シャングリラ・フロンティア〜クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす〜

硬梨菜

注意事項

【小説タイトル】
シャングリラ・フロンティア～クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす～

【Ｎコード】
Ｎ６１６９ＤＺ

【作者名】
硬梨菜

【あらすじ】
世に１００の神ゲーあれば、世に１０００のクソゲーが存在する。
バグ、エラー、テクスチャ崩壊、矛盾シナリオ………大衆に忌避と後悔を刻み込むゲームというカテゴリにおける影。
そんなクソゲーをこよなく愛する少年が、ちょっとしたきっかけから大衆が認めた神ゲーに挑む。
それによって少年を中心にゲームも、リアルも変化し始める。だが

少年は今日も神ゲーのスペックに恐れおののく。
「特定の挙動でゲームが強制終了しない……！！」
週刊少年マガジンでコミカライズが連載中です。
なんとアニメ化します。
さらに言うとゲーム化もします。

貴方はなんのためにゲームをしますか？

世界中の精霊達を捕らえていた邪神グラトーニエが斃れる。その巨躯の内側から爆ぜるようにして色取り取りの光が世界中に散らばっていく。その様子を涙を流しながら見つめていた少女が喜びの涙と笑顔でこちらへと振り向く。

『ああ、精霊達が解放されていく……世界に色が………貴方のお陰よ、本当にありがとう………！！』

思えば長い旅だった。様々な思い出が胸に去来し、俺はとびっきりの笑顔を浮かべ、万感の思いを込めて跳躍する。

「ついでにお前もくたばれやアバズレがぁぁぁぁぁ！！！」

妙に凝った設定のせいでラスボスにそれまでの武器が通用しないという最高にクソな要素を克服するために習得した格闘スキル「断罪飛び蹴り（パニッシュメントドロップ）」が少女の顔面に命中し、少女……このゲームにおけるヒロイン（クソビッチ）「フェアリア」が錐揉み回転しながら吹き飛ぶ。

しかしながらストーリーシーン故にダメージ判定もなく、ストーリーは進行するため衝撃でバウンドしながらこれまでの旅を懐かしむ姿はホラーとしか言いようがない。そもそも壮大なステージとBGMに反比例するかのような覆面と海パンだけの変質者こと俺に対して感動的な言葉を投げかけることのなんと不毛なことか。

「なんでラスボスへの唯一の対抗手段が素手よりダメージ少ないんだよ！素手と同じ量のダメージ与えるのに三倍以上時間かかるじゃねーか！それになんでギャグ装備が一番ラスボスに有効なんだよお

陰で変態ファッションでラスボス倒す羽目になったんだけど！？というかフェアカスてめーどこに居たんだよなんの援護もしないくせに声だけ響かせやがって！悪霊か！！塩まくぞ塩！！！」

『みんなとの旅は大変だったけど、楽しかった……！！』

「シナリオもサブクエも全部元凶お前だったけどなぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

雰囲気ぶち壊しで吠える姿は本当にゲームを楽しんでいるのか、と問われそうだが安心してほしい、このためにこのゲームから逃げなかったのだ。

『フェアリア・クロニクル・オンライン～妖精姫の祈り～』はVRRPG黎明期に発売された自称大作RPGのオンラインリメイク版であり、一般的な評価はクソゲーの一言に尽きる。

「高度な包囲殲滅を仕掛ける敵に対して壁に回復魔法をありったけぶつける味方」というギャグではなく一切の誇張のない事実という、悪辣な敵MOBの思考ルーチンに対して味方NPCのアホすぎる思考ルーチン。

ストーリーの大凡九割が「ヒロインが何らかの問題を起こす↓ヒロインが問題を悪化させる↓誰か死ぬ↓プレイヤーがそれを解決する↓なんだかんだで全部邪神のせいになる」という流れのため「痴呆」「アバズレ」「邪神さんかわいそう」「ラスボスよりヘイトを集めた女」「真の邪悪」とまで評されたヒロイン及びストーリー。

そして何より、「歩く度に爆発する草原」「落ちるとラスボスエリ

アに飛ばされる落とし穴」「ヒロインがパーティにいると全挙動が三倍速になるボス（ソロプレイだとヒロインはストーリー上必ずパーティに加入する）」エトセトラエトセトラ……なバグの数々。これがオフライン時代から引き継ぎだと言うのだからいっそのこと笑えてくる。

ラスボスを倒し、エンドロールに入るまでの三分間は無制限でヒロインに攻撃可能という事実だけがこのゲームを購入する価値とまで言わしめるパワーがこのゲームにはあった。ちなみに苦行を乗り越えここまでたどり着いたプレイヤー達から「報酬の三分間」と呼ばれるこのタイミング以外でヒロインに攻撃を加えた場合、ヒロインの好感度を上げなければストーリーが進まない上に他のＮＰＣ全員から罵倒され続けるというマゾしか楽しめない仕様となっている。強敵過ぎる敵、クソ過ぎるシナリオ、予測不能過ぎるバグの三位一体が建てたクソゲー界のトライアングルピラミッドとまで言われたフェアリア・クロニクル・オンライン、通称「フェアクソ」のプレイを始めて十日……人生の内約二十四時間をドブに捨てて漸くこのクソゲーをクリアした俺は今、奇妙な爽快感を感じていた。

例えるなら刑期を終えて出所し、数年ぶりに見る壁に囲まれていない青空を見たときのような。

はたまた砂漠に落ちたコンタクトレンズを見つけ出したときのような……

ただ一つだけ確信を持って言えることがある。

「こんなクソゲーもう二度とやらねぇ。」

やけに壮大な曲と共に流れる戦犯リスト（エンドロール）を流し見ながら、口ではそう言いつつも俺は確かな達成感に浸るのだった。

クソゲーマニア、神ゲーに挑まんとす

　クソゲーをクリアしてから暫くは大抵のことは許せる気分になる。今の俺にとっては「夏休み中に羽目を外し過ぎるな」の一言で終わる言葉を数十倍に希釈して語る担任の言葉も笑顔で流せる程に寛容だ。少なくとも担任の言葉は数分前の言葉と矛盾していないし、長いだけでいちいちカンに触る訳でもない。世界のためなら一分ほど前まで殺す事に反対していたモブキャラを殺す事を厭わないフェアリア（アバズレ）の超理論に比べればなんと真っ当な言葉だろうか。

「……という訳で、俺の目の黒いうちは夏休みデビューなんてしようものなら問答無用で三者面談だからな、覚悟しとけよ。はい解散！！」

　その言葉に、ゾンビの集団の方がまだ活力があるとも言える程に無気力オーラが漂っていたクラスに俄かに活気が取り戻される。

夏休みどこかに出かけよう。
今年の夏はこれが流行る。
彼氏と旅行に行く。
今年こそは彼女を作る。

　そんなリアルが充実しきった者たちの話題が聞こえると同時に、そうではない人種の話題も聞こえてくる。

（………今年の夏はどうしようかな。）

去年……高校一年の夏休みはぶっ通しで大作クソゲーを三本やり

込むという、自分でも頭のおかしい夏休みの過ごし方を敢行した訳だが、フェアクソという極大のクソゲーをクリアした今の俺では並のクソゲーでは満足できない、そんな確信があった。

（……まぁ今日寄るつもりだったし見てから決めるか。）

フェアクソの攻略で暫く寄っていなかったゲームショップに向かう事を決意し、俺は荷物を纏めて下校するのだった。

「…………」

俺をじっと見つめる視線に気づく事なく。

クソゲーとはなんぞや。数多のクソゲーを制覇してきた俺から言わせて貰えば、クソゲーとは「理不尽」である。

プレイスキルでどうしようもできない要素、例えばストーリー、例えばバグ、例えばゲームシステム……そう言った悪しき点をどれだけ積み重ねられるかがクソゲーの指標であると俺は答える。

その点で言えば難易度がバカみたいに高いゲームは俺の定義するクソゲーとは異なると言える。

……まぁフェアクソのようなバカ難易度＋理不尽要素という王水クラスの劇毒も世の中には存在するのだが。

その点で言えば、このゲームはクソゲーの対極、文句無しの神ゲーと言えるだろう。

「シャンフロ、か……」

「おいおい、クソゲーハンター君が大作神ゲーに手を出すとか明日は戦車でも降るんじゃないか？」

槍ですらないのか、とパッケージを持ったまま半目で振り向けば、この店の主人たる女性が愉快そうに俺を見ていた。俺が購入するゲームはことごとくこの店が持て余す在庫余り（クソゲー）ばかりのため、いつしか雑談を交わす程度には顔を知られたのだ。

「まぁそうっすね……フェアクソをクリアしたから暫くクソゲーはお腹いっぱいというか……せっかくの夏休みだしたまには大衆に絶賛されるゲームをやろうかな、と。」

「え、マジでフェアクソクリアしたの？あれソロプレイだとラスボス戦で最低二時間かかるって聞いたけど。」

「素手で顎を殴ったら三十分で倒せましたよ。」

「貫禄のレジェンドだなぁ。それをクリアしちゃう陽務（ひづとめ）君も大概だと思うけど。」

個人経営のゲームショップであるここ「ＳＨＯＰ　ロックロール」には数多くのクソゲーが眠っている。

フルダイブのＶＲゲームが主流となり、ディスプレイを使用するゲームがレトロと言われる昨今であるが、ＶＲゲームがまだ発売されて間もない頃は玉石混交という言葉が生ぬるい程に混沌とした綺羅星の如くゲームがリリースされていた。神ゲーが一割とすれば四割が普通ゲー、五割がクソゲーという泥のスープに石と僅かな宝石が沈んでいるかのような当時の環境は俺のような異端者（クソゲーマニア）からすればある種の神話時代だ。

「にしてもシャンフロも凄いよねぇ。未だに売り切れるし、多分明日あたりからまた売れるだろうねぇ。」

「岩巻さんは今年の夏はどうするんスか？確か今年は豊作だー！とか言ってましたけど。」

「うん、今月末から一週間この店は臨時休業するから。」

「あっ……」

察した。

俺、陽務（ひづとめ）楽郎（らくろう）がクソゲーを主食とする偏食主義ならばこの店の女主人たる岩巻（いわまき）　真奈（まな）は乙女ゲーを主食とする偏食主義者である。

ロックロールが不定期（ある種の規則性はあるが）に休業する理由は、常連は大体知っている。

「まぁいいや、これ買います。」

「はい毎度ー、ゲームの前はトイレを済ませてしっかり栄養補給だぞー。」

「二時間ごとに休憩も忘れずに、ですよ。」

互いに重度のやり込みゲーマーであるが故に、ＶＲにおける注意を互いに言い合って俺はロックロールを出る。
帰り道の途中、俺の通う高校の制服を着た女子とすれ違ったが、ビニールの中のゲームに心奪われていた俺はそれが誰なのかを気にすることはなかった。

「いらっしゃーい……おっ、やぁやぁ君かぁ。」
「朗報だよ、あの悪食ゲーマーがついにメジャーゲーをやるってさ。」
「そうそう、前に君に勧めたシャンフロだよ。」
「ふふふ、陽務君はプレイヤーネームは統一する派だからね、探せば見つかるんじゃないかな？」
「……いやぁ、恋する乙女は強いねぇ。」

クソゲーマニア、神ゲーに挑まんとす（後書き）

前提として作中世界では「外でサッカーしてくる！」と「家でゲームやるよ！」はほぼ同じ意味で受け入れられています。

Eスポーツとしてゲームが定着した、「とりあえずアマチュアゲーマー」と名乗っておけば名義上は無職を免れられるニートに優しい世界です。

効率の先鋭に汝、如何なるを捧ぐ

シャングリラ・フロンティア。

去年の春に発売され、確か今年の初めに最も多くの人が同時にプレイしたゲームとして某世界記録に認定された程の、フェアクソの同じカテゴリでありながら対極に位置するゲームだ。

プレイヤー達は元々は宇宙を旅する移民船団がなんだかんだあって新人類を残して滅亡して数千年後……という文明レベルが中世並みながらＳＦ要素を無理なく持ち込めるファンタジーな世界観で自由に生きていく事ができる。

評価もアンチが逆にいい所を必死に探すレベルのフェアクソと違い、僅かなアンチが数十倍のファンに押し流されるレベルの高評価だ。

「なんかパッケージをクソゲーと同じ列に並べる事が失礼に思えてきたな。」

レジェンドオブレジェンドたるフェアクソを筆頭に、ＦＰＳ視点で３６０度から無限リスポーンで敵が襲いかかってくる鬼畜クソゲー「コスモ・バスター」

ゲーム時間でおよそ一週間に一度巨大生物が台風が如く甚大な被害を撒き散らす中でのんびり牧場経営しろと宣うダイハードシミュクソゲー「スリリング・ファーム」

ガチで入院沙汰が起きた事で今ではプレミアで取引される無人島サバイバル（ピストルだけで巨大生物を狩るものとする）クソゲー「サバイバル・ガンマン」

あらゆるアイテムのドロップ率が頭おかしいレベルで低いために協力ゲーにも関わらずプレイヤー間の略奪がアポカリプスレベルな世

紀末クソゲー「ユナイト・ラウンズ」
まだまだあるぞクソゲーの数々……おっといけない。
大掃除の時に漫画を読み込んでしまうが如くクソゲーに心を囚われかける所だった。
シャンフロのパッケージはクソゲーゾーンとは別の場所に置き、ヘッドギアを装着してベッドに横たわる。

「さて……始めるか。」

トイレは小も大も済ませた上で水分と栄養補給を済ませる事。
ガチでやる必要がない場合はベッドに横たわってプレイする事。
起きてすぐ水分補給できるようにペットボトル飲料水は近くに置いておく事。
VRゲーマー基本三箇条を確認した俺は、何年振りか分からないほど久々にクソゲー以外のゲームを始めるのだった。

「へぇ……凄いな身長や性別まで変えられるのか。」

この手のMMORPGではお約束と言っていいキャラメイクで、俺はメイキングの自由度に舌を巻く。

人種、体格、アクセサリー、角！？……成る程、これだけの自由度なら余程の偶然でない限り見た目が完全に被る事は稀だろう。

「さてどんな見た目にするかな……」

俺はゲームのキャラはリアルの姿とは異なる姿にする派だ。ゲームのプレイを動画配信する者や、見た目に自信がある者は自分の姿をゲームに反映させるようだが俺としてはゲームとリアルは別の存在であるべきだと思っている。

「ん？あぁこれキャラメイク飛ばして先にジョブとか決められる系か。」

どうやらこのゲーム、出身と職業でステータスの成長に補正が入るようだ。ジョブや出身ありきのキャラメイクもあるわけだし、先にそちらから決める事にする。

「うわっ……スクロールで五秒かかるってどんだけ職業あるんだ……」

というかこれ騎士（〇〇使い）で一つ一つ独立しているのか、面倒な事を……全員木の棒装備でゲームを始めてから武器を選ばせれば良いものを、こういう細かすぎるこだわりが神ゲーたる所以なのかもしれないな。となれば……そうだな、ＤＰＳや覚えられるスキルから傭兵（二刀流使い）にしよう。

「出身は……ふむ。」

裕福な家の生まれ、平凡な生まれ、親無し子、忌み子………どれもこれも上昇補正と下降補正がセットになっている感じか……お。

「彷徨う者……これいいな。」

防御は上がりづらいが幸運は補正が入る出身か。
確かこのゲーム、クリティカルやドロップ運は幸運で変わるらしいから割と重要なパラメータだろう。
まぁこれさえあれば絶対！ってレベルではないだろうが、幸運が高くて困る事はないだろう。
というわけでジョブと出身で大凡のイメージが出来たのでそれに基づいたキャラメイクを行う……行ったのだが。

「これは………」

完成したのは、半裸に鳥の覆面を被った……奇しくもフェアクソをクリアした時とほぼ同じ姿をした長身痩躯の男キャラ、控えめに言って変質者であった。

いや、言い訳をさせて欲しい。誰に向けてかと言われると困るが。
このゲーム、色々調べてみたがどうやら初期装備をキャラメイクの段階で売る事が可能らしい。傭兵は初期装備として傭兵装備とやらを装備しているのだが、これが売ると結構な値段なのだ。具体的には初期の所持金が通常の三倍になる程だ。
この手のゲームは金が割とバカにならない。フルダイブタイプである以上、クエストを受けるにしても自分が飛んだり跳ねたりするわけで、一つのクエストに対する労力は中々にハードだ。
元々手数と機動力で戦うスタイルが主だった俺としては防具よりも武器を鍛えていきたい、それ故の防具売却である……のだが、流石にフェアクソと違いログインしている人数の多いシャンフロで素顔

を晒しての半裸プレイは中々に辛い……ので、キャラメイクで選べる「凝視の鳥面」なるやけに目力の強い鳥を模った覆面を装着する事にしたのだ。

「これは………いや、システムとして可能な以上他にもやってるやつはいる……筈！！」

葛藤をまだ見ぬガチ勢へのあやふやな信頼で叱咤し、キャラメイクの最後、プレイヤーネームの設定に移行する。

とはいえ、ここは特に迷う事はない。

俺はどんなゲームでも名前は統一する、故にこれまで数々のクソゲーを制覇した名をこの変態……否、彷徨える傭兵に与える。

「サンラク、と……」

「陽(サン)」務「楽(ラク)」郎、とまぁ安直ではあるがプレイヤーネームなどこんなものだ。

「さぁ、神ゲーの力を見せてもらおうじゃないか……！！」

最終決定、彷徨える傭兵(はんらのへんたい)が遂にシャングリラ・フロンティアの世界へと……………！！

効率の先鋭に汝、如何なるを捧ぐ（後書き）

シャングリラ・フロンティアは一応海外からのアクセスも可能ですがラグとか様々な理由でガチのゲーマーには辛い環境のため、シャンフロ発売後から日本に移住する外国人が増えたり増えなかったり。
さらに言えばプレイヤーのほとんどが日本人な上に言語も日本語以外対応しているとは言い難いため、外国人ゲーマーが始めるには少し難易度の高いゲームだったりします。
つまりそれでもシャンフロをプレイしているということは相当のゲーマーということです。

リアリティはクオリティに影響しないがその逆は別とする

『遥かな太古、神代と呼ばれる時代があった。』

『偉大なる神人達は後世に命を紡ぎ、その姿を消した。』

ああ、プロローグ的なアレか。

『時は流れ、神人の遺志継ぐ我々は彼らが願ったように地に広がり、そして大いなる命の流れを紡いでいく……』

…………。

『今を生きる我々は、歴史と遺跡の中に息づく過去の遺産から神人達の「スキップ。」プロローグをスキップしますか？』

「スキップ。」

取説で読んだよそこらへん。

問答無用でプロローグをスキップし、ついにフルダイブした意識に身体の感覚が到来する。身長や体格がリアルと異なるから少し身体を動かすべく周囲を見回すと……

そこは森だった……いや、知ってはいたんだが。出身「彷徨う者」は他の出身と違って初期スポーンが「ビギナー用エリアのどこか」であり自力で街に到着する、もしくはモンスターに倒される事で「

夢オチ」という形で街中でリスポーンできるらしい。忌み子なんかは街の路地裏スタートらしいし、やけに凝った作りだとつくづく感心させられる。

「とりあえず現状把握だな。」

ステータス画面を開く。

――――――――――――
PN：サンラク
LV：1
JOB：傭兵（二刀流使い）
9，000マーニ
HP（体力）：30
MP（魔力）：10
STM　（スタミナ）：20
STR（筋力）：10
DEX（器用）：15
AGI（敏捷）：10
TEC（技量）：15
VIT（耐久力）：1（2）
LUC（幸運）：30
スキル
・スピンスラッシュ
・ナックルラッシュ

装備
左右：傭兵の双刃
頭：凝視の鳥面（VIT＋2）

胴：無し
腰：無し
足：無し
アクセサリー：無し
――――――――――

貫禄の紙装甲、そして割りかし高めな幸運。変態と勇者の境界を征くほぼ半裸装備に二刀流。

「もう迷わない、葛藤はキャラメイクに置いてきた……！！」

とりあえずこれからどうするべきか。装備を整えるならなんでもいいからさっさと死んでリスポンすべきだろうが、とりあえず試しで戦闘をしてみるのもいいかもしれない。

「凄いな……身体がスムーズに動く。」

これぱっかりは開発時期の問題だが、フルダイブタイプのＶＲ黎明期に作られたフェアクソは何というか動きが少々ぎこちなかったのだが、このゲームのアバターは極めてリアルに近い動きができる。確かゲーム内の動きがリアルに影響を出さないよう毎回ログアウト時に現実の肉体と意識との同期システムがあるが、その必要がないと感じるくらいに思い通りに動くな。

「ギギッ！！」

「おっ」

栄えあるシャンフロ初戦闘の相手はファンタジーというジャンル

においてドラゴンに匹敵するメジャーモンスター。
オトナしか見れないファンタジーだとやたら強くなる緑肌の醜悪な人形モンスター……

「ゴブリンか。」

「グギャギギッ！！」

ゴブリン……というかプレイヤーより小さめの人型モンスターは戦闘要素のあるゲームではほぼ確実に現れるタイプの敵ＭＯＢだ。当然クソゲーにもその手のモンスターは出るわけで、一瞬脳裏に全方位から無限湧きする人型モンスターの悪夢がよぎるが頭を振って追い払う。

「……ほっ。」

「ギャッ！？」

あまりに素直な挙動で突っ込んできたゴブリンの突進をかわし、足を引っ掛ける。ゲームによっては武器以外で触れると問答無用で死ぬオワタ式なものもあったが、このゲームではぶつかる程度ではダメージ判定は出ないらしい。ただ物理的な演算はしっかり働いているようで、足元を掬われたゴブリンが顔面から地面にすっ転ぶ。

「肋骨に対して……平行！！」

「ギャァァア！！？」

リアリティを増した分、描写はともかくただ殴るだけではダメージが出ないのが今時のフルダイブアクションゲームだ。適当に殴る

だけでダメージが出るクソゲーと、内臓に至るまでガチで作り込んでいるためにちゃんと急所や耐久が存在するクソゲーとピンキリのため、一応試してみたがシャンフロはそこらへんしっかりと作り込んだ神ゲーのようだ。傷口からは血ではなく赤色のポリゴンが飛び散り、どうやら一撃でＨＰを削りきったのかゴブリンは泡のようにポリゴンとなって分解、消滅した。
死体から剥ぎ取るタイプではなくドロップアイテムだけ落ちるタイプか、一時期リアルにしすぎて犯罪沙汰になった事件があったし、そこらへんの配慮だろう。
あの時は「ゲームが価値観を歪める」と反ゲーム派の批判が凄かったなぁ。何処ぞの知識人ぶったタレントが「娯楽に負ける教育しか出来ないなら子供なんて作るな、親も教師も小学校からやり直せ」なんて過激な発言をしたことで色んなところにヤバいくらい飛び火しまくっていた記憶がある。
確かその頃はスリリング・ファームでトウモロコシを育ててたなぁ、全部巨大モンスターに踏み潰されてキレてたなぁ懐かしい。

「ドロップは……おっ。」

基本的に全てポリゴンになって消滅する、つまりその場に残ったものはドロップアイテムということだ。
お世辞にも上等とは言い難い、木の棒に石を蔦紐で巻きつけただけの石斧を拾い上げると、それは分解されてインベントリへと収納される。

「ふむ……「ゴブリンの手斧」か。」

二刀流対応、耐久は半分を切っている……まぁゴブリンが落とす武器としてはテンプレートだな。
メイン武器として使うことはないが、今使っている傭兵の双刃の耐

久をケチる時に使うくらいか……ならもう一本要るか。

「確かこのゲーム空腹度とかも隠しパラメータであるんだったか……」

となると、ある程度モンスターを狩って何をドロップするのか確かめないといけないか。

……あぁ、この感覚はクソゲーも神ゲーも分け隔てなく来るものだな。

新しい世界に飛び込んで、これからどうしようかと考えるこの瞬間の高揚感はリアルじゃ滅多に得られないものだ。

「さぁ、エンジョイを忘れずやっていこうか！」

俺は道なき森の中に、目標という道を探しながら一歩踏み出すのだった。

リアリティはクオリティに影響しないがその逆は別とする（後書き）

ちなみに半裸スタートのプレイヤーは結構な確率でいます。
実はキャラメイク画面で装備を売った方がゲーム内の鍛冶屋で武器を売るより高く売れるためです。

待ち人来ず、当方蛮族也

場所は変わり、シャングリラ・フロンティアを新規で始めたプレイヤーが最初に拠点とすることになる街「ファステイア」。

夏休みシーズンの到来ということで、さらにサーバーが強化された事で数千人単位の新規を受け入れる用意の整った、特に何かランドスポットがあるわけでもない平凡な街にそれはいた。

「すげぇ……見ただけで高レベルって分かる装備じゃん……」

「あのエンブレムネットで見たことあるよ、確か攻略ガチ勢クランの……」

「確かあのクランって最低でもレベル９０以上ないと加入試験すら受けられないんじゃなかったっけ？」

「ならなんでそんなガチ勢が初心者の街に……わっ、こっち見た！」

全身を包む白金のフルプレートアーマー、背中ではためくマントには剣を咥えた狼をイメージしたエンブレムが刻まれ、初心者が主にベルトに武器を吊るしているのに対してなんの力か背中に張り付くように浮遊する大剣。

明らかに初心者のそれではない格好のプレイヤーはまるで誰かを探すように新たにログインするプレイヤーをじっと見つめている。

ストーリーに関係するＮＰＣと勘違いしたプレイヤーに話しかけられたり、スクリーンショットを求められたりと、四苦八苦しながらも粘っていた白金鎧であったが、リアルで二時間ほど経過したところで諦めたように去って行ったのだった。

「これは困った……流石に予想できなかった………」

街などの宿屋とかでなければセーブできないらしく、どうせ暫くはログアウトするつもりもなかった俺はそれからも暫く森の中を徘徊してモンスターを片っ端から狩っていたのだが、ここで問題が二つ発生した。

まず一つは装備重量。余程大きいものでない限り大体のアイテムはインベントリに収納されるのだが、一定量を超えるとアクションにマイナス補正が入るらしい。

十二本集めて四本使い潰して今一本ドロップしたので九本目のゴブリンの手斧をインベントリに入れたところで、まるで厚着でもしたかのように動きに違和感を感じた。

とりあえずゴブリン以外にも角が生えた兎（アルミラージ）やゴブリンと双璧を成すオトナファンタジー最強モンスター豚頭（オーク）、珍しいところでは二足歩行の首刈り兎（ヴォーパルバニー）なんてのも倒した。

ヴォーパルバニーはどうも全アクションが首狙いかつクリティカル臭かったが、狙いが一択な行動パターンは慣れてしまえば絶好のカモだ、ウサギだけど。

だがヴォーパルバニーが体感５％で落とすドロップ武器である「致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）」は中々の有能武器だった。

初期装備の傭兵の双刃と比較して、全体的に上位互換な上にクリティカルダメージに補正が入る追加効果は俺の戦闘スタイルに上手く合致している。

それにレベルも上がった。アイテム的にも経験値的にもヴォーパルバニーは中々にオイシイ敵と言えるな。

――――――――――――

PN：サンラク

LV：１２

JOB：傭兵（二刀流使い）

９，０００マーニ

HP（体力）：３０

MP（魔力）：１０

STM（スタミナ）：２５

STR（筋力）：１０

DEX（器用）：１５

AGI（敏捷）：２５

TEC（技量）：２０

VIT（耐久力）：１（２）

LUC（幸運）：５５

スキル

・スピンスラッシュ

・スクーピアス

・ナックルラッシュ

・タップステップ
・フラッシュカウンター

装備
左右：傭兵の双刃
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋２）
胴：無し
腰：無し
足：無し
アクセサリー：無し
――――――――――――

　とりあえず致命の包丁は傭兵の双刃が破損するまでは取っておくとして、このゲームではレベルアップでステータスにポイントを割り振ることができる。
１２レベルになった事で５５のポイントを得たわけだったが、とりあえず半分ほどを幸運に振ってみた。
感想としては、まぁ誤差レベルとしか言いようのないドロップ率の変化だったが確かに気持ちアイテムがよく落ちるように感じた。

　そしてスキルだが、レベルアップで二つ、ヴォーパルバニーの攻撃を受け流し兎を叩き落としていたら一つ勝手に習得していた。
レベルアップ以外にも条件を満たす事で習得できるスキルもあるみたいだ。
スキルを使ってみた感想だが、頭の中で「このスキルはこう動けばいい」という確信が付与されるような感覚だった。
昔のゲームの中には無理やり体がスキル通りの動きを取るものもあったが、あれは色々悪用できたので今は思考誘導……というと言い方が悪いな、思考補助という形が主流だ。

最初から覚えていた二つは動きが大振りで自分と同等かそれ以下の大きさの敵に対しては効果が薄いがＤＰＳは高い。
新たに覚えたスキルのうちスクーピアスは発生が早く、コンパクトな攻撃かつ一撃の威力は高い……が連発できないことからあまり俺好みではかった。
タップステップは回避行動に補正が入るスキルで、フラッシュカウンターは対照的にパリィからのカウンターに補正が入るスキルだった。

結論から言えば、現状役立つスキルは辛うじてスクーピアスだけ、と言わざるを得ない。初期スキルは大振りで出番が無いし、回避受け流しスキルは自前のプレイヤースキルで十分賄えている。
この程度の雑魚ＭＯＢ、好き嫌いを通り越してクソとしか言いようのないゲームバランスな数々のクソゲーと比べれば有情過ぎて涙が出そうだ。
透過しない、分身しない、ちゃんと死んでくれる。この最低限の条件すら満たせないからこそクソゲーのバグは笑えないのだ。

話を戻そう。
一つ目の問題はインベントリの容量がカツカツになってきたこと。
これに関しては肉系アイテムを消費すれば何とかなる……のだが、その消費が二つ目の問題なのだ。

「ぬかったな……まさか生肉状態だと食べれないとは。」

どうもこのゲームでは肉系アイテムは最低限焼くなり煮るなりの調理をしなければ空腹回復アイテムとして使用できないらしく、生

肉を何度食べようとしても食欲が減衰する感覚で口の中に入れることができないのだ。
そして最大の問題として、サンラクには火を起こす手段が存在しない。
Ｌｖ．１から上がりも下がりもしないＭＰが魔法の一切を習得していないことを如実に指し示している。

「このままだと餓死でリスポーンになりかねないな……」

せめてモンスターの手にかかってリスポーンしたいものだが、ゴブリンに倒されるのも癪だ。
かと言って餓死でリスポーンもあまりに間抜け、さてどうしたものかと思案していると、何故か物凄く久しぶりに感じる自分以外の人の声を聞き取った。

待ち人来ず、当方蛮族也（後書き）

一応ゲーム内における全ての道具屋で購入できる確率で火がつく「火打ち石」を買えば火に困ることは基本的にあり得ません。

道中バッタリ遭遇した不幸なアルミラージは何もドロップしなかったが、アルミラージの肉は３０個ほどあるのでもういらない。
地味に動きづらい感覚に眉を顰めつつ、声のする方向へと歩いていく。

「こっちの方……あ、いた。」

丁度背の高い草叢で隠れる形になってしまったが、確かに獣道を進む男女、男一人に女二人という羨ましい編成の……頭の上に名前が表示されていることからプレイヤーである三人組がいた。

「騎士、盗賊、魔術師……好都合だな。」

魔術師は確か初期習得でファイアボールを覚えていたはずだ。うろ覚えだったたが魔術師は全員一律で初期は火属性だったはずだ。
アルミラージ肉、オーク肉、ヴォーパルバニー肉、全部合わせて７０個ほど生肉があるので、いくらか譲れば火を分けてくれるかもしれない。

さてどう話しかけたものかと悩んでいると、どうやら三人組がモンスターと遭遇したらしい。

「わぁ、可愛い！」

可愛い、つまりオークやゴブリンは除外。

「兎みたいだけど……これもモンスターなのかな。」

ふむ、アルミラージかな？ヴォーパルバニーはレアエネミーのようだしそんなピンポイントで遭遇するわけ……

「この兎、二足歩行なんだな。」

ヴォーパルバニーじゃねぇか！！

草むらから顔を出せば、よりにもよって魔術師の少女が無警戒にヴォーパルバニーへ近づいており、数十体ヴォーパルバニーを倒した経験から、あの首刈り兎が攻撃のそぶりを見せている事がありありと理解できる。

「待ぁぁぁぁぁぁてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

「へ？」

「え？」

「は？」

草むらから飛び出す半裸の鳥頭が双剣を振り上げ草むらから飛び出す。

このままでは間に合わないと確信、跳躍と同時にフラッシュカウンター発動。

魔術師の少女と少女に飛びかかるヴォーパルバニーの間に飛び込み、右の刃でヴォーパルバニーが持つ包丁を弾き飛ばす。

身体を捻り、回転するようにして左の刃を下から上へヴォーパルバニーに叩きつける。

クリティカルが入ったらしく、一撃で絶命したヴォーパルバニーがポリゴンとなって爆散、ドロップ落ちなかったかー、と呑気に考えつつ受け身をとって三人組に向き直る。
そしてここでようやくこの場にいる全員が状況を内容はともかく結果を理解する。

……すなわち「草むらから飛び出したやけに目力の強い半裸鳥頭の変態が可愛らしい兎を惨殺した」という結果を。

「きゃあああああああ!!!」

「いやぁぁぁあああああ!!!」

「うわぁぁあああああああ!!!」

構えられる三人組の武器、突っ込んでくる三人、振り下ろされる武器……

「っと危ねぇ!!」

流石に受け身をとってしゃがんだ状態から三方向同時攻撃は少し背筋が冷えた。
使わないと思っていたスキルその2であるタップステップで距離を離しつつ、大声かつ分かりやすい口調で戦闘の停止を求める。

「ストップ!ストーップ!俺プレイヤーです!スターップ!!」

「変態ぃぃぃぃぃぃ!!」

「それは否定できないけど!ホラ見て!プレイヤーネーム表示され

てるから！！　いやマジで！！」

「死ねぇぇぇぇぇぇ！！」

ＰｖＰの経験が無いわけではないが、流石にシャンフロプレイヤー初遭遇がＰｖＰは回避したいところだ。

結局、三人のうち盗賊の少女が冷静になって二人を抑えてくれるまで、俺はただひたすら回避と受け流しを繰り返す羽目になったのだった。

「あの、その……危険なモンスターから助けてもらったのに、すいません……」

「あぁいや、金に目が眩んで変態装備で冒険始めた俺の方が非が大きいから……」

何とか「レアエネミー珍獣ハンラトリアタマ」から「頭おかしい格好のプレイヤー、サンラク」に評価を変える事ができた俺は、三人に頭を下げる。

騎士の男子がソーマ、盗賊の少女がカッホ、魔術師の少女がリーナという名前らしい。

このゲーム見た目は好きにカスタムできるが声だけは変えられない

らしい。
そのため見た目幼女でも声を発するとおっさんバレ、ということはザラにあるらしいのだが、この三人は声的にも中学生といったところか。
後輩も後輩な三人をむやみに怯えさせて本当に申し訳ないが、毛皮は加工しないと装備にできないようなので街に行くまではどう足掻いてもこの格好なのだから仕方がない。

「えぇとその、サンラクさんはずっとここでレベリング……してたんですか？」

「あー、まぁね。とりあえずモンスターの動きを見るだけのつもりだったんだけど、最終的に色々検証したくなってね。」

クソゲーをやっていた頃の癖のようなものだ。
小数点以下ドロップ率とかザラだったので、とりあえず敵ＭＯＢは枯れるまで狩る、が身体に染み付いてしまっているのだ。

いや無限スポーンは勘弁してくれ。

やせいの　へんたいが　とびだした　！（後書き）

基本的にこのゲームで防具を装備しないことで発生するメリットはほとんどありません。
そのため、それなりの数存在する半裸スターター達は大抵さっさと一番安い防具を購入します。
故に街中でないエリアで遭遇するごく少数の半裸のプレイヤーとは
・半裸の姿を見られることで興奮する変態
・あえて大ダメージを受ける状態を楽しむM
のどちらかになります。主人公はある意味野生化した蛮族というべきかもしれませんが。

変態、効率の代償を痛感す。

俺は三人にアイテムが余りすぎたのと、空腹を何とかしようにも火を起こす手段が無いため困っていたこと、幾つか肉を渡すので火を起こしてほしい旨を伝えると、ありがたいことに快諾してくれた。

「ええと……【ファイアボール】！！」

「「「おお。」」」

リーナが魔法を唱えた瞬間、虚空から出現した火の玉が集めた木の枝にぶつかって焚き火となる。

恐らくこの三人組も始めたばかりの初心者なのだろう、俺も合わせて全員が宝石でも見るかのように焚き火を見つめる。

「あ、一括で焼けるのか……こういうとこゲーム的に便利だなぁ。」

「その……サンラク、さん？」

「サンラクでいいよ、同じシャンフロ初心者だろうし上も下もないだろう。」

「でも年上っぽいのでやっぱりさんはつけます。サンラクさんはその、なんでそんな格好なんですか……？」

ファイアボールを使った感触にしばらく感動していた様子のリーナだったが、俺が肉を一括で焼いていると恐る恐るといった様子で問いかけてきた。

「このゲーム、キャラメイクの時点で初期装備を売れるんだよ。」

「え、そうなんですか！？」

「それで、その頭装備と武器以外全部売り払ってこのザマなわけで。」

「え、でも街がスタート地点だからすぐに装備を買えたんじゃないの？」

盗賊の少女カッホがそう疑問を呈するが、出身「彷徨う者」は初期スポーンがランダムであることを告げるとうわぁ、と同情的な視線を頂いた。なぜか心が痛くなった。

「ていうかさっきの兎……なんだったっけ？」

「ヴォーパルバニー？」

「そうそう、そのヴォーパルバニーってそんなに強いのか？」

「そうだな……」

百聞は一見にしかずと言うが実物がいない以上、再現でいいか。
俺はヴォーパルバニーの攻撃を弾くときの速度で木の棒を問いを投げかけた少年、ソーマに突きつける。

「これくらいの速度で的確に首を狙ってくる、あと多分だけど攻撃が全部クリティカルになると思う。」

「は、速……」

「まぁ首しか狙わないから慣れれば簡単に対処できるモンスターだろうな。」

「え、サンラクってレベル幾つなんだよ？」

「12、そろそろ上がりづらくなってきたしもう少し狩ったら街を探そうかなと思ってたところだ。」

「あ、それでも狩るんだ……ていうかたけぇ！シャンフロ買って一日も経ってないのにもうそこまで上げられるのかー。」

少女二人と違い年齢など知ったことかとタメ口なソーマを好ましく思う。
俺はゲーム内での年功序列は基本的にプレイ時間であると思っている。流石に年齢の序列は無効、とは言わないが俺としては同時期に始めたプレイヤーは年齢関係なく同年代、と言う感覚なのだ。

「まぁ休憩挟んでも七時間くらい通しで森に籠ってたからな、お陰でインベントリがカツカツな上に空腹がそろそろ危険域でな……」

「ああ、だから火が必要だったんですね。」

「そういうこと。あ、全部焼けたみたいだ……はい、これお礼な。」

焼けた肉のうち、オーク肉はなんか汚そうなのでアルミラージ&ヴォーパルバニーの兎肉を三人に分配し、俺はオーク肉に齧り付く。

「んー……全体的に薄い？」

味はするが、リアルで同じもの（豚肉だが）を食べるのと比べてなんか味や食感が全体的に薄く感じる。
ゲーム内の食事で満足しないようにする配慮だろうか、確かにこればかり食べていたらそのうち耐え切れずにログアウトしてベーコンでも食べたくなるな……上手くできているものだ。

「あー、ログアウトして肉食べたい。」

「……？すればいいんじゃないですか？」

「いや、それ以上にこのゲームやりたいし。」

俺がそう言うと三人もあー、と納得したように頷く。
街というものに一度も行ってないので始めてから一度もログアウトしていないとはいえ、仮に戦闘エリア内でセーブ、ログアウトができたとしてもその果てにどうなるかは想像に難くない。こうも綿密に作られていると一周してクソゲー認定したくなるな……

「ああそうだ、厚かましいけどもう幾つか質問していいか？」

別に攻略サイト並の情報が欲しいわけではないので三人から最初の街の武器屋の品揃えやここら辺の地図を見せてもらい、俺はこれからの方針を決めるのだった。

薬草の採取クエストのために森に来たらしい三人と別れ、俺は彼らが来た方角とは逆の……二つ目の街「セカンディル」へと向かう事

を決めるのだった。

変態、効率の代償を痛感す。（後書き）

この作品におけるフルダイブゲームは、「ある程度本人の素養でシステムの壁を超えられる」ものとしています。
仮に全く同じレベル、ステータス、スキル、装備のAさんBさんがいたとしても、「VRゲームでの」運動神経が良い方がより強いと言えます。
ある意味現実と大差ないですが言い換えれば「現実で劣っていても鬼レベリングとガチ装備でリアルでよりは簡単に強くなれる」ということでもあるので、ゲームが認められるようになった……という感じです。

鳥頭バーサス大蛇

「必要な手数は増えたが消耗度はケチっていかないとなぁ。」

そろそろ壊れそうなゴブリンの手斧でアルミラージをポリゴン爆散させながらそう独りごちる。致命の包丁は温存、傭兵の双刃はそろそろ耐久が怪しい。流石にビギナーノービスルーキーニュービー……呼び方は何でもいいが初心者が最初に入るエリアだ、余程のことがなければレベルの暴力だけでやっていけると思うが……

「……………あれか。」

視線の先、遠目に見える人工物の連なりは二つ目の街「セカンディル」で間違いないだろう。

この森……地図では「跳梁跋扈の森」と記載されていた森とセカンディルへの道を断ち切る渓谷には吊り橋が一つ掛けられている。そして吊り橋の前に門番が如く立ち塞がる……いや、蜷局(とぐろ)塞がるとでも言うべきか？一頭の大蛇が舌をチロチロ出しながらさながら次の街へ向かうプレイヤーを待ち構えるようにそこにいた。

「所謂フィールドボス、いやエリアボスか？まぁどっちでもいいや。」

あれを倒さなくてはセカンディルへは行くことが出来ないようだ。推奨人数三人、推奨レベル10らしいが、果たしてソロで行けるだろうか。場合によっては出し惜しみ無しでやらなければファステイアでリスポーンだ。

というか夢オチリスポーンということはインベントリのアイテム全

損ということでは？とふと思ってしまった為にそれを実証しない為に意地でもノーコンクリアしなくてはならない。

「蛇型モンスターっていうと……巻きつく、噛み付く、丸呑み、毒、脱皮……まぁここら辺がメジャーな攻撃手段か。」

少なくとも「プレイヤーの予想の斜め上行けば面白いだろう」と突然蛇が爆発とかしなければプレイヤースキルでどうにかなる、筈だ。

「確かエリアボスに挑戦するソロプレイヤーなりパーティなりが戦闘を始めた時点で他プレイヤーやモンスターは干渉できなくなる、だったか。」

正直飛び入り乱入！とかは嫌いではないので少しだけモヤっとするが、不意打ちの心配なくボスとタイマンを張ることが出来るのはありがたい。暫くボス戦に備えて予行練習をした後、草むらから出た俺は「跳梁跋扈の森」エリアボス、貪食の大蛇へと挑む。

名前こそご大層だが所詮は初心者用のボス。動きは読みやすく、初見殺しな行動もない。

ほぼ思い通りに動くこのアバターの挙動ならばノーダメージで倒すことも容易い……と思っていた時期が俺にもありました。

「げぇえっ！！」

どうしようもない亀裂と共にポリゴンに変わり果てた傭兵の双刃が、貪食の大蛇の装甲値の高さを示す。
ぬかった、確かに初心者でも倒せる難易度だろうが、さすがに壊れかけの武器は舐めプすぎたか。鈍重そうな見た目とは裏腹に滑らかに地を這う貪食の大蛇が口を大きく開いて俺に飛びかかる。
それを身体を捻って避けつつ、俺はナックルラッシュを発動、格闘技と呼ぶには少々雑な拳の連打を貪食の大蛇の横っ面へ叩きつける。

（お、これパンチ一発一発が独立したクリティカル判定なのか。）

十発ほど拳を叩き込んだが、二、三発程強い手応えを感じる事があった。スキル一回での連打全てがクリティカルではなく、一発一発で別々の判定があるようだ。流石にレベルの暴力を横っ面に受けてはノックバック効果が無くてもそれなりにダメージは入ったらしく、貪食の大蛇は顔を仰け反らせる。
その隙に、事前に練習を重ねた高速装備切り替え……複数の武器を持ち込めるゲームでは割と重要なテクニックを行使してこれまで温存していた隠し球……致命の包丁を左右の手に装備する。

まるで餌食となった者達の血を吸ったかのように赤黒い刃を持つ包丁を二刀流で構え、半裸にやたら目力が強い鳥頭が新たな街への橋を塞ぐ大蛇と対峙する姿は相当滑稽だろうが、オワタ式クリティカルアタッカーとしては現状これがほぼ最適解だろう。

「座標（テレポート）ズレバグも使えないようではなぁ！！」

いきなり座標ごと瞬間移動したり、不可視の攻撃を背後から叩き込んできたり、全身即死判定の塊にならないようでは俺の敵足り得ない。

「三枚おろしにしてぶべぇ」

話は変わるが蛇型のモンスターを相手にする場合、注意するべき部位はどこか。

まぁ殆どの人が顔、尻尾と答えるだろう。何せ手足がないフォルム故に蛇型なのであって攻撃手段は巻きつく、噛み付く、尻尾で薙ぐが殆どのパターンだ。

だからこそ、まさか尻尾ではなく尻尾の近くにある穴からヘドロのようなものを飛ばしてくるとは思わず、不覚にも俺は貪食の大蛇が放ったヘドロ……うん、もしかしなくても排泄物に直撃してしまったのだった。

流石に匂いまで完全再現とかいうリアリティという名の畜生クオリティではなかったが、全身に冷たさを失った湿布を貼り付けられたような気持ち悪さが悪臭の代わりに襲い掛かる。

そして何よりもヤバいのが、

「マズイぞ……」

一秒ごとに削られていくＨＰ、スリップダメージ、即ち……

毒だ。

鳥頭バーサス大蛇（後書き）

・貪食の大蛇
跳梁跋扈の森エリアボスであり、セカンディルへ行くために必ず倒さなければならないモンスター。
締め付け攻撃と噛みつき攻撃は予備動作が分かりやすいため落ち着いて対処すれば簡単なボスではあるが、体力を一定まで削るとノーモーションで放ってくる毒糞攻撃に注意、ダメージはないが継続的にダメージを受ける毒状態にされる。

走れ、スリップダメージに追われながら

認めよう、俺はシャングリラ・フロンティアを舐めていた。
所詮は大衆が評価したヌルゲーだと、まぁ頑張ればなんとかなると。
薬草なくてもノーダメ余裕です＾＾とか思い上がりだった、フェア
クソをクリアしていた事で少し天狗になっていたらしい、その点は
貪食の大蛇に感謝もしてやろう。
だが同時に言い訳もさせて欲しい。

「蛇型モンスターが糞ぶつけてくるとか予想できるわけないだろ！
！」

お前仮にも竜に似た姿してるんだからもう少しプライドはないのか
！！
ステータス画面を開き現在のＨＰを確認、２８……毒糞を食らって
から大体二十秒経過したから十秒で１ダメージ（多分割合ダメージ
なのだろう）、残りＨＰ２８、いや実質２７だから二百七十秒、四
分半が俺に残されたタイムリミット。
セカンディルまで走ってどれくらいかかる？スタミナの関係もある
から最適なスタミナ管理は？そもそも貪食の大蛇はあとどれだけＨ
Ｐが残っている？クソ、こういう時敵のＨＰバーが見えないシステ
ムが最高に腹立つ！

「クソが、速攻で倒す！！」

ＲＴＡは専門外だがＴＡはそれなりに経験がある。
致命の包丁、シャンフロのクリティカル判定基準、貪食の大蛇の耐
久及び防御……今持ってる情報から答えを弾き出す。

このゲームにおけるクリティカルはランダム発生ではなく、どうやらプレイヤーの攻撃が理想的な当たり方をした、もしくは急所に当たる事で発生すると見た。
そして幸運のパラメータは前者の判定にボーナス補正が入る。
例えば垂直に振り下ろす事でクリティカルが出るなら幸運のパラメータが上がるほど1、2度の角度がずれてもクリティカル扱いになる、そんな感じだ。

そして貪食の大蛇。
蛇型のモンスターは大体頭が弱点だがこいつ見た目の割に瞬発力が高く、本来は複数人で頭の動きを止めてアタッカーが一気に潰すのが正解なんだろう。
だがそれが出来ない以上無理に頭を狙っても時間がかかるだけだ。
ならどうするか、頭以外は効果が薄いか鱗で防御力の高い場所ばかりだが……弱点がないなら作ればいい！！

「そこだあ！！」

致命の包丁が出刃包丁タイプで助かった、多分中華包丁みたいなタイプだったら突き攻撃が打撃判定になっていただろう。
スクーピアスで包丁の先端が貪食の大蛇の横っ腹に突き刺さり、抉るように鱗を裂いて傷口(ポリゴン)を露わにする。

流石にたまったものではないのか、のたうつように俺を搦め捕ろうとする大蛇だったがお前の行動パターンは大体把握済みなんだよ！！
タップステップを使用し、傷口に張り付くようにして回避行動。
貪食の大蛇のアクションが終了したタイミングを狙って一転攻勢に移る。

「スタミナ！一撃で５！！」
回避行動で回復しきっていないから攻撃は三回で止める必要がある。スタミナを使い切ると強制的に疲労モーションを取らされてしまうからだ、そしてスクーピアスで攻撃を当てると数秒間「傷口」が残る事は実証済みだ。
傷口という無理やり作り出した急所に更に攻撃を叩き込んだ事でクリティカル発生、耐え切れずに貪食の大蛇は仰け反りモーションを取り、その隙にスタミナとスキルの再使用時間（キャストタイム）を確認。

「くたばれぇ！！」
スクーピアスの発動に必要なスタミナ……間に合った。
スクーピアスを命中させたことによるクリティカル判定……左右共にクリティカル。
弾けるように貪食の大蛇の傷口からポリゴンが飛び散り、心なしか致命の包丁が光ったような気がした。
そしてポリゴンの爆発が貪食の大蛇の全身へと広がり、その巨体が爆ぜる。

「よ、よっしゃおらぁあ………！」
疲労モーションはマジで疲労感を感じるのか……いや、それよりもドロップアイテム！ＨＰ！スタミナ！時間がない！！
ロクに確認もせずにドロップしたアイテムをインベントリに叩き込み、スタミナが回復したことを確認して走り出す。
やばいやばいやばい、体力がもう一桁だ。あの糞蛇アクションが一々長いんだよ！！

「走れ走れ走れ……！！」

本来なら崖の下を見て震えたりするものなのだろうが、知ったことかと全力疾走で吊り橋を駆け抜ける。

残り体力6！五十秒で街について……解毒薬を買う！？いや、それよりもリスポーンポイントの更新！！

クソ、スタミナが持たない。スタミナを回復させつつ歩かなければならないのがもどかしい。この間隔だと辿り着く前に死ぬ……いや、待て。

「エリアボスをソロ討伐なら経験値独り占めだろ………ビンゴ！！」

レベルアップしてる！そしてポイントも！！

とりあえずパンクしそうな思考で辛うじて見えた30のポイントを半分ずつSTM（スタミナ）とAGI（敏捷）に叩き込む。

「うおおおおおおおおお！！！」

そして俺は倍近くの速度と持久力をフル稼働させてセカンディルへと飛び込むのだった。

走れ、スリップダメージに追われながら（後書き）

余談ですがこの蛇モンスターは「〇食の大蛇」でシリーズが存在するため、ある程度やり込んだプレイヤーはしょっちゅう蛇と戦うことになります。

中には「食蛇」のみを狩り続ける集団もいるとかいないとか

そのプレイヤーは名をレイジと言う。

苦節三ヶ月、懸想する女性と何とか仲良くなるべく手回しと賄賂（スイーツを奢るなど）の駆使が身を結び、遂に意中の女性がシャングリラ・フロンティアを始めるにあたって経験者たる自分にビギナーへのレクチャーをする、という流れに持ち込むことができたのだ。

「じゃあ山本くん、今日はよろしくね？」

「お、おう。とりあえず基本的にゲーム内では本名は呼ばないのがマナーなんだ。」

「あ、ごめんね！えぇとじゃあ……レイジくん。」

プレイヤーネームとはいえ、今まで苗字呼びだったのが名前呼びになったことにレイジ……本名山本　礼司は心の底からプレイヤーネームを本名のカタカナ表記にしてよかったと内心で狂喜乱舞する。

「ごほんっ、とりあえず……ミーアは犬系のモンスターをテイムしたいんだったよな？」

「うん、私のマンションだとペットを飼えなくて……友達からこのゲームのことを聞いて興味が出たの。」

ＲＰＧをするにはいささか平和的過ぎる理由ではあるものの、シャングリラ・フロンティアは化け物じみた自由度を誇るゲームであるため、戦闘以外にやりがいを見出すプレイヤーは多い。

レイジのパーティに加入したことで半ば寄生に近い形で跳梁跋扈の森を通り抜けたミーアだが、犬型のモンスターはセカンディル以前のステージには出現しないために致し方ないことだとレイジは割り切っていた。

「じゃあテイムの手順を……」

「……ぉぉお………」

「ん？」

と、その時だった。
丁度跳梁跋扈の森からセカンディルへと入る入り口にいた二人は吊り橋のかかった渓谷の方面から何やら声がしたことに思わず視線を向ける。
そしてレイジもミーアも、この場にいた不幸を呪うことになる。

「ゔぉぉぉおおおおおおおおおお！！！！」

あれは確かキャラメイクで選択できるマスク装備（初期装備の頭装備と入れ替えることができるが防御力が０）だったな、とそれの首から下から意識を逸らすようにそんな事を思うレイジ。
凄まじい速度で爆走する半裸の変態は頭の上にプレイヤーネームがなければランダムエンカウントの珍獣モンスターと間違えるところだった。

「あ、あれモンスターなの！？」

「いや、プレイヤーネームがあるしプレイヤーだ、それに攻撃しちゃダメだ。」

レイジは何となく半裸の変態プレイヤー……名前はサンラクなる人物が焦っている理由を察する。

（貪食の大蛇は毒フン攻撃してくるからなぁ……きっと薬草が尽きた状態で食らったんだろうな。）

サービス開始時に結構な数のプレイヤーがあれの被害に遭ったものだ、とサービス開始時からのプレイヤーであるレイジは当時の混沌っぷりを懐かしむ。

厳密にはホームレス生活から舐めプかまして回復手段皆無の状態で挑んだツケを支払わされているのだが、まさかそんなアホな理由だとはレイジは思いもよらないのだった。

なぜ半裸なのかはこの際気にしないことにして、レイジはミーアがＰＫペナルティを受けないよう構えた弓を降ろさせつつ、爆走するサンラクなるプレイヤーに叫ぶように告げる。

「宿屋は真っ直ぐ進んで白い屋根の建物だぞーーー！！」

「あああああありがとおおおおおおおおうううううううううううっっ－！！！」

一瞬で走り去っていくサンラクに、大凡のステータス配分を察したレイジは心の中で同情する。

（その育成(ビルド)は駄目だって早く気付くといいが……）

かつての自分と同じようなＡＧＩ偏重のステータスにしているのだろうサンラクを見送りながら、レイジはセカンディルから三つ目の街「サードレマ」に行くために倒さなければならないボスを思い出

す。

「あいつ……かったいんだよなぁ……」

「レイジくん……なんだか凄くベテランって感じだったよ！　かっこいいね！！」

「」

しばし、フリーズ。

そして正気に戻ったレイジは期せずして幸運を運んできた半裸の鳥頭に感謝するのだった。

結論から言えばサンラクはＨＰ全損で死亡したものの、親切なプレイヤーのおかげでリスポーン地点更新に成功し、セカンディルの宿屋で目を覚ますことが出来た。

「あっ…………ぶなかった……」

セカンディルの入り口に差し掛かったところで「宿屋の場所を知らない」という事実に気づいてしまった時は最早これまでと諦めかけていたが、親切なプレイヤーのおかげで本当に助かった。
実際に初期リスポーンに戻された場合ゲットしたアイテムがどうなるのかは分からないが、進んで試してみたいものでもない。
ステータス画面を開き、アイテムがそのまま残っていることを確認して漸く安堵のため息を吐いた。

「確か……レイジ、だったかな。」

今度会うようなことがあれば感謝しないといけないな。
暫くステータスを弄っていたが、どうもこのゲームのデスペナルティは一定時間ステータスにデバフ補正が入るようだ。

「そろそろいい時間だし、寝るか。」

夏休みは始まったばかりだ、一度寝てから改めてやり込むことにしよう。

経験者視点から見る半裸の変態（後書き）

「毒状態に焦ってセカンディルまで全力ダッシュ」は攻略が充実していない初期では割と見慣れた光景でした。
今でも攻略サイトを見ないプレイヤーが同様の光景を見せてくれます。

肥えた価値観をクソゲーで濯ぐ

「あれ、サンラクじゃん。「便秘」は卒業したんじゃなかったの？」

「相変わらずいつ来てもいるのなモドルカッツォ。久しぶりに理不尽ゲリラリズムゲーやりたくなってな。あ、そうだフェアクソクリアしたぞ。」

「マジかよ！俺ラスボスで投げたわ。」

「覆面海パンかつ素手で三十分くらい殴り続ければラスボス余裕だぞ。」

「覆面海パンがパワーワードすぎるんだよなぁ……オッケー今晩倒してくる、俺もフェアカスブン殴るんだぁ……」

デイリーのログイン人数が百人以下という、なぜ未だにサーバーが残っているのか不思議なレベルで過疎っているため、もはや殆どのプレイヤーが知り合いだ。

今の俺は半裸の鳥仮面サンラク……ではなく、イアイフィスト流免許皆伝の闘士（ベルセルク）サンラクであり、すなわち今プレイしているのはシャンフロではない。

神ゲーを長時間プレイしたせいで禁断症状が出たのでクソゲー成分を補給……

というわけではないが、少し思うところがあったので久しぶりにクリアしたクソゲーの対戦環境に戻ってきたのだ。

ベルセルク・オンライン・パッション、略してベンP、便秘。

シャンフロを買う前の俺が購入し、やり込んでいたゲームである以上このゲームはクソゲーであると断言できる。
元々クソゲーの片鱗が見え隠れしていた「ベルセルク・オンライン」の続編としてサービス開始されたパッションであるが、ダウンロード版のプレイヤーはまだマトモにプレイできるにも関わらず、なんとパッケージ版は最早別ゲーレベルのバグまみれのクソゲーだったというフェアクソとは別方向でのレジェンドオブクソゲーだ。

「モドルカッツォ、軽く闘(ヤ)ろうぜ。」

「おk、ルールは当然……」

「「なんでもあり(バーリトゥード)。」」

俺が飛ばしたバトル申請を同じ穴のムジナ……クソゲーが一周回って超次元バグゲリラリズム格ゲーと化した便秘にほぼ常駐しているゲテモノ好き(クソゲーマニア)であるモドルカッツォは即承認。
周囲にバトル開始のメッセージウィンドウが表示され、俺とモドルカッツォを囲むようにバトルフィールドが構築される。

「お、バトル成立したのか。」

「モドルカッツォと……お、サンラクじゃん！！」

「サンラクって確か卒業したんじゃ……？」

「クソゲーマニアは定期的にクソゲニウムを補給しないと死ぬからな、戻ってくると信じてたぜ。」

散々な言われようだが、対戦をするにも過疎りすぎて逆に対戦が成

立しない領域に到達したこのゲームでは誰かがバトルを始めれば自然とこの場にいる全員が観戦にやってくる。
それも現状このゲーム最強のプレイヤーたるモドルカッツォのバトルともなれば尚更に。

「お前がフェアクソに挑んでいる間、俺はさらなる研究の果てに新技を生み出した！ストレート勝ちしてやるから覚悟しとけよ！！」

「ハッ、俺はイアイフィスト流免許皆伝闘士として脳死居合拳最強説をより確実にするんだよ！！」

ゴングが鳴ると同時に、モドルカッツォの身体がバグる。

「うわキッモ！！」

「喰らえ！Ｒ１８触手アタック！！」

首や手足が数倍に「伸びた」モドルカッツォの手が宣言通り触手のように俺へと襲い掛かる。
それに対して俺はポケットに入れた拳を居合のように抜き放って襲い来る手……手？を弾く。
そして次の瞬間、俺とモドルカッツォの姿が消え、互いに全く別々の場所へと瞬間移動する。

「本当反応速度がイカれてんなお前、今の掴み攻撃ディレイ入れたのに普通に対応するとか……。」

「イアイフィスト流は１２フレームあれば理論上ボスの即死攻撃もノーダメでカウンターに持ち込める最強スタイルだからな、ていうかそれ感覚どうなってんだ？」

「首と手足がワカメになった感じ？」

「おいバカ覆面海パンを超えるパワーワードを出すんじゃない！！」

このゲームがクソゲーながら未だにニッチな人気がある理由がこれ、なんでもありならぬ通称「バグでもあり（バーグトゥード）」だ。

このゲームをパッケージ版でプレイすると……普通のゲームなら致命傷レベルのバグ、例えばアバターの形が崩壊する、突然瞬間移動する、一時的に無敵状態になる……などの明らかに製作の設計外のバグを任意で起こすことができるのだ。

これにより「便秘」は闘士達（ベルセルク）の熱き闘いのフィールドではなく、人であることを捨てた人外達による阿鼻叫喚のインフェルノへと変貌した。

一応このゲーム、本来は格ゲーでストーリーモードもあるのだが人外バグが敵ＭＯＢにも適応されるせいでどうしようもないくらいに収拾がつかなくなっている。

人間の動体視力を完全に凌駕する６フレーム、秒に換算すると驚異の０．１秒で発生する射程距離フィールド全体とかいうラスボスのパンチは予備動作に合わせてカウンターをしないと攻略不可能という極まりっぷりだ。

そしてついたあだ名が「超次元バグゲリラリズム格ゲー」、突発的に発生する予備動作（リズム）に合わせてカウンターを叩き込むクソゲーである。

一応フルダイブゲームである便秘では既存の格ゲーの常識は全く通

じゃない。
何せそもそもの前提である「自分が人の形をしている」という基本をぶち壊さなければならないのだから。
そして俺がこのゲームに戻ってきたのは、巡り巡ってシャンフロのためなのだ。

肥えた価値観をクソゲーで濯ぐ（後書き）

ＶＲ格ゲーの登場で既存のディスプレイとアケコンでプレイする格ゲーマーはほぼ絶滅しました。
実際にキャラクターとして体を動かすＶＲ格ゲーではリアルでも強いやつが有利……というわけではなく、「ゲームで体を動かすことが得意」なプレイヤーがＶＲゲームにおける強者です。
そのため、リアルでは貧弱でもＶＲ内ではパルクールもかくやな動きができるプレイヤーも存在します。主人公はその類です。

共通点はセオリーにとらわれない自由な発想（遠回しな表現）

結果から言えば、ストレートは防いだが2ラウンド取られて敗北した。
まさかバグにバグを重ねて来るとは思わなかった。
「いやぁー最近はＮＰＣ相手に技の練習ばっかしてたから満足だわ。」
「まさか飛び散った拳のテクスチャ全部に当たり判定あるとは思わなかった。」
「あれ失敗するとそこら中に当たり判定が飛び散る諸刃の剣だから……そうなると拳の欠片の上でタップダンスされるだけで死ぬ。」
「笑うわ。」
ショットガンパンチでまさか本当に拳が砕けて散弾になるとは予想できないって、精々拳が分裂するくらいだと思っていた。
このゲームの独特なマナーとして観戦していたプレイヤー達から今のバトルのスクリーンショットが送られてくるのを眺めながら俺とモドルカッツォは雑談に興じる。
「しかし大会でもないのになんで戻ってきたのさサンラク。次のクソゲーまでの暇潰し？」
「いやぁ……実は最近シャンフロを始めたんだけど……」

「リアリィ？ハッ。」

俺だから許したが、一般的に人を調理済みの七面鳥が命乞いを始めたのを見るかのような顔で笑うのは失礼なことだと分かっているのだろうか。

「いやいやサンラクお前「むしろバグらないゲームの方がクソゲーなのでは？」とか最高(クールな)に頭の悪いこと言ってたじゃん？なんでまた邪悪(クソゲー)の対極に位置するシャンフロデビュー？」

「フェアカスを殴ってたらなんか燃え尽き症候群みたいになってなー……偶には大衆が評価するゲームをやってみようかな、と。」

「明日は「便秘」が神ゲー扱いされるかも。」

俺がクソゲーじゃないゲームをやるのは槍の雨が降るよりありえない事態ってか。

俺ほど無節操にクソゲーに手を出す悪食ではないが、大抵のクソゲーはクリアしているモドルカッツォがツチノコをペットにしたエイリアンでも見るかのように俺を見るが、いちいち気にするだけアホらしいので話を進める。

「いやこれが中々によく出来ててさ、舐めプとは言えバグもクソ要素も無しで予想外の攻撃受けて死にかけてさぁ。」

「あー、つまり初見殺しとセオリー外しの塊たる便秘で勘を戻そう、ってことね。」

「そういうこと。」

流石に瞬間移動と分身の術を同時にやらかすこのゲームより予想外なアクションがシャンフロで起こるとも思えない。
結構長い間フェアクソ攻略をしていたのでバカなＡＩを介護するプレイは上達したが、代わりに若干錆びてしまった初見殺しに対する対応の勘を取り戻したかったのだ。

「まさか蛇が糞を飛ばしてくるとは思わないだろ？」

「クソゲー好きには相応しい攻撃じゃない？」

「ははは、ぬかしおる。」

「けどシャンフロかぁ……俺もやってみようかな、リア友にこのゲーム勧められねぇから盛り上がる話題がないんだよ。」

そりゃあ肉体改造ミュータントになれるゲームを大衆に広めてもなぁ。
最悪「バーチャルとは言え肉体を歪めるようなゲームは健康ガー精神ガー」と喧しい手合いが出ないとも限らないし、便秘はあくまでも細々と続くクソゲーでいいのだ、むしろ今ここにいるプレイヤー達はそれが好きで来ているのだから。

その後も何度かモドルカッツォや他のプレイヤーと対戦した後、俺は飯落ちも兼ねて人外魔境「便秘」からログアウトしたのだった。

水分と食事を補給し、クソゲーから神ゲーへと移動。
セカンディルの宿屋で目を覚ました変態鳥頭サンラクこと俺はデスペナルティが解除されていることを確認してこれからどうしたものかと考える。

「とりあえずなんか防具を買った方がいいかな……」

流石に裸装備はマズイということは理解できた。
貪食の大蛇の毒糞攻撃にダメージ判定がなかったから間に合ったものの、もしあれに命中した時点でダメージ判定があったら辿り着く前に死んでいた。
紙装甲と呼ぶことすら烏滸がましいノーガード装備だ、せめて初期装備でいいから何か着た方がいいだろう。
そして何より回復手段だ、流石に舐めプすぎた。

「地図もそうだし……インベントリも整理しないとな。」

やることが多いのが楽しいのはゲームだけだ、と現役リーマンなプレイヤーが愚痴っていたのを聞いたことがあるが、まさしくその通りだ。
これが家事課題などであったらそっとため息をついて翌日に後回しにしているだろう。

「さて、出るか。」

共通点はセオリーにとらわれない自由な発想（遠回しな表現）（後書き）

主人公とモドルカッツォは、会ったことはないがリアルでもメールのやり取りをするくらいには親交のあるクソゲーフレンドその１です。

クソゲーならなんでも美味しくいただく主人公とは違い、彼は「難易度が鬼畜調整されたクソゲー」を好んでおり時々主人公に紹介してもらっています。

「いらっしゃ……どの防具をお求めですか？」

俺ほど「着るものが必要です」を全身でアピールしている者もいないだろう。

防具屋の店員NPCは引きつった笑顔でそう俺に問いかけてきた。

というかAIすごいな……そこらへんは軍事レベルの技術が惜しげなく使われてるんだっけかこのゲーム、ほとんど人を相手しているようにしか思えない。

「一覧を。」

「こちらになります。」

羊皮紙……っぽい見た目をしたウィンドウが目の前に表示され、大まかな情報が記載されている。

・蛇革装備一式（個別購入可）：12，000マーニ
・ハードチェーン装備一式（装備個別購入可）：6，000マーニ
・黒道の黒衣装備一式（個別購入不可）：9，000マーニ
・白道の白衣装備一式（個別購入不可）：9，000マーニ
・隔て刃（へだてば）の皮服装備一式（個別購入不可）：4，000マーニ

「隔て刃一式をくれ。」

「かしこまりました、少々お待ちを。」

安さに負けた。
というか俺としては街中を歩く時に変質者扱いされるのがなんだかなぁ、という理由で服を買うだけだ。
よくよく考えたら真正面から攻撃を受ける状況に持ち込まれた時点で負けのようなものなのだから、優先すべきは防御よりも動きやすさだ。
多分ヤツの素材から作られた装備であろう蛇革装備とハードチェーン装備はどうも重量でＡＧＩにマイナス補正が入るようだし、黒道＆白道装備は魔法職用装備、俺には見た目以上の価値がない。
どちらにせよ隔て刃の皮服装備しか選択肢がないな、これ。

「お待たせいたしました。」

「はいこれ代金。」

「お買い上げありがとうございます！破損した装備は持ち込んでいただければ破損に応じた料金で修復させていただきます、貴方に幸運のあらんことを！！」

その場で装備……と、インベントリに消える直前、風船に目鼻口用の穴を開けただけの覆面が視界に入る。
………頭は鳥面のままでいいや。

・隔て刃の皮マスク
四駆八駆の沼荒野に生息するマッドフロッグの皮から作られたマスク。最低限の隙しかないマスクは装着者の顔を守る。
髪の量が多いと愉快なシルエットになるので注意。

・隔て刃の皮ベスト
四駆八駆の沼荒野に生息するマッドフロッグの皮から作られたベスト。一定以下の切れ味の斬撃に対して抵抗を持つ。
肌に吸い付く感触は賛否両論。

・隔て刃の皮ベルト
四駆八駆の沼荒野に生息するマッドフロッグの皮から作られたベルト。マッドフロッグの背中の皮だけを使っているため刺突に対して抵抗を持つ。
通は全身にこれを巻く。きつく、もっと！！

・隔て刃の皮ズボン
四駆八駆の沼荒野に生息するマッドフロッグの皮から作られたズボン。装備者の動きを阻害しない作り。
ベストと比べて防御は薄い。

とりあえず通報されるレベルの半裸から辛うじて薄着のファッションで済まされる肌着の不審者にランクアップ、といったところか。
厚手のダイバースーツ、もしくは分厚い全身タイツを服の形に分解したような服、と言うべきだろうか。
アイテム説明欄の言葉の通り、妙にクセになる密着感は動きやすさ

を損なう事なく見た目と防御力の改善に成功していた。

「まぁ覆面はつけないけど。」

目力鳥面がまだネタになる不審者であるなら、これはネタにならない不審者だ。これから銀行強盗します、と冗談で言っても信じられそうなくらいには不審者だ。

さて、次は武器屋だな。完全に損失してしまった傭兵の双刃に変わるメイン武器が手に入るといいんだが。

致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）は対ボス用の切り札として基本温存だ。

どうも二刀流は武器の磨耗がやけに早い気がするので雑魚相手に無駄遣いするのはナンセンスだろう。

「あ？こんなゴミ買い取れるかよ。」

「まぁそうだよなぁ、原始的な石器以下の出来だし……武器のラインナップを見せてくれ。」

「あいよ。」

カテゴリとしては武器なのだが、価値はゴミと等価らしいゴブリン

の手斧は買い取ってもらえなかった。
まぁ使い捨ての武器と考えれば使い道もあるか。
防具屋と同じく羊皮紙ウィンドウが表示され、俺は双剣カテゴリを探す。

「あれ、取り扱いがないのか。」

だが、双剣の欄は存在自体はするものの、購入可能な武器が一つも存在しない。
困ったな、前言撤回の必要があるか？このままだとゴブリンの手斧を使い潰しながら次のエリアを攻略することに……あ、そうか。
よくよく考えたら双剣使いではなく二刀流使いなんだから短剣二本でもいいのか。
初期装備だった傭兵の双刃が二本一対な一つのアイテム扱いだったから勝手に勘違いしていた。
冷静に考えてゴブリンの手斧も致命の包丁も二本使っていたな。

「短剣はっと………うーん………」

微妙。
可もなく不可もなく、まぁ二つ目の街で買えるものとしてはまぁ……という反応しづらいスペックだ。
いや、レアドロップであろう致命の包丁が想像以上に有能だから余計に弱く見えるのか。

「おう、作り置きで気にいる武器がねぇなら素材さえ持ってくれれば新しく作ってやるぜ？」

「お、マジで？」

それはいいことを聞いた。

通報レベルの変態は引かれる変態に進化した！（後書き）

シャングリラ・フロンティアにおけるＮＰＣは軍用ＡＩやらなんやらを惜しげも無く使用しているため、肉体がない以外はほぼ人間と言っても過言ではない性能です。
というよりも裏設定ですがこのゲームの開発者が頭おかしいレベルの天才なので明らかにオーバーテクノロジーな技術の宝箱と化しているシャンフロを狙う輩はそれこそ世界中にいます。しかしハッキング対策もオーバーテクノロジーなのでどうすることもできず、邪な考えでシャンフロに攻撃を仕掛けたものが最終的にプレイヤーとして普通に楽しんでいる……なんてこともあったりなかったり。

本業そっちのけで採取、あると思います

次のエリア、即ちセカンディルからサードレマへと行くために超えなければならないエリア「四駆八駆の沼荒野」は名前通り多数の沼が点在する荒野であるが、鉱物アイテムがドロップするらしい。行けばわかる、とＮＰＣのくせにやけに不親切な言葉を頂戴した俺は、アイテム整理も兼ねてちゃんと回復アイテムや地図などの諸々の必需品を購入して四駆八駆の沼荒野へとやってきていた。

「さて……まずはモンスターのドロップアイテム検証……」

と行きたいところであるが、その前にゴブリンの手斧でどこまで通用するかを確かめてからだ。場合によっては先に武器を作ることを優先しなければならない。とりあえず検証用サンドバッグとして狙うのは、隔て刃の皮服シリーズの材料となったマッドフロッグなるモンスターだ。

装備の説明からして斬撃に対して耐性を持っていると見て間違いないだろう。
この手の武器相性はお約束オブお約束だ、どうも特定部位は刺突にも耐性があるようなので、打撃か魔法で倒すのが推奨されるのだろうか？　それとも他にもタイプがあるのかな、このゲーム銃器も武器として存在するようだがあれは刺突なのか別の扱いなのか。

「いやぁ、まさか切れ味悪すぎて逆に打撃属性も持ってるとか見直したぞゴブリンの手斧。」

スキル使うとヤバい勢いで耐久が減る点に目を瞑れば打撃と斬撃を

兼ねた使い捨て武器として非常にグッドだ。

とりあえず優先順位は鉱石、モンスターだ。遠目に犬っぽいモンスターや鳥っぽいモンスターが見えたが、距離が離れすぎているためか敵ＡＩの索敵範囲には引っかからなかったようだ。

「確かに見ればわかる、だったな……」

それなりの広さの沼の縁に到達した俺は、ヒゲもじゃのオッサンＮＰＣの言葉の意味を理解する。沼のど真ん中に、岩の塊のようなものが生えているのだ。所々に岩とは違う鉱石らしき質感の部位が見えることから、どうやらこのエリアで鉱石アイテムを内包したオブジェクトのようだ。そして奇しくも、もう一つの探し物も見つかった。

「ゲゴゴッ、ゲゴゴッ」

「蛙……なのかあれ」

鳴き声や、大凡の特徴からあれが泥蛙（マッドフロッグ）であることはまず間違いないだろう。

ただ、将棋の駒に手足をくっつけたようなリアルの蛙とは異なり、どう例えたものか……直方体の箱に生物的なパーツをくっつけた蛙と形容すればいいのだろうか？なんともユニークな形をした蛙であった。

「というかデカいなおい。」

大型犬と同じくらいあるぞあの蛙。泥塗れで皮の色は分からないが、まぁ今俺の着ている皮服と同じ色なのだろう。

物は試しだ、ゴブリンの手斧を二本持って……

「ツシャオラァ！」

「ゲギョオッ！？」

馬鹿め、あからさまに動きに制限がかかりそうな沼の中で戦うと思ったか馬鹿……いや、バカエルめ。流石クオリティお化けの神ゲー、遠慮容赦なく武器を投擲できる。目を狙ったのだが普通にズレたものの、顔面に石器とはいえ手斧が命中したことでマッドフロッグは大きく仰け反り、ひっくり返る……カエルダケニ。

「はっはぁー！チャーンス！！」

泥沼の中に踏み入れば、案の定走ることができず、一歩一歩沼から足を引き抜いて進むことになったが、そこらへんの調整はされているのか、俺がマッドフロッグのもとにたどり着くまでマッドフロッグの仰け反り状態が解除されることはなかった。

「思いっきり弱点感漂わせてるもんな……ふんっ！！」

「ギュエエ……！！」

蛙が潰れたような……というか蛙そのものか、ともかく弱点丸出しのマッドフロッグに叩きつけたゴブリンの手斧（予備）はクリティカルエフェクトと共にマッドフロッグの腹に深く食い込み、それが致命傷になったのかマッドフロッグはポリゴンとなって散った。

「とりあえず投げたのを回収して……まぁ分かってはいたがドロップアイテムは皮か」

鎧としてＮＰＣが販売するくらいだし、レアアイテムではないのだろう。俺の見立てでは背中の皮がレアドロップと見た。とりあえずゴブリンの斧はマッドフロッグ相手ならまだ現役だということが分かった、モンスター検証はひとまず中断し、本命たる鉱石採掘へと取り掛かる。

「ツルハシ、アイテムとしてじゃなくて武器として装備もできるのか……」

あながち馬鹿にならない強武器ツルハシ、サバイバル系のゲームだと尖った石と木の枝でお手軽に作れる上に「斬る」モーションで「刺す」攻撃を繰り出せるのでメイン武器にする人もいた。野球ゲーム出身のプレイヤーがガチで使いこなすツルハシは下手な槍より殺意の塊だと断言できる。

「……って、いう、か……重い……っ！」

ガツガツと岩の塊にピッケルを叩きつけているのだが、武器として使えるだけあってか今のＳＴＲでは少々取り回しに難がある。振れないことはないのだが、一回振るだけでスタミナの三分の二が消費されるのだ、これでは効率が悪過ぎる。

それでも頑張って岩を叩き続けた結果、十分ほどかけて鉱石アイテムを採れるだけ採ったのだった。

本業そっちのけで採取、あると思います（後書き）

火山……主任……ピッケル……うっ頭が

時間効率が悪いとイライラするアレ（前書き）

すごい今更ですが感想など貰えますすと作者が気持ち悪い笑顔を浮かべてモチベーションが向上します

時間効率が悪いとイライラするアレ

・石ころ
何の変哲もない石の礫。
鉱石としての価値は皆無であるが、礫玉としての利用価値はある。

・灰色鉄鉱
灰色の鉄鉱石。
特殊な効果こそないものの様々な用途に加工することができる。
磨いても光沢を放たないため装飾品としては下の下。

・銀色鉄鉱
銀色の鉄鉱石。
これを用いた装備は「魔力強靭」の効果を持つ。
銀だけど鉄。

・沼棺の化石
おそらく何かのモンスターの一部であろう化石。
四駆八駆の沼荒野に乱立する沼棺は遥かな太古に在った生物の記憶を内包していることがある。
掘り当てたそれがただ過去の残滓なのか、過去からの遺産なのかは運次第……

十分間作業的にツルハシを振り下ろし続けるのは中々にクソゲチック（クソゲー的であるという様）であったが、結果としては中々に上々と呼べるのではないだろうか。
特にポロっと一つだけドロップした泥棺の化石なるアイテムは激レアなオーラがプンプンする。
どうやら一定回数採掘しきると岩……沼柱？　なるオブジェクトは崩れてそれ以上の採掘ができなくなってしまうようだ。最後の灰色鉄鉱をドロップしたところで沼柱は崩れてしまった。

「さてどうするか……」

まぁ一旦戻って武器を作ってもらうのが最善かな。とりあえず今回収したアイテムで何が作れるのかを調べておきたい。足りないようならもう一度ツルハシを担ぐ、足りたようなら作ってもらった武器でレベリングしてからツルハシを担ぐ。
まだこのエリアには大量の沼柱があるのだ、とりあえず片っ端から掘ってアイテム検証だ。

いやしかし、ウチの高校が他と比べても早いタイミングで夏休みに突入したのは本当に助かった。なにせ夏休みシーズンと言えば大体の業界で稼ぎ時だ。当然現在進行形で神ゲーまっしぐらなシャンフロが夏休みシーズンに売り上げ記録を更新するのは自明の理、きっとこれから先は最初の街は新規プレイヤーで埋まることになるだろう。
言い方は悪いが、新規プレイヤー達が一斉に冒険を始めようものなら、蝗の群れよろしくあらゆるエリア、アイテムが食い尽くされることになる。一応対策はされているらしいが、そこら中にプレイヤーがいる光景は中々に……うん、鬱陶しいだろう。

「おうい、鉱石集めてきたけどこれで何が作れる？」

「見せてみな……ほう、中々に集めてきたじゃねえか。これなら大体のものは作れると思うぜ」

沼柱一本掘り尽くせば武器は作れる、これなら余程のことがない限りは少数のプレイヤーが沼柱を掘り続ける必要性は薄いってことか。まぁ掘るがな。

「ふむふむ………」

新しく表示された武器の中で気になるのは二つ。

・湖沼の短剣
10，000マーニ

・凶暴の双鋸
16，000マーニ

「まぁ気になるだけで買うのは決まってるケド、湖沼の短剣を二つ作ってくれ」

跳梁跋扈の森で稼いだアイテム類を売り払い、金にはいくらか余裕がある。それにどちらにせよ沼柱は掘るしモンスターも狩るしでもう一方も買えばいいだろう。

「あいよ、ニイちゃん二刀流使いかい？」

「ん？まぁね。」

「二刀流用に同じ武器を二本作るのも久しぶりでなぁ！はっはっはっ！！」

へぇ、二刀流使いは少ないのかな？
とはいえ、材料と金を渡してはい完成、とはいかないようだ。
夜になったたら来な！と言われたため、手持ち無沙汰となってしまった。

「どうすっかなー………」

まぁ、レベリングかな。

というわけで戻ってきました四駆八駆の沼荒野。夜までどうするか考えたが、結局レベリングすることにした。

金も稼がないといけないしとりあえずマッドフロッグ乱獲しよう、そうしよう。

と、ゲーム故かあからさまに「今から襲いますよ、備えて。」とでも言いたげな甲高い鳴き声が頭上から響く。

見上げれば、最初にここにきた時にちらと見かけた鳥……改めて見ると、ハゲタカ？　みたいなモンスターがまさに俺に襲いかからんと降下してきていた。

「検証対象が自分から来てくれるとはありがたい」

俺の頭に鋭い爪による蹴りを食らわせようとしているハゲタカを一歩横にステップして避けつつ、ゴブリンの手斧をハゲタカの脚に叩きつけて見る。

「ギャエエ！！？」

「うげぇっ！一発破損！？」

一方は激痛に、一方は損害に悲鳴を上げる。消耗はしていたがまだ三分の二は耐久が残っていたんだが、まさか一撃破損とは。ゴブリンの手斧が通用しない頑丈なモンスターなのか、それともあの脚が特別頑丈なのか……まぁいい。

「おりゃあ！」

残ったもう片割れの手斧をハゲタカに投げつけ、新しい……と言っ

てもマッドフロッグを倒した時に消耗はしている手斧を二本持って、羽に投げた手斧が命中したことで動きの止まったハゲタカに肉薄する。

「頭！羽！胴体！もっかい脚ぃ！！」

く、結構殴ってるんだが一向に倒せん。ゴブリンの手斧はマッドフロッグが限界なのか？地面に落ちたハゲタカを石器で滅多打ちにする光景は中々シュールではあるが、大体四十秒ほどひたすら殴り続けてようやくハゲタカは羽を残してポリゴンに変換され爆ぜた。

「時間かかるなぁ………ていうか羽か。」

拾いつつ、調べてみる。

・盗賊禿鷹（バンディットバルチャー）の羽
バンディットバルチャーの羽毛の一枚。
文字通りただの羽であり盗賊組合の証として用いられる以外に価値はない。
だが故にこそ、かつてはただ罪人としてしか扱われなかった者達の証なのだ。

「割りに合わねぇ！！」

労力の対価としては低すぎる価値に思わず悲鳴をあげてしまった。

時間効率が悪いとイライラするアレ（後書き）

実際のところ４０秒間モンスターが怯み続けることは原則ありえません。

ただ、クリティカル攻撃には1秒程度のノックバック効果があるため、理論上は双剣や二刀流のような手数の多い武器でクリティカルを連発し続けることができれば、たいていの雑魚モンスターは完封することができます。悶えるモンスター相手に常に最適な角度で武器を振り下ろし続けられるのなら、の話ですが。

ちなみにある程度レベルの高いモンスターは特殊行動で強制的に怯み状態を解除します。

特異なる者（前書き）

ふとランキングを見ていたところ、自分の作品の名前を目撃して五度見くらいしました。
これからも拙作をよろしくお願い致します。

ゴブリンの斧では割りに合わない。そう結論づけた俺はリアルで寝る、という手段で夜まで時間を潰すことにした。
こうなったら徹夜敢行で徹底的に攻略し尽くしてやるよ……！と意気込んだはいいが、武器がなければまたあの不毛な太鼓ゲーだ。

「おっさん武器出来た？」

「おう来たか妙な格好のニイちゃんよう、出来てるぜ。」

格好への指摘は受け付けない方針だ、なんか気に入って来たんだよこの鳥面。手渡しではなく、インベントリに直接渡されたそれを確認する。

・湖沼の短剣
澱めど輝きの欠片を見せる短剣。
沼荒野の良質な鉱石から作られたそれは戦士の長き友となるであろう。
この剣に輝きを宿せるかは使い手次第。
クリティカル攻撃に成功時、一定時間耐久値の減少が半分になる。

「控えめに言って神武器かよ………」

長く使う、という点でこれ以上に適切な武器は現状ないだろう。もう一方の双鋸はクリティカルで追加ダメージ効果だったが、二刀流や双剣自体が手数とクリティカルを狙うスタイルで設計されているからだろう。

「ああそうだ、聞きたいんだけど。」

「あぁん？俺ぁそろそろ寝たいんだがよう……」

「武器の耐久を回復する手段ってある？」

「あー、そういう質問する奴多いんだよなぁ。シロートが武器をどうこうなんて出来るわけねぇだろ？大人しく俺たち鍛冶屋の世話になるんだな。俺たちゃ武器を作り武器を育てる鍛冶屋だぜ？武器に関しちゃ任せてくれりゃ十全に仕上げてやるよ。」

「ん？武器を育てる？」

「なんだ知らねぇのか？俺みてぇな鍛冶屋……鍛造魔法を使える奴は武器を作るだけじゃなくてより強く強化することができる。ま、鍛冶屋にとっちゃ武器は子供みてぇなもんだ、強化なんて味気ねぇ言葉じゃなくて育てる、って言うのさ……」

感傷に浸り始めたおっさんをよそに、俺はおっさんの言う「育つ」について考える。
というのもこのゲーム、攻略Ｗｉｋｉが降参する程度には隠しパラメータ隠し要素隠し条件の宝庫らしく、普通にレベリングしても当然強いが何らかのユニークジョブ、ユニーク装備、ユニーク魔法をゲットしようものなら例え始めて数日の初心者でも大注目を浴びる

程度には「ユニーク」は強い影響力を持っている。
つまり武器が「育つ」というのにも当然何らかの条件をトリガーに突然変異！ということも十二分にあり得る。
「ありがとよ、材料と金を集めたらまた来るよ。」
「おう、頑張れよ。」
おっさんと別れ、新たな武器を手に入れた俺は四駆八駆の沼荒野へと向かう。ノルマとしては「インベントリが限界になるまで」だ。

「マジかお前、それは反則だろう……！」
「ゲキャキャキャキャキャッ！！」
「グギゲッ！」
「ギャギャーッ！」
仲間を呼ぶ、は弱いモンスターの特権だろうがよ……！！

ゲーム上流石に真っ暗闇はクソゲーすぎるため、現実でいう日没直後程度の暗さの沼荒野にて、俺は赤帽子をかぶったゴブリンが仲間を呼んだ事実に思わずそう毒づいた。

沼荒野は昼と夜で出現するモンスターが変化する、それが分かったのは良いが明らかにこいつらは強さの調整がおかしい。赤帽子（レッドキャップ）の小鬼（ゴブ）達は打製石器から磨製石器にランクアップした手斧や、錆びた直剣を持って俺を包囲する。

遭遇した時、最初は一匹しかいなかったのだ。それでもゴブリンとは思えない素早さに避けることは出来るが時折背筋が冷えるような殺意高めのフェイントを絡めて来たりと、明らかに一定以上のレベルがなければ逃走一択な調整がされたモンスター……いわゆるユニークモンスター、他ゲーの単語を使うならＦ．Ｏ．Ｅ的な気配がプンプンしていた。

だがそこはフルダイブＶＲ、レベルのディスアドバンテージはプレイヤースキルでカバーできるのがこの手のゲームの良いところであり、かつてのディスプレイ型ゲームにおけるゲームの上手いプレイヤー達が淘汰された悪しき点でもある。
そして自慢じゃないが全体即死攻撃や確定命中、バグ命中でなければ俺は大抵の攻撃は回避できると自負している。
新調した武器の攻撃力も中々のもので、俺の見立てでは三分の二程度は無傷でレッドキャップのＨＰを削ったのだが……そこでこの赤帽子野郎は仲間を呼びやがった。

結果、現在俺は四匹のレッドキャップに囲まれている訳だが……

（さてどうするか……）

別に俺はリスポーンを縛っているわけでもなければ、一度も死なない制約を自分に課しているわけでもない。
だがゲームシステム的にプレイヤーキャラはＨＰが全損してもすぐさまポリゴン爆散するわけではなく、数分間アバターがその場に残り続ける。
さらに言えば数分経過してポリゴン爆散、リスポーンするまでの間は第三者がプレイヤーのインベントリを開くことが可能であり、プレイヤーキラー、ＰＫはまさしく強盗のためにプレイヤーを襲う事が殆どだと聞く。俺をカバー、もしくは蘇生してくれる仲間がいない以上、インベントリを誰かに漁られることは回避したい。
なら逃げるのが最適解……ではあるのだが、無茶をしてみたいのもまた事実。何せゲームだ、楽しまなければ何のためにやっているのか分からない。

「さぁどうしようか……」

と、その時レッドキャップの一体が轟音と共に空中へと吹き飛ばされた。もしや親切なプレイヤーが見兼ねて助けてくれたのか？

「グルルルル………」

そんな淡い期待は明らかに捕食者じみた唸り声にかき消されたのだった。

『ユニークモンスター「夜襲のリュカオーン」に遭遇しました。』

わぁ、そっちかぁ。

特異なる者（後書き）

鍛冶魔法はＮＰＣ鍛冶屋に弟子入りすることで習得可能な「武器と限定的な防具」製作魔法です。防具に関しては鍛冶魔法だけではなく服飾魔法というＮＰＣ防具屋に弟子入りしなければ習得できない魔法が必要になるため、プレイヤー鍛冶屋は武器職人がほとんどです。

自分で武器のデザインが可能であるためソードスミスを目指すプレイヤーは多く、初心者プレイヤー相手に自作の武器を販売するプレイヤーもいます。そのため新規プレイヤーが激増するシーズンは生産職プレイヤーが自身のスキルと懐事情を一気に解決するチャンスの時期でもあります。

黒狼夜襲（前書き）

ふとランキングを見ていたところ、自分の作品の名前を昨日よりも簡単に見つけることができて絶句しました。

皆々様のおかげで日間とはいえ２０位以内に拙作の名前を表示することができました、本当にありがとうございます。

ここで真ユニークモンスターから生き残るためシステム的には敵同士だが臨時で結成されたパーティのイカれたメンバーを紹介するぜ！！

明らかに防御力に難のある俺、サンラク！！
俺が半殺しにした死にかけのレッドキャップA！
無傷のレッドキャップB！
逃げることを視野に入れ始めたレッドキャップC！
果敢に立ち向かいポリゴン爆散したレッドキャップD！南無三！
以上だ！！

「おいおい一撃かよ……」

ユニークモンスターとは要するに「運が悪かったね、死ね！！」という運営の悪意である。
基本的に初心者は会ったら死である。レッドキャップがユニークモンスターなのでは？　なんて考えてた過去の自分に飛び蹴りして沼に沈めてやりたい。プレイヤースキルがどれだけ高かろうが雑魚はぶち殺す、それこそがユニークモンスターである。

言葉は無くとも全身から発せられる強者特有の圧が否が応でも俺に隔絶した実力差を叩きつけてくる。というかリアリティすげぇ、こんな肌を焼くような威圧感をゲームで再現できるのか。

「っとぉぉ！！？」

現実逃避しかけた思考を無理やり引っ張り戻し、転がるようにその場を離れる。
次の瞬間、俺のいた場所を一本一本が俺の手首から中指の先端までより巨大な牙の羅列が通過し、俺の背後にいたレッドキャップＢが咬合の餌食となった。

肉が引き裂かれ骨が砕かれ、臓腑が潰れて……これらの工程がただ一噛みに圧縮された結果、「ゴギョッ」とでも形容すべき音を立ててレッドキャップＢの命が粉砕される。

「ユニークモンスター「夜襲のリュカオーン」ねぇ……」

成る程、夜に襲ってくるから夜襲、と。ゲームの演出上夜とはいえ薄暗い所為か、逆に際立つ漆黒の毛並みにレッドキャップを……いや、多分俺でも一撃で喰い殺す殺意の篭った黒い牙。
体の殆どが黒い中で、真っ赤な口腔と黄色い眼がまるで狼の形をした暗闇の中に口と目だけがあるようにも錯覚させられる。

現在俺のレベルは１８だが夜襲のリュカオーンと一体どれほどの隔絶があるだろうか。ダブル……いや、トリプルスコアくらいはレベルに差がありそうだ。まぁまず勝てない、プレイヤースキルとか紙装甲がどうだとかそういう以前の問題として火力が足りない。クリティカルを出す出さない以前の問題だ、鉄板に爪楊枝から針に持ち替えて刺したってへし折れる結果に変わりはない。

「逃げる……も無理か」

ＡＧＩの数値がどれだけ違うかなど考えるのも馬鹿馬鹿しい。さっき避けられたのは割と奇跡……いや、そうでもないな。
あの程度……いや、程度って表現はなんか違うが兎も角あの速度で

突っ込んでくる敵ＭＯＢと戦った経験、実はある。
というかこのゲームではないがそこそこやり込むゲーマーである俺は高難易度の敵と戦った経験は当然ある。いや流石にレイド前提のユニークモンスターをソロで倒せるとは思えないが、戦ってみるか……？

「そうだ、そうだとも……俺を誰だと思ってやがる」

バグ、クソ調整、理不尽エンカ、あらゆるクソゲーを乗り越えたゲーマーだ！　当たり判定バグってもねぇお前にハイ参りましたと降参してたまるか！

「やってやろうじゃねぇか！！」

今最高に楽しい！　俺は今ゲームを楽しんでいる！！
そうとも、明らかに勝てないユニークモンスターに初期装備で挑むのはゲーマーのサガ！　なんら恥ずかしがることはない！
現状最高火力を出せる武器である致命の包丁に持ち替え、むしろこちらから突っ込む！

俺が諦めたようにへたり込むとでも思っていたのか、破れかぶれに突っ込んでくると思ったのか、なりふり構わず逃走するとでも思ったのか。そのどれをユニークモンスターのＡＩが予想したいのかは分からないが、まさかあの黒狼も俺が本気で倒すつもりで突っ込んでくるとは思わなかったのだろう。
雑に振り払われた前脚の薙ぎ払いをフラッシュカウンター……いや、貪食の大蛇の経験値で変化したジャストパリィでカチ上げたのを目撃したリュカオーンの目が見開かれる。

「大したことねぇじゃねーかハッハァーーッ！」

嘘です正直死ぬと思いました。

――――――――――――

PN：サンラク

LV：18

JOB：傭兵（二刀流使い）

2，000マーニ

HP（体力）：30

MP（魔力）：10

STM（スタミナ）：40

STR（筋力）：10

DEX（器用）：15

AGI（敏捷）：40

TEC（技量）：20

VIT（耐久力）：1（14）

LUC（幸運）：55

スキル

・スピンスラッシュ

・スクーピアス

・ナックルラッシュ

・タップステップ→スライドステップ

・フラッシュカウンター↓ジャストパリィ
・ループスラッシュＬｖ．１

装備
右：致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）
左：致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋２）
胴：隔て刃のベスト（ＶＩＴ＋４）
腰：隔て刃のベルト（ＶＩＴ＋４）
足：隔て刃のズボン（ＶＩＴ＋４）
アクセサリー：無し
――――――――――――

――――――――――――
ＥＮ：夜襲のリュカオーン
ＬＶ：１６５
ＨＰ（体力）：？？？？？
ＭＰ（魔力）：？？？？？
ＳＴＭ（スタミナ）：？？？？？
ＳＴＲ（筋力）：？？？？？
ＤＥＸ（器用）：？？？？？
ＡＧＩ（敏捷）：？？？？？
ＴＥＣ（技量）：？？？？？
ＶＩＴ（耐久力）：？？？？？
ＬＵＣ（幸運）：？？？？？
スキル

???????
???????
???????
???????
???????
???????
————————————

ジャストパリィは「敵の攻撃に対してクリティカルのタイミングで発動する」及び「受け流す体勢」の両方を完全に成功させれば理論上全ての敵の物理攻撃をパリィできる神スキル（なおパリィ不可の攻撃や魔法系攻撃で死ぬ模様）

ユニークモンスターとは一般的に出現確率が極端に低いレアモンスターと混同されがちですがシャングリラ・フロンティアでは「異名＋個体名持ち」を指します。

エリアボスやまだ登場するのは先ですがストーリーボスなどは「レベルを上げまくればソロでもいける」調整ですが、夜襲のリュカオーンを始めとするゲーム内世界に点在するユニークモンスター達は「俺ＴＵＥＥＥだろうが単独で倒せるような調整してねぇよ、死ね！」を地で行く調整がされています。

ちなみに現在何体のユニークモンスターが実装されているのかは明かされておらず、今も誰にも見つかっていないユニークモンスターがいたりいなかったり……夜襲のリュカオーンはあらゆる場所にランダム発生するポ〇モンの三犬的なモンスターのため知名度はトップクラスです。

まぁ、結果は分かりきっていたわけで。流石に突然覚醒して強烈なカウンターを！とか謎の高レベルプレイヤーに助けられて……とかそういう劇的なことがそうそう起きるはずもなく。

「まぁ、ですよねー」

逆に何故と聞きたい今現在、HPを1残して膝から下が噛み千切られた俺は地面に転がってゆっくりとこちらへ迫る夜襲のリュカオーンを眺めていた。

まぁプレイヤースキルだけで何にでも勝てるなら俺はリアルで身体を鍛えてるわ、って話なわけで。プレイヤースキルだけで全部決まるならこの世にゲーマーなんてゲーム限定の強者な人種は存在しないわけで。

いやでももし俺を「ユニークモンスターに瞬殺された変な鳥頭」と語り継ぐ者がいるならちょっと待ってほしい。これでも五分は持ち堪えたし、二百回くらいは攻撃を当ててたし、その内百と数十回くらいはクリティカルを出している。まさか毛ほどもダメージを与えられないとは思わなかったけどな！　ハハハ。

いやホント、あれ毛じゃないよ。鎧を毛の形に圧縮したものを全身から生やしてるようなもんだよ。

見ろよ、ほぼ無傷に近かった致命の包丁が破損寸前だ。ちゃんと柔らかそうな部位を攻撃してただけでこの有様だよ、俺は岩に斬りかかってたのか？　しかも何らかのスキルなのか、奴の咆哮で身体の動きは強制的に固定されるわ、消えたと思ったら背後から突然現れ

るわ……褒めて、むしろ現状使えるあらゆる手段で五分保たせた俺を褒めて！

ちなみにレッドキャップ達もヤケになったか夜襲のリュカオーンに攻撃を仕掛けたものの、一匹は後脚で蹴られて水風船のようにポリゴン爆裂し、俺が追い詰めたレッドキャップＡは一発攻撃を当てることには成功したものの、武器である錆びた長剣がへし折れ呆然としたところを夜襲のリュカオーンの口の中に消えた。
このゲームにモンスターテイマーとかがあって俺が今それであったなら間違いなくスカウトするくらいには気に入ってたんだがな……言ってしまえばデータでしかないのだが、南無。

「あークソ……つくづく神ゲーだわ……」

胸にあるのは満足感ただ一つ。確かに夜襲のリュカオーンは強かった。それはもう理不尽に固く、理不尽に強く、理不尽に速い。膝から下を噛み千切られた重傷とはいえ、致命傷と言うにはいささか疑問があるにも関わらずＨＰほぼ全損って頭おかしいだろ、１残ったのはＬＵＣの効果か何かか？　後で調べよう。
だが、この理不尽はちゃんと正常なプログラムによるものだった。
夜襲のリュカオーンはちゃんとこれを作った者達の想定通りの強さだ、言うなれば……倒せる理不尽だ。

「いつになるかは分からんが……お前絶対倒すからな」

「…………。」

ラスボスとかストーリーとかもうどうでもいい、完全に俺の炉心（ゲーマー魂）に火が入ったのを自覚する。
今この瞬間俺がこのゲームをプレイする原動力（モチベーション）は決まった。

「それまで倒されるなよ夜襲のリュカオーン。」

「…………グルッ」

「えっお前もしかして割と上等なＡＩ積んでおぼぁっ」

明らかに口の端を歪めて笑った夜襲のリュカオーンに物申す途中で俺は上半身を噛み千切られて残った１が０となった。

『「リュカオーンの呪い（マーキング）」が付与されました。』

「…………。」

セカンディルの宿屋のベッドの上で目を覚ました俺は、無言でステータス画面を開く。

――――――――――――

ＰＮ：サンラク
ＬＶ：２８（５０）
ＪＯＢ：傭兵（二刀流使い）
２,０００マーニ
ＨＰ（体力）：３０
ＭＰ（魔力）：１０
ＳＴＭ（スタミナ）：４０
ＳＴＲ（筋力）：１０
ＤＥＸ（器用）：１５
ＡＧＩ（敏捷）：４０
ＴＥＣ（技量）：２０
ＶＩＴ（耐久力）：１（６）
ＬＵＣ（幸運）：５５

スキル
・スピンスラッシュ→ラッシュスラッシュ
・スクーピアス→スパイラルエッジ
・ナックルラッシュ
・スライドステップ→スライドムーブ
・ジャストパリィ→レペルカウンター
・ループスラッシュＬｖ．１→Ｌｖ．４
・エッジクライム
・アクセルＬｖ．３

装備
右：致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）
左：致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋２）
胴：リュカオーンの呪い
腰：隔て刃のベルト（ＶＩＴ＋４）
足：リュカオーンの呪い

アクセサリー：無し
――――――――――

ユニークモンスターとはただ戦うだけで経験値が入るらしい、ステータスポイントが美味しい……まぁそれはいいとして。
スキルも新しいものもあればさらに発展したものもある、格闘スキルを使わなかったのは惜しいな……まぁそれはいいとして。

・リュカオーンの呪い（マーキング）
夜襲のリュカオーンは強敵をこそ好む。そこに善悪賢愚は考慮されず、ただ己の存在を示した者にリュカオーンは自身の呪いを刻みつける。
それは己の獲物であるという徴であり、傷跡の呪いより発せられる黒狼の気配は半端な存在に大いなる力の残滓を示す。
呪いは、黒狼を超える力にて解呪するか、黒狼を打倒する他に解く術なし。
「リュカオーンの呪いが付与された部位は装備品を装備することができません。」
「リュカオーンの呪いを持つキャラ以下のレベルのモンスターはキャラから逃亡します。」
「リュカオーンの呪いを持つキャラは他の呪いに対して強い抵抗を得ます。」
「リュカオーンの呪いを持つキャラはＮＰＣとの会話で補正がかかります。」

あれ、これ詰んでね？

主人公補正はパラメータには無い（後書き）

何とは言いませんが条件は「前衛職で五分間ノーダメージ」と「即死攻撃を受けてＨＰが全損しなかった（アイテム、スキル、魔法未使用）」です。

あともう一つ、「レベル差が１００以上ある相手にノーダメージでクリティカルを一定回数当てる」も主人公は達成しています。

半裸、悪化し再び（前書き）

一週間前の自分に「この作品カテゴリ日刊一位、総合日刊四位になるよ」と言ったら果たして信じるだろうか

皆々様のお陰でカテゴリ総合日刊ランキング四位という、「日刊ランキングをもっと見る」を押さなくても作品を見つけることができる場所まで来ることができました！　本当にありがとうございます！

これからも拙作を宜しくお願い致します。

半裸、悪化し再び

要するに何が問題なのか？　簡単だ。

・半裸を強制させられる胴、脚装備不可。
・常に格上と戦わなければならない雑魚敵逃走。
・呪術師のバフ、最悪魔術師のバフを弾く可能性のある呪い抵抗。
・さて私のキャラは今初心者、中級者、上級者のどれに該当するでしょうか。

「これは…………クソゲー展開じゃな？」

なんてことだ、神ゲーに拒絶反応を起こした俺の肉体に染み付いたクソゲー達の怨念がシャンフロをクソゲー化させる呪いを因果律を曲げて呼び寄せてしまったのか…………？　いや、落ち着け、冷静になれ。クール、ソークール。

クソゲーをプレイするにあたって重要な三か条。一にクソシナリオへの寛容な心、二にアホＡＩへの不屈の忍耐、三に突発的不具合への冷静な判断力だ。

「まずやる事を纏めよう……」

ステ振り、そうステ振りだ。５０ポイントあればそろそろキャラビルドの方針が定まる頃だ。現状は幸運紙装甲クリティカル戦士だが、これからレベリングを何の問題もなく行えるとは限らない。それにリュカオーンの呪いも完全にデメリットというわけでは無い、それを加味した上でどう分けるか。

「……そういえば」

このゲームって逃げたモンスターはどうなるんだ？　この手のリポップはある程度プレイヤーから離れたモンスターは自動的に消失して、初期位置に再発生したりするものだが、俺から逃走するとしてどこまで逃げる？　何せ一切のロードを挟まないフルダイブＶＲ、実質的にほぼ現実と同じ法則で動いている以上俺の予想通りなら。

「そうだな」

もういっそＨＰやＶＩＴは最低限あればいい、オワタ式でこのまま突っ走っていこう。今更タンクビルドにしても中途半端な出来になるだけだ。　重要なのは逃げるモンスターに追いつく脚力、それを支えるスタミナ……極振りは流石に怖いから技量にもちょっと振りつつ幸運にブッパ……そう、夜襲のリュカオーンの攻撃をＨＰ１で耐えることができたのはきっと幸運が関係しているんだろう。

「これは…………」

――――――――――――

ＰＮ：サンラク
ＬＶ：２８
ＪＯＢ：傭兵（二刀流使い）
２，０００マーニ
ＨＰ（体力）：３０
ＭＰ（魔力）：１０
ＳＴＭ　（スタミナ）：５０

ＳＴＲ（筋力）：１５
ＤＥＸ（器用）：２０
ＡＧＩ（敏捷）：６０
ＴＥＣ（技量）：２０
ＶＩＴ（耐久力）：６
ＬＵＣ（幸運）：６５
スキル
・ラッシュスラッシュ
・スパイラルエッジ
・ナックルラッシュ
・スライドムーブ
・レペルカウンター
・ループスラッシュＬｖ．４
・エッジクライム
・アクセルＬｖ．３

装備
右：致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）
左：致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋１）
胴：リュカオーンの呪い
腰：隔て刃のベルト（ＶＩＴ＋４）
足：リュカオーンの呪い
アクセサリー：無し
――――――――――――

おかしい、縛りプレイをするつもりは別になかったのに……
ここまで来ればもう幸運戦士と心中するしかあるまい、紙装甲は避けのテクで、火力はクリティカルと手数で補うしかないだろう。と

いうか新しく習得した双剣で壁を登るスキルやら一定時間文字通り加速するスキルやら、我がことながらどんだけ必死に戦ってたんだと笑えてくるぞ。いやそもそも、ちょっと手探りでプレイしすぎたかもしれない。強敵を前にヒャハってしまったがよくよく考えれば夜襲のリュカオーンが現れる前兆はあったのかもしれないし、オンラインゲームだというのにソロでプレイするのはどちらかと言うとマイノリティに属するのではないだろうか？

組むプレイヤーがほぼいない為に強制的ソロプレイになるクソゲーとは違って、常に数千人はログインしている神ゲーなら野良でもパーティは組めるだろう。

いや、でも俺より下のレベルのモンスターが逃げる以上他のレベリング目的のプレイヤーからすれば迷惑以外の何物でもなく……ああくそ、どれだけ考えても「ソロで頑張るしかない」という結論に到達してしまう。

というか明らかに数十人で倒すようなモンスターの呪いを解ける奴っているのか？トッププレイヤーなら行けるのだろうか？　というかそんな高レベルのプレイヤーがこんな初心者の街に来る確率なんてそれこそランダムエンカウントであの黒狼に出会う確率とほぼ同じだろう。

「はぁ………」

そして何よりも、あのクソ狼に噛まれた両足の膝から下と胴体を黒く蝕む爪痕のような……呪い（マーキング）。まるで当然の権利であると言わんばかりに隔て刃のベストとズボンは破損し消失、ステータス画面で何度確認しても装備欄を埋める忌々しい黒狼の名前。

比較的ネタで済む不審者は、再び通報されるレベルの不審者になってしまった、ということだ。

「まぁこの程度の艱難辛苦で俺が運営に泣きつくと思ったら大間違いだが……な。」

自分でも驚くくらいこのゲームにハマったものだ。打倒「夜襲のリユカオーン」を燃料として、俺は改めてこのゲームのやり込みを決意するのだった。

半裸、悪化し再び（後書き）

主人公が強制半裸になった原因たる「呪い」ですが、ゲーム内においては三種類存在します。
最初にデバフや魔法をもっとねちっこくした感じの攻撃手段「呪（まじな）い」、これは職業「呪術師」や一部のモンスターが使用するシステムに基づく魔法に分類されるものです。
次にシナリオの中におけるファクターとしての「呪（のろ）い」、これはプレイヤーがシナリオのフラグを達成することで解除されるシナリオギミックです。例としては「幽霊屋敷探索依頼で幽霊屋敷の中にいる間は継続的にステータスがダウンし、幽霊屋敷を探索完了することで解除される」などが該当します。
そして最後にユニークモンスターのみが扱うことができる特殊な「呪い（マーキング）」、これはいわゆるシステムに干渉する凶悪なデバフであると同時に装備欄を潰すだけのメリットも内包した特殊なシステムです。とはいえメリットもうまく活用したら、という前提付きなので基本的にはデメリットです（恒常的な格下モンスターの逃走強制など）
一応補足すると、二つマーキングされたとしても効果が二倍！　とはなったりしませんが、ＮＰＣの好感度補正だけは例外としてその影響をモロに受けます。
ＮＰＣ（ＰＬ的視点を持たない物語の人物たち）にとって「地方信仰で神扱いされてもおかしくないようなモンスターから認められた証」を付けた者がどういう風に見えるか、という話ですね。

食い違う一線級

「あれ、あのプレイヤーまだいるんだ……」

「なんであんな高レベルのプレイヤーが最初の街で仁王立ちしてるんだ？」

「なんか人を探してるんだって」

「ていうか中身女のプレイヤーらしいぞ」

「マジで？ゴツい男キャラの女性プレイヤーなのか……いいな」

「やめとけやめとけ、俺らみたいな始めたばっかの木っ端なんか構ってくれないって」

夏休みに突入し、爆発的に新規プレイヤーが増え始めたために、そのプレイヤーが探す人物を見つけ出すことは困難である、そう当の本人も思っていた。

だからこそ、クランの幹部にどやされて仕方なく本拠地へ戻ろうとした道すがらに、その名を聞くことができたのはまさしく奇跡であった。

「やっぱりレベリングするだけじゃなくてプレイヤースキル？も上げないとダメなんだって」

「やっぱりそうなのかなぁ、サンラクさんと同じレベルになったのにヴォーパルバニーの攻撃、全然見切れないもんねー」

「VRゲームが上手な方はレベル1でもそれなりに戦えると言いますからね……サンラクさんのアレは相当他のゲームで鍛えてると見ましたね！」

「なんかそれっぽいこと言ってるけどリーナってばこのゲームが初VRじゃーん」

「そ、それは言わないでくださいよう！」

武器屋に寄った帰りなのか、真新しい剣を何かを真似するように振る少年、たははと笑う盗賊の少女、そして頬を膨らませる魔術師の少女。

ガヤガヤと騒々しい中でその単語を聞き取れたのは、ずっとその名前を探し、考えていたからだろうか。自分が威圧的な格好であることは承知しているため、極力驚かれないよう静かに近づき、静かに問いかける。

「あの、」

「はい……？　ひょえっ！？」

「おわあっ！？」

「うおおっ！？」

ダメだった。

そもそも傍目から見れば「気配を殺しながら初心者の背後にガチ装備高レベルプレイヤーが立つ」という中々に心臓に悪い行動だったのだが、冷静にそれを指摘する者は幸か不幸か存在しなかった。
突然として明らかに強そうな鎧騎士に話しかけられた三人組……珍妙な鳥頭のプレイヤーと遭遇したソーマ、カッホ、リーナの三人は何故こうも普通ではない出会いばかりするのかと奇しくも三人とも全く同じことを考えていた。

「な、なんだ……です？」

「……別に攻撃するわけじゃない、聞きたいことがあるだけ……だ」

素の口調と敬語が混じっておかしなことになっているソーマだが、それに対する鎧騎士もまた、ロールプレイと呼ぶには少々たどたどしい口調で三人の初心者に問う。

「君達は……サンラクという、プレイヤーと会ったの……か？」

「え、あ、は、はい……」

「森で、その……結果的には助けてもらった……のかな？」

「最初は新手のモンスターかと思ったけどね……」

草むらから突如として飛び出し、今では厄介なモンスターであると知っているがあの時点では可愛らしいウサギを斬り殺した半裸の鳥頭（割といい人だった）を思い出し、カッホは苦笑いを浮かべる。

「彼が……どこにいるか教えてくだ……くれ。」

「ええと……確かこのままセカンディルに行く、って言ってたよな？」

「もう少しレベリングしてから、とも言ってたね」

「でも貪食の大蛇の適正レベル的にもう突破してるんじゃないですか？」

（……道理で探しても見つからない）

若干楽しまれているような気がしないでもないが、彼に近づくために色々と便宜を図ってくれる女店主から「奴はクソゲーを好むような変わり者だから想定外の行動をするだろうことを想定するべきだ」と言われていたが、まさか最初から森にスポーンしてそのままセカンディルへ向かっていたとは。

「……情報をありがとう。お礼と言ってはアレだけど、受け取って」

「え、ちょ」

「……じゃあ、急ぐので」

「ちょっと待っ……行っちゃっいました……」

「カッホ、何を貰ったんだ？」

「なんだろうこれ……マジック、スクロール……【座標転移（テレポート）】……？」

鎧騎士が渡したそれ……使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）【座標転移（テレポート）】が相当先まで、それこそ攻略最前線まで進めなければ入手できないアイテムであると知るのはもう少し先のことである。

鎧騎士は、見た目からは想像もつかない俊敏さ（AGI）で跳梁跋扈の森を駆け抜ける。【座標転移】は自分が最後に更新したリスポーンポイントに飛ぶ魔法のため、セカンディルへは徒歩で向かわなければならないのだ。

（想定外の行動の可能性は考えていましたが……まさか「最初の街に寄ってすらいない」なんて……っ！！）

当然ながら一番最初の街、すなわちゲームを始めたばかりのプレイヤーが最初の拠点とするファステイアはチュートリアルも兼ねている。まさかそれを全無視してセカンディルに向かっていたとは、しかもリスポーンしていないということは一度も死ぬことなく貪食の大蛇を突破した、ということだ。
所詮は最初のボス故、初見殺しの毒糞さえ分かってしまえば楽なボスではあるが、それでも始めて一日で突破するのは驚異的だ。余程のレベリング強行軍を敢行しなければもっと早い段階で彼を……サンラクを見つけることができていただろう。

適正レベルのプレイヤー達であれば最短最速でも十分はかかるであろうエリアを二分で走り抜けた鎧騎士は、鎌首をもたげて威嚇する

貪食の大蛇にノンストップで肉薄する。

「……「ハイエスト・ストレングス」、【エンチャント・ヘルフレイム】、「アポカリプス」！！」

一歩目でＳＴＲに大幅なバフをかけ、二歩目で構えた大剣に属性を付与し、そして三歩目で踏み込み……

「毎回ボスと戦わされるのは何とかして欲しいですね……シャトルラン的にはあったほうがいいんでしょうが。」

セカンディルへと走る鎧騎士の背後、威嚇した体勢そのままに貪食の大蛇の身体は縦に真っ二つにされ……その場には確定ドロップアイテム「貪食の牙」だけが残った。

誰にとって幸か不幸か、それは午後の出来事だった。

食い違う一線級（後書き）

エリアボスは一度次の街でリスポーンポイントを更新してから以前の街に戻ると普通にリポップします。エリアボスを倒してリポップさせて……を繰り返す行動を「シャトルラン」と呼びます

と、まぁ意気込んだは良いがデスペナルティが解かれるまではどうしようもないし、致命の包丁が壊れかけなのはいただけない。現状クリティカル威力に補正が入るこれは唯一の火力武器と言っていい。武器の消耗を回復させることができると分かった以上、回復させておきたい。というわけで鍛冶屋のおっさんと随分と早い再会……の、はずだったのだが。

「閉店……だと……？」

いやコンビニでもなし、夜遅くになれば閉まることは別に不思議ではないけど……ＮＰＣとしてそれはどうなんだ？　まぁ嵐の中露店で「いらっしゃい！」とか言われてもそれはそれで困るが。

「となると、朝まで修復はお預けか……」

自分で言うのもあれだが、俺は所謂「パーティは全員全回復させせないと満足できない」タイプの人間であり、壊れかけの武器を抱えたまま動くと言うのはその……むず痒い。だが致し方あるまい、おっさんが営業開始するまで致命の包丁の修復はお預けにする他ないだろう。

「幸運上げたのに運がないなぁ…………んんっ！？」

と、何の気なしに辺りを見回していた視界の端に入り込んだそれに、それまでの思考が全てシャットダウンされる。もし今の俺を第三者

が見ていたのならそれはもう見事な二度見であったろう。それだけ今俺の首は滑らかかつ迅速に視界に入り込んだ異物に顔を向けたのだ。

「…………」

ちょいちょい。

建物と建物の隙間、好き好んで通りたいとは思えない細い路地裏から顔を出し、明らかに俺だけを見て手招きするそれは、ある意味では見飽きる程に見た二足歩行の兎。

「ヴォーパルバニー？」

いや、しかしヴォーパルバニーと言えば二足歩行の兎と包丁だ。今コソコソと路地裏から手招きしているヴォーパルバニー（仮）は言ってしまえば全裸であったヴォーパルバニーとは違い、中々に高級感漂う服にシルクハット、片眼鏡に懐中時計……なんだっけ、どっかで見たことがあるような……ああそうだ、不思議の国のアリスの兎だ。

「街の中にもモンスターがポップするのか？」

だとすれば中々にクソゲーじゃね？　街中でも常在戦場って安心してセーブできないじゃないか。とりあえずレアエネミーなら狩ってみれば何か落とすかも……そう考えながら一歩踏み出した瞬間、目の前に突如としてウィンドウが開かれる。

『ユニークシナリオ「兎の国からの招待」を開始しますか？』

「っ…………！！！」

大声を上げそうになった口を手で押さえ、辺りをさりげなく見回す。
幸い深夜という時間帯と、大半のプレイヤーがもっと先かファステイアに集中している今の時期と、店じまいした武器屋の前という用のない場所が俺に味方したのか、この場に他のプレイヤーは存在しなかった。

ユニークシナリオ。
シャンフロが神ゲーたる所以であり、シャンフロのアンチが最大の攻撃点とする要素。
出現条件不明、受諾条件不明、しかしてその恩恵は最大。
シャンフロは「世界の開拓」が大きなメインのストーリーであるが、それとは別に無数のサイドクエストが存在する。その中でもユニークシナリオは何処でいつどのように誰がフラグとなるのか全く明らかになっていない未知のシナリオだ。
だが、ユニークシナリオをクリアする事で獲得できる装備、スキル、魔法……そう言ったものはどれも一級品の性能を誇り、ユニークシナリオを探すためだけのクランも存在するらしい。
……まぁこれはクソゲーをやっている時に他のプレイヤーから「それに比べてこのゲームは」という話題の前段階として聞いた内容だ。

「こういうのを塞翁が馬って言うのか……？」

あの黒狼に装備欄二つ潰されたことは中々に不幸な事件だが、ユニークシナリオに遭遇できたことはこれ以上ない幸運だ。ユニークシナリオの条件として装備欄二つと考えれば若干萎れたモチベーションもうなぎ登り……とまではいかないが回復すると言うものだ。

幸い致命の包丁は壊れかけでも残弾はあるし湖沼の短剣もほぼ無傷だ。

「よし、朝になるまでユニークシナリオ攻略だ！」

嬉々としてシナリオ開始の「はい」を押した俺は、思えばまだ夜襲のリュカオーンとの遭遇からユニークシナリオ発見の連鎖に浮かれていたのだろう。

シナリオ名の隣に書かれたその文字に、気づくことなくユニークシナリオ……魔境に飛び込んでしまったのだから。

シナリオ名
「兎の国からの招待」

推奨レベル……80。

連鎖するユニーク（後書き）

ユニークシナリオは基本的に「特殊な条件の達成」でフラグが立ちますので、ハイレベル……廃レベルプレイヤーの中には意図的にユニークシナリオの「特殊条件」を秘匿してる者はザラにいます。バレたら最後、手出しを抑えるだけのバックがいなければあらゆるプレイヤーから狙われかねない諸刃の剣ですが

裏の裏は表だが裏の後ろは更に裏（前書き）

総合評価が１万を突破いたしました。皆様のおかげで作者はいきなりキャラが真上へ飛んでいくバグのように浮かれております。未だ未熟者ではありますが、これからもシャングリラ・フロンティアを宜しくお願いいします。

裏の裏は表だが裏の後ろは更に裏

「自身よりレベルの高いモンスターを「ヴォーパル」武器を装備した状態で倒す」ことを条件に、全ての街に存在する特定のエリアに出現するヴォーパルバニーの案内でバニー型モンスターの国「ラビッツ」に向かう。
この際ヴォーパルバニーは喋る事なく走り続けるので見失わないようにする事。
そこで彼らの国を襲うモンスター「兎食の大蛇」を倒す事で魔法【エンチャント・ヴォーパル】を獲得することができる。

効果としては武器に「自身よりレベルの高い相手に対してクリティカルに補正が入る」と言う効果を付与するものであり、対ボスモンスターなどでは非常に有用であるため本格的にこのゲームをやり込むのならば必ずクリアすべきユニークシナリオである。
初心者へのオススメは跳梁跋扈の森に出現するヴォーパルバニーから手に入る「致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）」で貪食の大蛇を倒す、というもの。
余談であるが大量のヴォーパルバニー達で構成された兎の国は兎好きのプレイヤーならば是非スクリーンショットの準備をしてほしい。
ラビッツ内でセーブすることは可能だがクリアした時点でリスポーンポイントが変更されるため、現状ラビッツを訪れることができるのはこのユニークシナリオただ一度のみであるからだ。

これが俺が後にネットで調べて出てきたユニークシナリオ「兎の国ツアー」の概要である。

「いやぁ、今ラビッツはあなたの事で持ちきりなんですわ。あの黒狼に弱き身でありながら果敢に挑む勇気！　そして一撃も食らう事なく理想的な致命の一撃を当て続ける技量！　まさにヴォーパル魂の体現ですわ！　憧れますわぁ……」

「全くもって歯が立たなかったけどね」

「そりゃぁ相手が悪すぎますわ。かの夜の帝王はおやつ感覚でドラゴンすら喰い殺す最強種、神代の加護を持つ開拓者サン達じゃなきゃ今ここでアタシと喋る事すら出来ませんわ」

この兎、めっちゃ喋る。意気揚々と兎に近づいたらいきなり「お会いしたかったですわ！」と話しかけられた時は結構……いや、嘘ついた、めっちゃビビった。バグで何の前兆もなく突然味方NPCがプレイヤーに攻撃を仕掛けてきた時くらいビビった。というかなんで喋ってるんだこのヴォーパルバニー、NPCだからか？

テコテコと歩く垂れ耳(ロップイヤー)のヴォーパルバニー？に歩幅を合わせつつ、俺はただひたすらにこの奇妙な兎に褒めちぎられていた。確かリュカオーンの呪いはNPCとの会話に影響があると書かれていたが、これがその影響なのだろうか？てっきり病原菌扱いでもされるんじゃないかと内心では戦々恐々だったのだが、どうやらプラス補正だったようだ。

「それにその身体に刻まれた呪いは夜の帝王があなたを餌ではなく一個体として認めたって証！　おとーちゃ……げふん、ウチのカシラが是非あなたに会いたい、という事でアタシが派遣されたってワケですわ」

「ふーん……その、えーっと」

「エムルですわ、よろしくお願いしますわ」

凄いな、このゲームのＡＩは察することができるのか。絶対に敬語で話しかけないと返事すらしてくれないＡＩを積んだクソゲーとかあったが、それが正しく使われるところも真に迫るんだな。

「というか気になったんだけど、俺結構ヴォーパルバニー倒してるんだけど実は罠とかそういうパターンじゃないよな？」

「あはは、おと……カシラはそんなねちっこい事する方じゃありませんわ。それにアタシらだって積極的に殺しにかかってるワケで、まぁ殺されてもそれは当事者の自己責任ですわ。」

なんだか凄くシビアな死生観を語りつつも、俺とエムルは路地裏の更に奥の奥……先導無しでは辿り着けないような小さな建物と建物の隙間、地図上のわずかな空白へとたどり着く。

その場所に存在する奇妙な魔法陣……には目もくれることなく、小さな垂れ耳兎は壁の一部をぺしぺしと何やら叩き始める。

「ちょっと待っててくださいな……【座標移動門（テレポートゲート）】！」

「おおっ」

恐らく魔法と思しき名前を唱えた瞬間、エムルが触れていた壁が何やら先の空間が靄がかった門へと変化する。

「兎御殿に直通のゲートを作れるのがアタシしかいなかったんですわ。ささ、行きましょかサンラクさん。」

「あれ、名乗ったっけ？」

「ふふふ、兎の情報収集力を舐めるな、って話ですわ。」

実際はデータ的なメタい理由なんだろうが、まぁそんな細かいところまで粗探しする必要は無いだろう。ぴょこぴょこ跳ねるエムルの先導の元、俺は靄がかった門をくぐるのだった。

門を抜けると、そこはもふもふであった。

「ラビッツを訪れる人間の方は結構おりますが、兎御殿を訪れたのはサンラクさんが初めてですわ。」

「へぇ。」

そこら中にヴォーパルバニー達がいるなんとも不思議な光景を眺めながら、俺はエムルの言葉に内心気持ち悪い笑みを浮かべる。

エムルの言葉が真実ならば、正真正銘このユニークシナリオは俺だけが知っている情報ということだ。

俺はゲームはみんなでワイワイやるのも好きだが、ＭＭＯでみんな情報を共有するべきだとはカケラも思わない。

少なくともＰｖＰやランキングが存在する時点で全てのプレイヤーは潜在的な敵でもあるのだ。情報独占？　上等、だったらそっちが隠してる情報も開示しろって話だ。

挨拶がわりにＰｖＰで略奪強盗裏切りが基本の協力ゲーをやり込むと人の良心はかくも荒みます、クソゲーは用量用法を守ってプレイしよう！！

「こっちですわ！　この先がおとーカシラのいるトコですわー！」

微妙に何弁か分からない訛りと「わ」が混ざってなんとも言えない言葉遣いのエムルが兎と比較して……いや、人と比較してもやけにデカい扉の前で跳ねながら俺を呼ぶ。

では、いざエムルの父親と思しきカシラとやらに謁見するとしよう。

裏の裏は表だが裏の後ろは更に裏（後書き）

ヴォーパルバニーはほぼ全てのエリアに出現するモンスターです、レベリング作業中のプレイヤーに新鮮な刺激（クリティカル即死）を提供してくれます。

親分兎と舎弟半裸の好感度（前書き）

元々1話分のつもりで書いたのですが結構長くなったので二つに割りました。

そのため、今回は二話投稿しようと思います。

「お……カシラ！例のヴォーパル魂のある人間サンを連れてきましたわ！」

「おうエムル、ようやった」

　門の先は西洋風の玉座……ではなく妙に和風な謁見の間にそれはいた。これこそがハーレムであると言わんばかりに雌兎を侍らせた、夜襲のリュカオーン程ではないにしろ相当の力を感じさせる一匹の兎。

　他の兎と違い人間と同じくらいの大きさでありながら、円らな瞳や全身を覆う白い毛並みはドスの効いたバリトンボイスと激しく噛み合わない……かと思いきや、片目を潰すように刻まれた傷跡や、手触りが悪そうなゴワゴワとした毛という要素で不思議と違和感なく威圧感と愛嬌を両立させている。しかしキセルのように細い人参を燻らせている辺りにこのキャラを作った人の情熱を感じた。

「俺等（おいら）ぁヴァイスアッシュってんだ。このラビッツでカシラァ張ってる」

　一応中世ファンタジーが根本のシャンフロにおいて場違いな程に極道なボス兎……ヴァイスアッシュがにまりと笑みを浮かべる。おいおい、草食動物のくせに下手な肉食動物より怖い顔してるぜ。

「聞いたぜ、あのワンコロと殺り合ってションベン（マーキングされた）かけられたんだってな？中々ヴォーパル魂あるじゃねぇか」

ヴォーパル魂ってなんだ、とは聞いていいのだろうか。

「おめぇらはすぐ強くなってヴォーパル魂を無くしちまうのが気に食わなかったんだがよう、こうも将来有望な奴がいるなら俺直々に鍛えるのも一興と思ってな……っつーわけでどうだい？俺等におめぇさんの時間を預ける気はねぇかい」

「ふむ……」

要するにこれは修行クエスト、とでも言うべきものだろうか。はたしてシナリオをクリアした時にどんな特典が得られるのやら、今から楽しみだ。しかしどうにも極道的イメージが離れないし、組長に教えを請うなら……そうだな。

「拒む理由もない、よろしくお願いしやす兄貴。」

ちょっと巫山戯て頭を下げて舎弟っぽく答えたところ、ヴァイスアッシュはポロリと齧っていた人参を口から落として唖然としてたが、暫くすると侍らせていた兎達が引くくらいに笑い始めた。

「うははははははは！　こりゃあ傑作だ！　そうか、そうだよなぁ！　教えを請う以上俺等が上でおめぇさんが舎弟か！　うははははははははは！！」

台詞だけ見れば一発ぶん殴っても俺が許されそうなものだが、ヴァイスアッシュの笑い声には俺を侮辱するだとか馬鹿にするようなな感情は感じられず、むしろ凄腕のピエロを褒め称えるような敬意的なものを感じた。

「気に入った！気に入ったぜ！俺等のこたぁヴァッシュと呼びな！

俺等が認めた奴にゃあそう呼ばせてんだ」

「お、おう……うっす」

どうやら好感度選択肢で大当たりを引いたらしい、ちょっとしたジョークのつもりだったんだが……ま、まぁフェアクソでＮＰＣにおべっかを使い続けた経験が活きたかな？

「エムル！おめぇそいつの事気に入ってたよなぁ？色々案内してやんな」

「え！あ、うんアタシ超頑張るわ！」

ヴァイスアッシュ……もといヴァッシュに俺の世話役を任ぜられてぴょこぴょこ跳ねるエムルを尻目に、俺は暫くメタ的な思考にふける。開示するつもりはないとはいえ、どう言う条件でどういう風に進むのかは把握しておきたいのがゲーマーのサガだ。

とりあえず発生条件は自身より強い相手と戦ってある程度の条件をクリアすることではあるのだろう。この時点で高レベルプレイヤーとプレイヤースキルの低いプレイヤーはこのユニークシナリオを見つける可能性が低くなる辺りに運営の悪意を感じる。

「サンラクサンサンラクサン！兎御殿を案内しますわ！ついてきて欲しいんですわ！」

「ん？あー、はい」

「そんでですねー、ここがヴォーパル力を鍛える兎闘技場なんですわ！」

「うわぁ。」

大量の兎が様々な武器を手にカカシ相手にクリティカルの練習をしている光景は中々に恐ろしいものを感じた。
殆どが包丁や短剣なのだが、中にはスレッジハンマーでカカシの首をダルマ落としよろしくぶっ飛ばしているヴォーパルバニーもいる。

（もっと先のエリアにはああいうヴォーパルバニーも出るのか……）

スレッジハンマーだけではなく、鋸や釘バットにしか見えないトゲ付きメイス……可愛い見た目とは真逆の殺意に満ち満ちた武器のラインナップに冷や汗が背筋を伝う感覚に襲われる。

「おと、カシラはアタシらバニーが弱いモンスターだと思われてるのをなんとかしたい、っていつも言ってるんですわ。だからアタシらはドラゴンを仕留めるくらいの目標でこうやって頑張ってるんですわ！」

「初心者にとっては十分死神だけどな……うわ、アレ鋏か……こわっ。」

ホラーゲームにありそうなあの巨大鋏、どうみても対人を前提とした設計だろ……え、なにそれ分離するの！？　鋏になる双剣！？　超欲しい！

「サンラクサンは好奇心旺盛なんですわなぁ、アレは相当技量が無いと扱えないんですわ」

「マジかよ技量戦士になります」

幸運？知るか、ポイント振り直しさせてくれ。
まだユニークシナリオの恩恵を得たわけではないが、このシナリオには莫大なアドバンテージが眠っていることを確信した。

親分兎と舎弟半裸の好感度（後書き）

ＮＰＣの好感度は割と重要な項目です。好感度が高ければ得られる情報に＋αが追加されたり、ＮＰＣが自主的に情報を集めてプレイヤーに教えてくれることもあります。
ゲーム内におけるプレイヤーによる「情報屋」はギャルゲー畑の出身が多いです。

リアルとゲームの天秤

「ふぅ…………」

リアルで目を覚ませば、カーテンの隙間から朝日が漏れている。分かってはいたが徹夜でシャンフロをやってしまった、やはり神ゲーは神ゲーなんだよなぁ……健康やリアルでの用事がなければずっとログインしていたい衝動に駆られる。とはいえ、今日は終日ログイン、というわけにもいかない。俺は水を飲み、用を足してから我が家のキッチンへと向かうのだった。

「おはよう」

「はいおはよう、随分やり込んでいたようだけどちゃんと時間と約束を守れて偉いわね楽郎」

「ログアウト（物理）はもう懲り懲りだから……」

セーブしていなかったせいで8時間分のデータが消えた時は虚無感で暫く食べ物の味が理解できなかった。あの悲劇を繰り返さないためにも俺が我が家のルールを破ることはない。ヘッドギアの方に予備バッテリーが備えられていて突発的な切断にも対応していること

とを理解した上での物理的切断は中々に巧妙な手口だ……二度と喰らいたくはないが。

我が家はよく「家庭内環境大丈夫？」とよく心配される。というのも、ウチは両親も子供も全員がバラバラの趣味に没頭しているために、血の繋がった家族としては恐ろしい程に顔を合わせないためだ。

父、陽務　仙次は病的なレベルの釣り好きで、毎年有給を使って魚を釣り上げに行く。

母、陽務　永華はその道の専門家に名を知られる程の虫マニアで、最近は南米の蝶を育てる為に家の一室を南米の気候にカスタムした。

俺、陽務　楽郎は言わずもがなゲーマーで、家で過ごす時間の殆どはＶＲに意識が飛んでいる。

妹、陽務　瑠美はファッションガチ勢、両親に頼み込んで特別に自分の部屋を二つ持っているし、月の小遣いでは足りない勢いで服を買うのでブラック企業もかくやな勢いでアルバイト漬けの毎日を過ごしている。最近は読者モデルがなんたらで狂喜乱舞していたのを覚えている。

中学生の時にこの話をした所教師に三者面談を半強制的にさせられた辺り、我が家は頭がおかしいように世間からは受け取られるらしい。実際は全くそんなことはないのだがなぁ。まぁ俺と妹、二人して三者面談沙汰になったことで流石にまずいと判断し、毎週日曜日の朝と晩は絶対に一緒に食事をし会話をする、というルールが我が家には存在する。

「父さんは？」

「昨日から釣りに行ったわ……今帰ってきたみたいね」

かつてカジキ釣りに行ってルール違反したために釣竿を売られた悲しみを背負う父もまた、ルールを破ってまで釣りを続ける勇気はないらしい。カジキは美味しかった。まぁ家族は皆、服をネットオークションで格安で売ったり（実行犯：母）、蝶を野生に返したり（計画犯：俺、実行犯：妹）、クソゲーの限定版を売られたり（実行犯：父）と互いに互いを牽制する関係だが仲は良好です。いやほんと。

「ただいま、いい鱚が釣れたんだ。今日の晩は天ぷらで頼むよ」

「おはよー……あ、おとーさんお帰り、マグロは？」

「流石にこの装備じゃ無理かなぁ」

かつて知り合いの漁船について行ってクロマグロを釣り上げた実績を持つ父が言うと言葉の重みが違うね、そんなこんなで全員揃っての朝食である。母は虫の世話をする為に席を外しているが、それくらいは許容範囲だろう。

「お前達、最近はどうだい？」

「俺は最近新しいゲームを始めたけどこれが中々に楽しい」

「私はモデルのバイトが来たよ、宣伝よろしくっ！」

「お父さんは最近カジキ釣りをしてる人と友達になってねぇ、ちょっと遠出しようかなと思ってるよ」

味噌汁にご飯、納豆と焼き鮭……こと魚介類に関しては定期的に

ほぼタダで手に入るため我が家の食卓は魚料理が多い。蝶の世話を終えた母が食卓に座り、家族全員での食事が始まる。主な話題は大体自分の趣味に関してであり、時々学校の成績などの話にも変わったりする。

朝食を済ませれば各自各々の趣味の世界へと戻って行く。恐らく夜の七時まで顔を合わせることは殆どないだろう……何せ全員自分の部屋に引き込もってしまうか、バイトに出かけてしまうのだから。最近でも近所の優しいおばさんに妹共々育児放棄されてないか訊かれるけどちゃんと家族してますから、だから児童相談所呼ぼうとするのはやめてください。

「ん、メール？」

さてシャンフロに戻ろうか、と言うところで、VRヘッドギアとリンクした携帯端末にフレンドからメールが来ていることが通知される。誰かと思えばモドルカッツォともう一人、俺とモドルカッツォの共通のフレンドからだ。

現実で顔を合わせたことはないが、互いのメールアドレスくらいは知っている仲であり、三人ともメインとするゲームのカテゴリが違う為に時折メールで相談を持ちかけたりするが、どうも件名からし

て双方とも違うらしい。

件名：俺も買ったぜ
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：俺もシャンフロ買ったぜ、サンラク今どこらへん？すぐ追いつく。

「モドルカッツォもシャンフロ買ったのか。」

あいつ確か格ゲーのプロゲーマーらしいけど時間管理大丈夫なんだろうか。今のご時世、プロゲーマーは立派なアスリートとして定着している。オリンピック……ではないが世界大会が存在するくらいだし、モドルカッツォは全てのゲーマーの憧れとも言える。
大会近いんじゃなかったかな……まぁいいや、とりあえずユニークシナリオをやってる最中であることは伏せて進行具合だけ送っておこう。

もう一人は………

件名：明日は槍の雨かな？
差出人：鉛筆戦士
宛先：サンラク
本文：モドルカッツォ氏から聞いたけどクソゲーしかプレイできない病のサンラク君が神ゲーに手を出したってマジ？
お腹壊してない？アレルギー反応とか出てない？
あ、私シャンフロで結構ガチのプレイヤーだからフィフティシアま

で到達したら一緒に何か狩りに行こうね＾＾

ファンメール並の煽りメールだったわクソが、フィフティシアって確か今解放されてるエリアの中で最新の場所だったろ。畜生、後でエムルの画像だけ送りつけてやる、ユニークシナリオの気配を感じて悶絶するがいい。

どうせなので、シャンフロにログインする前にある程度情報収集するかな。別に攻略サイトを意地でも縛ってるわけじゃないし、思ってる以上にこのゲームは複雑怪奇だ。

リアルとゲームの天秤（後書き）

まぁ自分でも「ろくに家族と顔すら合わせない」友人とかいたら心配します。

一応買い物を頼むときとか最低限のコミュニケーションはちゃんと成立していますので家庭内不和とかそういう心配はないものとしてお願いします。

とりあえず攻略サイトや掲示板を軽く見て分かったことがいくつかある。

　一つ、やはりラビッツを訪れるユニークシナリオはあっても兎御殿の中に入るユニークシナリオは誰も発見していない。
　当然ヴァッシュやエムルのようなヴォーパルバニーの存在も誰かが秘匿していない限りは俺しか知らない事実だ。

　二つ、どうも夜襲のリュカオーンのようなユニークモンスターは、有志によるＮＰＣからの聞き込みで彼らが語る「七の最強種」がそれに相当するらしく、判明している中でプレイヤーによって発見されたのは四体。内訳としては

・夜襲のリュカオーン
・深淵のクターニッド
・天覇のジークヴルム
・冥響のオルケストラ

　その内のリュカオーンとジークヴルムは跳梁跋扈の森以外の全てのエリアでランダムエンカウントするらしく、俺が夜襲のリュカオーンと遭遇したのは完全に大当たり（大はずれ）を引いたらしい。
　ただユニークモンスターは遭遇するだけで経験値が入るらしく、初心者はほぼ確実に死ぬ事になるが会えたらマジでラッキー、らしい。

　三つ、祝シャングリラ・フロンティア登録者数３０００万人突破……今ファステイアは初心者プレイヤーで溢れかえっているらしい。
　これは早急に次のエリアに移らないとマズくないか？　レベリング的

な意味でもプレイヤー同士のゴタゴタ的な意味でも。

ユニークシナリオばかりに気を取られてると本筋のメインシナリオが進まないのは考えものだな……そんなことを考えながら俺はシャンフロの世界へとログインするのだった。

「あ、起きた。おはようですわサンラクサン！」

「ん、あー、そうかリスポン更新したんだっけ」

目を覚ましたのはセカンディルの宿屋ではなく、ラビッツにある兎御殿の一室だ。ゲーム内時間においてずっと隣にいたのか、それともジャストタイミングで隣に来たのかは分からないが、体を起こすとベッドの横でエムルが跳ねていた。

「聞きたいんだけどさ、俺って今の時点でセカンディルに戻れる？」

「戻れるよー、アタシがいればちょちょちょいのちょーい！ですわ」

めっちゃ便利だな転送装置（ヴォーパルバニー）……

「じゃあ一旦セカンディルに戻りたいんだが、とりあえず街は進んでおきたい」

「了解ですわ、しばし待たれよですわ」

暫くして、エムルが【座標移動】を唱えると、俺とエムルはセカンディルの路地裏へと立っていた。

「とりあえずおっさんの所に寄って致命の包丁を修理して……レベリングもあるしなぁ」

「あ、そうだ忘れてましたわ。サンラクサンはこれつけろ、っておとーカシラが」

「ん？一体なん……っ!?」

突然エムルが持っていた首輪が俺の首に巻きつき、思わず俺は仰け反る。

『致命魂の首輪を入手しました、自動で装備されます』

おいおいおい強制装備アイテムとかあるのかよ、呪いのアイテムじゃないのかそれ。とりあえず如何なる効果なのかと説明を開いて……絶句する。

・致命魂の首輪
致命兎の王が作り出した戒めの首輪、王の許可なくして外れることはない。
取得経験値が半分になる代わりにレベルアップの際に獲得するポイントが2.5倍（小数点切り捨て）になる。

弱者が強さを得るためには、尋常ならざる苦難が必要であるが故に。

「え、ちょ、ここに来て縛り追加とかマジで……？」

「それがマジなんですわー、ヴォーパル魂を忘れるべからず！って」

だからヴォーパル魂ってなんなんだ。

いや、それよりもこいつは中々にハードな縛りが追加されたぞ……実質的に一つレベルを上げるために二つレベルを上げるのと同等の労力が必要になってしまうのは非常にまずい。いや、メリットを考えればある程度装備が揃っていれば最高クラスのレベリングアクセサリなんだが……というかこれ控えめに言って壊れアイテムじゃないか？レベルが一つ上がれば5ポイント、労力二倍で小数点切り捨てで……大体1 2ポイントもらえるのか。壊れアイテムじゃないか。

「いや、兎に角まずは戦ってみないことには分からないか。」

思えば夜襲のリュカオーンに襲われてから戦闘をしていない、現在のステータスや呪いによるデメリットの実証ができていないのだ、ユニークシナリオで忘れていたが最優先事項じゃないか。

「サンラクサン、サンラクサン」

「ん？」

「今から次の街まで行くんですわな？アタシ手伝おっか？」

『NPC「魔術兎エムル」からパーティ申請が来ました。受諾しますか？』

……つくづくこのゲームはよく出来てるな。
ソロで行くつもりだったが、とりあえず四駆八駆の沼荒野のやり込みは諦めよう。予想外が重なり過ぎて俺の計画はズタボロだが、バラバラの布を縫い合わせれば新しい模様が見えてくる。モチベーションが高まってきたぞ……強行攻略、やってやるぜ。

「宜しくな」

「宜しくですわ！」

思えば、様々な要因が絡み合ったこともあるが、ここでエムルとパーティを組んだことが後々まで続く面倒ごとのフラグだったのだろう。

増えぬレベル、増える縛り（後書き）

レベルアップ以外でステータスポイントを得る手段、アイテムは普通に存在します。少なくとも二つ、三つ目の街で手に入るようなものではないのですが、ハイレベルプレイヤーの協力があれば不可能というわけでもありません。

不可抗力の包囲網（前書き）

6／12／17

皆様方のご意見を受け、大まかなストーリーの流れに影響はなくとも設定面で致命的な影響が出るのではと判断し、本文をある程度変更することにしました。皆様にはご迷惑をおかけして申し訳ありません。

この話に関しては理想的な描写を決めかねており、修正後の文章でも何か違和感や間違いがあればお手数ですが遠慮なく指摘いただけますとありがたいです。

ご迷惑をおかけしました。

そもそもの発端は、当事者が友人に送ったスクリーンショット……
ではなく、ネットゲームのマナーに疎い初心者が本人の許可なく撮影したスクリーンショットをゲーム内の特定施設で利用出来る掲示板にアップしたことだった。

【聖女様】初心者プレイヤーに上級者プレイヤーがいろはを教える
　その81【かわいい】

74　アリノイユ（初）
このスレ……もといなぜかリアルタイムで更新される不思議な掲示板に常駐する暇人……もとい、偉大な先達の皆様に質問です
セカンディルで装備を整えていたら、こんなプレイヤーを見かけました
とても可愛い喋る兎を連れていたんですけど、どうすればモンスターを仲間にできるんですか？
（画像）

75　アッド（上）
だから上位職業取るならシクスブルクまで来るのが最低条件だって
何回言ったか覚えてないぞこれ、そろそろテンプレに書くべきじゃね

７６　カレーのジョーンズ（上）
え、なにこれコラじゃないの？

７７　エクシード（初）
なにこのプレイヤーｗｗｗ半裸に鳥の覆面とか通報レベルじゃんｗｗｗ

７８　サンダーナット（上）
いや待て、服着たヴォーパルバニーなんて見たことねーぞ
あのファッ◯ン兎はフィフティシアに出るやつも全裸だろ

７９　超合金豆腐（上）
全裸っていうのやめろやｗｗｗ毛皮着込んでるから！
それはそれとして喋るって何？モンスターって喋るの？

８０　バサシムサシ（上）
ウチのクランのリーダーがジークヴルムとエンカしたんだけどあいつ喋るらしいよ

８１　サンダーナット（上）
そりゃユニークモンスターなら喋っても違和感ないけど、ヴォーパルバニーが服着て喋るのは無いだろ

８２　Ａｎｉｍａｌｉａ（上）
待って尊いつらいどういうこと？このゲーム、バディドッグとバディキャット以外のテイムは実装してないわよね！？　チート！？

８３　アッド（上）
いや、このゲームの運営チート対策が頭おかしいレベルだからあり

えない
お隣の国のハッカーチームが三日間ハッキング攻撃しても鯖ダウンすら出来なかった上に逆探知食らって逮捕されてたくらいだし個人でチートするのは不可能

８４　新鮮ゾンビ（初）
上級者様方が活発になってるｗｗ
てかこれアングル的に盗撮じゃね？　許可もらって撮ったようには見えないけど

８５　Ａｎｉｍａｌｉａ（上）
サンラクって名前ね覚えた
セカンディルでしょ？今向かってる

８６　サンダーナット（上）
行動早いな！ｗ　別の意味でのガチ勢怖いわ

８７　乾パン六世（上）
ていうか皆服着たヴォーパルバニーに注目してるけどこのタトゥーペイントなんだ？
キャラメイクでこんなペイントなかったろ

８８　アッド（上）
どっかで見たことあるけど思い出せん

８９　超合金豆腐（上）
てかこれ絶対ユニーク絡みだろうな
それはそれとして盗撮＆無許可うｐって中々にクズいな、覆面じゃなくてリアル顔のプレイヤーだったら通報次第じゃＢＡＮ案件だろ
まぁこのスレ……もとい掲示板も消されそうだけどもう拡散始まっ

てるからなぁ

９０　アリノイユ（初）
そうなんですか？　ゲームだしみんな撮影とかしてるんじゃないですか？

９１　ナット（上）
＞＞９０
うわぁ
ど外道回答に対してもそうだが、ここが匿名掲示板ではないという事実を理解してないと見える

９２　サンダーナット（上）
＞＞９０
自分が無許可で盗撮されて知らないうちに晒されたらどう思うか、って話だよ

９３　超合金豆腐（上）
＞＞９０
ちょっとネチケット無知すぎない……？

９４　アリノイユ（初）
知らなかったんです、今から許可をもらったら許してもらえるでしょうか

９５　カレーのジョーンズ（上）
ユニーク隠してるの晒しといて許してくれとか聖人プレイ中でもぶん殴る案件だろう、許可得られなかったらどうするつもりなんだよ
てかこの軽装もしかしてＡＧＩ極振り？セカンディルならマッドディグで詰むだろうし割と簡単に見つかるんじゃないか

９６　アッド（上）
待て、思い出したぞ。

９７　ユウキ・ジョイ（初）
勿体ぶらないでさっさと吐いて

９８　アッド（上）
確か呪いだよこれ、呪いが付与された部位の装備欄が潰されてメリットデメリット両方の効果が付与されるやつ

９９　サンダーナット（上）
それだとこいつ胴と足の二箇所に呪い食らってることになるぞ
それってあり得るのか？

１００　アリノイユ（初）
鍛冶屋のおじさん曰く「ありゃ夜の帝王に認められた証だ」だそうです

１０１　バサシムサシ（上）
夜の帝王
最強種
夜　襲　の　リ　ュ　カ　オ　ー　ン

１０２　アッド（上）
ファーーーーーｗｗｗｗｗｗ

１０３　サンダーナット（上）
確かセカンディル近辺でワンコの目撃情報あったたんだよな？
あと露骨に話題変えようとするのはいただけないな、本人に凸って

ないの？

１０４　ユウキ・ジョイ（初）
最強種って何？

１０５　超合金豆腐（上）
ガチ勢ですら十数人規模じゃないと歯が立たないユニークモンスター、エンカウントするだけで色々恩恵があるからそいつらを追い続けてるプレイヤーもいる
なおガチ勢十数人集まってもボーリングのピンみたいに吹っ飛ばされる模様

１０６　カレーのジョーンズ（上）
ワンコはテレポートするからガチの運ゲーだけどな

１０７　Ａｎｉｍａｌｉａ（上）
今テンバートついた

１０８　アッド（上）
待ってケモナーお前フィフティシアにいたのにもうテンバートにいるの早すぎじゃね、てかいちいちギルド入って書き込んでるのか律儀だな

１０９　バサシムサシ（上）
おい誰か攻略掲示板とユニーク検証掲示板に情報流してこい、人海戦術で鳥狩り……もとい事情聴取な
ネチケットも知らんプレイヤーに晒されたのは同情するがそれはそれ

１１０　乾パン六世（上）
というか呪いのせいとはいえハシビロコウ頭にベルトだけってＨＥ

ＮＴＡＩファッションすぎる……いや覆面のおかげで顔バレ阻止、っていう九死に一生拾ってるけどネームバレはしてるしもう覆面外せないいな

１１１　オルスロット（上）
リスポンキルで吐かせるか

１１２　カレーのジョーンズ（上）
凝視の鳥面さんはハシビロコウじゃねぇって言ってるだろ！いい加減にしろ！

１１２　アッド（上）
オルスロットさんちーっす！　テンバートでも指名手配されてＮＰＣに狙われる確率さらに増したらしいっすけど身辺整理は終わったんすかー？ｗｗｗ
ＰＫやりすぎるとプレイヤーかＮＰＣにキルされた時点で倉庫のアイテム含めて全ロスト＋懸賞金を賞金首ＰＫに支払わせるって中々畜生なシステムだよなぁ、ＰＫしすぎて後に引けなくなった阿修羅会は見てるぶんには最高にギャグだわ

１１３　超合金豆腐（上）
ＰＫクランが「阿修羅会」でＰＫＫクランが「ｉｎ虎団」って中々皮肉が効いてるよなぁ
レアエネミーと化したＰＫ共の手配書がなくなる度に飯がうまいわ、このゲームの食事全般的に味薄いけど

１１４　サイガー１００（上）
是非会って話がしたいな、もしサンラク氏がここを見ているなら是非狼と剣のエンブレムのプレイヤーに話しかけて欲しい。無断で情報を拡散されたことは同情するが、ウチなら後ろ盾にもなれる。

115　バサシムサシ（上）
おいおい、ガチ勢がどんどん来るぞ……サンラク包囲網やばいなイベボスと同じ扱い受けてるぞ
というかアリノイユは雲隠れか？　まぁ野良パーティ組むのはもう無理だろうなぁ、盗撮晒し芸人にでもなるのかな？

116　サンダーナット（上）
兎だけ撮影しとけばＢＡＮに怯えることも無かったろうに、まぁ運営からの厳重注意メールは確定だろうなぁ……
ていうかサンラクを張ってれば歩くボーナス宝箱と化したオルスロットを狙える可能性が、誰か一緒にオルスロット狩りやらねぇ？分け前は要相談。

117　アリノイユ（初）
サンラクさんごめんなさい、許してください

118　タンヤオロース（初）
ロップイヤーちゃんぺろぺろしたい＾＾

不可抗力の包囲網（後書き）

ゲーム内で掲示板を使用するためにはそれぞれの職業のギルドに登録している必要があります。

つまり主人公は……

「ゲーム内での匿名解除」「ＰＫに対する反応と諸々の説明」「盗撮晒しへの反応」など、本文を変更しました。

浅慮な知識による文章を晒してしまい重ね重ね申し訳ないです。

二羽の強行軍（前書き）

皆様のご意見を受け、前話の掲示板回に大幅に変更を加えました。
ほぼ別物となっておりますのでお手数ですが前話から読んでいただけますと助かります。

――――――――――――
ＮＰＣＮ：エムル
ＬＶ：５６
ＪＯＢ：魔術師
ヴォーパルバニー・トラベラー
ＨＰ（体力）：１２５
ＭＰ（魔力）：６５５
ＳＴＭ（スタミナ）：８０
ＳＴＲ（筋力）：３０
ＤＥＸ（器用）：７１
ＡＧＩ（敏捷）：５０
ＴＥＣ（技量）：７０
ＶＩＴ（耐久力）：３５
ＬＵＣ（幸運）：８５
スキル
・ベストステップ
・タップステップ
・クリティカルフォーカス
魔法
・【座標転移】
・【座標転移門】
・【座標転移「凱戦門」】
・【ランダムエンカウンターＬｖ．２】
・【マジックエッジＬｖ．７】

・【加算詠唱(アッド・スペル)Ｌｖ．５】

装備
武器：旅する賢者(ワイズ・ガング)
頭：観測者の片眼鏡
胴：兎式儀礼服
腰：兎式儀礼服
足：兎式儀礼服
アクセサリー：致命兎の秘環
――――――――――

ゲーム故に不思議なことでもないのだが、この小さな兎にほぼ全ステータス負けている事実に少しだけ凹んだ。いや、すぐに追い抜けばいい話だ、うん。
覆面越しとはいえ、俺の切ない視線に気づいたのかエムルはキョトンとした顔で首をかしげる。手をヒラヒラと振って何でもないと示せば、納得したのか改めて人が少ない沼荒野を見回す。

「でもサンラクサンどうするんですわ？その呪いは他のモンスターを遠ざけちゃいますわ」

「それに関しての対策は既に考えてある」

「どんな？お、あっこにドロガエルおります……わぁ！？」

ドロガエルことマッドフロッグがこちらに気づく、所謂感知範囲に入る前に俺は全力で走り出す。
感知範囲に突入し、一目散に距離を詰めた俺に気づいたマッドフロッグが逃走せんと泥の中に潜り込もうとするが……遅い。伊達に敏

捷ガン盛りやってるわけじゃねーんだよ！

「おぉぉぉぉぉっしゃぁぁぁぁぁあ！」

「ゲロォ！？」

沼に足を入れれば走れなくなる、故に沼の縁から跳躍してマッドフロッグまでの距離を一工程で詰める。

そして顔だけ沼の中に潜らせていた体勢のマッドフロッグのケツに膝蹴りを叩き込み、足りないＳＴＲを十数メートルの全力助走で得た慣性で無理やり補うのだ。物理演算が正確に働くゲームは神ゲー、これ豆な。

「グェエ！？」

逃走を強制的に中断させられ、尻にニードロップを食らったマッドフロッグは泥沼の上を転がりのたうつ。マッドフロッグが立ち上がる前にさらに肉薄し、両手に持った湖沼の短剣を垂直に突き刺す。

短剣を握る手に確かな手応えを感じる、断末魔の悲鳴を上げたマッドフロッグに駄目押しの攻撃を叩きつけると、マッドフロッグはポリゴンとなって爆ぜた。

「ふう………と、まぁこんな感じに「逃げられる前に追いついてぶちのめす」という戦法が現状できる最善だと結論づけた」

「う、うわぁ……サンラクサン、本物のモンスターみたいでしたわ……」

「失礼な」

幸か不幸か……いや、ぶっちぎりで不幸だが幸いな事に装備重量による動きが遅くなる心配は皆無だからな、敏捷とスタミナの暴力で逃亡を阻止して的確に弱点を狙うクリティカルでＨＰを削りきる。野生の肉食獣のようなこの戦法が今の俺の最適解だ。ただ問題があるとすれば、この方法は予想以上に気疲れする。

「全力疾走した後にスタミナ管理しながらクリティカルを狙わないといけないからなぁ……」

５０ｍ走でゴールした直後に剣玉をさせられている気分だ、気を抜くと集中が途切れかねない。とはいえ、とりあえずＡＧＩが低いモンスター相手ならこの戦法が有効であることは実証された。

「というわけでこれからのスケジュールを発表します！」

「わーわーやんややんやー」

「エリアボスまでぶっちぎる、以上！」

「予想外に雑でしたわ！？」

言っただろう、強行軍だって。

「道中の雑魚はあからさまにレアエネミー以外は全部無視する、断腸の思いではあるが、初心者で詰まるだろうセカンディルは抜けておきたい」

この手のフルダイブゲーは自分の身体を動かす、という点が前時代的なディスプレイゲームとの最大の違いだ。

リアルの運動神経がそのまま反映されるわけではないが、やはり始めたばかりですぐにゲーム内の物理法則に適応できる生粋のＶＲゲーマーというのはそう多いものではない。となれば、始めたばかりの大半は最初の街か、かろうじてクリアした次の街に溜まる。人で賑わうことは街というものにとっては歓迎すべきことかもしれないが、その全てがほぼ同じ目的を持っていたなら、待っているのは特定施設の渋滞だ。そこら辺の対策はどうなっているんだろうか……？いや、今はどうでもいいか。ともかく、本腰を据えてユニークシナリオに臨むのであるなら、街としての「容量」が高い場所が望ましい。

例えばセカンディルの数倍の規模を誇る大都市サードレマだったりな。

「というわけでサードレマまでノンストップだ。敏捷俺と同じくらいなんだし遅れるなよ？」

「アタシ駆け回るの苦手ですわ……」

「兎が言うセリフじゃないなそれ」

いざ行かん。エリアボスのその先、サードレマへ！！

二羽の強行軍（後書き）

逃げるモンスターを追いかけて狩るＡＧＩ特化、というのは序盤か中盤でかろうじて通用する戦法です。

最前線でも通用しないわけではないですが余裕でプレイヤーの限界速度よりも速いモンスターも多いため、結果的に追いかけ回すよりも待ち構え、追い詰める戦法がメジャーです。

「……いない」

　何故こうも見つからないのか、鎧騎士は電脳の身体にのしかかる落胆を軽減するかのようにため息をつく。
　実際のところ、痕跡自体は見つかるのだ。確か「天ぷら騎士団」とかいうクランのメンバーである高レベルプレイヤーがいたので話を聞いたところ、確かにサンラクというプレイヤーの姿を見たという。だがどこを探しても見つからない、宿屋から出てくる様子もない。
　どうにもプレイ時間が噛み合ってないのでは、と深夜遅くに宿屋を張ったが出てくる様子もない。もはや因果律が自分を彼に合わせないのでは、と陰謀論めいた妄想までし始めた時、そのメールが届いたのだ。

「クランの伝書鳥（メールバード）……」

　ある程度発展させたクランや、ＮＰＣが経営する施設で料金を支払えば使用できる伝書鳥はこのゲームにおける実質的なメール機能だ。鳥といってもメールを送信すれば即宛先に出現するのでメールにラグが起きたりはしない。
　大方個人的な理由でクランから出ている自分を呼び戻すメールであろう、と文面を読んだ鎧騎士は心臓が跳ねるような驚愕に身体を硬直させる。

『サイガー０へ

悪いがプライベートな人探しは中断してくれ。
ぜひスカウトしたいプレイヤーがいるので、そのプレイヤーを見つけて欲しい。
場所はセカンディル近辺、凝視の鳥面で胴と脚に黒狼の「呪い」付きのプレイヤーで名前はサンラク、服を着た喋るヴォーパルバニーを連れているらしい。
ユニーク絡みであることも相当だが、リュカオーンと遭遇してマーキングを二箇所も付けられたプレイヤーなど前代未聞だ、出来るならウチに引き入れたい。
サイガー100より』

鎧騎士……サイガー0は知っている。彼がまだゲームを始めて一週間も経過していないことを。
そしてその上で誰も知らないユニークを引き当て、さらにサイガー0が所属するギルドがエンブレムとする程に追い求める夜襲のリュカオーンを相手に大立ち回りをしてのけたという事実に改めて驚く。

「……ふふっ」

何はともあれ、これで大手を振って彼を探す事ができる。あわよくば同じクランで親交を深めてリアルでも……と重厚な見た目とは裏腹に羽が生えたような心持ちで承諾のメールを返信した瞬間、入れ替わるように新たなメールが届く。

「……？」

何か追伸だろうか、とメールを開き……先ほどとは別の意味で絶句する。

『サイガー0へ
追伸というか補足なのだが、現在団員が確認した限りで「SF－Zoo」と「阿修羅会」、「午後十時軍」がサンラク確保に動いている。
PvPに発展する可能性が極めて高いので注意してくれ。
サイガー100より』

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！？」

シャングリラ・フロンティアにおけるトップクランの錚々たる面子が……それもそのうちの一つがPvPを専門とするクランである事も含めて、思わぬ競争相手の出現に、斎賀玲（サイガー0）はサンラクを探す歩みを全力疾走に切り替えるのだった。

「………っ？」

「どうかしたんですわ？」

「いや、なんか背筋に震えが……なんだろう、ノイズかな？」
さっきから背筋がむず痒い感覚があるのだが……特に状態異常になっているわけでもないし、なんだろう。
「まぁいいや、地図の通りならもう少しでエリアボスがいる所だしここらで一度休憩するか」
空腹度は満タンにしておきたい。野生児生活の中で得た反省をちゃんと活かしている俺はインベントリから火打ち石と薪枝（たきぎえだ）を取り出し、火をつける。うん、今回は二回で火がついた。
「じゃあアタシもご飯にしますわ！」
盗賊禿鷹（バンディットバルチャー）の手羽先なるアイテムを焼いていると、エムルも真似をするように枝に刺した人参を焼き始めた。しかし兎に人参とはまたベタな……
「うーん、味のしないジャーキー」
「熱いニンジンも良いものですわぁ」
「そういえばロクに情報集めなかったからエリアボスと前情報なしで戦わなきゃならんのだが、エムルお前何か知ってない？」
「んー、この沼荒野のヌシは泥掘り（マッドディグ）っていうモンスターですわ。地面からズドーン！って攻撃してくるから動きを止めないとダメですわ」

地面からズドーン……モグラ叩き的なタイプの攻撃をするモンスターか？　いや、貪食の大蛇なんてモンスターを第一のボスに捨てるような運営だ、きっともっと悪質に仕掛けてくるボスに違いない。

「今度はなんだ？　尿か？　屁か？　吐瀉物(ブレス)の可能性もあるな……」

「やーん、サンラクサンお下品ですわぁ。」

ははは、ぬかしおる。だが「便秘」で初見殺しの勘を取り戻した俺に最早意表を突くということは不可能であると言っておこう。

いざ、第二のエリアボス「泥掘り(マッドディグ)」！

狙われた探し人（後書き）

エムルによるボス情報は基本的に街で集められる範囲の情報です。
ギルドや武器屋などの「ボスと戦う者と接点があるＮＰＣ」はエリアボスの情報を握っていることが多いです。

鳥面ｗｉｔｈ兎ｖｓ鮫土竜（前書き）

某ゲームがオープンワールドで新作出すのでテンション最高潮で連続投稿です。
某企業が新作の気配すら出なかったので悲しみを紛らわせるよう連続投稿です。

「これは……まずいな」

「うひゃあ、これじゃ服が汚れちゃいますわ」

貪食の大蛇がセカンディルへと続く吊り橋の前に陣取っていたように、泥掘り(マッドディグ)もまたサードレマへと通じる渓谷のど真ん中に露骨に設置された大沼の中にいる……のだろう。

「AGIキャラメタすぎる……」

沼では走れない、つまりここを越えるためにはほぼその場から動けない状態でボスと戦わなければならないのか。
くっ、エリアが沼荒野の時点で想定すべきだった。

「サンラクサンどうするん？　これじゃサンラクサンもアタシもぴょんぴょんできませんわ」

「そうだな……とりあえずボスを見てから考えるか。エムルは……なんだ、俺の背中にしがみついててくれ」

パーティを組んでいる以上ボス戦でハブることはできないし、サイズは普通の兎と同じエムルでは沼にハマれば俺以上に動きを制限させられるだろう。

「はいな！」

背中にくっついたもこもことした感触に少しだけ身をよじらせ、俺は大沼へと足を踏み入れる。畜生、装備無しの時に履くことになるほぼ裸足のサンダルに沼の冷たさが沁みるぜ。何が悲しくて裸装備縛りじみたプレイをしなければならないんだ、何よりちょっとこの状況に慣れ始めた自分が憎い。

「みょっ！サンラクサン来ますわ！」

「確かに……！」

ザバザバと進んでいると、素肌が直に触れた沼から振動が伝わる。それは紛れもなくエリアボスが現れる予兆であり、沼が真下から押し上げられるように膨れ上がると同時にそれは現れた。

「シァァァァァァァァッ！！」

「なんじゃこりゃ」

鮫頭の土竜？四肢の生えた鮫？でもなんでヒゲが生えてるんだ……？　ともかくそんな感じの巨大な鮫頭の無機質な眼差しがこちらを見据える。

「来ますわ！」

「チッ……！」

クッソ動きづらい！　いや、先ずは相手の確認！レペルカウンターで半ば無理やり……クリティカル発動を成功させると、攻撃側にノックバック効果を発動するスキルで泥掘り（マッドディグ）を真横に弾き飛ばす。物理的な潜行ではなく、なんらかの不思議議パワー（ゲームだからと

いえばそれまでだが）で地面に潜り込んでいるのか、俺の脛辺りまでしか沈み込まないはずの沼の浅瀬に吹っ飛ばされた泥掘り（マッドディグ）はなんの問題もないかのように沼の中へと潜り込み、この手の鮫にはお約束過ぎる背びれだけを沼から出した状態で此方へと猛進してくる。

「きゃあ！皮を剥がれちゃいますわぁ！」

「因幡の素兎かよ！」

くそ、こんな最序盤で回避スキルを使わされるとは……！　文字通り滑走するかのような動きで攻撃を回避するスキル、スライドムーブを発動して俺の身体を齧ろうとする泥掘り（マッドディグ）の突進を避ける。
スキルは消費するパラメータがないとはいえ、再発動するまでにリキャストタイムが存在する。二つある回避スキルを使い切ってしまった俺はリキャストタイム……双方合わせて約１０秒間を自力で回避しなければならない。

「さぁどうしたものか……！」

泥掘り（マッドディグ）がＵターンして再び攻撃を仕掛けてくるまでに情報をまとめろ。
まずこのエリア自体の特徴、言わずもがな足を搦めとる泥による露骨な敏捷封じ。判定としては足を沼に突っ込んで底に足がつくまではもう片方の足が沼にとらわれ続ける、つまり足を動かす回転数（ケイデンス）さえ上げれば多少は素早く動ける！

「来ますわ来ますわ食べられるぅぅぅ！」

「食べられません！」

一時的にＡＧＩとＳＴＲに補正を入れるスキル、アクセルで無理矢理足を動かし、間一髪で再度の突進を避ける。
くそ、これで正真正銘回避に使えそうなスキルは全部使い切ったぞ……アクセルは攻めに転ずる時に取っておきたかったが、致し方あるまい。予想以上に泥掘り（マッドディグ）の攻撃間隔が短いのだ。
「とりあえず動きを止める、とすれば……エムル、確かお前攻撃魔法持ってたよな？」
「え？うん、持ってますわ」
「それ使って泥掘り（マッドディグ）が攻撃する瞬間に当ててくれ」
「了解ですわ！」
自分より強いＮＰＣに頼るのはどうなんだ？　と思わないわけではない。だがセカンディルを、このエリアを通過点にすると決めた時点で形振り構わないことに決めたんだ。実体験としてそれを知っているわけではないが、過密した新規プレイヤーによるゴタゴタの面倒臭さは多くのプレイヤーから話を聞く。強ＮＰＣ（エムル）縛りは次のエリアからだ、と自分を無理やり納得させる。そう考えれば泥掘り（マッドディグ）が強敵であることはむしろ歓迎すべきことなのかもしれないな。
「むむむ……マジックエッジ！」
おんぶの体勢から肩車に近い姿勢に俺の背をよじ登ったエムルが俺の肩に立って魔法を唱える。瞬間、虚空に作り出された半透明な三日月状の刃が斜め一文字に射出、三度目の突進を敢行した泥掘り（マッドディグ）の顔面に見事命中する。
スライドムーブ回避、アクセル回避で稼いだ時間足すことの今の攻

撃によるラグ、そして吐息がぶつかる程の至近距離まで我慢すれば

………リキャスト終了！！

「かち上げる！！」

レペルカウンターを再発動。一歩後ろにステップを入れて距離を作り、真下から上へと泥掘り（マッドディグ）を殴り飛ばす。さらに握っていた湖沼の短剣を抉るように突き出すスキル、スパイラルエッジで駄目押しを仕掛ける。

多分本来は受け流しをより発展させたパリィに近いものなんだろう、俺のようにのけぞり（ノックバック）を利用した半ば攻撃転用の使用法が異端だということは分かるが、その「正解ではない使い方」でもちゃんと発動する辺り最高だぜシャングリラ・フロンティア。

「よっしゃ行くぞ！しっかり掴まってろよ！」

「はいな！！」

鳥面ｗｉｔｈ兎ｖｓ鮫土竜（後書き）

主人公がやったようなスキルの「本来想定されたものとは違うスキルや魔法の使い方」はそれなりにメジャーな技術です。

例を挙げれば「挙動の大きい攻撃技を回避に使う」「回復魔法をアンデッドに使ってダメージを与える」などがあります。

初心者視点から痛感する自身の限界（前書き）

某アメコミヒーローのゲームが予想以上に面白そうで作品の参考になったので連続投稿です。

某石像に登るデンジャラスなクライミングゲームが新しくなったことを祝って連続投稿です。

「エッジクライム！」

実際のところ、魔法ならともかくスキルを宣言する必要性は薄い。だがより確実に発動させるのならば音声認証でスキルを発動させた方が良い。

ネットでシャンフロについて調べた時に得た知識で俺は沈没する船のように直立するような形となった泥掘り(マッドディグ)の腹に湖沼の短剣を突き立て、言葉通り刃で泥掘り(マッドディグ)の身体を登っていく。実際スキルが無くても出来そうな芸当ではあるが、今の俺(サンラク)はＳＴＲを完全に捨てているのでスキルの補正がなければ同じ芸当はできないだろう。

夜襲のリュカオーンの足に張り付くために致命の包丁(ヴォーパルチョッパー)を壁を登るピッケル宜しく突き刺そうとしたことが習得の切っ掛けだ。致命の包丁の耐久が削れるだけだった忌々しい黒狼と違い、泥掘り(マッドディグ)の腹は柔らかく、ＳＴＲの低い俺でもスキルの補正でスイスイと登ることができた。

やっぱりこういう明らかに物理法則無視した動きをしているときが一番ゲームをしていると実感できる、物理法則に忠実すぎてもそれはそれでつまらない。

「うひゃあ！　凄いですわぁ！」

「とりあえず登ってみたが……さてどうしよう」

「ぎゃあああこの人無策でしたわぁ！」

仕方がないだろう、大局的な作戦を考えても咄嗟の判断はどうや

ったって脊髄反射だ。まぁいい……今の俺は効率厨、ソロだのなんだのプライドは泥の中に捨てたんだ、後で拾わないとな。ホオジロザメに近い泥掘り（マッドディグ）の頭は足場としては下の中程度、だがゲーム内なら綱渡りを全力疾走だって出来る俺にとってはそう難易度の高いものではない。

「俺がこいつの上でバランスとってるから、魔法攻撃連射頼む」

「れ、連射！？　い、一撃の威力を高める方針とかは……」

「威力で考える！　ゴー！」

「や、やーってやりますわぁ！　【加算詠唱（アッド・スペル）】！」

魔法を唱え始めたエムルから意識を外し、足元の泥掘り（マッドディグ）の口唇の上で俺は曲芸師よろしく立ち続ける。

だがモンスター側がわざわざ不安定な状態を維持する理由もない。

怯みが解除されたのか猛然と暴れ始めた泥掘り（マッドディグ）だったが、すぐに体勢を正すのではなく無理矢理俺に噛み付こうとするその行動は、俺にとっては「当たり」行動だ……！！

「燃えるワイヤーの上を走らされるよりはよっぽど安定した足場だぜ！」

そんなゲームがあるのかって？　あるんだなそれが。

牙、鼻先、口唇……足場にできる場所はいくらでもある。頭だけで軽自動車並の大きさの鮫頭と、リアルよりも数倍優れた身体能力、そしてなによりこれが遊び（ゲーム）だからこそこんな無茶を通すことができる。

「行けますわサンラクサン！」

「鼻っ面に叩き込め！」

「無茶言いますわ……っ！【マジックエッジ】！」

暴れに暴れてついに体勢を崩した泥掘り(マッドディグ)の顔を踏んづけて離脱したため、空中に投げ飛ばされた状態で魔法を撃て、というのが無茶なことは承知の上だ。だがここで追い討ちをかけられなければまた最初からやり直し、正直言って同じ結果を出す自信はない。

エムルの悲鳴混じりの魔法が発動し、先ほどのものよりも倍の大きさを誇る魔力の刃が泥掘りの顔面……ではなく右目に命中する。

「シギィィィィィイアアアアアアア！？」

それでも威力の上がったマジックエッジは相当のダメージを叩き出したのか、絶叫を上げた泥掘り(マッドディグ)はのたうちながら沼に沈……むことなく、浅い沼で一度バウンドするとそのまま横たわった。ふと俺の脳裏に小さな違和感が生まれたが、それはすぐさまかき消されることになる。

「やった！やりましたわサンラクサわぶぅ」

「まぁこうなるわべぇ」

倒れた泥掘り(マッドディグ)に続くように俺とエムルが沼へと落下、落下ダメージ自体は紙装甲にしては体力の三分の一と然程でもないが、全身泥パックを強制的に体験させられる。

「あきゃぁぁぁぁぁアタシの服ぅぅぅぅぅぅぅ！！！？！？」

「あー……濡れたティッシュを全身に貼り付けたような感覚だぁ……」

しかも全身泥まみれで身体の動きが酷く重い。貧弱なサーバーしかないオンラインゲームでサーバーが悲鳴をあげてる時みたいだ。泥塗れにはなったが、あの様子からして倒せたと…………………………

「待て待て待て待て……！！」

泥掘り（マッドディグ）がいない。いや、明らかに何か大質量が沼に沈んだ波紋はある、つまりまだ終わってない。違和感の正体は、そう言えばエムルが言ってた「ズドーン」らしき行動を見てない、特殊行動？　ＨＰの残量がフラグ？　削りきれなかった、発動した？　沼全体が揺れてる、全体攻撃、死……

「エムルっ！！」

「わにょっ！？」

バラバラに散った情報を纏めるために思考以外のすべての動きを止めようとした体を無理やり動かし、多少雑だがエムルの耳を掴んで沼から引っこ抜きながら沼の外へと放り投げる。次の瞬間、広い沼全域が突如として震えだし、俺の動きがシステムじみた強制力によって鎖で縛り付けられたかのようにその場から一歩も動けなくなる。

くそ、もしかしなくても発動した時点で確定で食らうタイプの特殊行動か……ちょっと待てＡＧＩメタに加えてソロもメタっててんのかこれ！？

「身体……動………！」

「サ、サンラクサン！下！下から来ますわーーーっ！！」

「下………！？」

走馬灯……とは少し違うが、身動きの取れない中で様々な情報がパズルのように組み上がっていく。

ズドーン、なる攻撃。
泥の中を水の中を泳ぐように潜行するモンスター。
数秒間とは言え沼から直立する事が可能であるということ。
動きを止めて、下から……

「あー……モグラ叩きかよ。」

次の瞬間、足元が感覚が消失し、上から叩くハンマーの存在しない泥掘り（マッドディグ）のモグラ叩きによって俺が泥掘り（マッドディグ）にした数倍の威力のかち上げで俺は宙高く吹き飛ばされたのだった。

泥掘（マッドディグ）り。
鮫の頭、四肢が異様に発達した土竜の胴体、そして鯰の髭を持つ広義のキメラに分類されるこのエリアボス最大の特徴は体力が２０％を切ることで発動する特殊行動である。
地中深くに潜行し、沼を震動させる事で沼に足を踏み入れたプレイヤーの動きを強制的に止め、そして沼の中にいる者達からランダムに一人を真下から鼻先で思い切り吹き飛ばす。
一人で挑戦した場合、沼の中にいると確定で攻撃を受ける上にかち上げられた高さから落ちる事でほぼ確実に落下ダメージでＨＰを全損させられること、沼に入っていなければソロでもこの攻撃を不発させることはできるが動きが制限されたこのエリアでダメージ調整と沼からの離脱を両立させることの困難さから、このモンスターはプレイヤー達から二つの名を渾されている。

地形によるＡＧＩへの露骨なメタっぷりと薄い装甲程度では難なく押し切ってしまうことから「軽戦士殺し」。
そしてもう一つが、一人で挑めばほぼ確定で即死攻撃を受ける事から……

「ソロ殺し」と呼ばれる。

初心者視点から痛感する自身の限界（後書き）

実のところ初見だとほぼ確実に１名はＨＰ全損にさせるため、蘇生要員がいないと野良パーティの場合は経験値やドロップアイテム関連で盛大にモメる、という点からプレイヤー達の間では「ギスギスをもたらすもの」とか言われたり言われなかったり

人は飛び、兎は跳ぶ

「ぐぉ………おわぁぁぁぁぁ！？」

人に翼は無く、故に人は様々な手段を用いて空を飛ぶ。そして飛ぶ（Fly）と跳ぶ（Jump）の違いはと言えば、やはり自らの力で空に滞在し続けられる力があるか否かであり……今の俺は跳ぶにすら満たないぶっ飛ばされた状態である。

（ＨＰは……うおお殆ど減ってない！）

てっきりかち上げられた時点で死んだものだと思っていたが、どうもこの攻撃の本命は落下ダメージによる……落下死。

（悪趣味過ぎる……！！）

あの牙に噛まれて死ぬより悪意があるぞこの攻撃！　このボス作ったやつは絶対に性格が悪い、断言できる。というかどうする、高くかち上げられすぎて考える時間があるものの、次に地面と接触した地点が俺の死に場所だ。

（考えろ……どうする！？　落下死は普通に嫌だ！　いや、だがプレイスキルとか魔法とかでどうにかなる問題では………）

魔法。

この場におけるもう一匹、ついに重力への反逆の限界に到達した俺の身体が落ちる寸前に下へ視線を向ければ、小さく見える白と、茶色と、鮮やかな服の色………エムルは無事だ、あのまま連続攻撃を

やるような畜生ボスではないらしい。
あぁくそ余計な思考はシャットアウトしろ、最短最速最適な行動を……どうする、ダメージ判定受けたら瞬間ポリゴン爆散だ、検証はしてないが流石に何の対策もなしに四、五階の高さから落ちた落下ダメージなど考えるまでもない。これは無理ゲー……いや、反省と後悔はやるならリスポーンしてからだ、今はとにかく足掻く！
無駄にリアルな落下の感触を考えないようにしながら必死に考えを巡らせる。対処すべきは落下ダメージ、地面に叩きつけられることを回避する？　地面に叩きつけられてもダメージを軽減する？　くそ、どっちも無理だ。
エムルの力を借りる？　座標転移がどれくらい汎用性があるのか俺には分からない、前準備が必要なら詰み、最悪エムルの上に落ちることになる。落ちる俺の身体にマジックエッジをぶつけて真横からぶっ飛ばしてもらうのはどうだろう。
……普通に魔法のダメージと落下のダメージで爆散だろうな、却下！
（あ、これは詰んだか）
流石にこれはどうしようもない。次トライする時は落下対策か攻撃の対策を練らないと。時間にして十秒もない落下の中であるが、俺が考えつく対処法は存在しないと結論が出てしまった。せめて出来ることといえば落下の衝撃に覚悟を決めるくらいか…………
「…………………ぁぁぁ」
昔からゲームでの落下死だけは慣れないんだよなぁ。
フルダイブだと落ち続ける中で視界がブラックアウトとかならまだ優しい、全身に電流が走る感覚と同時に感覚全消失……そしてリスポン、なんてものもあった。そういえばあのゲーム発禁にされてたた

な、俺の家の棚に眠ってるが。

「……わぁぁぁぁぁぁ……………！」

とりあえずあの攻撃、泥沼から出れば食らわない気がする。やっぱ効率厨とか言っておいて中途半端に出しゃばった俺が戦犯か、次は遠慮容赦なく遠距離からエムルの魔法でハメ殺そう。

「見さらせ致命魂（ヴォーパルスピリット）おおおおおおおおお！！」

「んお！？」

「使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）【瞬間転移（アポート）】！！」

切り替わる景色、数秒の落下のそれとは違う浮遊感と、腰に感じるモコモコとした暖かさ。

次の瞬間、見上げた先に流れる雲の位置がズレた。テレポートじゃなくて？　落下する俺にエムルが飛びついて？というか一体どこに……次の瞬間、俺の全身に衝撃が走る。だがそれは想定していた落下ダメージとは違う、というかそもそも沼にしてはやけにザラついているような……

「ギシャァァァァァァァァァァア！！！？」

泥飛沫が波のように沼を荒らす。プレイヤーが上から下に落ちる落下ではない、高高度から落下のエネルギーを利用し、反動覚悟で突撃するモンスターへの攻撃に変わった俺の激突は、ダメージ判定の内容を落下から反動に切り替える。

この時の俺は知る由もなかったが、今の俺のような状態で発動する「隕星落蹴（メテオ・フォール）」という同じ原理のスキルが存在する。そしてスキルと

して処理される物理演算はそれに似た現象にも適用される。というよりも特殊なスキルを除き、ほとんどのスキルはそのスキルに近い動きをする事と一定のレベルが新規習得のトリガーなのだ（取説参照）。

そしてこれは俺の個人的見解ではあるが、プレイヤーたる俺に即死攻撃を当てて余裕の遊泳をしていた泥掘り。やつはエムルによって落下地点に設定されてしまった為にロクな回避もできずに俺の「なんちゃってメテオ・フォール」が命中、互いのＨＰが削れてポリゴンが派手に飛び散る。

攻撃の反転、ダメージの切り替わり、幸運の発動判定………何もかもが複雑に混ざって解けて整理されて、そして結論が出て。

「……なぁエムル」

「うひゃあ……死ぬかと思いましたわぁ……何ですわ？」

「お前最高ですわ。」

「こ、言葉の真似っこはやめるんですわぁ！？」

あの黒狼と戦った時と同じく、死に体(HP1)ではあるが………生き残ったのは、俺達だった。

これはもうエムルさんに足向けて寝れませんわぁ。

人は飛び、兎は跳ぶ（後書き）

使い捨て魔術媒体【瞬間転移】は発動した瞬間に発動者から半径5メートル以内の座標を指定し、発動地点から指定座標へ瞬間移動する魔法です。

エムルとの協力……いや、ほぼ八割エムルのお手柄で俺は半ば寄生プレイヤーに等しい醜態ではあったものの、なんとかエリアボス泥掘り(マッドディグ)を倒すことに成功した。

分かったことは二つ、この先ソロ殺し特定ステ殺しは普通に出てくるであろうこと。もう一つはやっぱりエムル強すぎ問題の再確認だ。冷静に考えて魔法二発で特殊行動ラインまで削るって強すぎる。それに散々イキっておいて完全に介護されたという事実は……結構クる。

やっぱりエムルはマスコットとして頑張ってもらおう、少なくとも俺がエムルのレベルに並ぶまではね。

「とりあえずサードレマに………ぐぅ」

身体が凄まじく重い、ＨＰ１なだけあって今戦闘になったら間違いなく死ぬ。俺はインベントリから薬草を束で取り出してモシャモシャと摂取することで体力の回復に努めるのだが、やはり直ぐに全回復とはいかないか。

しかし食べるだけで体力即回復とは驚異的な吸収率としか言いようがない……いや、傷口に貼り付けるタイプの回復アイテムだったら俺はケツに草を貼るというマヌケな絵面を晒さないといけなかったし文句は言えないな。

「だ、大丈夫なんですわ？」

「大丈夫大丈夫、コラテラルダメージだとコラテラルダメージ」

「アタシには致命傷にしか見えないですわ……」

ふっ……正解だ。

とはいえ、これでサードレマ入りできるわけだし今の俺が死にかけなことは瑣末な問題だ。まぁ今この瞬間あの狼が出てきたりとかしなければ……

「…………」

「どうしたんですわ？　そんなキョロキョロして」

「いや、フラグになったんじゃないかとな……」

「？」

流石にそう何度も出てくるようなモンスターでもないか。ここまで来てセカンディルに戻されたら俺ぁ泣くよ、派手に泣くよ。

「杞憂だったみたいだ、さっさとサードレマでポイント更新したらラビッツに行こう」

「わぁ……！　本格的にラビッツに滞在するんですわな！」

「まぁね」

レベリング効率次第ではサードレマの先のエリアを優先するかもしれないが、仮定の話であるし黙っておこう。酔っ払いのような千鳥足ながらも俺はエムルと一緒にサードレマへと歩いていくのだった。

「あ、ちょっと待ってくださいなサンラクサン」

「ん？」

サードレマ、聞いた話に違わぬ大都市の門にはＮＰＣと思しき人の列が並んでおり、どうやらあれに並んで門番の審査を通過すれば晴れてサードレマに入る事ができるようだ……が、直前になってエムルが俺を呼び止める。

「このまま行ったらアタシ攻撃されちゃいますわ」

「ん……？　ああそうか、分類的にはモンスターだもんな。　でも初めて会った時は普通に街中にいたよな？」

あぁ、転移魔法があったなと自分で言ってから気づく。だが俺とパーティを組んでいるためなのか、俺と一緒に街に入るのならばモンスターが通されるとも思えない。プレイヤーならともかく、ＮＰＣの前にモンスターが現れたら問答無用（ノーガード）で斬りかかられてもおかしくない。なら何かに隠れる……困ったな、半裸の俺のどこに隠せばいいんだ。

俺がうんうんと唸っていると、エムルは何やら腕につけた腕輪に触れてモニョモニョとなにやら唱え始める。

「これこそアタシらヴォーパルバニーの秘法！　サンラクサン、他言無用でお願いしますわ……【姿形変化（メタモルフォーゼ）】！！」

ぼっふーん！　と実にファンシーな……いや正直に言い直そう、実にバカっぽいSEと煙エフェクトにエムルが包まれる。とはいえ屋外、風に煙は流され煙に包まれていたエムルの姿が、露わ、に……

……。

「は？」

「ふゅいー……身体の感覚が変わるのは何度やってもなれないですわぁ……」

……おかしいな、俺が今プレイしているのは日本が世界に誇るフルダイブVRゲーム、これまで星の数とは言わずとも多数のMMORPGが保有していた記録を全てぶち抜いた神ゲー、「世界を拓き、世界を楽しめ」がキャッチコピーのシャングリラ・フロンティアのはずだ。

「ふふーん、アタシらはこの魔法のおかげで人間サンの街でも活動できるんですわ！」

「あーその、獣の擬人化は度合いによって主義主張が異なるので俺からはなんとも……」

「どゆことですわ!?」

決して擬人化した獣とキャッキャウフフするギャルゲーをやってたじゃないんだけどなぁ……

小さな兎はどこへやら、俺の目の前で兎の頃の態度そのままに胸を張る少女が二ヒヒとイタズラを成功させた子供のような笑顔を浮かべた。

「これなら怪しまれずに街に入れる、って寸法ですわ！　まぁ、めっちゃ疲れるから長い時間変身してると魔法が解けちゃうんですわ……」

「なるほど、街に侵入したら物陰で解除、と。その魔法があるからこそヴォーパルバニーが街の中にいたのか……だがなエムルよ、お前は一つ致命的な……そうだな、実に致命的（ヴォーパル）なうっかりさんだ」

「ほへ？」

エムルが胸を張るのなら、俺は自分の胸板……そう、一切の遮蔽なく外気に晒された胸板をドンと叩いて事実を伝える。

「半裸の鳥頭と一緒にいる時点で怪しさはカンストしている」

「あ。」

むしろ兎のままの方が「兎連れの変態」で被害は俺だけに止まったのでは、と思うのだ。いやでもモンスターを引き連れていたら普通に街の中に入れてくれないだろうし、変人のレッテルで済むこっちの方が結果的には確実か。悪いがエムルには外れくじを引いてもらおう。

「これから「なにをトチ狂ったか半裸の鳥頭を引き連れた女」のレッテルを拝領することになるだろうがまぁ頑張れ」

頭を抱えて蹲ったエムル人間態に俺はそう生暖かい眼差しで告げてやるのだった。

そして丁度その時、サンラクとエムルが泥まみれになったあの場所にて再配置（リポップ）した泥掘りと一人のプレイヤーの戦闘が開始された。

人と兎と鳥頭（後書き）

致命兎の秘環
ユニークマジック【姿形変化(メタモルフォーゼ)】を使用できるようにする、ヴォーパルバニー限定アクセサリ。
【姿形変化(メタモルフォーゼ)】
ＭＰ常時消費状態を自身に付与する代わりにＭＰは当魔法以外の一切の魔法を使用しなければ丁度５分で０になり、ＭＰの総量が少なくなるほどに段階的に魔法が解けていく。

つまり４分経過辺りで極めてケモ度の高い擬人化状態になります。

東に絶版のクソゲーあらばネットオークションでポチり、西に流通数が少なすぎるクソゲーの目撃情報あればリニア一人旅にて店を訪れ、挙げ句の果てには数々のクソゲープレイヤー達より「クソゲーハンター」なる泥色の称号を拝領した俺ではあるが、ＮＰＣに二度見ならぬ四度見される経験は流石になかった。

「次の……人？　いや、なんで半裸？　そ、その痣は！　足にも！？」

と、まぁ一度にサンラクの頭おかしい点を全て指摘してくれた門番……もしゲーム内ＮＰＣ人気投票とかあったら俺はお前に投票するぜベイベー、リアクション面白すぎ。バグで「歩くと首が横軸で回る」キャラを見て爆笑したこともあったが、少なくともそれよりは数倍健全な笑いを彼は提供してくれた。

見るからに不審者オーラ全開な俺をどうしたものかと唸っていた門番だったが、ここでただの変態を連れにした女、というレッテルを回避するべくエムルの舌がフル回転する。

「いやいや待ってくださいな門番サン、彼にはそれは……っっっもう！　大変な過去があるんですわ……っ！」

いやもう、俺は大層驚いたよ。ＮＰＣが「嘘をでっち上げる」という人と遜色ないＡＩにもだが、エムルの弁舌によってサンラクというキャラクターが

「運命神の導きにより前世から夜襲のリュカオーンと戦う宿命の聖戦士が転生してリュカオーンに挑んだはいいが力及ばず呪いを刻ま

れ、運命に導かれ呪いを解く巡礼の旅を続けるさすらいの戦士」
とかいう設定過多で破裂しそうな何かにでっち上げられたことがな。

「なんか俺、めっちゃ応援されたんだけど……」

「そんだけの力がその呪いにはあるんですわ、サンラクサンはもっと自慢してもいいくらいですわ！」

そういうものなのかねぇ……まぁ、ＮＰＣに尊敬や畏怖の眼差しで見られるのはむず痒いが悪い気はしない。プレイヤーに見せびらかしたらどうなんだろう、「そのタトゥーはどこでアバターに付けれるんですか！？」と訊かれるのが関の山かな。

「問題なく街の中に入れるならまぁいいか、行こうエムル」

「はいな！」

例えるならそう、防御貫通効果のある超火力攻撃を頭にモロに食らったような。

いや、これは最早ゲーム内の現象では例えようがない。まさに脳天に破城槌が激突したかのような衝撃に、泥掘り（マッドディグ）を一刀の元に斬り捨ててサードレマまで全力疾走していたサイガー０は岩陰で不得手

とはいえガチ勢による全力の隠密を行いながらその光景を見ていた。

（あ、あの、あの女の子……誰？）

胴と脚が無装備で、凝視の鳥面を装備したサンラクというプレイヤー、まず間違いなく彼だろう。
全く同時期に同じプレイヤーネームの別人がいたとしたら非常に困ったことになるが、少なくとも「何をしでかすか分からないサンラクというプレイヤー」は彼くらいのものだろう。
だが、聞いた話では陽務楽郎（サンラク）は誰かと一緒にゲームをするような人物ではなかったはずだ。
まさか支援者（岩巻真奈）が情報の秘匿をしていたのかと、無意識のうちに剣に伸ばしていた手を拳にして握り締める。

（いや……落ち着いて、冷静に……姉さんも初見の事態には冷静な観察が大事と言ってました……）

視線の先、始めたばかりの初心者である彼に手取り足取り……というサイガー０の初期目標を見事に裏切り、破竹の勢いで突っ走っていった彼と、それなりにこのゲーム内の多くを見てきたサイガー０をして見たことのない装備に身を包んだ片眼鏡（モノクル）の少女は、所謂強さではなく見た目のためにゲームをプレイするファッションガチ勢ではないかと推測するが、少なくともゲーム開始からサードレマの間であんなオシャレ装備を整えるのは困難であるし、キャイキャイとはしゃぐ少女に何か違和感を感じる。

（確か喋るヴォーパルバニーと一緒にいる、という話でしたが……人、ですよね？　あれ……）

人に化けるモンスターに心当たりがないわけではないが、それら

はもっと分かりやすい。そして門番ＮＰＣ相手に何やら話している少女を暫く見続け、サイガ－０は漸く違和感の正体に気づく。

（そうか……プレイヤーネームが表示されていないんですね）

つまりあの少女はＮＰＣのようだ……と、サイガ－０は突如として出現した「ゲームの先輩として彼に話しかけよう作戦」最大の障壁が自分の早とちりであったことに安堵する。

それ以外の問題は解決するどころかさらに謎が深まっているのだが、私情八割で動いているサイガ－０にとっては瑣末な問題である。

（サードレマの中に……追わなくては……あっ）

話は変わるが、シャングリラ・フロンティアではＮＰＣも発生(ポップ)する事がある。例えば、サードレマへと入るために並んでいたＮＰＣの行列がサイガ－０の目の前で追加発生したように。

ちなみにここでＮＰＣを押しのけたり危害を加えたりすれば、最悪サードレマのみならず前後二つの街にプレイヤーの手配書が配られＮＰＣの衛兵や賞金稼ぎに、場合によっては懸賞金目当てのプレイヤーに追われる羽目になる。

サイガ－０からすればサードレマに存在するあらゆるＭｏｂなど敵ではないのだが、ＮＰＣの好感度が下がると様々なことに響くため、白金の騎士は門の先へと歩いていく半裸の鳥頭と何故か尻を抑えている白髪の少女をただ見ていることしかできなかった。

鎧騎士は見た！（後書き）

ちなみにＮＰＣの中には現時点でＬｖ．１００を突破している人物もいます

かくて汝、騒動の槍衾に囲まれん

　言ってしまえばセカンディルはさほど大きな街とは言いがたく、門の先から見えるサードレマの景色は活気にあふれた……「ファンタジーの大都市」としての条件を十全に満たした街であった。街を訪れた者達へ雨霰のように投げかけられる露天商達のアピールは、うるささに眉を顰めるのと同時に彼らから漏れ出す活力が自身の中へと入ってきたようにも感じる。
　ファステイアやセカンディルが平面に広がる街だとすれば、サードレマは町の中央に建つ城を頂点とした丘だ。故に、これから足を踏み入れる俺を待つ景色は、少なくともゲームを買う以外で遠出をしない俺にとっては目新しく、そしてモチベーションを激しく燃え上がらせるに足る光景であった。

「ふひゃあ、いつ見てもキレーな街ですわぁ」

「そうだな」

「む、なんだかサンラクサン反応が淡白ですわ」

　そりゃあ確かにすごい光景ではあるが、これでも俺はゲーマーだ。それなりの数のゲームをクリアしてきたということは、それだけ様々なステージを見てきたということでもある。
　例えば惑星を真下に大気圏に作られた足場の上。
　例えば「とりあえず立派な城」というオーダーを大雑把にクリアした結果、巨人でも住んでるのかと問いたくなるほど巨大な城。
　例えばテクスチャが崩壊したせいでひび割れた大地や空からサイバーな下地が見えてしまっている渓谷。

そういったゲームだからこそ、フルダイブVRだからこそ立ち、歩き、見聞きし感じてきた光景のことを門の前で立ち止まってエムルに説く。

「運命神の導きを受けた戦士ではないがそれなりに色んなところを見てきたからな」

「すごいですわ！　やっぱり開拓者サンはいろんなところを訪れているんですわ！」

人の姿をしても中身は変わらずヴォーパルバニーのエムルであり、踊るように跳ねる姿に思わず俺も笑みを浮かべる。

「さて、どうしたものかな」

「……？　宿を探すんじゃないですわ？」

「いや、それはノルマであって今現在の状況をどうするかって話」

セカンディルの時は時間帯と時期が上手い具合に噛み合ったおかげで全体的にチラと見かける程度にしかプレイヤーを見なかったのもあるが、これだけの大規模な街となればここに拠点を据えるプレイヤーもそれなりの数存在する。忙しそうに次のエリアに行くのではなくセカンディルへ戻るプレイヤーが結構いることは驚いたが、確かエリアボスは一度次の街でセーブポイント更新してから戻ると復活するんだったたか。それなら素材集めで行ったり来たりを繰り返すプレイヤーがいてもおかしくはない。

それは分かっていた、そして付け加えるなら自分の見た目が悪い意味で目立つことも分かっていたが、これは少し毛先が違うようにも感じる。

なんだろう、先ほどからサードレマを出てセカンディルへ戻るプレイヤーから見られている。だがその反応は「ヤベー奴が現れた」というよりも「もしかしてあいつじゃね？」という確認を孕んだ視線、と言えばいいのだろうか。
妙だな、確かに色々とスリリングな体験はしてきたが他プレイヤーに知られるような派手なアクションはしていないはずだが……もしや、跳梁跋扈の森でファーストコンタクト「不審者」な出会いをしたあの三人に「クッソ不審者プレイヤーいたんだけどｗｗｗ」みたいな感じで晒されたとか！？　いや、それはない、と、信じたい、が……

「まぁ、不審者だし」

森の中から熊じゃなくて覆面プロレスラーもどきがいきなり飛び出してきたらどうする？俺だったら写真撮って爆笑する、つまり仕方ない。

「行こうエムル、さっさと宿を探そう」

「は、はいな」

と、すれ違ったプレイヤーの一人にいきなり肩を掴まれ、サードレマへの第一歩はまたしてもお預けとなる。いやいい加減街に足を踏み入れさせてくれよ、なんで俺は門の前で延々と立ち止まっているんだ、門番の視線が痛いんだが。

「あ、あなた！　その格好、あなたがサンラクよね！？」

「へ？」

「サンラクサンお知り合いですわ？」
いきなり俺に掴みかかるように詰め寄ってきた見知らぬ女性プレイヤーに俺はそう問われた。エムルが知り合いなのかと聞いてくるが……「Ａｎｉｍａｌｉａ（アニマリア）」、この名前に心当たりはない。
クソゲーフレンドかもとは思ったが、少なくともそうであるならこんな他人行儀に話しかけてくるとも思えないし、何より少なくともプレイしていることが確定しているあいつならこんな正々堂々話しかけたりはしないだろう。
「ええと、どちら様で？」
ゲームと言えば、先に進むほどに装備が強くなるのは鉄則だ、そして装備の強さと見た目の派手さはおおよそ比例する。故にこのアニマリアの装備がこんな序盤で手に入るようなそれではない事は見ただけでわかる。
だがますます分からない、見た限りじゃ相当先でないと作れないオーラを放つ装備のこのプレイヤーが何故こんな序盤の街に？　というかそもそも何故俺の名を？
「挨拶とか……そういうのは、どうでも、いいの。私が聞きたいのは一つだけ……」
ぐわし！　と砕かんばかりに俺の肩を掴み、アニマリアなるプレイヤーは目を見開き問いかける。俺はおもわず武器を展開しようと動きかけた指をかろうじて意識で押さえ込み、エムルはぽふんっ！　と小さな音を立てて現れた垂れ耳をあわあわと髪の毛の中に隠している。

「どうやって！　ヴォーパルバニーを！　テイムしたの！？」

「…………！」

絶対にバレるなよエムル。

反射的に応えようとしたエムルを制し、表情の変化を悟られない覆面を装備していたことに感謝しながら俺は高速で思考を巡らす。

どこで漏れた？　いや、多分エムルを……ヴォーパルバニーを連れていることが他のプレイヤーに見られた、が妥当な線か。しくじったな、話しかけられないことと誰にも見られないことは別問題だと失念していた。くそ、いっそのこと無視して街中に逃げるか？　いや、それが最適解と判ずるのは早計だ。

どうする、ユニークシナリオを明かす事は論外だ。独占するから情報には価値がある、第一教えろと言われても「ヴォーパル魂があったから親分に呼ばれました」としか説明できない…………そうか、別に隠す必要がないのか。

なにせ、ユニークシナリオ「兎の国からの招待」がどういうフラグで成立したのかなんて俺が聞きたいくらいなのだから。

「いやぁどうやって、と聞かれましても俺自身よくわかって……」

「そうだよねぇ、こういうのは皆で共有するべきだよねぇ革命騎士サンラク君？」

その名前は、このゲームにおいては全く意味のないものである。
その名前は、このゲームとは別のゲームの俺を指すものである。
その名前は、特定のゲームでの俺との関係性を示すものである。

故にこそ声のした方向、門を超えた先のサードレマから奴が狙うであろう奇襲攻撃……的確に逃げるための脚を狙った一撃をアニマ

リア氏が俺の肩を掴んでいる腕を払いのけ、半ば勘で跳躍して回避する事に成功した。そしてそれが俯瞰的に見れば悪手であることを理解した上で門から離れるように距離をとる。

「出たな鉛筆戦士……！！」

「こらこら、ここじゃアーサー・ペンシルゴンだよサンラク君。というか人をモンスターみたいに言うんじゃないよ」

身形こそ違えど、鼻から上を隠す覆面を被ってなお「あぁこいつ美人だな」と理解させられる、驚くべきことにリアルの顔をそのまま使っているらしいその暗殺者……かつて世紀末略奪ゲーム(ユナイト・ラウンズ)で俺がモドルカッツォと暗殺したプレイヤー「鉛筆戦士」、今は「アーサー・ペンシルゴン」なるそいつは心底楽しげな笑顔を浮かべて俺に笑いかけた。

かくて汝、騒動の槍衾に囲まれん（後書き）

変更点

街の中を歩きながら会話→サードレマへ入る直前で立ち止まって会話

街中でアニマリアと遭遇→セカンディルへ向かおうとしていたアニマリアと遭遇

街中でペンシルゴンの強襲→街中で抜剣し門を飛び出してからペンシルゴンの強襲

いくつか描写追加

筆記用具の騎士王

さて、我がクソゲーフレンドにして笑顔で中指を突き立て合う仲である親愛なる鉛筆戦士氏の事を紹介するのならば絶対に外せないゲームを先に紹介しよう。

そのゲームの名は「ユナイト・ラウンズ」、滅びに瀕した王国を救うためにプレイヤー達は騎士となって襲い来るモンスターと戦う……「剣を重ね、結束せよ」がキャッチコピーの協力型ＭＭＯＶＲである。だがこのゲーム、俺の家の棚に鎮座しているという事は、即ちクソゲーである。

まず前提として、あり得ないレベルのドロップ率の悪さ。
例えば初心者騎士（プレイヤー）が「薬草調達任務」を受けたとしよう、ＮＰＣの上官は拠点すぐ近くの森で採取してこいと命じる。さて新米騎士が取るべき最もスマートかつ楽な方法は何か？チュートリアルなんだから素直に森で集めてこい？　おめでとう、そんな君はおおよそ１２時間ほどひたすら草むらで四つん這いになる作業をする事になる。

なにせこのゲーム、目を瞑ってプログラム組んだのかとキレそうなくらい設定に忠実なのだ。即ち、何もかもが滅びかけ。最も……そうゲーム内の全アイテムで最もドロップ率が高い「石ころ」ですら驚異のドロップ率４０％という狂気の沙汰、プレイヤー達は運が悪いとひたすら

「この石は投げるのに適さないようだ……」

というウィンドウを振り払いながら石を拾わなければならない。

何故って？　初期装備の剣が三回フルスイングすると破損するからだよ！！
ちなみに薬草のドロップ率は２％である、雑草の繁殖力逞しすぎて文字通り根絶やしにしたくなる。

ならば何が正解なんだよ？　簡単な話だ、他から奪えば良い。
これこそがユナイト・ラウンズ最大のクソ要素である「世紀末略奪ゲー」だ。オープンワールドで無法者になるカテゴリは有名無名含めて多く存在するが、まさかの協力型ＭＭＯで略奪こそが最適解になるとは誰も思わないであろう。
だが事実、攻略サイトですら最初の薬草集めは「ＮＰＣの売店を襲撃するか、襲撃したプレイヤーを襲撃して奪うのが一番楽である」と明記する程だ。さらに運営が意地になったのか「ドロップ率は絶対に変更しません」と明言してしまった為に王国という名のアポカリプスは過疎って滅び……る事はなかった。
なにせ前提としてＰｖＰが必須項目と化したゲームであり、ゲーム評価サイトが星１の評価とその理由を過分に表現して記述する程に、誘蛾灯に惹かれた虫の如く対人勢が寄って来る。さらにギスギスを通り越して挨拶がわりに略奪、ログアウト寸前に奇襲、一緒にクエスト中に謀殺という前提条件全員敵、という救われなさっぷりはコアなユーザーもやって来る。
結果としてユナイト・ラウンズ……通称「世紀末円卓」はＭＭＯとしてはそれなりの成功を収め、本来の用途とは全くの真逆の楽しまれ方で今も続いている。

話を鉛筆戦士に戻そう。奴は新たに呼び込まれた新規のうち、その世紀末な環境に惹かれた所謂「無法者勢（アウトレイジ）」だった。

過程は省くが、実質全員敵とも言える世紀末円卓で暴れに暴れ、あらゆる手練手管を駆使した鉛筆戦士は何をトチ狂ったのか王国の掌握を達成、「富もドロップアイテムもみんなで分けようね（笑顔）」を掲げる血よりも真っ赤な鉛筆王国の爆誕である。

あの頃は凄かった、この俺をして「クソゲーが極まり過ぎて神ゲー」と認めざるを得ないディストピアであった。

意図的に配下にしなかったプレイヤー達から徹底搾取は序の口、内通者にわざとレジスタンスを作らせる事で被害者達に反抗の意志を持たせる、即ちゲームから離れないよう対策。

まさしく奴こそが魔王、黒幕、ストーリー上のラスボスたる魔王「ロマニス十八世」とかいう影の薄いＭｏｂなど比べ物にならない。「真の魔王（トゥルー・イーヴィル）」、「反理想郷の女帝（ディストピア・エンプレス）」のアダ名は決して誇張ではない。あの瞬間確かにユナイト・ラウンズは一人のプレイヤーの掌の上だった。

俺と……あの時はカッツォタタキって名前だったかな、ともかく俺とモドルカッツォは反乱軍にも王国軍にも属さない傭兵（騎士なのに？）として反乱軍を囮に鉛筆戦士城へと侵入、悪辣な罠をくぐり抜け、反乱軍に鉛筆騎士配下のプレイヤーを押し付け、最終的に２対１でありながら引き分けという結果ではあるものの鉛筆戦士の暗殺に成功、ユナイト・ラウンズ通称「鉛筆朝時代」に幕を下ろしたのだった……そういえばアーサー王伝説になぞらえてアーサー・ペンシルゴンなんて呼ばれていたな。

「嫌な記憶を思い出す名前な事で……」

「ふふふ、態々フィフティシアから出向いた上にペナを承知で大人気なくキルしに来たんだ、感謝に咽び泣いてリスキルされるがよいぞぉ？」

ニマニマと笑いながら明らかに強力な力を備えているのだろう片手剣を構える鉛筆戦士……もといアーサー・ペンシルゴン。確かに嫌がらせ目的でエムルが人参食ってるSSを送りつけてやったが、態々俺をPKしに来るほどのことか？

あとエムル、耳を隠すのはグッドだが尻尾丸出しだ、気付かれないよう隅っこに立ってろ。

「一応言っておくと別に個人的な理由だけで来たんじゃないんだなこれが」

「はっ」

「カッツォ君もそうだけどさ、ごく自然に人を馬鹿にする鼻笑いほんと腹立つね君達」

自分勝手を人の形にして才能と高いAPPをインストールしたような奴が自分以外の誰かの理由で動く？　冗談なら72点と言ったところか。

「私さぁ、阿修羅会のナンバー2やってるんだよねぇ」

「阿修羅会のナンバー2……まさか廃人狩り（ジャイアントキリング）ペンシルゴン!？」

アニマリアの驚愕と畏怖が混じった声に、数秒の沈黙。

「ジャイアントキリング？」

「いやぁ、格上プレイヤーばっか狙ってたらそう呼ばれるようになってさぁ。最近はＰＫナーフのせいでそれもやりづらくなったんだけど……あれだよ、ムカシトッタキネヅカー的な」

「むしろキリングされるジャイアントの方だろ反理想郷の女帝（ディストピア・エンプレス）」

「それな」

「「あっはっはっはっ！」」

ゲラゲラと笑う俺とペンシルゴンを信じられないと言わんばかりに見つめるアニマリアとエムルだが、それなりに親しい友人だからこれくらいは当然だろう。

「というわけで隙あり！」

「来ると思ったわバーカ！」

そして俺とペンシルゴンは大抵敵対関係でゲームプレイするのでこの程度は日常茶飯事だ。使い捨ての投擲武器と思しきナイフを避け、周囲を見回す。

さぁ、この状況をどう切り抜けたものか。

筆記用具の騎士王（後書き）

変更点

ペンシルゴンによるＰＫが不利になった言及

秘匿していたユニークシナリオの存在がバレた。これぱっかりは俺が油断していたのもあるが、まさか最前線から廃人が直々にやって来るとは思わないだろう。

的確に対処しづらい位置からの攻撃を仕掛けて来るペンシルゴンから距離を取りつつ、さてこの現状をどう対処したものかと思考を巡らせる。今現在はペンシルゴンの剣を余裕の表情で回避して見せているのだが、ブラフに関しては見せかけるも見破るもあちらの方が数段上、実際のところギリギリであることはバレているだろう。

それにステータスとプレイヤースキルで劣っている以上、俺のアドバンテージはほぼ潰され、向こうは潤沢な装備で俺をサードレマへの門からどんどん離していく。

「フェイクにディレイと相変わらず厄介だな……」

「サンラク君レベル幾つよ？　20かそこらだろうに、よくもまぁ避けられるものだねぇ。」

「神ゲーだからな、スムーズに身体が動くんだ……よっ！」

明らかに「毒属性付与されてます！」と主張の激しいナイフを避け、避けた先に差し込まれる剣の腹を短剣で押し退ける。中距離ではナイフが飛んで来るが近づけば圧倒的に不利、距離を離したくともそうはさせない、本当にいやらしい戦い方をしてくれる……

「それはそれとして今回はメッセンジャーだからね、サンラク君にウチの頭（トップ）からのメッセージをだね……」

「今！？」

メッセージを真面目に聞いて欲しいなら攻撃をやめるとかさぁ……危ねっ。

矢継ぎ早に繰り出される攻撃を回避しながら俺は、そして矢継ぎ早に攻撃を繰り出しながらペンシルゴンは単純な言葉を伝える。

「諸々を開示するか、開示したくなるまで狙われるか選べ……だってさ」

「…………」

成る程、シンプルなメッセージだ。ユニークシナリオの詳細を吐くか、徹底的にＰＫされるか選べ、と…………馬鹿だな。

「２０点、脅し文句より先にその脅しでどうなるのか考えるべきだったな」

「あら高評価、私は諸々込みで１０点で赤点評価なんだけど」

「俺を知らないで初心者を脅すならそんなもんだ……ろうっ！」

「おわっ」

まだ見ぬ阿修羅会とやらのリーダー氏は、二つ致命的なミスを犯している。

一つは俺がサードレマに来たのは拠点確保の為だが、それは「ラビッツから戻って来る時の場所」であってこれからリスポン地点にする場所は誰も訪れたことがない場所だということ。

少なくとも一年近くサービス続けて誰も知らないユニークシナリオによる喋る兎(エムル)の存在を知っているなら、それが誰も知らない場所である可能性を失念しているのはいただけない。俺しか知らない場所に引き篭れば、プレイヤーキラーの集団だろうがなんだろうが対岸の火事だ。
　そしてもう一つ、これが一番致命的だ。俺と鉛筆戦士(ペンシルゴン)が知り合いだと知ってこいつを寄越したのだとしたら、そもそもこいつをメッセンジャーにしたこと。
　メッセンジャーというのは伝言を伝えることが第一で、その為には俺を殺して(キル)はいけないという縛りが課されるのだから。

「エムル！」

「はいっ！？」

　そろそろ限界時間なのか、人の形を保てなくなってきたために人から兎へと変わりつつある尻尾や顔、耳などを一度に隠そうと手を慌ただしく動かしているために、珍妙なダンスを踊っているようにも見えるエムルへ呼びかける。
　くそ、明らかにレベルも装備もスキルも魔法も……何もかもが劣っている俺が持ちこたえられていたのがおかしいんだ、ペンシルゴンは一度たりともスキルや魔法を使用していない……少なくとも伝言を伝えるまでは。そもそもこいつの得意武器剣じゃないし。
　露骨に手加減(舐めプ)していたペンシルゴンをレペルカウンターで弾き、さらにダメ押しして蹴り飛ばして一気に距離を稼ぐ。

「戻って掴まれ！」

「えええ！　いやでも」

「ハリーアップ！」

「あぁもうはいなーっ！」

突然始まったPK、なのに何故か加害者側とフレンドリーで、挙げ句の果てには奇襲を仕掛けた加害者はメッセンジャー。奇妙な現状に呆けていたエムルに腕を差し出し、この場においてエムルだけに通じる言葉を投げる。悪いが秘法はバラしてくれ。

ぼふーん！と相変わらずマヌケな効果音と共に白煙が発生し、煙が散れば俺の左腕にしがみついた垂れ耳兎。ただ全力で走るだけならともかく、今からは少しばかり「ガチ」で逃げる故にこうしなければならんのだ、すまん。

「あああああああ！！？」

「Animalia（アニマリア）だっけ？悪いけど俺もコレのフラグは把握してないんだ、ゴメンネ。」

「せめてその仔と写真を……！」

「このままだとこいつも危ないからさ！」

種は蒔いた、あとは逃げるだけだ。アニマリア氏とペンシルゴンの方へと押し出し、迂回するように全力で走る。

「おっと、そういうのは私の十八番（オハコ）だったんだけどねえ……」

「プレイヤーの方は割とどうでもいいけど、あの可愛らしい兎ちゃんに危険が及ぶ以上……止めるわ廃人狩り（ジャイアントキリング）！」

「まぁでも、対人にカケラも興味がないモンスター撮影クラン「ＳＦ－Ｚｏｏ」の園長さんと戦える場を整えてくれたことは感謝かな？　サンラク君あーりがーとねーー！」

当然俺へと攻撃を加えようとするペンシルゴンだったが、低レベルプレイヤーたる俺なんかよりもよっぽど驚異的なステータスをしているアニマリア氏の攻撃を無視はできないだろう。というかなんだあれ、短剣にしてはやけに装飾過多のような……ああいうデザインの武器ってだけの短剣なのか、それとも他に用途があるのか、まぁいいさ。

何も攻撃に晒すだけが盾ではない。二、三ほど話しただけだがアニマリア氏がエムルのためだけにここまで来るガッツとモチベーションの持ち主ならば、エムルが危ないかもしれないだけで仕事を終えて本気を出すであろうプレイヤーキラーの足止めをしてくれるだろう……そう、エムルという盾……人質ならぬ兎質で俺はハイレベルプレイヤーという盾を手に入れた。

悪いねアニマリア氏、また会うようなことがあればラビッツのＳＳを贈呈しよう。そしてペンシルゴン、お前絶対覚えてろよ……また闇討ちしてくれる。

エムルの【座標移動門】のための条件は街に入った時点で達成できるんだ、さっさと門へ飛び込んでラビッツに雲隠れだ。

「まぁメッセンジャーは私だけなんだけどサ、私別に一人で会いに来たなんて言ってないんだよねぇ……くっくっく」

野生のＰＫ達が現れた！

ちくしょう、レベル５０にも到達してない雑魚相手に増援なんて卑怯だぞ！　神ゲーをクソゲー展開にするのはやめろよ！

そう叫びたい衝動をこらえて見据えた先、現れた追加のプレイヤー四人は、皆一様に真っ赤なプレイヤーネームを頭上に浮かべていた。

内向きに荒ぶ台風の目（後書き）

変更点
主人公がペンシルゴンによって門から距離を離される
描写の追加
屋内で取り囲むプレイヤーキラーＡ～Ｄ↓門から全員やってくるプレイヤーキラーＡ～Ｄ

なるほど、どうやら阿修羅会なるＰＫクランのリーダー様は意地でも俺から情報を吐かせたいらしい。

「何人いようがお前みたいな低レベルキルするのなんか楽勝だっつの」

「三……いや四人かな？」

「雑魚をＰＫするとカルマポイント爆増するから嫌なんだけどなぁ」

「そりゃ上の奴らも一緒だろ、だから俺たちが実行班にされたんじゃねーか」

こちらに敵意と武器を向けるプレイヤー、頭上のプレイヤーネームが赤く染まっているのはプレイヤーキラーの証だ。取説に書いてあった。とりあえず現状をまとめよう。

達成すべき目標はサードレマへの到達を経てラビッツへの到達、その為に文字通り越えなくてはならないハイレベルプレイヤーの壁。位置関係は……門、ＰＫ四人、２メートル空けて俺＆エムル、そして数メートル後ろにペンシルゴンとアニマリア氏。

気になったのはカルマポイントなる聞き覚えのない単語、ＰＫ達の言葉的に溜まると奴らにとってはあんまりよろしくないものなのか？　嫌がらせのために徹底的に奴らに殺されまくってやろうかと一瞬考えたがエムルがいるこの場でその選択肢はノーだ。とりあえず見た限りではＰＫ共には遠距離武器の類は無いが……魔法や遠距離対応のスキルがないとも言い切れない。さて、誰にしたものか。

じりじりと包囲するプレイヤーキラー達に、腕にしがみついたモコモコがぶるりと震えた。なに、舐めプした二流のプレイヤーキラーなんぞにそう簡単にやられはしない。世の中には「ここは始まりの村だよ」というNPCのごとく新規プレイヤーのスポーン地点で武器を構えて出待ちするハイレベルプレイヤーが普通に受け入れられている世紀末円卓（ユナイト・ラウンズ）があってじゃな。

ちなみにそんなことをする理由は自分よりレベルが低いプレイヤーを一定数キルすると得られる称号「騎士失格」が割と便利だからだ。協力ゲーでなんでそんな称号があるのか運営に問い詰めたい、問い詰めたら「デメリット効果のつもりが結果的にメリット効果になっていた」だそうだ。

そらNPCからの好感度が最低になるデメリット効果が「NPCを煽れば武器を持ち出して襲ってくるのでぶち殺して武器ゲット」とかいう超蛮族的メリットになるとは思わんわな！　そもそもそんな称号を作るなバーカ！

よし、クソゲーの悪しき記憶（ストレス）を思い出して現状に萎れかけた俺の心が立ち直った。気を取り直して笑みと共に脚に力を込め……

アーサー・ペンシルゴンというNPC達からすれば殺人鬼に等しいプレイヤーの登場に逃げ惑うNPCの波からようやく抜け出したサイガー0が見たものは、文字通り火花を散らすアーサー・ペンシ

ルゴンとＳＦ－Ｚｏｏのクランマスター、そして四人のプレイヤーキラー達に囲まれつつあるサンラクとその腕にしがみつく垂れ耳のヴォーパルバニーの姿であった。

（私が目を離した間に一体何が！？）

一瞬サイガー０の脳裏に「赤子より目を離せないなあの人」と不可思議な感情がよぎったものの、これはチャンスであると思い直す。
古今東西、ピンチから始まる出会いのなんと多きことか、悪意を持って襲いかかるプレイヤーキラーを撃退してみせたのなら、それはただ話しかけるよりも遥かに良い関係を築く事ができる。幸い、ＰＫをキルする……即ちＰＫＫは数ヶ月前のアップデートによって一部のＮＰＣからの自身への好感度が下がる程度で身内(クラン)に迷惑がかかる事はない。

（チャンス！　チャンスですよこれは！　兎にも角にもこのゲームの中で面識を得て、そして現実で………っ！）

千客万来？　千載一遇？　もはやサイガー０の中には「とりあえずプレイヤーキラーから彼を助け出す」という考えしかなく、その過程に用いる手段の加減が頭の中から吹き飛んでいる。

「……「断撃【破城斬(はじょうざん)】」　！！」

レベル９９、トップクラン「黒狼(ヴォルフシュバルツ)」にて前衛として戦うサイガー０の放つ城塞クラスの装甲を持つモンスター用のスキルが放たれ……

「いやぁ、中々に楽しめたよ園長さん。流石、モンスターを撮影するためだけにデバフ状態異常を極めた呪術師なだけあるよ、うん。」

「く、ぅ……」

アーサー・ペンシルゴンは、足元でＨＰが尽きようとしているアニマリアを見下ろしながら、心からの賞賛を送る。

廃人狩り（ジャイアントキリング）などという小っ恥ずかしい異名はともかくとして、ペンシルゴンが今もフィフティシアで挑戦しているハイレベルプレイヤー達を狙い、そして勝ってきたのは事実だ。

そのペンシルゴン相手にハイレベルとはいえ対人の素人が善戦した事は十分に賞賛できる。ペンシルゴンはステータスに表示された夥しい数のデバフのアイコンに苦笑を浮かべる。

「そりゃここまでデバフ叩き込まれたらモンスターも哀れな被写モデルになるしかないよねぇ」

「スタンや、毒を何度も、仕掛けたのに、何故……」

「ん？その秘密はねぇ……じゃーん！　対呪術師において最高レベルのメタとして機能するユニークアイテム「応報の藁人形」君のお陰でしたー！　いやはや偶然って怖いねぇ」

アニマリアの敗因はただ一つ、ペンシルゴンがかつて呪術師ＰＫＫに粘着されていた経験から対呪術師の対策として最高クラスの呪

術師対策アイテムを所持していたという……要するに運が悪かった。そもそもＰｖＰに詳しいプレイヤーであるなら、対策の有無関係なしに「万全の状態のペンシルゴン」と戦うことが最悪手であることを知っていただろう。

「なる、ほど……」

「ま、そんなわけで因果応報呪い全カウンターってわけ、実際危なかったよ」

なにせこのゲームにおける呪術師は中々に厄介だ。そう単純でもないが要約するとＭＰを消費すれば発動できる魔法と違い、呪術系は発動にＭＰとは別の何らかのコストが必要になる。その分メリットも大きく、レイド戦であれば二、三人呪術師がいると一気に戦闘が楽になる程にはコストとリターンの双方が大きいジョブだ。

そして、「シャングリラ・フロンティアのあらゆる動物系モンスターを愛でる」ことを目的とするＳＦ－Ｚｏｏのクランマスターたるアニマリアはスペルスロットの殆どを拘束系の呪術で構築していた。

サンラクが期待した足止めという点において、偶然にもアニマリアというプレイヤーは最良であったとも言える。

「さて……」

どうしたものか、とペンシルゴンは思案する。サンラクを仕留めるためにクランマスターがペンシルゴンに同行させたプレイヤーキラー達ではあるが、ペンシルゴンは彼らがサンラクを仕留められるとはカケラも思っていなかった。ついでに言えば彼らに加勢するつもりもない。

（サンラク君、自前でＤＥＸ用意してるの狡いよねぇ……普通レベル差５０以上あったらろくに抵抗もできずにキルされるってのに）

クソゲーという制限付きとはいえジャンルを問わないあらゆるゲームの積み重ねから得た経験値はこのゲームのシステムにおいて下手なユニークアイテム以上の価値があることをペンシルゴンは知っている。

自分と同等かそれ以下のプレイヤーを囲んでＰＫする事しかできない者達ではアレを止めることは不可能だろう。かつてペンシルゴンも同じような判断をして痛い目を見たのだ、その推測には実体験が伴っていた。

（あのバカはチキってるし、そのせいでつまんないプレイヤーばっかりメンバーに増えたし……そろそろ潮時かなぁ。カッツォ君もシャンフロ始めたらしいし、あの計画も現実味を帯びてきたね……）

ペンシルゴンが思い浮かべるのは、レベル９９……シャングリラ・フロンティアにおける現段階でのレベル上限に達したプレイヤーたるペンシルゴンを含めたハイレベルプレイヤー１５名による討伐隊ですら、いとも容易く全滅させてみせた武者の姿。

プレイヤーキラークラン「阿修羅会」最大の秘密とも言える奴と張り合える知り合いは、かつてたった二人で鉛筆戦士（アーサー・ペンシルゴン）の国を墜とした彼らの他にはいない。あとはタイミングさえ合えば計画は現実的なものになるのだが……と、ペンシルゴンはふと視線を倒れ伏すアニマリアへと向ける。

「ふむ、ところで園長さん？私の記憶が間違ってなければ貴女、「詠唱丸暗記」と「ＨＰ１桁」の時のみ発動できる呪術を今まさに使おうとしているように見えるんだけど……？」

「…………」

にっこり、とモデルとして常日頃から顔の筋肉が引きつるほどに笑顔を作っている天音　永遠（ペンシルゴン）をして魅力的だと感じるアニマリアの笑顔だが、無言の笑みの中に確かに「死なば諸共」という非常に禍々しい意味が込められている事を理解させられる。

応報の藁人形は先程ストックを使い切った、そもそも破格のメタ性能の代償として持てる数が極端に少ないのが消費系のユニークアイテムの特徴だ。

「……ハナセバワカルヨ」

「問答無用、【冥府の旅路（フェロウ・トラベラー）は汝と共に】……！」

最高クラスの呪術師による自滅呪術がペンシルゴンへ……

そして状況は一斉に始動する。

状況始動（後書き）

変更点

ＰＫの数を五人から四人に

位置関係説明描写

主人公がクソゲー比較でモチベーション回復

サイガー０が順番待ちで出遅れた↓ＰＫのやべーやつから逃げたＮ

ＰＣ達の人波に呑まれていた

ペンシルゴンが応報の藁人形を持っている理由

ペンシルゴンの自クランへの評価追加

状況結実（前書き）

ご迷惑おかけしました

状況結実

　当初の予定としては、一番対処しやすそうな……明らかに俺を低レベルと舐めプしているＰＫプレイヤーの中でも大剣持ちのプレイヤーから抜くつもりだった。
　大剣はどうやっても一秒間に出せる手数が少ない、つまり攻撃の回避に必要な行動を少なく済ませることができる。ついでに言えば見るからに物理特化ですと言いたげな装備は不意打ちの魔法の心配も少なく見える。
　まぁ一番の理由は一番俺を舐め腐っていそうな奴だったから、ではあるが。ともかくこちらから先手を取って不意を打ってすり抜けて逃走が俺の当初の予定だった……なぜ「だった」と過去形でしつこく説明するのか？　理由は簡単だ。

　今その大剣使いが海老反りの「く」の字になって彗星の尻尾よろしくポリゴンを撒き散らしながら門の先へと吹っ飛んでいったからだ。というか俺のすぐ隣を通過したあからさまにヤバそうな衝撃波、あと少し右に寄っていたら俺も消し飛んでいた。

「なんだ！？」

「一撃だと！？」

「誰がやりやがった！」

　門の先、大通りのど真ん中で爆散する大剣使いＰＫ。それが想定

外の事態であるということは、小者臭さが極まったＰＫ達の反応を一目見れば分かる。ああも混乱していては冷静に攻撃を仕掛けるなんてできないだろう。だからこそ、分かりきった光景を見ることなく俺は振り返った先、剣を振るった姿勢で立つプレイヤーの姿を直視していた。

(見るからにハイレベルプレイヤー、ネームは赤くないしペンシルゴンのツレではないようだが……)

そもそもこの場に俺というプレイヤーの絶対の味方は存在しない。敵の敵は味方、なんていうが現在の状況に最も適切な言葉は敵同士が共食いし始めた、である。

ユニークを握る俺は手出しを防ぐだけの後ろ盾もレベルもない、喋る兎という強さとは別の方面で求める者が多そうなユニークだったというのも拍車をかけている。アニマリア氏がいい例だろう、動物好きなプレイヤーにも狙われる可能性は極めて高い。いや、それよりもあのプレイヤーについて可能な限りの情報を集めなければ。

プレイヤーキラー、それも物理ビルドの大剣使いを一撃でＨＰ全損にする……まず間違いなく最前線クラスのプレイヤー、それもアニマリア氏やペンシルゴンとは比べ物にならない完全前衛特化。ＰＫの吹っ飛び方、ダメージ判定を見るに一撃の威力を高めるタイプと想定……

「装備……大剣、盾、全身鎧……」

クソ、装備のバリエーションが増えると一見して魔法を使うのかどうか分からないってのが厄介だ。魔法は使ってくるものと想定するべきだな。

ガッシャガッシャとペンシルゴン達をガン無視して一歩ずつ近づい

てくる鎧騎士、さぁどうするこの状況。即興で思いついたプランは三つ。

一つ、正面突破。仮に鎧騎士が後ろから来るとしても脳筋である事を祈ってあわよくばアサシンキル。

二つ、逆走。前衛ハイレベルプレイヤーと戦えるか、元来た道を戻る。レベル上限に到達してそうなプレイヤーが三人いるけどな！

三つ、離脱。勝てるわけないだろ、強制ログアウトでもなんで……いや、

「プラン４だな。」

俺は迷う事なく全力で門へと突貫する。強い奴らってのはどいつもこいつも格下が躊躇いなく突っ込んでくるとなぜ驚くのやら、初心者のＣ４突撃とか経験がないのか？　少なくともあのワンコにはあるわけないか。

一切減速する事なく、更に言えば武器すら構えず俺はＰＫ達へと肉薄する。強いていうなら装備：エムルと言ったところか？

「………っ！」

三、鎧騎士が慌てたように駆けてくる。

「きゃぁぁぁあーーーっ！　死ぬ死ぬ死にますわぁぁぁぁ！！」

二、鎧騎士の大剣を握る手に力が入り、ようやくＰＫ達も戦闘態勢に入り始める。

一、そ「なんだあれ？」

「っ！？」

「にゃっ！？」

全力疾走と見せかけての全力停止、全力よそ見……不意に動きの止まった車の中にいる者が慣性に従って前に投げ出されるように、音ゲーの最中に第三者によって突然ゲームのポーズ画面を開かれたように。

時間にすれば数秒の「空白」が生まれる。側から見れば古典的かつ陳腐な手段だが、誰も彼もが役割(ロールプレイ)に入り込みそして何が起きても不思議ではないゲームだからこそ、こういう手段は笑っちまうくらいに上手くハマるのだ。

「エムル、門の用意。」

「は、はゃい！？」

棒立ちからの再全力逆疾走、この場にいる全員の認識が俺に戻る数秒。リアルの身体じゃ絶対に出来ない、数値化されたスタミナだからこその短時間での激しい緩急。

一歩踏み出しすぐ後ろまで来ていた鎧騎士へ肉薄し、二と三歩目で剣を「駆ける」。そして四歩目は……

「………待っ、ふぎゅっ！」

「悪いね。」

タッパのデカいアバターはこういう時にいい足場になる。

重量級の大剣と、それを支えるＳＴＲによって無理矢理見出した剣の坂道を駆け上がり、鎧騎士の肩を踏み台に反転した位置関係の結果背後にいるＰＫ共を一息に跳び越す。少し気合を入れて跳び過ぎたせいで体勢を崩しかけたが、空中で一回転入れて着地。

「はっはぁーっ！　システムアシスト無しで成功させるアクロバットはたまらんなぁ！」

「ちょ、揺れて集中できないですわーー！」

こういう時、ひょろ長いアバターは役に立つ。テレビで見るような高身長陸上選手の動きを肉体の制限なく再現できるからな。

「おうさっき許可は得たから入っていいよな！　悪いが返事は聞かない！」

「え、あっ！」

門番のおっさんにそう言い残してようやっと門の先に一歩足を踏み入れる。

「サイガー０、ね……名前だけでも覚えておくか。」

一瞬見えたプレイヤーネームを思い出すように唱え、記憶に留める。俺が握るユニークをハイレベルプレイヤー達が狙う以上、立ち塞がるプレイヤーの名前とスタイルは覚えて損はないだろう。正直ペンシルゴン以外のＰＫ達とか覚えてられないが。

俺はもう後ろを振り返る事なくサードレマへと駆け込むのだった。

「…………」

ただ、無言。

第一線にその名を轟かすトップクラン「黒狼（ヴォルフシュバルツ）」のエースが足蹴にされ、あまつさえ虚仮にされた事が？　答えは否である。

(は、話しかけられちゃいました……！)

まるで憧れのハリウッドスターに話しかけられでもしたかのような心中の斎賀（サイガー０）玲だが、ニヤケ顔を堪える顔も、喜びに震える身体も、全身鎧と見知らぬ他人という色眼鏡が重なれば怒りに震えるようにしか見えない。

それなりの数の野次馬達がサイガー０から距離を離す中、逆にサイガー０を囲むように近づく者もいた。

「な、なぁ……マジでやるのか？　相手は「最大火力（アタックホルダー）」だぞ……？」

「ビビってんのか？　最高火力っつったって所詮はバフデバフの支援ありきだろうが。ここで俺たちがあいつをキルすればランキング一桁にだって行けるんだぜ？」

「街の中に入られたらどうしようもねぇよ、俺たちじゃ賞金狩人（バウンティハンター）に勝てねぇし。それにいざって時はペンシルゴンさんもいるし……」

アップデートによって「街中でＰＫをする」ことを条件に出現する特殊ＮＰＣ、賞金狩人（バウンティハンター）。鬼ＡＩとまで言われるＣＰＵの暴力と尽きないスタミナによってエリアの果てまで追いかけてＰＫを容赦なくキルするそのＮＰＣは「キルしたプレイヤーの装備を自分のものとして使用する」という特殊能力から、クラン「阿修羅会」内ランキング旧八位と旧十位、及び旧三位がＰＫＫされた時点で、さらに言えば賞金狩人が複数体存在するということが明らかになった時点で阿修羅会内外を問わず、ほぼ全てのＰＫが街中での戦闘を自粛せざるをえないほどの効果を発揮していた。

そんな街中でのモラルを守るようになったプレイヤーキラーによるＰＫクラン「阿修羅会（ペンシルゴン）」、そのメンバーたるプレイヤー達はいざという時の保険ありきの皮算用を口々に話し合う。丁度そのタイミングでペンシルゴンがアニマリアによる道連れの自滅魔法によって即死を喰らってポリゴンと化している事実に彼らはまだ気づいていない。

「…………」

第三者が見ればしょうもない喜びかもしれないが、本人からすれば月面に踏み出した宇宙飛行士の第一歩が如き進展に喜んでいたサイガー０だったが、よくよく考えればＰＫ（彼ら）がいなければもっと確実に、逃げられる事もなく話すことができたのでは？　という事実に気付き、サンラクの時とは違う、明確に意識して大剣が持ち上げられる。

「……その、なんというか……八つ当たり……です、じゃなくて……だ。」

明らかに無理のあるロールプレイによる死刑宣告。数秒後、プレ

イヤーキラー達は阿修羅会Ｎｏ．２の助けを受ける事もできず、「最大火力（アタックホルダー）」の称号の意味を知ることとなる。

状況結実（後書き）

変更点全てを要約すると
・戦った場所が街中から門の前に
・PKが街中での戦闘を避ける理由「賞金狩人」の追加
です。

賞金狩人。
バウンティーハンター、物語開始前の大規模アップデートで追加された街中でPKが行われた時点でポップする特殊な職業のNPC。
某悪夢で狩りする啓蒙ゲーの狩人のような連中が無言でPKを殺しにかかってくる姿はかなりのホラーだが、5%くらいの確率でロシア系金髪幼女賞金狩人「ティーアスちゃん」がポップするため、談合の上でわざと街中PKをする&されるプレイヤーも存在する。ちなみにティーアスちゃんの現在の装備はビキニアーマーのためティーアスちゃんと戦闘する際にはPKKされるプレイヤーの装備を賞金狩人の特徴である「奪取」が行われた際に上書きされないよう全裸装備がマナー。
かつての阿修羅会ランキング旧三位が偶然遭遇した際、周囲のプレイヤーを味方にして時間稼ぎさせてる間にインベントリ整理して「自分がPKKされた時に絶対にティーアスちゃんがビキニアーマーを入手する」状態にして着させたもの。
ちなみに賞金狩人達のAIは「3S」を基本としています。すなわち、
「します」
「させます」

「させません」

一体目（複数形）（前書き）

割と重要な報告なのでここに書きます
感想欄で多くの方から指摘があり、考えた結果「街中でＰｖＰは流石におかしい」ということで
３３話～３８話の内容に大幅な変更を加えたいと思い、そのために数日ほど更新をストップします。
ご迷惑をおかけして誠に申し訳ありません。

一体目（複数形）

ヴォーパルバニーの国ラビッツ、王たるヴァイスアッシュの住まいである兎御殿の一室。王によって見込まれた人間に与えられた部屋に、空間を繋ぐ門が現れる。

「はい逃げ切ったぁ！　どうだ見たか廃人共め！　はははははははは！！」

「つ、疲れましたわぁ…………」

そこへ転がり込むように俺とエムルは現れ、【座標転移門】が完全に消えたことでようやく俺は安堵のため息をつく。エムルがMPが足りませんわー！とか言い出した時は本当にもう……何かに追われながらやるパルクールには慣れているが精神的にはあまりよろしくない。

正直相当ヤバい場面だった。知ってる驚異と知らない脅威が同時に来るのは心臓に悪い。ペンシルゴンはなんか俺のユニーク狙いとは別に何か悪巧みしてそうな気配がしたし、暫くはラビッツで優雅に亡命生活だな。できれば喋るヴォーパルバニー以上のビッグニュースで俺の存在が忘れ去られてくれたりすると大助かりなんだがな。

「あぁー……やっぱ対人戦も悪くないなぁ」

リアルには存在し得ないモンスターを倒すのもこれ以上ない達成感を齎すが、中身の入ったプレイヤーを出し抜く快感もまた捨てがたい。

「時間は……昼か」

　一旦飯食ってきた方がいいかな。俺はベッドへと飛び込むように寝転がり、セーブを行う。

「おれはちょっと寝る、起きたらヴァッシュ……兄貴？　親分？どっちがいいかな、まぁいいや……本格的に修練を受けることにする」

　地面に寝そべったままヒラヒラと手を振るエムルを確認し、俺はログアウトするのだった。

「さて。」

　水分補給と即興の食事を兼ねたゼリー飲料で栄養補給しつつ、俺は案の定届いていたメールを開く。

件名：してやられました
差出人：鉛筆戦士

宛先：サンラク
本文：いやはや、例えるなら雑魚A～Dとはいえよくもまぁ高レベルプレイヤーから逃げ切ったね。
なんか話を聞くに黒狼の「最大火力」ちゃんが助太刀に入ったらしいけど知り合いなの？
あとそのうちちょっと話したいことあるからカッツォ君も呼んで円卓で会おう、日程は後程。

　一通はまぁ当然と言うか鉛筆戦士。幾つか気になる言葉があるとはいえ、ちょっと話したい事とはなんだ？
「態々シャンフロ外で話をしようとしてるあたり、怪しい……」
というか何故あいつもなんだ？　と、首を傾げながらもう一通を見てみれば、件のモドルカッツォからのものであった。

件名：おい
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：鉛筆戦士から明らかに悪巧み臭いお誘い来たんだが、お前何したんだ。
面白そうだから俺は話を聞くが、当然お前逃げないよな？

　俺、モドルカッツォ、ペンシルゴンの三人によるペンシルゴン発案のなんらかの計画。怪しさマックス、いやマキシマムだが好奇心も同じくらいある。態々巻き込まれた奴から逃げるなよと念

押しされては、逃げるわけにもいかない。

「とりあえずカッツォには普通に返信して……」

ペンシルゴンにはファンメ紛いの文章にしておいてやろう、くくく。

「はいおはよう」

「おはようですわ！」

ラビッツのやけにモコモコしたベッドの上で目を覚ました（ログイン）俺は、エムルに適当に挨拶をしつつベッドから起き上がる。ユニークバレという別の問題が浮上したとはいえ、当初の目的であるラビッツから通常マップに戻る際のランドマーク更新は達成できたからまぁよしとしよう。

これでようやっとユニークシナリオに専念することができる。俺はぴょこぴょこ跳ねるエムルの後ろを歩きながら、ホクホクとした気分で兎御殿の廊下を進む。

「ここはアタシらが修練、それも実戦的な戦闘訓練をする時に使う

闘技場……兎呼んで「ヴォーパルコロッセオ」ですわ！」

「ほー」

　中々に広い闘技場に足を踏み入れ、俺は辺りを見回す。広さ的には直径2、30メートルくらいの円形のコロシアムは特に障害物があったりはしない、オーソドックスな戦闘フィールドのようだ。

「おとー……けふん！　カシラはサンラクサンにここで全部で十体のモンスターと戦えと言っていますわ！」

「勝ち抜き式か、オッケー」

「じゃあ早速挑戦しますわ？」

「おうよ」

　修行タイプのユニークシナリオであることは分かっていたが、モンスターと戦う実戦的なものだったか。さて何が出てくるやら、今の俺はモチベーションとは別にテンションゲージも高い数値を維持している。普段よりも上手く動ける自信があるぞ。

　にまりと笑みを浮かべ、湖沼の短け「あ、「致命(ヴォーパル)」武器以外は使っちゃ駄目ですわ」オーケィ、若干出鼻を挫かれたがその程度縛りですらない。安全優先から若干捨て身になるだけだ……まぁ一発で十体抜きできるとは最初から考えていない、トライアンドエラーでモンスターの行動パターンを覚え、て、確実、に………

「カロロロロ……」

　それは、嫌なものを思い出させる漆黒の毛並みを持つ猛獣。
狼……というよりは猟犬と言うべきだろうか？　狼特有のワイルドさは薄く、代わりに軍隊のような統率感を感じさせる一糸乱れぬ動きは、それが単体ではなく個の集まり、群体であることを如実に示している。

「……これ一体目？」

「はいな」

「……一体目？」

「はいな」

ふむ…………

「ヴァオオオオオオオン！！」

「ガウッ！　ガウッ！」

「グルルルァァ！！」

　殺到する漆黒の猟犬……その数ざっと見て十体以上。明らかに集団戦を得意としている猟犬に動きを封じられてＨＰをゴリゴリ削られながら俺が思ったことはただ一つ。

「せめて一戦目と表記しあぎゃあ」

　ユニークシナリオ「兎の国からの招待」、実戦的訓練一戦目。

必ず五体以上でポップし、プレイヤーに対して数的有利を確保した上で襲い掛かるモンスター「マジョリティハウンド」……平均レベル65。

一体目（複数形）（後書き）

どうでもいいけどこれ書いてる最中何度も「マジョリティ」と「マジェスティ」を打ち間違えたのでこいつ嫌いです（理不尽）

マジョリティハウンドの特徴としては必ず５体以上でポップし、さらにプレイヤーのパーティの数に応じてさらに頭数を増やす「プレイヤーに対して常に多数派で襲う」モンスターです。しかもＡＩが結構賢いので雑魚Ｍｏｂの割に苦戦するプレイヤーは多いです。

即決即断、プレイはグダる

「火力が足りない。」

　六度目のリスポーン、ご丁寧に闘技場の控え室でリスポンした俺はそうエムルに告げた。

　まさかの初手数とレベルの暴力が叩きつけられるとは思わなかった。何度か挑戦し、そのパターンを見極めたが攻略自体は容易いことがわかった……のだが、ある意味当たり前の問題としてステータスが足りないと言う問題にぶち当たった。

　とにもかくにもＤＰＳが足りない、ワンコ共……マジョリティハウンドは恐らく「一つのモンスター」として発生する「別個のＨＰバーを持つ」モンスターだ。言うなれば部位ごとにＨＰバーを持つボスキャラみたいなものか。

「攻略手順は大体把握したけど一体頭にかかる時間を短くしないと食いつかれる」

　逆に言えばその点さえ解決できれば楽に倒せるという意味である。

　クリティカルで押し切ろうにも他のハウンドに襲われるのが厄介なところだ。ただ、黒い毛並みの犬という点で過剰な警戒をしていたせいか、蓋を開ければ数と連携が厄介なだけの雑魚モンスターでしかなかったのは拍子抜けだ。

「そうなんですわ？」

「とりあえずあと少しでレベルアップするからちょっと経験値稼ぎい

でくる」

「へ？」

ほうらワンコ共ご飯の時間だぞう、メニューは俺、だがこの中で一匹だけぶち殺します、そうお前だ残念だったな、うわ妖怪一足りないだ、ああすまんもう一匹倒さないといけないみたいだ、よしお前にしよう、あっ待ってせめてこいつ倒してから……うぼぁ。

「はいレベルアップ」

「流れるように死んでましたわ！？」

　五分ほどして、レベリングと行動確認と軽く憂さ晴らしを終わらせた俺は唖然としているエムルに挨拶しつつ闘技場の控え室から出る。このシナリオ中、さらに言えばこの闘技場での実戦訓練はデスペナルティが付かないのが最高だ、何度でも特攻できる。

　その分経験値がアクセサリの効果も合わさって雀の涙だったのには困った、泥掘りで得た経験値（恐らくエムルと折半したとは言えど）がなければあと数十匹はマジョリティハウンドを倒さなけ

ればならなかっただろう。というか露骨に獲得経験値低いな、イベントエネミーだから露骨に経験値下がってる？　おのれ。

　ステータスウィンドウを開き、泥掘り（マッドディグ）とマジョリティハウンド数体分の経験値で得たステータスポイントを割り振る。ＳＴＲ……ではなく、ＳＴＭとＤＥＸに５ポイントずつ。

「２ポイントはいざという時の保険として……まぁこんなもんか」

　足りないのは火力ではあるが今更火力を上げたところで焼け石に水、ならば別の方向からＤＰＳを上げる。

「……っよし！　見てろよエムル、今からあのワンコロ共を倒してくる」

「ほわぁ、頑張ってですわ！」

　こういう時、カッコつけでも目標を他人に言うと気が引き締まる。俺はエムルに勝利予告をして闘技場へと足を踏み入れた。

「ネタは割れてんだよワンコ共、烏合の衆にしてやるよ……犬だけどな！」

　特に言葉に意味はなく、そもそも通じているとも思えないが挑発の意思は通じたようで、咆哮と共に突っ込んでくるマジョリティハウンド共…………成る程、司令塔はお前か。

「ツラ覚えたぞオラァ！」

　何度か挑戦した結果、分かったことがある。

このモンスターは単体ならそこまで厄介な性能ではなく、集団での戦闘にこそ厄介さは集約されている……だが、それにしたって連携が上手すぎる。ＡＩが優秀だから、で片付けてしまえばそれまでだが観察を続けて見つけたのだ。

「後ろで踏ん反り返るんじゃなくて部下の中に紛れる辺り中々イイ性格してるよ全く」

吠えるだけで明らかに攻撃をしない個体、攻撃手（アタッカー）の中に紛れつつも安全圏から指示を飛ばし続ける司令塔（コマンダー）。こいつこそがマジョリティハウンドというモンスターの要と見た。
どうやら俺の予想は的中していたようで、俺が司令塔個体のみを狙っていることに気づいた他のマジョリティハウンドが俺に食らいつこうと飛びかかるが、その動きは明らかに精彩を欠いている。
マジョリティハウンド同士が飛びかかった空中で激突している様など、先程まで俺を四方から囲んで四肢に食らいついて確実に仕留めていたモンスター共とは思えない。
レベルの差による時間効率は如何ともしがたいものの、アイスピックでも叩きつけるようにガツガツと致命の包丁で攻撃とクリティカルの回数を重ねていけばいつかは限界を迎える。
「多数派（マジョリティ）を纏める奴がいなくなったから個々の少数派（マイノリティ）の集まりになった、ってか？」
中々皮肉が効いてて面白い。ついには仲間割れを起こして喧嘩し始めたマジョリティハウンドを各個撃破することは、少なくとも高レベルプレイヤーの攻撃を避けるよりは容易いことだ。

「よっしゃオラァ！」

最後の一匹がポリゴンとなって爆散し、俺は達成感に歓声を上げる。
体力が比較的少ないタイプの敵Ｍｏｂだったとはいえ、４０近いレベルの開きがあれば一体倒すにしても時間がかかる。仲間割れをしていたとはいえ、死ぬまで大人しく殴られている程アホなＡＩでもないマジョリティティハウンド達を各個撃破していくのはそれなりに疲れた。
こういう時、頭悪いくらいＳＴＲに極振りした脳筋戦士とかが少しだけ羨ましく感じる。

「お疲れ様ですわサンラクサン！」

「あー、うん、できれば次は単体のモンスターで頼む……」

一体目（十数体）は正直こう、テンションが下がる。

「お次はちゃんと一体ですわ！」

「へぇ、一体どんな……」

二体目、背中から蛇の頭のようにも見える口がついた触手を生やした熊……パラサイトテンタクル。

「体感複数体じゃねーか！」

畜生、どっちが本体かは知らねーがぶちのめしてやる！！！

即決即断、プレイはグダる（後書き）

Q．推奨レベル85なのになんか温くない？

A．推奨レベルは別にステータスだけではなく装備の強さも加味されています。

「大体レベル85で得られるステと武器があれば快適にシナリオ進められるよ」という意味であってそれ以下ではクリア不可能というわけではないです。クリアまでの道のりが苦行になるだけです。

さらに言えば「兎の国からの招待」は発生の条件がクソ厳しいだけで内容は結構簡単な部類です。

二体目、パラサイトテンタクル。
本体は熊じゃなくて触手だったらしく、一本あたり五分かけて残った触手の妨害を避けながら根元から切り落として七本切り落としたところで熊も動かなくなりクリア。挑戦回数四回。
三体目、ゴブリンベルセルク。
めっちゃ強いゴブリン、としか言いようがなかったがめっちゃ強くてもゴブリンだった為、犬やら触手よりかは楽な部類だった。挑戦回数二回。
四体目、ダイナボア。
クソイノシシ、突進中に鼻にぶつかると爆発するという能力自体はさほどでもなかったがスタミナがおかしい。測ったら一度の突進で二十秒くらい走り続けていた。俺にロデオの心得がなければもっと時間がかかっていただろう……いやゲーム内の経験だからリアルじゃ五秒もロデオなんてできないだろうが。挑戦回数一回。
五体目、トキシッククイーグル。
おまえ、ほんと、まじ、ゆるさん。挑戦回数三十二回。
六体目、アーマード・ラーヴァ。
いやほんと、攻撃の届かない上空からひたすら毒攻撃かましてくるクソ鳥に比べたら攻撃した部位の装甲が散弾よろしく弾ける程度屁でもないね！　冷静に考えればこいつも大概アレだったがその前がその前だったのでアドレナリンで見てから避けて押し切った。挑戦回数一回。

晩御飯は鱚の天ぷら。

七体目、エクスキュートパンサー。
速い、強い、だが硬くはなかった。プレイヤーの視界の外に回り込んでから攻撃する、という特性は分かってしまえば対応はあまりに容易く、休憩を挟んだことで精神的余裕を取り戻した俺の敵ではなかった。挑戦回数一回。

八体目、ツインヘッドタイガー。
可もなく不可もなく、普通に強かった……それだけ。挑戦回数二回。

九体目、ベータユニットゴーレムS2型。
仮称として右腕による攻撃をA、左腕による攻撃をBとした場合、AからAへ繋げる場合はほとんどの時間差なく攻撃を叩き込んでくる。しかしAからB、またはその逆の場合は胸部のコアが一瞬光る。これによってある程度の攻撃予測が可能であり、元々のゴーレムの体高とこちらの身長の差を考えるにA、B双方の攻撃にも規則性が発生する。それによって攻撃の回避及びアクションの攻撃判定が消失した瞬間に腕部を利用した駆け上がり、及びコアへの肉薄が可能であると推測、実践したところ不可視のエネルギー場による弾き飛ばしにより体力の七割を削られたことで方針の変更を余儀なくされ方針変更の結果装甲を直接剥がすことで弱点の露出を（ここらへんでキレた）はぁーっ！　背中は車のボンネットみてぇなうっすい装甲のくせに反重力フィールドとか上等なもん発動してんじゃねーよ面倒なんだよオラァ！　そのアクション、時間経過とプレイヤーの位置の両方がフラグの技じゃなかったらお前ほんと許さんかったぞ……挑戦回数七回。

「エムル……ラストは、なんだ……」

「ち、ちょっとお休みした方がいいですわ!?　おめめが怖いですわ!?」

「いや……大丈夫だ……こうなってる時は、すこぶる上手く動けるんだ……」

俺はこの状態を「ロスタイム」と勝手に呼んでいる。精神はオチかけてるが肉体は最適化された状態……意識は飛んでいるのに身体は勝手に作業プレイを遂行していたりと、肉体面に疲労の概念が存在しないゲームだと二徹くらいするとこうなる。

そろそろ朝だが、ここまで過密に戦って来たせいで予想以上に疲れていたようだ。作業なり目的なりを達成した瞬間にプツッと意識が落ちるものの、この状態の時はエムルにも言った通り、身体が俺の反応に普段以上に素直に反応してくれる。

つまり、このユニーククエスト最後のモンスターが突然クイズなどを仕掛けてこない限りは俺はほぼベストパフォーマンスで相対することができる。

「十体目は……お、カシラが今からふんづかまえてくるって……」

「なんでぇ、もう九体目まで終わらせちまったのかい」

噂をすれば影がさす、フラグを建てれば兎が来る。人参をキセルよろしく齧り咥えながら現れたヴァッシュは驚いたような、しかしある意味予想通りだとでも言いたげな顔で俺とエムルを見る……そりゃ、九体倒したフラグで現れたんだろうし予想通りだろうさ。

「えーと、兄貴……最後のモンスターってのは……」

「おう、ちょいと遠出してふん縛って来た」

ヴァッシュはニヤリと笑みを浮かべるとくいと鼻先で何かを、それはきっとヴァッシュが捕まえて来たと言うモンスターを示しているのだろう身振りでこう告げた。

「俺等(おいら)が捕まえた奴ぁ……ま、言っちまえば今のおめぇさんにゃあ倒せねぇだろうな」

「えぇ……」

「だからぁよう、こいつに関してだけは達成の条件を俺が決める」

ポキリと人参を噛み砕き、ヴァッシュは俺へと告げる。

「五分間、生き延びろ」

「成る程、耐久系ね……上等だ」

そしてそれは俺の前に現れる。
四脚スタンドを思わせる四本の足から伸びた異様に細い胴体は、驚くことに人型のモンスターである。
ボロ布だってもう少し上等だと思える程のもはや切れ端としか言いようのないローブの残滓と、干からびた皮と骨によって握られた杖、そして何よりズタボロの三角帽子がそれが魔術師だったと言うことをかろうじて俺に教えてくれた。

「なんだ、こりゃ……」

「妄執の樹魔(ルーザーズ・ウッズ)、昔々のずぅっと昔……木と合体してでも生き延びようとしたバカヤロウ共の一人よう」

言われてみれば、干からびているにしても妙に生物感がない身体は、枯れた木の皮であり、ミイラなのか骨なのかは知らないが長い時が経過したにしては随分と生え揃っていると思っていた髪は枝だ。

「派手に啖呵切ったんだぁ、イキるだけの根拠ぉよう……見せてく

れや」

妄執の樹魔(ルーザーズ・ウッズ)、Ｌｖ．１２０。
シャングリラ・フロンティア全プレイヤーの中でもこの大陸に存在しないモンスターであるこいつと戦ったプレイヤーは俺が初であることを知るのはもっとずっと先のこと。

神代の残滓、妄執の敗者（後書き）

妄執の樹魔はトリエントを魔術特化させたようなモンスターです。
シャングリラ・フロンティアのモンスターは大きく二種類に分けられ、こいつはヴォーパルバニーやリュカオーンと同じカテゴリのモンスターです。その二種類が何かは今は明かしません。

妄執の樹魔、控え目に言ってヤバい。何がヤバいって、今の俺ではあの夜襲のリュカオーンと戦った方がまだ勝ちの目があると思える程にはヤバい。

ほぼノーモーションで放たれる地面から襲い掛かる槍と化した木の根（当然の権利のごとく追尾式）を避けた先に、妄執の樹魔本体から放たれた明らかに触れたらデバフ効果が付与されそうな漆黒の鎖を掻い潜り、耳元で蝉が鳴く方がまだ精神衛生的にもマシと思える不愉快な軋みの如き絶叫の中、俺はただひた走り、時に転げながら五分後の生存へとしがみつく。

クソが、オチかけた意識を無理やり引きずり戻して考えながら動かないとやられる。

まず大前提として、俺の攻撃の一切はアレに通用しない。リュカオーンのようにスペックが違いすぎて歯が立たないとかそういうものではなく、相性の問題としてあのミイラ擬きはこれ以上なく物理職殺しだ。

「物理攻撃完全耐性だぁ……！？」

開始数秒の間はまだ攻撃のチャンスがあった、故に遠慮なく攻撃を叩き込んだのだが、返ってきたのはゴムを巻いた鉄塊でも殴っているような不毛な感触。この手の類は大抵それ以外の攻撃で倒すのが定石、というか敵Ｍｏｂとしてのお約束であるが、魔法など一つも覚えていない俺にはこいつに１ミリのダメージも与えることはできない。

となればヴァッシュが設定したクリア条件……五分間逃げ延びる、という一見簡単そうなそれも、開始二十秒で甘い考えは消しとばされた。

「あっぶ……ねぇ……っ！」

地面が不自然に黒くなった数秒後にヘドロが噴き出してくる。畜生、また新しい攻撃だ。
ルーザーズ……長い、木乃伊椰子(ミイラヤシ)だが、兎にも角にも手数が多すぎる。全行動が常に初見殺しと言えばその厄介さが理解できるだろうか？　先程から一度も同じアクションを一度もしていない、常に違う行動をしてきやがる。
ただ救いがあるとすれば、木乃伊椰子の本体は闘技場の中心から一切動くことはなく、繰り出される攻撃の数々の合間には確かにモーションとモーションとを繋ぐリキャストが存在していることだ。
少なくともあの魔法と思しき技に捕まりさえしなければ、五分くらいなら大丈夫なんだが……

(明らかに逃げっぱなしだと詰むんだよなぁ)

少なくとも最初の二十秒間はただ火の玉を飛ばしたり、地面から突き出る土の槍も一本だけだったのが、二分現在の時点で同時に五本は発生する上にホーミング、リキャストも明らかに短くなっている。
くそ、頭痛い……何か甘いもの食べたい……まだ動く脳細胞をかき集めて考えろ。次に活かすにしたって情報は……いや。
「諦め前提でクリアできるゲームなんてのはなぁ……！」

クソゲーにすら劣るんだよ！　全く伏線なく発生するイベント戦闘以外はなぁ！

思えば俺は少し甘えていたかもしれない、その結果が泥掘り(マッドディグ)での情けない寄生プレイだ。口では効率だの謳いながら実際は「まぁ死んでもいいかな」とどこか手を抜いていた気がする。

そうだ、攻略済みのクソゲーをぬるくプレイするならともかく、未攻略のゲームで手を抜くなんてナンセンス。

主人公(プレイヤー)を露骨に侮って「ば、馬鹿な！　この俺様がぁ！　ぐわぁぁぁ！」的なこと言って爆散する敵キャラと大差無いではないか。

なんてことだ、クソゲーのしすぎでメンタルがクソキャラになっていたのか。やはりクソゲニウムの過剰摂取は危険性を伴っておりカミゲニウムで中和…………………うん。

「さっさとクリアして……寝よう！」

疲れてるんだよ、俺。

となればどう時間を稼ぐか、それが問題だ。物理完全無効という俺キラー、攻撃の密度はどんどん上がり、最終的には雨霰のごとく魔法が広範囲に発生するのだろう。

全体魔法、ってのは分かりやすく強キャラを作るためには非常に便利なファクターであり、無論俺もそういった攻撃への対処は心得ているが……流石に魔法無しで軽戦士ビルドで対処はなぁ。おっと危ない。

「雷、発生から大体０．５秒後……」

見たことのない攻撃とは言え、覚えておいて損はないだろう。それにこういったホーミングではない場所指定時間差攻撃はスタミナ回復のチャンスだ。

次は泥……来た！

「ネタ切れか！」

思い出せ、奴の攻撃パターンを！
まず火の玉、次に土の槍、間欠泉泥、落雷、魔力の鎖、瘴気の煙……そして近距離での物理攻撃！
そうか、冷静に考えたら規模が違うだけで大まかな攻撃の属性や形状は一緒……くそ、勝手に別種類の攻撃だと思い込んでいた！　いつもならもっと早く気付けてたのに、カフェインを摂取したい。

「時間経過で攻撃の密度と威力が上がるモンスター、物理攻撃完全無効……いや。」

確かに物理特化職を殺しにかかってる性能な木乃伊椰子だが、物理特化職が完全にゴミになる……そんなことあり得るのか？
このゲーム、こいつと戦う適正レベルプレイヤーを想定している調整として、全員が全員魔法も覚えた物理職になると仮定されてモンスターを作るか？　恐らくだが完全物理職でも勝てないにしろ何らかの対抗は可能なはず。

「と、なれ、ば……」

見えたぞ攻略の糸口。

３００リミット狂想曲、勝算を追う者（後書き）

特にこの章で説明することを思いつかなかったので本編に出す確率が低そうな設定開示コーナー
・シャングリラ・フロンティアには大量の「エクスカリバー」が存在する。
厳密に言えば「エクスカリバー」は一振りしか存在しないのだが、プレイヤー鍛冶師が自作の武器にエクスカリバーの名前をつけるため、市場には大量のエクスカリバーが叩き売りされています。
尤も、公式が用意した「エクスカリバー」と同名の名前をつけることはできないため
「真・エクスカリバー」
「ＲＥ：ＸＣＡＬＩＢＵＲ」
「儀典エクスカリバー」
「エクス力リバー」←「エ」と「カ」が違うが、フォントで分かる
「スーパーエクスカリバー」
など微妙に文字を付け足したものになるのですが、これは便宜上本物と呼称しますが本物のエクスカリバーに形を似せたものを初心者に売りつける詐欺行為対策でもあります。
中にはガチで本物を越えるべくプレイヤーの情熱によって作られた「エクスカリバー」も存在するため、一言でニセエクスカリバーと片付けることもできない、ある種の宝くじです。

範囲攻撃の密度が上がる。だが段階的に密度が上がるということは前段階の上位互換……即ち、範囲攻撃にいくらかの共通点があるということ。

「着弾数……プラス３！　発光からの着弾時間に変化無し！　余裕！」

回避スキルを使うまでもない、互いに重複しないよう必ず魔法一つ分の隙間を作る範囲攻撃など、安全地帯がそこら中にあるようなものだ。

ステータス画面を開く余裕さえある、俺を狙って降り注ぐ落雷を回避しきった俺は次の攻撃……ホーミング性能は飛び抜けて高いが当たり判定が小さいため回避も楽な鎖攻撃を避けながら木乃伊椰子(ミイラヤシ)のすぐ側まで肉薄する。

「おいコラ死に損ないのミイラヤシが！　俺はここだぞ、その薪にも使えなさそうな腕で殴ってみろ！」

もしかして挑発って隠しパラメータで存在するのだろうか。マジョリティハウンドの時もそうだったが、やけに俺の挑発に対してモンスター側がノッてくる印象が強い。

枯れた身体を軋ませながら、椰子と例えるだけあって異様に長い胴体をしならせて木乃伊椰子が近接攻撃を行う。

「3……2……1…………ここだっ！」

若干の調整を加え、タイミングに合わせて全力のバク転。俺の頭が地面に最も近くなる瞬間……天地が逆転し、走高跳びのような体勢でその勢いのまま薙ぎ払われた木乃伊椰子の胴体を紙一重で避けて、掴む。

「はっはぁーっ！　消えかけのろうそく理論ってやつだな、冴えてるぜ俺の脳細胞！」

こちらからの攻撃が通じないのはともかく、向こうが物理攻撃をする以上その身体に触れる事自体は可能なはずだ。少なくとも木乃伊椰子はゴースト系のような非実体ではない実体を持つモンスターであり、俺の手は確かに木乃伊椰子が持つ長杖（ロッド）を掴んでいた。

魔法職ガン有利はまだ分かるが、物理職完全ゴミ化はないだろうと試してみたが成る程、物理職は杖（これ）を狙えってか

「モンスターのくせに杖なんて持ってるってことはさぁ……これ、無くなったらどうなるんだろうなぁ？」

「オ、ォオオ………！」

俺の意図をＡＩが理解したのか、木乃伊椰子の首を即興の足場にして杖を奪い取る俺に抵抗せんと、木乃伊椰子は両手で杖を握り締める。枯れかけのＳＴＲなど、それも見るからに純魔術師なステータスと思しき奴のそれなど大したことはないとタカを括っていたが結構粘る。だがな……

「持っててよかったポイント貯金、ってな」

ステータス画面、ポイント割り振り、ＳＴＲ。

綱渡りじみた芸当であったが、木乃伊椰子が俺を振り払うのでは

なく杖を取られまいとしたのが運の尽き、空けた片手でステータスを弄り、両手で杖を奪い取る。
知ってるか、昨今のゲームの中には敵の武器を奪い取れるものもあってな……

「武器奪い（ウェポンスティール）は世紀末の嗜みぃ！」

ユナイト・ラウンズユーザーアンケート「今後実装してほしい機能は何ですか」第一位、「手持ちの武器を奪い取られないためのロック機能」とまで言わしめたクソ要素で鍛え上げられた略奪テクをナメんなよ！　コツは揺らして毟る！

木乃伊椰子の手から長杖を奪い取り、華麗に空中で一回転して体勢を整え着地……あっ落下ダメージ痛い！
それはともかく、ニヤリと木乃伊椰子に笑いかけてやれば、やはり長杖（コレ）が弁慶の泣き所だったらしい。先程までの魔法地獄はどこへやら、悲鳴……そう間違いなく俺を格上とする格下の悲鳴を上げながら木乃伊椰子は身体を折り曲げ杖へと手を伸ばす。

「まぁ俺がいうのもアレだけどさ、もう少し身体を鍛えたほうがいいぜ」

ＭＰとか俺の貧弱なそれと比べてトリプル、いやクワトロスコアくらい差がありそうなのに力比べで負けるって強Ｍｏｂとしてどうよ？　やつの敗因は透過するタイプの物理無効じゃなかったことだな。
まぁ、弱者は弱者らしく逃げ回ってやるよ。鬼さんこちら手の鳴る方へ……ってな。

角のないユニコーンは馬でしかない、翼のないペガサスも馬でしかない、首が生えたスリーピーホロウの馬はやっぱりただの馬……ならば魔法を失った魔法職（木乃伊椰子）は？　名は体を表す、どんなバックストーリーがあるのかは知らないがルーザー……「敗者」とはまさにこのことだな。

どうやら魔法ではなく種族的能力だったようで土の槍程の凶悪さはないにせよ、根の槍を放ってきた時は冷や汗ものだったが、慣れてしまえばただの作業。
こちとら諸々削ってスピード特化、文字通り地に足ついて根っこまで張った奴に捕まるような速度はしてない。

「おう、五分だ」
「よっしゃあ！」
最後の足掻きと言わんばかりに四方向から襲い掛かってきた根の槍をジャンプで避けたところでヴァッシュの声が静かに響く。瞬間、スパリと木乃伊椰子……もとい、妄執の樹魔（ルーザーズ・ウッズ）が縦に真っ二つに裂け、ポリゴンとなって爆散する。

紙吹雪の如く散っていく妄執の樹魔が居た場所の向こうには、馬鹿デカい大太刀……いや、斬馬刀か？兎も角巨大な刀を振り抜いたヴァッシュの姿。あの、物理無効じゃ……っていうか杖ごと消えたし！　使うわけじゃないがすごく勿体無い気分！

「後半素手頼りだったのはちぃと残念だが……確かにおめぇさんのヴォーパル魂、見せてもらったぜ」

ヴォーパル魂　とは　［検索］

大体察しはついているが、一度口頭かテキストで説明してもらいたいものだ。足元でワーワー騒いでいるエムルはとりあえず置いといて……俺はヴァッシュをまっすぐ見据える。

「見込み通りの人間だったようだぁな……いいぜ、おめぇさんをラビッツの【名誉国民】に認定してやるよう」

「ん？　え、あー……押忍」

え、いや、もうちょっとこう現物支給的なものは……

『ユニークシナリオ「兎の国からの招待」をクリアしました』
『称号【ラビッツ名誉国民】を獲得しました』
『アクセサリ【致命魂の首輪】が消失しました』
『NPC「魔術兎エムル」が正式にパーティに加入しました』
『ユニークシナリオEX「致命兎叙事詩（エピック・オブ・ヴォーパルバニー）」を開始しますか？はい
いいえ』

待て待て待て待て今の俺にはちょっと情報過多だって！　あ、　レベルアップしてる。

３００リミット狂想曲、勝算を抱え逃げる者（後書き）

妄執の樹魔は杖を取り上げるとレベルが高いだけの雑魚に成り下がります、物理無効も杖だけは対象外です。
というか実は杖を取り上げた時点で物理無効も解除されていることを彼は知らない。

本編に出す確率が低そうな設定開示コーナーその2
・「サンラク」というプレイヤーの知名度
場所が場所なのでそこまで有名な名前というわけでもなく、作中世界におけるゲーマー達にとってのアメフトのスタープレイヤーに等しいプロゲーマーの知名度と比べれば無名と言わざるをえない。
ただし、特定のワード……「爆撃アテンションプリーズ」「鉛筆削り」「ジョウロニスト」「μ－ｓｋＹ（μ鯖のサイレント・キル・幼女）」などの単語に過剰反応する者がいれば、その者はクソゲープレイヤーだと見分けられる程度にはその名前は知られている

亡命生活一日目、飽きる

「…………とうぶん、かふぇいん、ごはん」

あたまいたい、たりない、れいぞうこれいぞうこ……

「…………っかぁー！」

エナジードリンク！　ビタミン剤！　菓子パン！　昼に起きて初手がこれ！　不健康の極み最高！
まぁ二日酔いを治すためにドリンクを飲むようなもので、ちゃんと朝飯も食べるのだが。フルダイブゲーはエネルギーを使うから栄養補給しないとパフォーマンスに悪影響が出る。
ぢゅいー、とストローでエナジードリンクを吸いながら手っ取り早く朝食を作る。自家製のシャケフレークをご飯にのせて、海苔と隠し味に少しの七味、あとは麺つゆと沸かしたお茶で即興茶漬けの完成。

「あぁー……染みる」

主に精神的に。食事ってのは栄養じゃないんだよ、欲求の充填なんだよ。
手早く茶漬けを掻き込み、自室に戻りながらこれからの方針を考える。

「とりあえずラビッツにシナリオが終わっても滞在できるようにはなった。とはいえやる事が無くなったんだよなぁ……」
ラビッツ名誉国民なる称号のお陰か、ユニークシナリオをクリアしてもラビッツに滞在することができるようになった。だが問題はラビッツで出来る事が思った以上に少なかった、という事だ。
というかラビッツというエリアはどうもメインのマップから独立した隠しエリア故にラビッツの外、というものが存在しない。
ただ兎を見てアニマセラピーするならこれ以上ない環境かもしれないが、少なくとも「開拓」と「冒険」もへったくれもないだろう。

「それにあのユニークシナリオもな……」
ユニークシナリオ「兎の国からの招待」をクリアした事で新たに発生したユニークシナリオ「致命兎叙事詩（エピック・オブ・ヴォーパルバニー）」。
名前からしてヤバげなオーラを漂わせるそれは、あの時は見逃していたが推奨レベル８０というほぼレベル上限を要求する怪物ユニークだ。俺の見立てではヴァッシュの……明らかにユニークモンスタ一くさいヴァイスアッシュに関係するユニークシナリオなのだろう。
ユニークシナリオを受注してもメインの攻略は縛られない事を確認したのでとりあえず受注してみたが、シナリオが進むフラグがこれまた難解なもので曰く

「神代の魂揺らぎし時、彼の兎は叙事詩を語る」

ちょっと何言ってるか分からない。こういうタイプは個人的経験上、低レベルじゃどうしようもない条件な事が殆どだ。

神代…………………あ、そうか忘れてたわ世界観的に遥か昔に滅んだ文明を神代って言うんだっけか。そうなると本格的に世界観から調べないといけないが

「面倒なんだよな……」

以前攻略サイトを軽く開いていたときに、世界観から攻略に使えそうな情報がないかと一度考察サイトを開いたのだが、俺を待ち構えていたのは結構イイものを使っているウチの回線をして読み込みに二十秒を要する程に莫大な量の考察の山。

なんでも考察専門のクランなどがいるらしく、彼等に加えて個人個人が思い思いに考察を続けた結果があの莫大な情報量らしい。あれの中から情報を見つけ出すのは骨だし、何よりモチベーションが湧かない。

「ユニークは流石に後回しだな……と、なると……」

最初の問題提起がここに来て戻ってくるんだよなぁ。そもそも現状が想定外の状況なわけで、本来は気の向くまま風の吹くままにゲームを楽しもうとしていたのが亡命生活。いや、プレイヤーに追われたり隠れたりは色々と慣れているが自分からその状況に飛び込むのとその状況に放り込まれるのでは意味が違う。

「ならいっそユニークを開示する？」

恐らく一番賢い方法を思わず口に出すが、それを鼻で笑い飛ばす。
俺はナンバーワンよりオンリーワンの方が好きなんだ、椅子に縛り付けられてリスキルされ続けてもユニークの開示はしない。というか仮に開示したところで「夜襲のリュカオーン相手にヴォーパル魂見せたらユニークシナリオのフラグが立ちました」なんて信じる奴いるのか？

「うーん……」

まぁとりあえずログインしよ。

外出たいけど狙われてつらいわー、的なサムシングをエムルに話して見たところ、返って来た言葉は

「つまりサンラクサンは自分の見た目を隠したいんですわ？」

というものであった。

「ん、んんんー……いや、まぁ突き詰めればそうかもしれないが……」

俺が知らないだけで名前隠しの装備や方法もあるのかもしれない。
見た目も鎧などを使えば初見はごまかせるだろう。
だが俺にとっては見た目で誤魔化して速攻人目から逃げるのが最適解だとしても、胴体と脚部に装備不可能という忌々しい呪いがここに来てじわりと効いてくる。しかも見た目も結構派手なために裸装備のプレイヤーと比較しても目立ってしまう。

「だったらイイもん売ってるとこ知ってますわ！　こっちですわ！」

「え、ショップあるのここ!?」

エムルに連れられ、到着したのはラビッツの街の中……ではなく、兎御殿の中にいる一匹のヴォーパルバニーの前だった。

「おん？なんやエムルねーちゃんやんけ。どしたん？」

「サンラクサン！　こいつはアタシの弟のピーツですわ！　」

「よろしゅうな、確かアレやろ？　夜の帝王のオキニとかいう鳥の人」

「鳥の人て、いや別にこれはただの覆面であってちゃんと下に顔があるんだぞ、ほら」

頭装備は別に取り外しできる、俺はエムルと新たに発見した三体目の喋るヴォーパルバニーの前で凝視の鳥面を外して素顔を見せる。
そういや結構凝って顔を作ったのに殆ど見せてないや、ある意味ではこの鳥面こそが俺の顔だった……って

「いやなんでそんな驚いてるんだよ」

「それ、普通に外せたんですわ！？　てっきり何か深い事情があって外せないものかと……」

「いや、特には……外す理由もなかったし」

どうせ防御は捨てているし外す理由も買い換える理由もなかったからなぁ。強いていうなら隔て刃装備を買う時が装備を変えるチャンスだったかもしれないが、選択肢が強盗覆面なのがいけなかった。というか人の素顔見てそんな、ＦＰＳで後ろ取られた砂みたいな顔すんなよ……リアルの顔ではないとはいえ傷つかないわけではないんだ。

「ご、ごほんっ！　と、ともかくその覆面を外せるなら好都合ですわ！　ピーツ、確か前に面白い布を手に入れたって言ってましたわ？」

「布？　あー、あれか。おもろいし売れる思たんやけどなぁ、どーも値段の割に見た目はただの布だから中々買い手がつかんくてなぁ……獣人(ビーストマン)の祭祀用の衣装で手に入れるのにぎょうさん苦労したっちゅーのに」

布？

亡命生活一日目、飽きる（後書き）

ファステイア、セカンディル、サードレマには不定期かつランダムで常に何かのドリンクを飲んでいる胡散臭いローブのＮＰＣ「ピーツ」が出現するとかしないとか

見たこともない珍しいアイテムを取り扱っているもののやけに高額な上に非常に曖昧な説明しかしない本当に物を売る気があるのかと疑いたくなるＮＰＣがいるとかいないとか

要約すると興味がある方（前書き）

追記：予約投稿ミスってそのまま投稿してたみたいで、今更非公開にするのもアレなので予定外ですが二話投稿です

要約すると興味がある方

「……なぁエムル」

「はいな？」

「さっき立ち寄ったアイテム屋の人に明らかにヤベー奴を見る目で見られたんだが、本当に大丈夫なのか？」

「き、きっと大丈夫ですわ！　それに、街を出たら脱げばイイんですわ！」

現在時刻午後二時、プレイヤーのログイン率としては微妙なラインだが夜間よりはまだ人は少ない方だと信じたい。
エムルが「身内割引」をしてくれた上で手持ちの素材アイテムの殆どを売っ払ってようやく購入できたそれは、外見の偽装という点では満点ではあるのだが、堂々と道のど真ん中を歩けるようなものでもないのだ。だが呪い（マーキング）を隠す為には現状選べる選択肢はこれしかなく、故に全ては短期決戦だ。

「確かこの先はエリアが三つあるんだったな？」

「はいな、一つはフォスフォシエへ続く「千紫万紅の樹海窟」、次にファイヴァルへ続く「栄古斉衰の死火口湖」、そしてシクセンベルトへ続く「神代の鐵遺跡」……アタシは栄古斉衰の死火口湖をオススメしますわ」

千紫万紅の樹海窟は巨大な迷宮洞窟の中に樹海の如く植物が生い茂

っており、地面には一面色とりどりの花が咲いているエリア。
栄古斉衰の死火口湖は既に活動を停止した死火山の火口に水が溜まって湖となったエリア。
神代の鐵遺跡は神代の時代の遺跡であり、なんでも「宙に浮く鉄の板」からこの名前がつけられたというエリア。

「いいか、これは戦略シミュレーションでどの陣営を操作しどの陣営から搾取し、どの陣営に媚を売り倒すか……そんな高度な思考に似た極めて高難易度のトラップだ」

「は、はぁ……」

まずこの中で一番入るべきでないエリアとはどこか……これは考えるまでもない、神代の鐵遺跡だ。
今現在九割ファンタジーと言って良いこのゲームに垂らされた一滴のサイエンスという名の甘露、仮に皆が剣や槍を振るような文明している中で一人だけピストルでスタイリッシュにモンスターをＢＡＮＧ！ＢＡＮＧ！　出来るとしたら……？
あれはまさしく荒野に一本だけ生えた樹液ダバダバのクヌギの木、カナブン（初心者）もカブトムシ（上級者）も、場合によりギラファ（ガチ勢）すら誘引されている可能性を帯びたまさに蠱毒の壺……っ！
いや物の例えで流石にそこまでギスってはいないと思うが、俺では対処出来ないプレイヤーがいる可能性が最も高いエリアは避けるべきだ……例え、俺が、サイエンスなファンタジーにめっちゃ興味があるとしても……だ！

「つまり俺が選ぶべきは千紫万紅オア栄古斉衰のどちらか……だが、

どちらともリスキーな点は否めない」

「り、りすきー」

そう、この二つのエリアにはそれぞれメリットとデメリットが存在する。

まず千紫万紅の樹海窟、これは所謂「ダンジョン型」エリアだ。行き止まりや分岐路を多く内包するこの手のマップは隠れる、場合により逃走する必要性がある今の俺にとっては素晴らしいエリア……と思えるがそれは違う。

ダンジョン型エリアがその真価を発揮するのは作業が始まってから、これは俺の持論だ。

レベリング？　素材集め？　理由はなんでもいい、スタートから頑張ってゴールを目指すというゲームプレイヤーの基本原理において、ダンジョン型とは王道の試練足りうる。だからこそ、そこに何度も通わなければならない理由ができた瞬間にダンジョン型マップは牙を剥く。

周回は楽な方がいいに決まっている、脳細胞をロクに使わない周回ルートだとなおグッド。その点においてダンジョン型マップというのは本来の目的にプラスして複雑なルートを覚えるという面倒さが……話が逸れたな。

つまりはだ、初見のプレイヤーは後述するが死火口湖よりも樹海窟を選ぶ可能性が高い。

洞窟の中に樹海？　一面の花畑？　しかもダンジョン型マップ？おいおい、目の保養にもなって迷宮を冒険できるとか最高にエキサイティングじゃんか……！　というわけだ。

「まさに食虫植物……冒険とロケーションという甘い餌でプレイヤ

ーを引き寄せる魅惑の花園（セクシーダイナマイト）……！」

「せ、せくしーだいなまい……」

ならば正解は栄古斉衰の死火口湖？　いや、こちらもこちらで罠が仕掛けられている。

樹海窟がダンジョン型マップであるなら、こちらは「オープンワールド型マップ」と言うべきか。いや、このゲーム全エリアオープンワールドだけど、そう言う意味じゃない。ここにおけるオープンワールド型とは即ち「クッソ広い」という意味合いで用いられる。ダンジョン型マップには必ず「正解ルート（アリアドネの糸）」が存在するが、オープンワールド型にはそれがない。

厳密には「最適ルート」は存在するが「正解ルート」はゴールに辿り着ければ全部正解と言える。

「我が心肝慄わす衝撃に全身より脂汗噴き出し、本能の警鐘とそれに伴いし衝動に抗わんとするも全ては砂上の楼閣が如く」と「マジヤベェ、パーペキにブルったからエスケープするわ」は結局のところどちらも同じ意味であるのだ。

オープンワールド型マップの強みはその自由度だ。寄り道してもよし、最適ルートを直行するもよし、地形という大局的な流れに行動を制限されない圧倒的自由度。

さっさと次の街へ行くのならば死火口湖がベター……とでも言うと思ったのか？

俺はＲＴＡをやってるわけじゃないんだよ、いやステータスビルドはＲＴＡみたいなことになってるけど違うんだよ。

俺は楽しむために効率を求めているのであって別に速さは重要ではない。そもそもラビッツから出た理由は次の街に行きたいからじゃなくて楽しくゲームプレイしたいから、だ。

だから死火口湖の最適解による時間短縮という長所は俺にとってはメリットたり得ないし、さらに言えば火山というあからさまに遮蔽物が少なそうなエリアは他のプレイヤーに目撃される可能性が高い。

「効率というメリットを提示すると見せかけ、その裏に要するにただの山登りじゃんという事実を隠すまさに巧妙（テクニシャン）なる手腕……！」

「て、てくにしゃーん」

そう、これらの情報を加味して俺が選ぶべきは……

「千紫万紅の樹海窟だ」

「つまりサンラクサンはせくしーだいなまいっ！　なんですわ？」

「はぁ？」

変装前も変装した今もミスター（格好がやべーやつ）デンジャラスじゃねぇかなぁ。

要約すると興味がある方（後書き）

実際のところ、現在実装されている全てのエリアを攻略したプレイヤーは全体的に見ても少数です。
シャングリラ・フロンティアの世界観にこそ魅せられ、その最奥まで暴くことを目的とした考察勢や、世界観的な意味ではないゲーム的な意味で未知を明かすことこそを目的とする完クリ勢などが主人公がゲームを始めるまでに隅々まで開拓しきってなお今も考察と探索を続けています。

宙を駆けるは壁画のアレ

地図を確認し、サードレマの地形から千紫万紅の樹海窟へと続くルートを決める。
大通りを直行できれば最速なんだが、ある程度の隠密性も確保しなければ最悪ユニーク狙いの連中とコンニチワだ。
「ここを通って裏路地経由して……」
「ここ通ると近道ですわ！」
「成る程……よし」
ルート決定、あとはコケないように走るだけだ。

「いない……」
最近隠れんぼばかりしているような気がする、とサイガー０はサードレマにあるプレイヤー経営のレストランでため息をつく。

「ゲーム内で食べた料理をリアルでも食べたいと思わせたら勝ち」という理論のもと、現実で実際に料理人の職業に就く者達が運営する「レストラン」の中でも、サードレマは中々の激戦区だ。
そんな中でも千紫万紅の樹海窟で手に入る食材アイテムをメインで取り扱うこの店はサイガー０のお気に入りの店だ。個人的なオススメは「蛍光苔とニトロトマトのシーザーサラダ」、サイガー０のリアルにサラダブームが到来したのはこれが元凶である程だ。

「すごくせわしない人とは聞いていましたが、マグロみたいな人なんですね陽務君……」

止まると死ぬ、とは中々に辛辣な評価を下しているのは交流の第一歩をいつまで経っても踏み出せないことにほんの僅かな苛立ちを覚えているからだろうか。
では現状を打破するにはどうすれば良いのか？　サラダを待ちながらサイガー０が考えた方法は「発想の転換」であった。

（つまりは手順の入れ替えですっ）

とはいえ具体的にどうするかと問われると答えに詰まる。現実もゲームもままならないなぁ……と見上げた先、

「はい？」

身体を膝辺りまですっぽりと隠す白い頭巾に眉毛と目だけ書き込んだようなシンプルな姿の何かが筆舌し難い機動で宙を舞っていた。

「えーと、あの、エジプトの……」

さながら大地と冥府の神の館に住まう人間の心臓（ハツ）がお好きな目か

らビームを出すアレ……

「……はっ！」

その瞬間、サイガー０の思考が雷光の如き速度でバラバラの単語を繋げていく。

素足、紋様、隠す、奇行、探し人……プレイヤーネームは遠くてよく見えないが恐らく四文字。確証はないが確信した、あの妙ちきりんな白頭巾は間違いなく陽務楽郎（サンラク）であると。

果報は寝て待つものだが、朗報は自分から掴みに行かなければいつまで経っても何も進まない。未だ来ないサラダに後ろ髪引かれながらも、サイガー０はある秘策を以ってサンラクと思しきメジェ……もとい白頭巾が跳び去って行った方向へと駆け出すのだった。

「い、いきなり捻り回転を加えて飛ぶのはやめてほしいですわ！？」

「いやすまん、こうやって隠すと逆に中身を晒すのが恥ずかしくなってつい……」

アイテム名「祭衣・打倒者の長頭巾（フェスタ・メジェ・カフィエ）」。

どこからどう見ても装備した姿はエジプトの壁画にいる設定はボスみたいな癖に見た目はゆるキャラなアレにしか見えない、というかアレそのものなのだが中々にユニーク（面白い的な意味で）な性能をしている。

これ、分類的には頭装備なのだが膝の辺りまですっぽりと白い布が覆ってしまうため、頭装備欄だけでほぼ全身を隠すことが出来るのだ。ただデメリットとして装備中は腕を使うスキルの一切が使用不可となるという戦闘ではゴミ以外の何物でもない効果が付与されている辺り、本格的にネタ装備だ。まぁ街中でファッションとして使う分には問題はないという判断だろう。

そんな祭衣・打倒者の長頭巾を装備した俺は時に家屋の屋根を跳び、時に路地裏を潜り、時に大通りを駆け抜ける。

酷く目立つが初見で瞬間的にコレとサンラクが同一人物だと見抜くのは不可能だろう。名前を確認してようやくコレがサンラクだと気づく頃には俺は既に逃げ切っている。完璧な作戦だ、コレとサンラクがイコールであると理解された後の俺への評価はコラテラルダメージだ。

「でもなんで遠回りするんですわー！？」

「フェイクだよフェイク！」

木箱や壁を踏み台にし、時に人目につかない場所で頭巾をたくし上げて手を使ったりして屋根の上によじ登り、再び走る。

今俺は千紫万紅の樹海窟へ続くルートへ一直線……ではなく、神代の鐵遺跡へ続くルートへと走っている。とは言っても目的地は変わらず千紫万紅の樹海窟だ。これはあくまでもフェイク、本命は直前で裏路地を駆使して千紫万紅の樹海窟へと向かうルートを構築したのだ。

「いいかエムル、人を本気で騙すなら最低でも嘘っぽい嘘と、嘘っぽい真実と、真実っぽい嘘を用意しなければならない」

これはペンシルゴンの受け売りだ。真っ当な真実が必須項目に混ざってない辺りに奴の畜生さが窺えるな。

それは兎も角、大多数に俺が「神代の鐵遺跡」に向かうと思わせて本命の目的を霞ませる。仮に千紫万紅の樹海窟へ向かうところを見られたとしても大多数の意見が少数の真実を押し流す。マジョリティハウンドのモンスターコンセプトは実に合理的だよ全く。

「さぁ存分に悪目立ちしようじゃあないか！」

「きゃあああ宙返りも堪忍ですわぁぁ！！」

宙を駆けるは壁画のアレ（後書き）

シャンフロにおける料理ガチ勢は二種類に分かられます。
即ち他プレイヤーに食材採取を依頼する料理人プレイヤーと、包丁とフライパンでドラゴンだろうが叩きのめすセガールみたいな料理人プレイヤーです

深謀智慧以て真実暴きし騎士は虚構

サードレマに突如として出現した変質者(サンラク)の情報は、リアルタイムで街中を駆け抜けていることから瞬く間にプレイヤー達に伝播する。

「うわっこっち見たぞ！」

「いたぞ！　あっ、消えた！？」

「何あれレアモンスター！？」

家屋の隙間に消えたかと思えば路地裏から飛び出し、路地裏を覗き込めば大通りを横切る。

神出鬼没な白頭巾の情報は錯綜し、仮にそれがユニークを秘するプレイヤー「サンラク」であると気づいた者がいても、何処にいるかを把握することができない。

「あの野郎どこに行った！？」

「てか聞いた話と違うじゃん！　刺青半裸なんじゃなかったの！？」

「おい！　ダスクの鍛冶屋の方で見たってやつが！」

「そっちの方面ってことは……俺たちを撹乱した上で鐵遺跡に向かうつもりか！　行くぞ！！」

クラン内ナンバーツーの想定外の離脱(リスポーン)＋「なんかかかったるいのでパス」という唐突のボイコットにより、下っ端のみでサンラクを探

していたＰＫ達は、知り合い（ペンシルゴン）であればあからさまなその動きに疑問を抱いたのだろう情報を素直に信じて鐵遺跡へと先回りせんと走る。

　そんな中、サイガー０はただひたすらに走っていた。時折聞こえる白頭巾出現の喧騒を無視して、ただひたすらに走る。

（追いかけても追いつけない……だったら、一か八でヤマを張ります！）

　これもまた確証ではなく確信によるものだが、サイガー０はあの白頭巾がサンラクであると、そして同時に二日という短いスパンで次のエリアを目指すつもりなのだと確信している。それはクランからの指示だからではない、文字通りサンラクを最初から追っていたからこその推測。

　そして、サイガー０はあの風に舞う花びらよりも掴み所のないサンラクと相対するには、追うだけでは駄目だということも理解した。

（サードレマから次のエリアへの道は三つ、あの人はどれを選ぶのでしょう？）

　などと考えるだけ時間のロス。であるならば三分の一の可能性を信じて、ランダムに選んだ場所で待ち構える。

　それを選んだことに理由はない、強いていうのならば自分がかつて通った道だから。

「…………」

「……何故バレたし」

サードレマ北西門、千紫万紅の樹海窟へと続く門の前で仁王立ちしていたサイガー０の前に果たして彼は現れた。
この世界の設定上、確として存在する神に感謝を捧げながら、サイガー０は動く。

「……何故バレたし」

俺は今、かつてないほどの驚愕と動揺の渦中にいた。確かに撹乱から直前でのルート切り返しは完璧に成功した。
身体を覆う白頭巾から覗く初期装備足がパルクールまがいの動きで街中を疾走する、という陽動の末にあえて装備を元に戻して千紫万紅の樹海窟へ続く門へと隠密行動で飛び込む。
自画自賛気味だが完璧な流れだった。ユニーク秘匿をすっぱ抜かれた時のような油断もなく、完全にこの街を、プレイヤーを出し抜いたと確信していた。

ならば何故そこにいる？　どこで俺の狙いを読み取った？
ただ一つ分かるのは、ただの脳筋廃人だと思っていた全身鎧（サイガー０）はその実、俺を完全に上回る……ペンシルゴンのような俯瞰的視点の策略家ではない、戦闘職としての極めて高い洞察力を以って俺の狙いを完璧に読み切った端倪すべからざるプレイヤーだという事だ。

（マズいヤバいよろしくない！　どうする！？）
タイマンで抜けるような性能してないだろアレ、多分マジョリティハウンドとか一撃で全て消し飛ばすタイプのインフレの気配を感じる。
　ただでさえ踏み台にした過去があるわけで、初手謝罪コマンド……いや、その場合許す代わりにユニーク開示を求められかねない、いやしかし……

「サ、サンラクサン！ど、どど、どうするんですわ！？」

「どうするってお前……この陽動作戦も二度は使えん、ならここで抜くしかないだろう……！」

　下手なアイテムや魔法に頼った方法では対処される可能性が高い。対人におけるセオリー（カッツォ式）は選択肢を飽和させるか、絞るかであると言う。
　大量の可能性で身動きを取れなくさせるか、選択を強制させて行動を縛るか……結局のところ縛ってサンドバッグにするんかい、とプロゲーマー（モドルカッツォ）にそれを実践されてボコられながら思ったものだが、今まさにそれをすべき俺がサイガー０によって選択を制限されている……強い。レベルとしてではなく、ゲーマーとしてサイガー０は俺を上回っている。

　奴が俺に与える択は三つ。即ち降参、逃亡、抹殺……いや、ＰＫではなさそうだし自発的にキルはしないか？　であるならばユニークを開示するか、サードレマへ戻るか……

「っ！」

鎧騎士の手が動く。
おんぶのような状態で俺の首にしがみつくエムルの毛が逆立つのが感触として分かる。どう出てくるサイガー0、俺の動揺を見越した上で確実に先手を取るとはやはり相当のプレイヤーだ。
武器は出さない、警戒と敵意はそのまま向こうの大義名分になりかねないからだ。そして恐らく何らかの操作をしているのだろうサイガー0の手の動きが止まる。いや、アレは中断ではなく完遂による停止……

『サイガー0さんからフレンド申請が来ました。
「フレンドからよろしくおながいしもうす」』

……誤字ってる。

深謀智慧以て真実暴きし騎士は虚構（後書き）

【悲報】ヒロインちゃんラスボス扱い

直線通路に迷宮を定義する、人それを思考と呼ぶ

この感情、どこかで同じような……あぁそうだ。
「大宇宙で宇宙人と生存競争」というキャッチコピーの割に蓋を開けたら味方陣営でのＮＰＣ達による突然の内ゲバ、というか敵エイリアンも内ゲバ、見るだけで正気度が削られそうな宇宙怪獣が乱入し、地球の意思によって生み出された謎種族が人類に対して攻撃……と信じられるのは自分と武器だけ、とハードボイルドじみたプレイを強制させられる超乱戦ＭＭＯ「ユニバース・ストーム」で見た目が顔から大量の触手が生えた人型スライムとしか形容できない宇宙怪獣がクッソ可愛らしいロリボイスで協力要請して来た時の感覚に似てる……

最終的にプレイヤーによる核爆弾特攻祭りでそして誰もいなくなった状態になったのは実にアポカリプスしてたなぁあのゲーム。その時俺は核を抱えたプレイヤーを敵陣まで輸送する（アテンションプリーズ）宇宙船の操縦士をロリボイス人外と一緒にやっていた。

「………っは！？」

いけない、精神が顔面触手ロリボイスに連れて行かれるところだった。今やってるのはユナイト・ラウンズとは別方向で自分以外全部敵のゲームではなくシャングリラ・フロンティアだ。
何か宇宙的な神秘を受信しかけた精神を神ゲーに戻し、改めて鎧騎士……サイガー０が差した一手を考察する。

フレンドシステム、殆どのゲームがこの要素を持っていると言っていいだろう。それは時にゲーム内で仲の良くなった証であり、時

にステータス増強のための一要素である。そしてこのゲームにおけるフレンド申請は可視化された友好関係だ。
フレンド関係になったプレイヤー同士であればパーティを組む際に優先される、やたら手間のかかるメール機能が多少楽になるなど必須ではないが便利な機能が増えるらしいが……この状況でフレンド申請という選択をする意図は何だ？
対人における隙作りのテクニックか？　いや、そうであるなら今頃は真っ二つにされている。
ならば友好的関係を築いて俺が自主的にユニークを開示するのを促す平和的一手？　となればフレンド申請は武器を出さない以上の対話の意思表示？

「……分からん」

この俺をここまで悩ませるとは、恐るべしサイガー０。たったの一手で俺を完全封殺してみせるとはな……だが、俺とて数々の対人を経験したゲーマーとして参りましたユニークを教えます、とはいかない。受けて立つ！
俺はフレンド申請を認証、だがそれは仲良くしましょうサイガー０さん！　という降参ではない、お前の一手に乗った上でそれを超えるという対抗の意思表示だ。

「…………」

「…………」

互いに無言。この静寂は西部劇のガンマン同士の決闘にも似た緊迫を孕んでいる。ただ違いがあるとすれば、この相対に３カウントはない。先手が必ずしも勝利とは限らない。レベルと経験、ゲーマーとしての力量全てにおいてディスアドバンテージを負う俺はサイ

ガー０のアクションにどう対処する？
　畜生、この手の駆け引きは苦手なんだ。俺が一体何度ペンシルゴンにカモられたと思ってるんだ、最終的に実力解決に持ち込まないとどうしようもないってのに、それを選んだら俺は速攻八つ裂きだ。いやむしろ三枚おろし？

「……あの」

「っ！　！」

　く、先手を取られた！　いや、後手は悪手ではない。向こうからのアクションを見切れ、対処しろ。さぁどう来るサイガー０……！

「もしよければ、その……攻略をお手伝い……します、ぞ？」

　数瞬の思考停止。いや、停止というよりもナウローディング、意図を読み込もうとしてると言うべきか。
　もしかして俺が複雑に考えすぎているだけで第三者が見れば現状は極めてシンプルなのでは？　と一瞬そんな考えが頭をよぎるが、そう断ずるのは早計だと己を戒める。

「あー、そのレベルパワーで簡単攻略はあまり好きではないので……有難い話ですがお断りを……」

「そ、そうですか……その、差し出がましい真似を……」

「あぁ、いえ……」

　沈黙。だが先ほどまでのそれ……もしかして俺が一方的に警戒しすぎていたかもしれない緊迫とは違う。何だろう、この……好感度

が低くてフラグが立たなかったギャルゲー初見攻略みたいな気まずさ。

「あ、その、攻略の邪魔をして、その……」

「あぁ、いや……この前は踏み台にしたりしてこちらこそ申し訳なく……」

「いえいえそんな……」

と、後ろの方で喧騒の気配がする。白頭巾（俺）を探すプレイヤー達がこっちにも来たのか。不味いな……

「……あ、その、攻略、頑張って……下さい。その、またの機会があれば」

「え？　あー……それじゃ」

　驚く程あっさりとサイガー０は門から退いた。実は罠なのではと疑う自分もいるが善意を全て疑うのがデフォなのは世紀末円卓だけだ。

　ともかく、向こうは俺を足止めするような意図はないらしい。未だその真意を読み切ることはできないが、今はいち早くサードレマから離脱することが先決だ。

俺は軽く会釈すると、門からサードレマの外へと飛び出したのだった。

……そういえば、いろいろ考えすぎてて今思い出したが、サイガー０氏は声的に女性だったのか。ネカマは多いがネナベは珍しいな……いや、今のご時世ネカマなんて絶滅危惧種ではあるんだが。な

にせ声でばれるからな、逆に開き直ってバリトンボイスの幼女とか普通にいるが、男性の……それも細身の八、九頭身じゃないゴツい男性アバターとは、相当のゲーマーと見た。

人が分裂したり爆散したりする格闘ゲーム、ログインするだけでリスキルされる協力型MMO、懸命に育てた植物や家畜を為す術なく更地にしていく巨大生物の脅威に怯える農業酪農シミュレーションゲーム……彼が嬉々として購入していったゲームを自分もプレイすることで交流の足がけにしようとしてて……その悉くに失敗。

ゲームショップの女主人より「とりあえず劇毒に挑む前に基本的なスキルを身につけるべき」という言葉を受けて始めたシャングリラ・フロンティア。真面目だが少々堅物の嫌いがあると思っていた姉が実はシャングリラ・フロンティアのヘビーユーザーだと判明したと同時に、身内特権で黒狼に所属して目的のために邁進していった結果として今のサイガー0が出来上がったわけだが、最初の目的からはどんどん遠ざかっていく現状に歯噛みしていた。

そんなある日、彼が極めて珍しいことに（女主人談）メジャーな大作ゲーム、それもシャングリラ・フロンティアを始めると知った時の喜び。

会えず、すれ違い続けた数日間がついに結実したという事実、フレンド欄の最新に表示された「サンラク」の四文字。

「んんんんん……やったぁぁぁぁっ！！」

しばらくした後、サードレマのプレイヤー達は非常に……そう、非常に上機嫌な鎧騎士の姿を見たという。

直線通路に迷宮を定義する、人それを思考と呼ぶ（後書き）

【朗報】ヒロインちゃん、女性として認識される

華やかなる樹の海（前書き）

1話ごとの文字数増やそう計画、始動。

なんやかんやてんやわんやあったとはいえ、とりあえず最優先目標（マストオーダー）は達成した。

俺の動きを完璧に読み切ってみせたサイガー０というプレイヤーとの遭遇というアクシデントもあったが、結果だけ見ればまぁ平和的解決と言える。

「ふみゃあ、めっちゃ強そうな開拓者サンでしたわぁ」

「だろうな……多分俺の四、五倍強いだろうし」

「サンラクサンもヴォーパル魂でなら負けてないですわ！」

「そりゃどうも」

別に人と話すのが苦手というわけではないが、ハクスラやってる最中にいきなりシミュレーションゲー展開に切り替わったようなもんで、妙に疲れた。

「まぁなんだ、比較的話のわかるリュカオーンと会ったと割り切って切り替えていこう」

プレイヤーとの駆け引きも面白いが今はファンタジーにハクスラしたい気分だ、これから挑むエリアを全力で楽しんで、根っこの先端まで攻略し尽くしてやろう。

そんなこんなでサードレマでの緊張はどこへやら、俺とエムルは驚く程平和に千紫万紅の樹海窟に到着する。

「サードレマ離脱と諸々の補填のために所持金を使い切ったからなぁ、探索と稼ぎを両立しねーと」

所持金驚異の１００マーニ、薬草をかろうじて買えるかどうかの素寒貧なので金策は急務だ。採取系はそれを作業とする場合は一気に面倒になるが、探索の一環としてなら楽しい冒険に早変わりするし、ぼちぼちやっていくか。

インベントリが嵩みすぎるとＡＧＩに影響出るからそこらへんの兼ね合いも考えないとなぁ。

トンネルを抜けると、そこはファンタジーであった。そんな経験は幾度となくしている、トンネルを抜けたら鼻先をライフル弾が突っ切ったこともある。

ああ、一番酷かったのはトンネルを抜けたら目の前を隕石が突っ切った時だったな。黄色い線の外側で電車の通過を見るかのごとく目の前を隕石が横切ったというのに、当たり判定の関係で無傷だった時は流石に苦笑いして……隕石の後ろから飛んで来たプレイヤーの飛び膝蹴りが頭に命中してリスポーン、いい思い出だ。

「わぁ、洞窟の中なのに明るいですわ！」

「光る苔……そっち系か」

まさに名前の通り千紫万紅、様々な周囲の花が鮮やかな花弁と蜜の香りを撒き散らす花の絨毯。そして洞窟内だというのに森というには深すぎる木と植物が織りなす樹の海……樹海。現実ではありえない幻想の光景を照らすは壁や天井にびっしりと生えた光る苔。現実のヒカリゴケは太陽の光を反射する、とか聞いたことはあるがこれは完全に自ら光を生み出しているな……世界観次第では擬似太陽が浮かぶゲームもあったし、それを活用する可能性も考えると、こう言った確認は重要だ。

「さて、まず何からしたものか……お」

目を凝らした先、早速モンスターを発見する。
それは巨大な蝶の翅を持つ……球？　いや違うな、よく見ると中を黄金色の液体で満たしたバスケットボール大の胴体(それ)と比べるとあまりにも小さいピンポン球程の頭がくっついている。

「成る程……そんな思わせぶりに腹を揺らしちゃってまぁ……」

ムラっと（ドロップアイテム狙い的な意味で）くるよね、うん。
俺は湖沼の短剣を取り出し、一気に駆け出す。
こちらに気づいたらしい蝶……便宜上風船蝶と呼ぶが風船蝶は腹に大量の、恐らくは花蜜を蓄えているにも関わらず軽快な動きで飛び去ろうとするが……遅い。
追い越しざまに翅へ一閃、風船蝶がバランスを崩して空中で不自然な隙を作った瞬間に頭へ一突き。腹に一切のダメージを与えることなく翅と頭へクリティカルを叩き込めば風船蝶はポリゴンと共に爆散、そして予想通りポリゴンの中から地面に落ちんとする蜜風船をキャッチ。

「まぁ絶対これはレアドロップとしてあると思ったわ」

「わぁ、アタシも触ってみたいですわー！」

水風船をもう少し分厚くした感じ、だろうか？　取り扱いを間違えればすぐにでも割れてしまいそうなそれをブニブニと押すエムルを制しつつ、インベントリに入れてアイテム説明を見る。

・ストレージパピヨンの蜜袋
ストレージパピヨンが集めた蜜を貯蔵する腹袋。衝撃に弱く、蜜が溜め込まれた状態のものを手に入れるのは非常に困難。
食べて楽しむも、投げて楽しむも正解。

「投げる……？」

いや確かに思い切り蹴り飛ばしたい感触はしていたが。
まぁいい、どうせこのアイテムだけでも三、四個は集めるだろうしそしたら一つくらいぶん投げてみるか。

「さぁ、次行ってみようか」

花の蜜を集めるのは蝶だけではない。そして、実在の生物をモチーフにモンスターをデザインする場合、蝶よりもメジャーなやつがいる。

「やっぱりいたか、蜂型モンスター」

「あわわ、エンパイアビーのワーカービーですわ……！」

ふむ、エンパイアビー・ワーカーと言ったところか？　虫特有のあのなんとも言えない質感の体躯が先程のストレージパピヨン同様バスケットボール大の虫型モンスターというのは人によっては非常に地獄めいたエリアではないだろうかここ。

蜜蜂をそのまま巨大化させたようなそれは先程のストレージパピヨンと同じく、その大きな身体でせっせと花から蜜を採取している。いや、蜜だけじゃなくて花粉もか？

「そうだな……俺の見立てでは針がレアドロップと見た」

とはいえとりあえずは狩って何が泥するか見るか。俺は先程と同じように駆け出し、切り裂き、突いて……と、その瞬間だった。

バシュッ、とエンパイアビー・ワーカーの身体から何かが空へと射出される。それは花火のように空中で破裂すると、黄金色の粉末となって周囲に散る。恐らくあれの正体は花粉だろう……いや、そこは重要ではない。

こんな感じの絵面、どこかで見たことがありますねぇ……具体的に言うと、ミリタリーな感じのゲームにおける救難信号の照明弾的な……

「きゃあああ！　ハンタービーの群れがぁぁぁぁぁ！　ですわぁぁぁぁ！！」

その語尾のつけ方はちょっと無理ない？

「ワーカーと比べると攻撃的というか、ぶっちゃけスズメバチだな」
成る程、役職によって現実における別種の蜂がモチーフなのね。
羽音がリフレインする中、俺とエムルに強い敵意を向ける複数匹のエンパイアビー……恐らくハンターは、スズメバチに似た極悪な面構えで顎をカチカチと鳴らす。
「数は五体……いや、奴らもワーカーと同じように増援を呼ぶとしたら最悪鼠算的に増える可能性も……」
「サンラクサン！？　私も加勢しますわ！？　というかむしろ自衛しますわ！」
「そうだな、エムルは自分の方に来たやつだけ相手してくれ。それともう一つ指示を出す」
「は、はいなっ！」
「適当に採取してて」
ずこーっ！　とコケかけたエムルだが、少なくとも雑魚戦でまでエムルに頼っているようじゃな……多数上等、こちとらマジョリティハウンドで慣らしてるんだよ。
マジョリティハウンド程上等ではない、と言っても司令塔（コマンダー）を失ったワンコ共よりは上等な動きで俺へと殺到する……こっちには六体、二体はエムルの方に。
「っしゃ！」
シンプルに正面からケツの針で刺しに来たビー・ハンター1をス

キルではない、自前のテクニックによるパリィで弾き、低軌道から噛みつかんとするビー・ハンター２を足で頭を踏みつける。
ビー・ハンター３と４は距離が遠いので放置、ビー・ハンター１の後ろに追随するように攻撃を仕掛けていたビー・ハンター５の噛みつき攻撃に対して、動きを加速させるアクセルを起動しつつこちらから短剣を突き出して迎撃。
始動は後手でも先に当たれば則ち後の先である。ビー・ハンター５の顎の先、口腔へとスキルの補正を受けた短剣が捻じ込まれ、さらにスパイラルエッジを起動しビー・ハンター５の口腔をズタズタに蹂躙した短剣を引っこ抜く。

「奇襲仕掛けるならその翅音（バイブレーション）も消すべきだったな、うるさすぎ」

反響定位（ソナー）とまで言うつもりはないが、ビー・ハンター６が上に飛んで行ったのを見ていれば事前に備えることもできるし、音で大体の位置は把握できる。
ループスラッシュ起動、スタミナが続く限り全身を回転させながら斬撃を放ち続けるスキルで腰に捻りを入れ、本来は横回転の連撃を縦に捻じ曲げる。一撃目がビー・ハンター６の右翅を打ち据え、二撃目でひしゃげた右翅を断つ。手首で刃の向きを調整しつつ三、四、五撃でビー・ハンター６の腹にクリティカルを三連。

「ふっ！」

任意でスキルを中断できる、という点でこのスキルは非常に優秀だ。爆散したビー・ハンター６のポリゴンを浴びながら、スタミナを回復。数秒の間に残った奴らの位置を確認する。
１は背後、２は怯み終了で目の前、３と４はエムルに注意が向いてるな、レベルと火力で俺に勝るエムルはヘイトを集めやすい。だが態々「仲間を呼ぶ」コマンド持ちのモンスターだ、総合的なヘイ

ト判断は質ではなく量だろう。さてそろそろ5は……

「よいしょっと」

四、五度突いてビー・ハンター5はポリゴン爆散、と。軽く歩く、ステップする程度ならスタミナは消費しない。

攻撃時の動きは割と素直なビー・ハンター1、2の攻撃を軽くいなしてスタミナ回復……うん、まだアクセルの効果は持続してるな。

「オッケ、方針決定！」

まず狙うのはビー・ハンター2。振り向きモーションを向こうがしている隙に肉薄し、アクセルで上昇したSTRとAGIにモノを言わせた連撃を叩き込む。このエリア攻略の適正レベルがいくつかは知らないが、レベル30ならまぁそこそこ戦えるようだ。

飛び散るポリゴンの中を駆けてビー・ハンター1にラッシュスラッシュ起動。回転連撃なループスラッシュとはまた別の、オーソドックスな連続斬撃を浴びせ、フィニッシュに一発蹴り込んでやればビー・ハンター1もポリゴンへと変ずる。

「お待たせ」

アクセルの効果時間が切れる、だが残ったわずかな時間は距離を詰めるには十分。ビー・ハンター3、4のヘイトは最終的に四体のビー・ハンターを倒した俺へと向いたらしい。

二体同時の攻撃が俺を狙うが、少なくとも俺に本気で一撃入れるつもりならフェイントとディレイは必須だぞ？　直線の攻撃を食らうとしたら、まぁ流石に銃撃は食らう。ただ、条件が揃っていればピストルくらいなら回避できるかな……？

スライドムーブ、瞬間的に滑るような回避を可能とするこのスキ

ルを、自前のステップで回避した二体のビー・ハンターへ追随する為に使用する。スライドムーブで稼いだ距離に、二歩のバックステップ、腰を捻って下から上へ斬り上げれば……！

「はっはぁー！　ビンゴ！！」

冴えてる、冴えてるぜ俺！　完全に見切ったビー・ハンターの動きからだいたいこの辺りだろうとアタリをつけて放った双剣二本の斬り上げは見事ビー・ハンター……どっちだこれ、多分４かな？　ともかく、ビー・ハンターの腹に命中する。む、この感触はクリティカルは出せなかったか、流石に勘で振った攻撃をクリティカル命中させるのは難しいな。

「リキャスト終了！」

三度の攻撃でビー・ハンター４はポリゴンと散り、その一瞬を狙ったビー・ハンター３が俺へと最後となる攻撃、顎をガチガチと音立てながら噛みつきを敢行する。

「これ当たり判定は何処なの……っと」

疑問は口に、実証は剣に。レベルカウンターによって最後の攻撃ですら俺に傷一つつけられなかったビー・ハンター３に少しだけ哀れみを感じつつも、当たったらこちらが死にかねないのでプレイヤーはプレイヤーらしくＭｏｂ狩りをさせてもらうとしよう。

螺旋のエフェクトを帯びる湖沼の短剣、突き刺さり捻れる蜂、そしてビー・ハンター３はポリゴンとなって砕け散る。

「ふぃー、疲れましたわ」

「また真似っこですわー！」

今のはわざとではなく……いや、無意識のうちにエムル語尾に感染している……！？

そんなくだらないことを考えながらも、俺とエムルはせっせと地面に落ちたドロップアイテムを拾うのだった。

華やかなる樹の海（後書き）

とりあえず５０００字をノルマにしています。１万時はちょっと毎日更新が隔日になりそうなので断念しました。

・　エンパイアビー・ワーカーの貯粉毛
エンパイアビーの中でも花粉や蜜を集める事を使命とする個体に生えた柔らかな毛。
花粉を始めとした粉末を溜め込むその毛は戦闘よりも日常生活でこそ重宝される。

・　エンパイアビー・ハンターの狩針
エンパイアビーの中でも狩猟及び外敵への攻撃を使命とする個体の針。
その特性上毒を使うことができない為、針から生えた返しによって突き刺し、毟り抉る事で敵にダメージを与える。

・　エンパイアビー・ハンターの大顎
エンパイアビーの中でも狩猟及び外敵への攻撃を使命とする個体の顎。
彼らの顎そのものに求められたのは、鋭さではなく、硬い攻殻をも砕く頑丈さだった。

「虫ってすごいよなぁ、シンプルに殺意に満ちた進化してて」
哺乳類や爬虫類と比べてもずっとずっと死にやすいからこそ、万

能性ではなく特化性を突き詰めた姿は何か大きな力を感じる。
そう考えればタンクや前衛職と比べてもずっとずっと死にやすいからこそ、万能性ではなく特化性を突き詰めた姿はまさしく俺のことではなかろうか。
なんて事だ、あのビー達はある意味俺の写し身だったのか……まぁなんだ、経験値とドロップアイテムご馳走様です。
「サンラクサン、じゃあれ見て一言お願いしますわ」
「殺意の塊を捕食する以上、さらなる殺意を重ねるのは基本だよなぁ、って」
俺たちの目の前、恐らくはワーカーやハンターとはまた違う職業なのだろうエンパイアビーが花に食われている。いや、訂正しよう。あれは花ではない、俺もモチーフになったのだろうその昆虫の名前と姿は図鑑で見たことがある。
「ハナカマキリってやつか……ありゃ初見で見破れるやついなくねーか」
「お花がぐぱーっ！　って変形したですわ……」
エムルの言葉は誇張ではない。俺もエンパイアビー・なんたらの犠牲がなければ気づかなかった、それ程までに見事な擬態をしていたのだ。すごいな、カメレオンみたいに体色を変えた上で絶妙に花畑に隠れる姿勢だ。困ったな、気楽に進めないぞ……
「とりあえず狩るか」
アイテム説明見れば何か分かるかもしれないし。俺は懐から売店

で購入した投げナイフ……クソ鳥の悪夢（トキシックイーグル）から学んだ遠距離攻撃手段をハナカマキリが潜伏していた場所に投じる。

外部からの衝撃、それもダメージを伴ったそれは擬態が看破された事実を示しており、ハナカマキリは擬態を解いてバラバラに吹き飛ん……おっおーう？

「成る程……毒とか擬態とかじゃなくて、シンプルに物理で轢き殺すのがベストなのね」

「おっきな虫ですわーーーーっ！！」

その甲殻はまさに装甲と呼ぶに相応しく、頭部より伸びた四本角は王者の証か。同じ虫なれど蜂とは決定的に違う、重装を支えるに相応しい重くこちらの心胆を震わせるような低い翅音。

「カブトとクワガタのキメラ……ううむファンタジー」

ガチガチと左右の顎と上下の角が動く様は、まさにカブトムシとクワガタムシ双方の象徴を兼ね備えた究極の甲虫。

「ふむ、逃げるか」

「あ、あれ！　逃げるんですわ！？　てっきり戦うと言い出すのかと……」

「じゃあ戦うか」

「わぁい逃亡大賛成！　脱兎のダッシュをお見せしますわ！」

いや、戦いたい衝動は結構あるのだが様々な要因を加味して考えた結果、ここでこのカブトクワガタと……いや、厳密にはこのＦｏＥ臭い強敵Ｍｏｂと戦う事はデメリットの方が多い。

まず目立つ。俺がサードレマにいて、すでに街を出た事は遅かれ早かれバレているわけで、その内この千紫万紅の樹海窟にも人が来る。というか俺がいるいない関係なく人は来る。あのハナカマキリですら五分くらいは倒すのに手間取りそうな予感がしていたんだ、それよりも更に厄介なカブトクワガタと戦う場合、恐らく十数分かそれ以上足止めを食らうことになるし、プレイヤーから目立つ率も高い。

次に純粋に不利。これが地上戦闘であればやりようはいくらでもあるが、向こうは空を飛ぶことが出来て、なおかつ一撃でハナカマキリを粉砕するだけの馬力を飛行中に発揮することができる。流石にこの装備で暴走車に飛び乗るような曲芸はキツい。それを差し引いてもあの重装甲だ、攻撃できる場所が限定的すぎる飛行する敵とか飛び道具が投げナイフともう一個しかない時点で無理ゲーすぎる。少なくとも投げナイフの数が有限である今現在は。

「というわけで逃走ルートだが……うおっと」

「ぴゃぁあ！」

全身スパイラルエッジ……いや、スパイラル顎(バイト)&角(ホーン)と言うべき全身を螺旋回転させながらのカブトクワガタの突撃を回避する。エムルはと言えば、まさしく脱兎の如き動きで俺の首筋にしがみつく。お前そこ定位置になってないか。

「ははは！　直線番長に負けはしねぇよ！」

その時、丁度頭一つ分のすぐ隣を急停止から反転再突撃を敢行したカブトクワガタの角が通過する。

「訂正、ちょっとやばい」

「きゃああああ！！」

わぁ、思ったより攻撃間隔が短い。これスタミナ管理間違えたら撥ねられるな。

貧乏性なので粉砕され、ポリゴンとなったハナカマキリのドロップアイテムを拾ってから俺は走り出す。カブトクワガタは再び反転し、こちらへと突っ込んで来るが既に俺はその場にいない。

「どこ狙ってんだバーカ！」

「挑発やめるですわぁぁぁぁ！」

おっとつい癖で。

個人的に「樹海」というステージは嫌いではない。なにせ障害物と足場の宝庫、逃げ隠れするには非常に都合のいいフィールドだ。

傾いだ木の上を走り、撓む枝葉を命綱代わりに高所から飛び降りる。

大樹は盾であり道、正直このエリアで鬼ごっこするとして、俺は絶対に捕まらない自信すらある。だが、プレイヤーとモンスターの「障害物」の定義が異なることを、先程からずっと痛感している。というのも……

「オイオイ嘘だろ障害物すら意に介さないってどんだけ直線番長なんだよ……！」

先程から背後よりずっと破砕音が聞こえる。ちらと振り向けばへし折れる大樹、若干頭を振るだけで特にダメージを負った様子もないカブトクワガタ……まさかの迂回放棄の直線追跡に流石の俺も開いた口が塞がらない。

道理でこのエリア、やけに倒木が多いと思っていたが……犯人はお前か。

「どうするんですわ！？」

「ちょっと考え中」

花の絨毯を遠慮なく走り抜けながら考える。何故こいつはこうもしつこく俺を追って来る？　先程から何度か適当なモンスターになすりつけを試みたが全て失敗、いくらなんでも執念深過ぎる。運が悪い……で片付けるには少々妙だ、知らず知らずのうちになんらかの条件を俺が満たしている可能性が高い。

「このエリアに来てからやったこと……おっとと」

「落ちてきますわー！」

カブトクワガタの突進でへし折れた大木、それに実っていたリン

ゴと松ぼっくりを合体させたような鎧リンゴとでも形容できる奇妙な木の実の爆撃を避けつつ、いくつかキャッチしてインベントリに入れる。採取の手間が省けたぜ。

「蝶、蜂、採取……虫型……カブトムシ……クワガタ……樹液？いや、このエリア的にもしや……」

思い当たるのはストレージパピヨンからドロップした蜜を溜め込んだ腹袋。蜂や蝶が積極的に集めていることから、このエリアのモンスターの主食として設定されている可能性は高い。

ではは見ての通り甲虫がモチーフのこのモンスターの主食が蜜だったとして、明らかにせっせこ蜜を集めるのに適していない巨体が効率よく蜜を集めるスマートな方法といえば？

「ユナイト・ラウンズからの刺客かよ！」

オーケーそういうことか、道理で蜜を貯めてないストレージパピヨンやエンパイアビー・ワーカーになすりつけを敢行しても失敗するわけだ。狙いはインベントリ内の蜜か！　他者から略奪しようだなんて恥ずかしくないのか、やるならユナイト・ラウンズでやれよ！

「ん？　ああ、投げるってそういう……」

要するに蜜の詰まった腹袋はヘイトを自分から外すアイテムとしての役割を持っているのか。まぁ

「投げないけど」

「なんでですわ!?」

「エムル、覚えておけ……降参は敗北より賢く、敗北より悔いるべき行いだ」

ほぁあ、とエムルが偉人の名言でも聞いたかのように呆けているが、要約すると「負けて全アイテム奪われ煽られるよりも降参して自分からアイテムを渡して煽られる方が数倍腹立つ」というだけのあるクソゲーでの話なのだが。

既にあのカブトクワガタにはハナカマキリの経験値を持っていかれているのだ、さらにうまい具合に手に入ったレアアイテムまで捧げろ、だなんて……イラつくだろう？

「意地でも逃げ切る……！」

その為の策は既に考えてある。雑魚に押し付けられないなら同格のモンスターに押し付ける。

だからこそ、さっきから逃げながらもずっと追いかけてる。さぁ労働者くん、君の上司に会わせてもらおうか……！

蜂や蟻が持つ特性といえば、やはり女王を頂点とした社会を形成する点だ。古今東西、様々な娯楽作品において蜂や蟻をモチーフにしたフィクション作品において、特に蜂型Ｍｏｂが登場するゲームにおいて、それらの親玉としてデザインされるのはやはり女王。

「呪い（マーキング）」から放たれる黒狼の気配、そして弱肉強食に基づき労働の成果を己の命ごと狙う上位者たる甲虫。これらが同時に出現したのならば、一旦巣に帰投するのが自然な行為である。

巣へ逃げ帰るエンパイアビー・ワーカーは逃亡と同時に追跡を行う俺にとってのロケーターであり、ゲームとはいえ所詮は虫としてデザインされたデータは自身が巣への案内役とされていることを理解できない。

「見えた見えた……案内ご苦労！」

巨大な蜂の巣……六角形の集合体たるそれを目視した俺は温存したスタミナを枯渇させる勢いで全力で駆け抜け、ビー・ワーカーを追い抜く。巣の防衛をしているのだろう、ビー・ハンターとはまた異なった見た目の……恐らくはビー・ガーダーかキーパーそんな感じの防衛蜂達が俺という巣への侵入を試みる者に対して戦闘態勢に入る。

「ああ、俺の事は気にしなくていいぞ。主賓はこっちだから……な！」

スライドムーブの補正も含めた減速しない全力の直角右折、回避ではなく道を譲る為の移動。そして、俺の持つつまみにもならない蜜なんかよりも、もっと多くが溜め込まれたエンパイアビーの巣に、カブトクワガタが突撃の勢いのままにビー達を粉砕しながら突っ込んだ。

「ははは、見ろよエムル。あれが本当の突撃隣の晩御飯ってな。」

急激な方向転換にはカブトクワガタが反応できない事、それなりの空間がなければカブトクワガタは急速反転できない事、その場合は何かに突撃して勢いを殺してから反転する事……実証検証確証は既に完了している。

俺なんかに構っていられないほどの脅威、カブトクワガタという

特大のモンスター相手に、エンパイアビー達が一斉に襲いかかる。
怪獣大決戦ならぬ昆虫大決戦だ。
　俺とエムルは木陰で息を潜めながら蜂と甲虫の大喧嘩を観戦する。
その光景を例えるなら、味方武将が全て出払ってるタイミングでCPUがクソ強武将を本陣に突っ込ませてきた時の戦国モノのRTSみたいだぁ……いきなり戦場のど真ん中から敵武将が生えるのやめろや。

「や、やりましたわ！　うまいことエンパイアビー達に押し付けられましたわ！　さっさと逃げて……」

「なぁエムル、あれ……」

　俺の指差した先、そこにはカブトクワガタが自身に群がる蜂を角で、顎で、膂力で、重量で粉砕する度にボロボロと地面へ落ちていく大量のドロップアイテム………エムルの「マジかお前、マジで言ってるのか」という顔が非常に印象に残った。悪いな、予定とかプランとか、俺が組み立てる作戦的なサムシングは大抵アドリブで破壊されるんだ。

　懸念していた他プレイヤーの気配はないし、搦め手込みでカブトクワガタも消耗し始めている。蜂はいわずもがな現在進行形の大損害だし……ちょいとハイエナプレイ、やってみるか？

過去から学ぶ闘争術×逃走術◯（後書き）

樹海窟には食物連鎖が存在し、彼ら虫型モンスターにとっての食料である花の蜜を集めるモンスターとそれを横取りするモンスターに大体分けられます。

エンパイアビーは個々の弱さを数による袋叩き&女王とその親衛隊の単純な強さで搾取される側のモンスターでありながら樹海窟での生態系ピラミッドでは上位に位置します。

大義名分は有効活用

「おぉ、なんか明らかに強そうなビーが出てきたな」

「……あ、あれはクイーンの親衛隊、エンパイアビー・ナイツですわ」

「将軍（ジェネラル）とか宰相（ミニスター）もいるのかな？」

「……本当にやるんですわ？」

あからさまに嫌そうな……いやまぁ、目の前の光景に突っ込む、と言われりゃ誰だって嫌がる……何人かノリノリで突っ込みそうな知り合いがいるから別におかしいことではないな、うん。

「プランは三つ、結果次第でどれを選ぶかは変わる」

まず一つ目はエンパイアビー達がカブトクワガタに勝利した場合、この場合はプラン１「ハイエナ大作戦」だ。

全力でドロップアイテムを拾ってトンズラする、既に無視できないダメージを受けた巣を放置して俺を追ってくる可能性は低いからな。

次に二つ目はカブトクワガタがエンパイアビー達に勝利した場合、この場合はプラン２「漁夫の利大作戦」だ。

カブトクワガタの損耗次第だが瀕死であるならば俺がトドメを刺す。無理そうなら適当に蜂のドロップアイテムだけ拾ってトンズラ。

少なくともエンパイアビーの巣という特大の蜜貯蔵庫よりも俺を優

先する理由はないだろう。
そして最後に三つ目は相打ちでどちらも倒れた場合はプラン３「ラストスタンド大作戦」だ。
悠々と全部かっさらう、以上だ。
「というわけで個人的には壊滅するくらいエンパイアビーには頑張ってもらいたい」
「あ、悪魔ですわ……！」
そういやこのゲーム、「神」は存在するみたいだが天使悪魔っているんだろうか？
「よっしゃ行け行け、やれ！　おいおいもう少し踏ん張れよ甲虫王者！」
カブトクワガタがその重量を攻撃力にフルに換算するには飛ぶことが必須条件であり、その為には堅牢な甲殻を開いて無防備な翅と胴体をさらけ出さなければならない。
カブトクワガタが一度突進を敢行すれば、十数匹規模で蜂が砕け散る。だが、エンパイアビー達も負けじと針をミサイルの如く飛ばし、その殆どは高速で動くカブトクワガタの翅に弾かれるものの何本かをカブトクワガタの胴体に突き刺す事に成功している。
巨大にして強力な個と矮小ながらも精鋭たる群の戦いは、レイド戦に挑むプレイヤーのようで。蜂達は砕けた同胞のポリゴンの吹雪を浴びながらも、一切怯むことなくカブトクワガタを追い詰める。
だがカブトクワガタとてただ狩られる獲物ではない。その身は強者として設定されたもの、幾本もの針を受けてなお不沈。それは例

えるなら暴れ狂う暴風、猛り爆ぜる雷霆。
　一挙一動が弱者を殺し得る必殺であるその顎が、角が、遂に蜂達の司令塔のさらにその上……大局的視点で蜂達に命令を下していた宰相（ミニスター）を砕く。
「おお、見ろエムル。ついに女王が直々に出張ってきたぞ」
「はわあ……！」
　命令系統が崩壊しかけたエンパイアビー達が規律を取り戻す、忠誠を思い出す。半壊した騎士団（ビー・ナイツ）が彼女を守るように隊列を整える。狩人（ハンター）が、番兵（ガーダー）が、労働者（ワーカー）が精鋭が如くカブトクワガタを取り囲む。
　カブトクワガタもまた、己に楯突く弱者の首魁を見据えて顎をガチガチと鳴らす。全身を薄く覆う光はもしや魔法か？
「さぁ勝利の女神は一体どちらに微笑むのか、解説のエムルさんどう思いますか？」
「か、解説！？　アタシそこまで詳しくないですわ！」
　そこは適当に「いやぁ、もはや我々には推し量ることすらできませんねぇ」とか言っておけばいいんだよ……流石に無茶振りか。
　思わず実況したくなるエンパイアビー・クイーンとカブトクワガタの相対……そして彼らは激突する。
　その決着は。

ひび割れ、砕けた甲殻。左の大顎は半ばからへし折れ、右眼には巨大な針が突き刺さっている。だが……カブトクワガタは己の角に貫かれて絶命した王国の女王蜂（エンパイアビー・クイーン）を乱雑に頭を振って引き剥がす。
既に頂点を失ったビー達は方々に四散し、勝者が一体誰なのかを如実に示している。
「お前の敗因は、強いて挙げるなら三つ」
エンパイアビー・クイーンの身体がポリゴンへと変換される。他の蜂達と比べても大柄であった女王はその体躯に相応しい爆散と共にポリゴンを撒き散らす。
「一つは安全策を取らなかったこと、一つは妥協せずに蜂との戦いを決着させたこと……」
降り注ぎ、消えていくポリゴンの中をゆっくりと近づいてくる影に、カブトクワガタはそれでもなお戦意を滾らせる。それは傲りであり、誇りなのだろう。だがそのプライドは、このＭｏｂから大事なデータをすっぽ抜かせてしまったらしい。
「最後に、目先の蜜に気を取られて俺を見逃したこと」

これが闘技場の１ｖｓ１（タイマン）だったなら、カブトクワガタの選択は誇り高いものとして賞賛されただろう。だがこれは弱肉強食（サバイバル）、勝利とは打倒ではなく生還を指す。
満身創痍でなお戦闘を選んだ時点で、それは最悪手だぜ。逃げるコマンドは恥じゃない、不退転プレイはＨＰ管理をミスった時点でただのリスポン待ちだ。

「プラン２だ、誇りを抱えて俺の糧（ＥＸＰ）となれ」

女王はよくやってくれたよ。お陰様でこいつのモーションは体力が少ない時の特殊行動も含めて把握できた。
それじゃあ……全部まとめていただきます。

・クアッドビートルの勇角
クアッドビートルの撤退を知らぬ猛々しき角。非常に頑強なそれは武器や防具に非常に重宝する。
生まれついて好戦的な彼らの生涯は短く、それ故に永く生きた個体は強い。

・クアッドビートルの凄顎
クアッドビートルの立ちふさがる困難を打ち砕く凄まじき大顎。驚異的膂力あっての斬れ味は人が十全に扱うことは不可能。
永く生きた、即ち永く勝ち続けた個体は逃走を死よりもなお嫌う。

・クアッドビートルの重甲殻
クアッドビートルを強者たらしめる重厚な甲殻。重く、硬いそれは
クアッドビートル以外が扱うことを考慮していない。
クアッドビートルの素材を使った武具は古来より退却知らずの破軍
の象徴とされた。

・クアッドビートルの鱗扇翅
クアッドビートルの身体を浮遊させる強靭な翅。その秘密は鱗のよ
うに幾つもの「翅膜」が重なって一枚の翅を形成している。
ただ戦い、ただ進み続ける彼らの死に場所は戦いの場の他にはない。

「いやぁ大量大量！」

「むむむ……なんだかズルい気がしますわ……」

「それは違うぞエムル。あのカブト……いや、クアッドビートルは
逃げることだってできた。実際追ってまで倒すつもりはなかったし
……だがあいつは逃げなかった、それが全ての答えだ」

「じゃあエンパイアビーは？」

俺はそっと目をそらし、口笛を吹いた。コラテラルダメージだよ
コラテラルダメージ。

「まぁなんだ、弱肉強食の世界じゃ生き残った奴が正義ってことさ」

「うむむ、それを言われたら何も言い返せないですわ……」

随分と懐が重くなってきた。第二インベントリ……げふん、もといエムルにも結構持たせているというのになお重いインベントリが、壊滅したエンパイアビーとクアッドビートルでどれだけ荒稼ぎしたかを如実に示している。経験値こそクアッドビートルの分、それも瀕死故にあまり多くない量しか稼げなかったが、それでもレベルアップまであと少し。エリアボスに挑む前にどこかでレベルを上げておきたい。

「そういえばこのエリアのボスって確か蜘蛛なんだっけ？」

「そうですわ、クラウンスパイダーは糸を操って色々してくるんですわ！　ぱーん！　とかぼぼーん！　とか！」

ほう、蜘蛛か……糸を使ってアクロバットするタイプと子蜘蛛を使うタイプ、単純に襲ってくるタイプ……蜘蛛型モンスターも大抵ありがちなモンスターだが、最早俺に油断はない。ノーダメノーコンテのパーフェクトで攻略してやるぜ！

で、ぱーん！　とかぼぼーん！　って何だろう……？

と、まぁ意気込んだはいいが、俺達はボスエリア前というあと少しの場所でありながら、目下木の上で隠れながら下を見ている状況

である。

「まぁそりゃプレイヤーがいても不思議でもなんでもないが……出鼻を挫かれたな」

「剣士、剣士、剣士……なんというか、偏ってますわ」

「分隊全員衛生兵よりかはマシなんじゃないかな」

あるＦＰＳでの話だが、調整ミスで死んでも数秒は自分の身体を動かせることから、自分を蘇生する事でゾンビが如く不死と化した衛生兵達が泥沼の陣取り合戦をする紛争地帯はまさに不毛という言葉がぴったりだった。

それに全員前衛は必ずしも悪手ではない、火力で押し切るのなら下手に前衛後衛で分散させるよりもどちらか一方で固めた方が早く済むことはままあることだ。全員魔法職で超火力短期決戦とかクソゲーじゃなくてもよくある光景だ。

それはともかく、俺達が隠れているのはこのエリアのボスに挑む先客がいたからだ。三人パーティを組んだ彼らは皆剣士、という偏った編成ではあるものの、少なくとも俺のようにほぼ裸装備ではないし、損傷が少ないことからレベルもそれなりに高いことが窺える。

「……時折普通に服を着ることができているやつをどうしようもなく羨ましく感じる」

「普通それは羨むようなことじゃないですわ……」

遠回しに俺が普通じゃないってか……普通じゃないな、うん。少なくとも一般的なルーキープレイヤーは装備欄潰れたりしてないわ。

彼らが大木のうろの中へと入っていくのを確認し、木から飛び降りる。薬草をもしゃってミリの落下ダメージを癒しつつ、俺は彼らが入っていったうろへと歩いていく。
いや、他プレイヤー（パーティ）が挑戦中は当事者以外のプレイヤーは中に入ることはできないが、中を覗くことはできる。情報収集という意味合いもあるにはあるが、単純に他のプレイヤーがどんな風に戦っているのかを見てみたい。他人のゲーム画面覗き見現象とでもいうべき誘惑に特に抗うこともなく、俺はエムルを頭に乗せながらうろを進んだ先、エリアボスのフィールドを覗き込む。
「おお、エムルの言った通りだな」
やけに派手な柄をした……ああ成る程、王冠(クラウン)じゃなくて道化(クラウン)の蜘蛛(スパイダー)か、クラウンスパイダーが中身を繰り抜くようにして縦に伸びた円柱状のエリアを時に糸をロープ代わりに、時に上空に張り巡らせた糸を綱渡りのように飛び交っている。ああ、こっからじゃ見えない位置に行ってしまった。
三人のプレイヤー達は悲しきかな、見事に遠距離手段の乏しさを突きつけられているらしく、ただ一人魔法が使えるらしいプレイヤーがちまちまと火の玉を飛ばしているが、見た限り有効打とは程遠い。
「そこは無駄撃ちしないで降りてくるまで待ちだろ……！」
「ああっ、危ないですわ……！」
なんというか、ポップコーンとコーラが欲しくなる。あと椅子。
完全に観戦者モードになった俺とエムルをよそに、三人の剣士達はようやく待ち構えることを思いついたらしいが、その瞬間上から降ってきたのはクラウンスパイダーではなく、人が乗るタイプのバ

ランスボール程はある巨大な糸の玉。
　見事糸玉は三人のうちの魔法を使っていた一人に命中し、見た目の割に驚くほど柔らかく、そして粘っこいそれはトリモチよろしく魔法剣士の身動きを封じてしまった。

「うわえげつねぇ、上空から物を落としてくるのか……」

　身動きの取れない魔法剣士を助けようとしていたプレイヤー二人が上を見て突然慌てふためいて逃げ始める。
　何事かと思えば次の瞬間、魔法剣士が上から降ってきた丸太に押し潰されて……あ、死んだ。

　そこからはもうどうしようもない。遠距離攻撃手段を失った二人の剣士はジワジワと追い詰められていく。最後は身動きが取れない中、クラウンスパイダーに糸巻きにされてゲシゲシと脚で蹴られ続けた末にポリゴンとなって消えて行った。
　途中、最後に残ったプレイヤーが俺に気づいていたが、俺にできるのは情報提供を身を以て示してくれた彼らに合掌することくらいだった……南無南無。

「さて、彼らの尊い犠牲のおかげで大体把握できた」

「切り替え早いですわ！？」

　どうせサードレマでリスポーンしてるんだ、感謝はすれど追悼なんてするわけないだろう。彼らのおかげで大体のボスの特性は理解できた、宣言通りノーダメノーコン行かせてもらおうか。

　おっとその前にレベリングレベリング。

大義名分は有効活用（後書き）

分かってはいましたがストックが溜まるのが目に見えて遅くなったので焦りますね……

エンパイアビー内部の役職としては
女王（エンパイアビーのトップ、全体バフなどを使用する上に本体も強い）
宰相（実質的なナンバーツー、宰相が生きている限りは全ての蜂は統率された動きを可能とする）
将軍（女王を除けば配下の蜂の中で最も強い個体、十数匹程度を対象に強力なバフを使用するため騎士団と組まれると極めて厄介）
騎士団（巣、ひいては女王を守る蜂の群れ、女王を第一とする精鋭でありなかなかに厄介）
番兵（巣を守る防衛の蜂、耐久力が高めに設定されているが攻撃力は狩人に劣る）
狩人（労働階級、蜜ではなく餌としてモンスターを狩るのが役目のため獲物が汚染されないよう毒を持たない）
労働者（労働階級、蜜や花粉を集めるのが役割だが他の生態ピラミッド上位からよく狙われる、救難信号持ち）
極々稀にエンパイアビー・プリンセスがいたりします。姫からドロップするアイテムがないと作れない武器防具があったりなかったり

――――――――――――

ＰＮ：サンラク

ＬＶ：３１

ＪＯＢ：傭兵（二刀流使い）

２００マーニ

ＨＰ（体力）：３０

ＭＰ（魔力）：１０

ＳＴＭ（スタミナ）：６０

ＳＴＲ（筋力）：１７

ＤＥＸ（器用）：２０

ＡＧＩ（敏捷）：７０

ＴＥＣ（技量）：２０

ＶＩＴ（耐久力）：１（６）

ＬＵＣ（幸運）：７２

スキル

・ラッシュスラッシュ

・スパイラルエッジ

・ナックルラッシュ

・スライドムーブ

・レペルカウンター

・ループスラッシュＬｖ．５

・エッジクライム

・アクセルＬｖ．６

・一艘跳び

・クイックスピン

装備
右：致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）
左：致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋２）
胴：リュカオーンの呪い
腰：隔て刃のベルト（ＶＩＴ＋４）
足：リュカオーンの呪い
アクセサリー：なし
――――――――――――

スキルは増えているし、相変わらずの素寒貧だが、それはもうどうでもいい。最近は基礎スペックばかり上げていたので久し振りに幸運にポイントをぶち込んだ。とはいえ流石に全ブッパするとまでの度胸は無かったので、ラビッツで得た１２ポイントについ先程レベルアップした事で得た５ポイントの合計１７ポイントを割り振り、準備は完了した。

「まぁ新しくプレイヤーが入ったら全回復してるか」

俺たちを出迎えたクラウンスパイダーは見ようによってはピエロのメイクにも見える、派手派手しいカラーリングの身体を揺らしながらこちらに威嚇行動を取る。まぁ当然だがボスエリアに入る前に新たにリポップしたクラウンスパイダーに疲労やダメージの気配は一切ない。

「……ふむ、やっぱりか」

周囲を見回して確信した、貪食の大蛇然り、泥掘り然り……中々にこいつも初見殺しだ。あの剣士トリオは気づけたろうか、気づけないなら相当面倒なボスだぞこいつ。
全力で駆け出せば、クラウンスパイダーは驚異的な跳躍力でこの木のうろ……樹洞空間の上部に張り巡らされた蜘蛛の巣へと移行する。だが俺は別にお前目指して走ったわけじゃない。

「木の内側に紛れて見つけづらいのがまたやらしいわ……」

樹洞内面の壁面に、螺旋階段のようにせり出したそれはまさしく絶対的優位に立ったクラウンスパイダーを引きずり落とす下克上の階段。このエリア、地面はあくまで入口の延長なのだ。本当の戦いの場は……上だ。

「エムルは端っこ……いや、螺旋階段の途中で待機！　攻撃はしなくていい、間違っても持たせた荷物ぶちまけて死ぬなよな！」

「は、はいなっ！」

今回はエムルは戦闘には参加させない。これはある種のけじめでもあり……いや、本音で言おう。俺はガチのソロプレイするときはアシストＮＰＣは切るタイプ、以上！
樹洞内面を何週したか、エムルが白い点にしか見えなくなった辺りで俺は上部に張り巡らされた蜘蛛の巣へと到達する。クラウンスパイダーはこちらに気づいたのか、その体躯にふさわしい太さと頑丈さの蜘蛛糸の上を伝いながらこちらへと近づいてくる……が、やはりその歩みは地上でのそれと比べると遅い。

「多分本来はここに一人遠距離攻撃できるやつを置いて地面に落とすのが正解なんだろうが……」

火が点いていない、風で撓まない、綱が一本ではない。ここまで好条件が揃っていればやることは一つしかない。
俺は湖沼の短剣から切り替えた致命の包丁の腹で糸を軽く叩く。やっぱり縦の糸に粘着力は無い、横に張られた糸さえ踏まなければ足場としては十分だ。一度足を乗せ、何度か力を込めて確認し……こちらへと近づきつつあるクラウンスパイダーの懐へと駆ける。
「綱渡りはお前だけの特権じゃあないんだぜ！」
限りなく素足に近い、初期装備以下の無装備時の粗末なサンダルだからこそ、よりダイレクトに糸の重心を感じることができる。それでも俺はせめてブーツくらいは履きたかった！
「踏ん張りづらいが……先駆けいっぱぁつ！」
普通に踏ん張るのではうまく力が入りきらないし、足を踏み外す危険性もある。だからこういうシチュエーションでは下から上へ、綱の撓みを利用した跳ねるような斬り上げが最もダメージが大きい。
「おっと、久し振りだから落ちかけた。危ない危ない……踏ん張るなら真ん中かな」
どうやらクリティカルに加えて急所にも命中したらしい。顔面を切り裂かれたクラウンスパイダーはひっくり返るほどに仰け反って自身が張った糸から落ちていく。
「向こうにも落下ダメージが入ってりゃいいが……」
グシャァッ！とあまり聞き慣れたくはない音を遠くに、地面での

たうっているクラウンスパイダーを余所に俺は巣の上を軽業師宜しく跳ねるように進んでいく。
　なるほど、天井から巣の隙間から下に落ちるよう糸で吊るされた丸太、これを切り落として地上への攻撃にしていたわけか。これが自分に直撃するとかゾッとしないな……というわけで致命の包丁で糸を斬れないか試してみる。流石に足場の糸を斬れば俺が落下死（ポリゴン爆散）は免れないので、慎重に……あ、そーれ。

「む、硬い」

二度目で斬れた。クリティカル二発で切れるなら利用できそうだが、その前に怒り心頭の家主のお帰りだ。なるほど、跳躍力だけじゃなくて空中で糸を伸ばして逆バンジーの要領で巣に登っていたのか、意外に伸縮性があるようだ。
　表情の無い蜘蛛のモンスターではあるが、前脚をブンブンと振り回す様は言葉以上に俺への怒りが伝わってくる。先程よりも素早い動きでこちらへと殺到してくるが、既に俺は最も縦糸が密集した蜘蛛の巣の中心部に陣取っている。
　地の利を得た俺は先程よりも体感二倍は強いぞ？　なお当社調べ。

「レペルカウンター！」

　左足で巣の中心部を強く踏みしめ、右足を前へ出して体勢を整えてクラウンスパイダーの前脚攻撃を弾き飛ばす。
　仰け反りモーションを強制的に取らされたクラウンスパイダーの懐に再度飛び込み、左右の致命の包丁による二撃に加えてスパイラルエッジの補正付きの一撃を叩き込む。
　またしても地面へと落ちていくクラウンスパイダー。明らかに顔面に一撃を受けた以上のダメージを負っていたようだし、やはり落

下ダメージは入っているようだ。

「な、る、ほ、ど、ね……？」

あー今俺すごい悪い顔してると思う。

ではここでクラウンスパイダーくんの帰宅への挑戦、その戦いの記録を記そう。

帰宅（三度目）

クラウンスパイダーが最初に登った時、次に戻った時だから……三回目か。三回目の帰宅のために糸を天井へと伸ばす。それが天井に張り付き、推進を得るために一度クラウンスパイダーが完全に糸にぶら下がり、伸び切ったこのタイミング。

「はいクリティカル二発」

ぶつっ、と切れた糸はクラウンスパイダーの重さを支えることは出来ない。重力という巨大な掌に鷲掴みにされたクラウンスパイダーはワシャワシャと脚を動かしながら地面へと落ちていった。

帰宅（四度目）

「あれ、この位置は……」

糸が伸び、それを斬り落とさんとする俺は丁度近くに丸太がぶら下がっていることに気づく。

「モグラ叩き？　鼠返し？　まぁいいや、丸太の鉄槌！」

丸太が重力に引っ張られ、落ちていく。それはまさに上から下への破城槌、不運にもまたしても逆バンジー寸前の最も糸が伸び切った状態で尻に丸太が直撃したクラウンスパイダーは思わずと言った様子で尻から伸ばしていた糸が途切れ、そして地面へと丸太ごと落ちていった……

帰宅（五度目）

落下。

帰宅（六度目）

よくわからない糸でぐるぐる巻きにされた何かが直撃し落下。

帰宅（七度目）

蜘蛛糸による逆バンジーが成功し、上方へと跳ね上がるものの、巣の上へ戻る直前で俺により蹴り落とされて落下。

落下、落下、落下…………

「いやまさかここまでうまくハマるとは思わなかったな……」

プレイヤーがキャラクターを操作するゲームにおいてバグと正常の狭間に位置する技術……それこそがハメ技。
弱者が強ボスに勝つためのテクニックであり、ボスの何もかもを否定してサンドバッグへと変えてしまう悪魔のテクニック。
何度も地面に叩きつけられながらも、健気に巣へ戻ろうとする姿は哀れみを覚える……いや、一昔前のカートゥーンアニメのギャグみたいでウケる、とか思ってないよ、ホントダヨ。

「まぁそろそろ瀕死のようだな」

そりゃ十回は叩き落としたわけだし、いくらモンスター、それもエリアボスであってもこの高さから地面に叩きつけられ続ければ瀕死にもなるか。
クラウンスパイダーの様子はといえば、何度も地面に叩きつけられた為に脚の数本がひしゃげて妙な方向に曲がっているし、落下の衝撃故か全体的に凹んでおり、体液の代わりに体の所々からポリゴンが溢れている。俺なら十回死んでるようなダメージ受けてそれなら、十分過ぎるくらい強敵だったんだろう。

だが、瀕死のクアッドビートルを倒したあの時と比べても、なんというか盛り上がりに欠ける。いや楽しかったけど、楽しかったけどなんか違うんだなこれが。なんというか……そう、スリルが足りない。
ハメ技じみた落下コンボを決めたのも原因の一つ、というか大体それのせいではあるのだが、もっとこう……オワタ式が極まったような戦闘がしたいのだ。

「その点クアッドビートルはストレートに物理しててて良かったんだが……」

クラウンスパイダーも強敵ではあったが、どちらかというとギミックを解くまでがメインのボスだ。それ故にネタさえ割れてしまえばクアッドビートルよりも弱い。仮に俺も地面に降りて地上でタイマンしたとしても、多分ほとんどダメージを負うことなく俺が勝つだろう。
だからこそ不完全燃焼、全力を出し切れなかったモヤモヤがクラウンスパイダーへトドメを刺す達成感に影を差す。

「……ちょっとだけ舐めプするけど堪忍な」

ボス故に、この樹洞の主人であるが故に、クラウンスパイダーは満身創痍の身をそれでも動かしこちらへと飛びかかる。
スライドムーブ起動、綱引きの綱ほどの太さはあるとはいえ不安定な糸の上を滑るように移動してクラウンスパイダーの特攻を回避。そのタイミングで新たに覚えた……１８０度反転の際の急停止によって発生する仰け反りを解消して瞬間的な反転を可能とするクイックスピン起動。
反転した直後にこれまでのステータスに補正が入る回避系スキルとは異なる、純粋な跳躍距離を増強するスキル一艘跳びも起動。

撓む蜘蛛の糸、跳躍する身体は攻撃モーション後の硬直に入ったクラウンスパイダーの背後へ。
本来ならこんな曲芸の必要はない、レペルカウンターで弾いて斬れば安全かつ迅速に終わる。だからこれは舐めプであり、正しく遊びだ。

「オーバーキルかな？」

跳躍の勢いで刺突の威力を上げる……言うなればＡＧＩによる無理矢理ＳＴＲバフとも言える飛び込みの勢いをスパイラルエッジに重ねて突き出す。
クラウンスパイダーの尻に（流石に糸を生成する部位に刺す勇気はなかった）突き刺さった致命の包丁が螺旋のエフェクトを発し、さながら削岩機（ドリル）の如くクラウンスパイダーからポリゴンを噴き出させる。
クラウンスパイダーは一度ビクンと震えて硬直、そしてその身体はポリゴンとなって勢いよく爆散する。

「おっとと」

その勢いに押されて巣の上から落ちそうになったが、流石にここまで来て落下死（ドロップし）は恥ずかし過ぎるので意地で持ち堪え、ポリゴンの中から地面に落ちていたなんらかの球体をキャッチする。

「んー……まぁ、ノーダメノーコンだし上等か」

満点のプレイと最善の結果、しかし何か物足りない勝利だ。

鳥面ＶＳ道化蜘蛛（後書き）

あんまりなやられ方をしたクラウンスパイダー君ですが正しい戦い方としては魔法職がエリア上部でクラウンスパイダーを叩き落し、落ちたクラウンスパイダーを下で控えた火力職がフルボッコにする。

というどちらにせよハメ殺されるか袋叩きにされる可哀想なやつです。なおその戦法上、タンクの影が若干薄くなります。軽戦士は主人公がやったように巣の上で戦う、という役割があるだけまだマシでしょうか

刹那に想いを込めて　其の一（前書き）

ようやくこの作品を書くにあたって最初に構想した部分まで来ることができました、皆様の応援のおかげです。ありがとうございます。
これからも拙作を宜しくお願いします。

自分でも柄ではないとは理解している。

「ははは……3桁とかめっちゃ久しぶりに見たかも。薬草買えるかな？」

最後に薬草を購入したのはいつだったか、今の数万倍はあったはずの所持金も今では素寒貧。だがそれに反比例するように限界まで詰め込まれたアイテムの数々が、計画に対する彼女の本気を示している。

「……例のアイテムも入手の目処が立ったし、後は二人が受けてくれるかだケド」

いつからだったろう、彼女がこのゲームに飽き始めていたのは。ままならないとはいえ、彼女自身は現実に不満があるわけではない。ただ、彼はそうではなかった。

彼が作ったというプレイヤーキラーのためのクラン、というものは彼女にとってもプラスの多いものであった。

彼女が求めるものは花火のようなスリル。ただの一瞬、されど記憶に刻むような派手な花火、そんなプレイングこそが彼女の根本。

「倒されて素寒貧になるまでが悪役の華だってのに、チキっちゃってさぁ……」

初めてそれを見つけた時は、まだ全員が攻略の意思を、情熱を抱いていた。だがあの日、プレイヤーキラーに多大なデメリットが追

加されたあの日から、クランは変わってしまった。
危険を避け、安定を取る。かつてはほぼ全方位からヘイトを集めていても上等だかかって来いと笑っていたメンバー達も、かつての三位が賞金狩人相手に大馬鹿をやらかしながらも満足げに破産したのを皮切りに、一人また一人とクランを離れていった。
今ではクランにいるのは彼女からすればド三流もいいとこの雑魚ばかり。

「さてさて、どう懐柔したものかな……」

彼女には抜けていったメンバーの気持ちがわかる。彼らは別に、PKで得た栄華を保っていたい訳ではないのだ。それは結果に過ぎず、彼らがPKに及んだ何よりの理由は楽しむ為。
悪役ロールを好む者、己を狙う復讐者との戦いを楽しむ者、自身へ向けられる恐怖の目も侮蔑の目も憎悪の目も笑顔で受け止める変態……現実ではできない「はっちゃけ」をこそ彼らは求めていたのであり、今のステータスのままでいる必要性は無かった。

「むー……普通に持ちかけるだけでもノッてくれそうではあるけど、死ぬ気でやってもらいたいし焚きつける必要があるかなぁ」

PKそのものをこそ楽しむ者達が抜け、代わりにPKによって得られる蜜に群がる蝿ばかりになってしまったクラン。
それ故に、彼がアレを半ば装置のように使うと言いだした時は彼女は半ば本気でこのゲームを引退する決意を固めかけたのだ。
ならば何故今もシャングリラ・フロンティアを続けているのか。
そう問われれば彼女はこう答える。

「どうしてもアレ倒したいから」

ゲームに本気でのめりこむ今の彼女の姿は、彼女のプレイスタイルを知る者が見ればひどく滑稽に映るだろう。
例えゲーム全体で重要なＮＰＣであっても、容赦なく罠のギミックにしてしまう彼女が、たった一人のプレイヤーですらないＮＰＣの為に全てを賭しているのだ。

「次の満月と、新月から逆算して……今日明日で協力を取り付けないと、間に合わない」

彼女が描く未来という絵画に足りなかった絵の具、その最後の二つが見つかった。それが塗料であるのか、はたまたニトログリセリンであるのかは分からない……いや、多分ニトログリセリンだ。
だからこそ、彼女は失敗すれば引退も辞さない覚悟であらゆる手段を用意した。失敗すれば少なくとも彼女をこのゲームにログインさせていた惰性すらも失われるだろう。
彼女の表情に不安が過ぎる。狙うは前人未到の強敵、それをたった三人で倒せるのか？　自身の計画に支障を来す不安を叩き潰すかのように頬をバシバシと手で叩いた彼女は、誰もいない彼岸花の絨毯に寝転がって月を見上げる。
「見てなよセッちゃん。勝つか負けるかの大博打、私の全部をベットしてでも勝ってやる」

俺は今、半裸に鳥頭のサンラクではない。そっちのサンラクはフォスフォシエのランドマーク更新してラビッツのベッドでセーブ＆ログアウトだ。
そして今の俺はムキムキマッチョのヒゲダンディなボディを鎧で包んだレイピア使いのサンラクだ。

「久しぶりだなぁ……この空気」

フェアクソ挑戦前に一回ログインしたから本当に数ヶ月前だな。
おっと危ない奇襲するならただ後ろに回るんじゃなくて角度も考えないとこんな風に迎撃されるぞ？

「ええと、待ち合わせは確かファランクス伯爵の邸宅だったか」

確か番兵のガードが王城より硬いＮＰＣの邸宅だったはずだ、確かにプレイヤーはそうそう近づかないだろうが……ならば何故奴が待ち合わせ場所にそこを指定できるのかという疑問が……まぁいいや、今更こっちで罠に嵌めるメリットもないだろうしなんとかしたんだろう。

ゴロツキプレイヤーを適当に一撃死(おちょくり)ながら俺はこの世界……ユナイト・ラウンズの道を進む。

「おぽぁ！」

「はいこんばんわ、くたばれ」

「こんばんわ！　死ね！」

悪いが手数で攻めるオワタ式のあっちと違ってこっちはカンストレイピアで急所一撃の暗殺特化だ、一手刺す隙があれば大体一撃で殺せるぞ。

シャングリラ・フロンティアの消滅方式とは異なり、焚き火が燃え尽きるように灰となって消えた名も知れぬプレイヤーの装備を漁る。

「ちっ……シケた装備しかないな、まぁ盗賊崩れならこんなもんか」

プレイヤー全員がＰＫたるこのゲームにおいて、袋叩きはなんら恥じ入ることではない。十人で一人を袋叩きにしたと思ったら三十人に包囲されてた、とかザラだからな。そしてその三十人も隙さえあれば敵ごと味方を巻き添えにする気マンマンというオチだ。

「おっと、こんなことしてる場合じゃない」

ついつい癖で剥ぎ取っていたが、そんなことしてる場合じゃないや。ええと確かこっちだったかな……

「やぁやぁいらっしゃいサンラク君！　カッツォ君ももう来てるよ」

「あれ、俺がドベか」

ファランクス伯爵の邸宅に到着した俺は、NPCの番兵に止められることもなく中に入ることができた。いったいどんな手練手管を使ったのやら……まぁいい。

シャングリラ・フロンティアのペンシルゴンとほぼ同じ見た目の、強いていうなら若干ポリゴンが雑なアバター「鉛筆戦士」が笑みを浮かべて俺を出迎える。まるで我が家を行くかのようにNPCの屋敷を進む鉛筆戦士についていけば、応接間と思しき場所へと案内される。

「やぁサンラク、色々暴れてるらしいじゃん？」

「別に暴れてるわけじゃないんだけどなぁ、ユニークをすっぱ抜かれたのが痛かった」

「ネチケットがないって怖いよねぇ」

ああやっぱり、鉛筆戦士の口振りからして無断スクショでも撮られてたのかな。まぁ過ぎたことだ、態々掘り返すまでもなかろう。MMOはゲームだが現実だ、リセットもできなければタスクキルもできない。過ぎた時間を巻き戻すことが出来ないのならば今どうするかを考えなくてはならない。

「で？　本題に移ろうか。態々俺やサンラクを指名するってことは、

ただ一緒にシャンフロしようぜってことじゃあないんだろ？」

「そだね、時間もあまりないし単刀直入に言っちゃおうか」

まるで自宅であるかのような気軽さでオブジェクトとして最初から存在する茶菓子を口に放り込みながらのカッツォ(モドルカッツォ)タタキの問いに、鉛筆戦士はいつものように笑みを浮かべてなんでもないかのように爆弾を投下した。

「ユニークモンスター「墓守のウェザエモン」の討伐を三人でやらない？」

「ふぁ！？」

「ごふっ！？」

正直「三人でハイレベルプレイヤーのみで構成されたクランにカチコミかけよう！」までは想定していたが、斜め遥か上をぶち抜くその単語に俺は素っ頓狂な声を上げ、カッツォタタキはむせ返る。口の中に放り込んだ時点で茶菓子がオブジェクトとしては消失しているのが幸いだった。

もし現実だったら口の中の茶菓子がぶちまけられていただろう、汚ねぇ。

「待て待て待て待て、ユニークモンスター！？」

「そだよ。下手なボスよりヤバいシャンフロにも十体といないエネミー、その内の一体が墓守のウェザエモン」

「ふぅー……よし落ち着いた。とりあえず俺からは聞きたいことは三つ」

「はいよサンラク君、依頼者として質問には真摯に答えようじゃないか」

このリアクションは想定の範囲内だったのだろう、俺の質問に対しても鉛筆戦士は余裕の笑みを崩さなかった。

「まぁシンプルに……何故？　いつ？　勝算は？」

「シンプル過ぎない？　まぁ順番に答えていこうか。まず一つ目、何故君達二人なのか……これはちょっと込み入った事情があるんだけど要約すると数を揃えれば勝てる奴でもないんだよねぇ、実際阿修羅会上位十五人で討伐隊組んだけどフルボッコにされたし」

「……プレイヤー数が増えると体力攻撃力に補正が入るタイプ？」

カッツォタタキの指摘は俺も考えていたものだ。マルチを前提としたゲームにおいて、人数に比例したボスの強化はお約束すぎるほどにお約束だ。

それもユニークモンスター……あの夜襲のリュカオーンと同じカテゴリに位置するモンスターであるならば、素のスペックが人数補正でさらに強化されればどれ程の極悪性能になるのかは想像に難くない。

「それもあるけどもう少し厄介なんだよねぇ、まぁこれ以上の情報は承諾してくれたら開示するよ。次にいつ、だけど……チャンスは一回きり、二週間後に実施される夏の大型アップデート直後の夜、それが決行の日」

二週間……長いようで短い、だが準備期間としてはそれなりに長い方だろう。カッツォタタキの方もそれは分かっているらしく、特に何も言うことはなかった。だが本題は三つ目だ。

「勝算は？　言っちゃなんだが俺はまだレベル30ちょいだぞ？」

「俺はレベル25」

「うわ雑魚っ、二人とも弱過ぎ……？」

ぶっ飛ばすぞてめー……は冗談だとして、実際リュカオーンの例からすれば俺らを選ぶ理由が分からない。

数が多いと強くなりすぎる、だから少数精鋭で挑む……まぁここまでは分かる。だがそこに俺とカッツォを指定する意図が分からない。

確かに俺もカッツォもプレイヤースキルはある方だと自負しているが、ユニークモンスター相手に少数精鋭組むなら俺たちよりももっと強い……それこそ廃人（サイガ-0）プレイヤーのようなレベルカンストしたプレイヤーで固めるべきじゃないか？

「いや、レベルに関してはどうとでもなるんだよ。あの鬼つよ武者を相手にするのに必要なのはレベルでも最強装備でもなくて……純粋なプレイヤースキル。だからこそプロゲーマー（カッツォ君）とクソゲーマー（サンラク君）の力が必要なの」

「プロゲーマーとクソゲーマーって並べていいものじゃないよな」

「プロゲーマーの格が落ちそうだから離れてどうぞクソゲーマー」

悔しいがガチプロゲーマーのお言葉を否定できない……！　高級料理の隣に雑草が置いてあるような事実は否めないがクソゲーマーだってクソゲーでならプロゲーマーに三割勝てるんだよ！

「まぁまぁ……で、どうかな？　追加報酬が欲しいなら聞くけど」

「話が美味すぎる、明らかになんらかの意図を感じるけど……サンラクお前は？」

「俺？　いいよ協力する」

「即決かよ」

カモがネギを背負ってやってくる、と言うが今の俺にとってはカモがネギと牛を引きずって来て態々すき焼きを作ってくれるかのような好機だ。

なにせ求めていたオワタ式の極みのような戦闘が向こうからやって来たのだ、それもユニークモンスター。元々素寒貧の身の上、失って困るものもなければリカバリもそう難しくはない。

鉛筆戦士が提案した以上、何か裏があるのは確実なんだろうが……まぁ分かってても乗った方が楽しい。

「はぁ……ちなみにもし仮にお前らだけでそのウェザなんたらを倒したとしたら……大体どれくらい参加しなかった俺に自慢するわけ？」

「死ぬまでドヤ顔かます」

「会う度にネチっこく自慢するかな」

「こいつら……じゃあ俺も参加するしかないじゃん」

口ではそう言いつつも、その表情に嫌々と言った感情は無い。このツンデレさんめ、内心ウッキウキだろうに。

「いやぁ、君達なら受けてくれると思ったよ。八十人のプレイヤーで固めてた私の城に、たった二人で乗り込んでくるような馬鹿だしねぇ……」

遠い情景を眺めるように笑みを浮かべる鉛筆戦士に、俺もカッツォタタキも苦笑いを浮かべる。そういえばあの時は俺が提案したんだっけな……「面白そうだし王様アサシンキルしようぜ」ってな。

「で、だ」

ここからが本題。

「まだ何か隠してるんだろう？　俺たちを一枚噛ませるならそこんとこも教えてくれよな」

俺のその言葉に、鉛筆戦士はその笑みをますます深くしたのだった。

刹那に想いを込めて　其の一（後書き）

三人のゲーマー的タイプ

サンラク：理論派に見えて実はアドリブマン、テンションとプレイヤースキルが連動している

カッツォ：アドリブマンに見えて実は理論派、ちゃんと事前調査や練習は欠かさない

ペンシル：実際のところプレイヤースキル自体はそこまで高くない、状況と状態を組み合わせて殺しにくる

刹那に想いを込めて　其の二

「一言で言ってしまえば、「墓守のウェザエモン」は阿修羅会が去年の冬に発見してからずっと秘してきたユニークモンスター。今じゃ新規メンバーのレベリングのための経験値サーバー兼対人の練習台にされた哀れな奴だよ」

ユニークモンスターは遭遇するだけで経験値が入る。確かにリュカオーンのようなランダムエンカウントでないユニークモンスターの場所を占有できたならレベリングの場としてはこれ以上ない存在だろう。成る程、阿修羅会のリーダーも中々効率厨のようだな。

「わざわざ抜けて行った連中にも箝口令を敷く隠匿っぷりだよ。でもさぁ、それは違うとは思わない？」

「まぁ、確かに」

「少なくともMMOでそれをやるのは若干ナンセンスだとは思うかな」

満漢全席を眺めるだけで手をつけないようなもの、と言うべきだろうか。別にそれが悪いと言うわけではないし、責めるつもりもない……だが、そっちがやらないならこっちがやってもいいだろう、とは思う。

「だから私達は阿修羅会の奴らの隙を突いて、墓守のウェザエモンがいるエリアに潜り込む。具体的な作戦を話そうか」

俺たちへ鉛筆戦士からプレイヤー自身が情報を書き込むことができるアイテム「プレイヤーブック」が送られてくる。予め用意してたってことは、相当綿密に練られた計画っぽいな。

『ユニークモンスター「墓守のウェザエモン」はユニークシナリオEX「此岸より彼岸へ愛を込めて」を受注することで戦闘可能な人型ユニークモンスターである。
ユニークシナリオ受注条件は満月の夜に千紫万紅の樹海窟隠しエリア「秘匿の花園」に一切の武器を装備しない状態で訪れる事で出現するユニークNPC「遠き日のセツナ」と会話する事で受注可能。』

「ふぅん……」

「どうかした？　質問なら答えるけど」

「いや、こっちの話」

ユニークシナリオEX、ねぇ……やっぱりEXはユニークモンスターに直接関係するシナリオなのか。となると、俺が発生させたあれも……いや、今はそれは考えないようにしよう。

『シナリオを受注し、新月の夜に「秘匿の花園」を訪れる事で更に隠しフィールドへの道が現れる。』

「俺は未だにユニークシナリオってのをやってないから聞きたいん

だけど、ユニークってのはどいつもこいつもこんなにまだるっこしいの？」

「どうだろう、セッちゃん……ＮＰＣがそれっぽいことを示唆してくれるからフラグさえ立てちゃえばそこまで悩む要素は少ないかな」

「で、次のページからがウェザエモンの攻略情報ってわけか」

『墓守のウェザエモンは戦闘開始と同時に「自身を除く戦闘エリア内の全てのキャラクターのレベルを上限５０にする」スキルを発動するため、全プレイヤーはステータスが大幅に下がった状態での戦闘を余儀なくされる。
これはレベルが下がるのと同時に「レベル５１から９９までの間に割り振ったステータスポイント」が戦闘の間は消失するためである。
検証の結果、ＮＰＣにもこの効果は適用されるため、高レベルＮＰＣで固める戦法も無意味と判断せざるを得ない。』

はいちょっと待て。

「レベルとステータスに干渉？　読んだ限り戦闘中限定なのは分かったが……これ無理ゲーじゃないのか、向こうは１００とか余裕で超えてるんだろう？」

「鑑定持ちのプレイヤーが調べたけどレベル２００だったよ、脳筋アタッカーのフルパワーですら歯が立たないチートスキルだよ全く……多分だけど特殊勝利系」

レベル差１５０のクアドラプルスコアを強制するとはなかなかに

悪辣な。とはいえ特殊勝利系……イベント戦闘などでよく見る敵の体力を０にするのではなく、別の条件を達成する必要のあるタイプだ。いわゆる負けイベもこれに該当するわけだが、ユニークモンスターとの決戦で負けイベはあり得ないだろう。
考えられる可能性としては「特定のオブジェクトの確保、破壊」「時間経過」「特定の攻撃からの生存」……珍しいところでは「戦闘中の説得」なんてのもあるな。

「成る程、レベルは関係ないってのはこう言う理由か」

「確かにこれじゃレベルで押すタイプのプレイヤーは肉盾にしかならないな」

いや肉盾も立派な役割ではある、タンクとかその最たるものだし。だがレベルの差を強制的に１５０も開かされてはタンクも多少硬いだけで軽戦士と大差はなかろう。

「ちなみに勝利条件に心当たりは？」

「とりあえず負けイベ、オブジェクト関連の線は薄いと考えていいと思う。時間経過だとは思うけど、確証はない」

「ふぅん……おっ、戦闘パターンも書いてあるや、ありがたいねぇ」

格ゲーマーのカッツォからすれば相手の技が分かっているのは非常にありがたいことらしい。以前それについて話した時は「フレームも分かれば差し込める」と中々に荒唐無稽なお言葉をいただいた。初見の楽しみが削がれるのは少しだけ不満だが、鉛筆戦士の計画が挑戦一発での成功である以上四の五の言っていられない。

『通常攻撃は刀を使用したものが殆どであり、時折格闘攻撃を繰り出す。だが格闘攻撃と刀攻撃の二択であるならば刀攻撃を選択する思考ルーチンである。
以下はこれまでに判明した墓守のウェザエモンが使用する特殊行動
・断風（たちかぜ）
発生1フレーム疑惑のある神速の居合、致死レベルのガード貫通性能。喰らえば死ぬ。
予備動作で見切って回避する必要あり、とはいえ予備動作自体も短いのでタゲられたら死ぬ前提で行くべきか。
・入道雲（にゅうどうぐも）
溜めモーションの後に巨大な雲の腕でエリア全体を薙ぎ払う。喰らえば死ぬ。
恐らく安全地帯は上と至近距離、ＡＧＩがあれば走って逃げ切れるかも？
・雷鐘（らいしょう）
刀に雷を纏わせ、広範囲を爆撃する。喰らえば死ぬ。
着弾場所はある程度プレイヤーをホーミングしている、着弾地点は重複するためプレイヤーが密集すると一網打尽にされる。』

おいおいオワタ式極まってんな、喰らったら死ぬが前提なのか。とはいえこれだけの性能を誇ってまだ全貌が明らかになっていないのか。

「全体攻撃かぁ……苦手なんだけど俺」

「格ゲーって普通に全画面攻撃ないか？」

「いつの時代の格ゲーだよ、フルダイブで問答無用の全画面攻撃とかどうしようもないし、便秘くらいだってそんな理不尽攻撃」

かつての2D格闘ゲームでは存在した全画面攻撃も、3D、フルダイブと移行していく内に見かけなくなった。フルダイブではプレイヤー自身が身体で対処しないといけないからな、問答無用で全ての空間にダメージを与える全画面攻撃は時代の流れと共に減少してきた。あるとしても範囲攻撃くらいだ。

ウェザエモンのスキルは全画面とまではいかないがエリア全域を薙ぎ払う攻撃は中々に厄介だ、安全地帯があるのは有情だが……成る程、とことん大人数での戦闘をメタっている訳だ。下手に安全地帯にプレイヤーが殺到すれば詰まって一掃、そして数が減ればどうしようもなくジリ貧と。

「ウェザエモン自体も相当強いんだけど、本当に厄介なのはこいつ。測ってみたけど大体十分経過で出てくるウェザエモンの追加武装……」

「戦術機馬【騏驎】？」

『戦闘開始から十分ほど経過した時点でウェザエモンは追加武装を呼び出す。
戦術機馬【騏驎】は第一形態は馬の形をしたロボット、と呼ぶべき姿であるが完全に出るカテゴリを間違えているような性能をしており、ミサイルやらレーザーやらを撒き散らしながらエリア全体を爆走するため非常に危険。
さらに放置するとウェザエモンと合体し、その場合はどうしようもなくなる。
対処法としてはウェザエモン以外の存在、つまりプレイヤーが【騏

麟】に飛び乗った場合、麒麟は全アクションを中断して振り落としモーションを取るため、ひたすらそれで耐え続ける。』

ファンタジーなゲームでは見ないはずの単語がチラホラと……ミサイルて。だが中身は厄介そのものだ、嫌が応にでも対応せざるを得ない上に下手をすればウェザエモン本体が手をつけられなくなる。

成る程……おおよその計画が見えてきたぞ。

「俺がウェザエモン、カッツォが麒麟、お前は……アシスト、ってところか？」

「ご明察、アレと戦った結論として私はねサンラク君、キミじゃないとウェザエモンの攻撃には対処できないと思ってるんだ。プロゲーマーに反応速度で三割勝ちを取れる君じゃないと……ね」

「それはいいけどなんで俺が馬担当なんだ？　ロデオなんて別に得意じゃないけど？」

「カッツォ君さ、確かキャバクラやってたよね？」

「キャバクラ？」

キャバレークラブ……ではなく、多分ゲームの略称なんだろうが知らない名前だ……成る程、クソゲーではないのだろう。カッツォに関係するということは格ゲーなんだろうけど……肉体的に鍛える必要がなく、それでいて素人でもプロボクサーのような殴り合いができるようになる今の格ゲーはＶＲゲームの中でも人口が多い一大カテゴリだ、それ故に国内国外を問わず大量の格ゲーが発売されている。

その中でもクソゲー、かろうじて凡ゲーに限れば俺でも心当たり

はあるが、それ以外の良ゲー神ゲークラスとなると流石に名前を朧げに記憶に引っ掛けてる程度だ。

「そこまで調べたのか……分かったよ、その騏驎ってのは俺が受け持つ」

カッツォは再び茶菓子を口に放り込むと、本格的に熟読の体勢に入る。

「しかしそれでも三人は少なすぎないか？　俺的には五人は欲しいところだが」

具体的には騏驎対処にもう一人、アシストの鉛筆戦士に加えてより直接的なバフ強化、可能ならデバフ援護をする魔法職が欲しいところだが。そんな意味を込めて問えば、返ってきたのは苦笑を浮かべた答え。

「バフ援護なら期待できないよ、少なくとも一度十人がかりで一人を攻撃バフガン盛りにしたけどそれでも惨敗……いや、完敗だったからね」

レベル制限によるオワタ式強制、追加Ｍｏｂ、合体による手のつけられない暴れよう……幾ら何でも強すぎる。特殊勝利はほぼ確定と見ていいが、果たして何が条件なのかを確定させないと勝ちの目は薄いな。

「騏驎はカッツォが、ウェザエモンは俺が対処するとして、お前は？」

「遊撃としてアシスト入れたり、戦線崩壊を防ぐのに徹するつもり。

私じゃウェザエモンは止められないからね」
実質二人で戦線もクソもないだろうが、どちらかが崩れればそこで終わり、というのは事実だ。
「じゃあ次に具体的な進行の説明を……」

「……と、こんな感じで「時間経過」が勝利条件という前提で私達は墓守のウェザエモンに挑む」
ウェザエモンの戦闘スタイル、フィールドの特徴、騏驎の攻撃判定……諸々を話し合い、気づけば日付を跨いでいた。
墓守、という名前から特定オブジェクト……おそらく墓になんらかのアクションを取ることが勝利条件ではないか、と議論があったりしたものの、下手に墓守が守る墓に手を出して発狂モーション突入！　とかされても困る、ということで徹底耐久による挑戦という結論になった。と、ここで俺はふと思い浮かんだ疑問を口に出す。
「ああそうだ、今俺ＮＰＣがパーティに入ってるんだがどうしようか？」

「ＳＦ－Ｚｏｏのリーダーがヤバい顔してて見てた例のウサギちゃん？」

「いいなーユニークいいなー、俺もなんかユニーク見つけたいなー」

ドヤ顔かましたらプレイヤーブックで殴られた、本の角はやめろ本の角は！

「うーん、外した方がいいと思うよ。シャンフロは……」

ＮＰＣはリスポーンしないから。

なんとなくそんな予感がしていたとはいえ、鉛筆戦士の言葉は俺の中にストンと突き刺さる力を持っていた。

刹那に想いを込めて　其の二（後書き）

キャバクラ、正式名称キャバリー・クライシス
「騎兵同士の格闘ゲーム」という新しいタイプの格ゲーであり、動物愛護の点から馬が槍で突こうがビームを撃ち込もうが常時無敵モードであることを除けば中々の高評価を得ている良作ゲーム。
プレイヤーは体力が０になる、もしくは騎馬から落ちることで敗北し、従来の格ゲーと同じくゲージを溜めることで超必などを放つことができる。
ちなみにエイプリルフールにはペガサスに乗って空中対戦、というネタアップデートをしたら想像以上に反響が大きかったため正式に実装された……という話があったりなかったり

刹那に想いを込めて　其の三

「んんん……最近はシャンフロしっぱなしだったから身体が鈍ったなぁ……」

袖をまくったジャージ上下というファッションのカケラもない格好でジョギングしながら俺は乱れる息をなんとか整えようと苦心する。

ゲーマーは身体が資本、フルダイブゲームはその特性上筋肉が衰えやすい。故にプレイヤー自身のリアルのステータス管理をおろそかにするとゲームにも影響が出てしまう。

だからこそ、俺は買い物に行く時はわざわざ少し遠い三件先のコンビニに走って行く。例えそれが炎天下の中でも………正直少し後悔している。

「あっつ………」

照らす日光は燦々……というよりもギラッギラに熱と光とを地上に叩きつけ、アスファルトは負けじと下からも熱を発する。意地はらなくていいから負けてくれ、夏場に床暖房する意味はないんだよ。

身体からスリップダメージの如く水分が減少しているのを体感しつつ、俺はようやく見えてきたコンビニへと駆け込む。

「あ゛あ゛ー……」

冷房最高、人類はもっと大自然に反逆すべきだね全く。ジャージの袖で汗を拭いながら、俺は店内を歩き始める。とりあえずエナジードリンクがそろそろ切れかけてるし、これから二週間はハードス

ケジュールだ、２ダースは買っておきたい。

「ん？」

　ふとこの場にいないはずの人物が見えたような気がして、振り向いてみればそこは雑誌コーナー。様々なカテゴリの雑誌が並ぶ中、俺が目を留めたのは一冊の雑誌だ。

　そこにはいつもの人を小馬鹿にする笑みとは真逆の好青年！　と言った涼やかな笑みを浮かべる青年の写真が。

「週間VRフルダイバー、特集「プロゲーマー魚臣（うおみ）　慧（けい）独占インタビュー」ねぇ」

　魚臣（モドルカッツォ）　慧に何をインタビューするのか気になるところだ。あいつ無意識かつナチュラルに毒吐くし編集する人は大変そうだ。

　興味を惹いたのはつい数時間前までユナイト・ラウンズでひたすら茶菓子を口に放り込みながら二週間後の戦いについて共に作戦を立てた友人の名前だけで、それ以外の神ゲーの情報にさほど興味は……って。

「シャングリラ・フロンティア夏の大型アップデート、鉛筆戦士が言ってたのはこれか……」

　そうだな、今俺は神ゲーをやっているんだ。こういう雑誌も読むようにしないとな……そんなことより「週間クソゲーマー」とか発売されないかな、無いか。

「ふぅん……ふむ、成る程新エリア「断絶の大海」に「開拓船団」、まだ見ぬ「新大陸」……新職業「ライダー」ねぇ」

ゲーム内のスクリーンショットと思しき写真には、人の手が入っていない大自然や森の中に微かに見える奇妙な輪郭の人影、何かが浮上しようとしている海面と、見るものの好奇心を強く刺激する光景が煽り文句と共に何枚も掲載されている。

これを夏にやるってのが上手い、新規プレイヤーを引き込む方法ってのを熟知している。クソゲーはそういう広告関連も残念な事が多いからな……へぇ、それ以外にも幾つか修正が入るのか。

「何々……ほう、ふむ……」

おっといけない、つい読み込んでしまった。戻り次第色々用意をしないといけないんだ、さっさと買い物を終わらせないと。俺は買い物カゴの中にエナジードリンクを十二本入りのケースを二つ、ガッシャガッシャとカゴに入れていく。ああそうだ、菓子類も買っておくか。

「これで」

「8930円になります」

お財布の中にいる諭吉さんを一枚犠牲に、やたらに重いビニール袋と釣り銭を受け取る。昨今では電子マネーが幅を利かせているが、やっぱりリアルマネーの方が金銭をやりとりしているようで好きだ。紙一枚が何千倍もの重さに変わる感覚は中々こう、良い。

「さて、帰るか……」

「あ、あのっ！　陽務君……ですよねっ！？」

「ん？」

陽務という名字がそう何人もいるとは思えない、つまりこれは俺を指し示しているのだろう。既にコンビニから出てしまったために茹だる暑さに蝕まれる身体で振り返れば、そこには涼やかな白いワンピースを着た一人の少女が。なんだっけあの髪型、人の名前っぽい……バブリーデブ？　違うか。
いやいや、それ以前に名前だ名前。完全に初見ではない、どこかで……あ、そうか確か同学年の…………えーと…………ヤバい、早く思い出せ俺。

「えーと…………………斎賀さん？」

「は、はいっ！　斎賀です！　斎賀　玲ですっ！　き、奇遇ですねこんなところで！」

「さ、さいですね」

この炎天下故か、顔を真っ赤にした斎賀さんがブンブンと手を振って自己アピールする。あ、なんかエムルが頭によぎるな…………………ああ、だんだん思い出してきたぞ。斎賀　玲、確か高一の時は同じクラスで今は隣のクラスの人だったかな。新学期にクラスメイトが「何故斎賀さんと同じクラスになれなかったぁぁぁぁぁ！」とか嘆いてたな。
あの時はクソゲーメーカーが満を辞して発売したスクショの時点で地雷臭がする新作ゲームに思い馳せてて話半分だったが、案外覚えてるものだな。

「そ、そそのっ！　今日は暑いですねっ！」

「確かに、まだ七月でこれじゃ八月はもっと酷いことになりそうだ」

本格的に外出たくねぇな、通販でエナジードリンクとか注文しようか……いやいや、流石に不衛生すぎるか？　でも暑いからなぁ……

「ええと、ええと……ず、ずいぶんと重そうですけど何を、ご購入されたのですかっ!？」

「え？あー、エナジードリンクだよ。ちょっと二週間くらい缶詰でゲームするつもりだから……」

「もっ！」

も？

「もしかしてっ！　シャングリラ・フロンティアですかっ!？」

何故分かったし。俺は怪訝な目でそのうち跳ね出しそうな斎賀さんを見つめるが、よくよく考えたらゲームに詳しくない人からすれば「ゲーム＝シャンフロ」でもおかしくないな。今のシャンフロはそれくらいの知名度を持っている。

「あーうん、まぁそうだね」

「そ、そのっ！……………………」

突如としてフリーズした斎賀さん。処理落ちめいたその動きに俺は思わず一歩後ずさる。ゲーム内だからこそ苦笑で済ませられるが、リアルで見ると中々にアレだな、怖い。

「わ、わたひも、シャンフロ……やってる、です……」

「へぇ」

なんか旧家の出身だとか、めっちゃヤマトナデシコだとか色々聞いた……気がするし、花道とかやりながら茶道同時進行するみたいな生活してるもんだと思っていたが、ゲームとかやるんだ。

「も、もしよけれ……っぱ！　い、いっひょに……」

あ、メールだ。

「ごめん、ちょっと失礼」

「あひゃいっ！」

やっぱり鉛筆戦士か、何々……「はよこい」？　どんだけスパルタ強行軍するつもりなんだよ、もう少しゆとりのある買い物をさせてくれよ……うわ、連続メールはやめろよ！　メールボックスが凄い勢いで未読メールで埋まっていく！

「あー、斎賀さんごめん。フレンドに急かされちゃったからこれで……」

「あ、はいっ！　お引き止めしてごめんなさいっ！」

謙虚な人だな、別に謝る程の事でもないだろうに。いや、こういう気配りが社会人として重要なんだろうか。俺は小さく手を振りつつ、帰宅のために駆け出すのだった。

「ああそうだ」

斎賀さんがシャンフロやってるなら、プレイヤーネームとか聞いておけばよかったなぁ。

嫌がらせの如く送られてくるメールに若干キレつつも、ログインすればそこはラビッツのベッドの上。

「おはようですわ！」

「あー、うんおはよう」

あいも変わらずテンションの高い垂れ耳兎(ロップイヤー)に挨拶を返しつつ、俺は鉛筆戦士に言われた言葉を思い出す。

「NPCはリスポーンしない、かぁ……」

リスポーンとはゲームという娯楽にとってあって当然の機能である。たった一度しか遊べないゲームなんてものがあったとしたら、それはゲームとは呼べないだろう。というか「ゲームオーバーした

らデータ抹消」というゲームは実際にあった、世間からの評価は察するが。
リアル寄りのデザインのくせにやけに感情表現が激しいエムルを見ながら俺は考える。俺が二週間後に挑むのはユニークモンスター「墓守のウェザエモン」、夜襲のリュカオーンと同じカテゴリに属するそれが隔絶した力を持っていることは火を見るよりも明らかだ。
もしその場にエムルを連れていけば、高確率でエムルは死ぬだろう。というかパーティメンバーとして扱われている以上、参加人数が増えるのは鉛筆戦士の計画にズレが生じてしまう。とかなれば、事前に話しておくべきか。
「なぁエムル、実は話しておかないことがあってだな」
「なんですわ？」
「実は二週間後に墓守のウェザエモンとかいうのにケンカを売ることになってだな、その時は一時的にパーティ解散するかもしれん」
それを無理やり言語化するなら、「ビョッ！」「ゴヅン！」「ぼすっ」だろうか。
つい先ほどどこかで見たような数秒のフリーズの後、ギャグのような跳躍力で天井に激突したエムルはベッドの上に落ちて、そして頭を抱えて悶絶し始めた。
「ほぁぁぁぁぁ……っ！？」
「だ、大丈夫か？　薬草いる？」

「う、ううぇ、ウェザエモンんんん！？」

「お、おう」

「お、おとーちゃんに知らせてきますわぁぁっ！」

「うおっ」

普段の運動嫌いは何処へやら、転がるようにしてエムルは部屋を出て行った。やまびこのように「ですわー…ですわー……ですわー……」と響いているのはちょっとだけ笑えたが、何かフラグを踏んでしまったのか？

「んー、後で鉛筆戦士……こっちじゃペンシルゴンか、二人に謝っておかないと」

直感だが、このイベントは外してはいけない気がする。

エムルが「おとーちゃんが呼んでますわ！」と戻ってきたのは大体五分ほどしてからだった。
なにやらパニック状態のエムルに連れられ、ヴァッシュの元へと行ってみれば、いつにもなく険しい顔をしたヴァッシュがそこにはいた。
まずったかな……何か地雷を踏んでしまったか？　好感度が下がるようなフラグを立ててしまったのなら鉛筆戦士のせいなので俺は悪くない。

「おう……エムルから話は聞いたがよう、お前さんの口から聞かせ

てくれや………あの死に損ないに喧嘩売るってぇのは……本当かい？」

「あー、ええ、厳密には俺の友人が挑むのに手を貸す感じですかねぇ」

死に損ない、か。俺は墓守のウェザエモンについて、そこまで多くは知らない。だからこそ、リュカオーンの時もだったがやけにユニークモンスターについて詳しいヴァッシュの言葉は記憶に留めておく。

「おめぇさんも分かってんだろう？　おめぇさんはまだ弱ぇ(よえ)ってことくらいよう」

「そうっすね」

レベル31だからな、準備期間無しに挑めばまぁ九割九分九厘即死だろう。肉盾にすらなりはしないのは確定だ。

だが、ここは重要だぞ。NPCからの質問は高確率で好感度やフラグに影響する、この場で求められるのは「二週間あればパワーレベリングできるし事前調査でメタるんで無問題っス」なんてプレイヤー的な言葉じゃない。

世界観とキャラクター性に基づいたロールプレイング、それがこの状況でのベストアンサーだ。

さぁどう答える？　まずはシチュエーションの確認からだが……

「わざわざ死にに行くような真似をする自分を引き止める強キャラを説得する」？　いいぞ、割と良く見るシチュエーションだ。問題は何を根拠にどのようにして説得するかだが……いや待て落ち着けサンラク、お前はあの悪夢(フェアクソ)を乗り越えた男だ。どれだけフェアリアにおべっかを売り、他のパーティメンバーの好感度操作に苦心した

と思ってる。
記憶から言葉を集めろ、ヴァッシュのキャラクター性を思い出せ、俺の立ち位置を、キーワードはヴォーパル魂……っ！
「……別に俺は、「勝てる」という確信があって挑むわけじゃあないんです兄貴」
「ほう？」
単語は繋がった、文章は出来た。見せてやるぜ俺のロールプレイング！

刹那に想いを込めて　其の三（後書き）

【速報】ヒロインちゃん、フレ登録で満足してたらリアルでイベント発生し無事死亡【恋愛クソザコ廃人】

刹那に想いを込めて　其の四（前書き）

作者は地元以外の方言というものをウィキペディア知識でしか知りませんので、基本的に訛っているキャラクターは「なんちゃって方言」です。人によっては非常にもやもやした言葉遣いかもしれませんが、ご了承ください。

吟遊詩人をご存知だろうか。ファンタジーものなら大抵酒場とかで楽器片手に英雄譚を唄うアレだ。

中にはプレイヤーのジョブとしてバフなどを得意とする魔法職だったりもするが、重要なのは設定面の方だ。

ああいった、誰かに物語を語る上で大切なのは「真実をどこまで派手にするのか？」という点だ。過剰に膨らませれば爆ぜて破綻してしまう、だからこそ「いや流石にそれはありえないだろ」と「ありえない……いやでも英雄ならできるかも」の境界線の見極めこそが話を膨らませる上で大切なことだ。

故に、今この状況でヴァッシュに対して俺が何かを語るのであるならば、それは真実に基づいた上でよりドラマティックに、よりロマンティックに、そしてよりダイナミックにしなくてはならない。そして俺には一つ強みがある、それはヴァッシュがＮＰＣ、それも広く知られていないユニークＮＰＣだということ。つまりペンシルゴンの計画を漏らしても問題がないということだ。

「……別に俺は、「勝てる」という確信があって挑むわけじゃあないんです兄貴」

「ほう？」

「さっきも言った通り、俺はあくまでもサブ……補助、主幹となるのは俺の知り合いです」

まずは己の立ち位置の説明。墓守のウェザエモンに挑むことが私

利私欲ではなく友人への助太刀であることを示す。

「今、墓守のウェザエモンがどういう状態かご存知ですか兄貴？」

「いや？　奴に会ったのも相当前だからぁよう」

「今奴は、えーと……さ、殺人鬼集団？　を育成する為の道具としていいように扱われています」

ＰＫ、って言っても通じるかどうか分からないから別の例えにしたが、流石にちょっと酷いかな？　いやでもこれ以外に例えようがないし……あっ、ならず者とかにしておけばよかったか。

「此度のカチコミの発案者はそのならず者の中の一人ですが……そいつは墓守のウェザエモンを本気で倒すつもりです、その為にあらゆる手を尽くしている」

じゃなきゃ俺もモドルカッツォも計画に乗ったりはしない。少なくとも、奴に渡され今はテキストファイルとして携帯端末に入っている「計画書」はギャグやネタで済まされるような作りではなかった。これで盛大なドッキリだったら俺は奴と縁を切るよ。

「手を尽くして勝率は…………まぁ良くて四割程度、いや三割ですかねぇ」

「そりゃあ無謀ってやつじゃねえのかい？　俺ぁ死にに行くことをヴォーパル魂と言った覚えはねぇぜ？」

「ご尤もで。しかし友は……いや、俺ももう一人も負けるつもりはありやせん」

ここが山場だ。演出はドラマティックに、言葉はロマンティックに。挑戦の二文字で済む説明を限界まで薄く伸ばしてピザみたいに具材（演出）で彩れ。

「俺も、もう一人も……そいつの勝ちたいって心意気に力を貸すんでさ。俺達は死んでもベッドに戻りますがそういうことじゃあない。機会は一度きり、勝っても負けてもこれが最後と言ってのけた彼奴に力を貸してやるのが仁義ってもんだと俺は思うんです」

「成る程、なぁ……仁義を出されちゃあ俺も弱い」

キターーーーーー！　これはイイ流れだぞ！

「だがおめぇさんが弱い事実に変わりはねぇ、そこんとこ……どうなんだよう？」

「二週間、それが墓守のウェザエモンに挑むまでの猶予。俺ももう一人の協力者も未だ木っ端の未熟者ではありやすが……間に合わせます。未熟者の不遜な蛮勇を、挑戦者の強者へ挑む度胸になるまで」

個人的には及第点のロールプレイだが、果たしてどうだ……？

極論言えば別にヴァッシュの許可とか必要ないが、ラビッツからの好感度とウェザエモンへの挑戦を両立させる為にはここで成功フラグを立てなければならない。

ただ一つネックなのは、やけにユニークモンスターに親しいヴァッシュの背景がイマイチ判明していないこと。俺の中ではほぼ確定で例の明らかになっていない内の一体だと思っているが、もし仲間意識とかあったら割と詰みだ。その場合は土下座コマンドを連打せざるを得ない、最悪ケジメコマンドもかな？

「…………おめぇさんの言い分は分かった」

「っ！」

「話を聞いた時ぁ、ヴォーパル魂を勘違いしたもんかと思ったがよう……おめぇさんの中のヴォーパル魂はくすんじゃあいねぇ。おめぇさんの覚悟、確かに俺等（おいら）ぁが見届けた」

心の中の俺がくす玉とクラッカーをスタンバイしている、来たか？　来たか…………？

「可愛い娘の頼みもある、ちぃとばかし俺等（おいら）も力を貸してやろうじゃねぇか」

パンパカパーン！　とくす玉が割れて中から「祝！　グッドコミュニケーション！」と書かれた垂れ幕が露わになり、紙吹雪の中でクラッカーが鳴り響いた。

よっしゃ見たかフェアリアァッ！　一々好感度上げる為に飯か金品を貢がないといけないオメェと違ってちゃんと話せば理解してくれるのが神ゲーなんだよ分かったかオラァ！

「ありがとうございやす兄貴！」

何か忘れてる気もするが今はグッドコミュニケーション&助力フラグを成功させた余韻に浸ろう。

ヴァッシュは立ち上がると、ノッシノッシと何処かへと歩いて行く。手をくいくいと動かして……あ、ついて来い？

「あいつはよう、不器用なやつさ」

あいつ……？　あ、ウェザエモンの事か。世界観方面から奴の情報を得られるとしたらデカいな、直接的な攻略の情報ではない会話の中にギミックを解く鍵が隠されていることはままある。俺は気を引き締め、ヴァッシュの独り言にも思える言葉に耳をすませる。

「下手くそな嘘のせいで女房を失っちまって、糞真面目で加減をしらねぇもんだからああして死ぬに死ねねぇ身体になってまであの場所に立っているんだぁよう」

死ぬに死ねない、可能性としてはアンデットか？　あれは死んだけど死んでない、の方が正しいかもしれないがどちらの意味でも間違ってはいないだろう。

「俺等ぁが会った時はまだシャンとしてたぁがよぅ、今となっちゃあ不器用な誓いだけで動く生きた屍よう……」

「……それでも俺は挑みますぜ？」

「おう、やってやれ。あいつぁもう自分で倒れることができねぇ、なら誰かが張り倒して寝かせてやんなきゃならねぇ……俺等はあいつらにゃあ手を出さねぇと決めてるんだぁ、おめぇさんがやるってぇなら止めやしねえ」

「…………」

ヴァッシュは他のユニークには手を出さない、と。それぞれ設定はともかく相互不可侵みたいなものがあるのかな？　とはいえ墓守

のウェザエモンを倒すと言っている俺に手を貸してくれる辺り、完全に関わらないというわけでもないみたいだし……うぅむ、こういう時考察勢の知り合いがいればと思わなくもない。カッツォもペンシルゴンもプレイヤーとしてのガチ勢だからなぁ。

「おう、着いたぜ。ここを使うのはいつぶりだったか……おうおう、ちゃあんと掃除してあるじゃあねぇか」

「そりゃあオヤジに掃除を任せちょうたら炉が埃で詰まっても放置するけぇのう」

「おうビィラック」

「ビィねーちゃん！」

辿り着いたのは、こじんまりとした……鍛冶場ってやつか？　セカンディルで湖沼の短剣を作ってもらったオッサンの鍛冶場や、武器を修復してもらっただけだったがサードレマの鍛冶場と比べると、何というか……なんだろう、説明しづらい違和感を感じるがともかく炉があって金床があって金槌があって……ここは間違いなく鍛冶場だ。

そして、ヴァッシュとエムルの反応からしてヴァッシュの娘でありエムルの姉なのだろうビィラックなる黒兎が鍛冶場で二匹と一人を出迎えた。というかビィラック、エムル、ピーツってもしかしなくてもＡｔｏＺで子供がいるのかヴァッシュ……？　思った以上に大家族だな、ヴォーパルバニー凄い。

（というか、もしかして全員違う語尾だったり訛りだったりするのか……？）

思わず口に出そうになったのをなんとか堪えて、俺はエムル以上ヴァッシュ以下の大きさの黒兎と目を合わせる。

「ワリャ、オヤジやエムルが言うとったサンラクけぇ……成る程なぁ、イーヴェルに似た目をしちょる」

やめろ！　これ以上新しい名前を出さないで！　せめてメモさせて！　もしくはウィキを作らせて！　えーと、ビィでイーでエムでピーで……頭痛くなってきた。

「ビィラック、真化をやる」

「！　……オヤジが久々に金槌握るんけぇ？」

「おう、あの死に損ないに挑むって言われちゃあ俺等ぁがやんなきゃあなぁ」

「へえ……待っとってな、今炉に火ぃ入れるけぇな」

なにやら作業を始めたビィラックをよそに、ヴァッシュは俺へと向き直る。

「おう、ヴォーパルの武器ぃ出しな」

「え、あー、両方？」

「おうよ」

言われた通りに致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）をインベントリから出すと、ヴァッシュはそれを受け取るとなにやら調べるかのように致命の包丁をじっ

と見つめる。

「おう、おう……ちゃあんと武器に認められてるじゃあねぇかい、これならイケるだぁな。おう、おめぇさん手持ちに何か素材を……おめぇさんが苦労して倒した奴の素材はねぇかい？」

とっさに思い浮かんだのは、人の足を喰い千切った挙句に厄介な呪いまで押し付けた黒狼の姿。だがあれは苦戦とは言わないだろう、良くて善戦……言ってしまえば悪あがきだ。

となると苦戦したモンスターと言えば泥掘り（マッドディグ）が次に思い浮かぶが、残念な事に泥掘りの素材である「潜泥（せんでい）の背鰭」は祭衣・打倒者（フェスタ・メジェ・カ）の長頭巾（フィエ）を買うときに金策として売り払ってしまった。

となれば……九分九厘瀕死でありながら最期まで逃げる事なく、本気で俺を倒すつもりで向かってきたあいつの素材以外はあるまい。

「苦戦……かどうかは微妙だけど、強敵だった奴の素材なら」

「ふぅむ……クアッドビートルの甲殻（ガワ）か、悪くねぇな」

アイテム欄からクアッドビートルの重甲殻を取り出してヴァッシュに渡す。アイテム化されたそれは結構な重さであるはずなのだが、ヴァッシュはビート板でも持つかのように軽々と持っていく。

角や顎ではなく甲殻にしたのは、奴と戦って何よりも厄介だと感じた点が、そのアホみたいな硬さとそれを活かした突進攻撃だと思ったからだ。

「ビィラック、炉はどうでぇ？」

「ぬくうなってきたけぇ、もうちいとかかるけぇの」

「じゃあよう、先に準備だけしちまおうかい」
ノソノソと壁に吊り下げられた様々な道具を選んでいるヴァッシュをよそに、くいくいとベルトを引っ張られる感触に振り向けば、ヴァッシュによく似た不敵な笑みを浮かべた黒兎が俺に話しかけてきた。
「ワリャ、運のええ奴じゃけえの。オヤジが金槌握るんのはここ数年なかったことじゃき」
「そうなのか？　えーと……ビィラック、だっけ」
「ん、アニキがラビッツのこくおー？とかいうのを継いだでな、わちぁオヤジの鍛治ぃ継いだんじゃ」
鍛治？
どうやら顔に出ていたのか、いつの間にか頭に登っていたエムルがペシペシと俺の額を叩きながら説明してくれた。
「そういえばサンラクサンは知らないんでしたわ！　おとーちゃ……けふん！　カシラは鍛治師なんですわ！」
「それもタダの鍛治師じゃあない、鍛治を極めたもんが名乗ることぉ許される「名匠」にして、失ぁれた神代の武器を鍛える「古匠」……そん二つを極めた「神匠」、それがわちらのオヤジじゃ」
目を輝かせるビィラックとエムル、そして俺が見る先、火が炎となった炉の前にいるヴァッシュが、金槌の音を響かせた。

刹那に想いを込めて　其の四（後書き）

職業「神匠」はプレイヤーも取得可能な職業ですが取得条件が尋常じゃなく面倒臭い隠し職業　（ユニークではない）です
手順１、職業「鍛冶師」を取り、最上位職業「名匠」に転職（クラスチェンジ）
手順２、サブで職業「考古学者」を取り、「メインジョブが鍛冶師、もしくはその上位職」の状態で特定アイテムを入手して隠し職業「古匠」に転職（クラスチェンジ）
手順３、両職業を取得した上で発生するイベントをクリアしてようやく隠し職業「神匠」を取得できる。

非常にシンプルに纏めると「ほぼ生産職だけで廃人レベルの努力を要求する」「エンドコンテンツもかくやな尋常じゃなく面倒臭い茨の道だが達成すれば勝ち組確定」って感じです

刹那に想いを込めて　其の五

「真化」とは
極めて優れた名匠ともなれば、ただ優れた武器を製作するだけではない。ただより優れた武器に強化するだけでもない。武器に宿る経験を読み取り、より相応しい形へと……即ち「真なる姿」へと変える技術である。

微妙に公用語が混ざったなんちゃって広島弁のビィラックの言葉をまとめると、大体そういうことらしかった。

「ヴォーパル……「致命（ヴォーパル）」を冠する武器は、強者への挑戦をこそ記憶するけん。ワリャが今まで戦こうてきた記憶と、ワリャがオヤジに渡した強者のカケラを混ぜぇその形を変えるんじゃ」

「ふぅん……」

ヴァッシュが金槌を致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）に叩きつけるたびに、火花と同時に魔法陣が浮かび上がる。それは吸い寄せられるように致命の包丁へと吸い込まれていき、そしてまた新たな魔法陣が火花と共に生じる。

「……い夜空に……の炎……」

「え？なん……おぐふぅ？！」

「サンラクサン！静かにす……きゃひう！？」

え？　なんて言った？
そう問おうとした俺の口は、脛に兎の脚力でローキックを食らうという実に脳筋(ダイレクト)な手法によって強制的に中断される。
おま……ＮＰＣが自発的にダメージ与えるのは……おま……っ！
思わず振り向けば、そこには兎というウサギ目ウサギ科の植物食という草食系生物であるにもかかわらず、ブラックパンサーもかくやと言った威圧を放つビィラックの姿が。
　頭を抑えて無言の悶絶をするエムルをバックに、肉食獣じみた威圧感を漂わせながらビィラックはただ一言。

「謹聴。」

「いや、おまえ……」
「謹聴(謹んで聞け)。」

「「……はい。」」

　漫才じみたやり取りなど聞こえていないかのように、ヴァッシュは金槌を振り続ける。騒音(俺とエムル)が静かになったことで、ヴァッシュの口から漏れ出すそれが歌であると気づく。

「昏い夜空に、炉の炎。
火花は生まれ、闇が舐め取る。
踊る金槌、歌う鉄。

トンカラカンと、コンキンカン。

お前は刃、お前は力。

土より出でて、木を焚べ、火を育み、金を鍛えて、水にて冷やす。

世界は巡り、しかして停滞る。

金より鉄を、鉄より鋼を、鋼より刃を、刃より剣を。

明ける夜空に、剣の輝き。

光を映し、闇を切り裂く。

踊る剣に、歌えや世界…………」

　…………なるほど、ＣＶが極道の親分みたいな渋い声じゃなくて、顔面触手宇宙生命体みたいなロリボイスであれば、一曲３００円くらいで売れそうだが、いかんせん短すぎるしボイスが親分系だし……いや、岩巻さんが去年くらいだったか、極道の女がテーマの乙女ゲーをクリアして暫く雰囲気が劇画調になってたっけ。つまり親分系ボイスでもきっとどこかに需要があるということで……要するに俺は今にも泣き出さんばかりの勢いで震えるビィラック程の感動は感じなかった、ということだ。

「で、説明とかもらえると嬉しいんだが（小声）」

「あれはおとー…カシラの「鉄打ち唄」ですわ、ビィねーちゃんはあの歌が大好きなんですわ（小声）」

ＡｔｏＺ全ての兎の好感度管理の必要性、という恐ろしい単語が頭を過ぎったのを頭を振って振り払う。流石に八方美人ならぬ二十六＋一で二十七方美人のギャルゲーはつらい。

十二人同時なら経験はあるが、あれはちょっともう、本当に思い出したくない。乱数調整を含んだ秒単位スケジュール、ひたすらストップウォッチで一秒ジャストを狙い続けるような苦行……ＲＴＡでもないのにＢＧＭのどのタイミングで話しかけるかなどの綿密なチャートを作り、コンマ一秒のズレでイベントの発生に失敗してそれを起点にドミノが如くヒロイン達の好感度が下がっていく……み、脈拍が不安定になる。

「か、顔色が悪いですわ？　大丈夫ですわ！？」

「大丈夫……ただ、ちょっとランチでイタリアンを選んだら巡り巡って何故か全員イタリアに留学してバッドエンドになったのを思い出しただけで……」

意味分からなすぎて数分動けなかったからな、生徒会長も風紀委員長も運動部のエースも不良も全員イタリアにピザ修行留学ってどういうことなんだよ、そら公式ＳＮＳも派手に炎上しますわ。

なんであれピザに関係する選択肢を選んだ瞬間にピザルートに直行する十二人のヒロインを相手にひたすら乱数調整する目押しスケジュールゲーム「ラブ・クロック」……うう、頭が。

「おう、出来たぜ」

「え？　あ、出来た！？　オッケオッケ、それはなにより！」

　脳内に染み出したフェアクソとはまた別方向でトラウマとなった記憶を目の前の情報で洗い流し、ヴァッシュの方へと向き直る。

「そうだぁな……致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）はここに真なる名ぁと姿を得た。その名も兎月【上弦】、そして兎月【下弦】だ」

「おぉ……！」

　調理器具を武器として使う、というギャップから放たれるホラーは何処へやら、ヴァッシュが俺へと手渡したそれは完全に調理器具から武器へとその姿を変えていた。

　食材を切ることに適した刃の形状は敵を斬ることに特化した姿へと変化し、殆ど同じ形状をしている【上弦】と【下弦】ではあるが、下弦の方はどうも上弦とは違って逆手持ちのようだ。

「武器としての形ごと変わっちまうのは久しぶりだぁ」

「形ごと？」

「こいつらぁよう、二つで一つの刃。両方揃ってて初めて意味を成す……「対刃剣」ってやつよ」

「対刃剣……」

　少なくとも今現在の俺の攻略度合いでは聞いたことのない名前だ。

「サンラクサンが前に欲しいって言ってた合体する剣ですわ」

「マジですわ！？」

「真似っこー！！」

なんたる偶然、まさに僥倖。あれだろうか、無意識的にあの合体ハサミ双剣欲しいなぁ欲しいなぁと考えていたのが致命の包丁に染み付いていたのだろうか？　ともかく俺は念願の合体双剣、もとい対刃剣を手に入れ…………ちょっと待て。

今、俺の記憶の片隅で何かが語りかけてきたぞ。何か忘れてないかって…………

「サンラクサンは好奇心旺盛なんですわなぁ、アレは相当技量が無いと扱えないんですわ。」

「マジかよ技量戦士になります。」

「アレは相当技量が無いと扱えないんですわ。」

「技量が無いと扱えないんですわ。」

震える手で、受け取った兎月の上・下弦をインベントリに入れて、説明欄を読む。

兎月【上弦】
対刃剣
対となる刃の名は下弦、空に浮かぶ上弦三日月の刃を持つ剣。致命兎の魔法が込められたそれは、真の姿を未だ叢雲に隠している。
・自身よりレベルの高い相手と戦闘する場合、クリティカル攻撃に成功するとＨＰを減少させる代わりに次の攻撃の威力に補正がかかる。
・一定回数クリティカル攻撃を当てることで合体ゲージが蓄積される。
・必要ステータス「ＳＴＲ４０」「ＤＥＸ５０」「ＴＥＣ５５」

兎月【下弦】
対刃剣
対となる刃の名は上弦、空に浮かぶ下弦三日月の刃を持つ剣。致命兎の魔法が込められたそれは、真の姿を未だ叢雲に隠している。

・自身よりレベルの高い相手と戦闘する場合、クリティカル攻撃に成功するとＨＰが回復する。
・一定回数クリティカル攻撃を当てることで合体ゲージが蓄積される。
・必要ステータス「ＳＴＲ４０」「ＤＥＸ５０」「ＴＥＣ５５」

オチツケ……落ち着け、簡単な算数の問題だ。別に世界の真理に挑むような数式を解けってわけじゃあない。
ええと、必要ステータスの合計が１４５で？　今の俺の該当ステータスの合計が５２で？　引くことの９３で？　１レベル上がるごとに5ポイントだから5で割って大体１９レベル分の………うん、丁度レベル５０まで上げれば装備できるな。

「ノォォォォ………ッ！」

「サ、サンラクサーーーン！」

まさかのステータス制限という伏兵に、俺は呻き声と共に膝をつくのだった。

あれ程苦心して脱出したサードレマへ戻る、というのは少なからず複雑な感情を抱かずにはいられなかったが、カッツォの奴がようやくサードレマに到着したばかりである、という理由からシャンフロでの待ち合わせはこの大都市になってしまった。
再びサードレマで未確認生物騒ぎを起こしても面倒なので最短コースを最速で走り抜けて今現在、俺はサードレマの裏通りにひっそりと開店しているペンシルゴンオススメのＮＰＣカフェ「蛇の林檎」の中で、ニッコニコのペンシルゴンと相対していた。

「さてリアルじゃ間違いなく１１０番待ったなしのサンラク君、その変態的ファッションもさることながら三時間近く待ち合わせをすっぽ抜かした事について何か言い残すことは？」

「こっちのユニークでウェザエモンについての言及が」

「よし許す」

解決！
本当は別件で少し作業していたのだが、説明するのも面倒なのでユニークシナリオで一括纏めで説明する。

「いいなーユニークいいなー」

「やーい羨ましかろう……おいバカフォークはやめろフォークは！」

ＶＩＴ一桁になんてことしやがる、下手すりゃ致命傷だぞ。とはいえ少し大人気ない煽り方だったかもしれない、次はもっと奥ゆか

しく煽ってやろう。
明らかに喉を狙う気満々だったフォークを引っ込めて、ライトアーマーを着込んだモドルカッツォは味が薄いだろうにわざわざケーキなんて……ん？

「オイカッツォ？」
「ん？　あー、シャンフロの垢はこれだよ」
「追い鰹かよ」
相変わらずネーミングセンスがしょーもねぇなオイ！　そもそも魚と臣と慧（圣）で鰹ってのが既にシャレなんだよなぁ。
「お前が俺のプレイヤーネーム聞いて数秒くらい考え込む時は大抵「つまらんシャレだなぁ」とか考えてるんだろう？」
「ははは、何を馬鹿な」
「はいはい漫才はそこまでそこまで、とりあえずカッツォ君はそれ完食、サンラク君は情報を吐いてね」

しばらくオイカッツォがケーキをパクつき、俺が情報を話すだけなのでイベントスキップ。

「……と、まぁ直接攻略に役立ちそうなもんでもないが、「死に損ない」と形容されるってことは生きてたけど死んでるような状態、アンデット系のモンスターなんじゃないかってだけだ」

「…………そうだね、確かに思い返してみれば戦闘開始時は動きが硬かった。そうか、てっきりサイボーグ系とばかり思っていたけどアンデットなら納得できる点が……」

俺からすれば考察くらいにしか使えないんじゃ、と思っていたがどうやらペンシルゴンにとってはそうではなかったらしい。

熟考し始めたペンシルゴンだったが、思ったよりも早く思考の海から浮かび上がってきたのか、バッと顔を上げると俺とオイカッツォを交互に見る。

「私ちょっと用事ができたから夜まで別行動かも」

「まぁそれは構わないけど、じゃあ今日はどうするわけ？」

「とりあえずこれを渡しておくから、夜まで「神代の鐵遺跡」でレベリングしてて」

そう言って手渡されたのは、地図と……釣竿？　思わずオイカッツォと顔を見合わせる。話を聞こうにもペンシルゴンは既に店を出る気のようで、席を立ち上がり店の出入り口に行ってしまっている。

「行けば分かるから！　じゃあまた夜にここで！」

「行っちゃったな」

「せやな」

これ以上ここにいても仕方がないので、俺とオイカッツォも店を出て裏路地を歩き出す。は？表通りなんか歩いたら目立っちゃうだ

ろ？
　ただでさえ段々サードレマにもプレイヤーが増えてきたんだ、少なくともここで面倒ごとは御免だ。それ故にオイカッツォにも脛に傷でもあるかのようなコソコソ移動をやってもらう。幸いサードレマのマップ情報は以前覚えこんだのがまだ頭に残っている。三回道を間違えたけどセーフだセーフ。
　そしてようやっとサードレマを出て、千紫万紅の樹海窟へと続く道とは別の、森の中に申し訳程度に作られた道を俺達は進む。
「釣りでレベリングってどういう事だ？」
「今アイテム説明見たけど普通に釣竿だねこれ」
「お魚はお肉赤いのより白い方が美味いっておカシラが言ってたですわ」
「サーモンって白身魚らしいな」
「マジ？　今度チームメイトに教えてや……誰今喋ったの」
「エムル、「毛皮由来のマフラーのフリ」とかいう宴会芸はやめていいぞ」
「え、宴会芸じゃないですわ！　れっきとしたヴォーパルバニーに伝わる緊急隠密の……」
「うおおマフラーが喋った！？」
　突如喋り出した俺の首にくっついたモコモコにオイカッツォが叫ぶ。ああ、そう言えばオイカッツォは見るの初めてなんだっけか。

刹那に想いを込めて　其の五（後書き）

ここらへんからようやく主人公のガバが発覚してきます

Q．なんでエムル変身してないの？

A．カフェにたどり着くまでにＭＰ尽きました

「いいなーユニークいいなー」

「お前そればっかだな」

エムルの紹介をして、それがユニークに由来するものだと知ったオイカッツォは神代の鐵遺跡に到着するまで終始この調子だった。
エムルはと言えば俺の頭にへばりついて歩く労力を削減中、そのうち俺のステータスの職業が傭兵からウサギノコシカケとかになるんじゃないか？

「いいなーユニークいいなー、俺も兎をもふりたいなー」

「今現在ユニークのためにパワーレベリングするって事忘れてねぇ？」

「自分で見つけるのと他人が見つけたやつにに乗るのは別物だろー……お、あれじゃない？」

やんのやんのと「自発と助太刀の違い」について話していると、オイカッツォが一点を指す。視線を向ければ、そこには風化し劣化しているものの、これまでに見てきたエリア、文明とは完全に趣きを異なるＳＦの気配漂わせる「扉」がそこにはあった。
一瞬、「これ扉に入らずに先に進み続けたらどうなるんだろうか？」とさらに道の先を見てみたが、その程度は運営の想定なのか巨大な大地の亀裂によって神代の鐵遺跡を無視して向こうへ渡ることは無理そうだ。

なんだろうなこの亀裂、渓谷とかそういう長い年月で出来たものとは違う感じがするし……普通に地割れで出来たという設定にしてもなんか違和感が。

「はよ行こうよ」

「ん？　ああ……」

「斬新な開き方してるけど、自動ドアってやつ？」

「ねじ切れて歪んでいるのを開くと言えるならそうなんだろう。さて、中に入ったらまずは地下二階？まで行けとのことらしい」

「じゃあいこうか」

俺＆エムル、そしてオイカッツォは永い年月の経過によってその役割を放棄した扉を潜り、神代の鐵遺跡へと足を踏み入れるのだった。

「うわすっげぇ、ここだけ別ゲーみたいだ」

「黒い板がぐぃーん！って動いてますわ！」

「これに似た光景どっかで見た気がするんだけどな……ああそうだ、ブレイヴ・ギャラクシー・ファイターのラスボスステージだ」

「ちょっと知らないゲームですね……」

「全世界で評価されたＳＦ格ゲーの金字塔なんだけどなぁ」

神ゲーじゃないか、俺が知ってるわけないだろいい加減にしろ！
　実際クソゲー抜きに特定カテゴリばかりやってるわけでもないし、ましてや特定カテゴリの特定ゲーム内における特定ステージとか知ったことじゃないという。

「しかし、さっきまでファンタジーしていたのにいきなりコレかぁ」

目の前を通過した、浮遊する黒いプレート？らしき金属板を眺めてそう呟いたオイカッツォに、俺もまた同意の頷きを返す。
神代の鐵遺跡というエリアがこれまでのファンタジーを由来とするものであったとするなら、こちらは完全にサイエンスなファンタジーに由来するものだ。

風化しきった扉を越え、おそらく元々はエスカレーターだったのだろう所々が破損した歯抜けの階段を降りた先に待っていたのは、本当に前情報通りに「黒い板が空を浮遊する」広大な地下施設だった。
ただの金属ではない、サイバーな光の樹形をなぞりながら発光する金属板(プレート)は宙を浮遊し、時に別の場所に着地し、時に壁に延々とぶつかり続ける。
それだけでもゲームのエリアとしては及第点だろうに、ここを作った者はさらにそこへ荒廃要素を入れたらしい。
元々は金属のみが空間を構成するはずだったその場所はかろうじて文明こそ維持しているものの、風化によって生じた天井の亀裂から日光が差し込み、征服欲旺盛な植物がこのＳＦ空間にまで根を伸ばしている。

「こういう滅んだ系のエリアは個人的に好きだな」

「ああいう動くオブジェクトってバグると面白い挙動するよな」

「一回眼球丸ごと洗浄してそのクソゲーフィルター洗い落としてきなよ」

「サ、サンラクサン！　なんかこっち来てますわ！」

おや、どうやら久しぶりのパーティプレイではしゃぎ過ぎていたらしい。少しばかり周囲への注意力が散漫になっていた。

「エリアがエリアなら敵も敵か、警備ドローンとかそんな感じか……？」

丁度俺の頭の位置あたりの高さを飛行しながらこちらへと飛んで来たのは、正三角形の形をした金属の、どういう原理で浮遊しているのかよく分からないエネミーだった。なんて形容すればいいんだこれ……ＵＦＯの三角形版？

「どうするオイカッツォ」

「あー、とりあえず俺が殴ってみるよ。経験値欲しいし」

そう言うなり素手のまま飛び出したオイカッツォ。三角ＵＦＯは突っ込んで来たオイカッツォを敵と認識したのか、フリスビーよろしく回転しながらオイカッツォへと突っ込む。

「素直な動きだ、カウンター練習用のエネミーかな？」

そんな呟きが聞こえてきた次の瞬間、三角ＵＦＯが透明な壁にでも

衝突したかのように弾き飛ばされる。もしかしてあれレペルカウンターか？　他人が使うのは初めて見た。

「赤！」

なんだあれ、魔法か何かなんだろうが……オイカッツォの拳が赤いオーラに包まれた。そしてオイカッツォはノックバック状態で空中でグラつく三角ＵＦＯの真下に潜り込むように肉薄すると、重力に真っ向から逆らうかのように拳を振り上げる。

「クラッシュアッパー！」

「おー」

「い、一撃ですわ！？」

ただの素手によるアッパーではないだろう。あの赤いオーラがなんらかのバフを与えていることは明らかだが、一撃で体力全損か。
結局なんなのかよく分からないまま、三角ＵＦＯはポリゴンとなり、アッパーを振り上げた姿勢のまま余韻に浸るオイカッツォの拳から赤いオーラが消える。

「なんの職業だ？」

「修行僧（拳気使い）……いわゆるモンクだね。武器を装備できない代わりにバフで素手を強化しまくって殴る職業。ちなみに今のはＳＴＲとＶＩＴに補正入れる【拳気「赤衝」】って魔法」

「魔法職（物理）を公式がやっていくのか……」

もう少し俺も調べてから職業選べばよかったかな。拳にオーラを纏わせて戦う、というのは中々にかっこいい。
それに武器に依存せず、素手で戦えるというのは中々に魅力的だ。それに赤という短い単語で発動可能な魔法、というのはオイカッツォ自身と相性がいい、発生が早い的な意味で。
「でも武器の補正が受けられないのは結構痛いし、あんまり硬い敵相手だと逆にダメージ受けることもあるから、中々上級者向けかな」
「成る程ね……ちなみにステ振りどんな感じ？」
「軽戦士ビルド……からＡＧＩに振る分をＨＰとＶＩＴに振った感じ、カスダメ食らうこと多いからタフネスさを伸ばしてみた」
ここら辺は格ゲーマーの考えだな。オイカッツォのゲームスタイルは基本的にダメージを前提とした戦い方だ、要約すれば「やられる前にやれ」と言ったところか、ちなみに俺は「当たらなければどうということはない」だ。
カスダメで気づけば死にかけという危険性はあるが、回避スキルに使う分の時間やコストを攻撃に振れるのは中々大きい。
「サンラクは……ああ、言わなくていいよ。どうせ紙装甲ＳＴＲ・ＡＧＩ特化でしょ」
「残念！ＡＧＩ・ＬＵＣ特化の幸運戦士でした！」
「ヴォーパル魂全開ですわ！」
「ええ……てかヴォーパル魂って何？」

それは俺も知りたい。
その後も幸運というステータスの素晴らしさについて語ったり、調子乗って目的地までの敵の処理は自分一人で十分と粋がったオイカッツォが三体の三角ＵＦＯ……デルタユニットドローンＴ１式というらしいそれに囲まれて危うく死にかけたり、それについて煽り倒していたらオイカッツォがぼそりと「中々死なないしぶとさを持つ上にやたら速いってそれゴキ……」というつぶやきにあわやＰｖＰに発展しかけたりしたものの、俺達はステータス上は万全の状態で一先ずの目的地地下二階へと到達したのだった。

「荒廃具合が酷くなってるな、てっきり下に行くほど設備が無事なタイプかと思ってたんだが」

「下から崩落したんじゃない？底が抜けた鍋みたいに」

「その例えは微妙によく分からないが……」

一度周囲を見回し、他のプレイヤーがいないことを確認する。一応耳が良さそうなエムルにも周囲の索敵をさせたのち、俺はインベントリからペンシルゴンに渡された地図を取り出す。

「このフロアから隠しエリアに行くことができるらしい」

「隠しエリアねぇ……なんか俺って本来自分で探す要素を他者から提供されっぱなしな気がするんだけど」

「今のご時世ゲームプレイ前に攻略サイト見る奴だって珍しくはないんだ、気にするだけ無駄だろ」

ぶっちゃけストーリーネタバレさえ踏まなければ攻略サイトを見る

ことはそこまでナンセンスなことでもないとは個人的な考えだ。神ゲー良ゲーでもドツボにハマると延々と攻略できない、なんてこともあるし。クソゲー？　攻略サイト見ても意味が分からないしそもそも攻略サイトが無いかあっても極端に情報が少ない、以上。

「俺もユニーク自力で見つけたいなー」

「はいはい、ええと……こっちか」

真ん中に穴の空いたプレートの左側を通って亀裂を飛び越し、四方が欠けたプレートに乗って地下二階と三階の隙間へと移動しそこから先へ……

「面倒臭いわ！」

というか見つけた奴すげぇな！　どういうメンタルしてたらこれを見つけられるんだよ。というかペンシルゴンが見つけたのかこれ？

「うわ、今時フルダイブでここまで手の込んだ隠し要素も珍しい」

「壁を特定のリズムで叩いたら隠し通路が、とかありそうだな……」

ともかく、俺達がやるべきはこの七面倒くさいルートを進むことだ。

「……で、最後はこの穴に飛び込めと」

地図に書かれた行程通りに道とすら言えないルートを進み、俺たちの前に隠しエリアへの最後の行程として立ち塞がったのがこの大穴。元々地下ということもあって完全に底が見えない穴に飛び込め、と言われればフルダイブのリアリティもあって少しだけ怖気付いてしまう。

「実はこれ俺達を遠回しに暗殺するためのドッキリじゃないよね？」

「そしたらお前、あの鉛筆女はケジメ案件よ」

「ケジメ！おと、カシラもケジメは大事って言ってましたわ！」

あの極道兎のケジメ……知りたいような知らない方が幸せのような、いやいや流石にゴア描写マックスな事はないだろうが……うん、これ以上は考えないようにしよう。

「さて…………」

正直言って不安だ、俺とオイカッツォだけなら捻りを入れたバク転しながら飛び込んでもいいくらいだが、エムルがリスポーンできない以上はこう言った先の見えない危険には注意を払わなければならない。

「んー、じゃあとりあえず俺が落ちるよ。そんで無事ならサンラク達が来ればいい」

「……ありがとよ」

「ふきゅ」

どうやら俺の警戒を察したのか、オイカッツォはそう言うと俺の肩に移動したエムルの頭をポンポンと撫で、躊躇うことなく大穴へと飛び込んでいった。

「ふやぁ……カッコいい女の人ですわぁ」

「そうだな……いや、あいつ男だぞ？」

「……？」

ああそうか、見た目と声がアレだし勘違いしても仕方ないか。特にやつのシャンフロのアバターはあざといくらいの女キャラだし。

「あいつ、女顔だけど男だぞ」

「えええええ！？」

元々リアルが中性的だから奴はプライベートなゲームではよく女顔のキャラや女のキャラを使って遊ぶ。なんでも姉二人妹一人という紅一点ならぬ黒一点？　な家庭環境故にゲームを始めるまで趣味が女性的な物ばかりで……と、本人は遠い目をして語っていたことがある。

「せ、生命の神秘ですわ……」

「見た目だけ女のやつとかザラだろ」

「そういうのとはまた違う衝撃ですわ！」

さいですか。というかオイカッツォのやつが死んだかどうかをどう判断すればいいんだ？　あ、フレ登録とかしてなかったな。疑問から関係のない事へと思考が移り始めたその時、穴の奥から小さく反響する音が。

「…………れー…………」

「ペンシルゴンの遠回しの暗殺(ドッキリ)ではなかったようだな」

てかなんて言ってるんだあいつ。

「えーと、「はよ来いヘタレー」だそうですわ」

「上等じゃねぇかぶっ殺してやるあの野郎！」

「えっちょ、心の準備……ですわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」

一切の躊躇いなく、ついでに言えばエムルの心の準備が整うまでもなく、俺はエムルが剥がれないよう手で押さえながら穴へと飛び込んだのだった。

刹那に想いを込めて　其の六（後書き）

カッツォは女顔、というよりも歌舞伎の女形的な顔です。普通に男だけど女装したら予想以上に女にしか見えないタイプのアレです。

刹那に想いを込めて　其の七

どうやら穴は途中で滑り台のように斜めに曲がっていたらしく、いつの間にか落下から滑落、そして滑走へと切り替わって行き、最後はさほどでもない速度で穴の出口から隠しエリアへと滑り出た。そんな事よりも、

「死ねえ！」

「あっくそ！そうか兎の聴力で聞き取られてたか！」

流石にこんなくだらない事でプレイヤーネームを赤に染めたくないので素手で殴りかかったわけだが腐ってもプロゲーマー、余裕で回避されてしまう。

「全く……ここがシャンフロじゃなかったらフルボッコだったぞ」

「ここがシャンフロじゃなかったら悩んでるところを穴に蹴り落としてたよ」

「二人とも仲良く！仲良くですわー！」

はっはっは何を言うエムル、この程度平和な方だぞ。本気で敵対関係でゲームしてたら既に五回は互いに死んでる。

「ここがペンシルゴンの言ってた隠しエリア……「涙光の地底湖」か」

視線の先、地底に在する深い青色の湖からは雪のような光が立ち登り、ファンタジー的な突飛さこそ少ないものの、非常に幻想的な光景だ。この場所こそがペンシルゴンが指定したパワーレベリング用の曰く「ボーナスエリア」、神代の鐵遺跡における隠しエリア「涙光の地底湖」だ。

「ここで釣りをすることがパワーレベリングになるらしいけど……正直半信半疑だよ」

「まぁやってみれば分かるだろう、釣りをすれば分かるらしいし」

釣りゲーは個人的には苦手なんだよなぁ……いや、今までやった釣りゲー（クソゲー）がリアルを追求しすぎて三十分に一回くらいしか魚がヒットしないクソ乱数ゲーだったのが原因なんだが。

ちなみに全種釣り上げ&裏ボスのシロナガスクジラも釣り上げてトロコンした。リアル追求路線なのに釣竿で世界最大の哺乳類釣れるのはどうなん？　とは問うてはいけない。クソゲーの「リアリティ」は口約束よりも容易く破棄されるのだから。

「おっ、釣れた釣れた」

「幸運格差あり過ぎだろ！」

「お魚爆釣ですわ！」

ふはは、幸運マジ神ステ。未だに坊主（ボウズ）のオイカッツォの叫びに渾身のドヤ顔をかましながら、俺は六匹目の魚……魚？を釣り上げる。

・ライブスタイドサーモン
生命の潮流に住まう鮭。その身は食した者の体力を回復させ、その卵は優れた魔法触媒となる。
大いなる大地にも命があり、血と命が巡る。

見た目は薄く発光する銀色の鮭だというのにやたら壮大な説明文だ。鮭だと氷頭なますが好きだ。我が家では毎年父さんが鮭を釣って帰ってくるのでそれなりの頻度で鮭が食卓に上がる。

「幸運補正があるにしても釣れ過ぎじゃない……？」

「幸い、釣りのコツは偉大な師匠がいてね」

ワカサギからカジキまで幅広く釣ってくる偉大な師匠（父親）がな。俺が本格的にゲームを趣味にするまではよく父さんに連れられて魚釣りに行ったものだ、今思えばアレは間違いなく魚釣りの世界に俺を引きずりこむための光源氏計画的な謀略だったな。

「さて、とりあえず釣ってる訳だが……」

「サンラク、アレじゃないか？」

「な、なんか浮かんできますわ！」

来たな。俺とオイカッツォは釣竿をインベントリへしまい込み、戦闘体勢に入る。ゴボゴボと湖が泡立ち始め、水柱と共にそれは現れた。

「で、でっかい蛇ですわー！？」

「出たなライブスタイド・レイクサーペント！」

こいつこそがペンシルゴンの指示によれば「いわゆる経験値タンク」……この場合はタンクは壁役という意味ではなく貯蔵を指す、これから倒し続けるモンスターの名だ。

「長い！なんか略称考えて！」

「じゃあ鰻」

「身も蓋もないね！」

角があり、牙を備え、鱗に包まれたそれは要素だけなら間違いなくシーサーペント……所謂シーサーペント、ドラゴンに部類されることの多い海蛇モンスターの湖版なのだが、全体的に鋭角的というよりも滑らかな流線的なフォルムは鰻に角を生やしてドラゴンっぽくしたもの……というのが俺の印象だ。

初手は噛みつきを含めた突進か。俺とオイカッツォは簡単な動きでそれを回避すると、互いに攻撃を開始する。

「小手調べだ、最大火力で行ってみようか……「黒」！」
「トバすじゃねーかオイカッツォ……じゃあこっちも新武器のお披露目だ！」
致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）改め、兎月【上弦】及び【下弦】がレベルの問題上使用不可になったことで、使用可能な武器がセカンディルで作って以来ろくに強化せず使って来た湖沼の短剣オンリーになる、という問題を解決したのは「武器で困ったことがあるならワチを頼れ」というビィラックのありがたい言葉であった。
ラビッツにおける武器屋の解放に成功した俺は、とばっちりで壊滅するという憂き目に遭った哀れなエンパイアビーの素材から新たな武器を、そして湖沼の短剣の強化を行ったのだ。
「その名も「帝蜂双剣（エンパイア・ビーツイン）」！」
「ひゅー！かっこいいですわー！」
全体的に細身の刀身……下手に振り下ろせば折れてしまいそうな右の剣はビー・クイーンの素材が用いられたエストックタイプの剣であり、女王の甲殻を使った黄金と黒の意匠に針を加工した銀の刃のコントラストは、ビジュアル面でも優秀さを発揮している。
対照的に左の剣はマン・ゴーシュと呼ばれるパリングダガーの役割を持つ短めの短剣だ。女王配下のビーの素材が用いられたそれは右のレイピアに比べるといささか地味な印象を抱かせるが、右剣の攻撃を際立て、使用者を守るという堅実さが伺える。
個人的にこういう右と左で形が異なる双剣は大好物だ、その分フルダイブでは扱うのが微妙に難しいのだが。
「カッコつけてないで戦闘貢献してくれませんかねぇ！」

意気揚々と殴りかかったはいいものの予想外にレベルの差が響いたらしく、無駄にヘイトを集めて鰻の攻撃から逃げ回るオイカッツォの叫びに、俺は改めて帝蜂双剣を構えて鰻へと肉薄する。鰻の注意はオイカッツォへ向いている、攻撃のチャンスだ。

「さぁ、補正込みの火力を見せてもらおうか！」

スパイラルエッジのエフェクトを帯びた右剣の刺突が鰻の脇腹……脇腹だよな？　ともかく突き刺さり、螺旋にポリゴンが撒き散らされる。

だがそれだけじゃあない、この帝蜂双剣は右と左で異なる効果を持つ双剣。右の刃は刺突攻撃、及び刺突系スキルにダメージ補正が入るのに加えてもう一つの効果がある。

「ジィアアア！？」

「成る程、リュカオーンめ……こんな便利な効果をデフォルトで備えてやがったのか」

ビー・クイーンの針が持つ属性がそのまま武器の属性となった右剣の一撃を受けた鰻の脇腹は、通常の攻撃による損傷と異なり、肉が抉れるようにして損傷がそのまま残っている。ポリゴンで血や肉が見えないよう処理されているのは愛嬌だ。これは帝蜂双剣の右剣が備える「壊毒」によるものだ。

このゲームでは一部の武器やスキル、魔法……場合によりごく一部モンスターの攻撃などに「破壊属性」が付与されている。例えば剣を持った敵から攻撃を腕に受けた場合、破壊属性持ちでなかったら全力で斬り付けられたとしても基本的には大ダメージを受けるだ

けで腕が千切れ飛んだりすることはない。
だがリュカオーンの噛みつきだったり、一部には問答無用でプレイヤー、引いてはＭｏｂの肉体を完全破壊する攻撃が存在する。基本的にＨＰが尽きるまで通常武器で一点を攻撃し続けたとしても、腕が千切れる事はないが破壊属性を帯びた武器であればそれを可能とすることが出来る。

………プレイヤーキラーで悪用される以外思いつかないような要素だ。恐らくそういったプレイヤーへのペナルティ、カルマポイントと言ったか、アレが更に重く課されるなどの対処がされているだろうが。

話を戻そう、そんな破壊属性だがこの右剣の持つ「壊毒」はもう少し特殊だ。これは攻撃した部位を汚染し、スリップダメージのように徐々に破壊属性を適用させていくというものだ。さらに連続でヒットさせればさせるほどに壊毒は侵食し、スリップダメージの量は増えて行く。遅延型の破壊属性とでも言うべきか？
そしてスキル「スパイラルエッジ」は多段ヒットする攻撃であり、クリティカルも含めた全ヒット命中であれば。

「攻撃した場所に弱点を作れるって訳だ！」

まぁそう何もかも上手くいくわけではないのだが。破壊属性を適用させるにはそれなりのダメージを与えなければならないし、態々モンスターの手足を切り落とすくらいなら頭を殴り続けて倒したほうが早い。
というか破壊属性にせよ壊毒にせよ、敵Ｍｏｂやプレイヤー全てに無条件で効くわけでもない。精々元々部位破壊が前提のボスで便利……程度の代物である。

というのがビィラックの広島弁＋世界観に基づいた説明をプレイヤー視点で噛み砕いて理解したものだ。世界観的に「Ｍｏｂの抵抗力」を「モンスターの肉体の強靭」と言い直したりするのは分かるが面倒なんだよなぁ……ビィラックの言葉を翻訳する面倒臭さを思い出し、思わず口の中に苦味が広がるような感覚になる。

「サンラクサン！　サンラクサン！　思考の世界から戻ってくるですわーっ！」

「ん？　ああ戦闘ちゅぼぁっぶねえ！」

咄嗟に横っ飛びしなければ死んでいた。考え事は戦闘中にするものではないな！　うん！

「ちょっと集中切れてた、すまんな」

「お前に死なれると戦線瓦解するんだから勘弁してよ……な！」

「あいよ……っとぉ！」

俺とオイカッツォの同時レペルカウンターが鰻の顎をかち上げ、ノックバックを発生させる。

「さぁ、どんだけ経験値を落としてくれるか……鰻の三枚おろしだ」

「俺打撃系だから鰻の叩きになるね」

「タタキならみょうがが美味いぞ」

「唐突な飯テロはやめて！」

と、まぁカッコよく決めたはいいものの、隠しエリアだけあって中々レベルが高い鰻ことライブスタイド・レイクサーペントをレベル平均３０に満たない雑魚二人で倒すのは中々に骨が折れた。最終的にエムルに手伝ってもらいようやく倒すことができた。精神的な疲れから地面にへたり込み、ポリゴンとなって爆散した鰻を眺める俺達。

「タフネス……ほんとタフネスだった……」

「明らかに雑魚二人で倒す相手じゃあ……なかったな……」

「正直アタシの魔法受けててもピンピンしてる時は心折れそうでしたわ……」

だが、その分リターンも大きい。俺は新たに獲得した１０のステータスポイントを見て笑みを浮かべる。どうやらオイカッツォの方もレベルアップにより相当量のステータスポイントを獲得したらしい。

「なるほど確かに、これは美味いな」

「４レベルも上がったよ……レベルが低いことを含めても相当経験値をくれるみたいだ」

だがこれで若干心に残っていた疑心も晴れた。確かにここで二週間も戦い続けていればレベル５０……墓守のウェザエモンが指定する上限までレベルを上げることは容易いだろう。

「お、新しいスキル覚えた」

「おー」

「レベリング終わったら特技剪定所（スキルガーデナー）で連結（コネクト）できるか確かめないと」

「おいおい、いきなり別ゲーの話か？」

「えっ」

「えっ」

えっ？

俺とオイカッツォの間に奇妙な沈黙が降りる。

「いやいや、シャンフロじゃ自然習得したスキルを組み合わせて合体特技作るのは基本でしょ？仮にもスキルゲーなんだから」

「がったいとくぎ」

「えっ」

「えっ」

えっ……？
奇妙な沈黙から、互いに異なる感情と表情へと変わっていく。オイカッツォは「マジかこいつ」という驚愕と疑問が混じったものに、俺は「マジですか」という致命的な大ポカの判明による驚愕と乾いた笑み。

「……ファステイアで、チュートリアルあったでしょ？」

「……オレ、ファステイア、ファステイア、ヨッテナイ」

「えぇ……」

もしかしなくても……何か俺は、致命的に大事な要素をすっぽ抜かしているのではないだろうか？

「あー………ぶっちゃけ聞くと、そのスキルガーデナーって要素的にどれくらい重要？」

「必須……ではないかな、基本自然習得スキルが中々良スキル揃いだからそれだけでも戦うには十分だね、実際スキルガーデナー縛りするプレイヤーもいるみたいだし……だけど選択肢の幅が体感二倍くらい増える」

ああだめだ、目眩がしてきた。

「ニバイ……」

ここに来て特大のガバが判明した事で、色んな意味で心が折れそうな感覚に、俺は上を見上げる。

今だけは空も太陽も見えない洞窟が恨めしい。

刹那に想いを込めて　其の七（後書き）

Q．具体的に破壊属性武器でPKし続けるとどうなるの？
A．街の外でも確率で賞金狩人が襲ってくる上に、あまりに酷いPKをしていると賞金狩人が複数で殺しにかかってきます。さらにペナルティも重いです、新しく垢作って最初からやり直したほうが効率いいくらいのペナルティです

後で書き直しするかもしれませんが、とりあえず破壊属性に関しては某狩りゲーの「破壊王（部位破壊の蓄積値にプラス補正）」で考えて頂けますと助かります

そしてついに発覚する主人公の大ガバ、「スキル制MMO小説なのにスキル要素が薄いのは何故？」というかつて投げかけられた質問にようやく答えることができます。正解は「主人公がチュートリアルすっ飛ばしていた上に最低限の施設にしか寄っていなかったから」です
俗に言う「早くマルチ対戦やりたいからとストーリーモードやっていなかったせいで基本的なアイテム無しでやっていた」現象ですかね

刹那に想いを込めて　其の八（前書き）

ストックががが、毎日更新は最終防衛ラインですが文字数が減ったらお察しください

刹那に想いを込めて　其の八

　これまでずっと疑問だったことがあった、それはスキルの成長の違いだ。
　例えばレペルカウンター、これは元々フラッシュカウンターというパリングスキルがレベルアップと共にジャストパリィを経てスキルが変化したものだ。
　だが逆に、名前を変えることなくスキルの後ろにＬｖ．いくつ、と表記されるスキルも存在した。
　まぁそういうシステムなんだろう、と今までは深く気にも留めていなかったのだが、オイカッツォ曰く、自然習得するスキルは進化するものと強化されるものの二種類が存在するらしい。
　別のスキルに進化しない、熟練度が上がるタイプのスキル同士は各街に存在する特技剪定所（スキルガーデナー）なる施設で連結する事で別の合体特技（スキル）としてニコイチにする事ができるらしい。
　例としてオイカッツォは格闘系スキル「パワーストレート」とクリティカル率に補正をかける「クリティカルアシスト」を合わせる事でクリティカル時に一定確率で気絶効果を付与する「ノックアウター」を挙げた。

　それだけではなく、そのスキルが後どれくらいでレベルアップ及び進化するのかを教えてくれる、スキルを自然習得するためにどんな行動をすればいいかが書かれた秘伝書の販売などなど……おお、もうなんというか……今からゲーム開始時に戻れるならレベル１０ちょいの自分をＰＫしてファステイアに叩き込んでやりたい。
「控えめに言ってあれだな、今までバットを使わずに素手でボールを打っていたのが間違いだと気付かされた気分だ」

「その例えはちょっと意味不明だけど心中は察するよ、俺も最適コンボ見落としてたのに気づいた時とかそんな感じになるし」

天井を見つめたまま放心しかけた俺へとオイカッツォが慰めの言葉を投げかけるが、なんというかそういうのとは違うんだよなぁ……スナイパーライフルを持ってるのにスコープを使わずに撃っていたような……ああああああああ

「あああああああ……」

「サンラクサン、大丈夫ですわ……？」

「ちょっとモフらせて」

「へ？ぴゃあ！？」

モコモコモフモフを抱きしめながら、思考を切り替えるために今度はプラスな……自分を慰める要素を思い浮かべる。

まず第一に、今のスキル編成において連結可能なスキルは二つしかない事。これは仮に最初から特技剪定所の存在を知っていたとしてもそう大して利用することはなかったという事だ。

チュートリアル飛ばして大ガバしていたことの解決にはなっていないが、結果的には……という点で多少は慰められる。

「ふひゃ、くすっ、くすぐったいですわっ！」

次に知ったタイミングがウェザエモン戦前だったこと、少なくとも現状出来うる最善を欠いた状態でウェザエモンと戦う、という無

意識的舐めプをする醜態は晒さずに済んだ。

「み、耳は駄目ですわっ！耳ぃーー！」

最後に、全ての街に特技剪定所が存在すると分かったこと。それはつまり隠しエリアながらも通常の街と同じ設備を持つラビッツにもそれは存在するだろう、ということだ。

スキルというゲームシステムに深く関わる要素の施設、というどう考えてもプレイヤーが常に二、三人はいそうな場所に行くことは俺にとっては中々に困難だ、正直脛に傷がある訳でもないのに隠れるのはいい加減飽きて来たのだ。

が、それ以上にエムルやリュカオーンの「呪い」について問われるのが面倒くさい。ラビッツで利用できるならそれに越したことはない。

「おういサンラク君や、エムルちゃんがなんか形容し難い軟体兎と化してるから正気に戻りなさいって」

「ん？」

ふと視線を落としてみれば、頭から湯気でも出てそうな様子のエムルがぐでぇー……とでも形容できそうな脱力っぷりで気絶していた。

「きゅー……」

「なんかだらけきった猫みたい」

「猫ちゃいますわ！ヴォーパルバニーですわ！」

おお、復活した。

「ちなみに副業（サブジョブ）とか組合（ギルド）とか……」

「ああああああああああああああ！！」

「ぴゃあぁぁああああああああ！？」

どれだけ見落としてるんだ俺はぁぁぁぁぁぁぁ！！！

大変なミスをしてしまった時、精神的に心折れそうになった時、どうやって精神の均衡を保ちますか？

個人的に一番簡単な手段は、「思考停止して単純作業に没頭する」だ。問題からの逃走である上に事態が何も解決しない、というどちらかというと悪手寄りの手段ではあるが、今の俺にとってはこれが最善だ。

だから、釣った。釣って釣って釣って釣って釣りまくって、餌に

釣られた鰻を狩って狩って狩って狩って狩って狩りつくし……数度死にかけ、数度死にかけた鰹野郎を救出し、いつしかライブスタイド・レイクサーペントとのレベル差が縮まり、その挙動を俺もオイカッツォも把握し始めて……そして夜。

「うーん、私の見立てではあと二日はかかると思ってたんだけど、もうレベル４０かぁ……君達生き急ぎすぎじゃない？」

「違……あのバカが……現実逃避して……」

「そもそも現実逃避(シャンフロ)してさらに逃避ってどこに逃げてるの？」

「いや、うん……ちょっと頑張り過ぎた」

二人合わせてライブスタイド・サーモン七十四匹、ライブスタイド・レイクサーペント六体……俺はレベル４２、オイカッツォはレベル４０。

これがただひたすら鮭釣りと鰻狩りで現実逃避し続けた俺（と、そのとばっちりを食らったオイカッツォ、時々エムル）による本日のスコアだ。

「動きが単純とはいえライブスタイド・レイクサーペントは平均レベル４５はあったはずなんだけど、よく倒せたねぇ」

「はぁ？　お前ウチのエムルさんはレベル５６だぞ？」

「困った時のエムルちゃんマジ強いのなんの……」

終盤は経験値が分散して旨味が減るから、という理由で俺とオイカッツォ二人で戦っていたが、それでもエムルがいなければどちら

かは死んでいただろう。

「君達は本当、馬鹿だねぇ……いい意味でも悪い意味でも。まぁいいや、ほら立った立った、今日は満月なんだから……君達にユニークシナリオＥＸを受注させに行くよ」

「……一旦ログアウトしちゃダメ？」

「駄目です、そのセーブテントだって馬鹿みたいに高いのに回数制限付きとかいう畜生アイテムなんだからね！というか割と時間押してるの！」

オイカッツォが悲しげに見つめる先には、直方体の布によって面が構成された所謂レジャーで使用するようなテント……を中世の素材で作りました！　的なものが鎮座している。

曰く「廃人でもおいそれと買い占めはできない即席セーブポイントアイテム」というそれは、本来ならば街やラビッツのような拠点に存在するベッドの上でしかログアウトできない筈のシャングリラ・フロンティアのゲームシステムにおいて例外的にモンスターの出現するエリアでのセーブを可能とするアイテムだ。

「先の街は便利なアイテムが多くていいなぁ……」

尤も、「セーブする」「【座標転移(テレポート)】などのファストトラベル系の移動先に指定する」などで減少する回数制限がある上に、モンスターに襲われない効果があるわけでもない。

そのため、よほどの理由がない限りは【座標転移(テレポート)】でちゃんとした拠点に戻るなりしてセーブした方が安全かつ安上がりであるらしい。

幸いこの隠しエリアはサーモンを釣り上げ続けてレイクサーペントをおびき出さない限りは敵Ｍｏｂが出ないらしいので思う存分くつろいでも問題ないとのこと。

「つまり少しばかり休んでもバチが当たったりは……いてっ」

ペンシルゴンからの返答は無言で顔に投げつけられた、システム的に譲渡されたスクロールだった。

夜であっても千紫万紅の樹海窟の壁に根付いた苔達に光を抑えるという概念はないらしい。真昼間と変わりないような明るさの樹海窟を、三人と一匹が進む。

「しかしよりにもよって俺が攻略したエリアに隠しエリアが実はありました、ってのは個人的になんか悔しい」

「時間指定タイプの隠しエリアだから運ゲーだよ、見つけられなくても仕方ないよ、うん」

見つけた奴に言われてもなぁ、オイカッツォはまたしても「ユニークいいなぁー俺も自力で見つけたいなー」と持病を再発したので、もはや放置ということで結論が出た。

「満月の夜、千紫万紅の樹海窟の壁に生えた蛍光苔の中で極一部だけ光らなくなる苔がある。そこを調べれば……」

ペンシルゴンがぺたりと触れた、周囲の苔の光で見えづらいように隠されている光を放たない苔がボロボロと崩れ落ち、その先に苔の生えていないかろうじて頭がぶつからない程度の高さは確保された暗い道が現れる。

「よく気づいたなこんなの」

樹海をそのまま押し込めたようなこのエリアは、兎にも角にも広い。そんな中で壁にびっしりと生えた発光する苔の中から、言い換えれば壁中に光源がある中から光っていない場所を見つける、という事を意図的にできるとも考えづらいが……

「見つけたのは私なんだけど、ぶっちゃけると偶然。ここで取れるアイテムを獲りに来た時に見つけたんだよネ」

「そういうことだオイカッツォ、ユニーク発見は運ゲーだから天に祈れ」

「………その目をやめろぶっ飛ばすぞこのやろー」

おいおい俺の「地べたを這う愚民共の鳴き声を天より憐れみと慈悲の表情で眺める帝王の眼差し」に対してなんたる無礼だ、不敬だぞ不敬。

「もー、君達はすーぐそうやって漫才を始めるんだから。ほら、武器はインベントリにしまったら行くよー」

「わぉ……これは中々に壮観な」

「ユニーク抜きにしても私はこのエリアが好きなんだよねぇ」

暗闇が続く道、どうも上り坂らしいそれを進むこと数分。ようやく見えた淡い光差す出口を抜けた先には、一面を赤い花に覆われた空間が広がっていた。

見上げればそこに洞窟の天井はなく、現実のそれよりも巨大な丸い満月がその光を夜風と共にこの赤い花畑へと注いでいる。

地面が浮いているわけでも、物理的にあり得ない光景であるわけでもない。少し頑張れば現実でも再現できそうな景色だが、何故だかこれまでに見た何よりも幻想的に見えた。

「綺麗なお花ですわ！」

これは、確か彼岸花ってやつだ。実物を見たことはないけど、ローファンタジーなゲームでは結構特定のテーマを示すファクターとしてよく見る……即ち、死を暗喩するものとして。

「さ、行こうか。セッちゃんがお待ちかねだよ」

遠慮容赦なくペンシルゴンが彼岸花を踏みながら進んでいること

から、花を踏むことでトラップという線はないようだ。迷いなく進むペンシルゴンに続き、歩いていると一本の枯れ木が見えてくる。そして枯れ木の下に……女性？

「す、透けてますわ！」

「本当だ、バグかな？」

「何故第一候補が仕様じゃなくてバグなのかな……」

クソゲージョークだよ、全く……とはいえ、ペンシルゴンの様子からしてあの半透明の女性が目当てのＮＰＣ「遠き日のセツナ」で間違いないだろう。

「やぁやぁセッちゃん、一ヶ月ぶり」

「あら……アーサー、久し振りね」

幽霊だからもっとかすれるような、吹けば消えてしまうような儚いものかと思ったが、意外にもハキハキとした喋りと笑みで、後ろの光景が透けて見える程に希薄ながらも、ショートボブの髪を揺らしたＮＰＣ「遠き日のセツナ」はペンシルゴンに微笑みかけた。だが、それよりも地味に気になることがある。

「ふむ……エムル」

「なんですわ？」

「あの人が着てる服に見覚えってある？」

「うーん……アタシにはちょっと思い当たりが無いですわ……」

だろうな。あの幽霊の女性が着ている服、どうもファンタジーらしさが著しく欠けている。植物性、動物性の繊維から作られた服や、生物の皮や甲殻から作られたものとも違う。画一的な大量生産品に近く、高級感を仄かに感じさせる……そう、現代人である俺が既視感を覚えるそれはどちらかと言えば、サイエンスファンタジーに属するものだ。

「神代ってやつか」

シャングリラ・フロンティアという世界観において重要な意味合いを持つ「神代」。言ってしまえば旧文明とも言えるそれに類するキャラクターが絡むユニークシナリオ……馬がミサイルだのレーザーだの妙な単語が出た時点で分かってはいたが、なんだか俄然やる気が湧いて来たな。

と、ペンシルゴンが不敵な笑みを浮かべながら、おれたちの方へと振り向く。

「紹介するよセッちゃん。このバカ二人があいつ……ウェザエモンに引導を渡すための切り札だよ」

その紹介に俺とオイカッツォを見るセツナの目は、期待と悲哀が半々で混ざったような、なんとも言えない目をしていた。

特技剪定所で購入出来る秘伝書は購入してそこに記述されたアクションを達成し、かつ適正レベルであればスキルを習得できるというものです。覚えるのが面倒でレベル制限があるわざマシンと思っていただければ。

秘伝書を持っているだけで習得率（仮に飛び蹴りのスキルがあったとして、秘伝書の有無で習得できる確率が変わる）が上昇するので、攻略サイト見ればタダじゃん！ともいきません。ポンコツちゃん……もとい、ヒロインちゃんが使用したスキルにも秘伝書由来のものはありますが、それらは特技剪定所で買ったものではなくユニークシナリオ報酬だったりと特殊なものです

そして当然の権利のようにそれぞれの街の特技剪定所で販売している秘伝書は違ってくるのでお遍路よろしく街を巡るプレイヤー達の姿が

刹那に想いを込めて　其の九

期待するような、それでいて俺達を拒みたいような、しかして他の感情も混ざっているような……言い方は悪いがゼロとイチのデータがする目ではない眼差しで俺達を見るＮＰＣ「遠き日のセツナ」。

瞬間的にオイカッツォとアイコンタクトを交わし、どちらから自己紹介するかを譲り（押し付け）合う。

「あー……どうも、ペンシルゴンの愉快な仲間達技の一号サンラクだ、こっちはエムル」

「ヴァイスアッシュの娘のエムルですわ！」

「ペンシルゴンの愉快な仲間達力の二号オイカッツォ、宜しく」

「馬鹿ワンツーとマスコットだよ」

おいコラ。

目線だけで俺とオイカッツォがペンシルゴンにガンをつけていると、セツナはそれぞれを見た後に口を開く。

「なんというか……凄いのを集めたわね、アーサー」

「まぁね、今でこそ雑魚だけど決戦までには仕上げるつもりだよ」

「そうじゃないわ」

セツナは俺へと視線を向けると、自分の胸を指差して……ああ、

この場合は俺の「呪い」を指し示しているのか。

「クロちゃんの強い気配を二つもつけてる人なんて初めて見たわ、それに灰被りちゃんの子供と一緒なんて……ふふ、懐かしい人を思い出しちゃった」

「ええと」

「ああ気にしないで、ただの郷愁……ずっとずっと、昔のね……」

ペンシルゴンの様子からして、どうやら普段とは違うフラグが現在進行形で建設中らしい……オイカッツォ、ステイ。

「もう彼女はとっくに死んでいるのでしょうけど、あなたのお陰で懐かしい記憶を思い出したわ、ありがとう」

「え？　あー、どういたしまして？」

判断材料が少なすぎてどう返答すればいいか分からない。そうこうしているうちにタイミングを逃したのか、セツナは俺から視線を外してしまった。無理に聞こうとして好感度が下がるのもよろしくない。俺はペンシルゴンにアイコンタクトを送り、話の先を促す。

「セッちゃん、二人にもあいつの事を話してあげて欲しいかな」

「……分かった」

『ユニークシナリオＥＸ「此岸より彼岸へ愛を込めて」を開始しま

すか？』

来た。俺とオイカッツォは迷う事なく「はい」を押すと、セツナは一つ頷き、言葉を紡ぐ。

「彼は……ウェザエモンは私の恋人。ちょっとしたすれ違いで私が死んで……それからずっと、彼は私のお墓をずっと……そう、ずっと守り続けているの」

「なるほど、それで墓守か」

「生きていた頃の私が死んで、どれだけ経ったのかは分からないけれど、気づいた時には私はこうなっていた……別に私は死んだ事を未練に思っているわけじゃないの」

セツナの見上げた先には、枯れ果て葉の一つもつけていない、生命力の塊のような千紫万紅の樹海窟の抜け道から彼岸花が咲き誇るこの場所に至るまでで異彩を放つ枯れ木。

「死とは終わり。終わってしまったものは過去であって、誰かの今を……未来を縛るものではないわ。だから、私はあの人が今も私の墓(過去)に縛られ続けていることが耐えられない……」

だからこそ、とセツナは枯れ木からそのまま夜空を照らす満月へと視線を動かす。

「彼は私が構築したプログラ……ええと、魔法を使ってここに結界を構築した。月光の魔力を利用し、座標を次元の裏側に「反転」させることで誰にも干渉させないように」

地味に気になる単語が聞こえたが、要するに今俺達がいる場所がコインの表なら墓守のウェザエモンはコインの裏側にいる、という認識で合っているだろうか。

「でも月がその光を失う時……新月の夜だけは結界に綻びが出来る。彼のいる裏座標へと通じる綻びが生まれるの」

「そこに飛び込んで戦う……ってことだね」

オイカッツォの言葉にセツナは頷くと、居住まいを正して俺を、オイカッツォを、そしてペンシルゴンを見据える。

「どうか、ウェザエモンを……あの人を、眠らせてあげてください」

セツナはそう言って頭を下げた。さてなんと返答したものかと悩んでいると、ペンシルゴンがニッと笑みを浮かべる。

「任せてよセッちゃん、あのへたれ共とは違う。この三人でセッちゃんを悩ませるあんにゃろーを張り倒してくるからさ」

いつもの口調、いつもの仕草、されどペンシルゴンの言葉に込められた真摯な感情に俺とオイカッツォは目を丸くして顔を見合わせた。

本当にあいつペンシルゴンか？　ユナイト・ラウンズでNPC王を馬車で引き摺り回してエネミーを誘き寄せるルアーにし、NPC姫をシャンデリアに吊るしてプレイヤーを誘き寄せるルアーにしてのけたあの鉛筆戦士と同一人物？

「あのラスボスよりラスボスしてたペンシルゴンが、NPCと談笑……！？人の心を取り戻したというのかっ！？」

「サンラク君流石にそれは失礼ってやつじゃないかなー？」

「コノキモチ……コレガ、ココロ……？」

「おいプロゲーマー」

数秒の沈黙の後、極めて普段通りの笑顔を浮かべたペンシルゴンが耳を真っ赤にしながら、明らかに何かしらのユニークでなければデザインされないような神々しい剣……いや、槍？　を握る。

「よっしゃ貴様ら二人ともウェザエモン戦前の練習だ、レベル上限の暴力を脳髄に刻み込んであげよう」

表面上は冷静だけど内心は感情がスクランブルしている状態を再現してのける神ゲーっぷりすげぇな、とか微笑ましげにこちらを眺めるセツナの表情といい本当にＮＰＣなのか？　とか様々な考えが頭をよぎる。

数々の強敵との戦いが頭をよぎり、それはシャンフロのみに留まらずこれまでプレイしてきたゲームの記憶に……あ、これ走馬灯だな。

「おまっ！明らかにやばそうな武器を雑魚二人に出すんじゃねぇよ大人気ないぞ！」

「まずいサンラク目がマジだよあれ！ＰＫする気だ！」

「ぴゃあああああなんでアタシまでぇぇぇぇ！？」

ＨＰ九割で許してもらった、なおエムルはもふられていた。そし

てその様子を、セツナは楽しげに……本当に楽しげに目を細めて見つめていた。

「全くもう、墓守のウェザエモン挑戦前じゃなかったら五回はリスキルしなきゃ気が済まなかったところだよ」

「聞いたかオイカッツォ、これでこそペンシルゴンよ」

「ああ、馬鹿正直に侵攻してくる分ラスボスの方が有情とまで言われたペンシルゴンが帰ってきたね」

「十割いっとく？」

二人と一匹して両手を上げて降参のポーズを取れば、ペンシルゴンはため息をついて武器をしまう。

「そりゃライオンが家庭菜園作ってりゃ笑……おっと、我々は同じ志を持つ同志だ、話せばわかるそうだろう？」

「サンラク君、拳で伝わる青春もあるとは思わない？」

「全力で煽ってくサンラクのスタイル嫌いじゃないよ」

「アタシにもとばっちりくるからやめて欲しいですわ……」

ゲームで得られるのはダメージの数値レベル差の実感だけです。

そんな風にしばらく煽り言葉と拳が飛び交う帰り道であったが、しばし横一文字に引き締めていた口を開き、ぽつりとペンシルゴンが呟く。

「あー………その、ね。たまにはNPC相手にカッコつけたいっていうかさー……こう、なんというかセツナって名前とか背景的にこう、他人事に思えないというか……えぇそうですぅー、私だってゲームに本気で感情移入することくらいあるわけでぇーっ！」

顔を赤くして白状するペンシルゴンだが……それを俺たちに言うか。どうやらオイカッツォも同じ事を思ったらしく互いに苦笑を浮かべ、ご丁寧に二人してペンシルゴンを鼻で笑う。

「ゲームに本気になる？大いに結構だろ。何事も本気で取り組めるなら本気で取り組んだ方が楽しいに決まってる」

「そうそう……本気で遊ぶからゲームは楽しいのさ、というか俺それがお仕事なんですけど？」

「え、プロかつ本気で取り組んでユニークの一つも自発できていないんですか……？　やめっ！指で目を狙うのはやめろ目は！」

なんかこう、いい感じの流れにしたのにこの程度の煽り(ジョーク)も流せないとか大人気ないぞプロゲーマー。本気で取り組む場所間違えてるぞプレミかプロゲー……あっくそ押し負ける！

ステータス配分の関係上、レベルでは上回れどSTRに劣る俺が一切の躊躇いなく目を狙う人差し指を押しとどめていると、くつくつと笑う声が。

「ふ、ふふ……ああ、そうだったね……君達も大概だったね、ふふ

ふふ……あははは！」

晴れやかな笑みを浮かべたペンシルゴンは両手で頬を叩くといつもの表情、ド派手な花火を打ち上げる刹那主義らしく不敵に口の端を歪めて宣言する。

「相手は畜生ストーリーボスもビックリなレベル差150を強制するユニークモンスター！　それでも私達ならできる、本気でやって勝ちに行こう！」

その言葉に俺もオイカッツォも……ついでに流れ的に乗ってきたのかエムルも無言でサムズアップする。

「馬車馬の如く扱き使って死んでも休ませないから覚悟してもらうよ！」

決戦まで残り二週間を切り、俺たちは慌ただしく動くことになる。

「まぁ二人ともレベル50になるまでは魚釣り続行だけどね」

デスヨネー

「くぁあ……！」

ベッドから身体を起こしつつ大欠伸をする。昨日は色々過密スケジュールだったな、と目を擦って部屋を出る。

あの後テンションがちょっと暴走的方向にハイになったペンシルゴンに引っ張られるように徹夜で魚釣りを敢行したり。

俺がライブスタイド・レイクサーペントよりもレベルが高くなったことで忌々しい呪いの効果によって鰻が出現しても逃走し始め、レベリングがストップして二人からネチネチ文句を言われたり。

離れた場所に隔離され、キレた俺が釣りをしまくっていたらレアモンスター「ライブスタイド・デストロブスター」なるレベル８０のモンスターを呼び寄せてしまったり。

本格的に強過ぎてエムルでも歯が立たなかったのでペンシルゴンに全部押し付けて笑っていたらオイカッツォがまさかのロブスター二尾目とエンカしやがったせいで地獄絵図になったり。

正直よく死なずに済んだとは思う、だが二尾のロブスターを倒した事で俺はレベル５１、カッツォはレベル４６にまで成長していた。レベリングを驚異的速度で完了した俺は、特技剪定所(スキルガーデナー)の事もあって一旦離脱……と、ここまでが昨晩のログインで起きた出来事。

登り始めた朝日を窓越しに眺めつつ俺は、今日の予定を考える。

「とりあえずスキルだ、新しく覚えられるスキルがあるならそれに越した事はないし……後いくつか欲しい素材もあるし、ともかく先ずはラビッツに特技剪定所があるかどうかの確認をして、品揃え次第じゃ他の街の特技剪定所も行っておきたいが……」

ブツブツと呟きながら牛乳をコップに注いでいた時、ふと机の上に置かれた雑誌に気づく。
どうやら我が妹、瑠美が持って行き忘れたファッション誌のようだが、その表紙には輝くような笑みを浮かべた女性モデルが写っている。
その人物の本性を文字通り痛感していなければ、素直に綺麗な人だと思うだけであっただろう。つい先程まで一緒にゲームをしていたその人物をしげしげと眺めていると、横から伸びた手が雑誌を掠めとる。

「あ」

「何々？おにーちゃんもトワ様のファンになっちゃったの？」

「トワ様……？」

俺としては「何故妹が奴の事を様付けで呼んでいるのか」という意味で口からこぼれた呟きだったのだが、どうやら瑠美は違う意味で受け取ったらしい。雑誌を掲げるようにして如何に「トワ様」が素晴らしい存在かを語り始めた。

「天音永遠！日本が世界に誇る花形モデル！モデルを目指すティーンでトワ様に憧れない人なんていないわ！いたとしたらそいつはニワカだよ」

「ハナガタモデル」

「トワ様はね、変に気張る必要がないの！一挙一動を撮影するだけでファッション誌が一冊完成しちゃうくらい、もうモデルになるた

めだけに生まれたような人なの！すごいんだよ？　以前街でファンの子がトワ様をコッソリ撮影したのをＳＮＳにアップしたんだけど、こっちに気づいてないし撮影のタイミングすら分からないはずなのに本当に様になってて、まるであらかじめ撮影されるのを知ってたみたいなすっっごいベストショットで……」

「あ、そうか」

「？」

「いやなんでもない、こっちの話だ。そのトワ様とやらにもプライベートがあるんだから無断スクショは勘弁してやれよな」

牛乳を一息に呷り、瑠美にそう言って俺は部屋へと戻る。成る程成る程、そういうことか。

「刹那主義の永遠（トワ）と永久を過ごした刹那（セツナ）ね……」

仮に俺がペンシルゴンだとしたら例えそれがゲームというフィクションであっても、単なる偶然の一致だとしても、確かに本気で取り組みたくもなる。それも人と変わりないような反応をする神ゲーのＮＰＣともなれば尚更に。

一丁俺も気を引き締めますか。

刹那に想いを込めて　其の九（後書き）

厳密にはセツナは「幽霊」ではなかったり

刹那に想いを込めて　其の九半

「うーん、つい最近ログインしたばかりだけどなんか数年ぶりに来た気分だ」

今現在の俺は半裸鳥面のサンラクではなく、ストーリーモードの隠しルートで解放可能なイアイフィスト流免許皆伝の闘士（ベルセルク）サンラク……つまり、ここはベルセルク・オンライン・パッション……「便秘」のログイン地点に立っていた。

当然だがモドルカッツォのアバターはここにはない。あいつは残りのレベリングを終わらせるために今日も魚釣りだ。まぁペンシルゴンが一緒にやるらしいからそう時間はかからないだろうし、どちらにせよわざわざ便秘に来るとも思えない。

「誰か戦えそうなやつは……っと」

俺が便秘にログインした理由は、対墓守のウェザエモン用のスパーリング相手を求めてのことだ。

ペンシルゴンが集めた情報によれば墓守のウェザエモンは超速フレーム攻撃、即死、範囲攻撃のオンパレードを仕様で備えているという。であればバグによって全攻撃の発生フレームがイカれた速度になっているこのゲームのストーリーモードはいい練習になる。

幸運にも、このゲームではマルチモードでＮＰＣ対戦でラスボスと闘うこともできる故、今日も今日とて過疎（クソ）ゲーな便秘を俺は散策する。

ベルセルク・オンライン・パッションのストーリーモードにおけるラスボス「クライシス」……ええとなんだったかな、究極の力を

手に入れて人類の頂点として世界を管理するとかコッテコテな理由で人体改造&ドーピングをしまくったとかそんな設定だったはずだ。
奴と戦うにしてもウォーミングアップをしておきたい、その為に対戦相手を探しているのだがどうにも見つからない。
まぁまだ夏休みシーズンとはいえ水曜日の朝だからな、社会人プレイヤーがいないんじゃこんなものか……お、対戦希望アイコン出てるプレイヤーがいる！

「あー、もしもし？」

「は、はいっ！」

背後から話しかければ、上ずった声でそのプレイヤーは振り返る。思ったよりも声が若いな、カッツォみたいに元々そういう声なのか本当に年若いプレイヤーなのか。プレイヤーネームを確認するが、「ドラゴンフライ」……見たことのない名前だ。少なくともこのゲームをやり込んでいた時には見なかった。

「えーと、対戦オッケー？」

「はいっ！未だラスボスも倒せない未熟者ではありますがっ！胸を貸して頂けますと助かりますっ！」

凄い、このゲームのラスボス以上にコッテコテな「新規プレイヤー」だ。下手な絶滅危惧種動物よりも希少性が高そうだ。
見た所……うん、基本タイプのオールラウンダーか。最初に選べる戦闘スタイルで、一番バグ派生が多いタイプでもある。尤も、カッツォクラスのプレイヤースキルが無い限りはバグ派生を十全に活かすことは難しいだろう。

「えーと、バグあり？　なし？」
「バグ……？　あっ、先輩方の仰っていたバグ凍土ですね！　それでよろしくお願いします！」
　バグ凍土……あ、バーグトゥードか。一瞬新しいコンボでも見つかったのかと。とはいえ、こっちのサーバーにいるということはパッケージ版購入者であるし、先輩方という言葉から他プレイヤーからある程度はバグ指南を受けているのだろう。
　対戦が成立し、俺とドラゴンフライを囲うフィールドが形成される。
「まぁなんだ、よろしくね」
「よろしくお願いします！」
　そして、ラウンド1の開始を告げるゴングが鳴……「よぉぉっしゃぁぁぁぁ！！」
「うおっ！」
　速攻！？　普通オールラウンダーじゃなくて敏捷が高いスピードスタータイプで……ああそうか、初心者にセオリーなんてあるわけないか。
「拳を捻って……戻して打つ！」
　ドラゴンフライが拳を振りかぶり、それをさらに後ろへと引くことでドラゴンフライの右腕が伸びる。それも拳のテクスチャが振りかぶった座標に固定されているが故に、無理矢理ゴムを引っ張った

ような引き攣り……完全にテクスチャの崩壊した便秘名物人外バグだ。

「ふぅん、「パイルバンカー」か」

　一度パンチの準備モーションをした状態でさらに拳を引いて二段階の準備モーションを行うことで何故かパンチの判定が二段ヒット&威力二倍になるバグ技である「パイルバンカー」。

　初心者向けのバグ……いや、言ってて意味がわからないが兎も角、人外バグゲーの中では比較的発動が簡単なバグ技だ。

「とぁあっ！」

　伸ばしきったゴムを放すように、伸びきったドラゴンフライの拳テクスチャが縮んで俺へと拳が飛ぶ。

　俺のこのゲームにおける戦闘スタイル、相手の攻撃が着弾する直前に弾く事で攻撃を無効化するカウンタースタイル「イアイフィスト流」でパリィしてもいいのだが、ここは一つやり込みと研究の果てに便秘のプレイヤー達が見つけたバグを一つ実践してしんぜよう。

「停止状態から右足で任意方向にジャンプ、左脚はその場で踏ん張れば……！」

「あれっ!?」

　素直な動きのパンチがスカッたことにドラゴンフライは目を見開く。ただ避けられるよりも衝撃だろうな、何せ今の俺は左足首から下だけをその場に残した状態で五メートル程後ろにスライドしているのだから。

「これは「ヨーヨー」ってバグ技、三秒間当たり判定ごとアバターのテクスチャをずらせるんだ」

「あ、足が伸びてる……」

どうも左脚の踏ん張り判定とジャンプ判定がバグっているらしく、ヨーヨー以外でもこんな風に左右上下であべこべな動きをすると八割方バグる。

他にもガードした体勢で前に進むと発生するガード判定が生きたまま相手へと突進して壁際まで押し出す「シールドバッシュ」、カッツォが最近開発した条件は知らないが分裂した拳の当たり判定を散弾の如くばら撒く「ショットガン」などなど……クソゲー以外の何にも例えられないクソっぷりだが、慣れるとこれがまた楽しいのだ。

「まだまだこのゲームのバグはこんなもんじゃないんだなこれが」

「せめて1ラウンド……！」

ふはは、貴様にバグとイアイフィスト流を合体させた新感覚バグゲーを見せてやろう！

「か、勝てない……」

「イアイフィスト流は無敵の流派！」

モドルカッツォとかいう人外（プロゲーマー）は例外だ例外、初見殺しを仕掛けても次のラウンドにはメタってくるのだから、やりづらいことこの上ないのだあいつは。

「も、もう一試合！　ラストお願いします！」

「うーん……」

正直そろそろ辞めたいところだ、本来はプレイヤーとじゃなくてラスボスと戦いに来たわけだし。

だが、ここはシャンフロとは……黙っていても新規が数百人単位で入ってくる神ゲーとは違う。カソにクソを混ぜて出来上がった過疎（クソ）ゲーだ、新規プレイヤーとかダイヤモンドより価値が高い。

このゲームが爆発的に流行ることを期待しているわけではないが、過疎りきって終わってしまうことを望んでいるわけでもない。せっかくの新規だ、少しくらい先輩らしく胸を貸してやろうではないか。

「いいよ」

「ありがとうございます！」

それに、試行錯誤を繰り返しながら俺へと対処しようと頑張るド

ラゴンフライと対戦するのはそれなりに楽しい。
本音を言えばもう少し歯ごたえが欲しいところだが……いやいや、それは初心者に求めるものじゃない。
ラウンドのゴングが鳴る。どうも他のプレイヤー達も無理に矯正するのではなく、むしろ伸ばす方針にしたのだろう超速攻の突撃でドラゴンフライが近づいてくる。既に幾度となく直線突進をノーダメ迎撃して見せているが、さてラスト試合でどう対処する？
「ここっ！」
へぇ、俺の迎撃の射程距離ギリギリでヨーヨーか。確かに控えめに言っても気味の悪いスライドで距離を離したドラゴンフライだが、このまま元の位置に戻れば待ち受ける俺のカウンターをモロに食らうことになる。
だがドラゴンフライは引き戻される身体の動きに抗うことなく、むしろ右足で前へと跳ぶ。瞬間、踏ん張った左足の座標に戻る筈だったドラゴンフライの身体が俺の眼前へと瞬間移動並の速度で迫る。
「えぇい！」
「おっと」
パイルバンカー無しの普通の小パンチ、タイミングをズラされた俺は顔面にそれを食らうことになる。既に迎撃モーションに入っていたからどちらにせよ避けられなかったので、パイルバンカーで攻撃するのが正解なのだが、一時間も試合していないのにもうこの回答を出すとは中々にやるな。
「や、やった！」

「一撃入れたらそれで終わりじゃないのが格ゲーだけどね」

「うわっ」

カウンター主体のスタイルが攻めに転ずることができないなんて誰も言っていない。

必要最小限の動きでパイルバンカー小パンチを叩き込みつつ、常に前進することで反撃の隙を与えない。仮に再びヨーヨーで逃げたとしても今度は完璧に迎撃する。

「だ、だったら！」

「うおっ」

成る程、ガード判定を残したまま突進するシールドバッシュで逆に押し出してしまおうという算段か。うーん、正解だけど間違い、６０点！

「よいしょっ」

「えっ……くぅっ！？」

「ガード崩しは格ゲーじゃ必須項目だからな」

少なくともシールドバッシュに関しては防御じゃなくて攻撃のバグ技だ。仰け反りからシールドバッシュ壁際からの即死コンボはリアルファイト案件だ。仰け反ったところを大パンチで吹っ飛ばされたドラゴンフライはすぐさま起き上がるものの、こちらを警戒してか距離を離す。

「さぁどうする？　大体イアイフィストはプレイヤーを中心に半径1メートルは射程範囲だ」

「く……それなら！」

あいも変わらず直線突進、それが悪手とは言わないが何の策もないならカモだが……？

うん、直線でこちらへと走って？　直前で急停止して？　ゲージ技の体勢に入って？　ガーキャン派生から再発動して……ん！？

「え、なにそれ！？」

「とりゃあああああ！！」

これ負けたかな？　いや、1ラウンドくらいなら問題ない。それよりも気になるのは今のバグ技だ。

オールラウンダーのゲージ技は拳の形をした衝撃波を飛ばす「飛拳衝」というものであるが、ただでさえ多段ヒットするそれがパイルバンカーの技よろしく二重になって飛んできやがった。咄嗟に避けるのをやめて直に食らってみたが……体力が五割削れてやがる。

初心者と言えど最低限の格ゲーの心得はあるようで、俺が起き上がる隙を見逃さずに攻勢に転じる。あっという間に俺の体力は削り切られてドラゴンフライが初めてラウンドを取る。

「や、やったあ！初めてラウンドを取れたっ！」

「あ、ちょっとタイム」

「あ、はい！」

時間帯が時間帯とは言え、完全に俺とドラゴンフライの二人だけというわけではない。数人程いた観戦勢と相談を開始。

「で、見る専のお前らからしてどう思う？」

「原理的には「パイルバンカー」だけど、パイルバンカーのやり方ではゲージ技の重複はできなかったはずだよな？」

「ゲージ技ってーと「ドッペルゲンガー」関連のバグじゃないか？」

「いや、あれは同じ座標に分身は出せなかったはずだ、検証したやつがいた。それに「ドッペルゲンガー」に「キメラ」は使えない、となれば……」

「ああ、後で検証勢が再現できれば確定だ」

相談終了。結論が出たのでドラゴンフライの元へと戻る。

「えー……ドラゴンフライさん」

「は、はいっ！？」

「おめでとうございます、今のバグ技は暫定ではありますが貴方が初発見者です」

「え……えぇぇえ！？」

そっかぁ……ガーキャン挟めば重ねられたのかぁ……ていうか何

でガードキャンセルでゲージ技の判定残るんだよ……ほんともう便秘マジ便秘……

「というわけでバグ技を新たに見つけた場合は発見者が命名できるわけだけど」

「え、そんな、いきなり言われましても……」

暗黙の了解だが、これのせいで悪ノリしたプレイヤーによって命名された「にゃんにゃんシルブプレバスター」なんてバグ技もあったりする。

特定スタイルでは必須クラスのバグ技なので、日夜投げ技スタイルのプレイヤー達は非常に複雑な表情でにゃんにゃんシルブプレバスターを使用している。

「まぁ、それに関しては後々決めてくれ、まずはラウンド取り返してこの試合も俺の勝ちで終わらせる……！」

「ま、負けません！」

とはいえ、やはりここは未だ超えられぬ高い壁として強さを見せないとな。

ラウンド2が開始されると同時に開幕ゲージ技、発動寸前で回避行動。簡単なようで成功タイミングが極数フレームであることと、発生の遅いゲージ技を持つスタイルでなければ使えないことから再現性が極めて難しいものの、ロマンと実用性を多分に備えたバグ技。

「ええっ！？」

「凄いだろ、ゲームだから普通に俺が増えるし、ゲームだからそれも俺なんだよ」

このゲームにおけるゲージ技は発動から一定秒数経過でキャンセルができなくなる。シャンフロのようにプレイヤーの頭に「こういう動きをする」というイメージを与えるのではなく文字通り動きをシステムが遂行する。

だからキャンセル不可となる直前、プレイヤーが自分の意思で動ける1フレームと動けなくなる1フレームの間に抜け出せば、ゲージ技の判定とそれを行うアバターのデータを残したままプレイヤー自身は回避行動を行う……要約するとだ、俺が増える。

「これの名前を決めるときは「影分身」「スワンプマン」「ドッペルゲンガー」のどれにするのかそれはもう迷ったものでね」

イアイフィスト流のゲージ技「居合拳衝」は発生が全スタイルの中で最も遅い為に、このように無駄口を叩きながら本体がドラゴンフライを羽交い締めにすることも出来る。

「ああ、当然ながら俺はダメージを受けない」

「いいっ……！？」

タメが長い代わりに威力の高い衝撃波が俺とドラゴンフライに命中する。主導権を握ってしまえば、初心者プレイヤーを料理することなど容易いことだ。

「えと、ありがとうございました！　かっこいい名前考えておきます！」

「あーうん、頑張って」

頭を下げた巨漢のヒゲオヤジに別れを告げ、久し振りに初心者プレイヤーを上級者として相手する充実感に満足しながらログアウト……いや、当初の目的どうしたし。

結局、俺はいそいそと再ログインすることになったのだった。

刹那に想いを込めて　其の九半（後書き）

正直ここを逃すと入れる場所がなくなるので雑にフラグを立てていくスタイル

フレ登録とリアル遭遇で三日は飯がうまいヒロインちゃんに最大のライバルが迫る

「説明ばかりだけどバグまみれの格ゲーを実際に描写したらどうなるんだろう」という結果がこれです、想像以上に人外格闘技ですねこれ……

刹那に想いを込めて　其の十（前書き）

本日はちょっとマジで危うかったのでスキルで文字稼ぎするような真似に……でも山場は越えたので明日のうちに貯金を稼ぎます

刹那に想いを込めて　其の十

「さて……ここが？」

「はいなっ、ここがラビッツの特技剪定所（スキルガーデナー）ですわ！」

慌ただしくゲーム間をログイン＆アウトを繰り返しつつも、現在ラビッツ。エムルに連れられ、俺はついにシャングリラ・フロンティアをプレイして初めて利用する施設を訪れていた。

というのもパワーレベリングの結果、大量のスキルを習得した為にスキルの整理と強化の必要性が増したのだ。ポイント振りの結果、現在のステータスはこのようになっている。

――――――――――――

ＰＮ：サンラク

ＬＶ：５１（５）

ＪＯＢ：傭兵（二刀流使い）

７３，２００マーニ

ＨＰ（体力）：３０

ＭＰ（魔力）：１０

ＳＴＭ（スタミナ）：６０

ＳＴＲ（筋力）：４０

ＤＥＸ（器用）：５０

ＡＧＩ（敏捷）：７０

ＴＥＣ（技量）：５５

ＶＩＴ（耐久力）：５
ＬＵＣ（幸運）：７４
スキル
・ラッシュスラッシュ↓無尽連斬
・スパイラルエッジ↓ドリルピアッサー
・ナックルラッシュ↓選択可能
・スライドムーブ↓スケートフット
・レペルカウンター↓パリングプロテクト
・ループスラッシュＬｖ．８
・エッジクライム↓グレイトオブクライム
・アクセルＬｖ．ＭＡＸ
・一艘跳び↓五艘跳び
・クイックスピン↓シャープターン
・ディアステップＬｖ．７
・水切りＬｖ．６
・辻斬りＬｖ．４
・オプレッションキックＬｖ．５
・ピアッシングアーマーＬｖ．３
・ベストステップ
・ファイティングスピリットＬｖ．７
・アンブレイカブルＬｖ．５
・ハイランナーＬｖ．６
・ネイキッドセンスＬｖ．４
・飢餓衝動Ｌｖ．４

装備
左右：帝蜂双剣
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋１）
胴：リュカオーンの呪い
腰：隔て刃のベルト（ＶＩＴ＋４）

足：リュカオーンの呪ぃ
アクセサリー：なし
――――――――――――

「うーんこのティッシュ装甲」

もはや紙以下だよ、もしくはトイレットペーパー並の脆さだ……水の一滴で大穴が開きそう。装備を新調していないのもあるが、一切振っていないＶＩＴが貫禄の一桁。
どちらにせよ耐久面に振ったところで一撃全損はどうしようもないと諦めたのだが、本当はもう少し幸運とかに振りたかったなぁ……おのれマイフェイバリットウェポン。

「いい加減ごちゃごちゃしてきたし、確かに整理の為の施設があってもおかしくないよなぁ……」

スキルが多いことは悪いことではないが、三十も四十もスキルがあっては邪魔というものだ。であるならば名前の通り余計な枝を切って本筋を太くする剪定所が存在することはごく自然なことであり、何が言いたいかというと過去の俺殴りたい。

「街の方にも剪定所はありますわ、でもこっちの方が品揃えがいいんですわ！　これは内緒ですわ？」

「いいねいいね、そういう秘密の格差俺大好き」

悪代官と悪徳商人みたいな会話をしつつ、俺とエムルは兎御殿内の特技剪定所を訪れる。

「いらっしゃあーい、あらぁエムルと鳥の人じゃなぁい」

「その鳥の人ってのは定着してるのか？」

会うたびにそれ言われてる気がするぞ……ますます頭装備を変えられなくなってきた。

やけに間延びした口調の、所謂「おねーさん感」が強い兎が俺とエムルを出迎える。なんとなくエムルに似ている、耳がエムルと同じロップイヤーと言うこともあるが、なんというかより姉妹としての印象が強いと言うか。

「エルクおねーちゃん！サンラクサン、エルクおねーちゃんはアタシともう一人のおねーちゃん……アタシ達三つ子のおねーちゃんなんですわ！」

「へぇ」

「よろしくねぇ」

なるほど、ただ上から順番というわけではなく、三つ子だったり双子だったりもいるのか。かがんでエムルの姉……エルク握手を交わしつつも本題に入る。

「あー、ここでスキルの合体とかが出来るんだよな？」

「ええーそうよぉ、ワタシぃそういうの得意だからぁ、お父さんにぃ言われてぇ私が担当しているのぉ」

「さいですかぁ」

「サ、サンラクサンおねーちゃんの話し方が移ってますわ！」

おっといけない。

「じゃあ早速スキルの合体を頼む」

「はいはぁい、じゃあどのスキルを繋ぐか教えてねぇ」

エルクがそう言うと同時、俺の前にウィンドウが表示される。見ればば今現在俺が習得したスキルが羅列されており、二つ選べばどのようなスキルが生まれるのかを事前に見ることができるらしい。成る程、何ができるか分からないみたいなタイプではないようだ。ええと何々、これとこれを混ぜてこれになって……

「ああそうだぁ、スキルはレベルが高いもの同士で組み合わせた方がぁ、より良いスキルになるわぁ」

「ふむふむ」

そう言うこと言われるとスキルを全部レベルマックスにしたくもなるが、スキルのレベルはプレイヤーのレベルアップと合わせて上がるから、今から全部上げるとした場合６０……いや、６５くらいまで上げなければならない可能性もある。

贅沢は言っていられない、ちゃっちゃと混ぜてしまおう。

「まぁこんなものか」

――――――――――――

PN：サンラク
LV：51（5）
JOB：傭兵（二刀流使い）
73，200マーニ
HP（体力）：30
MP（魔力）：10
STM（スタミナ）：60
STR（筋力）：40
DEX（器用）：50
AGI（敏捷）：70
TEC（技量）：55
VIT（耐久力）：5
LUC（幸運）：74
スキル
・無尽連斬
・ドリルピアッサー
・インファイトLv．1
・スケートフット
・パリングプロテクト
・ハンド・オブ・フォーチュンLv．1

・グレイトオブクライム
・クライマックス・ブーストＬｖ．１
・五艘跳び
・シャープターン
・アサシンピアスＬｖ．１
・オプレッションキックＬｖ．５
・ベストステップ
・餓狼（ハンガーウルフ）の闘志
・オフロードＬｖ．１

装備
左右：帝蜂双剣
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋１）
胴：リュカオーンの呪い
腰：隔て刃のベルト（ＶＩＴ＋４）
足：リュカオーンの呪い
アクセサリー：なし
――――――――――――

うん、まぁまぁ整理できたんじゃないだろうか。とはいえ、実際に使ってみて分かったがただ単純に足し算的にスキルを合わせるだけではないみたいだ。
多分だがその時点でのプレイヤーのステータスやレベルとかも参照してスキルが決定されているように思える。なんという検証班殺し、どうりで攻略サイトが重くなるわけだ。
とりあえず実戦での確認は当然として大まかな把握だけしておくか。

無尽連斬、ドリルピアッサー、スケートフット、パリングプロテクト、グレイトオブクライム、五艘跳び、シャープターン……こいつらは名前と多少の効果違いはあるが、おおよそ最初から使っているスキルの諸々だ。

インファイトは格闘スキルに回避スキルを混ぜた結果出来た、超至近距離での格闘ダメージに補正を付与するスキル。基本的に双剣だから使い所は剣を手放さざるを得ない状況になったら輝くスキルかな。

ハンド・オブ・フォーチュン……クソゲーやってる時に似た名前(ハンド・オブ・グローリー)を見かけた記憶がある、確かそのゲーム内では魔法の触媒の名前だった、このゲームではスキル名のようだ。このスキルはＳＴＲではなくＬＵＣ、つまり幸運の数値を参照してダメージを算出する。つまり控えめに言っても神スキルだ、ティッシュ装甲かつ技量と幸運に重点的に振っている俺にとって火力を出せる貴重なスキルだ、大切に育てていこう。

アクセルとファイティングスピリッツを合体させたクライマックス・ブースト。体力が三分の一以下かつ相手のレベルが自身より高いほど全ステータスに大幅補正の入る……内容自体は使えるのだが、今の俺とはあまり噛み合わないのがネックだ。なにせティッシュ装甲なので。

アサシンピアス。敵が自身にヘイトを向けていない状態であれば刺突の威力が上がるスキル、以上。

オプレッションキックはダウン状態の鰻やらロブスターやらをゲシゲシ蹴っていたら覚えていたスキルで、ダウン、ノックバック、そ

の他の行動不能や状態異常の敵に対して威力が上がる格闘スキル。
合体できるスキルに良いものがなかったので今回は保留。

ベストステップ、これはエムルも覚えていたスキルだな。不安定な足場でも一回だけ完璧なジャンプを成功させるスキルらしいがこれも悪巧みできそうな予感を漂わせる。ほら、壁とか敵の身体の上とか……ね？

個人的な理由で複雑な感情を抱いてしまう問題児スキル……餓狼(ハンガー)の闘志(ウルフ)。こいつは内容自体は結構面白いスキルで「自身が空腹かつ体力が少ない程ＳＴＲ、ＡＧＩ、ＶＩＴにバフが付与されるが、代償としてＳＴＭ、ＤＥＸ、ＴＥＣにデバフが付与される」というものだ。短期決戦と火力追求という点では極めて有用なスキルなのだが……「空腹」「狼」「ＤＥＸ、ＴＥＣ」と何故か俺のトラウマを的確に抉ってくるのだこいつは、やめてくれよ本当……

気を取り直してオフロード、こいつは中々にグッドだ。水、泥、砂……そんな足場の不安定な場所でも平地のような動きを可能とするスキル。しかもレベル×１０秒、つまりレベル１の段階で十秒というのもまた素晴らしい、レベル１０にすれば百秒確定だからな。

「……うん、中々良いね」

現状揃え得るスキルとしては優秀なものが揃ったんじゃないだろうか。いやほんと便利だね特技剪定所！　こんな便利な施設を今までその存在すら知らずにいた大馬鹿野郎がいるらしいっすよ！　いやぁ誰なんでしょうね！

「時にサンラクさぁん？」

「うぉおぉ」

せ、背すじに鳥肌が。いや別に不快感的なものではなく、ウィスパーボイスとでも言うべきエルクの声に不意打ちされたのが原因だ。
何事かとステータスウィンドウから視線を外して見下ろせばエムルのふにゃけた笑顔に似た表情をしたエルクが、何やらメモ帳サイズの小さな本を持って……あ、これ営業スマイルってやつだ。

「ラビッツでしか取り扱っていないスキルの秘伝書とかぁ、いかがですかぁ？　エムルのお気に入りってことでぇ、お安くしておきますよぉ～？」

「サンラクサン運がいいですわ！　エルクおねーちゃんは基本的に銭ゲ……」

ゴンッ！！

「ばっ！！？」

「お安くしておきますよぉ～？」

状態異常「頭にたんこぶ」なエムルに合掌。お前が何を言いたかったのかはちゃんと理解したからな……
と、それはともかく安売りされているならちょっと品揃えだけ見ても良いかもしれない。

「どれどれ……」

・致命剣術【半月断ち】　５０，０００マーニ
・致命刃術【水鏡の月】８０，０００マーニ
・致命槍術【月光突き】７０，０００マーニ
・致命柔術【三日月巴】９０，０００マーニ
エトセトラエトセトラ……

「いや高ぇ！！」

どこが割り引かれているのか教えてくれ！

刹那に想いを込めて　其の十（後書き）

鬼！　悪魔！　エルク！

ちなみに通常時は１０万越えするようなスキルばかりなので相当安くなっています

刹那に想いを込めて　其の十一（前書き）

修正報告

「和紙は紙より丈夫」という情報を多く頂き、和紙装甲からティッシュ装甲に変更しました。作者の中では和紙とティッシュの耐久性はイコールになっていました、なんでだろう……？

刹那に想いを込めて　其の十一

光陰矢の如し、平日の月曜日から金曜日は延々と続くのに連休の一週間はふと気づくと最終日……時間とはかくも残酷でかくも慈悲深い、そんな哲学を脳内で思い浮かべつつも遂にやってきたペンシルゴン主催、俺とオイカッツォを巻き込んだチキチキ「墓守のウェザエモン討伐戦当日」が遂にやってきた。

待ち合わせ場所はＮＰＣカフェ「蛇の林檎」、何故ここにこだわるのか問うたところ実はこの店のメニューは味覚制限が無い上にレッドネームプレイヤーも受け入れてくれる稀有な店らしい。

初心者はこんな場所知らないし、上級者はもっと先の街の同じような施設を利用するので、知名度の割には人が少ないという穴場スポットなんだとか。というか、だから毎回オイカッツォはここでケーキを注文してたのかずるいぞ俺も食べる。

「んー、雑に甘い！」

「俺はこういう大雑把な甘味嫌いじゃないよ」

「はいはい……わざわざ朝集まってもらったのは他でもない、作戦決行における予定の再確認だね」

ムッシャムッシャとケーキをパクつきながらも、俺とオイカッツォは予定の復誦を行う。

「とりあえず俺達はサードレマで待機、そんで１１時半になった時点で樹海窟に行く……だろ？」

「今の俺達なら大体十五分あれば例の場所に着くから入り口前で待機」

「そう、私はフィフティシアに行く阿修羅会のメンバーを足止めする罠を仕掛けてから向かうから、大体五十五分予定……そして日付が変わるその瞬間が、決戦の時」

何をどう便宜したのか、ＮＰＣ店主たる強面のおっさんが揉み手で案内してくれた個室にて、俺達三人は絶賛悪巧み中だ。

レベリングは完了、スキルも整理し、武器防具も新調した。オイカッツォは何やら隠し球を用意したと言っていたが、俺は俺のできることをやるだけだ。

便秘で超速ボスの練習を行った今の俺はわずかな予備動作から相手の動きを読み取ることすら可能だ、多分。

さらにはオイカッツォがレベル４９で苦戦している時にレベリングに参加して、呪いを有効活用したライブスタイド・デストロブスター釣りによってある程度スキルも鍛えた。そんな今の俺のステータスはといえば。

――――――――――――――

ＰＮ：サンラク

ＬＶ：５３（１５）

ＪＯＢ：傭兵（二刀流使い）

１５０マーニ

ＨＰ（体力）：３０

ＭＰ（魔力）：１０

ＳＴＭ　（スタミナ）：６０

ＳＴＲ（筋力）：４０

ＤＥＸ（器用）：５０

ＡＧＩ（敏捷）：７０
ＴＥＣ（技量）：５５
ＶＩＴ（耐久力）：２０
ＬＵＣ（幸運）：７４

スキル
・無尽連斬
・ドリルピアッサー
・インファイトＬｖ．４
・スケートフット
・パリングプロテクト
・ハンド・オブ・フォーチュンＬｖ．３
・グレイトオブクライム
・クライマックス・ブーストＬｖ．２
・五艘跳び
・シャープターン
・アサシンピアスＬｖ．５
・オプレッションキックＬｖ．６
・ベストステップ
・餓狼（ハンガーウルフ）の闘志
・オフロードＬｖ．２
・致命刃術【水鏡の月】

装備
左右：帝蜂双剣
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋１）
胴：リュカオーンの呪い
腰：命潮の腰帯（ＶＩＴ＋１９）
足：リュカオーンの呪い
アクセサリー：なし
――――――――――――

……ええ買いましたよ買わされましたよ！　買わないとなんか怖かったんだよ！

いやそんなことよりも祝、ティッシュ装甲からダンボール装甲！

これは偉大な前進だ、何せダンボールはすぐに水で溶けない。

どちらにせよ焼け石に水ではあるのだが、最善を尽くすならば僅かでも努力はするべきだろう。様子見も兼ねて最初は帝蜂双剣で行くが、場合により装備は切り替えて行く。

「てか罠って何をするつもりだ？」

「上位クランに阿修羅会のクランの場所をチクる」

「「うわぁ」」

「多分上位クランが知らない場所、つまり例の場所に逃げ込んで来るだろうけど、少なくともあいつらが襲撃を受けてから即その答えにたどり着けるとも思えないし」

こいつ、たった一戦のためにクラン一つを潰すのか……いや、バレれば間違いなく袋叩きは確実な真似をしてでも勝つという決意か。

「とりあえずエリアに入るまでの作戦はこれで行くとして……本題は戦闘中の作戦」

「俺がウェザエモン担当で」

「こっちが騏驎担当、ペンシルゴンはサポートだよね？」

「そう、それについてのさらに詳細な確認だよ。まずサンラク君」

この場にエムルがいない寂しさになんとなく首の後ろを撫でていると、ペンシルゴンが俺に視線を向ける。

「まず君には、少なくとも墓守のウェザエモンが持つ大体のスキルを十分で完全対処できるようになってもらうよ」

「マジか」

「十分経過するまでは私とカッツォ君がアシストに回れるから、兎にも角にもあいつの動きに対処できるようになってほしい。多分後半に行くほどサンラク君には対処できなくなるから」

ふむ……事前情報があってもやはり実際の光景を見ない分には対処の仕方も変わってくる。十分の間であればカッツォを肉盾に出来るというのであれば、出来る限り節約しつつも酷使出来るな。

「というわけでよろしく頼むぞ肉盾」

「任せろふやけたダンボール」

無言でメンチを切る俺とオイカッツォの漫才をもはや無視したペンシルゴンは、次にオイカッツォへと視線を向ける。

「カッツォ君、多分だけどキミは相当回数死ぬことになる。だから十分経過して騏驎が来た時点で私は実質カッツォ君の専属サポートになる」

「……ヤバい、とは聞いてたけどそこまでヤバいの？」

オイカッツォは十分経過時点で出現する戦術機馬【騏驎】、それの足止めを役割としている。奴も大概ゲーム内じゃ超人じみているしロデオくらいなら難なくこなしそうではあるが、それを踏まえてのペンシルゴンの言葉は、否が応にでも戦闘の厳しさが伝わってくる。

「なんていうかな……馬とか牛とか、そういうイメージは捨てたほうがいいよ。あれはなんていうかもう……足の生えたダンプカーだと思った方がいい」

「予想の二段階くらい上行っちゃったなー」

安心しろ、俺は予想の三段階上で内心ドン引きしている。ペンシルゴンをして警戒を抱かせるデンジャラスロデオに挑むオイカッツォであるが、不敵な笑みを崩すことなく堂々と告げる。

「まぁ俺はこれでもプロゲーマーだからね、そこの悪食アマチュアゲーマーがロボ武者にボコられてる間優雅に馬と戯れているさ」

「行ってろ、精々後ろ足で蹴り上げられないようにな」

「あ、騏驎の後ろ足で蹴られたら死ぬよ。阿修羅会のタンクが掠っただけで消し飛んだし」

「…………」

笑みが引きつってるぜプロゲーマー。

「決戦は夜、とりあえず晩まで寝るとして……」

三日前から生活リズムをずらして来た俺は、今日の夜がベストパフォーマンスを可能とする時間帯だ。今すぐログアウトして寝てもいいが、寝る前にいくつかやっておきたいこともある。

ペンシルゴンから貰った使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）【座標転移（テレポート）】を使ってラビッツへと転移……

「キィーッ！」

「うおっなんだ！鳥！？」

いきなり肩を鉤爪で掴むように着地したそれは、俺の覆面とはまた違う鋭い眼光にまごう事なき猛禽の特性を備えた……ハヤブサ？

何事かと慌てて振り払おうとするが、肩にほとんど痛みを感じないことと、ハヤブサの脚に何か筒がくっついていることに気づく。

「もしかして……伝書鳩的な？」

「ピィー」
はよ受け取れや、とでも言いたげに脚を差し出して来たので筒に触れるとそれはポリゴンとなって消え、ウィンドウが表示される。
「手紙か……差出人は、んん！？」

拝啓
真夏の日差しも強く、日々猛暑の今夏でありますがいかがお過ごしでしょうか？
突然のことではありますが直接伺うのもご迷惑かと考え、こうして手紙を出させていただきました。
本日十一時にシャングリラ・フロンティアでは大型アップデートが実施されます。電子的な機微に疎い私としてもログアウトの必要なくアップデートするシャングリラ・フロンティアの技術力には驚嘆するばかりです。
本題ですが、宜しければ大型アップデートが実施された後の諸々について一緒に確認したい、と考える次第ですが如何でしょうか？
どうぞ御一考の方宜しくお願い致します。

サイガー０

一瞬あまりに堅っ苦しい文体過ぎてそういうロールプレイの果たし状か何かだと思ってしまった。
ええと、要約すると今晩空いていますか？　という意味なんだろうが……残念だが今晩は空いていない。

「ええと、返信は……これか」

わざわざ羊皮紙型のウィンドウが表示されるあたり細かいが記入はタッチパネル式のキーボードである。
とりあえず断りの言葉と……ああそうだ、どうせならシャンフロ内でもトップクラスの実力を持っているであろうサイガー０氏に質問でも投げてみようじゃないか。

「ハイレベルの方々は超速フレーム攻撃にどうやって対処なされてるんですか……っと」

これはハヤブサの脚にくっつければいいのかな？　おーよしよしそんな面倒そうな顔すんなよ……鳥のくせにやけに表情豊かじゃねぇか、睨んでも無駄だぞ目力の強さならこっちも自信がある。

「ほうれ行ってこーい」

「ピャーッ」

猛禽類とは思えない気の抜けた鳴き声で飛び去って行ったハヤブサを見送り、さて改めてラビッツに……あっ、手紙（メール）がいきなり来たもんだから使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）がインベントリに戻ってる、仕方ないなもう一回取り出して……

「ピェー」

「えぇ……」

ちょっと早過ぎない？

息切れしているハヤブサの頭を撫で、手紙を開けば今の一瞬でどれだけタイピングしたんだと聞きたくなるほどの大量の文章の羅列。肩で息切れするハヤブサを休ませ、なんとか解読したそれを要約する。

「要するに……「お返事ありがとう、残念ではありますがまたの機会に宜しくお願いします。基本的に高速で放たれる攻撃は予備動作を把握するか、ガードクリティカルなどで対処します。あまり見かけませんが幸運のパラメータを１００以上にすることで戦闘中一度だけあらゆる攻撃を受けても体力が１残る仕様もありますが、多段ヒットや即死攻撃には無力なためあまりオススメはできません」か」

これでも五分の一にまで圧縮した内容だぞ、実は俺のメールが届く前から既に俺が質問するであろう内容を把握していたんじゃなかろうな、恐るべしサイガー０。

にしても……うーん、あんまり役に立たない情報だ。いや、そうでもないんだが、今の俺ではどうしようもない情報ばかりだ。

「とりあえずお礼書いて……」

「ピィ……」

「……鮭でも食ってくか？」

「ピィー！」

高速シャトルランさせられているハヤブサがあまりにも哀れだったため、余りに余りまくっているライブスタイド・サーモンを食べるかと聞けば喜んでいるのか、羽を広げて一鳴きした後に鮭をつつき始めた。

「おーおー愛い奴め。しかし凄い作り込みだな……さすがシャンフロ」

ポリゴンのかけらも窺わせない狂気じみた作り込みは、実はゲーム内と見せかけて本当に異世界に来ているのではとすら思わせる。

「………っは」

「ピヨ？」

「何でもない……ってお前本当にハヤブサか？」

思わず自分の突飛な発想を鼻で笑う。異世界には行けないし行きたいとも思わないが、その非日常性を体験だけはしたいからこそ、ゲームをやるのだから。

「サンラクサン！　いらっしゃいです……わ？」

手紙をくくりつけたハヤブサを見送り、ラビッツへと転移した俺を出迎えたエムルだったが、何やら顔をしかめると俺の方によじ登って鼻を動かす。

「どうした？」

「……なんだか他のケモノの匂いがする！　ですわ！」

お前はヤンデレ系ヒロインか。例の「ピザ留学」にもヤンデレ系ヒロインはいたなぁ、最終的にお前主人公＜＜ピザなのかよと購入者から総ツッコミ受けてたな。

そんなことを考えていると、エムルはさらに俺の身体をよじ登って頭の上へと到達する。

「サンラクサンのここはアタシの定位置ですわっ！　ポッと出の鳥になんて負けないですわ！」

「兎も一羽二羽で数えるし似たようなもんじゃ……」

「むーーーーー！！」

「いたっ！いたたたたやめっ！」

ＳＴＲ３０でポカポカ殴るな痛いから！

シャンフロ内のメールは鳥を利用した所謂伝書鳩的なシステムを利用しており、お金を積めば積むほどより速くメールが相手へと届く。厳密には実在の動物そのものではないがほぼその見た目のため鳥の名前で認識されている。
ちなみに「送信↓返信」が一回分の料金であり、ヒロインちゃんは合計二回最高級の伝書鳥を使用しています。まさに廃人プレイヤーのみに許されたブルジョワメール

スズメ（最安価、送信してから五分後に宛先に届く、３０％程度の確率で猛禽に捕食されてメールが届かない）
ハト（普通、送信してから三分後に宛先に届く、スズメより若干速いが猛禽に捕食される可能性は５％存在する）
カラス（割高、送信してから四分後に宛先に届く、猛禽に捕食されることはないがハトより僅かに遅い）
フクロウ（高、夜間限定で送信してから二秒後に宛先へと届く、ただし日中は送信不可）
ハヤブサ（最高級、送信してから三秒後に宛先へと届く、稀に宛先人にアイテムをくれる……スズメの羽とか）

刹那に想いを込めて　其の十二

エムルさんまじかっけーっすわー、叡智とプリティーと強さを兼ね備えたパーフェクトバニーですわー

明らかに適当な褒め言葉だったのだが、頭の上でスライム兎と化したエムルを載せつつ、俺は兎御殿を進む。

「チョロエムルさん、ほら起きて起きて。お前のおとーちゃんに会いに行くんだぞー」

「ふぇへへへ…………はっ！」

正気になったエムルを下ろし、ヴァッシュがいる大部屋へと入る。

「おう、おめぇかい」

「うっす、いよいよ今晩です故一言ご挨拶にと」

こういう細かな心遣いはギャルゲーの基本だ、選択肢一つがルート分岐になりかねないからな。

訪れた俺に対して、ヴァッシュは一つ頷くと口を開く。

「成る程なぁ、いい面構えじゃあねぇかい……だったらぁよう、俺等ぁから言えるこたぁ一つだけだ」

「…………」

「ヴォーパル魂を忘れんなよう」

「押忍！」

この場でヴォーパル魂ってなんですか、とか聞いたらぶち殺されそう。

いや、それは冗談だがなんとなくニュアンスで理解はしている、それで十分なのだろう。

「では、失礼しやす」

「おう、頑張りな」

ヴァッシュに頭を下げて、部屋を出る。

装備よし、コミュニケーションよし、アイテムよし。さて……これで大体やるべき事はやったか、あとはイベントスキップ（夜まで寝る）だけか。

ログアウトしておやすみなさい……

睡眠イベントなんてスキップだスキップ！

晩……というよりもう夜だな。目を覚ました俺は風呂に入ってさっぱりした後、決戦前最後のリアルでの準備を整える。自室のドアに「重要局面につき明日朝まで面会謝絶」の紙を貼っておき、用意した諸々のうち、英語表記のそれのプルタブを開ける。
フルダイブVRではあまり推奨されていない裏技なのだが、カフェインを摂取してからフルダイブVRをプレイすると、ゲーム内でのパフォーマンスが上がる。
その代わり通常よりも多めの疲労感を感じるため、多用はできない裏技ではあるが今使わずしていつ使うというのか。

「うふふへへ……今日のために取り寄せたメリケン産のエナジードリンクぅ……日本のやつよりエグいが、効くねぇ」

若干残る眠気を叩き潰すようなカフェインパワーに口の端が不気味に歪んでしまう。来てる来てる、全身にカフェインが充填されているぞぉ……？
さらにビタミン剤、栄養食的なクッキー、諸々を詰め込んでエネルギーチャージ完了。言うなれば今の俺はゲージMAXの格ゲーキャラ、まさしくベストコンディションだ。
時間的にそろそろオイカッツォと合流しないとな。

「さぁ、いざ決戦の世界へ……ってな」

ログイン。

楽郎(サンラク)が俺に代わり、現実のベッドに横たわった俺がラビッツのベッドから起き上がる。身体は軽く、今なら虚空を飛ぶ蝿すら素手で掴め

そうだ。
本格的にカフェインが全身に回るまでは三十分くらいかかるだろう、今はとりあえずオイカッツォと合流だな。
激戦は必至のため、ラビッツに留まるエムルではあるがサードレマまでは送ると言うので、お言葉に甘えることに。

「サンラクサン、サンラクサン」

「ん？」

「墓守のウェザエモンに挑むサンラクサンにこれ、貸してあげるですわ！」

サードレマの裏路地、プレイヤーもそうそう来ることはない小さなスペースに転移した俺とエムル。
別れる前に、そう言ってなにやら小さなネックレスを手渡してくるエムル。よく見れば、ぶら下がっているそれは宝石とか指輪とかそういうものではなく、何かのカケラを金属のフレームで補強したもののようだ。

「これ、おとーちゃんが昔お土産にって持って来たんをネックレスにしてもらったアタシのお守りですわ！」

「ふむ……まぁこれがなくても俺達はウェザエモンに負けないけどな」

がーん！　とSEが鳴っていそうなエムルの姿に苦笑を浮かべ、俺はエムルの頭に手を乗せる。

「だがまぁ、ただでさえハイパー無敵な俺がお守りなんか持ったら

そりゃあ勝利は確実だ。ありがたく受け取っておくし、ちゃんと返しに徒歩で戻ってくるからよ」

「は、はいな！　頑張ってくださいですわ！」

ぴょこぴょこ跳ねるエムルの声援を受け、俺は親指を立ててサードレマの裏路地から待ち合わせ場所へと駆け出すのだった。

・識別片のネックレス
効果なし。
それは残滓であり、残骸であり、断片であり、欠片である。
それが誰を証明するもので、どこで用いられたものかを知ることはできない。
だがかつてそれは確かにある人物の存在を証明するものであった。

「よう」

「やぁサンラク、ドーピングのほどはどうだい？」

「お前が勧めてきたあのエナジードリンクヤバいな、ありゃ多用す

るものじゃねーわ」

「だろうね、俺もアメリカのプロゲーマーに勧められてたまに飲むけど常飲しようとは思えないくらいだし」

カフェ「蛇の林檎」で合流し、なるべく人目につかないよう千紫万紅の樹海窟へと向かう俺達。どうやらオイカッツォもベストコンディションのようだ、力み過ぎず緩み過ぎず……まぁ少なくとも緊張で手元が狂うようなタマでもないか。何千の視線を受けてゲームをするプロゲーマーの肝がそんなみみっちいはずもなし、俺達はバレる可能性は低いとは思うが周囲に注意しながら隠しエリア「秘匿の花園」へと入る。

「あ、そうだ。便秘で新バグ技見つかったぞ。ガーキャン挟めばゲージ技でパイルバンカーできる」

「え、まじで!?」

「マジもマジ」

「ガーキャンかぁ……それは考えてなかった、ていうかなんでガーキャンから派生するんだ……？」

俺と全く同じこと言ってやがる。やることがない故に花畑に座り込んで駄弁っていた俺達だったが、彼岸花の花畑のど真ん中に亀裂が走った瞬間、表情を引き締めて立ち上がる。

「……これ、だよね？」

「新月の夜は結界に綻びができる……だったか、こういう感じなの

か。なんというかバ……」

「バグってオブジェクト崩壊したみたい、とか馬鹿みたいなこと言わないでよ？」

「……バ、バッカ、俺がこの局面でそんなくだらないシャレ言うわけない……ですわ？」

「目が泳いでるよクソゲーマー」

それは兎も角として、あとは主催たるペンシルゴンを待つだけだ。

俺達が空間に生じた亀裂を眺めていると、洞窟の方から駆け足が聞こえてくる。

「お待たせ！」

「その様子だと……」

「いやぁ、予想以上に抜けるのに手間取ってさ。まさか最大火力（アタックホルダー）が初手ブッパ決めてくるとは思わなかったよ」

なんと哀れな……あまりいい印象の無い阿修羅会ではあるが、今頃は大変なことになっているのだろう。

グイッとポーションと思しき液体を飲み干したペンシルゴンは、改めて俺とオイカッツォに視線を向ける。

「チャンスは一度きり、失敗すれば……まぁ阿修羅会から袋叩きは確実だね」

「失敗した時のことなんかドブにでも捨てておけ」

「そうとも、俺達は墓守のウェザエモンだなんてご大層な相手に勝ち……に来てるんだ。だったら言う事は一つでしょ？」

俺達は互いを見て不敵な笑みを浮かべ、拳を突き合わせる。

「じゃあ主催者として私が音頭を取りまして………あのロボ武者野郎をぶっ倒すよ！」

「「「おう！」」」

拳を離すと同時にペンシルゴンから飛んで来たパーティ申請を受諾、改めて三人一組となった俺達は花園の中心に出来た空間の綻びに飛び込む。

オイカッツォが飛び込み、俺が飛び込み、最後にペンシルゴン。

そして世界は反転する………！

サンラクが飛び込み、自分が飛び込む番となったペンシルゴンは、枯れ果てた……そう、桜の木を見上げる。

満月の光が彼女の姿を浮かび上がらせると言う設定上、新月の今日

に彼女の姿を見出す事はできない。だが、それはあくまでも姿だけの話。

「セッちゃん……いや、セツナ」

その存在は確かにこの場所に存在している。恋人の純粋な想いに縛られた彼女は死してなおこの場でずっと待ち続けていた。

偶然と言えばそれまでだ。ただ自分の本名とゲームのＮＰＣの名前が対義語であった、それだけの話だ。だが……否、だからこそペンシルゴンは、天音永遠（アーサー・ペンシルゴン）は本気でゲームにのめり込む事を決めたのだ。

「貴女の願い、私が……いいえ、私達が叶えてあげる」

枯れ果てた木は夜風に僅かに枝を揺らすのみ。だがペンシルゴンはそこに一瞬女性の姿を見た。

そしてペンシルゴンは笑みを浮かべ、仲間達が飛び込んだ決戦のフィールドへと自身も飛び込むのだった。

彼らは、酷く消耗していた。今まで誰にも見つかる事のなかった拠点への突如とした襲撃。それも「黒狼」「イン虎会」「午後十時軍」「天ぷら騎士団」という、レイドボス戦でもみないような四クランによるプレイヤー連盟による奇襲は、ＰＫクラン阿修羅会に大混乱を齎した。

否、本来であればある程度の防衛はできていたのだ……奴さえいなければ。

「くそっ……くそっ……！　あんなのどう考えてもレイドボス相手に使うようなスキルコンボじゃねぇか……！」

特定条件で製作可能なプレイヤーが使役できる数少ないモンスター「ゴーレム」。レベル７０相当のそれら十体を一撃で殲滅せしめたプレイヤー……サイガー０。

最大火力（アタックホルダー）の称号が決して介護によるものだけではないという事をまざまざと見せつけられた阿修羅会は総崩れとなり、今ではクランマスターと数人のメンバーがかろうじて離脱に成功したものの、殆どのメンバーはＰＫＫ……即ち襲撃者達によって討ち取られてしまった。

「オ、オルスロットさん……どうしますか？」

「……とりあえず秘匿の花園に退避だ。あそこは俺たちしか知らねえ、癪だがあそこで朝まで隠れるしかねぇだろ」

サードレマなどの大規模マップに逃げ込むのも手ではあるが、どこに襲撃クランの目があるのか分かったものではない以上、それらの目から完全に逃れられる隠しエリア以上に安全な場所はない。

転移と移動を繰り返し、秘匿の花園へと向かいながら阿修羅会クランマスター、オルスロットは考える。

（一体なんでバレた？　どこから情報が漏れた……？）

阿修羅会が拠点としていた場所は、１５番目の街フィフティシアの隠しエリア「栄光の廃船グローリー・エリス号」、情報屋ですら知り得ない安全地帯をどうやって見つけ出したのか。
考えられる最も高い可能性はやはり内通者。オルスロットの脳裏に一人の女性が思い浮かぶが、彼女もまた襲撃に対して驚愕の表情を浮かべていた。

（……ちょっと待て）

オルスロットの中で単語同士が繋がり始める。
今日はなんの日であるのか。アップデート実施日？　違う、今日は新月であり阿修羅会最大の秘密たるユニークモンスターへの挑戦が可能な日。
ペンシルゴンはどこへ行ったのか？　生き残りによれば襲撃者が雪崩れ込んだ時点でどこかへ駆け出していたというのはわかる。
ペンシルゴンという人物は悔しいが自分よりも優れている。であるならば阿修羅会のみが知る隠しエリアが安全な場所であると当然理解しているはずだ。
であるなら、だとすれば、ひょっとして、まさか、そんな。

仮定が補強され、現実味を発し始める。
足を動かす速度が上がり、気づけばクランメンバーの声すら無視して全速力で秘匿の花園へと走っていた。

「な、あ…………？」

秘匿の花園はオルスロットから見ても幻想的な光景を……いつも通りの光景。だがそこにはいるべきはずの人物は存在せず、あるはずの入口すらも存在しない。

「あ、が…………」

最悪の予想が、誰よりもアーサー・ペンシルゴン……天音　永遠を知っているが故に、オルスロットは真実へと到達した。してしまった。

嘘か真か「かつてあるゲームで全プレイヤーを支配下に置いていた」……そんなことを嘯いていた実の姉の姿を、雑誌に写る、仕事用の笑顔とは真逆の人を喰ったような嘲笑を幻視する。

「や、やりやがった……」

「オルスロットさん？」

ただこの一瞬のためだけに。

オルスロット達が今晩の墓守のウェザエモンへの挑戦を阻止する、ただそれだけのためだけに。

アーサー・ペンシルゴンは阿修羅会を売り飛ばした。

まさしく正解にたどり着いたオルスロット……天音(あまね)　久遠(くおん)は思わずゲームのマナーすら忘れて絶叫する。

「あんのクソ姉御がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

刹那に想いを込めて　其の十二（後書き）

円卓最強の騎士の名前をもじってオルスロットにしよう！
←
姉がアーサー王をもじった名前でプレイしていたという事実

ちなみにヒロインちゃんがやたら張り切っていたのは
「アプデを理由とした主人公とのプレイができなかった」×「サードレマでの出来事を思い出した」×「主人公を狙うＰＫクランだし遠慮はいらないよね」＝　対レイドボス用クラスの一撃初手ブッパという感じです

刹那に想いを込めて　其の十三

「なんつーか、ゲーム内でログインし直した気分だ」

「あ、それ分かる」

ログイン時の意識が身体から離れて無重力空間に漂うようなあの感覚を、ゲーム内で味わった俺達は大まかなマップの形状こそ秘匿の花園と同じだが、目に映る光景は真逆の場所に立っていた。

あの一面に咲き誇っていた彼岸花は根の一片も残すことなく全て消失し、土なのか石なのか曖昧な平坦な地面が広がっている。

空に至っては色調反転してしまったかのごとく、白い夜空に黒い星が輝いている有様だ。それ故に夜空でありながら真昼間のように明るいと言う幻想的と言うには少々不気味な光景だ。

そして、「正位置」のエリアにポツンと生えていた枯れ木は、「逆位置」のこの場所……隠しフィールド「反転の墓標」においては全く別の姿を見せていた。

「枯れ木に花を咲かせましょう、ってか？」

命の気配の一切を感じられなかった枯れ木には白銀に僅かに朱色を帯びた花弁を、花弁そのものが重さに耐えきれず散ってしまうほどに咲き乱れる桜の花が。

そしてその根元には、簡素な墓標……そして何よりも。

「……あれか」

「……あれだろうね」

「……あれだよ」

錆があるわけでもない、ひび割れ風化しているわけでもない。だと言うのにそれからひしひしと伝わる「年月」が、舞い散る花弁を押しのけ静かに立ち上がる。

成る程、ペンシルゴンの言う通り確かにロボ武者と形容するのが一番適切だろう。

「………」

一切の肌を見せない全身を覆う白と黒の機械装甲、顔すらも覆い尽くしたそこにはヒロイックなロボ特有のツインアイカメラ。双眸に光が宿り、身体の各部が微かに駆動音を立てながらも、それは静かに腰に装備されていた刀を抜く。

立ち上がって初めて分かる全容、所々に日本の甲冑風の意匠が見えるその背丈はおおよそ二メートル半程か。

「さて……お手並み拝見と行こうか」

ペンシルゴンとオイカッツォを手で制し、俺はただ一人機械の鎧武者……NPC遠き日のセツナの恋人であり、ユニークモンスターであり、ヴァッシュ曰く「死に損ない」であるそれと俺の距離は互いが一歩踏み出す度に縮まっていく。

まるで西部劇の決闘だ、遠ざかるのではなく近づく辺りは真逆だがどちらが先手を打つのか、いつやるのか。モチベーションと緊張がアホみたいに高まっていくのが自覚できる。

「っ！」

そして互いの距離は一メートル、そこでそれは居合の構えを取る。
成る程、いいぜ……開幕から飛ばしてくるならこっちも乗ってやる。

「墓守のウェザエモン、いざ尋常に……」

「断風（タチカゼ）」

見た目とは逆に錆に錆びきったような呟き、それと共に超速フレームの居合が放たれる。霞む墓守のウェザエモンの腕、線にしか見えない光の筋、だが確かに俺の目はそこに刃の輝きと、即死の気配を感じ取った。狙いは首か！！

「勝負！」

インファイト起動、頭を屈めた瞬間頭上を青い水晶のような刃が通過し、それを確かめることなく俺は一気に墓守のウェザエモンに肉薄する。
そして俺とウェザエモンの長い長い戦いの火蓋は切って落とされた。

「マジで初見一発で避けたよサンラク君……」

「俺達はどうする？」
暴風圏ならぬ暴刃圏と化した墓守のウェザエモンに肉薄し、戦闘を開始したサンラクに目を向けつつオイカッツォは手短に問う。
笑みを浮かべながら墓守のウェザエモンに様々なアプローチを仕掛ける……例えば足払いは効くのか、具体的に装甲は如何程なのか、隙間は、手指は、目は、駆動部は……喰らえば即死は免れない刃の連撃を掻い潜りながら「もしや」の隙間を見出さんと試行錯誤を繰り返すサンラクの顔に浮かぶのは笑み。
だがそれが余裕のものではないとオイカッツォは知っている、あれは半ば引きつった顔であり、言うなればあまりの難易度に「笑うしかない」ものであると感想を聞かずとも理解できる。

「私は「準備」を始めるから、カッツォ君はあらかじめ持たせたアイテム持ってスタンバってて」

「了解……！」

駆け出したオイカッツォから早々に目を離し、ペンシルゴンはその場でアイテムをインベントリから取り出す。

「頼むよ天秤ちゃん……！　この戦いは君にかかってるんだからね……！」

余裕のない、されど勝利を諦めてはいない笑みを浮かべながら、ペンシルゴンが話しかけた先、そこには黄金色の天秤がキラリと輝きを放った。
そしてそのタイミングで、サンラクが致命的な一太刀（ダメージ）を受けてポリゴンと散った。

なんというか、これ作ったやつを一発殴りたい。ただただ「速い」「硬い」「強い」だけを追求したような性能をした墓守のウェザエモンに切り捨てられ、ポリゴンと散った俺はそんなことを考えながら……立ち上がる。

「スイッチ！　あと情報！」

「無理ゲーだから避けろ！」

「了解……！」

後退しながら、非常に簡素に纏めた「墓守のウェザエモンに対してなんらかの有効打は存在するか？」という問いに答えを返す。

「ひぃぃ隙なさすぎ！」

「本当にな……！」

二、三分という短い間でしかないにも関わらず、既に耐久度が四割を切った帝蜂双剣をインベントリにしまい、別の武器を取り出しながら俺は必死に攻撃を避けるオイカッツォを見る。

「リスポン一回が４００万マーニもするとはな……」

俺がＨＰを全損させたにも関わらずここに立っている理由、それは爆散の間際にオイカッツォが俺に投げつけたアイテムが理由だ。消費アイテムの中では貫禄の最高額、ポリゴンとなってから十秒以内に投げるなり叩きつけるなりして接触させる事で如何なるプレイヤーであろうと無条件で全回復して蘇生する言う所の完全蘇生アイテム「再誕の涙珠」。

「運命神の涙だかなんだか知らないが、ありがたいね……！」

どんな手を使ったのか、ペンシルゴンが買い占めたその数なんと十二個。一人頭四個ずつ持った上で体力半分で蘇生というライト版蘇生アイテム「生命の神薬」をさらに一人頭上限五個ずつ持った総計二十七の追加残機を以て俺達は墓守のウェザエモンに挑む。

まさしくゾンビ、墓守のウェザエモンとかいうロケットランチャーを頭に叩き込んでもケロッとしていそうな極大のデンジャラスモンスターに対抗するには、こっちもゾンビ戦法で立ち向かうしかないのだ。

間断なく攻撃を繰り出しているように見えて、その実数秒もないが確かに攻撃と攻撃の間が存在する。

ビィラックの鍛治により、強化されその耐久力を大幅に増した湖沼の短剣【改二】を両手に俺はその僅かな間を縫ってオイカッツォと切り替わる。

「オッケー、代わる！」

「死んだらまた受け持つ！」

「あい……よっ！」

もはや四つん這いに等しい程しゃがんで墓守のウェザエモンが放つ腰を断たんとする一閃を回避する。

一応無駄だとは薄々感づいているものの、脚を掴んでひっくり返せないか試すが……俺は電柱でも引っ張っているのか？

「うおっ！？」

一切の迷いなく頭を串刺しに来た上から下への突きを転がるように回避し、立ち上がる。

勝利条件も曖昧で、俺達が仮定する「時間経過説」も一体どれだけの間戦い続ければいいのかさっぱり分からない。だが、ただ一つ言えることがある。

「入道雲(ニュウドウグモ)」

「デス数は十以下で済めばいいが……」

何もかもを薙ぎ払わんと振り払われる雲の巨腕から逃れる術を模索しつつも、そうポツリと呟かずにはいられなかった。

そして七分が経過した。

「雷鐘（ライショウ）」

「来るよ！」

「見りゃ分かる……！」

一秒で五発の即死ダメージ確実の落雷、それが五秒間。あまりにも狂った秒間火力（DPS）を叩き出しながら降り注ぐ落雷の豪雨を文字通り滑走を可能とする回避スキル、スケートフットで回避しきる。ＤＰＳが高すぎるからこそ全力で走れば避けることはできる、他二人も死んではいないようだ。

「ナメんな！」

スケートフットの効果が切れた瞬間に放たれた突きを、本来は攻撃を弾きその攻撃の５％のダメージを与えるカウンタースキル、パリングプロテクトでなんとか軌道をズラす。真っ向から受けたら串刺しの未来しか見えないし、試すことすら余裕がない。

刀を背に隠すように構えてショルダータックル、俺が避けたところを狙う腰のひねりを入れての袈裟斬り。身体を回転させるようにして肩から右腕を斬り落とす軌道のそれを回避し、刃を裏返しての斬り上げをバック転で跳び越える。

こんな曲芸じみた動きだが、余裕があってのことではない。普通にジャンプしたのでは着地狩りされるのだ、コンマ一秒でも地面に足が付く速度の速いバック転に……それが例えスタミナを削る動きであってもやらざるを得ない。

「機関銃を避ける方がまだイージーだ……っ！」

「スイッチは！」

「頼む！」

オイカッツォと交代し、超速居合「断風」で首が飛んだオイカッツォに再誕の涙珠をぶん投げつつこんがらがった思考を丁寧に、しかし迅速に落ち着かせていく。間違ってもヘイトがこちらに向かないよう後方で何やら準備を続けているペンシルゴンの位置まで下がる。

「まだ十分も経過していないのか……」

「誰も脱落していない、という点では歴代最高記録だよ」

「一時間とかだったら流石に無理ゲーだぞ」

「それを踏まえて二十分……多く見積もって三十分間がリミットなんじゃないかと思ってるんだけど……」

これをあと2セット、さらに言えば難易度が段階的に上昇する残り二十分か……

「クソゲー認定していい？」

「三人とかいう舐めプじみたことしてるしダメじゃない？」

そっかー……というか、ペンシルゴンは何をしているんだ？　さっきから天秤とウィンドウを交互に見て何かしているようだが。視線に気づいたのか、ペンシルゴンはニヤリと笑みを浮かべる。

「これは「対価の天秤」っていうユニークアイテムでね、ちょっと頑張って説得して借りて来たのさ。効果は……おっと不味い、十分経過だ」

「オイカッツォ！　時間だ代われ！」

ダメージが通らないことは百も承知、ヘイトを奪うことが目的だ。オイカッツォを追う背中に、ヒット数が上がった刺突スキルであるドリルピアッサーを叩き込み、オイカッツォの離脱を確認して墓守のウェザエモンへと視線を向ける。

「第二ラウンドだろ？　出せよお馬さんをよぉ、ウチのプロゲーマーがロデオの練習台にするからよ」

「…………質量転送（エクスポート）・及び展開（サモンコール）、戦術機馬【騏麟】」

あまり聞き続けたいものでもない錆び付いた声がそう唱えると同時に、四人しかいないフィールドの空白に幾何学模様が展開される。それは足元から3Dプリンターで物質を形成するかの如く、巨大質量をこの場へと転送（召喚）する。

「馬……？」

「形状的にはそうとしか言いようがないし」

「足の生えたダンプカーだろどう見ても！」

「私それ言ったよねぇ！？」

召喚を終えると同時に墓守のウェザエモンが攻撃を再開した為にそ

の姿をちらりと見ることしかできなかったが、それだけでも「足の生えたダンプカー」の例えが決して誇張ではないと理解できた。
なんだありゃ、五メートルは軽く越してるぞ。オイカッツォの奴、大丈夫か……？

刹那に想いを込めて　其の十三（後書き）

サンラクが墓守のウェザエモンの対処を再開し、逆に離脱したオイカッツォが自分の相対するそれを見た第一印象は「足の生えたダンプカー」ではあったが、改めてその全容を見た上で抱いた感想は「跳ね回る戦車」であった。

墓守のウェザエモンの纏う鎧のカラーリングに合うようデザインされているのか、主人の甲冑と同じ白と黒の鋼鉄の体躯は見上げるほどに巨大で、装甲の隙間にはそれこそダンプカーのタイヤを思わせる人工筋肉と思しきチューブの束が見える。

キャバリー・クライシスでゲーム内限定とはいえ乗馬に心得のあるプロゲーマーとと言えども、乗りこなすとかそういう事を考える以前の問題として「どう乗れと？」と言わざるを得ない。

「これがミサイルやレーザーを撒き散らしながらエリア中を走り回る？」

「私の人生の中でもぶっ飛ばされるボウリングのピンの気持ちを体験したのは稀有だと思うよ」

そりゃそうだ、と溢しつつもオイカッツォは動き出さんとする巨大な機械馬……麒麟を観察する。

「サンラクが粘ってるのに、俺だけ残機回復要員なんてあり得ないよねぇ……！　あった、搭乗口！」

駆け出す先は麒麟の後脚。大雑把にＳＦ要素を入れた十把一絡げのゲームではなく、狂気じみたレベルで設定が練られ、それを完全

に再現しきった上でゲーム性も両立させたゲームだからこそ、設定を崩さない範囲で攻略のためのヒントを作るとしたなら、何を設置するのか。オイカッツォの予想は的中し、見つけ出した整備員用のはしご。

　サンラクが諸事情で技量などにステータスを振らざるを得なかった為に、ポイント振りの結果サンラクとほぼ同速を得たオイカッツォは麒麟の眼がサンラクを捉えるよりも先に、その背へと登り切る。

「馬には轡が必要だよねぇ……？　縄傀儡【蛇】！」

　オイカッツォが確実に成功させる為に口に出したスキルは修行僧（モンク）のものではない。縄と僅かばかりの魔法を頼りに未知を暴き、叡智を探し求める探求者……考古学者のスキルである。

　スキルによって生きた蛇のような動きで麒麟の首に巻きついた縄を強く握りしめ、さながら馬に轡を取り付けたかのような状態となる。

「まさか副業（サブジョブ）の考古学者をこんな使い方するとは思わなかったよ……キャバリー・クライシス全国三位のテクニックを見せてやるよ暴れ馬っ！」

　地響きと轟音の嗎をゴング代わりに、オイカッツォの長い長いロデオが始まる。

対価の天秤。
それはNPCが運営する商会である「黄金の天秤商会」が所有するユニークアイテムである。
レベル９９に到達したプレイヤーとして、様々なユニークを見てきたペンシルゴンをして「ぶっ壊れ」と評さざるを得ない破格のアイテム。

「おいおい、総計３０００万マーニ分のアイテム叩き込んでまだ行けますって？　とんだ大飯食らいさんめ」

ペンシルゴンがこれまでのプレイで集めたアイテム、更にはトレードや売買の結果集めた高額アイテム、全て合わせて時価３０００万マーニという大量のアイテムを左皿にデータとして載せた天秤は、当然ながら左皿が地に付くほどに傾いている。

「レートは１０万で１ポイント、頼むよ天秤ちゃん……『天秤は均衡を保つ、価値を数値に、万夫不当の力を』！　だったよね？」

ユニークアイテム特有の、設定に忠実すぎが故の面倒くささ……例えば用途毎に用意された呪文。ペンシルゴンはこの盤面において切り札となりうる効果を発動させる。

ユニークアイテム「対価の天秤」。

ＮＰＣ商会「黄金の天秤商会」が商売の象徴として秘していたユニークアイテム。

左皿……「捧げの皿」にアイテムを投入することで、その価値に応じて右皿……「恵みの皿」から様々な恩恵を得ることができる。

それは単純に左皿に乗せたアイテムを売却した場合の金額と同価値の金貨であったり……一時的という大きな制限こそあるもののレベル上限を超えた数値のステータスポイントを付与するものであったり。

「私の全財産、追加ステータスポイント。合計３００ポイント……持ってけ泥棒！」

ペンシルゴンの眼前に表示された二つのウィンドウ。タフネスに特化した格闘タイプのそれと、何がしたいのかわからない技量と幸運に特化した変態タイプのそれに、先駆けとして５０ポイントずつが叩き込まれる。

「おおお！？」

突如として墓守のウェザエモンが放つ攻撃がスローになった。そんな勘違いをしてしまうほどの感覚のズレに、思わず素っ頓狂な声を出してしまう。だが、すぐさまそれは違うということに気づく。

「ご大層な準備はこれか……っ！」

先程までと比べて格段に思い通りに動く身体で墓守のウェザエモンの太刀を避ける。直後、さらに身体の内側から軽く叩かれたような衝撃と共に、息切れの感覚が消える。

「袈裟斬り、斬り上げ、回転斬り」

一歩横にステップで袈裟斬りを避け、湖沼の短剣【改二】を用いて斬り上げをパリィ、三歩跳び下がって回転斬りの範囲から逃れる。攻撃が止まった一瞬に一気に肉薄し、右の短剣を用いてドリルピアッサー起動。狙うのは胴体でも顔でもない

「一点狙い！」

青い水晶体のような、一見すればすぐに割れてしまいそうな太刀を握る手……指だ。より荒々しさを増した螺旋エフェクトが回転斬りの終了モーションで固まった墓守のウェザエモンの指を撫でるように斬りつけ、多段ヒットが弾ける。

確かに墓守のウェザエモンは硬い、普通に攻撃していては帝蜂双剣のように耐久をあっという間に切らしてしまう。だが、頑丈な甲冑を持つモンスターの弱点はな、古来より関節と末端って相場が決まってるんだよ！

俺の攻撃を後押しするように身体に力が満ち、湖沼の短剣【改二】は確かに墓守のウェザエモンの指を削る。だが足りない、螺旋のエ

フェクトが解けてスキルの終了を告げる。
あと一歩、あと少しで緩みかけた太刀を握る手が開かれるのだ。
どうすればいい？　こうすればいい。左手の短剣を上へと放り投げ、さらに一歩踏み込みインファイト起動。左手に纏うエフェクトは幸運の光、７４という数値が補正を受けてダメージへと換算され、緩みかけた墓守のウェザエモンの指……ではなく、刀の柄を叩き据える。

「ハンド・オブ・フォーチュン！」

すっぽ抜けるように墓守のウェザエモンの手から太刀が離れ、遠くへと飛んでいく。墓守のウェザエモンが反応するよりも早く、俺は落ちてきた短剣をキャッチ&インベントリに叩き込みつつ地面に突き立ったウェザエモンの太刀を確保する。

「はっはぁ！　剣を持たない剣士などルーのないカレーと同義！ざまぁみろ白米野郎！」

分かってはいたがアイテムとしてインベントリに入れることは出来ないか。手から伝わる重さは、これを振るう資格が……この大剣にしか思えない大太刀を振るうに足るステータスを俺が持ってない事を伝えてくる。
だが、別に俺はこの刀を求めて吹っ飛ばしたわけじゃない。戦利品はドロップしてからだ。刀を失った墓守のウェザエモン、あの厄介な超速居合も、落雷も封じることが出来たのは大きい。さぁここからが第二ラウンド、お前が素手で出来ることなど精々あの雲の腕による範囲攻撃程度……

「大時化（オオシケ）」

「らぁぁいす！？」

ナメてた！　白米パワーナメてた！　畜生さすがは主食の貫禄と言うべきか……いや落ち着け、白米パワーってなんだよ。

　今の俺がベストステップとスケートフットを同時に発動したとしても、同じ速度が出せるかどうか怪しい程の急接近から放たれた掴み攻撃。あの大きく開かれた掌に掴まれればどうなるのかは考えるまでもないだろう。投げ飛ばすどころか力を込められただけで多分死ぬ。初見で避けられたのは幸運だった、だが位置が良くない。

「…………」

「…………」

「…………」

　麒麟とオイカッツォが轟音ロデオを繰り広げている中、三者の沈黙が広がる。不味い、避けるのに手一杯でペンシルゴンの近くまで来てしまった。

「大(オオ)……」

「うへぇ！」

「やっぱりかよ！」

　こう言う時のやって欲しくない事、というのはほぼ確実にやってくれるのが強敵の優しさだ……そんな優しさなんてゴミ箱に捨てておけ。

　ターゲットをペンシルゴンに変更した墓守のウェザエモンの掴み

攻撃を、無理矢理振り回したウェザエモンの太刀で背中を斬りつけることでヘイトを奪い取れないか試みる。どうだ、舐めプじみたカスダメだが自分の武器で背中を斬られた訳だ、それでもペンシルゴンを狙うか……？

「……時化（シケ）」

「うぐぉ！」

喉への衝撃、そして全身を包む浮遊感……くそ、掴まれた。いやだがペンシルゴンが離脱する時間を稼げたならこれが正か……

「うべ！！？」

あまりに一瞬のうちに世界が反転し、世界が暗転し、世界が明転する。最後は蘇生されたものとして、もしかしてあの一瞬で投げられて頭から地面に叩きつけられたのか？

くそ、全力稼働している洗濯機の中に放り込まれて洗濯機ごとプレスで潰された気分だ。ペンシルゴンが離脱しながらも投げた再誕の涙珠によって蘇生されながら、俺は距離を離す。

「刀持たせてた方がまだ対処できるか……」

リーチは短くなるがその分剣を振るより早いタイミングで掴まれるのは、ただでさえ付け焼き刃の対処をさらに見直さなくてはならなくなる。必死こいて構築した攻略チャートを崩してもう一度組み立て直せとか、心が折れる。

「やってやるよ、命懸けのチャンバラと洒落込もうじゃないか……！　ってそれただの殺し合いだな」

「断風」

「つぁぁあい！！」

なんて殺意の高い突っ込みだ、俺じゃなけりゃ死んでるぜ。
未だ止まぬ地響きはオイカッツォがロデオを続けているという証左、ここで俺がへばっちゃ末代まで煽られる。

「んんんあああああああ！？」

戦術機馬【騏驎】の上に乗ることに成功したオイカッツォではあったが、その数秒後に自身の下準備が無駄であったことを悟ることとなった。

「カ、カッツォ君大丈夫！？」

「だだいじょわぁぁぁぁ！！」

「え、何語？」

固定具を使わずにジェットコースターにしがみつくような、もはや振り落とされるとかそういう次元ではない。例えるなら幼子が振り回す人形になった気分とでもいうべきか、乗りこなすなど以ての外、ただ振り落とされないように縄にしがみつくことしかできない。

（やばっ……遠心力が……っ！）

左へ放り投げられたと思った直後に凄まじい勢いで右側へと吹き飛ばされ、かろうじて麒麟の背に復帰したかと思えば今度は真上へ跳ね上げられてその状態で振り回される。

そしてなにより麒麟の背への着地に失敗する度にダメージが入るため、ただしがみついていればいいというものでもない。ペンシルゴンからあらかじめ渡されていた再生（リジェネ）効果を付与するアイテムを使用していなければさらに死亡回数を増やしていただろう。

（ただで、さえ……2デスしてるんだ。サンラクと違ってこっちは1デスでも致命傷になりかねない）

ペンシルゴンが即座に蘇生しているからこそなんとかなっているが、十秒以上麒麟を放置すれば、待っているのはあの大質量がフィールド中を暴れ回る混沌である。

シェイクされる視界の中で、それでも縄を離さないオイカッツォはどうにかして麒麟の動きに対応できないものかと思考をフル回転させる。

（クソ、こういうのはサンラクの得意分野だってのにさ……！）

オイカッツォ……プロゲーマー魚臣　慧はそのプレイスタイルか

らよく勘違いされるが、その実態はガチガチの理論派である。相手の情報を可能な限り集めた上で「この場合何をするか」「どう追い込めばこの技を出すのか」「それに対してどう行動するのが最善手か」を予め考えてから実戦でそれを当てはめていく……「とりあえず突撃」からその場で作戦を構築するどこぞの悪食鳥頭とは真逆のタイプなのだ。

その点、今回の墓守のウェザエモン攻略はオイカッツォにとっては非常に相性の悪いものであった。

情報自体がオイカッツォの満足がいくほど充実していない上に、その特性上リハーサル無しのぶっつけ本番。

(どうする……こうも大暴れするとはね、姿勢制御なんて無理ゲーじゃない……？)

やたらめったらに振り回されるヨーヨーの気分だ。このままではそう遠くないうちに縄、考古学者が使用できる武器「ロープ」の耐久力が限界を迎える。

「あいたぁ！」

と、腰を騏驎の首に強く叩き据えられた瞬間、オイカッツォは天啓を得る。

(……ああそうか、俺自身が踏ん張りきれないから振り回されるわけで)

天秤が輝き、縄が踊り、半裸が舞うフィールド。墓守のウェザエモン挑戦から二十分経過まで、あと二分。

刹那に想いを込めて　其の十四（後書き）

リュカオーンの呪いによって一定以下のバフデバフを弾く主人公にも問題なく作用する辺り、対価の天秤は最高クラスのユニークアイテムです。このゲームにおける理論上最高火力を出すためにはこのアイテムは必要不可欠です。

つまりヒロインちゃんはエセ最高火力だった……？

ちなみにペンシルゴンが暴力交渉譲歩諸々をフル活用しても「一時的に借り受ける」ことしかできなかったくらいにはこのユニークアイテム入手は難攻不落です

刹那に想いを込めて　其の十五

ガシャン、と膝をつく音が響く。強制的半裸たる俺の膝を地面にぶつけたところでこんな金属音はしない。明らかにＶＩＴの高そうな装備であるオイカッツォとペンシルゴンの装備ではあるが、ここまで重い金属音がすることはない。
であるならば騏驎が膝をついたのか？　それならばもっと地面を揺らすだろう。即ちこの場において膝をついた者とは。

「…………」

「倒した……というわけじゃなさそうだな」

膝をついて動かなくなった墓守のウェザエモン。一見すればチャンスタイムにも見えるが……どう考えてもアレは距離を離して様子を見なければならない類のモーションだろう。
俺の仮説を裏付けるように、天秤をインベントリへとしまったペンシルゴンが警戒するように立ち上がる。

「来るよ二人とも……こっからがヤバい」

墓守のウェザエモンの動きに連動するようにピタリと動きを止めた騏驎の上、何をトチ狂ったのか自分自身を騏驎の首に縛り付けているオイカッツォも戸惑っているのが遠目でも見える。というか絵面で笑わせるのやめろよ……緊張が抜けちゃうじゃねーか。

「まだメンバーがマシだった頃の阿修羅会でもここまで来たのは一度っきり。便宜上第三形態と呼ぶけど……その時は墓守のウェザエ

モンの初手で全滅したからね」
「だからお前でも最初に何をしてくるかしか知らない、と」
だが逆に言えば、何を最初に仕掛けてくるのかは俺達三人は知っている。
第一形態ではウェザエモン単体との十分間の戦闘。
第二形態は騏驎が参戦し、ウェザエモンと騏驎を同時に相手する複数戦闘。
そして一度だけペンシルゴンが辿り着いた第三形態、墓守のウェザエモンが「自壊」をトリガーに発動する初手フィールド全体攻撃。
「お前これに関しては何か秘策があるって言ってたよな！？」
かつてペンシルゴンが戦った際、墓守のウェザエモンが鎧に亀裂を入れながら咆哮した瞬間に発生したという衝撃波。それによって消耗していたとはいえ、生き残っていたペンシルゴン含めた五人を一撃でＨＰ全損せしめたフィールド全体を襲う攻撃に対してペンシルゴンは秘策を用意したと計画説明時に言っていた。
悪いが俺のステータスでは防御を固めても消し飛ぶ、どうにかしてくれないとどうにもならない。
「カッツォ君！　騏驎も動きが変わる可能性があるから気をつけて！」
「了解……っ！」
馬に自分を縛り付けてロデオするという高度なプレイ（どちらの意味でも）を行なっていたオイカッツォが回復ポーションを浴びるように飲み干しながら緊縛状態を解く。

「ここから先は前人未到の領域、覚悟を決めてね」

「初見攻略はゲームの基本だ、覚悟なんて最初からできてる」

「ならよし……！」

インベントリから何か……ポーション？　何やら液体の入った瓶を取り出したペンシルゴンは迷いも恐れもない歩みで不動を崩さない墓守のウェザエモンへと近づいていく。

「あ、もしこれダメだったら自力でなんとかしてね？」

「おい！」

俺の抗議の声と、これまで驚異的なＶＩＴを誇っていたウェザエモンの鎧に亀裂が入るのと、ペンシルゴンがポーション瓶をウェザエモンに投げつけるのはほぼ同時のことだった。

パリンと小気味の良い音を立てて墓守のウェザエモンに瓶が命中し、ヒビが入れどその頑強さは遜色ない鎧との衝突に耐え切れなかった瓶が割れて中身のうっすらと青く発光する水を墓守のウェザエモンは浴びることになる。

そして何かを解放するように、メタな言い方をすれば咆哮モーションを取ろうとしたウェザエモンだったが、

「ォォォオオオ………ッ、ガッ！？」

そのモーションは強制的に中断され、明らかにダメージの結果発生した白煙がヒビの奥から立ち昇る。

「よっしゃビンゴォ！」

「何したんだ！？」

身体はここから先の戦闘に備えて準備を進め、口は今の一連の結果の説明を求める。

「このゲームさ、世界観や設定が攻略の鍵になるわけでさ。私はずっと墓守のウェザエモンは「神代の技術で身体を機械化したサイボーグ」だと思ってたわけよ」

確かに見た目は完全にパワードスーツのロボットであるウェザエモンの正体を推測したなら、セツナの話やシャンフロにおける「神代」というSFな設定からしてまずサイボーグと考えるのは別におかしくはない。

「だけどさ、ソースがどこなのかは知らないけどサンラク君が持ってきた「死に損ない」って単語から大体ウラが見えてきたわけで……要するにあいつ、過程はなんであれ分類的には「アンデッドモンスター」なんだよ」

つまり、とペンシルゴンは己の武器を……本人が最も得意とする武器である槍を構えて続ける。

「シャンフロのアイドル聖女ちゃんが丹精込めて作った「聖女ちゃんの聖水」……裏ルートで大枚叩いて手に入れた最強クラスの対アンデッドポーション、さすがの威力だね」

聖女ちゃんの聖水（意味深）……いや他意は無いですよホントホント、ていうか裏ルートで流通する聖女ちゃんの聖水（意味深）っ

て完全にアレだよね。

「言いたいことは分かるけど、アレなアレじゃないよ」

「大概ヨゴレ系だよな花形モデル」

「清濁吸い上げて花は美しく咲くのだよ……全体衝撃波は阻止した、ここから先は私もぶっつけ本番だよ！」

どうやら聖女ちゃんの聖水（意味深）も全体攻撃を妨害こそすれ致命的なダメージを、とはいかないらしい。悶え苦しむ動作を止めた墓守のウェザエモンの肩、腕、腰……各部の装甲が割れるように弾け、全身の亀裂から血が噴き出すように青い炎状のエネルギーが噴出する。

先程までのサイバーな印象を強く感じさせる機械の姿はあっという間に変わり果て、全身に亀裂を広げてゆらりと立ち上がる姿は蒼炎を纏う幽鬼、まさしく過去の亡霊という言葉が相応しい。ペンシルゴンはウェザエモンと戦う気満々のようだが……うん、ちょっと横見てみ？

「あー、なんだ。墓守のウェザエモンと戦う気満々なところ悪いがオイカッツォを助けてやれ」

「え？　そりゃアシストはするけ、ど……は？」

まぁ俺もコレの下ではそんな顔してるよ。

「勝利条件は時間制限説はほぼ確定っぽいし、多分三十分がリミットなんだろうな」

俺たちが視線を横に向けた先。変形し、頭と胴体が無い中途半端な甲冑のような姿へと変貌した戦術機馬【麒麟】、その前で困惑しながらもファイティングポーズを取るオイカッツォ。成る程、あそこにウェザエモンが入る事で巨大甲冑のような状態になるわけか。

「付け焼き刃のステアップをしてるとはいえ、レベル制限がある状態で完全体の「アレ」と戦うのは無理だろ。少なくともあの、元は馬だった現巨大甲冑をウェザエモンと合流させちゃあダメだってのはさすがに分かるよな？」

即ち、俺ら三人の役割分担は残り何分とも知れない耐久の中で奴らを合体させないことにある。麒麟甲冑とウェザエモン本体、どのように人数を割り振るのか、ウェザエモンに誰をぶつけるのか……ペンシルゴンならすぐに答えが出せるだろう。

「だろうね、私の知るウェザエモンと麒麟の合体はケンタウロスみたいな姿だったんだけど、第三形態じゃ別フォームがあったわけだ………」

苦々しげに動き出そうとする麒麟甲冑を見つめるペンシルゴン。俺とオイカッツォ双方のアシストという役目こそ変わりはないが、俺とオイカッツォどちらに比重を置くかは考えるまでもない。

「……………サンラク君、一応アシストはするけど任せられる？」

「任せろ」

強がりじゃあない。こっちもこっちで大体の検証は終わっているし、何より予想が当たっていた事で俄然勝ちの目が見えてきた。

ペンシルゴンがオイカッツォの支援へと向かうのを確認した俺は

炎を纏う幽鬼へと歩みを進めつつ、向こうが答えることはないと分かっていても口を開いてしまう。いい感じにゲームにのめり込んできたぞ、こういう時はパフォーマンスが上がるからな。

「……ペンシルゴンからお前の戦闘パターンを聞いた時から、ずっと疑問に思っていたんだ。「それつまらなくね？」ってな」

「…………」

成る程、強大な敵が自壊するまで耐える。刃を掻い潜り、死の気配から全力で逃げつつも戦いからは逃げない。いわゆる「ここは俺に任せてお前たちは先に行け」にも通じる見せ場。物語としてはつまらなくはない、面白い部類に入るだろう。

だがこれは小説でも漫画でもアニメでもない、「ゲーム」なのだ。脅威と戦うのも、耐え忍ぶのも登場人物という他人ではなく自分自身なのだ。であるならば、「三十分間ひたすら耐え続ける」だけのボスは果たしてゲームとして面白いのか？

断言する、クソつまらないに決まっている。

五分や場合により十分ならともかく、三十分間もひたすら逃げて避けて耐えるだけのボスとかゲームデザインからしてクソだ。イベント戦闘でもクソだ。仮にユニークモンスターがゲーム性よりもストーリー性を優先していたのならそれまでだが、俺は信頼している。

「神ゲーならそんなことしないってな」

世界観とゲーム性の両立、数多のゲームがその調整に失敗し「ゲーム性優先でストーリーがクソ」「ストーリーに忠実すぎてゲーム性がクソ」「どっちもクソじゃねえか畜生！」とクソゲーの烙印を

押されてきた。
だがシャングリラ・フロンティアなら、必ずその両方を及第点のそれ以上で纏めていると信じていた。例えエンドコンテンツとして設計されたユニークモンスターであっても二十分間もプレイヤーに耐えさせたのならば、必ず憂さ晴らしが出来るプレイヤーのターンが回ってくると。
だからこそ、ペンシルゴンから「耐久優先で装備を整えて」というオーダーを受けても俺はもしもの可能性を信じて「これ」を作った。必ず墓守のウェザエモンを「ちゃんと殴れるターンが来る」と信じて。
全身から蒼炎を噴き出し、刀にすらそれを纏わせた墓守のウェザエモンの攻撃。大上段から頭をカチ割りにくる斬り降ろしをパリングプロテクトを起動し、頭で弾く。
「…………！」
「凄いだろ、俺も頭でパリィするのは初めてでな……ちゃんと練習したんだぜ？」
蒼炎纏いし刀を弾いた今の俺の頭装備は目力の強い薄っぺらな鳥の覆面ではない。というかあれで同じことやったら頭が真っ二つになる。ビィラックによって素材本来の色である濃紺の輝きを得た顔全体を覆う「兜」には、特徴的な四本の角が生えている。流石は装甲おばけカブトクワガタ、ウェザエモンの攻撃を受けてもヒビ一つ入らないとは。まぁそう何度もぶつかっていては砕けてしまいそうだが。
「戦角兜【四甲】。クアッドビートルの素材から出来るこいつはシ

ヤングリラ・フロンティア全体を見ても数少ない……攻撃判定を持つ防具でな」

兜に取り付けられたクアッドビートルの角と大顎には当たり判定があり、頭突きによる攻撃も出来れば頭突きによるパリィすらも可能とする。わざわざ頭を振り回してパリィをするくらいなら武器でやれ、という話ではあるのだがそれでも俺は戦角兜【四甲】を用いた頭パリィを会得した。

「なにせ頭でパリィができれば…………両手が空く」

クアッドビートルの重装甲から作られた戦角兜は当然装備重量が凝視の覆面と比べて大きく、回避耐久戦たる第一、第二形態では使い道がなかった。だが俺が予想した通り、第三形態はアーマーの自壊という形で墓守のウェザエモンの無敵性が失われた。

「喰らえ俺の八万マーニ！」

向こうが自壊覚悟の捨て身なら、こちらも切り札を切る。耐久戦では噛み合わなかった為に出番がなかったが、今ならその力をフルで活用できる。

極道兎によって真の姿を得た対の刃、そして歴戦のクソゲーマーたる俺をして笑顔から発せられる圧力に屈して購入させられ……いや購入したスキルの秘伝書。無用な出費をしてしまった分、役に立ってなきゃやってられない！

プリズムのようなエフェクトを纏った兎月【上弦】、【下弦】でなにもない空を斬る。位置的に刃が届かないことは向こうも理解していたようで、構うことなく突きの体勢に入る墓守のウェザエモンだった……が、ウェザエモンの背後、誰もいないはずの空間が揺ら

ぐのが俺の目にも確認できた。

「後方注意、ってな」

「………！？」

致命刃術【水鏡の月】は非常に有用で……非常に使いづらいスキルというのが使ってみた感想だ。

このスキルは発動し、攻撃によって発生する当たり判定を眼前の敵の背後に鏡像体として発生させるというものだ。分かりやすく言えば攻撃判定だけが敵の背後に移動する……と言うべきか。

だがこのスキルの真価はそこではない。このただでさえややこしい当たり判定のこのスキルによる攻撃でクリティカルを成功させた場合……自身のヘイトを消すことが出来る。

突然の背後からの斬撃。墓守のウェザエモンは新手の奇襲と判断し、気配なく斬りつけた「敵」への警戒故に俺から完全に意識を外す。

振り向きざまに刀を振るうが、そこには何もいない。それはまさしく水面に映る月、夜空の月に等しい輝きを放てどそれは虚像でしかない。

「背中の傷は恥だったらゴメンな、存分に恥じてくれ」

敵Ｍｏｂに気づかれていない、またはヘイトを向けられていないという条件を達成した事で威力を増したスキル、アサシンピアス。上弦の刃が墓守のウェザエモンの無防備な背中、そこに走るエネルギー吹き出す亀裂に突き刺さる。

エフェクトが飛び散り、ポリゴンが舞う。一瞬で俺へとヘイトが向けられ、後ろを向いていた身体をこちらへと再度回そうとするウ

エザエモンに対して、引き抜いた上弦に更にエフェクトを纏わせる。

「ドリルピアッサー！」

俺の予想通りの軌道で振り払われた刃はあらかじめ屈んでいた俺の頭の上を通り過ぎ、真下から突き上げる形の上弦の切っ先を強靭なアーマーに生じた亀裂へと迷いなく突き出す。

「さぁ、補正に急所にクリティカル……今のお前に怯み状態無効（スーパーアーマー）は残ってるか？」

螺旋のエフェクトが自壊によって生まれた弱点（傷口）で弾け、墓守のウェザエモンは遂にここまでの戦闘で初めての仰け反りモーションを行う。

「憂さ晴らしさせてもらうぜ！」

ここから先は俺のターンだ、攻撃しても小揺るぎもしなかった第一、第二形態とは違う。二十分かけてようやく回ってきた俺のターン……覚悟しろ墓守のウェザエモン、フルボッコにしてやる！

「ふははははははははははは！！」

テンションは最高潮、グラついた墓守のウェザエモンにオプレッションキックを叩き込みながら俺は高らかに笑うのだった。

刹那に想いを込めて　其の十五（後書き）

ようやく明らかになる墓守のウェザエモン攻略チャート
第一形態：ウェザエモン単体、レベル制限&理不尽攻撃だけど頑張って見切ってね（はぁと）
第二形態：騏驎召喚、馬の背中に乗ってロデオしないとボウリングのピン体験会が始まるよ（にっこり）
第三形態：お前を殺す（初手範囲攻撃）

なお第三形態で初めてダメージがマトモに入るようになります、それ以前の第一、第二形態は常時スーパーアーマー&ダメージ軽減です。ヒロインちゃんの全力ブッパもカスダメに抑える超理不尽装甲です。

刹那に想いを込めて　其の十六

墓守のウェザエモン。
ほぼ全ての攻撃に対して怯み無効……所謂スーパーアーマーを持っており、さらには戦術機馬【麒麟】による撹乱、僅かな間しか観測できなかったとはいえ自壊をトリガーとする第三形態の存在からペンシルゴンは「時間経過によるウェザエモン自身の自滅」こそが攻略方法であると当たりをつけていた。

（最初の十分はウェザエモンから生き延びる、次の十分は麒麟にメンバーを割いて双方の合体阻止、そして全体攻撃をトリガーにウェザエモンに攻撃が通るようになるから攻勢に転じる……成る程こういう流れだったわけね）

「なんか狂人じみた笑い声が聞こえるんだけどあいつ大丈夫？」

「大丈夫だと思いたい……けど、どうであれコイツを食い止めないと勝ち目はないよ」

　実質無敵状態に等しい第二形態までのウェザエモン相手では活かすことができなかった追加効果付きの攻撃スキル。それが解禁された事でサンラクの生存率は上がっている……とペンシルゴンは見立てている。
　アレは逆境であればあるほど……訂正、逆境(クソゲー)であればあるほどモチベーションとプレイヤースキルが跳ね上がる手合いだ。
　どうやら二十分間にも及ぶ耐久の鬱憤を存分に晴らしているようで先程から高笑いが止まないのでまだ生きているようだ。

「サンラク君も言ってたけど、こいつとウェザエモンを合流させたら多分詰む。ウェザエモンに攻撃が通るならこいつにもダメージが入るようになった……と思う」

「少なくとも二人掛かりで倒すような敵じゃないよね」

墓守のウェザエモン本体が人型エネミーの臨界であるとするのなら、今の麒麟は極めてシンプルな……強敵としてのデザインだ。

「なんかこう、隠し球とかないの？　ウェザエモンにぶつけた瓶みたいなさ」

「実はあるんだなこれが」

そう言いながらペンシルゴンは、随分と寂しくなったインベントリから僅かに残ったアイテムを取り出す。

「じゃじゃーん！」

「なにそれ」

「魔魂丸薬（イヴィル・フォース）っていうおクスリ、原材料は聞かない方が精神衛生上健康デス」

「効果は？」

「十五分間実質レベル９９の力を得る代わりに、副作用（ペナルティー）で酷いことになる。昔私も使ったことあるけど、色々酷かった」

「オッケー」

ご丁寧に三つ用意された黒い丸薬の一つを受け取ったオイカッツォは躊躇うことなくそれを使用した……次の瞬間、オイカッツォの見る世界の何もかもが反転する。

「うおお！？」

「まず視覚情報の色調反転、まぁ元々色が逆転したようなフィールドだし問題なかったり？　他にも聴覚が靄がかったような状態になったり鼻が効かなくなったり……まぁ致命的ってほどじゃないけど五感が鈍くなったりおかしくなったりするわけで……まぁそれすらも序の口だよ」

自身も魔魂丸薬を使用し、自身に莫大量のバフが付与されたことを確認して改めて騏驎甲冑へと向きなおる。

「さぁ、ここからは三十秒毎に1レベルずつレベルダウンする喪失感との戦いだよ……！」

「はぁあ！？」

実質的な「30レベル消費」という重い制約を代償に、十五分間限定で小学生でも最強になれる禁忌のドーピングアイテム。

視覚的にあまり健康的ではないモンスターの、例えデータでもあまり触りたくない部位を調合した魔魂丸薬によってやけくそドーピングを行なった二人は、サンラクの……厳密にはサンラクと戦う墓守のウェザエモンの方へと向かおうとする騏驎甲冑へと駆け出す。

「クッソ、これが終わったらレベル20からやり直しぃ……！？　あーもう、サンドバッグにしてやるから覚悟しろロボットめ！」

人型という形を得たが故に、人と同じ弱点を抱えた麒麟甲冑。その脚部が地面を踏みしめた瞬間に、オイカッツォは拳に緋色の光を纏わせ関節を狙う。

「赤、黒……足して緋色！　混合拳気【火緋彩】！　んでもってインファイトからの……デュアルインパクト！」

赤よりも濃く、黒よりも明るい緋色の輝きを放つ左拳のジャブが麒麟甲冑の膝関節へと命中する。しかしその程度で揺らぐ程麒麟甲冑は軟弱ではない。それはオイカッツォも承知の上、左で殴りつけた場所に浮かび上がる十字状のマークを今度は渾身の力を込めた右拳のストレートで打ち抜く。

次の瞬間、麒麟甲冑の膝関節に無色無熱の爆発が如き衝撃が襲いかかる。流石の巨体も膝関節にここまでの負荷を受ければノーリアクションとはいかない、麒麟甲冑は膝かっくんでも食らったかのように不自然な動きで体勢を崩す。

「スイッチ！」

「はいよ！」

スイッチを切り替えるように場所を入れ替わったオイカッツォとペンシルゴン。その槍の穂先が狙うのは……オイカッツォが狙った膝関節。

「その膝、砕け散るまでイジメ倒してあげるよ……！」

ペンシルゴンが握る槍には既に複数のエンチャント、そしてペンシルゴン本人にも自前で付与したバフで強化が重ねられている。

傷口を抉るようにダメージを受けた麒麟甲冑の膝関節へと突き出された槍が帯びるエフェクトは、槍系スキルの中でも最上位に位置する「日差しの穂先（スピアオブサンレイズ）」。叩き込まれた攻撃が追い打ちをかけるように熱量を解放するが、それでもなお麒麟甲冑の膝関節が破損することはなかった。

「硬いなぁ……」

「でも通った。やっぱりここが正念場だよ」

「とりあえずこっちも避けゲー開始だけどね！」

麒麟甲冑の背から発射された二人をホーミングするミサイルを回避し、オイカッツォとペンシルゴンはそれぞれの手段でそれらを回避する。

　その隙に立ち上がった麒麟甲冑は見せつけるようにペンシルゴンへと掌を向けると、そこから莫大な熱量と破壊力を内包したレーザーを放つ。

「やばっ」

　身を捻ったペンシルゴンの左半身を熱線が襲う。魔魂丸薬の効果もあってか驚く事に即死しなかったペンシルゴンではあるが、その左半身は今にもポリゴンとして解けてしまいそうなほどに不安定になっている。

「よいしょお！」

「せめて一言欲しかったなぁ！」

思考は一瞬、器用に右腕だけで槍の穂先を自身へと向け、躊躇う事なくペンシルゴンは槍を自身の腹へと突き刺す。
なけなしのＨＰが全損し、ペンシルゴンの身体がポリゴンとなる……前に、オイカッツォが投げた蘇生アイテムによってペンシルゴンは全快状態で復活する。
「左手が使えないんじゃ槍使いとしてはお荷物だからねぇ……！」
インベントリから使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）を取り出し、その中に込められた雷撃の魔術を器用に騏驎甲冑の膝関節に叩き込みながら、ペンシルゴンは槍を携え走り出す。
「拳気「赤衝」、ハイストレングス、剛力充躯（ごうりきじゅうく）、……転べ！」
縄傀儡【蛇】によって縄が騏驎甲冑の足へと巻きつき、ありったけのＳＴＲ強化を付与したオイカッツォが縄を騏驎甲冑の進行方向とは真逆へと引っ張る。膝かっくんとはまた異なる、さながら足を引っ掛けられたように体勢を崩した騏驎甲冑がうつ伏せに転倒し、その隙に二人の攻撃が叩き込まれる。
「ああもう、火力も手数も何もかもが足りない！」
「ヘイトを稼いで死ななきゃ私達の役割は及第点だよカッツォ君。殴れこそすれ、耐久戦には変わりないんだから……！」
騏驎甲冑の掌から放たれる拡散型のレーザー掃射を最低限の被弾で対処しながら二人は改めてそれぞれの得物を構え直す。
「ちなみに満点は？」

「そりゃあ、あの暴走ロボットをスクラップにしてやる事でしょ」

「成る程、だったら目指してみようか花丸満点！」

下から真上へと頭を振って首を断つ横薙ぎを弾く。頭パリィ、便利なんだが疲れるな……

「チッ……やっぱりレベル５０が一人で倒せるようなデザインはしてないか」

幾度となく攻撃を叩き込み、それなりの回数怯ませてはいるが……流石に俺一人で倒せるような相手ではない。仮にも夜襲のリュカオーンと同じカテゴリに属する奴だ、分かってはいた。だがこちとら足を噛みちぎられ上半身むしゃむしゃされるまでリュカオーン相手に粘ったんだ、ほぼ対人戦で超速フレーム攻撃程度なら恐るるに足らん。

「クソゲーレベル足りてないんじゃないのか？」

クソゲー度合いをレベリングしろとは言わない……言わないぞ。戦角兜【四甲】の頑丈さもさる事ながら、やはり兎月の調子がすこぶる良い。自前で体力調整できる、というのは古今東西どのようなゲームでも強力な要素だ。

（体力調整は出来た……さて、いつ使うか）

体力は三分の一より少し下、レベルは向こうが遥か上。良い感じに空腹パラメータも底をついている。
これによりクライマックス・ブースト、餓狼（ハンガーウルフ）の闘志共に発動条件は満たした。だがいつ使うのか、それが問題だ。クライマックス・ブーストは発動から五分間の間、体力を三分の一で維持し続けられれば効果が持続するが、餓狼（ハンガーウルフ）の闘志はそれを踏まえた上で一分しか効果が持続しない。

（このまま時間終了まで何事もなく、なんてありえないよなぁ）

全体攻撃？　さらなるフレーム攻撃？　それとも別の何か？　少なくとも時間経過しましたハイ終了、なんてアッサリした終わり方ではないはずだ。蒼炎が虚空に青い軌跡を描きながら振るわれる三連撃をステップと受け流しで対処し、振り下ろされた刃が地面に最も近くなったタイミングで太刀の峰（みね）を踏みつける。

足裏を焼かれるような痛みは錯覚だ、そこにダメージ判定がないことは承知している。いや、厳密には感覚として焼かれてはいるが体力ゲージはミリも減っていない……リアルに焼かれているわけではなく、痛みと言っても熱いコーヒーが注がれたコップに触れた程度の熱さ、つまりは実質無害。
ベストステップ起動、地面に置かれている状態ですらない太刀の峰の上で踏み込んだ足が理想的な跳躍を成す。

「ふっ！」

下弦を後ろへ投げてインファイトを起動し、続けてハンド・オブ・フォーチュンを起動し顔面にパンチを入れる。軽く仰け反ったところに上弦の攻撃を叩き込み、胸板を蹴って距離を離す。一秒ほど浮遊感の後に着地し、墓守のウェザエモンの動きを警戒しつつも投げ捨てた下弦を回収する。

「いてて……グローブとか欲しいな」

素手で金属を殴る、というのはオイカッツォのようにスキルや魔法のアシストがなければこちらの拳が痛むだけだ。スタミナを回復させつつ、高揚に反比例して手持ち無沙汰な退屈を紛らわせるために墓守のウェザエモンへと話しかける。

「どうしたどうした、ロボ武者流剣術が通用しないのがそんなにショックか？」

残念だが俺は他ゲーのアクションも手動である程度再現できる、あくまでもこのゲームのスキルや魔法で調整された墓守のウェザエモンを攻略するにあたって、これは大きなアドバンテージだ。そもそも俺が今使用している双剣の立ち回りも別ゲー由来だしな。

「まぁアンデッドだかサイボーグだか知らないが、そのまま削られて自壊しな」

「…………ア、」

「！！」

……違う。これは違うぞ。
ただ立ち尽くし、静かに太刀を握り直す墓守のウェザエモン。奴がこれまで「声」を出すことは何度かあった、だが今のは明確に違う。今のは……「言葉」だ。

「……ア、リス」

「何……？」

「そ、の、断片……アリス、は……紡が、れた、か」

それはユニークモンスター「墓守のウェザエモン」ではなく、シャングリラ・フロンティアというゲームに登場するキャラクター「墓守のウェザエモン」としての言葉。ヴァッシュの言葉、ペンシルゴンの分析、それらから俺は勝手に「魂は死んでも肉体は未だ動いてるとかそんな感じのモンスター」だと思い込んでいた。だが今、目の前には確たるＡＩによって言葉を発する鎧武者の姿があった。

「アリス……？」

「悠久は、果てな、く……我が身、朽ち果、て、彼ら、の……行く、末、見ざれ、ど……確かに、「フロンティア」は、為され、成さ、れた……」

「おいおいおい、この盤面でそれは無いだろう……！」

墓守のウェザエモンを攻略することに全神経を向けている今の俺の脳みそが考察にまで考えを巡らせることなんて出来るわけないだろ！？　というかこれはイベントフラグか！　ペンシルゴンの読み

は当たっていたが、俺の読みも当たっていたか。何か来る、この会話イベントが終わったと同時に何かが。

「行くぞ……「二号計画（セカンドプラン）」の、申し子よ。我が、誓いを……踏み躙る…であれ、ば……我が、「晴天大征（セイテンタイセイ）」にて…………潰えよ」

ぞわりと背筋に電流が流れるような、データの意識に警鐘が鳴り響く。

「やっべ」

次の瞬間、俺は墓守のウェザエモンというキャラクターの本気を身を以て体感させられる事になる。

刹那に想いを込めて　其の十六（後書き）

第一、第二形態：オート、死んでいないだけ

第三形態：マニュアル、生きている

大体これくらい違います

刹那に想いを込めて　其の十七（前書き）

金のイクラを回収するバイトが忙しくて……（見苦しい言い訳）

刹那に想いを込めて　其の十七

さて問題です、ゲームを作るにあたって……この問題では「ボスエネミーの調整」におけるやってはならないこととはなんでしょう？
理不尽攻撃？　４０点、イベントに繋げたり特殊なアイテムによって打ち消せるのならば、それは世界観の彩りでありむしろ率先して入れるべき要素だ。
バグらないようにする？　０点、それは当たり前の要素と言うのだ馬鹿め。

正解は「ボスの攻撃に間隔を入れない」だ。
ターン制バトルであれ、アクションであれなんであれ、ボスを攻略して初めてゲームはクリアされる。そして強敵たるボスとの戦いにおいて、レベル差以外での「一方的」は容認されてはならない。
ずっと攻撃し続けるボス、ずっと回避し続けるボス、どれだけ攻撃を叩き込んでも防御が破れないボス……強さとクソさは表裏一体、世界観という縛りが絡むからこそ、強くし過ぎたボスキャラがゲームをクソにすることはままあることだ……フェアクソとか、フェアクソとか、フェアクソとか。

であるならば、「ずっとボスのターン」をゲーム性を破綻させることなく導入する場合どうすれば良いか……簡単だ、制限を設ければいい。濃すぎる原液は薄めればいいのだ。
例えば「特定の部位に攻撃を当てさえすれば行動を封じることが出来る」であったり、前述の「特殊なイベントやアイテムによって解除される」であったり、「時間制限を設ける」なんてのもいいかもしれない。
その点で言えば、墓守のウェザエモンが放った「晴天大征（せいてんたいせい）」なるそ

れは、「生き残れば確定勝利」という明確なクリアラインが設けられているという点では有情な技と言えた。

問題なのは、「三十秒間、あらゆる技をノータイムノーリキャストでぶっ放す」という超ド級の理不尽攻撃であるということだ。

「断風（タチカゼ）」

「つぉお！？」

「雷鐘（ライショウ）」

「そぉお！」

「大時化（オオシケ）」

「だぁあ！！」

超速の居合を回避した直後、転ぶように回避した俺を雷の雨がホーミングし、雷を突き破って俺の頭を掴まんとする掌を咄嗟に蹴って

弾きつつ反動で距離を稼ぐ。

「入道（ニュウドウ）……」

「っ！　お前ら範囲攻撃が来るぞ！」

「雲（グモ）」

薙ぎ払う腕の動きに合わせて背後に回り込み、スタミナを回復させる。既にクライマックス・ブーストと餓狼（ハンガーウルフ）の闘志を発動してこのザマだ、攻撃する暇などありはしない。

「断風（タチカゼ）、断風（タチカゼ）、断風（タチカゼ）」

「んなぁ！？」

顔狙い、心臓狙い、肩狙い。

頭がそれを理解するよりも先に身体が反射だけで超速の三連撃を回避する。くそ、同じ技でも連続で使えるのか、リキャスト概念ぶっ壊れかよぉ！？

「火（カ）……！」

断風（たちかぜ）、入道雲（にゅうどうぐも）、雷鐘（らいしょう）、大時化（おおしけ）……「か」から始まる技はない、つまりここにきて新技か。

（上か！？　下か！？　あああもうやってやる！）

「砕（サイ）……」

太刀を逆手に握り、杖をつくように地面へと突き立てる。太刀が突き立った場所を基点に地面が赤く発熱する。それは蛇が地を這うように捩くれた直線で地面を赤く熱く染めながら俺へと迫る。

「見切ったぁ！」

「龍！！」

赤熱を越えて白熱した地面がスライムのように隆起し、地面を食い破るようにして炎の柱が発生する。
見ようによっては天へと昇る龍にも見えるそれをギリギリまで引きつけてからバックステップで回避した俺は、火柱に隠れて見えない墓守のウェザエモンを視界に入れるべく立ち上がることもそこそこに火柱を迂回するように回り込む。
視界に入ったウェザエモンは、地面に突き立てた太刀を引き抜いて空に掲げ……その刃の先、気味が悪いほどに真っ白な上空を覆うように黒い雲が発生しているのを目撃する。

「元から組み合わせるのを前提とした攻撃か……っ！」

「灰吹雪」

俺の言葉を肯定する墓守のウェザエモンの言葉をトリガーに、上空へ滞留する黒雲が意思を持つかのように俺へと殺到する。一瞬確定即死攻撃かと硬直しかけた身体を無理やり動かし、蜷局を巻く蛇の如く俺を包囲せんとする黒雲の、僅かに残った切れ目に身体をねじ込むように取り込む。
体力が削られるのを自覚しつつも、なんとか灰の包囲網から抜け出すことに成功する。見上げればこちらへ手を伸ばす墓守のウェザエモン、初見攻撃を更に重ねられるよりはマシだ。逆にこちらからウ

ェザエモンの手首を掴み、横へと押し出す。捕まりさえしなければその技は怖くない。

(何秒経った？　幾つ技を使った？　何がトリガーでこれは終わる？)

考えることすら億劫だ、だが考えなければ。これが時間経過で終わるならまだいいが、なんらかのアクションをしなければ終わらない場合はそれを見つけ出さなくてはジリ貧に追い込まれる、というか追い込まれている。

第一、第二形態で受けた全攻撃を圧縮したような怒涛の攻撃に追い詰められているのがわかる。

だが、全身の亀裂から炎だけではなく、黒煙が上がり始めたことから向こうもノーリスクで理不尽攻撃をかましているようではないようだ。

この際反撃は捨てる、両手の兎月を投げ捨て、インベントリからアイテムを取り出し攻撃に備える。

「晴天大征(セイテンタイセイ)、流転と手向けを以って終極と為す」

「速っ……！」

アイテムを取り出すためにウィンドウに目を向けた一瞬で俺との距離を詰める墓守のウェザエモン。どうする、もう一度開いて武器を取り出す……いや間に合わない。

「晴天転(セイテン)じて我が窮極の一太刀。我、龍をも断つ……【天晴(テンセイ)】。」

「こなくそぁ！！」

手に持ったアイテムを放り投げ、回避を試みた瞬間、身体がいきなり止まる。集中が切れたとか、転んだとかそういうレベルじゃない……これは、

「行動そのものがキャンセルされ……」

最後に俺が出来たことは、大上段から俺を真っ二つにする一撃から急停止した身体のうち、かろうじて首を傾けることだけだった。
右肩より少し上、首筋に刃がめり込む。抵抗は一瞬すら保つことはなく、蒼い刃の一筋をなぞるように黄金の輝きがあるのを確認して、そこで左腰へと刃が抜けて真っ二つ。身体がポリゴンと砕け、視界が暗転し……

「土壇場で成功！　究極奥義セルフ蘇生ィィ！！」

上空へと放り投げた、自前の再誕の涙珠が投擲エネルギーを使いきったことで重力に引かれて落下し、直下でポリゴンと化した俺へと命中する。
お値段がお値段故に実証無しの賭けではあったが、「自分自身への使用」も可能であったらしい。

ありったけのスタミナを使ってウェザエモンから距離を離し、俺を真っ二つに斬り裂いた一撃の攻略を大至急で考える。

（天晴だかなんだか知らんが、ヤバい）

腰を撫でれば、そこにあったはずの腰装備……命潮の腰帯が無い。
あの一撃だけでほぼ無傷だった装備が破損したのだ。

（装備破壊、多分装甲貫通もあるな。それにあんまりにもあっさり死にすぎてる……まさか即死効果？）

自慢じゃないがこの戦闘内だけでどれだけあの太刀に切り捨てられてると思ってるんだ、斬られた時の感覚の違いくらいは分かる。あれは普通に当たった時とも、おそらくクリティカルによるオーバーキルとも違う。
もっと根本的にプレイヤーをぶち殺しに来ている。仮にフル装備で防御を固めたレベル９９のプレイヤーが盾を構えてあの一太刀を受け止めたとしても、俺と同じく豆腐でも切るかのように真っ二つにしてしまうだろう。
出来れば考えたくないが、当たった時点でシステム的な問答無用の死は確定していると断定していいだろう。

（だが、一番やばいのはそれじゃない）

回避行動を阻害する謎の金縛り。あれの条件を見つけなければ、恐らくこの戦闘そのものを終わらせる最後の一撃であろうあの斬り捨てを攻略できない。

（セルフ回復するにしても再誕の涙珠は二つ、生命の神薬は５個そのまま残ってはいるが……）

セルフ蘇生は片手間で出来るようなイージーなテクニックではない。相手の攻撃に対して死ぬ前に上へと放り投げなければならない、ということは死が確定した攻撃かどうかを判断した上で行動しなければならない。
兎にも角にもあの攻撃をなんとかするまで、何度か死を前提とした特攻をしなければなるまい。
そう判断し改めて墓守のウェザエモンを見れば、丁度そろそろ一分

前になるくらいかそれくらいの過去に見た構えをとるウェザエモンの姿。

「しからば、わが窮極を超えぬ限りこの身は甦ることあらず…………晴天大征（セイテンタイセイ）」

「もしかして最初からやり直しぃ!?」

「火砕龍（カサイリュウ）」

龍の火柱を回避しながら、俺は果たして何回最後の一太刀まで辿り着けるか懸念しなければならないのだった。

刹那に想いを込めて　其の十七（後書き）

天晴(テンセイ)ってどんな技なの？
触れた時点で装備を破壊します。
ＶＩＴ数億の鎧を着込んでいようが問答無用で破壊しながら攻撃を肉体に届かせます。
というか体力が５０００兆あろうが確定で即死させます、幸運？
運命ごと切り捨てたるわ。
避けるな、甘んじて死ね。
天晴に対処できない？　残念、最初からやり直しです！！
うーんこの糞技、一応「かっこいい攻略法」と「クソつまらない攻略法」の２種類の突破口があります

刹那に想いを込めて　其の十八（前書き）

昨日は更新をすっぽ抜かしてしまい大変申し訳ないです、文章自体は出来ていたのですがイクラ運びのバイトとシャチホコ運びの殺し合いで消耗しきってそのまま寝落ちして予約を忘れていました……ゲームは節度が大事ですね、本当に

刹那に想いを込めて　其の十八

「昨今の格ゲーで大事なことってなんだか知ってる？」

「んー、本職に答えを教えてもらおうかな？」

「まぁ人によって色々なんだけどさ、俺としては「ゲームとリアルの区別をつける」だと思うんだよね」

その言葉にペンシルゴンはうへぇ、と露骨に顔をしかめる。槍系パリィスキル「渦潮の転槍（メイル・スピアトロム）」によっていなされた麒麟甲冑の拳が大地を叩く。

「ここにきて倫理の話ぃ……？」

「違う違う、そんな旧時代的思考のＰＴＡみたいな意味じゃなくってさ……格ゲーって要するに「人間離れした動きを実現する」ってことでしょ？」

「まぁ、そうだねぇ」

麒麟甲冑の足に縄が巻きつく。足だけではなく腕や、腰にも。幾つもの縄が巻きつけられ、そしてその端は一点へと繋がる。ペンシルゴンが注意（ヘイト）を引きつけている間に、オイカッツォが麒麟甲冑の四肢に縄を巻きつける。即興の作戦を成功させながらも話を続ける。

「手が伸びる、ヤバいくらい跳ぶ、羽生えてる……場合によっては

人の形ですらないキャラクターを操作するわけ」

「そだね、君達がやってるバグゲーは人の形すら留めないらしいね」

「うーん……要約するとさ、人間離れしたキャラクターを操るのはあくまでも人間なんだよね。だからさ、その操作にはどうしても違和感が出る」

「……話が見えないんだけど」

「だからプロゲーマー、それも格ゲーをメインにする奴らってのはその「ゲームキャラとプレイヤーの違和感」を突く技能が必須なわけで……だからこそ、逆に言えば人の身体がどんな風に動いてどれくらい動けるかも把握しているんだなこれが」

さながら操り人形の意図を握る人形師か、それとも無謀な挑戦を試みる愚か者か。オイカッツォがパワーレベリングの副産物として得た大量のライブスタイド・レイクサーペントの素材、それを用いて作られた縄装備、蛇縄「命の手綱」。

手を離した時点で装備品はオブジェクト化するという特性を利用し、大量の「命の手綱」によって騏驎甲冑を捕縛したオイカッツォだが、当然体高5メートルを越える騏驎甲冑のＳＴＲは相応に高く、オイカッツォ一人でその動きを封じることは困難である。

現に、騏驎甲冑は縄を意に介することなくペンシルゴンを叩き潰すべく一歩踏み出さんと右足を上げ……

「例えば歩くモーション、片足を浮かせた瞬間に体を支えている方の足を引っ張ってやれば転ぶ」

騏驎甲冑の重心が前へと傾いた瞬間、左足に巻きつけられた縄がオ

イカッツォによって引っ張られ、重厚な身体はいとも容易く転倒する。

「立ち上がる瞬間に足を引っ張ればさらに転ぶ」

両手を地面につき、立ち上がろうとした麒麟甲冑は両足を引っ張られ、さながら喜劇の道化のように再び派手に転ぶこととなる。そして二度の力みによってスタミナを使い切ったオイカッツォがスタミナ回復をしている間に、準備を終えたペンシルゴンが転倒した麒麟甲冑へと肉薄する。

「弱点候補その一ぃ……本体との合体部分！」

ペンシルゴンが持つ槍……大型モンスターの背骨から刃を削り出したものに金属で補強と装飾を入れた「獅子の連骨槍（レグルス・トーテム）」はデザインされ、システムとして組み込まれた能力を十全に発揮して麒麟甲冑の欠けた空洞、本来であれば墓守のウェザエモン本体が収まるための言うなれば玉座へと突き出される。

複数のバフを受けた槍の穂先は麒麟甲冑の接合部の奥の奥を確かに穿った……が、返ってきたのはあまり有効とは言い難いいまいち会心を外れた感触。

「うーん、効果薄そう。次！　カッツォ君仰向けでよろしく！」

「無茶言いなさる……！」

オイカッツォによる転倒、それによって発生するダメージはあくまでも麒麟甲冑自身によって発生した自傷ダメージである。確かに文字通りの意味でオイカッツォは麒麟甲冑の足を引っ張ったわけであるが、それ自体にはダメージは発生しておらず、そしてそれは同時

にオイカッツォにヘイトが移ることはない、ということである。

「立ち上がって、頭……は無いけど、背中が伸びきって、慣性が残ったこのタイミングで……両腕！」

ゲームのシステム上片手で扱える装備扱いである縄装備は右と左で一本ずつ、一度に二本操ることが出来る。騏驎甲冑が立ち上がった瞬間に両腕を一息に真後ろへ引っ張った結果、巨体故に立ち上がる際の慣性にオイカッツォによる牽引のエネルギーも加わって騏驎甲冑の重心は後ろに傾く。だが足りない、あと少しで転倒するという寸前で、騏驎甲冑は左足を後ろに下げて踏ん張らんと試みる。

「あっ、耐えた！？」

「倒れとけ！」

よろめいた騏驎甲冑の腹に突進と跳躍によって威力を増したペンシルゴンの蹴りが命中し、首のない伽藍堂の巨人は青天井を仰ぐこととなる。

「腹を割って話そうか……なんて、ねっ！」

武器の耐久度を急速に消耗するというデメリットこそあれど、強力な装甲貫通効果を付与する「ブロークン・シェル」によって、奇しくも墓守のウェザエモンと同様に自壊しながら突き立てられた獅子の連骨槍が騏驎甲冑のＶＩＴと真正面から激突する。狙う部位は腹、それも最も装甲が硬い部位。

「分厚いってことは、その下が重要ってことだよねぇ……！　カッツォ君、二十秒耐えて！」

「無理！　十五秒！」

「上々！」

攻撃スキルを連続して発動し、ただ一点を集中的に攻撃し続ける。
騏驎甲冑が起き上がろうとする、腹の上のペンシルゴンを払いのけようとする行動はオイカッツォが腕を引っ張り、強制万歳をさせる事で阻止される。

「動きを阻害してもダメージもデバフも与えていないからこっちにヘイトが来ないし、転倒させれば自傷ダメージも入る……もしかしなくても、これハメだよね？」

「だったら運営に修正される前にウェザエモンを攻略しちゃおうか……！」

二度目のブロークン・シェルの行使によりビシリ、と致命的な亀裂の入った獅子の連骨槍を投げ捨て、ペンシルゴンは別の槍をインベントリから取り出す。

「ああもう、致し方ないとはいえ本気を出せないのはつらいなぁ……！」

とある事情から、今現在ペンシルゴンは本気を出せないでいる。それは決して侮りではなく、この戦闘におけるキーアイテム、対価の天秤を借りる為にペンシルゴンは自らの愛槍を対価として預けているのだ。

だからこそ、ペンシルゴンは此度の戦いではアシストに回ることを選んだ。代用の槍も用意できうる最良と最上を兼ね備えたものを揃

えたが、ここへきて騏驎甲冑を実際に倒す、という新たな課題の前に愛槍の不在が響いていた。

「それならそれでやりようは幾らでもあるけどね……！　やりだ……」

「槍だけに？」

「うーわカッツォ君ダジャレつまんなーい。うーわ、うーわ」

「こ、この野郎……！」

初見食らった時は「なんだこのクソゲー！？」と思ったものの、よくよく考えてみればそうでもないかもしれない。要するに、覚えゲーなのだ。

それに気づくまでに三度死んで残りあと四回は死ねるわけだが……

「晴天大征(せいてんたいせい)中の技はランダム選出、共通するのは最後の技は天晴ということだけか」

「断風(タチカゼ)、火砕龍(カサイリュウ)、灰吹雪(ハイフブキ)」

断風は準備モーション中に行う墓守のウェザエモンの首の動きと、踏み込んだ右足の動きでどこを狙うのかが分かる。
火砕龍(かさいりゅう)は発生までラグがあるので今となってはさほど脅威ではない。
灰吹雪(はいふぶき)も同様に完全にプレイヤーを包囲するまで数秒あるので不意を打たれたならともかく、備えていれば回避は容易い。

「天晴に関しては試行回数が少ないからなんとも言えないが、回避行動ができないことは確定している」

「大時化(オオシケ)、雷鐘(ライショウ)、入道雲(ニュウドウグモ)」

大時化(おおしけ)は断風ほどの理不尽速度ではないが、それでも驚くべき速さで接近して掴み攻撃をしてくる。だがその軌道は直線でしかなく掴まれさえしなければそれは腕を空振りするだけの動作となり明確な隙となる。
雷鐘(らいしょう)は回避自体は容易い、全力で走ればいいだけだからな。ただ状況とスタミナ管理次第では走るだけのスタミナがなくて着弾する、逃げ切りはしたがスタミナを使い果たして次の攻撃を避けられない、などのアクシデントが起こり得るから注意。
入道雲(にゅうどうぐも)、こいつが厄介だ。回避方法が単純に薙ぎ払いに追いつかれないよう走る、腕そのものを飛び越える、ウェザエモンの至近距離に存在する安全地帯に逃げ込む……どの選択肢もスタミナを確実に削ってくる辺りこの技が一番厄介かもしれない。

「対応は最小限、次に繋げられる体勢を維持してウェザエモンとの距離は3メートルを維持……天晴(てんせい)までのリミットはおおよそ三十秒」

身体の挙動と思考を切り離せ、これまでの技なんて慣れればそう怖いものではない。最重要を検証しろ、考察しろ、対応しろ。回避そのものを封じてくる天晴の対処法、その候補を脳内でリストアップし、一つずつ精査していく。
太刀を破壊する……実現は困難だろう、少なくとも破壊自体は可能かもしれないがこの戦闘にそれを組み込んでいるとは思えない。
本体を撃破する……可能性はなくはないが、それなら晴天大征のコンセプトに違和感を感じる。ずっとボスのターンをガチでやっているあの技を潜り抜けて攻撃、というのは難しい。仮に大人数で袋叩きにするのが攻略として正解だとしても何か違う気がする、根拠はないがこういう時の勘は信じた方が上手くいく。
となればやはり最有力説はあれをどうにかして受けて生き延びることだ。

「……パリィか」

それもクリティカルを出すレベルのベストタイミングで弾かなければならない。断風程でないにしろ、見てから対処することが困難な速度で振り下ろされる太刀を、だ。だがそれだと別の問題が発生する。

「あれ……弾けるのか？」

パリィだって万能ではない。クリティカル成功率は受け手のタイミングや角度の他に攻め手の攻撃のパラメータも関係してくる。
身体がなんの問題もなく動くのであれば身をひねるなりの補強を入れていなすことは出来ただろうが、下手に身体を動かして回避認定されればパリィの成功率は限りなく低くなるだろう。
つまり俺はその場で踏ん張ってあの太刀を弾かなければならない……が、下手なパリィでは力負けしてそのままぶった斬られるし、そ

もそも装備破壊効果が付与されたあれを素直に受け止めればこっちの武器が破壊される。

「考えられる最善、必要な要素は……あと三つ」

足元の白熱から飛びのきつつ、俺は辺りを見回す。どう動き、どう転がり、どう跳ぶのか、頭の中で即興でチャートを作り出し、俺は行動を開始する。

あと二分、耐えきれるか……？

刹那に想いを込めて　其の十九

まず最初に、投げ捨てた兎月【上弦】と【下弦】の回収。湖沼の短剣【改二】や帝蜂双剣では押し負ける、切り札になり得るのはアレしかない。

「タイミングは……今！」

火砕龍(かさいりゅう)から灰吹雪(はいふぶき)へと繋がるこの一瞬、完全に墓守のウェザエモンがその場に固定される技を最速で抜け出し、俺は地面に突き立った【上弦】へと走る。

「まずは一本回収！」

「大時化(オオシケ)」

「はっはぁ！　入道雲(にゅうどうぐも)以外ならデレ行動だぜ！」

墓守のウェザエモンの脇下を潜り抜け、下弦へと走る。背後を見ている時間はない、奴がご丁寧に宣言する技名から展開を予測しろ。

「雷鐘(らいしょう)」

「ありがとぉう！」

最高のデレ行動だ、ノッてるよ今！　全力疾走する俺の背後を雷が連打で着弾し、その隙に俺は【下弦】の位置へと到達、回収する。とりあえず第一段階はクリアだ……よし、溜まってるな。すぐさま

インベントリに兎月をしまい込み、蘇生アイテムを握りながらスキルを確認する。

（残り百秒、残機は四……へっ、結局耐久戦かよ、燃えてきた）

先の見える耐久戦ほど心躍るものはない。ボスキャラとの我慢比べ、ラストスパートにしてデッドヒート。表現はなんでもいい、今の俺はこのあと寝込むことになっても限界まで頭を酷使するぞ。

晴天大征（せいてんたいせい）は三十秒間のラッシュに天晴（てんせい）で〆る一連の流れを指す。技というより発狂モードと言うべきか……ともかく、限界まで時間を引き伸ばして百秒を稼ぎ出す。

「覚悟しろ墓守のウェザエモン、死んでも俺に付き合ってもらうぜ」

「雷鐘（ライショウ）」

雷を避け、即死の居合をかわし、命を掴む掌をいなす。そして訪れた三十秒。ウェザエモンは俺の眼前へと迫り、太刀を振り上げる。

「来たな……！」

「我が窮極……【天晴（テンセイ）】」

ここで成功する必要はない、来たるべき時の為の予行練習……遠慮なく死んでやろうじゃないか。セルフ蘇生の準備を終え、俺は素手のまま振り下ろされる太刀へのパリィを敢行する。真横からフックの形で俺の拳を太刀へと重ねんと動かす、このタイミングで拳がここならもう少し早く動かさなければぁ

「うおおリスポーン！」

「晴天大征（セイテンタイセイ）」

「別にそこまで頑張らなくてもいいのよ……おっと危ない」

さぁ次のセットだ、残り九十秒！

サンラクとウェザエモンとの戦闘が佳境に突入したと同時刻、オイカッツォとペンシルゴンによる麒麟甲冑との戦いもまたクライマックスを迎えていた。

「いやまさか腹を砕いたら中からビーム砲出てくるとは思わないよねぇ！？」

「お陰様で発狂モードだよどうすんのこれ！？」

ペンシルゴンによるダメージの積み重ねは麒麟甲冑の堅牢な装甲をついに打ち破り、腹部の装甲が隠していた中身を露出した……のだが、現れたのは莫大量の光熱を撒き散らすビーム砲であった。

さらにビーム砲の展開は騏驎甲冑自体の切り札であったらしい、縄を引きちぎり、全身の武装をやたらめったらに開放し始めた騏驎甲冑。ミサイルとレーザーが吹き荒れる台風の目と化した巨人を距離を離しながら眺めつつオイカッツォとペンシルゴンはさてどうしたものかと思案する。

「唯一の救いはヘイト関係なく暴れてるから距離さえ離せばこっちも休憩やら準備やらできる事だけど、下手したらサンラク君の方に乱入しかねないね……」

「だとしたらやることは一つ、あの発狂アーマーが黙るまでやるよペンシルゴン」

「はいはい。で、何か策はあるわけ？」

オイカッツォほど表には出していないが、ペンシルゴンもまた同じ気持ちを抱いている。大局的に見ればウェザエモンさえなんとかすれば戦闘自体は勝利と言える。だがここまで追い詰めたものを諦めろと言われ、ハイわかりましたと受け入れられるほど諦めの良い二人ではない。そして二人が騏驎甲冑を倒すことを諦めない理由はもう一つ。

「俺の予想では「俺が一人でユニークモンスターの本体を抑えていたのに高々でかいだけの機械の馬も倒せないんですかぁ？」と見た」

「私的には何も言わず鼻で笑う、かな」

恐らく相当腹の立つ顔をして鼻で笑うクソゲーマーの姿が二人の脳裏にありありと浮かぶ、なにせ自分が向こうの立場であれば同じ事をするという自信がある故に。

「時に閣下、わたくしめに名案がございまする」

「聞こうか軍師殿」

「とりあえず私が……」

ペンシルゴン発案の作戦とは、おふざけを入れる隙間のない場合（今回の墓守のウェザエモン討伐戦のような）を除き、ほとんどの場合において「ロクデモナイ」が頭にくっつくものが殆どである。それ故に、ニマリといつもの笑顔を浮かべながら説明した「麒麟甲冑を一撃で屠る必殺の策」を聞いたオイカッツォは非常に複雑な表情を浮かべつつも、それを承諾する。

「ちなみにカッツォ君、縄は残ってる？」

「さっきの発狂で全部一撃破損だよ、元々耐久の低い武器種とは分かってたけどもう少し頑丈にしてほしいよ……」

「ネタバレだけどテンバートで現時点で最高耐久の縄武器作れるよ」

「ははは、今使えないんじゃ絵に描いた餅より価値がないっての！」

最後の一つとなったＭＰ回復のポーションを一気飲みしたオイカッツォは何度目かも分からない自己強化を行い、ペンシルゴンは残りの槍のストックを確認し、その中から一本を取り出す。

「ああ勿体無い勿体無い、これ一本作るのにどれだけのお金がいるのやら……確か百万は越えてたかな。まぁ私のお古だから使い潰すのに抵抗は…………ないよ！　うん、ない！」

「葛藤が見えたねぇ……よっしゃ、やろう！」

そして最後の作戦が開始される。ミサイルとレーザーによって荒れ果てた地面、黒い月が白い夜空を照らしている中でも漆黒を維持している騏驎甲冑の影。その持ち主の大きさと同じく巨大なそれに投擲された槍が突き立てられる。

「汝、縫い留めしもの。我、繋ぎ止めしもの。万象に寄り添い、しかして相容れぬ万有の黒を穿つ。【黒楔の槍（シャドウ・ウェッジ）】！」

「フル詠唱だと威力に補正入るんだっけ？」

「普段はやらないけど、今回は１％でも確率が欲しいからね……！」

ブロークン・シェルと同様に武器そのものの耐久度を消費する魔法である黒楔の槍（シャドウ・ウェッジ）、その効果は敵の影に刺すという制限こそあれど、影の持ち主の動きを文字通り完全に封じる、というものだ。

とはいえ、実装当初はゴブリンだろうがワイバーンだろうが問答無用で縛る効果があまりにも強力であったために弱体化が施されたという過去もある。

「このサイズだと、保って五秒！　チャンスはこの一度だけだよ！」

「オーケー！　タイミングはこっちで合わせるから、外すなよ！」

騏驎甲冑の狂奔が完全に停止した数秒、二人は同じ目的のために異なる動きを取る。オイカッツォは騏驎甲冑へと肉薄し、ペンシルゴンは逆に距離を離す。

「こいつで私の武器は尽きる……最後に残ったのがこれとはまた何とも運命的というかなんというか」

ペンシルゴンのインベントリに残った最後の槍、必要素材の全てがプレイヤーよりも巨大なモンスター由来という銘通りの素材を要求する異なる武器種なれど同じ名を持つシリーズの一つ……その名も「巨人殺し・串刺し（ジャイアントキリング・スキューア）」。

名前の通り、プレイヤーよりも巨大な身体を持つモンスターに対してダメージに補正の入る槍である。

「頼むよ巨人殺し（ジャイアントキリング）……お前に託すよ！」

右手で巨人殺し・串刺し（ジャイアントキリング・スキューア）を振りかぶり、狙うは麒麟甲冑の露出した腹部砲塔。

「ほんと、何もかもドラマティックだなぁ……「乾坤一擲」！」

それはまさしくペンシルゴンの今の心情そのものであり、投擲スキルの名前でもある。持ちうるすべての力を込めてペンシルゴンが放った重厚な槍がエフェクトの尾を引きながら空を裂き、麒麟甲冑へと飛翔する。

そして投げ放たれた巨人殺し・串刺し（ジャイアントキリング・スキューア）の穂先が着弾する寸前、それに追随する影一つ。

「赤、青、黄……三色混合【拳気・過重黒衝】！」

ほぼ同時に起きた複数の出来事を順番に並べたならば、このようになる。

まず、最初に黒楔（シャドウ・ウェッジ）の槍に用いられた槍が砕け散り、麒麟甲冑の拘

束が解ける。
次に拘束が解除され、攻撃に転じようとした騏驎甲冑に投げた槍が命中。しかしながらその攻撃は決定打には至らない。
そして槍の着弾とほぼ同時、オイカッツォが持ちうる最高火力が巨人殺しの石突きを殴りつける。

「名付けて人力パイルバンカー！」

「いい加減……沈め伽藍堂（ガランドウ）！」

本来はペンシルゴンのＳＴＲを参照し、貫通力を得る筈の槍はオイカッツォという二段目のブーストを受けてさらに奥へ奥へと騏驎甲冑を穿つ。無理な運用、装甲ほどではないにしろ堅牢な騏驎甲冑の体内を進む負荷に槍全体に亀裂が走る。しかしながら確かに巨人殺しはその名の通りの結果を遂行した。

騏驎甲冑の背よりひび割れた穂先が顔を覗かせ、騏驎甲冑の動きが停止する。そして爆発。巨人殺しは砕け散るが、明らかに許容できるレベルではない爆発に、二、三度痙攣するかのように身体を震わせた騏驎甲冑は最期に手を伸ばし……崩れ落ちた。

「……疲れ、たぁ」

過重黒衝の反動により戦闘不能な状態まで身体が弛緩したオイカッツォが地面にへたり込み、大きく息を吐く。ペンシルゴンもまた肩から力を抜くが、本命が終わっていないと気を引き締めてサンラクの方へと向かう。

（サンラク君はまだ生きてるけど……逃げている？　何故、時間稼ぎ……そうか）

間断なく猛攻を仕掛ける墓守のウェザエモン、そしてそれを避ける……否、逃げているサンラクを見たペンシルゴンは数秒の思考を経て、彼が今最も求めているであろう問いを投げかける。

「サンラク君！　何秒要る！？」

それに対してサンラクの答えは単純、しかし明確なものだった。

「あと五十……いや二十秒！」

「スイッチ！」

「できるのか！？」

「やるんだよ！」

刹那に想いを込めて　其の十九（後書き）

次でウェザエモン戦は決着です。

刹那に想いを込めて　其の二十

致命刃術【水鏡の月】でヘイトを消し、入れ替わるように飛び出したペンシルゴンが魔法であろう炎をウェザエモンへと浴びせかける。向こうがやると言った以上、俺がすべきことは最後の瞬間のために準備することだけだ。

「兎月の準備よし、あと十五秒、大口叩いたからには耐えてくれよペンシルゴン……！」

「あっ、やばっ」

おい、五秒しか保ってないぞ。

墓守のウェザエモンに掴まれ、地面に叩きつけられたペンシルゴンがポリゴンとなって飛び散る。蘇生アイテムを投げつけ再び俺が墓守のウェザエモンの前へとおどり出る。まぁ数秒とはいえ緊張をほぐせたと考えれば無駄ではないか。

「下がってろペンシルゴン！」

「あーごめん！」

「しゃーない！」

ノータイムブッパはある程度見慣れないと事故要因が一気に増えるからな、実際俺も何度か死んでいるわけだし。

ペンシルゴンが後ろに下がったのを確認し、再び晴天大征（せいてんたいせい）へと挑む。

（あと十秒、八……六……四………一）

「よし！」

これで調整は完了した。あとは三十秒間耐えれば全部の準備が繋がって完成する。

「よっしゃこい！　ここからが正真正銘クライマックスだ！」

刃を避ける、火柱をかわし、掌を弾く。思えばたった三十分前始めたばかりの戦闘だというのに随分と対応できているものだ、エナジードリンクパワーだろうか？　三十秒がひたすら長く感じる、雲の腕を跳び越え、雷の雨を走り抜けて再び刃を避ける。あと少し、あと十秒。

「灰吹雪（ハイフブキ）」

「あと五秒！」

四、灰色の包囲網を抜ける。

三、超速の居合が放たれ、それをしゃがんで避ける。

二、墓守のウェザエモンの動きが一瞬止まる。来たな……！

一、こちらも迎撃の構えを取る。一対の刃を一つの刃へ。耐えに耐えて迎えたリキャスト終了によるスキルを再発動……！

零。

「あ、あれっ？」

空気が抜けるような虚脱感、この感覚はリキャストが終わっていないスキルを発動しようとした際の空振りの感覚……つまり、スキルが発動しない。目の前には太刀を振り上げた墓守のウェザエモン。兎月は既に合体を終えている、だが武器種そのものが変わった今の兎月ではクライマックス・ブーストと餓狼（ハンガーウルフ）の闘志のバフがなければパリィが間に合わない。

「まさか……」

秒数管理ミスった？　どこかで何秒か飛ばしていた？　ああそうか、違う。

「体力が削りきれてないのか」

「【天晴】。」

「ああ……しくじったな」

発動条件を満たせず不発。こんな凡ミスをしてしまうとは、参ったなここからセルフ蘇生の用意なんて無理だぞ。振り下ろされる蒼の刃、こちらはそれに対して対応できない。さすがにこの状態からどうにかすることは俺でも無理……

「おい女泣かせのウェザエモン！」

瞬間、墓守のウェザエモンの動きが一瞬とはいえ、完全に停止する。

「……………ぁ」

それは後ろへ下がったペンシルゴンと、這いずりながらも目的地点まで達したオイカッツォの二人が遠き日のセツナの墓を破壊し、墓守のウェザエモンを挑発したからであった。

墓守のウェザエモンがそれによって完全に意識を俺から外したからであった。

一体ペンシルゴンがウェザエモンへ何を言ったのかも、ウェザエモンというキャラクターが眼前の敵よりも恋人の墓を優先したことも、今この瞬間の俺にとってはそれら全てはどうでもいいことで……

「おいウェザエモン、人から目を離すとかいい度胸じゃねーか」

時間にしてわずか一秒。だがその６０フレームが何よりも俺が求めていたものだ……！

一対の双剣から、互いの柄頭同士が合体し、片刃の大剣となった兎月……兎月【双弦月】で俺自身の腹を切り裂く。自傷ダメージがＨＰを削り、体力の数字は瞬く間に０へと迫る。だが知ってるぞ、丁度三十分前に行われた大型アップデートの内容の一つ。あの日コンビニで読んだゲーム雑誌に確かに乗っていた一文。

――今回のアップデートでは、幸運による「食いしばり」の発動条件を変更致します。具体的には……

「自傷ダメージ、及び反動ダメージに限り幸運50以上で確定1で耐えるってなぁ！」

　体力の減少は僅かに残し、確かに止まる。横腹は痺れるような感覚がむず痒いし、身体は重いがそれら全てを気合いとスキルで塗りつぶす。クライマックス・ブーストを発動し、増加したステータスを喰らって餓狼（ハンガーウルフ）の闘志をさらに重ねる。

　どいつもこいつもあのNPC（セツナ）にご執心で、墓守のウェザエモンですらその想いには抗えなかったらしい。
　だが俺が想うのは今この一瞬の刹那、勝利への王手ただ一つ。
　晴天大征（せいてんたいせい）は天晴（てんせい）を以って終わる一連のアクションを指す。言い換えれば天晴（てんせい）を放たなければお前は終われない。晴天大征のアクションも、永い永い墓守の誓いすらも！
「うちの親分に代わって、張っ倒してでも眠らせてやる……「致命の三日月（クレセント・ヴォーパル）」！」
「………【天晴（テンセイ）】！」

兎月【双弦月】に設定された能力は非常にシンプルだ。自身が敵よりも非力であるほど、鈍足であるほど、貧弱で、脆弱であるほど……体力から幸運に至るまで、パラメータで劣っている程にクリティカル威力と成功率が上昇するというものだ。
ドーピング、バフ……諸々でステータスを底上げしてなお俺を上回る墓守のウェザエモンに対して、放たれた兎月合体時専用スキル「致命の三日月（クレセント・ヴォーパル）」はクリティカル確定成功とクリティカル威力最大を内包してウェザエモンが放つ刃を迎え撃つ。
後々反動で酷いことになる、そんな確信を抱く脳のフル回転によってスローモーションに見える視線の先、あらゆる死と破壊をもたらす力を帯びたウェザエモンの太刀、その刃の一筋を避けるように【双弦月】の刃が蒼い太刀の横っ腹を打ち据える。恐るべき膂力で振り下ろされたそれを致命をもたらすクリティカルの火力で真横から押し出し、振るう刃の先端に至るまで力を抜くことなく振りきり……

「即死の一撃……攻略完了だ」

「…………」

ウェザエモンが振るった太刀、その切っ先は俺に触れることなくすぐ隣の地面をへと叩きつけられた。
沈黙の中、俺は思い切り息を吐き出す。ゲーム内故ＣＯ２が吐き出されているのかは知らないが、吐息と一緒に身体の力すらも抜け落ちてしまいそうな虚脱感になんとか抵抗する。

「……見事だ」

引き抜かれる太刀、思わず戦闘態勢を取るが墓守のウェザエモンは俺に斬りかかることなく静かに立っているだけだ。

「晴天転(セイテン)じて我が窮極の【天晴(テンセイ)】、言葉は移りて祝(イワイ)に転ず………天晴(あっぱれ)である、よくぞ我が窮極を見切った」

「ダジャレかよ……」

この場面で言うのもアレすぎたが、いきなりのダジャレに思わず口から出てしまう。

「呵々……セツナにもよく、言われ、た、ものよ……」

「………」

少しだけウェザエモンというキャラクターに親しみが湧いた。だがシナリオは容赦なく進む、墓守のウェザエモンの身体から亀裂と軋みの音が響く。すでに身体の各所から噴き出ていた蒼炎は消え、ただ消えかけの煙が薄く細く立ち昇っているのみだ。

「重ねて、天晴(あっぱれ)で、ある……「拓く者」の、末えイ、よ……」

墓守のウェザエモン……否、永きに渡る誓いと仕事を終え、ただのウェザエモンとなったそれの腕が落ちる。脚が崩れ、胴体が地面に叩きつけられると同時に何もかもが崩れて行く。

「我が、身……朽ち果、テ……眠、る………鳴呼、セツ、ナ……今……そコ、へ……」

最後にそう言って、胴体からウェザエモンの頭部がこぼれ落ちる。細く燻（くゆ）る煙すらも途絶え、あれだけ頑丈だった鎧すらも崩れていく。

「終わった……のか？」

「ここからさらに連戦とか少なくとも俺は泣くよ？」

「流石にそれはないでしょ……」

　だがユニークシナリオEXをクリアしたと言う表示が出ない以上、まだ何かあるのは確定的なわけで。俺もオイカッツォもペンシルゴンも、何が起こるのかと警戒を残しつつ辺りを見回す……と、その時フィールドに変化が起きる。

　戦闘中も不自然な程に美しく咲き誇っていた桜の木が急速に枯れ果てていき、反転世界に入る前の秘匿の花園にあった枯れ木と同様の姿になっていく。そしてその傍には半透明の女性がいつ現れたのか、ひっそりと立っていた。

「アーサー、それにオイカッツォとサンラクも……成し遂げて、くれたのね」

「セッちゃん……」

「三人とも、本当にありがとう。私の……いいえ、遠き過去に「セツナ」が抱いた願いはここに果たされました」

　ん？　何か引っかかる言い方だな。それだとまるで自分はセツナではないみたいな言い方じゃないか。

「セッちゃん……というかセツナって貴女のことじゃないの？」

「いいえアーサー……私は確かに「セツナ」ではある。けれどあの日死んだセツナ本人とは違う……セツナの願いが、「もしも恋人がずっとずっと私の死に囚われるのなら、どうかやめてほしい」という想いが生み出した彼女の残滓、謂わば筆跡まで完全に再現された写本のようなもの。役割を終えれば消える存在……」

「ああ、だから「遠き日の」セツナなのか……」

セツナ本人ではない、遥か遠い昔のセツナ本人の願いが形になった過去の残滓。要するにコピペされ再現された存在、ということだろうか。言葉通り儚げな笑顔を浮かべたセツナの姿にノイズが走る。

「セッちゃん……」

「悲しまないでアーサー。彼女の願いに世界が応えた時点でいつかはこうなることは決まっていたの」

足の先から消えつつあるセツナは儚げな笑顔から真剣な顔つきになると、俺達三人を見回す。

「貴方達は開拓者。二号計画の末裔、世界を「拓く者」……もしも貴方達が自身のルーツを、世界の真実を知りたいと願うのなら「バハムート」を探しなさい」

「バハムート？」

「知らんのかオイカッツォ、大体ドラゴンとして扱われる魚だよ」

「それくらい知ってるっての……ペンシルゴン、このゲームにおけるバハムートって何か知ってる？」

「いや、プレイヤーが名付けたものならともかくバハムートなんてモンスターはいない筈……セッちゃん、それはどういう」

「ふふふ、ここから先は自分で見つけ出してちょうだい。だってそれが、未来を切り拓くってことでしょう？」

真顔から一転、いたずらな笑顔を見せるセツナは既に、ほとんど消えかかっている。

「……あぁ、最後に。アーサー、これは「セツナ」としてではなく「私」自身が貴女に贈る言葉」

「へ？」

「いつも「私」に会いに来てくれてありがとう。大好きよアーサー」

「え、あ……こちらこそ！」

その言葉と満開の笑顔を最後に、ＮＰＣ「遠き日のセツナ」は完全に消滅する。僅かに残ったポリゴンが泡沫のように砕けて消え、今度こそ完全な沈黙が辺りを支配する。

「なぁペンシルゴン」

「ぐす……泣いてないよ」

「まだ何も言ってないんだが」

顔を手でゴシゴシ拭ってからのその台詞には説得力のかけらも無い。とはいえ好感度に応じた特殊台詞まであるとは改めて化け物じみたＡＩだ。ぶん殴ろうが蹴り飛ばそうが炎で焼こうが思い出語りをやめないフェアカスに爪の垢を煎じて飲ませたい。

「それ否定になってないっていうか、ほぼ自白だよね？」

「ペンシルゴンにも暖かな涙を流す機能があったんだな」

「コノキモチ……コレガ、ココロ……？」

「そのネタ天丼じゃん！　もういい二人とも縊り殺す！！」

「やべぇ！　武器が無いから殺害方法が生々しくなってる！」

「ここに来てＰＫ食らうとか真っ平だよ！？　代わりに死んでくれサンラク！」

ぎゃあぎゃあと騒いでいると、ようやくウィンドウが表示される。ペンシルゴンは俺たちを追いかけるのをやめると、居住まいを正して口を開く。

「何はともあれ、二人とも私のワガママに付き合ってくれてありがとう。お陰でシナリオクリアまで来ることができた」

「なんだよ改まって、俺達がやりたいと思ったから参加したわけだし礼なんていらんよ」

「そうそう、シャングリラ・フロンティアがサービス開始されてから初のユニークモンスター討伐者っていう称号だけで十分だよ」

「他人のユニークに乗っかったのを誇るのは……楽しいか……？　あっ、的確に鳩尾を狙うな鳩尾を！」

「それ言ったらお前もでしょうが、いい加減ぶっ飛ばすよ？」

わいのわいのと騒ぐ俺とオイカッツォに、ペンシルゴンはモデルとしての笑顔でもなく、不敵な外道の笑顔でもなく、心からの笑顔で宣言する。

「さぁ野郎ども、報酬確認と洒落込もうか！」

『墓守のウェザエモンは永い眠りについた』

『セツナの残滓は遠き日の願いを終えた』

『ユニークシナリオEX「此岸より彼岸へ愛を込めて」をクリアしました』

『称号【看取りし者】を獲得しました』

『称号【刹那を想う者】を獲得しました』

『称号【ご先祖様のお墨付き】を獲得しました』

『アクセサリ【格納鍵インベントリア】を獲得しました』

『アイテム【晴天流奥義書】を獲得しました』

『アイテム【世界の真理書「墓守編」】を獲得しました』

『ユニークシナリオＥＸ「致命兎叙事詩（エピック・オブ・ヴォーパルバニー）」が進行しました』
『ワールドクエスト「シャングリラ・フロンティア」が進行しました』

刹那に想いを込めて　其の二十（後書き）

ユニークシナリオ：特定の存在にまつわる物語、「此岸より彼岸へ愛を込めて」の場合はウェザエモンとセツナを看取るまでの「物語」
グランドクエスト：プレイヤー全体の目的、ＮＰＣと協力して未開拓世界を開拓するという「目標」
ワールドクエスト：世界そのものが次の段階へ進む、段階ごとに世界に変化が起きる「変遷」

長かった……ようやく墓守のウェザエモン戦書ききった……この章のエピローグまで行ったらしばらく更新をお休みさせていただきたいと思います。具体的には一週間ほど書き溜めとイクラ集めをゴニョゴニョ

進む世界、明かされる英雄

大型アップデート、その内容で賑わうシャングリラ・フロンティア。
それは本当に唐突な出来事であった。
カラーン、カラーンと荘厳な鐘の音が鳴り響く。殆どの新規プレイヤーが何事かと目を丸くする中、サービス開始初期からプレイしている者たちはこれが所謂ゲームマスターによるアナウンスであることを思い出す。

『シャングリラ・フロンティアをプレイされている全てのプレイヤーの皆様にお知らせ致します。』

「なんだ?」

「アプデ内容に不具合があったとかじゃないか?」

「あー、それか」

殆どのプレイヤーが先ほど実施されたアップデートになんらかの不備があったのではと予想する中、告げられた内容は全てのプレイヤーを驚愕させるものであった。

『現時刻を持ちまして、ユニークモンスター「墓守のウェザエモン」の討伐を確認いたしました。討伐者はプレイヤー名「サンラク」、

『オイカッツォ』、『アーサー・ペンシルゴン』の三名です。さらにユニークモンスターの討伐に伴い、ワールドクエスト『シャングリラ・フロンティア』の進行を報告させていただきます』

「はぁぁぁ!？」

「ちょっ、ユニークモンスター!？　倒したってマジか！」

「たった三人で!？　てか墓守のウェザエモンって聞いたことないんだけど！」

夜襲のリュカオーン、天覇のジークヴルムを始めとする七体のモンスター。所謂ワールドエネミーとして他ゲームで扱われるただ一種しか存在しない、そして例外なく強大なモンスターがたった三人のプレイヤーによって攻略された。その事実は瞬く間にシャングリラ・フロンティアのプレイヤー達に広まり、明かされたプレイヤー名の特定が始まる。

「アーサー・ペンシルゴンって阿修羅会のあいつだろ？」

「阿修羅会ってトップクランの連合に壊滅させられたんじゃなかったか？」

「サンラクって確か『兎連れ』の鳥面プレイヤーじゃ……」

「この前までサードレマにいたっていうプレイヤーがなんでユニークモンスター討伐に参加できるんだよ!？」

「ていうかオイカッツォって誰？」

「聞いたことない名前だ……追い鰹？」

さらには討伐者達の特定とは別の方面で賑わう者達も。

「おい誰か「教授」にリアルで連絡できるやついないのか！？」

「確か黒狼に奥さんいるんだろ、誰か奥さんに頼んで呼んで来てもらえ！」

「ここに来て「七つの最強種」の不明枠が明らかになるとは……」

「ジークヴルム、リュカオーン、クターニッド、オルケストラ、そしてウェザエモン……不明枠はあと二体か」

クラン「ライブラリ」。シャングリラ・フロンティアという世界観の考察を掲げるプレイヤー達は唐突に明かされた新たな考察要素に動きを活発化させる。

「今奥さんのところへ使いを出した、ログインしてればいいが……」

「というかユニークモンスターはこの大陸に全ているのか？」

「いや、出現したからって実際に倒すフィールドがこの大陸とは限らない。それにオルケストラとクターニッドはＮＰＣの話から明らかになったユニークモンスターだから、どこにいるかも定かじゃないしな」

「実際に目撃されてるリュカオーンやジークヴルムもランダムエン

カだし、新大陸にいても不思議じゃないか」
「いや、それよりもワールドクエストを調べるのが最優先だろう。グランドクエストとは別なのか？」
「普通のストーリーとは別扱いとみていいでしょうね、大まかなストーリーが「ＮＰＣと協力して世界を開拓する」なら、ワールドクエストは「世界そのものが次のステージへ進んだ」とも考えられるわ」
「だとすれば何らかの変化が起きている可能性があるな、黒狼辺りに頼んで調べてもらうか？」
「いやそれよりもまずは墓守のウェザエモンの考察だ、討伐したプレイヤーとのコンタクトを……」
「奥さん、教授を叩き起こしてすぐ呼んでくれるって！」
「よし！　ありがとう教授の奥さん！」
「叩き起こされる教授可哀想……」

当然ながら、その情報は阿修羅会の壊滅に沸き立っていたトップクランにも届く。

「アーサー・ペンシルゴンがいないと思ったら……ユニークモンスター討伐だと!?」

「というかサンラクってリュカオーンの呪いを喰らったっていう……」

「団長!」

「団長!」

クランメンバー達が視線を向ける先、そこには動きやすさを重視しながらも、並の重装甲よりも防御力の高いＶＩＴと見た目の良さを両立した装備を身に纏う女性が静かに立ち上がる。

「やれやれ、まさか我々より先んじてユニークモンスターを倒すプレイヤーがいたとは……トップクランも形無しだな」

「どうしますか？　新大陸行きの件もありますし……」

「新大陸行きは変わりないが、私を含めた何名かはこっちに残そう。リュカオーンの呪いの件もあるし俄然彼らに話を聞きたくなった」

「アーサー・ペンシルゴンはどうするんだ？　逃げたオルスロットよりも厄介な厄介だけど？」

クラン「黒狼」のリーダー、サイガー１００は話題に上がった人物

の一人、今しがた壊滅させたＰＫクラン「阿修羅会」の副リーダーであり、恐らくは情報屋を介して阿修羅会を売った犯人である、激しく見覚えのある顔をしたプレイヤーを思い出す。

（奴め、阿修羅会を売ったのはこれが目的か……となると、阿修羅会はユニークモンスターを秘匿していたのか。我々は体良く使われたわけだ、まんまと一杯食わされたな……）

今でこそ攻略最前線を行くトップクランとしての座を欲しいままにするクラン「黒狼」ではあるが、その最終目的は「夜襲のリュカオーンの討伐」である。

いいように利用され、あまつさえ先んじてユニークモンスターの討伐という栄光を取られた挙句、重要人物たるサンラクなるプレイヤーすら手元に置くアーサー・ペンシルゴン。

サイガー１００とも因縁浅からぬ彼女が数手先を取っているという事実にサイガー１００は歯噛みするが、すぐさま思考を切り替える。

（とりあえずどうにかしてやつとコンタクトを取れればいいが、場合によっては「ロンダリング」による交渉も視野に入れて……ふふふ、楽しくなってきたじゃないの……！）

肉食獣じみた笑顔を浮かべるサイガー１００にクランメンバー達は怪訝な顔をする。そこでふとサイガー１００はこの場にいるはずの人物がいないことに気づく。

「ん？　れい……ゴホンゴホン、サイガー０はどこに行った？」

「そういえばいないっすね」

「なんかさっきフレンドがピンチだからとか言って【朋友救助(フレンドワープ)】し

てましたよ」

「フレンド……？　あぁ、確か気になる人とフレ登録したとかなんとか言ってたな……」

今までゲームとは無縁の生活をしていた妹が自分がやり込んでいるゲームを始めた、と聞いた時には年甲斐もなく大はしゃぎしたものだが、それが気になる男性に近づくため、と知った時には男日照りな自分よりも先んじている妹に愕然としたものだ、と斎賀（サイガ−100）百は少しだけ遠い目をするが、素直に妹の恋を応援することにして、クランメンバーには気にしないように、と告げておく。

まさかサイガ−0のフレンドがサンラクであるとは、この時点ではサイガ−100は知る由もないのだった。

呆然、唖然、愕然……それを表現する言葉は多々あれど、要約すればオルスロットは茫然自失としながらGMアナウンスを聞いていた。

「墓守のウェザエモンを……倒した？」

プレイヤーキラーとして、シャンフロでも屈指のプレイヤーであると自負していた自分を数秒で斬り殺したあのウェザエモンを、認めたくはないが自分よりも優れた姉ですら一分持つかどうか微妙であったあの鎧武者をたった三人で討伐した？
その事実はオルスロットの怒りを困惑とショックで吹き飛ばす程には衝撃的なものであった。

「サンラクって確かあの……」

「なんでペンシルゴンさんとそいつが？」

ざわめくクランメンバーを気にする余裕もない。オルスロットはただただ口を開けて呆けたようにへたり込む。
今まで積み上げてきたものが一夜にして崩壊し、トップクラン「黒狼」や考察クラン「ライブラリ」ですら把握していないユニークモンスターを知っている、という優越感は木っ端微塵に粉砕され、オルスロットは感情が表現に追いつかない。
とその時、秘匿の花園の中心に歪みが生まれる。そしてそこから現れる三人のプレイヤー。

「おー、ペンシルゴンの予測が当たったたね。アレが二人が言ってた「赤点のオルスロット」？」

「なにそのショボそうな二つ名、ウェザエモンかよ」

「あはは、ウチの愚弟にそんな仰々しい名前はいらないよ」

明らかに消耗しきった様子で、ペンシルゴンに至っては武器すら持っていない。だが三人の顔には確かな達成感が浮かんでおり、更に

言えば普段はウェザエモンに敗北すればセーブ地点でリスポーンする筈が、三人がこのエリアに出てきたということはウェザエモンの討伐が事実であることを再確認させられる。

「お、おま、お前ら……！」

「なによ愚弟、文句があるなら言いなさいよ。あんたがクソつまらない方法ばっかとるから私が先に倒した、それだけよ」

「………！……っ！」

あまりに理不尽な物言いに、口から出る筈の文句も罵倒もあまりの怒りに喉に詰まってしまう。

「クラン陥れてその物言いは酷くね？」

「いやいやサンラク君、こいつらはＰＫの粋を理解していないイキってるだけの三流だよ。やったらやり返される、ぶくぶく太って痩せるのが怖いからってチキンになっちゃってさぁ……だから私が腹パンして腹の中のもの全部吐かせた、それだけだよ」

「うわぁ、ガチギレペンシルゴンって割とレアじゃない……？」

「ＰＫに一家言姉貴怖いですわぁ」

「黙って聞いてりゃクソ姉御……！　もういい、この場でお前ら全員ぶっ殺してやる……ウェザエモンのドロップアイテム根こそぎ接収してやるからな…！」

その言葉を合図に阿修羅会の残党達は武器を構え、三人を取り囲む。

しかしくだんの三人はと言えば、それは予想通りであると言わんばかりに落ち着いた様子を崩さない。
その一々がオルスロットの癪に触る。特にあの半裸だ、明らかにナメた格好でありながら誰も知らないユニークを持ち、さらにウェザエモン討伐のメンバーに入っている、という事実の一々が気にくわない。
元々数多のクランに狙われつつあった阿修羅会の戦力増強、さらに言えば初心者が廃人も知らないユニークを持っている、という事が気に食わなかった。シャンフロのシステムもろくに把握していない初心者なら少しばかり脅しつけてやればどうとでもなると思っていたが、それが間違いであったとオルスロットはようやく気づく。
一番の敵は身内で、水面下で広げられた蜘蛛の巣に気づいた時には何もかもが手遅れで。抜けていったメンバー達は「なんか違う」と言う意味不明な理由でクランを去って。

何もかもが思い通りにならない事実についにオルスロットがブチ切れ、オルスロットが持つ「殺戮者の魔剣(スローターブリンガー)」に強化の魔法を付与する。

(まずはあの半裸(サンラク)、次にオイカッツォとかいうやつ、そして最後はクソ姉御を全員で袋叩きにしてやる……！)

オルスロットは気づかない。姉(ペンシルゴン)がため息をついている事に。ペンシルゴンがこの場にオルスロット達がいる事などとっくに気づいていて、それでもなお出てきたという事がどういう意味なのかを理解していない弟に。

「全く……大局的な視点を持てといつも言ってるのに、目先の利益に釣られるんだから……」

「ありゃFPSとかで砂のスコアにされまくりながら味方が無能だ

とキレるタイプだな」

「あー、なんかわかる」

何故この三人はこんなにも冷静なのか、なにを理由にこの状況でその態度が取れるのか。頭に血が上りきったオルスロット以外のプレイヤー達が怪訝な表情を浮かべた直後。

「いやはや、まさかのサンラク君の意外な交友関係ではあるけど、この場合は好都合だったね」

三人の、厳密に言えばサンラクの眼前に魔法陣が発生する。本来ここにいないはずの存在が、足の先からこの場所へと存在を固定していく。その装甲は半端な攻撃では傷一つつくことのない堅牢さと、同時に神々しさを備えた白金の鎧騎士。その姿にオルスロットのみならず、他の阿修羅会メンバーも驚きに目を見開く。

以前のアップデートにより追加されたPK対策の一つ。プレイヤーがPKに遭遇し襲われている場合、そのプレイヤーのフレンドに「救難信号」が送信される。

そして、フレンドの中に【朋友救助（フレンドワープ）】を会得している者がいれば……

「MMOで何もかも思い通りになるわけないでしょ？　だからあんたはオフラインの一人用ゲームがお似合いだって前々から言ってるのよ」

「あ、一人プレイでゲームするならフェアリア・クロニクル・オンラインってのがオススメだぜ」

「サンラクお前、鬼かよ……」

「サイガー０……！？」

忘れもしない、つい先ほど派手に阿修羅会の拠点を吹っ飛ばした悪夢が、まごう事なき本物の最大火力（アタックホルダー）が目の前にいる。

「………「アポカリプス」」

阿修羅会がアーサー・ペンシルゴンを抜いて全滅するまでおよそ五十秒。それが牙の抜けたプレイヤーキラー達の限界だった。

進む世界、明かされる英雄（後書き）

多分この話の中で一番の被害者はいきなり拠点チクられた上に、最高クラスの火力と物量で蹂躙され、挙げ句の果てに情報アドバンテージも無に帰して最後はトラウマにボロ雑巾のようにボコられたオルスロット君だと思います。職業：殺人鬼になるレベルでＰＫしていたツケを払わされたとも言えばそこまでですが。

ぶっちゃけ彼は悪役というよりペンシルゴン側の話を進める舞台装置です。

なおペンシルゴンこと永遠さんは独り立ちしてるのでいきなりリアルで弟が強制切断！　とかはないです。

ケジメとオーバーキル（前書き）

予約投稿ミスぁぁぁぁぁ！　しゃーないのでそのまま更新します

なんだあれ、オルスロットとかいうペンシルゴンの弟がボロ雑巾みたいにボコられて消えた……もはや憐れみしか感じないレベルでフルボッコにされた阿修羅会残党達が消失し、その場に大量のアイテムが散乱する。

「あーあー、阿修羅会の保有してたアイテムをこんなに溜め込んで、夜逃げかかっての全く……」

ため息と共にオルスロットがいた場所に落ちていたなにやら禍々しいオーラを放つ剣を蹴り飛ばすペンシルゴン。

ウェザエモンと戦ったフィールドから秘匿の花園へと戻る前、十中八九待ち構えているだろう阿修羅会をどうするのかという問題に対してペンシルゴンが提案したのが、「強いフレンド呼んでなんとかして貰おう作戦」である。

なんの因果か偶然にもシャンフロでもトップクラスの個人(プレイヤー)でもあるサイガー0氏とフレンド登録していた俺が救難信号とやらを出す事になったのだ。ほぼノータイムでやってきたサイガー0氏には感謝しかないわけだが、あまりにレスポンスが速すぎてちょっと引く。

「えぇと……」

「あー、サイガー0さん。わざわざ来てくれてどうもありがとう」

「い、いやっ、気にしなくて……いい。それよりも……ユニークモンスター討伐……おめでとう、ございます」

あぁ、ＧＭアナウンスで派手にバラされてたからな……お陰でますます表通りを歩きづらくなってしまった。もうそこらへんは諦めるかな、ラビッツという避難場所がある以上そこまで焦る事でもないだろう。

直接的な問題であった阿修羅会もペンシルゴンが潰してしまったわけだし、オルスロットも今しがたサイガー０氏によってボロ雑巾と消えた。

俺とサイガー０氏の間に沈黙が降りる。どうしよう、「もう呼び出した用件は終わったので帰っていいですよ」とは言いづらいし、何かしらお礼とかした方がいいだろうか。

「あー、サイガー０ちゃーん？　来てくれたところ悪いけどもう一つお願いがあるんだけど、いいかな？」

「……なんだ？」

無理してやってる感が半端ないぶっきらぼうな口調でペンシルゴンへと振り返るサイガー０氏。ペンシルゴンは何でもない風に、至極あっさりと告げる。

「ついでに私のこともキルしてもらえる？　報酬は再誕の涙珠二つを含んだ今私の持ってるアイテム全てとここに落ちてる阿修羅会が保有してたレアアイテム全てで」

「……いいのか？」

「いいのいいの、私だけノーリスクなんて愚弟以下のマンチキンだし？　いい加減ＰＫも飽きて来たからここらでスパッと罪を清算しようかなってね」

確かＰＫＫされた場合のペナルティは自身の全アイテムの没収、及び莫大量の罰金だったか。小っ恥ずかしい異名がつけられるくらいＰＫし続けていたペンシルゴンが一体どれだけのペナルティを負うのかは想像もつかないが、ペンシルゴン曰く最初から決めていたことらしい。

「とはいえ、私もプレイヤーキラーの端くれ、首切り介錯を大人しく待つほど良い子ちゃんじゃなんだないわけでぇ……」

オルスロットが持っていた剣を拾い上げ、サイガー０氏へと突きつけながらペンシルゴンは宣戦布告（おねがい）する。しばし悩む様子を見せるサイガー０氏だったが、チラリとこちらを見た後、静かに頷く。

「……分かった。廃人狩り（ジャイアントキリング）が相手なら、こちらも本気で行く」

サイガー０氏は背負っていた漆黒の大剣……明らかに人の手だけで作れるようなものではない、何か人知を越えた力が形になったような強大な力が無理やり剣の形に押し込められたような大剣を構え、静かに唱える。

「魔王天帝（サタナエル）……反転、天帝魔王（サタン）」

瞬間、大剣が脈打つように鳴動する。大剣の剣先から徐々に白く色が、質感が、性質が塗り変わって輝く純白の大剣が現れる。先程までの禍々しさなど欠片も感じさせない、神々しい刃が月光を受けて静かに輝く。

であるならば邪悪な漆黒は消滅したかといえばそうではない。剣が輝きを増す中、大剣から放逐された黒はサイガー０氏本人へ侵食する。白金の聖騎士然とした姿が黒く染まり、その形状までもを歪

めて行く。その姿は聖なる騎士とは程遠く、邪悪そのものな魔王じみた印象を強く感じさせるものだ。

「これが噂に名高い最大火力のユニーク武器、「神魔の大剣」か……反転まで見せてくれるなんて太っ腹だねぇ」

「姉さ……ゴホンゴホン、団長から貴女のことは聞いている。油断しているとロクな目に合わないし、すぐ逃げるので見つけ次第一撃で確殺しろ、と」

「私はゴキブリか何かか」

「「ぼっふぉあ！！」」

全くもってその通りな評価から本人から繰り出されたあんまりな例えに思わず噴き出す俺とオイカッツォ。

「ちょっと待ってて、先にこいつらぶち殺すから……よぉし最後のＰＫおねーさん頑張っちゃうぜぇ」

「誰だやつに武器を持たせたのは！」

「サイガー０だっけ？はやくその危険人物をボコって！」

「え、えぇと……」

どうにも俺達の芸風に慣れていない様子のサイガー０氏であったが、ペンシルゴンが剣を構えたことでサイガー０氏もまた戦闘体勢をとる。

「……『ハイエスト・ストレングス』『業魔の抱擁』『雷光閃華』【エンチャント：ヴァー・ミリオン】……『カタストロフィ』」

「うわぁ、なんだあれ……」

オイカッツォが絶句する気持ちもよく分かる。なんというか、悍ましいレベルで強化が施されて行くサイガー０氏の姿はもはやプレイヤーのそれではない。完全に悪魔とか魔王とかそういう類のモンスターだ。それはもう、強制レベル制限という縛りさえなければ墓守のウェザエモンと正面きって戦えるのでは？　とすら思えるほどに。

「ふぅー……確か起動呪文は『血を啜れ、肉を喰い千切れ、死を噛み締め命を吐き捨てよ。汝は殺戮者、屍の山で高らかに謳え』……だったかな？」

ペンシルゴンがそう唱えると、持っていた元オルスロットが所持していた剣が比喩ではなく脈打つ。何やら生物的な雑多に牙の生えた肉のようなものがペンシルゴンの右腕に食らいつき、刃をドス黒く染めてその形状を変形させて行く。

「うへぇ、悪趣味ぃ……」

そして出来上がったのはなんというか……釘バットを真っ平らにしたような、至る所から牙が飛び出した剣と呼ぶにはあまりに歪な何か。

「さぁ、いざ尋常に勝負といこっか」

「……いつでも、どうぞ」

「んじゃあ遠慮なく……「シリアルキラー」、【影絵の嘲笑】、【エンチャント：ヴォーパル】、「マサクル・バイト」！」

右腕と一体化した剣を構え、ペンシルゴンが飛び出す。蛇行に近い不規則な動きでサイガー０氏に近づいたペンシルゴンはサイガー０氏が剣を振り下ろしたタイミングで急制動、真後ろへと回り込んで剣を突き出す。

しかしその一撃はサイガー０氏の漆黒の鎧を覆う黒い靄のような何かに阻まれ、鎧そのものには届かない。サイガー０氏は振り返りながら剣を振り薙ぐ。ペンシルゴンは純白の大剣から逃げようとするが、黒い靄が剣に絡みついたことで一手出遅れる。

「くぁ……！」

「イグジスト・レクイエム」

手が剣と融合していたからこそ、靄に剣が掴まれた事で逃げ損ねたペンシルゴンの右腕が斬り飛ばされる。

強制的に剣を身体から分離させられたペンシルゴンは後ろへと飛び退くが、何かに押さえつけられたようにその動きからは精彩が欠けている。ペンシルゴンは右腕が飛んだ程度であそこまでパフォーマンスが落ちるようなメンタルはしていない。つまりはサイガー０氏が何かしらの干渉をしていると考えていいだろう。

「……これで、終わらせる」

「ははは、やっぱ私程度じゃレベル差を覆すのは難しいかぁ……とはいえ、この場所でへタれた真似はできないんだよねぇ！」

ペンシルゴンは一度だけ秘匿の花園に鎮座する、枯れ果て命を失った枯れ木に視線を向けたかと思うと、右腕も武器もない身一つでサイガー０氏へと突撃を敢行する。

「……だったら、とっておき。相反する摂理、反発する光と闇、拒絶を否定し、断たれし運命を縫い繋ぐ。我が身は光に染まり闇に浸る、混沌よ世界を喰らえ……【ケイオス・ヴォイド】」

一閃。サイガー０氏がやったことは左腕で殴りかかったペンシルゴンに対して、すれ違いながら剣を横薙ぎに振っただけ。だがただそれだけのことで、ペンシルゴンの上半身は綺麗さっぱり消失していた。そして上半身を失った下半身もまたすぐさまポリゴンとなって消滅した。

「…………」

「えー、ちょっとタンマ」

俺とオイカッツォはサイガー０氏から距離を離し、ヒソヒソ声で相談を開始する。

(え、どうすんのこれ。思った以上にえげつねぇ方法でペンシルゴンが消し飛んだんだけど！？)

(コミュ力お化けのペンシルゴンがいなくなったらアレとどうコミュニケーションとればいいのさ、サンラクのフレンドでしょ何とかしてよ！)

(俺の作戦を読んで待ち伏せした挙句に突如フレ申請送ってくる相手だぞ！？　俺の中ではまだ危険人物扱いですけど！！)

（ふぅー……よし分かった、先ずは俺がプロゲーマーとしてのコミュちからを見せてあげるよ）

（こみゅちから）

相談終了。いつの間にか白金の鎧に戻っていたサイガ－０氏に若干引きつった笑顔のオイカッツォが話しかける。

「あー、えー……と。ぺ、ペンシルゴンを一撃とは驚いたよ！　それがハイレベルプレイヤーの実力ってやつ？」

「…………その、ユニークスキルとか、多いので……全員がそうという、わけでは……ない」

「どんなスキルとか教えてもらったりとかは……」

「……それはちょっと」

「あー…………」

こちらへと戻ってくるオイカッツォは、無言で俺の肩を叩く。

「ごめん、俺のコミュちからはゴミだったらしい。何かコミュ力を鍛えられるゲームを教えて欲しい」

「ラブクロック」

「ピザ留学じゃねーか！」

不用意に甘い言葉を投げてフラグを立てると尋常じゃなく面倒だという事を教えてくれるゲームだよ。とはいえオイカッツォがプロゲーマーのくせに予想以上にコミュ障だったので仕方なく俺が出る。

「あー、なんだ、その……ペンシルゴンのワガママに付き合ってもらってありがとう。あいつも言ってたけどそこらに落ちてるアイテムは全部受け取ってください」

「…………………その」

「はい？」

「ヒトツ、オキキ、シタイコトガ」

「あっはい」

いきなりボイスに加工が入ったのかと思えるほど硬く平坦なロボットボイスに後ずさりそうになる足を叱咤しつつ、俺はサイガ－０氏の質問を聞く。

「……その、あの、ペンシルゴン…氏とは、どういった、ご関係で……？」

「ペンシルゴンと？　うーん……ゲーム友達？」

友達と呼ぶには少々裏切り内ゲバが多すぎる気がしなくなくなくもないが、まぁ結局のところ俺、オイカッツォ、ペンシルゴンの誰かがゲームやろうぜと言えば残り二人が乗る辺り、やはりゲーム友達と言っていいだろう。

「そ、そうですか……友達、トモダチ、フレンズ…………………」

俺の中で「サイガー０氏「バグったＮＰＣ」説」が現実味を帯びてきたのだが、流石にそんなことを聞くのは失礼というものだ。言葉を交わすだけでウェザエモン戦の如きプレッシャーを感じるので地面にぶちまけられた諸々の武器防具アイテムなどなどをサイガー０氏へと渡していく。

と、最後に元オルスロットの、そして先程までペンシルゴンが使っていた気色悪い剣を拾い上げたところで、サイガー０氏の身体が何やら白い光に包まれる。それはサイガー０氏がここへ転移してきた時の魔法陣の光に似たもので、足先から消えつつあることからどうやら帰還系のシステムが発動したらしい。正直助かった。

「あ………もう、時間……」

「え、あー、じゃあ改めまして、この度は助けてくれてありがとう。このお礼はいつか」

「そ、その、でしたら、機会があれば……その、是非いっし……」

パヒュンッ、とサイガー０氏の姿が消失する。渡しそびれた気色悪い剣を持ったまま俺はそれを見送ることに。

「……オイカッツォ、これいる？」

「なんか生臭そうだしいらない」

「とは言えここに捨てていくのもなぁ……しゃーない」

片手で扱うには少々重いし、なによりなんかヌメヌメして気持ち

悪いので正直インベントリに入れたくもないが所詮データと割り切って自身のインベントリへと突っ込む。

「じゃあ帰るか」

「そうだね、あー今日はぐっすり眠れそうだよ」

「ぐっすりというかぐったり昏睡の間違いじゃねえか？」

「違いないね」

とはいえ、俺は行くところがあるしサードレマで別れることになるかな。

ケジメとオーバーキル（後書き）

ケイオス・ヴォイド
発動者よりもレベルが低い対象を問答無用で即死させる。即死効果ではなくダメージ判定時に「その時点の体力と同等のダメージを与える」というもの
発動者とレベルが同等、及び発動者よりもレベルが高い相手に対しても幸運判定を強制し、失敗した場合「汚染」状態となる。高位の浄化魔法を用いない場合、一分以内に即死する。
当たり前といえば当たり前だがボスクラスのモンスターや浄化に特化した職業のプレイヤーであればそう大した脅威ではない、効果が効果なので修得条件は「ＰＫを行っていない者」、かつ「ＰＫをした時点で自滅する」という制限付き
アクシデントでＰＫしてしまった場合（フレンドリーファイア）でも容赦なく自滅させるので実は結構デリケート

主人公にいいところを見せようと奮起したらドン引きされたでござるの巻

エピローグ　それぞれの今と次

「ん、くぁぁ……はー疲れた、一週間後までには調子を取り戻さないとなぁ」

サンラク……陽務　楽郎が自室に設けたゲーム設備よりも、価格も規模も上位互換な部屋で、オイカッツォ……魚臣　慧は身体を起こす。伊達や酔狂でプロゲーマーをやっているわけではない、日本のみならずアメリカやヨーロッパにも名を知られたプレイヤーたる慧ともなれば、ゲームの為だけにマンションを一室借りる程度造作もない事だ。

「しっかし、本当良くできたゲームだよシャングリラ・フロンティア……ほんの暇つぶしのつもりだったんだけどなぁ」

理路整然と並べられたゲームソフト棚。一週間後に大会を控える身としては今回のようなエナジードリンクも用いた強行軍はあまりやるべき事ではないが、友人二人の不敵な笑顔に自分も乗せられてしまったのは事実だ。慧はスポーツドリンクを一息に呷りつつ、携帯端末を操作しながらバスルームへと向かう。

「対戦相手は「アイヴィ・エクスプレス」……あいつらメタるの下手くそだからまぁ何とかなるか。となると……ん？」

携帯端末に表示された朗報と悲報、それを見た慧は眉を顰めて思案する。思い浮かべるのは先程まで共に激闘をくぐり抜けた二人の人物。

「いやでもそれは流石に……いやしかしアイツにぶつけるならあの二人は割とアリでは……ま、なるようになるか」

携帯端末を放り投げ、慧はバスルームへと入る。スリープモードに入る直前、携帯端末には「GGC」の文字が表示されていた……

「大躍進、大躍進だよ私……！」

ヘッドギアを外し、家政婦が置いたのだろうペットボトル入りの緑茶（市販品ではなく作ったものをペットボトルに移した自家製）で乾いた喉を潤し、斎賀　玲は小さくガッツポーズを取る。

すれ違う事幾たび。あくまでも彼のプレイするゲームに慣れる前段階として始めたシャングリラ・フロンティアであったが、今では手段が目的になってしまった事に何も感じないわけではなかった。だがそれが功を奏し、かつてないほどに彼とコミュニケーションを取ることが出来ている。半ば強引にとはいえプレイヤーの先輩として自分のクランに玲を入れた姉の百(もも)には感謝の言葉しかない。

「こ、このまま仲良くなってゆくゆくは……」

ゆくゆくは現実でも交友を。
普通にリアルで話しかければ良いではないか、と言われるかもしれないがそれが単純なようで非常に困難であることを玲は知っている。それに玲が機嫌の良い理由はもう一つあった。

（最初あの女の人を見た時はとても驚きましたが……ゲーム友達、そうゲーム友達ですから……）

アーサー・ペンシルゴン。同性だからこそわかる彼女の自然な身のこなしと、姉の態度からほぼ確実に「天音　永遠」本人であろうプレイヤーが彼と親しいと知った時は、今にも崩落しそうな吊り橋を渡っている最中に上から炎を纏った肥満体の巨人が降ってきたかのような絶望感を感じたものだが、フレンドならセーフ、セーフである。

現状で玲が目指しているポジションの数手先を進まれているような気もするが、その点からは目をそらす。

「がんばれ私……いや本当に！」

斎賀（サイガ－0）玲、自身が彼……陽務楽郎（サンラク）から「ＰＫとはいえプレイヤーを容赦なく消し飛ばす危険人物（やべーやつ）」扱いされていることを知らないのは、幸か不幸か。

サードレマでオイカッツォと別れ、ペンシルゴンからかっぱらった最後の転移魔法入りスクロールでラビッツへと転移する。

「さて…………何してんのエムル」

「ふひゃあ！！　サ、サンラクサン！？」

なぜかベッドの上で枕に頭を突っ込んでいたエムルに話しかける。俺の声に跳ね起きたエムルは俺の姿に目を見開く。あ、そういえば頭装備を変えてなかったな、鳥面どこだ……あったあった。

「ほうら鳥の人サンラクさんがリスポーンせずに戻ってきたぞー」

「ふぇ…………ふびぇぇぇぇぇぇええええ！！」

「おぐふぅ！」

兎の……それもヴォーパルバニーの跳躍力で腹に飛び込んできたエムルに倒れそうになる身体をなんとか踏ん張って耐える。

「じゅごいでずばぁぁぁ！　じんばいじでだでずわっ！　ザンラグ

ザン、ウェザエモンを倒じだでずわぁぁぁ！？」

「なんて？」

「おどーぢゃにづだえできばずわぁぁぁぁ！！」

行っちゃった。どうでもいいことだが「でずわー……でずわー……でずわー……」と若干汚い山びこが響いているのにデジャヴを感じて少しだけクスッときた。

そして数分後、俺は頭でえぐえぐ泣いているのか笑っているのか分からないエムルを乗せてヴァッシュの前にいた。

「うぇぐっ、えぐっ、ぢぃーん！」

「待てお前何で鼻かんだ！？」

ハンカチだよな？　ハンカチだと言ってくれ、ハンカチだといいなぁ。

「おう……いいかい？」

「あ、うっす」

「そんじゃあ聞かせてぇもらおうかい……あの「死に損ない」はどうだったぁ？」

「強かった、少なくとも……えーと、そうルーザーズ何とかとは比べ物にならないくらいには」

　バグ抜きなら今までプレイしてきた全てのゲームの中でもトップクラスの強さだったと断言できる。バグ有りだと断風以上の理不尽攻撃とかがデフォルトになるので強敵ランキングは複雑になる。

「はっはっは、だろうなぁ……あいつぁ、満足して逝けたかい」

「天晴と、褒めてもらいやした」

「そうかぁ……そうかぁ……」

　深く、深く頷いたヴァッシュは瞑目すると、ポツリと呟く。

「育み、拓く……そろそろかもなぁ」

「そろそろ？」

「今ぁまだ俺等ぁの話だぁ。そうさぁな……おめぇさん、世界の真実を知りてぇかい？」

「……そりゃあ願っても無いことで」

　致命兎叙事詩……誰よりも早く、俺はこの世界の先へと足を踏み入れるのだった………！

「そのためにゃあちぃとばかし必要なもんがあるんだけぇどな」

「ウィッス」

足を踏み入れる前にお使いクエストかぁ。

随分と身軽になったものだ、と苦笑しながらも駆け足でファステイアからサードレマ、そして千紫万紅の樹海窟を訪れたペンシルゴンは迷いない手つきでサンラク、オイカッツォ以外の全てのフレンド関係を破棄する。

「さぁこれで真っさらなプレイヤーペンシルゴンとして再出発かぁ」

もはやその場所にロケーション以上の価値はない。だがそれは第三者の価値観であって、ペンシルゴンにとっては依然として大切な場所である。光を失い崩れた苔の先、暗いトンネルを抜ければそこ

は彼岸花の花畑。ペンシルゴンは彼岸花の絨毯の先、枯れた桜の木の根元へと辿り着く。

「文字通りの素寒貧だからね、ここに来るまでに適当にゴブリンやらでお金稼ぎして買ったけど……今度来る時にはもう少しマシなものを用意するよ。ＮＰＣの花屋とか初めて利用したよ、あはは……」

枯れて生命を感じさせない、しかしそれでも崩れ落ちてはいないその枯れ木の、いつも彼女がスポーンしていた場所にペンシルゴンは白い花で作られた花束を置く。

「見たことない花だからどんな花か聞いたらさ、笑っちゃうよね……セツナトワって言うんだってさ」

自然発生したそれは五分で満開となり、五分で枯れ落ちる地味に入手が困難なレアアイテムではある。しかし一度アイテムとして採取すればその花は破壊しない限りは枯れる事がない。刹那を生き、永遠に残る……故にセツナトワと名付けられた虚構（ゲーム）の花は、ペンシルゴンをして実は運営が個人情報を覗き見た上で全部裏で手を引いているのでは、と疑ってしまうほどには「出来た」展開であった。

「貴女は自分の事を写本、って言ったけど。私にとってはそれが原典で、それが本物だったんだよ」

例えそれがたかがゲームの一キャラクターであっても、ペンシルゴンの言葉に喜怒哀楽を示し、応えてくれた彼女はされどゲームのキャラクターである。

「セッちゃん、私もう少しこの世界（ゲーム）を楽しんでみるよ……セッちゃんに出された「宿題」もある事だしね」

――――もしも貴方達が自身のルーツを、世界の真実を知りたいと願うのなら「バハムート」を探しなさい。

「上等だよ、バハムートだろうがなんだろうが骨の髄まで白日に晒してあげるよ」

決意新たに、天音永遠(アーサー・ペンシルゴン)は本気でゲームへとのめり込む。

墓守のウェザエモン。誓いで己を縛り、永劫を墓守として過ごした男が眠った。恋人の不器用を知るが故に、世界に刻まれる程の願いを抱いた女性の残滓が役割を終えた。

世界は次のステージへと進み、開拓者達は新たな未知に心躍らせる。新天地は開かれ、「大航海」が始まる。

シャングリラ・フロンティアはさらなるヒートアップを迎えるのだった……

エピローグ　それぞれの今と次（後書き）

これにてプロローグから墓守編まで一旦終了でございます。
一週間ほどお休みさせていただきますが、ちょいちょいキャラ紹介や度々感想欄で尋ねられる「墓守のウェザエモンの適性攻略ってなんなの？」「天晴のダサい攻略方法ってなんなの？」について書いていきたいと思います。

墓守のウェザエモンの適性攻略人数は「６～７人」です。
大前提として全員が３～４個の蘇生アイテムを所有しているものとします。
メンバーの内訳としては
「ウェザエモン担当……可能であれば回避スキルも習得した壁タンク、回避系スキル魔法を多く持つ職業」
「騏驎担当……騏驎に乗って振り落とされないだけのプレイヤースキルを持つ者、もしくは職業ライダー」
「サポート担当……バッファー、蘇生魔法を使用できる職業」

墓守のウェザエモン攻略
戦闘フィールド「反転の花園」に入った時点で全てのプレイヤーはレベルが５０まで強制ダウンする。ステータスも「レベル５０時点で割り振ったステータス」以降のポイントが一時的に消失するため、ステータス制限のある装備を装備しているプレイヤーは注意すること。
墓守のウェザエモンは戦闘開始と同時に「断風」を放ってくるが、対象はウェザエモンに一番近いプレイヤーかつ首を確定で狙うため、予備動作から身をかがめることで初段の回避は可能。

・断風（たちかぜ）
神速の抜刀居合。予備動作が比較的大きいため、抜刀の瞬間ではなく「居合の姿勢を完了した瞬間」を目安に回避行動を行うこと。もっとも簡単な対処方法は居合切りの射程範囲から離脱すること。

・雷鐘(らいしょう)
刀を上に掲げ、雷を瞬間的かつ大量に発生させる。ヘイトが分散しているほど雷の数が増えて広範囲に被害が拡大するため、ウェザエモンへは少人数で対処するのが望ましい。全力で走り抜ければ雷に被弾することはないため、回避自体はたやすいがスタミナを消費しすぎた場合その次の行動に捕まる可能性があるため注意。

・入道雲(にゅうどうぐも)
刀を持っていない腕で雲の巨腕を作り出し、なぎ払う技。この技はウェザエモンの背後と腕よりも上が明確に安全地帯となっており、予備動作も大きいため解ってさえいれば対処は容易。しかし後述の騏驎をひき離す距離が足りなかったりした場合は騏驎担当やサポート担当に被弾し戦線崩壊の原因になりかねない。

・大時化(おおしけ)
基本的には何らかの理由で刀を失っている場合に使用する掴み攻撃。重量が重ければ重いほど叩きつけのダメージが増加するため、特に壁タンクのような重装甲は注意すべき技ではあるがまっすぐ手を伸ばしてくるだけなのでよく注意すれば回避スキル無しでも避けることはそう難しいことではない。パリィスキルも使用できるため、避けることが難しい壁タンクはその場で手を弾くのも一手、ただし次の攻撃に注意すること。

・火砕龍(かさいりゅう)
ウェザエモンのヘイトが3人以上に向けられている場合のみ使用する技。刀を地面に突き立て、ウェザエモンがヘイトを向ける対象からランダムに一人選択し、その対象の地面から火柱を発生させる。回避自体はそう難しいものではないが、後述する灰吹雪とワンセットの技であるため、最悪味方もろとも全滅しかねない危険性に注意

しなければならない。

・灰吹雪（はいふぶき）
火砕龍とワンセットで使用される技。上空で黒煙に変換された火砕龍が火柱の発生地点を中心に半径5メートルを包囲して包囲網を急速に狭めてしまう。完全に包囲される前に抜け出さなければほぼ死は確定したものと覚悟したほうがいい。何気に「窒息死」であるため斬り殺されるよりも精神的なダメージが大きい。

・天鬼夜咆（てんきよほう）
第三形態に入る際に使用する広範囲への衝撃波。後述の第三形態はウェザエモンにアンデッド属性が付与されるため、高位の浄化アイテムや浄化魔法で阻止が可能。装甲貫通効果があるため、食らえばほぼ即死ダメージは覚悟するべきである。

・晴天大征（せいてんたいせい）
第三形態から通常十分経過で発動するいわゆる発狂モード。三十秒間前述の行動をほぼ連続して放ってくる。ただし技の選択はランダムであるため、断風が連続などした場合は予備動作が行動間に挟まるため、完全に隙がないわけではない。「三十秒経過時点で刀を持っている場合」後述の天晴が使用される。

・天晴（てんせい）
即死効果、装甲貫通、装備破壊、魔法貫通、スキル貫通、回避不可とあらゆる効果がてんこ盛りの大上段からの斬りおろし。直撃すればまず命はないが、諸々の効果が付与されるのは太刀の「刃部分のみ」であるため、要するに斬られさえしなければただの高ＳＴＲから繰り出される斬りおろし攻撃と何ら変わりない。
回避行動に反応して金縛りさせてくるため、この技を受けるプレイ

ヤーとして避けタンクは好ましくない。
パリィであれば相応の威力、ＳＴＲが必要であるものの弾くことが可能。難易度は高いが高火力の攻撃を一点集中させることで弾くという方法もある。ただし刃に当てた時点で全て無効化＆破壊されるため狙うならば刃ではなく刀の横面。
後述の方法でウェザエモンのヘイトをパリィスキルを持つプレイヤーが全て請け負って天晴を受ける、と言う方法が安全。ただし「すでに天晴を発動した時点ではヘイトを変えても天晴のターゲットは変わらない」という点には注意。
もっとも簡単な対処法として「刀を破壊する」というものがある。ウェザエモンは刀を破壊された場合、晴天大征においても入道雲と大時化しか使用しなくなる上に天晴を使わずに戦闘が終了するため、攻略難易度は大幅に下がる。ただしこの手段を用いた場合は獲得できる報酬と称号が変化するため注意。

墓守のウェザエモン特殊行動
墓守のウェザエモンはストーリー的な特性上セツナの墓を守ることを最優先としている。もし墓に近く、あまつさえ破壊しようとする者がいれば何よりも最優先でそのプレイヤーを狙う。
第一、第二形態ではウェザエモンはスーパーアーマーとダメージ軽減が付与されており、おおよそあらゆる攻撃は無効化される。当然でバフなどの魔法も弾いてしまう。
第三形態になるとウェザエモンの装甲が破損し、攻撃が通るようになる。この時点でウェザエモンにはアンデッド属性が付与され、アンデッドに対して有効なアイテムや魔法が弱点になる。ただし相当

高位のものでなければ無視して攻撃を仕掛けてくる。
第三形態になった時点でウェザエモンは一秒ごとに体力を消耗する自壊状態となっており、何もせずに放置した場合はおおよそ十分で体力が「０」になる。ただし体力が０になっても倒れることはなく、「晴天大征を発動してプレイヤーが全員生存している（天晴を放ち終えた時点で全員が生存している、天晴で死亡したプレイヤーを蘇生した場合は最初からやり直し）」という条件を達成することで戦闘が終了する。

戦術機馬「騏驎」
墓守のウェザエモンが第二形態（戦闘開始から十分経過）になった時点で亜空間格納施設から召喚する馬型のゴーレム。放置した場合は搭載されたミサイルやレーザーを乱射しながらフィールドを爆走する上に、第二形態時に一定時間放置し続けるとウェザエモンとの合体を行うため、必ず対処要員を用意すること。
弱点として「プレイヤーが背中に乗っている場合は振り落とすモーションしかしない」ため、第三形態までロデオをするのが封殺の手段として最適解。第三形態に入った時点で同様にダメージが通るようになるが、ウェザエモンと比較してもＶＩＴが飛び抜けているため、力ずくでの攻略は実質不可能。

馬形態
基本的にミサイルとレーザーを撒き散らしてのフィールドを駆け回る行動がほとんど。背中にプレイヤーが乗っている場合のみ振り落

とすモーションを取る。

人馬形態

第二形態中に騏驎とウェザエモンが合流した場合、騏驎の頭部が変形しケンタウロスのような姿へ合体する。

こうなるとミサイルとレーザーを撒き散らしながら雷の雨と降らせ、雲の巨腕を振り回しなおかつフィールド中を走り回るという実質手をつけられない状態になってしまう。当然スーパーアーマーダメージ軽減があるため、ダメージを与えることもほぼ不可能。

甲冑形態

第三形態中に騏驎が変形する形態。頭部の無い巨人のような姿で、ミサイル、レーザーの他に四肢を使った物理的な攻撃、さらに切り札として腹部に大口径レーザーキャノンを内蔵している。体力が四割を切る、腹部装甲を破壊された時点で発狂モードに突入し、ヘイトに関係なく攻撃を撒き散らす。

当然即死級ダメージを叩き出す腹部レーザーキャノンであるが同時に弱点でもあり、砲口の奥に弱点のエネルギーコアが存在する。

ちなみにウェザエモンが晴天大征発動前に騏驎とウェザエモンが合流した場合、ウェザエモンが甲冑形態の騏驎と合体し巨人スケールで晴天大征を発動するという地獄めいた行動を展開する。

墓守のウェザエモンの効率重視の攻略方法

ウェザエモンの太刀を握る手を集中攻撃して太刀から手を離させて太刀を強奪します。

ウェザエモン、場合により騏驎も含めて壁役たちがヘイトを集めて引き付けている間に尋常ではなく耐久度の高い太刀をどうにかして破壊します。

後衛職がせっせと太刀を殴っている間は前衛は援護を受けるのが困難になるため、自爆特攻に近い突撃で時間を稼ぐことになります。
実質ゾンビアタック。
太刀を失ったウェザエモンは行動が大幅に制限されるため攻略難易度がグッと下がります。ただしこの方法でクリアした場合はセツナからの好感度が割とシャレにならない数値で下がる上に報酬が「格納鍵インベントリア」のみになります（真理の書「墓守編」は除くものとする）

墓守のウェザエモンのストーリー的設定
厳密には第一、第二形態は「ウェザエモン」というキャラクターが動かしているものではなく、ウェザエモンが纏っているパワードスーツが「意志」を持って動かしている。ウェザエモンの意志が染み付いた鎧版の「遠き日のセツナ」のようなものです。
第三形態時点で初めてウェザエモンというキャラクターの意識が復活する、それにより属性が機械から死に損ない、すなわち科学由来のアンデッドへと移行した状態になります。ちなみに鎧の中身ですがハイテクノロジーなあれこれで肉体を「固定」しているためミイラが鎧を動かしているわけではなく、若々しいままの男性の肉体が入っています。第一、第二形態の時点では意識ごと「固定」されていたわけですね。

第三形態に突入した時点でウェザエモン本人の意識が目覚め、「固定」が解けたためにウェザエモンの肉体は急速に老化、崩壊……すなわち自壊しています。それでも天晴を攻略されるまで動き続けるのはひとえに自壊すらねじ伏せるウェザエモンの執念です。

はるかな太古、神代と呼ばれる時代に些細なすれ違いとウェザエモンのほんの気の迷いから口にした小さな嘘が原因でセツナが死んでしまい、それによってウェザエモンは永い時を墓守として生きることを決意します。

セツナ自身もウェザエモンの人となりを理解していたために「こいつは誰かが止めないと死んでも墓守を止めない、願わくば誰か彼を止めてくれる人を」と死の間際に願ったため、結果として「遠き日のセツナ」が誕生しました。

枯れた桜の木はウェザエモンがセツナの墓と一緒に植えたもので、セツナが最も好きだった花です。ウェザエモンと同じく「固定」が施されていましたが、ウェザエモン本人とは違い「固定」が不完全だったため、枯れ始めてしまいます。それを防ぐため、ウェザエモンはセツナが遺した論文を基にあれやこれやして月からの魔力を利用して空間を時間ごと「反転」させることで墓（土に還ったセツナ）とまだ致命的なレベルで枯れていない桜の木ごと空間の裏側へ移転します。

この「反転」は例えるなら「版画」です。腐り始めた版の木板が表の空間で、それを用いて作られた版画が裏の空間。裏の空間は反転した時点で時間が停止しており、残された表の空間に存在するセツナの墓標は風化の果てに消滅し、「固定」が不完全だった木は原型こそ残しますが完全に枯れてしまいます。

とはいえ桜の根元にセツナが埋められていたこと、かつて墓標があったそこは確かに「セツナの居場所」として認識されるために「遠き日のセツナ」は表空間の桜の木からスポーンすることになりまし

た。

余談ですが、「固定」と同時に様々な半永久的延命処置が施されていた桜の木が枯れたことで行き場を失ったそれらの処置が広範囲の植物を活性化させ、本来はほのかな光を放つ程度の苔が陽光に匹敵する光量を得たり、ただの大規模な洞窟だった場所に樹海規模の植物が生い茂り、大量の花が地面を埋め尽くすほどに増殖する原因となりました。

要するに間接的にですが千紫万紅の樹海窟というエリアそのものがウェザエモンによって作られたわけです。

「そもそも意識ごとフリーズするような処置してまで墓守する必要はあるのか」とか「あくまでも裏空間の墓はコピーされたもので実際のセツナの墓消滅してますやん」という点ですが、それだけウェザエモンという人物が頭の固い人物であった上に永い年月の経過で上手く頭が回っていなかったということです。

ちなみにですが、生身のウェザエモンであっても天晴をはじめとした殆どの技は使えます。レベル換算すれば余裕で９９は超えているくらい強いです。鬼に金棒ならぬ剣豪にパワードスーツです。

幕間　世界の真理書「墓守編」（後書き）

設定厨に設定を語らせてはいけないということを再確認したウェザエモン設定もろもろでした。

実際にゲームの攻略Ｗｉｋｉを充実させる感じで書いています。

キャラ紹介

名前：陽務（ひづとめ）　楽郎（らくろう）
ＰＮ：サンラク
年齢：１７
性別：男
特技：ミュートで音ゲーをフルコンボする
好きなもの：ゲーム、刺身
嫌いなもの：ラグ、偏る乱数
好きなゲームカテゴリ：ほぼ全般（クソゲーであればなおよし、体を動かす系が特に好き）
嫌いなゲームカテゴリ：ノベルゲー（クソゲーの場合ひたすら地獄の時間が続くため、周回要素とか真顔案件）
　ゲームスタイル：悪食。気分と状況でどんなタイプでもそれなりにこなすことができる。強いて言うのならば超反応と経験則で回避攻撃を行う回避型アタッカー。即興作戦構築や突破口の模索、状況に応じた作戦変更などのアドリブも得意としており、戦闘が長引くほど戦略面ではサンラクが有利になる。
ただしクソゲーではトライ＆エラーが当たり前であったために諦めが良すぎるという欠点が存在する。
　詳細：クソゲーに魅入られ青春を悪魔（クソゲー）に売り渡さんとしようとしていたところを神ゲーに救いの手を差し伸べられた本作の主人公。反応速度が人並みはずれており、数々のクソゲーで培った理不尽耐性とプレイヤースキルを合わせることで驚異的なパフォーマンスを実現している。テンションとパフォーマンスが直結しているタイプであり、逆境であるほど燃える。それ以外にも数々のクソゲーを罵倒と挫折を絡めながらも制覇してきたためか、ストレス耐性が高く

大抵のことには寛容。でも乱数の偏りは許さない。
基本的にプレイヤーキラーなどの嫌われがちなプレイには肯定的、うんうんそれもまたゲーム活動(ゲーカツ)だね。だが殺す、それも踏まえてのゲーム活動。

名前：斎賀(さいが)　玲(れい)
PN：サイガー0
年齢：17
性別：女
特技：一撃でスイカを割る
好きなもの：陽務　楽郎
嫌いなもの：馴れ馴れしい人
好きなゲームカテゴリ：特になし
嫌いなゲームカテゴリ：エロゲー（見ると赤面する）
ゲームスタイル：数多のユニークで完全武装しているのもあるが、それらを十全かつ模範的に使いこなす優等生タイプ。やるべき場面でやるべきことをやる。元々稽古の一環として剣道や護身術を身に付けているため、それを生かしたプレイスタイルで同レベルプレイヤーの中でも頭ひとつ抜きん出た実力者。
ただし超速攻撃を見てから回避したり、馬に自分を縛りつけたり、ただ一度のチャンスのために組織を使いつぶしたりするメンツは苦手な部類。
　詳細：文武両道、人づきあいもよく旧家の生まれであり礼儀作法も正しい完璧超人、天に二物も三物も与えられたが、代償として恋愛力を没収された。とはいえ二人の姉も恋愛下手なのでもはや遺伝の模様。
毎日楽しそうな楽郎を見ているうちに惹かれるようになり、楽郎とお近づきになりたいと同じゲームを購入したものの、覚悟なきものを絶望に叩き落すクソゲーの連続に挫折。見かねた岩巻によってシ

ヤングリラ・フロンティアを勧められる。
最初は「ゲーム内で絡まれるのが嫌だから」という理由でゴツい男キャラにしたものの、姉の百（もも）にシャンフロをプレイしていることがバレ、流されていくうちにいつのまにかシャンフロ最強クラスのプレイヤーになっていた。

名前：魚臣（うおみ）　慧（けい）
PN：モドルカッツォ、カッツォタタキ、オイカッツォ
年齢：１９
性別：男
特技：徹夜
好きなもの：ゲーム、勝利
嫌いなもの：敗北
好きなゲームカテゴリ：格ゲー
嫌いなゲームカテゴリ：ロボゲー（自分の操作がロボという間を挟むのに慣れない）
　ゲームスタイル：徹底的な理詰め。情報を集め、対策を立て、対処を考案し、実際に戦って細かい部分を詰めていく。相手次第で攻撃特化やカウンター特化など自在にスタイルを分ける。ただ弱点、というよりも天敵が存在しており、戦っている最中に即興でアドリブを入れてくる相手にめっぽう弱い。サンラクを相手にそういった相手への対策はしているものの、やはり敗北の可能性はぬぐえないでいる。
　詳細：ゲームが好きなのではなくゲームで勝つことが好き、楽しければなおよし。ゲーマーたち羨望の職業たるプロゲーマー。マルチプロゲーミングチーム「電脳大隊（サイバー・バタリオン）」の格闘ゲーム部門、通称「爆薬分隊（ニトロ・スクワッド）」に所属する不動のエース、「Ｋｅｉ」の名前は海外のゲーマーにも通用するほど。

元々クソゲーとは縁のない人物のはずだったのだが、動画サイトに投稿された「便秘」の動画を目撃して興味を持ったものの、ベルセルク・オンライン・パッションの「ダウンロード版」を購入したのが運の尽き。サンラクにナメプされ五敗、慣れてきたところを五敗、本気を出されて五敗の合計十五連敗を喫したことで完全にクソゲーの沼に足を引きずりこまれてしまった。ちなみに本業そっちのけで「便秘」の研究を敢行し、お礼参りとしてサンラクに二十連勝した。
ちなみにプライベートな場では「俺」だが公の場では「僕」口調。
中性的な顔と声も相まって色々な（意味深）層に人気が有る。

名前：天音（あまね）　永遠（とわ）
PN：鉛筆戦士、アーサー・ペンシルゴン
年齢：24
性別：女
特技：不意打ちで撮影されてもポーズを決められる
好きなもの：花火、スリル
嫌いなもの：倦怠、なめくじ
好きなゲームカテゴリ：戦略ゲー
嫌いなゲームカテゴリ：レール式ゲー（戦略交渉のへったくれもないため）
ゲームスタイル：花火職人タイプ。ただ一瞬の大爆発のためにコツコツと下地を作っていく。重要なのは「最終的なスリルのため」であって前段階の準備自体は好きではなく嫌いな方。プレイヤーのみならずNPCとの交渉力も飛び抜けており、敵対関係のはずなのに最終的にペンシルゴンに有利となる行動を取っていた、なんてことも。
臨機応変に作戦を変更して自身が構築した状況を成立させることを得意としており、即興アドリブの能力も高いが最終目標という前提

の上での作戦修正のため、根本となる前提を崩されてしまうと中の上程度のプレイヤーとなってしまう。

詳細：今をときめくティーンの少女たちの憧れの星、花型モデル。その実態は人が派手に爆散する光景に「たまや～」と言えるタイプの畜生。根っからの刹那主義であり、平穏よりもスリリングを、安定よりも享楽を。現実でそれをやればたちまち生活に困ってしまう、それ故にゲームの世界へとスリルと求めてやってきた。

最終的な大爆発のためにコツコツと整地するタイプであり、その集大成が「ユナイト・ラウンズ【鉛筆王朝】事件」であると言える。

刹那主義をこじらせているので自爆装置とか大好き。当然王城には大量の爆薬を仕込んだ、部下となったプレイヤー達は何も知らされていなかったので城と一緒に吹っ飛んだ。

リアルの顔をそのまんま使っているが、フルダイブゲームのキャラメイクで有名人を模すことはそれなりにあり得ることなので身バレしたことはない。今のところは。

最近の悩みは周囲にフルダイブゲームをしていることがバレ、「どんなゲームをプレイしているんですか？」と聞かれること。まさか自分に憧れるファンに「いやぁ今日は弟がリーダーしてたクランを別のプレイヤーに売り渡して壊滅させちゃった」とは言えない。

姉より優れた弟はいないない主義者。

キャラ紹介（後書き）

とりあえず主要な人間メンバーのプロフィールをば

キャラ紹介その2

名前：天音(あまね)　久遠(くおん)
PN：オルスロット
年齢：15
性別：男
特技：粋がること
好きなもの：自分が無双すること
嫌いなもの：自分が無双できないこと、姉目当てで自分に近づいてくる女子
好きなゲームカテゴリ：アクションゲーム
嫌いなゲームカテゴリ：FPS
ゲームスタイル：俺TUEEE。レベルを上げてスペック差で圧し潰す、ある意味ではゲームにおいて真っ当に正しいプレイスタイル。
決してゲームが下手くそというわけではないのだが、複数回死ぬことを前提としたゲームが非常に苦手。さらに言えば脇役に徹することも好きではないため、FPSなどでは先陣を切って突撃するタイプ。砂に狙撃されて味方から罵倒されるまでがワンセット。ガチホコの爆発に巻き込まれて死ぬタイプ。
詳細：天音　永遠の弟。姉が有名人のため、自分と比較されるよくあるコンプレックスもあるが、それ以上に姉が畜生なので羨ましいようなああはなるまいと肝に銘じるような複雑な心境。
本質的にオンラインゲームに向いておらず、様々なオンラインゲームを軽くやっては俺TUEEEができないのでやめる、を繰り返していた。FPSではトラウマレベルで罵られたので二度とやりたくないと唾を吐き捨てるレベルで嫌っている、そら一人で0キル20デスもしてたら罵倒されますわ。

見かねた永遠が元々は同じクランに入る気もなかったが、シャングリラ・フロンティアをロクに楽しめずに弟が引退してしまうのも見ていて忍びないと協力した結果、「阿修羅会」が誕生した。
最初は程よく勝った負けたを繰り返していたが、プレイヤーキルを繰り返し続けることでユニークウェポン「殺戮者の魔剣（スローター・ブリンガー）」を取得したことで、色々と拗らせてしまった。
自分以外のメンバーが「ＰＫの過程」を楽しんでいることに気づかず、「ＰＫの結果」を守るように立ち回った結果、阿修羅会に所属していた歴戦のＰＫ達は脱退し、質の低い地雷プレイヤーの巣窟となってしまった。

名前：？？？？？
ＰＮ：Ａｎｉｍａｌｉａ
年齢：？？
性別：女
特技：雑種の犬の両親がなんの犬種か当てる
好きなもの：動物、アニマル
嫌いなもの：自分の身体
好きなゲームカテゴリ：ファンタジー、動物と触れ合える系のゲーム
嫌いなゲームカテゴリ：鉄臭いゲーム、動物が登場しないゲーム
ゲームスタイル：倒すのではなく無力化することに特化している。デバフや行動に制限を課す呪術を大量に習得しており、戦闘力自体は低いがことモンスターの無力化に関してはＡｎｉｍａｌｉａ一人で黒狼の一軍を越える技量を持っている。
詳細：モンスター撮影クラン「ＳＦ・Ｚｏｏ」クランリーダー通称「園長」の女性プレイヤー。動物が関わるとちょっと引くレベルで興奮する。実はリアルではおしとやかな女性なのだが、生まれつ

き重度の動物アレルギーを患っており、数分間犬と戯れただけでもひどい喘息を起こしてしまう。そのため動物と触れ合ってもアレルギーが起きないゲームの世界へとやってきた。
最近では新職業「ライダー」に無限の可能性を感じてそちらに注力しているが、かつて永住を決意するも不可能と知りガチ泣きしながら去った天国(ラビッツ)にもう一度行くためならばサンラクに土下座までならする覚悟を決めている。

名前：岩巻(いわまき)　真奈(まな)
PN：？？？？
年齢：26
性別：女
特技：攻略サイトを充実させる
好きなもの：物語の恋
嫌いなもの：現実の恋
好きなゲームカテゴリ：乙女ゲー
嫌いなゲームカテゴリ：ホラーゲー（吊り橋効果の恋が好きじゃない）
　ゲームスタイル：重箱の隅から隅まで完全に攻略しきるやり込み型。トロコンは当たり前、隠しCGから隠しルートまで完全制覇するまでやりこみにやりこむ。
　詳細：GAME－SHOP　ロックロールを営む女性。重度の乙女ゲースキーであり、一定の時期になると臨時休業する。実は既婚者、夫は登場するかもしないかも？
「ハッピーエンドは確定している」ゲームは安心して恋愛できるという理由で乙女ゲームを好んでおり、現実での色恋沙汰を嫌っている。具体的に言うと夫とゴールインするまでに色々あった模様、だが脳の使用可能領域をクソゲーにほぼ使い切っているアホと、そい

つと仲良くなるべく一途に頑張る恋愛クソザコ少女のことは応援している。

名前：？？？
ＰＮ：ドラゴンフライ
年齢：？？
性別：女
特技：諦めないこと
好きなもの：ゲームをクリアする瞬間
嫌いなもの：諦めること
好きなゲームカテゴリ：全般
嫌いなゲームカテゴリ：パズルゲー
ゲームスタイル：トライ＆エラーを繰り返して最適解へと到達する根っからのＲＴＡ型。とりあえず突撃、とりあえず実験、失敗してから正解を考える。スタイルに対して直感型なので微妙にかみ合っていない。
詳細：過疎ゲーに舞い降りた貴重な新規プレイヤーにして、サンラクがウェザエモン対策で便秘を訪れた際にガチムチマッチョのヒゲオヤジアバターで対戦者を探していたプレイヤー。全身から漂う後輩感は他プレイヤーから「ほっとけない」という気持ちを抱かせる。ただしキャラメイクセンスが独特なので後輩オーラを発する女性声のむさいオッサンという矛盾の塊のような存在。

名前：？？？（阿修羅会ランキング旧三位だった人）
ＰＮ：？？？
年齢：？？
性別：男

特技：？？？
好きなもの：おっさん
嫌いなもの：幼女
好きなゲームカテゴリ：可愛い女の子が出るゲーム
嫌いなゲームカテゴリ：おっさんとやたらフラグが立つゲーム
ゲームスタイル：対人特化。ほぼＴＡＳに等しい賞金狩人相手に回避と装備整理を両立しながら立ち回るだけのプレイヤースキルを持っている。恐らく一対一で限定すればサンラク・オイカッツォ・サイガ－０とも渡り合えるだけの実力がある。
詳細：賞金狩人「ティーアス」ちゃんにビキニアーマーを着せる、ただそれだけのためにそれまでの全てを投げ打ったシャングリラ・フロンティアの歴史に刻まれた勇者(ブレイバー)。現在は「聖女ちゃん親衛隊」と双璧をなす変態集団「ティーアスちゃんを着せ替え隊」のリーダーを務めている。毎日街中で仲間を介錯したりされたりしながらティーアスちゃんを引く乱数を探し求めている。

キャラ紹介その2（後書き）

筆が乗ったのでメイン以外のキャラ紹介もぺたんと

あれ、結局毎日更新してないかこれ……？

帰還のＫｉｎｇ　Ｆｉｓｈｅｒ（前書き）

多分一週間経過したと思うんで更新再開します（禁断症状）

帰還のKing Fisher

かつて、世界に最初の巨人が落ちてきた。
暴れ狂う異形の巨人は当時の先進国の首都で腕を振るい、吐息を撒き散らし、のたうち回って最後は爆ぜて死んだ。それを口火に世界各地に次々と落ちてきた巨人は人類の文明そのものを半壊させるに至った。

誰が一番最初であったのか、それは定かではない。だが、今がある以上確かにそれは実在した。

巨人と人間との融合。巨人の心臓部に操り手(パイロット)が融合する事で、人間は巨人の力と身体を得た。第一次ネフィリム大戦、今はそう呼ばれる人が駆る巨人と狂える巨人との戦いから二百年と幾ばくかが過ぎた頃、人類の文明は巨人をシステムとして内包するに至った。

巨人を資源と見なし、企業形態の社会システムを構築する事でこの星で最も覇者に近いと謳われる「ネフィリム・カンパニー」。
巨人を崇拝し、「教皇」をトップに巨人を駆る「聖騎士」達が異端者を狩る「天人教」。
巨人の殲滅を掲げ、自陣営全ての巨人に自爆装置を取り付けた上で他陣営に無差別に攻撃を仕掛ける「ジャイアント・キリング」。
今や世界はこの三つの勢力が均衡を保つ事によって成り立っていた。

「オハヨウゴザイマス、ルスト様」

「………ん」

早朝五時、機械音声の挨拶に対して適当に挨拶を返した彼女は己の愛機が格納されたドッグへと向かう。転送装置に乗り、一瞬のホワイトアウトを経た少女は格納庫で静かに佇む深紅の地色に薄く明滅する炎のペイントが施された奇妙な形をした巨人を見上げる。

「緋翼連理（ヒヨクレンリ）」と名付けられたその巨人はこの世界において自称ではない、事実として「最強」の称号を持つ彼女を象徴する機衣人（ネフィリム）である。

ベースとなる「ネフィリム」は中型二脚、右肩にレーザーガトリング、左脚にはミサイルポッドを搭載し、両腕は腰にダッキングしたレーザーブレード、及び実体ブレード一対二組合計四本を使い分ける形で戦う、近距離戦闘を主とした機体である。

最大の特徴として背中のブースターのみならず、左肩と右脚に装備された追加ブースターにより不規則かつ予想が困難な機動を可能としており、それを完璧に使いこなしている事実が彼女を最強たらしめている理由だ。

「あ、おはようルスト。今日も早いね」

「……モルド、五分遅い」
と、本来は彼女のみしか入れないはずのその場所に、一人の少年が現れる。体格自体はがっしりした偉丈夫であるはずなのだが、身のこなしや歩き方から軟弱な印象を抱いてしまう。そんな見た目にそぐわぬなよなよしさを発する男性は、見た目よりも数段若い声で少女へと声をかける。
「五分くらいは見逃してくれても……あ、ハイなんでもないです」
「早速、潜るよ」
「はいはい……今日はどのルールでやるの？」
早朝五時から七時の間に必ず現れることから「早暁の女王」、なんて恥ずかしい名前で呼ばれている少女に男は肩をすくめると、自身の相棒たる少女に戦いの詳細を問う。
「今日は決闘(デュエル)の気分……」
「それ僕いらなくない？　一対一だよね？」
「乱入や初見の解析……それは貴方の役目」
「仰せのままに……ちょっと待ってて、今から支援人形(パペット)のメンテをするから……いてっ！　いててっ！　脛はやめて脛は！」
機衣人(ネフィリム)に搭載することでオペレーターの支援を受けることができる小型ネフィリムとでも言うべき支援人形(パペット)のメンテナンスが終わっていないと言う事実に少女のローキックが男の脛へと刺さる。

「そういうメンテは事前に終わらせるもの……！」

「き、昨日は部活動が遅くまであったんだよう！」

「むう……」

渋々、と言った様子でローキックをやめた少女に、男はやれやれと苦笑交じりのため息をついて支援人形のメンテナンスを進めるのだった。

「ネフィリム・カンパニー」、操り手（パイロット）エントランスを訪れたルストとモルドは、他の操り手（パイロット）やオペレーター達が何やらざわめいている事に気付く。

「どうかされたんですか？」

「ん？　おおっ！　不死鳥（フェニックス）じゃねーか！　丁度いい、見ろよあれ！」

不死鳥（フェニックス）、それはかつて彼女、ルストと緋翼連理（ヒヨクレンリ）が全ての機衣人（ネフィリム）の頂点の座を五度防衛した際、「ネフィリム・カンパニー」最高経営責任者（CEO）より多額の賞金と共に賞与として贈られた、彼女のみが使用することを許された特殊機体塗装色（ユニークペイント）の名から取られた彼女の異名で

ある。だが、今この場をざわめかせているのはそれではない。彼らの視線は、今現在繰り広げられている戦闘を映したホログラフィックモニターに向けられていた。

「あれは……」

「……「キングスギャンビット」、ランキング三位「へっぽこナイト」の機衣人（ネフィリム）」

大量の索敵レーダーと超遠距離装備を搭載した構築は最速で敵を捕捉した上で全力で敵との距離を維持しつつ、遠距離から一方的に攻撃を叩き込んで相手を仕留める……名前の通り常に先手と有利を得た上で攻撃を行う「先行攻撃型（キングスギャンビット）」の機体である。

一対一という条件であればこれ以上ないほどに厄介な構築をしている機衣人（ネフィリム）。無論ランキング三位の実力はそれだけではなく、相手との距離を維持する逃げ隠れのテクニックもさることながら、距離を詰められた際の対処も心得ているからこそのランキング三位。その実力はランキング一位のルストをしてそうやすやすとは倒せない実力者。

そのキングスギャンビットが、なす術なく蹂躙されている光景が、ホログラフィックモニターにまざまざと映し出されていた。

「また当たった！　今度は頭部センサーだ！」

「嘘だろ……互いに高速機動中だぞ？　それも単発式のスナイパーレールガンなんて産廃で狙い撃ちとか……化け物かよ」

「見ろよ、キングスギャンビットの攻撃が追いついてない。ホーミングミサイルを振り切るってどんだけの速度出してるんだ……？」

「というかなんだよあの辻斬り。音速飛行を維持したまま変形して、キングスギャンビットをぶった斬ってまた変形して逃げるって……平衡感覚ぐちゃぐちゃになるだろ普通」

「一時期流行ったネタビルドじゃないのかよあれ、やべぇ……」

よく注視しなければ、キングスギャンビットが空中分解しているようにすら見える光景。だがよく見ればそれは、映像を撮影するカメラが追いつかないほどの超高速機動で飛翔する翡翠(ひすい)色の何かがキングスギャンビットを斬り刻み、撃ち砕いていることがわかる。

「…………っ！」

「うわっ」

画面に一瞬映り込んだ翡翠(ひすい)色が、キングスギャンビットを一方的に破壊している機体の色だと気づくのに数秒。そしてそれが塗装によるものではなく、機衣人(ネフィリム)が纏うように装着する衣装(パーツ)の初期カラーの組み合わせが、偶然翡翠(カワセミ)のような色合いになったことがその名の由来である機体だと気づくのにさらに数秒。それに気づいた瞬間、モルドは真横から発せられた威圧感に思わず一歩後ずさってしまう。この世界において全てはデータとシステム、虚像でしかない。だが確かにモルドは自身の真横で炎が発生したかのような圧を感じた。

「戻ってきたのか、「キングフィッシャー」……！」

「キングフィッシャー？」

「ああ、新参は知らねえのか、確か不死鳥（フェニックス）が二度目のランキング戦首位防衛戦の時だったか、その時にいきなり現れたのが奴だ。あの装備そのまんまでランキング最下位から全戦全勝して不死鳥（フェニックス）相手に引き分けた怪物……そのあとぱったり入ってこなくなったから引退したものだと思ってたが……」

古参の操り手（パイロット）が数少ない新参へと説明しているのを傍目に、モルドはルストに引き摺られるようにしてマッチングルームへと連れて行かれる。

「モルド、今すぐキングフィッシャーに挑戦状……！」

「わ、分かったから服引っ張らないで！」

オペレーターとしてモルドは「キングフィッシャー」へと挑戦状を送る。暫くして、キングスギャンビットの敗北で試合が終了したのだろう、キングフィッシャーから挑戦状の受諾を伝えるメッセージが届く。

「来た！　受諾されたよルスト！」

「モルド、本気で行く」

「了解！」

キングフィッシャー。そのあまりにハイリスクハイリターンなピーキーすぎる機体構築と、それを用いてキングフィッシャーが成し遂げた記録は、期間にして二日ほどのみの活躍でありながら、今尚機体ビルドのレシピが残る「変形型」機衣人（ネフィリム）である。

　特筆すべきは武装と装甲の殆どを犠牲にしてまで優先された化け物じみた機動力である。武装は右腕の排熱転換ブレード「超熱棒（オーバーヒートロッド）」と、左腕に搭載された単発式スナイパーレールガンのみ。装甲は超高速機動に耐えうる限界を維持した最低限のものという極めて脆弱なもの。ＡＩから武装と装甲の少なさを心配されるレベルのピーキービルドである。

　脚に至っては歩行を放棄したブースターそのものと一体化した「噴脚」と呼ばれる特殊なタイプであり、胴体の鳥の翼を思わせるウィング及びブースターも合わせて、航行形態時の速度は検証者によれば理論上はあらゆる機衣人（ネフィリム）の中でも最速を叩き出していると言う。

「速さ」のためにそれ以外のほぼ全て……地上に立つことすら犠牲にした「翡翠構築（カワセミビルド）」と呼ばれるそれは、「当たらなければどうと言うことはないが、速すぎてこっちの攻撃も当たらない上に燃費が悪すぎて失速したところを撃墜される一発屋」という評価が下されたネタ構築……だがそれはあくまでも「キングフィッシャー」以外の話である。

『左後ろ……違う、右上！？　あっ、撃った！　真正面！！』

「ぐ……」

緋翼連理（ヒヨクレンリ）と融合したルストは超高速で飛翔するキングフィッシャーから偏差射撃で放たれ、ほぼ誤差なく肩の付け根を狙う電磁加速された弾丸を回避する。

『急降下！　超熱棒（オーバーヒートロッド）が来る！』

「それは予想済み……っ！」

ガトリングとミサイルを解放し、対空防御を行う緋翼連理（ヒヨクレンリ）だが、曲芸じみた機動で下から上へと放たれた攻撃の雨を掻い潜ったキングフィッシャーが人の形へと変形する。

その右手には機体に蓄積された熱を武装に転用する性質上、一定時間排熱をチャージしなければ使えないものの当たれば一撃で大ダメージを与えることが可能な白熱するブレード。すれ違いざまに振るわれた超熱棒であったが、ルストは左肩と右脚のブースターを用いた変則機動でそれをかろうじて回避する。

「モルド！　キングフィッシャーは！？」

『嘘だろ……！？　そのまま切り返してきた！』

接地（墜落）する寸前、地面ギリギリの位置で変形から噴脚の連続使用で宙返りしたキングフィッシャーは再び航行形態へ変形し、落ちてきたルートをそのまま上へと飛翔する。人の身体でやろうものなら平衡感覚が完全に狂うようなそれを強行したキングフィッシャーが不安定な姿勢の緋翼連理（ヒヨクレンリ）へと迫る。

『ルスト！』

「なめる……な！」

左肩のブースターがオーバーヒートする勢いで無理矢理機体を回転させ、その勢いのまま下から上へ急襲を仕掛けてきたキングフィッシャーの攻撃をレーザーブレードで迎撃する。かたや超高速の突進の勢いを殺しきれず吹き飛び、かたや貧弱かつ軽量な装甲ゆえに激突の反動で吹き飛ぶ。

『左肩ブースター、オーバーヒート！　冷却まで三分！』

「奴は！」

『体勢を立て直してる！』

「攻めるなら今しかない……！」

距離を詰めんと全力で飛翔する深紅の不死鳥（フェニックス）。体勢を立て直し、レールガンを構える翡翠（キングフィッシャー）。二羽の鳥が激突する……！

帰還のＫｉｎｇ　Ｆｉｓｈｅｒ（後書き）

大丈夫です、この作品はちゃんと「シャングリラ・フロンティア～クソゲーハンターー、神ゲーに挑まんとす～」で合っています。

言わなくても解る方は解ると思いますが、元ネタは戦い続ける歓びのアレです。

ウェザエモンの遺産

時間は数日前、ユニークモンスター「墓守のウェザエモン」戦を終えた二日後まで遡る。
墓守のウェザエモン戦を終えてラビッツ関連のシナリオも済ませた俺はログアウトすると、それまでの反動が一気にのしかかってきたかのように即寝落ちした。次に目覚めた時には丸一日経過しており、朝寝たら朝起きていた、という中々に無い経験をすることになった。

「ご飯……水分……ぉぉお………」

趣味柄、断食紛いの事には慣れているが、流石に丸一日寝ていては身体がエマージェンシーをガンガン鳴らしている。ホラーゲームのゾンビ（走らない、爆発しない、謎の進化をしない）の如く千鳥足で冷蔵庫にたどり着いた俺は牛乳と菓子パンを大至急で補給して肉体からのエマージェンシーコールを切る。

「流石にエナジードリンクは暫くは飲みたくないからなぁ……」

適当に冷蔵庫を漁って朝食を済ませ、五分ほど日光浴した後にシャンフロへログイン。我ながら酷い生活リズムだとは思うがそれだけのめり込んでいるという事だ。

「サンラクサン！　おはようですわ！」

「んーおはよう」

さて、昨日はロクに調べずにログアウトしたからな、色々調べてみますか。まず手始めにとステータス画面を開いて……思わずニマリと笑顔を浮かべる。

「ふふふ……めっちゃレベルアップしてら」

――――――――――――――

PN：サンラク
LV：78（200）
JOB：傭兵（二刀流使い）
150マーニ
HP（体力）：30
MP（魔力）：10
STM　（スタミナ）：60
STR（筋力）：40
DEX（器用）：50
AGI（敏捷）：70
TEC（技量）：55
VIT（耐久力）：2
LUC（幸運）：74
スキル
・無尽連斬

・ドリルピアッサー↓グローイング・ピアス
・インファイトＬｖ．ＭＡＸ
・スケートフット↓ドリフトステップ
・パリングプロテクト↓セツナノミキリ
・ハンド・オブ・フォーチュンＬｖ．６
・グレイトオブクライム
・クライマックス・ブーストＬｖ．９
・五艘跳び↓六艘跳び
・シャープターン↓選択可能
・アサシンピアスＬｖ．ＭＡＸ
・オプレッションキックＬｖ．ＭＡＸ
・ベストステップ↓ムーンジャンパー
餓狼の闘志（ハンガーウルフ）↓孤高の餓狼（トランジェント）
・オフロードＬｖ．２
・致命刃術【水鏡の月】↓致命刃術【水鏡の月】参式
・イグニッションＬｖ．１
・オーバーヒートＬｖ．１
・ニトロゲインＬｖ．１
・デュエルイズム

装備
右：兎月【上弦】
左：兎月【下弦】
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋１）
胴：リュカオーンの呪い
腰：無し
足：リュカオーンの呪い
アクセサリー：格納鍵インベントリア
――――――――――――

レベルが25も上がってやがる。それにポイントがレベルアップ分だけよりも明らかに多い。ボーナスでレベルアップ分以外にもポイントが入っているのか？　美味しすぎるぜユニークモンスター……できる事ならまた戦いたいような、二度と戦いたくないような。スキルもスキルでレベルアップや進化しすぎててワチャワチャしてるな。後で特技剪定所（スキルガーデナー）に行くのは確定としても、やる事が多すぎて笑顔になってしまうな。

「ステータス関連の前に、まずは戦利品だな……ふふふ」

「サンラクサン、わっるい笑顔してますわぁ……」

「欲望に正直なだけだからピュアな笑顔だよ、多分」

「ベジタリアンを主張するヒドラより信用できないですわ」

「俺は種族の食生活レベルで邪悪かよ」

気を取り直してアイテムの確認を行う。まずは【晴天流奥義書】だ。

・晴天流奥義書
神代の剣豪が残せし天の剣術の奥義を記した記憶媒体。解読には神代の設備が必要。

その一太刀は天を斬り、大地を穿ち、暗雲を晴らす。

「マジか、もしかしなくても天晴（てんせい）とかってプレイヤーも習得可能なのか」

マジか、いやマジか。無我夢中で攻略したあれらの技の数々を使えるとか胸が熱くなるな。とはいえ奥義書と銘打たれてはいるが、アイテムとしては何やら半透明なキューブに時折光のラインが走る超文明の香りがするものである。説明文通りこれを読み込むための設備を見つけるまで中身のスキルはお預けというわけか。

「次は「世界の真理書「墓守編」」……あぁ、成る程要するに運営側からの答え合わせか」

世界観に沿ったものではなく、どうやら運営が想定していた攻略方法や背景ストーリーが記述された攻略本のようなものらしい。というか必死こいて攻略した後に攻略本渡されてどうしろというのか。多分だがユニークモンスターはリスポーンしないのだから、完全にオマケでしかないな。

「まぁ暇な時に読むか……ふふふ、さぁ本命だぁ……」

さぁさぁ、明らかに重要かつレアっぽいアイテム、格納鍵インベントリアの詳細を見せてもらおうか。

・格納鍵インベントリア
格納空間への鍵であり扉でもある神代の時代においても一部の者のみが持っていた特殊な腕輪型アクセサリー。
装着した時点でアクセサリー欄を一つ消費するが、装着者がＰＫされても略奪されない。
魔力を消費することで格納空間内へと転移可能。
空間拡張術式携帯アクセス装置。神代において、肉体情報と同期することで一体化し装着者の身体の一部となるこの道具は携行可能な最小のシェルターであり、許容の限界を持たぬ無尽蔵の倉庫である。
容量制限：無し
格納限界：縦横高さ５０ｍまでの非生物
内容
規格外戦術機鳥【朱雀(スザク)】ＥＭＰＴＹ
規格外戦術機虎【白虎(ビャッコ)】ＥＭＰＴＹ
規格外戦術機龍【青龍(セイリュウ)】ＥＭＰＴＹ
規格外戦術機亀【玄武(ゲンブ)】ＥＭＰＴＹ
規格外特殊強化装甲【艶羽(アデバネ)】ＥＭＰＴＹ
規格外特殊強化装甲【蛮武(バンブ)】ＥＭＰＴＹ
規格外特殊強化装甲【昇滝(ショウロウ)】ＥＭＰＴＹ
規格外特殊強化装甲【富嶽(フガク)】ＥＭＰＴＹ
規格外武装：太刀型【ハービンジャー】ＥＭＰＴＹ
規格外武装：鋼線型【キープアウト】ＥＭＰＴＹ
規格外武装：穿拳型【バタリングラム】ＥＭＰＴＹ
規格外武装：撃槍型【ファランクス】ＥＭＰＴＹ
規格外武装：轟鎚型【エレバス】ＥＭＰＴＹ
規格外武装：双剣型【ヒエロス・ロコス】ＥＭＰＴＹ
規格外武装：大砲型【レグルス】ＥＭＰＴＹ
規格外武装：双銃型【カストル・ポルクス】ＥＭＰＴＹ
規格外武装：長銃型【サジタリウス】ＥＭＰＴＹ

規格外武装：収束機構型【コメットカタパルト】ＥＭＰＴＹ
規格外武装：拡散機構型【メテオディフュージョン】ＥＭＰＴＹ

「……………………………………」

「サ、サンラク……サン？」

「……チョット、ネル。」

「は、はぁ……」

セーブ＆ログアウト。ベッドから無言で起き上がり、ジャージに着替え、家を出て…………

「んなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああああああ！！！」

「？！？」

叫びながら十分ほどただひたすらに走り続けて、ようやく俺は吹き飛んだ思考力を取り戻すに至った。散歩中のご老人に妖怪でも見るような目で見られたが今はそれどころではない。恥を押しつぶすパニック、気分は一発で目当ての乱数を引き当てた時の運ゲーだ。

いやいやいや、いやいやいやいやいや、いやいやいやいやいやいやいや。

え、何このワンマンアーミー、俺だけでシャンフロの全プレイヤーを相手にでもすんの？　それでも余裕で勝てそうな気がしてならないんだけど。ちょっともう、世界観がいきなりスペースオペラになったんじゃないかと思えるくらいのＳＦ武装の羅列に思考がまた吹っ飛びそうだ。と言うか地味にこいつも呪われた装備系アクセサリーかよ。

「と、とと、とりあえずメールを……」

そう、メールだ。少なくとも心臓が破裂しそうな動揺を俺だけで味わうのは理不尽だ。あの二人にも道連れ（おすそ分け）してやらねば。

「至急、格納鍵インベントリアを確認せよ……送信っと」

心臓がバクバク動いているのは決して十分ほど走り続けたからだけではあるまい。精神と肉体を落ち着かせるようにゆっくりと歩いて自宅へと戻ると、ちょうどそのタイミングでペンシルゴンとオイカッツォから返信が届く。

件名：え、なにこれやべくねゲーム間違えてぃ？
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：（このメールには本文が書き込まれていません）

件名：へんなこえでた
差出人：鉛筆戦士
宛先：サンラク
本文：ひるにさーどれまにあつまろう、いつものへびのりんごで

件名に本文を書きこんだり、漢字変換せずに送ってきたり、文体からだけでも二人のテンパりっぷりが分かる。やっぱり苦楽は他の二人とも分け合わないとな！

「ちょっと昼までインベントリアの事は忘れよう……」

精神衛生上あまりよろしくない。とりあえずステータス割り振りとスキルの整理だな……うん。
ユニークモンスターがもたらす莫大な利益、それをまざまざと見せつけられた俺はある意味でウェザエモンと戦った時以上の精神的ダメージを受けたのだった。

最早「いつもの場所」と化したNPCカフェ「蛇の林檎」。皆テンションがおかしくなっていたのか、何故か満場一致でバースデーケーキを注文した俺らは、NPCの店主に珍獣でも見るような視線を向けられつつも、個室でバースデーケーキを囲んで席についていた。内容が内容なのでエムルにはちょっとお留守番してもらっている。

「えー……二人も見たとは思うけど……どうしようか」

「どうしよう、って言われても……ねぇ」

「それに関してなんだけど、私ここに来る前に格納空間に行っていろいろ調べて見たんだよね」

見てるだけでも意味がないので、バースデーケーキを三等分に分けていると、若干引きつった笑顔を浮かべつつもペンシルゴンは検証の結果を話し始める。

「結論から言うと、今の私達にとってはあれは観賞用以上の価値はないね」

「その心は？　ほい、これペンシルゴンの分ね」

「えー私そっちの果物が多い方がいいー。簡単に言うと、動力源がない」

「動力源？　オイカッツォ、フォークくれフォーク……投げるな！」

「しれっとキャッチしてるくせに……つまりただの置物？」

雑に甘いバースデーケーキを口に運びつつ、俺たちはペンシルゴンに話の続きを促す。

「うん、特に戦術機系のゴーレムやパワードスーツなんかは「規格外エーテルリアクター」ってアイテムが必要みたいなんだけど、入手方法がサッパリ分から……」

「俺それ持ってるんだけど」

「ぼっふ！」

「うっわ汚ねぇ！　俺の顔に向けて吐くなよ！」

「ゲッホゴホ！　ゲームなんだから実際に飛び散ってないでしょ！　ってか持ってるぅ！？」

バースデーケーキを口から噴き出したペンシルゴンがいつもの不敵な態度が消し飛んだ様子でオイカッツォへと迫る。オイカッツォもまた、困惑した様子で自身の言葉を裏付ける為に口を開く。

「ほら、俺ってあの戦いでほとんど騏驎と戦っていたからなのか、報酬で「規格外エーテルリアクター（破損）」ってのを貰ったんだよね」

「でかした馬に縛り付けられてた人」

「見直したよ緊縛しながらロデオしてた人」

「場合により俺はモデルでも顔を重点的に殴るよ？」

歪んだ男女平等だ……それはともかく、破損した神代文明の道具、ねぇ。

「先に言っておく、口の中のものを飲み込め」

「オッケー」

「確証はできないが、破損した神代のアイテムを修理できるアテがあるかもしれない」

「んぐ、ぅぇ……………ふぅ、私達に追い風吹き過ぎじゃない……？」

今ちょっと嘔吐（ゲロ）りそうだったろペンシルゴン……まぁいい。ヴァッシュが持つ「神匠」なる職業、さらに言えばその前段階である「古匠」は古い神代の道具を扱う職業だったはず。であればもしかしたらオイカッツォの持つ破損した規格外エーテルリアクターも直せるかもしれない。

「と言うわけで俺にそのアイテムを預けて欲しいわけだが」

「……条件が一つある」

「条件？」

オイカッツォはケーキにトッピングされた苺っぽい果物を口に放り込み、俺へと告げる。

「お前が隠してるユニークの発生条件を教えてくれ、そしたら俺は

アイテムを預ける」

……成る程。

「カッツォ君それは……」

「はぁー？　どうせ俺はユニーク自発できないですしぃー？　他人のユニークに乗っかるしかないわけでぇー？」

「この人面倒臭いこじれ方してるよ！？」

「仮にもプロゲーマーとは思えない駄々のコネっぷりだ……まぁいいけど」

「えっ」

ふっかけた側が驚くなよ……あまり明かしたくないのは事実だが、他人にユニークモンスター由来のアイテムをホイホイ預けられる程俺もオイカッツォもピュアな性格はしていない。であれば友人関係であっても誠意は見せるべきだ。ゴクリと唾を飲み込んで俺を見るオイカッツォとペンシルゴン、俺は厳かにこれまでずっと秘匿してきた真実を明かす。

「とは言ってもこれ、って確証があるわけじゃないが……俺の場合はランダムエンカしたユニークモンスター「夜襲のリュカオーン」相手にレベル２０以下で五分間ノーダメかつ二百回ほど「致命(ヴォーパル)」武器でクリティカルを叩き込んだらこうなった」

「はい解散！」

「持ってけバカヤロー！」

「あいたぁ！　んぎゃあ！」

　オイカッツォが投げつけたひび割れた缶詰型のアイテムが顔に直撃したことで、仰け反った身体は椅子ごと後ろへと倒れる。強打した頭を抑えて破損リアクターを拾い上げつつ、俺は抗議の声を上げる。

「なんで俺がキレられるんだよ！」

「どうやったら空を飛べますかと聞いたら大胸筋を鍛えようって答えられた気分だよ！　くたばれ曲芸お馬鹿！」

「理不尽すぎる！」

　うんうんと頷くペンシルゴンもどうやらオイカッツォと同意見であるらしい。くそ、納得いかないぞ……

　譲渡処理を済ませた上で顔面にぶつけられた規格外エーテルリアクター（破損）を格納鍵インベントリアの格納空間に放り込み、俺は椅子を立て直して着席する。

「あ、そうだサンラク君」

「なんだよ？」

「預かってた例のもの、返してくれる？」

　あぁ、そういえばウェザエモン戦以来会うのは今日が初めてだから、返してなかったか。

「ほいよ」

俺は自前のインベントリを漁り、あの時反転の花園から秘匿の花園へ戻る前にペンシルゴンから預かっていたものを取り出す。ゴトリ、と机に置かれた黄金の天秤が、個室に吊るされたカンテラの光を受けてキラリと輝いた。

ウェザエモンの遺産（後書き）

主人公達の現状を非常にシンプルに説明すると「大量の最新鋭おもちゃ（電池無し）とぶっ壊れた電池だけもらった」という感じです
一応捕捉しますが流石に「装着すればウェザエモンと同等の力が……！」とまでは行きません

ペンシルゴン先生によるＰＫロンダリング教室

「なんだっけ？　これ借り物なんだっけ？」

「そうそう、多分シャングリラ・フロンティア全アイテムの中でも最高クラスのアイテムだと思うよ。何せ金さえ積めばユニークモンスター以上の力だって手に入るからねぇ」

国家予算を全額ぶち込んでもそのラインまで届くかは微妙だけど……と言いつつ、ペンシルゴンは手元に引き寄せた黄金の天秤、確か「対価の天秤」を何やら操作し始める。

「えーと……『天秤は均衡を保つ、経験を価値に、捧げし対価の返却を』…………あれっ、違うか。じゃあ……『天秤は均衡を保つ、過去を価値に、捧げし対価の返還を』……こっちか、うっかりうっかり」

何やら普通のウィンドウとは違う、フレームが豪華な感じのウィンドウを弄っていたペンシルゴンであったが、操作を終えた瞬間にペンシルゴンの身体から光の粒子が抜けて天秤へと吸い込まれ、一瞬の発光を経てペンシルゴンの前に小さな花飾りと一冊の本が現れる。

「極論インベントリアは取られても構わないくらいの心構えだったんだけど、呪いの装備じみた装備欄潰し効果なだけあって、ＰＫＫのペナルティでも没収されなかったんだよねぇ……とはいえ、これだけは絶対に取られたくなかったからさ、ロンダリングしちゃった」

「ロンダリングって？」
「んー？　まぁ要するにＰＫのペナルティから自分の所有物を守る小技的なものだよ」
　プレイヤーキラーがキルされる、要するにプレイヤーキラーキル（ＰＫＫ）された場合、その時点で本人が持っていたアイテムは倒した者に所有権が移る。ただし倒した者が一定時間回収しなければアイテムの所有権は誰のものでもなくなる。そしてその時点で倉庫などに預けられていたＰＫプレイヤーが所有していたものは自動的に売り払われてしまう。
「プレイヤーキラーのペナルティはだいたい二つ、殆どのＮＰＣからの好感度が最低値になるのと、罪状……要するにどんだけＰＫしたかによって増えていく罰金があるわけ。罰金はＰＫプレイヤーのカルマポイントに比例する懸賞金と同じなんだけどこれは今は関係ない」
　厄介なのが罰金で、売り払われたアイテムの総額が罰金から差し引かれるものの、罰金が残っている間はあらゆる手段で入手できるお金が罰金の返済に充てられてしまうらしい。
「じゃあその装備とかどうやって買ったのさ」
「セカンディルでＮＰＣ脅してモンスターのアイテムと物々交換」
「文明が滅んだ後の世紀末に生きてんなお前」
　そんな徹底的な自己破産の差し押さえからアイテムを守るのが所謂「ロンダリング」と呼ばれるテクニックなんだそうな。

「でもまぁこれがなかなか複雑でね、他者にアイテムを譲渡するだけじゃあ普通に売り払われるんだよね」

つまり、サイガー０氏にＰＫＫされる前の時点で俺がペンシルゴンからアイテムを譲渡されてもＰＫされると同時にそのアイテムは消滅する、と。犯罪者に関係するものはなんであろうと差し押さえする的な感じか、つまり安易に信用できるフレンドに預ければ問題無し！　とはいかないようだ。

「じゃあその天秤は？　なんで消えてないのさ」

「そもそもこれは私のじゃないから。所有権は「黄金の天秤商会」ってＮＰＣ組織にあるからね、仮にあの時私が持っててもオブジェクト化自体はしてもサイガー０ちゃんのものにはならなかったんじゃないかな」

そしてここからがロンダリングのミソである。要するに譲渡した程度ではアイテムは容赦なく売り払われるため、意味がないが、「ＰＫＫされた時点で完全に所有権を手放した」状態であれば強制売却からは免れる。

「この「遠き祈りの花飾り」は今さっきまで対価の天秤の効果で捧げられた状態……つまり私の手からは離れた状態だった。遠き祈りの花飾りを捧げた対価として適当に幸運の追加パラメータを貰っていた私は、花飾りの所有権をこの天秤に譲っていたわけ。さらに言えば天秤に捧げられたアイテムは一週間の間は対価を支払えば返却が可能とはいえ、物質としてこの世界に存在していなかった。だからアイテム差し押さえの影響を受けなかったワケ」

「……成る程ね、それを今の操作で返して貰ったわけだ」

「これと『真理の書「墓守編」』を取り返すために過去(レベル)を４０も消費しちゃったけどね……全く、飛んだ暴利を吹っかけられたよ」

「あ、真理の書の方はぶっちゃけネタバレ攻略書だからほぼ役に立たないぞ」

「マジかよちくしょう！」

御愁傷様でーす。

頭を抱えていたペンシルゴンであったが、気を取り直したのか真理の書をしまい、遠き祈りの花飾りを装備すると話を続ける。

「ついでに言えば、そもそも私は全財産をウェザエモン戦のために天秤(こいつ)にぶち込んだからなくなるアイテムも殆ど無し。さらに言えばこれを借りるために担保として「黄金の天秤商会」に預けたメイン武器は天秤を返すまで所有権は完全に商会にあるわけでぇ……要するにペナルティの差し押さえって完全に市場に流しちゃうか、この世から物質的に消してしまうかすればすり抜け可能なんだよねぇ」

「うわずっりぃ」

あの時足を洗って真っさらになるとか言っておいて、肝心のメイン武器と重要アイテムはしれっと守ってやがったのか。

「ちなみに罰金はどれくらいあるの？」

「ざっと五億マーニかな」

「お金は貸さないぞ」

「借りない借りない、頑張れば返せない額でもないし。ウチの愚弟なんか多分兆とか行ってるよ、あいつレベルの低いプレイヤーしかいないクランとかも調子乗ってリスポンキルしまくってたし」

うへぇ……国家予算並の罰金背負わされるとか、払い切る前にサービス終わるんじゃないのか。五億を簡単に返せると言ってしまうペンシルゴンも大概だと思うが。

「今回のウェザエモンとの戦いで分かったんだよね私……ユニークモンスターは金になる」

「……簡単に言ってくれるじゃねーか」

確かにそれは事実だ。恐らくインベントリアの中にあるアイテムの一つでも売れば借金の何割かは一瞬で返済できるだろう。ウェザエモンでこれなら他のユニークモンスターでも同様の利益が出る可能性は高い。

「それを踏まえて私から提案があるわけ」

「インベントリア内の奴の売却に関しては要相談な」

「サンラク、こいつに交渉させるとか敗北確定じゃん」

「いっぱいお話ししようねぇ……？　じゃなくて、私からの提案ってのはさ、この三人でクランを結成しない？」

クラン。それと関わったことは何度かあるが、今の自分には縁遠

いと思っていたものだ。確かに、阿修羅会や黒狼とかもはや組合レベルの規模のクランばかり見てたから忘れかけてたが、別に大人数である必要はないのか。

「別にいいよ、俺は特にどこかに所属するわけじゃないし」

「俺も同じく」

「ハイ決まりっ！　話が早くて本当助かるよ」

さて、と俺たち三人は一旦休止符を入れて……

「クラン名を決めたいと思います。私からは「ペンシルゴンと便利なパシリ達」で」

「それでいいよ」

「クラン「ペンシルゴンちゃんと便利なパシリ達」結成だな」

「冗談として流して欲しいなぁ！！」

決定して恥ずかしがるなら最初から発案するなよ全く……そうだな。

「クソゲー連合とか」

「お前一人でやってろ。　俺達全員ロクでもないわけだし「無法者」とかカッコよくない？」

「自称ＰＫから足洗った奴がアウトレイジなんてクランにいたら私

なら絶対信用しないね

「まぁ背中は預けたくないな」

タバコ代くらいのはした金で後ろから刺されそうなので却下。その後も様々な意見が出ては他の二人に否定される工程がループする。
具体的な例を挙げると

武士(ウェザエモン)を倒したので「打首獄門」……物騒すぎるのでNG

ユニークモンスターを討伐した三人なので「ユニークハンター」……シンプルにダサいのでNG

お金に困っているので縁起担ぎも含めて「ゴールドラッシュ」……お金に困ってるのはてめーだけだろうがNG

「いいじゃんゴールドラッシュ……」

「借金苦はペンシルゴンだけなんだよなぁ……」

うーん、そうだなぁ……なんか適当にかっこいい感じの単語とかでそれっぽいもの……そうだな。

「旅狼(ヴォルフガング)とかどう？」

「黒狼と被ってない？」

「ユニークモンスターを倒したこっちが先を行ってる上位互換だろ、レベルを高くするだけなら小学生でもできる。それにこっちはドイツ語だ、かっこよさが段違(ダンチ)いよ段違(ダンチ)い」

いや戦力的にはボロ負け以下のコールドゲーム並の差があるとは

思うが、サイガー０氏みたいなぶっ飛んだ奴がそう何人もいるとも思えないしユニークスレイヤーのネームバリューなら対抗はできるだろう。いや別にクラン「黒狼」と戦おうとかそんなつもりは皆無だが。

「成る程……いいねそれ」

何やら意味深（じゃあく）な笑みを浮かべたペンシルゴンが俺の案に賛成し、オイカッツォも特に反対理由もないと同意する。

「奇しくもクラン誕生のバースデーケーキになったわけだ」

「結果オーライではあるけどなんで俺たちバースデーケーキなんて頼んだの……？」

「気の迷い以上の意味はないだろうねぇ……おっ、来た来た」

追加で注文したのだろう、果実酒（ノンアルコールもへったくれもない）が三人それぞれへと渡り、ペンシルゴンが音頭をとる。

「それじゃあクラン「旅狼（ヴォルフガング）」の誕生を祝ってぇ……乾杯！」

「「乾杯」」

木のジョッキに注がれた果実酒を一息に呷り、ここで感想を一つ。

「大雑把に甘い」

「果汁をガンガンぶち込んだ麦汁（ばくじゅう）？」

「麦汁って何？」

「ビールからアルコール抜いたもの」

何そのウィンナーのないホットドッグみたいな。

「ところでクランを結成するにあたり、重要なことが一つ……誰がクランのリーダーになる？」

「……最初はグー、」

「じゃん」

「けん！」

俺、パー
ペンシルゴン、グー
オイカッツォ、パー

「三回勝負！」

「却下。」

「畜生！」

「まぁ頑張りたまえよペンシルゴン」

「名前的に狼の呪いを受けてるサンラク君がやってよ……てかそもそも反応（じゃんけん）速度で勝てるわけないじゃん……」

今気づいたのか、オイカッツォがじゃんけんを仕掛けた時点で水面下で既に二対一だったのだよ。

「奇しくも「ペンシルゴンちゃんと便利なパシリ達」そのまんまな形になったな」

「押忍！ペンシルゴンの姉御ォ！」

「鉛筆の姉御ァ！　焼きそばパン買ってきましょうかぁ！？」

「ちょっ、カッコつけた愚弟みたいなこと言わないでよ恥ずかしい！」

生き恥扱いされるオルスロット君に少しだけ同情した。

そんなこんなで。ペンシルゴンは「天秤返してメイン武器取り戻してくる」とフィフティシアまでマラソンを敢行。あいつ今レベル50くらいまで下がってるらしいけど、どうするつもりなんだろうか。

オイカッツォは「レベルがサンラクより低いのがなんかムカつく」とレベリング兼攻略のために先のエリアへ。

俺はといえば、一旦ラビッツに戻ってリアクターの修理が可能かどうかを調べるためにエムル待ちだ。ペンシルゴンの奴が素寒貧になったせいで今の俺では使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）を入手することができない。なので時間を指定してエムルにサードレマへと来てもらうことにしたのだ。体のいい道具扱いではあるが、実際に生きたプレイヤーと話しているとさえ錯覚するシャンフロが異常なだけで、ゲームのＮＰＣとは本来そういうものだと自分を納得させる。

「エムルが来るまであと五分か……」

「あの……もしかしてサンラクさんですか？」

「いえ人違いです、自分「サソラク」なんで」

「あ、そうですすかすいません……」

「いえいえ」

一切の曇りない笑顔（なお覆面）でそう断言し、尋ねて来たプレイヤーが視線を外した瞬間に全力疾走で裏路地へと飛び込む。

「……いやフォント的にやっぱりサ「ソ」ラクじゃなくてサ「ン」ラクじゃ……っていない！？」

「撒いたか」

まったく、大々的にアナウンスされたせいで気分はパパラッチに追われるハリウッドスターだ。お陰でサードレマの裏路地マップが頭にインプットされる程に覚えてしまったではないか。積み上げられた腐った木箱の陰から出た俺は、話しかけてきたプレイヤー……名前は見えなかったがあまり活発的(アクティブ)なタイプではなさそうな女性プレイヤーについて考える。

「しかしあのプレイヤー、サードレマの適正レベルって装備じゃなかったな……」

明らかに高いレベルに見合った装備品、といった感じの神官(クレリック)系の女性だった。

これまではあくまでも「服を着た喋るヴォーパルバニーを引き連れたプレイヤー」だったが、ウェザエモンを倒したことでそれにプラスして「前人未到のユニークモンスター討伐者」という知名度まで獲得してしまった。他のプレイヤーに話しかけられる頻度も上がりそうだな……やっぱ悪目立ちするんだよこの「呪い」、おのれリュカオーン。

「さて、これからどうすっかなぁ……」

まぁまずはラビッツだな。

ペンシルゴン先生によるＰＫロンダリング教室（後書き）

要するに
本人所有……ダメです、草の根分けても見つけ出します
他者へ譲渡……ダメです、それは罪人と所縁のある品ですね？　没収します
売却して「市場に流す」……く、市場に流れてしまってはもはや特定は不可能か
この世から消し去ってしまう……ないものは没収できない
微妙にザル差し押さえなペナルティ君です。

ちなみにペンシルゴンのメイン武装は対価の天秤を用いて「天秤にメイン武器を捧げ、天秤自体の一時的なレンタル権を得る」という形で契約が結ばれているのでペンシルゴンに所有権がなく、かつこの世にも存在しないという二重防御でロンダリングされていました。かっこいいこと言っておきながらちゃっかり予防線は貼っておくあたりペンシルゴンは悪いやつですね（他人事）

「んー……わちゃ「古匠」にゃあ届いとらんけ、これを直すこつは無理じゃやけぇの」

「そうか……となるとヴァッシュの兄貴にお願いするしかないか」

「たわけっ！」

「ひばし！？」

脛に金属の棒は駄目だろう……！　駄目だろう……っ！　弁慶だって泣くんだぞ！？

脛を抑えて悶絶していると、怒っていますと身体全体でアピールするビィラックがべしべしと俺の頭を叩く。しれっとエムルは頭の上から退避してやがった。

「なんでもオヤジに頼るんじゃない！　オヤジやてワリャに構ってばかりじゃないけぇ！」

「え、あー、すんません」

ヴァッシュも大概ランダムエンカウントだ。毎度兎御殿にいるわけではない、それにビィラックに怒られた以上今すぐヴァッシュに頼ってこれを修復するのは困難だろう。好感度が落ちる予感がする、クソゲーで鍛えられた俺の地雷(フラグ)を嗅ぎ分ける直感は八割当たる。

「さーてどうすっかなぁ……」

「どうするんですわー？」

「んー、久し振りに攻略進めてもいいけどなー」

さてどうしたものか、とりあえず特技剪定所に行ってスキル整理しつつ大量獲得したポイントを割り振っちゃおう。

――――――――――――

ＰＮ：サンラク
ＬＶ：７８
ＪＯＢ：傭兵（二刀流使い）
４０００マーニ
ＨＰ（体力）：４０

ＭＰ（魔力）：５０
ＳＴＭ（スタミナ）：１００
ＳＴＲ（筋力）：７０
ＤＥＸ（器用）：７０
ＡＧＩ（敏捷）：９０
ＴＥＣ（技量）：６５
ＶＩＴ（耐久力）：２
ＬＵＣ（幸運）：１０４

スキル
・無尽連断
・グローイング・ピアス
・インファイトＬｖ．ＭＡＸ
・ドリフトステップ
・セツナノミキリ
・ハンド・オブ・フォーチュンＬｖ．６
・グレイトオブクライム
・クライマックス・ブーストＬｖ．９
・六艘跳び
・リコシェット・ステップＬｖ．１
・ヘイト・トランプルＬｖ．１
・ムーンジャンパー
・孤高の餓狼（トランジェント）
・オフロードＬｖ．２
・致命刃術【水鏡の月】参式
・イグニッションＬｖ．１
・オーバーヒートＬｖ．１
・ニトロゲインＬｖ．１
・デュエルイズム

装備
右：兎月【上弦】
左：兎月【下弦】
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋１）
胴：リュカオーンの呪い
腰：無し
足：リュカオーンの呪い
アクセサリー：格納鍵インベントリア
――――――――――

素晴らしい、スタミナと幸運がついに三桁の大台に到達したぞ。今後インベントリアを使うことも考えてＭＰなどの数値にも手を入れたが、もはや俺はまごう事なき幸運戦士と言えるだろう。ＶＩＴ先輩は貫禄の一桁、装備品で補強すれば四桁は見込めそうなステータスの気配がするのに一桁を維持し続けるそのガッツは敬意すら感じる。いや、やったのは俺だけど。

「ご一緒にぃ、スキルの秘伝書はいかがですかぁー？」

「お金が貯まったらな」

「ぷぅ」

ぷぅ、じゃないよぷぅ、じゃ。隙あらば何か買わせようとしてきやがるなこの兎。
今回のスキル整理はほとんど弄らない事にした。オプレッション・キックにアサシン・ピアスを混ぜたらヘイト・トランプルなるなかなか面白いスキルが生まれた事くらいか。怯み状態の相手に使えば

ヘイトを大量に集めることが出来る、というのはヘイト管理的観点からしてなかなかに優秀だ。致命刃術【水鏡の月】、ヘイト・トランプルという真逆のヘイト操作スキルを得ることが出来たのはありがたい。
　いくつか得た新しいスキルは効果を検証しつつ育てていく感じで……ん？

「育てる……育成……そうか、無いなら集めればいい、手に入れればいい、育てればいいのか」

　そうだよ、ヴァッシュに頼れないなら現状頼ることが出来るのはビィラックくらいしかいない。ビィラックは「名匠」の職業しか持っておらず、「古匠」の職業技能がなければエーテルリアクターは修理できない。
　だがビィラックは未だ修行中の身と何度か言っていた、つまりそれはビィラックというNPCには「名匠」キャラとして固定されたキャラクターではなく条件を達成すれば成長する可能性があるのではないだろうか。

「エムル、予定が決まった」

「なにをするんですわ？」

「名付けて「ビィラック育成計画」……！」

「と、いうわけで「古匠」ジョブ取りに行こうぜ」

「何が「というわけで」なんじゃ……」

先ほど叱った相手が意気揚々と「無いなら取りに行こうぜ！」とか言い出したら俺も多分今のビィラックと同じ顔をするだろう。巨大な金槌を肩に乗せ、毛が黒くてよく分からないが頬についた煤を拭うビィラックは俺の言葉に呆れたような顔をする。

「むぅ……オヤジに頼れんならわちを古匠にする……理にゃ叶っとるが……」

「別に神匠になれと言ってるわけじゃない、だがいつかは通らなければならない道だろう？」

「ううむ……」

クルンクルンと人間が使うショートソード程はある金槌を回しながら考え込むビィラック。エムルやエルクのような現実の兎とほぼ同じか少し大きい程度ではなく、俺の背丈の半分はある大きさのビィラックがそれを振るうとまるで大剣を振り回しているようにも見える。

「……うむ、わぁーった。ワリャの案に乗ってやるけ」

「グッド、実にグッドだ」

ビィラックが承諾してくれたことも、ビィラックというＮＰＣに「古匠」適性があるということも、どちらもグッドだ。

「どうせワリャは知らんじゃき、わちがオーダーを出しちゃる。エムル、地図ぅ持ってき」

「は、はいなっ！」

数分後、何やら魔法媒体ではない、一般的な意味でのスクロールをエムルから受け取ったビィラックは、金床の上にそれを広げる。

「ええけ？　「古匠」になるにゃあな、二つ必要なもんがある」

「というと？」

「まず一つは神代の遺産……「機遺装（レガシーウェポン）」。武器を扱う職業ち、机上（きじょー）の空論（くーろん）じゃ鉄は打てん」

ふむふむ。

「そしてもう一つ、オヤジ曰く……「マーリョークウンヨーンユーニット」っちゅーものが必要になるらしいんじゃ」

厳かに必要となるアイテムの名を唱えたビィラックだが……何か引っかかるな。マーリョークウンヨーンユーニットー？

まーりょーく……うんよー……ゆーにっと……まりょく、うんよー、ゆにっと……

「……それ、もしかしなくても「魔力運用ユニット（マリョクウンヨウユニット）」じゃね？」

「…………………そうとも言うかもしれんな」

いや絶対そうとしか言わないって。なんだよマーリョークって、ニューヨークの姉妹都市か何かか？

「と、ともかくじゃ！　「古匠」になるためにゃあな、「稼働する機遺装（レガシーウェポン）」と「マリョクウンヨーユニット」が必要なんじゃ！」

「稼働するレガシーウェポン？　ってのはこれでいいのか？」

ゴトリ、と金床に広げられた地図の上に格納鍵インベントリアの格納空間の中から適当に選んだ「規格外武装：太刀型【ハービンジャー】」がオブジェクト化する。今はエネルギーが通っていないのか暗くくすんでいるが、その蒼い刀身は多少の違いはあれど間違いなくあのウェザエモンが使っていたものと同型の武装だ。

「んー……ん？　んん……？？　んんん！？　んんんあ！？」

凄い、驚異の五度見だ。プルプルと震えるモコモコした手で【ハービンジャー】に軽く触れたビィラックは、それが幻覚ではなく本物であると理解したらしい。

「ワ、ワリャ、こここ、これ……」

「ウェザエモンを倒した時にちょっとな。レガシーウェポンってのがこれも該当するかは分からないし、さっき俺が見せたエーテルリアクターを修復しないと稼働しないが……」

「……「古匠」になる為に稼働する機遺装（レガシーウェポン）ち必要になるんは神代の

技を識るためじゃき。稼働する、ってのは「仕組みを理解できる程度には部品が残っている」っちゅー意味じゃ。ほぼ新品のこれならなんの文句もない！」

「そ、そうか……」

今にも跳ね回りそうなビィラックにどこかデジャヴを感じつつも、俺は【ハービンジャー】をインベントリアに戻す。

「分解（バラ）すならあいつらの承認がいるからなぁ……」

クランを結成した後、色々調べた検証の結果分かったことがある。このインベントリアの格納空間は「共用」なのだ。少なくともあの時ウェザエモン戦で入手したインベントリアは全て同じ格納空間に繋がっていた。つまり非常に面倒なことに、インベントリア内に最初から入っていたアイテムは俺、オイカッツォ、ペンシルゴンの三人に所有権がある。

恐らく個人が取り出して使用するだけならまだしも、売却や破棄をする場合は俺だけではなく他二人の承認も必要になるという厄介なシステムだ。

「うむむ……も、問題はもう一つじゃけ。オヤジ曰くマリョクウンヨーユニットはここ……「去栄（きょえい）の残骸遺道（ざんがいいどう）」にあるらしい」

「去栄の残骸遺道……」

その名前はビィラック育成計画以前に俺にとっては無視できない名前だ。いや、この場所ではなく厳密にはこの次のエリアに用があるのだが、どちらにせよこのエリアは攻略の必要があった。

ユニークシナリオＥＸ「致命兎叙事詩（エピック・オヴォーパルバニー）」、その次の段階へ進むに

当たってヴァイスアッシュより課されたお使いクエスト。

・受信装置Δ（デルタ）
・座標装置Δ（デルタ）
・送信装置Δ（デルタ）

　これらのアイテムを集めて来いと言われ、どこにあるのかと問うたところ帰ってきた言葉が「無果落耀（むからくよう）の古城骸（こじょうがい）」……マップで言うのならば現状、いやアプデ前までの攻略最前線の拠点とされていた十五番目の街「フィフティシア」。そこへと繋がる四つのエリアの内の一つであり……「去栄の残骸遺道」を超えた先の街「イレベンダル」から挑む事になるエリアなのだ。

「なんの因果か、フォスフォシエから直通ときたもんだ」

　ヴォーパルバニーの手で作られたのか、サードレマで見かけたものよりも詳細に書き込まれた地図を改めて確認し、目下の目的とこの先の目的を含めてどう動くかの予定を立てる。

「とは言ってもフォスフォシエから真っ直ぐ進むだけか」

　他のエリアに興味がないわけではないが、目的の為に最短を行くのであれば目的地にたどり着く為、次に攻略すべきはフォスフォシエから続くエリア……「奥古来魂（おうこらいこん）の渓谷（けいこく）」だ。

「だが問題はどうやって兎二匹を連れてフォスフォシエを抜けるかだな……」

　流石に白頭巾で街中を駆け回るのはやる気が起きないし、どうも人間に変化（へんげ）する例の魔法も喋るヴォーパルバニーなら全員が使える

ワケでもないらしい。

「またマフラーの術をやるですわ？」

「わちも久しぶりにファーコートの術をやるけぇのう……」

ブルータス、お前もか。

お使いと育成と攻略と（後書き）

うーん、どこかで今現在のマップ描写を入れたいけど文章が無駄に長くなっちゃいそうだしいっそのこと挿絵にしちゃおうか……

ウォーキング・オブ・ザ・エアクリーナー

奥古来魂（おうこらいこん）の渓谷（けいこく）。曰くそこは神代よりもう少し先……今の人類がまだ今の文明レベルまで達していなかった頃に起きた大きな戦争、その決戦の地となった場所なんだそうな。

皮肉にもモンスターの介入によって強制中断を余儀なくされた戦争ではあるが、大量の死者を生み出したその場所には瘴気が蔓延しており、生者を憎むアンデッドの巣窟となっているらしい。

そうして月日は流れ、今ではかつての戦争で死んだ人間のみならず、迷い込んだモンスターや勇敢にもここを開拓しようとした人間をも呑み込み、今もなお死と呪いを撒き散らす危険地帯なんですわ

……

と、言うのが怪談でも話すかのようにわざとらしく低くした声でエムルが説明したエリア「奥古来魂の渓谷」の内容である。

残念だが俺はホラー耐性はそれなりに高い、逃げる系のホラーゲーも後半ショットガンが手に入る系のホラーゲーという名のゾンビシューティングもな。ただでさえ素で理不尽が多いホラーゲーというカテゴリのクソゲーは凄いぞ、陸上選手並みの速度で加速する悪霊とかな、殺意高すぎてギャグゲーだよもはや。

いや、そんな事はどうでもいいのだ。問題は奥古来魂の渓谷というエリアの特性だ。

「エリア全体にエリアボスが放つ瘴気が漂っており、長時間エリアにいると「呪い」状態になる。さらに言えば出現するモンスターの半数がデバフ呪術を使用する、所謂ボスに到着するまでに徹底的に

嫌がらせをするタイプのエリア……」
「だから聖なる力を持つ道具や聖職者を連れて行く必要があるんですわ！」
フォスフォシエで結構なお値段のする「聖水」を購入するか、呪い状態を解除できる「浄化」魔法を使える聖職者系ジョブを持つ者とパーティを組まない限りは延々と呪いに体力を削られ、恒常的に不快感を身体に塗ったくられながら攻略する事になる。なるほど確かに厄介なステージだ、だがな……
「……なぁエムルよ、俺はちょっと強くなりすぎちまったみたいだなぁ」
「そのようですわ……」
「ワリャの周りだけ空気がやけに綺麗じゃのう」
夜襲のリュカオーン以下の力による魔術、呪術の干渉無効という効果。
当人のレベル以下のモンスターは「呪い」保持者から逃げ出すという効果。
この二つのデメリットとメリットの双方を内包するリュカオーンの「呪い（マーキング）」を胴体と足のダブルで保有する俺の周囲は、瘴気が弾か

れる事でやけにフレッシュな空気に満ちている。さらに言えばオイカッツォやペンシルゴンのように特にレベルダウンを受けずにウェザエモン戦の経験値で存分にレベルアップした俺はこのエリアの攻略適正レベルを軽々と超えているわけで……

「見ろよエムルあの一糸乱れぬ動き、生前はさぞや規律に厳しい軍隊だったんだろう」

「もしかしなくてもあれは満場一致で逃げてるだけですわ」

「夜の帝王を恐れちょるとはいえ、ワイバーンゾンビすら飛ぶことを忘れちょるわ」

どったどったと覚束ない足取りで逃げ去って行く腐敗したワイバーンを見送りながら、俺たちはまるで散歩でもするかのように渓谷の底を進んで行く。

「なぁ思ったんだけどさ、これわざわざ渓谷の底に降りなくても上を崖っ淵に沿って進めば良かったんじゃ……？」

「ワリャが自殺志願者ならそれでもいいかもしれんがの、わちはごめんじゃ」

「奥古来魂の渓谷の上にはたーっくさんの水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）が潜んでいるんですわ。一匹にでも見つかれば、十秒もしないうちにその十倍の数の水晶群蠍が……」

ちなみにレベルは100超えだとか。ははは、レベル100オーバーのモンスターが袋叩きを仕掛けてくる？　このエリアの背景ストーリーよりよっぽどホラーだぜ。

まぁメタ的な事を言えば、プレイヤーが横着しないようにする対策であり、水晶群蠍とやらよりも強くなった時に憂さ晴らしとショートカットを兼ねた要素なのだろう。少なくとも時間を短縮してフォスフォシエと次の街「エイドルト」との往復する事はできるのだから。

「ううむ……あくまでもここが通過点なのは承知しているが、こうも楽々過ぎるとなんかこう……喧嘩を売りたくなる」

視線の先、パッカパッカと蹄の音を立てながら近づいてくるモンスターは、俺の姿を見ても逃げるそぶりを見せない。いや、果たして奴らに俺の姿は見えているのだろうか？

「デュラハンってやつか……いいね、「馬と剣士」ならつい最近その究極系と戦ったばかりだ」

騎手、騎馬共に首の無いそれは、生前はさぞや名のある騎士だったのだろう。辛うじて防具としての原型を保っている鎧を纏い、威風堂々とした姿で首なし馬を操りこちらへと近づいてきている。

「せ、先制攻撃するですわ……？」

「待て(ステイ)、待て(ステイ)。もしかしたら理性を残した話せばわかる奴(NPC)かもしれないだろ？」

「たわけぇ！　デュラハンに口などありゃせんわ！」

「うびゃぁあ！　剣を抜いたですわぁぁ！」

「ははは、ご尤もで！　ゴーゴーゴー！　デュラハン狩りだ！　悪い

が瘴気対策は各自でよろしく！」

ちゃんと修復して耐久度を回復した帝蜂双剣を構え、猛進してきたデュラハンへと俺もまた飛び込む。さぁ、新スキル諸々の検証を始めようか！

「点火していこうか、イグニッション！」

戦闘開始時のみ使用可能という非常に使い所の限られる、しかしいかなる戦闘でも確定で使用できるまさしく点火（イグニッション）にふさわしいこのスキルは、戦闘開始から三十秒経過するまでに段階的にＤＥＸとＳＴＲが上昇する。効果時間は一分であるので三十秒でエンジンを温め、残り三十秒で温まり切ったエンジンを解放する……そういうスキルなのだろう。

発動から三十秒間はフルパワーではないとはいえ、ステータスが上がり続けていることに変わりはなく、デュラハンが丸めて固めたような瘴気の球体を放ってくるが、走りながら横に一歩ずれてそれを回避する。

デュラハンにも馬にも首がないので、嘶（いななき）すら聞こえないが予備動作で馬がなんらかのモーションを取ったのは分かる。そして俺を轢いてしまうつもりなのか、減速なしで突っ込んでくる首なし馬とそれに乗るデュラハン。

「大体速度が……発生が……三、二……飛んで今！」

タイミングを合わせ、バックステップで三歩後ろへ跳びのきながら致命刃術【水鏡の月】……参式？　に進化したそれを放つ。

突っ込んでくる首なし馬の数秒後の座標と、【水鏡の月】の当たり判定の位置をバックステップで調整して当てる。ウェザエモン戦でプレイヤースキルが上がったのか、それともステータス上昇による身体のスムーズな動きが理由か、はたまた乱数が良い方に傾いただけなのか。
馬という生物の身体の作りからして、背後からのヘイトに無理やり振り返ろうとすればどうなるか。それも走っている最中に、真逆の方向に注意を向けようとすれば。

「うわ、御愁傷様」

あまりにも無理な体勢で振り向こうとした首なし馬が横転し、慣性と遠心力のダブルコンボで吹っ飛ばされたデュラハンが宙を舞う。それだけならやったぜ、と喜ぶところなのだが、俺がデュラハンを哀れんだ理由は彼？　が吹っ飛んだ方向にスレッジハンマーを振りかぶったビィラックが……

「おどりゃ、吹っ飛びやぁ……メガトンスイング！」

ボゴォン！　と明らかに生半可なダメージでは出せない打撃音が響き、首なし馬から放り出された際の諸々のエネルギーを相殺してなお上回るパワーによって胸部が粉砕されたデュラハンがさらに宙を舞う。他人事ながらこっちまで胸が痛くなってきた……だが容赦はしない。少なくとも「呪い」で逃げなかったということは俺よりレベルが高い相手なのだ、油断していたら死ぬ可能性は十二分にある。
一体どれ程のＳＴＲがあのスイングに込められていたのか、飛距離だけなら首なし馬に吹っ飛ばされた時よりも高い弧を描いてこちらへと飛ばされてきたデュラハン。落ちてきたところを攻撃してもいいが、スキルの試運転も兼ねてちょっとばかしチャレンジしてみ

ようか。

「ムーンジャンパー、そして六艘跳び……！」

「艘」が増えた事で飛距離とスキル補正が付与される跳躍の回数が増加した六艘跳びと、上方向への跳躍に補正の入るムーンジャンパーを使い、重力に捕まり落下し始めたデュラハンの高さまで一息で跳躍する。正直わざわざ空中で攻撃する理由は薄い、だがこういうチャレンジの積み重ねがスキルの新たな発展に繋がるのではと思うのだ。

「目指せ空中ジャンプ……！」

インファイト起動、そして吹っ飛び中の……即ち怯みモーション中のデュラハンに対してヘイト・スタンプルを使用したドロップキックをお見舞いする。傷口に塩を塗り込むようにビィラックによって粉砕された部位にドロップキックが命中し、真下へと叩き落とされるデュラハン。俺もまた空中で体勢を戻して着地……落下ダメージは無視だ無視！　首なし馬はまだ起き上がれてないな、先にデュラハンを片付けるか。

最早エムルのレベルを上回った以上、エムルの力を借りてもそれは寄生プレイではない。

「エムル！　魔法スタンバイ！」

「はいな！」

エムルが加算詠唱（アッド・スペル）を発動したのを確認し、俺はビィラックの位置を確認する。なんか大リーガーよろしく再びスレッジハンマーを構えてるんだが、その顎クイはこっちへ飛ばして来いという意味なの

か。
「上等じゃねーか、ＮＰＣに華を持たせる介護プレイはクソゲーの必須技能だ……！」
ＮＰＣにトドメを刺させないとクリア扱いにならない、ＮＰＣしかエネミーに対しての有効打を持っていない、などはクソゲー以外でもザラなのでアシストプレイというものは重要だ。特にＮＰＣが倒れるとゲームオーバーになるタイプの戦闘はＡＩ次第では地獄の様相を呈する事があるので戦場の制御は嫌でも鍛えられる。
「吹っ飛ばし判定、位置、距離……よしチャート完成！」
詠唱中のエムルを回収して左手で持ち運び、立ち上がるデュラハンへと肉薄。インファイトを起動し、握りしめた右拳で狙うはデュラハンの鳩尾。
「喰らえ、三桁の力を！」
ハンド・オブ・フォーチュンがデュラハンの鳩尾に突き刺さる。痛みに疎いアンデッドと言えど弱点への三桁幸運パンチは無視できないのか、デュラハンの身体がくの字に折れ曲がる。そして左手に持ったエムルをハンドガンを構えるように突きつける。
「名付けて兎銃（ラビットガン）【掌銃座（タレットパルム）】……！」
「っ……！　【マジックエッジ】！」
激しく何か言いたげな様子のエムルであったが、グッとこらえて魔力の刃をデュラハンへと放つ。なんだかんだ俺とオイカッツォの

レベリングに付き合っていたエムルもそれなりにレベルアップしている。
至近距離から放たれたマジックエッジはデュラハンへと外しようもなく命中し、加算詠唱で威力が倍増した衝撃がデュラハンを吹っ飛ばす。そして三度宙を舞うデュラハンの軌道の行き着く先は。
「タイタンブラスト！」
さっきのメガトンスイングがボゴォン！　だとすれば今のタイタンブラストは……そうだな、
「グワァラゴワガキィィン！」
「サンラクサン！　なんかアタシの扱い雑ですわ！？」
「ほうれ人参だぞー」
「わぁい」
適当にエムルへ人参(ワイロ)を差し出しつつ、清々しいまでにかっ飛ばされたデュラハンを見送るのだった。

ウォーキング・オブ・ザ・エアクリーナー（後書き）

実際レベルと似た動きの再現がスキル習得のトリガーなので、色々なアクションを試みることはプレイとしては正解です。

とりあえず「オブ・ザ・デッド」ってつけておくと問答無用でゾンビ出てきそうですよね

鳥ｗｉｔｈ兎's　ｖｓ　合唱髑髏

―――――――――――

ＮＰＣＮ：ビィラック

ＬＶ：９８

ＪＯＢ：　名匠

ＳＪＯＢ：考古学者

ヴォーパルバニー・マスタースミス

ＨＰ（体力）：１７５

ＭＰ（魔力）：５３０

ＳＴＭ　（スタミナ）：１２０

ＳＴＲ（筋力）：１３０

ＤＥＸ（器用）：１２０

ＡＧＩ（敏捷）：３０

ＴＥＣ（技量）：１３０

ＶＩＴ（耐久力）：１６９

ＬＵＣ（幸運）：１３０

スキル

・ベストステップ

・クエイクスタンプ

・ギガトンスイング

・タイタンブラスト

・フォートレスブレイカー

・マテリアルデストロイ

・クリティカルフォーカス

・アナライズ：レガシーＬｖ．４

魔法

・【損傷修復（ダメージリペア）Ｌｖ．ＭＡＸ】

・【破損修復（ブレイクリペア）Ｌｖ．８】
・【緊急鍛造（クイックフォージ）Ｌｖ．４】
・【蓄積研磨（スタックグリンド）Ｌｖ．７】
・【吸収錬刃（ドレインエンハンス）Ｌｖ．７】
・【武装破壊（ブレイカライズ）Ｌｖ．１】
・【武装鍛造（フォージライズ）Ｌｖ．ＭＡＸ】
・【武装強化（ストレングライズ）Ｌｖ．ＭＡＸ】
・【武装進化（エヴォライズ）Ｌｖ．８】
・【武装融合（フュージョライズ）Ｌｖ．６】
・【武装真化（トゥルーライズ）Ｌｖ．４】
・【ランダムエンカウンターＬｖ．３】
・【エンチャント：ハイロブスト】
・【ミラクルマイニング】
・【レガシーセンスＬｖ．３】

装備
武器：王鬼の戦鎚（スレッジ・オウガ）
頭：火見の巻布
胴：兎式鍛治装
腰：兎式鍛治装
足：兎式鍛治装
アクセサリー：炎霊の手袋（イフリートグローブ）
――――――――――――――――

「つっよ」

残された首なし馬を袋叩きにして戦闘を終えた俺はビィラックの

ステータスを確認していたのだが……なんかこの感覚、激しくデジャヴを感じるぞ？　具体的に思い出そうとすると足下から何かが飛び出してきそうな……うっ頭が。

「言うて鉄を打って得た経験での強さじゃき、戦いの経験はワリャにも負けるわ」

「改めて理解したけど俺もエムルもお前に頭ぶん殴られただけで首へし折れかねないんだが」

「わちをなんだと思うとるんじゃ！」

エムルと視線を合わせ、言葉は無くとも互いに考えていることを察した俺達は無言でビィラックへと振り向く。

「言わぬが花ってやつさ……」

「ってやつですわ……」

「エムル、ワリャ……こいつに似てきたの」

「へぇぇ！？」

愕然とした表情を浮かべるエムルだが、エムルもビィラックもそれは一体どう言う意味なんだ？　まぁいい、この手の話題は気にするだけプレイ時間の無駄だ。

「とりあえずデュラハンの素材を回収して……もうちゃっちゃとボスまで行っちゃうか」

モタモタしてるとさらに時間がかかりそうだ……俺が寄り道しまくりそうという意味で、だ。

・喪失骸将(ジェネラルデュラハン)の断首剣
喪失骸将(ジェネラルデュラハン)が持つ、かつては強き力を持っていたのだろう長剣。今は朽ち果て、ただ力任せに肉を断つことしかできない。
対象への首に対する攻撃の際、ダメージに補正が入る。
記憶を、誇りを、愛すらも忘れた骸は己の首すらも失った。故にこそ、取り残された胴体は生者のみならず死者の首すらも狙うのだ。

「なんという八つ当たり」
要するに首をなくしたのでお前らも首を失え、ってことだろう？
完全に八つ当たりじゃねーか。いやしかし仲間のアンデッドも斬首し回っていたならむしろそのキルスコアはプレイヤーに貢献していると言えるのではないだろうか。結局のところ切れ味悪そうだしそのうち売り払う事になるかな。
　錆や乾きへばりついた血によって剣というよりも剣っぽい形をした鉄屑と言うべきそれをインベントリにしまおうとした寸前、ビィラックが俺を呼び止める。
「なぁワリャ、ちぃとそれ貸してみぃ？」
「ん？　ほれ」

ビィラックに喪失骸将の斬首剣を手渡すと、ビィラックは剣をしげしげと眺めて二、三度振ると、得心がいったのか一つ頷き錆び朽ちた剣を掲げる。

「やっぱりな、この剣はまだ死んどらんけ。後でちぃと貸しぃ、元の姿ち取り戻しちゃるけえ」

「へぇ」

使いはしないが、真の姿があると言われれば気になるのがゲーマーの常だ。ちゃっちゃとエリアを攻略して真の姿とやらを拝んでみようじゃないか。

「しかし、今までのエリアと比べるとなんというか、めちゃくちゃシンプルなマップしてるな」

「なんだかんだ言って、真っ直ぐ進めば良いだけですわ」

崖と崖を通過する渓谷を横断する、ではなく崖を崖とを貫く渓谷を縦断するこのマップは最短ルートはただ真っ直ぐ突き進むだけだ。本来ならば瘴気やアンデッドが行く手を阻み、状態異常とデバフに苦しみながら進むものなんだろうが……こちとら人間空気清浄機兼弱者お断りだ、最早ただ散歩しているだけとすら思える。

「ていうかさ、お前らちょっとくらいは自分で歩けよ……」

「歩くの面倒臭いですわ」

「ワリャにくっついとりゃ聖水の節約になるんじゃ、観念せぇ」

確かにエリアボスでどれだけ聖水を消費するか分からないからな、理由としては真っ当なんだが………鳥頭の半裸が頭に白兎乗っけて黒兎をおんぶしながら死体と瘴気が蔓延する渓谷を進む、って絵面としてどうなんだ？

なんか俺の想定するファンタジーとズレているような、いやしかし現実じゃまず体験できない事という観点から見ればファンタジーとしては合格点なのか？

「うーむ……神ゲーとは深山幽谷が如く奥深い……」

神ゲーとは、クソゲーとは、いやそもそもゲームとは……そんな哲学的思考(ひまつぶし)をしていると、気づけばドーム状の黒い霧に包まれた開けた場所へと出る。

「まぁエリアボスだろうな」

軽く触れてみるが別に先客がいて通れないという訳ではなく、どうやらこれがデフォルトのようだ。

「これを潜るんですわ……？」

「頼むぞ鳥の人」

「最早デフォルトなのかその呼び方……よし、行こうか」

　武器を兎月に変えて、俺は靄の中へと侵入する。数秒程煙に巻かれていくような不快感を感じるが、肌を舐める黒い瘴気を抜けるとその中心にこの奥古来魂（おうこらいこん）の渓谷（けいこく）においてプレイヤーを阻む最後の番人（エリアボス）がその姿を見せる。

　炭化したとも、塗料を塗りたくったとも違う、もっと内側から染み出した何かが黒く染めてしまったかのような黒い頭蓋骨。そしてそこから同様に真っ黒な脊髄と何本かの肋骨、そして異様に大きい右腕の骨だけが残ったそれは、欠けた部位を補うようにドス黒い瘴気をローブのように纏っている。

　そして右手には非常に悪趣味な、人のものではない背骨に人の下顎の骨をまるで花弁のように飾り付けた杖を握っていた。

「好きな人はとことん好きそうなスカル野郎だな」

「気をつけりゃ、ありゃあ歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）……ここらの怨念や死を食らって渓谷全体に蔓延する瘴気を作っちょるやつじゃき！」

「ひぇえ、近づきたくないですわぁ……！」

　ははは、少なくともＲ－１８Ｇ指定を受けていないゲームだ。ただの悪趣味なスカルと割り切れば怖くない怖くない。

　ガチでゴア表現で未成年お断りのグロゲーとか３０％の確率で発禁になるご時世だぞ？　悪趣味なスカルモンスターなんてチョチョイノチョイとだな。

「やるなら聖なる属性の付与を忘れるなや、ただの物理じゃ奴にゃあ効かんけぇ」

「……えっ、物理攻撃無効なの？」

俺の発した言葉の意味と、それが意味する事実……俺が聖なる属性の付与なんてものを持ち合わせていないということを理解したのか、エムルとビィラックもまた驚愕の表情で硬直する。

そしてそれを見逃す歌う瘴骨魔(ハミング・リッチ)ではなく、無防備な俺の背中へと瘴気の奔流(シャワー)を浴びせかける。

「うおおっ、なんだなんだ！？」

背筋を刷毛で雑に掃かれたような感覚に己の不覚を叱責しながら振り向けば、表情のない黒い髑髏(しゃれこうべ)の下顎がカクーン、と落ちそうな程に開かれている。ふとある仮説を思い至った俺はステータスを開く。

うん、少し体力は削れているが特に状態異常はないな。

「あー……なんだ、つまり……」

俺は歌う瘴骨魔(ハミング・リッチ)に攻撃する手段がなく、明らかに純魔法職な雰囲気の向こうは瘴気を用いた呪い(カース)が「呪い(マーキング)」を持つ俺に通用しない、と。

奇妙な膠着状態、所謂千日手と呼称される状況……だがそれはあくまでも俺がソロ攻略であった場合だけだ。

「ふふふ……エムル、もっかい兎銃(ラビットガン)【掌銃座(タレットパルム)】の出番らしい」

「またですわぁ！？」

とは言っても、「呪い（マーキング）」が無効化するのは俺に対するバフデバフのみで、普通に攻撃系の魔術や呪術はダメージを受ける。そしてダンボールからトイレットペーパーに逆戻りした俺のＶＩＴで直撃すれば体力もいくらか確保しているとはいえ焼け石に水、死は免れないだろう。

さながら銃弾放火の中を何故か無傷で潜り抜けるイベントシーン中のキャラクターのように人力で歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）が放つ攻撃を回避しながら、タイミングを合わせてラビットガンもといエムルを悪趣味スカルへと突きつける。

「今のお前は単発式リボルバーだ！　ははははＢＡＮＧ！」

「ぴゃぁあ意味わかんないですわぁぁ！？　【マジックエッジ】！」

瘴気の隙間を縫うように歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）へ肉薄し、突きつけたエムルから魔力の刃が放たれる。大ダメージとまではいかないが、それなりのダメージは入っているようで歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）はエムルの攻撃を厭う素振りを見せる。

その隙に何度か斬りつけてみてはいるのだが、骨の部分もやはりというか物理無効らしい。透過してしまう兎月【上弦】をインベントリにしまい、エムルの攻撃一本に絞ることにする。

「ビィラックぅ！　進展はどうですかぁー！？」

「あーもう！　そんに簡単に出来るわけないじゃろうが！」

呼びかけた先、追加の聖水を一気飲みするビィラックが半ギレの様子でこちらへと吠える。その手には使うことはないと思っていた喪失骸将の斬首剣が握られており、ビィラックはそれに対して魔法を行使していた。

と、いうのもまさかの有効打無しという事態にＡＩがお慈悲を与えるべきと判断したのか、ビィラックがこんな提案をしてきたのだ。

「付け焼き刃じゃけぇども、歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）に通じる武器をこの場で作っちゃる」

そう言って喪失骸将の斬首剣を渡すよう言ってきたビィラックを信じ、俺は何度やったかも分からないヘイト集めという名の囮プレイを敢行しているのだ。

「瘴気は奔流、球体、包囲の三種類、闇っぽい地面から飛び出す手、雑魚召喚、後は杖で殴る……移動手段に短距離転移、瘴気の分身と位置交換……」

「ぴゃぁぁあ囲まれましたわぁぁ！！」

「灰吹雪（はいふぶき）に比べりゃベリーイージーだっての……！」

ムーンジャンパー起動、俺とエムルを囲んで押し潰さんとする瘴気を一息で飛び越え、数歩跳び退いて集めたモーションの情報をまとめる。

「全体的に劣化ウェザエモン、だけと瞬間転移が厄介だな……ラン

ダムか？　それとも位置で法則性あり？」

ほぼ反射で動かなければ殺されるレベルのウェザエモンと違い、全体的にスローな歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）のモーションの対応は容易い。だがこれは耐久戦ではなく討伐戦、つまり逃げているだけではジリ貧だ。

それに時折使用する瞬間移動と分身置換、あれが中々に厄介だ。転移先の座標はランダムなのか、それともなんらかの法則性があるのか。検証の必要があるな、エムルで体力を削りつつも転移を誘発させる必要があるな。

「出来たぁ！」

ビィラックが作業の終了を高らかに叫ぶのと、歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）が何やら不審な動きを取ったのはほぼ同時のことだった。

鳥with兎's vs 合唱髑髏（後書き）

これがホントの首置いてけ……なんちゃって

鍛冶魔法は実際便利なので修得しているプレイヤーは結構います。
ただメインで鍛冶職を取っているプレイヤーとそうではないサブのプレイヤーでは効果に差があります。

嗚呼魔法職、嗚呼紙装甲

「ビィラック、なんか来るぞ」

「見りゃあわかる、あとこんだけは伝えとく。今のそいつぁ死神だって切り裂く……じゃが多くて八回、それ以上振り回したら割れるけぇ、直してはやれるがそん場合はまた研ぎ直しじゃ、肝に銘じとき」

ビィラックへと警告を送りつつも、受け取った喪失骸将の斬首剣を手早く確認する。特に何かステータスが変わった様子はないが、実際に持ってみればその違いは歴然だ。

「軽い？　それに随分とまぁ切れ味良さそうな刃に……」

「炉も金床もないけぇ、雑な仕事じゃが研ぎまくった。お陰で割れる寸前まで薄ぅなっちょるが威力と斬れ味は保証するけぇ」

成る程、確かビィラックが持つ魔法の中に【蓄積研磨（スタックグリンド）】ってのがあったな。詳細は知らないが、半ば強引に研磨された喪失骸将の斬首剣は随分とその身を削られてはいるものの、長年の酷使によってこびりついた血錆がこそげ落とされたことで確かに鋼の色を取り戻していた。

「八発以内で倒せと……チャレンジクエストみたいだ」

八発か……流石にそこまで体力の少ないボスじゃないよなぁ。
今の手札でどれだけダメージを叩き込めるか、どうすればダメー

ジを算出できるのか。警戒と同時に思考を巡らせ、情報と制限を纏めて勝利の為の条件を導き出す。

「八発で勝てると信じてやるか！」

「はいですわっ！」

視線の先、歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）の握る杖に炎が宿る。それはただ燃え上がったのではない、悪趣味な下顎の花弁それぞれから発せられたドス黒い血のような炎が欠けた上顎を持つ炎の髑髏（しゃれこうべ）を形作る。

「グギ、ガ、ギギギギギ……」

「クケケケケケッ！　ケケカッ！　カカッ！」

「イイィィィィィ！　ギィィィィィイイイ！！」

「ゲガガガッ！　ガガグッ、ガガガガガ！」

「グゴォォォォアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「ア、ガ――――ラァ――――――！」

呻く髑髏、嗤う髑髏、叫ぶ髑髏、嘆く髑髏、吠える髑髏、そして唄う髑髏……成る程、だから歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）なのか。あれは本体だけが歌うんじゃない、杖に縛り付けられた髑髏六体と本体で歌う七重奏（セプセット）なんだ。

「ふ、増えましたわぁぁ！？」

「……いや、好都合かもしれないぞ」

そして炎は煙となり、煙は瘴気となり、六つに分かたれる。現れたのは歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）と殆どそっくりな……ただ、杖ではなくそれぞれが武器を持っていることと、髑髏の下顎から上がそれぞれの色の炎で形作られた分身が六体……だがこの手の分身攻撃は大体三種類に分けられる。

パターン1、分身自体は一発でも攻撃を加えれば消失するパターン。大体この手の分身は本体を見つけ出すことがメインであるので、一見して本体と区別できる特徴がないことが多い。だからあからさまに本体と異なる分身である今回は当てはまらない。

パターン2、分身は一発で消えるがある程度の攻撃性能を持つパターン。これの場合は分身というよりも固定砲台だ、徹頭徹尾妨害に特化したこのタイプはタイムアタックでは無視して殴るのがベター……話が逸れた、とりあえずこの場においてはある理由から当てはまらない。

パターン3、分身自体が独立したエネミーである正真正銘の分身攻撃。そしてこのタイプは割と少なくない確率で……

「本体と体力ゲージを共有している……と、信じたい……！」

要するに本体である歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）が身を削って作り出した分身であるなら、分身を倒すことで本体にもダメージが入る仕様であればチャンスはある。

「ふぅー……大体八分くらいは経ったか……？」

俺が使える攻撃はあと八回、それら全部を最高火力で叩き込む。
俺の現時点でのスキルには結構な数の発動条件つきのものがある。
それらの発動条件を満たすまでに調べられることは全部調べる。
「諸々込みで検証だ……エムル！　ビィラック！　張っ付け！」
「はいなっ！」
「おうよっ！」
ゲーム開始初期は色々とステータスを捨てていたが、今のステータスなら兎一匹と幼稚園児程度の重さはそう苦ではない……ハンマーはしまってくれ、重い。
こちらへと殺到する五体の分身、そして後方から支援攻撃を行わんとする分身一体と本体。状況は良くない……が、悪くもない！
「杖、剣、槍、弓、斧、双剣……た、盾？」
分身含めてそれぞれが持つ武器を確認するが、一体だけ良く分からない武器を持っている。なんだ、盾にしては小さすぎる。小盾（バックラー）だとしても構えが妙だ。
「グゴォォォァァアアアアア！！！」
「どぉお！？」
そんな小盾……どう見てもドラゴンの首にしか見えないそれを持つ分身髑髏が吠えた瞬間、竜の首から火炎放射器よろしく炎が吐き出される。とっさにドリフトステップで回避行動を取り、距離を離

すが気づいたことが二つ。
一つは避けた先に武器を構える分身が待ち構えていたこと、小癪にも俺は狩りで追い込まれる兎扱いらしい。
そしてもう一つは、俺が思っていたよりもドリフトステップというスキルの汎用性が高いという事だ。
「うっははは！　足がタイヤになった気分だ！」
振り下ろされる剣、突き出される槍、それらを本来人の足では出来ないはずの摩擦と慣性を利用した機動……まさしくドリフトを行い滑るように避けていく。ドリフトステップと言うよりもこれではドリフトスリップだな、だが気に入った。
「め、目が回るですわぁ……！？」
「ぶん回るなら先に言えぇ！？」
「すまんすまん………………もっと振り回すぞ」
馬鹿ではない、だが飛び抜けて優秀(悪辣)でもない分身達のＡＩは俺の後退に実に素直な動きで追随する。追い込まれた時は少し焦ったが、こちらが先手で動く立ち回りであれば二度同じ轍は踏まない。
「そんな中途半端な偏差射撃じゃなあ！」
遠方より飛んできた矢と瘴気玉、まだＬｖ．１故に真価を発揮しきれていないリコシェット・ステップで後退から前身に切り返し、分身達の隙間を抜ける。瞬間的に俺達と分身達の位置が交換され、遠距離攻撃は分身達へと命中する。

「……見た？」

「今確かに……」

「ぐらつきましたわ！」

確定、分身と本体はＨＰを共有している。しかもあの攻撃だけで怯みモーションってことはそこまで体力が多くないのか？　そりゃそうか、俺の場合は「呪い」あってこその単なる魔法使いとの戦いだが、本来ならデバフと呪いの中で戦う妨害地獄なんだ。だが状況は一気に好転したぞ、敵七体、人数三人、自発攻撃八回、前準備……オッケー、勝ちの目は見えた。

「エムル、ビィラック、手っ取り早く作戦説明するぞ」

「お、おぉ、今この状況でか！？」

「はいなっ、どうすればいいんですわ？」

見よ、これが慣れた兎と慣れてない兎の違いだ。なにせエムルは戦いながら作戦会議は当たり前、逃げながら、跳ねながら、転がりながら落ちながら……俺の即興作戦構築に付き合ってきたんだ、慣れてもらわなければ困る。

「…………って段取りで俺とエムルで分身を片付ける、ビィラックは本体付近で待機しててくれ。魔法職とはいえ仮にもエリアボス、トドメの火力はお前に頼らざるを得ないわけだ」

やろうと思えば使い切った喪失骸将の斬首剣をビィラックに修復してもらって、と戦う手段もあるが、折角裏方ＮＰＣのビィラック

を表に引っ張り出したんだ、戦ってもらわなければなんだかもったいない。それにそもそもレベルが上がりすぎた俺はこのエリアの適正攻略レベルを超えてしまっているだろう。

「だったらいっそさっさと通った方がいいかもな」

今の俺には明確な目的があって、ここは通過点も通過点、門前でしかない。こんなところでうだうだ時間潰すのもあんまりだし、何よりレベルの高いＮＰＣの力を頼るシチュエーションはあまり好きではないがそれを嫌厭するのはまた別の問題だ。

「しかし……わちが武器を壊すような事をせにゃならんとは……」

「違うぜビィラック」

「む？」

「武器はいつだって勝つために振るうんだ、ぶっ壊しても勝てないならそれこそ武器に失礼だろ？」

なにやらハッとした様子で目を見開くビィラックだがすまん、これ別ゲーのセリフで俺自身の言葉じゃないんだなこれが。ちなみにこれを言ったキャラはそれはもう全身全霊で戦うキャラでな、ＡＩの融通が利かないせいでどんな敵だろうが自分の装備が壊れる事を代償とした必殺技を初手でぶっ放す超脳筋だった。台詞に忠実にしすぎて木の枝持たせるのが一番コスト的に最適解ってどうなんだそれ。

「というわけで……こっからはノンストップで駆け抜けるぞ！」

「はいな！」

　背中にくっついていたビィラックが分離し、聖水入りの瓶を握りながら黒兎が遠回りに本体へと近づいていく。エムルは俺の頭にしがみつきながらマジックエッジを放ち、ビィラックへとヘイトを向けさせない。

「十分経過……ゲームお約束のモリモリバフをやっていこうか！」

「もりもりー！」

　戦闘開始から十分経過を条件として発動するスキル、オーバーヒート。実に五分間全ステータスに補正が入るという破格のスキルではあるが五分経過した時点で全ステータスが半減する……まさに一時的にエンジンを暴走させるかのような短期決戦用スキル。

　重ねてニトロゲイン。リキャストタイム驚異の一秒、その効果は体力の二割を削る事でＳＴＲとＡＧＩをブーストする自傷版アクセルとも言うべきスキル。むしろこいつの真価はダメージコントロールにある。

　そして重ねて体力減少をトリガーにクライマックス・ブースト、体力を調節できる上にバフもつく、ニトロゲイン様々だね。

「孤高の餓狼（トランジェント）はちょっと使いづらくなったからなぁ」

　餓狼の闘志（ハンガーウルフ）よりも効果量が上がり、効果時間も伸びたのだが発動条件に「自分一人が対象のヘイトを受けている状態」という面倒なものが追加されたせいで使い所の制限がついてしまった。出来ればさっさとスキルを進化させておきたいが……いや、今は重要な事ではない。

「エムル、あの五体を各個撃破するから……一体ずつ弾くぞ。威力はいらん、連射してくれ」

「はいなぁ！」

攻勢に転じた俺は、まず最初のターゲットとしてあの火炎放射野郎を狙う。回り込むように位置を調整し、火炎放射分身が一番最後尾になるように俺を分身達に追いかけさせる。

「むむむ……【マジックエッジ】！」

「ふっ！」

魔法の刃にタイミングを合わせて六艘跳び起動。銃弾とまでは言わないが、本来は走って追いつける速度ではない魔法の刃を盾にこちらへと迫る分身達へとこちらから肉薄する。

「接近まで二歩……ここっ！」

効果適用歩数は六歩。二歩を接近に用い、残り四歩で横縦縦反転の四コマンドで最後尾でこちらを追っていた火炎放射分身の背後を取る。

「その首暑いだろ、取っ払って涼しくしてやるよ」

攻撃スキルはまだ温存して、両手持ちで握った斬首剣を横一線に振るう。首を失くしたドジっ子デュラハンが生も死も分け隔てなく首を斬り続けた刃は、この渓谷を瘴気に沈めた元凶にすら届く。

頚椎を打ち据える喪失骸将(ジェネラルデュラハン)の妄執宿る刃に蘇った切れ味が硬質な骨を斬り裂き、炎噴き出す下顎を頚椎から切り離す。

「バフ盛りクリティカル弱点補正確一……！　エムル、次は斧以外！」

「了解ですわぁー！」

　この場の分身は残り四体、こちらの攻撃は残り七回。火炎放射分身が消えた事で振り返った四体に新たに放たれた魔力の刃、それに応対している隙を突いて次のターゲットは斧持ちの分身だ。俺の接近に気づいた斧持ち分身はこちらへと斧を振り下ろすが、ここでセツナノミキリを起動する。

　元々はパリィスキルから派生したこのスキルはどうもウェザエモン戦をトリガーとして妙な方向に発展したようで。恐らくカテゴリとしてはパリィスキルのままではあるのだろうが、このスキルは攻撃を弾くのではなく……

「後に出しても先に当たれば則ち後の先、をシステムでやってくれるとはね……」

　発動直後に放った攻撃を相手の攻撃よりも先に命中させ、瞬間的な硬直状態を与える。まさに後攻から先手を取る攻撃的なスキルへと変貌したセツナノミキリによって、首を断たれた斧持ち分身が瘴気と散る。この場の分身は残り三体、攻撃回数残り六回！

嗚呼魔法職、嗚呼紙装甲（後書き）

歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）

奥古来魂（おうこらいこん）の渓谷（けいこく）に瘴気を撒き散らしているハザード源。仮に浄化したとしてもエリアに蔓延する瘴気から復活する。

ちなみに本来であれば常時スリップダメージとステータスデバフ、ついでに水を吸いきったティッシュが全身に張り付いたような感覚を感じながら戦うことになる。鬼のようにデバフを叩き込んでくるが、実は本体も分身も弱い。

かつての戦争に参加した魔術師の成れの果て。噂では「性別が男のキャラと女のキャラで結成されたパーティ」の場合分身の攻撃が激しくなるらしい。

レアアイテムは命よりも重い

とは言っても、やはり首のみを狙ってクリティカルを出すのはそう容易い事ではない。二体の分身を斬首し残るは双剣持ちの分身、そして遠方から攻撃を放つ弓持ち分身と本体だ。

「ラ――――――――――！！」

歌いながらまるで舞うかのように双剣で斬りかかってくる双剣持ち分身の攻撃を避けつつ、内心は切羽詰った時間に焦る心を落ち着かせる。分身とはいえエリアボスを一撃で屠れているのはクリティカルによる弱点への攻撃以前に、盛りに盛ったバフによる効果が大きい。

効果時間が切れればリキャストを待たなければならないし、五分を超過すれば俺のステータスは大幅にダウンしてしまう。早急に決着をつけなければならないが、焦るほどに綱渡りは不安定になる。

「……そこっ！」

「ラ、ァ、ギィィ――――ッ！？」

首と背骨を分離された歌う髑髏(しゃれこうべ)の断末魔もそのままに、俺は弓持ち分身と本体の元へと駆け出す。

当然こちらへと放たれる矢と魔法をムーンジャンパーで跳んで回避、エムルの放ったマジックエッジが本体へと飛翔するタイミングに合わせて弓持ち分身の懐へと入り込む。

「うううぅぁぁぁ、なんかぬるっとした！」

「ちょっ！　危ないですわぁ！？」
聖なるエンチャントが付与されていなければあらゆる物理攻撃を透過する、という特性を利用して弓持ち分身の身体に肩が触れる動きで突っ込んで背後を取る。分身の身体を抜ける際に右肩を撫でる気色の悪い感触に思わず悲鳴をあげつつ喪失骸将（ジェネラルデュラハン）の斬首剣で首を斬り飛ばす。
残り使用回数二回、残る敵は……本体ただ一体。
「さぁ、潔く負けを認めるなら介錯してやるぜ？　こう、スパッと」
返事は言葉ではなく魔法。エムルを上にぶん投げると同時、真正面から噴きかけられた瘴気を俺はモロに浴びる。上の方で何やら悲鳴が聞こえるが、きっとこの渓谷に残留する悪霊とかそういう類だろう。
「お前の敗因は……そうだな、あの時の俺と同じだ。運が悪かった！」
気分は嫌になる程死んで攻略法を見つけ出した機械武者が放つ必殺の大上段。構えは揺るぎなく、振るう腕に迷いなく、ただ真っ直ぐに叩き斬る！
「強いて言うなら真似天晴（オマージュテンセイ）ってか」
斬り落とされたのは合唱から独唱になった歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）の首ではなく、腕。外したわけではない、本体が斬撃一発で倒せるとは思っていない。所詮軽戦士にバフを盛って誤魔化しただけの火力では決め手に欠ける。確実に殺しきる……確殺の火力を叩き込まなければならな

い以上、フィニッシャーは俺ではない。

「よく耐えた斬首剣！　あと二回ほど踏ん張ってくれ！」

振り下ろした姿勢から限界まで肘を後ろに引き、真っ直ぐ刃を射出する刺突の姿勢へと移る。

ここまで温存したのはこの為だ。俺はスキル、グローイング・ピアスを起動し、真下から突き上げるように歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）の下顎と首の付け根へと喪失骸将の斬首剣を捩じ込む。グローイング・ピアス、多段ヒットする刺突スキルであるドリル・ピアッサーから正当に進化したこのスキルはヒットすればするほどに威力にボーナス補正が入ると言う効果を持つ。

ヒット数は全部で五回、その全てを刺突に乗せた斬首剣の鋭い切っ先が歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）の骨を穿って進む。

ピシリと剣身にヒビが入り、斬首剣が悲鳴を上げる。だが確かにその刃は砕ける事なく残った。

「やっぱり分身よりも硬いか、俺では倒しきれない…………が、これで終わりだ悪趣味スカル」

切り替わり（スイッチ）。まるで不恰好なネクタイのように首から剣を吊るす歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）の前から俺は数歩後退し、代わりにスレッジハンマーを構えた小さな影が躍り出る。

「すまんの……じゃが、勝つ為にわちはお前を打つ！　マテリアルフォーカス…………フォートレスブレイカー！！」

「………んゃぁぁぁぁあああああへびゅっ！！」

瘴気から逃す為に結構な力で上へ投げ飛ばしたエムルをキャッチす

ると同時、真下から真上へと振り回すビィラックのカチ上げが喪失骸将の斬首剣の柄尻を打ち据える。聞けばウェザエモン戦における騏驎と相対していた二人はこうやってロボに変形した騏驎を倒したんだとか。

「人力パイルバンカー……いや、この場合兎力パイルバンカー？」

「サンラクサンいきなりは酷いですわぁ！」

「はい人参」

「わぁ……じゃなくて！　さすがに誤魔化され」

「なんと今ならオマケで二本つけちゃう」

「わぁい」

「チョロいなぁ」

戦闘職ではないとはいえ、レベル９８のフルスイングによって射出された斬首剣はその総身に亀裂を走らせながらも歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）の髑髏を貫き、後頭部から切っ先を覗かせる。

「カ、ァ…………！！」

断末魔すらも首を穿ち頭蓋を貫く一撃に縫い留められた髑髏では叶わず、斬首剣と同様に全身に亀裂を走らせた歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）は遂にポリゴンとなって爆散する。

「…………ふぅ、見事なバ火力ブッパだったぜ」

「むぐぐ……褒め言葉は受け取っとくが、まずはこいつを直すことが先じゃ！」

カランカランと地面に落ちたヒビだらけの剣を抱え上げ、修理し始めたビィラックを傍目に俺は斬首剣と同じく地面に落ちたドロップアイテムを拾い上げる。

「怨骨の欠片、ねぇ……説明を読む限り魔法、呪術系のアイテムっぽいし使わないかなぁ」

売り払って銭にするくらいが精々だろうか。いや、どうせならインベントリアにでも突っ込んでおくか。

この渓谷に瘴気を撒き散らしていた元凶が倒れた為か、気持ち瘴気が晴れたような気もする渓谷を見上げていた時、ふと思いつく。

「……いやいや、流石に今すぐはないな、うん」

とはいえ、人は開けるなと言われると開けたくなってしまう生き物だ。パンドラの箱なんてお話があるが、あれ絶対神様側もパンドラが箱を開けると分かっていたと思う。じゃなきゃカードゲームの一番下（デッキボトム）にキーカードを入れておくような真似はしないだろ。つまりパンドラは神話クラスの芸人だった可能性が……ああダメだ思考が変な方向に爆走してる、軌道修正しなければ。

「……なんかサンラクサン悪いこと考えてる気がしますわ」

「いやいや、ソンナコトナイヨ」

とりあえずはエイドルトへ向かってランドマークの更新だな。後で

預けるからとビィラックを説得し、ぶー垂れた黒兎からボロボロの剣を預かると、インベントリに放り込んで再び偽装形態……半裸にマフラーとファーコートだけ、という極めて変態的な人間一名という何か色々犠牲にして兎二匹を隠蔽する状態に。
というかそもそもビィラックの大きさとサンラクというアバターのタッパの差が大き過ぎてちっさいマントくらいにしかなっていないというか……いや、変態である事に変わりはないのか、ははは泣ける。

「さて……」

名前的に八つ目の街である「エイドルト」に到着し、一旦ラビッツに戻ってパーティ解消。ビィラックはどちらにせよ斬首剣を修繕したそうだったのでこれ幸いと斬首剣を抱えて鍛冶場へと跳ねていった、エムルはブー垂れていたがなんだかんだ人参と説得で納得させた。別にあいつの兄とかそういうのでは全くないしそもそもＮＰＣだが、エムルのチョロさは少し心配になってくる。
だが今から俺がやろうとしていることは、少なくとも俺一人であることが大前提なのでエムル達と一緒にやることはできない。ちらと横を見れば先ほど通過してきた奥古来魂（おうこらいこん）の渓谷（けいこく）の出口に黒い瘴気が

まるでカーテンのように渓谷内を隠しているのが見える。
きっと誰かがあの悪趣味なスカルと戦っているのだろう。頑張れ誰とも知らぬ同胞(プレイヤー)よ、聖職者ジョブいないと八割詰むぞ。

「さぁ……登るか」

俺の本命は渓谷内ではない。見上げた先に聳える断崖絶壁……とまでは行かないな、頑張れば歩きで登れてしまいそうな急斜面、その先にあるレベル100オーバーの蠍とやらがひしめく奥古来魂(おうこらいこん)の渓谷(けいこく)における隠しエリアとでも言うべき「水晶巣崖(すいしょうそうがい)」が今から俺が向かおうとしている場所だ。
レベル100オーバーのモンスター相手に俺一人で勝つ見込みは……無い！　なら何故行くのか？　そこに未確認フィールドがあるからさ。ゲームなら誰だってやるだろう？　明らかに今の自キャラでは攻略不可能だけどとりあえずどんな場所なのか見に行く、偵察と書いて自殺と読むピクニックってやつさ。
何、おやつは幾らまでだって？　ははは、袋叩きに遭うこと前提で突貫するんだから裸一貫に決まってるだろう。
凝視の鳥面すら外し、わっせわっせと崖を登ること大体四分。斜面を構成する物質が岩100％からポツポツと水晶が混ざり始め、急斜面がいつしか平面になる頃には完全に岩と水晶の比率が逆転していた。

「おぉ……なんて歩きにくいフィールド、足場は最悪(最高)だな」

不規則な大きさ、不規則な角度、不規則な長さの水晶が崖一面を埋め尽くす程に広がる光景は、状態こそ千紫万紅の樹海窟と同じであるがあれよりももっと幻想的だ。
聞く話によると、件の水晶群蠍(クリスタル・スコーピオン)は非アクティブ時はこのフィールドに埋まるようにして擬態しており、感知範囲に入った瞬間アクティ

ブ状態になるらしい。
とはいえ今の俺の幸運は三桁、既に下手なレベルカンスト勢に匹敵する幸運を備えた俺ならそう簡単に引き当てることは……

ズザザザッ（三体同時アクティブ状態）

……………ふぅ。

「まぁ落ち着け。アイムサイトシーイング、イエスイエスノープログレム………畜生せめてマップ内を爆走して景色くらいは見てやるぁぁぁぁぁ！！」

足場が最悪な水晶の地面を半ば飛び跳ねるように爆走し、さらに奥へ奥へと進んで行く。背後から重厚な音を立てながら迫る三体の大型トラック並の死神から全力で逃げていると、ふと前方に光が見える。
それはまるでオーロラ。太陽の光は輝く水晶の中で乱反射し、キラキラと美しい津波となって………うん、あれ全部水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）だ。

「ウッソだろお前一体につき十体呼ぶって重複しないのかぼろぁ！？」

袋叩きと言う言葉すら生ぬるい、レベル７０ちょいのプレイヤー一人相手にレベル１００オーバーが三十体以上でフルボッコを仕掛けると言う、オーバーキルがオーバーフローした大質量に飲まれた俺は一秒と持ち堪えることなく粉砕され、ポリゴンと散るのだった。

この程度で諦めると思うなよ……！

レアアイテムは命よりも重い（後書き）

ラグエル大橋、メリア、ゴゴール。この作品における根幹のモチーフになった作品だったり

明らかに歯が立たない強敵が普通に闊歩してるってイイですよね……

アイテムは中身ではなくガワが重要

攻略推奨レベル１００オーバーであろうエリア、当然そこで得られるアイテムの諸々はオーバーテクノロジーの遺機装（レガシーウェポン）に匹敵するポテンシャルを持っていると言っていいだろう。

少なくとも現在俺達が持つ規格外武装の数々に課せられた制限を考えるに、汎用性という面では神代由来の武器よりもレアアイテムを用いた武器の方が勝っていると思われる。

となれば狙うはいわゆる横着採取、レベル不相応なエリアに自爆特攻を繰り返して本来もっと先で手に入れるべきアイテムを手に入れる……普通のＲＰＧであればゲームのヌルゲー化になりかねない小技だ。

とはいえ世の中には強い武器とレベルの暴力でボスをタコ殴りにするのが楽しくて仕方ない人種がいるのもまた事実。俺はこれを「ホラーゲーにショットガンは是か非か論」と名付けている。

さて、それはともかく挑戦二回目。ラビッツからエイドルトに戻り、ダッシュで急斜面を登って再度水晶巣崖へ突入、今度は息を潜めて隠密行動だ。

「…………あっ、どうも」

バレた、死んだ。次行ってみよう。

挑戦三回目、次はスキルを用いて加速して何かアイテムがないかを調べる。

水晶からウェイクアップした水晶群蠍（トランジェント）がこちらにヘイトを向けた瞬間、ようやく条件を満たした孤高の餓狼の効果が発動する。

オーバーヒートを発動できないのが痛いが、代わりにイグニッション、ニトロゲインによる体力調整とクライマックス・ブースト、オ

フロードに六艘跳びも絡めるスキルフルバーストとも言える全開放で一気に背後から襲いかかる水晶群蠍を引き離す。
そろそろ増援が来るし、他のもアクティブになる。その前にせめてアイテムを……見つけた。
明らかに「ピッケルを叩きつけてね」と言わんばかりの色鮮やかな天然ものクリスタルの塔。地響きが近づく気配を一時忘れて俺はつるはしをインベントリから取り出す。

「よぉおっしゃぁぁぁぁ！！」

ガキンと渾身の力で叩きつけ、零れ落ちた瑠璃色の鉱石を碌に調べもせずにインベントリへと叩き込む。殺到する蠍の群れは避けられない死の暗喩……いや直喩だな、どストレートに殺意叩きつけてている。だが素直に死んでやる程俺は甘くない。
ムーンジャンパー起動、四方八方から殺到する水晶群蠍が唯一いない場所、上空へと全力で跳躍する。数秒後には落ちる身なれど、確かに重力に逆らって空へと踏み入った事で死の大群の殺到を一時は回避に成功した。
眼下に広がる光景はまるでハリウッド映画のハイウェイで玉突き事故を起こす車の群れだ、それぞれが全力で俺のいた場所に突っ込んだために、水晶の甲殻を持つ蠍達は互いの堅牢さが衝突して酷い様相を呈している。
甲殻が割れ、鋏が砕け、酷いものに至っては他の個体に踏み潰されている。
とはいえ今の俺は既に最高到達点へと来てしまった、蝋の羽すらない俺はあとは落ちるだけであって、そして俺の直下は水晶の破片と暴れ狂う蠍が蠢く針山地獄すら生温いサソリ・ミキサー。

「あそこに落ちて落下死は流石にちょっと心折れおごぼっ！」

まさに宙を飛ぶ蝿を箸で掴むかのような見事な達人技。真横から突き出された尻尾針に貫かれた俺は、何やら毒状態になったという事をなんとか突き止め、死んだ。

・アロンカレス瑠璃硬晶
鉱物食モンスターによって永い間圧縮と純化を繰り返される事で生成される極めて魔力濃度の高い水晶体。
硬度自体は然程でもないが、その真価はコーティング剤として用いられた時にこそ発揮される。
鉱物食の生物は鉱石を摂取し、鉱石を排泄し、鉱石を育みそしてその亡骸を鉱石に捧げる。それはまさしく石と命で完結した円環である。

「ふぅー…………こりゃ労力以上の対価臭いな」

ラビッツでリスポーンし、一度ログアウトして昼食を済ませてからログイン。手に入れたアイテムを確認して、あの水晶は宝の山とイ

コールであることを確信する。
とりあえず挑戦の結果分かったことが幾つかある。まず最初に水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の索敵判定。どうやらあの蠍共は非アクティブ時は水晶に擬態するように眠っているが、ある条件を満たせばアクティブ状態になる。おそらくその条件は索敵範囲内の水晶に振動を与えることだ、要するに気づかれたくなかったら空を飛べと。
次に水晶群蠍のＡＩ。そこまで賢くはない、というかぶっちゃけアホに部類される方だろう。ただあの巨体と物量で圧倒するレベル100オーバーに高性能ＡＩまで搭載されたら流石にどうしようもない。ただ、気になるのは俺が真上へ避けた際の大クラッシュだ。

「あれ……甲殻やら何やらが剥がれていたよな？」

もしかするともしかするかも……「そっち」は狙っていなかったが、可能性には挑んでおきたい。さて、それを踏まえて問題点と解決策を洗い出していこう。

「まず最初の問題として、クソ乱数を引けば一歩目でエンカウントするスポーン配置……いや、これは祈るしかないか」

お祈りゲーは嫌いじゃない、だが全編通してお祈りゲーはそれゲームとは言わないよ、絵と音があるおみくじって言うんだよ。
次にあの馬鹿げた索敵精度だ。下手したら水晶にデコピン一発入れるだけでも起動しかねない水晶群蠍にどう対処するか……実はもう答えは出ている。

「言うは易く行うは難し、とは言うけど全くもってその通りで……」

勝手に追突して自傷していくのならば、それを繰り返し続ければ相打ちからの漁夫の利を狙える。が、それをする為には「安全地帯」

の存在が必要不可欠。この場合の安全地帯とはただ攻撃が届かないと言うだけではない、場合によってはヘイトが消えるまで隠れられる場所でなくてはならない。
だがしかし、あの異常とも言える索敵精度に大質量に物量の掛け算、なにより悪路なだけでカテゴリ的には「平坦」と言っていい水晶巣崖には隠れる場所がない、隠れる前に見つかる、隠れても潰される。
「安全地帯……安全地帯……んんんんん…………」
駄目だ思いつかない。空でも飛べれば水晶群蠍の索敵から逃れることができるんだろうが、生憎頭の鳥面は完璧に飾りだ。俺の両腕は哺乳類のものであるし、どれだけ高速で動かしても空は飛べない。
「……しゃーない、乱数がいい方に傾くことを願って突撃を連打するか」
「諦めるって選択肢はないんですわ……？」
「いいかエムル、開拓者は死を恐れない。何故かって？　そこに未知があるからさ！」
「物欲にまみれてますわ……ぷぅ、毎回ゲートを開くアタシの気持ちにもなってほしいですわ！」
ぷんすこ！　とでもSEが鳴り出しそうな様子でエイドルトへ繋がるゲートを開くエムル。何度もゲートを開いてMPが減ったのか、インベントリからMP回復のポーションを取り出して飲んで……
「エムルちょっとストップ」

「んむむ！？」

魔法の液体を喉に流している状態でエムルが硬直し、俺はそれをしげしげと眺める。

「インベントリ……ＭＰ……物質としての消失……再出現………これだっ！」

「んぶふぅっ！？　げほげほっ、一体なんですわ！？」

まさに天啓、俺の灰色の脳細胞が弾き出した答えに俺は思わずエムルを抱き上げて高い高いを行う。

「ナイスアイデア俺！　ナイスアクションエムル！　あっはっは勝ち申した！」

「ぴゃぁぁあ！　水を飲んだ直後に動かすのはやめっ………うぷっ」

「おっと落ち着けエムル、グッボーイグッボーイ……いやグッガールか」

再チャレンジ前にやる事が出来た。だが俺の予想通りに行けば、レベル１００オーバーがひしめく蠍式水晶地雷原を超ヌルゲーで攻略できる。

最早奴らは俺にとって脅威ではなくなった。意気揚々と、足音が響くことすら恐れず俺は水晶が広がる崖の上を進んでいく。索敵範囲に足を踏み入れたのか、三体の水晶群蠍が起動し、こちらへとヘイトを向ける。
このままでは三体の水晶群蠍に蹂躙される未来は避けられない、だが逃げたところで三十体の蠍が俺を押し潰して呑み込んでしまうだろう。

「ふふふふ……結局のところ最後に笑うのはテクノロジーという事さ、文明万歳！　【転送：格納空間（エンタートラベル）】！」

瞬間、世界が切り替わる。
死が質量を持って迫ってきていた水晶地帯ではなく、シャングリラ・フロンティアの文明レベルでは再現すら困難であろう石材ではない金属で構築された奇妙な空間。
ここはインベントリアを持つ者のみが入る事を許された格納空間だ。少し時間を置く必要があるので、初めて入ったこの空間をしげしげと見回す。

「あぁ、そういう風にアイテムが収納されてるのか」

ふと上を見上げればオイカッツォかペンシルゴンが入れたのだろう、モンスターの素材が空中に浮遊している。わずかに青く発光しているのは不思議議力学で浮いている、という表現か。

だがこの場所における目玉は空中に浮かぶアイテムではない。視線を上から真正面に向ければ、そこには四機の鋼と科学によって作られた獣達が静かに佇んでいた。
所謂格納ドック、固定ハンガーでぶら下がるような形で眠るそれらは、名前の通り創作では七つの大罪と同じくらいお世話になる方角を司る獣の形をしていた。

「麒麟がデカすぎるだけで、プレイヤーが使えるのはこれくらいのサイズなのか」

俺はウェザエモンに付きっきりだったから麒麟についてはその姿しか見ていないが、あのダンプカーに足を生やしたような頭の悪い大きさは記憶に焼き付いている。それとは対照的に四機のゴーレム？　は軽自動車よりも少し大きい程度だろうか。あの東洋系ドラゴンっぽいのやフェニックスじゃねーんだよ系バードなんかは羽を広げたり体を伸ばしたらもう少し大きくなりそうだが……おおすげぇ、この亀キャノン砲搭載してる！

「おっといけないいけない……そろそろいいかな？　【転送（イグジット）・現実空間（ラベル）】」

大枚叩いて買い込んだMP回復ポーションを一気飲みし、格納空間に来た時とは逆の現実空間へと戻る起動呪文（コード）を唱える。
サイド世界は切り替わり、サイエンスによって生み出されたファンタジーがファンタジーでファンタジーを形成する水晶地帯へと戻る。

「ふっ、くくくくく……」

思わず呵々大笑したくなる気持ちを押さえつけ、ニヤケ顔のまま俺は周囲を見回して足元に落ちていた水晶の板のような……甲殻を拾

い上げてインベントリへと入れる。

・水晶群蠍(クリスタル・スコーピオン)の纏晶殻(てんしょうかく)

水晶群蠍(クリスタル・スコーピオン)がその身に纏う水晶体の甲殻。極めて頑丈であると同時に魔力を通す事で破損を修復する効果を持つ。
水晶群蠍はその攻撃性故に頻繁に自身の身を破損するが、周囲の水晶を摂取する事で自らの肉体を修復することができる。

「くっ、くふふふふ、ふはははははは！　濡れ手で粟！　採取(バイキング)し放題の時間だぁぁぁぁあっはははははははは！　やっべぇ【転送(エンタートラベル)：格納空間】！」

馬鹿笑いに反応して起動した水晶群蠍八体に囲まれた時は正直肝が冷えた。

アイテムは中身ではなくガワが重要（後書き）

中に入っていたものが本命と思わせて実はそれを入れていた袋が一番ヤバかったというパターン

古今東西、このようなアイテムを人は「四次元ポ◯ット」と呼称するのです

新キャラ出したいし展開進めたいのに設定語りたい欲求と前準備で話が進まない……うごごごご

本来、開拓者はインベントリの容量という制限がある。あまりに物を詰め過ぎればその重さはプレイヤー自身の動きを阻害するという代償を支払わされてしまう。
だが、だがしかし、嗚呼素晴らしき哉格納鍵インベントリア！　格納されていた規格外武装の数々を差し引いても無制限インベントリというだけでお釣りが帰って来る！
そして何よりも、格納空間という完全安全地帯。水晶群蠍のヘイトが霧散するまで格納空間に引きこもり、現実空間へと戻ればあら不思議、そこには非アクティブ状態になった水晶群蠍と奴らが激突の際に落とした大量のドロップアイテム……！

「ふふふ、ふははははは……天才だ、斯様な抜け道を見出す我こそ天才…………！」

思わずやたら強いサイボーグ系中ボス作って最終的に物語終盤で崩落するラボで瓦礫に潰されて死ぬ系のマッドサイエンティストな口調になってしまったが、この方法は極めて有効だ。
なにせＭＰをゴリゴリ削る以外で一切の労力必要なし、ご丁寧に轟音を立ててアクティブ状態になる水晶群蠍が動き出したら引きつけてから転移、しばらくして戻れば大量の素材を確保しつつ確実に前へ進むことができる。
運営にバレたら速攻対策されそうな荒稼ぎ、別にチートでもなんでもないので対策される前に稼ぐだけ稼いでおこう。

「やっぱこういう裏技小技もゲームの醍醐味だよなぁ！」

ガッツガッツとつるはしを振るい、転移を挟みつつMPを回復。手に入れた水晶群蠍のドロップアイテムや採掘した鉱石は全てインベントリアに叩き込めばMP回復手段が尽きるまで俺は荒稼ぎが可能だ。

インベントリア内のアイテム欄に大量のアイテムが溜め込まれていくのをホクホク顔で眺めながら、俺は次の採掘ポイントへと向かうのだった。

「さて……そろそろ持ち込んだ諸々も尽きてきたし、これ以上やると本格的にヌルゲーになりかねないからなぁ。引き上げるか」

三十分ほど掘って逃げてを繰り返し、このボーナスタイムを終える事を決める。

つるはしは使いすぎてぶっ壊れたし、MP回復ポーションも残り一つ……いや、今使ったので0だ。既にインベントリア内には結構な量の鉱石や水晶群蠍の素材が溜め込まれている。

後は適当に水晶群蠍を起動して死に戻りすればいい訳だが……ここで俺はインベントリア内の水晶群蠍のアイテムを見る。

「水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の纏晶殻（てんしょうかく）、断晶鋏（だんしょうきょう）、踏晶爪（とうしょうそう）、靭晶脚（じんしょうきゃく）……針が無いのはおかしいよなぁ」

蠍といえば毒針、古今東西蠍型モンスターのレアアイテムは針と相場が決まっている。それが無いと言うことは即ち水晶群蠍のレアドロップは針ということなんだろう……どうせ挑んで死ぬのなら、狙ってみたいのが人の常。

「とはいえ水晶群蠍はやたら硬い上に足場は最悪、大体十秒で増援……針攻撃を誘発さえできればワンチャンあるか？　いやしかし……」

流石に無理ゲー故、戦術の組み立ては乱数頼りの運ゲーになってしまうが、やってみようか。
俺は辺りを見渡し、見飽きる程に見たが故に何となく分かってきた「潜伏中の水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）」を発見する。
身体のほとんどが水晶で出来ている水晶群蠍を一面水晶のエリアで見つけることは難しい。だがどう誤魔化しても蠍は蠍、どれだけ巧妙に隠れても「形」だけは誤魔化せない。

「特に尻尾なんかは、折り畳むからこそ不自然な形になるから……よし、一体だけだな」

兎月【上弦】【下弦】を構え、足場としてはマシな大きめの水晶の上へとわざとらしく音を立てて着地する。
ピクリと水晶が震えた瞬間……イグニッション、ニトロゲイン連打、クライマックス・ブースト、オフロード、六艘跳び……使えるだけのスキルを全て起動して起き上がる水晶群蠍へと急接近する。
折り畳むようにして隠されていた尻尾が伸ばされ、身体を襲う寒気（ヘイト）を感じた瞬間、さらにスキルを重ねる。

「まずは先駆け一発……！」

右手の【上弦】を軽く真上へ放り投げてインファイト、孤高の餓狼（トランジェント）、一対一の状況でのみ発動可能なデュエルイズムを起動、空いた右手がハンド・オブ・フォーチュンで尻尾の付け根を殴りつける。

「いいっ……たぁぁぁ……！？」

レベルに2、30かそれ以上の開きがあるとはいえ、レベル78がバフを盛りに盛った攻撃でも揺らぎもしない尻尾、そして恐らくあまりの硬さに反動でダメージを受けたのだろう痺れる右拳に、涙目になりつつも落ちてきた【上弦】をキャッチする。
丁度水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の背中に着地する形となった俺は遠くの方から水晶を粉砕する轟音が近づいてくるのを聞き取りつつも、二対の刃で攻撃を仕掛ける。

「せめてヒビくらいは……！」

不安定な足場を踏みしめ、グローイング・ピアスのエフェクトを帯びた兎月の切っ先がハンド・オブ・フォーチュンで殴った場所を穿つ。
1ヒット、2ヒット、3ヒット、4ヒット……5ヒット目は水晶群蠍が尻尾を動かしたことで外れてしまう。そしてその傷口は……未だ無傷。

「やっぱり最低でもレベル99はないと無理か……だが、その時点での全力を叩き込まなきゃ検証にならないよなぁ……！」

視界の端に見える光の津波、一面の水晶を爆砕し、押し出しながら迫る追加の蠍は例えるならブルドーザー、巻き込まれれば水晶片とポリゴンの合挽き肉なる、ということから目をそらせば砕けたクリスタルが光を受けて輝きながら巻き上げられるその光景は美しいと

すら言える。
迫り来る死、現在進行形の死、ズタボロな攻略チャート、千切れかけの綱渡りを全力ダッシュで駆け抜ける。やっぱり無茶難題に挑む時が一番楽しいね。
トン、と軽くバックステップを入れ、ほとんど無防備な姿を眼下の蠍に晒す。鬱陶しい虫ケラが受け身すら取っていない隙だらけの姿を晒しているんだ、ご自慢の針串刺しを見せてくれよ……

「来たあっ！」

突き出される水晶の針。偶然なのかこのモンスターをデザインした製作者が狙って作ったのか、心臓を真っ直ぐ狙うそれを限界まで引きつけ、引き伸ばす。
背中に地面の水晶が、胸に針が、周囲に増援の蠍が来るその瞬間。
「【転送：格納空間（エンタートラベル）】！！」
シャングリラ・フロンティアの現実から俺の存在が消失する。格納空間の床に叩きつけられた俺は噎（む）せそうな衝動を堪えて数を数え始める。
「1…2…3……」
地面に針が刺さる、蠍の群れが俺のいた場所に殺到する、しばらくごたついた後ヘイトを向ける対象がいない事で蠍達は非アクティブ状態に……ここだ！
「【転送：現実空間（イグジットトラベル）】！」
ただ一度っきりのエスケープ。同じ座標に戻るという制限はあるが、

体勢を変えることは出来る。
受け身の取れない仰向けの落下から、次の一手に繋げられる着地の姿勢で水晶巣崖へと帰還、ここから先は一秒一秒を全力で使いきらねばならない。
辺りを見回し、位置を確認……水晶群蠍達は仕事を終えたサラリーマンのように散らばって行く最中。その中に尻尾に大きな亀裂の入った水晶群蠍を捕捉する。
綱渡りは成功した、地面に針が突き立った瞬間に大質量のクラッシュが起きた事で如何に頑丈な水晶群蠍であろうとも……いいや頑丈だからこそ十一体の蠍達による激突を受けてあそこまで破損したんだ。

「貰ったぞレアドロップ……！」

モンスターそのものが生存していても分離した素材はアイテム化することは確認済みだ。ムーンジャンパー起動、尻尾の高さまで飛び上がった俺は、尾にヒビの入った水晶群蠍がこちらへと向き直る前に、一気に肉薄してヒビの一番太い部分に攻撃を叩き込む。
万全の状態ならば通じない一撃も、今にも折れてしまいそうなほどに破損した今ならば最後の一押したり得る。
バキッ、と耐久の一線を越えた音が鳴り、遂に水晶群蠍の尻尾が本体から分離する。まさしく俺の作戦通り、勝利の確信を伴い、それに俺は手を伸ばし……

「あっ」
微笑むだけ微笑みかけておいて、最後の最後で中指を立てる乱数の女神を幻視する。
なんて事はない、折れた後にドロップした針がどこに落ちるのかという乱数で最悪のパターンを引き当てた。ただそれだけだ、ただそれだけ。
そしてその「それだけ」の要素が、俺には綱渡りの向こう岸で笑顔で鋏を持つ悪魔そのものであったということだ。
届かない。滞空中の俺はどう足掻いたところで腕の長さまでが射程範囲。俺とは真逆の方向へ落ちていく針を、どれだけ手を伸ばしても掴む事はできない。
憎らしいほどに優秀な物理エンジンは俺のアバターを重力に従って地面へと落とし、レアドロップはさらに遠のいていく。
「待っ……！」
瞬間、電車と正面衝突したかのような衝撃と共に視界に火花が散る。
真下に落ちる浮遊感は真横へ吹っ飛ばされる衝撃に、それがその場で回転（スピン）した水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の鋏による殴打（ビンタ）であると気づいた時には、俺の身体はポリゴンとなって砕け散っていた。

「あ、サンラクサン戻ってきたですわ……サンラクサン？」

「…………」

エムルの声が聞こえるが、心中をぽっかりと穿つ虚無感に、対応するだけの余裕がない。
何だろう……夢でご馳走の一口目を舌に乗せる寸前に目が覚めたような、小説で全ての謎が解ける瞬間に次のページを燃やされたような、マラソンでゴールラインを超える直前にスタートラインに戻されたような……

「んあぁぁぁぁぁあぁあぁあぁああ……」

「サンラクサン？　ど、どうしたですわ？　なんだか泣きそうな顔してるですわ？」

「ははは……不可能ではない、と分かっただけでも収穫だよな……やってできない事はないってことだもんな……はー空青いなぁ……
……」

「サンラクサン！？　窓から飛び出そうとするのはやめるですわ！？　いやほんとどうしたんですわ！？」

中々にパンチの効いた上げ落としだった、やっぱ乱数ってクソですわ。
一通り弱音を吐き終えた俺は気を取り直すために頬をバシバシと叩き、万が一の破損を避けるために外していた凝視の鳥面を着用する。
「よっし立ち直った……！　エムル、空中ジャンプ覚えようか」
「脈絡！　脈絡が分かんないですわ！」
「人は空を飛べないってことさ」
ちょっとメンタリティに亀裂が入ったのでしばらく水晶群蠍(クリスタル・スコーピオン)は見たくない。
だが結果として見れば相当先でないと手に入らないようなアイテムを大量に手にしたわけで、大勝利といっても過言ではない。
そうとも、出現モンスターの平均レベル１００オーバーのエリアで手に入れたアイテムを使って武器防具を作ったなら、それはもはや廃人の装備をも上回る可能性すらある。
自分で自分を慰め励ますという割と虚しい行為を経て俺のメンタルは八割まで回復する。基本挫折とブチギレ案件しかないクソゲーばかりやっていると、どういう思考(ことば)を使えば自分の心が立ち直るかなんて熟知してるんだよクソゲーマー舐めんな。
「よし、ビィラックに自慢しに行こう」
「よ、よく分からないけどお供するですわ！」
「やっぱり他人に成果を自慢する時が一番心踊るよね」

「割と外道なことだと思いますわ」

俺もそう思うけど主な対象が俺と同類（ペンシルゴン）の外道共（&オイカッツォ）なので差し引き真人間ってことで。

その後、俺が取り出した幻の素材（レアアイテム）の数々に、飛び上がってひっくり返ったビィラックを見ることで俺のメンタルは完全に解決するのだった。

試合に勝って勝負に負ける（後書き）

水晶巣崖
崖の上部を覆いきった水晶の正体は水晶群蠍の死骸や排泄物が長い時をかけて蓄積したもの。
ほぼ金属生命体と呼んで差し支えない水晶群蠍が摂取した水晶に蓄積された魔力を元に成長し、成長の最中で廃棄した水晶や同胞の死骸が積み重なり食べて排泄して死んで……を数百数千回繰り返し続けることで今の状態に至った。
いわゆる採掘ポイントとして存在する多種多様な鉱石の山は水晶群蠍が一度摂取するも身体に合わないと吐き出したもの……つまりあれは蠍達のゲ（設定はここで途切れているようだ）

そして猫と騒動の風が吹く（前書き）

性懲りもなくまーーーーーた予約ミスった大バカ野郎はだーれだ？

私　で　す

はい、連続投稿します、はい。

「こ、こりゃあコーティング剤の覇王と言われちょるアロンカレス瑠璃硬晶……こ、こっちは天蓋の一等星ラピステリア星晶体……ま、まさかっ、ローエンアンヴァ琥珀晶？　このサイズを？　こんなにも……こ、ここ、こりゃあ、アムルシディアン・クォーツ……ほ、本物……？」

「水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の素材各種もあるぞ…………針以外は」

「なんで針だけ無…」

「やめろエムル、それ以上言えば俺は全身から体液を撒き散らして爆散する」

「うええ！？」

いつか、リベンジ、カチコミ、かける。
全く違う方向性の性格だと思っていたが、やはりこの兎達は同じ父を持つ姉妹なのだろう。エムルそっくりな興奮っぷりで俺が取り出した素材の数々を見つめるビィラックを俺は思わず笑みを浮かべながら眺める。

「これらを使って武器とか作れたりする？」

「わちは今、全ケット・シーの夢を叶えちょるんじゃな……宝石になんぞ素材以上の興味が持てんかったが……はぁぁ、ただの石っころに頬擦りするだけでこんなにも幸せになれるんじゃなぁ……」

自身の顔とほぼ同サイズの、夜空のテクスチャをそのまま貼り付けたような宝石に頬擦りするビィラック、流石に微笑ましいを通り越して引くレベルでトリップしてやがる。そのうち口の中に入れて飴みたいにしゃぶりだすんじゃないだろうな。

「…………わっ！！！」

「わびゃああ！？　お、おどりゃ何するんじゃ！！」

「明後日の方向に飛びかけてた理性を戻してやったんだからむしろ感謝しろよ……じゃなくて、これで何か作れるか、って聞いてるんだが」

しばしの沈黙。ビィラックは取り出されたアイテムから幾つかを仕分けるとこちらへと向き直る。

「水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の素材と、これらの鉱石は武器を作るんに使える。じゃがこっちは武器防具には使えん……こいつらは鍛治匠（スミス）じゃのうて宝石匠（ジュエラー）の領分じゃき」

「宝石匠（ジュエラー）？」

「武器や防具じゃのうて身につけることで効果を発揮するアクセサリー、その中でも宝石を用いたものに特化したアクセサリーを作る者のことじゃ」

成る程、格納鍵インベントリアもカテゴリ的にはアクセサリーであるし、武器防具だけではない自身の強化という点では重要なファクターであるわけだ。

今の今までラビッツ以外では半分世捨て人のような行動ばかりだったから、アクセサリーを調べたりなんてロクにしていなかったな。だけとインベントリアで枠が潰れているから今更アクセサリーなんて……いや、よくよく思い返せばペンシルゴンの奴、インベントリアをつけた上であの花飾り装備してたような。もしかしてアクセサリーって一個以上装備できるのか？

「じゃあラビッツにいるアクセサリー職人に……」

「この国にはアクセサリー職人はおるが宝石匠（ジュエラー）はおらん」

「……マジで？」

その場合アクセサリー用鉱石がただの換金アイテムになるんだが、と心なしか宝石達の輝きがくすんで見え始めたその時、何故か顔を顰めながらビィラックは言葉を続けた。

「じゃがな、宝石匠のツテが無いわけじゃあない……わちらヴォーパルバニーと盟友の誓いを結んどる猫妖精（ケット・シー）になら、飛びっきり腕の立つ宝石匠がおる」

「ケット・シー……」

ケット・シー。喋る猫、二足歩行の猫の大体はファンタジーではこれにカテゴライズされるというのが個人的イメージだ。

それなりの数のゲーム……例えクソゲーでも数をこなして来た俺だ、当然ケット・シーを題材にしたゲームはあったし、時に仲間として、時に敵として何度も見て来た。だがこのゲームでケット・シーを見た事はない。

俺の頭の上で小振りな宝石でお手玉をしているエムルや何故かどん

どん顰めっ面が酷くなっているビィラックを見る。兎ですらこれなら、このゲームで猫が喋って二足歩行で歩いたらどれだけの破壊力が……何故か脳裏にアニマリア氏の顔が思い浮かんだ。

「…………わち個人としてはあいつに会うのはひっっっじょぉぉーーーーに不本意じゃが、この宝石達を腐らせる事は、鍛治職人として……物を作る者としてのプライドが許さん。ちょい待ちぃ、今呼んじゃる」

「え、今？」

いやそんな隣の部屋にいるやつを呼ぶような気軽さで呼べるようなもんじゃぁ……

「おう馬鹿猫、ちょっと来いや」

「嗚呼っ！　麗しの黒き乙女よっ！　君に呼ばれればこの僕は例え千尋の谷の奥底に落ちども瞬時に君の元へと舞い戻ろう……っ！」

なんかめっちゃキャラ濃いのが来た。

おそらく転移魔法の類で現れたそれを一言で表すなら「長靴（ブーツ）をはいた猫」であろう。

ビィラックとほぼ同じ大きさ、つまり俺の腰に頭が届くかどうかの大きさの黒猫は、見事な二足歩行の立ち姿に銃士風の服をぴっちり

と着こなした猫銃士とも呼ぶべき姿。腰にはレイピアと思しき細剣を佩いているが、何より目立つのはやはり長靴（ブーツ）だ。
他の装備が見た目よりも実用性を優先したものであるのに対して、ブーツだけが宝石や金属で派手派手しく装飾が施されている。
「むむっ！　君は確か我が愛しの乙女の妹君だったね！」
「エムルですわ。んでこの人がサンラクサンですわ」
「むむ？　何故ラビッツに鳥人（バードマン）が？　いや、腕の形が違う……もしや人間（ヒューマン）？　いやしかし鳥の顔をした人間など聞いたことが……」
「多分人間（ヒューマン）で分類は合ってるぞ」
多種族から人間がなんて呼ばれてるかなんて知らないから確証は出来ない。俺の言葉に猫銃士はしげしげと眺めると、突然何やらポージングをとる。
「であるならばっ！　我が名を告げねばなるまいっ！　そう我こそは剣聖！　吹き荒ぶ旋風（ワイルドウィンド）、猫妖精（ケット・シー）の国「キャッツェリア」が誇る「長靴銃士団」副団長！　アラッツ……ミィィィス！！」
紙吹雪でもまぶしてやれば良いんだろうか。
レイピアを抜き放ち、天へと突きつける姿は堂に入ったものではあるがなにぶん猫であるからして、格好良さよりも愛らしさの方が上回ってしまっている。
何故かアニマリア氏の声が頭の中で再生された。
「バカミースで覚えちょけばええ、カッコつけちょるが中身は悪童（ワッパ）じゃ」

「ああっ！　乙女よ貴女の言葉はいつも氷柱の如く冷たく鋭い、だが貴女の燃え盛る炉の火の煌々たる熱に我が心はまさに雪解けの氷柱が如く……」

ダメだ、これ放置すると延々と漫才を繰り広げるタイプの会話だ。

「あー、自己申告で剣聖って言ってるけど肝心の宝石匠は？」

「ん、おいバカミース。ワリャに……そう、頼み事が、ある」

顰めっ面が極まりすぎて殺気すら漂い始めたビィラックと対照的に太陽が如く顔を輝かせる黒猫……多分名前はアラミース。

「勿論！　勿論だとも乙女よ！　君の頼みとあらば、僕はあのリュカオーンにすら挑んで見せよう！」

いやぁ、流石にリュカオーンに挑んだら死ぬんじゃないかな……ソースは俺。

正しく飛び上がらんばかりに喜びを表現するアラミースにビィラックは深い深い溜息をつくと、己の顔ほどもある宝石をアラミースへと差し出す。

笑顔が熱量を持つのなら太陽と同等な程にニッコニコスマイルを浮かべていたアラミースだったが、ビィラックが両手で抱える宝石を目撃した瞬間、真顔から呆然へと瞬く間に表情が切り替わる。

「…………あー、乙女よ……ええと？」

「そこん鳥の人が取ってきたローエンアンヴァ琥珀晶じゃ。それ以外にも……ほれ」

鳩が豆鉄砲を食ったような顔をする猫、とはなかなかにレアな光景ではないだろうか。
震える手でビィラックが抱える琥珀を受け取ったアラミースはそれをペタペタと触り、頬擦りし、舌を出して舐め……
「やめんか阿呆！」
「はっ！？　僕としたことが、つい我を忘れて……っ！」
「アラミース、ワリャんとこの宝石匠……ダルニャータにアクセサリーの製作を頼みたい。そんもただのアクセサリーじゃのうて、最高傑作をじゃ」
「それは……また……一体この人間は何者で？」
「夜の帝王に認められ、永劫の墓守を打倒したオヤジの舎弟じゃ」
その言葉をビィラックが口にした瞬間、アラミースの目の色が変わる。それは今までの「ラビッツにいる人間」に対してのものではなく、「サンラクという一個人」を見るものだ。
「……しからば、不肖の身ではありますが長靴銃士団副団長「吹き荒ぶ旋風（ワイルドウィンド）」アラミースの名において、必ずや至高の装飾を作ると誓いましょう」
「鳥の人、こん宝石全部使っちゅうことんなるが……ええか？」
「構わんよ、どうせ使わないなら売るくらいしか使い道無かったし」

アラミースが諸々のアイテムを持って転移していき、この場に俺とエムルとビィラックしかいなくなったのを確認し、俺は諸々の疑問を一気に晴らすことにする。

「……キャッツェリアって？」

「ケット・シーの王国じゃ。とはいっても国っちゅーにはちぃとばかし「適当すぎる」んじゃがな」

「ちなみにアラミースとのご関係は」

「……昔、あん馬鹿に武器を作ってやった。そんだけじゃ」

「ちなみにあのアラミースってどんくらい強い？」

「わちよりゃ強い」

そっかー……そうだよなー……ビィラックとタメ張れそうな時点でそんな気はしてた、剣聖とか言ってたし。

「……うん、ちょっと寝てくる。晩くらいからいよいよ古匠を取るための魔力運用ユニット探しだ」

「ワリャ、前々から思っちょったが色々忙しないの……」

「目的地までは全力疾走する派なんだ」

ストーリーを進めながらこつこつレベルアップするよりも、集中して一気にレベルアップするのが性に合ってるもんでね。

「あー疲れた」

時間は……四時くらいか、軽く食事と仮眠を取ってから攻略再開するかな。そんなことを考えながら携帯端末を手に取ると、メールが届いていることに気づく。

未開封は三件、そのうち一件は昔やってたゲームのニュースメールなので気にしなくていい、そして残る二件は……

件名：ちょっと聞きたいことがあるんだけど
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：君今どこにいる？　早急に合流したい案件があるんだけど

件名：サンラク君に質問
差出人：鉛筆戦士
宛先：サンラク
本文：サンラク君今どこにいるかな？　ファイヴァル？　ちょっと直接会って話したいことがあるんだけれども、今晩とか空いてる？

「すげぇ、食虫植物だってもうちょっと上等な罠を張るぞ」
これを直訳すると「厄介事に巻き込まれたので貴様も引き摺り込む」と読み取ることができる。
場所を指定するのではなく、俺の居場所を聞いている辺りがどうにもクサい。他ゲーならともかく、このゲームでの「面倒事」と言うと、十中八九プレイヤー絡みなんだよなぁ……

「ＰｖＰの気分じゃないので旅に出ます探さないでください、あと場合によりインベントリア内の武器一個使い潰してもいいですか……送信」

さて、軽く食事を済ませて寝て……着信音。
とはいえ返事が来るのは予想していたので開いてみれば、片やブチギレ片や苦笑と言ったところか。

件名：ふざけんな！
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：やべー目をした奴らに取り囲まれて延々と「兎を」「サンラク氏にアポイントメントを……」って嘆願され続けてる恐怖分かる！？　俺無関係じゃん！　お前を生贄に快適なプレイを再開するんだから疾く速く居場所を吐くがよろし

件名：いやぁそれがそうもいかなくてね

差出人：鉛筆戦士
宛先：サンラク
本文：流石に「黒狼」の団長様が最大火力ちゃん同伴で直々に交渉持ち込んできたら断れないんだよねぇ
容赦無く上司権限濫用するので居場所を吐きなさい

「んー………………よし」

見なかった事にしよう！

アロンカレス瑠璃硬晶
鉱石としての硬度はむしろ低く、軽く叩くだけでもヒビが入るほど。ただしコーティング剤として武器や防具に塗装した場合、極めて高い魔法抵抗力を武器に与える。通称「コーティング剤の覇王」「英傑の一撫で」「うっかり屋に運ばせてはいけない鉱石」
摂取ではなく塗装しなければ効果を発揮しないため、料理をしない主義の水晶群蠍からは不評。

ラピステリア星晶体
星空をそのまま固めたような美しい宝石。宝石内に瞬く星が多ければ多いほどに蓄積する魔力量が高くなるという特性を持っており、「一等星」クラスともなればピンポン球サイズで小国が買える。通称「天蓋の一等星」「掌の星空」「デレないツンデレ」
極めて多量の魔力を蓄積しているが他の魔力と混ざらない＆変換されないという特性があり、摂取しても体内の異物にしかならないため、健康志向の水晶群蠍からは不評。

ローエンアンヴァ琥珀晶
厳密には鉱石ではなく太古の昔の樹液が固まって出来た琥珀。ただの琥珀ではなく「煌炎樹」と呼ばれる既に絶滅した樹の樹液で出来たものを指す。ごく稀に琥珀内に太古の魔力や生物が封じ込められており、優れた宝石匠であれば封じられた太古の力を現代に蘇らせることができる。通称「琥珀色の煌炎」「太古からの贈り物」「メープル味ではない」
そもそも鉱石ではない上に下手に摂取すると中に封じ込められた魔力などで内側からダメージを受けるため、危険なギャンブルはしな

い水晶群蠍からは不評。

アムルシディアン・クォーツ
必ず完全正六角形で形成される鉱石の中でも最高峰の硬度を誇る漆黒の鉱石。ドラゴンが踏みつけようがブレスを浴びせようが噛み砕こうとしようが傷一つつかなかったという「実績」を持っており、生半可な鍛冶屋では加工以前に傷をつけることすらできない。しかしごく一握りの優れた「匠」と呼ばれる者たちであれば解けた飴細工よりも容易く加工することができると伝えられている。
その名の由来は竜人族（ドラゴニュート）の英雄「アムル」と彼の永遠の相棒とされたドワーフの名匠「シディアン」から取られているが、今の人間の記録からは風化し消失してしまっている。全竜人族とドワーフの憧れであり、彼らはアムルシディアン・クォーツを眺めているだけでご飯が進む。通称「覇槍の穂先」「名工の証」「最高のおかず」
味がしない、舐めても溶けない、噛み砕けない。そんな飴玉に価値はありますか？　そのため、あくまでも鉱石は食べ物と認識する水晶群蠍達からは食べ物に似た非常に紛らわしいものとして不評。

どうしよう、本文書いてる時よりアイテムの設定考えてる時の方が楽しいぞ？

うーん仮眠のお陰ですっきり！　なんだか悪夢を見ていた気がするけど気のせい気のせい！　とりあえず携帯端末の電源は切る。

「さーて……まぁ奴らの話を聞くのは明日でいいだろう」

今日中にビィラックに古匠を取らせておきたい。別に緊急でも義務でもないのだが、人生（プレイ）を生き急ぐのはゲーマーの特権だ。

本音を言えば関われば最後、結構な時間を持っていかれそうな気配がヒシヒシと感じるので後回しにしたい。

「サンラクサン！　おはようですわ！」

「夜だけどな……さて、んじゃまぁ去栄（きょえい）の残骸遺道（ざんがいいどう）だっけか？　ちゃちゃっと攻略しちゃおうか」

「あー、その件でサンラクサンに伝えることがあるんですわ」

伝えること？　なんだろうか。

エムルは遠い目をしながら目を逸らすという器用な真似をしながら、そっと手で一点を示す。

「嗚呼っ！　乙女のっ！　僕を踏みしめる足っ！　悪くない……っ！　と言うか普通に痛い痛いいたたたたたぁぁぁ！？」

「頭ぁイカれちょおとは思っとったが、被虐嗜好まで拗らせとったたとはのう……この際、こんまま踏み潰すんが世の為じゃけぇのう」

「おっほぉ背骨ぇぇぇぇぇぇぇぇえ！！」

あー、うん。そら遠い目をしながら目を逸らしたくもなる。

ちなみに別にログインしていなくてもゲーム内の時間は進む為、聞いたところかれこれ一時間ああしているらしい。

「ていうかアラミース普通に帰ってなかったか？」

「宝石を預けて戻ってきたんですわ。なんでも……げほげほ、あー、あー。「成る程っ！　乙女が新たなる境地に至る為の冒険！　であればこの僕が力を貸さぬわけにはいくまいっ！　安心したまえ、この「吹き荒ぶ旋風（ワイルドウィンド）」が手を貸すからには如何なる敵をも切り裂いて御覧入れようっっ！！」って」

人参をレイピアに見立てて仰々しい口調にポーズ、どうやらアラミースのモノマネであるようだ。

要するにアラミースもパーティに加わる……と、そういう事なのだろう。

「まぁそれは構わないが……ううむ、攻略は攻略で別にすべきか？　いやしかし……」

レベル90クラスのNPC二人を引き連れていれば、恐らく今の俺が適正レベルであろう去栄（きょえい）の残骸遺道（ざんがいいどう）の攻略はなんというか……普通にヌルゲーと化すだろう。

目的はあくまでも「魔力運用ユニット」の入手であるからして、それを手に入れたら戻ってしまうのも手かもしれない。

「んー、よしっ。そこの夫婦漫才（めおとまんざい）コンビ」

「おどりゃ誰が夫婦じゃ！」

「おおっ！　サンラク殿の眼光はまさに真実を見抜く慧眼であらせられ……んにゃあぁぁ肋骨ぅぅぅぅぅ！？」

猫も啼かずば踏まれまいに……

げっしげっしと背中にフットスタンピングされながらもどこか幸せそうなアラミースへと俺は話しかける。

「エムルから聞いたけど、協力してくれるんだって？」

「ええ、ええ。これは僕のみの判断ではなく、キャッツェリアの意向と捉えてもらって結構。我等が王はサンラク殿からの「贈り物」に痛く感謝しております」

「贈り物？　いやあれは全部あげたわけでは……」

「ワリャ、ちょい耳貸しぃ」

トドメの一踏みを食らわせてアラミースを悶絶させたビィラックがちょいちょいと手招きをするので、身を屈めれば、ビィラックは俺の耳元に口を寄せる。

（猫妖精（ケット・シー）は種族レベルで大の宝石好きでな、特にキャッツェリアの宝石匠は腕は確かなんじゃが材料をちょろまかす事でも有名でじゃな……）

（え、マジで？）

（じゃからワリャが集めてきた宝石を全て押し付けてやったんじゃ、わちの見立てじゃあれだけありゃアクセサリーを八つは作れる。そんな量の宝石をダルニャータに独占させることをそこんバカミースが見逃すとも思えん）

ビィラック曰く、恐らくアラミースはまずケット・シーの王に俺が激レア宝石を使って宝石匠ダルニャータに依頼を出したことを伝える。

そして俺がヴァッシュの舎弟であること。七つの最強種（ユニークモンスター）相手に怯まず立ち向かい、あまつさえ打倒した事も伝える。

（オヤジの舎弟って肩書きはな、ラビッツと盟友関係にある種族にとっちゃデカイ意味を持つんじゃ。多分、今頃はキャッツェリア総掛かりでワリャの為にアクセサリーを作っとるけぇな）

（なんかえらい大事になっちゃったなぁ）

俺の言葉に、何故か呆れ顔のビィラック。

「……ワリャ、七つの最強種の一角を張っ倒したっちゅー事実がどんだけの影響力を持つか、分かっとるんけぇ？」

「ちなみに例えばどんな影響が？」

「下手すりゃ戦争が起こる」

「えぇ……」

俺は人畜無害……あーいや、見た目的には有害かもしれないが、清く正しい開拓者なんだが？

「特にワリャの場合、夜の帝王に認められた証も貼っつけとるから
の……半狼（ワーウルフ）や蜥蜴人（リザードマン）の嫁が出来るかもしれんな、くかか」

「えぇ……」

流石にそこまでケモ度が進行した種族はちょっと……俺が見当違い
な事で悩んでいるのを見抜いたのか、ビィラックはため息をついて
首を横に振った。俺の頭は手遅れですってか、はははぶっ飛ばすぞ
こいつめ。

「まぁ英雄になるのも世界の敵になるのも慣れてるし別にいいか…
…んじゃまぁ、行こうか」

「あいよ……さっさと起きんか！」

「頭蓋は！　頭蓋は勘弁してほしい乙女よ！」

ならなんで笑顔なのだアラミースよ。

名前的に八つ目の街「エイドルト」。時間帯が夜ということもあるが、夜道を照らす水晶のランプが道に沿うように規則正しく並んでいる光景は中々に幻想的だ。

近くに水晶巣崖（トラウマスポット）があるためか、エイドルトの建物には全体的に水晶が多く使用されている。店の軒先には水晶を掘って作られた像が置かれているし、建造物の屋根など水晶瓦とでも言うべきもので覆われている。

果ては石畳代わりに水晶、柱の代わりに水晶、防具屋には水晶の鎧、武器屋には水晶の剣……水晶づくし水晶まみれ、どんだけ水晶好きなんだこの街は。

「放っておくと水晶群蠍は延々と水晶を作り続けるんですわ。だからこの街の人間は崖から溢れそうになる水晶を間引いて活用してる……っておと、カシラが言ってたですわ！」

「へぇ、世界観に基づいた根拠があるってのはいいねぇ」

若干狭い視界から薄明かりに照らされた水晶の街を歩きながら進んでいく。ちらほら見かけるプレイヤーが遠目に俺を見ているが、もう気にしない……というか気にするだけ不毛なのではと最近気づいた。

「サンラクサン、もうコソコソしないですわ？」

「なんつーかさ、見つかったところでシラを切ればいいんじゃないかなって最近気づいた。ていうか普通に街の設備使いたいのに使えない状況に自分から突っ込むのは本末転倒じゃね？」

「とはいえ今の状況では目立つべきじゃないと思うけぇのう……」

「ふはは、今の僕はまさに借りてきた猫！　吹き荒ぶ旋風は今ひと時は頬を撫でる夜のそよ風……！」

「暴れんなって」

まさかこの手をまた使うことになるとは思わなかった。祭衣・打倒者の長頭巾の中では後頭部にエムル、背中にビィラック、両手でアラミースを抱えている状態であり、三匹が暴れると白頭巾がその、内側で何かが暴れている化け物のような動きをしているのだ。

プレイヤー達が話しかけないのはこれが理由かもしれないが、とにかく有難い。

まさかこの中にヴォーパルバニーとケット・シーが隠れているとは誰も思わないだろう。時折スクショしても良いかと問われるが、下手に断ってまた無断スクショされても困るし、ついてこられても困るのでそう言ったプレイヤーには適当に応える。

「あの、そのアイテムどうやって手に入れたんですか？」

「なんかサードレマの路地裏にいた怪しい露天商から買いましたね。ランダムエンカなのか、毎回はいなかったけど」

「そうなんですか、ありがとうございます！」

スクショと白頭巾の出所を問うてきたプレイヤーが離れたのを確認し、俺は小声でエムルに確認を取る。

「ピーツってサードレマで人化して露天商やってるんだよな？」

「はいな、サードレマは人が多いしちょろい開拓者が多いから割り増しでふっかけられる、って前言ってましたわ」

「商魂たくましいな」

さて、そろそろエイドルトを抜けて去栄の残骸遺道に辿り着く頃だが……ここでついに俺が想定していた最悪を引いてしまう。

「あー、サンラク……とは君のことかね？」

「……何か？」

やけに渋いシルバーな声に引き止められ、俺は後ろへと振り向く。
その際後頭部、背中、手元の三匹に喋らないよう身振りで合図する。
振り向いた先、そこには誰もいない……かと思えば、視線の少し下にピンク色の頭頂部を視認する。

「私は考察クラン「ライブラリ」のリーダーをしているキョージュと言う者でね、ユニークモンスター「墓守のウェザエモン」を倒したと言う君と、あと二人にも是非話を聞きたいと君を呼び止めたのさ」

ピンク髪のツインテール、碧眼に陶磁器のように白い肌。魔術師と言うよりは魔法少女と言うべきフリルを多用した衣装。
そしてその口から放たれるは声だけでも知性的な気配をひしひしと感じる、老成した男性の声。

「ぷふしゅっ」

「ん？」

「失礼、クシャミです」

馬鹿野郎エムル、堪えろって！　俺が必死になって耐えてるのに！

「ゲーム内でくしゃみ、ねぇ……まぁいいとも。で、今から時間は空いているかね？」

「……今はちょっと」

「ほう！」

見てくれだけは可愛らしい少女のキョージュなるプレイヤーの目が輝いた瞬間、俺は自分の言葉が失言であったことこのキョージュがペンシルゴンと同じタイプのプレイヤーであることに気づく。「今はちょっと」という断り方はミスったな、これだとキョージュの誘いに対する拒否は「今」しか通用しない。故にここから続く言葉は……

「ふむ、では差し支えなければ空いている日時を教えてもらえないだろうか？」

やっぱりそう来るよなぁ。今は無理と言ってしまった手前、別の日に会う約束に繋げるのは自然な流れだ……俺とした事が選択肢をミスるとは。

しばし考え、結論として他になすりつけることにした。

「あー……「墓守のウェザエモン」に関しては俺よりもアーサー・ペンシルゴンってやつの方が詳しいと言うか」

「成る程、彼女か……黒狼が接触すると言っていたし便乗してしまうか……」

すまんペンシルゴン、俺の快適なゲーム生活のための生贄となってくれ。

「成る程、とはいえ君にも聞きたい話はある。今ここでとは言わないが君の時間が空いたのなら、是非話を聞かせてほしい……君がその頭巾？の中に隠しているだろうものについてもネ」

「ははは……」

バレてら。
日本人の特殊スキルである「曖昧な笑顔で流す」を行使するが効果は薄いだろう。キョージュはその見た目とはあまりに不釣り合いな、老獪な笑顔を浮かべるとウィンドウを操作する。

『キョージュさんからフレンド申請が来ました。
「この世界の未知を解き明かすため、是非君の話が聞きたい」』

「ではまた」

軽い足取りで去っていくどピンク少女の後ろ姿を眺めながら俺はため息をつく。

「中身が紳士的なシルバーなのに見た目魔法少女なのは狙ってやってるんだろうか」

しかし考察クランか……正直に言うと考察を主とする者達とは繋がりを持っておきたい、という気持ちはある。

それなりにこのゲームをプレイして分かったが、シャングリラ・フロンティアというゲームはなんと言うか、根本的にこれまでのゲームと異なる点がある。
基本的にゲームというのは過程は何であれスタートとゴールが定められている。それはＭＭＯＲＰＧという実質的にサービス終了のその瞬間までゴールの存在しないゲームであっても同様だ。
例えば新エリアと新ボスが実装されたとしよう。普通であれば新エリアに行くためのフラグがあり、イベントがあり、プレイヤー達は新ボスへと導かれていく、それら全てを総括して物語（シナリオ）というわけだ。
だがシャングリラ・フロンティアは違う、このゲームは全てが手探りなのだ。
このゲームは最初から全てのフラグが巧妙に隠されている。それは隠しエリアであったり特殊な条件であったりと様々であるが、兎にも角にもプレイヤー自身が自分でフラグを見つけ出さなければならない。
真っ暗闇の中をカンテラ一つ持って宝探しをするようなものだ、そして真っ暗闇（せかいかん）を明かす為には考察というカンテラの光でアプローチをかけなければならない。

あの時、消えゆく遠き日のセツナが残した言葉「バハムート」「二号計画」……ただ敵を倒してレベルを上げるだけでは、その終着点はただのストーリー攻略最前線でしかない。
世界観に深く根ざしているユニークモンスター……あの夜襲のリュカオーンのシナリオフラグを立てる為には情報が要る。
「それに世捨て人プレイも飽きてきたしな」
そう誰に言うでもなく呟いて、俺はエセ魔法少女からのフレンド申請を承認したのだった。

世界の暗闇を拓く者（後書き）

「クッソ渋い声の魔法少女」で通じるプレイヤー、ちなみに本人の趣味ではなくキョージュの現実での妻が犯人。
ちなみにキョージュの奥さんはクラン「黒狼」でゴリゴリマッチョのめっちゃ濃い顔のアバターでブイブイ言わせている。

エイドルトは「水晶系武器防具が驚異的安価で購入出来る街」として有名であるが同時に「交通の難易度が高すぎて辿り着くまでに武器防具が充実してしまっている」という矛盾を孕んだ街です。
後々描写するつもりですが街間を「縦」ではなく「横」に移動する場合、エイドルトのみ尋常ではない難易度のためです。

水晶群蠍「おはよう！　死ね！」
歌う瘴骨魔「リア充死ね」
？？？「ハイジョシマス」

それは過去であり、墓標であり、爪痕であり、残滓である。遥かな昔、神代の文明が存在した事は発見される遺跡、発掘されるアイテムから実証されている。

その中でも特に神代のアイテムが発掘される場所として有名な場所といえばやはりここ、「去栄(きょえい)の残骸遺道(ざんがいいどう)」だ。

かつて神代の文明に何があったのか？　何故神代の文明の殆どは失伝し、散逸し、損失してしまったのか？　答えはまだ分からない、だが何となくのヒントはこのエリアに足を踏み入れた瞬間に否応にでも理解できる。

「っはぁー……こりゃあまた、現実離れ(ファンタジー)な光景だ事で……」

見上げた先、このエリア全体をドームの天井のように覆っている、巨大という言葉すらそれを言い表すには不相応な程に巨大な人造の背骨と肋骨に俺は思わず感嘆のため息をつく。

それは生物のものではないだろう。薄暗いとはいえ、リアリティを最重視したゲームではない故にそれなりの明度で見つめる先、中規模な街程度ならすっぽり収まってなお余裕がありそうな程の大きさを持つその背骨と肋骨が生物に由来するものではない……金属を組み合わせて作った道具である事がはっきりと見て取れる。

こんな代物を作る必要があったということ、完全に破損しきったものとはいえこのエリアからは「遺機装(レガシーウェポン)」が発掘されること……何故神代の文明が滅んだのか、答えは分からないが少なくとも「何かと戦っていた」という事だけはハッキリしている。

それがユニークモンスターなのか、それともこのゲームのラスボス

なのか……個人的にユニークモンスターだと困る。こんな巨大な「何か」を作らなければならないような相手は倒せる気がしないからな。

「怪しいのは「バハムート」……いや、今考察すべき事ではないな」

思考が脱線するのは悪い癖だな、まぁそれだけ考える事が多いという意味でもあって不快なものではないのだが。
とはいえエリア考察自体は重要だ、恐らくこの場所は元々は工場か何かだったと思われる。
なにせ、こちらに気づいて近づいてくるゴーレムの腕は工業用と思しきバーナーなのだから。

「デラックスキングメジェド、合体解除！」

頭装備を凝視の鳥面に変更、それと同時に頭にへばりついていたエムルが、背中にしがみついていたビィラックが、手で抱えていたアラミースが俺から分離する。
さながらバーナーを炎の剣のように振り回すゴーレム、だがその動きは巨人系モンスターの宿命として高い威力の代償に速度と精度が死にきっていた。

「強いて言うなら思っていたよりも当たり判定が長いくらいか……」

あとは見た目通り頑丈かつタフネスなデザインのモンスターなのだろう。さて今の自分の火力がどれだけ通るか……と湖沼の短剣【改二】を構えた瞬間、頬を不自然に鋭い風が撫でた。

「？　なん……」

「ははははっ！　彷徨える神代の鉄巨人よ、永き彷徨いにこのアラミースが幕を引いてくれよう！」

えっちょっまっ

「【従剣劇（ソーヴァント）「独奏（ソロ）」・至高の一閃（プライマルスラッシュ）】！」

あと一歩横にズレていたら直撃していただろう軌道で俺のすぐ横を斬撃のエフェクトが飛ぶ。

犯人（アラミース）とバーナーゴーレムの距離は目測5メートルは離れていたにも関わらず、恐ろしい速度の発生から着弾の流れは、バーナーゴーレムの爆砕という結果で威力をアピールする。

「ふふふ……乙女よ、それに君達よ安心し給え、この僕「吹き荒ぶ旋風（ワイルドウインド）」アラミースがいる限り、如何なる敵も障害足り得こうとうぶぁ！？」

「アホか！　アホかおどりゃはぁ！　作業用ゴーレム一体倒すのに対竜規模の技を使っとるんじゃないわ！　この……っ、アホォ！」

対竜規模ですってよ奥さん、下手したら俺の左半身消し飛んでましたよ。

木っ端微塵に吹き飛んだゴーレムからは当然ドロップアイテムなんてものはなく、というかドロップアイテムが落ちていたとしても今の一撃でロストしたっぽいな。

「あー……そうだなぁ……アラミース、悪いが大技ブッパは控えてくれ」

「さ、流石にハンマーは不味あふんっ…………りょ、了解した……」

脳天にゲンコツならぬスレッジハンマーを落とされたアラミースは頭を抑えて悶絶しつつも、俺の言葉を承諾した。

「遅かれ早かれここには来るつもりだったけぇの、わちは色々この場所について調べてあったんじゃ」

「なるほど」

「例えばこの場所では兎にも角にもまぁアホみたいにゴーレムが湧く。それも二種類のな」

「ほうほう」

「まず一つ目に神代の時代のゴーレムじゃ、彼奴らぁは全体的に鈍臭いがその代わりに頑丈じゃ。伊達に神代の頃から動き続けとるだけのことはあるけぇの」

「なるへそ」

「そして二つ目、この場の素材から生まれたゴーレム。こいつらは脆いが何をして来るかわからん」

「よく調べてるんだな、だがな……？」

半泣きでマジックエッジを連射するエムル、早々に大技制限を解かれて高笑いしながら剣を振り回すアラミースを横目に俺はジャガイモに足だけ生やし、されどサイズはスイカ大の「玉ゴーレム」とでも言うべきモンスターを蹴り飛ばしながら叫ぶ。

「そう言う情報は先に言ってくれ！」

「言ったところで結果は変わらんかったじゃろうが！」

「心構えの問題なんだよ！」

「ぴゃぁあ増援ですわぁぁ！？」

今しがた蹴り飛ばした玉ゴーレムが落下地点にいた別の個体にぶつかり……起爆。さらに爆炎は周囲に連鎖する。

「八コンボかな」

「悲報じゃ、九体追加された」

「差し引き黒字かよぁあの野郎！」

視線の先、見ようによっては口を大きく開けた顔に見えないこともないゴーレムが玉切れの様子もなく玉ゴーレムを量産している姿に思わず毒づく。

くそ、出来の悪い粘土細工みたいなツラしてるくせにＡＩが結構賢いぞ。
最高レベル（アラミース）と飛び道具持ち（エムル）がこちらに来る量以上の玉ゴーレムに抑え込まれているのを脇目に、俺はこちらへと迫る玉ゴーレムの群れを見回す。

「……よし、見えたぞルート！　ビィラック、掴まれ！」

「よっしゃ！」

ビィラックが背中に飛びついたのを号砲代わりに、俺は前へと飛び出す。
玉ゴーレムの物量が脅威であることは事実であるが、俺達四体の敵全てを封殺する事は出来ないらしい。
地面を埋め尽くすほどの文字通りの意味で絨毯爆撃を向けられているエムル、アラミースとは違いこちらに来る玉ゴーレムの物量は所々に地面が見える「穴」がある。

「なんだっけかあの粘土のやつ……そうだＣ４だ。信管じゃなくて魔力で起爆ってか？」

ミリタリー系のゲームじゃ大体出てくる粘土状の爆弾。厳密にそれと決まったわけではないが、あの玉ゴーレムの性質はほぼそれに近いものだろう。
自爆系モンスターという、戦闘的な意味でもアイテム集め的な意味でも極めて厄介なモンスターが物量と高性能ＡＩを得る。
なんともまぁ酷いモンスターだとは思うが悔しいことに性能が高いからこそ対策も浮き彫りにされている。

「レベルが一番高い奴以外にも、遠距離攻撃持ちを封じた時点で弱

点を朗読してるようなもんだぜ……！」
六艘跳び起動、高い判断力を持つが「罠」を用いないC４ゴーレムは、最大の脅威たるアラミースと遠距離から自身を屠る可能性を持つエムルの封殺を優先したために、近距離武器しか持たない俺とビィラックへの対処をおざなりにした。
俺はビィラックを背負った状態で跳躍し、迫る玉ゴーレムの隙間を浮島代わりに爆弾の海を跳び抜ける。
「頼むぜ打撃手（ストライカー）！」
「ゴーレムの弱点はぁ……いずれも核じゃあ！　マテリアルデストロイ！！」
俺が攻撃しても良かったが対物攻撃に補正が入るスキルを持つビィラックの方が一撃でゴーレムを屠ることができると言うことで俺は運搬手（キャリアー）に徹する。
聞くにゴーレムの核は神代製の核（リアクター）であっても、現代製の核（コア）であってもその大抵は身体の中心にあると言う。
故に歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）の時と同様に真下から真上へとカチ上げによって、大きく開かれた玉吐きゴーレムの上顎の裏へとスレッジハンマーが叩きつけられた。
「快打（クリティカル）じゃあ！」
「……？　やっべ全員退避！！」
「おりょわっ！」
さながら頭頂部が噴火したかのように砕けた玉吐きゴーレムがびく

りと震える。
不自然な停止からガタガタと震え始めた挙動に嫌な予感を抱いた俺はビィラックの首根っこを掴むようにして抱え上げ、不自然に動きが止まった玉ゴーレムを蹴散らしながらその場を離れる。
エムルとアラミースも距離を離したところで、轟音。

「まぁ吐き出すゴーレムが自爆系なら本体も当然自爆系だよなぁ……」

「なんか落ちてきちょるぞ」

「おっと」

数秒ほどで消え始めた爆煙の中から、爆風で吹き飛んできたのか何かがこちらへと落ちてくる。キャッチすれば、どうやらアイテムのようだ。
極限まで簡略化された人を象った粘土製の……

「埴輪(ハニワ)だな」

「なんじゃこのマヌケヅラ？」

「でもちょっと可愛いですわ？」

インベントリに入れてアイテム説明……

・爆土の偶像
自然発生するゴーレムが稀に生成する小規模な己の分け身。

キャノンボールゴーレムが生成した偶像は強い衝撃を与えることで小規模な爆発を起こす。
爆土の偶像の踊りが最高潮に達した時、土の中より炎が生ずる。

「手榴弾かよ……」

何気にキャッチミスしてたら死んでたな、怖っ。

半裸と愉快な仲間達･ｉｎゴーレムパラダイス（後書き）

クッソどうでもいい豆知識‥ごく稀に美少女フィギュアな偶像が発見され、プレイヤー間で高値で取引される。ちなみに歴代最高額は大人気ＮＰＣ聖女ちゃんそっくりな「天願の偶像」であり、３億マーニで入札された。

過去はいつだって背後から刺して来る

「わちらが探しとるもんはこの場所の表面……ガラクタの山を見回しても見つからん」

「じゃあどうするんですわ？」

「扉を探すんじゃ、マリョークウンヨーユニットーは要するに神代の時代の鍛冶屋が使っていたもんじゃ」

「つまりは工房を探すってことか」

ビィラックが頷くのを横目に、俺達はその工房とやらの入り口を探す。「古匠」を取得するために確実に訪れなければならない場所である以上、千紫万紅の樹海窟のような知っていても見つけるのが困難な秘匿の花園程の見つけづらさではないだろう。

「とはいえこうも残骸が積み重なってると扉を見つけるにしても一苦労だな」

地面に突き刺さるようにしてその身を支えている巨大な肋骨。その内側たるこのエリアはそこら中に何か建造物の残骸があり、機能停止したゴーレムが転がり、その上でそれらが風化によって草が這っていたりするのだ。さらに言えば夜という視界の明度が低くなっていることもあり、若干夜に攻略を始めたことを少し後悔し始める。

「なんかこう、目的地まで導いてくれるお導き的(ナビゲート)なものはないのか？」

「そんに楽ならわちだけで来とるわ、本腰入れて探さにゃならんから今まで来なかったんじゃ」

「なるほど」

あくまでもゲーム故に、ほぼ無限の残機と第三者視点の情報共有が可能なプレイヤーと違い、ＮＰＣからすれば命の保証のない場所で長期間探索をする、というのはそう気軽にできることではない。

セーブした時点で世界そのものの時間が停止するオフラインゲーと、ログアウトしても時間が経過するＭＭＯの違いだな。スローライフ系は普通にリアルの時間とリンクしたりしているが今は関係あるまい。

「となると、別れて探した方がいいか……」

「いや、安全を鑑みて二手に分けた方が良いだろう！　うむ、実に合理的だ！」

なんでそんな……ああ、そういう。

「じゃあどうやって分ける？」

「わちと鳥の人でええじゃろ」

ビィラックよ、アラミースがこの世の終わりみたいな顔で見てるぞ。わざとか？　わざとなのか？

「別れる事は賛成じゃし、アラミースにじゃったら安心してエムルを組ませられるからの」

「おいおい、俺だと不安ってか」

「七つの最強種に嬉々として挑むやつじゃけぇのう……」

うーん、否定できない。だがしかしNPCとはいえアラミースのアプローチを応援してやりたい気持ちも……

「な、頼めるじゃろう？　アラミース」

「乙女の頼みと……あらば……っ！」

あ、お前が屈しちゃうのか。俺の葛藤はビィラックの一言で無力化されるようなものですか、はい。

「……あれ、私の意見はナシですわ？」

「年功（レベル）序列だ諦めろ」

そんなわけで俺・ビィラックペアとエムル・アラミースペアに分かれて目的地の捜索を開始するのだった。

「よいしょっ！」

「おうりゃあ！」

ハリネズミのように全身から壊れた剣と思しきものを生やしたゴーレムの頭がひしゃげる。俺をジャンプ台として跳躍したビィラックの脳天潰しにぐらついたゴーレムの胴体、剣の隙間から覗く宝石のような核を直剣で穿つ。

「いやはやまさか、短剣じゃリーチが足りないとは盲点だった」

核(E)を潰されたハリネズミゴーレムがその形を崩壊(meth)させる。ドロップアイテムではなくあくまでもモンスターの一部という判定であるが故か、地面に散らばった剣もまたポリゴンとなって消える。

残ったのは石を削って作られたのだろう石像。拾い上げて眺めてみれば、どうやら女性騎士を模したものらしい。

・拒剣の偶像
自然発生するゴーレムが稀に生成する小規模な己の分け身。
ソードルゴーレムが生成した偶像は特定のモンスターの気を強く惹きつける。
拒剣の偶像が拒絶する程に、より興味を引いてしまうのだ。

「確信を持って言えるぞ、特定のモンスターってこれ絶対オークとかゴブリンだろ」

女騎士は女騎士でも未成年お断りの方かよ業が深いなオイ。

むくむくと湧いて来た偶像集めの衝動をぐっと堪えつつ、俺は改めてソードルゴーレムにトドメを刺した直剣を眺める。
かつてドジっ子デュラハンの手にあって生死を問わず首を刈り続けてきた血錆の金属塊な姿は何処へやら、わずかに赤みを帯びた美しい剣身を持つツーハンデッドソード……所謂ツヴァイハンダーへと生まれ変わっていた。

「というか前より剣身が伸びてない？」

「元々の姿がそれなんじゃ、あのデュラハンが使い潰してたから長い年月の中で削れて短くなっとったんじゃやけぇ」

「ふぅん……まぁ【双弦月】の取り回し練習とスキル習得には丁度いいかもな」

その名は「焔軍将の斬首剣」。レアエネミーからドロップした武器を修復する、なんて手間のかかる入手条件ゆえに中々に良い性能をしている。
気色悪い肉が腕に融合したり、使い手ごと属性反転したりと派手な能力こそ無いが、喪失骸将の斬首剣時代から引き継がれた……いやむしろこっちが大元なのだろう首への攻撃に対する補正に加えて、驚異的な耐久度が実に素晴らしい。
湖沼の短剣【改二】の五倍といえばその尋常ではない耐久度（タフネス）が分かるだろうか。さらに高熱への耐性も持っているとか至れり尽くせりだ。

「とはいえ、嵩張るからやっぱり双剣かなぁ」

取り回しが双剣と違うという事は立ち回りも変わってくる。この手の大剣未満ショートソード以上の類はある程度の防御が整っていな

ければ使いづらい。
俺のステータスは言わずもがな防御を捨てているので本来はこの手の武器は相性が悪いのだが、【双弦月】という切り札が存在するが故にそうも言っていられない。
ウェザエモン戦を振り返って思ったが、【双弦月】時に使えるスキルが少ないことが問題だ。俺のスキルは殆どが双剣向けの軽い立ち回りと手数を活かしたものだ、だからこそ直剣……いや、合体した兎月は大剣寄りだからその為のスキルが必要だ。

「ただ適正職業以外だとスキル上がりにくいって話だしなぁ」

このゲームにおける職業(ジョブ)と特技(スキル)の関係は少しだけややこしい。
例えば俺がメインで取っている「傭兵(二刀流使い)」、これは二刀流を特に得意とする「傭兵」という職業だ。
基本的に「傭兵」ジョブは魔法を覚えづらく、代わりに武器スキルを覚えやすい。特に剣を用いたスキルと格闘系スキルを覚える職業であるが、二刀流使いが付く俺の場合は双剣、短剣二刀流、対刃剣などの両手に一本ずつ持つ武器種のスキルを覚えやすい。
だがこっちが飛び出せばあっちが引っ込むと言うべきか……双剣系スキルを覚えやすい反面、大剣系スキルを覚えづらいと言うデメリットがある。
まぁ結局のところはレベルと試行を続ければ理論上はどんなスキルでも覚えられない事はないらしいが。
こういうスキル習得に乱数が絡む要素はタイムアタックにおける鬼門であり、さらにいえば乱数が酷いと一気にクソゲー化する危険性を孕みつつもやはりそのランダム性はゲームの世界観をエクステンドするフレーバーとしての……

「つまり乱数はクソということか」

「なんぞ真理に達したようなツラしちょるがな、わちは多分そりゃあワリャの勘違いじゃと思うぞ」

「だろうな……」

思考を今現在の問題に戻そう。言うなれば地図なしに目的地に辿り着けと言われているようなもので、目的地である魔力運用ユニットとやらがある場所……ビィラック曰く「工房」を見つける為には、それこそ名探偵の如き推理を必要としているわけだ。

まず「工房」とはなんぞや、ビィラックは鍛冶師として武器を作る場所をそう呼称したが、メタな視点を持つ俺からすれば工房とはイコールで「生産工場」と読み取ることができる。

ワンオフな武器にせよ大量生産の武器にせよ、超文明が何かしらを作るのならば金床でハンマーを振り回すような場所ではなく、もっとサイエンスな場所であろう。

「となると、建物の形や周囲の状態から……」

少なくとも精密作業を「外敵と戦っている最中地上で行う」なんてことはしないだろう、さらに言えばある程度の自衛手段もあったはず。

そう、例えば警備兼防衛用ゴーレムを周囲に置いたり、とかな。

「ビィラック、明らかに戦闘用っぽい、それでいて迎撃や防衛を前提とした武装のゴーレムが固まってる場所を探すぞ」

「あいよ、わぁった」

ゴーレム、ゴーレム、ゴーレム、ゴーレム。
異様にタフネスなやつか、何をしてくるかわからない奴ばかりと戦闘を繰り返していれば、流石に疲れも溜まる。

「くっそ……なんだよあのマトリョーシカ……切っても切っても中から小さいゴーレムが出てくるし……」

「割れた外殻が動いた時は流石にわちも死を覚悟したわ……」

幸い中身のない卵の殻みたいな状態故に、片っ端からビィラックが粉砕したことでなんとか倒すことができたが、一番小さいサイズのゴーレムに逃げられたのが悔しい。

「骨折り損はやっぱ堪えるな……」

「じゃが、あんゴーレムがいなくなった以上、もはやわちらを止める障害はなくなったっちゅうことじゃき」

視線の先、崩れかけた廃墟の中。今しがたまでマトリョーシカゴーレムが居座っていた場所に鎮座するエレベーターだったもの。
建物の「外側」に身体を向けて機能停止する防衛用の装備と思しき武装のゴーレム達、地下へと続くエレベーター、そして何よりもこ

れまで探索してきた他の建物と違い中に入ることができるという点が非常に怪しい。

「下までどれくらいだろう？」

「……結構深いみたいじゃな」

地面に落ちていた何かのパーツと思しき金属片を開きっぱなしのエレベーターの扉の先に放り投げたビィラックは、その黒い耳をピクピクと動かしてそう結論づける。

「さてどうしたものか……流石に下にクッションがあるとは思えないし……」

確証はないがこの下に存在する地下階層へは結構な深さがあるようで、素手で壁に取り付いて降りられる程イージーなものではないらしい。

そうだな、極力ギャンブル性を削って安全に降りるとするなら……

「縄とかあったら便利だよねサンラク君」

「奇遇だね、丁度ここに大量に縄を持っている考古学者改めトレジャーハンターがいるんだけど」

「おっ助かる、じゃあ早速…………」

ひぇっ

過去はいつだって背後から刺して来る（後書き）

ソードルゴーレム
ハリネズミの如く全身から神代の時代に作られた剣を生やした自然発生ゴーレム。ピンチになると全身の針を射出するお約束な攻撃手段を持っているが、武器はドロップしない。

ネスティングゴーレム
入れ子人形のようにゴーレムの中にゴーレムが入っておりさらに……を延々と繰り返すゴーレム。最終的にゴルフボールサイズの本体まで縮む上に捨てた外殻を遠隔で動かすことができるため油断していると後ろから殴られる。
本体はやたらすばしっこい上に本体が露出した時点で逃げの一手、さらに言えば本体を倒さなければ経験値もアイテムも手に入らないので非常に嫌われている。
なお例の聖女ちゃん似の偶像をドロップしたのがこいつであるため、一時期絶滅レベルで乱獲された。

アルファユニットゴーレムＩＷ４型
腕がバーナーになっている作業用ゴーレム。去栄の残骸遺道を覆う巨大骨組みを「完成」させるべく稼働しているが、既にオーダーが更新されていないために延々と同じことを繰り返している。急ごしらえで迎撃プログラムが組み込まれたために外敵に反応して襲いかかってくる。
彼らの存在意義を証明するものはもはやなく。

「とりあえず言いたいことと殴りたいことは多々あるけど、遺言なら今のうちに聞くよ？」

「遺言の内容に困ってるなら俺に任せてよ、それはもう見事な断末魔（ゆいごん）を叫ばせてあげるから」

にっこりと、仮にも人に顔を見せるのが当たり前の職業に就いているだけあって素人目に見ても見事な笑顔を浮かべ、しかしながら俺の肩と腕をガッチリと……絶対に逃さないようガッチリと掴んだオイカッツォとペンシルゴンに捕まった状態で、俺はさてどうしたものかと割と切実に思考を巡らす。

とりあえず時間稼ぎを兼ねてお約束な感じで……

「き、貴様らどうやってここを……！」

「サンラク君、インベントリアにアイテム突っ込んだでしょ、水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の素材をあんな大量に手に入れてるカラクリは後で吐いてもらうとして、あのモンスターは水晶巣崖にしかスポーンしないんだよねぇ」

「そこから足がついたか……不覚……っ」

「あとはメール飛ばして方向把握したり、どうせ予想の二歩先くらい行ってるから多分既に進んでここだろうって勘もあったけど、まぁ決め手は……」

ペンシルゴンが示した先、状況をうまく飲み込めてないないのか、あわあわした様子で俺とペンシルゴン達を交互に見回すエムル。

「サ、サンラクサンのお知り合いだから案内したの、不味かったですわ……？」

「あー……エムル、覚えておけ……こいつらは場合により簡単に敵に回るから基本的に潜在敵として警戒しなきゃならないんだ」

「ははは、俺と君との仲じゃないかスケープゴート」

「そうだよ、私にとっては二人とも大切な駒……もとい友達なんだからさ！」

聞いたかエムル、この外道共の運用方法は基本的に使い捨てだ。持ち手の部分も刃になってる剣みたいなもんだ、剃刀よりもキレてんなこいつら。

「まぁ茶番はともかくこの下にリアクター修復に必要な条件を満たすためのアイテムがある確率が高いのでとりあえずバンジージャンプしてくれオイカッツォ」

「よし、じゃあ飛び降りようかカッツォ君」

「ああしまった俺がタゲられた！」

戦場ではヘイト管理を怠った奴から死ぬ、俺たちの会話はいつだってキラーパス。

「まぁいいけどさぁ……」

それはそれ、これはこれ。俺がここにいる理由を聞いたオイカッツォは縄を瓦礫にくくりつけると、軽い動きでエレベータードアの奥に広がる穴へと飛び降りた。
シュルシュルと縄を伝う音も遠ざかり、それから暫くして慌てて登って来るオイカッツォ。

「なんかいた？」

「ウェザエモンっぽい感じのスマートなロボが」

沈黙。

「いやいや、流石にあれクラスは無いだろう。あいつ単体で三十分は確定で時間拘束してくるんだぞ？」

「多分ウェザエモンほどじゃあないだろうけど、明らかに高機動型！　ってアピール激しい感じのゴーレムが扉を守ってた」

所謂門番的なモンスターはさっきのマトリョーシカではなく、そっちだったようだ。
オイカッツォの話から地下空間の間取りと門番の位置を聞き、どう攻略すべきかを考える。

「ていうかそこの黒兎と長靴をはいた猫は一体？」

「よくぞ聞いた！　我こそは剣せ」

「オイカッツォ君が喉から手を伸ばしてゼスチャーサインしても手に入らないユニーク由来の鍛治師と剣聖」

その時俺が浮かべていた表情と、オイカッツォが浮かべた表情はペンシルゴンが爆笑するようなものであったと言っておく。

「とりあえず下に降りてその高機動ロボとやらを叩かないことには何も始まらないわけだし、行くか」

一度パーティ解消するのも面倒なので、俺を筆頭とした動物パーティに二人を加える形で三人と三匹の混合パーティが完成する。

「NPCを加えたパーティは結構見るけど、半数がアニマルなパーティは初経験だなぁ」

「いいなーユニークいいなー」

「自然な流れで俺を穴に突き落とそうとするのはやめろ」

縄を伝って降りること十数秒、普通に飛び降りていたらまず間違いなく死んでいた地下空間の床に降り立った俺（アニマルリアクティ

ブアーマー装備）は、地下空間でありながら明度が確保されていることに驚く。

「凄いな、この施設まだ生きてるのか」

「なんか一気にＳＦじみてきたねぇ」

「パワードアーマーやら変形ロボやら手に入れておいて何を今更」

続いてペンシルゴンが、オイカッツォが地下空間へと降りてくる。電気、ではないだろう。何を動力源としているかは不明だが、神代ではない現代の文明では到底再現できないだろう電灯に等しい光量で照らされた直線廊下。

そしてその最果て、明らかに何らかの施設と廊下とを隔てる扉の前に、それはいた。

「直線フィィールドはいつの世もクソフィィールドの名誉を与えられるんだよなぁ……アラミース、あそこまで届くか？」

「威力を絞れば届くだろう、だが一撃で仕留めるのは不可能であろう」

「いや、当たれば十分だ。俺達で時間を稼ぐからその隙に距離を詰めて袋叩きにしよう」

いつ動き出すか分からないので手っ取り早く作戦を相談し、即興の連携を組み上げる。

そしてアラミースがあの発生から着弾までがやたら速い斬撃波を放つ瞬間、頭にエムルを乗せてバフをガン盛りした俺が同時に飛び出した。

「ははは！　ゴーゴーゴー！」

「ぴゃぁぁぁぁぁあ！！」

急速に接近する生体反応（俺とエムル）二つにそれ……漆黒のボディに四つのアームを搭載した人型ゴーレムが起動する。

上二腕が前へと掲げられ、エネルギーシールドが展開される。アラミースの言った通り射程のために威力が削られた斬撃波は障壁にぶつかり打ち消される。

だがそれは囮、斬撃波を盾に射程範囲に飛び込んだ俺が致命刃術【水鏡の月】参式機動、背面を斬り付けられた四つ腕ゴーレムは年月を感じさせない迅速な動きで後ろを振り向く。

「エムル」

「はいなっ」

このタイミングでエムルが分離、四つ腕ゴーレムの真正面にエムルを残しつつ俺は壁へと走る。

この手の狭い直線ステージは何度も経験している。明らかにエリアの広さ以上の太さのレーザーで通路が埋まったり、こっちは狭さに苦しんでいるのに敵は普通にポリゴン貫通して尻尾で薙ぎ払ってきたり、ただ単純に敵の図体で道を塞がれて挟み撃ちにされたり…………あ、なんか腹が立ってきた。

「壁走りは必須技能！」

六艘跳び起動。壁へと跳躍し、足が壁についた瞬間にリコシェット・ステップ起動。

このスキルの真価たる「スキルレベルが上がるほどに跳弾するように壁や天井を蹴ることができる」という効果は未だ発揮しきれていないが、後ろに回る分ならば一回の跳弾で十分だ。

壁を踏みつけ跳んだタイミングに合わせてエムルが四つ腕ゴーレムに攻撃を仕掛ける。【水鏡の月】によってヘイトがニュートラルな状態になっていた四つ腕ゴーレムはエムルへとターゲットを……

「うおっ！？」

俺が背後へと回った瞬間、四本の腕が一斉に俺をターゲットに手のひらを突きつける。成る程、扉に近づくやつを最優先で排除ということか！

四つ腕ゴーレムの人間の倍ある手のひら、何らかの小型リアクターが埋め込まれたそこからレーザーが放たれる。

幸いどれもこれもが俺のいる場所を素直に狙うものであったので回避自体は容易い。これが回避先に置くように照射するようなタイプであったらダメージは避けられなかった。

「とはいえ……俺一人と他五人、どっちを優先すべきかな？」

「乾坤一擲！」

空を裂き、ペンシルゴンのスタミナ全てを食って放たれた黄金の槍がエムルの頭上を越えて四つ腕ゴーレムの腹へと突き刺さる。

「黄、緑、二重混合【拳気「若草衝」】……ポイントストライカー！」

さらに若草色のエフェクトを纏う拳を構え、オイカッツォが槍の石

突きへと肉薄する。左のジャブでマーキングし、右の一撃を叩き込む。手間がかかるということは即ちそれに見合う火力を出せるということ。
四つ腕ゴーレムは眼前の脅威たるオイカッツォに腕を向けようとするが……

「さーてどんな仕組みの扉なのかなー……二兎を追う者は一兎をも得ずって知ってるか？」

扉を守ることが存在理由である四つ腕ゴーレムは扉にぺたりと手で触れた俺に再びヘイトを向ける。
そしてオイカッツォの拳が石突きへと激突、衝撃によって四つ腕ゴーレムは扉の方へと押し出されてくる。

「退きや、そこの男女」

「ありゃ、性別バレしてるや」

「タイタン……ブラスト！」

ダメ押しでさらに叩き込まれるハンマーの衝撃、四つ腕ゴーレムの頑丈な身体をついに貫通した黄金の穂先は、背の装甲を食い破りそのまま真っ直ぐ背後にいる俺へと……いや待て

「あっぶねぇえ！」

「む、すまんの鳥の人」

「貫かれてたら焼き鳥って笑ってやろうと思ったのに」

「こんな金属質なネギが刺さったネギマなんて食えるか！」

「ぶふぅ！　ぷ、くくく……金属ネギマ……ふふふっ」

まさかのペンシルゴンに流れ弾がクリーンヒット、顔を背けて笑いを堪えるペンシルゴンを半目で睨みつつ、俺はショートし始めたゴーレムの膝裏を蹴り飛ばす。

踏ん張った状態ならともかく、腹を貫かれた今の状態では正常な判断も望めないらしい。容易く前へと傾いた四つ腕ゴーレムは膝をついて火花を散らす。

そして、丁度良い高さにまで頭が下がったことで、今度は威力が削がれることなく放たれたアラミースの一撃が四つ腕ゴーレムの顔面へと命中。

アイスピックで氷を砕くように、極限まで研ぎ澄まされた一撃が四つ腕ゴーレムの全身にヒビを入れる。

「そう我こそは剣聖！　吹き荒ぶ旋風（ワイルドウィンド）！」

「あ、それはスキップで」

「えぇえ！？」

長いんだよいちいち。

未知は明かされるまで賢愚善悪を秘する

多分あのゴーレム、本来であればあの四つ腕からレーザーやらシールドやらを乱射してプレイヤーを近づかせないタイプのモンスターだったのだろう。

「だが奴の不運は、こっちがフルアタッカーだったということだな」

「本来ならそれデメリットのはずなんだけどね」

やられる前にやれ、大体のゲームで通用する最強のタクティクスだ。イベントボス的なモンスターであったからか、特にドロップアイテムなどはなく、ペンシルゴンが槍を拾い上げるのを眺める。

「それがメイン武器ってやつか？」

「そだよ、これを手に入れるためにそれはもう苦労したんだよ、なにせ……」

「簡潔に頼むよ」

「分隊相手にソロで１５キル０デス」

マジかよ、ＭＶＰじゃん。
今思えばパワーレベリングの時にちらと見た気がするその槍を器用にくるくると回し、ピタリと止めてポーズを決めるペンシルゴン。

「聖槍カレドヴルッフ、このゲームに五種類しか存在しない「勇者

武器」の一つだよ」

なんでも剣、槍、弓、槌、杖の五種類に一つずつしか存在しないというそれは、所有することで特殊な職業「勇者」を獲得できるカテゴリなのだそうだ。

と、そこまで考えて俺は非常に信じ難い結論に至る。

「……ってことは、お前勇者ってことか？」

「副業だけどね、メインは魔槍使い」

「こんなのが勇者とかシャンフロ終わったねぇ」

「は？　勇者なんて所詮暗殺者とイコールでしょ？」

今この瞬間「勇者がいっちゃダメなセリフ」ランキングが更新されたよ。ちなみについ先程まで一位だったセリフは「君の為なら僕は世界中の人間を殺してみせる（本当に殺しました）」だ。

正史がコレなのだからクソゲーは面白いのだ。凄いよね、ラスボス前までは操作性が少し悪いくらいで明るい王道系シナリオの凡作だったのに、いきなりラストで無辜な民相手に無双ゲーかました挙句、今まで関わってきたＮＰＣをプレイヤー直々に一人一人斬り捨てていかされるんだから。

エンディングのみで一気にクソゲー化した……いやむしろ振り切った邪悪さを持つ神ゲーという意味では邪神ゲーとでも言うべきか。ちなみに見方によっては神ゲーなそのゲームがクソゲーと評される最大の理由は「シナリオ終盤まで絆を育んだ可愛らしいヒロインを真っ先に殺してまで裏切った愛を捧げるポッと出のヒロインが絶妙に可愛くない」である。

キャラモデリングが手抜きというか、他キャラのモデリングと比べ

て明らかに突貫工事で作られた「流し目するゴリラ」相手に愛を捧げなければならないプレイヤーの悲鳴が邪神をクソに叩き込んだのだ。

「いやでも実際、性能面でメチャクチャ強いんだよね「勇者」。デフォルトで残機2みたいなもんだし」

「は？　壊れ職業かな？」

「まぁ勇者武器装備時限定だからそこまで万能でもないんだけど……というかこれどうやって開くのかな？　オープンセサミでも唱える？」

それで開くなら苦労はしないんだがな。四つ腕ゴーレムという門番を差し引いても固く閉じられた扉は叩いて開くような脳筋開錠が通じる作りはしていないだろう。
考えられる可能性としてはどこかにある鍵を入手する、なんらかの条件を達成する、ハッキング、C４、リムペット……あれ、これ結局無理やりこじ開けるしかないのか？

「あー、もしかしてこういう時に使うのかな？」

「どうしたオイカッツォ、これは多分ユニークは関係ないぞ？」

「いい加減しつこいんだけどそのネタ」

「墓まで引きずるつもりだが？」

「よっしゃ今から墓に叩き込んであげるよ」

閑話休題。

「トレジャーハンター、というか考古学者系のジョブが共通で覚えられる魔法に【レガシーセンス】ってのがあるんだけどさ、トレジャーハンターにジョブチェンジした時に【ルインズセンス】ってのも習得したんだよね」

遺跡感覚(ルインズセンス)……成る程、こういった遺跡系で使える系の魔法か。

オイカッツォは扉に触れて魔法を発動、扉に触れた手から木の根のように光が扉全体に走り……弾かれる。

「これレベルが高い程成功率が上がる魔法なんだよね、ついでに言えば今レベル１なわけで……」

「つまり？」

「サンラクの天敵、乱数チャレンジのお時間です」

ちなみにオイカッツォ曰く成功率はレベル１で大体１５％前後だそうです、大体十回挑戦して八回失敗する可能性があるわけだ。

「はぁぁぁぁあ…………」

「な、なんか凄い実感のこもったため息ですわ！？」

「昔サンラク君、三週間くらい乱数外し続けたトラウマがあるからねぇ……」

「ミナココロ大戦記」、このゲームにおけるヒロインの病を治すために「仙丹桃」というアイテムが必要になったのだが、それがまぁ

出ない。三週間ひたすら挑戦し続けて、休日返上で三徹してようやく手に入れた時は、もうストーリーを進める気力すら削がれていた。ユナイト・ラウンズみたいな最初から乱数に期待していないゲームならまだいい、だけど普通の乱数なのに延々と外し続けるのは本当につらい。それがストーリーを進めるために必須の要素だった日にはもう、ね。

そんな必須要素を乱数にする辺りが頭悪いクソゲーの特徴であり、なにが言いたいかと言えば何が悲しくて世界を救う戦いの最中に延々と果樹園で桃を育てなければならないのかと言うことであり、しばらく桃を見るたびに頭痛の胃痛と吐き気と寒気を発症するくらいには桃桃桃もももももももももも……

ちなみにこのゲーム、最終的に流し目ゴリラ(ラスボス)にいきなり恋した主人公が仲間を斬り捨てていくというメンタルを粉砕するトドメ付きだ。

「ミナゴロシ大戦記クリア直後のサンラク君はそりゃあもう荒れててね、ハンドガンとスコップだけ持って敵分隊に突っ込んで壊滅させたり、戦車の中にダイナマイト突っ込んで爆発式ミキサーで合挽き肉を作ったりとそりゃあもうバーサークしてて……まぁ見てる分には最高に面白かったよね、うん」

「敵チームのリスポン地点先読みして地雷原でリスキルしてた奴に言われたくないなぁ」

反応式の地雷の中に遠隔操作の爆弾を仕込む辺りが最高にいやらしい。

そんなこんなでわいのわいのしていると、ヴォンッ、と低い電子音と共に扉が開く。

「まぁ、三週間桃農家になってた奴とは運命力が違うからね」

「この野郎……っていうかルインズセンスってのは鍵開けもできるのか？」

「いや、それがどういう仕掛けなのかを見抜く遺跡前提の鑑定魔法というか……っていうかこの扉「稼働する遺機装（レガシーウェポン）」をを読み込ませれば開くみたいでさ」

あれこそ「作業」の極致だったよ。

嫌な思い出は記憶の隅に掃き捨てて、インベントリアを扉にロードさせたオイカッツォが開いた扉の先に意識を向ける。

「おおすごい、まさにラボって感じだな」

「もう別ゲーレベルだよねぇ」

四つ腕ゴーレムが守り、門が隔てていたその先にあったのは、まさにサイエンスでファンタジーな武器開発ラボ。

所々破損していたりはするものの、殆どが良好な保存状態を保っているこの場所から漂う気配……即ち「アイテムの匂い」はトレジャーハンターではない俺やペンシルゴンでも容易に理解できる。

「よっしゃ家探しだ家探し、魔力運用ユニットってのを探してくれ」

「オッケ、それじゃあそこのアニマル達も散開！」

「ふぅむ……」

視線の先にあるのは「魔力運用ユニット」ではない。何となくタッチパネル式のキーボードに触れたところ、いきなり起動したホログラフィックに表示されたモノに対するものだ。

「なんだっけなこのマーク、ど忘れしたぞ……？」

タコの一番外側の二本以外の触手を抜いたような感じの記号、ええと確か……ああそうだ、これは「Ω（オメガ）」だ。

「大抵切り札とかボス的なものに付けられることが多いがこれは……」

ホログラフィックが形作っているのは少なくともプレイヤーの益になるようなものではなさそうだ。

それをなんと例えれば良いのだろうか、一番手っ取り早く形容するなら「怪獣」だろう。

より人間に近い姿勢の肉食恐竜の上半身に蜘蛛の下半身、怪獣版アラクネとでも言うべき異形の姿はどう見ても味方のそれではない。

ふと思い浮かぶのは地上部分にこれ以上なく存在感を示している人工の背骨と肋骨。あれはこれに対抗するものだったのか？　それとも……

「世界観がイマイチ掴みきれないな」

ＳＦを下地にファンタジーが形成されているのは分かるが、何が何

やら。
虚像の怪物を眺めて首を傾げていると、別の場所でゴソゴソと漁っていたエムルが声を上げる。
「おねーちゃん！　これじゃないですわ！？」
「ん？　ちょいと見せてみぃ……おお、これじゃ！　これがマリョクウンヨーユニットーじゃけぇ！」
エムルが手渡したフルダイブシステムが完成する前のゴーグルタイプのVRみたいなごついゴーグルを見つめて喜びの声を上げるビィラック、どうやらお目当の必要アイテムは手に入ったようだ。
「これがありゃあわちも神代の武器を識ることが出来る！」
「これでようやくリアクターを修復できるわけだ」
ガシッと、俺の肩をペンシルゴンとオイカッツォが掴む。俺はにこやかにそれを振り払うが、二人も二人でめげずに俺の肩を掴んで……
「ええい離せ！　誰が面倒事に自分から赴くか！」
「やかましい！　どうせサンラク君がいたってカスの役にも立たないんだからリアクター修理はそこの黒兎ちゃんに任せればいいでしょ！」
「っていうかいい加減観念しようかサンラク！」
ええい畜生！　であるならば死なば諸共だ！

「分かったよ……観念するよ。ただしつい先程コンタクトを取ってきた考察クラン「ライブラリ」とかいうのも巻き込む」

「あっ、こいつ逃げられないと悟るや周りを道連れすることにシフトしやがった！」

「諸々ひっくるめてぜぇんぶペンシルゴンに押し付けたから覚悟しとけよ……！」

「うーわ！　あのおじいちゃんまじで根掘り葉掘り聞いてくるんだよ！？　なんてことを！　なんてことを！！」

言うなれば死球限定(デッドボール)キャッチボールとでも言うべきか。互いに肉を切らせて骨を断つ理論でデメリットを被りつつも自分以外の奴に別のデメリットを押し付ける醜い争いに、俺たちを見るエムルとビィラックは溜息をつくのだった。

アラミースは尻を抑えて悶絶していた、いやお前何してたんだよ。

ちなみにアラミースは転びかけたビィラックを支えようとして尻に触ったために殴られました

Q．勇者武器のくせになんでプレイヤーキラーに所有されっぱなしなの？

A．命を奪わない武器とか武器たりえないので

勇者専用スキル「アンブロークン」
ＨＰが０になった時、「パーティメンバーが０人もしくは３人以上の場合、最大ＨＰの１０％を回復して復活する」

いい加減逃げててもアレなので観念した俺。とりあえずエイドルトに戻った後、ビィラックとアラミースはラビッツへと転移していったが、何故かエムルだけは残っていてくれと言われた。

「荒ぶるアニマリアちゃんを止めるならエムルちゃんいないと多分ハザードになるよ」

「そんなゾンビ映画じゃあるまいし……何故遠い目をして黙り込むオイカッツォ」

そんなにか、そんなにやばいことになってるのかあの人!?

「もうメール送っちゃったし、そのうち来ると思うけど……」

嫌だなぁ、帰りたいなぁと待ち合わせ場所としてペンシルゴンが指定したＮＰＣカフェで愚痴っていること十分程。薄味のケーキに渋面を浮かべるオイカッツォの姿に少しだけ愉快な気分になっている最中に感じたただならぬ気配。振り返ればそこには電脳のアバターでありながら、ゾンビの如くこちらへとゆらゆら近づいて来る女性プレイヤーの姿が。

「レッツゴースケープゴート」

「くたばれノーユニーク野郎………は、ははは、サードレマぶりですかね?」

ゆらりゆらりとこちらへと近づいて来る……うわぁぁなんか後ろに似たような状態のプレイヤーが一杯いるぅぅぅ！？

怖い、なんだあれゾンビウィルスでも実装されたの？　状態異常「ゾンビハザード」とかなのか？

Ａｎｉｍａｌｉａ（アニマリア）氏の目は真っ直ぐ俺を……いや違う、本能的危険を察知したのか俺の首でマフラーのフリをしているエムルただ一点に注がれている。

「エムル、ヴォーパル魂の見せ所だぞ」

「ここで飛び出すことはヴォーパル魂じゃなくて愉快な自殺ですわ……！」

ついに俺の前へと立ったアニマリア氏。スゴイなー、このゲーム目の血走りすらも再現するんだなーはははは、ショットガンどこ？

『Ａｎｉｍａｌｉａさんからフレンド申請が来ました。
「とりあえずスクショと握手からお願いします」』

スッ（そっとエムルを差し出す）

バッ（エムルが絶望の眼差しでこちらを見る）

「すまんエムル、顧客が求めているのは俺じゃないって言うか」

「あぴゃぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！！？」

アニマリア氏がエムルを抱き上げた瞬間、後ろに控えていたプレイヤー達が一斉にアニマリアとエムルに群がる。

動物大好きクランらしいし酷いことはされないはずだ……多分。

「新鮮なお肉に群がるゾンビ的な……」

「しっ、カッツォ君世の中には心の中に秘めておいたほうがいい言葉もあるんだよ！」

その台詞を言葉にしてる時点で心中フルオープンじゃね？　と思っていると、続々とプレイヤー達が集まって来る。

「随分と急な呼び出しだなペンシルゴン」

「やっほモモちゃん、相変わらず詐称が激しいね」

「やかましいわよ！」

まるで一歩歩くごとに地面が揺れているとさえ錯覚してしまう巨躯のアバターに、あの時の邪悪さをカケラも感じさせない神々しい鎧を纏ったプレイヤー……サイガー０。
そしてその隣にはロングコートに要所を守るアーマー、ペンシルゴンが持っていた「聖槍カレドヴルッフ」によく似たデザインの剣を腰に吊るし、赤毛をストレートな長髪にした女性プレイヤー。
どうやらペンシルゴンとは知り合いらしく、交わす会話は他人同士のものではないだろう。
こちらに会釈をしてきたサイガー０氏に会釈を返しつつ、俺の中の帰りたいメーターが急上昇していくのを感じる。

「……ど、どうも」

「あー、どうも」

この人と話していると西部劇のガンマンになった気分になる。会話のクイックドローー、先手を取るか待ち構えるか……

「何を果し合いのように睨み合っているんだお前は……初めましてかな、私はクラン「黒狼」の団長、リーダーをやっているサイガー100だ」

「これはどうも」

「君の噂は聞いている、リュカオーンを相手に「呪い」を二つも受けたプレイヤーとは是非話がしてみたかった」

お陰様で半裸生活も板についてきたけどな、おのれリュカオーン。俺がサイガー100氏と握手していると、何故かサイガー0氏の方にガン見されて帰りたいメーターが限界振り切りそうだ。

「おや、私が最後だったかな？」

ひょい、と。椅子を他所のテーブルから引っ張ってきたピンクの魔法少女が俺たちのいた席につく。よっこらせ、と言いながら腰掛ける様と声は実におじさん臭いのだが、見た目は魔法少女である。なんだこの矛盾の塊。

「やぁサイガー100君、ウチの家内は迷惑をかけていないかね？」

「…………マッシブダイナマイトさんは新大陸挑戦組です、一番はしゃいでましたよ」

会話の流れからしてキョージュのリアルの奥さんのプレイヤーネームがマッシブダイナマイトということになるんだが、プロレスラーのリングネームか何かか？
そんな俺の疑問を他所に、相変わらず彼女は心が若いなぁと呟きながら魔法少女……キョージュがこちらへと視線を向ける。

「いやはや、まさかフレンド申請したその日のうちにお呼ばれされるとは思わなかった。お陰で年甲斐もなく全力疾走してしまったよ」

「まぁハブにするのもあれかと思ったので」

嘘です、ペンシルゴンを道連れにする為に呼びました。
とはいえ、中々に凄いメンツが集まったな。最前線のクラン「黒狼」のナンバーワンと最大火力、全体的にやべーやつしかいないアニマリア氏と他諸々、考察クランのエセ魔法少女……うん、これただのイロモノ集団なんじゃ。

「えー、というわけでこの度はご足労いただき感謝いたします。僭越ながら最近足を洗って綺麗さっぱりＰＫを卒業したアーサー・ペンシルゴンがこの場の進行役をさせてもらいます。あー……そこの動物好きクランも要件があるんでしょー、人間性を取り戻してねー」

「人間性を取り戻してね、って普通に生きてたら聞かない言葉だよなぁ」

「あっ、サンラクこの野郎！　離せ！」

お前だけ逃すわけないだろーう？　スケープゴートに手を噛まれることは想定してなかったってかぁ？　甘いな。

しれっとこの場を去ろうとしていたオイカッツォを捕獲していると、ペンシルゴンが俺を指差す。

「まぁ、ウチの人間ツチノコことサンラクがようやく捕獲されたので、お三方からの打診に一気に答えちゃうべく今回集まってもらいました」

「誰がツチノコだ！」

「サンラク君さ、自分が専用スレ立てられてること知ってる？　捜索班とかいるんだよ？」

「え、まじで？」

確かに極力プレイヤーに関わらないように今の今までプレイしてきたわけだが、いつの間にか俺の与り知らないところで事態は進んでいたらしい。

「まぁそれはどうでもいいとして、少なくとも「黒狼」からの打診の半分と、「ＳＦ－Ｚｏｏ」からの打診はサンラク君にしか解決できないんだよね」

「…………」

俺はそっと視線をサイガー１００とアニマリアへと向ける。サイガー０氏とどんな関係かは知らないが、彼女は先程リュカオーンについて口にしていた。恐らくはそれ関連だろう。そしてアニマリア氏、これに関しては上に投げたリンゴが何処に落ちるかより簡単な問題なので考えるまでもないだろう。

「お先にどうぞ、我々ＳＦ－Ｚｏｏの打診は後で結構」

「良いのか？」

「少なくとも今現在非常に満ち足りているから」

先程までのゾンビ的様子は何処へやら、ツヤツヤとした様子でにこやかに黒狼に先手を譲るアニマリア氏。先程からエムルの声がしなくなったのが非常に不安なのだが大丈夫だよな？
後ろの人の塊の中でエムルがバラバラになってたとかないよな？

「では単刀直入に……我々クラン「黒狼」はユニークモンスターについての情報が欲しい。特に夜襲のリュカオーンの情報をね」

サイガー１００のストレートな要望に、俺はしばし考え込む。

「我々「黒狼」の最終目標は「夜襲のリュカオーンの討伐」……なんだが恥ずかしい話、今の今までユニークモンスターとまともに戦ったことがない。さらに言えばユニークモンスター「墓守のウェザエモン」を君達が倒した今現在でも、ユニークモンスターについては強い、以外の情報を持っていないんだ」

無論情報に対する報酬は支払うつもりだ、と言葉を締めたサイガー１００は真っ直ぐにこちらを見つめてくる。
成る程、夜襲のリュカオーンとユニークモンスターというシステムに関する情報が。確かに、夜襲のリュカオーンに関しては俺しか答えられないが、もう半分はペンシルゴンでも答えられる内容だ。

（とはいえ……）

この場において俺しか知らない隠し札がもう一枚ある。ユニークシナリオEX「致命兎叙事詩（エピック・オヴ・ヴォーパルバニー）」、ユニークモンスター「ヴァイスアッシュ」に関するユニークシナリオ。

正直に言ってこれを他プレイヤーに明かすつもりはない、だが明かさずとも利用する方法はある。情報とはその存在を匂わせるだけでもアドバンテージになる、シャングリラ・フロンティアにおける七枚のジョーカーのうち実質三枚を持つ今の俺は非常に有利な立ち位置なのだが……

「ん？　何？　私の美貌に惚れちゃった？」

「………はっ」

「千の言葉に勝る一の行動ってあるよね、ぶっ飛ばす」

問題はこいつ、ペンシルゴンだ。情報の一欠片でも手元から零せば、こいつは警察犬が如く俺の手の内を嗅ぎつけるだろう。いや、むしろもう嗅ぎつけられているかもしれない。

流石に複数のヴォーパルバニーやケット・シーとの繋がりを得るユニークシナリオがそこらにあるとも思えない、それに露骨に神代文明の技術が絡んできている以上聞かれないだけで気取られていると考えていいだろう。

「……まず最初に、ユニークモンスターはただ戦うだけでは倒すことはおそらく不可能だと思う」

ヴァイスアッシュという切り札は今は温存する、既に価値の無いウェザエモンから札を切っていくことに決めた俺は、この場にいる三勢力に情報を切り分けて提供していく。

「恐らくだがユニークモンスターには専用のシナリオが存在する。例えば俺たち「旅狼(ヴォルフガング)」が倒したユニークモンスター「墓守のウェザエモン」、奴に挑むためには前提条件として「ユニークシナリオEX」というものを受注しなければならなかった」

「それに関しては私の方が知識量は上だから引き継ぐよサンラク君。ユニークモンスターはEXシナリオの中核を為す特殊なモンスター、黒狼は必死こいてリュカオーンを追ってるみたいだけど多分何処かでシナリオのフラグを立てないと永遠に倒すことは出来ないと思うよ……まぁ、よくて撃退が精々かな？」

さらに言えば、あくまでもウェザエモンやヴァッシュはこの大陸でシナリオフラグを立てられた、というだけであって他のユニークモンスターも同様とは限らない。

未だ全貌の一割も明らかになっていない新大陸、そこが他のユニークモンスターのフラグ発生場所である可能性は十二分にある。

「そうだね、墓守のウェザエモンが如何なるモンスターか知りたいのなら……私が抱える借金を一番多く肩代わりしてくれた人にこの「世界の真理書〜墓守編〜」をあげちゃおうかなぁ？」

「ほんと抜け目ないねペンシルゴン……」

ごく自然な流れで二、三度読んだら最早価値のない真理書を高値で売り捌こうとしているペンシルゴンに俺とオイカッツォはため息をつく。

考察(ライブラリ)クランの長の目がキラリと光る中、最前線を行くクラン達への弱小クランからの説明会は続く。

踊る会議、巡る思惑、あとゾンビ（後書き）

現状プレイヤーが把握しているユニークモンスターのイメージ……
という名の設定垂れ流し

・夜襲のリュカオーン
ランダムエンカの黒い狼、クラン黒狼が追いかけてるらしいけど成果は芳しくないらしい。
実はメス

・深淵のクターニッド
海に出現するタコっぽい姿のユニークモンスターらしい、発狂したＮＰＣを見るにこれもしかしなくてもクトゥ……ああ窓に！窓に！
実は陸上でも活動できる

・天覇のジークヴルム
ランダムエンカの黄金のドラゴン、まれに空を見上げると見かけることができる。エリア「気宇蒼大の天聖地」で戦えるらしい……？
英雄フェチなので結構饒舌

・冥響のオルケストラ
シャングリラ・フロンティアにおいて現状確認されている唯一の人間の王国「エインヴルス」の王城に潜り込んだ情報屋プレイヤーが見つけた、名前だけ判明しているユニークモンスター。津波を操り炎を纏い雷を落とし怪物を従えるとか物騒な事しか書かれていないんですが……
実は主人公の天敵

墓守のウェザエモン
気づいたら倒されていた、どういう事なの……噂によると人型モンスターらしい。
実は結構凄い人

？？の？？？？？？？？
その名は知られずとも、その正体と姿を知る者は一人。
実は世界最年長

？？の？？？？？？？
不明。その名も、姿も、正体も。
脱ぎ癖のある可愛い女の子だよ（すっとぼけ）

「夜襲のリュカオーンに関しての情報だけど、ぶっちゃけ俺もそう知ってることは多くないぞ？」

「構わない、行動パターンだけでも貴重な情報だ」

「そうだなぁ……」

夜襲のリュカオーン、このゲームにおいて俺にとってのトラウマであり目標。

最序盤で酷い縛りを課したクソッタレの元凶ではあるが、今この瞬間に至ることができたのはこの「呪い（マーキング）」のお陰でもある。

あの時はがむしゃらに戦ってろくに行動分析なんてしていなかったし、さらに言えばウェザエモンという同党の存在のインパクトが鮮烈であったこともあってはっきりと断言できるような情報は多くないが、それでもその暴れようは記憶に焼き付いている。

「まず物理攻撃、予備動作が少なく発生も並のボスよりはるかに速いが、基本的に前足攻撃は斜め、縦、横振りの三パターン。ディレイも当然の権利の如く多用してくるけど安全地帯が結構多い。噛みつき攻撃は、というか物理攻撃はデフォルトで破壊属性を帯びてるから食らったら普通に食いちぎられる、というか俺は両足をむしゃむしゃされた。次に影を槍状にしたフィールド攻撃、これに関しては影に潜ってからの奇襲攻撃、これは後で話す分身を絡めてきたりするのでほぼ初見殺しに等しいが影から飛び出す直前に音がするのでそれで出現場所を判断するしかない。基本的に夜間戦闘だから当たり前のように足元からも奇襲を仕掛けてくるので走りながら出現

位置を特定するのがノーダメのベター。ちなみに出現時の音だけど分身は沼に石を落としたような音で本体はそれをもっと重くしたような音って感じかな。それで分身だけど確認した限りでは最大二体、少なくともシナリオ外でのエンカウント時は分身展開中の動きはチヨロかったかな、ディレイ使わない素直な挙動ばかりだったし潜伏奇襲も三体同時で場所さえ分かれば安全地帯の特定簡単だったし、分身自体は時間経過で消失するから極論逃げ回っていれば大して脅威じゃない。一番厄介なのは……」

「……すまないが、文章化してもらえないだろうか」

いけない、思い出したら口がフルスロットルで回り出していた。最初の辺りはまだ聞き取ろうと構えていたサイガー１００氏が眉間を抑えている姿に、案外覚えているものだな、と思わず覆面の下で苦笑する。

「まぁ基本的にはでかい狼、ってのが戦った感想。ただ最後に食らった技だけがよく分からない」

「最後に？」

思い出すのはあの時、リュカオーンに足を食い千切られたあの攻撃だ。

それが噛みつき攻撃である事は分かっているのだが、どんな原理で食らったのかが分からないのだ。

「少なくともあの時点で俺は攻撃を食らうようなヘマはしていなかった、というか分身と本体の攻撃範囲からは完全に出ていた」

だが気づいた時には足を食い千切られていた。リュカオーンが何か

した、という事は分かっているのだがそのネタが分からない。

「座標指定の回避不可能攻撃かと思ったけどどうもそれとは違うようだし、まさしく当たり判定がバグったみたいな感じというか……」

何だろうな、もう一回見ることが出来れば分かりそうなんだが、それは現実的ではないだろう。

なおも聞く姿勢を見せるサイガー１００氏に俺が知りうる情報はこれくらいだと伝えると、彼女は何やら考え込みそして俺をまっすぐに見つめる。

「情報提供に対してこちらも返礼しなければフェアではない、であればそうだな……リュカオーンによる呪いを解く方法を提供する、なんてどうだろうか？」

「え、マジで？」

「と言っても方法自体は割と知られたものではあるんだがね、「黒狼」であれば君達が一からやるよりも数倍楽に済ませられる」

俺の胴体と足に纏わり付いたリュカオーンによる呪い(マーキング)。助けられた事もあるが、それ以上に迷惑を被っている忌々しいこれを解くことが出来る。

サイガー１００の言葉に俺はクラン「黒狼」の評価を三段回程上げる。

「とわ……ごほん、ペンシルゴンがつるんでいるプレイヤーと聞いてどんな人物かと実際に目にして確信した、君達は今後もやらかすとね。だから私個人として君達には色々と関わりを持っておきたい

んだ、聞けばペンシルゴンとそこの彼を含めてクランを結成したらしいし、我々「黒狼」と連め……」

「ねぇ「黒狼」さん、その打診は後にしてもらってもいいかしら？」

と、ここで俺とサイガー１００の会話に水を差す一声。
ペンシルゴンはキョージュと真理書に関する値段交渉中、あそこだけ別ゲーをしている気がしないでもないがこちらには目もくれていない。自称進行役が全く進行役してないが、この際目を瞑ってやろう。
オイカッツォは逃げようとしてもどうせ捕まると観念したのか、追加でケーキを注文しては味が薄い薄いと愚痴り中。あいつ何しに来たんだ……あっ、ユニークに縁がないから手持ち無沙汰なんですねぇぇぇ！　何も言ってないのにフォークの投擲姿勢に入るとかやべーやつだなオイカッツォ。
サイガー０氏は寝落ちでもしたのかというくらい不動かつ無言。これはあれだろうか、クラン「黒狼」による示威行為的な。
であれば消去法で誰が口出ししたのかは絞られる、このタイミングで割り込んだのは一人しかいない。

「少なくともそれは当初の質問には含まれていないでしょう？」

「む……まぁそうだな、それにこれに関してはあいつと話すべき内容か……」

俺からすれば主語のない会話はちんぷんかんぷんなのだが、当人達の間では意味が通じているらしい。あっさり引き下がったサイガー１００に代わってアニマリア氏が次の会話相手としておどり出る。

「サンラクさん、まず先にこちらが提示する条件を伝えさせてもら

うわ。端的に言うと、私達クラン「ＳＦ－Ｚｏｏ」は可能な限り貴方の要望を全て呑む用意があるわ」

「へ、あ、はい」

会話の主導権を完全に取られてしまった、実質無条件でなんでもする、と言う言葉に先攻でアッパーカットを喰らった気分だ。

「そしてもう分かっているとは思うけれど、私達からの打診はただ一つ……ヴォーパルバニーの国「ラビッツ」を複数回訪れる方法、それを教えて欲しいの」

「まぁそれだよなぁ……」

強いて言うなら「喋るヴォーパルバニーの関連するユニークシナリオの開示」を求められると思っていたが、概ね予想通りの内容に俺は黙り込んで思考する。

「あー、それに関してだが当人……当兎？　に聞いた方がいいだろうから、ちょっとエムルを返して貰いたいんだが」

数分後、名残惜しげなＳＦ－Ｚｏｏのクランメンバーから返還されたエムルはと言えば、まるで救いようのないダークでシリアスなストーリーを見せられたかのように光のない目をしていた。一体何をされたんだ……

「エムル、しっかりしろー傷は浅いぞー」

「人間怖いですわ……だぶるぴーすってなんなんですわ……女豹のポーズって、アタシ兎ですわ……」

人参を目の前でチラつかせてみるが、彼方へ旅立った正気が戻ってこないな……仕方ない、切り札を使うか。

「ラビッツパイ」

ぴくっ（耳が動く）

「スペシャルラビッツパフェ」

ぴくぴくっ（耳がさらに動く）

「食べ放題、代金は俺持ち」

「も、もう一声……」

「前々から欲しがってた魔術書もつけてお値段なんと全部俺のオゴリ」

「本当ですわ!?　アタシ今欲しい魔術書が三冊くらいあるんですわ！」

やっぱ銭ゲバ（エルク）の妹でぼったくり（ピーツ）の姉だよこいつ。

スクショの被写体として揉みくちゃにされていたエムルが復活し、ぺしんぺしんと俺の頭を叩き出す。若干いつもより強めに叩いているのはゾンビへの生贄にされた恨みだろうか。

「はぁ……かわゆい…………あ、お気になさらず」

「えぇ……」

何やら水晶のようなアイテムを構え、物凄い勢いでエムルを撮影しまくっているアニマリア氏を半目で見るが効果はないようだ。もうこの際気にしないことにするとして、俺はエムルへと問う。

「なぁエムル」

「なんですわ？」

「確かラビッツってさ、開拓者を招いて蛇退治させてたよな？」

ラビッツを訪れるためのユニークシナリオは二つ。
一つは俺が発生させたヴォーパル魂なる謎の条件達成がフラグとなる「兎の国からの招待」、これに関しては正直明かしたくはない。そしてもう一つが攻略サイトにも記載されている、通常のヴォーパルバニーの案内で始まるユニークシナリオ「兎の国ツアー」だ。

「あれ結構定期的にプレイヤー……いや、開拓者を招いてるみたいだけどさ、ラビッツって別に人間立ち入りお断りってわけじゃないんだよな」

「うーん、多分そうだと思いますわ」

実のところ、「兎の国ツアー」でラビッツを訪れたプレイヤーが立ち入ることのできない兎御殿に滞在している俺は、御殿の窓から城下町にいるプレイヤーをちょくちょく見かけるのだ。人間の城下町と変わりない様子で商売をしたり騒いだりしているヴォーパルバニーを眺めてはしゃいでいるプレイヤーや、何をトチ狂ったか兎に攻撃を仕掛けて袋叩きにされて死んでいくプレイヤーなどなど、ある種の神的な視点で見ているからこそなかなかの暇つぶしになるのだ

が、少なくとも「兎の国からの招待」以外で複数回来ているプレイヤーは見たことがない。

「単刀直入に聞くけど、ぶっちゃけあいつらが再びラビッツに行く方法とかある？」

「むむむむむ……アタシはラビッツのせーじには関わってないからはっきりとは答えられないですわ……でも、多分サンラクサンがお願いしたらなんとかなるかもしれないですわ！　エードワードおにーちゃんはじゅーなんな思考のインテリーなんですわ！」

エードワード……ビィラックのさらに上、ヴァッシュを除けばネームドの中で一番最初のアルファベット、つまりヴァイスアッシュの子供の中における長男。以前ビィラックが言っていた話通りなら現在のラビッツ国王たるNPC。ヴァッシュは隠居というか大親分というか、例外的別格なので除外するとしてそのエードワードお兄ちゃんとやらがラビッツにおけるナンバーワンなのだろう。

「んー……今から聞いてくることってできるか？」

「是非とも今すぐ迅速に！　それでかつじっくりと慎重に丁寧にお話を聞いてくるですわ！」

そう言うなり一瞬で転移していったエムル、よほどもみくちゃにされたのがトラウマであったらしい。

「ああ……」

そしてこっちもこっちで見ている分には反応が面白い。リトマス試

験紙みたいだな、エムルがいると赤色（喜び）に染まり、いなくなると青色（落胆）に染まる的な。さて、わざわざエムルをこの場から去らせたのは別にアニマリア氏のリアクションを見るためではない。さっきから視界の端で奇怪な踊り（ゼスチャー）をする外道モデルの無言の指示ゆえだ、エムルがいると話が進まない……主にＳＦ－Ｚｏｏが話を聞かないので。

「わざわざ「時間を作れ」的なゼスチャーしてきたんだから、何か言いたいことがあるんだろ？」

「ほぼアイコンタクトで理解してくれて助かるよ」

「随分ご機嫌だが一体どれだけふっかけたんだ？」

「ふふふ、借金の２０％」

本当えげつないなこいつ……それをポンと出すライブラリもライブラリだが、双方が満足した結果なら部外者が口を出すことでもないか。

「さて、エムルちゃんが戻ってくるまでにクラン「旅狼（ヴォルフガング）」として「黒狼」「ライブラリ」「ＳＦ－Ｚｏｏ」としての皆様方の打診を聞いておこうかな？」

ペンシルゴンがそう三人へと問いかけると同時、三つのエンブレムが虚空に表示される。一つは剣を咥えた黒い狼のエンブレム、もう一つは栞が挟まれた本のエンブレム、最後の一つは肉球と羽のエンブレム。

三つのエンブレムを眺めるペンシルゴンの顔は、かつてユナイト・ラウンズのサーバーに君臨した暴君「鉛筆戦士」を彷彿とさせる非常に悪どい笑みであった。

加速する会議、迸る欲望、そしてそれぞれの糸口（後書き）

結構無茶言って新大陸組から外してもらって会いに来たのに緊張してロクに喋れないまま瞑想しているヒロインがいるらしい

いい加減彼女もいいところ見せなきゃですねぇ……

誰の掌の上で踊っているのかを知るがいい

「ま、結論から言えば至極当然なんだけどあの三クランは私達のことをナメてたわけよ」

あれからしばらくして、「黒狼」「ライブラリ」「SF－Zoo」の面々がそれぞれ帰って行った後、なんとご丁寧にエイドルトにも存在したNPCカフェ「蛇の林檎　水晶街支店」に移動した俺たちにペンシルゴンはそう答えた。

「クラン「黒狼」は完全にサンラク君の足元を見ていた。まぁウチの愚弟とはまた別方面に拗らせた選民主義の奴が多いから、モモちゃんもそこら辺の調整に苦心してるのは分かるんだけどねぇ」

「別にリュカオーンの行動パターンくらいタダでもいいんだけどな」

「それは違うよサンラク」

答えたのはペンシルゴンではなくオイカッツォ。
裏のカフェとでも言うべき蛇の林檎で出されるケーキをパクついていたオイカッツォはフォークでこちらを指しながら話を続ける。

「まぁ俺もプロゲーマーだし言わせてもらうけど、昔ながらのディスプレイ式ならともかく今のフルダイブで相手の動きが分かる、ってのはサンラクが思ってるよりデカい意味を持ってるんだよ」

なにせ対戦相手の最新情報が金になるくらいだからねぇ、とオイカッツォは忌々しげに顔を歪めながらも続ける。

「ストーリー上のボスならまだいい、それは最終的に全てのプレイヤーが関わるものだからね。でもユニークモンスターは違う、値千金なんて言うけどその通りだよ。状態異常解く程度じゃ釣り合わないでしょ」

「言われてみれば」

「そゆこと、次にライブラリ。あそこは他二つと比べたらまだマシだね、トップがあの人だから適正価格を見極めた上で二割引くらいのところを攻めてきてる」

考察クランはユニークを獲得したり、誰よりも先に未踏破エリアを攻略することを目的とはしていない。極論を言えば最後尾でもいいのだ、先に行った者達から情報を集め、零れ落ちた情報を集めて世界観を解き明かす。それこそが「図書館（ライブラリ）」がやっていることだ。

「とはいえ売る側である私達が値段設定できないのはなんか癪なことに変わりはないわけでぇ」

「本一冊で借金の二割返済した奴がさらに高望みしてるぜ」

「このゲームに三冊しか存在しないんだから妥当なお値段でしょ」

そうか、言われてみればそうだな。俺たち三人とも持っているせいで希少価値がないように思えたが、よくよく考えれば俺たち三人しか持っていないいって凄まじい希少価値なんだな。

「そして最後にＳＦ－Ｚｏｏだけど……サンラク君分かってるでしょ、あれは蝗（イナゴ）の群れだよ。多分ＮＰＣとモンスターの区別ができて

ないよアレ」

「…………」

まぁ分かってはいた。エムルに対して妙に遠慮がないな、とか微妙に「危害」の定義が食い違っているような感じがした、とか。

「ラビッツなら私も「兎の国ツアー」で行ったことあるけどさ、知ってる？　あのクラン、シナリオガン無視でラビッツに居座ったせいで強制退国食らってるって」

「ギャグかな？」

「いやまぁまさか時間制限があったとはねぇ。後々のプレイヤー達に情報提供したって意味じゃファインプレーかもしれないけど、そんなＳＦ－Ｚｏｏ団体様に滞在権を与えたらどうなるかくらい分かってるでしょ？」

そこかしこでスクショの音が響き続け兎が手当たり次第にモフられる未来しか見えないな。

「サンラク君が何のユニークを隠し持ってるかは今は聞かないでおくけどさ、少なくともそれが私達以外の手に渡るようなドベはしないで欲しいんだよねぇ」

「それに関しては問題ないが断ったら断ったで粘着されそうだし、とはいえ俺の紹介できた奴らが粗相をしたら俺の好感度に響くからなぁ……」

エムルがまだ戻ってこないのは僥倖だった。回答までの時間を延ば

せたからな。
とはいえ阿修羅会と違ってＳＦ－Ｚｏｏは何かモラル的なタブーを犯しているわけではない。極論ＮＰＣ相手に何しようがプレイヤーに直接的な被害を与えていない分、厄介さで言えば阿修羅会よりもこちらの方が上だ。

「……とまぁ、そんなわけでこの私が一肌脱いだわけよ」

「それがあいつらと結んだ「クラン連盟」ってやつ？」

「その通ぉーり！　これで私達は連盟相手のクランが保有する設備や権利を利用できるようになった。向こうからすれば色々便宜を図ってやるからユニークの情報を寄越せって事なんだろうけど、当然タダであげるわけないよね」

ペンシルゴンは俺たちに見せつけるように手を開く。

「私達は今現在五枚の切り札を持っている。それも一枚だけでも黒狼やライブラリ、ＳＦ－Ｚｏｏがセコセコやってきたプレイ時間全てを上回るパワーを持ったジョーカーを五枚もね」

開かれた五指を一本ずつ畳みながらペンシルゴンは「旅狼（ヴォルフガング）」が明かしていない切り札を説明し始める。

「一つ、私達は誰よりも先んじてユニークシナリオＥＸをクリアした事で「バハムート」という情報アドバンテージを持っている。
二つ、私達は墓守のウェザエモンを倒した事で格納鍵インベントリアとその中にある諸々の遺機装（レガシーウェポン）を保有している。
三つ、現状ビィラックちゃんのみしか確認されていないジョブ「古匠」、それを私達が実質独占している。

四つ、ラビッツへ行くための条件は実質的にサンラク君が握っている上に、ケット・シーの存在そのもの。
五つ、諸々を含めて「次の」ユニークシナリオEXに王手をかけているのが私達である事。」

補足して言えばさらに俺が何枚か切り札を隠しているわけだが、クランとしての切り札であるならばおおよそこの五つだろう。

「切り札ってのは、その存在を匂わせるだけで力になる。情報で人は殺せる、たった三人だけで私達はこのゲームにおける最高峰のクランに貢がせる。結成して一ヶ月も経ってない私達が廃人プレイヤー達の上に立った上で常に先を行く……それって最高に楽しいとは思わない？」

「悪い顔してるよペンシルゴン」

「ユナイト・ラウンズじゃちょっと家畜に厳しくしすぎたからね、今度はもう少し上等な餌で生かさず殺さずを維持しつつ対外的視点のイメージ安定を……」

「これ最終的に俺たちが全部悪い流れになって討伐される系の黒幕っぽくない？」

その時はお前らを売って俺はラビッツに亡命するから安心しろオイカッツォ。
あからさまに悪巧みを始めたペンシルゴンを他所に、俺はこれからのことを考える。とは言ってもペンシルゴンのように数手先を見据えた戦略という程上等なものではなく、もっとすぐ先の予定についてだ。

（とりあえずビィラックに会ってリアクターを修理してもらって、なるべく引き伸ばしつつもＳＦ－Ｚｏｏをどう処理するか考えて、ああエムルとの約束も果たさないとな……）

軽はずみな約束でも好感度にはしっかりと響く、明確なパラメータによって成り立つゲームであればその影響はより顕著だ。

となれば必要なものは金だ、世知辛いが俺には引き下ろし無制限の銀行がある。後で水晶群蠍君の所に遊びに行こう。

「とりあえず俺は夜に備えて飯食ってくるから落ちるわ」

「あいよー、なんか進展あったら連絡お願いね」

「次呼び出す時は逃げないでよサンラク」

「はいはい」

ヒラヒラと手を振って俺は蛇の林檎水晶街支店を後にするのだった。

さて、エムルがラビッツにいる以上俺がラビッツに戻る方法は死に戻りしかない。であればその死は実入りのあるものであった方が良い。
ＭＰ回復アイテムを買い込んで水晶巣崖へと到着した俺は、早速採掘ポイントへと駆け出す。

「こんばんわ蠍君、土足で悪いが踏み込ませてもらうぜ」

起動した水晶群蠍は二体、おおよそ十数秒後にはこの十倍の数の増援がやってくる。
とはいえインベントリアを持つ俺にとってはそんなものは脅威たり得ない。

ギリギリまで引きつけて格納空間へと転移、絶対的安全圏へと退避する。
何度見ても壮観な神代文明の道具の数々ににやける顔を抑えながらも、水晶群蠍のヘイトが解除されるまでの暇を潰す。

「ああそうだった、一応装備は外しておいて……よし、そろそろヘイトも分散しただろう」

ＭＰを回復し、水晶平原へと戻る。
格納空間から出る直前、なにか嫌な予感が頭を過ぎった気がするが、考えても何に対しての予感であるのか思い当たらないし特に問題はないとスルーする。

水晶広がる崖の上へと戻った俺を迎えたのは夜空と静寂。そして十メートルほど先に水晶が積み上げられた採掘ポイントを目視で確認。

「さて、まずは蠍の素材……ん？」

素材が落ちていない、何故？　地響き？　衝突していない？　タイミングにミスはなかった、蠍が衝突する前に止まった？　行動パターンの変更、システム的介入、全部足し引き掛け割りイコール……

「修せ……ぃぃい！？」

俺が今いる座標を中心に四方向の水晶が動き出す。非アクティブからアクティブへ移行するゆるやかなものではなく、それはまさしくアクティブ状態で行う潜伏奇襲……！

次の瞬間、今度こそ己の身体の破損を厭わぬ激突によって俺の身体はミンチへと変換されたのだった。

誰の掌の上で踊っているのかを知るがいい（後書き）

連盟
所謂フレンドシステムのクランバージョン。
例えばクランAが馬車の無料搭乗権を持っていた場合、クランBもその恩恵に預かることが出来る。
基本的には互いの利益を共有する、合同でレイドボスに挑むなどで利用されるシステムであるが今回の場合は「こっちで色々便宜を図ってやるからユニークの情報をくれ」的な意味合いで旅狼は最大手クラン三つの恩恵を受けられるようになった。
ちなみにそれに対する「旅狼」クランリーダーの返答は「餌はくれてやるからせいぜい働け家畜ども」、こりゃ魔王ですわ

水晶群蠍「土足で家に踏み入って抜け毛とかを持っていく変態を殺すために待ち伏せを覚えました！」

公式サイトの修正項目に追加されてるからサイレント修正じゃないよ、善意と悪意が半々の初見殺しだよ

万物は真下へと落ちる、万象は攻略法を秘める（前書き）

もしかしたら今週だけ毎日投稿が崩れるかもしれないです。なるべく毎日投稿を崩さないつもりですが、一応先に報告させていただきます。

万物は真下へと落ちる、万象は攻略法を秘める

「…………はぁ、マジかぁ」

ログアウトし公式サイトを確認した所、確かに修正項目に「一部モンスターの行動パターンに修正を行いました」の一文があった。
これだけでは一体どのモンスターであるのか分からないが、修正前と後を体感した俺からすればその一部モンスターが何を指しているのかが分かる。

「厄介な事になったな……」

元々ボーナスステージ的な仕様の抜け穴だったから、いつかは修正されるだろうとは思っていたが……予想以上に対策が早かったな、いやむしろ速かったな。

「となると予定も大幅に修正しないといけないか」

ゼリー飲料を咥え、椅子にもたれかかりながら今後の予定を考える。
修正された以上水晶群蠍を利用した金稼ぎはもはや不可能となった。
となると新たな金策を考えなくてはいけないわけだが、今日のうちにそれを見つけ出すモチベーションは流石に無い。

「んんん……やっぱり最終的に金稼ぎするためには周回できるだけのレベルが必要なわけで……じゃあやっぱりレベリングを軸に？けどなぁ……」

ウェザエモン戦以降、それなりに戦闘を繰り返してきた筈だがあれ

からレベルが上がらない。
やはりレベル８０が近くなるとレベルも上がりづらいな、とはいえエリアボスやギミックボスをパーティでとはいえ倒しているのでそろそろレベルアップしてもいい頃なんだが……

「レベルアップ……周回……」

そうなるとやっぱり水晶群蠍が頭にチラついてしまう。あのモンスターはありとあらゆる面で素晴らしい、フィールドの特徴に合致した生態も絶妙に頭の悪いＡＩも落とすアイテムの美味しさも。
表面上を見れば水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）は酷いモンスターに見えるかも知れない。だが単純な物理による突撃がデフォルトのＡＩや非アクティブとアクティブの関係性、アイテムを落とす法則性や水晶群蠍単体の性能は絶妙に倒せそうで倒せなさそう感が実に攻略意欲を湧かせるんだよなぁ……

「倒せそうで倒せない……突撃ＡＩ……」

それになによりあそこで採掘できるアイテムを諦めきれないというのが本音だ。単純に鉱石ではなく宝石というのがミソだ、宝石は素材としてではなく換金アイテムとしても優秀だからな。
どうにかして水晶群蠍という脅威を無効化して採掘だけはしたい、この際それが可能なら水晶群蠍のアイテムは諦めてもいい。
とはいえ待ち伏せ奇襲モーションが追加されてしまったからには、従来のエスケープからの安全確保も困難だ。対策として考えられるのは物理的に距離を話して襲撃までの時間を引き延ばすくらいだが……

「物理的排除……アイテムドロップを考慮しない……」

ぢゅいぃ、と中身のないパックを吸いながらバラバラの思考を纏めていく。何か掴めそうな気がする、後一つ何か……散らばった情報を纏めて固定する思考のネジがあれば…………

「うぷぉっ」

吸い過ぎたらしく、息を吸い込んだ拍子に口の中で弾けるようにしてゼリー飲料の飲み口を口から離してしまう。
重力という地球というサーバーに搭載された物理エンジンに従ってゼリー飲料のパックは僅かに放物線を描いてすぐに床へと落ちていく。
とっさに手を伸ばすが、やはりゲームと違って動きが思い通りにならない現実ではキャッチのモーションは二手ほど遅く、中身が飛び散ることこそなかったがパックは床に叩きつけられてしまう。それを見た瞬間、俺の脳裏に電流が走る、発想の超新星爆発が起きる、電球が光る、ええいなんでもいい、散らばった思考が一つの答えを導き出す。

「……ニュートン降りてきたわ」

落下、そうだ落下。
万有引力……全ては上から下へと落ちる、物理エンジンは基本的に何もかもに平等に物理法則を課す。なおバグは除くものとする、ありゃもっと高次元の何かに叛逆してる。
水晶巣崖はどこにある？　立地条件は？　水晶群蠍の思考パターンは？　待ち伏せる程の執念を手に入れた蠍達は何処まで追ってくる？

「ふふ、ふふふふふ……運営め、修正自体は素晴らしいと賞賛しよう。だがその程度でこの俺が屈するとでも思ったか……？」

最初は甘んじて受け入れるつもりだったが、気が変わった。今夜は寝かさないぜ、何せまた修正しなきゃいけない案件を俺が増やしてやるんだからなぁ！

必要なピースは後一つ、そのためにやるべき事は考えるまでもない。トライアンドエラーとレベルアップだ。

「あ、サンラクサン！　戻ってたんですわ？」

「エムルか、進捗どうだ？」

「エードワードおにーちゃんは少し考えるから明日まで待ってくれって言ってましたわ！　あとビィラックおねーちゃんが呼んでたですわ！」

「よし、ビィラックの方から片付けていこう」

ひょいとエムルを頭の上に放り投げれば、エムルも慣れたもので空

中で姿勢を直して頭の上に着地する。伊達にお荷物と運び屋はやっていないからな。

「なんだかサンラクサン燃えてるですわ？」

「わかる？　友達（カモ）の家に乗り込んだら袋叩きにされてさぁ、お礼参りに行くために準備しようかなって」

「それ多分謝った方がいいと思いますわ……」

「そいつらとても恥ずかしがり屋でさ、会いに言っても隠れてるし挨拶がわりに殺しにかかってくるから……」

「それ本当に友達って言うですわ？」

僕とクリスタル・スコーピオン君はとっても仲良し！　なにせ俺の懐は潤い向こうの住処は綺麗になる、ウィンウィンの関係だよ……コミュニケーション手段は主に暴力だけどな。

「というわけで殴り込みに行くためにちょっと下準備を……な」

ビィラックのいる工房に到着した俺は、頭にエムルを乗せたまま中を覗き込む。

「おう、来たけぇの」

「進捗どう？」

頭に例のごついゴーグルを着けたビィラックは、ファンタジーな格好にＳＦなパーツがくっついたちぐはぐな姿で俺を出迎える。

「仕上げの段階じゃな、はよう遺機装（レガシーウェポン）を渡しぃや」

「あいよ」

二人との相談の結果、別に使わないしバラしても問題ないよねと言うことで同じカテゴリでありながら二種類存在した杖型の遺機装「規格外武装：収束機構型【コメットカタパルト】」を取り出す。

「分解するなり好きにしてくれて構わない」

「おお、おお……明日の朝まで待っちょれ、それまでにわちは神代の鍛治……その深奥を学び取っちゃるわ」

「頼むよー」

お前にはロボやパワードスーツやＳＦ武器が使えるかどうかがかかっているんだ。

なぜかざわつく心に首を傾げつつも、俺は工房を後に

「ちょい待ちい、聞きたいことがあるんじゃった」

「ん？」

振り向けば、ゴーグルを外したビィラックがこちらを見据えていたので、俺もちゃんと身体をビィラックの方へと向ける。

「聞きたいこと、っちゅうよりある種の頼みなんじゃがな……水晶群蠍の素材、アレを使って遺機装（レガシーウェポン）を作らせて欲しいんじゃ」

「え？　それは構わないが、そもそも造れるのか？」

俺はてっきり「古匠」とは壊れた遺機装を直す職業とばかり思っていたのだが。

「普通の武器のように造れるわけじゃあのうて、多分何度も失敗する。じゃからワリャの持ってる素材を無駄に消費するかもしれんが……」

「いいよいいよ、是非ともトライアンドエラーを繰り返してくれ」

「ありがたい……！　ところで、作るのは双剣でええか？」

その言葉に、俺は否定の返答を返す。双剣は湖沼の短剣、帝蜂双剣、兎月の三本を強化する形でやって行く方針であるし、別の武器種も使って行った方が結果的に選べる択も増えると言うもの。

「作るのなら…………」

その後もいくつかの施設を訪れ、最終的な作戦に至る為の準備を終えた俺は水晶巣崖……ではなく、その下の奥古来魂（おうこらいこん）の渓谷（けいこく）へと来ていた。

「なんでこっちに来たですわ？」

「去栄の残骸遺道は確かに経験値的には美味いが、敵が硬いし何してくるかもわからない。だったら少し経験値は少なくなるが倒しやすいこっちの方が結果的に経験値効率が良くなるのさ」

それにネックの歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）への対策としてドジっ子剣こと焔軍将の斬首剣、さらには約束通り魔術師が新たな魔法を覚えるために必要となるアイテム「魔術書」を手に入れたことで新たに魔法を習得したエムルもいる。

「ノルマはそうだな、レベル８０。アンデッドを一掃するくらい暴れようか」

「アタシの新魔法が唸りを上げるですわ！」

悪いが新しくお前に覚えさせた魔法、殆どアシスト用なんだけどな。

何故か自分を邪悪だと理解していないどす黒い悪扱いされている（していろ）ので一応弁明的説明

・ＳＦ－Ｚｏｏ
「Ｓ」ｈａｎｇｒｉ－ｌａ「Ｆ」ｒｏｎｔｉｅｒ「Ｚｏｏ」の略称であり、シャングリラ・フロンティアに登場する動物型モンスターの観察撮影をメインとするクラン。
基本的に動物好きなプレイヤーで構築されているが、その内訳は「ファンタジーな動物を「見るのが」好き」なプレイヤー、「ファンタジーな動物を「愛でるのが」好き」なプレイヤー、「ファンタジーな動物を「調べるのが」好き」なプレイヤーと過程が統一されていないというチグハグが存在する。

ですので、エムルに対しても「愛玩用の喋る動物として」興味があるのか「ペットとして」興味があるのか、「世界観的に」興味があるのかでごっちゃになっているのです。
ぬいぐるみのように扱うプレイヤーもいれば、普通に他人のペットのように扱うプレイヤーもいるし、所詮モンスターと割り切っているプレイヤーもいます。
可愛いし味方にもなるけど普通にア◯ルーメ◯ルーに斬りかかる感じ、とでも言えばいいでしょうか
そんなわけで「目的は一緒でも過程がごっちゃな厄介な集団」であるために「ラビッツに招いたものなら可愛がる者、調べる者、あくまでもＮＰＣとして扱わない者で面倒なことになる」という意味でペンシルゴンに厄介者扱いされているのです。そのくせ「モンスター捕獲のノウハウ」に関してはシャンフロの中でも飛び抜けている

上にプレイヤー相手には特に危害を出さないあたり厄介な集団ですね

人は不可能に夢を見る、いざ空を歩く時（前書き）

皆々様の評価、感想、レビューのお陰で１００話に到達することができました。

未だ誤字や設定の齟齬が少なくない頻度で発見される未熟者ではありますが、今後とも拙作をよろしくお願いいいたします。

「待てコラァァァ！」

「ギィィィィッ！！」

目と目が合った瞬間、一方は一目散の闘争を選び、もう一方は一目散の逃走を選んだ。捕食者と被捕食者、襲うものと襲われるもの。ただ一つ間違いがあるとすればそれは、生者を憎むアンデッドの、捕食者たるワイバーンが逃げる側で死者を恐れ、被捕食者たる人間と兎が追いかける側であるということだろう。

「飛んで逃げようってかしゃらくせぇ、エムル！」

「はいな！　【マジックチェーン】！」

エムルが魔法名を唱えた瞬間、俺の頭上に発生した魔法陣から魔力の鎖が射出される。それは一直線にアンデッドワイバーンへと殺到し、その翼へと絡みつく。

「煩わしさに立ち止まったのは悪手だったな……手じゃないから悪翼ってか？」

「【マジックエッジ】！」

魔力の刃が腐肉の首にこびりついた朽ちた鱗を削り飛ばす。魔力刃が穿った傷口に斬首剣が叩きつけられ、さらにダメ押しとばかりに補正の入った幸運の拳がアンデッドワイバーンの頬を打つ。

そこでようやく力尽きたか、アンデッドワイバーンはポリゴンとなって爆散した。全く、初見じゃ重宝した雑魚除けの呪いもレベリングとなれば一瞬で縛り要素にクラスチェンジだ。

「全く……鬼ごっこがしたいわけじゃないんだがな」

「アタシは楽チンですわー、でもサンラクサンぴょんぴょん跳ねるから当てにくいんですわ！　もう少し安全運転ひてほしいですわ！」

「難しい相談だな、今の俺はまさに跳ね馬……鳥だけど」

そりゃあ俺の頭にしがみついてるわけだから、走る労力を省けてるからなこいつ。ついでに瘴気も俺によって弾かれてるからさぞや快適だろう。

とはいえ完全支援砲台と化した今のエムルはお荷物どころか、仮に今の十倍重かったとしても担ぐことを考慮する程度には有能だ。

まず今さっきアンデッドワイバーンに使用した【マジックチェーン】、同様の効果を持つ【マジックバインド】の上位魔法であるこの魔法は対象と使用者のレベル差が捕縛力に反映される。

つまり強ければ強い程拘束力が上がるということだ。

だがこの魔法の最大の利点は拘束できる事ではない、相手が「振りほどくモーション」を僅かでも行う事だ。

先程のアンデッドワイバーンであれば、羽に巻き付けたマジックチェーンを嫌って飛んで逃げる行動を中断してしまった。その隙に距離を詰めて一気にＨＰ全損まで削りきることができた、隔絶したレベル差や一部モンスター相手であるとそもそも縛れないなどの制限はあるようだが、雑魚を逃さないという点においては非常に優秀な魔法だ。

正直懐は素寒貧一歩手前だったのだが、それをギリギリで支えてくれたのが例の女騎士フィギュアだ。
あれをピーツに見せたところ非常にレアな一品であったらしく、相当なお値段で買い取ってくれたのだ。その時に聞いたのだが、基本的に完全な人型、それも表情まで彫り込んであるような偶像は非常に価値が高いらしい。
ちなみに最も価値が高い偶像は七つの最強種を模したもの、らしい……というかユニークモンスターを模した偶像ってドロップするのか。
「あー、諸々終えたら絶対偶像集めやるぅー……」
「サンラクサン！　デュラハンですわデュラハン！」
「おっ、経験値（レアエネミー）じゃん」
しかも今度はちゃんと首を持っているデュラハンだ。それってつまりあのデュラハンが普通にドジっ子であるという証明では……とホームランされて消えた彼の事を思い出しつつも、戦闘態勢に入る。
「エムル、オペレーション「英雄堕とし（ヒロイックフォール）」だ！」
「えっちょ、初耳ですわ！？」
「ははは！　今考えたからな！」
「ふびゃーっ！！」

説明しよう、オペレーション「英雄堕とし(ヒロイックフォール)」とは！

「手足をふん縛って袋叩きにする事でかつては名のある名将だったのだろうデュラハンを雑魚同然にぶち殺すという作戦です」

「死者の名誉を容赦なく踏み躙るサンラクサンは凄いっすわぁ……」

「覚えておけ、死者が貰って嬉しいのは結婚指輪でも二階級特進でもない。黙って眠らせてやる事、それが今を生きる俺たちが過去に生きた者達に出来る最大の手向けだ」

「サンラクサン……」

この台詞自体は俺も素直にカッコいいと思うが、これを言ったNPCの隣で衛生兵(プレイヤー)が生と死の境目を反復横跳びしてるんだからギャグなんだよなぁ。

クソゲーって二種類あるんだよ。要所要所に光るものがある惜しいクソゲーと、スタートボタンを押してから電源ボタンを切るまで地雷爆発の光しかない真性のクソゲー。

前者はなんというかちゃんといい所にも気づいているよ、という慈愛の感情と同時に、ライオンに狙われたヌーの子供を見るような台風で巣から落ちてしまったツバメの雛を見るような物悲しさを同時に感じてなんとも趣深い。

後者？　鼻で笑ってプレイできる程度には罪深いかな。

エムルがキラキラした目を向けてくることに罪悪感を感じるのは何故だろう。

「スイカ割りしようぜ！」

難易度は目隠し無し（ベリーイージー）、無論スイカ役はお前の首だぁ！
エムルの放ったマジックチェーンとそれにタイミングを合わせて放った無尽連斬によって、足を縺れさせ転倒した馬から転げ落ちた首はあるけど首なし騎士の腕を蹴り飛ばし、首をサッカーボールよろしく蹴り飛ばす。
エムルが胴体と馬へと攻撃を仕掛けて牽制している間に、デュラハンの頭部破壊作業に取り掛かる。首、というか頭部なのだが、生首と言うわけだし補正は入るだろうか。

「実験開始だオラァ！」

焔将軍の斬首剣を大上段に構えて振り下ろすオマージュ天晴再び。とはいえ今回はただ振り下ろすだけではない、ジャンプも絡めた跳躍大上段唐竹割りだ。
朽ちかけの兜に蘇った刃が叩きつけられ、衝撃が握りから俺の腕へと伝わる。まるで泥を詰めた水風船を叩いているような
液体と固体が不快な方面で絶妙なバランスを維持する感触に眉を顰めつつも、もう一度攻撃を行う。
今度はムーンジャンパーも絡めてさらに落下の威力を加算した一撃。次は例えるなら腐ったスイカ、ぐじゅりと肌が泡立つような感触ではあるが、確かに砕いた手応え。

「うぇえ」

「ギィィィィィィィィィィィィィィイ！！！」

粉砕された頭部が断末魔を叫ぶ、無線接続された胴体が何もない虚空の首から上を掻き毟る、起き上がることを忘れたようにのたうち回るデュラハンに無慈悲に叩きつけられるマジックエッジ。エムルお前人のこと言えないな、大概お前もアレだぞ？
兜の隙間から流れ出る腐ったラズベリー色のポリゴンに、無駄なところまで凝るなよとゲンナリしつつも斬首剣を逆手に持ち替え、さながら聖剣を祭壇に突き立てるようにその切っ先でデュラハンの頭を串刺しにする。

「頭が無くても生きていけるからそう落ち込むなよ、どちらにせよここで俺の経験値になってもらうけどな」

地面から斬首剣を引き抜き、突き刺さったままのデュラハンの頭を振り払う。ベショリと地面に落ちた頭はポリゴンとなって霧散し、遺された胴体からも力が抜ける。
どうやら頭を破壊した事で即死判定が胴体部分に付与されたらしい。
ポリゴンとなって消えていく胴体と首なし馬を眺めながら、あのドジっ子は実は凄かったのではとふと思う。
アメフト選手よろしく弱点（あたま）を抱えなければならないデュラハンにおいて、首そのものを紛失した喪失骸将（ジェネラルデュラハン）は……そう、言うなれば日光浴が趣味の吸血鬼、シルバーの十字架アクセサリーで着飾った吸血鬼、葡萄酒を一気飲みしながらガーリックトーストを食べる吸血鬼……やっぱ吸血鬼って明らかに弱点多くて可哀想だな。

「せめて安らかに眠れデュラハン……お前の頭パンクしたタイヤみたいにしちゃったけど」

なんとなく十字を切ってみたが、そう言えばこのゲームの世界観における宗教ってどう言うものなんだろうか。

少なくとも見たことはないが聖女ちゃんなんてＮＰＣがいる以上、やはりそっち方面の設定も執念じみた作り込みなのだろう。明らかに破戒僧だが一応聖職者系の職業たるオイカッツォに今度聞いてみよう。

だがデュラハンよ、レアエネミーだけあってお前が齎した経験値は俺をさらなる高みに至らせた。

「レベル７９……数値だけ見ればただの１レベル上がっただけに過ぎない」

だがこのゲームにおいて、経験がスキルに反映されるのはレベルが上がった瞬間だ。７８が７９になっただけ？　いいや違う、この「１レベル」にはウェザエモン戦以降の戦いの経験……喪失骸将（ジェネラルデュラハン）の、歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）の、四つ腕ゴーレムとの戦いの中で鍛えられてきたスキルへの理解と目覚めが詰まっている。

そして雑誌やＰＶ、様々な媒体からその存在を確信していた「目当てのスキル」の存在に、俺は仮面の下で口を下弦の弧に歪める。

「お前を待ってたぜ……二段ジャンプ！」

――――――――――――

ＰＮ：サンラク
ＬＶ：７９（５）
ＪＯＢ：傭兵（二刀流使い）
６２，０００マーニ
ＨＰ（体力）：４０
ＭＰ（魔力）：５０
ＳＴＭ（スタミナ）：１００
ＳＴＲ（筋力）：７０
ＤＥＸ（器用）：７０
ＡＧＩ（敏捷）：９０
ＴＥＣ（技量）：６５
ＶＩＴ（耐久力）：２
ＬＵＣ（幸運）：１０４
スキル
・無尽連斬→獣鏖無尽
・グローイング・ピアス
・インファイトＬｖ．ＭＡＸ
・ドリフトステップ
・セツナノミキリ
・ハンド・オブ・フォーチュンＬｖ．ＭＡＸ
・グレイトオブクライム
・クライマックス・ブーストＬｖ．ＭＡＸ
・六艘跳び→七艘跳び
・リコシェット・ステップＬｖ．ＭＡＸ
・ヘイト・トランプルＬｖ．４
・ムーンジャンパー→スカイウォーカー
・孤高の餓狼（トランジェント）
・オフロードＬｖ．ＭＡＸ
・致命刃術【水鏡の月】伍式
・イグニッションＬｖ．ＭＡＸ

・オーバーヒートＬｖ．６
・ニトロゲインＬｖ．ＭＡＸ
・デュエルイズム
・衝拳打Ｌｖ．１
・テンカウンター
・パワースラッシュＬｖ．１
・一振両断

装備
左右：焔将軍の斬首剣
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋１）
胴：リュカオーンの呪い
腰：無し
足：リュカオーンの呪い
アクセサリー：格納鍵インベントリア
――――――――――――

人は不可能に夢を見る、いざ空を歩く時（後書き）

１００話目が汚いスイカ割りになるとは……（困惑）

１００話目記念、ネタバレという名の設定吐き出したいコーナー
実は「現代」「神代」の前にもう一つ時代がある。
便宜上「始原」と呼称するその時代には文明が存在していなかった。
存在していたのは知能のない微生物と、大陸になる前のものだけ。

空中ジャンプ。いわゆる滞空中にもう一度ジャンプコマンドを行う事で、空中を踏んでもう一度跳躍するモーションの事だ。

やはり最大の特徴は地形に左右されないこと。それが水の上であろうがマグマの上であろうが関係なく跳躍を可能とする、これが意味するものは非常に大きい。

「空中での跳躍を可能にする、しかも他の跳躍系スキルの影響を受ける……最高だ、１２０％の成果と言っていいぞ」

他にもいくつか新たなスキルを、進化したスキルを確認しているがそれを確認検証するのは後でいい。

試しにスキルを発動して跳躍した足が虚空を踏みしめた感触に計画の成功を確信した俺は、天井に激突した頭をさすりながらも立ち上がる。

「エムル、ちょっとソロで出かけてくる。明日の朝、太陽が昇り切った頃にエイドルトの裏路地に迎えに来てくれ」

「分かりましたわ、サンラクサン何をするつもりですわ？」

「前と比べりゃ実にヴォーパル的なことさ」

少なくとも俺は以前の様に蠍を避けるのではなく、これから水晶群蠍を倒しに行くつもりだからな。

そもそもだ、物理エンジンはゲーム内の全てに適用される。プレイヤーが走る事ができるのも、矢が真っ直ぐ飛ぶのも、モンスターが空を飛ぶのも、全ては物理エンジンという絶対の摂理があるからこそ成り立つのだ。
もしも物理エンジンが不完全であったなら、人は歩くたびにバウンドし、放たれた矢は真下へ痙攣しながら落下し、モンスターは地面に沈んで行く。人はそれをバグゲーと呼び、それはそれとして楽しめる辺り大概雑食だとは思うがこのゲームにおいては関係のない事だ。

「林檎は地面に落ちるし、背中をぶっ叩けば前によろめく。覚悟しろ水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）、今からお前らはそんな当たり前に殺されるんだ」

もはや見慣れた水晶平原、夜闇に静寂を保つこの場所には地雷の様に大量の死が埋まっている。だが今の俺は不可能を可能にしたブーストモード、重力と物理法則が俺に味方している。
一切のためらいなく水晶地帯へと足を踏み入れ、一切のためらいなく堂々と水晶巣崖の中心へと向かって行く。
こういう時に限って良い乱数を引くもので、不自然な程にエンカウントの無いまま歩き続けるが、六つの弾倉に一つの弾丸、六回引き金を引けば必ず弾は放たれる。箱の中の一等賞は二等以下と外れを引き切れば必ず当てる事ができる。
水晶を砕き、安眠を叩き起こされた水晶群蠍の姿は心なしか不機

嫌そうにも見える。尤も、ヴォーパルバニーやケット・シーのようにストレートな感情表現のない無機物寄りの蠍故、全ては俺のイメージでしかないのだが。

「さぁ、最初からフルスロットルだ！」

イグニッション、オフロード、ニトロゲイン、孤高の餓狼（トランジェント）、デュエルイズム。
発動可能なバフスキルを全て発動し、死に体の半裸は迷う事なくさらに先へ。当然増援として出現する分も含めて連鎖的に水晶群蠍達がアクティブ状態になっていく。

「うはははは！　スタンダップウェイクアップグッドモーニングだ蠍共！　祭りの時間だぁぁ！」

月光に照らされる水晶の津波。自ら選んだ分かりきった結末ではあるが、いつ見ても背筋に冷や汗が流れるような怖さを感じる。月光を浴びながら駆け抜ける先、ついに俺は条件を達成した上で目的の場所へと辿り着く。前門の水晶群蠍、後門の渓谷……完璧だ。

「さぁ、チキンレースだ。ヘタれるような奴はいないよな？」

こちらへと突っ込んでくる水晶群蠍、迫るステータスの怪物の群は単純に夜襲のリュカオーンを上回る絶望だ。
質も量も、強いて言うならＡＩが足りていない程度の強エネミー相手に俺が真正面から戦って勝つ可能性は万に一つもない。であればどうすればいいか、簡単な話だ。

「俺じゃ勝てないからな、自分で死んでくれ」

ためらう事なく真後ろへバックジャンプ、夜闇に覆われてなお月光に照らされる瘴気が満ちた渓谷へとその身を投じる。
浮遊感に内臓が持ち上げられるような独特の感覚を完全再現しているところに神ゲーの妄執じみた作り込みを感じる。泥掘り（マッドディグ）にぶっ飛ばされた時はそれどころじゃなかったからな。
そして俺というターゲットに殺到する水晶群蠍達もまた、立ち止まる事なくこちらへと突っ込んでくる。であれば彼らの辿る末路は決まっている。

落下死、人も怪物もプレイヤーもＮＰＣも等しく殺す物理エンジンからの死刑宣告。
少なくともフィジカルスペックで殺しにかかる水晶群蠍に落下ダメージを軽減するような能力はない、はず。
仮に突撃ＡＩに「崖際で踏み止まる」知能があったとしても……

「お客様、後ろのお客様のご迷惑になりますので立ち止まらないようお願いいたします、ってな」

水晶群蠍の結束力はそれはもう凄い、後から来た増援すら一匹残らず敵の排除に全力全霊を出すところなんて、人間でもそうそうできない事だ。
だからこそ俺を排除するために、自分や味方の損害を厭わない水晶群蠍は迷う事なく、立ち止まった同胞を押し退けてでも前へと進む。全ては敵対者の排除のために。

「名付けて「蠍落とし（スコーピオンフォール）」……ところてん大作戦の方がいいかな？
【転送：格納空間（エンタートラベル）】！」

水晶の津波がこちらへと迫る。後続に押し出された蠍が崖から飛び出し、後続を押し出してまで前に進んだ蠍もまた崖からフライア

ウェイ。津波というよりむしろ滝だな、二十メートルくらい距離を離して安全確保した上で見れば水晶の滝というのは中々にファンタジーなのかもしれないが、滝の着弾点真っ只中にいる俺からすれば現在進行形の死神の鎌である。
　このままではどう足掻いたところで大質量の物量に巻き込まれて死ぬ……ので、特権(インベントリア)を遠慮なく使わせてもらう。

「うべっ、いててて……」

　仰向けに落ちる姿勢のまま転移したため、強打した背中をさすりつつもＭＰを回復するためにポーションを呷る。
「やっぱりお手軽エスケープってだけでも大概ぶっ壊れ性能だなぁ」
　出待ちされる程度じゃこいつの有能さは損なわれない、確殺攻撃をスカせるというだけでもヘタな肉壁に護られるよりも安全なのだから。

「大体こう落ちて、こっちが壁で、水晶群蠍の落ちる時間と数で……よし、一回跳んでからの……【転送：現実空間(イグジットトラベル)】！」
　世界が切り替わり、俺は再び浮遊感の最中へと舞い戻る。ふと真下を見れば、キラキラと舞い散るポリゴンの輝きが瘴気と夜闇の帳の中でなお綺羅星のように輝いている。
　ふと、もしも真下にプレイヤーとかいたらどうなっているんだろうと不安になったが、晴れのち水晶群蠍(クリスタル・スコーピオン)……そんな天候があってもいいじゃないと責任も渓谷の底へと捨てる。
「さぁ、物理法則に反逆していこうか……！」

スカイウォーク起動、さらに連続して七艘跳び、リコシェットステップ、オフロード……跳躍の助けとなるスキルを重ねていく。
侘しい無装備のサンダルが虚空を踏みしめる。土や金属、木や石の感触とも異なる「空気」を踏みしめる感覚はなんとも不安を煽るが、しかしてそれを踏む俺の右足裏は跳躍の確信を俺へと伝達する。
「空を歩く(スカイウォーク)というより月に跳ぶ(ムーンジャンパー)だな」
跳躍。スカイウォークの前身、ムーンジャンパーこそ今の状況に相応しいなと一人笑いながら宙を跳ねる俺は遠く離れていた岩壁へと接近する。そして岩壁に足が触れた瞬間、リコシェットステップの効果が発揮される。
跳弾(リコシェット)の名を持つこのスキルはスキルレベルに応じた回数だけ回避移動を可能とする。狭い場所で使用したならば、まさしく跳弾のように縦横無尽の動きを可能とするのだ。
尤も、スキルが適用されるのはあくまでもステップ、つまり足のみであるため、足で着地しなければ効果が発動しないのは欠点といえば欠点だが……跳躍そのものを強化する七艘跳びを発動した事で、俺は擬似的にだが七度の壁走りを可能とした。
「要練習だな……っとと危ぶべ！？」
とはいえ、ろくに検証もせずにぶっつけ本番故にその動きには粗が多い。壁を蹴って「真上に登る」というのは中々に難しいのだ、その証拠に三歩目にして身体が崖から離れつつあることに、慌てて俺は湖沼の短剣【改二】を壁へと突き立てる。
剣を用いた登攀に補正の入るグレイトオブクライムのエフェクトを纏う湖沼の短剣は豆腐……とまではいかないが体感では湿気ったクッキーのような岩の壁に突き立てられ、僅かに下へとずり下がったものの、俺の身体を確かに支える。

少し無理矢理な動作だった為に、ギャグのような顔面激突した姿は第三者が見れば大層滑稽かもしれないが、顔の痛みだけで数十体の水晶群蠍を落下死させたのなら支払った額の数百倍のお釣りが返ってきたようなものだ。

「……あれ、妙だな」

圧倒的大勝利の余韻に浸っていた俺だったが、短剣をピッケル代わりに崖を登る最中、ふとそれに気づく。

「レベルアップしない？」

まさか落下死はモンスターの自殺扱いで経験値が入らない？　いやそんな馬鹿な、だったら毒で殺しても厳密には自滅だろうに。それに俺が水晶群蠍と相対した時点で戦闘状態になっていたはず、であれば水晶群蠍が死んだ時点で戦闘は終了し、経験値が入ってくるはず。

水晶群蠍を排除して安全に採掘するという初期目標自体は達成しているが、原因と理由の考察は止めない。

「考えられる可能性は二つ」

一つはインベントリアの格納空間に入った時点で「逃走」扱いになって経験値が入らない説。正直これの可能性は大きいし、例えそうではなくても次に修正されるとしたらそうなるだろう。

そしてもう一つの可能性は………

「よう、随分とご機嫌なカラーリングだな……イメチェン？」

戦闘がまだ終わっていない。シャングリラ・フロンティアでは戦

闘終了時点でレベルアップするシステムだ、それ故に九十九体のモンスターを倒しても最後の一匹を倒すなり逆に倒されるなりしない限りは経験値は1すら入ってこない。
視線の先、水晶群蠍の屍に囲まれるようにして明確な存在感を放つそれに対して俺は話しかける。
「レアエネミーなんだろうが……随分とまた殺意の高そうな」
いわゆる「突然変異」モンスターなのだろうそれは、水晶群蠍(クリスタル・スコーピオン)に分類されるモンスターなのだろう。だがその体を構成する水晶は他の個体のような透明なものではなく、鋼色の骨格に金色の水晶を生やしたような、比較対象となる通常の水晶群蠍を見続けてきたからこそその異様さをより強く理解できる。
通常個体の時点で大概殺意の高いデザインではあったが、目の前のそれはその上を行く。ハサミの代わりに前肢から生えているのは、盾の縁を刃にしたような生物としての利便性を削ってまで殺意に特化したような武器であり、頭部から生えた水晶はさながら鬼の角のようにも見える。尻尾に至っては切り取って持ち手を取り付けるだけでそこらの武器を遥かに凌ぐ性能になる、素人目でもそう確信できるだけの凄みを帯びている。
同胞の亡骸から前肢を引き抜いたそれは、同胞を踏み躙り砕きながらこちらへと向き直る。追加の水晶群蠍が来る様子も、目の前の金蠍と同じタイプの増援が来る気配もない。成る程、一匹狼ってことか。
「奇遇だな、俺も一匹狼(トランジェント)なスキル持ちでな……！」
この瞬間、俺の中から逃走の選択肢は消えた。少なくとも、ご馳走(レアエネミー)の挑戦権を与えられて、それを使わないままでいるなんて性に合わない。こいつがどういう行動をするのかは未知数ではあるが、格

納空間に引きこもって戦闘を終わらせられる可能性も低いだろう。
かといって走って逃げれば通常の水晶群蠍に囲まれて死ぬ結末が今からでも見える。
目算だがここら一帯の水晶群蠍は大体が崖から落ちたか、金蠍によって死んだ。非アクティブ状態の個体を起こさないように戦うとして、戦闘フィールドとなる広さはおおよそ半径20メートル。
「死ななければ理論上はどんな相手にだって勝てるんだよ……！
あ、物理無効は勘弁な」
思い出すのはあの日、レッドキャップと俺の間に現れた夜よりなお黒い最強の狼。永き時の間誓いを守り続けた鎧武者。隔絶した実力は変わらず、されどこちらの手札は遥かに増えた。ユニークモンスターに挑む以上、ただレベルが隔絶している程度で怯んでいてはお話にもならない。
経験値と、アイテムと、採掘権を賭けて俺は黄金の蠍へと勝負を挑む。

水晶の滝、孤高を通じてのシンパシー（後書き）

一定以上数の水晶群蠍が集まると出現するレアエネミーが金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）
それとは別に一定以上数の水晶群蠍がキルされると出現するレアエネミーがいたりいなかったり

どうしよう、水晶群蠍好きすぎマンになってしまった……蠍とか別にそこまで好きじゃない筈なのに小一時間くらい水晶群蠍の設定語れそう……これが恋？
ちなみに金晶独蠍のカラーリングのイメージは「パラサイト隕石」で検索していただけると分かりやすいと思います

その衝動は、飢餓

まず最初に思ったのは「このモンスターをデザインした人はセンスがある」

次に思ったのは「このモンスターをデザインした奴はいい趣味してる」

さらに次に思ったのは「このモンスターを作った野郎は性根が腐ってる」

そして今思った事は……

「ああああああ！　くそがぁぁ！　ぶっ殺す！　ぜってぇにぶっ殺ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

この殺意は一体誰に向けられたものか、目の前の金蠍か？　これを作ったプログラマーにか？　ゲームの運営スタッフに？

ただ一つ言えるのは、金蠍と戦闘を始めてかれこれ数時間。エナジードリンクを飲まなかった事を激しく後悔しながらも俺は戦いを続けていた。

金蠍を一言で言い表すのであるなら、「戦闘特化」という言葉がピッタリだろう。

水晶を断ち掴むための鋏はより攻撃的な、明らかに生物を殺すための方向に進化している。見てくれこそ通常の水晶群蠍の鋏よりも薄く、脆くなったように見えるがそれは大きな間違い。

通常種の鋏角が鉄塊ならばあれは鉄鋼だ……受けて硬く、叩きつければ重い。重装甲の大剣使いが両方の鋏にくっついているようなものだ。

全身から生える黄金色の水晶は、何度か斬りつけてみて分かったが、通常種のものと比べて幾分か柔らかいように思える。とは言ってもチタンが鉄に変わったところで生半可な攻撃では傷一つつけられない事は承知の上だ。

しかも硬度を削った代わりに機動力が上がっているらしく、瞬発的な動きの速さが通常種のそれとは一線を画している。インベントリアによる緊急回避（エスケープ）が無ければ八度は死んでいた。

そして厄介なのが尻尾、正確には通常種のそれと比べて太く、がっしりとした毒針だ。

蠍というものは基本的に「刺して注入」という座薬みたいな方法で毒を放つのが基本だが、この金蠍は当たり前のように針の先端から毒液を発射しやがる。それもご丁寧に単発型、散弾型、レーザー型の三種類を使い分ける器用さ。こいつ、出る作品間違えてないか？

だが最も最も最も……そうとも、数時間もこいつと戦わされる最大の原因こそ……

「このレベル帯で再生能力は……卑怯だろ……っ！」

ある程度ダメージを与えると金蠍は露骨に俺から距離を離す。そして空に輝く月に向かって両腕を広げるようなポーズをするとみる

みるうちに全身の傷を修復してしまうのだ。体感一時間経過した時点でそれをやられた時は心にヒビが入り掛けたが、気を強く保って今尚戦闘を継続している。

とはいえ、何もかもが不利な戦いを延々と続けているわけではない。水晶群蠍から察した情報、戦闘中に得た情報、それらをまとめる事である程度の攻略チャートを俺は形成しつつあった。

まず最初に、やはり通常種と比べて耐久性が低い事。見た目の派手さに目を奪われがちではあるが、通常種と比べても全体的に水晶の外殻に隙間が散見される。上手い具合に刃を差し込むことさえ出来れば、ダメージを与えること自体は可能だ。

次に厄介な遠距離毒液弾、こいつに関してはぶっちゃけ警戒するべきは散弾型の毒液だけだ。単発型は割と目で追うことが出来る上に、着弾時に凡そ直径一メートルほど飛び散ることにさえ気を付ければ回避自体は容易い。

レーザー型はボーナスタイムだ、ホーミングの精度が甘いので走っていれば当たらないし、連続して毒液を放ち続ける事は金蠍をして容易いことではないらしく、五秒ほど動かなくなる。

注意すべきは散弾型、着弾範囲が広い上に一度に攻撃する範囲が広い毒液は立ち回りをミスれば被弾は免れない。

毒液に触れたらどうなるのか、なんて考えたくもないし実証したくもない。

そして厄介な自己再生であるが、どうやらあれのカラクリは「月」にあるらしい。

そういえば遠き日のセツナがウェザエモンが反転の花園を作る際にも月の魔力がどうたらと言っていた気がするし、恐らくソーラーパネル宜しく月の光を浴びることで金蠍は体力を回復させるのだ。

その証拠に月に雲がかかると唐突に自己再生は中断される、それ以外にもある程度の痛手を与えれば自己再生は中断される。
問題は急速に距離を離す金蠍に対してどうやって距離を詰めるかだが……これに関しては原始的な解決方法しかあるまい、即ち走って追いつけ。

「あとはあのバカ体力をどう削り切るか、だが……ここはやはり狩りゲーの基本からだな」

厄介な攻撃の基点となる部位を破壊し、選択肢を奪っていく。恐ろしい速度で尻尾が薙ぎ払われる回転攻撃を長縄跳び宜しく跳ぶのは中々に難易度が高いが、少なくとも毒液ショットガンを連射されるよりは回避は容易く、そしてインベントリアの使用回数も節約できる。

「ＭＰ回復ポーションは残り六個……」

緊急回避は残り六回。インベントリアはいざという時のためのエスケープであると同時に、なるべく使わないように心掛けている。
なにせ最初に立てた推測、格納空間に入った時点で「逃走」扱いになるのでは、という疑惑は晴れていないのだ。出待ちこそされずれ、それが戦闘が続行しているのか一旦戦闘が終了した上で出待ちの状態で蠍達が再配置されたのかを格納空間から知る術はない。
故に仮にインベントリアによるエスケープを使うことになっても、なるべく格納空間に滞在する時間は短くしている。数時間も戦ってオチが逃げられました、じゃ暫く立ち直れない。
とはいえ数時間に及ぶ長期戦で切れかけた集中力を再装填する、という重要なアクションを要するのでジリジリと魔力回復アイテムの数（インベントリアの残り使用回数）は少なくなってきている。

「来いよ金蠍、小生意気な人間一匹を見逃す程甘ったれちゃいねーだろ？」

視線の先、左眼に湖沼の短剣の一振りが突き立てられた金蠍は怒りを行動に直結させたかのように、その鋏というより盾か大剣に見える前肢を地面へと叩きつける。
　半分捨てるつもりで放った湖沼の短剣Ａではあるが、片眼を潰したのは大金星だ。もし無事に回収できたらＢと一緒に強化してやろう。

　その巨体からは想像もつかない俊敏の動きでこちらへと迫る金蠍、大きさの不揃いな石を敷いた石畳のような砕けた水晶の床から、足場たり得るサイズの水晶を見分けてその上を駆け抜ける。次の瞬間、ドリフトする車のような動きで無理やり身体を半回転させた金蠍の尻尾が俺のいた場所を斬り薙ぐ。
　金蠍の尻尾攻撃が放たれた時点で俺は反転し、丁度こちらに真っ直ぐ向ける形となった鋏剣の平面に足場を見出す。

「まずは飛び道具から削らせてもらう……！」

　ゲージ溜めと耐久削りを両立できるという点で対刃剣というカテゴリは非常に優秀だ、それに単体でも普通に機能するという点も素晴らしい。
　兎月【上弦】を振るう度、クリティカルの感触と共に【上弦】の効果によって体力が削られていく。
　兎月【下弦】を振るう度、クリティカルの感触と共に【下弦】の効果によって体力が回復していく。
　さながら天秤の均衡を曲芸しながらやっているような気分だ、何をぶち込んでも必ず５０：５０（フィフティフィフティ）にしてくれる対価の天秤パイセンを見習えよ俺。

「うははははは！　なんかどんどん楽しくなってきた！」

下弦の効果でかき集めた体力を遠慮なく使い潰してニトロゲイン起動。既に数十度使用している孤高の餓狼（トランジェント）も再起動、ただ一つのスキルを除いて全てを放出するつもりでスキルを連続で起動する。

帝蜂双剣の耐久さえ残っていれば尻尾を攻撃していたのだが、生憎最初の数十分で耐久度をほとんど使い切ってしまった上に、よりにもよっての自己再生で壊毒付与もパァである。

「だったら力尽くでぶっ壊すしかないよなぁ！」

戦闘の要と化したスカイウォークによる二段ジャンプ、無理矢理金蠍の背中にまで躍り出た俺は金蠍の背中に生えた水晶を足場に七艘跳び起動。

跳躍の加速を含めた勢いを込めたまま金蠍の尻尾、針の付け根にグローイング・ピアスを叩き込む……四ヒット、悪くない。

突撃の硬直から解き放たれた金蠍の毒針が俺をタゲるが、すかさず致命刃術【水鏡の月】を起動。

ぐりんと真後ろを向いた毒針に対し無尽連斬から進化したスキル、獣鏖無尽（ジュウオウムジン）を放つ。

「くっそ、使いづれえ……！」

スタミナが尽きるまで連撃を与えるという効果は変わらず、一発ごとの火力が上がったことでDPSが飛躍的に上昇した代償にモーションが大振りになってしまったこのスキルは、２フレームすら惜しい今の状況では非常に歯がゆい。

「くそっ……【転送：格納空間（エンタートラベル）】！」

ダメージこそ与えすれ、スタミナを使い切った俺は格納空間に退避。ＭＰとスタミナを回復させながら、緊張で硬くなった身体を迅速にほぐしていく。
　実際の肉体ではないが、精神的な緊張はアバターの動きに直結する。ペンシルゴンなんかは戦いながら相手を煽ることで隙を作るタイプであり、俺もオイカッツォも奴と戦うことで煽りスキルに対する耐性を鍛えたものだ。

「戻っ……させるかぁぁぁぁ！！」

　ダカダカと愉快な歩行で距離を離し、自己再生を試みんとした金蠍に俺は吠えながら全力疾走。露骨に隙だらけな金蠍の真正面に回り込み、思い切り振りかぶった握り拳（ハンド・オブ・フォーチュン）で未だ突き立てられた湖沼の短剣の柄尻を押し出すようにぶっ叩く。
　ライト版人力パイルバンカーによって押し込まれた湖沼の短剣が軋みをあげながらも金蠍を体内から攻撃し、のたうち回る金蠍から俺は距離を離す。

「いい加減……ちょん切れろ！」

　対の刃が一つの剣へと変貌する。兎月【双弦月】の刃が三日月の光を宿し、さらにスキル「一振両断（イッシンリョウダン）」の効果によって一撃限定で破壊属性を帯びた一閃が、やったらめったらに暴れ狂う金蠍の尻尾が薙ぎ払われたタイミングに合わせて大上段で振り下ろされる。
　冷凍庫で凍らせた肉に包丁を通すような、硬質な物体をそれでもなお切り裂く感触は達成の確信を俺へと齎す。

「よおぉぉっしゃああああ！！」

振り抜いた【双弦月】、俺の身体のすぐ隣を針のない尻尾が通過し、数フレームの間を置いて、俺の少し後ろの方の地面に分離たれた黄金の針が重力に従い、突き刺さった。

「はぁーっはっはっはっはっはぁぁぁ！」

この瞬間、この瞬間だけは俺の頭の中から全てのチャートが消し飛ぶ。最優先は針の回収だ！針さえ回収できればこの際死んでもいい！

前回の乱数の女神裏切り事件もあってか、そんな狂乱状態に陥った俺は黒人スプリンターを思わせる全力ダッシュで針へと殺到する。

「獲ったぁ！！」

過去最大の手際の良さでインベントリアに金蠍の針を収納し、二秒ほど充実の余韻に浸ってから俺は金蠍の方へと振り向く。

「はっ、怒りモードか？　ようやく時間が進んだ気分だ」

針を奪われたのがよっぽど腹に据えかねたのか、黄金の水晶を朱色に発光させながらひっきりなしに剣鋏で地面を叩き続ける。

剣鋏が水晶畳を叩き据える度、小規模な爆発が起きており、もはやスパークすら帯びかねないほどに黄金の水晶の中で莫大な魔力が暴れ狂っている。

勝算は……まぁ、二割あればいいところだろうか。戦闘開始十分時点であればもう少し戦えたかもしれないが、針を回収した時点で身体に満ちた保つべき緊張が解けてしまったのが分かる。こうなってしまっては駄目だ、緊張を再点火するまでに恐らく俺は金蠍に倒される。

「とはいえ、もし次があるならその時のために……いや、訂正する」

月が沈み始める。空が白み、太陽が地平線の果てから太陽がその光の片鱗を覗かせる。

いい加減帰りたい、だが死に戻りするつもりもない。ならばどうする？

「すぅぅ…………起きろボケ共ぉぉぉぉぉ！！！」

ウェイクアップ、クリスタル・スコーピオンズ！

その衝動は、飢餓（後書き）

水晶群蠍の設定を書き連ねていたら三千字を突破してまだ書ける自信があることをお知らせいたします……

金蠍こと金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）のちょっとした設定開示
水晶群蠍の中には時折「偏食個体」が誕生する。大抵は偏食対象以外の摂取を拒むために早死にするのが常であるが、その中でも「生きた同胞から生えた水晶」のみを好んで摂取する個体が存在する。そういった個体は肉体が「同胞を狩る」形状へと変化していく。これは水晶群蠍の驚異的な再生力を応用したものである。そういった個体は通常の個体よりも戦闘慣れした性質を持ち、コミュニティから離脱した放浪個体（トランジェント）となる。水晶群蠍は侵入者に対してはコミュニティ総掛かりで迎撃を行うが、同胞に対しては個人個人での対応しかしないという特性が存在するため、共食い個体が現れると水晶群蠍のコミュニティは大きな打撃を受けることになる。
そして同胞を狩る以上、水晶群蠍が休眠状態に入る夜間に行動するためその水晶は月の魔力を強く帯びることになる。もしも永い期間を同胞を喰らい時に迎撃しながら月光の魔力を水晶に蓄積させ続けた個体がいるとするならば、その姿はきっと神々しい黄金色になっているだろう。

俺は金蠍の取扱説明書を持っているわけでも、設定が書かれたwikiを見たわけでもない。だがそれでも見れば分かる情報というものはある。
そう例えば、金蠍自身は通常の水晶群蠍と敵対関係、もしくはそれに類する関係であるということだったりな。
水晶群蠍側がどう思っているかは知らないが、少なくとも金蠍は同胞を殺す行いを可能としている。

「はははは！　騒々しい目覚まし時計が日の出をお知らせしまぁぁぁぁす！！」

背後より迫る金蠍に轢かれないように注意を払いつつ、俺は大声で叫び散らしながら水晶巣崖を爆走する。
抜き足差し足ですら反応する連中だ、下の渓谷にいるプレイヤーにすら届けと言わんばかりに大声で叫びながら走り回れば当然水晶群蠍達はアクティブ状態へと移行する。
そして水晶群蠍が三体起動したのを確認した瞬間、俺は走る方向を百八十度反転。迫る金蠍にこちらからも距離を詰める。

「車をジャンプで避けるのと一緒だ……タイミングは体感早め……
……ここだっ！！」

金蠍と激突する寸前に跳躍、スカイウォークによって空中機動を可能とした俺は大質量の金蠍を跳び越える。
だが針を失えど攻撃手段としての役割を完全に喪失したわけではない金蠍の尻尾が俺の右腕をすれ違いぎわに打ち据え、右腕の感覚が

シャットアウトされた俺は上弦を手放してしまう。

「ぐ、う………だが俺にばかりかまかけてていいのか？」

俺が直前まで何をしていたのか、俺が今いる位置、金蠍がいる位置…全てを組み合わせればおのずと答えは導き出される。

下弦をインベントリにしまいつつ、痺れによって力の入らない右腕を慣性のままにぶらつかせながら、弾き飛ばされた上弦を左手で回収。そして地平線の先、その姿を現し始めた煌めく水晶の波濤に俺は作戦の成功を確信する。

消えゆく月光を背に俺は人差し指を金蠍に突きつけ、宣告する。

「お前を砕く厄災が俺というビーコンに釣られてやってきたぜ……さぁ、どうする？」

水晶群蠍のターゲットは俺一人、だが奴らの自身すら顧みない圧殺突撃は果たして金蠍を考慮してくれるかな？

状況を理解するだけの知能(AI)はあるようで、わずかに逡巡した様子を見せた金蠍は結論を出したらしい。煌々たる黄金水晶纏う剣鋏を構え、俺に背を向けた先……即ち奴の選んだ答えは逃走ではなく迎撃であった。

俺と相対していては背後から水晶群蠍の津波に飲まれることになる。仮に逃走を選んだとしても俺はどこまでも粘着する。どの選択肢を選んでも水晶群蠍への対象を強いる、土壇場で仕掛けた虫かごに奴はまんまと嵌り込んだわけだ。

「ヒュウ、カッコいいねぇ。じゃあ俺は遠慮なくお前に守ってもらうとしようか」

迫る波濤、対するは黄金と半裸。巻き上げられた水晶片は暁光と月

光の均衡が崩れ駆逐されつつある夜闇の空、消えゆく綺羅星の代用を果たしたその様はまさに朝の星空……俺はこそっと金蠍へと近づき、その尻尾をポンと叩く。

「精々頑張れ（Good Luck）」

誰がお前と心中なんてするかバーカ！

「よくよく考えたら仮に金蠍が倒れたとしても、戦う相手が水晶群蠍に変わるだけじゃ……いや、その場合は崖から落とせばいいか」

格納空間内で休憩がてら寝転がっていた俺だが、一度様子を見に行こうと起き上がる。

「【転送：現実空間（イグジットトラベル）】」

一瞬のホワイトアウト、硬質な平面はゴツゴツとした水晶畳に、不可思議な空間は平常の暁天に。
水晶巣崖に戻った俺は金蠍の姿を探すために視線を動かし、そして絶句する。

「…………まじかよ」

満身創痍、まさしくその通りたる姿の金蠍はそれはもう無残な姿だ。度重なる衝突、哀れな犠牲者のせめてもの抵抗も積み重なれば重傷となる。

全身の水晶には致命的な亀裂が入り、剣鋏に至っては右の剣鋏が根元から毟り取られている。

尻尾も針を根元から断たれた上で、さらにその半分が千切れかけの状態で力なく垂れ下がっており、金蠍が如何に絶体絶命の状況であったのかをまざまざと晒している。他の脚も何本か損失しており、水晶群蠍達の殺人おしくらまんじゅうに手心が加えられていたわけでもないだろう。

だが、生きている。

全身の亀裂から炎にも雷にも見える魔力を噴出させ、血飛沫の如く撒き散らしながらもその気炎は万丈、僅かばかりの衰えもなく満身創痍に戦意を満ち漲らせていた。

信じられない事に数十体の水晶群蠍の屍を踏みしめて、金蠍はあの大質量による大物量を極めて脳筋な手段を以って乗り切ったのだ。

ちらと見えた離れて行く数体の水晶群蠍はまさか、逃げているのか？　「あの」水晶群蠍が？　俺という侵入者を仕留めておらず、新しく覚えた出待ちすら忘れて一目散に？

「どんだけ、どんだけ戦闘特化してるんだお前は……」

自身のリソースを全て攻撃に転換し、身体から噴き出す魔力という形で可視化された闘志は空気を歪ませる蜃気楼の如く。

原型こそ残っているものの、それでもヒビだらけの左の剣鋏をこちらへと突きつけて威嚇する金蠍。

それはモンスター……エネミーＭｏｂとしてシステム的にプレイヤーに攻撃を仕掛けるそれとは根本的に異なる、もっと感情的な衝動によるものだ。

「たかがレアエネミー一匹にどれだけのＡＩ積み込んでるんだこのゲーム……」

背筋を伝う戦慄は決してマイナスな意味ではない。シャングリラ・フロンティアというゲームに込められた熱意が、満身創痍の金蠍を通じて俺へと伝わってくる。

「上等じゃねーか……そっちがその気なら決着をつけてやる。持ち得る全部を使ってな、卑怯の文句は受け付けないからな！」

今の今まで温存してきた……というよりもそのデメリットが致命的故にこの状況では使えなかったオーバーヒートを解禁する。さらに重ねてリキャストの終わったスキル全てを発動し、十全を超えた万全を以って左手にのみ湖沼の短剣【改二】を構える。

右腕の痺れはまだ取れない、であるならば無理に右手で剣を持つよりも左手一本に集中して右手の痺れがなくなるまで持ち堪える。

「来やがれ！」

屍を晒す水晶群蠍の頭を踏み砕き、千切れかけの尻尾を引きずりながら金蠍が突撃を敢行する。

三歩のステップで横に回避し斬りかかからんとするも、水晶からランダムに噴出する魔力が俺を近づけさせない。

歯抜けの脚を猛烈に動かし、その場でスピンした金蠍の千切れかけた尻尾が不規則な軌道を描いて薙ぎ払われる。

膝を屈し、身体を限りなく地面と平行に仰け反らせた姿勢を取る俺の鼻先を尻尾が通過する。
咄嗟に屈めた脚を伸ばして倒れこむような跳躍を行なった直後、俺のいた場所にひび割れた剣鋏が叩きつけられる。
水晶の欠片が背中に食い込む感触を振り払い、後転とバク転でノーブレーキで後退していく俺を追うように、いっそ砕けてしまえと言わんばかりに連続で剣鋏が叩きつけられ、着弾の度に爆発が水晶の石畳をさらに砕いていく。

圧倒的劣勢。それでも時間を稼ぎ、時間に急かされながら活路を探す、バラバラになった細い藁を束ねて縄を作り、綱渡りの全力疾走を目論み起点を探る。
果たしてその時は来た。

「勝機！！！」

背の水晶がその耐久の限界を迎え、爆ぜるように砕け散る。血飛沫代わりの魔力が決壊し、ガクンと金蠍の身体が揺らぐ。
どいつもこいつも自傷しながら戦う奴ばかりだ、流行りなのか？いや、よくよく考えたら俺もだったわ、などと考えながら距離を詰める。
狙うはもう片方の眼だ、構えはユナイト・ラウンズではメインで使っていた刺突の構え。
七艘跳びを移動スキル代わりに距離を詰め、そこについてて前見えるの？　と聞きたくなる位置にある眼へと滑らせるように短剣を突き出す。
ぞぶりと甲殻とは違う感触が突き進む短剣から伝わってくる、そして刃がその殆どを金蠍の眼球に突き埋めたところで、光を失った金蠍がやったらめったらに大暴れを始める。

「さぁ決着をつけようか！」

いい加減寝たいんだよ俺は！！

その執念は、渇望（後書き）

インベントリアで短時間とはいえ安全圏で休息を入れることが出来るのは大きな意味を持っており、正真正銘ぶっ通しで戦っていたら多分主人公はもっと早い段階でリスポーンしてると思います

結論から言えば、視界を奪われ俺をタゲることが出来なくなった金蠍の脅威度はほぼなくなったものと考えていい。
やたらめったらに繰り出される攻撃は距離を離してしまえば対岸の火事、あとは金蠍の攻撃と攻撃の合間にチクチクと刺していけばその内金蠍は沈むだろう。

「だけど、そういうのは違うよなぁ？」

右手を開け閉じして痺れが取れたことを確認し、申し訳程度に買っておいたＨＰ回復ポーションを一息に呷って兎月を構える。
別に安全牌が駄目というわけではない、ハイリスクな周回を要する場合は何よりも確率を安定させる安全牌こそが重要であるし、とりあえず乱数は死ねと思うがそれは今重要なことじゃあない。

「合体まで……うん、残り二分なら間に合うだろうな」

動機はなんであれ、全てのプレイヤーは現実で出来ないことを行うためにゲームをプレイする。であれば初見の強敵を攻略する際に重要視するべきは安全な勝利ではない。
よりドラマティックな過程と、不確定な博打（バクチ）……皮肉にも忌々しい乱数こそがやはりゲームにとっては最も重要な要素なのだ。
結局のところ、楽しまなきゃ何のためにゲームをやっているのかという話だ。さぁ、楽しく決めてみようか。

駆け出した先、もはや金蠍自身にも制御できていないのではと思える程乱雑に振るわれる攻撃、部位の欠損が激しい以上暴風のような

攻撃には必ず穴がある。
振るわれぬ右剣鋏があった方から距離を詰め、刺突一度に斬撃三度。
金蠍が俺の位置をダメージで特定した瞬間に【水鏡の月】でヘイトを背後へ。金蠍が後ろを振り向いた瞬間にインベントリから取り出したハニワ……もとい爆土の偶像を真上へと高く放り投げる。うわ、本当になんかぐねぐね踊ってるぞあのハニワ。
抜き足差し足カウント３、２、１……今。

地面に叩き据えられた爆土の偶像が一瞬その原型が球体になったと錯覚する程に膨張、次の瞬間想像以上に威力の高そうな爆発が後ろを振り向いた金蠍の臀部で炸裂する。
爆風は水晶片を吹き飛ばし、ビリビリとフィールドを揺らす。そして振動に紛れて俺は位置移動を行う。

「いい加減邪魔だろう、すぱっとカットしてやるよ」

水晶群蠍によって千切れかけた尻尾は半ばから千切れかけ、爆土の偶像の爆発によってかろうじて皮一枚で繋がっていると言ったそれをグローイング・ピアスのエフェクトを帯びた上弦で穿つ。
ヘイトを向ける先すらままならない相手に全ヒットさせることなどそう大したことではなく、五発の螺旋撃に削られた金蠍の尻尾はついに本体から完全にちぎれ飛ぶ。
兎月に破壊属性は付与されていなかったはずだが、何か条件を達成していたのだろうか？

「まぁいい、終幕だぜ金蠍！」

最早金蠍の攻撃手段は突進と左剣鋏による攻撃くらいしか存在しない。それでもなお戦意の衰えぬ金蠍へと手向けの必殺（トドメ）を放つべく、何度目かも知れぬ対刃の合体を敢行する。

「お前はウェザエモンにも匹敵する強敵だったよ」
少なくとも、システム的な不利を強いるウェザエモンに基礎スペックのみで匹敵する金蠍は間違いなく強敵だった。
いつだって、どんなゲームだって、ボスを倒して「終わる」瞬間ほど楽しく、そして寂しい瞬間は無い。
スキル「致命の三日月（クレセント・ヴォーパル）」を起動、右上から左下へと斬り捨てる一撃を金蠍の口腔へと叩き込む。
しかし、沈まない。致命傷の斬撃を受けてそれでも左剣鋏を振り上げる金蠍に対して、俺は【双弦月】の刃を反転させる。

「もう朝なんだ、月と一緒に沈め！」

直剣系スキル「致命剣術【半月断ち】」。左下から右上への斬り上げ攻撃を放つ、ラビッツで購入したスキルが朝日の中で半月を描く。
致命の三日月によって斬り裂かれた傷口を、【半月断ち】でなぞるように再度斬り裂かれた金蠍が大きく痙攣する。
振り上げられた剣鋏の動きが止まり、しかしてそれが力を失い落ちることはない。爆発で感覚を掻き乱され、視覚を潰されて尚、振り上げられた一撃は確かに俺を正確に狙いすましていた。
それでも何事にも終わりは訪れる。
ぷつりと糸が切れたかのように金蠍は左剣鋏を振り上げたまま崩れ落ち、捲き上る水晶の欠片と共に盛大にポリゴンを撒き散らす。

「んんんん………よっっっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

砕け散ったポリゴン、煌めく水晶片の雨に打たれながら、俺は歓喜の叫びを上げる。水晶群蠍がアクティブになる、とかもうどうでもいい、今この瞬間の喜びは何物にも代えがたい。なにやらウィンド

ウが表示されたが喜びのあまり内容を読む事なく振り払ってしまうほどに。
しかしウェザエモン戦とはまた違う意味でも耐久戦だった。あれは三十分間常に神経を張り詰め続けて最高パフォーマンスを要求されるという意味で高難易度だったが、今回は最低限のノルマを崩さないままさらに長時間戦い続けるタイプの高難易度だ。

「はー疲れた！　楽しかった！　眠い！」

朝日にも負けない晴れやかな笑顔で俺はその場に仰向けに寝転がる。もしこの瞬間いきなり現れた水晶群蠍に潰されてリスポーンしても笑顔でいられる自信がある。
とはいえまだやることが残っている。金蠍が消えた事で突き刺さっていた二本の湖沼の短剣が地面に落ちている。ヒビの入ったそれを拾い上げ、しみじみと眺める。
思えば兎月……その前身である致命の包丁（ヴォーパルチョッパー）に並んでプレイ最初期から長く付き合ってきた武器だ、もう少し強化してやってもいいだろう。
その役割を充分に果たした短剣をインベントリへと収納し、いよいよ本命だ。

「んんん……スクリーンショット撮って壁紙にしたい光景だぁ……」

そもそも遭遇が稀であるレアエネミー故にドロップ率もドロップ量も多めなのか、眼前には十数個はありそうな金蠍のドロップアイテムが散らばっている。
それらを一つたりとも見逃さぬよう丁寧に拾い上げていく。そして最後に、バスケットボールほどはある黄金色に輝く水晶をインベントリアに収納し……ようやく一晩かけた戦いが終わったのだと実感する。

「はー……本当、神ゲーだなぁ……」
なんというか、実に健康的な達成感だ。理不尽を強いた対象を踏み潰して勝ち誇るクソゲーの達成感よりももっとサッパリとした感情が全身に満ちている。
とはいえクソゲーをプレイしている最中の怒りが全てエネルギーに変換されるあの感覚もまた捨てがたいものがある。ストレスを創り、ストレスを破壊する……クソゲーとは創生神話だった？

「さて……どうすっかな」

正直、ここからエイドルトに帰還するのは難しい……いや訂正する、面倒臭い。いっそのこと崖から紐なしバンジーして死に戻りするのが一番楽といえば楽なのだが、あそこまで生き足掻いた金蠍と戦った直後にそんな戻り方はバツが悪い。
「ゲームとはいえ、心動かされることもあるわけで……よし、一丁生き足掻いてみるか！」
地響きに揺れる水晶巣崖、視線の先にはゆらりゆらりと揺れる金蠍のそれと比べても十倍近い大きさのありそうな蠍の尻尾がこちらへと近づいてくるのが見える。
尻尾であのサイズなら、俺を見据えるあの山は一体どれ程の大きさなのか。
「大親分の出撃ってか……上等じゃねーか、意地でも逃げ切ってやる」
見据える先、大量の水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）を引き連れた巨大水晶群蠍に俺はそう

宣言し、オーバーヒートの効果が切れた事で重くて仕方がない身体に鞭打ち、走り出す……！

エイドルトの路地裏。早朝という深夜勢がおおよそログアウトし、早朝勢がログインし始める時間帯はプレイヤーの数が少なく、面倒事から逃げ切った後に面倒事に巻き込まれるようなこともなく、俺は約束した場所へと到着していた。
いやはや全く、五体満足でいられたのは奇跡だ。あのクソデカ蠍野郎、身体に水晶群蠍を載せて運んでくるとか空母か何かか？

「エムルーいるかー？」

「はいなっ！　ここですわっ！」

ガタゴトと路地裏に無造作に捨て置かれた木箱が揺れ、中からエムルが飛び出してくる。
俺に返事をしたエムルは笑顔で俺を見つめ、そして驚いたように目を見開く。

「な、なんだかサンラクサンすごくすごい事になってるですわ！？

ヴォーパル魂がメラメラ感じるですわ！！」

「ははは、言ったろ？　ヴォーパル的な事してくるってよ。はいこれお土産な」

「キラキラして綺麗ですわぁ……これなんですわ？」

「水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の排泄物」

「ふびゃーーーっ！？」

一応それ結構レアなアイテムっぽいんだから捨てるなよな。

エムルをおちょくりつつもラビッツへと帰投した俺は、その足でビィラックの工房へと向かう。

「なんじゃ、鳥の人か。丁度良かった、ワリャに渡されたもんは修理が終わって……」

ことん、と金床に金蠍……「金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）の煌弩晶針」を置く。

俺と同じく一昼夜リアクターを修理していたのだろうビィラックは、隈の浮かんだ目を皿のように見開いて針を凝視する。

「煌弩晶針（こうどしょうしん）だけじゃないぞ……鏖晶戟鋏（おうしょうげっきょう）、封月晶殻（ほうげつしょうかく）、荒鞭晶尾（こうべんしょうび）、極め付けはこれだ、「金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）の命晶核（めいしょうかく）」……！」

無骨な金床が黄金色に彩られる。三桁の幸運が神乱数を引いたのか、それともソロ討伐ゆえの豪勢さか。ともかく一体のモンスターから出るにしてはあまりに大量の素材が、水晶にはない華美な煌めきを持って並べられる。

特に命晶核の美しさたるや、バスケットボールサイズの水晶の中に

銀河のような渦が見える様は飾って置くだけでも人生の潤いになりそうではないか。

「予定変更するようで悪いが、水晶群蠍の素材を使ったビィラック製遺機装（レガシーウェポン）にこれらの素材も……ビィラック？」

目を皿のように見開き、口をあんぐりと開けたまま動かないビィラック。不審に感じた俺はビィラックの眼前で手を振り、脈を図り……

「し、死んでる……！」

「生きてますわ！？」

どうも驚愕の表情のまま気絶してしまったらしい。しばらくエムルと一緒にビィラックを気つけしたり、パニックを起こしてアワアワしだしたビィラックに事情説明という名のドヤ顔をかました俺は、満足感で潤った心でリアクターを受け取り割り当てられた自室へと向かう。

いつもならばエムルが頭に張り付いているが、ビィラックが激レア素材の数々から放たれるゴージャスオーラに充てられてトチ狂ったのでその看病に付きっ切りなのだ。

故に一人で自室へとたどり着いた俺は、緊張が抜けきって意識が飛びそうになるのを堪えつつ、ログアウトする前に最後にやっておきたい事をすべく、格納空間へと移動する。

「ふふふふふ……パワードスーツ一番乗りはこの俺だ」

格納空間を進み、俺は防具立てに支えられているかのように空中に浮遊するパワードスーツ……規格外特殊強化装甲の前へとたどり着く。

なんかもう面倒臭いので適当に選んだ一つを調べ、パワードスーツを起動するにはそれに対応する戦術機獣にリアクターをセットすれば良い事を突き止める。

「ふははははは……さぁ、目覚めるがいい【青龍】よ…………！！」

詳細は省くが、結論を言うと俺は二日ほどシャンフロにログインするモチベーションを消失した。

Q1．あのでかい蠍なんなの？
A．水晶群老蠍(エルダー・クリスタル・スコーピオン)、水晶巣崖に出現するもう一体のレアモンスター。所謂長老的個体であり、通常個体や偏食個体と比べても十倍ほどの巨体を誇る。コミュニティ全体が大きなダメージを受けることで出現する。
色々設定は考えていますがどう足掻いても極悪レイドボス性能なのでソロ討伐はまぁ不可能です。ちなみに普段は完全に地面に埋まって身体に生えた水晶を水晶群蠍の幼体に食わせることで育てています。保育園系レイドボス？

Q2．金晶独蠍アイテム落としすぎじゃね？
A．一部モンスターはドロップアイテムに条件があり、討伐人数が多い程落ちにくい＆落ちる数が少ないアイテムがあります。ですのでもしもそんなモンスターをソロ討伐できれば、莫大なリターンが返ってくるわけです。
袋叩きは安全だがアイテム泥率は渋い、少数精鋭は危険だがアイテム泥率が高いと言うわけですね。

Q3．主人公は水晶群老蠍どうやって逃げたの？
A．逃げて隠れて走って跳んでワープして、一時間くらいかけて水晶巣崖から生還しました。ただでさえ金晶独蠍一体で三話も使ってるのに水晶群老蠍からの逃走劇も描写するとさらに長引きそうなのでカット。

米の代わりにライスを食べる的な

「…………………あー」

金蠍こと金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）との激闘、そして衝撃的な絶望に打ちひしがれた俺はとりあえずシャンフロから逃亡することにした。

時計を見れば時間は午前五時……うん、まぁ、早起きは健康だから……不眠は不健康だが。

「はぁー………」

自棄酒ならぬ自棄エナドリをキメ、ゾンビのような足取りで部屋を出て台所へと降りていく。

「あれ、おにーちゃん起きるの早いね？　駄目人間謳歌してるくせに」

「うっせ、青春の半分をバイトに捧げてるやつに言われたかないよ」

「もう半分が綺羅星の如く輝いてるから差し引きプラスだね、人生最高！」

我が妹ながら強いなぁ。

とはいえほぼ毎日ゲームにログインしている様は確かに駄目人間かもしれない、オイカッツォのようにゲームを仕事にするならともかく。

「ていうかどしたの？　露骨にしょぼくれてるけど」

「いやー……なんというかなぁ、お前的に言うならめっちゃデザインの気に入った服を必死にお金貯めて買ったら実は赤ん坊用の服だった、的な……」

「大丈夫？　葉緑素足りてないんじゃない？　日光浴したら？」

「ゲームやり過ぎて根が張ってるってか、はっはっは……誰が植物だ」

べしりと瑠美の頭にチョップを入れつつ、俺はあの瞬間の絶望を思い出す。

なんてことはない、薄々と嫌な予感はしていたのだ。ただそれが見事的中しただけのこと。

パワード「スーツ」である以上、規格外特殊強化装甲が頭、胴体、腰、足の四パーツから構成される「防具」である以上、リュカオーンの呪いが適用された……ただそれだけのことを失念していた俺のポカミスだ。

「ただやっぱりなぁ……」

必死こいて修理に奔走して、結果俺だけパワードスーツ着れません。
は中々に堪えた。さらに言えば規格外武装の殆どが「強化装甲を装備することを前提」とした装備であったことが判明したのは泣きっ面に蜂、起き上がりにハメ技である。
唯一の救いは戦術機獣達は普通に起動できるということだが、マイナス2にプラス1を足してもマイナス1なのだ、しばらくシャンフロにログインする気力は無かった。

だが一番悔しいのは、リアクターが修理されたことで俺はパワードスーツを着る事が出来ないのに、あの外道共は普通に着る事ができると言う事実が何より腹が立つ。その事実に気づいてしまった事で、いっそしばらくログインせずにいる事であいつらもパワードスーツを着れなくなってしまえ……なんてことも考えたが解決にはなっていない。
もう一つ衝撃的事実があったのだが、そちらの方はまだどうにかなりそうなのでそこまでのダメージはない。

「たまには気分転換も必要かぁ……」

「そうだよおにーちゃん、失敗したなら何かで埋め合わせればいいんだよ。さっきのよくわかんない例え話なら似たようなデザインの服で着飾ってみたりとか、ねっ」

「代用……気分転換……成る程、参考になった。ありがとな瑠美」

少しだけ晴れた心に、俺は瑠美に感謝の言葉を投げかけつつ、自室へと戻ったのだった。

「…………いや、結局ゲームじゃん」

「ふぅむ……そういやこれがあったな」

シャングリラ・フロンティアのゲームチップを本体から抜き、パッケージにしまってゲーム棚に置きつつ、俺は一本のゲームのパッケージをしげしげと眺める。

基本的にシャンフロ以前はクソゲーばかりやっていた偏食家(ゲーマー)であった俺だが、実は購入したゲームの中には別にクソゲーではないものがあったりする。

そんな数少ないクソではないゲームのうちの一つがこれ……

「ネフィリム・ホロウ……」

カテゴリとしてはロボットアクションゲーム。

舞台は「突如空から巨人が落ちてきて、なんだかんだあって文明が半壊したパラレルな地球」というもの。

プレイヤー達はかつて空から堕ちてきた巨人を乗りこなし、三勢力と時に争い時に協力する……というどちらかというと硝煙臭いタイ

プの個人的評価としては良ゲーだ。
であれば何故俺がこのゲームを持っているのか、それはこのゲームが過疎っていることと関係している。

このゲーム、操作が難しいことこの上ない。操作性が悪い、ではなく操作が複雑なのだ。
オイカッツォやペンシルゴンほど親交があるわけではないが、それでも会えば挨拶を交わす程度のクソゲー仲間から「一人でボーカル、ギター、ベース、キーボード、ドラムをこなすような操作性のゲームがある」と紹介され、購入したのがこのゲーム。
確かにその例えはあながち間違いではなかった。作中におけるロボこと、目を閉じた巨人と融合することで操作する機衣人(ネフィリム)は搭乗席(コクピット)に乗り込んで操作するタイプではなく、文字通り機体と融合一体化するタイプなのだが、それが原因で兎にも角にも操作が忙しすぎるのだ。

例えば両肩と両腕にガトリングを装備していたとしよう。これが搭乗席(コクピット)タイプであればレバーを引くなり、ボタンを押すなり、タッチパネルを操作するなりでガトリングを起動するわけだ。
だが機衣人(ネフィリム)は一体化型、要するにゲーム内でロボットというアバターにログインするようなもので、四門のガトリングをまさしく自分の身体のように扱わなければならない。
即ち、プレイヤーは自分の脳みそでロボの機動、行動、武装展開などのあらゆる行動を同時に制御しなければならない。
ＣＰＵに頼ってオートで武装を動かすこともできるが、代償は対人戦の勝率である。
少なくともゲーム内ランキング戦で上を狙うのならばマニュアル操作で高速機動しながら偏差射撃で当てるくらいの技量が必須であり、成る程確かにゲーム評価サイトで見かけた「多重人格者向けゲーム」というのもむべなるかな。一人乗りのくせに注意を向けるべき事が

多すぎるのだ。

「とはいえ慣れたプレイヤーなら問題なく操作できるし、ストーリーもゲームバランスも普通に良いからなぁ」

総評を言うのなら、プレイヤーとして参加するハードルが娯楽(ゲーム)とは思えないほど高いものの、見ている分には楽しい良ゲーと言える。
そう、言うなれば過疎ゲーにおける暗黒面(ダークサイド)のベルセルク・オンライン・パッション、光明面(ライトサイド)のネフィリム・ホロウ……便秘での知り合い故、薦めてきた理由は分かるが俺から言わせれば、ネフィリム・ドールにはプレイヤーに唾を吐き捨てるような邪悪さが足りない。
便秘を見てみろ、運営が手綱(修正)を諦めたせいで暴れ馬が名状しがたい何かにトランスフォームしてるんだぞ。

とはいえ、瑠美の言葉からロボに飢えた俺の無聊を慰めるには、やはりロボに乗るのが一番。
もう一本、ロボットアクションゲーはあるのだがそっちは色々と難ありのクソゲーなので今は除外する。

「このゲームなんのキャラでプレイしてたんだったか……まぁいいや、見りゃ分かるか」

久しぶりにゲームをプレイする時の感覚はニューゲームとはまた違うワクワク感があるな。

「あー、そうだそうだ、カワセミマンだったなそういえば」

ログインし、久しぶりにネフィリム・ホロウに於ける「サンラク」となった俺は、自身の機衣人(ネフィリム)が格納された倉庫を訪れていた。
シャンフロ程に狂った現実再現度のゲームではない故にそんなものはないが、しばらくの間やってないゲームだったから、機体にも埃が積もっていそうだ。

「久しぶり、「キングフィッシャー」……うん、いつ見ても奇跡的にマッチした初期カラーの組み合わせだ」

それは俺がこのゲームをプレイしていた当時、ふと「加速全ブッパにして武装も一撃で大ダメージを与えられるものを最低限にすれば楽しいのでは？」と最高に頭の悪い理論で組んだ機衣人(ネフィリム)こそがキングフィッシャーだ。
天から堕ちた巨人、ネフィリムの中でもその身体を折りたたむ事が可能な可変型骨格をベースに装甲を極限まで絞ることで得た最速の翼は、巨人の姿から翡翠の姿へと変形したならば、なんと初速の時点で下手な中量級機衣人の最高速を超え、およそ五秒あれば超高速の世界へと無理やり突っ込む。
その性質上、ワンゲーム五分を持ちこたえられない稼働時間三分という極めて悪い燃費と、たった一つのパーツでも破損すると機動力が大幅にダウンするという弱点を抱えたロケット花火みたいな機体ではあるのだが、つまり三分以内にノーダメージで相手を倒せばいいのだ。

「よくよく考えたらパワードスーツとロボットって微妙にと言うか

全然違う気がするが……まぁ気分転換だからなんでもいいか」

大事なのは気分転換、傷心のメンタルを別の事で発散するのだ。根本的に転換してない気がするがそこはご愛嬌という事で。

そんなわけで、俺は早速対人環境……ゲーム内に於ける所属組織「ネフィリム・カンパニー」のエントランスへと向かうのだった。

「旋回が甘い、リココンが雑、フェイントがシンプルすぎる……ふぅ、やっぱ鈍ってるなぁ」

遠距離特化という、ともすればヘイト対象になりかねないような対戦相手を撃墜した俺は、今の試合を振り返って自身の動きが鈍っていることにため息をつく。

最後にプレイしたのは確か数ヶ月前、あの時はランキング戦で一気にトップを目指すぜ！　的なハイテンションで暴れ回ったものだが、過疎ゲーとはいえやはりにわか仕込みで頂点を取れるほど甘くはなかったらしく、ランキング一位のプレイヤーを越えることはできなかった。

「確かあのプレイヤーの名前は……」

『操り手（パイロット）「ルスト」が貴方に決闘（デュエル）を申し込みました。受諾しますか？』

「そうそう確かルスト………噂をすれば影ってか」

叩きつけられた挑戦状に書かれたルストの文字、それはかつてのランキング戦であと一歩及ばず引き分けたランキング一位のプレイヤーのもの。

あのわざとアシンメトリーに配置した追加ブースターによって、宙を舞う枯れ葉のような動きを可能とする赤い機体に俺はあと一歩及ばなかった。結果としては引き分けだったが、体感敗北のようなものだ。

あの時期、大作シリーズ最新作がクソゲーと判明して大炎上していなければこのゲームをもう少し続けていたかもしれないくらいには今もなお悔しさが残っている。

「もう少しリハビリしたいところだったが……一期一会に千載一遇、断るわけにはいかないだろう……！」

俺は迷うことなく承諾する。そして暫くして、あの日見た赤い鳥が俺の前に姿を現わす。

あの日見た時と比べて、塗装が派手になっている事といくつか武装が違う事を除けば、そのデザインは間違いなくランキング一位プレイヤールストの機体「緋翼連理（ヒヨクレンリ）」だ。

不死鳥の如き赤い炎の塗装が施された緋翼連理（ヒヨクレンリ）に対するは初期カラーの翡翠（キングフィッシャー）、というのも中々にドラマティックだが、俺もルストも求

めているのは雰囲気ではない。

「よっし……カップ麺が出来上がるより速く倒してやるぜ！」

荒廃した都市に、赤と青の鳥が飛翔する。

米の代わりにライスを食べる的な（後書き）

ルストが二度目の防衛戦を行なった時のランキング戦ですが、はぐれメタル並に攻撃が当たらない超高速変形機体が辻斬り＆スナイプをかましてくる、という最速初見殺しで当時の環境トップであった「重装甲クアトロキャノン」はカワセミに入れ食いされまくりました。

ほぼにわか仕込みの主人公が全勝無敗でルストと対戦できたのはそれが理由です。

「だぁぁぁ負けたぁーーーーーっ！！」

エントランスにリスポーンした俺は、周囲のプレイヤーの視線を一点に浴びるのを気にすることもなく衝動のままに叫ぶ。
ああ畜生、最後の最後でまーーーーた攻撃を優先し過ぎてしまった。向こうが超高速機動に対応してくる以上、右ウィングと左脚が破損した事で機動力がガタ落ちしたキングフィッシャーでは勝ち目は無かったとはいえ、思い返せば誘い込まれていた。
せめて脚部が無事ならまた引き分けに持ち込めたかもしれないが、やはりプレイ時間の差は如何ともしがたい。

「切り返し強襲は上手くいったんだが、まさか避けられるとはなぁ……」

室内で思い切りスーパーボールを投げたような動きを空中でやってくるとは思わなかった。お前が言うな案件ではあるが、あんな動きして平衡感覚大丈夫なんだろうか。

「やっぱ鍔迫り合い装備がないと詰められたら死ぬなぁ……」

時間が進めば研究も進む。かつて俺がプレイしていた頃の、頭悪いくらい鈍足な機体ばかりの頃とは違うのだろう。
元々キングフィッシャーはストーリーボスを強くメタった機体だから、気分転換だとしても暫く遊ぶつもりだし構築を変える必要が……
そんな事を考えていると、俺は服の袖をグイと引っ張られる。そうだった、このサンラクは普通に服を着ているんだった、半裸生活が

長過ぎて色々麻痺してたな。

「そのヤカン頭に名前……間違いない、キングフィッシャー……！」

「え？　あー……ルスト？　ああルスト、対戦ありっしたー、GG（グッドゲーム）？」

「GG（グッドゲーム）……じゃなくてっ」

振り向くと、そこにはキャラクリエイトで選択できるバイザーを装着した少女のアバターが、バイザーの奥にある目を爛々と輝かせてこちらを凝視していた。

ちなみにヤカン頭とはネフィリム・ホロウにおける強化人間系キャラクター「ガジェットマン」の頭装備「ネフィリム融合補助ユニット旧式」というアクセサリのことだ、設定上はネフィリムと融合する実験における初期に用いられた道具……と色々と重い設定があるのだが、その見た目がヤカンにしか見えない事が由来だ。

装着すると通常のアバターの視界が著しく阻害されるためにあまり人気のない装備ではあるのだが、なんとなく装備してそのまま引退してしまったのでそのままだったのだ。

「何故戻ってきた……！？」

「え、何故って……」

ゲームをやるのに一々ちゃんとした理由を求められてもなぁ。そんな事を考えていると、ルストの後ろに付き人のように控えていた随分とタッパのある青年が見た目よりも若い声で俺に話しかけてくる。

「すいません。ルストはこんな感じですけど貴方がこのゲームに復

帰したのを喜んでいるんです」

「え、あ、さいで……」

よくよく見れば、ルストは詰め寄るように俺の服の袖を引っ張ってはいるものの、敵意は感じられない。なんと言うか、骨を見つけた犬みたいな……さながらこっちのプレイヤー、モルドは飼い主だろうか。

「速く……再戦……！」

「いや本当すいません……ちょっとはしゃぎ過ぎてるみたいで」

「モルドうるさい……！」

「あいったぁ！？」

脛を蹴られて悲鳴を上げるモルドと、脛を蹴ってドスの効いた声を上げるルスト。夫婦漫才に目が向きがちだが、要するにランキング一位から直々の再戦の申し込み、と言う事だろう。であれば俺の答えは言うまでもない。

「いや、今は無理」

その言葉を放った瞬間、ルストが燃え上がったかのように錯覚する。一瞬で雰囲気がさらにトゲトゲしくなったルストの目が細められ、静かに問うてくる。

「何故？」

「いや、どうせやるなら新しい機衣人とか組みたいし」

ゲームを始める時に結構な量のアップデートを読み込んだし、放任主義が極まり過ぎな便秘とは違ってちゃんと新要素が定期的に投入されているのだろう。

二日くらいしたらシャンフロに戻るとはいえ、どうせやるならキングフィッシャー一択というのも味気ない。

そう言うとルストの雰囲気が和らぎ、モルドがいや本当すいませんと謝罪する。

個人的にこういうゲームに人生捧げたようなガチ勢は嫌いではない。入れ込み過ぎて自分のルールを他者に押し付けるアレな手合いもいるにはいるが、少なくとも斜に構えて本気でゲームプレイしないよりは好ましい。

「……だったら、明日。明日の朝再戦しよう」

「んー、オッケー」

俺は仮面で見えぬ顔に不敵な笑みを浮かべ、ルストの対戦予約を受け入れるのだった。

とはいえ、このあと他のプレイヤーに色々話しかけられて新たな機体を組むのはもう少し先のことになったのだが。

ネフィリム・ホロウにおいて機衣人（ネフィリム）を新造する場合、三つのプロセスをクリアしなければならない。
まず最初に、野生のネフィリムの捕獲である…………

繰り返す、野生のネフィリムの捕獲である。

このゲームの世界観ではネフィリムとは天より堕ちてくる球体関節の巨大人形を指す。
天より堕ちてくるネフィリムの殆どは目が見開かれた状態であり、開眼個体は所謂エネミーとしてプレイヤーに攻撃を仕掛けてくる。
プレイヤーは所属組織「ネフィリム・カンパニー」からミッションを発注し、ネフィリムを討伐する。その際、たまに目を閉じた瞑目個体が発見される。
この瞑目個体がプレイヤーが操る機衣人（ネフィリム）の素体として用いられ、最初にチュートリアルで支給される機衣人と、シナリオ中に貰える機衣人以降、三機目四機目を作るのであれば瞑目個体を発見し、カンパニーからそれを買い取らなければならない。
「んー、おっこれは俺がプレイしてた時にはなかったタイプだな」

次は、捕獲したネフィリムに着せる衣装（パーツ）の入手だ。
ネフィリムの素体はまんま球体関節のマネキンである、それ故、装甲や武装は人形を飾るように「着せ」なければならない。
それらはカンパニーや闇市、プレイヤーが出品したものから入手する。どこ経由で入手するにしても一長一短ではあるが、どうせ作るなら面白いパーツを見つけたい。

「オート操作で地上を走って爆発する車輪。これもしかしなくてもパンジャンドラ……」

最後に、手に入れたパーツをネフィリムに着せ、名前をつけることで初めてプレイヤーと融合し、意のままに動く機衣人（ネフィリム）が完成する。
「名前、名前かぁ……まぁ、今回は流石に偶然カワセミっぽい色になったりはしなかったし、見た目からそのまんま名付けるか」
ええと、確かアレを英訳すると……いや、ドイツ語とかも捨てがたい……よし

「お前の名前は…………」

ランキング二位プレイヤー、スーパー玉男は困惑していた。
今朝、かつてネフィリム・ホロウの環境を破壊したプレイヤーとしてその名を残す「キングフィッシャー」が復帰したという事は聞いていた。
スーパー玉男は「キングフィッシャー」と戦った事がある。何せキングフィッシャーが唯一活動していた、最強プレイヤー「ルスト」が二度目の防衛戦を行なったランキング戦で一番最初に「キングフィッシャー」と戦った……言い換えれば一番最初にキングフィッシャーの餌食になったのが何を隠そうスーパー玉男なのだ。
当時ルストの「緋翼連理（ヒヨクレンリ）」を除いて環境を席巻していた「重装甲クアトロキャノン」を環境から撲滅して見せた翡翠、その羽ばたきは緋翼連理との引き分けでランキング戦が終わってからパッタリと途絶えてしまった。
当時はネフィリム・ホロウを始めたばかりで重装甲クアトロキャノンのテンプレ装備そのままでランキング戦に挑んだスーパー玉男は成すすべなく蹂躙されて敗北したが、今は違う。
重装甲クアトロキャノンが駆逐され、激変する環境の中で研究を続けたスーパー玉男は、プレイヤー操作で一度だけ軌道を曲げる事ができる屈折（フレキシブル）レーザーを搭載した「跳弾猟犬（バウンドドッグ）」を愛機として、いつしか絶対王者ルストを倒す可能性が最も高い男としてランキング二位にまで登りつめていた。

「なんだ、今の……」

そんな彼がたまたま潜った野良マッチでそれと遭遇したのは運命の

悪戯か。

プレイヤーネーム「サンラク」、間違いなくその名はキングフィッシャーを操る者の名であり、キングフィッシャーではないその機衣人（ネフィリム）の姿はすなわち、あの時と同じくスーパー玉男こそがあの機体と一番最初に戦う栄誉を得たという事。

そしてあの時と同じく、完封されエントランスにリスポーンした彼は呆然とその名を呟くのだ。

「フィドラークラブ……？」

スーパー玉男、強敵だった……鏡で光を反射するようにレーザーを曲げる事で真正面から背後奇襲（バックアサルト）を仕掛けてくる「跳弾猟犬」は非常に厄介ではあったが、こいつ……「望潮（フィドラークラブ）」のテスト相手としてはこれ以上ない相手だった。

キングフィッシャーと同じく初見殺しが勝利の一因であったことは否めないが、このフィドラークラブは対人を主眼とした構築をしている。

「一分け一敗、負け越しで終わるのは趣味じゃあない」

シャンフロの憂さ晴らしも込めていざ不死鳥倒し、やってやろうじゃないか。

新たな潮を招く者（後書き）

ネフィリム
天から堕ちてきた巨人、見た目は球体関節式のマネキン。
目を開いた個体と目を閉じた個体が存在し、前者は敵として、後者は機衣人の素体として存在する。
ストーリー終盤で「外宇宙文明が迫る脅威に対抗するためあらゆる宇宙に武器としてばら撒いていたが、その脅威に汚染されたネフィリムが暴れていた」事が判明し、ラスボスである一番最初に世界に堕ちてきた原初のネフィリム「グリゴリ」を倒す事でキャンペーンシナリオは終わる。
あらゆる文明の武器に「馴染む」特性を持ち、ネフィリムが纏いさえすればそれが如何なるものでもネフィリムは使いこなす事ができる。

これは戦いではない、捕食者が非捕食者を捕らう狩りである（前書き）

投稿が遅れたことを謝罪します。予約投稿がズレてました……

これは戦いではない、捕食者が非捕食者を捕らう狩りである

緋翼連理（ヒヨクレンリ）。
二度の戦闘と他のプレイヤー達から聞いた話を纏めて分かった事は、あの機体の真の恐ろしさはプレイヤースキルが大部分を占めているということだ。
あのアシンメトリーな配置のブースターによって可能とする不規則機動はロボゲーで対応できる動きではない……というのがプレイヤー達の総評だ。
実際のところ動き自体はそう複雑なものではないが、それを機衣人（ネフィリム）という上着を着た状態で対処するのが非常に難しいのだ。

「それがロボゲーの特徴なんだけどな」

話は変わるがオイカッツォ……奴には苦手なゲームカテゴリがある。それこそがロボゲーであり、反応、対応、操作にロボというワンクッションを挟むロボゲーは格ゲーとは似て非なるものだ。
故にこそ、カッツォのやつはロボを操作するタイプの格闘ゲームは専門外であるとぼやいていたし、それを承知の上で奴をロボゲーでフルボッコにしたこともあったが……今現在の問題はルストだ。
機体武装からも分かるが奴の得意な距離はショートレンジとミドルレンジ、それでいて遠距離狙撃も普通に回避する操縦スキルは伊達に絶対王者として君臨してはいない。
だが言い換えればそれは向こうも俺を倒すためには最低でも中距離まで近づいて来なければならない。

「どちらにせよあのモルドって奴がついてる以上、キングフィッシャーじゃ勝つのは難しい」

聞けば、あのモルドというプレイヤーが所謂オペレーター的な存在らしく、今朝の試合でも俺の動きをルストへと伝えていたらしい。オペレーターとしての相方を使わないソロプレイヤー相手ならともかく、もう一つ目があっては機動力でのかく乱の効果は半減かそれ以下まで落ち込むだろう。
過疎ゲー故、オペレーター付きのプレイヤー自体が少数なのもあるが、緋翼連理の最強伝説を影から支えるのがモルドというわけだ。

「おうキングフィッシャー、こいつを受け取ってくれや」

「ナニコレ」

「ランキング戦での緋翼連理のバトル記録だ、明日の朝再戦するんだろう？　参考にしてくれや」

「……いいの？」

「俺ぁお前さんのファンなんだ。あの機衣人(ネフィリム)……イカした姿を見せてくれよ」

「カニだけどな……まぁいいや、明日の朝を楽しみにしてな」

古参プレイヤー達は皆、無敗の不死鳥が沈む姿をどこかで願っている。現環境に於けるトップスリーの内の二人……へっぽこナイトの「キングスギャンビット」にスーパー玉男の「跳弾猟犬」を打ち破った俺というプレイヤーに様々なプレイヤー達が緋翼連理の情報を持ってきてくれた。
というのもルストが掲げるポリシーの中に「負けるまで機体を変えない」というものがあり、緋翼連理以外の機体が見たいと望むプレ

イヤーが多い事が俺を支援する理由の一つらしい。

「別にランキング戦以外くらい別の機体を使ってもいいだろうに、ルストも意地になってるから緋翼連理以外を使わなくなってる、って相方のモルドのやつがボヤいててな……それにボスキャラにしたって見飽きちまうからなぁ」

「そうそう、緋翼連理自体はそこまで飛び抜けた構築でもないのに勝てないんだよなぁ……へっぽこナイトなんか緋翼連理をガンメタした構築なのにフルボッコにされるしさぁ」

「うるさいよ！　玉男とルスト以外には普通に勝ってるだろ！」

「正直言ってかつてのランカー喰いに託すのも癪ではあるんだけど、今のネフホロは実質ルストｖｓ他プレイヤーみたいなものなんだ、戦うなら勝ちを狙って欲しいんだ」

そう言ってランキングに名を連ねるプレイヤー達の後押しも受けて最終調整を経た翌日の朝、俺は崩壊したニューヨークをモデルにした廃墟でバトル開始の合図を待っていた。

「あれが、キングフィッシャー……サンラクの新しい機体」

『機体ネームは「フィドラークラブ」……確か望潮(シオマネキ)の英訳だっけ？　フィドラーっていうのはバイオリン奏者って意味で鋏を動かす姿がバイオリンを……』

「毛ガニだろうとヤドカリだろうとなんだっていい、今の環境が反映されたあの機体なら、もしかしたら私を……」

『………どうやら向こうもこっちを呼んでるみたいだよ』

破壊音と共にビルの一つが崩壊する。少なくともこのゲームにおいてフィールドオブジェクトが自然崩壊することはない、ましてや巨大建造物が崩壊したということは、何者かが明確に攻撃を加えた以外に他ならない。

それはメッセージだ、俺はここにいるという宣戦布告。それを理解し、尚且つ待ち伏せの危険性を理解した上でルストは崩れゆくビルへと向かう。

『……いた！　反応……フィドラークラブだ！』

「こっちも目視した……！」

『な、なんだあれ……右腕が二倍くらいになってる？』

「…………六式断砕シザーユニット【ブックメーカー】。産廃武器というわけではないけど、少なくとも中量級機体に搭載する武器じゃない」

『それ以外にもゴテゴテしてるし、まるで重量級機衣人みたいだ』

軽量級、中量級、重量級の区別はずばり、ネフィリムの体高と装備から察することができる。
ネフィリム・ホロウ最強のプレイヤーであるルストにとって、武装から相手の情報を知ることは当然のことである。

（右腕は【ブックメーカー】、脚部は多段推進噴脚……左腕と背中は見えない、頭は…………あれは確か……）

ゴツゴツとした、キングフィッシャーと比べてずんぐりむっくりとしたフィドラークラブは右腕と半ば融合するように装着された巨大な武装ユニット。
二つのエッジで敵を挟み、圧断する対超巨大ネフィリム用の兵器を無理矢理通常機衣人に搭載した、という設定の【ブックメーカー】は大振りなモーションから放たれる一撃必殺クラスのロマン武器……それがルストの評価である。
そしてロマン武器を搭載するのならばその機体は得てしてロマンを成立させるためのギミックか、ロマンを成立させるためのプレイヤースキルを十全に発揮するための構築であることが定石である。
そして頭部の特徴的な、見ようによってはカニの目にも見える二つのアンテナを持つ頭部装備。それの正体をルストが記憶から掘り起こそうとした瞬間、フィドラークラブが動く。

「消えた……っ！」

『ルスト、光学迷彩だ！　反応はまだそこにいる！』

「仕掛ける……！」

頭部のユニットが発光し、フィドラークラブの全身がその姿を消失させる。
モルドの言葉にその正体が機衣人の姿を視覚的に消し去ってしまう「光学迷彩」の効果によるものだと理解したルストは、モルドからの報告とセンサーが示す反応からフィドラークラブのおおよその位置を把握し、ガトリングで攻撃を仕掛ける。

(光学迷彩はブースターの光で位置が分かる……！)

「そこだっ！」

放たれる銃弾の列。それはフィドラークラブのいた場所を通過し、ルストに既にそこに目標がいないことを知らせる。
だが銃弾の光に紛れるようにして、噴脚が吹かされたエフェクトを見逃すようなルストではない。
「コ」の軌道を描くように最低限の機動でガトリングを回避したことを示すブースターを刻むように吹かしたエフェクトの軌跡の先、センサーが示す位置座標に近接攻撃を仕掛ける。
成る程、確かにこの動きは並のプレイヤーに出来ることではない。
だがサンラクはルストを、緋翼連理(ヒヨクレンリ)をナメすぎた。

「出直せフィドラークラブ……！」

『違っ……！』

モルドが咄嗟に発した言葉を脳が知覚するよりも速く、

あまりにもあっさりと、最強の不死鳥は八つ裂きにされ地に堕ちた。

「…………………………え？」

敗北を示すリスポーン。呆然とエントランスに立ち竦むルストは、あまりにもあっさりと決着した試合にルストと同じく呆然とした他のプレイヤー達を視界に収めるが、それすらも脳が理解に追いつかない。

ネフィリム・ホロウ……不死鳥の住処に望潮の嘲笑が響く。

これは戦いではない、捕食者が非捕食者を捕らう狩りである（後書き）

Q．主人公は一体何をしたの？

A．隠れんぼに「隠れた場所から動いてはならない」なんてルールは別にない

クソゲニウムは白い布に垂れた汚泥の雫のように……

「一体何をした……！？」

戦闘勝利のリザルトを終え、エントランスに戻ってきた俺に掴みかかるように迫るルスト。その傍らには呆然としたモルドが立ちすくんでおり、あまりに容易く敗北を刻まれたことをこの二人はまだ理解できていないようだ。

「それを今明かしてもいいけど、自分で解いた方が楽しいだろう？」

ヤカン頭を揺らし、心の底から湧き上がる優越の感情を隠すことなく俺はルスト＆モルドへと再戦を告げる。

一勝一敗一分……これでようやくイーブンだ。さっきの戦いは要するに初見殺しの押し付け、勝ったというには少しばかり格好がつかない。

「モルドだったか、君ならさっき俺が何をしたのか分かるだろう？」

「……なんとなく、は」

「モルド、どういうこと……！？」

モルドの方はなんとなく分かっているんだろうな、フィドラークラブが仕掛けた罠に本当に引っかかったのが誰なのかってことをな。

既に不死鳥は堕ちた。しかしながら再びのチャンスを与えられたルストは、勝者にのみ許された傲慢を自分が受ける立場になった屈辱をひとまず忘れて再び搭乗した緋翼連理で注意深く周囲を索敵しながらモルドに問う。

「教えて、一体何が起きたの？」

『……あの時、ルストが近接攻撃を仕掛けた瞬間。フィドラークラブは「ジャミングセンサー」を使ったんだ』

「ジャミングセンサー……自身の座標を誤魔化すだけの産廃」

成る程、視覚的に消える光学迷彩に加えてセンサーを欺くジャミングセンサーを組み合わせればこのゲームにおける認識力から逃れることはできるだろう。
だがそれにしたって理解が及ばない。あの瞬間、推進のエフェクトから先を読んで斬りつけた緋翼連理は突然その動きが縛られたように止められ、抵抗する間もなく四肢を切り落とされ、胸部を潰されて破壊されたのだ。
一体何が起きたのか、それを知るのは第三者視点からそれを観測していた他のプレイヤー達と、それを成した本人（サンラク）……そして戦闘中のフィールドにおいて限りなく第三者視点に近い立場のモルドのみ。

『……一言で言えば、ジャミングで敵の位置が分からなくなった一瞬でフィドラークラブは君の真後ろに回り込んだんだ』

「……ありえない、あの位置から緋翼連理の後ろに回り込んだのなら、必ずブースターのエフェクトが発生する。地面を歩いていった可能性もありえない」

噴脚は地上歩行能力を持たない。常にエネルギーを消費し続けることで空中に滞空するユニットであり、エネルギー残量を代償に常時空中という地の利を得ることができるのだ。
であれば後ろに回り込むためにはブースターを吹かすことは必須、そしてそれを見逃すルストではない。

（………………待って、エフェクトを出さずに移動する？）

バトルが開始され、緋翼連理で飛翔しながらルストは考える。
推進のエフェクトとは即ち炎であり熱をゲーム的に可視化したものである。という事は炎や熱に頼らない移動方法であればエフェクトによる場所特定の危険性はなくなるという事。

（まさか……）

「モルド、不可視の移動のネタがわかった」

『え？』

「私の予想が正しければ……」

縦に大きく開いたストリート跡地へと躍り出た緋翼連理は、その場

で静かに佇むフィドラークラブに照準を合わせ、発砲。
先程のゲームを再現するかのようにフィドラークラブの姿が消え、
噴脚から発せられるエフェクトが途切れる。
「このゲームで移動時にエフェクトの発生しない空中移動はただ一種類……！」
滞空する緋翼連理の下方、瓦礫がわずかに舞い上がるそこへとガトリングを斉射、そしてついに隠れていたフィドラークラブがその姿を露わにする。
『じ、重力浮脚!？　なんで、噴脚の筈じゃ……ま、まさか！』
「二週間前にアップデートで実装された新ネフィリムタイプ……偽装双脚、それがフィドラークラブが消えたカラクリ……っ！」
「あらま、バレちゃった」

まぁ二度同じ手が通用するとはハナから思っちゃいない、それにこのフィドラークラブの初見殺し性能はあくまでも氷山の一角に過ぎない。
それにしてもこの偽装双脚というタイプのネフィリムは実に面白い性能をしているな。

「ケンタウロスみたいな四つ脚人型上半身ではなく、文字通り脚を「切り替える」タイプ……」

下半身が縦軸で回転し、尻の部分に折り畳まれた二つの脚が第一脚と切り替わる事で、二タイプの脚と最大四つの脚部武装を装備可能というまさにぶっ壊れ性能……とはいかない辺りがちゃんと調整された良ゲーだ。
まず純粋に重さが増えることで機動力が死ぬ。大型ブースターを搭載すれば機動力はある程度まかなえるが、やはり重量が嵩むのでキングフィッシャーのような超高速機動は不可能だ。
次に燃費、これはもう分かりやすいというか分からない方がおかしいレベルで最悪だ。
何せ足二つ分に加えて切り替え機能にまでエネルギーを割り振るため、兎にも角にもエネルギーをバカ食いする。
そんなわけで実装されて日が浅いとは言え、あまり使われていない理由がそれだ。
なので、俺はその逆に振り切る事にした。エネルギー効率など最初から考えない、積みたい武装を全部積んで短期決戦のみを狙う。
このフィドラークラブ、全武装をフル稼働した場合なんと一分でエネルギーがすっからかんになる潔さだ。だがその分ひとたび射程圏内に入り込んできたなら、獲物は絶対に逃さない。

「さぁ、どうする緋翼連理？」

しばしの膠着の後、緋翼連理が選択した行動は……加速。どうやら距離を離しての様子見ではなくこちらに対応を誘発させる様子見を選んだらしい。
双剣を構え、肩に装備したガトリングを掃射してくる緋翼連理に対し、こちらもまた接近の一手を選択。
下半身が回転し、噴脚へとモードチェンジして雨あられの如く降り注ぐガトリングを最小の動きで回避、エネルギーをぶちまける勢いでブーストする。
地の利は向こうが有利、手の内はこちらが有利、ゲームの経験値は向こうが有利、であればこちらがルストを上回るために必要な要素は……

「確殺の状況に追い込む技量だ……！」

再度光学迷彩を起動、消える機衣人（ネフィリム）に対して緋翼連理は冷静な対処を行う。
あえてラグを入れてのジャミングセンサー、数秒間だけ俺は緋翼連理の、ルストの認識の世界から消失する。
脚部を浮脚へとチェンジ。静かに、そして大胆に俺は緋翼連理の真正面へと接近し、あえて自分から光学迷彩を解く。
ジャミングセンサーによるセンサーの妨害は攻撃を行う事で解除される。
向こうもそれは承知の上で、構えた双剣は先程の戦闘で食らったあの攻撃を警戒してのものだろう。
だからこそこちらから姿を現わす。注意を向けた草むらからではなく、ストレートに真正面に現れるのはホラーゲーにおける怪物の常道、そして常道ということは効果的ということだ。
「回避するにせよ、迎撃にするにせよ……そこは射程範囲外であり

射程範囲内だ」

右腕に装備した【ブックメーカー】はメイン武装であると同時に左手を隠す盾でもある。

唐突なフィドラークラブの出現、自ら位置をバラすような行いに対して緋翼連理はその挙動を乱すことなく双剣を振りかぶり、どうやら気づいたらしい。

緋翼連理とフィドラークラブの位置関係は近距離武器を当てるには遠く、中距離武器が当たるには近すぎるという中途半端な距離。

二機の間に作られた空白を詰めるか詰めないべきか、フィドラークラブの全容を把握していない緋翼連理はそれが罠であるのかどうかを瞬間的に判断しなければならない。

その上で回避するのか、迎撃するのか、一目散に距離を離すのか、攻撃しつつ後退するべきか、あらゆる選択肢を叩きつけて機体ではなくそれを操るプレイヤー自身を攻撃する。

とはいえ、これだけでは向こうは容易く対処するだろう。であればこそ……ここからがフィドラークラブの狩りだ。

「このゲームの仕様は昨日のうちに検証済みなんだよ……！」

浮脚側の左脚に装備された、数秒間相手の動きを物理的に止めるキャプチャーネットを放つ。

射出された弾頭が開かれ、強化ワイヤー製のネットが花開くように展開して緋翼連理へと飛び掛る。

ネットの射出速度は比翼連理のブーストよりも速い、であれば選択肢は上下左右のいずれかに後退しながら避けるしかない。

そして緋翼連理の真骨頂たる不規則機動が回避に用いられた瞬間、時間で言えばキャプチャーネットを放ったのとほぼ同タイミングであらかじめ来るであろう場所に、敵自身が当たりに来るよう攻撃を放つ偏差攻撃……所謂「置き攻撃」を放つ。

キャプチャーネットの当たり判定はそれを放った機衣人による別の攻撃には反応しない。
即ち、キャプチャーネットを盾として放たれた左腕のスタンメーザーはワイヤーの網をすり抜けて、そのまま回避機動に入った緋翼連理に命中する。

「ぶっちゃけ「キングスギャンビット」みたいなセンサーガン積み遠距離機体に致命的に弱いんだが……その点、中近距離メインの機体にはめっぽう強いんだなこれが」

三秒あれば距離は詰められる。五秒あればフィドラークラブの「鋏」が敵を仕留める。
右腕の【ブックメーカー】が緋翼連理の首を掴んでギリギリと締め上げ、フィドラークラブの背中に搭載されたユニットを稼働させる。
「悪いな、望潮なんて名前をつけてるが……こいつの「鋏」は三つある」

背部搭載式工業型丸ノコ【ピザカットウィング】。
ほとんどの攻撃手段が「対超巨大ネフィリム用武装」というフィドラークラブの火力は、重量級機体であっても五秒で耐久を0まで溶かす。

先程の試合と同様、八つ裂きにされた緋翼連理が爆散し、俺は勝ち越しの余韻に笑みを浮かべるのだった。

Q．要するに主人公は何をしたの？
A．ネフィリム・ホロウは神ゲーではなく良ゲーであるため、所々にゲーム的妥協があります。
攻撃と攻撃が同じ座標に重複する（自身の放ったミサイルにレーザーを打ち込んでもミサイルは破壊されないし両方とも当たればダメージが入る）為、キャプチャーネットを盾がわりに回避行動をとった緋翼連理の機動を読んでスタンメーザーを当て、オーバーキル火力で八つ裂きにするという戦法です。
厳密にはルストに情報を伝えるモルドに対して情報の奔流を叩きつけ、ルスト自身の判断で行動させる事で向こうの行動をある程度縛らせています。

実はフィドラークラブはキングスギャンビット相手だと七割不利です。
隠密が意味をなさない上に射程範囲外からイジメ倒されるので。

勝てばよかろうなのだカウンター

五勝二分三敗、数値上は割と接戦ではあるが結果だけ見ればまぁ……完全勝利と言ってもいいだろう。
それは向こうも理解しているようで、ぷるぷると震えながら湧き上がる感情を抑えてる姿を見るのは実に心地が良い。

「はー勝利の美酒を2リットルペットボトルで飲んでる気分ですわー」

「ぐぬぬ……」

「ま、まぁまぁ……」

フィドラークラブに正々堂々の概念は存在しない。逃げもするし隠れもする、不意打ち足止め一撃必殺……その性質は真正面から戦うタイプの構築相手なら極めて高い戦果を叩き出す。
逆に言えば距離を離されればただの蟹なのだが、それならそれで隠れんぼからの暗殺を敢行するだけだ……あっ、センサーガン積みはやめて！　バレる！

「捕まったら即死とかクソゲーすぎる……」

「ははは、本当のクソゲーなら空間固定AMR連射バグで遠距離構築以外に存在権が許されないから」

「空間……何？」

「君らが知らなくていい世界だよ……」
何せバグが酷すぎてサービス終了した、今は跡地（オフライン）に過去の惨状を想起することしかできないクソゲーというものは星の数ほど……いや、そこまでは多くないがマンボウが一度に産卵する数くらいには存在する。
空中に完全固定された状態で一切狙いがブレない対物ライフルを連射するゲームだってこの世には存在していたのだ、超遠距離から対物ライフルでクイックドローの早撃ち対決をするって斬新すぎて面白かったんだがな。
諸行無常（因果応報）を感じずにはいられないな、デバッガーは居眠りでもしてたのか。

「十戦もすれば十分だろう」
「悔しいけど、緋翼連理が負けたことは認める。でも次は勝つ、明日にでも……」
「あーどうだろう、明日にはメインのゲームに戻ってるかもだし」
「再戦を……なんて？」
絶対王者たる緋翼連理に対して勝ち越し、なおかつ「隠密、奇襲、決着」という操り手（パイロット）としてある程度のスキルを持つプレイヤーであれば、真似をするのにそう大した苦ではない「望潮型双脚構築」の誕生。
それを真似するのか、メタとしての「キングスギャンビット型」をパクるのか、はたまたキングスギャンビットメタを構築するのか……にわかに活発化したプレイヤー達を尻目に、ルストは俺が口にした言葉に硬直する。

「つまり…………もう来ない、と？」

「どうだろう、たまには来るかもしれないけど今回このゲームを再開したのは気分転換の面が大きいし……まぁやるとしても月一くら」

「それは、良くない。とても、良くない」

「うおっ！？」

「ちょ、ちょっとルスト！」

ガバリと小柄なアバターのどこにそんな力があるのか、俺のアバターの胸倉を掴んで引き寄せるルスト。
モルドが慌ててルストを俺から引き剥がそうとするが、ルストは構うことなく俺へと言葉を紡ぐ。

「サンラク、貴方が来ただけでネフホロは、こんなにも活発になった。きっと、これからも貴方がいてくれたら、ネフホロはもっと楽しくなる…………だから、ネフホロを続けるべ……続けて、欲しい」

即興で説得の言葉を考えているためか、たどたどしい感じではあるが、ルストの目は大真面目だ。そして意外な事にそれを止めようとしているモルドもまた、こちらに対して期待するような目を向けている。
とはいえ正直継続してこのゲームをやる程のモチベーションは無い。面白いゲームだとは思うし、実際楽しいとは思うが「毎日やりたい楽しいゲーム」と「たまにやるくらいが楽しいゲーム」はやはり違うのだ。

「とはいえなぁ、元々シャンフロでロボを見つけたのに乗れない憂さ晴らしだし……」

「……シャンフロで、ロボ？　今ロボと言った？」

「へ？」

先程よりも力を増した胸倉を掴むルストの手。その目は「ネフィリム・ホロウを愛するプレイヤー」としてではなく、別の輝きで爛々としている。
これは……そう、シャングリラ・フロンティアのプレイヤーとしての輝きだ。それに気づくと同時、俺は自身の迂闊を呪う。

「い、いや今のは無しにして欲しいというか忘れて欲しいというか……」

「私もシャングリラ・フロンティアはプレイしていた。でも、いつまで経ってもロボの手がかりすらないので引退した……」

「は、ははは、それは災難な事で……」

「ので、今の言葉には非常に興味がある……！」

さて、厄介な事になったぞ。ぶっちゃければ俺はルストの要望のいずれにも応える義務も義理もない。
とはいえそれを一切の波風立てずに断ることが出来るかと聞かれればペンシルゴンのように口車がニトロでブーストする話術を持たない俺ではちと荷が重い。
ゲーム次第じゃＰＫだって普通にやってのける俺ではあるが、このゲームでそういうギスギスするような事はあまりしたくない。時間

にして一日にも満たない交流ではあるが、性格の良し悪しではなく性質の良し悪しとしてこのゲームの住人はいい奴が多い。
クソゲーではないにしろ継続的にプレイしたい気持ちがないわけでもないが、やはり今一番ガチでやり込んでいるシャンフロに専念したい気持ちもあるわけで。
結果としてさぁどうはぐらかそうと考えていた俺だったが次の瞬間、ルストが投下した核爆弾クラスの発言に思考の全てが吹き飛ばされる事になる。

「もしこれからもネフホロを続けてくれるなら……ついでにシャンフロでのロボについて教えてくれるなら……」

その言葉をまさかシャンフロですらないロボゲーで聞く事になるとは、未来予測レベルで悪巧みするペンシルゴンですら思いもしないだろう。

「ユニークモンスター「深淵のクターニッド」、それに繋がるユニークシナリオを教えてあげても、いい」

シャンフロにおける七枚のジョーカー、一枚消えて残り六枚。
その内の一枚を俺が握っているわけだが、にわかに三枚目のジョーカーの存在が俺の前に現れたのだ。

「……で、なんでこうなったんだ」
あれから翌日、いま私はフィールド名「爆心地（グラウンド・ゼロ）」に来ています。
一番最初のネフィリムが落ちて来た都市の跡地で、俺はフィドラークラブに乗り込みながらそう呟いた。
いや、その理由は重々承知しているがそれでも呟かずにはいられない。

――明日の朝、また私と勝負して欲しい、私が勝ったらネフホロを続けて。
ついでにもし自分に勝てたらユニークモンスターの情報を開示する、なんて言われれば断るわけにはいかない。
想定外も想定外、まさかこんな場所でユニークモンスターの名前が出てくるとは思わなかった。
「深淵のクターニッド」、確かその名前は既に知られているものではあったはずだ。なにか名状しがたい狂気を感じる名前ではあるが、ユニークモンスターである以上、挑むにせよ発見するにせよユニークシナリオＥＸのフラグを立てない事には始まらない。
正直信ぴょう性の観点から言えば疑わしさは拭えてはいないのだが、

わざわざ深淵のクターニッドを名指しで指定する理由がわからないし、元々暗闇でコンタクトレンズを探すようなものだったのだから知る価値はある。

「新機体で来るみたいなこと言ってたが、とりあえずどういう構築なのかを確認して……」

次の瞬間、フィドラークラブの右腕に衝撃が走り、肩の球体関節ごと抉り貫かれた右腕が吹き飛ばされた。

咄嗟に光学迷彩とジャミングセンサーを発動、周囲を索敵しながら瓦礫を盾にその場を離れ……

「うのぉお！？」

さらに降り注ぐ弾丸。左噴脚に弾丸が直撃し、ガタ落ちした機動力を浮脚に切り換えて再び逃げる。

だがどこに隠れても姿を消しても弾丸は的確に俺を狙い撃つ。そしてビルを隙間を縫うように飛んで来た弾丸が頭部の半分を消しとばした時点で、俺は確信する。

「あ、あんの野郎…………なりふり構わずガンメタ決めやがった！！」

センサーガン積み遠距離狙撃機体、キングスギャンビットのそれとほぼ同等の構築にしたのだろうルストの新機体の姿が一瞬だけ視界に入り、胴体を射抜かれたことでフィドラークラブは爆散した……

いやもう一度言います、あの野郎！！！

どこかでルストに鼻で笑われたような気がした。

勝てばよかろうなのだカウンター（後書き）

後出しジャンケンでドヤ顔を決めたやつは、後出しジャンケンでドヤ顔を決め返されても文句は言えないのです……

本格的にクソゲーのプレイ描写したいけど大切な何かを失いそうで怖い

何をすべきか、何を目指すべきか、何に頼るべきか

「はぁ……」

結局のところ、ガンメタ決められて虐殺されたフィドラークラブは見事に蟹鍋にされ、キングスギャンビット丸パクリの機体で俺を虐殺したルストはそれはもういい笑顔を浮かべていた。

「これからよろしく」

「いやなんというか……すいません」

「ああ、いいよいいよ……これに関しちゃ俺が油断してた」

まぁ、後出しジャンケンできて勝つためのモチベーションがあるならそりゃあメタを張るよな。とりあえずキングスギャンビットをメタる構築を絶対に作ることを心に誓いつつ、俺は改めてルストへと向きなおる。

「上手いこと乗せられたが……本命はここからだろう？　確かに俺は、というか俺とあと二人いるんだが、その三人で所有権を持つSF的な装備がある。その二人を説得できれば使えるかも……しれない」

即ち、俺だけを説得しても意味はない。ルストが強化装甲を、引いては戦術機獣に乗りたいと願うのであれば、妙なところでシビアなオイカッツォと、ラスボスたるペンシルゴンを説得しなければならない。

その点で言えば言葉ではなく手土産情報を持ち込む、というのは間違った判断ではない。
とりあえずユニークを自発できていないオイカッツォはこれで黙らせることができる。俺がログインしていない間に奴がユニークを見つける可能性は……見つけたら見つけたで恐らくもっとウザくなるので見つけてはいないのだろう。
問題はペンシルゴンだ、自称「ポーカーの勝率七割」が現実味を帯びる奴を説得することは並大抵の事ではない。気づいたら向こうの有利になる約束を取り付けられていた、なんてこと多々ある。
であればユニークモンスターの情報は有力ではあるのだが、俺から言わせて貰えば

「決定打が足りない」

「決定打？」

そう、これを知る者は少ないがユニークモンスターへ繋がるシナリオにはＥＸがつく。そして恐らく現状これを知るのは俺くらいの情報がもう一つ、それこそが「ユニークモンスターへ繋がるかもしれない」という曖昧な情報を信じた理由でもある。

「一応聞くけど、その「深淵のクターニッド」に繋がるシナリオの内容を聞いても？」

「……モルド」

「はいはい……ええと、ユニークシナリオ「深淵の使徒を穿て」はフィフティシアで受注できるユニークシナリオです。内容としてはＮＰＣ「自称大海賊スチューデ」の依頼で幽霊船を追う、というものです」

「あー、敬語はいいよ」

「あ……じゃあそうさせてもらうよ。僕達はフィフティシアでこのシナリオを受注だけはしたんだけど、その時にその幽霊船……クライング・インスマン号の情報を聞いたんだ。その自称大海賊曰く、幽霊船は攫った人間を「深淵の盟主」に捧げるんだって」

深淵の盟主……成る程、確かにそれ自体は別のユニークシナリオでも本命のＥＸに繋がっている確率は高そうではある。
だがこれでは足りない、「かもしれない」では交渉材料になり得ないのであれば推測を確定させなければならない。

「やっぱり決定打が足りないな……」

「だからその決定打って、何？」

「ユニークモンスターに直接関わるシナリオには後ろにＥＸが付くんだよ。だから交渉材料とするならユニークモンスターへ「繋がるかもしれない」、じゃなくてユニークシナリオに「繋がる」っていう決定打が必要だ」

つまりはだ。

「その「深淵の使徒を穿て」をクリアして、ユニークシナリオＥＸを発生させなければ交渉材料にはなり得ない」

「あっ、サンラクサンですわ！」

なんだかとても久しぶりに感じるシャングリラ・フロンティアへとログインした俺は、びょっ！　と飛びついてきたエムルを頭に載せつつ、驚くべき情報を聞くことになった。

「ラビッツに……俺以外の人間が？」

「はいな！　シークルゥおにーちゃんが「実にあっぱれな人間にゴザル！」って連れてきたんですわ！」

「そうか……そうかぁ……」

ここに来たということはつまり「兎の国からの招待」のフラグを立てたプレイヤーが俺以外に現れたということ。
それ即ち、ユニークシナリオＥＸ「致命兎叙事詩（エピック・オヴォーパルバニー）」に至る可能性が高い……いや、ほぼ確実に至るであろうプレイヤーが現れたということ。

「不味い……これは非常に不味いぞ……」

切り札とは自分だけが持っているからこそ他の手札と隔絶した効果を発揮する。もしもそのプレイヤーが「兎の国からの招待」の情報をネットで拡散などしようものなら、俺が持つアドバンテージが霧散しかねない。
所詮シャンフロの1プレイヤーでしかない俺にはプレイヤーに、それも同じクランやフレンドならともかく、面識のない赤の他人に対して箝口令を敷くことは出来ない。
ちくしょう、そもそもあのクソ激高難易度のフラグ発生条件を満たす奴が現れるとは……どうする、ペンシルゴンのように策を練らねば切り札がシャンフロ全プレイヤーに開示される、なんて面倒なことになるぞ。
ただでさえＳＦ－Ｚｏｏという不発弾を抱えているのに、ラビッツにユニークシナリオＥＸがあるなんて発覚した日には黒狼やライブラリまで出張ってきかねない。ペンシルゴンに相談するか？　いや、その前にルスト＆モルドとの約束がある、いやしかしそれよりも最優先事項はもう一人のラビッツ入国者の対処であって……

「だぁーっ！　頭がこんがらがる！？」

「ぴゃああ！？」

ぐわんぐわんと俺が頭を揺さぶったことで、頭の上に載っているエムルが悲鳴をあげるが、今の俺はそれどころではない。

「エムル、そのもう一人のプレイ……じゃない、開拓者の名前ってわかるか？」

「ええと……確か「あきつあかねどの」ってシークルゥおにーちゃんは言ってたですわ」

あきつあかねどの……秋津茜殿？　殿は敬称として「秋津茜（アキツアカネ）」か？
　少なくとも今までプレイしてきて聞いた名前ではない。そりゃ便秘の数千、下手したら数万倍のプレイヤー人数を誇るシャンフロの中からたった一人を特定することなんて砂漠で蟻のコンタクトレンズを探すのと同義だが……クソ、焦りで頭がうまく回らない。
「すまん、ちょっともう一回寝る」
「ふぇ！？」
「すぐ起きる！」
「それ寝るって言うですわ！？」
「仮眠だよ仮眠！」
　ログアウトし、すぐさまインターネットで「兎の国からの招待」「ユニークシナリオＥＸ」で検索。五分ほど調べて、どうやらまだネット上でその情報が明らかになっていないことを確認する。
　すぐさまログイン、なにやらあわあわしているエムルを頭に載せつつ自室を出て廊下を駆ける。
「エムル、そのアキツアカネってやつ……もしくはシークルゥってやつに会いたいんだがどこにいる？」
「アキツアカネサンはおとー……カシラが戻ってくるまで寝る、ってお部屋ですわ。シークルゥおにーちゃんはふらっといなくなるからわかんないですわ……」

く、今すぐ会うことはできないか。時は金なりとは言うが一秒経過するごとに焦りが俺の身体を焼いているようにすら感じるぞ。自分の力ではどうしようもない展開にこれほどやきもきさせられるとは……いや、落ち着け……落ち着け……

「そうとも、これは乱数だ……「アキツアカネなるプレイヤーが情報を拡散しない」という乱数を引けるかどうかの……ああああちくしょうめっちゃ低乱数としか思えない！」

「乱数って何ですわ！？」

「世界のルールだよ！」

そう叫びつつ、心を落ち着かせるために割りと全力で頬を両手でぶっ叩く。他のゲームと比べても「感覚」のリアリティが優れているとはいえ、過剰な痛みはゲーム全体で規制されているため痛みとは違う痺れが頬を撫でる。

落ち着いたとは言い難いが、思考に余裕はできた。今どうにもならないことに悶々としてもどうにもならない、出来ることをするんだ。積み上げがったやるべきこと、やったほうがいいこと、やらなくてもいいこと……猫が遊んだ後の毛糸玉以上にこんがらがった思考の欠片を並べて揃えて整理して、より大局的なプレイチャートを作り上げる。

「エムル、とりあえず俺はやらねばならないことがあるのでソロで走らなければならない」

「は、はぁ……」

「であるからして、エムルお前に重要な任務を言い渡す」
「じゅ、重要……アタシにどんと任せるですわ！」
俺は指令（オーダー）を伝えたエムルと別れると、そのままやることを必死に整理しつつビィラックの元へと走る。
「ビィラック！　例のブツは完成してるか！？」
「お、おぉ……ワリャか……くくく、出来ちょるわ……わちの最高傑作……その名も！「ギル――」
「これだな！　いい出来だ、もらっていく！」
「ちょお！？　ワリャ、もう少し話をじゃな……」
「あとで使い心地と一緒に小一時間感謝の言葉を送るからさ！　じゃあな！」
背後で「おどりゃあああ……りゃぁぁぁぁ……りゃぁあ………！」とキレたやまびこが聞こえてきたが、無視だ無視。
「ここから先はＲＴＡ（リアルタイムアタック）だ……！」
その為にやるべきことは一つ。俺はエムルに頼んである場所について教えてもらい、一目散に向かうのだった……

何をすべきか、何を目指すべきか、何に頼るべきか（後書き）

ここらへん、プロット書いてて「主人公やること多すぎだろ（笑）」と個人的にニマニマしてました

・ヴォーパル魂
致命兎達（ヴォーパルバニー）が掲げる謎の概念。
実は隠しパラメータとして存在していおり、特定条件を達成した上でなおかつ「一定値以上のヴォーパル魂」を達成することでユニークシナリオ「兎の国からの招待」が発生する。
例えばそれは「夜の帝王に果敢に挑み、死の瞬間まで致命の攻撃を当て続ける」ことであったり、例えばそれは「天空の覇王に果敢に挑み、彼の竜王の弱点に致命の一撃を当ててみせる」ことであったり……

実は「アキツアカネ」はすでに作中に登場しています。

あまり使いたくはない手札ではあったが、俺はなんとしても明日までにフィフティシアに到着しなければならない。
その為には去栄の残骸遺道を、そしてその先にあるイレベンタルから続く無果落耀の古城骸を早急に走破しなくてはならない。
それをソロで敢行することが如何に困難なことであるかはさすがの俺でも理解できる。であれば増援が必要だ、それも俺が急いでいることを過剰に問い詰めてこない助っ人がだ。

「あの人怖いんだけどな……まぁ、手段は選んでいられない」

半ば道具として利用するようで少しだけ申し訳ないが、ペンシルゴンが言うように利用できるものは何でも利用するべきだ。それを使い捨てるのか、成果に応じて餌を与えるのかは結果次第……これどう考えても悪役的思考な気がしてならないが、今の俺はちょっと手段を選んではいられない。
それに元々、明日までにフィフティシアに向かわねばならなかった以上、助っ人の存在は必須だったのだ。

「合流場所はイレベンタル……よし、行くか」

エムルはラビッツに残している。あいつには任務……「アキツアカネ」なるプレイヤーがログインした時点で俺に報告する、あわよくば俺が「アキツアカネ」に会うまで足止めをする、という重要な任務を任せている。
「致命兎叙事詩」という切り札が切り札として機能するかどうかの分水嶺はあいつにかかっていると言っていい。

「アキツアカネ」……一体何をしでかしてユニークシナリオ「兎の国からの招待」のフラグを立てたのかは知らないが、相当のプレイヤースキルを持ったプレイヤーであることだけは間違いない。
そんな相手にどうやってユニークシナリオ……というか「ヴァイスアッシュ」というNPCについて箝口令を敷くか。
そもそもなぜここまで必死になってラビッツの情報を隠そうとしてるのか自分でも分からなくなってきた、どちらにせよ「兎の国からの招待」を発生させる難易度クソ高いし、バレたところで兎御殿にプレイヤーが増えることはそうそうないとは思う。
だが今はプレイヤー関係で面倒な地雷を抱えているんだ、ここで「ヴォーパルバニー関連のユニークモンスターがいる」なんて判明してみろ。きっと今以上にプレイヤーが俺に押しかけてくるだろう。

「アイテムで釣る……いや、難しいな。いっそのこと身内にしてしまうというのはどうだろうか」

そもそも俺は完全なソロプレイヤーではない。クラン「旅狼(ヴォルフガング)」……俺、オイカッツォ、ペンシルゴンの三人で一つのコミュニティを作っている以上、一人は皆の為に(ワン・フォー・オール) 皆は一人の為に(オール・フォー・ワン)というわけではないが最終的に「旅狼」が大勝利すればいいわけだ。
であれば件の「アキツアカネ」氏を「旅狼」に引き込んでしまえばユニークシナリオEX「致命兎叙事詩」の独占は実質的に破綻しない。どちらにせよユニークシナリオEXを一人でクリアできるなんて思っちゃいない、いつかはバラさなければならないことではあった。
だが、アキツアカネ氏以前に俺はルスト&モルドを「旅狼」に加入させるよう外道二人(あいつら)に推薦するつもりだった。勝負で負けてさらに誘惑にも負けたという面を差し引いてもルストとモルドは戦力になると判断してのことだ。
聞けばあの二人、フィフティシアまで到達しただけあってシャング

リラ・フロンティアでも結構な強さを持っているらしい。確かルストがＬＶ．８５でモルドがＬＶ．８７なんだとか。

「あ、そうだ」

レベルといえば、俺のレベルは今どうなっているんだろう。水晶群蠍を大量に落下しさせ、金晶独蠍を倒した以上俺は莫大量の経験値を獲得したはずだ。ふとそれを思い出しステータス画面を開いた俺は、去栄の残骸遺道ど真ん中でステータス画面を開き……絶句する。

「ちょ、おま…………………」

――――――――――――
ＰＮ：サンラク
ＬＶ：９９　Ｅｘｔｅｎｄ（１５０）
ＪＯＢ：傭兵（二刀流使い）
６２，０００マーニ
ＨＰ（体力）：４０
ＭＰ（魔力）：５０
ＳＴＭ（スタミナ）：１００
ＳＴＲ（筋力）：７０
ＤＥＸ（器用）：７０
ＡＧＩ（敏捷）：９０
ＴＥＣ（技量）：６５
ＶＩＴ（耐久力）：２

ＬＵＣ（幸運）：１０４
スキル
・獣鏖無尽↓選択可能
・グローイング・ピアス↓選択可能
・インファイトＬｖ．ＭＡＸ
・ドリフトステップ↓選択可能
・セツナノミキリ↓選択可能
・ハンド・オブ・フォーチュンＬｖ．ＭＡＸ
・グレイトオブクライム↓選択可能
・クライマックス・ブーストＬｖ．ＭＡＸ
・八艘跳び↓遮那王憑き
・リコシェット・ステップＬｖ．ＭＡＸ
・ヘイト・トランプルＬｖ．ＭＡＸ
・スカイウォーカー↓選択可能
・孤高の餓狼（トランジェント）↓月狼の誇り（マーナガルム・プライド）
・オフロードＬｖ．ＭＡＸ
・致命刃術【水鏡の月】玖式↓致命秘奥【ウツロウミカガミ】
・イグニッションＬｖ．ＭＡＸ
・オーバーヒートＬｖ．ＭＡＸ
・ニトロゲインＬｖ．ＭＡＸ
・デュエルイズム↓血戦主義
・衝拳打Ｌｖ．ＭＡＸ
・テンカウンター↓レテ・バニッシャー
・パワースラッシュＬｖ．ＭＡＸ
・一振両断↓壊刀乱魔
・致命剣術【半月断ち】参式
・武頼闘気Ｌｖ．１
・剣舞【紡刃】
・パーシスタンド
・アクロバットＬｖ．１

・メロスティック・フット

装備
右：兎月【上弦】
左：兎月【下弦】
頭：凝視の鳥面（ＶＩＴ＋２）
胴：リュカオーンの呪い
腰：無し
足：リュカオーンの呪い
アクセサリー：格納鍵インベントリア
――――――――――

そう言えば腰装備つけるのずっと忘れていたな、とか数時間ひたすらスキルを起動させせ続けていただけあって新しく覚えたスキル以外のほとんどがスキルレベルＭＡＸか次段階を選択可能になっているな、とか様々なことが頭をよぎるがやはり一番目を引くのは現状たどり着くことができる最大レベル「９９」の後ろに追加された拡張(Extend)の文字。
ウェザエモンと戦っている真っ最中に行われたというアップデートでレベルキャップが開放された、というのは知っている。であればこの拡張を意味する「Ｅｘｔｅｎｄ」はレベルキャップ開放の前段階と考えるのが妥当か。
いや、それよりも９９、レベル９９である。金晶独蠍だけでレベルが２０も上がるとは思えない、仮にソロ討伐だとしてもだ。だとすればやはり落下死した大量の水晶群蠍は俺に経験値をもたらしてい

た、これはヤバいんじゃないか？
実質インベントリアがあればお手軽レベリングである、バカバカしすぎて鰻やらロブスターやらを釣ってる場合じゃないぞ。くそ、ラビッツを出る前に気づけていたらエルクのところに寄っていたんだが………というかこれ、レベルキャップを開放しないと新しくスキルを覚えることも、スキルを強化することもできないのではないだろうか。
上限に達して拡張までしてしまった俺（サンラク）という存在（アバター）が、さらなる高みを目指すためにはレベルという限界をぶち破れということか。色々と一段落ついたらレベル上限について調べてみよう。

「邪魔！」

雑魚に構っている時間はない。一旦ステータス画面の確認を切り上げて寄ってきたゴーレム……ゴーレムだよな？　どう見ても三角木馬以上でも以下でもないなんだか邪気を纏っていそうなゴーレムから全力ダッシュで逃走する。
ステータスやらスキルやらは色々と検証と整理の必要があるものの、レベル９９に到達した今の俺ならばフィフティシアまでの全力ダッシュもやりやすくなるというもの。
そこらの雑魚など脇目も振らず、エリアの性質上入り口が巨大骨格の首側であるなら出口は尻側であることは自明の理であり、ただまっすぐ進めばいいというシンプルさは今の俺にとっては大助かりだ。
聞く話によるとフォスフォシエからフィフティシアへとまっすぐ進む「フォスフォシエルート」以外に二つある「ファイヴァルルート」と「シクセンブルクルート」に立ちはだかるエリアは出口まで一直線ではないエリアばかりであるという。もしそちら側を選んでいたら、フィフティシアに着くまでに消費する時間はもっと多くなっていただろう。

武器を振るう時間すら惜しいと言わんばかりにスタミナゲージを乱高下させながら走りつつ、俺はごちゃごちゃした思考をまとめてやるべきことをまとめて順序立てていく。
まず突発的に発生した重要事項……便宜上「アキツアカネ問題」であるが、これはとりあえずは後回しにする。アキツアカネ氏の出現をこちらで制御できない以上、エムルからの報告を待つことしかできない。
次にファイヴァルへと到着する……便宜上「ファイヴァル到達ＲＴＡ」であるが、まず予定として俺一人で去栄の残骸遺道を突破する。そして本日の夕方に会うことを約束している人物と合流し次第、フィフティシア到達に立ちふさがる最後の関門……無果落耀の古城骸を攻略する。
本来はこのエリアでユニークシナリオＥＸ「致命兎叙事詩」で課されたお使いクエストをクリアしなければならなかったのだが、残念ながら今日に限っては最後尾まで後回しにすることにした。
そもそもなぜこうも急いているかと問われれば、ルスト＆モルドと明日の朝８時までにフィフティシアで合流しなければならないからだ。
なにせルストに「パワードスーツを貸す」と約束した以上、俺はオイカッツォとペンシルゴンを説得しなければならない。そのための手土産としてユニークモンスター「深淵のクターニッド」の情報を用意する……まではいいのだが、ルスト達曰く深淵のクターニッドに通じるかもしれないユニークシナリオ「深淵の使徒を穿て」はフィフティシアで受注しなければならない。
仲良くなったとはいえ、俺とルスト達の関係は「赤の他人」である。シャンフロ内でフレンド関係にあるわけでもなければ、メールアドレスを交換するほど交友関係があるわけでもない。つまり口約束で現地集合である、こういう時ＳＮＳ的なものをやっていなかったのが悔やまれる。
要するに、だ。口約束とはいえ明日の朝七時までにフィフティシア

「破落戸(ならずもの)通り」に行かなかった場合、下手をすれば深淵のクターニッドに通じる手がかりが消失しかねないのだ。

「早ければいいってもんじゃないな！」

時間にゆとりを、これ大事。

過去の自分の考え無しの突っ走りを殴って止めれたなら……と未来の自分にしかできない特権である「過去を悔いる」アクションをしていると……不意に俺を覆うように影がさす。

「なん………」

「ＤＮＡスキャン……不一致(フイッチ)、コードスキャン……不所持(フショジ)、登録該当(トウロクガイトウ)セズ。最終決定(サイシュウケッテイ)、シンニュウシャ、ハッケン」

上を見上げてそれを見てしまった俺は、走る足を急遽バックステップに変更し、戦闘態勢に入る。

そしてそれは俺の眼前へと着地し、無機質な単眼をこちらへと向ける。若干の軋みを帯びてはいるが、その戦闘力に翳りのないいくつもの箱をくっつけたものを大雑把に人の形にして、蟹や蜘蛛の足のような機械仕掛けの節足を取り付けたようなそれは、至極単純にこれから俺に対して何をするのかを宣告する。

「ハイジョシマス」

駆けろ、焦燥を燃料に（後書き）

・レベルキャップ
シャングリラ・フロンティアでは夏の大型アップデート以前までレベル上限は９９であった。
しかし、プレイヤー達の手によって完成したエインヴルス王国による超大型新大陸調査船「トルヴァンテ・ディスカバリエ号」が完成したことにより新大陸への航路が開かれた。そして待ち構える未知の中で、開拓者達は新たな強さを得ることになる――
という設定により、プレイヤーのレベル上限が開放された。と言っても無条件の開放ではなく、まず前提として「レベル１００以上のモンスターを倒す」条件を達成してレベル９９　Ｅｘｔｅｎｄ状態になる必要がある。
そして新大陸で特定条件を達成することでレベル上限が９９から１５０になる。
レベルキャップが開放されるまでわざとレベルを下げるなどの涙ぐましい努力でスキルを強化していたプレイヤー達の歓喜の叫びが響いたとか響かなかったとか。
ちなみにすでにレベル上限開放プレイヤーは続々と増えています、具体的にはキョージュの奥さんとか。

レガシー・メイド・トゥ・黒兎（前書き）

お知らせ
１１１話にてレベルアップの際に得られるステータス割り振りポイントを
ポカ１「間違えてレベル÷5してしまう」
ポカ２「量を勘違いしてレベル×１０してしまう」
など諸々ミスを続けていたので顔を洗って頭をすっきりさせてからまとめました。
レベルアップ２０×５＋ボーナス５０で１５０です。ご迷惑おかけしました。

俺が調べた限り、去栄の残骸遺道のエリアボスは「オーバドレス・ゴーレム」である。

所謂神代時代製のものではなく、自然発生したゴーレムであり、朽ちた神代製の残骸を鱗のように身にまとった姿はまるで着飾っているようにすら見えるという。

であれば眼前のこいつはオーバドレス・ゴーレムではない。情報を集めた際に聞いた残骸遺道を徘徊し、侵入者を撃滅するレアエネミー「オメガセルユニットゴーレムＳＳ（セキュリティー）」、それこそがこのゴーレムの名だ。

「レアエネミーを相手にしている余裕なんざ無い。無い、んだが……」

フィフティシアまで走り抜けるに当たって、ボスの情報はおおよそ調べ尽くしてある。オーバドレス・ゴーレムに関しては上手くいけば一分程度で倒せる可能性がある。そしてオーバドレス・ゴーレムの攻略に関しては手順が決まっている。

であれば、今の俺（サンラク）がどこまで戦えるのか…………そのための試金石（サンドバッグ）としてこのオメガセルユニットゴーレム……長い、オメガ箱は丁度いいのではないか？

意見の一つとして頭に浮かんだことではあるが、身体は正直じゃねえかへっへっへ……は冗談として、既に身体は動いている。

「使い心地の感想を小一時間語らないといけないからな、試運転はしないといけないよなぁ……」

兎月をインベントリにしまい、早急にステータスを割り振る。アレが要求するステータス制限は……マジかよ耐久力３００だと！？　いや待て待て、装備で上げられるんだから実は無理ゲーでしたとかじゃない……戦角兜【四甲】を装備することで追加される耐久力が……よぉぉぉぉし５００！　ありがとうクアッドビートル！　いやマジでありがとう！

あとは１５０のポイントで最低限の要求ステータス「ＳＴＲ１００」と「ＴＥＣ７０」を満たし、キリよくそれぞれのステータスを上げつつ残ったポイントを全部幸運にぶち込んで……条件は満たされた。

古匠（ビィラック）によって現代に甦った神代の技術。遥かなる太古よりの遺産として名付けられた遺機装（レガシーウェポン）、親愛（クソッタレ）なる水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）と金晶独蠍（ゴルディ・スコーピオン）の素材、そして綺羅星の如きレア鉱石から作られたそれは、オメガ箱と巨大骨格の陰に光を遮られてなお、ギラリと黒曜の輝きを放つ。

「甦機装（リ・レガシーウェポン）：ビィラック……その名も【煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）】！　ビィラック、最高の仕事だぜこりゃあ……」

思い出すのは俺が水晶巣崖へと再チャレンジに向かう直前、ビィラックが水晶群蠍の素材で遺機装を作りたいと俺に申し出てきた時、何を作ればいいいかと聞かれて俺が答えた言葉。

――作るのなら、双剣じゃなくて格闘用のガントレット的なものを頼む。

「気炎万丈！　いいねいいね、最高に燃えてきた！！」

ガギィン！　と俺の両腕を肘まで覆う、水晶群蠍と金晶独蠍それぞれの頭部を模した籠手(ガントレット)をぶつける。その大きさたるや、片方の拳部分だけで人の頭とほぼ同じ大きさだ。そのSFチックな見た目も相まってメカ腕にすら見えるそれは、初陣にて勝利を掴むべくただの鋼ではあり得ない駆動音を静かに響かせる。
一見するとただの漆黒のガントレットのようにも見えるが、黒曜の装甲の隙間から見える水晶の輝きは右に黄金、左に蒼銀の輝きを秘めている。

「いい加減素手で殴るのは勿体無いと思っていたんだ。」

スキルインファイト、そしてハンド・オブ・フォーチュン……この二つのスキルを俺は常に素手で使用していた。
オイカッツォのように「素手であること」に意味があるのならばそれは仕方のないことだ、だが傭兵にそんな縛りは存在しない。それはつまり俺はずっと最低威力で格闘攻撃を放っていた、という事実に他ならない。だからこそ俺はビィラックに格闘用装備を作って欲しいと望んだ、だがそれ以外にも理由はある。
俺はこれまで数多のクソゲーをプレイしてきた。そしてそれぞれが異なる攻略法を必要とする以上、様々な武器を扱ってきた。それは銃であり、剣であり、槍であり、杖であり……当然拳も使ってきた。およそどんな武器でも三十分くらい練習すれば使いこなす自信はあるが、そんな俺にも「得意な武器」というものは存在する。例えば、人外格ゲーでメインで使っていた格闘術とかな。

「神ゲーにクソゲーの要素を持ち込むことは非常に心苦しいが……だが言わせてもらうぜ箱野郎」

向こうもまた戦闘態勢に入ったオメガ箱に左拳を突きつけ、四本角の兜越しに不敵な笑みを浮かべて俺は告げる。

「イアイフィスト流の真髄ここにありってな、１ラウンドでノックアウトしてやる」

その言葉が合図となったわけではないが、互いに動き出したのはほぼ同時だった。

積み重ねた紙束を一枚ずつずらしていくように、手札として引いたカードを扇状に持つように、腕に相当する箱部分が薄い板状にスライドして板を並べた鞭状の腕が振りかぶられる。どこかで見た覚えがあると思ったが、蛇腹剣に似ているのか。

俺を断裁せんと、板の羅列が刃のように振り下ろされる。だがその程度の素直な軌道、ぬるめの速度、細すぎる当たり判定に引っかかるほど耄碌しちゃいない。俺に当てたいなら当たり判定をあと二メートル拡張した上で１２フレーム以下にしてから出直してこい。

顔を守るように構えたボクシングフォームのまま横にステップ、そしてオメガ箱の「腕」攻撃が地面に着弾したと同時に一気に距離を詰める。

「さぁ、火力検証だ」

超至近距離攻撃に補正を入れるインファイト、そして幸運の数値でダメージ判定を行うハンド・オブ・フォーチュン。俺が持ちうるスキルの中ではニトロゲイン、クライマックス・ブーストのコンボに匹敵するズッ友コンボである一連のスキルを起動。

左足を前に踏み出し体を後ろに傾けるような姿勢で助走から拳を振りかぶる体勢に。お前単体でもボスキャラ張れるよと言いたくなる三メートル程度の巨体……狙うは四つある節脚の付け根。

左足に全体重をかけ、地面を踏み込み右腕を振るう。この大陸における後半エリアのレアエネミーといえど、こちとらレベル９９である。ソロであることを差し引いても脚の関節という耐久力が削られ

がちな部位に高火力を叩き込まれては素知らぬ顔でノーダメージとはいかない。
生命なく、魂もない故に「呪い」を恐れない過去の箱人形。例え相手が自身より強い相手であってもそのゴーレムが為すべき任務が変更されることはない。侵入者の排除、ただそれだけがオメガ箱……オメガセルユニットゴーレムSS（セキスロチター）の存在意義。
だがな、キャラを立たせたいなら最低ライン感情を持つくらいしないとロボは生き残れないんだよ。
ちなみに主要人物を守るために半壊、もしくは全壊するまで自身を犠牲にして機能停止の間際に花を見て情緒ある台詞を言えればロボキャラでも人気投票上位は間違いなしだ。つまり何が言いたいかというと所詮レアエネミーとして出てきたお前はワンチャンすらないってことだ。
金晶独蠍を模した右拳が四つある節脚の一つ、膝に相当する部分にクリーンヒットする。無論クリティカルを外すようなヘマはしない、ガントレットを通して右腕に伝わるのは会心の手応え。
ヒビの入った膝関節は今の一撃が奴の耐久を上回って大打撃を与えたということ。オメガ箱は自身の足元にいる敵を抹殺せんと動き出すが、こちらの方が三手早い。

「へし折る！」

右腕を振り切った余韻を強制的にねじ伏せ、左腕に力を込める。ハンド・オブ・フォーチュンの火力は見込めないが、今の俺のＳＴＲは幸運に匹敵する火力を発揮できる。真下からすくい上げるようなアッパーカットを亀裂の入った膝関節へと叩き込む。
ベギョリと亀裂がさらに広がり、張り詰めていた節脚から力が抜ける。砕けて千切れなかったのは破壊属性を帯びていないからか。だが重要なのは脚の一本を破壊したという事実だけだ、スキル込みクリティカル二発確定か……スキルなしクリティカル二発確定だった

らよかったんだが、贅沢は言っていられない。

「ただでさえ寄り道なんだ、速攻で片付けさせてもらうぜ！」

俺はさらなる一撃を残る節脚に放ちつつ、ただ一人強敵へと挑むのだった…………

二十分かかった。大ガバじゃねーか！！

レガシー・メイド・トゥ・黒兎（後書き）

感想欄で質問された内容ですが、説明すべきと考えましたのでここで説明します。
ユニークモンスターによって付与される「呪い」ですが、例外的にその効果を受け付けないモンスターが存在します。
まずエリアボス、例えそれが貪食の大蛇であったとしても彼らが逃走することはありえません。
そしてボスではないモンスターの中にも逃走しないモンスターが存在します。それが「そもそも命を持っておらず、なおかつ生物でもないゴーレムなどのモンスター」です。ここで注意すべきはこれに該当するゴーレムは「神代製のゴーレム」のみで、「自然発生ゴーレム」は該当しない、ということです。
ちなみにアンデッドなどのモンスターは「肉体に残留した本能が反応して逃走する」という判定です。
ぶっちゃけ後付け設定なのですが、意外にユニークモンスターの設定と噛み合ったのでこれでいきたいと思います。

・遺機装の表記について
基本的に遺機装：「何由来であるか」　「装備名」となっています。
古匠によって新造されたものは発掘される過去に作られたものと差別化され、甦機装（リ・レガシーウェポン）と呼称されます。
ですので実はインベントリア内にあった武器は厳密には遺機装ではないんですね、ペンシルゴンがそこらへんを知る由もないので普通に遺機装呼びしていましたが。

「クソゲーやりすぎて昨今のゲームの流行に俺が遅れてるだけなのか……？　自己再生エネミー多すぎだろ……」

蠍といい、オメガ箱といい……自己再生エネミーってもっとこう、頻繁に出るようなやつじゃないだろう。
ブロックで雑に人の形を作ったようなやっつけデザインのくせに、ＡＩが中々に優秀なやつだった。まさか腕を自切して囮にしつつ、自己修復を試みるなんて器用な真似をするとは。雑な組み上げ方だからこそ、関節パーツがガバガバになったプラモデルよりも簡単に身体を切り離したり再度くっつけたりするものだから、予想以上に手間取ってしまった。
だがお陰さまで新たに習得した、及び次の段階へと進化したスキルの試しもできたから差し引きプラマイゼロ…………いや、気持ちマイナス寄りかな。
とはいえ、やはりレベル９９の力は凄まじい。二十分という時間がかかったのは仮にもレアエネミーであることと、ソロ討伐だったということもあるが、逆に言えば二十分間戦い続けることができるスペックを俺が得たということだ。
二十分間戦ってカスダメ以外ダメージらしいダメージを受けることなく、そもそも戦闘したこと自体がロスであることに目を瞑れば、現状のステータス、スキル、装備の組み合わせにおいて最速で倒せたと自負している。
ドロップしたアイテムはよく分からないパーツ系アイテムだったが、それはビィラックに見せればいいだろう。俺は見上げた先の巨大骨格の末端、様々な残骸が積み上がって道を塞ぐこのエリアの出口へと駆けていく。

「そろそろエリアボスだな……」

オーバドレス・ゴーレム。その特性上身にまとったガラクタや瓦礫を攻防の両方に利用し、ランダムで肉体の特性が変更され、しかもある一点を除いて全身が炸裂装甲（リアクティブアーマー）のような状態であるためにダメージがまともに通らない……だがプレイヤー達に幾度も打倒される中で判明した「弱点」により、アプデ以前までは終盤エリアのボスであったオーバドレス・ゴーレムは今では全てのプレイヤーが一番最初に戦うことになる第一エリアのボス「貪食の大蛇」以下とまで言われてしまっている。

走り抜けた先、去栄の残骸遺道の終点たる巨大骨格の尻の端……何か巨大なものが潰れた上で瓦礫が積もったような。そしてその瓦礫の山のど真ん中に空間を作るように丸くぽっかりと開いた円形のフィールド、それこそがオーバドレス・ゴーレムの住処であり、プレイヤーが越えねばならない最後の関門だ。

「他のプレイヤーの姿はなし、運がいいな」

迷うことなくボスエリアへと飛び込み、湖沼の短剣【改二】を構える。俺の方がレベルが上な以上、兎月はその効果を発揮することができない。帝蜂双剣はそのデザイン上「斬る」モーションが得手ではない、煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手はある理由から今は使わない。身軽さと取り回しを加味して斬首剣も除外され、ファイナルアンサーとして湖沼の短剣が選ばれたわけだが……おっと、どうやらボスのお出ました。
見据える先、このエリアの出口を塞いでいた瓦礫の山が突如として崩れ始める。だがしばらく見ていればそれが自然現象の崩落でないことはすぐに分かる。
なんてことはない、それは壁などではない。不躾な侵入者に気づいたこの場所の番人（家主）が起き上がったのだ。土砂崩れではないそれはそ

の下半身が溶けた上半身のみの人型を保つ、泥のような身体に幾重にも纏った瓦礫がそれの動きに連動して蠢動している。
まず最初に感じることは……でかい。リュカオーンや麒麟の大きさをはるかに上回るその巨体は、もはや山を相手しているようにすら感じる。そしてその認識は間違っていない。

これから俺は山登りをするのだ。

「確か記録に残ってる限りじゃ討伐最速タイムは一分らしいが……TA(タイムアタック)がてら、目指してみようか一分切り！」

もはや恒例の開幕スキル盛り盛り。点火(イグニッション)、自傷加速連打(ニトロゲイン)、さらに加速(クライマックス・ブースト)……お約束コンボに加えて新たなスキルを連続で発動していく。
かつてはスキルレベルの上昇が発動可能回数であった「艘跳び」スキルは進化したことによって三十秒間跳躍が強化され続ける「遮那王憑き」を起動。実質的にバフスキルへと変貌したことで発動タイミングや使用方法が大幅に変わった。
重ねて武器を装備している場合に武器による攻撃補正を強化、及び武器の耐久消耗率を軽減する「武頼闘気」起動。修行僧(オイカッツォ)泣かせのスキルだな、ざまぁ。
これ以外にも全体的に立ち回りに用いるスキルばかり保有する俺(サンラク)の機動力はほぼ俺の理想を実現するところまで到達した。オーバドレス・ゴーレムの至近まで到達した俺は、瓦礫同士が擦れぶつかり合う不協和音を奏でながら俺をボディプレスで圧殺せんとする巨体を見上げて笑う。

「十五秒、まずは背中に回り込む……ここで独自チャートだ！」

致命の術を極めることで奥義は秘奥へと変わった。かつて致命刃術【水鏡の月】の名と、斬撃のみを背後へと飛ばすスキルであったそ

れは致命秘奥【ウツロウミカガミ】の名を得ると同時に、その性質を真逆へと反転させた。
斬撃を背後に飛ばすのではなく、斬撃のみをその場に残す。
すなわち姿なき囮、俺という本体が背後へと回り込んでいるにもかかわらずオーバドドレス・ゴーレムは執拗に俺がいた場所にボディプレスを放ち続ける。本来はヘイト管理をタンクが行い、その間に本命の軽戦士を援護する形なのだろうが……今の俺はそれを単体で達成可能だ。
ラビッツ名誉国民の俺が遮那王憑きの効果で兎のように跳ねながら背後へと回り込んでいるのは皮肉か、因縁か。だが背後へと回り込み、見上げた先にはクレーン、屋根、柱、割れた壁の一部、剣、見たことない形のビークル、何かの砲身、三角木馬ゴーレムと思しきパーツ……ああ、同族も容赦なく身体の一部にしてしまうのか、恐ろしいな。
泥に飲まれ、巨人の一部と化した残骸。これこそが残骸遺道なのかもしれないこれから俺が昇るオーバドレス・ゴーレムの背に視線を巡らせ、ルートを割り出す。

「二十三秒、五秒で登り切る！」

遮那王憑き効果終了まで残り七秒、二秒で必要スキルを発動して五秒登山の用意を至急整える。
不安定な足場でも快適なムーブを、オフロード起動。地面から足を離した状態での行動で消費するスタミナを軽減します、アクロバット起動。入射角？　屈折角？　ガン無視で跳弾します、リコシェット・ステップ起動。足場がない？　だったら空を踏めばいいじゃない、スカイウォーカー改めフリットフロートは場合により起動予定。

「二十五秒、レッツゴー！」

スタート……三角木馬の縁を踏みつけ跳躍。一秒経過、割れた窓枠を蹴ってさらに跳躍。二秒経過、柱を滑り剣を踏みしめ、未知のビークルのハンドルを即席の足場に。三秒経過、邪魔な砲身は真横に飛んでフリットフロートで宙を踏み、鋭角な迂回で最短経路を往く。四秒経過、背後へと追い抜いた砲身を踏みつけ跳躍し、湖沼の短剣をわずかに露出したオーバドレス・ゴーレムの地肌に突き立ててスキル起動。

登攀時の刺した短剣に補正を付与するに加えて加速を帯びるグレイトオブクライム、それに加えて「昇る場所が険しいほど自重負荷が減少する」というマゾ御用達効果が追加されたトライアルトラバースによって登攀とは思えぬ軽やかな動きで足場のない泥肌をよじ登り、ついに目的座標……クレーンの上へと到着する。

「三十秒、こっからが本番だ……！」

見た目こそ鉄骨を組んだクレーンのようにも見えるが、その先端には巨大なホイールがくっついている。あの、なんだっけか……あのやたらでかい巨大重機。だいたいハリウッド映画で派手に炎上したり爆発したりするあれだ。

この巨大掘削ホイール……数多のプレイヤーの検証によって破壊できることが判明している。そして破壊されたホイールは物理エンジンに従って真下………すなわちオーバドレス・ゴーレムの脳天に激突する。

なんちゅーアホな弱点と思わなくもないが、登攀スキルと破壊スキルを両立しなければホイールの破壊ができない以上はデザインとしては破綻してはいない。

ホイールは自転車のフロントフォークのようなパーツによって左右から固定されている。この二つのフォークを破壊することでホイールが下に落ちるわけだが、オーバドレス・ゴーレムが前傾姿勢の時しかこの攻略法は意味をなさない。

であればどうすればいい？　簡単だ、起き上がる前にコトを済ませればいい。

「三十三秒、まずは右側からだ……！」

攻撃スキルを重ね、自画自賛したくなるような会心の乱舞を錆びた金属に叩きつける…………！

カカカカカンッ

「やっべ思ったより硬ぃ！」

チクショウ、強化の足りてない湖沼の短剣じゃ役不足だったか。煌蠍の籠手に切り替えてラッシュを叩き込む。
四十五秒、右側のフォークを破壊する……間に合うか十五秒！？
いや、走って左側に回ったんじゃ間に合わない……であるならば！

「【発射せよ(Firing up)】！！」

オメガ箱との戦いで一通りの性能は把握している。拳を真下に突きつけ叫んだ音声を認識し、左の籠手が起動する。籠手の各部がスライドし、その内側に秘めていた蒼銀に輝く水晶群蠍の水晶が充填された魔力に応えて輝きを増す。
そして直後、人体の拳で例えるならば丁度中指の中手骨から小さな煌めきが足元、かろうじて左側に支えられて崩壊を耐える右フロントフォークの亀裂に突き刺さる。むろんこれで終わるような緩い武器ではない、これは種蒔きだ。撒かれた種は自然の摂理に従い、成長する……！

「さぁ……飛ぶぞ。【成長せよ(Growing up)】！！」

煌蠍の籠手……というよりも、遺機装共通と思しき説明文に曰く。

――神代において、何事において掲げられた理念は「制御」と「活性」であった。旧き武器は用いられた素材の力を御し、その真の力を活性化させることで様々な力を武器という形へと収束させたという。

であるならば、水晶群蠍の力を宿す左拳が持つ力とはすなわち。

「射出した晶弾（クリスタルバレット）を急速成長させて柱（ピラー）を生成する……！」

左拳が足場を叩く。そして俺自身が嫌という程体験した水晶群蠍の感知能力はこの拳と、水晶に継がれた。

振動を感知した晶弾が一瞬自ら光を放った瞬間。俺の身体は真下から射出された巨大な柱によって打ち上げられ、宙を舞った――！

宙を舞う変態

ハリウッドとかで派手に炎上したり爆発する巨大重機、いいですよね……！
ちなみにオーバドレス・ゴーレムが背中にくっつけてるのはバケットホイールエクスカベーターです、いいですか？　バケットホイールエクスカベーターです！　ゴグマ◯オスっていうのは厳禁の方向でよろしくお願いします！
ちなみにオーバドレス・ゴーレムTAの最速記録は複数人パーティによるものです、一人でやってる主人公は頭がおかしいです。というか挙動がおかしいです。

そして宙を舞う変態と最高火力は邂逅す

遺機装とは、用いられた素材の力を増幅し、制御する神代の技術によって製造された武器を指す。
左拳から放たれた晶弾(クリスタルバレット)は本体である左拳から放たれた特殊周波の振動を受ける事により、凡そ三メートル程の巨大な水晶柱を生成する。
この水晶柱は時間制限付きのオブジェクトであり、凡そ五秒で崩壊しポリゴンとなるが、その悪用方法はいくらでも思いつく。何せ晶弾が着弾した場所からズドンと飛び出る水晶柱である、罠にしてよし足場にしてよし……射出装置にしてもよし、だ。

「ははははは！　ゲームシステムが俺の戦闘(プレイング)データを解析したとか!?　最高のオモチャじゃねーか！」

優雅……と呼ぶには少々ジタバタしすぎではあるが空中で体を捻り、ホイールを飛び越える事で時間短縮を試みる。

「華麗に着地……っとと危なっ！」

ずるんと足を滑らせ仰向けに落ちそうになる身体を、腕を思い切り前へと振り抜く事でかろうじて体勢を前へと傾ける。
危なかった、湖沼の短剣のままだったら滑り落ちていた……ちゃんと強化してやるからな。

「さぁて……四十八秒、畳み掛ける！」

インファイト＋ハンド・オブ・フォーチュンのズッ友コンボ！
狭い足場ではあるが、綱の上で戦わされるよりはずっと動きやすい。

振りかぶった拳をフロントフォークに叩きつけ、破壊あと一歩で耐えた亀裂にもう一発ダメ押しを叩き込んでやればバギリ、と取り返しのつかない音が響く。

「おっと、流石にヘイト囮（デコイ）も一分は続かないか……図が高いぞ、こうべを垂れろ！」

身体を起こし、俺を振り落とさんとするオーバドレス・ゴーレム。
俺が落ちるのは割とどうにでもなるが、タイム的にあと九秒以内に死んでくれないと困る。
自ら足場としている鉄筋の上から飛び降り、落ちる先は起き上がりつつあるオーバドレス・ゴーレムの頭頂部。
さながらプロレスにおけるダブルスレッジハンマーの如く、両拳を重ねるようにして落下のエネルギーに振り下ろしのエネルギーを重ねながらスキルを二つ発動する。
一つは頭部に攻撃を当てた際に仰け反り発生率を高め、確率で気絶させる効果を攻撃に付与する「衝拳打」。そして最初から気絶効果を持ち、この攻撃で気絶させた場合気絶時間を十秒まで引き伸ばす攻撃スキル「レテ・バニッシャー」。

「気分はダンクシューット！！」

ファッションセンス皆無な泥人形の頭に黒曜の拳槌を叩き落とす。
頭の頂点に命中、拳の入射角は良し、威力良し、スキル良し。
条件が満たされ、結果が連鎖する。ゴーレムに脳があるのかは知らないが、少なくともこのモンスターの核は頭にある。だからこそ背中にでかでかと弱点を背負っているこいつは、プレイヤーの間で「自殺志願者」と呼ばれているのだ。

「はっはーっ！　次の鉄槌はもっと痛いぞ！！」

真上から拳骨でどつかれたようにオーバドレス・ゴーレムが蹲るように身体を屈める。もとより着地を無視した落下であるがために、真っ逆さまに落ちる俺であったが視線の先、ついに支えを失いフロントフォークから外れたホイールがまるでスローモーションのように落ちていく。

「悪いが相打ち狙いで飛び降りたわけじゃあないんだ、くたばるのはお前だけだ」

インベントリア起動。格納空間内へと転移し、落下の勢いを一度リセットする。

何故落下ダメージがリセットされるのかを厳密に理解しているわけではないが、インベントリアは魔法ではなく神代の科学によって作られている。その辺りに魔法による転移との違いがあるのだろう。

今までも何度かインベントリアを使っているが、なんだかその度に背中を強打している気がすると背中をさすりながら立ち上がり、格納空間から退出する。再び空中に投げ出されるが、今度はちゃんと落下に備えた体勢だ。

「おっ、いい音させるじゃん」

まさしく巨大なモノ同士が激突した音と共にオーバドレス・ゴーレムの脳天にホイールが激突、見ようによってはモヒカンにも見える頭からホイールを生やした状態でオーバドレス・ゴーレムが絶叫する。

「そっちの方が人気でそうじゃん、イメチェンしたらどうだ？」

リキャストの終わったフリットフロートを使い、虚空を踏んで落下

の勢いを殺す。
五メートルから落ちるのと、二メートル半落ちるのを二回繰り返すのでは受けるダメージは大きく変わる。
若干の痺れは落下ダメージを軽減しきれていない証拠ではあるが、確かに俺は二本の足で立っており、オーバドレス・ゴーレムは愉快なことになっている車輪頭を下げて、土下座するように崩れ落ちていた。

「……「ホイールを支えるだけの丈夫さがないので、頭にホイールが落ちると重さで核が潰れて即死する」。いざ実際に見てみると、後半エリアのボスとは思えぬ間抜けな死因すぎるな」

着地した俺の眼前に、ホイールが落ちてくる。いや、厳密にはホイールに押し潰されたオーバドレス・ゴーレムの頭ごと、だ。
重量と重力によって頭を地面に縫い付けられたオーバドレス・ゴーレムは二、三度身体を震わせていたが、それが止まると同時にその全身をポリゴンへと変えて爆散した。
経験値が入らないのが惜しいと言えば惜しいが……今は急ぐ事が先決だ。

青みを帯びたインゴットに触れてアイテム化させ、インベントリに放り込みつつ俺は駆け出す。
目指すは第十一の街、イレベタンタル。そこには俺が要請して二十秒で承諾の返事を送ってきた助っ人がいる。

「…………」

沈黙、ただそのプレイヤーはそこに立っているだけである。シャングリラ・フロンティアがオンラインゲームである以上、「待ち合わせ」というものはごくごく当たり前に存在する。
であるならばそれがイレベタンタルの街道ど真ん中で立っていることも、そう不思議なことではない。
道行くプレイヤー達は「ああ待ち合わせなんだな」とそれを特に気にすることなく……とは行かない。

「あれ、サイガー0だよな……？」

「よく分からんが先発組から外れてこっちに残ったってのは聞いてたが、なんでイレベンタルに？」

「っていうか、いつ見てもすげぇな……ユニーク装備でフル武装だぜ」

「確か鎧と大剣でそれぞれ連動したユニークシナリオで獲得される「天魔」シリーズなんだっけ？」

「噂じゃユニークモンスターにも匹敵する敵を一人で倒したとか…

「……」

そのプレイヤーの名はサイガー０。単体としての強さも突出していながら、運営から直々に「最大火力（アタックホルダー）」の栄誉を贈られ、未だその称号を保持し続ける……即ち、変わることなくこの世界で最も高いダメージを出したプレイヤーである。
そんなプレイヤーが何故新大陸調査船トルヴァンテ・ディスカバリエ号に搭乗し新大陸へ向かうプレイヤー達、所謂「先発組」から外れてこちらに残ったのか、何故そんなプレイヤーが一人でイレベタンタルのど真ん中に立っているのか。
なるほど確かにイレベタンタルの前後のエリアはサイガー０のような最前線攻略プレイヤーがいて不自然な場所ではない。そしてサイガー０がプレイヤーである以上、誰かと待ち合わせすることも間違いではない。

であるならば、おおよそ一時間待ち続けるような待ち合わせ相手とは一体誰なのか。
まさか本人に聞くこともできず、周囲のプレイヤー達はチラチラと街道ど真ん中に立ち竦む白輝の聖騎士に視線を送るのだった。
そして彫像が如く不動であったサイガー０が動く。その反応速度は周囲のプレイヤー達は知る由もないが、ユニークシナリオ「堕ちたる天帝」、そして「昇りたる魔王」をソロでクリアした際の全身に緊張が漲った時以上のものであり、その視線の先には待ち合わせ相手が現れたのだろう。
そしてプレイヤー達は最高峰のプレイヤーを一時間も待たせた色々な意味で勇者な相手に視線を向ける。

「あー……どれくらい待たせてしまいました？」
「……今、来タトコロデス」

嘘つけぇ！

と

なんだあの変態！？

果たしてどちらが取り多くのプレイヤーの胸に去来したか、喉の奥まで飛び出しかかった叫びを堪えるプレイヤー達など知る由もなく、サイガー０は人生最大の山場、陽務　楽郎(サンラク)からのお誘い(実質デート)に臨むのだった――――！！！

そして宙を舞う変態と最高火力は邂逅す（後書き）

オーバドレス・ゴーレム裏設定

オーバドレス・ゴーレムは「周囲の物体をその性質を問わず吸収し自身の一部とする」という設定上、倒された際にドロップするアイテムは去栄の残骸遺道でドロップするレアアイテムの中からランダムで選出されたものが落ちる。

そのため、弱点発見前から狩られ続けていたりします。効率厨達がタイム短縮を突き詰め続けた結果、「脳天鉄槌ルート」の発見に至ったわけです。

そして次の話以降、ヒロインちゃんが本気を出す……？

大志の灯火を抱いて　其の一

――――――――――――
PN：サンラク
LV：99　Extend
JOB：傭兵（二刀流使い）
1，000マーニ
HP（体力）：80
MP（魔力）：50
STM　（スタミナ）：100
STR（筋力）：100
DEX（器用）：100
AGI（敏捷）：100
TEC（技量）：80
VIT（耐久力）：901
LUC（幸運）：129
スキル
・縷々閃舞（るるせんぶ）
・一念岩穿（いちねんいわうがち）
・瞬刻視界（モーメントサイト）
・フォーミュラ・ドリフトLv.1
・アガートラムLv.1
・トライアルトラバースLv.1
・遮那王憑き
・グラビティゼロLv.1
・フリットフロート
・月狼の誇り（マーナガルム・プライド）
・致命秘奥【ウツロウミカガミ】

・バーンアウトＬｖ．１
・ライオットアクセルＬｖ．１
・血戦主義
・レテ・バニッシャー
・ダーティ・ソードＬｖ．１
・壊刀乱魔
・致命剣術【半月断ち】参式
・戦極武頼Ｌｖ．１
・剣舞【紡刃】
・パーシスタンド
・メロスティック・フット

装備
左右：焔将軍の斬首剣
頭：戦角兜【四甲】（ＶＩＴ＋５００）
胴：リュカオーンの呪い
腰：発掘研磨腰帯【古兵】（ＶＩＴ＋４００）
足：リュカオーンの呪い
アクセサリー：格納鍵インベントリア
——————————

整理されたスキル欄よりも、俺の耐久が９００になったという事実に震えた。
そういえば腰装備を付けるのを忘れていたと今更気づき、店売りの腰装備を装備してみたのだが、流石は終盤の街イレベタンタル。レアエネミー産の武器とはいえ、終盤ちょっと前の装備に匹敵するとは。いやむしろ今の段階でも普通に現役な戦角兜が凄いのか……

うん、頭がガチャガチャして鬱陶しいから鳥面にしよう。
随分と軽い金属製のベルトである腰装備だけでも煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）の使用条件は満たしているし。

「約束の時間まではあと十五分か……まぁこっちから頼んだのだし、先に待って当然か」

大通りにある「朽ちた巨剣像」の前が待ち合わせ場所なんだっけか。
名前からしてどんなものなのかおおよそ想像がつくし、整理したスキルをチェックしながら向かうとしようか。

………と、行動を開始したのが五分前。

「おかしいな、「朽ちた巨剣と聖騎士像」とは聞いてないんだが……」

ははは と現実逃避しかけた思考の肩を掴んで現実へと引きずり戻す。
お前だけお花畑に逃げることは許さんぞ。
神々しい白輝の全身鎧とは真逆の禍々しい大剣……確か「神魔の大剣（アンチノミー）」とかいうユニーク武器を背負ったプレイヤーが、全体に錆びが走り武器としての機能はほぼ損失された巨大な剣の前に立っている。
その全身から放たれる威圧感はプレイヤーのものというよりも最早ボスキャラだ、それも「やたら防御が硬い上にＡＩが堅実なので下手するとその先のボスより強敵な番人系エネミー」みたいな。
背後の朽ちた大剣以上に視線を集めるサイガ－０氏、正直言うとめちゃくちゃ話しかけたくない。出来ることなら他人のフリをして逃げたい。

だがそんな失礼はゲーマーとして看過できない、呼んだ側がドタキャンするなど言語道断、「ｎｏｏｂ」コールと一緒にブラックリストに叩き込まれても文句は言えない愚行だ。

「あー……どれくらい待たせてしまいました？」

「……今、来タトコロデス」

勇気を出して話しかける。周囲の視線がサイガー０氏から俺へと急速に集まるのを自覚しつつ、明らかに五分十分前から待っていただけでは出せない鎮座感を醸し出すサイガー０氏の言葉は考えないようにする。

「さ、さいですか……ごほん。今日はわざわざ無理を言ってお願いして申し訳ない」

「……いえ、丁度……そう、丁度時間の空いていた時でした、ので」

何故丁度を強調するのか、これはあれか？　「時間作ってやったんだから感謝しろよ」という暗黙のメッセージ？　いや相手はシャンフロ最高峰のプレイヤーだ、何か別の意図が含まれている可能性は考慮すべきだ。

やはり「旅狼（ヴォルフガング）」のメンバーが「黒狼」の最高戦力の力を借りる以上、何らかの礼は必要なわけで……やっぱりユニーク絡みで何か要求されるだろうか、いやされるだろう。

「あー、それでわざわざ来てもらったお礼ですけど……」

「……お気に、なさらず。その、フレっ、フレンド、ですから……！」

………。

（怖い！　待って超怖い！　無償の善意がめちゃくちゃ怖い！？）

今日この日ほど覆面を装備していて良かったと思った日はない。

きっと、俺は今引きつった笑顔で白目を剥いているかもしれないから。

「このエリア、無果落耀（むからくよう）の古城骸（こじょうがい）は去栄（きょえい）の残骸遺道（ざんがいいどう）と同じ神代の文明を強く感じさせるエリア……です。ただ、「工場跡地」だった残骸遺道と違って、このエリアは……「戦場跡地」なんです」

「成る程……随分と激しい戦いだったようで」

「ライブラリの方々曰く、「恐らく決定打かはどうかは不明だが、兵器工場の眼前まで追い詰められる程の戦いがあったことは確定」らしい、です……」

これほどまでに視覚的に何があったのかを分からせる光景もそうそうないだろう。

無果落耀の古城骸……古き城の「骸」と言うだけあって、その城は死んでいる。そしてその「死」は風化や経年劣化による老衰ではない。

腕。

それを除けば所々に朽ちた謎ビークルやイレベンタルにあった巨剣像のような巨大な剣に巻き付くように育った木が散見される草原地帯であるが、やはり目を引くのはアレだ。

ファンタジーな西洋風の城や、日本風の城とは違う、現実にあるもので一番近い例えで表現するとしたら「戦艦と空母を雑に合体させたもの」とでも言うべきだろうか。

明らかに戦うための防衛拠点として設計された巨大な建造物に、腕が突き刺さっているのだ。

しかもそのサイズが異常だ、砂場で作られた城とそれを作った子供の腕と同じ比率を本当に城塞サイズにまで巨大化させたと言うべきその大きさは、果たして存在しない肘から向こうがあったのならば一体どれほどの大きさなのか。

「……少なくとも、シャングリラ・フロンティアにあのサイズのモンスターは、出て来ては、いません……だから、過去に何があったのか、調べている、プレイヤーたちがライブラリを……作ったんです」

「オメガ、か……」

「え？」

「いや、独り言。思考をイデアに接続してレテの呪縛から逃げただけ」

「はぁ……」

適当に誤魔化しつつも、俺の中の考察脳が記憶から関連情報を引っ張り出す。
去栄の残骸遺道を象徴する巨大な機械骨格、やはりこの「腕」と関連があると考えて間違いはないだろう。
そしてあの地下ラボで見かけた「Ω」の姿……神代の文明はこの「腕」の持ち主に対抗するために機械骨格で何かを作っていた？
果たして腕の持ち主がΩなのか、それともあの骨格の完成系がΩなのか……そして何よりも、俺の中で俄然存在感を放ち始めた単語……「バハムート」。
だが推測が仮説になるまでの情報すら足りない。遺された結果と単語を結びつける糸がない以上、やはりユニークシナリオＥＸこそが世界の謎に迫る鍵か。

「……その、サンラク、さん？」

「ん、あー、申し訳ない。ちょっとイデアがレテってた」

「はぁ……その、サンラクさ、ん……は、エリア突破最優先、なんでした、よね？」

「ええまぁ、ちょっと待ち合わせをしていて……明日までにフィフティシアに」

流石にユニークモンスター絡みですとは言えない、ここは情報をぼかしていこう。

「マチアワセ……デスカ」

「え、えぇ……別ゲーで知り合ったプレイヤー達と、女性、とか、ですか？」

「ナルホド、モシカシテ、ソノ、エッと……じ、女性、とか、ですか？」

「まぁ、片方はそうですね」

次の瞬間、ビュゴァ！　と俺ですら一瞬見逃しかけた勢いで振るわれた大剣がこちらへと近づいて来ていた四枚翼のドラゴン……いや、ワイバーンの頭を横殴りに切り裂く。

「ひぇっ」

「サンラクさん、ストーム・ワイバーンです！　レベル９９ですから、ここは私に……」

「い、いや、それなら俺も戦える……色々あってレベル９９とＥｘ（エク）ｔｅｎｄ（ステンド）なんでな！」

「え！？」

バフスキルを発動し、構えた焔将軍の斬首剣を怯んだストーム・ワイバーンの首へと叩きつける。
サイガー０氏の一撃によって顔の左半分が潰れたストーム・ワイバーンは、首にめり込んだツヴァイハンダーに悲鳴を上げてもがくが、時すでに遅し。

「サイガー０氏！」

「剣神断覇……！」

ストーム・ワイバーンが俺に注意を向け、即時離脱をしなかった時点で命運は決していた。
明らかに極まった感じのスキルエフェクトを帯びた大剣の大上段がストーム・ワイバーンの脳天に叩きつけられ、着弾地点を起点にストーム・ワイバーンの首、背中を伝って尾の先端まで可視化された斬撃エフェクトが走る。
哀れストーム・ワイバーンは断末魔の叫びすら許される事はなく、斬撃エフェクトが走った場所から広がるようにポリゴンとなって爆散した。

「えーと、いつ見ても凄い威力ですね」

「えぇ、まぁ…………あの、一つおねが、提案が……」

「なんです？」

大剣を背中に戻したサイガー０氏はなにやら居住まいを正すと、こちらへと提案とやらを話し始める。

「その、あの、ですね……その」

「はぁ」

「……その、「サイガー０氏」という、呼び方は……長いで、しょうし、サイガだけだと、その、姉さ……じゃなくて、サイガー１００と被る、ので……」

「確かに」

なんというか、鎧の内側から爆発しそうな威圧感に後ずさりたくなる足を叱咤激励しつつ、サイガー０氏の話を聞く。
なるほど確かにリアルでなんらかの関係があるのだろう、クラン「黒狼」リーダーのサイガー１００氏とほぼ同じと言ってもいいプレイヤーネームである以上、紛らわしいというのは一理ある。
「そ、そそ、その……０（レイ）と呼んでいただけると、その、あの、分かりやすい、と言いますか……」
「あ、サイガー０（ゼロ）じゃなくてレイだったんですね。じゃあレイ氏と……ん？」
何か頭に引っかかった気がするが、なんだろうか。考えを巡らせなければならないことが多すぎて思い当たる節が多すぎる、いやいや今は攻略を最優先だ。考える事は後でもできる。
「な、なにか、こ、こころっ、心当たりでもっ、ございましょうござるますか？」
「あーいえ、別に……じゃあこれからはレイ氏と」
「っ……！　〜〜〜〜〜っ！」
「だ、大丈夫ですか？　体調が悪いようでしたら一旦ログアウトを……」
「いえっ！　絶好調です！　今ならリュカオーンにも勝てそうですっ！」
この人の場合、マジで勝てそうだから困る。

最大火力、だなんて称号を持っているくらいだ、一体どれほどのプレイヤーから支援を受けたのかは分からないが、少なくとも完全に味方頼りというわけではあるまい。

「じ、じゃあ行きましょうか……」

「はいっ！　なにが来ようと、叩き斬りますともっ！」

跳ねるような声と共に、物騒な大剣がぶぉんと風を切った。

ははは、ラビッツに帰りてぇ。

大志の灯火を抱いて　其の一（後書き）

後々から不意に「レイ」と呼ばれて悶絶するパターン

・隠しステータス
実際のところ、プレイヤーが確認できるステータスの数倍量の隠しステータスが存在します。
それは例えば出身による素質の違いであったり、職業による成長の度合いであったり、素行による性質の萌芽であったり……それらを分析してスキルが発現するわけです。

大志の灯火を抱いて　其の二（前書き）

ちょっと全体的な修正作業を行う予定です。具体的にはＶＩＴ関係で修正を行います

大志の灯火を抱いて　其の二

攻略を続けながらも、俺はこのエリアについての考察を続ける。
なにせ今回は走り抜けるが、ゆくゆくは本格的にここを探索しなければならないのだ。知ることのできる情報は可能な限り集めておきたい。
その点で言えばサイガ……もといレイ氏は極めて優秀な教師と言えるだろう。
やはりこのゲームをやり込んだ廃人なだけあって、大抵の質問には完璧な回答を返してくれる。
（あの城……中にはレベル９９でも苦戦するようなモンスターがウヨウヨいるらしいが、十中八九あそこだよなぁ……）
ヴァイスアッシュからのお使いクエスト、三つのΔ（デルタ）の名を持つ装置を集めなければならない以上、あからさまに神代文明の匂いをプンプン発するあの場所は避けようもなく調べる必要がある。
本音を言えばこのままレイ氏を引き連れて調べたいのだが、それはできないし……ううむ、ままならない。

「それにしても、凄いですね……」

「ん、何がです？」

リュカオーンの呪いのお陰で雑魚だけ寄り付かない、即ちそれでもなおやってくるモンスターは全てレベル９９クラスということである。
暴走する装甲車の如きハードラッグ・ライノにトドメを刺した直後、

突然の言葉に何が凄いのかと振り向けば、明らかに下手な壁より頑丈そうなハードラッグ・ライノの外殻を叩き割って肉に突き刺さった大剣を抜きながらレイ氏はこちらに感嘆を込めた言葉を投げかける。

「結構、モンスターを倒してきましたけれど……一度も被弾して、ないですから」

「まぁ見ての通り一撃喰らえば死にますからね、避けタンクに特化せざるを得ないというか……」

実際はいろんなものに手を出しすぎて中途半端なステータスになっている気がしなくもない。
だがこのゲームにおけるプレイヤーの個性とはスキルも含めてのものだ、であるならばアバターの性能はやはりオンリーワンになるのだろう……ほぼ乱数(ランダム)とか攻略サイトを書く人が悶絶しそうだ。

「黒狼にも、サンラクさんと似たタイプの方はいますが、それでもある程度はダメージを受けますし……」

「まぁ、これでも色々とゲーム慣れしてますから」

バグは人を鍛える、ラグは人を寛容にする、つまりクソゲーは人を強くする。
この持論をオイカッツォに言ったところ、爆笑した後にわざわざ笑いを抑えた上で鼻で笑いやがったが、実際俺の強みはそれなのだから仕方ない。
シャンフロでは未経験だが、あの城にぶっ刺さっている腕程の大きさのエネミーとだって戦ったことはある。
塵も積もれば山となる、だがゲームを積んだら積みゲーの山になる

だけだ。

「じゃあ逆にこっちも質問ですけど、レイ氏はどれくらいこのゲームを？」

「へ？　あ、その、大体一年くらいでしょう、か……」

「ほぼ古参勢じゃないっすか、流石は……えーと、最大火力（アタックホルダー）？」

「そんな、あの称号はクランの皆さんに手伝ってもらった結果ですし、私だけで成したものでは……」

謙遜するレイ氏を眺めつつ、やはりゲームにおいて見た目はプレイヤーの人間性の判断にはならないな、と改めて思う。
最初会った時はゲームの為にリアルを投げ捨ててそう、とか失礼な事も思ったものだが話してみれば普通に礼儀の正しい人だ。
個人的には若干素が出かけてはいるものの、声色はロールプレイを遵守して若干低めになっているところが好印象だ。

「あ、またハードラッグ・ライノですね……ヘイトは私が……っ！」

訂正、やっぱおっかないわ。
明らかに時速４０キロは出ているであろう爆走犀を真正面から迎撃してのけたレイ氏の評価を「実はいい人だけどやっぱりどこかネジが外れている人」に変更しつつ、俺は帝蜂双剣で関節をチクチクと攻撃する。
俺も人の事を言える程安全第一なプレイをしているわけではないが、それでも実質車が突っ込んでくるのを冷静に迎撃できるのはそれに慣れるほど戦い続けてきたことに他ならない。
謙虚ではあるが、やはり最大火力は伊達ではないと言うことか……

優しさの仮面の下では今もこちらの動向から俺が秘する情報を引きずり出さんとしているのかもしれないな。
ここは一旦会話の主導権を取って、ボロを出さないようにするべきか？

「に、にしてもやっぱりこうも強敵ばかりくると辟易しますね」

「そうですね……サンラク、さんはその「呪い」は解除されるつもりなのです、か？」

「んー……正直少し悩んでいます」

これは事実だ。
もういい加減慣れたとはいえ、やはり装備があるに越した事はない。デメリット以上にメリットに助けられた事も事実ではあるが、それでもやはり……せめて足の呪いくらいは解除したい。

「せめてズボンくらいは履かせて欲しいんですけどね……バッファーからの支援も受けられないっぽいですし」

「解呪するにしても、聖女イリステラに会う事自体難しい、ですからね……」

「聖女イリステラ？」

まさかプレイヤーの名前ではあるまい、だとすれば「聖女」という称号には心当たりがある。

「このゲーム……と言うよりも、世界観における宗教、「三神教」の聖女……確か、「慈愛の聖女イリステラ」が正式なＮＰＣネーム

だった、と、思います……」

曰く、慈愛の聖女イリステラ……通称「聖女ちゃん」はシャングリラ・フロンティアで唯一「全呪いの解呪が可能」という規格外の性能を持つ特殊なNPCであるらしく、その力はユニークモンスターによる呪いすらも解いてしまうらしい。
だがやはりというか当然というか、高レベルプレイヤーや教会のNPC達によって囲われており、そうやすやすと会える存在ではない。

「彼女に、会うためには……教会のNPCか、その……せ、「聖女ちゃん親衛隊」の方に、頼まないといけない、ので……」

前者ならば結構な額のお布施(マーニ)を、後者ならばそもそもの伝手が必要になる。
成る程、あの時サイガー100が解呪を条件に出したのは自分達ならば聖女イリステラと会う渡りを付けられる、という意味だったわけだ。

「んー……ま、今はそこまで切羽詰まってもないんで後回しでいいですかね」

ああでも、ユニークモンスターとこれからも戦うことを考えたらやはり防具は充実させたい。というかよくよく考えたら呪いを解除しなければパワードスーツを着ることが出来ないではないか、畜生やっぱり切羽詰まっているかもしれない。

「そろそろ日が沈みますね……できればリアルの方で日を跨ぐ前にここを越えたいところだけど……」

「エリアボスの、ところへは……もう少し、時間がかかります、は

い」

やはり新大陸に続く、言うなればこの大陸のゴールであるフィフティシアに続くこのエリアは他のエリアと比べても広く、レイ氏の案内で迷う事はないとはいえ時間がかかる事は避けられない。

「まぁ、流石に明日の朝まで彷徨うこともないでしょうし程々で行きましょうか」

「そう、ですね。程々で行きましょう……程々で……」

サンラクは知らない。

サイガー０が自分の現実（リアル）を知っているということを。

今現在サイガー０の案内で進んでいる道が最短ルートではないということを。

（もう少しだけ……もう少しだけ、長く）

千載一遇のチャンスを、最短で終わらせたくはない。そんなほんの

少しの我儘によって、サンラクとサイガー０は少しだけ遠回りのルートを進んでいた。

サイガー０は知らない。
少しでも長く話していたい、少しでも長く一緒にゲームをしたい。
どんな時も楽しげな笑顔を浮かべる彼のように、いいや彼と一緒に笑いたい。
そんな恋心から芽生えた些細な裏切り、サンラクから要請の半分の不履行。

それこそが二人の……否、もはや二人だけにとどまらないシャングリラ・フロンティア全体の転換点(パラダイムシフト)であったのだと。
今はまだ、この場にいる二人のどちらも知らない。

そして、もう一つ。サンラクも、サイガー０も知らない出来事が静かに、そして確かに進行していた。
「困った時は走る！　それで大体のことは解決するんです！」
「ちょっ、待、ぴゃぁぁぁあ！！」

「諦めるで御座る妹よ、此奴はそういう性質(タチ)故なぁ」

一匹は任務の失敗に慌てふためき、一匹は溜息をつき、そして一人が走り出したこと。

噛み合わない歯車は、時間と状況が噛み合わせる。それはもう少し先のことではあるけれど。

大志の灯火を抱いて　其の二（後書き）

ヒロインちゃんのセリフにやけに読点が多いのはわざと声を低くしているのと、上りきったテンションを無理矢理押さえつけているからです。

・三神教
シャングリラ・フロンティアにおける最大宗教であり、この世界を創造した三柱の神を崇めている。
万象の定めと過去、現在、未来を創り出した「運命神」
天地と万物、あらゆる生命を創り出した「創世神」
生命に過酷を強いる世界に摂理を創り出した「調律神」
これらは三位一体でありながら別々のものとして扱われており、今も世界を見守っていて世界に破滅の危機が訪れた際に神獣と共に現世に降臨すると伝えられている。

「……このエリアのボスは「ユザーパー・ドラゴン」と、言います」

「……あの」

「厄介なのが、「スティール」の魔法を、使ってくることで……魔法攻撃を、奪って撃ち返して……きます」

「成る程、いやそうではなく……」

「それ以外、にも、ドラゴンなので、空を飛んだり、火を吹いたりをするので、ターン制バトルのように、攻撃と防御を、切り替えるのが重要、です……」

「ふむふむ、自分のターンと相手のターンで対応を切り替えるということか、いやそれよりも……」

「……体力が減ってくると、行動パターンが変わり、ます。特に、瀕死の状態になると、プレイヤーから武器を奪いに、くるので……対応、出来ないとその、武器を盗まれます。怯ませると武器を、落とすので……取り返すこと自体は簡単、です」

「うん、ぶっちゃけますけど道に迷ってますよねこれ？」

「……ソンナコトナイデスヨ？」

既に太陽は沈みきり、月光が柔らかに夜闇を照らす中、俺のぶっち

ゃけに対してレイ氏は随分と固い声でそう返した。
いや流石に初挑戦の俺でも迷っていると分かるぞ？　いや確かにレベル９９のモンスターとばかり戦って真っ直ぐ進んでいたとは言いがたいが、それでも流石に数時間以上迷うようなエリアではないだろう。

「…………その、すいません」

「あーいや、別に気にしてないですよ。割と懐も温まったので……」

申し訳なさが溢れ出したようなか細い謝罪の言葉に、俺は気にしていないと首を振る。
実際結構な量のドロップアイテムが手に入ったので、装備やアイテム補充で毎度毎度のことながら侘しくなる懐をチャージすることができた。
それに明日の朝までにフィフティシアに到着できればいいのだ、廃人だってミスくらいはする。
何か俺が思っている以上に思いつめているようなので、何か話題をそらすべきだろう。とはいえここまで結構話してきたので、話題が尽きているのも事実。何か話題の種になりそうなものは……そうだ。

「にしてもやっぱりシャンフロの再現度はすごいですよね、月があんなにも綺麗だ」

古今東西景色に力を入れたゲームは多々あるが、それらと比べてもシャンフロはやはり頭三つは飛び抜けている。
VR、ヴァーチャルリアリティ、仮想現実……満天の星空、クレーターによって作られる月の模様に至るまで限りなく現実に近く、そして現実のそれとは決定的に違った景色を作っている。
吸い込む夜の空気が冷たさを帯びている、というのがゲームとして

どれほど異常なことか。ハイクオリティで片付けるには迫真に過ぎる。

「そ、しょのっ、私は死んでもいいです……！」

「何故！？」

そこまで思いつめるような事ではないだろうに。あれか？　詫び切腹する的な？　見た目は騎士なのに中身は武士なのか？

「いやいや、流石にリスポーンできるとはいえ死に詫びする程の事じゃないですよ。これもまたゲームの楽しみ方ですよ、うん」

「へ……？　あ、そ、そうですね！　すごくリアリティのあるグラフィックですねははは……」

何か勘違いさせるようなことを言っただろうか？　まぁいいや。夜とはいえ、多少見づらいくらいで視覚的に問題はないが……

「レイ氏、やっぱり昼と夜とで出現モンスターは変わったりしますか？」

「変わります、ね。特にマジョリティハウンドの上位種のマジョリティヘルハウンドというモンスターが厄介で……」

「あーいや、そいつに関しては知ってる、うん」

マジョリティハウンドかぁ……あいつらかぁ……というか上位種とかいるのかよ。

「とはいえ、呪いもありますし、注意すべきモンスターは……」
「あら、誰かと思えば最大火力（サイガ－0）さんとサンラクさんじゃない」
突然名指しで呼ばれ、俺とレイ氏は声の主の方へと振り向く。
「……Ａｎｉｍａｌｉａ（アニマリア）、さん？」
「あら、トッププレイヤーに名前を覚えてもらえるなんて光栄ね」
だけではない。アニマリア氏の後ろにはゾロゾロと十数人はプレイヤーが控えており、そして其の全員がもれなくフル装備を纏っている。どうやらピクニックという様子ではなさそうだ。
「一応聞くけれど、貴方達……どうしてここにいるのかしら？」
「……普通に攻略ですが？」
「そう……だったらダブルブッキングというわけではないようね」
二重予約（ダブルブッキング）？　俺はレイ氏にここで何かイベントがあるのかと視線を向けるが、レイ氏は知らないと首を横に振る。
「アーサー・ペンシルゴンといい、あのネカマといい……貴方達は何をしでかすのか本当に分からないからもしかしたら、と思ったけど杞憂だったみたいね。だったら私達の邪魔をしないでもらえるかしら？　貴方は止めたいかも知れないけれど、私達全員を相手にする事がどれだけ無謀かは流石の貴方でも分かるでしょう？」
「あー待って、待て、待たれよ。なんの話なんだそれは、ラビッツ

入国条件ならまだ決まってないはずだけど？」

何故向こうはいきなりこちらに対して敵対的なんだ。確かに「できる事ならラビッツに関してはなぁなぁで誤魔化せないかなぁ」とは思っているが実行はまだしていない、敵意を向けられる理由はないはずだ。

だが現にアニマリアを筆頭としたＳＦ－Ｚｏｏの面々は武器を構え、戦闘態勢に入っている。まさかいつまでも返事が来ないからＰＫクランに鞍替えしたのか？　と一瞬最悪の展開を思い浮かべるが、どうにも毛色がおかしい。

「ええ、もういいの。あの時私達は貴方にラビッツに恒常的に訪れる方法を乞うたけれど……もういいの。悪いけどアレ、破棄という事でいいかしら？」

「……話が見えない、説明を求めることは？」

「貴方と……そっちのサイガー０さんがこの場でしゃしゃり出ないと約束してくれるなら」

ちらとレイ氏を横の目に見やり、一つ頷く。どうやらそれで伝わってくれたようで、レイ氏は大剣にかけた手を下ろす。

「これでいいだろう、説明を求める」

「ふふふ……私達はね、貴方が必死に隠しているユニークシナリオの条件を知ったのよ」

「何？」

まさか「致命兎叙事詩（エピック・オヴォーパルバニー）」の存在が漏れた？　いや、流石にそれはあり得ないと信じたい。
目下最大の未処理の爆弾たる「アキツアカネ」経由からバレたのだとしても、漏れた情報はＥＸではなくその前段階である「兎の国からの招待」だろう。

「ちなみにソースは？」

「貴方のところのリーダーさんの借金を肩代わりしたのよ」

「ちょっとタイム」

両手で「Ｔ（タイム）」のゼスチャーをしつつ、俺はインベントリの中を確認する。そして今現在の装備の充実を確認し、おおよそのチャートを組み上げ、確定で奴を滅殺する確信を得た時点でタイム解除。

「あ、続きどうぞ」

「……今、何を？」

「ああ気にしないで、あの外道野郎（クソヤロウ）を血祭りに上げる算段をつけてただけだから」

とりあえずあのお喋りな下顎をアッパーでぶっ飛ばしてから蠍のお家にお邪魔させる。そう固く決心する俺に若干引いた様子だったアニマリア氏だったが、話自体は続けてくれるようだ。

「そ、そう……コホン、つまりラビッツに行くためには「夜襲のリュカオーンに合計百回以上のクリティカルを当てる」それがラビッツへ恒常的に訪れる事ができるユニークシナリオの発生条件だとい

うことはすでに掴んでいる。だから貴方に頼る必要はもうないの」
アニマリア氏はなおも続ける。
この場にいるクランメンバーは皆、モンスターの動きを止めるデバッファーの精鋭である、と。
夜襲のリュカオーンの動きを止め、クリティカル攻撃を当て続けることでユニークシナリオの条件を満たす、と。
そしてことレイド戦に於いてＳＦ－Ｚｏｏは黒狼すらも凌駕する、我々が本気を出せばリュカオーンをもふる事すら造作もない、と。

それをどこか客観的な感慨を抱きながら聞きつつ、俺はペンシルゴン締め上げ計画を撤回する。
そして得意げに演説をするアニマリア氏を見てＳＦ－Ｚｏｏが突然ドタキャンしてきたこと、何故か自信満々に不完全なフラグ条件を語っていること、それら全てがペンシルゴンから俺へと蹴り飛ばされてきたＳＦ－Ｚｏｏというボールによるキラーパスであることを理解した。

（あいつ本当にやり口がエグいな……）

流石に俺と鉢合わせたのは偶然だろうが、ＳＦ－Ｚｏｏが俺との契約を破棄するところまでは奴の手のひらの上だろうな。なんてやつだ、より多くリソースを搾り取るためにＳＦ－Ｚｏｏそのものを躍らせやがったよあの外道モデル。

（リュカオーンにクリティカルを当てる事だけがフラグの条件じゃない。嘘はついてないが穴だらけの情報でぼったくったのかよ……）
少なくとも確定ではないがフラグ条件は「クリティカル回数」以外に「特定武器」「特定レベル」「特定人数」は絶対に絡んでいる。

いかに相手がユニークモンスターであろうと、大人数で袋叩きにする行動をヴォーパル魂と認められることはないだろう。
そして向こう側から契約を切った以上、再度契約を結ぶ為にこちらが要求できるメリットは一体どれほどか……しかもここで活きてくるのは「俺自身、ペンシルゴンに対して不確定な事しか話していない」ということだ。
なるほど確かにペンシルゴンは虫食いだらけの地図をさも完全な状態であるかのようにＳＦ－Ｚｏｏへと売り渡した。
だがそれは故意に虫が食ったものではなく、そもそもの入手(ソース)からして虫食い地図なのだ。

(仮にそれを詰られても、「私はそれしか情報を持っていない」としらばっくれれば俺とオイカッツォが黙っている限り証明する方法はない)

本当はヴォーパル武器が必要なことや、恐らくレベルや人数が関係することもペンシルゴンは承知しているだろうに、それを証明することができるのは奴の味方である俺達しかいないという悪意満載の予防線。どうあがいてもＳＦ－Ｚｏｏはカモられる、今この瞬間事情を把握した俺ですらそう確信できる情報でできた蜘蛛の巣……やっぱりあいつは全てのプレイヤーのためにももっと派手なペナルティを負うべきではなかろうか。
なんというか、歩く爆弾に起爆スイッチを手渡された気分だ……もしくは操り人形に糸を切るハサミを手渡された気分か。
眼前の得意げな様子のアニマリア氏を見ていると、ネタバラシしてやりたい気持ちが無いわけでもないが……ある理由からこいつらをもう少し泳がせておく必要がある。

「最後に一つ……なんでここに来た？」

「ふふ……やっぱり気づいたようね」

夜闇に風が吹く。冷たさを帯びた電脳の風、一瞬の揺らぎが肌を震わせ一瞬この場にいるプレイヤー達以外の全ての音が途切れたかのように錯覚する。

「これは私達（ＳＦ－Ｚｏｏ）だけが知るアドバンテージ……私達はね、夜襲のリュカオーンが何処に現れるかを把握することに成功したのよ」

夜闇に風が吹く。だがそれは気候による大気の流れではない、大質量の顕現によって大気が押し退けられたことによる流れだ。

「だってここ、エリアの終点から外れたエリアの端っこよ？　そんな場所に貴方達がいたんだもの、まさか私達以外にリュカオーンのパターンを見抜いたのかと勘ぐっても仕方がないでしょう」

夜闇に風が……待て、終点から離れたエリアの端っこ？　もしかしてレイ氏、方向音痴？

俺が半目でレイ氏を見ると、偉丈夫のアバターが非常に申し訳なさそうに顔を横に逸らした。

「まさかエリアだけじゃなく座標まで割り出すとはな、ＳＦ－Ｚｏｏってクランの評価を上げておくよ……」

「それはどうも、貴方達はそこで私達がユニークモンスターを討伐するのを見ていなさい」

夜闇に風が吹く。それは圧であり、吐息であり、それは狼の形に圧縮された影の揺らめきそのものでもあった。

静かに唸り、己がマーキングした場所に屯（たむろ）する人間を確認し……

ユニークモンスター「夜襲のリュカオーン」は堂々たる咆哮を放った。

大志の灯火を抱いて　其の三（後書き）

夜襲のリュカオーンを逃す事は、ヴォーパルバニーをもふることに懸けてもできなかった。
万全の強襲をかけるＳＦ－Ｚｏｏ。
サンラク達が闇の中に恐怖を見た時、ペンシルゴンの企みがアニマリアを包む。
次回「アニマリア、散る」

大志の灯火を抱いて　其の四（前書き）

ポテトの使徒として鶏肉を駆逐しないといけないし擬人化した刀と空飛ばないといけないし皇帝主催のお祭りで花びら集めないといけないし……

大志の灯火を抱いて　其の四

夜よりなお黒く、暗く、深く。
こいつのグラフィックを担当した運営スタッフは楽な仕事だっただろう、問答無用で全身真っ黒にすれば良いのだから。

「リュカオーン……！」

嗚呼見間違いようもない、金晶独蠍ですら比べ物にならないデータリソースの塊。０と１にポリゴンを被せただけの所詮はＭｏｂに過ぎない筈の存在であるというのに、さながら断頭台に首を掛けたような死の気配……いや、死をもたらす気配をこれ以上なく全身に満ち溢れさせている。
あの日、見苦しく足掻いた末に足と胴体を食い千切られたあの時よりもずっと強くなった今でさえ、どうしようもなく勝利が遠く感じる。奴から勝ちをもぎ取るビジョンがドット絵以上に曖昧にぼやける。

「カロロロロロロ……」

夜闇の影より顕現したリュカオーンは、月光を浴びてなお漆黒の体躯を動かすことなく、その黄金の目で眼下を睥睨する。
静かに、されど騒々しい程の存在感を放ちながらも巡る黄金の視線はＳＦ－Ｚｏｏの面々を流し見、レイ氏を見つめ、そして最後に俺を見据える。
やはりただの戦う事しか考慮されていないＡＩではない、ＮＰＣと同等の高度な判断力を兼ね備えている。

「全員行動開始！　作戦は対ドラゴン！」

思わず武器を構えそうになる俺とリュカオーンの睨めっこ、それを妨げたのはアニマリアの鋭い号令だった。

自信満々に、それもあらかじめ準備をしてここにやって来ただけあってＳＦ－Ｚｏｏのクランメンバー達の動きに混乱はない。

ちらとアニマリアがこちらを見たのは手出し無用という釘刺しだろう。

「サンラクさん」

「一旦距離を離そう、リュカオーンにヘイトを向けられないくらいには」

まだ戦闘が始まったわけではない。戦闘開始前のカウントダウン、スタートを合図するブルーシグナルが点灯する直前の数秒。

俺はレイ氏と共に戦端となるであろうリュカオーンとＳＦ－Ｚｏｏから距離を離す。

「……いいん、ですか？」

「レイ氏、リュカオーンと戦った経験は？」

「三度程……その、瞬殺、だったんですけど」

俺より経験豊富じゃないか、パイセン呼びしたほうがいいかな？

まぁいいや。

「俺は一回しかないけどさ……十中八九、あの手のモンスターがハメ殺されるとは思いづらい。下手に首を突っ込んでＳＦ－Ｚｏｏに

益々付きまとわれるのも面倒だから、ここは様子見で」

たとえそれが本番ではないとしても、リュカオーンがそう容易く倒れるとも思えない。それに確かめたい事がある、どうせ今や赤の他人なのだから遠慮なく毒味役になってもらおう。

ＳＦ－Ｚｏｏ。モンスターを行動不能にして撮影、モフる、その他諸々を行う他のトップクランとは毛先の違う面々は、メンバーの内訳もまた、あまり見かけないものであった。

「タンク五人に……まさかデバッファー十人？」

それもただのタンクではない、全身重甲冑にタワーシールドを両手に一つずつ装備した、攻撃放棄の真の意味で純粋な壁役（タンク）と言うべきか。

それが五人、砦のように一列横隊でデバッファー達を守るように並んでいるのだ。

「あれが、ＳＦ－Ｚｏｏの基本戦術、です。タンクがひたすらヘイトを、集めて……デバフで動きを、止める」

「あの鉄塊ダルマじゃ置物にしか……成る程、スキルのアシストで無理矢理動くのか」

五人いればヘイトのリレーができる。一人、もしくは二人掛かりで敵を引きつけていれば残る三人は立て直しを図ることができる。

そしてプレイヤーではないＭｏｂ達はヘイトを集めるタンクを無視

する事ができない。そしてもたついていれば、後ろからデバフの嵐が飛んでくるわけだ……清々しいまでに対モンスターに特化している、成る程確かに下手なボスじゃなす術なく被写体デビューだろう。

「とはいえ、だ」

「？」

多分それはある程度通じる相手にしか効果を成さないだろう。いかにヘイト管理が完璧であろうと、ああも機動力が死にきっていては……

「凄いな、重装甲がサッカーボールみたいに」

夜襲のリュカオーン、奴はともすればプレイヤー以上に狡猾だ。ボウリングよろしく一括撃破を避けるためにタンクが分散しているのは愚策ではないが、リュカオーン相手には悪手だった。
リュカオーンの姿が早送りした氷のように一瞬で溶け、タンクの一人の背後からまるでそこに最初からいたように現れる。
実際に戦った経験と第三者の視点だからこそ分かるリュカオーンの影奇襲、如何に防御に特化していても対応できなければサンドバッグでしかない。
背後に回り込まれ、その場で反転することもできないままタンクの一人が雑に振り払われた前足パンチによって転がっていく。
とはいえ機動力を削ってまで防御に全てを注ぎ込んでいる以上、流石にワンパン爆散なんてことはないようだ。
それにリカバリが上手い、ほぼアイコンタクトだけで残った四人の内一人がぶっ飛ばされた一人の元へ、残る三人が一塊になってリュカオーンのヘイトを集めている。
攻撃面での攻撃力がほぼないことに目を瞑れば理想的タンクの立ち

回りだ、そしてタンク達の足止め性能は後ろに控えるデバッファー達と恐ろしい程に噛み合っている。

「第一……撃て！」

「「「「アトラスバインド！」」」」

第一陣、後衛十人の内四人が同一の魔法を発動する。起動したシステムは彼らが指定したリュカオーンの四肢を捕らえる。
地面から吹き出したかのように見えるエフェクトがリュカオーンの四肢へと絡みつき、動きを封じるがリュカオーンの動きを見るにそう長々と縛り付けることは出来なさそうだ。

「畳み掛ける！　第二、補強！」

だがそれで終わるようなＳＦ－Ｚｏｏではないようで、続いて第二陣の四人が各々の魔術呪術を発動する。
それは鎖であり、萎びた腕であり、蔦であり、石化であり……アトラスバインドで縛られたリュカオーンの四肢への拘束をさらに補強する。
あの手の魔法って重複するのか、いや重複する魔法を選んでいると考えるべきか。そしてここで満を辞してのアニマリアだ。

「リーダー！」

「これで完全捕縛よ、【鷲掴む冥府の腕(ハンズ・オブ・タルタロス)・】！」

明らかに他のメンバーと比べて異彩を放つ武器、おそらくはユニークウェポンなのだろう杖を構えたアニマリアともう一人が術式を起動した瞬間、リュカオーンの左右の足元が物理的にあり得ないテク

スチャバグのような形状に歪む。
そしてその歪みから巨大な「腕」が突如として飛び出し、リュカオーンの胴体をがっしりと掴んだのだ。

「え、なにあれ」

「……あの人が持つ、ユニークウェポン「冥府の鍵杖」の固有呪術、です。確か、あらゆる生物に対して、三十秒間の行動不能状態を付与する、と……」

「生物、ねぇ……」

「それよりも、このままだと、ＳＦ－Ｚｏｏがリュカオーンを……」

実のところを言うと、それに関してはあまり心配していない。
自分なら倒せると思い上がっているわけではないが、少なくともあの倒し方では無理だと言うことは分かる。
思った以上にあっさりと拘束されたリュカオーンではあるが、あのふてぶてしい面構えは拘束された奴の表情ではない。

「い、いいんですか……？　その、今から、でも……」

「待った……来る」

「え？」

そうだ、そうだよ思い出した。あの時もそうだった、ようやくアレの条件が分かった。
ほんの少しのきっかけで、連鎖するように俺の中で情報が組み上げられていく。

確定情報、夜襲のリュカオーンは影と一体化し、影から分身を作り出す。

推測、夜襲のリュカオーンは厳密には影ではなく夜闇と一体化することができる。

確定情報、夜闇とは地面の影ではなく、空間の「暗さ」そのものである。

確定情報、あの攻撃の際リュカオーンは分身を出していなかった。

——仮説。

あの攻撃は「不可視の噛み付き」ではなく。

「不可視状態の分身による噛み付き」だとすれば。

そしてその発動条件とは月光という光源すらも消え、星光という照らすには光量の足りない暗闇がトリガーだとすれば。

夜闇と完全に同化した分身による不意打ちだとすれば……！

「戦闘中に天気の確認をしろってか……！」

夜襲のリュカオーン。その名を俺は今までずっと勘違いしていた。

夜に襲ってくるから「夜襲」なのではない、夜が襲ってくるから「夜襲」なのだ。

俺がその答えへとたどり着いたのと同時に、アニマリアに暗闇そのものが襲いかかった。

大志の灯火を抱いて　其の四（後書き）

【朗報】アニマリア氏、生き残る【実質死刑宣告】

【悲報】アニマリア氏、次話にて散る【ひとくちおやつ】

・分身夜襲

月光が隠れている時のみ発動する。生成した分身を完全に夜闇に溶け込ませることで不可視の攻撃を放つ。

ゲームシステム的にプレイヤーには「薄暗い」ように見えるが、実際は真っ暗闇であるため、プレイヤーからすれば完全に透明化したように見える即死級攻撃というパーフェクト初見殺し、というか分かっていても避けるのは困難。

実は割と対処は簡単だったりする。

大志の灯火を抱いて　其の五（前書き）

ちょっとアニマリア氏のデス描写をまるっと書き直していて遅れました、すいません

血が出ちゃダメでしょ（ゲームだということを忘れたガチ表現）

アニマリアが最初思ったのは、拍子抜けするほどのあっけなさだった。

（随分と、あっけない……ユニークモンスターといえど所詮はこの程度なのかしら？）

なるほど確かにＳＦ－Ｚｏｏが用いる捕獲戦術の中でも最高峰、十人規模で行う拘束デバフの重ね掛けはファンタジーオブファンタジーな動物であるドラゴンすら最低でも一分は完全拘束が可能だ。
例えばこのエリアのボスであるユザーパー・ドラゴンであれば間違いなくハメ殺すことが可能である、高レベルプレイヤーの連携による拘束であれば、如何に強力なユニークモンスターと言えども所詮はゲームのＭｏｂ、全員がかりで拘束すればこうもあっけなくその動きを縛ることも出来る……きっとそうなのだろう。

「さて、リュカオーンちゃんは一体どんな毛並みなのかしら？」

頭をよぎる不安を押しのけ、アニマリアは好奇心の抑えを解いてリュカオーンの元へと向かう。
アニマリアの持つ「冥府の鍵杖」、そしてそれを用いた場合のみ使うことが可能なユニーク呪術【鷲掴む冥府の腕（ハンズ・オブ・タルタロス）】は如何なる相手であろうと生物に対して一分間の完全拘束を可能とする。
代償として五分間自身のＨＰが回復せず、同時に五分かけてＨＰが１になるようスリップダメージを受け続ける、というデメリットもあるにはある。
だが重要であるのは己の好奇心のままに動物に触ることができる一

分のみだ、そのあとの四分間のどこで死のうがアニマリアにとっては瑣末な問題だ。

厳島(いつくしま)　真里亜(まりあ)は動物に触れることができない。

生まれついての動物好きな趣好を嘲笑うかのような重度の動物アレルギー、そのせいで真里亜はたった一匹のハムスターと同じ部屋にいるだけで酷いアレルギー症状を発症してしまう。

幼少の頃から無理矢理動物と触れ合おうとして何度も病院に行く羽目になり、幾度となく涙を飲んできた真里亜にとって、限りなく現実に近いシャングリラ・フロンティアはまさに楽園(シャングリラ)と呼ぶべきものだった。

雑草を引き抜けば根に土が付着する、拾い上げる石はその全てが異なる形をしており、水面に投げ込めば毎回異なる波紋と飛沫を作る。動物(モンスター)の毛に潜む蚤に至るまで描写されたシャングリラ・フロンティアでは当然、その毛並みも動作も現実となんら変わりない。

最終的にはモンスターを討伐することは避けられないが、所詮はゲームのデータと割り切るしかなく、であるからこそ厳島(Animalia)　真里亜はＳＦ－Ｚｏｏを立ち上げたのだ。

（巨大な狼……毛並みはゴワゴワしてるのかしら、それとも予想外にサラサラ？）

【鷲掴む冥府の腕(ハンズ・オブ・タルタロス)】発動中は如何なる生物も動くことは出来ない。そう、如何なる動作でもだ。だからこそアニマリアはリュカオーンが動くことはあり得ないと確信していたし、ＳＦ－Ｚｏｏのクランメンバーもまた、好き勝手にスクリーンショットなどを撮影している。

（ふふ、一番最初に触れることができるのはリーダー特権ね）

無論当初の目的も忘れてはいない。思う存分に触った後には全員がかりで攻撃を加えて条件を満たし、ラビッツへと再び向かうのだ。
あの時は異邦人故に追放処分という残念な結果となってしまったが、今度は違う。遠目に自身らを見るあのプレイヤーが頻繁にラビッツへと向かっていることは突き止めている。
異邦人としてではなく、住人として、思う存分にヴォーパルバニーを愛でるのだ。

（思う存分に触ったらクリティカルを百回……………え？）

目が合った、アニマリアはそう確信した。
リュカオーンは一切動いていない、そう文字通りピクリとも動いていない。
まるでプレイヤーが操作していない空っぽのアバターのように、命のない人形のように。その黄金の眼はただどこでもない虚空を見つめており、そこに生物らしさのカケラも感じることはなかった。
無論その眼はアニマリアなど見てはいない、であれば誰がアニマリアを見ているのか。

（夜が、私を見ている……？）

そこには何もない。システム的に可視化された薄暗闇と、古城骸のフィールドが広がっているだけ。
だが確かにアニマリアはそこに視線を見た。ここにはいない、だがここにいる。そしてその視線は間違いなくアニマリアを見つめている。

「…………まさか」

黒く、暗く、深黒(しんこく)の闇夜に見えざる眼差し。その不可視の視線から発せられる強烈な意思は、アニマリアを……「獲物」を一点に見据えている。

アニマリアはその瞬間に気付く。

夜襲のリュカオーンとは、全エリアにランダムで現れる影より出でし狼の正体とは。

違う、順番が逆だ。

──狼が作った影とは、夜襲のリュカオーン……！

答えにたどり着きかけた次の瞬間、アニマリアは真横からの凄まじい衝撃と共に明らかに物理法則を無視した動きで宙へと持ち上げられた。

シャングリラ・フロンティアにおいてダメージは痺れや感覚の鈍さで表現される。故に、一切の感覚が消失する程のダメージとは一体如何なるものか。

「ひっ……！」

傍目より見れば質の低いCGのような不自然な動き、本人からすれば何かに「噛まれて」「咥え上げられた」現状、アニマリアはそこにいてそこにいない「それ」を実体的に知覚する。

（噛まれ……力、強くなって……食べられる！？）

動物とは可愛らしく、雄々しく、人と違うからこそ愛おしい。
だから違う、知らない、これはそうじゃない。
動物とは自分が愛でて向こうが愛でられるもので、これでは、これでは。

「やだ、助け……」

恐らく一般的な日本人であれば一生味わうことのない捕食者に食われる被捕食者の経験。
捕食モーションという全Ｍｏｂの中でも中々見かけない屈指の「エグさ」を誇る攻撃によって、アニマリアのアバターは一撃で粉砕された。

「うわぁ……」

年齢対象と表現的な問題で早い段階からポリゴン化していたものの、確かにアニマリアが逆海老反りにへし折れる瞬間を見てしまった俺は背筋に走った悪寒を振り払う。
シャンフロが成年対象じゃなくてよかったなアニマリア氏、でなけりゃ今頃ミンチだったぜ。

そこからはもう酷かった。
なにせデバフによる拘束が意味をなしていない、実体を捉えても分身が好き勝手動くのだから。さらに言えば憎らしいほどジャストタイミングで大規模な雲が月を隠し続けているのだからもう見ていられない。
まず最初にタンクが狙われた。なるほど確かに高いＶＩＴに防御系スキルを積んだ彼らは優れたタンクだ。だが絶無の機動力に不可視の不意打ちは致命的に過ぎた。
もはやそれは戦いですらない、人間をサッカーボールに見立ててビリヤードしているとしか言いようがない。
転がるタンク、吹っ飛ばされたプレイヤーと激突して二次災害が撒き散らされ、連携する暇すら与えられない。
それでも四人が生存しているあたり、本当に優秀なタンク組なんだが……

「そこで全員回復に回ったのは最悪手だよなぁ」

恐らくは不慮の事故だ、「決定的崩壊を防ぐ為に最優先で自身の回復を行う」というリカバリをタンク全員が同時に行ってしまった。
だからこそ、ヘイト集めが途切れたことで不可視の夜による猛威はタンクをすり抜け後衛組に襲いかかった。

「うわすっごい、あれが噂の人間ボウリング……」

ある者は木っ端のように吹き飛び、ある者は受け身すら取れずに地面を転がる。
シンプルオブシンプル、大質量のタックルの直撃は高レベルであっても等しくＨＰパラメータの壊滅を齎す。
リーダーがポリゴン爆散したという事実以上に、撮影タイムに入っていたというのが原因だろう。タンク達であれば盾を装備して構えればいいが、魔法職はそれに加えて魔法の発動を挟まなければただの案山子であり、タンクが復帰した頃には最早戦線は壊滅状態であった。

「これはひどい」

俺はそれをレイ氏と共に岩陰から眺めながら思わず呟く。
守ったところでどうしようもないタンク達は、装備品を全て取り外して裸状態になって全員不可視の……多分前脚攻撃で消し飛んで行った。
装備品の消耗を避ける為の自殺か……最早生き残ってるのは三人くらいだし賢明な判断だ。護るべき対象がいないのだからどうしようもない、壁タンクはどう足掻いても装備を酷使する。勝ち目のない戦いでリソースを削り続けるのは愚策でしかない。
ううむ、やはりトップクランだけあって地力は高いんだよなぁ。リュカオーン相手に舐めプかましたのが敗因……いや、あのクソ初見殺しに対応できる方が頭おかしいか。
ありがとうアニマリア、ありがとうＳＦ－－Ｚｏｏ。副リーダーと思しき男性プレイヤーが此方へと助けを求めるように視線を向けてくるが、ちょっと何言ってるか分からないです。ほら、俺って貴方々に一方的に縁切りされて実質赤の他人なんで。

「プレイ映像提供感謝、潔く死んでくれ」

覆面で向こうからは見えないだろうが、ニッコリ笑顔でサムズアップ。立てた親指をひっくり返し真下へと振り下ろす。

男性プレイヤーが「ですよねー」と「そんなぁ」が半々で混ざったような表情を見せた瞬間、彼の身体は拘束が溶けた実体リュカオーンによって踏み潰されてポリゴンと消えた。

……さぁ、どうしよう。

大志の灯火を抱いて　其の五（後書き）

「実体」であることと「本体」であることは別問題

実は「噛みつき攻撃」や「破壊属性を帯びた食い千切り攻撃」を使うモンスターは多いが「ガチ捕食」するモンスターは少なかったりします。描写的にどう取り繕ってもグロさが出てしまうので。リュカオーンにそれが実装されているのはどうしても譲らなかった人がいるからです。

夜襲のリュカオーン、見ていて分かったがやはりあれを倒すのは無理だ。
まず単純に地力が隔絶しきっている。基礎ステータスで劣る上であの畜生分身だ、持ちこたえることはできるが倒すとなるとつらいものがある。
次に奴がユニークモンスターであるということ、仮に倒したとしたならその場合……

「……どうか、しました、か？」

この人(レイ氏)にもユニークシナリオＥＸのフラグが立つ可能性が極めて高い。
別にこの人単体ならいい、だがまず間違いなくクラン「黒狼」が出張ってくる。態々クラン名にまでリュカオーンの名を使うあたり筋金入りのオオカミスキー共だ、所詮は木っ端クランである「旅狼(ヴォルフガング)」の立ち入る隙間など作ってはくれないだろう。
ＳＦ－Ｚｏｏのタンク達を見て確信したが、やはりレベルキャップに到達したプレイヤーは強い。
俺のようにプレイヤースキルに秀でているだけではなく、スキルや装備でプレイヤースキルを補強する術を心得ている。
それはＳＦ－Ｚｏｏのような尖ったパーティ構成ではなく、もしも純粋な「攻略編成」であったならならばもしかしたら、と思わせるだけの説得力がある。
(黒狼によるリュカオーンの独占、それがもっとも回避すべき最悪のルートだ)

確かに旅狼は、俺個人としても切り札を何枚か握っている。だがそれ一枚あってもババ抜きのドベにしかなれない、エースからキングまで揃えたロイヤルストレートフラッシュを抱える黒狼が本気を出せばジョーカー一枚程度いくらでも封殺できる。
ならばどうすればいい、ここからどう動けばベターな展開に持っていける？

（一番楽な展開は…………俺が足を引っ張って諸共に死ぬことなんだが、流石に気がひけるよなぁ）

まず確実にギスる。露骨に手を抜くわけだからな、俺なら笑顔で「フレに呼ばれたので抜けますね＾＾」する。
これはプレイヤーキルとはまた違った嫌われるプレイヤーの特徴だが、例えば「ドラゴンを討伐する」という目的があったとして、二人のプレイヤーがペアで挑んだとする。
一方は何度もドラゴンを討伐しており、ぶっちゃけ必死になってまで戦う必要がなく。
もう一方は既に何度もドラゴン討伐に失敗しており、一度もクリアできていないプレイヤーであるとして。
同じ目的を持っていてもこの二人のモチベーションは天と地ほどの差がある、そしてその差が時折酷いプレイヤー間トラブルになるのだ。そしてそれを故意にやることがいかに失礼であるかは言うまでもない。

本音を言えばリュカオーンに挑みたい、勝てる勝てないではなく、とりあえずあの鼻持ちならない顔に一発は攻撃を叩き込みたい。
だが万が一にでもユニークシナリオEXのシナリオフラグが立ってしまえば、最終的にリュカオーンを倒す事は極めて困難になる。
いっそ闇討ちをしてしまおうか、レイ氏をリュカオーンに殺させる

形であれば俺にペナルティは付かな……何考えてるんだか。

やはりままならない、ＭＭＯが俺一人の思い通りにならないことくらい分かってはいるが、だからこそ我を通す為に四苦八苦するのだ。

（リュカオーン……ユニークシナリオＥＸ……倒す……倒せない……）

目下の状況だけではない、ラビッツのこともある、明日の朝までに行かねばならない予定もあって、どれをどれしてどうすることでどうなって…………ぬぁぁぁぁああああああ！！！

「サンラク、さん」

と、隣にいるレイ氏が俺へと話しかけてくる。

「――――――。」

その言葉を聞いた瞬間……ぷつっ、と。

俺の頭の中で、小さな俺（サンラク）が下衆な笑い声を上げながら何か大切な糸を切ったような。

夜襲のリュカオーン、戦うのは今回で四度目になるか。サイガー０はＳＦ－Ｚｏｏを文字通り蹴散らし勝者としてそこに在る黒い狼を見る。
一度目は駆け出しの頃に、為すすべもなく一撃で。
二度目はそれなりに装備が整った頃に、野良で組んだプレイヤー達ごとボウリングのピンにされた。
そして三度目は「黒狼」のメンバーと一緒に、その頃はまだ全員レベル８０台だったとはいえ一分で壊滅状態にまで陥り、そのまま地面のシミにされた。姉など先程のアニマリアと同じく咀嚼された。
そして四度目が今目の前にいる、それも彼と共にいる今このタイミングで。

（どうしましょうか……）

率直に言ってしまえば、サイガー０は姉や他のメンバー程リュカオーンというモンスターに執着していない。
確かに己の手で倒したい、と思わないわけでもない。だがよりにもよって今である。
正直に白状しよう、今この瞬間サイガー０はリュカオーンに負けてもいいとすら思っている。
ここでリュカオーンに敗北すればサンラクは再びこのエリアを最初から攻略し直さなければならない。そして自分はそれを手伝うという名目で一緒にいる時間を延ばすことができる。

それはサイガー０からすれば歓迎すべきことである、だが同時にサンラクにとっては歓迎すべきことではない。
いっそのこと、わざと手を抜いてしまおうか。相手はＳＦ－Ｚｏｏすら一蹴して見せたユニークモンスター、たった二人で挑んであっけなくリスポーンすることはなんらおかしいことではない。

（……なんて、浅ましい）

そこまで考えて、サイガー０は自分が何をしようとしていたのかを自覚し、自らを叱咤する。自ら手を抜き、その結果を良しとする。自分の都合のために他者に迷惑をかけるなどと。
リュカオーンには勝てない、どうせならば……そんな心が迷いを生み出したのだとサイガー０は己を恥じる。
ちらと横を見れば、鳥の覆面をつけたサンラクの姿がある。彼もまた何かを悩んでいるように見えるが、その目だけはまっすぐに迷うことなくリュカオーンを見つめていた。
彼が何を考えているのかを推し量ることはできない、だが一つだけ分かることがある。

（きっと、陽務君は今この瞬間を楽しんでいない）

目の前に宝石があるのに、それを掴む決心がつかない。余計なしがらみが手を動かさせてくれない。
全てはサイガー０の想像であり、勘であったのだがそれらは偶然にも恐ろしい程に正解であった。
だからこそ、サイガー０がサンラクへと贈る言葉は一つだけだ。
ゲームソフトの入った袋を持って、いつだって楽しげに帰っていく姿に惹かれたからこそ。

「サンラク、さん…………やりましょう。リュカオーンに勝てる勝てないじゃなくて、今この瞬間の偶然を、このゲームを全力で楽しみましょう」

ああ良かった、とサイガー0は思う。

サンラクから無果落耀（むからくよう）の古城骸（こじょうがい）を手伝って欲しいと言われた時、踊り出さんばかりに舞い上がったサイガー0は、過剰とも言える程の準備を整えてきた。

だからこそ、実質的に支援を受けられないサイガー0単体であっても「本気」を出せる。

リュカオーンを相手に「呪い（マーキング）」を二つも受ける程の善戦をしたサンラクの足手まといになることはない。

覆面故に顔は見えない、だが唯一見えるその目に炎が宿ったサンラクを見て、サイガー0は同じく兜の下に隠された顔に笑みを浮かべるのだった。

「…………やりましょう。リュカオーンに勝てる勝てないじゃな

くて、今この瞬間の偶然を、このゲームを全力で楽しみましょう」
その言葉は、俺のこれまでの悩みや思考を全てシャットアウトした上で叩き潰す程の衝撃を秘めていた。
まさか見抜いていたとでも言うのか、その言葉は俺の葛藤に対してクリティカル過ぎる力を持っており、俺は驚愕に目を見開いてレイ氏を見つめる。
ただ静かにこちらを見つめ返すレイ氏、その兜の下の表情を伺うことはできないがまるでゲームのアバターではなく、本来の俺が見透かされているような気分だ。

「……ふ、ふふふふ……くくく、はははははは………！」

自然と笑みが溢れる。というか溢れすぎてちょっと困るくらい笑い声が勝手に出てくる。
ああそうだ、そうだとも。何をごちゃごちゃ考えていたんだ俺は、ペンシルゴンに引っ張られて迷走していたか。
ユニークを隠すだとか、保持するだとか……実にくだらない、実にくだらないぞ。名前忘れたけどペンシルゴン弟の事を言えないじゃないか。

「ああそうだとも、いまこの瞬間！　今が楽しければ先のことなんざどうでもいい！」

先の事を考えるのはいい事だ、だがことゲームにおいてその為に今がつまらなくなる事を俺は許容しない。
アイテム集め作業は避けられぬ苦行故妥協するしかないが……今は違う。
レイ氏もリュカオーンのフラグを立てるかもしれない？　知るか！
黒狼がリュカオーンを独占して倒せないかもしれない？　ペンシル

ゴンに相談だ！
いいぞ何だか色々と吹っ切れた、夜だけど今とても晴れやかな気分だ。レイ氏同伴だとか関係ない、アキツアカネとか未来の俺がきっとなんとかしてくれる、そんなことよりも今やるべきは目の前のリュカオーンだろう！
「レイ氏、やろう。勝とうが負けようが、折角のチャンスを棒に振るほうが馬鹿らしい」
「…………はい！」
覚悟しろリュカオーン、あの時とは一味も二味も違うレベル９９Ｅｘｔｅｎｄの力を見せてやる。

大志の灯火を抱いて　其の六（後書き）

リュカオーン「あ、終わった？」

互いが互いに対して高すぎる評価を下しているのでまさか双方ともに「ナメプしてわざと負けようかな」と考えていたとは思いもよらないのです

ここでユニークモンスターに無謀にも挑みかかったシステム的にはフレンド同士な臨時で結成されたパーティのイカれたメンバーを紹介するぜ！！

レベルマックスになってティッシュ装甲からボンドで補強された段ボール装甲くらいにはランクアップした俺！

俺何人分の装甲かも分からない問答無用の最強プレイヤーなレイ氏！

以上だ！

「相変わらずエグい動きしやがる……っ！」

ステップで身体が浮いた瞬間を狙ったのかはたまた偶然か、普通の回避では避けきれないタイミングで振られた前脚による攻撃を、切り札とするには少々心許ない回数しか使えないインベントリアによる転移を切って回避する。

リュカオーン相手に遅延は得策ではないと判断し、格納空間に移動し次第即帰還。前脚を振り抜いたままこちらを睨め付けるリュカオーンの足元へと自ら飛び込む。

「そのまま下を覗き込んでろ！」

致命秘奥【ウツロウミカガミ】によってヘイトのみがその場に取り残され、リュカオーンの視線は眼下へと縫い留められる。

その隙に転がるようにして横へと離脱、武器を切り替えつつ叫ぶ。

「レイ氏！」

「アポカリプス……！」

漆黒の魔剣が赤黒く煮えたぎったマグマの様なエフェクトをまといながらリュカオーンの後脚に叩きつけられる。

流石のリュカオーンもこれを四、五度も繰り返されれば平然とは出来ないらしく、戦闘を始めてようやく一度目の怯みモーションを行う。

攻撃チャンスを逃すはずもなく、レイ氏が後ろへと飛び退いたのを視界の端に確認しつつ煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）でワンツーラッシュを叩き込む。

四度ほど攻撃を叩き込んだ辺りで、怯みモーションから立ち直ったリュカオーンは忌々しげにレイ氏を睨みつけると、俺など御構い無しにレイ氏へと飛びかかった。

「スイッチ！」

「はい……！」

ここで役割が切り替わる。今度はレイ氏がリュカオーンのヘイトを受け持ち、俺がアタッカーを請け負う。

「脇腹貰ったぁ！」

ハンド・オブ・フォーチュン系列、幸運のパラメータを参照するという特性に加え、クリティカル成功でさらに補正が加わる攻撃スキル「アガートラム」の銀光を帯びた右拳が金銀入り混じった輝き（エフェクト）と共にリュカオーンの右脇腹へと叩きつけられる。

だがこれだけでは足りない、左拳をリュカオーンが向かうであろう予測地点へと突きつけ晶弾を射出。黒き狼がその座標と重なる寸前で地面に突き立った晶弾を成長させ、水晶柱のジャベリンで巨体を

迎撃する。

「多少は怯むくらいしてくれよ……！」

「大丈夫、です……！　剣舞【流旋】！」

そんなものは障害たり得ぬと言わんばかりに、前脚の動きを妨害する位置に生やした水晶柱を踏み潰してレイ氏へと飛び掛るリュカオーン。

だが大剣の刃ではなく、その腹を突きつけるような奇妙な構えを取ったレイ氏は回転を利用した流れるような動きでリュカオーンの飛び掛かりをいなして避ける。

一瞬の沈黙、リュカオーンは一切の疲労もダメージも感じさせない動きでゆっくりと俺たちの方へと振り向く。

「こういう時なんて言うんだっけな……」

「暖簾に腕押し、糠に釘……でしょうか」

全くもってその通りだ。可視化された奴のＨＰゲージが欲しい……いや、むしろ見えたほうが心折れるか。

リュカオーンの行動に合わせてタンクとアタッカーを目まぐるしく切り替えていく。言い換えれば片方は絶対に攻撃に参加できないこの作戦は時間がかかることは承知していたが、やはり実際にやるのと覚悟を決めるのではつらさが違う。

「レイ氏……今どれくらいだ？」

「……あと、六回です」

「そうか……分かった」

戦闘に突入する前、明らかに高額そうな強化アイテムを惜しみなく使い潰すレイ氏から伝えられた「切り札」の存在を思い返す。

――魔王天帝(サタナエル)のユニークスキル「アポカリプス」、天帝魔王(サタン)のユニークスキル「カタストロフィ」……両スキルを「五回ずつ使用する」という条件を満たすことで使えるスキルがあります。

それこそがサイガー0というプレイヤーが「最大火力(アタックホルダー)」の称号を持つ所以であり、それを当てることさえできれば勝ちの目があるかもしれない。

その言葉を信じ、俺はレイ氏を守りつつもレイ氏を戦わせるという矛盾した綱渡りを敢行していた。

「クソ、好き勝手暴れてくれやがって……」

そもそもこいつ、どういう基準でヘイトを判定しているのかさっぱり分からない。

執拗に俺を狙い続けるから「呪い」持ちが優先されるのかと思えば、唐突にレイ氏へ襲いかかったりする。これでは狼というよりも猫だ、自由気まま過ぎておちおち息を吐くことも出来やしない。

とはいえ二兎を追う者は一兎をも得ず、リュカオーンが徹底的に一人を狙い続けないからこそなんとか今の均衡を保つことができている。

「月が隠れました！」

「来るか……！」

松明というアイテムがある。主に夜間や洞窟などの光が届かないフィールドで松明を中心に半径五メートルの明度を引き上げる、という効果のアイテムなのだが……

「基本的に薄暗い程度で普通に夜でも周りが見えるゲームで、んなアイテム常備してるわけねーだろうが………右っ！！」

分身そのものの動きは通常の分身攻撃とそう変わりはない、だがその姿が見えなくなるだけで極悪度がうなぎ登りだ。
全神経を聴覚に集中し、砂でも詰めた麻袋を引きずるような音の発信源を探り、イメージだけで透明な死に形を与える。
見えなくてもそこにいる、透明でも質量がある。不可視の分身が出現した音、地面を踏みしめ走り出した音からおおよその位置を割り出した俺は、指差し声出しでレイ氏にそれを伝えつつ、全力でその場を離脱する。

「ぃぃいっ！？」

背筋を風が撫でる。自然現象じゃない、大質量に押し避けられた大気の流れと、大質量を動かすだけの肺活量によって漏れ出す吐息が、ギリギリのところで俺の背中を撫でたのだ。
レイ氏は……無事か、戦線崩壊が杞憂であったことに安堵しつつも俺はちらと空を見上げる。
月に叢雲花に風、なるほど確かに月にかかる雲は風流を感じる事もある、だが今の俺にとっては忌々しさしか感じない。
隠れていた月は雲より逃れ、その柔らかな光で俺達とリュカオーンを照らす。そして月光が辺りを照らした事で、俺やレイ氏が先程までいた場所に、消えゆくリュカオーン瓜二つの狼の姿を確かに認め

た。

（やはり月光、というより光が途切れた瞬間だけ使用する特殊攻撃……どうする、タイミングが不確定過ぎて対策のしようがないぞ）

光、ライト……くそ、懐中電灯でもあればいいんだが。いや、それではダメだ、根本的な発動を食い止めなければいつか避けきれなくなる。

風の流れ、空模様。月の軌道にかかる雲はまだまだある、まさか気象そのものが敵に回るとは………………

「いや、待て………あるぞ、透明分身を食い止める名案が」

「本当、ですか……？」

だがこれをレイ氏の前で使うのは……いいや違うな、使わない武器に価値はない、一度も履かない靴など無いのと同じだ。それに宝物は……見せびらかす瞬間が一番楽しい。

であれば迷う事は最早なく、俺はレイ氏にヘイトを頼みつつインベントリアを操作する。

「ああそうとも、確かに俺はパワードスーツを着ることができない。だけどな、何もかもがお預けってわけじゃないんだよ……！　真夜中に叩き起こすようで悪いが仕事だ！」

インベントリアより取り出しますは三つのアイテム。

一つ、ビィラックの手により在りし日の姿を取り戻した規格外エーテルリアクター。

二つ、それを運用するための指揮棒でありホイッスルである規格外特殊強化装甲【艶羽】、その頭機殻（ヘルム）。

そして三つ……【艶羽】に対応、いや【艶羽】が対応する赤色塗装に鋼の体躯。動力のない伽藍堂はただ主人からの命令を待つようにその翼を折りたたんでいる。

「さぁ、初仕事だ……朱雀！」

規格外戦術機鳥【朱雀】に、規格外エーテルリアクターを装備。
満天の星空、月下の草原に赤い機鳥が目覚める。

大志の灯火を抱いて　其の七（後書き）

特殊裁定Ｍｏｂ

一部オブジェクト、アイテムなどは特殊な条件を満たすことで判定がＭｏｂに変更される。

戦術機獣であれば「リアクターを装着する」、死霊術であれば「一定数の特定モンスターのアイテムを消費する」

これらは恒常的なＭｏｂとして維持することができないという欠点があるものの、インベントリに収納可能である。

ステータス画面からアイテム欄、そこから特殊ウィンドウが展開され、俺は規格外戦術機鳥【朱雀】の情報を把握していく。

「当然飛べるものとして、攻撃手段は……いいや」

こいつに期待しているのは戦闘力ではない。
朱雀の視覚素子が命なき目で俺を見つめ、装備したヘルムにホログラフィックで文字が表示される。
パワードスーツを全て着る事はできない。だがエネルギーはリアクター、つまり戦術機獣から供給されるという特性上パーツ単位でも稼働自体はする。そして機獣に命令を送るだけならば頭装備があれば事足りる！
頭全体を覆うのは凝視の鳥面と同じく、されどその金属質な感触は紛れもなくそれがパワードスーツを構成する一パーツであることを俺へと示している。だが装着して分かる、明らかに金属の兜とは異なる特徴が一つ。

「全天周囲フルフェイスヘルメットってか、裸眼よりはっきりものが見えるんじゃないか？」

本来兜というものは装備しただけで視界に制限を課してしまう。そこまでのリアリティは追求していないのか、覗き穴以外は見えないというわけではなくある程度の視界は確保されているが、それでも顔にぴっちりと張り付く覆面や素顔の時と比べればどうしても兜を装備した場合の視界は狭い。だが【艶羽】の頭機殻は朱雀からのエネルギー供給によって稼働し、装備した時点でまるで兜など装備し

ていないかのような一切の狭まりのない、クリアな視界を俺へと提供している。
それどころか、下手をすれば裸眼でものを見るよりもはっきりとものが見える、当たり前のように暗闇も取り除かれてまるで昼間のように草原の緑もあまりに黒いリュカオーンの毛並みもはっきりと視認できる。
と、視界の端に文字列が表記される。それはどうやら朱雀がこちらへと命令を求めるメッセージであるようだ。

『待機、命令ヲ求メマス』

「オーケー、早速で悪いが……あそこに月を隠そうとしている雲があるだろ？　あれを吹き散らしてきてくれ」

『……了解』

一瞬の沈黙は俺の言葉を理解するためのロード時間か、それとも理解した上で「そんな事のために私を呼んだのですか！？」というツッコミを堪えての事か。一つだけ言えるのは俺の見間違いかもしれないが朱雀の機械の眼はなんとも言えない哀愁を帯びていたということだ。
だが今の俺にとっては、いや俺達にとっては重要なことなのだ。四体の内空を飛ぶことができるのは朱雀と青龍、そして雲を低コストで払うことができるのは翼を持つ朱雀だけなのだ。団扇（うちわ）まがいの仕事ではあるがやってもらうぞ。
朱雀が機械仕掛けの翼を広げる。よく見れば翼を模したそれは小規模なブースターがいくつも連結して形成されたものであり、飛翔と同時に吹き出した噴炎が炎の羽を生み出す。炎の流星が大地より天空へと舞い上がる、尾羽に相当する位置に備え付けられたメインブースターから夜空を切り裂く火炎の尾が空に一筋のラインを描き、

月を背に羽を広げた朱雀が月光を翳らせる雲へと突っ込んでいく。

「なんというか、くだらない使い方して悪い気がしてきたな……」

「サンラクさんそちらに！」

「おっとぉ！」

残念だったなリュカオーン、ここからしばらく透明化奇襲は使えないものと思え。あの畜生攻撃さえなければお前などただの隙が少なくてタフネスお化けで怯み値も蓄積しづらくて透明化しなくても普通に分身は出してきて全体攻撃ホーミング攻撃ディレイフェイント回避が高水準で纏まった、ただの……ただの………結局ただの強敵じゃないか！！

地上からでは宙を舞う極小の粒にしか見えない小さな火種が、巨人がごとき雲を切り裂き吹き散らす。月光は叢雲に翳ることなく、その光で俺とレイ氏、そしてリュカオーンを柔らかに照らす。
アポカリプスは五回使った、カタストロフィは現在三回目を命中させた。おおよそリュカオーンの挙動は把握完了、気が抜けて脚がも

つれない限り俺は以前戦闘した時よりも遥かに長い時間を戦える自信があるが……ここで問題が発生していた。

「あの野郎……やっぱり分かって狙ってるな？」

戦闘開始から既に一時間が経過しようとしているが、今になって露骨にレイ氏が狙われるようになったのだ。派手な行動や回復でヘイトをこちらに向けようにも、明らかにヘイトはレイ氏を優先している。

やはりリュカオーンのＡＩは普通のそれとは一線を画している、戦闘の中でどれが脅威でどれが無視できるものかを学習して的確に痛いところを突いてくる。レイ氏のプレイヤースキルも相当なものではあるが、それは立ち回りをスキルに依存したものだ。所々で俺が邪魔に入ってなんとか持ちこたえさせているが、スキルのリキャスト、集中の欠如、偶発的なうっかり……何がトリガーで瓦解するか分かったものではない。

唯一の救いはこのエリアが障害物の少ない広大な草原であったことだ、少なくとも後退に限度はないし立ち回りの幅は極めて大きい。だが俺にとってはメリットの塊であっても、現在進行形で猛攻を受けているレイ氏にとってはそれが仇となっている。

「くそ……こんなことなら壁タンクでもやってヘイト奪取スキルを取っておけばよかった！」

右拳を天に翳し、ウィンドウを確認しつつ毒付く俺は、先ほどまでヘイトを引き受けて回復のために距離を離したことが仇となって集中攻撃を受けているレイ氏の元へと駆け出す。水晶柱で加速したいのは山々だが、あれは着弾時の角度が水晶柱の生成に影響するため、今のように走りながら打ち込んでも角度的に逆方向に水晶が伸びてしまう。そして攻撃手段として使おうにもやはり本家水晶群蠍のも

のと比べても突貫工事で成長した水晶ではリュカオーンは容易く砕いてしまう。

水晶を攻撃転用することは望めない、であれば移動、足場としての運用が主になるわけだが、であれば攻撃はＤＰＳではなく一発の火力を如何に有効に活かせるか……今にも崩れそうなレイ氏から注意を逸らすだけの攻撃が必要だ。

（アレを使う？　いや、アレは正真正銘の切り札だ、如何にレイ氏がピンチといえどまだ使うわけには……）

兎月【双弦月】時のみ使用可能な「致命の三日月（クレセント・ヴォーパル）」が切札（エース）であるならば、アレは正真正銘鬼札（ジョーカー）だ。幾つものデメリットが課せられた特殊スキルはともすればレイ氏が狙う、両面五度の必殺を以てなお倒せぬ強敵にのみ使われる秘奥義と同等の力を秘めている。
どうする、どうすればいい、アガートラムは使用可能だ。バフスキルはもう何度使ったかも覚えていないが直近に使ったものはまだ効果時間持続中、最高効率で最大火力を出すためには……そうだ、弱点だ。
リュカオーンとしての弱点じゃない、もっと根本的な「狼型モンスターとしての」弱点……生物としての……よし。

「レイ氏！　もう少し踏ん張ってくれ！　……「【発射せよ（Firing up）】！！」

今日この日ほど音声認証を手間に感じることもないだろう。左拳が駆動を開始し、晶弾（クリスタルバレット）を射出する。銃器として扱えるほどの殺傷速度はないが、それでも俺が走る速度よりも若干速い速度で飛翔する晶弾はリュカオーンのすぐ傍へと着弾。それを確認した俺は煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）を装着したまま前転倒立回転（ハンドスプリング）を敢行、叩きつけた拳の振動が地面を伝播して晶弾を起動する。
逆転する天地、慣性がかかとを前へと進める感覚に抗うことなく再

度の天地逆転を行いながらもう一つの起動音声を叫ぶ。
「【成長せよ】(Growing up)！！」
水晶柱の生成と同時に、右足だけ先行して着地、その勢いを推進に回しながら前へと一歩左足を着地。最低限に抑えてもどうしても発生してしまう減速を逆手にとって、さらに加速した俺の身体が水晶柱へと疾駆する。
即興目測、自分の座標から水晶柱、リュカオーンの位置を見ておおよそのルートを脳内に描く。駆け抜け五歩で踏み込んで、跳躍からフリットフロート起動。宙を踏んで斜め前へと跳ね進み、水晶を足場にゼログラビティ起動。地面以外での場所に於ける重力負担を大幅に軽減することで名前通りの無重力空間のように加速を幾分か削りながらも標的(リュカオーン)へと身体をねじって狙いを定める。
俺はこのゲームを信じている。年齢制限という大きな壁があるが故に表現そのものはマイルドにポリゴンが砕けたガラスのように散る、というものに落ち着いてこそいるが首筋に触れればすぐに分かる。いくらプレイヤーのものとはいえ首に触れれば脈がある、胸に触れれば鼓動がある。それは信じがたいことに「人体そのもの」をポリゴンで再現しているということに他ならない。
それは本来ゲームには必要のない要素だ、しかしシャングリラ・フロンティアではただの人の形をしたアバターではなく一生命として肉体がポリゴンで形作られている。だからこそ、だからこそプレイヤーは感じることのできない弱点の痛みをＭｏｂ達はダイレクトに受けることになる。例えば骨の上に皮一枚しか張っていないが故に、皮膚のすぐ下に神経が通っている故に「如何な豪傑といえどそこを叩かれれば痛みに涙を流す」とまで言われる……脛とかな。
「弁慶だって泣くんだからお前も……泣け！」

拳を振りかぶり、水晶柱を蹴ってリュカオーンの後右脚へと一気に肉薄する。武頼闘気とインファイトを連結したことで念願の純粋な近接攻撃強化スキルとなった「戦極武頼」を起動し、火力に補正を重ねた銀光の腕をリュカオーンの向こう脛へと叩きつける。

「グルォア！？」

「はっはぁー！　随分と間抜けた悲鳴を上げるじゃないかリュカオーン！」

会心の感触、右腕に乗った慣性が大質量を支える柱の一本と激突し、反動によって真逆の方向へと逆るエネルギーへと変換される。それに抗うことなく、空中という不安定な位置で目まぐるしく揺らぐ体幹を制御して着地、すぐさまリュカオーンの射程圏から離れる。まるで踊るように、兎が跳ねるように、あの巨狼の世界からすれば木っ端に等しい小人が精一杯目立つような動きでリュカオーンの視線を、レイ氏に向けられていたヘイトを俺が奪い取る。

金蠍の籠手は威力は高いが取り回しが重い、故にこそ守勢に回るのならば兎月が適任だ。装備を外して二振りの兎月を握りつつ俺は着々と追い詰められている現状からおおよその制限時間（タイムリミット）を導き出す。

トリガーは……レイ氏の限界だ。

少なくとも、このままレイ氏一人狙いをされ続ければ……多く見積もって十五分。それがこの戦況が大きくリュカオーン側に傾く分岐点。

さぁ、どうする…………？

夜の草原。空に炎鳥、大地に黒狼。鎧騎士と半裸が駆け跳ね武器を振るう中、二羽をひっつけ走る影一つ。

大志の灯火を抱いて　其の八（後書き）

意気揚々と起動して最初の命令が「雲を散らしてこい」というメカがいるらしい。

ちなみに朱雀ですが本来は高速で飛翔しながら翼のブースターから噴射されるジェットの余波で生成される炎の翼や、武装として搭載されたレーザーやら物理ブレードなどを用いて戦います。

大志の灯火を抱いて　其の九

剣が重い、鎧が重い、身体が重い。
それらは全て仮想、実際に質量として存在しているわけではない。
だが確かにそれらはこの仮想現実（シャングリラ・フロンティア）においてサイガー０（斎賀　玲）に重く重くのしかかっていた。
その身に纏う「双貌の鎧」はその手に握る「神魔の大剣（アンチノミー）」と同時運用する事で真価を発揮する防具だ。大剣が聖なる力を宿せば鎧は魔の力を帯び、剣が魔に反転すれば鎧は聖なる力を宿す。
そして剣が魔、鎧が聖の場合はステータスに防御寄りの補正が付与され、並のモンスターであれば真正面からの突進すらも体力を三分の一も減らす事なく受け止めることができる。

だがこの場にあって荒ぶる黒狼は尋常ならざる夜襲のリュカオーン。
防御強化された今のサイガー０ですら当たり方が悪ければ一撃でＨＰ全損は免れず、そしてそんな必殺を軽々と連撃で繰り出してくるただ一頭の最強種。
直撃は避けたものの、蓄積した擦り傷だけでＨＰが危険域に達したサイガー０はフルフェイス故に液体ポーションを飲むことが困難なため、少々値は張るものの、砕くだけで体力が回復する結晶状の回復アイテムを砕きながら、それを見つめる。

「凄い、なぁ……」

黒い暴風、分身を絡めた幾度となない必殺の嵐の中心で、八面六臂の対応で「無傷」を通すプレイヤー。あの空で入道雲を吹き散らす機械の鳥を操る為か、目力の強い鳥の覆面ではなく、サイガー０がこれまでに見て来た鎧装備のどれよりも洗練された技術で鳥を模した

機械仕掛けのヘルムを被った半裸の男がリュカオーンを相手にひたすら時間を稼いでいた。

その身に背負うは二つの「呪い」、サイガー０はそれを知っている。何せ自身もかつてはそれを胴体に刻まれていたことがあるのだから。だからこそ、「該当部位装備不可」がどれ程厄介なデメリットであるかを重々承知している。

そもそも、このゲームにおいてプレイヤーの「防御力」は数値だけで結論づける事はできない。如何に防御が高くとも素肌を晒す胴体に攻撃を受ければ大きなダメージを受ける、数値を補強するという役目以上に実際にアバターを守る装甲として、防具は極めて重要な役割を担っている。

如何に男の姿とはいえ、胴体だけ半裸という姿を開き直る程に恥を捨てられなかったサイガー０は慈愛の聖女イリステラによって呪いを解いたのだが、プレイヤーの中には呪いを保持し続ける事で何らかのフラグが立つと考え、あえて呪いを抱えたままの者もいるにはいる。

だがそれにしたって、二箇所はあまりに非常識である。最早半裸と呼ぶべき胴体と足の素肌を露出した姿で立ち回るサンラクは、いつ爪が引っかかってＨＰを削り切られるか分かったものではない。

本人は「それ故かスキルが立ち回りに特化している」と言っていたが、それにしても限度というものがある。

だからこそ、自分が前に立ってサンラクをリュカオーンから守らねばならない。そう決意したのもどれ程前か、既にサイガー０の集中力は風前の灯火であった。

本人は自身の力不足を恥じているが、実のところを言えば極論攻撃を当てる必要のないサンラクと、条件を満たすために合計十度の大振りな攻撃を当てなくてはならないサイガー０では精神的な負担は若干サイガー０が上回る。

序盤はサンラクとのヘイトのキャッチボールは上手く回っていた、だが今では僅かでもサイガー０が攻撃のそぶりを見せたのならば、リュカオーンは猛烈な勢いでそれを潰さんと狙いを絞る。

あと少し、あと少しで条件は達成される。だというのにそこまでが異様に遠く感じる。

パラメータとして存在する空腹を解消するために一旦頭装備だけを取り外し、携帯食を口に入れようとしたサイガー０は、サンラクの悲鳴のような叫びによってそれに気づく。

「分身がそっちに！」

迫る黒い影に、サイガー０は己の油断を自覚する。

度重なる攻撃の起点を封殺せんとする攻撃に、いつしか勝手に「攻撃に反応してリュカオーンはヘイトをこちらに向ける」と錯覚していた。

狼はもっと狡猾で、この場においてメインの火力となるサイガー０が体力を回復しようとする行いを見逃すはずがないというのに――

――！

「しまっ……」

時既に遅し、もはや回避も防御も間に合わない。死から蘇生する手段はあるが、それを自らが死んだあとに使う事などできない。

おそらく本体であろうリュカオーンに阻まれながらも、こちらを見るサンラクの表情はヘルムでうかがい知れない。だが向こうも手一杯であろうにこちらを気にかけてくれている事に心が暖かくなると同時、申し訳なさで胸が満ちる。

(ごめんなさい陽務君……結局、私が足を引っ張ってしまいました

……）

その関係は一方的に認知されたもので、手落ちの謝罪は心の中でしか言うことができない。狼の牙が迫る、口腔の中まで影で作られたそれは光すらも喰らうと言わんばかりに夜よりなお暗い闇が奥へと続いており、あれに噛みつかれれば最後、アニマリアと同様の末路を辿ることになる。

無残な死を恐れるわけではない。ゲームをプレイする中で一通りの「死」を経験してきたサイガー０にとって、噛まれて死ぬくらいは喜ばしいことではないが慣れたものだ。尤も、咀嚼されて嚥下されるのは気分の良いものではないだろうが。

だからこそサイガー０はそれが実行されるまで気づかなかった。こちらを見るサンラクの驚愕の表情がヘルムで隠れていたこともあった、リュカオーンという視覚的にも聴覚的にもインパクトの塊が眼前にいたこともあった。だからこそ、サイガー０はそれが実行され、自身が巻き込まれて初めて後ろに人がいたことに気づいたのだった。

「刃隠心得(はがくしこころえ)……【空蝉(ウツセミ)】！」

「へ？」

気の抜けた声が出てしまうのも宜なるかな。なにせ音程の高い少女の声とともに肩を誰かに叩かれたかと思った瞬間、さながらラグを修正するために強制的に数秒前の座標に戻るかのように……サイガー０の身体は先ほどまでいた場所……今はリュカオーンの牙がガチンと噛み合わされた場所から数メートルほど後方に「瞬間移動」していたのだから。そして断頭台に頭を押し付けられていたサイガー０に変わって、リュカオーンの牙の餌食となった哀れな代理人は……

……

「丸太？」

「やっぱり変わり身の術といえば丸太ですよねっ！」

食感に怪訝を感じたか、咀嚼を止めたリュカオーンの口からこぼれ落ちる粉々に砕け散った木片は、全てをかき集めて正しい形に組み立てれば木を雑にカットした丸太であることが分かるだろう。そしてもう一つ、丸太を変わり身として、直前に指定した座標に転移する「魔法」を駆使する職業、サイガー０には一つ心当たりがあった。それは職業「盗賊」から派生する上位職にして、本来の……自身のヘイトを減少させ、様々な悪路を軽々と走り抜けるスキル主体の上位職「隠密」とは異なる、実にジャパニズムを感じずにはいられない摩訶不思議な「魔法（忍法）」を駆使する魔法主体の隠し職業……

「忍者？」

「はいっ！　ところでつかぬ事をお聞きしますが貴方はサンラク……さんではないですよね？」

「え、あ、はい。サイガー０です」

「やっぱり！　人間的に割と頭のおかしい格好の鳥頭と聞いていましたので！　なんだか聞いた話より頭が物理的に硬そうですけどあの人ですよね！」

振り返った先、そこには全体的に地味目な……言い換えれば目立たない配色によって隠密を想定した二の腕や膝下を大きく露出した軽装を身にまとい、何故か顔に狐の面を付けたプレイヤーがそこにはいた。確かあの狐面は頭装備ではなくアクセサリの一種であり、兜

の上から装備すると相当滑稽な姿になることから時折ネタやファッション目的で装備しているプレイヤーをサイガー０は知っていた。
アバターの大まかな輪郭と、声からして姿と中身が一致している彼女の頭上を見れば、そこには「秋津茜（アキツアカネ）」の文字。サイガー０は絶賛リュカオーンが大暴れしている最中でありながら、日本では古くは蜻蛉を「秋津（アキツ）」と呼び、それに「茜（アカネ）」の色を足したのならばそれは即ち「アキアカネ」を指しているのだろう、とその名が中々に古風であるなと場違いな感想を抱く。

「ちょっとご挨拶してきます！」

「あ、あの！」

こんな時に聞くべきではないということはわかっている。だがサイガー０の……斎賀　玲の心の奥底で燃え盛る何かが聞かねばならぬと強い衝動を以て口を動かしていた。

「その、サンラク……さん、とはどのような、ご関係で………」

「えーと………尊敬すべき先輩、でしょうか！　ではっ！」

そう言うなり実に美しいフォームで走って行った秋津茜の後ろ姿を見送りながら、サイガー０は震える唇をなんとか動かして思わずつぶやく。

「セン、パイ？」

なにか、ヤバい。

一体、ホップ！　何が、ステップ！　起きた？　ジャーンプッ！
レイ氏が分身から逃げ切れないのを目撃した瞬間「あ、終わった」と確信していたのが、物凄いスピードで走ってきた何者かによってレイ氏が救出された。そしてその人物（プレイヤー）は何故かこちらへと猛スピードで走ってくるのだ。これがオイカッツォやらペンシルゴンならまだ分かる、いや分からないが納得はできる。
だがそれが全く面識のない他人であれば分かりもしないし納得もできない、そして身体はめまぐるしく動きながら思考をかき乱す「疑問」は、プレイヤーの頭に浮かぶ名前を目撃することで「驚愕」へとトランスフォームする。

「秋津茜……アキツアカネぇ！？」

今の今まで「刹那的享楽」と額に紙が貼り付けられた、デフォルメされた俺に踏みつけられていた「策略的理性」の張り紙をつけた同様の俺がアッパーカットで前者の俺を殴り飛ばすイメージが思い浮かぶ。
アキツアカネ、秋津茜。その名は俺の中で最重要懸念事項として燦然と輝いていたプレイヤーの名前であり、エムルに銘じて足止めを狙っていたのだが、まさか「今」この場で会うことになるとは思わ

なかった。やけに整ったフォームでこちらへと全力疾走してくる秋津茜に、リュカオーンすらも対応に迷っているように見える。正直その気持ち、凄いよく分かるがその隙は最大限に活用させてもらう。【ウツロウミカガミ】でヘイトをその場に置き去りにして、リュカオーンの攻撃圏内から脱出。仮面で顔は見えないが全身から喜色の雰囲気を発しながらこちらへと走ってくる秋津茜と合流する。

「え、なん、とりあえず何故ここに！？」

「お初にお目にかかります！　その、単刀直入に聞きますがベルセルク・オンライン・パッションというゲームをプレイしていたりはしませんか！？」

「何故ここで「便秘」！？」

なんだろう、カレーライスのど真ん中にソフトクリームを投下されたような場違いな単語に、思わず俺は声を荒げる。よりにもよって神ゲーの対局、クソゲーでの中でも中々に最北端を征く便秘の名前を出されたことに思った以上に感情を乱してしまった。だがその答えは秋津茜にとってはなんらかの確信を得るには十分だったらしく、仮面の奥の目にこれ以上ないほどの喜びが充填される。

「やっぱり！　もしやと思っていましたがやっぱり「サンラク」さんなんですね！」

「え？まぁ基本的にゲームじゃサンラクで統一してるが……」

「私です！　「ドラゴンフライ」です！　あの時お世話になった！！」

数秒の沈黙、そして物凄い勢いで過去の記憶を遡った俺の脳裏にガタイとむさい見た目とは真逆の態度で、新たなバグ技を発見して見せたプレイヤーの姿が想起される。

「ドラゴンフライ！？　あん時の！？」

「はい！　まさか別のゲームで再会できるとは！」

蜻蛉（ドラゴンフライ）、秋津茜……なるほど、カッツォと同じで共通のテーマで名前を決めるタイプか。いやそんなことよりもだ、いくらなんでも先制パンチの威力が高すぎるだろう。まさか向こうから俺へと会いに来るとは、それも薄い繋がりとはいえ面識がある人物だったとは。

狐の面を付けた盗賊と思しき装備の秋津茜は、なんの裏もない純粋に再会を喜ぶかのようにぴょんぴょんと跳ねており、肩に巻かれている妙に見覚えのある柄のマフラーもそれに連動するかのように揺れて……揺れて……

あれ、これマフラーじゃなくて兎だ。

「きゅう……」

「エムル！？」

「あ、はい！　どうせならとご一緒してもらいました！」

いやいや「どうせなら」じゃないよ「どうせなら」じゃ。秋津茜の首元にかろうじてしがみついているエムルは、まるで何時間もシェイクされたかのようにグロッキーな状態であり、鳴き声を上げなければ本当に兎皮を使ったマフラーと見間違うところだった。

「いや、待て待て一体どうやってここに？」

「はい！　私、初めて間もない未熟者でしてイレベンタルを訪れたことがなかったので……ええ、頑張ってサードレマからここまで全力で走ってきました！！」

さて弱った、こいつもしかしなくてもカッツォやペンシルゴンとは別の方向で「バカ」であらせられるな？

大志の灯火を抱いて　其の九（後書き）

ここにきて「タイムアタック型体育会系後輩ポジお面忍者少女」のエントリーだ！

属性盛りすぎな気もするけど多くて損することはないだろう、多分。

・職業「忍者」

前提条件として職業「盗賊」であること、ある程度の魔法（種類は問わない）を会得している必要がある。

前提条件を満たした上で隠しパラメータ「忍者度」を一定値まで満たした場合、盗賊ギルド内に特殊ＮＰＣが出現する。

そのＮＰＣから受注できる「三番勝負試験」をクリアすることで隠し職業「忍者」にジョブチェンジする権利を得る。

そのジャパニズム溢れる忍法……もとい「刃隠心得」系列の魔法は熱狂的なファンが多いが、それらを行使するために様々な前準備が必要になるため、結局普通の上位職である「隠密」の方が総合的に使いやすいのでは……馬鹿野郎！　忍者なんだからそういうのはどうでもいいんだよ！

ちなみに特筆すべき点として「刃隠心得」系列の魔法は「詠唱」ではなく「印」を結ぶことで発動する。ニンニン。

大志の灯火を抱いて　其の十（前書き）

具体的に言うと十二月上旬から毎日投稿難しくなりますねこれ（ゼノブレイド2発売）

コレクターズエディションの付属眺めてるだけで一日潰せそうなんですけど……

大志の灯火を抱いて　其の十

ニコニコと喜色を滲ませながら、要約すると「三エリア踏破してここまで走ってきました」とのたまった秋津茜。

なるほど確かにユニークシナリオ「兎の国からの招待」を自発した程の技量があればそう難しいことではないだろう、恐らくどんな説得をしたのかは不明だがエムルとパーティを組んでいることからボス自体はソロ討伐ではない。だがそれにしたって早すぎるだろう。

「………言いたいことはいろいろあるけど、今はそれどころじゃないんでな」

「はいっ！　あれが噂に聞く「夜襲のリュカオーン」ですねっ！　未だレベル４３の未熟者ですがお力添えさせていただきます！」

「あぁ………あぁ！？」

今何か壮絶に頭のおかしいセリフが聞こえたきがするんだが、聞き間違いか？

「レベル４３！？」

「はい！　エムルちゃんとシークルゥさんのお力添えでここまで来ました！」

シークルゥ……聞き覚えがあるぞ、たしかエムルの兄の一人で、名前的にビィラックの一つ下なのだろう。つまりヴァッシュの子供の中でも次男ってことか、であれば恐らくそのレベルは９０代。エム

ルのレベルが現在９０間近であることを考えれば過剰とも言える介護要員を抱えていることになる。成る程、道化の蜘蛛（クラウン・スパイダー）や歌う瘴骨魔（ハミング・リッチ）程度ならヌルゲー突破が可能になる。

「それは……その、リュカオーン相手にはほぼ役に立たないのでは」

「そうですね！　火力支援ではお役に立てないですが……緊急のエスケープでしたら先ほどのように！」

なんというか、俺の近辺ではあまり見かけないタイプのゲーマーだ、なんというか……その、「初々しさ」にガソリンをぶっかけて火をつけたような……「脳筋」とはまた違うんだけど微妙に似通っているような……そう、「体育会系」だ。「頑張ればなんとかなる」と信じて、実際に頑張ってなんとかしてしまうタイプのゲーマーだ。この手のゲーマーは俺と同じでモチベーションがプレイヤースキルに直結するが……さらにそれに加えて、明確な目標を作ることで更にパフォーマンスが上がる、タイムアタッカーによく見かけられるタイプだ。

とはいえ、この秋津茜というプレイヤーはメリットとデメリットの双方を持ち込んでくれやがった。メリットは単純にパーティのメンバーが増えたことだ。レベル４３という、正直言ってリュカオーン戦ではほぼ役に立たない秋津茜ではあるが、先ほどのよく分からない変わり身魔法などは俺とレイ氏の二人ではどうしても生まれる綻びを補完することができる。そしてなにより、高レベルのヴォーパルバニー達を連れてきたことでこちらの戦術幅が劇的に変わる。

だがデメリットも当然ある。正直言って、俺とレイ氏はリュカオーンに勝つ気はそこまでなかったりする。いや、負けを前提に戦っているわけではないが「互いが持つ切り札をぶつけてなお倒せないならスパッと諦めよう」という暗黙の目標が設定されていた。だが秋津茜がエムル達を……リスポーンが利かないＮＰＣを連れてきたこ

とで「負けられない理由」が出来てしまった。
リュカオーンに勝つための戦いではない、リュカオーンに負けられない戦い。あの狐っ子は増援と一緒に退路を崩壊させてここに来たのだ、ここからの予定と一緒に俺の心構えも切り替わる。

「っふぅー…………」

ウツロウミカガミの虚像を追っていたリュカオーンがこちらに再び注意を向けるあとわずかの一瞬、吐き出す吐息に弱音を載せて排出し、覚悟を決める。増えた手札は三枚、その内の一枚はよく知るものではあるが残り二つは未だブラックボックスが多い、だが断片から理解できる情報から作戦を組み立てることはできる。鉄骨むき出しの突貫工事、一夜城以下の張りぼてではあるが、フルスイングで叩きつければ立派な質量兵器だ。

「秋津茜、君はとりあえずあそこにいるレイ氏の護衛についていてくれ、今レイ氏は切り札のための前準備をしていて、そのためにはあと何回かリュカオーンを殴りつけなくちゃならない。だからこそレイ氏が体勢を整えるまでエスケープでアシストを頼む」

「はいっ！　お任せください！」

「あとすまん、その首でぐったりしてるウサギ……シークルゥだっけか、そいつの大まかな情報を教えてくれ」

「お侍さんです！　兎の！」

うーん、料理の原材料は何かと聞いてるのに「魚と！　野菜！」って答えられた気分です。だが「侍」ならばやはり近距離職だろう。実質前衛3、後衛1、遊撃1……だとすれば最適解は2：3で護衛

か。

「よし、エムルはこっちで預かる、君はシークルゥと一緒にレイ氏の護衛……そしてアシストだ。極論リュカオーンに攻撃を当てる必要はない、レイ氏が確実に攻撃を当てるためにあの人を助けてやってくれ」

「は、はいっ！　粉骨砕身で頑張りますっ！！」

俺が飛ばしたパーティ申請に目を輝かせた秋津茜はノータイムでそれを受け入れる。グロッキーだった兎達もそれを承認し、ここにプレイヤー三人ＮＰＣ二羽の五人パーティが結成される。すなわち秋津茜や、エムル達もリュカオーンに勝つかリュカオーンに負けるまでここからお家へは帰れないということだ。

リュカオーンがこちらを見据える、その視線は果たして誰に向けられたものか。鬱陶しい俺か、喰いちぎれなかったレイ氏か、獲物を横からかっさらった秋津茜か。分かるのはここからが最終ラウンドだということ、そして俺達は……いや、俺はパーティメンバーノーデスクリアをユニークモンスター「夜襲のリュカオーン」相手に通さないといけないということだ。

艱難辛苦、さながら英雄に課せられる試練のようではないか。生憎そのポジションにいるのが半裸の変態であることに申し訳なさでいっぱいに……いや待て、古代ギリシャとかそこらへんまで遡れば半裸でマッスルしてヒロイックにバイオレンスする感じの英雄とか結構いるのでは？　つまり半裸でも大丈夫！　ありがとう紀元前！！

「よっしゃ行こうか！　起きろエムル、大仕事だぞ！　それとも兎の手より猫の手の方が有能だったか？」

「兎の手の方がふわふわしてて可愛いですわっ！　って、っぴゃあ

ああああああ！！？　リュカオーンですわぁぁぁぁぁぁ！！」

「ははは、しっかり頭に捕まっとけ！」

「乗り心地が硬いですわぁぁぁぁぁあクッションが欲しいですわぁぁぁあぁぁぁぁあ！！」

「残念、却下です」

これからもこの金属製の兜（座席）に座ることは多くなるだろうからな、気合と根性で慣れてくれ。

…………おっと、そうだったな悪い悪い。このパーティは三人と二羽じゃない、三人と三羽だったな。

退けない理由も、負けられない理由も、覚悟を決めてしまえば縛りプレイのモチベーションとなる。皮肉なことに、エムルというお荷物を抱えたことで俺のパフォーマンスはこの戦闘中においても最高値を叩き出していた。

それに荷物は荷物でも追加武装（オプションパーツ）であるエムルという魔法砲台が頭に張り付いていることで、俺はこの両腕で振るう攻撃以上のアクションを可能としていた。

リュカオーンのヘイトを集めるために割かねばならなかった火力（スキル）を

エムルという火力（魔法）に任せることで、突発的なリュカオーンのヘイト変更に対してこっちを見ろと頬を引っ叩くことができる。時折分身がレイ氏の方へと向かうのを許してしまうこともあったが、秋津茜やもう一羽のヴォーパルバニー、シークルゥによって戦線の崩壊を避けられているようだ。

「本体右前脚！　跳ぶぞ！」

「ひぃぃぃ【マジックチェーン】！」

それが有効かどうかは別問題として、リュカオーンにも拘束自体は通じる事をＳＦ－Ｚｏｏが証明してくれた。エムルが放った魔力の鎖がリュカオーンの前脚へと絡みつく。

無論完全に拘束するほどの力はなく、一瞬その動きが止まる程度の効果しかない。だが一秒あれば気づける、動ける、対応できる。

遮那王憑きの効果によりまさしく天狗の如き動きを可能とする俺の身体が跳躍によってふわりとリュカオーンの前脚に着地、リュカオーン自ら用意してくれた足場から跳び上がり両手で握る双弦月の刃がもう一つの月を漆黒の毛皮（キャンバス）に刻む。

弱者が強者へと挑むための一閃を以ってしても、血の一滴すら出やしない……流石にここまで無血であれば流石に別の可能性が見えてくる。

「……やっぱり妙だな」

年齢制限の壁があるとは言え、シャンフロでは流血表現をポリゴンで代用している。つまり血の通ったＭｏｂなりプレイヤーなりを切りつければ、傷口からは赤いポリゴン、場合により青や緑のポリゴンが飛び散るわけだ。だがリュカオーンからはそれがない、どれだけ深く斬りつけても血（ポリゴン）の一欠片すら出てこない。

だから発想の切り口を変える、度重なる攻撃を受けてもノーダメージなのではなく、設定として「血が出ない」状態にあると考えるべきだ。そしてリュカオーンの特性を考えれば、自ずと答えは見えてくる。

「あれは本体じゃない、あれも分身なんだ」

リュカオーンは可視不可視はともかくとして分身を生み出すことができる、あの実体はあくまでも分身を作ることができる一種の統括機のようなもので、結論から言えばリュカオーンの本体はここにはいないと考えるべきだ。

であれば、こちらも使える手札の使い方が変わるというもの。

「エムルっ！　撹拌してやれ！！」

「はいなっ！　むむむ……【マナ・シェイカー】！！」

その魔法は、物理的破壊力という点においては絶無と断言できる。レベル９０の領域に手をかけたエムルが放ったものですら、レベル１の初心者プレイヤーのＨＰをたったの１ドット減らすこともできないだろう。であればこの魔法の存在意義とは何か、その真価を今リュカオーンが実証してくれている。

エムルが放った円形波状のエフェクトがリュカオーンの肩に命中した瞬間、着弾部位が明らかに生物の肉で発生するとは思えない「揺らぎ」と共に一瞬ではあったが崩壊したのだ。「マナ・シェイカー」は魔力で肉体を構成するモンスターや、魔力によって肉体を「作る」モンスターに対して高い効果を発揮する。つまり……

「ガルァ!?」

「ビンゴ！　触り触られこそできるが、やっぱり分類上は「ゴースト」と同じ非物質モンスターか！！」

巨躯を誇り、プレイヤーを小虫が如く踏み潰すからこそ見えなくなっていたこのリュカオーンの正体。要するにこいつは「ポルターガイスト」なのだ。物理的影響を与えることができる、非物質的存在……分身を作り出す原理からして、信じがたいがこいつは影、もしくは闇を「物質化」することができる。言うなれば眼前のリュカオーンとは、粘土で作った狼を遠隔操作で動かしているようなものなのだ。どれだけ物理的に殴ったところでそれを操っている糸……この場合は魔力的な「力」をどうにかしなければこのリュカオーンを倒すことはできない。

(だがそれならそれで腑に落ちない……魔法職依存ならまだ分かるが、これじゃ物理職が肉壁以上の価値を持てなくなる。となると、クリア条件は魔法ルートと物理ルートで二つ存在する？)

バカ体力を削る手間があるものの、装備である程度固くできる上にスキル系統で立ち回りで有利を取れる物理職。対して体力を効率的に削ることができるが、装備の硬さと、立ち回りの不便さから一度守勢に回ったらそのまま削られかねない魔法職。

だとすればまだ望みの目はある、なにせ今の攻撃はよっぽどリュカオーンの腹に据えかねたらしい。

「ぴぃぃぃぃぃぃぃぃいいいいい！　めっちゃこっち見てるですわああああああああ！！」

「凄いな、俺へのヘイトを全部持ってったぞ」

「おうち帰りたいですわあああああああああああ！！」

大志の灯火を抱いて　其の十（後書き）

結局あのリュカオーンってなんなの
ある法則によってリュカオーンは影、闇という概念から自身の分身を生み出すことができます。生み出された分身は飛び石のように影を「渡る」ことで好きな場所に移動することができます。そのためありとあらゆるエリアに出現するわけです。多分本気を出せば海底とかの影を使って大陸越えも出来ます。
言うなれば自作のドローンです、分身に意識を載せることで本体から遠く離れた場所を知覚、干渉することができます。というかそもそも意識だけ飛ばすことも可能です、アニマリアが見た「夜そのものの視線」は分身が身動き封じられて鬱陶しいので一旦意識だけ抜け出したリュカオーン本体の視線です。

ちなみに何故リュカオーンの発生座標をＳＦ－Ｚｏｏが特定したかというと、狼の特性に詳しい兄貴プレイヤー（多分サブリーダー）の調査の結果、エリアにはそれぞれマーキングポイントが存在しているることが判明し、それの状態から出現位置を割り出すことができたのです。尤も、「日が沈むまでに」「全エリアのマーキングポイントを特定&調査」「場所を特定次第全員集合」という中々に手間のかかる特定方法ですが、多分クラン黒狼辺りなら嬉々としてその情報を買い取るんじゃないですかね？

純白の神剣が振るわれ、絶大な破壊力を秘めた刃が黒狼の脇腹を抉る。だが幾度となない攻撃を受けて尚、リュカオーンは倒れない。大きく抉れた傷口も瞬く間に塞がり、見た目の上では一切のダメージを受けていないようにも見える。
だがずっと戦ってきたからこそ分かる、確かに俺達の攻撃はリュカオーンのリソースを削っている。現にリュカオーンが出現させる分身の数は一体にまで減ったし、地面から影の槍を発生させる全体攻撃も露骨に数が減っている。一度の出現で使える影の量には上限があるのか、それとも別の理由があるのか。それを推し量るにはそれこそ攻略書が必要になるだろうが、生憎そんなものは今この場には存在しない。

「残り回数！」

「あと一回です……！」

リュカオーンの振るう爪が丸太を砕き、背後から放たれたマナ・シエイカーがリュカオーンの後脚を崩す。忌々しげに俺の頭に載っかったエムルを睨むリュカオーンだが、こちらを見る程にレイ氏がフリーになる。
ワイヤー渡りから綱引き用のものを使った綱渡りくらいには安定してきたが、それでもいくつかの問題が発生していた。

「すいませんっ！　【空蝉】はもう使えないです！」

「オッケー下がって！」

秋津茜が扱う「刃隠心得」はその性質上「変わり身丸太」というアイテムの数が魔法の発動回数となるらしく、まさかリュカオーンと戦うことになるとは思っていなかった秋津茜のインベントリに収められた丸太が底をついたということ。

視界の端に表示された文字列……『稼働限界時間、残り一分』というタイムリミット。規格外エーテルリアクターは悲しい事に充電式なのだ、つまり朱雀の稼働には制限時間があり、それが差し迫っているということ。

そしてレイ氏のみならず、俺自身の集中もそろそろ限界だということ。

（レイ氏の切り札の条件達成まであと一回……こちらの手札はいつ切る、先か？　後か？）

残り二分。朱雀はよく頑張ってくれたが、よりにもよって後数分で巨大な雲が月の軌道に重なる。不可視の分身が解禁されれば、対処しきれるかどうかは微妙なラインだ。

焦りが身体を急かす、もはやリュカオーンの動きは完全に見切ったと言ってもいい。だが蛇が糞を飛ばしてくるようなゲームだ、何がフラグになって特殊行動を起こすか分かったものではないが為に、攻勢に転じる後一歩が踏み出せない。

「レイ氏！　次の攻撃は！」

「一分下さい！」

朱雀のリミットが迫る。頭の中で複数展開されたタイマーがこんがらがって、どのスキルがリキャスト中でどのスキルを発動しなければならないのかを見失いそうになる。

生意気にも俺の動きを読んで先読みで俺が数秒後に着地する位置に噛み付きを放つリュカオーンに対し、空中を踏む事で無理矢理軌道を変えて待ち受ける顎門から逃れる。よし、フリットフロートのリキャストは今からだな。

「どうする……聞いた話じゃレイ氏の切り札は動きを止めないと当てるのが難しいらしいし……」

動きを止めるための拘束系スキルは生憎持ち合わせていないし、エムルのマジックチェーンも拘束と言うには少々出力が足りない。であれば狙うは怯みモーション、Ｍｏｂの全アクションを強制中断させる絶対の摂理でリュカオーンを止めるしかない。であればやはりそのタイミングで俺の切り札を切るのが最適解、ではあるのだが……実を言うと、俺の握る隠し球も相手の動きが停止していないと当てるのが難しいのだ。不可能ではないが、難しい。

「どう当てる……全体攻撃か、通常攻撃か、分身発動中か……」

ただ当てればいいわけではない。レイ氏の切り札の射程圏内まで追い込んだ上で怯みを誘発しなければならない、つまり怯み値の制御と位置取りの立ち回りを両立させた上で攻撃を当てなければならない。なんたる高難易度、流石の俺も乾いた笑いが口から漏れる。

「ヘイトを集めて、あえて全員一箇所に固まる……いや、分身を出されたら失敗する。向こうの攻撃の発生と同時でなければ当たらない、どうやって行動を絞らせる。確実に本体が殺しにくる行動誘発……くそっ」

全く可愛らしくもなければ破壊力はもっと可愛らしくない前脚パンチの連続を、地面に叩きつけられた前脚による衝撃波に影響されな

いギリギリの位置を保ちながらステップを刻んで回避する。もはやバックステップというよりバック走に近い勢いで足を動かし、リュカオーンの攻撃終了時点で至近距離を確保する。
俺自身も攻撃を何度か当ててはいるが、やはりエムルによる「有効打」でなければ目まぐるしく移り変わるリュカオーンのヘイトを奪えない。ダメージの多寡ではなく、それがリュカオーン自身に通じるかどうか、が奴の優先度の基本なのだろう。そう考えればＳＦ－Ｚｏｏが奴と戦った時、タンクを無視して後衛を襲った事にも納得がいく。奴からすれば多少硬い程度のタンクよりも、どうとでもなるとはいえ自身を拘束してみせた後衛の方がウザかった、そういうことだ。

「ナメくさった理由だが、絶望的に有効なのが腹立つ」

的確に本命のエースを刈り取りに来る、プレイヤーの狡猾さをモンスターが行う。言葉にすれば容易く実行されればクソボス、ユニークモンスターというエンドコンテンツじみた要素でなければバランス崩壊も良いところだ。
朱雀に残された時間は一分半、そこで試合が終わるわけではないが、少なくとも透明分身の解禁で事態が好転することはないだろう。

「えーと、これ命令は普通に喋ればいいのか……」

「誰と話してるんですわ？」

「お空の鳥さん」

「サンラクサン……そんな、頭が……」

振り落とすぞこの野郎。

ナチュラルに毒を吐くようになりやがって、一体誰に似たんだが…………オイカッツォやペンシルゴンから悪い菌でも貰ったかな、うん。

「いいか朱雀、就寝前に一仕事頼む。俺が合図したタイミングで…………」

ここが正念場だ。

朱雀にオーダーを飛ばし、手短に他メンバーとの作戦会議を終えた俺は、武器を兎月から煌蠍(ギルタ・ブリル)の籠手に変更する。

「エムル、タイミングを合わせろよ！」

「はいなっ！」

「サンラクさん、いけます！」

「オッケー……よっしゃ来いリュカオーン！」

しくじれない、細心の注意を……三、二、一、今。

腰の捻りから生じるエネルギーを遠心力に乗せて、脱力と力みを混ぜたフレーム調整による裏拳がリュカオーンの前脚へと叩きつけられる。
人間の首程度なら力づくで刎ね飛ばしてしまう恐るべき前脚に力が充填される寸前、一瞬の「ゆるみ」を衝いたパリィ。五秒にも満たないほんの数秒の空白、そこへと漆黒の騎士が身体と剣をねじ込んでいく。

「カタストロフィ……っ！！」

顎に叩きつけられた大剣が、リュカオーンの右目を切り裂く。堪らず怯むリュカオーンではあるが、真上へと仰け反った顔、傷つけられた一瞬塗装されていない泥人形のような無機質さを帯びた右目は瞬く間に回復し、血の一滴すら垂らすことなく再び黄金の眼光を宿す。

「条件達成です……！」

「即ブッパ！」

「はいっ！」

ここからが本番だ。俺と、エムルと、そして朱雀でこいつをこの場に完全に縛り付ける……！

「今だ朱雀！」

『了解シマシタ、焼却対魔刃（インシレートスラッシャー）起動。』

機械仕掛けの朱雀が灼熱の流星となって急降下する。残る全出力を

掻き集め、腹部に格納されていた長大な物理ブレードを展開し、翼の推進をただ一直線に、紅蓮の尾羽が轟音を立てて大気を焼き払う。重力の後押しを受けた加速する朱雀が狙うはリュカオーンの後脚、生物としての形を持つ限り機動力の大半を依存する「足」を穿つ。当然リュカオーンが爆音と共に落ちてくる朱雀に気づかないはずもなく、狙われた後脚で蹴り上げることで迎撃せんと力を込め……

「悪いなリュカオーン」

例えるならトランプじゃなくてＴＣＧなんでな、切り札の連打で押し切らせてもらう。

「【超過機構（イクシードチャージ）】！」

「マナ・シェイカー！」

「我は混沌を手繰る者……！」

ヘイトの基準さえ分かってしまえば攻略方法はどうとでも立てられる。ＡＩが判断する脅威度の更新、突発的な危険の発生が怯みと同じ隙を生む。
第一に真正面に立つ俺が切り札を切った。
第二に斜め後方で待機していたエムルが脚に攻撃を仕掛けた。
第三に俺の背後に陣取ったレイ氏が切り札の発動に入った。
四つの危険、分かっていてもどうしようもないから「詰み」と言うのだ。お前の持つ全体攻撃が今からでは間に合わないことは分かっている、どれかを封じても残った切り札がお前に当たる。だからお前が今この瞬間に選べる選択肢はただ一つ。

「やっぱ乱数はクソだな」

こんな時に限って、月光が翳る。即ち分身は闇夜に溶け、その姿を不可視のものとする。四枚の手札は既に切られた、分身への対処は不可能であり、あいつがなんとかしてくれなければ総崩れだ。

「頼むぞ……秋津茜！」

大志の灯火を抱いて　其の十一（後書き）

其の十まででまとめるつもりだったのに……

・そもそも遺機装って何がすごいの？

通常の鍛治では作れない武器カテゴリが存在する、銃とか銃とか銃とか。

さらに「機装」共通の機能(スキル)を持っており、控えめに言ってクソ強い。

ただしデメリット有り

大志の灯火を抱いて　其の十二（前書き）

ええ、はい。単刀直入に申しますと「二万字消えました」。
腹痛とショックと復元ｅｔｃ・・・でわっちゃわっちゃしていたため、昨日は更新できず大変申し訳ありません。
少々毎日更新が滞るかもしれませんが、すでにこの章のエピローグまでは一度文章化したので頑張って記憶掘り起こして書き上げます。
ご迷惑おかけしました。

大志の灯火を抱いて　其の十二

人間、やらねばならぬ時というものはどうあがいても避けられない。それはアンカーとして最後のバトンを受け取る時であったり、どうしても分からない問題に対して六角鉛筆を転がす時であったり、そして今この瞬間であったり。

「シークルゥさん！　やりますよ、大仕事ですっ！！」

「エムルがヴォーパル魂を張っている中、拙者が怖気付くなど親父殿に顔向けできんで御座る！」

なんの偶然かシャングリラ・フロンティアで再会したゲームの先達。交友と呼べる程の関係ですらないが、彼らが困難に打ち勝たんとするその手助けが出来るのであれば、したいと思うのが秋津茜にとっての人情というものだ。

話には聞いていたリュカオーンの不可視の攻撃、その弱点は「光」であるという。

――恐らく本体の身動きが止められた以上、奴は分身を用いた打開を狙うはずだ。というかそうであってほしい。

「燃えてきましたよ……！！」

恐らくサンラクは秋津茜ではなく、シークルゥの戦力を以って分身を食い止めてほしいと考えて秋津茜に話したのだろう。それに対し

て文句があるわけではない、もしやベルセルク・オンライン・パッションで自身の我儘に付き合ってくれた親切なプレイヤーと同じ方では、と不確定な予測の為だけにシークルゥとエムルに戦闘のほとんどを任せてここまで来たのだ。

首に付けたアクセサリーの効果もあってレベルはほとんど上がることなく、この場において一番の足手まといが自分であることは分かりきっている。だがそれでも、シークルゥが不可視の分身を見据えるために「光」が必要であることを悟った秋津茜は「自分に任せてほしい」と宣言したのだ。

「本当に足音しか聞こえない……見えないけど、いますっ！」

「秋津茜殿！　拙者は何時でも出陣できるに御座る！」

「もう出陣自体はしてるんじゃないですかね？　まぁいいや、行きますよ！！」

秋津茜は己の顔を覆う……あの黄金の龍に刻まれた「呪い（マーキング）」を隠すという目的以上に、シャンフロを購入したことに舞い上がって現実の素顔そのまんまな顔を隠すために付けている狐面をズラして素顔を露出させた。

左眼を交叉点として、顔に大きく刻まれたバツ印の紅い模様が秋津茜の表情の変化につられて歪む。

「刃隠心得、奥義！」

この魔法（忍法）は極めて珍しいことに、プレイヤーの肺活量が威力に直結する。尤もレベル５０すら越えていない秋津茜では見てくれの模倣が限界であり、威力自体はあまりに乏しい。

職業「忍者」の獲得における最終段階、見習い忍者達の師匠として様々な修行クエストを課す「隠居忍者カスミ」が卒業していく新米忍者達に餞別として与えてくれる忍術の記された秘伝書。
プレイヤーの間では「リセマラ不可の忍術ガチャ」と呼ばれる最後のクエスト報酬に於いて秋津茜が引き当てた「奥義（大当たり）」は、記憶に強く残る竜の息吹を模倣する忍者の秘奥義である。
そしてゲームを始めて一月も経っていない秋津茜が遭遇したドラゴンはただの一体のみ。

「すぅうぅう……【竜威吹（リュウイブキ）】！　わぁ――――っ！！！」

頑張って覚えた印による手の動きを完遂し、出す必要のない大声と共に七つの最強種が一体「天覇のジークヴルム」のブレスの見てくれだけが模倣された、炎を超えてビームと化した大熱波が暗い夜空に煌々たる光をもたらした。

天覇のジークヴルムが放つブレスは炎にあらず、されど強烈な光は威力が落ちどもその光量に不足なし。
本家のブレスが城塞すらも軽々と倒壊させることを鑑みれば、秋津茜の口の前に展開された陣から放たれるそれは大樹と爪楊枝ほどの差がある。だが黄金の竜王が放つ太陽の代理たりうる程の高熱に及ばなくとも、この場限定で光量を引き上げることはできる。

「ぁぁぁぁ……あっ、ごめんなさいぃぃ――――っ！！」

「ピィイ！？」

途切れかけた声は急降下を敢行する朱雀の翼にブレスが掠ったことへの謝罪によって再び勢いを取り戻す。そして既に分身への本命、

片刃の剣を持つ兎は駆け出していた。

「拙者の心眼、確かに見抜いたで御座る！」

夜明けまではまだ時間がある、だが秋津茜の放った模倣ブレスによって照らされた草原から夜闇が駆逐されたことで、不可視の狼は半透明程度までその姿を暴かれた。その爪牙が狙うはサンラク、しかし人と狼との間に刀を抜いた兎が飛び込んだ。

「刮目せよ！　我が【タケノミカヅチ】を！！」

抜き放たれた刃が向かう先はリュカオーンの分身ではなく、シークルゥの真下の地面。突き立てられた刃から可視化された力を示すポリゴンが大地へ流れ込む。そして次の瞬間、シークルゥの眼前まで迫った不可視のリュカオーンの足元から、土と草を押しのけ屹立した幾本もの「竹」が槍衾のように、格子のように、あるいは鉄壁が如く分身の進撃を食い止め、貫いたのだ。

「ううむ、一撃でまやかしの狼を消すには至らぬで御座るか……」

「ケホコホッ……シークルゥさん、前々から思ってたんですけど、なんで刀を地面に刺すと、竹が生えるんですか……？」

「修行の成果に御座る」

自分も修行すれば水晶や竹を生やせるようになるのだろうか。口からドラゴンブレスを放つことが出来る自称初心者は、リュカオーンとの決着をつけるべく戦う先達達の姿を見るのだった。

口からドラゴンブレスをぶっ放せる大作ゲーム、それがシャングリラ・フロンティア。

いやいやいや、なんだあれやべーな。明らかにロボゲーとかで見るようなレーザーだったぞ今の。だが不可視のリュカオーンの姿が暴かれ、シークルゥが使った……魔法？　なんかやけに緑緑(みどりみどり)した壁によって分身は封殺された。今こそこちらの切り札を叩き込む時だ。

「ここで決めよう！」

リュカオーンが俺を見据える。それはたまたま近くにいた俺を見ただけなのか、自身が呪いを付与した俺を見ているのか。

だがその目は見ていてとても小気味がいい。

「ぶちかませ！！」

『ポイントマーキング、攻撃ヲ仕掛ケマス』

エムルが攻撃を仕掛けたリュカオーンの後脚。即再生するとはいえ、再生中の部位は脆いのが世の常人の常と言うもの。どれだけ主役を痛めつけた強敵でも再生怪人になればワンパンで死ぬのだ。

いやそれは関係ない、今重要なのは急降下攻撃を仕掛けた朱雀の刃が、エムルによって不安定な状態となった後脚を貫き、自身を楔とするかのようにその動きを封じ込めたと言うことだ。活動可能限界を迎えた朱雀は攻撃の寸前にすでに電源落ちしていたが、加速した機体の動きはもはや止まらない。まさに捨て身の献身、ご褒美はオイルでいいのかな？

そして敢えて言わせてもらおう、この手の展開じゃお約束すぎるほどにお約束なあのセリフを……！

「この瞬間を待っていた！！」

実のところを言えば、この戦闘中右拳の機能はずっと使用されていた。それは右拳に内蔵された機能の片割れ、即ちアイテムとしての能力は二つある。まず一つは「右拳」としての能力である、月光を当てることで五分で晶弾一発分の魔力をチャージする能力。朱雀で雲を払ったのは不可視の分身を封じるという目的の他に戦闘を通して右拳の能力を万全とするためだ。

そしてもう一つ、これは煌蠍の籠手(ギルタ・ブリル)という武装そのものの能力。それはチャージした魔力を全て破壊力(ダメージ)に転換し排出する、極めてシンプルなダメージブースト。何より恐ろしいのはこの蓄積ダメージ……魔力蓄積上限が無い。それだけ見れば最強無敵に思えるがそうは問屋(運営)が卸さない。超過機構(イクシードチャージ)にはバ火力を叩き出すだけのデメリットが存在する。

まず当然ながら、超過機構を発動するためには魔力(エネルギー)をケチらなければならない。特殊パラメータが表示され、どれだけエネルギーがチャージされたのかを確認することはできるが、晶弾を使っていれば当然その蓄積は進まない。

次に反動。超過機構の説明文に「使用者及び武装は極めて甚大な反動ダメージを受ける」とある。極めて甚大、という単語からして調子に乗ってチャージしまくると最悪暴発して周囲ごと消し飛ぶこと

すらあり得る。反動ダメージ、自傷ダメージを確定で1耐える俺自身が死なずとも、武器は消し飛ぶし周囲も消し飛ぶ。
そして最後に、超過機構は一度使用すれば次に使用可能となるまでのリキャストタイムがなんと一週間後、週に一度の楽しみにしろってか。

諸々を含めて切り札と呼ぶべき超過機構(イクシードチャージ)であるが、今切らずしていつ切る手札だというのか、何もかも吹っ切って「最大火力(アタックホルダー)」の称号を奪い取るくらいの大火力を叩き込んでやりたい衝動もあるが、シナリオＥＸですらない前哨戦でそこまで捨て身にはなれない。それに俺はあくまでも本命を通すための前段階、相手をひるませるジャブでしか無い。
第一のエネルギー問題と第二の反動問題も含めて今回はお試しも兼ねた「蓄積８０％」でぶちかます。一週間後まで再使用不可能であるが、まさかそんな早急にこれが必要になることも無いだろう。そんな定期的に世紀末な血戦してたら身がもたない。

「お前が月を避けるなら、俺が月を叩きつけてやる」

右拳の各部がスライドし、内蔵された黄金の水晶が輝きをさらに増す。あの日水晶の断崖で死闘を繰り広げた金晶独蠍の心臓……金晶独蠍(ゴールディ・スコーピオン)の命晶核(めいしょうかく)に月の魔力が注ぎ込まれ、内蔵機構が軋み叫ぶような方向と共にエネルギーを破壊力へと転換していく。
リュカオーンに逃走の術は無い、眠りについた朱雀が後脚を封じている限りやつは回避という選択肢を選べない。であれば迎撃か？
否。

「俺のほうが速い！！」

こちらの位置取り、あちらの顔の位置、タイミング、発生フレーム

の優位、ヘイトの混乱。全部が繋がりくっついて、「作戦」という名の蜘蛛の巣がリュカオーンをがんじがらめに縛り上げる。
さぁ、メインディッシュの前にはオードブルだ、くれぐれもこれで満腹（瀕死）になってくれるなよ？

「あの夜の礼だ、受け取れ……【超排撃（リジェクト）】‼」

黄金が漆黒を食い破って、爆ぜた。

大志の灯火を抱いて　其の十二（後書き）

竹ミカヅチ（小声）

超過機構（イクシードチャージ）：超排撃（リジェクト）
数タイプある「機装」の中でもシンプルイズベストに破壊力に特化した超過機構。
用いた素材が秘めるエネルギーをオーバーヒートさせて莫大な破壊力を生み出す、半ば「自爆」の意味も含む超火力攻撃。
ちなみに煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手の場合「右拳に仕込まれた針を敵にブッ刺して「水晶化」エネルギーを流し込み、内側から大爆発させる」という中々にエグい設定。
どれだけ堅牢な装甲があろうが、強烈な筋肉があろうが、流し込んだエネルギーによって敵を構成する物質を「水晶」に変換して爆砕してしまう。要するに「煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手の」超過機構（イクシードチャージ）の効果は超大ダメージ＋装甲貫通効果＋極めて甚大な反動、です。
他の「超排撃」型は追加効果の部分が違っています。

大志の灯火を抱いて　其の十三（前書き）

ようやく復旧完了しました……これで安心してハイラル救いに行けます

右拳に仕込まれた針がアッパーカットの着弾と同時にリュカオーンの下顎を貫く。文章にしてしまえば超火力を防御貫通で叩き込むだけのシンプルなものではあるが、実際の光景はなかなかに刺激的だ。針より注入されたエネルギーは物質化した夜すらも侵し、砕く。使い方の感触としてはパイルバンカーが近いが、あくまでも針は破壊力の前準備でしかない。刺突点を中心にリュカオーンの下顎が結晶化する、そして如何なる装甲をも砕きやすくした後には蓄積された破壊力が解放される。

「おぉらぁ！！」

人間一人を噛み砕いて余りあるリュカオーンの顎を下から持ち上げてしまうほどのエネルギーの噴出が至近距離で爆ぜる。黄金色の大爆発はリュカオーンの下顎を粉砕し、そして右拳に亀裂が走る。

「うぉ、ぐぅぅぅ！？」

右拳が俺の意思に反して暴れんとする、下から上に放たれた黄金の破壊が右拳を押し戻さんとしているのだ。慌てて右拳を支えんとするが、そのタイミングで一際大きな爆発が俺とリュカオーン双方に衝撃波を撒き散らす。

「ぶっ！？」

例えるならいきなり出力最大の巨大扇風機を全身に食らったような、制限された痛みの表現は感覚が一時的に消える「圧」となって俺の

全身を張り手で打つ。
あいにく俺は自身の身体を二つの足のみでしか固定していない、それ故に押し出されるような衝撃に抗う程のふんばりを維持することはできず、無双ゲーでプレイアブルキャラに吹っ飛ばされる雑兵よろしく俺は真後ろへと吹き飛ばされた。

「サンラクさん！」

「大丈夫！　ぶちかませ！！」

全身が重く、身体に鍵を掛けられたような感覚。この感覚は覚えがある、体力が風前の灯である証拠だ。

「８０％ですらこれかよ……」

２００％とか身体が消し飛ぶんじゃないか？
着地に失敗すればミリで残った体力すらも失われ、ここまで来たのに俺だけベッドで目覚める、なんてことになるだろう。

「だがこの程度の操作性程度ならなぁ！！」

フルダイブ黎明期、とりあえず最先端に乗ったはいいが持て余したクソゲーの劣悪な操作性に比べりゃどうってことはない！　少なくともオフラインなのにラグが起きるよりはずっともっと快適操作性なんだよ！！
空中で無理矢理身を屈め、重心を前方向に変更する。簡素なサンダルが草をかき分け土を掘り起こしてなお、後ろへの慣性を軽減せんと二つの線を地面に刻みつける。前に傾いた重心も気を抜けば俺自身を後ろへと吹き飛ばさんとしている、であればアプローチを変えよう。

「要するに、すっ転んでも死なない程度に回復すれば……！」

置き回復、投げ回復、口含み保留回復、浴び回復、染み回復、吸い回復、爆発回復、飛び回復、落ち回復、回復更新、重ね回復、時間差回復、避け回復、裏切り回復、回復偽装体力調整自傷、体力調整自傷偽装回復……飲むタイプ、砕くタイプ、祈るタイプ、ありとあらゆる回復シチュエーションと回復方法を網羅して来た俺にとって、吹き飛びながら回復することなどお茶の子さいさい、臍で茶を沸かすどころか強火で炒飯だって作れるわ。

不恰好なバック走のような形で転倒を防いでいた足を曲げ、真後ろへの勢いを上へと捻じ曲げる。着地までの間に回復薬を取り出し、覆面の上から染み込ませるようにして無理矢理回復ポーションを流し込……あ、鳥面でも今の俺は金属製の鳥面じゃん。鳥の覆面をつけすぎて脳みそまで鳥頭になったかな？

「これは逝ったか……ん？」

なんかこっちに来てる奴がいるんだけど、ついでに言えばそのアバターとステータスで俺をキャッチするのは無理があるだろう秋津茜……

「うごぁ！？」

「あいたぁ！」

ゴリッ、と背中に狐面が激突した感触と共に、俺と秋津茜は纏めて吹き飛ばされた。幸い秋津茜自身が衝撃の大半を受け止めるクッションになったおかげでダメージ判定を乗り越え、結果的に着地ミスで死亡、なんて間抜けたオチは避けられたが……

「あ、ありがたい……」

「きょ、恐縮です……」

ギャルゲーなら押し倒すような格好になる可能性もあっただろうが、生憎絶賛戦闘中であるためそんな色気は皆無である。二人して転がった末にうつ伏せに倒れる俺の上に膝から着地した秋津茜の気概に感謝しつつ、早急に退くように手振りで訴えるのだった。

さぁ、全員がかりでお膳立てをしたんだ……シャンフロのプレイヤーすべての上に立つ最高の火力を見せてもらおうか。

「我は混沌を手繰る者。天上に在りて天の果てへ飛翔し、奈落に在りて深淵の底へ潜行す」

この奥義(スキル)は、世界観を彩る設定から「切り札」の名を与えられている。威力や効果は下がるものの、詠唱のスキップが可能な魔法とは違い、複雑な発動条件に加えて長文の詠唱を強制する中々に面倒臭い奥義ではあるが、その威力は絶大の一言に尽きる。

「双貌たる天魔、尚も手を伸ばし極点へと至る」

天帝魔王（サタン）の「カタストロフィ」と魔王天帝（サタナエル）の「アポカリプス」、二つの奥義を以ってなお倒せぬ大敵にのみ開帳される聖と邪の二つを融合させた混沌の一撃。ユニークシナリオ「覇天に手を伸ばす魔王」、それと対を成す「覇淵に踏み入る天帝」の二つのシナリオをクリアする事で入手可能な剣と鎧が変貌を始める。「神魔の大剣（アンチノミー）」が属性を帯びる時、それを阻害する相反する属性を隔離する「双貌の鎧」がその役割を放棄、急速に赤土色の錆びれた本来の姿へと戻っていく。それとは反対に神魔の大剣には光と闇が渦を巻き、正反対のエネルギーの衝突がさらなる力を生み出していく。

「我が覇道を塞ぐ大敵よ、我が覇たる道の先導は我が他に要らず。即ち我が一撃は塞がる万象を砕く」

白と黒の交差が狙うは漆黒の狼。炎の鳥が縫い止め、致命の魔術兎が揺らがした。狐面の忍びが照らし、致命の侍兎が食い止めた。そして狼の呪いを背負う鳥頭によって恐るべき顎門は粉砕された。傷口より溢れ出す闇が下あごの骨格を形成し、牙を作り、筋肉と皮を構築して急速に下顎を再構築しているが、もはや全てが後手に回ったリュカオーンは、ある種の覚悟を宿した目でサイガー0を、秋津茜を二羽のヴォーパルバニーを、そしてサンラクを見つめる。

「我が身は天にありてサタナエル、魔にありてサタン。双貌一つに混沌を執行（な）す」

サイガー0にとってこの奥義は「覚えるのが面倒な上に使う場面がほとんど無い」という何方かと言えば無駄なものという認識であったが、今ではこの瞬間の実現の為にあったのではとすら思える。サ

ンラクの期待を、これまでの積み重ねを、任された役目を果たすべく長き戦いに終幕を。サイガー０は詠唱の終わりと共に大剣を振り下ろす。

「始源（ハジマリ）の終焉（オワリ）を謳え………「アルマゲドン」！！！」

放たれる白と黒の交差、放たれた破壊力を続く破壊力が噛み潰す連鎖、段階的に強さを増すエネルギーの奔流が螺旋を描いてリュカオーンに叩きつけられる。１．０倍の「初撃」から十段階の乗算によるダメージ判定を叩きつける正真正銘「究極の攻撃」がリュカオーンのリソースを凄まじい勢いで削り尽くす。

最後の波動が霧散し、月も沈み始めた夜空に白と黒の輝きが消えた時、そこには左半身が消失したリュカオーンの姿が。その姿形は原形をとどめること自体が困難であるのか今にも崩れ落ちそうではあり、実際左半身が綺麗さっぱりなくなっている以上立つこと自体が不可能であるはずなのに、それでも漆黒の狼は立っていた。

「まだ……足りない……？」

「流石にここからロスタイムは勘弁してほしいが……」

「アルマゲドン」発動の代償として剣と鎧から色と力が失われ、錆びつき朽ちかけた騎士の残骸と化したサイガー０をかばうようにサンラクと秋津茜が、そしてエムルとシークルゥが前へと立つ。リュカオーンは己に立ち向かった矮小なる存在に口の端を心底愉快に歪め………そして遂にその身を崩壊させた。後には地面に突き刺さった朱雀のみがその場に残される。

「やりました、か……？」

「それフラグ……いやマジでフラグはやめろよ………」

「や、やりましたよお二人とも！　リュカオーンを倒したんですよ！」

不安げなサイガー０、言葉の意味を懸念するサンラク、そして勝利を喜ぶ秋津茜。各々が現状を思う中、二羽のウサギに遅れて三人のプレイヤーはそれに気づく。

「サ、サンラクサン……み、見てますわ！　り、リュカオーンが！！」

「秋津茜殿、まだリュカオーンはそこにいるで御座るよ……！」

姿があるわけではない、だが確かにそこにいるという確信が三人と二羽が何もないはずの闇の一点に感覚を向けさせる。何も無いはずのそこにいる気配はただ静かに己の分身を打倒した開拓者達を見つめ、そして笑った。少なくともサイガー０はそう感じた。

『称号【影狼(かげろう)を穿つ】を獲得しました』
『特殊状態「導きの灯火」を入手しました』
『ユニークシナリオＥＸ「夜闇を祓うは勇気の灯火」を開始しますか？はい　いいえ』

大志の灯火を抱いて　其の十三（後書き）

この「大志の灯火を抱いて　其の十三」という一話にシャングリラ・フロンティアというゲームの世界観における重要な設定の伏線をブチ込みまくってます、特にヒロインちゃんの装備とリュカオーンの特性。

・アルマゲドン
スキル「アポカリプス」と「カタストロフィ」を同一の対象に五回使用し、なおかつ対象のＨＰが尽きていない場合のみ発動可能。本文にある通り初撃を起点に１．１～２．０倍までの十段階乗算で合計十一回のダメージ判定を叩き込む究極の切り札。
１．０倍率攻撃↓１．１倍率攻撃↓（中略）↓１．９倍率攻撃↓２．０倍率攻撃と多段ヒットするので要するに相手は死ぬ。
使用後しばらくの間剣と鎧がガラクタレベルにまで弱体化してしまう、つまりこれ以上の戦闘を拒絶する文字どおり必勝の切り札。もしもこれを用いて敗北などしようものなら、使用者には死よりも恐ろしいペナルティが課されるとか……具体的に言うと剣と鎧が呪いの装備化して状態異常まみれになって酷いことになる。

夜が明け、後悔を乗り越える……違う、そうじゃない（前書き）

とりあえず防具の防御力関連は現状これでいきます、後々修正はするつもりです。

あともしかしたらこの話は手を加えるかもしれません。

夜が明け、後悔を乗り越える……違う、そうじゃない

やってしまった、やらかしてしまった。湧き上がる後悔を達成感で押さえつけてなんとか平常を保つ。流石にこの状況でわめき散らすのは無様が過ぎる。おそらく俺が今見て、受け取った事と全く同様の処理を行っているのだろうレイ氏と秋津茜を横目でちらと見る。リュカオーンのユニークシナリオＥＸ「夜闇を祓うは勇気の灯火」を俺ではどうすることもできないクラン「黒狼」の切り札と、不確定要素の塊であるプレイヤーが握ってしまった。ここから先、俺がリュカオーンに関わることができるかどうかは分からない、それだけに留まらず「致命兎叙事詩（エピック・オヴォーパルバニー）」の秘匿すら……

「はぁ……馬鹿馬鹿しい」

「へ？」

「あーいや、ちょっと雑念がね」

そうだとも、今更うじうじしたってどうしようもないんだ。進んでしまったイベントを巻き戻ることはできない、ここからどうするリカバリするか考えるのが良いゲーマーというものだ。なおセーブデータでタイムスリップはないものとする。

どうせ悪巧みはペンシルゴンの領域であるし、まぁなんとかなるだろう……あいつ権力を手に入れるとラスボススイッチが入ってその内倒されるが今はまだその時ではない。

「ユニークシナリオＥＸ……これが、ユニークモンスターに挑むために必要な……」

「そう、墓守のウェザエモンの時は「此岸より彼岸へ愛を込めて」ってシナリオがウェザエモンに挑む為のシナリオだった」

「な、なんだかよく分かりませんけど私もそのユニークシナリオいーえっくす？　を受けても良いのでしょうか！？」

「大丈夫大丈夫、受けた方が楽しいから。それに君の援護が無ければ勝てない戦いだったしね」

そう、楽しければいいのだ。うだうだ悩んで作戦練って、思い通りに事が動くよりも、何も分からない暗闇に松明一本で突っ込む方が俺には合っている。

そして恐らくEXシナリオの鍵となるのであろう「導きの灯火」なる特殊状態、いわゆる麻痺や毒が状態異常であるなら異常ではないが平常ではない状態、という事だろうか。こういう時は黙って説明欄を見るに限る。

・特殊状態「導きの灯火」
昏く黒い夜闇の中において夜の帝王への道を示す小さな炎をその身に宿した状態。
ユニークモンスター「夜襲のリュカオーン」が一定範囲内に存在する場合、その方向を指し示す。
闇を束ねるリュカオーンは、逆説的に光を払う事ができる。リュカオーンより授けられた灯火はリュカオーンの一部であり、破棄された光である。

「要するにレーダーか」
この一定範囲、というのが広域に作用するものなのか狭い範囲であるのかで産廃かどうかが決まるのだが、少なくともこれがリュカオーンに挑む為に必要なパスポートであることは明白だ。
最初からある程度どこで何をするべきかが分かっていた「此岸より彼岸へ愛を込めて」と違い、リュカオーンを自力で探さなければならないのだろうか。
ちらと暗闇を見やれば、姿形は無くともそこにいると確信できる不可視の視線が闇を通してこちらを見つめている。上等だ、自宅に引き籠ってるのなら地の果て空の果て海の果てまで探し尽くして引き摺り出してやる。
俺の視線に篭った挑戦の意思を感じ取ったのか、不可視の圧は笑うようにその気配を霧散させ……いやちょっと待て。
「おい何勝手に〆ようとしてんだちょっと待てワンコロ！！」
お前ＡＩのくせに忘れてるんじゃないか！？　説明文に書かれた条件は満たしたんだ、忘れてもらっては困る。
「分身（お前）に刻まれたこの「呪い」、分身（お前）を打倒したんだからキッチリ解いてもらうぞ！」

忌々しいリュカオーンの呪い、レベル９９になった事でメリットデメリットの関係性はデメリット側に大きく傾いたと言ってもいい。これを解除するには「慈愛の聖女イリステラ」に解呪してもらうか、リュカオーン自身に解かせる他に方法はない。そしてパーティで打倒したとはいえ、倒したことに変わりはないのだ。ふはは待ってるぞ挑戦者よ！　なんて陳腐な終わり方をされては困る。
あんちくしょうは人の言葉を理解できている、少なくとも言葉の意味は分からずともニュアンスは理解できるだけの知能（ＡＩ）を奴は持っている。であれば自身の足と胴体を叩きながら叫ぶ俺が何を求めているのかも奴は理解しているはずだ。

「せめて装備を付けることくらいは許せよ！」

ウェザエモン相手でも半裸、金晶独蠍でも半裸、エリアボス相手にも半裸、かっこいいこと言っても半裸……防御力が欲しいんじゃない、最低限人としての身嗜みがしたいんだ。縛りプレイにしたってせめてズボンを履かせてください。

人間は「恥」を持つ唯一の生き物だ、恥じらいを失ったら獣と同じではないか。
かつてプレイしたゲームからの引用だが、なるほど良い言葉だ。女の子のスカートをめくるアクションゲームというしょーもない一発ネタのくせに、肝心のキャラクターの恥じらいが声は迫真であるのに表情のテクスチャがゴミなせいで質の悪い仮面をつけている風にしか見えない、というカレーからルーを差し引いたような点に目を瞑れば台詞回しも面白いクソゲーだったが、今の俺にはピッタリな言葉だ。
オフラインならともかく、オンラインの他プレイヤーの視線を半裸で受け止めるのはやっぱりつらい。恐らくこれまでとは比べ物にな

らないプレイヤー人口を誇るであろうフィフティシアに入る事になる、レイ氏とこのエリアの攻略を始めた時点では既に露出プレイか頭巾プレイの覚悟は決まっていたのだが……やはり服を着られる可能性があるのならそれに縋りたいのだ。尤も、その可能性（リュカオーン）に縋るどころか顎粉砕してやったんだがなはっはっはっ！

奇妙な沈黙があたりを支配する。エムル達ＮＰＣからすれば最強種たるリュカオーン相手にクレームをつけているという命知らずの蛮行に対して、レイ氏達からすればＮＰＣ相手にクレームをつけているプレイヤーとしての行動に対して、果たしてリュカオーンが如何なる返答を返すのかを固唾を飲んで待っている。

果たして薄れ霧散しかけていた気配は再び一点へと収束し、こちらへと視線が向けられた。それはまるで電話を切る直前に「あ、もう一個話すことがあった！」と聞こえてきたので通話を切ろうとする動作をギリギリで止めたような、ほんの少しの間抜けさすら感じるものであったが、やはりそこは腐ってもユニークモンスター。最低限の威厳は確保されている。

「さぁ、俺に服を（さっさと呪いを）着させてくれ（解け犬っころ）」

俺を見つめるリュカオーンはしばらくの間沈黙していたが暗闇の中に狼の姿を一瞬とらえた瞬間、突如として俺の体に衝撃が走り、宙へと吹き飛ばされて……明らかに口と思しき圧力に身体を捉えられた。風前の灯である体力で生きているということは突然のロスタイムではなく、イベント的表現であることは分かるが心臓に悪すぎる。

「さ、サンラクサーン！？」

「うわ、ぬめる！　やばい、飴玉体験会！」

「なんか余裕そうですわ！？」

余裕なんじゃなくて状況の理解が追いつかなくて思考を経ずに思ったことを直接口に出してるだけです。というかロクな準備もせず徹夜敢行だからちょっとテンションが妙な方向に突っ走ってるかもしれな……ぎゃああ舌の上で転がすな！　頭は鳥だがテイスティングしたって鶏肉の味はしないんだよ！　あっ、やばい落ちる落ちるリュカオーンの胃袋に落ちちゃう！　ここまで来て奴の夜食になるのは嫌だぁぁぁぁぁ！！

「おべぇっ」

んべっ、とでもSEがつきそうな雑な吐き出しによって俺は地面へと吐き捨てられた。畜生……地面にこびりついたガムの気持ちを理解できた……せめて紙に包んでゴミ箱に捨ててやろうな………だが今の行動はなんらかの処理を行うためのモーションであろう。そして俺の要望とリュカオーンが俺にしたことを踏まえれば一体俺にどんな変化が起きたのかはステータス画面を見れば分かるはずだ。

――――――――――
PN：サンラク
LV：99　Extend
JOB：傭兵（二刀流使い）
1，000マーニ
HP（体力）：80
MP（魔力）：50

ＳＴＭ（スタミナ）：１００
ＳＴＲ（筋力）：１００
ＤＥＸ（器用）：１００
ＡＧＩ（敏捷）：１００
ＴＥＣ（技量）：８０
ＶＩＴ（耐久力）：１６０１
ＬＵＣ（幸運）：１２９
スキル
・縷々閃舞（るるせんぶ）
・一念岩穿（いちねんいわうがち）
・フォーミュラ・ドリフトＬｖ．１
・瞬刻視界（モーメントサイト）
・アガートラムＬｖ．１
・トライアルトラバースＬｖ．１
・遮那王憑き
・グラビティゼロＬｖ．１
・フリットフロート
・月狼の誇り（マーナガルム・プライド）
・致命秘奥【ウツロウミカガミ】
・バーンアウトＬｖ．１
・ライオットアクセルＬｖ．１
・血戦主義
・レテ・バニッシャー
・ダーティ・ソードＬｖ．１
・壊刀乱魔
・致命剣術【半月断ち】参式
・戦極武頼Ｌｖ．１
・剣舞【紡刃】
・パーシスタンド
・メロスティック・フット

装備
左右：煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）
頭：規格外特殊装甲頭機殻【艶羽】（ＶＩＴ＋１２００）
胴：リュカオーンの刻傷
腰：発掘研磨腰帯【古兵】（ＶＩＴ＋４００）
足：リュカオーンの刻傷
アクセサリー：格納鍵インベントリア
――――――――――

・リュカオーンの刻傷
夜の帝王の分け身を打ち破りし者を、最早リュカオーンは餌として認識しない。
それは自らの手で仕留めるにふさわしい「敵」の証明であり、最強種が認めた強者の刻印である。
魂に刻み込まれた呪いは黒狼の真なる姿を打ち破る他に解く術無し。
「リュカオーンの刻傷を持つキャラ以上のレベルのモンスターが積極的に戦闘を選択します」
「リュカオーンの刻傷を持つキャラ以下のレベルのモンスターは積極的に逃走を選択します」
「リュカオーンの刻傷を持つキャラはあらゆる「呪い」を無効化します」
「リュカオーンの刻傷を持つキャラはＮＰＣとの会話で補正がかかります」
「リュカオーンの刻傷を持つキャラは改宗（コンバーション）することができません」
「リュカオーンの刻傷が付与された部位に装備したアイテムは一定時間で破壊されます」

違う、そうじゃない。

要するに「私の餌だから手ェ出すな」から「こいつは私が認めるくらい強いよ」に変わりました。
「本当に御座るかぁ〜？」と強モンスターが積極的に殺しにきます。そしておめでとうサンラク！　時間制限つきで服を着ることができるよ！　制限時間オーバーしたらギャグみたいに服が破壊されるけどね！

リュカオーンの奇妙な沈黙はその場で「刻傷」の内容が生成されているローディングだったりします。
ＡＩがプレイヤーの言葉を判断して思考しているわけです、ムダニ＝ハイテクノロジー！
これはＮＰＣがプレイヤーの言動を理解、学習しているシステムの応用です。例えばプレイヤーがＮＰＣに「私に似合う服を選んで！」と頼んだ場合、ＮＰＣはサーバーからプレイヤーの戦闘傾向や素行をロードして大体の傾向から服のタイプを決定します。
要するに日頃の行いやその場の行動、ロールプレイが割とシャレにならない重要要素なのです。

違う、そうじゃない。そうじゃないんだよリュカオーン、俺はそう難しい事は言っていないだろう？　俺はただ「呪いを解け」と言っているんだ、断じて「呪いを更新しろ」なんて言ってないんだ。ましてや内容を充実させて欲しいわけでもないし、何故よりにもよって時間制限付きの装備破壊効果なんて追加したんだ？　あれか？自分の住まいに自爆機能つけないと気が済まない系の思考回路でもしてんのか？　ははは、腹にダイナマイトでも巻きつけておけクソッタレめ。

「しかもなんか悪化してるゥーーー！？」

「ううむ、まるで生まれた時より身体に刻まれていたかの如く強く刻みこまれているで御座るな」

俺の目には従来の効果に加えて「強敵呼び寄せ機能」と「聖女ちゃんキャンセラー機能」が追加されているように見えるのだが実は誤表記とか……何、不正はない？　やかましいわ求めてるのは不正じゃなくて訂正だ馬鹿野郎。

ああっ、リュカオーンてめぇなに一仕事終えた職人みたいな雰囲気漂わせてイベント終わらせようとしてんだ待てコラ……いや待って！

「ぬわぁぁぁぁぁーーーっ！　あの野郎絶対許さねぇーーっ！！」

成る程、俺という敵の戦意を燃え上がらせるという点では奴は飛んだ策士だ。

怒りと、嘆きと、それら二つを合わせたのと同等の楽しさが篭った

叫びに満足したのか、心底楽しげなリュカオーンの気配は今度こそ完全に霧散した。
それすなわち、ここからはハードモード縛りを課した上で進まなければならないという事だ。

「二段構えのトラップは卑怯だろ……なんで跳び箱越えた先に別の跳び箱があるんだよ……人間二段ジャンプはできないんだぞ……ゲームの世界ならできるわ…………」

「大丈夫ですか？　２００ｍ走れば大体吹っ切れますよ！」

「走るは走るでもどっちかと言えばＲＴＡがいいかなぁ」

ゲーム次第では１００％は人間性が削れるのでａｎｙ％でご勘弁を。シャングリラ・フロンティアＴＡとかならあるのだろうか。とはいえ、先ずはこれから先のことよりも、今終わった出来事に喜ぶべきだ。

「とりあえずレイ氏には感謝を、普通にエリア攻略に付き合ってもらうだけだったのに、リュカオーン戦にまで付き合わせてしまって……」

「そ、そんな、お気になさらず……この程度のことといくらでも付き合いま……付き、合い…………？　付き合う……つ、つつ、つ………………ぅぁ」

振るわれる錆びついた大剣、草原に轟と風が吹き、草むらが無言で暴風発生器と化したレイ氏によってマグマの海よりも危険な領域へと変貌する。

「うぉ、危なっ！」

「い、いえいえいえいえ！　まだエリアボスを倒してませんから！　ええ、ええ！　つき、つ、つつ、付き合いますとも、ええ！」

轟音を立てて空を切る大剣、これは未だ我が刃は血に飢えていると言外に示しているのだろうか、武闘派すぎませんかこの人。ＳＦ－Ｚｏｏも色々とアレな点を考慮しなければパーティ戦に特化したハイレベルなプレイヤー達であったし、やはり如何なゲームであっても極めたプレイヤーというものはいるものだね。

つまりクラン「黒狼」はレイ氏クラスがぞろぞろいるってことか……そんな連中相手に悪巧みしてるバカ三人組がいるらしいぜ？　きっとユニークの自発もできない悪鬼と人心掌握する真性ラスボス悪魔に振り回される純真無垢なゲーマーによって構成されたクランなんだろうなぁ。

「えぇ、えぇ！　今ならジークヴルムも倒せそうです！」

「ジークヴルムは凄く強いですよ！　私なんて、頭をむしゃむしゃされちゃいましたから！」

なんだろう、まるで噛み合ってない歯車同士が凄まじい勢いで空転しているのを見ているようだ。ジークヴルムという新たなユニークモンスターの情報も気になるが、今はなんというか、疲れた。しばらくユニークモンスターについては考えないように……考え、ない、ように………………

「い、今何時！？」

「へ？　大体四時くらいですね！　わぁ、すっごい夜更かししちゃ

いました……！」
もはや夜更かしではなく徹夜だろう、というツッコミはしないほうがいいだろうか。いや夏休みシーズンであるし、今寝て昼に起きても咎められないのかもしれない。
いやそれよりもだ、約束の時間は朝九時。まだ余裕があるとはいえ、アイテム整理に武器強化、ログアウトしての休憩食事用足し風呂……そう、リアルを疎かにすればゲームにも支障が出てしまう。過去にはフルダイブにのめり込みすぎて病院に搬送された、なんてニュースが流れたこともあったし、リアルのケアはとても重要なのだ。
「今から街まで行ってランドマーク確保してラビッツに戻り、ビィラックに消耗した武器の修理を頼みつつ武器を強化して金子を確保、刻傷の検証もしなければならないし風呂入って飯食って………」
うん、時間がない。特にこのゲームの武器強化システム的に七時前にはビィラックに武器を預けなければ追っつかなくなる。
残り三時間、余裕そうに見えるが今からボスエリアまで行ってボスを倒し、フィフティシアに到着したらなんだかんだレイ氏と別れてラビッツに戻る、と過程の多さを考えるとそう余裕があるようには思えない。即ち迅速な行動が必要なわけで……
「さっさとエリアを攻略してしまおう、なんだっけ、傍聴者の竜（オブザーバー・ドラゴン）？」
「違いますよ！　私調べましたから！　確か、えーと……そう！
波乗りの竜（サーファー・ドラゴン）！」
「簒奪者の竜（ユザーパー・ドラゴン）、ですね……」
まぁなんでもいいや、この場にいるメンツであればそう苦戦する相

手でもないだろう。

だが俺達は忘れていた。それはこれが突き詰めれば命の危険がない娯楽だからこそ、失念していたのだ。

今の今まで、手持ちを全解放する勢いでリュカオーンと戦っていた俺達は手札の殆どを使い切っているということを。

「だぁぁぁ降りてこいバカヤロー！！」

「サンラクサンアタシを投げようとするのはやめるですわぁぁぁ！！」

「成る程、兎砲弾ですね！」

「良いで御座るか秋津茜殿……兎は空を飛べない、分かるで御座るな？」

「一羽二羽で数えますし行けますよ！」

「無理！　無理で御座るよ！」

「退避ーっ！！」
俺たちの攻撃が届かない高所より放たれた火球攻撃をわぁ、と散開して回避する。
無果落耀の古城骸エリアボス「ユザーパー・ドラゴン」。放たれた魔法の主導権を奪ってくるという特性は成る程厄介である、だがそれ以上にドラゴンとして備える翼を用いた飛翔がウザすぎる。
だからユザーパー・ドラゴンが降りてくるのを待つしかないのだが、よりにもよってこの臨時パーティ、物理的な遠距離職がいないのだ。
気持ちが焦っているためか実際の滞空時間以上に時間を稼がれているように感じる。エムルの攻撃はほぼ奪い取られる、シークルゥや俺は攻撃の射程が届かず、秋津茜の攻撃はそもそも火力が足りない。
であれば頼みの綱はレイ氏、なのだが……
「すいません、私が動ければもっと早く倒せるのに……」
「名誉の置物化だし、負い目を感じることはないですよ」
「そうですよ！　それに弱体化しても私より強いじゃないですか！！」
金蠍の籠手が長いリキャストとプレイヤーと装備そのものに対して甚大な負荷を強いることが火力の代償であるというのならば、レイ氏の装備はよりダイレクトな弱体化であったのだ。
聖なる白も、邪なる黒も損なわれ、金属どころか土塊にすら見えてしまうほど貧相な姿となってしまったレイ氏の鎧と大剣。現在レイ氏は約一日、全ステータスの半減に加えてスキルの使用が不可能になっているのだ。
これでもデメリットとしてはマシな方らしく、酷い場合はこれが永

続化して装備を外せなくなるらしい。

「せめてスキルが使えれば……」

「立ち回りを心得てるだけでも最低限の貢献は出来てますよ……っと、降りてきたなクソトカゲめ、総攻撃だ！！」

俺自身は双剣を構え、地に降り立った迷彩色の鱗を持つ竜へと全員で躍り掛かる。どうせ全員手札がスッカラカンなのだ、マルチ要素のあるゲームにおけるシンプルイズベスト、あらゆるボス攻略においてベストアンサーとなる必殺タクティクス「袋叩き」でこいつを圧し潰す！！

※あまりにグダったので音声のみ抜粋。

「ぴゃぁぁあ！？　たーべーらーれーまーすーわぁぁぁーー！？」

「い、妹よーっ！！」

「待てコラァ！　って待て、俺を乗せたまま空を飛ぶな！　落ちたら死ぬから！」

「今助けますサンラクさん！　ちょ、あああ私の短剣が！　私お金なくてそれしか持ってないんです！　返してぇ！！」

「あ、秋津茜さん、次降りてきた時に取り返せますから、落ち着いて……」

「私素手のスキルとか持ってないんです！　攻撃するための武器のない私ができることなんてもう手裏剣くらいで……」

「サ゛ン゛ラ゛ク゛サ゛ン゛た゛す゛け゛て゛て゛す゛わ゛ぁ゛ぁ゛」

「ええい取り敢えず咥えたエムルを離せ……あっ」

「あっ………びゃぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

「エムルーーーーっ！！」

か細く断末魔の呻きを漏らし、ユザーパー・ドラゴンがその身を地面に横たえる。リュカオーンよりは弱いからすぐ倒せるだろうと高を括っていたがとんでもない間違いだった。

フィフティシア直前のエリア、即ちユニークの絡まないボスキャラの中では終盤のボスである奴はリュカオーン戦で消耗した集中力をかき集め、漸く倒すことが出来た強敵だった。

「や、やりましたね……」

「この、モンスター……こんなに苦戦するようなボスだったんです

ね……」

「次挑む時は……投石機（カタパルト）とか、持ち込みたいな……」

「はは、は……」

エムルは落下死しかけるわ、秋津茜は武器を盗まれるわ……レイ氏がステータスガタ落ちしたとは言え、魔法で自らを強化して要所要所でアシストしてくれなければ戦闘時間は更に伸びていただろう。やはり空を飛ぶモンスターは厄介、そう強く再確認させられるボスであった。

フィフティシアへと通じる道に立ちふさがる最後の関門を突破し、明るみ始めた空を見ながら俺達はフィフティシアへと歩を進める。リュカオーン、ユザーパー・ドラゴンと立て続けに激戦を繰り広げた為か、いつしかほぼ初対面の俺達三人は他愛のない雑談をするくらいには打ち解けていた。

「今こちらに残っている、プレイヤーは次の、調査船に乗る準備を、進めてます。古城骸で他のプレイヤーを見なかったのは、時間もありますが多分、皆あの古城に潜っているからだと思います……」

「そうなんですね、あのお城にはどんなモンスターが出るんですか？」

「なんと言うべきか……線画の騎士、でしょうか」

「？？？」

頭の上に大量のクエスチョンマークを浮かべる秋津茜と、それに対してよりわかりやすい説明を試みるレイ氏を尻目に、前を見ていた

俺とエムルがその存在に最初に気づいた。

「おお、あれが……」

「……はい、あれがアップデート前まではプレイヤーが到達できる最後の街であり……今は、新大陸へ向かうための、門出の町です」

夜明けの太陽が昇る。意外なことにこのゲームで初めて見る海が日の出の陽光を受け、キラキラと輝きに波打つ。

あの先にまだ見ぬ新世界があり、かつて冒険の果てとして在った十五番目の街は今、新たな世界へと旅立つ開拓者を見送る街として在る。

ファステイアより旅立った開拓者の終点であり、大海によって隔絶された新たな世界に向かうための出発点である、この大陸唯一の人間による王国「エインヴルス」が持つ終わりにして始まりの港街フィフティシア。俺たちはついに到達したのだった。

激闘の果てに隔絶の大海（後書き）

すまないユザーパー・ドラゴンくん……リュカオーン戦の後にどんな戦闘描写をしても蛇足にしかならないと判断したので君との戦いはギャグオチカットだ…………

あと二、三話で二章のエピローグに入り、その後一週間ほどお休みさせていただきます。メインは書溜めですが、かねてより感想欄などで提案されていた設定やら何やらを詰めた別作品を作ることも検討しています。キャラ紹介などもそっちに移行させるかもしれません。

夢想に従い愚行を通す、その原動は極端か熱狂

運命神の導きにより前世から夜襲のリュカオーンと戦う宿命の聖戦士が転生してリュカオーンに挑んだはいいが力及ばず呪いを刻まれ、運命に導かれ呪いを解く巡礼の旅を続けるさすらいの戦士……だったのだが遂に夜襲のリュカオーンの打倒に成功し、あの最強種に明確に敵として認められた鋼の獣を従え、何人たりとも触れることすら叶わぬ闘気を纏いし宿命の超戦士。

それが今の俺の設定らしい。

「ふっふっふ……アタシのくちはっちょーてはっちょーも日々成長してるんですわっ！」

最近はずっとマフラー擬態で人目を乗り切っていたので、久しぶりに見る【姿形変化（メタモルフォーゼ）】によって人の姿へと化けたエムル。
これまでのある種の模様にも見える刺青のような痣であった「呪い（マーキング）」から、シンプルだが乱雑な……まるで全身をズタズタに引き裂かれたような、傷跡を黒く染めたようなおどろおどろしい模様を胴体と足に刻み込んだ鳥頭を決戦兵器でも見るかのような目で関所の門番（NPC）が見送る。
尤も、後ろに控えているのが若干土っぽくなったとはいえ威圧感を放つ「最大火力（アタックホルダー）」や、中にモコモコした白マント（シークルゥ）をくっつけた狐面の忍者というやべー軍団を相手に強く出られないのも分かるのだが。

「魔力（MP）の方は大丈夫なのか？」

「ふふふー、アタシも日々成長してるんですわっ」

「シークルゥさんはあれ出来ないんですか？　ねぇシークルゥさん？　もしもーし？」

「必死にマントのふりしてるんだから話しかけるのは勘弁してあげろよ……」

「はっ、そうでした！」

朝五時ともなればログインユーザーの数も増え始める時間帯だ、ちらほらとＮＰＣとは別種の視線に晒されているのを感じつつ俺はレイ氏へと向き直る。

「今日は何から何まで本当にありがとうございます、エリア攻略のみならずリュカオーン戦にまで付き合わせちゃって……」

「いえ…………えぇ、私も楽しかったですから。また何か私が協力できるような事があれば……是非」

「その時はまた連絡します」

果たしてレイ氏に頼らざるを得ないような状況になるリュカオーンクラスの奴がそうポンポンいるのかとも思うが、それを差し引いてもレイ氏との共闘は楽しかった。それだけで「次」を考えるには充分だ。

街の観察は後でもいいだろう、今はリュカオーンとエリア攻略で消費した諸々を補充しなければならない。

わぁわぁと街を見渡しながら黙り込んだマントに話しかけるやべーやつはさておき、これにて解散とラビッツへ行く為に何処か人目のない裏路地を……と視線を巡らせていた俺は、ふと路地裏に人がい

ることに気づく。
それは全身を奇妙な紋様が描かれた真っ黒なローブに身を包み、フードから覗く皺くちゃの顔を笑みに歪めて明確に俺を手招きしていた。

「なんだありゃ」

「わ、路地裏から手招きしてるですわ……なんだか怪しいですわ……なんでサンラクサンそこでアタシを見るですわ？」

「いや、路地裏から手招きして俺をラビッツに連れていった不審者がいたなぁ、と」

「言われてみればそうですわ！？」

愕然とした様子で硬直した擬人化エムルの肩をポンと叩きつつも、俺は路地裏で不審者呼ばわりされてもめげずに手招きする謎の人物の正体を見極めんと注意深く観察する。だが意外にも、いやある意味では不思議ではないが謎のフードの正体の答えは俺の真横からもたらされた。

「あれは、覚醒の導師アーカヌム……ああ、レベル９９だから……」

「説明をお願いしても？」

俺の言葉に、別れる直前に俺が見ているもの、俺を見ているものに気づいたレイ氏がその正体に言及する。

「覚醒の導師アーカヌムは、レベル９９になったプレイヤーの前に現れる、特殊ＮＰＣ……です。特殊ジョブ「神秘（アルカナム）」の取得ができま

す」

「特殊ジョブ？」

このゲームにおけるジョブ、職業とは要するにスキルや魔法の覚えやすさに影響を与えるものだ。魔法使いであれば魔法を覚えやすいし、俺のように二刀流使いであれば剣や立ち回り系のスキルを覚えやすくなる。そんな中で「神秘(アルカナム)」は通常のジョブとは明らかに毛色が違うものであるらしい。

まず第一にこのジョブは副業、サブジョブ限定のものであり、言い換えればサブジョブの欄を潰してプレイヤーに「装備」される。

第二にこの「神秘」はスキル習得ではなくプレイヤーのステータスに直接干渉する。

そして第三にタロットの大アルカナに対応する「神秘」はその殆どがピーキーな性能をしているということ。

「……例えば「戦車(チャリオット)」の「神秘」は、ＡＧＩとＳＴＲを二倍近く引き上げますが、その代わりにＳＴＭの消費速度も倍になります」

「なんじゃそりゃあ……」

超テクノロジーで作られた燃費が悪すぎる車のようなちぐはぐっぷりだ。とはいえ「超特化型」として有用な神秘もそれなりにあるらしく、「魔術師(マジシャン)」の神秘を得た状態で魔法特化にすればＳＴＲが死にきる代わりに超火力砲台を実現できたりもするらしい。

しかもタロットカードに描かれるイラストはプレイヤーの姿を模したものであるらしい、無駄なところで細かいな。

「ちなみにレイ氏は何を引いたんで？」

「その、「世界（ワールド）」の神秘を……」

聞けば全ステータスに上昇補正が入る代わりにスキル、魔法などで発生するデメリットが二倍になる、というものらしい。それ控えめに言って大当たりでは？　やはり持ってる人は持ってるんだな、と改めてレイ氏というプレイヤーの凄まじさを実感する。

「戻る前に「神秘」チャレンジとやら、してみるか」

俺は迷うことなく手招きする老人の元へと歩いていく。知り合いがガチャに挑むのであれば結果が気になるのが人の常、恐る恐ると言った様子でレイ氏や秋津茜も後ろから俺と黒ローブ……覚醒の導師アーカヌムを見つめている。

「えーと、おはようございます？」

「強気に至りし者……汝が神秘を、覚醒してしんぜよう……」

「あ、これ話通じないタイプか」

「さぁ、汝が神秘は運命が決める……札を引きたまえよ」

シャンフロではなかなか珍しいこちらからの会話に一切反応しない老人は、懐から取り出したタロットカードを空中へとぶちまける。だが不思議なことにタロットカードは地面に落ちることなく、空中で球体を作るように浮遊している。さらに言えばその全てのカードは表面が俺には見えないような挙動をしていた、本当このゲーム無駄なところに凝ってるな。

「これってランダム？」

「いえ、恐らくですがなんらかのパラメータを、参照しているのではと、言われてます」

「つまりどう引こうが結果は変わらないわけだ」

ベシッと雑にカードの一枚を掴み取る。描かれていたのは、半裸の鳥頭と二足歩行の兎が一緒になって歩いているイラスト。番号は0番、ゲームの題材ではお約束の部類なのでうろ覚えとは言え心当たりがある、確かタロットで0番のカードは……そう、

「愚者か」

「ほう……汝、定住せざる者、その歩みは放浪か、それとも目的ありし旅か……だが一つ言えることがある」

「というと？」

「……愚者の神秘は汝の再起を助けるであろう、だが汝は汝の他に助けを求めることができぬ、故に病は汝の首により鋭い刃を突きつけるであろう……」

「えーと……これの効果分かります？」

「愚者は確か……スキルのリキャストタイムが半分になる代わりに……状態異常で受けるダメージや持続時間が倍になって、回復アイテムの成功率が確率になる……だった、はずです」

えーと、うん。

大当たりでは？

夢想に従い愚行を通す、その原動は極端か熱狂（後書き）

実際ステータスに大幅な補正が入ってもフルダイブ故に自分で動かなきゃならないので神秘（アルカナム）は強いんだけど使いづらい、というのが現状の評価。ぶっちゃけある程度ユニークが充実すると必要性は薄れるので実質ユニークを持たないｏｒ少ないプレイヤーへの救済的意味合いがある。
ちなみにもしも主人公がもっと本格的にアイテム掘り作業やらなんやらをしていたら引いたカードは愚者（フール）ではなく運命の輪（ホイール・オブ・フォーチュン）でした。

ちなみに余談ですが
ペンシルゴン：力
サイガー１００：女帝
アニマリア：太陽
だと思います

エピローグ　一期一会を何度でも

「しっかし愚者（コレ）、大当たりも大当たりだなぁ……どうせ安全圏で回復できるし」

「サンラクサンにぴったりですわ！」

「それは「お前は愚者（バカ）だ」ってことか？　ん？」

「正直バカじゃなきゃ半裸でリュカオーンに挑もうとか思わないですわ」

「おい正論を言うのはやめろ、まるで俺がバカみたいじゃないか」

「…………」

「その「ああ、やっぱり頭がおかしくなって……」みたいな目もやめーや！　そもそもリュカオーンのせいだからぁぁ！！」

わぁわぁと騒ぎながら路地裏へと駆けて行ったエムルとサンラク。

レベル９９に到達すると発生する「神秘（アルカナム）」イベントを終え、愚者（フール）の神秘を授けたアーカヌムは既にその姿を消している。ライブラリの調べによればこの王国の黎明期から存在するという老人（NPC）はプレイヤーのそれまでのプレイから神秘を決定するのではと考えられている。

そして愚者（フール）の神秘（アルカナム）はその中でもある程度の条件が判明している部類

だ。

（確か、レベル９９になるまでにかかった時間が短ければ短いほど愚者（フール）を獲得しやすくするんでしたか……）

例えば「運命の輪（ホイール・オブ・フォーチュン）」はレベル９９になるまでにどれだけレアドロップを取得したかが関係していると言われているし、「皇帝（エンペラー）」や「女帝（エンプレス）」などは共通してクランリーダーとして多くのプレイヤーに指示を出してきたプレイヤーが受け取る傾向が高い。
サイガー０自身が持つ「世界（ワールド）」や「審判（ジャッジメント）」などは取得条件が明らかになっていない神秘（アルカナム）も多いが、レベル９９にさえ到達すれば大アルカナに対応したいずれか一つを確定で受け取ることができることから、プレイヤーの間でも盛んに考察が行われている。
閑話休題、サンラクがこのシャングリラ・フロンティアを始めてまだ一ヶ月も経過していない。そしてどこでパワーレベリングを行ったのか、昨日サイガー０と再会した時、彼は既にレベル１００オーバーのモンスターを倒した者のみが到達する「Ｅｘｔｅｎｄ」の領域に足を踏み入れていた。レベル９９のプレイヤー複数人に介護を受けなければ到達しえない領域に彼がほぼ独力で到達しているという事実はサイガー０に驚愕と納得をもたらしていた。

（あんなに難しいゲームをたくさんクリアしてますし、納得といえば納得です）

かつて陽務（サンラク）　楽郎との会話のタネにする為に購入したゲームの数々は、シャンフロ最高クラスにまで到達したサイガー０をしてクリアを断念するようなものばかりであった。であれば自分ですらレベル９９になれるゲームで彼がより早くその高みへ到達することはそう不思議なことではない。
いつの間にかサンラクとエムルは路地裏から忽然と姿を消しており、

サイガー０は昨晩からずっと張りつめていた緊張を吐息と一緒に吐き出す。たった一度の徹夜行軍、何度も経験しているというのに今回のそれはあまりにも濃密な一晩であった。夜襲のリュカオーンを打倒したという事実はサイガー０のステータス欄に表示された特殊状態「導きの灯火」が確たる証拠として存在しており、およそ一年間姉が追ってきた相手をたった一晩、それもぶっつけ本番で倒してしまったということだ。果たして姉になんて言おう、サイガー０……もとい玲は頭を悩ませる。正直、リュカオーンが絡むと姉は面倒臭くなるのだ。

（姉さん、「ユニークに関連する事である以上私自ら調べたい」って無理矢理こっちに残ったくらいですし……）

本来であればサイガー１００を筆頭に新大陸の開拓を行うはずが、突如現れた「墓守のウェザエモン」討伐の看板を掲げるクラン「旅狼」の出現により、無理矢理こちらに残った姉。もしここで「サンラクさんと一緒にリュカオーンを倒しちゃいました」などと言えばどうなるか……恐らく六割くらいの確率で「ではもう一度頼む！今度は私も含めて！」とでも言って彼を捕獲&リュカオーン探しの旅が始まるだろう。

身内ながら、姉は良い意味でも悪い意味でも強引な人間であると玲は知っている。それは多くの人を牽引するカリスマであり、姉が常々愚痴っている「厄介ごとの権化」ことアーサー・ペンシルゴンの事を言えないくらいには人を振り回すものだ。

（……知らせるのは一週間くらい後でいいんじゃないですかね）

疲れと充実による燃え尽き症候群の諸々が組み合わさり、思わずそう考えてしまうサイガー０。サンラクは待ち合わせの前に消費したアイテム類や武器の修理などをする、と言っていたがそれは彼女も

また同じである。結果的にリュカオーンを相手取ることになって過剰とも言える準備は十全に役に立ったが、やはり懐に響いたのもまた事実。所持金の面では問題ないが、入手の手間はいかんともしがたい。

（私も一度ログアウトして、玉露を淹れてもらいましょうか……）

ノーダメージでリュカオーンと相対し続けたサンラクと確実に攻撃を当てる為にタイミングを計り続けたサイガー０。アバターの消耗以上に本人の疲労もまた看過できない。クラン「黒狼」が拠点としている場所へと向かおうと一歩踏み出したサイガー０は、改めて昨晩から今までの夢のようなひと時を思い出して笑みを浮かべる。

初めて会った時はその他大勢の中の一人でしかなかった。いつしかどんな日であっても楽しげに帰る彼の姿に惹かれていた。彼が熱中しているものに手を出して挫折したことも少なくない、巨大生物に収穫間際の作物を何度も踏み潰されてはさすがに心が折れる。それでも彼が楽しんでいるものを知って、彼を知りたくて、時に協力者からのアドバイスを受けて今がある。

彼が笑って楽しんでいる中に、自分が含まれているということ。彼と一緒に楽しいことを出来たという事実。それら全ては輝く思い出となってサイガー０というデータに、斎賀　玲という人物の記憶に刻まれて……それがどうしようもなく、嬉しい。

「えへへへ……」

まるで悠久の時の中で朽ち果てた鎧が動き出したような、ある種のちぐはぐさすらをも威圧に変えた巨躯の騎士。その兜の隙間から漏れ出した威圧のかけらもない緩みきった笑みを聞いた水夫のＮＰＣが直立不動の蛇でも見るかのような驚愕の視線でサイガー０を見ているこことに彼女は気づいていない。そのままスキップで踊り出しそ

うな様子のサイガー０であったが、ふとこの場にいるもう一人の人物のことを思い出す。当の人物……秋津茜はと言えば、サンラクからの別れの挨拶も話半分にフィフティシアの街並みを見ては歓声をあげていたのだが、ようやく思考が現状へと戻ってきたらしい。

「あ、サンラクさんはラビッツに行っちゃったんでしたっけ……じゃあ私たちもラビッツに行きましょうかシークルゥさん！」

狐面の忍者少女が背に纏うマントが「だからマントは喋らないで御座るぅーーー！！」とでも言いたげにはためくが、サイガー０の聴覚が脳に送った危険信号（アラート）の原因はそれではない。今彼女はなんといった？　サンラクがラビッツに行った、そこではない。自分もラビッツに戻ると…………？

「い、今なんと……！？」

「へ？」

思わず秋津茜を呼び止めるサイガー０。仮面越しですらぽかんとした表情が見えるかのような間の抜けた声に、サイガー０は意を決して訪ねるのだった――――

「だぁーっ！　畜生！」

ダン！　と見た目よりも実用性が重視された机が握りこぶしで叩かれる。苛立ちを隠そうともせず、長い長い息を吐き出した彼は、肩を落としてベッドへと倒れ込む。

「ジュリーはお家事情、ケンは喪中……くそ、メンバーが足りない……！！」

取り出した携帯端末、パスワードを入れてメールを開けば、そこには彼からの誘いに対し各々の理由で断りの文言が書かれたメールの数々。

「このままじゃ……く、他のチームに頼るのも無理だし…………」

断りのメールが続く中、日付を遡った先にある一通のメールが開かれる。そこには明らかに翻訳ツールによって無理やりに日本語に変えたのだろう文章が書き込まれていた。

『私はあなたとの再戦を楽しみにしています。　次のＧＧＣでも私の　〝流星〟があなたの　〝溶岩〟をまたしても克服します』

「………このままじゃ不戦敗なんて情けない結果になる……どうにか、どうにかメンバーを……」

そこで彼は思い出す。いつだったか、冗談交じりに考えていた「マ

ッチング」を。来たる祭りにて戦うことになる最強のヒーローと、彼女を支える強敵達と渡り合えそうな友人達の姿を。

もはや手段は残されていないのだ。そもそも彼女と彼の個人的な因縁であったが為に、チームメイトの殆どが当日にスケジュールの空きが無かったという現状。当てにしていたチームメイトも突然の用事で不参加となり、進退窮まっていた彼が必要としているのは「残り二枠」の埋め合わせ。

「ああもう、後が怖い……」

口ではこのメールによって生じる大きな「借り」をどこまでせびられるかを嘆くが、その口元には一縷の望みがもしも叶ったら、そんなｉｆを思って無意識のうちに笑みが形作られていた。

件名：折り入って頼みが
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク、鉛筆戦士
本文：交通費参加費諸々を持つから、二人ともグローバル・ゲーム・コンペティションに遊びに来ませんか？

「やっぱりすごいリアリティだね……」

「それにロボがある、文句なしの神ゲーと認める」

フィフティシアのとある宿屋にて、チェックインから実に半年ぶりに二人の開拓者がチェックアウトする。

方や褐色の肌に銀髪の、背中に弦のない奇妙な弓を背負った眠たげな表情に隠しきれない期待を浮かべた小柄な少女。方や全身に幾つもの傷跡を持つ偉丈夫……でありながら、明らかに魔法職のローブに腰に革紐で本をぶら下げた青年。互いに幼さの残る声で話し合いながら、ＮＰＣに加えてプレイヤー達のログインも増えたことで騒々しくなった港街で昇る朝日を眺める。

「……待ち合わせ場所に行く」

「そうだね」

ＮＰＣ、プレイヤー共に忙しなく港の方へと駆けていく中、のんびりとした足取りで二人が向かうは、明らかに治安を悪くデザインされた、雰囲気的な暗さが物理的に太陽の光を遮っているかのような建物の密集地。というのも、活気あふれる港街から薄暗い部分を建物ごと隅に掃いてしまったようなその場所全体を覆うように巨大な船の残骸が鎮座しており、真っ二つに裂けた半身のみが残った船の亡骸は日の出の光を遮ってしまっているのだ。

通称「破落戸（ならずもの）通り」、王国が急遽発展させた港街に生じた文字通りならず者達の掃き溜め。その中でも特定のＮＰＣに喧嘩で勝利し、連鎖的に関わっていく先にいるとある海賊から発注されるユニーク

シナリオこそが二人がある人物への交渉材料として提示したものだ。

「にしても、サンラクさんをどうやって見分ければいいんだろう」

「……見ればわかる、と言っていた」

視覚的に特徴がある、ということはネタ装備かなにかなのだろうか。

そんなことを考えながら青年……「モルド」がふと振り向いた先、

そこに幽鬼の如き千鳥足でこちらへと歩いてくる半裸の鳥頭を見た。

「オハヨウゴザイマス……」

「ひぇっ」

エピローグ　一期一会を何度でも（後書き）

終盤スケジュール管理ガッタガタになって申し訳ないです。とりあえずこれにて2章は終了とし、一週間ほどお休みさせていただきます。

それと、かねてより考えておりましたが別作品にてシャンフロの作品設定集兼本編では語られない番外編的なものを突っ込む作品を作ろうかなと考えております。その場合本編に載せたキャラ設定などを移動させる可能性がありますので、話数が減ったらそういうことだとお察しください。

書き溜めしなきゃ……

摩天楼にて流星を、深海にて異形を（前書き）

更新再開します（唐突）

摩天楼にて流星を、深海にて異形を

◇

目を覚ますと、そこはさながら金属の大樹海。空を埋め尽くす摩天楼の密集は太陽の光を受けて堂々たる輝きを放つと同時に、光の届かない影を作る。
俺が今いる場所はそんな摩天楼が作る暗部、画一的な格子模様の地図の中で爪弾きにされたどこにも繋がらない袋小路。

「よいしょ……っと」

素人目から見てもサイケデリックが過ぎるデザインな、後部がそのまま屋台として稼働するトラック……に偽装した輸送車から俺は身体を降ろす。ただ一歩踏み出しただけでトラックは頼りなげに揺れ、アスファルトに火花が散る。
ギャリギャリと音を立てて鈍重なこの身は「ケイオースシティ」へと立つ。鈍重なこの身を覆う拘束具の意匠が各部にデザインされた鎧は、宇宙の神的存在である「ギャラクセウス」によって過ぎた力を封じられている。この鎧から解放されるにはギャラクセウスそのものか、その恩寵を受けた者の力を以って破壊するしか方法はない。であればこそ、この身は流星光る場所に必ず在り、流星と相対する宿命なのだ。

「勝利条件はケイオースキューブの確保、もしくは……」

……相手ヒーローの撃破。
果たして向こうからやってくるただ一人を打倒する事と、広大な街

の中からバスケットボールほどのサイズもない箱を探す事のどちらが楽かを考え、この状況で勝つつもりでいる自分に気づいて笑みを浮かべる。

「相手はカッツォに勝ち越してるやつだってのに、勝ちを狙ってしまうのはゲーマーの性かな……よし、やってやるか！！」

ルール上、向こうがこの世界に現れるまで三十秒ある。ヒーローはいつだって悪巧みの先手を取る悪役の後手に回るものだ。

確かこういう時に「この身」はなんと言うのだったか、しばし考え思い出す。

「そうそう思い出した……さぁ、暴君の時間だ！」

誰にでもなくそう言い放ち、俺はトラックに偽装した輸送車に渾身のパンチを叩き込むのだった。

◆

目を覚ますと、そこはさながら冒涜の大海嘯。深海を埋め尽くす超古代の残影は深淵の力を受けて邪悪なる胎動を放つと同時に、抵抗する者達が走る。

俺は奇声を上げながら錆びついたサーベルを振りかぶるフジツボだらけのゾンビを蹴り倒しつつ、辺りを見回す。

「だぁー畜生！　エンカ率ぶっ壊れてるんじゃないの！？」

「エンカとはなんだサンラクよ！　「封将」にたどり着くためにはここを突破しなければならないんだぞ！」

「分かってる！　おい、あそこから屋根に登るぞ！」

「ま、待ってくれ！　俺は君のように軽々と跳ね回ることは出来ないぞ！」

「キアイト、コンジョウデ、ヤレ」

俺の言葉にひくりと口の端を引きつらせた相方であるが、自分とは似ても似つかぬ異形の殺到になりふり構っている場合ではないことは理解しているのか、ひぃひぃ言いながら半壊した建物の亀裂に手を掛けて屋根へとよじ登る。一足先に駆け上がっていた俺は相方の手を掴むと、渾身の力でその身体を引っ張り上げる。

数フレームのさで相方のぶら下がっていた場所に幾本ものトライデントが突き刺さり、俺が引っ張り上げなければ不恰好な串刺しになっていたことに気づいた相方の顔が青ざめる。

「おお友よ……またしても君に命を救われたな……この恩は魚人族の誇りに誓って必ず……！」

「なら今すぐ恩を返してくれ、即物的で悪いが……走れ」

「うおお！？　やつら、同胞を踏み台に登ってきているぞ！！」

「だから走れって言ってんだよぉ！！」

数が質量を伴えば力技で大抵のことはなんとかなる。先行く者を踏み台にし、後続く者に踏み台にされながら形成された知性のかけらもない極めて原始的な肉の梯子をよじ登ってきた異形の先発を蹴り落として俺と相方は走り出す。

「くそ、俺よりレベルの低い敵は逃げるんじゃなかったのかよ……」

「奴らは深淵の盟主の眷属だぞ、いかに恐ろしい相手でも盟主にやれと命じられれば神獣にだって噛み付くぞ。奴らはそういう契約を結んでいる」

「リスポンゾンビみてーな思考ルーチンを強制するとか鬼かよ……蛸か」

妖艶な笑みを浮かべて宙を泳いでこちらへと迫る人魚の顔面に回し蹴りを叩き込み、可愛らしい顔を歪めながら吹っ飛んで行く人魚を尻目に目的地までひた走る。

「君はなんというか……容赦がないな」

「容赦なんてものは後ろにいる魚人もどきにでも食わせりゃいいんだよ、人面魚相手に情けなんぞかけてる暇はない！」

なんだかんだ俺に並走しているサメを擬人化したような相方のような種族と違い、人魚は完全なモンスターである。美しい少女の姿をした上半身は所謂擬態、本体は下半身の魚部分であって人間部分はチョウチンアンコウの提灯と同じ疑似餌だ。

モンスターデザインをしたスタッフは相当意地が悪い、そんな確信を抱きながら今にも歌いださんとする人魚にラリアットを食らわせる。

「あれだ！　あの中に封将がいるぞ！」

「よぉぉーし……カチコミだぁぁぁ！！」

◇

爆炎と共に着飾ったマネキンが並ぶショーウィンドウが弾け飛ぶ。

破壊の衝撃はガラスとプラスチックを纏って着飾り、グレードアッ

プした殺傷力が辺り一帯に撒き散らされる。

「おっしゃオラァ！　逃げ惑え一般市民共！！　警察と消防への連絡は忘れんなよ！」

無駄に凝ったＮＰＣ達が悲鳴を上げ、顔を引きつらせて爆心地から、そして爆発源たる俺から離れようと逃げ惑う。

幾人か携帯電話を耳に当てているＭｏｂもいるし、ゲーム的なアレがアレ故に迅速にやって来る装甲車や消防車が来るまでおよそ三十秒。

トラックに偽装したこの身を運ぶ輸送車には、明らかに輸送以外を目的とした武器が搭載されていた。この身の能力は「破壊したものを取り込んで鎧に変える」というもの、所謂初期装備である輸送車纏い状態であるこの身は右手にガトリングを、左手にショットガン。脚には鈍重な機動力を補うタイヤが装着され、背中にくっついたトラックエンジンが唸りを上げて黒煙を吐く。

唸るタイヤが巨体を豪速で走らせ、軽自動車のボンネットに激突した膝蹴りが金属の塊たる乗用車をサッカーボールの如く転がす。ストリートの格子のズレ、直線通路の果てに構えるビルのエントランスに軽自動車が突っ込み、爆ぜる。

「へぇ、私の前にソレで来るだけあって、パフォーマンス目的のナメプ（舐めプ）じゃあないようね」

「出たな全米一（ゼンイチ）……！」

振り向いた先、そこには炎を背に腕を組んで立つ一人の影。全体的に白系のスーツの各部に金のアーマー、覆面には特徴的な五芒星の形をしたゴーグルが装着されており、揺らめく炎の光によってこちらからでは影になって尚、全身から輝きを放っていそうな人物が俺

を品定めするかのように不躾な視線をぶつけていた。
まぁ無理もない、直前までメンバー登録していないと思えば、土壇場で登録されたのはプロゲーマーですらない謎の二人組だったのだから。そしてその片割れがよりにもよって全米一のプレイヤーが使うキャラのライバルキャラを選ぶ……なんて挑発まがいのことをしたのだから。

「ケイが連れてきた助っ人の力、確かめてあげるわ……この「ボク」、ヒーローたる「ミーティアス」がね！」

「受けて立つとも、一筋縄の試合になると思うなよ……この「俺様」、ヴィランたる「カースドプリズン」相手になぁ！」

相手は文字通り全米最強の「ミーティアス」使い、付け焼き刃どころか使い始めたのは昨日から、というセロハンテープで腕に貼り付けただけの即席「カースドプリズン」使いでどこまで食らいつくことができるやら。だがこっちも義理と貸しでこんな場所に立っているんだ、結果がどうであれ仕事は果たす。
ダイアグラム７：３でミーティアス有利というクソみたいな相性関係で全米最強のプレイヤーに突貫しなければならない、思わず浮かび上がった言葉を口に出してしまう。

「――――どうして」

◆

この「深淵盟都ルルイアス」において、世界の理は「反転」する。
水中に生きる者たちはこの海底都市にて空を泳ぐ、地上に生きる者たちはこの水没都市において地上が如く振る舞う。水陸両用たる相方は今でこそ「こちら側」に合わせているようだが、その気になれば空中を泳ぐことも可能であるらしい。であればこそ、それはこの都市の四方に鎮座する四体のモンスターもまた同じ道理であり、俺と相方は宙を泳ぐ「天女(バケモノ)」との苛烈な戦いを繰り広げていた。

「アラバ！　こっちに追い込め！」

「無茶を言ってくれるな！　一歩間違えれば俺は奴に頭から食われるんだぞ！？」

「食われたくなかったらこっちに寄せろっつってんだよバーカ！」

美しい女性の顔をした頭部が頭頂部から八等分に裂け、明らかにその質量を増した人の頭部に擬態していた八本の触手が宙を猛スピードで泳ぐアラバへと襲い掛かる。時に回避し、時にその手に持つ刀で切り落とすことで触手に対処する相方ではあるが八つ同時の猛攻に対処できるほどではない。このままでは捕まることを理解したのか、向きを変えて俺の方へと突撃してくるアラバに対し、こちらも双剣を構えて迎撃の準備を整える。

「よーし……追い越せ！」

「ああ！」

猛スピードで泳ぐアラバが俺のすぐ側を通過した瞬間、光を帯びた双剣が閃き触手に斬撃の連打を浴びせかける。一本一本に攻撃を当てていたのでは追いつかない、バックステップで「間」を稼ぎつつ一撃で二本を切り裂く、腰のひねりで勢いをつけて二撃で四本を切り落とし、その勢いを殺すことなくスピンするように身体を回して三撃で六本を切り断つ。一本は既に切り落とされているので残り一本、こちらは割と無茶な挙動のせいであと一撃につなげられない……だがその点に心配はない。

「おおおおお！！」

俺と交差したアラバはただ逃げていたわけではない、本人曰く「直線ならともかく立ち回りであればそこらの魚人族には負けない」と豪語するだけあり、最低限の動きで加速を続けていた鮫人の刃が残る一本の触手ごと天女型(クリオネ)の「封将」の腕を切り落とした。

「――――――！！！」

青みを帯びた黒い血液を撒き散らし、優美なドレスのごとき翼足のついた腕が地面に落ちる。金切り声の絶叫を上げた天女は空に浮かぶ力を失ったかのように腕のあとを追って地面に落ち……恐るべき再生力で復活した頭部が見上げた先には双剣を構えた半裸の鳥頭と、刀を構えた全裸の鮫頭を見る。

「お前のあとに残り三体と大ボスのタコを倒さなきゃならないんだ、疾く迅速に死んでくれ」

「悪いな盟主の眷属よ、俺は見ての通り肉食でな」

「海藻食ってたじゃん……ってかこいつ食べるの？」

「肉（を好んで）食　（べるの）でな……いや食わんぞ！？」

その顔はあくまでも擬態であって、ゲーム上種族的にただの人間である俺と、あきらかに半魚人だが一応「人間」であるらしい相方の顔とはそもそも備わっているものからしてまったく異なる。極論手のひらに顔の落書きを描いているだけのようなもので、それに視覚も聴覚も存在しない……だが確かにその顔は恐怖に引きつっていた。

「サンラクまずいぞ！　やつらがなだれ込んできた！！」

「ボス戦が終わったからここはボスエリアじゃないですよってか……！？　悪い、上まで引っ張り上げてくれ！」

ドロップアイテムは忘れずに回収し、大至急この場から離脱する。瞬く間にそれなりの広さがあったバトルフィールドがフジツボゾンビと人型の魚共によって埋め尽くされていく光景を眼下に、俺は思わず呟く。

「────どうして」

「どうしてこうなった！！」

摩天楼にて流星を、深海にて異形を（後書き）

データあぼん対策はした、持ってくれよ書き溜め……！

今日二時間しか寝てないからつらい？　そんな言い訳はＭＭＯでは通用しない。言い訳に口を動かす暇があるのならばそのリソースは魔法の詠唱に使うべきであり、要するに現実とシャンフロを行ったり来たりしてさまざまな用事を終わらせてきた。

普段ならば特に苦労を感じることもなく済ませる事も、夜襲のリュカオーンという規格外の強敵と戦った直後からほぼ休みなし、というのは中々に堪える。尤も、精神的疲労の大部分はユザーパー・ドラゴンのせいであるのだが。うーむ、やはり遠距離攻撃手段が欲しい。

それ以外にもボロボロになった煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手を見て悲鳴を上げたビィラックに説教されたり、続け様に武器の修理、強化、防具の新造などなどを押し付けられてビィラックがさらに悲鳴を上げたり、金が足りぬとピーツに大量の素材を一括売却して悲鳴を上げさせたり、金の匂いを嗅ぎつけたエルクにエムルが悲鳴を上げたり、ある「検証」の為に木っ端微塵に砕け散った鎧にビィラックが悲鳴を上げたり……今朝のラビッツは六割増でやかましかったな。だがお陰で実入りは大きい、特にリュカオーンによってなんの嫌がらせか更新された「刻傷」なるそれは、俺の切望をきわめて曲解した上で叶えており、その検証は色々な意味で急務だったのだ。

三分、それが呪われた胴体と脚部に装備された防具が木っ端微塵に爆散するまでのタイムリミットだ。防御力に関係なく一律三分、伝説級の防具であろうがそこらで売ってる紙装甲であろうがカップ麺に湯を注いで完成と同時に爆散する。セミより儚いとは恐れ入ったよ全く。

防具の貴賤強弱を問わないということはつまり、規格外特殊強化装甲ですら三分で爆散するということであり、作ったばかりの鎧を跡形もなく砕いてしまったことに対しては製作者様ビィラックに謝罪の意を表明すると同時、検証のための尊い犠牲として深く感謝の意を表明致します。鳩尾に頭突きで許してもらった。というかむしろ三分ごとに半裸にメタモルフォーゼする奴が街中を歩いていたらまず間違いなく通報されるのではないだろうか、衛兵的な意味でも運営的な意味でも。

三分、防具をパッシブな装備としてではなく、時間制限付きのアクティブバフとして完全に割り切って（使い潰して）しまうのであれば長いが、知性体として最低限の存在でいられる時間と考えればあまりに短い。防具を大量にストックするにしても、二分五十九秒で装備を外して使い回すにしても、継続的に金がかかる。やはりバフの一種として割り切るのが一番懐に優しく、かつ有効に装備を扱える……か。
その点インベントリアを持っているのはデカいアドバンテージだ、金さえあれば三分間のバフをほぼ無尽蔵に使用することができる。
一式装備を揃えるのは懐にクリティカルがぶっ刺さる上に特定モンスターを狩り続けなければならないため、時間を急いている今は不可能だが、諸々終わったら駆け足攻略は一旦ストップしてゆっくり装備の充実に努めるのも良いかもしれない。
どちらにせよ無果落耀の古城骸には戻る必要があるしな。

スキルに変化はなし、防具も現状維持であるため最も変化したのは武器だ。まず俺の手持ち武器の中でもそのままの形を維持しているという点では最古参たる湖沼の短剣を始めとした殆どの武器を強化刷新、少し無理したので懐は吹っ飛んだ。手持ちの素材も吹っ飛んだ。
今の俺は素寒貧を超えた素寒貧……そう、超素寒貧とでも言うべき状態だ、まさか古城骸を攻略して手に入れた諸々から得た利益全てを使ってなお赤字になるとは思わなんだ。なんでもいいから金策が

必要だ、それも一攫千金レベルの。
ああそうだ、海賊がどうのとか言ってたし釣りとかできないだろうか。神代の鐵遺跡で釣りまくったシャケはいいお値段がしたし、新大陸に通じる大海原であればそう……マグロとか釣れるんじゃないか？　マグロはいいぞマグロは、ただし用量用法は守らないとダメだ。一度父さんが馬鹿でかいクロマグロを持ち帰ってきた時は三日三晩三食マグロという地獄絵図だった。
二十歳にもなってない若さでトロの脂がキツくなるとは思わなかった、最後の晩餐で食卓の中央にマグロのお頭が鎮座していた時は、なんというかもうある種のカルトじみた雰囲気の中でマグロハンバーグを黙々と食べる一家という……

「ぅあー」

あーダメだ、諸々の疲れでダンマリを決め込んだせいで思考がどんどんおかしくなっていく。なんでマグロについて熱く思考してるんだ俺は。とはいえ風呂にも入ったしエナドリもキメた、もう少しすれば全身にカフェインが行き渡りハイな状態に……カフェインは合法、そう合法だ。
普段が生き生きした鳥面であるなら今は死んだ鳥面だ、さながら首を切り落とされて時間の経過した鶏の頭が如くドロリとした目と、ゲームがゲームならまず間違いなくショットガンを突きつけられるような千鳥足で破落戸通りへと歩いて行く様は、我ながらどう見ても光を嫌って闇へ潜り込もうとするモンスターそのものだ。
一段と禍々しさを増した胴と足の刻傷も相まって、死戦に果てた死体がズタボロの身体を無理やり動かして彷徨っているようにも見えるのだろう……だからって武器を構えるのはやめろよ全く。
あからさまに素行の悪そうなＮＰＣが増えてきたというのに、どい

つもこいつも「あれに関わってはいけない」みたいな態度で話しかけてきすらしない。なんだなんだ、「お゛えあうお゛ぉぉ゛あぁ゛ああ゛あ」とでも叫びながら噛み付けばＡＩが勝手に勘違いしてゾンビパニックでも起こせそうじゃないか。

「…………ん？」

ふと、前を歩いている二人組のプレイヤーに気づく。ＮＰＣもプレイヤーも、港の方にある馬鹿でかい船に向かっているというのに、俺と同じくこの街の暗部たる破落戸通りへと進んで行く弓使いと魔術師。小柄な弓使いの方は褐色肌に銀髪のショートボブ、耳を伸ばせばダークエルフですと言われても信じられそうなくらいそれっぽい。

もう片方の大柄な魔術師は……なんというか、職業間違えてない？どう見ても歴戦の剣士、とか戦場にて無傷で百人斬りを成した凄腕の将軍、みたいな顔をしているというのに魔法職。それも見た限り物理的攻撃力を完全に捨てた、所謂「純魔」というやつではなかろうか？　ごつい見た目の割に歩き方もなんというかヒョロいというか……いや、身のこなしまで完全にロールプレイできるプレイヤーというのはそうそう見かけないものではあるが、あれじゃ狼の皮を被った羊ですらない。いいとこ狼の落書きがされた羊だろう。

「なんか既視感」

無愛想なチビと、ナヨい巨漢……激しく既視感がある。具体的に言うと結構最近ガンメタ決めてフルボッコにしたし、ガンメタ決められてフルボッコにされたような。頭の上に表示されているプレイヤーネームを見れば……チビが「ルスト」で巨漢が「モルド」、はいビンゴ。

この手のフルダイブではフィジカルがメンタリティに及ぼす影響がアバターの動きに結果的に直結する。
経験はないが所謂二日酔い、もしくは残業明けに近い状態である今の俺のメンタリティはエナドリパワーで復活する寸前のゾンビである。思考は明後日の方向を向いてかろうじて周囲の認識に割かれたリソースが「二人に近づけ」と身体を動かさせる。
おや、モルドの方がこっちに気づいた。

「オハヨウゴザイマス……」

「ひぇっ」

オイ。

「珍妙な格好……そう言う趣味なの？」

「大体リュカオーンってやつのせいでな、丁度数時間前に奴の顎をカチ割ってきたんだけど、さらに嫌がらせされてなぁ……」

「リュカオーンってユニークモンスターだったような……？」
ユニークかどうかは関係ないんだモルド君、要は殴れるかどうかだ。結局のところそれが一番大事なんだよ。脳筋思考は悪い事ではないがとりあえず殴るのは二流の脳筋だ、一流はいつだって最高効率と最大火力を考えて殴る。
カフェインが胃から脳に回ってきたのか、思考がまとまってくる。精神的ゾンビから脱却した今の俺は周囲の景色を楽しむ余裕すらできてきた。

「しかしなんというか……街を雑に圧縮したような光景だな」

「確かフィフティシアを作るにあたって、労働者達が住む場所を早急に作らなきゃいけなかったからああなった……と聞きましたよ」

「街が完成してお役御免になった仮住まいがそのままならず者達の温床になった……ってことか」

見上げた先、縦に真っ二つになったのだろう港で出航を控えている巨大船に見劣りしないサイズの、船の残骸が朝日を隠すように地面に放置されており、それを壁にするかのように大量の掘建小屋が密集しているのだ。
四角い部屋を丸く掃く、と言われることもあるがこれは逆だな。散らばるお家を真ん中に掃いたような、火事になったら燃え広がって全焼しそうな危うさを孕んだ、潮の匂いと湿気が混ざったなんとも陰気臭い光景だ。
それは破落戸通りを除くフィフティシア全体が爽やかな印象を与える街並みだからこそ余計に際立っている。

「……今のところ新記録更新中、半裸パワーすごい」

「はい？」

いったい何がと聞いてみれば「破落戸通りに入ってからＮＰＣに絡まれるまでタイム」だそうだ、ちなみに最高記録は限界まで強面を維持したモルドが周囲にガンを飛ばし続けて二分半らしい。ちなみに俺たちがこのエリアに入って既に五分経過している。

ナイフぺろぺろして笑ってそうな奴も、世の中腕っぷしで全て解決できると思ってそうな奴も、晩御飯のメニューを考えながら人を殺せそうな顔した奴も。最初にルストを見て興味を示し、次にモルドを見て「いける」と確信し、最後に俺を見て「やっべ」みたいな顔をして離れていくのだ。俺を見る目が完全に「上玉とそれにくっついたナヨそうなの……の隣をのっしのっしと歩く魔獣」を見るソレである、俺は奴らに一発蹴りを入れてもいいんじゃないだろうか？

とはいえプレイヤーならともかくＮＰＣ達の態度も分かる、なにせ俺の身体には忌々しいクソ狼によって魂レベルの傷が刻み込まれている。誰だって自然災害のお墨付きを二箇所につけた奴に喧嘩を売ろうとは思わないだろう。プレイヤーであれば俺の頭上に浮かぶネームから俺という人間があくまでもロールプレイをしているだけの一般人であると理解できるだろうが、この世界こそが彼らの現実であるＮＰＣからすれば俺がただの高校生であるとは理解しようもない。

「あー、エムル隠すのも面倒だしマフラーのフリはもういいぞ」

「ご、五十年に一度の出来栄えの擬態だったのにー！　なんでばらしちゃうんですわー！？」

「来年は「今年は天候が良かった為、昨年並みの仕上がり。モフモフで毛並みが良い」ってか？」

「マフラーが……」

「しゃべった!?」

どちらにせよ明かすつもりだったし、街の中に入ってしまえばどうとでもなる。驚愕の目で喋るモンスターを見つめる二人をよそに、俺はこれから向かう場所、これからやること、そしてこの後にやることを想起するのだった……

ここから、俺の死ぬほど忙しい一週間が始まる。

精神的ゾンビはカフェインで蘇生する（後書き）

もはや「胸に七つの傷」レベルの威圧感を放つ奴がいるらしい

ジョーカー混じりのストレートフラッシュ

最初そのメールを見た時、新手のスパムか何かだと思った。基本的にリアルで関わる事のない俺たちの関係性に石が投げ込まれたのだ、それもメールの文体からして何か裏がある。
とりあえずメールの送り主……カッツォに対して説明を要求しつつ、俺は我らがクラン「旅狼（ヴォルフガング）」のブレインことペンシルゴンへと秘匿メールを送ったのだ。

とはいえ俺とペンシルゴンの会話を簡略化すると

俺「奴の狙いはなんだと思う？」

鉛筆「内容次第だけどどれくらい「貸し」を作れるかな？」

俺「交通費参加費を全額負担、って何かは知らんが辺り割と追い詰められてるっぽいな」

鉛筆「お仕事が一段落ついててよかったよ」

ううむ、やはり狂人とは会話が成立しないらしい。奴の話に乗るかどうかを聞いてるのに、あんにゃろーは既に乗った後のことしか話さないんだもの。
とはいえいくつかの詰問メールを送った結果、奴が吐き出した情報は以下の通りであった。

ＧＧＣ……グローバル・ゲーム・コンペティション。その名の通り世界中で作られた、作られる、作ることが決定した、作るから投資よろしく……なゲームの数々を紹介する一大イベントだ。
数年前まではイギリスやアメリカなどの海外で開催されていた。所謂スポンサーとしての強さが垣間見える開催地チョイスだったのだが、去年から今年も含めて二年連続で日本が開催地となっている。
その理由とは当然シャングリラ・フロンティアという超巨大タイトルの存在が大きな理由を占めていると言っていいだろう。
アメリカの大手企業が億単位で金をつぎ込んで作った大作ゲームですら「ゲーム」でしかなかった。それに対してのシャンフロは……言うまでもあるまい。

シャンフロが発売されるまで世界各国のゲームバランスはおおよそ三つに分けられていた。クオリティのアメリカ、キャラとストーリーのアジア、斬新なシステムのヨーロッパ。
お国柄もあるため、ゴリラの遺伝子が三割混じったようなキャラばかりだったり、主にヒョロヒョロの男や美少女が大剣を振り回したり、独創的過ぎて人類が理解する為に数年かかったり……良きも悪きも含めて素晴らしいゲームやクソみたいなゲームが数多あるわけだ。
それが今では何もかもをシャンフロが……アジアではなく「日本」の一企業が掻っ攫っていってしまった。俺の見立てではシャンフロと現行のタイトルじゃ三……いや、五世代くらい差がついている。
シャンフロ発売から半年くらいで国内外を問わず色々なメーカーからシャンフロっぽいタイトルが発表されたが、その手の嗅覚に秀で

た俺がいくつかマークしてる時点で察してほしい。さながら流星群の如く一瞬の輝きを放って流れていくシャンフロもどき達……発売が楽しみだなぁ。

話を戻すが、要するに今ゲーム業界は資金力が５３万を軽くぶっ飛んでいるアメリカなどが牽引している遥か先をシャンフロが独走しているような状態なのだ。当然あらゆるアクション、ＲＰＧ、シミュ……シャンフロが内包する要素を一つでも含むゲームはシャンフロが仮想敵になる。基本的に神ゲーや良ゲーが発表される場所である為、俺は中継動画を見る程度で済ませているのだが最近のＧＧＣは殺伐とした雰囲気が漂っている……とは去年辺りにカッツォから聞いた情報だ。

あいつは割と有名なプロゲーマーであるし、ＧＧＣでゲームを発表する企業はプロゲーマーに依頼して実機プレイを見せたりするから毎年ＧＧＣには顔を出しているらしい。そして今年はお仕事でお呼ばれされているカッツォが何故俺とペンシルゴンを招くような真似をするのか。

「要するに絶対に負けたくない相手と対戦するのに、当初予定していたメンバーがほぼ全員欠席して不戦敗の危機になった、と……」

シャンフロからログアウトし、再度ログインするまでの隙間の時間でメールを読み込んだ俺は思わず鼻で笑ってしまう。ギャグみたいなアクシデントの連鎖だな、いつもよりエナドリが美味く感じるぜ。

「とはいえどうしたものか……明後日かぁ」

まぁ、特に用事があるわけでもない。毎日ログイン＆ノルマがあるようなクランにいるわけでもない。この後にシャンフロで人と会う約束をしてはいるが、それは問題ではない……ぶっちゃけ、俺の意

思以外でこれを断る理由はない。
要するに欠員による不戦敗を回避するための埋め合わせ、それがカッツォが俺たちに求めている役割だ。とはいえそれでも俺達を選んでいる辺りにただの人数合わせではない、勝つ気を感じるが。
プロゲーマーですらない一般人を勝手にエントリーさせて良いのか、とか疑問は尽きないが仮にもカッツォのやつがそこらへんを考えずに誘うとも考えづらいので気にしなくてもいいのだろう。

「明後日……色々準備して明日出るにして……んー、まぁ行けるかな」

今日やるべきことはシナリオを一つ消化することだけ、少なくとも強行軍で一つのエリアを突破するよりかは容易いだろう。これが海外だったら笑顔でスパムメールをカッツォに送りつけてやるところだったが、電車(リニア)で二、三時間で到着する距離ならクソゲー探して場末のゲーム屋を巡るよりかはイージーな難易度だ。
GGC自体は三日間行われるわけだが、カッツォが提示した「親善試合実機プレイ」は一日で終わるのだから拘束時間も短い。そして何よりプロゲーマーとして結構な稼ぎをしているらしい今をときめく魚臣　慧サマが諸々の経費を請け負うとまで言っているのだ、最近はシャンフロを全力疾走していたのでたまには息抜きも良いだろう。

「お前の誘いに乗ってやるよ……っと」

メールを送り、ふと思う。

「……よくよく考えると、これ天音(あまね)　永遠(とわ)と魚臣(うおみ)　慧(けい)にリアルで会いに行くってことなのか……」

有名人と会う、というイベントは本来はもっとはしゃいで然りなんだろうが…………普通にメールやゲーム内で会話してるし、あんまりレア感が薄い。我が妹の為にサイン色紙でも持って行ってやるか。

……と、まぁそんなわけで明日の夜にはGGCの会場までちょいと遠出しなければならない俺ではあるのだが、今はこの二人とのユニークシナリオ検証が目下の予定だ。

「ねぇルスト、僕らがこのゲームから離れたのって結構前だけど、あのユニークシナリオ……もう他の人に攻略されてたりしないかな」

「……大丈夫だと思う。あれの発生条件は私たちでも分からないくらい、だし」

二人が俺へと提供したユニークシナリオ「深淵の使徒を穿て」は、NPC「自称大海賊スチューデ」と会話することで発生する。だがそこに至るまでどうすればいいのかを当事者二人ですら把握してい

ないらしい。

「初めてここに来た時、ルストがＮＰＣ達の……その、挑発にマジギレして全員ボコボコにしたんです」

「全員ボコボコって……見た所弓メインの遠距離に見えるが……あと敬語はいいって」

「あ、そっか……ルストは「魔法弓」と「剛弓」を使い分けるから、素のＳＴＲが高いんです。人間、それもＮＰＣ相手なら普通に殴るだけでも十分なので……」

「あー……」

気になるワードはあったが、ともかくルストは大暴れに暴れたらしい。もはや顔が悪人面ならとりあえず殴る、というレベルで暴れに暴れて……そして気づいたら「大海賊の遺い」を名乗るＮＰＣに連れられてユニークシナリオに到達した、と。うーむ、一定数のＮＰＣを倒すことが条件か？　いや、確かＮＰＣをキルしてもカルマ値は溜まる、と以前ペンシルゴンのやつから聞いたことがある気がする、ユニークシナリオＥＸというレア中のレアならありえなくもないが……キルする必要はない？　むしろ別の可能性であるかもしれないな。

そもそもこのゲームではプレイヤーをキルしようがＮＰＣをキルしようが等しくペナルティを負う。そんなゲームシステムの中でまさかＮＰＣをフルボッコにしようと考える者は少数派だろう、経験値が欲しいなら街から出てエリアボスかレアエネミーでも倒せば良いのだから。仕様の穴……というほどのものではないが、盲点ではあるな。

「で、その自称大海賊のクソガキに付き合って幽霊船を追う……それがこのシナリオ」

「クソガキて」

「あーうん、あれは「クソガキ」と表現するしかないというか……」

モルドですらそう評価するNPCだと……？　言っておくが俺の中でのクソガキ認定はフェアクソ基準だからな、並大抵のクソガキ度では俺はクソガキとは認めない。フェアクソ最大の邪悪といえば当然フェアカスことフェアリアとかいう畜生で間違いないのだが、そのフェアカスに匹敵するクソガキが存在したのだ。

その名も「アーク」、通称で「害悪（ガイアーク）」とまで言われたそのキャラは、無自覚に災禍を撒き散らすフェアカスというキャラを産み落とした開発が意図的に「クソガキ」としてデザインした人造邪悪である。

ストーリー上の役割としては「精霊教」における精霊の愛し子として莫大な権力を持ち、主人公達を何度も妨害する悪役なのだが、主人公一行の指名手配から始まり刺客を送り込む（強敵込み最低10人）、主人公が向かう村の井戸に毒を流し込む、魔物をけしかける、森に火を放つ、重要アイテムを盗む、などなど……明らかに主人公の障害としてではない、プレイヤーを不快にさせることを主眼とした行動の数々。

それらは分かっていてもストレスの溜まるものであり、最終的に主人公……厳密にはフェアカスを敵視する理由が「僕より精霊に愛されているから」という自分勝手な理由であったこと、さらに言えば暴走してボスキャラとして戦うことから、如何にこいつをフルボッコにするかだけでｗｉｋｉを１ページ使うクソガキオブクソガキなのだ。

末路としては精霊に見捨てられたことで権力を持ったクソガキから

ただのクソガキに格下げされ、裸一貫で教会から叩き出されるという中々ハードな終わり方をするキャラクターであり、ある程度ストーリーを進めた状態で特定の街にいる特定のＮＰＣに話しかけると「やたら生意気なガキが男娼館（アレなお店）へと連れ去られていった」という話を聞くことができる……というキャラクターである。

フェアクソがＲ１８ゲーであったのならアレなお店でアレなことになった害悪君を見ることができたかもしれないが、大抵のプレイヤーはボスとなった害悪君をタコ殴りにして精霊に見捨てられたシーンを見て満足するので露骨に死体蹴りする必要はあったのか？　製作側は「悪役」キャラの扱い方間違ってない？　おいフェアカスお前ボス戦の時は「貴方はこの世全ての苦しみを受けてなお足りない」とか言ってたのになんで聖人面して哀れんでるの？　と結局クソゲー度合いを高めるだけに終わったのだが。

「そう、高々生意気な程度では俺からクソガキ認定を勝ち取ることなど……」

数分後

「よく来たな！　僕様こそが大海賊スチューデ様だっ！　僕様の言うことは絶対だからな！」

こういうのも何だか妙なのだが、俺は正しい意味でのクソガキを今

知ったのかもしれない。

動きやすさを重視した膝出しの短パン、ダボダボの海賊衣装に着られているかのようなちまっこい身体、ファッションとしての考慮が一切されていない、ただ切っただけというべき短髪。頬には何か粘っこいもので貼り付けた包帯の切れっ端が貼り付けられているその顔には理由のない自信に満ち溢れている。なんというか自分にできないことはないと妄信的に信じきっている、思わずデコピンしたくなるクソガキの塊が偉そうにふんぞり返って俺達を見下ろしていた。すごい、クソガキという形容以外の表現が思いつかない！　マジかよ……こいつに比べたら害悪君とかただの悪役じゃん……クソガキというかただのクソじゃん……

「はんっ、怖気付いて逃げたかと思ったけどちゃんと来たみたいだなチビ女！」

「……クソガキが、相変わらず生意気なことしか特徴がない」

「なんだとぉ！？」

俺がエムルと会話するように、ルストとクソガキ……確かスチューデだったたか、クソガキの挑発に対してルストは毒を吐き返す。すごいなぁ、煽り耐性の絶無さもクソガキレベル高いなぁ。

「ヒョロノッポは相変わらずなよなよしてんな！」

「ははは……僕文系だから……」

「ブンケイだかベンケイだか知らないけどもっと肉食えよな！」

魂の問題だし、ゲーム内でいくら肉喰ってもうっすいジャーキーみたいな味しかしないと思うがね。そんな感じでルストとモルドに対して実に生意気な態度で騒いでいたスチューデであったが、俺の方を見て何か言おうとして……何故か目をそらす。

「なぜ目をそらす」

「うっ……」

まるで捕食者から逃げるイワシのように縦横無尽に泳いでいたスチューデの視線が俺の視線とぶつかるが、数秒としないうちにまた視線がそらされる。よくよく周りを見てみればスチューデだけではなく、他の海賊ＮＰＣ達ですら俺とあまり目を合わせないようにしている。

「んん……？」

心当たりはありすぎるほどにあるが、仮にも海賊というアウトローがこんなあからさまに目を合わせようとしない程の効果を持っているのか。腫れ物に触るような……というよりも眠るライオンの檻にそっと餌を伸ばすような慎重さでスチューデは俺へと話しかけてくる。

「お、お前の……その、名前を聞いておこうか！」

「サンラクだ、此度はそこの二人に助太刀する形で参加することになった。特技はリュカオーンの顎をかち割る事」

「そ…………そうか！　うん、そ、それは剛毅なやつだな！
ぼ、僕様のために働いてくれたらしかるべき、ほ……ほ……」

「報酬？」

「そう！　ほーしゅーを支払ってやる！」

ちょっといたずら心がくすぐられたので物騒な特技を口にしながらガン見してやったのだが、視線をクリティカルヒットしたスチューデだけではなく、他のＮＰＣ達すらもが冷や汗を流しながらざわめき始める。

「こう、ならず者の蛮勇とか無謀を恐れない度胸とかさぁ……」

「度胸試しと自殺はベツモノですわ……ふぎゅんっ！？」

思わずポツリと呟いた言葉に対して、マフラーの妖精がなにやらほざいたので、咳で誤魔化しながらちょうど妖精さんの頭がありそうな辺りにデコピンを当てておく。プルプルとマフラーの毛並みが震えているが、きっと静電気だろう。

「早速だが仕事の話をしたい、その二人から大凡の話は聞いているが……やっぱり依頼者本人の口から説明を聞きたい」

「そ、そうだな……お前達には僕様の……ううん、僕様達の船に乗って「幽霊船」をぶっ壊しにいってもらう！」

「幽霊船？」

「うん、幽霊船……「クライング・インスマン号」、僕様のパパ…

…じゃなくて、親父を殺した仇だ……！」

『ユニークシナリオ「深淵の使徒を穿て」を開始しますか？　はい、いいえ』

パパとはまた随分と可愛らしい呼び方をするやつだ……と思いつつも怒りと悲しみが篭った言葉で説明するスチューデの話を纏めると、大凡ルスト達の説明と一致している。
幽霊船クライング・インスマン号……嵐と共に現れ、生ける船乗りを深い海の底へと引きずりこむ呪われた魔船。かつては極めて残虐であると同時に極めて勇敢な海賊の船であったそれは、今では見るもおぞましい「深淵の盟主」の眷属と化した化け物達と化したかつての船乗り達によって海の中を帆を張って進むのだとか。
スチューデの父親はかつてクライング・インスマン号と遭遇した際、たった一人で幽霊船に乗り込み、化け物達を相手に部下と船を逃した。もはや生存の可能性はなく、遺された一人息子のスチューデは父親の仇である幽霊船を沈めて初めて新たな船長として立つことが出来る……というのが大凡のシナリオストーリーだ。

「成る程……そのクライング・インスマン号に乗ってる化け物ってのは具体的にどんなのなんだ？」

「そ、そりゃあ……口に出すのもおぞましい、腐った魚と人間の死体をぐっちゃぐちゃに混ぜたような怪物でさぁ」

「それはただの腐ったつみれでは……とにかく、半魚人みたいなのを想定すればいいのかな」

出発は一時間後、スチューデの号令により出航の用意を慌ただしく始めた海賊達が武器や食料をあの巨大船舶ほどではないにせよ、十

分巨大な帆船へと積み込んで行くのを眺めながら俺はモブA的な海賊の一人にその怪物の特徴を聞いていた。
俺だとあからさまに恐れられてしまうため、スチューデへのコンタクトはルストとモルドに任せてある。

「いやしかし、この刻傷は思った以上に効果を発揮するのな……」

「そりゃあそうですわ、サンラクサンの全身から放たれるヴォーパル魂は近づく者を切り刻むような威圧感を放ってるですわ」

「キレたナイフか何かかよ俺は……」

効果が強すぎて逆にＮＰＣとの会話が困難になりそうじゃないか、スチューデというクソガキという概念を実体化させたようなＮＰＣですら借りてきた猫よりおとなしくなってしまうとは、いっそ半裸であることを笑うくらいしてくれればいいのになぁ。
モンスターが当たり前に存在する世界であるためか、これからカチコミをかけるのが超常の幽霊船であるためか、明らかに対人を想定していない武装が帆船へと運ばれて行く。

「幽霊船が敵なんだよな……クラーケンとかじゃないよな？」

海賊船の武装といえば大砲とかがテンプレなのだが、船に積まれているのは大砲ではなく、バリスタと呼ばれるでっかい弩だ。火薬自体が存在しないからだろうか、そこらへんは魔法でなんとかすればいいだろうに。ああでも、魔法でどうにもならないから銃が存在しないのかもな、メタなことを言えば「遺機装（レガシーウェポン）」だけが銃というカテゴリを持つ、というアドバンテージを作るためだろうけど。

「船上戦か……」

「アタシ、お船に乗るのは初めてですわ！」

「……まぁ、いつも物理的に振り回してるし船酔いは大丈夫だろうしな」

「？」

船の上での戦闘、というのはこれがまた中々に一筋縄ではいかない。それも嵐の中での戦闘ともなれば、常に地震が起きている中で戦うと言っても過言ではないくらいだ。

視界は揺れる、足はもつれる、体幹が足場ごと揺らされるから点に狙いを定める武器は大きな制限を受けることになる。幸い俺（サンラク）は狙撃技能を必要とする攻撃手段を持っていないからそこまで酷い制限を受けるわけではないが、それを差し引いても対策は必要だろう。

「足場の確保……リキャスト管理……揺れのルーチン把握……敵味方双方のＡＩの行動パターン……」

「時々サンラクサンは魔法の呪文より難しいことを言うですわ……」

「どちらかといえば魔法（マジック）じゃなくて論理（ロジック）なんだけどな……ん？」

シャングリラ・フロンティアは超文明がロボを作ったりしているが、その根幹は魔法や架空といったファンタジーで構成されている。だから現実では見ないような奇妙な光景は探そうと思えばいくらでも見つけることができる。

そうそれは例えば、もうどこからどう見ても「私は力仕事要員です」とアピールの激しいマッチョ達が馬鹿でかい樽を神輿のように担いでここまでやってくる光景だとか。

「なんだありゃあ……蛸壺？　まさかマジでクラーケンを相手にするんじゃ……」

いやでも人間を三人くらい詰めたら容量オーバーしそうな程度の大きさでは多くのゲームで船を軽々と沈める巨体のタコ、もしくはイカとしてデザインされるクラーケンを納めるには小さすぎるだろう。まさかシャンフロのクラーケンは現実のダイオウイカ程度、と言うことはないだろう。

いやそもそも樽で壺の代用たり得るのかと言う根本的な問題があるわけで……そんなことを考えていると、樽を担いでいたマッチョ達は船にそれを積み込むのではなく、俺の目の前で立ち止まるとその樽を地面に下ろして横に倒した。

「きゃあっ」

「わあっ！」

「ぐぇっ」

「おうおうおう！　赤鯨海賊団名物「バレル・デリバリー」はお仕事完了だぜぇ！」

「おうそこのおっかねぇにいちゃん！　あんたのツレだろう？　確かに連れてきたぜ！」

「え？　は？　あー……んん？」

わっはっはと笑いながら去って行くマッチョ達……いやそこじゃない、今重要なのはそこではなく樽から転がり出てきた方の連中だ。

「い、一体何が…………え、ひづ……ゴホン！　サンラク、さん？」

「洗濯物の気分を味わえました……あれ、ここはどこですかね！？」

「ちょ……っ、秋津、あか、ね……殿……潰れ……っ！？」

未だデメリットが終わっていないために、朽ち果て錆びた土塊のような鎧に身を包んだ騎士のプレイヤー。
三つのエリアを真っ直ぐ突破してきたと言う俺以外に兎御殿の敷居をまたぐことを許された狐面をつけた忍者のプレイヤー。
そしてその忍者に潰されて現在進行形でくぐもった悲鳴を上げている白いマント。

「え、なんで？」

つい数時間前まで共にリュカオーンに挑んだ二人と一羽、そして俺とエムルを合わせた三人と二羽が全く状況を理解できぬまま、混乱と共に互いに目を見合わせているのだった。

運送品はナマモノ注意（後書き）

胸に七つの傷がありそうな威圧感を放つやつが「特技はゴジラを半殺しにすることです！」とかほざいたらそらドン引きされますわな、という

時間は数分ほど前まで戻る。
このゲームにおけるレアモンスター中のレアモンスター、ゲームのサービス開始から今に、そしてこの先に至るまでただ一体しか存在しない七種類のユニークモンスター。その内の一体である「夜襲のリュカオーン」との激闘に火力的貢献は皆無ではあったとはいえ、攻略メンバーの末席に座ることが出来た秋津茜は非常に、そう非常に舞い上がっていた。

「わぁ……あれが調査船ですか！　とても大きいですね！　豪華客船みたいです！」

「そうで御座るな……」

フィフティシアにクランの拠点があるためにそこへと向かったサイガー０や何やら慌ただしく用事があるからとラビッツへ戻っていったサンラクと違い、部活の朝練もなくなんの予定もない秋津茜は思う存分にフィフティシアという街の景色を楽しんでいた。
ＮＰＣの中には奇妙な面をつけた少女に訝しげな視線を送る者もいたが、プレイヤーからすればその手のアバターを作る奇特なプレイヤーなどいくらでも見かけることができるためにそう注意が向けられることもなかった。
少なくともフィフティシアに到達するような、秋津茜やサンラクのような最高効率で突っ走る少数派ではないコツコツと真っ当にレベルを上げて真っ当な強さを得てここにたどり着いたプレイヤー達の注意を引きたいのであれば、格好ではなく挙動の特異さが必要になるだろう。

「わぁ凄い……！　魚の串焼きですか！　一本ください！　味うっすいですね！！」

冷静に考えて失礼極まりない感想も、仮面越しですら伝わってくる喜色の気配を見れば売った方も悪い気はしない。ＡＩが「気配を察する」ということがどれだけ異常なことなのかを一々考えるよりも、今この瞬間を楽しむことこそが真にゲーマーとして健全であると言わんばかりにはしゃぐ秋津茜に、マントに擬態したシークルゥは周りに聞こえぬよう小声で話しかける。

「凄いはしゃぎように御座るな」

「私、海って見たことなかったんですよね。だからゲーム内でも海を見れてすごく楽しいです！」

「遊戯（ゲーム）の中、とはまた面妖な言葉を……時折拙者、秋津茜殿の言葉が分からんで御座る」

「そうですか？　でもサンラクさんとエムルちゃんは割と普通に話してますよね？」

「エムルも大概強い子になったで御座るからなぁ、ディアレの奴が焦っておったのは痛快で御座ったな」

恐らくヴァイスアッシュ直系の子の中でも上位の実力者にまで上り詰めたであろうエムルであるが、彼女がサンラクと普通に話しているのは彼の独り言のほとんどを戯言と処理しているからであることを知る術は今はない。

仮想の現実……すなわち虚構であったとしてもシャングリラ・フロ

ンティアのグラフィックはそれ単体で並のゲームを凌駕する。潮騒の響き、活気と共に街を包む潮風の香り、朝日はキラキラと海を街を世界を照らし、魔法と幻想が確たる実態と共に存在する港街フィフティシアは、秋津茜にとってはどれだけ見ても飽きがこないものであった。

と、そんな秋津茜の眼前に景色を遮るかのように無粋なウィンドウが表示される。

『ユニークシナリオ「深淵の使徒を穿て」を開始しますか？　はい、いいえ』

「へ？　なんで？」

ユニークシナリオ、その言葉の意味は理解している。要するに超レアなミッションだ……だが今この瞬間に表示された理由がわからない。ユニークシナリオとは経験の浅い秋津茜からすれば「何か凄いことをした後に出てくるもの」という認識である。

実際それは間違っていない。ユニークシナリオとは通常のクエストとは毛先の異なる、この世界に生きる者たちによる物語であるのだから。それは例えば夜の帝王を相手に威を示すことであったり、天穹の覇者の逆鱗を穿つことであったり、この世界の根幹……貫かれた大穴の最奥に至ることであったり。だからこそ、ただ観光してただけでユニークシナリオが発生することは基本的にありえない。であれば何故秋津茜の前にそれが現れたのか。この疑問、サイガー０であればたやすく理解することができただろう。

このゲームにおける「パーティ」とはある種の一心同体である。中心となるリーダーが発生させた依頼は他のメンバーにも発生し、拒否権自体は存在するがかいつまんで言えばリーダーさえ条件を満たせば他のメンバーは観光していても同じクエストを……ユニークシナリオを受注することができるのだ。

そして、数時間前までリュカオーンを倒すために結成された臨時のパーティは、その前身たる「エリア攻略のための二人組パーティ」の時点からのリーダーが回らない頭で慌しく動いていたためにパーティが解消されておらず、またパーティで行動したことこそあれ、常に野良パーティに追加で加わるという形で参加しリーダーによるパーティ解消で離脱していた秋津茜にはパーティを自分から解消するという考え自体が存在していなかったのだ。

「うーん……よく分からないけど、折角出てきたなら受けてみるのも一興ですね！」

それ故に、秋津茜は眼前のユニークシナリオが未だパーティで繋がったままのサンラクが発生させたものだとは思いもよらぬし、それを遠慮するという思考に至ることもない。

世の中には二種類の人間がいる。文章に釣られてスパムメールを踏む人間とそうでない人間である、秋津茜は割と前者寄りの人間であった。躊躇いなくシナリオ受注の「はい」が押され、狐面の忍者と白マントは突如として現れたマッチョの群れによって、樽の中に放り込まれることとなる。

「パーティ……ど、どうしましょう……」

サイガー０は激しく懊悩していた。彼女の眼前には未だ自身がサンラクや秋津茜、そして二羽のヴォーパルバニーとパーティ関係にあることを示すウィンドウが表示されている。この繋がりから抜けることはたやすい、今現在進行形で表示されている「パーティから離脱しますか？」という問いに対して「はい」を押すだけでいいのだから。

だが、理屈でそれを理解していても心情がそれを激しく拒んでいた。折角繋がった縁を自分から断ち切ることは難しい、それが強感情に起因するものであれば尚更に。分かっている、分かってはいるのだ。放置していたところでいつかはサンラク側から切られてしまうものであり、そしてしばらくすればクランメンバーと改めてパーティを結成しなければならない以上、向こうからパーティを解消するのを待っていることはできないということも。

「う、ううう………」

半ば無理を言って昨日は予定を空けたのだ、今朝から現実でもゲーム内でも姉から戻ってくるようにと急かされている。追加の新大陸調査船が完成した以上、クラン「黒狼」のメインメンバーたるサイガー０は早急にレベルキャップを解放する必要がある。だからこそ今現在のパーティを解消しなければならないし、調査船に乗り込む為の準備を整えなければならない。

先発隊からの情報により調査船上で戦闘が発生することは判明しているし、船内にあるショップで購入できるアイテムは値段が高いことも分かっている。だがしかし、たった一度選択するだけのそれはリュカオーンに挑むのと同等かそれ以上にサイガー０にとっては困難な問題であった。

「む、むむむむ……！」

指を伸ばす、引っ込める。覚悟を決める、やっぱりちょっと待って。優柔不断という熟語の例として映像ごと広辞苑に乗せてしまえそうな状態で人差し指が虚空でシャトルランを行う、ただ普通のシャトルランと異なる点は時間が経つごとに指の動きが遅くなっているということだろう。

（分かってます……分かっては、いるんです……でも、その……自分から切るというのは気がひけるというか……余計な感傷だということは分かっているんですが……そう、苦労して作ったトランプタワーを自分で壊す感覚というべきか……）

優柔不断に右往左往する指とは逆に、思考ばかりが加速していく。自分で自分に言い訳をしている姿は本人からすれば滑稽そのものであるが、傍目からすれば迫真の威圧感を巨軀の騎士の身で撒き散らしているようなもので、その身に「呪い」を、「傷」を刻んだ者たちとはまた違ったベクトルでＮＰＣのみならずプレイヤーすらをも遠のかせていた。

「なんだ来ていたのか０（レイ）」

「……ええ、まぁ」

「何をおまえはさっきから奇妙な動きをしているんだ、新大陸に行く前に高濃度回復薬を大量に作る必要がある、今から「神話の大森林」で角狩りマラソンだぞ」

「あぁ……うん……ちょっと待って、今パーティを解消するから…

「……」

これ以上の迷いは姉だけではなく、他のメンバーにも迷惑をかけてしまう。それにフレンド関係ではあるのだ、パーティの繋がりはまた結ぶことができる。意を決して「はい」を押そうとするが、やはり心のどこかにいる恋愛脳がやめろ早まるなと叫んでのたうつ。

「ええい南無三！」

「いきなりどうした！？」

首をひねって顔をそらし、目をつむって迷いですら止められない勢いで指を突き出す。だからこそサイガー０はそれを認識することもなければ、それを認識して指を止めることもできなかった。

『ユニークシナリオ「深淵の使徒を穿て」を開始しますか？　はい、いいえ』

パーティを解消するかの是否を問うウィンドウを押しのけるようにして、最新の情報を伝えるウィンドウ……すなわちパーティリーダーが発生させたユニークシナリオに参加するかの是否を問うウィンドウが発生したことを。

そしてオブジェクト耐久の低いアイテムであれば一発で破損できる力が篭った「最大火力（アタックホルダー）」の人差し指は、こんな時に限ってブレることなく「はい」を押していた……ユニークシナリオのウィンドウのものを。

「…………あ、あれ？　今確かに押したはずじゃ」

「おっしゃ野郎ども見つけたぜぇ！　積載ろ（つめ）積載ろ（つめ）！」

「運搬べ運搬べ！！」

「えっ、ちょ、待っ……きゃぁぁあぁあ！？」

「ふぎゅぅぅぅ！？」

「シークルゥさんんんん！？　あ、サイガー０さんでしたっけ！　お久しぶりです！！」

そして、いったい何が起きているのか誰も理解していない中、サイガー０の巨軀を軽々と樽の中へと投げ込んだマッチョの群れによって、二人と一羽は破落戸通りへと運ばれていくのだった。

「あー……ええと………」

秋津茜の説明と、レイ氏の推測。そして自身による調査によっていったい何がどうしてどうなったのかを把握した。パーティを解消していなかったということ、そして偶然にも俺がパーティリーダーであったために、ユニークシナリオが二人にも発生したということ。そして夜襲のリュカオーンのみならず、深淵のクターニッドについ

てもこの二人が関わってしまうかもしれないという事実……果たして俺はどうするべきか。
脳内会議は大紛糾と殴り合いの末アポカリプスと化し、最終的に現れた神（結論）が裁定を下す。

「なんかもうどうにでもなーれ！」

「よく分からないけどサンラクサンそれでいいですわ！？」

「ははは、お空きれーい」

今更二人増えたところでなんだ！　楽しけりゃそれでいいんだよ！！

好機と、懊悩と、またしてもガバ（後書き）

・赤鯨海賊団「バレル・デリバリー」
マッチョたちによる「クエスト開始地点に存在しないプレイヤーを連行する」ある種の強制イベント。
プレイヤーを樽に詰め、運ぶためだけに出現するＮＰＣではあるが強制イベントであるため何よりも優先される彼らのＳＴＲは、極めて限定的な状況においてのみ「無制限」になる。
そのため、サイガー０のような重装備の騎士をお手玉よろしく樽に詰めて爆走していく満面の笑みを浮かべた海賊マッチョによる樽神輿は相当ホラー。

そう、冷静に考えればこのユニークシナリオ「深淵の使徒を穿て」はそうやすやすと発生できるものではない。なにせ俺は何も知らないし、これの情報を持つルストとモルドですらどのように発生させたのか定かではないのだ。
あの二人はある意味で俺に弱みを握られている状態であるので、口封じは容易だ……いや、キル的な意味で始末するとかではなくロボをちらつかせる的な意味で。
なので仮にこのシナリオをクリアすることでユニークシナリオEXが発生したとしても、レイ氏や秋津茜以外のプレイヤーが便乗することはできない。そもそもこの二人が来てしまったこと自体が予想外だが、やってしまったことを悔いるよりもやるべきことを修正するべきだ。

「……と、いうわけでこのシナリオに参加することになった助っ人のサイガー０氏と秋津茜氏です」

「何がというわけなのかサッパリなんだけど……」

まぁそりゃそうも言いたくなるだろうが、流石に「手違いだったので帰ってくれ、あと君達はユニークシナリオなんて知らない、いいね？」と告げるだけの勇気は俺にはなかった。
「手違いで呼んですいません、用事があるようでしたら帰っていただいて結構です」的なことを遠回しに言ってみたのだが、まぁユニークシナリオに参加するチャンスを逃すようなプレイヤーはそうそういないだろう。レイ氏はなにやら迷っている様子だったが、なんだかんだでこのシナリオに参加すると俺に告げた……無理しなくて

もいいのよ？

様々な感情のこもった視線が主にルストから向けられてはいたが、サイガー０というプレイヤーがシャンフロにおいて最強格のプレイヤーであることを告げることで納得して貰った。

「……で、そっちは？」

「はい！　秋津茜と申します！」

「便利要員Ａ的なものと思えばいいと思うよ、オプションパーツが本体的な」

「辛辣ですね！？」

実際この場において最もレベルの低いプレイヤーだしなぁ、リュカオーン（分身）を倒した事で通常ではあり得ないレベルのレベルアップをしているかもしれないが、流石に平均レベル８０のメンツの中では頭一つは力が劣っているのは事実だろう。
とはいえオプションパーツことシークルゥはエムルと違い、ガチガチの戦闘ビルドだからオプションパーツが本体と言えるし、あのニンジャニンジャしている魔法の数々は火力以外の面ではそれなりに役に立つ。というかメインアタッカーのシークルゥとアシストの秋津茜で役割が逆転しているんだよな。
せめてあのレーザービームがもう少し火力を出せればアシストではなく後方火力としての役割があるんだろうが。聞いた話じゃかろうじて残骸遺道のゴーレムをよろめかせる程度なんだとか、あのビームの火力はクリティカルに弱点を狙うとはいえ俺の攻撃五発分くらいだぜ。見た目詐欺も甚だしいところだ。

「……まぁ、ロボを使えるならなんでもいい」

「人数が多い方が役割分担もできるしね、僕も異論はないよ」

弱みにつけ込む必要もなく、あっさりと二人の了承を得たことで改めてパーティを結成し直す。

このシナリオのメインはルストとモルドの二人だからな、であればリュカオーン戦からそのまんまな俺のパーティに入れるよりも向こうをリーダーにしてこっちが傘下に入るべきだろう。パーティをリーダー権限で解散する瞬間、なにやらレイ氏から圧が発せられたような気がしたがなんだったのだろう。パーティくらいいつでも組めるんだから解散することに問題はないはずだが……まさかパーティを解くことで発生する何かがあったとか！？

「パーティの申請を送った。というか、ヴォーパルバニーもパーティメンバー扱いなんだ……」

確か犬っぽいモンスターと猫っぽいモンスターはある種のオプションパーツがとして連れて行くことができるんだっけか、まぁエムルやシークルゥ達はＮＰＣ扱いだからそこら辺の兼ね合いなんだろう。

「いつまでモタモタしてるんだー！　さっさと船に乗れーっ！！」

「クソガキが呼んでる、行こう」

船の上から、子供にしてはやけに大きな声でスチューデが俺達を急かす。突然の追加人員というアクシデントこそあったが、リュカオーン戦のメンバーと弓使い、そして純魔を加えた五人二羽で俺達は赤鯨海賊団の帆船「スカーレットホエール号」に乗り込むのだった。

「わぁ、凄いですね！　進んでますよ！」

フィフティシアの表港とは比べ物にならない貧相な破落戸通りに存在する裏港。巨大な船の残骸の陰から一隻の帆船が水を掻き分け大海へと進む。

表港に堂々と浮かぶ、豪華客船かはたまた弩級戦艦か……現実に存在する鯨すら人と虫程の差がある巨大な船に比べればあまりに小さい帆船はされど風を受け、我こそが海を征く者であると帆に赤い鯨と髑髏を模したエンブレムを掲げている。

「すげぇなぁ、ちゃんとＭｏｂが船を動かしてるんだよなぁ」

「それの、どこが凄いんですか？」

「そりゃあ、Ｍｏｂが実際に動かしてるってことはこの船はシステム的に動いてるんじゃない、物理演算に則ってネジの一本まで再現してるってことだ」

レイ氏の疑問に対して、俺はこのゲームのトチ狂った作り込みを説明する。多分、この船に使われているデータをストレージに入れるだけで下手なＰＣならメモリが吹っ飛ぶだろう。普通こういうところは妥協するべきものだ、別に風関係なく船が高速で動いたって誰も気にしやしない。船の形をしたモデルにそれっぽい凹凸のあるテクスチャを貼り付けただけのものでも問題ないってのに、この船は……恐らくあの巨大調査船も、「船」というモデルではなく「木」と「金具」とその他諸々を物理エンジンに則って組み上げている。もはや凄いを通り越してキモい、何がこのゲームを作ったやつをここまで駆り立てているんだ。

「まぁなんというか、凄いゲームだねってことかな」

「そう、ですね……とても、良いゲームだと思います」

レイ氏のその言葉には、ゲームのスペックが高いこと以外の点に重きが置かれているようにも感じたが、まぁグラフィックだけがゲームの全てではない。ドットでだって人は感動できる、どれか一つが優れているだけの……言い換えればどれか一つしか優れていないゲームの大抵はクソゲーに部類されるのだから。

「流石に動いてる船で釣りしても魚は釣れないかな、いやでも帆船だしエンジン搭載の船に比べればその動きは遅いんだから割と泳ぎの速い魚なら追いついて食いつく可能性もあるか……？」

そうと決まれば早速釣りをしてみよう。明らかに大型の魚を釣るような釣り竿ではないが、はてさて何が釣れるやら。

釣りを始めて大凡三十分ほど経過しただろうか。釣果は聞くな、居眠りし始めたエムルが何よりの証拠だ……マフラーが鼻ちょうちんを出すんじゃねーよ、妙なところでギャグなモーションしやがって。

「……雲行きが変わった？」

ふと呟いたのは誰だったか、その言葉を聞いたプレイヤー、ＮＰＣ双方が空を見上げる。

先ほどまで蒼海に負けぬ青い蒼穹を広げていた天幕、光を鬱陶しいくらいに降り注がせていた太陽の光が弱い。太陽自体の光量が減ったわけではない、青空のテクスチャにフィルタをかけたように、光

が遮られているのだ。

「……なぁレイ氏、もしかしたら俺が無知かもしれないから聞くけどシャンフロじゃこういう一分も経たずに天候が激変する、ってイベントは割とあり得るものなのか？」

「少なくとも、私が今までプレイしてきた、中でそのような事は……っ！」

最初は光が弱まっただけだった。だがそれは一秒経過する毎に翳り、隠され、そしてついには多量の水と雷を孕んだ黒雲がスカーレットホエール号を太陽から完全に覆い隠してしまう。
よくよく見てみれば、この黒雲はシャンフロという世界そのものを覆ってはいない。明らかに不自然な円形の雲は、まさしくこの船を中心に発生している。

「船長！　間違いねぇ、あの時と一緒だぁ！！」

「こ、怖くなんてない、僕様はパパの息子なんだ…………お前らっ！　武器を構えろっ！！」

何やら一瞬ヘタれていたスチューデが船員に、そして俺たちへと戦闘準備を告げる。慌ただしく武器を取りに走るNPC達に対して、インベントリからさっさと取り出せるプレイヤー達はその場で武器を構えげながらも、何が起きているのかと辺りを見回す。

「幽霊船ってのは大抵二つのうちのどっちかのパターンで出現するって相場が決まってるもんだ」

「そ、それはなんですわ……？」

毛並みを逆立て、恐る恐るといった様子でエムルが問いかけてくる。

「一つは霧の中からゆっくりと現れるホラーゲーパターン、そしてもう一つは…………来るぞ、下だ！！」

海底から飛び出してくるアクションゲーパターン！！

次の瞬間、黒雲より破壊力を伴った光が落ちる。海面に叩きつけられた光の鉄槌は、一瞬で海水を蒸発させ、破壊力を水面の爆発という形で表現する。

そしてそれと同時、海面が下からの衝撃によって巨大な水柱を立てる。

「幽霊船……なんだっけ、サムシング・インシュリン号？」

「クライング・インスマン号……！　ぜ、ぜんいんせんとう、よ、よういーっ！！」

怯えながらも、船長としての役割を放棄しなかった事は褒めてやろうクソガキ。

傷持つ赤鯨の海賊船と、泣き叫ぶ魚怪の幽霊船が荒天の海原で相対する――

赤鯨、魚怪と相対す（後書き）

実際のところ、このメンバーの中でいちばん役立たずはステータスそのものが半減中のヒロインちゃんなんですけどね
装備を変えてもステータス半減は一日続くので。

荒天荒波ＳＡＮチェック

クライング・インスマン号、それはもはや船と呼ぶにはあまりにもズタボロであった。
マストはへし折れ、船底にはいくつもの穴が空いている。船首の損傷は、まるで巨大な船の怪物が口を開いて笑っているように見える……当然、間違っても航行できるような損傷ではない。そんな物理的に航行が不可能なレベルの損傷を負っているにもかかわらず、荒れ狂う荒波の中を跳ねながらクライング・インスマン号はこちらへと確実に迫っていた。

「わひゃあ！？」

「ぶぎゅお！？　せ、拙者をソリがわりにぃぃぃぃぃ………」

なにやらすっ転んだ秋津茜がマントを下敷きに船尾へと滑っていったが、それを笑う奴はプレイヤーＮＰＣを問わず存在しない。足場が悪いとかそういうレベルの話ではない、馬の背中で踊る方がまだ簡単だぞ！？

現代人が「危険」に遭うことは早々無い。皆無でない辺りは確率論とか人の諸行無常とか哲学的な話になるので省くが、当然今のご時世嵐の中を帆船で進むような人間はいない。だがこれはゲームでありそしてファンタジーである、尋常ではない揺れは一秒として足場の平行を保つことが出来ず、俺でさえ気を抜けば体勢を崩してしまいそうになる。

「大丈夫か！？　この状態で戦うんだぞ！！」

「私は、なんとか……！」

「この程度なら、まぁ」

「助けてルストぉぉぉぉ…………」

大丈夫なのは二人、大丈夫じゃないのは二人と一羽か。ＮＰＣ達は……流石に海賊の役割（ロール）を背負ってるだけあって捕まることができる場所でなんとか踏ん張っているな、だっこちゃん人形よろしくマストに手と足フルに使ってしがみ付いてるスチューデは見なかったことにしてやろう……男の情けというものだ。

「闇雲に攻撃を仕掛けんなよ！　射程圏内まで引きつけて攻撃を叩き込め！！」

「め、命令を出すのは僕様だぞ！！」

「うるせぇ！　そういう台詞は立ってから言え！」

「うぐぐっ」

男の情け？　魚の餌にもなりゃしねーよ、ペッ！
大砲代わりに船に設置されたバリスタに船員達が何とか取り付く。中には船員を押しのけ自分がバリスタを操ろうとするルストなんかもいたが、誰が撃とうと当たればいい。
既にこちらと向こうの距離は二十メートルを切った、それにつれて向こうの船に乗っている連中もその姿がぼんやりと見えてくる。そして眩い閃光が辺りを照らした瞬間、その姿を俺たちはハッキリと目視した。

「１Ｄいくつロールすりゃいいんだろうな」

「き、気持ち悪いですわぁあ……！」

それを人間と呼称するにはあまりに醜く、あまりに悍ましいものであった。人の形こそしているが、まるで腐肉を無理矢理固めたかのような爛れた全身をビッシリと鱗が覆っている。
その顔は身体以上に人間離れしており、ギョロリと眼窩から飛び出さんばかりの眼球は焦点の合わない動きで忙しなく蠢き、引き下げたかのような口には鮫や鯱とは違う、細かな針のような魚の牙が不規則に生え並んでいた。
そんな異形達は半魚人とも言える身体にボロ切れのような衣服を纏っており、さながらそれは水底に沈んだ水死体達が魚の怪となって這い出て来たかのような、人の本能を握り蝕む原始的な恐怖を開拓者たちに強く自覚させた。
深き者共ディープ・ワンの姿を直視してしまった開拓者達はＳＡＮｃ　成功／失敗　１Ｄ３／１Ｄ１０……いやいや、何を考えてるんだ俺は。

「ひ、ひぃい……！」

「ああクソ、アイデアロールに成功しちゃいましたってか！？」

所詮はゲームの敵と割り切ったメタ視点を持つプレイヤーと違い、ＮＰＣの中には発狂しかけの奴らがチラホラと見受けられる。クソッタレめ、置物と化すならともかく下手にＦＦ（フレンドリーファイア）されたらたまったもんじゃない。

「精神分析（物理）！」

「ぐべぇ！？」
悪いが回復魔法なんて覚えてないからな、ショック療法しか使えないんだ。
「ほ、ほっぺが痛い……」
「船長なら船長らしくパニックになった部下を正気に戻しとけ！」
恐怖のあまり前後不覚で船の外に落ちそうになっていたスチューデを文字通り叩き直（治）し、頬を抑えるクソガキに手短に告げて改めて武器を構える。
「余り物とはいえ最高級品で生まれ変わった湖沼の短剣……いいや、初陣だぜ「傑剣（デュクスラム）への憧刃」！」
名剣と呼ばれる剣がある、聖剣と呼ばれる剣がある、魔剣と呼ばれる剣がある。それらの業物はオンリーワンであって、如何に模したところで唯一の刃に至ることはできない。
だがそんな足りない刃を重ねて一つの剣としたならば、それはきっと英傑達の剣に負けない強き刃となるだろう。
そんな「片手剣」を二振りは雨粒を弾いて雷光にその身を輝かせる。
これまでの長い戦いを耐え続けて来た湖沼の短剣系列から派生したこの片手剣には特別な効果はほとんどない、その剣が秘めた力はただただ頑丈であること。クリティカル攻撃に成功した場合耐久が減らない、というシンプルながらこれ以上なく俺向きな能力。
片手剣ではなく短剣のまま「湖光の短輝剣」に強化するルートもあったのだが、競争相手が格上キラーの兎月と状態異常付与の帝蜂双

剣であるために単なる強化では物足りなかった為に片手剣二振りに「真化」させたのだ。

「交差じゃなくて衝突かよ……！！」

「射撃する……！」

こちらへと迫るクライング・インスマン号は真っ直ぐスカーレッドホエール号を目指している。それは交差するつもりのない正面衝突を自覚した直進であり、船員達は慌てた様子で船首付近から離れていく。

それに対してプレイヤー陣は後ろに滑っていった奴らはともかくとして、前衛たる俺とレイ氏は迷う事なく前へ、そして狙撃手たるルストはバリスタの狙いを定める。

「狙いを定めて……今っ！！」

荒波による揺れを上書きする、大質量同士の激突。次の瞬間、向こうの船からこちらの船へと乗り移らんとしていた半魚人の何匹かが、放たれた巨大な鉄の矢に貫かれて吹き飛んでいく。

「腐ったつみれ共が、どっちがカチコミに来たのか教えてやるよ！！」

そう叫び、俺は半魚人を蹴り飛ばしながら幽霊船へと飛び移るのだった。

実は、シナリオ名を見た時から何となく予想していたことがある。
シナリオ名は「深淵の使徒を穿て」……最終的にユニークモンスターに繋がるにせよそうでないにせよ、少なくともこのシナリオ内でのターゲットとなるモンスターは「深淵の使徒」なる存在であることは明らかだ。
シナリオボスにしてもユニークモンスターよりも強いということはないであろうし、恐らくはエリアボスと同等かそれ以下のモンスターであると予想していた。そして現れた幽霊船に乗っていたエネミーＭｏｂはあの腐れ半魚人共のみ。
エムルを連れていく判断は割と迷ったものだが、この手の群体系エネミーであればエムルを守りながら戦うのはあまりに容易い。

「エムル！　離れた場所の奴を狙え！」

「はいなっ！」

短剣を二刀流で扱うのと片手剣を二刀流で扱うのでは立ち回りは別物レベルで変わる。手数と火力のバランスの変動を把握して立ち回りを慣らしていく。
単身飛び込んだ俺を囲うように襲いかかってくる半魚人共の動きはさほど素早くはないが、数の暴力は侮れない。
真正面にいた半魚人に切り掛かり、よろめいたところを蹴り倒して包囲網を抜ける。頭だけで後ろを振り向き、しがみついたエムルの射線を確保する。

「明らかに窮地ですわーっ！」

「ははは安心しろエムル、他にも面子がいるんだからむしろ安ぜ……」

バシュンッ！　と俺の顔のすぐ横を鉄の矢が通過する。すぐ後ろでヒット音が聞こえたことからその意図は理解できるのだが……

「むしろ危険かも」

「帰りたいですわぁぁぁぁ！！」

「泣き言は後で聞いてやるからさ！　キリキリ働けって！」

「うぁぁぁぁぁん！　マジックエッジぃぃぃ！！」

幽霊船に、三つの刃が乱れ舞う。こうして切って落とされた海賊船と幽霊船の激突は、荒れ狂う空模様に呼応するかのように激化していくのだった。

荒天荒波ＳＡＮチェック（後書き）

半魚人達は突然奇声をあげながら襲いかかってきた頭に兎を載せた半裸の反対を直視しました、ＳＡＮチェックです。

ちなみに海に落ちた場合、ＮＰＣに縄を垂らしてもらうことで船に復帰できますが、当然重い装備を纏っていればそもそも浮かばないので沈みます、死にます

恐れで足を止めれば逆に危険だということが分かり、俺は目まぐるしく身体を動かしながらクライング・インスマン号の甲板を駆け抜ける。半魚人共は別に徒手空拳で襲いかかってくるわけではなく二、三度打ち付ければ砕けてしまいそうなボロボロの武器を振り上げ幽霊船に入り込んだ異物を取り除かんとする。

「はんっ、俺を圧倒するなら物量が足りてねーんだよ！」

「いやどう見ても完全包囲ですわ！？」

「後続が前にいる奴を踏み越えながら俺を押し潰すくらいの物量じゃないとお話にならねーから」

「わぁい、そう考えると包囲網がスカスカに見えますわーっ！！」

その点水晶群蠍はいい感じにクソゲーしてたな、恩恵をフルで受け取ってから運営に指摘メール送りつけてやったから多分修正されたと思うが。

振り下ろされたサーベルを身を捻って回避し、左剣で首を突きつつ右から襲いかかってきた槍の一突きを右剣で弾いて逸らす。

再び包囲される前に折れて傾いたマストを足場に跳躍、遮那王憑きの補正を受けた動きで宙返りを交えた動きで半魚人の群れを跳び越える。着地の直前、俺の足の下を抜けるようにバリスタが飛翔し、振り向いていた半魚人の何匹かが団子よろしく連なって吹き飛んでいく。

「伊達にあの変態機動で弾当ててないな、固定砲台なら曲芸レベルだぞこりゃあ」

「一歩間違えたら極刑ですわぁ！！」

「お、うまい。座布団一枚」

「バリスタが尽きた、弓矢で支援する」

「なんでこっち乗り込んできてるんだよ！？」

「……私は「中距離弓使い」、少なくとも魔法弓を使っている間は、ここが私の距離……！」

そう静かに言い放ち、ルストは弦の張られていない弓を構える。ルストの左手が弓を強く握った瞬間、明らかに物質的なものではない光の弦と矢が生成される。

「もしかしなくてもＭＰ依存？」

「さらに言えば魔法判定……！」

幽霊船の船首に立ち、器用にバランスを取るルストが魔法の矢を放つ。それは攻撃モーションに入っていた半魚人の一体に命中し、硬直したところを俺が切り裂く。

半魚人共は突如として現れた追加の異物に対して排除を試みるが、ルストは半魚人を己の至近に近づかせることなく距離を維持しながら魔法矢を連射する。俺のように攻撃に対応しきるのではなく相手の攻撃と行動を予測して動く立ち回りだ、いい感じにヘイトを俺に押し付けてきているのもまた憎らしい。

「避けタンクらしく働きますよっと……！！」

キリキリ働けと視線でお叱りを受けたので程よく背丈が近しい半魚人三体を焔将軍の斬首剣で撫で斬りにすれば、大立ち回りをする俺へとヘイトが集中する。

「ご、ごめんルスト！」

「遅い、そっちは？」

「海から這い上がってきたモンスターが乗り込んできたけど、そっちはＮＰＣと秋津茜さんがなんとかしてくれてる！」

そりゃあ半魚人だもんな、海を泳げて当然だろう。とはいえ二、三回クリティカルを首あたりの弱点に叩き込めばポリゴン爆散する雑魚敵だ、秋津茜やＮＰＣ達だけでも防衛自体はどうにかなるようだ。成る程、このシナリオは恐らく四、五人での攻略が想定されているのだろう。ＮＰＣに混ざって防衛する要員と直接幽霊船に乗り込む要員で役割分担するのが最適解と見た。もしくは先ほどのルストのようにバリスタ要員を割り振るのもアリだな。

そしてこのシナリオの目的が幽霊船へのカチコミである以上、勝利条件は半魚人の全滅もしくは……

「お前が船長かな？」

今の今までワラワラと半魚人を吐き出していた船内への入り口から、それはヌッと現れた。シルエットだけなら「ろくろ首」が近いだろうか。明らかに人間のそれよりも長く、キリンのそれよりも柔軟なそいつの首は巨体に見合う大きさですぬるりゆらりと蠢きながら俺

達を見下ろす。
蛇のようにも見えるが腐っているとはいえ地の黄と茶のブヨブヨしたマダラ模様の皮と、魚類の面影を強く持つ表情の無い面構えはそれがウツボのものであるとわかる。
首を含めなくとも俺と同じかそれ以上はある巨躯はなんと船の錨を握りしめており、明らかにこいつは他の雑魚半魚人もは異なる存在だ。

「さぁどう調理したものか……」

「私に任せて、ください」

「あぁレイ氏、今までどこ、に……」

甲板が揺れる。それは激突し繋がった二つの船の間を飛び越え、幽霊船に着地した鎧の戦士によるものだ。だがそれは土塊の騎士ではない、東洋の意匠が多く見られる鎧甲冑に加え、まるで憤怒の鬼をそのまま防具にしたかのような、般若の如き憤怒の形相を模した兜を装着した鎧武者。
その手には大剣ではなく赤黒い鉄槌……スレッジハンマーが握られており、ある意味分かりやすい刃物を持っているよりも凶悪さが際立っているようにも見える。

「ステータスのデバフは如何ともしがたいですが、この程度なら任せて、ください」

「お、おう……了解、援護するよ」

一瞬新手のモンスターかと思ったのは内緒にしておこう。

「コァッ、キァァァァァァァァァァァァァァ！！！」

ウツボ半魚人はなんとも形容しがたい音で吠えると、実に重量感のある錨を俺達へと振り下ろした。俺とレイ氏は磁石の反発のように別方向に回避すると、それぞれが役割を果たすべく動き出す。

「エムル、レイ氏とウツボ野郎のタイマンに水を差す半魚人を優先的に狙いつつ、隙を伺ってウツボ野郎に攻撃を仕掛けていくぞ」

「じ、地味に要求が多いですわ……！」

「要するに暴れるんだよ！」

どうやら向こうにとってもウツボ半魚人の出撃は追い詰められている証拠であるらしい。なんというか、先程まではゾンビパニックのそれに近い緩慢な動きであった半魚人達の動きが気持ち早くなったように見える。だがその速さは動きが洗練されたことによるものではなく、焦りに起因する直情的で分かりやすい動きだ。

「であれば数の不利は巻き返せる……！」

半魚人の一体に飛び蹴りを放ち、俺のヘイトがそいつに向かった……と思わせて別の半魚人に斬りかかる。ははは、この手のフェイントは苦手かな？　では今回の戦いを反省に次回に活かすといい……おっと、ここで死ぬなら意味ないな、残念！

レイ氏（スラム）のもとへ向かおうとする半魚人のうなじに、投擲した傑剣（デュク）へ

の憧刃が突き刺さる。振り向いたそいつにもう一本の傑剣への憧刃が脇腹へ命中し、半魚人は大きく仰け反る。
無手となった俺へと好機とばかりに半魚人が群がるが、あいにくプレイヤーは武器をいくつも持っているんだよ魚頭共め。

「確定四発乱数三発！」

四発当てれば確定、運が良ければ三発で確定するという意味が込められた魔法の呪文と共に、帝蜂双剣【改四】の右剣が閃く。
強化を重ねられたことで「壊毒」の付与率も上昇した刺突剣の貫きは四度の閃きを経て不用意に近づいたシャケ頭の半魚人の肩をボロボロに破壊する。
悲鳴……多分悲鳴を上げてアップルパイの生地のようにボロボロ崩れていく肩の付け根を抑えるシャケ頭を左剣でど突いて走り、インベントリに帝蜂双剣【改四】をしまいながら傑剣への憧刃を投げつけた半魚人の背中側の脇腹、厳密にはそこに突き刺さった傑剣への憧刃の柄尻を蹴り飛ばす。
貫通した刃にその腐った身体の動きが硬直した瞬間を狙ってうなじに刺さった剣を引き抜いて連続で斬りつける。
体力が尽きたことでその腐った身体はポリゴン爆散し、刺さる対象を失い池に落ちる刃を空中でキャッチ、そのままこちらへとドタドタ迫ってくる半魚人を無視して片膝をついたウツボ半魚人の方へと走る。

「エムル、奴の首に攻撃」

「はいなっ！」

凄いな、さっき使った遮那王憑きがもうリキャスト終わってら……愚者、なかなか使えるじゃないか。

魔力の刃がウツボ半魚人の首に傷をつける。それに対してウツボ半魚人が意識を向ける前に遮那王憑きを再起動した俺が巨体そのものを足場に駆け上がる。

「遠慮せず……受け取れっ！！」

縷々閃舞（るるせんぶ）、起動。

一閃につき三の斬撃が爆ぜ、連続した斬撃はその三倍の斬撃エフェクトの花を咲かせる。

戦況は圧倒的にこちらが有利……

だがここからがこのシナリオの本番だった。

だって元々水棲だもの（後書き）

固有ＮＰＣがいるんだもの、当然シナリオには積極的に参加しますよねぇ……（悪い顔）

既に賽は投げられていた（前書き）

更新が遅れてしまい大変申し訳ないです、リアルが安定しない……
チャートを書き直さないと……人生ＲＴＡ……

既に賽は投げられていた

おかしい。あんまりにうまく行き過ぎている。

「パーティ組んで役割分担完璧とはいえ、あまりにうまく行き過ぎてる」

罠、というわけではない。全体的な難易度がイージーに設定されているというべきか……ユニーク繋がりの可能性を差し引いても大陸ラストの街で受けられるシナリオにしてはあまりに簡単過ぎる。

「考えられる可能性は三つ」

一つ、特に意味はなく偶然簡単なシナリオだった。
二つ、実はウツボ半魚人すら雑魚敵でさらなるボスがいる。
いや、これらはなきにしもあらずだがむしろ……

三つ、

「ば、化け物め……僕様がパパの仇を討ってやる！！」

「ああクソ、もっと早く気付くべきだった！」

護衛系ミッションかこれ！！

護衛系ミッションとは、嫌いな人はとことん嫌いな……それでいてＲＰＧというカテゴリにおいて分かりやすく世界観を補強する手段

であるために多くのゲームで見かける特殊な勝利条件と敗北条件を持つミッションだ。
護衛対象として設定されるＮＰＣは大抵非力に設定されており、出現するエネミーからＮＰＣを守り通す、特定地点まで連れて行く……そしてその逆としてどれだけプレイヤーが暴れてもＮＰＣがやられた時点で敗北する、それが護衛系ミッション。
そして、このユニークシナリオにおけるキーパーソン「自称大海賊スチューデ」が幽霊船クライング・インスマン号に乗り込んだ瞬間、状況が動いた。

「おいおい全ヘイト奪取とかタンクの素質があるぜ……クソッタレ！！」

あまりにも貧弱な短剣一つで幽霊船に飛び移ったスチューデに対し、この場にいる全ての半魚人がヘイトを向ける。ウツボ半魚人すらもが眼前のレイ氏を無視してスチューデを狙っているのだ。

「か、かかってこい！」

「かかってこいじゃない……！」

「う、うわっ！」

スチューデの身体が引っ張られる。引っ張ったルストはスチューデを引きずるようにしてスカーレットホエール号に戻ろうとするが、海賊船に乗り込んでいた半魚人共もまた幽霊船に戻るようにスチューデを狙っているため、幽霊船側へ突き進むように逃走を開始する。

「なんで来た……！」

「ぼ、僕様だって、戦えるんだ！」

「お前より石ころを投げるほうが戦力になる……！」

「んなっ！？」

石ころ以下だってさクソガキ、まぁ確かに弱点が騒音を発しながら勝手に動くとかクソゲーすぎるわな。

とはいえ護衛系ミッションだと見抜けなかったプレイヤーの手落ちだ、リカバリと打開策を考えなければ。

幸か不幸か完全に俺とエムルはスルーされているため、どう動くべきか考えているといつの間にか折れたマストをよじ登っていたモルドが狂乱状態に陥った半魚人達を俯瞰しこちらに指示を飛ばして来た。

「ルスト！　右側突破！　ごめんサンラクさん、左の群を攻撃して！」

「よっしゃ任せろ！　レイ氏！！」

「あの半魚人は私が……！」

どうする、とりあえずルストとスチューデを追う半魚人を食い止めなければならないが、お荷物抱えて逃げ続けることはできない、どこかでこの後手に回った状況を打開しなければ。

「エムル、お前に大命を与える」

「は、はいなっ！」

「あそこで立ってるナヨいのいるだろ？」

「いますわ」

「あそこにお前をぶん投げる」

「ですわぁ！？」

むんずとエムルを掴み、照準合わせぇー……

「待って！　待ってですわ！　早まるのはよくない、よくないですわ！？」

「エムル……秋津茜も言ってたろ？　兎は一羽二羽で数えるからイケるって」

「それシークルゥお兄ちゃんが否定してたですわやぁぁぁぁぁあぁあぁぁあぁあぁあぁあぁあ！！？」

ぶん投げる！！

半魚人共の上をエムルが飛んでいく。若干捻りが入ったせいでジャイロ回転してるが誤差だよ誤差、というかエムルもエムルでちゃんとモルドの肩に着地している辺り慣れってて怖いなあ！

それはともかく、ここから少し無茶な動きをするからエムルをどこかに置かなければならないし、どうも俯瞰的な視点からの支援を得意としているらしいモルドの護衛と言葉以上にダイレクトなポインターとしてエムルはあっちにいた方が役に立つ。

「よーし…………ゴー！！」

まずはヘイトの奪取だ、どんなカラクリかは知らないがスチューデが全部持って行ったヘイトを丁寧に一個ずつ剥いでこちらに貼り付ける。

ライオットアクセル起動、体力が削れて速さと膂力が加速する。駆け出した先、半魚人の一体へと加速した勢い任せの飛び蹴りを放って注意をこちらへと向けさせる、こちらに注意を向けた一体が立ち止まったことで後続がそいつに引っかかる。ギャグのような連鎖は行進を止めた原因へと意識を向け、ある程度のヘイトをこちらに向けることに成功する。

さらに致命秘奥【ウツロウミカガミ】起動、集めたヘイトをその場に残して移動する。先程よりも加速したとはいえ所詮はゾンビの親戚のようなもの、ＡＧＩに重きを置いたレベル９９の脚なら容易く追い越すことができる。

「レイ氏、そっちにいる雑魚を頼む！」

無言で頷いたレイ氏がスキルエフェクトが残留する、現在進行形で半魚人が十数人群がる場所へと走っていく。

敵の多寡はもうどうでもいいが、その場所が欲しい。

「ルスト、まだ走れるか？」

「そろそろスタミナが限界、一度回復の時間が欲しい……」

「そうか……レイ氏が雑魚を散らすからそこを通ってあっちに戻ってくれ」

「分かった……多分モルドが援護を飛ばしてくれる」

「俺バフとか弾いちゃうんだけどなぁ」

「火力支援だから一安心……！」

現状がすでに安心のカケラもないけどな！！
まるで騒音を強制シャットアウトするために顔を殴られたかのように気絶状態のバカを雑に引っ張りながらルストが駆けていくのを確認し、傑剣への憧刃を握る手に力を込める。
状況だけ見ればバリッバリの死亡フラグだが策はある。要するにあのゾンビトレインをどうにかして止めればいいのだ、そして別にそれはお行儀よくストップさせる必要もない。

「先頭を転ばせて後ろを巻き込む、さっきと一緒だ……」

いや待て足止めさえできればいいんだ、だったら必要なのは無双ゲーの如き強さではなく……パズルゲーのペナルティのような邪魔さだ。

「だったら……！」

インベントリアからアイテム選択、こちらに迫る冒涜的な行列の進行上の座標を指定して……！
ルストのスタミナが尽きて走る足が速度を落とす、モルドとエムルの魔法がウツボ半魚人へと放たれる、俺がアイテムを取り出す最後の行程を終えんとする、レイ氏が振り抜いたスレッジハンマーが半魚人を打ち据える……それぞれがそれぞれの行動をする中、またしても――というか奴はそういう星の元に生まれたのかと問い詰めたくなるような――奴が歯車を動かす最後のひと押しであった。

「すいませんっ！　転がっていったシークルゥさんを回収してて遅れました！！」

別に秋津茜が原因、という訳ではない。恐らく秋津茜は「最後の一人」であっただけで、この場にプレイヤーが全員揃ったこと自体がトリガーだったのだろう。物凄い雑にシークルゥを担いだ秋津茜がクライング・インスマン号に飛び移った瞬間、一瞬時が止まったかのような錯覚を覚える。

（違う……違うぞ、これ本当に止まって……）

雨粒が、俺の眼球のすぐ側で停止している。時間にすれば一秒に満たないラグにも思える世界の停止は、幽霊船の周囲に発生した巨大な水柱を再起動の合図としたかのようにすぐさま何事もなかったかのように動き出す。

これまでの荒波に揺れるそれとは桁の違う揺れにこの場にいる全員が行動の中断を余儀なくされる。

「はぁあ！？」

水柱は重力に従い豪雨と共に海へと落ちていく、だがその柱の中にあった巨大な……あまりに巨大な「蛸足」に俺は呆然と動きを止めてしまう。己の迂闊に気づき慌てて半魚人共へと振り向くと、先程まで狂乱のままにスチューデを追っていた筈のそいつらは、そんな事実はなかったとばかりにその場でピクリとも動かずに停止している。

「え、え？」

「な、何事！？」

「やばいですわやばいですわ……サンラクサン！！」

エムルの声が酷くクリアに聞こえる。そしてその言葉は、状況が動くのとほぼ同時にこの場にいる全員に届いた。

「ク、クターニッドですわ――――っ！！」

「はぁあ！！？」

水柱は八本、つまり八本ある漆黒の触手がクライング・インスマン号をガッチリと固定する。まさかデストラップかと目の前が真っ暗になりかけるが、まだ残っている思考の冷静な部分がそれを否定する。
ある程度の数なのか参加プレイヤー全員なのかはともかく、戦闘エリアに入っただけで即死なんてそんなバカな話があるか、あるわ。だが少なくともそれはシャンフロでの話ではない。
であれば参加プレイヤーが全員「クライング・インスマン号」に乗り込む事で条件を満たした何か……そして足だけとはいえ姿を現したユニークモンスター「深淵のクターニッド」……そもそもクターニッドとどこで戦うのか……特殊なエリア？

「まさか、このシナリオが開始した時点でＥＸまで停車なしの直通？」

八本の巨大な触手によって完全に掴まれたクライング・インスマン号が船体を軋ませながら沈んでいく。沈没ではなく、これは……！！

「こういうのって普通開始前に断りがあるもんだろぉぉぉ！！」

叫んで足を緩めてくれるほどクターニッドは優しくはないようだ。
重力と浮力を全て振り切った規格外の膂力によってクライング・インスマン号は海の底、暗闇の深淵へと引きずりこまれていく……！！

『ユニークシナリオＥＸ「人よ深淵を見仰げ、世界は反転る」を開始します。』

そして何もかもがひっくり返る。

既に賽は投げられていた（後書き）

ふわあぁぁ！　いらっしゃぁい！　よぉこそぉ→深淵へ〜！　どうぞどうぞ！　ゆっぐりしてってぇ！

いやま゛っ←てたよぉ！　やっとお客さん（ゲス顔）が来てくれたゆぉ！　嬉しいなあ！　ねえなんにぃで死ぬぅ？　色々あるよぉ、これね、眷属って言うんだってぇハ←カセに教えてもらったンの！

ここから攻略が始まるから楽しんで逝ってにぇ！

静謐が終わる、廃都よ賑やかなれ

「……強制気絶とは新しい」

ログインする時に感じる、眠ったはずの身体が世界を知覚するような、眼を覚ますような感覚。

ボロボロの甲板に横たわっていた俺は、五感に押し寄せる情報の奔流に頭を振りながら起き上がって辺りを見回す……案の定というか、お約束というか俺しかいない。だが俺以外全滅ということはないだろう、流石に。

そしてあの半魚人達は、と落ちていた傑剣への憧刃を慌てて拾い上げて視線を向ければ……なぜかそこにはビチビチと跳ねる新鮮な魚が大量に。

「どういうことだ……？」

半魚人っていうか全部魚になってるが、何が起きたんだ。恐る恐るヌッタヌッタとうねるウツボを剣の腹で叩いて、意を決してインベントリに放り込む。

「ディープアビス・モーレイ……本当にただの魚（アイテム）だな」

一体何がどうなってるんだ、半魚人の正体が魚だったのか？　それとも半魚人がただの魚になったのか？　うーむ……いやそれどころじゃねぇ。

「ロードが入る直前、拒否権無しでＥＸシナリオ始まってたよなぁ……」

クソ……流石にそれは想定していなかった。強制イベントはゲームじゃありふれたものだ、そして大凡初見殺しであることもありふれたことだ。
見上げた先、夜空とは違う暗闇にキラキラと星のような何かが遠目に見える。見た所、どこか洞窟内のようだが……そして俺はようやくこの場所の観察を始める。
「空気自体はある、やっぱり洞窟の中か何かなのか？　そしてなによりこの光景よ」
一言で言えば「地下都市」、海底に引きずりこまれたのだから所謂アトランティス的なエリアなのだろう。
あの嵐と共に現れ、亡者の呻きの如くこちらを襲った幽霊船は、そんな事実など最初からなかったかの如く、航行不可能な損傷を背負いこの海底都市の端っこに静かに座礁している。
何故俺だけここに残されているのかは……うん、心当たりがないわけではないが、とりあえず深くは考えなくていい。
「このエリア……立地、というかマップ的にはサードレマと同じタイプか」
つまりは中央に城を置いて、円形に建造物や道路が配置された円形都市。船の上から見る限りではどうやら俺が今いる場所はこの円形の外縁部であることくらいしか分からない、あと街並みは崩壊が酷いが中世風、つまり神代の文明以降のものであるということ。
「クターニッドの本拠地なんだろうが………クソ、エムルを連れてきたのは完全に失策だったな」

ＮＰＣがリスポン出来ない以上、死亡確率が極めて高いＥＸシナリオにはなるべく参加させたくなかった。ＥＸシナリオを発生させる前段階なら問題ないと思っていたが、まさかこんな不意打ちを食らうことになるとは。
思い通りにいかな過ぎて逆に楽しくなってきた、性質は真逆も真逆だがクソゲーを攻略するときと同じメンタリティになってきたぞぉ……

「んぉ」

どちらにせよＥＸシナリオに突入した以上、攻略するのがゲーマーとしての礼儀というもの、装備やステータスを確認していた俺は、ステータス欄に追加されていたある項目に気づく。

「特殊状態「深淵の刻限」……」

特殊状態と言われ真っ先に思い浮かぶのはリュカオーンの姿。今思えばウェザエモンの強制レベル制限もある種の特殊状態だったのかもしれないな、いやそれはそれとしてだ。

「この数字……成る程、この場所に滞在できるリミットは七日間ってわけだ。」

１６７：５８：２１……目減りしていく数字の羅列を変換すれば、このエリアに居られる時間が決まっていることが見てとれる。だがタイムリミットが分かったのは良いニュースだ。
なにせ七日間もログインし続けることは不可能、であればこのエリアのどこかにセーブポイントが存在するということ、そしてセーブ＝ログアウトの性質上、その場所は安全が確保されているということ。安全地帯があるのならば、ＮＰＣをそこに叩き込んでおけば少

なくともタイムリミットまでは安全が保障される。

「七日あるなら今すぐクリアを目指す必要はない、エムルやシークルゥ……ああそうか、一応あのクソガキも含めてＮＰＣの確保、そしてセーブポイントの発見……」

よし、最終目標の前に達成すべきオーダーは決まった。ひとまずは動かないことには何も始まらない、他のメンツを探しつつセーブポイントを見つけなければ。

「よし、行くか！！」

甲板からフリットフロートを挟んで飛び降り、落下ダメージを軽減する。エリアチェンジするまでのロードの間に体力は全回復されていたので、落下ダメージで死亡だなんて情けない事にはならなかったがどちらにせよ体力を削ってなんぼのスキル構築であるので、このまま行くことにする。

「見た所モンスターの姿は無し」

海底都市にしては妙に青々とした草原に着地し、注意深く辺りを見回す。どうやら都市部の方には灯りがあるらしく、今俺のいる場所はその灯りのお零れでかすかな光を帯びているようだ。軽く地面を蹴ってほじくり返してみると、砂とは違う土と一緒に海藻とは違う雑草が掘り返される。

「……どうにも海底っぽさがないな」

エリアを構築している何もかもが、そのまま地上のエリアとして使

えそうなものばかりだ。さすがにこのゲームで雑な使い回しが許容されるとも思えないから、何らかのタネがあるのだろうか。
振り返れば船の残骸、嵐の中でホラーですらあったクライング・インスマン号もこうなってしまえば哀愁が漂ってくる。とはいえ、プレイヤーのスタート地点に大したものがあるとも考えにくいし、仲間探しとセーブポイント探しのために向かうとはいえ、船の残骸を調べるよりもあの都市を調べたい。

「外周はほぼ無事、本当にただ風化したって感じだな」

てっきりクターニッドに襲われて滅亡とかそういうバックストーリーがあるのかと思ったが、崩れた外周壁は戦いによるものというより単純に風化して崩れ落ちたという感じだな。崩れて瓦礫が積もった部分から都市内部へと侵入すれば、改めてこの都市の姿をよりはっきりと見ることができた。
何よりも特徴的なのは建物の建材から道路に至るまで全てが淡い青一色であるということか。どうやら塗装による色調統一ではなく、そういう色を持つ石材を使っているようで灯り代わりに辺りを照らす奇妙なランプのようなものに照らされた街並みは何とも幻想的な光景だ。それが廃墟であり、崩壊と静寂を帯びていれば尚更に。
だが気になる点が一つ。

「家屋が封鎖されている？」

施錠とかそんな生易しいものでは無い。損傷がひどいものが大半ではあるがかろうじて玄関の扉や窓が残っている家屋の多くが外側から封鎖されているのだ、それもご丁寧にやっぱり他と同じ色の木材で。
なんだか一気にきな臭くなってきたな、少なくとも外側から民家を封鎖するような状況がお祭りや祝日であり得るとは思えない。中に

いる住人を外に出さないようにする処置をしなければならない状況とは……

「白骨とか出てきたら割とビンゴだが……さて、住民の皆さんの熱烈歓迎か」

名状しがたい姿と、声と、クーラーボックスの中で忘れ去られて腐りきった魚のような腐臭と生臭さのミックススメル。流石にあのこの世の汚物を圧縮しきったような激臭を完全再現したわけではなく、幾分かマイルドになっているがそれらの存在感を際立たせるには十分すぎる。

「出たな腐りつみれ共め」

幽霊船の上にいた奴らがなぜか魚になっていたのでもう出現しないかと思ったがそんなことはなかった。通りの曲がり角から現れた半魚人達は、その腐りかけの身体からちょっと触りたくない類のヌメついた体液を滲ませながらこちらを認識する。最初から警戒状態であったのに少しだけ違和感を感じつつも、こちらも戦闘態勢に入る。幽霊船で戦った連中とは違い、妙に整った装備を纏った半魚人共は奇声をあげながらこちらへと突進してくるが、所詮は魚頭故に本当にただ突っ込んでくるだけの愚直な突進など脅威では無い。そうとも、先陣が突っ込み第二陣が続き第三陣が続き……第四、第五、第六………第ｎ陣、っていやいや。

「待て待て待て！？」

こっち一人なんですけど！！
作戦変更、あんなのとまともに戦ってなどいられない。迷うことなく１８０度反転、全速力で走り出すのだった。

静謐が終わる、廃都よ賑やかなれ（後書き）

実はクターニッドが一番反則くさい能力持ちだったり

記憶とは経験であり、経験とは力である。エクスペリエンスイズパワー。

「コスモ・バスター」というゲームがある、フェアクソの数ヶ月前に発売されたフルダイブＶＲの中でも割と古参に位置するＦＰＳであり、その最大の売り文句は「圧倒的絶望を全身で感じ取れ！」というものだった。プレイした感想から言わせてもらうと、確かに圧倒的絶望を全身で余すことなく感じることはできた……うん、３６０度全方位から無限リスポーンするバスケットボールに手足だけくっつけたような敵キャラに群がられる、という理不尽であったが。
何がいけなかったかといえば、フルダイブＶＲ黎明期にありがちな「手に持ったコントローラーを動かす」ことと「実際に自分が動く」ことの違いを理解していなかった、ということだ。コントローラーであればスティックを傾けるだけで行える行動をフルダイブでは自分の意思で身体を動かさなければならない、その為従来のコントローラータイプとフルダイブでは調整の仕方が全く異なるのだ。フルダイブ黎明期にはそう言った調整を失敗した凡ゲーとクソゲーの中間に位置する残念ゲーはともすればクソゲー以上に存在していた。

「クソ、マッピング機能が欲しいと切に願うのも久しぶりだ……！！」

今の状況は嗚呼懐かしきコスモ・バスター５面ミッション「連合軍殿撤退決戦」を彷彿とさせる。捨て奸（すてがまり）、ってあるだろ？　超脳筋型蜥蜴の尻尾切り。あれを「一人で」「何度も」やらされるという地獄絵図だったが、現状の打開でまさかあの経験が役立つことになろ

うとは。
「連合軍殿撤退決戦」における最終的な結論最適解は戦わないことだった、なにせ敗北条件が「自プレイヤーの死亡」だけだった上に評価基準が「自プレイヤーの被弾率とキルスコア」だったからな、味方のNPCがいくら死のうと評価に一切影響しないから崖まで追い詰めて橋を爆破すればS評価余裕、という攻略法に気づくまでが地獄絵図なものだったが……何が言いたいかといえば、そのミッションで重要だったのは「如何に特定ポイントまで無傷で逃げられるか」ということだ。
「コスバスの時はバグを使った壁登りだったが、このゲームなら正規手段で登れる！」
ゼログラビティ、フリットフロート、遮那王憑きを起動。最高クラスの機動力を獲得した俺は瓦礫を足場に跳躍、壁を蹴り虚空を踏んで建物の屋根へと駆け上がる。コスバスでは敵が壁の上に登ることはできなかったからx、y軸でz軸で安全圏に逃げた俺を追うしかできなかったが……ああ、どうやらこっちじゃそう甘くはいかないようだ。
「個体に人権がない群体モンスターってのはどうしてこう厄介なもんかね……！！」
塵も積もれば山となるなら、モンスターを積めば足場になる。後続が先発を踏みしめ、さらに同じことを繰り返し続けることで死屍累々の山が屋根へと続く道となる。大軍勢の何％を使いつぶしたのか、道を塞ぐほどの山を踏み越えてその数倍の数の半魚人がこちらを追ってよじ登ってくる。なるほど、厄介な行動の自由性だ。
「だが好都合だ単細胞共め」

愚直にまっすぐにしつこいくらい素直に俺を追いかけてくる奴らは融通が利かない。回りこむ、という思考ルーチンが存在しない半魚人は俺が通った道を極めて素直に追跡する、だったらｘとｙとｚの三方向を生かして撒くことは容易い。
屋根を伝う、屋根を飛び越える、柱を蹴って逆走、さらに高く登って飛び移ると見せかけて下に落ちる。俺が行うパルクールじみた動きを奴らは人的資源の消費という形で無理やり食らいつく。無尽蔵に思えた物量が屍の山が積み上げられるたびに減っていく。俺が道を変え、高さを変えるたびに置いていかれる半魚人は増えていく。落下対策をしていない半魚人たちは上から下へ落ちるたびに不要な屍を増やしていく。

「はいお疲れさん」

時に逃走から反転、追いついてきた半魚人を逆に仕留めてさらに数を減らしていく。仮に半魚人が無限リスポーンだとしても、ＡＩがあえておばかに設定されているなら付け入る隙は幾らでもある。

「ハッ！　バーカ！！　俺を追い詰めたいなら包囲殲滅仕掛けた上で味方もろとも毒ガス散布でもするんだな！！」

……いや、実行はしなくていいからな？

からくも……と言うほど苦戦はしていないが、ゾンビパニックじみた半魚人をうまい具合に処理することができた俺は、二階建ての家屋の屋根まで登り、改めて街の全貌を見回す。

「中央に城、円形の街の四方向になにやら塔。なんと言うか明らかに「あの四つを攻略するとボスに挑めるよ」と言わんばかりな……」

うーん、見た限り他のプレイヤーたちがいるようには見えないし、セーブできそうな場所も見当たらないな。

遅れてやってきた鱚(キス)頭の半魚人を建物から蹴り落とし、別の建物へと二段ジャンプを絡めながら移動。後ろの方で無理やりついて来ようとした半魚人が何匹か先に逝った半魚人と同じ運命を辿っていたが、あいつら頭悪すぎないか。

「ステルスアクション……はまだいいか、とりあえず屋根伝いに移動して……うん？」

今誰か走ってたな。それも半魚人たちのゾンビじみたそれとは違う、傷をかばうような走り方だ。明らかに傷を庇えるだけの知性がある何者かが街の中を逃げている。だがどうする、気になることがある。

「遠目とはいえ……明らかに俺らの中で一致する見た目の奴がいない」

見た限りでは大男ではあると思う。まずこの時点でルスト、秋津茜、エムル、シークルゥ、スチューデが除外される。であればレイ氏かモルドか？　いや……というか………なんか尻尾生えてなかった

か？　こう、魚の尻尾的な感じの……であればやっぱり半魚人か？
だがあいつらは首が半分取れかかってても構わず掴み攻撃を敢行するようなやつらだ、そんな半魚人が傷を抑えて何かから逃げる？

「……怪しい、実に怪しいぞ」

フラグとイベントの匂いが漂ってきてるな……生臭い。上から見た限り、多分あの通路はあっちにつながっているから、向こうに走れば先回りできる。

「よし、行こう」

屋根から飛び降り、若干体力を削りつつも俺は謎の人影を捉えるべく先回りを行う。家屋を飛び越え、通路をショートカットしてマップ上を無理やり直進する。リキャストタイムが半分になったことで機動力そのものが大幅に向上し、二段ジャンプや諸々のモーション強化も併せていとも容易く予想地点に到達する。この手のパルクールじみた挙動ができるゲームは延々と走っていたい気分にすらなるが、衝動は胸にしまって屋根の上から辺りを窺う。
どうも音が聞こえづらいこのエリアであって狂った叫びが聞こえてくるということはすぐ近くにまで半魚人が来ているということ、そして……

「はぁっ……はぁっ……！」

「ハロー比較的知能が高そうな半魚人、声帯使って会話はできるかい？」

「くっ、回り込まれたか………っ！　って、何故こんなところに鳥人族(バーディアン)が？」

「守護者（ガーディアン）？」

それの目の前に降りるよう計算して着地し、赤い血（ダメージエフェクト）が流れる肩を押さえた半魚人へとファーストコンタクトを試みる。体格や声からして性別はオス……妙にスケスケなダイバースーツのような服をまとった、鮫と人を足して割ったような姿の、これまでに遭遇してきた半魚人とは一線を画する知性（NPC）の光を感じる男は俺を見て妙な単語を口走りつつも、いきなり襲い掛かるようなことはせずに呆然と俺の姿を見ていた。

だが、この鮫男が逃げていた以上追う存在がいたことは間違いなく、曲がり角から知性のかけらもない腐れ半魚人共が群れを成して殺到する。

「ああくそ、話は後だ。これ飲んだら走れ！！」

「え、ああ、誰とも知らぬが感謝するぞ！！」

兎かクソガキかプレイヤーを探していたのに、この都市に来て最初に接触した会話可能な存在はなんと鮫の半魚人であった。

深淵に抗う鮫と鳥（後書き）

というわけで半魚人（？）と接触です。分かる人には分かる元ネタ、お姉ちゃんにはしょっちゅうお世話になりました……

ハンテンするセカイ、コトワリすらも（前書き）

昨日は更新をすっぽかしてしまい申し訳ありません。私事の方が少々ごたついておりまして、少し更新ペースに乱れが出るかもしれません

ご迷惑おかけします

ハンテンするセカイ、コトワリすらも

曲がり角にいた半魚人を斬り捨て、挟撃されないかを確かめてから謎の半魚人に呼びかけ走る。

「何故鳥人族が……いや待て、羽がない？」

「悪いがこれは被り物だ、中身は普通の人間だよ！」

「ニ、ニンゲン、そうか……俺の名はアラバ、助けてくれたこと、感謝する」

「サンラクだ！　あの瓦礫から屋根に登るぞ！」

「お、おう！」

家屋の壁が崩壊し、ちょうど登りやすい形に崩れた瓦礫の上を駆け上がり、注意深く索敵を行う。

「よし、あっちの屋根に飛び移……」

「ぐ、むぅ、ぼ、バランスが……」

振り向くと、そこには謎の半魚人改めアラバなるＮＰＣが、駆け上れるような瓦礫を両手両足を使ってよじ登っている光景が。

「すっとろい！！」

「うおお！？」

細身な俺のアバターよりもがっしりとした腕を掴み、無理やり引っ張り上げる。数秒の差で半魚人共がアラバのいた場所に殺到し、すぐさま後続が前の連中を踏み潰して肉階段を形成していく。

「俺よりＳＴＲありそうなのにちんたらよじ登るなよ！」

「そ、そうは言ってもだな……というかえすてぃーあぁるとは一体なん」

「言い訳無用、撤くぞ！」

まさか屋根を飛び越えることもできないのでは、と若干不安になって振り返ってみたが、流石にそこまでどん臭くはなかったらしい。軽業が得意そうな見た目ではないが、少なくともレイ氏のような水にも浮かばなそうな重装甲というわけでもないのだから高々一メートルくらいは跳んでくれなければ困る。

「さてどこに逃げたものか……よっ、ほっ。よし、掴まれ」

「その身のこなし、やはり君は鳥人族なのではないか？　いや、しかし翼も羽毛も無いぞ……」

「だぁーっ！　てめーの尻尾に縄くくりつけて水揚げすんぞ！」

「す、すまない！」

縄なんて持ってないけどな。ともかく事情聴取（話を聞くの）は後だ、新たなＮＰＣを拾うことになるとは思わなかったがこれはこのエリアの、ひい

てはこのＥＸシナリオの攻略にきっと役立つだろう。と、その時だった。

「なんだ？　歌？」

「不味い……人魚（ニンギョ）だ！！」

人魚、人魚と言ったか。人魚と言えばあの人魚だろう、何故そんなモンスターにでも遭遇したような慌てようで……まさか。

「アラバだったか、もしかしなくても人魚って……モンスターなのか？　お前らの親戚とかじゃないのか？」

「何をバカな！　アレは人の上半身に擬態した魚だぞ！　誇り高き魚人族（マーマーン）と一緒にしないでくれ！！」

新情報がてんこ盛りではあったが、少なくとも確定したのはこのゲームにおける「人魚」はモンスターであるということ。エムルやアラミースのようなモンスターでもＮＰＣのようなＭｏｂが存在するかもしれないが、完全敵対するのであれば俺はヴォーパルバニーだろうがケット・シーだろうが遠慮なく攻撃する音の、人魚であろうと遠慮容赦は………ん？

ふと引っかかりを覚える。人魚？　いや、海底都市なのだから人魚のような海棲のモンスターが出現することはなんら不思議なことじゃない、現に今も背後では消費期限が壮絶に切れたツミレの擬人化共が追ってきているわけだし。クソッタレめ、魚なら魚らしく鰓呼吸でもしてやが、れ……それだ。

「なんで陸に人魚がいるんだよ！？」

見上げた先、そこには優雅に宙を泳ぐ人魚の姿が。成る程、擬態である事を事前に聞かされていなければまず間違いなくアレがモンスターだとは思わない、気合の入ったモデリングの美女や美少女が微笑みを浮かべた口を開く。

「ル――――」

「ラ、ア――――」

「いきなりヒップホップとか歌い出したらどうしようとか思ったけど、そんなことはなかったか」

「ぐぁあ、がぁぁぁぁ！！？」

「え、ちょ、え、何事！？」

突如耳を抑えて苦しみだしたアラバ、その身体には明らかになんらかのデバフと思しき暗色のエフェクトが纏わりついている。流石に人魚の歌とこれが無関係だと判断できるおめでたい頭はしていない、迷う事なく人魚共が敵対的であると断定して行動を開始する。
どういう理不尽か空中を遊泳する人魚にここから届く攻撃手段はない。であればどうすればいいか、こうするんだよ。

「足りない高さは足場で補える……」

スキル起動、天狗の如き身のこなしに重力の枷から解き放たれた壁走りで付近に存在する三階建の家屋を駆け上がる。そして壁を踏みしめ、自ら足を離し、人魚が持つアドバンテージたる空中へと土足でダイブトゥスカイを敢行する。
スキル「グラビティゼロ」はスキルレベル×十秒の間、壁や天井に

対して行う登攀などの行為に重力計算が働かない、というものだ。
室内であれば文字通り縦横無尽に動くことすら可能なスキルによって、壁を足場にしたジャンプはスキル未使用時と比べても明らかに伸びた飛距離と勢いで宙を舞う人魚へと飛びかかる。
人魚はと言えば、なんらかのデバフ魔法らしき歌が響く中で動く俺に驚いたように目を見開くが、飛距離が足りていないことに気づいたのか嘲笑うかのように目を細め……

「よう。」

「!?」

フリットフロート起動。たった一歩の踏み込みが飛距離の起点となる、あらゆるスキルが身を削ってでもたった一歩の踏み込みからの跳躍を補強する。

「言っておくが、俺は美少女だろうがイケメンだろうが一切遠慮容赦なくキルできる」

「か、ひゅ……っ!?」

なにせプレイヤー操作のアバターなんて七割イケメンか美少女、もしくはイケオジなのだから。残り三割はロボかネタ。
それを差し引いてもボスキャラがイケメンだったり美少女だったりするゲームなど星の数ほどある。美少女にヘッドショットなんて日常茶飯事だし、そこが弱点ならイケメンの顔をタコ殴りにだってする、それがゲームというものだ。

空中ジャンプによって人魚の虚を突いた刃の一閃が人魚の喉を切り裂く。ポリゴンが飛び散り、歌を強制的に中断させられた人魚が空

気の漏れるような音を出す。何体かいる別の人魚達も、同胞の声が奪われたことに歌を中断して落下運動を始めた俺へと視線を向ける。

「さぁ次は誰だ！」

喉を切り裂いた人魚の手首を掴み、共倒れの落下を防ぐために必死になって泳ぐ人魚を落下傘（パラシュート）代わりに降下しながら俺は他個体の人魚共に吠える。落下ダメージによって自滅する心配のない高度にまで降りた時点でしがみついていた人魚を離す。

できれば撤退してもらいたいが、こっちが明確に攻撃を仕掛けたことで完全に怒らせてしまったのか、人魚共が撤退する様子はない。

できれば接近戦を仕掛けてくれれば助かるのだがさてどうしようかと考えていると、すぐ近くでゴギョ、と不気味な音が。

「なん………」

「ぬぅあ！！」

明らかにやばい角度に首が曲がった人魚が力なく俺の立つ屋根へと落ちてくる。首筋から大量のポリゴンを撒き散らしていた人魚は何が起こったのかわからない、という表情でその姿をポリゴンと散らせる。

そして口から、いや厳密には人間のそれと比べて明らかに鋭さが割り増しされた歯（牙）に、スキルエフェクトの青を纏わせたアラバが血走った目で牙を剥き出しに人魚共を睨め付ける。

「かかってこい魚共め！　このアラバの牙に噛み砕かれたいのであればな！！」

「えぇ……」

さっきまで耳抑えてのたうちまわってたやん……水揚げされた鮫そのまんまだったやん……ていうかこいつ耳あるんだな。
人魚達は警戒するかのように俺とアラバを睨み付け、そして泳ぎ去っていった。くそう、遠距離攻撃手段さえあればなぁ。

「お前、思ったよりワイルドな戦い方するのな」

「こ、これはあくまでも奥の手だ……己の得物を無くしてしまったからな。そうだ、これくらいの片刃の剣を見なかったか!？　鉱人族(ドワーフ)の名工に鍛えてもらった業物なんだが……」

「悪いが見てないな、俺だってこの海底都市を調べ始めたばかりなんだ」

「海底都市？　何をいっているんだ」

「え？」

巨躯の半魚人はきょとんとした表情で俺の言葉に首をかしげる。

「ここは「深淵盟都ルルイアス」、海中で文字通りひっくり返った反転都市だ」

「…………あー、ちょっと待て思考整理させてくれ」

まず確認その一。真っ暗闇な空、よくよく思えば何故か真上へと落ちていく雪のようなものを指差し問いかける。

「あれは洞窟の天井ではなく？」

「あれが海底だぞ、マリンスノーが落ちていってるじゃないか」

確認その二。ぴょんぴょんとその場でジャンプ、逆立ちしてちゃんと物理演算が正しい向きに働いていることを確認して問いかける。

「だったら俺たちは上に落ちるのでは？」

「深淵の盟主の力だぞ、この都市全域に盟主の「反転」の力が満ち溢れているからな」

最後に、大きく息を吸い込み、吐き出し、呼吸が滞りなく行われていることを確認して問いかける。

「普通に息吸えてるけど」

「盟主の「反転」の力で「空気がない場所」が「空気がある場所」に書き換えられているんだぞ、盟主の力は死をも覆すのだからな」

「成る程、成る程……成る程………」

深淵のクターニッド……これ、勝てるの？

ハンテンするセカイ、コトワリすらも（後書き）

要するに海底の少し上あたりの水中に都市一つが丸ごとひっくり返った状態で固定されています。

兎にも角にも情報だ、情報がほしい。攻略ｗｉｋｉを充実させるためにはリスポン前提で突撃するのが一番なのだが現状それが不可能な今、可能な限りの情報を集めて敵の輪郭だけでも把握しておかなければならない。四つの塔、一つの城、円形にして逆さの都市、空を飛ぶ人魚、無尽蔵の半魚人、理性的な半魚人……これらの情報はただ一つのシナリオを彩るアクセントであり、キーパーツだ。

「と、いうわけでだ。まず最初にどこか安全の確保できる場所に心当たりは？」

「そ、それなら簡単だ……奴らは敵感知の大部分を目と耳に頼りきっている。だから視覚的も聴覚的にも壁で隔ててしまえば余程のヘマをしなければ見つからないぞ」

「なるほど、つまり……」

逆だったのか。この街のどこかに安全なセーブゾーンがあるのではなく、この街にある全ての建物が理論上はセーブゾーンとして機能するんだ。要するにかくれんぼだ、見つかりさえしなければ隠れ場所は安全性を維持する、中に入る方法は考えるとしてもこの広大な……なるほど確かに一週間くらいかけなければエリア全域を把握しきれないような広大な都市のほぼ全域をセーブポイント化させることができるなら色々と行動はしやすそうだ。

「俺は奴らの事を伝聞ではあるが聞いていたのでな……家屋に隠れていたのだが、ヘマをして窓越しに目が合ってしまいあのザマだぞ

「……」

「デンジャラスすぎるかくれんぼだな……」

見つかったら数十人規模（時間経過で増加）の半魚人に追い回され、下手に屋根に上がると人魚にデバフを浴びせかけられる隠れ鬼ごっこか……半魚人自体は全力で走れば割となんとかなる、となればこの街の探索における鍵は人魚の攻略法か。

「とりあえず拠点を探す、人魚なり半魚人なりと接敵するまで、お前の知る情報を洗いざらい話してもらうからな」

十数分間走り、時に半魚人に追われたりもしたが俺とアラバは丁度屋根の一部が崩れたことで最小限の崩壊で踏みとどまり、かつ中に入ることができる家屋を発見し、その中に入ってようやく一息つくことができた。そうしてアラバから聞き出した情報をまとめ上げて、ある程度このシナリオの内容が明らかになったのだ。

まず最初に、このアラバというＮＰＣはそもそもあの腐れつみれや人魚とは完全に別種族である。この質問をした時は危うく噛まれそうになったがまぁ確かに「お前チンパンジーみたいな顔してるしチンパンジー（サンラク）だろ」とか初対面のやつに言われたら殴っても仕方あるまい。ただ俺の場合その一噛みが死活問題になるので回避したが。

アラバは魚人族（マーマーン）と呼ばれる種族であり、あの半魚人や人魚は盟主、即ちクターニッドの力によって魚が変質したものであるらしい。曰く「人ならざる生きた魚」を反転させて「魚ならざる死せる半魚人」に変質させたものだとか、逆に「人ならざる死せる魚」を「魚ならざる生きた人魚」に変えてしまう……そんなこじつけのような屁理

屈を実現させてみせるからこそのユニークモンスターなのかもしれないが、となると見えてくる事実がある。

「魚からエネミーを作り出せるなら、実質的にスローターは不可能だな……色々悪巧みできそうだけど」

手っ取り早く雑魚との接敵を減らす方法としてベターな手段といえば「スポーンしなくなるまで根絶やしにする」という方法であるが、そこらの海から仕入れた新鮮なお魚を一瞬で腐った半魚人に変えられるのなら、奴らとの戦闘は装備の消耗と折れた骨以外に得るものが何もない。強いて言うならドロップアイテムくらいだろうか、人魚からは「人魚の赤身肉」なるアイテムがドロップしたが……これ、カニバリズムに抵触しない？　下半身側だから大丈夫理論？　つーかもしかしなくてもこれ白身肉もあったりするのでは。

そして次にあの四つの塔と一つの城について。大方予想通りというかテンプレートというか、城の最奥にはこの深淵盟都ルルイアスの盟主たる深淵のクターニッドが潜んでいるらしい。そして四つの塔、ここにはそれぞれ「封将」と呼ばれるモンスターが設置されているんだとか。

「深淵の盟主は別に俺たちを殺したくてルルイアスに招いているわけじゃないぞ、彼の者にとってこの都市の全ては盤上の駒に過ぎない……」

「あー、そこらへんはお約束だから別にどうとも思わんな」

バトルロワイヤルさせられないだけマシと言うべきだ。苦難とを共にしたパーティメンバーが報酬につられて血みどろのＰｖＰを繰り広げることだってあるのだ、仲間割れ誘発とかを警戒していたがそ

の可能性は低くなったと考えていいだろうか。
そして中ボスたる「封将」達は、それぞれが特殊な能力を持っており、こちらの力を封じてくるのだとか。アラバが知る限りでは封将の一体「クリオネア」は魔法の一切を封じ込めてしまうのだとか。
クリオネア……クリオネ？　流氷の天使（意外とグロいアレ）のことか？
そして最後に、深淵のクターニッドというモンスターに関して。深淵のクターニッドとは海の底、光届かぬ深淵において万象を束ね上に立つ盟主として君臨する超越者。この世の「理（コトワリ）」を裏返し、逆さにし、乱し、世界そのものを変質させてしまう「反転」の力を備える存在、それこそがクターニッド。
このルルイアスも元々は海上に存在していたなんの変哲も無い島であったが、クターニッドの力によって「海の上の島」を「海の下の島」に空間ごと捻じ曲げて逆さにしたというのだから、その力の強大さが伺えるというものだ。
「クターニッドは己の住まいに人を招いてはその足掻きを見て無聊を慰めているんだぞ。ここから生きて帰るには、クターニッドを楽しませる他にはない」
「はっ、タコの前で漫才でもすればいいのか？」
「かつて魚人族でただ一人、このルルイアスから生きて脱出した男がいた。その男はクターニッドの左眼を貫き……気付いた時にはルルイアスから脱出できていたらしいぞ」
「へぇー……なんというか随分と詳しいな」
「その男は俺の祖父だ」
「身内でござったか」

よし、情報を組み立てていこう。
まずこのユニークシナリオＥＸにおける最終目的は深淵のクターニッドを相手になんらかの条件を満たすこと、討伐は恐らくだが無理だ。死んでも生き返る奴をどうやって倒せばいいんだ、恐らくリュカオーンに「呪い(マーキング)」を付与された時のように、ラビッツからの接触が来た時のように……なんらかのクリア条件が存在するはずだ。
そしてこのシナリオにおけるボスに挑むまでにやるべきことは四体の「封将」を攻略すること、十中八九なんらかのボス戦ギミックが仕込まれている。でなければ態々四体のボスを徘徊型ではなく設置型にする意味がわからない、プレイヤーが自ら向かうだけの理由があるはず、単純なおまけ要素だったら泣く。
さて、であればやることは決まった。とりあえず念のため全てのアイテムをインベントリアに移動させ、体力、空腹度、諸々のパラメータを全回復させる。ちなみに「愚者」の神秘(アルカナム)のせいで回復は四敗した、おのれ乱数。

「セーブ完了……よし、ちょっと行ってくる」

「どこにだ？」

「俺の仲間がこの街のどこかにいる、あとついでにおめーの武器も探して来てやる」

リスポーンポイントを確保した以上もはや恐れるものは何もない、であればやることは一つだろう。

「特攻ってやつさ」

「うははははは！！　気分はハーメルンの笛吹き男だな！」

青一色の廃都を半裸が駆け抜ける。その後ろから増えに増えた半魚人、その数目測で百オーバーがたった一人の人間を狙って大行進しているのだ。空を見上げれば人魚の歌が響き、時折なんらかの攻撃なのか俺を抱擁せんと腕を広げて人魚が突っ込んでくる。

仮にも美少女や、美女のモデリングがされた存在を蹴り飛ばすことに抵抗を感じないわけでもないが、十体ほど蹴り飛ばした辺りで慣れた。

もはやホラーパレードと化した大群を引き連れ、美しい歌声（有害）をＢＧＭに街の中をただひたすらに走る。

「いや確かに目立つためにあえてヘイト集めたけどさぁ、沸きすぎだろあっはっは！」

ゾンビに追われるホラーも、ここまで増えればギャグにしか思えない。慌ただしく走っているのに人魚の歌はゆったりとしたスローテンポ、チグハグすぎてもはや笑えてくる。

走れ走れ走れ、どいつもこいつも後ろから追ってくるならいちいち確認する必要すらない、前だけ向いて情報を集めろ、人を探せ、ア

イテムを漁れ！

「勢いも！　パワーも！　理不尽も！　なにもかも足りてないぞお前ら！」

いきなり地面から現れて、即仲間を呼んで、なおかつ単体の戦闘力をぶっちぎってイかれた蠍と比べたらなんたるイージーモード、本来は人魚によってデバフを重ねられ行動を封じられるはずなのだろうが、悔しいことにリュカオーンの刻傷によって俺はあらゆる呪いを魔法によるバフデバフを弾く。

実際のところ、ピンポイントで頭や腰を狙われた場合どうなるか気になるところだが少なくとも人魚の歌は耳だけではなく俺の全身に効果を及ぼすがゆえに、脚と胴体にレジストされている。

人魚の上半身は擬態、チョウチンアンコウの提灯のようなものだ。だというのにまるで人のように何故？　とでも言いたげに眉をひそめる人魚の顎に遠慮容赦なくアッパーを叩き込む。

やっぱりだ、このシナリオにおいて半魚人や人魚と戦うことは下策なんだ。何度か戦闘を経たからこそ分かる、無限湧きする以前の問題として倒すための労力と成果が見合わない。

「このシナリオは……「隠れ進む」ことがデフォルトってことか」

そう考えると今俺がやっていることは下策も下策、無用なヘイトを集める愚策……だが、逆を言えば今この瞬間、この廃都で最も注目されているということでもある。

「遠からんものは音に聞け、近くば寄って目にも見よ……ってな」

生物の中でもある程度理性を持つ存在というものは大抵二種類に分けられる、すなわち馬鹿でかい音を立てて進むナニカを「確かめる」

か「逃げるか」のどちらかだ。

「すぅぅ…………誰かいるかぁぁぁ！！」

「ザンラグザァァァァン……っ！！」

ビンゴ、応えた！！

リミットリミット・マーチ（後書き）

嗚呼、窓に！窓に！

刻傷のレジストの判定ですが、全身に対する効果の場合は無効化が可能ですが特定の部位を指定する場合は無効化できない場合があります。
要するに対象に取る効果は無効化できませんが対象に取らない効果は無効化できます。（コンマイ語）

ぶっちゃけると、俺を追う怪物パレードを対処することはそう難しくはない。何せ俺一人にヘイトが集中しているのだから、ヘイトを切り離してしまえば安全に逃走することができる。

だからこれは騒音源と化すことでこの場にいるプレイヤー達に俺はここにいると知らせるのが目的であり、プレイヤーもしくはＮＰＣを見つけた時点で致命秘奥【ウツロウミカガミ】を使用して離脱するつもりだった。

だが、俺の声に応えた声、悲鳴と安堵が７：３でブレンドされた声を出したエムルの方に振り向き……とりあえず今の今まで組み上げていた予定や作戦がガラガラと根元から崩落する音が聞こえた気がした。

かつてエムルに聞いたことがあった。

「このランダムエンカウンターって魔法はなに？」

それに対してエムルが答えた魔法の効果を今になって思い出す。それはヴォーパルバニーやケット・シーなどのモンスターの中でも一部の存在のみが習得する「最後の切り札」である。

弱き者達であるヴォーパルバニーが自身の努力ではどうしようもない危機に陥った時、弱者は叫（歌う）ぶ。

ランダムエンカウンター
・発動者の周囲に存在する発動者自身よりもレベルの高い非アクティブ状態のモンスターを一体召喚する。召喚されるモンスターは発動者の発動時点でのレベルの１．（スキルレベル）倍の数値以下のレベルを持つモンスターの中からランダムで選択される。

アラバから聞いた情報を思い出す。何故人魚が空を飛んでいるのか、それはクターニッドの力によって理がねじ曲げられたこのルルイアスを「水中ではない」場所を「水中でもある」場所としてさらに捻じ曲げることで人魚達は空を泳いでいるのだそうだ。
難しく考えると混乱するが、要するに「水のない空中」としてねじ曲げられたルールをさらに「水がある空中」に変えることで俺達からすれば人魚が空を泳いでいるように、人魚達からすれば俺達が水中で走っているように見えるわけだ。裏の裏は表と言うが、無理矢理にも程があるぜクターニッド。
そしてこの廃都は深海に存在している、即ち海の底に直通している。ランダムエンカウンターの効果は周囲のどれくらいにまで適用されるのかを検証していないからなんとも言えないが、少なくともエムルよりもレベルが高いモンスターをシステムが探し出し、そしてこの場へと招いた。
まぁなにが言いたいかというと……エムルが発動した魔術によって招かれたそれにとって、ここは深海の延長線上なのだ。

「だずげでですわぁぁぁぁぁ！！」

モチーフとなったのだろう魚類とは似ても似つかぬそれは東洋の龍にしか見えない虹色の体躯で家屋を粉砕しながら、人に化けたヴォーパルバニーとそれに背負われた泣きべそをかく少年を追いかけている。そう、言うなれば……リュウグウノツカイＬｖ．１００。

「おまっ、なんつーもんを呼び寄せてるんだお前はぁぁぁぁ！！」

「だって！　だってぇぇぇ！！」

八両編成くらいの電車を長さそのままに縦に平べったくしてドラゴンの顔をくっつけた感じ、と言えばそのヤバさが分かるだろうか。もはやソロで倒せるとかそういうレベルの話ではない、恐らく半魚人や人魚に追い詰められたエムルが止むを得ず発動したランダムエンカウンターによって呼び寄せられたギガリュウグウノツカイは、まず最初に人魚や半魚人を容易く殲滅し、そして己を呼びつけた不遜なる兎とクソガキを次のターゲットとしたのだろう。

「ええい、渡せ！　そして掴まれ！」

「はいなぁぁぁ！！」

スチューデを担いで走る速度は人間の姿の方が上だ。その為、人の姿へと変化していたエムルからスチューデを受け取り、兎の姿に戻ったエムルを頭に乗せる。

「丁度よく囮の大群を引き連れていて良かった、ぶつけるぞ……！」

背にクソガキ、頭に兎を装備した状態で俺はスキルを発動する。すっとろい半魚人共の先を走るだけなら素のステータスでなんとかなったが、あの暴走特急相手に荷物抱えて逃げるならＳＴＲを強化しなければ逃げ切れない。

「ギリギリまで粘れ……空転させて加速を溜めるんだ……」

あと数秒もしないうちにギガリュウグウノツカイが来る、足から白煙のようなエフェクトを発生させながら俺はスキルの条件を満たしていく。
そのスキルの名はバーンアウト、タイヤを空転させて煙を出すように停止状態でチャージを行うことで、チャージした秒数に対応して加速力を得ることができる。
レベルが上がらず、スキルレベルも上がらない以上スキルレベル1での運用しかできないが、スキルレベル1で得られる加速力は四秒のチャージと二十秒間の加速。魚というより最早ドラゴンなギガリュウグウノツカイの顎門が俺を捉える刹那、あらゆる加速スキルを盛りに盛った俺の身体は弾丸の如く駆け出した。

「踏ん張れよエムル！」

「ぴぃぃぃぃ！！」

悲鳴は了承と受け取る。バーンアウトの最大のメリットは初速にある、通常の加速では最高速度になるまである程度の時間と距離を要するが、バーンアウトは最初から最高速度手前の速度で走り出すことができる。

「おいクソガキ！　返事はいらない、しがみつけ！！」

根がガキンチョなせいか、今の状況に反応する気力すらないのか茫然自失状態のスチューデであったが、こちらの声に反応するだけの気力は残っていたようで俺の身体にしがみつく手足の力が強まる。
これで両手が空いた、二刀流スキルである以上武器を持たなければスキルが使えない。俺を追ってきていた半魚人や人魚に満面の笑顔を向けて致命秘奥【ウツロウミカガミ】起動、ヘイトだけをその場に脱ぎ捨て本体(俺)はさらに前へ。

「うん、じゃあ宜しく頼むよ」

怪物パレードの先頭、半魚人の鼻先で９０度進路変更。真横の壁を駆け上がり、屋根の上を最速で駆け抜ける。

そして次の瞬間には怪物パレードに真正面から突っ込んだギガリュウグウノツカイによって何もかもがごちゃ混ぜのミンチと化した。

「逃げろ逃げろ逃げろーっ！」

「おうち帰りたいですわぁぁぁぁ！！」

破壊力を伴った大恐慌を背になんとか臨時拠点にまで戻った俺は、ようやく緊張を吐き出して身体を弛緩させる。

「…………というわけで、こっちの兎はエムルで、そこで震えてるのがクソガキだ」

「そ、そうか……というか、先程から凄まじい音が聞こえて来るのだが……」

「目を閉じ耳を塞げ、そうすれば世界は平和なままだ」

「えぇ……」

アラバの疑問は無視して、今度はエムル達にアラバを紹介する。

「こいつはアラバ、一応あの腐れ魚共とは別種族だから怯える必要

はない」

「お魚みたいな人ですわ……」

スチューデは怯えっぱなし、と。話にならんな……いや、俺ら（プレイヤー）のようないろいろ覚悟がキマっている連中と同じはっちゃけをＮＰＣに求めるのは酷というものか。

「とりあえずここを臨時拠点としてはぐれた他の連中と合流する。見つからず聞かれなければ魚共には気取られない、大人しくしてるんだな」

さて……

「ちょっともっかい行って来る」

「……最早蛮勇と言う言葉すら足りないぞ、君には恐怖心がないのか？」

「人並みにはあるよ、ただ別に今の状況に恐怖を感じないだけだ」

「……んで、だよ……」

「ん？」

とりあえずこのエリアでのセーブ関連を他プレイヤーに伝える為、そしてあのギガリュウグウノツカイに特攻かましてみようかな、と考えながら立ち上がると、今の今まで何もかもに怯えて震えているだけだったスチューデが俺へと言葉をぶつける。

「なんで怖くないんだよ……こんな、意味わかんない場所で……なんで笑えるんだよ……！」

おっと、これは好感度とか色々に影響しそうな気配がするぞ。さて、どうドラマティックに返したものか……うん。

「未知を楽しむ、開拓者魂ってやつだよ。俺達はそうやって前に進んできた……それだけさ」

ついでに既知を周回して一人前だ、乱数は回数で打ち勝てる。脳細胞を殺して作業しろ。

客観的に見て凄まじくキザな台詞で答え、俺は再び拠点の外に忍び出る。ここにオイカッツォやペンシルゴンがいなくて良かった、向こう数年は笑われていただろうからな。根拠は俺ならそうするから。

「あんだけいた半魚人を全部平らげやがるとは、金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）と同等かそれ以上……単純なスペックだけならユニークモンスタークラスか……」

どうも「ユニークモンスター」は全てのモンスターよりも強いというわけではないようで、あの月光を纏う黄金の蠍のようにユニークモンスターに迫る強さのモンスターは存在する。俺の存在に気づいてゆっくりと空中を泳ぐギガリュウグウノツカイもまた金晶独蠍と同じ類のモンスターであることは明白、クターニッドというボスキ

ャラが控えている以上戦う意味は半魚人共以上にない。

「でも違うんだよなぁ」

ゲームだからこそやばそうなスイッチは取り敢えず押すし、世界の危機を放り出して寄り道するし、明らかに勝てない相手に突撃するのだ。

「水晶群蠍の時と一緒だ、鱗の一枚くらいは削り取らせてもらうぜ」

宙を泳ぎ、その長い胴体をくねらせるだけで家屋を破壊する巨大なリュウグウノツカイに宣戦布告する。

「ただの餌だと思うなよ？　魚を食うのはいつだって鳥なんだぜ」

砕けて解け、散っていくポリゴンを眺めながら俺は思う。

「予想以上に熱が入ってしまった」

身体を動かしているうちにテンションが上がるのは俺の悪い癖だな。軽く攻撃して逃げるなり死ぬなりするつもりだったのだが、思わず本気で戦ってしまった。

このリアルな仮想現実の中で、これがサイバーに因るゼロとイチであることを示すサイコロ状のポリゴンは、世界観にそぐわぬからこそ幻想的だ。散っていくポリゴンは段々と透明になり、そして消え

ていく。ああ、やってしまった。

「勝っちゃったよ…………」

その巨体をこの世界から消失させ、大量のドロップアイテムを前に俺は思わず思考を口に出してしまうのだった。

だって水棲だもの　龍王魚編（後書き）

アルクトゥス・レガレクス

深海に棲まうリュウグウノツカイの如き姿の魚類モンスター。ドラゴンに似た姿をしているがドラゴンとは別種族。シーサーペントは爬虫類系なのでこれとも別種族、口からブレスも吐けるが魚なんです。

水中を泳ぐ姿は遠目から見れば優美にも見えるが、ひとたびアルクトゥス・レガレクスの「攻撃圏」に入れば、それが間違いであることを否応にも理解することになる。

鱗は虹色に輝き、鬣の如き背鰭は海の中で焔が揺らめいているようにすら見える美しさ。

ちなみに生態系ピラミッドでは上の下程度、大量の魚類を喰らう捕食者であり、割と淡白な味わいとしてよく晩御飯にされる被捕食者

違うんだよ、別に倒すつもりとかなかったんだよ。そりゃあ戦闘の立ち回りに手を抜くつもりなんてなかったが、どう見てもタフネスの塊だろうし、適当に何発か攻撃を入れたら撤退しようかなと考えていたんだよ。

でもさ、こいつら……というか宙を泳いでる奴らってクターニッドの屁理屈パワーで「水の中だけど地上と同じような環境の中で水の中に入るように振る舞う」っていう面倒くさいこじつけによって泳いでるわけじゃん？

それってつまり奴らのモーションは水中での計算が適用されるってわけで。

更に言えばこちら側のモーションは地上での計算が適用されるってわけで。

水中であの平べったい身体を振り回せば相当量の抵抗が発生する。仮に時速８０キロメートルの速度で突っ込んでくるにしても、水中でその巨体が加速するには相当量の距離が必要になる。そして、俺自身はそれに対して地上と全く同じコンディションで対応できる。

そして俺はこう思ってしまったのだ。

あれ、これちょろくね？　と。

比較対象がウェザエモン、リュカオーン、金晶独蠍なのがいけなかった。即死攻撃を間断なく放ち続けるウェザエモンのような凶悪さもなく、透明な分身を不意打ちで放つリュカオーンのような悪辣さもなく、刃が一切通らない癖に再生能力まで備えた金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）のよう

な理不尽さもなく。それになによりも、俺自身……サンラクではなく陽務　楽郎という一個人が「魚の捌き方」について知っている、というのが決定打だったのだ。

位置座標でアドバンテージを持つ巨大なモンスターの対処法など、古今東西「近づいてくるのを待つ」である。挙動がダイナミックであるが故に突発的な不意打ちが少なく、ブレス自体そこまで乱射できるものでもないのか攻撃の殆どが近づいてからの巨体を活かした物理攻撃であり、なおかつしなやかではあるのだがそこまで硬くない外皮であり……何もかもがやりやすい、だからこそ俺はちょっと頑張った。頑張りすぎた。

「突進後の隙とかメチャクチャ優しかったからなぁ……」

向こうは液体による抵抗があるわけだが、こっちは気体による抵抗しかなくなにより重力がちゃんと働いているから走ることができる、急制動ができる、跳躍することができる。巨体を動かすには莫大なエネルギーを消費する、そんな当たり前を忠実にシステム化しているからこそ隙が大きいギガリュウグウノツカイに接近しその腹に攻撃を仕掛けることはあんまりにも容易く、クリティカル攻撃であれば耐久が減らない、すなわちプレイヤースキルを途切れさせなければ武器の消耗を度外視して戦い続けられる俺にとって時間さえあれば巨体と強さと反比例するかのような討伐難易度だったのだ。

「ただ、作業じみた難易度だからこそ達成感が……」

いや、それを差し引いても長時間の大激戦であったたし、攻撃自体は一撃で俺のような半裸は消し飛ぶようなダイナミックなものであったし、危ない場面がなかったわけではない。ただなんというか……結局のところ「超大型のモンスターは慣れたら作業」というハンティング系のゲームにおけるあるあるからはギガリュウグウノツカイ

といえど逃れられなかった、ということだ。

「しかし……ソロで倒せてしまうとは……俺が強すぎた……わけじゃないよな……もしかしなくてもギガリュウグウノツカイ、タフネス少なめだった？」

いや、その可能性は低いと言わざるをえない。ただ気になることが一つある、それは戦闘中何度か攻撃を仕掛けていないタイミングでギガリュウグウノツカイが怯みモーションを行ったのだ。少なくとも俺の持ちうる武器やアイテムの中で時間差ダメージを与えられるものは多分ないし、傑剣（デュクスラム）への憧刃にそんな力はない。だとすれば考えられる可能性は俺が来る前に何らかの毒……もしくはそれに類するスリップダメージ状態以上を受けていたということ。そして俺がギガリュウグウノツカイと戦闘する前に何を押し付けたのかを考えれば見えてくるものがある。

「あぶねぇ……あの腐れつみれ共、食あたりするような毒持ちがいるのかよ……益々油断できねぇ」

毒自体に弱いのか、あの巨体を毒状態にするほど凄まじい毒持ち半魚人……例えばフグとかカサゴとかの半魚人がいるのかは要検証ではあるが、やはり半魚人には関わらないのが正解なんだろう。ありがとうギガリュウグウノツカイ、お前のおかげで俺はまた一つ賢くなった。

目の前にドロップしている大量のアイテム……金晶独蠍の何十倍あるかもわからない大きさのエネミーだったからこそ、そのアイテム量は尋常ではない。文字どおり山である。

「うへ、うへへへへへへへへ………」

臨時ボーナスどころか埋蔵金を掘り当てた気分だ。武器防具にしてよし、売ってよし、食ってよしのより取り見取り、気持ち悪い笑い声を漏らしてしまっても仕方あるま

「……なにその、気持ち悪い笑い方」

「うおっしぇあ！？」

言葉の端々から「何だこの気持ち悪いの……」という気配が発せられた言葉に不意を打たれた俺は飛び退くようにして後ろを振り向く。そこには呆れたような、しかしどこか尊敬するような目で俺を見るルストの姿が。その後ろには何故かモルドではなくシークルゥが立っていた。

「お、おうルストか……合流できてなによりだ」

「……あんな轟音を立てていれば、誰だって見に来る。まさか、あんな巨大なモンスターを倒すとは、思わなかったケド」

ああそうか、そりゃそうだよな。電車並みの大きさのリュウグウノツカイが空中を泳いでいればこの街のどこにいたって気づく、それが大暴れしていれば尚更にだ。そしてこの都市における「異常」が何によって引き起こされたのか、それに一番最初に気づくのはやはり元凶たるエムルの同族にして兄たるシークルゥだ。であればエムルの危機に反応しない侍兎ではあるまい、名前的にＡｔｏＺ兄弟の中でもヴァッシュの三番目の子供だろうしな。

「サンラク殿、エムルは無事で御座るか？」

「ああ、あのリュウグウノツカイに追いかけられてたところを回収した。今は臨時拠点に連れて行ってある」

「そうで御座るか……」

あんな巨大モンスターを呼ばざるをえない状況が好転的なものであるはずもなく、シークルゥは俺からエムルの無事を伝えられてようやく身体から力を抜いた。嗚呼素晴らしきかな兄妹愛、泣けるねえ……アイテム回収回収。

「あの巨大モンスター……ロボで倒したの？」

「いや、訳あって今は使えないんだ」

というのも、特殊強化装甲を動かすために稼働させなければならない戦術機獣を動かすために必要となる規格外エーテルリアクターが未だ充電中なのだ。アレは「インベントリ内」に置いておくことで周囲の魔力を吸収してエネルギーをチャージする、という設定なのだが一週間チャージしてようやく十分使えるかどうかなレベルなのだ。

オーバーテクノロジーも甚だしいアイテムであるしチャージに上限がないので理論上でなら一時間でも二時間でも稼働させることができるのだろうが、現実的に考えるなら週一十分稼働でデザインされた装備群なのだろう。

「ちなみにだがみせること自体は出来たり」

「是非、見たい……！」

というわけで電池を抜かれた朱雀召喚。別に他の機獣でも良かった

が、ネフホロで緋翼連理なんて名前の機体を作っていた奴だ、きっと朱雀の方がウケがいいだろう。

「実に……実に素晴らしい……とても、とても良い……金属の冷たさが最高に心地いい……シャンフロ最高………」

「まぁ、ネフィリム・ホロウ世代のゲームはそこらへん結構妥協してるのが多いからな……」

雑草を引き抜いたら根っこに土が付着していて、それがちゃんと冷たいことまで再現しているゲームが早々あってたまるか。特にシャンフロ発売の大体一年前くらいに発売されたゲームはまだ仮想現実が仮想のままだった。シャンフロみたいな気色悪いレベルで現実に迫っているゲームが異常なのだ、技術革新ってレベルじゃないんだよなぁ……今までドット絵が最新だった世代にいきなり超リアルなポリゴンのゲームやらせるようなもんだぞ、一世紀先の技術レベルかよ。

「あのギガリュウグウノツカイ、アルクトゥス・レガレクスって言うのか……名前カッコよすぎかよ」

動物や虫、魚とかの学名って調べるとかっこいい奴多いよなー、やっぱりこの手のモンスター名やアイテム名はラテン語が強い。ドイツ語？　あいつはレジェンドだから比べてはいけない。ええと、鰭に鱗に骨に……

「肉、か……さっぱりした味わいだと聞いたことがあるけど、シャンフロだしなぁ……」

どうせ味がしないか薄いかなのだろう。俺は実物すら見たことはな

いが、案の定というかその手の交友が尋常ではない父さんがリュウグウノツカイを食ったことがあるとかないとか。サッパリしてるらしい……っていうか味の感想言ってる時点で食ったことあるじゃねーか父よ。
遂には朱雀に頬ずりまでし始めたルストを尻目に、俺はギガリュウグウノツカイ改めアルクトゥス・レガレクスとの激闘によって更地となったルルイアスの一区画を眺める。

「あれが水中モンスターで良かったというべきか……空を飛ぶタイプのガチドラゴンだったら定期的に地獄めいたレイドが起きてたかもな…………………………は？」

瞬きによる瞼が下がり、上がるまでの一瞬。仮想現実故本来必要のない瞬きは人間としての本能が反射的かつ無意識的に行うものだ。とはいえ所詮は瞬き、俺の視界が遮断されるのは一秒にも満たない一瞬でしかない。
だというのに

「おいおい嘘だろ……」

瞬きの一瞬で先ほどまでの破壊など最初から存在していなかったかのように完全に元通りの姿に復元された街並みを目撃したことで、流石の俺も正気度が削れそうだ。誰がこれをやったのかなんて分かりきっている。
システムリセットじみた事を容易くやってのける怪物（クターニッド）……いやこれ、本当に勝てるのか？

そして旅狼は海から摩天楼へ（前書き）

ほら、その……フェスとバイトがね……？　はともかく、心の中でガイアが俺に「ユー隔日更新でいいじゃん？」って囁いてくる……リアルのチャートガバガバすぎて不定期になっている現状で何言ってんだとは思いますが、基本的に毎日更新を心がけていくつもりです。

そして旅狼は海から摩天楼へ

「なんでこのギャラクセウスって奴は徹底的に傍観者になりたがるんだ……割と直接介入してるくせに肝心なところで傍観者気取るなよ……」

座席に備えられたフルダイブではない簡易版VRヘッドギアに携帯端末を接続し、カッツォの奴から読むようにと言われた米国(アメリカ)発祥の漫画……いわゆるアメコミを読みながらポツリと呟く。ふとヘッドギアを外し窓から外を見れば、沈みゆく太陽の就寝に伴う黄昏の訪れに点灯した煌々たる街の明かりが高速で通り過ぎていく。

俺は今、この国の首都へと向かうリニアの中にいた。

ギガリュウグウノツカイ……ええと、アルキダス・メガネクスみたいな名前のアレを倒してからしばらくして、爆音と崩壊というこれ以上ないビーコンにプレイヤー達は続々と集まった。ついでに半魚人も。そうしてある程度の会話をした結果、とりあえず合流自体は出来たのだが問題がいくつか浮上していた……海底だけど。
まず最初に、俺がそうであるように他のプレイヤー達もまたEXシナリオの制限時間七日間をフルで戦えないということ。事前に分かっていたのであれば七日間フルタイムで戦い抜けるようスケジュール調整もしたのだが、特急直通でEXシナリオに突入してしまったため、スケジュールを構築する暇すら与えられなかった。とはいえ、さすがに七日ぶっ通し(フルタイム)で攻略しなければ突破不可能な難易度とは如何にユニークEXであっても考えにくい。恐らく四日、いや三日く

らいおおよそ人間的な生活を放棄すれば攻略できなくもない、それくらいの難易度だと見た。
俺は明日、明後日……いや、場合によっては明々後日にも響きかねないので二日目から四日目までの三日ほど攻略には参加できないことになる。秋津茜は部活があるとかなんとかで三日目から五日目まで参加できず、モルドとルストも内容は明かさなかったが二日目、四日目、六日目の隔日で攻略参加不可。少なくとも話を聞いた限りの全員は七日目は参加できるようなので最終決戦たるクターニッド戦はなんとかなりそうだ。

そしてもう一つの問題。それはレイ氏……サイガー0との合流ができなかったということ。あの場に集まった順番はルスト&シークルゥ、秋津茜、そしてモルド。しばらく待っていたがレイ氏だけはその場に現れなかったのだ。半魚人が集まってきたことと、他のプレイヤー達がログアウトしたいとのことでその場は離脱せざるを得なかったが……レイ氏は時折おかしくなるがシャングリラ・フロンティアというゲームのやり込みにかけてはこのシナリオに参加したプレイヤーの中でも頭ひとつ、いや頭四つは飛び抜けている。単独(ソロ)でもなんとかセーブの仕方に気づいてくれていればいいが。
とはいえゲームとしてではなくVRシステムの特性として数時間以上の連続プレイは最悪強制ログアウトが入るので万が一はないと思う。それに俺が強制ログアウトを試せなかったのはエムル達NPCの安否が気になっていたのもあるのでレイ氏は遠慮なくログアウトすることできる。再ログイン時どこにスポーンするのかは分からないが少なくとも七日かけて合流できないなんてことはあるまい。

そんなこんなでレイ氏と合流できていないという問題こそあるものの、とりあえずの合流を果たした俺たちは攻略の予定を話し合い各々がログイン続行、ログアウトをした。そして俺は旅行カバン片手にリニアへと乗っているわけだ。

「にしても、あの二人がアレなせいでＥメールなんて手段を使ってたけど……そうだよな、普通はＳＮＳを使うよなぁ……」

片やティーンに神格化すらされているカリスマモデル、こなた全てのゲーマーにとっての憧れプロゲーマー。どちらもＳＮＳで仕事用のアカウントを持っているがために「プライベートアカウントと間違えて誤爆しそう」というしょーもない理由から俺たち三人の連絡手段はメールが主となっている。一回奴らの本性を全国規模で暴露したほうがいいんじゃと思わなくもないが、妹が邪教徒になっても困るので綺麗なものは綺麗なままであるべきだろう。
それ故にリアルでの連絡にＳＮＳを使うという選択肢自体が頭から抜け落ちていたため、連絡手段の確立のためにメールアドレスを聞こうとして俺は他のプレイヤー達から奇異の目で見られることになってしまった。

「なんもかんもあいつらが悪い……っと」

一旦読書の手を止め、最近の中高生の間で人気が高いというＳＮＳアプリを開く。俺自身も高校生だけど……あの、うん。ほら青春の半分をすでにクソゲーという炎に薪として焚べちゃってるというか……

「ええと、ここをこうしてこれに入って……よし、と」

とりあえず新規のアカウントを作り、「ルルイアス攻略最前線」と銘打たれたルームへと入室。既にレイ氏を除く他のメンバーは秋津茜が建てたというルームに入室しており、幾つかの文章が表示されている。へえ、半魚人狩りは経験値効率いいんだ……いいなぁ……俺は金晶独蠍との戦闘で諸々すっ飛ばしちゃったからなぁ……レベ

ルが上がりすぎるのも考えものだ。

『……お降りのお客様はお荷物をお忘れないよう――』

「ん、もう着いたか」

歩けばどれほどかかるかわからない距離も、リニアにかかれば一時間切りだ。文明って素晴らしいね。
リニアを降り、携帯端末で地図を起動して歩いていく。首都ともなれば今のご時世日本だって立派な不夜城、LEDの光が夜闇を照らしビルを輝かせる。リュカオーンの透明分身だって暴けそうな光の中を地図を頼りに進み、それを見つける。

「ホテルグランドスプリーム………これはあれか、所謂高級ホテルというやつでは」

それも一泊するだけでフルダイブVRするのに必要な諸々を買えるようなお値段の。実は地図アプリが座標を間違えていたとかそういうアレでは……うん、無いか。おのれプロゲーマー、こんな場所に人を呼びつけるとは正気か。高校生が一人で来るような場所じゃないだろ、フルダイブVRできるネカフェのほうが主に精神的に落ち着きそうなんだけど。

「うーん……「魚臣　慧の連れのサンラクですと言えば通してくれる」なんてカッツォは言ってたが……」

気が引けるというレベルでは無い、レベル1でリュカオーンに挑まされるような心境だ。これがゲームだったらC4をベッタベタに貼り付けた装甲車でエントランスに突っ込んだり、ビルを戦闘機で爆撃したりなんて何のためらいもなくできるのだが、リアルとなると

ホテルに入ることすら難易度がハードだ。とはいえ何のために来たのかという話になるわけだし……ええい、ままよ！！

「ＯＭＯＴＥＮＡＳＨＩすごぃ……あれが一流ってやつか……ロールプレイの参考とかにできそうだ」

どう見ても場違いこの上無い高校生一人相手に凄まじく丁寧な対応で連れてこられたホテルの一室。流石にスイートルームに案内されるなんてトチ狂った真似こそされなかったが、落ち着かないという一点においてはスイートだろうがなんだろうが変わり無いということを今ひしひしと実感している。

「俺個人を正確に狙撃した壮大なドッキリ……じゃないよなぁ」

カッツォの奴に連絡したところ、すぐ会いに来るとのことで部屋で待ってるようにと言われた。荷物を適当にベッドに放り、改めて俺が案内された部屋を眺める。ベッドが二つ、所謂ツインルームをシングルユースで割り当てられているのだが兎にも角にも広い。そして何よりも異彩を放つベッドやリクライニングチェアに似た……だがそれらと比べるとメカニクス味の強い「設備」が一つ、部屋のど真ん中にどんと置かれている。

「これ、庶民に買わせる気が無いお値段と大きさで有名な最新型のフルダイブシステムでは……」

やばい、だんだん怖くなってきたぞ。何を考えているんだあのプロゲーマー、逆境に精神がやられたんじゃないのか。高校生一人を歓待するにしてはあまりに、そうあまりにお金をかけすぎではなかろうか。とはいえそれはそれとして最新鋭のフルダイブに興味が無いといえば嘘になる。確かカタログだとここがスイッチでここに寝転がって……

と、見ようによっては巨大なカプセルのようにも見えるチェアー一体型フルダイブシステムを触っていると、扉が雑にノックされる。ホテル従業員であれば備え付けのインターホンを鳴らすだろうしこれはカッツォがやってきたのだろうか？

「ん？　あれこれって……」

「やっほーサンラク君！　プロゲーマーだと思った？　なんと！　スーパーカリスマモデル天音様が直々の降臨だよー？　さぁさぁそのお顔を見せ………」

「しゅこー……しゅこー……」

正直俺もガスマスクは無いなと思うよ、うん。でもカバンの中に入ってたらさ、とりあえず装着するじゃん？
スーパーカリスマモデルの顔を引きつらせるという快挙を成し遂げた俺は、まず最初にペンシルゴン……もとい天音　永遠が従業員に

助けを呼ぼうとするのを阻止するために苦心しなければならなかった。

そして旅狼は海から摩天楼へ（後書き）

ちなみに各々のＳＮＳでのアイコン

・サンラク：ハシビロコウのどアップ
・秋津茜：デフォルメされたトンボマーク
・ルスト：錆びた螺子
・モルド：ブルーチーズ
・ペンシルゴン：貫禄の自撮り画像
・カッツォ：定期的に変わる格ゲーキャラの顔画像

「……ふっ、くくく……腹筋割れそ……」

「そこまで笑われる謂れはないんだが……？」

「存在がギャグみたいなものでしょキミ……いやまさか、リアルでも笑わせてくるとはね……ふふっくく、くくく……」

昔買ったクソゲーの初回購入特典で付いてきたガスマスクを装着した俺とご対面した事で、何が面白いのか腹を抱えて大爆笑していた天音 永遠(アーサー・ペンシルゴン)であったが、ようやく笑いを止めた彼女へ俺はガスマスクを付けたまま文句を言うのだが、存在ごとギャグ認定されるという理不尽カウンターを食らわされてしまった。

失礼な、たしかにゲームの中ではＮＰＣをビルの屋上から蹴落としたりＮＰＣを車のボンネットに固定して世紀末晒し上げしたり他プレイヤーの背中に爆弾貼り付けて拠点に戻ったところで爆破とかもするが、リアルではいたって常識的に生きていると断言できるぞ。このガスマスクだってゲームを開封した時にガスマスクだけカバンに入れたままその存在を忘却し、父に返却したそれが一度も使用されることなく再び俺が借りたせいで中にガスマスクが入ったままだった、というだけであって決して今日の為に持ち込んだわけではない。

「いやぁ、まさかそこまでムキになって顔を隠すとは思わなくてさぁ」

「いや、別に隠してるわけじゃなくて、カバンの底にあったからと

りあえず装着してみたというか」

「普通旅行カバンにガスマスク入れる人とかいないでしょ」

「ハリウッド映画的な？」

とりあえずアクションゲームでホテルが出てきたら少なくとも銃撃戦の嵐か爆破による倒壊のどちらかを考慮しないといけない。

「はー笑った笑った、では改めまして……鉛筆戦士です、宜しくネ？」

「サンラクです、よろしく……っと」

いつだったか瑠美が言っていたように「いついかなる時でもカメラ映えする」とは誇張表現ではなかったらしい。堂々たる様子で俺に握手を求める姿は、適当に撮影しても雑誌の一ページを埋めることができそうだ。

とはいえ中身のアレは身を以て承知しているし、そもそもゲーム内のアバターがリアルそのまんまなのでティーンの少女達のように魂を奪われるようなこともなく、普通に握手に応じる。

「で、俺達を呼んだホスト様は？」

「んー、なんかもう一人のチームメイトを呼んでくる、って」

そういえばそんなことも追加のメールで言っていたような。確かGGCで行うイベントでは４ｖｓ４のチーム戦であるため、俺、カッツォ、ペンシルゴンの他にもう一人チームメンバーがいるはずだ。

そしてその人物はカッツォと同じプロゲーマーチームのメンバーな

んだとか。
「しかし天下のカリスマモデル様がよくもまぁ時間を合わせられたな」
「ほら、私って一挙一動が写真映えするから実際のところお仕事って結構あっさり終わるんだよね」
「自信過剰も二周回れば清々しいな」
「謙遜するボスキャラってウザくない？」
「ボスキャラの自覚はあるのか……」
そんな風に話していると、曲がり角から一組の男女がこちらへとやってくる。かたや鉛筆戦士の顔を見て驚愕の表情を浮かべる俺と同年代くらいの少女、そしてかたやガスマスクの俺を見て数秒の呆然の後、腹を抱えて笑い始めた雑誌やテレビでよく見かける中性的な青年。
「高級ホテルにガスマスクって組み合わせがすでに面白すぎるんだけど、リアルでもそんな感じなの？」
「うるせー、再販未定のレアものだぞ？　崇めろ、讃えろ」
「クソゲーだからか……まぁいいや、来てくれて感謝するよサンラク」
先ほどのペンシルゴンと同じく握手を求めて右手を差し出す青年……プロゲーマー魚臣（オイカッツォ）　慧は不敵な笑みを浮かべてそう俺へと言うの

だった。

◆

「さて、とりあえず改めて紹介するよメグ。この二人が俺のプライベートなゲーム友達のサンラクと鉛筆戦士……まぁ、こっちのは顔を隠すつもりもないようだから言うけど天音　永遠ご本人」

「夏目　恵、雑誌で結構君のこと見かけるよ。よろしくねー」

「んでそっちのガスマスク野郎がサンラク、頭おかしいのはゲームの中だけだと思ってたけどリアルでも狂人だったみたい」

「外し時を見失ったんだよ察せ」

「んで、彼女が夏目（ナツメ）　恵（メグミ）。我らが爆薬分隊（ニトロスクワッド）のメンバーで、明日明後日の予定が空いていた唯一の人物だ」

カッツォは俺達に気の強そうなポニーテールの少女を紹介する。夏目　恵……多分有名なんだろうけど、知らないな。ゲーム雑誌とかただでさえ読まない上にプロゲーマーの記事なんて、それこそ知り合いが写っていない限り見向きもしない人生を送って来たからなぁ。

「じゃあ単刀直入に本題に入るけど、俺達は明後日のＧＧＣでアメリカのプロゲーマーチーム「スターレイン」と対戦するわけなんだけど……メールでも説明した通り、色々あってメンバーにドタキャ

ン食らってさ、その穴埋めに二人を呼んだわけ」

「ねぇケイ、その前に聞きたいんだけど……この二人、本当に強いの？」

カッツォの言葉を遮るようにして、夏目氏がこちらに胡乱げな視線を向ける。まぁ確かにかたや有名とはいえプロモデル、かたやガスマスクである。そんな二人がプロゲーマーの欠員を埋めるに足るのか疑問を覚えるのは……まぁいたって普通だな。

「実力は保証するよメグ、そっちのモデルは今回のゲームと相性が極めて良いしそっちのガスマスクは……そうだな、俺と戦って勝率四割くらい確保する腕前って言えば分かるかな」

そうだろうか、確かに互いに新規で始めたゲームならそれくらいのダイアグラムになるかもしれないが、プロゲーマーなだけあっていつ研究するほど厄介になるから最終的に三割くらいしか勝率維持できないんだよなぁ。

だが、その言葉は夏目氏の俺に対する評価が激変する程度には大きな意味を持っていたらしい。どこかいたずらを成功させた子供のような表情でそう告げたカッツォに、夏目氏は目を見開いて俺を凝視する。

「嘘……え、ケイ相手に、勝率四割……！？」

「イェーイ」

「まぁ六、七割俺に負けてる雑魚だけどね」

「よっしゃ喧嘩なら買うぞ？　お？」

わざわざ自分の方がダイアグラムが上だということをアピールする辺り意地の悪いやつだ……とガスマスク越しにカッツォを睨みつけていると、ちょいちょいと横からペンシルゴンが俺をつついてくる。

「なんか察してなさそうだから解説するけど……プロゲーマー魚臣慧にダイアグラム四割取れる格ゲーマーが日本に何人いるか知ってる？」

「あいつ結構アドリブに弱いから普通にいるんじゃないのか？」

「国内公式戦じゃカッツォ君、誰が相手でも勝率八割落としたことないんだよ？」

「へぇー……」

「反応淡白だなぁ」

それは凄いことなんだろう、それ自体は分かるのだが……宝石とかならそれを見ただけで高価さとか希少さをダイレクトに感じることができるのだが、いかんせんある程度勝てる上に気心知れた相手が実は超強かったんやで？　と言われても、へぇーとしか言いようがないというか……

「椅子から転げ落ち、恐れ慄きながら床を這いずり、パニックの果てに失禁でもすればいいのか？」

「それいいね、早速やってよサンラク君」

「社会的に死ねと言ってるって分かってるかー？　んー？」

やっぱりこいつ性根が邪悪だよ、ウィスキーという名の邪悪をチョコという名の美貌でカモフラージュしたイかれたウィスキーボンボンだよこいつ。

「まぁいいや、本題に入るよ。兎に角だ、俺達が明後日に戦う「スターレイン」ってチームは……まぁ、一言で言うと全米最強クラスの格ゲーチームなんだけど」

「なぁ、もしかしてこいつ全国規模で俺達に敗北晒し上げさせようとしてるんじゃないのか？」

「んー、そんな酷いことされる謂れは……パッと思いついただけで八個くらいあるんだけどサンラク君は？」

「そんな！　俺がそんな酷いことするわけないじゃないか……うーん、六個くらいかなぁ」

笑顔で敵に売り渡し、当たり前のように裏切りを繰り返す間柄ですが僕等は一応友人関係です。とはいえだ、まさかそんな相手と戦う為に俺やペンシルゴン……言うなればアマチュアを呼ぶとは、本当に何を考えているんだこいつは。

「別に負け前提で二人を呼んだわけじゃない、メグも含めたこの四人なら勝ちの目は無くなっていないと確信したからこそ呼んだんだから」

そう言うと、カッツォは最新型のパッド端末に四人の人物の写真を表示する。

「こいつらが明後日に試合に出る四人、チーム「スターレイン」の一軍スタメンだよ」

「うわ凄い、見てよサンラク君。Ｒ－１８のハードＮＴＲモノの竿役みたいなマッチョがいるよ！」

「最高に返答しづらいキラーパスを投げつけるのやめろよ、こちとら未成年だぞ。とはいえ、このガタイはリアルで格闘技やるべきでは……？」

「そいつ片手でリンゴ砕けるよ」

マッチョすげぇ！
それ以外にもやけに顔の濃ゆい面々が続く中……最後の一人に注目してしまうのは致し方ないことだった。

「あら可愛い子、紅一点ってやつかな？」

「金髪碧眼……なんつーか、ザ・外国人って感じだな」

「そいつの名前はシルヴィア・ゴールドバーグ……」

写真の中で微笑む俺より少し年上の……つまりカッツォと同年代くらいに見える少女の写真を、顰めっ面で見つめていた国内最強クラスらしいプロゲーマーはポツリとその事実をつぶやく。

「全米一(ゼンイチ)……名実共に最強のプロゲーマーってやつだよ」

流星雨の一等星（後書き）

スターレイン1軍メンバー
ジョンソン：黒人マッチョ、片手でリンゴを砕ける。妻帯者。
アレックス：白人マッチョ、顔が暑苦しい。日本に彼女がいて遠距離恋愛中。
ルーカス：ヒスパニック細マッチョ、顔がいい。頭がいい。そのうち刺されそうな女性関係。
シルヴィア：金髪碧眼ショートボブ、超強い。ジャパンの「ケイ」がお気に入り。

一等星に手を伸ばして

シルヴィア・ゴールドバーグ、女性、二十歳。アメリカの格ゲーを主とするプロゲーマーの中で最強は誰かと問われればまず間違いなく最初に名前の挙がる人物。その名が初めて公の場に出たのは今から五年前のとある格ゲー大会におけるアマチュア部門でのことだった。

トーナメント形式であったその大会において第一、第二、準々決勝、準決勝、決勝……その全てをノーダメージパーフェクトで勝利し、エキシビションマッチに至ってはプロゲーマー相手（事実）に2ラウンドを一方的に奪取して勝利したという冗談のような伝説と共に、最強の格ゲーマー「シルヴィ」がこの世界に盛大な産声をあげたのだ。

衝撃的なデビューを果たしたシルヴィア・ゴールドバーグはその場で大手マルチプロゲーミングチーム「Ｚｏｄｉａｃ（ゾディアック） Ｃｌｕｓｔｅｒ（クラスタ）」からスカウトされ、一年と経たないうちに実質的に彼女のために作られたと言ってもいい格ゲー専門の部門「Ｓｔａｒ（スター） Ｒａｉｎ（レイン）」が設立……それから五年間、彼女はプロゲーマーの一等星として輝かしい記録を今も打ち建てている…………

「すげぇ、何そのラスボス」

「ラスボスというよりあれだよね、作中で一度も負けないタイプの強キャラ」

「あー、分かる」

死亡フラグを軽々と踏み倒してラスボスを間接的に追い詰めちゃう、主人公を食ってしまうタイプの強キャラ感が半端ない。しかもこの整った顔立ちに写真データからもわかる愛想の良さそうな表情……これは人気が凄いタイプの強キャラだ。主人公にトリプルスコアくらい差をつけて人気投票一位になっちゃうタイプの強キャラだ。

「他の三人も普通に強いんだけど、シルヴィア・ゴールドバーグが一等星なら彼らは皆二等星……いや、二・五等星と言わざるをえない……それくらいの人物なんだよね」

「そんな奴相手に勝算があるって言ったのかお前……」

「プロゲーマーのお墨付きだから割と大船に乗ったつもりだったけど、実は泥舟だったどころか砂利で出来た船だった気分だよ」

「まぁ確かに既に発売されたゲームだったら勝ち目は無かったよね、うん。実際俺も今まで何度か戦って一度だけ引き分けに持ち込んだだけでそれ以外は全敗してるし……ただ、今回に限っては突破口が無いわけでもないんだよ」

そう言ってカッツォは相手チームの顔写真から、別のページへと端末を操作する。しばらくしてタッチパネルに表示されたのは、派手なデザインの文字で飾り付けられたゲームのオフィシャルサイト。

「ギャラクシア・ヒーローズ：カオス……今秋全世界同時発売……まだ発売してないじゃねーか」

「このゲームの実機プレイ……という名目のエキシビジョン・チームマッチを明後日のＧＧＣでやるんだよ」

「マジか」

ギャラクシア……？　どっかで見たような……あ。

「お前が読めって送りつけてきたアメコミの出版社か」

「そう、ギャラクシアコミックに登場するヒーローやヴィランを作品問わず操作できるクロスオーバータイトルの最新作。そしてシャングリラ・フロンティアの開発元であるＵＥＳ……「ユートピアエンターテイメントソフトウェア」が技術提供した恐らく世界で二番目の「シャンフロ世代」タイトルってやつさ」

シャングリラ・フロンティア、ここでその名前を聞くことになるとは。今現在最も熱を入れてプレイしているゲームの名前が出たことで、ガスマスクの下の俺の表情が硬くなったのを感じる。どちらかといえば俺には無関係だと思っていた格ゲーのタイトルが、急に存在感を増したようにすら感じる。

「あのシャンフロと同じ技術が限定的とはいえ使われている、オーパーツレベルで技術が数世代先をいってるシャンフロに並ぶタイトル。アメリカの企業がアホみたいな大金を積んでＵＥＳと共同開発した米国ゲーム業界起死回生の一手と言ったところだけど……メーカーの復権の野望はこの際どうでもいいんだ、重要なのはこのゲームがギャラヒロの前作「ギャラクシア・ヒーローズ：バースト」とはほぼ別物と化した作品だということなんだよ」

「な・る・ほ・ど・ねぇ……なーんかカッツォ君の言いたいことが

分かってきたかなー？　つまりぃ、この銀金ちゃん達アメリカ人にとっては全くの未体験ゲームだけれど、私たち日本人にとっては**シャンフロに似たゲーム**ってわけだ。私たちは慣れというアドバンテージを持ってるわけだ」

「そういうこと、俺たちもあっちのチームも「ギャラクシア・ヒーローズ：カオス」に触れるのは今日から……あっちは二日間でゲームシステムに慣れるしかないけど、こっちはシャンフロをプレイしていた時間というアドバンテージを最初から持っている。それこそがあの全米一の格ゲーマーに勝てる唯一の突破口ってわけ」

ペンシルゴンの推測、カッツォの回答から俺もおおよその内容を理解する。要するにシャングリラ・フロンティアの技術が流用されたこのゲームにおいて、シャングリラ・フロンティアをプレイしているという事実はそれだけでアドバンテージになりうる。そして現状シャングリラ・フロンティアが「日本国内のみ」でサービスが行なわれているゲームである以上このアドバンテージは向こうには存在しえない。

「だからこそ俺たちってことか」

「ウェザエモン戦を共にくぐり抜けた友人諸君ならプロゲーマーの代役として不足ないだろうからね」

そう言ってカッツォは……いや、プロゲーマー魚臣　慧は不敵な笑みを浮かべると改めて俺たちへと告げる。

「じゃ、早速打倒スターレイン、打倒シルヴィア・ゴールドバーグの作戦会議を始めようか」

「…………とは言っても、シルヴィアの戦闘スタイルってものすごくシンプルに説明できるんだよね」

「と言うと？」

「君だよサンラク」

は？　俺？　あと人を指さすな。
いきなりの指名に何事かと首を傾げていると、カッツォは極めて単純明快なシルヴィアのバトルスタイルを説明する。

「テンションとプレイヤースキルが直結した高機動アタッカー……サンラク、お前とほぼ同じプレイスタイルなんだよ」

「…………へぇ」

「あいつの代名詞とも言えるメインキャラ……ミーティアス。まず間違いなく明後日のチームマッチでもあいつはこのキャラを使ってくる」

そう言ってカッツォがゲームのオフィシャルサイト、そのキャラクター紹介画面から選択したのはなんともまぁ派手派手しいヒーロー

であった。全体的に白系のスーツに要所を守る金色のアーマー、フルフェイスの覆面には特徴的な五芒星の形をしたゴーグルが装着されており、顔に星がくっついているようにも見える。
名前はミーティアス……確か宇宙創生に関わる超越的存在「ギャラクセウス」によって流星の力を与えられたしがないサラリーマンが世界に潜む陰謀、そして宇宙から来る脅威に立ち向かう……！　的な設定のキャラクターだったはずだ。力を授かった瞬間腹筋は割れ顔の影は濃くなりちょっと別人レベルでイケメンになったのはコミックを読んでる最中に笑ってしまったが、パワー＝マッチョの方程式が基本のアメコミならありふれた設定だろう。

「問題はシルヴィアの奴が何番目に来るか、なんだよね……」

「ああ、本気で勝ちを狙いに来るなら先鋒に来るかもしれないけど、実機プレイである以上ある程度見せ場も要るから最後に来る可能性もあるってことね」

「まぁ無難に大トリなんじゃねーの？　それより他のマッチョ共はどういうプレイスタイルなんだ？」

カッツォの口ぶりからして、何らかの因縁が件のシルヴィアなにがしとカッツォの間にあるのは確定だろう。であれば向こうもカッツォとの戦いを望んでいるのは明白、俺たちの役割はこのプロゲーマー様を温存した状態で全米一の最強プレイヤーの元までデリバリーすることだ。となれば俺やペンシルゴン、夏目氏が対策するべきはシルヴィアなにがしのミーティアスではなく、他三人のプレイヤー達だろう。

「それに関しては後で資料を送っておく、個室に置かれてるフルダイブシステムのハード内にはギャラヒロ：カオスがインストールさ

れてるはずだから、今日はさわり程度でいいからプレイしてみて欲しい。明日から本格的に対策会議をするつもりだよ」

「ふぅん……ちなみにそのギャラヒロなんたらはもうサーバーは開かれてるのか？」

「このホテルと会場限定のサーバーはもう設置されてる、ただこのホテルに宿泊してるスターレインのチームとこっち……爆薬分隊のデータは意図的にマッチングしないようにされてるけどね」

てか相手チームもこのホテルに宿泊してるのかよ、いや下手すりゃスポーツ選手並みに稼いでいるような連中だ。それも米国の頂点に立つようなチームであれば多分スイートルームとかに宿泊してるんだろうな。

「なるほど……じゃあこの四人でなら対戦もできるわけだ」

俺はそう、わざと彼女に聞こえるようにそう呟き、ガスマスク越しに彼女……夏目氏へと視線を送る。

分かる、分かっているとも。こんなあからさまに不審な年下くさい奴と、有名ではあるが本当に実力者なのかどうかも怪しいカリスマモデルが本当に戦力になるのか疑っているな？　その疑問はごもっとも、別に侮られることを不快に思っているわけじゃない。だがたった一日だとしても同じチームとして組む以上、ちゃんと交流するべきだ。そしてそれはカッツォやペンシルゴンも分かっている。

「夏目ちゃんも含めて皆、大体何時くらいからログインするかな？」

「諸々込みで十時からがキリがいいんじゃない？」

「私もそれくらいにログインするつもりよ」

「……そんな遠まわしな駆け引きしなくても、十時から対戦しようぜって言えばいいのに」

違うんだよ、これは初歩的なことだよカツォソン君。こうあえて敵対的な方が燃えるだろう？

一等星に手を伸ばして（後書き）

夏目　恵
電脳大隊（サイバーバタリオン）格ゲー部門「爆薬分隊（ニトロスクワッド）」に所属するプロゲーマー。ゲーム内でのプレイヤーネームは「Ｎｕ２ｍｅｇ（ナツメグ）」、言わなくても察してる人多いだろうけど慧のことが好き。
同じチームのライバルがお家事情で参加脱落したことで今こそ好機と予定を無理押して空け、今回のエキシビションのチームメンバーとしてカッツォに急接近することに成功した。アメリカからの刺客（シルヴィア）をさぁどう迎撃したものかと悩んでいたところ、いきなりガスマスクの変た……変人とカリスマモデルがやってくるという異常事態にリアクションが追いついていない。

素顔をさらすタイミングを逃し続けたせいでなんだか「こいつは覆面で最後まで通していくんだな」的な空気が漂ってしまい、俺は結局自室に食事を持ってきてもらうという選択肢を選ばざるをえなかった。まぁそれはそれとして食事は普通に美味しかった……タダ飯って素晴らしいよね、何せ自分の懐は一切痛まないんだから。

そんなこんなでいつもと違うアプローチでＶＲの世界へとダイブした俺は、明後日の戦いの舞台となるゲーム……ギャラクシア・ヒーローズ：カオスを起動し、とりあえずトレーニングモードへと進み、キャラ選択画面で現在進行形でお悩み中であった。

「と言っても、ギャラクシアコミックのキャラなんてそれこそ見た目くらいしか知らないし、リニアの中で読んだ作品のキャラクターくらいしか把握してないんだよなぁ……」

こういう時はとりあえず見た目で選ぶ、最終的には一通り全キャラを使うのは確定しているのだが。とりあえずこの侍っぽい「ランゾウ」なるキャラから使ってみよう……

――およそ一時間後

「んー……とりあえず一通り使ってみたが……」

作品の特性上ヒーローだけではなくサブヒーローやヴィランなんかも使えるため、全キャラの試運転はまぁなんというか、疲れた。とはいえ一通り身体を動かしてみてわかったが、シャンフロの技術が使われているというのはどうやら本当のようだ。

シャンフロ以前のゲームにはある宿命がつきまとっていた、それは現実の肉体と仮想現実内におけるアバターの体型の違いから来る挙動の違和感である。例えば現実では細身で長身の人物がゲーム内でドワーフ体型のアバターを使用する場合、歩き方や身のこなし、手足の長さや体型の違いから生じる違和感などがどうしても拭いきれないという問題があった。であるために基本的にフルダイブVRというゲームはプレイヤーの現実の肉体がアバターに参照されることが多い。特に「個人」の設定に自由が利くFPSなんかはその点では動きやすいゲームであると言える。

逆に格ゲーというものはフルダイブVRとは相性が悪い、なにせ様々な個性を持つキャラクターを操作するという特性上、デブやらノッポやら、場合によっては人外すら操作するのが格ゲーというものであり、ただレバーとボタンを動かせばいい前時代的それと違い、格ゲーマーはまず「持ちキャラの身体に慣れる」という前段階を要するのだ。そのため、「便秘」のようなアバターに現実の自分の体型を参照することができる格ゲーは結構多い。
流石に百貫デブとは言わないが格ゲーのアバター向きではない体型のプレイヤーなんかはどうしてもリアルとVRの身体の動かし方の違いに苦しむ定めにあり、これがフルダイブVRは健康体でやるべきという理由の一つでもあった。つまるところ、従来のフルダイブVRはデブに厳しかったのだ。

だがシャングリラ・フロンティアというゲームはその問題点をどういう原理か完璧に解消している。身長を伸ばそうが縮めようが太らせようが骨と皮だけのような姿にしようが、如何なる体格体型のアバターであってもプレイヤーはそれをまるで最初からそれこそが自分の姿であったかのように操作することができる。
そしてそれはシャンフロの血が流れているこのゲームも同じであったようで、巨漢やらチビやらを一通り使ってみたのだが、今の所体

格の違いによる動きづらさを感じることはなかった。

「とりあえず本番で使うキャラの候補は五つくらいに絞って……今日明日で最終候補を決めるか」

まだ正式に発売されたわけでもない現段階で二十キャラ以上の中から己の分身を選ぶことができるのだが、その中で個人的に使いやすかったキャラクターをとりあえず五体、ピックアップしておく。

まず第一候補「ランゾウ」。どうやら嵐蔵（ランゾウ）と書くらしいそのキャラは所謂サムライ（侍ではない）キャラであり、宮本武蔵よろしく日本刀二振りを二刀流で扱うお爺ちゃん系ヒーローキャラクターだ。シャンフロにおける俺（サンラク）に近しい戦闘スタイルであるということもあるが、特殊技が瞬間移動じみた居合術であるのが個人的に好評価だ。

次に第二候補「カースドプリズン」。名前の通り呪われた鎧によってその力を封じ込められているヴィランであり、シルヴィアなにがしの使うミーティアスの宿敵だ。車や瓦礫などを取り込んで自身の鎧を強化することができるのだがその性質上機動力を補うには一工夫が必要になる。あるロマン技が搭載されており、それも含めて使っていて楽しいキャラであると言える。

第三候補は「ミーティアス」。シルヴィアなにがしが俺と同じタイプのゲーマーである……というカッツォの言うとおり、彼女のメインキャラは俺にとっても極めて使いやすいキャラクターであると言える。兎にも角にも機動力がぶっ飛んでおり、急カーブするには一旦止まらないといけないという弱点にさえ目を瞑れば、爆速直進による距離関係の主導権を相手から奪い取ることができる……これはあれだな、防御に回ると死ぬタイプのキャラクターだ。

第四候補……「ティンクルピクシー」。名前から既にアレなオーラ

が漂っているが、まぁ女性キャラである。それも妖精的な可愛らしさ重点のヒロイン的キャラ……というのは仮の姿、その本性は超至近距離戦闘(インファイト)に特化した嫌がらせの塊だ。コンボのほとんどが「近づく」「動きを縛る」「棒で殴る」で構築される、妖精というより悪鬼の類としか思えないキャラクターだ。

そして第五候補「PSY(サイ)ボーグ・ロード」。超能力とサイボーグが合体した飛び道具持ちのキャラクターだ。というか飛び道具が本体と言ってもいい、あんまりに分かりやすいキャラクターコンセプト……つまりは「近づかれたら死ぬ」。とはいえ豊富なステップ技に上手くハメれば一方的に殴り続けることができる飛び道具技、立ち回りの技術を要求されるという点では中々に好みのキャラクターだった。

「とりあえずこの五キャラで対人やって最終的に決めるか……九時五十二分か」

オンライン上で合流するのは十時からだが、別にサーバーが開く時間までも十時と言うわけではない。どうせマッチング待ちするなら今からでいいかとオンラインに接続し……

『Nu2meg　とマッチングしました、キャラクター選択画面に移行します』

「んぁ!?」

ほぼノータイムでマッチングが成立したことで思わず間の抜けた声を出してしまう。このゲームでは基本的に直前に使用していたキャラクターが暫定的なアバターとされるため、キャラクター選択画面でメカメカしい外見のイケメンが間抜け面を晒していることになる

のだが……いや、今それは関係ない。

「この名前……成る程、早速実力の証明をしなけりゃならんわけだ」

カッツォではない、ペンシルゴンでもない。であればこの人物が誰であるかは明白、この一戦は本番と同等の重さを持っている。

（夏目氏のプレイスタイル……聞いておくべきだったな、こっちのプレイスタイルはカッツォの奴にバラされてるし……おのれユニーク自発できないマンめ）

さぁどうする。使いやすさで言うのならミーティアスかランゾウだが、初見の相手への様子見を兼ねるのならＰＳＹボーグ・ロードやカースドプリズンも良い。ティンクルピクシーはある程度相手の手の内を把握していないとリスキーなので今回はパス。

「……よし」

全能存在ギャラクセウスですら予期し得なかった正体不明の存在「カオス」。調和でもなく、破滅でもない、終わりなき戦いが続く混沌をこそ望むその存在はあらゆる世界のヒーローを、ヴィランを取り込み己の世界「ケイオースシティ」へと閉じ込めた。異なる正義を掲げるヒーロー達は手を組むのか？　己の欲望をこそ第一とするヴィラン達は敵対するのか？　それとも宿敵たるヒーローとヴィラ

ンがタッグを組むのか！？　混沌の街に、超常の存在は嗤う――
！！

という設定の今作であるが、その設定上従来の格ゲーとは大きく異なるルールで戦うことになる。
まず勝利条件は二つ、一つは対戦相手をノックアウト……つまり倒すこと。格ゲーとしてはこちらがメインではあるのだが、ある理由から単純に殴ればいいという問題でもない。
そしてもう一つが広大なバトルフィールド「ケイオースシティ」のどこかにランダムで設置される「ケイオースキューブ」を獲得すること。
基本的に格ゲーのテンプレートはコロシアムのようなバトルフィールド内で戦う、というものであるが、ギャラヒロ：カオスでは一試合ごとにオブジェクトがランダム再配置されることで常に異なる景色を見せる街一つ全てがバトルフィールドだ。

であれば対戦相手など無視して高機動の……それこそミーティアスのようなキャラを使ってケイオースキューブを最速で確保すればいいと考えてしまうがところがどっこいそうはいかない。
プレイヤーは使用キャラクターによるが「ヒロイックゲージ」「ヴィラニックゲージ」をゲーム開始時点から持っている。そしてこのゲージを溜めなければケイオースキューブを回収することができないのだ。そしてこのゲージを溜めるためにしなければならないこと……まぁ言うまでもないだろう。
ちなみにヴィラン同士、ヒーロー同士でマッチングした場合はＮＰＣとしてヴィランやヒーローが出現したりするらしい。
「さて……どうやら向こうはヴィランキャラを選んだみたいだな」
ヒーロー対ヴィランでマッチングした場合、ヴィラン側のプレイヤ

ーは三十秒間の準備時間が与えられる。ヒーローは後から登場するというお約束のためのルールなんだろうが、ヴィランキャラはその間にゲージを溜める、罠を仕掛ける、自身を強化するなどの行動が可能だ。

これだけ見ればヴィランの方が有利にも思えるが、ヒーロー側のキャラはケイオースシティに存在するＮＰＣを味方につけることができる。例えばヴィランの目撃情報を集めて潜伏したヴィランの場所を特定したり、災害救助などをすることでヒロイックゲージを溜めることができる。

愚直に敵を倒すことに注力するのか、それともキューブを手に入れるために走るのか……格ゲーではあるが戦略ゲーの面が強いようにも感じるな。

「ああそこのお嬢さん、ここらで暴れまわってるやつを見なかったか？」

「あ、あっちで化け物が暴れてるって……私の夫があそこにいるかもしれないのに……！！」

「成る程……ところでここらに甘味処はあるかい？」

「今そんなことどうでもいいでしょう！　老人ホームの場所を教えて差し上げましょうか！？」

うん、やっぱりか。いきなりトチ狂った質問を投げかけた老人に対して怒る女性を尻目に、俺はこのゲームの本質に気づいた。オフラインの一人対戦……流石に実機プレイのテスターといえど製品版をプレイできるわけではなく、簡単なトレーニングモードではあったがそれでもＮＰＣにコンタクトを行うことはできた。

なので当然というか俺はいろいろ試してみた。ヴィランキャラで幼

子を人質にしてみたり、ヒーローキャラで災害救助をし続けてみたり、気障ったらしい言動をしてみたり。そして今の最後の確認で分かったことがある。

このゲームの本質はシミュレーションゲームだ。

混沌たる街に正義と悪は駆け巡る（後書き）

ぶっちゃけるとシャンフロが五世代先を行くゲームだとすればこのギャラクシア・ヒーローズ：カオスはまぁ三、五世代先くらいのゲームです

確かにＮＰＣのＡＩは優秀ですが、シャンフロのそれと比べると数段劣るものです。問いかけに対する回答力は優れていますが五、六回話しかけ続ければ会話がループするタイプの知能ですね

ただそれでも莫大なお金の流れがあったとかなかったとか

キャラゲーとはすなわち

ギャラクシア・ヒーローズというゲームにとって、対戦要素というものはぶっちゃけて言えば極論必要のないもの、贅肉だ。では何のためのゲームかと言われれば、その本質は「ヒーロー体験」「ヴィラン体験」という結論に尽きる。

ギャラクシア・ヒーローズシリーズとは格ゲーを基として作られたゲームではなく、ギャラクシアコミックという漫画をゲームに変換したものに他ならない。あのヒーローのように夜の摩天楼を駆け抜けたい、あのヴィランのように欲望のままに暴れまわりたい。そういう追体験を行うことがこのゲームの根幹だ。

そしてこれまではそれを成し得る技術が存在しなかった、だからこその格ゲー。限定的なフィールドでヒーローのスペックだけを模倣するゲームしか作れなかった。

「だがシャンフロがこの世に生まれた」

ゲームという分野の歴史におけるパラダイムシフト、シャングリラ・フロンティア……その開発元にいくら積んだのかは知らないが、かくしてギャラクシア・ヒーローズ：カオスはこれまで叶わなかった本来のコンセプトの実現に至った。

即ちプレイヤー自身がキャラクターになること、ただ戦うのではなくケイオースシティという舞台の中でヒーローらしく振る舞うこと、ヴィランらしく振る舞うこと。それこそがこのゲームの根幹にして本質、ただ作業的にアクションするだけではこのゲームで勝つことは出来ない。

「ヒロイックゲージはキューブの確保以外にも、超必にも使うゲー

ジだからな……より効率的なゲージ溜めに必要なものは……」
ロールプレイング。プレイヤーがキャラクターになりきること、それこそがこのゲームにおける「最低限のノルマ」だ。
「つまりなんだ、ギャラクシアコミックのファンにとっては神ゲーなんだろうな」
「別に貴方が気に食わないってわけじゃないけど……その実力、確かめさせてもらうわ」
二刀を携えた老侍と、大地に根を張った植物と人間のキメラが大通りで対峙する。確かあのキャラクターの名前は……そう、ユグドライアだっけか。
なんかマッドドクターに拉致られて改造手術を施されたことで植物を操る力を獲得し、色々あってヴィランになったキャラクターだ。
そしてそのゲームキャラクターとしてのコンセプトは……
「設置とカウンターに特化した鈍足キャラだったか」
「ケイに勝率四割キープする実力とやら……見せてもらうわよ！！」
次の瞬間、ビルに仕掛けられた「罠種子（トラップシード）」が起動し、凄まじい勢いで成長した蔦が俺へと襲いかかってきた。
「甘い甘い……！！」
一通りキャラ性能は把握している、この設置技はプレイヤーが任意で起動させることができるがその代わりに真っ直ぐにしか攻撃できない。ただし喰らえば身動きを封じられ、数秒とはいえサンドバッ

グにされてしまう。
左右二方向から伸びる蔦はそれぞれが足首と首を狙ういやらしい配置であるが、極端に狙う部位がずらされているために回避は容易い。
身を屈め、兎跳びのようにジャンプして二方向からの掴み攻撃を避ける。すぐさま着地し前進の勢いを維持したまま夏目氏もといユグドライア本体から放たれた茨の鞭を身を捻って回避する。
確かに俺は一通りのキャラ性能を触り程度だが把握している。だがそれはあくまでも大体どんなキャラであるか程度であり、そのキャラを使いこなした場合どれくらいのことができるのかまで把握しているわけではない。
だが世の中には王道というものがあり、「植物使い」「中距離が得意」という情報さえあれば大体どんな攻撃を仕掛けてくるかなんて簡単に推測できるんだよ……！！

「嘘、全部避け……！？」

「えーとなんだっけな、そうそう……『嵐刃(ランバ)の極意をお見せしよう』だったな」

ここに来るまでに人命救助七名、さらにフラグを建てた女性の夫を救助してボーナス込みでゲージは溜まっている。
ランゾウの特殊技「嵐気流道征(ランキリューミチユキ)」発動。距離にして五メートルを瞬間移動(踏み込み)で詰め寄る移動技でユグドライアの距離をランゾウの距離へと塗り替える。

「かかったわね……！」

恐らくペンシルゴンがあれを操作していたならもっと悪辣な罠を仕掛けていた、だがこの距離まで詰められれば奴はなすすべなく敗北

していただろう。仮に夏目氏と同じ手段をペンシルゴンが持っていたとしても、俺なら先手を取ってそのまま押し切れる。だが今相対するはプロゲーマー、己の技量を職とする者だ。
ユグドライアのゲージ技、名前は覚えてないが自身を中心に茨の槍を円を広げるように放つ必殺の近距離攻撃手段だ。だがこれは想定の内だ、ペンシルゴン相手ならそのまま押し切るが、そうでないのならば対処するというもの。

「検証するのは威力じゃねぇ、範囲だ……！」

この円形範囲攻撃の「高さ」はおよそ三メートル、つまり最もシンプルかつ手っ取り早い対処法はただ一つ。前後左右、封じられたならば逃げ道は上だ。

「老骨大跳躍！」

「タイミングを合わせた……！？」

最初から想定していれば対処にブレは無し！　ランゾウのゲージ技「天津風大嵐斬（アマツカゼタイランザン）」はおよそ十メートルの跳躍の後、刃が交差した十字斬りを浴びせかける必殺技だ。なにより「アメコミヒーローだから」の一言で片付けられる物理法則への叛逆っぷりが素晴らしい。「とりあえずぶん殴る」という素晴らしい名案をいつだって胸に抱いているのだから。

まさか完璧に対処されるとは思っていなかったのか、驚愕の表情を浮かべる植物女はしかしてプロゲーマーインストール、地に張られた根をせわしなく動かすことで一応は存在するステップを用いて斬撃エフェクトによるダメージを軽減する。

ここで完全に回避するのではなくある程度ダメージを受け入れたのは流石としか言いようがない、ゲージ回復、ステップの温存、迎撃の用意……それら全てを考慮した上でダメージコントロールを為す腕前は感嘆の吐息を漏らしてしまいそうだが……残念だがその対応は65点、及第点ギリギリだ。

カウンターを主体とするキャラが迎撃の用意を整える、それ自体はなんら問題はないが、そこで攻撃を仕掛けないのは悪手だ。結局のところ、戦いとはいつだって体力と名付けられた数字をゼロまで押し切った方が勝つのだから。

この戦いは俺という人物が果たして魚臣　慧に四割勝率を取れる相手であるかを夏目氏が確かめる為のもの、つまり彼女の脳裏に「単純な激突による実力以外での勝利」は存在していない。それはこちらも同じではあるがそれを自覚していれば勝利に続く道の選択肢が増えるというもの。

向こうが迎撃に回るのならばこちらはあえて手を出さない。迎撃とは受動的な攻撃でありこちらは能動的に攻撃を手放すのだ。

ジャンケンで同じ手がぶつかり合ったかのような、攻撃も防御もない停滞が一瞬生まれる。夏目氏は少々警戒が過ぎる、こちらの手を見切って対処する……キャラ選択からしてその気配を隠そうともしていない。

そしてなんとなく夏目氏のバトルスタイルというものが見えてきた、つまり彼女は自分のリズムを作るタイプだ。

俺や、多分だがレイ氏みたいなプレイヤーはリズムを持っているタイプだ。どんな相手が来ようが自分がやりたいことをやる、主導権を握れば一方的に殴ることが出来るが、逆に主導権を奪われると同じ事が自分に返って来る。

逆にカッツォやペンシルゴン、そして夏目氏はリズムを作るタイプだ、それは相手の動きを見た上で自分に都合のいい流れに変える。一見押されているように見えて最終的には何故か勝っているような、主導権を後から奪い返すタイプだ。

ぶっちゃけどちらもメリットデメリットを抱えているが……少なくとも夏目氏を攻略する構想は形を得た。

この手のタイプは……拍子を乱される事に滅法不得手だ。

「やぁメグ、その様子じゃあいつと戦ったみたいだけど……どうだ

った？」

「……負けた。っていうか何よアレ、途中から動きがメチャクチャになるしやたら煽ってくるし、本当何よアレ？」

カッツォ……慧は今は永遠と対戦しているガスマスクの友人の姿を思いながらチームメイトに対戦の感想を聞く。

返ってきた言葉は、成る程彼女が自分と同じ「負けパターン」に引っかかった事を示しており、その事実に慧は直前まで使っていた溶岩の腕を持つヒーローの姿で苦笑する。

「言ったろ？　あいつはシルヴィア・ゴールドバーグと似たタイプのプレイヤーだって。十秒ごとにバトルスタイルが切り替わるような奴だからね、こっちもそれに合わせて対処しないと」

魚臣　慧から言わせて貰えばサンラクという人物は一つ一つが必殺を秘めた十徳ナイフだ。あらゆる手段を用い、時に組み合わせる事でこちらに大量の選択肢を叩きつけてくる。手間取れば待っているのは一方的なタコ殴り……であるが、逆に言えばサンラクが持つ手札全てを把握し、こちらの必勝パターンを差し込むことさえできれば拍子抜けするほどあっさり勝てる。

「あいつ素で強いのもあるけど、思考回路が奇行（ロマン）で固定されてるから七割以上が安定しないんだよなー……」

何をどう考えたら「プロゲーマーに勝つために攻撃の八割にフェイントを絡めよう」なんて思考回路になるのか、それなりに長い付き合いだが今でも慧にはあの狂人の考えがわからなくなる時がある。

ただ奴が考案した多段フェイントは慧の助けにもなったことがあるので侮れない。

効率よりも派手なロマンを選ぶからこそ予想外の敗北を喫するし、逆に動きを特定することも容易いのだが、それでも残り一割が詰められない。だからこそ単純に興味があるのだ。

「あれをスターレインにぶつけてみたらどうなるのかが単純に興味があるってのもあるんだけどね」

「……じゃあ、天音　永遠も同じくらい強いの？」

「いや、あれはもっと邪悪な奴だよ」

なにせ「自由度」を与えると爆泳しだすマグロじみたプレイヤーがサンラクだとすれば、それはもう悪辣な巣を作り始める蜘蛛が鉛筆戦士というプレイヤーなので。

キャラゲーとはすなわち（後書き）

※要約

「ヘイヘイへーイ！　射程足りてないんじゃないかぁー？？　ほうれジジイはここだぞぉハイ残念かわします！　じゃあ俺は逃げるんで……と思わせて曲がり角で待ち伏せでーす！！」

「ぐぬぬ」

ただ一瞬にて気取るは灼光の限界

「えげつねぇ！　えげつねぇぞこんちくしょう！」

「あーごめんねー負け犬の遠吠え語はちょっと知らないっていうかぁー？　ちょっと何言ってるか分かんないでぇーす！！」

「鬼！　悪魔！　外道！」

ＮＰＣが数千人単位で死ぬような事しやがったぜこいつ！　まぁ俺も俺で高級車を中心に３ダースほど車をスクラップにしたが、比べ物にならないワルですよこいつわ……

「なにしたのさ？」

「ビルでジェンガ」

「鬼かよ……」

段階的に崩壊していくビルを背景に高笑うペンシルゴン、大量のＮＰＣに「助けてヒーロー！」と纏わり付かれたところを…………やり口がえげつなさ過ぎてヤバい。もっとシンプルに倒しにかかればよかったか。

「メグも含めて聞くけど、このゲームを触ってみた感想は？」

このゲームの触りの感想か、そうさな……

「対民衆シミュレーションゲーム（バトル要素あり）」

「箱庭タワーオフェンス、なおヴィラン限定」

「自由度がズバ抜けた広い視野での立ち回りが要求される……って私も捻った感想を言わないといけないの？」

「メグはメグのままでいいんだよ、あの二人はニューロンに消せないバグがくっついてるだけだから」

「そ、そう……今の私がいいんだ……」

「ねぇサンラクさんや、私達はこれに対してどう対応すればいいかな？」

「笑顔で中指立ててやればいいんじゃないか？」

なにこのある程度イベント進めた中盤くらいのギャルゲーみたいな光景、カッツォの野郎見せつけてるのか？　見せつけてるのか？　ただ本人はそういう感じには見えませんね、つまりはそういうことかよ、カーッ、ぺっ！！

「なんで無言で罵倒の限りを尽くされてるのか分かんないけど……とりあえず本格的な対策は明日として……ヘイサンラク、ちょっと一試合やんない？」

「ん？　別にいいけど」

「ただし一つだけこっちから頼みがあってさ……使用キャラは「ミーティアス」にしてほしい」

「……シルヴィアなんとかさんのプレイ動画でも見てこようか？」

「いや、いい。どうせ前回よりも進化してるのがシルヴィア・ゴールドバーグってやつなんだから」

――ただし、本気で来てくれ

それがカッツォからのオーダーであった。

見ようによっては今にもフィーバーしだしそうな格好のヒーロー「ミーティアス」の姿で俺はビルの屋上から街並みが先程とはガラリと変わったケイオースシティを見下ろす。

「さて、バグが絡まない格ゲーで奴と戦うのはどんくらいぶりか……」

初見ゲームという点では俺が有利ではあるが、シャンフロ系列であることや前作をカッツォがやり込んでいたことを考えるとダイアグラムは６：４でこっち不利くらいか……？

「まぁいいさ、やる事は変わりない」

ミーティアスというキャラクターを一言で表すなら「ｘｙｚ軸を全網羅した高機動アタッカー」だ。空中ジャンプ、壁走りに高速ダッシュの性能が凄まじく、ステップと直角カーブが苦手ではあるが、この広大なステージを走り回るという点では現状選べるキャラの中でも最高峰の機動力を持っている。
ただ素の火力が若干低いため、より多くの攻撃を当てなければならないキャラクターだ。

「確かカッツォの使用キャラは「アムドラヴァ」だったか……」

腕が溶岩になっているヒーローキャラであり、コンクリやら鉄筋を溶かして弾丸代わりに飛ばしてくる近距離ファイター。溶鉄弾は全体的に遅いので不意打ちか対処できない状態でなければ回避は容易い、だがそれを当てる動きをするのがカッツォ……魚臣　慧というプレイヤーだ。

「幸い機動力でミーティアスが負ける相手なんて五キャラもいないし、主導権はこっちが握れる……いや、それが狙いか」

同じプレイスタイルに同じキャラを使わせる、これが対シルヴィアなんたらを見据えたスパーリングだということは猿でも分かる。であれば機動力で勝るミーティアスへの対策は当然組まれていると考えていい。
ヒーローｖｓヒーローマッチである以上、カッツォガン無視で救援活動＆ＮＰＣヴィラン退治に向かうのもアリだな、ルールとして設定されている以上それ自体は別に邪道でもなんでもないのだから。

「とはいえ、だ」

俺個人として、対カッツォ……いいや、モドルカッツォとの戦績の

最新が敗北のまま、というのは宜しくないと思うわけで。
いくつかのビルへと飛び移りながら辺りを索敵し、摩天楼の乱立に囲まれるようにして存在する公園の中央に、電灯とは違う灼熱の輝きを見つける。

「もうゴングは鳴ってるんだ……先手必勝で叩き込む！」

ビルから跳躍し、空中ジャンプ。ミーティアスの特殊技「スターロード」の効果により五秒間空中を駆け抜ける。本来であればここでゲージ技を切って奇襲を仕掛けたいところなのだがあいにくゲージはすっからかん、特撮ヒーローを彷彿とさせる通常の飛び蹴りで上から先制攻撃を仕掛ける。あー、これシャンフロに持ってけないかなぁ。

「シャラシャラうるさいからバレバレなんだよ！」

「承知の上……だっ！！」

とはいえこのミーティアスというキャラクター、常に光の粒子のようなエフェクトを纏っている上に、地面に足がついていない……つまり今のような状況だと勝手に効果音が鳴る。驚く程隠密に向いていないキャラだが、今俺が欲しいのは会心の手応えではなく、攻撃したという判定だ。

ある程度の高さから落ちた場合、このゲームではダメージ判定こそないが代わりに着地モーションを強制されてしまう。だが攻撃モーションであればその硬直は大幅に短縮される。
こちらの飛び蹴りに対してカッツォ……アムドラヴァの対応は腕による防御。ジュワ、と熱が物質を溶かす音と共に互いのＨＰが減少する。摩天楼の天辺からの蹴りは流石にガードで完全に無効化でき

るものではなく、防御を貫いた衝撃がアムドラヴァの体力を僅かに削り、そしてミーティアスもまたダメージを受ける。
確かアムドラヴァ最大の特徴は、腕部限定ではあるが触れた相手にダメージを与える「溶岩装甲」だ。棘の鎧を腕限定にしたかのようなそれは、腕を用いる攻撃と防御に追加ダメージを付与する。
「あの高さから的確にこっちに攻撃を当ててくるとはよくやるよ……！」
「分かりやすく目印があるからなぁっ！！」
アムドラヴァ相手に張り付いての近距離戦闘はミーティアスでは不利だ、こちらの攻撃を防がれればその分スリップダメージを受ける上に、機動力を自ら潰すような真似はすべきではない。
であれば最適解はヒットアンドアウェイ……蝶のように舞い、蜂のように刺すってやつだ。
バックステップで距離を取り、攻撃の隙を伺う。しまったな、アムドラヴァが溶鉄弾を発射可能状態、不可状態で見た目に変化があるのか検証を忘れていた。飛び道具の有無が不明瞭、というのは中々に不味いのだが……悩んでいても千日手だ、遠距離攻撃があるものと仮定してここは前へ突っ込む。
助走をつけて前へと進む、アムドラヴァは灼熱の塊と化した右腕をさながら砲塔の狙いを定めるようにこちらへと突きつける。溶鉄弾はやはりあったのか、と警戒レベルを引き上げつつも駆け抜ける足に減速の命令は出さない。
五歩を経て速力が増したダッシュ状態になったミーティアスは他キャラと比べても頭一つは抜けた速さを叩き出す。
互いの距離は五メートルを切った、弾丸は飛んで来ない。ブラフか

？　それとも飛び道具としてではなく至近距離で運用するつもりか？

三メートル、右腕を引っ込めた……ブラフか！　降ろされた溶岩の右腕はこちらの攻撃を迎撃する構えだ、狙いはパリィか？

二メートル、既にここは互いの射程圏内だ。とはいえあくまでもそれは手持ちの攻撃の中でもいくつかが届くだけであって牽制以上の成果は発揮できない。

一メートル……互いに届く。

ミーティアスは設定上ジークンドーを会得しており、軽快なフットワークから怒涛の攻撃を放つ事ができる……サラリーマンなのに。

であるからして技の殆どは近距離戦闘であり最速で攻撃を叩き込むのであるならば懐に潜り込み一発入れ……違う！！

「く、ぬ、ぉお……っ！？」

右手、フェイク、身体、陰、左手、左手、来る！　来る！！

もはや思考ですらない、視覚からぶつ切りで送られてきた情報のカケラを精査するよりも先に、全力で身体を捻りアムドラヴァの右半身側を抜けるように跳躍。

次の瞬間、右半身を前に出すように構えることで自身の身体で隠していた左手から散弾の如くマグマを撒き散らしながら溶けた鉄の塊が射出された。

ジリジリと肌を熱するダメージを伴う光源が身をかわした俺の右脇腹を掠めて後ろへと飛んでいく。直撃こそ避けたがこちらは出鼻を大きく挫かれてしまった……とでもいうと思ったか？

「そこから反応するのかよ……っ！？」

「自発的ならそれは回避って言うんだよ……！！」

想定外の緊急行動であっても身体の主導権はまだ俺が手綱を握っている。直撃を受けて吹っ飛ばされるのと、自分から転がるのでは動きは天と地ほどの差がある。
狙ったかどうかは定かではないが、アムドラヴァの溶鉄弾は俺の胸の中央を目掛けて発射された。それを回避するために俺もまた弾丸の如く身体を左回転で捩じらせていた。
動きを止めず、衰えさせることもなくさらに後押しするように力を込めれば天地の景色が逆転する。前後を軸に、左回転のロールを敢行した俺は視界の逆転が正常となった時点で地面を蹴るように着地、頭を一度振って平衡感覚を戻しつつノータイムで身を屈める。
そして今度は右足を円の中心点に、時計の針が動く軌道を真似るように左足から奴の体勢を崩さんとする足払いを放つ。狙うのは奴の膝裏、喰らえ爪先蹴り式膝カックン……！

「舐めんな！」

「うるせぇ倒れろ！」

この蹴りによる膝カックンは兎にも角にも始動から直撃までの速度が速い事と、蹴りそのものにダメージがあるという点において通常の膝カックン、つまり背後に回って自分の膝で相手の膝を押すそれよりも優っている。
だが回し蹴りに近い体勢で行う以上、「二」足歩行の生物である為に一本を支えとすれば攻撃に使えるのはもう一本以外には存在しない。
そのため片方の膝裏しか打ち据えることができないが元より苦しい姿勢からの反撃、会心（クリティカル）のヒットは期待していない。
片足立ちの姿勢を強制されたアムドラヴァであるが、細マッチョな

ミーティアスと違い、ヘビー級ボクサーのような体型をしたアムドラヴァは片足のみで身体を支えてなおバランスを維持していた……中身(プレイヤー)のセンスによる所も大きいだろうが、やはり「アムドラヴァ」というキャラクター自身の体幹の信頼性が高い。

さぁどう攻略したものか、足を払ったはいいが追撃を仕掛けられるような余裕はない。ミーティアスの「コンボ」は相手を空中にかち上げなければならない以上この体勢からコンボへと繋げるのは困難、であれば一旦引いてから下から上への攻撃をメインに撹乱を……

「あー、ごめん。バトル中断で」

「んぁあ？」

車は急には止まれない。すでに身体は次の一手へと動き出しており、そんな急にノーコンテスト宣言されたところで止まることはできない。先ほどまで戦意を漲らせていたアムドラヴァ(カッツォ)の口からその言葉が飛び出してきた時、疑問や驚愕よりも先にすでに跳躍と共に蹴り足を唸らせていた俺はとりあえず技を放ち終わってからその言葉の意味を考えることにした。即ち……

「うぐぉ！？」

「不慮の事故だ、笑って許せ」

ハイキックが顎に命中して吹っ飛んでいくカッツォに俺は誠心誠意の謝罪の言葉を送るのだった。

「……で？　いきなりノーコン宣言とか何考えてるんだ。お前から対戦希望してきたくせに」

「ごめんて、いやなんというかさ……仮想シルヴィア的な感じでミーティアスと戦ってみて確信したっていうか……多分アムドラヴァじゃ勝てないんだよね」

「そうか？　結構苦戦しそうな予感がしたけど」

両腕にトゲ付きのシールドを常に装備しているようなキャラだ、ボクシング的な感じで戦い続けていれば守勢でありながら相手のＨＰを削ることができるだろうし、その性質上殴るためには近づかなければならないミーティアス相手なら結構有利を取れると思うんだが。そんな所感を煽りを交えつつ伝えると、プロゲーマー殿は実に良い笑顔で単純明快な「今の自分ではダメな理由」を説明してくださった。いいかカッツォ、拳に会話能力はないんだ……わかったらその拳を降ろして、オッケィ？

「まぁはっきり言うと……シルヴィア・ゴールドバーグって怪物は今のお前より速い」

「マジ？」

俺より速いとかもはやそれウェザエモン（公式ＴＡＳ）レベルでは？

ただ一瞬にて気取るは灼光の限界（後書き）

シャンフロ描写に戻りたい……でもこっちの描写も書きたい……でもそれ以上に設定考えていたい！！　モンスターとかの！！！　と思う今日この頃

果たしてどちらが寄り道か

『あーっ！　ミーティアスのコンボが入ったァーッ！』

なんだ今のは、アムドラヴァの対応は完璧だった。空中からの蹴りに対してガード、なおも接近を図るミーティアスに対して掴み攻撃で牽制し、威力こそ高いが隙の大きい技を安全策を取ってガードしようとして……ガードが成立するよりも先にミーティアスが攻撃を当てた。

『いや、今の……まさかガードの隙間に差し込んだ？　ははは、あれ本当に人間技なんですか？　来るとわかっててもあれをできる人はそうそういないでしょう……』

解説の声が言う通り、アレは反応速度でどうこうできるものではない。それこそ台本通りに進む展開を最初から知っていなければ出来ないような、曲芸と呼ぶ事すら生ぬるいあまりに致命的な一刺し。アレは駄目だ、仮にあの場で戦っていたアムドラヴァの中身が俺だったとしても、こうも見事に差し込まれてはどうしようもない。

『アムドラヴァが跳ね上げられていくゥ！　そしてミーティアスのゲージはマックス！　来るか？　来るか……来たぁぁぁっ！　ミーティアスの超必がぶっ込まれるぅ！　ＫＯォォォォッ！「Ｋ（ケイ）」ですら勝てないっ！　強すぎる、あまりに強すぎるぞ絶対王者シルヴィィィィッ！！』

そこからは語るまでもなく、一切のミスなくフルコンボを当てきり、超必殺の飛び蹴りを叩き込み……フィニッシュ。体力の半分を削ら

れてはいるものの、完勝といって差し支えないレベルの圧倒だ。俺は開いたサイト……「Ｋ　ｖｓ　Ｓｉｌｖｉ」と題名付けられた動画を閉じつつ、カッツォの奴が言った言葉が真実であることを実感する。

「テクニック自体は真似できそうだけど……先読みが極まりすぎてて意味わかんねー……」

一年前に録画されたものだというカッツォの奴と、シルヴィアなんたならかーらの戦いは、1ラウンド目をシルヴィアが先取し、続く2ラウンド目をカッツォが取り返す。
そして3ラウンド目、カッツォのアムドラヴァが体力を七割残した状態でシルヴィアのミーティアスの体力を半分まで削り……そこでいきなりミーティアスの動きが化けた。
それまでどちらといえば戦局を予想して戦っていたのはカッツォの方であったというのにその瞬間から、シルヴィアの動きが加速したのだ。
常時パリィ成功補正でも付いているかのようにカッツォの攻撃を捌き切り、前作でも備えていたスリップダメージを与える溶岩の腕への攻撃によるＨＰ管理は計算機でも使ったのかというレベルだ。
そして何よりあのガード抜き、グーでパーを貫通するような力技を最速、最適、最高のパフォーマンスで通す。理想乱数引く為に何回くらい追記したんですか？　ぶっつけ本番？　ははは、ふざけろ。

「ていうか調べたらあいつ公式戦だけで零勝八敗一分……フルボッコにされてんじゃん」

それでも勝ちを諦めてないあたり、筋金入りの負けず嫌いだなあいつ。思えば俺が「便秘」にやってきたあいつをフルボッコにした時も、わざわざパッケージ版を買ってまでリベンジに来たしなぁ……

あぁいう闘争心がプロゲーマーには必要な大前提なのかもしれないな。

まぁ結局のところ俺たちの役割はカッツォｖｓシルヴィアのマッチングを成立させること、言うなれば前座も前座だ。であれば俺が調べ、対策するべきは三人のマッチョの方だ。三匹の子豚みたいだな……随分と汗臭そうな。

「さぁ、一夜漬けで対策を立てるとしようか！！」

四十五分で挫折した。

「あぁー……どーっすっかなぁ……」

現在俺はガスマスクを外してホテルの外に存在する二十四時間経営、徹夜と夜食調達の心強い味方ことコンビニへと赴いていた。さすがにコンビニにガスマスクをつけて行けばカッツォに呼ばれた俺が警察を呼ばれるというギャグみたいな謎連鎖をすることになりかねない。

予想外の発見をしたために急遽夜更かしの可能性が出てきたため、エナジードリンクの補給を行うためと……なんというかチープ＆ジャンクなコンビニの空気が吸いたくなったのだ。あのホテル、友達の家にゲームやりにいくような感覚で泊まる場所じゃないよ。

「流石に海外製エナドリはないか……まぁ、二本飲み(ダブルチャージ)すればカフェイン充填200%でいい感じにキマるだろうし今日は大人しめに一本にして……んー、でも二本開けると尿意問題がなぁ……」

ある意味で短期決戦用の奥の手だな、本来はタンク一本でいいのに物資不足やらなんやらで下位互換のパーツを多量積み込むことで出力を補う、ってロボ系の胸熱展開っぽくて俺は好きだなぁ……尿意(リミット)が早まるところまで再現しなくていいんだが。

本当であれば適当にプロゲーマーチーム「スターレイン」の選手たちのプレイ動画を見ておおよそのスタイルやおそらく使ってくるであろうキャラの対策、自身が使うキャラの練習やシステム的な検証の諸々などやることは結構あったのだが……あの新型フルダイブシステムを何の気なしにいじっていたところ、見つけてしまったのだ。

そう、「シャングリラ・フロンティア」のダウンロード版を……！！

そもそもシャングリラ・フロンティアはセーブデータを一つしか作ることができない。それはシャンフロ世界そのものと言っていいサーバーにユーザー情報が保存され、それを認証するためにユーザーの持つフルダイブシステムの機体コード、さらにユーザーそのものの肉体情報認証、タイプ式のパスワードの三つを参照して初めてユーザーはシャンフロ世界におけるもう一人の自分として振る舞うことができる。だが例えばフルダイブシステムがなんらかのアクシデントで破損してしまった場合、他システムでログインするための手段がある。

……ご大層な言葉を並べているが、要するにシャンフロというゲームはある程度の条件を達成すれば自分のものではないシステム下でも自データで遊ぶことができる、というわけで。それすなわち三日

ほどログインできないと割り切っていたシャンフロに思いがけずログインできるということで。

俺自身が所有するフルダイブシステム、ホテルにある最新型（ついでに最高額）のモデルの一個前のそれは別に破損しているわけではないので今回は平和的な別機体ログインを行う。自身のハードとリンクした携帯端末を中継ポイントとして対象システムに接続、機体コードを継承させた上でパスワード認証を行う。簡単に言えば携帯端末を接続して何分か待てばいいだけなので携帯端末は部屋に置いてきてある。

今回の滞在が終わる時に逆の手順をすれば良いので後々に問題が発生することもない。なんの問題もなくシャンフロがプレイできる、プレイできてしまうのだ。

「衝動的にシャンフロをプレイする準備をしてしまったからな……」

一応スターレインのマッチョ三連星の動画は見たし、どうせ明日は本格的な練習をするのだから今晩くらいは……ね？

そんな言い訳を誰に言うでもなく心の中で五周くらいループさせていると、ふと深夜のコンビニに場違いなほどはつらつとした声が響く。とは言ってもこの場にいるのは深夜シフトなのだろう眠たげな目の女性店員と、俺と、声の元凶たる人物しかいない。

「コーヒー！　クロ！　濃イノヲイッパイ出シテ！」

なんだそのいかがわしいオーダーは、とはさすがに見ず知らずの他人に声を出してツッコミを入れることはできない。これがペンシルゴンの口から出た言葉であったなら容赦なくツッコミを入れた上で煽るところなんだが……

そう考えながらエナドリを携えレジに向かった俺が見たものは、引

きつった笑顔の女性店員と何故かドヤ顔で胸を張る金髪の女性であった。とはいえ、帽子を目深にかぶり、サングラスまでした「私は身元を知られたくない」とアピールの激しい不審者ファッションであったが、それを装着している素体のＡＰＰが高いので不思議と似合っている、そんな印象を抱かせる金髪の外国人。

「あー、ええと……コーヒーは大体全部黒いんです、けど……」

「⁉︖　コーヒー、黒クテ、濃ユイノ、ドピュット？」

「ブラックの部分は無理に日本語にしなくてもいいんじゃ……」

しまった、いろいろ耐えかねて声に出してしまった。この不審者ファッションの言葉遣いがあんまりにもあんまりすぎて的外れな返答をしていた女性店員も、俺の言葉で彼女が「ブラックコーヒーを濃いめで出してくれ」と言っていることに気づいたのか、俺へと目礼を向けるとコーヒーサーバーへと駆けていった。つまり限定的条件であるとはいえ俺と不審者ファッションが二人きりの状況になる。

「アー……感謝！　アザッスー？」

「いえいえお気になさらず、ノープロブレムユアウェルカム？」

日本人であれば高確率で習得可能な特殊スキル「社交辞令スマイル」を起動し、日本人ではなかなか見ないコミュニケーション力(ちから)の高さで俺へと話しかけてきた不審者ファッションへと返答する。なんというかものすごく典型的な「エセ日本語を使う外国人」だ、妙にいかがわしい単語をチョイスするあたりが特に。

「ム、私モソノメーカー、オキニ！　デモコッチノ、濃ユイクナイ

……？」

「（「薄い」って単語を知らないのだろうか……）そっすね、カフェイン少なめですねー」

「お、お待たせしました……えーと、ブラックコーヒーです。ええとお会計……」

「ＯＫ！　コノ瞬間ヲ待ッテタンダー！」

待ち時間一分もなかったろ、早いなお前の起死回生。世の中には黙っていた方が美徳なこともあるんです、なんだかやたらキラキラしたカードで支払いを済ませたらしい不審者ファッションは俺と女性店員にひらひらと手を振ると、店を出て行った……後に残るは日本人的感性を持つ俺と店員。

「……なんか、ザ・テンションが高い外国人でしたね」

「あはは……あ、商品お預かりします」

「あ、支払いは現金で」

足取りは軽く、比較的星の見える夜空の下で彼女は笑う。笑いながら駆けていく。

ああわかっている、わかっているのだ。本来はこんなことをすべきではない。同じシリーズとはいえ従来のコロシアム式とは全く別のシステムによって成り立つあのゲームを慣らすためにこのような寄り道をするべきではないと。

だがそれはそれ、これはこれ。かつてはゲーム業界ですら世界を牽引していた母なるＵＳＡをたったい一作でぶっちぎりでぶち抜いたゲームタイトル……本業の忙しさと、ラグを嫌う個人的主義故に触ることのなかった理想郷の開拓。

日本にせっかく来たのであるなら触ってみたいと思うのがゲーマーというもの、公式戦で唯一引き分けを勝ち取り、己が公的にライバルと言ってはばからない「彼」への対策に燃える仲間たちには申し訳ないが、少しだけ寄り道をさせて欲しい。

明日から頑張ります、だから今晩だけは……ね？　そんな風に心の中で言い訳をしながら、彼女……シルヴィア・ゴールドバーグはホテルのエレベーターへと乗り込み、スイートルームのある最上階へと導くボタンを押す。

『あら？　さっきのボーイもこのホテルに宿泊してたんだね……彼も明後日の「お祭り（フェス）」に来るのかな？』

エレベータの扉が閉まる直前、欠伸をしながらホテルへと入ってきた親切な少年を僅かに視界に捉え……数秒後にはまだ見ぬ理想郷（シャングリラ）への期待にその記憶は押し流されていったのだった。

その日、混沌の街をほっぽり出して理想郷へと旅立つ者が二人。

果たしてどちらが寄り道か（後書き）

実際のところカフェインの含有量でぶっちぎってるのは玉露らしいので、作中で一番カフェインキメてるのはヒロインちゃんだったりします

主人公「私のカフェイン力は53万です」
ヒロイン「（玉露をおかわりして）100万パワー＋100万パワーで200万パワー！！　いつもの2倍の濃度が加わり、200万×2の400万パワー！！　そして、いつもの3倍の三煎出しを加えれば、400万×3の　ユニーク自発しまくりマン！お前をうわまわる1200万カフェインパワーだーっ！！」

なお実際はタンニンがなんやかんやでモンエナとかの方がカフェインキマるらしいです

「っはー……来ちゃったなぁ……来ちゃったよ……」

「む？　サンラクではないか、多分俺の体内感覚が狂ってないのであるならば今は夜だぞ？　もしや夜行性か？」

「ようアラバ、俺は俺のやる気が燃え上がる時間が活動時間なんだ、昼夜関係ナッシングってな」

「そ、そうか……」

他のメンツは……別の家屋に潜伏こそしているがログインはしていなさそうだな、エムルは寝ている。この家屋は俺、アラバ、エムルの二人と一羽が拠点としている。主にベッドの数が全員セーブするには足りないという理由で別々の家屋にプレイヤーがばらけている。故に他のプレイヤーがログインしているかどうかはちょっとわかりかねる。

「……まぁ、エムルは起こさなくていっか。おうアラバ、ちょっくら夜の探検に行ってくる」

「君はアレだな、寝ているか駆け回っているかのどちらかしかしないのか？　起きてる間は動いてないと死ぬとかそういうアレなのか？」

「誰がマグロだ、フカヒレ毟ってスープにしてやろうか。まぁちょ

いと遊んでくるだけだよ」

本格的な攻略は無理だからな、封将に特攻かましてもいいが今回は色々試しつつルルイアスの探索がメインだ。遠慮なく死ぬつもりなのでＮＰＣを連れて行くわけにもいかない。

屋根の穴から外へと出て、屋根伝いに夜のルルイアス探索の始まりだ。海底に逆さまに位置するルルイアスは謎光源で光を確保しているので昼も夜もへったくれもないのだが、昼と夜で出現エネミーが変わるなんてよくあることだ。

「っほぉー……こりゃまたファンタジックな光景だことで」

昼間が「半魚人（ゾンビ）彷徨う冒涜の都市」だとするなら、今はさながら「魚たちの楽園と化したかつての都市」という言葉こそふさわしい。

宙を泳ぐ魚、魚、魚。まさしく大魚群と呼ぶべき魚たちの賑わいはまず現実では見られない光景だ。腐敗した半魚人は新鮮な魚類から作り出される……つまり昼間は街を埋め尽くすほどに存在していた半魚人たちの本来の姿こそがあの大魚群なのだろう。

父の趣味故にそこまで釣りに興味のない俺でも魚の名前や姿にはある程度の理解がある。だからこそ中を泳ぐ魚の一匹一匹が現実に存在する魚類に似た特徴を持ち、そしてそれらとは決定的に異なるデザインであることに何度目かもわからない驚きの感情を得る。別に魚のデザインくらい現実の魚をそのまんま持ってきたって誰も怒らないだろうに、なぜこう重箱の隅を顕微鏡で覗き込むくらい細かく作り込むのやら。

「つっても、半漁人がいないから夜は楽勝、とはいかないわけか……」

さて問題です。魚が群れを作る理由とは何でしょうか？　正解は箇

単だ、くじ引きの中身は多ければ多いほど当たり（自分）を引かれる可能性が遠のくから。

「昼間はゾンビパニック、夜間はモンスターパニックってわけね」

巨影が魚群へと襲い掛かる。縦長とはいえ電車ほどはある巨大な顎門が開かれ、一つの大きな塊となった魚の大群の一部をごっそりと抉り取る。特急列車のごとき早さに長さ、そして巨大でありながらどこか神秘を内包する優美を保ち続けるその姿は、ま昼間に大激闘を繰り広げたアルクトゥス・レガレクスそのものであった。
だがそれだけであったのなら「おっ、ボーナスモンスターやんけ！」とでも考え嬉々として喧嘩を売っていただろう。そんなアホ思考の俺が「モンスターパニック」と形容するに足る理由とは。

その答えはやはり上空（水中）にこそある。ルルイアスの中では摂理が反転するが、それ以前に物理的に全てが反転している。だからこそ、深海のそこから浮上するかのように都市へと入り込んだ存在は深海から上空へと入りきった時点で上に落ちる。身体を捻るように、さながらつい先ほどカッツォと戦ったとき、溶鉄弾を回避した俺のように身体を錐揉み回転させながら下から上へ落ちてきたそれは、美しい「翼」を広げて虹帯の龍王魚へと飛び掛る。
奇襲者の身より噴き出すはこの場においてあまりに不釣り合いのはずの輝き。水中という世界とは正反対の性質故に、水の中での存在の維持を許されないはずのそれ……この一面が青い都市においてなお際立つ「蒼」い炎を纏い、大きく広げた翼のようにも見える胸鰭を力強く動かす様は、先ほどまでこの場における頂点であったアルクトゥス・レガレクスからいとも容易く「頂点」の地位を奪い去った。
「おいおい……ギガリュウグウノツカイ越えのモンスターが出現す

るかもしれないとか、昼のほうが安全じゃねーか」

胸鰭からブレードのように、羽毛のように生えた水晶体がアルクトゥス・レガレクスの身体を打ち据える。言葉にすれば単純な攻撃に巨体に見合う体力を備えたはずのアルクトゥス・レガレクスが悲鳴じみた咆哮をあげて身体を悶えさせる。

アルクトゥス・レガレクスの泳ぎが美しさを強く感じさせるものだとすれば、襲撃者のそれは力強さをこそ尊ぶ「強者」の泳ぎだ。遠目に見ている俺ですら、その力強いターンに風圧を受けたかのように錯覚する。轟と家屋を揺るがしながら、アルクトゥス・レガレクスに比べれば小さいがそれでも大型トラックほどもある巨体が突き進む。

まるで見えざる巨人の腕がアンダースローでフルスイングしたかのような、豪快なUターンによって再び上へと泳ぐ襲撃者の顎門が開かれる。悶え、苦しみ、それでも生物的な本能に従い捕食者の牙より逃れようとするアルクトゥス・レガレクス。だが最高速度になれば電車ほどの速度を出せるその巨体はその場から迅速に逃げ出すという点において悲しいほどに瞬発力が欠如していた。

牙が食らいつく。燃え盛る蒼炎は飾りなどでは断じてなく、牙に肉を裂かれ、蒼炎に身を焼かれるアルクトゥス・レガレクスの明確な悲鳴がルルイアス全土に響き渡る。その巨体を襲撃者へと絡みつかせ、抵抗せんとするアルクトゥス・レガレクスであったが、驚くべきことにその巨体を巻きつかせ締め上げて……それでも襲撃者の膂力は虹帯を上回っていた。

俺程度なら百人同時に締め上げ潰してしまえるような莫大なＳＴＲがあの巻きつきには内包されている、だというのに襲撃者はアルクトゥス・レガレクスに締め付けられたまま、あまつさえ速度を落とすことなく泳いですらいるのだ。もはやこれは対等な敵同士の戦いではなく、捕食者が餌を仕留めるまでの作業でしかない。

襲撃者の翼が光を放つ。水晶のエッジのようなそれが放つ光は身体の上半分を覆う炎の外套とはまた別種の、荒々しくも暗い深海を照らす温もりのあった炎とは全く異なる「王」の意向に逆らう者を塵の一つさえ存在を許さない冷酷な殺意。古来よりそれを人は神の御業であると畏れてきた、超高速フレーム攻撃の上に直撃すればほぼ即死攻撃というリアルチート技。

すなわち人それを「雷」と呼ぶ。

水晶体の翼がスパークを帯びる。蓄積と増幅、落雷の電力は規模にもよるが数億ボルトにまで到達するというがさすがにモンスター一匹でそこまでの火力は出せないだろう。そんな当たり前すら肯定しきれない莫大量の数字が襲撃者に雷鳴の翼を授ける。システム的な行動か、それともシステムが再現した「本能」による警鐘か。アルクトゥス・レガレクスが襲撃者にしがみついていた身体を解いて逃走を図る、だが奴は勘違いをしている。この狩りは最初から最後まで何も変わっていない。
奴がこの反転都市に入った時点で狩人は襲撃者であり、獲物はアルクトゥス・レガレクスである。そして今の今まで捕まっていたのはアルクトゥス・レガレクスであり、捕まえていたのは襲撃者であるという事実は、一度たりとも覆ってはいないのだ。

その蒼炎が襲撃者の血潮であるのなら、その身から放つ雷撃もまた蒼く。確かにタイマンで倒したとはいえその巨体の存在感を損なうことのなかったアルクトゥス・レガレクスが実に無様に身をくねらせ、悪足掻きを繰り返すもどうにもならないから悪あがきと呼ぶのであり、そして死神の鎌が振り下ろされる。
雷の翼の輝きが最高潮に達し、ルルイアスを照らす青水晶の光が放電の光に上書きされた。襲撃者を中心に球体状に広がる「致死圏内」はルルイアスの一部と運悪く逃げ遅れた魚類を巻き込み炸裂し、喰

らって試してみる気すら起きない極大ダメージを孕んだ蒼雷の嵐として辺り一帯へと撒き散らしたのだ。

「……………三十秒、二秒、五秒、短いな」

遍くモンスターはすなわちプレイヤーが相対すべきであり、相対可能なエネミーである。それはエムルのような友好的なモンスターであっても否定はできず、あの襲撃者……水晶の翼を持つ炎の鯱であっても例外ではない。であるなら俺がすべきことはギガリュウグウノツカイを瞬殺した力に恐れおののくことではなく、その力をいかに攻略するかを追求することだ。

遍くエリアはすなわちプレイヤーが攻略すべきであり、攻略可能なダンジョンである。それはルルイアスのような怪物のお膝元であっても例外ではない。であるなら俺がすべきことは理不尽なリセット能力に攻略を諦めることではなく、その理不尽をいかに踏破するかを検証することだ。

やりたいこと、やるべきこと、やった方がいいこと。どれから手をつければいいかわからない、そんな時のスマートな解決方法を特別にお見せしてやろう。オーディエンスがいないから妥協してお前にだよ二属性シャチ。

「このゲーム唯一の不満点があるとすれば、グロ表現に規制が入ってるせいでモンスターの捕食モーションが微妙ってことだな」

ポリゴンを咀嚼する姿はリアリティが飛び抜けたシャンフロだからこそ余計に滑稽に見える。二属性シャチのそんな姿を嘲笑い、地面に落ちてきたいくつかのドロップアイテムをこれ見よがしに掠め盗る。さぁどうするダブルタイプ、ご馳走の食べかすとはいえ不遜な小虫がかっさらっていったぞ？　そしてそいつは不敬にもこの海底

生態系において頂点に位置する存在にあまつさえ敵意すら向けている、クターニッドはピラミッドに入れていい存在じゃないから除外な。

「気炎万丈を物理的にアピールしやがって、そりゃこっちも同じだっての……！」

別にこいつを倒すために挑発をしたわけではない。俺には確かめたいことがあってそのためには「莫大な破壊力を行使できる存在」が必要なんだ。

だからこそ俺は、怯えることなくこの逆かさ空から俺を見下ろす海底の王へ喧嘩を売った。今ならなんとオマケで挑発コマンドもつけちゃう！　ドロップアイテムあざーっす！！

半裸が飲む国産のエナドリは、薄い（後書き）

稚拙な画力ではありますが設定集的作品である「設定鍵インベントリア：シャンフロの諸々」の方に二属性シャチことアトランティクス・レプノルカの設定画的なものを掲載しております。
拙作の文章表現の一助となれば幸いです、今後とも宜しくお願いします。

ちなみに主人公がカウントしていた「三十秒、二秒、五秒」はそれぞれ
雷撃のチャージ時間
攻撃モーションからダメージ判定が発生するまでの空白時間
ダメージ判定が働いている攻撃時間
です

深淵のクターニッドは設定面からして他のユニークモンスターとは隔絶した能力を持っていると言っていい。
限定的とは言え己の「死」すらをも含んだ世界そのものの時を止めたウェザエモンや、夜闇と一体化して無尽とも思える分身を作り出すリュカオーンがユニークモンスターとして力不足、というわけではない。
だがクターニッドという存在はまるで動画サイトで気になる場面を見返すかのような気軽さで破壊された街を元に戻す。電源のオンオフを切り替えるように容易く生死を、存在そのものを変容させてしまう。
強い弱いではなくただただ理不尽、格ゲーキャラが制限時間以上の戦いを許されないように、RPGのラスボスがその役割から逃げられないように……ゲームというシステムそのものに干渉するかのようなどうしようもない理不尽、それこそがユニークモンスター深淵のクターニッドだ。
だがそれはあくまでもスペックだけを見た限定的な絶望だ。シャングリラ・フロンティアがゲームであり、そしてクターニッドとの戦いがシナリオとして存在する以上抜け道が必ず存在する。
謎解きゲームは嫌いじゃない、世の中には「扉を開ける為に別のタワーにある鍵を持ってこい（閉じ込めた後に教える）」なんてクソゲーも存在するが、このシナリオがそうでないことを切に願うとして、だ。

「ちょおーっと調べたいことがあったんだよなぁ」

二属性シャチのご飯、ついでに俺の懐をあったためるアイテムと成り果てたアルクトゥス・レガレクス……先ほどの個体ではない昼にタイマンを張った個体との戦闘の際、俺はクターニッドというエネミーに与えられた強大な現実改変能力をその目で見ることになった。
成る程、確かに凄い。だがゲームである以上フィールドリセットというものはそう特異なものではない、極論適当な家屋に入ってもう一度外に出ればフィールドの全てが修復されるようなゲームはクソ、凡、良を問わずままあるものだ。
であればクエスチョン1、深淵のクターニッドによるフィールドリセットの発動条件とは？
そしてクエスチョン2、この都市は一体どれほどの規模まで破壊することが可能なのか？
最後にクエスチョン3、果たして「封将」とやらはどれだけ強いのか？

「徹底的に破壊の限りを尽くしてやる……二属性シャチがな！！」

屋根を飛び移り、二属性シャチとの距離を維持しながらひたすらにちょこまかと……そう、思わず叩き潰したくなるような絶妙のウザさを演出して二属性シャチを引き連れて俺が走る先は、四体の封将がいるこの都市の四隅にある塔の一つだ。
背後でバチバチと嫌な音が響く、慌てて走る速度を上げて屋根から飛び降りるとすぐ背後で激しいスパークと建物が崩壊する音が響き、背中を張り手で叩かれたように錯覚する。

「おっ、ととと……危ねぇ！」

崩れ落ちた瓦礫が土砂の流れとなって着地地点の道を汚す、目まぐ

るしく不安定な変動を繰り返す足場に着地。そして背後から迫る大質量の気配にスキル各種を起動し再跳躍、壁と土砂を足場に再び屋根の上へと舞い戻る。
直後、ただ雪崩れて覆いかぶさるだけで人を殺し得る質量の土砂を、まるでプリンのように掻っ捌きながら俺がいた場所を二属性シャチの胸鰭から生えた水晶羽が通過する。

「……………凄いな」

二属性シャチの火力にではない、噛まれようが叩かれようが感電させられようが一撃でお陀仏することは確定なのだから今更土砂を真っ二つにした程度で驚いていられるか。
驚いたのは今の回避挙動を完璧にこなした俺自身にだ。正直に言うと、不安定な足場をノンストップで駆け抜けて壁を蹴って屋根に再跳躍という一連の動作は無理ではないかと自分では思っていた、だが出来た。
一秒ごとに変動する瓦礫の中から足場たり得る状態の瓦礫を見抜き、踏み込み壁を蹴り屋根に手を掛け一気に登り切る……土壇場の出たとこ勝負にしてはあまりに理想的な動きを俺は可能としたのだ。

「流石は業務用とまであだ名される最新型と言うべきか……」

本当の業務用は完全なベッド型でレントゲン撮影機のような仰々しい代物であるらしいが、先代機となった自宅のヘッドギア型と比べればやはりパフォーマンスには確たる差がある。
現実はゲームと違い昨日今日で劇的に動きが良くなることは稀だ、俺がその「稀」をつかむようなことをしていない以上、この動きの秘訣はやはり機体に因るものだろう。
ただでさえリアル以上に動くアバターの挙動がさらに滑らかになっ

ているし、思考が発した命令に対する挙動のレスポンスも良くなっている。世界がよりクリアに見える気がするのも気のせいではなく画質向上もされているのだろうか？　成る程サイズを大きくしただけのことはある。

これならプロならざる俺でも米国最強チームとかいう明後日の……ああ、日付跨いだから明日か、明日の対戦でも対抗できるかもしれない。いや、よくよく考えたら向こうも条件は同じなのだから大差はなかった。

「見えた、確かモルドの話じゃクリオネっぽい奴がいる……だったか？」

下手に刺激して何が起こるかわからないということで遠目から観察しただけで手は出してないらしいが、試さないことには何も実証できない。

「愚者」の神秘(アルカナム)のお陰でスキルをぶん回しているとはいえ、ノータイムで連打できるわけではない。距離的に一度リキャストを挟まないといけないわけだが……しゃーなしだ、ちょいとばかし煽りじゃなくて喧嘩を売ってみようか。

奴がギガリュウグウノツカイと戦っている間、そして今に至る逃走の間を含めて結構な情報量を確保することができた。

まず大前提としてあの二属性シャチを真正面切って倒すのは極めて困難だと言うことだ。ギガリュウグウノツカイですら毒によるスリップダメージがあったからこそソロ討伐が出来たようなもので、なんの干渉も入らない戦闘であればもっと苦戦していただろう。

身体の上半分をすっぽり包んでしまっているあの炎は見てくれだけのものではなくダメージ判定がある、ダメージ判定というのは何も

プレイヤーの体力を削るだけのものではない。
武器や防具には耐久がある、いかに傑剣への憧刃が高い耐久を叶える効果を持っているとしても直接ダメージを与え続ければ破損は免れない、アレは「クリティカルで耐久が減らない」のであって「破損しない」というわけではないのだから。

上半分が狙えない以上攻撃する部位は自然と身体の下半分になるわけだが、先程の土砂切りでも分かる通り奴は非常にアクロバティックな動きをする。
接近を誘発したとして攻撃をぶつけることができる回数は……まぁ、良くて二回か三回。それがレイ氏のような大剣による攻撃ならばある程度の火力は見込めるかもしれないが、俺の火力では焼け石に水だ。

であれば攻撃回数を増やせばいつかは倒せるかもしれない、だがアレを相手に長時間戦闘はなかなかに辛いものがある。同じく強敵という意味では金晶独蠍戦の方が不利な条件下で戦っていたわけだが、アレは最終的に水晶群蠍を利用して体力を大幅に削ることが出来たし、何より奴は空を飛ばなかった。

「だったらフィールドを味方につけるしかあるまい……！！」

道に沿うように建築された家屋の数々だが、なにも長屋のように家屋同士が隙間なく並んでいるわけではない。人が通れる程度の隙間があるし、崩落で隙間そのものが埋まるも隙間を埋めた瓦礫自体が道となっている場所もある。
気分はモグラ叩きのモグラ側。潜伏と出現、挑発と逃走を絡めてリキャストタイムの時間を稼ぎ、そして目的地へとじわりじわりと接近していく。
二属性シャチはちょこまかと逃げ隠れする俺への苛立ちを隠そうと

もせずにやったらめったらに街並みを破壊し、そして時折出現する小虫（俺）へと怒りの突撃を仕掛ける。

「ハッ！　三十秒前から準備させてくれる技なんぞ当たるもんかよ！」

あの放電攻撃はおよそ三十秒のチャージを必要とする、チャージ中でも普通に行動できるという点は脅威であるがあからさまに水晶羽にスパークを纏っていれば誰だって放電攻撃が来ることは分かる。
そしてチャージの後に放たれる二属性シャチを中心とした雷霆の球体は結構な範囲ではあるが二、三度見れば把握もできるというもの、二属性シャチとの距離を詰められないよう立ち回りに注意しながらあわよくば誘導を……

「……違う」

身体の上半分を覆う炎が通常時とは比べ物にならない燃え上がりを見せている、胸鰭を這い回っていた電流が二属性シャチ本体に吸収されていく。
この時点で二属性シャチが初見行動を取ると断定、インベントリアエスケープの用意をしつつ位置調整を開始する。いやだって、身体にエネルギーを溜めてする事なんて十中八九ビームだろ。露骨に二属性シャチ側も距離を離しているし。

「よーし……ちゃんと狙いを定めろよ……？　そうそう、わざわざ高いところに登ってアピールしてるんだ、外さずにまっすぐ俺を狙えよ……？」

背後には封将がいるらしい塔、前方には空中で静止し頭部付近を輝かせる二属性シャチ、そしてそれらに挟まれるようにして俺。

位置取りは上々、わがままを言えばもう少し上に位置取りたかったが、流石に動きが向上しても出来ない事はある。
さぁここからは反射神経と勘と乱数ではない天運に頼る運ゲーの時間だ。二属性シャチの初見行動が一体どんなものでどれくらいの速度でいつ来るのか、初見でそれらを全て把握するのは不可能である以上は文字通り「見てから避ける」芸当が要求される。それが出来ないなら勘で躱す、それでもダメならあとは天に祈る。

「こういう時双眼鏡とかそういうアイテムが欲しいな……」

ええと、遠目ではっきりとは見えないが……水晶羽が電灯みたいに光っている、放電攻撃の時も光ってはいたがそれは水晶羽の外側をスパークが纏われていたからだ、今は水晶体の内側から発光している。
そして最も大きな変化は身体の上半分を覆っていた蒼炎が消えかかっている、と言っていいほどにその勢いを弱めている事。蒼炎が剥がれ露出したそれは恐らく奴の……頭蓋、か？　下半分に比べて随分と小さく見えるのは皮膚と筋肉の分が炎となっているためか。
遠目から見ても分かるほどに発光するそれは、放電など比べ物にならない火力を内包して……

光っ

「うぉぉあぁっ！！？」

ば、バカヤロー！　こういうのは普通チャージが終わったらなんらかの合図的なエフェクトがモーションがあるモンだろう！！　即ブッパとか卑怯だろうが！！

「くっ……【転送：格納空間（エンタートラベル）】！！」

回避、そう回避自体は成功した。恐ろしい速度で飛来したレーザーの如きそれの直撃という最悪の事態は避けることが出来た、だがその余波だけですら俺の身体は風に吹かれる枯葉よりも容易く吹き飛び、格納空間に転移した俺はその勢いを格納空間内を転がるようにスライドすることで何とか減衰させることに成功した。

「くっそ……そらそうだよな、あんな砲台じみた攻撃なら普通は照準から逃げるように走り続けるのが普通か……くそっ」

ステータスを確認すれば、残り体力は……４。余波ならばフル体力で一発は耐えられる、と……当然というかなんというか、直撃したら死ぬな。
念のため握っていた武器を放り投げ慌てて回復を試みるが、こういう時に限って乱数というものは悪い方に傾き続ける。本来の二倍の消費でようやく体力をフルで回復することはできた……恩恵（アルカナム）に全力で乗っかっている身分で言えた事じゃないが、こういう時は神秘が煩わしく感じる。

「く……兎にも角にも戻らなければ何も始まらないか」

格納空間から現実空間へと転移、空中に転移することは分かっていたので直前の記憶を引っ張り出して方角を把握、身体を捻ってあの攻撃による成果を確認する。

「チッ……破壊不可能オブジェクトか？　それとも大家（クターニッド）がご丁寧に直したか……」

視線の先、そこには無傷の塔が二属性シャチの攻撃などなかったかのように屹立していた。

格納空間に逃げ込んでいたのが痛いな、壊れなかったのか壊れたが直されたのかが確認できなかった。とりあえず着地してここからの行動、を……あ。

空を掻き分ける音が真上から響く、まるで空気の大槌が上から俺を圧し潰すかのような圧迫感。その存在を忘れていたわけではないが、もう一つの事実を俺は忘れていた。
見上げた先には炎の上顎と肉と骨の下顎を組み合わせた顎門を大きく、大きく開いたモンスターの姿が。この感覚はどこかで覚えがある、デジャヴってやつだ……ああそうだ、水晶群蠍だ。
あいつら修正で転移逃げしても待ち構えるようになったんだったか、そういえば修正項目は「一部モンスター」とは書かれていたが別に水晶群蠍だけとは書かれてなかった、まさか結構な数のモンスターが転移逃げ対策されている……？

「まぁいい、何事もトライアンドエラーだ」

百回エラーを叩き出しても一回の結果を出せればそれら全ては無駄ではない。セーブポイントを確保している以上、ここでアルクトゥス・レガレクスというメインディッシュの後のデザートがわりにムシャムシャされてもリスポーンするだけだ。
ああそうだ二属性シャチ、言っておくが俺のボディは甘くないからデザートとしては失格の部類だ。

「残念だったな」

「普通そこでバカにするように笑うことはないと思うぞ……っ！！」

「うおっ！？」

腕が肩から抜けてしまうような強烈な牽引、そして二属性シャチの顎門が、レーザーの余波なのか何故か真っ二つに抉れている道路が、手ブレしまくった写真のように縦に長く長く引き伸ばされて……

「って、アラバか!?」

「君というやつは……何をどう間違えたら深海の王にケンカを売ることになるのだ！　あの人魚共ともう少し賢いぞ！」

極めて真っ当な叱責をしながら俺を掴んで空を泳ぐのは、鮫と人を足して二で割ったような人なのかモンスターなのかも分からないNPC。

なるほど、どうやら俺は今空を飛んでいるらしい。

鳥だけに?

秒速百メートルの殺意（後書き）

ただの破壊不可能オブジェクトではない
ただ「破壊されない」という反転効果でもない
そしてイベント二つ平行描写なのでこの章はきっと長引く！

影分身の術とか覚えたい……

「まったく、あの忌々しい魚共がいないから我が愛刀を探しに行けると外に出ただけだというのに、何故アトランティクス・レプノルカとたった二人で相対する事になっているんだ……！」

「俺としては会って一日も経ってない奴を助けるためにそのアトナントカ・レプナントカの真正面を横断する精神の方が分からんがな……！」

「君には助けられた恩がある！」

「それを断言して迷いなく実行できるところ尊敬しますわぁ」

尻の少し上あたりから生えた尻尾を動かし、俺をつかんだアラバが空中を進む。平常時であれば空中遊泳を楽しんだところだが、現在進行形で真後ろに二属性シャチ……アトナントカ・レプナントカと言うらしいモンスターがブチギレモードでこちらを追ってきているのだ。

まぁ食卓に蝿が寄ってきて、あと少しで倒せると言う瞬間に追加の蝿が現れたらそりゃあ怒るだろう。とはいえなんの因果か命を拾った訳だが……困ったな。

「あれから逃げるのは難しくねーか？」

「……難しい、だろうな。アトランティクス・レプノルカは闘争心の塊のようなモンスターだ、相手がなんにせよ戦うと決めたのならば敵を仕留めるまで暴れ続けるだろう」

水晶群蠍もそうだったが、こいつらは「程々で引き上げる」って事を知らねーのか。獅子は兎を狩るにもなんとやらとは言うが、それで身体を壊してちゃあ世話もない。

「……サンラク、俺があいつをルルイアス外縁まで引きつけてなんとか外に出て行くようにするぞ」

「なんであんな変な抉れ方を？　ここを、こう、こう来て、こう曲がって……あぁ、なるほどね……よし、作戦変更だ。あのシャチ野郎をぶっ倒すか」

「何、俺とて海の中であれば素早く動ける、そうそうヘマは…………今なんて言った？」

「あぁ？　あの二属性シャチをここでぶっ倒すっつったんだよ、作戦（チャート）変更だ」

アラバが鮫（サメ）に喧嘩を売る鰯（イワシ）でも見るかのような、唖然とした表情で俺を二度見するが別に無策で突っ込むと言ってる訳じゃない。

「アラバ避けろ！」

「うおお！？」

「レーザー撃った後はエネルギー不足で第二射や放電はしないっぽいな……」

「それよりもだ！　サンラク、君は今アトランティクス・レプノルカを倒すと、倒すと言ったか！？　正気か君は！　無理に決まって

いるぞ！！」

「悪いが大真面目だ、あそこを見ろ」

右手はアラバに掴まれている為、左手に持った傑剣への憧刃で眼下の都市部、そのうちの俺が実験台とした塔へと続く大通りを指し示す。そこには恐らく二属性シャチのレーザーによって焼き「斬られ」たのだろう一直線の斬裂痕が青い石材で舗装された道を抉っていた。

「いいか、あのアトラン……面倒だ、仮称シャチ野郎が俺に攻撃を仕掛けた場所はあの完全崩壊した瓦礫の山あたり、俺がそれを迎え撃ったのはあの妙な形に削れている家屋。何をどうやったらあんな所が抉られるんだ？」

「一体何を……」

「簡単な理科の問題ってやつだ、鏡に光をぶつけたら光はどんな風に振る舞う？　クターニッドの能力は「反転」、概念すらひっくり返すなら物理法則に従って攻撃を「反射」することくらい容易いだろうさ」

仮にあの「抉れ」がシャチ野郎のレーザーの余波によるものだとすればここら一帯が更地になっているはずだ、少なくとも五、六メートル下の道路を抉るような余波があのビームにあったのだとすれば俺の身体はとっくに蒸発している。

そしてこの説を否定する最大の理由として、もし余波でできたものならば抉れは二属性シャチのいた地点から塔まで続くはず、あんな中途半端な抉れ方はおかしいと言わざるを得ない。

それに直線に抉られた傷跡は塔に近づくほど浅く、塔から離れた位置に行くほどに深く抉れている。であれば考えられる可能性は一つ

しかない。

即ち、あの塔は確かにダメージを通さなかったが無力化したわけではなく。物理的反転とでも言うべき「反射」が行われたものであると仮定。

そして塔に直撃したレーザーは鏡に光を当てるように反射し、入射角に基づき向きを反転し下方向へと弾かれたレーザーは反射した光が進むほどに道を深く深く抉っていった……と考えれば現状の光景、あの妙な抉れ方をした大通りに説明がつく。

「それがなんだと言うのだ！　まさかあれにアトランティクス・レプノルカの攻撃を当てて反射させようとでも！？」

「おっ、大正解。エムルならもう少しパニックになってたな」

おっ、その口をパクパクさせる姿はちょっと魚っぽいぞ。

「いいか、あいつがあの極悪レーザーを撃つまで大体二十秒程度、いい感じに奴を誘導してもう一度塔の真正面でアレを撃たせる。今度は真っ直ぐに、な」

まさかこの塔自体がギミック……はさすがに考えすぎだろう。だが少なくとも攻撃を「反射」するオブジェクトだなんて、悪用されること前提で設計しているだろう。ぱっと思いついただけでも三つくらいは悪用方法がある、態々「破壊不可能」ではなく「攻撃全反射」にしたということは何らかの意図があるということ。

その意図が戦闘フィールドとしての特性であるのかシナリオ上での特性であるのかを論じている時ではない。敵はレーザーを撃つ、こちらは反射の手段がある、この二つさえあればプレイヤーは巨大なモンスターにだって立ち向える。そしてとりあえずかっこいい感じ

に自分を鼓舞すれば尚良し！

「王だか何だか知らないけどな、俺たちはこれからそいつらを束ねてぶつけても勝てるかどうか怪しい「盟主」様に挑まなきゃならないんだ、こんなところで屁(へ)っ放(ぴ)り腰になんかなってられるか！」

「……分かった、君の言葉を信じよう。俺は何をすればいい？」

「釣り」

「……はい？」

ルアーフィッシング、ってあるだろう。疑似餌(ルアー)を使った釣りのアレだ、ルアーはどう足掻いても生物ではないので、釣りを行う際にはまるでルアーが生きた魚であると誤認させるためにこう、クイクイっとルアーを躍らせなければならない。それと同じだ、厳密には違うが今からアラバには「俺と一緒に行動している」とシャチ野郎に誤認させるために、全力で逃げ回ってもらう。

「原理は知らないがお前も空中を泳げるんだろう？　具体的には奴の上半分を覆う炎が火力を高めて……あの攻撃をもう一度放てるようになるまで全力で逃げ回ってくれ。俺はその間に塔に行って位置調整をする」

「それは難しいのではないか？　アトランティクス・レプノルカは明らかに君を狙っている、恐らく二手に分かれれば君の方を追ってくるぞ」

「それに関しちゃちょっとばかり秘策がある」

俺は過去から学ぶ男、そして駄目と言われると意固地になる男！
アラバには不適な笑みで秘策であると言ったはいいが、実のところは今から検証するのだがNPCにそんな裏事情を明かす必要はあるまい。今この世界で俺がすべきロールは「アトランティクス・レプノルカに立ち向かう無謀にしてされど勇敢なる開拓者」の不適な笑みであり、不安を抱かせる笑みではない。
「いいか、合図をしたら俺は消える。多分しばらくの間はシャチ野郎をその場に釘付けにすることができるだろうから……もし俺の秘策が成功すれば、次にお前を狙うようになるはずだ」
「何でもないように言うが消える、とは……いや、今はそれを追及するべきではないか。」
「じゃあ作戦を説明するぞ、まず…………」
所詮はＡＩ、人間とは違いその思考も行動もロジックによる見せかけの生命に過ぎない。とはいえそこはシャングリラ・フロンティア、軍用ＡＩレベルの人工知能をモンスターにも使っている疑惑のあるこのゲームにおいてシャチ野郎が今いったいどんな気持ちであるのかは手に取るようにわかる。

部屋の中に入り込んだ蝿退治に絶賛苦戦し、イライラが頂点に達しようとしている……分かる、その気持ちはとても良く分かる。クソつまらないミニゲームを延々と強制されている時の俺と同じ精神状態だ。別に義務というわけではない、やめたって何か深刻なペナルティが発生するわけでもないのに自分の矜持がログアウトを選ばせてくれないんだ。

地上にもお前と似た奴がいたぜ、多分強さは天と地ほどの差があるだろうけど……この手の脳筋は戦闘における制御こそ難しいが戦局における制御は割と容易い。

「さぁ、脳筋物理ビルドのサンラクさんによる奇術(マジック)を見せてやろう……今だアラバ！」

「どうなっても知らないぞ！！」

迫るシャチ野郎から逃げるアラバが、俺の腕を掴んでいた手を離す。当然俺の身体は一、二秒は慣性によって宙を飛び続けるものの、三秒もすれば落下運動を開始する。これまでの逃走的ムーブではなく物理法則に縛られた素直な動きに、シャチ野郎の目がギラリと光ったように見えた。

もはや生かしておかぬとばかりに口を大きく開き、ただ一噛みで俺を粉砕せんと迫るシャチ野郎。アラバは少し離れた場所で俺とシャチ野郎の激突の瞬間を見ているのだろう。この後死ぬほど忙しくなるんだからクラウチングスタートの体勢でもしておけ。

「まぁ答えが返ってくるとは思わないが……一つ聞いておこうか」

水中とは思えぬ、背に風を受けながら下(上)へと落ちていく俺はあと数秒で俺に接敵するシャチ野郎へと問いかける。さぁ、検証を始めよう。

「なんでお前ら……俺を「待ち構え」られるんだろうな？」

四つの塔に搭載された反射効果は「何故中ボスがいる場所にそんな効果があるのか」ではなく「何故ルルイアスの四方に存在する塔にそんな効果があるのか」と考えればなんとなく理由がわかると思います。
実際のところ、今主人公が行っていることはあながち寄り道というわけでもないのです。コップに注がれたジュースは飲まなければ減らないのですから……

普通、モンスターの行動パターンや思考ルーチンを変えるのであればそこにけったいな理由が介在することはない、「Aの行動に対して従来のB対処ではなく新たにCで対処する」という具合にプログラムを弄ればいいだけだ。だがこのゲーム……リュカオーンやウェザエモンのような特別なモンスターのみならず一般的なモンスターにも人工知能が搭載されている疑惑(俺所感)がある。そしてこのゲームの人工知能はちゃんと物を考えて行動する。

であればここで一つ疑問が生まれる。かつてインベントリアによる転移エスケープ移動術で水晶巣崖を歩いていた俺は、運営の実に迅速な対応修正によってミンチにされた経験がある。そして今現在もアトランティクス・レプノルカは転移によって消えた俺を待ち伏せ、アラバの介入がなければ俺を噛み砕くことに成功していただろう。
では、だ。運営によって転移エスケープ対策をインストールされた彼らは果たしてどういう「思考」で俺を待ち伏せているのか。それこそが現状における秘策であり、かつて舐めた辛酸にタバスコをぶちまけて運営に返送するポイントであると俺は考えている。

俺がシャチ野郎の心情を例える際に用いた「蝿退治」を例とするならば、俺が行った転移エスケープは「今まで目で追っていた蝿が忽然と姿を消した」に相当する。そんな時、普通なら周囲を見回しただ単純に見失った可能性を考え、それが不可思議現象であると分かったのであるならば蝿が消えた場所をマークするだろう。そしてもしも一部モンスターとやらに追加された思考パターンがその「見失ったから消えた場所を見張る」というものであるとするならば、だ。

「俺を「誤認」した場合は例の待ち伏せモーションは発動しないんじゃねえか……！？」

致命秘奥【ウツロウミカガミ】とはその名の通り水面に映った月の如く、敵対者の目に虚像の影を浮かび上がらせるスキルだ。かっこいいことを言っているが要するに発動時点でのヘイトを全て発動地点に置き去りにするスキル……どちらかと言えば「発動時点までのヘイトを持ったデコイ作成」と言うべきスキルであり、プログラム上での処理はともかくとしてモンスター自身からすればそれはプレイヤーを見失ったのではなく、プレイヤーがそこにいるのだと誤認しているわけだ。

さぁ運営よ、俺は俺の質問を今から自己解決するぞ。果たしてシャチ野郎は俺を……気配だけのデコイではない、正真正銘の俺が消えたことに気付くかどうか。俺一人ならどうとでもなるが、リスポンできないアラバが巻き込まれていることは少しだけ不安材料ではある。

「ええい、動かなきゃ良いも悪いも進まない！【転移：格納空間（エンタートラベル）】！！」

もはや倉庫としてよりも一時的避難所としてばかりつかっている格納空間内に転移した俺は、その場でカウントダウンを始める。数えるのは致命秘奥【ウツロウミカガミ】によって置き去りにしたヘイトデコイが消えるまでの時間に十秒を足した秒数だ。俺が残したヘイトが消失した時点でアラバがシャチ野郎に全力でちょっかいをかけ、その場から離脱させるという手筈だ。

もしも俺の立てた仮説が正しければ俺の残したヘイトが消えることでシャチ野郎の次のターゲットはアラバへと移行するはず、これでもし俺が再び戻った時に待ち伏せされていたら……まぁ、その時はその時だ。

「三……二……一…………頼むぞアラバ……【転移：現実空間】！」

足が支えていた重力が再び俺を落とさんと作用する。空中に投げ出された俺はある種死の覚悟を決めつつ周囲を見回し……百メートルほど離れた場所で宙を泳ぐ小蝿の如き点と、燃え盛る粒を目視する。

「おっしゃビンゴぉ！　見てるか運営！　修正するなら七日後でよろしく！！」

空中で一回転して体勢を立て直し、フリットフロートによる空中着地を絡めて落下ダメージを軽減。俺がこの世界から消えている間にシャチ野郎が暴れたのか、損壊している建物の中でも比較的無事なものに着地して走る。

パルクールの心得なんてネットで何の気なしに調べた程度の貧弱なものではあるが、動画として見たことは何度もある。そしてこの仮想の現実……理想を実現できる体さえあれば俺はそれを再現できる。実際は身体の動かし方やなんやらがいろいろ異なっているだろうし、見てくれだけのものではあるが見てくれさえ同じなら結果も同じということだ。

壁を踏む、屋根を蹴る、宙を転がり縁を走る。俺が頭に到着した時点でアラバに合図を出さなければならない。そして後はシャチ野郎の思考ルーチンが目当ての技を選んでくれることを祈るしかない。

壁を蹴り、重力が俺を捉える前に屋根の縁を掴んでよじ登る。前ではなく横に飛び降り、別の家屋の壁面に走った亀裂を足場に落下の勢いを弱めて一階分頭の低い別の家屋へと飛び降りる。

フルダイブ黎明期のゲームには「仮想現実世界でプレイヤー自身が登場人物として体を動かす」という性質からやらめったらにアクロバティックな動きを要求するものが多い傾向にある。最近のある

程度フルダイブというものに小慣れてきたゲームであればモーションアシストや特殊モーションで実質オート操作、などその手の対策はされつつあるのだが……まぁ、そんな親切がまだ実装されていなかった頃のフルダイブ、それもクソゲーともなればどんなものなのか。

「崩落異世界飛び石タイムアタックに比べればこの程度、舗装された手すり付き通路みたいなもんだ……！」

つまりそういうことだ、あのクソステージクリアするのに三日かかったんだよなぁ……ランダムで瞬間移動する足場はちょっと鬼畜すぎた。手前に現れた足場が二秒後にはゴール前に転移するせいでちゃんと自分がジャンプして届く範囲に足場が出現する乱数を……乱数、らん、す、すすすすすすすす………おっと悪夢は忘れよう、目的地に到着だ。

「凹凸自体は多いが、なんだこれ……他の家屋とは材質が違うのか？　ずいぶんツルツルしてて登りづらそうだが……」

なんというか、塔というよりも装飾されたオブジェと言った方がしっくりくるような、摩訶不思議なデザインのそれを見上げ、ふと扉もなく開かれた塔の内部に視線を向ける。そこには例の「水中なんだか空気中だなんだかよく分からない領域」の効果なのか、まるで天女のごとく地面から浮かび上がった人型の、されど明らかに人ではない者がいた。

なるほど、ドレスのような羽衣のようなパーツ、優美な貴婦人のようにも見える姿は確かにモデルとなった生物がクリオネであると分かりやすく伝えてくる。

まるで透明な寒天のようなゼリー状の素材で人の形を作ったかのような封将なる存在はふと覗き込んでいる俺に気付いたのかふわりと

笑みを浮かべ……

ぐばぁ

「…………人外萌えには需要が高そうっすね」

頭頂部からリンゴをカットするようにクリオネ封将の頭が裂け、どうやら人の頭部に擬態していたらしい触手(バッカルコーン)をうねらせる様はこう、人を選ぶジャンルではアイドルになれそうな……うん、これうまい具合に扉を通るようにシャチ野郎のレーザー通せたらあいつ爆散しないかな。

「いやいや、二兎を追うものはなんとやらだ」

綿密なチャートを立てずに二羽のウサギを追いかける狩人さんサイドにも非はあると思う、とりあえず二体同時クエストならステルス心がけて片方から処理するのは当たり前だろうに。

俺はなにやらアピールしているクリオネ封将から目を離し、塔の外壁に視線を巡らせて丁度良さげな道を探す。

「あそこの出っ張りに足をかけて、そこの縁に手をかけて……よし」

単純なクライミングではあるがスキルによるアシストも入れば俺でなくとも割とたやすく登れそうな塔だ。もはや攻撃スキルよりも酷使しているグラビティゼロ、遮那王憑き、フリットフロートの黄金コンボにステータスバフスキルを重ね、天狗並みの摩訶不思議挙動を可能としてタワークライムへととりかかる。

実際のところ壁や崖などを悪用して無理やり攻略することはままあるので(ゲーム内なら)この手のクライミングは得意だったりする。現実でやったら足を踏み外して腰を強打するのがオチだろうか。

「高さを調整……そろそろアラバに伝えた「時間」が来る」

この作戦の第一段階はアラバへのヘイト譲渡から始まり、次段階はアラバがシャチ野郎を引きつけ俺がタワーに登ることに繋がる。
そして第三段階、およそ一分間のヘイト引き受けを行ったアラバは、こちらの合図を受け取り次第全速力でタワーへと向かう。恐らくだがシャチ野郎は至近距離、中距離の相手に対しては噛みつきや水晶羽による物理攻撃を行い、大体五十メートル圏内であれば放電攻撃、そしてそれ以上離れている場合はあのレーザーを放ってくるものだと考えられる。
言い換えれば五十メートル以上離れても戦闘が終了しないクソエネミーなのではと思わなくもないが、どうも奴さん隠れんぼは苦手のご様子なので上手く隠れられれば戦闘離脱自体はそこまで難しいわけでもない。

「つまりシャチ野郎から推定五十メートル以上離れた時、奴はレーザー攻撃を行う……アラバァ！！　全力でこっちに来いっ！！！」

とはいえ宙を泳ぐ、実質飛行可能モンスターと同じシャチ野郎から距離を離すのであればそのチャンスはただ一つ。
遠目でも気づかない方がおかしい程にはっきりと分かる蒼い雷の球体が閃光と轟音を伴って展開される。
チャージ三十秒、判定前の空白に二秒、そして判定適用中の五秒……チャージ中は自在に動くので実質七秒で五十メートル以上の距離を離す……現実でそれをできる人物が少ないとしても、ここならばそう難しいことではない。

「サンラクっ！　託したぞ！！」

「おうさ！！」

塔のほぼ天辺付近、ガラスが張られていない窓の上部を足場代わりに塔の外壁へ張り付く俺はこちらへと猛烈な速度で泳いできたアラバに不敵な笑みを見せ、そして放電攻撃を終えてアラバの姿を探すシャチ野郎と視線を交差させる。

「離席してて悪かったな、相手してやるよ魚類もどきめ……！」

小蝿一号、リターンズ。その事実を認識したシャチ野郎は迷うことなく、その身の炎を、雷をより強く放つ。さぁ来いアトランティクス・レプノルカ、ここからは俺とお前によるチキンレースだ。

無影にて駆けろ、登れ、そして騒げ（後書き）

クリーオー・クティーラ「なんでっ！どいつもこいつもっ！中に入ってこないのっ！！」

引っかかった。上手い具合にヘイトをこっちに引っ張ることができるかは半々だったが、奴が記憶力の良い方で助かった。

「イベント戦闘だったらウツロウミカガミで俺は安全圏に避難でもよかったんだが……恐ろしい事にただの通常戦闘なんだよなぁ」

負けイベというわけでも、イベント補正がかかるわけでもない。死んだらそこで終わり、ただ難易度が高いだけのなんでもない日常……なんでも大ありの非日常ではあるがイベント的補正は望めない。つまりこの塔による反射作戦はオートではなくマニュアルでシャチ野郎が放つレーザーの入射角を調整しなければならない。

「奴の足元の塔が多分これくらいだから、もう少し上に……いや、角度的にもう少し左か？」

全ては勘と確証のない視覚情報からおおよそシャチ野郎のいる高さと場所を、そしてそれに合わせて俺は塔にへばりつく場所の微調整を行う。

デザイン上の妥協ではなくおそらくは「建築方式の流用」という設定なのだろうか、この街では同じような形状の建物が結構多い。シャチ野郎の足元にある建物と同じ形状のものを探し、そこから高さを割り出しついでにズレを直す。

大体は弓などの原始的な遠距離武器を使う時の狙い合わせと同じ要領だ、あとは天に祈れ。これぱっかりはロシアンルーレット式の当たり外れの二つしかない単純な乱数ではどうにもならない。

「少なくとも光速よりは遅いんだ……やって出来ないことはない……はず」

今ではVRの中で仮想に再現されたものしかほぼ存在しないと言っていい「筐体ゲーム」では光速すら遅いと言い切る修羅が跋扈していた時代もあったらしい、実際に光速よりも速く動くというわけではないんだろうがそれでも光速すらも不足と言える人間がいたのであるなら、きっと俺だって出来る。

「来い……来い……来い……っ！」

目を限界まで見開き、VRで瞬きなど不要と本能的な行動すら捩じ伏せる。おそらく過去最高レベルで眼力が強まっているだろう凝視でアトランティクス・レプノルカという砲台の、身じろぎすらも逃すものかとただ、見る。

西部劇の早撃ち勝負……というよりも真剣白刃取りが喩えとしては近いだろうか。いつ放たれるともわからないシャチ野郎の刃(レーザー)を、先手を許されない受け手たる俺が迎え撃つ。

あの時は確か、大体十秒程度で飛来してきたはず。ただそれが九秒寄りのものか十一秒寄りのものであるか……見誤れば全てが瓦解する。

遠目に見えるシャチ野郎の炎が激しく燃え上がる、水晶の羽に宿していた雷光が本体の身体へと収束し、シャチと酷似したその体型の額の部分に光が集う。

最早ここまで来たならば、勘と天運に身を委ねた上で挑むしかない。見てから避けるにしても体勢が体勢だ、八割死ぬ。であれば最後に頼るのは……頼むぜ我が滑舌よ！！

「【転送：格納空間（エンタートラベル）】！！」

光が迫る。大気を燃やし、俺には認識できない海水を蒸発させながら最高速の光条が俺を射抜かんと迫る。

俺の身体がこの世界から消える、一体どこから消えているのか、光が迫る、肌が震える、当た……

「……っ！！」

永遠に感じる一瞬も、やはり一瞬である事に変わりはない。目を光で焼き潰さんとするレーザーは跡形もなく消え、壁に張り付いていた俺はその体勢のまま床の上に立つ事になり、緊張が解けた衝撃と転倒の衝撃によるダブルインパクトで俺は肺の中に溜めていた息を全て吐き出す。

「ま、まだだ……【転送：現実空間（イグジットトラベル）】……って危なぁ！？」

あのレーザーは単発型ではなく長時間照射するタイプだ、ある程度の時間を置いて元の場所へと戻る。

あの時点で出来得ることは全てやった、これで失敗していたなら……どうにかしてアラバだけ逃してシャチ野郎に特攻だな。

「くくく……成果は上々！　上々だぞアラバ！！」

「嗚呼クソ、君が消えたり現れたりすることも深海の王が悶え苦しんでいることも、何もかも理解が追いつかないぞ！」

「ふはははは！　見ろ！　聞け！　そして感じたものが事実だ！」

床が消え、代わりに壁が現れる。通常、人は壁に立つことはできない、ので当たり前のように落下する俺であったが、遠目に見える、そしてここからでも聞こえる絶叫に着地すら忘れて狂喜する。
塔の陰に隠れていたらしいアラバが俺をキャッチしなければ落下死という情けない結果になっていたかもしれない。だがそれ以上にあれを見ろ、聞け、理解しろ！

「若干軸はズレたようだが誤差だ、これは立派な直撃だ！」

王に触れる不遜なる者を焼く炎が、王が不遜なる者を裂く水晶羽が、莫大量のリソースが破裂した風船の如く、反射した攻撃が直撃したのだろうシャチ野郎の右半身から血飛沫の如きポリゴンという形で噴き出していた。
あれ程驚異的であった巨魁が、まるであの時のギガリュウグウノツカイの如く絶叫を上げてのたうっている。己の放った矢で己を貫かれるとは思ってもいなかったのか、俺達の存在など忘れてしまったかのように、その高度を徐々に下げていく。

「勝機！　仕留めるぞ！！」

「本気か！？」

「レーザーの反動、ダメージ、今の奴に放電攻撃をするだけの余裕なんざない、陸に打ち上げられたマグロと大差ねぇんだからここで削りきる！！」

「わ、分かった！！」

奴は浮力と左半身の力でかろうじて浮遊しているに過ぎず、その身

の炎も今にも消えそうなほどに弱まっている。
今の今までニンジャ紛いの事ばっかかりさせられていた鬱憤晴らしだ、三枚おろしにしてくれる！！

「下克上の時間だ！」

傑剣への憧刃を振りかぶり、屋根から跳躍してシャチ野郎の左胸鰭を狙って斬りつける。さらに跳躍した先の空中でフリットフロート起動、ただ一歩の空中足場をフル活用して再度の攻撃を仕掛ける。

胸鰭の付け根を抉られるように切り裂かれたシャチ野郎はまぎれもない悲鳴を上げて仰け反り、その身をついに地面へと落とす。だが駄目だな、斬撃自体そこまで有効打にならない。どうも炎の下には皮や筋肉はなく、直接骨があるようで刃物は効きづらいし、そもそも皮が硬い！
だがそれならそれで別方向からアプローチするだけだ。位置を変えつつ武器を変更し、黄金と白銀を秘めた鉄拳を構えてシャチ野郎の真正面へと回り込む。

「サンラク！　俺はいったいどう攻撃すれば良いんだ！？」

「尾鰭でも齧ってろ！」

「……硬いぞ！？」

「知るかぁ！！」

その火は最早消え去ってしまいそうなほどに弱まり、皮や筋肉を取り除いたシャチ野郎の頭蓋らしきものが時折火の隙間から覗く。いったいどういう生態（設定）しているんだと疑問に思わなくもないが、頭が

あり頭蓋があり、こちらに打撃攻撃があるならやることは一つ。
「お前の世界を揺らしてやる……！」
俺からお前に脳震盪のプレゼントだ、なぁに礼の言葉はいらん、代わりにお前のドロップアイテムをよこせ。
人は熱を帯びた鍋を掴むために鍋つかみを発明し、焼けた炭を持つために火箸を発明できる知的生物、両腕を金属の籠手で覆った俺は恐れる事なくシャチ野郎の火に包まれた頭部を殴打する。
やはりここまで肉薄するとスリップダメージは免れられないのか、ジリジリと俺の体力が削られていくのが分かる。
だがもはやＤＰＳを叩き出す装置と化した俺は止まらない。身を削る損害全てを必要経費（コラテラルダメージ）と断じ、ただひたすら最高効率で打撃を叩き込んでいく。スリップダメージを受けながらの攻撃故、体力を削るタイプのスキルが使えないのがネックではあるが、それ以外は出し惜しみなしだ。
別にこいつに恨みがあるわけではないが、こういう時は恨みを原動力にするとパフォーマンス的にいい火力が出せる。恨み、恨みか…………
「なんでっ！　たかが機嫌直しのためにっ！　マップの端から端までっ！　お使いに行かなきゃならんのだぁぁぁ！！」
おのれフェアカス！！　何が「最高級デラックスパフェを食べれば機嫌を直す」だ！！　卵の殻でもしゃぶってろイカレポンチがぁぁぁぁ！！
「なんという凶相……まさかあれが、話に聞く鳥人族（バーディアン）の拳闘鶏（デスペラード）なのか？　いや、サンラクは鳥人族ではない、いやだが……」

「思い出したらますます腹が立ってきた！」
彼女（フェアカス）の姿を思い返すたびに心に熱が灯る。この気持ち……これは……そう、強く人を想うこの気持ち、間違いなく……憎悪！！

「八つ当たり」という最高クラスのフィジカル、メンタルに対するバフによって一発一発に怒りと殺意が込められたラッシュは着実にシャチ野郎の体力を削る。
なにせ頭蓋を残してそれ以外のナマモノ部分が炎になっているようなモンスターだ、これ以上ないほど頭への打撃は致命傷になりうるだろう。
シャチ野郎も抵抗を試みてはいたのだが、己の必殺を跳ね返された上に頭部を打楽器にされ、なけなしの抵抗も怯みモーションによって中断を余儀なくされる。

「危なっ……体力が一割切ってるし」

いつの間にか体力が尽きかけている時に起こる倦怠感に慌てて距離を離す。かつての思い出（トラウマ）を力にしていたとはいえ、流石に数字を誤魔化すことは出来ない。毒沼の上でタップダンスをすれば迅速に死ねるように、火元の前に陣取っていれば体力ゲージは目減りしていく。

危うくスリップダメージで死ぬところだったが、奴の炎が俺の体力を削る以上のダメージは与えたはずだ。
もはやシャチ野郎は抵抗する力もないのかぐったりとその身体を地面に横たえ、身体を覆う炎もその下地が露出した部分の方が多い。
「ついさっきまで捕食者だったものが今はこうして死にかけている

……弱肉強食とは残酷と言うべきか」

「なんでたった二人で挑んで勝っているのだろうな……」

「ここの大家に感謝だな」

俺の言葉通り律儀にシャチ野郎の尾鰭に噛り付いていたらしいアラバの言葉に適当な答えを返し、瀕死のシャチ野郎へと向き直る。この姿を見て同情や憐憫を感じないわけではないが、いちいちＭｏｂに同情してたら狩猟ゲーはこの世に存在できないのだ。綺麗事だけで世界が救えるなら貧困は存在しない、俺はそれをユナイト・ラウンズで学んだ。

「Ｍｏｂに言っても意味ないとは思うが、成仏しろよー」

アガートラム起動、呻くようにか細い声を出すだけとなったシャチ野郎……アトランティクス・レプノルカの脳天に幸運を力に転換したダブルスレッジハンマーを叩き込む。

そしてそれがトドメとなったのか、一度びくりと震えた巨体はあまりにあっけなくその身を崩壊させたのだった。

ほぼ徹夜でこんなことをしていたのだから翌日、ひどく寝坊してしまったのは言うまでもあるまい。

果たして誰が因果応報か（後書き）

実はシャチ野郎やギガリュウグウノツカイとは普通に「水中」で戦うこともできたりします。その為には色々と手順が必要ですが、別にいちいちルルイアスに行かなくても良いのです。

ただし、「プレイヤー側が実質地上で」これらの水棲モンスターと戦えるのはルルイアスだけです。

匿名（馬鹿）野郎Aチーム、そして風雲急

アトランティクス・レプノルカ戦におけるリザルト

・冥王鯱の照鏡骨
・冥王鯱の凝触羽
・冥王鯱の扇薙鰭
・冥王鯱の重頭殻
・冥王鯱の剛耐皮
・ムキになって攻略した事で大量に消費した回復アイテム
・薬にも毒にもならない経験値
・状態異常：寝不足
・時計を見たら早朝四時の絶望
・時計を見たら朝十時の絶望
・外道二人からの嫌味
・ある事実を思い出したことで新たに噴出した問題

「畜生……何よりも現実こそクソゲーってそれ一番言われてるから……」

「重役出勤のヒヅトメさんちーっす！」

「ブランチのお味はどうだったかなー？　みんなを待たせて食べるブランチの味はさぁー？？」

「言い返せないという事実が何よりも痛い、これが罪悪感……？」
後で知ったがこの二人も大概寝坊していたらしい、こいつらその上であれだけの煽りを俺にしてやがったのか。

場所は変わって電脳世界、それぞれの直前まで使っていたキャラをアバター代わりに、今現在エントランスの円卓を囲むようにして座っている。
「会場は今現在進行形でGGCの一日目が開催中だが、生憎だけど俺達はここで対スターレイン戦の対策会議です」
「カッツォ君一応聞くけどあのシルヴィアちゃん以外のマッチョ三人……どれくらい強いの？」
「他の奴らも前作で世界ランキングトップ20に名前を連ねるランカーだよ」
「もうさ、試合前に下剤盛った方がよくない？」
「サラッと外道発言はやめてもらえるかなぁ！？」
わいのわいのと騒ぐチームメイトをよそに、俺はある問題に頭を悩ませる。
（そうなんだよなぁ……この二人にクターニッドのこと、そしてルスト&モルドの事を言わなきゃいけないんだよなぁ……）

そもそも、俺が今クターニッドに挑んでいるのは元を辿ればネフィリム・ホロウで出遭った二人のプレイヤーとの契約によるものだ。実際にクターニッドにつながるシナリオであった以上、俺はその対価としてロボ……戦術機装の使用権を二人に提供しなければならない。

そしてその為にはこの二人を説得しなければならないのだ、よりにもよってこの二人をユニーク攻略からハブったこの現状でだ！

「無理ゲーじゃねぇかな……」

「サンラクくんが弱音吐くレベルだよ？」

「おいおい今からボケたこと言わないでよサンラク」

なにやら外野が騒いでいるがそれどころではないのだ。この二人を説得するならば一番手っ取り早いのは今挑戦中のEXシナリオを失敗で終わらせて再チャレンジすることだ、これなら新たに二人を加えてEXシナリオに参加できるから交渉の難易度は確かに下がる。

だがそれはNPC達がどうなるか分からない、ということでもある。どうもアラバの話を聞くにクターニッド相手に善戦できないと生還自体できない気配がするし、やはりここはプランBか？

逆にEXシナリオを成功させることで、その成果を交渉材料とする。言うなればユニーク的アイテムを

「人質にして脅迫……」

「ねぇケイこの老侍物騒なこと言いだしたんだけど！？」

「サンラク気を確かにして！　外道芸はペンシルゴンの十八番でしょうが！」

「まず君に下剤を盛るべきなのかなー？　んー？？」

ええいうるさいうるさい、しゃらーっぷ。

だが全ての事を上手く運ぶのならばやはりその方法しかない。ユニークモンスター「深淵のクターニッド」を打倒し、それによって得られるアイテムでペンシルゴンを交渉の場に出す。カッツォはどうとでも言いくるめられる、ペンシルゴンさえ説得できればいいのだ。

つまり今の俺に要求されるものは

「不条理を踏み躙る、圧倒的な力……‼」

「あー、もしかしてサンラク……話聞いてない？」

「は？　なんの話だよユニーク自発できないマン」

「プロゲーマーチョップ！」

「ごふう！？」

「さて頭がユニークなことになってるマン、君から見たスターレインの印象を教えてもらおうか」

「……ぶっちゃけ、この三人相手なら上手くいけばペンシルゴンでハメ殺せるでしょ」

ガンガンと痛む頭を抑えつつ、俺は対戦チームのエース以外の評価をスパッと断言する。

「この三人、なんか格闘技やってないか？」

「やってるな、こいつとかボクシングのヘヴィ級ライセンス持ちだったと思う」

「なぜボクサーの道に進まないんだ……まぁいいや、基本的に格闘技やってるタイプのプレイヤーってファイトスタイルがどうしてもそっちに引っ張られるんだよ」

通常それは弱点とは言わない、この現代において極めてアナログな戦いの術を知っている人種というものはやはり格ゲーにおいて大きなアドバンテージを持っている。それが利点となることはあっても弱点となることは稀だ。

だからこそ、此度の戦いにおいて本来は弱点にはなり得ない筈のそれがウィークポイントになるのだ。

「簡単に言うと？」

「ボクシングはリングでグローブだけ使ってするもの」

素晴らしく邪悪な笑顔を浮かべるカリスマモデル殿に夏目氏がなんとも言えない表情でそれを見て……と、ここでふと気になったので件の本人に聞いてみることに。

「なぁ、ペンシルゴンって顔それで出るの？」

「いやいやまさか、ちゃんと顔は隠して出るよ？　世のティーンに

はちょーっと刺激が強すぎるだろうからね」

「あ、それで思い出した。二人とも、なんて名前でエントリーしとく？　特に要望がないならサンラク、鉛筆戦士で登録しとくけど」

ああそうか、仮にも大会に出る以上は名義がいるのか。正直、サンラクという名前で目立ちたいわけでもないし……

「匿名希望アルファとかで宜しく」

「あ、じゃあ私は匿名希望オメガで」

むっ。

「……いや、やっぱり匿名希望零式とかにしようかな」

「じゃあ私は……匿名希望非存在番号（ゴーストナンバー）とかにしよっかなぁ……」

むむっ。

五分後。

「はぁ……じゃあサンラクは「彼方より解き放たれし宿痾の匿名希望」でペンシルゴンが「†気高き（ミスティック・レディ）匿名希望の淑女†」で良いんだね？」

「「やっぱなしで」」

それで呼ばれたら死ねる、いろんな意味で。

「……もう謎の助っ人一号二号でいいんじゃないかしら？」

それはそれでなんだかなぁ、と感じてしまうのが人の心と言いますかね夏目氏。

「よし、もうこの際プロゲーマー様直々に名前を決めてあげよう」

「ほう」

「サンラクが「ガンボール」でペンシルゴンが「ブラックカーテン」で」

「誰が「鉄砲玉」だコラァ！？」

「今回の「黒幕」はむしろそっちじゃーん！！」

「ええい黙れ現役厨二病共、昼までに決めないといけないんだぞ！」

さらに三十分経過。

「……はい、というわけで厳正な殴り合いの結果名前が決定しました」

そう、サンラクとはあくまでもプライベートな名前でしかない。我が公式大会用の「真名」は……っ！！

とりあえずカッツォは絶対に許さん。

『なぁシルヴィ、ケインんとこのチームにこんな名前のメンバーいたっけか？』

『んー？　誰か新入りでも入れたのかしら……って何これ、「顔隠し（ノーフェイス）」と「名前隠し（ノーネーム）」？』

「くそー……「意地でも顔バレしたくないやつと名前バレしたくな

いやつなんだからそれで上等だろ」とか……」
割と言い返せないから腹が立つ。あとシンプルでちょっとかっこいいとか思ってない、思ってないぞ。
今思えばしょうもない理由で騒いでいたなとは思うが、過ぎたことを蒸し返しても意味がない。

時間は正午少し前、カッツォの奴はエントリーの申請と何やら呼び出されたとのことで離席、夏目氏は無理なスケジュール調整の反動でかかってきたらしい電話の対応、ペンシルゴンはなにやら悪巧み……もとい、何か宅配を頼んでいたのでその受け取りに行った。
そして俺はといえば、特にやることもないのでホテルのレストランへと来ていた。流石にガスマスクはつけて公共の場に出るわけにもいかないので素顔である。もし他の面子に見られたら……別に特に困らないか。

「つってもさっき飯食ったばかりだし軽食を、いや甘いもの食べたい」
デザートデザート……あれ、値段が書いてない。まさか宿泊費に食事代も込みなのか？　マジかよ。
「そうだな、このレアチーズケーキ〜真夏の果実スプラッシュを添えて〜とかちょっと興味が……」
「ステーキ９００グラム、四人前。ミディアム一人、レア二人、ウェルダン一人、レア一ツトウェルダンニハガーリック多メデ」
なんだその聞くだけで人を胸焼けにするようは呪文は。
俺はこの場に一人で来た、であるからしてその注文は赤の他人が従

業員へとオーダーしたもの。だが俺は好奇心のままに振り返り……
顔を引きつらせてフリーズする。

「……嘘だろおい」

マッチョ、マッチョ、一人飛んでマッチョ。
こいつらがいるだけでこのホテルにテロリストが乗り込んでくるんじゃないか、謎の秘密結社との銃撃戦が始まるんじゃないか、というかトラックがエントランスに突っ込んでくるんじゃないかと思えるようなマッチョの群れが、そこにはいた。
そしてマッチョ三人の中で一人だけノットマッチョな……だからこそ際立っているようにすら見える金髪の女性が一人。ハリウッド映画の中から出て来たのかと言いたくなるようなこう、凄くアメリカンな四人組がペラペラと英語で何かを話している。

「……日本人必修技能、気配遮断」

俺が座っている場所のすぐ後ろに、スターレインとやらの一軍メンバーがいる。ゆっくりと振り返った首を元に戻し、私はモブですです景色の一パーツですとその気配を薄めることを試みる。
突然のリアル邂逅に対し、俺は国語教師に指名される確率を極限まで軽減させるジャパニーズ隠密技能を全力で行使するのだった。

「…………は？」
自身へと告げられた言葉が理解できない。慧（けい）は思わず間の抜けた声でその「命令」に対してのリアクションをとる。もしや英語か何かで話しているのだろうか？　それが日本語であると抜かすのであるなら、言葉の意味が理解できない。
「…………冗談、っすよね？」
「冗談ではないんだ魚臣、これは電脳大隊（サイバーバタリオン）の……ひいては「スポンサー」からの命令（オーダー）だ」
「ふっざ……！　それがどういう意味が分かってて言ってるのか！？」
タブレットを地面に叩きつけて慧は目の前の、役職上は自身の上司に当たる人物へと吠える。
だがしかし、世間では好青年で通っている慧の怒りの咆哮にすら眉ひとつ動かすことなく、男は再度その言葉を……言い聞かせるかのようにはっきりと宣告する。
「プロゲーマー魚臣（うおみ）　慧（けい）、君には明日のＧＧＣで「ルインズ・ウォ

ー・ハウンズ6世界大会」の決勝戦に「強襲中隊（アサルトカンパニー）」のメンバーとして出場してもらう。フルタイムでだ、手を抜くことは認められない」

風と雲が急いて動く。

匿名（馬鹿）野郎Aチーム、そして風雲急（後書き）

世のティーンズ達の理想とする天音　永遠「女の子はどこまでだって輝ける！　私みたいにネ！！」

夏目氏が目撃したアーサー・ペンシルゴン「もうさ、盤外戦術でスターレイン闇討ちしたほうがよくない？」

夏目氏「えぇ……」

後ろ向きの邂逅、そしてパンドラの箱？

やばいやばいやばいやばい、いや別にやましい事があるわけではないがのんびりデザートをパクつけるような状況じゃねーぞこれ！？

『しかし、相変わらずシルヴィはよく食べるなぁ。太らないの？』

『ぶっ飛ばすわよプレイボーイ、この後もトレーニングなんだからカロリーが必要なのよ』

『そうは言っても派手に寝坊したのは君じゃないか、俺らは朝からトレーニングし通しなんだぜ？　少しくらいジャパン観光をさせてくれてもいいじゃないか』

『ハッ、どうせ「ああなんてアジアンビューティー！　どうだいレディ、僕とディナーでも……」とか口説くつもりだろうがよ』

『かーっ！　ジョンソンよくもまぁそんな三流の口説き文句で嫁さんにプロポーズできたな！　俺ならそんなクソみてーな文章、丸めてトイレに流しちまうぜ！』

『てめーの下半身にぶら下がってる脳みそを蹴り潰してやろうか？　あぁ？！』

『少し黙ってくれ、彼女の声が聞こえない』

『なぁアレックス、それ生じゃなくて録音なんだよな？　っつーか……それ昨日から数十回くらい聞いてたよな？』

『ルーカス、彼女の声はな……マリファナよりも優しく、そして強く僕のハートを掴んでいるんだ。回数だとか録音だとか……些細な問題なんだ、分かるね？』

『ドラッグキメてるやつよりイかれてら……』

『貴方のガールフレンド、明日来るんだっけ？』

『あぁ、僕がお金を支払うと言ったのに！　彼女は自身のお金で！　ホッカイドゥーから！　ここに来てくれると！　なんて……っ、なんてオクユカシイんだっ！！』

『シルヴィ！　なんでアレックスに燃料を投下するんだ！』

『あー、ここから長いぞ……』

早口な英語の上にスラングか何か入っているのか、なにを言ってるかほとんど分からないが……とりあえず頭の悪そうな会話をしているのは雰囲気でわかるぞ。

ともすれば煽り合戦をする俺達よりも騒がしいマッチョ＋α達に、否応にでも視線が集まる。その殆どは迷惑そうな……ではなく、メジャーリーガーでも見かけたような驚きと憧れの視線だ。

そうだよな……プロゲーマーだもんな。どの部屋に宿泊しているか知らないが、有名人なら部屋に食事を運ぶとかしてくれよ……

「お客様、ご注文はお決まりでしょうか？」

「んえっ！？　あっ、あー……じゃあ、これで」

「かしこまりました、トッピングは如何しますか？」

「トッピング？　あー……じゃあ全部で」

後ろが気になりすぎて上の空でデザートを注文し、この奇妙な状況をどうしたものかと思案する。

とりあえず俺が……地下鉄屈伸(メトロスクワット)？　だったかの臨時メンバーだと割れることはないだろう。つまり現状俺が焦る必要はなにひとつない、ないのだが……

「――No　Face？　――……」

「No　Name――．　――……」

ちょこちょこ聞こえてくる単語が耳に入るたびに緊張してしまうのだ、簡単な英単語だからこそ俺のリスニング力でも理解できてしまう。そしてやはり謎の匿名メンバーについては向こうでも話題になっているようで、結構な頻度で「顔隠し(ノーフェイス)」と「名前隠し(ノーネーム)」が出て来ている。

(どうせ英語聞き取れないし、作戦会議をしてたとしても理解できないか……罵倒とかゲーム用語ならなんとなく拾えるんだが)

今のご時世外人プレイヤーとマッチングすることなどそう珍しいことではない。言語の壁による障害をゲームシステムは汲み取ってく

れないのだから、プレイヤー各自でなんとか対応するしかない。
であるからして、基本的に海外プレイヤーとマッチングする可能性のあるゲームをしているプレイヤーという人種は、言語の壁をなんらかの方法で乗り越える術を会得しているものだ。まぁ基本的に「どこに行くのか」「何をすればいいのか」「罵倒」を簡単なものでいいから覚えておけばなんとかなる。
Ｎｏｏｂコールと和製罵倒が飛び交う国際交流、心が温まりますね。

「お客様お待たせいたしました、「東京極氷火山（エレバス）パフェ～極北のワルキューレ騎行～」トッピング全盛りでございます」

「あれ、俺が注文したのはチーズケー……ひゅっ」

後ろに向いていた意識を前に戻した俺は……無意識的に、喉から変な声が出た。

そこに在ったのは、山だった。それも極寒の、凍てつく氷山。だがそれはただ死して凍えた山ではない、火口より真っ赤な溶岩（ベリージャム）を噴出させ、その山肌からは幾本ものスティック菓子が突き刺さっており、その先端には天使を模した飴細工がくっついたマシュマロ……

「ナニコレ？」

「当ホテルのパティシエ達を総動員して制作された「エレバスパフェ」に御座います、創業以来、完全武装（フルトッピング）を注文された方はお客様で九十九人目でございます」

「……ちなみに登頂に成功した人は」

「ソロでは七人ですね」

いるのか……いやそうではなく、何故こんな怪物が俺のテーブルに運ばれてくるんだ、確かに俺はチーズケーキ的なものを注文したはず。あれ、そういえばチーズケーキの隣に表示されていたデザートって。

突如として東京のど真ん中に出現した凍てつく火山に、レストラン中の視線が俺へと集まる。それは当然後ろの席に座っている面子も同様であり……

（ヤバい、何がどうあれか自分でもよくわからないけどこれはヤバい！）

これは、人が食べるものなのか？　これを収めるあのサイズ想定がどちらかというと牛とか象とかではないのかこれ。器の時点で俺の顔より大きいというか、この堂々たる巨山の如き生クリームとソフトクリームには一体どれほどの牛乳が費やされているのか。わからない、この俺の目をもってしても分からない。

「ま、まぁ支払うのは俺じゃないしこれも経験と考えれば………」

手元へと引き寄せようと器を掴んだ腕が、動かない。俺は今からボウリングの球でも食うのか？　とすら思える重量感に、頬が引き攣る。

これはもう後ろの席に対戦相手がどうこう言っている場合ではない。最終的に殴り合いで結論を出すことに定評のある脳内会議は既にこの怪物(スイーツ)は対ウェザエモン、対リュカオーンに匹敵する決戦であると判断した。

「ええいいいざ鎌倉……っ！」

討伐に要した時間は一時間半、先に注文品が来た俺の方がスタートレインの面々よりも後に離席するという大激闘であった。
結果的オーライと言うべきか、そもそもメニュー選択からしてタイム短縮の余地があると言うべきか……スイーツは第二ストレージ……じゃない、別腹と言うがあれは嘘だと再確認した。メインの胃袋もフル稼働してかろうじて倒せるような怪物の前に別の胃袋を温存する余裕など無い。

ただ、激闘の最中に後ろの席から聞こえてくる単語の中で、一つ気になるものが。

（ルインズ・ウォー・ハウンズ……確かFPSだったか、結構前に6が出たんだっけ、プロゲーマー達の話題に出てくるなら今回のGGCで7発表とかなのか？）

少なくとも俺が特に気にするべき話題ではなさそうだな、とりあえず食休みしないと……吐きそう。

そんなこんなで自室に戻ってフルダイブする気すら湧かないので、

ベッドの上で仰向けに転がってぼーっとしていると、ガンガンと扉を雑にノックする音で正気に戻される。
何事かとベッドから起き上がり、ごく自然な動作でガスマスクを装着して、ってこれホテルの従業員だったらやばくないか。
「サンラク君いるー？　カリスマモデル様が部屋凸したんだから居留守は認めないよー？」
訂正、ガスマスクは外さなくていいや。
先の「エレバスパフェ討滅戦」の後遺症が抜けきっていない身体でのそのそと部屋の扉を開ければ、そこにはにこやかな顔でダンボールを抱えたカリスマモデルに擬態した外道殿。
「はいこれ、私からのプレゼント」
「…………怪しげなカウント音はしない、と」
「うーん、人から贈り物を受け取ってまずやることが爆弾かどうか確かめる、ってそれ人としてどうなの？」
仮に爆弾ではないにしても「面白そうだから」という理由で火薬を使うタイプのビックリ箱を贈ってきかねない危うさがあるからなぁ。
「ジョークだよジョーク、んでこれ何？」
「んー？　ほら、私色々バレるとお仕事の方でアレがアレだからさ、当日コスプレしようと思ってるんだよね」
「なるほど」

顔だけ隠すよりも全身仮装の一パーツとして顔を隠す、成る程確かに理にかなってはいる。ゲームの大会ですることじゃねぇとは思うけどな。

「そんなわけで昨日の晩に発注したコスプレ衣装をさっき受け取りに行ってたわけ、いやぁ運送の発展は素晴らしいね」

「成る程ね？」

「で、どうせならサンラク君も巻き込もうかなって」

「ごく自然な流れで飛び火させせんな」

何故こいつはより多くを巻き込んで派手に爆発しようとするのか、例えるなら周囲の花火を誘爆させようとする制御不能な大玉花火……危険すぎる。

「でもサンラク君、人に見せられるような顔じゃないんでしょ？」

「そのワードをチョイスするあたり流石の外道ですわーあっはっは、ぶっ飛ばすぞこんにゃろー」

つまり俺が今受け取ったこの箱の中身はコスプレ衣装、ということになるわけだ。それもペンシルゴンチョイスとかいう不安しかないおまけ付きの。

「一応聞くけど、中身これ何？」

「顔隠し(ノーフェイス)に相応しいコスチューム、かな」

キリッとした顔でそう発言する姿を写真に撮ってＳＮＳに晒すだけでめちゃくちゃ反応が来そうだが、今の俺にはこの顔にパイでも叩きつけてやりたいという気持ちしかない。

「ちなみにそっちは？」

「ふふふ、本番までのお楽しみ、的な？」

不安しかない……ん？

「カッツォからの呼び出しだ」

「なんだろね？」

とりあえず指定された（ゲーム内エントランス）集合場所に行くとしようか。

後ろ向きの邂逅、そしてパンドラの箱？（後書き）

シルヴィア：めっちゃ健啖家、日本のピザ小さすぎ！
ジョンソン：プロポーズの台詞は「俺と家族になって欲しい」
ルーカス：三回ほどニューハーフに引っかかってソッチ系に堕ちそうになったことがある
アレックス：実は片言日本語はキャラ作り、恋人の事になると早口で二時間くらい語り出す

最近マッチョ共の設定考えてる時が一番楽しいかもしれない、タコの設定がだいたい固まったからというのもありますが

誰が為の尽力（有料）

「「「試合に参加できなくなったぁ！？」」」

「……………あぁ」

俺とペンシルゴン、そして夏目氏は、喜怒哀楽から喜びと楽しみを抜いたような顔をしたカッツォの口から告げられた言葉に意図せずしてハモる。

「主催者がドタキャンって……まさか壮大なドッキリ説が真実だった……？」

「他人事なら盛大に爆笑してたんだけどさ、カッツォ君流石にそれは笑えなくない？」

「ど、どういうことなのよケイ！？」

「上から……つーかスポンサーからの「命令」でＲｗＨ６の大会の欠員補充で出場されることになったんだよ……」

「はぁ？」

カッツォの話を要約すると、だ。
ＧＧＣの二日目、つまり俺達が参加するギャラクシア・ヒーローズ・カオスの実機プレイの実演と言う名のエキシビションマッチと同じ

日にＲｗＨ６……ルインズ・ウォー・ハウンズ６の世界大会、その決勝戦が行われるらしい。それだけなら他人事で済んだのだが、メンバーの一人が交通事故で入院したことで事態は急変。

今のご時世身体が千切れでもしない限りはなんとかなる。幸い後遺症が残るような怪我ではないらしいものの、当然大会に出場など不可能であり、急遽代理のメンバーを立てる必要が出た。
本来であればプロゲーミングチーム「電脳大隊（サイバーバタリオン）」におけるＦＰＳ部門「強襲中隊（アサルトカンパニー）」の補欠から選ぶ筈だったのが、ここで口を出して来たのがスポンサー。

なんでも「どうせなら魚臣　慧を追加メンバーにしてよ」というお願いという名の結構な脅迫によって半ば強制的にカッツォは出場するゲームカテゴリをチェンジさせられた。
本来であればそんな要望は通らない筈だ。だが同じ日時にカッツォがこの場にいて、中途半端にＲｗＨ６の大会とＧＨ：Ｃのエキシビションマッチの開始時刻がズレており、そしてその「スポンサー」の機嫌を損なうことが経営上宜しくない……そんな間の悪さが連鎖してフルコンボしたことで今に至る。

「ピンボールみてぇに不幸が連鎖してってもはや笑えるな」
「他人事なら笑えてたんだけどね……」
「というかなんで格ゲー畑のカッツォ君がＦＰＳの選手になんかなるわけ？　おかしくない？」

「あー……ちょっと昔色々あってさ、そのスポンサーの前でＦＰＳをやったことがあってさ。はは、こう見えて格ゲーの次くらいにはＦＰＳ得意だから……」

成る程、中途半端に目立ったもんだからスポンサーの記憶に強く焼きついた、と。

諦めを帯びた疲れた顔で乾いた笑いを浮かべるカッツォ、そして絶望の表情を浮かべた夏目氏。どうやら二人は気づいていないようだが、今この場では二種類の人種に別れている。

「そ、そうだ、ＲｗＨ６の大会をすぐに終わらせれば間に合うんじゃ……」

「確かにウチのミリタリー馬鹿どもは強いけどさ、対戦相手がドイツの「シュトゥルム・ウント・エクスプロシヴ」だから、十中八九長引くよね、っていう」

朝顔工業（アサガオカンパニー）だか海老（シュリンプ）・餡子（あんこ）・高価（エクスペンシヴ）だか知らないが、カッツォや夏目氏の中ではカッツォのエキシビションマッチ参加は絶望的という判断のようだ。

「成る程なぁ……ちなみに全力でぐだったとしてその決勝戦とやらはどれくらいかかるんだ？」

「ルールは陣取り、合計五試合……一試合三十分だからまぁ、休憩込みで三時間は拘束されるよね」

「ちなみにＧＨ：Ｃのエキシビションマッチ開始時間は十時でＲｗＨ６世界大会の開始時間は九時だね」

どう足掻いても一時間は確実に遅刻する、と。ＦＰＳと違って格ゲーは一試合のリミットが短い。確かエキシビションマッチでは一ラウンド十分でフルラウンドで戦っても一試合三十分、仮に四番手にカッツォを配置したとしても間に合うかどうかは怪しい。

そもそもこの前提は「俺たち三人がフルラウンド三十分全て使い切って持ちこたえる」ことが条件だ、策と言うにはあまりに無理が過ぎる。

つまりこの状況はもはや……

「つまり全員フルラウンドで戦えば間に合うって事だよね？」

「うちの大将はトイレに行ってます、とでも言っときゃいいだろ。実際丸々十分使い切る戦法ってどうすればいいかな、全力ロールプレイ？」

「向こうが乗ってくれればそれでもいいけど、キューブ確保とノックアウトのどっちつかずで三ラウンド引っ張ればなんとかなりそうかな？」

「……ちょ、お前らマジなの？　本気でそれ言ってるの！？」

現状に悲嘆していた二人が、現状の打開を企んでいた二人の言葉に目を見開く。何をそんなに驚くことがあるというのか、だって俺とペンシルゴンだぜ？　こんな時に言うこと、考えることとくらい分かるだろう。

「アマチュア二人を衆人環視の前に引っ張り出しておいて、自分だけバックレようなんて俺達が認めるわけないよなぁ？」

「ただでさえ「人数足りないので補欠入れました」感が酷いのにこ

こで主役欠員とか派手に晒し者じゃん、私そーゆー目立ち方はあんまり好きじゃないかなーって」

「この状況で俺の足を引っ張りに来る君ら一周回って尊敬するよ……じゃなくて！　流石に言ってることが無茶だってことくらい分かるよね……？」

「私だってただコスプレの用意してたわけじゃあないんだぜぇ？」

そう言ってにまりと笑うペンシルゴン。リアルの姿でなら大層映えるものであったのだろうがここはＧＨ：Ｃのマッチングエントランス、直近に使ったキャラクターがアバターとして反映されるので不敵な笑みを浮かべているのは頭がブラウン管テレビになっている燕尾服の謎キャラである。

ちなみに表情はブラウン管に表示された人の顔であり、どうも女性キャラであるらしい。見た目、性別、服装のキャラ設定をスロットで決めたのか？

夏目氏が「コスプレ……？」と疑問符を浮かべるのを尻目に、黒幕モードになったペンシルゴン先生の演説は続く。

「いい？　今回のエキシビションマッチは極論勝ち負けは二の次、重要なのは「いかにこのゲームが面白いか」を観客に、ネットから見ている視聴者に、後から録画を見る人に伝えることがメインなわけ」

「だからこそこれはバトルではなくエンターテイメント、プロローグで決着する勝利よりもエピローグまで続く山場をこそ望まれる」

「では私達の目論見と、このエキシビションマッチの目的の双方を

叶えるにはどうすればよいでしょうか」

夏目氏がペンシルゴンの弁舌に引き込まれるように身体を前に傾ける。こうなってしまえば最早逃げられない、ペンシルゴンという操り手に糸をくっつけられた者はすべからく操り人形として使い潰される。

まぁ今回ばかりは俺達は自分から糸をくっつけなければならないけどな。

「私たちは最大三十分の対戦をするんじゃない、放送時間三十分の……ドラマを繰り広げるのサ」

――

――

――

「さぁて、と」

やる事は山積み、黒幕（フィクサー）から仰せつかった大役は容易くこなせるものではない。
ウェザエモンとの戦いが「サンラク」という一本の剣を限界まで酷使する戦いであったとするなら、今回の戦いは言うなれば多刀流だ。
無理を通して目論見を達成する、人数制限と時間ノルマをたった三人でクリアする為にペンシルゴンが悪巧みして尚無理のあるポンコツ作戦を、一人がいくつもの歯車となってかろうじて回す。

正直、三人で勝つ方法を模索する方が幾分かマシであっただろう。
確かに全米一のプレイヤー様は強敵であるが、少なくともレベル30にも満たないステータスで夜の帝王に挑むよりは幾分か勝ち目がある。
だがそれでもペンシルゴンが立案した悪巧みは茨の道をタップダンスで踏破するようなものであり、それに乗った俺も……きっと夏目氏も馬鹿も馬鹿、大馬鹿なのだろう。

「ん？」

わざわざメールで真意を聞きに来るとは、カッツォの奴め。
「なんで、ってそりゃあ……」

何故そこまでしてくれるのか。
簡潔な問い（メール）に対して返ってきた答えもまた、シンプルなものだった。

件名：　Ｒｅ：何故
差出人：サンラク
宛先：モドルカッツォ
本文：わざわざ俺たちを呼ぶくらいマジなイベントなんだろ？　華を持たせてやるって言ってんだよバーカ

上手くいったら焼肉な、当然お前の奢りで

件名：　Ｒｅ：何故
差出人：鉛筆戦士
宛先：モドルカッツォ
本文：シルヴィアちゃんとの対戦、カッツォ君にとっては大事な事なんでしょ？　おねーさんが一肌脱いであげようってことさ
まぁ実際はコスプレ衣装を着込むんだけどね！

上手くいったら私お寿司食べたいなぁ、カッツォ君全持ちで

「……宿泊費込みで既に俺が全持ち（オゴリ）じゃんか」

ごく自然な流れでさらに金を使わせようとする二人からの文面に、慧は呆れと、諦めと、悲しみと……そしてそれら全てを上回る感謝の籠った苦笑いを浮かべて携帯端末をベッドへと放り投げる。

モチベーションで言えば最低レベルで臨むつもりであったＲｗＨ６の世界大会とやらであったが、頼もしい友人達が全力で時間稼ぎをしてくれるというのならば。

「上等だよ、シュークリーム・カルト・エクササイズだがなんだか知らないけど、ちゃっちゃと倒して本業に戻ればいいだけってね！」

慧の部屋に設置されたＶＲシステムに急遽インストールされたソフトを起動し、慧もまた己の成すべきことのために仮想現実の世界へとダイブするのだった。

誰が為の尽力（有料）（後書き）

・シュトゥルム・ウント・エクスプロシヴ
ドイツのプロゲーミングチームであり、世界有数のＦＰＳの強豪。
シュガースティックではない。
完璧に統率のとれた動きで迅速に、そして徹底的に効率的なプレイスタイル。ウコンではない。
ちなみに決勝戦の開催地たる日本に来てからはビールとウィンナーの品質に文句タラタラ、でもタコさんウィンナーはいいね！　エクスプロアではない。

季節外れのカボチャとくっ殺しない女騎士

「…………じゃあ行ってくるよ」

時刻は朝七時、俺たちよりも先に開始されるＲＷＨ６の世界大会へと向け出発するためカッツォは先に離脱することになる。何か言いたげな……しかしそれを必死になって嚥下して、かろうじて心の中に留めたのだろうカッツォはこちらへとエナジードリンクの缶を投げる。

「もともと向こうが無理を通してきたんだからね、これくらいは融通させた」

「エナドリ一本の融通……ってオイこれ」

「例のメーカーの新作だよ、当然米国産」

オイオイ、噂には聞いてたけど実物を用意するとは……やるなカッツォ。俺が英語表記のエナジードリンクに対して戦々恐々という態度で眺めていると、ペンシルゴンはイマイチピンとこないのか眉をひそめつつ俺たちに問いかけてきた。

「日本のと何が違うの？」

「日本のがカフェインキマるくらいだとしたら、こいつはこれ一本でガンギマる」

「……合法、だよね？」

「ユーザーもそれちょっと心配してるんだけど、一応法に触れるようなあれこれはないらしいよ」

「ちょうど一週間前に発売されたばかりの「ライオットブラッド・トゥナイト」……実物を用意するとはやるじゃんカッツォ」

飲めば二日は眠れなくなる、という本当に合法として売る気があるのか疑わしくなるキャッチコピーで、全世界数億のエナドリユーザーを激震させた怪物エナジードリンク。つーかトゥナイトと二徹(トゥーナイト)でダジャレかよと言いたくなるが、瞬間ガンギマリ率は過去最高クラスであることは明白。プロゲーマー相手に勝負を挑む現状においてこれ以上ないブースターだ。

「一応全員分用意してるけど」

「なんか眠気と一緒にお肌のツヤも持ってかれそうだから私はふつーのでいいかなー」

「わ、私は貰おうかしら……」

飲むのはもう少し後にしておこう、なんというか勿体無い。カシャコンと開いていたマスクを閉じ、エナジードリンクをホルスターに無理やり突っ込む。そんな俺の姿をひっっっっっじょーーーーに何か言いたげな表情で見つめていたカッツォであったが、何を言っても無駄と判断したのか、ヒラヒラと手を振ると会場の方へとタクシーに乗って向かって行ったのだった。

「全く、言いたいことがあるならはっきり言えばいいのにな」

「本当、その通りだねぇ」

「口では何も言ってないけど目が全てを物語っていたように私には見えたけど……？」

「夏目ちゃん、私らのシマじゃ発言しなきゃノーカンだから」

如何に目で語っていようが、言われなければそれは問題ないということなのだ。口を開け、物を申せ、故にこそ俺たちは互いに互いを煽るのだ！　黙っていると勝手に物事を進められかねないからな！！

ヴィィィ……と静かに響く駆動音の中、カッツォを見送った俺とペンシルゴンと夏目氏はしばらく沈黙を続ける。それは俺とペンシルゴンにとっては「何か言いたいことがあるならどうぞ」という待ちの静寂であり、夏目氏はもごもごと口を動かすが……それを開くまでには至らなかった。

「流石に今から追加の仮装を用意するのは難しいかなぁ」

「私は！　着ません！　から！！」

さいでっか。カシャコン、カシャコン……ヴォン。

「なぁペンシルゴンさんや、ここでクイズです」

「よっしゃどんとこい、私の灰色の脳細胞が黄金に輝くよ」

「それ既に黄金色では……まあいいや、さて問題です。今我々は周囲からなんだと思われているでしょうか」

「愉快なコスプレ集団」

「あっはっは、せめてボケろよ畜生」

「あ、こっち銃構えてもらえますかー？」

「ほらほらオーダー来てるよー？　レイヤーたるものちゃーんと応えないと。はいはいそこローアングルならもっと右よってねー！」

カッツォが会場入りしてからおよそ一時間後、俺達もまた会場へと向かった。向かったのだが、格好が格好故にカメラを持った来場者に「写真いいですか」と言われたのが運の尽き。かれこれ十数分間ほど俺は銃を構えたりよく分からないポーズをしたり……俺は一体何をしているんだ。というかノリノリで写真撮影を快諾するバカがいるから俺も巻き添えを食らったわけで、俺はヘルメット越しに恨めしげな視線を隣でポーズを決める「女騎士」に向けるが、仮面をつけた外道はそんな視線などどこ吹く風といった様子である。

（確か……なんだっけなー、どっかで見た気がするんだけどなんのゲームキャラだったか……）

こういう時偏食の代償が痛いな、今俺がしている格好のキャラも、ペンシルゴンがしているキャラも見たことはあるんだがどんなゲームのキャラだったか思い出せない。少なくとも奴はファンタジー畑のキャラでこっちはＳＦ畑……それもＦＰＳ関連のキャラであろうことはわかるんだが。

「…………で、いつまでここで撮影会やるわけ？」

「んー？　ほら職業的に撮影には快諾しちゃう性質（タチ）だからね、うっかりうっかり。すいませーん！　ちょっと行くとこあるんで撮影会はお開きってことでー！！」

こういう時はっきりズケズケとものを言えるあたり、やはりモデルという視線を浴びる職業故の強さなのだろうか。完全に顔が隠れているとはいえ、自身の写真を何枚も撮られるという経験は初めてだったので貴重な体験といえばそうなのかもしれないが、俺個人としてはこういう経験はあまりしたくないなぁ。

「んっふふー、どうよサンラク君。これから全世界規模でオーディエンスに見られながらゲームするわけだし、予行練習がてら撮影会してみたけど、パフォーマンスは維持できそう？」

「…………ヤンキーが猫を拾うといい奴に見える現象を狙ったか、策士め……っ！」

「あっれぇー結構私善意でやったんだけどなー……？」

善意が全て良い結果になるとは限らない、悪意で良い結果を掴み取る奴がそれをやるとなおさら疑ってかかってしまう。つまりは……

「日頃の行い」

「どストレートな正論やめよっか、私が言い返せない」

ちなみに夏目氏はさっさとGGC会場……国際展示場をゲーム一色に染めたその場所へと行ってしまった。人としてどうかとは思うが残念ながら俺たちへの対処法としては満点と言わざるをえないな。

「それじゃ、いこっかカボチャ君？」

「なあ、これ季節外れって言われないかな」

「コスプレに季節なんてものは関係ないのさ、冬でも水着みたいなコスをしてポーズをする。それがコスプレイヤーってものだよ」

「さいですか」

俺は頭全体を覆うフルフェイスヘルメットを二、三度撫でて……カボチャのお化け（ジャック・オー・ランタン）を模したマスクを顔部分に装着した奇妙な兵士のコスチュームと、Rが１８に指定される方のそれではない肌の露出を限界までなくし、陶磁器のような無機質な仮面をつけた女騎士のコスチュームが白熱するコンペティションの会場へと足を踏み入れたのだった。

季節外れのカボチャとくっ殺しない女騎士（後書き）

めちゃくちゃメタいこと言うとアイア○マンのマスク部分をジャッ
クオーランタンっぽくした奴と暗銀の残滅と黄金の残光をくれるあ
の人でイメージしたいただければ

レクイエム・フォー・アーミーズ。
フルダイブVR黎明期にリリースされたゲームでありながら今なおFPSの歴史の中で傑作と評される作品。そのゲームにおけるキャンペーンシナリオ、所謂オフラインでプレイするストーリーモードに於いて幾度となく主人公の前に立ち塞がり、時に肩を並べ、最後は核爆弾と共に深海へと消えた顔のない傭兵「ジャック」。
その傭兵は常にジャック・オー・ランタンを模したマスク付きのヘルメットを装着しており、誰もその顔を知らず。プレイヤーによる解析ですら「顔のグラフィックが最初から作られていない」という徹底的な顔の隠蔽が施されたレクイエム・フォー・アーミーズにおける名脇役。
それこそが俺が今コスプレしているカボチャヘルメットの兵士の元ネタであるらしい。

「顔無しの君にはピッタリでしょ？」

「ハロウィンにはまだ早いと思うけどな」

という過去のヘルメット、コスプレの道具にしてはやたら手が込んでいると言うか……ボイスチェンジャーに発光機能、果ては顎部がスライドすることで口元だけ素顔を晒すことができる変形機能。キャラクター云々を抜きにしてちょっと欲しいなと思えてしまうロマンを感じる。

「んで私が亡国の城を死して尚守護する女騎士「名無し（ネームレス）」のコスプレってわけ。通には分かる衣装チョイスってやつだよキミィ」

「あーはいはい」

「なんというか……図太いのね、貴方達」

係員に大層怪訝な表情をさせてしまったものの、来たるエキシビションマッチに参加する片割れ「爆薬分隊（ニトロスクワッド）」のメンバーとして案内された控え室、緊張を隠そうともしない夏目氏が傍でわいのわいのと雑談する俺達へと話しかける。

成る程確かに大勢の前で全米トップクラスのプロゲーミングチームと対戦する、という事に対して緊張しない方がおかしいと言える。

「私はほら、視線が多いほどパフォーマンスが上がる……的な？」

「……貴方は？」

「俺？　まぁ緊張してるにはしてるけど……フルダイブしたらそこまで気にならないんじゃね？」

観客も同じゲーム内に入ってくるわけではない、確かに大量の人の目の前に立つ事に一切緊張のない自然体でいることは難しいが、そこは顔を隠している事と俺はこの程度で緊張しないと思い込み（ロールプレイ）でなんとかしようという腹づもりだ。

「あとはあれじゃね？　掌に神と書いて緊張を消し去るってやつ」

「……人、じゃなかったっけ？」

「ぶふっ、いいねそれ採用。私の番になったら掌に神って書こ」

神を食って強くなる、悪食だな。とはいえなりふり構わない俺達にはお似合いかな？

「さーて、作戦の最終確認だよ。夏目ちゃんもチワワみたいに震えてないで寄った寄った」

「チワッ……！？」

自身を小型犬に例えられた事による夏目氏の異議申し立てとそれに対する我々の返答は省略。
貸し出し品のタブレットを操作するペンシルゴンは今回のＧＧＣ公式ホームページにおけるとあるページを開いて俺たち二人にも見えるように机の上にタブレットを置く。

「ゲーム方式は勝ち抜き戦、勝てばそのまま相手チームの次のプレイヤーと戦う事になる。つまり私達の裏目的を達成するために最も効率的な勝ち筋は時間をフルに使って一勝一敗することだった」

一人頭一時間の時間稼ぎ、三人合わせて三時間……カッツォが戻ってくるまでの時間稼ぎとしてはお釣りが出るレベルの「最善策」であった。だがこれはある前提を必要とした策であり、そしてその前提はすでに崩壊している。

「まさかシルヴィアちゃんが三番手で出てくるとはね……カッツォ君と対戦するなら絶対四番手だと思ったんだけどなぁ」

そう、この作戦はそもそもマッチョ達相手に都合よく勝率操作できるかどうかを考慮していないとはいえ、大前提としてシルヴィア・ゴールドバーグが四番手の大トリにいることが条件だった。
だが現実はシルヴィア・ゴールドバーグの名前はスターレイン四人

の選手のうち三番目に記載されている。

「こうなると作戦は大きく切り詰めないといけないし、私と夏目ちゃんは一勝一敗したとしても……サンラク君が絶対に当たるんだよね」

そう、先鋒の夏目氏が一勝一敗してスターレインの次鋒とペンシルゴンがぶつかる。そしてペンシルゴンがそれに勝って、副将たるシルヴィア相手に負けたとして……時間が足りない。

そして夏目氏とペンシルゴンが2タテされない限り、俺は絶対にシルヴィア・ゴールドバーグとかち合う。

もし俺以前の二人が都合よく時間を稼げたとすれば二時間、カッツォはかろうじて間に合うかもしれない。だが流石にそこまでうまくいくとはこの場にいる誰一人として思っちゃいない。

なにせ相手はプロゲーマー、本業の方々である。さらに言えば本業の中でも指折り数えられる上位陣、木っ端二人にプロゲーマー一人で果たしてどこまでうまく事を運べるか。

「私が立案したとは言え笑っちゃうくらい難易度ハードだけど……それでもやるって決めた、その為に準備もした。やるだけやって遅刻したお馬鹿さんを間に合わせよう！」

「……ええ！！」

「応とも！」

係員が来たのだろう、ドアがノックされる。さぁ、派手に時間を稼ごうか。

『――と、いうわけで最新作「ギャラクシア・ヒーローズ：カオス」の紹介を以上とさせていただきますが……皆さん、実際にプレイしている様子を見てみたいですよね？』

名前は知らないが、ギャラクシア・ヒーローズのディレクターである男性の、観客を煽るような問いが投げかけられる。
あらかじめの打ち合わせ通り、このすぐ後にスターレインと爆薬分隊のメンバーが壇上へと上がるのだ。

「ねぇ、サンラク……君？」

「どうした夏目氏？」

「私も掌に神って書く事にするわ」

「さいですか」

光が俺たちを照らす、およそ一般的な高校生が高校生活の中で向けられる数十、数百倍の視線がスターレインのメンバーに、夏目氏に、ペンシルゴンに、そして俺に向けられる。
まるで視線が物質的な圧力を帯びたかのような錯覚、踏み出す足が

たたらを踏みそうになる。

「ちなみにワンポイントアドバイス、傭兵「ジャック」はいつも猫背で不敵に笑うようなキャラだよ」

「役作りの補強感謝……っと」

それがどんなキャラなのか、とかそれがどんな物語の中で何を成し遂げたのかを俺は知らない。都合よく上っ面を借りているだけだが、気圧され防止に力を貸してもらうぜカボチャ傭兵。

背筋を曲げ、物怖じする事なく一歩を踏み出す。そうだ、そうとも、そうだとも。所詮は単なる視線、視線のついでにレーザーもぶっ放してくるシャチ野郎に比べればそよ風みたいなもの、何を恐れることがあろうか。

『えーそれでは、ギャラクシア・ヒーローズ：カオス実機プレイ……という名目のスターレインｖｓ爆薬分隊（ニトロスクワッド）によるスペシャルエキシビションマッチを始めさせていただきます！　司会進行兼実況はワタクシ笹原エイトが務めさせていただきまーす！』

「……笹原エイト？」

「ゲームプレイアイドル、って絶賛売り出し中の子だね。シャンフロでアイ活しようとしてたみたいだけど……」

「みたいだけど？」

「ほら、シャンフロには聖女ちゃんがいるから……まぁでも、普通にいい子だよ？」

何がほら、なのかさっぱり分からないが、聖女ちゃんとやらが凄いということは分かった。ＮＰＣに負けるリアルアイドル……ちょっとだけ同情した。
衣装自体はサイバーな印象を抱かせるものだが、本人の雰囲気がきゃるんきゃるんしているせいで妙にチグハグな印象を感じさせる女性がマイクを片手に観客達を盛り上げる。
『あれ？　爆薬分隊の方は一人足りないようですが……？』
「その、ケイなら……」
「ちょっとトイレに戦争をしに」
「どうせ大トリなんでお気になさらずー」
『は、はぁ……それでは改めましてルール説明！　とはいってもシンプルな勝ち抜き戦ですが、ギャラクシア・ヒーローズ：カオスは前作とは全く異なるルールの新感覚格闘ゲーム！　今回はシティモード「喧騒（ライブリー）」！　さらにキューブゲットルールはオンに設定されています！』
小難しい専門用語が並んでいるが要するにＮＰＣ有り、キューブ確保による勝利有り、ということだ。普段の俺なら勝ち筋が増えることはあまり望ましくないと考えただろうが、今だけは歓迎しよう。互いに勝ち筋、負け筋が増えるということはそれだけ迷いが生まれるのだから。
『解説にはプロゲーミングチーム「若野牛（コルトバイソン）」の浅間　絢斗さんにお越し頂いております！！』

『自分、格ゲーを解説できるほどメインにはしてないんですが……はい、よろしくお願いします』

「んー、「あれ大丈夫なのか」みたいな雰囲気漂わせてるから私が解説するけど、あの人解説が上手いから結構いろんな大会に呼ばれてるんだよ」

「ふーん」

プロゲーマーとかぶっちゃけほとんど興味がなかったからなぁ、何もかもが新鮮だ。とはいえこれからも興味を抱くかどうかは正直微妙なラインではあるけれど。

『そして皆様、今回はギャラクシア・ヒーローズ：カオスの実機プレイの他にもう一つ！　ユートピアコンピュータエンターテイメントが今秋に世界へリリースする新機能「バベル」についてもご説明させていただきます！』

バベル？

『既にご存知の方もいらっしゃられるかもしれませんが、バベルとはＵＣＥがサービス提供するフルダイブシステムに今秋九月末にリリースを予定している「リアルタイム・トランスレート・システム」の事です。

今エキシビションマッチではこの「バベル」が先行実装されており、日本のプロゲーミングチーム「爆薬分隊（ニトロスクワッド）」とアメリカのプロゲーミングチーム「スターレイン」の選手の皆様はこのゲーム内において言語の壁を気にすることなくコミュニケーションができるのっ……ですっ！！』

「そうか、そういえばそもそもの大前提……それ以前の問題として言語の壁があったのか。これも見越しての作戦だったわけ……だよな？」

「ソダヨ、ワタシスゴイデショ、ホメテホメテ」

「お前まさか言語的問題を考慮せずに……」

「ほら、人間「オウイェー！」と「カマーン！」だけでなんとかなるってばっちゃも言ってたから……」

「お前のばあちゃんめちゃくちゃファンキーだなおい……」

念入りに立てた作戦がそもそも土台からガタガタの違法建築だったと判明し、夏目氏の額からダバダバと汗が流れ始めた中……ついに第一試合、夏目　恵　ｖｓ　ルーカス・ガルシアが始まる。

創世の裁きに抗うは電脳の塔（後書き）

ぶっちゃけ実況解説のキャラは三秒で考えたので覚える必要はあんまりないです。本名「笹原八花（エイト）」さんは使い捨てキャラにするにはちょっともったいないのでリサイクル予定ではありますが。
ただのモブだったくせについに苗字まで獲得したマッチョ達……何かがおかしい（すっとぼけ）

リアルタイム・トランスレート・システム「バベル」
ユートピア社がまたしてもオーパーツをリリース、その内容は「フルダイブシステム使用中のユーザーの脳波をキャッチし、大規模サーバー内で翻訳。さらに「聞き手」の言語野に情報を「イメージ」として送り込むことでいわゆるエキサイト語になることなく同じ言語で話しているかのような会話を可能とする」というもの。
どう考えてもアレな技術なのだが実績と金でその手の批判を封殺していたり……ぶっちゃけ超すごい翻訳システムを自作した、とだけ覚えておけば大丈夫です。

ルーカス・ガルシア。作戦中は「スケコマシ」の名前で対策を練ったそのゲーマーは一言で言えば「頭脳派」である。
言ってしまえばカッツォと同じ「研究が進む程強くなる」タイプであり、今回に限ってはスターレイン四人の中では比較的弱い部類だ。
いや、レベル９９と比較してレベル９７が弱い、というだけであって強いという大前提は変わらないのだが。
とはいえ普段の大会などでは僅差で負けるか圧勝するかのどちらかとまで言われる分析の鬼だとか、出先で女を作るどころか女性パパラッチを口説いた、なんて噂もあるらしい。

「なんていうかあれだよね、ギャルゲーのバッドエンドが似合いそう」

「むしろゾンビパニックで中盤くらいに死ぬ二枚目キャラじゃね」

「あー分かる」

見上げた先、特大ディスプレイでは夏目氏とスケコ……ルーカスがキャラクター選択を行なっている。いわゆるお祭りゲーであるＧＨ：Ｃでは異なる作品のキャラクター同士が対戦することこそが目玉の一つでもある、だが此度の爆薬分隊は一味違う。

『ルーカス選手、キャラクターは「Ｄｒ．　サンダルフォン」！』

『前作からの彼の持ちキャラですね、システム周りが大幅に変わっ

たとはいえ、勝手知ったるキャラを選ぶのは彼のプレイスタイル的にもベターな選択でしょう』

「はい私の一勝、これは打ち上げはお寿司で決定かな？　んー？」

「……まだわかんねーし」

ボロボロの白衣にサンダル、手には携帯電話を持ったくたびれたおっさんにしか見えないのだが、一応あれでもヒーローであるらしい。携帯電話型の超能力増幅装置で悪のマッドサイエンティストが生み出す怪物と戦う医者……だったっけか。

とはいえ、秘密裏に俺とペンシルゴンの間で行われていた「シルヴィア以外のマッチョがなんのキャラを使うか当てゲーム」は幸先の悪いスタートとなってしまった。

頼むぞ白黒マッチョ、俺は寿司より焼肉が食べたいんだ……！！

『おおっと！　対する夏目選手が選んだキャラはユグドライア！！
　同作品のヒーローヴィラン対決だーっ！！』

『前作でならユグドライアがダイアグラム６：４で有利なんでしたっけ？　果たして今作でもその有利を維持できるのか、注目ですね』

実況の聖女ちゃんに負けたアイドルさんは偶然にも！　と言った様子でこのマッチングを囃し立てているが、無論偶然でこの組み合わせになったわけではない。

これこそが爆薬分隊ｗｉｔｈコスプレイヤーによる戦闘方針「原作再現ロールプレイ」だ。これまでのスターレインの対戦記録から相手選手がどのキャラクターを選ぶのかを推測し、そのキャラクターのライバルキャラによるカウンターを仕掛ける。

エキシビションマッチだからこその「遊び」を利用したよりダイナ

ミックな、よりドラマティックな戦いで時間を引き延ばす。

「サンラ……もとい顔隠し君（ノーフェイス）はエナドリはまだキメないの？」

「個人的持論だけどエナドリは飲んでから三十分くらい経過した頃が一番キマると思う」

「時にプラシーボ効果って知ってる？」

「F1カーとかが高速で走る時に音が低くなるアレ……」

「うん、それドップラー効果ね」

一体こいつは何が言いたいんだ。まぁいい、今は夏目氏の奮闘を見ることの方が重要だ。

夏目氏はぶっちゃけ……そう、ぶっちゃけカッツォの下位互換だ。そしてそれはルーカスの下位互換という意味でもある。普通に強いが普通に弱いとでも言うべきか、自分が出来る仕事を果たすことはできるがシンプルな実力差を覆す事が得手ではない、そんな感じだ。ちなみにペンシルゴンの夏目氏評価はもっと酷い。なんだよ「肉食獣の真似をしても魂が草食獣だから食い物にされる」って、人間に対する評価じゃないぞ。

現役プロゲーマーに対してアマチュアが何を言っているんだ、とは我ながら思うが実際五試合中三勝しているからアマチュアでも発言権くらいはあるだろう。

とはいえこれらの評価はあくまでも正面切って戦った場合の評価だ、稀代の外道こと軍師ペンシルゴンによる策を組み合わせたなら、案山子だって英雄に仕立て上げられる。

「いいか夏目氏、ロールプレイ心得の基本を忘れるなよ……」
「そう、ロールプレイにおける基本中の基本にして、絶対遵守のルールその一……」

そう大した事ではない、恥じらいを捨てろ。

千載一遇のチャンスは、悪鬼と悪魔が同伴する茨の道であった。夏目　恵の現状に対する率直な感想はそれであった。ついでに言えば道にはガソリンが撒かれており今にも火がつきそう、も追加するべきだろう。

（なんで私はスターレインのレギュラー選手相手に舐めプじみた事をしないといけないの……）

元を正せば慧の頼みに応えるべく家族旅行をキャンセルしてまでこの場にいるのだ、昨晩は時差ガン無視でグアムにいる両親から電話が掛かって来たりもしたがそれ自体はまぁいい。
言うなれば自分の役割はあの危険な女……シルヴィア・ゴールドバーグと慧との対戦を成立させるための前座でしかない、だがそれ自体は若干不本意ではあるが受け入れてはいた。
だが、何をどう間違えたらカリスマモデルと謎のガスマスクと一緒に全米トッププクラスのプロゲーミングチームに挑まなければならないのか。

アマチュア二人と肩を並べていることに文句があるのではない、それ以前に恵の目から見てもあの二人の実力は相当高いように見える。ただ息を吐くように互いを煽り、ビルを破壊し、奇怪な挙動をするような者達と無茶無謀な作戦に挑むという現状を作った者に文句が言いたいのだ。

それ即ち慧に文句が言いたいのではと恵の冷静な部分が指摘する。だが冷静ではない部分が彼等の「熱」にあてられたのか、それとも急場凌ぎで詰め込んだユグドライアというキャラクター像がそう差し向けているのか、恵が出した結論は「だいたい運命のせい」であった。

「私は運命になんて負けない……！！」

ユグドライアは設置技を主体としたカウンタータイプであり、近接タイプであるＤｒ．　サンダルフォンに対しては有利に立ち回ることができる。
だが相手が相手故に慎重を期さねばならない……と、数日前までならそう考えていたかもしれない。

「あぁもう、やってやるわよ！！」

ユグドライアらしい、より盛り上がる行動。であればすべき事は迎撃の用意ではない。邪悪なるマッドサイエンティストによって植物の因子を植え付けけられた女が見つめる先は……病院。

「いやぁ、流石は名前隠し殿。迷うことなく「人質確保して時間稼ぎ」を指示するとはね」

「それを言うなら「病院とかならより邪悪感増すんじゃゃね？」とか言い出したお主もワルよのうって話じゃない？」

ギャラクシア・ヒーローズ：カオスにおいてモラルなんてものはドブに捨てるべきものだ。より悪役らしくよりヒーローらしく、その中でもユグドライアは所謂頭のネジがぶっ飛んでいる系のヴィランであり、ある意味では初心者でも扱いやすく、そしてある意味では上級者ではないと扱えない。

ヴィランといっても単なる敵で終わらないからこそ独特の魅力がある。悲しい理由があって悪の道へと堕ちた者、悪の道を歩みながらも確固たる信念を抱く者、ただ己の望むままに暴れる者……ヒーローに正義があるようにヴィランにも揺るぎない行動原理がある。

そんな中でユグドライアはの行動原理はいたってシンプルだ。即ちモラルが欠如した自己中心的思考、自分がハッピーになるためならどんな行動も躊躇わない。

「このゲーム、よくできてるよねぇ……ヴィランが有利に見えるけど後半になるほどヒーローが有利になる」

「自発的に長引かせる腹積もりの俺達にとっては最悪じゃねーか」

「それならそれでやりようはあるのだよカボチャ君、そのための予習でしょ？」

「……顔も名前も割れてる夏目氏に同情するわ」

「それでもあの場に立っている夏目ちゃんを私は賞賛するけどね」

俺やペンシルゴンは問題ないのだ、仮にどんなエグい真似を全世界規模で放送したとしてもバッシングを受けるのは「顔隠し（ノーフェイス）」と「名前隠し（ノーネーム）」なのだから。だが夏目氏は本名も素顔も明らかとなった状態でこれから外道行為をするのだ、所詮はゲームのロールプレイとはいえどもその度胸は同情と賞賛に値する。

「こんなに頑張ってもらって本人はトイレとはねぇ……」

「やはりあのヤローは一度〆るべきでは？」

「シメサバならぬシメカツオ？」

「「あっはっはっ」」

しばらくして知ったのだが、画面の中で突如として始まった凶行を見ながら朗らかに会話するカボチャの傭兵と亡国の女騎士は、それはもう大層不気味がられていたらしい。

き、強キャラ感が出てよかったんじゃない？　うん。

光る変態、笑う外道、足掻く先鋒

『ほ、ほぉーら！　私のために盾になって頂戴ーっ！』

『オイオイ、役作りにしたってやり過ぎじゃあねぇか……！？』

画面の中で、ユグドライアが老人と幼子を触手で絡め取って盾代わりにＤｒ．サンダルフォンの前へ構える。

バベルとやらは外部からの視聴にまでは対応していないらしく、日本人向けのモードで表示されている大画面モニターにはルーカスの台詞がリアルタイムで字幕として表示されている。いやそれでも凄くないか？

「まだ恥じらいが感じられる、６０点」

「幼子と老人を人質にしてるのはグッド、７５点」

『あ、あのー……』

現在進行形で時間稼ぎを試みている夏目氏を俺が発言面から辛口評価し、ペンシルゴンが行動面から高評価をしていると、恐る恐ると言った様子で実況の……笹かまナイト？　さんだったかが話しかけてくる。

『その、お話聞いてもいいですかー？』

「え？　あー……」

「どうぞどうぞ！　謎の助っ人（美しい方）が知ってることとならなんでも答えちゃうよー！」

ここまでブレないとそろそろ素直に尊敬したくなるな。俺へと向けられたマイクをひったくるように自分の方へと向けてペンシルゴンが朗らかに応える。

とは言っても、俺もペンシルゴンもボイスチェンジャーをオンにしているのでその声はなんとも形容しがたいものではあるのだが。

『えーと、それでは……夏目選手はどうしてあのような、その、凶悪なプレイングを？』

「ふふふ、それはですねー……我々はこのプレイングこそがギャラクシア・ヒーローズ：カオスにおける正しい戦法であると確信しているからなのです！」

『と、言いますと？』

「このゲームではゲージ……所謂格ゲーにおける必殺技ゲージがあるわけですが、別にそれはただ単純な殴る蹴るやその逆だけで貯まるわけでは――」

もはやどっちが司会進行が分からなくなるような舌の回転ぶりを見せつけてペンシルゴンが話している間、手持ち無沙汰になった俺はコスプレ用のヘルメットに仕込まれたギミックを動かして遊ぶことにする。

いや、夏目氏とルーカスの対戦はちゃんと見ているが、それはそれとして手持ち無沙汰なのだ。

このカボチャヘルメット、妙に凝った作りで首筋のボタンを押すこ

とで顔部分のマスクがスライドする。と言っても所謂顔のほとんどを覆う上部分は物理的に固定されており、動くのは鼻から下の口部分だけだ。
多分元ネタのキャラ設定とか色々あるのだろうが、俺からすると「あ、ヘルメットつけたままでも物が食えるんだ」程度の感想しか抱けない。

カシャンカシャン、カシャッ、ピカーッ！

「んふぅっ！！」

口部分を開いたり閉じたりしていたのだが、手が滑って隣にあるボタン……ヘルメットの各部分に仕込まれたライトの電源ボタンを押してしまった。恐らく傍目から見れば口を開け閉めしていたカボチャがいきなり光りだすという珍妙な光景を見ただろう。
そして今、それを直視したやつが笑いをこらえきれなかったようで思い切り吹き出していた。一体誰が……

「フ、く、フフフフ……」

お前かよ。
顔をうつむかせ、ぷるぷると震えるシルヴィア・ゴールドバーグの姿に若干呆れつつ………ふと、魔が差した。

ゴソゴソ（ホルスターに無理やり突っ込んでいたエナドリを取り出す）

プシュッ（開封）

ぢゅー……（ストローを挿してエナドリをキメる）

ピカーッ！（発光）

「ぷひゅっ！！」

「…ぶはっ？！」

今度は黒マッチョも釣れた。白マッチョの方は誰かを探しているのか、しきりに観客席の方に首を傾けているので残念ながら引っ掛ける事は出来なかった。もはや痙攣に近い震え方をしているシルヴィア・ゴールドバーグや、隠すことなく笑っている黒マッチョ……えーと、確か「妻帯者（ジョンソン）」だったか。

これも一種の盤外戦術と言えるだろうか、いや笑わせたところでだからどうなんだという話なんだが……げ、カメラが近づいてきた。これ何か言わないと駄目かな。

「………よく効くよ」

仕方ないのでエナドリのラベルを見せるように構えてガッツポーズしておいた。

「なーにやってんのさ」

「売り上げへの貢献？　早いところ日本でも売って欲しいし」

「あーはいはい……ほら、状況が動いたよ」

「あ、ほんとだ」

見上げた先、そこには人質を奪取され防戦に追い込まれたユグドライアと、人質盾を取り除いたことで遠慮なく攻勢に転じたＤｒ・サンダルフォンの様子が映し出されていた。

「ラウンド取られそうかな？」

「どうだろう、さっき人質を解放するのに向こうがゲージを切ったからね。夏目ちゃん的にゲージを持ち越すかここでゲージ切っちゃうか、ってところじゃない？」

難しいところだ。まだ最初のラウンドでゲージを吐き出してしまえば当然次のラウンド以降で不利になることは確定だ。だがラウンド先取、というアドバンテージには無理をしてでも獲得する価値はある。

俺であれば迷うことなくラウンドを取りにかかるが、ペンシルゴンであれば恐らくゲージを温存する。そしてカッツォのスタイルと似た夏目氏であれば……

「ゲージを切ったか」

「次のラウンドで粘れば３ラウンド目に勝ち目が見えてくるからねぇ、ただどうだろうね……」

大地を砕き、哀れな犠牲者を絡め取る荊棘がＤｒ・サンダルフォンの体力を大幅に削る。そしてそのままコンボを入れ……ノックアウト。１ラウンド目は夏目氏の先取という形で決着。数秒のロードを挟んで２ラウンド目が開始される。

「正直キツくね？」

「だよねー……私だったら最初のラウンドを渡して2、3ラウンドを奪取したかな」

人質を奪い取ったのもそうだが、時間が経つほどにルーカスは夏目氏の動きに対応しているようにも見えた。人質作戦自体が有効であっても、それをする本人の動きを読まれたのでは有利不利は逆転する。

そして最大の問題として、夏目氏には恥じらい以前に躊躇いが見上げるのだ。そりゃあ確かにNPCとはいえ人間を平気な顔で肉盾に出来る奴というのは少数派だろう。別にそれに躊躇いがあることを責めるわけではないが、中途半端を見逃すほど甘い相手ではないだろう。

『ああーっ！　再び人質作戦を行った夏目選手、背後から奇襲を食らったーっ！』

「やばいなー……さっきのラウンドで中途半端にゲージを与えちゃったから、ゲージ溜め無視で不意打ちとか使われてるねこれ」

「それに互いのスポーン場所が近いのも運が悪い、やっぱ乱数は悪だよ悪」

背後からの不意打ちによって人質を手放してしまい、そこからはもうサンドバックだ。ただ圧倒されるのではなく反撃もしているが、素人目に見てもどちらが有利かと言われれば殆どの回答者が同じ人物を選ぶだろう。

「あ、逃げた」

「律儀というか真面目というか……時間稼ぎしようとしてるね」

今笹かまぼこさんはスターレインの方へとインタビューに向かっている。マイクに音を拾われる心配のない俺たちは遠慮なく言葉を交わしながらズルズルと路地裏に設置技である種子を仕込みながら逃げるユグドライアを見つめる。

その情けない様子に観客席からはブーイングが出たりもしているが……何、気にすることはない。最終的に勝利すれば全てのバッシングは負け犬の遠吠えとなんら変わりないんだ。

「このラウンドの勝利は捨てたみたいだね、ゲージ稼ぎに回った」

「うわぁ、パトカーが宙を舞ってる」

ヴィラニックゲージはヴィラン的行動で増加する。それはヒーローと戦うことであり、無辜の一般人を脅かすことでもゲージは増える。街並みを破壊する、というのもゲージ稼ぎに該当する行為であり、最終的に追いついてきたＤｒ．サンダルフォンによって体力を削りきられるまでユグドライアは暴れ続けたのだった。

「やっぱこれ、キャラクターごとに別々のゲージ上昇条件が設定されてるっぽいね」

スターレインのメンバーの得意キャラの殆どがヒーローキャラであったことから、必然的に俺達はヴィランキャラの練習ばかりしていたのでそれに気づくことができた。

例えばユグドライアであればただシンプルに建物を破壊するよりもＮＰＣに直接被害を与える方がゲージが溜まりやすい。さらに言えばただ危害を加えるのではなく自分の保身のために身代わりにする、肉盾にするなどの行動である方がよりゲージが溜まる。さらにさら

に言えば非力なＮＰＣをネチネチ虐めるとゲージは……これを好んで使うやついるんだろうか？　すぐ隣にいたわ。

「キャラ性能のために卑劣な行為を許容するかどうか……別の意味で人を選ぶキャラばっかだな」

「忠実再現も考えものだね、そのうち緩和されるんじゃない？」

これが武人キャラのヴィランであれば正々堂々ヒーローに喧嘩を売ればいいが、ユグドライアのような卑劣を良しとするキャラは色々と問題点が多そうだ。

「さぁ、最終ラウンドだよ。夏目ちゃんはどこまで頑張ってくれるかな？」

「楽しそうっすね」

「私は私の指示で誰かが動くのを見るのが大好きなのだよ」

「生粋のパシらせ屋かよ……」

光る変態、笑う外道、足掻く先鋒（後書き）

頑張れ夏目ちゃん、ヒロインちゃんと似たオーラが漂い始めてるけど頑張れ！！

悪辣は陰に潜み平穏を嗤う（前書き）

予告と言いますか予報と言いますか、十二月の間は更新が滞る可能性が極めて高くなったことをあらかじめお知らせしておきます。
具体的に言うとゼノでブレイドな2がですね（目そらし）

総合計二十四分と四秒、それが夏目氏が全力で稼ぎ出した時間の全てだ。

「面目次第もないわ……」

「いやいや、正直3ラウンド目はあそこでゲージ技食らった時点で詰んだと思ってたからあそこで立て直したのはすごいと思う」

「うんうん、途中でケイオースキューブ確保を匂わせて不意打ちを仕掛けるところとか私も驚いちゃったよ」

結果だけ言えば夏目氏は負けた。意表を衝く事は何度も成功していたのだが、ルーカスの対応力があまりにも高すぎた。結局のところユグドライアはケイオースキューブまであと五メートル、というところでＤｒ．サンダルフォンによって鎮圧されてしまったのだった。

「いやむしろあそこで夏目氏の行動を看破したあっちが化け物なんだよなぁ」

途中まではうまいこと陽動に引っかかっていたというのに、突然ルーカスはそれらを看破し夏目氏へと追いついてみせたのだ。夏目氏からすれば何が何やらと言った様子で今も疑問符を浮かべている。

「夏目ちゃんあれだよ、報道ヘリに追っかけられてるのを忘れてたでしょ」

「…………あ」

「現在進行形でヴィランから攻撃を受けているのに報道ヘリは自分からどんどん離れて行ってるのに向こうが気付いちゃったんだよ」

「そっ、か……」

これに関しては正直夏目氏はそこまで悪いとは思わない、そもそもこのギャラクシア・ヒーローズ：カオスは従来の格ゲーと比べてあまりにも情報量が多すぎるのだ。
ＮＰＣという目が、耳が、そして口があるために逃亡という行為自体の難易度が高く、かと言ってそれにばかり気を取られていては対戦相手に攻撃を差し込まれる。言うなれば戦いながら周囲の、ＮＰＣの変化をシミュレートしなければならない。

そして時代設定が現代であるが故に、ＮＰＣ間での情報伝達が異様に早い。そこらのＮＰＣに話を聞けば町の正反対で暴れるヴィランがどこに向かったのかすら分かるのだから、ヴィランキャラで戦う場合はそれらも含めた立ち回りが要求される。

「………プロゲーマーなのに一勝もできなかった私が言う資格はないかもしれないけれど、後をお願い……します」

「んふふ、敬語なんていらないよ。おねーさんにドーン！　と任せなさい」

「そうとも、少なくともユニーク自発できないマンに頼まれるよりはよっぽど承諾できる頼みだしな」

なんというか、カッツォの野郎一回酷い目に遭えとしか言いようが

ない。自分の評価が下がるのを覚悟でここまでやってもらえるなんてそうそうない事だぜ。これは打ち上げで何を食うか合戦に第三勢力夏目氏を加える必要があるかもしれない。

「さて、と……それじゃあこの「名前隠し（ノーネーム）」さんが全世界にこのゲームにおけるヴィランプレイとはなんたるかをお見せしてあげるとしよう！」

「程々になー」

勝ち抜き戦故、スターレインは引き続きルーカスがフルダイブし、こちらは次鋒たるペンシルゴン……もとい、名前隠し（ノーネーム）の出陣だ。シルヴィア・ゴールドバーグが予想外の三番手として出てきた事でこちらの予定は大きく狂い、さらに言えば夏目氏が初戦負けしてしまったために崖っぷちではあるが……ペンシルゴンが二勝し、シルヴィア・ゴールドバーグ相手にフルタイム持ち堪え、そして俺も同じく持ち堪えたならギリギリ帳尻合わせが間に合う。

それがどれほど無理難題かは言うまでもない、そしてペンシルゴンにかかる負担がどれほどであるかも。
だが世の大部分の人々は知らないのだ、ペンシルゴンが……いや、かつて鉛筆戦士と呼ばれた奴を「箱庭」で戦わせる事が一体どう言う事なのかを。

「天音……じゃない、名前隠し（ノーネーム）さんは……大丈夫、かな」

「ノープロブレム、確かに格ゲーの実力はぶっちゃけあいつは弱い。多分普通のコロシアム型格ゲーなら夏目氏も余裕で連勝できるくらい弱い」

「じゃあ……！？」

「だけどな、こと奴に自由度というものを与えるとだな………」

地獄だって自分色に整地する、奴はそういうゲーマーだ。

『さぁ第二試合、ルーカス選手は引き続きＤｒ．サンダルフォンですが謎の仮面プレイヤーこと名前隠し（ノーネーム）選手の選ぶキャラクターは……』

『クロックファイア、ですね。ユグドライアと同じ設置技をメインとするキャラクターですが、資料によれば近距離カウンター型のユグドライアとは異なり、能動的に動き回るアタッカータイプのキャラですね』

Ｄｒ．サンダルフォンが登場するコミックは「Ｄｒ．サンダルフォン」であり、クロックファイアは別作品に登場するヴィランだ。であれば当初のロールプレイ時間稼ぎの目的からは外れているのではないか、んなこたぁない。

こと鉛筆戦士（ペンシルゴン）に限ってはストーリー的な繋がりよりも自身の悪辣さを十全に発揮できるキャラクターこそがベストアンサー、その点においてクロックファイアというキャラクターは正直奴のために作られたのではと疑うレベルで奴と相性が良かった。

いや、良すぎた。

「さーてさーて、日本人らしくおもてなししてあげなきゃねぇ……」

紺色の燕尾服にシルクハット、左眼には生物的なものではない紅玉の義眼が輝く奇妙な格好の女性。それこそがギャラクシア・コミックが一つ「ハイドロハンド」に登場するヴィラン「クロックファイア」である。

「んー、とりあえず……よしよし、そこのお嬢ちゃーんお母さんはどうしたのかなー？」

クロックファイアは左瞼を閉じて義眼を隠しつつ、にこやかな笑みを浮かべてベンチでアイスクリームを舐めている少女(NPC)へと話しかける。

「ママならあそこでお友達とお話ししてるよ？」

「そっかそっか、綺麗なママだねぇ。アイス美味しい？　何味？」

「栗きんとん味！」

「渋いなおい……ごほんっ。じゃなくて、そんな可愛らしい君にこれをプレゼントしよう」

ニコニコと、悪意のかけらも感じさせない笑みを浮かべた燕尾服の邪悪(ヴィラン)はワンピースを着た少女の腹にぺたりと、可愛らしい熊のぬいぐるみを貼り付ける。

それは一体どういう原理なのか、ベルトで固定されてもいないというのに少女のお腹へと張り付き、不思議そうな顔で少女がぬいぐる

みを引っ張っても離れる様子はない。

「熊さん？」

「熊さんは君のことが気に入ったんだって、大切にしてあげてね？」

「……？　うんっ」

「じゃあ私はちょっと君のママとお話ししなきゃいけないからさ、引き続きアイスを食べててねー」

まるで踊るかのように軽やかな足取りでクロックファイアは少女が示した母親へと近づきその背中をポンポンと叩く。

「あのお嬢ちゃんのママンだよね？」

「え？　えぇ……」

「唐突で悪いんだけど……ほら、あの子のお腹に熊の人形がくっついてるの分かる？　これと同じものなんだけどぉ……」

さながらマジックのように、いつのまにか少女に押し付けたものと同一品を取り出していたクロックファイアはそれを無造作に道路へと放り投げる。

てん、てんと間抜けな音を立てて跳ね転がっていったそれは車道の中央にまで到達し、ブレーキをかけることなく走行していた車のタイヤに踏み潰されたところで……爆ぜた。

「端的に言おっかママン、ちょーっと私の為に働いてくれないかな

ぁ？」
横転する車、人間を舐めとる灼熱の炎。爆炎はアスファルトを抉り、砕け散ったアスファルトの欠片が通行人に襲いかかる。瞬く間に平穏が恐慌へと塗り替えられ、人々の悲鳴がいくつも響く中、クロックファイア……名前隠し（ノーネーム）はまるで世間話でもするかのような気軽さで、目を見開いて凍りついた女性の肩を叩く。
「報酬はあの子の身の安全、そう難しいことじゃないんだもの……断らない、よね？」
ヒーローはまだ来ない。
唖然、呆然、愕然。流れるようにさも当たり前のようにＮＰＣを脅迫したクロックファイアの手並みに、実況解説すらも絶句している。分かるよその気持ち、ゲームだとしてもそこまで吹っ切れるとは思わないよな。俺もペンシルゴンと会ったばかりの頃はそう思ってた。
「自作の爆弾で平穏が破壊されるのが大好きな快楽第一のサイコボマー……設定と中身のシナジーが高すぎるんだよなぁ」

『あ、その、えと……は、果たしてルーカス選手は、どう打開する……でしょうか……ひぇ』

かろうじて実況を試みる笹かまぼこさんであったが、流れるような動作でタクシーの運転手を脅迫し始めたペンシルゴンにフォローが追いついていない。

「あれが世の少女達の憧れ、だなんて……」

「世の中って残酷よな、分かるよ」

任意、もしくは衝撃が加わることで起動する最大二十個設置可能なクロックファイアの人形爆弾。その威力はプレイヤーキャラであればそこまで痛手でもないが、オブジェクトやＮＰＣに対しては原作準拠と言うべき火力を発揮する。

「年齢制限をつけるべきだったかもな」

ＮＰＣ少女に一つ、タクシー運転手に十四個、さて残り五個はどこでしょうか？

『ああっ、Ｄｒ．サンダルフォンに母親がしがみついて……爆発したぁ！？　ああぁあっ！？　タクシーが！　タクシーが突っ込んで……っ！　やっぱり爆破したぁぁ！？』

『いっそ清々しいレベルでＮＰＣを使い潰してますね……うわ凄い、もうヴィラニックゲージが半分も』

娘を人質に透明化したカメレオン人形(爆弾)を貼り付けた母親をしがみつ

かせ、相手が吹っ飛んだところを「家族が大事ならここで死ぬわけにはいかないよね？　だったらちょっとアクセルを踏むだけでいいからさ」と運転手を脅したタクシーで撥ね飛ばして、当然の如く衝突の瞬間に起爆。
合計十九の爆発でＤｒ．サンダルフォンが派手に転がる中、本人は別のタクシーで優雅に戦線離脱という、完全に別ゲーをやっているかのような凶行に、もはやブーイングを通り越して悲鳴が聞こえてくる。
「あれって設置した順に起爆するからどうあがいても最初の女の子も吹っ飛んでるんだよな」
「鬼か悪魔なんじゃないのあの人……」
「ははは、豆や十字架でなんとかできるなら苦労しねーよ」
ギャラクシア・ヒーローズ：カオスは単なる格ゲーではない。何故１ラウンドが十分もあるのか、何故コロシアム型のバトルフィールドではなくシティ型なのか、何故ＮＰＣがいるのか……ペンシルゴン先生の特別授業が始まるぞ。

悪辣は陰に潜み平穏を嗤う（後書き）

分かる人は既になんとなく察してるかもしれませんが、この名前隠し（ノーネーム）とかいう奴、格ゲーの大会でウォッチドッグスやってるんすよ

すまぬ夏目ちゃん……尺とか描写のアレとか色々詰まってるので君の描写はまるっとカットです……！

ユザーパードラゴン「涙拭けよ」

「このゲーム、ＮＰＣありだと単なる賑やかし以上に厄介な存在だからな……」

技術の進歩がリアリティを脅威にまで引き上げた、とでも言うべきか。

撒き散らされるファンシーな人形、飛び散る爆炎、阿鼻叫喚にペンシルゴンの笑い声だけが異様に響く。哀れなる一般市民達、頼るべき警察も等しく爆破されるのなら、最後に頼るべきはヒーローしか存在しない。

助けてヒーロー、助けてお医者様、貴方なら助けてくれると聞いたから。

もはやそれは人ではなく、ヒーローの動きを押し留める肉の津波。

ヴィランであれば遠慮も容赦も慈悲もなくそれらを薙ぎ払い、踏み躙ることができる。だがヒーローではそれができない。できたとしてもそれは英雄的（ヒロイック）ではない。

だから止まってしまう、迷ってしまう、見逃してしまう。

助けを求める声の中に「これを取って」という声があることを。

『きゃぁぁ！』

笹かまさんの悲鳴がマイクを通して大音量で響く。画面の中では助けを求める者達の中に仕込まれた爆弾付きのＮＰＣが起爆し、人々を諸共にＤｒ．サンダルフォンが宙を舞う。

『っはぁー……確かにこれは格ゲーではないですね……どちらかといえばシミュレーションゲーム、でしょうか』

だからこそ鬼が笑う、悪魔が笑う。そんな悪鬼羅刹共が真顔になるような所業を成してペンシルゴンが笑うのだ。

観客席からＤｒ．サンダルフォンへ「気づいて！」と悲鳴混じりのコールが放たれるが、その訴えが届くことはない。ルーカスが攻撃できない無双ゲーをしている最中、既にカメラマンとレポーターに降りて貰ったヘリの中、パイロットに爆弾を貼り付けたペンシルゴンが優雅に空中から全てを見下ろしていることに気付けるのは第三者たる俺達だけなのだ。

「昨日からずーっとあいつに付き合ってヘリの通る軌道とか検証してたからなぁ……」

脅迫だけの一辺倒と侮るなかれと言わんばかりに、ＮＰＣを翻弄し誘導する手口は悪辣この上なく、先の試合におけるユグドライアの凶行などこの私に比べれば児戯に等しいと実践を以て証明する外道。面と名前が割れなければ奴は割と無敵だ、限りなく人に近く、それでいて決定的なところでＮＰＣだからこそ御し易い。そうのたまいあまつさえ実行できる辺り、ほんともうこれ全世界に流していいんだろうか。

「あーあーラスボススイッチ入っちゃってまぁ」

ヘリコプターの中で呵々大笑という言葉がしっくり来るような高笑いを披露するクロックファイア。にこやかにパイロットへと手を振りヘリから飛び降りて数秒後、当然の如くヘリのコクピットが爆発し、金属の塊が煙と炎を吐き散らしながら墜ちていく。

もはやテロを通り越してハザードになりつつあるケイオースシティの中、なんとかＮＰＣ爆破から脱出したＤｒ．サンダルフォンはビルの屋上からにこやかに手を振るクロックファイアを目撃する。

『ルーカス選手、ビルに突入しました！対する名前隠し（ノーネーム）選手は迎え撃……たない！　ああっ！　エレベーターで！　エレベーターで普通に降りていきます！』

『傍目から見ていると階段を登っているルーカス選手がなんとも滑稽ですね……』

完全に弄ばれているスケコマシ殿にはいっそ哀れみすらも覚えるが、自身の建てた作戦を有言実行と言わんばかりに着々と制限時間を消費していくペンシルゴン。
そして屋上まで登りきったＤｒ．サンダルフォンへの報酬は、ビルを降りきって地面から屋上へと手を振るクロックファイアの無茶苦茶腹立つ煽り。流石にここまで虚仮にされて冷静な判断を出来る者はそうそういないだろう。仮に冷静さを保っていても、思考にノイズが走る。
最短距離で追い詰める事を優先するあまり、行動に油断の穴が穿たれるのだ。そしてそれを見逃すほど奴は優しくはない。

「タイムは九分四十三秒……有言実行に相応しい稼ぎっぷりだな」

このゲームでは落下ダメージが存在しない。ちょこまかと逃げ回るクロックファイアを追い詰めるため、不用意に屋上から飛び降りたＤｒ．サンダルフォンを出迎えたのは「カマーン！」と手を振るクロックファイア、そして燕尾服の狂人が巧妙に背後へと隠していた彼女と瓜二つの形をしたデコイ爆弾（ゲージ技）。
あとは簡単な算数の問題だ。１００と２０、両方の数字から３０を

引き算したなら先に0になるのはどちらか。

「な？」

「いや、な？　って言われても……」

ある程度自由行動できるNPCが絡むと奴のウザさは数倍に跳ね上がる、強さじゃなくてウザさなところがミソなのだ。
ただ単純に強くなったのであれば対処は容易い、敵がやることと出来ることの想定を引き上げればいい。だがウザさが倍増すると話は全く別の問題にシフトする。
先程のルーカスのように、本来であれば設置技を多く持つクロックファイアがいる場所へ、行動を大きく制限される落下という方法で近づく事は愚の骨頂、冷静に考えれば本体を囮とした待ち伏せというとにも気づいただろう。
だがNPCを隠れ蓑とした徹底的な嫌がらせの数々、行動の数々が徒労となるストレス、なにより腹の立つ煽り。それらが組み合わさる事で生まれる軽率な行動、誤差範囲の油断。奴はその隙間を見逃さない、気づいた時には首筋に刃が突きつけられている。

「なんつーか、ゲームスタイルが「魔王」なんだよあいつ」

「……言い得て妙ね」

数々の困難を課し、それらを一つ一つクリアしてようやくボスへ挑むことが許される。まさしく古き良きRPG、弱点は部屋の隅に追い詰めて袋叩きだ。

「さて、ここからが奴の本領発揮だぞ」

「まだ本領じゃなかったの！？」

『まだ本領じゃなかったんですか！？』

げっ、笹かまさんがマイク持ってこっち来てたのか。どうしよう、ここ本来は「時間稼ぎのためにより劇的に負けを演出するからな」って言うつもりだったのにさすがにそれを全世界規模で配信するわけにもいかないし、というかカメラこっち向けないでほしいというか、ああくそ。

「えー、あー……まぁ、見ての通りですがあいつは、あー、効率を放棄して演出のため効率を優先させると言いますか……ごほん、まぁアレですね、一回あいつが作った舞台に上がったら途中退場するのは難しいと思いますよ、うん」

や、やめろ！　そんな目で見るな夏目氏！　「あ、この人大勢の前で喋るの苦手なんだ」って目で語るんじゃない、いやその通りでございまするが！

いや落ち着け落ち着け、ロールプレイだロールプレイ。カボチャ傭兵はシニカルでクールな顔隠し(ノーフェイス)、たかだか数万人に注目されてる程度で心掻き乱れたりはしない、はず！

「というか、そもそもこのゲーム明らかに直接戦闘を想定のメインにしてないヴィランキャラクターが割と多いんですよね、うん。流石にあそこまで酷いのを推奨してるわけじゃないとは思いますが、あー……裏工作を想定してる感じですかね？」

『と、言いますと？』

頼む代わってくれと夏目氏にテレパシーを送った！　あからさまに

無視された。畜生！！

「ヴィランは町に被害を出す事でゲージを溜めますが、後半になる程ゲージを溜めにくくなる……ます。そして逆に、ヒーローは後半になる程、ヴィランが作った「被害」を解決しやすくなるので、ゲージが貯めやすくなります」

言うなればヴィランは鉛筆でヒーローは消しゴム、そしてステージは白紙のノートだ。序盤は白紙のノートにヴィランは好きなように書き込むことが出来るし、ヒーローはヴィランがノートを汚すまで待たなければならない。ヒーローはヴィランがいないと成立しない、ってのを上手いことシステムに落とし込めていると思う。

だがノートというものはいつか書き込むスペースがなくなる、そして鉛筆による汚れが多いほど消しゴムが活躍する。これが所謂「序盤はヴィラン有利、後半はヒーロー有利」の簡単な原理説明だ。

これは一見ヴィランが有利にも見えるが、実際ヴィラン視点からすると結構厄介な問題点が多い。

元来ヒーローにとってヴィランとは「倒すべき悪であり自身の存在理由」である。敵を倒す事こそがヒーローの役目、存在意義だ。

だがヴィランにとってヒーローとは「目的達成の途中に現れた邪魔要素」でしかない。最終的にヒーロー打倒が生きがいになるヴィランもいるにはいるが、基本的にヒーローとの相対は寄り道でしかない。よからぬことを企んで達成することがヴィランの本質だ。

そしてアメコミを限りなく忠実にゲーム化したこの作品でもその法則は適用されている。つまり「ヒーローとヴィランの直接衝突」という状況はヴィランにとっては旨味が少ないのだ。

ヒーローは困っている人を助け、ヴィランを倒すべく戦う事でヒロイックゲージが上がるのだが、ヴィランはヒーローと戦闘してもそ

こまでヴィラニックゲージが上がらない。
ヴィランはヒーローが来るまでに可能な限りゲージを稼ぐ事で初めてフェアな状況に持ち込める、逆に言えばゲージを稼げないと時間が経つほどにヒーローが有利になる。

「……つまり、ヴィランは可能な限り「ヒーローに見つからない」行動を取る、これがヴィランキャラのベターです。あの、ウサギとカメってあるじゃないですか、童話の。アレみたいなもんです」

『なるほど……つまり、ヴィランがカメでヒーローがウサギということですね。ウサギが動き出すまでにカメはどれだけ距離を稼げるのか、カメも死に物狂いで走らなければウサギに追いつかれ、追い越されてしまう、と』

「そういうこと……デス」

笹かまさんが離れていき、カメラも離れたところで俺は息を大きく吐き出す。こういう演説はカッツォやペンシルゴンの領分なんだよなぁ、俺はこう……何も考えずに突撃するのが性に合ってる。いやだから鉄砲玉とか煽られるのか、畜生。

それに容易くゲージを稼いでいるように見えるが、実はペンシルゴンのアレは結構ギリギリの曲芸だったりする。
ペンシルゴンの誘導術で意のままに状況が動いているように見えるが、アレの攻略法は結構簡単なのだ。

『さぁ2ラウンドが始まりました……あぁっと！　ルーカス選手これはーっ！』

流石に見抜いて来るか。
画面の先、そこには助けを求めるＮＰＣをガン無視し、時に払い除けてクロックファイアを探すＤｒ．サンダルフォンの姿があった。

外道劇場にて踊れや踊れ（後書き）

ちなみに街の被害などはラウンド持ち越しされます、なので余裕そうに見えますがペンシルゴンは結構カツカツな戦いだったり。

クロックファイア先生「よいこのみんな！　残弾（NPC）は大切にしようね！」

・コミック「ハイドロハンズ」

ギャラクシア・コミックにおける「だいたいこいつのせい」ことギャラクセウスさんによって水を操る力を得た消防士アクオスがヒーロー「ハイドロハンズ」として活躍する物語。

主なヴィランは平穏を破壊することに快楽を見出すサイコボマー「クロックファイア」や、様々な兵器の「実演テスト」と称して街中でミサイルをぶっ放す死の商人「ショーウィンドウ」など。

人命救助とヴィラン退治のどちらを優先すべきかで葛藤するアクオスの描写や、他コミックと比較しても頭のネジが吹き飛んだヴィラン達などで評価の高い作品。

裏の裏の裏の裏をかく（前書き）

唐揚げが古戦場でインディちゃんに清き一票をお願いするウルムンに備えてヌル厳選で僕はシヴァもセスランスもザオシェンも持ってるのにアグニスが無いので悲しみの鰹編成でシルヴァ砲はレモンをかけないので多分明日は更新できないです、申し訳ありません。

通信交換されれば腕が四本になったりしませんかね……

裏の裏の裏の裏をかく

「はー流石はプロゲーマー様だねぇ、困った困った」

クロックファイアの「お人形」は任意起爆のためには視界内、厳密には「左眼の義眼の視界内」に爆弾が存在していなければならない。1ラウンド目のようにヘリという最高クラスの足があればそう大したデメリットではなくなるのだが、今のようなラウンド開始直後であるとある弱点が浮き彫りになる。

簡単な話だ、移動すらままならない始まってすぐの状況であるならば爆発するということは近くにいるということなのだ。であればクロックファイアの対策は実に簡単であり、爆弾を無視して本体を捕捉する、ただそれだけだ。

「はっはぁー！　見つけたぜ女騎士（レディー）！！」

「あら、がっつく男は嫌われるわよ？」

「ワイルドな男の方がモテるんだぜ」

もはや動く爆弾（アクティブボム）としての価値はない。であれば手持ちの設置可能数を回復させるべく使い切るべき、そして女絡みの噂が絶えないこの男はその隙を見逃すほど甘いプレイヤーではないだろう。

「私はごめん……だね！」

Ｄｒ．サンダルフォンの背後、逃げ惑うＮＰＣの何人かが爆ぜる。

それを合図に、対峙は衝突へと移行した。

（ちょっ、速すぎ……っ）

「さっきのラウンドの礼代わりだ、チップと一緒に受け取ってくれよな！」

「結構だ、よ！」

設置可能数八、既設置数十二。

任意起爆は使えない、であれば己の体力を担保に距離を取る。

Ｄｒ．サンダルフォンは超能力を操る近接格闘タイプ、その代名詞たる技は拳に念動力を纏わせることでパンチの威力を上げるサイコフィストだ。具体的には連打力は若干かけるが二段ヒットする。

クロックファイアの左眼に埋め込まれた義眼の力で犬の人形を生み出し、ペンシルゴンは拳と自身の間にそれを翳（かざ）す。

犬人形がペンシルゴンとルーカスの拳で挟まれ、サイコフィストの衝撃がファンシーな犬の身体をたわませ潰し、そして爆ぜる。

「うっぷ……お腹に電気マッサージのアレつけてるみたい……っ」

起爆、起爆、起爆。かろうじて視界に映るＮＰＣ達を見つめ、さらに三つ起爆する。

「誘爆！　ラッキー！」

設置可能数十三、既設置数七。

小盾（バックラー）のように人形で拳を受け止め、諸共を巻き込む爆風で距離を稼ぐ。

（マズいなぁ……ＮＰＣが散る。まだここらにいる内に全部回収しないと）

「オイオイ、デートの最中に他のやつのことなんて考えるもんじゃあないぜ！　俺だけを見な！」

「プロポーズなら医師免許取ってから言ってよねヤブ医者！」

爆ぜる、吹き飛ぶ、起き上がる。

想定していた迎撃ポイントからの距離は遠く、逃げ惑うＮＰＣ達を逃せば爆弾の数に制限が付いてしまう。

（どうせこのラウンドは負けるつもりだったとはいえ、負け方ってもんがあるわけでぇ……）

このゲームではラウンド移行の際にフィールドの変化も引き継がれる。それはつまり、爆弾が貼り付けられたＮＰＣもそのまま引き継がれるということだ。

（七人、か……体力は六割ちょい、ここらのマップ的にスケコマシを抜かないとあっちには戻れない……）

一瞬視界に映り込んだＮＰＣを見逃さず起爆、幸いにも起爆順の最前列であったらしい。だがこれで視界内に他のＮＰＣは映っていない、ビルとビルの隙間に追い込まれた現状を早急に解決する必要がある。

（サンラク君やカッツォ君なら当身とかガード投げ？　とかで解決するのかもしれないけど、私じゃプロゲーマー相手には無理だよなぁ……よし）

交渉で最も重要な道具は笑顔だ、柔らかな笑みは余裕を演出する。もしや何か策を隠し持っているのでは、そんな疑問は毒となって動きを鈍らせる。それこそがペンシルゴンの、鉛筆戦士の真のメインウェポンなのだ。相手に考えさせること、疑わせること。
どこぞのテンション馬鹿のように自身の在りようを高めてバフをかけるのではなく、どこぞのユニーク自発できないマンのように研究と経験を突き詰めてバフをかけるのでもない……相手に対して話術と状況を用いてデバフを仕掛ける戦法。

「私は後ろを気にする必要がなく、貴方は一直線にしか行動できない……もし作戦通りって言ったらどうする？」

「まっすぐ進むだけさ」

「そりゃ結構！」

必要な情報は聞き出せた、あとは実行あるのみ。にまりと笑みを浮かべ、躊躇いなく前へ飛び出したペンシルゴンにＤｒ．サンダルフォンの身体警戒に強張ってしまう。
口ではどうとだって言える、だからこそ実行された突撃にルーカスは存在しない打開策を警戒する。だからこそ、敵へ突っ込んでそのまま脇をすり抜けて行ったクロックファイアに対戦相手のみならず、観客すらもが数秒フリーズする。

「あっはっはバーーーカ！　女の子を路地裏に連れ込もうなんて三光年速いんだよっ……バーーーーカ！！」

「そりゃ距離じゃねぇか！！」

天音　永遠二十四歳、小学生並みの煽りの後全力疾走である。
このワンシーンだけを切り取れば、これが全世界に放送されている大舞台での出来事とは思えないだろう。だがペンシルゴンとて試合放棄で逃走しているわけではない、元よりか細い勝利へ続く蜘蛛の糸をかろうじて維持しながらよじ登っているのだ。

（まだ二分……あと五分は稼いでおきたいところだけど……っ！）

「待ぁぁてぇぇぇぇ！！」

「私は鬼ごっこより隠れんぼがしたいかなぁ！？」

「させるわけねぇだろうが！！」

（だよねぇ……おっ、二個回収）

設置された爆弾はあと五つ、回収と逃走と時間稼ぎの三つを一つ足りとも漏らさぬためにはどうすれば良いか。
とりあえず無辜の一般人を爆破して人形を回収し、フィナーレの下準備を整えるべくクロックファイアは全力のダッシュを始めた。

「ぶふっ、くく……中指立てなかったことは褒めてもいいんじゃね

……？」

「それを差し引いてもこんな大々的な場所であんな子供みたいな……頭痛くなってきた」

「まぁ、夏目氏のヒールプレイが霞むどころか消し飛んでるから結果オーライってことで」

「…………もしかして、そのためにあんな振る舞いを？」

「いやいや、素だよアレ」

夏目氏が頭を抱えて動かなくなったのを尻目に、俺はヘルメットの下で眉を顰め口をへの字に曲げる。
夏目氏が稼いだ実質三十分にペンシルゴンが今現在稼いだ時間を足して大体四十五分程度。仮にペンシルゴンが今と次の試合も含めて一時間稼ぎ、さらに仮定の話だがシルヴィア・ゴールドバーグ相手に三十分稼いだとして二時間。カッツォのやろーがゴタつかなければ俺達の役目は達成される。
とはいえ何もかも上手くいく世の中ならそもそもこんな状況になっているはずがない、こう言っちゃアレだがペンシルゴンが三試合連続で持ちこたえられるなんてハナから思っちゃいない、そもそもペンシルゴン本人が一番分かっているだろう。

「良くて四十分稼げればいい方か……？」

予想外に、いやある意味では予想の内であるのだがやはりプロゲーマーの対応力は、高い。
本来であればペンシルゴンは徹頭徹尾会敵を回避し続けることが前提なのだ。それに開始してすぐとはいえ三十秒の先行時間があった

ペンシルゴンはそれなりに準備していたというのに、あっという間に見つけられてしまった。

何故格ゲーで鬼ごっこしてるんだと言いたくもなるがクロックファイアは設置ボムが極悪な分、全体的なフィジカルのスペックは低めに設定されている。いつかは追いつかれる以上、この均衡もそう長くは保つまい。

「結局のところペ……名前隠し（ノーネーム）の頑張り次第だからな、俺達にできることは一つしかない」

「ここで祈ること？」

「奴の醜態を笑うこと」

フレーメン反応起こした猫みたいな顔で俺を見てくる夏目氏は無視。さてさてペンシルゴンよ、せいぜい暇を持て余している俺達を興じさせるがよいぞ、ふはははは！！

あっ、カメラさんこっちにレンズ向けないで！　緊張するから！

裏の裏の裏の裏をかく（後書き）

夏目ちゃんが顔芸要員になりつつある……

実のところ、武道の試合よろしく同じ条件かつ一対一で相対した場合、ペンシルゴンというゲーマーは弱い部類である。
それを外付けのバフやデバフなどで補強することでシャングリラ・フロンティアにおいて廃人殺し（ジャイアントキリング）と呼ばれる程のスコアを作り上げたのだ。だがペンシルゴンのゲームスタイルには、純粋な実力差で負ける以外に明確な天敵が二種類存在する。

一つはサンラクのようなスペックの暴力で強行突破してくるタイプ。
これは最早対人ではなく対モンスターのようなもので、対人のセオリーを想定外の方法で突破してくる手合いだ。
こう言ったタイプは最終的に手札を全て叩きつけるポーカータイプであり、出し惜しめば競り負ける。状況が揃い次第即仕留める速効性が特に効く。

そしてもう一つがカッツォ……魚臣　慧のような経験則と行動予測から理詰めでくるタイプ。逆にこちらは手札を晒せば晒す程不利になる、何故ならばこの手合いは晒した手札から「次」を割り出してくる。いわば晒した3から残りの7の手札を把握せんとする大富豪タイプだ。
これは直感型とは真反対の対策、すなわち極力手の内を晒さずに最後の最後で温存した刃を刺す必要がある。

つまるところ、この2ラウンド目でクロックファイア（ペンシルゴン）が選ぶべき最適解は極めて遅延した劇的な自殺である。

「随分と登ってくるのが遅かったねぇ、お医者様は階段は苦手だったかしら？」

「不思議なことに……エレベーターが爆破されて使えなかったんでな……！　だが、追い詰めたぜ？」

「追い詰めた？　ノンノン！　貴方は私に招待されたのよ！」

残り体力比おおよそ7：1、華麗なる爆弾魔の体力は既に風前の灯であり、だがそれでも蓄積した情報と回収した人形(爆弾)は本人にだけ最終的な勝利の予感を齎していた。

「さてさて、いよいよクロックファイアちゃん監督による三部構成劇は最終章を迎えんとしております」

まるで踊るように歌うように、ビルの縁でクルクルと回り、上を真横を真下を正面を、あたかも単なる漫画のキャラクターが透明な壁のその先を知っているかのように、視線を向ける。

「大詰めのクライマックスに移行するため、ワタクシめはこれにて一度退場とさせていただきます。それでは一分ほど後に……あらやだ強引？」

「追いかけっこはお終いだ……！！」

「ざーんねーんでーしたぁー！　貴方の拳じゃ死にませーん！」

「マジかよ……っ！？」

地面に叩きつけられた猫の人形がクロックファイアによって踏みつ

けられる、ぐしゃりと踏み歪められたファンシーな猫の顔が内側から膨張し、爆ぜた。爆風はＤｒ．サンダルフォンの身体を後ろへと押し込み、そして爆炎はクロックファイアの体力を削りきり、ラウンドの決着が告げられた。

「自爆かよ……勝った気がしねぇ……」

敗北したキャラクターは数秒の後、砕けるように消えていく。屋上から転落し、身体を砕け散らせながら落ちていく爆弾魔の姿にルーカスは苦々しい表情を隠そうともしない。
状況はラウンドを取り返した五分と五分であるはずだ、だというのにこれまで何度も感じてきた勝利の味がしない。
まるで彼女の言う通り、何もかもが誰かの筋書き通りのシナリオに沿っているかのような。

（いや……仮にそうだとしても奴のプレイスタイルは割れた、もうトリックプレイは通用しやしねぇ）

ＮＰＣをアクティブボムにする戦法には驚かされたがクロックファイアの性能上付近に潜伏していることは確実なのだ、対策は容易い。どう出てきたところで、何もさせずに追い詰めればいいだけだ。本人のバトルセンスはそこまで高くはなく、所詮は初見殺しに特化した数合わせ……それがルーカスの出した結論だった。

そう、それだけのプレイヤーであるのなら。

与えられた三十秒。クライマックスは騒々しく、派手に。

「さぁさ遠からん者は音に聞け、近くば寄って目にも見よ。クロックファイアさんによるスペシャルパレードの始まり始まり……ってね」

1、2ラウンドの全てはこの3ラウンド目のための下調べと前準備でしかない。毎回異なる形となるこのケイオースシティではあるがある程度の規則性というものはある。
それは例えば網目状に道路が整備されたものであったり、それはビルが連立する摩天楼であったり、それはビル内部の構造の共通性であったり。

「貯金はパーッ！　と使ってナンボってね、んふふ……さ、派手にやろうか！！」

もはや陰から様子を伺うようなことはしない。大通りのど真ん中、乗り捨てられたタクシーの上でペンシルゴンは来たる敵を待つ。

「オイオイ、ここでスタイルチェンジか？」

「私はちゃんと予告したでしょう？　ここがクライマックス、派手に騒ぎましょうか！」

自分が楽しく、周りも楽しければなお良し。内輪でチビチビやるよりも公の場で派手に暴れるのが性に合う、であればこの一瞬こそがペンシルゴンにとっての大舞台。成果も被害も最大限を、勝ちでもなく負けでもない「最高」を！！

「ハァイエブリワン！　誰もが一度は考えたことがあるんじゃない？　やってみたいと思ってそれは無理だと諦めたことは？」

Ｄｒ．サンダルフォンの拳に超能力が宿る。何か行動を起こす前に封殺せんと白衣の医者が駆ける。

「そんな貴方に朗報！　ここなら、ここでなら！　ヴィランであるなら遠慮せずに出来ちゃう！」

１ラウンド目はＮＰＣでルーカスを撹乱しつつ、今回のエリアのマップとＮＰＣ達の動きを把握しつつビルの柱のいくつかをあらかじめ破壊しておいた。

２ラウンド目はＮＰＣの逃げる先を爆弾で誘導した。彼等は今、この先のスポーツスタジアムに逃げ込んでいる。

そして３ラウンド目、１ラウンド目に亀裂を入れたビルに仕込んだ爆弾が赤い目の奇術師によって起爆される。その為にビルの一部を破壊し、視線を通したのだ。

「さぁ、ドミノしようぜ！！」

爆発が連鎖し、満身創痍のビルがゆっくりと傾く。巨大な鋼とコンクリの塊を支える足の半数をへし折られたビルはしなだれかかるように隣接するビルへと大質量を叩きつける。

「マッ……ジかよオイ……！」

駆ける足を思わず止めて、呆然とルーカスが見上げた先ではペンシルゴンによって倒壊させられたビルを支えきれずにへし折れたビルがさらに隣のビルを、そして同じ行程を何度も繰り返して街が平坦になっていく。

「信じらんねぇ（アンビリーバボー）……」

「んふふ、まだ気づいてないようだねぇ……この時点で私の勝利は確定したも同然だと言うのに」

「……またお得意の話術か？」

「ノンノン、事実だよ」

ここにはいない一人を加えた四人で行った徹底検証。戦う術ではなく戦う「場所」と「仕様」を知る事、それこそが実力を誤魔化し補強するペンシルゴンの勝利の鍵。

「さぁ、不平等な戦いを始めようか！」

これまでずっと逃げ隠れし、ルーカスからの攻撃に対してのみ反撃を行っていたペンシルゴンが、自発的に攻めに転じた事実に生じた動揺をプロゲーマーとしての判断が上回る。

クロックファイアの方から来てくれるのならば追う手間が省けて好

都合と、拳を構え笑う奇術師の動向を見極めんとする。

「どうせ演（や）るならノってこうか！　おはよう（ウェイクアップ）私の道化師！」

「ここでゲージを使うか！」

コミック「ハイドロハンズ」において、クロックファイアが主人公ハイドロハンズの所属する消防署を爆破する為に使用した巨大爆弾。笑い、膨れ、そして体内に仕込まれた大量の小型ピエロ爆弾を爆発と共に撒き散らし広範囲に甚大な被害を与える群体爆弾（クラスターボム）。本編中における印象の強さからギャラクシア・ヒーローズ：カオスにおけるクロックファイアの超必殺技として設定された膨れ上がる道化師がルーカスへと襲いかかる。

恐らく先程のビル破壊はこの為のゲージ稼ぎだったのだろう、３ラウンド目ともなればＮＰＣの殆どはどこかへと逃げてしまっている。だが無人のビルを破壊したとしてもある程度のゲージ回収は見込める。

「だが俺も全キャラの性能は把握済みなんでなぁ！」

ペンシルゴン達が検証をしたように、スターレインもまた使用可能キャラクターの性能を把握し、対策を立てていた。クロックファイアの超必殺（ウルト）である「Ｗａｋｅ　ｕｐ　Ｃｌｏｗｎ」は広範囲を爆破する強力な性能を持っているが、一箇所だけ安全地帯が存在する。

「知ってるぜ、こいつは「頭上」が安全地帯だってなあ！」

ウェイクアップクラウンは腹の中に大量の人形爆弾を詰めている。そして周囲に撒き散らすという性質上、頭の上は比較的ダメージが少ない。

超必殺はケイオースキューブの確保を放棄して放つ最強の一撃、直撃すればピンチは避けられない。だがそのダメージを軽減する事はできる。

道化師の爆発まで数秒ある、Ｄｒ．サンダルフォンには僅かな間ではあるが跳躍力を含めた身体能力を劇的に高めるゲージ技がある。

「ハッ！　決着を焦ったな！」

返答は笑みだった。

「あーあ、決着を焦ったな」

俺は画面の中で、これ以上ない笑みを浮かべたペンシルゴンを眺めつつルーカスに同情する。なるほど確かにその行動は間違ってはいない、超必を避けられないのならダメージを軽減する、なるほど確かにそれは正しい。

だが、なぜビルをジェンガよろしく爆破するのではなくドミノのように爆破したのか。その答えに気づかなかったことが奴の敗因だ。

「流石にその発想はなかったたっつーか……いやホント、えげつねぇなマジで！」

大型ディスプレイはペンシルゴンとルーカスの対戦をメインに映している。だが画面の端っこで倒壊したビルがスポーツスタジアムをスイカ割りよろしくど真ん中に倒れ込んだ意味を理解できている者は何人いるだろうか。

だがその結果ペンシルゴンに何が起きているのか、それはこの場にいる全員が、これを見ているここにいない全員がクロックファイアのヴィラニックゲージを見ることで猿でも理解できるだろう。

『なにこれバグですか！？　名前隠し(ノーネーム)選手のゲージが……減らない？』

『いやこれは減らないというよりも、減ったそばから凄まじい速度で充填されて……』

見てるか世界、見てるか制作スタッフ。非公式の小技だが、これぶっちゃけ修正した方がいいと思うぞ。

「名付けて「ゲージバースト」ってな」

ＮＰＣの絶望を糧に、笑うピエロが大量増殖した。

焚き火にガソリンをリットルで（後書き）

Q．あの外道なにしやがったの？

A．大量の避難民がいるスポーツスタジアムをビルでぶっ叩きました、現在進行形で甚大な被害を拡大しております

外道劇場ヒートアップ

それは昨晩の検証中にペンシルゴンが偶然発見したものだった。
「あ、これ根本的な原因がヴィランにあるならゲージ溜まるんだ」
きっかけは爆風で吹き飛び転がったタンクが数分後に大爆発を起こした時、ペンシルゴンのヴィラニックゲージが上昇したことだった。その時の邪悪な顔はそれはもう非道いものだった。酷い、じゃないぞ非道い、だ。
直接手を下さずとも、二次災害でゲージが溜まる。この事実はペンシルゴンに「有人ビルジェンガ」なる頭のおかしい戦法を編み出させるに至ったが、まさかさらにその上を行く外道を可能としていたとは。
とはいえ実のところそこまでヤバい技、というわけでもない。立地と状況と調整、それら全てがエリア生成時の乱数に依存するクソ技である以上、ネタの域は出ないだろう。やはり乱数ってクソ……いや、この場合は乱数がクソゲー化を防いだのか？　乱数がＭＶＰ？
　清濁含めて業の深い混沌と言うべきか。
「ビルが崩れ、その大質量が避難場所で炸裂する……甚大な悪行がゲージをオーバーフローするレベルで補填し続ける。クロックファイアの超必が「ピエロ爆弾が出現した」時点で発動しきった判定になるのが原因なんだろうが……」
直接的に潰されたもの、砕けた瓦礫に呑まれたもの、さらにそこから発展する様々な絶望がクロックファイアのゲージを凄まじい勢い

で充填していく。
これが他のキャラであったなら、超必の発動時間などもあってそこまで連射できるようなものではなかっただろう。だがクロックファイアというキャラは、全キャラクターの中でも珍しい「設置型超必殺技」持ちなのだ。それはつまり、爆弾を置いた瞬間に次の超必を撃てるということ。
超必が設置技という特殊なタイプのキャラクターだからこそ、頭のおかしい勢いで超必爆弾を量産するなどと言う狂気的な光景はこの場にいる俺や夏目氏も含めた全ての人間を唖然とさせるに充分であったし、狂気の包囲網に囚われたスケコマシ殿の心中は察するに余りある。
「っつーか、あんにゃろー楽しさ優先しやがったな……」
確かにこの作戦は温存できるようなものではなく、発動者たるクロックファイアが特定位置にいなければならないと言う点を考えれば仕方のないことかもしれない、が。
「総合計二十一分三十三秒……」
大量の膨張ピエロ爆弾に囲まれ、ダークヒーロー寄りの白衣の医者が包囲殲滅された事でカウントが止まる。1、2ラウンド目と比べてあまりに早すぎる決着に、俺は頭を抱えたくなるのだった。

「あっはっは、あー楽しかった！」

『おいありゃバグだろ！　どういう事だ！？』

悪巧みのその全てが上手くいった者と、悪巧みによる全てが直撃した者。実に対照的な目覚めであった。

「いやぁねぇ、あぁもベストな立地だとつい魔が差してね……んふふふ、凄かったでしょ？」

「凄すぎて全員ドン引きしてたよ馬鹿」

「いやホント、ギャグみたいなスイカ割りだったよねぇ！　これ映像記録欲しいなー、後でもらえないかなぁー」

ゲーム内とは言えジェノサイドやらかしてギャグと言い切りましたよこいつ、夏目氏は口の中でタコがロボットダンスしてるみたいななんとも言えない顔だし……ええいマトモなのは俺だけか！？

『落ち着けルーカス、ありゃバグじゃねぇよ』

『はぁ！？　どう見てもゲージがイかれてたじゃねぇか！』

『ビルの倒壊でＮＰＣのいるスタジアムが崩壊したのよ、ゲージの急激な増加はそれが理由』

『んなのアリかよ……』

どうやら向こうも落ち着いたらしい、説明を受けたのかへなへなと

脱力するように椅子に座り込むルーカス。そりゃあ「ビルドミノでスタジアムスイカ割りして無尽蔵ゲージ確保して超必連打」とか何も知らない奴が聞いたらバグとしか思えないだろう。

「んで？　楽しさ優先して3ラウンド目をカップ麺が完成するより手早く終わらせた作戦立案者殿、何か言い分は？」

「まぁなんとかなるでしょ」

「根拠の「こ」の字すら満たしてねぇな」

ロバに乗って風車に突っ込む方が勝算ありそうだぜ。

とはいえ意気揚々と笹かまさんのインタビューに答える辺り、ここで時間を稼ぐつもりなのだろう。今この瞬間において最も視線を受けているのは間違いなくペンシルゴンだ、いとも容易く注目を集めてしまうのはある意味ゲームの才能よりも貴重なものではないだろうか。

やっぱりこいつ、世が世ならやばいことになってたんじゃなかろうか？　現代万歳ゲーム万歳、世界は娯楽と時代に救われた。

「夏目氏、次の相手誰だっけ」

「アレックス・テイラー……シルヴィア・ゴールドバーグが現れるまでスターレイン……いえ、その前身である「アトラス」の最強プレイヤーだった男よ」

「…………えーと」

「……コードネーム「遠距離恋愛」」

あー！　そいつか！　うんうん思い出した、思い出したからそんな0点のテストを見るような目はやめてくれ。

「ん、でも確かそいつって……」

ペンシルゴンが自信満々に「こいつならちょろいわ」って断言してた奴じゃ。

『あーっはっはっはっはぁーっ！　私を殴るのを優先するの同業者（ヴィラン）さーん？　仲睦まじい恋人達の絆を引き裂いてまで！？』

『ぬ、ぐぉぉぉぉおおおお！？』

『そんな情けない姿見せていいのかなー？　んー？　ほらほらー？』

『ぬおおおおおおあああああ！』

絶句を通り越すと真顔になり、それすらも通り越すと至極真っ当な恥ずかしさが戻ってくるのだと今日初めて知った。

「なんつーか、チェスの試合中にバット持って殴りかかるような……」

「私も匿名で参加すればよかったぁ……ねぇ、今からでいいからそのヘルメット……」

「今自分が相当な外道発言したって自覚あります？」

俺のプライバシーを生贄にしようとするとかペンシルゴンに勝るとも劣らない外道行為だぞ。いやアレよりかはマシかもしれないが、いやしかし……ええい、それもこれも全部あんちくしょうのせいだ。

「いやまさか「これ見てる恋人さんにカッコ悪いとこ見せられるの？」ってリアル方面から攻撃を仕掛けるとは……」

使い切りの匿名プレイヤーとして完全に吹っ切れてしまっているのか、遠慮容赦なくアレックスのリアルをどつき回して苦しめる姿はまごう事なく悪役のそれであるが、先ほどの巨悪としてのプレイングと比較するとあまりに、そうあまりにみみっちい。

「かませ犬のチンピラと同レベルじゃないの……」

「問題はそのチンピラが終始有利にことを運んでるってことだな……」

そう、マフィア映画で主演を務めていた俳優が別の映画ではチンピラを演じるように、ロールプレイに落差はあっても格差はない。如何にチンピラ臭い人質戦法を取っているとしても中身がペンシルゴンであることに変わりはなく、人の神経を逆撫でするような話術に冷静さを失った者を巧みに仕留める戦術もなんら変わらない。

調べた情報では持ちキャラはヒーローであったはずのアレックス・リア充さんだったが、恐らくは先の試合からペンシルゴン相手にヒーローキャラで挑むのは危険であると判断したのだろう。ヴィランキャラを選ぶ事で互いになんら被害を考える事なく暴れられるようにした、それ自体はベターな対処法であるとは思う。ただ、ロールプレイに際してどれだけ恥を捨てられるのかで決定的な差があった、それだけなのだ。

アレックスの対策について、ペンシルゴンは非常にシンプルな答えを持っていた。

「彼女にカッコつけたい奴がＮＰＣとはいえ弱いものイジメできると思う？」

普通独身でもＮＰＣを積極的にジェノサイドしようとは思わないいんじゃねーかな……少なくともそれがメインでないゲームにおいては。

「わぁ、助けに行こうとした瞬間建物ごと爆破しやがった……ああ、ゲージが溜まって……」

今日何回目の登場だあのピエロ爆弾。どうも地面に設置されるまではある程度自由に動かせられるようで、サッカーでもするかのようにクロックファイアが膨れ始めたピエロを崩壊していく建物の中へと蹴り込む光景が全世界に放映されていく。

「そっかそうだよな……アレと同類扱いにされるんだよな……」

「私、今後のプロゲーマー活動に影響出そうなんだけど……」

「全部含めてバカッツォのせいにしておこう、あの価値観地球外生命体を引き込んだのは奴な訳だし」

こりゃ特上寿司やＡ５黒毛和牛サーロインじゃ許されないぞカッツォ……満漢全席かフルコースだな。

「どうせこの後には挙動地球外生命体が暴れ回るんでしょ、私知ってるもん……」

「ちょ、きょどっ……挙動てオイ、人を笑顔で戦車の砲塔に括り付ける外道共と比べたら俺はまともだろう」

人をタコ足のエイリアンみたいに言いやがって、神格存在(クターニッド)との決戦はまだ先だし俺は至って平均的な人類だ。メンタル神話生物と似たカテゴリに置かれるのは甚だ遺憾である。

ちなみに俺が戦車の砲塔に括り付けられた経緯は話すと長くなるので省かせてもらう、ただ言えることがあるとすればカッツォとペンシルゴンが敵拠点に突入した時点で外からガスを流し込んだだけだ。

「なんというかアレね、慧が妙に批判とかに強い理由が分かった気がするわ……」

知ってるか、禁止言語が設定されているゲームでは如何に文学的な罵倒を放つかが重要だ。正直ストレートに嫌いと言われるよりも「あなたと関わるこの一瞬は私にとっては汚泥の中で溝鼠(どぶねずみ)と婚儀を結

ぶ以上の苦痛だ」と言われる方が最終的なダメージはでかいんだ。

なにやら悟った目で俺と、画面の中で親子連れの母親と娘を人質に笑うペンシルゴンを見る夏目氏。

おや、あの親子ルーカス戦で初手爆破したＮＰＣだ、またしてもペンシルゴンに捕まるとは哀れな。

外道劇場ヒートアップ（後書き）

アレックスの彼女さんは北海道で両親の経営する牧場をお手伝いしている娘さんです。
アレックスと彼女さんの出会いは面倒なのでプロローグしか考えてないです。

勧善懲悪という言葉をご存知だろうか？　善きを勧め、悪を懲罰する。人が本能ではない理性を以って社会を形成するが故の極めて合理的かつシンプルなシステムだ。
これがマフィアとか巨大勢力の存在しないはずの部隊、とかになるとそうも言っていられなくなるがＧＨ：Ｃは極めてシンプルなヒーローとヴィランの激突をデザインしたゲームである。
プレイヤーによっては正義同士の激突、邪悪同士の衝突になる事もあるが、結局のところお天道様は見ているもので、調子に乗った釘は一撃で脳天潰れるまで打たれるものなのだ。
それこそが因果応報というものであり……あれ、勧善懲悪について考えていたつもりだったんだが、まぁいいか。
『正義の流星が駆け抜けるぅーっ！　名前隠し(ノーネーム)選手為すすべもない！』
『これは完全にコンボが入りましたね、ここから巻き返すのは難しいでしょう』
心なしかペンシルゴン最盛期よりも生き生きと繰り出される気がする実況解説だが、その気持ちはよくわかる。誰だってあの凶行を愉快痛快に実況解説するのは難しいだろう。
痛快というより痛恨と言うべき惨劇だったからな、まさかあんな事をするなんて……というかあんな事が未来永劫動画データとして残るだなんて……今ばかりは文明の発達が悔やまれる。
まぁ個人的な見地から言わせて貰えば試合が終わり、死人みたいな

顔をしたアレックスに突然の彼女さん登場で、全世界規模な衆人環視の中でゲロ甘ラブコメ始めやがったからもう三回くらいペンシルゴンに痛めつけられてしまえとは思う。

「まぁそれはそれとして見事なもんじゃないか」

フルボッコ、それはもうフルボッコだ。フルボッコという言葉以外の言葉が見つからないフルボッコ・オブ・フルボッコが繰り広げられていた。

街の至る所で爆発の花が咲く、だがそれは全てが遅きに失した。

壁を柱を道を車を、まるでスーパーボールが意思を持ったかのような蒼い軌跡に爆発が追いつかないのだ。

ペンシルゴンとてただ素直に蒼が近づいたら爆破、なんて簡単な操作をしているわけではない。

大凡の軌道から場所を予測しあらかじめ爆破しているはずだというのに、それでも蒼い流星は捉えられない。信じられないが、奴は爆発を見てから避けている。

あらかじめ設置場所が分かっていて何度か試行すれば俺にも同じ芸当が出来るやもしれないが、ぶっつけ本番で、なおかつあのペンシルゴンがマニュアル操作する爆雷原を走り抜けるのは至難の技だと断言できる。もはや乱数の領域だからなあの外道鉛筆の予測爆破、ＦＰＳで一発も弾丸を使う事なく爆弾だけで２５キル叩き出した奴だぞ。

だがそんなペンシルゴンの爆雷原をいとも容易く突破した流星(ミーティアス)……シルヴィア・ゴールドバーグはミスの気配すら感じさせない完璧なコンボを叩き込み、クロックファイアの体力をゴリゴリと削っていく。

「見事なもんだ」

「まぁ確かに見事なボコられっぷりかもしれないけど……仮にも負けてるんだからもう少しオブラートに包むべきじゃないの？」

「ん？　あー違う違う。絶頂期からドン底まで急降下するのはあいつのお家芸だから」

そんでもってこっそり予防策まで用意してやがるのがペンシルゴン、いや鉛筆戦士というゲーマーだ。だが俺が見事だと言っているのはそこじゃない。

指向性の爆発効果を持つエリマキトカゲ人形の顔が弾け飛ぶ。しかし届かない、真横から蹴り飛ばされる。

「キャットファイトならフルボッコにしてもいいってわけじゃないよね……」

仮にネコ科同士の戦いだとしてもライオン相手にマンチカンが挑み掛かるこの現状が平等な戦いであるとは思えない。
時間稼ぎは不可能、こちらの仕込みを正面突破で突っ切ってくる上にそもそも機動力が違いすぎる。

（確かにミーティアスは素早さ重視のキャラだけど、それもあるけど動きが最適化されきってる）

しかも最適化をわざと崩してフェイントを仕掛けてくる狡猾さすらもある。
仕込んだ最後の人形爆弾を起爆、ビルを崩してゲージ溜めを試みるがヒーローの声かけによって既にＮＰＣの姿はなく、本来想定していた程のヴィラニックゲージは回収できなかった。

（いやこれ勝ち目ないなー、最高にノッてる時のサンラク君くらい強いんじゃや……）

これが全米一、シルヴィア・ゴールドバーグ。超高速で振り回される死神の鎌を幻視するペンシルゴンであったが、生憎と速攻首チョンパはウェザエモンで慣れきっている。ただし即死攻撃にスーパーボール挙動が加わるとは聞いていない、よって勝てない。
瓦礫の中に刺さっていた細いパイプの一部を槍代わりに構えて迎撃を試みる、言語化しづらい挙動で回避された。

（後は託すしかない、か……）

だからこそ、ペンシルゴンがなすべき最後の仕事は三つ。
夏目がそうしたように敗北を先延ばしして時間を稼ぐ。

これまでの暴挙の清算として華々しく敗北する。
そして可能な限り現在のシルヴィアの力を真打に伝える。
(最終的に目的さえ達成できれば……！！)
「特上寿司ーーーーっ！　ぐわーっ！！」
「……なんで今寿司の話？」
ミーティアスの超必殺技「ミーティア・ストライク」を喰らい、断末魔とともに爆発したクロックファイア。
何故か満足げであったのは分かる、プロゲーマーの中にもヒールプレイをメインとする勝率以上に観客を楽しませることを良しとするエンターテイナータイプのゲーマーはいるものだ。それを差し引いてもあの名無しのプレイヤーは少々過激が過ぎたが。
だが何故断末魔にジャパニーズフィッシュオンザライスを選んだのか、分からない。いやマジで分からない。
その叫びが果たして誰に向けられたものなのか、それを知るのは寿司が食べたい本人と、焼肉が食べたい副将と、別になんでもいいけど強いて言うならパスタが食べたい先鋒、そして最終的にそれらを支払うことになる大将にしか通じないのだった。

往年の特撮怪人よろしく派手に爆発したクロックファイアであるが所詮はゲーム、中の人であるペンシルゴンはピンピンした様子でＶＲシステムから起き上がる。

「いや強いねー、ありゃ怪物ですよ怪物」

「もっと分かりやすく」

「ウェザエモンにＡＧＩ＋１００」

「戦闘機か何かかよ」

終盤酷かったからな、リフティングされるサッカーボールみたいにボッコボコにされていた。

「私にしては割と粘れた方だと思うけど、どう？」

「……正直、アレでいく以上ゲージさえ何とかなれば食らいつくことはできる、かな」

「そっか。うん、じゃあ私もせめてもの時間稼ぎをしてくるから緊張ほぐしてなよ」

堂々たる姿勢で笹かまさんが向けるマイクへと歩いて行く様は、顔と正体を隠していてもモデルらしさが滲み出していた。ボイチェン無かったら割と簡単に身バレしてたんじゃないかあいつ。

とはいえペンシルゴンが身体を張って明らかにしたシルヴィア・ゴールドバーグの性能はやはりというか昨年よりもグレードアップしていた。
恐らく空中ジャンプと壁蹴り、ダッシュを組み合わせたただの移動ではあるのだろうがブレーキが存在しないのだ。
兎にも角にも動きが捉えられない、設置技にも見てから対応できるものだから、クロックファイアというキャラ自体がシルヴィア・ゴールドバーグと致命的に相性が悪すぎた。

「多分重心制御と即興でルートを算出する判断力の合わせ技なんだろうが……」

キツいな、今から俺があれを相手に時間稼ぎしなければならないという事実が何よりキツい。
夏目氏が稼いだ大体三十分にペンシルゴン一戦目で稼いだ大体二十五分、二戦目は口に出すのも憚られる二十五分ちょいの凶行、そして直前の邪悪撲滅の十分。
試合間の時間などの諸々も含めてそろそろ二時間は経過しようとしている。なんだかんだ言ってもペンシルゴンは凄いのだ、あいつ一人で実質的に時間を稼ぎきったのだから。
だが来ない、来ないのだ。あのアホが、バカッツォが来ないのだ。
俺達が全力で時間を稼ぎ、ＲｗＨ６の大会を片付けたカッツォが何でもない顔で合流する。それがこの作戦の全容であり、最終段階の鍵であるあいつが今なお来ない以上、時間稼ぎは終わっていない。
であれば副将……いいや、時間稼ぎ三人衆の大将である俺の役目はあの怪物相手に限界まで時間稼ぎをすることだ。
一度仮想現実の世界へとダイブしてしまえば俺は現実で何が起こっ

たのかを知ることが出来ない。カッツォが来たのか、来ていないのかを把握できないのだ。
つまりカッツォが到着したとしてもダイブ中のメンバーは全力で時間稼ぎをしなければならない。夏目氏は時間稼ぎとしてはぶっちゃけ落第点ではあったが、その敢闘は作戦に忠実であったと言える。
ペンシルゴンは言うまでもなく、奴は真性の悪魔だ、鬼だ、鉛筆戦士（名詞ではなく比喩表現）だ。ゲームでの時間稼ぎだけではなく勝った後のインタビューも笹かまさんを言いくるめてわざと長話に持ち込んでいる。
もうあいつ一人でいいんじゃないか？　と言いたくなるが、ペンシルゴンではシルヴィア・ゴールドバーグに太刀打ちできないことは分かっていたんだ。

「その為の俺、だもんなぁ」

俺の役割は後詰め、予備、最終防衛ライン、隠し弾（シークレットブレット）……表現はなんでもいい、シルヴィア・ゴールドバーグただ一人を狙撃するのが俺の役割だ。それも峰打ちで、と言うハンデ付きで。
全米一（ゼンイチ）様が三番手に来た時点で俺達は作戦の大幅な変更を余儀なくされていた。

そもそも、この作戦はカッツォが戻るまでの時間稼ぎであると同時に「魚臣　慧ｖｓシルヴィア・ゴールドバーグ」のマッチングを成立させる側面もあるのだ。
シルヴィア・ゴールドバーグが三番手に来た時点で俺の役目は「時間稼ぎしつつ絶対に負けること」になった。
正直に言おう、今からでもカッツォの奴を殴って唾を吐きかけたい気分だ。確かに選んだのは俺ではあるが、結果として俺は八百長じ

みた事をしなければならないのだから。

だが、一つだけ朗報がある。それはシルヴィア・ゴールドバーグが想像以上に強いと言うこと。

時間稼ぎの性質上絶対に1ラウンドは奪取しなければならない。その為には否が応でも全力を出さざるを得ない。

覚悟しろシルヴィア・ゴールドバーグ、俺の全力は2ラウンドしか続かないぞ。

そしてお前を俺達の舞台（時間稼ぎ）に引きずり込む為に、俺はお前相手に舐めプと八百長をしなければならないのだ。

「ボッコボコにしてやる……！」

あくはほろびた！　（後書き）

シルヴィア（寿司……？）
笹かまさん（寿司……？）
観客（何故寿司……？）
サンラク（焼肉なんだよなぁ……）
夏目（サッパリしたパスタが食べたい……）

カッツォ「うおおおお畜生！　メディック！　メディーック！」

傲岸不遜のチャレンジャー：イグニッション（前書き）

色違いメタング出ました！　うっかりやでした！

ちくしょう！　（毎日投稿を）だいなしにしやがった！　お前はいつもそうだ。

このＣＤＳ３Ｖとかいう需要が意味不明な色違いメタングはお前の人生そのものだ。お前はいつも失敗ばかりだ。

お前はいろんなことに手を付けるが、ひとつだってやり遂げられない。

誰もお前を愛さない。

大変申し訳ないです……

傲岸不遜のチャレンジャー：イグニッション

『さぁエキシビションマッチ、シルヴィア選手の出番となったことで爆薬分隊は厳しい状況になったのではないでしょうか？』

『そうですね、現状顔隠し(ノーフェイス)選手の実力が未知数ですのでシルヴィア選手に対抗できるのは魚臣選手だけでしょうが……』

「ちょっとお腹の中の戦場で衛生兵が撃たれたそうなので苦戦するそうでーす！」

何故この場にいない人物の腹の具合を正確に把握できるのか、そんな疑問などシルヴィア・ゴールドバーグの戦いが始まると言う事実より優先されることはない。

『あ、そうですか……兎も角、ここに来て謎の仮面選手もう一人の実力が明らかになるわけですね』

『さぁ互いにキャラクター選択です。シルヴィア選手は当然と言うか、やはりミーティアスですね！』

『ミーティアスは先ほどの試合でも分かると思いますが、機動力がズバ抜けて優れたヒーローキャラです。その分耐久に少々難がありますが、「当たらなければどうと言うことはない」を実践するシルヴィア選手の技量が組み合わさる事で最強の称号を欲しいままにしていますね』

『格ゲーのプロゲーマーはシルヴィミーティアスに一撃当てられた

ら初めて一人前、なんて言葉が生まれるくらいですからねー』

そう、鮮烈なデビューを遂げてから無敗記録を今尚刻み続けるシルヴィア・ゴールドバーグの対策は現在進行形で研究が続いている。匿名の掲示板に、時折明らかにプロゲーマーしか知り得ないような情報を持つ者が現れたりする程に、シルヴィア打倒を目指す者達はあらゆる情報を集めている。

そして弾き出された結論は「カウンター」であった。
ミーティアスを捉えることは不可能だ。壁も地面も天井もない、全ては流星が走る「道」でしかない以上、それを追い、追いつくことは出来ない。であれば向こうからの攻撃に対して迎撃をするしかないのだ。
シルヴィミーティアスに一撃当てられたら一人前、という言葉は「超速超軌道で叩き込まれる攻撃に対処できるようになれば一人前」ともいう意味なのだ。

話を戻すが、ミーティアスに対して最も有利なキャラクターは「アムドラヴァ」であると言われている。
それはかつてシルヴィア・ゴールドバーグを追い詰めた二人のプレイヤーが使用したキャラクターであった為だ。
それは近距離、厳密に言えば徒手空拳をメインとするキャラクターに対し、高い防御性能とスリップダメージで有利対面を強いることができるからだ。

そしてそれは言い換えれば「近距離型に弱く」「ミーティアスの速さに追いつけない」キャラクターはミーティアスに、シルヴィア・ゴールドバーグに対して対面時点で不利を背負うことになる。

そして顔隠し（ノーフェイス）がゆっくりと、しかし迷いなく選んだキャラクターは

上述の理由から、ミーティアスとのダイアグラム不利七割という、仮にもミーティアスの宿敵でありながら、あまりに情けない相性のヴィランであった。

『さぁ顔隠し（ノーフェイス）選手のキャラクターは……え、嘘っ、カースドプリズン！？』

地面に手袋を叩きつける、果たし状を送る、相手の首がどこに飾られるべきかを告げる……古今東西において弱者も強者も関係なく、全力を望む戦いがある。そして絶対王者に対して、正体不明のチャレンジャーは最大の挑戦状を叩きつけた。

『カースドプリズン！　カースドプリズンです！　ヒーロー「ミーティアス」の宿敵、呪われた監獄（カースドプリズン）だーっ！！』

かつてシルヴィア・ゴールドバーグに挑んだプレイヤーの中に、カースドプリズン使いがいなかったわけではない。

だがそういった挑戦者達は、全て苛烈なまでの全力によって叩き潰されて来た。いつしかシルヴィア・ゴールドバーグに対してカースドプリズンを使用することは一種のタブーであるとされ、もしそれでもカースドプリズンを選択したということはそれ即ち……

「本気でかかってこいクソッタレ」を意味する。

時間稼ぎがしたいのならば、カースドプリズンはむしろ避けるべきではないのか？　そう問うたペンシルゴンだったが、俺にはその選択肢は存在しないのだ。
正直言って、俺がシルヴィア・ゴールドバーグに太刀打ちできるとすれば他の扱いやすいキャラでもミーティアス同士のミラーマッチでもない、カースドプリズンでなければならないのだ。

時間稼ぎとは、ともすれば単純に勝つよりも難しい。なにせどれだけバフデバフを繰り出し、プレイヤースキルを高め、乱数を味方につけたところで……時間はどうしようもない。
億、兆、それ以上のダメージを叩き出せるスペックを持っていたとて時計の針を早めることは出来ない、いいから黙って時間稼ぎしろとしかならない。

だが勝ちを諦めるからと言って、勝てない装備で時間稼ぎができるかと言えば答えはノー。時間稼ぎとはつまるところ「勝てるけど勝たない」状況で初めてノルマを達成できるのだ。
老侍、妖精、サイボーグ……俺が扱いやすいと感じたキャラはいくつかあれど、「全米一にワンチャンある」と思えたのは前作ダイアグラム３：７であったカースドプリズンだけだった。
ミーティアスに対して圧倒的不利なカースドプリズンであるが、聞けば歴代のギャラクシア・ヒーローズでもその相性は覆ったことは

ないらしい。お前宿敵として恥ずかしくないのかよ……いやそれは置いといて、だがいつの作品でもカースドプリズンは三割の勝率だけは逃さなかった。

「その三割が鍵なんだよ……っ！！」

成る程、飛び跳ねるウェザエモンという評価がまさに相応しい。実際に相対して分かる人力ＴＡＳじみた奇怪な機動力は本当に人間を相手にしているか疑わしくなってくる。

カースドプリズンの初期装備とも言えるガトリングが絶叫を上げて弾丸をばら撒く弾幕の中を、泳ぐように駆け抜ける流星は先のペンシルゴン戦と同様に複雑な立体機動から、俺へと強襲を仕掛ける。

だが残念だったな、

「奴は四天王の中でも最弱ゥーーッ！」

車輪に機動力を依存するモノが出るゲームと言えばまずレーシングゲームが思い浮かぶ。だが、こと車輪が人の二足で稼働する場合、参考とすべきはレーシングカーではなく、戦車だ。

人力ではない車輪脚の最大のアドバンテージは足腰を動かすことなく身体を百八十度回す事ができる事だと俺は思う。

右脚と左足の車輪をそれぞれ逆方向に回転させる事で、その場で超信地旋回。虚空を叩き据えるように振り回したガトリングが流星を撃墜すべく弾丸を叩き込む。

ああ分かってる、分かっているとも。これじゃ避けさせることは出来ても当てることは出来ない。だから……

「落ちろ青色ＬＥＤ！！」

「わっ！？」

壁を蹴りこちらへと攻撃を仕掛けてくる以上、空中で回避するには空中ジャンプを使用するしかない。そして虚空を踏み、跳躍した瞬間こそが攻撃の隙となる。なにせ行動判定が終わってないからなぁ！
空中で散弾に撃墜されたミーティアスであったが、そんなものは苦でもないとばかりに身を翻し、そして着地する。
星型のゴーグルが光を反射してその目を見ることは難しいが、どうやら俺が思った以上にできる事に驚いているらしい。

「中々やるじゃない」

「そりゃどうも……！」

お誉めいただいたのは光栄だが、この程度で満足できる縛りではないのだ。恐らくこちらの残弾数が底を尽きかけていることはバレている。カッツォもそうなのだが、格ゲーガチ勢という人種は気持ち悪い精度で相手の状態を把握して来る。

「とはいえ、私の前にそれで立った、ということは私の全力がご所望なんでしょう？」

「舐めプされるのは嫌いなんでな」

「その喧嘩、チップもつけて買ってあげるわ」

1ラウンド目先取は厳しいかもしれない。
獰猛な笑みを浮かべて放たれる蹴りに視界を塞がれながら、俺はそう思わずにはいられなかった。

……まだ来ない。

傲岸不遜のチャレンジャー：イグニッション（後書き）

前述の理由からちょっとアローラ救ってくるまで更新が……ええ、まぁ、はい、あっ、はいちゃんと書きます、はい、はい。

情報を纏め、精査することはゲームの攻略において非常に重要な行動だ。というわけで俺と同じタイプのゲーマーであるらしいシルヴィア・ゴールドバーグ氏と俺の共通点、そして差異を纏めてみよう。まずは根本的なプレイスタイル……これは俺も向こうも同じだ、精神的なテンションが技量に反映されるテンションファイター、そしてさらに言えば大抵の攻撃は直感的に対処できるタイプだ。カッツォやペンシルゴンが理詰めで進むところをとりあえず突っ走ってなんとかなる、いやなんとかしてしまうゲーマー……大抵謎解き要素で蹴つまずくまでがお約束だ。

先ほどのガトリングも、信じがたいが「弾速と銃口の角度、発射の音からおおよその着弾時間、位置を予想して突っ切る」を素でやっているらしい。おそらく元々のゲーマーとしてのスペックが高いのもあるがそれ以前にこのゲームについての造詣の深さがあの曲芸のタネだ。

よほどの技術革新が起きない限り、基本的にゲームに使用される技術というものはそう何度も変わったりはしない。そして同じ会社のナンバリングタイトルであればグラフィックやシステム周りが変わろうとも根本的なプログラムや、変更する必要のない諸々はそのまま流用されることが多い。

俺みたいにクソゲーを渡り歩くゲーマーとは違い、このゲーム一本に心血を注いできた俺の上位互換であるならば、そこらへんの慣れはコンピュータによって最適化されたＡＩにも匹敵すると考えていい。世の中には人力でツールアシステッドなスーパープレイをやらかす人種が存在するのだからな。

そしてなによりも、奴自身がカースドプリズンの性能を完全に把握してやがる……っ！

「消防車を取り込んだのはミスチョイスだったね、ミーティアス相手にただでさえ鈍足な足なのにその上行動範囲まで狭めちゃうんだもの」

「どの口が言いやがる……」

後半明らかに誘導されていた。ペンシルゴンにしてやられた時ように気付いたらドツボにはまっていたパターンではなく、選択肢が狭められて選ばざるをえない、そういう動き方をさせられた。気づけば動きを制限させられる外装を選ばされ、サンドバッグが確定した。というかこの消防車外装、消火栓にホースを接続しないとメインウェポン使えないとか産廃すぎるだろ！　一応梯子を打撃武器として使うことはできるが大ぶりな武器が奴相手にどれほど有効か、だなんて馬の耳に爆音で念仏叩き込んだ方がまだ有効だ……少なくとも馬の聴覚に攻撃はできる。

ここから勝ちを拾うのは困難だろう……いやだが時間稼ぎとしては上等ではないだろうか、体感だが五分以上は粘ったはず。そもそも最低限のノルマはペンシルゴンが稼ぎ出してくれたので俺は余興も余興、カッツォｖｓシルヴィア・ゴールドバーグの前座でしかない。ああそう考えると途端にモチベーションが下がり始めて……

「はぁ、カースドプリズンで挑んでくるから何かサプライズでもあるのかと思ったけど……ただの時間稼ぎか」

「む」

蹴られる。
「あれだけ時間が経ってケイが来ないなんて流石におかしいでしょ、なんの理由かは知らないけど貴方達の狙いはケイが来るまでの時間稼ぎ」
「むむ」
壁に叩きつけられたところを、首筋に回し蹴りが叩き込まれる。
「つまり貴方がカースドプリズンを選んだのもただの時間稼ぎのためのパフォーマンス、そうでしょ？」
「むむむむむ」
「ふぅ……ま、いい試合にしましょ？」
俺が怯みモーションで動けなくなったところで、ミーティアスは跳躍。宙を蹴って宙返りと共に飛び蹴りが放たれる。恐らく着弾の瞬間に浮かべた表情は、俺にしか見えなかっただろう。
そう、その表情には見覚えがある。ゲーム内で長時間作業が確定した時の俺の顔とそっくりだ。
なるほど確かに、対戦相手が勝つ気０で時間稼ぎの舐めプをかましてきて不快な思いをするのは当然だ。それに対して舐めプをする側である俺が何を言ってもその言葉に力はない。なるほど確かに、それが一般的な「正しい」だ。
なるほど、なるほど、なるほど………だとすればこの俺の頭の中

でカチッと切り替わったなんらかのスイッチは、カフェインと一緒に全身を駆け巡るマグマに豆板醤でもぶち込んだかのような感情は、やけにスッキリハッキリした頭の中に浮かぶ簡素な指令はなんなんだろうな？

わざわざ遠出してまで出張って、一夜漬けでゲームシステムやらなんやらを猛勉強して、頭のおかしいサイズのパフェを食う羽目になって、ウェザエモン並の人外相手に接待バトルする羽目になって、外道の同類として全世界に晒されて、そもそも現在進行形でミーティアスにボコられてる姿が全世界に晒されて……それだけの苦を背負って向けられた表情は「うんざり」と「がっかり」？

なるほど、なるほど、なるほど、なるほど、なるほど……はははっ

ラウンド2。

「ぶちのめす！！」

時間稼ぎ？　カッツォの到着？　接待？　知るか！　何もかもがどうでもいいわ！　凡庸的宿命魚類（ユニーク自発できないバカッツォ）への考慮なぞドブにでも捨てておけ！！

おうおう確かにそっちが正論だろうさシルヴィア・ゴールドバーグ、だがな……自覚してるのと他人に言われるのは別問題なんだよ！　んなこと俺が一番よくわかってるわ！　何がゴールドバーグだ何が全米一だ！　その称号、金メッキみてーに引っぺがしてやるぁ！！

なんだろう、ひどく視界がクリアだ。十数時間寝て朝日を受けて起床した朝みたいな爽快感、ただし俺の中にはただ一つのオーダーだけが爛々と輝いている。すなわち「あのヒーローかぶれをぎゃふんと言わせろ」と。

「そうだよなぁ、お前の設定的にあんなシケた面で勝たれるのが一番腹たつよなぁ……！」

ロールプレイ、という点では先ほどのラウンドは無様というしかなかった。シルヴィア・ゴールドバーグへの対応でカースドプリズンというキャラの真似などやってる暇がなかったのだ。だが今俺の心は奴への、ヒーロー（ミーティアス）への怒り、恨み、微妙に違うな……ああそうだ、これはアレだ。イベント戦闘でレベル的には格下に強制的に負けさせられた時のような、ラスボス戦をノーダメクリアしたのにイベントムービー中ではズタボロに消耗しているのを見るかのような、そういう理不尽への反抗だ。ともかくそういったドロッとしたもので動いている。

「上等だ、上等じゃねーか、ああそうだとも！」

見つけた。奴の速さに対抗するにはこちらも最低限の装いというものがある。消防車とかクソだよクソ、なぜ自分から首輪とリードをつけなきゃならんのだアホか。

「ハロー白バイ隊員ズ、ちょっと傷心の俺にバイクを寄付してくれないか。拒否権はない」

吠え面かかせてやる。

機材のトラブル、大接戦、実況解説がやけに長々と語る、そういった積み重ねによって随分と戻るのが遅れてしまった。表彰式を抜け出し、「魚臣　慧」がこの場にいると色々まずいから、と渡されたヘルメットを「魚臣さんこっちの方が向いてませんか？」と抜かした強襲中隊（アサルトカンパニー）のマネージャーの顔に投げつけて慧は走る。

驚いた顔でこちらを見る裏方スタッフをかき分け、何故か何人かのスタッフに「お尻大丈夫ですか？」と謎の心配をされつつも、慧はステージの上に……ようやく戻ってきた己のホームである爆薬分隊が座っている座席の、最後の一席へと着席する。

「………？」

歓声を受けるとは思っていないが、少なくともなんらかのアクションが自分へ向けられると思っていた慧は観客の、スターレインの、実況解説の……この場にいるほとんどの目線が自身に向けられていないことに気づいた。

「重役出勤もここまで来れば感心するねぇ」

「……正直すまんかった、今サン……顔隠し（ノーフェイス）の手番か？」

「もう少し早く来てれば平和的だったかもねぇ……」

何故か乾いた笑いを浮かべるペンシルゴン、もとい名前隠し（ノーネーム）に慧は首をかしげる。

きっとその理由は画面の先にある。スターレインの面子から恐らくサンラクＶＳシルヴィアの対戦の光景が表示されているその先に。

だと言うのになんだろう、先ほどからスピーカーを割らんばかりに響く高笑いは。ギャリギャリとアスファルトを擦るタイヤの音は。

あの頭のネジが爆散したかのような高笑いには心当たりがある。やることなすことが突飛な友人が、もうどうにでもなぁれと吹っ切れた時の笑い声にひどく似ているような、というかそれそのものであるような……

「いやまぁ、舐めプしてたこっちサイドにも非があるんだけどさ……」

「あー、なんとなく察したけど要約お願い」

「諸々あって、キレた」

「ちょっと要約しすぎかなぁ」

不敗のチャンピオンに、激情のチャレンジャーが高笑う。

怒髪衝天のリベンジャー：バーンアウト（後書き）

傷心（沸騰する血液と逆ギレによる呪詛を撒き散らし、カフェインにひどく汚染されている）

ライオットブラッド・トゥナイト
米国にて今夏発売、ライオットブラッドはついに眠りの神ヒュプノスを打倒した――！　一本開ければ二徹に耐えきると称される最新モデルにして新たなる怪物の目覚めを彷彿とさせる一品。完全に合法であるはずなのに何故か日本では未だ発売されていない、不思議なこともあるものですね。破城槌を抱えたスーツ姿の男が目印。

正直に言って、シルヴィア・ゴールドバーグは退屈していた。そして落胆もしていた。

遅延戦術に続く遅延戦術、それに気づいたのは名前隠し(ノーネーム)の奇妙な動きと、シルヴィアがダイブするまでの時点でもやってこない魚臣慧の姿であった。

（なんらかのアクシデントがあったんでしょうけど、ねぇ……）

ゲームの実力的には歯牙にも掛けないレベルの、しかしある点からは凄まじい強敵(ライバル)である夏目　恵の慣れないヒールプレイも今思えば時間を稼ぐためのパフォーマンスだったのだろう。それ自体に不満があるわけではない、わざわざこの仕事を受けたのは慧との再戦を望む面もあるのだから。シルヴィアの心を沈める落胆の最大の要因は、今現在対戦中のプレイヤーにこそあった。

シルヴィア・ゴールドバーグは客観的な評価として最強である。それは机上のスペックを競うものではなく、実際に対戦してあらゆる強敵達を鎧袖一触で捩じ伏せてきたからこその嘘偽りのない真実である。そして慧を初めとして、シルヴィアを苦戦させたプレイヤーというのは両手で数えられるほどだが確かに存在する。

だがその中にカースドプリズンを使って己に挑んだ者はいなかった。ミーティアスにとってカースドプリズンとは不倶戴天の宿敵であり、そして何より最大のライバルでもあるのだ。誰よりも巧く、強くミーティアスを扱うシルヴィアだからこそ、カースドプリズンを相手に手を抜くことを許容しない。それを選ぶということは、シルヴィアに、ミーティアスに対しての全力の宣戦布告なのだから。

だが悲しきかな、ギャラクシア・ヒーローズ：カオスにおいてカースドプリズンの性能はミーティアスに対して不利としか言いようがない。それがシルヴィアの操るミーティアスであればその相性は絶対的なものに近くなる。ある条件さえ満たせればその相性は変動するのだが、少なくともシルヴィアが相手をしてきた数多のカースドプリズン達の中にその条件を満たせた者はいなかった。

（名無しの誰かさん（MS.ジェーン・ドゥ）がそれなりにやるから期待してたんだけどね……）

もしや、と期待したMr．ジョン・ドゥの方はただの虚仮威しであったらしい。さぁどう処理してくれようか、果たしてケイはどんなアイデアで自分に挑んでくるのか……

自分に相対できる悪役（ヴィラン）への期待は既に心の奥底へ、プロゲーマーとしてこの次の試合へと思いが移ろいかけていたシルヴィアは、それに気付いた。逃げ惑うＮＰＣ達、その中には痛めつけられた警官達も含まれており、他のそれとは違うヘルメットが彼らが何者で、何を奪われたのかを物語っていた。

「あら、着替えは終わったの？」

「待たせたな」

警察が使用する白を主としたバイク、鎧のように纏ったそれの意匠にあるフロントカウルの数から五台程を取り込んだのだろう。肩、足、腕……あらゆる場所にタイヤがくっついていることを除けばさながら純白の重騎士にも見えるカースドプリズンがゆっくりと、だが確実に歩みを進めてこちらへと近づいてきていた。その姿にシル

ヴィアは心の中で感嘆のため息を漏らす。

従来のギャラクシア・ヒーローズではコロシアム型のバトルフィールドであったが故に、キャラクターとしての魅力を十全に表現できない事が多かった。例えばただ爆弾をばら撒くだけのキャラであったクロックファイア、例えば取り込める外装が三種類しかなかったカースドプリズン。だがこのゲームはその制限が取り払われた、まるで本当にコミックの世界に入ってしまったかのようなリアリティ。

「さ、始めましょうか」

「ああ、一つだけ言っておきたい事があるんだ」

「？」

「なんつったかな……そうそう。」

カースドプリズンは肌を一部たりとも見せないほど、鎧（牢獄）に閉じ込められている。だが確かにシルヴィアは、ミーティアスはその姿に不敵な笑みを見た。

「キック、ユア、アス」

その意味は「俺はお前をぶちのめす」。

「上等！」

大地を蹴り、駆ける。壁を走り、宙を踏みしめ、時にスピンを、バックステップを入れて加速。そしてガラ空きの背後に蹴りを……

「え？」

足を掴まれた。

足を掴んだ。半分は勘に頼ったギャンブルではあったが、どうやら今回は乱数の女神が俺を助けてくれたらしい。

「ウェェルカァァァァム！！」

ミーティアスが速さに特化した攻撃タイプであるとすればカースドプリズンはパワーに特化した攻撃タイプだ。本来であればそれに加えて尋常ならざるタフネスもあるはずなのだが、格ゲー故に体力を無尽蔵にすることはできず結果的に「火力は高いが取り回しが難しいので結果的に弱い」というキャラになってしまったのだろう。

だがそれは逆に言えばパワーだけは原作に忠実な設定がされているということだ。白バイ五台を取り込んだ高機動カースドプリズンとなった俺は1ラウンド目の初期装備と同様に足に装備されたタイヤ

を互いに逆回転させることで超信地旋回、身体ごと回転させることで背後から俺を蹴とばさんとした飛び蹴り、その足首を横から掴む。

そしてそのままフル出力で超信地旋回を続行、背中から羽の如く伸びたマフラーが獣の唸り声のような轟音を立てて煙を吐き出す。今の俺には乱数の女神と物理エンジンの神が手を貸してくれている、全米一位がなにするものぞ、だ。

高機動型カースドプリズンは最速であり、最遅のモードだ。なにせ多少のパーツを省いているとはいえバイク五台分の重量が身体にくっついているのだ、足を使って走ることすらできない。まるでダンベルを足にくっつけたかのような重い足取りで歩くことはできるが、こんな状態では普通は戦うことなどできない。

だがバイク五台分のエンジンを搭載しているこのモードは、精密性の少ない単純な動きであれば驚異的な速度を発揮する。例えば脚部のタイヤを回すことに全エネルギーを集中させれば……

「お星様になりやがれえええええええええええ！！」

一般人なら頭がもげかねないレベルのジャイアントスイングすら可能になる。勢いよく放り投げられたミーティアスの身体がビルのフロントドアを突き破ってビルの中へと流星の如く突っ込んでいく。ただそれは本人の意思ではなくより大きな力によるもの、という点で普段のミーティアスとは異なるのだろうが。

「ふふふ、くくくくく……」

いいねいいね、凄くいい。野球でいうならホームランを量産する大砲バッター、サッカーで言うならハットトリックを易々と達成するファンタジスタ、競馬で言うなら三馬身以上引き離して単独ゴールを果たす名馬。そんなプロゲーマーを俺が、今、全力でぶん投げた

のだ。待ってろ、今もシケた面を浮かべているか確かめてやる。

「ふはははははははははははぁぁぁぁぁぁぁ！！　うおっと」

「げっ！？」

意気揚々とビルへと突入した俺だったが、瞬間粉塵の中から飛び出したミーティアスと目があう。ここで補足すると、現在俺は腕がゴタゴタしている関係上、両腕を広げるような姿勢で「走行」しており、どうも向こうはこちらが豪速で向かってきたのが想定外だったらしく、とっさに俺との直撃を避けるように脇からすり抜けるように避けようとして、そしてこちらは逃がすものかと腕の位置を調整して。

「ハグ失敗だな！　うははははははは！」

「ふぐっ！？」

結果的に互いに高速で接近した加速度を維持したまま俺がミーティアスにラリアットを食らわせる形となった。そしてその隙を見逃すようなテンションはしていない、タイヤをスリップさせ、その場でアイススケートのように無理やり身体を反転させる。

そして凄まじい激突のエネルギーが首で炸裂したためか、空中で逆宙返りをするかのように回転するミーティアスにショルダータックルをお見舞いする。今の俺の肩には白バイのタイヤが装着されている。ギャリギャリと唸りを上げて回転するそれに人体が触れればどうなるかなんて言わなくても分かるだろう？　分からない奴も安心しろ、今から実演してやる。

「はーっはっはっはっはぁ！　喜べ壁ドンだぞぉ！！」

ビルから飛び出した俺と、俺に押し出される形のミーティアスは向かいに建てられていたビルの壁面へと激突する。ビルの壁と、ミーティアスと、回転するタイヤ……随分と物騒なサンドイッチだが遠慮するな、ＨＰが０になるまでたんと召し上がれ。

ミーティアスの体力がゴリゴリと削れていく、流石にこのまま０まで削り切れるとは思っちゃいないが、削ることができるなら限界までその体力を削らせてもらう。

「離れ……ろっ！」

ミーティアスの蹴りが俺の腹へと入り、殺人サンドイッチが具によって無理やり解除させられる。そのままミーティアスは三度の跳躍を経て自らが作った距離を自ら詰めて加速された回し蹴りを俺の延髄へと叩き込んだ。だが甘い、最早てめーとの戦いは対人戦とは考えない。対人間大のモンスターとして想定する！

「肩輪走行！」

「うわ気持ち悪い！」

失礼な、俺はただ……そう、ただ身体の半面だけを使ったブリッジのような姿勢で身体を捻り、それにより左肩と左足のタイヤを直線状に並べて即興のバイクを形成しただけだ。この形態は回し蹴りの回避に位置取り、そして起き上がりを攻撃に転用するという非常に理にかなった戦術なんだぞ。見た目は涅槃のポーズで爆走する変態そのものだが。

身体をえび反りにして涅槃ポーズを意図的に倒すことでバイクで言うドリフトを再現し、遠心力を利用して無理やり身体を起立させる。

俺へのカウンター回し蹴りで奴は今動けない、着地までのその数秒

と数フレームが大きな隙となる、往生しやがれ。
左半身走りから獣のような四足走行にチェンジした俺はそのまま獣が吠えるが如くエンジンを鳴らして爆進。着地した瞬間のミーティアスへとフロントタックルで激突する。ミーティアスにこのタックルを受け止めるだけのＳＴＲはなく、そしてここまであからさまな有利を奪取できれば如何なカースドプリズン使いとてコンボを叩き込むことが出来る……！

「これは1ラウンド目の分！　これはダシに使われた消防車の分！　そしてこれが……っ！　焼肉の分だぁぁぁぁぁ！！」

タイヤによって加速された地面を抉るような蹴りを、全身を竜巻のように回転させて加速と遠心力で凶器と化した腕によるパンチを、壁際に追い詰め瓦礫ごと被害者を巻き込んだタックルを。カースドプリズンのコンボはその全てが大ぶりで、そして高火力だ。
「何故今焼肉の話が！？」とでも言いたげなミーティアスがコンボの終了と共に勢いよく大通りを吹き飛んでいく。少々エンジンを酷使しすぎたらしく、熱を持った俺の全身から熱気が陽炎のように空気を歪めていた。

「さぁ来い全米一（ゼンイチ）、ぶちのめしてやる！」

俺の感情に呼応するかのように全身のエンジンが咆哮を上げ、マフラーからは炎混じりの煙を吐き出す。十メートル以上吹っ飛んでいったため、起き上がったミーティアスがどんな顔をしているかを伺うことはできない。だが直感的に、奴は笑っているような気がした。

そろそろ来そうだが……

活火激発のインベーダー：フルスロットル（後書き）

涅槃のポーズで爆走する変態……まさかそんな主人公がいるわけ、ハハハ

高機動カースドプリズンは白く塗装した轟く侵略さんをイメージしていただければわかりやすいと思います。

気炎万丈のハイスピーダー：トルクバースト（前書き）

間違えてインベントリアの方に投稿してしまった……ご迷惑おかけしました

気炎万丈のハイスピーダー：トルクバースト

俺の格ゲー経験は大きく分けて三つのクソゲーによって構成されている。
一つ目は言わずもがな「便秘」ことベルセルク・オンライン・パッション。人としての形態を放棄して人外の戦いを繰り返す魔境で俺は人としてのプライドを捨てた戦いを会得した。というか会得するのが最低限のスタートラインなのでむしろ率先して人間性を削ぎ落としていた、と言うべきか。

二つ目はアニマルファイト・オンライン……通称「ゴリライオンライン」。プレイヤーが動物となってワイルドな戦いを繰り広げる……と言うコンセプトのゲームなのだが、コントローラー式の旧文明的なゲームならともかくフルダイブで人間の身体を捨てるゲームのくせに操作性が劣悪の一言に尽きる、という酷さ。それになにより数十種類の操作可能キャラクターがいるくせにその九割九分九厘が「ライオンの下位互換」というバランス調整の悪さ。
結局アプデで下方修正を受けてなおライオンの最強の座は揺るがず、環境は猫パンチでハメ技が出来るライオンとライオンに対してだけ妙に強いローキックゴリラで溢れかえったというなんともアレなゲームだ。百獣の王補正だろうか、だが何故ゴリラ。
俺はこのゴリライオンで獣の戦い方を会得した。いやこれどこで役に立つんだよと当時は苦笑いしていたものだが、今だからこそ言える。結構役に立った。

そして三つ目。そのゲームはあまりに突飛すぎるゲームシステム、

人間の善意を踏み躙ってぐちゃぐちゃの肉片にしたものを土に蒔いて耕したような世紀末……いや、幕末っぷりから「エリートぼっち専用ゲーム」とまで言われた怪作、その名を辻斬・狂想曲（カプリッチオ）：オンライン、通称「幕末」。箱庭型のオープンワールドでプレイヤー、NPCを問わず兎にも角にも「斬れば斬るほどハイスコア」という非常にシンプルなゲームだ。

プレイヤーは刀一本だけ持たされて幕末江戸をモチーフとしたオープンフィールドに放り込まれる、出迎えるのは新規プレイヤーを出待ち狩りせんと目論む先輩からの熱い洗礼だ。具体的に言うと先輩方が飽きるまで根切りにされ続けたプレイヤーを次に待ち受けるのはNPC辻斬り達による静かなる夜襲、具体的に言うと朝まで続く。

そうして心折れることなく弱者として狩られ続けながらも時に弱者が集まり格上を天誅（袋叩き）、だいたい一週間くらいで復活する幕臣を天誅（袋叩き）、報酬の分配でもめるので仲間を天誅（共食い）、時に何の罪もない町娘で天誅（経験値稼ぎ）していくうちにプレイヤー達はいつしか自分と自分の得物以外が信じられなくなり、気づけばかつて自分をリスキルした先輩方と一緒に新規プレイヤーのスポーン地点で出待ちするようになっている。

そういうゲームだ。

その幕末っぷりばかりが注目されがちなゲームだが、実のところこのゲームから学ぶものは結構多かった。特に後のクソゲー攻略で役に立ったのが拍子の間隙を突くテクニックだ。NPCには明確に隙が存在する、それはプログラミングされた行動と行動の隙間であったり、何かの動作をしている最中であったり。プレイヤーであったなら尚更に気が抜けた瞬間に隙が生まれる。

言うなれば音楽における休符のようなものだ。明確に緊張に途切れが生まれるその瞬間に肉薄、相手が対応するよりも早く刀を抜き辻斬り、時に辻斬られる。自分以外の全てが実質敵、というゲームはユナイトラウンズのように他にもあるが、より一瞬の攻防に重きを置いたこのゲームで俺の対人スキルは磨かれたと言ってもいい。

この「拍子ずらし」こそがＰｖＰにおける極めて重要なファクターであると俺は考えている。フェイントやディレイ、後の先も大きなカテゴリで言えばこれに含まれるし、幕末で磨かれた不意打ちのスキルも同様だ。シルヴィア・ゴールドバーグは俺と同じで相手にリズムを押し付けるタイプだ、爆音でリズムが叩き込まれるものだから大抵のプレイヤーはその音量に飲み込まれてボコられる。先ほどの俺のようにな。

これは推測だがカッツォや、他の善戦したプレイヤー達は多分シルヴィア・ゴールドバーグが押し付けてくる爆音リズムを研究してそれをカウンターする戦術へとシフトしたのだと思う。間違いではない、間違いではないのだが未だシルヴィア・ゴールドバーグの不敗記録が破られていないことが事実である以上、正解でもないということになる。

シルヴィア・ゴールドバーグの強みは彼女の持つ拍子、リズムが常に更新されているということだ。それはさながら土壇場で覚醒するヒーローのように、もしくはさらにギアを上げた車のように、リズムが変わるのだ。つまりそれまで保たせていたカウンターの組み立てを一からやり直さなければならないということであり、大抵はここでシルヴィア・ゴールドバーグのリズムに追いつけなくなって負ける。であればシルヴィア・ゴールドバーグを攻略するにはどうすればいいのか、ここで格ゲーにおける基本が活きてくる。格ゲーとは即ち選択肢の収束だ、相手に取らせせる行動を狭めてこちらの攻撃を押し付ける。

シルヴィア・ゴールドバーグへの対策の最善はカウンターじゃない、後の先ならぬ先の後だ。先に選択肢を叩きつけた上で選んだ方にカウンターを叩き込む、どこからどのタイミングで攻撃が来るかわか

らないから厄介なのだ、飛び回る鳥は鳥籠の中に入れてしまえばいい。速すぎる流星を捕まえるには後手ではなく先手に回らなければならないんだ。

「く……っ！」

「頑張れ俺の三半規管キーック！」

超信地旋回を酷使することで片足を浮かせ、フィギュアスケートのキャメルスピンのような姿勢で回転しながら蹴りを放つ。ゴリライオンラインにおいてライオンにのみ一方的に有利が取れるゴリラのゲージ技の一つであったが、この蹴り技はとにかく対処が面倒臭い。なにせ羽むき出しの扇風機のようなものだ、うかつに近づけば体力が削れてしまう。

「く、厄介な……何者よ貴方……！」

「いわゆる傭兵だよ、金と飯で雇われた……な！」

唸る剛脚がミーティアスを打ち据え、何度目とも分からぬ吹き飛ばしにミーティアスが宙を舞う。こちらも主に三半規管に少なくないダメージこそ受けているが、最早どちらが有利かは言うまでもあるまい。体幹のブレは頭を振って何とかする。

「貰うぜラウンド！　ぶっ飛べ！」

全身から生えたマフラーから炎が噴き出し、フロントカウルに付いたライトが点灯する。咆哮を上げて壁際に追い詰められたミーティアスへと猛進するカースドプリズン。崩れた体勢からミーティアスが逃げるには時間が足りず、奴に与えられた選択肢は迎撃か横に転

がることでの回避のみ。

「いいわ、このラウンドはプレゼントしたげる」

そして奴は迎撃を選んだ。

「でも勝つのはいつだってヒーロー、そうでしょ私の宿敵（カースドプリズン）」

「ここはコミックじゃねぇ、ゲームだ」

激突。元より大質量の激突を速さはあるが耐久に欠けるキャラクターがノーダメージで受け切れるわけがなく、それでも成功したカウンターによりカースドプリズンの体力が削れるもミーティアスの体力が０となる。

奴が砕け消える直前に浮かべていた肉食獣のような笑みは、次のラウンドの苛烈さを予感させるに十分なものであった……ハッ、知ったことか。このまま土ペロさせてやるから覚悟しておけ。

『ラウンドを返したぁーっ！　顔隠し（ノーフェイス）選手、1ラウンド目とは別人のような、実況が困難な動きでシルヴィア選手をノックアウトしました！』

『いや、凄い試合でしたね……白バイを取り込んで機動力を確保したのは分かりますが、大振りな動きで繊細な調整を無理矢理通しているような……』

『これは是非お話しを……あ、魚臣選手来ていらしたんですね！』

「ははは、酷いなぁ……皆さん、どうもー」

困ったように眉を下げながらも、柔らかな笑みでカメラへと手を振るカッツォに、仮面の下でペンシルゴンはうへぇと口を半開きにする。

人のことを言えるような身ではないが、随分と小綺麗な化けの皮を被っているものだ。同じセリフをペンシルゴンかサンラクが言ったなら、その口から吐き出されていたのは恐らく毒だっただろう。

『先程顔隠し（ノーフェイス）選手は自身を傭兵と名乗っていましたが、どういうことなんでしょうか？』

「んー、そこの名無しの権兵衛もそうですけど……まぁ、僕の友人ですね。ちょっとウチの他メンバーに予定が入ってしまったんで急遽助っ人として、ね」

「女性に権兵衛は酷くない？」

「ごめんごめん、じゃあ権兵衛子（ごんべこ）で」

サラッと毒を吐きやがったこの野郎。思わず拳が飛びそうになったのを堪え、ペンシルゴンは「はははこやつめ」と表面を取り繕う。何故か夏目がハラハラとした顔でペンシルゴンの仮面と手を交互に見ているが、何がそんなに気になるのだろうかとペンシルゴンは首を傾げる。まさか無意識的に握り拳に力を込めて今にも殴りかからんとしていた、とは本人には思いもよらないのだ。

『それにしても、随分と凄まじい試合を見せたお二人ですが……もしやプロゲーマーの方なんでしょうか？』

「それも含めてシークレット、ですね。その方が謎感が増すじゃないですか？」

この場に意識のあるサンラクがいたならば、思わず「化けの皮被りすぎだろ！」と叫んでいたかもしれない豹変ぶりであったが、サンラクは今第三ラウンドを始めようとしているところである。

『もしかしたら、今まで誰も成したことのない快挙を達成してしまうかもしれませんね……』

「いやいや、いやいやいやいや、あいつが勝てるなら僕でも勝てますよ……なにせ奴相手でも僕は勝率七割確保してますから」

初見同士の戦いだとほぼ確実に負けるくせに。その言葉を胸の内に秘めたのはペンシルゴンのせめてもの武士の情けであった。果たして絶賛大暴走中のサンラクは、当初の「カッツォへのパス」を覚えているだろうか？

第三ラウンドが始まる。

気炎万丈のハイスピーダー‥トルクバースト（後書き）

わーい！　クソゲーの設定考えるのたーのしー！

世紀末円卓‥一応製作側は「プレイヤー同士の協力」を想定して作っていた、鉛筆の食い物にされた

幕末‥そもそも製作側が「プレイヤー同士のバトロワ」を想定して作りやがった、変態辻斬りが天誅連打

ゴリライオン‥やけに足技にキレのあるゴリラと猫パンチでハメるライオンがサバンナで暴れている

竜騰虎闘のクロスファイア：デッドヒート（前書き）

書いてる内容と同じカテゴリの他作品や映画を見ると筆が捗りますね

「潰れろオラァァァァア！」

「遅い遅い！　もう引っかからないよ……あぶなっ！」

チッ、ここまで温存していた本気速度の叩きつけすらかわされたか。カッツォならほぼ初見で引っかかってくれるんだが。クソ、さっきのラウンドは意表を突けたがもう対応してきやがった、頭の中にＴＡＳでも仕込んでるのかこんちくしょう。

ダメだ、高機動カースドプリズンは馬力こそあるがどうしても動きが大振りになる。超信地旋回とドリフトを駆使してなんとか小刻みな動きで誤魔化しているがこりゃこのラウンド中には完全に対応されてしまう。打開策は二つ、一つはあと少しで溜まりきるカースドプリズンの超必殺……短期決戦になるが確実なアドバンテージを得ることができる。

そしてもう一つが……そろそろ、そろそろ来るはずなんだ。破壊工作が足りなかったか？

「いいねいいね、すごくいいよカースドプリズン！　強い弱いじゃない、君との戦いはワクワクする！」

「そりゃどうも！」

「でもそれはよくない、カースドプリズンならもっと傲慢じゃなきゃね！」

原作準拠にしろってか？　カースドプリズンのことなんか概要程度

しか知らねーよ……左！

地面を滑るように移動し、ごく自然な風に空中を踏んで反転。右から左へと一瞬でステップしたミーティアスに対し、咄嗟に左腕を折り畳むように固めてガードの姿勢をとる。次の瞬間左腕に二度の衝撃が走り、崩れかける姿勢をなんとか維持する。

「その動きにも慣れてきた、攻めてくよー！！」

「自己申告とはお優しいなオイ！」

どうする、超必殺で攻めるか？　それとも………………………来た。

「来た来た来た来たぁぁぁあっ！！」

「わっ！」

多少のダメージは許容する、行動方針変更！　急ぎこの場を離脱する！！

舞踊のような優美さと苛烈さを同居させた猛攻をガードしつつ、大振りな回し蹴りが放たれた瞬間にこちらから肉薄する。

ああそうとも、所詮は根本的な実力差はほぼ横一列な格ゲーのキャラクター。あいつのように絶対的上下関係を強制することはできない。そして人の脳では成しえない「電脳」の力があるからこそあいつの技は驚異的な殺傷力を発揮していた。

「見様見真似（なんちゃって）……」

側頭部に回し蹴りが命中する。決して軽くはないダメージを負うが重量級キャラクターであるカースドプリズンは回し蹴り一発程度では吹き飛ばない。マフラーから炎を吐きつつ伸ばした手でミーティ

アスの首を掴む。

使わせてもらうぜ、ウェザエモン！

「大時化！！」

接近と、持ち上げと、体全体を使った投げ。本家であるウェザエモンはそういった諸々を全てパワーで解決していたが、そこまで吹っ飛んだ力のない今の俺はテクニックを使って擬似的にユニークモンスターの投げ技を模倣する。

大時化最大の特徴は掴んでから投げられ、地面に叩きつけられるまでの恐ろしいほどの速さだ。掴まれたと気付いた時にはすでに地面に叩きつけられ死んでいる、刀を奪って安心した瞬間を狙った酷い初見殺しであったがあの技は非常に厄介で、非常に魅力的だ。

自ら接近することで掴んでから投げに入るまでのフレーム短縮、さらにタイヤを動かすことで投げとばしに必要な身体の捻りをアシスト。ミーティアスからすれば掴まれた手を弾こうとした頃には既に叩きつけられているように感じるはずだ。

そして投げとばし、ミーティアスの首から手を離したあとも回転を続け、地面に叩きつけられたミーティアスに背を向けた時点で左右のタイヤを同じ方向に全力で回す。即ち俺はその場から急速離脱を行ったのだ。後ろから逃げるなと声が聞こえた気がするが、まぁ黙って待ってろって。

お色直しだ。

良い（Good）！　すごく良い（Very Good）！　素晴らしい（Amazing）！
掴まれ、気付いた時には地面に叩きつけられていた。ギミックは理解できる、だがそれをあの状況で一瞬の隙からやってくれるとは。
これまで何人ものカースドプリズン使いと戦ってきた。アメリアは強いがあと一歩足りない、アレックスはメインではないがそこそこ強い、あいつも、あいつも。確かに強かった、ロールプレイに忠実な者もいた。だがシルヴィアの、ミーティアスの敵ではなかった。
その点で言えば今戦っているカースドプリズンはそこまで突出した技量があるわけではない。
だが、これまで戦ってきた数多のカースドプリズンの中で……もっともらしさがあった。強い弱いではない、シルヴィアが対戦相手と戦っているのではなく、ミーティアスがカースドプリズンと戦っているのだと強く実感できる。

シルヴィア・ゴールドバーグは最強である。その強さ、原作に忠実なミーティアスの戦いはコミック「ミーティアス」の作者をして「彼女こそがリアル・ミーティアスである」と言わしめるほどだった。
だからこそ彼女は常にある不満を抱えていた。

ヒーローは、ヒーローだけではヒーローたりえない。敵が、ヴィランがいてこそヒーローは輝く。リアル・ミーティアスが私であるのならば、リアル・カースドプリズンはどこにいるのか、と。

誰よりもミーティアスというキャラが大好きで、ミーティアスを使いこなしているからこそ彼女はずっと探していた。己の宿敵を、誰かを愛いと思う執着とは別の、己の不敗を止めんと立ちふさがる強者との高揚とも違う、こいつだけは本気で倒さねばならないというミーティアスとしての叫びを浴びせるに足る存在を。

「やっと見つけたよ、カースドプリズン」

投げ技から復帰した時、既に視界の中にカースドプリズンの姿はない。もしやケイオースキューブを確保しに行ったのかと一瞬眉を顰めるが、恐らく違うと自分の中の何かが否定する。であれば不意打ちを狙ったか？　それも違うと否定する。

奴は中途半端に戦いを捨ててまで勝ちを拾いに行く手合いではないと、直感的な確信を抱くのだ。であれば何のためにこの場を離脱したのか、奴は「来た」と言っていた、それはつまり何かを待っていたということ。

超必殺（ウルト）ではないだろう、来たと言うならばそれはプレイヤーが能動的にどうこうできるものではなく受動的に待つものであるはずだ。

（何を待っていた？　3ラウンド目になって来るようなもの？　ラウンド毎に何かが追加されるなんて聞いた覚えは…………違う）

数えるのはラウンドではない、時間だ。一ラウンド目が始まり、2ラウンドを経てどれだけの時間が経過した？　ケイオースシティはリアルタイムで状況が動く。カースドプリズンは何を待っていた、いや違う、何を呼んだ？

「まさか」

それは車両と違い準備に時間がかかる、それはカースドプリズンにとって有用で自分と戦闘をしながらでは回収しづらく、それは空からやって来る！

「まさか！」

破壊音、それは左右でも前後でもない。見上げた先、そこには――――！！

「待ってたぜ、メインウェポォォォォン！！」

「……はは、あはははは！　最高だ、最高だよカースドプリズン！！」

どうやったのかビルの最上階まで登り切り、より近くから映像を拾おうとビルに触れそうなほどに高度を落としたマスコミの報道ヘリコプターにダンクを決めるカースドプリズンの姿があった。

ビルから飛び移るように大質量がしがみついたことで、バランスを崩したヘリコプターが地面へと墜ちる。
地面に金属塊が激突した瞬間、大爆発を起こし爆炎がヘリとカースドプリズンの姿を包み隠す。
カースドプリズンは無機物を破壊し、取り込む能力を持っている。であれば爆発の炎はお色直しを隠すカーテン、そして幕をかき分けそれは現れる。

「悪いな、お色直しだ」

白バイを取り込んだ姿が徒手空拳の白騎士であるならばこれはジャ

パニーズ武士(サムライ)だ。
ヘリコプターのプロペラウィングを刀のように腰に二振り、両手に一振りずつ握り、ヘリの装甲を甲冑のように纏う姿はまさしく東洋の騎士そのもの。
「高機動型も悪くはないが……全力を出すならこっちの方がよく馴染む」
「全力？　ノンノン、違うよカースドプリズン」
シルヴィア・ゴールドバーグはそう望まれた場合を除いて、常に全力で戦ってきた。だがこの戦いにおいて全ての力程度(テクニック)では足りない、満足しない。
「本気でやるんだよ」
正義(ヒーロー)は必ず勝つ、そして正義は邪悪(ヴィラン)と戦ってこそ最高に輝くのだ。

銃では足りない、徒手空拳では届かない、であれば武装してようやくイーブンだ。
特殊オブジェクト「報道ヘリコプター」は一定以上の被害と一定時間の経過で出現する。始まりは何故あのヘリはやたら低い位置を飛んでいるのかという疑問だった、試しに撃墜してカースドプリズンの能力で鎧として纏ってみて、初めて特殊オブジェクトが特殊たる所以が判明したのだ。

「ヘリの馬力に四本の武器、下手な銃より火力が出るからな」

カースドプリズンはどういう不思議パワーかはよく知らないが、取り込んだものの耐久力をある程度強めることができるらしい。
だが銃弾の威力はそこまで上がらない、ショットガンを一発当てるよりも蹴りをクリーンヒットさせた方が良いダメージが出る。そして鎧のパーツとして強化されたプロペラソードはそのダメージ判定はカースドプリズン本体の膂力から弾き出される、つまりダメージは素手以上という事だ。

「最近メインでやってるのが二刀流だからなぁ、よぉく馴染むとも」

欲を言えばＳＴＲ偏重ではなくＡＧＩ偏重であれば完全にシャンフロでのアバターの感覚で動けたが、そこまで欲張りはしない。

「三枚おろしにしてやるよ」

「上等！」

背中のヘリエンジンが唸りを上げ、全身に力を漲らせる。振り下ろした左のソードは容易くかわされ、避けた先からミーティアスが急

襲する。
だが先程までの速いが小回りの効かない高機動型とは違う、今の俺はこんな芸当も出来るんだぜ。

左のソードを放棄、右のソードすらも放り捨てて左腰に佩いた予備ソードを掴み、居合の姿勢から速攻でソードを「抜刀」する。
「見様見真似(なんちゃって)……断風(タチカゼ)！！」
驚くべきことにミーティアスはこれすらも避けてみせた、マジかよ完全に捉えてたろ今の。

「だが隙有りだぁ！」

「ぐぅう……まだまだぁ！」

腰に据えていた左手で拳を握り、抜刀居合を身を屈めることで回避したミーティアスへ叩き込む。浅い。
振り抜いた右手のソードを両手で握りなおし、一気に距離を詰める。
振り下ろし、振り払い、突き出すもそれら全てを回避されて攻撃を叩き込まれる。
ええい必要経費(コラテラルダメージ)だ、カースドプリズンは体力は無駄にあるのだから確実にミーティアスに攻撃を当てる。怯みにつながりそうな攻撃はガードし、隙を晒した瞬間にソードで奴の腹を打ち据えた。一般的な人類としてみれば長身であるミーティアスも、巨漢と言って差し支えないカースドプリズンと比較すれば小柄だ。思い切り吹き飛んで行ったミーティアスを追いつつ最初に投げ捨てたソード二本を回収、再度二刀流となって追撃を仕掛ける。

「この程度じゃや、私はぁ……流星(ミーティアス)は止まらなぁい！！」

「止めるのは息の根だ馬鹿野郎がぁ！！」
右ソードで振り下ろし、数フレームのディレイを入れて左ソードで横薙ぎの十字切り。最小の動きで回避された、そしてその場で逆立ちをするように膝と肘を曲げた倒立の姿勢となったミーティアスの全身が撓（たわ）む。次の瞬間、バネが伸びるように全身を伸ばして放たれた蹴りが俺の顎を打ち抜く。

「ぐ、お………！？」

痛みはない、ただ一瞬強制切断されたかのようなブラックアウトで視界が潰れ、全身から力が抜けかける。まずいぞ気絶モーションか！

「貰ったぁ！！」

「こなくそぁ！」

このままサンドバッグにされるのはマズい、攻撃を喰らえば気絶は解除されるがコンボを食らうのはマズい。差し込めるか……！？
腹に衝撃、気絶拘束が解け、視界と力（りき）みが回復する。態勢を立て直すよりも先にミーティアスの姿を……来る、腹に一発当ててから肘打ちでつなげるコンボだ。喰らったら詰みにリーチがかかる。

「嘘、差し込めるの！？」

「イアイフィスト流差し込み術だ」

逆手に持った左ソードを盾代わりに構えて肘打ちを受け止める、一秒遅かったら死んでたな。現在残り体力は俺が五割と少し、ミーティアスが六割。若干押されている……が、ここからひっくり返させ

てもらう。

竜騰虎闘のクロスファイア：デッドヒート（後書き）

この後にクターニッド戦が控えているという事実、そしてなにより
そろそろ２００話なのに未だに作中は夏休みが終わっていないとい
う事実
うわっ……私の小説、テンポ悪すぎ……？

ガチアサリ……ギア追加……新エリア……（唾を飲む音）

義気凛然のブレイカー：デッドウェイト（前書き）

ふと気づけば総合評価五万を超えていました

皆様の評価や感想のお陰で作者の脳みそは今日も元気に設定を吐き出しております。

今後とも拙作をよろしくお願いいたします。

アスファルトに傷を刻み、火花を散らしながらソードが下から上へ斬り上げられる。だが既にその場にはミーティアスの姿はない。ソードを持つ手に不自然な重み、見上げればそこにはプロペラソードを踏んで跳躍したミーティアスの踵が顔面へと振り下ろされんとしていた。

「ぬぉお！？」

「ちぃいっ！」

全力で仰け反り、かかと落としを回避する。胸部のプレートをガリガリと踵落としが擦り、片や着地し、片や仰け反りから復帰した時点で同時に動き出す。

大通りのど真ん中に陣取って、軽快に跳ね回るミーティアスを迎撃し、追撃を仕掛ける。

超必殺発動まで最早ドットレベルまでゲージが溜まった。だがどこで使う？　カースドプリズンの超必殺は他のキャラの超必殺とは少々毛色が異なる。

使えばハイ勝ちましたとはいかない、どこで切るかは慎重に吟味しなければ……お、チャーンス死ねい！　クソ、避けられたか。

「ちょこまかと……！」

「そう急がない急がない、時間いっぱい使って楽しもうじゃない」

クソ、いい空気吸いやがって……やろうぶっころしてやる。
互いの体力は多少の差はあるが三割程度、一気呵成に攻め立てれば削り切れるかもしれない。だが気を抜けば一気に削り切られる可能性もある。
それは向こうもわかっている、いやわかった上でやってるのかもしれないが、現状俺とシルヴィア・ゴールドバーグはゲージを温存した殴り合いを続けていた。

「そっちも超必殺(ウルト)……出せるんでしょ？　来なよ」

「その言葉そっくりそのまま返してやるよ」

ミーティアスの超必殺ミーティア・ストライクはホーミングする。
基本的には怯ませた後に確実に当てる技ではあるが、発動した時点でまず避けられないと考えていいだろう。
例外があるとすればミーティア・ストライクの着弾以上の速度かつホーミングを振り切る速度で動けるキャラであれば回避することが出来る、他にも瞬間移動を使ってスカすことも出来るが……今は関係ない。

(先に出すか？　後出しするか？　どっちも一長一短、状況を動かそうにも体力が心もとない……)

これが体力ゲージドット残し、レベルの崖っぷちなら一か八かで突っ込めたが……なまじ三割ほど残っているからこそ慎重になってしまう。

「隙有り」

「しまっ！？」

しまった、気が散った。気付いた時には時既に遅く。胸部に強い衝撃が走り、身体が怯みに縛られる。

「楽しかった、本当に楽しかったよカースドプリズン……私の勝ちだ」

ミーティアスが跳躍する、脚に蒼い粒子が収束し煌々たる輝きを宿す。

詰んだ？　いや、まだだ！　この怯みは拘束時間が短い怯み（小）だ、飛び蹴りが当たる前にギリギリでこちらの超必殺が間に合うはず……！　そうすれば避けることも出来る、筈。

超必殺は基本的に当たれば四割、クリーンヒットすれば五、六割を削る。ミーティア・ストライクは着弾と同時に広範囲に爆発を発生させる。

仮に避けたところで爆発のダメージが来るので完全に避け切ることは不可能だろうが、生き残ることは出来る筈だ。

「俺を……ナメるなぁぁぁぁ！！」

超必殺発ど……

「ママ、どこぉ……？」

限界まで集中した事で研ぎ澄まされた五感は、意識がそれを認識するよりも先に情報の精査を終え、結論を弾き出す。

声、子供、女、聞き覚え、栗きんとん、背後、爆風範囲、栗きんとん、ペンシルゴン、栗きんとん、武器、栗きんとん、ミーティアスの設定………

身体が勝手に動く、いや違う、これはちゃんと俺の意思だ。何故、どうやって、後ろに何が、それら全てを省略した俺の脳が全身へと放ったオーダーは「逃げるな」のただ四文字。

ミーティア・ストライクは着弾した対象にエネルギーを流し込み、内側から爆発させる技。つまりあの超必殺の定義は「接触」だ。

爆風は避けられない、この場から回避することは許されない。盾だ、盾を作れ、戦列を、重ねろ、連ねろ、前へ、押し出せ、バッシュしろ。

思考は後からついてくる、自分のしている行動に、後から納得を得る。

両手に握った剣で「X」の字を作るように放り投げ、腰の二振りを掴んで同様に重ねる。

四枚の壁、あたまがいたい、めがくらむ、蹴りがちかづいて来る、ふん張れ、ガードしろ、おしこめ、おしだせ、

タイミングを合わせろ。

「ここだ」

アメフトのタックルのようなガードの姿勢で、落下運動に囚われ始めた四枚の刃に寄りかかる。次の瞬間、四枚のプロペラソード越しに衝撃が身体を貫く。

傍目から見れば直撃、だが判定として攻撃を受けたのはカースドプリズンじゃない、ヘリのプロペラだ。

思考の加速が限界を迎える、内側から蒼光に食い破られていくプロペラソード達の先、剣の盾に攻撃を防がれたヒーローの表情がちらと見えた。

星型ゴーグルの奥にある目は驚愕に見開き、その口元は引裂けんばかりの喜悦に下弦の弧を描き……

爆ぜた。

「しなやすしなやす……っと」

直撃を免れたとはいえ、至近距離からの爆発はカースドプリズンの重量をして耐え切れるものではなく、容易く吹き飛んだ身体をそれでも立たせて立ち塞がる。

全身のヘリ装甲はひしゃげ、防御としての役割をほとんど成していない。だがそれでもカースドプリズンは倒れていない、僅かな体力をかろうじて残し、瀕死といっても良い状態でそれでも倒れない。

「ミーティア・ストライクはミーティアスの星の力を相手に注入して内側から爆破する超必殺……確かにプロペラでガードすればクリーンヒットは阻止できるけど、解せないわね」

「……何故逃げずに受け止めたか、だろう？」

なぁに、そんな大した事じゃあない。ウチの外道に散々な目に遭わされた彼女達へのちょっとしたお詫びのようなものだ。
俺が避けて爆風で被害が出ました、じゃ寝覚めが悪い。ついでに言えば奴と同類扱いされたくないので好感度を稼ぎたいとかそういうわけではない。

「おい栗きん(ガキンチョ)とん幼女、邪魔だからあっち行け。ママがお前を探してるぞ」

「う、うん……」

俺の背後、無駄にデカいカースドプリズンの身体に守られるようにして一人の幼子(NPC)がへたり込んでいる。直接的な関係のない事は分かっている、クロックファイアが暴れ回ったケイオースシティと、今俺のいるケイオースシティが別物だという事は分かっているのだ。
とはいえヴィランが避けた先にいるNPCがヒーローによって害される、この局面でそんなテンションの下がるような事は出来ない。
ここは古今より伝わる「雨の日に不良が子犬を拾うといいやつそうに見えるロジック」を使わせてもらう、さぁこのカースドプリズンを崇めるが良い……！

「いい子だ、後ろを振り向かず真っ直ぐに走れ」

「あ、ありがとうおじちゃん……」

「オジチャン……まぁいいや」

男は見た目じゃないよ、中身の若さだよ。遠目にこちらへと寄って来る栗きんとんの母親……こことは違うケイオースシティで人間機雷にされた女性と幼子が抱き合い、逃げていくのを確認して俺はミーティアスへと向き直る。

「どうしたヒーロー、困った人を助けないとかまるで一般人(モブ)のようじゃゃねぇか」

「あはは、言ってくれるね……カースドプリズンは人助けするような奴じゃなかったと思うケド」

「ここはコミックじゃねぇ、ゲームだ」

どれくらい前だったたか、実際は一時間も経過していないだろうが随分と昔に言ったことのように感じる言葉をもう一度告げる。確かパラレル設定をアメコミじゃこう言うんだったかな。

「世界線(ユニバース)がちげーんだよ、俺に……いいや、俺様がやる事にいちいち文句を出すな」

体力は圧倒的に不利、ヘリ装甲も使い物にならずプロペラソードも失った。だがどちらが有利か、それだけは確定している。

「超必殺を使ったな、ヒーロー」

「……来なよ、「カースドプリズン」を倒すならそれに勝たなきゃ意味がない！」

「こっちのターンだ」

カースドプリズンの超必殺は他のキャラクターとは毛先の異なるタイプであり、その内容はカースドプリズンというキャラクターの設定と密接に関係しているのだ。

カースドプリズンはコミック「ミーティアス」に登場するヴィランであり、ギャラクシア・レーベルにおけるデウスエクスマキナ、だいたいこいつのせいこと「ギャラクセウス」との因縁がある。

遥か太古の地球において、全能存在ギャラクセウスすらも予期せぬイレギュラーとして生まれたそれは、想像を絶する力を己の欲望のままに振るっていた。

だが星の命すらも脅かしかねないとギャラクセウスによって呪われた鎧を装着させられた存在、自由に歩く事ができながらも牢獄に囚われ続けた囚人、それこそが「呪われた牢獄（カースドプリズン）」。

そして、かつてこの星で暴れた強大な存在を模倣した力を与えられた青年こそが主人公であるミーティアスであり、カースドプリズンは己を封じる鎧を脱ぐためにミーティアスへと襲いかかるのだ。

「脱獄（プリズンブレイク）！！」

故に、カースドプリズンこそがミーティアスのオリジナル。ゲージを溜め、キューブを手にする可能性を捧げて発動する超必殺こそが、

限定的に本来の力を行使する「脱獄（プリズンブレイク）」！
全身のヘリ装甲が弾け飛ぶ、その下にある漆黒の鎧に亀裂が走る。本来はギャラクセウスの力を取り込む事で解き放つものであるが、ゲームなんだから細かい事は気にすんな。
先ほどのプロペラソードの如く、全身の内側から光が溢れ出す。それはミーティアスの蒼とは真逆の、緋色の輝き。
そして輝きを抑えきれなくなった鎧が弾け、全身が緋色に輝く細身の男が現れる。

カースドプリズンは極めて特殊な性能をしたキャラクターだ。無機物を取り込む事でその性質を変化させ、超必殺を使う事でキャラクターそのものが「変わる」。

「その姿にここまでワクワクするのは初めてだよ、プリズンブレイカー！」

脱獄の猶予は三十秒、ラウンドの時間と比べればあまりに短い。だがその力は、速さは、性能は……ミーティアスの完全上位互換だ。

「クライマックスだ、ケリをつけてやる」

「勝つのはいつだって……ヒーローなんだから！！」

蒼の流星と、緋の凶星が激突する。

義気凛然のブレイカー：デッドウェイト（後書き）

いわゆるゼロスーツサムス。なおプリズンプレイカーは半裸です、その上で発光しています。

赤　色　発　光　半　裸

何とは言わないけどザビーが一番好きです

暴虎馮河のフォビドゥンスター：オーバーヒート

体が軽い、3ラウンド通して鈍重な鎧を身に纏っていたがために、恐ろしさすら感じるほど身体が動く。

「速……っ！」

「なんだ、不敗の女王様は誰かに追い越される経験もないのか？」

「生憎無敗なものでね！」

1ラウンド目ではタコ殴りにされた、2ラウンド目は押し返したがそれでも鬱陶しかった。この3ラウンド目で全部ひっくるめて倍返しだ。

ミーティアスがバックステップで二メートル距離を離す、プリズンブレイカーが一歩ステップを入れて三メートル詰めて追い抜く。背後に回り込んだ俺はその場で背後を回し蹴りで蹴り抜く。

かろうじてガードを間に合わせたミーティアスであったが、火力が違う。吹き飛ぶ事こそなかったがその体幹が揺らぐ。

「驚いた……貴方、そっちが本職なのね！」

「生憎バトルスタイルは悪食なもんでなぁ！」

それが最適解なら魔法職だろうがゴリラだろうが……半裸の変態だってやるさ、それが攻略ってもんだろう！

ミーティアスが空中ジャンプで体勢を立て直さんとするが、プリズンブレイカーの空中ジャンプは二回虚空を踏める。空へ逃げたミー

ティアスに追いつき、宙を踏み抜き回し蹴りを叩き込む。
「どうしたどうしたぁ！　チキってタイムリミットまで耐えるつもりかぁ！？」
「ふふふ、ここからだ……よ！」
マジかよこいつ、まだ速くなるのか！？　ええい、燃え上がれカフエイン！　ニトロの如く！！
体力的にも超必殺的にももう止まることはできない、攻めて攻めて攻め続けて押し切らなければこちらが押し込まれるだろう。頭から煙が出そうな勢いで集中し、縦横無尽に駆け回るミーティアスに追随して攻撃を放ち続ける。
十秒経過、残り二十秒の時点で防戦一方であったミーティアスが動いた。
「決着をつけましょうか！」
「やってやろうじゃねえか！」
周囲に人はなく、乗り捨てられた車があり、ひしゃげた標識がある。なるほど、ここが最終決戦のステージってわけだ。オブジェクトの多さが足場の多さとイコールであるプリズンブレイカーはこの場所でなら最高のパフォーマンスを叩き出せる、そしてそれは同タイプであるミーティアスも同様だ。
「っ………！」
ミーティアスが車を駆け上がり、ひしゃげた標識を蹴り飛ばして加速する。回避以外の対処が使えない俺はそれを回避し、ミーティア

スの着地の瞬間を狙って足払いを仕掛ける。鎌の如く振るわれた俺の足がミーティアスの体勢を崩し、ミーティアスは背中から倒れ……ない。

「まだまだぁ！」

空中で身をひねり、仰向けからうつ伏せの姿勢に変えて腕立て伏せのような姿勢で着地したミーティアスは、そのまま腕の力だけで跳ね上がるように起き上がる。そして足払いを放った姿勢の俺の顔面へとサッカーボールを蹴るかのようにフルスイングの蹴りが放たれる。

喰らえば死ぬ、首をひねり腕でいなすようにして蹴りのベクトルを変更、ザリザリとミーティアスのつま先に削られる腕の感触はそのまま体力の減少に繋がる。だがただでは起き上がらないぞ。振り抜かれた足をつかみ、立ち上がりながら全力で引っ張ることでジャイアントスイングの体勢に持ち込む。

「残り十秒！」

ここで決める！！

ミーティアスが対応するよりも速く振り回し……ではなく、その場で地面へと叩きつける。だがスイングの体勢に入らなかった時点で、こちらの手は見透かされていたらしい。「暴れ」が俺の手から奴の足首を弾き飛ばし、数度のバク転を経てミーティアスが体勢を立て直す。

思考がさらに加速する、体内のカフェインが猛烈な勢いで枯渇しているのが分かる。俺の手から奴の足首が離れた時点で既に身体は動き出していた。奴がバク転で離した距離をこちらから詰め、さらに拳打のラッシュを叩き込む。向こうはガードでそれを耐えようとしているみたいだが……イアイフィスト流をなめるなよ。

「12フレームの隙があれば差し込める……！」

データで構築された世界とキャラ、だがそれを操るのは生身の人間だ。外部からの衝撃に対して常に一寸の狂いもなく最適解を出し続けることは不可能、必ず綻びが生まれる。そしてその一瞬の隙間こそが人外格ゲーにおいて比較的人の形を維持するバトルスタイルイアイフィスト流の真髄！　人の形を捨てる人外どもを「人の形」に縛り付ける生物としての本能を穿つ究極の盤外戦術！

幾度となく叩き込まれる衝撃にガードが揺らぐその一瞬、腕を前面に構えた盾に隙間ができる瞬間に俺の右手が空気を切り裂いて唸る。

「そこだぁ！！」

「がひゅっ！？」

拳じゃない、蹴りでもない、ピンと伸ばした五本指による一点突破の貫手がミーティアスの腕の隙間に刺さり、無理やりこじ空ける。驚愕に目を見開いた奴の喉に俺の指の先端が突き刺さり、生物としての本能が喉という急所を穿たれたという事実に奴の身体を硬直させる。

「くぅぅぅたぁぁぁぁばぁぁぁぁぁれぇぇぇええ！！」

右腕を引き抜き、全身を力ませ身体を捻る。回転のエネルギーを右足だけを支柱として支えて独楽のように一回転、全身全霊のエネルギーを込めた左足による回し蹴りを放つ。

勝利の確信、カッツォのことも大会のことも何もかもが頭の中から

消し飛び、ただこの一撃に思考が先鋭化する。

だがしかし、いやここはやはりと言うべきか。俺の猛撃により体力を一割まで削り切られ、システムによる硬直ではなく本能的な強張りに身体を縛りつけられても……そう、絶体絶命の王手を掛けられたこの一瞬でさえ、シルヴィア・ゴールドバーグは「プロゲーマー」だった。

「なめるなぁぁぁぁっ！！」

身体を縛る本能という名の鎖を理性で毟り取り、無理やり復帰したミーティアス。殺意すら漂う叫びとともに奴もまた蹴りの体勢に入る。ただの蹴りでは威力が足りない、回し蹴りでは時間が足りない。だからこそ奴が選んだ最後の一撃は……その場で足を限界まで上へと蹴り上げるハイキックだった。

三秒、二秒、一秒…………零。

「うごぉ！！」

「ぐふぅ！！」

互いの蹴りが激突する、俺の胸に突き刺さった奴のつま先から放たれた衝撃は胸筋を貫通して肋骨と心臓を揺らす。奴の脇腹に突き刺さった俺の回し蹴りもまた、骨の無い部分から内臓にダメージを与える。数秒の沈黙、システムによるダメージ判定が互いの体力を削り……数時間にも思える数秒が経過し、そして結果が出力された。

「ぐ…………」

俺の全身から力が抜ける、視界がブラックアウトするこの感覚はまごうことなく体力がゼロになった証拠。

（あそこから後の先取って切り返すとか怪物かよ………）

所詮アマチュアゲーマーでは無敗のプロゲーマー様には勝てなかったか。

そう消えゆく視界の中で最後に見た勝者の姿は……

「あ…………」

全身から力が抜け、倒れゆく奴の姿だった。

DOUBLE KO（ダブルノックアウト）

これどうなんの？

暴虎馮河のフォビドゥンスター：オーバーヒート（後書き）

キャストオフするくせに内容的にはアクセルフォームという

どうしてもキリよく話を分けたかったので今回は少し短めです。

エンスト・ロスタイムファンタジスタ

『ログアウトします』

あれ、ログアウトするのか。てっきり4ラウンド目に入るのかと思っていたのだが。すべての感覚が外界から切り離されたような感覚、起床するときのように肌に触れる空気を認識し、目を開けば頭全体を覆うVRシステムの無機質なボディを視認し、そしてやかましいほどの大歓声が鼓膜を打つ。

「うるさ……」

「自業自得だよバーカ」

「うっせーぞ大腸大戦争（レストルーム・ウォー）野郎」

「下手に騒ぐと電波に声乗るよ」

それは困る。確かに俺は正体不明の助っ人カボチャ頭だが極めて一般的な人間なのだから、爆弾魔やトイレ野郎と一緒にされるのは不本意だ。

「つーかログアウト？　引き分けで両方負け扱いなの？」

「違うよ、馬鹿二人があまりにも命削ってるような戦いを繰り広げたから一旦休憩挟むんだって」

「つまり4ラウンド目はやるのね……」

なんというか、精魂尽き果てかけている。さっきの相打ちで出せるものだし尽くした気分だ、これはもうさっさと負けてカッツォの奴に手番渡したほうがいいんじゃ……と、カッツォから中身の入った缶を投げ渡される。

「ほれ、トゥナイトは在庫切れだったけど強襲中隊（アサルトカンパニー）から拝借してきた」

「おっマジかよバックドラフトじゃん！」

プシュッと開いてぐびっと一気。おぉ……身体にカフェインが駆け巡る、消費して枯渇しかけたライオットブラッド・トゥナイト分のカフェインが補填されて元気が漲ってきたぞ。こう、ドバドバとあまり健康的ではない感じに！

「これ日本製かよ……つーかいいのかよ、俺にガソリン補給するような真似してさ」

「お前にとってカフェイン＝燃料（ガソリン）なのか……はは、ここで君の邪魔したらお……ごほん、僕の好感度に関わるからね。それに」

「それに？」

「仮にシルヴィアが負けたとしても、その勝利者に七割勝てる僕が逆説的に最強ってことになるから」

「超理論かよ……」

三すくみって言葉を知らないのだろうかこいつは、いやじゃんけん

の概念は知っているのだからそれはないはず……

「うーん、ヘルメットで顔が見えないはずなのに馬鹿にされてるって分かるんだけど」

「馬鹿にしてるなんてとんでもない、心配してるんだよ」

お前の知性を。

結局のところを言えば、だ。サンラクではシルヴィアには勝てない。

それはカッツォ……魚臣　慧にとっては純然たる事実であった。

確かに先ほどの試合はプロゲーマーの視点を以てしても凄まじいの一言であった。シルヴィア・ゴールドバーグと同じタイプの、そして無敗の流星に匹敵する力を持つプレイヤーをぶつけた場合にどうなるのか……既にネットの話題はシルヴィアと、それに対抗するカボチャ頭の事で持ちきりになっているだろう。

だが、ただ強いだけではシルヴィアには勝てない。サンラクの最高潮（ハイテンション）はシルヴィアの喉元に届きうるものであった、最後の相打ちとてどちらが勝ってもおかしくない。だがログアウトしたサンラクの消耗ぶりを見て確信した、仮に別の日に改めて試合をするのであればサンラクにも勝ち目はあるかもしれないが今は無理だ。なにせ、シルヴィア・ゴールドバーグというプレイヤーの最大の武器は時間が経過するほどに脅威を増していくのだから。

（とはいえ、サンラク……キミはよくやってくれたよ）

シルヴィア・ゴールドバーグ最大の武器、それはテンションによって急上昇するバトルテクニックでもリアル・ミーティアスと称されるバトルセンスでもない。どれだけの激戦を、どれだけの時間続けても一切パフォーマンスが劣化しない化け物じみた継戦力（タフネス）、それこそがシルヴィアを無敗たらしめる最大の武器なのだ。

体力を削ることができないラスボス戦、単純にして極めて悪辣すぎる事実こそがかつて「連続五十人抜き」などという正気を疑うスコアを叩き出したシルヴィア・ゴールドバーグの真の恐ろしさである。

（流石にエクストララウンドに引っ張り込むまで粘るとは思わなかった）

危うく勝ちかけた時はこいつ自分の言ったこと忘れているのかと奴の記憶領域の心配をしたものだが、結果的に最高のコンディションで慧へとパスが放たれるのだ。

（とはいえ、俺個人としてテンションモンスター共の共食いがどうなるのか見たいのも事実だしなぁ）

妙なところで察しのいいサンラクのことだ、自身が追加のエナドリを渡した意味は察しているだろう。即ち、「全力で戦ってこい」という後押しを。

もしもシルヴィアが負けるならそれまでのこと、シルヴィアがサンラクに勝ったというのであるなら、その時は奴の無敗記録を終わらせるのは自分の役割になるだけだ。

「よかったの？　折角夏目ちゃんやサンラク君、そしてこの私が頑

張ってたってのに」

「……ま、忌々しいけどその点ではシルヴィアを信じてるからさ」

いつだって世の中は王道に収束する、どれだけ邪道に逸れても、最後は……

「最後は必ずヒーローが勝つ、ってね」

今の俺には腹の立つことが三つある。

まず一つ目、スターレインのプレイヤーが使うキャラ当て勝負で二敗したので寿司が確定したということ。ああ、シルヴィアはミーティアス確定なので除外される。

次に二つ目、渡された「ライオットブラッド・バックドラフト」が日本産だったこと。そこは米国産にしろよ、絶妙にフルスロットルにさせないあたりに奴の性格の悪さが伺えるな。

そして三つ目、エクストララウンドに向かう俺を見るカッツォの目が完全に負けイベで死ぬＮＰＣを見るそれであったことだ。

なるほど、こちらが慢性的な頭痛と気だるさをカフェインでごまかしている中、滅茶苦茶ピンピンした様子でインタビューに答えていたシルヴィア・ゴールドバーグを見れば実力云々の前にタフネスがそもそも桁違いであったことは明白だ。さっきまで殺し合いみたい

な迫力で戦ってましたよねあなた、なんでそんなピンピンしてるん？
対人戦と対モンスター戦では精神の削られようにも違いが出てくる、金晶独蠍やリュカオーン、シャチ野郎相手に戦い通したこともあるが、あれはあれで結構隙が多めに設定されているのだ。
自分で言うのもアレだが結構激戦であったはずなのに無敗のヒーロー殿は全く消耗した様子が見られない。これは長期戦によるパフォーマンスの低下は見込めないだろう。

なるほど、消耗したアマチュアとまだまだ余裕のプロゲーマー、どっちが勝つかなんて言うまでもないだろう。
だがなカッツォ、俺は今腹を立てているのだ。シルヴィア・ゴールドバーグにナメた目で見られた時ほどの瞬間火力は出せないが、それでも「ただで負けてやる気はない」と思えるくらいには腹を立てているのだ。
ゲームの攻略にはモチベーションがいるがゲームを始める理由は理屈じゃねーんだよ、悪役には悪役なりの散り様があるってのを見せつけてやろう。

「エクストララウンドでは互いにゲージの上昇量が二倍になる、さらに通常ラウンドでは出現しないＮＰＣが出現する……」
システムからして短期決戦を推奨する内容であるわけだ。俺を囲むようにしてハンドガンではない、アサルトライフルを構える軍隊(ＮＰＣ)の皆様を眺めつつ、数十秒後にやってくる死神の姿を思い浮かべつつ俺は動く。

「ショッピングの時間だ」
その戦車いいね、戦闘機とか来ないのかな？

エンスト・ロスタイムファンタジスタ（後書き）

カフェインの有無で精神状態が切り替わるとかこいつ大丈夫なんだろうか……（他人事）

ゆうかん最遅厳選が手間取ったとかそういうわけではないです、はい…………はい、すいませんでした。

迫る運命の日（）、果たして更新ペースは維持できるのだろうか……

カースドプリズン：エクストラカスタム。全身に銃火器を仕込み、ジェットエンジンをチャージする事でバイク五台分の出力に手綱をかけた高機動型以上の、非常に大雑把な大出力を実現した長期戦の果てにのみその姿を見せるレアな姿。

「まぁ、小回りが利かねーんだから、こうなるわなぁ」

そんなエクストラカスタムであったが疲労の「ひ」の字も感じさせない流星にフルボッコにされた事で見るも無残な姿となっていた。一応こちらもジェットの噴射でその身を大質量の凶弾とするタックルを命中させたり店員（軍人）さんからタダで強奪（もら）ったロケランを叩き込んだりもしたのだが……終盤あたり、ロケランの弾頭をパリィしてなかったかあんにゃろー。

「さて……体力比は2：5ってところか……」

数字だけ見れば3ラウンド目とほぼ同じ割合ではあるが、生憎与えるダメージ量は増えていない。逆転の可能性は非常に細く、薄い。

「とりあえず隠れてみたが……見つかるのは時間の問題だ、し……」

ゲージは既に溜まっている、それは向こうも同じでありどちらが先に超必殺を切るかと機を伺っていたのだが、じわじわと体力を削られていたというね。

「いっそキューブ確保に動くか……？　いやいや、今更チキるのも

なんだかなぁ」

「いいね、そういう敢闘精神は嫌いじゃないよ」

「これぞ致命魂だ……って」

現在、オフィスビルの一つへお邪魔して、十階カフェスペースの机を椅子代わりに休憩していたのだが、横から淹れたてのコーヒーが入った紙コップが手渡される。

「やぁ」

「よっしゃオラァ！」

「一瞬の迷いもなくコーヒーぶっかけたよこの人！？」

「しっかり反応してるじゃねーか！」

クッソびびったわホラー映画かよ！　なんでピンポイントで場所嗅ぎつけてんだこっわ！　こっわ！！

それはそうと話は変わるが世の中には二種類の人間がいる。突然目の前にゾンビが現れ襲い掛かってきたときに、身体が硬直する人間と反射的に動く人間だ。

ちなみに俺は迷いなくショットガンを叩き込んで蹴りを入れるタイプだ、幕末で辻斬りしたり世紀末で騎士したり無人島でガンマンやってると不意打ちに対してほぼオートで反撃できるようになるものだ。

「さぁ、引導を渡してあげるよ！」

「悪いが往生際の悪さには定評があるからなぁ！」
なお死に戻りによる効率化及びイベスキップは除く、むしろ自主的に死にに行くようになってからが作業の本番よ。一流の作業員は放たれた弾を自身の額に導くことが出来るのだとか。
流石に俺はまだそこまでの高みには上り詰めていない、せいぜいマズルフラッシュから大体の弾道予測して急所に当たりに行くくらいが限界だ。

ぶちまけられたコーヒー、その形状を留めるためのＬサイズ紙コップから解き放たれた漆黒の液体が宙を舞い……

「炸裂・脱獄（リアクティブプリズンブレイク）！！」

別に新たな超必殺という訳ではない、ただダメージは無くとも当たり判定はある、ただそれだけで飛び散るスクラップはロケットランチャーと同じだけの価値を持つ。
炸裂装甲（リアクティブアーマー）の如く弾け飛ぶエクストラカスタム・アーマー。熱々のコーヒーにバックステップを選んだミーティアスへと、弾け飛んだ戦闘機の装甲が黒い帳を切り裂いて奇襲を仕掛ける。

「おおっと！　随分と手癖の悪い……ぃいっ！？」

「俺の手癖は凶暴でね、つい反射的にこんな事もやっちゃうんだよ……！」

コーヒーの帳へと手を突っ込み、そのまま向こう側にいるミーティアスの顔面を掴む。場合によりダメージ覚悟でマグマの川や毒沼を横断する事もある、それに比べれば熱々のコーヒーに手を突っ込む

ことなどぬるいぬるい！

第一ゲーム故実際に激熱というわけではないのだ、リアルなグラフィックに騙されるな、この世界じゃ六発中六発弾込めされた大当たり確定ガチャを六回回しても死にはしないのだから。

「これからメインでこのゲームをやるであろうＭｓ．チャンピオンに一つレクチャーしてやる」

「ジャ、ジャパニーズ寝技！？」

どっちかといえばプロレスじゃねーかな、まぁいいや。

「これが仕様なのかバグなのかは知らないが……今この瞬間は、存分に悪用させてもらう！」

左腕はヒーローの首を、右腕はヒーローの腿を、決して離さぬと力強くクラッチし全身全霊の蹴りを窓へと放つ。

「このゲーム、落下ダメージは０に設定されているから多分成層圏からパラシュートなしでダイビングしても無傷な訳だが……」

だが、そうすると疑問が残る。たってそうだろう、落下ダメージが０になるのであれば投げ技のダメージが０になってもおかしくないはずだ。

仮にプレイアブルキャラによる直接干渉がある場合はダメージが発生するのであれば、それはそれで気になることがある。

そんなわけでＮＰＣ十数人とカッツォ操るアムドラヴァの腰を犠牲に検証を済ませた俺は、ここに一つの隠し弾を用意した。

窓ガラスが弾け飛び、十階の高さにプリズンブレイカーとミーティ

アスが躍り出る。

「通常の場合落下ダメージは０になる！　だがビルから紐なしバンジーして踏んづけた車は大爆発したし、脇に抱えて一緒に落ちたＮＰＣは大ダメージを受けた！」

そこから導き出される事実、それは「ダメージは０でも物理演算自体はされている」という事。

「例えばこんな風にぃ！　超高度からプロレス技を仕掛けたらぁ！！」

「え、ちょっ、まさか！」

半分残った体力が気の緩みを招いたか。今更逃げようとしても無駄だ、プリズンブレイカーのスペックはあらゆる面でミーティアスを上回る、そんな踏ん張りもなっていないばたつきで死ぬほどヤワなキャラでもない！！

「似非超必殺（エセウルト）！」

空中を二歩踏み高さを稼ぎ姿勢を整える。さぁ、二階から落とされる目薬の気分を味わあわせてやる。

物理演算自体は作用している、ただ落ちただけではダメージは発生しない、だがダメージは無くとも落下によって発生するエネルギーそのものは確かにそこに在る。

喰らえ、ゲージを一切消費することのなく放たれる大ダメージを！！

「衝撃変換（インパクトコンバート）！！」

重力が緋色と蒼色を絡め取る、それは翼を持たない人間で在るがゆえに逃れられない摂理であり、ミーティアスを地獄に引きずり込む無色の腕だ。
ガッチリとミーティアスをクラッチした俺の身体が凄まじい速度で地面へと落ちて行く。数十メートルは優に超える高さから飛び出した二人の人間は瞬く間に空から追放され、大地はそんな馬鹿どもを塩対応で受け止める。

激突。

砕け散る大地、アスファルトはただ一点に着地した二つの足裏を中心に蜘蛛の巣を思わせる亀裂を走らせ、全身の感覚が消失したかのような痺れが踵から膝へ、膝から腰へ、脊髄を伝播してミーティアスの身体の中間に凄まじい衝撃を走らせる。

「………」

「………」

俺の全身を縛り付ける落下硬直、ミーティアスの全身を縛り付ける仰け反り硬直。果たして先に回復したのは……ミーティアスであった。
その体力は残り一割、渾身の空中殺法は果たして流星を落とすには

あと一歩足りなかった。

「……この技、五割削るにはビルで言うなら十二階以上から飛び降りないとダメなんだよ」

まさか土壇場でやるとは思ってなかったし、そもそもシルヴィア・ゴールドバーグ相手に出来るとも思っていなかった。十二階に潜伏していれば……あと二階分登っていればぁ……！！

「言い残すことは？」

例えるなら断頭台に首をセットされた気分か、それとも崖っぷちに立たされ背中に手を添えられた気分か。

成る程、じゃあ俺が言うべきは……

「うーん…………あー、そうだな…………ええと、強いて言うなら………………」

「………？」

おいおい、ここまで露骨にやってるのにまだ気づかないのか？　仕方ねぇな、種明かししてやるとしよう。

「丁度五秒前が「三十秒」だ。」

「っ！！」

見開かれるヒーローの眼(まなこ)。見上げた先、そこにはキラキラと輝くガラスの雨に混じって猛スピードで降り注ぐ漆黒の金属片達の姿。

「ただでは死なん！　ここがどこだか分からないようなら教えてやるよ……ここはぁっ！！」

鎧が俺に自らを着せる。かつて世界を荒らした凶星は再び呪われた牢獄へと囚われ、されど存在が切り替わったことで硬直の溶けた鎧の魔人。

俺は渾身の力で一見すればアイスを移動販売するトラックにしか見えない輸送車を破壊する。

衝撃変換が隠し弾と言ったな、であるならこっちはへそくりとでも言うべきか、使うことなく放置していた初期装備、俺の最後の悪あがき！

「俺の「初期位置」だっ！！」

「っ………お前っ！！」

「ああ、言い残すこと、だったな」

ガトリングと、ショットガンと、改造トラックエンジン。

跳躍と、宙返りと、飛び蹴り。

スクラップを纏う黒鎧が引き金を引く、光を纏う流星が空に蒼を描く。

天へと登る鉛の雨を地に降る流星が蹴散らし、光と衝撃が俺の内側から溢れ出す。

「寿司より焼き肉ぅーーーーっ！！！」

「だからなんでぇ！？」

大爆発。

まぁ、そのなんだ、最終的にカッツォｖｓシルヴィアのマッチングまで漕ぎ着けたわけだし、結果オーライ？

悪の足掻き（後書き）

っかしーな……１０００文字くらいのダイジェストでちゃちゃっと負けさせるつもりだったのになんでこいつデバッグ技とか編み出してるんだろう……

「いや寿司だって」

「お疲れ様の言葉もなしかよ、傷ついたから焼き肉な」

「どっちでもいいっての……」

「カッツォ君のそういう白黒はっきりつけずに流すところおねーさん良くないと思うなぁ」

「だからお前はユニーク自発できないマンなんだよ恥を知れ」

「あっれなんで息ピッタリにこっちをディスるんだろうねこいつら？　つーかどちらにせよ僕の奢りじゃないか……」

「そんなことよりカボチャ君や、観客にファンサービスの一つでもやったら？」

ええ……？　ただの高校生にそんな無茶振りをするもんじゃないだろ……つーか曲がりなりにも負けたプレイヤーをそんな仰々しく担ぎ上げるもんでもないだろう。

えーと、えーと……げっ、こういう時に限って的確にマイクを持ってくるんじゃないよ名前忘れたけどささくれグラファイトさん。

『あー、えー……ライオットブラッドを飲めばプロゲーマーにも善戦できます、皆も是非』

「君、ガトリングドラム社の社員か何かだっけ……？」

う、うるせーやい！　俺はお前みたいに観客席に投げキッス飛ばせるほど愛想を安売りしてねーんだよ！

クソ、頭が痛い。燃料切れだ、ライオットブラッドの過剰摂取はリスキー過ぎるしこりゃ今日中にシャンフロ再開は難しそうだ……

「Ｍｒ．　Ｐｕｍｐｋｉｎ　Ｈｅａｄ！」

「うおっ！？」

と、俺は真横からがっしと両手を掴まれる、何事かと振り向けばそこには目を輝かせたシルヴィア・ゴールドバーグが。やはりというか消耗した様子は見られない。

「Ｇｏｏｄ　Ｇａｍｅ！　Ｇｏｏｄ　Ｇａｍｅ！　オミゴト！　アッパレ！」

「え、あ、どうも……」

ブンブンと勢いよく振り回される握手がシルヴィア・ゴールドバーグの興奮っぷりを如実に表しているが……そうだ、確かあのリア充白マッチョは日本語話せるんだったな。

ヘイカマーン、現実世界にはバベルがインストールされてないから通訳がいるんだよ。よしオッケー、ちゃんと伝えてくれよ？

「ふふふ、残念だったなシルヴィア・ゴールドバーグ」

「？」

「俺はあくまでも前座、ウチのカッ……じゃなくて、ウチのボスは「今の僕ならシルヴィア相手にストレート勝ちできる」と宣言したぜ」

「え、言ってないけど」

「そうだよ、「僕が勝ったらシルヴィアに猫耳メイドコスプレさせてやるぜぐひょひょ」とも言ってたんだよ」

「いや言ってないけど！？」

「そ、そうよ！　ケイが貴女の不敗神話を終わらせるんだから！……って言ってた、かな？」

「メグゥ！！？」

お前、人が必死こいて時間稼ぎしてたのにまさか普通に負けるなんてこと、認めるわけないよなぁ？
しばしのラグを経て、シルヴィアに俺たちの言葉が伝わったらしい。なんでも雑誌の表紙とかを飾ってもいるらしい端正な顔が、凶暴な笑みに歪む。

「安心しろよ、俺達が責任を持って背水の陣を布陣してやる」

「大トリのプロゲーマー様なら崖っぷちでもよじ登ってくるよね？」

「が、頑張って！」

「思いっきり崖から蹴落とそうとしてるくせに……まぁいいや」

ジト目でこちらを見るカッツォであったが、どちらにせよ奴は負けるつもりで戦うわけではない。
ちょいちょい「仮想シルヴィア」として俺にミーティアスを使わせて調整もしたし、ペンシルゴンのやつとＮＰＣの行動パターンや建物の作りを検証もしていた。夏目氏はもう少し頑張ろう。

「まぁなんだ、ここまでお膳立てしてやったんだからさ……半端な結果は残すなよ」

街を蹂躙し尽くしたペンシルゴンや、ミーティアスとタイマン張った俺に負けないくらいの名試合を見せてくれよな。

「……僕が、いや俺が勝ったら打ち上げで何食べるかは俺が決めるから」

「焼き肉だな」

「寿司だね」

「イタリアンにします」

イタリアン焼き肉……？

「こうやってハッキリ話すのは初めてねケイ」

「いつも怪しい日本語と英語だったからね……シルヴィ」

ヒーロー対ヴィランであればヴィランキャラは三十秒程先にスポーンする。だが互いにヒーローキャラであった場合、またはその逆の場合はプレイヤーは同じタイミングでスポーンする。

植物人間が起こした凶行も、爆弾魔が齎した破壊も、呪われた鎧が刻んだ傷跡も綺麗さっぱり消え去った混沌の街で二人のヒーローが相対する。

「アムドラヴァを外してくるなんて、意外ね」

「あの外道共（バカ）は好き勝手妄言言ってくれたけど、あながち間違いじゃないこともあるんだよね」

かたや不敗の流星に、かたや白銀の上着（ジャケット）を羽織った青年が人差し指を突きつける。

「今日俺は君に勝つ、この……シルバージャンパーでね」

確固たる意志、ビッグマウスでも虚仮威しでもない、必ず勝つという強い闘志は電脳の街並みの中であってもシルヴィアへと熱量を伝えさせる。

幾度となく打倒されても諦めずに対策を考え、一度はシルヴィアを追い詰めるに至った男の姿。シルヴィアはその諦めの悪さをこそ愛いと思うのだ。

「それはそれは……とっても楽しみだね。ああそうだ、一つ聞きたかったんだけど……ネコミーミメイドが趣味なの？」

「ああ、彼らは頭がおかしいんだ。妄言だから気にしなくていいよ」

「そう？　残念。じゃあ最後に……もし私が勝ったら、リアルヴィランズの正体を教えてもらおうかしら」

「あっはっは、あいつらのリアル割れ程度なら上等だ」

人の事をトイレの妖精扱いにしやがったのだ、この程度の意趣返しは許されるだろう。そしてそれが開戦の合図であった。

シルバージャンパー。コミック「ゴールドエッジ」に登場するサブキャラであり、ギャラクシア・レーベルの中では最古参に位置するキャラクターである。

その歴史の長さから幾度となく設定の追加、変更が行われてきたキャラクターでもあるが、メインとなる設定は常に一貫している。

「シンプルな分、使いやすいが使いづらい！」

「さぁ、どう僕に勝つつもりなんだい！」

疲労を感じさせない「ように見える」蒼い流星。だが慧の見立てではクロックファイアとカースドプリズンの……友人達の奮戦は確かに無敗の王者に綻びを作っていた、と確信する。

疲労によるパフォーマンスの低下ではない、継続によるパフォーマンスの最適化。言い換えれば慣れが混じった事で動きがパターン化しているという事だ。

「何も相手をぶん殴るだけがこのゲームの「勝ち方」じゃあない……っ！」

慧、ペンシルゴン、サンラク、そして夏目の四人による検証の結果、このゲームで使用できるキャラクターは大きく分けて三つに分類されるという結論が出された。

まずカースドプリズンやミーティアスのような「闘士（ファイター）タイプ」。

単純な殴り合いでこそ輝く基本的なタイプ、最も格ゲーらしいキャラクターだ。

次にクロックファイアなどの本体性能が非力なキャラが該当する「黒幕（フィクサー）タイプ」。

力ではない、智謀と計略を以て街の裏側から戦局を操るテクニカルなキャラクターだ。

そして最後に、シルバージャンパーが該当する……「捜索者（シーカー）タイプ」。

正面切って戦うには地力が足りず、街の陰に潜むには性能が素直すぎる。であればこのカテゴリのキャラクターは何に秀でているのか。
「時代（システム）は変わった、いつまでも力に頼っているようじゃ……置いていくよ、ミーティアス」

縦横無尽に駆け回るミーティアスが放った一撃は、何もない虚空を薙ぐ。消えたのではない、避けられたのだ。
見上げれば高らかに跳ね上がった白銀が壁と虚空を蹴ってビルの曲がり角に消えるところであった。

シルバージャンパーの能力は非常にシンプルである。星の光を宿しているわけでも、魔眼から無尽蔵に爆弾を取り出すわけでもなく、ただ高く跳べる……それだけ。
だが侮るなかれ、その跳躍力は全キャラの中でも突出しており、超必殺を使用したカースドプリズン（プリズンブレイカー）をも上回る四度の空中ジャンプを可能とする。
尤も、言い換えればシルバージャンパーよりも多くは飛べずともより速く跳ぶことが出来、より鋭い攻撃が放てるミーティアスやプリズンブレイカーと比較すればやはり馬力不足は否めない。
だがそれはシルバージャンパーにとってはディスアドバンテージと言うほどでもない。

このゲームにおいて勝利の定義は二種類存在する。
一つは単純明快に相手を打倒する「殴り合い」、そしてもう一つは……
「ケイオースキューブの、確保……！」

この街のどこかに存在する、虚構の街を支える要石。ケイオースキューブと呼称される立方体の確保、即ち「宝探し」である。
だがそれは戦闘を避ける名案などではない。キューブの確保にはゲージが必要であり、ヒーローがゲージを溜めるためには……

「く、狙いはNPCヴィランね……！」

思えば、確かに夏目(ナツメグ)　恵はケイオースキューブの確保による勝利を目指していた。だが続く名前隠し(ノーネーム)と顔隠し(ノーフェイス)の暴れっぷりに誰もが、そうシルヴィアすらもがケイオースキューブの獲得を忘却していた。
いや、忘却という例えは正しくはない。これは、意識を外されていた？

「ま、直接的にシルヴィアちゃんを削れなかった私からのささやかなプレゼントってやつだよ」

「あーなんだ、そういうのって……アビスデストラクションみたいな感じの……」

「もしかして、ミスディレクション？」

「あーそれだ、夏目氏賢いねぇ」

「頭カボチャだから中身(脳みそ)くり抜かれてるんじゃないの顔隠し(ノーフェイス)君？」

「うるせぇ乾燥女騎士（ゾンビ）、トイレで湿気（シケ）ってろ」

「人を煎餅みたいに言うのやめてくれますぅー？」

（初動が遅れた。ケイの狙いはキューブの確保？　ならＮＰＣヴィランを相手にゲージを稼……）

「ウチのねちっこい方の外道曰く、「対人戦で隙を作るなら、七割の嘘に一割の真実を混ぜろ」なんだと」

「くぅっ！？」

ちなみに残り二割は「非常に曖昧なはぐらかし」である。
シルヴィアの思考が「戦闘」から「追跡」に切り替わった瞬間、身体の動きが瞬間的なものではなく継続的なものに変わったその瞬間、シルヴィアの身体が真横から地面と平行に跳び込んできたシルバージャンパーのタックルを受けて地面を転がる。

「そしてウチの大雑把な方の外道曰く、「対人戦で有利に立ち回るなら、想定外を味方につけろ」だとさ」

ミーティアスが起き上がり、シルバージャンパーを睨め付けた瞬間、ビルの壁面を破壊して二人のヒーローのちょうど真ん中に割り込んだ巨大な肉塊が咆哮を上げた。

「もうここはお行儀よく戦うコロシアムじゃない、さぁどうするヒーロー（シルヴィ）？」

アンカーへバトンを全力投球（後書き）

鰹「仲間達の力を借りるぜ！」
鉛筆「積極的に嘘をついていこう」
半裸「積極的に奇行をしていこう」
鰹「外道過ぎる……まぁやるけど」

実は昨日の段階で急遽カッツォの戦闘シーンまるっと書き直していたり。
二話くらいでＧＨ編は畳んでシャンフロに戻りたいなぁ……（希望）

結実に至る道（前書き）

Xデーが近づいているのもありますが、私用が積み重なっているので毎日更新は少し困難かもしれません。
ご迷惑おかけしますが今後ともシャンフロをよろしくお願いします。
ちなみに密林的な理由でXデーは４日から７日を予定しております。

「実際のところさ、アレをされるのが一番面倒くさいよね」
「夏目氏もそれっぽいことはやってたけど、同じヒーロー同士ヴィラン同士でマッチングするとああなるわけで」
カッツォがシルヴィア・ゴールドバーグに提示したものはズバリ「選択肢」だ、そしてこれこそがこのゲームにおける最大のギミックであると俺たちは考えている。
まず最初の二択、「シルバージャンパーを操るカッツォはキューブ確保とミーティアス打倒のどちらを狙っているのか」というもの。一見すればキューブ確保を優先しているようにも見える、だが先ほどの奇襲によってシルヴィア・ゴールドバーグの中にはこのまま奇襲を続けてこちらを削りきるのではという疑念が植え付けられた。
そして次の二択、いや三択は「ＮＰＣヴィランとプレイヤーの三つ巴の状況でカッツォはどうするかどうか」というものだ。この選択肢のいやらしいところは最初の二択とリンクしているということだ。カッツォがキューブ確保を狙うのであればあの肉達磨ヴィラン……確かゼノなんたらとかいう名前だったが今はどうでもいい。あの肉達磨を放置すればカッツォにゲージ稼ぎを許してしまう。
ならばカッツォの妨害をすればいいのか、ところがどっこいそうはいかない。
もしカッツォがミーティアスを倒す事を目的としていたならば肉達

磨を放置してカッツォに殴りかかることは奴の想定内ということになる。
つまりは奴の術中と言うことであり否応にでも警戒心が高まる。
では第三の選択肢、カッツォにゲージを渡すのを覚悟で肉達磨を片付けることでミーティアスもゲージを稼げば良いのか？
ああそうとも、シルヴィア・ゴールドバーグはそれを選べない。この選択肢は最初の二択を解かなければ結論が出せない。
瞬間的な加速力はミーティアスが上だが、長距離の移動を絡めた逃走となると飛距離と高度を稼ぐことができるシルバージャンパーに軍配が上がる。最悪相手のゲージ稼ぎに貢献した挙句、それを高確率で逃してしまう事になりかねないのだ。

「相変わらずエグい戦略考えますな軍師名前隠し（ノーネーム）」
「いやいや原案を出した君には言われたくないよ顔隠し（ノーフェイス）軍曹」

分身リュカオーン戦と同じ原理だ、瞬間的に多数の選択肢を叩きつける事で相手の思考を縛る。
最新のＡＩすら捕縛できるこの戦術は単なる格ゲーでは使えない、だが箱庭の中で状況が変動するこのゲームならばそれが可能になる。
生粋の罠師（トラッパー）と生粋の脳筋（グラップラー）という前例がまだ頭に残っているシルヴィア・ゴールドバーグを蝕む遅効性の毒。その両方を同時に見せつける事で奴の思考を縛り、鈍らせる。
そしてシルヴィア・ゴールドバーグは思い出すだろう、そういえば今の戦術に似た戦法を選んだやつが最初のラウンドにいたな、と。

ははは、当然それもトラップだ。
夏目氏には失礼かもしれないが、少なくともシルヴィア・ゴールド

バーグは夏目　恵というゲーマーをそこまで重く見てはいない。
だからこそ夏目氏の戦法を戦闘中に思い返すなんて芸当、流石のチャンピオンもたやすく出来るわけないのだ。それは例えるなら音ゲーしながら一昨日の晩御飯を思い出そうとするくらい難しい。

こちとら最初から俺とペルシルゴンはキューブ確保を考慮しない前提で動いていたんだ、キューブ確保をメインに動く戦法への対処を考えさせないためにな。
ミスディレクション、そうミスディレクションって奴だ。ペルシルゴン曰く「格闘技(グラップル)メインのスターレインだからこそ、不規則なゲームカテゴリの変更は最大の武器となる」だそうだ、何言ってるのかさっぱりわかんねーや。

「だけどそろそろだろ」
「シルヴィアちゃん、思考回路が割と脳筋だからそろそろキレるだろうね」

難しい問題を極めてシンプルに解決する方法なんて馬鹿でも分かる。
そしてシルヴィア・ゴールドバーグにはそれを出来るだけの力がある。
さぁ、ここからが正念場だぞカッツォ。

シルヴィア・ゴールドバーグは己の体力が五割に差し掛かった時点で考える事をやめた。

シルバージャンパーの狙いはキューブの確保なのか、自身の打倒であるのか。
突如乱入した肉達磨（ゼノセルグス）を放置すべきか、対処すべきか。
シルバージャンパーのゲージ稼ぎを妨害すべきか、先んじて己がゲージを溜めるか。

（何するか知らないけどとりあえずケイを殴ればいいや）

ああそうとも、シルヴィア・ゴールドバーグは結論を急いてしまった。強烈な結果に気を取られて簡単な事実を見逃してしまった。
魚臣　慧（シルバージャンパー）の背後には、己の思考を読める同じタイプのゲーマーがおり、それを基に策略を張り巡らすゲーマーがいる事を。

慧が提示した選択肢に正解など存在しない、あれは同じ条件で速さを競う徒競走ではなく、提示側が圧倒的に有利な後出しジャンケンなのだから。回答者が答えを選んだ時点でその逆を正解とすればいい、そもそもシルヴィアが選ぶべき最適解は状況のリセットなのだから。

過去に倒れた悪役達（ヴィラン）の屍が嗤う。ユグドライアの動きを思い出さんとするシルヴィアの思考を鈍らせ、クロックファイアとカースドプリズンの鮮烈なイメージが思考を曇らせる。ヴィラン達はただ時間を稼いでいたのではない、最初からずっとスターレイン全員に対し

て攻撃を仕掛けていた。そうそれはデータ上の体力でも、現実の体力でもない。

彼らの思考に、だ。

そして最大の大前提、思考を放棄し視野を狭めたシルヴィア・ゴールドバーグに格ゲーの根本が牙を剥く。あまりにも当たり前な格闘ゲームの大前提。

即ち、格ゲーに多対一は存在しないという大前提を。

「えぐいこと考える外道共だ……だけど、このラウンドは貰ったぁ！！」

ミーティアスが一直線にシルバージャンパーへと襲い掛かる。ただ敵を打倒するという思考は己とシルバージャンパーのみに集中し、彼女の認識からもう一人のバトルキャラが考慮されなくなる。
格ゲーマーとしての極点であるからこそ「相手と自分」というタイマンが彼女の根幹であり、格ゲーをメインとするプロゲーマーでありながら外道達（友人）と共に格ゲーとは異なる理（ルール）を持つゲームを攻略してきた慧の動きが理解できない。
それは別カテゴリのゲームにおいては「モンスタープレイヤーキル」と呼ばれる技術である。共通の敵を、相手にだけ押し付けるヘイトの強制譲渡、Ｍｏｂにプレイヤーの殺害を代行させる悪しきテクニック。例えばそれは本能のままに暴れ狂う獣がこちらを警戒する餌と、こちらから意識を外した餌のどちらを狙うのか、であったり。

「うぐぅ……っ！？」

「余所見は良くない、そうだろうミーティアス」

理性を持たない殺戮と自滅だけで生きている怪物、シルバージャンパーやミーティアスの数倍、重装のカースドプリズンすら優に超える質量を持つ超重量級ヴィランのタックルがミーティアスの身体をいともたやすく吹き飛ばす。

「これは正々堂々ではない、そう思う？」

全くもってその通りであると慧も思っている。そもそもペンシルゴンが活躍できる時点でこのゲームはもはや格ゲーではないのだ。

「これはグローバル・ゲーム・コンペティション。これを見ているみなさまと……何より君に、このゲームの何たるかを紹介してあげるよ」

この世界(ゲーム)では誰もがヒーローになれる、ヴィランになれる。だがそれは言い換えれば、

ヒーローの苦難と、ヴィランの因果をより鮮明に体感するということでもあるのだ。

「やった！　ケイがラウンドを取った！！」

「最後、肉達磨にケツ蹴り飛ばされたのクソ面白すぎるんだけど」

「システム音声のせいで音拾えてなかったけどあれ唇の形的に「おひゅっ」って叫んでたね」

「マジかよ向こう三年はネタに出来るな」

「少しは喜ぼう！？」

喜べと言ってもなぁ。たしかに先取したのは喜ばしいが、多分次のラウンドから地獄絵図になるだろうし……

俺達がじっくりコトコト仕込んで、カッツォが結実させた策略は、このゲームにおいては王道だとしても従来の格ゲーの常識からすれば邪道オブ邪道、横道にそれた上でワープゲートを設置したくらいの奇策だ。

それはともかくすれば馬鹿にされているようにも見える。

実のところそれをやっているカッツォ本人からすれば竜巻の中で暴れ馬の調伏を試みるようなもので、見た目ほど簡単な事ではない。なにせあの肉達磨……というか、Ｍｏｂのヘイト管理は思った以上に難しい。それを上手いことシルヴィア・ゴールドバーグに押し付けなければならないのだ……あのシルヴィア・ゴールドバーグに、だ。

そして同じような考えをしているからこそ分かる、分かるぞ。もしあの場でＮＰＣと協力プレイでボコられたのが俺だったら、どんな

気持ちなのか。

嗚呼、嗚呼……そりゃあもう、カチッとスイッチが入るのだ。所謂「ブチ切れスイッチ」って奴がな。

アマチュアゲーマーの俺でさえ無敗の全米一(ゼンイチ)相手にあそこまで食い下がれた感情(テンション)ブースト、それをシルヴィア・ゴールドバーグがやったのなら。

その結果は、わずか四分で肉達磨とシルバージャンパーを鏖殺(みなごろ)してのけた能面の如き無表情のミーティアスによって実証された。

「……ははは、見なよカボチャ君。凄すぎて会場ドン引きだよ」

「まぁ、アレはねーよなぁ……」

俺の中にあった「シルヴィアＴＡＳ説」が俄然現実味を帯びた。なんだあの…………なんだ？

ミーティアスというキャラクターは基本的に直線移動というハンデを背負っている。だから曲がり角を曲がるためには一度停止した上で直角に折れ曲がる必要がある。

普段のシルヴィアミーティアスはスーパーボールを狭い室内で全力で跳ねさせるように、地を蹴り空を蹴りオブジェクトを蹴る事で予測困難かつ高速な動きを実現しているわけだが……

「その場でステップ刻みまくって無理やり曲がる、ってのをガチでやるとは……」

圧巻というか絶句というか、直線にしか曲がれないはずのミーティアスが滑らかかな弧を描いてぬるっとカーブしやがった。

これまで何があろうと……例えカースドプリズンと相討つ瞬間であろうと感情を発露させていたシルヴィア・ゴールドバーグの無慈悲とも言える虐殺は、ともすればクロックファイアのピーク以上に会場を圧倒していた。

「予想外のブーストだったが……これはチャンスだ」

俺も同じ状態になったから分かる、だからこそ言える。あのブチ切れブーストは……凄まじく疲れる。

例えるならマラソンの中盤でペース配分を無視して全力疾走するようなものだ、圧倒的な区間記録を出せたとしても……その後に待っているのはガス欠だ。

シルヴィア・ゴールドバーグは確かに化け物じみたタフネスの持ち

主だ。だが化け物じみたタフネスの持ち主がブチ切れて全身全霊を切った。
ああそうだ、ここが最大のチャンスだ。誰よりも高く速く、そして力強く飛び続けていた鳥が今、「息切れ」を起こそうとしているんだ。

「大丈夫だカッツォ……」

これは俺が送る最大のエールだ、俺達が最後に縋るものは乱数でも天運でもない、そうだろ？

「俺達にはカフェインの加護がついている」

夏目氏、なぜ素直にエールを送った俺をそんな目で見るんだ。まるで俺が「バカ」みたいじゃないか。

「一応トドメ刺すけど「バカ」だと思うよ、カボチャのエナドリ煮込み君」

「何それ不味そう」

汗が頬を伝う。否、それは錯覚だ。
電脳の身体にそのような生理的な現象はない、もしそう感じるのだとしたら、それはきっと現実世界にある肉体が流したものなのだろう。

（何アレ、あいつのギアはまだ多段ブーストできるの！？　い、いや……あんな強引過ぎるパフォーマンス、そう何度も連発は出来ない）

まるでスイッチが切り替わったような豹変、実現可能なのかこの目で見ても疑わしい絶技……慧には見覚えがあった。
そう、あの「プッツン」はサンラクが時々見せるテンションだ。主に怒りやイラつき、ゲージを振り切ったハイテンションを原動力とする瞬間的なリミッターの解除、傍目から見ても脳細胞を凄まじい勢いで使い潰していそうな絶技だ。
少なくとも慧には出来ない、寿命が縮みそうなので。

（少なくとも、アレをやったあとのサンラクは二日酔いみたいな状態になる……ノーリスクでできる事じゃないんだ）

千載一遇。迫れど追い抜けなかったシルヴィアが、今この瞬間手の届く場所にいる。

ただの偶然ではない。時間を削ってまで来てくれた友人が、彼らが稼いだ時間が、彼らが作った道が今この瞬間に至らせた。
であれば、己にできる事はたった二つ。

シルヴィア・ゴールドバーグに勝つ、そしてどうにかして焼肉と寿司を両立させるために財布と相談する……それだけだ。

「さぁ、勝とう！」

慧は勝利を確定はさせても確信はしない。だが今この瞬間は……負ける気がしなかった。

・ゼノセルグス
完全に理性がトンだハルク、もしくはエイリアンゴリラ。パシリムのレザーバックがイメージとしては近い。
どこかの宇宙で生み出された生体兵器であり、全能存在ギャラクセウスがいらんことしたせいで地球に流れ着いた。
見るだけで対象を解析し自身に反映する、というチート能力の持ち主でありギャラクシアコミックでの最強議論では必ず名前が挙がる。
あまりにも強すぎたため最近「特定の周波数の音を聞くと身体が硬直する。具体的には十二歳以下の人間の子供の泣き声」という弱点が追加された。

GH：Cでは「アナライズ」という能力を持つ最重量級へビーファイターであり、オブジェクトを五秒以上見続けることで肉体を対象と同じ性質のものに切り替えることができる。
一見するとカースドプリズンの上位互換に見えるが破壊を経由しなければならないが破壊したものをまとめて吸収できるカースドプリズンと、見るだけでいいとはいえ単体しかアナライズ出来ないゼノセルグスで差別化されている。

ちなみに追加された弱点もちゃんと反映されているので具体的に言えば栗きんとん幼女を泣かした瞬間宇宙ゴリラは数秒間フリーズします。子供に優しい宇宙ゴリラ、好物はバナナではなくガソリン。

運命の第三ラウンド。
互いにゲージを残し、既に互いの位置は割れている。ゼノセルグスは暫くこちらへ来ることはないだろう、即ちここが山場、シルバージャンパーは何とかしてここを逃れる必要があり、ミーティアスはなんとしてでもここで仕留める必要がある。

「さっきはちょっとカッとしちゃったよ、ゴメンネ」

「心配無用だよ、人間をやめた動きには慣れてる」

鍵を握るのはやはり超必殺だ。ミーティアスの超必殺「ミーティア・ストライク」は一見凄まじい性能を誇っている……ように見える。
実際クロックファイアやカースドプリズンに対して使用したそれは凄まじい威力を叩き出していた。
だがミーティア・ストライクには明確な弱点が存在する、シルヴィアの強みの一つはその弱点を隠すテクニックでもある。

(あの特撮飛び蹴りは……技を出した後の硬直が他のキャラの超必殺よりも長い)

厳密には蹴りを放った後に後ろを向いて決めポーズを取るまでが超必殺の判定となっており、蹴りを放った後のポーズ中に攻撃を当てることができれば怯みモーションを取らせることができるのだ。
シルヴィアは基本的にとどめを刺す際に使用して隙の発生そのもの

を無問題とする、もしくは話術や周囲の状況を利用して隙から目を逸らさせるのだ。

カースドプリズン（サンラク）の場合は迎撃側も寸劇（ロールプレイ）にノっていた為に気づいていなかったようだが、もしもあの瞬間後ろのＮＰＣを庇うような真似をせずに速攻で「脱獄（プリズンブレイク）」していれば、結果は変わっていたかもしれない。

（ま、仮にそれに気づいていたとしてもあいつがそれをやるかは微妙なところか、バカだし）

楽しい引き分けと、最適化した勝利。生憎慧の友人達は笑顔で前者を選ぶタイプばかりなのだから。

（向こうはこっちがゲージを使うことを狙ってる、使うとすれば超必殺への対処の時……）

３ラウンド目現在、ケイオースキューブの場所はいまだに分かっていない、だがおおよその見当はついている。

このゲームでは基本的にキューブの発生地点にある程度のパターンが存在する。流石に路地裏のゴミ箱の中や、そこらのデリの厨房の中まで探さなければならないようではゲームのカテゴリが変わり過ぎる。

それ故にケイオースキューブは例外も混じるが主に三つの場所のどれかに置かれる事が多い。

一つ目は公園やスタジアムなどの見晴らしの良い平地の中心。なんらかのオブジェクト、大抵は例えば噴水などのシンボルの真上を浮いている。ちなみに昨夜の検証の際はＮＰＣ達が避難したスタジア

ムに爆弾魔（ペンシルゴン）が突撃を敢行するという悲劇が起きたりもした。
二つ目はビルの屋上。それもヘリポートが存在するものに限り、これに関しては最初の段階で有無を確かめることができる。ヘリポートが存在するビルの形状もパターンがあるので特定は簡単だ。
そして三つ目……このケイオースシティにおける最大のシンボル、形を変え続ける街にあってただ一つ必ず設置される建築物オブジェクトであるケイオースタワー。その最上階、展望室こそがケイオースキューブが設置される三つのポイントの最後の一つである。
視線は動かさない、シルヴィアはそれだけでケイオースキューブの場所を察知しかねない。
ジリジリと時間の経過に比例して緊張が高まる。先行して動くことが有利とは限らず、先んじて動かなければ圧倒される危険性もある。ゼノセルグスを呼び込む案もあまり得策ではない、おそらくもう対応されている。流石にそれはないと信じたいが、既にシルヴィアがＭＰＫを使えるようになっていたとしたら次に多対一を強いられるのは慧の方となる。
「……悪い癖、かな」
シルヴィアやサンラクは「動きながら考える」タイプであり、ペンシルゴンや慧は「考えながら動く」タイプだ。さらに言えば己やペンシルゴンが作戦に沿って行動するのに対して、奴らは常にその場で作戦を更新し続けている。
悩みは動きを鈍らせる、迷いを奴らは突いてくる。であれば、であれば、であれば。
（キューブの確保、それ以外は横着しない）

己の行動はただ一点に、思考を束ねて目の前の強敵にのみ集中する。幾度となく負け、そして幾度となく研究を続けてきた。会うたびに強さが更新され続ける怪物、だがそれでも根底の癖やバトルスタイルは変わらない。

「っ……！」

先手を取ったのはシルバージャンパー。果たして白銀は後退することなく前へ、ミーティアスの元へと駆け出す。それを笑顔で迎え撃つミーティアスが加速、シルバージャンパーが距離を詰めるよりも早く己の射程範囲にシルバージャンパーを入れる。

「さぁ、追いつけるかな！」

「追いつかなくてもやりようはある……よっ！」

現実における魚臣　慧が実際に筋肉をつける必要はない、ただそれを行う「やり方」だけ理解していればいい。

シルヴィアの利き足は右であり、左足で蹴りができないわけではないがやはり主として使うのは右足の蹴りだ。サンラクのように「見様見真似（なんちゃって）」でＴＡＳじみた動きを実行することはできない、だがちゃんと練習した動きであれば。

「ありがとう「ＶＲ合気道教室」……！」

戦法を変えたところでかつての努力は決して無駄ではない。シルヴィア・ゴールドバーグを越える為に鍛えたカウンターの技術を付け焼き刃よりは上等な動きで対応する。

シルヴィア・ゴールドバーグのバトルスタイルの根本はマーシャルアーツ、それも足技に重きを置いたものだ。スポーツと比べて実用性が高い、だが仮想現実の世界においては身体スペックによるアドバンテージはほとんど存在しない。

「相変わらずケイは受け止めるのが上手ね……！」

「なんかその言い方は誤解を招きそうなんだけど！」

「ケイは受け」

「くっ……精神攻撃ぃ……っ！！」

慧には「反射行動を自覚しつつ次を考える」などということはできない、だが積み上げた予測と経験でシルヴィアの、ミーティアスの次の一手に対する対応をすることは出来る。

だが決して完全に受けきることはできない、だからこそ被弾もするし吹っ飛びもする。その度に周囲を確認し、わずかな隙を、勝利へと続く細い道を見出す。

「……………っ！！」

サンラクはそれを「綱渡りの糸が向こう岸に繋がる瞬間」と呼び、ペンシルゴンはそれを「花火を点火するタイミング」と呼ぶ。

慧にとってそれは「数多く持つ鍵の一つが合致した」であり、友人の一人が蛇蝎の如く嫌う乱数の神に慧は初めて感謝の祈りを捧げた。

ギャラクシア・ヒーローズ：カオスで追加された要素は数多くある、その中でも明確に対シルヴィアにおいて非常に強力な武器となるものがある。
それは状況だ、どこまでも対等なコロシアムでは発生し得ない理不尽。それこそが慧の手元に勝利を塞ぐ扉の鍵を作り出した。

ヴィラン「カースドプリズン」がその身を賭して幼子を守った。その行動は賛否両論こそあったがおおよそ好意的に受け取られていた。なるほど所謂雨の日に子猫を拾う不良現象というやつだろう。
だがそれが気にくわない奴がいる、次に同じ光景を見た時に静観できない奴がいる。

簡単な話だ、襲われる被害者(NPC)と襲う加害者(NPC)がいる。そして先の戦いでヒロイックな見せ場を宿敵に持っていかれたヒーローがいる。
理性なき魔獣に追われ、逃げる力を使い切ったのだろう。流石に何度も同じNPCがとばっちりを食らうミラクルは起きなかったが、若い女性が今にもゼノセルグスに襲われんとしていた。
よくよく見たらそれが「栗きんとんちゃん」と呼ばれ始めたNPCの母親であると気づけただろう。ミラクルは起きていた。

ここだ、ここしかない。シルバージャンパーのゲージが削れる、溜め込んだ勝利の鍵を自ら崩して銀光が走った。

「あ……」

「隙有りだ……！」

足払い、極めてシンプルでありながら人間の肉体を支える二本の柱を刈り取る技。

過去の激闘による消耗、無理な挙動の代償、突発的なイベントによる硬直、思考の空白。全ての積み重ねが無敗にして不沈のシルヴィア・ゴールドバーグにほんの僅かな、本当に僅かな隙を生み出した。

シルバージャンパーのゲージ技「銀の足(シルバーフット)」は十秒間の脚力強化。決して劇的とは言い難いがキックの威力を上げることができる。だがこのゲージ技の真価は副次効果の跳躍力と走力の強化にこそある。

「悪いけど今回「も」見せ場は貰っていくよ！！」

「んなぁあーっ！！？」

ミーティアスが倒れ、起き上がるまでの一瞬……銀色の軌跡が混沌の街を駆ける。曰く活躍は劇的であるほど英雄的(ヒロイック)である、曰く程よく絶望した方が希望がより味わい深くなる。

つまり外道達によるゲージ溜めの結論は、

（ＮＰＣは程よく半殺し……！！）

まさか口には出せない、都合よく匿名の外道共とは違い慧には好感度とそれに伴う収入があるのだから。

「やぁマドモアゼル、もう安心だ」

「あ、あなたは……？」

「シルバージャンパー、銀色のヒーローさ」

決まった、程よく半死半生の女性、ゼノセルグスの攻撃が彼女を潰す寸前の救助、決め顔、決め台詞……最高のヒロイックに消費した

ゲージ以上のゲージが蓄積される。
表面上は女性を安全な場所まで運ぶ為の、だがそれはあくまでも隠れ蓑であり、シルバージャンパーはゼノセルグスや起き上がりつつあるミーティアスから距離を離し、ケイオースタワーへと向かう。

「さぁ、これを登らなければならないんだけれど……」

既に女性は適当な場所に置いてきた。背後からは恐らく縦横無尽に駆ける蒼い流星の足音と、何もかもを暴力で突破する異星の獣の足音がする。
成る程、やはりシルヴィア・ゴールドバーグに迂闊な真似はできないようだ。もうモンスタートレインを習得してしまうとは、苦々しく舌打ちをしつつも、その顔には笑顔が浮かぶ。

「そうこなくっちゃ」

ヒーローと、ヒーローと、ヴィラン。立体的なタワーを舞台に最後の戦いが始まる。

果たして、最後（ラストスタンド）に立っていたのは……

修練と研修の収束（後書き）

ＮＰＣが半死半生になるタイミングを見計らって参上するヒーロー
ＮＰＣが死なないよう、しかし希望も抱かないよう適度にボコるヴィラン

末踏の金鉱山に人は集る

なんか怖いのでＳＮＳは見ていない。
あれからどれくらい経ったか、大歓声と共にＧＧＣの二日目は終了し、ある者は熱狂冷めやらぬまま帰路につき、またある者は翌日の三日目に備えてホテルへと戻った。
そして我々爆薬小隊（ニトロスクワッド）ｗｉｔｈジョン（ジェーン）・ドゥはと言えば、ＧＧＣ二日目に行われた様々な大会の参加者による打ち上げパーティに誘われていた……とはいえまだ時間に余裕があるので自室待機ではあるが。

「……つかれた」

ここまで消耗したのはいつぶりだったか……九州の左端までクソゲーの在庫を探しに行った時くらいかな。
限界まで精神を尖らせたシルヴィア・ゴールドバーグとの戦いも理由ではあるが、なにより大量の注目がキツかった。顔を隠していたとは言え通常運転なペンシルゴンがおかしいんだよ。

「いっそこのまま寝てしまおうか……」

いや、ライオットブラッドの多段摂取で眠気は完全にトンでしまっている、寝るのは少々難しいだろう。
俺のプライバシーを守ってくれていたヘルメットを脱ぎ、ベッドの上でゴロンゴロンと転がる。
打ち上げ、打ち上げかぁ……確かこのホテルのパーティフロアを貸

し切るだとかなんとか、という話らしいがやべーなプロゲーマー。カッツォが時々ポロっとブルジョワジーを匂わせる事はあったが、ステータス「資金」のパラメータが高い。

「うーむ、この明らかにたかそうなベッドともお別れかー……」

なによりもコイツとお別れなのがつらいところだ、俺はルームの一角に鎮座するVRシステムユニットを撫でる。
愛着が湧いた……というわけではないが、コイツを使ってのゲームプレイは中々に快適であった。伊達にデカイ図体と業務用なお値段はしていない、と言うべきか。

帰宅したら操作性のズレをリハビリしないといけないなぁ……流石にシャンフロ内で試すのもあれだし、帰りになんか別ゲーでも買おうかな。

「なんかいい感じのゲームあったかなぁ……」

最近はプレイする前から邪気を発するクラスの劇毒(クソゲー)は稀だからなぁ、その代わりに一見すると面白そうに見える地雷タイプが増えたのだが。
その手のクソゲーは俺の場合、初動で遅れてしまう。少なくとも誰かが踏み抜いて爆発しないと気づけないのだから。

「……調べるか」

お、これとかいい感じにクソっぷりが……いやこれどちらかというと只のバカゲーだな。なんでプレイヤーがケーキを作るとモンスターがダメージを受けるんだ？　食べさせているわけでもないのに。
ＰＶとかを見る限りプレイヤーはモンスターに一切触れてないよう

に見えるが……超能力？

「そろそろ本格的に洋ゲーを開拓してもいいけど、あっちはあっちでクソゲーの定義が違ってくるからなぁ……」

なんというか、洋ゲーにおける「クソ」というのは……凄いのだ。フルプライス分の金でひたすら消しゴムだけを買ってもまだそちらの方がまだ有意義に思えるような、それはそもそもゲームとして成立しているのかと聞きたくなるようなものが割と発掘される。

お前これ20世紀の技術縛りで作ったんじゃないかと詰問したくなるようなゲームとかがあるのだ、色々な意味で魔境すぎる……のだが、たしかにそういうゲームにはレビュアーがいるんだよなぁ。

ちゃんとクリアまでやりこんだ理解度で書き込まれたレビューを見ると、心を強く保つことができる。なんというか、世の中には俺と同じ志を持ち、俺より強いメンタルを持つクソゲーハンターがいるんだ、と。

「そうだ、一応ルルイアス攻略が進んだか見ないといけないのか………って」

あ。

「サンラクくーん、麗しいお姉様が迎えに来てあげたよー……って、なんか死にそうな雰囲気出してるけどどしたの？　カフェインで寿命削りすぎた？」

「人という生き物は……忘却に笑い、忘却に泣くのだと、悟ってしまった……」

「あぁ、カフェインの摂りすぎで頭が……」

カフェインは用法用量を守って正しく使用しましょう。いやカフェインにそんな脳のシワが減るような危険性はねーよ。

「つーかそれどうやって飯食うの？」

「正直外したいんだよねぇ」

「カッツォは？」

「先に行ってるってさ、私らと一緒に行くと延々と煽られるから逃げたんじゃない？」

「どちらにせよ半世紀は馬鹿にできそうだったからなぁ……くくく」

シルヴィア・ゴールドバーグの輝かしい無敗記録、遂に終わる。
そのニュースはズタボロのシルバージャンパーがケイオースキューブを掴み取った瞬間、全世界に発信された。

伝説を終わらせた者の名は魚臣　慧……そして、その十数分後にラウンド2タテされてあっさり黒マッチョに負けた男の名も、奇遇なことに魚臣　慧であったのだ。

いやホント、末代まで笑い話に出来るね。シルヴィア・ゴールドバーグに勝ったのがそれだけ嬉しかったのか、黒マッチョ……確か既婚者（ジヨンソン）相手にイキりにイキってストレート負けである。

「ログアウトした時のカッツォ君の顔すごかったねぇ」

「ハニワみたいな顔してたな」

「んぶっっふ！」

顔を背けてプルプル震えるペンシルゴンにバッシバッシと背中をぶっ叩かれる。痛いからやめーや。

でもまぁ、結果的にあいつが満足ならそれでいいか。

「それはそれとしてなんて弄ってやろうか」

「そりゃあもう、満面の笑みで「初勝利おめでとうございます」でしょ」

「むしろジョンソン戦でのイキってる所をそのままモノマネしてやるとか……」

常に共食いと生贄の駆け引きを繰り返している我々は気を抜けばいつ自分が標的にされるか分かったものではない、それはそれとして俺とペンシルゴン……もとい顔隠し（ノーフェイス）と名前隠し（ノーネーム）は道すがら雇い主殿を如何に煽るかで話に花を咲かせるのだった。

「……なんか冷静に考えると俺らだけ仮装パーティなんだよな」

「ほら、私は時代を先取りする女だから」

「先取った結果が二ヶ月後、ってそれ先取りというより先走りじゃねえかな」

さらに飛んで白髪白髭に赤い衣装でも着れば四ヶ月後を先取りできるぜ。炎天下にサンタクロースとかオーストラリアか何かか。

パーティ会場の扉にはボディガード的なスーツが立っている、なんというか物々しすぎて帰りたくなってきた。
ああほら、帰りの新幹線を降りて、ロックロールでクソゲーを漁って……おいペンシルゴン人が感傷に浸っているのに躊躇いなく扉を開けるんじゃない。ドレスコードがあったら即死だったんだぞ？

どうも俺とペンシルゴンは遅刻していたようで、既に会場が賑やかと呼べるくらいには人がいる部屋の中からいくつもの視線が俺とペンシルゴンに注がれる。
うーわなんだこれ、この場にいるのがプロゲーマーばかりだからこそ、なのかは分からないが視線の圧がヤバい。プロゲーマーになると目力のステータスに補正が入るのか？

「……なに冬真っ只中に目が覚めた冬眠中のリスみたいな雰囲気出してるのさ」

「無理に例えんでもいいだろそれ……あ、そうだ。「今の俺は、誰にも負ける気がしない（キリッ）」……負けたな、くくく」

「やぁやぁ雇い主殿（マイボス）、この度は悲願達成おめでとうございまーす。その後すぐ負けたけど」

「君らは本当にケンカを売るのが上手な商人だねぇ！」

これは極めて友好的なキャッチボールだよ、友好に比例した豪速球が友好で滑って顔面に飛んで行っただけだよ。

世の中には相手チーム全員をデッドボールでノックアウトすればラスボスチームも五分で片付けられる野球ゲームだってあるんだ、だからこれは友好的なキャッチボールだ。

「焼き肉は？」

「お寿司はー？」

「良かったね、ちゃんとあるから腹に他のものが入らなくなるまで食べるといい。ただ……」

ただ？

スッと横にスライドするカッツォ。はて、何か見せたいものでも……

「なんかいろーんな人が話しかけたそうにしてるねぇ」

「謀ったなカッツォァ！」

「喉が干からびるまでお話しするといいよ、バーカ」

「ええい外道ガード！」

「外道フラッシュカウンター！」

瞬間的に立ち位置を逆転させただと！　畜生、リアルは身体能力パラメータが平等じゃないから……グワーッ！！

Q．あなたプロゲーマーなの？

A．それ言ったら顔隠してる意味ないじゃん？

Q．凄かった！

A．あ、どうも

Q．どうして今まで公式大会とかに出なかったの？

A．一身上の都合

Q．魚臣との関係は？

A．プライベートな友人

Q．どうやったらあんな動きが？
A．常日頃から理不尽に晒され続けること、ですかね
Q．魚臣相手に勝率三割ってマジ？
A．マジ、よくボコられてるけど時々勝ってます
Q．なんで顔隠すの？
A．一身上の都合
Q．ジャックが好きなの？
A．ジャック……？　あ、あーこのヘルメットのキャラか、えーと嫌いではないですよ？
Q．ＦＰＳやるの？
A．基本的になんでもやります
Q．年齢は？
A．それ言ったら声変えてる意味ないじゃん？
Q．お酒どうぞ
A．あ、自分未成年なので……はっ！　カッ、魚臣貴様っ！
Q．申し遅れましたガトリングドラム社の者ですが此度は顔隠し（ノーフェイス）様と一度是非お話がしたいと……
A．え、あ、はい？　はぁ……え、インタビュー？

「……ちかれた」

なんであの状況でイキイキできるんだペンシルゴン……精神構造が一般的な人間のそれと別物すぎるだろあいつ。

「肉……肉……」

ぶっちゃけそこまで食いたいわけじゃないが、食事という行為に集中することで癒しを得たい。

ノロノロとビュッフェ方式の肉料理が並ぶコーナーへと向かっていると、ふと所在なさげに立ち竦む夏目氏を発見する。

何故あんなところで……とバカッツォの姿を探してみれば、例のシルヴィア・ゴールドバーグにわちゃわちゃと絡まれていた。成る程、ジャパニーズ的奥ゆかしさが悪い方向に傾いて話しかけられない、と。

「どう思うかねエージェント名前隠し(ノーネーム)」

「君の意見を聞こうエージェント顔隠し(ノーフェイス)」

「カッツォ殴りてえ」

「わかるぅー」

理屈じゃない、魂がとりあえずあの野郎殴りたいと叫んでいるんだ。
はて、何故俺はフォークを握りしめて？

「しかたない、ここは素敵なおねーさんが一肌脱いであげようじゃないの」

「何か策が？」

「あっはっは……スケープゴートって知ってる？」

「緊急離だ……あっ、ヘルメットに手をかけるなやめろ俺のプライバシーを生贄に捧げるなァーっ！」

「いやぁーそれにしても凄かったね顔隠し君！　いやホントまさかプロゲーマーですらないアマチュアなのにねーっ！！」

ざわりと、外道仮面によって暴露された言葉にこの場にいる何人か……具体的に言うとプロゲーマーとは違うマネジメントとかしてそうな方々の目がギラリと光った。
彼らは懐に手を突っ込むと、己の主武装たる名刺を構え、こちらへと迫ってくる。成る程これがプレイヤーに群がられるレイドボス視点か……くそ、逃走経路は！？

「お前ーっ！」

「あははは！　頑張れー」

あいつ〆る、ぜってー〆る！
ああおい待て待て待て、シルヴィア・ゴールドバーグお前何マッチ

ョ共をモンスターテイマーのようにけしかけて……あぁ、筋肉が！
めっちゃ笑顔の筋肉が！！

「さて、恋のキューピッドAの尊い犠牲を無駄にしないために恋のキューピッドBが一肌脱ぎますか」

「何やってるんだあいつら……」

色々言いたいことは山積みだが、シルヴィア・ゴールドバーグに勝利したという成果と、スペシャルエキシビションの大成功という事実は爆薬分隊（ニトロスクワッド）の発言力を大きく高めることができるだろう。少なくともスポンサーからの無茶な命令を拒否できるくらいの発言力が必要なことは今回でよくよく身に沁みた。

「ケ、ケイ」

「ん？　どうしたのメグ」

電脳大隊（サイバーバタリオン）のみならず、様々なプロゲーミングチームのスカウトマンに群がられたカボチャを尻目に、慧は呼びかけられた声に応える。

「その、まずはシルヴィアに勝ったの、おめでとう」

「まぁ、その後ストレート負けして結果的には爆薬分隊は負けたんだけどね……」
「試合には負けても勝負に勝ったじゃない、それはきっとすごいこと、前人未到ってやつでしょ？」
「まぁそうなんだけどねぇ……あいつらのお膳立ての上で勝ったようなものだからね、いつかは個人の力だけで勝ちたいよね」
別に複数人による打倒が悪いとは言わない、チーム戦である以上相手を複数回の戦いで消耗させることは当たり前の戦術だ。
だがそれはそれ、これはこれというものだ。かつては仲間達のお膳立てがあっても届かなかった勝利に、今は届く。であれば次は己一人で手を届かせるのだ。
「そういえば気になっていたのだけれど」
「何が？」
「その……天音、じゃなくて名前隠し（ノーネーム）はともかく、顔隠し（ノーフェイス）の方は、アマチュア……なんでしょ？」
「そうだね、本人が時々口を滑らせる情報的に多分高校生だね」
「高校生でアレをやれるの……じゃなくて、スカウトとかしないの？」
なぜか少し離れた場所で奇妙な踊り（ゼスチャー）をしている名前隠し……もといペンシルゴンから目を逸らしつつ、慧はかつて持ちかけた誘いに対

してサンラクが返した答えをそのまま口に出す。

「大学を卒業するのが親御さんとの約束、なんだって」

曰く、己の家は一家全員が趣味人故に個人の趣味に対してたいそう大らかであるらしい。だが好き勝手に趣味を満喫する資金などを与えられる代わりにただ一つだけ条件があると言う。

「それが大学卒業？」

「らしいよ、言い方は悪いけどまさかそんな理由で断られるとは思わなかったよ」

二十一世紀初頭ならともかく、今のご時世ではプロゲーマーとは立派な職業だ。例えば賞金の絡んだ大会、例えば今回のようなゲームの公開テスター、例えばゲームのレビュー。

ピンキリこそあるが、最上位の……それこそスターレインの不動のエースであったりするなら、下手なスポーツ選手に匹敵する収入を得ることができる。

そんなビッグドリームのチケットをまさか「期末あるし別にいいや」とキャンセルする奴がいようとは。

とはいえ、現在進行形で捕獲されたエイリアンのような姿でマッチョに捕まったカボチャ頭の姿は、慧にとっては若干の小気味の良さを感じるのも事実。

TASじみた動きを「ね、簡単でしょう？」と言わんばかりにやらかし、あまつさえどうやるのか、という問いに対して「頑張れば誰でもできるだろ」とのたまう馬鹿野郎は、一度自分の価値を知るべきなのだ。

謎の匿名プレイヤー達による好き勝手、シルヴィア・ゴールドバーグの敗北、己の発言。
これら全てが新たな波となって慧に襲い掛かるのは、まだもう少し先のことである。

未踏の金鉱山に人は集る（後書き）

キューピッドA「名刺でトレーディングカードゲームできそう」
キューピッドB「なんでそこでアプローチしないのかなぁ！？　夏目ちゃんそこはもっとグイグイ押そうよ！」

ここまでヘタレなヒロインが夏目ちゃん以外にいるなんて、いやまさかそんなねぇ

深淵都市観光兎付き

時間は飛んでＧＧＣ二日目から二日後、ルルイアス滞在四日目。
一昨日の事は目の前の仕事が終わるまでは記憶ごと封印する、紐解くとしたらそれはクターニッドとの決着がついたら……であろう。
そんなわけで顔隠し（ノーフェイス）からサンラクへと戻った俺は深淵の反転都市に戻って、はいない。

「まさかこんな形で後遺症が出てしまうとはなぁ……」

プレイしているゲームの名は「ＶＲチュートリアルアスレチック」、ＶＲシステムに最初からダウンロードされている、仮想現実に参加するにあたってのチュートリアルソフトだ。
特に弾丸や魔法が飛び交うわけでも、極めてリアルなＮＰＣがいるわけでもない。だがミニゲームとして存在する「仮想無重力」というものが個人的に結構役に立つのだ。
三次元的立体の迷宮の中で泳ぐように無重力下の身体を操りエリア内に存在する光る球体をタッチし、タッチした球の数がスコアとなるシンプルながら「仮想肉体の身のこなし」が高いレベルで要求されるこのゲームのマイベストスコアは六十五個。
そして今やった結果は……四十一個。
結論から言えば、今の俺は大絶賛進行形でスペックのズレに苦しんでいるのだった。

ＶＲシステムに限った話ではないが、大は小を兼ねても小が大を兼ねるパターンは稀だ。
業務用、マッサージチェアと揶揄される椅子型ＶＲシステムではあるが、やはりサイズと重量の肥大化というデメリットを背負うだけあってか、そのスペックはヘッドギア型よりも数段優れている。
椅子型を使用した事で恩恵を得たのであれば、その逆も然りである。つい一週間前までそれでやって来たというのに、今の俺はアクションのいちいちに後ろ髪を引っ張られるような違和感を感じている。
少なくともウェザエモンやリュカオーンと同等とされるユニークモンスターを相手に、こんな根本的な問題を抱えたまま戦うのは舐めプが過ぎる。
昨日からリハビリを続け、何とか勘を取り戻してきてはいるが……やっぱり実際にゲームして実戦の中で勘を取り戻す方が効率がいいかな。

「とりあえず他の奴らも色々調査はしてくれたらしい、が……」

俺がカボチャ頭の助っ人として戦っている間、他のＥＸシナリオ参加者達も合間を縫ってポツポツと探索を進めていたようだ。
夜間に出現する魚達は魔法や弓で撃墜が可能であり、食料問題は魚肉で解決可能らしい。それ多分昼には腐れつみれや人魚になってる

やつだろうけど大丈夫か？

「四隅の塔に存在するボスはそれぞれが特定の攻撃を無効化する、か……」

ルストや秋津茜が突撃を敢行した結果、魔法を完全無効化するボスとその正反対の物理を完全無効化するボスが確認されたらしい。

残り二体は攻撃が当たったたり無効化されたりと何の条件なのかは分からないそうだ。

「あのクリオネは魔法無効化か……となると完全物理の俺が出張るべきか？」

純魔であるモルドは論外、忘れがちだが割と魔法職である秋津茜も除外、レイ氏とはそもそも連絡がつかない。

遠距離職であるルストは剛弓だったかのみを使えばいけるかもしれないが、そもそも四日目の今日はルストは多分ログインしていない。

あのクリオネはわずかでも魔法が絡むと、その絶対防御性を発揮する。つまりエンチャントもアウト、スキルのみでの攻略もしくは確証はないが極大の魔法火力で消しとばす、が攻略法かな。

尤も、後者は荒唐無稽過ぎるので結論から言えば、魔法を一切使わない使えない脳筋特化の俺が適任というわけだ。

「さて……ログイン、するかぁ」

もしかしたらレイ氏とも合流できるかもしれないしな。

目を瞑り、目が醒める。考えてもみれば中々に奇妙な体験だ、果たして今の俺は眠っているのか起きているのか……なーんて小洒落たことを考えつつ、俺はルルイアスの家屋、硬いベッドの上で目を覚ます。

「脳が動いてる以上起きてる、だろうしなぁ」

「あーっ！　サンラクサン起きたですわ！」

「おーエムル、なんかスゲー久しぶりに感じるな」

「サンラクサンはお寝坊さん過ぎですわ！！」

ぷんすかと俺の膝に飛び乗るエムルを頭に移動させつつ、ふと頭をよぎった何か違和感に眉を顰める。
手を握り開き、スクワット、宙返り、反復横跳びなどを行い違和感は軽減されていることを確認しつつ、やはり完全に本調子ではないなと苦笑する。

なんだったんだ、物凄く頭に引っかかる何かを感じた気がしたんだが。

「い、いきなり飛び跳ね回るのはやめて欲しいですわ……」

「ん？　あーすまん、そういえばアラバとクソガキは？」

「魚臭い人は「俺の愛刀を探してくるぞ！」ってけっこー前から探索してますわ」

愛刀、ねぇ……出会った時からそんな事を言っていたが好感度か、はたまたEXシナリオに関わるフラグか、一度本腰入れて探してみるのも手かもしれないな。

ともかくアラバ自体の戦闘力は結構高いようであるし、流石にのたれ死んでいるとは思いたくない。あれ、じゃあクソガキはどこに？

「それでガキンチョは……そこですわ」

「俺が寝てたベッドじゃん」

「その下ですわ」

えぇ……と覗き込んでみれば、ベッドの下、陰の暗闇の中に怯えた瞳孔と目が合った。えぇ……

「ずーっとそこで震えっぱなしですわ。ヴォーパル魂が足りてないですわ！」

「いや、まぁ徹底的に家探しでもしなけりゃ見つからない場所かもしれんが……」

幾ら何でも怯え過ぎではなかろうか。いや、これがまともな反応なのかもしれないな。ユニークモンスターの縄張りでゾンビパニックさせられるんだ、普通は立て籠もる。
その点で言えば積極的に外に出るアラバがおかしいのかもしれないな。プレイヤー？　そこにイベントフラグか最強武器があればブラックホールにだって飛び込むわ。

「そうさなぁ……よしエムル、アラバの愛刀とやらを探してやるか！」

「サンラクサンならてっきり「ふーしょー四枚抜きだー！　ぐはははは！」くらい言うと思ってたですわ」

なんとなくムカついたので両頬をつまんで引っ張る、おーフニフニ伸びる。ケダーマモフモーフ。

「ひゃへれー、ひゃへるへふわー」

「蛮勇は用法用量を守らないとヴォーパル魂的には良くないんだぞー？　分かってるのかー？」

用法と用量を守ればそれはパラメータ以上の成果を齎してくれることもあるけどな、少なくとも先日の戦いでは無茶を通したからこそあそこまで戦えたんだ。

「んじゃ、ちょっと出かけてくるから戸締りちゃんとして引きこもってろよー」

「へひゅわー！」

ネフィリムホロウというゲームにおいて最強のプレイヤーであったルストは、そのまま最もやり込んでいるプレイヤーであったということであり、それについて行っていたモルドもまた同様だ。
それはつまり根本的な当人の性質が「ゲーム」に向いているということだ。

ゲーマーには大きく分けて二種類存在する、即ち物語を突き詰めるプレイヤーとシステムを突き詰めるプレイヤーだ。
前者はぶっちゃけゲームシステムとかはどうでもいい。シナリオとキャラクター、世界観にこそ重きを置く。ゲーム外でも二次創作を作ったり、データをリセットしてまた最初からストーリーを始める……そういうタイプ。
そして後者はゲームにおけるシステムやスコアにこそ重きを置くタイプだ。より高い火力を、より最高の構築を、キャラの顔や性格よりもそいつが持つパラメータこそが重要である……そういうタイプ。
別にどちらが間違っているとかそういう話ではない、どちらも正しいゲームの楽しみ方だ。フルプライスでソフトを購入しただけの価値を見出せたのであるなら楽しみ方に貴賎はない。だがどちらがより長くゲームそのものを続けるかと聞かれれば、それは後者だ。どのアイテムがどのパラメータにどのように作用するのか？　どの

アクションにどのアクションを合わせることで更なる力を発揮するのか？　そういった積み重ねを好むプレイヤーが攻略サイトを充実させていくのだ。

そして後者であるルストとモルドの二人は封将以外の雑魚Ｍｏｂに関してもある程度のリサーチをしていたのだ。

「半魚人共は基本的に視覚と聴覚頼りで発見されてから十秒以内にエンカウントした半魚人を倒しきれば増援は湧かない」

更に確率は低いが時折元となった魚のアイテムが落ちる事があるらしい。魚単体でアイテム化するものは落ちないが、部位が個別のパーツでドロップするものはアイテムドロップが発生する、と。

「人魚の歌は聞く前に物理的に耳を塞げば無効化できる」

一度聞いてしまったならばデバフを受けることになるが、聞く前に物理的にシャットアウトすれば無効化が可能、と。そもそもこれに関して俺は……いや、恐らく俺と秋津茜は考慮の必要がないか。

「夜間は大型モンスターが湧くが、昼間は基本的に半魚人と人魚だけ……なるほどなるほど」

ボスが出てこないゾンビパニックって事ね、それならやりようはいくらでもある。アルクトゥス・レガレクスが出てきたのはエムルの魔法によるイレギュラーだから普通は起こりえない、ってことか。

「ヌルい、ヌルいなぁ……そうは思わないかエムル」

「クターニッドのお膝元で言う台詞じゃないと思いますわ……」

どうせ七日目には大家に殴り込みに行くんだ、それに比べりゃ大抵はヌルゲーよ。あーでもシャチはキツかった、あれだけゲームジャンルが違ってたからなぁ。

「さて……どこから探そう？」

「無策！？　無策ですわ！？」

「イキアタリバッタ ーリ、と言う言葉があってだな。こう言う時は地面に立てた木の枝が倒れる方向に進むものだ」

枝がないので傑剣(デュクスラム)への憧刃を立てて……

「拠点にしてるおうちの方に倒れたですわ」

「戻って寝ろ、と言うことか……？」

ええい、倒れる方向なんて所詮は乱数なんだ。俺は乱数になんて屈しない！　こうなりゃルルイアス全域をローラーしてでも……むっ

「………エムル、聞こえたか？」

「聞こえたですわ！　魚臭い人の声ですわ！」

「具体的になんて言ってるか分かる？」

「うーん、多分「見つけたぞぉぉぉ！」ですわ」

イベントが向こうからやってきたな。カモネギならぬ……サメ、イ

べ？
まぁいいさ、ゾンビパニックだけならリハビリには丁度いいだろう。

深淵都市観光兎付き（後書き）

掲示板回とか、ガトリングドラム社とか、ＧＨ：Ｃ編……というかＧＧＣ編は色々と書きたいことがまだまだあるのですが、いい加減本筋に戻らないと何の小説書いてるのか書いてる本人が見失いかねないのでインベントリアかこの章が終わったら番外編書きます。

スチューデ君はいわゆる不定の狂気発症してます、つーかクターニッドのお膝元に迷い込んでピンピンしてるアラバやエムルがおかしいだけです。エムルに関しては感覚麻痺ってそうですが

海産物合体カイセンオー！！！（前書き）

ゼノブレイド2楽しすぎかよ……

海産物合体カイセンオー！！！

ロップイヤーとはいえ伊達に大きな耳はしていない、優れたレーダーとして俺をアラバの元へと誘導するエムル。何度か人魚に見つかりかけた事もあったが、モンスターを引き連れてのアラバと合流、という事態は回避できた。

「で、アラバと合流したわけだ、が……」

「おおサンラクよ！　目を覚ましたのか、ならば手を貸して欲しいぞ！」

あーうん、それはいいんだそれは。手伝う手伝う、超手伝う。

だがちょっと目の前にいるモンスターが理解できないというか……え、なにこれ。大きさは二メートルより少しでかいくらいだが、形状が妙だ。

「え、なにこれ」

「多分、喰纏種(キメラ)ですわ……！」

「キメラ？」

キメラといえばあれだ、ライオンやらヤギやらヘビやらをミックスした超雑種モンスター。ジャパニーズキメラといえば鵺(ぬえ)、コカトリスとかはキメラじゃないの？　と色々ややこしい奴ではあるが、まぁおおよそ「複数の生物の要素を持つ一つの生物」という点は共通している。

ファンタジーじゃ結構な大御所モンスターだが……あれは、キメラと認定していいのだろうか。

「おのれ、我が愛刀をあんな使い方しおって……！」

右腕（ライトアーム）にはカジキのものと思しき鋭いソード。

左腕（レフトアーム）には岩……じゃないな牡蠣か、牡蠣の貝殻を盾のようにくっつけている。

右足（ライトレッグ）には触手……吸盤のつき方がタコのそれとは違うので多分イカの触手。

左足（レフトレッグ）には甲殻類、それも蟹などに見られる細身な蟹の脚。

それらごちゃごちゃのパーツが胴体部の半透明なゲルに接続され、頭の代わりなのか首の上には太い珊瑚が生えている。それはそう、言うなれば……

「海産物合体カイセンオー……！」

なんだろう、全体的に七輪で焼いたらすごく美味しそう！　あーでも蟹脚は焼くよりシンプルに茹でた方がいいかな。まぁそもそも腐れつみれと同類なので腐ってるんだが。

つーかあの真ん中のぶよぶよとしたゲルといい、四肢にコードの如く接続された半透明な細い何かといい、もしかしなくても非常に信じ難いが……海月（クラゲ）、か？

キメラクラゲがクターニッドの力で人型になったから、あんなゲテモノ特撮ロボじみた姿に……？

「イカの足、蟹の脚、カジキのツノ、牡蠣の貝殻を持ち珊瑚を生やしたクラゲ……？」

「喰纏種（キメラ）は食べたものを自分の身体に追加できるんですわっ！」

「あ、なるほどね」

つまり昨日の晩御飯がそのまま身体に反映される、と。プライバシーもへったくれもねぇな、というかキメラという種族ではなく一種の突然変異扱いなのか？

いや、今それはいい。問題はアラバがキレている理由、カイセンオーが取り込んだアラバの愛刀とやらの状態が問題なのだ。

「臍の下、両腿の間にぶら下がるあのポジショニングは……」

「ち〇こですわーっ！？」

「バッカ、女の子が大声で言うんじゃありませんっ！」

「俺の愛刀は恥部ではない！！」

見てくれ僕のエクスカリバー（股間）ってか、この場にペンシルゴンがいたら大爆笑してただろうな……あいつ結構下ネタぶちかますし。

「つってもな、実際中々いやらしい場所にくっついてるからな……ああいや、戦闘難易度の話だ」

あれを引っこ抜くには奴の真正面に立たないといけない、ケツから生えているとかであれば引っこ抜くチャンスは結構あるのだが、前向きに生えてるんだよなぁ……

「一応聞くけど諦めるつもりはないよな？」

「無論だぞ！　あ、あのような、あのような扱われ方は断じて許せん！　いや、許さん！！」

よし、それならカイセンオー討伐作戦を組み立てないとな。とはいっても作戦は至ってシンプル、はっ倒す！

「よっしゃ突撃だーっ！」

「はいなーっ！」

多機能とはいえ所詮は半魚人、耐久力なんて俺とどっこいかそれ以下だ。触手攻撃や右腕のカジキホーンは要警戒だがそう驚異的な敵ではない！

「死にさらせぇーっ！」

傑剣（デュクスラム）への憧刃を両手に握り、カイセンオーへと躍り掛かる。真っ直ぐな直線に空を切って刃がオイスターシールドに叩きつけられる。手に響く僅かな痺れはシールドの頑丈さをストレートに伝達させ、返す刃のカジキソードが俺の胴を狙う。

「ぐっ……！」

「サンラクサン！？」

くそ、少し掠った。避けたと思ったんだがタイミングをミスっていたか、だがレベル９９にもなれば半裸でもそれなりの体力はある。

それにこのゲームは数値の処理以上に当て方当たり方が重要になる、擦り傷なら無視して構わない。

「エムル、胴体を狙え」

「【マジックエッジ】！！」

魔力の刃がカイセンオーの胴体へと叩き込まれ、カイセンオーが悲鳴をあげる。なんとも言えない声だ、声帯がないから身体の軋みが声のように聞こえているのか？

「やっぱり本体は真ん中のクラゲ部分か……威力重視でチャージ、立ち回りと位置取りは任せろ！」

「はいなっ！」

「アラバァ！　お前も働け、囮を頼む！」

「任された！」

不恰好な人型とはいえモンスターとして出てくるだけはあり、カジキソードを振るいオイスターシールドで防ぐ、程度の知能はあるらしい。

さらに言えば脚部や胴体から四肢につながるクラゲの触手も気になるところだ、古今東西クラゲモンスターには毒があるものだ。

ただの毒ならまだしも、これが麻痺毒……状態異常「麻痺（サンラク）」を付与するものであったなら目も当てられない。紙装甲の俺では身動きを封じられてから最悪ワンコンボで死にかねないからな。

「ぐぅう……クターニッドの力で形を得た命のなり損ないの癖をし

て、小癪な！」

剣の達人、と言うわけではないな。生物の本能的な反応を無理やり底上げしている感じというか、恐らく腕自体の筋力を巻きつけたクラゲ触手でカサ増ししている。
だから咄嗟の反応に身体を無理やり間にあわせることができる。だが所詮は雑魚モンスター、レアモンスターではあるのかもしれないがその動きには隙が多い。反射挙動は連続で使えないと見た。

「首……はただの飾りか、となるとやっぱり胴体狙いだろうけど……剣と盾が邪魔臭いな」

スキル起動、ステータスを上昇させて駆ける。それでも後ろ襟を引っ張られているようなしこりを感じつつも、カイセンオーへと一気に距離を詰める。

「回るぞエムル、ちゃんとしがみついとけ……！」

意図的に奴の左側に寄った攻撃、やはりというか傑剣への憧刃の攻撃は弾かれるが、オートガードは使わせた。
前へ踏み込んだ右足を軸に身体を左回転。腰を曲げて身体を屈め、カイセンオーの左側をオイスターシールドを潜り抜けるようにしてカイセンオーの背後へと回り込む。

「うげぇ気持ち悪っ！」

ウジョウジョしてる！　触手が！　触手が！　腐ってるから余計タチ悪いな！！

「後で洗いたい……が、微塵切りだ！」

縷々閃舞(るるせんぶ)起動。一振りに三の斬撃が付与され、スキルとダメージのエフェクトが勢いよく飛び散る。
カイセンオーは背後を取った俺の方へと振り向かんとするが、次の瞬間には徒手空拳のアラバによる全身をしならせたフルスイングパンチを胴体に受けて硬直。奴のヘイトが右往左往している間に、スキルの効果が途切れど俺はさらに攻撃を加えていく。
斬撃が腐れゲルを切り裂くたびにネチョネチョしたものが飛び散り付着する。エムル我慢しろ、ここで悲鳴をあげたら全体的にパーになる。

「地味にタフネスな奴め……」

だが所詮は雑魚Ｍｏｂ、注意力が散りすぎだ。この場で一番の脅威は俺でもアラバでもない、必殺の一撃を組み上げていたエムルだ。

「いくら鈍(なま)ってても流石にそれは喰らわねーよ……エムル、やれ」

腐った巨躯が自壊しかねないほどの捻りを加えた全身全霊の大上段、喰らえば俺とエムルを叩き潰れてしまうような一撃も、当たらなければカス当たりにも劣るというもの。
所詮腐れつみれに斬撃の軌道を修正するだけの繊細な技量があるはずもなく、余裕で決めポーズなんかもしちゃった俺のすぐ側をカジキソードが通過し、地面に叩きつけられる。
引き抜かれんとするそれを足で踏んづけ、どこが目なのか分からないカイセンオーを真っ直ぐに見据える。
別にカイセンオーに何か思い入れがあるわけじゃない、ただ射線を通しただけだ。

「【マジックエッジ】ィィ！！」

攻撃魔法を放つ前に使用する事で威力を高める加算詠唱（アッド・スペル）、それによってその規模を増した魔力の刃がカイセンオーの胴体、本体と思しきクラゲ部分に叩き込まれる。

腐れゲルが魔力に食い破られ、貫通する。全身に張り巡らされたゲル触手がのたうち四肢が硬直、そして最後には四肢がもげるように崩れ落ちてぐしゃりと崩壊した。

汚いゼリー包みだ、イギリス人も敬遠するレベルだな。

「お前の得物は？」

「おお、おお！　無事だ、無事だぞ！」

今気づいたけど、もしかしなくても股間部分にぶら下がっていたのって握りの部分から捕食されていたんじゃなかろうか。つまりもう少し見つけるのが遅かったらアラバの愛刀の能力を持ったカイセンオーになっていたかもしれなかった、と。

「もう離さないぞ！　ああ、そうとも、二度と同じ過ちは繰り返さないぞ……！」

「高々武器一つに入れ込みすぎじゃねぇか……？」

ウチの傑剣（デュクスラム）への憧刃君を見てみろ、湖沼の短剣時代から酷使されまくりだぞ？

若干ネチョっている片刃の剣……刀ではあるが大きさ的に太刀だな、下手な大剣くらいデカイぞあれ。

己の得物に頬ずりし始めそうなアラバに思わずそう呟くと、アラバ

は何か得心がいったかのように太刀を俺に見せつけるように突き出す。

「あぁ、そうか紹介が遅れたな。サンラク、これは俺の相棒の「大海峡(だいかいきょう)」……に宿る憑依精霊(イグジステンツ)のネレイスだ」

「…………ドウモ」

「ゔぇ？」

剣からなんか出てきたぁぁぁぁ！？

海産物合体カイセンオー！！！（後書き）

・喰纏種（キメラ）

所謂複数の生物の特徴を持つモンスター。だがシャンフロの世界ではごく稀に発生する生物の突然変異であり、厳密には種として定義することができない。なのでゴブリンのキメラもいるしクラゲのキメラも存在する。

本編でエムルが説明した通り、捕食摂取を経ることで捕食対象の細胞情報を自身に反映する。ただし「キメラの素体となるモンスターが元々備える器官」以外のパーツを取り込む、増やすことはできない。

つまりサメキメラが四匹のサメを食べたところでファイブヘッドジョーズにはならない。

カイセンオーの場合は素体となった「リードール・ジェルフィッシュ」が触手の先端に自身が産んだ幼生をくっつけて半分オートで操る、というなかなか度し難い生物であったため、一触手（手足）にカジキの頭やら牡蠣の貝殻やらが生えていた。

何、「食べたものを自身に反映する」生態に見覚えがある？

……一部の生物の中には本来一代限りで子孫には遺伝しない喰纏種（キメラ）の特性を種族レベルで定着させたモンスターが存在し、かの水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）などが該当する。

居心地はネカフェの個室くらい（前書き）

むしろ筆が進む現象

精霊、それはともすればキメラ以上にメジャーな、それこそドラゴンや天使悪魔といったファンタジーお約束連中と肩を並べる超大御所種族だ。
精霊と言っても様々な種類があるわけだが……まぁメジャーどころで言えば火、水、風、土の四属性関連の精霊やランプの精などに代表されるアラビア的精霊ことジン、エクスカリバーと名のつく剣は結構な確率で「湖の精霊」とか出てくるな。
ゲーム、というか設定を考えた人の定義次第で実態があったりなかったり、人外じみていたり「それただのコスプレでは？」みたいな姿だったり。
逆に元ネタの設定に忠実にしすぎて薄汚いトカゲにしか見えなかったり……酷い時はサラマンダーの代わりにイフリートが火の精霊扱いされていることもある。そいつヨーロッパ圏の出身者じゃないぞ。

まぁ他ゲーの話はここまでにして、だ。シャンフロの世界における精霊（スピリット）とは、極めて簡潔に言ってしまえば「意思持つ竜巻」だ。
無差別に被害を撒き散らす、と言う意味ではなく「特定の属性が一定量固まったものに自我らしきものが宿った存在」がこの世界では精霊として定義されている。
竜巻と例えたのもこの性質によるものだ、精霊は生命体ではなく言ってしまえば魔力が溜まった場所に自我が宿ったもの……つまりある程度時間が経つと霧散してしまう。あたかもエネルギーを使い果

たした竜巻がほどけて消えるように。
それに自我といっても人格と呼べるほどご大層なものではなく、かろうじて自分とそれ以外の区別がつく程度の幼稚な自我らしく、大抵の精霊は後先考えずに力を使って消えてしまうか、何をすればいいのか分からないまま無為に力を使い果たして消えてしまうそうだ。
とはいえそんな、なんちゃって自然災害に精霊というビッグネームを与える程シャンフロの設定を考えた奴も馬鹿ではない。
蛍や蝉よりも儚い生態をしている精霊だが、ごく稀に人格と呼べる確固たる自我と、周囲の魔力から自身の属性と同じものを取り込む事でその存在を固定できるモノが現れる。
むしろプレイヤー達からすればそいつらこそが「精霊」と言えるだろう。意思持つ自然現象、自我を獲得した属性の塊、言い方はなんでもいいが時にそれはボスキャラであったり、ユニークシナリオに関わるＮＰＣであったりする。

「で、そのイガグリ電通(デンツウ)ってのは？」
「イグジステンツ、だ。力ある精霊ではないもの……強き力を得られなかった精霊が消えてしまうのは知っているか？」
「知識としては」
「そりゃあアタシが今さっき説明したからですわ……」
悪いね、攻略サイトはそこまで熱心に見てないんだ。
「鉱人(ドワーフ)族達はそこに注目したんだ。己の身体を維持するだけの力が

ないのであれば、こちらから器と糧を与えてやれば良いのではないか、とな」

「それが育児ステイツ？」

「存在（イグジステンツ）を得た者達だ！　サンラク、もしやわざとやってないか？」

「まぁそこはどうでもいいだろ、続けてくれ」

苦虫を噛み潰したような顔をするアラバではあるが、こいつは俺に三つ四つは恩があるから強くは言えないらしい。尤も、俺個人としてはシャチ野郎の時に助けてくれたことで全部チャラにしてるんだがなぁ。

「彼女もまたそういった精霊だったんだ。自我はあったが自ら魔力を得る術を覚えられず、消えかけていたんだぞ」

コクコクと頷く青い肌をした、彼らの話が事実であれば言い方は悪いがクズ精霊であるはずのネレイスとやらからは今にも消えてしまいそうな危うさは感じられない。

肌も髪も目も、何もかもが青みがかり羽衣のように妙に向こう側が透けない水を纏う事で衣服の代わりとしている姿は中々に刺激的ではあるが、時折グニャリと全身の輪郭がブレる姿や、彼女の髪や手足の末端が時折人の輪郭を崩して液状化する様は彼女を構成するのがタンパク質ではなく水と魔力である事を示している。

「あー、なんとなく察した。それを放っておけないと何とかしてドワーフの所にそいつを運んで、武器の中に封じ込めて……いや、合意の上っぽいし住んでもらった、と。大体こんなところか？」

「君は、俺達をずっと昔から見ていたのか……？」

「んなわけあるかい」

ボーイミーツガールに諸々の要素を混ぜたら大体こんな感じだろうな、という勘だ。

「話を聞くにその刀には精霊が宿っており、使い手が魔力を与える……いや、ある程度は武器自体が魔力を集めたりする、もしくは武器に宿った時点で精霊は魔力供給の方法を会得できる、と見た」

ふふん、どうやら当たりのようだな。超自然存在が宿った武器なんて王道設定、腐るほど見てきた俺ともなればこの程度はお茶の子さいさい。へそで沸かした茶どころかへそで米も炊いて茶漬けが作れるぜ。

何だか腹が減ってきたな……ログアウトしたらお茶漬けを作ろう、確かシャケフレークがまだ残ってたはずだ。

「とはいえそう簡単にできるものではないらしいぞ。消えゆく精霊と同調し、同意を得なければ契約は結べない。無理矢理武器に封じ込めるのは無理らしいぞ」

「あー凄いっぽいわ。それ最終的に大量の精霊を詰め込んで大量破壊兵器とかにするやつだ」

「なんだって！？」

それに似たストーリーをつい最近クリアしたばかりだ。フェアリア・クロニクル・オンラインと言ってだな……うっ、頭が。

「ジョークだよジョーク、ドワーフってのはそんな酷いことをする連中じゃぁあねぇんだろ？」

「当然だぞ！　彼らは、少々ガサツな所はあるが皆気の良い奴らだからな！」

酒飲みで全員おっさん顔なら役満だな、鉱山か地下暮らしなら追加得点だ。

「ここに来た時、奴らに襲われ彼女を手放してしまってな……見つかって、本当に良かった……っ！」

「あれにタベられたトキは、ホントウにコワかった」

「あ、やっぱ食われてたのかアレ」

触手、女精霊、捕食吸収……ふむ、シャンフロがR18じゃなくて良かったなアラバ。つーか下手したらカイセンオーが精霊化してたのか……危ない危ない。ゴースト的な霊体なら斬首剣で切れるが精霊がそれに該当するかは微妙な所だからな。

「ありがとう、トリのヒト。ネレイス、おレイするよ？」

「礼ならアラバの武器として全力を尽くしてくれ、じゃなきゃ全員蛸の餌だ」

なんかもう神とかそういうカテゴリに足突っ込んでそうなクターニッドが安易に人を捕食するのかは疑問だが、徒手空拳（十牙）でも割と強いアラバが本来の武器を取り戻したのなら、もう正式に戦力

として数えていいだろう。
これでスチューデを除けばプレイヤーとＮＰＣの混成八人パーティの完成だ、レイドボスでもなんとか行けそうな人数じゃないか。少なくとも三人でレベルダウンかましてくるユニークモンスターに挑むよりは心強い。
「ワかったガンバる、ネレイスはアラバとトリのヒトをマモる。あと……なんかシロくてヤワいウニっぽいのも」
「ヴォーパルバニーとも呼ばれないですわ！？」
ヴォーパルバニーが海中に進出してないからじゃないかなぁ、まぁどうでもいいや。
「まぁ落ち着けよウニル……いたたっ！　頭頂部を執拗に突くのはやめろ！」
「ぷぅあーーっ！！」
外道共なら笑って煽り返すというのに沸点の低い奴め、うりうり耳を引っ張ってくれようぞ。
「ふびゃーーっ！？」
お前あれだぞ？　全体的な厨二度じゃネレイスにボロ負けしてるんだぞ？　お前、剣に宿る霊的存在とか魔眼オッドアイに匹敵する厨二力を誇るんだぞ、マスコットじゃ太刀打ちできんぞ？
「まぁいい、早速だが……アラバ、クリオネ狩りに行くぞ」

「本当にいきなりだな!?」

どうせレベリングもできねぇ、アイテム探しも興が乗らねぇ、だったらボス討伐をやるしかないだろう。

あのクリオネは魔法を全て遮断する特性を持っている、少なくとも物理的に振り回すだけなら精霊憑き武器でも産廃にはならないだろう。

(……ま、他のプレイヤーがいないうちにボス泥確認したいっていう下心がない訳でもないんだが)

ほら、ボスも四体いるんだし一体くらいいいね?

「あ、エムルは留守番な」

「ぷぇえ!?」

だって魔法職は置物か肉盾くらいにしか価値ないし……

居心地はネカフェの個室くらい（後書き）

察しの良い読者の皆様ならご存知だろうが……っ！　クリオネさんの戦闘シーンは今章の最初に描写したので……っ！　ユザパります……っ！（カットするの意）

・憑依精霊武器（イグジステンツ）のレシピ
・必要なもの
精霊と一定以上の友好度を得た者
一定以上の友好度を持つ精霊（クズ精霊に限る）
精霊の属性と同じ属性を持つ依代石
精霊の属性と同じ属性を持つ鉱石素材
二等石以上の腕前の鉱人族（ドワーフ）
・作業工程
武器の使い手となる者が依代石へ魔力を注入します。
武器の使い手となる者が精霊に魔力を譲渡します。
武器の使い手となる者の魔力が同調した依代石に精霊が潜り込みます。
精霊と同じ属性を帯びた鉱石素材で武器を製作します。
武器の使い手となる者が製作した武器に魔力を注入します。
武器の使い手となる者が魔力を同調させた武器と依代石それぞれに魔力を注入しながら組み立てます。
完成！

ゲームシステム的に要約すると「製作時点でのプレイヤーの最大魔力量五分割し、五度の魔力注入判定を行い、その数値が武器の完成度評価に影響する」というものです。ある種のユニークアイテムではありますが効率重視だと中々精霊の好感度が上げられないという

トラップが。
ＭＰ特化にすれば良い武器が作れるが使いこなせず、かといって少ない魔力では良い武器が作れない……さぁどうする？

繋ぐ、繋がる、繋ぎの日（前書き）

甲殻類と甲虫を合体させて戦闘特化させせたような重装甲人外が大好きだって一万年前から毎日欠かさず言ってる（ヂカラオすこ）

でも一番好きなのはシキです

繋ぐ、繋がる、繋ぎの日

お茶漬けだけでは足りなかったので簡単な料理を作る事にした。フライパンに油をひいてご飯とコンソメを叩き込む。適当に冷蔵庫の中にあるものを叩き込み、最終的に塩胡椒で適当に体裁を整えて完成。

「名付けて……なんだろう、適当チャーハン？」

もしくはケチャップの入ってない半端者チキンライス……よし、お前は今日からヒヨコライスだ。だって卵が切れていたんだもの。

「とりあえず封将の一体を倒してみました、っと……」

ＳＮＳにクリオネを倒した報告をしつつ手早く食事を済ませる。クリオネ、中々に強敵だったが逆に物理にそこまで強くないという致命的な弱点をなんとかするべきだったな。あとバッカルコーンの耐久度低すぎ、寒天か何かかよ。

とはいえ性能はさておき設定面でも結構気になる事は多かった、そう例えばクリオネの鮮度とか。

基本的にこのエリアでエンカウントする半魚人は皆腐っていた、それかもしくは人魚のように不自然に人間臭さが強かったり。

だがあのクリオネからはそういった違和感をあまり感じなかった。違和感を言語化するのが難しいな……なんというか、その……うーん、ガワの表記ミスみたいな？

見た目もアイテム欄での表示もナイフなのに実際に使うと何故か散弾を撒き散らす、表示がナイフなのに中身の判定はショットガンに

なっている、そういう感じの違和感と言うべきか。
半魚人や人魚にはそういったちぐはぐ感がある、何か別のものが無理に人魚として振舞っているというか……うーん。

「水が溢れない底の抜けた鍋、素通りできる閉じた門、ストーリー上は味方になったのにバグで判定が敵のままだから裏切りがネタバレされてるＮＰＣ……」

「一体なんの話をしているんだ？」

「ルルイアスの根幹に根ざす概念の言語化だ、言葉として形にすることで脳細胞が活性化するんだ」

「お、おう……？」

「サンラクサンの持病ですわ、気にするだけ疲れますわ」

「ビョウキ？」

失礼な、頭のエクササイズだ。
とはいえ俺の構築では物理完全無効の封将を倒すことは出来ない、それはモルドや秋津茜のような魔法職に任せるとして……問題は残

り二体の封将だ。

「魔法も当たるし物理も通る、ただ時々魔法も物理も無効化してくる、と……」

だがヒントは多い、ここで謎を解く鍵になるのはクリオネだ。

魔法の一切を弾くクリオネに対し、残る封将の中には物理（スキル）を無効化するボスがいる。二体で一体のボスとして存在する、曰く「生き生きした半魚人ズ」なるそいつらは、クリオネと非常によく似た制限をプレイヤーに課している。

だがその性質は真逆、水と油、N極とS極……そう、対になっているんだ。

反転とは即ち表と裏がなければ成立しない、無地の球体はひっくり返したところでその性質は変わらない。

であれば認識がそもそも間違っていたんだ、一体のユニークモンスターと四体の封将ではない。

「二体一対が二組なんだ」

中々にエグいギミック仕込んでくれるじゃねーかクターニッド、魔法職がいなければ詰むしその逆でも詰む。残り二体、いや一組の共通はなんだ？　当たるときと当たらない時がある、条件はなんだ？　クリティカルの有無？　ダメージ量の制限？

「いや、ルスト曰く剛弓魔法弓を問わず無効化もされたが当たりもした。モルド曰くプレイヤー側が不利になると攻撃が当たり出したり、その逆もあった。秋津茜曰くクナイ攻撃は当たる時と当たらない時があった……」

にこやかな笑みで歌いながら近づいてきた人魚の顎をハイキックで蹴り上げ、歌が直撃して頭から転げ落ちたエムルをキャッチしつつ思考はさらに加速していく。

証言の中で最も重視すべきはモルドの発言だ、他の証言が無効化の有無であるのに対して彼の発言だけは別の対義語で語られている。

「有利な時だけ当たる、不利な時だけ当たる……」

流石にそんな頭のおかしい無効化条件ではないはず、なんらかの条件が結果として有利な時だけ攻撃が当たる、そしてその逆の状況を作っている。

憤怒の表情でハグを求めるという中々に笑える攻撃を仕掛けてきた人魚を回避し、そのうなじに斬首剣を叩きつける。ぴぎゅっ！？と中々アレな断末魔が聞こえた気もするが最早脳細胞はトップスピード、そのような些事は思考のはるか後ろに置いていかれた。

「秋津茜のクナイは両方の封将に対して同じ結果を出した、ルストの矢は有利な時は当たり不利な時は外れた……クナイの共通と弓の差異？」

弓の有利はなんだ、遠距離から攻撃を当てられることだ。では弓の不利は？　アドバンテージである距離を詰められた時だ。秋津茜のクナイの特徴は？　耐久度が通常の武器(ナイフ)より低い代わりに投擲武器として使える使い捨てのアイテムだ。

「…………距離か」

思考がトンネルを抜け、実証されてないとはいえ確信すら抱く答えという光に照らされる。

弓使ぃが不利になった瞬間攻撃が当たるようになったのは至近距離に近づかれたから、クナイが中途半端に戦果を出したのは投擲武器としての運用をしたから。

「答えに辿り着いた……っ！」

「辿り着いて欲しいのは答えじゃなくて安全圏ですわーっ！！」

「ん？」

ああそうだったな、無双ゲーみたいなもんだし考えに熱中していたから忘れていたが……絶賛戦闘中だった。

「アラバ！　上だ上！」

「む、無茶を言ってくれる……！」

「また愛刀を「大海峡」ならぬ「大股挟」にしたいのかー？」

「ぬおおおおおお！　この程度の登攀んんん！！」

分かりやすい思考ルーチンは扱いやすいが見てて不安になる。ほら、ロクでもない絵しか描けない鉛筆とかに悪用されそうで……

サンラク：【重要】封将攻略について

サンラク：えー、先程長文コピペして貼った通りですが恐らく物理無効を除いた残り二体の制限は「遠距離無効化」と「近距離無効化」であるものと考えられます

サンラク：ですので近接職で巻き貝を殴り倒し、飛び道具持ちでフジツボをぶっ飛ばす事を提案した次第ですが今回は別件です

モルド：今ちょっとルストがマトモじゃないので代わりに僕が

サンラク：何があったし

モルド：GGCでネフィリム・ホロウのナンバリング続編の制作発表されたんだけど、知らない？

サンラク：マジか、よくもまぁ過疎ゲーの続編にゴーサイン出たな

秋津茜：休憩時間です！

サンラク：まぁいいや、俺が提案したいのは封将を倒すタイミング

サンラク：クターニッド戦でなんらかの特殊効果が出ると睨んで封

将倒ししているわけだけど

サンラク：あ、お疲れ様です

サンラク：全部倒した瞬間クターニッド戦に移行する可能性もあり得るし、七日目になった瞬間自動的にクターニッド戦に移行する可能性もあるので

秋津茜：はい！　もう少ししたらまた頑張ります！！

モルド：つまり六日目までに封将を倒し切りたいという事？

サンラク：そういうこと、俺は用事を済ませたから七日目までインできるので、端的に言うとメンバー募集

モルド：明日までにはなんとかルストを正気に戻して参加します

秋津茜：六日目なら大丈夫です！

秋津茜：呼ばれたので失礼します！

ルスト：世界マジエクセレント、来年まで死ねない

モルド：この調子なんで……

サンラク：その気持ちは分からなくもない

サンラク：出来れば七日目までにレイ氏とも合流できればいいんだけど

モルド：全く会わないけど、ログインしていないのかな

サンクラク：リアルが忙しいのかもしれないな、願わくば最終日にはログインして欲しいが

サンラク：幸いクターニッドっていう特大のランドマークがあるしな

サンラク：んじゃ予定としては……

さて、と。

「よし、稼ぐか」

ボス戦は団体行動だ、であれば暇になってしまった四日目はユニークシナリオでもユニークモンスターでもない、この反転都市ルルイアスそのものを隅から隅まで堪能し尽くさせて貰おう。

なぁに物入れ(インベントリア)には余裕がある、無尽蔵の余裕がな。

繋ぐ、繋がる、繋ぎの日（後書き）

今から残り三体のボス倒して、キャラ描写して、クターニッド行って、世界観掘り下げて、戦闘描写……

メタ特効と化したユザパさんの次の得物は誰だ

四を挟んで五より走る（前書き）

ゼノブレイド2　ストーリークリアしました、とても良い空気吸えました。代わりにフェスはほぼ不参加でした

ガチアサリ……うっ頭が

四を挟んで五より走る

今日はワクワク海鮮ツアー！　昼の間は動いてる時は新鮮じゃないけど倒すと新鮮な素材を落とすいちご狩りならぬゾンビ狩りだ！

「レアエネミーはカイセンオーか！　ははは、すげぇや今度はチョウチンアンコウに大量の魚がくっ付いてら！」

アンコウのメスはオスを吸収云々と聞くけど他種族を吸収するアンコウとか怖すぎだろ。キメラって突然変異らしいけどそんなポンポン出てきていいのだろうか……いや所詮はレアエネミー、時々出てくる程度のエンカ率は普通か。

ユナイトラウンズとか凄いぞ、レアエネミーがマジでツチノコレベルの低出現率だからたった一匹のレアエネミーのために百人規模の共喰いが発生する。

気分的には無双ゲーだな、実質破壊不可オブジェクトと言っても過言ではない傑剣への憧刃が尋常ならざるキルスコアを叩き出している。

最早いちいちアイテム名を確かめる暇すらない、無尽蔵に現れる半魚人を千切っては投げ千切っては投げ……人魚は顔面に一発入れてから十割入るので対面自体は楽だがやはり空というアドバンテージを取られているのが痛いな。

「邪魔だツインテオラァ！」

「上半分は人の形してるのに容赦なく蹴り飛ばすサンラクサン相変わらずカッ飛んでるですわ！」

「今の俺の目には奴らは空飛ぶサンドバッグにしか見えないからなぁ！　ポニテオラァ！」

人が本気になれるのはいつだって自分の望みを叶える時さ、実質的なゴールのないＭＭＯに於いて今俺の望みは懐を温めること！

「ふはは、ふはははははははは！！」

黒髪ロングのお前も！　金髪ツインテのお前も！　銀髪エアリーボブのお前もォ！　すべて換金用素材と果てるがいい！！

「時々思うのだが、俺はその……何か正気ならざるものに同行しているのではないかと思うぞ」

「ダイジョウブ、あれはホショクシャとオナじ。エモノをクうことにゼンアクはナい、ホンノウテキなコウドウ」

ははは、笑えるじゃないかＮＰＣがプレイヤーの思考ルーチンを説いてら。

海鮮ツアーは終わらない！　昼間は腐った魚相手に無双ゲーするだ

けの作業だったが夜は違う！　今度はどこも腐ってない新鮮ピチピチな魚を相手に大暴れ！　むしろ向こうも大暴れするからスリル満点だぜ！

「あ、あれは昼間の射撃型カイセンオーの、ご母堂！？」

「スレーギヴン・キャリアングラーだ！　本当に挑むつもりなのか！？」

半ベソをかくエムルを頭に乗せて、俺達は上空に力強く在るそれを見上げる。
ギガリュウグウノツカイことアルクトゥス・レガレクスはさながら電車であった。
シャチ野郎ことアトランティクス・レプノルカは言うなれば戦車に戦闘機と戦艦の主砲を混ぜたような怪物であった。
であればスレーギヴン・キャリアングラーはなんと例えれば良いのだろう？　ははは、見りゃわかる。

「射撃型カイセンオーのお母さーん！　お子さんは美味しくいただきましたよーっ！！」

「やっぱ、このヒトアタマおかしいかも……」

「なぁエムル、アンコウって捨てるところがないと言うらしいが、それってつまり大量に素材落としてくれるってことかな」

「やっぱり頭おかしくなってるですわーっ！？」

巨大な一と、それに仕える大量の群。アルクトゥス・レガレクス程ではないがそれでも巨大な縦幅に横幅すらも追加された母体から発

艦されていく奇妙なパーツの符号を持つ艦載機（魚類）達が此方へと牙を剥く。

ああそうとも、こんな作りをしたモノを「空母」と呼ばずしてなんと呼べばいいんだ？

「アラバ、あの逆ハーアンコウってどれくらい強いんだ？」

「……深海の王、程ではないが逆に言えばアレに勝てるのは深海の王か「海の森」くらいとは言われている」

成る程、今日中にその海の森とやらも見ておきたいが……まぁ高望みはしない、ボス戦も控えているしご母堂の素材で勘弁してやるとしよう。

「見ろよ、素材が向こうからやってきたぞ。向こうが空母ならこっちは駆逐艦（デストロイヤー）の水雷戦隊だ、それっぽい掛け声でもやってみるか？」

照準合わせ……撃てぇーっ！

「おーう……おはよーさん……」

「もしかして、サンラクって朝弱い人？　フィフティシアで会った時もそんな感じだったけど……」

「いやなに、空母の撃沈に時間がかかってな……」

「別のゲームの話？」

なんとシャンフロ内での話なんすよ、エムルとアラバは疲労でぶっ倒れたが俺は今からボス戦だ。
カフェインは薄めのものをキメたから全力とは言えないが、七日目を前に今から本気を出しているようじゃ流石に保たない。

「んで、それが正気に戻した結果？」

「手を尽くしましたが、残念ながら……」

「あはは、うふふ」

満面の笑顔である。
どちらかと言えば寡黙な類であったルストが、だらしなく頬を緩めて満面の笑みを浮かべている。この世の厳しさを知らない赤子だってもう少し渋みのある笑顔を浮かべてるぜ。

「いやほんと昨日は大変で大変で……続編が発売されるまでに死なないよう筋トレの旅に出るとか言い出したりするし」

その気持ちは分かる、が俺にはあまり縁のない感情だなぁ。クソゲ

ーってのは大抵誰かが評価を下して初めて見つかるものだから発売を心待ちにするという事自体が稀だ。まぁ、強いて言うなら通販に委託したクソゲーが届くのを待つ時か。

「これ、使い物になるか？」

「大丈夫、来たる運命の日に備えてＶＲ修行をする。のでシャンフロも、前作も手を抜かずに本気を出す」

めっちゃスマイリーなルストはそう言うものの、本当に大丈夫かと言う疑問はルスト本人ではなくモルドの方へと視線で送られる。返事はどうにも曖昧な苦笑いではあったが……まぁどうとでもなるだろう、今回の攻略班は全員プレイヤーだから遠慮なく死ねるからな。

「今から向かうのはルルイアス南の塔……遠距離攻撃の一切を無効化する「巻貝」だ」

と言っても俺はそれを実際に見たわけではない、それを確認したのはルスト達だ。そもそも無効化条件に確証があるわけではない。それを確かめに行くという面もあるが、マストオーダーは封将の攻略だ。

「残る「藤壺」と「夫婦（めおと）半魚人」に対して俺は有効打を持っていない。ダメージを入れられないからヘイトも取れない、本当にただの賑やかししか役目がない」

やろうと思えば受けタンクが出来ないわけでもないのだが、リソースの消費が激し過ぎるので中ボス程度では使うわけにもいかない。最終手段として頭に砲塔（エムル）をくっつけて走り回る人間戦車大作戦もあ

るっちゃあるが、それ下が俺である必要性薄いからな……
「エムルの付属パーツとして突貫するくらいならできるが、多分「藤壺」も「夫婦半魚人」も任せる事になると思う」
「了解、じゃあ巻貝の攻略に行こう。ほらルストも、正気に戻って」
「はー空気がおいしーい！」
「……………」
本当に大丈夫なんだろうかこいつ。

作戦内容を確認する。
仮称「巻貝」は遠距離攻撃の一切を魔法、スキルを問わず無効化する能力を持っている。
その為巻貝の打倒には至近距離まで肉薄してのインファイトが必要不可欠であり、当作戦では不肖サンラクがメインアタッカー及びヘイト稼ぎを担当する。
ルストは遠距離で待機しつつ、隙を伺って至近距離から弓矢で攻撃を行ってもらう。
モルドはルストの援護だ、下手に巻貝に近づきすぎてヘイトを向けられても困るので基本的にモルドはルストへバフを供給することの

みに集中して直接戦闘には関わらない。

「オペレーション名は……「潮干狩り」で」

「それ巻貝ではないんじゃ……」

「モルド、細かいことはどうでもいいの。些細な問題だからいちいち気にしなくて良い」

チームネフィリムホロウ、出撃だ。俺たち三人は武器を構えて残り三つの塔の一つへ侵入する。

「…………」

「成る程、「巻貝」ね」

いやはや、確かにクリオネもバッカルコーンをオープンするまでは人の形をしていたが、どうやら封将ってのは全員人型っぽいな。かつて和風の武士の格好をしたロボアーマーと戦ったりもしたが、こいつはその逆で西洋の騎士の特徴を強く備えている。全体的に貝殻を多く使っているとは言え、やはり目立つのは頭をすっぽりと覆っている大きな巻貝だ。

俺はてっきりサザエとかそう言う感じの貝を想像していたんだが、アレはどう見ても……

「アンモナイト、だな」

「ルストが「もしかしたらオウムガイかもしれない」とアンモナイト断定を渋ったから、巻貝と……」

「妙なとこにこだわるなおい……まぁいいや、人型なら対人スキルが役に立つ」

アンモ騎士(ナイト)はレイピアを彷彿とさせる、こちらはサザエ型の巻貝の棘が長く伸びた細身の剣と……明らかに人の手によって作られたと思しきカトラスの二刀流を構えて戦闘態勢に移る。

二刀流対決か、面白いじゃないかアンモ騎士。異なる武器種の二刀流はロマン度が高いがそりゃあ土壇場で使うから輝くのだ、戦闘開始時点からボスキャラが使っても特に補正がかからない事を教えてやる。

「作戦通り、俺が奴を受け持つ」

「大丈夫？　回避タンクだとしてもその防御力じゃ……」

その心配はご尤もだ、だから笑顔で俺はこう返す。

「もっと厄介な人型エネミー(ウェザエモン)に比べれば、あの程度敵じゃないさ」

さぁ、攻略を始めよう。

四を挟んで五より走る（後書き）

・スレーギヴン・キャリアングラー
しはいバケモン
みず／あく
とくしゅな　フェロモンを　さんぷして　たしゅぞくの　オスを
とりこむ
とりこまれた　オスは　ぼたいから　おくりこまれる　ぶんぴつえ
きで　けんぞくに　されてしまうぞ

ちなみにエムルが半ベソなのは口八丁手八丁でサンラクがランダムエンカウントを使わせたからです。
あまいかおり要員かな？

破綻する頂点

実際のところ、史実のレイピアは貴族が決闘に用いるものであって、実際の戦場ではあまり役に立たなかったんだとか。
だがここはゲームの世界、限りなくリアルに近くても現実とは異なる場所、そしてボスキャラが扱うレイピアにはプレイヤーをリスポーンさせるに足るリソースが込められている。

刺突剣のメイン攻撃は当然突きだ。刺突の厄介なところは正面から受ける場合、その攻撃が「点」である事だ。
それが斬るや薙ぐなどの「線」の攻撃ならば、突き詰めれば対処は容易い。実際はステータスパラメータなどが絡んでくるが、極論を言えば縦線の攻撃は横線の防御で受け止めることができる。
だが刺突というものは「点」だ、当たり判定が小さいから対処が割と難しい。

「そこらへん、理解できるかねアンモ騎士(ナイト)君？」

「っ……！」

この一ヶ月でこちとらＴＡＳじみた奴とどれだけ戦って来たと思ってる、つい最近なんかついに人力ＴＡＳが出て来たんだぞ。今思い出してもなんだあれ、背中にバッテリー仕込むフタでも付いてるんじゃないか。
役割が明確に異なる、と言うことはどちらがどの役割を果たすのか明確、と言うことだ。
踏み込みから二撃、返しで飛んで来た刺突を横から剣を叩きつけて

パリィ、刺突フォームのために伸びきったアンモ騎士の肘に抉るような突きを叩き込んでやる。
限られた手の内をどうやりくりするかを考えるゲームも良いが、やはり自分好みのスキルで武装したアクションゲーは素晴らしいね。
【ウツロウミカガミ】起動、カトラスが虚空を切る間に切り替えられた特大剣（ツヴァイハンダー）がイマイチ頭と胴体の境界が曖昧なアンモ騎士の頭の付け根に叩きつけられる。
刺突のアドバンテージは何も敵だけの特権じゃない、プレイヤーにだって等しく与えられた恩恵だ。そして俺はそれに対処できる、被害を受けるのはお前だけだ。

「射つ」

「あいよっ！」

状態異常：狂喜乱舞から回復したらしいルストの声に、急ぎ跳び退き射線を通す。次の瞬間、空気を穿って放たれた矢が凄まじい音を立ててアンモ騎士の横っ面へと激突した。

「……序盤の雑魚敵なら一撃で消し飛びそうだな」

「何度か試して、無効化されないギリギリは当たりをつけた。あとは丁寧に叩き込んでいくだけ……」

「今の物理特化にしたんだけど効果ありそうーっ？！」

加害者側である俺が言うのもなんだが、ものすごく痛そうな吹っ飛び方をしたアンモ騎士を観察するが、凄まじい衝撃による吹き飛び以外にダメージを受けている様子はない。

「まずまずってところだ！」

「ルスト、次は炎で試すよ！」

「分かった」

後方へと下がっていくルスト、既に詠唱を開始しているモルドを尻目に、俺は煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手に装備を変えて立ち上がるアンモ騎士の前に立つ。

「次はじゃんけんで遊ぼうぜ、俺はグーしか出さないハンデ付きだ」

ただし生半可なパーなんて出そうものなら、拳（グー）で無理矢理勝ちを獲らせてもらうがな。

先程よりもリーチが減った代わりにより素手に近い振る舞いが可能となった動きでカトラスとレイピアへと立ち向かう。

そして奴が俺以外を忘れた頃に、意識の外から剛弓によって放たれる何かしらの力を帯びた矢がアンモ騎士を順調に削っていく。

そして、モルドによるどの属性が有効かを調べる検証が一巡して定まり、十本ほど放たれた頃。

「………、……っ」

「まぁ、強い方ではあったよ。だが俺を追い詰めたいなら三十秒間リキャスト時間ゼロで即死技を連打するくらいしなきゃあな」

今のステータスをそのまま使ってウェザエモンと戦ったとしても、同じ芸当が出来るかは怪しいところだ。

とはいえ一つ気になる点があったとすれば、それは奴のバトルスタイルだ。
（なんかチグハグと言うか、余計な動きが多いと言うか……蛇足？）
そもそも見た目からしておかしいんだ。アンモナイトを擬人化した騎士然とした姿のモンスターが、何故カトラスなんてものを使っているんだ。
実際レイピアによる攻撃には割とひやりとさせられることもあったと言うのに、カトラスの攻撃に関しては二徹明けのテンションでも対処できそうなくらいヌルかった。
まぁカトラスなんて基本海賊とかが使うイメージの強い武器だし、雑に使うくらいが丁度いい……
「海賊？」
「どうしたの？」
「いや……もしや、とな」
クリオネを倒した時と同様に通常の消滅描写とは異なる、泡のように消えていくアンモ騎士を眺めつつその場に残った貝殻のような素材アイテムとカトラスを見て目を細める。
「ボスドロップするんだ……」
「私もモルドも、近距離武器は使わない。だから」
「いや、これはルストかモルドが持ってくれ」

二人は疑問符を浮かべている様子であったが、恐らくアイテム欄でも見ればこの赤い鯨が刻まれたカトラスが意味するものを理解できるだろう。

これまでの違和感を加味すれば、このカトラスはボスドロップではなくもっと別の要因が絡んでいると推測される。

成る程、これは一本取られたな。成る程成る程、確かに思い返せばそうだった。

「ＥＸシナリオのインパクトに隠れていたがそういうことか……」

「……！」

「どうしたのルスト？」

「……「赤鯨のカトラス」、これって」

思い返すのはルルイアス・サバイバル初日……厳密には半魚人幽霊船との激突から巨大触手に引きずり込まれたあの瞬間。

暗転した意識の中、最後に認識したのはＥＸシナリオが開始されるシステムメッセージ。ああそうとも、誰も直前まで受けていたシナリオが終わったなんて言っていない。

「同時進行しているんだ」

結論を言うとだ、ユニークシナリオ「深淵の使徒を穿て」はまだ終わっていない。

つまりは、だ。

「今現在、二つの物語が一つの舞台で進行しているんだ」

一つはルルイアスに君臨するクターニッドに挑むユニークシナリオEX「人よ深淵(ソラ)を見仰げ、世界は反転(マワ)マる」だ。

そしてもう一つこそがユニークシナリオ「深淵の使徒を穿て」、自称大海賊(クソガキ)スチューデの父親を攫った幽霊船にカチコミをかけるシナリオ。

「もしかしたら、「深淵の使徒を穿て」はマルチエンディングだったのかもしれないな」

ノーマルエンドは幽霊船上の半魚人全ての撃破、そして条件を満たしてルルイアスに来た場合、もう一つのルートに分岐する。そう考えればアンモ騎士がカトラスを持っていた理由にも何となく察せられると言うものだ。

「その場合、クエストを受けた奴が進めるべきだろ？」

NPCと話すにも若干ギャルゲーが混じっているのがシャンフロだ、赤の他人よりある程度の交流のある者がコンタクトした方が良さそうじゃないか。

EXシナリオの場合、俺は一参加者ではあるがスチューデに関して

はあくまでも「依頼を受けた二人にくっついて来た鳥頭」でしかない。

「ここは受注者として迷える子羊を導いてやれよ」

「めんどくさ……モルド」

「あはは、僕も同伴するからさ……」

さて、それはともかくとしてこれで封将は二体倒したが……特にフィールドに変化が起きたりはしない、と。
とはいえ四体倒して何かイベントが起きても困るから、六日目ギリギリで四体目を倒す予定だ。
それまでに見つかればいいんだが……一体どこで何をしているんだレイ氏。

◆

それは他愛もない姉妹喧嘩だった。

「ホウレンソウ」の欠如。
姉より先んじた妹。
横暴な姉特権の行使に対する抵抗。
恋路を邪魔する者は馬に蹴られ、馬がいないので妹がキレた。

「……玲！」

「私は、姉さんの付属部品でもなければリードで繋がった犬でもありません！」

それは他愛もない姉妹喧嘩だった。
だがそれは、ある場所においては……漆黒の狼の、致命的な破綻であった。

破綻する頂点（後書き）

まぁ要約しますと、二章でやったことと三章始めでヒロインちゃんがどこに行ったのかが姉にバレましたとさ。

そしてなんやかんやあってヒロインちゃんがキレましたとさ。

何とは言いませんが着信履歴１２４件と自宅凸されてます

サーモンヘッド・アドバイス

本来であればこのまま「藤壺」の攻略に行くつもりだったが、想定外のイベントフラグを回収した事で急遽予定変更して俺達は拠点としている空き家に……厳密には俺、アラバ、エムル、スチューデが詰め込まれた比較的大きめな家屋に来ていた。

「モルド……馬鹿……この、お馬鹿っ……！」

「だからごめんって！」

「うわーすげぇ、カイセンオーが三体もいるぞ。究極合体ウルティマカイセンオーとかにならないかな」

「カイセンオー？」

事の発端は足を踏み外したモルドが地面に滑落し、半魚人に捕捉された事だったのだが、悪い乱数を引いたのか半魚人が集まるわ集まるわ……俺がエムルを見つけた時に出来上がっていたモンスターパレードに匹敵する数の半魚人に、レアエネミー三体すらも引き連れた大軍団が完成していた。

「流石にこれを連れて拠点に帰りたくはないよなぁ……」

「ご、ごめんなさい……いてっ、いててっ」

「お馬鹿、お馬鹿」

そうだな、今から向かう場所は俺のリスポーン地点でもあるわけだし……適当な所で死んでおけばイケるか。

「よし、俺がちょっとあいつら遠くに捨ててくるわ」

「え？」

「離れた所で適当に死んで死に戻りするからさ、先に行っててくれ」

「成る程、分かった」

「いやほんと、お手数おかけします……」

「いいっていいって」

シチュエーションだけ見れば仲間を先に進めさせる為にただ一人残って足止めするキャラそのものだな。まぁ実際死に戻りする事を考えればまさしくその通りではあるが。

「武器消耗するのも面倒だし、素手喧嘩（ステゴロ）でいいよな？　オラッ徳用腐れつみれ共が、俺についてこい！！」

ルルイアス大マラソン大会だ、リードランナーは任せろ。

だが、いっそルルイアス外縁一周でもしてくれようかと企み始めた俺の目論見は、曲がり角からぬっと姿を現したそれによって完膚なきまでに破壊される事となる。

「お、お前は……っ！？」

その姿は、その顔は。

半ば確信めいた衝動が胸中に渦巻き、思わず武器を構えてこちらに気づいたそれとの距離を詰める。

前方のそれ、後方の大魚群、挟み撃ちに自らを置く愚行を犯してでも、俺は俺が離脱する事を許せない。

俺はこいつを倒さなければならない、たとえ如何なる犠牲を払ったとしても。

悪いなルスト&モルド、ちょっとそっちに行くのは遅れちまいそうだ……あ、今の言い方すごいそれっぽい！　いや、このセリフだとむしろフラグを折った時に言うやつになるのでは……まぁいいや

「うおおおお！」

男には避けられない戦いってのがあるんだよ！！

「……遅い」

「何かトラブルでもあったのかな……あっ、戻ってき……っ！！？」

腐れつみれにデンジャラス胴上げ（餌の取り合いで上に吹っ飛ばされる状態）されたせいで、死ぬのが遅れてしまった……大量の手に掴まれる感覚は中々に得難い体験ではあるが、二度はやりたくないな。

「一体どうし……うおお！？」

「サ、サンラクサン……」

おいおいアラバ剣を構えるな。エムルもステイだ、ステイ。
全く、人の顔を見てそんなリアクションをするなんて酷いんじゃないか？　まぁ分かっててやってるがさて第一声はなんて言ってやろうか？

「………」

リスポーンしたベッドからつくりと起き上がり、二本の足でしっかりと地面を踏みしめ立ち上がる。
それに反応するように周囲の面々が一歩後ずさる。それを確認した俺は大きく息を吸い込み……あっ、生臭い。

「私は大トロの妖精です」

「ばっふぉ！！」

「んくふっ」

俺はそう、鮭(シャケ)の頭でそう言い放った。

～混乱が収まるまでしばらくお待ちください～

「シャケじゃん……サーモンじゃん……マグロ関係ない……んふっ、んふふふふ……っ」

「ルスト、モルドが壊れたぞ」

「モルドは笑いの沸点が低いから、多分思い出し笑いで三日は笑ってると思う」

笑いの沸点低すぎだろ、ヘリウムかよ……まぁその原因は俺なんだけど、さ。

「何、それ？」

「これ？　「リッチマン・キング・サーモンの頭面(かしらめん)」っていうアイテム。アイテム判定だけど装備もできるっていう……まぁ、ネタ装備だよね」

「効果は？」

「生臭い」

「っ……！　っ……！」

べしんべしんと床を叩いて痙攣しだしたモルドはこの際無視で、俺は他のリアクションを確認する。

「ほうらエムル、頭に乗せてやろう」

「い、嫌ですわ！　生臭そうだし背ビレが刺さりそうですわ！　ていうか目が死んでてめちゃくちゃ怖いんですわ！！」

「ちゃんと視覚が機能してるあたり謎原理だよね」

このシャケ頭の中で光はどんな運動をしているんだ、いやまぁゲームだからそこらへんはスルーした方がいいんだろうけど。あと生臭い。

「俺はてっきり奴らに成り果ててしまったのかと……時々それらしい動きをする事もあったからな」

「失礼な、ちょっと関節駆動範囲ギリギリまで腕を曲げるだけだろ」

生物的な本能があるから流石に度を超えた自傷行為には抵抗があるが、ちょっとヤバい方向まで腕を曲げる程度ならバトルスタイルに組み込める。なかなか便利なんだなこれが。

「スチューデ（クソガキ）は？」

「まだアレは見せてない、戻ってきたらやろうかと」

ありがたい話だ、つまりまだベッドの下にいるってことか。へー……ほー……ふーん……ふひひ。

「ゔぁぁぁぉぉぉぇぇぇぁぁぁぁあああ！！」

「ぎゃぁぁぁあああああああああ！！？！？」

「お前を死の世界まで引き摺り込んでやるよぉおぉおぉおぉお！！」

「いやぁぁぁぁ！！　やだぁぁぁぁぁ！！ひぃぃぃぃぃぃぃぃいいいいい！！」

数々のゾンビゲーを踏破した事で得たノウハウと、とあるゲームにおいて「死鋼の魔術師」と呼ばれた重低音の合わせ技による宴会芸「ゾンビパニックの終盤あたりに出てくる凶暴なモンスターのモノマネ」だ。

悲鳴を上げながらベッドを覗き込む鮭に狂乱状態に陥るスチューデ。その場から一刻も早く逃げ出さんと身体は暴れ回り、頭を強打しだ結果パタリと力が抜けて動かなくなった。

「やっべ……いやいや、ポリゴン爆散してないから死んでない死んでない……」

「心に致命傷入ってるですわ！」

大丈夫、人間割と精神的にタフな生き物だから。不幸が連鎖でもしなけりゃ大体立ち直れる……

・父親は半魚人に攫われ行方不明、多分死んでる
・自身の軽率な行動で怪物の巣窟へ迷い込む

・覗き込む鮭頭、お前も海鮮親子丼にしてやろうか

「ふぅー…………トリプルコンボ決まってんなこれ」

「ご臨終、か……」

いや待てルスト、死んでない死んでない。まだスチューデは頑張れる、そうだろう？　な？

ＴＰＯ的にフレンドリーファイアされても文句は言えないぞ、という有難い金言を頂いたので仕方なく元の鳥頭へと装備を戻す。腐れつみれ共の敵対判定消せたりとかそういう隠し効果ないかな、と試したけど普通にワッショイされて死んだから、ネタ以上の意味はないことも分かっているしな。

とはいえ地味に鮭頭の方が防御力高いんだよなぁ……なんと鳥面の二十倍だぞ二十倍。ティッシュペーパー二十枚でドラゴンブレスが防げるかと言われたならば、そういう問題ではないと笑ってやろう。

「モルド、いい加減正気に戻って」

「だ、大丈夫……ふふっ」

「思ったよりゲラなんだな……」

目が覚めた時に目の前に鮭がいるのもハシビロコウがいるのも大差

なく怖いだろ、という理由で俺は部屋の隅に隔離されている。
悲しいのでエムルを乗せた頭をメトロノームのように左右にカクカク動かしていると、ルストとモルドがスチューデを起こして例のブツを見せる。

「起きて……起きろクソガキ」

「う、うーん……重低音の魚が……」

「…………」

「ふぎゅっ！？」

正中線に沿って顔面チョップしやがりましたよあいつ。
とはいえそれが気付けになったのか、スチューデは目を覚ました。

「う、ううん……ここは……」

「寝ぼけたこと言ってないで、これを見て」

「……？　ただのカトラスじゃん……って、これ！！」

やっぱりイベントフラグだったか。目を見開き、唇を戦慄かせながらスチューデは食い入るようにカトラスを、厳密にはカトラスの柄に刻まれた赤い鯨のエンブレムを見つめる。

「こ、これっ、これっ！　ど、どこで！！」

「うるさい」

塩対応を通り越してタバスコ対応くらい行ってないかアレ、父親の手がかり自分から提示しておいてうるさいって。

「これはこの場所の……うーん、すごく強いモンスターが持っていたんだ」

「じゃ、じゃあ……パパは……」

「またグチグチと……」

アレだな、さてはこいつらロールプレイ下手くそだな？
いや分かる、分かるよ？　「こいつはなんでこうウジウジしてるんだ」って気持ちになるのはわかる。俺だって面倒なペナルティやゲームオーバーがなかったら、フェアカスを装備無し状態でゴブリンの巣に蹴り込むくらいはしただろうからな。

ロールプレイってのには向き不向きがある、世の中には自然体でそれっぽい事を言えちゃう人種もいるが大抵の場合はＮＰＣが必要とする言葉を言うキャラを演じなきゃならない。

この場において俺達は俯瞰的にストーリーを見るプレイヤーであると同時に、ストーリーの一人物でもあるんだ。だからこういう時は発破をかけてやるんだよ。

「仕方ない、俺に任せろ」

イベントがどういうふうに進むのかは分からない、だが少なくともここでカトラスを抱いてめそめそ泣くことが正しいイベントの進み方とは思えない。

「少年、お前はそれでいいのか？」

「え？」

外道鉛筆仕込みの人心（NPC）掌握術、とくとご覧あれ。

サーモンヘッド・アドバイス（後書き）

鮭頭「お前を地獄の底に引き摺り込んでやる（重低音）」
鳥頭「もっと熱くなれよ！」

これが同一人物でしかも主人公とかいう小説があるんですって、世の中怖いですね

ＮＰＣのＡＩはシャンフロ以前のものであっても結構な発展を遂げている。流石に天気の話から昨日食べた夕飯の話に繋げて「そういえば今から倒すモンスターなんだっけ？」という質問に一切のＡＩらしさを出す事なく完璧に答えられるシャンフロ程の精度はない。だがそれでも特定の単語や相手の言葉からおおよその意味を理解し、ＮＰＣが反応を返すくらいならば普通にやってのける。それすらできないゲームもあるにはあるが今はいい。

「お前、この剣をアンモ騎士……いや、モンスターが持っていた意味が分かっているのか？」

「え……？」

そして技術が進み、ＡＩが優れた知能を獲得する程にイキイキしだす奴がいる。
ＡＩが優れているからこそ、そして所詮はＡＩだからこそいくらでも丸め込めると、かつてとあるゲームで王や王女を合意の上で罠のパーツ扱いにした奴がいる。

「分かってるのか、と聞いているんだ」

「わ、分かってるよ……分かってるよ！　パパはここで死んだって事だろ！！」

ＮＰＣとは人ならざる人、複雑怪奇な人間性を削って単純な「属性(性格)」だけを残した存在。台本に書かれた情報以上の情報を持たない、持

てない存在。
悪役はどこまで行っても悪役であるし、序盤で死ぬおじさんがどんな人生を送ってきたかなんてマクガフィンにすらならない。
奴曰く、ＮＰＣとは「単純な作りの鍵穴」である。然るべきツールを使えば鍵を開けることは容易く、キャラクターとしての要素が定められたＮＰＣの掌握にはそのツールの選択こそが肝要である、と。

「駄目だな、お前は何も分かっちゃいない」

「え……？　な、何がだよ！」

「いいか小便漏らし」

「漏らしてない！」

ゲーム的表現に守られてるだけでそれが無かったら絶対漏らしてるだろ、正直になれ。
まぁいい、対象は「怯え心が折れたガキ」。達成条件は「奮い立たせること」。そのために必要な要素（ツール）は……「偉大な父」と「残された部下」だ。

「いいか、このルルイアスには大量の腐れつみれ以外に四体の怪物がいる。この剣を持っていたのはその一体であり、そしてそいつらは基本的に都市の四隅にある塔の中から出てこない」

「だ、だからなんなんだよう……？」

奴は、ペンシルゴンはこういう時「嘘」を使う。厳密には嘘も使うと言うべきだが、俺が使うのは「考察」だ。

あいつの場合、嘘に嘘を重ねて最終的にオセロで一列ひっくり返すみたいに全部本当のことにしてしまうのが恐ろしい。あんなの真似できるか。

「お前の親父さんはな、戦って死んだんだ。それも自分から挑みに行ってな」

「……っ！」

「それがどう言う意味かくらい分かるだろ？　それを踏まえて聞くが、お前はこんなところで何をしているんだ？」

いいぞいいぞ、いい感じにロールプレイが出来ている。こちとらNPC相手におべっか使うのは慣れてんだよ、おそらくユニークモンスターであろうヴァッシュにすら成功した説得術、クソガキ一匹に防げるかな……？

「お前の父親は戦った、まぁあそこで死んだ辺りそこまで強くはなかったんだろうな……ああ睨むな睨むな、話はまだ続くんだ」

起きた結果を鞭にして叩きまくり、そこに至るまでの過程を飴にして餌付けする。死人に口なし、カトラスも死に様も遠慮なく使わせてもらうぜ。

「自分の実力ってのはなんだかんだ自分が一番よく分かってるもんだ、お前の親父さんもきっと分かってたんだろうさ。だがそれでも彼はアンモ騎士に挑んだ、それが何故か……分かるだろう？」

「それ、は……」

「お前だよ、いやお前だけじゃない。こんな海の底じゃない、フィフティシアの薄暗くも愛おしい破落戸通りにいる部下の為に彼はカトラスを握ったんだ。人はそれを「覚悟」と読んで尊ぶんだ」

「覚悟……」

「奇しくもお前は親父さんと同じ轍を踏んじまった、だが子は親を超えるもんだ。お前がすべきことはなんだ？　ベッドの下で震えていることか？　違うだろう、覚悟を決めて前に進むことだ」

「前に、進む……」

「暗闇を歩くのは怖いか？　なら奇遇だな、俺達は暗闇に松明ぶっ刺して後に続く奴等のために前へ進むのが仕事の「開拓者」サマだ。水先案内人なら請け負ってやるさ、なぁ？」

全身全霊の空気読めオーラに指向性を持たせてルストとモルドへと念を飛ばす。どうやらそれは伝わったようで、若干アドリブに難があるものの二人は俺の言葉に追随する。

「そ、そうだよ！　ここにいる僕ら以外にも頼れる仲間はいるからね！」

「……どちらにせよ、ここから出るためには戦わなければならない。ガキ一人増えた程度、どうってことない」

「ガキって、言うなよ……」

湿気りマッチ野郎め、まーだ火がつかないか？　いや、これ以上なく正解に近いロールプレイはした、あとは時間が解決してくれる。

「このクソッタレな都市の大家に殴り込みをかけるのは二日後だ、まぁその時までに自分なりの覚悟ってのを見つけておけよ」

そう言い放ち、俺はエムルを頭に乗せたまま家屋から退出した……屋根に空いた穴をよじ登って。

絶妙に最後しまらねーな！！

「……で、今からどうするの？」

「当初の予定通り封将攻略を進めていきたいところだけど、流石に他のプレイヤーをハブるのもなぁ……」

ボスドロップとかもあるし、そこら辺の兼ね合いは重要だ。とはいえ何もしない、っていうのもそれはそれで暇だし……

「あ、素材集めとかは？」

「そろそろドロップアイテムが1グロスくらい集まりそうだから……」

「1グロス？」

「1ダースが1ダースある状態」

「144個……インベントリにそんなに入らないんじゃ」

「そこはこう、色々とチョメチョメしたんだよ」

「チョメチョメ」

インベントリア万歳、強力な武器や防具よりもありがたいよコレ。その内修正入っても納得しちゃうくらいには便利すぎる。重量を考慮しなくても良い無制限インベントリ、という時点でぶっ壊れなのにエスケープ手段としても有用、なにせ必要最低限のＭＰさえ確保できれば回数制限すらないと来たもんだ。

「あ、そうだ。ルスト、あそこなんてどう？」

「あそこ……あぁ、確かに一度は寄っておきたかった」

視線と気配で続きを促す。何やら面白そうな情報を持っていそうじゃないか。

「これはまた、なんというか……シンプルに凄いな」

「絵に描いたような、って感じだよね」

ルルイアス外縁、町外れの恐らくは元々砂浜であったのだろう場所に大量に存在する船の残骸。
以前ルストとモルドがエリア調査した際は途中で半魚人に襲われたために放置したというそれ……なんというか頭の悪い感じに積み上げられた金銀財宝宝箱の山、実に趣味の悪いキンキラキンな光が二人に案内された俺を出迎えた。

「これ一個でも結構なお金になりそう」

「どうせなら回収できるだけしようと思って」

「いいのか？　俺までご相伴に預かっちゃって」

「まぁ、インベントリ的に僕らも全部持てるわけじゃないしね」

まぁ確かに普通のプレイヤーならそうだろうけどさ……その点俺にはインベントリアがある。
誰が集めたのか座礁したガレオン船の一室に積み上げられたそれは全部換金すれば小規模な城くらいなら建ててしまえそうなマネーパワーを発揮しそうだ。
流石に全部持ってくのはアレだよなぁ……いやしかしだからといってお残しするのもアイテムに失礼というもの、ううむ……あ、そうだ。

「そういえば聞き忘れてたんだった、二人って今フリーなんだよな？」

「フリー？」

「クラン無所属だよな？」

「そうだね」
そうさな、諸々の話は打ち上げの時に外道共に言ってある。あの時のことを思い出すと連鎖的に封じ込めていた記憶が溢れてきそうになるので蓋をして……うっ、ビールジョッキでレモンスカッシュ一気飲み……根菜カーニバル…………ええい心を強く持て。
「いやさ、ロボの件もあるしうちのクランに所属しないか、って話をだな」
「……ノルマ的なものは、ノーサンキュー」
「あーそういうのウチは無いから、基本的に同じ所属ってだけで拠点すらねーし」
クターニッドに繋がるユニークの提供分は恩を返さないといけないし、同じクランであった方がそこら辺が好都合だ。
「前にも説明したけど俺たち「旅狼（ヴォルフガング）」は現メンバー三人でロボを共同所有してるんだ、聞いた話だとそれをクラン所有にできるらしいからさ」
「……つまりそのヴぉるふなんとかに入れば」
ここで最後の一押しだ、この場に四体の戦術機獣を呼び出す！
「こいつらを扱う事も難しい事では」
バキバキグシャベキズドォーン！！

「……」

「……」

「……」

うん、考えてもみればそりゃあこんな腐った上にカビてそうな船の中で人間サイズよりデカい機械出したらそりゃ床をぶち抜いて落ちるか。

「しまったぁーー！？」

「ロ、ロボが……！」

「こんな音立てたら半魚人が来ちゃうよ！？」

「ていうか近づいてくる音がするですわぁーっ！！」

「ええいロボは後で回収する！　財宝根こそぎ頂いていってやらぁ！！」

他者への遠慮？　うるせー！　そういうのは自分が最低限の余裕を持てたらの話なんだよ！！

金だ金！　手持ちの武器を修理強化するにも金がかかるんだよ！！

特に兎月と煌蠍の籠手の修理費がな……。

「こんばんは！　皆さんいらっしゃったんですね！　……って、随分と疲れてるみたいだけど、どうしたんですか！？」

「ちょっと、ルルイアス大マラソン大会をね……」

「長距離走はあまり得意ではないですけど２５００くらいなら私イケますよ！」

「サンラク馬鹿、お馬鹿」

いやぁ面目無い……あ、そうだ。

「秋津茜、今クランとか入ってたりする？　そうじゃないならウチのクランとか興味ない？」

「わぁ、クランに誘われたの初めてです！　是非！！」

即決かよ。

湿気たマッチに火を、そして狼は群れを増す（後書き）

朱雀「どうも朱雀です、飛行能力とヒートソードによる奇襲攻撃を得意としてぐわぁぁぁ！？」
青龍「どうも青龍です、起動自体は一番最初でぐわぁぁぁ！？」
玄武「元から最重量級だからぐわぁぁぁ！？」
白虎「今の今まで一度も触れられてきませんでしぐわぁぁぁ！？」

焦燥よりの解放、いざ焦燥を抱え走れ

俺、ルスト、モルド、秋津茜、エムル、シークルゥ、アラバ、ネレイス。未だ行方知れずのレイ氏と戦力外のスチューデを除けば中々にいい感じの大規模パーティだ。

前衛三人に後衛二人、遊撃二人の七人構成で内純魔法職は二人、例外としてネレイスも一応魔法職らしいが武器なので除外。
物理特化の前衛は俺とアラバ、シークルゥは何故か魔法で竹を生やすことができる……竹？　いや、まぁ攻撃手段が何であれ魔法攻撃持ちって事に変わりはない。
遊撃の二人は魔法と物理の両方を扱うことができる、とはいえその両立には結構な偏りがある。ルストは物理と魔法を使い分けるがその両方が遠距離攻撃であり、秋津茜はどちらかといえば魔法職寄りで物理はおまけ程度のものだ。

「というわけでルストとモルドが六日目朝まで（厳密にはネフホロにログインするまで）粘れる、との事なので今からボスを倒しに行きます。標的は……「藤壺」だ」

近距離無効化の封将、この時点で前衛三人はほぼゴミと化す。だが来たる最終日に備えてなるべく簡単な方の封将を後に回しておきたい、であればシークルゥがゴミにならない「夫婦」を後に回しておくのだ。
俺とアラバはどちらにせよゴミなので大差はないがね。ほら、俺はエムルを乗せて移動砲台になれるしアラバはなんか色々やればネレイスを実体化させられるらしいから……

「サイガー０さんは？」

「強く生きてもらおう」

どれだけレベルを上げて強大な力を手に入れても、どうにもならないことはある。来ないのならばいない前提で動くしかなかろう。しかし本当に影も形も見かけないとは、やはり一度もログインしていないのだろうか。夏休みシーズンとはいえ既に八月末、なんらかの予定が入っていてもそうおかしい事ではないし、そもそも突然の招待だったからな。

「この手の「自分の都合以外で時間が進む」ゲームじゃままある事だし、悲しいけどログインしない方が悪いから……」

まぁそれをそもそも言うなら突発的にＥＸシナリオに叩き込むこのゲームの方にも非があるとは思うが……昨今は多少の利便性を削ってでも世界観に忠実なゲームがウケるのかねぇ。お兄さんクソゲーばっかやってるからちょっとそこらへん分かんないや。少なくとも世界観を過剰再現してクソゲーの烙印を押されたゲームなら三つ四つは挙げられるが。

あーでもその点ソシャゲ畑から来たゲーマーとかはスケジュール管理がマメな奴が多い気がするな。ＶＲがゲームにおける主流となった今じゃ全盛期程の勢いは保てなくなったが、今でも続いてるものもある。

その中でも他のゲームに目がいかないほど重度のプレイヤーではないが、ゲームに縛られているほどでもないので他ゲーもやるタイプのプレイヤーは曜日ダンジョンとかそういうのに対して妙に几帳面な人が多い。

大抵「あ、ごめんログボ貰って来なきゃ」とログアウトするまでが

一連のお約束だ。ソシャゲ畑はアラートみたいなもんだからな……大体早朝五時、六時あたりに一旦消えるよね彼ら。

「おっと、もう着いたのか」

「サンラクサンずっと考え事してたですわ？」

「んー？　生物的な体内時計を意図的にセットすることは可能なのかを考察してただけだぞー」

うへー、と頭の上で呻くエムルを他所に、俺たちは遂に「藤壺」のいる塔へと辿り着いていた。道中サメとカエルを足して全身に産毛を生やしたような奇怪生物の襲撃こそあったが最早俺にとっては思考の邪魔としてすら認識されない作業でしかなく、色とりどりな性能をしたプレイヤー、ＮＰＣが揃ったこのパーティの敵ではない。

「あれが……なんつーか、苦手な人はとことん苦手そうなデザインしてるな」

人型……ではある、かろうじて人型だ。首の位置が若干左肩に寄り過ぎだったり右腕が異常に肥大化していたりしているがまぁセーフだ。

だが特筆すべきは形状ではなくその表面だ。藤壺（フジツボ）と言えば岩や防波堤なんかにビッシリと生えるものであるが、やはりというかお約束というかそのモンスターの表面にはビッシリとフジツボが生えている。

「うへぇ……」

「あれでどうやって近距離技を無効化するんだ……？　シールドを張るとか？」

「違いますよう、刃が当たる瞬間にブワーッ！　って増えるんです……！」

「それはまた……」

中々にショッキングな光景になりそうだ、とはいえ海産物にありがちなグロさには割と耐性がある。
ウチの父とか「フジツボは黒鯛が食いつくから現地調達だぞー」とか言いながら海に落ちるからな。フジツボイコール「釣り餌」というイメージしかない。

「…………そう言えばフジツボって食えるんだっけ？」

いや、それはちゃんと食用の種がいるんだっけか……ん？
ふと周囲を見ると、パーティメンバーの面々が信じられないものを見るかのように俺を凝視している。心なしかこれから戦う「藤壺」すらも俺を凝視している気すらしてきた。

「……サンラクサン、いくらなんでもアレを食べるのはどうかと思うですわ」

「もしかしてサンラクさん、悪食なタイプですか！？」

「いやアレじゃねーよリアルの方のフジツボの話な」

でも食用アイテムとか落ちたらちょっと挑戦してみたいなぁ、とは

思ったり。

「さて、行動開始だ。とりあえずアラバ！」

「おう！」

「効果は度外視だ、一発ぶん殴ってこい」

「おう！？」

無茶振りってわけじゃない、近距離無効化の制限はヘイトを稼ぐ事すら出来ないのかを試すためだ。

「ほら行った行った！　骨なら拾ってやる」

「ええい強引な奴め……！」

「アラバがフりマワされてるの、ハジめてミたかも」

「全くだ！　ネレイス、頼む！」

「イいよ……【深圧(シンアツ)の亀裂(キレツ)】」

肉厚な刀身に深い青の輝きが宿る。そして藤壺が対応するよりも早くその身体に刀身が叩きつけられた瞬間、あまり聞きなれない轟音が響く。

それは金属同士が叩きつけられる音でもなく、刃が肉を裂く音でもなく、そう例えるなら巨大な石が割れるような音。

明らかに単なる斬撃だけではない大ダメージが放たれた音、だがそ

の攻撃は藤壺の肉体を割断することはなかった。

「これが近接を封じる仕掛けとやらか……！」

「うぇぇえ、ばきばきぐちゃぐちゃしてるぅ……」

顔の正中線に叩き込まれた刃に沿うように藤壺の肉体が爆ぜた。いや爆ぜたんじゃない、爆ぜるようにフジツボが大量増殖したんだ。なんつー力技、言うなれば攻撃側の運動エネルギーが尽きるまで盾を生産し続けるようなものだ。

とはいえアラバの大技も無駄ではないようだ。煩わしげにアラバを肥大化した右腕で叩き潰さんと動いたことから、少なくとも注意(ヘイト)自体は引きつけることはできる。

「あれを突破するのは無理だな、プランB(ゴリ押し)は破棄の方向で。アラバーっ！　戻ってこーい！！」

当初の作戦プランAだ、藤壺と対の関係であろうアンモ騎士が無効化する遠距離攻撃の距離は、ルスト曰く推定五〜八メートル。であればその性質だけを逆転して奴は最大でも八メートル圏内から放たれた攻撃を無効化してくる可能性が高い。

「よし、秋津茜エムルを頼んだぞ」

「お任せくださいっ！　粉骨砕身守護(まも)ります！」

「粉骨砕身するような状況にはならないで欲しいですわ！？」

安心しろエムル、秋津茜も俺やシルヴィア・ゴールドバーグと同じ

手合いだから粉骨して砕身するようなタンク的な役割はしない。まぁあの腕の攻撃を一発でも食らったら骨ごと粉砕されそうだが。

「よーしアラバ、シークルゥ！　これより俺達は全力で奴を茶化すぞ！」

「おう！」

「こう、もうちょっと言い方ないで御座るか？」

「鬱陶しい小蝿のように奴に集るぞ」

「言い方悪化してるで御座る！」

それはルルイアスにある幾多もの家屋のうちの一つ、他と比べても少々貧相な街外れの小さな一軒家。その扉を壊さぬよう、丁寧にゆっくりと開いてそれは現れた。

「………」

実際に大きい、というわけではない。確かに長身ではあるがそれは人間の範疇であり、確かに着込まれた鬼武者の鎧によって生身の状態よりも輪郭が肥大化しているとはいえ、所詮は人間大であるはずだった。

だが、大きい。ただでさえ他と比べてこじんまりとした家屋が犬小屋にすら見えてしまうかのようなそれは、果たして何に起因するものであろうか。

その身に秘められた力がその姿を大きく見せているのか、違う。それはもっと根源的な、鎧に身を包んだ者の圧がその身を実際の大きさ以上に巨大なものへと見せていた。

「何処……何処なの……？」

実に五日もの間ログインしていなかった、できなかったという事実。残り二日もないという焦り、未だにこの場所に来てからただひとりぼっちのままであるという孤独。焦燥の鎖に繋がれていた騎士は今解き放たれた。

「ゲルルルロロロロロッ！！！」

サメの身体にカエルの手足、全身から生えた針金のような硬毛によって魚を引っ掛ける特性を持つ、その名を「引っ掛き（ディープフック）」と言う。種としての分岐によって分かたれた同族が地上にも存在するそのモンスターは、この奇妙な狩場の中で見つけた人間を餌と見做して襲いかかる。

「………黙っていて！！」

極めて短時間ながら自身のＳＴＲを極めて大幅に上昇させるスキル「ハイエスト・ストレングス」、自身へと向けられたヘイトが大きいほどカウンターの威力が上昇するスキル「業魔の抱擁」、武器に対して上位属性とも異なる特殊な属性効果を付与する魔法【エンチャント：ヴァー・ミリオン】。

さらに「致命（ヴォーパル）」シリーズにその名を連ねるスレッジハンマー「致命（ヴォーパル）の大鎚（パルスレッジ）改十四」、近接武器による攻撃に大幅な補正をかける「鬼叫甲冑一式」。

加えてまっすぐに突っ込んできた「引っ掛き」の鼻っ面に対してフルスイングがクリティカルで命中したことによるダメージ計算。前衛、それもタンクとしての役割を果たすこともできる「最大火力」の膂力と、焦りと、怒りの込められた渾身の一撃は「引っ掛き」の顔面を粉砕し、その衝撃で頚椎を、背骨を、大腿骨を肉ごと粉砕していく。

まさに粉骨砕身、骨は粉と散りその身は爆ぜるかのような一撃によって「引っ掛き」はたったの一撃でその体力を全損させた。

「探さ、ないと……そして、謝らなくちゃ………」

今宵のルルイアスにおける「個」の危険度が今、更新される。

焦燥よりの解放、いざ焦燥を抱え走れ（後書き）

ヒロインちゃん「今、私は冷静さを欠こうとしています」
引っ掛き「あべし！」
泥掘り「お兄ちゃーん！！」

・武器強化について
シャンフロにおける武器補強（武器名の後に改◯◯とつくアレ）は最大十五段階まで強化できます。メリットとしては強化に必要な「素材」が武器を進化させるよりもお安くなっている点であり、デメリットとしては改十以降から「費用」が跳ね上がるという点。改十から改十一に強化する費用だけで傑剣（デュクスラム）への憧刃が三本くらい作れる。
ちなみにヒロインちゃんはフィフティシアで一旦別れてから樽デリバリーに拉致られるまでの間に初期状態の「致命の大鎚」を改十四まで上げてます。いわゆる廃人にのみ許された思考停止ボタン連打
……！

極点の意味（前書き）

決して貝類を抱えてタッチダウンすることに熱中していたわけではありません（すっとぼけ）

それもありますが、ようやくデカい壁となって立ちふさがっていた私事が片付きました……あとはゲームの誘惑に負けないよう文章を書くだけですね！

避けタンクとは、所謂タンク職の中でも相手の攻撃を防御ではなく回避で対処するタンク職を指す。
メリットとしては回避する為の脚さえあればいいのである程度攻撃にも回れるという事、デメリットとしては一撃食らったらそれが致命傷になりかねない事。

「ヘイヘイイヘイヘーイ！」

職業からして避けタンク適性が高そうな「忍者」はシャンフロ開始時点で知っていれば挑戦していたかもしれないが、今の俺は避けタンク適性の高いスキルを各種揃えているので「忍者」というジョブにはそこまで魅力は感じていない。

「どうしたどうした！　鮮度が足りてないぞヘイヘイヘーイ！」

話は変わるがこのゲームには「釣り」が存在するわけだが、これがまた結構手が込んでいるもので……いや、むしろやはり手が込んでいると言うべきか。
驚くべきことに職業「釣り師」が存在するらしく、別に職業ごと釣り特化にせずとも使用できる釣竿だがこれまた結構本格的だ。
初期状態でも鮭やら海蛇、クソ強ロブスターやらを釣り上げるポテンシャルを秘めているが、針や釣り餌を変える事で釣れる魚やモンスターにも違いが出るようだ。

そしてフジツボは釣り餌として使うことが出来る……なぁ「藤壺」、お前もしかして釣り餌として使えたりしないか？

「うわすげぇ背中のフジツボからジェットみたいに水が！」

「びゃあああこっち来るなですわぁ！！？」

「はい足元注意ーっ！！」

フジツボを大量増殖させる事で攻撃に使われる運動エネルギーを吸収しきる、成る程強烈な能力だがその能力にはただ一つ明確な弱点が存在する。

運動エネルギーを０にしたとしてもオブジェクトそのものが消滅したわけじゃない、車に激突されたエネルギーを無しにしても目の前に車がある事実に変わりがないように、単純な足払いを無効化する事は出来ない。

俺、アラバ、シークルゥの妨害により派手にすっ転んだ「藤壺」にありったけの遠距離攻撃が叩き込まれる。

なんでもＭＰ回復効果のある魚が捕獲できるらしく、ＭＰ問題を解決したらしい秋津茜が口からビームを出す姿はいつ見てもシュールというか……本当に同じゲームをしているのだろうか？

あ、シークルゥに掠った。

「ほぁぁぁぁあああ！？！」

「お、おにーちゃーん！！」

「ごめんなさぁぁーい！！」

名付けて……謝罪砲、もしくは詫びブレスかな？

「何だかんだ大規模パーティだとそう大して苦戦しなかったね」

「そりゃ怯み耐性絶無レベルの転びっぷりだったからな……」

「あはは……後半面白いくらい転び続けてたからね……」

やはりアンモ騎士（ナイト）がカトラスを落としたのはイベントフラグだったようで、藤壷が落としたのは素材アイテムだけであった。
まぁ大規模パーティだったので一人が獲得する素材の量はあまり多いとは言えなかったが……いやまさか、しかし、うーん。

「どうしたの？」

「いや、ちょっとね」

まぁこれに関しては今できる事はないし、後回しでいいか。エムル頭を叩くな。
これで封将は三体撃破、あと一体で全ての封将を撃破することにな

る。果たして奴らは何を封じているのか、それらを倒した事で何が起きるのか……正直今すぐにでも四体目を討伐して何が起こるか確かめたい衝動に駆られるが我慢我慢。エムル頭を叩くな。それでクターニッド戦に強制移行したら笑うに笑えない。エムル頭を……

「なんだよエムル」

「上ーーーっ！」

上？　あいも変わらず逆転した天地による海底の空にマリンスノー、そして顔面がボッコボコになったアルクトゥス・レガレクスの巨体が重力運動に従い落下してあれこれ影の位置的に丁度俺とエムルだけ潰れる位置では

「回避ーーーっ！！」

「ぴぃぃぃいいい！？」

ハリウッドジャンプ、ハリウッドジャンプだ。見てるか世界、第三者視点から見ればアカデミー賞すら狙える理想的なハリウッドジャンプだったぞ。
響く轟音、受け身を取るとエムルが潰れるので仕方なく地面へとダイブして土ペロの屈辱を受け入れる。これは名誉の土ペロだ……っ！　というかなんだなんだ、また食物連鎖の現場に立ち会ったのか？　いやそれにしてはなんで顔面が重点的に打撃されてるんだあいつ。

とはいえ奴が友好的でない事は分かっている、急ぎ武器を構えて振り返らんと……

ゴッッッ！！

「ひぇっ」

このゲームではゴア表現に規制が入っている、であるのでどれだけ人間を切り刻んだところで血は出ないし断面もエフェクトによってそれとなく隠されているので骨や肉が見える事はない。
だが俺の目は確かに、真上からの特大衝撃によってひしゃげ潰れたアルクトゥス・レガレクスの頭部を目撃したし、スレッジハンマーを携え口から蒸気でも吐き出しそうな鬼神が如き形相の人型殲滅兵器（サイガー0）を直視してしまったわけで……

「見つけた……！！」

「きゅう……」

なんやかんやウェザエモンやリュカオーン相手でもリアクション芸人してたエムルが卒倒するとか第一級危険警報では？
いや正直下手なホラーゲーより驚かされてるんだが、今日やる事ないのでレイ氏創作でもするか！　と提案する直前だったためかビビるよりも「あ、いた」という感情が優先されたのだ。

「ど、どうもレイ氏……」

「…………」

何故無言なのですかレイ氏、背後で爆ぜたアルクトゥス・レガレクスのエフェクトも相まって完全にボスキャラの登場ムービーにしか見えないですレイ氏。

あまりにも衝撃的な、圧倒的なパワーの視覚情報にこの場にいるほぼ全員が絶句する中、宙へと散って消えていくアルクトゥス・レガレクスのポリゴンを背に立つレイ氏は赤黒いハンマーをインベントリに格納すると一歩下がり、そして

「本っっっ当に………ごめんなさい！！」

深々と頭を下げた。

斯々然々。

「あー、やっぱりリアルの方がごたついてたか」

「本当に申し訳ないです……五日間も連絡出来ずに……」

やはりというか、レイ氏はあの後リアルの方が相当に忙しかったらしい。夜間にログインすらできないほどであったとは、その忙しさが他人である俺達にも伝わってくるようだ。

それに対して深く深く頭を下げるレイ氏に頭を上げさせ、俺達は改めてレイ氏が七日目に参加できるかを問う。

「はい、大丈夫です！　問題ないです！」

「そ、そうっすか」

「えぇ、はい。邪魔は全て…………片付（カタヅ）けましたから」

ひやり、と。若干低めの声が作られているとはいえ、穏やかな女性の声であるはずなのに何故か背筋に悪寒が走った。

「……サンラク、提案がある」

「ん？」

「今この場にプレイヤー全員が揃った」

「であればもう四体目に挑んでしまうのはどう」

「そうだな」

「……マジで？」

いや、だがそれもいいかもしれない。いくらクターニッドといえど流石に半日も時間を潰すような戦闘を強いてはこないだろう、流石にそんな長時間ログインしていてはシステム側からの強制ログアウトを食らいかねない。

だとすれば全員揃っている今この瞬間に四体目を倒してクターニッドまで行ってしまうのもアリといえばアリだ。

プレイヤー全員の顔を見つつ考え、便宜上まとめ役になりつつある俺は結論を下す。

「……ベストコンディションで行きたいのも事実だが、このまま行くのもアリと言えばアリだ。だからとりあえず四体目の封将を倒しにいく、それでクターニッド戦に直行なら戦うが、そうでないなら七日目に決戦は変えない……でどうだろうか？」

異議は出なかった。そして大規模パーティにレイ氏という最終兵器を加えた完成形パーティは四体目の封将……二体一組の半魚人「夫婦」のいる最後の塔へと向かう事にしたのだった。

廃人とはなんぞや。
廃人とは人が人として使うべき最低限の時間すらをもゲームに費やす者を指す言葉である。
廃人とはなんぞや。
廃人とはシステムに許された上限に至らんとする、または至った者を指す言葉である。
廃人とはなんぞや。
とりあえず初見ボスが解放されたら「あの人に任せておけば攻略情報出るでしょ」と攻略サイト待ち勢の期待を一身に背負う者を指す。
であれば廃人が持つものとはなんぞや。決まっている、力だ。

「物理攻撃は駄目……なんですよね」

シャンフロにおける魔法には三種類の発動方法が存在する。
一つは詠唱を経た発動、これはその魔法が持つ効果をプレイヤーの

ステータスが許す上限まで発揮して発動することができる。とはいえ長い呪文をそらで唱えられるプレイヤーなんてそう多くいるものではないのでモルドのように戦闘時に開く魔導本……という名のカンペを使うのが主流であるらしい。

次に詠唱を全カットした無詠唱による発動、おそらくこの方式が一番使われているだろう。圧倒的なスペルスピードだがその分効果や火力は減少してしまうため、魔法戦士などの詠唱よりも優先すべきものがある場合のプレイヤー、そもそも滑舌的な問題で詠唱自体が不得手なプレイヤーはこれを多用する。

そして最後にスクロールを用いた代理発動。無詠唱以下の減衰を食らうがＭＰさえあれば猿でも使えるお手軽さに、テレポートなどの火力とか関係ない魔法であればアドバンテージのみが残る発動方法。

「焔よ猛れ、其は熱波で喉を震わす猛獣の咆哮。其は光輝にて暗闇を食い破る猛獣の牙。眼に映る敵へ猛れ、高らかなる獣叫(じゅうきょう)は敵を震わせ、轟々たる烈牙(れつが)は敵の喉を食い千切る。焔よ、獣となりて猛れ。【ビースト・ドゥームフレア】」

完全暗記、完全暗記である。何回「猛る」と「獣」という単語が出てきたか分からない長々とした呪文を一切噛む事なく、流暢な発音で詠唱しきった。それも夫婦半魚人の夫の方に襲われている最中に、である。

夫半魚人の顔面に翳した鬼武者の掌から、熱量が噴き出す。レイ氏の魔力を貪り顕現した炎の獣はレイ氏の魔力だけでは飽き足らず大気すらをも貪り咆哮を上げる。
咄嗟に手でガードせんとした夫半魚人の上半身に焔獣が食らいつく。ヌメヌメした粘液……物理攻撃の一切がどういう原理か滑る厄介な

粘液が一秒も保たずに蒸発し、夫半魚人の絶叫が塔の内部に響き渡る。

「おしどり夫婦なのはいい事だ……エムル、喉を狙え」

「【マジックエッジ】！！」

夫の絶叫に、俺という脚を得たエムルを叩き潰さんとしていた妻半魚人が動きを止める。その隙を見逃す事なく射線を通したエムルの攻撃が妻半魚人の喉を抉る。

すかさずルストの魔法弓から放たれた矢が妻半魚人に突き立てられ、見れば夫半魚人の方にも再現された黄金の龍王(ユニークモンスター)のブレスが叩き込まれている。

「廃人恐るべし」

不特定多数が我こそは主役であるとひしめき合うＭＭＯの世界において、「最大火力」の名を我が物とするプレイヤーの実力は本物であった。

それをまざまざと見せつけられてはこちらも奮起するというもの。

ただ一人追加されただけだというのに、最後の封将が倒れたのは他の封将と比べても最も速かった。

そして、四体の封将が斃れ…………

極点の意味（後書き）

クリーオー・クティーラ「ユザパられたけどシルヴィアちゃんと一緒にプロローグを飾りました！」
アンモーン・オトゥーム「一応キーキャラクターのフラグアイテムを持っていました」
バーシュド＝メルナクル「転びすぎて膝が痛い」
スレイビール・ダーゴーン＆ハイドーラ「ローストされました」「捌かれました」
クターニッド「乙ｗｗｗｗ」

ちなみに顔面西瓜割りされたギガリュウグウノツカイくんですが、何が起きたかというと
・突進攻撃をハンマーで迎撃される、位置関係上徹底的に顔を殴られる
・上空に逃亡しようとしたところをしがみ付かれデンジャラス日本昔話をする羽目に、坊や良い子だ永眠（ねんね）しな
・顔面に魔法を叩き込まれる
・怯んで墜落したところを上からスマッシュされる
大体こんな感じでボッコボコにされてました。

倶に天を戴いて　其の一（前書き）

正直これ結構アレな内容なのですがそういうものであると、単なる主人公強化イベントであると流していただけると幸いです

倶に天を戴いて　其の一

結論から言おう、特に何も起こらなかった。
どうやら自動的にボス戦に移行、とかは無かったらしい。というわけでルルイアス攻略班は一旦解散し、最終日……黒い蛸足にルルイアスへと引きずり込まれてから七日経過した朝に備えて各自自由行動となったのだった。
最終決戦の地は円形都市の中央に位置する青い城、警戒もあってかこれまで誰一人として足を踏み入れていない……テスターなどがいれば別だが恐らく一切のプレイヤーが足を踏み入れたことのない前人未到のエリア。七日目にはＮＰＣも含めた全員で城へとカチコミをかけ、巨大なタコ討伐に挑むのだ。

「っふぅー………「七日目にベストコンディションで挑みましょう」って言い出しっぺの俺がゲームしてちゃ世話ないな全く」

未成年なので当然リアルで喫煙すればお縄案件だ。だがここは仮想(VR)現実(ゲーム)、ここでどれだけ酒を胃に流しこもうが煙を肺に流しこもうが、リアルの肉体にアルコールやニコチンが蓄積することはない。そもそもこのタバコ、このゲームにおけるいわゆる回復アイテムなのだ、このゲームをプレイしている限り皆喫煙者よ。
まぁ、一つ問題があるとすれば飲酒喫煙が回復手段であるのにキャラメイクは老人から児童まで無駄に幅広い、という点だな。

「見た目の犯罪臭が半端ないよなぁこれ……」

口から煙を吐き出す俺の視点はいつも以上に低く、よれた煙草をつまむ指はいつも以上に細く華奢だ。一般的にこの姿の人間を人は「

幼女」と呼ぶ。

ある意味ではフェアクソ以上に悪名を轟かすクソゲー。無人島で頼れるものは己と手に持ったピストルのみ、オンライン環境では全プレイヤーが敵同士というサバイバルガンシューティングゲーム、その名を「サバイバル・ガンマン」と言う。
ある理由からオンライン環境が閉鎖されたこのゲームは、オフラインでなら起動することが可能だ。ある理由からクソゲーでありながら非常に高価な値段で取引されるこのゲーム……俺は中学二年生の時にこのゲームを手に入れることに成功していた、というか発売初日組だ。

「なんつーか、久々にこの空気を吸ったなー」

少なくとも、俺の記憶に残るクソゲーは今やフェアクソことフェアリア・クロニクル・オンラインが不動の一位に君臨しているが、人生を変えたクソゲーはと問われれば迷うことなくこのゲームを挙げるだろう。
まぁそんなことはどうでもいいのだ、このゲームに来たのは対クターニッドを見越してのことだ。そう、かつてウェザエモン戦を想定して「便秘」のボスで練習をしたように。

このゲームの特徴は無人島でサバイバルをする軽装備とはいえ武装した人間が生態ピラミッドの最底辺である、という点だ。回復アイテムとして使用出来る虫ですら油断してると毒でやられる、もしくは群れで襲われて死ぬ。魚釣りで魚に逆に釣られる経験は中々出来ないだろうよ。
だが人間を食物連鎖の最底辺に叩き込んだ元凶はそれらではない。
おっと、回顧していたらどうやら来たようだ。

「んー、マトンか……割と強いけどまぁキツめのウォーミングアップとしては許容内か」

永久歯が二本以上生えたジンギスカン向けの羊ではない、背の高い木々を草むらのように掻き分けて現れたそいつは、ただの皮膚であるというのに下手なライフル弾すら通さない分厚い皮膚と、それに比例した巨大な体を持つ……豚だ。すなわち魔豚（マトン）である。
ちなみにこのゲームには魔法的なアレコレは存在しない、魔豚という名前も魔物じみた豚とかそういう感じの理由だ。
野生化した豚ってそれ猪じゃないのかと思うが、クソゲーでそんな事気にしてたらスタートボタンすら押せやしない。

「短い再会だが、頼むぜ相棒」

サプレッサー付きハンドガン、威力は当然マグナムにも劣る性能だがこいつには何度も命の危機を助けられた。

「さぁ、μ鯖の「サイレント・キル・幼女」の恐ろしさ、肉の隅々にまで焼き付けてウェルダンにしてやるよ豚野郎！」

このゲームでは基本的にめちゃくちゃ小型だが群体のＭｏｂか、めちゃくちゃ大型だが単体のＭｏｂがエネミーとして出現する。そして言うなれば「怪獣ｖｓ人間」のタイマンとでも言うべきこの状況こそが、来たるクターニッド戦に向けて取り戻しておきたいノウハウだ。

「死に晒せぇぇぇ！！」

そしてお昼はトンカツにしよう！！

「いっつつつ……やっぱ鈍ってると何発か貰っちゃうか……全盛期ならノーダメ余裕だったんだが」

ベッドから起き上がり、じんわりと熱を持つ右肩をグルグル回しながら俺は一階へと降りる。

あの後も基本サイズが大型ダンプほどある梟やら虎やらを倒してきたわけだが、なんとなく身体の奥底に眠っていた対巨大モンスターへの動きが戻ってきた気がする。

そう、モンスターでありながらある種の可動オブジェクトと想定して動く感覚……懐かしいなぁ、「鯖癌(サバガン)」の現役時代を思い出すぜ。

「トンカツの出前……おっ、あるじゃんあるじゃん」

携帯端末一つでどこでも出前が取れる、現代日本は最高だね。注文を発注して……っと

ピンポーン

「配達込みで一秒！？」

出前RTA世界一位かよ、すげーなオイ……んなわけあるか、なんだろう？

父さんは最近知り合ったらしい釣り友達と沖釣りに行ってるし、母さんは世界のカブトムシ展に出るショボクレスガクブルみたいな名前のカブトムシを見に行ってる。

瑠美は……今の瑠美に関わることはニトログリセリンの直上で線香花火するくらいデンジャーな所業だ、多分バイトでいないないだろうし俺が応対するしかあるまい。

「はい？」

『どうも、お届け物でーす』

「あー、少々お待ちをー」

宅配便、瑠美が服を頼んだか？　それとも父さんが新しい釣竿を？　まさか母さんが新しい昆虫標本を……？　参ったな春先の「世界の蛾セレクション」の悪夢をもう一度やれってか？　割とシャレにならないハザードが起きかけたんだぞアレ。

「あーはい受け取ります」

「いえいえ、運びますよーデカいんで」

「……デカい？」

宅配のお兄さんの後ろを見れば、明らかに手荷物を運ぶためとは思えない大型トラックの中から聞く限り二人以上の男性の声で「持ち上げるぞー」と言う声が聞こえてくる。

え、待って大の大人二人以上で運ぶ必要があるもの？　まさか母さんがテラリウムでも買ったのか？

去年のクリスマスに自宅に南米環境を作り出さんとした母さんを家族三人で阻止した記憶が頭をよぎるが、まさか凍結されたはずのプロジェクトが秘密裏に動いていた？　いや、母さんだったらもっと上手くやるはずだし……そうだ。

「あのー、誰宛のナニですかね？」

「あーはい、こちら……「ヒヅトメ　ラクロウ」様宛の「ＵＣＥ・チェア型フルダイブＶＲシステム　Ｐｒｏ」と後はダンボールが一つです。いやぁ、あの業務用を個人で所有する人初めて見ましたよ……あの、もしもし？」

――思考強制シャットダウン

――思考を再起動します

――アップデートが一件存在します、アップデートが完了次第再起動します

――なんじゃこりゃ

「アノ………コレ、ダレカラオクラレタモノデスカネ？」

「へ？　え、えーと……電脳大隊（サイバーバタリオン）……プロゲーミングチームからＶ

Ｒシステムが届くなんて、懸賞かなんかやってたんすか？」

「アーソッスネ、チョトシツレイシマスネ」

「あの、どこに運びますか？」

「オテスウデスガ、オレノヘヤマデオネガイシャス。ニカイノ……

エエ、ハイ」

ちょっと俺は尋問をしなければならない。

件名：おいコラ
差出人：サンラク
宛先：モドルカッツォ
本文：どういうこっちゃねん、なんやねんあれ

件名：Ｒｅ：おいコラ
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：関西弁になってるのは笑うわ、その様子だと届いたみたいだね

件名：Ｒｅ：Ｒｅ：おいコラ

差出人：サンラク
宛先：モドルカッツォ
本文：新手のドッキリか？　着払いとかだったら割と法的手段に踏み切るぞ？　お？

件名：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：おいコラ
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：まぁ落ち着けって、いたずらで業務用ＶＲシステム送りつけるかよ。そりゃウチのトップが「顔隠し（ノーフェイス）」様に、ってプレゼントだよ。タダだぜタダ

件名：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：おいコラ
差出人：サンラク
宛先：モドルカッツォ
本文：タダほど怖いものはないんですけどー？　無償の善意とか主要キャラ以外だと大抵が後々のトラップなんですけどー？

件名：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：おいコラ
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：脳みそゲームに侵されすぎだよ、一回エナドリとゲームを絶って瞑想でもしたら？　まぁ先行投資するから是非ウチに、ってのは透けて見えるよね。多分そのうち正式にメール来るんじゃない？

件名：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：おいコラ

差出人：サンラク
宛先：モドルカッツォ
本文：つーかサイダーバターケーキだかなんだか知らんけど住所教えた覚えないんですが

件名：Re：Re：Re：Re：Re：Re：おいコラ
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：ああそれなら、サンラク打ち上げの時に鉛筆の奴に住所教えてたじゃん？

件名：お前ーーーーーっ！！
差出人：サンラク
宛先：鉛筆戦士
本文：法的手段ーーーーーーーーっ！！

件名：Re：お前ーーーーーーっ！！
差出人：鉛筆戦士
宛先：サンラク
本文：どうせ早かれ遅かれバレるんだからいいじゃーん！　しれっと企業に正体バラされた私の方がダメージでかいんですけどーーーー？？？　それに守秘義務とかそこらへんは守ってくれるでしょ、多分

件名：お前らホンマお前ら……
差出人：サンラク

宛先：鉛筆戦士、モドルカッツォ
本文：突然名指しで馬鹿でかい荷物が届いた俺の気持ち考えろよ……

件名：Ｒｅ：お前らホンマお前ら……
差出人：鉛筆戦士
宛先：サンラク
本文：今日の晩酌が美味しくなりそう

件名：Ｒｅ：お前らホンマお前ら……
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：笑顔って心を豊かにしますよね

「あんの外道ども………っ！」

プライバシーって法的に守られてるモンなんだぞ？　あいつらそれを忘れてるんじゃなかろうか。
いや、まぁ……出どころがはっきりした以上、その内容自体はなんのしがらみもなければ三日三晩小躍りするくらいに嬉しいものではあるけど……えぇ……

「ここで開けちゃいますか？」

「あー、自分で組んじゃうんで大丈夫です」

「はい、じゃあここ指紋認証お願いしまーす」

今のご時世、住所情報と一緒に登録された指紋認識で判子の代わりになる。俺は宅配のお兄さんに差し出されたタブレッドに指を押し付けてデータを読み込ませ、数秒のロードを経て本人認証が完了する。

「うっす、ありがとうございましたー」

「お疲れ様でーす」

さて、と…………宅配のお兄さんを見送り、玄関の鍵をかけて、靴を脱いで階段を上って自分の部屋に戻って……さてこれどうしよう。これを受け取るということは実質的にカッツォが所属するチームからのスカウトを受けるに等しい。流石にこんだけのものをプレゼントされて無下に扱うのも……いやしかし大学進学は絶対条件だ、そこを揺るがせるのは家族会議……いや家族尋問……もはや家族拷問……？

思考はうだうだと底に沈んでいくが身体は正直なもので、淀みない手つきでダンボールを開封し、中にあるＶＲシステムを取り出して…………

「ゔぇぇえ」

思わず喉から変な声が出た。いや、まぁ確かに印象には残ったのかもしれないけど、別に俺のお気に入りのキャラというわけでもないんだが……

「手が、込みすぎている……」

取り出されたチェア型フルダイブVRシステム……強化プラスチック製の外装で機械部分が覆われたそれの外装には、右面にはデカデカとカースドプリズン、そしてプリズンブレイカーのイラストがプリントされている。そして左面にはエンブレムチックにデザインされた金属質なカボチャのヘルメットをかぶった傭兵のイラストと「NO－FACE」のロゴがプリントされていた。あとよくよく見たら椅子の背もたれ部分にしれっと電脳大隊のロゴが入っていた。

件名：追伸
差出人：モドルカッツォ
宛先：サンラク
本文：そのデザイン、両方とも原作者の直筆イラストをプリントしたものだからそのVRシステム世界に一点しかないワンオフだよ

「嬉しいけど……っ、嬉しいけど………っ！　もはや脅迫じみててつれぇ………っ！！」

今の状況を簡潔に表現出来る例えが分かった、悪魔と契約した瞬間だ。

――ああ、だがそれでも。
来るクターニッド戦に向けて、最高クラスの環境が意図せずして整ったわけだ。

倶に天を戴いて　其の一（後書き）

今回の長篇タイトル「倶に天を戴いて」はクターニッドというキャラの設定を考えた初期段階で絶対に使おうと決めていたタイトルだったりします。

あとここで明言させていただきますが、現在想定しているこの物語の本編内においては主人公の職業が学生からプロゲーマーにジョブチェンジは致しません。

倶に天を戴いて　其の二

「おー、続編発表されただけあって気持ち人増えてるな」

もともと最前線で戦うにあたってのプレイヤースキルの要求度が高すぎる、という理由から良ゲーの割に過疎っていたゲームではあるが続編が出るともなれば前作をやってみたくなるのが人の常というもの。

かつては熾烈な身内同士のランキング戦によってかギラギラとしたオーラを放っていたエントランスも、心なしかマイルドな感じに新規を受け入れていた。分かる、分かるよ。にわかだのなんだの言ってもやっぱりマッチングで知り合いとしか当たらない過疎っぷりは健康ではないもんな。

まさかの業務用（業務用ではない）プレゼントというサプライズが直撃した俺ではあったが、もらったからには有効活用してやるべきだ。早速最新鋭のＶＲにクソみたいなゲームのデータを叩き込んでやる暗い快感を堪能しつつ、まず最初に始めたゲームはネフィリム・ホロウであった。

何故と聞かれると返しに困るが、適当に選んだだけで特に意味はない。ルストとモルドいるかなー、程度のふとした思い付きがこれを選んだ。ただそれだけだ。

「で、案の定いるし」

ベストコンディションはどうした、いや鯖癌からネフホロで連続ゲームプレイしてる俺が言えたセリフではないが。

エントランスの見上げた先、新規の心を掴むべく戦っているのはル

スト&モルドとスーパー玉男だ。緋翼連理(ヒヨクレンリ)と見慣れぬ機体が熾烈な激突を繰り広げているが、まぁ仮にも俺が暗殺するまで頂点に立ちつづけていた真紅の不死鳥がそうそう負けるとも思えない。ちょいとサプライズをかましてやるとしますか。

「さーて……ちびちび改造していたお前を、今日この瞬間お披露目してやろう」

それも、本体性能(プレイヤースキル)に大幅に補正が入ったこの俺を乗せてな。
そこにはかつての速さのために全てを削ぎ落とした蒼い鳥の姿はなく。全身に新たな翼を追加した極彩色のネフィリムが鎮座している。
統一性のないバラバラのパーツは、それぞれが異なる初期カラーリングを持っており、まるで別々の色のペンキをぶちまけたような色合いだ。
こういうのに名前つけるとき、妙に凝っちゃうんだよね。進化した翡翠(カワセミ)、キングフィッシャーの新たな姿にはカワセミの近縁種の名を贈ろう。

「さぁ、派手に羽ばたこうぜ十四の彩(コーラシアス・ライラック)を持つ鳥」

これこそが、キングフィッシャーの真のリベンジマッチだ。
いそいそと準備を整え、スーパー玉男の機体を撃墜したルスト達へと挑戦状を叩きつける。受諾の返答は直ぐに届けられ、コーラシアス・ライラック……ブッポウソウの一種の名を持つネフィリムと比翼連理の不死鳥が対峙する。
フレンドマッチではなく野良マッチ故、会話を交わすことはできない。だが向こうのやる気が十分すぎるほど満ちていることはバトル開始の合図と同時に全力で突っ込んできた緋翼連理を見れば分

かる。

「上等だ、今度は逃げも隠れもしない！」

両背部、両腕、両肩、両足、腰の左右。手持ち武器である物理ブレード「十束(トツカ)」を除いて全部位に推進用ブースターが装備され、基本となるブースターと脚部の噴脚も含めて合計十四ものブースターを搭載した機動力全振り機体。
もはや遠距離攻撃手段すら放棄したこの機体はただ一本の剣を失った時点で攻撃手段が体当たりのみになるという尖り方をしている。だがゲームにおいてデメリットだけということはありえない、大きなデメリットを背負うことでコーラシアス・ライラックはキングフィッシャーとは異なる最強の翼を手に入れた。

「今の俺ならこいつを使いこなせるってなぁ！！」

第四、第五、第十一、第十四ブースター点火。空中でトリプルアクセルを決めた極彩色の鳥が不死鳥の突進を回避し背後を取る。それに対して緋翼連理は素早い身のこなしで背後へと攻撃を仕掛ける。だがしかし第三、第七、第八、第十三ブースター点火。トリプルアクセルの勢いを残したまま別方向へと移動したコーラシアス・ライラックが振り下ろしたブレードが緋翼連理の左腕を破壊する。

ふははははは、見たかルスト！　見たかモルド！　これこそがフィドラークラブで勝ったはいいけどキングフィッシャーでは一度も勝てていないことを地味に気にしていた俺が考え抜いたファイナルアンサー！
緋翼連理がアシンメトリーに配置したブースターによって不規則な動きを可能とするのであるならば、さらにその上を行く積載限界まで積んだブースターによる超超超不規則機動だ！！　ふふふふふ、

もはや俺ですら頭がどうにかなりそうな操作性。だがその不可能を可能とすることで実現するバイブレーション的ムーヴ！！！
ヘッドギア型では情報処理が追いつかなすぎて最終的に制御不能のきりもみ回転をしながらビルに突っ込む確率が常時最低３０％存在するロシアンルーレットの如き機体であったが、業務用の処理力を得た今の俺ならば……まぁ２０％くらいには抑え込めている！！

「腕を動かすことすら困難だが、このネフィリムは……空中でブレイクダンスすら出来る」

真の三次元機動とはなんたるかを存分に思い知らせてやろう。墜ちろ緋翼連理（蚊トンボ）！！

「あっ制御ミスっ………ぐべぁ」

優しく受け止めてくれないビルのコンクリートはツンデレ。

「ウッ……勝利の美酒をウッ……樽で飲んでる気分だウッ……っ！

！」

「…………っ！　…………っ！」

ルストにゆるめの腹パンを連打されつつも、俺はドヤ顔パフォーマンスを中断するような無粋はしない。いやヤカン頭だからドヤ顔もへったくれもないのだが。だがそれでも二度にわたり勝利を逃してきたキングフィッシャーの仇は今ここに討たれた。

「ウッ……あのそろそろウッ……やめてもらいたいんだがウッ、コーラシアス・ライラック乗った後だと結っこウッ……酔うというウべべべべべべべべッ」

待て待て連打はやめろ連打は！　しかも段々一発の威力が高まってるし累積バフでもかかってんのか！！

「もう一回……！」

「いや……流石にあの動きを連戦するのはキツいから………」

なにより大ダメージを受けるのが俺の三半規管だからなアレ、いやトリプルアクセルからさらに加速したトリプルアクセルに繋げるのは自分でも無茶ぶりだとは思ったがそうでもしなきゃ緋翼連理にリベンジを果たすことはできなかった。

「にしても、よくあんな無茶な動きできるね……」

「実はな、色々あってVRシステムを換えたんだよ」

「……もしかして、業務用？」

応とも、と答えればモルドは驚きに目をまん丸に見開く。あっやめてルストさん「スペックからして不公平」と腹パンを再開するのはやめて、痛覚上限あるとはいえ連続して腹に衝撃が走るのはあまり良くない！

「そうそう、その試し運転でどうせなら組んだはいいがじゃじゃ馬すぎて扱いきれないアレを使えるんじゃないかとな……鳥だけど」

「ぶふっ……」

「サンラク、モルドを使い物にできなくするのやめて」

「これ俺が悪いの？」

「ナビゲート中に思い出し笑いされたらたまったものではない……」

がくりと肩を落とすルスト、どうやら今日中のリベンジは諦めたようだ。ホログラフィックモニタ内で繰り広げられたバトルに触発されたのか、ブースターを購入しに行く者、新しい構築の可能性を見出す者、熱心に議論する者などなど……つい最近まで過疎っていたとは思えないほどの熱気がこちらにまで伝わって来る。

「……私は今この瞬間が夢ではないかとまだ疑っている」

「だろうなぁ」

「貴方は幸運を運ぶ青い鳥(カワセミ)だったのかもしれない」

「なんじゃそら」

「私はこのゲームが好き、きっと何十年先老衰で死ぬ間際でも最後に思い出すのはこのゲームだと思う。だからこそ、キングフィッシャーが現れたことこそが、このゲームの転機になった……と、思う」

「いや繰り返すがなんじゃそら」

偶然も偶然だ、黒猫が横切ったら悪い乱数ばかり引くようになる、レベルのジンクスだぜ。ああそうだ、一応聞いておくか。

「ルスト、ネフホロの続編が決定したわけだが、シャンフロは続けるのか？」

別にネフホロ一本に熱中することが悪いわけではないし、それを止める権利は俺にはない。ただ仮にも俺はルストやモルドと「シャンフロでロボを提供する」という契約を交わしている。それが使われることなくシャンフロを去られるのはなんというか、モヤッとくる。

「シャンフロと無印ネフホロは続けていくつもり………ブラックドールは頭がおかしい、こんな過疎ゲーの続編に「シャンフロシステム」を使うなんて……馬鹿、阿呆、一生ついてく……！」

「え、マジで？」

シャンフロシステムとは名前そのまんま、シャングリラ・フロンティアに使われているシステム……つまり気色悪いレベルの仮想現実システムを指す。ルストから伝え聞くネフホロのディレクター、およびネフホロの開発メーカーである「ブラックドール」の社長曰く、「自社メーカーにおいてシャンフロシステムに最も適したタイトルはネフホロ以外になく、ある程度機能を軽量化することで比較的ロ

ーコストでシャンフロシステムを運用できるよう開発する……」とのことらしい。

なるほど、なにも世界まるまる一つをオープンワールドとして運用する必要はない。ＧＨ：Ｃのように一つの街限定でワールドを構築することもできるし、この手のゲームであればある程度ワールドを作って移動なりなんなりで個別にローディングを挟むこともできる。そして操作性さえ、操作性さえなんとかなればＳＦロボアクションとしてのこのゲームは業界に大旋風を起こすことすら不可能ではない……とメーカーの上層部が判断した、と。

そう考えれば、ルストは幸運であるとしみじみ思う。どれだけユーザー個人が「売れる理論」を組み立てたところで、ゲームの続編は発売されない。それを決定するだけの力を持つ人物の心が動かない限り、どれだけ好きなゲームであったとしても続編は作られず、そしていつしか過疎の果てに過去のゲームとなる。

俺は別にそれはそれで構わないと思っている。それは俺が好むゲームがそういった「過去」のゲームだからこそというのもあるが、なんだかんだ続編が必ずしもよりよいゲームになるとは限らない。初代が興したブランドを二代目三代目で使い潰す、なんて例はゲームの歴史の中で幾度となく繰り返されてきた摂理だ。

だからこそ、ただ多少のシステム周りの改良とキャラクター・メカニックの更新だけをしたものに「2」と銘打たれたものではない。シャンフロのシステムという超技術によって新たな地平に進化する続編をリアルタイムで楽しみにできる、というのはすでに評価を下され過去のものとなったゲームばかりしてきた俺には縁遠い感情だ。そしてそれを享受しているルストやモルド、このゲームを続けてきたプレイヤー達、新たに始めた新規達を羨ましく感じる。

「で、サンラクも当然……買うよね？」

「…………買わなきゃダメ？」

「買うべき、いやむしろ義務、買え」

だが、ルストの言葉でふと気づく。そうか、考えてみれば今この瞬間ネフホロをプレイしている俺も、そっち側に立っていたのか。

ふう、と一つ息を吐き盛り上がるプレイヤー達を見つつ思う。この場合俺はフェアクソに感謝しなければならないのだろうか？　アレを制覇したからこそ、クソゲーからいったん離れようと思えた。そしてシャンフロを始めて、ネフホロを再開して、何の因果か顔を隠してプロゲーマーなんかと戦ったりして……人生とはわからないもんだ。

「とりあえず発売未定の続編より明日のクターニッドだ、制限時間的に明日の晩にアタックを仕掛けるんだから……間違ってもネフホロやりすぎてグロッキー、とかはやめてくれよ？」

「……当然。来る「2」に備えてシャンフロでシステムに慣れなければならない、のでクターニッド戦でも手は抜かないし、ロボにも乗る」

そう宣言したルストの目には、確かにモチベーションの炎が燃え上がっていた。

「鳥……馬なのに……誰うま……誰馬？　ぷっ、くくくくく……」

「笑いのツボを自分で作るのやめーや」

「今回は結構重症かも……」

倶に天を戴いて　其の二（後書き）

当初ルスト&モルドは一章使いきりの予定でしたがなんだかんだ愛着湧いたので続投します……というお話
英名と学名ごっちゃになってますがコーラシアス・ライラックの元ネタは「ライラックニシブッポウソウ」です、ペイントで色塗り失敗したみたいな色合いで結構好きです

なんだかんだ文句言われつつもシリーズが続いているタイトルってのはやっぱり幸せだと思うんです
今でもパタポン４待ってます……

倶に天を戴いて　其の三

光陰矢の如しという言葉がある。

意味としては「光属性魔法と闇属性魔法の方が発生早ぃんだから火属性魔法とか使ってるやつｗｗｗ」「よしぶっ殺す！」というとあるゲームにおける光・闇魔法勢と火魔法勢による熾烈な内ゲバを例えたものを指す。確かに矢のような運用で使うなら光、闇魔法は強いが火魔法はトラップとして使うと極悪性能発揮してたからどちらが優れているとも言いづらかったんだが……最終的に土魔法使いによる集団土葬ですべて決着したが代わりに土魔法使いがしばらくの間追いかけ回されていた。

あの時は俺は非干渉を通していたがもしも「禁術使い」が出てきていたら俺も介入していたかもしれないな……やつはあまりにも危険すぎた、幾度となく神罰（BAN）すらも平気な顔で受け止めて常に周囲へとハザードを起こしおっとこれ以上は関係ないか。

まぁ冗談はさておき、光陰矢の如しとは要するに時間経つのめっちゃ早い！　の意味だ。ルルイアスに入りＥＸシナリオが始まったのが朝であったため、タイムリミットもまた七日目の朝ということになる。そして今日こそがその七日目だ。

アタックを仕掛ける時間帯は七日目の晩からタイムリミットが０になる八日目の朝まで……即ち夜通しで攻略するつもりなのだ。なぜそんな時間帯にと言えば、どうも本来は手間取るはずのなかった私事で五日間ろくにログインできなかったレイ氏のようにいきなりの予定が入る可能性もある。そのため少なくとも絶対に急用が発生し得ない（はずの）夜に行うこととなったのだ。

それよりも今問題とすべきは目の前のダンボールだ。

「届いた、か……いや、なんで届くの……？」

あの日打ち上げ会場で出会ったライオットブラッドの製造元であるガトリングドラム社の社員……を名乗った謎の黒頭巾さん。見た目の割に普通に礼儀正しいビジネスマンという感じの人だったが、ＧＧＣの大会という場でライオットブラッドの宣伝に貢献してくれたお礼ということで送られてきた「ライオットブラッド詰め合わせ」。住所を教えた覚えはないし、タイミング的にカッツォからリークされることもありえないはず。なのになぜかちゃんと郵送で届いた事実にこの現代社会においてほとんど駆逐されたと言っていいオカルティックな風を背筋に感じ、夏だというのにぶるりと震える。

「無印、アンデッド、バックドラフト、ファンタム、トゥナイト……ん？」

オレンジの缶？　ライオットブラッドシリーズって無印込みで五種類しかなかった気がするんだが……試作品か何かだろうか。

「ライオットブラッド・リボルブランタン……？」

リボルブ、回転する……ランタン……灯り………………………走馬灯か！　間違ってもエナドリにつける名前じゃないだろ不吉すぎるわ！！
しかもよくよく見ればライオットブラッドお約束の破城槌を抱えたキャラクターのロゴが右腕で破城槌を構え左腕でランタンを持ったカボチャ頭………いやいや、ＧＧＣから一週間も経ってないのになんで……いやいやいや、ただの偶然だろう。１％の確率があれば乱数を引き当てることもあるさ、うん。

「試供品ってやつか……なになに？」

『ライオットブラッド・リボルブランタンは当社が試験的に開発した「短時間で多量の集中力を要するお客様向け」の商品となっております。効果時間はおよそ三十分から一時間と極めて短い間ではありますが、リボルブランタンを摂取されてから最低でも三十分は睡眠薬を投与されてもそれに抗えるだけのカフェインを保証いたします……冗談ですよ？』

落ち着け俺の左腕、無意識的に警察にアポを取ろうとするのはまだ早い。
エナドリ飲んだら短時間カフェインが決まって名前が走馬灯だとしても、なんだかんだ合法なのがあの会社じゃないか。だから落ち着け、ああやばい「110」の「11」まで入力してしまっている！

「成分表は…………一応、違法的な分量だったり成分は表記されていない、か……」

たかがエナジードリンクに何をそんな警戒しているんだ、と思うかもしれない。だがライオットブラッドに関しては警戒しないと酷いことになる。エナドリは酒と混ぜると直ぐに酔いがまわると言われているが、ライオットブラッドを混ぜたら歴戦の酒豪が一発でノックアウトされた、なんて噂話があるくらいだ。
そんなメーカーの試供品……公式サイトにも名前が載っていない代物だ、おそらく一般ユーザーでは俺が一番最初に手に入れたもの。
摂取は慎重に行わなければならない。

「まぁ、今飲んでもしょうがないし後に回しておこう」

頑張れ数時間後の俺、面倒ごとは未来に発送するに限る。

恨むぜ数時間前の俺、面倒ごとが過去から発送されてきやがった。
そろそろシャンフロへとログインし、集まったメンバーとクターニッドが座するルルイアス中央の城へと乗り込まなければならない。
この時の他にいつエナドリを決めろと言うのか、だからこそどのライオットブラッドを使うべきか……そんな悩みを持つ俺の視界の端で異様な気配を放ち続けるライオットブラッド・リボルブランタン。
……気になる、超気になる。これでも熱心なライオットブラッドユーザーだ、かつて俺と同じかそれ以上にライオットブラッドに魂を奪われた同志達ですら挑戦をためらった発光する危険物だって割と早い段階で試した。だがそれは俺以外にも挑戦者がいたからこその勇気だ、俺はこの孤独の中でオーラを放つ走馬灯を試すだけの勇気が果たしてあるのか。
「………ほら、生死すら逆転させるっていうならこっちも同じような力に頼るべき……だしな、うん」
結論から言えば、俺はクターニッド戦を控える今、リボルブランタ

ンを試すだけの勇気を見出すことはできなかった。代わりに選んだのはライオットブラッド・アンデッド、妙にさわやかな味わいの「死体すら起き上がる！」がキャッチコピーのエナジードリンクだ。なぜか念入りに死体に接触させるなと念押ししているのは何故だろうか。

「うーん、歯磨き粉味」

全世界のミントスキーにこれを言ったらグーでビンタされそうだ、過激派ミントスキーともなればミント味の食べ物を手に入れられない状況下ではミントの歯磨き粉を摂取することで糊口を凌ぐと言う。歯磨き粉と言うと怒るくせに自分から歯磨き粉を摂取するというのはどういうことなんだろうか、新手のツンデレか？

「うっし！　カフェイン摂取完了！！」

残念だったなクターニッド、今の俺を死体にしても身体を駆け巡るカフェインが俺の身体を動かすだろう。

「さて、来てないのはレイ氏だけだが……あ、来た」

「あ、すいません……またお待たせしてしまったみたいで」

「いやいや、全員今集まったばかりだから大丈夫大丈夫」

秋津茜やモルドは先に来て半魚人から素材集めをしていたようだし、俺も船の残骸の底に落ちた機獣を回収しつつさらに船内を漁っていたりしていたが、それは個々人の暇つぶしであって待ち合わせに早く来たとは言えない。

ルストなんてさも時間通りに来ました、みたいな顔をしているが一回モルドがログアウトして起こさなければ危うく遅刻しかけていたことを俺たちは知っている。

ＮＰＣは全員この場に集合済み、意外なことにスチューデもこの場にいる。父親のカトラスを抱えるクソガキの目には怯えの揺れはなく、何かを決心した確たる光が灯っていた。俺がいない間に何かイベントでもあったのかな。

「さてこれにて全員集合、これよりこの都市の本丸に向かうわけだが……」

「サンラク、提案」

「はいルスト」

「こういう時は、結束を高めるためにチーム名と作戦名があると、良い……」

くっそどうでもいいな、だが良いアイデアだ。チーム名も作戦名もパラメータには一切関係しない、だがモチベーションには補正が入る。同じグループであることは事実だがそれに名を与えることでより結束力が高まる、これは純然たる事実だ。ただの「今回のパーティに勝利を」よりも「チームなんたらかんたらに勝利を」の方がか

っこいい、そして自分が団体の一員であることをより強く自覚できる。
どうせ一、二分遊んだところでクターニッドは逃げやしない。そんなわけで突発的ではあるがチーム名&作戦名大喜利が始まったのだった。

「……チーム名は「依気陽々（イキヨウヨウ）」で、作戦名は「オペレーション・サンライズ」……良い感じ」

「ルスト、それ文として書かないと意味が伝わらないチーム名だよ……ええとチーム名は「タコハンター」で作戦名は「クターニッド撃破作戦」……安直かな」

「はいはいっ！　チーム名は「ルルイアス探検隊」で作戦名は「ルルイアスの神秘に迫る！」でどうでしょう！！」

「え、ええと……チーム名は、その……えーと…………ごめんなさい、ちょっと、思いつかないのでパスということで……」

「サンラクサン、サンラクサン、チーム名は「致命的突撃団（ヴォーパルアサルト）」とかいいですわ？」

「玉砕しそうだからダメ」

ぷぅぷぅ鳴いてもダメなものはダメです。ふふふ、では俺の厨二スピリットの戦闘力をお見せしようか。

「チーム名は「不倶戴天」、作戦名は「天体観測」でどうだろう」

クターニッドはこの反転都市で海底を天としている、俺たちは地上で空を天としている。奴とは見ている空が違うからこそのチーム名「不倶戴天（ふぐたいてん）」。そして正しい空を見に行く作戦名「天体観測」……

……これは勝ったな。

「チーム名は良いと思うけど作戦名がダサい」

「天体観測ですか？　あれって確かマリンスノーなんですよね？」

「秋津茜、いやそうじゃなくてこれには正しい空を見に行くために戦うという秘められた意味がだな……」

最終的に多数決でチーム名と作戦名が決定した。

「………………では改めまして、チーム「不倶戴天」、オペレーション「クターニッド撃破作戦」を開始する！」

人と、魚人と、精霊と、致命兎。なんとも闇鍋な一団ではあるが、力強い返答は確かに全員が団結していることを示していた。

倶に天を戴いて　其の三（後書き）

プレイヤー達がいない間にアラバがスチューデを励ますイベント的なものがあったけどプレイヤー達がいなかったので描写的にユザパです。

ライオットブラッド関連は八割ネタなのでSF的な物理法則は無視されます、多分ヒューム値が高いんでしょう

考察、そうこのゲームでプレイヤーに要求されるものの中には考察が存在する。
ただ目の前の敵を倒して、経験値を得て、わーいやったーレベルアップだー……そんな単純なハクスラだけでは攻略できない謎……いや、謎ではない。それを言葉として形容するのなら「未知」が存在する。
例えば「吊り橋が存在する。この吊り橋は両岸に亘って橋を支えるロープが千切れかけであり、足場である木の板も何枚かは腐敗し、歯抜けの状態である」というシチュエーションがあるとする。これを考えなしに全力疾走で渡ろうとすれば考えつくだけでも三パターンの落下エンドにたどり着く。このシチュエーションを攻略するのであるなら縄が切れない慎重な歩きかた、歯抜けた木の板を判断する確認、などのアプローチが必要になるわけだ。

そしてそれこそが「考察」だ。何もわからない状況から手がかりを手繰り寄せ、一枚の絵を構成する大部分が散逸してしまったパズルがどんな絵であったのかを考える。
では本題だ、このユニークシナリオＥＸ「人よ深淵(ソラ)を見仰げ、世界は反転(マワ)る」において考察材料となるものはなんだ？
「………とりあえず、城の中に入ってすぐに何か起きるってわけじゃないのか」
「……その、ようですね」
全体的に青い、という点を除けば一般的な……いや一般的ではない

かもしれないがとりあえず「城」というものからそこまで逸脱していない内装のエントランスだ。注意深くなんらかの変化が起きていないかを警戒していたが、数分待っても敵の一体とすらエンカウントしないことから俺とレイ氏はとりあえず肩の力を抜く。

「これはどっちかというと、ダンジョンの中にもう一つダンジョンが内包されている感じなのかもしれないな」

「サンラクさん！　上り階段と下り階段を見つけました！！」

おー流石は忍者、ちゃっかり斥候らしいことしてるじゃん。でも今度からは調べる前に報告と連絡と相談をしようような。とはいえ上り階段と下り階段……最上階と最下層、そのどちらかにクターニッドがいると考えて間違いないだろう。

常識的に考えればあんな巨大触手の持ち主を洋風な城の最上階に詰め込むことはできない、地下にいると考えるのが自然であるが生憎相手は鰓呼吸と肺呼吸を同じ場所で共存させることすら可能なチートモンスターだ。なんらかの能力で最上階でエンカウントする可能性も無きにしも非ず、だ。

「とりあえず上に行くか下に降りるかはこの一階全フロアを調べてからにしよう」

「手分け、する？」

ルストの言葉にしばし思案し、上か下の末端に行かない限りは劇的な変化は起きないだろうと判断してパーティを二つに割ってフロア内部を探索することにする。なにやらこの城に入ってから行動の一々にサイコロを要求されそうなゲームカテゴリに変わった気がしなくもないが、これはユニークシナリオ。すなわち物語だ。

「攻略の手がかりがあるかもしれないからな、探索は大事」

「見てください！　ロウソクが青いです！！」

「うーん、それはフレーバー以上の意味はないんじゃねぇかなぁ」

つーかそれただのオブジェクトじゃん？　もっとこう、アイテム的なものを見つけような。とはいえゲームというものがＶＲ以前の、ブラウン管とかいう巨大立方体だった頃に存在していたようなレトロを通り越して化石レベルのＲＰＧでは妙な場所に最強装備が落ちていた……なんてこともあったらしいが、流石に時代の最先端を征くシャンフロ様では城の一階という、言うなればダンジョンの入り口でしかない場所に最強装備を設置していたりはしないようだ。

「さて……どうやらあのタコは俺たちに探索をさせたいらしい。そんなわけで上と下、どっちから先に調べようか」

多数決の結果、地下から先に調べることになった我々チーム「不倶戴天」は秋津茜が発見した地下へと続く階段を降りるのだった……

…………

はい、というわけで本当に脈絡もなく地下の扉を開いた先の広大な空間に鎮座している巨大タコ（クターニッド）を直視した我々はＳＡＮチェックです。

「えっちょ！　はいぃ！？　全員戦闘準備ーっ！」

いやいやここまで大掛かりな舞台整えておいてそんな扉を開けたらエンカウントて！　もうすこしこう、この先から邪悪なオーラを感じる……セーブしますか？　この先に進むとセーブすることはできません、的なＲＰＧラスダンお約束のシステムメッセージとかさぁ！

改めて目にするクターニッド、その姿は………タコだ。軟体的な八本の触手、イカとは違うまん丸つるっ禿げな頭、あれ実際は頭じゃなくて胴体なんだってな。その姿はなんの捻りもなく、ただタコ型のＭｏｂのサイズを拡大しただけのようにも見える。

強いてサイズに目をつむった上で普通のリアルタコとの違いを挙げるとすればその全身が漆黒であるということ、そしてもう一つは八本の黒い触手の内、四本が鎖のようなもので地面に縫い止められているということか。

絶技を持つ機械の武者、夜となって襲い来る黒狼、伝聞のみの知識だが黄金の竜王……それらと比較すればあまりにも……その、なんというか、普通の見た目だ。ただのでかいタコというか、俺の中でユニークモンスター疑惑がますます強まっているヴァッシュなんかは言ってしまえば人間大の喋る二足歩行の兎でしかない、だがその姿からはプレイヤーの脳に直接熱風が吹き付けるような威圧感を感じる。

だがクターニッドと思しきタコからはそれすら感じられない、ぶっちゃけるとアトランティクス・レプノルカの方がよっぽどボスらし

さを感じる。それは強力な質量兵器たり得る触手の半数が何故か使用不可に見える状態であるからだろうか。あの程度ならすぐに倒せてしまいそうな…………なんて？

「…………エムル、あれ見てどう思う？」

「今がチャンスだと思うですわ！」

よーし分かった、こりゃひでぇや。

「全員撤退、作戦の大幅な見直しが必要だ」

俺の下した判断に驚いたような目を向けるのは秋津茜、エムル、シークルゥ、アラバ、ネレイス、スチューデ……約一名の例外はあるがそのほとんどがＮＰＣであった。そしてクソガキがそちら側の時点でルストとモルドはこの強烈な違和感に確信を持ったようだ。

半ば引きずるようにしてＮＰＣ達を連れ、俺たちは急ぎこの広大な空間へと入る扉からエントランスへと撤退を選ぶのだった。念のために殿（しんがり）を務めた俺は明らかに空間がねじ曲げなければ形成できない、野球ドームほどの大きさのある地下空間の最奥に佇むクターニッドを見据える。

「…………とりあえず「及第点」ってわけかよ」

吐き捨てるように、だが奴が仕掛けてきた「大前提」を突破したという事実に口の端を吊り上げながら地下空間から離脱する。振り返った視界に映るクターニッドが途切れる寸前、確かに俺の目はそれを知覚した。

タコ特有の真横一文字の瞳孔、それが恐らく喜悦による下弦の弧を

描いて……そう、まさしく奴は俺たちを見て、笑っていた。

「単刀直入に言う、多分現状のままクターニッドに挑めば１００％確実に勝てない」

「なんでだよ！　皆でいけば勝て……」

「クソガキ、シャラップ」

ゴッ！　と結構いい音を頭から響かせて悶絶しているスチューデを一瞥だけすると、ルストが俺の話を引き継ぐ。

「相手はユニークモンスター、言うなればストーリーに縛られないラスボス……私たちよりはるかに大きいのに、勝てそうと思えること自体がおかしい」

「あっ！　確かにそうですね！」

素でイケそうと思ってたのか秋津茜……ある意味そこまで没入できる感性は羨ましくもあるが、ここで要求されるのはプレイヤーとし

ての、いや違うな。この世界の存在ではないからこその第三者的視点だ。

そもそもだ、人間という生き物は自分よりもはるかに小さく、はるかに脆い虫ですら「針」と「毒」というたった二つの要素を持っているというだけで危険視する。人間が持つ警戒心は知識と常識に比例し、何か一点でも「人間」という共通意識のスペックを上回る要素を持つ存在であればその対象に警戒の意識を抱くことになる。

そして今現在判明しているだけでもクターニッドには「人をはるかに超える巨体」と「人智を超越した現実の反転」という人間とは比べ物にならないアドバンテージを持っている。

そんな相手になぜ「勝てそう」なんて思えるんだ？　それも、弱者故に強者に立ち向かう特性を持つヴォーパルバニーまでもが。そんなものは冷静に考えればすぐに分かる。

ユニークモンスター「深淵のクターニッド」は第一段階の時点で、この世界の設定風に言うのならば「自身に抱かせる脅威の感情を反転させている」ということだ。そしてそれが印象だけに留まっていると考えるのはあまりに愚かだ。

「でも、プレイヤーにすら影響させるなんて……技術的に可能なのかな」

「モルド、フルダイブVRシステムに反対運動起こしてる奴らがフルダイブ黎明期から今に至るまでずぅーーーっと言い続けてる言い分って知ってるか？」

今でこそ大衆に広く受け入れられたフルダイブVRだが、何も全人類が諸手を挙げて日常の一部としているわけではない。仮想の現実を拒み真なる現実をこそ正しいとする、自称「現実主義者（リアリスト）」を名乗

るフルダイブＶＲというシステムそのものに強い拒絶を持つ人間が存在するのもまた事実だ。
彼らの言い分の大半が「フルダイブの危険性を声高らかに叫ぶ前にとりあえず病院行ってフィクションとノンフィクションの区別をつけるようリハビリしような」と言いたくなるような……前時代的なＳＦ小説の設定をそのまんまパクったようなものばかりではあるが、
まぁなにも現実主義者の全てがバカというわけではない。
その中には確かな知識を基に仮想現実に意識を飛ばすという行いを害であると主張する者がいるのも事実だ。

「曰く「フルダイブＶＲとは形を変えた電気椅子でしかなく、脳に電流を流して好き勝手に夢という名のノイズを撒き散らす行いが生物として健康なはずがない」……って主張だな」

「くわしいん、だね」

「敵を知り己を知れば百戦危うからず、って言うだろ？　相手の主張を理解した上で反論しなきゃ言葉に意味はない」

まぁそんなことはどうでもいいのだ、重要なのは割と賢い方の現実主義者が主張する「頭に電流を流す」というＶＲシステムの仕組みのことだ。

「見ているもの、感じているもの……それら全ては真実ではない。それは脳に送り込まれた電流が誤作動した結果認識するもの、まぁ要するに夢の中なら何が起きても別に不思議じゃないってことだけど……あーだめだ、自分で言っててこんがらがってきたとりあえず今言ったセリフの八割は忘れてくれ」

ルストとモルドが半目になったが仕方ないだろ、別に俺はＶＲを哲

学的に解説したいわけじゃないんだ。

「何が言いたいかっていえば、技術的にプレイヤーを「勘違い」させることとくらい別にそんな難しくないだろってこと」

「サンラク、この場合リアルの事情なんてどうでもいい。重要なのはこのままだと私たち、真の姿を明かしていないクターニッドに、突撃するしかないってこと……」

「非常に簡潔な結論サンキュールスト。つまりはだ、そこのクソガキ……つい最近までベッドの下で震えてた奴がアレ見て「勝てる！」って思う時点でもうすでにおかしいだろ」

後悔先に立たずとは言うが……こんなクソ面倒くさいギミックが仕込まれてるんなら初日から城に突撃するべきだったなちくしょうめ！

考察、そうこのユニークシナリオＥＸでプレイヤーに要求されるものの中には考察が存在するんだ。

俺たちは考え、検証し、あと十時間ちょっとの制限時間の中で正しくクターニッドを認識して、倒さなければならないってことだ。

倶に天を戴いて　其の四（後書き）

まぁ大体皆様お察しだと思いますが深淵のクターニッドというモンスターの設定には某財団が収容する超常存在の設定と、某神話で正気を削る超常存在の設定に強く影響を受けています。
あともう一つだけ設定バラシをすると「クターニッドの皮膚の色は黒ではない」です。

まぁ冷静に考えて意識をコンピュータで操作する、ってのが生物的に健康かって聞かれると「やべーだろ」ってなりますよね。カテゴリの根幹が揺らぐようなアレですけど現実主義者(リアリスト)達の主張は言ってしまえばスカイダイビングが趣味の人に「飛び降り自殺紛いのことして何が楽しいんだ」って言うようなものです、それらが趣味の人からすれば「飛び降り自殺にならないよう用意はされている」しそもそも「お前らに口出しされる謂れはねえよ」というわけです。

倶に天を戴いて　其の五（前書き）

今年のクリスマスはゼノ・ディアボロス君と熱い夜を過ごします。
オラッ！　刀落とせっ！！
クソザコ光パでも周回させてくれるゼノディア君はいい文明、地獄を見せてきたゼノウォフちゃんは悪い文明

「この手のボスだとなんらかのアイテムが真の姿を明かす、ってのが多いよね」

クターニッド撃破作戦特別対策会議、多方面の有識者を集めて現在我々が直面する問題、その解決の糸口を考える会議の中、モルドのセリフに俺は同意の頷きを返す。

「そうだな、俺の経験してきたゲームの中にはそういうのは割とあったし、アイテムじゃなくて特定の武器とか魔法がトリガーのパターンもあった」

「じゃあそのアイテムを探すんですね！？」

「秋津茜、ステイ」

だんだんこいつの取り扱い方法が分かってきたぞ、まぁそれはともかく秋津茜は盗賊を源流とする隠し職業の持ち主だ、恐らくこの場にいる全員の中で最も探索適性が高い。
それ故に探索の優先度が最も高い場所に送り込む必要がある。

「確証はないとはいえ、このままクターニッドに挑んでも勝てない。そう判断したからこそ俺達は今ここで対策会議をしている、なんでもいいから情報を出し合って攻略の糸口を見つけるんだ」

ユニークモンスター「深淵のクターニッド」、まずは基本的な情報

から纏めていこう。

「まぁ、十中八九真の姿とか隠してそうだが……奴はまぁアレだ、蛸だ。このルルイアスという巨大な蛸壺の大家をして生計を立ててるらしい」

「恐らく……システムレベルで、物事の摂理を「反転」する……能力持ちです」

命の状態すらもが奴の掌の……いや、触手の上。奴にかかれば崩壊した街並みは瞬きの内に新築となり、鮮魚は腐ったつみれへと調理されてしまう。その過程で何をどう間違えたかホモ・フィッシュエンスになるわけだが。

その根幹となる能力こそがレイ氏が発言した奴の「反転」の力、島一つを海の底に沈める規格外の能力だ。

恐らくユニークモンスターの中では魔法寄りの性能をしたボスモンスター、ただあの巨体で転がるだけでも人間が三桁単位でミンチにされかねない以上、物理は苦手と考えるのは無理がある。

「……少なくとも、今ある情報の中でクターニッドに直接的に大ダメージを与える、弱点は無い」

「強いて言うなら封将、じゃないかなルスト。クターニッドの触手が四本鎖で地面に縫い止められていたし、封将を倒す事でクターニッドが使える触手が少なくなる……のかな？」

弱点が見つかっていない事実を指摘するルストへ疑問形で封将の存在理由を推測するモルド、何故疑問形であるかを答えたのは秋津茜だ。

「クターニッドさん、自分で自分を縛ってるんですねー」

「そう、それだ」

ルルイアス四方に位置する四つの塔、その中にいた四体のモンスター。魔法を、物理を、遠距離を、近距離を。それぞれが異なる制限をプレイヤーに課す厄介なモンスターであったが、奴らを倒した事で何が起きるかが今まで謎だった。

そしてクターニッドと邂逅した事で奴の触手を封印することが出来る、という事実を視認した訳だがここで秋津茜の言った「何故」という疑問が出てくる。

だってそうだろう、この反転都市ルルイアスはその全域がクターニッドの直轄と言っていい。なんで自分を弱体化させるようなギミックをボスが自ら設置するのかという疑問が出てくる。

「クターニッドは迷い込んだ者の足掻きを見て無聊を慰める、それ故ではないか？」

「だとすれば朗報だ、クターニッド君はクソみたいなトラップを仕掛けつつもこの都市のどこかにそれを解く鍵を設置してるってことだ」

強者故の慢心、それを油断と言うつもりはない。というか慢心してくれなきゃ弱者は勝てない。

バトル内のギミックではなく挑戦するにあたっての最低条件、封将の撃破はあくまでもクターニッド本体の弱体化を誘発するものであるとすれば、それとは別に正しい意味でクターニッドと相対するためのフラグがある。

「このゲームの長所であり短所は、攻略がイコール世界観考察ってところだ。俺達は「何故」を解き明かして「どのように」挑むかを考えなきゃならない」

クターニッドは情報が少な過ぎて考察の余地がない、だとすれば焦点を変える必要がある。

クターニッド本体ではなく、その玉座……即ち、ルルイアスそのものの考察だ。

「ルルイアスは大別して四つのエリアに分かれる。船の残骸、塔、街、そして城だ」

ルルイアスは「反転」都市、つまり正しい位置にあった時期が存在するわけで、恐らく城と街は反転前、塔と船の残骸は反転後に出来たもの……という設定だろう。

「船の残骸は調べたけど世界観に繋がるようなアイテムはなかった、ちょっと落し物を回収しに行く時に探索したから俺が保証する」

金銀財宝はガッポガッポだったが、それこそ単に高価なフレーバーアイテム以上の価値はないだろう。

「塔って何か手がかりになるようなものはあったっけ？」

「……無い、でかいカラーコーンみたいなもので、中は空洞なだけ……モルド、今は真面目な話をしている」

「カラーコーン……ふふ……ご、ごめん」

「となれば探すべきはこのお城と街ですね！」

街は後回しだ、それこそ探してる内に日が昇りかねない。

「つまるところ、この城を……探すほかない、ということ、ですか？」

「まぁ一周回ってそうなるな」

数秒ほど一同沈黙。

会議が踊るとはよく言うものだ、こんなシンプルな結論を出すのにここまで話す必要ほぼないじゃん。

「さて、気を取り直して探索だ！　地下はアレだから入らないようにして、この城を隅から隅まで調べつくそう！」

「……とは言ったものの」

この城、割とデカい。どれくらいでかいかと言えば割とシャレにならない感じで迷う程度にはデカい。

やはり使用されている色が青一色という塗装ミスじみた色彩であることを除けば一般的な城内の一室から逸脱していない部屋の中で、芯まで真っ青な薪を火の付いていない暖炉へ投げ捨てながらレイ氏に問いかける。

「レイ氏何か見つけた？」

「特には……恐らく装飾品として、作られた剣なら……」

レイ氏は壁に飾られていた装飾剣を軽く振るう、それは剣と魔法で戦うファンタジーにしては随分と頼りなく見えるものであり、レイ氏の見立て通り武器として設定されたオブジェクトではないのだろう。

「こういうのは大抵玉座とかに手がかりがあるもんなんだけどなぁ……」

「じゃあ玉座に行きますか！？」

「そんな急いでもクターニッドは逃げないんだからステイステイ」

「イエッサー！」

俺のことを呼ぶならサンラク大佐と呼んでくれ、名前の響き的に大佐か准将が一番かっこいいと思う。元帥は一周回って名乗るのが恐れ多いからな。

「この手の探索ゲーなら日記帳とかありそうなもんだがなぁ」

現在チーム「不倶戴天」は二手に分かれて探索を続けている。ごく

自然な流れでルストとモルドがペアを組んだので、便宜上「Aチーム」は俺、レイ氏、秋津茜、エムルで構成されている。
向こうにはシークルゥとアラバ&ネレイス、そしてスチューデがくっついている。
今のところめぼしい手がかりは見つかっていないが、今でも考察脳はフル回転させている。

クターニッドとルルイアスの関係性は何ぞや。それこそが扉を開く鍵、クターニッドが仕掛けた認識ギミックを突破する為のフラグだ。
そもそもこの反転都市、元々は海上に存在していた一都市分程度の島国だったのだろう。少なくとも単なる一領土にここまで本格的な円形都市を作るとも思えないし。

そしてこの都市に何かが起きた、それは荒廃しきった無人の街並みが証明している。
封鎖、崩壊……まず思いつくのは疫病などのパンデミックだが、そこはなんでもいいんだ。何かが起きたこの都市にやってきたクターニッドがこの都市に何かをした。

「……見た限り、大怪獣が暴れたって壊れ方じゃあねぇよなぁ」

荒廃しきった廃墟都市、だが仮にクターニッドがこの都市に侵攻したとしたなら……もっと酷い感じに壊れているんじゃないのか？
そうでなくとも、都市全域をまっさら新品にすることもそう難しいことではないだろうクターニッドが、こんな中途半端な壊れ方をした都市を、この状態で残し続ける理由はなんだ。趣味とかだったらそこまでだが……

「この都市には確かに生活の跡があった、人のいた痕跡があった。だがそれらはなんというか……」

「緩やかな、滅び……」

「そうそれだレイ氏」

あれ、俺口に出してたかな。まぁいいや、考察は一人でするより複数人で持論をグローブに殴り合う方が楽しいからな。

「この都市はどうしようもない災害で瞬間的に滅んだんじゃない、もっと緩やかな滅びを経た感じがしないか？」

クターニッドが来たにも関わらず致命的なパニックが起きなかった？　まるで前の住人と今の住人が引越しを経て入れ替わったような。

「悩んでても仕方ない、次の部屋を調べよう」

「分かりました！　開錠ならお任せください！」

こういう時盗賊職は便利だなぁ、秋津茜がいなかったらマスターキー（暴力）で扉を開けなきゃならんかったし。

その時、ふと秋津茜の顔に装着された狐面に意識が向く。振り返り、次の部屋へと駆け出さんとする秋津茜の、僅かにのぞいた素肌に刻まれた傷のような紋様……天覇のジークヴルムに刻まれた呪い(マーキング)。

「……それだ」

呼ばれた悪魔は暴力を用いない。だとすればルルイアスとクターニッド、この二つの間で交わされた行為とは……

「契約だ」

ここにいたかつての人々が提示したのはこの土地の権利、じゃあクターニッドは何を提示したんだ？

きっとその答えは、この城の果てに。

倶に天を戴いて　其の五（後書き）

そろそろこの章を通してクターニッドの放つ「違和感」に気づかれた方もいらっしゃるんじゃないでしょうか

倶に天を戴いて　其の六（前書き）

投稿を忘れていたわけではなくてですね、ピヨサンブラックとピヨサブレの誕生を見守るという重要なミッションがあってですね……

契約、それはメリットの譲渡だ。片側に欠けた何かを提供する代わりに代償を支払う。
ルルイアスの、かつてこの都市にいた人々はクターニッドにこの街を明け渡した。であれば代わりに何を得た？

「答えがあるとすれば、探索モノにおける情報ソースのお約束オブお約束しかないだろう」

「そ、それは……」

そらもう、あれしかないだろう。

「紙媒体に書かれた何者かの記録、日誌やら実験記録ってやつさ」

大抵内容の半分あたりから不穏になることに定評のあるホラーゲーでは定番の世界観説明アイテム。
モンスターが脱走するかパンデミックが起きるかのどちらかが大抵であるそれではあるが、かつて何が起きたのかを知るにあたってこれ以上のものもないだろう。

玉座ではなく執務室と思しき場所にて、俺たちAチームは一冊の日記を発見することに成功した。ルスト達Bチームはこの城の最上階を目指して行った。

「さて……読むぞ」

『海の果てより、忌々しき「青」が来てどれほどが経ったであろうか。西に続き既に南の街は「青」に呑まれ、この島より逃げ出さんとした大臣達を乗せた船はこの島を蝕むもの以上の「青」によって海の底へと引き摺り込まれた。
その光景は、民のみならず王である我等すらも絶望させせるに足る光景であった。』

早速新設定ブッ込むのやめろや！　なんだよ「青」ってぇ!?
……いや落ち着け、この時点でわかった事が二つある。少なくとも日記の最初の時点でこの島はなんらかの侵略を受けていたという事、そしてそれはクターニッドではないという事だ。

『もはや街は「青」の占有物と化した、「青」に呑まれた民はその身を「青」の一部にされてしまう。
幸か不幸か、つい先日まで城の大部分に一族郎党で居座っていた潔癖症の大臣達が退去した事で、なんの憂いもなく民を城へと避難させる事ができる。今日この日を以って、この城は民に対して門を閉ざすことはない。』

「読む限りでは、いい人……そうですね」

「文面的に大臣に強く言い出せないヘタレ王感凄いけどな」

『「青」に挑み、奴の一部と消えた兵達の損失を差し引いても、この城は今生き残っている全ての民を収容できてしまった。本来ならばこの数十倍は民がいたというのに、「青」に対して何もできない己が恨めしい。輝かしい王冠の威光は来たりし災厄に対してなんの意味もなさなかった。』

この「青」ってやつ、最初はエイリアン侵略的なものを想像していたんだが、どうにも毛色が異なる感じだな。これを書いてる……恐らくかつてこのルルイアスで一番偉かった奴の口振り的に、「青」に対して使用しているのは複数形ではなく単数形だ。

考えられるとすれば巨大な一個体か、一つの概念的なものに対する呼び方だが……やはりクターニッドか？

『じわじわと追い詰められていく焦燥、大臣達が食料の大部分を持って船に乗り込んだのが酷く恨めしい。百余人の民の食い扶持を支えるにはあまりに心許ない食料庫の光景、我等はやはりここで死ぬしかないのだろうか。』

「これ最終的に内ゲバで壊滅するパターンだよな」

「とはいえ、城内に争ったような形跡は……」

読む限り、その「青」とやらに追い詰められて籠城を始めた住民達であったが、船による脱出を試みた大臣達が持って行った食料ごと沈んだせいで食糧難秒読みである事が読み取れる。

『嵐だ、全てを捩伏せ海へと還すような酷い嵐がこの国を襲った。だがこの国に深く根付いた「青」を洗い流すことはできまい……そう思っていた。』

ん、この流れは……？

『荒天を纏い、海より伸びた「青」を引き千切ってそれは現れた。その姿をなんと形容すればよいのか、人を、家畜を、家屋すらをも呑み込んできた「青」の手招きを力尽くで振りほどき、逆に蝕み滅ぼす姿は……八つの首を持つ龍のようだ。』

「多分この八つ首の龍ってのがクターニッドだな」

「クターニッドはタコですよ？」

「あんだけデカイタコが触手を振り回してたら、頭が八つあるドラゴンに見えないこともないだろう」

「成る程！」

本体の頭があるからむしろ九頭龍（くずりゅう）……九頭龍（くとうりゅう）、九頭龍（くとぅりゅー）、九頭龍（くとぅるー）って
か？
つーかこの文章を見る限りクターニッド、むしろ救世主じみた事を
やっていないかこれ。

『窮した我々にとって、例えそれが「青」を制した後に我等を蹂躙
するものであったとしても、それはまさしく救いの神であった。
我等はその威が我等に向く事に怯えながらも、「青」を打ち砕く神
に声援を送り、祈った。』

『そして遂に「青」は沈黙した、神が勝利したのだ。もはや街並み
が我等を喰らう事もなく、誰が命じたわけでもなく、城門は開かれ
た。
そして我等は誰が命じたわけでもなく、神の前へと跪いた。』

「つ、続きは！　続きが気になります！」

「普通に引き込まれんなー、情報収集なんだぞ……って、レイ氏そ
わそわして次のページに伸ばしたその手は一体」

「あ、あはは……」

『果たして神は、我等の言葉に答えを返した。神は仰った。我が名
はクターニッド、深き淵に座する者……神ならざれど、神なる力を
振るう者と。』

神は我等を救った見返りに、この国を欲した。』

「これ盛大なマッチポンプだったら流石に笑うよな」

「さ、流石にそれは……」

まぁその線は薄そうだ。クターニッドはそんな回りくどい事をする必要がない、なんでこの島に住んでいた人々を助けるような真似をしたのかは兎も角、少なくとも対価を要求するだけの知能は認めていたようだ。

『神はこの国を……我等のいないルールイアをこそ所望した。民の中にいた幼子が、無知故の蛮勇をして神へと問いを投げた。我等を追い出すのか、と。』

『神は怒らず、そして答えた。この地は既に人が住むに適わぬと、死してなお地に染み付いた「青」……神曰く「狂える大群青」は、いつの日か再び全てを喰らわんと蘇る。故にこの島そのものを海の底へと持ち帰る。滅びの運命を是とするならば勝手に住まえば良い、と。』

……なんだろう、完全にこれクターニッドいい奴ルートに入って来たのでは。そして思った以上に「青」がヤバそうな気配を漂わせてるな。

『この日記が誰かに読まれることは恐らくないであろう、だが私は

これをこの城へと遺す。これはかつてルールイアという国があった証であり、私がルールイアの王であった残滓だ。
我等は生き残った民と共に島を去る、船出の刻は近い。我等は神に永遠の感謝を捧げるであろう、この城は既に神によって要石と成った。玉座に在りし要の碑こそが、このルールイアの新たなる統治者であり、私は王の権威を誓いと共に譲り渡した。』

これだ、これこそが恐らくイベントフラグだ。玉座に置かれた要石、これを書いてる王様か女王様のどちらか曰く、島を反転させる要石なる何か。
どう考えてもこれだろう、明らかに触れたらダメな類のギミックな気がしてならないがルルイアス……かつてルールイアと呼ばれたこの場所を物理的にひっくり返した反転能力を支えるもの、これになんらかのアクションをする事がクターニッドの真の姿を明かす鍵と見た。

「となると問題はその要石とやらに何をすればいいのか、だ」

「壊すんでしょうか？」

「いいえ、何か別の方法が、あるかも……」

日記は……クソ、ここで終わりか。分かっちゃいたが一から十まで教えてはくれないか。

「目指すべき場所は決まった、ルスト達と合流して玉座に行こう」

「こっちは収穫アリだ、そっちは？」

「……一応、収穫アリ」

気づけば日を跨いでのクターニッド撃破作戦は深夜の三時を回ろうとしていた。皆今晩に向けて準備をして来たとはいえ、疲労の雰囲気が漂っているのは否めない。

「一旦休憩を入れるのも有りかもしれないが……まずは情報交換だ。Aチームは執務室らしき場所で日記を見つけた、内容はこの島がかつて海上にあった頃の記録と玉座に「要石」なるものがある……というものだ」

「……Bチームはこの城の最上階でモンスターと遭遇、倒したらこれをドロップした」

ルストが己の頭を指差すと、そこには見窄(みすぼ)らしい王冠が載っていた。造形自体はなかなかいい線行ってるのだが、元々は宝石が嵌め込まれていたのだろう空白も相まってか見窄らしさが際立っている。

「無関係……とは思えないが、とりあえず一旦休憩だ。探索中幾つ

かベッドのある部屋もあったし、一時間くらいログアウトも含めて一旦休もう」

玉座の探索、及びクターニッドとの決戦はその後でも時間はあるだろう。

倶に天を戴いて　其の六（後書き）

「狂える大群青」
その正体は群体生命体でありながら統合された意識を持つプランクトン型のモンスターである。
極めて厄介な性質を持っており、「青」は無機物に寄生することが可能である。そして寄生した物に近づいてきた有機物、すなわち生物に対して襲いかかり一瞬で捕食、消化、増殖のプロセスを完了する。
その様はまるで「青色」に食われた獲物が瞬く間にその身を「青」へと変じていくようにさえ見える。死滅スピードを増殖スピードで上回ることで陸上での活動すらも可能としており、仮に放置されていた場合はおよそ数年で大陸全土を貪り尽くしていた可能性すらあった。

人知れず生まれた災厄の波は、人ならざる者によって滅ぼされた。
それは善意ではなく、悪意でもない。それは――

核心的なネタバレをすると仮にクターニッドが人間だとした場合好きなゲームはシムシティです。
そしてしれっと言及してますが、クターニッドは人の言葉をしゃべれます。

「……さて、と」

「あ……」

「おやレイ氏」

俺自身はライオットブラッドをキメた事、そもそも普段からこの手の徹夜行軍に慣れている事もあって軽く用を足し、軽食をかきこんでから戻って来たのだが、そこで丁度ログインしてきたレイ氏と遭遇した。

「お早いお帰りだねレイ氏」

「そ、そちらこそ……」

「まぁ軽く食べてきただけだし……」

沈黙。いや待て待て、何か話題あるだろう。仮にも一週間同じクエストを……あー、レイ氏その半分以上欠席だったわ。

「………」

「………」

「そ、そうだ！」

「はいなんでしょうかっ！？」

「名前はちょっと忘れたけど……あの鎧と剣は使わないんで？」

「へ？　あ、えーと！　それはちょっと、その、イメチェンと言いますか……あ、ちゃんとクターニッドとの決戦では使うつもりですよ？　えぇ！」

「な、成る程」

こちらの煌蠍の籠手のチャージもあと少しで完了する。そう考えると一週間という制限時間ギリギリで決戦に挑むこのタイミングはいろんな意味で丁度よかったわけだ。

「………」

「………」

さて困った……このままではまた会話が途切れてしまう、この程度のコミュニケーション力（ちから）ではラブクロックが地獄の底から俺を笑いに来るぜ。

「えーと……」

「あの」

「んぉ？」

俺の脳細胞がコミュニケーションを継続するための架け橋を突貫工事で作り上げている最中、レイ氏から俺の方へと話しかけてきた。

渡りに船とはこの事だ、これを起点に会話を続けてみせよう。

「あの、その……一つ、お訊きしたい事が、ですね」

「俺に答えられる限りのことなら」

鎧を震わせ、さながら猛獣が唸りを上げるかのようなオーラを放つレイ氏。なんだ、何をするつもりだ？　これはあれか、嘘をついたら覚悟できてるんだろうな的なサムシングを無言で伝えてきているのか？

「その……クラン「旅狼（ヴォルフガング）」の、事なんですが……」

高速で演算を行う俺の頭脳がこの先推測されるレイ氏の発言を予測し、いくつかの結果を提示する。考えられる可能性としては、

・最近調子に乗りすぎでは？　潰しますね

・一体他にどんな情報を隠しているのですか？　潰して吐かせますね

・後々の脅威となっては面倒です、潰しますね

「……っ、ふぅぅぅー……」

恐らく単純なプレイヤースキルで言えばレイ氏はそこまで突出した存在ではない、シルヴィア・ゴールドバーグと比べれば向こうの方が強い。

だがここは格ゲーではなく、対人戦におけるアドバンテージはプレイヤースキルではなくステータスパラメータだ。その観点から見ればレイ氏はシルヴィア・ゴールドバーグを凌駕している。スナイパ

ーライフルを取り扱うのに飛んだり跳ねたりする必要はない、照準を合わせて引き金を引くただそれだけの動作を如何に最適化するかが重要だ。つまりは身体一つの技能ではなくパラメータや武装を含んだ全体的なパフォーマンス、その点重装甲と高火力を両立し百二十点に届かずとも合格点を常に維持し続けるレイ氏は格ゲーではないハクスラアクションゲーというカテゴリ内における強者でありもし仮にレイ氏がこの場でフルパワーを出して襲ってきた場合俺が打てる手は少なく逃走か説得に望みを託す事しか……

「あ、あの……」

「出来る事なら非殺傷形式で……」

「？？？」

あれ、てっきりタイマンでこちらの情報を洗いざらい吐かせるつもりなのかと思ったのだが……思い過ごしだったか？　自ら唸り声を上げるような無様な真似はせず、されど鎧を震わせる事で己の威を言外に告げる様は、成る程こういう挑発コマンドもあるのかと感心したものだが。

「その……ええと……今……弊クランは、その、メンバーを新規に募集していたりは、するので……しょうか」

「メンバー？」

なんだ、何故ウチのクランのメンバー状況なんてものを気にする？　最大手の廃人クラン様に勝ってるものなんてほぼ存在しない木っ端クランだぞ。

そりゃ確かにユニークシナリオＥＸを三人で達成した実績は我なが

ら自慢できるものだとは思うが、所詮はたった三人。
軽く物量で責め立てられるだけですぐに根を上げる程度だ、物量戦とはそういうもので一騎当千が軍団を結成したらそらどうしようもないのだから。

ここで返すべき答えはなんだ？　実はレイ氏以外全員「旅狼（ヴォルフガング）」入団内定してます、という事実を言っていいものか。
いやしかしどうしたものか、ううむ……くそ、いつだったかも同じ結論に至った気がするぞ。こういう口八丁手八丁はペンシルゴンの領分なんだよ！！

「まぁ、出来立てホヤホヤのクランだし定員オーバーしてるって事もないと思うけど……」

「そう、ですか……！」

「……えーと、なぜそんな事を気にするんで？」

聞いた、聞いてやった！　聞いてしまった！
ゲームにおける禁じ手、自分で謎を解き明かす前に敵に答えを聞こうとするご法度！　大抵クソむかつく顔で要約すると「自分で考えろカス」と来たるべき戦闘への殺意……もといモチベーションが否応にも高まる敵キャラ特有の真実のはぐらかしを喰らいかねない危険な技だ。
だがこれは対人戦、素朴な疑問を装って真意を聞き出せ……！　これを素で軽々とやってのけるあんちくしょうはやっぱり外道だな。
コミュちからがチワワにも劣るユニーク他力本願マンは論外だ。

「え、何故、ええと、何故……あの、その、ええと……それは、その、実は……」

実は？
レイ氏のアバターは今、鬼武者の格好をしている。その表情は憤怒の表情を浮かべる鬼の面隠しによって窺うことはできず、その沈黙の理由が俺には分からない。
今度はちゃんとカウントした、二十三秒だ。二十三秒の沈黙の後、ついにレイ氏が言葉を放つ。

「……いえ、これに関しては、地上に戻ったら話し……ます」

「………そっか」

ぬぁぁぁぁあああ超気になるぅぅぅぅぅぅ！！！
そこではぐらかすのはねーっすよレイ氏ィ！　逆に気になるわ！
ムッチャ気になるわ！！
クソ、やはり侮りがたしサイガー0。この俺がこうも容易く手玉に取られるとはな……これが、シャンフロの最前線に立つ廃人という訳か……ええいヤケ酒(エナドリ)だぁ！！

「ちょっと急用が生えてきたので一旦落ちます！　おやすーみ！」

「え、へ！　は、はい！？」

ログオーーッフ！！

「くっそぉ……焦らしプレイの達人かよ」

いやむしろ余程の理由であるからこそこの場で明かす事を避けたのかもしれない、じらされてその内容に懊悩する方が良いとレイ氏は判断したのかもしれない。エナドリエナドリ……っと。

世界の危機や、知るべきではない真実を知ってもプレイヤーが「へぇそうなんだ」で済ませられるのはあくまでもゲーム内の世界の危機が極論他人事であるからだ。視線を向けるのも面倒だ適当にこれでいいや。

だがシャンフロでは、いやプレイヤーが己の分身を自作（キャラメイク）するゲームにおいて、ゲーム内で起きる出来事は即ち他人事ではなく、己自身に降りかかる事実なのだ。プシュッと開けてグイッと一気……なんだこの味、濃縮されたエナドリ特有のエグ味がスパークリングしてして味わうよりも先に身体に吸収されるような

ライオットブラッド・リボルブランタン

「あ゛」

間に描かれたカボチャ頭の間抜け面と目が合う。だばぁ、と今までにない蛍光色かつ朱色の液体が一筋、口の端から垂れ落ちる。
飲んじゃった……もっとこう、覚悟を決めて然るべき場を整えて挑戦するつもりだったんだが嗚呼身体にカフェインが染み込んでいくぅ……うーわすげぇ今までの奴より即効性あるこれ！　すげぇ！　でもこれ絶対健康的なアレじゃないねアッハッハー！！

ログイーッン！！

「あ、お帰りなさ……」

「よーし休憩終了！　玉座行くぞ玉座！　カチコミ前カチコミだ！なにそれ意味わかんねーアッハッハ！！」

「え、ちょ、五分の間に何が！？　何が起きたんですかひづ……サンラクさん！」

積み重ねにどれだけ時間をかけても、物事の結果は大体一分で結実するもんなんだよ！　こまけぇことは気にするだけ無駄無駄！お空キレーイ！　上にあるのは地底だけどなアッハッハ！

あれだ、例えば人間にスイッチがあるものとして今の俺はスイッチをむしり取って電流を直接流してる感じ。これがありゃあシルヴィア・ゴールドバーグにも勝てたかもしれないなぁ！なんというかアレだ、キマり方の原理が他と違う感じがする。今までのキマり方がパイプの中にある不純物を取り除いてクリアな流れにするとしたら、これはそれに加えて加速が入っている。

いや、むしろアンデッドと続けてライオットブラッドを摂取したせいか？　まぁいいや、人間エナドリを日に二本飲んだ程度じゃ死なない。

効果時間が短めなんだっけか、さっさと謎を解いてクターニッドに

カチコミだ！

とりあえず教訓！　正式に発売されてもリボルブランタンは時と場所を選ぼう！

倶に天を戴いて　其の七（後書き）

うん、そうやってはぐらかして最終的に有耶無耶にしちゃうところがダメだと思うよヒロインちゃん

主人公が異様にキマってるのはほとんどプラシーボ効果によるものです、よくある「酒一杯で泥酔する」系のキャラクターのエナドリ版です。
それと前話に１００話ごとネタバレコーナーを入れるのを素で忘れていたので２０１話に入れることにしました、お詫びとして割ととっておきの設定を開示します。

・「リュカオーン」「ウェザエモン」「クターニッド」「ジークヴルム」「オルケストラ」「————————」「——————」はシャングリラ・フロンティアというゲームではなく「シャングリラ・フロンティア」という作品における現実世界内に実在しています。
そして現実世界に存在するそれとゲーム内に登場するそれは、広義の意味では同一存在です。

倶に天を戴いて　其の八

この感じ、万能感とは少し違うな。感覚が研ぎ澄まされている……とも違う、思考が非常にスムーズだ。そう、今の俺はミステリー物におけるデウスエクスマキナじみた探偵キャラくらい頭が冴えている。いかなる謎が立ちふさがろうとも俺の敵ではない。

「よし、破壊しよう」

「もう少し考えようよ！？」

玉座の間。我々チーム「不倶戴天」は遂にかつての王、もしかしたら女王の日記に記された玉座にあるという「要石」なるオブジェクトを発見していた。

てっきり肉の塊に人の顔やら腕やらが生えていてこちらに手を伸ばし懇願の眼差しで「コロシテ……コロシテ……」とか言っちゃうくらいの代物を想定していたのだが、そんな期待（？）は裏切られた。この空間の最上段に設置された玉座に座るようにして、それは存在していた。

「人型の……クリスタル？」

「高く売れそうですね！」

「……秋津茜、空気を読め」

「はいすいませんルストさん！」

「いやしかし実際これ売ったらおいくらくらいに痛ぁ！？」

足首をつま先で蹴り抜くとか鬼かてめーはルストオラァ！？
くそう……まぁいいや、ともかくこれが「要石」とやらなんだろう、だが気になるのはこれが人型の姿を取っているということだ。「碑」なる文字が日記の中に登場した以上どこかしらに文字が刻まれた石碑があってもおかしくない……

「サンラクさん！　椅子の後ろ側に文字が！　でも読めないです！！」

「よーし大体解決だ、壊すか！」

「サンラクサンなんだか思考回路がストレートになりすぎですわ！？」

いや実際のところ破壊が一番手っ取り早い解決方法ってのはあながち間違いじゃないんだぞ？　施錠された木製の扉の鍵を探すより扉を破壊したほうが手っ取り早いし、なんなら壁をぶち抜いてもいい。自由度を謳ってた癖に自由すぎてラスダンですら壁をぶち抜いて直進すればギミック全無視でボスに到達できるゲームとかあったんだぞ？

「……よく分からないけど、サンラクがポンコツになったので、私達で考える」

「あ、あはは……でも、随分と精巧に作られた水晶ですね……」

「…………」

これは、俺だけが……いや、俺とエムルだけが知っている事実だが。
この水晶で作られた人型……見覚えがある。
厳密にはこの水晶人型が「誰」なのかを知っているわけではないが、
水晶仕立てとはいえその服装の造形に見覚えがある。

（確か、「遠き日のセツナ」も似たような服装だったよな……）

こいつ、誰だ？　この際誰であってもいいが、これのモチーフになった女性は一体どんな人物だったんだ？　クソ、情報が少なすぎるからクリアな思考回路でも答えは導き出せなさそうだ。やはり破壊するしか……

「にしても随分とゴージャスな水晶像だな」

「……まぁ、確かに。目が紅玉（ルビー）みたいだし」

「これネックレスなんじゃなくて、ネックレス型に宝石が埋め込まれてるのか。随分と特徴的なカッティングのダイヤだな……ん？」

「……」

「……」

しばらくの間、俺とルストは顔を見合わせる。そして互いに今考えていることが一致しているだろうことを視線の交差で確認した俺たちは互いに頷き、迷うことなく行動を開始した。

「……そいっ」

「せいっ！」

ルストの二指が穏やかな表情に彫られた水晶の女性の目に突き立てられ、俺の手が水晶女性の鎖骨の真ん中あたりに埋め込まれた、十字架状のダイヤモンドと思しき水晶とは異なる透明な輝きを放つ宝石を掴む。突然の暴挙に全員がフリーズする中、グリグリと指を動かしていたルストが水晶女性の目玉(ルビー)をくり抜き、俺はネックレスの形に埋め込まれていた宝石をすべてむしり取る。

「ちょ、ちょちょ、ちょっとルスト！？」

「えと、あの……サンラク、さん？」

「王権の移譲、政治的な意味ではなく象徴的な意味で王を王たらしめるものと言えば？」

「……ついでに、本命の扉を開けるための鍵を、別のところに置くのはゲームの常道」

王様というジョブを思い浮かべる場合まず最初に思い浮かべるもの、この城の執務室で情報を手に入れ、玉座の間で要石を解く為に必要な鍵を最上階で手に入れる。実にゲーム的な配置関係じゃないか、それに大きすぎず小さすぎずな宝石の数々は実に欠けたものを埋め合わせてくれそうだ。

「日記曰く、かつての王と玉座を基に作られた「要石」の間で行われた王権の譲渡。それを逆戻しにすることが正解だとすれば……」

「あ……損なわれた、王権の回復……！」

その通りだレイ氏、見るからに「宝石を嵌め込んでね」とでも言い

たげな空洞を持つ見すぼらしい王冠。王権の輝きは宝石と共に譲渡され、今それを元の場所へと戻すのだ。

「……あれっ、嵌らない」

「……サンラク、それ上下逆。全く…………む、……っ、……っ！」

「ルストそんなガンガン押し込んだら割れちゃうって！　というかその宝石別のところに嵌めるやつじゃないの？」

え、じゃあこっちか？　いや嵌らないし……あれ、あれ、あれぇ？

「…………やっぱり破壊したほうがいいかもしれない」

「だろ？　やっぱり名案だったじゃないか」

「いやいやいやいや……」

「私！　パズル得意ですよ！」

秋津茜がそう言うので、半信半疑ながらも俺とルストは王冠と宝石を手渡す。本当にできるのか？　俺とルストが知恵を絞っても完成できなかった超難問を言っちゃ悪いが割とアレな秋津茜が……うん、宝石を逆にひっくり返して……あ、嵌ったね。

「やっぱりこれ、そもそも表と裏が逆だったんですね！　クターニッドがわざわざ逆さまにしたんでしょうか？」

「笑えよ秋津茜、俺はどうやらゴミ野郎だったらしい」

「…………恥とは、己を殺す毒に、等しく……っ！」

「えぇ！？　どうしたんですか！？」

…………気んな簡単な引っ掛けに気づかず何をやってたんだ俺たちは…………気を取り直そう、ここで折れてちゃクターニッド戦で砕けてしまいそうだ。ともかくこれで王冠は本来の姿を戻したわけだろうが、何か変化は……？

視線を向ければ、言い方は悪いがカビが増殖していくように錆びついた表面を黄金色が這っていく王冠の姿。そして数秒後には黄金のクラウンに色とりどりの宝石が嵌め込まれた、まさしく王権の象徴にふさわしい姿を取り戻した王冠がルストの手に持たれていた。

「…………特に今この瞬間何かが起こるわけじゃないのな」

「となると、やはりクターニッドの、ところに……？」

「いや、もう少しだけ探索しよう」

リボルブランタンの効果時間内に戦闘に入りたいところだが、可能な限り情報収集はしておきたい。玉座の後ろに回って文字とやらを確認する。

「んー…………？　これって」

非常にクセのある文体だが、これって筆記体の……

その時、ルルイアス全体が揺れた。それは当然ルルイアス中央にいる俺たちもまた揺れによって体勢を崩される。

「この手の時間差イベント発生は不意打ちされて困るっての！」

「このままクターニッド戦に直行ですか！？」

「……その可能性は、高い……！」

武器に手をかけ、立っていられないほどに揺れ始めた玉座の間で膝をつきながら辺りを警戒する。だが俺たちに牙を剥いたのはクターニッドではなく、この空間そのものだった。

最初それを視認した時、バグか何かだと思った。なにせプレイヤーやＮＰＣ以外のすべてのオブジェクトにノイズが走っているのだから。だがそれを他の面子に言葉として伝えるよりも先に……

「は？」

「へ？」

「え？」

「わっ」

「ちょっ」

ぐるん、と。天地が逆さまにひっくり返った。

先ほどまで足元にあったはずの床がはるか上に、その代わり足元には天井が驚くほど近くに。だが最も重要なのは、俺達の身体は正しい重力に従い上へ……いいや違う、下に落ちているということだ。

「待て待て待て待て初見殺しの落下死とか悪辣すぎんだろオイ！」
「というかこのままだとアタシが潰れるですわぁーっ！？」
いや待て信じるんだ、クソゲーならまず確実にこのまま落下するが神ゲーなら、神ゲーならそこらへん配慮してくれる……！　というか、
「このまま落下死したら末代までネガキャンしてやるからなぁぁぁぁぁぁぁ！！」

不倶戴天。その意味は絶対的な敵対、同じ天（そら）に存在することすら許容できぬ憎悪であり、水と油が決して混じらないように、互いが弾かれる様を指す。だが天地は、摂理は、要の石がルルイア（ルールイア）スの王権を手放したことでなにもかもが反転する。
故にこそ、深き海の底で盟主として君臨していたそれは相対を決意

する。かつての彼らが遺した未来を、なんでもない明日を迎える為に「世界」と戦った偉大なる神人の後継は己の足で前に進めるのかを推し量るために。

『ユニークモンスター「深淵のクターニッド」に遭遇しました。』

深淵は今ここに、再び倶（とも）なる天（そら）を戴く。

倶に天を戴いて　其の八（後書き）

・Ｋｔｈａｎｉｄ（クタニド）
クタニドは、ブライアン・ラムレイの作品では、旧神のリーダー。クトゥルーの従兄弟でクトゥルーと同じ姿だが慈愛に満ちた黄金色の目をしている。人間たちを守りたいと願う強く優しい神。
（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより抜粋）

倶に天を戴いて　其の九（前書き）

可愛い堕天司が欲しいのにガチャの結果は可愛くない堕天司でした

倶に天を戴いて　其の九

浮遊感、のち落下の衝撃。しかしそれはダメージと呼ぶほどのものでもなければ、エムルが潰れてしまうほどの重圧でもなかった。

「うべっ」

「ふぎゅうっ」

言うなれば腕立て伏せ中に腕から力が抜けて潰れるように倒れ込んだ時のような、反射的に「痛い」と言ってしまうがダメージ自体は全くない、そういう感じだ。

「ほ、他の人達も無事みたいですわ……うぅ、お顔痛いですわ……」

「エムル、泣き言は後で聞いてやるから……武器を構えろ」

成る程、今度こそボス直行であったらしいな。それにしても一々イベントを派手にぶちかます野郎だ……只今フィールド整地中ってか？

「お、お城が！」

今の今まで俺達が探索していたルルイアスの……いや、ルールイアの城が組み替えられている。

それはまるで、ブロックを組み合わせて作った城を一度分解してから、全く別のものに作り変える行程を早送りで再生しているかのような……現実では決して起こりえない超常の御業。そして、もう一つ分かった事がある。

「見ろよ、空だ」
上から下へと昇るマリンスノーが舞う海底の天蓋ではない、大気と星と月が輝く正真正銘の夜空。
瞬く間に分解されていく城の中で、俺（サンラク）とエムルは実に七日ぶりの空を見た。
「これ落ちてない！？」
「……エレベーター的な落下だし、大丈夫……多分」
「そこは根拠がなくても断言して欲しかったよルスト！」
こんな時にも漫才をするガッツは見習うべきかもしれないが、事実俺達は今円形に残された玉座の間の床の上に乗って、猛烈な勢いで下へと落ちていた。
もはや城そのものが竜巻にでもなってしまったかのように、城を構成していたあらゆるパーツが俺達を中心に外側へ広がっていくように拡散する。
柱が等間隔に並んだ、煉瓦が階段を形成した、燭台は照明となり、城と同質量の建材達が旋風の中でコロシアムを作り上げていく。
「えーと、アレみたいですね！　イタリアの肝っ玉！」
「もしかして、イタリアの……コロッセオ、ですか？」
「それです！」

すげぇな「ッ」以外掠りもしてないのにニュアンスは理解できるぞ。
だがすり鉢状の円形闘技場は確かにコロッセオを彷彿とさせるものだ……その広さが野球ドームと同等かそれ以上という点を除けば、だが。

「全員無事か！」

「はいな！」

「心配ご無用に御座る！」

「こちらも大丈夫だぞ！」

「ぼ、僕だって！」

よしＮＰＣは問題なさそうだ。プレイヤーは死んでもどこかしらでリスポーンするからな、命の価値が安い安ぃ。
はてさて、こんな特設リングまで作った主催者殿は覆面でも被って登場するつもりか？　上等だこっちも覆面なんだから覆面剥ぎデスマッチでもしてやろうじゃねーか。

『示せ』

「む」

「ぴぃ！？」

ああＮＰＣは問題しかなさそうだ。エムルが頭の上で震えているもんだから、俺の頭まで振動し始めてやがる。一応話しかけたり耳を引っ張ったりしてみたが完全に茫然自失してしまっている、元凶は

明らかだが現況を把握しようか。
まず今俺の頭の中で加工しまくった声みたいな響き方をした……大量の錆びた釘に泥を混ぜて黒板に叩きつけたような……言ってしまえば非常に形容しがたい奥歯の裏をかき混ぜられたような声は、他のプレイヤー及びＮＰＣ達も聞いたものと考えていいだろう。

『継がれし遺志を』

「だぁーっ！　ヘリウムガスでもいいからもう少しマシな声質で喋れや！」

ウェザエモンの声が美声に聞こえるレベルだぞ！　クソ、奴が喋るだけでＮＰＣが仮称「恐怖状態」になるだけじゃなくプレイヤーの集中力すら削ぐのか！？　というかそもそもご本人（クターニッド）はどこなんだ、歯軋りしたくなる感情を押さえつけて周囲を見回す。

「サンラクさん……上、です！」

左右前後じゃなくて上だったか、どうりで全員上を見上げていたわけだ。

「なんだありゃ」

ラスボスの第一形態が妙な姿をしていることはそう珍しいことではない。一見すると中ボスの方が強そうに見えるラスボスが化け物に変貌する、なんてものはお約束とも言っていいだろう。
だからこそ、あのでかいタコの姿こそが第一形態だと最初は思っていた。だとすればアレが第二形態か？　それとも……

「チッ、少なくとも何か行動しない限りＮＰＣが産廃になるか……」

「サンラク、どうする？」

「とりあえずＮＰＣ連中を脇にどけておかないとサンドバッグだ」

「僕が誘導しておくよ」

「サンキューモルド」

完全に呆けてしまっている、アラバやシークルゥすらもだ。こいつは明らかにＮＰＣをメタってきてるな、とはいえ流石に戦闘終了までＮＰＣが使い物にならないとは考えづらい。

「あ、あ、あぁ……」

「はいちょっと傍に寄ってろなエムル……さて、誰かあそこまで届く飛び道具持ちはいるか？」

俺は未だ沈黙を解かないそれ……上空に展開された八芒星（オクタグラム）の魔法陣から目玉と触手が生えている何か、としか形容できない奇天烈な姿をしたクターニッドを指差して動ける面子（プレイヤー）に問いかけた。

「……上方向だと、多分剛弓でも届かない」

「恐らく、魔法全般が距離減衰、で届かない……かと」

となればこれはもう俺が動くしかないかと考えていると、レイ氏はですが、と前置きを入れてからある人物へと顔を向けた。

「恐らくこの中で、最も長射程の魔法は……秋津茜、さんの【竜息吹】です。もしもジークヴルムの、ブレスをそのまま模倣した、ものであるなら……多分、届きます」

「私の出番ですか！？」

「……秋津茜、ステイ」

遂にルストにすら犬扱いされ始めた秋津茜だが、ある種の切り札足りうる秋津茜の謝罪砲は使い所を吟味すべきという点で待て(ステイ)には同意だ。

「そもそも攻撃を当てれば事態が進むと確定したわけでもないんだ、もう少し検証を……」

「でも攻撃きてますよ？」

「散開！」

シャンフロ廃人一名、ネフホロ廃人二名、どうも素のスペック自体が優れていそうな一名は俺の声に即座に反応し、全員がバラバラの方向へと飛び退く。

次の瞬間、天から降り注ぐ大量のタコ足が俺たちのいた場所に突き刺さった。

「オイオイ……大元の一本がさらに枝分かれしてんのかこれ……！？」

複雑な紋様の八芒星(オクタグラム)と化した化け蛸(オクトパス)。その八つの「角」から一本ずつ、合計八本の触手を蠢かせていたが、そのうちの一本がさらに十

数本の細い触手に枝分かれして槍の如く地面に突き立てられていた。仮に一本の触手を十本に枝分かれできるとして、それが8セット……最大八十本の中触手が雨のように降り注いでくる？

「どうしろってんだ……」

『揺るがぬ心で進め、届かぬ高みはなく』

「やかましいわ！」

いや待て、ただの煽り台詞と片付けるのは早計だ。単純な力比べ以外で攻略するタイプの戦闘は戦闘中に何らかのヒントを提示する場合が多い、だとすれば今の台詞がヒントということか？

「チッ……予想はしてたが微ホーミングか……！」

かつてラビッツで戦った妄執の樹魔（ルーザーズ・ウッズ）の攻撃程の過密さはなく、ウェザエモンの雷鐘ほどの発生の早さもない。だが双方の脅威を程よく内包する触手槍は一度の攻撃に十度のダメージ判定を携え標的を追い詰めるかのように地面を抉っていく。

「フェーズ移行の条件は何だ……？　それっぽいギミックオブジェクトは見当たらないし、攻撃しようにも遠いし……」

いや、違うぞ。ターン制バトルならともかくリアルタイム進行の乱戦であるなら攻撃と防御の関係性を律儀に守る必要はない。何も攻撃と攻撃でかち合ったとしてもそれはあいこではなく、より有効打を叩き込んだ方が勝利するだけだ。

「えいっ！」

そして、秋津茜が自身を狙い、そして外れて地面に突き立った分裂触手の一本に短刀による攻撃を叩き込んだ瞬間、攻撃を受けた分裂触手の一本が巻尺を一気に巻き戻すように凄まじい速度で上空の魔法陣に吸われて行ったのを視認した瞬間……実践に値する仮説が俺の中で完成する。

「触手だ！　地面に突き刺さった触手に攻撃するんだ！」

今できうる行動はそれくらいだ、片っ端からあの気色悪い魔法陣の中へと叩き返す！！

倶に天を戴いて　其の九（後書き）

クターニッド「諦めんなよ！　やればできる！（要約）」

倶に天を戴いて　其の十（前書き）

今年最後の更新になると思います。来年もよろしくお願いします。

「1、2、3……うん、大体タイミングは掴めた」

特にディレイが混ぜられるわけでもないし、やはりギミック重視のボスであるからしてどこぞの即死技武士（ウェザエモン）やら透明化狼（リュカオーン）ほどの直接的な脅威度は無い……現状は。

「十二本目が着弾した時点で五秒後に上へと戻っていく、だったらギリギリで回避すれば距離を詰める必要なく五秒間攻撃し放題……！！」

小刻みなバックステップで後ろへと下がる俺の鼻先を漆黒の触手が十度掠っていく。おや、生臭さを感じない。

「いや、これは……」

考察は後だ、まずは身体を動かせ。数えたところ十二本の触手は俺の回避軌道上に一列に並んでいる、回避を最小限で留めたお蔭で連立する触手の間隔は狭い。もう武器をケチる必要は無い、兎月【上弦】【下弦】が潮風を切り裂いて触手を斬り裂く。十二本の触手が双刃によって傷を刻まれ、逃げ帰るようにして上空の八芒星へと引っ込んでいく。

見れば既に八つの角のうち五つは触手が叩き返され、残り三つも時間の問題と言ったところか。随分とあっさりとしているようにも思うが、この手の攻略法は気付かないと延々とドツボに嵌るタイプだ。気づけば攻略は簡単という意味ではこれくらいの難易度が適当かもしれないが……まぁ、第二形態があるんだろうなぁ。

「……これで、最後」

放たれた魔力の矢が逃げ惑うモルド目掛けて落ちてきた最後の一本を貫く。漆黒の触手の、その最後の一本が八芒星へと引っ込んだことで、とりあえず第一形態の主な攻撃手段である十二掛けることの八……九十六本の細触手を叩き返したわけだが、さぁどう出てくるクターニッド。

『届かぬ高みはなく、されば至りて後(のち)に人は何処へ征く……』

ボスキャラ特有のポエムか、噛み砕いて理解するなら「ゴールした後お前どうすんの？」って感じか。少なくともそれがゲームに関しての話であるなら決まってる、やり込み要素を埋めていくんだよ。それが終わったらボス討伐タイムアタック、さらに興が乗ったらリアル・タイム・アタックだ。

『信ずる己を見出せ、世界が変わり果てようと根幹は揺るがず』

その言葉と共に八芒星が動きだす。幾何学的な模様を蠢かせ、平面であった図形が膨れ上がって……まるで折り紙を開くように八芒の星が立体へと変形していく。魔法陣を構成する文字が虚空を這い回るようにして平面から触手と目が飛び出したクターニッドがその姿を変貌させていく。平面が立体となり、立体が明確な形を作り、角ばっていたそれが滑らかなフォルムへと洗練される。

ああやっぱり、その光景を見てクターニッドの触手を斬った際に感じた違和感の正体に合点がいった。クターニッドの能力を把握した時からずっと思っていた、幼稚園児の屁理屈レベルの理屈を無理やりひっくり返してしまえる奴をどうやって倒せというんだ、と。

いや無理だわこれ、何をどうやったら中身が無い敵を倒せるというんだ。

「あの魔法陣、どこかからクターニッドが遠隔操作してるとかじゃなくてクターニッド本体そのもの、だったとは……」

「あれ、最終形態かな……」

「……多分、もう一段階くらい、ありそう」

「来ます、私が前に……！」

巨大な蛸の形をした立体的な「魔法陣（クターニッド）」が地面へと降り立つ。魔法陣に重さなんてものがあるはずもなく、見上げるほどの巨体でありながらクターニッドの着地に際して重量を感じさせるような現象の一切が起きない。

それに対してレイ氏がスレッジハンマーを構えて前へと出る。やはりレイ氏もまだこの先があると考えているのだろう、あの白黒鎧を取り出さないのは来る最終形態に向けて温存しているのだろう。大体予想できるとはいえやはり初見のモンスターである以上、その行動モーションを確認する必要がある。

「私はどうしますか！？」

「とりあえず俺らである程度モーションを引き出してみるからある程度対応できそうなら攻撃してくれ。秋津茜は道具の残数をなるべくケチること、まだ先があるかもしれないからな」

「はいっ！」

「……了解」

「ルスト、先にバフをかけておくよ。他の人も……」

「あ、俺はそこらへん全部弾いちゃうから……」

1コンボ！

「私もです！　」

2コンボ！

「その、ありがたいのですが……多分、自前のバフで事足りるというか、重複しないタイプなので無意味というか……」

3コンボ！

「あ、はい……」

結局、ルスト一人にエンチャントを行うことになったモルドを尻目に、俺とレイ氏が武器を構えて前へと出る。

「レイ氏、まず間違いなく触手攻撃はあるだろうけど、受けて大丈夫なのか？」

「はい、タンク系のスキルに「反撃衝突(コリージョンカウンター)」というものが、ありまして……多少のダメージは食らう、と思います、が……耐え切れ、ます」

名前の感じからして、相手の攻撃に自分の攻撃を当てる系のカウン

ターかな。いいなぁ、そういうの俺の得意分野だからちょっとタンク職にも興味が湧いてくる。まあこのゲーム調べた限りじゃステータスリセットがクソ面倒そうなので憧れは憧れのままだけれど。

「さてクターニッドどう出る？」

何が来ようと俺たちレベル９９エクステンズのスペックで対処し切ってみせようぞ……ふむふむ、八本の触手を上へと掲げて？　それぞれの触手の先端が異なる八色に輝いて？　光が潰れたワイングラスみたいな形状になったのをを触手が掴んで？　あれ、何もしてないのに四つ勝手に壊れて……うおっまぶしっ

視界が青一色に染まる。何かヤバげなモンスターによって着色されたらしいルルイアスの青色すらも塗り潰す青い閃光、それがクターニッドの持つ青い杯から放たれたものであることは直前まで視認していた視覚情報が補足している。

とりあえずダメージを伴うようなものではないようだ、であれば何が起きる？　同じユニークモンスターだ、リュカオーンの刻傷が必ずしも効果を発揮するとは断言できない。どうやらこれもギミックのようだしひどいデバフが付与されてもなんらおかしくはない。

「サンラクさん、大丈夫ですか！？」

今の誰だ、女の声だけどルストや秋津茜のものではない。ＮＰＣの性別：女のキャラに俺をさん付けで呼ぶやつはいないし……まさか幻聴効果？　クターニッドならやりそうと思えてしまうあたり奴を設計したデザイナーの思惑通りなのが腹立たしい。

よし、とりあえず全員にステータス異常がないか聞いておこう

「とりあえず全員ステータスに以上がないか確認してくれ！！　……って、あぇ？」

…………………今の誰だ、女の声だけど他人のものではない。確かに今の台詞は俺の脳が考え出したものを俺の喉が発声したもので……いや、待て。ちょっと待て。

クターニッドの能力は「反転」で、反転とはつまりAをひっくり返してBにする、ということだ。いや、この場合AとBじゃなくてXとYが入れ替わっているのではというかまさか。

「うわ、デカい」

およそハンドボールサイズ。弱ったな、女キャラを使う経験がないってわけじゃあないがE……いやまさかF？　こんな重心がブレまくるものを二つもぶら下げてクターニッド戦はいくら俺でも慎重にいかないとっていやいや冷静に考えるのは大事だがここは素直に驚くべきだろう。

「性別反転……だと……！？」

どうでもいいが、上半身半裸の状態で性別反転してもすっぽんぽんというわけではなく、へそから下を切り落としたタンクトップみたいなアンダーウェアを着た状態になっていた。残念なような我が事だから安心したような……まぁいいや、とりあえず殴るか。

「煮ても焼いても食えないハリボテタコモドキがぁぁぁ！！」

「えっ、え、ひゃあぁぁ……」

視点の高さからして身長150位、体重は……やっぱり胸の分だけ重いな。ステータス自体は変化なし、兎月などのステータス条件付きの武器は問題なく使える。というか地味に声が女性的な高さに変わってやがる、マジかよ全ネカマプレイヤーが涙を飲んだ声質変更効果もあるの？　ネカマプレイヤーの神じゃんクターニッド……

走りながらおおよその歩幅やら跳躍力やらを把握し、背後で思いっきりメンタルをかき乱されてへたり込んでしまったレイ氏に変わって俺（サンラク）改め私（サンラク）が兎月のクリティカルをクターニッドへと叩き込んだ。

やっぱり直接攻撃自体クターニッドには有効打たりえないようだ、なんというか脂身の塊に斬りかかっている気分だ。クターニッドの表面を貫いて内側へと食い込んだ刃がヌメるようなまとわりつくようななんとも言えない抵抗力に止められる。少なくともこれがダメージを与えているようには考えづらいな。

「レイ氏！　なんか見るからに鎧のサイズが合ってないけど動けそう！？」

「え、ひゃ、あの、えと……あ、待って！　大丈夫、判断力あります……！」

明らかに恐慌状態だったので精神分析をするべきかと兎月の柄をハンマー代わりに構えていた俺だったが、どうやら雰囲気で察したよ

うでレイ氏はわたわたと手を振って自身の正常さをアピールする。
心なしか作っている声が元の地声に戻りかけているが……まぁいい。
非常に厄介なことにレイ氏の見てくれからして性別反転時の体型は恐らくランダム、そしてその時点で装備していた防具は「元の」体型に準拠しているということが分かる。つまり巨漢から一般的な高校生女子程度の背丈にまで縮んでしまった今のレイ氏は装備品がブカブカになっているということだ。

「やっぱり普通に物理攻撃もしてくるか……！　失礼！！」

「ひゃあああああ！？」

よし、装備品込みなので自信はなかったが鍛えたＳＴＲは俺を裏切らなかった。今にも脱げてしまいそうな鎧を着たレイ氏を抱え上げ、質量の無さそうな身体構造のくせに轟音を立てながら叩きつけられんとする触手の攻撃範囲から緊急離脱する。

「奴自身はほとんど座標移動しないからある程度距離を離せば安地が多いのはデザイナーの温情か……」

「おひっ、お姫……っ、だっ…………」

とりあえず他の連中と合流して……

「大丈夫ですかぁ！？」

「ひょえっ」

目の前に障害物が突如発声し、何事かと性別反転直後以上にパニクしているレイ氏を見ていた視線を上げればそこにはギッチギチの

服に浮かび上がった筋骨隆々の……いや、しかしてどちらかというと脂がノッていそうないわゆる「ガチムチ」の筋肉が視界いっぱいに広がる。そしてさらに視界を上に向けると、そこにはカイゼル髭を蓄え額に狐の面をちょんと乗せたおっさんフェイス。

「いやお前秋津茜だろ」

「はい！　秋津茜ですぅ！」

やっぱり秋津茜だったわ。

何故よりにもよってまたおっさんなんだと言いかけた次の瞬間、緑色の閃光によって何もかもが塗りつぶされる。

……そして世界がひっくり返った。

倶に天を戴いて　其の十（後書き）

クターニッド「仮に性転換しようがお前はお前だろ！（要約）」

後にネカマの神と崇めらるるクターニッド、２０ＸＸ年の夏であった

……

・赤の聖杯：近距離無効化
・橙の聖杯：遠距離無効化
・黄の聖杯：物理攻撃無効化
・黄緑の聖杯：魔法攻撃無効化
・緑の聖杯：？？反転
・青の聖杯：性別反転
・藍の聖杯：？？？？反転
・紫の聖杯：？？？？反転

封将を倒してないとユニークモンスターのスペックで魔法無効化、物理無効化をやらかす地獄絵図に変わります。

倶に天を戴いて　其の十一（前書き）

なろうの機能を漁ってたらふと思いついたので、アレなようなら元に戻します

みなさま明けましておめでとうございます、今年度も拙作をよろしくお願いいいたします。

北斎出たので穏やかな心境で更新です。

倶に天を戴いて　其の十一

「うぉっ!?」

夜空が白い。

コロシアムが赤い。

クターニッドの姿が異様に白く見える。

ふと己の手を見れば、人のものとは思えない青白い手のひら。

「なん、なに、こ、これ……」

「レイ氏落ち着いて、色調反転してるだけだ」

「色調……そ、そう、です、ね……」

文字どおり「見た目」のインパクトに気を逸らされるが、変わったのは色だけだ。少なくともバグだとすればなんらかのＧＭコールが起きるはず、それがないということはあの緑色の杯によって齎された状況ということだ。

「わっ、わわっ！　なんですかこれ!?」

「落ち着け、落ち着けって……ああもう、全員謹聴っ!!!!」

女性アバターだからか、大声を出した喉がヒリヒリする。だがパニ

ックにパニックを重ねがけしてきやがったクターニッドに対抗するには、パニックを吹き飛ばすほどの出力でゴリ押すしかない。

「秋津茜は危ないからじたばたすんな！　ルストは逆に硬直すんな！　モルドもだ！　色調反転くらいちょいと機材を弄ればすぐ出来ることだろうが！　取り乱すな！！」

兎にも角にも状況を立て直す。残り二つがどんな効果を起こすのかわからない以上一旦距離を離すしかない。俺はジャンプして秋津茜の頭を引っ叩き、ルストとモルドにデコピンを決めつつレイ氏の手を引っ張ってコロシアムの片隅、ＮＰＣを避難させていた場所に退避する。

「あ、あわわ、サンラクサン！　サンラクサン！」

「ええい面倒くせぇ、全員ちゅうもーく！！」

すぐ向こうに怪物がいるってのに、なんで幼稚園の先生みたいなことをしなければならないのだ。だがしかしこれはソロプレイじゃない、俺は一人じゃない。マトモな判断が出来るのが一人しかいないならそいつがまとめ役になるしかないのだ。

「落ち着け、いいか？　落ち着け。落ち着いてなくても落ち着け。深呼吸だ……息を吸え、そして吐け。一旦目を閉じて「空は白い、肌は青白い」と唱えろ。いいか？　分かったならイエスサーと言え、いやイエスマムだエビバデセイッ！」

「……まずサンラクが落ち着くべき」

「反面教師式クールダウンだ、自分よりテンパってる奴がいると逆

に落ち着くだろう？」

よし、ＮＰＣも含めて全員こっちの話に耳を傾けるくらいには落ち着いたようだな。スチューデは一発チョップを入れたら白目を剥いておとなしくなった。

「原理なんて分からなくて結構、物事は「誰が」やったのかさえ分かっていれば上等なんだ」

バグだってそうだ、周囲に敵が一切いないのに攻撃判定を受けるよりも雑魚敵が何故かラスボス級の火力を持ってるバグの方がまだ心を強く保てる。ちなみに前者はプレイヤー有志による解析の結果「ラスダンのマップ情報を表面上だけ変えて使い回したために、見た限りでは何もいないように見えるが実際はラスダンのＭｏｂが透明状態でそこにいる」という衝撃の事実が発覚したとあるゲームでの話だ。

メインストーリー上では行く必要のない場所であったからまだマシであったが、あるイベントフラグを踏んでしまうとこのエリアにあるアイテムが必須になるため「絶対にフェアカスの機嫌を損ねてはいけないポイント」として恐怖の代名詞になった「とある」ゲームでの話だ。

「よし、とりあえず今現在分かってるのは「あの杯が光ると何か起きる」ということだ」

「……青で性別反転、緑は視界の色調反転」

「えーと……ルスト、だよな？」

「……やっと目が慣れてきた」

少女漫画のイケメンをそのまま実体化させたかのような八頭身の男が、煩しげに眉間を押さえながらボソリと呟く。ぱっつんぱっつんの女性用服を着ている、という点にさえ目を瞑れば非常に映える光景ではあるが……まぁ、変態にしか見えんよなぁ。秋津茜は論外だ、ギャグでしかないよ。

「……クターニッド、様子見？」

「ゲーム的配慮とかじゃねぇかな、チュートリアル的な」

「うぅ……動きづらい……」

もう俺は突っ込まんぞ、明らかに少女漫画のヒロインじみたモルドに対して俺はリアクションを取らないぞ。

ええい、こいつら魂の性別が逆だから今の方が見た目しっくりくるのがまたなんとも……ええい性別逆転ネタで盛り上がってる場合じゃねーんだぞ。でも無視できるほどこの状況で平然としていられない自分が憎い！

「ザンラグザァァァアン！　なんがっ！　なんが生えだでずわぁぁぁぁぁ！！」

「ナニが生えたとは聞かないぞ、次！」

「クターニッドにこのような能力があったとは、聞いていなかったぞ！」

「全然本気じゃなかったってことだろ、次！」

「くっ……このような辱めをぉ……！」

「はいはいくっころくっころ！　次！」

「ワタシ、トクにヘンカナいんだけど」

「性別が無いってことだろ、次！」

クソ、半日くらい笑いのタネにできそうな状況の奴らばかりだというのに今それどころじゃ無いのが歯がゆい。

と、そうこうしているうちにまたしてもクターニッドが持つ杯が光を放ち、視界が橙一色に染まる。いや待て色が反転してるんだからこれは橙色じゃないのか？　だったら何色の杯が光った！？

「違います、橙じゃなくて……青です……！」

「なるほど、どうやら同じ光を受けると元に戻るらしい……！」

おっさんは狐面の少女に、少女漫画コンビは青春漫画コンビに、諸々含めて正常な性別へと戻った面子を見回してから俺はクターニッドへと向き直る。

「とりあえずもう一度「緑」の杯を使わせて、視界を元に戻さないことにはどうしようもない。そして視界が元に戻ったタイミングであの杯を破壊できないか試す」

クターニッドの触手は常に杯を掴んでいる、それは触手を叩きつける等の物理攻撃時にも同様にだ。それに触手を物理攻撃に使ってから体勢を立て直すまで若干長めの硬直がある、恐らくだがあの杯は破壊できる。ここで注意すべきは「杯を破壊する」事では恐らく光

を浴びた事での効果は解かれないだろうということだ、下手をすれば性別や視界がひっくり返った状態で戦い詰めなければならなくなる。

「残り二つの杯がどんな効果なのかも気になるが、「杯」が使われ正常な状態になったタイミングで攻撃を仕掛ける。レイ氏と俺で触手の攻撃を誘発させるから杯が地面に近くなったタイミングで総攻撃を仕掛ける！」

というか破壊の条件が単純火力ならレイ氏が頼みの綱だ。まさかオブジェクト破壊を見越してハンマーを……？　いやまさかな。だが「オブジェクトの粉砕」という点では剣よりもハンマーの方が有利であることは事実、やはり廃人ともなれば俺のように無限の格納スペースを持つのではなく、限られたインベントリでやりくりするスキルものあるのだろう。

「レイ氏まずは性別反転の杯から破壊しよう、いちいちＮＰＣがパニックになってちゃ世話がない」

「了解、です」

特にこの中では俺やレイ氏に次いでメインアタッカーを張れるシークルゥが露骨にヘタれるのは割と痛いし、いちいち身体の動かし方を変えなければならないのは視界がバグる以上にキツい。

駆け出した俺とレイ氏がクターニッドの前にまで到達する。視界が反転しているせいで真っ白に見えるクターニッド、さらに厄介なことに杯の色も反転しているので色ではなくどの触手がどの杯を持っていたのかで判別しなければならない。

「どの足だっけ！？」

「ええと……多分、青の逆なので、あの杯が……性別逆転、で……あの足が色反転、です！」

「まずは性別反転から！」

斬りつけてもダメージはないものと考えていい、だが注意をひくことはできる。血を吹き出すようなダメージではなくても肌の上を蟻が這っていたら否応にでも注目せざるをえないだろう。クターニッドの触手の一つ、恐らく正常な色であれば「青」の杯を持つ触手に俺とレイ氏の武器が叩きつけられる。

効果は……やはりあるとは言い難い、だがクターニッドの目がぎょろりとこちらを向いた。がらんどうの触手に力が満ち満ちて俺とレイ氏に危険が迫る。だが色調反転した視界とはいえこの程度の攻撃を食らうほど耄碌はしていない。

「来ます…っ！」

振り下ろされる触手は誰もいない場所を叩き据える、青色の杯が地面近くにまで下がり、その瞬間後ろに控えていた者達が武器を、魔法を、矢を携えて青色の杯へと躍りかかる。さて果たして杯の耐久力は如何程なるや……？

「ダメです！　これめっちゃ硬いです！！」

「破壊自体はできそうか！？」

「ヒビが入った！　出来るぞ！」

大海峡を叩きつけたアラバが叫ぶもそう長い間触手を叩きつけたま

まにはしておかないようで、最後にルストが放った矢が命中したものの、一度のトライで破壊しきることは叶わず青の聖杯は近距離職が届かない高さに行ってしまった。

「とりあえず攻略パターンは割れた、このまま攻撃を誘発して杯を破壊していく！！」

あ、また光った。ちくしょうまた性別反転かよ！　この無装備状態のアンダーウェア、胸を強く固定してくれないからめっちゃ揺れて痛いんだよ！！

「うおおただひたすらめんどくせぇ！」

倶に天を戴いて　其の十一（後書き）

ばるんばるんしよる！

倶に天を戴いて　其の十二

「はぁーっもう、めんどくせーっ！！」

今まで生きてきた中で幼少期以外では絶対出せないような高音で叫びながら、届かない高さへと行ってしまった青色の杯に悪態をつく。何度か視界がひっくり返ったものの正常な色を知覚できる状態でなんとか緑色の杯の破壊に成功し、さぁ次の杯だと意気込んだはいいものの……ここに来て良悪含めて三つの事実が判明していた。

「そろそろ次の発光が来るですわ！！」

「青来い、青来い、青……！」

「……藍色」

「乱数ァーッ！」

まず一つ目、何度も発光を許したことで否が応でも理解してしまった発光の間隔。三十秒間隔で光る杯が齎す効果は別々の色同士であるならば重複し、同じ色が二度光ることで元の状態へと戻る。

「何が入れ替わっ……ぶげぇ！？」

「サンラクさん！？」

「オーケー……言わなくても分かった……敏捷(AGI)と耐久(VIT)だ」

直撃こそ免れど触手に引っかかって派手に吹き飛んだ俺であったが、本来であれば幸運によるＨＰ１で堪える効果が発動しない限り一撃でＨＰが全損しているはずが一割程度残っている。どうやら今回の「藍」はサンラクという高機動アタッカーの強みを全否定しに来たらしい。

そう、二つ目の事実は「藍色」の光が持つ効果だ。色調反転や性別反転なんぞ比べ物にもならない、「紫」も含めて悪辣極まりないその効果はステータス反転。各ステータスのパラメータを入れ替えてしまう反転の定義が疑わしくなってくるような制限が課されるのだ。

「く……」

この効果は所謂特化型のステータス配分をしているプレイヤーにとっては天敵とも言っていい。タンクからＳＴＲやＶＩＴを差し引いたら？　軽戦士からＡＧＩとＤＥＸを奪ったら？　魔法職からＭＰを削ぎ落としたら？　悪辣極まりない、だがメリットが無いわけでもないからこそ厄介なのだ。

「レイ氏！　役割スイッチだ！」

「了解、です……！」

タンク寄りのオールラウンダーであるレイ氏は比較的被害が少ないとはいえ、今のステータス入れ替えで頑強さを削がれたものの素早さを手に入れた。そしてその反対に足を奪われた俺はタンク職に匹敵する耐久力を得た。

役割が入れ替わる、足早にレイ氏が後退し代わりにステータス画面を弄る俺が前へと出る。今の俺はかつての俺とは違う、言うなればバージョン２だ。極めて限定的な時間とはいえ、代償として強制破損というデメリットを背負っているとはいえ、今の俺は……お酒

落できる。

「馬鹿め、俺がタンクできないと誰が言ったぁ！！」

所謂プレイヤーが作成用素材を用意せずとも金さえ積めば入手することができる店売り装備。ラビッツにおいてヴァイスアッシュに最も近い存在であり、現状「名匠」「古匠」のジョブを持つ神匠に最も近い兎ことビィラックが作成した重戦士（タンク）用全身鎧「守り人の大鎧」シリーズ。

一式を装備することで「自身を対象にスキルや魔法を使用していない状態で被弾した場合ダメージを軽減する」という効果を発揮する。実際普通にプレイする場合スキルや魔法抜きで戦うこと自体稀なのであまり有用な効果ではないのだが、今の俺にとってはありがたい効果だ。

「む、ぐぅぅ……！」

持ち込んだポーションはとうの昔に尽きている。ルルイアス滞在中に捕獲したHP回復効果のある魚を頭ごとバリバリ食べることで無理やり体力を回復させた俺にクターニッドの触手が襲いかかる。サッカーボールのように吹き飛びコロシアムを転がる俺だが、見た目ほど受けたダメージは大きくない。

「くそう……小骨の感触まで忠実再現しやがってぇ……」

流石に小骨が喉に刺さる、なんてところまで再現はしなかった……いや、多分このゲームに使われてる技術的に可能ではあるがしなかった、というところだろうが助かる。干し魚にすればもう少し食べやすいんだろうが、なんというか……うん、生でかじった方が咀嚼速度的に回復する時間が早いんだよな。

鳥面時にこれをやったところルストから「鳥なら噛まずに飲めよ」と言われたりもしたが、うるせー俺は人間なんだよと言い返してやったりもした。ああそういえばこのゲームを始めてから結構な頻度で鳥扱いされたな、アラバは俺のこと鳥人族（バーディアン）とか言ってたが……いや待てこれ走馬灯だ。

「うぉらっしゃあい！！」

全身全霊、ＳＴＲの全てを注ぎ込んだ全力の跳躍。足が引っかかり水切りの石のようにフリスビー的回転をしながらもかろうじてＨＰは０にはならず、藍色の光が視界を染めたと認識した瞬間全力で装備を脱ぎ捨てた俺は半裸の女キャラという痴女そのものな格好であることすら気にせず全力で走ってクターニッドから距離を離した。

「危ない危ない……むぐ」

「その、もう少し服を着たりとか……というか、魚を生で頭から齧るのは……」

「モルド、見てくれに惑わされるな。俺は男だし効率のためなら多少の常識は捨ててもいいと思っている」

「捨ててるのは常識じゃなくて最低限の人間性だよ……」

ええい人間シシャモの頭だって普通に食ってるしシラスなんて骨や頭すら認識せずにまとめて口の中に放り込んでるだろうが、今更ロリ巨乳が半裸で魚を頭からバリバリ食ってるくらいでうろたえるんじゃあない。

「……サンラク、モルドの教育に悪いからもう少し見えないところ

でやって」
「回復終わったら前線に突っ込むんだからさらに後ろに下がるだけロスだろ……ほら「紫」が降りてきた！　あればっかりは最優先破壊だぞ！」

恐らく第二形態に突入した瞬間に自壊した四つの杯は封将と対応しているのだろう、考えたくないが効果内容も同様に。つまり封将を倒していなければ物理無効やら近距離無効やらが付与されていたかもしれないと考えるとゾッとしないが、それと同じくらい「紫」の杯の持つ効果は使わせてはいけない。うん、今紫色に光ったな。

「って言ってるそばからかぁ……！」
「すいません破壊しきれませんでしたーっ！！」
「ちっくしょう再生なんぞされてたまるか！　ポーション残ってる奴はあと何人だ！？」
「……私はまだ残ってる」
「私も、です……！」

そして現状判明した中で最悪と言っていいのが三つ目……「紫」の杯の効果だ。紫の杯の効果はずばり「ダメージ(HPが減る)反転」、文字だけだとカウンター効果のように思えるが違う。ダメージ(HPが増える)を回復に反転させるのだ。それにより何が起きるか？　こちらからの攻撃で杯が再生しだすのだ。いやそれだけじゃない。
クターニッドが触手を振り上げる。その触手が持っているのはあと

少しで破壊できそうな青色の杯、そしてクターニッドは俺たちへ危害を加えるためではなく、明らかに杯にダメージがいくような動きで触手を叩きつけた。轟音と共に青色の杯が地面に叩きつけられ、今にも真っ二つに割れてしまいそうな亀裂が修復され始める。
そう、クターニッドの野郎あれだけの強さを誇るくせに杯の再生を自発的にやるのだ。みみっちいんだよタコ！　クソ、罵倒が事実確認になるから効果がない……おのれクターニッド。
だがこちらとてそれを指をくわえて見ているわけではない。ダメージが回復になるならその逆もまた反転する、投げつけられたポーションが杯にぶつかって中身をぶちまける。本来は傷を癒すはずのそれは硫酸のように振舞って癒え始めた杯を再び蝕む。
「どうりでポーションの代わりになる魚が大量にゲットできたわけだ……」
初見殺しも甚だしいが、ちゃんと救済策が用意されているあたりが腹立たしい。とはいえまさか「回復阻止のために投擲武器としてポーション使うので温存しよう」なんて事前情報抜きに予測できるわけねーけどな！！
「三十秒ですわーっ！」
タイマー……もといエムルの声が響く。どちらにせよ前に出て囮をやる俺とレイ氏以外はぶっちゃけ結構暇なのだ。アタッカーを後ろに控えさせておかないと杯を攻撃する際に最高効率を出せないので今のフォーメーションを変える気もなく、エムルの声で次の発光が来ることを知った俺は忌々しい乱数が良確率を引き当てることを祈るしかない。

「藍色だぞ！」

「よぉぉぉっしゃぁぁ！　ぶっ壊せぇ！！」

ステータスが元に戻った今のうちに壊せないとまた乱数お祈りゲーになる、元の頑丈さを取り戻したレイ氏と元の素早さを取り戻した俺は、藍色の杯を持つ触手の攻撃を誘発すべく駈け出すのだった。

胸が揺れて痛い！

倶に天を戴いて　其の十二（後書き）

半裸で全身に傷跡みたいな痣があって据わった目で生魚を頭からムシャムシャ齧る女……山姥か何か？

倶に天を戴いて　其の十三

その瞬間、俺の身体は反射的に動いていた。

「逃すかぁぁぁっ！！」

次の発光まで残り五秒、杯はラスト一個。ここまで来て紫点灯から回復行動なんてさせるか！　させてなるものか！！
カッコイイ設定と名前を貰ってもサンラクウェポンズ随一の汚れ仕事役こと傑剣（デュクスラム）への憧刃一号を全力でぶん投げる。ちなみに我が武装の序列的にトップが兎月でその次に煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手が続く。
ただ頑丈であるということはいくらでも酷使できるということ、英傑には到れずともされど手を伸ばす刃の輝きが回転しながら持ち上げられていく紫色の杯へと突き刺さる。お祈りゲーじみた悪あがきではあったが十数分間シャトルランと玉投げ（ポーション）を繰り返していただけあって紫色の杯はすでに限界を迎えていたらしい。
傑剣（デュクスラム）への憧刃一号は決壊を押しとどめていたダムにトドメを刺した、紫色の杯が光を放つ。だがそれは損傷を回復へと反転させる光ではない、その存在を留める根幹を失ったことによる崩壊の光だ。

『世界が変わり果てようと根幹は揺るがず、されば人は星の海を未だ泳ぐのか……』

ポエム入った、来たな次の形態だ。意味なんぞ知らん、落ちてきた一号を回収しつつとりあえず内容だけ覚えておこう。
全ての杯が破壊され、八色の輝きを失ったクターニッド。だがそう少なくない回数俺とレイ氏が気をひくために攻撃を仕掛けたにもか

かわらずクターニッド本体にダメージを受けているような素振りは一切ない。まぁ魔法生命体……いや、生命体魔法とでも言うべきクターニッドが外的損傷でどうこうなるとは思えないがだとすれば外的変化はすなわちクターニッド自身が行っているということだ。

触手が折りたたまれていく、表現としておかしいことはわかっているが極めて有機的な蛸の形をしていたクターニッドの触手が、立体かつ直線的に折りたたまれていくのだ。ああそうだな、まさしくコンピュータ上でグラフィックを作る際の直線をつなげて作るモデリングを無理やり折りたたんだような感じだ。

質量とか物理とかは完全に無視されている、折りたたまれた触手は同じ空間の座標で重なり合い、触手一本で今はめっきりみかけなくなった電柱より太く長いはずのそれが半分に、さらに半分に、しまいには完全にクターニッドの大元、胴体へと取り込まれてしまった。

「あれが普通の蛸なら滑稽なんだけどな……」

「……身じろぎだけで、私達を殺せる蛸相手では下手に笑うのは厳しい」

分かってくれるかルスト。そうなんだよ、滑稽な行動も実力が伴うと笑うより先に怯えとか怒りとかが湧いてくるんだよ。

触手のない蛸、下手くそがコンパスを使って書いた円に蛸の目をくっつけたような姿のクターニッドであったが、その眼球すらもが胴体へと沈んでいく。ついには出来損ないのリンゴのような黒い塊となったクターニッドであったが、ぐむぐむと内側から何かがクターニッドという殻を突き破らんとするかのようにその輪郭を不気味に歪めていく。

『遠く、遠く、遠くまで来た。私は彼女の故郷を知らない。私の故

郷は星の海と同胞と彼女の笑みであった』

「長文ポエムきたぞ！」

「最終形態、ですか……？」

「いや、様子見しようレイ氏。どうも蛹っぽい気配を感じるし最終形態前にもう一個挟むかもしれない」

クターニッドの身体の膨張がピタリと止まる。そして次に起きるのは収縮だ。クターニッドの身体が萎むようにではなく、そのままサイズだけが縮んでいくように小さく圧縮されていく。

『この世に在りて、されどこの世に在らざるもの。我が身に肉はなく、我が身に骨はなく、我が身に血は流れぬ』

「骨がないって、まぁ蛸ですもんね！」

「ばぶっふぅ！」

「モルド！　ステイ！！」

秋津茜も不意打ちで差し込んでくるんじゃないよ、モルドの笑いのツボは感度が常人のそれより高めなんだから。

まぁいいさクターニッド戦で笑う余裕があるとも思えないし、それでもヘマをするようなら残念だが死体として頑張ってもらおう。

「だ、大丈夫、ちゃんと真面目にやるからルストもサンラクもその目を止めて……」

ゲーマーって人種は足し算と引き算が大得意なんだ、邪魔なら容赦なく引き算できるんだからな？　冗談だよモルド、屠殺される事実を知った家畜みたいな目をするんじゃないよほらグッボーイグッボーイ。

『であれば、私は妄想を事実とし、幻想として生じ、空想より出でて想像とならん。故にこそ、故にこそ仮想となりて我血肉を求む』

「焼肉が食べたいってことですかね？」

「秋津茜、ステイ」

ちょっと俺の笑いのツボも刺激されかけたわあぶねぇ。ただクターニッドの変化を見た瞬間、笑っている場合ではないと悟った俺は恐らく現物を見たことがある俺以上にそれを知っているだろう、慌てた顔で走ってきたエムルを頭に乗せながら全員に向けて叫ぶ。

「全員武器を構えて全方位警戒！！」

それを例えるなら己の力に耐え切れず崩壊したコラプサー、天体を呑み、光すらをも喰らう重力の怪物……虚無の穴（ブラックホール）。縮小と圧縮の末に空間に開いた不気味な漆黒の穴と化したクターニッドの周囲に数十もの魔法陣が展開される。

俺は魔法職ではないのであの魔法陣がどういう仕組みなのかを理解することはできないが、魔法陣から漏れ出す特徴的な光のエフェクトには激しく見覚えがある。厳密には若干異なるがほぼ似ているということは発動される効果も似ていると考えるのが必定、そして本来であればヴォーパルバニーやケット・シーなどの脆弱な魔物が持つはずのその魔法は。

『命脈の波濤に抗え、闘争こそが命の本質故に』

ランダムエンカウンター、恐らくクターニッド用にチューンされたのだろう正真正銘の「無作為に(ランダム)」「遭遇させる者(エンカウンター)」その数軽く数えて三十以上が一斉に発動された。

雑魚はつみれに、強者は据え置き、キメラはカイセンオー。なんのことかって？　今現在の地獄を形容する言葉だよ。

「やっべぇハンティングゲーとゾンビゲーと格ゲーのボス戦がぜんぶ混ざった気分だ！」

「これ死ぬ死ぬ死ぬですわーっ！」

「ええい泣くのは全部終わってからラビッツでやれ！　よっしゃモンスタートレイン行くぞ！！」

直線に逃げていた俺が真横に飛びのいたことでギガリュウグウノツカイことアルクトゥス・レガレクスの猛進が腐れつみれの大群へと

突撃をかます。
モンスターハウス、という言葉がある。いわゆる迷宮探索系のゲームにおけるトラップであり、密室の中に大量に湧くモンスターをすべて倒さないと外に出られないタイプの罠。それはプレイヤーよりレベルの高いモンスター数体によるリンチであったり、プレイヤーよりレベルは低いが数十倍の物量による圧倒であったりと種類は様々だが、クターニッド君はどうやら両方のいいとこ取りをしてくれやがったらしい。

便宜上「真ランダムエンカウンター」と呼称するが、奴が発動した数十の魔法によってコロシアムは大量の魚とモンスターによって埋め尽くされた。そして魚達は存在の定義を反転させられたことで腐りかけの半魚人へと変貌し、空中にはアルクトゥス・レガレクスがリュウグウノツカイとは思えない咆哮を上げてターゲットを定めんとしていた。

「……なにこれ」

「いわゆる「なかまをよぶ」コマンド！」

「……理解した、モルド支援して」

「わかった！」

ある程度別ゲーの単語でも通じる相手というのは非常にありがたい。秋津茜を見ろ、俺の言葉と目の前の光景を見て「クターニッドのお友達？」とかすっとんきょうなこと言い出してるぞ。まぁちゃんと行動してるところは褒めてもいい。

「レイ氏！　あのデカいのは俺がヘイトを受け持つ！　雑魚を掃討

してくれ！」

クターニッドがなかまをよぶコマンドを使用した意味を考えろ、基本的に「仲間呼び」ってのは雑魚モンスターがやることだ。ボスモンスターが部下やら眷属やらを呼ぶことはあるが、こうも無差別に呼び出したことには違和感がある。

だとすればこのモンスターは壁じゃない、奴が求めている「血」と「肉」と「骨」だ。クターニッドの台詞は世界観的にはやつの独白、ゲーム的に言えば次のギミックのヒントだ。

クターニッドのポエムは難解だが現代語だ、状況と一緒に噛み砕けば答えが見えてくる。クターニッドは自分には血肉がなく、それ故に血肉を求めると言った。妄想を事実として、空想から現れ、仮想をへて想像となる。

重要なのは言葉の意味ではなく単語の数、「妄想」「幻想」「空想」「仮想」「想像」……ルルイアスを正常な位置に戻す前の蛸の姿を第一形態と考えればクターニッドは全部で五つの形態を持っていると推測できる。つまり今の状況は奴が「仮想態」であるということだ。

「エムル、お前は俺がアレの気をひいてる間近づいてくる雑魚を対処してくれ。あと可能なら倒しきれ」

「は、はいなっ」

血肉を求め、最終形態が控えている状態で大量の血肉を呼び出す。そしてパズルの最後のピースを埋めようか。クターニッドは俺達にずっとヒントを出してきていた。

『揺るがぬ心で進め、届かぬ高みはなく』

上空高くに位置するクターニッドを引き摺り下ろすために、届かないからと諦めることなく戦え。事実触手の全てを迎撃することで奴は地上へと降り立った。

『信ずる己を見出せ、世界が変わり果てようと根幹は揺るがず』

八つの杯、八つの光によって性別が、視界が、ステータスが変わろうとも根幹は変わらない。女になろうが素早さが頑丈さにすり替わろうが戦い続けたことで杯はすべて砕けた。

であるならば先ほどの言葉……『命脈の波濤に抗え、闘争こそが命の本質故に』は何を意味しているのか。

命脈の波濤とはまさしく今現在の状況だ。この海の中で紡がれてきた命が一堂に会し、こちらへと襲い掛かってくる。そして奴が提示した取るべき行動は「闘争」、「逃走」ではない。

冷静に考えりゃわかることだ、今のクターニッドは穴に変形したんじゃない。大きく開いた口に変化したんだ。野郎、この土壇場で海鮮丼の出前を頼んだってか。

「なら俺たちがやるべきことは決まってる」

やつの口に入る量を減らして満腹にさせない。第四形態とはすなわち第五形態時の戦闘力を如何に削れるかの戦いだ。

倶に天を戴いて　其の十三（後書き）

本文中でも出しましたがクターニッドの形態にはちゃんと名前が設定されています

・妄想態：厳密にはクターニッド本体ではなくクターニッドによる「認識」の形態、本来はそこに存在しないはずの大蛸を相手に適当に死闘を繰り広げた後適当に解放される。アラバ祖父はこれに引っかかった

・幻想態：エリアギミックを乗り越えた者の前に現れるクターニッド本体、クターニッド的には結構リラックスしている状態

・空想態：クターニッドがかつての姿を模して「物質としてそこに存在はしないがエントロピーとかそういうの的にそこに何かがいる」状態になる。いい歳した大人が高校生時代の制服を着ている感じ

・仮想態：さなぎをやぶりちょうはまう

・想像態：想いは実像を得た、来れ挑戦者よ。今こそ血と肉と骨を携え相対しよう

ミニゲームなのだ、要するに。
第二形態「幻想態」は空から降ってくる触手を全部殴ってクターニッドを地面に降ろすというミニゲーム。
第三形態「空想態」は触手が握っている様々な効果を三十秒ごとに発動する八つの杯を破壊するミニゲーム。

じゃあ第四形態「仮想態」はどんなミニゲームなのか？　簡単な話だ、奴が口の中に入れようとするご飯を片っ端から叩きのめして奴を満腹にさせないこと。恐らく正真正銘の正面衝突となるであろう最終形態「想像態」のスペックに関わってくるのだろう仮想態時の攻略とは、すなわちそういうことなのだ。

「デカいのは端（ハナ）から倒せるなんて思えねぇ！　俺が引きつけるから可能な限り雑魚を蹴散らせ！」

最初に召喚されたアルクトゥス・レガレクスは虚空に穿たれた蛸穴に周囲の半魚人ごと吸い込まれていった。結果として無差別召喚から三十秒経過で残っているモンスターはクターニッドに食われるということが分かり、今俺は新たに召喚された空母アンコウことスレーギヴン・キャリアングラーの気を引くために全力アピール中だ。

あの女王様は非常に旨みの多いモンスターだ、なにせ本体であるアンコウが死ぬと取り込まれた他モンスターも連動して爆散する。そして取り込んだモンスターの素材も結構な量ドロップする。というかスレーギヴン・キャリアングラー本体の素材＋取り込んだ他モンスターの素材も確定ドロップ枠と見た、アンコウに捨てるところ無

しとは言うが捨てるだなんてとんでもない。
素材を満載した宝箱が空を飛んでいるようなものだ、もし時間があればスレーギヴン・キャリアングラーを重点的に乱獲したいところだ。だが三十秒で倒せるような雑魚であるはずもなく、泣く泣くではあるがクターニッドのご飯として供される光景を見ている他ないのだ。

エムルに遠距離攻撃をぶつけさせ、空母アンコウがこちらに飛ばしてきた眷属を倒して挑発する。そしてスレーギヴン・キャリアングラーがこちらにヘイトを向けている間に他のメンバーが全力で半魚人の総数を削る。
デカブツにばかり目がいくが質量的な意味では腐れつみれの方が多い。それに意図的に耐久力が低く設定されているのかDPSはともかく一撃の火力自体はそこまで高くないサンラクのステータスですら二、三度斬るだけでHPを削り切れるほどに体力を低く設定された腐れつみれを削るのが正しい攻略手順と見た。

「く……一匹でも多く削る……！」

ブラックホールのように虚空に開いた穴が吸い込みを始める。どういう原理か、そもそも「吸い込む」という動作ではないのかはわからない、だが事実としてプレイヤーとNPCは一切吸い込まれることなく、クターニッドが呼び出したモンスターだけが奴の中へと消えていく。
ギャグみたいに吸い込まれていく半魚人の一匹を空中で叩き斬り、それが吸い込まれる前に爆散して消えたことを確認した俺はもう何度目か……多分十回目ちょいくらいの召喚魔法陣に弱りかけた心を叱咤する。

「あと何回やるんだこれ、五分間とかならそろそろだと思うんだが

「……」

「それよりも、武器の消耗が結構やばいよ。この次もあるとしたら割とギリギリだ」

「……モルドは魔法職だしマシ、弓は射つだけで耐久が減る……」

そう、俺には傑剣(デュクスラム)への憧刃という実質耐久無限の武器があるが他のプレイヤーはそうはいかない。どれだけ雑魚でも無抵抗で斬れるわけではない、無双ゲー並に現れる半魚人を倒し続けるということはそれだけ負荷が武器にかかるということだ。

特にルストが深刻だ、剣は素振りするだけでは耐久は減らないが弓はそうはいかない。既に剛弓が破損し魔法弓も限界に近いという。一応スペアで物理魔法共にもう一つずつ弓はあるらしいがそれ以前に矢もＭＰも尽きかけている。

「イケそうか？」

「……いざって時は、徒手空拳でも貢献する」

「皆さん……十二回目、来ます」

さすがはレイ氏だ、ちゃんとカウントしていたとは。十二回目の無差別召喚、なにやら明らかにこれが最後ですと言わんばかりに巨大な魔法陣があるわけだが、ひっっっっじょーに嫌な予感がする。このルルイアスであれだけの大きさの魔法陣で呼び出されそうなモンスターというとアイツしか……

「ああ、やっぱり……」

「ぴぃっ」

そうか、エムルは見るの初めてだったか。よしじゃあアラバ君よ俺の代わりに奴の名前を皆様に言っておやり。

「アトランティクス・レプノルカ……！？」

「あれはヤバい……全員逃げることだけを考えっ」

次の瞬間、全てを灰塵に帰すかのような大放電が宙に君臨する帝王を中心にぶちまけられた。

「あー……全員、生きてるかー」

「それ、学校で出席の時に「今日欠席の奴手を上げろー」って先生が言う奴ですよね……」

秋津茜、お前ツッコミもできたのか……いや、それはどうでもいいんだ。

最後の最後に呼び出されたあのシャチ野郎は、帝王と呼ばれるだけの猛威を思う存分に振るった。クターニッドによって丹精込めて建造されたコロシアムは崩落寸前まで破壊され、奴がぶっ放すビームやら体当たりやらによって俺たちが攻撃する必要すらなく腐れつみれ共は壊滅状態になっていた。

俺の声が聞こえていたのか、はたまたそうではないのかはともかく戦うどころではない奴の暴走に俺たちはただただ回避と逃走に全神経を費やし……そして最後に、クターニッドに吸い込まれていくアトランティクス・レプノルカが最後っ屁に放った放電によって俺たちは吹き飛ばされていた。

「死んでないなら返事しろー……エムル生きてるか」

「多分死んでるですわ……」

「元気そうだな」

俺は割と瀕死状態だ、とはいえ体力が残っていれば問題はない。ありったけを詰め込んだはずなのにもう底が見え始めた魚を頭から囓りつつ、重い瞼に俺は現状を悟る。

「カフェイン切れ始めたな……」

「かふぇ？」

「なんでもない、気にするな」

ライオットブラッド・リボルブランタンは曰く「短期決戦用」、予想以上にギミックの解除に手間取ったせいで効果時間が切れた。別にカフェインが切れたからってすぐ寝落ちするわけじゃないが、慢性的に感じる「ダルさ」が足を引っ張らなければいいが。

「……私とモルドは無事」

「なんとか……」

「俺もネレイスも無事だぞ」

「アラバ、ダイジョウブ？」

レイ氏は多分大丈夫だと思うがそれよりクソガキはどうした。死んだか？

六割くらい諦めの境地でスチューデを探していた俺だが、瓦礫を押しのけて現れたレイ氏がスチューデを抱えているのを確認する。この土壇場で別シナリオのキーＮＰＣを守ることをやってのけるとは……やはり一線を画している、か。秋津茜とシークルゥは俺たちのすぐ傍にいたので生存確認は容易く、とりあえず全員死んでいないことは確認できた。

「醤油ほしい……まぁいいや、全員無事なら悪いがすぐ立ってくれ」

奴め、お色直しは終わったらしい。うなじまでずり落ちていたエムルが俺の頭までよじ登り、その身体の震えが俺の頭を揺らす。もこもこぶるぶるしてる。

「……クソガキ、こっから先はお前がいるだけ邪魔、海岸まで全力で走って」

「ぼ、僕は……」

「あいにくお前以外船を操縦できる奴がいねーんだ、小舟でもいいから全部終わった後にこっから脱出するための手段を確保しといてくれ」

ルストの言葉に重ねるようにしてロールプレイ、どう煮ても焼いても戦力にならないスチューデをこの場から離脱させる。下手にヘイト持ってかれるくらいなら遠くで大人しくしていてほしいというのはゲーマーとしての冷静な判断によるものだ、それをどう受け取ったのかは分からないがクソガキは泣きそうな顔で崩落したコロシアムの一角から外へと走って行った。

「さて、と……レイ氏、前やったアレいけそうか？」

「ええ、同じ手順は必要ですが……いけます」

「こっちもイケる、前と同じ感じで俺が怯ませたら……」

「了解、です」

視線の先、漆黒の穴が佇む虚空。空間そのものに開いたブラックホールには奥行きを確認することができない。だが、その穴の淵（フチ）に……手が。

「深淵のクターニッド……」

深い淵より現れるその姿は、まさにその名を体現しているようで。

広義の意味では人の形をしたそれは、血の赤色をした筋肉むき出し

の巨躯を皮膚代わりなのか魔法チックな黒い模様や文章と思しき羅列で全身を覆っていた。さっきまで命だったものを己の身体へと作り変えてから時間が経っていないのか、潮の匂いに血と死が混じったようなえもいわれぬ匂いが鼻をつく。
ゲームの題材としても結構な頻度で採用される「クトゥルフ」の一般的なイメージに近い、人の胴体に頭として蛸を接続したような異形の姿であるが、一般的なイメージと明確に異なる点が一つだけ存在する。

『人よ、遍く生まれ広がる一つ目の奇跡よ。人よ、前へ進み暗闇を照らす二つ目の奇跡よ。』
『お前たちは何を成す、何を為した。示せ、示せ、示せ。』
『天より撒かれし種よ、お前たちは根を伸ばしたのか。』
『私は倶なる天を戴く者、私は深き淵より世界を見遣る者、偉大なる軌跡の残照を知る者。』
『示せ、命の価値を。彼らの、彼女の願いは果たして叶ったのかを。』

人のものとは思えない、音が声として聞こえるとしか言えないような言葉が響く。それはクターニッドが放っているはずだというのに、複数人が一斉に喋っているようにも聞こえる。
一般的なイメージでは背中から悪魔のような翼が生えていることが多いはずだが、クターニッドの背中に生えているのは仏像の後光のような「円」だ。そしてその円には枝に果実が実るように八つの宝石が怪しげな光を放っていた。

「うるせー、内情知らねーんだから大人しく真理書を渡せタコ野郎……最終決戦だ、全員気合入れ直していけ！」

『闘争こそが命の本質故に、されば汝ら……証明せよ！』

クターニッド最終形態「想像態」、巨大なタコもどきと俺たちチーム「不倶戴天」……正真正銘決戦の火蓋が切って落とされた。

倶に天を戴いて　其の十四（後書き）

・ぶっちゃけネタバレコーナー

クターニッドと「プレイヤー」は厳密には親戚くらいの関係

ゲームだからと当たり前のように見過ごしていませんか？　皆さん本当に気付いていませんか？

ＮＰＣとプレイヤーは異なる存在です、それは同様に……

倶に天を戴いて　其の十五

嚆矢を務める一撃が、ルストの剛弓より放たれる。剛弓の破損を代償に放たれた矢は一直線に空を切り裂きクターニッドへと突き立て……られない。

「……割と会心の一撃だったのに」

「流石にあんなゴリマッチョの腹筋は貫(ぬ)けないだろ」

ありゃ俺やレイ氏の持つ切り札クラスの火力じゃないと貫通しないタイプの筋肉装甲だ、ここは基本に忠実な攻略手順を踏もう。

「顔を狙う……と言いたいところだがまずは足を狙う、すっ転ばしてから顔に集中攻撃だ！　とりあえず奴がどんな攻撃を仕掛けてくるか把握する！」

蛸ゴリラ菩薩とでも形容できそうな奇怪な姿をしたクターニッドは、恐らく全形態を通して唯一物質的な肉体を持っている。つまり触手叩きだったりグラス叩きだったり雑魚叩きではない、正真正銘のガチンコ勝負と見た。ポエムも「かかってこいやオラァ」的なことを言っていたしな。

「よっしゃその顎かち割ってくれるぁあ！」

まだ発動タイミングではないが、インファイトで相手の出方を見るために煌蠍(ギルタ・ブリル)の籠手を構えて距離を詰める。来いよクターニッド、殴り合いしようぜ！

Ｖｖｖｖｖｖｖｖｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！

「おぐっ……いいねぇ、良いシャウトだっ！」

瞬刻視界（モーメントサイト）起動、さっきまでギミック＆ギミックを仕掛けてきたボスとは思えない豪快なパンチが俺の認識限定でスローモーションへと変わる。避けるだけならわざわざこのスキルを使う必要はないのだが、別の意図があるが故にこれを使ったのだ。

レイ氏が習得しているスキルの一つにあった、攻撃に攻撃をぶつけて弾くパリングスキル……あれをどうにかして習得したい。レベル９９Ｅｘｔｅｎｄが上限であることは知っているが、確かレベル上限が解放されたとも知っている。であればスキルを習得するために動作を真似ることは現状成長打ち止めの俺（サンラク）であっても無駄ではないだろう。

スローモーションの世界が本来の摂理に引き戻されるようにして速度を取り戻す。だがそのタイミングも、急速に加速する認識の中での身体の動かし方も既に慣らしてある。

身体を捻りステップで横にズレてアガートラム起動、右拳が銀光のエフェクトを纏いクターニッドの拳を横から叩き据える。手首が吹っ飛びそうな感覚に口の端が引きつるが、確かなヒットの感触が拳を通して俺へと伝わる。

「基本的な物理攻撃は網羅してそうだな、他にはどんな手を隠してる？」

どうせ背中から生えてる輪と、それにぶら下がった宝石からなんか魔法とか出すんだろう？　さっさとゲロっちまえよ、対策してやる

から。

そんな俺の挑発が視線に乗っていたのか、横から叩かれ空振った拳を戻しながらクターニッドが吠える。それに呼応するように奴の背中から生えた輪……近くで見て気づいたが、これ多分大型モンスターの肋骨で出来た骨の輪だ。だとすればあのサイズの肋骨の持ち主は……いや、死んだモンスターのことをあれこれ言ってもどうにもならない。

奴の背中から生えた輪にくっついていた宝珠が光を放って輪から分離した。そしてそれはこの場にいる全員の頭上へと移動し、停止する。

「なにこれっ、やばいんじゃゃ……」

「いや待て、対処の余地が無さすぎる。ギミックだから即死はない……と信じたい！」

「そこは断言して欲しいですわーっ！」

『——Analysis（アナライシス）．』

アナライシス？　言葉の発音には分析（アナライズ）に似ているが……いやそれよりもなんでクターニッドが……

光が俺を、いや俺たち全員それぞれがまるでデータを読み込まれるように光の円環を身体がくぐっていく。

秋津茜やシークルゥは光の輪から抜け出さんとじたばたしているが、多分確定で食らうギミック技だから足掻くだけ無駄だと思うぞ。

「さぁて……何が来る……？」

俺から何を分析したのかは知らないが、アナライシスとやらを行っ

たことで青色に変わった宝珠がクターニッドの元へと帰っていく。
どうやら他の奴らからも同様の何かをしたのか、赤であったり紫であったりと様々な色の宝珠が合計八つ、クターニッドの背輪にセットされた。
数はパーティに登録されたメンバーと対応してるのか？　それとも元々八個が上限なのか？　ユニークモンスターというオンリーワンなボスである以上前者の可能性は十分あり得るが、蛸だし後者の可能性も捨てきれない。

『――Ｒｅｆｌｅｘｕｓ（リフレクス）.』

「おい待てそれは卑怯だろ！？」

青い宝珠が点灯する。他にも青系統の宝珠はあるが群青色のそれは俺の直上で何かを分析したやつだ、青い光は杯の時とは異なり、視界を埋め尽くすほどの光量はない。だが異なる点はもう一つあった。
放たれた青い光は時間の経過とともに一点へと指向性を持ち、その一点……すなわちクターニッドの背中に降り注ぐ光が全て巨体に取り込まれた瞬間変化が起きる。

「あれって……」

「……サンラクが、双剣を使うときによくやる構え……？」

クターニッドの両手から青い光が溢れ出す。それは俺たちの尺度からすれば大剣ほどの、クターニッドの尺度からすれば片手で振れる程度の大きさの二本の双剣となって実体化する。そして双剣を装備したクターニッドの構えは、非常に見覚えがあるものだ。
時代劇やハリウッド映画、無論ゲームも含まれる俺が知る双剣使いのフォームを適当に参考（パクった）にした左の剣を前に、右の剣を下に向ける

「俺の」構え。

「それは、つまり……」

「プレイスタイルを分析されたってことですか！？」

秋津茜が恐らく正解であろう答えを叫ぶのと、クターニッドが双剣を振りかぶって襲いかかってきたのはほぼ同時であった。

「サンラクサン！」

「うおっ、く……おおお！？」

右の剣が振り下ろされ、避けたところに左の剣が突き込まれる。想像態のクターニッドは５メートル、いや４メートル程度の大きさしかなく、今までの形態と比べると随分と小柄ではあるがその分人型という形状もあってか物理法則が人間に近い。

かろうじて回避するものの、腕を戻す動きを利用して放り投げられた右の剣を器用に空中で逆手にキャッチし、攻撃に繋げてきた一撃を転がるようになんとか避けきる。

「サンラク！」

「代わり、ます……っ！」

「頼む……！」

体勢が崩れた俺の代わりにアラバとレイ氏が前へと出る。見ればモルドはルストにバフをかけ、秋津茜とシークルゥはコロシアムを大回りに走ってクターニッドの背後へと回り込もうとしている。

クターニッドの背で水色の宝珠が光る。双剣が糸のように解けて消え、代わりにクターニッドの手に現れたのはクターニッドの体格をしてなお大剣と見まごう程の片刃の大太刀。

「お、俺かぁ！？」

「受けるのは、無理です……っ！？」

慌てた様子でしゃがんだ直前にアラバとレイ氏の首があった場所を大太刀が空振る。返す刀で二人を切り裂かんとしたクターニッドであったが、頭部に突き立った魔力の矢の破裂によってその動きは中断させられる。

「怯んだ！？」

「……違う、ヘイトが切り替わっただけ」

大太刀が消える、第一から第四形態までのギミック重視のボスとしての威厳をどこに忘れたのか尋常ではないアグレッシブっぷりを発揮するクターニッドは弓を構えて照準をルストへと合わせる。ギリギリと引きしぼられる弦（つる）がその一撃の火力を言外に語っており、食らえば一撃死は免れないだろう。

「たぁーっ！」

だがしかし、どうやらヘイトを向けられないようにするスキルか魔法でも使っているのか、一度も気取られることなく背後に回り込んだ秋津茜の異様に勢いが乗った助走による飛び蹴りがクターニッドの膝裏に命中する。

伝家の宝刀膝カックン、どれだけマッチョでも問答無用で体勢を崩

す禁断の奥義だ。あとやられた側が滅茶苦茶イラっとくる悪魔の奥義でもある。

「ゔぇっ」

「……っ」

バヅァンッ！　と弓と矢から出る音ではない轟音を立てながら矢が放たれるも、秋津茜のファインプレーによって必殺の一矢が誰かに命中することはなく、俺の頭上とルストの顔のすぐ横を掠った矢はコロシアムの観客席に命中すると、純粋な衝撃だけで大爆発を起こした。

「あー、つまりここにいる奴らのメイン武器とプレイスタイルを自分に反映する、と……」

だとすれば、非常に不味い。
もしそうだとすれば今クターニッドは八つの形態を持っているに等しく、さらに言えばあくまでも「人間大」だからこそ無茶な動きができる俺のプレイスタイルや秋津茜のプレイスタイルはまだマシな……ほどに巨人向けであるレイ氏のような「重装甲騎士」タイプをクターニッドのフィジカルでやろうものなら……

赤い光が大剣の形を成す。とりあえず一つだけ分かったのはクターニッドがパクるのは今現在の装備とプレイスタイルではなく恐らくはプレイヤーやＮＰＣが最も長く使っている、もしくは最も得意なプレイスタイルということだ。

「チッ……全員回避主体で！　こうなったら殺りやすいタイプになるまで粘るぞ！」

「具体的にはいつでしょうか！」

「物理スキルがゴミな純魔(モルド)のプレイスタイル！」

「その通りだけどなんか酷い！」

今はただSTRとVITの怪物と化したクターニッドから生き残れ！！

倶に天を戴いて　其の十五（後書き）

個性的なプレイスタイルが集まったパーティほど苦戦するシステム、
とはいえある程度の動きをコピーするだけなので実は言うほど厄介
でもない……ただしマッシブクターニッドと相性のいいＳＴＲ偏重
のプレイスタイルをパクられるととても危険
軍隊みたいな画一したプレイスタイルが集まったパーティであれば
そこまで脅威ではない

ちなみに宝珠の上限は八つで、八人以上のパーティの場合は定期的
に分析情報を更新してきます

倶に天を戴いて　其の十六

俺（サンラク）のスキル構築は兎にも角にも機動力に特化している。
矢が飛んでこようが、槍が突き出されようが、崖っぷちだろうが、行き止まりに追い詰められようが。
道がないなら壁を、壁がないなら空を。すべてのスキルを同時起動できる手段が実装されれば天井だって走ってみせる自信がある。

振り下ろされる特大の質量兵器が地面へと突き立てられる。戦っていて分かるクターニッドというキャラクターの特徴。宝珠を用いたプレイスタイルのコピーは確かに強力、かつ非常に厄介だが今の所脱落した者は一人たりとも存在しない。
それは俺やレイ氏、秋津茜のような相手の攻撃に対しての対処法を持つ前衛が攻撃を引き受けていることもあるが、なによりもクターニッド自身が「弱い」からこそ今の状況が成り立っている。

「動きが単調すぎるんだよ……っ！」

大剣とは切れ味ではなく重量で圧し斬る武器だ、故に刃の部分は触れば肉が切れるというほどの鋭利さはない。
遮那王憑き、グラビディゼロ、トライアルトラバース起動。大剣の刃に飛び乗り、綱渡りの要領で大剣を駆け上がる。
さらにリキャストが終了した致命秘奥【ウツロウミカガミ】再起動、ヘイトが残影として大剣の中腹に取り残され幻影と化した本体（おれ）が大剣を登りきり跳躍する。

プレイスタイルのコピー、なるほど強力かつ厄介だ。だがその模倣には応用がない、どう身体を動かしてどう攻撃するかを真似しても

それを独自の思考でクターニッドは応用しない。コマンド制の格ゲーのようなものだ、奴の動きはパターン化されている。

理屈として八つのタイプのパターンをそれぞれ即興で覚えることは難しい、だが理屈ではない体感としてそれを覚えることは可能だ。要するに習うより慣れろ。

「これで三回目だ、学べよクターニッド」

フリットフロート起動、頭を下に足を上にした天地逆転の状態でクターニッドの頭上に跳躍した俺が空気の足場を踏んで上から下へと跳躍する。重力に跳躍の勢いが加算された落下を攻撃力へと転換し、二種類のスキルエフェクトを帯びた煌蠍の籠手を構える。

レテ・バニッシャー及びアガートラム起動。頭部に命中させることで気絶怯みを起こす確率が高められた幸運参照の拳がクターニッドの眉間に叩き落とされた。

Vu、vooooooooo…………！

「ゔ」なのか「ぼ」なのか識別しづらい呻きと共にクターニッドの巨体が膝をつく。クターニッドの背中を滑り台代わりに着地した俺は向かってくるレイ氏に頷いてすぐさま横っとびに回避、次の瞬間クターニッドの背中に純白の光が叩きつけられた。

「カタストロフィ……！」

レイ氏の……厳密にはユニーク装備「双貌の鎧」とその手に握る「神魔の大剣（アンチノミー）」が秘める最大火力の代名詞「アルマゲドン」、ユニークモンスター相手であれば必須とも言えるその一撃のためにレイ氏には合計十発の大技を命中させてもらわなければならない。

一旦頭から下ろしたエムルをメッセンジャー代わりにパーティメンバー全員に通達は完了した、今は後衛で頑張ってもらっているがいざという時はまた走ってもらうことになるだろう。

脳天に直撃を受け、さらに背中に大火力を受けたクターニッドが転倒する。すっ転んだ巨人相手に小人が群がって袋叩きにする光景は正直中々にアレな光景ではあるが、効率と攻略のために見てくれを犠牲にすることはゲームにおいて避けられない宿命だ。

「……矢が尽きた」

「なんて！？」

「ルストの矢が尽きたって！」

魔法弓に移行するようだが、ＭＰを消費する以上ルストが射ち切りになるのはそう遠いことではないか……

「ごめんなさい！　道具類がそろそろ尽きそうです！」

「アタシも魔力が限界ですわーっ！」

「ぼ、僕も魔力が限界で……」

次々と上がってくる悪い知らせが現在の有利と、後々の不利を同時に伝えてくる。クターニッドめ、タフネスすぎるだろう……怯み値自体は他のユニークモンスターと比べて低いので結構すっ転ぶが、タフネス……というかあのモンスターを継ぎ接いで作ったのだろう究極つみれボディの耐久値が高すぎる。

第二形態から最終形態まで戦い通し、更に言えば回復アイテムは魚

で代用できるが武器の耐久値などの対策ができなかった以上、俺たちはじりじりと追い詰められていた。

俺自身も多様な武器を持っているとはいえそろそろ限界が近い。クリティカルで耐久が減らない傑剣への憧刃(デュクスラム)だってじりじりと耐久が減りつつあるのだ、このゲームでは耐久が０になると武器や防具はロストする。ロストはしない一部例外(ユニーク)もあるようだが全員が全員それを持っているはずもなく。

だが少なくともレイ氏と俺が切り札を切っていない状況でクターニッドが倒れるとは思えない、それにもう一つ懸念があるのだが…………

「サンラクさん……行け、ます……！」

くそ、よくよく考えたらなぜ皆ナチュラルに俺に判断を委ねようとするんだ。俺は先頭で進みたいだけで他の者を先導したいわけじゃないんだぞ……ええい、やるか、やるしかないか？

俺が懸念すること、それはボスエネミーにありがちな一定体力でダメージを止めてしまう現象だ。その直後にイベントに入ったり別形態になったり……理由は何であれ体力１０００の相手に１００００のダメージを与えたとしても５０しか体力が削れない、そういうシステム的なトラップがこの世には存在するのだ。

もしもそれがクターニッドにもあったとしたなら、俺たちは一気に不利状況に陥ってしまう。だがこのままぐだぐだと続けていてもジリ貧になってしまうのも事実……ええいなるようになれ！

「分かった……スパートかけよう！　俺とレイ氏が勝負をかけるから他は距離を離しつつ追撃の用意を！」

「サンラクさん！　私も参加すべきではないでしょうか！」

「いや、秋津茜（おまえ）はいざって時の保険だ、温存しておいてくれ」

「はいっ！」

「覚悟しろクターニッド……【超過機構（イクシードチャージ）】！」

海上に浮上したのは間違いだったなクターニッド、煌蠍の籠手はずっと月の光を浴びていたんだぜ？

降り注ぐ月光はこの一撃の火力をずっと高めていた。最終形態なんだから妙なダメージストッパー仕込んでるんじゃねぇぞ？

煌蠍の籠手が変形し、黄金の核が破壊のエネルギーを解放せんと光を放つ。クターニッドはマッシブボディを手に入れて思考が脳筋になったのか拳を構えて先に俺を殴り潰すつもりらしい。

「脇腹貰うぞ、【超排撃（リジェクト）】！」

先に動いたのは俺、先に届いたのはクターニッド。だが奴の右腕から放たれたパンチが俺に命中する寸前、前へ出した左足を軸に身体を捻りながら右足を前へ、軸を左足から右足にシフトした状態で身体を回す。

真っ直ぐなストレートで突き出されたクターニッドのパンチを歯車が回転するように回避し、ステップでクターニッドの左脇腹を射程圏内に収める。

出力１２０％、俺自身の自滅も覚悟した超火力……もしもダメージストッパーがあったとしても、次のレイ氏が確実にダメージを入れられるように。

腹筋や骨で守られた部位と比べれば脇腹は守りが薄い、ボディブローが命中し、右拳の仕込み針がクターニッドの脇腹に突き立てられた瞬間、侵食と破壊がインパクトとなってクターニッドを激しく痙攣させた。

「隠し球があるなら……さっさと、吐き出せぇぇぇっ！！」

破裂。

水晶の欠片となってクターニッドの脇腹が大きく抉れる。衝撃波に押し出された俺の身体が冗談のように跳ね飛ぶ。さらに両拳には亀裂が走り、明らかな不調を示す黒煙が噴き出しているのが吹っ飛ぶ中で確認できた。

「上に吹っ飛んだなら好都合だ……アラバ！　助けてー！」

「何故自信満々に情けない台詞を叫べるんだ君は……」

地面にぶつかるから反動で体力が1になった俺は死んでしまう、だったら空中キャッチしてもらえばいい。

まだクターニッドの反転効果で水のない場所でも泳げることはアラバに証明させた、だからこそ宙を泳ぐアラバによってキャッチされた俺は体力1ではあるがそこで踏みとどまることができる。

「クターニッドは！」

俺の体力のことなどどうでもいい、レイ氏の攻撃は？　俺の攻撃を食らったクターニッドは？　ふらつく視界をなんとかマトモに立て直して眼下に俺が見たものは、

Vooooooooooo aaaaaa AAAAAAA！！！

「――始源（ハジマリ）の終焉（オワリ）を謳え……く、「アルマゲドン」っ！！」

脇腹を穿たれながらも、背中から巨大な漆黒の触手を……七日前、俺たちを深海の底に引きずり込んだあの触手を展開させたクターニッドと、白と黒の交差が混じり合った破壊の螺旋が激突する光景であった。

倶に天を戴いて　其の十六（後書き）

クターニッド「よっしゃラストスパートだ本気出す」

・巨大触手
クターニッド想像態の体力が一定以下になった時点で八つの宝珠から展開される超巨大触手。この状態になった時点で宝珠によるプレイスタイルコピーは終了するがむしろこっちの方が厄介、何故って触手一本振り回すだけでコロシアムが半壊するから。
とはいえ動きが遅い、隙が大きい、安置がある、と割と対処は簡単……とはいえ触手は八本あるのでパーティ人数が多いほど被弾確率が増える。

ＭＨＷ的な未開拓地探索を楽しむ一般プレイヤーと大怪獣決戦している主人公組、一体どちらがゲームとして楽しいのだろうか……というかＭＨＷ的な未開拓地探索のお話書きたい……新しいモンスターの設定書きたい……というかもうある程度考えてる……皣……いやなんでもないです

現在手元にＰＳ４が無いため血の涙を流しながらＭＨＷの情報を眺めている模様、ランボー悲しみの四象降臨

白と黒の螺旋がクターニッドに激突する。分身とはいえリュカオーンを屠った一撃だ、流石のクターニッドも……そう考えられるほどお気楽ではない。

八本の塔……いや違う、数十メートルはあろう巨大な八本の触手がレイ氏が放ったアルマゲドンを包み込むように巻きつく。

無論攻撃スキルであるアルマゲドンは触れられるようなものではない、だと言うのにその身を削りながらも八本の触手はアルマゲドンのエフェクトを包み、締め上げ、絞る。

「そん、な……！」

そしてボンッ、と本来の威力を考えればあり得ないほどに呆気なくアルマゲドンのエフェクトはクターニッドによって握り潰された。

ダメージを拡散した？　アルマゲドンに込められた情報リソースを触手に肩代わりさせて本体のダメージを軽減したってか？

だがクターニッドとて無傷でそれを行なったわけではない、八本の触手は力なくコロシアムの客席を粉砕しながらだらりと地に横たわり、クターニッド本体も明らかに消耗している。

しかしアルマゲドンはクターニッドを打倒できなかった。奴は死んだわけじゃない、クターニッドは未だ力を残している。

「降ろせアラバ、お前はレイ氏を回収っ！！」

「俺がか！？」

「あの重騎士を無理矢理でも引っ張れるのはお前しかいないんだよ！！」

不味い不味い、非常に不味いぞ。確かあの技って成功失敗を問わず使用後はスキル使用不可とかそういうデメリットがあるという話だ、この局面でメインアタッカーの離脱は正直困る、超困る。

「全員撤退！　一度距離を離す！」

一旦体勢を立て直す必要がある、回復する暇すら惜しいと俺は体力1のままクターニッドから距離を離す。後ろを見れば土色の鎧と剣を持つレイ氏を引きずるようにしてアラバが此方へと泳いでくる。

「作戦会議だ！」

クターニッドが怯みモーションから復帰する前に、俺達は一旦コロシアムの外へと退却することになったのだった。

「すいません……いきなり、触手が出てきて狙いが、逸れて……」

「……そういうのは無しでいい、これからどうするかを、考えるべき」

レイ氏を責めることは出来まい、あの瞬間最前線にいたのはレイ氏だけだったのだ。そして目の前で巨大な触手が展開されれば誰だってビビるだろう、俺でもビビる。むしろ外さなかったことを賞賛するべきだろう。

「よし、端的に全員手持ち武器、アイテムの損耗具合を教えてくれ」

「……魔法弓もそろそろ限界、多分射てて二十発」

「僕も、ルスト単体ならまだ数回バフは使えるけど……」

モルドとルストは限界だな……元々復帰勢だからアイテムもそこまで買い込んでいなかった可能性がある。

「秋津茜は？」

「えと、その……刃隠心得はほとんどもう使えないです……ご、ごめんなさいっ！」

「別に怒ってないし責めてもないから大丈夫、今使える手持ちを教えてくれ」

「はいっ！　回復アイテムを全部使い切れば竜威吹は撃てます！」

「そうか……いいか秋津茜、俺もレイ氏も切り札を使っちまった。レイ氏は反動で大幅に弱体化してるし、俺も体力回復でアイテムを使いきった……」

「だ、大ピンチですね……」

「そう、大ピンチだ。まぁ俺は戦力にアテがあるが……多分今の俺達の中で最高火力はお前だ」

「わ、私っですか！？」

「ステイ、落ち着け。はい深呼吸ー……よし落ち着いたな、そうだリュカオーンやらなんやらでレベルも上がったお前の切り札が切り札なんだ」

「せ、責任重大ですね！」

その通り、責任重大なのだ。
NPC連中はまぁ予想通り、と言ったところだ。強いて言うならアラバの持つ大太刀は特殊な武器なのでMPを使う事で消耗を回復できるという事実が発覚したくらいか。
プレイヤー陣の何名かが割とガチな目でネレイスを見ていた（俺含む）。
そして最後に、先程までの姿が見る影もなく弱体化したレイ氏。

「ぶっちゃけ……どう？」

……正直に言おう、今のレイ氏は足手まとい以外の何物でもない。

アルマゲドンの条件を達成できなかった事によるペナルティ。スキルに加えて魔法すらも封じ込められ、ステータスは軒並みデバフがかかり、見た目通りの心許ない数値の武器防具をレイ氏は外すことすらできなくなった。

「正直に言うけど……このまま行っても壁にすらなれない、と思う」

「っ…………………承知、しています」

廃人故にレイ氏もそれを理解している。だからこそ、レイ氏はしばらくの間沈黙し、答えた。

「……まだ戦えます」

「分かった」

誇張でも誤魔化しでもない、確たる根拠が伴った返答を疑うつもりはない。シャンフロ屈指のプレイヤーが出来ると言ったのだ、それはつまり出来るということだ。

その時、派手な崩壊音がさらに音を増す。作戦会議の最初の辺りからずっとBGMとして鳴っていたそれが、いよいよ近くなってきた。つまりはそういうことだ。

「よーし、クターニッド撃破作戦もいよいよラストスパートだ。勝っても負けても……なんてヌルい台詞はナシだ」

NPCはリスポンしないから？　それもある。
また挑めるチャンスがあるかも分からないから？　それもある。
だが最たる理由は、もっと根本的なところで俺達には怒りを抱くだ

けの権利がある。

「いきなり海底に引きずり込んで七日間も拘束しやがったんだ、諸々の経費込みで詫びを入れさせなきゃあな。素手で殴って噛み付いてでも勝つぞ！」

応、と結束と決意が篭った声がルルイアスの破壊音に負けない音量で響く。

振り向けば、八本の触手を手当たり次第に叩きつけながらこちらへと近づいてくるクターニッドの姿が。

触手を足代わりに移動しているため、マッシブボディのクターニッドは空中に浮いているような体勢だ。触手を展開するためなのか最初に見た時よりも拡大している骨の輪とクターニッド……

「……レオナルド・ダ・ヴィンチの」

「……あぁ！　大の字で寝っ転がってる変なおじさんの絵ですね！」

「ふぶふっ！　ふ、んふふふふ……痛いっ！　ルスト肋骨の隙間に貫き手はシャレにならないくらい痛いからっ！」

大丈夫かなぁ……怒りの感情欠片も感じねーんだけど……

不測の事態を限りなくゼロにしてこそ一流、だが不測の事態というものは絶対にゼロにはならない。
小数点以下の確率を根絶することはできない、量も質も優位を取って相手を追い詰めても突然隕石が落ちてきて自分達だけ大損害、というギャグみたいな可能性ですら万能ならざる俺達は潰すことができない。

とはいえそれはあくまでも「ｉｆ」がそこら中に転がっている現実での話であって、バグでない限りは実装されていない事象は発生し得ないゲームでは完璧な攻略というものは成立し得る。

だがしかし……そう、だがしかしだ。ここはシャンフロ、製作会社の妄執にもっと別の何かをドロドロに混ぜたようなリアリティで成り立つこの世界では、不測の事態は考慮すべき危険性として浮かび上がってくる。

「大盤振る舞い、です……！」

全ステータスを大幅に上昇させる【獅子なる側の栄光（レグルス・グローリア）】。
バッドステータスの数と質に比例してステータスバフを付与する【幾度となき再起（リーオーバー・ウェイク）】。
自身よりも巨大なエネミーと戦闘する場合全ステータスを大幅に上昇させる【小さき掌に大きな勇気（イグザージェレーション・ブレイブ）】。
体力や魔力、スタミナなどの消費されるステータスの数値が減少しているほど、消費されないＳＴＲなどのステータスが上昇する【精霊の報酬（フェアリワード）】。
俺は今札束が舞い散る様を見ている。いや違うそれは錯覚だ、俺は

今使い捨て魔術媒体(マジックスクロール)が大量に使い潰されている光景を見ているのだ。

なるほど確かに、アルマゲドンによる制限は魔法とスキルの「発動」だ。だが使い捨て魔術媒体(マジックスクロール)はレイ氏が魔法を使っているわけではない、レイ氏はＭＰを提供しただけで実行したのは羊皮紙……羊皮紙？　の方だ。

「もしもの、時の……最終手段、です。あまり長続きは、しませんが……戦え、ます」

「明らかに高価なものっぽいけど、お値段の方は……」

「八桁程……」

最低一千万マーニですよ奥さん、やっぱり飛び散ってるのは札束ですわ。

おびただしい量の魔法エフェクトを身に纏った錆色の騎士が力強く立ち上がる。

制約によりレイ氏は鎧を脱ぐことが出来ず、また剣を手放すことも出来ない。だが流石は廃人というか、レイ氏はスレッジハンマーをインベントリに入れることなくそのまま外に出しっぱなしにしていたらしい。

判定としてはレイ氏は大剣を装備している、この場合出しっ放しのスレッジハンマーは武器ではなく一種のオブジェクトのような扱いがされる。武器として使用すること自体は可能だが、その武器種のスキルを使うことはできない。

だが今のレイ氏にそれは関係ない、そもそもスキル自体が使えないのだから武器としてのダメージ倍率が下がった大剣よりもスキル使

用不可とはいえダメージ倍率が高いハンマーの方が武器として役に立つ。

「さて……」

レイ氏も前線に出た。アラバとシークルゥが前衛を受け持ち、秋津茜とモルドはヘイトを受けないよう隠れている。ルストは頭にエムルを乗せて移動中、数を射てないので確実に攻撃が通るタイミングを見計らっている。

であれば俺は何をしているのか。俺は今、クターニッドから離れた場所でウィンドウを弄っている。
この作戦の肝はリュカオーンを筆頭に数々の強敵と戦ってきたことで鍛え上げられた秋津茜の謝罪砲……竜威吹による一撃だ。そしてそれを確実に命中させるためにはクターニッドが動きを止めるよう怯ませなくてはならない。
ただの怯みではない、十秒は動けなくなるような特大の怯みを、だ。そして消耗が激しいチーム「不倶戴天」でそれを可能とするのは俺しかいない。

「三分でクターニッドをノックアウトする、責任重大だ……刻傷のせいでつらいかもしれないが頼むぜ」

あの日叶わなかった野望を再び叶えよう。

「エネルギーはケチらねぇ、存分に暴れるぜ……「青龍（セイリュウ）」‼」

倶に天を戴いて　其の十七（後書き）

Ｓｗｉｔｃｈでダークソウル……？
どこでもダークソウルとかいうパワーワード

戦術機獣「青龍」
野望に燃える鳥頭が「鎧着れないから無理」という事実に打ちひしがれる場面に遭遇していたやつ。
朱雀と異なるプロセスで空を飛ぶことが可能、というか実は玄武もホバーで浮遊できるので飛べないのは白虎だけ。

フュージョンジャック
フュージョンジャック
フロート
を彷彿とさせる悲しみを背負っている奴がいるらしい。

倶に天を戴いて　其の十八（前書き）

投稿の方遅れてすいませんでした、実はここまで書き溜め自体はできていたのですが設定を大幅に変えていたことを完全に忘れていたので書き直してました……なんだよ想像態って、当初の予定じゃ普通にタコの形態だったじゃん……

戦術機龍「青龍」は規格外特殊強化装甲【昇滝】一式に対応した戦術機獣である。
刻傷の効果によって刻一刻と破損の危険が迫る中、駆け出した俺は追随する青龍へと命令を下す。

「行くぞ青龍！　合体だっ！！！」

『御了解！！』

うーむ、こうもリアリティの高いゲームで「合体」という浪漫ワードを声高らかに言えるとは感無量。
朱雀のＡＩと比較するとテンションが高い青龍が吼えると同時、【昇滝（ショウロウ）】のヘルムを装備した俺の視界にいくつもの文章が流れて行く。

流石に後頭部に目は付いていないので何が起きているのかを主観的に認識することはできない。だが気づかぬほど軽くはなく、押し潰されるほど重くはない圧力は青龍が俺に覆い被さっている事を示している。
背中に何かが押し付けられるような感覚、頭全体を包み込むように何かが被さり、肩甲骨の辺りからスライドするように俺の両腕に青龍の腕部がさらなる外殻を形成する。

『各部連結準備完了！　コレヨリ当機体ハ合体シークエンスヲ開始ス！』

「あのクソ長ったらしい説明文を読んだんだ、大体把握してる……

「駆け昇る！！」

青龍は設定上では引力と斥力を操作する能力を持っている、それにより空気中の粒子を固定して斥力でなんたらかんたら……ゲーム的に言うなれば壁や天井を歩けるようになるスキル「ゼログラビティ」と空中を踏むことができるスキル「フリットフロート」が常時発動し続けているようなものだ。

俺の思考をＶＲシステムが読み取り、それをさらにシャンフロのサーバーが分析し、青龍がヘルム内に俺が望む「道」を表示する。
【昇滝】によって情報が拡張された視界に映る存在しないはずの道に足を踏み込んだ瞬間、なんというか泥を踏んだような雪を踏んだような……真下から足の裏をものすごい勢いで空気が押し上げているようななんとも言えない感触。

『足駆天翔（アシガケアマガケ）！』

「おおおお！？」

例えるならめちゃくちゃ高速で動くベルトコンベア、操作不可能な直線スキー、もしくは本来は乗ることが出来ない車の上に乗って吹っ飛ばされた時のような。
慣性が俺の上半身を掴んで後ろへと引き摺り込まんとする、慌てて前傾姿勢を取って前へと向いて……

「ちょっ、ジャンプ台みたいに道が途切れてるんだが！？」

『座標経路ノ常時指定ヲ求ム！』

「余所見運転は認めないってか……っ！」

Ｆｌｙａｗａｙ（ファーラウェーイ）！！
途切れた不可視の道から青龍を纏う俺の身体が吹っ飛ぶ。どうやら奴も派手に空を突っ走る青色の金属塊に気づいたらしく、ビルのごとき触手を伸ばして俺を叩き落とさんとする。

「お、わざわざ道を作ってくれてありがとよ」

常に「道」をイメージしていないと不可視の道を維持することができないようだが、既に物質として存在するクターニッドの触手はよそ見しても消えたりはしない。

「てめーの顔面まで直通通路だ！」

ぐむぅ、とゴムのようなスポンジのような肉の塊に着地し、加速する。確か説明文では「空気と自身の間に斥力を発生させて自身を弾いて加速している」んだっけか、つまりは常時ピンボール状態。
食らった血肉を固めて作ったのだろう触手の上を青色の龍機士が滑走する。ゴールは巨大触手の根元、ウィトルウィウス的人体図ポーズで君臨するクターニッドの横っ面だ。

うねり暴れて俺を振り落さんとする触手の上を引力操作による絶対的安定感で滑走しながら、インベントリアを操作する。折角の大盤振る舞いだ、どうせ三分以内で済ませなければならないのだからケチケチするのはなしだ。
ウェザエモンが残した遺産、規格外特殊強化装甲は戦術機獣を電源として稼動する。そして鎧があれば当然武器も存在する。

「規格外武装……折角なら剣と魔法からは脱却しようかぁ！」

双銃型【カストル・ポルクス】を選択、インベントリアからルルイアスへと転送する。

格納空間から喚び出されたそれは一見すると巨大な本のようにも見える直方体の金属塊、少なくとも重機のようには見えない。

だが青龍がヘルム内に表示する案内に従い両手がそれぞれの直方体に触れた瞬間、金属直方体が変形を開始する。

金属の表面を這う直線のラインに従って、折り紙を元の形に戻すように開いた金属が俺の両腕を包むようにしてバレルを形成し、装甲側も変形に伴って何らかのエネルギーラインを接続する。

「ヒューッ、かっこいいねぇ……！」

『接続完了！　装填（チャージ）弾丸数：二十！！』

「それ片方で？　それとも両方で？……まぁいい、とりあえず二十発！」

金属の塊が両腕にくっついているにしては驚くほど軽やかな動きで銃口をクターニッドへと突きつける。イメージが視界に存在しない道を作り出す。触手道から跳んだ俺の足は力場の道を踏みしめ、俺だけが歩くことを許されたそのルートはクターニッドの真正面、顔面のすぐ側を通過する。

「墨をブチまけろ！」

電光が飛び散る。変形したカストルとポルクスからスパークを帯びたエネルギーの弾丸が連射され、大雑把な照準とはいえそれらはすべてクターニッドの顔面へと命中し、破壊力をぶちまける。

Voaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa！！

ここに来て科学的高火力を顔面に食らったクターニッドが悲鳴をあげる。怯みモーションと共に巨大触手も波打ち、隙を晒すが……駄目だ、浅い。
視線を向けた先、落下軌道上に俺がイメージした滑り台が形成され、その上を滑り降りた俺は地上へと着地する。もっとダメージを叩き込んでもっと大きな隙を晒させなければ、秋津茜の一撃を叩き込む確実性を確保することができない。

「……すごい、とてもすごい、とてもマーベラス……！」

「うおっ、ルストか……」

どうやらルストがいる場所の近くに着地したのか、迫る制限時間に焦りつつも次の手を考えていると頭にエムルを乗せたルストがこちらへと近づいてきた。

「悪いが感想なら終わった後に……」

「……クターニッドの弱点に関していくつか、考察がある」

「二十秒で頼む」

残り時間は二分を切った、一秒すらも惜しい。

「……クターニッドの背中、触手の付け根にある玉が明らかに弱点っぽく光ってる。ヘイトを受け持ってくれれば私が射抜く」

怯みモーションで動きを止めながらも、奴のヘイトは俺へと向いていることは鎧の中で粟立つ肌が如実に示している。後ろに回り込む

暇もないのでそれを実際に確かめることはできないが、確かめる必要もない。

「いけるのか？」

「……ＭＰ的にも八発が限界だけど、モルドのバフ込みで全部当てれば問題ない」

「っし、囮は任せろ。エムル、秋津茜に俺たちの攻撃が終わったらぶちかませと伝えてこい！」

「はいなっ！」

「よぉーっし！　全員！　プランＢだ！！」

プランＢの「Ｂ」とは！　「ぶっ飛ばす」のＢであり！　「ぶちのめす」のＢであり！　「ボコす」のＢである！　即ち作戦最終段階に至るため、秋津茜を除く全員が今持ちうる最大火力を叩き込む！！クターニッドは喋れるからな、当然その逆も可能なんだろう。下手に口に出して察知されたらたまったものではないので作戦は非常に単純な合言葉に変換している。

「正々堂々一対一！！」

やったらめったらに反転させまくるタコが相手なんだ、作戦の言葉と内容を逆にするのはお似合いだろう？

正々堂々（卑怯上等）で相手（袋叩きに）してやる号令と共に全員が動きだす。どうやら俺の攻撃でやつは地面へと降りて攻撃することを選んだらしい、実は腕立て伏せしてるみたいで空中に浮くのは辛かったりするんだろうか？　いやまさかな……とはいえ好都合だ。

『エネルギー残量三割！　充電求ム！』

「燃費……じゃねーな、充電がそもそも足りてないか……まぁいい、ゼロまで使い切ってでも動いてもらうぞ！」

カストル・ポルクスをしまい代わりに規格外武装大砲型【レグルス】を展開、一メートルほどの円柱が右腕へとくっつく。規格外武装自体がそういうコンセプトなのか、カストル・ポルクスと同じくバラバラに分離した円柱が変形と合体を経て巨大な砲を形成する。

いつから生きてるのかは知らないが、どうやらクターニッドはレグルスを脅威として正しく認識できているらしく腕を盾のように構えて俺への警戒を高めている。触手で俺を攻撃してもいいんだぜ馬鹿め……

「時にクターニッド、いいことを教えてやる……言葉の意味は裏返しだぜ」

「【タケミカヅチ】！！」

「【深海嘯（タイダルディープ）】！！」

正々堂々？　換金したって1マーニにもならんようなもの、ゴブリンにでも食わせてやれ。

俺に注意が向けられている間に背後に回り込んだシークルゥとアラバがクターニッドの膝の裏へと攻撃を叩き込む。膝カックン再び、一つだけ違う点があるとすれば奴の膝裏に叩き込まれた火力が段違いということだ。

「ファイヤーッ！」

そして膝カックンによって重心が崩れたクターニッドへとレグルスが光を放つ。青龍によって反動で吹き飛ぶようなことこそはなかったものの、右腕が軋むような圧力に負けじと力を込める。
放たれた砲撃はクターニッドの鎖骨のあたりに命中し、後ろへと重心が揺れたクターニッドを更に押し込む。

「そんなにひっくり返りたいなら、自分の身体でオセロでもやってな……レイ氏！」

「………！」

後ろへと倒れんとするクターニッド、だが足りない。これでは求める怯みの時間には到底届かない。
だから更に叩き込む、過剰に殺す（オーバーキル）つもりでレイ氏には札束でぶん殴ってもらう。

「行きます……【巨神の崩撃（ティタノマキア）】！！」

レイ氏が持つ使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）の中でも最高額、そして最強の魔法が込められたそれがレイ氏の意思に従い封じ込められた魔法を解き放つ。
土属性に該当するこの魔法は、ある程度の範囲に地面があることが条件であり、つい最近まで海底にあったとはいえもともとルルイアスは「島」だ。俺たちはちゃんと大地の上に立っている、巨神の一撃は発動できる。
大地が鳴動する、まるで巨大な何かが方向を上げながら力を解き放つが如くクターニッドが形成したコロシアムの地面がひび割れる。

「すげぇ、フライパンでホットケーキとかひっくり返したみたいだ」

大地をぶち抜き顕現した巨大な土の拳、ひび割れた拳の奥に赤く光る灼熱を帯びた巨神の一撃が青天井に倒れんとしていたクターニッドの背中を真下から真上へとぶっ飛ばす。信じられるか、クターニッドが浮いてやがるぜ。

「ルスト！！」

さぁ、ネフホロ最強プレイヤーの力を見せてもらおうか！！

倶に天を戴いて　其の十八（後書き）

クターニッドの巨大触手は「相手への干渉時は質量に見合った重量を示す」が「自身への干渉時は本来の重量を示さない」という使ってるいわゆる本人は重さを感じない「細腕の美少女が大剣を振れるわけがない？　うるせぇ！　不思議パワーで本人は重さを感じねーんだよ！」ってやつなんですが逆を言えば「クターニッド自身の物理法則は人型分の重量のみが適用される」ということです、地味にこれ拘束魔法などに関わってくるので攻略には重要……と言う設定です。

決闘者向けに超わかりやすく言うと混沌幻魔アーミタイル

・使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）

一定以上の条件を満たした「魔法使い」系のプレイヤー・NPCであれば作成することができる。

転移魔法などの汎用性のデメリットなく使用出来る魔法が主流ではあるが攻撃魔法なども封じ込めることは可能。

とはいえ威力は下がる……のだが、「発動によって起きる現象」そのものは変わらないため現状「賢者」のNPCしか作成できない特大オブジェクトを呼び出す【巨神の崩撃（ティタノマキア）】などは超高額で取引される。

ちなみにレイ氏が後先考えずに使いまくってるスクロールはレイ氏の自腹ではなく「クランの資金」で購入し、レイ氏に持たされたもの。その場のノリで「ヤケ使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）」して後で激しく後悔するパターン。

倶に天を戴いて　其の十九

実のところ、ルストにとって弓というものはファンタジーの武器でしか無い。現実において弓道やアーチェリーの経験があるというわけでもなく、ただ遠距離武器であるというだけで選んだメイン武器である。

だがそれでも、「動いて、射つ」というバトルスタイルはネフィリム・ホロウで培われた技術を反映させることができるし、決して長いとは言えないシャンフロのプレイ時間の中で弓だけを使い続けてきた慣れはこの状況においてルストが為すべき事を成すために最適な動きを取る。

「……モルド」

「これで全部だよルスト、もうＭＰが尽きたからこれ以上の強化（バフ）はできない」

「……ん、わかった」

視線を遠くに向ければ、実にアメイジングで実にファビュラスな機械鎧が実にエレガントな砲撃を放っている。

今すぐにアレを使えるわけでは無いが、来る新世界（新作）までの間には是非とも体験してみたい、シャングリラ・フロンティアにおけるロボ。

であればサンラクの他に二人いるというロボの所有者たちへの好感度を上げるべく、この戦闘で多大な貢献をすることは間違いでは無いだろう。

「………ふぅー……」

魔法弓「聖幽柳の弓（ラール・ウィロー）」は既に限界が近い、だがこの瞬間に八発の射撃に耐えられるだけの耐久を残している事をルストは称賛する。
魔法弓という武器種最大の特徴は魔法攻撃をスキルで放つことができるという点である……というのはあくまでも一般的な魔法弓の利点であり、ルストにとっての最大のメリットは魔法という非物質的な矢であるが故に物理的な制約を受けづらい、ということだ。

「……地味に狙いづらい」

それ即ち、ＳＦなどで登場する「ビーム」と似た感覚で攻撃ができるということである。それに加えてルストはモルドの強化魔法と自身のスキルで矢の軌道をさらに真っ直ぐにすることで、まさしく「ビーム」と言っていい直線的な一矢を放つことができる。

狙うは深淵の盟主の背中、八つの宝珠。
スキル「天眼の一矢」により命中に補正がかけられた第一射が放たれる。空間を真っ直ぐ切り裂く光の矢がクターニッドの背中、巨大触手の付け根で輝く宝珠の一つにぶつかり弾ける。

「……次」

スキル「噴流の螺矢（ストリーム・アロー）」により貫通力が高められた第二射が放たれる。
砕け散った一つ目の宝珠の破片をかき分けながら二つ目の宝珠を貫き爆ぜる。

「……次、次、次」

スキル「鶴瓶射ち」、スキル「跳ね馬の騎射」、スキル「一矢二鳥」……非物理的な弦（つる）と矢で攻撃するため、剛弓のように力を込めて弾

く必要が無い魔法弓、それ故に凄まじい勢いで連射される矢がクターニッドが地面に落ちるまでの数秒の間に次々と宝珠を穿つ。
そしてルストの見立ては確かに正解であった。砕かれた宝珠に対応する巨大触手は宝珠の破壊と連動するようにのたうち、根元からボロボロと崩れ去っていく。

「……あと二個……っ！？」

「ルスト！」

だがここで、誰もが予想しえぬ行動をクターニッドは選んだ。
残った二本の触手、宝珠の位置としては右肩上部と左脇腹から伸びた巨大な「腕」を激しくしならせて地面を強く叩く。挑戦者たちがそれを正確に知る由は無いが、自身への干渉と他者への干渉で物理法則が異なる触手は本来ならばありえないはずの動きを可能とする。大地に叩きつけられた超重量の触手、されどクターニッドにとっては空気より軽い触手。重力をはじき返す上向きのエネルギーと、クターニッド本体分の重さしか無い体重。空気抵抗すらも欺く巨大触手による莫大なエネルギーはクターニッドをさらに跳ね飛ばす。

「……跳ん、だ……！？」

「逃げてルスト！」

ルストは気付いた、この瞬間クターニッドの状態がまさしく反転したということに。
被弾による滞空では無い、上から下への位置的有利を確保した自発的な滞空であるということ。そう長くは保たずに巨体は落ちてくるであろうが、今この瞬間だけは力関係が完全に逆転したのだということ。

そして、振り下ろされた触手が狙うは自分であるということ………

「させま、せん………っ！！」

飛び込む錆色、乱暴に突き飛ばされたルストが地面を転がるように倒れ伏す。突き飛ばされたルストが見たものは振り下ろされた超重量に真っ向から立ち向かうサイガー０の姿。

「く、ぅあ……っ！」

弱体化し、スキルも魔法も封じられたサイガー０に触手を迎撃する手段は無い。円を描くように振り上げられた致命の大鎚(ヴォーパル・スレッジ)と錆び付いた神魔(アンチノミー)の大剣を渾身の力で触手に叩きつけ、その反動で触手の軌道と自身の位置をかろうじて位置をずらすも、巨大触手に叩き据えられたサイガー０の身体が冗談のように跳ねる。

「………っ！」

「まだ、大丈夫……射って！」

違う、懸念はそこではない。そう言うために喉を振るわせることすらもが時間のロスになる。ルストの選んだ行動は果たして攻撃であった。

振りかぶられるもう一本の触手、だがそれでも攻撃のチャンスを逃すまいとルストは天上へと弓を構える。

そうとも、隙を作るのは彼の仕事なのだから。

残り十秒、エネルギー残量も僅か。これ以上の装備し続けることは危険であるし、これ以上の砲撃もできない。
だがそれでもやりようはある、やれることはある。

「全速力で飛ばせ青龍……空へ！！」

『御了解！！』

地の利はクターニッドにある、それを取り返すにはさらに地の利を上書きする他に無いだろう。馬鹿めクターニッド、空は俺と青龍のテリトリーだ。
力場の道は真っ直ぐ縦に伸び、それを駆け昇る様はまさしく鯉が龍となるための昇滝(ショウロウ)だ。クターニッドを追い越し、暗さが薄まってきた夜空に青い龍が昇る。

「解除！」

四、三、二……一………間に合った！
危ない、三分経過まであと一秒だぞ……二度と昇滝を着用できないのは痛いが、それでクターニッドを倒せるなら釣り合いは取れてい

る。

インベントリアに頭装備以外の【昇滝】一式を放り込み、まだギリギリ稼働している青龍に最後のオーダーを下す。

「ぶん投げろ！！」

兎月を【双弦月】に、合体した対刃を左手に持った状態で右手を青龍へと伸ばす。伸ばされた手は青龍のアームに掴まれ、最後のエネルギーを振り絞った青龍が俺の身体をハンマー投げのように振り回し……真下へとぶん投げた。

力を失い墜落する青龍よりも速く落ちる身体をなんとか制御しながら、真下へと【双弦月（クレセント・ヴォーパル）】の刃を突きつけ、スキルを起動。強者に挑む俺を照らす致命の三日月の光はさながら流星のように光の尾を引き、物理演算の加護が今この一瞬だけクターニッドを凌駕する。

一瞬、ルスト達を二本目の触手で叩き据えんとしていたクターニッドがこちらに気づいたかのように身体を震わせたが……遅い、もう着弾する。

「這い蹲れクターニッドッ！！」

流星の速さを得た三日月が夜明けの凪を引き裂き迸る。

三日月の刃は宝珠を一つ砕き、クターニッドを再び大地へと叩き落とす。だがその代償は大きい。

「ぐぁっ………」

クターニッドが滞空する十メートルほどの高さのさらに上から落ちてきた俺は、言うなれば上から下へピッチングマシンでぶん投げられたようなものだ。当然何かに触れればその衝撃は自分に跳ね返ってくる。

さらに言えば今この瞬間俺は攻撃のために受け身や着地を捨てている、であれば物理演算の加護は俺にそのツケを支払わせるだろう。

全身に痺れと脱力、これは間違い無く今ので体力が1になった。耐えてはいるが俺が着地したのはクターニッドの背中、つまりそこからもう一度地面に落ちる。

インベントリアエスケープしようにもMPはとっくのとうに尽きている、青龍はリアクターのエネルギー切れで既に電源切れだ、仮に誰かが下でキャッチしたとしてもさすがにノーダメージとはいかないだろう。

（これは死んだか……）

だが痺れ脱力しても身体を動かすことくらいは出来る。俺が下にいる奴らに送るメッセージはただ一つ。

「……殺れ！！」

最後の矢が放たれる。俺が落ちるであろう地点に先に落ちたクターニッドの最後の宝珠が粉々に砕け散り、巨大触手の全てをもぎ取られたクターニッドだけが残る。

レイ氏が走る。地面に叩きつけられ、激震と共にわずかに跳ね上がったクターニッドへと肉薄し、スレッジハンマーでクターニッドの首と鎖骨の間あたりだろう場所をカチ上げる。

クターニッドがちょうど海老反りのように顔を持ち上げさせられ、無防備な姿をさらけ出す。

そしてこれが王手だ、秋津茜が飛び出し例の謝罪砲を放つ構えをとる。

この一瞬、ただこの一瞬の為に全員が全力を尽くしてきた。秋津茜

は竜威吹を発動する為の印を結ぶと、息を大きく吸い込む。
ふと、露わになった秋津茜の素顔がこちらを向いて迷いを見せる。
何故ここで躊躇うのかと考え、その理由にふと思い至る。
そうか、この軌道だと俺も竜威吹を食らうのか……些事だな、そもそも落下の時点で死ぬわけだし。
だったら、やることは一つだ。俺は頭から落下しながら秋津茜に親指を立てたサムズアップをしてみせ、改めて告げる。
「ぶちかませ！」
返事は無く、ただ秋津茜の動きから迷いが消えた。
「さぁてクターニッド、互いに死んでも死なないようなもんだ。遠慮なく死ね」
地面が迫る、それでも目は瞑らない。最後に見たものは視界を埋め尽くす竜の閃光と、まるで誰かが流した涙のような小さな輝き……
そしてクターニッドと共に光に呑まれた俺は死んだ。

倶に天を戴いて　其の十九（後書き）

実際のところレベルアップを経た秋津茜の竜威吹はレベル９９　Ｅｘｔｅｎｄのサンラク体力満タンでも一撃で葬れます。
秋津茜が高火力というより変態が脆すぎるだけですが……

倶に天を戴いて　其の二十

かつて私は「そう在れ」と生み出された。

今の私は「そう在る」ことに不満を感じたことはない。

であればこそ、私は彼等の前に立つ。

この「名」が持つ使命ではない、この「身」が持つ理由でもない。

ただ、ここに在る私がそう想うのだ。

だから、だから今この瞬間は彼等を称賛しよう。

…………………

…………

……あれ、生きてる？

え、まさかの幸運による食いしばり連続発動？　乱数の女神様が俺の祈りをついに聞いてくれたの？　マジかよ本格的に崇めようか？

「良かった……間に、合った……」

「レイ氏？」

なぜレイ氏が間に合ったと安堵しているのか。その答えは俺の身体が僅かに帯びていたエフェクトの残滓からおおよそ察せられた。

「蘇生アイテム？」

「はい、以前……その、ＰＫＫをした時の、ものが残って……いまして」

以前のＰＫＫ……ああ、ペンシルゴンがロンダリングした時の。

つまり乱数関係なく俺は死んでいたというわけだ。乱数のクソ女神め、やはり邪神の類であったか塩撒け塩。

いやでも「愚者」の効果で強制運ゲーだしむしろ乱数に救われていた……？　へ、へへっ、冗談っすよ女神様ぁー……

「さて……クターニッドは？」

聞かずとも分かる、奴が現れてからずっと肌で感じていた空気が霧散している、それは即ちそういうことなのだろう。

「勝った、か…………」

視線の先、そこにはマッシブボディの原型を留められずに崩壊し、消えてゆくクターニッドだったもの。
そしてその肉塊の表面を這いずるように空中へと逃れ、現れる魔法陣……いいや、クターニッドであろうもの。

『生命の輝き、確と見届けた』

「終わり、です……か？」

「多分……そうだと、思うよ」

「……ねーむい、つかれたぁ……」

ルストまだ寝るな、流石に地面に寝転がった状態でイベント進めるのはちょっとアレだぞ。俺もそろそろ寝落ちしそうだが堪えろ堪えろ。

魔法陣は空に浮かんでいた時とは違い、目や口があるわけではない。本当にただ複雑な模様の魔法陣が歯車が回るように動いている、それだけの模様であるはずなのに、たしかに俺は……多分他の奴らもクターニッドに見られたと感じただろう。

視線は俺達を見て、アラバやエムル達を見て、そして最後にどこか遠くを見て……わずかな沈黙の後、言葉を紡ぐ。

『連なる二つの奇跡。相反することなく、共に在る事……喜ばしい』

「おっ」

「……？　どうし、ましたか？」

「いやちょっとな」

これもしかしなくても何か条件を達成したんじゃないか？　ウェザエモンで言うところの天晴（テンセイ）を受けきった場合とそうでない場合のクリア報酬の違い、みたいな感じの。
だとすればクターニッドの特殊条件は「ＮＰＣと一緒にクターニッドを撃破する」か？　そう考えればアラバがここに配置されていた理由もなんとなく見えてくる。
いや、そもそもスチューデがフラグとなってルルイアスに連れてこられた理由も……そういうことなのか？

『遠く、遠く……遠くへ来た。星の海はもはや遠く……されど、見上げた先のあの海こそが故郷である』

『星の大海を征く旅人……滅べどもその旅は継がれ続く……人よ、偉大なる祖を持つ栄誉を誇れ』

星だの旅だの……まぁ、ＳＦ的な背景からして元々神代の人類ってのは宇宙船に乗っていたってことなんだろう。
どこかしらで宇宙船ステージでも出てきそうだが、まぁ今はユニークシナリオをクリアした喜びに浸ろうじゃ無いか。考察とか名前忘れたけど考察クランの違法幼女に真理書をちらつかせればなんとかしてくれるだろう。

流石に一人でいくつもユニークを抱えっぱなしでいると本格的に悪目立ちしそうだし、ある程度「ワタシプレイヤーノミカタネー」っ

てところを見せたほうがいいだろう。
もう既に悪目立ちしまくってる気もしなくもないが、雨の日に子犬を拾う不良現象は日本人に効果的な手法だ。

『人よ、力を示せし人よ。その旅路の一助を授く』

「よっしゃ報酬キタ！」

宙に展開された魔法陣(クターニッド)が異なる形の魔法陣に変形した瞬間、俺達全員の前に八つの光が花開くように円を描く。
それは丁度数十分前くらいに必死こいて破壊した八つの杯と同じ輝きを放っており、報酬が何であるかをどことなく察せられるものだ。

『我が八の光輝、その断片を一つ授けよう……』

「八つのうち一つだけ、か」

なんか、周回要素臭いぞ……？　いやまさかな。
意外なことにNPCの前にもクルクルと緩やかに回転する八つの光、はてどれがどれであったかとしばらく悩むが適当にいじっていたらアイテム説明が出てきたので勘で選ぶ必要はなかったようだ。

多分、戦術機獣がウェザエモンの騏驎程のスペックを持っていないようにある程度のダウングレードがされているんだろうが……
近距離、遠距離、スキル、魔法、性別、視界、ダメージ、ステータス。これらいずれかを反転できるアイテムともなればその価値は計り知れない。
俺ですら単純にLUCとVITを入れ替えるだけで高機動タンクになるし、MPを高めれば魔法職もどきにだってなれる。
そうでなくとも土壇場で近距離無効を使う事で一時的な無敵状態を

確保できたり、純魔や脳筋に対してのメタを張る事も出来る。夢が広がるな。

だがやはり皆こう思ったはずだ……「一個って少ないなぁ」と。
だが日本人とは良くも悪くも奥ゆかしいもので、思うだけで口には出さない。ただやっぱり八つもあるのにたった一つ、というのはやはり少ないと感じてしまうわけで……

何が言いたいかというと、だ。

「タコさん！　これ三つくらい貰えないんですか！！」

「うぉい！？」

まさかの秋津茜、むしろやはり秋津茜。
いや本当、その度胸はどこから湧き出しているのか聞きたいくらいの度胸を以って、奴はまさかのクターニッドに直談判しやがった。

『…………』

「せめて二つ欲しいです！」

「秋津茜、お前……勇者かよ」

相手がついさっきまで殺し合いしてたとか、そもそも生き物かどうかも怪しいモンスターだとか、大前提としてＡＩじゃねーかとか、そういった諸々を全て乗り越えての値切りである。
マジかお前、マジかよお前。そりゃジークヴルム相手に突撃できる訳だよ。

沈黙が辺りを支配する。プレイヤー達は「よくその要望言えたな」という驚愕で、ＮＰＣは「神にも等しい相手によくそんな気軽に話しかけられるな」という驚愕で。
ただクターニッドが空中で緩やかに魔法陣として回転している。いや流石に無理だろう、ユニークモンスターだよ？　そんなアホみたいな要望が通る訳ないだろ、値切りの技能値を初期値にマイナスついたようなモンだよ？

『二つ授けよう』

クリティカルですか、嘘だろオイ。

「やった！　ありがとうございますタコさん！！」

「嘘だろオイ！？」

もはやプレイスキルとかそういう生易しいものではない、これは天運と天賦の才能の合わせ技だぞ。

「いやこれ何をどうやったら見つけられるんだよ」と言いたくなるような隠し要素も、それでも見つけるゲーマーというものは確かに存在する。
特定の場所で特定のアイテムを装備した状態で特定の呪文と特定のアクション、なんて「特定」の四重奏すらをも何故か突破して隠し要素を見つけるタイプ。
その瞬間を目撃できるとは思わなかったが、いやはや秋津茜、恐ろしや……

「いや、まさか直接値切りするとは思わなかったが、でかした……と言っておこう……うん」

「はい！　以前サンラクさんがリュ……リュカ、ローン？　リュカローンに話しかけてたのを思い出したので！」

言われてみれば俺も似たようなことしてたわ、人のこと言えないじゃん。

とんでもない馬鹿野郎を見る視線が俺の方にも向いてきたが、しゃーねーだろあの狼のせいでこちとら彫り物半裸生活なんだぞ。

一言文句言わなきゃ気が済まなかったというか、結局さらに面倒なことにさせられたからあいつ絶対ゆるさねぇ……

リュカオーンにはいつかお礼参りするとして、改めて俺は目の前に浮かぶ八つの光を見る。

二つもらえるなら遠慮なく、これと……これで。

いやまさか交渉コマンドが通じるとは思わないよなぁ、シナリオが終わって気が抜け……いや待て。

「どうか、しましたか……？」

ふと、気付く。

「なぁ……誰かさ、ユニークモンスターを倒したアナウンス……聞いたやつ、いるか？」

「……アナウンス？」

俺の言葉にルストとモルド、そして秋津茜は疑問符を浮かべるが、シャンフロというシステムに詳しいレイ氏は俺の言わんとする事を理解したようだ。

脱力していた身体に力を込め、辺りを警戒するように見渡す俺達に他の面子も何かがおかしいと気づいたのか立ち上がる。

その時だった。

ぞわり、と

「青」が蠢いた。

倶に天を戴いて　其の二十（後書き）

帰るまでが遠足です

クターニッドに値切り交渉が効いたのはリュカオーンが刻傷を主人公に付与したのと同じ原理ですが、シナリオ中の行動などから判断されています。
つまり最適最速で面白みもなくクリアしていた場合、値切りは失敗していたでしょう。
いわゆる「シナリオの山場を超えて寛容になったＴＲＰＧのキーパー」ですね、多少の要望を聞いちゃうアレです。

前々からやろうかどうか迷って後回しにし続けてたんですが、キャラクターの見た目的な描写とかって書いた方がいいんですかね？

我ら人の味方に非ざれど、防波の先陣に立つ（前書き）

いつも「長編部分は其の十くらいに収めよう」と計画するのに毎回二十まで伸びるのは何故なのか、これが分からない

我ら人の味方に非ざれど、防波の先陣に立つ

その「青色」を俺達は知っている。
この場所がルールイアと呼ばれていた頃、この島が海上にあった頃、ルールイアを滅ぼしかけた正体不明の何か。
クターニッドが滅ぼし、それでも汚染されたこの島を海の底へとひっくり返したそれは、ただの背景ストーリーのフレーバーだとばかり思っていた。

「エムル、頭に乗れ！」

「は、はいなぁっ！」

足は……大丈夫、恐らく非活性なら触れてもいいんだ。

「こ、これって！」

「モルドの思ってる通りだろうさ、間違っても触れるなよ！」

こいつはもう、倒す倒せないの話じゃない。これはフィールドギミックだ、ボスを倒した後ならお約束すぎるほどにお約束な「崩れるぞ！　脱出するんだ！」ってやつだ。

『忌々しい始源の亡霊め』

「――なんだって？」

今何か、壮絶に重要な設定をクターニッドが吐き出した気がするぞ。

だがそれを考える暇もなければ、クターニッドも懇切丁寧に説明するつもりはないらしい。

『人よ、この場は再び深淵へと沈む……危機は近い、ゆめ忘るることなかれ』

実際に物質としての指がそれを示したわけではない、だがこの場にいる全員が同じ方向を示されたかのように視線を向ける。

『行け、旅は続く……この世界に生きる人よ、バハムートを見つけ出せ』

「お前、それは……」

バハムート、またしてもその言葉を聞くことになるか。一体なんなんだ、ドラゴンなのか？　安易にドラゴンと考えていいのか？

『現在は継がれし「人」のものである、しからば抗い戦うのもまた現在を生きる者……』

「くそっ、よく分からんがロケート示されたなら従ってやるよ！　全員帰るまでが遠足だ！　走るぞ！！」

「……うぇぇぇぇぇ……」

「ルストもう少し頑張ろう！　ね！」

「よーし！　走りますよーっ！！」

「秋津茜殿は、なんというか元気で御座るなぁ……」

「また走るのかぁ！？　そろそろ限界だぞ！？」

「アラバ、ガンバる」

泣き言吐いてもいいが身体は動かしてもらう、ギャーギャーと叫びながらもここまで来てシナリオ失敗は泣くに泣けない。

崩壊した街並みで荒波の如く暴れ狂う「青色」の街並みの中、逆に不自然な程に保たれた道を駆け出す。

『――――』

「……え？　あ、えと、はい……」

だからこそ背後でレイ氏がクターニッドと何かを話していたことには気づいていても、墜落した青龍やら放り投げられた【双弦月】やらを回収することでそれどころではない俺は、その内容までは聞き取ることが出来なかった。

「あっぷ……！」

「ぴぃぃぃっ！？」

ぐばぁ、とスライムのような波のような霧のような……何かが悍しいほどに蓄積したという事だけは分かる「青色」をすんでのところでかいひし、エムルが悲鳴を上げる。

「……これ、イベント？」

「触れて死ぬならプレイ中だ！」

「……試す気も起きない」

青色一色ではあったとはいえ、確かに文化の残滓が感じられたルルイアス、だがもはやここは「青色」が暴れ狂う地獄の一丁目だ。

「というかこれどこに続いているんでしょうか！」

「ほぉお！？」

先頭を行く秋津茜が地面を這う「青色」を飛び越え、秋津茜の背にしがみついたシークルゥが奇声を上げる。

リードランナーの動きを真似て俺達も明らかに触れてはマズイと分

かる青色を飛び越える。

「そりゃ、島の外……海だろ！」

「泳いで脱出ですか！？　私、トライアスロンは流石に専門外といいますか……」

「いざって時はアラバに全員しがみついて脱出だな」

「いや……っ！　流石に……無り、おわぁあ！？」

「チッ、ドベを狙うとは意地の悪い……！」

インベントリを素早く操作、今にも「青色」に呑まれそうになっていたアラバとネレイスを守るために守り人の大鎧を「青色」へ投げつける。

あの手記の描写が正しければこの「青色」は無機物に寄生し有機物を喰う、プロセスは違うが結果だけならどちらも「処理に手間取る」ってことだ。

「ま、また助けられたな友よ……！」

「感謝は後だ！　走れ走れ走れ！」

くそう、あれ結構高かったんだぞ……だがＮＰＣと違って替えが利く、悪いが犠牲となってくれ！

胸鎧を、兜を、腰鎧を、脚甲を犠牲に時間と距離を稼ぎ、俺たちは遂に海岸線へと出る。

「ゴールッ！」

「ここからどうするの！？」

「……知らん」

「海に、飛び込みます……か？」

どうする、なにか行動しないと駄目か？　プレイヤーとＮＰＣの命の価値は等価値では無い、いざって時はエムルやシークルゥをアラバに積んで海に流せば俺達はリスポーンできる。

アラバにエムル達ＮＰＣを託すかどうかを本気で視野に入れながら迫る「青色」の津波を見ていたその時、

「お前らっ！」

「んお？」

この世の中希望に満ち溢れていてそれを当たり前のように自分が享受できると思っているような甘ったれた、だが七日間のサバイバルの中で少しだけ成長したようなガキっぽい声色は――――！

「クソガキ（スチューデ）か！」

振り向いた先、そこには巨大な漆黒の触手にむんずと掴まれ、こちらへと近づく妙に真新しい巨大な帆船。そしてその船首にはカトラスを振り回してこちらへと手を振るスチューデの姿が。

「いやナチュラルに流してるけどどうなってんだそれ！？」

「僕がわかるわけないだろ！　いいから早く！」

「アラバもさっさと行け！　お前すっとろいんだから先に登れ！」

ええい、行くしかねーか。船から投げ下された縄梯子、俺はエムルを秋津茜の頭に乗せると、さっさと登るように身振り手振りで示す。

「お前はどうするんだ！」

「俺はとっっっっっっっても強いからな、殿を務めてやるのさ」

「………友よ、死ぬんじゃないぞ！」

「バーカ、死んでも生きて帰るんだよ」

レイ氏に目配せを送り、俺は迫る青すぎるほどに青い「青色」と対峙する。

「物量戦ならこっちも少し自信がある、凌ぎ切ってやるから俺に注目しやがれ」

フィールドギミックとしての「現象」であったなら、俺のやっていることは無駄になるわけだが……恐らく、この「青色」はモンスターだ。単一のモンスターなのか複数のモンスターの集合体なのかはこの際どうでもいい、重要なのはこいつにヘイトの概念があるかどうかってことだ。

というわけで手っ取り早く検証する。

・その1、適当にアイテムをぶん投げる。

・その2、致命秘奥【ウツロウミカガミ】起動。

もし奴にヘイト概念があれば……

「ひっかかった！」

先ほどまで俺がいた場所に降り注ぎ群がる「青色」の姿は、奴にもヘイトを理解するだけの設定が搭載されていることを示している。だがそんなことはそもそも無意味であったと数秒後に俺は悟る。なにせ物量という言葉すら少なく感じるような質量の暴力、四方八方を瞬く間に「青色」が包囲し、砂浜が青色に染まっていく。こいつはやべぇ、こんなものを放っておいたら世界がダイレクトにヤバいぞ。やだよ俺滅んだ後の世界でＭＭＯするとか、これではポストアポカリプスどころか惑星規模でリセットだ。

「そろそろヤバいが……」

「サンラク！」

「おーっし、順番きたからあばよクソブルー！」

物理的に倒す手段が無い以上、脳筋ビルドの俺に出来ることは何も無い。鈍臭いアラバや全体的にスペックが落ちているレイ氏が上りきったならこちらのもの、さっさとおさらばするに限るぜ。

「よっ、ほっ、俺を捕まえようなんざ……百億年早いわ出直してこい！」

砂浜に押し寄せる波が足を絡めんとする、カフェインが切れた脳がもう休ませてくれと悲鳴をあげる。それらすべてを踏みつけて走る。
「青色」が天を覆い、俺を食らうかのように襲い来る。
これは詰んだかと力んだ足が弛緩しそうになる、電脳の世界で力みが緩むとはどういう原理なのかは疑問だが、要するに気の持ちようだ。気が滅入るから身体がそれに引っ張られるのだ。

「うおおお！　ここまで来て一人だけ死ねるかぁあぁぁ！」

つーかこの場合死んだらリスポン地点ってルルイアスになるんじゃねーの？　やだよたまに来るくらいならいいけどこんな場所に住みたくねぇ！！
あと三メートル、ぞわりと海水に何かが通ったような感触。あと二メートル、今の今までただ足にまとわりつくだけだった海水が明確に俺の足を掴むような圧力を感じる。あと一メートル、あぁこれやっぱり間に合わな……

くすり、と誰かに笑われたような。

次の瞬間、凄まじい水飛沫と共に俺のすぐ後ろの海面が爆ぜる。いやこれは爆ぜたのではなく、何かが凄まじいエネルギーを伴って海面を叩いた、のか……？
振り向けば、そこには「青色」の侵食をストレートな物理で叩き潰

す、半透明な触手……いいやあれは触手じゃない、あれは！
「何故生きているバッカルコーン！」
触角で逆さ吊りにされた挙句思いっきり投げ飛ばされた。

「………ぉぉぉぉぉおおおおおお！！？」

「サンラク！　大丈夫か！？」
空中一回転！　からの……足裏、膝、片拳によるヒーロー着地！
「お前、これが、大丈夫に、見えんのか……膝が、指が……っ！」
ズダァン！　と看板を震わせつつも着地した俺に視線が集まる。体力がちょっとシャレにならない感じに減少したのでそれどころではないのだが、痺れが走る身体に鞭打って俺を投げ飛ばしたそいつ……俺とアラバで引導を渡したはずのクリオネ女、確かクリーオー・クティィーラとかいう名前の封将を見つめる。
ぐぱぁと開いた触角が閉じられ、明らかに人ではない比喩抜きで透き通った美貌を持つクリーオー・クティィーラが俺を、俺達を見上げる。
そしてヒラヒラと手を振ると奴を喰らわんとする「青色」を謎エネルギー波で吹き飛ばし、島の内側へと押し込めて行く。

「……壮大なイベントシーン、だった？」

「ムービー銃とかムービーナイフは即死効果あるから勘弁して欲しいんだがな……」

マグマに落ちようがダメージを受けるだけのキャラクターもイベントシーン中にナイフで刺されるだけでぽっくり死ぬ、それがムービーウェポンというものだ。

とはいえ、クターニッドの力をもってすれば倒した封将が復活することくらい不思議ではないか。
イベントだから、と言われればそれまでだが何らかの力を用いてクリーオー・クティーラは「青色」をルルイアスの内側へと押し込み、そして都市の……いいや、島の四方にある塔の一つへと跳躍し、その頂点へと立つ。

「……他の封将もいる」

遠くて詳しくそれを見ることはできないが、ルストの言う通り他の塔にも何かが立っているのが見えるしそのうちの一つには二体立っている塔もある。
封将……何を封印していたのか、果たしてそれは「青色」を封印していたのか、クターニッドが戯れに己を封印するために作ったのか。
真理書案件ではあるが、今は考えないようにしよう。

「ねぇみんな、あんまり考えないようにしてたんだけどさ」

「……何、モルド」

「この船……もしかして、ぶん投げられる寸前なんじゃ？」

帆船はクターニッドの巨大触手に掴まれている、そしてその触手は明らかに力を込めてますと言わんばかりにみちみちと膨張し、気づけば船は斜め上を向くように傾いて……

ふと視線を向けると、クリーオー・クティーラがこちらを向いてあっかんべーをしていた。

「全員船にしがみつけぇーっ！！」

強烈な慣性が叩きつけられ、海を進む筈の船が宙を飛ぶ。
猛烈な勢いで遠ざかって行く光景の中最後に見たルルイアスは、躍り狂う「青色」によって瓦礫と青の合挽肉(ミンチ)のような状態で……されど島に輝く四つの塔は、破滅を齎す大群青の波濤を塞ぐ防波堤として威風堂々と聳え立つ。

四つの塔と、その頂点で輝く光。そしてそれを覆い尽くすように広がるあまりに巨大な触手によって島そのものが海の底へと引きずりこまれて行く姿……「青色」と共にルルイアスは再び深淵へと消えた。盟主の君臨は揺らがず。

『深淵のクターニッドは再び倶なる天より別たれた』

『狂える大群青は再び封じられた』

『ユニークシナリオEX「人よ深淵（ソラ）を見仰げ、世界は反転（マワ）る」をクリアしました』

『小さな海賊は、明日を恐れぬ勇気を得た』

『ユニークシナリオ「深淵の使徒を穿て」をクリアしました』

『称号【深淵からの生還者】を獲得しました』

『称号【トゥルー・シーカー】を獲得しました』

『称号【フライング・インスマンズ・クルー】を獲得しました』

『称号【継承の証明】を獲得しました』

『称号【道は違えど心は同じ】を獲得しました』

『称号【一目置かれたアウトロー】を獲得しました』

『称号【一攫億金（ビリオンゲッター）】を獲得しました』

『アイテム【青色の聖杯】を獲得しました』

『アイテム【藍色の聖杯】を獲得しました』

『アクセサリ【深淵の警鐘】を獲得しました』

『アイテム【世界の真理書「深淵編」】を獲得しました』

『ワールドクエスト「シャングリラ・フロンティア」が進行しました』

我ら人の味方に非ざれど、防波の先陣に立つ（後書き）

エピローグまで書いたらしばらくお休みをもらいます。
いやマジで番外編やら真理書という名の設定吐き出しドヤ顔マンしたいので二週間くらい無理っす、ウィッス

・称号【深淵からの生還者】
ルルイアスから生きて脱出した時点で獲得できる
・称号【トゥルー・シーカー】
クターニッド想像態を倒した場合に獲得できる
・称号【フライング・インスマンズ・クルー】
シナリオ最終盤でのルート分岐で船による脱出ルートの場合獲得できる
・称号【継承の証明】
クターニッド（妄想態、想像態問わず）を倒した場合獲得できる
・称号【道は違えど心は同じ】
ＮＰＣとクターニッドを倒した場合獲得できる
・称号【一目置かれたアウトロー】
アウトロー系の特定ＮＰＣのユニークシナリオクリアにより獲得できる

・称号【一攫億金（ビリオンゲッター）】
一定期間内に特定金額以上のマーニを得た時に獲得できる
下位称号は【一攫万金（ミリオンゲッター）】、上位称号は【一攫兆金（トリリオンゲッター）】

この中に一人、四次元ポケット悪用して大量の財宝を根こそぎガメた奴がいるらしいっすよ?

道は違えど心は同じ

永久に運動し続けるものは存在しない。ホームランでかっとばされたボールもいつかは落ちるし、それは船であっても同じだ。

「落ぢでるでずわぁぁぁ！　これは死んだでずわぁぁぁ！！」

「はいはい俺が抑えてるから少なくとも吹っ飛んで死ぬこたねーよ！！」

「アタシを掴んでるサンラクサンが問題なんですわぁぁぁ！！」

ただ今わたくし、マストに張られたロープに足を引っ掛けている状態であります。まぁ確かにこの引っ掛けている足が外れた瞬間落下軌道に入った船から放り出されて海面に叩きつけられることになるわけだが、なせばなるって。

「ほら着地くるぞぉ……今っ！」

豪快な水飛沫と共に帆船が深く深く海面に食い込む。物理的に無理やり潜行しかけた帆船であったが、表面張力と浮力が気合で船艇を持ち上げ、風呂桶を無理やり湯船に沈めたような沈没にはならなかった。

「よっ、ほっ」

フリットフロートを挟んで着地、ぶん投げられた船の中でシェイクされていた他の面子もなんとか生きているようだ。

「いやー……とりあえず皆、ユニークシナリオＥＸお疲れ様です」

七日間というプレイヤーのリアルなど捨ててしまえと喧嘩を売るような内容ではあったが、色々な意味で実りのある七日間であった。

「これは快挙だ、俺達はこのゲームを誰よりも早くプレイし、クリアした。俺達が一番乗りだ」

まぁ実際はリリース前のテストプレイやらで先にクリアしたやつがいるんだろうが、流石にそれをカウントしてたらゲームなんてどれも誰かのクリア済みだ。

「この船どこに向かってんの？」

「この方向なら多分、フィフティシアに向かえる。帰れるんだ！」

「くれぐれも調子に乗って迷うとかするなよー」

スチューデに航路を聞きつつ、全てが終わったことを実感した俺はようやっと全身から力を抜く。

「つっっっっっ……かれたぁ……」

この一週間、いろんな意味で駆け抜けてたからなぁ……明日はとりあえず寝る、寝尽くす。

このままフィフティシアに戻るまで寝転がっていてもいいが、どうせなら戦利品を漁るとしますか。

まずは八つの中から選んだ二つの杯……青色の聖杯と藍色の聖杯。

効果は青色が性別反転で藍色がステータス反転だ。
正直結構迷ったのだが、青色と藍色は色々と汎用性が高いと判断した。

これが男の時と同じような体格で性別が変わっていたら多分選ばなかったと思うが二、三十センチ規模で体格が変わるとなればそれはもう立派な武器だ。
性別によるステータスの差異は多少あるものの、性別が反転してもステータスはそのままだ。サイズを変更しての奇襲は対人、対エネミーの両方で有効活用できるだろう。
まぁ使ってて面白そう、という理由も六割くらいあるんだが。

むしろ本命は藍色の聖杯だ。こいつはヤバい、何がヤバいって現状オンリーワンな性能をしているのが何よりヤバい。
魔法無効化や物理無効化、遠近無効化ってのは要するに防御だ。タンクであれば原理は別物だが最終的な結果として同じことをするのは難しくないだろう。
視界反転も極論目くらましでしかないわけで、ある程度派手な魔法で代用できないこともない。
ダメージ反転は強く心を惹かれたが、それを使わなければならないほどグダるような戦闘は負け色の方が濃厚だろう。

だが藍色は違う、ステータスそのものを入れ替えるという能力はヤバい。俺を例にしても幸運をＶＩＴと入れ替えるだけでタンクになれるし、ＭＰを大幅に上昇させて魔法使いになる事すら可能だ。
ステータスの振り直しではなく反転ってところがヤバい、つまり元々のステ構築を維持した状態で別のスタイルに切り替えられるということだ。

「そういや、聖杯何選んだ？」

ふと気になったので他のメンバーにも聞いてみたところ……

レイ氏：青、紫

ルスト：緑、赤

モルド：黄、紫

秋津茜：青、紫

アラバ：赤、黄

ガチ勢廃人たるレイ氏が青色を選んだのは意外であったが、ガチ勢になる程このゲームが好きならキャラメイクにも手を抜かないのは不思議ではないか。

だがなぜ藍色を取らずに紫を……そうか、藍色のステータス反転はある程度他の職業をこなせるやつじゃなければその真価は発揮できない。

レイ氏は重装甲火力という役割を突き詰めるためにあえて紫を選んだのか。被弾が死に直結する俺とは違い、レイ氏はある程度の被弾前提で前に出る。であれば突っ立って殴られるだけでも体力が回復する紫色のダメージ反転はタンクとしての側面も持つレイ氏と相性がいい。

流石はガチ勢、ソロ性能を高めつつもメインはパーティ戦闘を見据えているとは。

他の奴らのも気になるっちゃ気になるが、他人のプレイスタイルにまで口を出すこともないだろう。

むしろ問題はこっちだ。

・深淵の警鐘
それは深き淵より送られた警鐘、迫る危機を感知し告げる海色の鈴。
［ワールドクエスト四段階目で解放］に反応して持ち主に危機を告げる。
かつての人々は失敗した、次はお前達だ。

すごいだろ、やばいことしか書かれてねぇ。どう考えても物語中盤で襲来する謎の生命体とかそういうアレですよこれ。
ワールドクエスト、ウェザエモンを倒しクターニッドを満足させたことで二つのユニークシナリオがクリアされ、それによって二度ワールドクエストなるものが進行されている。つまり現段階でワールドクエストは第三段階に入っているということだ。
ウェザエモンが倒された時に結構な数の質問が飛んだのか、公式が答えていたがワールドクエストとは世界そのものが次のステップに進行した状態、なんだそうだ。

例えば「木に実ったリンゴを収穫する」がプレイヤー全体の目的であるグランドクエストだとする。ユニークシナリオは「リンゴを回収するまでに繰り広げられる農家の青春スペクタクル」で、ワールドクエストは「収穫されるリンゴに起きる変化」ということだ。自分でも何言ってるかわかんねーや、要するに季節が変わるようなモンだろう。
そしてこのアイテムの説明文から、三体目のユニークモンスターが倒された時点で……ワールドクエストが四段階目になった時点で何

かが起きる。そしてそれは警報が必要になるような代物ということだ。
スローライフをしているプレイヤーは憤死案件だな、幸い俺は作物にジョウロで水をまいて虹を作るよりもモンスターの血飛沫で虹を幻視するタイプなのでそこまで困ることもない。だがこればっかりは流石に少人数で秘匿するべき情報ではないか、エセ魔法少女案件だな。

ただ俺にはある予感がある。
ただの警報がユニークモンスター撃破の報酬とは考えにくい、現実としてこの鈴には警報以上の効果はなく一見すればたいして価値のないアイテムに見える……逆転の発想だ、第四段階で現れるであろうその何らかを「むしろプレイヤーが探し求める」ような存在であったなら？　警報はそのまま探知機（レーダー）へと様変わりする。

「アイテム掘りの匂いがするぜ……」
「潮風の匂いしかしませんよ？」
「そだなー、秋津茜ステイなー」

ガキでも海賊、さらに言えば船乗りであるスチューデの操舵により帆船はフィフティシアへと向かっている。
はてさて、戻ったら何をしようか……いや、まぁまずはエムルやシークルゥを引き連れてルルイアスに行ったことをヴァッシュに詫びる必要があるか……ケジメ案件になりかねないが、こうなんとか工面と工夫をして指詰めくらいでご勘弁してもらうしか。

「……ンラク、サンラク！」

「んおっ、なんだよアラバ」

「いや、俺はそろそろ故郷へ帰ろうと思ってな」

だからフィフティシアに向かってんだろ……と考えてそういえばアラバは種族レベルでなんか違うしフィフティシアは別に拠点でも故郷でもないことにふと気づく。

「ああそうか、そういやそうか………まぁいいや、アラバお前のおかげで色々助かった、感謝するぜ」

「何を言う友よ、俺もネレイスもお前がいなければとっくにあの都市でクターニッドの眷属と成り果てていたぞ」

実際アラバに助けられた場面は多い、アトランティクス・レプノルカ戦ではあいつの機動力がなかったらシャチの餌になっていただろうし、クターニッド戦でもある種のＳＴＲ偏重魔法戦士としての戦力は頼りになった。

「もし……お前たちが鉱人族(ドワーフ)の「ガンダック」に会う事があれば俺の名を出すといい。あいつは腕のいい鍛冶師だからな、きっと力を貸してくれるぞ」

「はっ、何を今生の別れみたいな面(ツラ)してんだか」

「そりゃあそうだろう、俺は基本的に海の中に生きる魚人族(マーマーン)だ。大地に生きるお前たちと会うことは難しいだろう」

チッチチッチ、と指を振り俺は笑みと共に言い放つ。

「俺たちはそこに未知があるなら、世界の果てでも突っ走る開拓者だぜ。海の底くらい気合と根性でなんとかするさ」

魚人族（マーマーン）というNPCの存在、海底でエンカウントする固有のモンスター。どう考えても深海へ進出するなんらかの手段があるってことだろう。確たる根拠があるわけではないが、少なくとも再会は不可能じゃない。

俺の言葉に目を丸くしていたアラバであったが、ふっと笑みを浮かべると俺へと手を差し出す。

それを握り返して握手するとアラバは俺に抱きつき背中をバシバシと叩く。知ってるぞ、これハリウッド映画とかでよくやる別れの挨拶だ、実際にこれをやる日が来るとは……なんか地味に感動してるぞ。

「友よ、そして共に戦った心強い仲間たちよ！　また会える日を楽しみにしているぞ！」

「ミンナ、ゲンキでね」

器用に太刀から上半身だけ現出させて手を振るネレイスとアラバは船の縁に立ち、最後にスチューデへと視線を向ける。

「小さな海賊よ、君が強く成長することを祈っているぞ！」

「お……おう！　当然だろ！　僕は偉大な海賊の息子なんだからなっ！」

なにかNPC間でイベントがあったのかは知らないが、アラバは最後にニッとやけに鋭い歯並びを見せる笑みを浮かべて海へと飛び込んで行った。

なんというか……ここにきて一気にハンサム度を上げまくって去っていったなあいつ………

「さて……とりあえず現地解散でいいとして……このあとどうする？」

「……寝る、とりあえず寝る」

「そうだね……流石にちょっと、疲れたよ……」

まぁ、戻ってすぐ行動とはいかないな。リソース的にもプレイヤーの体力的にも消耗しまくった激闘だった。何か行動するにしても明日か、明後日だろう。

「んじゃぁ、明日……いや、明後日くらいにウチのクランの頭(カシラ)と会わせるよ。いろいろ話は通してあるし……」

「あ、あの！」

「ん？」

レイ氏が俺の話を中断するように声を挟む。いったい何事かと振り向いた俺は、この後ユニークシナリオを抱える以上に厄介な問題を背負うことになる。

「その………折り入って、お願いが……あります」

晴れやかな晴天の航路を行くサンラク達、だが一方のフィフティシアでは……否、プレイヤー達の間には嵐が吹き荒れていた。

道は違えど心は同じ（後書き）

もうちょっとだけ続くんじゃよ（思ったより開示情報が多い）（次の章へのつなぎも書かないと）（文章圧縮できない未熟者）（設定量で差をつけろ）

ぶっちゃけルート分岐で主人公パーティ全員新大陸にランダム転移でも面白そうだったんですがよくよく考えたらエムルがいる限り普通にラビッツに帰還できると気付いたので無事脱出ルートに分岐しました。

このどこでもドア兎め……

表面上エピローグ：戦火を嗅ぎつける獣

カラーン、カラーンと鐘の音。

『シャングリラ・フロンティアをプレイされている全てのプレイヤーの皆様にお知らせ致します。』

記憶に新しい、運営によるアナウンス。

いいやまさかね、とある種の警戒を抱きながらそれを聞くプレイヤー達はまたしても驚愕を叩きつけられることになる。

『現時刻を持ちまして、ユニークモンスター「深淵のクターニッド」の撃破を確認いたしました。撃破者はプレイヤー名「ルスト」、「モルド」、「秋津茜」、「サンラク」、「サイガー０」の五名です。さらにユニークモンスターの撃破に伴い、ワールドクエスト「シャングリラ・フロンティア」の進行を報告させていただきます』

ユニークモンスター「深淵のクターニッド」、あの日以前であればランダムエンカウントするリュカオーンやジークヴルムに次いで広く知られていたユニークモンスター。新大陸と旧大陸のちょうど中間の海底にいる「らしい」ということは判明していたが、そこにどうやっていくのかはさっぱりわからなかったそれが討伐された。

しかもその栄誉を獲得したプレイヤーの中にまたしても「あの」名前がある。

「またサンラクって奴だ……」

「でも最大火力（アタックホルダー）もいるみたいだぜ？」

「にしたって同じプレイヤーが短期間で二体も倒すとかありえないでしょ」

「実は運営の関係者だったりして」

「噂じゃそこらへん滅茶苦茶厳しいらしいから多分ないんじゃないかな……」

「それ知ってる、「個人でシャングリラ・フロンティアをプレイするべからず」誓約書を書かされるんだっけ？」

「その代わり給料すげーって話だぜ」

かつてたった三人で未知のユニークモンスター「墓守のウェザエモン」が討伐されたことは記憶に新しい。そして今、その三人の内の一人が再びユニークモンスターを倒すことに成功したのだ。

否が応でもその情報はプレイヤー達の間を駆け巡り、伝言ゲームのように伝わった情報は肥大化していく。

「なんでもバニーガールを連れた半裸のプレイヤーなんだって……」

「俺が聞いた話じゃ空を飛ぶスキルを持ってるとか」

「マジで？　俺は「ＳＦ－Ｚｏｏ」のメンバーを全員ＰＫしたって聞いたんだけど」

最終的に「バニーガール姿の奴隷を鎖で引きずり、近づく者の頭を握り潰す人外種族のＰＫプレイヤー」という情報が出回り始めた時点でプレイヤー達も「いやさすがにそれはないだろう」と気付き始

めるのだが、少なくとも「サンラク」というプレイヤーの名が広まったのは事実であった。

怒髪衝天という言葉がある。
怒りのあまり髪が逆立ち天を衝かんばかりの怒りの感情……「不倶戴天」とプロセスこそ違えど、「やろうぶっころす」という最終的な殺意で落ち着くという意味では似たような言葉かもしれない。
そして今、クラン「黒狼」でそのうち髪の毛が蛇となって暴れだすのではないかと思えるほどに、怒りを抱く者が一人。

「あ、あの……団長…………」

「……………………………………………………なんだ」

「な、なんでもないです！」

表面上は冷静に見える。だがそれは限界まで加熱された金属を冷やした感情だ、触れれば肉を焼く熱さはなくとも、触れるだけで肉を

斬る刃のごとき鋭さを内包している。
話しかけた団員は団長……サイガー１００の顔を一切動かすことなく眼球だけを動かしての返事に気圧され撤退する。
撤退し本陣、もとい他のクランメンバーのところまで戻った団員は小声で他のメンバーと相談を開始する。

「無理無理無理無理！　リアル上司よりおっかないんだけど！」

「頼むって！　今いるメンバーの中で団長にコミュニケーションできるのお前くらいなんだって！」

「仮にも壁タンクならお前が前に出ろよ！」

「ほら、俺は精神攻撃系の対策してないから……」

「……ちょっと、「じゃあ魔法職に行ってもらおう」みたいな顔でこっち見ないでよ！　嫌よ怖い！」

クラン「黒狼」では現在、半ば確信を以って語られる噂話がある。
曰く……リアルで姉妹関係にあるという「サイガー０」と「サイガー１００」が大喧嘩をした、という噂が。

クラン「黒狼」の設立者にして、メンバーをまとめ上げるサイガー１００。そして団長の肝入りで入団し今ではシャングリラ・フロンティア最高の火力を獲得するに至ったサイガー０。この二人の人間関係は決して悪いものではなかった。
第三者視点から見ても少々強引だが無茶ではない程度にメンバーを引っ張るリーダーと、そのために火力貢献するエースの関係性はリアルで姉妹関係であるということを差し引いても良好と言える。

だが数日ほど前からサイガー１００の様子がおかしい。常に刃のような冷たさをまとっている上に、サイガー０の話をすると露骨に機嫌が悪くなる。
永遠に仲良しでい続ける関係など存在しない、姉妹喧嘩くらい別に珍しいものでもないし……と事態の沈静化を待っていたメンバーに齎されたものは、件のサイガー０がある程度最前線を走るプレイヤーからすれば悪夢の代名詞とまでされるアーサー・ペンシルゴンと共に、ユニークモンスター「墓守のウェザエモン」を討伐したプレイヤー「サンラク」と他数名でユニークモンスター「深淵のクターニッド」を討伐した、というものであった。

「……なぁ、これ結構まずい流れじゃないか？」

「だよなぁ……割と末期の匂いがする」

トップクランというだけあって、所属するプレイヤー達は素人ばかりではない。中にはサイガー０のようにシャンフロが初ＭＭＯでありながら驚異的な才覚を発揮する手合いも存在するが、大抵は他のＭＭＯを経験したことがある者ばかりだ。そして当然、ゲーム内におけるクラン、もしくはギルドとは要するに団体行動である。その列を乱すものはそれがどんなに優秀なプレイヤーであれ害悪以外の何物でもない。確かに突発的にユニークシナリオが発生することもあるこのゲームで何もかも予想通りに事が起きることはない。
だがそれでも、このゲームで七体しか存在しないオンリーワンなモンスターをクランとは別のメンバーでクリアしてしまった……というのは非常に不味い、と団員達は思う。これは……ギスる兆候であると。
それに、クラン「黒狼」がほぼ蚊帳の外でユニークモンスターが攻

略されているのも不味い。なにせトップクランであっても……否、トップクランだからこそ面倒臭いプレイヤーというものは存在するのだから。

「蛇の林檎」フィフティシア支店。

なぜかどの街でも同じ顔の店主が出迎える味覚制限が解除された知る人ぞ知る店の中、告げられたアナウンスにアーサー・ペンシルゴンは苦笑する。

話自体は聞いていた、要約すると「直前で踏みとどまろうと思ったら直通だったのでちょっとクターニッドボコってくる」「クラン「黒狼」の最大火力（アタックホルダー）も一緒だよ」「ついでにリュカオーンのＥＸシナリオも発生させたよ」などと戯言を連続でほざいた馬鹿野郎は根菜による制裁を実行したが、それはそれとしてユニークシナリオＥＸのクリアを成し遂げたようだ。

「いやーしかし、これは荒れそうだなぁ」

出る杭は打たれる、それはある程度のランキングや位階が存在する世界であれば当たり前に存在する概念。

これがペンシルゴンやサイガー０であれば事はそう大きくならない。小っ恥ずかしい二つ名で呼ばれるだけの「実績」を持ったプレイヤーがその快挙を成したのであれば納得もできるというもの。
だがサンラクにはそれがない。彼に親しい自分やカッツォであれば「まぁやらかしてもおかしくはないか」と納得できるがそれ以外のプレイヤーにその納得を強いるのは酷というもの。
「どこかしらに着地点を置いて納得させないとマトモにゲームもできなさそうだしねぇ」
「あはは、君をそんな顰め面にするなんて件の友人殿は中々やるようだね」
「本当そうだよ、私の周りにはいきなり無理難題をふっかけてくる奴が多すぎるよ……ねぇ」
「おっと、弁舌の穂先をこっちに向けられても僕は気の利いた返しなんてできないよ」
そしてこの場にはもう一人、ペンシルゴンと同じテーブルを囲むプレイヤーがいる。
軽装の剣士装束に身を包み、袖を通さず羽織を肩にかけた女性が一人、カップを傾けながら男性的ではないいちゃんとした女性の声でペンシルゴンの皮肉に返答する。
何を隠そう、黒い長髪を一纏めにしたその女性もペンシルゴンに無理難題をふっかけに来た手合いであるのだから。
「……で？　あのロリコンに続いて阿修羅会をばっくれた京極ちゃんは今更私に何の用かな？」

「彼はいい対人プレイヤーだったんだけどね……いやはや、まさかファステイアに常駐してしまうとは」

「ま、私以上にバトルジャンキーだったのが大人しくなったならこのゲーム的には歓迎すべきなんじゃない？」

ペンシルゴンは彼女が自分の元を訪れた理由を知っている。彼女は元々阿修羅会に所属していたプレイヤーであり……そして、阿修羅会の中でも対人戦そのものに重きを置いた武闘派に属していたプレイヤーだ。
そして、元三位の名誉のＰＫＫによって脱退した事を皮切りにあっさりと阿修羅会を去り、今では野良パーティをメインとして新大陸に行ったという話だったが……

「私としちゃあ、絶賛サバイバル中の新大陸からどう戻ってきたのか聞きたいところだけどねぇ」

「ああ、ちょっとお願いしてね。【座標転移門】持ちの賢者に送ってもらったんだ」

【座標転移門】……噂には聞いた事がある、【座標転移】の上位に位置する魔法であり、発動者と数人程度が訪れたことのある場所であればどこにでも転移可能といういわゆるファストトラベルだ。
ＮＰＣには何人か習得している者がいるらしいが、プレイヤーではまだ片手で数えられるほどしかいなかったはずである。それに対してお願いとは。

（一体何をしたんだが……）

「さて、君も忙しくなるだろうし単刀直入に言おうかペンシルゴン」

「はいはいよっしゃばっちこい」

「ふふ……君ら、クラン「黒狼」とやり合うんだろう？　だったらさ……僕も入れてよ、クラン「旅狼(ヴォルフガング)」にさ」

予想通り。この女に「ユニークの恩恵に与ろう」という考えはない、そもそも「刀が一本あれば戦える」と明言して憚らない生粋の剣士プレイヤーである。かつてクラン「黒狼」への侵攻を提案し、愚弟に却下された過去を持つこの女はクラン「旅狼」の噂を聞きつけて戻ってきたのだろう。

全てはシャングリラ・フロンティア最強のクランと戦うために。その果てに敗北し、自身の持ち物を全て失うことになってもだ。

「一応私、今は足を洗ってるんだけど？」

「足を洗って性根が綺麗になるわけないじゃん」

ここにサンラクとオイカッツォがいれば爆笑必至の一撃にペンシルゴンの頬がひくり、と震える。

「よーしお姉さんまた名前を赤く染めちゃおっかなー？」

「あはは、準備なしの一対一なら君程度には負けないよ」

傲慢、だがそれを虚言としないだけの対人スキルを持っている。だからこそ厄介なのだ。

一期一会が基本の野良パーティで新大陸の過酷な環境を斬り拓いた実績はまごう事なき事実、それは彼女のステータスに燦然と輝く「レベル１０４」の文字が如実に示している。

「……言っても引くようなタマじゃないし、まぁ一考の余地はあるとしておくよ」

「それは重畳（ちょうじょう）。」

「ま、うちは主に私含めた三人の民主制だから要相談だけどね」

戦力としては上等も上等、サイガー０に匹敵する戦力を手札に加えられる事は上等ではあるのだが、いかんせん自爆と暴走の危険を内包するジョーカー……と、ここまで考えてふと悟る。

（よくよく考えたらうちのバカ二人もジョーカーみたいなもんだし今更大した問題じゃないか）

はぁー……とため息をつく。ペンシルゴンにも苦手な手合いというものは存在する。

それは眼前の、以前見たときはあったはずもない頭に獣の耳が揺れる羽織の女性のような「人の話は聞くし理解もするが意見を変える気がそもそも無い」という手合いであったり。

「それと」

「まだ何かあるの？」

「僕の名前は京極（きょうごく）じゃない」

どういう原理かまるで元からそうであったかのように狐系の耳を揺らしてそのプレイヤーは宣言する。

「僕のＰＮは「京（キョウ）・極（アルティメット）」だ」

「言いづらいから却下って結論出てるから」

却下であった。

表面上エピローグ：戦火を嗅ぎつける獣（後書き）

えぴろーぐです（にっこりえがお）

深層的エピローグ：裏方、あるいは神と呼称される者（前書き）

昨日の更新がエピローグとか言った奴がいるらしい、誰だそんなふてぇ野郎は

深層的エピローグ：裏方、あるいは神と呼称される者

それはあまりに閑散とした部屋だった。窓すらない、太陽の光を拒むかのようなコンクリで囲まれた部屋にはＬＥＤの柔らかな光とデスク……そしてたった一つ、このご時世にはあまりに時代遅れなデスクトップタイプのパソコンだけが置かれている。

タッチパネル式ですらない全時代的なキーボードに、あまり画質が良いわけでもなければコンパクトな薄型であるわけでもない。もはや骨董品と称しても遜色ない２１世紀初期のＰＣが、一般にはまだ出回っていない最新鋭の技術で補強の限りを尽くされそこに鎮座していた。

「…………」

そして、そんな寂しすぎる部屋に一人の女性がいた。

上下を色の落ちたサイズ違いのジャージで包み、ものぐさにしてもあまりに伸びきった髪の毛は彼女が立ち上がっても後ろ髪の先端が地面にくっついてしまうだろう。

そんな彼女は古臭いコンピューターだけが置かれている部屋の中で、あまり画質のよくないディスプレイを眺めてこれ以上なく幸福な顔をしていたが、何かを思い出したのか数瞬前までの幸福な笑顔が嘘のようにこの世の悪意の全てを眺めたようなしかめっ面を浮かべる。

「はぁ………今からでもデスゲームにしようかしら……」

「勘弁してくれ継久理（つくり）、俺の首が物理的に飛びかねん」
「戯言よ木兎夜枝（つくよぎ）、私たちの……いえ、私の世界を悪名として残すなんて許容できないもの」
ぽつりと呟いた言葉に、部屋を訪れた男が真顔のまま女へと冗談を飛ばす。
それは旧姓で今は別の苗字なんだがな……とため息をつきながらも木兎夜枝と呼ばれたスーツをカッチリと決めた男は壁にもたれ掛かりながら女性に……継久理（つくり）と呼んだ女へと問いかける。
「恐らくあと少しで天地（あまち）の奴が怒鳴り込んでくるぞ」
「でしょうね、私も正直驚いているわ」
継久理、木兎夜枝、天地……シャングリラ・フロンティアという「ゲーム」を作り上げた三人のメンバーも、今では札束で家が建てられるほどの富を得た。かつて大学の一室で酒を片手に騒いでいた頃が懐かしいと木兎夜枝はなんとなしに過去を懐かしむ。
と、その時。扉を開けっ放しでいるというのもあるが、防音処理が施されているはずの廊下から大きな足音が凄まじいテンポで響く。それは明らかに誰かが猛烈な勢いで走ってきている証左であり、そして閉まりかかった扉を蹴破るようにしてその女は部屋へと入ってきた。
「汚れたらすぐにわかるのでそれが風呂に入るタイミング」という理由で白衣を纏い、文房具用のハサミで雑に散髪しているという女子力の欠片すら感じられないぱっつん前髪の女性は、眉間に肉体全ての皺を集約させたかのような表情で怒鳴り込む。

「継久理(つくり)ィ！　お前またデータ弄ったんじゃ無いだろうなァ！！」
「うるさいわよ、私の世界をいじりまわしたのは貴女でしょう？」
「そうでもなきゃこんな短期間にユニークモンスターが連続で倒されるわけねえだろ！」
カチン、と木兎夜枝はスイッチが入った音を幻聴した。なおもう一つのスイッチは恐らく今朝あたりから入っている。
「ふっっっざけないで！　私の可愛いクターニッドやウェザエモンに無粋な枷を嵌めたのは貴女でしょう！　そのくせ倒されたら倒されたで私に文句を言うってどういう事よ！」
「全部で十五形態だの空間転移と時間干渉を使って過去と未来から奇襲を仕掛ける、だなんて実装できるわけねーだろうがぁ！！」
「ああかわいそうなクターニッド……たったの四形態で悲しい戦いを強いられたんだわ……ウェザエモンだって、機能をフルに使えば天下無双だというのに……！」
「なーにーが天下無双だ！　ありゃ強いんじゃなくてクソって言うんだよ！」
「クソ！？　クソですって！？　言うに事欠いて！　私の！　世界に！　クソですってぇ！？」
木兎夜枝はため息を一つつき、もはや手放せなくなった胃薬を服用する。
シャングリラ・フロンティアという「世界」を作り上げた天才、継(つくり)

久理　創世。
シャングリラ・フロンティアを「ゲーム」として調整した天才、天地　律。
そしてこの水と油よりなお相性が悪い二人の仲介こそが自分……旧姓木兎夜枝　境なのだ。

キャットファイトと言えば聞こえはいいが、この女性二人の対立はそのまま「シャングリラ・フロンティア」という巨大なシステムの瓦解につながりかねない。
であればこそ、木兎夜枝は日々胃腸薬と愛妻弁当をエネルギーとしてこの二人の仲介に奮闘しているのだ。

「アタシがいなけりゃ「データの藻屑」になってた世界で神サマぶってねぇでマトモに働きやがれ！」
「私の世界の「おこぼれ」に吸い付いてるアブラムシが言うじゃない！」
「……落ち着け、言いたいことは尽きないだろうがまずは深呼吸だ」
「ふーっ！　ふーっ！」
「ぐるるるる……！」

まさしく獣同士の殺し合いの如き様相の二人ではあるが、仮に実力行使に発展したとしても悲しきかな両者共に運動神経がゴミ以下なので、ハムスター同士の喧嘩よりも情けない光景が広がることになるだろう。なにせ双方ともに、缶のプルタブに敗北する貧弱っぷりである。

「まず天地。データの改ざんはされていない以上、二体のユニークモンスターは正しい手順で討伐された……それは事実だろう」

「……にしたって早過ぎる」

「討伐のタイミングが偶然近かっただけだろう、ウェザエモンは以前からプレイヤーが挑戦していたはずだ。それにクターニッドも前提シナリオ自体はすでに発生していた」

「……まぁな」

「継久理も、お前が本気を出すと我々でも気付けないんだ。ユニークモンスターのデータを改ざんしていないと……君の祖父殿に誓えるか？」

「……それを出すのは卑怯よ木兎夜枝。えぇ……お祖父様に誓っていいわ」

最近は妻も忙しかったようで、少々夫婦関係が冷えていた感は否めないが、今日の愛妻弁当にはタコさんウィンナーが入っていた。つまり今の木兎夜枝は無敵である。
大恋愛の末にゴールインした背景があるためか、生真面目な性格がバグった木兎夜枝が今の状態になると面倒くさいことになる。それを承知している二人はひとまず怒りの刃を鞘に収めるのだった。

「それよりも、私としてはウェザエモンとクターニッドを倒したプレイヤーの中に同じ名前があることの方が気になるのだけれど？」

「それはアタシも調べた。少なくとも「身内」じゃあねぇ、一般プレイヤーだ………」

「何よ、思わせぶりに黙り込んで」

「こいつ、ゲーム開始して一ヶ月程度しか経ってねぇんだよ」

しばし沈黙。
天地は苦虫を噛み潰したような顔で、木兎夜枝は真顔に若干影が差し、継久理は驚いたように目を丸くする。

「しかもリュカオーンとヴァイスアッシュのＥＸシナリオも発生させてる」

「……αテスターか？」

「いんや、α、βテスター両方調べたが無関係だった。しかもログを調べたらレベル１８でリュカオーン相手に「呪い」の条件を二つ達成してやがる、チートやツールの線も疑ったが……」

「私の世界にそんなものを持ち込めるとでも？」

「と、神サマもこう仰ってるからな。幸運発動で条件達成はまぐれでもあり得るかもしれないが……つまりはこいつの「腕」だけでこれだけのことをやってるってことだ」

天地の言わんとしていることは二人にも理解出来る。即ち偶然にせよ、なんらかの理屈があるにせよ、シャングリラ・フロンティアにおける重要なイベントを猛烈な勢いでクリアするプレイヤーに対して何らかの干渉をするべきか、と問うているのだ。

「……いいえ、それは認めない」

「一応理由を聞いてやるよ」

立ちっぱなしでいることに疲れたのか、車輪付きの椅子を引っ張って腰かけた継久理……シャングリラ・フロンティアという世界の根幹を作り、管理するまさしく神のごとき女はそれに相応しい傲慢を以って宣言する。

「神は個人を観測しても、個人を愛さない」

「なんだ、ニーチェの名言集でも読んだか？」

「あら、だったら精神的ゴリラでも理解出来るように理由を5Gバイトくらいにまとめて提出してあげましょうか？」

だが、天地ははぁとため息をひとつつくと首を横に振る。

確かにこのプレイヤーが現れるまでシャングリラ・フロンティアが一種の停滞に陥っていたのは事実だ。

それを見越しての新大陸実装でもあったのだが、予想外の進展に無駄に焦ったのもまた事実。主に仕事が激増したので。

「メモリを一つゴミ溜めにする気かよ……まぁいいさ、我らがワールドクリエイティブ・アドミニストレーター様がそう仰るならアタシはなんも言わねぇよ」

さて、と天地は思考を切り替えるようにべちべちと頬を叩くとそれとは違う要件を伝える。

「んで、こっちが昨日の時点で予定していた事項だが……二件、てめぇに用件があるってよ」

「ふーん……どこかしら？」

「おう、「ガキ大将」と「てめぇの実家」だ」

「一応要件だけは聞いてあげるわ」

先ほどまでの険悪な雰囲気はどこへやら、一転して悪巧みをする子供の集まりのようにある種の団結すら感じさせる嘲笑を浮かべる二人に木兎夜枝は胃がキリキリと痛み出すのを自覚する。

「前者は「新情報をリークしてくれ」だとさ」

「本当、こらえ性の無い子供のようね……「オルケストラ」にデータを入れてあるから適当にチラつかせてあげなさい。ああでも、前におイタしたんだからちょっとお仕置きが必要かしら？」

「ガキ大将のケツを叩くのは気持ちいいだろうなぁ……後者はメンテナンスのお願いだ。奴ら、「何もしていないのに壊れた」だとさ」

「ぶふっ……どれだけ前時代的な言い訳よ……ふふふ、子離れできない親を持つと恥ずかしいわ」

何でも無いことのようにバカにしているが、前者も後者も下手を踏めばこの場にいる全員の首を飛ばすくらい造作の無い存在である。もっとも、継久理に限っては死んだことにして拉致される可能性も否定できないが。

そしてさらに言えば、矢面に立たされるのは自分である。この恐ろ

しいまでに天才的な二人の女性が言う通り「ガキ大将」が寄越した使者の何とも言えない表情を見るのは暗い喜びがあるのも事実だが、加速度的に胃薬の消費が早まるのも事実だ。
前に発注ミスで1グロスの胃薬を経費で落としてしまったことがあったが、半年で使い切る程には木兎夜枝の胃はダメージを受けている。昨晩妻の作ったオムライスがなければ即死であっただろう。

「ほら、いい加減私の至福の時間を邪魔しないでちょうだい……出てって。」

「言われずとも。こちとら第四段階の調整でやることが山積みなんだからよ」

「……一応君も社会人なのだから、ほどほどに仕事もしてくれよ」

「さて……と。例のプレイヤーはっと……一ヶ月前なら「リヴァイアサン」かしら……あったあった」

市販のものでは無い彼女だけの携帯端末を弄り、継久理は目当ての

プレイヤーの情報を検索する。
彼女の忠実なしもべであり子供であるモノからの迅速なレスポンスに笑みを浮かべながらも、そのプレイヤーの軌跡（ログ）を眺めていた神はぽつりと呟く。
「ふぅん……「ツクヨ丸」は無理でも、「キョージューロー」なら出来そうね……ま、偶になら観（み）測てあげようかしら」
ファイル分類が神の手によって変わる。いくつかのプレイヤー名が表示される中、その一番下……最新の項目に「サンラク」の名が表示された。
神は個人を愛さない、だが神は世界を観測している。であれば――
―

深層的エピローグ：裏方、あるいは神と呼称される者（後書き）

ようやっとここまで来た……わりと初期に書きたい内容だったのに気づけば８２万字書いてますねぇ……

というわけで三章エピローグです。しばらくお休みをいただきます、具体的には古戦場が……シヴァシヴァマンとしては最低１２箱は開けたい

インベントリアの方に番外編を上げるつもりですのでもしよろしければそちらのほうもよろしくお願いします。

実はこの三人の中に一人だけ……

間章：其は天穹を覇する黄金の失墜を望む者（前書き）

MHWがプレイできない悲しみと怒りを濃縮してフラストレーションをエクスプロージョンして設定を詰め込みました

間章：其は天穹を覇する黄金の失墜を望む者

これはクターニッドが討伐された少し後の出来事。

鬱屈とした密林。彼らは歴戦の戦士であり、探求者であり、生還者である。

あまたの魔境を乗り越え、それに見合う強さを得た彼らをしても、この場所では油断することができない。

「……と、まぁ野良パだけどそこまで緊張せずまったりやっていきましょう」

幅の広い長剣を腰に佩き、装飾として見事な染色が為された布が使われた騎士装束を纏った男の名は「武Ｌｕｃｋ（ブラック）　Ｓｈｉｎｅ（シャイン）」、名前から哀愁が漂う男ではあるがこの場に来ているというだけあってタンク寄りの中装備アタッカーたるその装備とステータスに妥協はない。

「まだ三時以降の深夜帯に出現するモンスターは判明しきってないし、緊張はしなくても警戒はしないとパックリいかれるぜ？」

一期一会の関係で不穏な後味を残さぬよう和を求める武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅとは異なり、辺りを注意深く警戒する漆黒の忍者装束に小太刀二刀の男は「ヴィジランス」、今までずっとソロプレイを貫いていたものの、新大陸の過酷なモンスター群に苦渋の選択で野良パーティへの参加を決めた経緯を持つ。

少なくともこの場にいる全員が相応の実力を持ち、いわゆる不相応な実力のまま高みへ登る寄生プレイヤーではないという点では初のパーティ戦としては上々であろう。そしてソロプレイ故に索敵に特化したスキル群はパーティプレイでもその性能を遺憾なく発揮する。

「そうですね……でもあのケルベロスティラノが出ないだけでも随分マシじゃないですかね？　アレは本当に頭おかしいですから……」

そうしんみりと語る、このゲームでは珍しく声と性別が一致した女の名は「笑みリア」。特に目立つユニークを持っているわけではないのだが、新大陸組と呼ばれるプレイヤーの中でも拠点強化に貢献するプレイヤーとして一目置かれる副業（サブジョブ）に「大工（カーペンター）」を持つクレリックである。

拠点強化に於いてはトンカチを、そして息抜きのハンティングの際はメイスを装備する姿は大多数のプレイヤーから「何かを殴るのが好きなのかな？」という疑惑を抱かれていることに本人は気づいていない。

かつて拠点に襲来した三つ首のティラノサウルスに蹂躙された過去を持つ笑みリアにとって、未だ誰も討伐できていないが故に誰も名を知らぬ彼のモンスターはある種のトラウマであり、出現が確認されていない深夜であってもその影に怯えている。

「でもあれ、「捕獲（テイム）」判定自体はあるらしいからライダーの騎乗獣（ライドモンスター）にできるんじゃないかって検証してる人達いるらしいっすよ」

そして臨時で組まれた野良パーティ最後の一人の名は「レイジ」。僅かに顔を合わせ声を交わしただけではあるが、ある人物と細い糸で繋がった魔法と直剣をバランス良く使い分ける魔法剣士である。
剣の道を突き詰めるのではなく魔法を取り入れ奇跡を宿す剣で戦う「魔法剣士」の本業（メインジョブ）に加え、ある理由から副業に「ライダー」を持

つプレイヤーではあるが、「可愛くない騎乗獣は望ましくない」という理由から未だに一体の騎乗獣すらも持っていない。

「……とりあえず、周囲にモンスターの気配はなし。俺の索敵を上回る隠密性能持ちがいたとしてもさすがに許してくれ」

「了解、とりあえず目的の再確認だ。今回のターゲットは開拓船の「夜梟梟の鱗羽根」の納品……つまり「ドラクルス・ディノウル」の討伐です。一応全員ドラクルス・ディノウルと戦った経験はあるんですよね？」

ドラクルス・ディノウル。おそらく厳密には「ディノ」と「オウル」を組み合わせたのだろう名前と、「ドラクルス」の名前が組み合わさったそのモンスターはなかなかに奇妙な姿をしたモンスターだ。

「あの恐竜みたいな梟ですよね？　拠点に来たのをパーティ戦ですが倒したことはあります」

「……一応ソロ討伐経験ありだ、今までソロでやってたからな」

「俺も戦ったことはあります、あの時は別のモンスターに乱入されて倒してはないんスけど……」

新大陸に出現するモンスターの中でも恐竜的な特徴を持つモンスターは皆名前に「ディノ」もしくは「ドラクルス」の名を冠している。

これらが同じ種族であるのか、それとも別の法則があるのかは考察を好むプレイヤー達の間で熱心に討論されいてるが、そこまで考察に興味のないプレイヤー達にとっては「ディノ」も「ドラクルス」も厄介な性質を持つモンスター群という認識の他に意味はない。

「ドラクルス・ディノウルは無音攻撃が非常に厄介なので、ヴィジランスさんは攻撃よりも奴の補足をメインでお願いできますか？」

「了解、補足メインなら色々道具を使ってもいいか？」

「ああ、忍者だと色々使えますからね……了解です、ただ「大痼癪」は使わないようお願いします」

「流石にアレは使わねーよ……ある程度開けた場所でも他のモンスターがウヨウヨ寄ってくるし」

全身の羽毛が「鱗」に置き換わっているにもかかわらず、ドラクルス・ディノウルはモチーフである梟と同様に極めて無音に近い羽ばたきでプレイヤーに襲いかかる。

「ディノ」モンスターに共通する堅牢な鱗の鎧により暗殺者のごとき奇襲と重騎士のごときタフネスを両立するドラクルス・ディノウルは一度その姿を見失うと戦闘時間が割とシャレにならないレベルで延びる。それ故にある程度の索敵とＡＧＩを持つプレイヤーが重宝される。

「一番頑丈なの俺っぽいんで、俺がヘイトを受け持ちます。笑みリアさんは遠慮なくぶん殴ってください」

「はいっ！大工で鍛えたメイス捌き、見せちゃいますよ！」

なお、「大工（カーペンター）」の特性によりハンマーを振るほど打撃系スキルに経験値が入るのであながち間違いではない。

「んでレイジさん、あんまり派手なエフェクトの魔法は使わないようお願いします」

「ウッス」

「あと念のため、全員大技はなるべく温存してください。深夜帯は乱入確率が結構高いらしいんでもしもの時はタイミングを合わせて大技を叩き込んで一気に決着を狙います」

主に午後十時くらいからしかログインできない社会人メインで構成されたクラン「午後十時軍」に所属する武Ｌｕｃｋ Ｓｈｉｎｅはある程度の指揮官経験がある。それ故に的確な指示に異を唱える者はおらず、獣道すら存在しない植物の海を進んで行く。

「あ、すいませんアイテム拾います」

「えーと……ああ、ワイルドジュラハーブ。「大味な回復薬（ポーション）」の材料になるんですっけ？」

「あはは……拠点防衛だとアイテム消費が激しくて。貧乏性ですかね？」

「そもそもアイテム購入すら安定しないし、現地調達は重要だろう」

「知り合いに調合系の称号持ってる奴いないとぼったくられますよね。調合に五千マーニとか引っかかる奴いるんすかね、ははは」

薄暗いとはいえ暗闇の中、索敵と隠密に特化してるが故に調合は他人任せなヴィジランスがレイジの台詞に「え、マジで？」と目を見開いたことには幸か不幸か誰も気づかなかった。

四人は進む。面倒な大型モンスターは事前にヴィジランスの索敵で回避し、ある程度短時間で狩れるモンスターは素材集めも兼ねて手早く処理する。ＮＰＣが雑魚モンスターの素材も割と高値で買い取ってくれるため、素材として求めているわけでなくとも雑魚モンスターの素材を集めるプレイヤーは多い。

「レイジさん、ライダーって確か前段階にレンジャーを挟む派生経路もありましたよね？」

「あ、俺レンジャー派生なんで「痕跡追跡（トレースチェイス）」使えますよ」

「おっラッキー、じゃあお願いします。確かディノウルは「枝が折れた大樹」がポイントだったっけな……」

「武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅさん詳しいですね……」

「いやぁ、仕事柄色々覚えなきゃならないんですけどやっぱりゲームだとモチベーションが違いますよね」

レンジャーが習得できるスキル「痕跡追跡（トレースチェイス）」は特定のオブジェクトに対して発動することでそれに対応するモンスターの位置を感知する索敵スキルである。ヴィジランスのそれより精度こそ低いものの、大まかな座標であれば数百メートルまでなら範囲に収められる。

「結構近いです、多分まだ気づいてないけど……確かディノウルって索敵鬼性能してましたよね」

「ですね、索敵ぎりぎりから狙撃特化で攻撃すれば先制できるらしいけど基本的に向こうに気づかせてから戦うことになりますね」

「狙撃……できるんです？」

「ウチのクラン……午後十字軍に一人だけね、ちょっと怖いくらい強い奴がいるんだ。対人戦も割と強いけど新大陸みたいな「やたら強いモンスターがウヨウヨしている」サバイバル系？　の環境で妙に強いんだよね……」

当人は昔取った杵柄とは言うものの、その杵柄がなんなのかはいつもはぐらかしている。そんなプレイヤーではあるが新大陸で獅子奮迅の活躍をしているが故に、現在クラン「午後十字軍」はトップクラン「黒狼」よりも先を行っているのだ。尤も、黒狼の主力がまだ新大陸に来ていないからこその三日天下でもあるのだが。

「……みんな、反応が近い」

「というかこっちに来てるな……食いついたぞ！」

「よし……笑みリアさんは一旦離れて、俺が一発叩き込むんで！」

新大陸にいる、ということは即ちシャングリラ・フロンティアをやり込んでいるということである。レベル９９に到達していないプレイヤーも多いが、少なくともフィフティシアまでは到達することが最低条件であるが故に少なくともユザーパードラゴン程度なら戦えるプレイヤースキルを持っている。

ホストとしてメンバーを募集したパーティリーダーの武Ｌｕｃｋ（ブラック）Ｓｈｉｎｅ（シャイン）の号令に他三人は淀みのない動きで散開する。

無音。互いに獲物に照準を合わせているにもかかわらず片や静寂をまとった翼で飛来し、片や長剣を構えて不動の立ち姿。
襲撃者……ドラクルス・ディノウルは獲物がすでにこちらに感づいていることを理解したのか、全身の羽毛から生え変わった緑色の鱗羽(りんう)を逆立て「奇襲」から「戦闘」へと切り替わる。
その嘴には明らかに鳥類のそれには見られない牙が覗き、嘴であるならばありえない動き……咬合を確かめるように空を咀嚼する姿は「ディノ」の名の通り竜化した姿。それはこの新大陸で起きている「何か」を想像させるには十分であった。

「明らかに「顎」が出来てるんだけど、カテゴリ的に鳥類なんだろうか……よし！」

鳥系の「ディノ」の鱗は見た目の割にはそこまで硬くはない、だがその代わりに鱗の一枚一枚がナイフと言っても良く不用意に触れる、もしくは攻撃を受ければ鮫肌(スパイク)のようにダメージを受ける。
であれば瞬間的な火力、鱗を潰すほどの一撃もしくは鱗の間を通すような一撃こそが有効打となる。

「ふぅうっ！！」

振り下ろされた直剣が鉤爪を突きつけ飛びかかるドラクルス・ディノウルの右翼を叩き据え、互いに前方へと進んでいたが故にエネルギーの衝突が武Ｌｕｃｋ　ＳｈｉｎｅのＳＴＲ以上の激突力を叩きだす。

「グギョアア！？」

明らかに鳥類のものとはかけ離れた悲鳴を上げ、ドラクルス・ディ

ノウルが地面を滑るようにして墜ちる。

「……っ！」

バッと手を挙げ、散開した三人へと合図を飛ばす。次の瞬間、暗闇と木の陰を利用してドラクルス・ディノウルの正面へと回り込んでいた笑みリアが月下へと飛び出す。

「よい……っしょ！！」

打撃系スキル「スカルシェイカー」。地味なエフェクトと頭部に命中させることで高確率で相手を怯ませる追加効果を持つ一撃が叩き込まれ、動きが止まったドラクルス・ディノウルへとアタッカーたるレイジと武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅが飛びかかる。

互いに直剣を主武装とするがその性質は全く異なる二人の剣士が共に斬撃スキル「斫断斬（シャクダンザン）」を放つ。ある程度の「硬度」を持つ敵に対して高い効果を発揮する上位の斬撃がドラクルス・ディノウルへと叩きつけら『黙れ、きぃきぃと蠢めくな……人間（むし）』

「おぶぐぉ……っ!?」

次の瞬間、ドラクルス・ディノウルに肉薄していた三人の認識外から飛来した砲弾がドラクルス・ディノウルへと叩きつけられた。だが砲弾の耐久力が低かったのか、ドラクルス・ディノウルが致命傷を受けることはなく砲弾が…………否、砲弾ではない。

「ヴィジランス……さん！？」

辺りを警戒しつつも攻撃に参加しようとしていた「筈の」ヴィジランスは、全身から赤色のエフェクト……マイルドに薄められた血のポリゴンを撒き散らし爆ぜた。

『ふん……大して面白みもない爆ぜ模様だ』

「何……！？」

「なんだ、敵か！？」

『フン、「緑」の眷属か。彼奴め、所詮は地を這うだけの小物か』

「どこから……！？」

ぐしゃり、と。ドラクルス・ディノウルの身体がひしゃげて潰れる。ドロップアイテムすらをも破砕する強大な圧力、それを為した相応のサイズの「手」に武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅ達は乱入者がどこにいるのかを理解する。

「武Ｌｕｃｋさん！　上だ！！」

「な………空を、覆うほど……！？」

夜空が黒い。星すらない深い漆黒は空の黒ではない。木々の上に在りて武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅ達が見上げた空を覆い隠してしまうほどに巨大な身体と……翼。

『時は来た、光栄に思うがいい蟲共よ。我が眷属として使い潰され

る栄誉をくれてやる』

「モンスター……か……！？」

「これ、ドラゴ――」

その存在がやったことを形容するならば、デコピンだろう。だがそこに込められた破壊力はデコピンなどという可愛らしい響きに収まるような生易しいものではなく、ただの一撃で幾度とない新大陸拠点の防衛を為した笑みリアが粉砕される。

「武（ブラック）Ｌｕｃｋさん！」

「ごめんレイジ君、予定変更だ」

勝つ、逃げるなどという「不可能な目論見」ではなく、情報を集めるというトッププレイヤーとしての目論見を武Ｌｕｃｋ Ｓｈｉｎｅの目から読み取ったレイジは武器をインベントリにしまいこみつつ一瞬で三つの命を潰してのけたそれへと視線を向け『蟲が賢（さか）しげな目をするな、不愉快だ』

「がっ！？」

吹き飛ばされる武Ｌｕｃｋ Ｓｈｉｎｅ、それでも一撃でＨＰが全損しなかったのは彼自身が幾たびもの激戦をくぐり抜けて作り上げた堅牢な防具と激戦を経て鍛え上げられた当人のステータスの『死に損ないが』

「…………」

あまりにも残酷な……いいや、あえて不遜を承知で言うならばあまりにもねちっこい追撃で立ち上がることすら許さず武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅが砕け散る。
槍よりなお鋭く大鎚より尚圧迫する爪の先端で武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅを地面へ押しつぶし、グリグリと砕け散った武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅをすり潰すかのように指を動かす暗闇よりなお黒いドラゴン。
その目に浮かぶ感情は侮蔑に似ている、嘲笑に似ている、だがもっと無機質なものだ。
そうそれは、まるでただ暇だったから蟻を踏み潰しましたとでも言わんばかりの……生命を生命としてすら認識していない「無慈悲」の目。

「喋るドラゴン……もしかしてユニークモンスター？　いや、ははっ………」

勝てないことはわかっている、逃げられないこともわかっている。
話をしようにも第一声を上げる前に武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅは地面のシミになった。
だからレイジにできることは遺言として僅かに喋ることだけ。ドラゴンがレイジに視線を向けるまでの僅かな空白を、ただポツリと呟くことだけ。

そして幸か不幸か、それとも喋るドラゴンという共通点故か。強大な力を人へと振るうという点では合致すれど、彼の黄金の竜王が持つ人間への敬意、期待、戦う者としての礼儀……それらが著しく欠けた漆黒のドラゴンへと言い放つ。
レイジはこの場においての不正解、プレイヤー全体にとっての大正解を口にしたのだ。

「偽ジークヴルムかよ」

『その名を口にするな！！！！』

最早レイジがそれを認識するよりも速く、地面ごと消滅した樹海の只中にて目を黒く血走らせた竜が吠える。愚かな蟲の間違いを正すように、まるで自分に言い聞かせるように。

『我が名はノワルリンド！！　我こそが唯一にして絶対の、真なる竜王である！！！』

武Luck（ブラック） Shine（シャイン）、ヴィジランス、笑みリア、レイジの遭遇によってプレイヤー達の間に「漆黒のドラゴン」の情報が広がる。彼らはそれを正確に理解しているわけではない。だが彼らはワールドクエストの進行によって始まった「竜」達の戦争に飛び込むことになる。

世界は進んだ。
墓守が眠り、「最も新しき神代」が動いた。
深淵が沈み、「黄金を越えんとする漆黒」が動いた。
世界は進む、その過程でその身の上で息づく生命に激震を走らせながら。

ワールドクエスト三段階目「黄金を墜とす大戦」が始まる。

なお当の「黄金」さんは竜王とかそういうのクソどうでもいい模様、そんなことより強い人間探そうぜ！！

ちなみに「青（狂える大群青ではない）」さんはアトランティクス・レプノルカやスレーギヴン・アングラーにフルボッコにされて既にお亡くなりになっています。海マジパネーション

・ドラクルスとディノ
厳密に言えばディノが一段階目、ドラクルスが二段階目。ある理由から「竜化」したモンスターは「ディノ」となり、さらに症状が進行しきると「ドラクルス」になる。
ドラクルス・ディノウルはつまり末期症状です、同族だって平気で襲っちゃう。

深淵のクターニッドの適性攻略人数は「８人以上」です。
パーティメンバーの職業をなるべく少ない種類にすることが推奨されます。
基本的にどの職業でも問題はありませんが壁タンクがいれば創造態での戦闘が幾分か楽になります。
クターニッドのユニークシナリオＥＸの発生条件は初回限定で「深淵の使途を穿て」を受注し特定条件を満たすことで移行しますが、クリアされて以降は「クターニッド撃破から二週間経過し、なおかつフィフティシアで発生する「嵐の日に海に船出するＮＰＣのユニークシナリオ」を受注する」ことでクターニッドが遣わす幽霊船とエンカウント可能です。

反転都市ルルイアス概要
この特殊エリアでは昼と夜で出現モンスターが変わります。
昼間の間は「深淵の眷属」「深淵の偽人魚（ぎじんぎょ）」が主に出現し、夜の間は深海エリア「冥府の深海」に出現するモンスターがランダムで出現します。
ルルイアス内部には多くの廃屋が存在し、無事なベッドであればどのベッドでもセーブ、ログアウトが可能です。
エリア四方には四つの塔が存在し、それぞれに特殊エネミー「封将」が存在します。
この封将はそれぞれが後述するクターニッドの特殊能力と対応した能力を保有しており、封将を倒すことでクターニッドの能力を封じることができます。
中央のルールルイア城の地下空間にクターニッドがいますが、最上階

のギミックを起動するまでクターニッドは「妄想態」であり、この状態のクターニッドを倒した場合、強制的にユニークシナリオEXが終了され、プレイヤー及びNPCはいずれかのエリアにランダムで転移させられます。
ルールイア城の上層には「王の執務室」「要の玉座」「望郷の最上階」の三つの部屋が存在します。
王の執務室にはギミックのヒントとなる女王の日誌が存在します。
要の玉座にはクターニッドの「妄想態」を破るギミック「反転の要石」が存在します。
望郷の最上階にはギミックアイテム「かつての栄光」が存在しますが、モンスター「虚飾の鮫怪」を倒す必要があります。
反転の要石に嵌め込まれた宝石をかつての栄光に戻すことでギミックが作動し、自動的にクターニッドの「妄想態」が解除され戦闘に移行します。

封将攻略
クリーオー・クティーラ
クリオネの姿をしたこのモンスターは魔法を封じる能力を持っています。
触手による隙のない攻撃を仕掛けますが近距離攻撃か遠距離のどちらかしか攻撃できないため、対処は割と楽。ただし純魔は攻撃手段の九割が無効化されるので大人しく手を引きましょう。
スレイビール・ダーゴーン&ハイドーラ
いわゆる二体で一体のボスである二対の半魚人は物理攻撃、ひいてはスキルによる攻撃を無効化します。一切のスキルの発動を封じるため攻略難易度は一番高いものの、ボス自体のスペックはそこまで

高くはなく、さらにボスからの攻撃を防御することは可能なので魔法職をメイン火力として動けばあっさり倒せます。

バーシュド＝メルナクル
一種の群体モンスターのようなものであり、体表から生み出される大量のフジツボの幼生が本体の身体に纏わり付くことで近距離攻撃を封じてしまいます。ただしド近眼なので１０メートル以上離れた遠距離攻撃であれば幼生ガードが発生せず、さらに転倒耐性が低いため簡単に転びます。
瞬間的な攻撃ではなくオブジェクトや縄などのバーシュド＝メルナクル自体のバランスを崩す圧力的な攻撃が有効です。

アンモーン・オトゥーム
騎士の決闘に飛び道具は無粋、近距離による真正面からのタイマンのみが攻略法のアンモナイトを模した騎士です。近距離肉弾戦のセオリーが通用するため、もっとも戦いやすいボスではありますがそれなりに高度な行動を取るため油断しているとレイピアで一突きにされているでしょう。

深淵のクターニッド攻略
特殊エリア「反転都市ルルイアス」に入った時点から七日間がルルイアスに滞在できるリミットであり、七日以内に深淵のクターニッド「妄想態」または「想像態」の撃破でシナリオクリアになります。

形態別情報
「妄想態」
初期状態、巨大な漆黒の蛸に見える姿。その実態は「クターニッド」の認識に作用する幻像であり、厳密にはクターニッドではない。
この状態時は常時シナリオ参加ＮＰＣ全体に「呪い」を振りまく特

殊行動「深淵錯視（フェイク・アビス）」を発動します。
影響下にあるＮＰＣは偽想態のクターニッドに戦闘を積極的に仕掛けるようになります。
この形態のクターニッドは打倒することは不可能であり、城内の「王権ギミック」を解除することで初めて幻想態に移行します。
主な攻撃手段としては触手を使った薙ぎ払いや叩きつけを用います。

「幻想態」
第二形態、八芒星の魔法陣から触手と目玉が生えた異形の姿。
戦闘開始と同時にシナリオ参加ＮＰＣ全体に「恐怖」を振りまく特殊行動「深淵凝視（グレア・アビス）」を発動します。
これは攻撃に用いられる八本の触手全てに一定ダメージを与えると解除され、次の形態へと移行します。
主な攻撃手段としては触手を枝分かれさせてプレイヤーに軽度のホーミング攻撃を行います。

「空想態」
第三形態、魔法陣を組み合わせて作った中身のないハリボテの蛸のような姿。
八本の触手が持つ杯がそれぞれ異なる特殊能力を発動し、それに対応した反転効果がプレイヤー及びＮＰＣに適用される。
・赤：近距離無効化の効果によりクターニッドから十メートル以内の座標から放たれた攻撃をすべて無効化します。
・橙：遠距離無効化の効果によりクターニッドから十メートル以上離れた座標から放たれた攻撃をすべて無効化します。
・黄：物理攻撃無効化の効果によりクターニッドに対して物理、およびスキルによるダメージの一切を無効化します。
・黄緑：魔法攻撃無効化の効果によりクターニッドに対してＭＰを

消費する魔法によるダメージの一切を無効化します。
・緑：色彩反転の効果によりプレイヤーおよびＮＰＣの視界の色調を反転します。
・青：性別反転の効果によりプレイヤーおよびＮＰＣの性別を反転します。体型や年齢などはステータスやプレイヤー（およびＮＰＣ）の行動ログから生成されます。
・藍：ステータス反転の効果により、ランダムに選択された二つのステータスの数値が反転します。
・紫：ダメージ反転の効果により、クターニッドおよび「杯」に対して与えられるダメージは回復効果に、回復効果はダメージに反転します。

全ての触手が持つ「八色の聖杯」を破壊することで次の形態へと移行する。なお、この形態での反転効果は戦闘終了まで継続します。
主な攻撃手段はありませんが、第三形態で反転した効果は戦闘終了まで持続します。

「仮想態」
第四形態、周囲の生物を吸い込むブラックホールのような漆黒球体の姿。
五分間魔法「ランダムエンカウント」を無差別かつ無尽蔵に発動し続け、三十秒ごとに召喚されたモンスターを吸収します。この形態時に吸収したモンスターの総数によって第五形態のＨＰが変動します。
プレイヤーおよびＮＰＣにたいして攻撃を行うことはありません。

「想像態」
最終形態、血肉を基底として仮初めの実態を得た蛸頭人体の姿持つ

深淵の盟主。
形態とは別に想像態は二段階の行動パターンを持っている。第一段階では深淵宝玉によってランダムに選出されたプレイヤーおよびＮＰＣ八名のモーションログを参照し、自身の行動パターンに反映させる「Ａｎａｌｙｓｉｓ．（アナライシス）」「Ｒｅｆｌｅｘｕｓ．（リフレクス）」を使用する。
想像態第一段階のクターニッドは五つの「ダメージアーマー」が備えられており、一定以上のダメージを与えることで一つずつアーマーが解除されます。そしてすべてのアーマーがブレイクされることを条件に第二段階へ移行します。
第二段階ではクターニッドは八つの深淵宝玉を基点として八本の「巨神触手」を展開します。
第二段階ではこの八本の巨神触手を展開する深淵宝玉をすべて破壊し、破壊後に一定量のダメージを与えることでクリアとなります。
一定量のダメージはプレイヤー一人でも達成は容易な量であるため、実質的には八つの宝玉を破壊した時点で撃破成功と言っていいでしょう。

深淵のクターニッドのストーリー的設定
大前提として深淵のクターニッドの価値観は人間のそれとは大きく異なっており、クターニッドは人間を「個」として識別せず人間という「種族」という枠組みで認識します。
クターニッドはその出自から人間という種族に対して「敬意」の感情を持っており、ある理由から拠点としているルルイアスへ「一号計画」及び「二号計画」の産物たる人類を誘い、その力を観測しているのです。

そのため、ユニークシナリオＥＸ全てがクターニッドによる壮大な「盤上遊戯」に過ぎず、ゲームキーパーたる己が課した苦難を乗り越え、最後の試練（ボス）を打倒した者達を讃え、報酬を与えるのです。
既にお気付きの方もいらっしゃるかもしれません、まさしくクターニッドはＴＲＰＧのゲームキーパーそのものなのです。かつて己を生み出した優れた人類達、滅びに対して絶望に打ちひしがれ……されど歩みを止めなかった偉大なる人類。その後継を見極めることこそがクターニッドの根本原理であり、彼の生きがいなのです。

クターニッドの正体は神代の時代に行われた「二号計画」における前提実験「一個体における限定的現実改変特性の付与」の被験体として選ばれた一匹の蛸、その末路です。
第一、及び第二の実験で得た「術式」が肉体に施された状態で、無差別な現実改変を一個体の制御化に置くための処置が施され、その結果「反転」という条件付きでクターニッドの意思で自在に現実改変が可能となりました。
ただその副作用としてクターニッドは肉体を喪失し、自身の意識、思考能力、そして記憶を転写した自律魔法術式……それこそが深淵のクターニッドなのです。
言うなれば生きた魔法、魔法とはすなわち世界に刻まれた「概念」です。火によって物質が変質する概念を「燃焼」と呼ぶように、上に投げた林檎が下に落ちる概念を「引力」と呼ぶように、クターニッドという現象そのものが「深淵のクターニッド」という概念なのです。

そしてもう一つ、クターニッドという存在を語る上で欠かせないキャラクターこそが要の玉座に存在する反転の要石……人の女性を象ったそれこそが、クターニッドが唯一「個」として認識する人物。
それは「二号計画」における全権限を持ち、「一号計画」とは異な

るアプローチで未来へと人類という種族を繋げた「アリス・フロンティア」を象ったものなのです。その詳細は世界の真理書「不滅編」に記述されています。

――以下、ワールドクエスト第四、第五段階で解放――

クターニッドがルルイアスを拠点とし、深淵に座す理由はルルイアスに存在する女王の手記にも記されている通り「狂える大群青」を封印するためです。

そもそも「狂える大群青」の正体は「――――」の「――」であり、即ち神代よりさらに前の時代「始源」の胎動を指します。

かつて神代の人類が総力を挙げて抵抗した「――――」の脅威は根絶されておらず、クターニッドは現在の人類を見極め、警鐘を鳴らすのです。

――意思亡き「始源」胎動せり。人類（ひと）よかつて成しえなかった抵抗を成せ。

上記を要約すると
物が燃える現象は「燃焼」です。
物が地面へと落ちる現象は「落下」です。
あらゆる現象、状態を反転し意思を持った現象は「深淵のクターニッド」です。
超やべー奴らがそろそろ目覚めそうだから気をつけろよお前ら、とりあえず一番やばいのは俺が封印しとくから。
あとお前、色恋に奥手そうなお前だよお前。お前めっちゃキーパーソンだからいろいろ覚悟しとけよ。

そしてついに明らかになる「アリス」のフルネーム、彼女こそが「シャングリラ・フロンティア」における超重要人物であり、「シャングリラ・フロンティア　～クソゲーハンター神ゲーに挑まんとす～」における極めて重要な意味を持つ「設定」です。

あの日見た笑顔に憧れて（前書き）

真理書も書かないといけないのに……番外編も書きたいの多いのに……二週間経ったから畜生！
おいおい書いていきます

あの日見た笑顔に憧れて

（雨……これは明日まで降るかな）

轟々と降り注ぐ雨を窓越しに眺めながら思う。
台風が近づいていることは予報で分かっていた、そして明日から明後日にかけて暴風警報が発令されそれによって学校が休みになることも。
傲慢……というわけでもないが、自分が優れているという自覚はある。だがそれはそれ、これはこれ。今日と明日が休みなのだからと各教科の教師から課された山積みの課題は優等生とも言えど憂鬱なため息をつかせるには十分であった。

そしてさらに台風の前哨戦とも言えるこの大雨と強風である。
自分はまだいい、すでに連絡を入れたので十分程度待っていれば迎えの車が来るだろう。家柄故の役得、この雨を予期することを失念して傘も合羽も無しに帰宅する同輩達には少々の憐憫を抱かなくもないが、天の機嫌なのだから仕方がない。

（憂鬱……なのかな、とりあえず家に帰って課題を片付けて……ああ、お稽古もあるし…………今日だけ休みにしてもらえないかな）

きっとその要望は通らないだろう。
女性故の非力に甘んじることなかれ、家訓でもあるこの言葉に従い自分だけでなく二人の姉も護身としての武術を身につけている。雨の日であろうと鍛錬を怠ることはきっと認められない。

（やっぱり、憂鬱……かな）

どうやら恵まれた家柄の自分であっても他の人たちと同じく憂鬱を共有することはできたようだ。
どうにも思考が嫌な方向に傾いてしまう、そんな自分に苦笑しながら今のご時世には珍しい上履きと靴を履き替えるための玄関へと向かい………ふと、それに気づいた。

「んー、まぁ水は入らない……か。財布と端末も鞄の中、服は……まぁ、岩巻さんなら笑って許してくれるか、多分」

土砂降りの雨が降り注ぐ外と雨から人間達を守ってくれる校舎の境界、玄関口に一人の男子生徒がいる。
着ている制服からしてまず間違いなく同じ学校の生徒、そして自分の記憶が間違っていなければ多分クラスメイトの……

（日……違う、陽、つとめ……どっちの「つとめ」だったっけ）

少なくとも鈴木や佐藤よりは珍しい苗字の同級生、「勤」と「務」のどちらかは失念してしまったが確か「ヒヅトメ」という苗字であったはずだ。
念入りに屈伸しながら外を見つめるその男子の傍らにはおそらく学校側から貰ったのだろう透明なビニール袋の中に鞄が入れられた上で口を縛られている。そして本人が傘も合羽も持っていないことから、この「ヒヅトメ」何某が雨の対策を忘れていたということは理解できた。

（この雨の中、大変そう……）

その様子からしてこの土砂降りの中を傘もささず合羽も着ずに走っ

て帰ろうとしていることは分かる。彼の家がどこにあるかなど知らないが、少なくとも彼が帰宅する頃にはずぶ濡れの濡れ鼠になっていることは確定だろう。
この雨の中を濡れ鼠で帰り、帰ったとしても大量の課題が待っている。彼は災難続きだと思っていた、だが。

「っし！　行くか！！」

「……え？」

笑っていた。
雨の中に飛び出し、シャワーのような水滴の連打を浴びながら。ビニール袋の中に物質的な重さはなくとも大量の課題が詰まった鞄を持って。それでも彼は満面の笑みを浮かべて走っていたのだ。
豪雨の中、走り去っていった「ヒヅトメ」何某の悲鳴が遠ざかる。
その後ろ姿を眺めながら、心に浮かんだ疑問を考える。

「なんで、あんなに嬉しそうに……楽しげに……？」

それが最初の出会い、きっと彼は自分がその後ろ姿を見ていたこと

すら知る由もないだろう。

それからも、自分は何度も彼の姿と笑顔を見かけた。春も、夏も、秋も、冬も……どれだけ面倒な課題があっても、彼が体育の時間に派手に転倒して保健室の世話になるようなことがあった日でも。

「っしゃぁ！　遂にアレが届くってメールが来たし、急いで受け取って早速徹夜だ……！」

いつだって彼は笑顔で帰宅する。何時しか自分は彼が「なぜ」笑顔を浮かべて帰るのかという疑問と並行して、彼を笑顔にさせるものとは「何」なのかを知りたいと思うようになった。

だからある日、彼の後を追跡することにしたのだ。何度かの調査で彼の帰り道は把握している、そして彼がどこに寄り道するのかを知りたいと思ったのだ。不思議なことに今自分がしている行為が世間一般的に「ストーキング」と呼ばれるものであることはなぜか頭の中から抜け落ちていた。

そしてたどり着いたのが、おそらく個人経営なのだろう一軒のゲームショップ。

「ロックロール……ロック「ン」ロールじゃないんですね……ひゃっ！？」

「ふふふふふ……遂に、遂に手に入れたぞサバイバル・ガンマン……！」

手動の扉が開き、飛び出すように店から出てきたかつては名前がうろ覚えだった彼、陽務楽郎の姿に、思わず咄嗟に曲がり角に隠れる。

「ん？　猫かな……まぁいいや、初回特典付きも無事確保したしさ

っさと帰るか」

（ああ、やっぱり楽しそう）

学校での彼は決して不真面目な生徒というわけではない。授業は真面目に受けているし、成績も良好、友人付き合いも愛想が悪いわけではない。

だが、学校にいる時には決して浮かべないような笑みを浮かべている。

そうして走り去っていった陽務の姿を曲がり角の陰から見送った自分は、意を決してゲームショップ「ロックロール」の扉を開いたのだった。

まさか、その店の店主に本人が気づいてすらいなかった感情の正体を指摘された上にあまつさえ協力者となるとは、この時は思いもしなかったのだが。

「夏休み……終わっちゃった、か……」

土砂降りのあの日から、同じ季節を数度巡った。そして今、自分でも分かる。

ただ見ているだけの……雌伏の時は終わったのだと。協力者（岩巻真奈）曰く「立てたフラグを成立させる時」が来たのだと、夏休み明けの朝、目を覚ました斎賀　玲は直感したのだ。

「お嬢様、お車の方用意できました」

「……いえ、ごめんなさい。今日は歩いて学校に行きたいと思います……その、夏休み明けですし、気分転換と言いますか」

「成る程……かしこまりました」

朝食を済ませ、制服を着て、鏡の前でちょっと気合を入れて身だしなみを整える。

「じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃいませ、お嬢様」

いつもは車で送迎されているとはいえ、道くらいは覚えている。だけれど、今日は違う道を通って学校に行こう。

もしかしたら……そんな予感がするから。

あの日見た笑顔に憧れて（後書き）

岩巻ノーズ：恋愛の匂いを敏感に嗅ぎ取るぞ！
岩巻アイ：恋愛でモジモジしてる奴を敏感に発見するぞ！
岩巻イヤー：私の耳に難聴という概念はない
岩巻マウス：私の声は難聴で誤魔化させない
岩巻スキン：空気中に漂う恋愛的オーラを敏感に感じ取るぞ！
岩巻シックスセンス：お前恋してるだろう！なぁ！

リアル・ストロング（前書き）

間章：第三段階に世界の真理書「深淵編」を追加しました。ご注意ください

リアル・ストロング

気づけば夏も終わりに近く、数年間の貯蓄を全て使い切った蝉達が地に落ち始める頃。
「課題は持った、学生証もある……よし、大丈夫だな」
クリーニングされた夏服制服を着込み、寝癖がない事を確かめた俺は玄関の扉を開く。
「いってきまーす」
「はいいってらっしゃい」
母の声に送られ外に出れば季節は九月、高校生たる俺は学校に行かねばならないのだ。
セミファイナル地雷が仕掛けられた危険な通学路を歩きつつも、俺

は長期の休暇が終わった事で忙しくなるこれからに想いを馳せる。
とりあえずこれまでのようなゲーム三昧とはいかないだろう、基本的に夜型になるわけだがそこら辺は慣れている。
問題はシャンフロがリアル時間とリンクしてるってことなんだよなぁ、昼と夜でモンスターの出現テーブルが変わることもあるし、そこらへんも考えて行かないと。
ユニークモンスター「深淵のクターニッド」を倒し、二つのユニークを制覇した俺であったが、やはりというかそれと比例するように面倒ごとも増えてしまった。
フィフティシアに戻った俺を出迎えたのは、恐ろしい勢いで増えていく手紙(メール)を括り付けられたピヨピヨと鳴くハヤブサの大群であった。送り主はキョージュ……考察クランだかのリーダーであるエセ魔法少女だ。
スパムかというくらいに送られてくる「是非話がしたい(要約)」という内容のメールはハヤブサが二十羽に到達した辺りで恐怖を感じ始めたものだ。
仕方ないのでその中の一羽、どこかで見た気がするハヤブサに「そのうちメールするからスパムメールやめろ馬鹿(要約)」と返事を持たせる事で解決したわけだが、下手をすればマジで街を出歩けなくなるかもしれないと実感した。
青色の聖杯は役には立つが使用方法が面倒臭いし、やはりラビッツに亡命……もうこの際永住……
「ままならないなＭＭＯ……」

大多数がプレイしているからこそ楽しいが、それ故に面倒くさい。
まるで人生みたいだ……つまり現実はＭＭＯだしゲームは人生。

「とりあえず今日は何するか……武器の修理だよなぁ」

あのあと疲れてすぐログアウトして寝てたし。その後もしばらくゲームする気がおきなくてなぁ……

春であれば桜並木が続く道を進み、いくつかの信号と曲がり道を越えれば学校だ。ここで少し寄り道すればロックロールに行ける。

特に何か買う予定があるわけではないが、帰りに少し寄ってみるかな。

あの人乙女ゲーガチ勢だから俺より過酷かつ過密なスケジュール組んでそうだし。

‥あのラブクロックを「まぁまぁ忙しいね」で片付ける女傑だ、恐らくチャート「遂行」能力だけなら俺やカッツォ、ペンシルゴンすら上回る。ハーレムルートを追うなら必須事項なんだと、ギャルゲー業界怖い。

あ、そういえば大量にゲットした海鮮系モンスターの素材で何か作れるか試さないとな。資金面の問題は完全に解決されたし、たくさん無駄遣いしちゃおう。

「…………」

さて。

時に話を変えるが、人間の気配とは人体から発せられる電磁波だと

言われている。
それが残留するからこそ「誰もいないのに誰かの気配がする」というホラー映画とか見た後によくある現象が起きたりする、と。
気配に過敏になってるから残留した電磁波をキャッチする、と。

つまり何が言いたいかというう、と。

（なんか……尾けられてね？　と。）

いや「と」はいらない。
というか電磁波とか関係なく、明らかに違う足音がさっきからずっと聞こえてくる。
ストーカー？　いやいや流石にそりゃ無いだろうが、少し落ち着いて考えてみよう。

一番高い可能性は俺と目的地が同じ……つまり同じ学校の生徒である可能性。
まぁそろそろ学校に着くし、その可能性が一番高いだろうが……なんだろう、やけに近い。

（足音的に、一メートル離れてるかこれ……？）

コツコツと聞こえる足音的に、俺が急停止すれば後ろにいる何者かが衝突しそうなくらい近い気がする。

（携帯端末でも見ながら歩いてんのか……？）

この可能性は高いな。視線が俺の方を見ていないからこそこの距離、そしてやけに近いのは歩く速度が俺と近しいから。

だったら解決策は容易い。俺が少しだけ歩く速度を早めれば……

（……………追いついてきたし）

え、まさかのストーカー説急浮上？　いやいやまさか。

となれば知り合いか？　いや、ウチは結構学区内の変な場所にあるから近くに友人の家は無い、つまり寄り道することもある下校時なら兎も角登校時に誰か知り合いと会う事は無い筈。

え、なに、だんだん怖くなってきた。後ろを振り向いて確かめれば済む話だけどマジで赤の他人だった時の気まずさが困る。

互いに「え、なんでこいつ他人についてきてんの」「え、なんでこいついきなり他人の顔見るの」という気まずさを抱きかねない。夏休み明け最初の登校日早々そんな気まずさ抱きとうないぞ俺は。

どうする……いっそ走って振り切るか？　いや、だが別に遅刻時でもないこのタイミングで走れば視認せずとも存在に気付いていたことを相手に気づかれる。

それに勝ち逃げっぽいがこっちはもやもやを抱え続けるから負け逃げだ、くっ……九月早々難易度の高い、やはり現実とは全人類参加型のゲームであったか……っ！

「……あ、あのっ！」

「！！？」

喋った！　いや、話しかけてきた！？　何だ、何が狙いだ！？
この局面でなぜコンタクトを取る？　まさか背中に何かくっついていた？　いやそれならここは紳士的対応で返答しつつ己のうっかりを笑って流すのが大人の対応！

「ハイナンデショカ」

「あの、その……陽務君、ですよね？」

振り向けば、俺の脳が勝手にイメージしていた殺し屋の如き「仮想：後ろの人」とはかけ離れた、同年代の少女が一人。

「あー、えーと、斎賀さん？」

「は、はい！　陽務君、えーと、その……夏休み！　以来ですね！」

「夏……あ、そういえば確かに」

成る程、後ろを尾けていたのは後ろ姿から俺だと確証が持てなかったためか。
あの夏の日に会った時の涼やかなワンピースとは違う、ウチの高校の女子用夏服を着た斎賀さんは残暑の暑さによるものか、若干顔を赤くしながらも嬉しそうに笑みを浮かべる。
うーむ、流石は文武両道に見た目スペックと性格まで付与された斎賀さん、文字にするとギャルゲーのヒロインみたいな事になるのにちゃんと実在してるんだものなぁ。

「あれ、斎賀さんってこっち方面に住んでたっけ？」
「え、えと、その……たまには気分を変えようかな、と違う道で通ったら偶然……そう、偶然見かけまして！」
「成る程……」
まぁ近所のコンビニで遭遇するくらいだし住んでる場所が近い、という事実も納得できる。
とはいえ斎賀さんの家なんて興味のないゲームと同等かそれ以上に縁遠いものだろうしどうでもいいか。
さて、ここでハイそうですか会話終了、とぶった切るのは人としてどうかと思うし「たわいない世間話」とやらをするべきか。
「にしても、夏休みも終わって学校が始まるね」
「そ、そうですね……これから学校、ですから、ね」
そりゃあずっと休みだったらいいのにと思わない事もないが、それはそれで人生からメリハリがなくなる。
程よくままならないから現実もゲームも楽しいのだ。まぁ世の中には自分の好きな事だけして生きてる手合いもいるのだが……主に外道二人や夏目氏。あとは米国産の怪物（プロゲーマー）シルヴィア・ゴールドバーグなんて最たるものか。
「…………」
「…………」
くっ、キャッチボール式ではなくピッチャーバッター式会話術をお

望みか。
リア充力が高い超リア充ともなればガトリングの如く話題を提供できるだろうが、あいにく別方向でリアルを充実させる俺ではせいぜい六連筒リボルバーが限界だ、保ってくれよ俺の話術……！
「あー……あ、そうだ。そういえば斎賀さんシャンフロ、やってるんだっけ？」
「ふぇあ」
「ふぇあ？」
「い、いえいえ何でもないですよ！？　えぇ、はい！　シャンフロやってます！」
そういえばあの時は外道二人に急かされて会話を切り上げてしまったが、確かそんな話をしていた筈。
いきなり話題がゲームの方に吹っ飛んだせいか肩をビクリと震わせる斎賀さん。なんだっけ、ビバリーヒルズみたいな名前の髪型がふわりと揺れた。
「斎賀さんもやってたんだ、ヒーラーとか？」
「い、いえ、その……戦士職を」
意外……ではないな、確か剣道とかスゲーって風の噂で聞いた事がある。ウェザエモンとかが頭おかしいだけで、普通のモンスター相手なら武道経験は大きな武器になるだろう。
「成る程……結構やり込んでるの？」

「えぇ、まぁ、その……ハイ。クランとかにも、所属したりしてて……」

「おぉ、身内団だったり？」

「えと、そうですね……」

身内団はギスるとそれがリアルにまで波及する、という危険性を孕んでいるが赤の他人と組むよりもずっと結束できるというメリットがある。

俺やカッツォ、ペンシルゴンは他ゲーから流れてきたから身内団ではあるがイナゴ寄りだ。

悲しい事件を経たものの新メンバーが加入したのでもう身内団とは言いづらいけど。野菜スティックと新鮮って必ずしもペアにしていいわけじゃないんだなって。

それはともかく良い流れだ、無闇に話題を変えずともシャンフロの話題で持ちこたえられるぞ。

「新大陸、解放されたけど斎賀さんは挑めそう？」

「ど、どうでしょう……たくさんの、プレイヤーが行きたい、でしょうし……」

確かに、なんか大量に船を作っているっぽいし新規のほとんどはまだサードレマを拠点としている現状ではあるとはいえ、新大陸行きを控えるプレイヤーが百人前後ということはないだろう。

それにレイ氏達「黒狼」のようなトップクランは第一次新大陸行きの船には他プレイヤーも考慮して人数を減らしたとも聞く。

「確かに、まぁ今の大陸の方も全部が解明されてるわけじゃないし退屈はしなさそうだけど」

なにせユニークモンスターはほぼ放置だったからな。

「そう、ですね。ふふふ……」

俺程度の話術でも斎賀さんの暇をつぶす程度にはなったのか、楽しげに笑う斎賀さん。

と、そこに飛び込む小さな影。それは命のストックを吐き出し切り、子を残す事も出来ていないだろうにどこか満足気に落ちてくる一匹の蝉。

それは下向きの放物線を描いて、真っ直ぐに斎賀さんの元へと突っ込んでいる。

これがゲームの中であれば対応できたかもしれない、だがリアルの俺は思考に即対応するだけの肉体を持っていない。

蝉が落ちてきていることに気づけたのも偶然視界に入ったからに他ならず、危ないと喉を震わせ身体を動かすよりも早く蝉は斎賀さんの頭にぶつかっ

「ひゃっ」

「おぶぁっ」

ビシィッ！！

「へ？　あ、あぁあ！？」

俺よりも遅くに気付いたにも関わらず、俺よりも先に動いた斎賀さんの手刀が叩くように蝉を弾き飛ばす。
そして空中でクルクルと回転する蝉はそのまま俺の頬に胴体着陸。
まさか流れ弾が来ると思っていなかった俺はそのままバランスを崩し転倒、さらに追い討ちのつもりか斎賀さんの手刀でショック蘇生した蝉がセミファイナル地雷と化して暴走。
ジジジジジジジジジジジッ！！
「いだだだだだっ！？」
あ、脚がっ！　蝉の脚が引っかかって！　羽がビヂビヂ当たっててやばい！
「ご、ごめんなさいっ！　い、今助け……きゃあっ！？」
不肖陽務　楽郎、夏休み明け最初の思い出は蝉もろともビンタされるという中々に得難い経験であった。
斎賀さん、強い。

リアル・ストロング（後書き）

Q、斎賀さんはどれだけ強いのー？
A．首裏トンッが出来る。ちなみに斎賀三姉妹は護身術としての古武術の他に長女が弓道、次女が柔道、三女が剣道を履修している。

ウルフパック・トランスファー（前書き）

間章：第三段階に世界の真理書「深淵編」を追加しました。ご注意ください

ウルフパック・トランスファー

何度もペコペコと謝る斎賀さんをなんとか宥めすかして教室へと入った俺は、共に斎賀さんにビンタされたという奇妙な絆を結ぶに至った蝉くんの事を思いつつ席に着く。

ほぼ引きこもっていた俺とは違い、ちらほらと見事に日焼けしたクラスメイトを見かける。ああいう風に、所謂「健全な」リア充を見ていると自分はどうなんだと比べがちになるが……まぁ記憶に残る夏ではあったし、少なくともクソゲー行脚するよりは健全だろう。

「………ンフロが……」

「……ーニッド……」

（やっぱシャンフロの人気すげーなー）

俺以外にも夏休みシャンフロ　デビューした奴がいるのか、チラホラとそれっぽい話題が聞こえてくる。混ざってもいいが、そろそろ朝のホームルームである以上今から会話に混ざってもそう長くは話せないだろう。

携帯端末で適当に流し読みしつつ時間を潰す。なんとなく気になったのでシャンフロ関連の掲示板やらＳＮＳを見てみると、ユニークモンスター関連の内容が出るわ出るわ。やはり話題は深淵のクターニッドの撃破、そしてもう一つは……あ……あそうだ、あまりにも面倒臭すぎて記憶から押しのけていた大問題。やはりというかアレだけの大ごとになったわけだし、話題にもなる

のか……流石はシャンフロ屈指の廃人クラン。

考察クランから大量に送りつけられたスパムハヤブサは、良くも悪くも……いや八割悪い方向に目立ちまくっていた。
一箇所に何羽も鳥が飛んでいけば誰だってそこに何があるのか気になるというもの、クターニッドによって派手に送り返された俺達は構造的にクライング・インスマン号に酷似した帆船から降りたところ、スチューデ関係のＮＰＣと何人かのプレイヤーに出迎えられたのだ。

「やぁやぁサンラク君、色々問い詰めたいけどまずはお疲れ様と言うべきかな？」

まず最初に俺へと話しかけたのは我等が外道アーサー・ペンシルゴンだ。聞けば別件でフィフティシアにいたらしいが、ＧＭアナウンスと大量のハヤブサが一箇所に飛んで行ったことからおおよそのアタリをつけてここに来たらしい。

「ほぼ徹夜でタコと戦ってた上にエナドリ切れたから話なら後でい

い？」

「んー、どうせカッツォ君も合流してから尋問するつもりだったし別にいいよ、どちらかと言うと「旅狼（ヴォルフガング）」のリーダーとして来たようなもんだし」

しばし考え、新メンバーの件についてかと合点が行く。

「あー、ルストモルド秋津茜。こちらうちのクランのリーダー」

「やぁやぁ、ユニークシナリオ明けで疲れてるかもしれないけど挨拶だけしとくよ。私はアーサー・ペンシルゴン、そこのアホから話は聞いてるよ」

早速人心掌握を始めたペンシルゴンだが、残念だったな。秋津茜は光属性だからお前は成す術なく消し飛ぶだろう……と、ペンシルゴンと入れ替わるように俺へと話しかける者が。

「噂には聞いてたけど、本当に半裸なんだねぇ……ダメージとかどうしてるの？」

「はい？」

「やっぱり回避前提なの？　ウェザエモンってそんな甘い攻撃してこなかった気がするし……やっぱり蘇生前提の特攻（ゴリ押し）？」

「いや、誰だよ……」

やけに馴れ馴れしく話しかけてくる侍っぽさを感じさせる装備の……うん、ネームカラー的にプレイヤーに俺は胡乱げな視線を向ける。

そこでふと、どれだけ変態的なステータスや装備にしようとも根本的な種族は人間であるはずのプレイヤーにはあるはずのない物に目を見開く。

「やっぱり気づいた？　ふふ、ちょっとばかし改宗（コンバージョン）してね」

改宗（コンバージョン）？　引っかかるな、初めて聞いた気がしない、どっかでその単語を見た気がする。どこだ？

「魔法適性が下がったけど代わりの恩恵が中々優秀でね、サクッと獣人種（ビーストマン）になったのさ」

「ふぅん……キャラメイクで種族を変更できない理屈はそれか」

「彼女ほどじゃないけど君も大概切れるみたいだね」

まるでヴァンパイアが日光を浴びたかのように悶えるペンシルゴンをチラと見つつ目の前の和風ケモ耳はそう俺へと告げる。

恐らくペンシルゴンの知り合いか何かだろう。まずは名乗れ、と言いたいところだが頭の上に名前が表示されているのだからそちらを見ればいいだけの話だ。

「京極（きょうごく）？」

「京極（キョウアルティメット）だ、間違えないでね」

「長い、それで京ティメットさんはただの野次馬か？」

「京ティメット……」

非常に複雑そうな表情を浮かべたケモ耳剣士京極であったが、気を取り直したのか視線を別の方向へ……凄まじくギスったオーラを放つ一角へと向ける。

「…………」

「…………」

恐らく肉親関係か、それに近しい関係なのだろう二人の「サイガ」が只々無言で向き合っている。
双方の間に和やかさは欠片も感じられず、むしろ敵意と言ってもいいほどの物騒な気配が漂っていた。

「うわ関わりたくねぇ」

「清々しいくらいの感想だけど、元凶君だよ？」

「はぁ？」

何故俺の名前がここで出てくるんだ？

「そりゃぁ、仮にも自他共に認めるトップクランが二度もユニークを逃して？　その二度の討伐アナウンス両方に聞いたこともないぽっと出の名前が出てたら……そりゃあ当事者達は気に食わないでしょ」

「えぇ……」

だが京極の言葉にも納得できる点はある。要するに物語中盤でよくある「新キャラ初登場」の失敗パターンだ。

それまでのキャラクターを難なく倒して登場して「この程度の敵に手こずってたの？」とか言っちゃう生意気なキャラに対する、とりあえずこいつ不幸な目に遭わないかな、という感情。
それがどんなキャラクターか掘り下げられていないからこそ、第一印象だけで評価が下される。
つまり京極曰く俺がクラン「黒狼」からよく思われていないのはぽっと出のキャラが横からユニークをかっさらっていったから、と言うことか。
「……いや、それならサイガー１００？　だったかは俺の方に詰め寄るはずじゃね？」
「んー……確かあの二人姉妹って話だし、リアルで何かあったんじゃない？」
いや妙だな、リアルで喧嘩でもしたならサイガー１００の方がわざわざ出迎えに来るのは違和感がある。
ルストやモルド、秋津茜もダブルサイガが気になるのかペンシルゴンの口八丁（せんのう）が効いていない。
見兼ねたのかペンシルゴンはダブルサイガの方へと歩み寄ると二人の間に割って入った。
「はいはい何でギスってるのかはしらないけどさぁ、こんなところでやらずに君らの拠点でやってよ」
「………トワ、これもお前の手の内か？」
「アーサー・ペンシルゴンだよ「１００（モモ）」ちゃん、生憎だけどこの

件に関して私は蚊帳の外だよ」
互いにリアルネームを知っている関係なのか、随分と危うい感じに互いを呼び合う二人。だが少なくとも片方は外道である以上、どうやら俺を傍聴席に留めておくつもりはないらしい。
「今回は大体サンラク君の独断専行さ、私も事後報告で知ったよ」
「オイここでキラーパスかよ……」
サイガー１００の視線が俺の方へと向く。ゲーマー特有の新情報を求める目だ、さぁどうしてくれようか。
ペンシルゴンめ、ここで俺に振ってどうしろってんだ。しらばっくれるのは無理だし逃走は後が面倒だ、話すにしてもどこまで話していいんだ？
真理書に書かれたあの情報を切るか？　いや、駄目だな……あの情報は下手をすればユニークモンスターを倒したと言う事実以上に大きな力を持っている。
ペンシルゴンほど悪巧みに長けていない俺でも分かるくらいあの情報には価値がある。
「あー……とりあえず、こっちの不手際でレイ氏を七日間も借りて悪かった」
初手謝罪コマンド、謝罪は日本人のメイン武器だ。
「世辞はいい、単刀直入に聞かせてもらう……「夜襲のリュカオーン」のユニークシナリオを発生させた、というのは事実か？」

視界の隅で、頭を下げるレイ氏の姿が映った。やっぱりレイ氏経由でバレたか……どちらにせよ身内以外と発生させた時点で独占は諦めてる。

「事実だ、倒すのに一晩かかったクソボスだったけどな」
「我々は一晩持ちこたえることもできなかったがな」

これは不味い。
自虐ネタは心に余裕がある時か心に余裕がない時かの両極端でしか言わないものだ。
下手をすると不機嫌がこっちに飛び火する可能性もある。どうにか穏便に……穏便に…………

「ＳＦ－Ｚｏｏがリュカオーンの出現法則割り出した」

「ほう、それは朗報だな」

初手他者売却、悪いがデコイになってくれ。

「……そうだな、ここでリュカオーンの攻略情報を教えても俺は構わないが……我らが旅狼の頭(カシラ)に許可をもらわないとな」

そしてキラーパスをバットで打ち返す！　やだよ誰が起爆仕掛けのダイナマイトに触らなくちゃならないんだ。

だが俺の責任転嫁も、ペンシルゴンの策略も、何故か笑みを浮かべる京ティメットの目論見も、何もかもがたった一人のプレイヤーの言葉によって消し飛ばされた。

「その前に、お話があります姉さ……いえ、クランリーダー」

「……今一度聞いてやる」

「私は、クラン「黒狼」を脱退し……クラン「旅狼(ヴォルフガング)」に加入したいと考えています」

何故かペンシルゴンに殴られた、何故だ。

ウルフパック・トランスファー（後書き）

鉛筆「どうせ君がなんかやったんでしょぉーーー？？？」

既にサイガー０はリアルの方で黒狼脱退をサイガー１００へと叩きつけてます、まさか「旅狼」に入りたいとは聞いてなかったのですがそしてサイガー０という特大戦力と同時に特大地雷を抱え込まされたペンシルゴン怒りのパンチ

エンカウント・ペナルティ

廃人プレイヤー「サイガー０」がクラン「黒狼」を脱退すると言う大ニュース。

そしてさらにユニークモンスターを討伐したプレイヤーが所属する「旅狼(ヴォルフガング)」への移籍希望。

どこから漏れたのか、瞬く間に広がった大ニュースの二重螺旋によってシャンフロスレは大賑わいだ。

何故新大陸行きを目前とした今、脱退を決意したのか。

クラン「旅狼」のメンバーとユニークモンスター「深淵のクターニッド」を倒したのはなんらかの意図があるのか。

聖女ちゃん可愛い、聖女ちゃん可愛い、聖女ちゃん可愛い……おい専スレでやれ。

「悪目立ちここに極まれり、って感じだな……」

単語検索「サンラク」……うわっ、ヒット数三桁超えてる。ていうか「珍鳥サンラク捕獲対策会議」ってなんだよサンラクは正真正銘種族人間だぞ。

ラビッツという安置を確保しておいてよかった、下手すりゃログアウトした宿の前で出待ちとかされかねない。

「よーしお前ら席につけー、夏休みデビューしたやつはいないな？」

夏休みにシャンフロデビューはしたかな。

簡単な集会と課題の提出程度で、この日は下校となった。

自宅の位置が学区内の妙な位置……具体的に言うとあまり高校生がいない場所にあるために友人達に別れを告げ、帰路につく。

このまま帰宅してシャンフロにフルダイブしてもいいかもしれないが、ここはやっぱりロックロールに寄ることにしよう。

「もしかしたらなんか掘り出し物があるかもだしな……！」

俺は陽務　楽郎、ロックロールの在庫余り（クソゲー）処分に一役買うスカベンジャーなのだから！

「………」

と、言うわけで。

「なんかいい感じのクソゲーあったりします？」

「君ね……もうちょっとこう、有意義な青春を送ろうとは思わないのかしら？」

「いやいやひと夏を乙女ゲーに捧げた人に言われたくないっすよ……全クリしたんです？」

「隠しシチュまで完全にコンプしてご意見メールも送ったわよ」

貫禄のヘビープレイヤーだ……とはいえ、俺の中で岩巻さんは時間を圧縮して生き急いでいる人、と言うイメージなので去年の俺のように連続攻略をしただろうこの人が元気そうなら何よりだ。

「で？　わざわざクソゲー漁りに来るなんてシャンフロはやめちゃったの？」

「なんだかんだあって知り合いと団組んでぼちぼちやってますね」

「ほうほう……あ、そうだクソゲーってわけじゃないけどイイのがあるんだ」

そう言うと、岩巻さんは一本のパッケージを俺に差し出す。

「……クソゲー？」

「んー、別にクソゲーってわけじゃないんだけどね？　それの裏ボスが誰にも倒せないって評判でね」

「裏ボス……」

いやこれそもそもゲームであるかも怪しいところではあるが、裏ボスという単語に心惹かれるものがあるのも事実だ。
とはいえ……いや……だってこれ……ＶＲ教材だよな？

「まぁいいや、ハウマッチ？」

「４２１０円だよ」

「結構安いっすね」

「そりゃゲームというかＶＲ教室みたいなものだもの」

今年の夏はシャンフロしか買ってなかったからな、ＧＧＣに行くために交通費で少し使ったが懐にはそれなりの温もりがある。
リアルマネー派なので天上天下平等だから勉強しろ馬鹿、という真理を説いたおっさんが書かれた紙を渡す。

「はいまいどありーシャンフロの方はどう？　楽しんでる？」

「まぁそれなりに、時々クソゲーが懐かしくなったりしますけど」

「ふぅん……そろそろかな」

「ん？」

何か待っているのだろうか。
用事があるようならただの客に過ぎない俺はさっさと退散するべきか。
そんなことを考えていると、どうやら誰か来店したのかロックロー

ルの扉が開かれる。

「あの、岩巻さん可及的速やかにって一体何が…………」

「あ、どうも」

「…………」

四、五時間ぶりっすね斎賀さん。

扉を開いたのはなんと斎賀さんであった、なんか最近遭遇率高いなこの人……

目をまん丸にして、扉を開いた状態でフリーズした斎賀さんであったが、ギギギと首を動かし岩巻さんを見つめる。

「アラーイラッシャアーイ、ソンナトコデタッテナイデハイッテラッシャーイ」

「キャラボイスに金ケチったゲームみたいな棒読みっすね」

「CV妥協は絶対に許しちゃダメだよ」

乙女ゲーに人生を捧げたプレイヤー、魂の一言であった。

「あ、あの、岩巻さ、え、あの……」

「あれれー、もしかして二人は知り合いだったりするのかしら？」

「……？　まぁ、同じ学校の同じ学年だし顔とと名前くらいは知ってますよ」

「……ヘタレめ、乙女ゲーで言えばチャプター2くらいじゃないの」
チャプター2？　なんの話だろうか。
そして何故斎賀さんがいたたまれないような表情で顔を背けているのだろうか。
「実はさ陽務君、前々から彼女と君の話をしてたのよ」
「俺の？」
「えう、あう、えと、ちが、あの」
何故かため息をつく岩巻さん。
「……ほら、陽務君カテゴリこそアレだけどいろんなゲームしてるでしょ？　そこの斎賀ちゃんがゲームを始める時にきみの話題をしたのよ」
「そ、そうっ！　そうなんですっ！　えぇ、はい！」
「あぁ、じゃあ斎賀さんにシャンフロ勧めたのってもしかして？」
「うん私。売れ筋だったしフルダイブの中じゃやりやすい方って聞いてたから」
成る程、ゲームの話題で盛り上がったのはそれが理由か。初めてのゲームってのは記憶に残りやすいし、贔屓したくなるものだ。
「いやぁ、それにしても奇遇ねぇ。あなた達の学校、今日が夏休み明け最初の登校日なんでしょ？　早速ウチに来てくれるなんて嬉し

いわ」

なんだろう、物凄く白々しい雰囲気を感じるのだが……まぁいいや。

「まぁどうせ帰ってゲームするつもりだったし、掘り出しものないかなって来ただけですし」

「ふーん……」

この人なんか妙な動きが多いな。まぁ斎賀さんと長く談笑する程の仲でもなし、買ったこれをプレイしたいし帰るか。

「じゃあ俺はこの辺で」

「あっ……」

「……？　何か？」

「あの、その、ま、また明日！」

「え？　あ、はいまた明日……」

思わず小学生か何かか？　とツッコミそうになったが、小学生にも教えるような基礎の挨拶をこそ守れる礼儀正しい人なのだろう。やはり一般市民とは隔絶したオーラ的なものがあるんだろうな。

さーて、シャンフロをするか買ったこれをするか、どうしたものかな。

「…………」

「…………」

「さて、反省会を開きましょっか」

「その、せめてもう少し覚悟を決めさせてもらえたりすれば……」

「覚悟を決めるために三年かけてちゃ世話ないでしょうが」

「うっ……」

「まずは吃らずに喋るところから始めないといけないわね……」

なんだかんだクターニッド戦の消耗を補填しときたいな、というわけでシャンフロから始めることにした。

「とりあえず……」

やらねばならないことがある……陰腹切って誠意を見せた方がいいだろうか。

九割……いや七割クターニッドのせいとは言え、エムルやシークルゥを連れてルルイアスに殴り込みをかけた以上、ケジメ的なアレコレをヴァッシュに示さねばなるまい……

「ど、どうしたですわサンラクサン？　なんだか悲痛な顔してるですわ！？」

「小指か……いや、コンクリ詰めて太平洋に……やはり陰腹切って……」

「なんの話をしてるですわ！？」

「エムル、介錯を頼む」

「だからなんの話ですわー！！？」

なお割とあっさり許された。

エンカウント・ペナルティ（後書き）

なお反省会は一時間ほど続いた模様

放置した傷は膿み、呪う

「……っ、かぁぁぁぁぁぁあ〜…………」
俺とエムルによる「なんだかんだあってクターニッド殴り飛ばしてきたよ！」という報告を受けたビィラック、渾身の溜息であった。
「ワリャら、バカじゃやバカじゃたぁ思うとったが……はぁぁぁぁぁあぁ………」
「んなこと言ったってなぁエムル」
「はいな、ルルイアスでもサンラクサンはいつも通りだったけど流石にこれは事故ですわ」
「……で？　わちんとこ来たんなら、まぁた派手にぶっ壊したんじゃろ。見しぃや」
「七日間ぶっ通しだったからな……傑剣（デュクスラム）への憧刃以外はボロボロだ」
傑剣への憧刃は確かに俺と極めて相性のいい武器ではあるが、それにしたって１００％クリティカルを出せるわけじゃない。延々とゾンビゲーのごとく半魚人や人魚を切っていればクリティカルを損なうこともあるし、リュウグウノツカイやらシャチやらアンコウやらの激戦も潜り抜けてきた。
傑剣への憧刃とクターニッド戦で派手にぶっ壊れた煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手以外は今にも壊れそうなぐらいに消耗している。ウィンドウを操作して俺が提示した武器を検分していたビィラックであったが、やはりと

いうか「破損」状態になった煌蠍の籠手で盛大に顔をしかめた。

「……まぁ、あんクターニッド相手に喧嘩売ったんじゃ、死闘じゃったたこたぁ分かるが、また派手に壊したのぅ」

「というかシステム……設計的に壊れること前提だろこれ」

「壊れるほどの出力を出すなっちゅーことじゃたわけ！」

いやいや、男なら黙って100%……いや、120%で動かしたくなるものだろう。浪漫だよ浪漫、人間の三割はそれで出来ているんだ。じゃなきゃこの世にギャンブルやゲームは存在しねぇ。

「あとは新規で武器を作って欲しい、素材なら大量にあるぞ……いやもう、本当大量に」

「ふん……そりゃ構わんが、金はあるんか？」

「この人、ルルイアスの金銀財宝根こそぎかっぱらってきたんですわ……」

「凄いぞ、城が建てれそうなくらいある」

エルクには言わないほうがいいな、しれっとボッたくられそうだ。

俺はインベントリアから素材を取り出す、素材を取り出す、素材を取り出す、素材を取り出す、素材を取り出す、素材を取り出す、素材を取り出す、素材を取り出す、素材を取り出す、素材を取り出す、素材を取り出す、素材を取り出す、そざざざざざざざ「待て待て待て待てぇ！！」

「おどりゃ待たんかい！」

「まだあるぞ」

「どんだけ戦っとるんじゃゃワリャは……」

人間には……いや、生き物には「不安になる数」がある。具体的に言うとモンスターの素材とかで「これで武器や防具作りたいけど数足りるかな？　もっと集めたほうがいいかな？」となるアレだ。コレクター精神とも違う、ハクスラというカテゴリにおける宿命、製作時に定められた全武具を作成するために必要な数を「最低限」として、それを集めるまでプレイヤーはスローターと同義だ。

例えば売却時の値段が美味しい素材を落とす敵がいたなら、おそらくゲームを棚に並べて気がむくまで再び開かないその時まで乱獲され続けるだろう。そして、七日間しかいられない場所で手に入る素材があるのならば全力で稼ぐ……それがゲーマーの性なのだ。

「こがいな時は手順を逆にするんじゃゃ。ワリャはどがいな武器が欲しい？　言うてみぃ」

「どんな……か」

とりあえず頭防具と腰防具を更新するとして……また双剣を作るのも悪くはない。悪くはないがどうせなら別武器を使ってみたくもある。とはいえスキル的に今からハンマーや槍を使ってもしょうもないし……そうだな。

「頭と腰の防具と……拳武器、片手剣、そして……盾。」

「盾？」

なるほど、今の俺の武器のほとんどを作ったビィラックからすれば不思議かもしれないな。俺（サンラク）というキャラクターのステータスは今や完全回避特化、なにせクターニッド戦までガードしても死ぬような状態だったからな。ステータス反転アイテムを手に入れたことで条件付きで耐久力を得ることができるようにもなったが、そんなものは結局のところ大した意味はない。
このゲームが「スキル」と「魔法」という二つのシステムを備えている時点で、装備品で着飾りプレイヤースキルで補ったところでスキルや魔法にまで妥協しなかった本職には遠く及ばない。

例えばＳＦ－Ｚｏｏにいた機動力を完全に犠牲にするという代償の代わりに、リュカオーン相手に後衛を守りきったタンクのプレイヤー達……あれこそがタンクの鑑だ。万能型とは聞こえこそいいがそれは敵に対して圧倒的に上位の強さがあってこその呼び方、同等かそれ以下なら世間一般ではそれを器用貧乏と言う。
であれば回避と立ち回りに特化した俺が盾を持つことは妥協ではないのか？　どちらにせよ半裸なのに無理に盾を持つ必要があるのか？

うるせーばか、使いたいから使うんだよ。

というか何もタワーシールドが欲しいわけじゃない、最近はやけにデカいモンスターとばかり戦っていたせいで回避ばかりに特化していたが、俺は別にパリィが苦手というわけではないのだ。片手で構えて剣や槍を弾ける程度の大きさの盾であれば俺（サンラク）とは矛盾しない、斬らない剣として成立する。
世の中にはタワーシールドを二つ持って絶対防御！　と遊ぶやつだっている。具体的には別ゲーで暇を持て余した俺だったりするが盾は盾で使ってて楽しいのだ。こう、持ち方を少し変えれば鉄板型の拳になるし……

「わぁったわぁった、ワリャのツラ見りゃ大体言いたいことは分かるわ」

「え、何も言ってないんだけど」

「「うだうだ言うな、使いこなせるけぇ早う作ってくれ」と顔が言うちょるわ」

いや、ね。NPC武器屋がぐちぐち言うなよとはちょっと思いました、はい。

「ん、兜に腰帯……拳帯、片手剣、盾か。じゃったらこれと、これ、これ……あとこれじゃな」

ひょいひょいと山盛りの素材の中からいくつかを持ち出していくビィラックであったが、ふととあるアイテムを見て動きを止める。

「……はは ぁ、「盾が欲しい」たぁこがいなことか」

「……バレたか」

「ここまで見事な素材を見りゃあ、わちだって盾を作りとうなるわ」

冥王鯱の照鏡骨……アトランティクス・レプノルカがビームを撃つ際にレンズとして用いる透明な円盤型をした頭蓋の一部、この素材を武器防具にするならば盾以外に選択肢はないだろう。

「金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）と同等の強い力を感じるけぇ……」

「だろうな、友達が助けてくれなきゃ俺も食われてた」

「あの魚臭い人ですわ？」

「アラバな」

ルルイアスにおいて空中を泳げるアタッカーという時点でクソ強かった……生息圏が噛み合わないがいつかこのゲームを引退する前にもう一度会っておきたいもんだ。だがどうにも「改宗（コンバージョン）」というシステムがそこらへんに絡んできそうなんだが、そうだった場合問題があるんだよなぁ。

「やはりリュカオーンを倒さずして俺は前へ進めないのか……」

やつに刻まれた「刻傷」、それまでの「呪い（マーキング）」の発展系とも言える厄介さを持つがここにきて最初確認した時に後回しにしていた制限が効いてきた。

――「改宗（コンバージョン）」の封印。京ティメットを見る限り、改宗とは後天的なキャラメイクだ。

恐らく「人族」とつく種族にアバターを変更することができる。京ティメットの言い方だと獣系だと単純な筋力増強が見込めるんだろう。だが刻傷はそれを封じやがった。

つまり俺はリュカオーンを張っ倒して呪いを解かなければ種族変更することができない。上等じゃねえかあの犬畜生、必要性がなくても制限されると無性に気になる性質（タチ）なんだよ俺は。

「どれくらいで完成しそうだ？」

「明日ん夜来や、そん頃には完成させとくけぇの」

「そうか」

「じゃが」

ん？

ビィラックはポンポンとそれを……ひび割れ、本来の力を失った籠手を叩く。

「こいつの修理は骨が折れる、向こう一週間は無理じゃ」

「んー、まぁしゃーない。直るってだけでも朗報だ」

さて、さっそく暇になってしまったが何をしようか。

放置した傷は膿み、呪う（後書き）

ジョブ「鍛冶師」は武器を強化することは当然として、無論武器を制作することも可能である。
だが武器作成においては二種類存在し、システムが登録した武器を作成する場合と完全なオリジナル……すなわちユニークウェポンを作成する場合がある。
前者の場合は突出した能力を持つ武器防具こそ作れないものの、百回繰り返して百本同じ剣を作ることができる。
後者の場合はステータスやレベルに応じてユニーク性能の武器が作成できるものの、百回繰り返して二本同じ性能の剣を作ることすら稀。

六級より初段へと七立てに疾る（前書き）

実質一話分ですがどうしてもタイトルで分けたかったので二話更新です

六級より初段へと七立てに疾る

俺の前にマネキンがいる。

「…………」

最低限のAIだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、正眼の構えで竹刀を構えている。

「……よっと」

突っ込んできたそれを軽く回避し、すれ違い際に足をかけて転倒させる。そしてべしりと頭を一発。

「……まぁ、ルール的にはD評価だよな……」

俺の前にマネキンがいる。

「…………」

最低限のＡＩだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、上段の構えで竹刀を構えている。

「……よっと」

突っ込んできたそれを軽く回避し、すれ違い際に足をかけて転倒させる。転ばなかったので回し蹴りをたたき込み、そしてべしりと頭を一発。

「……まぁ、ルール的にはＥ評価だよな……」

俺の前にマネキンがいる。

「…………」

最低限のＡＩだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、下段の構えで竹刀を構えている。

「……ふっ！」

突っ込んできたそれよりも早くこちらが突きを放つ、どうやら判定

的には続行のようなので怯んだところを足掛け転倒、そしてべしりと頭を一発。

「……F評価あるんか……」

俺の前にマネキンがいる。

「…………」

最低限のＡＩだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、正眼の構えで竹刀を構えている。

「……よっと」

突っ込んできたそれを軽く回避し、すれ違い際に足をかけて転倒させる。マネキンが転ぶよりも早く振り上げた竹刀をマネキンの後頭部に、判定的にダメらしかったのでべしりと頭を一発。

「わぁーったよ足掛けやめるよ！　なんだよG評価って……」

俺の前に強いマネキンがいる。

「…………」

最低限よりかはましなＡＩが搭載された、だがシャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、上段の構えで竹刀を構えている。

「……おっ」

突っ込んできたそれと鍔迫り合い、マネキンの腹を蹴り飛ばして怯んだところを胴体一閃。

「足技がダメなのか……とはいえＥ評価だ」

俺の前に強いマネキンがいる。

「…………」

最低限よりかはましなＡＩが搭載された、だがシャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、上段の構えで竹刀を構えている。

「……おっ」

突っ込んできたそれと鍔迫り合い、マネキンの腹を蹴り飛ばして怯んだところを胴体一閃。

「足技がダメなのか……とはいえＥ評価だ」

俺の前に強い剣士がいる。

「やっぱり、ここが境界線か……だが！」

俺が狙うは裏ボスの首ただ一つ、であればここですら通過点だ。

E評価だった。

六級より初段へと七立てに疾る（後書き）

未知を登ることの、なんと楽しいことか

銃落とせ銃

六級より初段へと七立てに燻る（前書き）

実質一話分ですがどうしてもタイトルで分けたかったので二話更新です

六級より初段へと七立てに燻る

私の前にマネキンがいる。

「…………」

最低限のＡＩだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、正眼の構えで竹刀を構えている。

「……ふっ」

突っ込んできたそれを軽く回避し、すれ違い際にその手へ竹刀を打ち据える。

「……Ｓ評価」

私の前にマネキンがいる。

「…………」

最低限のＡＩだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、上段の構えで竹刀を構えている。

「……………ふっ」

突っ込んできたそれを軽く回避し、すれ違い際に胴体一閃。

「……Ｓ評価」

私の前にマネキンがいる。

「…………………」

最低限のＡＩだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、下段の構えで竹刀を構えている。

「……ふっ！」

突っ込んできたそれよりも早くこちらが突きを放つ、胴を切り裂くように一閃。

「…………S評価」

私の前にマネキンがいる。

「…………」

最低限のＡＩだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、正眼の構えで竹刀を構えている。

「…………」

突っ込んできたそれよりも速く、振り上げられたそれよりも疾く、全てにおいて上回った一撃を。

「…………」

私の前にマネキンがいる。

「…………」

最低限のＡＩだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、上段の構えで竹刀を構えている。

「…………」

突っ込んできたそれと鍔迫り合う。否、それは一瞬であり行動の成立としてはあまりに短く、次の瞬間には額を叩き据えられたマネキンが床に沈んだ。

「…………」

私の前にマネキンがいる。

「…………」

最低限のＡＩだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、上段の構えで竹刀を構えている。

「…………」

胴を薙ぐ、判定は下らない。どうやら気の焦りが剣先を鈍らせたようだ。二の太刀にわずかばかりの無念を感じつつ、三度目の正直は無し。

「Ａ、評価………」

私の前にマネキンがいる。

「…………」

最低限のＡＩだけが搭載された、シャンフロのそれと比べればあまりにチンケなマネキンだ。電脳の世界でのみ動き戦うことを許されたそれは、やはり私の敵ではなかった。

B評価だった。

六級より初段へと七立てに燻る（後書き）

既知を登り直すことの、なんと退屈なことか

弓落とせ弓

わるいおおかみ、きれるうさぎ、へんたいねこ（前書き）

若干修正、素で主人公がエンチャント弾くことを失念していたので

エンチャント：古雷・災から特殊状態：古雷・災に変更

具体的に何が違うかというとエンチャントはステータスの改変で特殊状態は肉体の状態です

わるいおおかみ、きれるうさぎ、へんたいねこ

「くぁぁ……ふぅ」

欠伸交じりの通学路、夏休みは終わったが、まだ夏は終わってねぇと言わんばかりの入道雲が青空にでん、と鎮座している。

結局、なんだかんだで夜更かししてしまった。まさか早朝から「最近ネフホロにログインしていないのでは？（要約）」とルストからチャットが飛んでくるとは思わなかった。

ガチ廃人クランのノルマか何かかよ、と思いもしたが結局三戦二勝一敗で勝ち越して来た。

「今日なんだっけ……国語？　寝ないよう気をつけないと……」

世界史なら何とかなるが国語はまずい、国語教師の堀川は授業中にポロっと呟いた言葉をそのまんまテストに出すことがあるから油断してはいけないのだ。古文のテストで世界史の問題を出すのは奴くらいのものだ。

「お、おひゃようございますっ！」

「うぉお！？」

なんだなんだ！？

「き、奇遇です、ね？」

「ああ斎賀さん、おはよう」

ビビった……いきなり後ろから声をかけられたものだから思いっきり肩がびくりと震えてしまった。
振り返れば斎賀さんが若干顔を赤くして立っており、どうやら律儀なことにちらと見かけた俺へ声をかけたようだ。

「よ、よければ、その……学校まで、お話ししません、か！？」

「え？　いいけど……」

何故だろう、切り出された内容自体は普通なのに、何故か手袋か果たし状を叩きつけられた気分だ。
とは言え何を話すべきか……流石に何度も何度もシャンフロの話をするってのもアレだしなぁ。よし、ここは学生らしく学業的な話題で尺を稼ぐとするか。

「そう言えば斎賀さんって文系？　理系？」

「ええと、一応文系を選んで……ます」

「俺もだ、どうも数学が苦手でさ」

出来ないわけじゃないが、飛び抜けて出来るわけでもなく、いい点取って高評価を得るなら文系科目の方が気持ちやりやすい。

「そ、そうですね！　私も、その……出来なくはないのですが、得意科目的に文系というか……」

おお、今俺すごく高校生っぽくないか？　勉学について語り合って

る、すごく学生っぽいぞ！

「なぁ陽務」

「んぁ？」

極めて学生的なトークで場を繋いで斎賀さんと登校した俺はであったが、やはりというか斎賀さんという高嶺の花（自衛機能有り）と一緒に学校に来ていたという光景は一般的に話題たりうるものであったようだ。

「お前斎賀さんと一緒に登校してたってマジか？」

「ん？　一緒にって言うほど上等なもんでもねーよ、偶然通学路で遭遇して雑談したくらいだ」

陽キャと陰キャの中間、ちょっと陽キャ寄りな友人がゴシップ誌を購読する主婦のような眼光で俺へと詰め寄ってくる。
そいつの言い放った言葉に、クラスの何割かの意識がこちらに向いた気がするが……気のせいかな、リアルで気配読むスキルとか持ってないし。

「お前それ、テストで１００点取るより難しいことだって分かってんのか……？　てかいっつも外車で送り迎えされてる斎賀さんとどうしてお前が歩いて登校してんだよ」

「俺が知るわけねーだろ、女心を理解するよりアイテムテーブルの乱数要素を読み切る方がまだ分かりやすいっての」

「……お前それ女の子の前で絶対言うなよ？」

恐らく俺の顔には心の底から「俺がそんなこと知るわけないだろうが」という表情が浮かび上がっているのだろう。

その後もやれ電話番号は交換したのかただの夏休みに何かあったかだの根掘り葉掘り聞かれたが、強いて言うならコンビニでエンカウントしたくらいしか心当たりがないのだから痛む腹もない。

そんなに気になるのなら俺じゃなくて斎賀さんの方に聞きに行けと言ってやったのだが、去年こっそり空けたピアス穴に雑菌が入って愉快な福耳になった友人殿曰く「高嶺の花とそこらへんに生えてる毒持ちの雑草じゃ話しかける難易度が違いすぎる」とのことだ。

「誰が有毒の雑草だ雑菌福耳マンめ」

「あーっ、やめろっ！　ピアス穴を引っ張るのはやめろっ！」

雑草なのは認めるが、せめてタンポポのように意地でも抜かれぬと言わんばかりのガッツを持つ男になりたいと思う今日この頃。

【裏旅狼の溜まり場】

鉛筆騎士王：オッス旅狼の構成員諸君！　みんなのゴッドマーザーペンシルゴン様のありがたいお話だよ！

サンラク：なお明らかに闇討ち前提なメンバーのみの秘密チャットの模様

京極：で、いつ襲撃するの？

オイカッツォ：知らないうちに追加されてた知らない人がクッソ武闘派な件について

サンラク：この中に一人未だにフィフティシアに到達できてない奴がいるってマジ？

オイカッツォ：うっせ、ジョブとかの兼ね合いもあって別ルート選んだだけだし。あとリアルが死ぬほどゴタついてる

鉛筆騎士王：ルストちゃん達はそもそもシャンフロにそこまで興味なさそうだし秋ちゃんは色々光明面（ライトサイド）だからねぇ……

鉛筆騎士王：とりあえずそこの京極ちゃんは阿修羅会時代の知り合いでね、刀一本でなんとかなると信じてる時代錯誤の剣客だよ

京極：ひどいなぁ、否定はしないけど

サンラク：滲み出る外道臭

鉛筆騎士王：まぁ、とりあえず情報屋使って「黒狼」の内情を探らせたんだけどさ、大荒れも大荒れらしくてねぇ

鉛筆騎士王：渦中の人物であるサイガー０がログインしないから矛先がこっちに向いてるんだよね

京極：ゾクゾクするね

鉛筆騎士王：そんなわけで光明面組にも事態改善まで一先ず潜伏するよう言ってあるんだけど、具体的にどうしましょってワケでして

オイカッツォ：実際黒狼側はこっちに何を要求するつもりなのさ？

鉛筆騎士王：サイガー０が現れない以上は最低でもリュカオーンとクターニッドの情報は要求してくるだろうし、下手すればウェザエモン関連も難癖付けてきそうだねぇ

サンラク：別に赤の他人の文句に付き合う義理はねーだろ

鉛筆騎士王：あそこも大概末期状態だからねぇ、普通にいい奴もいるけどそれと同じくらい選民的なプレイヤーもいるし

鉛筆騎士王：普段はモ……クランリーダーがそこらへんを纏めてたけど、今回はそのクランリーダーが頭に血が上ってるのがマズイね

鉛筆騎士王：とりあえずライブラリあたりを巻き込んで落とし所を探るつもりではあるけど、場合により実力行使もやむなし、が私の見立て

京極：イイね、刃傷沙汰になったら任せてよ

鉛筆騎士王：ただ、ここで私の素晴らしい計略に待ったをかけた奴がいるんですよ

サンラク：まぁ俺だね

サンラク：ぶっちゃけると、クターニッドの真理書を不特定多数に開示したくない

オイカッツォ：その心は

サンラク：ネタバレされたギミックボスはただの苦行

オイカッツォ：ん？　それって……

サンラク：あと単純に情報が持つパワーがやばい

サンラク：ぶっちゃけるとだな

サンラク：深淵のクターニッドは複数回挑戦できる

そう、リュカオーンを倒したことよりもクターニッドを倒したこと

よりも、何よりもこれがヤバい。

再挑戦可能なユニークモンスター、この情報は新たにユニークモンスターを倒すよりもヤバい情報だ。ＭＭＯというゲームでは平等という概念は原則的にあり得ない。
クターニッドを独占する事で得られる利益は計り知れない、下手に組織力のあるクランにこの情報が漏れれば高確率でクターニッドの独占が発生するだろう。

そして今の「黒狼」なら多分それをやる。ペンシルゴンの言うことが事実なら今の「黒狼」は暴走している、二度……いや、三度も出し抜かれた廃人共、それもイキったプレイヤーが主導権を握っているだろう廃人クランであるなら。

まぁそれを抜きにしても攻略情報を頼りに苦戦することなくクターニッドをクリアされるのがムカつく、というのが最大の理由なのだが。
そんなこんなでルスト達にも真理書は誰にも開示しないよう言ってある。

「それを踏まえてどう落とし所をつけるか……まぁ、面倒事は魔王に任せるに限る」

どうせ俺ができることなんて鉄砲玉か体のいいデコイだ。頭脳労働はそれが好きな奴にやらせればいいのさ。

「さて、俺は俺で好きにさせてもらうとしますか……！」

ユニークシナリオＥＸ、秋津茜という後続が現れたものの現状俺ただ一人が持つアドバンテージ。

いい加減お使ぃを達成しないと親分に怒られちまう。

「ビィラック、出来てるかー？」

「ふんっ！」

「ほぁぁ乙女よ！　背骨は不味ぃ背骨は不味ぃ！」

漫才コンビ、再結成。
今度は何をしたのか、うつ伏せに倒れた喧しい長靴をはいた猫ことアラミースが上からビィラックに踏まれた上で背中にハンマーを振り下ろさんとしている二秒前にバッタリ遭遇してしまった。

「おおっ！　鳥ならざれど鳥なる気配のサンラク！　このアラミースが約束の品を持ってきたのだがね！」

「約束……あぁ、アクセサリーか」

あ、そういえばアクセサリー関連でやるべき事も頭からすっぽ抜けていたな。まーたやることが増えてしまった……

「ビィラック、何されたかは知らんけど勘弁してやってくれ」

むっすー、と明らかに不機嫌そうなビィラックは渋々と言った様子でアラミースを踏んづけていた足を離す。何故か踏まれていたアラミースの方が名残惜しげな表情をしていたが、俺もエムルも色々あってスルースキルが鍛えられているので無視。

起き上がり、パシパシと身体についた煤を払ったアラミースは俺の前に美しい装飾の施された箱を置いた。

「致命兎（ヴォーパルバニー）への友誼と、リュカオーンに認められし勇気に敬意を評し、キャッツェリア最高の宝石匠（ジュエラー）ダルニャータによる「瑠璃天の星外套（ラピステラ）」、そして「封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）」をここに」

「あー、えーと……そうだな、ケット・シー達の王国……そう、キャッツェリアに感謝を。もし何か困ったことがあればヴァッシュの兄貴だけじゃなく、俺にも是非頼ってほしい」

突発的ロールプレイだったが、どうだ？　少なくともアラミースのリアクション的に及第点は確保したか。

キャッツェリアとの繋がりは持って損はないだろうし、ここはこちらからも礼を忘れぬロールプレイが最適だ。ええい、妙なところでギャルゲーなせいで下手に気を抜けないな。

遠慮なくおちょくれるエムルやアラバは貴重な要員なんだなぁ、と再確認したよ。

さて、至急ラピッツのアクセサリー屋に行く必要性が出てきたが、まずは最高クラスのアクセサリーの性能とやらを確認させてもらおうか。

・瑠璃天（ラピステラ）の星外套（せいがいとう）
「宝石織」の技術によって生み出された夜空を内包する肩甲付きの純白の外套。
純白の外側に対して夜空のごとき漆黒と星の輝きを持つ内側は魔力をストック、コンバートする機能を持っている。
あらかじめこのアクセサリーを対象に「魔法」を使用することで一つまで魔法を設定（セット）することが可能であり、使用者の任意で発動可能。
その際外套にチャージされた魔力を使用することで使用者のＭＰを消費しなくてもよい。
星外套がチャージ可能な魔力量は素材として使用した「ラピステリア星晶体」の等級で決定され、一等級の場合は３００までチャージ可能。
空の輝きは誰にも縛られず、しかしてそれを眺める権利は万象に等しく与えられる。

・封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）
右手を覆う琥珀の装飾を持つ手袋。右親指の琥珀部分を自身の左胸にぶつけることで琥珀に封じられた効果が発動する。さらに装備者に一定時間「特殊状態：古雷（レビン）・災（ハザード）」を付与する。

「密封の琥珀」シリーズは琥珀の中に封じ込められた属性の他に封じ込められた物の危険度でクラス分けがされる。クラスは「雑（クルード）」「密（デンシティ）」「純（ピュア）」「災（ハザード）」「極（スペリオル）」の五つに分けられ、その中でも「災（ハザード）」級は最上級である「極（スペリオル）」をも上回る力を発揮する代わりに使用者にもその牙を剥く。
琥珀の撃鉄（ハンマー）、引き金（トリガー）は使い手の意思。

※特殊状態「古雷」……対象は漆黒の雷を纏う。追加効果として「追加ダメージ」「攻撃対象の状態異常抵抗の低下」「蝕電効果」を付与する。
※追加効果「災（ハザード）」……効果発動中、自身に「過剰伝達（オーバーフロー）」効果を付与する。「過剰伝達」状態時はプレイヤーのモーション感度が数倍に引き上げられ、全モーションに補正が入る。さらに十秒ごとに判定時の体力総量の５０％のダメージを受ける。

あっこれヤバい奴だ。

別に封雷の撃鉄‥災を使い続けることで自我が消失し目に映るものすべてを破壊したりはしないです。
毎日「ハザードオン！」を目覚ましにするくらいドツボにハマってますが別に関係はないです……ホントダヨ。
ちなみに星外套も撃鉄もユニークアクセサリーではありません、素材と「宝石匠」が揃っていれば量産可能です。

・宝石匠（ジュエラー）
そもアクセサリーとは力を持つマジックアイテムと同義であり、すなわちアクセサリーを作成可能な者とは鍛冶師であり魔術師でもあるということである。そして宝石匠とはその中でも宝石の加工に特に秀でた者のみが名乗ることを許された「匠」の名を持つ職業である。
「宝石織」とは宝石匠の極致とも言える技術であり、宝石の持つ力をそのままに鉱石としての性質を糸へ、布へ、衣へと変じて織ることができる。

「宝石匠」ジョブのプレイヤーもしくはNPCへの師事、一定数値以上のDEX、魔術師関連の職業、アクセサリー作成数、その他もろもろの条件を満たすことで「宝石匠」ジョブを獲得することができるが現状プレイヤーに「宝石匠」を獲得した者はいない。
何故かって？　宝石匠になるための最後の関門「一定以上のレアリティを持つ宝石を用いてアクセサリーを作成する」ために必要な宝石の産地にクソ強袋叩き蠍軍団がいるからさ！！　なので安全な採掘エリアの発見が新大陸に期待されていたりいなかったり

歴史的正当性を行使した合法半裸及び職人的見地から語る変態の異常性（前書き）

矛盾修正のため、昨日更新した最新話の「前」に新しく一話ぶっ込みます

歴史的正当性を行使した合法半裸及び職人的見地から語る変態の異常性

チクチクチクチク、ヌイヌイヌイヌイ

茶色い毛並みの兎が、耳をピンと伸ばしてロッキングチェアに揺られながらただひたすらに小さな人形を作っている。それは兎の形をしたものであったり、ゴブリンであったりと様々だ。ロッキングチェアの隣に置かれたテーブルには革製のキーチェーンがあり、どうやらこの兎……アクセサリー屋に相当するエムルの何匹いるかは知らないが姉である茶色兎はキーホルダーを作っているようだ。

「………？　あらぁ、おいでやす。エムルに……あぁ、あんさんが噂の鳥の人な」

「京言葉か……」

「サンラクサン！　エフュールおねーちゃんですわ！」

「お噂はかねがね聞いとります、あてはここでしがないアクセサリー職人をしとりますわぁ」

ふにゃりと笑う姿は同じエムルの姉であるビィラックとは随分とタイプの違う性格をしているようだが……

「風の噂でキャッツェリアからアクセサリーを贈られた、と聞いとるがそないなあんさんがあてみたいな木っ端に何の用どすか？　宝石に関してはあてはそこまで得手ではおまへんが……？」

うん、ビィラックと血縁あるな。しれっと言葉で刺してくるあたりがすごい血のつながりを感じる。
要するに「私ではない一流の職人の世話になってる奴が何の用だ、お？　冷やかしか？　冷やかしなのか？」と笑顔で先制パンチを食らったわけではあるが、クソゲーハンターはへこたれない。こちとらワゴンの海から不発弾を発掘する作業がライフワークなんだよ！
一流三流は関係ない、クソゲーは等しく予想外な場所から生まれ、ワゴンカートの中から出土する。
「実はな、恥ずかしい話今の今まで明確にアクセサリーの世話になったことが殆どなくてな」
「はぁ。」
「アクセサリーのスロットも開いていないんだ、だから今回はスロットを開けて欲しくてここを訪れたって寸法さ」
「サンラクサンは基本的に生態がモンスターなんですわ、社会復帰の第一歩だからエフュールおねーちゃんには手伝ってほしへゃほぁふょふぃ」
「誰が蛮族だコラ」
グニグニとエムルの頬を引っ張り、物理的に黙らせる。なんか最近エムルを頭に乗せすぎて大体どこに頬があるか勘で当てられるようになってきたな……
「うふふふふ、ビィ姉が気に入るだけはあるなぁ。分かりんした、スロット拡張なら任せてくださいなぁ……あ、よければあてが作ったアクセサリーも買うて行ってくださいな」

「一番いいのを頼むよ」

それはさておき。
プレイヤーは現状六つまでスロットを開くことが可能であるらしい。と、いうのもレベル１時点でアクセサリースロットは一つ、そこから２０レベル刻みで新たにアクセサリースロットを開くことができる。
つまり現状では京ティメットのようにレベルキャップを解放したことで、レベル１００に到達したプレイヤーは六つ目のアクセサリースロットを開くことができる。とはいえレベルキャップを取り払っていない俺は五つが限界なのだが。

「なるほどなぁ……このブレスレットがサンラクはんの霊穴を一つ食いつぶしとるんどすなぁ」

新単語はやめろ、割とこんがらがるから。とはいえスロットのことだとは思うが……エフュールはエプロンドレスっぽい衣装のポケットから眼鏡を取り出すと、ちょこんと鼻の上に載せた……こいつ、眼鏡属性まで……！

「こんな状態でよくもまぁリュカオーンやクターニッドと渡りあえましたなぁ……」

「思い通りに身体が動けば大抵何とかなるからな」

「あてらアクセサリー屋が店じまいしてしまうさかい、その結論は堪忍して欲しいどすなぁ……ほい、ここと、ここ……ここやな」

ぽふぽふと俺の手を軽く叩いていたエフュールであったが、大きく

振りかぶったその手にエフェクトが宿る。

「スロットロック・オープン！」

べしぃ！

「あいたっ」

べしぃ！

「ちょっ」

べしぃーん！！

最後だけ威力高くないか！？

「はいおしまい、これであんさんの霊穴は開きましたさかいアクセサリーも装備できますえ」

「不意打ちでやる予防注射かよ……」

三秒後に刺しますよーとか言うくせに二秒くらいで不意打ちで刺すやつな、昔はもっと痛かったらしいけど。
とりあえずこれでアクセサリーのスロットが解放されたわけだし、早速装備してみるか。

「…………」

「…………」

「…………なんか言いたいことあるなら言えよ」

「半裸にマントで余計に不審者ですわ」

「はっきり言って変態どすなぁ」

「いやお前らこれあれだから古き良き格闘家的な格好だから、空中殺法とかやっちゃうから」

半裸に鳥頭でマントとかプロレスリング以外の場所で遭遇したら迷うことなく110番に連絡するレベルだが大丈夫、このゲームはファンタジーだから……全裸どころか皮膚と肉すら脱ぎ捨てたスケルトンに比べれば奥ゆかしい厚着だから……！

「とはいえ、あんまり無茶な動きはできなさそうだな……」

「なんでですわ？」

「マントが絡まる」

これが腰くらいまでの長さのマントであったらただの飾りとして無視できたが、瑠璃天の星外套は脛のあたりまであるし、それに結構重い。
なにより肩と首を被せるような形で覆っているアーマー部分が自由な動きを結構阻害している、下手な鎧だと露骨に動きが縛られるしやっぱ半裸の方が…………いやいや待て待て、心まで半裸に屈したらただの変態じゃないか。

「封雷の撃鉄・災の方はまぁ、普通に革手袋って感じか……」

若干プラスチック繊維的な硬さを感じるが、普通の手袋として使える許容範囲だ。発動のためのアクションは親指部分にある琥珀を左胸に叩きつけるだったか、少なくとも不用意な誤爆はなさそうだな。

「ほな、あての自信作たちも買っておくれやす」

「へいへい……ちなみにこの人形共はどんな効果があるんだ？」

「んー……この子らは基本的に持っとる人の厄を受け持ったり、益を招き寄せてくれるさかいなぁ。例えばこの小鬼(ゴブリン)人形(ドール)なんかはほんのちょっぴりやけど、体力を常に回復してくれたりするなぁ」

「おいくら？」

使うかどうかはべつとして再生(リジェネ)効果付与のアクセサリーとか最高かよ。

「うふふ、お金遣いの荒い人あては嫌いやないわぁ……」

「金なら質量兵器にできるくらいありあまってるし、懐は海より広いんでな。端から端まで全部買おう」

「ぶ、ぶるじょわじぃーですわ！！」

リアルじゃ一握りの勝ち組しかできないが、ゲームじゃ作業すれば金が貯まるからな。ＮＰＣの雑貨を枯渇させるときの快感はハクスラなら馴染みの感覚だ。

ゴブリンやらスケルトンやらマンドラゴラやら……デフォルメされてはいるが気持ち悪さは据え置きの人形を全て購入し、ニッコニコ笑顔のエフュールにマーニを渡す。

「そろそろ換金した分が枯渇しそうだな……とりあえず武器防具分は先払いしたからいいけど」

「手持ちのマーニ全部持ってかれて代わりに宝石を受け取ったときのピーツの顔、正直ちょっと面白かったですわ」

知ってるかエムル、あれを「生活費全部使って何か無駄なものを買ったときの人の顔」って言うんだぜ。厳密には違うけど何かを受け取るために手持ちの金が全部消えたときの顔ってのは人も兎も大差ないらしい。

「さて、とりあえず……」

「おねーちゃんのところ行くですわ？」

「あてもお姉ちゃんやで？」

「むぅ！　エフュールおねーちゃんじゃなくてビィラックおねーちゃんですわ！」

また来てなぁ、と人形作りに戻ったエフュールを背に、俺が向かうのは……コロシアム。

武器防具の受け取りは一旦後回しだ、まずはアクセサリーの性能が知りたい。

この明らかにやべー気配漂う撃鉄の、な。

歴史的正当性を行使した合法半裸及び職人的見地から語る変態の異常性（後書き）

アクセサリーは「細工師」「宝石匠」などの手によってある程度の加工を経て初めてアクセサリーアイテムとして完成しますが、逆に言えば加工を経た素材であれば宝石だろうが木の根っこだろうがアクセサリーたり得ます。
リジェネ効果を持つアクセサリーも当然存在しますしヒロインちゃんも装備しています。というかタンクはカスダメに構ってられないので短期決戦、もしくは安定してヒーラーの援護を受けられる状況でもなければ基本的にリジェネアクセサリーは必須です。

そしてアクセサリーには「重複」というシステムがあり、同じ「宝石」カテゴリのアクセサリーの同一効果は重複してしまいます。であるため、回復量自体は控えめでも「人形」カテゴリである小鬼人形は結構レアなアクセサリーです
アイテムそのものがレア、というよりも「人形」カテゴリのアクセサリーがレア、という感じですね

アンコントロール・モーション（前書き）

んあああああああああああ、んおっ、おあああああああああああああああ！！！？！？

→

最高にアホな矛盾点を見つけてのたうちまわる音

インベントリアで第一スロット潰れてて、アクセサリー屋に行ってないのに別アクセサリー装備できるわけないやん！

というわけで修正します、さらに言えばこの話の前に一話差し込みます。とりあえず

・アクセサリー屋に行ってスロットを開いた
・コロシアムでトリガーの検証した
・ビィラックの武器屋に行くことを思い出した

の順番でお願いします……おおおおお………

アンコントロール・モーション

瑠璃天の星外套の性能についてはいろいろ言いたいことはあるがまず何がヤバいって３００て、ＭＰ３００て。猿でもウィザードになれるぜ。
多分バケツと同じで枯渇したらプレイヤーのＭＰ使って補充するんだろうけど、瞬間的に３００＋プレイヤーのＭＰ分だけ魔法を連射できるのはヤバい。魔法の火力はＭＰの最大値に依存する、って話だが何も連射が効果的な魔法は攻撃魔法ばかりではない。
さらにいえば魔法のストック、詳しくは使ってみなけりゃ分からないが……ものすごく悪巧みできそうな気配がプンプンする。

そもそも短期決戦ならリキャストタイムという制限を持たない魔法は非常に優れた性能をしている。
ＭＰという別の制限こそあるが、大火力をぶっ放せるという点では一発の火力は魔法職の方が上だ。まぁ武器による通常攻撃の兼ね合いもあって最終的なＤＰＳは物理職の方が上かもしれないが。

「要検証だけど、魔法のＤＰＳがイカれたことになるんじゃねーかこれ……」

もしも設定する魔法が詠唱無詠唱の威力減衰が関係なければ……いやそもそも、このアクセサリー最大のメリットは一度の魔法行使で魔法を記録できるということだ。
例えばクターニッドとの決戦でレイ氏が使いまくった使い捨て魔術媒体(マジックスクロール)、それに記録された魔法……高価ということはそれだけ希少ということ。

馬鹿みたいに高価な魔法をいちいち購入せずとも瑠璃天の星外套に記録させれば使い放題になる。うん、控えめに言って頭がおかしいよ……考えつくだけで四つは悪用方法を思いつく。

問題はこっちだ。

「サ、サンラクサン……それ、使って大丈夫なんですわ……？」

「それを確かめるための検証だろー？　一応危ないかもしれないから離れておけエムル」

「は、はいなっ」

かつてはここで猟犬の群れやらミイラ椰子やらを倒したラビッツ・コロシアム。そのうち秋津茜もここで戦うことになるだろうが、今はもう一つのアクセサリー「封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）」の検証のために俺が使う。

アクセサリーの説明文を読む限り、デメリット付きの強化アイテムってところか。気になるのは「過剰伝達（オーバーフロー）」状態、密封の琥珀は五つのクラスがありその中でも「災（ハザード）」がデメリット付きの効果だとすればモーション感度の上昇、全モーションへの補正、スリップダメージの三つ全てがデメリットということはないだろう。

「とりあえず使ってみなきゃ分かるものも分からないってな……っ」

念のため封雷の撃鉄・災以外の装備品を全て外し、意を決して手袋の親指部分に嵌め込まれた琥珀をちょうど拳を胸に叩きつけるようにぶつけて発動条件を満たす。

チリッ、と静電気のような痺れが叩きつけた琥珀を中心に全身へと迸る。次の瞬間、全身に走った痺れが漆黒の雷へと転じた。バチバチと全身を覆う……いいや違う、これは俺の表面を覆っているのではなく、俺というアバターの内側から溢れ出しているような。琥珀の中に封じ込められていた太古の雷、その発生源に俺自身がなってしまったかのような。

「これは……！！」

全身に力が漲る。思わず大声をあげながら全力で走りたくなるような力強いエネルギーが俺の中で暴れ狂っている。

俺は我慢できずに全力で駆け出し――――壁。

「へぶぉ！！？」

「サ、サンラクサァァァァアアアアア！！？」

俺は死んだ。

「……はっ！？」

コロシアムの控え室、兎御殿の俺に与えられた部屋にあるベッドと比べると質素なベッドの上でリスポーンした俺が目を覚ます。

え、いったい何が起きた？　なぜ俺は死んでいるんだ！？

「サンラクサン、大丈夫ですわ！？」

「すまんエムル、死因の説明を頼む」

「サンラクサン、いきなりものっそい速度で壁に激突したんですわ！」

壁に……激突？　バカ言え、俺が立っていた場所から壁まで２０メートルはあったんだぞ？　それも壁にぶつかっただけで死ぬわけ……いや待て。

「まさか、そういうことなのか……？」

「サンラクサン……？」

「よしエムル、ちょっと今から死にまくってくる」

「ふぁああ！？」

デスペナも抜けきっていないが、それ以前に確かめたいことが一気に増えてしまった。駆け足でコロシアムに戻った俺は再び撃鉄を胸に叩きつける。

「モーション補正、感度の上昇……」

例えば「腕を持ち上げ顎に手で触れる」という動作をするとする。その時に腕を持ち上げる動作を極限までスピードアップし、顎に手で触れる動作にパンチするくらいのエネルギーを込めたらどうなる？

人は、生き物は常に１００％の力を発揮しながら生活することはできない。肉体の限界とかそういう理由もあるが、常にリンゴを握りつぶすような握力と瓦を叩き割るような腕力で生活できるわけがないのだ。

つまりはだ。

「ぶげっ」

バク転を試みた俺は、過剰なまでのエネルギーと加減のきかない動きでバック宙返り二回転を行い、顔面から地面に落ちて死んだ。ちょっと首がヤバい方向に曲がってたぞ今。

「これはなんというか、ヤバいな」

「物理的に首がへし折れてたのに平気な顔して起き上がるサンラクサンも大概ヤバいですわ……」

「巨大な鉤爪に掴まれてぐしゃっとされる死に方よりはよっぽどマシだからな」

握りつぶされた折り紙みたいな死に方ってすごいぞ、痛みがなくてもショッキングだし痛みがあるともっとショッキングだ。尤も、痛いとかそういうのを知覚する前に頭が真っ白になるんだけどな。
とはいえ今の過剰な運動エネルギーで大体分かったぞ、「過剰伝達」状態時は全モーションが非常に大雑把かつ全力になるんだ。しかも遮那王付きのようにモーションそのものに補正が入るからさっきのようにバク転しようとしたら勢いが強すぎて二回転するし、ちょっと走ろうとしただけで壁に激突するほどの速度が出る。
出力調整ミスったロボットみてーだな、歩くだけなのに足を限界まで振り上げて転倒するタイプの。

しかも、ある理由からこの状況下ではかすり傷でも死亡する。

「ここで響いてくるか「神秘（アルカナム）」……！」

神秘（アルカナム）「愚者（フール）」の効果はスキルを再使用できるまでにかかるリキャストタイムの半減、そしてその代償として回復行為が乱数となりスリップダメージが倍増する。
そして封雷の撃鉄・災に含まれる効果として「十秒ごとにその時点の体力の５０％のスリップダメージ」が発生する。それが二倍になるということは即ち十秒経過する度に俺は体力の１００％分のダメージを受ける。
即死しなかった、ということは恐らく毒状態とは違い体力を削りきることはないのだろう。つまり１００％ダメージではあるがＨＰ１で持ちこたえるということだ。
とはいえＨＰ１の死にかけ状態、刻傷のせいで半裸、行動の制御が

困難になる……これらが絡み合うことで壁にぶつかれば死ぬ、足を挫けば死ぬ、着地に失敗すれば死ぬ、当然攻撃が掠れば死ぬ。
というかこれ下手に格闘戦とかやったら殴った衝撃で死ぬんじゃ……いや、そこらへんは幸運による食いしばりでなんとかなるのか？
確か自傷、反動は幸運５０以上で耐えるって話だし、いやでもあれって連続発動するのか？　うーむ……

「レトロゲーの一撃死キャラかよ……」

しかもゲーム内速度が三倍くらいになっている、ゲームそのものの質ではなく周辺環境で殺しにかかるのやめーや。
フルダイブ以前のゲームだと本体側をいじって倍速プレイとかもできたらしいが、フルダイブでそれをやると仮想現実と現実の間で意識にラグが生まれるので今じゃあ法で制限されている。とはいえ最近じゃ「意識ごと」加速する技術やらも研究されているらしいし、封雷の撃鉄・災の場合はあくまでもボディのみの加速だからドラッグカーで曲芸を要求されているだけだ。ドラッグカーって曲がれないんですけどどうすればいいんですかね？

「要するに１が１０になる、サイズを大きくした定規の最小単位が１ミリから１センチになる、想定を割って、いやむしろ結果を掛ける……？」

「まーた始まったですわ……」

悪いなエムル、システム的な理不尽に遭遇するとむしろ燃えるタイプなんだ俺。理不尽って大抵制作側も制御できてないからバグとか未調整のメリットが確保できたりする。乱数で割引１００円で買えるアイテムが１５０円で売却できる、とかな。適当に割引値を設定するとこうなるパターンは多い。

「よーし、今日……いや、なんとなく外道(バカ)がなんかやらかしそうだし明日までに基礎的な動きを練習だ！」

「その前に！」

むっ

「サンラクサン忘れてることがあるですわ！」

「忘れてること？」

「ビィラックおねーちゃんのとこに行くって自分で言ってたの忘れてるですわ！？」

「あっ」

ガチで忘れてたわ、とりあえず色々雑務を済ませないとな。

アンコントロール・モーション（後書き）

コンジャクション

有名税は意図せずして

ガンガンガンガン、キンキンキンキン

エフュールと比べると随分と金属質な音が響く工房の中に、真っ黒な兎はいた。

「おう、来たけぇ」

「来たぜー、仕上がりはどんなもんだ？」

「全身一式で作れなかったことが口惜しいくらいの出来栄えじゃけぇ。ほれ、まずは盾……わち謹製の　甦機装（リ・レガシーウェポン）……その名も「冥王の鏡盾（ディス・パテル）」じゃ！」

「お、おぉお……！」

ビィラックが俺に差し出したそれは、明らかにファンタジーとはかけ離れた見た目の、鋼鉄の円盤の如き青みを帯びた黒い小盾（バックラー）……むっ？　カテゴリ上は大盾？

「死してなお、骨の一欠片にまで込められた生命力……ワリャが持ってきたアレは間違いなく極上の逸品じゃけぇ、無断で悪いが甦機装に仕立て上げといたわ」

うぉーすげぇ！　持ち手の部分に力を込めると外縁部が外に展開して更にでかいシールドになるのか！

あ、これ楽しい。ガシャコガシャコとギミックをオンオフして遊ん

でいるとビィラックに脛をハンマーで殴られた。おいやめろ装甲無いから致命傷になり得るんだぞ！

「ヨッ、さすがは名工！」

「ふふん、わちを崇めるにはまだ早い！　次はこれじゃ！」

「うぇーい！」

ごとり、と片手で扱える剣であるが確かな重量を感じさせる一振りが金床の上に置かれる。

それは傑剣（デュクスラム）への憧刃のような金属としての纏まりを感じる剣とは少々趣の異なる、剣そのものが肉食モンスターの牙を彷彿とさせる骨を鋼で補強した海色の片刃を持つ剣。

「海喰の剣（ブループレデター）、なにぶんわちも海ん獣の素材は慣れとらんでな。別な剣の作り方を参考にしたけぇ」

「いい感じの重さだ、盾のお供で運用するなら文句はないかな」

「さらにぃ！」

「うぇーいっ！」

「サンラクサンもビィラックおねーちゃんも、それ疲れないですわ？」

ウェーイ系ってだいたいこんな感じじゃね？　疲れを見せたものから脱落し、最後まで立っていた者が真のウェーイ系の称号を……！

トロコン要素ならやるけどそうじゃないなら別にいらんか。

「……なぁビィラック」

「なんじゃ」

「もしかしなくてもこの格好……狙ってたか？」

ビィラックが完成品披露の締めとして見せたものは、ギガリュウグウノツカイことアルクトゥス・レガレクスの素材をふんだんに用いた兜と腰甲だった。

「ラケダイモン一式」なるそれは、当然素材元であるアルクトゥス・レガレクスをある程度模している。

現実の歴史を参照するなら、特定地域の特定年代の方式の兜に酷似した形状をしているラケダイモン・ヘルムを被る。鎧の一部、というよりは衣服に鎧が若干くっついているという感じのするラケダイモン・ガードルを装備して……ふと自分を顧みた時。

半裸に兜、マントに丸い大盾……どう見てもスパルタ的なあれですね、はい。

「なぁエムル、半裸のレスラーと半裸のスパルタ兵どっちがマシかな」

「すぱるた？が何かはわかんないけど大前提が半裸の時点で既に変

態だと思うですわ？」
「だよなぁ……ま、いっか」
実際性能は良いんだ性能は。一式装備でカスダメに対してスーパーアーマー付く、と知って唇を噛んだりもしたけど悔しくなんてない。どうせこちとらギリギリを攻める背水の陣だ、カスダメだって致命傷になるんだから食らう前提はできないんだよ！
「エムルァ！　狩りに行くぞ！」
「はいなっ！　どこにですわ？」
「いい加減待たせっぱなしじゃ怒られそうだからな、お使いを終わらせに行くんだよ」
ユニークシナリオＥＸ「致命兎叙事詩（エピック・オヴォーパルバニー）」の次の段階として課されたお使いクエスト。
受信、座標、送信……三つのΔ（デルタ）装置、ヴァッシュ曰くこれらのキーアイテムがある場所こそが無果落耀（むからくよう）の古城骸（こじょうがい）。
クソ狼に呪いを更新されたり、クソドラゴンに手間取ったりとあまり良い思い出のない場所ではあるが、あの時俺とレイ氏が攻略したのはあくまでも平原領域のみ。
「古城骸（こじょうがい）」である以上、当然このエリアには城が存在する。レイ氏曰く「線画の騎士」なる謎のモンスターが出現するらしい神代の時代に作られた要塞……そここそが俺が目指すべき場所。
「っつーわけで早速こいつらを活用させてもらうぜビィラック、あとで感想付きで修理を頼むかもな」

「ん、くれぐれも初陣でぶっ壊す、なんてたわけな真似はせんようにな。そん時は……」
お前をぶっ壊す、と無言で示すかのようにハンマーを握るビィラックに、俺とエムルはそそくさと工房から退散する。
「あれは、マジだった」
「サンラクサン、武器は大事に扱うですわ」
「せやな……」

「さて、ここからどうしようか」
現在俺とエムルは、裏通りで息を潜めて奴らが通り過ぎるのを待っていた。
「どこに行った!?」

「あー見失ったぁー！」

「兎いたね！　服着て可愛かった！」

「やっぱフィフティシアにいたか……！」

俺は忘れていた、サンラクという名前が非常に悪目立ちしていたことを。さらに言えばフィフティシアとは即ちこのゲームをある程度やり込んだプレイヤー達がひしめいているという事を。

深夜帯だしそこまで人はいねーだろはははは、とか楽観視してた俺が馬鹿だった！　めっちゃ追いかけられたわ！

「さぁどうしたもんか……」

「あわわわ……」

別に話しかけられることが嫌って訳じゃない、適当に流してはぐらかせばいいだけだ。

問題は下手に見つかると絶対に無果落耀（むからくよう）の古城骸（こじょうがい）まで付いてくるやつがいる。

「こいつについていけば自分もユニークに与れるんじゃね？」とハイエナのようにストーキングされる可能性は決してありえない話ではない。

別にパーティプレイが嫌いってわけじゃないが今の気分はソロプレイなのだ。ＮＰＣ（エムル）がいるから厳密にはソロではないが、この世界の住民（ＮＰＣ）に接するのと、これがゲームと知っている開拓者（プレイヤー）に接するのでは気苦労の度合いが変わってくる。

「……使うか？　いや、しかしなぁ」

こういう時も想定して性別反転聖杯を選んだという理由もあるが、あれはデメリットが地味に面倒くさいのだ。

青色の聖杯の効果は性別反転、デメリットとしては特定条件を満たさない限り反転した性別が元に戻らないことであり、その条件とは「死亡し、リスポーンする」ことだ。

一見そこまでキツくないデメリットにも思えるが一度性別を切り替えたら一度死なないと元に戻せないということは、この状況でこれを使った場合俺はリスポーンするまで女キャラのまま戦わなければならないということだ。

そしてリスポーンする場所がラビッツである以上、また同じ手間をかけなければ古城骸に行くことができない。男ボディと女ボディならやっぱり長く使っている男ボディの方が戦いやすい、ユニークシナリオ関係である以上特殊なモンスターと戦う可能性もあるし変なところで冒険心は出したくない。

いや待て状況整理だ、現状俺が取れる手段は三つ。

一つ目は強行突破、何人かプレイヤーが付いてくる可能性があるからあまり選びたくはないが、別に悪いことをしたわけではないのだからそもそも逃げ隠れする必要はないはずだ。

二つ目はメジェド・ダッシュ、かつてサードレマでやったアレをもう一度行う。だがあの時は撹乱が目的だったのでなるべく波風立てたくない現状とは微妙に食い違っているのがネックだ。

三つ目は隠密を貫き通して脱出を試みる、何もログインしているプレイヤー全員が徹夜でゲームをプレイするわけではない。必ずログイン数が少なくなる時間帯があるしそれに加えて隠れながら街を出れば快適なソロ（ＮＰＣ除く）プレイは可能……だが、否が応でも時間を消費してしまう。

「と、いうわけで第四の選択肢を選ぼうと思う」

あまり考えたくはないが、他のエリアにいるプレイヤーにも「サンラクはフィフティシアにいる」という情報が伝わっているとすれば、フィフティシアから抜け出す難易度はどんどん上がっていくだろう。

だったら前提から変えてしまえばいい。

「エムル、イレベンタルにゲートを開いてくれ」

「はいなっ、サンラクサン冴えてるですわっ！」

「知将と呼んでくれてもいいぜ」

格好的には恥将ってか？　ははは、リュカオーンはいつか〆(シメ)る。

有名税は意図せずして（後書き）

フィンブル……フィンブル……（鳴き声）

Q、主人公武器持ちすぎてこんがらがってきたんだけど
A．書いてる本人が一番こんがらがってます、「あぁこんな武器作ってたなこいつ」くらいの気持ちで読んでいただければ幸いです。

実際ユニークモンスターを二体倒した話題のプレイヤー「サンラク」とつながりを持ちたいプレイヤー、及びクランは結構な数います。
特にサンラク属する「旅狼」と同盟を組んだ「黒狼」「ＳＦ－Ｚｏｏ」「ライブラリ」や、在籍プレイヤーの活動時間的に遭遇が不安定なユニークではなく攻略の最前線に重きを置く「午後十時軍」以外……完全に出遅れた「天ぷら騎士団」や御神体が興味を持ったことで動き始めた「聖盾輝士団」などは割と血眼でサンラクとコンタクトを取らんと試みていたりします。
ただ件の半裸はラビッツに亡命している上にクラン「旅狼」は拠点を持たないファミレス集合系クランであるためコンタクトが取れないのですが。

というか
サンラク：ラビッツにいるので遭遇が稀
秋津茜：同上
ルスト：メインはネフホロなのであまりシャンフロにログインしていない
モルド：同上
ペンシルゴン：話しかけても言いくるめられる

カッツォ：最近自宅マンションの隣部屋に引っ越してきたやつのせいでプライベートなゲーム時間が削られている

遭遇難易度が初代サファリパークのミニリュウ並のクランっていう。

つわものどものゆめのあと

イレベンタルに着いたら着いたで、あの地獄めいた水晶平原(地雷原)に行きたい衝動がむくむくと湧いてきたものの、流石に瞬間火力がルルイアス以上の危険地帯にエムルを連れて行ったら今度こそ詫び切腹しなければならなくなる。

「やってる最中は地獄でもいざ終わってみるとまたやってみたくなるんだよなぁ」

また今度カチコミをかけるとして、今回の目的地は無果落耀(むからくよう)の古城(こじょう)骸(がい)だ。

このエリアは平原と古城、二つのフィールドが組み合わさったエリアだ。主に生物的なモンスターがメインの草原とは異なり、古城内部は全く異なるカテゴリのモンスターが出現するらしい……それもクソ強いモンスターが。

何せ事前に調べた情報だけでも「レベル８０がギリギリ最低ライン」「自衛手段がなければ高確率で後衛は死ぬ」「賞金狩人よりはマシだけど大概鬼畜ＡＩ」「純魔お断り」エトセトラエトセトラ……なかなかに心が躍るような評価ばかり散見されていた。

「コントゥアル・ナイトってのがレイ氏の言ってた線画の騎士、って奴らしい」

「ほへぇー……スケルトンみたいな感じですわ？」

「どうだろうな、楽しみ潰したくないからあんまり調べてないし」

だが少なくともプレイヤーとカチ合う確率はそこまで高くないと俺は見ている。
なにせ攻略サイトの評価が「力試し以外に行くほどの価値はないハズレフィールド」なんてものなのだから。
「経験値はそこまで美味くない、アイテムをドロップしない、良いアイテムが拾えるわけでもない……」
とは言えどこになんのユニークがあるかも分からないゲームであるので、調査自体は今も進められているらしいが……それでもこれはゲームだ。
根幹となる大前提は楽しむための娯楽であって、平日の深夜にリターンの少ない場所に潜るプレイヤーは稀だろう。
「まぁ、何もないわけじゃあなかったようだがなぁ」
現に俺たちはユニークシナリオＥＸに導かれてここに来ているわけだし。
何やら破滅的なドラマを感じさせる、明らかに外部からの衝撃で破壊されたと思しきひしゃげ方をしたゲートを通過し、城内へと足を踏み入れる。
「わわ、真っ暗ですわ……ひゅえっ！？」
「よかったなエムル、ほうら明るくなったろう？」
「サンラクサンが明るくしたわけではないですわ！？」
せやな。

それがどういう仕組みで点灯したかはさておき、どうやらこの神代の技術を感じさせる施設はまだ生きているようだ。

「設定的には、神代時代の遺跡を大昔の国が城として使ったはいいがなんだかんだ滅びた……だったか」

「はいな、とうーいつせんそー？　だったかで使われてた？　って聞いたことあるですわ！」

人に歴史あり、兵共がなんとやらってな。考察クランにでも質問すれば色々聞けそうだが、正直あのエセ魔法少女からは話が長いタイプの気配がする。

しかもなんだかんだ聞いてる側も引き込まれるタイプのやつだ、聞くとしても暇があるときにしよう。

「つまり作ったやつと一番最後に使ったやつの文明レベルが違うから、こんなチグハグなんだな」

ＳＦ感漂う建物の中では浮いてるというレベルではない風化した兜を蹴飛ばしながら先へと進む俺と、その頭に乗ったエムル。

アルクトゥス・レガレクスの背鰭をモチーフとしたのだろうスパルタ的コリント式兜は乗り心地が悪いと不評であったので今は鳥頭にしている。

だってシャケ頭だと生臭いって文句言うし……文句の多いやつだ。

「……サンラクサン、なんだか気配がするですわ」

「だろうな、徘徊型じゃなくて固定エンカって話だし」

徘徊型はポップしてからエリア全体を歩き回るタイプ、固定型は特定エリアから動かないタイプだ。

前者は逃走時に追いかけてくるが、後者は一定ラインを越えれば許してくれたりする。

腐り崩れた木箱、へし折れ錆びきった剣。神代よりは新しく、今よりは古い過去を踏み進みながら俺とエムルは自動で開く機械仕掛けの扉を超える。

そして俺たちの目に飛び込むは、廊下と比べればやけに広々とした広い空間。サイバーパンクというものをカテゴリとして知っている俺からすれば「エントランス」としてかつては機能していたのだろう複数の別エリアに通じるのだろう広場だ。

そして、そんなＳＦ的廃墟のど真ん中に堂々たる姿で立つそれに俺はレイ氏の言う「線画の騎士」の意味を真に正しく理解した。

「なるほど、透過背景に線だけで書かれたから中身がない、って事か……」

「サンラクサン！　他に気配はないですわ！」

一対一（タイマン）ってか？　見た目通りの騎士道精神と言うべきか。

その騎士を形容するならレイ氏の言う通りまさしく線画だけで背景の色に染まった騎士。

中身（色）が無いままに立体化したがために、昨今はめっきり見なくなったジャングルジムのような点と線だけで騎士という形を形成したかのような不自然さを持っている。

だが、違う。それを形成するものは、叩けばへし折れるような非力な骨組みなどではない。
点と線だけで描かれた大剣が、果たして重い風切り音を立てるものか。

「エムル、向こうがタイマンを望んでるなら受けて立つ。手出しは無しだ、自衛に専念しろ」
「はいなっ！　サンラクサンならそう言うと思ってたですわ！」
これは信頼されていると喜ぶべきか？
だが、エントランスの隅で頑張れとパタパタ応援されては悪い気もしない。

「一対一の決闘だ、正々堂々ぶっ倒してやるからかかって来な」

取り出すのは双剣……ではなく、冥王の鏡盾（ディス・パテル）と海喰の剣（ブループレデター）。
片手剣と盾の基本的剣士装備を最後に使ったのはいつだったたか……
ラスボス手前まで使っていたフェアクソか？

「専用の補助（スキル）なんざ必要ねぇ、腕（テク）さえあれば戦えるって事を見せてやるよ」

対モンスターと対プレイヤーの最大の違いとはなんだろうか、俺はそれを「隙の質」と定義している。
モンスター……すなわち倒される事が前提のＭｏｂは、どれだけ苛烈な性能をしていても制作側が「ここが隙ですよ」と定めた隙が必ず設定されている。
それに対して対人戦。どんな結果でも必ず安全な結末を迎えるとしても、過程として行なっている事はどう見ても殺し合いである。
生命的にはノーリスクでコンティニューできるからこそ俺達は頭で銃弾を受け止めるし、悪魔だろうが邪神だろうが喧嘩を売る事ができる。

話が逸れたが、要するに対人の「隙」とは文字通りの隙だ。ゲームのように作曲家が音符の間に挟んだ休符じゃない、行動の間に挟まざるを得ない呼吸だ。

つまり何が言いたいか？　この輪郭の騎士（コントゥアル・ナイト）は後者であり、明確な隙がほとんど無いって事だ。
「中々に……手強い……っ！」

瞬刻視界起動（モーメントサイト）、一瞬世界が止まってしまったかのような違和感が俺の認識を包み込む。
あんまりどういうシステムの原理でこれを実行しているのかは考えたくはないが、難なく掴めてしまえそうなスローモーションで突き出される大剣を真横から盾で叩き据える。
あくまでも加速しているのは俺の思考だけ、身体の動きはコントゥアル・ナイトと同じくスローではあるがそれでも大剣が俺にぶっ刺さるよりも早くシールドを用いたパリィが成功する。

「っ！」

任意で解除できるのはとてもいいと思うぞこのスキル。
スローモーションが本来の速度を取り戻し、回避不可能なタイミングで突き出された大剣が弾かれ俺のすぐ横を通過する。
対人戦の隙は作るものだ、その点ほぼ対人と同じ感覚を持ち込めるこのモンスターは対人慣れしているプレイヤーほど戦い易いと言える。

「これ本当に効いてるのかなぁ！？」

奴を構成する線への攻撃は無駄だ。武器の消耗こそしないが、線一本ですら全力の振り下ろしを弾きやがる。
だが有効打は存在する。奴を構成する線と線の間から奴の内側へと攻撃を与えればダメージとして成立するようだ。
なんと言えばいいのか、奴らコントゥアル・ナイトには「中身」がある。それは物質的な肉とかではなく、例えるなら騎士の形をした風船に詰まった空気のようなものだ。

つついたら爆ぜるわけではないが、無色透明のそれに剣を深く突き刺せばこいつは怯む。

理論はこの際どうでもいい、輪郭だけの騎士を騎士たらしめるエネルギーなり魔力なりを枯渇させればこいつは倒れる！　多分！

「物理有効な時点で負ける気がしねぇんだよ！」

海喰（ブループレデター）の剣の効果は「水中モンスターに対してダメージ補正」というルルイアス以外じゃ使い所に困る性能だが、それを差し引いても基礎スペックだけで戦える有能武器だ。

剣としての鋭さは傑剣（デュクスラム）への憧刃に劣る、だが獣の爪牙を素材とするこの剣はより荒々しくコントゥアル・ナイトの中へと突き立てられる。

「ふぅ……今度はちゃんと攻撃を止める鎧を着て出直すんだな」

明確に輪郭の騎士が持つ体力の底を突いた感覚。海喰（ブループレデター）の剣を引き抜けば騎士は怯んだモーションのまま硬直し、まるでトランプタワーが崩れるようなあっけなさで崩壊し、消えた。

ドロップアイテムは無し、レベルがＥｘｔｅｎｄしているので数値として確認はできないが経験値も旨味無し。

そのくせこのＡＩと厄介さ……成る程、ユニーク絡みじゃなきゃ俺だって二度と来ないな。

「さぁエムル、前進だ」

つわものどものゆめのあと（後書き）

この世界の王国史、下手な日本史と同じくらい充実しているので考察クランはとてもいい顔で歴史書を作成した模様

目的地到達ＲＴＡ、多分世界記録（前書き）

グラビティゼロ、なのかゼログラビティ、なのか書いてる本人が一番混同してるってアホすぎるのでは……？
グラビティゼロ、です。デュエマの能力名の方、で覚えましょう（自己確認）

目的地到達RTA、多分世界記録

ヴォーパルバニーもそうだが、このゲーム同一の名前を持つモンスターでも普通にバリエーション豊かなんだよなぁ。
真横から俺の頭を吹っ飛ばしに来た巨大モーニングスターの鉄球を盾の表面を転がすようにしてパリィ、見てください奥さん棘だらけの鉄球を転がしても傷一つついてませんよ！　と見せつけるように肉薄し、モーニングスター持ちの騎士の喉元へと海喰（ブループレデター）の剣を突き刺す。

グシャリとその身を支えた力を失ったかのように潰れたコントゥアル・ナイトを一瞥し、モーニングスター持ちと槍持ち二体同時襲撃で立派に囮の役割を果たしたエムルと合流する。

「魔法……ダメみたいっすね」

「魔法を受けたら強くなるとか聞いてないですわぁーっ！」

純魔お断り、の理由が分かった気がする。幽霊タイプのモンスターが物理無効のようにこいつらは魔法を吸収するんだ。
多分魔法を帯びた物理攻撃だったりは効くんだろうが、魔法火力一本で成立する純魔は相手側を回復させる裏切りヒーラーになりかねない。

「さてエムル、上と下……どっちが怪しいと思う？」

「下ですわっ！」

「同意見だ」

ファンタジーなら城の一番上がボスエリア、というのは割と定石ではあるがこの古城は設定が二つ重なっている。
つまりここを一番最後に使ったファンタジー設定ではなくここを作ったＳＦ設定に基づいた考察が要求される。

神代の人間は例のΩを始めとする巨大生物と戦っていた、それはこの城に突き刺さった巨大腕が示している。
であれば中枢を上に置くことはあるまい、恐らく俺たちが探し求めているものも同様に。

「と、な、れ、ば、どこかに下に降りる道があるはずだが……」

これ見よがしに上へと続く階段はあるが、下に向かう階段は無いな……いや、思いっきりＳＦしてるんならワープシステムという可能性もあるのか？

「うーん……神代がどこまでＳＦしてるのか、って話なんだが……」

俺が知る限りの神代人たる「遠き日のセツナ」や「墓守のウェザエモン」が魔法っぽいものを使っていた事実、遺機装及び甦機装がメカニカルとはいえモンスターの素材を用いてモンスターの特性を増幅させたようなアクションを可能としている事実、そしてこれらを組み合わせると見えてくる事実。

「神代文明は科学一辺倒じゃなくて、普通に魔法も使ってた臭いんだよなぁ」

だとすれば文明レベル中世の現ＮＰＣが使える転移魔法を神代文明

が使えない、とは考えにくい……曖昧に「ほのおをだすまほう！」とかじゃなくてもっと画一的な歯車の一つレベルにまで制御していた、とも予想できる。

「じゃあやっぱり転送装置の類か？　いや、中枢に直通で行けるわけねぇしここがある種のダンジョンならルルイアスみたいにギミックか……」

「むむむ……下に続く道は見つからないですわ！」

ひょこひょことコントゥアル・ナイトが消えたことで安全が確保されたエントランス内を走り回っていたエムルが戻ってきた。
どうやら下に続く道を探していたようだが、やはり見つからなかったようだ。

「だよなぁ……これは一回上にいくのは確定か……」

「あっ、あとサンラクサンそっちは気をつけるですわ！壁の向こうに穴が空いてて、もしかしたら落ちちゃうかもですわ！」

「でかしたエムル！」

「ふぇ？」

道あるじゃーん！　道、あるっじゃーん！
成る程、普通にエレベーターか。壁と一体化してて分かりづらい上に破損していて初見じゃ気づけねーわ。
かろうじてエムルなら通れそうなくらいの小さな穴が扉に穿たれているが、どう考えても人は通れそうにない。

「これ多分、帰り道専用とかそういうパターンだな」

「どういうことですわ？」

「恐らくこの城の一番最下層にエレベーター……あーなんだ、人を上へと運んでくれる乗り物がある、と思う」

普通に照明が点灯する状況だけエレベーターだけ死んでいる、とは考えづらい。

帰り道専用か、それともギミックで再稼働させて下に降りるのか……どちらにせよこれを使用できるのは上でギミックを解放してからか、全てが終わってから………

とでも、言うと思ったか？

馬鹿め、デバッガーの目は節穴だったようだなぁ！！

そこらに落ちていた剣を適当に穴の中へと落とす。結構な時間差を経てかろうじて聞こえるような小さな音ではあるが、底に金属が叩きつけられた快音が響いて来た。

成る程、確かに深い。普通に降りればミンチは確定だ……普通に落ちたなら、な。

「ようしエムル！　降りるぞ！」

「へ？　どうやってですわ？」

「ここから下に直通で降りる」

「……サンラクサン？　これは道じゃなくて、穴ですわ？」

まるで幼子の間違いを正すように俺にそう告げるエムルであったが、
その笑みは段々と引きつっているぞ。
お前だってわかってるんだろう？今の俺（サンラク）は空をも駆ける男、道が縦
向きな程度じゃ問題たり得ない……ってさ。

「で、でも！　流石のサンラクサンもこーんな小さい穴を潜ること
はできないですわ！？」

「そうだな、潜り抜けるのは無理だろうな」

どうせ扉も破壊不可オブジェクトとかそんな感じなのだろう。民家
の扉ならワンチャン破壊できたかもしれないが、ＳＦ施設だし破壊
できない可能性の方が高い。

「だがなエムル、お前忘れてないか？　俺は今、魔法使いなんだぜ
？」

「………？　………！　………！？！？」

こいつは何を言っているんだ、いや待てまさか！！いやいやいや無
理無理無理！？！？
大体こんな感じの顔芸を披露するエムルを頭の上……いや、一応首

後ろにしがみつかせて俺は瑠璃天(ラピステラ)の星外套をはためかせる。

「いいかエムル覚えておけ」

「な、なにを……ですわ？」

「仕様は悪用できる」

「ちょ、待っ……ぴぃっ！」

星外套に設定(セット)した魔法を発動する。さぁ、鯉が滝を登るなら俺は縦に駆け下りる！！

この魔法はエムル行きつけの使い捨て魔術媒体(マジックスクロール)を取り扱う店で購入した、ある意味因縁深い魔法だ。

なにせこれはかつての俺の未熟を救った魔法、発動した瞬間に発動者から半径5メートル以内の座標を指定し、発動地点から指定座標へ瞬間移動する転移魔法の一つ。

泥掘り(マッドディグ)に撥ね上げられた時、エムルが俺を助けるために使った短距離転移魔法。その名は……

「瞬間転移(アポート)！」

転移先の座標は視覚に依存している、隙間サイズでも穴が空いてる時点で、扉で隔たれたその先に視線が通るんだよ！！

あの時はエムルが俺を抱えて発動した、今は俺がエムルを抱えて発動する。

一瞬の空転、データ上におけるプレイヤーとNPCの座標が過程を略して移動する。暗闇は深く、少なくともそのまま落ちれば俺もエ

ムルもミンチエンドは免れない。

「落ち……ひぃ……っ！？」

「大丈夫だエムル！　合言葉はトラストミー（信じて）ー！！」

「と、とらすとみー！！」

物理演算が俺とエムルに絡みつく。下へ下へ、距離に比例した加速が死に際の衝撃を高めんと俺たちを力強く引っ張る。

「はっはははは！　スキル万歳！！」

フリットフロートで体勢を立て直し、トライアルトラバース！　遮那王憑き！　メロスティックフット！　そしてぇ……グラビティゼロ！　起動！

空中ジャンプでエレベーターが通る縦の通路の壁を足で踏みしめる。登攀補正、アクション補正、継続走行補正、重力干渉……天井だって走れるのならば、上から下へ駆け落ちる事など容易いものだ。

「こちとらレーザーとデブリが高速で飛翔する無重力宇宙の中でデリバリーやってたんだよオラァ！」

「死ぬ死ぬ死ぬぅぅぅぅぁぁぁうぢゅうってなんでずわぁぁぁ！？」

グラビティゼロ発動中は足の裏が触れている場所が地面となる。言い換えれば足が離れた時点で重力の方向が元に戻るわけで、俺とエムルは駆け足で走る足が壁から離れる度にガクンガクンと下に引っ張られる感覚に耐えながら全速力の近道（ショートカット）を敢行している。

「宇宙、それはかつての輝きを映すあの空の果てだぁ！！」

「ぽぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

クソ、そろそろグラビティゼロの効果が切れるか……全ステータスを底上げしまくってなお最下層は遠い。

このままでは……いいや、出来る！

「エムル、ちょっとくすぐったいぞ」

「ひぃぃいぃぃ！？」

ぶっつけ本番、失敗確率の方が高いが……やるしかない、やれる、出来る。

いつだってそうだった、具体的なイメージさえ固まれば俺は大抵のことは思い浮かべた通りに実行できる。

右拳を固く握り締め、親指部分の琥珀を……太古の樹液に封ぜられた雷(いかづち)を俺自身へと叩きつける。

「びゃあっ！？」

「ちょっとだけ我慢してくれよな……！」

認識を行動が上回る。最初に試した時は駄目だった、予想外の加速であったことは事実だがそれを差し引いても対応が遅すぎた。

だが如何に俺でも自転車にジェットエンジンをくっつけた状態でトリックを決めることは出来ない……まぁウィリーして大ジャンプくらいなら出来る。

だから。

「俺がもっと速くなる……！！」

意識が加速する、

この城の底まであと１００メートル、

グラビティゼロの効果時間は残り六秒、

暗闇の中で黒い雷が光る、

五秒フラットあれば十分だ。

一瞬を刻む、俺は俺の身体を捉えた。

目的地到達ＲＴＡ、多分世界記録（後書き）

地上から地下３００メートル急転直下爆走ＲＴＡ、はいよーいスタート

タイマーストップは最下層で着地した時点、アポートでエレベーターの通路に侵入してスキル発動、あとはひたすら下まで走ります。ここでオリチャー発動！　封雷の撃鉄・災を使用してグラビティゼロが切れる前に１００ｍを５秒フラットで走タイマーストップ、記録は００：２４：２１……普通だな！

ちなみに着地はフォーミュラ・ドリフトで強引に加速しながら減速してます（矛盾）
具体的には壁に「し」の字を描くように最下層直前で逆に登ることで落下エネルギーを無理矢理に相殺してます。
どれくらい強引かというと反動で体力１まで削れてる上にエムルも若干ダメージを受けています。
こいつっいっつも死にかけてんな

見苦しくも足掻いた噛ませ犬の物語（前書き）

ヘルシェイク矢野のこと考えてたら投稿遅れました（言い訳）

こう、ロボアニメ見てるとロボ物書きたくなる……ネフホロ2を外伝で書けとガイアが俺に囁いている……！

ガイアてめーこの前は「シャンフロに喋る変身ベルト入れようぜ」とか囁いてただろ！

見苦しくも足掻いた噛ませ犬の物語

「エムル、おーいエムル、生きてるかー？」

「しびれ、びびびれ、でずずばばばば……」

「いやーすまんすまん、説明文には「攻撃で相手にデバフ付与」って書いてあったから触れるだけならセーフかと……口開けろー、状態異常解除のポーション飲ませるぞー……あっ」

「あぶぶぶぶ……げほっ！　げほっごほっ！」

すまん、素で手が滑った。

「地の底で溺れるとか意味わかんないですわぁ！？」

「いやーこれは普通にすまん、予想以上にスリリングすぎてこの俺をしてもヒヤッとしたわ」

「なんかもう……もう！　もう！　もぉぉぉぉ！！」

いてて、頭を叩くな叩くな。生きてるんだからセーフセーフ、兎だろうがお前は。

「いや流石にぐふぅ、着地の時はげふぅ、俺も少し死を覚くぅぶぅ、覚悟したがががががが」

頭を振るな台詞がブレる。

エレベーターの一番下まで限界加速して辿り着いたが、身体にかかった慣性を処理するのは大変だった。
流石に壁でドリフトするなんて荒技はさしもの俺も初体験、いざという時の予防策もあったにはあったがまぁ確実に俺は死んでただろうし。

「どうだエムル、上から下へ走り抜けた気分は」
「金輪際体験したくないですわっ！！！」
ヴォーパルバニー、迫真の絶叫であった……
まぁそれはそれとして。
「エムル、最下層だ」
「ほぁあ……」
俺たちという侵入者に対して、この空間は迎撃ではなく歓迎を選んだらしい。
原理の分からない光が灯り、古城の骸……その果ての全容を照らし出す。
「なんだ、これ……」
「あ、穴ですわ！　さらに穴ですわ！　もう落ちるのは嫌ですわ！！」
「エムル、ステイ」

流石に俺もまた同じ事をするのは嫌だっての。だが、この光景はどういう事だ……？

どれだけの距離を落ちたのかは分からない、だが少なくとも１００メートルやそこらで済むような距離ではないだろう。
そんな地下深くに作られた場所、てっきり司令室的なものがあるとばかり思っていたが、そこにあったのは地下数百メートルの位置にありながらさらに下へ掘り進められた穴と、それを成すための工具や機材だ。
いや、それだけじゃないな。他にも用途がいまいち分からない機材的なものがチラホラと見受けられる。

「……なんつーか、四つくらい過程を飛び越えてしまった感が」

「サ、サンラクサン！　あれ見るですわ！！」

「ん……？」

ペシペシと俺の頭を叩くエムルが指し示した方向を見れば、そこには用途不明の機材が。
いや、なんとなくコンピュータっぽい感じがするが……

「じゃなくて！　その上に刺さってるアレですわっ！」

刺さって？　エムルあれは挿さっている、と言うんだ。
あくまでも設計上想定された別々の機材の接続であってお前の言い方だと物理的にぶっこんでる感じに……うん、三つあるな。というか合体できそうだな。

「Δ装置やんけ！」

「やったですわ！　見つけたですわぁ！」

やっぱり大事なモノは一番奥深くに隠してやがったか、絶対正規ルートじゃないけど許せ運営……デバッグが足りない方が悪い。

喜び全開で一目散に回収、してしまうのは三流のする事だ。一流はまず周囲の調査だ……不用意にアイテムに触ってトラップ起動したりボス戦突入したり……うっ、頭が。

「待て待てエムル、手を出す前に周囲を調べるぞ」

「……？　はいなっ」

まぁまずは……これだよなぁ。

間違っても落下オチなんてアホな事にならないよう気をつけながら地下深くでなお掘り進められた穴の底を覗き込む。

「……よいしょっ」

その辺に落ちていたよく分からない機材を蹴り落としてみたが、今度は何秒待っても激突音がしない……これ落下死以前に死亡エリアの可能性の方が高いな。

とりあえず穴は放置だな、ドローンでもなければ調査のしようがない。

「……ドローン、か」

SFってのはサイエンスフィクションの略だ、サイエンスファンタジーの略でもあるが……その根本は「現代よりも先の未来」がモチーフな訳だ。

つまり恒星間ワープしようが宇宙で人型決戦ロボを運用しようが、その根本は現代技術からの系譜がある。

「それにシャンフロはある種探索ゲーだし、スキル抜きでも……これか？」

シャンフロの神代文明は別に宇宙人が作ったってわけじゃない、神代製の戦術機獣が「朱雀」「青龍」「玄武」「白虎」、ついでに「麒麟」の時点で地球人類がルーツなんだろう。

つまり根本的な価値観はリアルの俺たちと似通っている、だからこれらの機材の電源もそれっぽいのを探せば……ふふふ、ビンゴ。

「電源が入ったか、ARホログラフィック……」

AR、オーギュメンテッド・リアリティ……いわゆる拡張現実。機材を使って脳に直接情報をぶち込むVRと違い、ホログラムなどを使って現実側に電脳情報を出力する技術だ。

大企業の宣伝や人気アーティストのライブとかだとチラホラ使われてるみたいだが、個人の娯楽にまでは落とし込めなかった技術、という印象だ。

VRで電脳空間に遊園地を作るのと、ARを利用した現実世界の遊園地のどちらが生き残ったのか、それが答えな気がする。

思考が余計な方向にそれてしまった。

浮かび上がったホログラムの画面、よく分からない起動プロセスを経てご丁寧にいくつかの映像ファイルが選択できるようだ。

「わわっ！　サンラクサンそれ動かせるですわ!?」

「いいかーエムル、何もしてないのに壊れたなんてことはあり得ない。逆に言えば何かしないと物事は進展しないんだぜ」
タッチパネル式キーボード、見るからに未来感溢れているが根本的なキー配置はそこまで変わっていないな。
多分これがエンターで……キーの配置的にこれで選択か？　いや、これの上で手を動かして……あれこれ三つ中二つはデータ破損してるのかよ、実質一つだけかよ。
「宇宙の果てから別次元まで、数多のＳＦを潜り抜けてきた俺にかかればこの程度ちょちょいのちょいってやつよ」
流石にＳＦ式ファイル修復のやり方とか分かるわけないし、今は残った一番最後の映像を見るとしますか。

『やった！　やったぞ！　ついに僕は根元に到達した！』

おーすげぇ。性格の悪そうな顔、物理的パワーのなさそうな貧弱な身体、ロクなことしてなさそうな喜び方。
コッテコテの「大体こいつのせい（マッドサイエンティスト）」だ。

破損した前二つの映像で何があったのかは分からないが、少なくともこの映像を記録したマッドサイエンティストとしては成功と呼べる結果が出たらしい。

『地上では今も雑兵共が消費されている頃だろうが……ふっ、くくくく……褒めてやってもいいだろうな、この僕の偉業の礎となったんだからなぁ……！』

「……サンラクサン、あたしこの人嫌いですわ」

「まぁまぁ落ち着けって」

人を見た目と言動だけで判断しちゃダメだぞ、八割印象が決まる気がするけど最終的な評価はそいつが何をやったのか、で決めるべきだ。

見た目が良くても言動と所業がゴミだとフェアカスみたいになるしな。

『何が継承だ、何が次世代だ！　天津気（アマツキ）刹那（セツナ）の理論だけは認めてやってもいいが……アイツらだけは、アイツらだけは！』

おっとこれはぁ？　もしかしなくても……いや、とりあえず続きだ。

『馬鹿馬鹿しい、今この瞬間を生きる我々が死んでは意味がない！　アリス・フロンティアも！　ジュリウス・シャングリラも！　奴

らはイカれている！』

『そうだ……そうだとも、人類の救世主はこの僕だ……』

待て待て待て待て、お前噛ませ臭さハンパないくせにガチ設定垂れ流しまくるのやめろ！

えーと待て、確か金子（きんす）に余裕があるからって買っておいたはず……いや、記録映像なんだからもう一度再生すればいいのか。

『僕らは空からやってきた、空は僕らの領域……天に神はいない、神は下にいるんだ……！』

お、今の表現結構好き。

空から来たから神が天にいないことは知っている、と。つーかお前噛ませ臭いけど結構重要人物か？

『本来ならばもっと西で実験を行いたかったが……まぁいい、接続に問題はない。僕は奴らのような悲観主義じゃあないぞ……この、災禍の根本を、僕がぁ……この手で……！』

ここでノイズ、あっ（察し）

ホログラムで立体的に映し出されていた映像が途切れる、だが音声は生きているようでなにやら悲鳴のような声と、金属が破壊される音と、明らかに人外のものであろう咆哮が……あっ（察し）

『い、嫌だ！　嫌だぁぁ！　僕はっ！　僕が……っ！　違う、僕はこんな、畜生……！！』

「な、何が！　何が起こってるですわ！？」

「なんだろうなぁ……おおよそ見当はつくけどさ」

さぁどうなる噛ませ犬、ここで断末魔か？　それとも……

『くそっ！　くそっ！　くそおおお！　ただで死んでたまるか畜生！　記録……あぁそうだ、記録だ！　よく聞け、誰だっていい！　いいか、全ては下だ！　空を見上げたって代わり映えのない宇宙があるだけだ、時間の無駄でしかない！！』

『う、腕が……！　この、化け物め……僕を、引き摺り込むつもりか……！　クソ、掘削アーム起動！　時間を稼げ！！』

『死にたくない……くそッ、うぐぅ……いいか、下なんだ！　ジズは……ダメだ、リヴァイアサンとベヒーモスなら、よし……よし……が、うがぁぁぁぁ！！？』

ガタンガタン、と肉と金属がぶつかり合う音だけが響く。少し離れた場所で何かが爆ぜたのか、爆音が響き……映像が回復する。

「ぴぃっ！？」

エムルが悲鳴をあげるのも無理はない、なにせさっきまで噛ませオーラ全開だった男が、体の半分を「何か」に進行形で喰われているのだから。

それはまるでミミズのような、触手のような、グズグズと腐敗と蠢動の中間のような動きで男の左半身を侵食している。
それが快感をもたらしていないことは、涙やら鼻水やらを流して顔を歪ませている男を見れば分かる。

だがそれでも、俺が噛ませ犬と判断した男の目は死んでいなかった。
絶望に塗り潰された瞳の最奥には、確かにまだ炎が灯っている。

『もうこの際ジュリウスでもアリスでもいい！　いいか、お前たちがやろうとしてることは糞尿に消臭剤を散布しただけに過ぎない！　根本の解決になってないんだよ！　Δに僕のプログラムを入れた、癪だがお前達に託す！』

『痛い、痛い、痛い……！　くそっ！　役立たずのポンコツが！　綱引きも満足に出来ないのか！　まだだ、まだぁ……！』
『ああ、畜生……こんなもの、外に出せるわけないだろう……！　クソ、なんでこうなるかなぁ……！　だけど、それでも僕は……！』
『起動コード「反物質の終幕（ナキマ・スクエ・スウデ）」！　限界までアレに近づかないと……ひぃっ！』
『むぐぉ！？　お、ご、ごげぎっ！　ぐ、おおおおああああああ！！』

誰得な触手プレイ（R－18G）の末に穴へと引きずりこまれていく噛ませ……いや、名も知らぬ科学者。

しばらくズリュヌリュと音が聞こえ、それが遠ざかって、光とノイズの後……映像は終わった。

「なんというか……」

総合評価としては「盛大な自滅」なんだが、それでもあの科学者は自分がしでかしたことの落とし前を自分でカタをつけた。

「これ、割とヤバいのでは？」

情報的にラスダン前とかで得る情報じゃないかこれ？

見苦しくも足掻いた噛ませ犬の物語（後書き）

・エドワード・オールドクリング
賞賛はなく、古きにしがみついたその行動は新たなる継承を進める救世主達の足を引っ張ったに過ぎない。
けれども、それでも彼は確かに「人類」の救世主であった。

噛ませ犬だけど情報の質も量もヤバすぎる人、甘いの苦手な人にわざわざ匂いを偽装したマックスコーヒーを手渡すようなみみっちい人間性。

ちなみに最後に起動したのは携行反物質爆弾、核よりクリーン！
なにせ爆発範囲の物質が丸ごと消滅するしね！
ある理由から二人の科学者と袂を分かち、盛大にやらかしたが自分で解決した。
悪い人ではない……噛ませ犬だけど。

地の底にて天啓（前書き）

此の度は目出度く単発チケットでヴァルナ引き当てたので今日から「ヴァルナ硬梨菜」と名乗ることにします。嘘です冗談です。

いや、これやばいだろ。
内容の話じゃないぞ、いや内容もやばいけどこれ今見ていいのか？
明らかにもう少し先の……具体的には深淵の警鐘がジャンジャン鳴りまくってあの動画の中で科学者をこう……表現をぼかすならシュークリームを握り潰した感じで科学者を引きずり込んだアレが明確に敵として現れた後とかに来る場所だったのでは？
い、いやいや……ヴァッシュからのクエストという形でオーダーが出ている以上なんらかの手段でエレベーターを起動することは出来る筈だ……待て、もしかして「クエストとして受注できる」というだけでフィールド開放はまだ先だったり？
「いやいやいやいや……あの時はデバッグ足りてないと言ったけど流石に完全に想定外って事はないだろう」
レベル差１００以上の相手と戦って発生するユニークすらあるんだ、少なくとも正規のスキルを連続使用した壁走り３００メートルがバグってことはあるまい。裏技の可能性は否定しきれないが……仕様！　仕様に沿ってるからセーフ！
「まぁ、なんだ……分かったろエムル、評価はそいつが何をなしたのかで決めるもんだ」
「はいな……あのいけ好かない人、最期のところはヴォーパル魂を感じたですわ……」

この手の「サブキャラのバッドエンド」なんてクソほど見てきたからそこまで何かを感じたわけではないのだが、ここで気取った態度を取っても虚しいだけだ。
それに俺がΔ装置を入手できるのもあの科学者がいたお陰でもあるしな。

「とりあえず、この場所が思ったより危険だってことが分かったしさっさと撤収するぞ」

なんとなくだが「深淵の警鐘」が警戒を促す何か……後もう一体ユニークモンスターが倒される事をトリガーに解放される、ワールドクエスト第四段階で現れるだろう「敵」はアレな気がする。
だから少なくとも今現在危険が発生する可能性は薄いと思う。だがこのゲーム初心者エリアにユニークモンスターけしかけるからな、油断は禁物だ。

「エムル、一応エレベーターに駆け込む用意だけしておけ」

「は、はいな……っ！」

自爆はやめろ……自爆はやめろ……ええい南無三！
ガチャっと装置に差し込まれたΔ装置の内の一つを抜き取る。左手に装備した冥王の鏡盾（ディス・パテル）をいつでも構えられるようにしつつ周囲を……特に穴の方面を警戒。
十秒ほど経って、特に何も起きない事を確認した事で警戒を少しだけ緩めつつ残りのΔ装置も回収する。
「冷静に考えたら、あの科学者は誰かに装置を渡そうとしてたんだから自爆装置起動したらギャグか……」

一応念のため用途不明の機材をもう一度穴の底へと叩き込む……反応なし、よし警戒解除。
とりあえずダイレクトな危険性はないと判断、ノルマであるΔ装置は確保したがそれ以外にもやるべき事はやってしまおう。

「やはりペンシルゴン、奴は稀代の策士であったか……」

要約すると「お前放っておくと重要な情報発生させまくるから録画アイテム持っておけ」と半ば無理やり購入を強制された「録映の眼珠」なるアイテム。
運命神さん涙の次は目玉をアイテム化されたんですか、大変っすね。
いやそれはともかくこれは所謂録画アイテム、サービス開始初期は消費アイテムだったらしいが流石にプレイヤー達からの抗議があったらしく、今では何度でも使えるアイテムとなっている。

もう一度先程の科学者の最期の記録を再生しつつ、録映の眼珠を使用する。場所を伏せれば映像で金を毟り、場所を教える代わりにさらに金を毟ることができる。
流石はペンシルゴン、仮にも真っ赤な国を作っただけのことはある。

「次来た時にあのゲロミミズがいないとも限らないしなぁ……エムル、ちょっと黙ってろよー」

「はいなっ！」

ちょいちょい「ぴうっ」やら「ひょえっ」やら雑音(エムル)が混じったが、まぁ記録映像としては及第点か。
しかし気になるのは破損した二つのフォルダだ、修復の手段があるのかそれとも単なるフレーバーなのか。

後者なら良いが前者であった場合、俺は二つの選択肢を探さなければならなくなる。
即ち修復する為の手段をここに持って来るのか、それとも修復する手段がある場所に破損ファイルを持って行くのか。

「……ん？」

今何か思いつきそうだったんだが……んー？
まぁいいや、データを持ち運びするならなんらかのアイテムが必要になるだろうし、修復の為のアイテムがある場所を探す必要があるかもしれない。

「……ん？」

今何か来たぞ、喉のすぐ下辺りまで上がってきたぞ。ゲロじゃない、アイデアだ。
よしよし思考を精査するぞ、直近まで俺が考えていたのはこのＳＦ的コンピュータの中に収められていた破損データについてだ。
これが単なるフレーバーであるというならそれはそれで構わない、だがもしもこれがフレーバーではなく条件達成で閲覧可能なものであった場合、このデータをどのようにして修復するかという話だ。

もしもここことは別の……例えば神代の鐵遺跡のような神代文明の施設がフィールド化した場所をもっと探せばデータ修復が可能だとすれば、その場合データを修復する手段をここに持ってくるのかそれともここにある破損データを外に持ち出し、て…………何を使って？

「データを、入れて、持ち運ぶ………………ゔぉっ」

天啓、まさしく天啓。
新しく何かを思いついたわけではない、だが忘れていたそれを思い出した。
「だぁぁぁあぁぁあぁぁあああああああ！！」
「ぴゃあああああぁぁぁぁああああぁぁぁあ！？」
待て待て待て待て！　イケるのか？　出来るのか！？
「スロット……スロットはどこだ……！？　クソ、超未来だと物理的にぶっ刺さないのか！？　いや、片割れは持ってんだ、形状から推測はできる……！」
「サ、サンラクサンどうしたですわ！？　かつてないほどにやべー顔してるですわ！」
「やべー顔にもなるわ！　あぁくそ、今の今まで完ッッッ全に忘れてた！　イベントが立て込み過ぎてたのとインベントリアのインパクトにやられたかっ！」
インベントリア……ではなく、その存在を完全に失念していたが故にインベントリの方に放り込まれたままずっとその存在を忘れていたもの……光のラインが通う半透明のキューブ。
言ってしまえば単なる記憶媒体、だがこの中に秘められた情報は……どれだけ頑張ろうが「見様見真似（なんちゃって）」でしか再現できなかった絶技の心得そのものが入っている。
晴天流奥義書……ユニークモンスター「墓守のウェザエモン」を打倒したことで俺とカッツォ、ペンシルゴンはそれぞれ別々のドロッ

プアイテムを入手し、俺の手元へと来たのがこの小さな……しかし途方もなく巨大な情報を秘めるキューブだ。

「戦術機獣じゃダメだった、あいつらは携帯端末みたいなモンで本格的な作業は出来ないんだろう。だがこれならどうだ？」

あの科学者が何をしようとしていたのかは知らないが、少なくともやつが何かをするために用意した機材だ。

読み込みと閲覧が可能なんじゃないか……？　くッ、スロットはどこなんだよこれ！　無駄にスタイリッシュなフォルムにしやがって、矢印でロケーターくらいつけてくれよ。

「これか？　ここか？　ここだぁー！！」

舐め回すように筐体を探し回っていたが、ホログラムを出力する場所にあった窪みにキューブをセットしたところ見事にビンゴ。ついに単なるお洒落サイコロ（無地）としてしか存在意義を発揮できなかったキューブが真価を発揮する。

「おぉ………！！」

光が……満ちて――――！

・スキル習得方法
基本的なスキル習得する方法は「プレイヤーのモーショントレースによる閃き式」「スキルレベルを上げることで上位スキルへ派生」「特技剪定師（スキルガーデナー）によるスキル合体」の三つ。ＮＰＣが運営する特技剪定所で販売されている「秘伝書」はモーショントレースの判定に補正を入れる効果があり、スキルを閃きやすくなる。

ただあくまでもこれらは「基本的な」習得方法であり、科学と魔法の双方を極めた神代の時代にはより手っ取り早く人類に技術を植え付ける方法があったとかなかったとか……

案山子ではなく、その一分一秒が歴史となる

三幹七枝、このような言葉は存在しない。
だがこの言葉通りの意味を持つものは存在する。

誰もが当たり前のように受け入れているからこそ気づかない。
生も死も、ただ本流に呑まれる小石のごとく流し、不可逆のベクトルに「老い」を付加する時間という絶対不変の潮流。

不特定多数が同時に遊ぶ箱庭である以上、誰か一人のために時間が止まることはない。当たり前の話だ……だがだからこそ見落とす。

この世界は確かに電脳であり、そこに存在する者たちに命は存在しない。だが、彼らの住まう三幹七枝は生命の有無を、人権の有無を考慮しない。さらに大きな流れに逆らうことなく時間は流れ、そして進む。

だから

今この世界における七つの最強種……神代に発生の根本を置く者達。
彼らに最も近い者が何をしていようが、世界は進むのだ。

気宇蒼大(きうそうだい)の天聖地(てんせいち)。
中央に位置する巨大な台地と、そこに至るまでの傾斜に多くのモンスターが存在するエリア。上に行くほど強力なモンスターが発生(スポーン)するが、その頂上にはモンスターが発生しないことが特徴でもある。
何故なのか、それはプレイヤー達の間でも知られている事実ではあるが……このエリアは、とあるモンスターの休息地であるからだ。
「ジークヴルム！　お前を倒せば、僕だって……！」
『すまんな、今は客を迎えておる故御主等程度には構って居れんのだ』
その動機はただ一人のプレイヤーが二体のユニークモンスターを撃破したが故の焦りか、それとも自己顕示の暴走か。明らかに実力の足りていない装備でジークヴルムに挑まんとしたプレイヤー達が一撃でＨＰを０まで削られる。
とある仮面の忍者が模倣したそれ……威力からして全くの別物である真なるブレスによって文字どおり一撃で消し飛ばされたプレイヤー達の残滓をわずかに申し訳なさそうに見ながらも黄金の竜王(ジークヴルム)はそれへと視線を向ける。
「相変わらず、律儀なやつだぁなぁ……」
『我が威を恐れず、武器を構える者は遍く勇者……全力で相手をすることこそが礼儀というものよ』

「そりゃあよう……お前さんの似姿たる彼奴らもかぁ？」

『うぅむ……あやつ等と我では根本からして異なるのだから、敵視は門が違うのだがなぁ』

苛烈なまでに全力、それが例えレベル差が１００以上離れた駆け出し忍者であっても敵として迎え撃つジークヴルムは、されど挑戦者とは対等ではない。

この世界における反物質、幸も不幸も全てを内包するこの世界に対する最大級のカウンターたるジークヴルムは結局のところ孤高であり、対等な存在はいない。いるとすればそれは、起源を共有する同輩だけである。

『しかし珍しいな友よ、君から我に会いに来るとは』

「ま、そうなんだがよう……おめぇさんも気づいてるんだろう？……そろそろだとな」

『……で、あろうな』

世界は進む、それが如何なる理由であれ七つの楔のうち二つが外された。そして三つ目の楔は一体誰の撃破を以って引き抜かれるのか。

「竜災……あの「菌糸類」共はおめぇを狙ってる。二号の人間達もそれに乗っかってくるだろうよう。聞くまでもねぇがそれでも答えてくれや……どうする？」

『くくく……知れたことよ』

黄金の竜王は笑う。あの日ジークヴルムとなるものが生まれたその

日から、ずっと己の存在意義を考えていた。
そして導き出した結論こそが「人の行く末に立ちふさがる試練」としての在り方。憎悪でも、尊敬でも、敬愛でもなく……期待、そして信頼を根幹とする竜王の根本原理。仮に人類が厄災の竜達と共に己へと向かってくるならば、むしろ歓迎すらしてもよい。

人よ強くあれ、人よ我を超えてみよ。

『我が意義は揺るがず、我が信念はあの日より変わらず。我は山、我は壁、我は門……人よ、我を踏み越え未来へと進め……だ』

「そうかいそうかい……だったら、ウチの食客共がおめぇさんの喉元に刃を向けるかもなぁ」

『以前言っていた墓守の御仁を屠り、深淵のタコスケを超えし人間……それと、かつて我の逆鱗を穿った人間か！　面白い、実に面白いぞ』

心の底から愉快であると言わんばかりに笑う竜王。そしてその友は……かつては灰色だった、今は白色の毛並みを持つ長い耳を風で揺らす。

『よかろう、彼奴等が我を超えんと足掻くならばそれを踏み躙り君臨するが竜の務め。竜災の地に、真なる竜とは何たるかを教示してくれよう！』

ワールドクエスト三段階目「黄金を墜とす大戦」は、この瞬間を以ってその名を変える。
今を生きる竜と、今に至るまでを生きてきた竜王による、遍く人を巻き込む大戦……「竜災大戦」と。

「学校……ダルい……いやだがこのダルさこそ学校に行くという実感をもたらしていると考えれば風情的なサムシングを感じたり……」

ダメだ、そんなマゾヒスティックなフィーリングは持ち合わせてないや。

今日も今日とて蝉がうるさい。九月にもなってまだ求愛中ってそれ割と行き遅れてないかと思わなくもないが、命が尽きるその瞬間まで敢闘するスピリッツには敬意を表するべきだろう。

「……気配っ！」

後ろを振り向くが、誰もいない。ふっ……さては俺が俺の中で飼っている厨二病(けもの)が寝返りでもし「お、おはようございます」

「っつおお！？」

前！？　数秒前まで視界に収めていた進行方向になんで斎賀さんが出現してるの！？　オブジェクトとしてマップに表示されてないだ

けで固定エンカなの！？

「お、おはよう斎賀さん……」

斎賀さん固定エンカ説、という新説が俺の中で浮上するもそれを表に出すようなことはせずに挨拶を返す。

なんか最近やけに斎賀さんとのエンカウント率高いなぁ、と考えつつも行き先が同じなのでまたしても一緒に歩くことに。

「……あの、その」

「ん？」

「そのう……陽務君に、相談が、あると言うか……」

「相談？」

何故俺に？　ＶＲシステムの調子がおかしい、とかだったら簡単な修理くらいならできるけどぶっちゃけ素人に任せるよりメーカーに問い合わせた方が確実だぞ。

いや流石にそんな事を俺に相談はしないだろう、メーカーに問い合わせた方が早い。

「その……ゲームの事、なんですけれど……」

「もしかしてシャンフロの？」

「そうでは、あるんですけど……そうではない、と言います、か」

妙に歯切れが悪いな、シャンフロの事だけどそうではない？

「実は……」

斎賀さんの話した内容を纏めるとこう言う事らしい。

今、斎賀さんはシャンフロで自身にノルマを課している。そしてその為に所謂作業を繰り返しているのだが、やはり何事もやりすぎは毒、飽きて来てしまう。

聞けば陽務氏はゲームを多くやり込んでおり、この手の作業との付き合い方も詳しいのではないか。

是非とも作業を効率よく進める為の手ほどきをお願いしたく……

と言う事だそうで。まるで台本を読み上げているような印象を抱いたが、まぁどうでもいいことだ。

「作業……作業かぁ……」

実の所、ＶＲゲーム……それもフルダイブタイプのゲームにおける作業は中々の苦行だ。

なにせ作業対策のお約束である「ながらプレイ」が出来ない。ミニゲーム集的なゲームだったりゲーム要素の薄い仮想現実メインだったりすると音楽とかムービーを外からインポート出来たりするんだが。

シャンフロをはじめとするゲームしているゲームは世界観的なあれそれでそれが出来ない……だからフルダイブゲーにおけるモチベーション維持は二パターンのうちのどちらかしかない。

即ち「むしろやる事を増やす」か「複数人でやる」か、だ。

前者の場合はたとえばタイムアタック要素を自ら課すとか、むしろ

俺こそが攻略サイトを充実させると言わんばかりに効率的作業をマニュアル化したりだとか……そういう人種はむしろモチベーションが上がる。

後者の場合は単純に負担が減る、話し相手ができる。ながらプレイを他者を経由して実現しているから気楽ではあるが、スケジュール管理は自分と他人の二人分になる。

「そうだな……ん？」

ペンシルゴンからメールだ、ＳＮＳを使わないってことはつまりそういうことか？　何々……

件名：エマージェンシー
差出人：鉛筆戦士
宛先：サンラク、モドルカッツォ
本文：ごめん、京極がやらかした
ちょっと面倒なことになりそうかも

見なかったことにできないかな、できないよなぁ……今週の土日は

面倒くさそうだ。

案山子ではなく、その一分一秒が歴史となる（後書き）

シャンフロシステムの何よりもやばいところはＮＰＣに時間概念があること、未来をＮＰＣ達自身が作ること

岩巻「いい？　どうせ陽務君は脳内領域の七割をゲームに使ってる真性のゲーマーなんだからゲームの話題を出しておけばホイホイ食いついてくるの、だから今回の貴女のノルマは話題を膨らませてシャンフロ内で「貴女と」ゲームをする、という状況に持ち込むの」

斎賀「なんて難しいミッションなんだ……」

インフォメーションパワー・アタック！！！！

アセンション・ホーンと呼ばれるモンスターがいる。
鹿とユニコーンをごちゃ混ぜにしたかのようなそのモンスターの特徴は何と言っても後頭部から二本、額から一本伸びる三本の角である。
頭を振るえば矢を弾き、全力で突進すれば下手なタンクも吹っ飛ばされる。さらには角から雷撃のような衝撃波を放つことで非常に厄介なモンスターとして知られている…………が、それ以上に「角がめっちゃ高値で売れる」という事実から資金繰りのために見つけ次第狩猟されることでも有名なモンスターである。

というのも、アセンション・ホーンの角を素材として生成される「ハイエスト・ポーション」は基本的に飽和すること自体が稀であり、さらに言えば続々とプレイヤー達が新大陸行きの準備を整えている真っ只中である現在、「アセンション・ホーンの聖角」の買取値はうなぎのぼりで高まっている。

とはいえこのモンスター、出現確率がそんなに高くない上に出現条件も明らかになっていないためあくまでも「出会いたらラッキー、絶対に逃がすな」という評価に落ち着いている

というのはあくまでも「一般プレイヤーの」認識である。
近頃はリアル事情か何かがあったのか、クランリーダーがログインしてこない動物系モンスターの生態調査においては突出した執着を持つ「ＳＦ－Ｚｏｏ」と、無差別と言ってもいいレベルで情報をかき集め、毎日拠点である大図書館の一室で熱い討論を繰り返す「ラ

イブラリ」によってアセンション・ホーンの出現条件は割り出されており、この二つのギルドのお得意様である限られたプレイヤーはアセンション・ホーン乱獲稼ぎを可能としていた……

「これで、二十本目……」

か細い断末魔を上げてどう、と倒れ伏す夜の帳を青白い光で照らす三本の角を持つ獣。その身が崩れて散り、角だけを残して消え去る。アセンション・ホーンの聖角は同じ名前を冠するが、厳密には二種類存在する。後頭部から生えた二本と額から生えた一本はどちらも「アセンション・ホーンの聖角」であるのだが名称の後に（前）（後）とくっついて別々のアイテムとしてインベントリに表記される。

というのも、後角は主に武器や防具に使用されハイエスト・ポーションの素材として高額買取されるのは前角の方なのだ。後角もそれなりの値段で売れるのだが、やはり前角の値段と比べるといくらか見劣りしてしまう。そしてこれ等の角のドロップは角に与えたダメージ関係なく完全な乱数であるため、どうしても運が絡む。

「ノルマまで……最短でも、前角のみで四百本……」

インベントリにアセンション・ホーンの聖角（前）をしまったプレイヤー……サイガー０はため息をひとつ吐き出して再びそれを待つ。二つのクランによる合同検証で明らかになったアセンション・ホーンの出現条件は「夜間にエリア「神話の大森林」内に点在する洞窟の前で十～二十分以上動かない」こと。動物の生態的な見地と、ＮＰＣからの聞き込み及び書物による検証から割り出されたこの「ア

センション・ホーン稼ぎ」は尋常ではないレベルで暇な作業として敬遠されていた。

「…………」

姉から提示された条件はサイガー０一人で達成するにはあまりにも遠いゴール。だがそれさえ突破してしまえば、自分はクラン「黒狼」から抜ける正当な理由を獲得できる。

だから、ただ一人でＢＧＭすらない薄暗闇の中じっと我慢することもできる。誰の助けを借りることもなく、大型車ほどの体躯を持つアセンション・ホーンとだって戦える。

だから…………

「パーティ組んで、作業……」

もう少しだけ、勇気が欲しい。

◆

蛇の林檎イレベンタル支部、フィフティシアではなくここを選んだ

のは主に京ティメットのやらかしが原因である。

「……つまり？」

「いやぁ、僕がクラン「旅狼」に入ったことは向こうにも伝わってたみたいでねぇ」

「まぁそれは私が意図的に流したんだけど」

「適当に狩りしてたら……あ、モンスターをだよ？　そしたらクラン「黒狼」のプレイヤーに絡まれてね、思わずＰＫしちゃったんだけど」

「まぁそこまでは割と計画内だったかな」

「なんだかテンション上がっちゃって、復讐にきたそいつをＰＫし直して、増援引き連れてきたのをもろともＰＫして………で、彼らの装備品が結構入手できちゃって」

「ハイこっから計画外」

「なんて酷い話だ……」

倫理観が、じゃないぞ。しれっとペンシルゴンがロクでもない計画を練っていた事と思った以上に京ティメットが狂犬だったという事実だ。
いや冷静に考えればＰＫのペナルティがどんどん厳しくなってるらしいこのゲームで現役ＰＫｅｒしてる時点でどこかしらぶっ飛んでるのは当たり前なのか……？

「で、約一名来てないけど？」

「なんか「撒いてから合流する」とかなんとか」

撒いてから？

「四割くらいは君らのせいだからね……」

おっと噂をすれば影、なにやら疲れた様子のカッツォが蛇の林檎の中へと入ってくる。

もともとならず者が溜まる裏社会の店、的な設定なので結構な強面NPCが多いのだが、カッツォ……もといオイカッツォは美少女キャラで愛想を振りまきながら俺たちがいるテーブル席に椅子を引っ張ってくる。

ちなみに俺は脛に傷……もとい刻傷を持っているので強面NPCに絡まれたことはない。それ以前に半裸に鳥頭の変態に積極的に関わらない時点でなかなか賢いＡＩだと言わざるをえない。

ペンシルゴンは何故かフレンドリーに話しかけられていた、京ティメットは関わり合いになりたくないと目を逸らされていた。普段のプレイスタイルが如実に表れているな……

「四割？　なにがだよ」

「シルヴィアがシャンフロデビュー」

「「…………」」

そっと目をそらす俺とペンシルゴン。一ヶ月も経過してないついつい最近、ゾンビ女騎士とカボチャ傭兵として全米一の格ゲーマーと戦っ

た俺とペンシルゴンは何を言うでもなく「関わり合いになりたくねぇ」という結論に至った。
このゲームに「顔隠し（ノーフェイス）」と「名前隠し（ノーネーム）」がいると全米一（ゼンイチ）が気付いたらどうなるか……

「今はまだJRPGに慣れてないみたいでセカンディルで足止め食らってる」

「もしかして最近ログインしても忙しそうだったのってシルヴィアちゃんとデート？」

「……分かってて言ってるでしょペンシルゴン。で？　そこのレッドネームさんがなにやらかしたの？」

「要約するとクラン「黒狼」に泥塗ったくって唾吐きかけた感じ？」

「マジかよ勇気あるねぇ！」

「へへへ……照れるなぁ」

ああクソ、こいつの大概外道なのを忘れていた。俺含めて誰も京ティメットの行動を責めてない辺りやはり暗黒面（ダークサイド）か……

「で？　わざわざ俺たちをシャンフロに呼びつけた理由を聞こうか」

「んー、京極ちゃんがやらかした訳だけど……結局のところクラン「黒狼」はほぼ完全に敵対コースに入った感じでねぇ」

敵対って……そこまで敵視される理由はないんだが。

「情報屋を使って色々調べてもらったんだけどさ、今の「黒狼」ってクラン同盟に従って旅狼から穏便にユニーク情報を得ようとしてる派閥と「プレイヤー全体への情報提供」って大義名分で結構強引にウチから情報持ってこうとしてる派閥で割れてたっぽいんだよね、んで……」

「強硬派が勝った、と」

「そだね、サイガー0ちゃんの離脱と旅狼への加入希望が割とトドメになったみたいでねぇ……「黒狼」名義で談合のお誘いが飛んできたよ」

店員に頼んだそら豆とアーモンドを合体させたような謎豆を炒ったものが来たのでそれをボリボリ齧りながら考える。まぁクラン「黒狼」が強硬な手段を選ぼうとするのはわからないでもない。

これが他のトップクラン……それこそ「ライブラリ」や「SF－Zoo」がユニークを討伐した、とかだったら彼らも悔しさに唇を噛むことはあってもそこまでで済んだだろう。

だがクラン「旅狼」はその成り立ちからして悪名高いアーサー・ペンシルゴンと阿修羅会の崩壊が絡んでくる。胡散臭さで言えば屈指のもので、そんなクランに所属する奴が連続でユニークを撃破するわリュカオーンとのフラグを建てるわ端から見れば怪しさしかないトッププレイヤーの引き抜きをするわ……おや？

「もしかしてこれ半分くらい俺のせいか？」

「びっくり！　サンラク君自力で真実に到達したね！　偉い偉い！」

「サンラクも成長したんだね……」

「おっ、喧嘩売ってんのか？　顎を粉砕してやるから横一列に並べよ」

シュッシュッとシャドーボクシングをして外道二人をけん制しつつも俺はこの先の展開を考える。
少なくとも俺たち三人が黒狼の思い通りに条件を飲むかといえば断じてノーだ。なにせこちらにうま味が一切ない、プレイヤー全体に情報を広めるなんて大義名分は俺たち「旅狼」にほぼなんのメリットもないのだから。
情報をタダでわたしてしまえば旅狼のアドバンテージはゼロになる、というかほぼ確実に俺が持ってる情報の開示を求められるだろう。
そもそも一番被害を受けるのは俺だ、我ながら色々と情報を持ちすぎてるからなぁ……地味に「神匠」や「ケット・シーの宝石匠」なんかもバレたらラビッツ関連の追求が激化するだろうし。下手すりゃ何をするにしても同盟クランに事前報告してね、とか言われかねない。最悪のパターンは……「黒狼」に「旅狼」が吸収されるパターンかな？
別にパーティプレイが嫌いってわけではないが、廃人クランの「ノルマ」やらなんやらに縛られながらプレイするのも真っ平御免だ。となれば非常に不本意だが俺と精神性に類似点が見られるペンシルゴンやオイカッツォが集まればそりゃあもう文殊(ろくでなし)の知恵ってやつだ。

「で？　俺たちは何をすればいいんだ？」

「んー、ぶっちゃけここまでするつもりはなかったけど、クラン「黒狼」相手に戦うなら頭数を揃えたいと思ってねぇ」

「今からメンバー募集でもするつもり？」

「いやいや、私たちは誇り高き民主主義国家の国民なんだから数の暴力を確保したい、ってだけだよ」

成る程、こちら側の味方になるクランと一緒に黒狼を牽制しようという腹積もりか。恐らく味方を増やすにしてもある程度の情報開示は必要になるだろうが、根掘り葉掘り聞かれるよりは手札の温存は可能だろう。

クラン「旅狼」は所詮メンバーがかろうじて五人を超える程度の弱小クランだからな、使えるものはなんでも使わないと。

「あー……申し訳ないんだけど、君ら要点だけで会話するから僕にもわかるようまとめてくれないかな？」

「クラン「黒狼」とほぼ敵対しました、責任の一端は君のせいなので責任感じて、他クラン買収して黒狼黙らせるよ」

現状「旅狼」は脛に三つの傷を抱えている。

まず第一に「ユニークモンスターの情報提供」という同盟条件を半分くらい無視していること。

そして第二に「サイガー0が移籍希望している」というクターニッド戦も含めると割とシャレにならない人間関係。

最後、第三に「京ティメットが派手にPKした」という下手すればハラキリケジメ案件。

これらの傷を上手い具合に誤魔化して吠え立てる黒狼を黙らせろ、と。さらに言えば他クランが俺たち「旅狼」に向けてる悪い意味での注目もいい感じにチョメってしまおう、と。

「……僕が言えたことじゃないけど、どうしようもないんじゃないの？」

「そこをどうにかするからＰｖＰは楽しんでしょ京極ちゃーん？」

「お前の言うＰｖＰはアクションゲーじゃなくてシミュレーションゲーの方なんだよなぁ……」

まぁ要するに俺たちが楽しくゲームをプレイするため、貯金を切り崩しつつも既得権益を守るために戦うんだよ。

と、言うわけで。

「さて、君の方からコンタクトを取ってくれるとは……用があるのは私に、かね？　それとも……「ライブラリ」に、かね？」

ペンシルゴンが厄介と認めるエセ魔法少女、恐らく俺たちの現状と黒狼の現状も全て把握した上で俺が何をしに来たのか解っているのだろう。そのくせ澄ました顔でしらばっくれるクラン「ライブラリ」のリーダー、キョージュと真っ向から対面する俺は。

「まぁ、なんと言うか……」

録画、再生っと。

『やった！　やったぞ！　ついに僕は根元に到達した！』

「考察の材料（エサ）をあげるから、是非とも協力していただきたいんですよねぇ」

初手から考察厨の顎にフルスイングの情報開示（アッパーカット）を決めた。

インフォメーションパワー・アタック！！！！！（後書き）

「ほぼタダで情報よこせ」ｖｓ「情報絞るけど貢げ」

なんだこのロクでもない対決……

「賢いキャラクターは作者の知能以上にはならない」って言いますけどほんそれ……デスノート読めばＩＮＴ上がるかな……

インフォメーション・クロスカウンター

こちらからの要望は単純明快、来たる黒狼との衝突の際にこちらに肩入れしてほしい……ただそれだけだ。
セーブポイントとしての役割もあるお高めの宿屋の二階、ライブラリの長曰く秘密の会話をするならばうってつけの場所で俺とエセ魔法少女キョージュが相対する。
『僕らは空からやってきた、空は僕らの領域……天に神はいない、神はプツンッ
ここで動画を切る。お試し版とは得てして「もっと続きがやりたい！」というところでぶつ切りにするからこそ効果を発揮する。ここから先が知りたいなら……つまりそういうことだ。
「……なるほど、どうやら君達は……いや、君は我々が想定していた以上に情報を持っているようだね」
ああ嫌だ嫌だ、どう見てもこのエセ魔法少女はペンシルゴンと同じタイプだ。
口だけで人を動かせる根っこからの策士タイプ、詐欺のように騙すんじゃなくて自身のほうが取り分多めにした上で双方ともに納得させてしまうタイプの口が回る人種だ。
「君達の要望は解っているとも。だが我々としては「黒狼」によって君達が秘める全情報が開示された方が都合がいいことは分かっているかね？　それに君が情報を得られるという事は、これから先にまだ見ぬ誰かが同じように情報を発見する可能性もある……違うか

ね？」

ここまでは俺もペンシルゴンも想定していた流れだ。ライブラリは考察クラン、情報を自ら探すこともあるがその殆どは最前線のプレイヤーから齎された情報で考察を行う……すなわち性質的に最後尾を歩く手合いだ。

であれば俺達が提示する条件よりも「黒狼」が俺達の秘する情報を全て開示した後にそれらを受け取る方がお得だ。そもそも急がば回れ精神でもっと先の未来に誰かが俺が通った道を通って同じように情報を得るかもしれない、そして無駄に要望の多い俺たちから情報を得るよりもそっちから情報を得る方が安上がりになる、かもしれない。

ペンシルゴンはこう言った。

「あの爺さまは常に情報を貰う側なんだよね、だから値切り交渉が巧い。どうせ私らの状況を把握した上でしれっとふっかけてくるだろうから逆にこっちが釣り上げてあげるのさ」

元から身銭を切る事は承知の上。だからこそ俺がただ一人でライブラリの交渉に充てられた、オークションでより資産が大きい者が有利であるように、今この瞬間「旅狼」で最も世界観的なキーワードを知っているプレイヤーは俺であるからこそ言葉に説得力が生まれる。

「一号、二号計画」

「む」

「バハムート、ベヒーモス、リヴァイアサン、ジズ」

「…………」

「Δ装置、キャッツェリア、宝石匠、神匠」

これの存在を考察ギルドに知らせるのは非常に心苦しいが……やむを得まい。

「ユニークシナリオＥＸ「致命兎叙事詩(エピック・オヴォーパルバニー)」……不義理な事はしたくはないが、最悪の場合モチベーションが下がりまくって抱え落ちする可能性は否定できない……かな」

もはや脅迫だ、これだけ考察し甲斐のありそうな単語を並べた上で「協力しないならこれらを秘密にしたままゲームを引退するかも？」とまで言ってのける。

仮にこっそりゲームを続けていたとしてもラビッツという亡命先を持つ俺が本気で世捨て人プレイに徹すればいつ得られるかもわからない次の機会を、今匂わせた単語が一体なんなのかを考えながら待ち続けなければならない。

考察クランとカッコつけていたってその本質は週刊誌の来週号を待ち望む小学生と大差はない、上質なエサには必ず食いつく。

「くくく……あのお嬢さんの入れ知恵かな？　考察を好む者を焦らす方法をよく分かっているようだ……」

「ウチの首領は最初からライブラリはこっちに協力する前提で話を進めてたよ」

重要なのはどこまで渡す情報を絞ることができるのか。これに関しては暗黒面ズのみならず光明面組＋もう一人とも相談して、ジョーカーの一枚を切ることが決定している。

「もし協力してくれるなら……とびっきりの情報を一つ「ライブラリ」にだけ明かすのもやぶさかではない、というのが「旅狼」の意向と受け取ってくれて構わない」

「ほう、我々としては是非とも深淵のクターニッドを倒した君が持っているであろう真理書を譲って欲しいのだが……」

「深淵のクターニッドは再戦可能だ」

これまでずっと余裕の表情を崩さなかったキョージュの目が驚愕に見開かれる。

机の上で論じているばかりでは結局のところそれは机上の空論でしかなく、実際に己の手で検証し己の足で探索してより多くを知ることができる。

キョージュが俺の言葉を信じるのならば、この情報は「黒狼」や「ＳＦ－Ｚｏｏ」にも渡っていない正真正銘の独占情報ということ……つまり「空き枠」が多い。

「ウチのユニーク自発できな……じゃないや、ウチから二名ほど同行希望しているが、クラン「旅狼」は「ライブラリ」と合同で深淵のクターニッドの再攻略を望んでいる……と言ったら？」

「こればっかりはさすがに私の一存では決めかねるね、一応「ライブラリ」メンバーと相談をしても？」

構わないとゼスチャーで示す俺を見つつもとはいえ、とキョージュは話を続ける。

「私としてはそもそもクラン「黒狼」にはメインストーリーの攻略以外はさほど期待していない、故にユニークモンスター関連を攻略した実績を持つ君達「旅狼」のモチベーションを維持する手伝いはすべきだと思っている」

長々と喋ってはいるが要点を抽出すれば単純明快、クラン「ライブラリ」は「旅狼」の肩を持つという実質的な宣言だ。とりあえず俺に課せられたペンシルゴンプランの役割を果たしたことで肩の荷が下りた。

「こういう時って握手とかするべきですかね？」

「ふむ……実はだね、まだ話は終わってないのだよ」

「む」

今度は俺が身構える番だ。想定ではこちらの要望に向こうが答え、それでおしまいだったはずなのだが想定外だ。

「現在プレイヤー達が新大陸に渡っているのは知っているだろうが……我々「ライブラリ」も何人かを新大陸に送って、情報収集の任に当たらせている」

「はぁ」

「そして新大陸にいるメンバーから面白い報告を受けてね、もし君が我々の考察に個人的に貢献してくれるのならば、我々ライブラリからも情報提供はやぶさかではないのだよ」

クソ、クラン「旅狼」ではなく俺を狙い撃ちしてやがるのか。

「情報の発見者が誰であっても我々は関心を持たない。そして明確な「実績」を持つ君にそれを託すことは、不自然なことではないだろう？」

この瞬間、情報の売り手と買い手が逆転した。

いや待ってくれよすごい敏腕ネゴシエーターっぽく振舞ってたけどぶっちゃけ口論でこの爺さんに勝てる気まったくしないんですけど？　それっぽいこと言っても底が浅い俺がリアルＩＮＴ高そうなインテリシルバーと舌戦なんか出来るわけないだろ。

「ず……随分と期待されてる、と言ったところ……ですかな」

やばい、化けの皮が陽焼け後みたいに剥がれ始めた。

「今さっきの君の言葉で我々は七体のユニークモンスターの情報を大まかにだが獲得したと言っても良いだろう」

ほらーしれっと俺の言葉からなんか導き出してるしぃ……やばい物凄く帰りたくなってきた。思考停止でモンスター狩る作業が今は無性にやりたい！

「君が持つ「致命兎叙事詩」の情報……我々は考察クラン、ユニークシナリオで発生する利益や栄光に興味はない。サンラク君、我々はただ情報が欲しいだけなんだよ……分かるかね？」

「なるほど……まるで、まるで……えーと、悪魔の契約のようだ。ユニークモンスターの情報をトレードしたい、ってこと……か」

まずい、脊髄反射で口が動き始めた。ここから先俺は俺の発言を制御できない……！

「まだ情報を確約できる段階ではないが、我々「ライブラリ」は君一人に対して「荒ぶる蛇神」の情報を渡す用意がある」

「荒ぶる……邪神？」

「いや、邪(よこしま)の方ではなく蛇(へび)の方だ」

蛇、か……オルケストラのことは名前しか知らないが、ライブラリが調査を進めれば七体のユニークモンスター全ての名前が判明するのだろうか。

「さて、先ほど君がそうしたようにここまでがお試し番だ……どうかね？　実際にこの目で見るに越したことはないが、君が我々の「目」になってくれれば考察者としては非常にありがたいのだが、ネ？」

これはクラン「旅狼」に対しての交渉ではない、カス情報でも限界までボッたくるペンシルゴンを介さず、直接俺から情報を得ようという腹積もりなんだろう。そして俺がそれに応えるようなメリットも奴は用意しているんだろう。

「とりあえず保留で……まぁ、俺の心のうちに留めておく」

「色好い返事を願うとも」

はっはっはと笑い合う半裸マントの鳥頭とシルバーボイスのエセ魔法少女。

無論速攻でペンシルゴンにチクった、所詮俺は鉄砲玉よ。

インフォメーション・クロスカウンター（後書き）

【速報】半裸の変態、少女と共に宿屋の個室へ【事案】

なお同性の上、年齢は少女の方が上の模様

ライブラリとしてはユニークモンスターの情報……のみならず神代についての言及も多く語られる真理書は喉から手が出るほどに欲しいものではあるが、フィールドワークできるならするに越したことはないという武闘派考察厨です。

黒狼が主導権を握った場合「クターニッド戦は当然黒狼で大多数を埋める、ライブラリは……まぁ、二人くらいなら入れてあげても良いよ？」となる。さらに攻略中の行動も黒狼が主導で決定するため団体行動に参加せざるを得なくなる。

旅狼が主導権を維持した場合「クターニッド戦は主導こそ旅狼だがパーティの大多数をライブラリで決めることができる」ということになる。旅狼の派遣二人はクリアが目的なので七日間のスケジュールはライブラリが主導で動くことができる。

手痛い停滞って一体（前書き）

声に出して読み上げたくなる激ウマギャグ（自画自賛）

手痛い停滞って一体

「んー……んふふふ、まぁあの狸爺さまなら遅かれ早かれサンラク君単品に交渉しかけるとは思ってたけど、やっぱりこの機は逃さないよねぇ……」

「どうする？」

「ぶっちゃけライブラリを味方につけられるなら多少の出費は許容範囲だよ」

とても楽しげな笑みを浮かべるペンシルゴンではあったが、俺がチクった個人交渉に対して特に何かいうわけでもなく「特にヤバそうな情報以外は流してもいいんじゃない？」とだけ返された。

何やらオイカッツォや京ティメットを使いっ走りにして悪巧みしているようだが、生き生きしてんなぁこいつ……

「足を洗ったから大人しくしようと思ってたけど、周辺状況が私に動けと囁くんだから仕方ないよねぇ……んふふふ、出来れば午後十時軍も引っ張り込みたかったけど贅沢は言えないか……」

「おーい、俺はソロプレイに戻るけどいいかー？」

「お好きにどうぞー、てか明日バックレないでねー」

流石にクラン全体でのイベントみたいなものだし、素知らぬ顔で蒸発するほど不義理な性格はしていない。

基本的に試合後は握手するタイプのルストモルドや、プレイヤーはみんな仲間！　とか思ってそうな秋津茜はこういうギスギスドロドロした対人戦は好まないだろう。
実際チラと聞いてみたが興味も無さげだったので明日の談合には三人は参加しない。
一体ペンシルゴンが何をやらかすつもりなのかは当日になれば分かるだろうが……まぁ、今は俺がしたい事をしたいように遊ぶとしようかな。
万一の時は、しばらくシャンフロから離れることもあり得るわけだし。

と、言ったものの。

「え？　ヴァッシュ……の兄貴いないの？」
「はいですわ、おとーちゃんはお友達に会いにいく、ってお出かけしたですわ！」
使い捨て魔術媒体でラビッツに帰還した俺は、ぶっちゃけユニークモンスターなのであろうヴァッシュにΔ装置を渡そうと思っていたのだが、どうやら素ですれ違ったらしい。
「そうか……」
出鼻を挫かれたな、こういう時間を任意で進めることができないゲームはこういう時不便だ。
シャンフロはリアルと時間がリンクしているからどう足掻いたとこ

ろでヴァッシュが即帰ってくるわけでもないし……よし！

「寝る！」

「おやすみなさいですわ！」

まだ日も暮れていないんですがね！

なんだかやる事なす事すべき事がこんがらがってきてシャンフロをやる気分じゃないので、最近購入したアレを再開することに。

「……「龍宮院（りゅうぐういん）　富嶽（ふがく）全面協力！　ＶＲ剣道教室・極」、ただの教材ソフトなのに単語パワーが強すぎる」

なんとなく調べてみたが、剣道の大家でクッソ強い爺さんが監修したのがこの一品だ。

そしてなんとなく察しているだろうが……岩巻さんの言っていた裏ボスとは龍宮院富嶽（名前かっこよすぎ）その人である。

今はもう亡くなられているらしいが、生前にUCEが全面協力してサイバー全盛期の現代に現れたリアル・ストロング・サムラーイの精巧なトレースAIの開発に成功したらしい。

トレースAI、という技術がある。
一時期にわか知識の現実主義者（リアリスト）がクローンがー倫理がーと頓珍漢なデモをしたこともあるが、小難しい理論を全て端折って要約すると「元となった人物の思考を限りなく忠実にトレースしたAI」だ。
特殊なVRシステムを装着して、電脳空間内でなんらかのアクションをさせる。その際の行動パターンや思考を記録して反映させることで限りなく本人に近い思考パターンを持つAIが完成する。

あくまでも「この人だったらどう動くのか」を極限まで突き詰めたものでしかないので別に自我を獲得するわけでもないし当然人権もへったくれもない。
そうして完成したのが通称「裏ボス」と呼ばれるAI範士・極だ。

「通常プレイで出てくるのが範士で、極は特殊条件達成だったか……」

普通にプレイしていれば最後に戦うことになるのはAI範士であるが、五段以降から難易度が上がっていくごとにVRの剣道場内に掛けられく掛軸に書かれた文字を全部繋げてタイトル画面で唱えれば裏ボス出現、だったか。

「全部Ｓ評価、とかじゃなくてよかった」
半分ゲームのようなものだし、そこまで厳しいノルマは課されない。惨憺たる評価ではあるが剣の道を全力で踏み外せば難易度段位でもそれなりに戦える。

難易度「ＡＩ教士」の腹に飛び蹴りを叩き込み、ぐらついたところをフルスイングでぶっ叩く。クリア、評価さんからは「Ｅ評価（ゴミが）」と厳しめのお言葉を頂いた。
というかそもそも剣道着オンオフできる時点でこれ制作側もある程度邪道を前提で作ってないか。

「やっぱ……普通に武道の達人クラスになると、普通に強いな……」

ちょこちょことプレイして進めていたが、四段あたりから普通に苦戦するようになってきた。
段を過ぎて難易度がＡＩ◯士になったらもうトライアンドエラーの繰り返しだ。
お前実はホバー移動してんじゃないかってくらい滑らかに動き回って後の先をデフォルトでかましてくるＡＩマネキン相手に既に数十は軽く超えるくらい床ペロさせられているが……というかもうなりふり構っていられないのでアメフトタックルやらプロレス技やら邪道全解禁してかろうじてＧ評価（最低）である。

「スキルでステータス盛れるアクションゲーって偉大だったんだな……」

このソフト内での俺のアバターのステータスを弄りたい、具体的にはＡＧＩを１．５倍くらいにしてくれ。

あとついでに二段ジャンプできるとなお嬉しい。

「次が通常ラスボスか……」

張り倒す！

張り倒した（一勝二分四十三敗）

決め手はジャーマンスープレックスだったが……疲れた……とても疲れた……

「シャンフロの息抜きで息も絶え絶えになってちゃ世話ないな……さて」

とりあえず裏ボスに突撃してからシャンフロに戻るか。タイトル画面に戻って、と……

「えーと……「若き芽よ　西へ東へ　研ぎ鑽りて　枯葉踏み越え咲かせ大輪」？」

短歌か、意味はちょっと分かりかねるが……いやいや現役高校生の古文力ナメんなよ？

えーと……これはつまり……うん、季語は枯葉かな？

このＶＲ剣道教室のタイトル画面は道場の扉を開くことで始まる。

そして特殊コマンドを入れたことで裏ボスが解放された道場内に入れば……

『モード選択で二刀流が解放されました！』

『オンライン対戦モード・改が解放されました！』

『隠し難易度、ＡＩ範士・極が解放されました！』

ほら来た。前二つは通常ボスを倒すことで解放されるモードだろう。それはそれとして迷うことなく難易度を選択し、虚空に出力された竹刀を持って現れたそれと対峙する。

「二刀流か……」

俺は龍宮院　富嶽なる人物を触り程度にしか調べていない。
だから現れた今は亡き剣道家のスタイルが二刀流だという事も初めて知ったし…………

「おぐぇ！？」

俺ですらたった五秒で脳天に一撃を叩き込まれるほど強いという事も今初めて知った。
ウェザエモンのような理不尽な速さではない、ただただ普通に速い。そして最短を最適な動きでこちらが対応するよりも先に一発叩き込まれた。

……これは苦戦しそうだ、壮絶に。

「起きた！」

「おはようございますですわ！」

もう日が暮れてるけどな！

「帰って来てるですわ！」

「よっしゃ行くぞエムル！」

今の俺はＶＲ龍宮院　富嶽の攻略の糸口が掴めなくてムシャクシャしている、ユニークシナリオＥＸを進展させて憂さ晴らしだ。

兎御殿の廊下を歩きつつ、俺はこれまでのユニークの状況を思い返す。

現状時点で他のユニークは参考にならない、敵を殴り倒すだけのウェザエモンや突き詰めれば単なるギミック付きのダンジョン攻略であるクターニッドと異なりこのＥＸシナリオは手順が多過ぎる。

他のユニークシナリオＥＸのクリアを条件として状況が進み、お使いクエストの他にもまだまだやることは多い気配がする。
最終的にヴァッシュと戦うことになるのか、それとも他の達成条件があるのか……そう考えるとそもそもユニークモンスターとは本当に倒せるのか？
逆の発想だ、むしろ倒せたウェザエモンが例外なのであって、本来ユニークモンスターとは撃破しても消滅しない……つまり再戦可能なモンスターなのではないか？
よくよく考えてみればユニーク「シナリオ」だ、ユニークモンスターにまつわる物語をクリアすることが目的であって、別にユニークモンスター自身が必ずしも打倒されるボスを務めるわけではない？
可能性としては低くはないな、例えばの話もしも「遠き日のセツナ」がユニークモンスターであったなら、そのシナリオ内におけるボスがウェザエモン、でもシナリオ的に破綻はしない。
クターニッドだって見方を変えれば奴が作った箱庭にピクニックに行ってデカいタコと遊んで来ただけ、とも言えるしな。
「そもそもユニークモンスターは何を以ってしてユニークとして成立しているんだ……？　ストーリー的な立ち位置、神代、世界観における引き継ぎ要素的な……」
「サンラクサン！　まーた上の空ですわっ！　もう扉の前ですわーっ！」
ぐえっ、マントを引っ張るなマントを。
「っし、じゃあお使いの達成を報告しに行くとするか」

はてさて、何が起きるやら……

まぁ結論から言うと先にログインしていた秋津茜の「兎の国からの招待」でコロシアムに行ったらしく、エムルを抱えて全力疾走でコロシアムに走った。

手痛い停滞って一体（後書き）

Q．この富嶽って爺さんどれくらい強いの？
A．カテゴリ的にVRモノ小説でありながらバガボンド世界の住人だろテメーってレベル

まぁぶっちゃけるとユニークモンスターに限っては天才さんの猛烈な抗議により「ストーリー性＞＞ゲーム性」になってます、なお天才さんの意見をもし全て通していたらストーリー性とゲーム性の間にある不等号の数が十倍位になってました。天地と木兎夜枝がめっちゃ頑張った。

強者の代償、されどその目は烈火の如く

ユニークシナリオ「兎の国からの招待」、未だ挑戦者俺一人というユニークシナリオEX「致命兎叙事詩（エピック・オヴォーパルバニー）」に直接繋がる前提ユニーク。
内容としては恐らくだが「対象プレイヤーよりもレベルが高いが機転で対応可能なモンスターとの連戦」だ。物理無効とかいう最高にクソッタレな妄執の魔樹（ルーザーズ・ウッズ）ですら杖を強奪することで物理特化でも攻略が可能であった。

で、あればだ。
例えば奇跡的な偶然が重なったことで「極めて優れたステータスポイントボーナスを持つアイテムを装備し続けた状態で」「ユニークモンスター二体を始めとする強敵と戦い続け」「結果として尋常ではないステータスを獲得した」……そんなリアルLUCカンストしてんのってプレイヤーがいたとしたら。
果たしてどうなるだろうか？　結果はご覧の有様である。

「うわぁ…………」

自慢ではないが、クソゲーハンターとして俺は数多のクソ難易度を制覇してきた。クソゲーと過疎は切っても切り離せない概念的ズッ友のようなもので、明らかに調整ミスなレイドボスをソロ討伐したこともあるし、エンドコンテンツ調整ということを差し引いても十回以上周回したら人間性が崩壊してしまうんじゃないかというクソエネミーですら百週してやったこともある。だって百週でもらえる称号があったから……ライオットブラッドを四本消費する大激闘であった。

だが、そんな俺ですら絶句し口を閉じざるを得ない惨状が眼の前で繰り広げられていた。

「え、なに今の吸い込み……バグじゃん」

「あぁっ……首を掴まれて、斬られ……ぴうっ」

十メートルは距離を離し、相手の行動を伺うという及第点は確実な行動を取った秋津茜が「死神」としか形容できない黒影の手の中へと転移させられる。

そして黒影の持つ人の首をより惨たらしく切断するという概念に血と悪意を塗りたくって固めたような大鎌が閃いて……コトリ、と狐の面をつけた少女の首が地面に落ちた。リュカオーンも真っ青なFATALITY……運営さんよ、とりあえず傷口をマイルドにすればいいってもんじゃないっすよ……

「シークルゥ、あれ……何？」

「黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）……親父殿しか捕まえることは出来ないだろう、最上位の「精霊」に御座る……」

永遠に静かにしてほしいからチート吸い込み即死投げ技ってかははは……あぁ～今から「兎の国からの招待」やりなおせねぇかなぁ！　超戦ってみたい！
いや待て落ちつけ……今の俺にはＡＩ範士・極というクソ強裏ボスがいるじゃないか……現状制限されたアバターステータスでどう倒せばいいのか全く見当がつかないけどそこがいいんだよそこが。
まぁそれはそれとして非常に興味があるのであとでヴァッシュにそれとなく聞いてみよう。

「おう、サンラクじゃあねぇかよう」

「お晩です兄貴ィ！　件の頼まれ物、見つけて来やした」

俺は基本的には素でプレイするが、ロールプレイで普段とは別の自分になりきるのもまた別の楽しみがある。
こういう「小者ロール」はネタ構築とかと案外相性が良くて結構使っているが、ヴァッシュがどう見ても極道兎なのでいい感じにマッチしている感があるな。

「おうおう……随分と早く見つけたじゃあねぇかい、俺等ぁもうちぃっとかかると思ってたんだがなぁ」

「身軽な身の上ですんで、まぁちょちょいっと壁を走ったり……」

ものすごい顔でエムルがこっちを見ていたが、嘘は言ってないぞ。
ちょちょいってレベルの高さではなかったけど結果的に一発成功したんならちょちょいっは間違いじゃない、うん。

「ふぅむ……サンラクよう、兎月と……「おめぇさんが強えと認め

たモンスターの素材」も一緒に寄越しなぁ」

おおっ、これは来たな。ビィラックに頼んでみても「わちが親父が作った武器を修理以外で弄くれるわきゃないじゃろうがおどりゃあああ！！」とぶん殴られるだけだった以上、ユニークシナリオEXの進行と同時に真化が施される「ヴォーパル」武器。
最終的に何と戦うのかは分からないが、おそらくEXシナリオの進行とリンクして強化される武器が鍵になるのだろう。

とはいえ兎月を作った頃は特に気にもとめていなかったが、素材指定が非常にアバウトなところが逆に気になってきたな。「プレイヤーが思う強敵の素材」で武器の派生先が決定するのであれば強力なモンスターの素材を出せばいいという問題でもないだろう。
ソロ討伐で大苦戦した強敵と、パーティ戦でハメ殺した超強敵、苦戦の度合いでいえば前者に軍配があがるが、パラメータ的な強さは後者が上だ。この場合どういう判定になるのか……正直俺以外のプレイヤーが「致命兎叙事詩」を発生させるのは素直に歓迎はできなかったが、こうなってくると十人くらいで武器派生を統計してみたくなるな。

とはいえクターニッドやリュカオーンから素材が落ちなかった以上、俺が苦戦したモンスターといえばこいつらしかいないだろう。その殆どを煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手と冥王（ディス・パテル）の鏡盾に持って行かれてしまったものの、素材指定が非常に曖昧であるが故に残った素材でもアイテム作成が可能となるのは幸いだったな。

「金晶独蠍（ゴールディー・スコーピオン）の素材、そして冥王鯱（アトランティクス・レプノルカ）の素材……リュカオーンやクターニッドを除けば、本気で死を覚悟した強敵っすわ」

双方ともにフィールドギミックがなければ普通に勝てない相手だっ

たろうしな。特にあのシャチ野郎はあれルルイアスの塔で反射しないと勝てないレベルでは？　海中でレールガンとか蒸発待ったなしでは？
金晶独蠍の鋏やアトランティクス・レプノルカの結晶化した羽のような鰭を眺めていたヴァッシュであったが、ニヤリとニヒルな笑みを浮かべると兎月とそれらのアイテムを受け取った。
「面白ぇじゃあねえか、おう……これじゃあビィラックの奴ぁ笑えねぇなぁ……」
……あ、うんそれだけ？　あの、とりあえず武器完成とΔ装置の完成を待てばいいのかな？
じゃあこの際聞いちゃおうか。
「時に兄貴、先程からあの……シークルゥ、なんて名前だっけ？」
「黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）で御座る」
「そう、アレが非常に気になってるんですがね……」
「ありゃあ秋津茜の奴に課した奴だぁ、あいつ一人で倒さにゃあ意味がねぇ……と言いたいところだが、おめぇさんが兄貴分として手助けしてぇってんなら止めやしねぇよ」
いや……そうじゃなくて俺も戦いたい……まぁいいや、どうせドロップアイテムは鎌とかなんだろ？　このシナリオ限定のモンスターってわけでもないだろうからまたの機会でいいや。
別に秋津茜を積極的に手伝おうとかそういうつもりはなかったのだが、ここで「いや別に……」と答えてはこっちの好感度にまで影響が出そうだ。

「へい、ありがとうございやす」

まぁ知らん相手でもないし少しくらい手伝ってやってもいいだろう。

「よぉーし！　次は勝ちますよーっ！」

「あ、また即死投げ食らった」

「秋津茜殿ぉーっ！！」

あのめげないメンタリティは積極的に見習うべきだとは思うよ、うん。

かつては俺も幾度となくお世話になったコロシアムの控え室を訪れてみれば、俺が目撃しただけでも十回目の首チョンパを食らった秋津茜が早速十一回目の突撃をせんとしているところであった。

「あ！　サンラクさん！　どうも！」

「あーうん、とりあえずステイ」

「はい！」

うん、座って。そうそう、作戦会議な？　とりあえず相手のモーションに慣れるまで死に続けて身体に動きを覚えさせるのもアリと言えばアリだけど、あの豆腐ダイエットみたいな名前のモンスターはクターニッドみたいなギミックタイプだ。

原理を解き明かさない限りデスペナが積み重なるだけだぞ。

「とりあえず客席から見た限りだと、あのモンスターはなんらかのギミックを解かないとクソ吸い込みの掴み攻撃を避けられない」

「そうですね！　距離を離したり跳んでみたりしたんですけど、避けられなくて……」

んー、着眼点は悪くない。実際あのギミックは第三者視点の方が分かりやすいしな。

「んー、ネタバレ気味になるけど良いか？」

「はいっ！　正直手詰まり感があったので助かります！」

「ん、ぶっちゃけあの強制転移掴み、トリガーは「影」だ」

そう、豆腐ダイエットが手を伸ばした瞬間、地面にあった奴の影が伸びたのだ。それも結構な速度で。

確信に至るには検証が必要だが、恐らくあのモーション中豆腐ダイエットの影に対象の影が触れると自動で奴の手元に転移させられる。

「ホーミングは多分しないだろうけど、兎にも角にも発生が早いか

ら奴が掴みモーションを始めた時点で横に回避だ」

「成る程……分かりました！　早速試して来ます！」

今度は止める暇もなく走り去って行った秋津茜を見送りつつ、俺はちらりとエムルとシークルゥを見る。

この情報、観客席から見ていれば割と簡単に気づくことができる。それでも俺が教えるまで気づかなかったということは、やはりヴォーパルバニー達はこれに関してはヒントを与えてくれないのか。

冷静に考えると意味が分からなすぎる、ユニークモンスターが直々にプレイヤーを鍛える癖にお使いさせたり、武器を強化してくれたり……やはりこのＥＸシナリオにおいてヴァッシュは敵としては戦わないのか？

「うーん……」

おや、秋津茜がリスポーンした。

「なんか気づいたら後ろから斬られてました！」

「自身も転移持ちかぁ……あ、そうだあのモンスターって何体目？」

「一体目です！」

「……俺も協力するから、頑張ろうな？」

あれクラスのモンスターがまだ九体後ろに控えてるのか……これ、低レベルで発生させるのが大正解だな。

・黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）
いわゆる金晶独蠍やアトランティクス・レプノルカと同じ「通常スポーンのモンスターのくせにユニーク並に強い理不尽モンスター」の一体である超絶理不尽モンスター。
「死」「苦痛」「病」エトセトラエトセトラ……おおよそ生物に良い影響を与えることがないだろう属性をやったらめったらに混ぜ合わせて発生する最凶最悪の死神。特定エリアで一定数以上の「死」が短期間に集中すると発生する、つまり大規模なスローターをやるとプレイヤーを殺しにくる。刈り取る者って言うとわかる人はわかるかも
手に持った大鎌で無差別に死を振りまくがなによりも厄介なのは対処が極めて困難な特殊技の数々である。具体例を挙げると
・自身の影を伸ばして対象の影に触れた瞬間問答無用で手元に転移させる、影が伸びる速度が弾丸並なのでほぼ確実に首チョンパされる
・自身の影を切り離して影のある場所に自身を転移させる、本体が予備動作なしで転移するため影の動きで判断しなければならない
・状態異常「黒死の宣告」が付与されるとほぼ詰む、しかも十秒ごとに感染者の周囲十メートル圏内の存在に伝染する
・そもそも物理攻撃も魔法攻撃も完全無効化する完全耐性、アルマゲドンや超排撃すら０ダメージという鬼耐性だしデバフも無論弾く
ただ「兎の国からの招待」で出現するモンスターは「力押し以外の対処が可能」であるため、このモンスターも当然攻略法が存在する……というか理論上はレベル１でも倒せる。札束で殴れ。
ちなみに天霊とは「上位種」と同義

黄金の月よ、青く冷たく（前書き）

妖怪惑星、実はＳＣＰで財団によってカバーストーリー「サービス終了」で表舞台から消された説すごい好き

自分で戦うことができないという状況がものすごくイライラする、という事実を発見できたので少なくともこれまでに費やした時間は無駄ではなかった……と思いたい。

「や……やったぁーっ！　やりましたよサンラクさーん！　シークルゥさんも見てましたかー！」

影に触れると強制転移させられる即死掴み攻撃。
本体から切り離された影がある場所に瞬間移動する転移攻撃。
状態異常を喰らえばゴリゴリ体力が削れる上にデバフ地獄。
というかそもそも攻撃が全く通じない、謝罪砲すらノーダメっぽい。
クソ極まりないモンスターであったのだが、ふと思いついた手段を実行したところ……恐ろしいほどあっさりと黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）は消滅してしまった。

「100ある体力を0まで削るんじゃなくて、マイナス100を0まで増やすのが正解だったわけか……」

やはりこのゲーム、単純なパラメータで判断するよりも世界観に基づいた設定から弱点を割り出すのが基本形だな。
クソゲーでも中々見ないバランスの壊れたモンスターであったが、その一方でクソゲーでも中々見ないレベルのクソザコモンスターでもあった。聞けばあのモンスターは生命が終わる瞬間に放出される属性……「死」やそれに至るまでの「苦痛」、それを齎した「病」や「暴力」など負の属性が混ぜ合わさって生まれる存在なんだとい

う。

であれば、奴を構成するのはゲーム的に言えば「ＨＰ０」や「ダメージ」、「デバフ」ということになる。要するに奴はゼロを振り切ってマイナスになってしまった状態、マイナスにマイナスを足し続けても負の方向に数字が膨れ上がり続けるだけだ。

だったら逆転の発想だ、マイナスにプラスを足して消滅（ゼロ）に戻してしまえばいい。クターニッド戦の時にやったことと原理は同じだ。あれはシステムの反転であったが、こっちはシステムに則ったダメージ計算の応用だ。

ダメージがダメなら回復、デバフが通らないならバフ、既に死んでいるなら蘇生してしまえばいい。

そうして俺と秋津茜が至った結論はラビッツにあるアイテム屋で回復アイテムを買い占めて投げつける、というなんとも言えない作戦であった。

「アンデッドとかに聖水をぶっかけるのと同じ感覚ではあるんだが、なんというかアンデッド以上にアイテムを無駄にした感が凄い」

こう、闇の存在に光的アイテムを使うのは相反する属性による浄化、とかそういう感じがするが黒死の天霊の場合なんというか借金を返済しているような気分になるんだよな。客席から見ている俺でさえそうだったのだから、高級アイテムを投げ捨てていた秋津茜の心情や如何に……まぁ普通に喜んでるな、うん。

「これがマネーイズパワーってやつですね！」

「なんか微妙に違う気もするが……まぁいいや」

「わっ！　なんか鎌がドロップしました！」

「ほ、ほーん……運いいじゃん」

はぁぁぁ！？　いいなー！　いいなぁぁぁぁぁぁぁ！！！　死神の鎌とか格好良さの権化じゃーーーん！！　超欲しいぃぃぃぃ！！
だがここで駄々をこねずに心の中に留めておけるのが一流の大人ってもんさ…………………

「サンラクサン、握りしめた拳がめっちゃぷるぷるしてるですわ」

俺はまだ青春真っ只中なんだよちくしょおおおおおおおおお！！

二番手として現れたクッソ強そうな槍を持った幽霊っぽい武人を見た時点で、見ていることしかできない自分の立ち位置とか、五秒ごとに増え続ける槍の付喪霊に串刺しにされる秋津茜を見てちょっと心が折れたので今回の秋津茜チャレンジはこれにて終了とさせてもらった。

リアルな痛みはないとはいえ、流石に何度も何度も首チョンパされたり串刺しにされるのが精神衛生的に健康とは思えないからな……
精神性の端々から暗黒面（ダークサイド）の適性を感じるが光明面（ライトサイド）側の存在を無理に暗黒面へと引きずり込んではいけない、ゲーム廃人達のお約束だ。

ゲーム……オンラインという匿名の繋がりで対戦するシステムがこの世界に登場してからの歴史は、匿名を悪用しまくった罵倒と煽りの歴史と言ってもいい。

フレンド申請のメッセージ欄に煽り文を入れるのは序の口、酷い時はギルメンを使った徹底的な粘着なんて例もある。だが技術が進歩すればゲームの開発も進歩するというもの。年月の経過に比例して数多のゲームが発売される。

新規を逃してしまえば待っているのは新作ゲームの波に飲まれて過疎と消える未来だけ……故に一つのゲームに心血を注ぎ込む「廃人ゲーマー」達には如何なるカテゴリのゲームであろうと共通する不文律がある。

それこそが「光明面（新規ユーザー）に暗黒面（廃人ユーザー）的な接し方をするべからず」だ。

正直言って身内間だからこそ俺やカッツォ、ペンシルゴンは遠慮なく煽り合っているが、あれ見ず知らずの他人にやったら普通に殴り合い案件だからな。割と人格の否定とか絡めるし。

「基本的にフルダイブで死に覚えはあんまり推奨できないんだよね、だからとりあえず一回一回で極力情報を集めきったほうがいい」

「わかりました！」

本当に分かってるかなぁ……俺だったら間違いなく「とりあえず十連」みたいな感じで特攻するからなぁ……

まぁいいや、結局のところプレイスタイルはその人のものだ。他人が助言はできても強制はするべきではない。

想定外の精神的ダメージに打ちのめされたものの、時間的にそろそろな気がするのでトイレなどを軽く済ませてログイン。兎御殿内を気持ち鍛冶工房の方へと歩いていると、なんだかとても充実した表情のビィラックと遭遇した。

「あ、ビィラックおねーちゃんですわ」

「おう、親父がわりゃらを呼んどるけぇ」

「おっ、もしかしなくても完成した？」

「あぁ……ほんに素晴らしい、たった五文字でしか親父の凄さを表現できんわち自身が恨めしい……！」

いいねぇ、ビィラックがここまで骨抜きにされるとは、完成品に期待が持てる。

軽やかな足取りでヴァッシュがいるであろう工房へと出向いてみれば、煙管をふかす白兎が俺へと視線を流した。

「来たかぁ……いーい出来栄えだぁ」

「ほぉお……！」

かつてはクアッドビートルの甲殻を用いて鍛え上げられた致命の包丁(ヴォーパルチョッパー)は兎月(とげつ)【上弦】【下弦】……合体して【双弦月】へと姿を変えた。

そして今、金晶独蠍とアトランティクス・レプノルカの素材を組み込まれた兎月は新たな姿を獲得した。

「勇魚兎月（イサナトゲツ）……こいつが【金照（コンショウ）】、そいつが【冥輝（メイキ）】だ」

ＫＡＫＫＯＩＩ！！

素材としたモンスター双方が水晶という共通項を持っていたためか、やたらかっこいいネーミングの対刃は異なる形状であるが刃が水晶体という共通項を持っていた。【金照】の方が片手剣に匹敵する大きさであるのとは対照的に、【冥輝】の方はナイフほどの大きさしかないことも気になるが……

名前からして金色水晶の方が金晶独蠍の素材を、濃紺水晶の方がアトランティクス・レプノルカの素材を用いているんだろう。とりあえず見た目は百点満点、性能確認といこうじゃないか。

勇魚兎月【金照】

対刃剣

対となる刃の名は冥輝、黄金の月光を水晶に宿した刃を持つ剣。致命兎の魔法が込められたそれは冥府の冷気と交わる時、真なる月の輝きを放つ。

・自身よりレベルの高い相手と戦闘する場合、クリティカル攻撃に成功すると攻撃対象へ結晶化効果を付与する。

・使用者のＨＰを消費する、もしくは月光を受けることで武器の耐久度を急速回復させる。

・一定回数クリティカル攻撃を当てることで合体ゲージが蓄積される。

・必要ステータス「ＳＴＲ８０」「ＤＥＸ１００」「ＴＥＣ８０」

「ヴォーパル魂200」

勇魚兎月【冥輝】
対刃剣
対となる刃の名は金照、昏冥の霊気を水晶に宿した刃を持つ剣。致命兎の魔法が込められたそれは黄金の輝きと交わる時、真なる月の輝きを放つ。

・自身よりレベルの高い相手と戦闘する場合、クリティカル攻撃に成功すると使用者に冥気効果を付与する。
・使用者のMPを消費する、もしくはHPを消費することで武器の形状を変化させる。
・一定回数クリティカル攻撃を当てることで合体ゲージが蓄積される。
・必要ステータス「STR100」「DEX80」「TEC80」
「ヴォーパル魂200」

ついに隠されすらしなくなったなヴォーパル魂……

黄金の月よ、青く冷たく（後書き）

二つ合わせると「蒼耀月」です
致命武器はこのユニークシナリオＥＸにおけるパスポートのようなものです、最終的にヴァッシュの手によって真化された武器がシナリオの鍵になります

男なら黒に染まれ、その身滅びども（前書き）

設定語りたい欲ゲージ：４０％（本日午前8時59分時点）
設定語りたい欲ゲージ：３００％（本日午前9時35分時点）

設定語りたい欲求がマックスハザードオーバーフローしてもう駄目なので連続更新します

明日の更新は本当に申し訳ないですがご勘弁を……ちょっと精魂尽き果てました

とりあえず装備自体は出来たので、俺のヴォーパル魂(サンラク)は２００は超えているらしい。
いや、それはいいんだが確認できないパラメータが装備条件って結構きついぞ。少なくともこのヴォーパル魂ってどちらかと言えばＨＰやＭＰ、ＳＴＭに相当する隠しパラメータだから気づかないうちに減っているかもしれない。そしてそれを確認できないということは肝心な時に装備できなくなる可能性が出てきてしまう。

「……まぁ、上げ方はなんとなくわかるけどさ」

具体的には水晶平原にカチコミに行けばすぐに上限まで上げれてしまいそうだ。
とりあえず【金照】が相手にデバフを付与する効果で、【冥輝】が自身にバフを付与する効果……自身にバフ？

「いや、駄目じゃん」

いや、駄目じゃん。だって俺、そこら辺諸々全部弾くじゃん。

「お、おぉうふ……」

というかそもそも武器としての性能だと傑剣(デュクスラム)への憧刃が優秀すぎて他の武器いる？　状態にまでなってるんだよなぁ……耐久が減らないってやっぱ便利っすわ。双剣使いならもはや人権武器じゃないか？
いや待て、対刃剣である以上目玉効果は合体時に発揮される。

「だから少なくとも産廃ではない、産廃ではない、産廃ではない……」

かっこいい、というただ一点で爆アドなんだから産廃ではない、産廃ではない……そう自己暗示をかけていると、俺の心中をなんとなく察したのか苦笑いのような笑みを浮かべつつもヴァッシュはもう一つ、手のひらサイズのアイテムを俺に投げ渡してきた。

「これは……」

形状的には銃だが、武器というよりも信号弾とかを撃つフレイムガンという感じだ。つまり殺傷力が感じられない。

「おうよ、こいつぁなぁ……BC（ビィシィ）ービーコンってんだ。おめぇさん、何度か聞いたことがあるんじゃぁあねぇかい……それはな、バハムートを呼ぶ笛ってやつさ」

「バッ」

なんですと!?　いやちょっと待て、そのセリフの破壊力はやばいぞ、エセ魔法少女が死ぬ。

なにせその一言だけで、これまでに得た情報が一気につながる。点と点が繋がって単なる情報が設定へと形を変えることになる。

少なくとも地下の科学者の残した映像と、セツナの言葉、今のヴァッシュの言葉でバハムートがモンスターではなくなんらかの「科学」であることが確定した。となるとリヴァイアサンやベヒーモス……ここらへんも無関係ではないのか？　ファンタジー世界観だから意識が向かなかったが、いわゆる創作で多用される「名ありの」ファンタジー生物……その名前を冠しているものは神代のものということか？　いや、だが……くっ、考察厨に全力投球してやりたいが流

石にこのＢＣービーコンなるアイテム含めて情報の重要度が高すぎる！

「つってもなぁ、ただ使えばいいってもんでもねぇ。今のご時世じゃあどれだけ叫んだって聞こえやしねぇからなぁ……使うための「座標」がある」

「座標？」

「おうよ。俺等ぁはあえて教えねぇ、そこに近づけばビーコンが自ずとおめぇさんに教えてくれるだろうよ。おめぇさんが自分の足で探しな」

「う、うっす……」

「あぁ、あともう一つ言い忘れてたことがある」

かんべんしてください、これいじょうはおれのあたまのきゃぱしていーがもちま

「あの犬っころがおめぇさんに刻んだ傷……一時的にだが無効化する方法がある。だから俺等ぁはあえて「冥輝」をそう作ったからよう」

情報でノックアウトとはこうするのだ、と言わんばかりの本日最高火力の衝撃情報による乱打(ラッシュ)を受けて、今度こそ俺は完全にノックアウトされた。

「サ、サンラクサン……おとーちゃんが言ってたこと……」

「正直、今すぐ寝て今日起きた全てを忘れたいくらいだ」

「呪い(マーキング)」も「刻傷」も、つまるところ言えば消去不可能の永続デバフだ。だからこそヴァッシュが齎した情報は目から鱗が落ちる思いであったし、その為に示された方法はエムルが「本気なのか」と問うほどの無理難題であった。

「濃い色をなくすにはより濃い色で塗り潰す他に方法はない、か……」

俺とエムルが向かう先はこの兎御殿のもう一つの頂点。ラビッツという国の象徴がヴァッシュであるなら、ラビッツという国の中枢を担うNPCがいる場所。名前だけはなんども聞いたことがあるし、エムルを通して意見陳情をしたこともある。
だが会いに行くのはこれが初めてだな……

「ここが執務室か」

「はいな、ここにエードワードおにーちゃんがいるですわ」

ヴァッシュの子供達シリーズ、堂々の「A」を冠するヴォーパルバニー。ヴァッシュが齎した情報と、ビィラックから聞き出した情報から導き出した結論を実行するため、俺は執務室の扉を開けた。

「ん…………おや、誰かと思えばエムルと…………初めまして、と言うべきでしょうか？　サンラク殿」

「あぁ、初めまして……だな、宰相閣下」

長女が黒兎、次男が白兎であるなら長男は何色か、答えは「灰色」であった。人間大のヴァッシュよりも若干小さいくらいのサイズの右耳が半ばでぺたんと折れた兎が、メガネをクイッと持ち上げて丁寧な口調で俺へと笑みを向けた。あぁ、インテリヤクザ的な……

「わざわざ私の部屋を訪れて、如何な用件でしょうか？」

「兄貴……いや、ここはあえてヴァイスアッシュと言わせてもらうが……あいつから色々と助言をもらってな」

ユニークモンスターがプレイヤーに付与する永続デバフには階級がある。例えばリュカオーンでいえば「呪い（マーキング）」はあくまでも獲物に対するものだ。獲物にあえて苦難の道を歩ませることでその力を高めさせ、歯ごたえを良くするための呪い。

そしてその結果牙を押しのけるほどの強さを見せた俺に対してリュカオーンは「呪い」を「刻傷」へと変えた。

好敵手に向けた挑戦状、その強さを認めた上で「もっと強くなれ」

という激励の意思も含まれるこの傷はゲームシステム的には悪化しているが世界観的には軽くなっているのだと言う。

であれば、だ。クターニッドがその身をもって体現しているように万象にはその逆が存在する。

「呪い」が軽減された結果「刻傷」になったというなら、「呪い」がさらに悪化するパターンも存在する。

ちくしょう、今日だけで俺はどれだけこの世界の設定を抱え込まなければならないんだ。ライブラリの資金を全部奪い尽くして借金させてもなお金を支払わせるだけの大スクープだぞ。

「俺はヴォーパルバニーじゃねぇ、結局のところただの食客だが……それでも嬉しいことにラビッツ名誉国民としてこの国の末席に座っている」

「そうですね、私としてもあなたのことは評価していますよ」

「だからこそ……俺は国民としての義務を果たすべきだと、そう思うわけだ」

ヴァッシュは言った、呪いを打ち消すためにはより強い呪いが必要なのだと。

そしてそれはリュカオーンのように「興味」を根本とするものではなく、クターニッドのように「評価」を根本とするものでもなく、ジークヴルムのように「期待」を根本とするものでもない。

もっと根本的な「憎悪」、老若男女であろうが強者だろうが弱者だろうが敵対しようが媚を売ろうが関係なく全てを憎悪する七体目の「呪い」ただ一つが該当するのだと。

「宰相閣下、俺を「ラビッツ防衛線」に…………無尽のゴルドゥニーネとの戦いに加えてくれ」

ヴァッシュ曰く…………それは人を憎み、兎を憎み、世界を憎む者。
全ての「蛇」の母であり、今もなおラビッツへの侵攻を続ける致命(ヴォーパル)兎(バニー)の宿敵。
そしてそれは、このゲームにおいてその存在のわずかな片鱗のみがライブラリによって発見されていた「七体目のユニークモンスター」だ。

男なら黒に染まれ、その身滅びども（後書き）

ついに判明する七体目、無尽のゴルドゥニーネ。脱皮癖のある可愛い女の子ですよ、うん（目逸らし）

貪食の大蛇っていましたよね？　うんkもとい毒糞攻撃してくるやつ、あいつ……というか蛇系モンスターは全てゴルドゥニーネから派生しています

神代を経た現代だからこそ起き得た現象であり、生物学的にはあり得ないはずのガチの「始まりの祖」です。

やり込み要素は狂気の沙汰ほど面白い

ユニークシナリオ「兎の国ツアー」では、ヴォーパルバニーの依頼で「兎食の大蛇」というモンスターを撃破するという。

そもそもヴォーパルバニー以外ではユニークによって訪れたプレイヤーしかいないはずの国に、なんで「兎食」なんて物騒な名前のモンスターが出現するのか……その答えこそが七体目のユニークモンスターにあった。

「敬語を使うべきかな？」

「別に構いませんよ、妹からしてアレですから」

あぁ……まぁいいや。俺は執務室にある来客用の椅子に座りつつ、この国の実質的な国王であるエードワードとの会話を続ける。

「ゴルドゥニーネは己が住処から物理的にラビッツまでトンネルを作り、己の「分け身」と眷属を差し向けているのです」

「それは聞いた、文字どおり無尽蔵に湧き出続けるから戦線の押し上げはできても押し込みができない、ってのもな」

「ええ……かつて大規模な戦闘があり、かろうじてトンネルの半分まで押し込むことには成功しましたが……まぁ、その先は言うまでもないでしょう」

無尽のゴルドゥニーネ、名前からして不吉な予感を感じられずにはいられない「蛇」のユニークモンスター。

ツアーで訪れたプレイヤー達が倒すのはあくまでも眷属、それもヴォーパルバニー達が死守する防衛線から漏れたおこぼれに過ぎず……その真なる脅威は眷属という点に目を瞑っても象すら呑み込んでしまえそうな大蛇を率いる「分け身」の方だ。

「父から話は聞いているのでしょう？　防衛線を死守する同胞達は生還を考慮していない死兵であることは」

「ゴルドゥニーネの分け身がバラまく「毒」……俺が用があるのもそれなんだよ」

流石にゴルドゥニーネ本体と戦うようなことはなかったが、それでもヴァッシュ曰く「ゴルドゥニーネの特性上」分け身からでも「毒（呪い）」を受け取ることは可能であるらしい。
生物学的なものではない、概念的な呪いは防衛として命を張るヴォーパルバニー達から帰還の可能性を摘み取る。ユニークモンスターが付与する「呪い」はそのユニークモンスターが倒されない限り解除されることはない。
そして「分け身」が倒されない限りゴルドゥニーネの呪いはヴォーパルバニー達を蝕み、防衛線の前か後ろか……どちらにせよ薄暗いトンネルの中で朽ち果てていく。
何より厄介な点は分け身側の制御下にある毒は伝染する、防衛に就くヴォーパルバニー達がラビッツへと戻れば、未曾有の災害が起きるというわけだ。

「なるほど……確かに貴方であればあの忌々しい毒に対抗することも可能でしょう、夜の帝王……リュカオーンの傷を持つ貴方であれば」

「というか、だな……むしろ俺は積極的に毒を喰らいに行くっつー

か……あーうん、手っ取り早く言うと俺はその「分け身」ってやつに喧嘩を売りに行くつもりだ」

ＡＩがそうなるように仕向けたのか、そもそもシナリオの既定路線として設計されているのかは分からない。だが新たな能力を獲得した兎月……現状産廃である【冥輝】君ではなくまだ期待のホープである【金照】の能力にある「結晶化効果」が今回の鍵を握っている。

「……ふむ、トンネルの制圧はラビッツにとって重要事項です。はて、地図をどこに置いたか……これか」

筒状に巻いた羊皮紙がエードワードの手によって転がされ、内側に書かれた情報を顕にする。

トンネルというからてっきり一本道なのかと思ったが、どうにも事態はもっとややこしいようだ。まっすぐラビッツと反対側をつなぐ太い一直線のトンネル、ラビッツ側の側壁面から根っこのように細いトンネルがいくつも伸びており、それが逆側のどこに繋がっているかは書かれていないものの蛇と兎の押し合いへし合いがどういう状況なのかをなんとなく察することができた。

「かつてゴルドゥニーネ本体が掘り起こした中央トンネル、我々が安全を確保したのはトンネルの三割……ここから先は未確認、もしくは封鎖できていない「横穴」がある可能性があり、さらにその先が最前線となっている」

「これ新しく横穴を作られて奇襲される可能性は？」

「既存の横穴を使用された場合ならともかく、新規で横穴を掘っていれば音で気づけます。と言っても人間の聴力でもそれが可能なのかは私には分かりかねますが……えぇ」

無理に決まってるだろうが、人間の耳と兎の耳じゃ性能が違いすぎる。少なくともプレイヤーがこれに参加する場合はノーモーション奇襲を警戒しないといけないみたいだな。

「ゴルドゥニーネの分け身……抜け殻がいるのはトンネルのここ、もし仮に貴方が分け身に挑むというのなら……」

至極あっさりと、シンプルなマップであるからこそ俺がすべきことも単純であるが故に、エードワードはあっさりと俺がやるべき無茶難題（ノルマ）を口にした。

「安全に出発できるここからだとしても、おおよそここからここまで……ゴルドゥニーネの眷属をくぐり抜けながら駆け抜ける必要がありますが、貴方にそれができるので？」

だからこそ俺も、同じようにあっさりと答えてやる。

「できなくてもやる、できるまでやる、いつかできる……それが俺たち開拓者（ゲーマー）ってやつさ」

モンスターだらけのダンジョンをノーエンカウントで突破する？ レベリングサボったプレイヤーのお約束じゃないか、縛りプレイならやって当然のこと、ＲＴＡならなおさらだ。

最適で動いて、最短を最速で駆け抜ける……多少のロスは目を瞑れ。そもそも雑魚エンカを回避するのは作業以外なら慣れたものよ。それが例え爬虫類オンリーモンスターハウスでもな。

「成る程、これもまた父さんの思惑通りか……手銭をきるたぁ豪勢な」

「ん？」

思惑？

「こちらの話です。ちょうど一週間後の夜、ラビッツでは大規模な防衛作戦が実施されるんですよ」

「ほう」

これまたタイミングの良い。

「目的は戦線の押し上げと第三区画から第四区画までの未だ未処理の横穴を塞ぐこと……もしも貴方がゴルドゥニーネの分け身を倒せると言うのであるなら、我々もその手助けをいたしましょう」

「上等、最低でも戦術的勝利は約束しよう」

「貴方の働き次第では例の件、考慮しましょう」

流石にプレイヤー一人で戦略的な勝利までは保証できない…………

例の件？

思えば新しい兎月に秋津茜チャレンジ、一週間後の防衛戦参加……一気にシャンフロでの予定が増えてしまった。
幸い来週の土日も特に予定はないので遠慮なくエナドリをキメることができるが、それよりも目下重要事項は明日……いや、もう今日か。今日の昼過ぎから始まる「旅狼」と「黒狼」のたのしいたのしいお話タイムだ。

要約すると黒狼の「ナマ言ってねぇでさっさと情報吐けや」という脅迫に対しウチの魔王が「うっせぇダボ、てめーらは黙って貢いでればいいいんだよ」と言い返す……くっそしょーもない話し合いだ。しかもウチの魔王は外道二名と新規外道一名をパシリにして盛大な花火を仕込んでいると来た。

常日頃から外道モデルと外道プロゲーマーに挟まれた哀れな羊としてのゲーマー生活をしている俺だが、こんな楽しそうな花火大会現地で見なくてどこで見る。

「録画とかしてもいいかな……」

はてさて、一体どうなることとやら。まぁ仮眠のつもりが大爆睡したせいで遅刻ギリギリなんだけど。

やり込み要素は狂気の沙汰ほど面白い（後書き）

ゴルドゥニーネさんは脱ぎ癖がひどいししょっちゅう変態的行動をとるし殺意込みで粘着質という面倒臭さの役満

あまりに面倒くさすぎて脱ぎ捨てたものが自律行動し始めるくらい面倒臭いし、時間経過で中身が補填されて繁殖活動を開始し生態系が出来上がるというゴジラ・アースみたいな面倒臭いやつ

狼争開幕、最初にガラスをぶち破れ

急がば回れ、という言葉がある。要するに「横着すんな」と言う真理を例え話も絡めて馬鹿でも理解できるよう非常に分かりやすく教えるための言葉だ。もしかしたら賢い人にも言っているのかもしれないが。

だが待ってほしい、本当に賢いやつならそもそも急ぐような状況に陥らないからつまりこれはやはり馬鹿に向けた言葉なのだろう。

そして俺は馬鹿ではない、ちょっと無茶をやったりするが少なくとも廃人クラン相手に派手に喧嘩を売ろうとか考えないし、ユニークが自発できないわけでもない。あと粘着されたからって徹底的にＰＫも……しないと、思うよ？

ともかく俺は馬鹿ではない、つまり「急がば回れ」は俺には適用されない、我ながら完璧なロジックだ。

なので、

「だっしゃらーっ！！」

遅刻ギリギリ故に屋根づたいに走り、目的地のドアから入るのでは間に合わないということで濁った不透明な窓ガラスをぶち破り、談合場所として指定されたフィフティシアのクラン「黒狼」の拠点である「黒狼館」へと突入した。

「ふぅ……セーフ」

「…………？　………！？」

「おっすペンシルゴン、どうしたそんなアホヅラ晒して」

「……痴女？」

失礼な、性別女の方が若干ＡＧＩ補正が高いからわざわざ聖杯使って走ってきたんだぞ。

そりゃあラビッツで色々実験してたから装備品全部外してほぼ下着姿とかいう格好だけどさぁ、ははは我ながら初期キャラかよと突っ込みたくなるな。はー胸が揺れて痛い！

時間は少しだけ巻き戻る。

「こういう時新作スイーツでも食べに行くみたいな顔が出来る性根がちょっと羨ましいよ」

「まぁ別に殴り合いに行くってわけじゃないからねぇ」

「の割に現役でレッドネームの僕まで連れてってていいわけ？」
「今回の談合は話題が三つくらいあるからねぇ、一応君重要参考人だから」
黒狼が大規模なＭｏｂ狩りの末に建造した拠点「黒狼館」。言うなればクラン「旅狼」にとっては敵の胃の中へと飛び込むようなものだ。
とはいえ新入りの京極も含めて一癖も二癖もある連中である。ペンシルゴンは今から私の弁舌がフルスロットルになるぜと唇をぺろりと舐めているし、オイカッツォもしれっと装備品を確認、京極に至っては明らかにその手の騒動が起きることを期待するかのように腰に佩いた刀の柄を撫でていた。
とはいえ、今回クラン「旅狼」は四名が出向くことになっている。同盟を結んだ時点で所属していた最初の三人と、ある騒動の「当事者」である京極を含めた四人……の筈なのだが。
「あいつこないんだけど」
「んー、流石にばっくれた、ってことはないだろうけどリアルの事情って可能性もあるしねぇ……」
「リアルで何かごたついたのなら、メールくらいは寄越すんじゃないのかい？」
「となると寝てる可能性がなきにしもあらずになってくるねぇ……」
「厳罰に処す必要があるねぇ……」

「自然な流れで二対一にしていくなぁ」

まるでそれが当然とでも言うかのように、この場にいない四人目の制裁を計画し始める二人に京極は苦笑いを浮かべる。

黒狼館に入った瞬間、何人かの何故か装備が貧相なプレイヤーが京極を射殺さんばかりの目で睨みつけているが、当の本人はと言えば人にあるはずのない獣の耳をぴょこぴょこと動かしながらにこやかに手を振り返す。

「見てよペンシルゴン、ああ言う目を見るとＰＫｅｒやっててよかったと思うよ」

「否定はしないけど割と大概なこと言ってるって自覚あるかなー？」

積極的にプレイヤーに嫌われるレッドネームを貫き通す京極の発言に適当に相槌を返しつつ、ペンシルゴンはちらりと視線を横に向ける。

（ま、クランの方針が強硬策になっても、穏健派全員が意見を合わせたら洗脳の領域だしねぇ）

京極にキルされたプレイヤー達とは異なり、どこか困ったような申し訳なさそうな目でペンシルゴン達を見るプレイヤー達。

穏健、と言うよりもどちらかと言えばオンラインゲームにおけるマナーを重視するプレイヤー達だろう。

（モモちゃんはこう言うところ甘いから可愛いなぁ……）

そもそもクラン内部の意識を統一できていない時点で万全ではないのだ。

すでにクラン「黒狼」は三つの勢力に割れていると言ってもいい。
当初穏健派と強硬派に分かれていたのが、強硬派がさらに「直接旅狼を殴りたい派」と「情報を奪えればそれでいい派」に割れている。
これに関しては京極が予想外のＰＫをかました事によるイレギュラーではあるが、イレギュラーが全て害持つわけではない。
（さぁて、どこからつついて行こうかなぁー……？　やっぱ手持ちの札が多いと楽しくてたまらないねぇ）
「……随分と楽しそうだなアーサー・ペンシルゴン」
「んふふ……そう見えちゃうかな、サイガー１００ちゃん？　その節ではお世話になったねぇ……」
机に肘を置いて来訪者を見据えるサイガー１００の表情は硬く、かつてペンシルゴンが引き金を引いた「阿修羅会崩壊」の話題に対しても眉一つ動かさない。
その様子にオイカッツォはそっと目をそらし、京極は目を輝かせ、そしてペンシルゴンは笑顔のまま心中でため息をついた。
（全く……後先考えずになんでも皿に載せちゃうからこうやってごちゃごちゃになるんだよ）
異なる思惑が複雑に絡み合った此度の談合の手綱を握らなければならないのはペンシルゴンだけではない。
当然ながらクラン「黒狼」の長であるサイガー１００は様々な感情渦巻くクランメンバーを背負ってこの場に臨まなければならない。

「一人足りないようだが？」

「それはこっちのセリフでもあるね、とりあえずウチの鉄砲玉は……ふふ、もしかしたらまた新しいユニークを見つけてるかもねぇ……」

大当たりである。

だがこの場にいる面面はまさか本当に話題の渦中にいる半裸が七体目のユニークに到達していたなど知る由もなく、明らかな挑発に「旅狼」の面々を睨むプレイヤー達の雰囲気が更に刺々しくなる。

「成る程……どうやらお前でもあのプレイヤーの手綱は握れていないようだな」

「そりゃあ鉄砲玉だもの、銃弾に縄を括り付けてどうするのさ」

好き勝手に動く駒の手綱を握れていない事に対する追及と、それを華麗に受け流す返答。

今にも爆ぜてしまいそうな雰囲気の中、「旅狼」の三人がテーブルにつき、そして

「だっしゃらーっ！！」

吹き抜けになっている黒狼館の二階の窓をぶち抜いて、下着姿の半裸の女が館の中へと落ちてきた。

「なぁペンシルゴンよ、いい加減笑いすぎでは？」

「いや……っ、だって……んふふっ、たった一日で玉無しになってくるとか……ふふふふふっ、思わないじゃん……ぷふふっ」

玉無し言うなや。蛸さんの奇跡による産物なんだぞ、胸の大きさが邪魔過ぎて少し困るが。

「このゲーム性別変更できたの？」

「お前には無理だよユニーク自発できないマン」

「分かったユニーク絡みね、それはそれとして殴るわ」

「きゃあこわーい、ユニーク自発できない奴の嫉妬こわーい」

「声まで女声になってるから余計腹立つ……！」

ユニーク自発できない奴を弄るのは楽しいなぁ！　声含めて性別反転してるからエセネカマであるお前の上位互換（パーフェクトネカマ）なんだよなぁカッツォくぅーん？

「やーいユニーク自発できないマンやーい」

「サンラク……ちゃん？　まぁいいや、流れ弾が向こうに飛んでるよ」

「ん？」

京ティメットが指差した方を見ると……おや、なんだかプルプルと震えているクラン「黒狼」の方々が。
しばし考え、カッツォをおちょくる為の台詞が全てユニークモンスターを倒すどころかＥＸシナリオを発生させることすらできていない黒狼にも適用されていたと言う事に気づく。

「あっ……まぁその、なんだ……ごめーんね☆」

ペンシルゴンに殴られた、理由は「あざといキャラ見てるとなんか腹が立つ」との事。
おめーが被ってる肉厚な化けの皮よりはマイルドだろうがよぉ！！

狼争開幕、最初にガラスをぶち破れ（後書き）

ごめーんね☆（半裸でガラスをぶち抜き二階から落ちた事で割と瀕死）

狼争前哨・正論パンチは避けられない（前書き）

これから忙しくなりそうなので毎日投稿が難しくなるかもしれないです、皆様にはご迷惑おかけします

狼争前哨・正論パンチは避けられない

針のむしろとはこの事だろうか。
たかだかゲーム内拠点の窓を破った程度だろうに、何故かもの凄く睨まれている。
こちらが引く理由もないので胸を張って堂々としてやると視線は気まずそうに逸らされた。ふふふ、正義は勝つ……！
「ばるんばるん揺らしてないで服着ろって事だよサンラクちゃん君？」
「100スレ目に突入したらしいっすね」
すん……、と慧きゅん（オイカッツォ）にだけ伝わるキラーパスで奴の目から光を消した所でついに二つの狼による話し合いが始まった。
「さて、自己紹介は省かせてもらう……本来であれば同盟の内容について今一度確認する予定であったが、その前に解決しなければならない事案があるな？」
この場にいる殆どの視線が京ティメットへと集中する。特に廃人勢の一員でありながら妙に装備が貧相なプレイヤー達の表情や凄まじく、今にも剣で斬りかかってきそうな剣幕だ。
「ふぅーん、そこからか……まぁいいや、じゃあ単刀直入に言うけど八わ……流石に冗談だよ、五割で手を打とう」
「……黒狼全員で対処する可能性も加味しろ、二割だ」

「いーや、最大譲歩しても四割だね」
要点のみで繰り広げられる交渉、傍聴者達は理解している者とそうではない者に分けられる。
内容を理解できている前者のプレイヤーは、思いっきり吹っ掛けているペンシルゴンと報復の可能性をチラつかせて譲歩を引き出さんとするサイガー１００の熾烈な値引き合戦を正しく認識できているが……幸か不幸か、当事者であるカモられた被害者(プレイヤー)は後者であった。
「い、一体なんの話をしてるんだよ……」
「分からないのかい？　君らのリーダーは僕の装備をいくらで買い取るのかで値下げ交渉してるのさ」
すなわち先程の会話内容を補足すると
「アイテム返して欲しいなら売却値の総額にプラス四割増しで払え」
「生意気言ってるとクラン総がかりで報復するぞ二割増しで手を打て」
という事になる。
加害者が被害者ににっこり笑顔で教える、という畜生感極まった状況にしばしフリーズしていた被害者がようやっと理解できたらしい。
元は自分の装備だというのに、返して欲しくば割り増しで金を支払えと言われている理由が理解できていないのか、年相応に高い声で被害者が怒鳴る。
「なんっ……なんで俺の装備に金払わないといけないんだよ！　普通に返せよ！」

「なんでって、君の……ええと、アセンションブレード改六の所有権は今僕にあるんだから、タダで渡す理由がないだろう？」

「元々俺のだろうが！」

あーあー分かってないなぁ。ほら、サイガー１００は頭を抱えているしペンシルゴンはすごく悪い笑みを浮かべている。
外道共のテンポについていけるだけあって大概外道属性が高い京ティメットは幼稚園児に物の道理を教えるように……言い換えればもの凄く腹の立つ口調で被害者君達に何故金を払わなければならないのかを説明する。

「いいかいボク？　このゲームではＰＫは別に違法行為ってわけじゃない。ゲームシステム側がプレイスタイルの一つとしてちゃんと設定している、つまり僕は君達から装備を巻き上げたけど別にそれは悪い事じゃないんだよ？　わかりゅ？」

そう、勘違いしてはいけないのはプレイヤーキラーというシステム自体運営が想定したシステムであるという事だ。
例えばペンシルゴンが言葉巧みにあの被害者君から装備を騙し取ったとしよう、この場合は運営に泣きついたり晒しスレに晒すだけの権利がある。ネットのデータとはいえ詐欺は詐欺だからな。

だがＰＫerは違う、れっきとしたシャンフロの楽しみ方の一つでありプレイスタイルでもある。
ＰＫされれば装備を奪われるが、ＰＫer側は負ければ全財産没収という重いデメリットを承知でやっている。
インベントリアがあればそこらへん無問題、という点には今は目を瞑るとしてもだ。今回のケースだって粘着であったりクラン同士の

いざこざであったり抜きにプレイヤーキラーが勝った場合の当たり前の結末を迎えただけだ。

被害者君から巻き上げた装備をどうしようと現所有者である京ティメットの勝手、別にわざわざ黒狼に売る必要すら本来はないのだからこの時点で京ティメットは優しすぎるくらいの譲歩をしていると言ってもいい……理屈の上では、だが。

だが理屈だけで世の中回るなら戦争なんて起きるわけがない。

「うわすごい、聞いてるこっちが殴りたくなってきた」

「京ティメット……中々の逸材のようだな……だが奴は四天王の中でも最弱……」

「えー私四天王じゃなくて魔王がいいんだけどー」

「じゃあ俺四天王の一人だけど最終的に光属性になる系のキャラで」

「そういうキャラって結構創作じゃ見かけるけど普通にどっちつかず（ダブルクロス）なコウモリなのによく堂々といられるよなー、って思わない？敵になるのはいいけどもう少し申し訳なさとかないのかって感じ」

「分かる、でもそこらへんで葛藤し続けてもウザいんだよねぇ」

「知ってるか、ストーリー上ではうじうじ悩むくせに戦闘中は敵の時のボイスそのまま流用してるせいでノリノリでかつての味方を虐殺するキャラが出るゲームがあるんだが」

「どう考えてもクソゲーじゃん」

いやまぁクソゲーなんだけど、中途半端にまともな分プレイ中ただひたすら「もう少しましな出来だったらなぁ……」という感情を抱かずにはいられない、周回するほどその感情が濃厚になっていく腐ったスルメみたいなゲームでこれが中々癖になるんだよ。
ストーリー中では「裏切り者の自分がおめおめと幸せになっていいのか」とか悩むくせに直後の戦闘中は「さぁお前の悲鳴を聞かせろォ！」とかヒャッハーしてるところとか結構な笑いどころだぞ。

「サイガさん！　なんでこいつらの言う通りにしなくちゃならないんですかぁ！？」

おや、自分達では京ティメットを論破できないと悟ったのかサイガ－100に泣きついたな。
だが忘れていないだろうか、そもそもサイガ－100は最初から買い取り前提で話を進めている。だからどれだけ泣きついてもタダで返却されることはあり得ない。

少なくとも他のクランに売り払われないだけ有情なのだから大人しく支払うのがベターだが……ふと気になったので京ティメットに質問してみる。

「ちなみにカツアゲした装備って全額おいくらくらい？」

「んー、ＮＰＣに値段聞いたら全部で１４００万マーニくらいだったかな」

仮に二割増しだとしても１７００万くらいするのか……

「あ、悪いけど一括払いで頼むよ」

「鬼かよ」

このゲーム金策するならクソ強いモンスターを単独で倒すか徹底的にスロートするかのどちらかになる。

まぁ例外的に宝の山を丸ごとガメたり、なんて裏道もあるが……少なくとも一括で四捨五入すれば２０００万マーニをポンと出せる奴はそうはいるまい。

「まぁ、見たところユニーク武器ってわけでもなさそうだし無くした分はスパッと諦めてまた一から作ればいいんじゃないかな？」

言うねぇ、俺なら無言で白手袋を叩きつけてるレベルの煽りだ。人間、普通に罵倒されても大概腹が立つが理論武装されると更に腹が立つ。正論ってのは得てして人を傷つけるものだ、分かっちゃいるけど納得できないってやつだな。

「……………っ！」

「あ、リベンジなら受けて立つけどお話が終わってからにした方がいいと思うよ？」

白手袋を嵌めた拳を決闘状代わりにして殴られても文句言えなさそうな煽りっぷりだが、ペンシルゴンの表情からしてこれ多分事前に打ち合わせしてたな？

どうせ奴の事だ、黒狼側から京ティメットに絡んだ証言でも確保しているんだろう。つまり京ティメットを「被害者」にした上で吹っかけるつもりか。

「まぁまぁ京極ちゃん、言ってる事は間違いじゃなけどそこらへん

にしてあげなさい」

「ふふふ……クランの長がそう言うなら僕とて鬼じゃあない、ちょっとくらいは譲歩するさ」

しれっとこちらに正当性があるとアピールしつつも「仲良しなんだから譲歩するよ」と言える白々しさは見習うべきだろうか……いや、人間性が汚染されそうなのでやめとこう。

「分割払いでもいいよ」

「譲歩するのそこかよ」

思わず口を出してしまったわ、そこで値下げじゃなくて支払い方法で譲歩するんかい。

口では勝てず、道理は京ティメットの肩を持った。選べる手段はクソ高い代金を支払って装備を買い戻すか、諦めて泣き寝入りするかの二択だ。そんなクソ選択肢を初手でぶちかました弱小クランにトップクラン様の雰囲気がギスギスとしてきたが、我らが外道共はそんなものはどこ吹く風だ。

どいつもこいつも面の皮が分厚いからなぁ、そうでもなければモデルやプロゲーマー、ＰＫｅｒなんてやってられないだろう。

とはいえ我らがペンシルゴンが想定した「三番勝負（三つの議題）」の内、まずは一勝と言ったところか。

一歩間違えれば京ティメットのＰＫを手打ちにする代わりに情報を寄越せ、なんて事になる可能性もあった。わざわざ被害者達を煽ったのも被害者と加害者の関係を逆転させてこちらの理屈を通させるためだ。

本番はここから。

「ま、前座はこの程度にして……次の議題に行こうか」

どう考えてもこちらが悪い内容をひっくり返すべくペンシルゴンが笑う、正しく責任追及をする為にサイガー１００が目を細める。

いざ、次の議題へ………の前に。

「あー……どうも」

「……その……遅れて、ごめんなさい……」

ものすごく気まずそうに入ってきたレイ氏に俺は挨拶するのだった。

狼争前哨・正論パンチは避けられない（後書き）

本気で嫌がらせするなら迷うことなく他クランに売却、そうでなければ破棄する模様

狼争佳境・キレッキレのイニシアチブ

「旅狼（ヴォルフガング）」、「黒狼（ヴォルフシュバルツ）」、「ライブラリ」、「ＳＦ－Ｚｏｏ」の四クラン間で結ばれた同盟。

三つのクランが「旅狼」に便宜を図る代わりに、こちらからはユニークモンスターの情報を渡す……その契約はリュカオーンのユニークシナリオＥＸの無断自発、さらには深淵のクターニッドの無断撃破と、完全に契約違反に該当する暴挙が成されていた。

「全く、誰のせいなんだか……」

「君だよ」

「ぬぉ！？」

胸を叩くな胸を！　全く……まぁ両方とも俺が関与している以上、際重要参考人は不本意ながら俺ともう一人、レイ氏になる。

「少なくとも我々「黒狼」は契約を遵守していた、であれば当事者に聞くしかあるまい……何故、無断で事を進めたのかを」

クランの頭を張れるプレイヤーというものは、大小の差はあれある程度の「力」を持っている。

それはプレイヤースキルとかアバターの強さとかではない、カリスマとかリーダー性とかそういうものだ。

そしてシャングリラ・フロンティアというゲームにおいて、最高クラスのクランを率いるプレイヤー、サイガ－１００の視線はさながら

ら突きつけられた剣の切っ先だ。

「…………ふっ」

上等だ、受けて立とう。とりあえず頭装備を……よし、

「まぁ事情を説明するとだ「ちょっと待ってサンラク君」なんだよ
気を引き締めたところなのに」

「うーん、すごい自然な流れだったから私も流しそうになったけど、
なんでこの場面で魚の頭を装備したの？」

何でって……

「大勝負の前に鉢巻締めたりするじゃん？」

「ふむふむ」

「つまりそういう事だよ」

「うんちょっと理解できない」

古代のある一族は様々な仮面を作り、祭りの際や戦いの際などにそ
れぞれ仮面を付け替えたという。
それ即ち仮面という顔、さらに言えば人格を仮面という象徴で入れ
替える事で意思の統一を図ったわけだ。

今でっち上げたホラ話なんだけどな。

「鰹（カッツォ）がいるなら鮭（シャッケ）がいてもいいだろうがよ」

ここでキメ顔。

「サ（ーモ）ンラクと言ったところか……」

「ふふっ」

キルスコア（笑わせた）は九人か、上々だな。

「まぁ話を戻すけど、ぶっちゃけリュカオーンもクターニッドも事故みたいなもんだ。不慮の事故、埋蔵金が自宅に埋まっている確率と隕石が頭に落ちてくる確率が偶然一致したようなもんだ」

「それで納得できるなら世の中もっとシンプルなんだろうが、我々が同盟関係である以上報告、連絡、相談は義務だと思うのだが？」

「現場が柔軟な対応を出来なければ組織は回らないだろ？」

あーやばい、化けの皮剥がれそう。よしプランB、とりあえず事実説明だ。

「これに関してはそこのレイ氏……いや、サイガー0も証言してくれるだろうが俺は別ゲーの知り合いとこのゲームで会う約束をしてな。一晩でエリアを踏破しなければならないって事で手助けを頼んだんだ……寄生とか出荷とかは目を瞑ってくれよな？」

少なくともあの時点でリュカオーンの手がかりを掴んでいたことはとりあえず黙っておく。

「そこで偶然SF―Zooの連中と遭遇してな、奴ら「リュカオー

ンの出現パターンを掴んだ」とかなんとかで俺達とは手を切る、なんて一方的に絶縁を叩きつけてきてなぁ……」
よよよ、とわざとらしく泣きアピール。とはいえＳＦ－Ｚｏｏに関してはこの件をチクったペンシルゴンがとても楽しそうに笑っていたのでまぁ、そういう事だろう。
「まぁ、あそこのクランがデカい顔してない時点で結果は分かってると思うが……哀れ俺とレイ氏はリュカオーンの次なる獲物として狙われてしまったわけだ」
その後は、まぁ秋津茜の乱入があったり兎二匹の加勢があったりスーパー扇風機「朱雀」が頑張ったりと色々あったが要約すると……
「一晩かけてはっ倒した、以上」
「そんなはずないだろ！」
「あぁ？」
声を上げたのは今の今まで俺の弁舌を黙って聞いていた黒狼のプレイヤーの一人だ。
見たところ万能型の剣士、と言ったところか。
「リュカオーンがそんな簡単に倒せるわけないだろうが！　どんなチートを使ったのか白状しろよ！」

ほう、言うに事欠いてチートと言ったかこいつ。
ふふふ……怒ってないさ、怒ってないとも。
「チート、チートねぇ……面白い冗談だ、ネット芸人に向いてるよお前」
「んだと……！」
「まぁ落ち着けって、お前の気持ちはよーく分かる」
つまりこういう事だろう？
「FPSとかでクッソ上手いプレイヤーとマッチングしてキルスコア稼がれまくると負け惜しみにチートって言いたくなるもんだ、要は嫉妬だろ？　分かるとも！」
「なっ……！？」
「見たところ魔法も使える剣士、装備の形状的にある程度タフネスもある動ける中量級ってところか。やりたい事がバラつきすぎ、対人戦ならオールマイティかもしれないがレイドボス並の相手じゃ器用貧乏って言うんだぜそういうの」
口は止めない、反論させない。言うに事欠いてチート呼ばわり、雑魚(Noob)コールより性質(タチ)の悪い台詞だ。

「俺を見てみろ、リュカオーンに軽く引っ掻かれただけでもお陀仏するだろうな。レベル５０にすら届いていない時に二箇所も呪いを食らったんだ、今に至るまでにどれだけ回避特化にしたか分かるだろ？」

「リュカオーン相手に勝てるわけない？　バカ言え、タイムリミットがあるわけでもなし、死ぬまで殴れば勝てる。そんくらいゲーム始めたての初心者(ニュービー)でも分かる事だ」

「追及するなら私情は捨てるべきだったな、チート？　このゲームと運営がそれを許すと？　リュカオーンの分身にも勝てねぇ雑魚が随分と生意気(ナマ)言うじゃねーか」

流れるような動作で足払い、尻餅をついた馬鹿の胴を踏みつけて鮭頭で見下ろす。

怒ってないよ、ただムカついただけ。

「俺に意見するならリュカオーン相手にソロでノーデス回避ゲーやってから言ってくれ、な？」

着席、一つ息を吐いて気を取り直す。

「まぁ流石に端折りすぎたな、もう少し説明するわ」

「そう、か……ウチのメンバーが失礼を言ってすまない」

「別に大概の罵倒には慣れてるけど、軽々しくチートだのなんだの言う事はやめるんだな。ゲームそのものを馬鹿にしてるぞ」

さて……威嚇はこんなものでいいかとチラリとペンシルゴンの方を向けば口の端が吊り上っていた。

元々「黒狼」は「ゲームガチ勢」と「シャンフロのみガチ勢」の二種類がごっちゃになったクランだ。

ペンシルゴンは最初から「絶対にヤジを飛ばしてくる奴がいる」と予見していた、そこで俺がキレ芸を見せる事で精神的に圧倒する。

割とカチンときたが威圧感を保つのに結構苦労した、マジでムカついたら口を使わずもっとダイレクトにボコるし俺。

「まぁ、誰にでも秘密はあるもんだが同盟を結ぶ間柄だし教えるか。俺は単体でレイ氏のアルマゲドンに匹敵する火力を持っている」

流石にアレには及ばないけどな、とレイ氏の剣を指差しながら補足するがこの場にいるほとんどが驚いたような目で俺を見る。

「それに勘違いしてるみたいだが別に俺とレイ氏の二人だけで倒したわけじゃない、途中で乱入してきたやつも含めて五人……うん、一応五人で倒してる」

「つまりあと三人、リュカオーンのＥＸシナリオを発生させている、と？」

「いや、そのうち二人はＮＰＣだから一人だ。クラン「旅狼」に新規で入った内の一人だよ」
秋津茜、よくよく考えるとあいつのリアルラックはカンストしてるんじゃなかろうか。
そのくせ本人は素直に喜ぶから弄りづらいんだが……そこも含めて奴の強みなんだろう。
「あんたらがどう言う戦法で戦ったのかは知らんけど、少なくともリュカオーン相手に数で押してもボウリングのピンみたいにぶっ飛ばされるだけだろ……あぁ、経験済みだったか」
ピクリとサイガー１００の眉毛が動くが、流石はクランの頭を張ってるだけあるのか、彼女が見せた反応はそれだけであった。
「クターニッドに関しては……まぁ、こっちも事故なんだよなぁ」
ぶっちゃけ本音だ、まさか前提ユニークから停車無しの直通とか予想出来るわけないし。
だって初めて一ヶ月くらいしか経ってない初心者だもんね！
「別のユニークをやってたら、それがまさかのクターニッドのＥＸシナリオ直行でさぁ」
「つまり……そこの愚妹（サイガー0）を引き連れてクターニッドを撃破したのは全て偶然であると？」
「頭上に隕石が落ちてくるよりは確率高そうじゃん？」

ここそとこちら側から小声で「サンラク君のナチュラルに煽るスタイルすごいと思う」だの「時代が時代なら切腹案件とかになってそう」だの失礼な言葉が聞こえてくるがあえてスルー、報復の機会は別の場所でな……！

「さて、ウチの鉄砲玉が割と制御不可能なのはご理解いただけたと思うけど……いい加減本題に入ろっか、100ちゃん？」

「いいだろう……」

一拍置いて、これまで精神的には受け手に回っていたサイガ－100が口を開く。

「我々クラン「黒狼」は同盟の内容に基づき、クラン「旅狼」が持つユニークモンスターの情報全てを要求する」

「やだ☆」

これだからアーサー・ペンシルゴンって奴は……

狼争佳境・キレッキレのイニシアチブ（後書き）

主人公は煽られたらフルボッコにした上で煽り返すタイプ

「チート」って言葉は最近じゃ「その世界の常識の埒外にある超強力な何か」って扱いされること多いけど、本来の意味でチート呼ばわりされたら普通怒っていいと思うんですよね

何が言いたいかというと某ＶＲモノのレジェンドに出てくるあいつがあまり好きではないってことです、でも「なんでや！」は好き

狼争真意・生け贄の山羊は誰だ（前書き）

頭脳戦をやる作品を読んで自分も賢くなった気分で書けばモチベーションを保てる大発見

狼争真意・生け贄の山羊は誰だ

今更ながらやっぱりコイツ馬鹿なんじゃないかなと俺は思う。
まぁ実際目にして「あぁ、そういう層が多いんだな」と察したりもしたがやはり大規模なクランを運営する以上幹部クラスは優秀……というかこの手の運営に慣れたゲーマーが多い。
つまりなんだかんだ茶々を出されても操舵は狂わず、まともな判断が出来る「黒狼」相手にこの馬鹿野郎は正面切って拒否権を叩きつけやがったのだ。
今度は眉毛が動くだけではなく、明らかに顔を顰めたサイガー１００がゆっくりと口を開く。

「ふぅ………うん、一応聞こうか……何故？」

「私ら、別に「黒狼」のパシリってわけじゃないからね？　タダで情報を寄越せと言われてへぇ畏まりましたとは行かないよねぇ……？」

「色々便宜を図ってやってるだろうが！」

ふふふ、馬鹿め。お前達のクランのリーダーが「できれば口を出さないでほしい」って顔をしてるのに気づかないのか。
お前達が出しゃばるたびにその足元に地雷が埋め込まれてるんだぜ？　そしてその地雷は人を陥れる事に楽しさを感じる外道謹製だ。

「便宜？　あの程度で？　冗談キツイねぇ……ライブラリやＳＦ－Ｚｏｏくらい情報アドバンテージがあるならともかく、ただ金があ

るだけのクランなら他にもごまんとあるんだよ？　わかりゅ？　りゅりゅりゅ？」

「あ、僕のパクられた」

「ウザさは完全上位互換だけどな」

「殴られても文句言えないでしょぁれ」

俺からペンシルゴンにバトンタッチした時点で会話の主導権は奴が握っている。

「ライブラリは考察以外にも情報屋のギルド的な側面もある、なるほど確かにユニークを渡してでも仲良くなる価値があるねぇ」

「………」

「ＳＦ－Ｚｏｏも最近ちょおーっとおイタしちゃったけど、動物型のモンスターに対するノウハウは一線を画してる。実際マーキング捕捉してリュカオーンの出現パターンを特定した、なんて聞いた時は流石の私も驚いたよ」

実際あそこ、色々問題を抱えているとはいえ普通に優秀……というかリアルでそういう職業とかの人がいる疑惑あるらしいからな。ペットの病気を相談したらガチ知識で返答してくれた、とか聞いたことあるし。

「別にユニークモンスターの情報を渡さないってわけじゃないよ？　現にライブラリは私たちが提供した墓守のウェザエモンに関する情報は全て開示してるしね」

「それにリュカオーンの行動パターンとか割と提供したよな俺？」

チクチクと正当性の針でつついていく。言い返したいが下手な発言はペンシルゴンに揺っ攫われる。

それが分かっている奴はただ言われるがままに黙り込み、分かっていない奴は出しゃばりたがる。

「リーダー、ここは僕に任せてもらえませんか？」

き、

（（（来たーっ！！）））

断言してもいい、今この瞬間旅狼側の四人は表情に出す出さないの違いこそあれ、全員が同じ感情を共有したと。

「あぁ、一応自己紹介を。僕はリベリオス、クラン「黒狼」のサブリーダーです」

「ほ、ほーん……ヨロシク」

笑い出しそうになるのを必死に押さえ込みながら返答。

表面上一切の変化が無いペンシルゴンは流石というべきか。

同じく顔に感情を出していない京ティメットも……いや、耳がめっちゃ揺れてるわ。

オイカッツォてめーはもう少しポーカーフェイスを覚えろや無理に表情を固めてるせいで梅干し口に含みながらアへ顔してるみたいになってるぞ。

そんな俺の様子を見つめるサイガー１００は一つだけため息をつき、なぜかドヤ顔で出しゃばってきたリベリオス何某に無言で頷いた。この場を任されたと判断しますますドヤ顔が深まっていくリベ何某の顔を鮭面越しに見つめつつ、心の中で同情の言葉を送ってやる。
かわいそうにリ何某、今回のスケープゴートは君だ。

時間は「黒狼」との談合開始よりもさらに前に巻き戻る。
「……えーと、つまり？」
「私とモモちゃんは裏で手を組んでる」
「聞いたか京ティメット、明日の談合が九割茶番になったぞ」
「詳しい説明を求む、って感じだね」

なんというか壮絶に酷過ぎるネタバレを食らった。
とはいえ事情聴取してから最終判断を下すべきだろう、場合によっては重石を括り付けて海に……いやなんでもない。
「モモちゃんはすぐ暴走するけどすぐ冷静になるところが欠点であり美点だからねぇ、それに根本的には穏健派だし」
「じゃあなんでわざわざ談合なんてやるんだよ」
「そりゃあこっちは少数で意識統一できてるけど向こうはそうじゃないし？　向こうはメンバーに明確な結果を理解させなきゃいけないもの」
まぁそれだけじゃないんだけどね、とぺろんと舌を出しながらペンシルゴンは続ける。
「そもそも黒狼が「ゲーマー」と「シャンフロのみガチ勢」で割れてるって話はしたよね？」
「そうだな」
「それ正解だけど間違いでもある、クラン「黒狼」はもっとシンプルに割れてるんだよ……「サイガー１００派」と「リベリオス派」にね」
そもそもガチ勢が求めるものとは何か、火力やステータス、誰よりも先に誰よりも高みにいるという事実……まぁ動機はなんでもいいが、要するに「他のやつより有利でありたい」という感情が根本原理だ。

だがここで疑問が出てくる、それこそがクラン「黒狼」が抱える最大の爆弾だ。

「穏健派、強硬派ってのも正しいけど間違い。正確には「リュカオーンを倒すことを目的とする派」と「トップクランであり続けることを目的とする派」なのさ」

そう、そもそもクラン「黒狼（ヴォルフシュバルツ）」……語呂が悪いという理由で「黒狼（こくろう）」と呼ばれるクランが作られたそもそもの理由はユニークモンスター「夜襲のリュカオーン」を倒す事だ。

ガチ装備に身を包み、トップクランとして君臨することは手段や過程であって目的ではない。

その点から言えばそもそも本来の「黒狼」はガチ勢クランではなく、ライブラリやＳＦ－Ｚｏｏのような「特定の目的」に特化したクランであったはずなのだ。

「あー……待て、なんか背景が見えてきたぞ……」

「奇遇だねサンラク、俺も嫌な予感がしてきた……」

「んっふっふ……そういう事、そもそも今回は「黒狼」と「旅狼」の衝突なんかじゃないんだよ」

「旅狼」＋「黒狼」の穏健派と「黒狼」の強硬派の衝突。異なる二つのクラン同士のぶつかり合いではなく、そう見えるだけで実際は一つのクランの内ゲバに別クランが首を突っ込んだという構図。

「私とモモちゃんはマブダチだからねぇ、結構早い段階で色々と打診は貰ってたわけよ」

クラン「黒狼」……厳密にはリュカオーンを倒したいがために所属する者達はリュカオーンさえ倒せればいい。
なるほど確かにウェザエモンやクターニッドの情報は気になる、欲を言えば欲しい。だがそれは最優先事項を後回しにするだけの理由にはならない。

「ぶっちゃけモモちゃん達が欲しいのはサンラク君達が持つリュカオーンを倒したノウハウだけ、というかむしろ「旅狼（わたしら）」なんかよりも「ＳＦ－Ｚｏｏ」との交渉に本腰を入れたいんじゃないかな」
ＳＦ－Ｚｏｏに口止めさせている張本人がどの口でほざく、とは思うが言ったところで何か変わるわけでもないのでスルー。
「でもリベリオスを筆頭に「プレイヤーの中で一番」でありたいプレイヤー達はそうはいかない」

人間の欲望なんてものは結局のところ底なしなのだ、ナンバーワンにもなりたいしオンリーワンにもなりたい。
そんな奴らにとってユニークモンスターを次々と攻略していく弱小クランなんてものは、目の上のたんこぶ……いや、どれだけベストなスコアを出せても追い越せない音ゲーの一番上の名前みたいなもんだ。
邪魔で邪魔で仕方ないが、その情報（スコア）は欲しい。

「リベリオス派の目的は「旅狼（ヴォルフガング）」からの搾取……もしくは吸収ってとこかな」

強者が弱者に強いることなんて大体その辺りだろう。理由なんていくらでも作ることが出来るし、トップクランに加入できるというの

は一般的には「朗報」に部類される条件だ。
だが別に俺達は廃人に混ざりたくて遊んでいるわけじゃない。そもそも最初の「旅狼」は身内クランだ、正直ペンシルゴンが本格的に魔王プレイを開始した事で何か拗らせ始めている感は否めないが、少なくとも大手クランに吸収されてわーいやったぁ、とは喜べない。
「今回の段取りもおおよそ私とモモちゃんで仕組んでる。露骨な盤面、不甲斐ないクランリーダー、んふふふふ……」
にまぁ、と今この瞬間自分こそがシャンフロを最高に楽しんでいるとでも言いたげな笑顔を浮かべてペンシルゴンは宣言する。
「クラン「黒狼」を内部分裂させる、嗚呼なんて最高に楽しいんでしょう！　ギスギスの不協和音（シンフォニー）が聞こえてくるようだね！」
「なぁオイカッツォ、そろそろ「俺たちは魔王にリアルで脅されてました」的な根回しした方がよくね？」
「んー、魔王が持ってるバズーカの弾頭が何言っても信じてくれないんじゃない？」
ハハハ、よっしゃその喧嘩買った。
前哨戦だ、ぶっ飛ばしてやるよユニーク自発できないマンがよぉーっ！！

狼争真意・生け贄の山羊は誰だ（後書き）

船頭多くして船山に登るとは少し違いますが船で向かう先が大事な奴と向かうための船の豪華さが大事な奴の違い、って感じですね

狼争増援・服従か、追放か

某日某通話記録。

「あ、もしもしモモちゃん？　ごめんごめん撮影が長引いちゃってさぁ、どしたの？　打ち合わせの話？」

『本当に高校時代から変わらないなお前は……シャンフロの話だ』

「ほほう……今をときめくトップクラン様が私らのような木っ端クランになんの御用でしょうか？」

『以前話していたあの話だが、決心がついた』

「……へぇ、てっきり断るかと思ってた」

『断るつもりだったんだがな……あぁ、うん……ちょっと、な』

「んー……まぁ深くは聞かないけどさ、分かってるだろうけどやるなら徹底的にやるよ？」

『承知の上だ、「黒狼（ヴォルフシュバルツ）」の弱体化は不可避だろうが……ふっ』

「？」

『少人数でもユニークモンスターは撃破可能だと、お前達が二度も

証明してしまったからな』

「あー……まぁ、確かに」

『今の「黒狼」は確かに強い、だが……こういうことはおおっぴらに言いたくはないが……』

「ま、邪魔だろうねぇ……リベリオス君」

『若年層を纏めるカリスマは認めるがな、あの手の野心を持つ手合いは組織経営では癌にしかならん』

「言うねぇ、ていうかもしかしてモモちゃん結構キレてる？」

『ん？　ああそれは別件だ、少々姉妹喧嘩をな』

「あー…………………もしかしなくても、妹ちゃんの方？」

『当たり前だろう、仙姉さんと喧嘩などしてみろ、向こう三年は実家の敷居を跨げなくなりかねん』

「デスヨネー……ていうかいいの？　ウチに来たいって、別に身内団を貫き通すつもりもないけどさぁ」

『……その件についてなんだが、な』

「んー？」

『これは「黒狼」から「旅狼」への打診と受け取ってくれて構わない』

「単刀直入に言わせてもらいますが、十人にも満たない弱小クランにユニークモンスターは荷が重すぎると思うんですよ」

この状況を何に例えるべきか。
例えば十匹の山羊が狼に襲われたなら、山羊の群れから一匹が生贄として自ら狼に捕まる事をスケープゴートと言う。
だが今回の場合「真・黒狼」とでも言うべきサイガー100との密約が結ばれている以上スケープゴートと言うには少々作為的過ぎる気もする。

「だが我々なら違う。強力な装備、潤沢なアイテム、重要なＮＰＣとの繋がりもある……貴方々のような弱小……おっと失礼、実力の足りないクランに任せるには、ねぇ……」

この談合は九割が茶番だ、そうではない一割は現在進行形でドヤ顔で喋ってる目の前の奴だ。

なにやら高慢な台詞を恥ずかしげもなく喋り続けているが、これが茶番だと知っている俺達からすればまぁ、その……うん。

サイガー100は黙して語らず、ただリ……リ……リベリウスだったかの言葉を聞いているように見せかけ、ただこちらをじっと見つめている。

「我々「黒狼」に情報を差し出してくれるのであれば、「旅狼」を合併することもやぶさかでは……」

「んー、リベリウスだったか」

「リベリオス、です。何か？」

今回の談合（茶番）、この場にいる四人はそれぞれが異なる役割を与えられている。

ペンシルゴンは全体的な進行役、京ティメットはＰＫ問題についての参考人兼「黒狼」のクランメンバーを挑発する役、オイカッツォはある理由からだんまりを決め込み、そしてユニークモンスターについて語る以外に俺のもう一つの役割が……

「お前達「黒狼」が規模のでかいクランだってのは分かったが、じゃあ尚更今まで何してたんだ？」

「……今まで何を、とは？」

当事者だからこそ俺が適任なのだ、ユニークモンスターを二体、いや三体倒した俺だからこそ「リベリオス派を煽り倒す役」というしょーもない役割を果たすだけの実績がある。

「それだけの実力があってなんで一体もユニークモンスターを倒せてないんだ、って聞いてんだよボケ」

「……あ？」

ぴしり、と空気が凍りつく。
常に笑顔の強キャラってやつは創作におけるある種のお約束ではあるけどさ、上っ面だけニコニコしてても吐き出す台詞が三下臭くちゃどうしようもないだろう。

「お前ら、三回くらいリュカオーンに挑んで三回とも全滅したんだってな？　俺はノーコンクリアしたけど？」

「……そんなものはまぐれに過ぎませんよ、このゲームはそんなに甘くはない」

「面白いジョークだ、リュカオーンだけじゃなくウェザエモンやクターニッドもまぐれで倒せたなら最早俺のリアルラックは最強の武器になるな……で？」

鮭頭をわざとらしくカクカク揺らしながら、自分で自分を殴りたくなるような声音で俺はリベリウスに……いいや、奴に付き従うプレイヤー全員をおちょくるように問う。

「偉っっっそうにしてるけど、クラン「黒狼」さんはこれまでに何体ユニークモンスターを倒したんでちゅかぁ？」

「うわキモッ………待ってサンラク君冗談だから、死んだ魚の目で凝視されると笑っちゃうから」

お前が「殴りたくなるくらいウザい感じで」って言ったんだろがぁー？？？　おーん？？？？

俺は席を立ち、薄っぺらな笑顔の仮面が剥がれて真顔になったリベリウスの所へと近づくと、ペチペチとその頬を軽く叩きながら煽りプレイの更にその先へと踏み込む。

「ねぇねぇ教えてくださいよぉ？　ユニークシナリオEXの存在すらつい最近まで知らなかったトップクラン様が今までなにしてたのかぁ、是非とも聞きたいんだけどなぁー？」

「………っ！」

「教えてくれよぉ。強力な装備ぃ？　潤沢なアイテムぅ？重要なNPCとの繋がりもあってぇ……貴方々のような強豪……おっと失礼、実力が足りてるクランなのに、ねぇ……」

にゅっと鮭頭を近づけ、濁った魚眼をリベリウスに近づけ、今年最高の出来と言っても過言ではない渾身の煽りを叩き込む。

「そうだ！　我々「旅狼」のパシリになるってことなら、「黒狼」を合併することもやぶさかではないかなぁぁぁ？」

プツッ、と。

電脳空間だからこそ感情に反応してそんなSEをつけたのかそれともやはり俺の幻聴なのか……だが確かにキレた音がした。

「生意気な事を……言ってんじゃぁねーぞ雑魚風情がぁ！」

「ふはは、お前の化けの皮薄すぎかよ」

掴みかかってきた手を容易く避け、バックステップで距離を離しつつ煽る、煽る、あお……

「お前達程度、こっちは何時でも切る事が出来るんだぞ……！」

あっ、地雷ワード。

「成る程、じゃあ同盟切っちゃおっか」

話し手切り替え（スイッチ）、特定のワードを奴が口にするまで煽る役割であった俺からペンシルゴンへ。

兎にも角にも「リベリオス派から冷静な判断力を奪う」という目的の為にラスボスが仕込んだ花火に点火される……！

「は、ははっ！　良いんですか？　同盟を破棄するという事は即ち「ライブラリ」「ＳＦ－Ｚｏｏ」とも同盟を破棄するという事！　貴方々が得ていた恩恵を全て捨てることになりますよ？」

リベリウス……あれ、リベリアスだっけ？　まぁいい、リベ君よう……お前のとこのリーダーがその手の工作を一切行っていないこと

に疑問を抱かなかったのか？
そもそも同盟についての談合であるにも関わらず、ライブラリもＳＦーＺｏｏも呼んでいない、という状況自体がおかしいと気づかなかったのか？

「あ、その件について旅狼（ヴォルフガング）から「黒狼」へと通告（おしらせ）があるんだよねぇ……」

パチン、と「黒狼」に選択を迫る音が響き、それを合図として黒狼館へと何人かのプレイヤー達が入ってくる。
例えばそれは一見すれば可愛らしいフリフリの衣装を纏う魔法少女。
例えばそれは黄金の意匠が施された騎士装を纏いながらどこか使い捨ての兵士のような悲哀漂う騎士。
例えばそれは本来ここに来るはずの女性の代理としてやってきた非常に気まずそうな顔をした呪術師。
例えばそれは特徴的な白金の盾を背負った神々しさ漂う女聖騎士。
タイプも違えばプレイスタイルも違う、ただ共通するのは全員がクランを率いる、もしくはそれに近しい身分のプレイヤーであるということ。

「改めて私達「旅狼」は「黒狼」に通告するよ。私達はこれまでの「４クラン同盟」を破棄し、新たに「聖盾輝士団」「午後十時軍」を加えた「６クラン同盟」を結ぼうと考えているわけだけども……

あえてリベリエス君に聞いてあげるよ」
蜘蛛の巣は既に張り巡らされていた、リベレタスは気づいているかな？
この新同盟はこれまでの四クランによる同盟とは全く異なるものであるということを。
「混ぜて欲しいなら、頼み方ってもんがあるでしょ？　土下座とか土下座とか」
「鬼かな？」
「魔王だろ」
「悪鬼羅刹の類ではあるよね」
「あれぇ？　なんで身内からフレンドリーファイア喰らいまくってるんだろうね私ー？」
日頃の行いだろ。

狼争増援・服従か、追放か（後書き）

リベリオス君は悪い意味で狼の皮を被った羊というか、なんで自分が狼に狙われないのかよくわかっていないというか

夏休みの宿題を消化するスケジュール作成は上手いけど実行能力が……という感じ

サーモンラク「その顔が見たかった……私に嫉妬するその顔がぁ……っ！（奇天烈な動きをしながら）」

狼争合意・大体予定通り

かつて結ばれた四クランによる同盟は「三クランが様々な便宜を図る」「一クランがユニークモンスターの情報を渡す」というものであった。

だが今回の六クランによる同盟は根本から以前のそれとは異なっている。

なにせ「一クランが主導権を持ち」「他クランはある程度の条件付きとはいえそれを承諾した」という形なのだから。

「6クラン、同盟……!?」

絶句するリベジタリアン、なにせ新たに加わる予定の2クランはそのどちらもが一線級のプレイヤー達によって構成されている。

「ははは……どうも、カローシスUQです。一応クラン「午後十時軍」のリーダーを務めています」

「キョージュ、まぁご存知の通りだろうが「ライブラリ」のクランリーダーだ」

「あー、ウチのリーダーが今ちょっと……ええと、武者修行の旅的な事してるので代理で来ました「SF－Zoo」のサブリーダー、ヴェットです」

「あー……まぁロールプレイはいらないか、「聖盾輝士団」で団長(リーダー)

やってます、ジョゼットです。本日はそこの元ＰＫさんに誘われて参上しました」

他プレイヤーの情報には疎い世捨て人なので具体的に彼らがどれくらい凄いのか、というのはいまいちピンとこないが少なくともトップクランであるという事だけは知っている。

午後十時以降にメインで活動する社会人を中心として結成され、大体のメンバーが死んだような目をしているものの社会の歯車らしい際立った組織力を持つ「午後十時軍」

攻略よりも考察を優先し、様々なクランや情報屋との繋がりからシャンフロで屈指の情報量を蓄積しているだろう「ライブラリ」

個人的所感としては民度はあまり宜しくはない印象であるが、クランメンバー全員の意思とプレイスタイルが統一されているため型にハマればリュカオーンすら封じ込める「ＳＦ－Ｚｏｏ」

クランメンバー全員が同一規格の装備に身を包み、プレイヤークランの中でも特に異端な「所属メンバー全員がロールプレイガチ勢」という「聖女ちゃん親衛隊」……別名「聖盾輝士団」

「んふふふ……私達は「旅狼」を盟主とした新しい同盟を作らんとしている、同盟の条件としては色々考えた結果こんな感じでね」

何やら他クランも巻き込んで悪巧みしているなぁ、とは感づいていたが要約すると新同盟の条件はこのような感じらしい。

・「旅狼」の持つ情報は「ライブラリ」を通して他クランに伝えら

れる、その後に広く公開される

・「旅狼」を盟主とする同盟に加わったクランは盟主を可能な限り支援する

・「旅狼」の鉄砲玉が獲得したユニークモンスターの情報はオークション形式で先んじて購入が可能

・「旅狼」がユニークモンスターの情報をある程度秘匿する事を認める

・「旅狼」がユニークシナリオEXをクラン内メンバーのみで攻略する可能性を認める

文章だけ見ると酷いなこれ。

「な、なん……こんな……！？」

「ちなみに彼らは皆、これらの条件を快（こころよ）ぉーく呑んでくれたよ？」

「はぁ！？」

リベベリベの驚きは理解できる、なにせあまりにも「旅狼」に有利なこととしか書かれていない。

これでは実質ユニークモンスターに挑む盟主を支援するだけで「旅狼」以外のクランに旨味は殆ど無いに等しいのだから。

だがここでペンシルゴンの外道の業（ワザ）が光る。

この同盟内容、実はよくよく読んでみると殆ど意味がないのだ。
まず最初に「ライブラリ」を介した情報伝達だが、よくよく考えてみればそもそも間に手間を一つ挟んだだけで「旅狼」が情報を出し渋ればどちらにせよ参加クランに情報は届かない。ライブラリは基本的に非確定情報以外は隠さずに公開するし。

次に盟主への支援、これは「可能な限り」という言葉がある通り義務ではなく自由意志だ。この同盟条件には「支援しなかった場合」のペナルティには一切言及していない……つまり、言ってしまえば「支援しなくても問題ない」のだ。

非常に不本意だが鉄砲玉……つまり俺が得た情報は金を積めば他クランよりも先んじて得る事ができる。これは最初の条件を打ち消しており、言い換えれば「秘匿している情報も金を積めば売る」という意味だ。

そして四つ目、五つ目の条件……いや、ネタバラシと行こうか。
この二つの条件は……というか今挙げた条件全てが「黒狼」を、厳密にはリリリベを騙すためだけに設定されたブラフだ、他クランには一切のダメージがない。

何故なら、この同盟はユニークモンスターとはほぼ無関係な理由で結成されたものなのだから。

「私は去る者追わず精神だからね、この新しい同盟に入りたくない、って事なら無理は言わないけど……？」

ニンマリと笑うペンシルゴンに、歯軋りで応えるリベベベリ。そもそも隣にトップがいるのにさも自分の判断がクランの総意みたいな態度するのはどうなんだ？

「私個人としては参加するべきだと思う」

「っはぁ！？　何言ってるんですかリーダー！　こんな条件、ウチに全く利が無いじゃないですか！」

そうだね、ユニークモンスターに関する努力を全部「旅狼」に一任すればそうなるね。そもそも別に「旅狼」は協力体制を拒否するとは言ってないね。

というか条件の内容を読んだ上でもう一段下まで読み解け、って辺りペンシルゴンの悪質さが見えるな。現国のテストか何かかよ、作者の気持ちを考えろって問題あるけどあれって国語じゃなくて心理学の領域じゃないっすかね？

暫く黙して何も語らずリベリベリを見ていたサイガー100であったが、望ましい答えが出ないと結論付けたのかため息を一つついて遂に……いやむしろ意外な事に他クランの代表がいるこの場で第三の議題を口にした。

「…………はぁ。同盟の件への返答は暫く待ってもらって構わないか？」

「構わないよ」

「では最後に……愚妹、もといサイガー0が「旅狼」に移籍を希望している件についてだ」

「………」

「………」

この場にいるプレイヤーの多くが黙り込み、じっと当事者たるレイ氏に注目する。

実の所、俺はペンシルゴンがレイ氏を受け入れるのか否か、その真意を知らない。

黒狼を嵌める、という事は知っていたがレイ氏の処遇に関しては奴は言葉を濁し続けていたからな。今思えば裏でサイガー１００とそこらへんも話していたのかもしれないが、結論は俺もこの場で初めて聞く事になる。

「……そだね、友人の友人とかぶっちゃけ他人だしぃ？　まぁそれなら私をムショにぶち込んだプレイヤーなら他人よりは一段上だよねぇ」

「そうか……では「黒狼」としてはサイガー０にはこれまで彼女の育成にクランがかけた金額＋消費した使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）分の代金を支払った時点でクランの脱退を認める」

至極あっさりと、いや所詮ゲーム内のグループから抜けるにしては大袈裟かもしれないが、思っていたよりも数段あっさりとペンシルゴンはレイ氏の受け入れを承認し、サイガー１００はレイ氏の離脱を承認した。

何やら非常に物申したそうな顔をするリリックスだが、例えクランリーダーだろうとプレイヤーの行動を縛り付ける権利はない故に何も言えない……と言ったところか。

「これ「トントン拍子」の実例としてこの映像を辞書に保存すべきじゃない？」

「むしろ「茶番」の実例じゃね？」

ぽつりと京ティメットが呟いた言葉に返事をしつつも、自分でも形容できない感情を帯びた視線をリペイントへと向ける。
なにせ嘲笑を通り越してもはや気の毒になるくらい外道(ペンシルゴン)に踊らされてるからなぁ……もう無理に強キャラムーブ維持しようとせずに、シンプルにキレた方が精神衛生的に健康じゃないか？

「黒狼」のサブリーダーは煽り耐性が絶無、とはあらかじめ聞いていたが流石にこれは耐性なさ過ぎじゃなかろうか。
実はこれが全て俺たちを欺く仮の姿、とかだったら拍手喝采で賞賛したっていいくらいのおがくずメンタルだ……よく燃えるという意味で。

「さて……」

ちらり、とオイカッツォを見る。
今の今まで黙り続けていたユニーク自発できないマンの出番がそろそろやってきそうだ、俺達によって速攻炎上するおがくずに大量のガソリンがぶち込まれた。

あとはそれを最大規模で起爆するだけだ。

狼争合意・大体予定通り（後書き）

もうすこしリベリオス君を賢くしてやりたいけどこういう手合いはオンラインゲーだと稀によく見かけるのでこのままでもいいかな……と悩み中

狼争決着・結局最後は肉体言語（前書き）

時間がない時ほど文章が思いつくジレンマ

狼争決着・結局最後は肉体言語

そうとも、この談合は「リベリオス」ただ一人をターゲットとしたサプライズパーティーだ。これまでの会話内容も他クランの代表者達の乱入も全てはあらかじめ決まっていたし、レイ氏の処遇やＰＫに関する諸々も決定事項をなぞっていただけに過ぎない。

その目的は黒狼のリーダー「サイガー１００」からの依頼によるリベリエスとそのフォロワーをクランから切り離す事。

具体的に何をどうするつもりなのかは知らないが、ペンシルゴンや切れ者っぽいサイガー１００が何か企んでいるようだし気にしなくてもいいだろう。

「……納得いかない、あいつらは「黒狼」をナメてる！　そうでしょう！」

いい火加減だ。多少の違和感に気付かず、発狂までは至っていない丁度いいヒートアップ具合。

被害者の先輩としてもしリベルオスにアドバイスできたとするなら、奴を相手にするなら冷静な思考を切らさないかさっさと発狂して殴り倒すのが正解だ。下手に考えると術中にハマるぞ？

「落ち着けリベリオス」

「だっておかしいでしょ！　サイガー０はシャンフロ最高クラスのプレイヤーですよ！？　それをただ金を払うだけで「旅狼（ヴォルフガング）」に渡すとか……！！」

無言脱退、無言引退に比べれば律儀すぎるくらい律儀だと思うけどな、たかがゲームのグループから無言で抜けたところで法的デメリットがあるわけでもないし。

それにこのゲーム結構金策が面倒だから多額のノルマ達成で脱退を認めるというのはむしろ厳しいくらいだろう、いや待て金か……金……換金……あ、オイカッツォ準備はいいか？　よーいスタート

「ソ、ソウイウコトナいたぁっ！」

無言で奴の脇腹に貫手。大根と化してるじゃねーかバカ、それだからユニーク自発できないんだ、奴と違ってこちとらゴルドゥニーネのフラグも立ててるしな。

「お前覚えてろよ……ごほん、そういうことならさぁ、もういっそ代表戦みら、みたいのやって決めたら？」

「43点」

「58点くらい？」

京ティメット、採点甘くないか？　ここは甘やかさずに厳しめの点数をつけるべきだろう。

オイカッツォの役割は「決着を決闘でつける」という提案をすること。

その程度の事のために何故オイカッツォを温存し続けたかと言えば、まぁ単純にその前段階で俺やペンシルゴン、京ティメットは喧嘩を売りすぎた。

所謂「後付けで追加された選択肢が妙に魅力的に見える」現象、俺

達三人に「敵意」を向けるからこそ、今まで黙して何も語らなかった向けるべき感情が俺達と比較して薄いオイカッツォの言葉が奴に染み込む。
まぁ要するに散々リリリリリ君やこの場にいる「黒狼」リンリンリン派を煽ってきた俺やペンシルゴンが「バトルで決着つけようぜ！」と言っても裏を探るよね、という話だ。
辛口採点にワナワナと震えるオイカッツォの拳を眺めつつ、何をどうしていきなりバトル漫画みたいな展開にするのかを考えたり、そもそもこんなあからさまな提案にリブリオスが引っかかるのかどうかを懸念したり……
「代表戦？」
後ろにいる奴らも含めて爆釣なんだよなぁ……もう少し裏を考えたりしようぜ。
暇になったのか何か聞きたそうに俺の方をチラチラと見つめてくる魔法少女の視線をスルーしつつ、俺は大根演技で台本通りの台詞を吐くオイカッツォを眺め……あーダメだ暇、インベントリア弄ってよう。
「えーと、「眠れる宝石」が１０個で４００万マーニだったたからこれとこれを合わせて……」
んー、称号の時点でなんとなく分かっちゃいたが、これ総資産余裕で十億ぶっちぎってないか？　宝石だけで４桁超えてるし、宝石以外にも財宝系アイテム腐るほどあるし。
問題はこれを全部マーニに換金できるかどうか、なんだがこれに関しては心当たりが一つある。

適当にペンシルゴンを金で釣って上手いこと渡りをつけられればいいが……もし上手くいけば一晩で億万長者だ、レイ氏の借金を肩代わりすることも可能だろう。

と、俺の手首と一体化したインベントリアをじっと見つめる視線が一つ。

「……ねぇ、それ何？」

「うお近っ、あー……ジョゼット、だっけ？」

「えぇ、よろしくね？　うん、貴方とあの二人も同じのを付けているし、最初はクランメンバーの証的なものかと思ったんだけど」

ちらとジョゼットが京ティメットの方を見る。まぁこれは「旅狼」の初期メンバー……墓守のウェザエモンに挑んだ三人だけが持っているアイテムだしな。

「で、それって何かしら？　ウィンドウを出せるってことはただの飾り（アクセサリー）じゃないんでしょう？」

いや近い近い、顔を近づけんな顔を。生臭いぞ？

「まぁなんというか一言で言うと…………無限インベントリ」

「はい！？」

ぼそっと呟いた言葉であったが、このゲームにおける所持限界を解決するアクセサリーに一番の反応を示したのは聞いてきたジョゼットではなく、午後十時軍の過労死する有給……ではなくカローシス

ＵＱであった。

「え、マジで？　無制限って重量とかも？　あ、今後ともお世話になるからよろしくお願いします」

「あ、どうも」

威風堂々たる直角の一礼から流れるようにこちらへと近づいてくる。男アバターが近づいてくるのと同時にすっとジョゼットが一歩距離を取ったのがすこし気になったがまぁいいや。

「え、これユニークモンスター由来？　超欲しいんだけど……一応聞くけどトレードとか無理？」

「順番に答えると重量制限無しでどれだけ詰めても重さは変わらない、ウェザエモン撃破した時の報酬だけど汎用アイテムっぽい、装備した瞬間外せなくなるからそもそもトレードできない、って感じ」

ウェザエモン戦の時は「ウェザエモンが使う技の奥義書」「恐らくウェザエモンが所蔵していた規格外の戦術機獣のリアクター」「なにやら隠された効果がありそうなアクセサリー」。「ククターニッド戦の時は「クターニッドが使用する八つの聖杯」「クターニッドがプレイヤーになんらかの危機を報せる鈴」。

この二つの例はどちらも「ユニークモンスターと関連したアイテム」であるが、インベントリアだけはその例に当てはまらない。

神代、という点ではウェザエモンに関連しているかもしれないが、どちらかといえばウェザエモンのアイテムを格納するための宝箱が中身を取り出した後でも再利用できる……といった感だ。

そこで建てられた推測は「格納鍵インベントリア内にあるアイテムはウェザエモン戦限定であるが、インベントリアそのものは汎用アイテムではないか」というものだ。
そしてこれが事実であるならばこのシャンフロの世界の何処かにはインベントリアをドロップする敵、もしくはアイテムとして設置されたエリアがあるはず。となればやはり一番怪しいのは……
「やっぱユニークモンスターは実入りが良さそうだな……とはいえウチはワールドクエストメインで行く方針にしたからさ、次ユニークモンスターに挑む時は事前に知らせて欲しいかな」
ワールドシナリオか……ユニークモンスターを倒すごとに進行していく世界の変遷は少なくとも「第四段階」で何かが起こることは確定している。
「もう情報が広がってるだろうけど、新大陸の方でデカいドラゴンが出て先行組は大混乱なんだよな」
「デカいドラゴン？」
「そうそう、ウチのギルメン……じゃないやクランメンバーが野良パで初遭遇してさ、ワールドクエストの進行で発生したっぽいからできれば次のユニークモンスターが倒されるタイミングを事前に知りたいんだよ」
成る程、ライブラリ以外は何を餌に同盟に参加するよう釣ったのか？　午後十時軍の場合はユニークモンスターを倒すタイミング、ワールドクエストの進行を餌にしたのか。
ワールドクエストがユニークモンスターの撃破によって進行するの

であれば、俺達がやった事はすなわち人のセーブデータを勝手に進めたようなもの。
ＭＭＯというカテゴリの性質上特定の個人を優遇できない以上、状況が動くタイミングを把握できる事は大きなアドバンテージになる。言うなれば突発的に発生する竜巻を事前に察知できるようなものだ、タイムイズマネーという言葉もあるしな。

「新大陸に出現した喋る黒い竜、ユニークモンスターの一体であるジークヴルムを強く敵視するそのモンスターがはたして何者なのか。新大陸において一日の長を持つ午後十時軍には我々ライブラリも期待しているとも」

うげ、ついにエセ魔法少女も混ざってきた。

「目撃者達の発言を纏めると、ジークヴルムを敵視する「竜」はどうやら他にも何体か存在すると推測される。そして新大陸にいる様々な人間種の亜種……これは新大陸全体の人間種族を巻き込んだ騒乱になる可能性もあるだろうね」

「相変わらず情報纏めるの速いっすね……」

「断片的な情報を纏めるのが仕事なものでね」

カローシスＵＱの言葉を軽く返してだからもっと情報プリーズ、という気配を隠そうともしない見た目だけは可愛らしい魔法少女の期待に輝く目から顔を背けつつ、ふと俺は京ティメットに視線を向ける。

「………ふふ」

すりすりと刀の柄尻を撫でる様子は、遠くない未来にやってくる戦いを喜んでいるようで。そしてそれはペンシルゴンの弁舌がまんまとリバリバリを丸め込んだことを示している。

クラン「旅狼」とクラン「黒狼」の代表戦。

こちらが勝てば理不尽な要望を全て通し、向こうが勝てば情報の全開示。ハイリスクハイリターン？　大凡外道共の予定通り、全くもって酷い話だ。

日時は一週間後の夜、五対五とのこと……ん？　昨日の段階で予定を聞いてそこから少し寝て今日に至るので……

一週間後？

自然な流れでデュエル
Q．こんなあからさまに怪しい誘導に引っかかるの？
A．リアルならともかく彼らは今、電脳とは言えファンタジーの中にいますから

・聖盾輝士団
正式なクラン名は「聖女ちゃん親衛隊」であり「聖盾輝士団」とはNPCが設立した組織名、つまり「NPCが作った聖盾輝士団という枠組みにクラン「聖女ちゃん親衛隊」がそのまま入った」という事。

教会の盾たる聖盾輝士団の団長は非常に厳格な人物として知られている

ロールプレイヤー兼とあるNPCのフォロワー集団である聖女ちゃん親衛隊のリーダーはシャンフロ最強クラスのタンクであり、ガチのレがズな人物ではないかと言われている

スリップ・スラッシュ・スクランブル

黒狼館から脱出。何故か他クランの代表達もぞろぞろとついてくる中、外道達と俺は何をするでもなく歩いていた。
五対五、「旅狼」の暗黒面に属するのは四人。計算としては一人足りないわけだが……？

「まぁなんとかなるか」

さぁ用事も終わったしとりあえず晩飯食うためにログアウトして、それからどうすっかなー……うん。

「何故俺は路地裏に引きずり込まれた挙句に捕獲された宇宙人みたいな体勢なんですかねぇ」

「んー、簡潔に言うとですね」

「はい」

「君を売って彼らを呼びました」

「うおおおお離せえええええ！　ジュネーヴ条約違反だぁぁぁあああ！」

畜生！　来週はエナドリキメて徹夜確定した上に今度はこれかよ！
ゆとりが欲しい！　時間にゆとりが欲しい！
くそ、嘆いたところで乱数は非情だ。だが俺は拷問された程度じゃ

口を割らないぞ……！

「とりあえず「ライブラリ」と「午後十時軍」に関してはクランとして返答ができる内容なんだけど、「聖女ちゃん親衛隊」に関してはサンラク君個人をご指名なんだよねぇ」

ナチュラルにハブられるＳＦ－Ｚｏｏに涙を禁じ得ないが強く生きて欲しい。

と言うか俺個人を？　色々嫌な予感しかしないが話くらいは聞いてやってもいいだろう。

「まぁ用件だけ話すと聖女ちゃんが君に関心を持ってるんだよね、だから聖女ちゃんの忠実なる盾である私達は彼女の願いに応えなければならないの……」

聖女ちゃん、正式名は確か地雷の聖女イージス・テラみたいな……いやなんだ地雷の聖女って。慈愛だ慈愛、地雷じゃどう見てもウォーモンガーじゃねーか。

いつだったかサイガー１００が同盟の条件の一つに挙げていた「呪い（マーキング）」を解くことが出来るＮＰＣだったか。

ぶっちゃけ「刻傷」にアップグレードされた事で本格的に解除不可になった以上、こちらから会いに行く理由はほぼ無いのだが……

「俺に？」

「そう、実は私らも独自に貴女を探してたんだけど、見つからなくてネ。クランぐるみで仲良くすれば捕捉できるかなって」

「籠を棒で支えて引っ張るタイプの罠にクソゲー餌にしておけば簡

単に捕まりそう」

はいそこうっさい、俺をなんだと思ってるんだ。あーでもギャラクシートラベラーの初回特典付き未開封なら飛びつくかも、あれクソゲーのくせにプレミアついて二十万とか頭おかしい値段になってるし。

世界観を忠実すぎるほどに再現した結果「広すぎる宇宙で定期的にマップデータが消し飛ぶせいで同じ場所には二度と戻れない」という強制一期一会。

大体４０％の確率で宇宙船に隕石が激突するのでタイミングを合わせて適当な恒星系の近くにいないと宇宙の藻屑になるデンジャラスギャンブル（強制）

およそ６０％の確率で敵対的種族に遭遇するので宇宙船内のキャラは平和を謳うくせにゲームが進むほど宇宙船が戦艦と化していく事。

そして何よりひっきりなしに発狂するＮＰＣクルーのメンタルケアをしないとクーデターを起こされて強制ゲームオーバーする。

これらの点に目を瞑れば中々の良作なんだよなぁ……あ、忘れてた初回特典でゲームと連動して星の位置が変わるガチのプラネタリウム装置をつけて新品のお値段十二万円という点にも目を瞑れば、もだ。

俺はプラネタリウム装置（十一万八千円）抜きのゲームのみ版を購入してプレイしてみたが、あれは中々に虚無に呑まれるゲームだった。

こう、ゴールのないマラソンを死ぬまで続けるような、日本の国土より広い砂漠で蟻のコンタクトレンズを見つける為に彷徨うような……あぁ、タンホイザーゲートごと恒星が爆発して宇宙戦艦が征く……

「……っは！？」

し、思考が宇宙の果てに飛んでいた。

いかんいかん、ゴールのない虚無ではあったがゲーム性そのものは割と面白いのでやめ時が見つからず、四ヶ月くらい延々と銀河帝国に喧嘩売ったりした事もあったがなんとか意識が地球に帰還したので現在は棚に封印（かざっ）してある。

「……というわけなんだけど、どうかな」

「え？　……………え？」

「あーこれは話聞いてない時のサンラクだね、一発殴って正気に戻さないと」

「聞いてる聞いてる、つまり聖女ちゃんに会いに行こうって話だろ？　どの惑星だ？」

「成る程、お仲間さんの言う通り聞いてなかったみたいね……一週間後に黒狼と代表戦をするようだしその前日の予定は空いてるかなって聞いたんだけれど？」

何故どいつもこいつも一週間後に予定を詰め込もうとするんだ。

「ダメダメ、その日はラビッツでゴルドゥニーネの分け身を殴りに、行……く…………あっ」

「ゴルドゥニーネ？」

口は割れなくても滑るってかはははは……

「……」

「……」

この場にいる全員が完全にフリーズする中、穏やかな笑みを鮭頭の下で浮かべながら俺の腕を掴むオイカッツォと京ティメットを優しく振りほどき、瑠璃天の星外套を装備しつつごく当たり前のように路地裏から抜け出し……

がしっ

「何でしょうか見た目詐欺爺さん」

「今の話をもっと詳しく聞かせて欲しいのだがね？」

「面倒なのでまたの機会に、【瞬間転移（アポート）】！」

「あ、逃げた！」

「瞬間転移（アポート）ならまだ近くにいるはず！　四肢を斬り落としてでも捕らえるよ！」

「いやこえーよ！」

「いたよ！　あそこだ！」

ちくしょおおおおお！　俺は自由を愛する一匹の魚ァーッ！　鯉が滝を昇って龍になるなら鮭なら何になるんだァーッ！

…………

………

……

「ふ、ふははは……逃げ切ってやったぞ……アイアムストロングサーモン……」

「なんだかサンラクサンのヴォーパル魂がしょーもない上がり方してる気がするですわ……」

今日積み上がった面倒ごとは着払いにして明日の俺に発送だ。頑張れ明日の俺、過去から未来へエールを送ろう。

はいどうも明日、もとい今日の俺です。昨日の俺から着払いで発送された面倒ごとですがさらに明日に送りつけることにしました、頑張れ明日の俺。
というわけで面倒ごとを彼方に放り投げた俺は別の苦行に飛び込むことに……脳天に一撃！

「だぁーっ！　勝てねぇええええ！！」

もうなりふり構わずに殴りかかってるのに、俺の攻撃が届かないギリギリの回避だけで完全対処される！
なんなんだあのクソＡＩ！　トレースＡＩとかぜってぇ嘘だろどう見てもＴＡＳじゃねーか！
人間関係に疲れた俺は荒んだ心を癒すべく鬼つよクソボスが待ち受けるＶＲ剣道場で、何度目とも分からぬ面を食らって床に沈んでいた。

「くっそぉ……ガチの達人じゃねーか……」

シルヴィア・ゴールドバーグも大概人力ＴＡＳであったが、あれは俺と同じで反射的な動きを極限まで格ゲー用に突き詰めたものだ。……だけどこのかつて実在した剣士は違う、端的に言うと見てから避けられてる。
剣の速さを見切っている、とかではなく全体的な動きから次の手を完全に見切られているようきな。俺が一歩踏み出した瞬間にどんな攻

撃が来るのかを見抜いて最低限の動きで対処されている。
言うなれば譜面を完全暗記した音ゲー、次に何が来るのか分かっているのだから派手な動きは必要ないと言わんばかりの最適化の極みだ。

「ていうか当たり前だけど剣の扱いが異次元すぎる……」

最適、最短、最速の軌道で振られる二刀はこちらの対処よりもテンポが１．５倍くらい速い。
なんと言うべきか、流れ続ける水のような太刀筋だ。剣の動きが止まらない上、一度攻勢に入れば対処できないくらいの連撃に押しつぶされてしまう。

「というかどういう動きしてるんだあれ……右の竹刀をこう動かして、左を……んん？」

足運びはこんな感じで……よしっ

「見切ったぞ龍宮院富がべしぃっ!？」

全く見切れてなかった。
つーか今、踏み込みの瞬間加速しやがった……ねぇこれ本当にアシスト無し？　向こうだけアクションゲーとかの処理を流用してない？

「くっ……本格的な対策が必要だ……覚えてやがれ！」

ぜってー勝つ！

……と、意気込んだはいいものの。

「シルヴィア・ゴールドバーグといいなんでこう極端に強すぎる人間って存在するのかなぁ……」

概要だけではなく、もっと深くまで「龍宮院　富嶽」という人物を調べてみれば出るわ出るわ。同姓同名の創作キャラの設定を間違えて見ているのではないかと何度も疑ってしまうような武勇伝の数々がな。

公式戦のみでも生涯戦績八千二百三十八勝六敗だとか、龍宮院道場にはこの人が勝ち取ったトロフィーだけで床が抜けた場所があるだとか、四十歳よりも前は相手の竹刀を吹き飛ばす程の剛剣の使い手だったとか……俺は一体何を見ているんだ、ボスキャラの概要でも見ているのか？

「コレを完全にトレースしたＡＩ、かぁ……」

とりあえずこのリアル剣聖な爺さんが負けた六試合を見るところから始めるるか。

スリップ・スラッシュ・スクランブル（後書き）

路地裏に連れ込まれる半裸の女性（鮭頭）

シャンフロとは無関係の新作書きたい欲求がムラムラと湧いてきましたが時間と腕と脳みそが足りないので誰か俺をカイリキーにして下さい

今明かされる衝撃のクソザコストロング「ゼロ」（前書き）

作者をも騙す衝撃の能力に腹筋ねじ切れるくらい笑ったので明日の分を今公開します

今明かされる衝撃のクソザコストロング「ゼロ」

勝てない、全くもって勝てない。そもそも付け焼き刃の対策で勝てるとは思っていないが、それにしたって勝てない。

夢の中にまであのクソ強ＡＩ出てきたからな……ちょっとした暇つぶしのつもりがリアルにまで侵食されてきたぞ。

「踏み込みを二段階で入れて攻撃……いや、白刃取り……」

「おっ、おひゃようございます！」

「あ、斎賀さんおはよう。頭、胴、手をメインに狙って来るんだから攻撃を誘発して……」

斎賀さんとのエンカ率高いなぁ、と思わなくもないがそんな考えはＡＩ範士・極を如何にして打倒するかという思考に流されていく。

相変わらず斎賀さんは顔が赤いが暑がりなんだろうか？　相手に対処させない速攻……いや、対処に対処を重ねてパンクさせる……あ、そうだ。

「そういえば斎賀さんって武術？　とかやってるんだっけ」

「は、はいっ！　瓦割れます！」

「かわら……まぁいいや、聞きたいことがあるんだけどめちゃくちゃ強い人と戦う時に勝つ為にどんな努力をしたりするの？」

「へ？　ええと……私の場合はあくまでも護身の一環なので詳しく

は知らないですけど、例えば相手の動きを自分で真似してみたり、とかでしょうか」

相手の動きを？　いや待て護身術なのに何故瓦を割る？　不埒者の顎を瓦のように叩き割りますってこと？　怖っ！

俺の顔に疑問符（恐怖混じり）が浮かんでいるのに気づいたのか、斎賀さんは俺でも分かるように説明を続けてくれる。

「相手の動きを自分のものにする、というわけではないですが……例えば「この動きをしている時にこれをされたら嫌だ」って動作を探したりできますし、やっぱり見て覚えるよりも実際にやってみたほうが覚えられますから」

成る程、相手の気持ちになることで弱点を見出す。同じ動きをするならば弱点もまた共通する、と。

「成る程……ありがとう、為になったよ」

「い、いえいえいえ！　ええと……な、何故そんな事を？」

「え？　あー……ほら、ロックロールで俺が買ったやつあったじゃん？　アレの裏ボスが滅茶苦茶強くてさ、龍宮院　富嶽？　って人のトレースＡＩなんだけど」

「富嶽お爺様の……ですか」

「富嶽お爺様？」

赤の他人の呼び方にしては妙に馴れ馴れしいが……え、もしや

「あ、その、えと……その、ですね？　斎賀家と龍宮院家は……その、遠縁の親戚なんです」

「え、マジで？」

「はい、私の姉……あと、えと、姉が二人いるんですけど二番目の姉の方が龍宮院流を修めています」

斎賀家の戦闘力高すぎない？　というかトレースＡＩとはいえ斎賀さんの遠縁の方に「死ねえええええ！」とか叫びながら殴りかかってるんだけど大丈夫か俺、クリアと同時に一門の刺客に闇討ちとかされないよね？

「私と同年代の従姉妹の子とか凄いんですよ？　剣道をやってるんですけど、関西では敵無しで…………ぇあぅ」

楽しげに話していた斎賀さんだったが、突如人の喉から出るとは思えない奇妙な音を立てて動きが止まる。

「？」

「あ、あのっ！　ののののっ！　すいませっ、すいませんっ！　こ、こんな、身内の事ばかりペラペラと……！！」

「へ？　いや別に……（話の流れ的に）俺とも関係のある話だし」

「わたっ……関係……っ！？　それは、籍……！？」

「咳？」

「なんれもないれす！」

お、おう……何というかつい最近まで住む世界が違う芸能人的なイメージだったけど、話してみると中々テンションが愉快な人だな斎賀さん。

「そろそろ学校着くね」

「そ、そですね……あ、の！」

「何か？」

「えと、そのあの、えと……その、あの……」

「えと」「その」「あの」がループしてる？　そんなどうでもいいことを考えていると意を決したかのように斎賀さんが顔を上げ口を開く。

「ほ、放課後！　お時間ありますでしょうか！」

「え？　あぁ、まぁ特に用事はないけど……」

「その、あの、大事なお話があるので、その……ロックロールに！　行きませう……か？」

大事なお話？　何だろう……ロックロールを選んだということはゲーム関連の話か。

「オッケー、じゃあ放課後」

「はひゃあい！」

愉快な人だなぁ。

「……で、俺は何故教室の隅で取り調べを受ける容疑者みたいな状態にさせられてるんすかね」

あれ、なんかすごいデジャヴを感じる。最近はアレなのか捕まるのがトレンドなのか？　プリズンブレイクすりゅ？

「容疑者陽務　楽郎、最後に何か言い残すことは？」

「とりあえず何で取り調べされてんの？」

「宜しい、では処刑する」

拘束から処刑までの過程全部飛ばすのやめーや、中世だってもう少し時間かけて処刑に持ち込むぞ。

「何でちょくちょく斎賀さんと登校してるんだよ！」

「何でって……学区が同じだからじゃねーの？」

「斎賀さんは車登校だろ、何でお前に合わせてるんだよ？」

「本人に聞け」

「まさかとは思うけどお前、斎賀さんと付き合ってたりとか……」

（「私は神だ」と主張するハムスターを見るような目）

嘘を浮く理由も隠し立てするような事情もないので聞かれたことに対して普通に答えていく。さて、

「さて、言いたいことはそれだけか？　者共、奴を捕らえろ」

「え！？　なんでこの流れで俺が捕まえられるの？」

「よろしい、それではピアス穴拡張の刑を実行する」

「おい非人道的処刑じゃねーか！　あーっ、やめろっ！　ピアス穴を引っ張るのはやめろぉぉっ！　なんでお前らは俺のピアス穴を広げようとするんだぁ！」

雑福ピ（雑菌福耳ピアスの略）に非人道的制裁を与えつつ、それでもやはり俺の脳内はゲームの事で八割埋め尽くされていたのであった。

あ、耳を重点的に攻めるのは君が一番いいリアクションをしてくれるからだよ。

放課後、斎賀さんが何やら大切な話？　をするらしいので一足先にロックロールへ。

「うぃーっす」

「はぁい陽務君、青春してるかい？」

「高い壁を超えんと頑張ってるんで多分青春してますね」

「ベッドに横たわる青春かぁ……」

まぁ行動ではなく状態を見ればそうとも言う。俺の場合業務用なので椅子に座って脱力してる形になるが些細な違いだ。

「何か買ってく？」

「いや、なんか知らないけど斎賀さんに呼ばれたんですよね」

「……ねぇ陽務君、なんで呼ばれたと思う？」

なんで？　わざわざロックロールを場所に選んだ理由、そしてこれまでの会話から導き出される答えは……！

「……危険因子の、抹殺？」

「何故そうなるかなぁー？」

あいにく脳内がＡＩ龍宮院富嶽に埋め尽くされているので、直近の会話から導き出された答えは「龍宮院流を超える者をあらかじめ抹殺する」というものだった。

斎賀さん物理攻撃力高いし首トンって意識刈り取ってきそう。

「朴念仁というか、ドラッグカーを公道走らせられるように改造するところからスタートかぁ……」

「ドラッグカー曲がれないじゃないですか」

「そうだね、人生ドラッグカーだね」

会話が噛み合わないな、一体岩巻さんは何の話をしているんだろうか。

「時にだけどさ陽務君」

「はい」

「数字の零（ゼロ）って日本語でなんていうか知ってる？」

「零（レイ）ですね」

「じゃあその逆に零（レイ）を英語にしたら零（ゼロ）だね？」

「そっすね」

「じゃあさ、君が最近出会った零（レイ）を零（ゼロ）にしてみたり、その逆にしてみよっか？」

「……………？」

最近出会ったゼロをレイに……？

ていうか最近ってどこまで遡ればいいんだ？　あぁ、そう言えばレイ氏とか名前に０（ゼロ）が入ってたな。

つまりサイガー０（ゼロ）をサイガー０（レイ）に…………………んぬぁ？

サイガー０、サイガーレイ、さいが　れい……斎賀（サイガ）　玲（０）？

いやまさかそんな、いやいやまさか、そんな安直過ぎる……ユニーク自発できないマンですらもう少し捻った名前にしてるし……はははは

「あ、あの……来ま」

「レイ氏？」

「しぁえふぁえんいおぁ！？」

シャンフロにその名を轟かす最強プレイヤーの正体は、リアルでも

ストロングな高嶺の花であった……

えっ、ゲームもリアルもヒエラルキー上位とか最強じゃん。この人リセマラ不可の誕生ガチャで怒涛の最高レア叩き出してやがる……

怖っ

今明かされる衝撃のクソザコストロング「ゼロ」（後書き）

プロット的なものを書いた段階では「サイガー０＝斎賀　玲」であることは狼争前に明かされるはずだったのに作者が素で忘れていたというミラクルクソザコパワー

そういえばこの章でヒロインちゃんに本気出させるって自分で言ったんだった……

人、その一歩を進展もしくは挑戦と呼ぶ

今明かされた衝撃の事実、シャンフロにおける「最大火力（アタックホルダー）」の保有者、そしてリュカオーンやクターニッドとの戦闘で多大な貢献をしていた廃人プレイヤー「サイガー０」の正体はなんと斎賀　玲その人であった……！

「つーか、もしかしてその逆もばれてます？」

「はははゴメンね、「サンラク」ってプレイヤーの話を玲ちゃんが話した時もしや！　と思って話しちゃった」

まぁ確かに多少の違いはあれ基本的にゲームする時はＰＮを「サンラク」で統一してるけど。あーでもこれに関してはリアルでレイ氏……もとい斎賀さんが言及するくらい悪目立ちした俺が悪いのか？

「えと、その……黙ってて、ごめんなさい……」

「いやいや、大っぴらに話すことでもないし……」

いや待て、だったら何故今それを明かした？　ゲーマーにとってリアル情報とはある種のタブー、リアルでの付き合いに進展する程の友好をゲーム内で築いたならともかく今この時、それもクラン関連でゴタついている今明かした理由はなんだ？

「ふっ……成る程ね」

やはり策士か、レイ氏の中身が文武両道完璧超人の斎賀さんと判明

した以上納得だ。今この瞬間斎賀さんがレイ氏とイコールであることを明かした理由、それは「サンラクとの独自のコネクション」の形成だ。
例えばペンシルゴンとサイガー１００が裏で繋がっているように公式、非公式な繋がりのさらにもう一段奥にラインを繋ぐ。
俺という多量の情報を抱え込んだプレイヤーとのコネクションで今一番強固であるのはペンシルゴンとオイカッツォだ、次点に「旅狼」のメンバーだろう。

だがここにリアルで明確な繋がりを持つレイ氏が入ってくると話は大きく変わってくる。
レイ氏はクターニッドの撃破に大きく関わっている、それ即ち旅狼の半数と繋がりがあるという事。だがこれだけでは足りなかった、なにせサイガー０が「旅狼」に所属を希望している以上、クターニッド組が持つ情報は「旅狼」にしまい込まれる。つまり別にレイ氏だけのアドバンテージではなくなるわけだ。

だが俺と個人的な繋がりがあれば？　ぶっちゃけクランメンバーにも明かしていない情報を大量に抱え込んでいる俺と個人的なコネクションがある、というだけでまぁライブラリは爆釣できるだろう。

そう、レイ氏の……斎賀さんの狙いは俺以外のプレイヤー達の中で一歩先んずる事。俺に追いつくのではなく、俺を追う者達の中で頭一つ抜ける事……っ！
現状俺や秋津茜しか知り得ないラビッツという情報に近付く為の布石……！

だがそうだとしてもなんたる胆力、リアルバレという諸刃の刃をあえて己に突き立てるとはな。
こちらのリアルを暴きつつも向こうもリアルを明かすことである種

の連帯感を形成している。それになんだかんだリアルで共通の趣味を持ってる奴がいると嬉しいという心理的脆弱性を巧妙に刺激している……！

「悪魔的、智謀……っ！」

「ち、ちぼう……？」

「深追いは禁物だよ玲ちゃん、劇的な進展よりも確実にフラグ建てて行こうね」

「は、はい……！」

そう、岩巻さんのいう通りだ。
いつから向こうは俺がサンラクだと気付いていた？　まさかサードレマ脱出時にはすでに特定していた？あり得る話だが、なおさら信じられない。
夏休み真っ只中から今に至るまで俺に「レイ氏＝斎賀さん」の方程式を一切悟らせる事なく俺のレイ氏への印象が良くなるまで機を見計らっていたとはな。

ふふふ、やられたよ。騙された！　という怒りよりもマジですか！？　という驚愕が凌駕している、まるで推理小説で劇的な伏線回収を見たかのように、な……

「えと、その、あの……」

「ん？」

「もし、その、よろしければ、ええと……今晩、じゃなくて明日、

明日に！………い、いっひょに！　シャンフロ、やり、やりません、か……？」

ふふふ、ここで一気に俺を追い詰めるつもりか……上等だ。

「オッケー、どうせ来週まで暇みたいなもんだったし」

受けてたってやるぜぇ！

楽郎が先に店を出てしばらくして。

「玲ちゃん、今日だと気持ちの整理がつかないからってちょっと時間稼ぎしたでしょ」

「うっ……」

「そういうところよ？　そういうところ。別に即日押し倒せなんて言ってないけど、そういうところ直していきましょうね？」

「うぅ……」

「いい？　鉄は熱いうちに打て、って言うでしょ？　貴女が挑もう

としてる鉄は放っておくと勝手に飛び去っていくようなものなんだから、手元にあるうちに速攻で叩かないとダメなのよ！」

「が、頑張ります……！」

「まぁ、数年越しの快挙だし今日は宴ね。私は秘蔵のお酒開けちゃうわ！」

それはそれとして、だ。

レイ氏、もとい斎賀さんのアドバイスに従い俺は打倒龍宮院　富嶽、もとい打倒ＡＩ範士・極を達成するべく行動を開始する。

「兎にも角にも、動きの効率化が極まってるんだよな」

つい最近まで生きる伝説扱いされていた爺さんなんだ、動画サイトでもなんでも漁れば試合動画は大量にヒットする。

人気があるのだろう動画投稿者が「シャンフロで噂のあの人を捜索

する！」みたいなタイトルの生放送をしているのは見なかった事にする。

「これが五年前、これが三年前……」

そして数十年前の記録映像も確保、新しい方から順番に再生してその動きを目に焼き付ける。

「足捌きも大概けど、最高効率で動く竹刀が何気に頭おかしすぎる……」

映像の中では、二人の剣士が竹刀を持って向き合っている。互いに竹刀を構えて対峙していたが、クソ強爺さんの対戦相手が堪え切れなくなったのか、裂帛の気合を上げて斬りかかり……大上段の一撃は何もない虚空を斬り裂く。

竹刀がどこをどの速度で通るのかを完全に見切った上での一歩半の後退、だがそれだけで挑戦者は致命的な隙を晒してしまう。

慌てて距離を取ろうとしても、すでにターンを明け渡してしまった以上、龍宮院　富嶽の攻撃に対処しなければ次の自分のターンは巡ってこない。そしてこの爺さんの攻撃はウェザエモンもびっくりな掠ったら即死（剣道のルール）に基づいているわけで。

俺は剣道にそこまで詳しくはない、奇声を上げながら頭、胴体、手の甲を叩けばええんやろ？　程度の知識だ。　だがそれでもこの爺さんの動きが他とは隔絶した技量であることは分かるぞ。

相手の竹刀のリカバリを読みきった牽制と、己の行動が妨げられる事はないと言う確信を前提とした踏み込み。機動力が段違いの剣士が滑るように、それでいて一瞬で挑戦者の懐へと肉薄し龍宮院　富嶽の右腕がブレ……快音。

派手なエフェクトがあるわけでもないのに現実で起きたはずのその試合は、ゲームのワンシーンと言われても信じてしまえそうなほどに現実離れしていた。

「これ参考にならないやつだ……」

いや待て諦めるのは早い。龍宮院流なんだろう？　流派とは即ち体系化された「教え」だ。
つまりそこには共通する動きがあり論理がある。何もゼロとイチをディスカッションしてエビデンスするだけがロジックじゃない、後に続く者が参考として理解できるものがあるはずだ。

「龍宮院流、龍宮院流……あった！　龍宮院流……って高えよ！？」

教本一冊９８００円！　金欠の高校生には中々つらいお値段だ、却下！！

「くそ……やるしかない、動作（アクション）程度ならパクれるが、全体的な流派（モーション）か……」

見様見真似（なんちゃって）龍宮院流、どう考えても龍宮院流正当後継者とかにボコられる雑魚敵感は否めないが、敵を知り己を知れば百戦危うからずってヤツだ。

「幸い、トレースＡＩなんて最高の敵（先生）もいるしなァ……！」

覚悟しろＡＩ範士・極、ゲームの敵は倒されるために存在するんだよ……！

本日の戦績、三十五戦三十五敗。

人、その一歩を進展もしくは挑戦と呼ぶ（後書き）

なおドンペリが開けられた模様

これは主人公が攻略し、同時に攻略される物語。
頑張れヒロインちゃん、ここから先はプロット段階ですら曖昧な未知の領域だ……！

芯に捉える事による運動量の完全伝達と運動エネルギーを他者に依存した飛翔

今思えば、やけに斎賀さんとのエンカウントが多かったのもシャンフロでのリアルバレを前提とした策略だったのだろう。とはいえこれからはシャンフロ廃人であることを前提に話を振ることができるのは気が楽でいい。

「あ、そういえば」

「は、ハイなんでしょう！」

「いや、そう言えば「旅狼（ヴォルフガング）」入りがほぼ内定したなら、クランメンバーで使ってるＳＮＳのアドレス教えた方がいいかなって」

「アドレ、ス……！？」

「そうそう、とりあえず俺の個人アドレス送るからこっちで参加させるよ」

うわなんか凄い顔してる。

ブレーメンだか冷麺だかの反応した猫みたいな……

「こっ……ここっ、交換……っ！」

「お、おう……そう、交換」

関節が錆びついてしまったかのような動きで鞄の中から携帯端末を取り出した斎賀さんは、それをゆっくりとこちらへと差し出して……

「ふ、不束者ですが！」

「あー……このアプリなんだけど入れてる？」

最近なんとなく感じてきているが、もしかして斎賀さんって俺が思ってるより面白い生態している人なんじゃ……いかんいかんいかん言うに事欠いて「生態」だなんて。こういう単語は外道共に使うものだ。

「くそッ、忌々しい生態しやがって……！」

これは正しい使い方。
下校し、ＡＩ範士・極に十二連敗した俺はシャンフロの気晴らしに始めたＶＲ剣道教室・極の気晴らしにシャンフロをする、という壮絶に意味の分からない行動に出ていた。

そして今俺が何をしているかって？

「ふっ……ぬぐぐ……」

奥古来魂（おうこらいこん）の渓谷（けいこく）でロッククライミングしてんだよ。

これ以上ユニークを掘り起こし過ぎると本格的に首が回らなくなりそうであるし、対人的なイベントももう少し先。
割と暇していた俺が選んだ遊び方は、割とつい最近のことであるはずなのにもう随分と前のことのようにも思える水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）君のお家に遊びに行くことであった。

とはいえ崖から落とす裏技もインベントリアエスケープも対策されているのだろう。
という事で第三の選択肢、前々からちょっと試してみたかった「崖壁をよじ登って距離を稼ぐ」というものを実行していた。

ただひたすら岩壁にしがみついて横へ横へと移動し、スタミナがヤバくなったらインベントリアで回復。
それをひたすらに繰り返し続けるのは中々に虚無ポイントが高かったが、まぁこれはこれで俺のクソゲー魂をくすぐってくるので楽しいっちゃ楽しい。

「………」

そっと崖の縁に手をかけ、頭だけを崖上へと出す。夜間である以上少なくとも活動中の水晶群蠍はいないと思うが……うん、見てくれだけは平和な水晶の平原……

「……っ！」

慌てて顔を引っ込め、岩壁に張り付いて息をひそめる。その直後、ガシャンガシャンと水晶を踏み砕きながら大質量がすぐ上を通過していく。

ちらりと見えた黄金の光は縁にしがみつく俺には気づかなかったようで、そのまま歩き去って行った……

そりゃあれから何日も経過してんだからリポップもしてるわな。奴の素材に魅力を感じないわけでもないが、今日のメインは鉱石系アイテムだ。

シャンフロに限らずハクスラ系の武器は大抵が「モンスターの素材製」か「鉱石素材製」のどちらかに分けられる。木製だったりと例外もあるが省略。

重要なのはこの水晶巣崖が宝石系アイテムの宝庫であり、あの忌々しい蠍共さえなんとかできれば後に残るは宝の山、という事だ。

「さて……」

下手に登れば振動でバレる、いや大前提として採掘できる場所に行くためには気づかれた上で水晶群蠍に見逃されなければならないのだが……やはりここは金晶独蠍を利用して……駄目だ、朝まで奴とじゃれあうことになる。

「となればプランCか」

プランA「インベントリアエスケープ」は運営にガンメタ決められたので不可。

プランB「蠍は急には止まれない」は俺自身がドヤ顔ご意見メールしたのでおそらく不可。

となればプランCであるインベントリアエスケープ改……「スペクトラムインベントリア」でいくしかあるまい！

死んだら死んだでまた対策を立て直すだけだ、いざ南無三！

「おはようございまぁぁぁす！！」

かつてこの場所に来た時と同じく、一切の躊躇いも静けさもなく全力の疾走で採掘ポイントまで走る。
無論索敵範囲を思いっきり踏み抜いた俺に反応した水晶群蠍が起動し、またお前かと言わんばかりにこちらへとヘイトを向ける。
ごめんな、またなんだよ。

「タイミング、座標、大事な事はいつだってミスらない度胸！」

致命秘奥【ウツロウミカガミ】起動、段階式のブースターのようにヘイトを切り離す！
迫り来る水晶の大波、限界まで採掘ポイントに接近して、3、2、1……

「【転送（エンタートラベル）：格納空間】！」

これこそルルイアスで俺が編み出した修正後インベントリアでエスケープを行うための対策案。残留ヘイトに反応して待ち伏せをするならデコイに全部押し付けてしまえばいい。
少なくともアトランティクス・レプノルカは【ウツロウミカガミ】の効果が終了した後に俺の姿を完全に見失っていた。
クソ乱数のせいでただの水と化したポーションをガブ飲みしながらヘイトデコイが消えるその瞬間を待つ。

いや念のため【ウツロウミカガミ】のリキャストが終わるまでにしよう…………よし終わった。

「【転送：現実空間(エグジットトラベル)】」

座標が切り替わり、水晶の上から滑り落ちそうになるのを必死に堪える。

呼吸すらもトリガーになるのでは、と口を手で塞いで辺りを見れば……ええい我慢だ我慢。

「…………（グッ）」

辺り一面に散らばった水晶群蠍の素材にひっっっっじょぉぉぉぉに後ろ髪引かれつつも、二兎を追う者は一兎をも得ずと言うので泣く泣く諦める。

つまりエムルとビィラックを同時に捕獲しようとしても結託されてボコられるので各個捕獲しましょうという意味だな、うん。

さて気を取り直して、このまま悠長に採掘していてはまた水晶群蠍に轢き潰されるだけだ。この局面では迅速な作業が求められるわけだが、まさかこんな使い方をすることになるとは……

こつん、と剥き出しの胸部に琥珀がぶつかり、次の瞬間全身に比喩ではなく文字通り電流が走る。

「はぁーっはっはっはぁ！　これぞ必殺「加速採掘」！」

オーバーフロー状態が瞬刻視界(モーメントサイト)で制御可能である事は実証済みだ、であればツルハシを叩きつけ落ちたアイテムを拾う動作を最高速度で繰り返す！

ツルハシが叩きつけられ、キラキラと輝く鉱石が出現する。そしてそれが地面に落ちるよりも先にキャッチ！　アンドストライク！　なんだこれすげぇ！　一人で高速餅つきやってる気分になる！　あっ、ヤバいなんかツボに入った、よぉーしハイスコア叩き出しちゃうぞぉ！

「うははははヤバいこれは効率突き詰めたくなごべぁ！？」

真横からの衝撃、見ればいつの間にか戻って来ていたのか円月を描いて振り回された金晶独蠍の尻尾によって勢いよく吹っ飛ばされた俺はそのまま崖の下へと紐なしバンジージャンプしていた。

アッハイ調子乗りました。ハイスコア叩き出す前に水晶巣崖から叩き出されたよ……

「むぐぅ、落下死はやはり慣れない……」

「目覚めて早々不吉過ぎる呟きはやめるですわ……」

落下死ってさ、激突の瞬間よりも激突までの空中にいる時間の方が怖いんだよね。タマヒュンっていうか全身の臓器が持ち上がっていくような感覚はなんとも言えない。

とはいえ暇つぶしのカチコミの結果は上々だ、具体的に何をゲットしたかは確認していないが少なくとも二十個くらいはアイテム拾ったし。

「あぁっ！　ツルハシが無い！」

何気にちょっと愛着あったのに！

つっても所詮は消費アイテム。
るてんの運命に消えたと考えれば……
はよ次のツルハシを買えってことか
しかしなぁ……こう、やはり愛着が

オイオイ今の思考、最初の一文字を繋げたらツルハシじゃねーか。
これは神のお告げですわ。

「おっしゃあカチコミの時間じゃあ！」

これもヴォーパル魂！　多分！！　何気に傑剣（デュクスラム）への憧刃より古株なツルハシ君を取り戻す！

一時間後

「なぁなぁエムル、今俺がどんな風に死んだか聞きたい？」

「ちょっと気になるですわ」

「水晶群蠍の尻尾に弾き飛ばされて三回転半しながら飛んでたところを金晶独蠍に打ち上げられて崖から落ちたところを下にいたアンデッドワイバーンの口に頭から突っ込んで死んだ」

「……ぷふひゅっ」

「なにわろてんねん」

「りふひんれひゅわぁぁ！？」

まぁ金晶独蠍の頭に引っかかっていたツルハシ君の救出には成功したので良しとしよう。いつか絶対お礼参りに行くがな……！

エムルの頬をぶにぶにと引っ張りながら歩いていると、なにやら清々しい表情の秋津茜と遭遇した。

「あっ！　サンラクさん！　聞いてください！　私頑張りました！」

「なんだ、あの増える槍マンを倒したとか？」

「はいっ！　そうなんです！」

え、マジで？　逆にあれどうやって倒したのか知りたいんだけど。

聞けばあの槍兵、分身に与えたダメージが本体のＨＰも削るタイプだったらしく、最終的に謝罪砲で纏めて焼き払ったんだとか。
なんでもない風に言うしなんでもない風に受け流してるけど「口からビームを出す」って大概頭おかしいような……まぁ忍者だし仕方ないか、うん。

芯に捉える事による運動量の完全伝達と運動エネルギーを他者に依存した飛翔（後書き）

サンラクのリトライ数：１回（ツルハシ取り返すついでにしれっと素材集めしてた）

秋津茜のリトライ数：５４回（闘技場内を全力で走り回って増えた槍兵をひとまとめにするのに苦戦していた）

斎賀　玲のリトライ数：０回（現実ってリトライできないんですよ）

更新が滞ってしまい申し訳ないです

設定ファイルの片隅に眠ってたシャンフロの没設定君が「俺を使って短編書けよ」って言うから……

君採用してたらシャンフロの世界観ＤｏＤになるんだよなぁ、大陸のど真ん中に絶望の呪いを放つ神の死体が転がってるとかあかんでしょ

まぁ採用した現設定君の方もマヴラヴだったりＲ－Ｔｙｐｅだったりと大概なんですけどげふんげふん

まぁ本音を言うとスタレジェも無料ガチャもお薬だったたせいで極度のダウナー状態になっていたというか……（目逸らし）

敵を知り己を知れば百戦危うからず？

一歩踏み出す、一歩退かれる。攻撃は流され、反撃を弾く。

距離を離すのは悪手であると昨日気づいた、集中力をガリガリ削ることになるがあのクソＡＩマネキンに構えさせるよりはマシだ。

何度も立ち向かいその度に床に沈められて気づいたのだ、ＡＩ範士・極の……いや、龍宮院　富嶽のバトルスタイルは二つのステータスの複合であると。

「死にゃあばぁ！？」

逆手に持ち替えた左の竹刀で向かい来る胴狙いの横打ちを弾き、勝機を確信した一刀は本当に薄皮一枚程の回避で対処され、そして次の瞬間には頭をぶっ叩かれて床に沈んだ……俺が。

「勝てねー……」

何もかもが高水準、というよりも龍宮院　富嶽の戦い方は「相手の動きを紙一重で完璧に避け切る立ち回り」と「相手の急所へと攻撃を最速最適最短で叩き込む竹刀の扱い」の二点をそれこそ極限まで突き詰めたものだ。

ただ単純に全体的に強いのではなくどちらか一方を攻略したとしてももう片方で狩られる、赤か青でどっちか切ると爆発する爆弾でどっちを切っても爆発するみたいな酷い話だ。

故にこちらも同じ動きをトレースして相殺する作戦に踏み切ってみたものの、やはり付け焼き刃の見様見真似と死ぬまで研ぎ澄まされ

て来た技術の結晶では比較にすらならない。

「つーかこれ、身体の動かし方じゃなくて動体視力と経験則が怪物じみてるのがタネか」

真似して分かった、あれの仕掛けは単純に強いとかそう言うレベルの話じゃないんだ。狂った技量の持ち主が立ち回りと取り回しの二点に生涯を注ぎ込んだ狂気の結晶だ。

だがこれは……あまり好きじゃない。

否定するわけではないしむしろそれこそが好きと言う者もいることは分かっている。

「……「若き頃は心に火を灯し戦い、今は我が身の河川を御するに注力せり」ねぇ」

つまりそれって自分との戦いって事だろ？

お祖父様（師匠）はある時私に言った。

「儂のようにはなるな」

と。

一体何を言っているのかと思った。

貴方はこの国最強の、いいやこの世界最強の剣士ではないか！　遍く全ての剣士が目指すべき到達点！　そんな貴方が何故そんな事を言うのか。

結局答えを僕に教えてくれる事なく、お祖父様はこの世を去った。

老衰……少なくとも悔いのない人生であったと、残された僕達はそう思いたい。

「…………」

……ラスボスＡＩ範士と言えど、やはり剣道としての強さに比重が偏っている。

まさか現実の試合でやるわけにもいかないが、少し足癖を悪くしてやれば対処は驚くほどに簡単であった。

「はぁ……」

この「ＡＩ範士」の基になった人物よりも自分が優れているとは思わない。所詮はＡＩで、自分のとった手段は剣道としては邪道も邪道、そもそもルール違反なのだから。

だがそれでも、いやだからこそ落胆もまた大きい。

お祖父様の遺品整理をしていたお祖母様から「貴女への誕生日プレゼントとして用意されていた」と渡されたのがこの「ＶＲ剣道教室・極」だったが、一通りクリアした感想は失望の色が濃い結果だった。

成る程確かに教室……つまりあくまでも練習用のツールとしては優

れている。だが所詮はツールであり、お祖父様の背を追って彼が名づけてくれた名前の通り「京の西から東まで敵無し」の剣士となった僕にわざわざこれを贈る理由が分からない。

「なんで、貴方のようになっちゃいけないのさ……」

答えは得られない、出題者はもうこの世にいないのだから。きっと僕はこの疑問をずっと抱えていくのだろう。

ログアウトし、雑に机の上へと投げ捨てられたＶＲ剣道教室・極のパッケージがなにか言いたげにも見えたが……所詮は気の迷いだ。

「今週末、かぁ……出来れば「黒狼」の主力と戦ってみたいものだね」

答えは、戦いの中で見つけるしかない。かつてお祖父様が数多の試合を潜り抜けてきたように、未だ若い僕はより濃密な戦いの経験が必要なのだから。

「ログイン天誅！」

「あばぁーっ！？」

「ログボ天誅！」

「ぐばぁーっ！？」

「天誅ァァァ！」

「危なっ、テメェ維新側か！　念入りに天誅してやるよぉ！」

「おのれ新撰ぐみぁぁぁぁ！？」

あはははは！　息抜きに雑魚共を快刀乱麻するのは最高だぜぇ！　冷静に考えて強エネミーの巣窟に突っ込むのが息抜きって頭おかしいもんな！

辻斬・狂想曲（カプリッチオ）：オンライン……通称「幕末」。

このゲームにモラルなど存在しない、プレイヤーキラーのために作られたプレイヤーキラーの為だけのゲームである幕末ではログボの確認ですら致命的な隙となる。

基本的に「野良」のプレイヤーはＮＰＣの長屋を奪ったり、このゲームでは異端とされる土下座コマンドを使って居候になったりしてセーブポイントを確保するわけだが……まぁ、そんな事をすれば基本的にカモな訳で。

ある程度このゲームに慣れたプレイヤーならば野良ではやっていけ

ない事を理解できる。だからこそ陣営に所属する、少なくともセーブ中に奇襲を受ける可能性は低いからな……

ゲーム故エフェクトがあったり物理的におかしい動きの多少はあるが、基本的な世界観は日本の幕末期に準拠している。プレイヤーは「幕府軍」側か「維新軍」側のどちらかに所属するのがベターだ。

そしてこのゲーム、そもそものコンセプトが畜生真っしぐらな修羅の道である事を除けば割としっかりとした作りなのだ。

「維新軍」に所属した場合は基本となる刀剣系スキルの他に鉄砲を武器として使用可能になる。

「幕府軍」の場合は刀剣系スキルにボーナスが付与され、刀剣オンリーの戦いならスペック上は維新軍を上回ることが出来る。

「誰かと思ったら「一桁隊」の壬生狼（みぶろ）じゃねーか！」

「あ、ちなみに最高記録は二番隊の切り込み隊長やってたぜ」

「ガチガチのランカーじゃねーか！」

今は半分引退状態だったから九番隊まで落ちているが、今日一日だけとはいえ五番隊くらいまでスコア叩き出すかな。流石に三番隊以上はガチ勢領域だから無理だろうし。

このゲームにおいてランカーとはそれだけのＰＫを成した実力者に他ならない。腰の引けた維新軍プレイヤー達を睥睨しつつ、これでは実験にならないので発破をかけてやる。

「屁っ放り腰なお前らをやる気にさせてやるよ」

腰の二刀を鞘ごと掴み、見せつけるように維新軍プレイヤー共へと

突きつける。

「去年の春限定のランカー報酬「枝垂夜桜（しだれよざくら）」、そして同年夏限定ランカー報酬「玉花火（たまや）・八尺（はちしゃく）」……そして俺は「死に引退」じゃない、あとは分かるな？」

流石に一番隊々長賞（ランキング一位）報酬である「国宝級」は持っていないが、それでも期間限定刀が魅力的な餌になる事に変わりはない。

「「「天誅ァーーッ！！」」」

欲望に忠実で大変よろしい！

このゲームにおける最大のカモ、大量のアイテムを抱えた肉袋に巡り合うチャンスは持ち物全損というゲームシステムのリスクを無視するだけの価値がある。

イキイキとした表情で斬りかかってきた維新志士共へこちらも笑みを浮かべながら抜刀。さぁさ皆さんご一緒に、人斬りの業を全部責任転嫁する魔法の言葉を唱えましょう。

「天誅ッ！！」

天がやれって言いました、だから仕方ないね……天誅に御座る！

「介錯してやろう、辞世の句を読め」

「粋がるな……俺は志士でも、最弱だ……俺より強い、志士がお前を……！」

「見事な短歌！　打首獄門！！」

「できればアイテムは質屋に……ぐばぁ！」

実質的な降伏コマンドとしても機能する土下座コマンドで命乞いをした幕末志士の介錯を済ませ、俺はようやく一息つく。切腹で死ぬとデスペナが免除される、って控えめに言ってこのゲーム頭おかしいよ……まぁ介錯側にもボーナス入るので結構な頻度で切腹するプレイヤーを見ることは出来るのだけど。

武士の情けという事で獲得アイテムは全部質屋に放り込む、俺が借りた金を返さず時間が経てば彼らが購入できるようになるだろう。

「やっぱ同じ敵とばっかり戦ってても技は身につかないな、実践あるのみ！」

さぁーて、ラビッツ防衛戦までにはＡＩ範士・極を片付けておきたい。本格的にモノにしてやろうじゃねーの、見様見真似（なんちゃって）を超える次のステージ……役割模倣（ロールプレイ）を！！

敵を知り己を知れば百戦危うからず？（後書き）

本名をプレイヤーネームにする度胸、なお本人は「読みが違うからセーフ」などと供述しており……

ちなみに「私」は剣道をしている時に使う一人称で「僕」は普段使う一人称です
お祖父ちゃんが「女として剣を握る事を恥じてはならない、剣が曇る」という理由で剣道をしている時は「私」を使うよう約束させたためです

集え防人、彼方より来たるは怨讐の蛇

サイガー０：あの、こんばんは

サイガー０：この間は楽しかったです

サイガー０：えと

サイガー０：あの

サンラク：あ、ごめんちょっと目を離してた

サイガー０：ふゃあは

サンラク：ふゃあは？

サイガー０：いえなんでもないです！

サイガー０：私超現金Ｄｅａｔｈ！

サンラク：……超元気です？

サイガー０：ひゃい……

サンラク：まぁいいや、昨日はどうも

サイガー０：い、いえいえいえ！

サイガー０：そのあの、こちらこそ大変お世話になったといいますか

サイガー０：まさか身請けしていただ……身請け？

サイガー０：みうぁっ！？

サンラク：ステイステイ、落ち着いて

サンラク：とりあえず深呼吸深呼吸

サンラク：こっちも結構アイテム集めたりできたしありがたい

サイガー０：それでその……黒狼との代表戦の話ですが

サイガー０：例の件、拝領致しました

サンラク：オーケー、それじゃ当日はよろしく

サイガー０：へぁい！

「音声認証かな？」

妙な奇声がそのまんま文章となって表示されたのを確認しつつ、俺は携帯端末をベッドへ放り投げる。ていうか日常生活で「拝領」なんて言葉使われたの初めてだぞ……

「…………くくくく」

ちら、と棚に飾られたＶＲ剣道教室・極のパッケージを見て我ながら気持ち悪い笑みをこぼす。

ああそうとも、その棚はクリア済みのゲームを置く棚だ。俺はついにあの鬼畜ＡＩを打倒したのだ！！

「……まぁあんまり正々堂々勝った、って感じじゃないけど」

ゲームシステム側の判定を利用した小技だし、実力で勝ったとは言い難いが……結局はスコアだよスコア。ＡＩ範士・極を倒した事でＶＲシステムに記録されたトロフィーが、俺の偉業を確かな形で証明してくれている。

「さて、と……やるかぁ！」

幕末で維新側のランカーと当たった時はマジでアイテムロストを覚悟したが、役割模倣（ロールプレイ）の調子は上々だ。死合った後に仲良くなったランカーさんから色々為になる話も聞くことができたし良質なクソゲニウムを補給できた……

「水分補給は今から、トイレよし、リアルの用事も済ませた！」

あれから数日、今日はラビッツ防衛戦の当日だ。積んだゲームにやり残しはない、これで心置きなくゴルドゥニーネの分け身をぶっ飛ばしに行けるというものだ。

「さて、と……」

これは第二級徹夜案件と判断、ライオットブラッドの使用を許可する……！　今回使用するのはトゥナイト、長くキマるという点では一線を画する合法液体だ。

「あぁあぁあぁーキマってきたぁー……」

おっしゃ準備完了！　蛇の抜け殻だかなんだか知らないが瓶に詰めてマムシ酒にしてくれるわ！

「うおっ」

集合場所に向かう前に寄ってみたビィラックの工房にて、モゾモゾと蠢く黒い毛玉を発見した俺は思わず声を漏らす。すると毛玉からウサギの耳が生えて……うん、まぁ丸まったビィラックだわな。

「ぉー……ワリャけぇ……」

「どうした、腹痛か？　ぽんぽんペインした？」

「何ぞ腹立つ言い方じゃな……単純に疲れただけじゃ……ワリャも参加するんじゃろう……？　その為の武器を仕上げとったんじゃけ

ぇ……」

「成る程」

今回の防衛戦、防衛と言うだけあって俺一人で戦うわけではない。
ラビッツのＮＰＣ……すなわちヴォーパルバニーの防衛兵達と協力して戦線を押し上げるのだ。
俺の役割は本丸を射抜く一本の矢、大将首に迫る断頭の刃、ぶっちゃけると鉄砲玉。

「ほれ、ワリャがぶっ壊したのも直しといた」

「おっ、流石名匠」

再び戦う力を取り戻した煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手をインベントリに納めると、ビィラックは再びゴワゴワした黒毛玉へと戻っていく。

「わちは寝る……勝ちいや……」

「任せろ、今の俺は大剣豪だ」

「寝言は寝て言え……ぐぅ」

いや寝てるのはお前じゃん……まぁいいや、だが寝言なんかじゃないぞ？　ゲームの強化イベよろしく俺の見様見真似（なんちゃって）は次のステージへと進んだのだから。
ハッ、対エネミーでも龍宮院流が使えるかどうか試してやろうじゃねーか。

「さて……改めまして、行くか」

ビィラックの工房を出て、進む先はエードワードの執務室……ではなくラビッツの地下、かつてゴルドゥニーネがこじ開けたというトンネルだ。
こちらに気づいて駆け寄ってくるエムルから全力ダッシュで逃走しつつ俺は待ち合わせの場所へと向かうのだった。

……

…

「でっか……」

なんだこりゃ、トンネルって言うから車が通る山間トンネルくらいのイメージだったが、車が十列横並びに走ってもまだ余裕なくらい広いじゃねーか。
縦も横もこの広さ……これがゴルドゥニーネのところまで直通している？　この広さでヴォーパルバニーが防戦で手一杯の物量が攻め込んでくる？

「これは……ちょっと本気にならないとヤバいか」
「手抜きはご遠慮頂きたいところですがね」

流石に俺のプレイスタイルに関わるイベントだ、手抜きはしないさ。
だがそれよりも目下最大の問題は……

「ぜぇ……なんで、ぜぇ、逃げるですわ……ぜぇっ」
「なんでってそりゃあ……」

「エムル、お前の参加は認めてないはずだよ？」

何故己を連れて行かないのか、というエムルの問いに対して答えたのは俺ではなくエードワード。ピシャリと放たれた言葉にエムルの身体が震える。

「エムル、私は説明したはずだ。ゴルドゥニーネとの戦いは、例え分け身とは言え生還すらも二の次にしなければならない……私やビィ、かろうじてイーまでの上の兄弟ならともかく、お前ではゴルドゥニーネの毒に耐えられない」

「でも、でも……！」

「ででではないよ、ここで戦う兵達はお前達を守る為に死兵としてここで踏ん張っているんだ……それを踏みにじるような事はこの国を預かる者として認めるわけにはいかない」

断言。それは父を同じくする兄としての言葉なのか、それとも偉大な父から国を託された王としての言葉か。

有無を言わせぬ言葉に反論できなくなったエムルはエードワードではなく俺の方に視線を向ける。

「サンラクサン！」

「んー……こればっかりはエードワードの言う事を聞くべきだろエムル」

「えぅ……」

「とはいえ、だ。エードワード、二つほどお前の話には間違いがある」

その言葉にエードワードのみならずエムルもまた怪訝そうに俺を見る。ふふ、凝視の鳥面を被っていなかったら気恥ずかしさで目をそらしていたかもな。だが今の俺は目力二割増し、インテリヤクザ兎の視線も何するものぞ！

「生還は二の次、って言ったよな？　訂正しな、今日この時そいつらを縛る呪い（毒）は俺が払う。有給休暇くらいくれてやれよな」

「もう一つは？」

フッ……妹想いは結構だが、リュカオーンと戦い、クターニッドと戦い、俺の無茶に付き合ってきたエムルをちょっとナメすぎだぜ。

「エムルは防人（さきもり）の献身を無下にするほど弱っちくはない、後方支援くらいならさせてやれよ」

無言で視線が交差する。やはりインテリヤクザ、細められ鋭さを増した眼光は父親を彷彿とさせる物騒な光を宿している。

だが今の俺は勝利の栄光とカフェイン、そして夕飯に食った鮭のムニエルによって剣呑な眼差しを堂々と受け止めるだけの活力がある。

お？　やんのかゴラ、俺を本気にさせたらアレだぞ……えーと、アレだ。

「……はぁ、良いでしょう。ですが彼についていくのは駄目だ、あくまでも後方支援……いいね？」

「は、はいな……」

「いざって時の帰り道を確保しといてくれよなエムル」

「は、はいな！　準備してくるですわ！」

走り去って行ったエムルを見送っていると、エードワードが先ほどの眼光とは違う種類の半目で俺を見上げる。

「随分と妹の扱いが上手なようで」

「お前と一緒さ、俺もお兄ちゃんってやつさ」

まぁうちの妹はほっといても一人で生きていけそうなガッツを感じるが。

「成る程……ではこちらへ、作戦会議を始めます」

「いいねぇ、ブリーフィングは嫌いじゃない」

巨大なトンネルの片隅、それなりに頑丈に作られた小屋の中に入るとそこにはヴォーパルバニー達が机を囲んでいた。
入ってきた俺とエードワードをじっと見つめる兎達には共通点があった。

「これがゴルドゥニーネの毒ってやつか」

「えぇ、他者へ伝染し身体を蝕む蛇の毒……ヴァイスアッシュの直系ですら直接食らえばただではすまない、そういう毒です」

そして、とエードワードがまっすぐ俺の目を見る。

「これが最終確認です、もうここから先引き下がる事は指揮官として認める事はできませんが……宜しいですね？」

「………ハッ、爬虫類程度で怯えるほどヌルい冒険はしてきてないんでな」

表示されるウィンドウ、ユニークシナリオＥＸに繋がる前提ではなく、ユニークシナリオからさらに枝分かれしたユニークシナリオ。

『ユニークシナリオ「兎の国防衛戦（ラビッツ・ディフェンシブ）」を開始しますか？はい　いいえ』

その手は迷う事なく。

集え防人、彼方より来たるは怨讐の蛇（後書き）

落ち着けユザーパードラゴン、ヒロインちゃんの出番は後回しにしただけだから、ユザパらなくていいから
でもＡＩ範士・極との決戦はぶっちゃけると剣道を描写しきれる気がしなかったのでユザパっていいぞ

過程は違えど、防衛戦の誘いを受けたのは三人…

ユニークモンスターが刻む「呪い」というものは、どうやらユニークモンスターによって多少の違いがあるらしい。

リュカオーンの場合は牙や爪で刻む為か、浮かび上がる黒い「呪い」はなんというか粗雑だ。見ようによっては鎖のタトゥーのように見えないこともない。

ジークヴルムの場合は秋津茜の顔に刻まれているのをちらと見たことがあるが、リュカオーンと同様の切り傷のような赤い「呪い」だがリュカオーンのそれと比べるとスッパリと切れたような模様だ。

ウェザエモンやクターニッド、ヴァッシュは不明。

正体不明のオルケストラも同様。

そしてゴルドゥニーネ。この場にいるヴォーパルバニー達は皆奴から呪いを受けたことで家族に会うこともできず、ここで戦い続けているそうな。

そして当然ながら皆ゴルドゥニーネの「呪い」をその身に受けている。

「以前説明した通り、我々が侵攻するゴルドゥニーネの眷属を食い止め押し上げます」

コンコン

「俺は突出して分け身まで突っ走る、そうだろ？」

コンコンコンコンコンコン

「えぇ、単純ではありますが我々はが貴方を援護する事は難しいでしょう」

ココココココココココ……

「連打！？」

ドアノックで連打はちょっと想定外だったが、わざわざ許可を得るまで入ろうとしない律儀な来訪者にエードワードがドア近くにいた兎に開くように顎で示す。

「あ、どうも！」

「うぉっ、秋津茜？」

「はいっ！　いきなりシークルゥさんにユニークシナリオのお誘いされたのでとりあえず来てみました！」

シークルゥから？　っつーことはラビッツユニーク……いや、兎御殿の中に入れる「招待」ユニークを発生させたユニークに自動で発生するのか？
いいや待て、決めつけるのは早計だからここは直接聞いてしまおう。

「なぁ、一応聞くけどシナリオ名はなんだった？」

「えーと……「兎の国義勇兵（ラビッツ・ボランティア）」です！」

オーケー、やっぱりソロ討伐に変わりはないな。恐らく義勇兵としての参加と、防衛戦の一員としての参加ではなんらかの違いがあるのだろう。

「すまん話を止めちまったな、続けてくれエードワード」

「……では。まず最前線に到着次第、魔法部隊の全火力で敵を一掃します」

まぁすぐに後続によって埋め尽くされるでしょうが……と続け、エードワードは地図を指し示す。

「我々はゴルドゥニーネの眷属が殺到する前に戦線を押し上げ、横穴を封鎖します。その隙に貴方は前へ……そこの貴女は横穴から奇襲を仕掛ける眷属への対処及び補充されるであろう眷属を食い止める役割です」

「はいっ！　ゴルドゥなんとかさんがなんなのかよく分かってないけど頑張ります！」

びしっ！　と姿勢を正す秋津茜から迸るスポ根青春的なオーラに若干気圧されつつも俺は懸念を告げる。

「なぁ、一応聞くんだがこれ仮に分け身のところまで辿り着いたとしても眷属に囲まれて死なね？」

「その点は問題ありません、むしろ貴方は分け身を足止めすることになるでしょうから」

そう言うと、エードワードは先程からずっと背中に背負っていたそれを指し示す。

「父の得物の一つ「鍛龍（タンリュウ）」です、これを抜けばゴルドゥニーネの眷属は一斉にこちらへと殺到する……それこそ分け身すらも」

それは鞘に非常に精巧かつ緻密な彫り意匠が施された鍔のない刀……まぁぶっちゃけよう、長ドスであった。

「これを抜く以上、貴方には是が非でも……それもなるべく迅速に分け身を倒してもらわなければならない」

ジッと俺を見つめるエードワード。それだけじゃない、この場にいる身体の一部がヒビ割れたヴォーパルバニー達もまた俺をジッと見つめる。

果たして俺に命を預けるだけの価値があるのか、俺に任せていいのか……兎たちは実際にその目で俺を見て判断しようとしているのだろう。

「これが最後の確認です、貴方に出来ますか？」

であればロールプレイだ、それこそがシャンフロという世界観に生きるＮＰＣ達を納得させる最大の根拠となる。

勇魚兎月をあえて見せつけるように装備し、半ば代名詞と化した鳥の人を示す凝視の鳥面を整え、一歩も引くことなく視線を受け止めて告げる。

「任せろ、ウェザエモンもリュカオーンもクターニッドも……真正面から乗り越えて今の俺がある。俺を信じろ、トラストミーってや

つだ」

「そうですわっ！　サンラクサンならやってくれるですわっ！」

親指を立ててサムズアップ。百の言葉を並べるよりも、積み上げてきた実績（スコア）と刻まれた傷がＮＰＣを納得させるだけの力になる。

「よろしい、では貴方に我々の命を預けましょう」

安心しな、俺は外道文房具とは違って友軍ＮＰＣは大事にするプレイヤーだ。

「そういや秋津茜、十番勝負は終わったのか？」

「いえ、まだです！」

「つまり防衛戦シナリオは「招待」を受注さえしていれば発生するイベントみたいなものか……見たところ「ツアー」は対象外、ってところか」

そういえば「兎の国ツアー」では兎食の大蛇とかいうモンスターが

出るんだっけ、もしかしなくてもこのシナリオと繋がりがあったわけか。
これは推測だが、恐らくトンネルの制圧率が「招待」と「ツアー」に発生するフラグになっているんだろう。劣勢になった場合、恐らく「ツアー」を行なっているプレイヤーにも「義勇兵」か「防衛戦」か……それとも別のシナリオが発生するんじゃなかろうか。
「燃えてきたな、俺たちの背後には数千数万のプレイヤーが今か今かと待ちわびているわけだ」
だが残念だったな、お前らにこの領域はまだ早い。リュカオーンに包丁で立ち向かうくらいのガッツを見せたらまた来いよな。
「そういや槍兵の次は何と戦ってるんだ？」
「ええと、なんて言えばいいのか……二人三脚のロボット？」
二人三脚……クソッ、楽しそうな敵と当たってて羨ましい！　こっちなんてひたすら上空から猛毒撒き散らすクソ鳥だったんだぞ。
「まぁなんだ、俺はちょっと最前線突っ走ってくるけど秋津茜も気をつけろよ？　さっきの話を聞く限り向こうは物量戦で来るみたいだし」
「はいっ！　頑張ります！」
大丈夫かなぁ……と心配になったが、よくよく考えたらこいつステータスだけなら俺をぶっちぎってるんだよな……あれ、もしかして先輩風吹かしてるけど俺の方が下位互か……いややめよう、この思考は俺の精神が崩壊しかねない。

そ、それにスキルとかの関係上俺が下とは限らないしな！　うん！

広く、長く続くトンネルを進むたびにヴォーパルバニーにすれ違う。
どのヴォーパルバニー達も身体のどこかしらにまるでガラスのように不自然な亀裂が走っている。
そしてその亀裂からは明らかに身体に良さそうな成分は含まれていないだろう黒煙が漏れ出している。松明があるというのにこのトンネル内に暗い印象を感じるのはこれが原因だろう。

ゴルドゥニーネの「呪い」はああいう感じになるのか。
職人芸ではないが手慣れた様子で斧を研ぐ片耳が今にも割れてしまいそうなヴォーパルバニーとすれ違いつつ改めてトンネルの内部を観察する。

ゴルドゥニーネが一体どんな姿をしているのかは不明だが、この広大なトンネルを単体で掘り抜いた、という時点でヤバさがわかるというもの。
まるで専用の重機を使ったかのように掘り貫かれたトンネル、その壁や天井、果ては地面の至る所にはコンクリート……ではないだろうがそれに類する何かで塞がれたと思しき穴が幾つも存在している。
なんかもう塞がれた穴がトンネルを水玉模様にしているくらいだ、この全てから奇襲を仕掛けてくるとかなんだこの三次元モグラ叩き、鬼かよ……蛇か。
戦線を押し上げ食い止めている間に穴を塞ぐ、成る程一大作戦だ。
軍団レベルでの食い止め役（タンク）がいなけりゃどうしようもねぇな。

「で、あいつらが穴を塞ぐ役割か」

今ではめっきり見なくなった壁大工のようなヴォーパルバニ

ー達がコンクリート……というより粘土っぽい何かをいくつも用意している。
確かこのゲーム戦闘職とは異なる一次職みたいなジョブもあったはず、となればあれは「大工（カーペンター）」か？
物理的な封鎖や即興の建設が出来るならトラップ系のジョブなんだろうか……生憎俺は立ち止まると死ぬマグロみたいなステータスしているので大工を取得することはないだろう。
「さぁ、いよいよ最前線付近です。ここからは安全を保障しきれていませんので念のため警戒を」
「おうよ」
「はいっ！　ええと、どちら様ですか！？」
「秋津茜殿、エードワード兄者に御座る！」
「成る程！　よろしくお願いします！」
元気だなぁ……これが若さってやつか。
兎にも角にもだ、藪に飛び蹴りかまして蛇を追い出す一大作戦が始まる。
お前の「呪い（毒）」……採取させてもらうぜ、ゴルドゥニーネ。

「オラオラどけどけどけぇ！　オヤジはどこだぁ！」
「あ、あの……待って……！　あんまり、足は速くないから……」
「何言ってんスかぁ！　早くしねぇと防衛戦が始まっちまうんですぜ！　とっととオヤジに会わねぇと間に合わねぇ！」
「にしたって、速すぎ、て……！」
「はっはァーっ！　走れウォットホッグ！」
「プギィ！」
「うっっっるさいわ！　おんどりゃあ、御殿の中じゃ静かにしろ言うちょるじゃろうがぁ！！」
「げぇっ！　ビィラック姉(ね)ぇ！」
「おんどりゃあエクシスぅ……！　そこに直れぇ！」
「ひぃい！　走ってくだせぇ！　このままじゃアタイが致命的(ヴォーパル)に殴(ボコ)られちまう！」

「うぅ、　そろそろスタミナが……」

身体砕けど心は割れず（後書き）

今すべきではないと分かっていた、しがらみが無くなるまでは「はい」を押さないように我慢していた。
だが、「鳥の人が致命的に危険」と聞いたその時、指は無意識のうちに動いていていた。

鉄槌携え騎士は征く……

どうも、ヴァルナ硬梨菜改めハデス硬梨菜です

ヴォーパルバニーによる防衛軍の内訳は最前線でゴルドゥニーネの眷属を食い止めるタンク、堰き止められた眷属を一掃しタンクと共に戦線を押し上げるアタッカー、迅速に横穴を封鎖し安全確保を行うカーペンターの三種の兵科をメインとして構成されている。
まぁ他にも衛生兵やら後方支援のヴォーパルバニーがいるようだが大半は「止める」「叩く」「塞ぐ」が中心になっている。
そして俺の役割は作戦の初期段階に行われる一掃に混じって敵本丸へと辿り着く事。敵大将であり、ヴォーパルバニー達を蝕む「呪い」の元凶として存在するゴルドゥニーネの分け身を撃破する事だ。
ちなみに秋津茜はアタッカーとカーペンターを状況に応じて支援する遊撃、エムルは後方支援、シークルゥとエードワードは最前線でタンクだ。

「大将が前に出て大丈夫なのかよ？」

「誰よりも前に立つ事こそがヴォーパル魂、そう父に教わりましたから」

その観点から言えば俺のヴォーパル魂はカンストしてないか？　まぁいい、俺は俺がすべき事を遂行するだけよ。
とはいえゴルドゥニーネの分け身に関する事前情報は少ない。分け身そのものを目撃したヴォーパルバニー自体が少ない上に、目撃者の生還率も低いと来た。
エムルを介した情報集めの結果分かったことは「サイズ自体はそれ

ほど大きくない」と言うことと「単純な蛇の形をしていない」と言うことくらいだ。

シンプルな蛇型ではないなら八岐大蛇型やメドゥーサ型など色々候補はあるが……現実の兎サイズに近いヴォーパルバニーが「それほど大きくない」と言うならばリュカオーンやクターニッド程のサイズではないのだと信じたい。

水晶群蠍程度なら、まぁ……いやあれもあれで大型乗用車くらいあるしなぁ……そして懸念すべき最大の問題。

「当たり前だけど、灯りとかあったりはしないよな」

「当然でしょう、開拓者の方々は夜目が利くのでは？」

そりゃＮＰＣが「真っ暗」と感じる暗さもプレイヤーからすれば「薄暗い」程度まで見やすくはなるが、それでも薄暗いのだ。派手なエフェクトの攻撃なら見逃さないだろうが……地味な、ましてや隠密系の攻撃は直撃する可能性は捨てきれない。

「一応リスポン地点更新するべきか……？　いや、だがもう一走りできる可能性はそう高くないし…………まぁいっか」

なんとかなるさ、今の俺はカフェイン大明神の霊験あらたかな勇魚兎月を携えし大剣豪だ。自分でも何言ってるか分かんなくなってきたぞぉ？

「こほん……少々失礼を」

「ん？」

一つ咳をして喉を整えたエードワードが眼鏡を外す。あれ、これ大抵インテリヤクザ系キャラが本気出すときの……次の瞬間、

「べらんめぇぇぇっ！！」

「べっ……」

「らんめぇ？」

なんとなく予想はしていたが、それでも突然の大音量に目を丸くする俺と秋津茜。成る程これで空欄が一つ埋まりましたな。

上から極道、インテリヤクザ（江戸っ子）、広島弁、御座る、？、？、京都弁、と……ヴォーパルバニーの上位層が軒並み濃すぎるぜ。

「おうおうおうおうテメェらぁっ！　シケたツラァ晒してねぇでしゃんとしやがれぃ！　あんのクソ蛇にカチコミかけんぞぉ！」

全身の毛を逆立たせ、色々な意味ではっちゃけたエードワードの咆哮に周囲のヴォーパルバニー達が耳をピンと立てる。

「今回は食い止めるなんてぇなまっちょれぇこたぁ言わねえ！　テメェらの鬱憤、熨斗（のし）つけてぶち込んで押し込むぞぉ！」

剣が、斧が、手鎌が、槌が。ヴォーパルな殺意にコーティングされた兎達の武器が次々と掲げられ、この場の戦意が鰻登りに高揚していく。

「魔砲撃隊！　並べぇ！」

「あ！　私もお手伝いします！　サンラクさん、頑張ってください

ね！」

「おうよ」

魔術師的な装備のヴォーパルバニーが一列に並び、その中に秋津茜も紛れ込む。

「いくぞテメェらぁ！　覚悟きめやがれい！」

しゅらり、と「鍛龍」と言うらしい長ドスが抜き放たれる。緊張を帯びた沈黙が数秒続き、そして。

「おいおい、ヌーの大移動みたいな音してんぞコレ……！」

蛇だよな？　蛇なんだよな？　なんでドドドドド……！　みたいな音してるんだ音声バグってなぁい？

「おっと、俺も準備しないと……」

一応この日のために小学生がかけっこの練習をするようにオーバーフロー状態の過剰挙動を慣らしてきたんだ、あとは露払いをしてくれる兎達を信じるしかあるまい。

壁にぶつかる、転んだ勢いが強すぎて首が変な方向に曲がる、顔面スライディング、顔面バウンド、ギャグみたいな壁激突、空中三回転半顔面着地……今日に至るまでどれだけのデススコアを稼いだと思ってやがる、デスペナのステータス低下中の動きにすら慣れきったわ。

「来るぞォ！」

祈るように封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）を胸に当て、バチリと雷鳴を纏う。
陸上選手の如くクラウチングスタートの姿勢でただ前をまっすぐに見据え、そして遂にその姿が見える。

「おぅっ……」

えーと、流しそうめんってあるだろ？　アレをスケール大きくしてそうめんを全部蛇にした感じ、以上。

「ぶちかませぇえっ！！」

一斉に放たれる業火、そしてそれらを呑み込み眼前の全てを蹂躙する竜の息吹。

「がんばってくださぁぁぁぁああああああ！！！」

謝罪砲ならぬ応援砲ってか？　だが貫禄の火力だ、味方の攻撃すらも食い尽くしたエネルギーの奔流が散り消えた時、そこには無理矢理こじ開けられた道が……レディ、ゴー！！

ふふふ、かつてゴリライオンラインでサブでチーターを使っていた俺の足捌きを見せてくれようぞ！
なおライオンの謎吸い込み判定のある猫パンチで最高速度で突っ込んでも叩き潰されたんだがな、無情すぎるぞゴリライオン。

もはや倒れる一歩手前の状態で踏み出された足が俺の身体を前へ前へと傾ける。
その一歩が推進力となり、その二歩がさらなる加速を齎す。周りの全てが後ろへと流れていき、秋津茜が放ったブレスの残滓が粒子となって漂う破壊痕の道を真っ直ぐに突き進む。

目指すはゴルドゥニーネの分け身、俺の背中に視線がのしかかる。

流れ行く蛇の奔流、足を踏み外せば流動する質量に呑まれて砕け散る。

狂ったように同属を圧し潰してでも前へ前へと進まんとするゴルドゥニーネの眷属共……多様な大蛇達の波濤を逆行して奥へ奥へと加速する。

なんというか、爬虫類苦手な人は精神が死ぬレベルの光景だな……ドラゴンがそもそも爬虫類寄り故にその手の耐性はゲームで鍛え上げられた俺ですら若干引くレベルの光景だ。

「こっちが踏んでもっ……ヘイトがっ……来っ、なっ、いっ、のはぁっ……！」

救いといえば救いだが、ボコボコに歪んだベルトコンベアを逆走しているようなもので気を抜けば容易く転倒してしまいそうだ。

普通に走ったんではまず間違い無くエードワード達のいる激突ラインまでミンチになって送り届けられていただろうが、今の俺は気を抜けば壁にぶつかるまで走りかねない暴走特急だ。むしろ程よく速度が殺されることで走りやすいとまで思える。

しかしこれ、通常プレイの場合はどうするんだろうか。いや、その場合は普通に分け身とエンカするまで戦線を押し上げるだけでいいのか、むしろこんなクソトンネルを強行突破してる俺がおかしいだけで。

「よっ、ほっ、頭借りるぜっ」

過剰な挙動と、増幅された運動量。例えるならばスーパーボールかバッタ、跳び上がった先にいた大蛇の頭を踏んづけ、頭蓋を踏み潰すつもりで力を込めて再跳躍。
グラビティゼロで円形に掘り貫かれたトンネルの壁や天井を駆け抜ける。

ふふふ、かつてゴリライオンラインで「肉食獣より獰猛なトムソンガゼル」と呼ばれた俺の跳躍センスを見せてくれようぞ！
なおライオンのくせに何故かワニより高性能な掴み技（デスロール）に捕まったら最後、十割ダメージが確定する……非道すぎるぞゴリライオン。
まぁ何故かこれらの極悪戦術がゴリラにだけは通用しない、という謎調整は今でもクソゲー界（俺限定）の謎の一つとされて……内側に向かっていた思考を戻せ、どうやら到着したらしい。

「……もしかしなくてもアレだろ」

横穴の多少はあれど真っ直ぐ伸びたトンネルに穿たれたすり鉢状の穴。うじゅうじゅと筆舌に尽くしがたい混沌ぶりを見せるその「穴」の中心に、一匹の蛇がいた。
全身を漆黒の鱗で覆い、一般的なイメージの蛇とは大きく異なる異様に膨れ上がった腹部……うん、俺これ何か知ってるぞ。

「ツチノコじゃねーか！」

ゴルドゥニーネの分け身改め黒ツチノコは眷属共が続々と俺が来た道へと殺到していく中、ただ一匹俺へと視線を向けて敵意を燃やす。

そして穴の中で蠢いていた蛇が全てトンネルの先へ消え、グラビティゼロの効果切れで着地した俺と黒ツチノコが相対する。

「ツチノコ……いや、明らかに機動力なさそうだが見た目だけで判断んんぃぃぃぃい！？」

ばづん！　と俺の顔があった場所で閉じられる巨大な青白い掌。反射的に仰け反っていなければ、今頃兎御殿にリスポンしていたことだろう。

「……悪かった、悪かったよ見た目で判断して」

だが言わせてくれ。

「そこからそれが出るの！？」

大きく口を開いた黒ツチノコの口腔から伸びた「腕」に、俺は渾身のツッコミを放ち……剣を構える。

こいつは歯ごたえのある戦いになりそうだ。

喉から手が出る程に災渦（後書き）

呪腹の大樹のアレ的な

ゴルドゥニーネ・レプティィカ３
ゴルドゥニーネの脱け殻が自律行動能力を獲得した個体をレプティィカ1、魔力を吸収蓄積したものをレプティィカ2、蓄積した魔力で肉体を精製したものをレプティィカ３と呼称する

なお、レプティィカ４に到達した個体は……嗚呼、私は誰だお前は誰だ。あらゆる生命が持つ当たり前が揺らぐ、故に人を憎む。奴を庇う兎を憎む。

すり鉢状のフィールド、口から腕が伸びるツチノコ、薄暗い視界……文字にして並べてみれば苦戦しそうなラインナップだが、実際にやってみればそう難しいものでもない。
登り坂と下り坂のフィールド的弊害はそのまま向こうの枷にもなる、伸ばされる腕は備えていればなんとかできる、薄暗さを利用した攻撃は無い様子。
だからこそ不安になる、あまりにもヌルすぎるからこそ警戒はより深まる。
仮にもユニークモンスターに関連するモンスターがここまで簡単に攻略できるはずがない、妙にタフネスなところはボスモンスターらしさがあるが、それにしたって対応が簡単過ぎる。
「掴み、薙ぎ払い、叩きつけ、飛び道具は無し……なんかヌメってるし接触は回避の方向で行こう」
十中八九、複数形態ボスだろう。それもいい、問題はそれがどの程度の強さなのか、という事だ。
ユニークモンスターの分身、ユニークモンスターが作り出した眷属、という点で参考にするべきはランダムエンカする影リュカオーンもしくはルルイアスの封将だ。
後者ならまだいい、だが前者の場合単独撃破(ソロクリア)の難易度は一気に跳ね上がる。というか無理ゲーに近くなる。

「撃破を約束しちまったからなぁ……少なくとも逃走は選べ、ないっ！」

振り抜いた金照が黒ツチノコの鱗を奴の皮膚から弾き飛ばす、快音・快撃、良い手応えだ。砕け散った鱗は薄暗闇の中に飛び散り……結晶化する。

シャンフロではアイテムを「持つ、もしくは握る」ことをトリガーに入手判定が発生する。現状では傑剣への憧刃以下の性能な冥輝を放り投げて左手でキャッチ。

「えーと？　「成分結晶：ゴルドゥニーネ・レプティカ３」……こいつの名前か？」

なんつーか、生物って言うより機械の名前みたいだな。おっとごめんよ冥輝、無事これをクリアしたらお前の効果も産廃じゃなくなるから今は耐えろ。

回復アイテムは大量に買い込んでいるが、ここに来るまでの封雷の撃鉄・災によるデメリット回復で結構使ってしまった。

ノーダメ……は流石に侮り過ぎだがそれでも被弾は最小限にしなければならない。

「隙ありぃ！」

壊刀乱魔、戦極武頼、剣舞【紡刃】、パーシスタンドから繋げて縷々閃舞。

スタミナ消費を抑えた多段ヒットがエフェクトの花を咲かせる。悶える黒ツチノコと口から伸びた腕、だが触手型ではなく骨と関節を持つ人体型であることが仇になったな。

この位置だと地味に腕を回すのが難しいだろうからなぁ！

「第二形態だろうが第三形態だろうがとっとと移行させせてぶっ潰す！」

どうしたどうしたぁ！　レスポンスが悪いんじゃないか？　ラグか？　ゴミ回線使ってんじゃねーぞ対応が二手遅いんだよ！

とはいえ意気込んだはいいがやはりタフネス、曲がりなりにもボスエネミーか。というかツチノコ部分に攻撃が通っている気がしない、となると……

「えいっ」

ザンッ（腕に攻撃）

ブシュッ（飛び散る粘液）

じゅわわ……（金照の表面が溶ける）

「ほぁぁぁあ！？」

マジかよ武器の耐久削り！？　くそッ、傑剣への憧刃のクリティカル効果でも多分防げないだろう。安全策を取るなら傑剣への憧刃でツチノコ部分を殴れば良いが……

びたんびたんとのたうつ腕を見る限り、分かりやすいほどに弱点なんだよなぁ……つまり武器を使い潰して腕を殴り続けるか、ダメージの通りは悪いが通常の消耗具合でツチノコを殴るかってことだ。

だが残念だったな、この金照には使用者の体力を喰らって耐久を回復する効果がある！

「リソースの削り合いだ、どん底に沈むまで殴り合おうぜ……！」

冥輝君は……うん、そのぉ……ご縁が無かった！　そう、この敵とはご縁が無かったんだ！

やはり攻防含めてやり取りされる数値がインフレーションしている時が一番楽しい。鱗の一枚もないぬめりとした腕は既に幾多もの傷が刻まれ、半分溶けかけた金照に意識を集中させれば使い手の命を糧に刃は蘇る。

しかし厄介なツチノコだ、金照の方は合体ゲージが溜まりきっているが硬い蛇部分を攻撃せざるを得ない冥輝のゲージ溜まりが悪い。まぁ意図して設計されたものではないだろうが、互いに性能が異なる対刃剣にこんな弱点があったとはな。

エフェクトを帯びた冥輝が黒ツチノコの喉を穿った瞬間、同じ場所を攻撃した事で一念岩穿（いちねんいわうがち）のダメージボーナスが爆ぜる。それにより何らかの効果が発動してはいるのだろうが、この戦いが始まってからずっと胴体から腕までを這う刺青の如き傷によってそ

れは霧散してしまう。

「くそ、分かっちゃいるが勿体無い気分だ」

ポーションガチャ……おっ、当たりだ。

死にかけから死にそう、くらいにまでは回復した体力で勇魚兎月を構えつつ黒ツチノコ……ゴルドゥニーネ・レプティカ3とやらを見据える。

「第二形態、か……」

時間経過か、それとも何のひねりもなくダメージか。トリガーが何なのかは検証しなければ分からないが、とりあえず分かっていることがある。

俺はどうやらあのモンスターを少々勘違いしていたらしい。即ち、蛇の中に何かがいるのではなく……

何かが蛇の皮を被っている。

「つまりは脱皮ってことかよ」

ガワはあくまでもガワだ、通りでダメージが入らないわけだ。鎧騎士相手に鎧だけ狙っているようなものだ。

そしてあの黒ツチノコの中にいる何かは目覚め……いや、皮を脱ぎ

捨てようとしている。

何のために？　メタ的に言えば第二形態、ロールプレイを気取って言うのなら……本気で俺を潰す為。

まるで風船の中でスーパーボールが跳ね回っているような、ただでさえ蛇としては奇妙な形を内側からの衝撃でさらに歪なものに変えていく黒ツチノコ。

見た限り黒ツチノコを内側から攻撃する「打点」は四つ。さっき引っ込んだ腕といい、これもしかしなくても、二腕二足的なモンスターじゃあ……

その時、黒ツチノコの身体が内側から「腕」に突き破られた。

先程までの形状として骨を肉と皮で包み、関節と指、爪を持つからこそ「腕」と呼称していたもどきとは違う。

よく女性の手や指を褒め称える時に「白魚のような」なんて言葉を使うが、まさしくその言葉が該当するような女性の手が、色を明確に判断することはできないが恐らく紫であろう黒ツチノコの体液に塗れて妖艶になる。

「オイオイ……前哨戦だぜ？」

ゴルドゥニーネのＥＸシナリオを発生させてすらいないのに、ここで人型ボスとか大盤振る舞いかよ……

「ハァァァァァ……」

「年齢制限的な要所要所は鱗で隠れてるが……完全な人型だな」

人型ではある、サイズが三メートルくらいあるって点に目を瞑れば

人間にしか見えないだろう。大きなお山を二つお持ちだが普通に質量兵器だな、揺れるアレに当たったら死ぬな。

俯いているから顔は見えない、底冷えするような女？　ｉｎ黒ツチノコの吐息だけがやけに響く。こういう時ＢＧＭとか……無い、あっはいそうですか。

その時、ふと魔が差した。

「おい蛇女」

「………」

リュカオーンにはこちらの言葉を理解するだけの知能があった、ウェザエモンは人間、クターニッドはよく分からんがテレパシー的なものを、そしてヴァイスアッシュはなんでもないかのように人の言葉を使う。

じゃあもしかしたらゴルドゥニーネもそうなのでは？

そんな些細な疑問から、俺は三メートル程ある人型の女へと会話を試みた。

「服着ろよ、常識だぞ」

「…………ひ、ト」

空耳か？　いや違う、呼吸で「と」の音は出ないだろう。

「自己紹介でもするか？　俺は……」

「わ、タシ、ハ………ゴるド、う、にぃネ」

自称ゴルドゥニーネが顔を上げる。
目が二つ、鼻があり耳があり……耳の根元まで引き裂けた口から伸びる先が二股に割れた長い舌、目は哺乳類のものとはかけ離れた爬虫類の眼、紛れもない蛇相(じゃそう)はそれが人ではないことを明確に示していた。
「ゆエに……殺す」
「上等じゃねーか素材の足しにしてやるよ蛇女が！」
口裂け女を撃退する言葉ってなんだっけ、えーと……あ、そうだ思い出した。
「ナパームナパームってかぁ！？」
口裂け女一人を撃退するのに焼夷弾(ナパーム)って、物騒な都市伝説だなぁ。

ネイキッド・マーダー（後書き）

半裸の鳥頭「脱いでないで服着ろよ常識だぞ」
全裸の蛇女「お前に言われたかねーよ殺すぞ」
争いは、同じ変態（レベル）の者同士でしか発生しない！！（ＡＡ略）

ゴルドゥニーネちゃんが非常に面倒くさい理由を書き連ねたいけど割と核心的なネタバレになるので話せないジレンマ
どれくらい面倒臭いかというと妖怪人間べムにヤンデレとツンデレと暴力属性付与した上で優しさ皆無のけものフレンズスレイヤー＝サンみたいな事になってます

にしてもなんで人型になったんでしょうね、不思議ですね（すっとぼけ）

月無き地底に月光を

良い事と悪い事というものは大抵同時にやってくる。それがどちらかに偏ったものが「幸運」であり「不運」なのだ。

例えばゲームを購入したなら、娯楽を入手したという幸運の陰には所持金……資産を消費したという不運がある。だがそれを嘆く者は少ないだろう、不運を上回る幸運があるからこそゲームは楽しいのだ。

その点幸運度合いが低いクソゲーって割と金ドブ（金をドブに捨てる、の意）案件じゃ……ふふふ、覚悟の上での修羅の道じゃないか。おっと危ない即死攻撃、回避回避。

「シィィイ！！」

「動きが素直すぎなんだよ馬ァ鹿！」

なにやら身体から分泌した毒的雰囲気を漂わせる粘液を剣の形にした時はひやりとしたが、この程度ならエナドリ無しでもなんとかなる。

とはいえ立地が悪い、なんとかすり鉢状の穴から抜け出せないか試しているのだが。

「チッ……【発射せよ（Firing-up）】！　んでもって【成長せよ（Growing-up）】！」

勇魚兎月では相性が悪過ぎる、煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手に切り替えて間合いの維持を心がけながら真下に飛ばした晶弾をすぐさま起動、水晶柱を形成し即席の盾とする。

奴の体液性の武器はすなわち液体、パリィが実質無効化されている。弾いたところで飛び散るだけだからな、暖簾に全力でタックルする方がまだ有意義だ。

「一応鉱物なんだけどな……」

自称ゴルドゥニーネが持つ液体の曲剣が水晶柱に叩きつけられ、紫色の粘液が水晶柱をじわじわと溶かし始める。

耐久性を著しく損なった水晶柱が自称ゴルドゥニーネの蹴りで粉砕され、その後ろに隠れていた俺の姿が露わになる。

「死ね！」

「悪いな、そりゃ虚ろう水鏡ってやつだ」

致命秘奥【ウツロウミカガミ】、ヘイトを切り離す奥義によって生み出されたデコイに注意を向ける自称ゴルドゥニーネの懐へと潜り込んだ俺は、右腕に銀の光を輝かせながら跳び上がるようなアッパーを奴の顎へと叩き込む。

俺（デコイ）にトドメを刺さんと屈み込んだのがお前の失策だ。奴の顎に食い込んだ右拳に伝わる確かな重さ、一応無いとは思うが衝撃を受け流されるようなこともなく。

「揺れろ脳天！」

レテ・パニッシャーの効果で気絶確率を高められた一撃によって自称ゴルドゥニーネの身体が大きく仰け反る。怯んだ！　よっしゃあ！

「脇腹！　脇腹！　大きく振りかぶってぇ……脇腹ァ！」

執拗なリバーブロー、堪らず数歩後ろへとたたらを踏んだ自称ゴルドゥニーネへさらに連撃を重ねていく。
角度を調整して晶弾発射、起動したなら奴の振る剣の軌道上に水晶の柱。
肉が硬いものにぶつかる音と共に自称ゴルドゥニーネの手首が水晶柱に激突し、一時的に剣として形を成していた毒液がその力を失う。

はンッ、こちとらフレーム単位でタイミング合わせることなんざ慣れきってんだよ！　ルーレットで目押しジャックポット出来るようになってから出直してきな！
リアルのルーレットはともかくゲームの場合、表示されるルーレットの動きは全く関係なしにルーレット開始から押した時点での経過秒数で判定される事とか割とあるからなぁ……目押しでタイミング完璧なのに止まりかけた針が急停止したり再加速した時は笑うしかなかった。

おっと、話を戻そう。
俺にとって今この状況は「幸運」寄りだ、なにせ向こうが態々「人型」かつ「物理メインの動き」にスタイルを変えてくれたのだから。
別に対人が飛び抜けて得意というわけではないがこちとらクソ強剣豪を倒したばかりなんだ、テンションの波が来ている。

このテンションの波ってやつはプレイヤースキルじゃどうにもならない、健康的な生活を送っているのに連敗を重ねる時もあれば、死ぬ程疲れてるはずなのに何故か連勝できる時もある。
「絶好調のタイミングを完全に割り出す方法があったら金を払ってでも知りたい」とは知り合いのプロゲーマー（魚類）の言だが、全

くもって同感だ。だが今この瞬間、俺は理想的な波を掴んだ。

「流石に巨人相手に役割模倣(ロールプレイ)は想定外だけど、それでも根本の対処に共通があるんだよ……っとお！」

毒液を武器として一点に集中してくれるお陰で危険が明確化された、時々人体力学的に明らかにおかしい動きで襲いかかって来たりするが……え？　人間の身体が「W」の形にねじくれて突進してくる程度「便秘」じゃ当たり前の攻撃だぜ？　むしろ「W」人間の周囲一メートルに吸い込み判定付与してからが本番だし。

人体への冒涜という点では他に類を見ない「便秘」に慣れきった俺からすれば、腰を180度回して背後に攻撃してくる程度なんて事はない。

あらかじめ仕込んでおいた晶弾(クリスタルバレット)を起爆、急速成長した水晶柱三本が槍の如く自称ゴルドゥニーネへと襲い掛かり……しかしその先端はゴルドゥニーネに当たることはなく。だが計算通りだ。

「ギ、ィ……！？」

「攻撃じゃなくて妨害なんだよなぁ……おっしゃダメージ稼がせてもらうぜ！」

動きさえ止めてしまえば勇魚兎月の活躍の場がやってくる。さぁ、ゴルドゥニーネの「呪い」を採取……って。

「具体的に「呪い」って……何？」

そもそもこのゲーム的に「呪い」ってオブジェクトじゃなくてステータスデバフじゃん、要するに数値と文章……どう、集めろと？

「普通に身体を断っても「成分結晶：ゴルドゥニーネ・レプティカ4」しか出ないし……」

いや、これが目的のアイテムか？　いやいや、なんか違う気がする……というか地味に４へとランクアップしてる、その場で進化したのか？

「おい蛇女、ちょっと「呪い」出してみろよ」

「ガァァァァアッ！！」

「オゥ、ストロングマッソー……」

見た目の割に耐久力ゴミなので脱出されることは想定内だったが、まさかそんな衝撃波出したみたいなぶっ壊し方されるとは。

「殺す！　殺す！　殺すぁぁぁ！」

「思考レベルが三徹した時の俺と同じくらいだ……ん？」

ゴルドゥニーネの呪いって毒なんだよな？　毒ってことはつまり一応物質（オブジェクト）として存在してるってことで、つまり導き出される結論は……

「マぁジぃ？」

奴が振り回す液体の曲剣をこっちも斬撃でクリティカル迎撃しろと？　兄貴、流石にちょっと難易度高すぎ……いや待て、出来ないこともないぞ。

「となると準備が必要になるが……行けるか？」

罠師プレイ自体は心得があるものの、流石にこの状況で罠を仕掛けるのは少々難易度が高い。

最低でも勇魚兎月、煌蠍の籠手が必要であるしソロなのでヘイト管理も考えながら動かなくてはならない。

「時間的にも次善策込みでチャンスは一回、ノーデスノーミス……いいじゃん、こういう時こそテンションの上げどころだろう！」

やってやろうじゃねーか、その為にも計画変更（チャート）！　勇魚兎月続投の上で合体ゲージを溜める。

「来やがれ蛇女！　カフェインが燃え尽きるまで踊ってやるよ！」

「シィィィィッ！」

振り下ろされた毒液の刃。横にステップを入れフォーミュラドリフト起動、本来ならばブレーキになるはずの踏み出した足が滑り加速する。

ざらついた岩の上をドリフトしながら自称ゴルドゥニーネの真横へと移動、見た目だけなら肉感的な……実際に斬りつけてみると高密度のゴムにニス塗りたくったような不毛極まりない感触の肌にスキル連続起動で威力を高めた縷々閃舞を叩き込む。

チッ、自称ゴルドゥニーネがタフいのもあるが場所が予想以上に俺と相性が悪い。

俺（サンラク）というキャラクターはステータスこそ偏重、程度で収まっているが習得しているスキルはその殆どが機動力に関するもの、もしくは

機動力を高めるものだ。
そしてすり鉢状の穴、という上方向への逃げ道が少ない場所。そして何よりも夜であるにも関わらず月が見えないという最大の制約が「月狼の誇り（マーナガルム・プライド）」の発動を縛っているのだ。
つまり今の俺は最高のパフォーマンスが出来ない状況にある。封雷の撃鉄・災と瑠璃天の星外套を使えば普段以上の機動力も可能ではあるが、失敗が許されないこの場で慣れきっていない挙動はリスキーだ。
掴み攻撃、明らかに触れたら即死しそうな毒手の掌を龍宮院　富嶽の見様見真似（なんちゃって）ステップで紙一重、逆手に持ち替えた左手の冥輝で自称ゴルドゥニーネの手首を斬り上げる。
蛇由来のくせにやたら頑丈な骨は、肉の少ない手首ですらマトモにダメージが通らない。いやというかこれさっきより硬く……
「危なっ！？」
いや違うこれ速くもなってる、まさか脱皮ってそういう事なのか！？
「カロロロロ……」
「日焼けした？　っていうかパクるなよオイ……」
青白い肌は先程よりもより硬い漆黒の肌に、片手に出現させていた毒液曲剣はもう片方の手からも出現。
明らかに先程よりも硬く、速く、そして極悪性を増した自称ゴルドゥニーネは舌舐めずりをして、その蛇眼で俺を睨め付けた。

月無き地底に月光を（後書き）

ゴースの遺児＋冷たい谷の踊り子

例えそれが不毛な炎であるとしても、尽き果てぬ蛇にとってはただ一つの灯火ゆえに……

ちなみに裏話をすると初期設定では「断涯のゴルドゥニーネ」にする予定のハデス硬梨菜改めアグニス硬梨菜でした。
あの、ウチ３凸シヴァいるから出番が……というかＳＳＲキャラピックアップとはなんだったのか（同時にカグヤ）

マルチタスク・プレスティッシモ

全く、ゴルドゥニーネって奴は俺を何度喜ばせれば気が済むんだ。この喜ばせ上手さんめ。

「遅い遅い！　柔軟足りてねぇぜ自称ゴルドゥニーネさんよぉ！」

「死、ねぇ……！」

「双剣ってのはこう使うんだよ！」

皮膚が頑丈になった？　あぁ、その代わりに柔っこかった（なお圧縮ゴム的質感）頃の柔軟性を失ったな。
毒液曲剣が二本に増えた？　あぁ、その代わりに動きが読みやすくなったな。

双剣ってのはただ闇雲に振り回せば強いってわけじゃない。右と左で攻撃を分担するわけだから左右の剣による攻撃のタイミング、攻撃範囲などの兼ね合いでクセが出る。
長剣二本の二刀流には夢があるが、取り回しを考えればやはり双剣は短い方が扱いやすい。まぁ双剣術の心得が現実であるわけでもないのだが。

対刃剣はそこらへん合体後の性能ありきだから形状が独特なんだよなぁ、柄尻同士をくっつける旧兎月型やヴォーパルバニーの一匹が使っていた例の鋏型はまだマシで、一度だけ試してみた勇魚兎月の合体形態……【蒼耀月（ソウヨウゲツ）】なんかは特殊形態過ぎて思わず笑ってしまった程だ。

ギリギリと力のこもった腰のひねりから放たれた回転斬り、対するこちらはあえて自称ゴルドゥニーネに背を向け、斜面を利用したバック宙返りでスカしつつ空中でフリットフロート。
空中の足場でバック宙返り2コンボを決めて自称ゴルドゥニーネの背後に着地。
「流石にその、刺突はな……」
色々と気が引けるので斬撃を自称ゴルドゥニーネの尻……の少し下辺りに食らわせる。くそッ、地味に倫理コード的観点からの精神攻撃がつれぇ。
「ゲージは後少し……」
脱皮直後の生物が柔いように、時間経過で本来の硬さを取り戻すように。時間が経過するほど自称ゴルドゥニーネのステータスが上がっていく。唯一の救いは毒液は硬くならないってことかな？　液体だし。
「位置取りから考え直しか、上から下だと確実性が減ったか……」
左右同時の振り下ろし、左右に回避は危険と判断し前へ跳ねる。
双剣の間を潜るようにすり抜け、遮那王憑きで強化された跳躍力で自称ゴルドゥニーネの両腕を足場に着地、さらに跳んで頭を踏みつけもう一段。
リキャストタイムが終わったフリットフロートとグラビティゼロを起動、天地逆さまの状態で形成された虚空の足場を蹴って下向きに加速する。

「これで……ゲージＭＡＸ！」

上から下への斬撃がゴルドゥニーネのうなじから腰までをなぞり、冥輝の発動した何かしらの効果は刻まれた傷によって拒絶される。

さて、これで下準備はおおよそ整ったが今すぐに行動、というわけにはいかない。

自称ゴルドゥニーネは時間経過で強化されている節がある。

最初の脱皮直後から今現在、全身が漆黒に染まった巨躯の人型は煌々と憎悪に瞳を輝かせ、単純に沸騰しているのか別の原理なのかは分からないがボゴボゴと泡立ち始めた毒液双剣を携えこちらを睨め付ける。

「次は何だ？　遠距離攻撃でもするつもりか？」

「爆ぜろ」

「ぬあぁっ！？」

事前に予告してくれていなかったら間違いなく死んでいた。バックステップというかバックダッシュと言ってもいい全力の後退の数秒後、巨体を浮かすだけの脚力による跳躍で跳び上がった自称ゴルドゥニーネの毒液双剣が地面に叩きつけられる。

その瞬間、言葉通り爆発した毒液が当たらなかったのは単なる偶然だ。

再度生成される泡立つ毒液の剣、その様子に目を細めつつも爆発効果が付与された毒攻撃をどう潜り抜けるのかを脳みそフル回転で考えつつ身体を動かす。

「予定変更してばかりだが……やっぱり使うか？」

右手に装備された琥珀が嵌め込まれた手袋にちらと視線を向けつつ、先程からずっと組み立てては崩れるを繰り返すチャートを再び形成する。

恐らく理想的な攻略法は脱皮直後を狙って速攻で片をつける事だったのだろうが、過ぎたことはどうしようもない。
改めて作戦確認、金照の結晶(アイテム)化効果で自称ゴルドゥニーネの呪(毒)いを採取、そこから煌蠍の籠手に繋げてゴリ押しで決着させる。
前半は私情で後半はユニークシナリオのクリア条件、ソロで発生させたのだから自称ゴルドゥニーネの体力がソロ向けに調整されていることを祈るしかないが……いけるか？

俺に直接叩きつけるのではなく、地面にぶつける事で発生させた毒爆破で俺を削る方向にシフトした自称ゴルドゥニーネに背を向けて距離を離しながらその瞬間の到来を待つ。

組み上げたチャートを満たすために必要な条件は三つ。

「逃げ、惑え……踊れ……死の舞踏を……！」

「戦略的撤退だ、視点が狭いぜ蛇女ァ！」

まず第一、ゴルドゥニーネに大技を使わせ隙を見出す事。流石に分身程度がウェザエモンの晴天大征並のクソ技は使ってこないだろう。
問題は毒液双剣が爆発性を帯びた事で攻撃後の隙を使えなくなったという事だ。つまり相手の攻撃に合わせなければならない……やはり使うしかないか。

「ちょこまか、と……！」

「ヘイヘイ随分とすっとろい捕食者じゃねーかそんなんじゃ風に揺れる花も食えないんじゃないかぁ！？」

口は煽りに、思考はチャートに、身体は対応に。対人で培われた並行処理でエネミーというよりもＮＰＣに近い自称ゴルドゥニーネには攻撃ならぬ「口」撃がよく効く。今更だが本当に優れたＡＩだ、流石は軍用レベル。

思考を戻す、第二に理想的な座標の確保だ。最初はすり鉢状の穴の中央に陣取って上から来る自称ゴルドゥニーネを迎撃する算段であったが、やはりネックになるのは爆発する毒液双剣。仮に迎撃に成功しても下手をすれば結晶化したそれを拾う前に死にかねない。求められる一撃は爆撃機のような攻撃と離脱の両立、攻撃と離脱を同時にこなせるだけの直線機動。その実行の為にはこちらから動くしかない。

「大技の挙動をコントロールして誘導……初期案の迎撃を転用……参考は落とし穴……よし」

「シィィィィッ！」

爆発効果が付与された攻撃なんてこれまで渡り歩いてきたクソゲーで飽きる程見てきたっての、爆風に触れてもアウト、というのは大衆に認められたゲームとしては中々にファンキーであるが爆発がホーミングしてきたり何故か一分近く爆発し続けるケースと比べれば有情も有情ってやつよ。

爆発時間の計測、三秒でダメージ判定が消えるものと仮定して四秒

で前へと出る。すでに合体ゲージは溜まりきっているため攻撃の必要はあまりないのだが、リュカオーンやエムルを見ているとＡＩの判断能力でこちらの考えを見抜かれかねないという判断からだ。
毒液剣を爆破させた後、再出現させるまでに若干時間がかかる事は分かっている。つまり片方だけ爆破したなら一時的に片手剣使いに、両方爆破したなら一時的に無手になる訳だ。

隙の大きさという点なら後者を狙うべきなのだが、今回用があるのはその武器なのだから厄介だ。
であれば狙うべきは前者と後者の折衷案、自称ゴルドゥニーネが両手の毒液双剣を同時に叩きつける最大威力の爆破攻撃の瞬間に後手から先手に転じて武器を叩く。

「ギィィィィィイイ！　爆ぜ、死ねぇぇぇぇぇえええ！」

「絶好の好機（チャァァアアンス）！！」

ＮＰＣだからこそ分かるモーションの予備動作だけではない「感情」の予備動作。猪口才な人間の息の根を止めるために振り上げられた毒液双剣は大技の行使を予感させるには十分すぎる。
フォーミュラドリフトを利用した全速力のバック走、大穴の中心を挟んで自称ゴルドゥニーネと俺の位置が一直線に繋がる。

「さぁ行くぜ【蒼耀月】！！」

合体機能解放！　進化したその力、ユニークモンスターに叩きつけてやれ！
かつて見たヴォーパルバニーの対刃剣は「Ｘ」の形に交差することで鋏の形となった。以前の兎月【双弦月（ソウゲンゲツ）】は柄尻同士をくっつけることで片刃の両手剣となった。では勇魚兎月は如何様な姿となるの

か。

金照を軸に冥輝を寄り添うように、しかし若干冥輝をズラした状態で二つの刃を平行に並べる。すると冥輝の水晶刃がパキパキと成長し、金照を包み込むようにしてその剣刃を拡大した己の刃に取り込み始めた。

そして完成した姿は二つの握りと一つの刃を持つ金色の芯を濃紺の身で包んだ両手剣と言うべきもの。だがそれはあくまでも見た目上のもの、これの本質はもっと別の場所にある。

「来いよ自称ゴルドゥニーネ、真っ直ぐ行っててめーをぶっ飛ばす」

【蒼耀月】の力を……それだけじゃない、晴天流の真髄をとくと味あわせてやろう！

マルチタスク・プレスティッシモ（後書き）

対モンスター書きたくて自称ゴルドゥニーネ戦にシフトチェンジしたのに対人書きたくなってくるジレンマ
サイガー１００さんは見た目の良さもありますが戦法がかっこ良すぎるために彼女のフォロワーは結構多いです、ダブルオークアンタみたいな戦い方するので

禁句１：火縄大橙ＤＪ銃
禁句２：フルボトルバスター
禁句３：トレーラー砲
禁句４：メダガブリュー

勇魚兎月【蒼耀月】はこれらの武器とは一切関係……無いよ？　ホントダヨ？（目そらし口笛）
新しく摂取した特撮成分をすぐに小説に導入ようとするのは悪い癖ですね……持病なので治るかどうかは微妙ですが生暖かい目で見ていただけると有難いです

必要条件、その三。

それは相手の行動を確定させ、位置取りを確保した上で俺自身が毒液の剣を斬るだけのアクションを実行する事。

その為に必要な要素は後手から始動し先手で実行するだけの速さ、確実に事を成す為の火力、そしてそれらを制御する手段。

「これ自動化できないものか……運営に要望、は流石に無理か」

見ようによっては出刃包丁をそのままサイズアップしたように見える蒼耀月の背峯にある冥輝部分の握りを掴んで刃先を背後に、腰に佩くようにして持ちながら右手にオブジェクト化した成分結晶を取り出す。

そしてそれを蒼耀月へと近づけると、まるで水の雫がより大きな水溜りに取り込まれるように手のひらサイズの結晶体が水晶の大剣へと呑まれていった。

「どうせ周回は出来なさそうだし、アイテムの貯蓄無視で大盤振る舞いだオラァ！」

これまでの戦闘で確保したゴルドゥニーネ・レプティカの成分結晶を全て蒼耀月へと食わせ、合体した一つの刃が持つ能力を発動させる。

「輝塗蒼耀（ディープ・コーティング）！」

音声認識は浪漫があるが一秒すらロスにしか思えないこの瞬間では煩わしさすら感じる。
成分結晶を消費する事で抜き放った刃に消費量に比例した強化効果を付与する、絵面だけ見れば金(アイテム)を注ぎ込んでパワーを得るなんとも言えない絵面だが、見た目だけで強さが手に入るなら苦労しないというものだ。

「さぁ来いゴルドゥニーネ、一撃だ……！」

封雷の撃鉄(レビントリガー)・災(ハザード)を起動。左手で持った蒼耀月、もう一つの握りを右手で掴んで腰を落とした姿勢はまごう事なき居合抜刀の構え。
そうとも、勇魚兎月【蒼耀月】は只の大剣ではない。これは濃紺の「鞘」と、その内部で輝きを増す黄金の「刃」でもあるのだ。

「晴天流奥義……一の太刀！」

晴天流奥義書を神代時代の機器で起動する事でプレイヤーは晴天流奥義を直接脳内に焼き付ける事ができる……いや、あくまでもゲーム的な設定での話だ。リアルの俺にまで影響が出たら流石に怖い。
そういう設定故か、晴天流スキルは通常のスキルとは少々毛色の異なる開放が行われる。
まず最初にスキルが一つ解放され、それを徹底的に使い続ける事で次のスキルが解放される。通常スキルと異なる点は第二スキルが解放されても第一スキルはそのまま残るという事、そしてスキル単体も強化を重ねる事で最終系……墓守のウェザエモンが使っていた奥義へと到達するという事だ。
故に一の太刀、それは超速抜刀「断風(たちかぜ)」に至る風の名を冠する抜刀

術。

「カァァァァッ！」

元は蛇のくせに、四足歩行の獣の如き前傾姿勢で飛び込んでくる自称ゴルドゥニーネに対してこちらも雷を纏って踏み込む。

瞬刻視界(モーメントサイト)によるスローモーションの世界の中、左手に握る鞘と右手に握る刃に力が宿る感触がやけに強く感じる。

だがこのままでは同時の衝突でしかない。それではダメだ、先を取る為にすべきは過程を踏み越える跳躍の一歩……！

「【瞬間転移(アポート)】！」

互いに駆けるならば、一歩踏み込み、二、三を飛ばし四を踏む。

間合いの短縮、序章と終章を残して過程を全て破り捨てるかのような禁じ手(タブー)は後手より走り出した俺が先手を掴み取る為の最善の一手。

自称ゴルドゥニーネの眼前、空中に躍り出た俺の姿に蛇相の眼が見開かれる。その姿にどこか滑稽さを感じて口の端を歪めつつ遮那王憑き、及びフリットフロートを起動。

空気の足場を踏みしめ、虚空に踏み込む。抜き放たれんとする黄金の刃は濃紺のオーラを纏い、その一閃はまさしく夜空を引き連れた月の輝き。

「晴天流……「疾風(はやかぜ)」！」

抜刀の瞬間、晴天流の抜刀術とは別にもう一つのスキルが発動していた。

それは勇魚兎月【蒼耀月】に備えられたもう一つのスキル「致命の月蝕（エクリプス・ヴォーパル）」。
強制的な合体解除、という条件を承諾する事で鞘に充填された魔力が刃……金照を押し出す事で抜刀を加速させるというスキルだ。
そして晴天流一の太刀「疾風（はやかぜ）」は抜刀攻撃スキル、その性質は抜き放たれる刃に付与されるものだ。即ちこの二つのスキルは抜刀術という一工程において両立ができる。

「な、ぁ……っ！？」

加速する夜空、天蓋が閉じられた地底の洞窟に、雷を纏い、疾風（しっぷう）と化し、夜空を引き連れた月光が高らかに歌う（SEを響かせる）。
抜き放たれた刃は「致命の月蝕」の効果に従い【蒼耀月】ではなく勇魚兎月【金照】としての効果を発揮、毒液の双剣が衝撃に反応するよりも速くその刀身が水晶へと変じていく。
さらに毒液を斬り抜け、なお進む刃は自称ゴルドゥニーネの首に決して浅くはない線（傷）を描いた。

「ふっ……決まっ、た……！」

意地でも失敗してなるものかと気合いで着地し、封雷の撃鉄・災の効果を解除。再び二本の刃となった勇魚兎月を構えて振り返る。
暫しの静寂、そして完全に結晶化した毒液の双剣が砕けた瞬間、首筋から紫色のダメージエフェクトを噴出させた自称ゴルドゥニーネの絶叫がトンネルを震わせた。

「ギィァァァアアアア！！？」

「ぐ……即追撃とは行かないか……」

晴天流「疾風」は発動時点でのスタミナを全て消費して放つ渾身の一撃。消費したスタミナが多い程威力は上がるが当然攻撃後は一時的なスタミナ切れとなる。全身を鎖で雁字搦めにされたような脱力が一刻も早く終わるよう念じつつ、ウィンドウ操作はできるという判定を利用して勇魚兎月を煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）へと切り替える。

「はよ立てはよ立てはよ立て……」

アイテム化した毒液……「呪い」を拾って、超排撃で削って、それでも余るなら手持ちを使い切ってでも倒し切る。

それはあちらも同様だ。今までの憎悪がぬるま湯に感じられるような、自分自身すらも焼き尽くしてしまいそうな純粋な怒りを目に宿した自称ゴルドゥニーネが真っ直ぐただ一点、俺だけを睨みつける。

「殺す」

「……こっちの台詞だ」

ここから先は俺も本気だ、叩きのめしてやる。起因する感情こそ異なれど、互いに燃え盛る戦意を抱いている。

片や疲労に鈍る身体を、片や痛みに怯む身体を。速く動けと脅しつけながら如何にして相手を仕留めるか、ただそれだけを考えてその瞬間を待つ。

「不愉快……本当に不愉快。私が私である為に、人も私も本当に不愉快……ネ」

だからこそ気づけたのか。
思考を自称ゴルドゥニーネただ一点に集中させていたからこそ、ノイズが逆に際立ったと言うべきか。
そして瑠璃天の星外套に記憶された瞬間転移（アポート）の魔法が、俺と自称ゴルドゥニーネの運命を分けた。

「!?　っ、瞬間転（アポー）……」

「死ネ」

全てを焼き払うような憎悪、背筋に氷柱を刺されたような悪寒、痺れるような濃密な気配。
ゲームで表現しうる全ての危険信号が確認するよりも先にこの場からの離脱を選択させた。

そして視界が俺のいた場所から五メートルほど後方に下がった光景に切り替わったのを認識するのと同時に。

「ぎぷっ」

何か黒色の大質量が、自称ゴルドゥニーネに真横から激突した。
三メートルはあるであろう自称ゴルドゥニーネが、奇妙な声を残して人間と変わりないような吹っ飛び方をする。そしてある程度の視界が慣れてきた時、初めて自称ゴルドゥニーネを吹っ飛ばしたモノの……そして瞬間転移（アポート）を使っていなければ俺をも同様の運命にしていただろうモノの正体を認識した。

「デカい、蛇……か？」

アルクトゥス・レガレクスに匹敵する、即ち電車程の体躯を持つ巨大な鱗持つ身体。
独特の光沢は爬虫類に見られるそれであり、このトンネルがどこに繋がっているのかという基本的な情報が俺に解答を齎した。

「オイオイ、嘘だろ……」

「生きてる？　不愉快は続くのネ」

すり鉢状の穴の淵に立つ小さな影。
自称ゴルドゥニーネと比べればあまりに小さな、それこそ人間の高校……いや、中学生程度しかない小柄な純白の少女。
まるで様々な地域の民族衣装を一度全部引き裂いてグチャグチャに繋ぎ合わせたような、奇妙な服を纏っているがモデリングが当然のように美少女である為元々そういうファッションであったかのよう

に見える。

だが何よりも。

その表情に浮かぶ侮蔑よりも、その目は自称ゴルドゥニーネの憎悪すらをも凌駕する、直視するだけで身体が石のように固まってしまいそうな、ドロドロとした赤い蛇の目が、迷い込んだか弱い少女などでは断じてない事を示している。

そして少女の形をした怪物の背後に控える、四匹の大蛇。蛇と呼ぶには角まで生えたそれはもはや龍……いや、ファンタジー的には龍蛇（ナーガ）とでも呼ぶべきか。

「私は」

それは独白か、それともこの場にいる俺と自称ゴルドゥニーネに向けての言葉か。

「私は私を生んだ人を憎む、私を脅かす私を憎む、私を阻む兎を憎む……ああ、世界は今日も不愉快だワ！」

だから、と純白（アルビノ）の少女（へび）は酷薄な笑みに溢れんばかりの殺意を乗せて宣言する。

「死んで頂戴？」

「お前がぁっ！　死ねぇぇぇええ！」

だが次の瞬間、撥ね飛ばされた衝撃から復帰した自称ゴルドゥニーネが怒号を上げて四匹の龍蛇（ナーガ）を従える少女（へび）……「無尽のゴルドゥニ

ーネ」へと襲いかかった。

徹頭徹尾の憎悪を食む蛇（後書き）

ついに変態（動詞）少女ゴルドゥニーネちゃん登場！
「えっ、全裸じゃないの？」って考えたそこのお前、極刑に処す
なおどうあがいてもレプティカが４になった時点で本体が出張ってくるので二重の意味でタイムリミットが課せられたユニークであった模様。

ちなみに四匹の龍蛇ですが
ゴルドゥニーネの右上にいる奴がグラト普段ス、右下にいる奴がヴォレモス、左上にいる奴がアベルシア、左下にいる奴がサナトスです。
ゴルドゥニーネの遺伝子から生まれたサラブレッド・スネーク的な存在で一匹だけでもエルフの村を五分で更地に出来ます。森のおやつ故致し方なし、頑張れ勇者トットリ・ザ・シマーネ

ゴルドゥニーネ・レプティカ４は時間が経過するほどアイデンティティが確立される為キャラクター、つまり性格が定まってきます。
つまり脱皮したばかりの自称ゴルドゥニーネさんが殺す殺すマシーンなのはそれが理由です、五年くらい生き延びることが出来たらちゃんとしたキャラクター性が与えられていたかもしれませんが……
残念、現実は非情なのです

その舌は煽りの他を知らぬが故に（前書き）

グラト普段ス「グラトスです！　グラトスです！」

その舌は煽りの他を知らぬが故に

おぉ、知っているか自称ゴルドゥニーネよ。ゲームとは、創作とは得てして先手が負けるように出来ているものだ。
これに関しては原始的な勧善懲悪が何よりの証拠だ、悲しいことにどれだけ平和の素晴らしさを説いたとしてもヴィランが先に暴れなければヒーローは輝けないのだ。

「生まれたての私。嗚呼、そうやって私を揺らがせる。不愉快、とても不愉快ネ」

「殺す！　死ね！　死ねぇぇぇ！」

「私の可愛い子供達、どうか私を壊して頂戴ナ、どうか私を殺して頂戴ナ……もう二度と私にならないようにネ」

自称ゴルドゥニーネの爆発する毒液双剣が再度生成される。だがそれが叩きつけられるよりも速く動いた四匹の龍蛇（ナーガ）が自称ゴルドゥニーネへと殺到する。

一匹目の龍蛇が自称ゴルドゥニーネの右腕を食い千切った。

二匹目の龍蛇が自称ゴルドゥニーネの左腕に食らい付き、噛み千切りながら地面へと叩きつけた。

三匹目の龍蛇は自称ゴルドゥニーネの腰に牙を突き立てて腰の肉を毟り取った。

四匹目の龍蛇はすでに虫の息な自称ゴルドゥニーネの足に噛み付き、まるで飼い主へ狩りの成果を見せつけるかのように満身創痍の自称ゴルドゥニーネを純白の少女の前へと放り投げた。

もはやこれは戦いですらない、処刑？　袋叩き？　いいやもっと酷い、小学生にプロボクサーがメリケンサックつけて殴りかかるようなものだ。強者が弱者に暴力を押し付ける、反撃すらも許さない……ああそうだ、これはサンドバッグだ。

「………」

正直なところ、ユニークシナリオのクリア条件を考えればこのまま放置するのが正解なんだろう。

ヴォーパルバニー達を蝕む呪いは自称ゴルドゥニーネのものであり、それさえ倒せば彼らは帰宅して家族に会うことが出来るようになる。

俺はヴァッシュやエードワードからの覚えが良くなり、既に「呪い」の成分結晶は回収したので自称ゴルドゥニーネがやられたのを確認し次第、逃げるも特攻かまして死ぬも自由だ。

でも違う、そういうのは違う。誰でもない俺がそう思う。

ああそうだ、別にゲームの主役的な正義感とかそういうわけじゃない。

だけどさ、例えば俺が一対一のゲームをやっていたとして。いきなり横から入ってきた奴が俺から操作権を奪って無双したとして。

「どうだ凄いだろう」とか言われても「横入りすんな馬鹿」と殴りかかるしかないだろう。

「あら？　なんのつもりかしラ？」

「そりゃぁ俺のセリフだろ、横からしゃしゃり出てきて何様のつもりだクソガキ」

「フフフ、コレの姿を見て怯え竦まないなんて、随分と勇敢な人（ゴミ）なのネ」

龍蛇の突進に比べればあまりに軽い無尽のゴルドゥニーネの踏みつけ。だが肉体的なダメージは無くとも、その踏みつけは心を折る。

「別にそいつがフルボッコにされてることに意義があるわけじゃない、どちらにせよ俺がやるかお前がやるかの違いだ」

その言葉に自称ゴルドゥニーネの焼けるような眼差しが俺を射抜くが、当たり前だろう。お前座標無視して攻撃当ててくるくらいしなきゃ俺の本気は引き出せないぞ。

「俺が文句言いたいのはさ、人の獲物横から掻っ攫って偉そうな面してんじゃねーよって事だぞスクショして晒すぞゴラ」

「すくしょ……？　ウフフフフ、少しだけ愉快だワ。晒されるのはお前の屍でしょうニ」

デコピンっ！

「…………」

「…………」

いや、その……ね？　こう話しながらだんだん近づくことで距離を詰める作戦的なものを先程から実行していたのだが、思った以上に会話に花が咲いたというか……うん、もう目の前にいるんだよね。

「えーと、これか……」

全体像の他にバストアップスクショも撮影してっと。
ぽかんとした表情で額に触れる無尽のゴルドゥニーネの表情が保存されたのを確認して、俺は今年何度目かの更新となる煽りを喰らわせてやる。

「良かったな、もし俺が本気だったらお前三十回は死んでたぞ」

いやまぁどうせ見た目と反比例してクソ耐久だろうし無理だけどさ、「ゴルドゥニーネ」系モンスターってもしかして煽り耐性絶無に等しいんじゃないかなって。

ストン、と表情の抜け落ちた顔。純白の少女は口角を釣り上げるが、全く笑顔に見えない。ただ笑顔の形を作っただけ、という表現がしっくりくる……そういう顔だ。
完全におちょくられたゴルドゥニーネは静かにただ一言。

「不愉快だワ」

「俺超愉快なんだけど」

トントン、と琥珀を胸に当てつつ追い煽りをかましまして……

「ころっ」

グシャアッ！！

スタートの合図は空砲がわりに頭を踏み抜かれた自称ゴルドゥニー……ちょっ、自称ゴルドゥニーネぇぇぇ！！

「殺セ、跡形もなク……惨たらしク！」

「うおおお死んでたまるかぁぁぁ！！」

ここまで煽って巻き添えに自称ゴルドゥニーネも死んでしまったというのに、あっさり死んだら末代まで黒歴史じゃねーか！　絶対生還してやるぅぅぅ！！

時間は十分程遡る。

戦争が人的資源の数で決まる時代はとうの昔に終わった。ＡＩの発

達、遠隔操作の精度上昇、今や戦争の戦力とはより多くの機材を作る資金力。ダイレクトな金の殴り合いとなった……

だがシャングリラ・フロンティアの時代設定は中世であり、即ち戦争の有利不利は人的資源によって決まる。

そしてそれは人同士の戦いでなくとも適用される事であり、ヴォーパルバニーとゴルドゥニーネの眷属による激突は、ある種の膠着状態に陥っていた。

「えぇーい！」

スキルなど関係ない、ただ膂力と技量に任せたフルスイングによって振るわれたあまりに邪悪な大鎌が大蛇の首に致命的な傷を負わせる。

「これっ……えぇと、ヤバいって奴ですね！？」

「全く、兄者も無茶をするで御座る……なっ！」

辺り一面に散らばるゴルドゥニーネの眷属……大蛇達のドロップアイテムを拾う暇すらない。そこかしこで繰り広げられるヴォーパルバニーと大蛇の戦いの中を秋津茜は走っていた。

「うぅ、使いづらい……」

「慣れぬ武器ゆえ致し方なし、しかし武器の損耗は深刻に御座るよ秋津茜殿！」

蛇を駆逐し、戦線を押し上げ、穴を塞ぐ。言うは易いが絶え間なく現れ続ける蛇に対応し、制圧したトンネルに明かりを灯し穴を塞ぐ

後方部隊を守るという動作を延々と繰り返す事は中々に骨であった。

「まさにシャトルランですね！　他の参加者がライバルじゃなくて味方だから頼り甲斐があります！」

ツルハシを岩に叩きつけるように鎌の先端を叩きつけられた大蛇がゲームエフェクト的マイルドさで砕け散る。

それを差し引いても蛇に鎌を叩きつける狐面の少女、と言うものは中々にホラーな光景であったが、一歩間違えば蛇に丸呑みにされかねないヴォーパルバニー達からすれば救いの女神に他ならない。

「あぁっ、もう壊れそうに！」

「致し方ないとはいえ秋津茜殿は鎌の扱いが雑すぎるに御座る！鍬や鋤ではないんで御座るよーっ！？」

「うう、そんなこと言われましても……」

ゴルドゥニーネの眷属の厄介な点は単純な物量だけに留まらない。秋津茜……というよりレベル９９のプレイヤーであれば一撃で撃破可能な蛇の中に一匹だけカンストプレイヤーすら一撃で半殺しにするようなエネミーが混ざっていることもあれば、強力な蛇の群れに何故か一匹だけ貧弱な蛇がいたりと、個体によって強さがバラついている。

どこから強い個体が襲いかかってくるのかが分からず、そして逆に強い個体だけが固まっていることすらある。

拍子抜けにあっさり倒せたと思えば後続に派手に吹っ飛ばされることも珍しくはなく、秋津茜とて何度か危うい場面こそあったがこれまでの激闘の果てに得たステータスによってなんとか耐えていたの

だ。

「うぅ……ちょっとお休みしたいです……」

「……なら、私が……代わります」

「え？」

振るわれる轟音、今にも秋津茜に食らいつかんとしていた大蛇の顔面に鉄槌が叩き込まれる。

その衝撃は大蛇の顔面から骨を伝って全身を震わし、怯んだところにスレッジハンマーの乱打が叩き込まれる。

「間に合って……良かった、です」

「むっ、貴殿は……サイガー0殿！？　何故この場に……」

「へっへーん！　見たかシー兄(にい)！　アタイが連れてきた鎧の人は強いだろーっ！」

確固たる力に握られた致命の大槌(ヴォーパルスレッジ)を担ぐ鎧の騎士。その足元で猪に乗った兎が踏ん反り返る。

「サイガー0さん！」

「ど、どうも……えぇと、サンラク……さんは、どこでしょうか？」

「この先で戦ってますよ！」

「じゃあ……」

ラビッツ防衛戦、襲いくる無尽の大蛇の前に騎士が立つ。このゲームにおいて最高峰の力を持つプレイヤーはただ一言。

「蹴散らし……ましょう」

宣言した。

その舌は煽りの他を知らぬが故に（後書き）

実際実入りの良さで言ったら秋津茜達の「義勇兵」シナリオの方が遥かに良い模様

満身創痍の鬼ごっこ

「うおおおお！？」

自称ゴルドゥニーネは身を以て教えてくれた……アレに捕まったら死ぬ、と。いや見りゃ分かるので無駄死に感が酷いがストーリー進行における強制イベントっぽいので成仏してほしい。

ガヂン！　とおおよそ蛇の顎門から出る音ではない牙と牙の激突音がすぐ背後で鳴り響く。
なんとなく詰み感が漂っていたので念の為に瑠璃天の星外套を外しておいて正解だった。今の位置、間違いなくマントをはためかせていたら喰いつかれていた。

「あっ、馬鹿やめろ先回りは死ねるだろうが！」

タイミングと位置を合わせて拳が地面に激突する寸前に走りながら晶弾発射、着弾と同時に前へ進んだ分拳が叩きつけられる場所がズレて丁度晶弾を起動できる位置を叩く。

水晶柱に飛び乗ってジャンプ、前方から俺を丸呑みにせんと口を大きく開いて突っ込んできた龍蛇の突進をさらに空中でフリットフロートを起動して回避。壁に足が触れたところでグラビティゼロ、オーバーフローも合わさって猛烈な速度で走り出す。

「くそっ、ミスったか……！？」

思わずラビッツ側に逃げてしまったが、どうせ死ぬならゴルドゥニ

ーネ側に逃げて情報収集すべきだったか。いや待て、逆にこれラビッツまで逃げ切ればなんとかなるんじゃないか？

今までラビッツに侵攻していたのは自称ゴルドゥニーネ……もとい分け身だった。本体が現在進行形で俺を追いかけている以上、別にゴルドゥニーネがここには入れないという制限は無いようだ。では何故今まで分け身に侵攻を任せていたのか？

ああそうとも、ラビッツにはヴァッシュがいる。十中八九ユニークモンスターのヴァイスアッシュがいる、恐らくそれがある種の抑止力になっていたんだ。

というかクターニッドの真理書やゴルドゥニーネを見るに、ええと……「墓守」「夜襲」「天覇」「深淵」「冥響」「無尽」だから……「不滅」のヴァイスアッシュになるのか？

「っだぁぁ危ねえっ！？」

クソ、見た目通りの頑丈さでゴリ押ししてくるとか……！
顔から思いきり壁に激突した龍蛇を壁面フォーミュラドリフトで回避したのはいいが、ただでさえ加速している最中にさらに加速するような真似をしたせいでドリフトと言うよりもスリップに近い状態になる。

「お、とととと……ぉっ！？」

一瞬身体が制御不可能になるが、ここで焦ると派手にすっ転ぶ。落ち着いて……おや、丁度いいところに道が。

「背中借りるぜ蛇野郎！」

リキャストが終わり次第ノータイム再起動で酷使し続けている遮那王憑きの効果で上昇した跳躍力で天井から地面へと跳び上がる。両足が離れた瞬間、スキルによって歪められていた正しい重力方向によって一気に真下へと引っ張られるように落下するが、丁度真下で首を持ち上げていた龍蛇……クソ、どいつもこいつも似た見た目してるからこんがらがってくる。空中で体の向きを直しつつ宙返り、そのまま龍蛇の背中を滑って降りる。

クソ、今の着地は流石に瞬刻視界を使わないと失敗する。本当にヤバい時に使わないとリキャストが足を引っ張りかねないと言うのに……おや、何やら後ろから毒の大剣が。

「うぐっ！？」

煌蠍の籠手を収納！　クソが、左腕がやられた！
自称ゴルドゥニーネと同様にあの毒は「呪い」であるようで、先程から刻傷がものすごい勢いで毒をレジストしているのだが、そのせいで左腕に電流を流され続けているような感覚が消えない。
ダメージは……多分幸運の効果で耐えたか？　最後の予防線を使わされてしまった、というか本体は毒武器飛ばせるのかよ卑怯くせぇ！

「まずは左腕……ウフフ、さぁ泣き叫んで逃げなさい鼠さン？」

「クソガキめ……」

もう一度デコピンしてくれようか。しかしどうしたものか、レジストによって致命的なデバフは防がれているがこれでは左手が使い物にならない。

「そもそもクリア条件がさっぱり分かんねぇ……」

自称ゴルドゥニーネは撃破した……まぁ厳密には撃破されただがまぁそれはいい。じゃあ絶賛鬼ごっこを繰り広げるコイツをどうすればいいんだ？　強制負けイベントならそれまでだが、シナリオ名が「兎の国防衛戦」である以上、この大規模戦闘が終わって初めてクリアの可能性が高い。

つまりどちらにせよゴルドゥニーネを何とかしない限り終わらないし終われないのだ。

選べる選択肢は三つ、逃げ切るのか……戦うのか……死を選ぶか……おや、灯り？　……あっ、そうか。戦線を押し上げるって言ってたし、ヴォーパルバニー達の防衛が成功したなら俺が自称ゴルドゥニーネと戦っていた位置から近い場所にヴォーパルバニー達が来てるのか……これマズくね？

「全員逃げろぉぉぉぉ！！」

これやってる事は完全にモンスタートレインだなぁ！？　畜生プランBだ！

ゴルドゥニーネの眷属達が混乱状態に陥り、ヴォーパルバニー達を蝕んでいたヒビ割れの呪いが消失した。
それは即ち最前線のさらに先、敵の懐に飛び込んだ人物が呪いの根源を撃破したということを示している。
ある者は顔の半分がひび割れていた、またある者は腹部が半ばほど砕けかけていた。酷い者は全身がひび割れ、下手に動けば砕けてしまいかねなかった。
さらにこの毒は病のように伝染する、故に兎達はこのくらい洞窟から帰ることもできなければ家族に会うこともできなかった。
だがそれも今日この瞬間終わる、歓喜に跳ねるヴォーパルバニー達の武器に力が篭る。それは希望に満ち満ちたものであり、混乱するゴルドゥニーネの眷属が一掃されるのはそう遠くない未来であった。
そして最後の一匹、複数の頭を持つコブラのような蛇が大槌と大鎌によって命(HP)の最後の一雫を削り取られ沈んだ事で、奇妙な静寂が広がる。
ヴォーパルバニー達の見つめる先、そこには一目見て業物(レア武器)と分かる長ドスを携えたヴォーパルバニーがゆっくりと武器を持つ手を掲げる。

「我々の……勝」

「全員逃げろぉぉぉぉ！！」

緩みかけた雰囲気が緊迫に塗り潰される。それは響き渡った警告の声を聞き取ったからであり、それと同時に迫り来る禍々しい気配を

本能的に感じ取ったからに他ならない。

「えっ、えっ、何事ですか！？」

「ごめーん！　やばいの連れて来ちったー！」

暗闇の中から申し訳なさげな声が響く。それに伴い、頭陀袋に肉を詰めて引きずった音を何千倍にもしたような轟音はその音と振動を次第に大きくしていき……そしてついにヴォーパルバニー達によって設置された松明の光がそれらを照らし出した。

「うおおおプランBィィィ！」

電光石火の如く駆け抜ける半裸の人間、鳥を模した面をつけたその男は四体の龍の如き蛇に狙われながらも、左腕に力が入っていないものの驚くべき事にほとんど無傷なままトンネルの隅へ……四体の龍蛇が一塊に連なる位置へと移動すると右手で虚空に何かを描くように動かす。

次の瞬間、どこからともなく現れた純白のマントと漆黒の籠手を構えると、殺到する龍蛇に臆する事なく拳を振りかぶる。

「残存全ブッパ……７５％だ。【超過機構（イクシードチャージ）】、超排撃（リジェクト）ォ！！」

秘めたる黄金を晒した鉄拳のフックが龍蛇の横っ面を捉える。ほんの一瞬、何もかもが停止したような静寂。そして次の瞬間、莫大なエネルギーの破裂によって龍蛇が真横へと吹き飛ばされる。

倒れゆくドミノは次のドミノへと崩壊を伝達する。蘇った超技術によるな七割五分の排撃（フック）が直撃した龍蛇は吹き飛ばされるように仰け反り、大質量の不意な挙動はすぐ横にいた三体の龍蛇を巻き込んで

絡まる。

そしてただ一手で一時的に四体の龍蛇を行動不能にしてみせた張本人はと言えば。

「こういう時だけ乱数の女神微笑みすぎじゃね……？」

「意地汚く生き延びてるなんテ、本当に不愉快ネ」

「あっこれ知ってる頭がリンゴみたいにグシャアされるやつ」

誰もそれが近くに来ていたことを気づいていなかった。獲物を狙う蛇が静かに地を這うように、殺すと決めた人間の……サンラクの頭を掴んで持ち上げる純白の少女。

その表情はヴォーパルバニーを苦しめ続けていた分け身の命を踏みつぶした時と同様に、その行為に躊躇いも感慨もない。

「さぁ、血色の花を咲かせまショウ？」

「お、俺を倒したとて第二第三のサンラクがお前を……」

みしり、とサンラクの頭からダメージエフェクトが漏れて……

ゴッ！！！

次の瞬間、スキルエフェクトの乗った大槌の一撃が純白の少女を打ち据える。規格外の膂力を持てどその身体は華奢な少女の平均的な重量に準拠する。それ故に純白の少女は軽々と吹き飛び、思わずといった様子で緩んだ手からサンラクの頭が解放される。

「て……敵ですよ、ね？　敵でいいです、よね？　……敵、ですね。」

「斎……もといレイ氏、諸々の質問は飲み込むけど、グッジョブ……」

「だ、大丈夫ですか！？　えーとサンラクさんも、派手に吹っ飛んだ方も！」

「あれでくたばるなら俺も自称ゴルドゥニーネも苦労してないさ……あれはモノホンのゴルドゥニーネだ」

まるで寝起きに身体を伸ばすように、サイガ－０のフルスイングによって妙な方向に曲がった首を元に戻す純白の少女（へび）。

「嗚呼……不愉快だワ」

満身創痍の鬼ごっこ（後書き）

（実行）↓（疑問）↓（確認）↓（自己解決）

殴った後に考える女、サイガー０

・怨毒（おんどく）
ゴルドゥニーネが付与する「呪い」の上位状態異常。致死性のものではなく、より対象を長く苦しめる効果を持つ。
基本的な装備不可、プレイヤーのＶＩＴを「１」としてダメージ計算を行う。つまり呪われた部位は何を着ようが素っ裸以下の敏感肌になる。
見た目としてはひび割れ、そこから僅かに黒煙が漏れ出ているように見える状態。
実はファインプレーしてくれていた刻傷。

何故溜めておいた金剛晶二つがなくなって……おや、こんなところに脂の乗ったカツウォヌス……ウッ、頭が

敗北だけが負けじゃない

ハズレ
アタリ
アタリ
アタリ

今日の女神様は機嫌が良いらしい、ポーションガチャで差し引き大成功を達成した上にまさか死亡フラグを三連続くらいでへし折る事に成功するとは。

「左腕は……もう少しすれば使えるか？」

流石の「呪い」と言えどレジストされ続けた状態を永遠に繰り返す訳ではないようで、ここまでの逃走劇で左腕に付着した毒はそのほとんどが剥がれ落ちていた。まさか三分間服を着ることができる以外にこの忌々しい傷に感謝する日が来ようとは。

「とはいえ状況は最悪だな……」

エードワードの指示で一般的ヴォーパルバニー達が後方へと避難してはいるが、あの四体の龍蛇を食い止められるようなタンクはここにはいない。

「悪い、面倒くさい女に絡まれてな……蛇だけに」

「…………？　あっ、蛇だから！」

やめろ秋津茜、時間差でギャグを理解されるのは結構つらい。
とはいえ龍蛇を一時的とはいえ封じることができたのは運が良かった、一匹を障害物にして動きを滞らせる程度を想定したプランBだったがまさか勝手に絡まるとは。

「ええと、普通にハンマーで叩いてしまったん、ですけど……」

「大丈夫大丈夫、その程度で死ぬなら俺が一人でカタをつけてた」

現に折れた首を自分で元に戻すとかいう最高に「人の形をした怪物的行動」をやってるし、下手すりゃ首を切り落としても胴体だけで暴れそうだ。

「エードワード！　出来れば兄貴を……ヴァイスアッシュを呼んでほしいんだけど、やっぱ無理！？」

「伝令は飛ばしたぁ！　だがどっちにせよここで止めなきゃどうしようもねぇ！」

ごもっともで、折角戦線を押し上げたのにこいつのせいでさらに奥まで押し込まれたんじゃ笑い話にもならん。

「EXシナリオじゃないなら負けイベ濃厚では、あるが……」

何も負けイベとは一方的に殴られるだけではない、体力を一定ラインまで削った時点で戦闘終了するタイプも「勝てない」という意味では負けイベだしな。

「リュカオーンも前提シナリオがあったわけじゃねぇ、撃退なら行けるか……？」

希望的観測だ、俺は当然として秋津茜もレイ氏も消耗している……
って言うか頑張って飲み込んだけど何故しれっとレイ氏ここにいる
んだ、ルルイアスか？　ルルイアスでヴォーパル魂稼いだのか？
クッ、時間差でサプライズを仕掛けてくるとはやはり策士かレイ氏（斎賀さん）
……っ！

なんとなくだが秋津茜が情報漏らした臭いな、エンチャント・ヴォ
ーパルという武器要らずの魔法がある以上、シャンフロ廃人が有限
のインベントリに無駄武器詰め込むとは考えにくいし……いや、流
石に穿ち過ぎか。

「ウフフ……龍に、狼に、一番不愉快な気配……ウフフフフ、み
ぃんナ壊して殺して消し去ってしまいましょウ。そうしましょウ」
「確認した限りじゃ毒を剣の形にして高速で飛ばしてくる、食らっ
たら呪われるっぽいから警戒！」

「はい！」

「了解……です」

秋津茜ならまだいいが、レイ氏はつらいところだな……鈍重、では
ないが俊敏というわけでもない。警戒の外だったから食らった、と
言えば言い訳がましいが不意に撃たれたら避けるのが難しい攻撃で
あることは事実だ。
それに自称ゴルドゥニーネの攻撃を思い返す限り、「呪い」以外に
も追加効果が付与されそうな気配がプンプン漂ってる。まぁ十中八
九爆発はするだろうな……ホーミングはやめろ、繰り返すホーミン
グはやめろ。

「ひぇぇぇぇ……」

ふと視線を横に向ければ、何故か猪に乗ったヴォーパルバニーが猪共々ガタガタと震えている。言葉を喋っているということはヴァイスアッシュファミリーか、レイ氏付きの兎か？

「ヘイそこのバニー」

「ひょわっ！　わ、わわっ！　鳥の人だ！　スゲー、本物だぜヴォットホッグ！」

「ブィイ！」

「あ、はいそうですす鳥の人ことサンラクですどうも」

なんだろう、黒毛だしエムルとは全然似てないんだけど、魂的なアレにエムルみを感じる。
エムルよりも小柄だし妹っぽいが……あまり強そうには見えんな。

「ここは今から戦場になる、後ろに避難しときな」

一応悪足掻きではあるがＭＰ回復に挑戦……おっ、当たり。

「えと、その、でも……」

「なぁぁぁぁぁぁ………」

ん？

「ぁぁぁぁああにやっとるですわぁぁぁぁーっ！！」

「ふげぅ！？」

おぉ、見事な空中殺法(ルチャドール)……いやお前魔法職だろエムル。

「いきなり走り去っていったと思ったらこんな最前線ど真ん中で突っ立ってるんじゃないですわーっ！」

「ご、ごめんようエムル姉(ねぇ)！」

ガミガミとこんな状況で妹……妹だよな？　妹を叱るエムルであるが、まぁ少し落ち着け。俺は回復に勤しんでるから参加できてないけど今レイ氏、秋津茜、エードワードが必死にゴルドゥニーネ相手に耐えてるんだからな？　うん、時と場所を考えろってことよ。

「まぁとりあえずエムル、お前に任務を言い渡そう」

「は、はいなっ！」

「割と切実にヴァッシュの兄貴を連れてきてくれ……いやマジで」

現状戦闘終了できそうな可能性がマジでヴァッシュしかいねぇ、プレイヤー陣は死んでも生き返るが流石にエードワードが死んだらヤバい未来しか見えない。

「頼んだぞエムル、これは最重要ミッションだ」

「は……はいなっ！」

「じゃ、じゃあな鳥の人！　あとで武勇伝（ぶゆーでん）聞かせてくれよなっ！　ハイヤーウォットホッグ！　風になるぜぇーっ！」

「ブルルルォォッ！」

名前を聞きそびれた兎ｏｎ猪が走り去っていったのを眺めつつグビリとポーションを一気飲み、実際に胃に溜まるわけじゃないがそろそろつらい。

「ぐふぅ……良し行けエムルゴーゴーゴー！」

「はいなぁ！」

……さて、と。あとはエードワードを避難させりゃ心置き無く死ねる訳だが、流石にそこまで甘くはないか。

「しゃあねぇ、腹括るか！」

思えばリュカオーンと戦ったあの時と同じメンバーだが、やれるところまでやってやろうじゃねぇか！！

左手が完全回復するまでは下手に武器を握っても役に立たない、右手にのみ海喰の剣（ブループレデター）を握りながら俺は立ち上がる。

全力時と比べれば４０％と言ったところだが、やってやれないことはない！

「おっしゃそのツラ泣かせてくれるわーっ！」

あわよくばＥＸシナリオ発生ーっ！

「あー……生きてる？」

「なんとか……」

「ゲームだと分かってるんですけど、やっぱりちょっとつらいです……」

まぁ、今回は龍蛇四匹とかいう鬼編成もオマケで付いてきた訳で、

五分持ち堪えただけ善戦したと言えるのではないだろうか。
とはいえ俺は右腕を食い千切られ、秋津茜は左足、レイ氏は鎧にヒビが入る程の衝撃を腹に受けている。
エードワードが瀕死とはいえ五体満足なのはある種の奇跡だな……グッジョブだぜ乱数の女神様。

「おういエードワード、お前だけ走って逃げろ」

「ぐ……」

「まぁ特攻かませばお前が逃げる時間くらいは稼げるさ」

強化装甲と戦術機獣を使えばもう少しなんとかなったかもしれないが、あれは今リアクターが手元に無いので使えない。
無いものをねだったところで虚しいだけだが、さてどう時間を稼いだものか……やっぱりここは煽り攻撃でヘイトを集めるか？　いや、でもそれやると顔か腰に呪い食らいそうなんだよなぁ……半裸が全裸になるのは色々とつらい。性能的な意味でも見た目的な意味でも。

「よっしゃあクソ蛇がぁ！　もっかいデコピンしてやっからデコ出せコラァ！」

システム的に死なない限り、俺は首だけになっても動くぜぇ……超動くぜぇ……！　実際俺を本気にさせたら片目以外の五感を全て封じる超絶クソバグだって乗り越えられる。唸れ俺の左手、今こそ封印されていた奥義「デコピン桜吹雪（今思いついた）」を解放する時が……！

「おうサンラクよう、おめぇさん達はそうかもしれねぇがよう、命は粗末にするもんじゃあねぇ……」

「んえぁ」

変な声出た、いやそんなことよりヴァイスアッシュの兄貴ィ！

敗北だけが負けじゃない（後書き）

実際ゴルドゥニーネはギミックボスなので負けイベではあるもののヴァッシュが来る、来ないでルート分岐する模様

重要そうで重要でない少し重要な事実

でかい方が強キャラ、むしろ小さい方が強キャラ。この命題はＲＰＧ黎明期より今に至るまで結論が出ていない、だが俺はこの瞬間答えを見た。
人間大とはいえただの兎相手に龍蛇達は恐れ慄き、後ずさる。
「おうおうエードワード、まぁた随分と痛めつけられてるじゃねぇかぁ」
「オ、オヤジ……」
「おう、こいつぁ返してもらうぜぇ」
立ち上がれない様子のエードワードの傍から長ドス……鍛龍を拾い上げたヴァッシュはすらりと鞘から刀を抜き、その峰を肩に乗せてゴルドゥニーネを見遣る。
「おめぇさんが出張りゃあ、俺等ぁが出張る……分かってんだろう？　おう……」
「随分とこいつらにご執心なのネ？」
「見込みの芽を咲く前に摘むもんじゃねぇだろうがよう……なぁ？」
「いいエ、見込みなんてありはしないワ。今も、これから先モ……私が私である限リ、私は私でしかないのヨ」

ユニークモンスター同士にのみ通じる何かがあるのか、よく分からない会話を続ける二体のユニークモンスター。

私が私だから私は私でしかない……？　卵に卵を混ぜて卵をトッピングした料理、みたいな……マヨネーズを油代わりにしたプレーンオムレツにマヨネーズをトッピングした的な？　そんなくだらないことを考えつつも、さて啖呵を切って立ち上がった今の俺はどうするべきかと考えていると、先に動いたのはヴァッシュであった。

「俺等ぁも、おめぇさんも……互いに身内同士を戦わせてのこの結果よう。だったらおめぇさん、そこにしゃしゃり出るのはお門違いってやつじゃぁあねぇのかい」

「………」

ゴルドゥニーネの底冷えするような眼差しにもヴァッシュは揺らがない。威圧しているわけでも、刀を振り回しているわけでもないと言うのに龍蛇達は怯え、先程までゴルドゥニーネが握っていたはずのこの場の支配権がヴァッシュへと移らんとしている。

さて、完全に手持ち無沙汰になってしまった俺はどうすればいいものか。

「……ふん、興が醒めたワ」

あァん？　なに睨んでんだテメェ、ヴァッシュ見てるとビビるからってこっちにヘイト向けようってかいい度胸じゃねーか確かゴルドゥニーネの右上にいた奴だな顔覚えたぞゴラ。

「でも忘れないことネ……私は、必ずお前が匿っている奴を殺しに行クの。お前の眷属を鏖殺(みなごろし)しながら……ネ」

ヒュンッ、と風が吹いた。はて、洞窟なら後ろから前に風が吹くだろうになぜ竜巻のような風が……

「ゴァァアォォァァアア！？」

「うおぉう」

さっきから「こいつならイケる」的なガンを俺へと付けてきていた龍蛇が悲鳴を上げる。レイ氏のアポカリプスにすら耐えてみせた頑丈な鱗が下の肉ごと切り刻まれ、ダメージエフェクトを撒き散らしているのがここからでも見える。

え、なに今の。ウェザエモンの断風の方がまだ分かりやすかったんだけど……え、魔法？　まさかスキルじゃないよな？

「迂闊な言葉をよう……やったらめったらぁに、使うもんじゃあねぇぜぇ……？」

別に敵対する気がある訳ではないけどさぁ……うん、ゴルドゥニーネもヴァイスアッシュもどう勝てばいいんだ。ギミックボスだよな？　これでリュカオーンやウェザエモンみたいなガチンコタイプだったら流石に死ねるぞ。

それはそれとしてやーい顔面ズタズタざまぁーっ！　龍蛇はどいつもこいつも同じような顔してるから見分けるのに丁度いいな。

「消えな、ここはもうおめぇさんの場所じゃあねぇよ」

「あの私が掘った穴に執着なんて無いワ、でも……いいワ、此度は私が引いてあげまショウ」

「ぷぇー…………うおおあっぷぁ！　ぶねぇ！？」

なんとなく暇になったので変なポーズしながらゴルドゥニーネに煽り思念を送っていたら毒剣を連続で五本ぶち込まれた。ヴァッシュは助けてくれなかったが……あっはい茶化した俺が悪いですね、はい。

どうやら本当にこの場を引くようで、身を翻したゴルドゥニーネはしかしてチラリと振り返って俺を見つめる。

「お前、必ず殺すワ」

「ほざけ、無尽だか無償だか知らないがな……俺達はいつか必ずお前の喉元に剣を突きつける、覚悟しとけ」

鼻で笑われた。

ははは、こやつめ、ぜったいゆるさねぇ……！

いつか来る決戦の日にどんな煽り言葉を叩き込んでやろうか考えながら睨む先、純白の少女が暗闇に消え、それに続くように四匹の龍蛇(へび)が消える。

そして静寂。キン、とヴァッシュが長ドスを鞘に収めた音がやけに大きく響く。改めて見渡せばやはりひどい状況だ、紙装甲たる俺や秋津茜が欠損レベルのダメージを受けるのは分かるが、レイ氏の双貌の鎧が砕けかける程とは……

「兄貴ィ、ありがとうございやす」

「おう……もう少しすりゃあ後ろに下げた奴らが来るだろうがぁ……ん、手間だな」

「はい？」

おっと兄貴、何故刀を抜くんですかね？　というか鍛龍に今まで見たことないタイプのエフェクトが発生してるんですが、ちょっ……待っ！

「痛みはねぇからよう……【安楽(アンラク)】」

サクッと首チョンパされる俺、心臓を一突きされる秋津茜、首筋の脈を斬られるレイ氏……不意打ちすぎて全く対応できなかった。え、兄貴ご乱心？

「おめぇさん達ぁ、目覚めりゃなんもかんも治っちまうからなぁ……先にラビッツにぃ帰ってな」

痛みはなく、強いて言うなら頭が地面に落ちた感触すら感じられて……………

『ユニークシナリオ「兎の国防衛戦」をクリアしました』
『称号「兎の国の防人」を入手しました』
『ユニークシナリオＥＸ「致命兎叙事詩(エピック・オヴォーパルバニー)」が進行しました』

「いやちょっと待て！」

グシャグシャになった思考が纏まるよりも先に指が動く。

デスペナルティが無い、信じがたいがあのスキルか魔法か、どちらにせよなんらかのシステム処理を伴う「安楽」でデスしたプレイヤーはペナルティがつかないのか。

いやそれよりも、死ぬ瞬間に聞いたヴァッシュのあの言葉……嘘だろ、今までずっと感じてきていた違和感が全部繋がっちまった。

「目覚めれば全回復……そりゃそうさ、リスポーンなんだからな」

ああそうとも、基本的にゲームというものは現実と違ってやり直しが利く。その最たるものこそ「セーブ」と「リスポーン」だ。

俺達は間に十年間のラグを挟んでもセーブした場所から物語を再開できる、肉片すら残らない爆発に巻き込まれて消し飛んでも万全の状態で再発生する。

……だがそれはゲームの話だ。

「第四の壁？　いいやニュアンスが違う、元々そういうものとしての認識だ、どれだけ爆睡していてもエムルはそういうものだと認識していた……ああくそっ、二号（おれたち）計画ってそういうことかよ！」

ベッドの柔らかさを利用して跳ね上がってからの宙返り、宝くじの一等に当選したのと同時に家の鍵を閉め忘れたことを地球の裏側で気づいた気分だ。

「ああもうっ！　今からライブラリの拠点に殴り込みかけて全部ぶちまけてェーっ！！」

これは一人で抱え込んでいい案件じゃないでしょぉぉ！　でも話せないんだなこれがぁーっ！

あまりにも当然過ぎてスルーしていた事実に、衝動のままに宙返りを繰り返す。

NPCとプレイヤーは同じシステム下で動いていたとしても別物だ、だがこのゲームの場合……いや、このゲームの世界観での場合、もっと根本的に別物なんだ。

つまり

「開拓者(プレイヤー)と一般人(NPC)はそもそも別種族……？」

「えっ」

世界の真理に踏み込んでしまった衝撃に震えていると、部屋に入ってきたエムルがポツリと言葉を漏らす。

だがそれは衝撃の事実に対する驚愕のそれではなく……「えっ、今更？」とでも言いたげな若干の呆れを含んだ……ん？

「え、なにその顔」

「え、だってサンラクサン……死んだら最後に寝た場所に復活するとか神代の加護がある開拓者サン以外に出来るわけないですわ……？」

…………。

「え、何、つまりお前最初から知ってたの？」

「サンラクサン、一般常識ですわ？」

…………。

むんず

「ふゃっ？」

ぐにぐにぐにぐにぐにぐにぃーっ！

「ふぉふひゃぁあぁあぁあぁあ！！？」

「そういう事はちゃんとイベント起こした上で言及するもんなんだよエムルァーッ！」

エムルの頬を高速でぐにぐにしながら吼える。叙述トリックじゃねーんだからちゃんと説明しろやオラーッ！！

重要そうで重要でない少し重要な事実（後書き）

まぁ午後十時以降から明け方までしか活動せず、宿屋から出ていったはずなのに何故かチェックアウトしたはずの部屋から現れる人間とか冷静に考えて怖過ぎという

ぶっちゃけ種族：プレイヤーよりもゴルドゥニーネの「私が私である限り、私は私でしかない」の方が二百倍くらい重要です。この一言がゴルドゥニーネの六割を物語っています

残り四割はやけにあっさり退散した理由

神代の加護を受けた「開拓者」は他の人類種と比べて急激な実力向上が起こりやすい。
そして死亡したとしても最後に休息した場所に転移して何事もないように動き回る。
さらに個体差はあるが数週間眠り続ける者もいれば、短い仮眠以外休息を取らない者もいる。
そして死なないように思えるが、ある日ふっと消えてしまう事もある。

上から順に「レベルアップシステム」「リスポーンシステム」「ログインログアウトシステム」「引退」となるわけだ。
成る程、陽炎より安定しない生物だな開拓者(プレイヤー)……

「つまりプレイヤーという立ち位置そのものが世界観として設定されてたって訳か」

ただ単に世界に住む原住民としてではなくプレイヤーそのものが何故異様に強くなるのか、変なタイミングで活動するのかなどを設定にしている……うーん。

「これわざわざ設定にする程の事か……?」

ぶっちゃけ「そういう生態の生物です」なんて設定を付けなくても誰も気にしないと思うんだがな……いや、この場合は明確にNPCとの線引きとする「一号計画」「二号計画」があるからこその区別化なのか?

「号」という単語は差異こそあれ同じ目的、用途で関連付けられるものに与えられる記号だ。つまり一号計画と二号計画は内容の違いこそあれ、最終的な目的は同一である可能性が高い。

古城骸の地下で見つけた映像、墓守のウェザエモンと遠き日のセツナ、ルルイアスに残された手記、謎の「Ω」……おおよその骨格は見えてきたがまだ肉をつけるまでには至っていない。

やはり鍵を握るのはバハムートなのか。ユニークモンスター関連でも結構情報が齎されるが、結局のところ主役というか話の中心はユニークモンスターだからな……

「そういや他の二人は？」

「秋津茜サンは足の調子を確かめるー、とか言って走って行ったですわ。サイガー０サンは一回起きたけど今は寝てるですわ」

ログアウトかな？　まぁいいや、あの二人にとってはただの防衛戦かもしれないが俺は別件が残っているし。

どうせこの後にもやる事があるんだ、徹夜したらぁよ。エナドリもう一本開けるか……

「さて、行きますか」

「エードワードおにーちゃんのお見舞いですわ？」

「ポーション風呂にでも沈めときゃええやろ、それもあるがわざわざゴルドゥニーネに喧嘩売った理由は別にあるだろー」

「刻傷」の克服、産廃ルートまっしぐらな冥輝君を救う為に呪いを上書きして相殺する手段を獲得する。

その為に必要なアイテムはゲットした、ついでのオマケもあるので
それも含めてお楽しみの武器作成タイムだ。

ラビッツ、兎御殿には二つの鍛冶工房が存在する。一つはビィラックの工房、古匠を獲得したせいか最近はＳＦ味が増してきた。
そしてもう一つが兎御殿の主、ヴァイスアッシュの工房だ。華美にあらず、されど道具の一つ一つに命が宿っているかのような場所……そこにヴァッシュはいた。

「おう……来たかぁ」

「なんだかんだと邪魔は入りやしたが、ゴルドゥニーネの「呪い」
……確かにここに」

取り出したそれは、紫色の液体を内包した掌サイズの水晶体。
アイテム名は「成分結晶：ゴルドゥニーネ・カースドポイズン」、
ただでさえ長ったらしいモンスター名を加えて更に長くなったが「呪い」の採取に成功した確かな証だ。

「そしてもう一つ」

負け色濃厚な時間稼ぎ中、別に回避に徹し続けていたわけじゃない。

隙あらばデコピンを叩き込む事を目標とし、鬱陶しい龍蛇の牙くらいもぎ取れないものかと色々と足掻いたりしていたのだ。

まぁ結果としてはお察しなのだが、それでも多少は攻撃に成功しているし足掻いたおかげであるものの発見に至ったのだ。

「ゴルドゥニーネが引き連れていた四匹の蛇……そのうちの一匹の背中に刺さってたんでさぁ」

お陰で腕一本を犠牲にする羽目になったが、意地と根性で回収したそれはカテゴライズするにしてもあまりに長い……

「えーと？　名は「朽ち果てたアラドヴァル」……っおぉ！？」

がしっ、と。

転移魔法でも使ったのかと勘違いする程の身のこなしで俺の腕を、そして取り出された錆び付いた大剣を掴むヴァッシュ。縮地か、縮地ってやつか。

「えーと……？」

「おぉ……そこにいたのかよぅ、ドルダナ……」

普段の余裕のある態度はどこへやら、一気に老け込んだかのようにじっと錆び付いた大剣を見つめるヴァッシュ。

なにやらフラグを踏んだ臭いがあいにく俺はドルダナなる人物については知らないし、何か特殊なイベントでこれを入手したわけでもない。

いや、特殊(ユニーク)っちゃ特殊(ユニーク)だがジェットコースターみたいに突っ込んで

くる龍蛇の上をルームランナーみたいに全力疾走してる最中に刺さってたのを引っこ抜いただけだし……まぁお陰様で身動き取れなくなって右上野郎に腕食いちぎられたんだけど。

調べたら特にゴルドゥニーネに対して有効とかそういうわけでもない錆び果てた産廃だったんだから笑い話だわな。
まさか聖剣とかそういう系の刺さり方してたくせに産廃とか、ハハハ……とか思ってたらヴァッシュのこの反応ですよ。片腕食われた価値はあったんだなアラドヴァル君。

「あー……なんか兄貴に縁のあるモンっすか？」

「……………いんや、今となってはただの鈍（ナマクラ）よう」

なんでもないならそんな全力で言葉を飲み込んだような顔はしないんだよなぁ……ギャルゲーだと特定モーションや表情がフラグに直結している事が多いからこの手の感情機微には聡い方だぞ俺は。

「どうせ大剣ですし、なんなら兄貴に納めてても構いやせんが」

「おうおう、いっちょまえに気遣ってぇくれるじゃねぇかぁよう……
……だが、いい。何処も知れず消えたぁもんが今ここにあるってぇこたぁよう、そりゃあ「縁」ってぇやつよ。つまりこいつぁおめぇさんが使うべきなのさ」

「はぁ……」

そういうものだろうか、なんだなんだ最近乱数の女神様微笑みすぎだろ。これ絶対揺り戻しが来るぞ、フィーバーの法則だっけ？

「こいつぁむかぁしむかし……ずぅっと昔の俺等ぁのダチが使ってたモンでなぁ……正確には大剣じゃあねぇ」

確かに大剣にしては妙だ、いや実在したタイプの大剣はいわゆるゲーム的「もう板じゃん」な大剣ではなく細身であるものが多いが、この錆び付いた刃はそういうのとは何かが違う。

「こいつぁ……巨人の槍、その穂先よ。どこぞの馬鹿がへし折って直剣として使ってたがなぁ……」

巨人の槍……成る程、違和感の正体はそれか。大剣ではなく、サイズ比が狂ってる槍の穂先だったと。いや待て刀身だけで一メートル以上あるんだぞ？　剣槍タイプだとしても二メートル、三メートルはあるわけで……でもこの横幅的に普通の槍サイズ？　五メートルくらいあるのでは？

「神代のモンじゃあねぇ、世界が産んだモンでもねぇ、確かに誰かが握り、携え、振るったもの……そう言うのをよう、「英傑武器(グレイトフル)」ってぇ言うのサ」

「グレイトフル……」

うん。

考察はまた今度でいいですかぁ！？

「…………」

「うわっ、死んだ魚がいる」

「うるさい仮釈放……」

「保釈金後払いなだけですぅー！」

「それいろんな意味でダメなのでは……？」

さぁ、楽しい楽しい楽しい対エネミー戦の後は楽しい楽しい楽しいたのしい対人戦だ。おかしいな、フルダイブしてる以上肉体側の感覚はほぼ感じないはずなのに舌にエナドリの味が残ってら。

牛乳で割って飲んだんだけどなぁ……

英傑の残照（後書き）

全盛期アラドヴァル「ドラゴン死ね死ねアターック！」
龍蛇「見た目ドラゴンっぽいけどただの爬虫類ッス」
全盛期アラドヴァル「えっ」

・アラドヴァルのドルダナ
アラドヴァルの、も含めてのフルネーム。命名法則に関してはインベントリア参照。
神代が終わり、現代に至るまでの昔。
我らこそ至上種族であると暴虐の限りを尽くした竜種（菌類）を殺すべく立ち上がった異種族混合パーティの一人。
穏やかな人物ではあったが「使いづらい」という理由で槍をへし折って剣にするアバウトな一面もあった。
実際ヴァッシュというキャラのフレーバー程度でしかない（つまりユニークシナリオ的にはどうでもいいマクガフィン）人物ではあるが、短くも長き時を経て彼の穂先の剣は友の元へと届けられた。

・遺機装
こいつらなにが違うの？

・英傑武器
神代時代の武器、遺物であり異物
英雄と呼ばれるべき者が使った武器、中古品も使い手次第で価値が

つく

・勇者武器

詳細は未だ伏せるものの、願いの結晶であり漏れた力の凝固

・神魔の剣、双貌の鎧

［――削除済み――］

人は時間と金があれば大抵の出来事に対して有利を取れる

「ねぇ、彼明らかに不調って感じだけど大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫、サンラク君はほどよく萎びてた方が良い動きするから」

「消える瞬間の蝋燭が激しく燃え上がる的な？」

「そうそう、こいつ二徹し始めた辺りから「こいつ命削って動いてないか？」みたいな挙動するけどエナドリに浸して日光浴びせればピンピンしてるからほっといて大丈夫だよ」

「誰が常時クライマックスだ、昨日は色々ユニークで忙しかったんだよ」

「あ、その件だけどこのゴタゴタ終わったら君の身柄はライブラリと聖女ちゃん親衛隊に引き渡されます」

「帰っていい？」

駄目でした。

エナドリの牛乳割りに、輪切りのウィンナーを混ぜた結果大量の目玉から血の涙（ケチャップ）を流すモンスターっぽくなったオムレツ。それが今の俺を動かす燃料な訳だが、正直ビタミンが足りてない気がする。

「牛って草食だし実質牛肉も牛乳も野菜なのでは？」

「ごめん京極ちゃん、やっぱダメかもしれない」

「ちょっと？」

「叩いて直そう」

フルスイングの頬狙い、首を傾けて回避しつつ目潰し敢行。チッ、避けられたか。

「………」

「………」

「戯れてないで一応作戦会議するよー」

「「うーい」」

京ティメットが首を傾げているがこれで通常運転だから気にしないで欲しい。

「まぁ中身が何であれガワはトップクラスのステータスな訳で、さらに言えば装備も充実してる」

「実際中身がアレだけど「黒狼」のメンバーなだけあって全員プレイヤースキルもあるよ。まぁ対人特化ってわけでもないけどね」

プレイ時間的にはノービスを卒業した程度である俺とオイカッツォへと歴戦ＰＫｅｒ二人が説明する。というか中身をディスる前置きを置かないといけない縛りでもしてんのか。

「まぁ、裏でモモちゃんと繋がってるので五人中三人は対策できるんだけどさ」

「酷いヤラセを見た」

「戦う前から駆け引きは始まっているのだよカッツォ君。まぁそれはそれとしても問題はサイガ姉妹だよね」

レイ氏もといサイガ－０、そしてその姉であり黒狼のトップたるサイガ－１００。中身が何であれそのアバターは強化と武装の限りを尽くした廃人スペックだ。

まっすぐ来る、と分かっていても人がリニアを避けることは難しい。事前に対処することができないならば尚更に、だ。

「僕としては嬉しい限りだけど、八百長とかはしないんだ？」

「流石に黒狼のリーダーがあっさり負けるのは認められないってさ」

ちら、と会場として指定された闘技場の逆サイドにいる黒狼のメンバーを見る。なんというか随分と余裕そうな顔をしている面々の中、

一人だけ真剣な顔でステータスを確認するサイガー100。
この状況自体、奴とペンシルゴンの結託の上で成り立っているらしいが果たして奴の真意とは一体。

「モモちゃんは「剣聖」ジョブ持ちな上に五重奏（クインテット）を使い熟す、とかいう完璧超人だからねぇ……」

「剣聖、か……」

アラミースも確かジョブは剣聖だったっけか。独奏（ソロ）とか五重奏（クインテット）とか、単純に火力の事じゃなさそうだよなぁ……まさか「本数」か？

「実際サイガ姉妹は厄介極まりないんだよね、双方ともに対エネミー寄りのビルドだけど火力が高すぎて対人でも普通に通じるっていう……」

「ていうか、さ。そろそろ聞いてもいいかい？」

しみじみとサイガ姉妹の厄介さを語るペンシルゴンの話を折るようにして京ティメットが割り込む。
その頭から生えた人類のものとはカテゴリが違う耳を揺らし、獣人の剣士は俺たち四人を見回す。

「……あと一人は？」

「そうそれ！　サンラク君が「最後の一人については俺に任せろ」とか言うから面白そうだし一任したけどさぁ」

「性別変換して「俺が二人分だ」とか言い出すに一票」

「TSネタのイラストが定期的にスレに流れるの凄いよなお前」
すん……と目が死んだオイカッツォはさておき、それに関しちゃ抜かりはない。
「さて問題だ、この代表戦のルールは？」
「……？　互いのクランから五人選出して戦う、でしょ？」
「京ティメット正解、オイカッツォは廊下に立ってろ」
「流れ弾理不尽過ぎない？」
ジョークだ、笑って受け流せ。
そう、この代表戦のルールは互いのクランに所属するメンバー五人による対人戦、他クランからの助っ人は原則認められておらず、それ故に京ティメットは「旅狼」に加入したわけで。
「じゃあ第二問……退職っていつ成立するんだろうな？」
ここで地頭の良さが出たな。今だに首をかしげるオイカッツォや京ティメットに対し、ペンシルゴンだけは何かに気づいたのかとても……そうとても愉快そうな笑みを浮かべて俺を見る。
「え、マジで？」
「おうよ、マジマジ」
「どういうことさ」

ちら、と俺を見るペンシルゴン。別に俺は何かを説明してドヤ顔する事に愉悦を覚える性癖は持ち合わせていないので解説を譲ってやる事にする。

「んー、まぁ凄いシンプルな話だよね。五対四の不利を手っ取り早く覆す方法ってなんだと思う？」

コロシアムの対面、オブジェクト化されたマーニがレイ氏からサイガー１００へと手渡される。

リ……リ？　えーと、レベリングみたいな名前のサブリーダーが口をあんぐりと開けて呆けている中、晴れてソロプレイヤーとなったレイ氏がこちらへとやってくる。

「ええと、その……アーサー・ペンシルゴン、さん」

「はいはい何かなー？」

「えと……クラン「旅狼（ヴォルフガング）」への、加入を……希望、します」

「オッケーイ（いいですとも）！　ウェルカムウェルカム！　歓迎するとも！」

五対四の不利をひっくり返す一番簡単な方法？　決まってる、相手から一人引っこ抜けば四対五でこっちが有利になるのさ。

俺はしっかりと覚えてるぜ黒狼サンよ。あんたらのリーダーは確かに「これまでレイ氏の育成にクランがかけた金額＋消費した使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）分の代金を支払った時点でクランの脱退を認める」って言ったのをな。

数千万、いや下手をすれば数億ものマーニを短期間に稼ぎ出す事は

難しいだろう……普通なら、な。
だが俺は公式(システム)が認めた一攫億金(ビリオンゲッター)、その総資産は十億すら越える。レイ氏はこの作戦を「身請け」と例えたがあながち間違いでもないな、レイ氏を縛る契約ごと旅狼に移行させる。俺としてはまだまだ懐に超余裕があるので構わないのだがレイ氏は律儀なので立て替えた分を俺に支払うとのことだが、少なくとも今この瞬間レイ氏の所属は「旅狼」となり、メンバーが足りないのは「黒狼」側となったのだ。
「ちなみにサンラク君、今所持金どれくらいあんの？」
「貴様の借金はビタ一文建て替えんぞ」
「その言い方相当蓄えてるなーっ！？　ゼロちゃんの借金とその態度的に……まさか所持金、億……？」
今のやりとりだけで大まかな懐内容把握してくるのほんと怖いわこいつ。
色々と悪どい交渉で借金を返済しているペンシルゴンだが、かつての前科はそれでもなお多量の借金を残している。身近な所に大量の金を抱えた金庫がいると判明した事でハッスルし始めたが俺の意向は変わらない。
「君ってやつは頼れるおねーさんを助けようって気概は無いのかぁっ！」
「オイカッツォ、お前が仮に数十億持ってたとしてペンシルゴンの借金建て替えるか？」

「するわけないじゃん、借金苦にもがく姿でご飯が進むってのに」

「くっそ……私がそっちの立場なら同じ事言ってるだろうから何も言い返せないなぁ……！」

ぼくたちはとってもなかよしなので、ともだちのくるしんでるすがたをみるとたのしくなるんだ。

これを友情と言うなら人類は一度リセットされるべきじゃねぇかなぁ……

「ゴホン、まぁマネー的な交渉については後々じっくりやるとして……さて、まさかのゼロちゃん奪取のファインプレーをしてくれたわけだけど」

「おう」

「悪いけど五体四でも五対五になるのを待つのも無し、四対四でやる事にしよっか」

曰くこれ以上虐めると向こうが爆発しかねないとのこと、さすがは生かさず殺さずのペンシルゴンだ。

まだ何か企んでるっぽいが、今は聞かないでおいてやろう。

「さて、そろそろ向こうさんもこっちをボコりたくて仕方ないようだから作戦を説明します」

ニッコリと、ペンシルゴンはモデルに相応しい自信に満ち溢れた笑みを浮かべてただ一言。

「カッツォ君、戦術機獣使って3タテして来て」

「よっしゃ」

「黒狼」の死刑を宣告した。

人は時間と金があれば大抵の出来事に対して有利を取れる（後書き）

情報を隠しているのは主人公だけじゃない

ユザパったけどサンラクがどうやって財宝の山を現金化したのか、その内書きます。次の展開に繋げたいので。

ルール無用の黒狼に、機械のパンチをぶちかませ

「鬼に金棒」という言葉がある。ゲーマー風に言い換えるなら高ＤＰＳに火力バフ、タンクに高倍率カウンター。

……断言しよう、「オイカッツォに白虎」はこれらに匹敵するクソタッグだ。

おおよそ全ての組み合わせ要素のあるゲームには理想的な組み合わせ、すなわちベストマッチが存在し、それらはシナジーと呼ばれコンボパーツとして成立する。

制作側の想定したものから想定外のものまで、そういった組み合わせの模索こそがゲームの醍醐味であると断言するゲーマーもいるくらいだ。

では何を以ってしてオイカッツォと戦術機獣「白虎」の相性が最高と断じたのか？

見りゃわかる。

「えーと？　これなんて読むの？　武閃陰蝕（むせんいんしょく）？」

「†武閃陰蝕（スラッシュシャドウ）†だ！　ブレイブ・シャドウソード知らねぇのかよ……」

数秒程記憶の海に潜った結果、確か数年前に人気を博し、今も流行っているアニメか何かにそんなタイトルがあったことを思い出す。

（あー……思い出した、確か主人公の名前が地雷ネームなんだっけ）

ゲームとは現実とは違う自分になるということ。そしてその現実とは違う自分を「憧れの誰か」にする事はそう珍しいことではない。だが名前や姿を同じにしたからといって実力まで理想と同じになるなどという理屈はない。

誰も彼もが下位互換、とは言わないがその名前の元になったモノを好む年齢層次第ではある種の「この名前＝実力の伴わない年齢層のプレイヤー」となってしまう事はままあることだ。

「で？　そのスラ影さんはどういうキャラなんだ？」

「は？　まぁ何も知らないならしゃーないか……スラッシュシャドウは闇夜を駆け抜ける孤高の二刀流使いだよ」

「成る程、じゃあ君のメイン武器も二刀流かな？」

「あっ……」

しまった、という表情を浮かべる†武閃陰蝕（スラッシュシャドウ）†であるがもう遅い、既にオイカッツォの脳裏では記憶の洗い出しと相手の手札の推測が始まっていた。

（うろ覚えだけど確かあのキャラはよくある二刀流キャラだった筈、この前ＣＭで見かけた時は影を操るみたいな攻撃をしてたな。ってことは魔法剣士か？　このゲームの場合魔法剣士は魔法と物理を分ける手動型（マニュアル）と魔剣に魔法を使わせる自動型（オート）がいる、前情報じゃ自動型らしいけど廃人クランにいる以上、なりきりビルドを突き詰めた可能性は高い。見たところあのバカみたいな突き詰めた構築ではなさそうだし……うん）

表情を変えぬまま、オイカッツォの脳内で「劣化サンラク」という結論が弾き出される。
劣化、というよりもどちらかと言えば突き詰めすぎたステータスをマトモにした「汎用型サンラク」と言うべきステータスなのだが、仮に手札の全容は分からないとしてもデッキのタイプさえ分かってしまえば対策は容易い。

故にこそ魚臣（オイカッツォ）　慧は日本でも最高クラスと謳われるプロゲーマーなのだから。

「言っとくけど、俺はレベルダウンビルド済みだから超強いぞ」

「へーえ」

レベルダウンビルド、意図的にレベルを下げるアイテムを服用する事でスキルを鍛え上げるプレイの一種。
何度レベルダウンを行なったのか、という情報は廃人プレイヤーにとってはある種のステータスである。

人間、しょーもない内容であっても飛び抜けた記録というものは見せびらかしたくなるものだ。

「ま、そこらへんは割とどうでもいいんだけどね……」

オイカッツォにとって、ＭＭＯというシステム自体あまり相性の良いものではない。

その性質上、システム的な公平化がない限りは対等な力関係の対戦というものは困難であるためだ。

だからこそオイカッツォが重視するのは相手の分析よりも己の調整、理想的な動作を突き詰める事にのみ力を注ぐ。

己の思うがままに身体を動かせるなら、ついでに相手のおおよその動きも把握できたなら。

「足の生えたダンプだって乗りこなすさ……！　さぁ、プロゲ……ごほん！　「旅狼」の力を見せてあげよう、白虎！！」

別に戦術機獣シリーズを共有化する事に文句はない。だがリアクターの所有権は本来自身にあり、だと言うのにしれっと一番乗りをあの半裸が持っていった、というのは釈然としない。そうオイカッツォは常々思っていた。

聞いた話では「朱雀」は起動され、「青龍」は合体まで行ったのだとか。であれば同じ機体を使うのもつまらない……と選んだ「白虎」であったが、オイカッツォは確信を以って言える。

「これ持ってＧＨ：Ｃ行けたらシルヴィアにも勝てる」と。

「ロ、ロボォ！？」

「カッコいいでしょ、ウェザエモンを倒した時の報酬なんだよねコレ……っと！」

クラン共有処理が行われ、インベントリアを介してサンラクからオイカッツォへと戻った規格外エーテルリアクターが白虎の背に装填される。

試運転で若干稼働時間が減っているものの、深淵の都市で消費された分を充電したリアクターからエネルギーが迸り、白亜の鋼虎に光が宿る。

「生憎俺はどっかの馬鹿みたいに本人に時間制限がある訳じゃない、最初から出し惜しみなしでタテるから覚悟しときなよ」

虎をイメージした頭機殻(ヘルム)に、細身な胴体とは対照的にそのまま打撃武器として使えそうな鈍重な四肢。

規格外特殊強化装甲【蛮武(バンブ)】を纏い、鋼の虎を連れた姿は完全に別ゲーとしか思えない。

だがこれもシャングリラ・フロンティアなのだ、誰も知らないだけでこの世界にはロボがあり、パワードスーツがあり、ＳＦがある。

「合体だ白虎！」

『Ｙｅａｈ！』

随分とノリの良い声がオイカッツォに呼応し、動き出す。
布団を被せるかのようにオイカッツォへと覆い被さった白虎の体躯が分解される。
ある機構が搭載された四肢をより強化し、それらと比べると細く貧弱だった胴体が補強される。
そして機械でありながらまるで生物のように深呼吸を行い、合体は完了する。

「な、なん……！？」

「トップクランでも初見なのかな？　なら好都合、存分に初見殺されていってね」

『圧縮吸気（インテーク）！』

轟、と大気が動く。
逆巻く台風、中心部たる白い拳闘士へと集う大気はその四肢に備えられた吸気口から二腕二脚へと取り込まれ、圧縮処理が施される。
それはさながら唸りを上げる虎のような低音を響かせ、ただならぬ雰囲気を放っていた。。

†武閃陰蝕（スラッシュシャドウ）†は完全に気圧されきっており、ステータス的な差を覆す程の圧倒的な優位性（アドバンテージ）は既に白虎の手の中に収まっていた。
どれだけステータスで勝ろうと、気圧されてしまえば勝利は遠く離れていく。そして離れた勝利は相手の手の中へと飛び込むのだ。

「呼吸ってのは息を吸ったら当然吐くわけで……一応歯を食いしば

った方がいいよ？」
『解放排気（エグゾースト）！』

吸えば、吐く。
圧縮された大気に指向性を持たせて吐き出す事で推進力を得た白虎が疾る。
本来ロボゲーが苦手であるオイカッツォであっても、パワードスーツならば身体の延長としてその欠点を補うことができる。
そして白虎の排気加速はマニュアルとオートが半々で成立したシステムであり、装着者の思考を戦術機虎【白虎】側が実行する事でオイカッツォ……否、魚臣　慧がシルヴィア・ゴールドバーグや陽務楽郎（サンラク）に劣っていた要素……圧倒的先攻奪取を可能とさせた。

「速……っぷぇ！？」

「いいなぁこれ……これがあればシルヴィアにも楽に勝てそう……いや、普通に対応してきそうだな……」

例えるならばそれはかつてどこぞの覆面マニアが大舞台で見せたバイク五台による大質量加速のような、されどそれよりも軽量化された白虎が放つ拳は人一人を紙屑のように吹っ飛ばす事などあまりに容易い。
吠え猛り、大気を震わす一撃が†武閃陰蝕（スラッシュシャドウ）†の顎をクリーンヒットで打ち抜く。
その瞬間、拳武器として装備された規格外武装：穿拳型【バタリングラム】……蛮武の腕部を軸に回転する四枚の板状パーツが稼働、明らかに対人用ではない衝撃が†武閃陰蝕（スラッシュシャドウ）†の顔を変な方向へと曲げる。

例えばそれが強化を重ねた人の拳であるなら、†武閃陰蝕(スラッシュシャドウ)†のステータスであれば軽い怯み状態だけで済んだであろう。
だが彼にとっての不幸は規格外戦術機虎【白虎】、規格外特殊強化装甲【蛮武(バンブ)】、規格外武装：穿拳型【バタリングラム】、そして何よりもそれらを使いこなすだけの力量を持つオイカッツォが中身という完璧な合致。
結論から言えば、だ。
「ぢょっ、俺の頭どうなってる……？」
「直角？」
「折れでんじゃん……」
「ゲームだから大丈夫！」
「うぺぶ」
ゴリュ、と嫌な音を立てて元に戻された首。しかし初撃で六割、今ので三割の体力を削られ、そして完全に拳撃の射程に捉えられた†武閃陰蝕(スラッシュシャドウ)†に逃げ道はない。
「あ！　この場所でならキルしてもペナルティつかないよーっ！」
「やったぜ」
「とどぺっ！？」
†武閃陰蝕(スラッシュシャドウ)†の顔面に拳が叩き込まれ、ぐしゃりとその身が倒れ臥

す。ポリゴンと散った漆黒の双剣士が消えゆく中、再び息を吸い始めた白虎が静かに告げる。

「次。」

ルール無用の黒狼に、機械のパンチをぶちかませ（後書き）

イキリの代名詞みたいになっちゃった某ネームを彷彿とさせますが他意はありません

・ブレイブ・シャドウソード
どっちかというとバットマンにコブラ混ぜた感じの作品、闇夜を駆け抜ける二刀流の主人公が巨悪と戦いながら強くなっていく系
コブラ……バット……イキリ……ホテルおじさん……うっ、頭に注入されたネビュラガスが……

スクラップアンドビルド（前書き）

ミスじゃないよ、筆が進んだので連続投稿だよ

明日休んでも許して（予防線）

「惨いねぇ、見てる分には最高のエンターテイメントだけど」

「白虎の能力って「圧縮」と「解放」だっけか、土を圧縮して拳から土砂崩れ発射したりさっきみたいに空気吸い込んでブーストしたり……あんまり俺には向いてないなぁ」

「そう？　サンラク君向けかなーって思ったんだけど」

「空気圧縮の加速はいい感じだけど、攻撃が割とシビアだろあれ。あいつ普通に攻撃してるけど急ブレーキと加速刻みまくってるだろうし」

基本的に俺は始点から終点までノンストップで動くタイプだが、あれ始点からごく短い終点までを何度も繰り返し続ける挙動だ。反復横跳びみたいなものだ、加速と停止を繰り返して複雑な挙動を遂行するあの動きは出来ないわけではないが相性はあまり良くない。

「あれだよ、直線で円を描いてる感じ。より球体に近くするには一度ずつ角度をずらして線をつなげていくしかないっていうか」

その点で言えば俺と青龍の相性はやばかったな、空中に道を作ってその上を滑走する訳だから自由度が半端ない。グラビティゼロを組み合わせれば三半規管が保つ限りバグみたいな挙動も余裕だったしな。

「何あれ」

「あぁ、京極ちゃんは知らないんだっけ？　アレは規格外戦術機獣の一体「白虎」とその端末である「蛮武」。後三体含めてユニークモンスター「墓守のウェザエモン」の撃破報酬ってやつだよ」

「いや……あ、うんそっちも気になるけどそうじゃなくて……彼、凄い強いと言うか……」

「そりゃあアレで飯食ってる訳だしな」

黒狼側の二人目は刀を携えたロングコートのプレイヤー。なにやら抜刀術を使おうとしたようだが、加速して一気に肉薄したオイカッツォによって柄頭を押さえつけられた事で刀を引き抜くことが出来ずにいた。

「抜刀術（抜けない）」

「パスタのないペペロンチーノみたいな」

「それは……その、ただのオリーブオイル、では？」

「いやいやゼロちゃん、ニンニクと鷹の爪もあるでしょー？」

「パスタというアイデンティティを失った時点でもうダメじゃないかなと僕は思うよ」

麺なしパスタ君が宙を舞う、なんというか全員軽装なせいで面白いくらい吹っ飛んでくなぁ。
まぁ、こっちもこっちで軽装ばかりだから相手のことを言えないのだが……あ？　なんだよ、半裸だって軽装だろうがよ！

「サンラク君時々自分の思考に喧嘩売ってるっぽいのクソ面白いよね、ウロボロスか何か？」

「地産地消ならぬ自産自消ってか？　水晶群蠍じゃあるまいし」

明らかに本来の跳躍以上の加速で叩き込まれたサマーソルトで麺なしパスタ君がカチ上げられる。そのまま上空で砕け散る様はなんだか花火のようだった。

「さぁ次はいよいよリベリエス君だねぇ」

「リベリアスだろ間違えてやるなよ」

「君も間違えてるよ、彼はリベリウスだ」

「あの……えと、リベリオス、ですね……」

別に覚えづらい名前って訳じゃないのにこの絶妙に誤字られるネーミング、ある意味才能なんじゃないだろうか。

とはいえ奴も運がいい、戦術機獣はファンタジーにＳＦを持ち込むという中々の禁じ手ではあるが、バッテリー……もといリアクターの制限時間という致命的なデメリットが存在する。

特に特殊装甲と機獣が合体している時の燃費はクソオブクソ、突っ立ってるだけでもエネルギーがバリバリ消費されるのでそろそろ時間切れになるだろう。

「中身がアレでもトッププレイヤー、タコ殴りでもタフネスだったな」

はてさてオイカッツォはどう動くのか。あいつ確か……
まだレベル上限届いてないよな？

『エネルギーがＢＡＤだゼ……』
「まぁあんなバカスカ動いてればねぇ……」
やけにノリのいい白虎からの燃料切れ（エンプティー）警告を軽く流しつつ、オイカッツォは三人目……リベリ……リベリドス？　だったかを見遣る。
「厄介なユニークですね……だが、恐らくそれには時間制限がある、そうでしょう？」
「まぁそうだね、流石に無制限だと壊れ案件だし」

オイカッツォの現在のレベルは８６、低いわけではないがレベルダウンビルドを繰り返しているであろうリベリオスを相手にするにはあまりに心もとないステータス。

だがオイカッツォとて何もただ惰性で外道の策略でレベル２０近辺にまで下げられたレベルをここまで上げてきたわけではない。

「とりあえず……リアクターのエネルギーを使い切るまでは働いてもらうよ白虎！」

『Ｏｈ，　Ｙｅａａａａａａａｈ！』

深呼吸、解放排気（エグゾースト）によって加速した白亜の拳闘士が拳を振りかぶる。

「くっ……「スリックランペイジ」！」

側から見た二戦と、実際に相対する一戦では体感が異なったのか、眉をひそめながらもスキルを発動するリベリオス。その手に持った両手剣にスキルのエフェクトが宿り、白虎の加速鉄拳が刃の上を滑る。

（スリックランペイジ……確か弾かれ無効の攻撃スキルだったか……なるほど、パリィにも使えるんだ）

弾かれない、ということと絶対に切断できる、ということは必ずしも両立されない。スキルとて万能ではなく、スキルの補正に対抗できるだけの強度を持つ白虎の拳は剣の上を滑るようにして受け流され、直撃を受ければ前の二人のように十割コンボを喰らいかねない一撃を透かしたリベリオスが攻撃に転じる。

「凍て付き逆れ……「コキュートス」！」

「っ！　解放排気（エグゾースト）！」
一閃。白虎の脛から放たれた大気の噴射がデタラメな方向へとオイカッツォを吹き飛ばす。そして瞬き程の直後、まるで宝石を掴み損ねた手がそれを名残り惜しむかのように白虎の腕に霜が降りる。
「それが噂の「昏い氷河（コキュートス）」ってやつか」
「えぇ、ユニークウェポンでありウチの団長が持つ「エクスカリバー」にも匹敵する魔剣……黒狼の副団長として、タテり返してやりますよ」
「生憎だけど、ウチの外道からのオーダーは３タテでね……全抜きじゃないことが少しムカつくけど、逆に言えば……」
『Ｏｈ，Ｅｍｐｔｙ……』
燃料切れの白虎が消える、バタリングラムが消える、蛮武が消える。地に降り立つは一人の拳闘士、レベル８６というディスアドバンテージを感じさせないその立ち振る舞いは彼の素性を知らずともその実力を察知させるには十分で。
「俺はあそこの馬鹿みたいにユニーク乱立したり、あそこの外道みたいにＮＰＣ恐喝して色々悪巧みしたり、最近入った辻斬りみたいにレベル上限を突破してるわけでもないけど……」
ハック＆スラッシュ、切り刻み叩き斬る。その本質は戦闘と強化のループ、ゲームの電源を切るその日まで強くなり続けるシステムにとってユニークだのなんだのは所詮使われる画材の色の違いでしか

ない。

「積み上げれば強くなる、掛け算が出来なくても足し算ができれば百に到達することだって出来るのさ」

であればユニークの有無は強さとは関係ない。自分のフルパワーを出せる環境が整うのなら市販の武器防具であってもオンリーワンの武器に匹敵する。

それこそが「得られるもの全てを使ってより強く」を根幹とするサンラクや「自分自身すら歯車の一つに過ぎない」ペンシルゴンとは異なるオイカッツォの根本理念。

「……積み上げて突き詰める、シンプルでいいと思わない？」

とはいえ、とオイカッツォは苦笑いを浮かべる。

そんな自身の理念とはかけ離れた今のバトルスタイルはまるで賽の河原だな、と。

「これは皆伝の手甲……修行僧(モンク)ジョブを鍛え上げて発生するクエストのクリア報酬。んで、これを装備して……っ！」

バキャ、と職人の技が光る手甲が砕け散る。戦闘による破損ではない、元より耐久が限界であったわけでもない。

オイカッツォが自らの意思で破壊したのだ。

格闘武器、自壊、修行僧(モンク)……「中身がアレ」と形容されはするものの、シャングリラ・フロンティアにおけるトップクラン「黒狼」のサブマスターを務めるリベリオスは答えへと辿り着く。

それは剣士の上位職業たるリベリオスの「剣豪」と同様に、修行僧や拳闘士から派生する格闘系上位職業。

装備無しの素手であることを前提とする修行僧と、装備が傷つく程に火力を増す拳闘士の特性が混ざり合った結果誕生したハイリスクハイリターンの権化。

自ら武器を破壊し、破壊した武器に応じたバフを付与する「資産食いジョブ」と揶揄されつつもその火力の高さから取得者の多いそのジョブの名は。

「破壊者（デストロイヤー）……！」

「足りない火力は砕いて鍛える（スクラップアンドビルド）で積み上げていくのさ……！」

凍てつく魔剣に抗うべく、破砕を伴う光が吼える。

スクラップアンドビルド（後書き）

昏い氷河（コキュートス）

リベリオスが持つ魔剣、魔力を消費する事で刃を中心とした凍結効果を付与する。

無効化手段が限られる事が特徴であり、生身で食らった場合状態異常回復を使用しない限り解除されることはなく、継続的に凍傷ダメージを受ける。

何より厄介な点は手がかじかむのでプレイヤースキルが思い切り阻害されるという事。

ジョブ関連の設定はあまり触れないようにしています。何故かって？　延々と設定練れるからね、本編に戻れなくなるからね

破壊者（デストロイヤー）や剣豪は上位職業、そこから条件達成（例えばＮＰＣ主催の闘技大会で優勝など）で最上位職業への道が開かれます。

剣聖への転職条件は明らかになっているものの条件が厳し過ぎてあまり数が多くないという。

基本的に攻略最前線に立つだけなら上位職業でも問題はありませんが

「最上位職業」

「ユニーク職業」

「隠し職業」

のどれかを持っているプレイヤーは当然他プレイヤーよりも一歩先んずる事ができます。

おまけ

半裸：メイン「傭兵（ギルド未登録）」サブ「神秘【愚者】」
鉛筆：メイン「魔槍使い」サブ「勇者」
鰹：メイン「破壊者」サブ「色々」
サイガ０：メイン「聖騎士」サブ「暗黒騎士」
京極：メイン「剣豪」サブ「九尾の六刃」
サイガ１００：メイン「剣聖」サブ「勇者」
アージェンアウル：メイン「闘士（グラディエーター）」サブ「聖職者（プリースト）」

結構ストーリー進んでるのに実質無職の主人公がいるらしい、いい加減就職させてやりたい

上位職業「破壊者（デストロイヤー）」の固有スキル「スクラップアンドビルド」は装備した武器の耐久度をゼロにする、すなわち破壊する事で消費した耐久度に応じた攻撃力補正を付与する。

そしてシャンフロにおける武器の耐久度は当然レアリティに比例する。もし仮に水晶群蠍、金晶独蠍の素材に高レア鉱物をふんだんに使った煌蠍の籠手を消費したならば、最上位職業をも凌駕する火力を獲得できるだろう。

そして「皆伝の手甲」は職業「修行僧（モンク）」が戦闘方面に派生するジョブビルドを行った際の最終クエストの報酬として与えられる武器であり、そのレアリティは確定報酬としては破格の耐久力を誇る。

修行僧から派生する破壊者の固有スキル、何度でも発注可能なその最終クエストからして狙っているとしか思えない組み合わせであるそれは攻略サイトでは破壊者ビルドまでの流れ、その基本形として登録されている。

そして何より、「素手」という条件を達成した事で培ってきた修行僧のスキルを使用する事ができる。

「黄、赤……二色混合【拳気「大橙衝」】！」

クリティカルの威力を上げる橙色のオーラが拳に宿り、スクラップアンドビルドの赤いスキルエフェクトと混ざり合ってそれはさながら炎の如く。

「一分でノックアウトしてあげるよ」

「ぬかしたな！」

煌めくスキルエフェクトの数々は間違いなくトッププクラスのプレイヤーの証に他ならない。

「剣聖ジョブさえ取得できれば、あの「五重奏」を自分も使えるようになればサイガー１００すら超える」……そう自負するリベリオスのそれが事実かどうかはさておき、レベル９９Ｅｘｔｅｎｄのステータスで振るう凍結の魔剣は当たればオイカッツォの体力の殆どを削りきることも容易いだろう。

「悪いね、人型を崩すでもしない限りこの距離なら基本負けないんだよ俺」

「なんで……っ当たらな……っ！？」

剣の腹を拳打で弾く、付与される凍結によるデメリットをそれ以上のバフで問題なしと断じてさらに殴る。

そもそも拳闘士系のジョブが剣士系のジョブに対して最大の効果を発揮する距離は超至近距離（インファイト）、リベリオスが距離を離さんと一歩後ずさればオイカッツォが一歩詰め、魔剣によるあらゆる攻撃を至近距離を維持したまま対処する。

「一応公式じゃ八割切った事なくてねぇ……ここまで詰めて対処できる奴は俺が知ってる限りじゃ五、六人くらいかな？」

意図的に急所を外した一撃、打撃点にリベリオスの意識が向いた瞬間別方向からの本命がリベリオスの顎を打ち抜く。

怯みモーションにふらついた魔法剣士の手に回し蹴りが叩き込まれ、

凍て付く魔剣がその手から離れる。

「隙ありってね」

「かかったな！」

「ああごめん、それ知ってる」

「なぁっ……」

無手になったリベリオスへ攻勢を仕掛けるオイカッツォ。その瞬間、己の隠し球が効果を発揮すると勝ち誇りながらもう一本の魔剣、敵を焼く炎の魔剣を振り……無情にも己の上司によって横流しされていた情報によってそれを把握していたオイカッツォは難なく対処。

「まぁ、なんというか……対人特化、という意味なら僕以上のやつは早々いないんじゃないかな、相手が悪かったね」

「そ、そんな……」

「赤、青、黄……」

鮮やかな三色のエフェクトが混ざり、漆黒へと変じる。

リベリオスは戦う手段を全て失ったわけではない、インベントリの中にはまだ武器があるし、回復アイテムだってある。

だがもっと根本的な部分で彼は両手を上げてしまった、故に対応できない。

「三色混合【拳気「過重黒衝」】！」

爆ぜる。かつては強大な戦術機馬をも打倒せしめた漆黒の衝撃がリベリオスの腹部で炸裂する。
鍛え上げたステータスを信じ頼っていたからこそ、そして対人戦対策を怠っていたからこそ、リベリオスの防具は見た目を重視した軽装であり、腹部に装甲が無いという致命的な欠点を文字通り突かれたのだ。

「ぉ、ご……っ！」

折れたのは果たして身体か、心か。真横に吹っ飛び、地面を転がりながら闘技場の壁面に叩きつけられたリベリオス。

「それでも……リーダー、なら……」

崩壊。互いにペナルティのない勝敗が定められ、闘技場にはオイカッツォただ一人が立つ。

「とりあえず三抜きしたわけだけど……」

なるほど確かに戦術機獣はエネルギー切れ、三人目で隠し球の破壊者も晒した。手札のほとんどは晒し切ってしまった。

「とはいえ、全抜きしちゃダメってわけでもなし」

残るは一人、クラン「黒狼」団長サイガー１００のみ。

「で？　なんでカッツォに全抜き命じなかったんだ？」
最初は向こうの面子を保つためにわざと負けろとかそういう意図かと思ったが、オイカッツォに「負けろ」と命じるわけでもなく、いまいちその真意が読めない。
だが意外な事に、そう本当に意外な事にこの場において理解していなかったのは俺ただ一人であったらしい。
ペンシルゴンは苦笑いを浮かべ、京ティメットは好戦的な笑みを、そしてレイ氏は申し訳なさそうに身を縮こませて。
「まぁ、シンプルな話だよサンラク君。例えば……あー、そうだね、例えば一般的にクソ強いレイドボスにソロで勝とうと思ったらどうするべきかな」
「なんで一瞬俺見て言葉止めた？　まぁいいや、そりゃレベリングして装備整えて攻略情報漁る、とかだろ」
まぁ、俺が参考にならんことくらいは分かるよ。一般的なゲーマー

に「クソゲーで経験値貯めてプレイヤースキルとユニークで削り殺す」は適用できないだろう。

視界の端で闘技場にサイガー１００が降り立つ。

「そうだね、じゃあさ……」

携えた黄金の剣がオイカッツォへと突きつけられ、

「ほぼ一年間みっちりリュカオーンを倒す為だけに徹底的に鍛え上げてきたプレイヤーってどれくらい強くなるもんだと思う？」

飛翔する四本の剣によって滅多斬りにされたオイカッツォが即落ち(リスポーン)した。

呆然の表情で現れたオイカッツォが口を開き……

「……………………ぇぇ」

これぱっかりはあまりにアレ過ぎて煽れんわ……やっぱ後で煽ろう。

「何今の」

「剣士系最上位職業「剣聖」の固有魔法【従剣劇（ソーヴァント）】、最大四本まであんな風に遠隔操作出来て、手持ち含めた五本……「五重奏（クインテット）」スキルも行使する、判明している限りじゃユニークを除いてシャンフロでの「前衛最強職業」って言われてるジョブでねぇ……」

「さらに言えばサイガー１００の「五重奏」はユニーク中のユニーク武器たる「聖剣エクスカリバー」を筆頭に「聖槌」所有者が作成した「超猫じゃらしＬｖ．１００」や、それ以外にも魔剣やらなんやら……まぁ、笑っちゃうくらいのスペシャルチューンだよね」

「ちょっと待て今クソ面白い単語が混じらなかったか？」

「斬りつけると最大３０ヒットするとかいうド畜生兵器だけど」

何それこわい。

「あー脇腹をギョリギョリ削ってたのはそれかぁ……」

「その……姉の、場合……魔剣の効果もフルで、使うので……実質「後衛能力も備えた上に中距離も強い前衛」と言いますか……」

「そもそも近づかせてくれないからインファイトも出来ないっていうね」

「何そのクソゲー特有のヤケクソ調整」

あるよね、とりあえず最強武器を強くしようってバランス調整ミスった結果、「最速でそれ確保すればあとはよそ見してても勝てる」ってなるやつ。

そういうのに限って序盤で入手できるバグとか見つかってヌルゲー化して、ストーリーもつまらないもんだから目も当てられない蹂躙ゲーになるんだよなぁ。

よく強者との戦いに餓えた戦闘狂キャラっているけど、ああいうの気持ちが分かるんだよ。
「これガワがバリエーションあるだけで戦いの楽しさもへったくれもねぇな」ってなるんだよ、ノートに同じ文字をただひたすら書き込むような無常さを感じるんだよ。

「クソゲー？」

「あー最近はシャンフロセラピーでマトモに戻ってきたと思ったけどやっぱり根っこが腐っててちゃ救いようがないね、気にしないでいいよ京極ちゃん」

「ぶっ飛ばすぞワレ」

「残念、今から私をぶっ飛ばすのはモモちゃんなんだよねぇ……本命のお二方には是非とも彼女の弱点を見つけて欲しい、私はその礎となるのだ！」

綺麗事の方は無視するとして、どうやら次の生贄に自ら立候補するらしいペンシルゴン。
装備をガチ仕様に変えたのか、サイガー１００が持つ黄金の剣とデザイン的な共通が多く見られる槍を携え、防御力の薄そうな軽装に着替えたペンシルゴンは堂々と闘技場へと立つ。

「さぁ来なよモモちゃん！　具体的にどうと言われると困るけどぶっ飛ばしてあげよう！」

「ヘソ出しだね」

「私アレ着る度胸ないなぁ」

「そ、そうです、ね……」

「羞恥心と良心を母親の腹に置いてきた女の異名は伊達じゃないな」

「今用意できる最上級がこれしかなかったんですぅー！　というかそこの半裸！　流石の私も羞恥心は持ち合わせてるからね！？」

良心は？

剣狼相対すは雷火の獣　其の一（後書き）

拙作初の「プレイヤーが長編ボス」という時点でサイガー１００の強さを察していただきたい

実際「黒狼」のリベリオス派が魔法剣士ばかりなのも、トッププレイヤーの半数が剣士か騎士系職業なのも大体サイガ姉妹の戦闘動画がネットに流出したせい、だったりする。あとジョゼット。

・「剣聖」への転職条件
ＮＰＣが主催する「剣闘大会」で十回優勝することで発生するクエスト「剣に捧ぐ光を試す」をクリアする事で転職可能。
なお初期に剣聖に転職したプレイヤー達（サイガー１００含む）のプレイが動画として流出したため人気大爆発、剣豪と魔法剣士達による激烈な優勝争い＆悪辣な裏工作が勃発した為、ナーフ修正が入った過去を持つ。
じつは阿修羅会もこの騒動に一枚噛んでいた（多額の依頼料をぼったくって他出場者を闇討ちしてた）

現在は「剣闘大会で五回以上三位以内に入る」「特殊クエストのクリア」「一定以上の練度パラメータをクリアした直剣タイプの武器の所有」となっている。
ちなみにリベリオスはあと少しで剣聖に転職できるが現在三連続予選落ちしてる模様……

剣狼相対すは雷火の獣　其の二（前書き）

本当は「異世界転生ゲーム化してもただのデバッグモードじゃねーか！」的な小話をインベントリアに投下しようかと画策してましたが激烈に体調不良だったので「午後六時だと思った？　午後六時でした！」でエイプリルフールはご勘弁いただきたい……！

体調不良は飯食って寝たら治りました、あれこれただの空腹……？

剣狼相対すは雷火の獣　其の二

よくよく考えればこの構図は勇者対勇者でもあるのだと、黄金の剣と槍が相対した時にふと気づいた。

「なぁレイ氏、あの聖剣？　の能力ってなんなの？」

「聖剣エクスカリバーは……勇者武器共通の、復活効果と……修復効果、それともう一つが……」

「逆境覚醒、だっけ？」

「そうです……えと、き、京極（きょうごく）……さん？」

「京極（アルティメット）だよサイガ（さいが）さん？」

何故かレイ氏と京ティメットの間にピリッと火花が散ったようにも思えたが、プレイヤーキラー特有の挑発か何かだろうか。

ちなみに「幕末」では刀に手を掛けた時点で喧嘩を売った、と認識されて天誅される。それを利用した挑発→袋叩きの誘発天誅なんてのもあるが。

「字面から大体予想がつくけど逆境覚醒ってのは要するに……」

「ピンチになるとＨＰとＭＰ以外の全ステータスが大幅に強化される、しかも確率発動の食いしばり効果もオマケでね」

「……あの性能で？」

なにやら明らかに搦め手っぽいアイテムを多用しながら飛び交う四剣を凌ぐペンシルゴンに視線を向けつつ、あれを追い詰めると強化される、というボスキャラじみた事実に思わず呟いてしまう。

「サイガー０さんと秋津茜の三人でリュカオーン倒したって聞いたけど、逆に言えば黒狼は少人数で倒せる相手を何故今まで倒せないのさ……」

「姉さんは……その、リュカオーンとはそれなりの回数、遭遇してるんですが……パーティメンバーが足りなかったり、職種が偏ってたりで……」

無情すぎるログイン乱数の悲劇という事か。それに「黒狼」はつい最近までリュカオーンの透明分身も把握していなかったらしい。
俺たちの場合は朱雀というハイスペック扇風機……もとい理想的フィールドを維持する条件が整っていたのもあるが、朱雀のような手段をそう簡単に用意できるはずもなし。

つまり雲一つない夜間に、理想的パーティのメンバーが全員ログインかつ団体行動して、なおかつランダムエンカを引き当てる、と。
俺でも心が折れそうな乱数ジャックポットだな。

「夜間にログインするような、プレイヤーは……その、大体午後十時軍に、流れますから……」

「あー」

まぁ確かにトップクラスだがリベリオス的なのが多い「黒狼」と、自分と同じ時間帯にログインして社会人が多い「午後十時軍」なら

……うん、後者を選ぶかもしれない。

「なので、姉個人としては……その、言い方は悪いですけど……意識統一の為に、リベリオスさん達を、飛ばすつもりではないかと……」

「だったら適当に苦戦してから負ければ……いや、あんだけの実力あってあっさり負けたらそれこそバレるのか」

強すぎるが故に手加減がバレてしまう、と。あれ？　それってつまりそこの魚類が即落ちして、ペンシルゴンが負け前提で出張ってるわけだから……

「うわっ、すごいなぁペンシルゴン。見なよ、なんの躊躇いなく呪殺しようとしてるよ」

「京ティメットか俺が勝たないと駄目なのか……」

レイ氏は向こうから引き抜いた代償にこちらも使用することができない。一瞬「ババ抜き」が頭をよぎったが悪質さで言えば今戦ってるペンシルゴンの方がよっぽどジョーカーなのでアホな考えは振り払う。

「あいつあんな強かったっけ？」

「ウェザエモン戦で色々用意してたみたいだし腕も上げたんじゃない？」

「成る程……」

野球かゴルフのように、槍で五寸釘を滅多刺しにされた赤い藁人形を打ちこむペンシルゴン。サイガー１００の様子からして食らったら不味いものなのか、珍しい事に攻撃に回していた四剣を防御に用いてクリムゾン藁人形を弾いている。

防御に固まった瞬間を狙った一突きが放たれるが、盾として並んだ剣の後ろでは既に回避行動を取るサイガー１００の姿が。

「カレドヴルッフって装甲無視効果あるから、ステータスＶＩＴ低い相手には天敵レベルで刺さるんだよね」

「槍だけに？」

「被告人オイカッツォ、クソみたいなギャグをかました罪で死刑」

「恩赦！　恩赦プリーズ！」

実は俺も同じこと考えてた、ってのは墓の下まで持って行こう。

というかサイガー１００はＶＩＴが低いのか、の割に速度があるわけでもないし防御面は剣に一任しているのか？

「いや、違うな覚醒でステータス上げられるなら必要なのはＨＰとＭＰか」

「正解。剣聖は下手をすれば特化魔法職並にＭＰ消費が激しいからね、特に「五重奏」主体だとそれこそ魔法職並のＭＰが必要になるんだよ」

俺とは別方向ではあるがコンセプトが似ているな。俺の場合はメリットの為に瀕死を許容するが、奴の場合は瀕死であることがメリットになるわけだ。

「逆境覚醒」とやらの詳細次第だが、サイガー１００は俺と同じピンチを前提としたプレイヤーの可能性が高い。この手のプレイヤーはピンチに慣れている、すなわち終盤の粘りが厄介極まりないという事だ。

「高燃費って話だけど、二戦ぶっ通しで保つくらいには燃費が良いの？」

「姉は、アクセサリーでＭＰ回復を、補ってるので……」

当たり前っちゃ当たり前か。なんでもインベントリアの超劣化版みたいなミニインベントリに有りっ丈の回復アイテムを詰め込んで、別のアクセサリーで回復モーションを省略して使っているらしい。

……俺が瑠璃天の星外套やインベントリアでやっている事をユニーク抜きでやってる辺り、つくづく共通点が多いな。それはそれとして回復モーションカットのアクセサリーめちゃくちゃ欲しいんだけど後でどこで入手するか聞けないかな。

「つまりあれだけ暴れて持続力もあると……あれやっぱりボスじゃないの？」

「こればっかりは俺もオイカッツォと同意見だな……プレイヤー的な隙を潰しすぎてボス化してやがる」

装甲無視ということはつまり、防具による防御力を無視して肉体の耐久で攻撃を受けさせることができるということだ。
頑丈な外殻を持つモンスターにも有効だが明らかに対人戦が主眼に置かれていそうな聖槍で果敢に攻めるペンシルゴンではあるが、射程的なアドバンテージを奪取できていない時点で結末は半ば決まったようなものだ。

「実際二回目以降ならお前どうするよ？」

「最初は理不尽性能かと思ったけど多分あれ任意でマニュアル操作できる半オートだよね？　だったら……うん、多分三回くらい試せば対応できると思う」

確かに、いくらリアリティが凄いからって一から十まで完全マニュアルの剣を四本操るのは無理だ。恐らくある程度の動作はオートで設定されている、自分の背後に浮かばせる、とか相手めがけて真っ直ぐ飛ぶ、とかはな。

逆に言えばオート操作を任意でズラせるという訳だが、あれとて完全に敵無し、という訳じゃないな。

「そう、剣聖とて無敵じゃない。ＭＰを使い切ればただの剣士レベルまで性能が落ちるし、それを抜きにしても四本同時操作しながら動けば必ず隙が生まれる。そして僕ならその隙を穿つことができる」

成る程確かに、人間の脳は誰も彼もがマルチタスクできる訳じゃない。出来るとしてもキャパシティというものがある、でなけりゃこの世にコンピュータというものは存在しない。

「それに加えて僕はレベルキャップを解放したプレイヤーキラー……任せなよ、旅狼に加わった僕の役割、しっかと果たして見せよう」

ふふん、と獣の耳を揺らす京ティメットに対し、俺とオイカッツォは無言で視線を合わせる。あっ、多分同じこと考えてるな。

「これ、噛ませにされる強キャラの典型……」

「いや、その判断は早計だよサンラク。昨今じゃ噛ませみたいなネタキャラがジャイアントキリングするのも珍しくないし」

「レベル的にはこっちがジャイアントじゃねーか、しかもあっちは勇者だぞ勇者」

「実際どうだろう、アレってリュカオーン特化なんでしょ？　対人カスタムの方が有利っちゃ有利なんじゃない？」

こればっかりは俺しか知らないことだからしゃーないが、あの斎賀さんの姉って事は絶対リアルで戦闘力高いタイプなんだよなぁ……

何故だか猛烈な不安を感じ始めた俺達であったが、それはともあれペンシルゴンが時代劇の悪役みたいにバッサリ一刀両断されたので次だ。

「さぁ……狼狩りだ」

「京極ちゃんそれ噛ませっぽいよ？」

ペンシルゴン！　しっ！　ステイ！

言語化すると余計フラグが立つだろうが！

剣狼相対すは雷火の獣　其の二（後書き）

ちなみにペンシルゴンが投げつけまくっていたクリムゾン藁人形はいつぞやのアニマリアの呪術を無効化した藁人形とは真逆で「攻撃を当てたやつにカウンター＋時間差即死呪術を付与する」という危険物。

解呪持ち相手にはあまり効果はないが累積するので下手に食らえない厄介なアイテムです

後ろから壮絶に失礼な言葉が聞こえてくるが、短い付き合いとはいえあの三人がそういう芸風であることは理解している。
あのアーサー・ペンシルゴンが、将棋で言う飛車角駒のような扱いをするだけあって、一癖も二癖もある連中であるらしい。
噂には聞いていた「鳥頭」は噂以上に形容しがたい人物であったし、ウェザエモン撃破の称号以外はあまり目立たない……正直おこぼれだと思っていたオイカッツォは下手をすればあの三人の中で最も強いのでは、とすら思えた。

（もしかして僕、相当に凄いクランに入れたのかな？）

フィフティシアの港でちらと見た程度だが、この三人以外のプレイヤーもあの二人に負けず劣らずだと京極はペンシルゴンから聞いていた。それに加えてサイガー０の移籍……「ライブラリ」や「午後十時軍」が呼応したのはペンシルゴンの話術のみによるものではないだろう。

（んー……彼らならアレについて話してもいいかもしれないけど……おっと、今は目の前のお楽しみに集中しなきゃね）

何もユニークモンスターばかりがシャンフロの醍醐味ではない。
貴人を守護する九人の刃、その六番目を遠く離れた新天地で勝ち取った京極とて、とあるユニークを話すことなく秘している。

「さて……君か京極（アルティメット）」

「実際に相対するのはこれが初めてかな？　それとも……去年会った事あるかな？」

「………度胸があると言うか、無謀と言うか」

どうやら向こうも京極の正体に気づいたらしい。「読みが違うから」と本名そのままでデータを作ったとは思いもしなかったらしい。とはいえ京極も京極で「フルネームの文字を変えただけ」なんて安直なネーミングを姉妹揃ってやっているとは思わなかったのだが。

「そう言えば百……いや、モモさんとはガチで対戦したことはなかったっけ？」

「その呼び方は……はぁ、まぁいいさ。言っておくが現実と同じように行くと思ったら間違いだぞ京極」

飛翔する四の剣が消え、聖剣ただ一本を構えるサイガー１００。そしてそれに相対する刃先に至るまで漆黒の鋼で作られた黒刀を構える京極。

審判はなく、ただどちらが先を取るかを無言のまま推し量る……

「っ！」

「くっ！？」

次の瞬間、前へ出た京極の足を縫い止めるかのように、再展開された従剣が京極の踏み出した爪先をかするように地面へと突き立った。

「私とて龍宮院流は心得ている、初手の踏み込みを抑えられると弱

いことも……な！」

「ぐ……なら！」

京極は辺りを確認し、展開された従剣が一振りであることを確認すると、突き立てられた「超猫じゃらしＬｖ．１００」とサイガー１００を警戒しつつもスキルを解放する。

切り込みの極意（トップ・スラッシャー）、血戦主義、風雷怒濤。レベル上限を取り払った事で新たに習得、進化した通称「三桁スキル」が京極の身体にシステムの加護を齎し、その身の敏捷を高める。

「さらに……【九尾朧火（ナインテール・シクス）】！」

「ほう……見覚えがない、ユニークマジックか」

引き絞られた矢が放たれるが如く、獣の耳と紫の炎を灯す黒い刃で風を切りながら剣士が行く。

対するサイガー１００はこれまで手持ちの五本目として振るっていた聖剣を浮遊させ、代わりに別の直剣を握る。

「魔剣ラス・ペガシアス……ユニークではないが、その名くらいは知っているだろう？」

知っている、神話の大森林にごく稀に出現するレアエネミー「イーティバル・ペガサス」の角から作成される魔剣であり、その効果は武器の耐久値そのものにダメージを与える「武器破壊効果（ウェポンブレイカー）」だ。

その能力は京極が持つ「刀」系統のような……武器種として耐久の総量が低い武器とは相性が悪すぎる。

限られた武器のみが持つ「耐久消費無効」効果でなければ鍔迫り合

いをするだけでもへし折れかねないそれを構えたと言うことは、京極が最も得意とする殴り合いの如き斬り結びを軽率に行えないと言う事だ。

「なら……斬り抜けるだけさ！」

「させんよ、ハイエスト・デクステリティ」

浮遊する従剣が京極へと切っ先を向けたまま空中に固定される。武器としてではなく障害物として二本の刃は京極の行動を制限し、止むを得ず京極はサイガー１００が持つ魔剣と刀をぶつけ、鍔迫り合う。

「ふっ！」

「はっ！」

互いに相手を押し込むように、されど実際は自分が後ろへと下がるために相手を押す龍宮院流剣術における「引き波の型」で距離を離す。

そして波が引けば新たな波が押し寄せるように、引き波の型とセットになっている攻撃態勢へと双方ともに移る。

「【従剣劇（ソーヴァント）・三重奏（トリオ）……！」

「っ！？」

無論、龍宮院流に「剣を遠隔操作する」などと言うトンデモ奥義は存在しない。だがそれを成立させることはできる。

「影絵三役（シンクロニシト）】！」

発動者が振るう剣と連動して同じ軌道で動く二本の刃。あたかも剣聖の動きを真似る見えざる者がいるかのような擬似的な三対一、如何に対人に長けているとて無視するわけにもいかない。

「く……はあぁっ！」

その名の如く波のような軌道で衝撃波を発する攻撃スキル「荒波の太刀」で三つの刃を弾くが、三本同時に加えて一本は武器破壊効果を帯びた魔剣。

みしり、とあまり心地よい音ではない呻きを黒刀が漏らした。

「これは剣道の試合ではないからな……っ！」

「ならこっちも、相応の手段を使う……だけさっ！」

左手が霞み、京極はサイガー１００へと何かを投げつける。
先ほどのペンシルゴンのように何らかのデバフアイテムか、それとも手裏剣のような投擲武器か。その正体を見極めるよりも前に対応せざるを得ないサイガー１００ではあるが従剣で受け止める事で本体が対応する手間を省く。

その正体は「縛り鳥黐（とりもち）」、対人対エネミーを問わず有効な粘着する即興のトラップである。
ネッチョリと張り付いた鳥黐を剥がさんとオート操作の超猫じゃらしＬｖ．１００が空中でのたうつが、縛り鳥黐は五秒間取れることはない。

「一本止めれば……っ！」

剣聖の固有魔法【従剣劇】は展開している本数に応じたスキルしか使うことができない。即ち三本展開している現在、一本の動きを阻害すればスキルは飛んで来ない。

そして仮に妨害された剣をしまって二重奏にするとしても、その隙を京極なら突くことができる。

「……ここだっ！」

秘剣「獅子落し（ししおとし）」、鹿威し（ししおどし）に似ているが特に関係はない。

現在の京極が単体で出し得る中では最高の火力を齎すスキルが紫炎帯びる黒刀をさらに包み込む。

剣聖の苦手とする超至近距離、行く手を阻まんと飛翔する聖剣は一秒遅く、己の刃圏にサイガー１００を捕捉した京極が狙うは脇腹。

恐らくユニーク系であろう【九尾朧火（ナインテール・シクス）】は攻撃を命中させた場所にターゲットマーキングを付与し、そしてそれ以降は【九尾】魔法がその場所へのホーミング性能を持つのだ。

（入った！）

鋒に感触あり、鎧を砕き肉に……至らない。違う、肉じゃない、ただひたすら金属を押しのけるようなこれは、外した、違う。

火花が散る如く駆け巡った思考が京極に後退を選ばせる。

「【従剣劇・四重奏（カルテット）……】」

飛ぶ聖剣が主人を守るには一秒足りていなかった、であれば本人が

掴んで引っ張ればその一秒を詰めることができる。
一瞬の判断、思考と行動がほぼ同一のタイミングで行われた高速の主役切り替え。手放した魔剣ラス・ペガシアスの代わりに握られた聖剣が京極渾身の一太刀を受け止めていた。

「四面三角の錐（クアッド・デルタ）】！」

空中に正三角を形成した従剣、その中心をサイガー０が持つ聖剣が刺突した瞬間、まるで輪に張ったシャボン液からシャボン玉が生まれるかのように力の塊が発射される。
ただ一点シャボン玉と違う点を挙げるなら、それが球体ではなく三角錐であると言うことか。

「間に合え……っ！」

回避スキルによる無理矢理の捻りで三角錐の突きを何とか回避せんと試みるも、左肩に食らいついたダメージ判定が京極の体力を二割ほど削り取る。

「…………成る程、流石はトップクランの長と言うべきか」

「京極（アルティメット）、これはシャンフロだ。ルール無用である以前に、剣道ですらないことを思い出すべきだ」

「嫌という程思い知らされたよ……」

削られた二割、全体的に見ればまだ戦う事は出来るが、ダメージ後のモーションフィードバックの点から見れば非常に不味い。

（一度に大量のダメージを受けるとその部位が痺れるわけで……参

ったな、左肩が回復するまでどれくらいかかるやら……）

シャンフロでは痛覚が痺れに変換されている。故にこそ、噛み砕かれようが踏み潰されようが激痛を感じることがないがその代わりに寝起きに身体を伸ばした時のあの感触が全身に広がるような何とも言えない感触を受けることになる。

つまりは脱力感である。痛みはないが走ろうとすればその動きを大きく阻害する痺れ、今京極の肩に纏わり付いたものの正体がそれだ。

ことサイガー１００を相手としている場合、左肩が使用不可という現状は非常によろしくない。

（まぁ、もっとよろしくないのは……）

ちら、と少しだけ味方側の観客席を見る。

このまま負ければどう考えても旅狼外道三人衆に激しく煽られることになるだろう。自覚できるほど派手に啖呵を切った分、その煽りは想像を絶するはず。

（なんだろう、すごい嫌だ！）

本能的な拒否感、何としてでもこのまま負ける事は避けねばならない。負けたつもりは無いが少なくとも左肩が回復するまでどうにか時間稼ぎをしなければ。

思案を巡らせていた京極であったが、ふと。

（…………いや、これは……）

悪魔が降りた。

確実にサイガー１００を動揺させられる悪魔の言葉、だがそれはマナー的に言えばタブー側に偏った手段だ……何せプレイヤーのリアルを攻撃するに等しいのだから。

だが、

「時にサイガー１００さん」

「なにか？」

力の入らない左腕は使わず、右手のみで黒刀を握りしめて全身。三本の刃が京極に狙いを定めたその瞬間……

「やっぱ胸にぶら下がってたメロンが無いと動きやすいの？」

「ぶふっ！！？」

「隙ありぃっっ！！」

明後日の方向に吹き飛ぶ従剣、そして京極の振るった刃が今度こそサイガー１００に命中した。

剣狼相対すは雷火の獣　其の三（後書き）

斎賀　百さんはディ・モールト立派なものをお持ち、ヒロインちゃんも平均よりは上
神に愛されたスペックなのに姉妹揃って恋愛運を没収されたのは幸運かそれとも不運か
なお母と長女は「恋愛運低いなら見合い結婚で確定ガチャ引けばええやん」派、ヒロインちゃんはヒロインちゃんだけど恋を頑張ってるので一番やばいのは次女。

・九尾の六刃
ある意味ではオンリーワンジョブ、正確には一から九まで存在する「九尾の刃」の六番目。
就任時点でユニーク魔法＆スキル「九尾」を習得できるが、刃の資格を失った時点でそれらのユニーク魔法・スキルも消失する。
獣人族は獅子派、象派、狐派の三派閥がしょーもないトップ争いをしている中、ある理由から「犬、狼系」獣人族だけが独自活動している。

「あっなんかだんだん腹立ってきた！　自分から削るとか舐めプかい！？　舐めプだよねぇ！」

片手で扱う刀がその本来の力を発揮できない事は京極自身が最も心得ている。京極のステータスは技量や器用さに比重が偏った技量剣士であり、両手用の刀を片手でブンブン振り回すのはそもそも京極のスタイルとはあまり噛み合わない。

だがそれでも、怒っている己自身が一番理不尽だと思っているような憤怒が片手のみでの戦闘を持ちこたえさせている。

「ひ、卑怯だぞ京極！　大体メロンだのなんだの……」

「ウチの大浴場で君と君の姉の完熟メロンで何人絶望に沈んだと思ってんの？　なめてんの？　ハリセンでぶっ叩いてスーパースローカメラで記録したげよっか？」

「おいあの馬鹿に何を吹き込まれた！？　リアル方面から攻撃するのは卑怯だろう！」

感情によるパフォーマンスの上昇、それはサンラクやシルヴィア・ゴールドバーグのようなテンションファイターとしての資質に他ならないが、半ば暴走状態であるが故に京極がそれを自覚する事はない。

ちなみに秋津茜は「テンションでパフォーマンスを上げて学習応用反映する」というなんだかよく分からない本能と理詰めのハイブリ

ッドである。侵略者系エイリアンとかでよく見る設定とは言ってはいけない。

現在の集中を切らしたサイガー１００では複雑な操作を行うことが出来ず、大雑把な軌道で飛んでくるオート操作であれば回避は可能だ。

魔剣ラス・ペガシアスは回避に徹し、それ以外は黒刀で弾きながら前へ前へと進む。

「くっ……悔しいが有効な撹乱だ……だが！」

「最近またブラ破壊したって聞いたけどマジなの？」

「くぅうっ！」

虚脱、従剣は空中で空転し始め、致命的な隙が、チャンスが京極の前に晒される。

黒刀「研竜剛角」、ドラクルス・ディノケラスなるトリケラトプスと馬を混ぜたようなモンスターの角から作成された刀に再びエフェクトが燃え盛る。

秘剣「獅子落し」、今度は外さないと鋒の狙う先は鎧の隙間に覗く首筋。

さらに認識速度高め、視覚映像をスローにする「瞬刻視界（モーメントサイト）」を起動し、確実に命中させるべく軌道を修正する。

京極はこの意識だけが通常のまま認識する全てがスローになる感覚をあまり好まない。だが好みで勝てるならこの世に弱者は存在しない。

（行ける……確殺は無理だけど、体力の五割はもらった！）

だが、京極は肝心な事実を失念していた。

最上級職業「剣聖」、その習得条件はＮＰＣが主催する剣闘大会での好成績。今でこそ三位以内で入賞で特殊クエストを発生させることが出来るようになったが、サイガー１００が剣聖を獲得した時期はナーフ修正前。

それが示す事実は至って単純。

剣聖とは対人スキルが高くなくては獲得できないジョブである。

「【迸る電律（スタンビート）】！」

「くぁっ！？」

全身に走る痺れ、ダメージ処理によるものではない。これは「痺れ」という現象として設定されたダメージエフェクトだ。

鋒が揺れる、止まりそうになる身体に無理やり鞭を打ち、左腕を叩きつけるように添えて無理やり振り抜く。

「こ、なくそぉ！」

「ぐっ……」

浅い。

たしかに黒刀はサイガー１００の首筋を切り裂いた、だがその感触はあまりに軽く、体力を削ることは殆ど出来ていないだろう。

「くぅ……ふふ、便利な魔法だろう？　威力自体は魔法特化のステータスの者が使ってなんとかダメージが出る程度の微弱な魔法だが……発生の速さと対プレイヤーにおける不意打ちとしてはこれ以上なく優秀だ」

「随分……対人慣れしてるん、だね」

「当たり前だろう、私は「修正前剣聖」だ。天ぷら騎士団のリーダーを始めとする修正前組と八百長抜きでどれだけ戦ってきたと思っている」

互いにポーションを使用。体力こそ振り出しに戻ったが、状況は最悪としか言いようがない。

もはやセクハラ妨害は通用しないだろう、安定した制御下に置かれた刃が五本宙に浮遊し……

「五本、だって？」

従剣劇は必ず手に一本、「指揮剣」を持たねばならない。であれば宙に五本浮いているなど有り得るはずがない。

「剣聖の【従剣劇（ソーヴァント）】はスキルレベルなどと同じく使い続けることで独奏（ソロ）、二重奏（デュオ）、三重奏（トリオ）と扱える数が増える……あぁ、そうだとも」

現状明らかとなっている剣劇は従剣四本に指揮剣一本の五重奏（クインテット）、だがもしそれが限界でないとすれば。
京極の悪寒を肯定するかのように、「七本目」が剣の列へと並ぶ。

「七重奏……！？」

「対人相手に見せるのは初めてなんだが、堪能して欲しい……【従剣劇（ソーヴァント）・七重奏（セプテット）！」

妨害は間に合わない。
半分のパーツが欠けた六芒星のような組み合わさりを形成した六の従剣、そして七本目の指揮剣が指揮者の意に従い鉄槌を下す。

「七つの罪錘（セブン・シンカー）】！！」

「ぷぐっ」

まるで真上から見えない手に圧し潰されるかのような、人の足掻きではどうにもならない巨大な力による圧縮。肺の中の空気を無理やり押し出されたような声が漏れ、視界が急激に下に落ちる。刀を手放さなかったのは京極の剣士としてのプライド故か。
強制的に地面へ伏せった京極は腕すら持ち上がらない重圧の中、システム的な処理として作用しているその原理に気づく。

「まさか……重力？」

「御名答、これならリュカオーンにも通用するとは思わないか？」

尤も、魔力消費が悪すぎるのが欠点なのだが……とぼやきながらも剣聖が剣豪へと聖剣の刃を突きつける。

「私の勝ちだ」

やっぱりボスキャラじゃねーか、とか逆３タテ食らって一気にピンチじゃねーか、とか色々思うところはあるが……サクッと倒された京ティメットが戻ってきたところを俺と外道二人で囲む。

「あはは、ごめん負けちゃっ」

「いやまさか公衆の面前でセクハラかますとは思わなかったよ京極ちゃーん」

「マナーなんて糞食らえ、ＰＫｅｒの鑑だね……恐れ入ったよ」

「いや我々一同、京ティメット……いや、京ティメットさんのこと見くびってましたわぁ！　想像を絶するセクハラ大魔王じゃないっ

スかぁ！」

「くっ……！　予想はしてたけど人を小馬鹿にすることにほんと躊躇いないなこの人ら……！」

それはそれ、これはこれ。敗北者は煽る、部外者と勝者の特権ですよこれは。

とはいえ京ティメットのお陰で分かったことも多い。サイガー１００がさらに二つモードを隠していたこととか、あの対人以外で使い道あんのかって魔法とか……

「これ初見で勝てるかぁ……？」

「負けたら旅狼は黒狼のパシリになっちゃうんだから頑張ってもらわないと困るんだけどサンラク君」

「いや、完全にボスキャラじゃんアレ。正直実は八重奏（オクテット）も隠してたんだ！　とかされたら泣くぜ？」

だが愚痴を言ったところでサイガー１００が弱体化するわけもなく、旅狼の大トリとしてやるだけの事はやるしかあるまい。

「俺が勝ったら向こう半年はこれをネタに煽るから覚悟しとけよ負け犬共」

「言うねぇ、負けたら向こう三年はこのネタで煽ってあげるよ」

向こう三年はキツイって。

「あの、サンラク……さん」

「ん？」

「その……頑張って、下さい」

己の姉へと立ち向かう俺へとレイ氏からのエール。いいね、なんだかゲームのワンシーンみたいじゃないか。

「任せろって、手数の多さならこっちも自信がある」

それに京ティメットとサイガー１００との戦いで何やら気になるワードも出ていたしな。

ご覧に入れよう、この俺の「役割模倣（ロールプレイ）：龍宮院富嶽」を！

剣狼相対すは雷火の獣　其の四（後書き）

実際のところ、使いこなしているように見せかけているがサイガー100が完全に制御できるのは五重奏まで、七重奏は二本オート操作にしないと操作できない
ついでに余裕そうに見せかけているが「七つの罪錘」でMP空になってます
流石に戦闘しながら思考七分割は難しい、それ抜きにしても現在いる「剣聖」の中では間違いなくトップクラスの従剣制御ですが

剣狼相対すは雷火の獣　其の五

プレイヤー名「サンラク」。
初出はとあるプレイヤーが無断で撮影した「服を着て喋るヴォーパルバニーと一緒にいるスクリーンショット」であった。
その次はユニークを求めて初心者プレイヤーを脅さんとした阿修羅会からの逃走劇。

そしてシャングリラ・フロンティアがサービスを開始してから初となるユニークモンスター「墓守のウェザエモン」の撃破、さらに続けて「深淵のクターニッド」を撃破した事でこのゲーム唯一の「ユニークモンスターの複数撃破」を成し遂げたプレイヤーでもある。

「墓守のウェザエモン」なる阿修羅会が秘していたユニークを撃破した……ライブラリに提供されたアイテムと、離散した元阿修羅会のメンバーへの聞き込みから墓守のウェザエモンが「超高速の抜刀や条件を達成しない限り死なない理不尽系モンスター」であるそれを撃破するだけの力量を持つプレイヤーがフリーであるという事実。
いくつものクランがその確保を試みたが、彼女の人となりを知るサイガー１００はその試みが身を結ぶことはないだろう、と思っていた。

そして結成されたクラン「旅狼」、なんとも当てつけ感のある名前であるがサイガー１００としてはそこまで注目するような存在ではなかった……あの日までは。

たった三人（厳密にはＮＰＣ二匹込み）での「夜襲のリュカオーン」撃破。

初のユニーク討伐よりも、かねてより待望と捜索がされていた「喋るモンスター」の発見よりも。

間の悪さもあったとはいえ、「黒狼」が幾度となく挑んでは敗れていたリュカオーンを倒したという事実はサイガー１００に極めて多大な衝撃を齎していた。

夜襲のリュカオーン。まだサイガー１００が剣聖でも「黒狼」の団長でもない初心者であった頃、サービス開始直後に始めたプレイヤー同士だから、という淡い繋がりで結成された野良パーティをあまりにたやすく蹂躙した夜を狼の形にしたかのようなユニークモンスター。

全員がリスポーンし、なんだあれはと話し合う中サイガー１００の心は既に奪われていた。

ゲーマーには二種類存在する。

過程をこそ楽しむ者と、結果をこそ楽しむ者だ。

分かりやすく言うなら、前者はラスボスに挑む前に武器をコンプリートしたりサブクエストを全て埋めるタイプ。後者はひのきの棒だろうがなんだろうがラスボスを倒せるだけの力をつけ次第突撃するタイプだ。

どちらもゲームの楽しみ方としてはなんら間違ってはいない。結局のところゲームというものは「楽しかった」あわよくば「またやろう」と電源を落とすことができればその意義を果たしているのだから。

であれば、それまでゲームというものとは無縁であったサイガー１００……斎賀　百の目標は「夜襲のリュカオーンの打倒」であり、その為に今までプレイを続けてきたのだ。

だがらこそ、先んじてリュカオーンが撃破されたと知った時は荒れに荒れた。妹に当たるような事もしてしまったし、ビール缶を五本空けた。

だが高校時代から今に至るまで天音永遠(ストレス)とはうまく付き合ってきたので酒飲んで寝れば大抵冷静になって立ち直れるのがサイガー１００の長所である。

冷静になったサイガー１００が次に抱いた疑問は「一体どうやって」というものであった。

その恵まれたスペックを全力で無駄遣いして得たゲーム知識の中にギミックをメインとしたボスモンスターというものが存在することは知っていた。

だがリュカオーンは、少なくともランダムエンカで出現するリュカオーンに関してはそう言ったギミックはない、と踏んでいたサイガー１００からすれば十人にも満たない数でどうやってリュカオーンを打倒せしめたのか、ただそれだけが疑問であった。

妹、サイガー０は確かに強力な火力を持つが、あれは「発動条件を満たす為にどうしても時間がかかる」という順当だが致命的な欠点を抱えている。

だが己の姉に睨まれる覚悟で妹を問い詰めて得た情報では確かに「アルマゲドン」は発動されたらしい。

……そう、たった二人のプレイヤーが避けタンクとして前線を維持し続けるという力技で、だ。
そのうちの片割れ、後からヴォーパルバニー二匹を連れて参戦した秋津茜なるプレイヤーは今は除外する。問題は戦闘開始から数時間近く前線を維持し……それもほぼノーダメでそれを成したというプレイヤー。

リュカオーンが持っていた、サイガー１００すら気づいていなかった「透明分身」のカラクリに気づき、雲を物理的に取り払うことで対策するという力技を用いつつも、一歩間違えればボウリングのピンのように吹っ飛ばされる戦闘を最後まで通したプレイヤー……サンラク。

防御力を捨て去った機動力特化、ステータスそのものは偏りがある程度で極振りではないらしいが、それでも偏ったビルドでもリュカオーンを、ユニークモンスターを倒せるという事実。
それは「剣聖」が対リュカオーンに向いていないのではと薄々気づいていたサイガー１００にとっては朗報と言えば朗報ではあった。
少なくとも半裸に二刀流よりかは剣聖の方が対リュカオーンに向いているであろう、と。

実際のところ、攻撃スキルが五つにも満たず、それ以外のほぼ全てを機動力に費やしているサンラクのビルドは十分すぎるほどに「極端」な事をサイガー１００はまだ知らない。

故にこそ今回の相対においてサンラクとの直接の対決はサイガー１００が全力で３タテを行うだけの理由の……半分である。

もう半分はサイガー１００としてではなく斎賀　百としての理由。
サンラクの話になると明らかに冷静さを失う妹、なんでも最近「恋」を……斎賀の女としては快挙に等しい恋をしているのだ。
そして恐らくだが、サンラクとその何某はイコールで繋がっている。
であれば姉としてすべきことは一つだろう。
妹の心を射止めた百にとってのリュカオーンがどんな人物かを見極めるのだ。

「やぁ……まぁ、こんな時に言うのもあれだが私は君との対戦を楽

しみにしていた」

「ほぅ？」

「サンラク……その名と風体こそ知られているが一体どのように戦うのか、どんな武器を持っているのか……その殆どが明らかになっていない。強いて言うなら「アルマゲドン」に匹敵する火力を持っている、と言うことくらいか」

言われてみれば確かにそうかもしれない。これまで俺とパーティプレイをしたプレイヤーはほぼ全員「旅狼」に所属している。つまり煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手に関してすら殆ど外部に情報が漏れていない上に、今の俺はさらに装備更新を行なっている。

ふと観客席を見ればチラホラと明らかに「旅狼」「黒狼」ではないプレイヤーが見える、エセ魔法少女とか。つまり俺は今まで隠してきた詳細を公の場で明かすことになるのか……まぁ、だからなんだと言う話だが。

「それに最初はちょっと試したいことがあるんでそっち優先だ」

「……ほう？　それはユニークに関するものだったりするのかな？」

「いいや、プレイスタイルだよ」

傑剣（デュクスラム）への憧刃二振りを握り、構えを取る。この構えに名前があるのかどうかは知らない、見てくれだけを真似ただけで真髄もへったくれもない訳だが、俺が欲しいのはこの構えから続く動きによる結果だけだ。

「心の火を鎮め、己の河川を御する……だったかな？」
「笑えない類の冗句ではあるが……その挑発、受けて立とう」
挑発？　何故？
心中にて割と本気で首を傾げていると、先程の京ティメット戦の時より速度を増した剣が俺を狙って飛来する。

龍宮院　富嶽の強さのカラクリは単純だ。経験則から相手の動きを見切ってそれに対して完璧な解答を返す、ただそれだけ。
まさしくＴＡＳと呼ぶに相応しい、最大の敵は解答をミスるかもしれない自分自身と言う訳だ。

「前の二つはブラフ、本命は後ろからの大上段」
左肩を狙う剣を軽く身をひねって回避、右脇腹を狙う超猫じゃらしを右剣で弾く。
そして本命であろう背後に回り込み、真上から頭を狙って落ちてくる魔剣ペガなんとかを左剣で迎撃する。
武器破壊効果？　上等だ、やってみろよ。
「憧れは砕けない」
俺の剣筋が折れない限り、傑剣(デュクスラム)への憧刃は毀(こぼ)れない！
激突する刃と刃、武器破壊効果は武器の耐久値そのものにダメージを与える。

だが傑剣(デュクスラム)への憧刃はクリティカル攻撃に成功した時点で耐久値が減少しない。
それは相手が身体が水晶で出来た蠍だろうが、半分エネルギー体の鯱だろうが、武器破壊効果を持つ魔剣だろうが。
弾き飛ばされる魔剣ユニなんとか、武器を殺す刃に打ち勝った傑剣(デュクスラム)への憧刃に刃毀れはなく、その輝きに陰りなし。

「悪いな、上空奇襲式袋叩き天誅には耐性があるんだ」

俺を本気で殺したいなら「上空肉盾貫通型奇襲式袋叩き天誅」くらいしないと。幕末プレイヤーが天誅に向ける情熱はフレンドリーファイアすら戦略に組み込むからな。
軽い挨拶は終わった、いよいよクラン「黒狼」対クラン「旅狼」相対戦、大将同士の激突が始まる。

モモちゃんのリュカオーンへ向ける感情はグラハム・エーカー的な拗らせた愛とか宿命とかそんな感じ
決して「人と恋愛できないから電脳世界の獣に性的衝動をぶつけた」とかそういうアレではないのです
そもそもモモちゃんがリアルでは有能女上司系なのに完璧超人だから「実は可愛いところあるじゃん」的なものを一切見せないのが男運に恵まれない原因の一つというか

・上空肉盾貫通型奇襲式袋叩き天誅
ランカーを袋叩きにするために考案された天誅。
ターゲットの意識を囮に向けたところで長屋の屋根などを利用した上空から奇襲を仕掛けるまでは上空奇襲式と同じであるがこの程度はランカーなら当たり前に対処してくるので奇襲役にすら知らせていない「第二の奇襲者」が先に飛び降りたプレイヤーを壁にしてターゲットを奇襲、最終的に隠れていた複数人で袋叩きにする三段階天誅である。
その性質上先に飛び降りる奇襲者には何も知らせず後ろから刺すので洒落にならないレベルで恨まれる、という欠点があるため基本共通の敵を持つ敵同士が幕末の常識である中、例外的に「事が成功したら後で謝罪込みの詫び袖の下」を贈るのがマナーとなっている。

剣狼相対すは雷火の獣　其の六（前書き）

「十兵衛ぇぇぇぇぇぇぇっ！助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇっ！創作意欲が破裂してしまううううう！！！パーンて！！！！！」

「一人でやってろ」（画像略）

端的に言って、その男は最強であった。

若い頃から獣のような勘を持っており、相手よりも先に相手の動きを嗅ぎ取り剛剣で機先を叩き伏せる。そんな尋常ならざる戦い方をしていた。

だが生きとし生けるもの全ては劣化し、衰える。己の筋力が落ちたと、そう悟ったその時から……同年代の他の剣士と比べればまだまだ力は上であったにも関わらず、男は戦いの作法を変えた。

若き頃より磨き上げ、積み上げてきた経験と、獣の如き荒々しさは失えどより鋭く敵を読む勘をさらに研ぎ澄ました事で得た達人芸の極致。

相手の動きを相手よりも先に見切り、最低限の動きだけで対応し面を打つ。

老いてなお最強の称号を独占する男と戦ったものは「幽霊と戦っているようだった」「竹刀がすり抜けた」「気づいたら負けていた」としか答えようのない敗北を喫して尚、その男に憧れと敬意を向けた。

そうして男が死期を感じ始めたある日、男が名付け男の背を追って剣の道へと入った孫娘と相対する機会があった。

男も人間、孫娘を可愛がるだけの情は持ち合わせているが剣の事となれば話は別だ。孫娘の力が及ばぬ事と己が手を抜くことは別問題、いつものように相手の動きを読み取らんとして……気づいた。

孫娘がまっすぐ自分を見ている事に、そして自分が孫娘すら見ていなかった事に。

なんて事はない、相手の動きを見て自分を制御する事に心血を注ぐと言うのなら、相手が誰であろうと関係がなかった。
仮に孫娘ではなく防具の中に肉を詰めただけの人形であったとしても男のやる事は変わらなかった。

相手の技だけを見て、相手そのものを見ていない。

そんな簡単な事実を悟ってしまった男はひどく絶望し、人生最初にして最後の酒に溺れ……そして己に届けられ、かつては一笑で放り捨てたそれを拾い上げた。

――最早自分が変わるには遅すぎた、だがのちに続く者の一助になるならば

結論から言えば、その思いは未だ一番届いて欲しい相手には気づかれていない。
だが、その願いは紆余曲折に三回転半捻り込みを入れた奇妙な偶然の末、男の孫娘の前で披露される事となる。

要するにバッティングセンターなんだよ龍宮院　富嶽スタイルって。
ピッチャーとバッターの対決ではなく、飛んでくるボールに対して自分のフォームを直す。
別にそれが間違っている、なんて言える程偉い立場でもないけどさ、それならＮＰＣ殴るのと大差ないじゃん？　せっかくの対人戦ならもっと相手を見ようぜって事だ。

とはいえ事実としてあの戦法は強い、こうしてガワだけを真似るだけでも従剣劇の乱舞に対応できるのだから。

「俺を袋叩きにするなら本数足りてねぇぞオラァ！」

幕末乱世と袋叩きＦＰＳの中で鍛え上げられた袋叩きへの対応術！
基本的に人間本命には視線を向けちまうんだよ！
サイガー１００の視線が向く先、真下から掬い上げるような軌道で飛来したペガなんとかを迎撃して一念岩穿起動、同じ箇所に攻撃を命中させた事でペガなんとかの刀身が悲鳴を上げる。

「冗談だろう……どこでそれを会得した！？」

「……通信教育だ！」

まぁ間違ってはないだろう。
いつまでも飛ぶ剣と戯れていても仕方がない、ここからは俺のターンだ。

「いろんな武器を使うのは、何もお前だけじゃないぜ……！」

武器変更、拳に纏うは紅蓮の拳帯（セスタス）。名前のかっこよさの割にあっさり毒になるわおやつにされるわと散々なイメージしかないアルクトゥス・レガレクスの素材から作られたこの拳帯は拳にきつく巻きつく事である条件を達成しない限り外れない。

まぁ実際は人差し指一本分は動かせるのでウィンドウ操作すれば普通に外せるがそこはご愛嬌、設定は大事にしようぜ。

「紅蓮海の拳帯（レガレクス・セスタス）」

拳に巻きついた余りを風に靡かせながら俺は役割模倣（ロールプレイ）を維持したまま構える。

「やる事は同じでもここからは攻勢だ」

「なら見せてもらおうか！」

それを握る手は無くともそれを動かす者はいる、飛翔する魔剣やら猫じゃらしやらを見据え、俺は躊躇うことなく拳を振るった。

紅蓮海の拳帯（レガレクス・セスタス）には三つの能力がある。

一つ目は攻撃時、拳に命中した攻撃への自らへのダメージ軽減。要するにこれ装備した状態でなら剣の刃部分を殴りつけてもダメージ軽減処理が発生するという事だ。

二つ目は自身と攻撃対象の双方にダメージが発生した場合、「ゲージ」が溜まる効果。この武器はある意味では対刃剣と似たようなシステムを持っているわけだ。

「右だ！　左だ！　真上ぇ！」

ペガなんとかを殴りつけ、超猫じゃらしを弾き飛ばし、上から地面

に突き立てるように振ってきた名も知らぬ剣と真紅の帯巻く拳が激突する。
鋼の切っ先と人の中指、本来なら拮抗などする筈のない二つがぶつかり合い、そして拳が剣を弾き飛ばした。

「ハッハァー！　ストロングフィースト！！」

んでもってついでに装備変更！　俺が対人のいろはを教えてやろう！
なけなしの防御力をかなぐり捨てた魚面と化した俺が一気に前へと踏み込む。
同じ龍宮院流ならば、とでも考えたのか俺の前へ進む一歩を縫い止めんと俺の前へ剣が飛びかかるが

「おいおい、俺が通った後を塞いでどうすんだよ……」

今の俺は半裸に魚面、そして内側に夜空を持つ純白の外套を纏った防寒対策済み半裸！　変態はＮＧワードだからな！
瑠璃天の星外套を身につけた俺は魔法使いにだってなれる、あぁそうだとも五メートルの距離だって「射程距離」だ。

「【瞬間転移(アポート)】！」

「なっ!?」

転移可能距離の限界、聖剣を持つ手からして恐らく利き手なのだろう右とは逆の左前方一メートル圏内に移動した俺にサイガー１００の動きが硬直する。まさか俺が転移魔法を使うとは思っていなかったらしい。

「質のいい剣を使ってるお陰でこっちのゲージも溜まりやすくて助かったよ……！」

紅蓮海の拳帯が持つ三つ目の能力。

ゲージを最大まで蓄積する事で発動可能なそれは、拳を縛り付ける帯の解放だ。

「この程度の対応……っ！」

「残念、依然として役割模倣(ロールプレイ)だ」

剣を遠ざけるなら物理運動を越えるアドバンテージを稼がないとな。

京極のアイデアは悪くなかったが従剣劇の制御が万全なままでの実行は悪手だ。

こういうのは相手を揺さぶってからやるのが対人の作法というものだ。

横薙ぎに振るわれた聖剣エクスカリバーを首の皮一枚の範囲で回避、正直ちょっとヒヤリとしたが相手の手札は切らせた。これであの発生が早い魔法よりも速くこちらが動ける。

「名刺代わりだ、受け取ってくれ」

弾けるように解放された紅蓮海の拳帯はまるで俺の手が一回り大きくなったかのように俺の拳の周りを包んでいる。

さながら帯で作られた中途半端なグローブと言うべきか、明らかに拳を守り切れていないように見えるが、見た目だけで判断するのは早計というもの。

「っオラァ！」

「ぐおっ……！」

拳の周りの空気を包む紅蓮海の拳帯がサイガー１００が纏う防具と激突し……硬い金属音を響かせた。

この状態になった紅蓮海の拳帯が発揮する能力はある意味では極めてシンプル、拳を経由するダメージの完全無効化だ。
要するにこの状態であればマグマに手を突っ込もうが毒の塊を殴ろうがリュカオーンに噛みつかれようが……そのダメージを受けるのが「肘から拳の先まで」であれば一切のダメージは無効化される。

どれだけ硬い鎧に攻撃したとしても、剣の刃を受け止めたとしても俺の拳は傷つかない、ダメージを受けるのは相手だけだ。
まぁ肘から先以外は普通にダメージ食らうしペガなんとかみたいな武器破壊で耐久も削られるから万能って程でもないが……

「それでもこの拳は砕けない、さっきの剣と同じくな！」

「なら胴体を狙うだけだ！」

はい役割模倣（ロールプレイ）。
そろそろ集中力が切れかけてきたが、この後に勇者的覚醒が控えている以上ここで削れるだけ削っておきたい。

剣聖唯一の距離的弱点である超至近距離戦闘、下手に従剣を使えば自分に刺さりかねないこの距離を維持し続けて攻撃する。
簡単そうに聞こえるがこれがなかなか難しい。逃げようとする相手に追随しつつ、振るわれる迎撃を距離を維持したまま避ける。

「【迸る電り（スタンビー）――」

「それ手から出す系だろ？」

なら後ろに回り込めばいい。
フォーミュラドリフト起動、加速する滑走で後ろに回り込んで……
おっとここまでか。

「無茶するじゃねーか……！」

サイガー１００の背中を掠めるようにして俺とサイガー１００とを隔てる従剣、下手をすれば自分で自分の背中を斬り裂きそうなものだがよくやるよ。

「確信した……君はあれだな、至近距離に近づかせてはいけないタイプだ」

「まだまだ手の内の一割くらいしか見せないわけだが？」

「なに、そう決着を急ぐこともないだろう……手の内を見せ切っていないのは私も同じだ」

従剣が消え、聖剣すらも収納して。そしてラインナップを入れ替えるかのように先程までのものとは全て異なる剣の数々が展開される。

「おいおい……インベントリに何本武器入れてんだよ」

「ふふふ……三十五本だよ」

マジかよバリエーションが多過ぎるだろオイ。

というか聖剣を何故しまい込んだ？　覚醒を使わない？　いや違う、覚醒を使わないだけのメリットが……！？

「時にサンラク、君は「同時に使われることで効果を発揮する」武器を知っているかな？」

「実演は結構なんだが――――！？」

「ははは、遠慮は不要だ……「インペリアル・ファイブ」発動！」

うん、ちょっとこれはあれだな。役割模倣（ロールプレイ）で遊んでる場合じゃないかも。

剣狼相対すは雷火の獣　其の六（後書き）

普通ならインベントリパンパンで動きに支障が出ますがサイガー100はそこらへんをアクセサリーで解決しています
まぁそれでも重いものは重いのでいろんなバフを盛って動けるようにする、という見た目の優雅さとは真逆の地道かつ綿密な構築によってシャンフロ最高クラスの剣聖は成り立っているのです

スパルタ風の防具ができたり特定条件下でプレイヤーの拳絶対守る武器になったりとかっこよさの権化なのにその元になった武器は深海では捕食者に踊り食いされる模様
まぁ半分精霊の領域に足（ヒレ）突っ込んだシャチだったり、あらゆる種族を自分の眷属に改造して発艦させてくるアンコウだったり、背中に独自生態系を作ってそこで作った危険生物に戦闘させるヤドカリだったりと海底の生態系が頭おかしすぎるのが悪い
ちなみに上記三種類のモンスターですがシャチはアンコウをゴリ押しでぶちのめせるがヤドカリのメタに弱く、アンコウはヤドカリが作ったモンスターを奪えますがシャチの力技に弱く、ヤドカリはシャチの天敵性能のモンスターを作成できますがアンコウが相手だと作ったモンスターを奪われるので弱い、という三すくみになっております

剣狼相対すは雷火の獣　其の七（前書き）

「設定が止め処なく作られていくのが実感できる！」（画像省略）

ぶっちゃけるとさっきの更新割と操作ミスだったんですけど、今作者の精神状態がちょっと暴走しておりまして

別に精神的に追い詰められてるとかじゃなくて「面白い作品読んで創作意欲が爆発した」というだけなんですが

諸々含めて面倒くさくなったので連続投稿祭りに踏み切りました。

明日更新しなくてもゆるして

剣狼相対すは雷火の獣　其の七

シャンフロに存在する武器の中には全く別々の武器でありながら一つの武器へ合体する「対刃剣」のように「分類上は別々の武器だが同じ場所で使用されることで共通の効果を発揮する」武器が存在する。

例えばサイガー１００が五重奏(クインテット)で展開した五本の剣。

「インペリアル」の名を共有するこの五本は戦闘処理時に同じ場所かつ同じ対象と敵対している際に効果を発揮する。

「それぞれの武器が対応したステータスを向上させる、だが私はそれら全てを一人で使っている。つまりは……」

「特典独り占めって事だろうが！」

ＳＴＲ、ＤＥＸ、ＡＧＩ、ＴＥＣ、ＶＩＴ。

スパーダを持つ者はより力強く

カトラスを持つ者はより軽く

レイピアを持つ者はより速く
マンゴーシュを持つ者はより巧く
ファルシオンを持つ者はより硬く
ではその全てを持ち、使い熟す剣の聖がいたならばどうなるのか？
　クソッタレめ、聖剣抜きでも普通に強化されやがった！

「はぁあっ！」

「くぉっ……なくそぉ！」

ダメージはない、だがあまりの膂力に拳が弾き飛ばされる。ギリギリの所で追撃の回避に成功したが、距離を取らざるを得ない。そして距離を離せば従剣の乱舞が俺へと牙を剥く。

「なめんなっ！　こなくそっ！　とぉああ！　はいぃぃい！」

「呆れるほどに動くな君は……リアルで曲芸師でもやってるのか？」

ジャンプで一本目を回避、フリットフロートを利用した空中トリプルアクセルで二本目を避け、振り回される拳をぶつけて三本目を迎撃、そして着地刈り狙いの四本目を無理やり身体を曲げてダメコン。体勢を崩すが迅速に起き上がって再び警戒態勢。
従剣を己の周囲に戻しつつも、呆れたようにそう問いかけるサイガ－１００に対して俺は努めて余裕そうに振る舞いつつも頭の中ではここからどう巻き返すかを考える。

「おいおい、リュカオーン相手にするならこれくらいは必須技能だろう？　お宅の避けタンクを参加させるならこれくらいやらないと」

「いや……流石にそこまでの技量を要求するのは……」

うるせぇ、巨大生物と三時間鬼ごっこ繰り広げたり四方八方から天誅されたり恒星間兵器の不意打ちに対応したりしてりゃこんくらい誰でもできるようになんだよ。幕末のランカートップ勢とか見てみろ、あいつら極まりすぎて数式と心理学組み合わせて確殺天誅する戦術とか作り出し始めてるからな？　晴れ時々脳天狙いの斬馬刀、とか頭のおかしい天気予報が成立する修羅の時代やぞ。

とはいえトークスキル（自前）で時間を稼ぎつつ脳内では高速で装備と使用戦術戦術の取捨選択が繰り広げられる。
長期戦は無理だ、リュカオーンや金晶独蠍相手に一晩戦ったこともあるがあれは結局のところ奴らはＡＩ操作の「倒されること」を前提としたモンスターだったからこそ、その行動パターンにはある程度の上限があったからこそ遅延のループを構築できた。
だが三十五本で何パターンの戦法を作れるか分からない眼前のサイガー１００相手ではそれができない。時間をかけるほど向こうの手数に圧倒されてしまう、であれば短期決戦……だがこれも難しい。

逆境覚醒以外にも手札がある、と確定した以上不用意な突撃は悪手オブ悪手だ。不用意に突っ込んで何が飛んでくるか分からないとか常時透明状態のリュカオーンに無策で突っ込む方がまだ難易度軽めだ。じゃあどうすればいいのか？　実を言えばそれに関しての結論は既に出ている。

「全く、実は俺が持ってるユニークを白日のもとに晒すのが本命の目的じゃないだろうな……」

「ほう、何か見せてくれるのかね？」

「そうだな……時にサイガー１００氏、俺の身体に刻まれたこれが「リュカオーンの呪い」とは別のものであることは理解しているかい？」

「…………ああ、非常に悔しいがリュカオーンに関して君は我々の……いや、私以上に先を行っているようだ。よければ説明してくれると私としては非常に嬉しい」

紅蓮海の拳帯（レガレクス・セスタス）をしまって武器を切り替える。効果時間が残っているのにしまうのはもったいないがアレを使うならこいつを使っても仕方がない。

「これはリュカオーンの「刻傷（こくしょう）」……あのクソ狼を張り倒した後に「呪いをなんとかしろ」って言ったらよりにもよってアップデートしやがってな、服は着れるが三分経つと爆散しやがる」

それ以外にも改宗（コンバーション）はできないわ強いモンスターは寄ってくるわ多分聖女ちゃんとやらでも解除できないわとクソッタレ特典満載の縛りプレイだが、それでも救済手段が残っているあたり運営に文句も言えやしない。

「実はあるユニークを進めている最中にこの「呪い」を消すんじゃなくて相殺する手段を得てな」

「相殺、それは興味深い」

「お返しだ、こっちも実演してやるよ」

取り出しますは奇妙な武器。それを形容するなら「刃部分を取り除いた短剣」とでも言うべきか。刃を飛ばした後のスペツナズナイフ

のような、短剣としての存在意義の九割が存在しない武器とすら呼べないただの握る棒と言うべき何か。

だがよくよく観察すれば、鍔の中心、本来なら刃の根元があるべき場所に奇妙な水晶が取り付けられていることが分かるだろう。言うまでもなく、これは地下トンネルの死闘で手に入れた自称ゴルドゥニーネ……ユニークモンスター「無尽のゴルドゥニーネ」に由来する「呪い」の成分結晶に他ならない。

「銘を「灼骨砕身（シャッコツサイシン）」と言うらしくてな、こいつにはユニークモンスター……無尽のゴルドゥニーネの呪いが仕込まれている」

俺の言葉が示す事実は単純明快、既に俺が「四体目のユニークモンスターと戦闘している」という事実にレイ氏を除くこの場にいる全員が驚愕の気配を発する。

「そしてこれをぉ……！」

強く握れば、刃の存在しない短剣に非物質の刃……普通に振るうだけでも軽度の呪いを付与する鬼畜武器足り得る呪いの短剣が形成される。そして俺は刃の向ける先をくるりと裏返して俺自身に刃を突き立てた。

「さらにこっちにも！」

胴体に突き立てた灼骨砕身を引き抜き、右腿に叩きつけるように突き立てる。どうでもいいが右腿に刺した時点で左側にも効果が及ぶので三カ所刺す必要はないらしい、ささやかすぎる心遣いに涙が出るね。ペッ！

「これは予定変更せざるを得ないかもしれないな……」

「と、言うと？」

「君はどこまでユニークを隠している？」

「……ヘッ」

別にサイガー１００を笑ったわけではない。冷静に考えたらチュートリアルすらスルーし、速攻でユニークモンスターの居城に居候してそっからここまでどれだけユニークな経験をしたのか、自分で考えて笑ってしまっただけだ。

「全力で立ち向かえよ剣聖殿、こっからは三段階くらいギアを上げていくぞ」

「……その、姿は」

ビシリ、と明らかに人の身体から発せられるには異質な亀裂の音。灼骨砕身を突き立てた傷口を起点に、俺の胴体と足がひび割れていく。転移先を読み取らせないために魚面を着けていたが、ここからは視界が僅かでも塞がれるのも鬱陶しい。ラケダイモン・ヘルムに装備を変更した所で、顔と腰に届く直前で辛うじて留まった崩壊の傷口、亀裂から炎が漏れる。

「灼骨(しゃっこつ)ってさ、卜骨(ぼっこつ)っていう大昔の占いの別名なんだってな」

焼いた骨を叩き割り、その割れ方で吉兆凶兆を占う原始的な運試し。呪いを呪いで相殺し、我が身を砕いて行く末を占う。誰が吉兆で誰が凶兆か、はたまた俺が誰の凶兆となるのか。

やったぜ冥輝君、今日この瞬間が君のデビュー戦だ。

「やっぱ俺的には川を舗装するより心を燃やす戦い方の方が好みだな、どっちが先に燃え尽きるかチキンレースと洒落込もうぜぇっ！！！」

大量の手札を持つサイガー１００の対処法は結局のところシンプルな結論に至る。
百枚の手札を持っていようが、使う前にぶっ飛ばせば手札はないに等しい。仮に俺への対処を持っていたとしてもそれしか使えないくらいの突き詰めた切り札で真正面から捩伏せる！
ボスキャラみたいな性能したプレイヤー相手にするならこっちもボスキャラみたいな性能になるしかねぇんだよ！
まだまだギアは上がるぞ覚悟しやがれ！！

・灼骨砕身
物質化した「呪い」をあえて肉体に付与することで既に定着した「呪い」を一時的に無効化する相殺の短剣。
自身に対して刺突使用することで発動し、五分間自身に付与された「呪い」を無効化する。
代償として装備品による追加数値を除いた肉体のＶＩＴが半分になる。
それは憎悪であり、憤怒であり、呪いすらをも噛み潰す蛇の牙、その毒である。肉体は罅割れる、呪い同士が喰い合う。その意思が呪いに屈した時、その身は砕け散るであろう。

普通に厳しいデメリットなのにデメリットとしてほぼ機能していないという
まさかゴルドゥニーネさんも「自分の悪意が完全スルーされるくらい貧弱ＶＩＴ」とは思うまいて

剣狼相対すは雷火の獣　其の八（前書き）

こういうキャラクターの感情が燃え上がったり戦闘が白熱するシーンは鮮度が命（意味不明）

剣狼相対すは雷火の獣　其の八

「やっぱ根本からしてカウンター系は性に合ってないんだろうなぁ！」

「まだ加速するだと……っ！？　馬鹿な、どれだけ強化を重ねているとっ」

「スペックだけで何もかもが決まるならプレイヤーはリュカオーンに永遠に勝てないってことになるだろうがよぉ！」

響く高笑い、先ほどまでの見切りと対応による戦法とはあまりに真逆の、超急戦へとシフトチェンジ。

亀裂が走る身体から炎を靡かせる姿はスパルタ風の姿も相まってか、人でありながら人であることを捨ててしまったかのような、元が人であるからこその恐怖にも似た違和感を抱かせる。

この場にいる誰もが、彼と所属を同じくする者達ですら初めて目撃する「サンラク」というプレイヤーデータが持つ全身全霊の開帳に恐れ慄（ドン引）き、それぞれがそれぞれの反応を示す。

「ねぇ、あれさっきまでモモちゃんの事ボスキャラだのなんだの言ってた奴だよね？」

「どっちがボスキャラだって話だよね……第二形態持ってるのお前じゃん、って」

「ペンシルゴン君！　いやぁハハハハハ凄まじいな彼は！　金ならい

くらでも積むから是非とも君からも彼に情報提供の協力を打診してくれないかね！」

「あぁっ！　面倒臭い爺様が連動して着火しちゃったよゼロちゃんちょっとマッシブダイナマイトさん呼んできて！」

「え、えっ、その、ええと……」

どの口で人のことをラスボスだの何だの好き勝手言ってたんだあの野郎、と呆れる者。
秘められていた新情報の数々に金鉱山どころかレアメタルまで豊富に内包する宝の山であった、と喜ぶ者。
面倒臭い奴が面倒臭いハッスルを始めたのでせめて新入りを弄って楽しもう、と無茶を振る者と戸惑う者。
予想の数倍以上の価値を持つプレイヤーであると判明したことでこれからどう動くべきか、を考える者。
どうせならさっさと女体化して胸をばるんばるん揺らしながら戦ってくれないかしら、と真顔で思う者。
三者三様十人十色。サンラクというプレイヤーがその本性を、これまでほぼソロプレイであったからこそ明かされなかった手の内が明らかになったことでこの場にいる誰もが様々な反応を見せる中、思考が真っ白になるほどの驚愕の感情のみに支配された者がいた。

「…………」

絶句、まさにその言葉がこれ以上ふさわしい状況など無いと断言できるほどの驚愕に支配されたそのプレイヤーは、先ほどまでのロールプレイを中止し本来のプレイスタイルに戻ったサンラクを凝視しながらも、頭の中では先ほどまでの非常に見覚えのある戦い方で埋

め尽くされていた。

「なん…………え？　なんで…………なんで？」

足取りも、剣を振る動作も、何もかもがそれとは比べるまでもなく……粗悪。素人が考える最適解で動きました、と言わんばかりの動きに剣の道としての流れは一切存在しない。

なのに

なのに

サンラクが見せたその動きは、誰よりも自分よりも「龍宮院　富嶽」だった。龍宮院流の所作の一切を感じさせない動き、だというのにその動きは紛れもなく「龍宮院　富嶽」のそれで、すでにこの世にはいない祖父の動きを誰よりも近く、長く見てきた己よりも、まるで祖父が彼の身体に乗り移ったかのような、いいや違うその動きはあくまでも彼のもの、つまり「龍宮院　富嶽」というスタイルを己のものに……

意味が分からない

「あの、その……京アルティメット……さん？」

「っ！」

だからこそ、恐る恐るといった様子で声をかけられた時、脳内麻薬やらなんやらをフルで放出した京極の脳はかつて無いほどに稼働し、結論を叩き出したことで話しかけてきた相手……サイガー０（斎賀玲）へと掴み掛かった。

「教えて、知ってるんだろう？　彼が誰なのかを！」

「え、えと」

「教えて！　知ってるんだろ！　ねぇ！　ウチの門下生じゃないよね、誰！　ねぇ！！」

「お、落ち着いて……落ち着いて、京極、ちゃん……！」

「…………っ、ぁ…………っ！　…………っぃ！」

感情のオーバーフロー、吐き出すべき言葉が喉で詰まったことで窒息したかのようにサイガー０を揺らす京極。プレイヤーの感情を読み取ったシステムによりその目からは涙すら流れ始め、これまでの印象を自ら壊すような変貌ぶりに周りの者達も何事かと二人を見遣る。

「その……とりあえず、彼は……龍宮院とは一切関係ない、です……」

「は？」

そんな訳あるか、まさかお前私をおちょくっているのか？
言葉に出さずとも顔に出ているその言葉と、もはや殺意と言ってい
い感情が発露し、その矛先はサイガー０一点に向けられている。と
もすれば今すぐにでも首を掴んで締め上げんばかりの様相を真正面
から受け止める鎧騎士はされど怯むことなく真正面から受けて立つ。
それを証明することを躊躇ってはいけないと、理性を超えた感情の
衝動が告げるが故に。

「彼は……その、武術とかは……やっていません、本当です」

「そんな訳……っ！」

「本当です」

断言。
たとえ今この瞬間から地球を軸に宇宙が回転しだしたとしてもその
事実だけは不変であると、絶対の自信を帯びた断言に京極の感情に
僅かながらの冷静さが取り戻される。

「じゃあああれをどう説明する！？　足取りは雑だし剣の取り回しも
滅茶苦茶だ、ああそうだとも！　あんなのは素人同然だ、なのにあ
れはお祖父様そのものだ！　どういうことなのさ！！」

吠え猛る京極の言葉、現実であったなら飛び散る唾が顔にかかるほ
どの剣幕を受け止めなお退かない。
ここで気圧されてしまったら、自分だけではなく彼自身も貶めてし
まう……そんな自分でもよく分からない妙な確信がサイガー０を支
えている。だからこそ騎士は揺るがない、彼が烈火のごとく健在で
ある限り己もまた倒れないのだと、そう行動で示すかのように。

「あれは……多分、ゲームで覚えた…………んだと、思います」

「…………は？」

確証は無い、だが状況証拠を揃えたならおそらくそれが正解なのだ。

「富嶽お爺様が監修したゲームを、知っていますか？」

「……知ってるもなにも、全クリしたよ」

はてそれは妙な話だ、とサイガー０は首をかしげる。年上の知人である女性が彼へと勧めたそのゲームは裏ボスとして自分も知っている偉大な剣士をトレースしたＮＰＣが登場するゲームだ。最大の協力者の縁者である京極にあのゲームが届いていることは何ら不思議ではは無いが、全てをクリアしたというのならばなぜそこで疑問を覚えるのか。

だって今の反応は「ゲームだけで習得できる訳無いだろう」というよりは

なぜ今その話題を出す必要があるのかと言わんばかりではないか。

「その…………ええと、裏ボスで龍宮院　富嶽のトレースＡＩと戦えるのは……知って…………まさか、知らないんです、か？」

絶句、更新。魂が抜け落ちたかのような無を超えた無表情。まさか現実の方の肉体が驚愕のあまり心臓停止とかしてないだろうか、と本気で心配してしまうほどの様子にサイガー０は慌てて京極を揺さぶる。

「だ、大丈夫…………？」

「しらない…………わたし、そんなの、しらない…………」

明かされた真実、今はもういない正真正銘の「剣聖」が遺した願い。事実は小説よりも奇なり、一体どれほどの偶然が重なればこうなるのか分からないほどの連鎖によって、剣聖の孫娘は祖父の願いを知ることになる。

だがそんなことを闘技場で戦う二人が知る由もない。
電脳の「剣聖」と電脳の「罅割れ燃え上がる傭兵」、その激突はさらなる燃え上りを見せていた。

剣狼相対すは雷火の獣　其の八（後書き）

ジョゼット、ブレない

剣狼相対すは雷火の獣　其の九（前書き）

明日は更新休みます！！！！！！！！！！（力尽きた）
流石に衝動のままにキャラクターを動かしすぎた……

剣狼相対すは雷火の獣　其の九

どちらにせよ半裸なのだからわざわざ呪いを相殺する意味はあるのか？　大アリだ。

お前相方がフル稼働してる傍らで産業廃棄物扱いされていた冥輝君の悲しみが分かるか？　分かれよ、分からねーなら教えてやるよオラァ！

「どうしたどうしたァ！　疲れたなら一息で首刎ねてやろうかァ！？」

「なんという……っ！」

降り注ぐ従剣の流星、それら全てがオートからマニュアルへの移行を攻撃にまで高めた技術の極致と言っていいだろう。だからどうした、ライオットブラッドを二缶空けた今の俺はあの日と同様……シルヴィア・ゴールドバーグと正面激突したあの日と同等のコンディションになっている。

さらに言えば付け焼き刃のカースドプリズンじゃあない、俺が一から育て上げた「サンラク」として動いているんだ。

「見てから対応するくらい余裕なんだよァ！！」

神秘「愚者」がかつてないほどに回転する。リキャストタイムが終了次第即使用され、まるでスキルの発動が封じられてしまったかのようにスキルのリキャストが連続する。

宙を踏んでは駆け抜けて、剣を踏みつけ滑走し、剣を振りかぶった姿勢のまま転移して不意を討つ。俺とサイガ－１００では一年近い

プレイ時間の差がある、故にこそこれだけの猛攻を仕掛けて尚サイガー１００は沈まない、倒れない、屈しない。

プレイヤースキルで言うならサイガー１００はシルヴィア・ゴールドバーグとは比べるまでもない。アレはもう規格外とかそういうレベルじゃなかった、こっちのフルパワーに笑いながら合わせてきた上に息切れすらしないとか完全に怪物だ。幕末のランカーもそうだが、世の中「これのためだけに生まれてきた存在」としか思えない奴って割といるんだよな。サイガー１００はそういった存在ではない、正直にぶっちゃけるがプレイヤースキルだけなら負ける気がしない。

だが違う、サイガー１００というプレイヤーの強みはそこじゃない。そんな才能だけでなんとかなるくだらない領域の話ではないのだ。

「面白い……！　リュカオーンと渡り合うにはそれ程までの力量が必要だと？　上等じゃないか、だったら私の全てをぶつけて君に勝つ──！　それが、奴への勝利につながるのならば！！」

ゲーマーにとって最も大切なものとは何か。

プレイヤースキル？　違う、そんなものがなくたってゲームは起動できる。レアアイテム？　違う、完全な間違いではないが木の枝一本でラスボスまで楽しみ尽くすことだってできる。

ゲーマーにとっても最も大切なもの、それはモチベーションだ。どれだけ乱数がクソだろうが下手の横好きだろうが、そいつの中で煌々と燃える熱意がある限り、人に限界はない。

その点で言えばサイガー１００は最上級だ、一年間というあまりに長い時間を経て尚陰りを見せない「打倒リュカオーン」という熱意の炎。その手で操る武器の数々はサイガー１００というプレイヤー

の熱意の結晶、宙を舞う剣の一本一本にこのゲームへ向ける熱意と、時間と、努力が込められている。

ガチ勢、ああそうだガチ勢という言葉がこれ以上似合うプレイヤーもいないだろう。運営も草葉の陰で喜んでいるだろうさ。
だからこそ俺もまた燃え上がる、このゲームにこれほどまでのめり込んでいる相手に全力を叩きつける喜び。だからこそ対人戦は人を惹きつける、ＰＫが無くならないのだってこれが理由だ。不純な理由だってあるだろう、だがＰＫの根本はＡＩ操作の敵ではなく己と同じプレイヤーとこそ戦いたいという純粋な想いが根幹にある。
シャンフロのＡＩは確かに別格だ、本当にそういう生物として実在しているかのようなＡＩには拍手するしかない。だがそれはそれ、これはこれ……対人戦の楽しさを損なわせることはできない。

「【従剣劇（ソーヴァント）・六重奏（セクステット）】！！」

「検証の時間だ……飛ばせ「冥輝」！！」

ああ、今俺は幸運を得ている。
それは恐らく……というか新大陸に行っていない以上ほぼ確実にレベル上限解放を行っていない、つまりレベルとしては俺と同じＬｖ．９９Ｅｘｔｅｎｄであるはずのサイガ－１００を相手に勇魚兎月を発動できているということ。
おそらくレベルダウンビルドを何度も繰り返しているだろうことが理由か？　それともレベルダウンビルドによって俺より数値的には高いであろうステータスが条件になっているのか？
まぁいいさ、本来はレベルが俺よりも高い相手にしか効果を発揮しないはずの勇魚兎月が使えるのは僥倖だ。だからこそ今からやる「検証」を成立させることができるのだから。

俺の言葉か、それとも思考か。どちらによってオーダーを認証したのかはともかく、俺の意思に従い冥輝がその性能を白日のもとに晒す。
そもそも冥輝には対刃剣としての合体能力を除けば二つの能力を持っている、一つは言わずもがな今朝あたりまで産業廃棄物だった「冥気効果」だ。分類としてバフである以上リュカオーンの「刻傷」によって弾かれてしまうそれは、なんか手がバチバチする以外に何の意味も成さないゴミ能力と化していた。まぁそれも今朝解決したわけだが。
だが冥輝にはもう一つ、ＨＰ　ｏｒ　ＭＰを消費することでその形状を変えるという能力がある。具体的に言うと条件を満たすことで短剣型からレイピア型だったり曲剣型だったりに変形できるのだ。ぶっちゃけ短剣型で運用するのが一番使いやすいのでこっちの能力も腐っていたわけだが……本来この能力は「冥気効果」とセットで運用することを前提にデザインされている。
では結論を実演しよう、冥気効果とはなんぞや？
それはクリティカル攻撃を命中させることで発現し、クリティカル攻撃を命中させた回数だけ、そして冥輝の形状に応じて………

「馬鹿な……スキルを経由しない「飛ぶ斬撃」だと！？」
「ハッハァー！　検証成功！　やっぱり「陣形」を崩せば従剣劇は不発するんじゃねーか！！」

「遠距離攻撃」を可能とするのだ。
これこそが冥輝君の真の実力、腕をバチバチさせて意味もなく変形する金照の鞘（オマケ）なんかじゃねーんだよ！　むしろ冥輝君の方がぶっ壊れ性能しとるわ！

「露骨過ぎて気づくのが遅れたっての……さぁどうする！　こっからは徹底的に妨害を絡めていくぜ！？」

「上等！！」

遠距離斬撃は冥輝の形状によってタイプが変わる。レイピア型であれば貫通力の高い飛ぶ刺突に、曲剣型であれば弧を描く飛ぶ切断に、短剣型なら連射力の高い飛ぶ連撃に！

攻撃を飛ばせるのは剣聖だけじゃないぞ、実質無職の傭兵でもやってやれないことはない。今この瞬間、俺が証明してやる。

「初期職業でもジャイアントキリングできるってなぁ！！」

青白い冷気のような、その真逆の炎のような。どちらとも受け取れる蒼いオーラを纏った左腕を持ち上げ、冥輝をサイガー１００へと突きつける。
さぁ出し惜しみは無しだ、全部炎に突っ込んで燃え尽きるまでヒートアップだ！！　アッハハハ、テンション上がりすぎて揺り戻しが怖いなぁ！！！！！

実際のところ「Ｅｘｔｅｎｄ」という表記が曲者なのです。Ｅｘｔｅｎｄを別の形にするなら「Ｌｖ．９９＋」
そしてこの「＋」された数値が一体幾つなのかは表示されていないだけでパラメータとして蓄積されています
例えばレベル１００の領域へと踏み込んだ京極はなにも、レベル９９からコツコツと今のレベルまでレベルアップしたわけではないのです

レベル上限を更新した瞬間に蓄積された拡張(Extend)経験値がレベルに変換されたのです

そして多くの強敵と戦ったとはいえゲームスタートから半年も経過していないサンラクと、サービス開始時からみっっっちり己を鍛え上げてきたサイガ－１００。二人の間には表示されていないだけで確たる経験値の差が存在します
本来ならば比較にならない「差」がレベル上限を更新していない、というただ一点の理由で二人のステータスを互角としているのです
まぁ京極ちゃんが負けたのは単純にシャンフロというシステムに対する理解の差ですね。レベル差だけで何もかもが決まるなら、ユニークモンスターに勝てるプレイヤーは存在しないはずなのですから

剣狼相対すは雷火の獣　其の十

「――蒼穹よ陰(かげ)れ、暗天に嗤え、轟々たる喝采はなお及ばず、其(そ)は天より下る裁きの鉄槌」

やはり、か。

予想はしていた、レイ氏がやってのけたそれをサイガー１００ができない理由があるのだろうか、と。

恐らくサイガー１００が最も得意としているのだろう本数……五重奏(クインテット)を対処しながら、逆に言えば俺に対処させざるを得ない挙動を制御しながら、サイガー１００の唇が、舌が、喉が言葉を紡ぎ文として、詠唱として成立させる。【逆る電律(スタンピート)】を使用してきた時点でその可能性は六割くらいで考慮していた。

サイガー１００は魔法と剣術を両立させた魔法剣士である、という可能性を。

「詩人は謳う、其は神の威信と、僧侶は説く、其は神よりの天罰と」

「さて………」

対応策は三つ、使われる前に止めるか？　それとも避けるか？　もしくは………ここで使うか。

どれも現実的だ、特に三つ目は難易度こそ高いが明確な弱点を作ってしまうが故に下手をすれば盛大に自爆しかねない。

だから俺は三つ目の選択肢を選ぼう。

正直に言おう、もはや勝利や敗北はどうでもよくなってきた。最終的な結末として勝利しようが、敗北しようが……なんというかどっちでも「まぁそんなものか」と受け入れられる気がする。なら今の俺を突き動かすこの衝動の正体は何か？　俺は既にその名前を知っている。なにせ初めてゲームを始めた時からの長い付き合いで、これからも俺と共にあるであろうモノだから。

「さらにギアをあげるか」

「真実を告げる、其に義は無く、其に邪も無く、其は純粋にして至極なる暴力」

詠唱が止まることはない、現在進行形で減り続けるＭＰをそれを上回る回復で無理やり維持し、あまつさえ魔法のコストさえ稼ぎ出す。サイガー１００はただの対人戦で使うにはあまりに勿体ないはずのリソースを使っている。

であれば、こちらも今この瞬間の「全身全霊」を使い切るのが礼儀であり……浪漫なのだから。

「さぁ、冥輝君に続いてお前も初披露と洒落込もうじゃないか……
…冥王の鏡盾（ディス・パテル）！！」

そうとも、実は俺が所有する武器の中に一つだけ卑怯者ならぬ卑怯物がいたのだ。
そいつは「魔法を反射する」という能力をアピールすることで、実は自分も産廃であるという事実を巧妙に隠していたのだ。

そいつの名は甦機装（リ・レガシーウェポン）：ビィラック「冥王の鏡盾（ディス・パテル）」、「煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）」に続く、ビィラック印の現代に甦った古代武装である。
アトランティクス・レプノルカの素材から作られたそれはギミック武器でありながら生半可な衝撃ではビクともしない耐久力を持ち、魔法すらも弾き返すという至れり尽くせりな性能……確かにそれは事実だ。
だがこいつはある事実を隠していた。

そもそも遺・甦機装共に備える必殺機構【超過機構（イクシードチャージ）】はいくつかの分類に分けられる。
言ってしまえば煌蠍の籠手の超過機構（イクシードチャージ）である「超排撃（リジェクト）」は固有の必殺技と言うよりも「超排撃（リジェクト）タイプの【超過機構（イクシードチャージ）】」と呼ぶのが正しいわけだ。

では被告「冥王の鏡盾」の超過機構（イクシードチャージ）は何に分類されるのか？
答えは簡単、この盾の超過駆動は特定条件の達成で使用者に強力なバフを付与する……

そう、強力なバフを付与するのだ。

それは単体能力がゴミとなるものの合体効果で鞘としての役割はかろうじて果たせていた勇魚兎月「冥輝」とは真逆の、肝心の必殺技がポンコツというなんともまぁ間抜けな裏事情があったのだ。

だが今この瞬間ならば。

使える、冥王の鏡盾が持つ超過機構（イクシードチャージ）を、そして俺が持ちうる最大強化状態でサイガー１００を討つ。

「叫べ！　呵々大笑の鉄槌、大地を叩き万象我が道を塞ぐ敵を打ち砕け！」

半裸にして二刀流、機動力に特化したサンラクはあくまでもシャンフロでの姿。
どう考えても悪用されるゲームシステムがやっぱり悪用された事で今はもう滅びてしまったクソゲーにて、悪逆の限りを尽くした「ＵＩＥ」……、アンダーアイデアエンパイア、通称シモネタニア帝国に抗った反抗軍の切り込み隊長「死鋼の魔術師（デスメタル・マジシャン）」と呼ばれた俺の魔法洞察力を舐めてもらっては困る。

そもそもゲーにおける魔法戦において重要な要素はやはり魔法の名前だ。名前に火の要素が入っていれば炎が飛んでくると分かる、メテオなんて入っていればどんなふうに炎が飛んでくるかまで読み取ることができる。
ゲームによってはオリジナル単語を使うせいで現物を見ないとどうしようもない事もあるが……少なくともシャンフロでは前者の法則で魔法名が決められている。

かつてあったあの世界で、あの下ネタ大魔神みたいに「AVの説明文とタイトル」で魔法を作ったりしない以上、魔法戦はあまりに容易い。見たことも買ったこともないAVについてやたら詳しくなってしまったのは大体あんちくしょうの所為だ。
実に十六回のBANを経てなおあの世界に蘇り続けたラスボスは、表現方法が絶望的にクソであったことを除けば魔法を絡めた戦闘の達人だった。
故にそれに対応できる俺や数人が奴を受け持たなければならず、必然下ネタを浴びせかけられる回数が増えていく、と。

「……嫌なことを思い出した」

まぁいい、サービス終了寸前で奴を歌殺出来た以上、全ては終わった話だ。未成年にも容赦なくNGワードを回避した猥談吹っかけてくるとか人としてどうなんだあいつ。
というか口で喋ってるのに句読点まで発音するとか頭おかしいよ……

「撃ち砕け雷霆！　其は喰らい付く飢えた狂犬！　其は我が意に従い敵を滅ぼす忠実なる猟犬！」

放たれる魔法は雷に類されるもの、火力と速度を両立することが多い雷属性の魔法は二種類のどちらかを引き当てるババ抜きみたいなものだ。
即ちは「前か、上か」。雷という特性上天から雷を落とすのか手元から前へレーザーのように飛ばすのか、そしてそれさえ分かってしまえば、分かった上で動くだけの速さがあれば。

「フルスロットルだ！」

封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）の発動、それに連続する瞬刻視界（モーメントサイト）の起動。
漆黒の雷がひび割れた身体から漏れる火の粉と混じる中、スローモーションの世界で二つの動きが結実に向けて最後の行程に踏み込む。

「【暴虐の雷獣（バイオレンス・サンダー）】！」

「【超過機構（イクシードチャージ）】！」

オーバーフローを引き起こしたモーションを制御し、サイガー１００が突きつけた手の先……天空へと、まるで編笠でも被るかのように冥王の鏡盾を上へと構える。
俺の周囲を囲む従剣は俺に回避をさせないつもりか、残念だが受け止めさせてもらう。
向こうの詠唱の完遂、こちらの機能の始動、天より雷の獣が俺を目掛けて落下してくるのと、

冥王の鏡盾（ディス・パテル）が花開いたのはほぼ同時のタイミングだった。

見せてもらおうか、産廃ではなくなった超過機構（イクシードチャージ）……「吸転換（コンバート）」の力を！

激突と同時に破裂、雷に相応しい大轟音と共に俺の身体は土煙の中

に消えた。

――倒せていない。

直感的にサイガー１００は悟っていた。
従剣劇の使用によって減り続けるＭＰをインベントリ内に入れた大量の回復アイテムで減少量を上回った回復量で放つ手持ちの中では最高火力のフル詠唱【暴虐の雷獣（バイオレンス・サンダー）】。
着弾地点を設定後変更できない、という欠点からサンラクを動かさないことが重要であり、実際のところ浮遊させるのが限界であった
従剣による結界で結果としては魔法の命中に成功したわけだが……

動けなかった、と動かなかった、では天と地ほどの差がある。
そして奴が何か行動した、というだけで警戒に値することは今に至るまで嫌という程理解させられた。

「イクシードチャージ……？　一体何を使った？」

盾という武器からして防御系のスキルだろうか、突進（チャージ）と言うからには押し返す系のスキルだろうか。
これに限っては突進（チャージ）ではなく蓄積（チャージ）であるという事実、そしてサンラクが何をして何が起きたのか……答えは土煙の中から明かされる。
「【超過機構（イクシードチャージ）】、タイプ「吸転換（コンバート）」……普段は「鏡」として魔法を反射するところを「レンズ」としてあえて機構内に取り込む事で吸収した魔法を転換、使用者の全ステータスの上昇及び強化状態（エンチャント）「冥炎」を付与する」

轟、と土煙がかき分けられる。
煙の煙幕から伸びた左腕には蒼い炎の如きオーラが纏わりつく。そして左腕の先、土煙から現れたそれは……
「モンスター化、か……？」
「んなわけあるかい」
それは漆黒の雷を纏い、全身が炎上したあまりにも人間離れした姿をしていた。
「それじゃあここで一発ギャグします」
黄金と群青、二つの水晶剣を持つその男の頭が魚を模したそれに変わり……

「焼き鮭」

「………ふふっ」

「隙ありィ！」

尋常ならざる速度で肉薄した燃える男による炎雷を帯びた蹴りにサイガー１００の身体は吹き飛んだ。

剣狼相対すは雷火の獣　其の十（後書き）

袋叩きにされようがムシャムシャされようが「それもまたクソゲーだよね」と許容する主人公をして「嫌な思い出」と言わしめる奴は「性癖：全部」と言えばそのヤバさが伝わるでしょうか

拙作世界観でのVRシステムの仕組みを逆手に取って声を自在に変え、関節を逆に曲げることすら可能とするサンラクとは別方面のVR限定で活性化する怪人です
ジョゼットが奥ゆかしい淑女に思えるくらい脳内どピンクなのはある意味幸いなのかもしれません、その気になればいくらでも犯罪利用できそうな特技をセクハラに１００％使い切ってますから

エンチャント「冥炎」
全身の皮膚がエネルギー体として燃え上がっている状態、あくまでもエンチャントなので効果が終わったら人体模型じみた姿になったり醒鋭孔食らったジャギみたいに感度三千倍になることもない。
超過機構の全ステータス強化とは別枠でステータス補正付与、魔法攻撃全般への耐性付与、接触対象へのスリップダメージなどなど「特殊状態：古雷」の別バージョンという感じになっています
要約すると今の主人公は「俺に触れると火傷するぜ」ならぬ「俺に触れると火傷し感電した上で状態異常耐性が下がって確率で行動が阻害されるぜ、なお積極的に殴りかかる」という感じです。
なんだこの害悪でしかないはぐれメタルは

見た目的にはサンラク第三形態は火の通常攻刃を１００％ＵＰさせる神の頭を鮭にして帯電してる感じです、モンスターかな？

剣狼相対すは雷火の獣　其の十一

物理的に燃え上がる身体、瞬刻視界のリキャストが終わるまでは単純な動きしかできないがそれでもサイガー１００の操る従剣を振り切るだけの速度はある。
時間経過する毎に半減していくＨＰはそう遠くないうちに俺の体力を１にするだろう。
灼骨砕身で強化無効の枷を外し、古雷による規格外の速度を瞬刻視界で制御、そして「冥王の鏡盾」によるステータスの二重強化。
「先に宣言しておこう、今の俺は一発でも攻撃を受ければ即沈むぜ」
「……であれば、こちらも切り札を全て切らせてもらおうか」
従剣が消える、そして再び現れた時にはそのキャストが変わる。
「最高効率で【従剣劇（ソーヴァント）】と聖剣を両立させる」
従剣六本、指揮剣は聖剣。七重奏（セプテット）を展開したサイガー１００が聖剣を持たぬ左腕を掲げた。
次の瞬間、その腕に食らいつくかの如く後ろに控えていた従剣六本がサイガー１００の腕を切り裂く。
「簡単な話だ、六本の剣を全て「自傷」をトリガーに効果を発揮するもので固めて聖剣の発動条件を満たせばいい……！」
「マッチポンプ逆境じゃねーか！」

「これを使う場面が既に逆境という事だ……ドミネイオン！　イヴィロミス！　ヴァンダルグレイ！　ファンクファング！　グラットブラッド！　ウロボロッサ！　……そして、エクスカリバー！」

くそッ、カッコイイ奥の手を持ってやがる。

六本の従剣がそれぞれの自傷トリガー効果を発動し、それにより条件の体力値を下回った事でエクスカリバーが覚醒する。

確か全ステータスの向上に食いしばり効果だったか、ダメージを受ける側に回れば脆すぎる俺と違って見た目の状態以上にしぶとそうだ。

「さて……」

ここが正念場だ。超過機構による冥王の鏡盾のバフは時間制限がある。吸収した魔法の威力で決定されるそれは先ほどの雷獣落としのような明らかに火力の高そうな魔法でも三分保てば上等だ。

尤も、あまりに威力が高すぎる魔法を受け止めると冥王の鏡盾が破損する可能性もあるのでそこらへんは兼ね合いだが。

「ぶっ飛ばす！」

「来い！」

片や魔剣六振りによる自傷強化、聖剣による逆境覚醒。莫大量のＨＰの八割以上を代償とし、能力同士が重ならないよう綿密に練られた能力がただ一人を強化した剣聖。
片や「呪い」を「呪い」で以って相殺し、体力など1か0かで十分だと言わんばかりの背水仕様。突き詰めたリスクをそれを上回るリターンで塗り潰した炎雷の魔人。

方向性に若干の類似、過程はあまりにも異なる、されど根本の立場は同等。

言うなれば「超背水機動特化双剣士」ｖｓ「逆境調整自傷背水魔法剣聖」という二つのスタイルの性能比べ。
プレイヤーでもここまで至れるというモデルケース同士の激突は、一秒が経過する毎に「これ以上はないだろう」という白熱を更新し続ける。

何も互いに憎み合っている訳ではない。片や今の自分が為し得る全力全開を試すためのサンドバッグとして、片や今の自分が夜の帝王に通用するのかを試すための試金石として。

相手がどんなプレイを経て今に至るかなど気にも留めず、ただ相手に勝利する事で己を定義せんとするシャングリラ・フロンティアというゲームシステムにおける対人戦の最高峰。

七つ劔が罪科の錘を落とさんと陣を作れば飛翔する斬撃がそれを阻み、炎が黒雷を尾として駆け出せば六の劔がそれを阻んで七本目で

迎え撃つ。

激化し加速し白熱する相対、それを眺める者達もまたその光景に目を奪われる。もはやこの相対がそもそも何を発端とするのか、裏で結ばれた約定でどういう流れであったのか、それら全てがこの一瞬だけは忘れ去られ、ただ単純に「どちらが勝つのか」という疑問だけがその解答が弾き出される瞬間を待つ。

その目と水晶に激闘を映しながら。

最早ロールプレイもへったくれもない、反応と誘導と勘をフル稼働させて従剣を振り切り、本体を討たんと駆け抜ける。

一歩気を抜けば転倒からの即死に繋がりかねない、だがそれでも加速する回避（フォーミュラドリフト）を躊躇いなく使用し、虚空を踏む（フリットフロート）足場を跳んで空すらをも足場とする。

それでも尚攻め切れない。物理的に硬い訳でもなく、攻撃が無効化されるわけでもなく、こちらの猛攻を耐え凌いで反撃を試みてくるのだ。

集中力のチキンレースと言うべきか、互いに限界を迎えて集中の糸が断ち切れる瞬間のギリギリまで糸を張り詰める。

片や一撃でも食らえば即死する俺、片や従剣の乱舞を途切れさせた瞬間削り殺されるサイガー１００。
スキルが湯水の如く使用され、互いにリソースを使い潰すかのように一枚一枚が切り札足り得る手札を叩きつけていく。

「くたばれぇ！」

「猪口才な！」

スローモーションの世界で狙いを定めた傑剣（デュクスラム）への憧刃二振りを投擲する。そして間髪入れずに焔将軍の斬首剣を幕末テクニックの一つ「晴れのち斬馬刀」を参考にした投擲で叩き込む。
それに対して従剣の何本かで防御しつつこちらに反撃として飛んできた従剣を超過機構こそ使えないが打撃武器としてなら普通に利用できる煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手で迎撃し、オーバーフローしたモーションで投げ捨てた勇魚兎月を回収しつつ決着の一瞬を探る。
タイムリミットは間近、ここで決めねばガス欠だ。

「合体ゲージは良し……クライマックスだ！」

「受けて立つ！」

これが最後、脳内に散らばったサイガー１００の情報を自分ができる事という釘で組み立てたあまりに杜撰な一夜城の如き作戦。
意図的に温存したもの、今使っても意味がないものを除いた全スキル起動。
つい数時間前のことであるのに随分昔のことのように思えるがやっぱり数時間前に使ったばかりの合体機能を使う。

「互いに直線で向き合った対峙、抜刀の構え……面白い！」

俺がどう攻撃するのかを理解したのか、サイガー１００は聖剣を構えると俺を迎撃する態勢を整える。

「……………」

「……………」

静寂。

一歩読み違えば互いに致命傷になる可能性が常につきまとっていたスタミナ管理。

この一瞬に限り、互いのスタミナ回復の為の休止符が一致し、まるで何もかもが終わったのような、はたまたこの瞬間こそが本当の試合開始であると言わんばかりの無言が続く。

「────無謬なる世界に我が意を告げる」

「………っ！」

始動。

俺の舌が紡ぐ言葉の羅列に、サイガー１００の目が見開かれる。まさかここにきて詠唱という選択肢を選ぶとは思わなかったと見える……まぁ魔法とか一個も覚えてないがね。

「無の領域、幾億の光孕みてなお深き闇、天に輝くアストログラフ」

「くっ……させん！」

従剣が舞う、これまでの積み重ねが「俺に何かをさせる」ということ自体に警戒を抱かせる。それも謎の呪文を唱え始めているんだ、止めようともするだろうさ。まぁ全部適当だけど。

「紅蓮のぉ……極光！　山河砂の……流転ン！」

回避回避、そして前進。メリットとデメリットは本質を隠す隠れ蓑になり得る。明らかに詠唱を止めた方が楽であるべき場面で敢行する、という事実そのものが架空の刃を作り出す。

「此岸より花を！深淵より空を！　古き叙事詩より、勇気は灯火に導かれる！」

「くっ……ならば！」

このまま座して待つのは悪手と悟ったか、剣を持たぬ手をこちらへ向けて……

「【迸る電律（スタンピート）】！！」

俺はこの対戦中最大の笑みを浮かべ、サイガー１００が放った対人

特化の怯み魔法に直撃した。

「なっ」

人はどうして転んだ時に驚くと思う？

そこで転ぶと思わなかったからさ。

「天機！　歌え世界、踊れ世界！　無謬の世界に抗いて、なお笑い進め！」

適当ブッコきながら、反転して背中で受け止めた姿勢から倒れるようにもう一度反転、再び俺とサイガー１００が向き合った瞬間に走りだす。

なぜ俺が攻撃を受けて沈まないのか、詠唱の完成によって何が起きるのか、合体した二つの剣が何をもたらすのか、そもそも何が狙いなのか。対人も対ＡＩも根本は一緒さ、大量の選択肢を叩きつけて動きを止めたところをぶっ飛ばす！　故に、「現地調達」した最後のピースを今この瞬間開示する！

「朦朧と〝す耽美（スタンビ）、糸（イト）〟はなお紡がれ――――！」

「がっ！？」

バヂン、と電光が迸る。

怯みながらもサイガー１００の目は驚愕一色に染まり、何故俺が【迸る電律（スタンビート）】を詠唱中に無詠唱で唱えたのか、全く理解できていない様子で……勝機。

ここで決める！

剣狼相対すは雷火の獣　其の十一（後書き）

自信を対象として魔法を取り込むならこういう使い方できるよねっていう
自分で書いてて「あれこれ悪用できるんじゃゃ……」ってなったので多分このバトルの後に運営が変更は一日一回とかのサイレント修正します

・偽装魔法
「スペル・クリエイション・オンライン」で用いられたテクニックの一つ。
魔法詠唱の中に別の魔法名を入れることで詠唱途中で魔法を叩き込むことを可能としている。さらに文字を僅かに変えることで「長文詠唱の魔法一つ」を「短文詠唱の魔法二つ」に変える応用技もある。
これらを最大限に利用したのが「禁呪」サービス終了直前に行われた「製品版死鋼」と「フルボイス官能小説」の激突である。

剣狼相対すは雷火の獣　其の十二（前書き）

若干修正

厨二文章の即興構築、既存の魔法名を読みが同じ別単語に置換、偽装魔法の詠唱にそれを混ぜることで不意打ちの一撃とする。
スペクリ……今はもうない「禁呪」じゃ割と重要なテクニックだった。頭の中で「雑談中に不意打ちで魔法ぶっ放す感じ」を心がけていれば割と簡単だしな。

「なるほどなぁ！　確かにこいつは便利だなぁオイ！」

これ対人じゃ必須クラスじゃ……いや、魔法対策されまくったら逆にこっちが隙を晒すのか。だがまぁバグと鋏は使いよう、とも言うし活用できればご覧の成果というものだ。

「悪いな！　俺自身は魔法習得数ゼロの完全物理なもんでなぁあ！！」

サイガー１００の硬直が解けるよりも先に、致命的な距離までの肉薄を達成する。
ここで抜刀……は選ばない。サイガー１００のジョブが「勇者」である以上、あの聖剣の食いしばり効果が実際どの程度の確率なのかが不明だ。
これが「稀に」レベルだったら遠慮なく大技を使うが、「稀に（実質五割）」だったりする場合もなきにしもあらずであるため、やるならば徹底的に削り殺す。

「まずは先駆け二連撃ィ！」

壊刀乱魔、戦極武頼、剣舞【紡刃】起動。武器の火力を上げた上で一本の剣として【蒼耀月】を下から上へと振り上げる。

この瞬間、ダーティ・ソードの効果により怯み状態のサイガー１００に対して倍率を増した一撃が叩き込まれ……

「おおおおりゃあっ！！」

「くぅぅっ！」

致命剣術【半月断ち】、文字通り返す刀で傷口をなぞる半月の斬撃。聖剣が輝き、サイガー１００の身体が黄金のエフェクトに包まれ……食いしばりが発動したか、さぁここからは正真正銘のチキンレースだ。つまづくだけで死にかねない極限状況を楽しもうじゃないか！

「乱数に祈りな！」

「まだだ！！」

フォーミュラドリフト起動、ドリフトというよりやはりスリップなのではと言いたくなる大きな円を描いてサイガー１００の背後へと回り込む。

オーバーフロー状態の機動に追いつけないのか、俺の通った後の地面を従剣が貫いていく。

「そこだっ！！」

「おっ、ととと……まだまだ俺のターンだぜ！」

俺が回り込もうとした地点を読んで放たれる斬撃を回避、だがこの距離を、逃せば二度と手元に手繰ることのできない勝機を掴む手を

緩めるつもりはない。

「【迸る電律（スタンビート）】！」

「くっ……カラクリはそのマントか！」

「ご明察ぅ！」

スキルを回す、命を削って得た恩恵を湯水の如く使い切りながらなお走る。

元より封雷の撃鉄・災のデメリットで体力なんて無いに等しいのだ、回復したところで速攻半減し続けるのだから「愚者（バカ）」とのシンクロ率はさらに高まったと言っていいだろう。誰が愚者だこの野郎。

当たったなら儲けもの、当たらなくても向こうの対処を引き出せた。

「一撃！　二撃！　三撃！」

一撃目は避けられた、二撃目は従剣が盾になった、三撃目は炎雷と共にサイガー１００の右肩を穿ち……されど黄金のエフェクトが勇者を死なせはしないとでも言いたげに光り輝く。先ほどとは異なるエフェクトであることが若干気になったが疑念は過去に置いていく。

「しつけぇ……！」

「不屈は……勇者の、特権だろう……っ！？」

もはや技量もへったくれもないただ俺を己から引き離す為だけの従剣乱舞。だが俺は立ち位置を変え、時にサイガー１００自身を盾とすることで距離を離さない。

「チッ……」

命中（クリーンヒット）、聖剣が光る。命中（カスダメ）、聖剣が光る。命中（クリーンヒット）、やっぱり聖剣が光る。

だぁぁぁあ！　どんだけ発動してんだクソ乱数にも程があるだろ！

　いやこれ向こうが運がいいのか？　それとも俺の乱数運がゴミなのか？

「うるせぇっ！　死ぬまで殴れば死ぬんだよ！」

己を叱咤し、最早いつ途切れてもおかしくはない集中力をかき集める。ガス欠したって突っ走れ、燃えろカフェイン業火の如く！

カチリ、と俺の頭の中でいくつもの時計の針が同じ数字を指す。遠く離れた崖の果てに蜘蛛の糸のように細い足場がつながった確信。

「ここだっ！！！」

サイガー１００はそれを見た。
明らかに接触によって何らかのデメリットを生じさせるであろう火と雷の魔人、その身が地面に突き立てた濃紺に黄金の芯を持つ大剣を足場に宙に飛翔した様を。

最早それに対しての感情を発露する時間すらもが惜しい。サイガー１００の脳内では泡沫の如く生じる思考が消えゆく前に、電脳なれど明確な五感が感じ取ったものを組み立てていく。

（武器、捨て……上、座標有利、従剣、間に合わない……）

導き出した結論。
従剣を呼び戻し陣を組むにはあまりに遅い。であれば自ら六本の従剣を消し、聖剣ただ一本のみに己の全てを賭ける。
例え上から攻撃を仕掛けられようと、この一撃だけは決して外さないという不退転と決死の複合。

「【従剣劇（ソーヴァント）・独奏（ソロ）！！】」

それは剣聖のジョブを獲得すると同時に会得する奥義。使用期間が長い程に威力を上げるその名に違わぬ研鑽の末に到りし飛翔する一刀。
下から上へ、鋒が描く斬撃の軌跡をなぞって直上に燃える炎雷を穿つ。

「至高の一閃（プライマルスラッシュ）】！！」

黄金の斬撃は昇竜の如く、剣聖の意思に応えるは言葉ではなくただ一振り。

理論立てた軌道ではなく、直感に拠る黄金の斬撃はサンラクへと命
中し……

すり抜けた。

「なっ……」

「湖面の月に目が眩んだってか？」

トン、と着地の音。
極限の一瞬であったが故に、宙を舞うサンラクが微動だにしない違
和感に気づけない。
致命秘奥【ウツロウミカガミ】、対エネミーとしてのヘイトデコイ
の役割は果たせずとも、敵の目を欺く囮であればご覧の通り。
遮那王憑きによる跳躍の加速、フリットフロートによる上から下へ
天地逆転の跳躍……そして「愚者」であるが故のリキャスト短縮で
再使用を可能としたフォーミュラドリフトによる「蒼耀月」への帰
還。

「大詰めだ」

従剣は無く、剣は上を目指して前に及ばず。

蒼耀に包まれた月、聖剣の輝きとはまた異なる月光の黄金の輝きが疾風を伴い閃光を放つ。
「致命の月蝕（エクリプス・ヴォーパル）」と晴天流奥義一の太刀「疾風（はやかぜ）」、無尽の蛇をも斬った渾身の抜刀がサイガー１００を斬り裂き、その脇を通り抜けて二人が交差する。

だが、それでも聖剣は耐え切った。

実に五度の食いしばり、本当に偶然の……まさしく奇跡と言うべき発動。
それはサイガー１００が幸運なのか、それともサンラクが不運なのかはシステムのみが知る。
「疾風」は渾身の一刀、故にこそ放てば暫くは動けない。であれば勇者はその身の軌跡に感謝し勝利を得ることができるのか？　いいや、それは出来ない。

「…………あ」

本来は勝利を得たはずの一撃。ＨＰを削りきれずとも、サイガー１００自身に刻まれた「敗北の確信」が剣聖とて張り詰め続けていた緊張、集中の糸を断ち切っていた。

「……天気予報だ」

剣を振り抜いた姿勢のまま動けぬサンラクがぽつりと呟く。
「晴れのち武器雨、注意しな」
クソゲーハンターは乱数に期待はすれど信頼はしない。１％でも可能性があるならば、何度だって挑戦する。故にこそ仕込んだ最後の追撃。
「蒼耀月」を手放した一瞬、システムが手放した武器をオブジェクトとして処理した事で一時的に無装備状態となる性質を利用した武装の追加展開。
ウツロウミカガミは二重の囮。本命は疾風、そして後詰に武器の雨。
観客席から見ていた者達はそれを見ていた。跳躍の瞬間、展開した武器を真上に投げるサンラクの姿を。そして物理エンジンに従い真下（サイガ－100）へと落ちる武器を。

「これ、は…………！？」
「いい加減死んでくれよな勇者様」
サイガ－100の目の前を通って地面に突き立った傑剣への憧刃（デュクスラム）、見当違いの場所に落ちた煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）、そして剣聖であり勇者たるその身の肩に蜂の双剣が突き刺さり……
六度目の奇跡は起きなかった。

剣狼相対すは雷火の獣　其の十二（後書き）

帝蜂双剣「よっしゃトドメ刺したぁぁぁあ！！」

Q.要するに何したんだこの可燃性&帯電性はぐれメタル
A.要約すると
・地面に突き刺した「蒼耀月」を足場に遮那王憑きの補正付きで跳躍
・体を捻って体勢を変えながら武器を展開して真上に投擲
・サイガー１００の真上に来た時点でウツロウミカガミ起動、自身が上にいると思わせる兼さらに上に投げた武器の隠蔽
・頭が下を向くよう体勢を変えた状態でフリットフロート、上下反転状態で跳躍して宙返りしながら着地
・着地と同時にフォーミュラドリフトでその場を離脱、完全にサイガー１００の視界から外れながら「蒼耀月」を刺した場所に戻って抜刀体勢
・サイガー１００が大技を使った直後の硬直を狙って「致命の月蝕」&「疾風」コンボ
・倒しきれなかったので上に投げた武器が雨のように降り注いでチェックメイト

ちなみに聖剣の食いしばり発動率は２５％くらい、四分の一の確率で発動するきあいのハチマキと考えるとぶっ壊れ具合がわかると思います。まぁゴミが食いしばったところでリュカオーンからすれば大差無いのがモモちゃんの悲しみ

ちなみにリュカオーン（影）を倒す理想編成を作るとしたらＳＦ－Ｚｏｏのタンク組に協力要請すれば割とイケます、単体としてのタンク最強はジョゼットですが複数人で役割分担して前衛を支え続けるという意味ではＳＦ－Ｚｏｏのタンク達は最高クラスです
シャンフロでは中途半端に極振りしてもただのゴミですが突き詰めた上でちゃんと考えて極振りすればエセ魔法少女の家内とかＳＦ－Ｚｏｏタンク組のようにある程度の役割を持つことができます、要するにレベル１から７０くらいまでの産廃期間を耐え切った猛者だけがレベル７１からの極振りライフを楽しめるのです

その身砕けて消え去る剣聖。まるで加速しきった車が長い距離を経て減速するように張り詰めた上でガソリン浸して着火した集中の糸をゆっくりと《ほぐ》していく。

「…………ほふぅー」

分かったことがある、とりあえず封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）を使っての対人戦は尋常ではなく疲れるって事だ。
なんだろうな、ベルトコンベアの上を走っていた後動かない床の上に踏み込んだような、自分だけが他よりも重く押し付けられているかのようなあのなんとも言えない重圧感というかなんというか。

戦闘終了と同時に炎が剥がれ、トントンと拳で胸を叩いて雷を散らす。体を蝕んでいた亀裂も塞がり、一般的な半裸に戻った俺はコキコキと首を鳴らしながら旅狼陣営の観客席側へと歩み寄り……

「約束通り半年は煽るから覚悟しとけよ負け犬共」

「いや流石にあそこまで動かれちゃこっちも文句言えないかなぁ……」

「なんかサンラクだけ倍速処理されてるみたいで段々笑えてきたよね」

「あれ結構つらいんだからな？　具体的に言うと集中切れた瞬間顔面から壁に激突するか顔面バウンドｏｒスライディングしかねない

し……おいなんだその「再現どうぞ」みたいな顔は」

やらないよ？　ていうかすげー疲れたんでログアウトして寝たい、もしくは心を無にして三時間くらい日光浴したい。

「まぁそれはそれとしてお疲れのようだしこういう事を言うのは非常に申し訳ないんだけどさ」

「うん？」

「サンラク君、この後にいろいろスケジュールが詰まってるって覚えてる？」

……………。

「戦術的撤退！」

「戦略的確保ーっ！！」

「ちょっ、どこから湧いて……グワーッ！？」

一体どこに潜んでいたのか、突然迫ってきた見知らぬプレイヤーに取り押さえられる俺。くっ、脱走した動物を捕獲するみたいに人をお前……っ！

「ゴメンねサンラク君、君この手のばっくれ前科多すぎだからさ……どうしてもって「ライブラリ」と「聖盾輝士団」の御二方がね……」

よよよ、とわざとらしい泣き真似をするペンシルゴンを殴らんとビ

チビチもがくが流石に六人くらいに押し付けられては脱出は不可能だ。

「ちなみに本音を言うと？」

「勝ったからってドヤ顔かまされたらムカつくから私から持ちかけました」

「うおおぁの野郎を殴ったとしても正義は俺だろこれーっ！！」

ビチビチと暴れていると「魚市場……」と抑えている誰かが呟いた。クソがっ！　誰が水揚げされたばかりの鮮魚だコラァ！　つーかそこの生まれながらの(ナチュラル・ボーン・)魔王(イヴィル)！　テメー今「あ、この状況人質解放すると約束しといて肝心な時に反故にする系の悪役っぽい」とか思ってんだろ！

「だってサンラク君、適当ブッこいてログアウトする気満々だったでしょ？」

「そんな訳ないじゃないか」

「人の目をまっすぐ見れば信じてもらえると思ったら大間違いだよ」

性善説全否定の素晴らしいお言葉だ、覚えとけよ総受けヤロー。まぁ事実適当ブッこいてログアウトする気満々だったけどさ……

「……分かった分かった、もう逃げないからとりあえず取り押さえるのは勘弁してくれ」

ここで逃げたら本格的に指名手配されそうなので流石に控えてやる

か。
くそう、クランの威信をかけて廃人と渡り合った奴に対する扱いじゃないだろこれ……
「ま、「黒狼」とのアレコレは私がやるからさ」
むしろそっちが本番であると言わんばかりのペンシルゴンにため息で応じつつ、俺はちらりとオイカッツォへと視線を向ける。
「………（くいっ）」
「………（ふるふる、すっ）」
「成る程」
「えっ、何が成る程なの？」
「翻訳すると「煽る？」「逆ギレしそうだからまだやめとこう」「成る程」ってどころじゃない？　リベ君メンタルがおが屑だからすぐ燃えそうだし」
「嫌な以心伝心だ……」
うん、常識人（マトモ）のフリしてるそこの京ティメットさんよう。
「何故俺をガン見して刀をチャキチャキ言わせてるのか言い分を聞こうか？」
天誅か？　お？　天誅をお望みか？　疲労しているとはいえ俺の天誅に陰りはないぞ？

「んー、なんというか結構ドロッとした感情を押し込めた結果とりあえず君と対人戦やりたいなーって」

「ハハハ、セクハラに頼らず勝てるようになってから言えよ」

ピキッ、と何かにヒビが入るような音が聞こえた気がする。おかしいな、灼骨砕身はもう使ってないんだけどなぁ？？？

「ヘイ、オイカッツォ。なんでもドヤ顔で参戦した割に普通にボコられたＰＫｅｒがいるらしいぜ？」

「なんだってサンラク、それは本当かい？　ピーナッツヌガーを塗りたくっても笑えないジョークじゃないか」

「くぅっ………！」

３タテしたオイカッツォでさえ下手を踏めば煽り倒される危険性があると言うのに、普通に負けた京ティメットがターゲッティングされるのは自明の理なんだよなぁ……

「ていうかサンラク、色々名状しがたい姿になってたけどあれどういう事なの？」

「んー？　まぁとりあえず雷纏ってたのはこいつの効果で、身体にヒビ入ってたのはこいつの効果で、全身炎はこれの効果だな」

「ふむ、続けて？」

当たり前のような顔で会話に混ざってきたエセ魔法少女に非常に曖

味な感情を込めた顔を向けるが無視された、面の皮古生代まで積み重なってんじゃねーのか。
とはいえなんというか「え？　この流れなら説明するよね？」みたいな雰囲気がこの場にいるほぼ全員から漂っているせいで日本人的空気圧に屈さざるを得ない。

「こいつは、まぁ……うん、戦ってる最中に言った通り……その「無尽のゴルドゥニーネ」に喧嘩売って……まぁ色々とやって入手しました、うん」

「この続きの情報が欲しかったら旅狼経理担当アーサー・ペンシルゴンにご連絡宜しくねー」

「こっちは……ははは、んー……「宝石匠」ってジョブの奴にお願いして作った感じで？　うん多分ユニークではない、ユニークでは……ないけどガチャ的な？」

「あーうん、これに関しても続きは私に連絡入れてからで宜しく」

「これ？　あー……言わなきゃダメ？　あ、はい。まぁなんというか甦機装（リ・レガシーウェポン）って言うんだけど、遺機装（レガシーウェポン）の新規建造版と言うか「古匠」と関係してくると言うか」

「ちょっと待ってサンラク君一回ちょっと情報共有させてもらえる？」

再び拘束される俺、真顔で詰め寄るペンシルゴン、チャキチャキ刀を鳴らし続ける京ティメット、こちらにユニークいないいいなオーラを向けるオイカッツォ……くそっ、誰か味方は！　味方はいないのか！？

「あの、すいません……」

レイ氏ィ！！（喜びの眼差し）

死んだ魚眼を輝かせながら救世主を見つめると、そこにはどこか申し訳なさげに肩を縮こませるレイ氏と、どこか晴れやかな様子のサイガー１００、そして「納得してないけどルール的な正しさは向こうにあるわけで自分達が主導権を握れない事に対して喚き散らしたいけどそれはそれでプライドが邪魔するので精一杯「自分は大人だから結果を受け入れますよ」的なオーラ出すけど傍目から見たら普通に泣く寸前の子供だよね」という様子のリベリ……ふふ、もう覚えたんだよなぁ……リベリウスが立っていた。

「まぁまずは敗北者として勝利を讃えさせてもらおう」

「讃える気が絶無な顔した奴がいるけど？」

「まぁ若さ故の反骨心という奴だ、見逃してやってくれ」

リベリオスをボコったオイカッツォがとてもいい顔で握手（煽り）をしに行ったのでそこんところは奴に任せておこう。

「いい試合だった、リュカオーンを打倒した実力に偽りはなかったと確信したとも」

「あぁうん、こちらこそグッドゲームと言わせてくれ」

バカにしてる訳じゃないが、サンドバッグにしたって全力を出すにはそれなりの質が必要になる。その点で言えばサイガー１００は百

点満点と言っていいだろう。

「それに……フフ、ウチの愚妹も面白い殿方と知り合ったものだ」

「ぼふっ！？」

サイガー１００の背後でレイ氏が内側から爆ぜるように震えたが、レイ氏は挙動がしょっちゅうバグるので気にしないことにした。
それよりも背後でプルプル震えるリベリアスをニマニマと見つめるオイカッツォが何をしたのか非常に気になるところだ。

「さて……ここからはクラン「黒狼」としての言葉と受け取ってくれて構わない」

ごほん、と咳払いをして喉を整えたサイガー１００は、この相対の原因となった案件を至極あっさりと告げる。

「我々クラン「黒狼」改めクラン「黒剣」はクラン「旅狼」の提示した連盟への参加を希望する」

かつて剣を咥えた狼のエンブレムを掲げていたクラン。だが今そのエンブレムは、狼と剣へ別れんとしていた。

剣は己の意思で立つ（後書き）

昨日はコナンコラボやりつつ水晶群蠍の新種考えながら気持ち悪い笑い声出したり新大陸のモンスター考えて気持ち悪い笑い声出したりしてました（本編そっちのけ）

エピローグまでに詰め込みたい描写があるのでもう数話続きます

痴女相対するは聖なる乙女（前書き）

【悲報】インベントリアの穴あき魔力運用理論の完全版、データが消える【内容覚えてねぇよ】

カーソルの位置がバグって消し間違えたとかうっそだろお前……内容自体は覚えてるけど文章は……申し訳ない……申し訳ない……

ガタガタゴットン、と馬車が揺れる。気分はさながら護送される囚人、死んだ鮭の目にも涙がちょちょぎれそうだ。
「……あのさ、「興が乗ったから」を理由にガチで拘束して護送するのってなんか違くない？」
「あはは、流石に聖女ちゃんのトコに引きずって出したりはしないから大丈夫」
この後の事じゃなくて現状を嘆いてんだよ。

闘技場で水揚げ（確保）された俺は、念入りに中身（情報）を吐き出させられた上で聖盾輝士団（聖女ちゃん親衛隊）が手配した馬車で運ばれているのだった。
とはいえ「致命兎叙事詩」……即ち最後のユニークモンスター「不滅のヴァイスアッシュ」については話していないし、古匠を超える「神匠」ジョブの存在もまだ手札として温存している。ククク、未だ我が手のひらで踊るが良いぞ……でもそのうちバレそう。
「それはそれとして寝たいんだけど……」

「流石にいつまでもこっちにいられるほどリアルで暇してないからねー、注射と一緒でちゃっちゃと済ませちゃいましょ、ね？」

「むむむ」

慈愛の聖女イリステラ、かつては彼女に会う事を目標としていたが、刻傷に「呪い」がアップデートされた事でその必要性はなくなってしまった。
つまり噂の聖女ちゃんと会う理由が無い以上俺としては今すぐバックれたいのだが何の因果か、なんと向こうが俺を名指しで呼んでいるのだとか。

「てか世捨て人プレイに近いのになんでＮＰＣが俺のこと知ってるんだよ……」

「あれ、知らないの？　君、プレイヤー経由で結構有名人なんだよ？」

「は？」

生きている……とは言わないがそれでもこちらと会話を成立させるほどのＡＩを持つシャンフロＮＰＣ、プレイヤー達が「サンラク」について噂をすれば当然ＮＰＣ達にもその話が聞こえるわけで。

「ヴォーパルバニーを連れた彷徨う異貌の戦士、運命神が何たらかんたらってのも聞いたことあるけど……で、それが聖女ちゃんにも伝わったってわけ」

とりあえずエムルは後で頬を引っ張る、そう固く決意しつつもちょっとかっこいいなと思ってしまったり。

「にしても神代の時代の武器かぁ……ね、あの盾って素材何使ってんの？　魔法吸収して自身にバフとかタンクとしては注目せざるを得ないっていうかさ」

「海の底まで潜らなきゃ手に入らないから無理だと思うぞ、それに吸収からバフの流れは「急転換（コンバート）」は冥王の鏡盾（ディス・パテル）だけのオンリー技じゃなくて系統的機能だし」

何故か驚いたように目を見開いて俺を見る聖盾輝士団々長ことジョゼット、何かおかしい事を言っただろうか？

「あー……これビジネスライクよりフレンドリーの方が情報出してくれるのね」

「なんのこっちゃ？」

「んーん、何でもないよ「ライブラリ」のビジネス方式がここで裏目に出るとはなー、って思っただけ」

そんなことよりも、とライブラリが聞けば目を剥きそうな流し方でジョゼットはジロリと俺の全身を眺める。

「別に個人的趣味嗜好がというわけではないんだけど聖女ちゃんって一応聖域的な清らかさがあるわけでそんな彼女に半裸の男を会わせるわけにはいかないというかロールプレイ的に色々アレなので」

「お、おう」

「出来れば性別変更してもらえるかしら？」

「いや、一応服を着ることは出来るけ」

「そういうのはいいから」

どういうことなの……

とはいえ半裸の野郎よりかはマシであろう、という判断も分からなくもないので聖杯使用。

「……ふぅ、これでいい？」

「………」

「あの、もしもし？」

じっと俺の姿を……何というか舐めるように見つめるジョゼットへ恐る恐る話しかける。

「アバターの女体化だけじゃなくて出力からして女性としてリビルドするのね……クターニッドの報酬だっけ、周回(ヘビロテ)できないかしら……あっ、うん大丈夫オッケーオッケー、とってもオッケー」

「……？　ならいいけど……あぁ、どうせなら頭装備外した方がいい？　不審者度合いも減るだろうし……」

「うびょぽ」

何だその声、人の喉から出ていい音じゃないぞ。

「クリクリおめめなコケティッシュ美少女でトランジスタグラマー

痴女とか最強じゃないの……は？　エロスの塊？　ＴＳ系も捨てたもんじゃないわ……」

あまりに小声かつ早口過ぎてほとんど聞き取れなかったのだが、なんというかこの人カテゴリ的にはマトモじゃない側なんじゃという疑惑がふつふつと湧いてきた。

「もうずっとその姿のままでいるつもりはない？」

「いや、これ死んだら解除されるし……」

「任せなさい、この世の全てから守ってあげる」

それ言う相手間違えてない？

聞けばフィフティシア内に聖女ちゃんはいるらしく、じゃあなんで馬車に乗ったんだと問うたところ「仮にも騎士団が徒歩ってのもね」と言うことらしい。

まぁロールプレイ重視であるならこういうところで手を抜かないのは割と好感が持てる。

「馬車から降りたら私達はロールプレイに入るからそこら辺よろし

くね？」

にへり、とそう笑いながら俺へと告げたジョゼットが馬車を降りた瞬間、空気が凍結したかのような錯覚を覚える。

「ふぅ…………………では来てもらおうかサンラク殿、この先にて聖女様がお待ちだ」

先程までのフランクな気配はどこへやら、我こそが聖女を守護する第一の盾であると言わんばかりの威風堂々たる女騎士がそこにはいた。

見ればば他のプレイヤー達もNPCと言われたなら信じてしまいそうなほど堂に入った騎士ロールプレイで規則正しく整列する。

「おぉう……それでは失礼しまして」

破落戸通りとは比べ物にならない、フィフティシアのライトサイド側に建つ建物の中では最も金がかかっていそうな屋敷へと入り、俺はジョゼット達聖盾輝士団に連れられて屋敷の奥、ボスか偉い奴のどちらかがいるとしか思えない一番奥の部屋の前へと案内される。

「イリステラ様、件の開拓者を連れてまいりました」

「――――入ってください」

鈴を転がしたかのような声が入室を促す。一瞬だけプレイヤーとしての顔を見せたジョゼットが「くれぐれも無礼はしないでね」と小声で俺に告げたあと、再び団長ジョゼットとしての顔に戻って扉を開く。

「貴方がサンラク……聞いた話では男性と聞いていたのですが……？」

恐らく貴人用の部屋であろうその場所に、その人物はいた。
透き通るような銀髪を後ろで束ね、クレリック系ではあるが更に彼女と言う存在を引き立てるような衣装。
そして何よりもその吸い込まれそうな目だ。夜明けの直前、太陽が昇る寸前の夜空と青空の境界を思わせるその目は見ているだけで魂か何かが吸い込まれてしまいそうだ。

成る程これは尋常なモデリングではない、言い方は悪いがこれを相手に三次元的存在で勝てる奴は少ないだろう。
ＮＰＣの親衛隊が結成されるわけだ、俺はちらりとロールプレイを続けるジョゼットを見遣りつつも下手な態度を取るとＰＫされかねないので対ヴァッシュロールプレイを貴族版に改変して対応する。

「お初にお目にかかります聖女イリステラ、私の名はサンラク……木っ端の如き開拓し」

次の瞬間、馬車を出てからここに到達するまでに三分経過した事で俺の衣服が弾け飛んだ。

「………」

「………」

「………お気になさらず、持病です」

いや、うん。入る前に別装備に着替えるつもりだったんだけどどうっかり忘れたと言うか……俺を見るジョゼットの目がなんか怖かった

ので服着たはいいけどやっぱりリュカオーンは許さねえ。
「初めまして、私はイリステラ……光栄な事に皆様から聖女と、頼られる者です」
凄い、凄いぞ聖女ちゃん。ジョゼットすら笑うのを堪える光景を直視して聖女ムーブが崩れていない。
先制攻撃で強さを見せつけられた俺はこの相対はヴァイスアッシュとの謁見に等しいものである、と確信する。これはアレだな……俗に言う「メインキャラ」って奴だな？
「七つの最強種に打ち勝った者……一度お会いしたい、と言う私のわがままに付き合ってくれてありがとうジョゼット」
「……それが貴女のお望みであるならば我ら一同、必ず叶えましょう」
さて、それだけなら適当に談笑するだけでいいが……
「この度貴方をお呼びしたのは私のわがままもありますが……一つ、お願いがあるのです。他でもない、確たる強さを噂される貴方に」
『クエスト「聖女の刃剣（ソード・オブ・セイント）」を受注しますか？はい　いいえ』

あれ、これもしかして俺的にシャンフロ初クエスト？

クエスト「聖女の剣」
ユニークシナリオではなくクエストではあるが、特殊な方式として「クエストの内容がその都度変わる」というものである。
共通して「武力的解決がクリア条件」であり、普段は聖盾輝士団が実質独占してクリアしているクエスト。
報酬は一般的なクエストと変わりないがクリアの成否で聖女ちゃんの好感度が変わるため特定のプレイヤーにとってはユニークシナリオに匹敵する重要クエストと言える。

ちなみに好感度一位はジョゼット、ソロでレアエネミー討伐して頭をヨシヨシしてもらった。内なる獣を押さえつけるのに大層苦心したとかしないとか

「……「若き芽よ　西へ東へ　　研ぎ鑽(き)りて　枯葉踏み越え　咲かせ大輪」、か」

表面だけを読み解けば、これから剣の道を歩む者達への剣聖からの激励の言葉。だが、京極にとっては祖父から孫娘へと送られた想いに他ならない。

「……「富嶽スタイルは自分の動きからミスを減らす動き、故に相手の人間性を見ていない」、か」

電脳の世界で出会った、祖父ならざれど祖父の剣を再現して見せた者が教えてくれたその「剣」の本質。

きっと、祖父が「自分のようにはなるな」と言った理由はそれだったのだと、今になって京極は気づいた。

きっとそれは、京極が自力で気づくべきだった真実。きっとそれは京極が祖父の剣をなぞり切った果てに気づくかどうかであっただろう真実。

だからこそ、祖父が遺したゲームの……真なるボスとして己を待つ祖父の写し身にはまだ挑めない。

祖父が晩年に悟った絶望を、孫娘である己は自分自身の「剣」で超えて初めて今は亡き祖父への孝行、と京極はそう結論づけた。

「名前は……まぁ、京極(アルティメット)でいいか」

知り合いから高確率で「いやそうは読まないだろう」と言われる名前ではあるが、京極は最高にハイカラなネーミングであると確信している。

――お祖父様も褒めてくれたしね

アバターを作成し、表記だけなら本名そのままのデータを作った京極は件のプレイヤー……サンラクが「そんなに切った張ったのＰＫがしたいなら是非オススメしたいゲームがあるんですけどねぇえ？」と非常に胡散臭い笑顔で勧めてきたゲーム……「辻斬り・狂騒曲：オンライン」の世界へと降り立つ事になったのだ。

「つまり、二陣営に分かれての対戦ゲームって感じなのかな？」

ある程度調べた感想としてはＰＫをそもそものコンセプトとして作られたゲーム、と言ったところか。

成る程確かに自分向けのゲームと言える。シャンフロと比べてしまっては幾分か劣る操作性ではあるものの、自分の剣を振るうに弊害が出るほどではない。

今はまだ、だがいつか必ず超えると誓った祖父の写し身に挑む前の修行の場としては中々に良い場所である。

だが京極は知らなかった。

サンラクというプレイヤーが「クソゲーハンター」と揶揄される悪

食ゲーマーであることを。
公式サイトも攻略サイトも、示し合わせたかのように「プレイヤー達は和気藹々の仲良しです！」と言わんばかりの文章やスクリーンショットを並べていることを。

そして何よりも、「幕末」……幕府が末期状態と揶揄されるそのゲームが、そんな甘いものではないという事実を――！

「うーん、とりあえずチュートリアルから始め」
「ウェルカム天誅ァーッ！！」
「え？　あ――」
すぽん、と肩口から腰にかけてを袈裟斬り。ゲームを始めたばかりの浪人（初期装備）である京極が称号獲得の為にリスポン狩りを行う中級者の一撃を耐えられるはずもなく。
「許せ新入り、だがこれが幕末なのだ……」
「余韻天誅っ！」
「うぎょべ」
己を殺したプレイヤーが、背後から忍び寄った別のプレイヤーの兜割りによって脳天をカチ割られたのを最期に京極の視界は途切れ……

「リスポン狩りとか、やってくれるじゃな……」

「若干経験値足りないから埋め合わせ天誅！」

「ちょっ」

シュッ、と喉を切り裂かれ死亡。

「よしレベルアップ、お先ー」

「どうする？　天誅（殺）る？」

「囲んでボコれば行けるべ、数集めろ」

「よし時間を稼ぐ……肉盾式はやめろよ？　うおおお天誅ぅぅぅ！！」

お先に失礼と告げて去らんとしたプレイヤーを囲んで襲いかかるプレイヤー達を眺めつつ視界が途切れ……

「ああそういうゲームなわけね！　くっ、上等じゃない……へ？」

ドスッと、何故か空から落ちてきた刀が胸に突き刺さり、貫通した刃が地面に刺さったことで串刺しにされ死亡。

何故空から、そんな疑問に支配される京極の視線の先で恐慌状態に陥ったプレイヤー達が悲鳴を上げる。

「ちょっ、これ「刀雨」の……ぐぇえ！」

「そう言えば昨日「刀雨」と「轟車（ゴーカート）」がこの間「銭鳴」が天誅され

たのに触発されてガチったたって……」

「刀切れしたから補充しに来たってか！？　逃げろ！　いや、レア刀持ってるやつを餌にしろ！」

先程まで袋叩きする側とされる側であったはずのプレイヤー達が結託して別のプレイヤーをスケープゴートにせんと動き出す姿を眺めつつ、視界が暗転し……

「サっ………」

顔を引きつらせ、おそらく全部知っていた上でしらばっくれたのだろう男に、怒りと少しだけの喜びが混ざった絶叫を上げる。

「サンラクぅぅぅぅぅぅぅう！！」

「うるせぇ！　ルーキーは黙って死んどけ！　それがここでの作法ってやつだぁ！！」

背後から火縄銃で頭を撃ち抜かれながら、京極は考える。

——あの野郎、どうしてくれようか。

とある会社、とあるカフェテラス。
男女を問わず羨望の眼差しを向けられつつも、それは当然であると言わんばかりの堂々たる態度でアフタヌーンティーを楽しむ女がいた。

「そのくつろぎっぷりは流石というか何というか……」

「あら百ちゃん、お仕事終わったの？」

「まぁな……あとスコーン寄越せ」

「ヘイヘイヘイ、ラスイチを持っていくのは大罪だって教わらなかったのかい？」

「おおよそお前と同じ教育を経て今に至るが初耳だな」

「くっ、メロン女め……」

新たに現れ、空いた席についた女……斎賀　百は、我こそが世界の中心であると言わんばかりの態度であった女……天音　永遠が残していたスコーンを掠め取ると一口齧りようやく肩の力を抜いた。

「んふふー、にしても予定通りリベ君達を体良く追い払えてよかっ

たねぇ斎賀さん？」

「人聞きの悪いことを言うな、あくまでも「新大陸攻略組」と「リュカオーン攻略組」に分かれただけに過ぎないさ。ジークヴルムに興味はない、彼らがそちらに心奪われている間に私達はリュカオーンを討つ」

「かっこいい風に言ってるけどクラン経営の幹部連中をまとめて引っこ抜いたくせに、この子の口はよくもまぁ……」

「お前にだけは言われたくない」

いけしゃあしゃあとそうのたまう百であるが、二人とも理解しているのだ。

良くも悪くも戦う事しか出来ないリベリオス達では、その内立ち行かなくなると。だが彼らがサイガー１００を頼る事はないだろう、リベリオスは「黒狼の二巨頭としてクランを任された」というプライドが邪魔をするであろうし、彼についていったプレイヤー達の神輿から降りるほどの度胸もない。

「にしても良かったわけ？　新大陸にはレベル上限解放イベがあるんだしリュカオーンに挑む前に行けば良かったのに」

「ふっ、理論上ではなく実際にレベル９９だけでもリュカオーンが倒せると証明されてしまったからな……」

「彼はちょっと特殊パターンだからねぇ……叩くほど知らない情報を吐き出すんだもの、埃まみれの畳かって話だよね」

パラパラと落ちるスコーンのカスが百の大きく前へ突き出した胸に

積もっていくのを非常に濃密な負の感情を帯びた目で眺めつつ、永遠は残りわずかとなった紅茶を飲み干す。

「さて……百ちゃん」

「ん？」

「例のユニークシナリオ、どうなってる？」

それはクラン「黒狼」「旅狼」のトップ同士で結ばれた密約……ではなく。勇者武器の所有者同士としての会話、サンラクが怪しんだ通りにもう一段階奥に仕込まれた密約。

「あぁ、こちらは既に条件を達成しているが……特に変わりはない、どうやら激突を重ねても次の条件に影響は出ないらしい」

「じゃあお陰様で私も百ちゃん達と同じフェーズに入ったのかな？」

「だろうな」

ユニークシナリオ「勇ましの試練」、勇者武器を所有している事が大前提となるそのシナリオはいくつかのフェーズに分かれている。そのうちの一つが「勇者武器同士で戦闘を行う」というものであり、勝敗に関係なくサイガ－１００とアーサー・ペンシルゴンの相対が実現した時点で既に目的は達せられていた。

「前々から話には聞いてたけど、やっぱりあれってそういう事なのかな？」

「だろうな……考えてみれば武器はあって防具は無い、というのも妙な話ではあった」

同じユニークを持つ者であるからこそ通じる主語の欠落した会話、互いに同じ領域に立ったからこそ共通の話題として成立するその内容は勇者武器同士の相対を経たユニークシナリオの次段階。

「……『勇ましき者よ、己が相棒振るいて黄金の手が守りし地殻の扉を開け。その先に万象に打ち克つ鎧有り』」

「命名法則に則るなら……「聖鎧（セイガイ）」と言ったところか」

聖なる武器が指し示す新たなる力、それは誰の為に……何のために用意されたものか。

今はまだ誰も知らない。

だがそれは、竜達の声が絶えし時……明らかとなる。

その者居ずとも世界は進む（後書き）

リスキルされた時に「は？クソゲーじゃんやってられるか」ではなく「殺した奴、顔覚えたからな……地獄の果てまで追い詰めて切腹させたるからなぁ……っ！」となったら幕末適性が高い

次回エピローグ

え？　ヒロインちゃんの本気はどうしたって？　忘れてないですよ

ヒロインちゃんの本気の「――」をご覧に入れましょう

外堀を発破で埋め立てる愚かしくも最善の方法（配点：自爆）（前書き）

多分二四時間経過したので本日の更新です

外堀を発破で埋め立てる愚かしくも最善の方法（配点：自爆）

「それじゃあ」

「は、はい！　今日も頑張りましょう！」

クラスが違うが故に、学校に到着してしまえば別れるのは道理である。

だがそれでも、毎朝を共に歩いていけることがとても嬉しい。

最近は吃らないよう喋ることができるようにもなったし、今年は波が来ている！　ポロロッカ！！

そんな風に今日も今日とて全身から幸せオーラを漂わせていた玲であったが、ふとある事を思い出す。

ユニークシナリオ「兎の国からの招待」を自発した事？　それはもう報告した。

ＮＰＣ「慈愛の聖女イリステラ」から打診されたクエストについて？　それに関しては登校中に向こうから話題として持ち出してきた。

違う、それではない。

それは玲の……サイガー０の中ではつい最近まである種の既に終わったイベントとして認識されていた。

だが深淵の盟主からの言及、警鐘が予見する未来……そして、ラビッツの賢兎からの言葉。それらをまとめればゲームというものに楽

郎程の造詣の深さを持たない玲とて理解できる。

クターニッドにそれを告げられた時は「青」からの逃走でそれどころではなく、その後は身内のゴタゴタで完全に忘れていた。

だが言わねばならない、相談せねばならない。何故ならそれは恐らく……。

ワールドクエスト第四段階に関連する事柄であろう事はほぼ確実であるが故に。

「どうしたの玲？　上の空で」

「あぁ、いえ……ちょっと不手際を思い出したというか」

「ふーん……課題すら一度も忘れた事がない玲が珍しいね」

友人の心配に、大したことではないと返答しつつさていつ伝えたものか、と玲は考える。
確実に伝えるとすればやはりシャングリラ・フロンティアにログインしている最中だろう。とはいえ陽務　楽郎という人物はシャンフロ一本でゲームをしているわけではなく、何も毎日ログインしているわけでもない。

であればSNSを使うのが次善か、そんな事を考えながら昼休みの廊下を歩いていると、ふと前方から友人と談笑する件の人物が歩いてきた。

（あ、丁度いいですね）

如何なる人とて、己の全ての行動に思慮を巡らせる事は困難である。突発的な欠伸やくしゃみを完全に制御する事は困難であり、同様に脳内で優先度が低いと判断された挙動へは得てして注意が散漫となる。

「あ、陽務……君」

「んぁ？」

だからこそ特に緊張する事もなく、最優先事項「楽郎にシャンフロについて重要な話がある事を伝える」の達成に意識を向けた玲は、携帯端末を使って伝える手間が省けてよかった、と極々自然な動作で楽郎を呼び止め……

「この後、（シャンフロについての）大切なお話があるのですが、（ログインした後に）お時間を頂いても……いいですか？」

共通の繋がりを持つ当人以外には絶対に他の意味で伝わるであろう爆弾を投下した。

「………」

「………」

「………」

静寂。
全員の呼吸が一斉に停止してしまったかのような、完全な静寂。
玲が投下した爆弾を聞き取れなかった者達の喧騒は遠く、当人である玲は何故いきなり空気が凍ったのかとしばし考え………

「……？　あー……もしかしてシャンフ」

「ばっっっっ！！？！？！！？」

正しく意図を察した楽郎（サンラク）を余所に、自分が「いきなり廊下ですれ違った相手に告白予告じみた台詞を放った」という事実に玲の感情のメーターが三回転半程振り切った。
バッ！！！　と明らかに素人の動きではない挙動で楽郎を制するように掌を向け、もう一方の手で発火せんばかりに熱を持った顔を覆う。

「ち、違っ……一般的なあれそれではなく！」

「え？　あ、うんあっちの話だよな？」

「そう！　一般的なあれそれではなく！」

「アッハイ」

「い……いぃいぃ………！」

頭に昇った血と熱が臨界に達する。
脳内に突如として竜巻が発生したかのように思考が攪拌される。
自分に降り注ぐ視線、視線、視線。隣で唖然として口を開く友人すらも頭の中から消失して……

「一般的なあれそれではなくぅぅぅぅぅ！！」

逃げた。

「……いや、結局シャンフロの話だったのか？」

後に残ったのは、起爆した爆弾によって引き起こされるであろう未来に気づいていない最重要人物と。

「ヘイ陽務、今日の昼飯は奢ってやるよ」

「え、マジ？」

「おう、カツ丼固定だがな」

「なんで？」

「そりゃお前……取り調べと言えばカツ丼、伝統だろ？」

「取り調べ？　何の…………」

暫し思考の後、楽郎は全方向に味方がいない事に気付いた。

「……ははは」

「ははははは」

「「HAHAHAHAHA」」

ポン、と肩に手を載せる友人の手を振り払って笑い合い……

「フレに呼ばれたんで部屋抜けますね＾　＾」

「ひっ捕らえろっ！！」

逃走劇が始まる。

外堀を発破で埋め立てる愚かしくも最善の方法（配点：自爆）（後書き）

斎賀　玲、本気の自爆芸

二人だけで関係が進まないなら環境ごと動かせばいいじゃない！

テレビ見ながら別作業やろうとして信じられないようなミスするアレ現象

カップ麺にお湯注ごうとしてＰＣ画面に気を取られたせいで手に湯をぶっかけちゃった感じ（実体験）（そもそも湯が沸いてなかった）

（勘違いで悲鳴をあげる）

エピローグ　広がる竜災戦禍（前書き）

設定特盛りダイナマイッ（断末魔）

書きたいこと多すぎて咽び泣いていたのですが心の中のアーノルド・シュワルツェネッガー（コマンドー）が「だったら全部書けばいいだろ！」と激励してくれたので全部書きました。

エピローグ　広がる竜災戦禍

・赤竜は舞う、舞い上がる木っ端の輝きも知らず

「――救援要請（へるぷみー）……第二百三十二試行、失敗。送信装置の破損は確定的であるとする」

人形は表情を変えない。己の声が届かないのであれば、上ではなく己自身を見るしかない。

――過剰衝撃による右腕部の欠損

――想定されてない使用法による左手部の磨耗

――耐久超過加圧による両脚部の粉砕

――想定外遭遇への対処による武装の破損

――回収目標……損傷無し

なんて事はない、満身創痍（至急修復の必要あり）な現状がより詳しく分かっただけであり、人形は無表情のままさてどうしたものかと思案する。

人形は己が存在する理由を果たすべく稼働していた所を紅蓮の炎の如き赤い竜……共有データベースを参照した結果、個体名称「ドゥーレッドハウル」と遭遇、ある理由から全力を出せなかった人形は四肢の欠損、武装の散逸を代償としてなんとか生存に成功していた。

大質量の「尾」による衝撃より吹き飛んだ右腕。超重量の「足」によって踏み潰された両脚、武装は「鱗」を穿つために失われ、「息吹」から逃れる為に崖から飛び降り……人形ともう一人分を支えた左手は岩肌を無理やり掴もうとして削れ切ってしまった。

そして見方を変えれば、人形に命を助けられたとも言える回収目標（ターゲット）はと言えば。

「い、いいかげんはなしなさいよおっ！　ううっ、なんでわたしまでこんなぁ……」

「回収目標（ターゲット）重要度（ランク）「総動員級（フルスクランブル）」、もし貴女（ワタシ）が当機との言語的相互理解を許容するだけの理性レベルを持ち合わせているのならばこの場から動かない事を推奨いたします」

「いやよ！こんなところに、ながいなんてしたくないわっ！」

……

「こんなところだからです。ここは……」

次の瞬間、土砂崩れのような音と轟音が響く。だがそれは崩落の音ではない、それは進撃である。

太陽の輝きを受け、青と緑を混ぜ合わせたような色に輝く水晶の大地、夜になれば月の輝きを受けて炎と見間違うばかりの鮮烈な赤い輝きを放つ場所へとその姿を変える神秘的な台地……の、下。

宝玉の大地を囲うように抉られたドーナツ状の渓谷。既に抉られきったその場所を更に掘り起こしてやる、と言わんばかりの大質量による蹂躙が渓谷と大地の境界に出来た僅かな窪みの中にいる人形と回収目標の前を通過する。

「ここは地形名称「シグモニア前線渓谷（フロントライン）」、大地を穿つ大砲百足達の巣です」

「ぴょあぁ…………！？」

ゲームとして設定されたその名はトレイノル・センチピード・グスタフ。

魔境たる深海にてそこそこの強さを誇るアルクトゥス・レガレクスに匹敵する巨体で大地を爆走するその様は、まさしく線路という枷から逃れて暴れ狂う暴走特急と呼ぶべき猛威である。

その背部の甲殻から突き出した明らかに砲撃を想定した筒状の突起だけが通常の百足と大きく異なる姿を形成していた。

だが、中央に宝玉を戴くこの円形渓谷において、トレイノル・センチピード・グスタフは頂点を独占する存在ではない。

「警告します、どうやら開戦したようですね……要塞蜘蛛です」

宙を切り裂き飛翔する砲弾、着弾と同時に強い粘着性を持つ糸を固めた弾丸に張り付いた子蜘蛛が一斉に爆裂し、トレイノル・センチピード・グスタフの甲殻に衝撃を走らせる。

大百足と対峙する姿はその名が示す通りに巨躯を誇り、全身に張り巡らされた微細な毛（とはいえサイズ比的に人の腕ほどの太さはある）に幾百、いや幾千もの子蜘蛛を張り巡らせたそのモンスターの名はフォルトレス・ガルガンチュラ。

己の子を、番いのオスを「兵士」として……時に「武器」として用

いる事で生物としては最高クラスの肉体という武器を持ちながら、さらなる武装を自らに施す性質を持つ要塞の如き蜘蛛である。

共に虫、言葉はなく咆哮もない。
ただ関節から過密なまでに搭載された質量を軋ませ、ギチギチと音を立てながら蜘蛛と百足が相対する。

見上げるばかりに巨大なそれら二体と比べれば、余りに矮小な人形と回収目標が見守る中、二体は激と

「……ねぇ、もっとおおきなくもとむかでにふみつぶされてるんだけど」

「────回答。要塞蜘蛛の女王個体、及び大砲百足の牝個体と推測……当機は現時点を以って継続的稼働を困難と断定、他機達(しすたー)への情報継承プロセスを開始……ピーガガー」

「ねぇちょっといろいろあきらめてない!?　いやぁぁぁぁしにたくなぁぁあい!!」

ここはシグモニア前線渓谷(フロントライン)、フォルトレス・ガルガンチュラとトレイノル・センチピードが熾烈な縄張り争いを続ける新大陸屈指の危険地帯。

そして

渓谷の中心に戴かれし帝宝石の王冠より、「蠍」はそれらを睥睨する――

・青竜は晒す、その身は死して糧となる

新大陸、誰も知らない海岸にそれは打ち上げられていた。
スレーギヴン・キャリアングラーの眷属に全身を食い千切られ、アーコリウム・ハーミットが生成した己にのみ致命の効果を発揮する毒性生物を撃ち込まれ、そしてアトランティクス・レプノルカによって命を刈り取られたその姿は無残の一言に尽きる。

その屍の名はエルドランザ、かつて我こそが大海の覇者と唱えたドラゴンの成れの果てであった。
このシャングリラ・フロンティアにおいて深海エリアとはまごう事なき魔境である。ある人物によって明らかに偏ったバランス調整を施された三種類のモンスターは、それこそ海底でありながら地上であるかのように動ける場所でなければまず勝てない……そんな性能をしたモンスターが密やかに、だが確実に潜んでいる。

そしてエルドランザは己の高慢に目を曇らせ、それら三種に一度に喧嘩を売るという愚を犯してしまった。

その成れの果てが海岸に打ち上げられた。だが、この場所を知る者はいない。それは地形的な理由であり……

同時に、知った者が生きていないという理由もあった。

ジジジ、ジジジジジジッ、ジジッ

――それは、酷く飢えていた。

空腹であるとか、栄養が不足しているとか、そういった生易しいものではない。

体積が足りない、容積が足りない、己を構成する何もかもが足りていない。

たまに迷い込む餌ではあまりに少なすぎる。身を切り詰め、かろうじて「己」を繋いできたが、もはやそれも限界だ。

ブブブブブブブブブブ……

――それは、酷く恐れていた。

それに感情と呼べるものはない、それに生物としての規定値に達するような意思もない。

だがそれは、己の存在意義を心得ている。生きるというあまりに当たり前な存在意義が、それに恐怖をもたらすのだ。

ぐち、ぐちぐちぐちぐち……

――それは、食事を見つけた。
かつてエルドランザと名乗っていたモノにそれは牙を突き立てる。腐り落ちた肉を嚥下し、穢れた汁を啜る。人間の掌ほどの大きさにも満たない小さな身体に確かな質量が入っていく。

ぶぢゅり、と。

まるでそれが潰れてしまったのかと勘違いするような音を立てて……それが「分裂」した。
一は二へ、二は四へ、四は八へ。増え続けるそれはエルドランザの屍を貪り尽くすと、増えた己すらも喰らいながら増殖と結合を繰り返し……

「Quwrrrrrrrrooooooo……」

いつしかそこには、全身を「赤」に置換したエルドランザの形をした何かが立っていた。
だがそれは全盛の姿ではなく、死したその時をそのまま再現したもの。死体が立ち上がっているかのようなその姿は極めてシンプルな嫌悪感を周囲に撒き散らすも、それを感じ取る生物はこの場にはいない。

——それの名を知る者は、ここにはいない。
だがそれをデザインした者と、この世界を運営する者達はそれの名を知っている。
「貪る大赤依（ダイセキイ）」……深淵の底に封じられた「狂える大群青」が捕食と増殖を繰り返し、無機物に寄生する微生物であると言うのならばこれはある意味逆の性質を持つ。
——それは、貪り喰らった有機物に自らを「置換」する飛蝗である。
——それは血である。
——それは肉である。
——それは…………

・緑竜は目覚める、無法の居候を蹴散らして

その開拓者（プレイヤー）、名をトットリ・ザ・シマーネと言う。
クラン「N.M.M.」……「ネイキッド」「マッピング」「マーケット」の頭文字で構成される、誰よりも先んじて未踏エリアに飛

び込みその全貌を明かす事に熱意を傾ける……「ライブラリ」とも懇意であるクランに所属するその男は、「誤射から始まるエルフ達の英雄生活」などと本のタイトルになりそうな紆余曲折を経て、何故か森人族（エルフ）達に英雄として担ぎ上げられていた。

そんなある日、

「うおおっ！　なんだなんだ……地震！？」

「トットリ様！　逃げます！！」

「相変わらずの負け犬根性だ……てかエリナ！　一体何が起きてんだよ！？」

「その、ヘーシュ様が居を構えた大樹が……！」

高位森人族（ハイエルフ）、と呼ばれる森人族の上位種が存在する。魔力に秀でた森人族たるハイエルフや強化森人族（ダークエルフ）は負け犬根性が種族レベルで染み付いた森人族の中では比較的プライドが残っている部類である。

「あのツンデレエルフか……！　で、その木がどうしたって……」

『だぁれの許しを得て吾輩の背に棲み着いたぁぁぁあ！！』

轟音。岩を砕く亀裂が走ったようなそれは確かに明確な意味を持つ言葉としてトットリは認識した。

「……なんか、おおよそ把握できたけどヤバい？」

「緑竜ブロッケントリード……勝つとか負けるとか、そういう話し

ではありません！」

地鳴りは止まず、気を抜けば木の上に組み上げられた即席の家屋の上ですら倒れてしまいそうなほどに揺れが激しくなる。

「非常に、残念ですが……ヘーシュ様には……」

「囮か……」

トットリのパーティに加入しているエルフと共に家屋の外に出ると、トットリは注意深く……主に自分が木の上から落ちないよう細心の注意を払いながら、ウッドハウスを折り畳むその姿をしげしげと見つめる。

（やっぱこれ、スキルか何かっぽいんだよな……太い幹を持つ木と素材さえあればどこでもセーブポイント設置できるスキル……習得したいけど、種族系スキルだったらやっぱり改宗(コンバージョン)案件なのか？）

竜もどき達に抗う術すら持たぬ彷徨える種族「森人族(エルフ)」は、その逃亡と放浪の歴史の中で迅速に夜逃げするためのスキルを磨き上げてきたらしい。

辺りを見れば、至る所で家屋を折り畳んで逃げ出すエルフ達を確認できる。

だがこの場で一番注目するべきはやはりあれだろう。

『臭う、臭うぞぉお……忌々しい、同胞(はらから)のぉ……そしてぇ……黄金の臭いがぁぁぁぁあ……！』

「ひっ……だ、誰か助け……」

脚を折ったのか、女性としての柔らかさを加味しても明らかにおかしな方向に曲がったエルフが今にも失禁しそうな程に怯えながらそれを見上げていた。

飛翔機能を捨てた代わりに、鈍器のような打撃を主としたハンマーの如き翼腕。全身からは木の根を彷彿とさせる毛が生えており、それらはまるで一本一本が生き物であるかのようにひとりでに動いては地面に突き立てられている。

翼のような腕が生えた牛頭の亀、というよく分からない例えをトットリは頭に浮かべつつも、苦笑いを浮かべながら走り出す。

「おっと牛亀、悪いがちょっと通らせてもらうぜ？」

『ぬぅうぅん……？』

「あ、アンタは……」

「まだアンタのデレ期を見てないんだ、死なれちゃエルフスレのブラザー達に叱られる……エリナ、悪いが引きずって行ってくれ」

他の森人族と比べて耳が長く大きいへーシュを慌てて付いてきたエリナへと預け、トットリは弓を構える。

「トットリ様は……」

「囮は、俺がやる」

どこでも設置できるセーブポイント、という特大の情報を獲得する

為に森人族の信頼を得る事はトットリにとって最重要事項である。
故にこそ、トットリが森人族の英雄として迎えられた日から何度か変わった指導者の中で現状最も長く指導者を続けているヘーシュの好感度を上げる事はこの場で危険を担うに足る事だろう……と理知的に振る舞いつつトットリは録画アイテムを起動する。

と、ふと考える。

「あれ、直近のセーブポイント畳まれちゃったけど、これ俺のリスポーンどこになるんだ？」

確か、セーブポイントが破壊された場合はその前にセーブした無事なポイントでリスポーンするはず、と。
そして新大陸調査船で目覚めたなら、常に住処を変え続けるエルフに再度合流するのは非常に困難では、と。

『虫めがぁぁぁぁあああ！』

「あ、やっべぇぇぇぇぇぇ！？」

・白竜は怒り狂う、終わりなき闘争を知るは今は朽ちた鋼
彼らは、強靭な肉体を持つ。
彼らは、大きな身体を持つ。
彼らは、常に武器と共に在る。
彼らは、巨人族(キガント)と呼ばれる。

そして彼らは……竜殺し(ドラゴンスレイ)の種族である。

『またしても愛しい我が子をォオ……！　許さない、許さないぞ独活(ウド)共めぇぇぇえ！！』

「げははははは！　うぞうぞと虫のように湧き出てくる蛆を叩き潰して何が悪い！」

「応とも！　よう言うた剛鉄拳の！　あんな煮ても焼いても食えん子竜など、潰して地の肥やしにする以外に価値などなかろうて！」

人と比べてなお巨大な者が、己の背丈ほどもある大剣を振り回したのならばどうなるか？　それが今実演されている。

二人の巨人と一体の竜。双方の間には純然たる殺意が激突し、純白の竜の足元から無尽蔵に這い出る白竜をダウンサイジングしたような小さな竜が次々と巨人達へ襲いかかる。

「友よ刮目せよ！　この「クレイモアのバルドン」と相棒の生き様をおおぉぉぉぉぁぁぁぁ！！」

「応とも！　しかとこの「剛鉄拳のアンベレッグ」の目に焼き付けるぞぉぉぉおおお！」

本能のままに飛びかかる純白の子竜を薙ぎ払う大剣。切断という言葉すら生ぬるい様子で爆ぜる我が子の姿に白竜ブライレイニェゴは苛立ちを隠そうともせずに喚き散らす。

『何をしているのです我が子達よ！　お前達の兄弟の仇を取るのです！』

「ぐぁっはっはっは！　そうやって貴様はいつも後ろでビクビクと震えているだけか！」

「しかしクレイモアの！　流石に我らだけでは厳しくはないか！」

「おう、丁度そう考えていたところでなぁ！　ううむ、やはり英雄の振るいし武器には未だ至らぬなぁ……では逃げるとするか！」

多勢に無勢、そもそも巨人達が白竜を倒す手段を持っていない以上、この結末は必然であったのだがそれを知っていてなお巨人達の闘志が曇る事はない。

「よし来た！　ではまた来るぞ！　ブラ……ブラブラネコネコ！」

『逃すなあぁぁぁあ！　殺せぇえぇえぇえぇ！！』

今日も今日とて、そして明日も竜と巨人の戦いは続く。それは遠き日の約束を果たす為、それとは別に彼らは戦いの中でこそ己を実感できるから。

・黒竜は待望する、それこそが己の証明であるが故に

「くっ……やべーぞこのままじゃ突破される！」

「畜生ボスキャラムーブしてるくせにやり口がみみっちいんだよあのドラゴン！」

「増援来るぞ！　って、げぇっ！　ケルベロスティラノだぁぁっ！！」

防衛線を構築するタンク達が吹き飛ばされる。それを成した三つの首を持つティラノサウルスを彷彿とさせるモンスターが、体勢を立て直したプレイヤー達の集中砲火を受けて悲鳴を上げる。
だがその程度で三つ首の亜竜は……ドラクルス・ディノサーベラスは止まらない。かつて編成された大規模討伐パーティすらも打ち倒したその威は翳りなく発揮される。

「なぁにが『我が爪を振るうまでもない』だあの黒トカゲ！」

「モンスターがモンスタートレインするとかみみっちすぎるでしょ！？」

『ほう、よく吠えた。我直々に踏み潰してくれよう』

開拓者達の前線基地として着々と設備が整えられていた沿岸の町が壊されていく。
それは黒竜ノワルリンドがけしかけたモンスター達によるものであり、そして気まぐれにプレイヤー達を蹂躙しながらその脆弱さを嘲笑う黒いドラゴンによるものである。

『ふん……弱い弱い、貴様らのような脆弱な虫共は黙って我に隷属すれば良いものを』

「エネミー風情が生意気言ってるんじゃないわよっ！　【フレイムブラ……きゃああ！？」

あるいはノワルリンドただ一体のみの襲撃であればプレイヤー達として拮抗できたかもしれない。

だがノワルリンドによって暴走状態で嗾けられたモンスター達に対応しながら、拠点を守り、そしてノワルリンドと戦う……第一陣のプレイヤーだけではあまりに手が足りなかった。

『貴様らの寄る辺はその巣穴か？　であればそれを壊せば貴様らはどうなるであろうなぁ……？』

「やっば……船が狙われてんぞ！　誰でもいいからヘイト奪い取れぇぇぇ！！」

黒竜の口に力が集まる。それはかつてとあるプレイヤーを跡形もなく消し飛ばした竜の息吹、いくら頑丈な船とて無防備な横腹に受ければ致命傷は免れない破滅の一撃。

ノワルリンドの注意を引きつけんとしたプレイヤーが横から飛び出してきた馬のようなフォルムの亜竜(トリケラトプス)に撥ねられる。

そして、ノワルリンドの放った漆黒のブレスが一直線に新大陸調査船へと……

『幾星霜にも満たぬ相対であるが、しつこさだけは一級よな……ノワルリンド』

届かない。
命中の寸前、船とブレスとの間に降り立った黄金がその翼を広げた瞬間、プレイヤー数十人を消し炭にしてなお釣りが出るだろう威力を秘めた漆黒の息吹がまるで煙を散らすかのように雲散霧消したのだ。

『おぉ……おぉお……！　その黄金、その姿……忘れもしない、忘れてなるものか、貴様から受けた屈辱、幾度となく蘇れど決して忘れはせぬ……！』

『ふん、世界に寄生する胞子の怪が上等をほざくではないか』

『……ジークヴルムゥゥゥ！！』

半壊した人の拠点、それは偶然かあるいは慈悲か。
開拓者達の寄る辺たる調査船（セーブポイント）を守るように黄金の龍王が漆黒の竜と対峙する。

・そして黄金龍王は高らかに謳う。人よ、我を越えてみよ……と

『ユニークシナリオEX「来たれ英傑、我が宿命は幾星霜を越えて」が開始されました』
『新大陸エリアのプレイヤーは自動的に当シナリオに参加されます』

エピローグ　広がる竜災戦禍（後書き）

ユニークシナリオＥＸ「来たれ英傑、我が宿命は幾星霜を越えて」
クリア条件……ユニークモンスター「天覇のジークヴルム」の打倒、
もしくは「赤竜ドゥーレッドハウル」「緑竜ブロッケントリード」
「白竜ブライレイニェゴ」「黒竜ノワルリンド」「青竜エルドラン
ザ（討伐済）」の討伐

これにて四章の〆とさせていただきます
明確に「いつ再開するか」を設定すると投稿したくなる病に罹患し
ていることが発覚したので「更新不定期期間突入」とさせていただ
きます

解説したいこと多すぎたので要約（これでも二割くらいにまで軽量
化した結果）
・トレイノル・センチピードは「グスタフ」が牡個体、「ドーラ」
が牝個体……何、ドーラのサイズ？　全高は大体グスタフの五倍
・蠍ィィィィィィ！　いや、別に蠍はそこまで好きじゃないんで
すけどね？
・ややこしいけど人形と［――――］を吹っ飛ばした「赤」とイキリ
青ドラゴンをムシャった「赤」は別物。後者の方がヤバい……「管
理人！管理人！」とは鳴かないけど似たようなもん、つまり超アグ
レッシブドッペルゲンガー
・勇者鳥取島根は「ヴォーパルバニーにとってのサンラク」のエル

フ版と言えば大体どういうプレイしてるかわかると思います。常に拠点を変えるため常駐しているトットリは全国三千万のエルフスキー達の期待を背負っている
・森人族はクソザコランチパックですが木と幾つかの素材さえあればどこでもセーブポイント設置可能、というクソ便利スキルが使えます。まぁセーブポイントごとぶっ壊されますが
・ブライレイニェゴちゃんは子供と言ってるが実際は自身から生物的プロセスを経て増殖したクローンなので「ミニ自分」にママみを見せるやベーやつ、あとちょいちょい自宅凸される
・巨人族は薩摩的ミームがインストールされている
・なお前線拠点強襲イベント時、キルスコア一位は笑みリアさん。苦労して広げてきた拠点を破壊され堪忍袋の緒がダイナマイトに直結した上で点火された模様

「…………」

「アブラムシ、それは貴女の主義主張とは対極の行いではなくて？」

「……うるせぇ」

とある会社、とある階層、とある装置の前。

シャングリラ・フロンティアというゲームの心臓であり脳であり魂であり……つまりは世界の中枢（サーバールーム）におけるとあるサーバーの前に立つ白衣の女へと、ジャージの女が話しかける。

「そんな私欲にまみれた手で私の世界に触らないで欲しいのだけれど？」

「うるせぇ！　またなんだぞ！？」

「だからってそんな、私怨でプレイヤーのデータを消そうとするのが非常識なことくらい私にだって分かるわよ」

白衣の女の名は天地　律、そしてジャージの女の名は継久理　創世、どちらもシャングリラ・フロンティアというゲームを成立させる上で欠かすことのできない人物であり、見ようによってはシャングリラ・フロンティアにおける「神」と言ってもいい者達である。
だが、普段とは真逆の立場として相対する二人にはいつもの険悪さとはまた別の緊張が張り詰めていた。

「貴女の失敗談は最上級の酒のツマミになるから大歓迎だけれど、トラウマ拗らせて私にまで迷惑をかけないでくれる？」

「ぐ………！」

ガン！　と機材を蹴り飛ばす天地。とはいえ天地も継久理も体力がゴミであるため、その暴力が明確な被害をもたらすことはなかった。
怒り……ではない。もっと粘着質で、毒性を持ち、容易に除去する事が困難なその感情は憎悪と呼ばれるものだ。

「で？　「γのガンマン」に「φの野人」と続いて三人目の正体はなんだったのかしら？」

「……「μ」だ」

それはかつて在ったとあるゲームにまつわるもの、天地にとっては呪いの如く己の後ろ髪にしがみ付く過去の影。
別に一プレイヤーとして紛れ込むなら見逃しもしよう、だがその名が広大かつ深遠なシャンフロの中で明確に浮上する度に、天地の心はかき乱される。普段は真面目すぎるほど運営としての役割を果た

す彼女が、子供が嫌いな食べ物を投げ捨てるかのように衝動のままに動いてしまう程に。

「この間の「剣聖」との勝負、凄かったものねぇ……で？　気になって本体履歴を読み取って判明したわけね」

「……そういうテメェは随分と冷静じゃねぇか、あァ？　ゴルドゥニーネとの接触までしたってのによ」

「真横でチンパンジーが騒いでいれば誰だって冷静になるわよ。まぁ、それを差し引いても私は貴女と違って寛容な心の持ち主だもの」

どの口が言いやがる、と唾を吐き捨てんとした天地であったが、この場でそんな愚行をする事がどれ程馬鹿な事かを分かっているが故に、なけなしの理性が衝動を殴り倒してなんとか堪える。

さりとて、致し方のない理由もある。
既に過半数のユニークモンスターとの関わりを持つプレイヤー、その素性を調べていた時に表示された三つのゲーム……天地にとっての「地雷（きず）」であるそれが雁首揃えて表示されたのだ。

「相変わらず、お父上の事になると獣の如く野蛮になるのね」

「……あのクソオヤジの話をするんじゃねぇよ」

「私は結構尊敬しているわよ？」

リアリティを何よりも優先したが為に、ＶＲそのものを滅ぼしかけた人物。その血の命脈に繋がる天地は幾らかの冷静さを取り戻して尚、恨みがましい目でコンソールを睨みつける。

「アタシは奴を認めない……自滅するならまだしも、何もかも巻き込みかけた奴を私は超える……」

「その結果がアレでしょ？」

「だからこそアタシはシャンフロに手を抜かない、例えお前だろうとゲームの邪魔になるなら捩じ伏せる」

冷ややかに天地を眺めていた継久理であったが、天地のその言葉に酷薄な笑みを浮かべる。

「ほざいたわねアブラムシ、でもまぁ……私の世界をより良くすると言うのなら、その益に免じて駆除しないであげる」

「チッ……言ってろ」

天地が去り、継久理一人となったサーバールーム。人間的に相当だらしない格好の「神」は心の底から楽しいと言わんばかりの笑みを浮かべ、サーバールーム内を歩く。

「ふふ、ふふふふふ。クターニッドが倒されたのは割と不快だけれど……お陰で第三段階を早めに見る事ができたのは不幸中の幸いかしら？」

シャングリラ・フロンティア……ワールドクエスト第三段階「黄金

を墜とす大戦」、新大陸に住まう全ての生命を巻き込んだ「竜」と「ジークヴルム」の戦い。

天覇のジークヴルム、リュカオーンと同じくランダムエンカウントするユニークモンスターであり、しかしてその出自を異なるもの。

「なりそこないのドラゴン達、それでも私は貴方達を愛してあげる。シャングリラを形作る一要素（いちいん）だもの」

くすくすと、心底楽しげに笑いながら継久理はそれの前で立ち止まる。

「頑張ってちょうだいな「ジークヴルム」……私の無聊を慰める為に、沢山のプレイヤーを屠ってね？」

返答はなく、「ジークヴルム」は無機質な音だけを返した。

なお此度の天地の暴走を後で知った木兎夜枝の胃に深刻なダメージがクリティカルで入ったものの、愛妻弁当で完治した事をここに追記する。

それは呪いを放つ傷（後書き）

こいつら別に善人って訳ではないので普通にグレーなことをやらかすという

そして木兎夜枝の胃にダメージが入るという

天地　律が関わった作品

スペル・クリエイション・オンライン（２０ＸＸ）

フェアリア・クロニクル・オンライン（２０ＸＹ）

シャングリラ・フロンティア（２０ＸＺ）

【レイドユニーク】新大陸情報交換所　その１８２【天覇さん】

１３　笑みリア
ノワルリンド潰す

１４　乾パン六世
ひぇっ

１５　トロログリセリン
笑みリア氏がヤバいんだけど

１６　武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅ
いやこれは仕方ないって、まさか拠点半壊してくるとは

１７　バサシムサシ
これまでちまちまやってきた拠点クエストが実質水泡に帰したからな……

１８　笑みリア
奴が命乞いするまで叩きのめしたら切り落とした首を拠点のシンボルとして晒す

１９　たくあん載せティラミス
能面より無表情な顔で復旧作業する笑みリア氏は割と……あー、その、ヤバかった。本人いる前で失礼かもしれないけど

２０　じゅぴたー
でも実際プレイヤーの総意としては今回の天覇ユニークはどっちのクリア条件狙うん？

２１　梅王星
ジークヴルムｏｒドラゴン数体か

２２　エルフ・ガスキ
森人族（エルフ）スレから出張してきました！　森人族のところにいる我らが勇者トットトリが緑竜ブロッケントリードと接触したらしい

２３　ＡＢ天
マジかよ流石は勇者トットトリだ……

２４　バサシムサシ
いや実際この恐竜天国でノーデス維持してエルフと同行してるのは素直にすげーと思う

２５　梅王星
油断してると木陰からサラブレッドトリケラに吹っ飛ばされる魔境だからな……

２６　笑みリア
トライケラス・ディノブレッド素材は防壁に使えると判明したので余裕のある方は拠点にある素材納品ボックスに寄付お願いします

２７　余るガム
蛮族……

２８　アンドゥ＝ロメダ

お前新大陸の屋台骨たる氏を侮辱するとか生産職を敵に回すも同然だぞ

２９　乾パン六世
実際出払ってた連中以外の、具体的に言えばノワルリンドの拠点襲撃に居合わせた連中でジークヴルムさん倒そうとする奴いないでしょ

３０　たくあん載せティラミス
まぁノワルリンドとジークヴルムの戦闘の二次災害も大概酷かったけどな

３１　ロックブラック
でもセーブポイント守ってくれたんだよなぁ

３２　トットリ・ザ・シマーネ
まじであぶなかった

３３　梅王星
勇者！

３４　エルフ・ガスキ
おお我らが勇者トットリよ！

３５　トロログリセリン
緑竜どんな感じなん？

３６　トットリ・ザ・シマーネ
あれはヤバい、地面から魔力かなんか吸収するせいでどんだけ矢をブチ込んでも即再生しやがる

３７　バサシムサシ
あー……再生系かぁ

３８　じゅぴたー
実際これジークヴルム一体か色ドラゴン複数体かで絶対ルート分岐しそうだよね

３９　笑みリア
選ぶ道は最初から一つでは？

４０　かっぺンター
実際新大陸生産職は親ジークヴルム派が大多数だぞ、というか反ノワルリンド派が主流というべきだけど

４１　サンダーナット
でも戦闘職にはちらほらジークヴルムに挑みたい連中もいるんだよな

４２　武Ｌｕｃｋ　Ｓｈｉｎｅ
まぁ個人的にはノワルリンド倒したいけどプレイヤーが広く参加したって意味じゃ初ユニークだからな……

４３　バサシムサシ
例のあの人がユニーク独占しすぎなのがね……

４４　ビートヴァン
さる筋からの話だけど例のあの人、黒狼を壊滅させたとかなんとか

４５　インドルー
前々から主張してるけど多分情報せき止めてるの例のあの人じゃなくてアーサー・ペンシルゴンだと思うぞ

４６　ルドワール
というかマジで捕捉できないんだよな例のあの人

４７　バサシムサシ
逆に割と普通に会話してくれた、みたいな目撃証言もあるからマジでわけわかんねぇ

４８　湿布ぅ怒涛
少なくともライブラリはある程度接触できてるっぽいけどな

４９　トロログリセリン
あそこもあそこで自分達で考察し終わらないと情報開示してくれないからなぁ……

５０　たくあん載せティラミス
おい例のあの人についてならここじゃなくて捜索掲示板行けよ

５１　バサシムサシ
いや割と関係ある話題だぞ

５２　ルドワール
そもそもリュカオーンの呪い持っててウェザエモンとクターニッド倒した、って時点でジークヴルムの情報持っててもおかしくないしな

５３　じゅぴたー
＞＞４４
黒狼がいきなり二分割されたのってまさか……

５４　ノックス

いやあれに関してはトカゲの尻尾切りじゃねーかな

55　まるどうく
マッシブダイナマイトさんとこの前話したけどメインメンバーほぼ全員サイガー100側のクランについてくらしいな

56　ビートヴァン
あっ……（察し）

57　バッドブラッド
マダムマッシブダイナマイトさんはSTR極振り教のご神体

58　サンダーナット
実際の話、マッダイさんくらい突き抜けた火力出せるならノワルリンドの甲殻貫けるか？

59　バッドブラッド
マダムってメイン武器が打撃系だから多分頭とか狙えば高確率で気絶怯み狙えるとは思う

60　バッドブラッド
ただSTR極振りだと確実に当てられる状況じゃないと無理ゲー、ノワルリンドもジークヴルムも普通に空飛ぶからどうにかして地面に縫い止めないとどうにもならん

61　湿布ゥ怒涛
それもしかしてSF－Zooいれば何とかなるっぽくね？

62　トロログリセリン
あいつら戦闘中にスクショ撮影とか始めるからレイドとは致命的に

相性悪いんだよなぁ……あそこが出してる写真集割と好きだけど

63　ロックブラック
明らかに撮影後即死するようなアングルとかあるからね……本職いるっぽいよねあれ
あと地味に名前被りしてて笑う

64　バッドブラッド
あそこのタンク組は聖女ちゃん親衛隊のとこの団長除けば最高クラスの壁タンなんだけどなぁ

65　ビートヴァン
ろくに歩けない重鎧がゴロゴロ転がってくの、側から見るとギャグなんだけどヘイト管理完璧だからなあいつら……

66　まるどうく
一度だけ動物園のタンク組とパーティ組んだことあるけど凄いぞ、被弾どころかヘイトすらこっちに来ないヌルゲー

67　サンダーナット
話戻すけど結局ノワルリンド狙うにしても他にもターゲットいるわけだし兎に角新大陸のマップ完成させないとどうにもならなくね

68　おこっとしぬ
なんか既に死んでる奴いたよな

69　ルドワール
あれほんとウケる、つまりユニークシナリオ始まる前に死んでるんだよなあれ

７０　バサシムサシ
まさか例のあの人が……

７１　たくあん載せティラミス
流石にありえないだろ、例のあの人まだ旧大陸にいるっぽいし

７２　インドルー
でも明らかに海棲生物なクターニッド倒してるし海に出てはいるんだよな例のあの人……

７３　ティッシァー
そういえば青系の竜ってことは水属性なんすかね

７４　サンダーナット
………マジで例のあの人案件？

７５　ノックス
誰か例のあの人とっ捕まえて聞いてくれよ

７６　トロログリセリン
例のあの人捜索掲示板でなんて言われてるか知ってるか、ツチノコだぞツチノコ

７７　ロックブラック
未確認生命体扱いされてるのほんと笑う

７８　ウォンバット
捜索班に期待だな、でもディープスローターさんもうこっちに来ちゃってるんだっけ？

７９　笑みリア
久しぶりにスローターしようかなぁ……

８０　梅王星
このゲーム下手にスローターするとペナルティモンスター出るって噂だし危険では？

８１　バサシムサシ
なんかよくわからないうちに即死するらしいな、何かのモンスターの仕業とは言われてるけど

８２　サンダーナット
もう一度話を戻すけど、実際ジークヴルムに味方するルート選ぶにしても青は死んでるから赤、緑、白、黒の四体の居場所を見つけないといけないんだよ

８３　武Ｌｕｃｋ Ｓｈｉｎｅ
勇者トットリさん、確か生還重視で緑竜からはさっさと逃走しちゃったらしいし

８４　エルフ・ガスキ
英断

８５　ウォンバット
エルフスレの奴らはいい加減トットリに合流してやれよ……

８６　ノックス
ＮＰＣをパーティに入れてるとはいえ実質ソロプレイで難民プレイはキツそうだよなぁ

８７　おこっとしぬ
ていうかリザードマンの目撃情報があったり改宗の仕様からして他種族とコンタクト取るのが必須な気がする

８８　乾パン六世
ジークヴルム倒すルートにしてもノワルリンドと戦いながらどっかいっちゃったしなジークヴルム

８９　トロログリセリン
現状明確に存在が判明してるのは森人族(エルフ)と獣人族(ビーストマン)だっけ？

９０　サンダーナット
んで、目撃証言だけあるのがリザードマンと虫人間

９１　超農民
植物モンスターは他種族に含まれますか！？

９２　ノックス
自分でモンスターって言ってるんだよなぁ……

９３　湿布ゥ怒涛
こればっかりは第一陣だけじゃ無理ゲーだわ、追加でこっちに来るプレイヤー含めて人海戦術使わないと

９４　ディープスローター
まぁこの手のレイドは必ずＭＶＰ報酬とかありそうだけどねぇ、ちんたらしてていいのかい？　ほうらちんたらちんたら

９５　インドルー
ディプスロさんプレイヤーじゃ数少ない座標移動門持ちだからソロ

プレイで行方くらまされると大陸間移動できなくて本格的に困ると
いうか……

96　ディープスローター
これ僕の所感なんだけど、例のあの人……サンラクくぅんが行方を
くらましてるのって転移系の魔法が関わってそうな気がするんだよ
ねぇ

97　ディープスローター
あと私行方くらましてないよ？　黒狼……「元」黒狼の皆様にお願
いされて出張してるだけだよ？

98　ノックス
相変わらずこの人キャラ纏まらないのがキャラだなー

99　バッドブラッド
えっ、マダムもう旧大陸戻ってんの！？　マジかよ本格的にリュカ
オーンに勝つつもりじゃん……

100　笑みリア
ノワルリンド潰す

災禍ののちに（後書き）

積極的に恐竜モンスターをフルボッコにして出来上がっていく骨の防衛線

半裸を探して三千里（前書き）

延々とＢｌａｃｋとＢｌａｃｋ　ＲＸの変身ポーズ練習してたので投稿遅れました

【喋る兎】サンラク氏捜索掲示板　ｐａｒｔ１【二重の呪い】

１　バサシムサシ
発端こそアレだったけど喋るヴォーパルバニーを同行させたプレイヤー「サンラク」氏を見つけ出しどうにかその秘密を聞き出せないかあれこれする掲示板です
情報を独占しているとはいえ盗撮が発端なのでコンタクトは慎重に

…………

……

…

５２３　バサシムサシ
割と過疎ってきたな

５２４　アッド
まぁ皆新大陸の方主軸にしてるわけだししゃーない

５２５　バサシムサシ
まぁサイガー１００とかオルスロットみたいな目立ち方でもないのに専スレ作ったのもあれだったしなぁ

５２６　ディープスローター

サンラク？　サンラク……聞き覚えのある名前だねぇ

527　アッド
お、ここにきて新展開？

528　ディープスローター
いやいや、以前やっていたゲームで同じ名前の方と少々因縁がありましてね

529　ディープスローター
まァこっちが一方的にライバル視してるだけかもしれねェがなァ

530　バサシムサシ
いやせめてキャラは統一しろよ……

531　超合金豆腐
なんか愉快なのが来たな

532　ディープスローター
せっかくのゲームなんだし、いろんなキャラクターをやりたい……そう思う次第なのだよ

533　アッド
というか本題に戻るけど知り合い？

534　ディープスローター
どうかしら、名前が同じだけの他人って可能性もあるし

535　バサシムサシ
性別すら無視かい

まぁ確かに名前被りを否定できるほど独創的な名前ってわけでもないしょえあ

５３６　アッド
は！？　ユニークモンスターだぁ！？

５３７　超合金豆腐
ていうか噂をすればなんとやらかよ！

５３８　ルドワール
ちょっと衝撃的すぎてここ開いちゃったわ、なにしてんだあの人

５３９　ディープスローター
見つけた

５４０　インドルー
アーサー・ペンシルゴン！？　野郎拠点襲撃した時にいなかったのはそういうことかよ！

５４１　バサシムサシ
は？　マジで？　ｉｎ虎団奇襲しかけたんじゃねーの？

５４２　サンダーナット
やっぱり回り出してたなここ

５４３　インドルー
ああくそ、今にして思えばなんか都合よくリーク来るなとは思ってたんだ！　わざと流したのかよ！

５４４　アッド

というかそれ以前に墓守のウェザエモンってなんだ聞いたことすらねーぞ

５４５　ルドワール
阿修羅会襲撃時に消えた副リーダー、別の場所で達成されるユニークモンスター撃破、都合よく仕組まれた阿修羅会の情報リーク

５４６　バサシムサシ
鳥肌立ったわ、全部廃人殺しの掌の上だった？

５４７　カレーのジョーンズ
専スレに参加してまで家探しする気もなかったけどちょっと旗色変わったわ

５４８　ビートヴァン
あれ、もう専用掲示板できてんの？　＞＞１の記入日的にもっと前からなんかやったのこの人

５４９　バサシムサシ
・リュカオーンの「呪い」を二ヶ所に刻んでる
・喋るヴォーパルバニーを同行させている
・ユニークモンスター「墓守のウェザエモン」撃破↓ｎｅｗ！

５５０　超合金豆腐
こりゃ本格的に捜索班編成されそうだな……

【目撃証言？】サンラク氏捜索掲示板　ｐａｒｔ５【デマｏｒガチ】

１　バサシムサシ
発端こそアレだったけど喋るヴォーパルバニーを同行させたプレイヤー「サンラク」氏を見つけ出しどうにかその秘密を聞き出せないかあれこれする掲示板でした
コンタクトしようにも全く見つからないのでとりあえず何としてでも発見しましょう

…………

……

…

７２３　バサシムサシ
目撃情報
エイドルトにて目撃の報告あり！

７２４　ダサイフィフティ
近場だわ、急行する

７２５　アッド
フィフティシアからは……間に合わないんだろうなぁ

７２６　ミンストレルウィンド
なんか昔やったゲームに出てくる戦闘モードになってもすぐ逃走し

てフィールドマップの反対にランダム出現する固定シンボル敵思い出した

727　コクリュー
そのゲーム俺もやってたかもしれない、てかお前さてはおっさんだな？

728　ミンストレルウィンド
ち、ちちちちちげーし！　親父じじじが大切に保管してたのをこっそりプレイしただだだけだし！！
……もしかしてアルマジロ買うために並んだ世代？

729　コクリュー
カメラート……！

730　サウスビューティ
コンパーニョ……！

731　クボッタ
トンチー……！

732　カモ・フォウンテン
タヴァーリシチ……！

733　バサシムサシ
加齢臭で掲示板汚染するのやめろォ！

734　アッド
アルマジロってなんだ……

735　カモ・フォウンテン
「アル」カナ・「マジ」シャン「6」の略称、フルダイブVRの一世代前のVRゲームの中じゃレジェンドなゲームだよ

736　ミンストレルウィンド
あれはマジで人生の何割か費やして熱中してたな……

737　サウスビューティ
中盤でヒロイン死ぬけど終盤で蘇生するまでのストーリー展開が完璧なんだよなぁ……

738　クボッタ
ゲームシステムすら伏線にしてたのはマジで驚愕したもんだ……

739　ディープスローター
精気が吸い取られそうな会話だぁ……

740　アッド
おっすディプスロさん

【クターニッド】サンラク氏捜索掲示板　part8【どこだあの野郎】

1　ディープスローター

ここはどれだけ探しても影も形も見つからないくせにしれっと二体目のユニークモンスターを倒したサンラク君をどうにかして追いつめて捕獲するための掲示板だよ、情報交換して近場で目撃証言があったら急行しようね

…………

……

…

324　ディープスローター
わぁ、便利な魔法手に入れちゃったぁ

325　アッド
相変わらず突然話の流れぶった切るな……

326　ディープスローター
いやこれマジで便利っすよ、なにせ念願のファストトラベル

327　バサシムサシ
新大陸にいるからサンラク探そうにもやることないっていうな

328　バサシムサシ
いや待てなんて？

329　ディープスローター
うん、だからファストトラベル。【座標移動（テレポート）】みたいに最後にセーブした街限定とかじゃなくて行ったことのある場所ならどこでも飛

べる【座標移動門（テレポートゲート）】って上位魔法

330　アッド
なにぃぃぃぃ！？

331　ディープスローター
習得条件鬼すぎてクッソ笑ったけど気合いで習得してやったで御座る

332　ベルモット
一応後学のために習得条件お聞きしても……

333　ディープスローター
いいよぉ？　初々しい後輩のために手取り足取り教えてあげるよぉ……

334　ディープスローター
【座標移動（テレポート）】、及び【瞬間転移（アポート）】の合計発動回数1000

335　ベルモット
えっ、つっっっっら

336　コクリュー
ただただ苦行な作業系かー……前提としてあのスケベジジイの好感度稼ぎしないといけないしおっさんには厳しいものがある……

337　ディープスローター
お爺ちゃんの耳元で催眠音声へビーローテーションしてやればちょちょいのちょいですのよ？

338　ディープスローター

あの爺さん、胸が小さいことを気にしてる女性に性的興奮を覚えてると見たぜ

339　ルドワール
何が悲しくてNPCスケベジジイの性癖なんて無駄情報を脳にインプットしなければならないんだ……

340　ディープスローター
この掲示板見てる全員の脳みそを犯していこうねぇ……

341　ディープスローター
あ、最低五十万マーニで大陸間移動請け負ってもよろしくてよ？

342　ベルモット
うっわぼったくりだ……でも稼げるだろうなぁ……

343　ゼニス・ゲバラ
後払いは？

344　ディープスローター
二割増し

345　ゼニス・ゲバラ
安い！　後で送還頼む！

346　アッド
誰かと思ったらボッタクリ商売してるやつじゃねーか！

347　ゼニス・ゲバラ
うるせぇ！　クソみてぇなラインナップしかないNPC商店で満足

してるんならウチで商品買う必要もねぇよなぁ！？

３４８　ディープスロータ－

みぃんなもっともっと私に頼って頂戴ね……ふふふ

半裸を探して三千里（後書き）

新大陸に張り巡らされるかつての因縁を発端とする包囲網
ペンシルゴンは上手いこと言いくるめつつ納得させるだけの餌を与えて「手駒」にするけどこいつの場合連帯感やら依存やらを使って「味方」にするのが厄介なところ
鉤爪の男って言えばどれくらい厄介かわかると思います

魚を捕まえる一番簡単な方法は「絶対に通る場所に罠を仕掛けること」なんだよなぁ……まぁそのターゲットの魚、ジェットエンジン搭載した鮭なんですけどね

最初の街、最適の狩人

墓守のウェザエモンというユニークモンスターがいた。
即死技の後に即死技、一息ついて即死技。最終的に即死技を連鎖するというCPUの暴力としか思えないクソ技を三十分間延々と叩きつけてくるまごう事なきクソモンスターであったが、思い出補正もあってなんだかんだ良モンスターな気もする。

シルヴィア・ゴールドバーグというプロゲーマーがいた。
実質的に俺の上位互換と言ってもいいプレイスタイル、使用キャラクターを誇張抜きに我が身のように扱うあの女は間違いなく人力TASと言っていい存在だった。

龍宮院　富嶽……のトレースAIという裏ボスがいた。
あれはなんというかもう、色んな意味で酷かった。実質生身に近いステータスでシルヴィア・ゴールドバーグ並の相手と戦わされる、というクソゲー……いや、教材にクソもへったくれもないのだがそれでも厳しい戦いだった。

サイガー100というシャンフロ廃人がいた。
シャングリラ・フロンティアというただ一点を研鑽し続けてきたその力量は凄まじいの一言に尽きた。自分の出来る出来ないを完全に把握し、その上で如何なる相手にも対応する点はシルヴィア・ゴールドバーグに通じるものがあったが……あの時は高いテンションを常に維持し続けられたからこそおおよそ有利に事を運ぶことができ

た。
であれば、このＴＡＳ野郎よりも俺が上回る点はこの経験の他にはない。

「……」

「こ、なくそぉ！」

くるり、と鋒の向きを反転させた一撃が的確かつ確実に俺の首を狙う。
傑剣(デュクスラム)への憧刃を叩きつけるようにして俺を殺す為の刃を弾き飛ばし、それすらも囮であると言わんばかりに胸の中央へ突き出されたそれ……トンファーを斬撃武器にしたような奇妙な武器をスキル総動員の回避で逃げ延びる。

「……」

「クソッ、只でさえ集中力が削れるってのに……！」

役割模倣(ロールプレイ)：龍宮院富嶽をフル稼働し、クリティカルさえ出せば無敵と言っていい傑剣への憧刃を半壊させてなお圧倒的に俺が不利。
周囲で野次を飛ばしていたプレイヤー達も諦めムードが漂っている。
クソが、こんな……こんな意味のわからない理由でキルされてたまるか！

守りに回ったら死ぬ、攻めながら受け流す。畜生カフェインが足りてないいんだよ頑張れアドレナリン！
飛び抜けて速いわけではない、だが武器にとっての理想的最適解を常になぞり続ける姿はまさしくＴＡＳと言うべき鬼挙動で俺を仕留めんと閃きが舞う。

くるり、と鋒を後ろへ。トンファー型に戻った事でパンチという選択肢を増やした敵の攻撃がより多彩になる。
だがそっちは実質拳射程……ありがたい、まだ活路は途切れちゃいないようだ。

「立て直した！」

「うぉー、すげー」

ガヤガヤうるさい、ＢＧＭならもう少し旋律に気を配れ。気分的にはロックな感じの音楽を聴きたい……あぁダメだ、聴覚封じたら多分死ぬ。

「つーかっ……俺っ……なんか悪い事っ……したかぁっ！？」

弾かれ吹き飛ぶ傑剣への憧刃、強制的に空いた手でウィンドウを操作しつつ片手一本でこちらを刈り取りにくる乱舞へと対処する。
普段は気にもしていない武器の展開速度、今は怒りすら感じる遅さにしか思えない。
七日経過していないので超過機構は使えないがそれでも有能な冥王の鏡盾でトンファーエッジの攻撃を迎撃しながら前へと踏み出す。
喰らえ一人ファランクス！

「………っ」

目深に被ったフードに口元を隠すマフラー、表情を伺うことは出来ないがこれだけ持ちこたえて尚その動きに焦燥などの感情は見られない。

文字通りAIってわけかい、ますます俺が集中的に狙われてる理由が分からないのだがここまで持ち堪えて「しゃーない勝てそうにないから負けるか」というのはなんだか無性に悔しい。

それはここがシャンフロを始めたプレイヤーのうち殆どが一番最初に降り立つことになるであろう街……ファステイアであり、今死ぬと別の街でリスポーンする事になるからか。

それとも初心者の街であるが故に大量の新規が観客として俺を見ている中で負けるのがなんだか気に食わないからか。

発端なんぞ何でもいい、兎にも角にも今の俺の中で燃えるこの衝動は「負けたくない」と叫んでいるのだ。

「うおおお意地でも五秒くらい時間を貰うぞぉぉお！」

元よりユニークでもなし、隠す理由ももはや無し！　押し込まれる一方であった戦局を死を覚悟した力技で無理矢理押し返した空白の一瞬、手袋に包まれた右手をきつく握りしめて拳を胸に叩きつける。

「そっちが先に喧嘩を売ったんだ、ぶっ飛ばされてもキルペナつけるんじゃねーぞオラァ！」

「…………っ！」

黒雷を纏い、最適最速の攻撃すら上回った俺の挙動に敵は……賞金狩人（バウンティハンター）「ルティア」が初めて動揺したように身体を震わせる。

先に言っておくが俺はシャンフロでＰＫなんぞした事はない、そして賞金狩人はカルマ値を上げたプレイヤー……つまりＰＫｅｒを狩るＮＰＣ。

おかしいね、じゃあなんでそこで転がってるＰＫそっちのけで俺が狙われてるんでしょうか？　俺が一番聞きてぇわ。

・賞金狩人ルティア
「ティーアスちゃんを着せ替え隊」が本格的に活動を開始して以降、何人か確認された賞金狩人の内の一人。
未確認武器種たるトンファーブレードを装備しており、切っ先の向きを変えることでバトルスタイルを切り替える近距離型のNPC。
ティーアスと同等のAIを搭載しているため、尋常ではない強さを誇る。
当初はいわゆる「お前じゃねぇ帰れ」枠だったのだが、名前が妙に女性的であることから「着せ替え隊」に所属する上位陣が決死の調査を行ったことで女性ということが判明。一時は着せ替え隊が真っ二つに割れかねないほどの混乱をもたらした。
現在は「着せ替え隊」内の一部門として「ルティアさんをどうにかして脱がせ隊」が結成されている。

逃亡者、果てを見る眼差し

ゲームとは俺にとって趣味である。

血筋を辿ればどうも父方、母方両方共に趣味人の多い家系であるらしく、北の方にある父方の実家に行けばギラッギラに手入れされたスポーツカーを乗り回す祖父がいるし、西の方にある母方の実家に行けばプラモデルの為だけに祖母が建てたという離れがある。お祖父ちゃんの方はワシが死んだら車はお前にやろう、と嘘か本当か分からないことを酒の席で言ったりしてたが……いつか免許取らなきゃ、いやその前にレースゲーで練習か？

それはともかく。

つまりは俺や妹は、趣味狂いの血筋が生物学の神秘的な混じり合いの末に生まれたハイブリッド趣味人という訳だ……なんというか人生の選択肢を一歩でも踏み間違えたら酷いことになりそうだ、瑠美はその兆候を匂わせ始めてるし。

そんなわけで、俺にとってゲームとは「目的」である……だからこそ現実逃避という、「手段」としてゲームをプレイする現状は俺としては非常に珍しいケースであると言えた。

事の発端は、まぁなんというかレイ氏こと斎賀さんが学校で盛大に自爆した事である。

斎賀さんは控えめに言って完璧超人である。十人に彼女がどんな人物かと聞けば九人が同じ答えを返すだろう。

そんな彼女が廊下のど真ん中で男子生徒に「大切な話がある」なんて言い放ったのだ、学生である以上は成績的な理由で無断早退するわけにもいかず陸上部のエース共まで動員した陽務 楽郎捕獲班に捕まった俺が尋問されるのは当然の事であった。

条約違反だと人権の重要性を説いたにも関わらず、俺を羽交い絞めにする柔道部のマッシブアームは緩む気配もなく、せめてもの足掻きに雑菌福耳ピアス君が授業中にポエムを書いてる事実をバラして反撃を試みたりもしたのだが……まぁ、どうしようもないわけだ。

「あー、審問官こと雑菌福耳ポエムが殉職(悶絶)なさったので俺が代理を努めよう」

「弁護士は？」

「………？」

参ったな、同じ学校内に蛮族がいたとは。これから死ぬ奴に何故そんなものが必要なんだ？　と言わんばかりに首をかしげる代理審問(クラスメ)官殿(イト)を睨め付けつつ、さてどうしたものかと思考を巡らせる。

別に斎賀さんと恋仲とかそういうものではない、と否定するのは簡単だ。だがそうすればごく自然な流れでこう問われるだろう。

じゃあ大切な話ってなんだよ……と。

改めて言おう。

斎賀さんは完璧超人だ、十人に彼女がどんな人物かと問えば九人が同じ答えを返すだろう。だが同じ答えを返せない一人こそ俺だ……俺は彼女の秘密を知っている。

斎賀　玲は割と人生捨ててる廃人ゲーマーであるという事実を――――！

プライバシーは大事だ、なにせそれが無かったら俺もカッツォも……特にペンシルゴンはゲームで好き勝手暴れられないのだから。故にこそ俺は他人のプライバシーは極力守る男、この口が裂けても言うわけにはいかないのだ。法治国家のご加護は捨てるにはあまりに惜しすぎるからな……！

「くっ……この男、この期に及んでなんて綺麗な目を……！」

「お前らみんな都合よく頭打って記憶失ってくれねぇかなぁ」

「よし、情状酌量の余地はないな。なぁお前確か布団を畳むのが特技だったよな？」

「おう任せろ」

「待て！　背骨か？　背骨を畳むつもりか！？」

背骨に関節はないんだぞ？　折ったらダメなんだぞ？

………

「妹の結婚式がアレコレなんで親友のセリヌン雑菌ピアスを身代わりに……」

「この局面で容赦なく友人売れるお前こそ邪智暴虐そのものだよ陽(ヒツ)務(トメ)ロス……」

「妹……こいつの妹読モって聞いたけどマジ？」

「マジだぞ、普通に可愛い」

「被告人陽務、お前の妹のアドレス教えてくれたら恩赦の余地を……」

「うちの妹とテメーが釣り合うわけねーだろ人生リセマラしてから出直して来やがれ」

「刑を執行するッ！！」

くっ……ここまでか……！

「おーしバカやってないで席につけー、今日はテストにも出す重要単語出しまくるぞー」

「ひゃっほうお勉強大好き！　ハッ！　学生らしく勉強すんだよ離せオラァ！」

「先生ェ！　こいつの処刑まで授業を待っちゃあくれませんかっっ

！！」

「お前ら木っ端の生き死により歴史上の偉人の軌跡の方が重要なので却下だ」

信じられるか教育者の言葉ですよこれ。

サイガー０：本当にご迷惑をおかけしました……っ！

サンラク：いやいやお気になさらず

サイガー０：私の不手際でご迷惑を……！

サンラク：気にしてない気にしてない

サンラク：で、本題に戻るけど大切な話って？　シャンフロ関連だよね？

サイガー０：は、はい……実は、私が保有する神魔（アンチノミー）の剣と双貌の鎧に関してなんですが……

サンラク：あぁ、あれね

サイガー0：その、実はあれ関連……まだユニークシナリオ終わってないんです

サンラク：なんと

「つまりあの人(レイ氏)本格的にシャンフロ的主人公してんなって話よ」

「ほひゃはっ！？　ふぁんへほっふぇをひっひゃるへふわーっ！？」

「どっかの誰かさんのせいで神の戦士扱いされてるんだが心当たりないかな？　ん？」

「ひょふぁーーーっ！？」

エムルをぐにぐにしつつ、俺は聖女ちゃんこと「慈愛の聖女イリステラ」との会話、提示されたクエスト……そして大前提として立ち塞がった大問題を解決するべく動き出す。

◆

「新大陸では……世界を蝕むドラゴンと、天覇の龍王が戦っています」

「ん？　なるほど……」

一瞬何か違和感を感じたが、その正体は次の言葉で明らかとなる。

「そして、そう遠くないうちにこの国でクーデターが起きます」

「……」

ちら、とジョゼットの方を見れば、俺の無言の疑問を肯定するかのように一つ頷いた。

「何故、「これから先に起きる事」をそうも自信たっぷりに？」

「……私は、人よりも多くを見聞きできますから」

聖女ちゃん親衛隊、なんてクラン名から割と軽んじていたのを訂正しないといけないかもしれないな。
こいつ、単なるＮＰＣじゃねえ。もしこいつの「予言」が全て正しいのだとしたら。

「フライングゲットのスケジュール表ってことじゃねーか……」

「……どうか、なされましたか？」

「いやいや、なんでもございませんことのよ？」
ＮＰＣにガチ恋勢かと思っていたがとんでもない、こいつらはライブラリや最前線組よりも早くこの世界で何が起きるのかを把握することが出来る、という特大のアドバンテージをガチ恋勢という隠れ蓑で――――！
「…………（ちょっと戸惑い気味な聖女ちゃん可愛すぎかよ、という目）」
いや、やっぱり隠れ蓑の方が本心かもしれない。聖女ちゃんをガン見するジョゼットをなんとも言えない目で眺めつつ、では何故それらを含めて俺という無職の世捨て人を呼んだのか。
「クーデターの首謀者はこの国の第一王子アレックス……」
「第一王子がクーデター？」
なんじゃそりゃ、黙って座ってるだけでも王位継承されるだろうに何故クーデターなんかやるんだ。下手に民からの心象悪くする必要があるか？　いや、待て……まさかここに俺を呼んだ理由とは……！
「成る程、使い捨ての鉄砲玉って訳か……」
「……？　ああいえ、そうではなく」
あれ？　てっきり第一王子を秘密裏に殺れって命令だとばかり。暗殺プレイは得意だぞ、無人島じゃそれメインでやってたし魔王ペンシルゴンだって当初は暗殺するつもりだったし……まぁあれは最

終的に爆発オチになったけど。

だがそうでないとするなら目的はなんだ？　後腐れない開拓者なら新大陸に高飛びさせるなりすればいい訳だし、なんでジョゼット達子飼いの開拓者ではなく俺を指定する必要が？

「クーデターですが、これは成功します。そして表向きは「王位を第一王子に継承し、先王は新大陸の視察に向かう」という理由で……」

「あー、大体流れは掴めた」

ＮＰＣはリスポーンしない、新大陸で「不幸にも」死んでしまったとしても仕方がない、と。だが逆に「幸運にも」その場にいた開拓者に助けられる可能性もあるだろう。

「船内で暗殺される可能性は？」

「その光景は朧げでしたから……事が為されるとすれば、新大陸に到着してから、かと……」

未来予知は視覚に頼っている？　より確定に近い未来ほどはっきりと映る？　この手の未来予知は全く別の作品でもある程度の類似性があったりするし、考察が捗りそうだなぁ……

「故にこそ、私からの依頼なのです……新大陸で命を脅かされる先王の保護、そして新大陸に作られる三神教の教会までの警護をお願いしたいのです」

「今度こそ成る程……王国との繋がりが薄い開拓者ってことか」

「えぇ、それに……かの国との繋がりをお持ちの方、ですから」

…………………うん、ロールプレイを切らすな。

「おや、ウチの兄貴とお知り合いで？」

「以前お会いした事がありまして」

ちら、と今度は気づかれないようにジョゼットを見れば何の事かは分かっていない様子。

さて……廃人プレイヤーが隣にいる状況でどう乗り切ったものか。

逃亡者、果てを見る眼差し（後書き）

聖女ちゃん親衛隊がユニークに興味を持たない理由がこれ、どう考えても聖女ちゃん絡みでデカい何かが起きると確信しているからとはいえそれは理由の三割くらいで残り七割は「聖女ちゃんかわいい」の一言に尽きる。

日本人は銀髪とか白髪みたいな白系のキャラに弱い、古事記にもそう書かれている。神秘性とかそういう理由なんですかねぇ？

大陸は二つある

ヴォーパルバニーの国「ラビッツ」、ユニークシナリオ「兎の国ツアー」しか知らないプレイヤーからすればそれなりの重要度を持つ魔法を取得するユニークでしかない……が、ユニークシナリオ「兎の国からの招待」をクリアすればその裏に隠された意味を知る事ができる。

それはユニークモンスター「不滅のヴァイスアッシュ」の存在、そして地下深くのトンネルで繋がったユニークモンスター「無尽のゴルドゥニーネ」との因縁。
だがこれはあくまでもユニークシナリオ、シャングリラ・フロンティアという大きな流れからすれば寄り道に過ぎない。

だがここに聖女ちゃんが絡んでくるなら話は別だ。

慈愛の聖女イリステラ、明らかにメインストーリーに絡むタイプのNPCだ。ワールドクエストなるヤバげなフラグが着々とカウントを進めているが、絶対この聖女も絡んでくるだろ。
そもそも「聖女ちゃんは未来予知できる」なんて特大の爆弾投下されてこちとら結構パニックしてるんだぞ。
というか聖女ちゃんと会話するということはこの事実が露見するという事だ。それに気づかず親衛隊は俺を通した？　あえて気づかせる事でなんらかの取引を持ちかけるつもりか？　成る程、先払いを無理やり受け取らせる事で俺からの引き出しを増やすのが目的か……

「………（何故聖女ちゃんはこんなにも可愛いのか？　という疑問を発端に宇宙の神秘などを哲学的に思考する目）」

いや、やっぱり何も考えてないかもしれないなぁ……まぁいいかゲーマーは度胸だ、対策なんてものは死んでから考えればいい。

「承りました、その依頼お受けしましょう」

「ありがとうございますサンラク様、三柱の神々に誓ってこのお礼は必ず……」

ジョゼット、流石にゲーム内で鼻血は出ないと思うぞ。

◆

「ってな訳で、新大陸に行く必要が出てきたってわけよ……っていうかぶっちゃけラビッツって新大陸にあるよな？」

「はいなっ！　でもでも、ラビッツは島国ですわ？　だからラビッツのお外に出ても大陸に辿り着くのは難しいですわ」

おいつまりゴルドゥニーネは海底掘ってトンネル作ったのか、一歩間違えたら崩落じゃねーか……

エムルを頭に乗せつつ、聖女ちゃん親衛隊に拉致られてから死んでいない俺は女モードのまま兎御殿を進む。

「とりあえず武器を整理したらファステイアに行く」

「……？　なんでですわ？」

「無職に厳しい世の中だった、ってだけさ……」

いやまさかゲームの中で身分証明求められるとは思わないよね、ビックリしたわ。

新大陸調査船……名前は忘れたが三神教に伝えられる三体の神獣の名を持つ三隻の新規で造られた船。その船に乗る事ができる開拓者は組合……つまりギルドなどからある程度の実力を保証された者に限る。

実際のところフィフティシアまで辿り着いたプレイヤーはどこぞの狐くノ一のようにRTA並の最速到達でもしない限り、ギルドが掲示するクエストなどをクリアした開拓者は実力の保証をギルドがしてくれる……

そう、ギルドに所属していれば、だ。

「そこら辺は聖女ちゃんのネームパワーでなんとかしてくれるらしいが、それでも無職はマズいんだってさ」

「よく分かんないけど世知辛いってことですわ？」

「船底に隠れて密航プレイもそれはそれで楽しそうだけどなー」

これぞ社会的ヴォーパル魂。大質量のモンスターに立ち向かうのとはまた別のスリルがあるな……ゲームにそんなスリルは求めてねぇよ、ペッ！

「とりあえず兄貴んところとビィラックんところに寄って武器整えたらアイテム買い占めて突撃だな」

座標移動門はイベント使用時以外はくぐる者が行ったことのある場所しか行けないようだし、セカンディルから逆行しないといけないか……うーん、寄り道すっか。

「とりあえず適当に死んでから行こうか」

「さらっと命を投げ捨てるのはヴォーパル的じゃないですわ？」

「ははは、ダチの家に遊びに行くだけさ」

「ダチ……？」

向こうは俺が来たことにすぐ気付くし、俺は彼ら（の素材と採掘アイテム）に夢中だからな……これをダチと言わずしてなんと言う。

自分で突っ込むけどまぁ「怨敵」……かな。

「おう、来たかぁ……」

「ウス、そんで兄貴例の武器に関しての話とは」

「ちぃと待ちな……この話はビィの奴にも聞かせるからぁよう」

兎御殿、ヴァッシュが座す玉座の間でしばし待つこと五分、なにやら緊張した面持ちのビィラックがいそいそとやって来た。

「オ、オヤジ……わちに英傑武器（グレイトフル）について、お、教えてくれるって……」

「おぉうよ、ちゃあんと耳ぃかっぽじって聞けよう……！」

ブンブンと首を激しく縦に振りながら頷くビィラックを一瞥し、ヴァッシュは俺が手渡した「朽ち果てたアラドヴァル」を掲げてゆっくりと語り始めた。

「英傑武器（グレイトフル）はぁよう、大抵はこいつみてぇに本来の力を損なっちまってるもんだぁ……だからぁよう、俺等（おいら）ぁ達みてぇな鍛治師はなぁ……英傑武器が求めているものをぉよう、分かってやらにゃあらなねぇ」

例えば朽ち果てたアラドヴァル、長年ゴルドゥニーネの龍蛇に突き刺さっていた槍剣の刃は朽ちてしまっている。であればその身に再び輝きを宿すために必要なものがある、とヴァッシュは説く。

「アラドヴァルはなぁ……竜の身を焼き滅ぼす劫火の劔よう。朽ち果てたこの身にゃあ、種火がねぇのさ……故に、サンラクおめぇさんはこいつを再び燃え上がらせる「種火」を探さなきゃあなんねぇ……」

「種火……」

「ただの火じゃあお話にならねぇ、それこそ「地の底より雄叫びを伴い天をも燃やす炎」でもねぇとなぁ……」

「……………ん？」

地面の底から、大音量で、空をも燃やす………なんというかこう、これらのワードを全て満たす自然現象に覚えがあるというか……いや、だけどそこって半裸で突っ込んだら絶対ダメな場所トップ5と言ってもいい場所では？　ジュッ、てなるぞジュッ、て。

「溶けるのでは？」

「溶けるってどういうことですわ？」

「そりゃお前、地下深くから大量の煙と土砂を伴って噴き出す炎なんて一つしかないだろ」

「…………あっ！　火山ですわ！」

「というかワリャ、しれっと飛び込む前提なんじゃな……」

いやだって、まさか溶岩揃ってはいおしまい、とはならんだろう。絶対地下奥深くまで潜って溶岩の魔人的な敵と戦ってその核を毟り取るとかそういうアレだろこれ。

「装備問題は灼骨砕身で実質解決したから火耐性防具か……いや、そもそも旧大陸に活火山は無いしやっぱり新大陸案件……」

栄古斉衰の死火口湖、っていうくらいだしそもそも湖だ、火属性的なあれそれを期待しても望み薄だろう。

マグマダイバーとかそういう都合のいいジョブが当然実装されねぇかなぁ、などと考えていると

「あぁん？　あの山ならまだ死んじゃあいねぇぜぇ？」

「……マぁジでぇ？」

曰く、あの死火山は極めて強引な物理的理由によって火山ではなくなった、らしい。全くもって意味がわからないのでそれとなく情報を催促したところ分かった情報は……

「先々代の「赤竜」をジークヴルムが物理的に「蓋」にして地中深くまで押し込んだァ？？？」

「意味わかんねぇよなぁ……ククク、だがそれができちまうのが彼奴なのよう」

いや驚いてるのはそこじゃない、いやそれもあるがドラゴンに先代今代の概念があることだとか、さっきの話と合わせればあの湖の底に……そう、ウェザエモンがいた「秘匿の花園」のような隠しエリアがあるという事実だとか、なんでそんな都合よく色々知ってんだこの極道兎は、だとか……

様々な感情をこねくり回して煮込んだような状態になった思考を、もうどうにでもなぁれと無理やり断ち切る。オンゲーモードだから頭がこんがらがるんだ、コンシューマーゲーモードになれ。

ストーリーを進める度に与えられる情報という餌、プレイヤーは口を開けて待てばいい。それが極上であれ、クソみたいなバグであれ咀嚼して飲み込むしかないのだから。

「実際潜るとしたら……こう、脚に重しを括り付けて……」

「どう見ても処刑とかそういう感じのアレですわ……」

「……ま、そこはおめぇさんが自力で考えな」

ぶっちゃけ解決策は二秒で思いついたので問題はない。まーた最強伝説が更新されてしまうな……あと懸念すべきは水圧くらいか？

「あぁ、それともう一つ……ビィラック」

「んあ？」

「アラドヴァルの修理……おめぇさんがやんな」

四、五メートルは跳び上がったビィラックを見て、あぁやっぱりこいつエムルの姉なんだなぁと再認識した。

大陸は二つある（後書き）

代替わりは「死」をトリガーとして行われるが、「死」の定義が一般的な生命体と異なるのです

というわけで善は急げだ、ビィラックの奴がフリーズしてしまったので奴とアラドヴァルを熱する為の種火が必要になったわけだ。流石に兎月でもない武器の整備をヴァッシュに任せるのはなんか怖い……いや信頼的な意味じゃなくて好感度的な意味で。

「というわけでエムル、久し振りにサードレマに飛ぶぞ」

「わぁ…………あんまりこれといった思い出がないですわ」

「到着して即外道(ペンシルゴン)に追いかけられたりしたなぁ……」

やっぱあいつ、一度キッチリ天誅した方が……いや、幕末理論を他ゲーに持っていくのはマナー違反で切腹案件だ。ランカー複数人に囲まれて介錯されてるの、傍目から見てもクソ怖いからな……

そんなわけで転移、最初は水晶巣崖に寄って女体化解除しようかと思っていたが新規が溜まっているサードレマを抜けるならこっちの方が都合が良かろう。

「よしエムル、ガールズトークするぞ」

この言葉を聞いた瞬間のエムルの顔をスクショし忘れた事を、俺は後々まで後悔することになる――――

「エムル、女子力足りてないよブーストかけてギア上げてけー」

「サ、サンラ……子サンに言われたくないですわ……っ！」

シャンフロでは見た目をどれだけ取り繕っても声帯だけは誤魔化すことができない。故にこそ見た目も声も完全に逆転させる聖杯の力はカモフラージュとしては最強クラスだ。

例え名前が「サンラク」であったとしてもこれまで目立ってきた「サンラク（男）」の印象が俺を守ってくれるのだ。

「というかなんで女の人用の服持ってるですわ……？」

「そりゃあ性転換アイテムゲットしたら作るでしょ……当然」

男状態の時にビィラックへ頼んだからそういうケの無い俺ですらちょっとゾクッとくるような目で見られたが、目の前で実演して謂れなき中傷は回避した。

「ほらほら女子力アゲてくわよー！」

「う、うぅぅ……サンラ子サンが普通に女の人してるのがすごい違和感ですわ……」

はーお前、サンラクさんはその気になれば幼女にだってなれるんだぞ？

「わ、見たことない装備……可愛いね、あれどこで入手できるんだろう」

「サンラクってあの……？」

「いや、確かあの人って男キャラなんじゃないっけ？」

「じゃあ名前被りしたのかな」

「……ていうかなんであの人煙ってるの？」

「さぁ？　そういうエフェクトの防具なんじゃない？」

「隣の子も含めてキャラメイクの完成度たけー……」

「声的にガチ女プレイヤーか、なぁおい声かけろよ」

「バカ言え、どう見ても高レベルプレイヤーだ。声かけてどうするんだよ」

「こう、手取り足取り……」

「逆ならワンチャンあったかもな」

これ、見た目反転してこの姿になった俺のキャラメイクを誇るべきか、それともクターニッドが結構アレな奴だったのか……真相は海の底か。

サードレマを出てしばらくした瞬間、オーバーフローで全力ダッシュ。エムルには悪いがまた痺れてもらった……あっ、お前兎の脚力で頬を蹴るのはやめろ死ぬ！　体力1しかないんだぞ余裕で死ねるわ！

「ササソサンラララクコココササササン……」

「まぁ落ち着いてこれ飲めって」

状態異常を回復させたところで、さてと振り向けばそこには活動を停止した……と思われている火山がその姿を堂々と晒していた。

まぁこっちの大陸で一番高い場所は気宇蒼大の天聖地らしいが、高

さとか抜きにやはり山というものは見る者にある種の威圧感を与えてくるものだ。

「まぁ尤も、威圧感を撒き散らしてるのは俺なわけだが」

「わぁ……随分と気楽な登山になりそうですわ……」

リュカオーンの刻傷による俺以下のレベルのモンスターが俺を忌避する効果によって、全くと言っていいほどモンスターとエンカウントしない……つまりマジで単なる登山というわけだ。

「でもでも、どうやって湖の底まで行くんですわ？」

「インベントリア連打」

「あっ……」

格納鍵インベントリア最強伝説がまた一ページ追加されてしまったな……いやこれどれだけ弱体食らおうが「一切の干渉をシャットアウトする別空間に退避できる」なんて最強能力が腐るとかあり得ないだろ。

仮に戦闘中使用できなくなったとしても、今回のように息継ぎ目的でも有用……個人的には物理演算による運動エネルギーをリセット出来ることが最高にぶっ壊れだと思うぞ。

「………んゅ？」

「どうしたエムル」

「もしかして……アタシまたお留守番ですわ？」

「…………………………………………気づいて、しまわれましたか……」

俺、顔をそらす。
エムル、頬を膨らませる。

いやだってこのインベントリア一人用だし……そもそもシャンフロのシステム的に水中ってどういう判定なのかイマイチわかってないし……

「なんか最近都合のいい転移要員としか扱われてな気がするですわ！」

「いやだってさぁ、水晶巣崖一緒に行ったら死ぬじゃん？」

「嬉々として通い詰めるサンラクサンがおかしいんですわーっ！」

袋叩きの生態がクソ過ぎて実質俺が独占してる、ってのが気分良いよね。最近オイカッツォの奴がそれとなく攻略法聞き出そうとしてるけど誰が教えるかよ、テメーも蠍の袋叩きで吹っ飛ばされるバレーボールの気持ちになってから自分で考えろ。

「というかだなエムル」

「はいな」

「よくよく考えたら目的のブツを回収したら多分自殺転移(デスポーン)するからどちらにせよラビッツに戻ぶべるっ！？」

「ここまでの苦労の八割が無駄ですわァーっ！！」

「仰る通りでぇぇぇー…………」

跳躍からのサマーソルトが俺の顎に命中し、バランスを崩した俺はそのまま十メートルほど転がりながら山を降りる羽目になったのだった。

「分かっちゃいたが重い……つーか湖の上から更に機獣纏うとか機動力死に切るんじゃないか……？」

ゴリラと、アメフト選手と、重機を混ぜてロボにしたかのようなこれ以上ないほどに明確な「重量級」……日陰に繁茂した苔のような深緑と漆黒の二色を主とした重装甲、それこそが規格外特殊強化装甲【富嶽】の姿であった。

富嶽……富嶽……脳裏に浮かぶ苦行じみた挑戦の記憶がよみがえるがあの剣豪は関係ないのだろう、恐らく正しく「山」としてのネーミングだ。

だがそれならそれで別の疑問が出てくるのだが、ユニークシナリオを通して割と世界の真実に足を踏み入れている俺としては大体答えは見えている。

結局のところ、認識の問題だ。超すげぇ科学は魔法と同じと言うがあれ厳密には違う、正確には「タネを明かさなければ科学を魔法と思わせられる」と言うべきだ……そしてこのゲームの世界観もそう言うことなんだろう。

「よし、行くか！」

「行ってらっしゃいですわ！　じゃあ先にラビッツに戻ってるですわ！」

「骨折り損させて悪いな、あとでなんか買ってやるよ」

何せ大金持ちなので、な。

「じゃ、じゃああのクソ高い魔法も……」

「お前あれプライスの桁がイかれてる奴だろ……」

単なる魔道書が一億って、てかあれを買えと？　もしかしてまだ怒ってます？

まぁ普通に買えるのでどうせなら久々にエムル強化計画再始動するか、なんて考えながら俺は栄古斉衰の死火口湖……その山頂に在る巨大な湖へと飛び込む。

ヴァッシュが語ったこのエリアの真実、虎をバターにするのと同じ感じの謎パワーで先々代「赤竜」を物理的に蓋として火山活動を停止させたのだと言うこの死火山には浅瀬というものが存在しない。言うなれば巨大なクッキー生地の塊に指を突き刺してまな板まで押し込んだようなものだ、シャンフロってシステム的な物理法則は完璧だけど世界観的な物理法則はガバガバだからな……コップが光るだけで性転換されるんだから細かいことは気にしていられない。

沈みゆく【玄武】は稼働の光を宿してはいない。当然だ、リアクタ

ーはオイカッツォが保有しているのだから正真正銘ただ重いだけの鎧でしかない。
無論水中で酸素を供給するシステムがあるはずもなく、一分もすれば窒息死するわけだが……

「自分で縛りを入れてもいいレベルで便利過ぎる……」

格納空間に転移、存分に空気を吸い込んだらMP回復ガチャをぶん回し、再び潜行。
あとはもう単なる作業だ、浮力をねじ伏せる重量で底へ底へと沈み、定期的に格納空間で酸素と魔力を補充し……そして遂に現実空間で俺の足が何かを踏みしめた。

「悪いな、踏みつけちまって」

ヴァッシュの言葉が正しければ、今俺が地面として踏みしめているものこそ、はるか太古にジークヴルムによって屠られた「赤竜クレプトクルム」の成れの果てだ。

私の女子力は５３万です（後書き）

これは完璧に女子力ですわ……

・赤竜クレプトクルム
ドゥーレッドハウルとは異なり旧大陸出身、色々調子に乗ってたのもあるが自覚なしに地雷の上でタップダンスしていたがためにジークヴルムによってお仕置きされた。肉体こそ「蓋」として残っているが完全に死滅してるので既に代替わりしている。

戦術機鳥【朱雀】と対応する特殊強化装甲【艶羽】の頭機殻はそれ単体でも暗視効果があったがあれはあくまでも朱雀からのエネルギー供給があったからこそ成立していた効果らしい。
いくらプレイヤーは真っ暗闇を薄暗い、程度にまで視覚補正を受けているとしても暗いものは暗い。

鎧の中に水が入ってくる、なんて事はないが酸素を供給する手段がないので定期的にインベントリアエスケープを使う必要はあるものの、マジで便利だな神代のパワードスーツ。
水中であり、電源オフであり、単純に重いという三重苦によって驚くほど鈍重な四肢を動かしつつも俺はとある魔法を発動する。

「この魔法、よくよく考えたら露骨にリュカオーンメタなんだな……」

【富嶽】を装着する際、一緒に鎧の中へ押し込められた瑠璃天の星外套に設定した魔法。発動中は解除するまでMPを消費し続けるが、消費時間に応じて光源を発生させ続ける【マジック・トーチ】、お値段二千マーニ、端金だが……無駄にMPを消費する時点でアイテム「松明」の下位互換？　そもそも無くても問題ない？

とんでもない、水中でも発動可能な上に手が塞がらない、という時点で有能魔法じゃねーか。MPに依存しない脳筋の頭にローテーションで浮かべておくだけでリュカオーンの不可視の分身に対処できる。

だがこの魔法の真価はそこじゃない、基本的に魔法もスキルもアク

ティブタイプなシャンフロにおいて稀有なパッシブ運用を可能とする魔法だ。専門職がそれを可能とするのかは詳しくないので知らないが、瑠璃天の星外套のような代理発動アクセサリーを持っていれば魔法の二重発動が可能になる。

「使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）……【アクティブソナー】」

お値段二十万マーニ、端金だ。
発動者を中心に半径三十メートルの地形情報、及びプレイヤー・NPC・エネミーの座標を表示させる索敵魔法。基本的に使い捨て魔術媒体の値段はその魔法の会得難易度と比例する。
まぁ地形情報すら脳にイメージとしてブッ込んでくる魔法とかどんだけシステムリソース割いてんだ、って話なわけで二十万マーニというお値段にも納得だ。

「……何というか、マジで上からプレスして潰したのを「蓋」にしてんのか」

マジック・トーチで照らされた視界と、アクティブ・ソナーで脳内に浮かぶ地形のイメージによって、この火口の奥底で火山活動そのものを停止させた「蓋」が所々に角や鱗の名残が見える巨大な何かである事が証明される。

そしてそれと同時に火口の内側、壁の一部に亀裂が存在しているのが分かる。それは丁度人一人が通れるサイズに裂けた火山の傷跡、傷の中央辺りを蓋が隔てているが逆に言えば亀裂内部を通ればこの蓋の下に行けるわけだ。

「よし……ふんっ！」

ゴリュッ（亀裂に【富嶽】がハマる音）

重装甲(クソデブ)め……一旦インベントリアで格納空間へと退避。

「水圧とか大丈夫だよな…………いや」

……あまり乱用したくはなかったが備えておく必要があるな。

多分【富嶽】と比較すれば細身な他の強化装甲でも亀裂を通り抜けられない、であれば一旦生身の状態になる必要があるわけだが……

取り出したのはクターニッド戦の報酬として手に入れたもう一つの聖杯……藍色の聖杯だ。

特定のステータスの数値を入れ替える、という極めて強力な能力を備えてはいるが代償として一定時間経過すると指定したステータス二種に一定時間元のステータスの半分以下まで弱体化するデバフが付与される。

MPを回復させつつ、俺は藍色の聖杯を起動し……

「ごぼぼぶっ……！？」

現実空間に戻った瞬間、水という大質量が俺の身体を圧壊させせんと襲いかかった――

「っしゃコラ……生き残ってやったぞコラァ……！！」

塞がった火口に長い長い年月を掛けて莫大量の水を溜め込んだ栄古斉衰の死火口湖、火口深くの「蓋」を越え、冷えて固まった溶岩と思しき地層の隙間を潜り抜け……細かい事は気にしないが俺はついに呼吸可能な地下空洞へと到達していた。

やはりというか、水圧によるダメージがあったわけだが……俺の読みと予測は見事に命中したわけだ。
俺が藍色の聖杯で反転したステータスは「ＶＩＴ」と「ＬＵＣ」だ。
水圧とは言わば環境ダメージ、毒沼や溶岩に足を突っ込むのと同義と言える。そして圧と言うことは持続する打撃のようなもの、ＶＩＴを高めれば耐え切れると睨んだがビンゴだったようだ。

「瑠璃天の星外套にチャージしたＭＰも使い切っちまったか……」

だが灯りはもう必要ない。
なにせそんなものが必要ないくらいここは明るいのだから。

それを、なんと形容すればいいのか。

俺は地質学に詳しいとかそういうリアルスキルは持ち合わせていない。だがそれでも分かる、マグマ溜りは断じてこんな作りではない、と。

「Ｆｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏ……」

「なぁんだあれぇ……」

栄古斉衰の死火口湖……便宜上「深層」と呼称するエリアは球場よりは小さいドーム型のエリアだ。
赤竜蓋前までの中層を越え、その下をさらに潜行した先にある冷え固まった溶岩の天蓋がある下層、その亀裂から降りた先にある深層はその入り口の性質上、天井の何ヶ所から水が滝のように落ちてきている。
壁や地面の材質は天蓋と同じ、つまり冷え固まった溶岩だが……普通ならこんな地形にはならないはずだ、冷え固まったってことはつまり一度水没したってことだ、マグマが入る隙間も無いなら普通では無い方法で水を抜いたということだ。

つまりフィールドの光景としては上から降り注ぐ水柱と、それによって水の張った地面を持つ出口のないドーム。そしてその中央に存在するアレ……関わりたくないけどどう考えても目的のブツはアレだよなぁ。

「Ｆｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏ……」

「モンスター……いや、ＮＰＣの可能性も……あるかなぁ……？」

いや本当に、それをなんと形容すればいいのか……マグマを彷彿とさせる朱色と白が混ざったような光を放つ、×（バツ）型にブロッコリーが生えた球体？　しかもなんか笑ってるようないびきのような妙な鳴き声するし。
先程までずぶ濡れだった身体が自然乾燥にしてはあまりに早く乾き始めている事から、あのマグマ色に光る何かが熱も同時に放っていることは分かる。

「……………」

シャンフロのプレイ時間のほとんどをそれでやっていたせいか、ある種のルーティンとなった覆面装備。凝視の鳥面を装備し鳥頭となった俺はとりあえず武器を展か

「qiqiqiqiqiqiqi……」

「オッケーわかった、武器は「ナシ」の方向で行こう……」

過去最速、タイムアタックで世界記録すら狙えそうな滑らかな動きで武器を収納すると、エックスブロッコリーの「警戒音」は消え去り、再びあの笑いいびきが鳴り始める。
とりあえずあのモンスター……多分、モンスターであろうエックスブロッコリーはノンアクティブモンスターに近い性質を持っているということが分かった。武器を構えるだけで警戒状態に移行するならとりあえず無手なら……と思ったが見逃してくれたらしい。

「ていうか今、変形しかけてたよな……？」

発光してるせいで分からなかったが、あの一瞬の間にブロッコリーみたいな形をした何かがグシャグシャの布を広げる様に展開しよう

としていた。少なくとも今の形態はあくまでも待機状態と考えるのが妥当だろう。

栄古斉衰の死火口湖、深層にいる謎の浮遊物体。この空間がドーム状に完結している以上、俺の目的はアレという事になるのだが……

「最近は装備充実してゴリ押しが利くようになったからあんまりできてなかったが……久々に検証行ってみるか！」

腹を割って話そう！

深層の「赤」（後書き）

似てるようで違う二つの「赤」、色竜は関係あるにはあるけど関係ないというか

太陽の暖簾に全力で突っ込むイカロスのような

仮称エックスブロッコリー、見た限りでは全身がマグマかそれに等しい何かで形成されている。明らかに生物とは逸脱した見た目だが振る舞いは生物的なモーションのモンスターのようにも見える。サイズはビィラックやエードワード程度……つまり長身の成人男性の半分くらいの大きさ、謎のブロッコリー的部位は恐らく羽……もしくは翅。

とりあえず数歩接近する程度なら問題はなし、その場でシャドーボクシングしても問題はなかった。
武装の展開はアウト、それに加えて何度かシャドーボクシングでも警戒音を出される事があった。警戒モードに切り替わると鳴き声（？）が変わるが、戦闘用意を中断して数歩下がれば警戒モードはあっさり解除される。

「んー……もしもーし！」

「Ｆｕｌｕｌｕｌｕｌｕ……」

反応自体はある、だが言葉としての返答は無し。ＮＰＣという線はやはり薄いか？　ノンアクティブモンスターと考えるのが妥当か。
とりあえず明確に警戒モードに切り替わるスイッチとして「戦闘用意」は確定した、次は単純に接近してみる。

「怖くなーい、怖くなーい……見ろよどう見ても半裸だ、仕込み武器とか無いから怖くなーい……」

一歩、二歩、意を決して数歩一気に前し……おっとスリップダメージ。

「ん……？　ちょっ、燃えてるぅぅぅぅ！？」

慌てて後ろへと跳び退き、燃え始めていた凝視の鳥面を鎮火する。

嘘だろ耐久半減してる……あぶねぇ。

「これ接触アウト系か……となると戦っての攻略法は……いや、その場合普通にプレイヤーも死ぬか」

どうにかして天井を吹っ飛ばして水を落とす、なんて考えが一瞬頭をよぎったがプレイヤーの安全が一切保証されてないので結果を見る前に圧死するだろう。

それになんとなく戦闘に頼った攻略は勝つ負ける以前にアウトな気がする。

『僕らは空からやってきた、空は僕らの領域……天に神はいない、神は下にいるんだ……！』

かませ犬、マッドサイエンティスト、ホラー映画とかで序盤にやられる奴……評価はなんであれ、あの記録映像に映った男は確かにそう言った。

流石に目の前のエックスブロッコリーが「神」であり、俺はこのゲームのラスボスに一足早く遭遇した……なんて都合の良い事は考えない。

だが少なくとも「神」と形容される何かがいるエリアは地下であり、エックスブロッコリーがそれらと無関係であると断じる事は早計に

過ぎる。

「とはいえ、種火の入手方法次第じゃ戦闘突入が必須の可能性もあるし……」

ゴルドゥニーネの「毒（呪い）」を採取した際に用いた手段は、大前提として金照で斬りつける必要がある。流石に刃物で斬りつけるのが友情の証、なんて都合のいい解釈はしてくれないだろう。

「とりあえず武器出し縛って色々試すか」

幸い人の目は存在しないわけだし、遠慮はいらないな。

試行1、土下座。

「種火を分けてくれませんかっっっ！！」

一流のゲーマーは様子見なんてしない、初手ブッパのフルスロットルだ。

これこそが大和魂だと言わんばかりの全力土下座をエックスブロッコリーへと向ける。十秒ほどそのまま頭を下げていたが、反応こそすれど土下座にへの対応はなし。

「困った、万策尽きたぞ」

土下座以上に有効な方法ってなんだ？

割とマジで万策尽きたのでエフュールの店で買ったリジェネ効果のアクセサリーを装備しつつ、スリップダメージとリジェネ回復が丁度打ち消しあってノーダメになる距離を見つけて適度に炙られていた時、ふと思いついた。

「シャドーボクシングが警戒に引っかかったりしなかったりする理由……か」

要するに何を以ってエックスブロッコリーが警戒するのか、その基準を割り出すのだ。

まず最初に普通にシャドーボクシング、久々に学校行きたくないいって考えながらゲームするなぁ…………無警戒。

次に真っ直ぐエックスブロッコリーを見据えながらシャドーボクシング、真っ直ぐ突っ込んで殴り飛ば……警戒音！

「そんな気はしてたけどシステムがプレイヤーの思考を読み取ってんのかこれ……？」

バッと跳び退きつつ、警戒状態に移行する条件を結論づける。プレイヤーが戦闘を望んで行動すると警戒網に引っかかるなら……ヘイ、ブロッコリーボーイ見てくれよ俺の武器を、ヴァッシュお手製の対刃剣だ………よーし警戒網突破ァ！
成る程戦闘以外での武器展開なら見逃してくれるわけね、恐らく心変わりした瞬間警戒モードだろうけど。

「となるとやっぱり金照は使えない……攻撃を経由した目的達成は無理臭い」

ジリジリと接近しつつ、さぁどうしたものかと考える。金照の能力はクリティカルヒットがトリガーだ、可能性としては「どうにかして金照を使う」もしくは「金照を使わずに「種火？」を入手する方法がある」のどちらかというわけだ。

「Ｆｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏ………」

「実はあの鳴き声はモールス信号的な暗号説……あり得そうだから怖い」

その場合、俺の知能指数では解読不可能案件だ。最悪エセ魔法少女に情報売り渡す必要があるが……うーん

「あー、名前は知らないけどミスターブロッコリー」

「Ｆｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏ………」

誠実さ、って基本的に同じ生物かある程度自分が上位に立てる相手以外には通用しない概念な気がするけど土下座が通用しない強敵だ、まぁ試して損はなかろう。

「実は今回ここに来たのは兄貴……あぁ、超絶極道な兎なんですけどそいつから種火？　ってのを持って来いというオーダーでしてね」

そもそも相互の言語的理解度０％という驚異のゼロコミュニケーション状態で話しかけて何の意味があるんだと思わなくもないが、他の手段が実力行使しか残ってないのだから仕方がない。

「攻撃しない、オーケー？　……で、まぁ何に使うかっていうとコイツの修復？　蘇生？　的なもので……」

と、敵意を抱かないよう状況説明という形で朽ち果てたアラドヴァルを取り出した瞬間の事だった。

「Ｖｉｖｉｖｉｖｉｖｉｖｉｖｉｖｉｖｉｖｉ……」

「キッ……」

キタ――――！！　と叫んで朽ち果てたアラドヴァルを振り回しそうになった衝動を全力で抑えながら俺は黒焦げた覆面の下で歯を剥き出しにした笑顔を浮かべる。

見たかこの野郎！　こちとらコンマ一秒の世界(ギャルゲー)を潜り抜け、聖女風(フ)高飛車白痴(エアカス)相手に媚を完売させてきたんだオラーッ！！

謎物体相手にだってパーフェクトコミュニケーション成功させたらアーっ！！

「そうだグッボーイ……グッボーイ……俺、種火、欲しい……お前、種火、くれる……グッボーイ、グッボーイ……」

平常時とも警戒時とも異なる、俺と俺が持つ朽ち果てた巨槍(アラドヴァル)の穂先をじっと見つめているかのように浮遊するエックスブロッコリー。

俺はアラドヴァルを武器ではなくあくまでも見せつけるための装飾品(アイテム)という認識をブレないようにしつつ前へ前へと近づいていく。

装備を全て外し、全裸……いや無装備状態のインナーがあるからギリ半裸！　ギリ半裸です！

ギリ半裸（自己認識）で近づくたび、秒数毎に食らうダメージの量が増していく。アクセサリーの回復量を上回り、ゴリゴリと削れていく体力を自覚しつつもそれでも前へと進んでいく。

冥王の鏡盾(ディス・パテル)や灼骨砕身のエフェクトに依るものとは根本的に異なる、これはもう肉体そのものが焼け始めている。

ダメージエフェクトと炎が混ざり合い、全身を砕きながらそれでも前に進み……叫ぶ。

「なんでもいいので種火プリィーーーズ！！」

「Vooooooooouuuu……」

ぶわり、とエックスブロッコリー……いや、限界まで近づいたからこそ分かった、やっぱりアレはクシャクシャに丸められた大きな、とても大きな……「蝶」がマグマによって彩られた翅を広げる。

鱗粉でも撒き散らすかのように、だが実際にマグマ蝶の翅から放たれたそれは、衝撃波を伴う灼熱の熱波――

「ぶぉ」

一瞬で消し炭と化した俺がエフェクトと共に砂煙の如く消滅する。

次目覚めた時、無駄死にだったら本格的に殴りに来るから覚えとけよ……！

それにとって、「来るべき時」の為に火山の底で眠り続ける事は苦痛ですらない。

それは意思を持つからこそ成立する感情であり、虫やコンピュータに近い思考をするそれからすれば、天蓋の亀裂から落ちてきた侵入者など本当にどうでも良いものであった。

対応とて、それがそう望んだからではない。そもそもそれに生物的な自主性(キャラクター)は存在しない、Aという干渉に対してBという答えを返す。そんな単純な行動パターンを束ねて臨機応変に見せかけただけの反応と対応のシステム、それが地底でただひたすらに力を蓄え続ける赤色の。

もう一つの「赤」とカテゴリを同じくするも、その原理と出自を明確に異なるもの……

「焠(にら)がる大赤翅」と名付けられたモンスターは、ただ己の存在意義に従った。

即ち、「己が持つ力で欠損を補填する」という使命を果たす。
その為に火耐性特化したプレイヤーすら焼き殺す火力の炎を叩きつけたとしても、それによって騒がしい生物が消し飛んだとしても。
焠がる大赤翅は己の炎を必要としていた鋼に、確かに自身の力が込められたことに対して特に何か感慨を抱くようなこともなく、ただ元の状態へと戻った。

地殻の檻の中、ひたすらに力を高めるそれが地上の光を浴びる日は……そう遠くない。

太陽の暖簾に全力で突っ込むイカロスのような（後書き）

・焠（にら）がる大赤翅（だいせきし）

貪（むさぼ）る大赤依（だいせきい）とは異なるもう一つの「赤」。栄古斉衰の死火口湖はそもそも火山ではない、その正体は「――」の「――」であり、深層に潜むものこそが焠がる大赤翅である。

他の「――」同様に明確な意思や感情などは持っておらず、存在理由をただ果たすだけのシステムのようなもの。ちなみに攻撃した場合死火口湖が噴火ならぬ噴蒸してもおかしくなかった。

ちなみにレイドボス性能なので例の衝撃熱波ですがフル防御を固めたジョゼットでなんとか半殺しで済むレベルの超火力です、そら紙装甲じゃ消し炭になりますわ……しかも範囲攻撃

半裸の足長お兄さん（鳥頭）

・朽ち灯りしアラドヴァル
再起への炎を宿した英傑の武器。
未だ本来の力には程遠く武器として使用する事は難しいが、剣に宿った真なる炎は巨槍の剣に二つの道を照らし示す。

無言、しかして全身でガッツポーズ。女体化が解けて男に戻っているがこの際どうでもいい、ぶっちゃけアバターの性別とか二の次だし。

そんな俺をエムルが何やってんだこいつと半目で見ているが知った事ではない、ピザの影に怯えながら駆け抜けた恋愛経験(ラブクロック)は遂に言語とＡＩの壁すら超えたのだ。

「今ならフェアカスだって怖くない……」

いややっぱこえーわ、だってあいつ一つ前のチャプターで友好度高めたキャラを敵ごと抹殺するからな。しかも主人公と良い雰囲気になったキャラは優先的に狙われるという……
涙ながらに謝罪するけどイベントシーンが終わったら「クヨクヨし続けても馬鹿馬鹿しいじゃない！」とかほざくからな、どういう人生送ったらあんな台詞考えられるんだ頭おかしいんじゃねーか。

「ようしエムル、ボケたアホウサギを叩き起こしに行くぞ」

「はいなっ！」

と、そんな感じに意気揚々と奴の工房に乗り込んだ俺達であったが、そこで目撃したものはあまりに変わり果てたビィラックの姿であった……

「うへへへへ……」

「ビ、ビィラックおねーちゃん……？」

「びゃー」

「こ、こいつ、人参を金槌で叩いてやがる……」

え、ペーストでも作ってんの？

上の空な様子でただひたすらに金床に置いた人参をぶっ叩き続ける様は精神崩壊でもしたんじゃないかとマジで懸念する程であった。

「これ話しかけて大丈夫か？　肉体に刻まれた自動防御本能で襲いかかってくるとかないよな？」

「アタシのおねーちゃんをゴーレム扱いするのはやめて欲しいですわ……」

いやでもあれ完全に簡単なプログラムだけ仕込まれたＡＩみたいになってんぞ。逆に放置し続けたらどれくらいあの作業を続けるのか気になる……あ、人参ペースト食べた。成る程栄養補給はバッチリ、と……

「これなーんだ」

「んぁ……？　なんじゃ、ワリ…」

ごずん！（ビィラックの手に金槌が叩きつけられる音）

「ヤァァァァァァァァァァァ！！？！？！！？」

「んぶっ」

「んひゅっ」

思い切り笑わなかった俺とエムルの理性を誰か褒め称えて欲しい。非常に形容し難い声を漏らしながら悶絶するビィラックを見下ろしつつ、見せつけるためにに取り出したアラドヴァルをきつく握りしめて笑いを堪える。

分かってんだよ、ここで笑ったら脛か膝をハンマーで強打されるってことくらいよぉ……！

「大丈ぶふふっ」

………。

「………待て話し合おうビィラック、フルスイングはあかん。フルスイングはあかんて」

「おどりゃ死に晒せやぁ！」

「おっぐ！？」

七割削れた。

「わちぁオヤジに任されたんじゃ、絶対にこの剣を蘇らせてやるけぇ……！」

あの謎蝶によって炎が灯ったアラドヴァルを受け取り、灼骨砕身を使った俺のように朽ち果てた刀身から紅蓮を覗かせる剣に負けず劣らずの燃えっぷりを見せながらビィラックはそう宣言した。

「他に必要なものは？」

「んー……「火」は揃った、「炉」……そう、炉が必要じゃな」

炉？　俺はちら、とビィラックの工房にある炉に視線を向ける。なにやら明らかに近未来的な機材が傍に置かれているが無視、煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）と冥王の鏡盾（ディス・パテル）の生みの親かもしれないのだからむしろ拝んだ方がいいだろうか？

「わちも名匠の端くれ、この剣を見た時理解出来た……こん剣（つるぎ）は炎なんじゃ」

「火属性？」

「まぁ、間違っちょる訳じゃないが…………違うな、この剣は「炎そのもの」なんじゃ」

大仰な比喩はファンタジーの特権ってやつさ……

それはともかくビィラックの様子的に何かを隠しているわけでもなし、このアラドヴァルという武器は単なる火属性武器というわけではないようだ。

「この剣は……いや、元は槍のようじゃが、こいつぁ「炎」を芯として「剣」を成しとるけぇ、その力を取り戻すにゃあ……今の炉をじゃきっと足らん」

「成る程……必要なものは？」

ふむふむ、成る程質の良い鉱石をダース単位？　成る程……

しばし離席

そして着席

走る、隠れる、掘る、んで死ぬ。

「ほれ、こんなもんでいいか？」

「なぁエムル、わちが希望した素材はこんな「ちょっと取ってくる」みたいなもんじゃったかの……？」

「おねーちゃん、「黄金の鱗は時の波に揺るがず」ですわ」

なんのこっちゃと詳細を聞いてみたら「どれだけの年月を経ても風化しないジークヴルムの鱗が風化する事を心配する者は愚かである」という意味らしい。こういうリアルには存在しない諺とかって妙に興味を引……おい待てそれは「俺がやる事はどうせ頭おかしいんだから気にするだけ無駄」と言いたいのか？　おン？

「エムル、後で傑剣への憧刃体験会な」

「ちょっ……ぶん投げるですわ？　ぶん投げるんですわ！？」

「放物線じゃないぞ、直線だ」

「直線！？」

便利、故に酷使。今日も今日とて傑剣への憧刃君には頑張ってもらうのだ。

なんというかクリティカルを外さない限り耐久が減らない、って時点で下手すりゃ勇魚兎月より便利なんだよな……まぁ攻撃的能力が無いからアタッカー的視点から見れば俺の保有する武器の中では一番大人しい武器かもしれない。

「……まぁ、なんじゃ。炉の強化にも時間がかかるけぇ、二週間くらい待ちぃや」

「あいよ、あぁそれとは別にこれとこれの強化もだな……」

あとついでに詫びとしてのエムル強化計画もするか、行くぞエムル

金に糸目はつけぬぞ！

そう、俺は金に糸目をつけない男。リアルだったら間違いなく貯金一択の小市民ではあるが、ゲームの俺は何億だろうが使う時はパーっと使う男なのだ。

ファステイア行きは後日、という事になった後。俺はフィフティシアのとある商会を訪れていた。

俺が所属するクランのとある人物のツテを利用した繋がりではあったが、ちょいとばかし我が「財」を見せてやれば半裸の鳥頭もＶｉＰ待遇というものよ。

「これはサンラク様、このような夜更けに……」

「開拓者故夜型の生活を送っていてな……例の彼は？」

「サンラク様がお呼びである、と伝えればすぐにでもこちらにいらっしゃるでしょう」

「そうか、では呼んでくれ……ここで待たせてもらっても？」

「勿論でございます、サンラク様は我が「黄金の天秤商会」のお得意様ですから」

それからしばらくして、商会の一室……曰く「王城の貴賓室にすら匹敵する」らしい部屋でマフラーに人参を食わせていると、コンコンとドアがノックされる。

「サンラク様、お連れいたしました」

「通してくれ給え」

「サンラクサン、見た目と言動がちぐはぐで笑っちゃうですわ……ぷぎゅっ！」

マフラーは喋らないんだよなぁ？　んー？　ちょっと黙ってような？

扉を開いて中へと入ってきたのは、随分とくたびれ、煤けた服を着た青年NPC。

筋肉質ではあるがどこか丸い印象が拭えない青年はオドオドと貴賓室を見回していたが、俺に視線を留めると慌てて頭を下げようとして……二度見した。

「え、なんで裸に……」

「気にしないでくれ、ちょっとした因縁によるものだ……君がノーマン、だね？」

「は、はい………その、黄金の天秤商会の方から、融資をしてい

ただけると、お聞きしたのですが……」

ドズン！　と貴賓室に置かれた質の良さそうな机が揺れる。俺がインベントリから取り出したものに青年……ノーマンの目が見開かれる。

丸顔の青年は俺の言葉など聞こえていないか、ゾンビのような足取りで机の上に置かれた美しく……そして巨大な宝石へと近づいて行く。

何せこれはこの青年が莫大な融資を注ぎ込んででも求めていたアイテムであり、現状こちらの大陸では地獄と同義である水晶巣崖を攻略しなければ入手できない宝石なのだから。

「ラピステリア星晶体……君が求めているものはコレだろう？」

「あ、あぁあ……こんな大きな……嘘だろう……？　まさか、一等星……！？　そんな、王家でもなきゃ、えっ……えぇ……？」

「話を続けても？」

「は、はひっ！」

ペンシルゴン流交渉術、交渉において己の手札は限界まで隠すか、必要以上に見せびらかすのどちらかが推奨される。

最初に最大級の情報を提示する事でその場における主導権を奪い取り、相手に譲歩を引き出させる。

気分は謎の強キャラ臭を漂わせる金持ちの足長おじさん、ちょっと前にこの商会でペンシルゴンの名前を出してどうにか「対価の天秤」を使えないかと交渉していた時にふと耳に入ったある話……是非とも一枚噛みたい。

「ノーマン君、俺は君の……そう、君が造っているものに非常に興味があるんだ……是非とも、詳しく話をしたいと思っていてねぇ……！」

俺は金に糸目をつけない男、五十億までなら出せるぜふはははは……！！

半裸の足長お兄さん（鳥頭）（後書き）

リュカオーンの刻傷（威圧感＋５０）
圧倒的資金力（威圧感＋２０）
商会のＶＩＰ待遇（威圧感＋１０）
圧倒的半裸（威圧感＋８０）
やたら目力が強い鳥頭（威圧感＋４０）

「仲良くしようぜぇ……！（威圧感２００％）」

ちなみに水晶群蠍が威圧感３００くらいです

お前そういうところだぞ（前書き）

悪党（ローグ）の仮面を被った、ライダー………！（非常に精神的につらい）
（スクラッシュドライバー勢も強化して）

今日は更新サボるつもりだったけど推しがつらいので初投稿です
なおタイトルは書いてる時に作者が思ってたこと

お前そういうところだぞ

「……それでですね、七体目のモンスターが人型の木のようなモンスターで」

「あー、もしかして妄執の樹魔(ルーザーズ・ウッド)ってやつ？」

「は、はい！　そうです、ご存知なのですか？」

「まぁね、俺が「招待」をクリアした時のラストがそいつだったんだ。あいつは杖を強奪すれば目に見えて弱体するよ」

「成る程……試して、みます」

爆弾発言事件があったせいで色々とゴタついたものの、なんやかんや今一番力を入れているゲームという共通を持つ同士であるからして。

順調にヴァッシュが課す課題を突破している斎賀さんと登校しつつのシャンフロトーク。

「あぁそうだ、後で旅狼のグループチャットにも流すつもりだったけど拠点の目処が立った」

「そうなんですか？」

「おうとも、前々からルストモルドへの協力報酬渡すためにクランハウスの設立は急務だったからなぁ……」

ルストとか「ロボ使えるようになったら呼んで」とか言ってログイン率露骨に低いし、その代わりネフホロには確実にいるので結構な頻度でボコられている。
装備縛りが消えたからか最近は精力的に新機体を試しているようだ、次は全身武器な機体で初見殺ししてくれようか……
「えと、その……ルストさん、とはどこでお知り合いに？」
「え？　あー……別のゲームでね、ネフィリムホロウってゲームなんだけど……まぁ割とマイナーゲームだったし」
「……し、知ってます。マネキンみたいなロボットに乗るゲーム、ですよね？」
「え、知ってんの？」
割とマジでビックリした。俺が驚きの目で斎賀さんを見つめると、彼女はどこか恥ずかしそうに目を逸らしつつも口を開く。
「その……操作方法に慣れることができず、ストーリーも半ばで放置してしまってるのですけど……」
「いやあれはしゃーないよ、対人のランカーとかは当たり前みたいに動いてるけどブースターの位置とか把握した上で自分の身体のように動け、ってシステム自体が人選ぶからなぁ」
新作を出すらしいけどそこら辺は改善するんだろうか、下手にプレイヤー寄りにし過ぎると世界観としての魅力が減るから１ユーザーとしては程よく動かしづらい辺りを望んじゃうな。

「あの、えと、その……もし機会がありましたら、ネフホロの操作とか教えていただけたり……」

「ん？　別に構わないけど……それならルストとかモルドの方が教師に向いてるかもしれないけど？」

最近知ったがモルドもモルドで普通にネフホロに適応したプレイヤーなんだよなぁ、本人のオペレーター適性がそれ以上ってだけで。

「久しぶりに操り手（パイロット）やるなぁ」とか言いながら新規を軽くあしらう様は強キャラ感があって凄かった、だがどうもちょっと前に俺が敢行した「対モルド封殺法」が新規の間にも広まっていたらしく、音声通信を迂闊に開いたモルドは相手プレイヤーが矢継ぎ早に繰り出すダジャレで自爆していた。

「まさかあの作戦をやってくるような奴がサンラク以外にいたとは」

との弁解をルストにしていたが彼は分かっているのだろうか。

かつて無敵を誇ったルストを支える右腕を効果的に封じる手段として、ランカーの殆どがそれを実行しようとしている事実に。

「いえ、あの……そ、そう！　陽務君とはこうやって会えますから、その……予定の兼ね合いとか……」

何故か顔を背けながらそう説明する斎賀さん、まぁくしゃみとかあくびとかそういうのを見せないようにする作法的なあれそれだろう。うちの妹はそんなこと知るかと言わんばかりに堂々とくしゃみするけど。

「成る程……俺でよければ付き合うけど」

「つっ……………………………ソウ、デスネ……いつか、

付き合っていただけましたら、その時に……」

なんだかもの凄い「間」があったが、斎賀さんって割と会話中にローディング入るしサイガー0の時もそうだったからそういう性質のお人なのだろう。

そして俺は拘束され、連行された。

「朝練帰りの陸上部を徴兵するのは卑怯だろ！」

「彼らは志願兵（ボランティア）だからセーフ、取り調べすっぞオラァ！」

自分の席に座らされた上で囲まれた俺は、忌々しげに取調官共を睨みつける。いざという時は雑ピの最新作「ラヴィニュー・ひまわり」を朗読して反撃してくれる……！

「実際のところ、お前と斎賀さんってマジで付き合ってんの？」

「いや別に？　共通の話題があるだけだって前も言わなかったか？」

「その共通の話題ってなんだよ」

「俺はほら、プライバシーの守護者だから……」

「俺のプライバシーは守らねぇじゃねーか！」

あ？　雑菌ピアスがほざくじゃねーか。

「黙れラヴィニュー・ひまわり」

「ラヴィニュー？」

「ラヴィニュー……？」

「ばっ……おまっ、どこでそれを……！」

「お前書きかけのポエムページ開いたまんまトイレ行ってるだろ、迂闊すぎんだよ」

席の位置的にお前が離席すると思いっきり見えるんだよ。

「――――きらめく太陽の光、僕は君に目を奪われたひまわり畑の一輪……」

「みんな、寄ってたかっての取り調べは人道に反すると思うんだ。このくらいにしよう」

「いいや違うぞポエマー、これは単に選手交代なだけさ……取り押さえろ！」

「な、なにぃ！？」

立場を逆転させ主導権を奪い取った俺が浮かべる笑みに顔をひきつ

らせる哀れな羊。さぁ、楽しい楽しい黒歴史暴露(ポエム朗読会)を始めようじゃあないか……！
とはいえスケープゴートで話を逸らすのもそろそろ限界だな……
なおポエムそのものは割と出来がいいんじゃないか、という結論になった。

◇

「おはよう玲」
「あ、おはようございます頼花さん」
「聞いたよー？　噂の彼氏さんと一緒に登校してきたんだってぇ？」
「かっ……！？　ち、違います！　そんな、えと、あう、その……そう！　友達です！」
「ふぅぅん……？　でももっと仲良くなりたいとか思ってるんじゃないのー？」
「それは、その…………………ハイ」
「マジか……これは波乱の予感がするわね」

「波乱、だなんてそんな……」

「玲がご執心ってだけで噂の彼の注目度が上がっ……待って玲、真顔で気（オーラ）を高めないで。クッ、素人でも分かる威圧感が……っ！」

「…………」

◆

最近観察されるような視線を多く感じるなぁ、と思いつつも下校。

ヒィヒィ言いながら走り込みしている陸上部（捕獲班）にもっと苦しめ……！　と邪念を送りつつ歩いていると、明らかに高級そうな車が俺の隣で停車する。

ていうか左ハンドルって外車？　え、なんで？

「あの、陽務君……」

「あ、斎賀さんか」

斎賀家のパワー（主にマネー的な）が物理的に顕現したかのような車に慄いていると、後部座席の窓が開いて斎賀さんの顔が出てきた。

「その、今週の土日……一緒に、シャンフロをプレイしませんか？」

「え？　あぁうんそれは構わないけど……」

何を今更、割と結構な頻度でログイン時に遭遇してる気がするが……あぁ、一緒に狩りをしようとかそういう感じかな？
「うんオッケー、あーでも確か新大陸行きの調査船が出港するのが日曜だっけ……？」
「……？　新大陸調査船に乗るんですか？」
「あーうん、クエストを受けてね……レイ氏、じゃないや斎賀さんってまだ新大陸には行ってないんだっけ？」
「そう、ですね……うん、多分大丈夫です。乗員リストにねじ込めるので私も、乗れます」
「へー、それは良かった」
……ん？　なんか会話の流れが一瞬バグったような、気のせいか？　まぁいいや。
「じゃあ土日に、事前にメールしておくよ」
「は、はい！」
しかしガチ廃人からのお誘いか……なんか散歩に行く気軽さでスローター提案してきそうだな、今のうちにライオットブラッド買っておくか？
非常に怪しい経緯で手元に届けられたもう一本のリボルブランタンはまだ飲ん（キメ）でいない。

まぁそんな、クターニッドクラスの相手と戦うことなんざそうそう無いだろうしな。

水晶群蠍はなんかもう慣れた。

お前そういうところだぞ（後書き）

・得間(えま)　頼花(らいか)

いわゆる「攻略対象の友達ポジションの非攻略キャラ」、塚原パイセンみたいなやつ

「皆斎賀さんばかり注目してるけど、俺はお前の魅力に気づいてるぜ……」的な人気が高く、実は潜在的な人気はヒロインちゃんより高い。ヒロインちゃんの人気が実は低い、というより２０ｔｈシークレットクレットレアが高すぎるから隣にあるシークレットレアで妥協する感じ。

理想のタイプは「俺様王子系」、金持ちならなお良し。ヒロインちゃんと噂になった主人公のことをいろいろ調べているが、闇が深いのは自分の隣にいるやつだという事実には気づいていない。

個人的にはアルティメットトレアが光り方的に一番好きなんですけど亜２０ｔｈシクとかお値段どうなっちゃうんですかねぇ……

ブリュンヒルデ・バスカヴィル三世（１４歳）

【旅狼】

サンラク：突然ですがアンケート

ルスト：アンケート？

サンラク：なんか適当にカッコイイ名前言って

ルスト：絶対零度（アブソリュートゼロ）

秋津茜：黒天無塵鎌（ノーブルー・サイスレント）！

オイカッツォ：血液感染（ブラッド・インフェクション）

鉛筆騎士王：ブリュンヒルデ・バスカヴィル三世

サンラク：誰それ

鉛筆騎士王：リアルでけったいな内容のファンメールを送ってきた子が名乗ってた名前

鉛筆騎士王：この私相手に超上から目線でアドバイスしてきた勇気を称えて三年後くらいに大々的に弄ろうかなって

サンラク：鬼かな？

京極：サンラクぅ……君も幕末の世界に戻ってきなよぉ……今楽し

いことになってるからさぁ……！

サンラク：幕末プレイヤーの誘い文句とか天誅予告と同義なんだよなぁ……

京極：あのリスポン地獄から抜け出すのにどれだけかかったと……！

京極：なんか忍者みたいなのに奇襲されるし！　全く身に覚えのない仇討ちのターゲットにされるし！

サンラク：あぁ、仇討ち感染か……あれ上手い人は数十人規模で巻き込むからなぁ

鉛筆騎士王：幕末キライ、あいつら会話能力を殺傷力に変換してるもん

オイカッツォ：世紀末円卓より「こんにちは！死ね！」がデフォルトな世界があるとは思わないよね普通

サンラク：どちらかというと「死ね！（意、こんにちは）」かなぁ

京極：それはそれとしてカッコいい名前……極（アルティメット）・将軍とか

サンラク：却下

京極：いつか絶対天誅してやる……！

モルド：というかなんのアンケート？

サンラク：実はシャンフロ内で高い買い物をしたんだけど買ったも

のにまだ名前が付いてなくてだな
ルスト：……何を買った？
サンラク：それは秘密

「どうしよう、このままだとブリュンヒルデ・バスカヴィル三世が最有力候補になりかねんぞ……」
くっ、肝心な時に使えない奴らめ。
とはいえ「完成」までにはまだもう少し時間がかかる、というのが設計者の言だ。
フフフフフ……こと鉱物資源という点で現状俺に匹敵するプレイヤーはそうはおるまいて。購入費と改造費込みで合計四十九億マーニもブッ込んだのだから、相応の働きはしてもらわねばなぁ……！

「あー……こういう金銭感覚狂ったショッピングは最高だな……」

「ほ、ほぁぁぁあ……！　アタシは今一億マーニを抱えているんですわ……！？」

積み上げられた魔道書を抱えながら喜びと荷重にプルプル震えるエムルを眺め、ふとロクに装備を強化していないなと思い立つ。つまり吉日なので即行動しよう。

「おーっしエムル、どうせならお前の装備も大々的に強化すっぞオラァ！」

「うひゃあサンラクサン最高ですわーっ！」

「来たる新大陸でも働いてもらわないといけないからなァ……！」

「うひゃあ……」

ははエムルよ、死んだような目をしてどうした？　どちらにせよ俺とパーティ組み続けるならリュカオーンやゴルドゥニーネとほぼ確実にぶつかるんだぜ？

折角の頭に乗る重さと大きさ、もっと活かしていかないとなぁ？

というわけで現在、懐かしの第一エリア「跳梁跋扈の森」に来ています。

「見ろよエムル、ゴブリンが泣き叫びながら逃げて行く姿ってレアじゃね？」

「リュカオーンに遭遇するモンスターってあんな感じですわ？」

「おいおい失礼な、それじゃまるで俺がモンスターみたいじゃないか？」

「うわっ！？　なんだこいつ、モンスター！？」

「と、鳥頭の……原始人？」

「レアエネミーだろ！　倒そうぜ！」

「プレイヤーなんだよなぁ……」

ちなみにこれで十二回目のモンスター誤認だ。このエリアのレアエネミーがヴォーパルバニーなせいでエムルが襲われかねないのでマフラーモードだ。

女体化聖杯はなんかもう単純に面倒なのと、ギルドに登録する時に性別が違うと不都合があるのではという予想から使っていない。

「あーなんか懐かしいなぁ、割と最近なはずなんだが遠い日の思い出みたいに感じる……」

「アタシはここを駆け抜けた頃のサンラクサンを知らないですわ。でも絶対それ以降の密度がヤバすぎるってことは分かるですわ」

「大体ペンシルゴンって奴のせいなんだよなぁ……いやマジで」

少なくともサードレマで阿修羅会に絡まれたのも、ウェザエモンを倒したことで面倒事に巻き込まれるのも………

「やっぱ分かっちゃいたけどあいつのせいだな」

「前々から薄々思ってたけど、サンラクサン元凶は自分じゃないって事を大義名分にしてないですわ？」

「ソンナコトナイヨ」

まぁでも困った時は「アーサー・ペンシルゴンにやれって言われました」という言い訳を切る用意は常に用意してるよ。

進むたびに初々しさを隠しきれないプレイヤー達とすれ違う。どいつもこいつもギョッとした目で半裸の俺を見てから「あぁ装備買う金もないんだな……」みたいな目を向けてくるが、むしろ俺と同じ選択をしたらしい半裸に馬頭のプレイヤーとすれ違った時の「友よ！」みたいな視線の方が個人的に堪えた。別に俺は望んで半裸ってわけじゃないからな！　望まざる半裸だからな！　いや、まぁ最初は見た目より金を優先して半裸になったわけだけど根幹にあるのは半裸願望じゃなくて金だからつまり資本主義万歳。

「さて、いよいよ到着だな」

「見えてきたですわ！」

きっと、こちら側からの光景を見るプレイヤーはそう多くはないだろう。
誰もが「一」から「二」へと進む旅路の中で、逆行するように開ける森の景色。その先に見えるは開拓者達が降り立ち、未知へと旅立つ足場となる最初の街。ともすればサードレマと同等かそれ以上の盛り上がりを見せるその街は名を「ファステイア」と言う。

「セカンディル以上サードレマ以下、ただし広さはサードレマ級ってところか……？」

「と言っても広場が多いから広い、って感じですわ」

もう新大陸に王手な状況で最初の街を初訪問、ってのも中々に感慨深いものがあるな……
新たな旅立ちの地故に栄えていたフィフティシアのような港町ではなく、三つの選択肢の前に立ちどまる場所として存在するサードレマのような台地の都市でもなく。
広さはある、建物もそれなりにある、だが絶妙に田舎臭い。なんというか若さに任せて飛び出したくなるような正しく「一番最初の旅立ちの街」という感じだ。

「す、すごいわちゃわちゃしてるですわ……！」

「これでも大人しい方っぽいけどな」

ともすれば大都市に匹敵する開拓者(プレイヤー)の群れ、夏休みシーズンとか相当ヤバかったと話には聞く。まぁ流石に一ヶ月以上この街に留まり続ける理由もなし、殆どのプレイヤーはセカンディルかサードレマを拠点としているだろう。

つまりここにいるのは文字通り新たに参入した新規だけでこの混雑っぷりという事だ。深夜帯であるというのにこの盛り上がり、この1%でいいから「便秘」とか「危牧」に分けてくれねぇかなぁ……クソゲーだから無理か。
スリリングファームはいいぞ、トイレに行くような頻度で核シェルターを使用する危険環境下での農業は「努力が必ずしも結ばれるとは限らない」という残酷な真理を作物の全滅という形で教えてくれる。それ以上に「適材適所の重要性」を知る事が出来るけどな！

「……エムル、静かにしておけよ？」

「はいなっ」

さて、傭兵ギルドに登録して「証」を手に入れたらさっさとオサラバして……いや何処だよ傭兵ギルド。
当たり前だが初めて来た街の何処に何があるか、なんて知る訳がない。とりあえず観光がてらファステイアという街を探索してみるか。

「成る程……新規で街が溢れかえるのは想定済みだからショップは大多数を想定した露店型なのか」

大量に押しかけてくるプレイヤーを捌くため、横一列にテーブルを並べてその上に回復ポーションやら薬草やらを並べたおばちゃん達が喧騒を押し返さんばかりの大声で客を捌いている。
中にはゲーム故の悪戯心で並べられたアイテムをスろうと手を伸ばす不届き者もいるが、明らかにＡＧＩの足りたはたき落としと睨みつけによって窃盗が未然に防がれている……いや待て瞬間速度だけならシルヴィア・ゴールドバーグくらいなかったか今の？　あのおばちゃん、出来るっ！

「…………兎が」

「……蛇が……」

「毒を……」

うーん、色々心当たりのある単語が漏れ聞こえてくる。どうやら既にこの街から飛び出し、そして死に戻ってきたプレイヤーも結構な数いるようだな。

このゲーム、一応跳梁跋扈の森がチュートリアルなんだろうけど普通に初見殺しカマして来るからな……思い出したらなんか腹立って来たぞあのクソ蛇、ヴォーパル魂ノルマが無かったらイジメに行ってもよかったんだが。ていうかアイツ、もしかしなくてもゴルドゥニーネの縁者じゃね？

「くっ、どいつもこいつも似たような装備しやがって……」

いやまぁ始めたばかりのプレイヤーが殆どであり、態々戻ってくる理由も薄い以上殆どがキャラメイクした程度の連中だ。
つまりせいぜい二、三種類の中から選ぶことになる初期支給の装備を着たやつばかりという事であり、多少のカラーリングの違いや装備の違いこそあるが、なんだろう……ヒヨコの性別を見分けるアレを彷彿とさせる。

「つまり逆説的に半裸こそが稀少性を持つアイデンティティを確立している……？」

お、凝視の鳥面だ。
強く育てよ新人、泥掘り(マッドディグ)で詰みかけるが回避特化なら終盤まで使え

る装備だぞ……

と、なにやら混雑的喧騒とはまた違う騒めきが目に留まる。

「なんだなんだ？」

長身アバターを生かして背伸びして見えたそれは、初々しさ剥き出しな新規の街にしては不釣り合いな慣れを感じさせるプレイヤーが相対している光景であった。

「勝ったた負けたたは二の次！」

「スク水は持ったな？」

「おうとも！」

「いざ尋常に……」

「「勝負！」」

いやマジで何してんだこれ。

ブリュンヒルデ・バスカヴィル三世（１４歳）（後書き）

多分三年後くらいに憤死する女子高生がこの世界の何処かに……おのれペンシルゴン！

・仇討ち感染
上級天誅テクニックと呼称されるもの。一定以上の戦力比によって「壬生狼側」「維新志士側」のどちらかが集団ＰＫされ、少数側の勢力に生き残りがいた場合発動する「仇討ち」システムを悪用した広域殲滅天誅。
敵討ちシステムが発動している間、生き残りプレイヤーは「戦闘エリアにいた敵対勢力側のプレイヤー」に対する戦闘時に大幅なボーナス補正を受ける事が出来る。
これを利用することで戦力比を意図的に偏らせた混戦を起こし、周囲にいる無関係なプレイヤーを強制的に「仇」に指定することで有利な状況で天誅を成功させる事が出来る。
維新志士側のランカー「戦争屋」がこの技術に長けており、本人の幕末性能の高さも相まってかの悪名高い「上空肉盾貫通型奇襲式袋叩き天誅」すらも迎撃してみせた、という記録も存在する。

要するに
戦争屋「お前あの時あの場所にいたから仇な」
京極「は？」

受け継がれる夢（前書き）

後書きが長くなったので３００話記念の設定吐き出しコーナーは次話で

受け継がれる夢

分からなかったら聞くに限る。

「なぁ、あれ何やってんだ？」

「うわ、ネタ装備だ」

おうテメーの貧相な装備よか防御力上だぞ。とはいえ嵩張って邪魔、という理由で星外套を外している今の俺は頭だけネタ装備にして初期装備を売り払ったニュービーに見えないこともないだろう。

まるで「端金のために半裸でゲーム始めるとかないわぁ……」とでも言いたげな視線を向けてくる新規プレイヤー……名前は「タンゴ」な、覚えたからなテメェ。こちとらほぼこの状態で狼やらタコやらを殴り倒してんだよ舐めん……いやそれはいいとして、恐らく大剣使いの傭兵と思しきタンゴは若干引いたような視線を向けつつも俺の質問に答える。

「あれって……えーと？　「なんとかちゃんを着せ替えたい」ってネタ連中だろ？」

「……あー、どっかで聞いた事あるかも」

ペンシルゴンがいつだったかに話してたような、確か幼女にビキニアーマーを着せて喜ぶ変態集団だっけか。

度し難いがゲーム故そういう手合いもいるよね、と軽く流していたがそうかあいつらがそうなのか……元々は賞金狩人？　とかいうシ

ステムが実装された事で結成されたクランらしいが中核にいるのが元ＰＫなんだっけか？

「確か意図的に街中でのＰＫを起こして賞金狩人を呼ぶ、だったか……」

「なんだ、知ってるじゃん」

「それを思い出すかどうかはまた別問題なんだよ、歴史のテストみたいなもんだ」

「ゲームの中でまで勉強の話はやめろよ……」

あーなるほど、こいつ「没入タイプ」か。ゲームとしてではなく本当に異世界の一員であるかのように楽しむプレイスタイルだ、無論否定する理由など存在しないが向こうから見れば半裸に覆面とかふざけているようにしか見えないわけだ。

「ははは、細かいこと気にしてると禿げるぞ若者よ。それより見ろよ、連中やっぱり対人上手いな」

賞金狩人って確かガチＴＡＳみたいな性能のＮＰＣだと聞いた、そんな奴をわざと呼び込む連中だ。当然対人に特化しているようだな、装備こそ貧弱だが動きは完全に廃人のそれだ。

木の棒と大差なさげな頼りない武器も、熟練の使い手が握れば立派に武器として輝く。

片手剣と盾、というシンプルスタイルなプレイヤーが相対する槍使いの猛攻を盾で対処し、的確に間合いを詰めて攻撃を加える。だが槍使いとて己の長所と相手の短所が噛み合わないことは承知の上、

互いに武器をぶつける以上に有利な間合いを確保する戦いと言えるだろう。

「なんでスキルとか使わないんだ？」

「あいつらにとっちゃ前哨戦だからだろ、本命相手に温存してるんじゃゃね？」

間合いは槍使いに有利、だが満を辞して放たれた必殺の一突きは真正面から攻撃を盾で受け止める、という中々に無茶な対処によって受け止められた。
片や覚悟を決めた上での受け止め、片や必殺の一撃を防がれた空白。
決着は必然であり、片手剣の刃が槍使いの首に深々と突き刺さり、派手なダメージエフェクトと共に勝敗が決した。

「くっ……裸エプロンの夢、が……」

「強敵よ、裸エプロンはむしろルティアさんに似合うと思う」

「俺的にはティーアスちゃんでもルティアさんでも大勝利なんだなこれが………夢を託すぞ……っ！」

そして砕け散る槍使い、片手剣使いのネームが赤に染まりＰＫの烙印が押される。
シャンフロに搭載された「カルマ値」システム、それは街中でのＰＫにおいては非常に高いペナルティが下される。

「おっ、一人抜きで出て来るか運が良いな……おい来るぞ！」

「トゥールはやめろトゥールはやめろトゥールはやめ………」

何故か祈り始めた片手剣使い、トゥールとやらが誰だかは知らないが果たしてそれはまるで空から降って来たかのように片手剣使いの前へと着地した。
トッ、と降り立つ音は軽く、細身であろうその狩人はまるで素肌を晒すことを禁忌としているかのように、分厚いロングコートにフードを目深に被った上でマフラーで口元を隠す徹底ぶりだ。暑くないかそれ？
だが確か……そう「ティーアスちゃんを着せ替え隊」のメンバーとしては現れた人物は歓喜に値する存在であったらしい。
「ルッ………」
「「ルティアだぁぁぁぁぁ！！」」
「おいゴズマンドラって何持ってた」
「馬鹿野郎ルティアさんにはメイド服だって語り合ったじゃねーか！」
「まだ間に合う！　交換するぞオイ！」
「ごめん皆、俺はルティアさんにスク水着せてもいいと思う！！」
「貴様ァーッ！？」
あー………クソ、楽しそうだなぁ。ＰＫペナルティがメリットでしかない以上あいつら無敵じゃん……
とはいえ俺の場合ＰＫペナルティはペナルティのままなので観戦することしかできない、ので現れた賞金狩人とやらの実力を見せても

らおうか。

「…………」

無言を貫く賞金狩人（バウンティハンター）ルティア、その両手に持っている物はなんだろうか？　トンファーの棍部分を刃物に変えたトンファーエッジ？　ブレード？　とでも言うべき代物か。

カテゴリは双剣か？　いや属性的には斬撃で武器種的には打撃って可能性もあるか？

静かに構えを取るその姿に未知の武器を持て余しているような気配はない、まるで己の一部であるかのようにトンファーエッジを構えたルティアが片手剣使い……ゴズマンドラへと襲いかかった。

「くっ……！」

「オラッ！　さっさとくたばれ！」

「うるせー！　挑戦くらいさせろよ！」

「俺もルティアさんにスク水はいいと思う！」

無装備状態、つまり俺より装備品が少ないゴズマンドラが消耗した盾を取り替えてルティアの強襲に立ち向かう。

だがＴＡＳみたいな性能、という表現は誇張でもなんでもないらしい。左右一振りずつのトンファーエッジ、その切っ先をくるりと回せば刺突武器となる。またその逆として柄尻を叩きつければ打撃武器となる。

精神的なブレが一切存在しない、常にタイプ変更し続けるシルヴィア・ゴールドバーグとでも形容するしかないバトルスタイルを常に最適解で維持し続ける。

「運営からのＰＫを絶対に処理するという固い意志を感じるな……」

「あの武器強そうだな……」

おぉタンゴよ、目標を作るのは良い事だぞ。モチベーションは大事だ、それを達成するまでは大抵のクソゲー要素にも耐えられる。

やっぱりメイスからトンファーに派生してトンファーエッジになるのか？　明らかに双剣っぽい対刃剣が短剣二本からの派生だからなぁ……うーん、ビィラックに聞いてみるかな。

「くっ……やっぱつえぇ……ぐわっ！？」

「スクショオ！」

「今の美脚撮影したかスクショ担当！」

「三機体制（バッチリ）だ」

「流石はローアングラーだ……」

「ゴズマンドラが思いっきり吹っ飛ばされたことに誰か突っ込んでやれよ」

そうだな、ゴズマンドラ氏は派手に吹っ飛んだな……俺たちの方に。

「あぶねっ」

「蹴りいっ！？」

「うわっ！」

ルティアとやらは恐らく女キャラなんだろうが、見た目と実際のSTRは別物であるらしい。いきなりの事に声を上げて硬直したタンゴ君をよそに、中々の速度でこちらへ吹っ飛んで来たゴズマンドラ氏を足裏で受け止める。

「Heyミスター、リングアウト的なルールはあるのかい？」

「すまん助かっ……てねぇ！」

「ん？」

おや、見上げた先に上空からトンファーエッジをクロスさせてトドメを狙う賞金狩人の姿が。

あれ？　これ軌道的に下に落ちて、刃を振って、慣性が働いて……うん、俺とタンゴ君が巻き込まれるな。

「なぁマンドラゴラ」

「あ、うんゴズマンドラな？」

「このゲームって正当防衛的な処理ってある？」

「は？」

傑剣(デュクスラム)への憧刃を取り出し、真上からの「死」に対して迎撃を選択。トンファーエッジは切っ先を前へ向けた斬撃モード。物理演算に従い致命傷を齎すに足りうる重量の振り下ろしを、二の足踏み締め真っ向から受け止めて弾き飛ばす。

うーん、重い。というか少し体力が削れたわSTRがもう少しあったら耐えきれたかな？

「観客巻き込んで場外乱闘は良くないぞ、リングに戻って戦え」

TAS故の理想的斬撃で助かった、こちらも受け止めやすいからな。さて、状況だけ見ればPKを庇った形になってしまうわけだが正当防衛だし大丈夫だろう。ほら、タンゴ君という庇われた証人もいるわけだし。

…………うん。

「…………」

「…………ちょっと待て、俺は一度だって殺しはやってないぞ。誓ってもいい」

突きつけられたトンファーエッジの切っ先は、真っ直ぐ俺を指し示していた。

まるで「構えろ」と言わんばかりの様子に俺の周りにいたプレイヤー達は距離を離し、ぽっかりと開けた人を輪郭とする円は新たなリングを作り出した。

「いやなんで俺が狙われて……」

「なぁあんた……」

「ん？」

そうだよなゴズマンドラ氏、君はルティアをスク水にするという大

切な使命があるのだからさっさと立ち上がって……アイテム譲渡申請？

「よく分からんが……俺たちの夢を、叶えてくれ……っ！」

・隔て刃の撥水着（すくぅるみずぎ）
ゴンブトリオン作、高い防水性能を持つ胴装備。
製作者コメント：装備した者の名前が名札に平仮名で表示される機能の搭載に成功しました！　どうか俺たちの夢を叶えてくれ……！
　Ｂｙゴンブトリオン

こんなクソみたいなバトンタッチ、中々経験できませんよこれは……

受け継がれる夢（後書き）

・隠し職業「？？？」取得条件
条件１：隠しパラメータ「歴戦度」が一定以上であること（ヴォーパル魂の人間版みたいなパラメータ）
条件２：組織的なしがらみのない「無所属」であること
条件３：ＮＰＣ職業「賞金狩人（バウンティハンター）」との対戦で一定以上の結果を出す事
条件４：カルマ値が１０以下である事（ちなみにエリアＰＫでカルマ値＋５０、街中ＰＫでカルマ値＋１００）

ちなみに条件2は後天的に達成する事は可能です。通常、ギルドから脱退する為には他のギルドに所属してメインジョブを変える必要があります。つまりメイン職業を変えることこそ容易いものの、後天的な「無職」になる事は結構難しいのです。

ですが、ジョブを維持したまま無所属になる方法もあります。各街に存在する自身が所属する組合（ギルド）のＮＰＣ（ギルドマスター）を全員殴り飛ばせば素行不良として除籍処分になれます。ただそれだとカルマ値が結構溜まるので教会で懺悔連打すればジョブを維持したまま無職になれるのです。
カルマ値１００以上だと教会から門前払いされるのでＰＫの常習犯が懺悔で罪を軽減させる、的な事は出来ません。ＰＫｅｒが行くのは懺悔室ではなくブタ箱ということです

つまりＲｅ（リ）：ストラから始まる裏稼業生活……！

尚、ゴズマンドラが嫌だ嫌だと言っていた「トゥール」さんは呼び出し事故の結果、メイド服を着せられたゴリゴリマッチョの渋いオッサン賞金狩人です。ＶＩＴオバケなので軽戦士だとカスダメすら怪しい物理耐久仕様

就職活動は波乱の連続

「クソが……っ！　よく分からんが喧嘩を売るなら買ってやるよオラァ！」

ＰＫなんてしてないからペナルティはないよな？　ないですよね？　ないと言ってくれ。

とはいえ賞金狩人と戦えるというのなら、せっかくの機会を逃すのも惜しい。ペナルティがあるかもしれない懸念は未だ拭えないがやってやろうじゃないか！

「おいタンゴ、ちょっとこれ持っててくれ」

「え？　お、おう……なんか妙に暖かいなこのマフラー」

タンゴの手に乗せたマフラーがびくりと一瞬動いたが頑張って擬態していてくれ、流石にエムルを庇いながら戦うのはキツイだろうし。傑剣への憧刃を構え、人の囲いが形成するリングの真ん中へと静かに移動する。

突然のターゲット変更、それもＰＫとは無関係のプレイヤー。想定外の展開故か、クラン「ティーアスちゃん着せ替え隊」の連中が突然の闖入者たる俺を咎めたりするような事はなかった。

つまりこの瞬間、俺とルティアのタイマンは成立したと言っていいだろう。互いに無言のトンファーエッジと片手剣二刀流が対峙、数多の視線が向けられる中で俺と賞金狩人ルティアによる相対が静かに始まった。

「…………」

「…………」

さぁどうしたものか。互いに二刀、恐らくルティアはＴＥＣが高い近距離戦士だ。トンファーエッジは切っ先の向きで間合いが切り替わる、ＴＡＳ性能ともなれば戦闘中に目まぐるしく切り替わると見て間違いない。

対するこちらは機動力特化、一発でも喰らえば瀕死間違いなしだがそれ故に回避系の性能が高まっている。

ヒットアンドアウェイで確実にダメージを稼ぐかそれとも一気呵成に攻めて攻めての押し切りで行くか……おっと向こうが先手を取ったか。

「………！」

「うおっと！」

的確に首を狙った横薙ぎ。拳を掠らせるようなインファイトによる先制攻撃に対してこちらは身体を屈めての回避で応える。

首狙いの最速攻撃と言えばウェザエモンの「断風（たちかぜ）」を思い出すがあれは速度が極まった単一の奥義だったが、こちらはすぐさま次の技

に繋がるコンボの一部だ。

「それは読めてた……ぜっ！」

横薙ぎの勢いをそのまま維持し、むしろさらに加速することで放たれたもう一方のトンファーエッジによる回転斬りが襲い来る。
それに対してこちらも負けじと傑剣への憧刃を叩きつけての鍔迫り合い。若干対応が遅れたのかクリティカルの手応えはなく、ＳＴＲのぶつかり合いによる拮抗はこちらの力負けという形で崩れる。

「ぐ、く……こなくそっ！」

パラパラ漫画のような、１ページ１ページがが連続することで一つの動きとなるようなモーションコンボが流れるように俺を襲う。
単一の攻撃で迎撃を終わらせるな、奴の武器はトンファーエッジだけではない。武器の振り終わりに生じる隙を潰すかのような脚技は喰らえばコンボの起点にされるだろう。

無理にクリティカルを狙えばそこを起点としてつけ込まれかねない、故に傑剣への憧刃の消耗を覚悟の上でルティアの猛攻を受け止め流す。
ダメだな、足を止めたらジリ貧だ。一瞬の隙を逃さずスキルを起動し、攻撃のターンをなんとか奪い取る事に成功した。

「っしゃオラァ！」

スキル起動、一気に速度を上げた一撃をルティアへと叩きつける。
防がれこそしたが攻撃主導権を握っている限りはまだ動ける、叩きつけた傑剣への憧刃を逆手に持ち替え縷々閃舞を起動し多段ヒットでルティアの攻勢を押し止める。

だが流石は賞金狩人と言うべきか、果たして奴が選んだ選択肢はダメージをある程度許容した上での主導権奪取であった。

「……」

「ぐ、ぬぉ……っ！？」

二刀流は即ち「剣」の間合いだ、だがルティアはさらに距離を詰めることでトンファーエッジによる「打撃」の間合い……即ち超至近距離（インファイト）に持ち込んできた。

脇腹に一閃を掠らせつつも肉薄した鳩尾狙いの左打撃を回避、避けた先に置くように放たれた顎を揺らさんと放たれるフックを仰け反るように避ける。

あぶねえ、仰け反りが足りなかったら文字通り顎を割られていた。

「んの……っ！」

本来であれば勢いが足りずに青天井に倒れるところを、スキル補正による補強で無理矢理のバク転。サマーソルトキックでルティアに無理矢理距離を取らせる。

派手な動きの応酬に周囲からおぉぉっ！　と声が聞こえるが応える暇はない。

四つん這いに近い前傾姿勢のまま、クラウチングスタートを切るように前へと飛び出す。

「正当防衛！」

「……っ！」

腹狙いの突きをトンファーエッジが払いのける。だがそれはブラフ

だ、フォーミュラドリフト起動と同時に攻撃的転用！
独楽のような回転を伴った鋭い回り込み、加速した足払いがルティアの足に命中し、そのバランスを崩……していない！　跳んで避けた！？　嘘だろやっべぇ！

「のぉぉおお！！？」

フリットフロートによる、まるで平泳ぎのような超低空での虚空蹴り、プールで壁を蹴って加速するようにその場から跳び退いた俺がいた場所にトンファーエッジが突き立てられる。

「………！」

ザリザリと地面に線を引きながら俺を追う刃、喰らえばブツ斬りにされるだろう。

一回転目は地べたを転がるように。

二回転目は肘を立てて身体を浮かし。

三回転目で剣を握った拳を支えに勢いをつけ。

そして四回転目で勢いよく回転しながら起き上がる。

「うおおおお頑張れ俺の三半規管んんん！！」

グラつく視界、ふらつく足を叱咤して地面に二本の線を描いて放たれた斬り上げを二刀の交差で受け止めた。
膂力に劣る俺では受け止めきれない、だが遮那王憑きはまだ継続している。ギャリギャリと刃物同士が火花を散らしつつも、同時に行

ったバックジャンプでかろうじて致死圏内からの離脱に成功する。

「………」

「………」

互いに無理な挙動のツケを支払った事による硬直、息つく暇なく繰り広げられた怒涛の応酬に僅かながら休止符が打たれる。

「……ふはぁ」

緊張の糸が緩んでしまわないよう、わずかに吐き出した吐息。ふと周囲に耳をすませば同様に息を吐く音がいくつも聞こえる。

「……ちょっとタンマとか」

「………！」

「だよなぁ！　クソがっ、死ねオラァ！」

賞金狩人と、突然の指名により相対の舞台へ登った謎の半裸の激突。予想外という言葉では足りない応酬に、この場にルティアを呼び込んだ張本人たる「ティーアスちゃんを着せ替え隊」のメンバー達もまた固唾を飲んでいた。

「うっわあんだけ動いてほぼノーダメかよ……」

「サバさん並に強くね？」

ファスティアは一番最初の街であり、つまりはスポーン地点でもある。故にキャラメイク時点で装備を売り払った無装備状態のキャラを見かける事はそれなりに多く、半裸にキャラメイク時点で選択可能な覆面を被ったそのプレイヤーは「始めたばかりの新規である」と誤認していた者達も一連の動きでそれが間違いであると気付いていた。

「どういう事だ、初心者に擬態してた？」

「意味がわからん、ファステイアでハイレベルなプレイヤーが擬態するメリットとかないだろ」

「てかルティアさんの鬼コンボ対処しきる奴サバさん以外で初めて見たわ」

「おう、呼んだかよ」

「あ、サバさんインしてたんすね！」

挙げた名前に対しての返答、着せ替え隊のメンバーが振り向いた先には状況を掴めていない表情で立つ一人のプレイヤー。

「リアルのゴタゴタがようやく片付いてな……ってアレ誰だ？」

「いやそれが、ルティアさん呼べたのはいいんスけど……なんでか関係ないプレイヤーにヘイトが切り替わりまして」

「は？　あれウチのメンバーじゃねーの？　誰だよ」

至極もっともな疑問、故に問われたプレイヤーは当たり前のように答えを返す。

「さっきちらっと見ましたけど……確か「サンラク」って名前の……」

「今何つった？」

「え？」

だからこそ、少々粗野ではあるが兄貴肌なその人物の気配がガラリと変わった事に呆けてしまった。

「サンラク……だぁ？」

まるで獣のような尖った、それでいて不思議なことに喜びの気配も入り混じっているように思える眼差しで鳥頭の半裸を見つめる女キャラ（中身は男）のプレイヤー……「サバイバアル」

そして、恐らく問われたプレイヤーだけが聞き取れた、サバイバアルがポツリと呟いた言葉。しかしその意味を理解することはでき

なかった。

「まさか……μ（ミュー）鯖の？」

それがどんな意味かを問うよりも先に半裸の鳥頭と賞金狩人ルティアが再び激突、疑問は熱狂に押し流されて消えた。

就職活動は波乱の連続（後書き）

３００話記念設定吐き出しコーナー、お口チャックがゆるゆるガバガバなので今回は割と核心的ネタです、一応無粋なネタバレを好まない方はお手数ですがスクロールせずにページを閉じるか次の話に行っていただきますよう、よろしくお願いします

実は感想欄で当ててる人結構いましたね

狂える大群青：白血球
貪る大赤依：赤血球
？てる大白？：血小板
？？？？？？：血漿

つまりそういうこと
ぶっちゃけますが色自体は特に関係ないです、あとブロッコリーさんはカテゴリ的には同じだけど仕組みが違います。あっちは足し算系、こっちは掛け算系

含有するマナの多寡で活性化ｏｒ非活性化する為、「――――」達とマナとの間に割り込んだ菌糸類（スポンジ）が消えたなら、マナを集めて燃や

す生きた焼却炉（神代の切り札）が弱体化したなら……それが第四段階

以前言った気もしますが拙作は某異質な剣の物語の影響を受けまくりなので……丸パクリにならないようオリジナリティを出していく所存です。

気づけば話数は三百を超えてまだ予定の半分にも至らず、文字数も百万を超えており編集画面を開く間にティアマグ殴り倒せるくらいですが、頑張ってペースを維持したい所存です。

これからも拙作をどうかよろしくお願いいたします。

セツナノコウサ（前書き）

３０１話のネタバレあとがき対策の連続更新

セツナノコウサ

「……」

「こ、なくそぉ！」

くるり、と鋒の向きを反転させた一撃が的確かつ確実に俺の首を狙う。

傑剣（デュクスラム）への憧刃を叩きつけるようにして俺を殺す為の刃を弾き飛ばし、それすらも囮であると言わんばかりに胸の中央へ突き出されたそれ……トンファーを斬撃武器にしたような奇妙な武器をスキル総動員の回避で逃げ延びる。

「……」

「クソッ、只でさえ集中力が削れるってのに……！」

役割模倣（ロールプレイ）：龍宮院富嶽をフル稼働し、クリティカルさえ出せば無敵と言っていい傑剣への憧刃を半壊させてなお圧倒的に俺が不利。

周囲で野次を飛ばしていたプレイヤー達も諦めムードが漂っている。クソが、こんな……こんな意味のわからない理由でキルされてたまるか！

守りに回ったら死ぬ、攻めながら受け流す。畜生カフェインが足りてないんだよ頑張れアドレナリン！

飛び抜けて速いわけではない、だが武器にとっての理想的最適解を常になぞり続ける姿はまさしくＴＡＳと言うべき鬼挙動で俺を仕留めんと閃きが舞う。

くるり、と鋒を後ろへ。トンファー型に戻った事でパンチという選択肢を増やした敵の攻撃がより多彩になる。
だがそっちは実質拳射程……ありがたい、まだ活路は途切れちゃいないようだ。

「立て直した！」

「うぉー、すげー」

ガヤガヤうるさい、ＢＧＭならもう少し旋律に気を配れ。気分的にはロックな感じの音楽を聴きたい……あぁダメだ、聴覚封じたら多分死ぬ。

「つーかっ……俺っ……なんか悪い事っ……したかぁっ！？」

泣き言で気が緩んだか、不覚にも弾かれ吹き飛ぶ傑剣への憧刃。
ならばと強制的に空けさせられた手でウィンドウを操作しつつ、片手の一本でこちらを刈り取りにくる乱舞へと対処する。

普段は気にもしていない武器の展開速度、今は怒りすら感じる遅さにしか思えない。
七日経過していないので超過機構は使えないがそれでも有能な冥王の鏡盾でトンファーエッジの攻撃を迎撃しながら前へと踏み出す。
喰らえ一人ファランクス！

「………っ」

目深に被ったフードに口元を隠すマフラー、表情を伺うことは出来ないがこれだけ持ちこたえて尚その動きに焦燥などの感情は見られ

ない。
文字通りＡＩってわけかい、ますます俺が集中的に狙われてる理由が分からないのだがここまで持ち堪えて「しゃーない勝てそうにないから負けるか」というのはなんだか無性に悔しい。
それはここがシャンフロを始めたプレイヤーのうち殆どが一番最初に降り立つことになるであろう街……ファステイアであり、今死ぬと別の街でリスポーンする事になるからか。
それとも初心者の街であるが故に大量の新規が観客として俺を見ている中で負けるのがなんだか気に食わないからか。
発端なんぞ何でもいい、兎にも角にも今の俺の中で燃えるこの衝動は「負けたくない」と叫んでいるのだ。
「うおおお意地でも五秒くらい時間を貰うぞぉぉお！」
元よりユニークでもなし、隠す理由ももはや無し！　押し込まれる一方であった戦局を死を覚悟した力技で無理矢理押し返した空白の一瞬、手袋に包まれた右手をきつく握りしめて拳を胸に叩きつける。
「そっちが先に喧嘩を売ったんだ、ぶっ飛ばされてもキルペナつけるんじゃねーぞオラァ！」
「…………っ！」
黒雷を纏い、最適最速の攻撃すら上回った俺の挙動に敵は……賞金狩人（バウンティハンター）「ルティア」が初めて動揺したように身体を震わせた。

何故俺が執拗なまでに狙われるのか、何故観衆の中で突っ立ってぃるゴズマンドラ氏を放置してまで俺を狙うのか、その理由を話せと叫びたいが賞金狩人はただ無言のまま襲いかかってくるだけだろう、であればこちらも全力全開だ。

「フルスロットルだ、性能差（ステータス）で技量差を超えてやる！」

瞬刻視界起動（モーメントサイト）、スローモーションの世界で己だけが加速する特権を行使してプランB「一気呵成の押し込み」を敢行する。

スタミナがあっても精神的な疲労はごまかせない、カフェインによるブーストがない以上より短期の決着で決めなければ削り潰される。故にこそ短期決戦、一秒を限界まで引き伸ばして一瞬に全てを賭ける。

「ブッこ、ろ……」

だが逆に言えばそれは、考える時間をも削った諸刃の剣ということ。だからこそあまりに単純な「事実」に俺は今気づぃた。

「…………」

目が、合った。

加速する思考、スローモーションになった世界の中で賞金狩人の目が確かに俺の動きを捉えてぃた。

フードとマフラーの隙間、サファイアを思わせる蒼ぃ「目」がまるで自ら輝く恒星のように光を宿している。きっと俺の目も同様のエフェクトが発生してぃる。

それは瞬間を刻む世界を捉える目、フレームを見逃さない眼差し。

NPCとて魔法やスキルを使うという簡単な事実、俺と同様に「瞬刻視界(モーメントサイト)」の効果を受けたルティアの口がゆっくりと動く。

こちらの攻撃が届く……寸前。須臾の一瞬(フレーム)を残してルティアは確かにこう呟いた。

「――――「超速(マッハ)」。」

黒い電光石火、と、音速の衝撃波、が、交差して…………頭の中で火花が散った。

「……………っ!!?」

嘘だろ意識トンでた！？　ていうかリスポーン……してない！　生きてる！？

「っ……ぶはぁ！！」

ダメだ、完全に緊張の糸が切れた。

かろうじて動く右手で胸を叩いて封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）の効果を切り、支柱を欠いた塔が崩れ落ちるかのように膝をつく……事にすら耐えられない身体は崩壊した瓦礫の山が更に崩れ落ちるように尻餅をついてしまう。

あまりに隙だらけな、緩慢な動きで振り返るとそこには必殺の一撃を振り抜いた姿勢で止まる賞金狩人と……

六等分に断ち裂かれたヘイトの虚像（ウツロウミカガミ）の姿があった。

「我ながら、よくやった……か」

あの一瞬で、直感と無意識が選んだ選択肢は全ての速度を注ぎ込んでのヘイト分離、すなわち「責任転嫁」であった。

スキルなのか魔法なのかは知らないが、瞬間速度だけなら封雷（レビントリ）の撃鉄（ガー）・災（ハザード）と同等……いや、それ以上だった「超速（マッハ）」なるアレから逃れる。ただ横に逸れただけでは捉えられる、故にあの一瞬で限界を超えて駆け巡ったニューロンの判断をウチの業務用マシンは読み取っ

てくれたようだ。

「あーダメだ、もう動けん」

エンストだ、再起動までに三十回は死ねるな。それとも幸運の食いしばり乱数を信じてクソロシアンルーレットでもやるか？　女神様に媚び売らなきゃ。

「…………」

「……あー、示談金で許して？」

最近の死神は鎌じゃなくてトンファーを使うらしい。あんだけの速度を出していたというのにピンピンした様子の賞金狩人はじっと俺を見つめ……

ヒュンッ！

「うぇぽぁっ！？」

目にも留まらぬ速さで投擲されたナイフは俺……ではなく、間抜けな顔をして俺と賞金狩人ルティアの戦いを見ていたゴズマンドラ氏の喉に命中。体力を回復することを忘れていたのか、投げナイフの一撃で体力がゼロになったゴズマンドラ氏が爆散エフェクトと共に消滅した。

ばら撒かれたゴズマンドラ氏のアイテムを一瞥し、舌打ちした……うん、今確かに舌打ちしたな。「時化たアイテムだなオイ」とでも言いたげな舌打ちだった。

「…………」

迅速かつ鮮やかにターゲットを始末したルティアはロングコートの中から何か……カード？　のようなものを取り出すと尻餅をついてへたれる俺へと投げつけた。
そして顔を俺の耳元に近付けると……

「……カフェ「蛇の林檎」、合言葉は「林檎の花に誘われて」。」

「あ、そこ割と常連だわ……」

化けの皮を何枚も被ったペンシルゴンのような背筋に電流を走らせる囁きを残し、賞金狩人はコートの裾を翻した。
ツカツカと歩いたルティアは地面に散らばった故ゴズマンドラ氏のアイテムを指パッチン一つで回収すると、颯爽と去って行った……

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

沈黙。

この場の状況を知らぬ喧騒は遠く、この場で起きたことを目撃した者達はただ言葉もなく静まり返る。

さて、どう動く？　俺の一挙一動、それこそ「トイレ」と呟いただ

けでもこの静寂は崩れ去るだろう。

「………（スッ）」

俺は立ち上がりつつも「まぁ落ち着け」とゼスチャーを行う。そして先程までの引き気味な視線などどこかにすっ飛んだ様子のタンゴ君からマフラー（擬態解けかけ）を受け取り、フッと笑い……

「あーっ！　あんなところに夜襲のリュカオーンがぁあっ！！」

全力で逃げた。

アイニード女子力ぅぅぅぅぅぅ！！！

セツナノコウサ（後書き）

スキル「超速（マッハ）」
加速と認識、二種類のスキルを複数連結した超加速スキル。圧倒的な速さを実現する代わりに、使用後は一定時間「疲労硬直」状態となる。
尤も、音速の世界から帰還した者に追いつける者はそうはいないであろう。
なおルティアさんは賞金狩人の中では二番目の速さ、一位？　そりゃあ勿論……

スキル「参撃陸斬（サンゲキムザン）」
賞金狩人「ルティア」の切り札、かの絶技「断風（たちかぜ）」……とまでは行かないがそれでも認識すら困難な速度で繰り出す三連撃。その威力は如何なる者であろうと六等分に断ち斬ってしまう程鋭く、速い。
対象が「無防備（文字通り防御を備えているかどうかを参照する）」である程装甲貫通力が増す為、前述の「超速（マッハ）」とのシナジーが非常に合致している。

クソが、このクソ田舎街隠れられる場所が少な過ぎるぞクソが。

「エムルぅ……予定変更、流石にこの状況じゃギルド登録は無理だ」

「きゅー……」

「ウェイカップ！」

「ふぎゅっ！？　お、おはようですわむぐぐ！？」

「アーンド、クワイエットプリーズ……？」

女体化と高速着替えを経て人混みにダイブしての逃亡。揉みくちゃになりながらの逃走劇に目を回していたエムルをチョップして起こし、大声を出そうとした口を塞ぐ。

今俺はファステイアの出口、すなわち跳梁跋扈の森へと続く門の前に来ていた。

既に俺が逃走した背後で爆発した熱狂の余波はここまで来ているらしい、なんだなんだと騒めき始めたプレイヤー達に気取られぬよう俺自身も「なんか起きたの？　ぱなーい」とでも言いたげな態度をとりつつファステイアからの離脱を試みる。

「いいかエムル……ラビッツだ、兎にも角にもラビッツに逃げ切ればあとは寝るだけだ、そうだろう？　脱兎の如く、だ……」

「は、はぁ……」

大丈夫、サンラ子の事を知る者は少なくともこの街にはいねぇ。インベントリアでほとぼりが冷めるまで退避も考えたが、何時間格納空間にいれば良いのか分かったもんじゃない。

畜生恨むぜ神ゲー、深夜帯だってのに何でこんなにログインしてる奴がいるんだ……明日が土曜日だからかクソが。

「いいか、背景に溶け込め。ありふれた日常の一コマ、俺たちは街を去るご令嬢だ……」

「……サンラクだな？」

「ぽひょっ」

口から心臓出るかと思ったわ。

「いやいやいや、ワタシサンラクじゃなくて「サソラワ」ですわ。人違いですわ」

「アタシの真似っこぶぶぶ」

しゃらーっぷ！

俺の心臓を鷲掴みにするような低い男声、にこやかに振り向くとそこには声とは真逆の荒々しさと凛々しさが両立した茶髪をポニーテールにし、鼻から左頬へと走る傷ペイントを顔に刻んだ女キャラが歯を見せる笑みで真っ直ぐ俺を見つめていた。

「あぁ気にすんなや、一個だけ聞きたい事があるだけだ。黙って見送ってやるからそう警戒すんなよ」

「……で？　何が聞きたい？」

「俺は「φ鯖」の「バイバアル」だ、お前は「μ鯖」の「サンラク」か？」

「！！！」

口から心臓が飛び出たかもしれない。

問いと同時に送られて来たフレンド申請。言わずとも分かる、このサバイバアルからのフレンド申請への返事として表示された「YES　or　NO」が答えとなる。

「……孤島からの「生還者（サバイバー）」ってか？」

「応よ……まさかこんな偶然があるたぁな……！」

何てこったい、初対面だなんてとんでもない。

俺とこいつは会ったことがある。フレンド申請を受諾し、ただ無言で視線を交わす。これまで別ゲーの知り合いと再会したことは何度かあるがこれは別物だ、サバイバル・ガンマン……鯖癌。それも「ギリシャ文字鯖」の連中は単に同じゲームをしていただけ、で片付けられるほど単純な関係ではないのだから。

「積もる話もあるが……大分ごたついて来たからなァ……一息ついたら連絡をくれや」

「オッケー」

にまりと笑みを交わし、何でもないかのように別れる。どうやら「

ティーアスちゃんを着せ替え隊」のメンバーと思しきプレイヤーがサバイバアルへ話しかけていたが、うまいこと足止めしてくれたようだ。

「サンラクサン、お知り合いですわ？」

「んー、まぁな」

ф鯖……バイバアル……知ってるさ、心許ないとはいえ拳銃という武器がある鯖癌において「徒手空拳(ステゴロ)」で巨大生物相手にサバイバル生活を敢行するイカレポンチ共が巣食っていたサーバーだ。そこで一番暴れてたプレイヤーが「バイバアル」って名前だったはずだ。

「全く、酷い目に遭っ」

三分経過

砕け散る変装用胴・脚装備（お値段合計九十万マーニ）

服が弾けた衝撃で揺れる乳。

それを目撃したプレイヤーの目が釘付けになり。

その瞬間を逃さず野生のヴォーパルバニーがプレイヤーの首を包丁で切り裂いた。

「……訂正、現在進行形で酷い目に遭ってるわ」

「……サンラクサン、ラビッツに戻るですわ。きっと今日は厄日だったんですわ」

「あーいや、フィフティシア……いや、やっぱエイドルトで頼む」
「はいなはいな、お友達のところにいくですわねー、じゃあアタシはラビッツで待ってるですわー」
まぁそれもあるがもう一つ、な。

カフェ「蛇の林檎」、裏通りのならず者達を受け入れる………という設定の、ほぼ全ての街に存在する（ついでに店主が全部同じ顔、このゲームがつまらない妥協をするとは思えないので多分何かしらの設定があると思われる）カフェだ。
基本的にこのゲームでは味覚系が意図的に薄く設定されているが例外的にこのカフェで注文できる物はちゃんとした味がある。
と言っても甘味であればケーキだろうが砂糖の塊だろうが同じような味がするしペンシルゴン曰く「酒という名前なだけのノンアルコール炭酸」だそうなので結局のところリアルで食えということだ、うん。

「……いらっしゃい、注文は？」

そして、賞金狩人ルティアが去り際にとあるアイテムと一緒に残した言葉もまた、この場所を指し示していた。

というわけで早速それっぽいロールプレイを絡めつつ行ってみようか。

「林檎の香りに誘われてね、アップルパイとかあるかな？」

「……ウチの「隠しメニュー」、どなたから？」

「ルティアって人から。熱く激しい夜だったよ……」

本当に激しかった、気を抜けば六等分とかＰＫＫ特化ＮＰＣの恐ろしさを実感させられた。

そんな軽口を叩きつつ、俺はルティアが渡して来たアイテム……「鍬形紋（スタッグエンブレム）の紹介状」をすすす、とカウンターに乗せる。

「…………なるほど、確かに。それではお客様、アップルパイが焼き上がるまであちらの個室でお待ちを」

「あいよ」

ほんの数秒の沈黙、しかし何事もなかったかのように紹介状を懐にしまい込んだ店主が手で個室の方向を示す。

服で隠れようとその威圧感が霞むことはないのか、一応今は華奢な少女の姿である俺に対して、ならず者ＮＰＣ達が絡んでくるようなことは無かった。

おん？　何見てんだ見世物じゃねぇぞぶっ飛すぞこのヤロー。

「はてさて、何が起きるか……」

目を逸らしたNPC達を尻目に俺は店主が指し示した個室へと歩み寄り、こんなアングラな場所で個室とか色々黒いイメージしか想像できないなと扉を開き……

エムルの使う「門」とは違う、随分と荒っぽい衝撃を伴った暗転で視界が黒く染まった。

「……んおっと！？」

まるで無意識のうちにバナナの皮を踏んで滑ったかのような、直前まで維持していた直立のためのバランスをリセットされたかのような浮遊感。幸い、足元にちゃんと床があったのでなんとか踏ん張って転倒の阻止に成功した。

大型のモンスターに吹っ飛ばされた瞬間とかに似ている、ほんの僅かな間だけ三半規管がシェイクされるような……つまりは転移魔法だ。

「また、随分と大雑把な……」

「あら……聞いた話では男性だったはずだけれど……？」

少女と思うには低く、老婆と断ずるには張りのある女性の声。
顔を上げれば、そこには貴族的なそれとは違うドレスを纏った女性……なんというか貴族的なものではなくキャバクラとかそういう系のボス感が漂う女性だ。

「訳あって女体化してるけど中身は同一人物だ……で？　アップルパイはいつ届くんだ？」

「……ふふふ、中々度胸があるのね。いいワ、彼女（ルティア）の招待に値する人物のようね」

にまぁ、と。

一応形式上は上司たる外道モデルの加虐的な笑みとも違う、総受け魚類や人力ＴＡＳ女のような激闘を期待する笑みは少し近い。

どこかデジャヴを感じる、なんとも言えない只々楽しげな笑みを浮かべる女性は端的にこう述べた。

「ようこそカフェ「彷徨う剣」へ……貴方に「仇討人（あだうちびと）」の選択肢を示しましょう」

『隠し職業クエスト「か細き願いを叶える者（リベンジ・デッド・エッジ）」を開始しますか？はい　いいえ』

無職俺氏、就職のチャンス来たる。

合縁奇縁は林檎の香り（後書き）

Q．この顔どこかで見覚えが
A．クソゲー並べた棚を見てる時のお前の顔だよ

・仇討人（あだうちびと）
最初から上級職として設定された隠し職業。厳密には「無所属」を初期職業と見れば普通に上位職。
割とこの話を更新する寸前まで「仕事人」とか「代行者」にしようか迷っていたが前者は暗殺色が強いし後者は眼鏡の神父が頭をよぎるので今の名前に決定しました。
「賞金狩人」は仇討人の中でも「殺人鬼（プレイヤーキラー）」のみをターゲットとする者達。

世の中には、誰にも聞き届けられない叫びがある。金か、権力か、それとも如何な理由か。
故にこそ使い（しがらみ）手を持たぬ彷徨える剣が必要なのだ、動機は問わない、前歴は多少問う。

要するに賞金稼ぎですね、人知れず集めたヤバい案件……それこそ職業名の通り「仇討ち」であったりなにもシャンフロ世界で仇になり得るのは人だけではありませんから

最速を冠する少女（前書き）

風邪引いたのでレッドブルキメながら安静(グラブル)してたのに悪化した、何故だ……（止まらない頭痛と鼻水）

最速を冠する少女

おっと三分経ちそうだ、装備変更。
何やらバイオリンとギターの合いの子のような弦楽器によるジャズっぽい旋律がバックグラウンドで奏でられている。
窓も扉もない不思議な場所を見回しつつ、俺はドレスの女性の後ろを追いかけていくが……
カフェ「蛇の林檎」にいるクローン疑惑のある店主をそのまま歳を経たようなマスターが立つカウンター、その隅の方でなにやら妙に露出度の高いビキニアーマーを着た幼女がもっしゃもっしゃと肉を齧っているがもしかしなくてもあれがティーアスなる賞金狩人では？
「ここは仇討人のギルドのようなもの……と言っても、そこまで所属者は多くないのだけれど、ネ？」
隠し職業「仇討人」、俺へと提示されたその職業は要するに「難易度の高い案件のみを受ける専門職」という事らしい。
「この世には、成し遂げられない願いがある。例えばそう、その難易度の高さ故に王国の騎士団すら黙殺せざるを得ない獣の討伐依頼であったり。採取の困難さ故に非常に高価な薬草を求める貧しい少女の願いであったり」
「思想は立派だが……慈善事業って奴か？」
聞く限りでは世のため人のために奔走するボランティアのようにしか思えないが、俺がそう問いかけると「頭領」と名乗った女性は扇

子を揺らしながら首を振る。

「それは理由の半分、もう半分は貴方達のような方々に戦う場を与える事……」

「……成る程」

暴力的手段の合法化、潜在的な危険因子に手綱をつける……戦闘狂などの命知らずを集め、表社会では持て余すような、もしくは見向きもされないような難題をクリアする者達。

となると「賞金狩人」システムは仇討人のターゲットを絞ったＮＰＣ限定職ってところか、まぁ流石にＰＫｅｒが相手とはいえプレイヤーにその処断を任せるのはな。街中でＰＫするよりヘイトを集めかねない。

「で？　招待されたら即採用なのか？」

「そうねぇ……実力の保証はされているからそれで良いのだけど、何か自慢話でもしてもらおうかしら？」

自慢話、自己アピールか？　俺はこれだけの力を持っているという……そうだな、この後用事もある訳だし。

インベントリから取り出したのは素材余りとして使っていなかった水晶群蠍の針、あとついでに掘り当てたはいいが「中身無し」だったようでゲーム的価値は低いと言わざるを得ないハズレのローエンアンヴァ琥珀晶。

「水晶巣崖(あそこ)にはよく行くよ、良ければそっちの琥珀晶はプレゼントするが？」

「あらあらまぁまぁ……これは思った以上の奇貨かしら、噂もあながち間違ってないのかもね」

噂……噂、ねぇ……おっと三分。

「前々から気になっていたんだけど、その噂ってのは具体的にどのようなもので……？」

「そうねぇ、一番の噂は「夜の帝王をも退けた夜駆けの怪人」かしら」

「カイジン……」

死ぬと派手に爆発でもするのか俺は。つーか誰だそんな噂広めたやつ、ＮＰＣか？　ＮＰＣ由来か？　ちくしょうリュカオーン許さねぇ。

「ある時は鳥を模した覆面、ある時は魚を模した覆面……身体をすっぽり覆う白い布で闊歩してた、なんて噂もあったけど、まさか性別すら自在とは思わなかったワ。「怪人（人なのか怪しい）」というのもあながち間違いではないかも知れないわね……？」

「甚だ不本意だけど事実が基になってるから否定できない悲しみ……」

日頃の行い、というやつか……リュカオーンのせいだな許さねぇカウンターが回る回る。

いちいち着替えるのも面倒なのでサクッと灼骨砕身、先程からコロコロ装備を変えたりいきなり自刃し始めているにも関わらず、眉一つ動かさない頭領はなかなかに豪胆な設定のＮＰＣなのだな……

と感心していたのだが、仕事帰りなのかのっしのっしと歩いてきたメイド服（ミニスカではなくロング）姿のゴツイおっさんと一見普通のスーツに見えるがよく見るとキャリアウーマン用のスーツ姿の優男が通り過ぎていったのを見て、単純に奇抜なものを見慣れているだけ説が浮上した。

というかあれ全部プレイヤーによるオーダーメイドか？　着せ替え隊悪ノリしすぎだろ……畜生、楽しそうだなぁ。

「そうねぇ、今日は軽い紹介という事で詳しくは後日という事でどうかしら？」

「……分かった、じゃあ今日は帰らせてもらうかな」

というわけで魔法陣が刻まれた床の上に立つと「蛇の林檎」へと戻り、個室を出たら店主からアップルパイ（割と空腹度が回復できるようなのでダース単位で欲しい）を包んでもらい、帰って寝ました

……な訳ねーだろうが騙されねーぞ！！

（招待されただけで採用？　システムが思いっきり否定してんじゃねーか）

俺のステータスに表記されたメイン職業は「傭兵」のまま、というかそもそもジョブクエストを達成すらしていない。

つまりは、だ。絶対に何かある、抜き打ちのテストか何かは知らないが、クエストが存在する以上はなにかしらのイベントがな……！

仇討人、名称と頭領による説明からして単なる労働戦力とは考えづらい。

少なくとも同様に隠し職業と思しき「古匠」や「神匠」を見るになんらかのイベントがあって然りな訳だが、生産職の「古匠」ですら戦闘イベントがあるわけで、果たしてガチガチの戦闘職業のイベントとは。

「き……むぐぐっ！」

「はい来たァ！」

夜更けも近いエイドルトの空気を切り裂くような悲鳴……を無理やり押さえ込んだようなくぐもった声、まばらとはいえ何人かいたプレイヤー達が何故か気づいていない。

だが確かにそこには如何にも「追われて逃げていたけど捕まりました」とでも言いたげな様子の光景が。

非力ながらも必死にもがく女性と、それを押さえつけて路地裏に引きずり込もうとするガサツそうな男性……成る程？　俺の正義感を試そうって訳か、オーケーいいだろう。

「囚われの女性とか百科事典作れるくらい救って来たっつーの……！」

大丈夫、服着てるから「変質者追加入りましたぁー！」とはならないはず、そう今の俺はレディの危機に颯爽と駆けつける謎の美少女戦士！

「いざ参じょ……」

「た、たすけて……！」

駆け出そうとする寸前、俺の手を掴む小さな感触につんのめりそうになるのを堪えて振り向けばそこには今にも溢れそうなほどの涙を浮かべた幼子が俺を見上げていた。

「おとうとが、わたしのおとうとがもんすたーに、おそわれて……！」

「んぐっ……」

ここに来ての選択肢に御座るかぁ！？　クソッ、並のゲームならどう考えてもルート分岐……っ！　バカでも分かる取捨選択……っ！　どっちだ、どっちが正解だ……！？　というか両方ともイベントか？　それとも無関係のフラグ踏み抜いた！？

悩んでいる時間はない、どちらが正解でどちらが間違いなのか。この選択に俺の就職(ジョブチェンジ)がかかっている……ならば！

「五秒」

カフェインが足りないだぁ？　そろそろ体内でカフェインを自己生成できるようになってもおかしくはないから行け！

封雷の撃鉄(レビントリガー)・災起動(ハザード)、最短最速でルートを導き出し薄れ始めたとはいえ月光を浴びたことで月狼の誇り(マーナガルム・プライド)が解放された今の俺は、おそらく昼よりも速い。

「最！」

座標乱数、良し。裏路地へ消えんとする二人と俺は直線で結ばれている。

「速！」

スタートダッシュ、まぁまぁ。幼女の手を振りほどくのに一瞬の躊躇(ロス)があったがまぁ良しとしよう。

「解！」

鎮圧手順、非常に良し。こちとら伊達にふと思いついたようにちょっとかじったただけの格闘技を実践レベルで戦法に絡めてくる総受け魚類のサンドバッグやってねぇんだよ！
路地裏、つまり建物と建物の隙間故に左右を壁（足場）で挟む形ということだ。

「決！」

まさか本当に出来るとは思わなかった。
上位互換のグラビティゼロを持っているとはいえ、あれはあれで便利だったために手動再現したリコシェットステップもどきで加速した飛び蹴りが不埒者の顎を撃ち抜く。
そして現実の物理運動ならばあり得ない、空中での着地……いや、着空ついでに力の抜けたＮＰＣを蹴り飛ばしつつ空中を舞い……着地と同時に封雷の撃鉄・災を解除。デメリットたる体力減少のリミットすら凌駕した最速の動きに我ながら惚れ惚れする。

あとついでに三分経過したらしく服が弾け飛んだ、灼骨砕身は常に煙って鬱陶しいしそれに加えて懐炉（カイロ）を貼り付けているような感覚が鬱陶しいので常時発動は考えものだしなぁ。

「多分これが一番速いと思う……！」

あまりに理想的、チンピラ蹴り飛ばしＴＡがあったら世界を獲れるムーブだった。
だが、俺の記録に異を唱える思いもよらない者が思いもよらない場所に現れた。

「――四秒と少し、動きに無駄が多いから改善の余地あり」

「は、速い……っ!?」

座標転移?　違う、幼女がいた足元に僅かだが砂塵が舞っている。
瞬間移動でそこにあった質量が消えたなら砂埃は地面から上に舞う、
だが目の前のそれは若干左側へ流れている。
つまり物理演算に基づいた超高速の移動だ。
いや待て、封雷の撃鉄・災を発動した状態時の速度とルティアの「超速」にそこまでの差はない。そして過剰伝達状態の速さはまだギリギリグラフィック描写される速さだ。

つまり今の速度はルティアよりも……

「――これは「適性」の試験、ルティアが用事で外してるから私があなたの担当……」

それ即ち、

「幼女先生（ティーアス）……！」

振り向けば、そこには先程までの力なき幼子の姿を衣服ごと脱ぎ去ったビキニアーマーの幼女が、ガラス玉のような静かな目で俺を見つめていた。

着せ替え隊の業が深すぎる。

最速を冠する少女（後書き）

爆裂全裸「速過ぎる」
違法全裸「遅過ぎる」

視覚的危険地帯

天才二人が嬉々として協力し完成したＰＫを確実にボコる為の「賞金狩人システム」ですが

「ちゃんと設定練らなきゃ」
「設定練りすぎ」
「あ？」
「お？」

結局水と油は溶け合わなかった模様
何せティーアスやルティアは外伝書けるくらい設定が詰め込まれている模様

「人か、獣か……仇討人にも適性というものがあるわ。故にこそ瞬間的な二択でこそその真価が垣間見える……」
モンスターに襲われる幼子を取るか、路地裏に引っ張り込まれる女性を取るか。
大抵のプレイヤーは後者を先に済ませると思うのだが……随分と早い再会を果たした頭領はそうではない、と笑みを浮かべる。
「それは認識の視界、貴方の意識がどこを見ているのか……行動と結果は副次的なモノでしかない」
目の前の女性を見逃せないと意識から幼女の願いを外すのか、それとも所詮は人同士の下らないイザコザと断じてまだ見ぬモンスターの事を見つめているのか。それこそが仇討人の本質を示すのだと頭領は説く。
「貴方は中々珍しい結果を見せてくれたわ……どちらか一方を選びながらも、もう一方からも視線を外さない……視野が広いのね？」
いまいち理解できないが、要するに「システムが貴方の思考を読んでどっち優先にしたのか」を判定したって事ですかね？　しれっとハイテク見せつけてくるなこのゲーム。
「というかもしかしなくてもあの二人も……」

「えぇ、ウチの「調査員」よ？　殴られ役、よく出来ていたでしょう……？」

つまり踊らされてたって事じゃないですかぁー、いやまぁ壁蹴りなんて力技が妙にクリティカルヒットしっくり入ったなぁとは思ってたが……受ける側が協力してたなら納得もできる。

「割と会心の一撃だったけど無事なんですかね……？」

「本職の暗殺者相手に死んだフリを成功させる名役者ですもの、心配はいらないわ」

いやそれあんまり関係な……いや待て暗殺者相手に死んだフリ？　すげぇなオイなんだその生存特化、すごく興味あるんだけど。

「まぁいいや本題に戻ろう、結局俺の適性とやらはどのような結果になったんで？」

「そうねぇ……仇討人は大きく分けて「対人」「対モンスター」のどちらかを専門としてもらうのだけれど、どちらでも活躍してくれそうだし貴方が選んでいいわよ？」

「じゃあ対モンスターで」

ぶっちゃけシャンフロでは対人にそこまで熱意傾けてないからな、これが幕末とか世紀末円卓なら迷うことすら馬鹿馬鹿しいんだが。

「……付いてきて」

「え？　あっ、ういっす！」

え、なんだなんだ。あっやめてティーアスさん半裸状態でインナー引っ張らないでアウトになっちゃう！　アウトになっちゃうううううう！！

「実地試験……倒して」

「倒してって……」

そんなわけでやって来ました去栄の残骸遺道、あぁダチの家が遠のいていく。

ジョブクエストが終わっていない以上、これもクエストの一環なんだろうが……一体、どうすればいいんだ。

ビキニアーマーの幼女に引っ張られながら半裸の女アバターで街中を突っ切るという中々の羞恥プレイをさせられ、今俺はティーアスが指差す先……なんだろう、さくらんぼに足生やしたような見た目全振りなゴーレムを「違うそっちじゃない、あっち」

「あっち？」

おや、何か猛烈な速度で走ってくるな……おやおや、チェリーゴー

レムが暴発したアメリカンクラッカーみたいな吹っ飛び方で宙を舞って……なんだありゃ、足の生えたイソギンチャク？

「……最速で終わらせる、倒して」

「せめて解説お願いできませんかぁ！？」

まるでスキップ不可能のムービーが挟まったかのような億劫さを隠そうともせず、ティーアス……いや幼女先生はため息をつく。

「……アレは人喰い、それも人間の腕だけを貪る」

「アレ全部人の腕かぁ……」

そっかぁ……下手すりゃルルイアスにいてもおかしくない見た目だな。ていうかあんな感じの奴いたような……いや、アレは半魚人にイソギンチャクが大量に付着してただけかあっはっは大差ねぇよ。

「奴につけられた名は「アイガイオ」……奴は暴れすぎた、だから私達に願いが届いた」

「一応聞くけど手助けとかは……」

「……私はとても眠い、五分」

「タイムアタックかぁ……！」

上等じゃねーかイソギンチャク野郎、丸ハゲにしてやるよ！！

（中略（スキップ））

もうね、馬鹿じゃないかと。仮に百本腕があるとして百回連続で掴み判定あるとかね、近距離職に厳しすぎるだろと。
まぁ「オペレーション〝痒いところに手が届かない〟」で奴の脛をズタズタにしてやったがな！　女体化の影響で小柄になっているのも幸いした、ニーソックスを履くたびに激痛が走る身体にしてやったぜェ……

「き、記録は……」

「五分十八秒（ごふんじゅうはちびょう）、良判定（いいんじゃない）？」

良判定（鼻で笑われた）かぁ……じゃあお前はどうなんだよ、と言いたいところだが名前的に一分切りで倒しそうな雰囲気があるので口には出さないでおく。

「仇討人（あだうちびと）の仕事（しごと）はとてもきびしい。一度（いちど）でも失敗（しっぱい）すれば報酬（ほうしゅう）は九割減（きゅーわりげん）する」

９０％減はキツそう、まぁこのゲーム極論モンスター掻っ捌いて素材売るだけでなんとかなるんだが……いや素材売却＋クエスト報酬の方が普通に実入りいいに決まってるわ。

「それに仕事(しごと)も不定期(ふていき)、いつ呼(よ)び出(だ)されるかもわからない」

不定期ってのはつらいなぁ、ログイン中のランダムなタイミングであるなら問題はないんだけど。

「そしてこの界隈(かいわい)でたべていくなら、大事(だいじ)なことがある」

「……大事なこと」

ティーアスは説く、原則として仇討人には上下関係というものが存在しないのだと。いや頭領という元締めこそ存在するが狩人間に上司部下という関係性は存在せず、あくまでも身分としては平坦であるのだ、と。

とはいえ人間とは……いや、人間に限らず生き物というものはある程度の上下関係がなければそれはそれで不安になるものだ。

つまりは、だ。ふんす、と踏ん反り返ったティーアスは初めての後輩に対して台風の如き先輩風を吹かせたいらしい。

「……私(わたし)のことは「先生(せんせい)」と呼(よ)ぶように」

「ついていきます幼女先生(ティーアスセンセ)ェーーーっ！」

兎を兄貴と慕い、幼女を先生と慕う。大概意味分からない状態になって来たなこのキャラ(セーブデータ)……まぁそれはそれとして話は変わるがゲーマーというものはある意味差別主義者とは真逆に位置する存在と言えるだろう。

何せフィクションという大義名分を盾に制作側の性癖が詰め込まれたキャラと触れ合うわけだからな。肌の色？　性別？　人種？　パ

ラメータが優れているならナメクジだってパーティに迎え入れる、
それがゲーマーだ。
それに幼女を師と仰ぐ経験とか腐る程あるわ、ロリババアってファンタジー系のゲームじゃ結構な頻度で見かけるしな。

一切のみくびりも侮りもない全力の平身低頭を幼女先生はお気に召したらしい。ふんすふんすと鼻息高らかなティーアスは裏カフェ「彷徨う剣」を案内してくれた上にりんごパフェを奢ってくれた。
極めて珍しいことに多少の安っぽさはあるものの味覚制限はほぼ解除されてると言っていいお味であった。このゲーム食べ物系は味覚制限されているものとばかり思っていたが……仇討人関係は解除されてる？　いや、流石にそんな意味不明な優遇を隠しとはいえ単なる職業に実装するとは思えない、というかそれなら料理人（モンスターの素材で回復・バフアイテムを作成できる職業）の方が適任だろう。何か別の条件があるのか……？　まぁいい、こういうのは考察厨（ライブラリ）達の仕事だ。

あとついでに「ドヤ顔ティーアス先生」「私服だとか撥水性だとか言いくるめてティーアスにスク水着せて俺（女）とのツーショット」のスクショがあるんだが……これ高値で売れたりするんかな？

『隠し職業クエスト「か細き願いを叶える者（リベンジ・デッド・エッジ）」をクリアしました』
『ジョブチェンジ！　メイン職業が「仇討人」に変更されました』
『職業「傭兵」をサブ職業に変更しますか？　はい・いいえ』
『称号【美食舌】を獲得しました』

謎の称号【美食舌】を獲得してわかった事がある。多分このゲーム「食材の高級度」と「味覚制限」がリンクしてるんだ、つまり金さえ積めば美味しいものが食べられる。
つまり俺たちが今まで食っていたものは…………資本主義の残酷な真実に世の無常さを感じつつも現在俺はフィフティシアに来ていた。

「なんだろう、一日すら経過してないのに男の身体がひどく懐かしく感じる……」

女体化中に怒涛の勢いでイベントが起きたからかな、とりあえず可憐な少女の姿でも蠍達は容赦しないらしい。彼等は男女差別の色眼鏡をかけていない、訪問者は誰であろうと全力で歓迎してくれるのさ……とりあえずアムルシディアン・クォーツを結構回収できたので良しとする。

今日の予定はレイ氏と新大陸移動前に色々と用意を整えるための狩りに出かけるつもりだ。ハイテンションだったかペンションだったか忘れたが、角がポーションの材料になるモンスターは現在プレイヤーによって大乱獲が行われているらしいので、相対的にプレイヤーの数が少ないエリアに行くとのことらしい。
まぁ俺はほぼ一直線にフィフティシアまで走ったから他ルートのエリアについては疎い、せいぜい死火口湖の底にフレイムブロッコリ

ーバタフライがいるって事と鐵遺跡に釣りスポットがあるって事を知っているくらいだ。

「さて……そろそろ待ち合わせの時間か」

俺はちょっとばかし目立ちすぎたからな、さっさと通り過ぎるならともかく待ち合わせ場所で仁王立ちするのはリスクが高い。
そんなわけで待ち合わせ三分前くらいまでは路地裏で息を潜め、機を見て表舞台に躍り出る作戦を決行したのだが……

「あの、サッ、サササ、サンララクささささ、こここここれれれれれれれ、なんんなんなんなんなんんんんんんん」

「ひぇっ」

目の前に全身がノイズで崩れかけた暗黒騎士が現れたら誰だってビビるだろう。
周囲が騒然とする中……いや、何人かはその原因が分かるのか同情的な視線を向ける中、本格的にバグったレイ氏が人としての輪郭がブレた手をこちらに伸ばして……ぶつんっ、とその場から消失した。

「参ったな」

なんて事はない、俺達が無事でレイ氏だけピンポイントでバグったというなら理由は一つ……本体トラブルだ。

幼女先生の夜空教室（後書き）

ユザパを超えるユザパ、スキップユザパ……ＴＡＳだからね、スキップは当然だね。
なおユザパの究極は設定のみの登場で描写すらカットされた深海三強のヤドカリさん

ちなみにですが「アイガイオ」とは種族名（モンスター）ではなく個体名（モンスター）です。フレッシュミートゴーレムの変種、と言ったところでしょうか。
喰纏種（キメラ）と似たような特性を持っていますが、あくまでも人の腕のみを偏食しているだけなので喰纏種ではありません。というか落とすアイテムは変種ではない通常種と同じです、レアエネミーではなくあくまでも「異常な（行動的）特性を持ったために二つ名を与えられた通常種」なので。

仇討人が受注できるクエストはこう言った変種モンスターや極悪人ＮＰＣだったりします。

余談裏設定
ティーアスちゃんは栄養失調と発育不良がデフォルトな最底辺の孤児だった境遇からルティアさんに拾われた背景設定があるので見た目と年齢が割と釣り合ってない、具体的に言うと見た目はかろうじて小学四年生くらいだが実年齢は十四歳くらい。
天才二人が「ＰＫ絶対殺すマン」として最後に設計した賞金狩人で

あり、専用スキル「――速（×××ン）」はティーアス単体の処理だけで鯖落ちする可能性すら孕んだ規格外のスキル
カロリーが高ければなんでも好き、生まれ育った背景から「着れればなんでもいいじゃん」というナチュラルボーン・コスプレイヤーなのでスク水も着てくれた。
多分サバイバアルならスクショ画像に五億マーニまでなら出せる。

風雲斎賀城

サンラク：あー、大丈夫？

サイガー０：ごめんなさい！　あの、ＶＲシステムが調子悪くて……

サンラク：だろうね

サンラク：でもヤバくない？　今すぐ修理に出したとしても絶対明日までには間に合わないだろうし

サイガー０：ですよね……

サンラク：多分出力系に何か問題があると思うから、一応携帯端末経由でデータ移行の用意はした方がいいと思う

サンラク：一応聞くけど今すぐ新品に買い換える、とかは……

サイガー０：できない事はない、ですけど……

サンラク：あー別に無理しなくてもいいよ、ヘッドギア型でも結構なお値段だしね

サイガー０：修理に出すことにします、今日は約束を破ってしまうような事になってしまい申し訳ありません……

サンラク：いや、待った

サイガ－０：え？

サンラク：もしかしたらなんとかなるかも

サンラク：斎賀さんがレンタルオッケーかどうか次第ではあるけど

つまるところ、俺は二つのＶＲシステムを持っている。一つはプロゲーミングチーム「電脳大隊（サイバーバタリオン）」が贈ってきたイラスト付きの業務用……もといチェア型ＶＲシステム、そしてもう一つはそれまで使っていたヘッドギア型ＶＲシステムだ。

業務用にデータコンバートを行った以上、データリセットされたヘッドギア型は現状使う機会がない。これが通常時なら「早く修理から戻ってくるといいですね」で済ませるのだが、シャンフロは明日に新大陸調査船第二便の出航が控えている。

レイ氏はこの土壇場で乗員に割り込むアテがあるようだが、そもそもログイン出来ないのではそれ以前の問題だ。

と言うわけで俺は、現状使っていないヘッドギア型の貸し出しを提案したわけで。ついでに斎賀さんの故障したＶＲシステムを診（み）るために段ボールを抱えつつだいぶ涼しくなった土曜の朝から外出しているのだった。

◇

サンラク：というわけで今使ってないVRシステムを修理が終わるまで貸し出す、って訳よ

サイガー０：いいんですか？

サンラク：まぁ色々あって今は使ってないから大丈夫

サンラク：でも大丈夫？　野郎が結構長いこと使ってた奴なんだけど

サイガー０：大丈夫です！　全くもって！　問題はないです！

サイガー０：はい！！

サンラク：お、おう……

サンラク：じゃあロックロールで……

サンラク：あ、確か「皇室花園（インペリアルアヴァロン）3」の発売日が昨日だっけ……じゃあ休みか

サイガー０：インペリ、アル……？

サンラク：乙女ゲーの新作だよ、超大作らしいから土日は多分休みだな

サンラク：そういえば斎賀さん俺と同じ学区だし割と近所だよね？

サンラク：じゃあ直接持っていくよ

サンラク：一応簡単なチェックくらいなら出来るし、もしかしたら修理に出さなくても解決できるかもしれないし

サイガー０：いいんですか？　そんな、態々ご足労いただくような……

サンラク：フルダイブゲーマーは適度に運動しないとパフォーマンスに響くから気にしなくていいよ、ジョギングのコース変えるみたいなもんだし

サイガー０：じゃ、じゃあ住所を送るので……でもやっぱり私が向かっ

サイガー０：なんでもないです

サンラク：え？

サイガー０：なんでもないです、はい

サイガー０：偶然見かけたとかそういう感じなので調べたから知ってるというわけではないのでなんでもないで

サイガー０：［このメッセージは削除されました］

サンラク：ま、まぁいいや

サンラク：じゃあ適当に朝飯食べたら伺わせてもらいます

サイガー０：分かりました

ＶＲシステムの不調を調べる以上、彼を自宅に上げるのは当然の帰結でありそれ即ち「自宅デート」に該当するのでは、という結論に至った玲の思考が超新星爆発を起こしたのは五分後のことであった。

◆

陽務家が建っている学区は生徒が殆どいない陸の孤島だ。
というのもこの辺りは二十世紀辺りからここに住んでいる人達が多く集まった地区であるため年齢層が高めなのだ、むしろなんでこんな場所に家建てたんだと一度両親に聞いてみたら「偶然この土地が安かったから」というありきたりな理由であった。
実際のところ未成年が住んでいないわけでもないのだが、ウチの高校に在籍している同年代に絞ると知っている限りでは斎賀さんくらいしか該当しない。

「えーと、ここを右に曲がって……ここか」

割と駆け足でウチから十五分くらいか、結構近いな。
というか……あれ、これ地図上に区分けなくデカデカと表示されたブロック全部単一の土地？　この壁の囲い全部……えっ、デカっ。陽務家を縦横四個並べてつまり単純に坪数が十六倍くらいあるんじゃ……野球出来そうだなオイ。

「これが……っ、斎賀家の力……っ！？」

ていうか玄関どこだ、まさかあの城攻めシチュでよく破城槌とか使ってブチ開けるタイプっぽい門が玄関なのか？　本当にここ現代日本なんですかね、武家屋敷じゃんこれ完全に武家屋敷じゃん。

「いやあれどう見ても宅配便の配達員とかが立つ場所じゃないだろ……」

やっぱりロックロール前とかで待ち合わせた方が……いや、流石に立ち作業でVRシステムのチェックは無理だ。岩巻さんが大陸に覇を唱えんとする皇室に使える平民上がりのメイドとして異様に男ばかりな皇室の攻略に旅立った以上、流石にそこらのファミレスで機械いじりってのアレだ。

しょうがない、斎賀さんに「到着したけど入り口どこ？」送信っと。とりあえず門の前にでも行って待機してるか……ん？

「……メラ、……か？」

「……ぶ、………死角……ら」

「…くぞ」

何だろう、妙なポージングで門の前にへばりついた子供達がいる。
見るからに悪ガキといった風情だが、なんであんなところに……あ、こっちに走ってきた。
何故か俺を見て「やべぇ！」とでも言いたげな顔をして走り去っていったが……まぁいいや、門の前に移動して……あ、普通に人間用のドアもあるのな、なんか安心した。

『……どちら様でしょうか？』

「うおおビビったぁ！？」

俺インターホン押してないで御座るヨ！？　まさか専用のスタッフが二十四時間玄関前を監視して来客に備えているとか！？
よくよく考えればあのクソガキ達が変なポーズで壁に張り付いていた場所とインターホンの場所からして所謂「ピンポンダッシュ」的な行動をしたからこそ、ちょうどのタイミングで俺とインターホンに応じた人がカチ合わせたのだと理解できたのだが、多少……いや結構テンパっていた俺がそれに気づいたのはもう少し先になる。

「んぁ、えっ、あー…………斎賀　玲さんにお届けもの？　でして」

『…………』

『……アポイントメントは取られましたか？』

うわ凄い、一言も喋ってないのに不信感がひしひしと伝わってくる。

アポイントメント……ＳＮＳも一応該当するよな、うん。

「あーはい、事前に連絡はしています」

『…………少々お待ちを』

待つこと数分、ギギギと門が開いて……あ、そっち？

いや違うな、車が中から外に出てるのか。やはりというか外車が出ていったのを見送り、入っていいものかと立ち尽くしていると確認に行っていたと思しきインターホンの人から入って良いとのお言葉を頂いたので遂に斎賀邸への侵入を果たしたのであった。

いや侵入だと捕まるわ。そんな事を考えていると、現代日本においてで生で見ることは結構レアな和装の中年女性が俺の前へと現れた。

使用人……実在するのか。

「陽務様、ですね？」

「様って……あ、はい」

「玲様は少々こちらへ来るのが遅れると思われますので、こちらへ……」

どうしよう、ドレスコードとかあったのかな。思いっきり私服なんだが、少なくともジャージよりはマシだったか。

軽々しく修理を安請け合いしたのは失敗だったか……そんな事を考えながら俺は斎賀邸へと歩みを進めるのだった。

「………」

「しばしお待ちを」

ずっと差し出された緑茶はへし折れた茶柱がクルクルと緑色の海を泳いでいた。こ、これは「幸運だろうがへし折れる」という凶兆的な……ええい心を強く持て俺。

ランダムテレポートでモンスターハウスに叩き込まれた気分で正座していると、ふと視界の隅に妙なものが映り込んだ事に気づく。

「あれ、これって……」

それは例えるなら「サーフボードを模したキーホルダーに返しのついた針を付けたもの」とでも言うべき奇妙なシロモノだ。

とはいえ俺はこれを知っている、というか同じようなものがウチにダース単位である。

「……ふむ、それは儂のものであるのだが？」

「え？　……ひひゅっ」

具体的に「何」に使うものだったかと考えていた俺にかけられた声、振り返ればそこにはどう見ても日本刀とかで無双するタイプのキャラデザなご老人が直立不動で俺を見つめていた。

間違いない、この人は風雲斎賀城のラスボスだ……徘徊系のボスとか聞いてないんですけど。

風雲斎賀城（後書き）

ヴォーン……「風雲斎賀城」（ダクソ3でアノール・ロンドの文字が表示された時風）

なおヒロインちゃんは禊やら掃除やらメイクやら服選びやらでパニックになり、長女に捕まって説教を受けている模様

・風雲斎賀城……もとい斎賀邸

敷地内に弓道場やら武道場やらが存在する。

コミュニケート・ボスラッシュ

徘徊型ボス、実在したのか……っ！
奇妙な静寂の中、俺は老人と対峙する。なんだこれは、龍宮院　富嶽と言いリアル老戦士じみた実在人物多すぎません？　見ろよあの腕、鮫だって絞め殺せそうじゃないか。ステ振りどうしてるんだろう、ＳＴＲは年齢補正で下がってそうだけどＤＥＸとかを上げて……

「………はっ！？」

いかん、思考がゲームに侵食されていた。目の前にいるご老公が強キャラオーラ出しすぎなのが悪いな、うん。
とはいえ俺が拾ったこれが木の床から自生する筈もなく、であれば落とした者がいるのは当然と言えば当然。確か聞いた話では今のシーズンだと……

「あ、あぁ……すいません、どうぞ」

「うむ」

「鮭釣りですか？　もう少し先が旬って聞きますけど」
そうあれはルアーだ、それも鮭釣り用の。父さんが嬉々として用意してるのを見かけたから覚えていた。
「いくら丼食うぞいくら丼！」とハイテンションになっていたが、市販の方がいろいろ安心感が……

「……ほう、詳しいのかね？」

「あ、しまっ……んぐ、ええまぁ……と言っても自分ではなく父が釣りキチ……じゃない、釣りを趣味としてまして」

さっさと渡して会話を終わらせておけばよかったものを……と選択肢ミスによるタイムロスに歯噛みしつつも、ストロングシルバー相手にギャルゲーでの経験をフル回転させながら会話を続ける。

「確か北の方ならもう釣ってもいいんでしたっけ？」

「うむ、今の季節であるならば鰹釣りも良いが友人の勧めでルアーフィッシングに挑戦してみよう、という事になってな」

「ルアーだと狙う魚も自然と大きいのになりますからね……小学生くらいの時、父に連れられてシーバスを釣りに行った事があるんですけど力負けして海に落ちた事あるんですよねぇ」

今思えばアレは結構凄い経験だった、父さんが「釣竿を離せ！」って叫んでる声は聞こえないし、絶対に釣り上げてやると子供心に意固地になったせいで危うく流されかけたって言う。

「……ふむ、それはまたなんとも」

いいねいいね、過去話から会話を盛り上げる応用テクニックだ。やり過ぎると自分語り判定が下って好感度マイナスになりかねないので警戒が必要だ。

「まぁ最終的に釣竿を手放して父に救助されたんですけど、そのあと別の人が滅茶苦茶でかいヒラマサ釣り上げたんですよ」

「話の流れ的に……」

「えぇ、そいつ食いしん坊だったらしくて。口からラインが伸びてるから引っ張ったら父のロッドが釣れたっていう」

「っはっはっはっ！　釣竿が釣られたというわけか！」

「はははお後がよろしいようで……」

一メートルくらいある巨大魚を釣り上げたおっちゃんが「坊主は将来すげー大物を釣り上げるかもなぁ！」と頭を撫でてくれたのは朧げながら記憶に残っている。
おっちゃん、あの時の坊主は電脳世界で鯨を一本釣りするまで成長しました……！　あとウチの親父はカジキを釣るくらい釣りキチが悪化しました。

「ふむ……成る程、成る程……最初はシーバス釣り、ヒラマサに釣られた子供、釣竿が釣り上げられた……」

は、早く来てくれ斎賀さーーん！　これ以上釣りトークを続行するのは無理だーっ！　そろそろボロが出るぅ！
というかやっぱり中途半端に会話を始めたのが悪手だったじゃねーか！　ここで今更「もう話す事ないので……」とか言えるわけないじゃん！
笑顔の仮面がボロボロと崩れ始めたのを必死に補修しつつ、救難信号を心の中で飛ばしていると……

「…………」

「…………」

襖の陰から顔の上半分だけを覗かせてこちらを見る斎賀さんとバッチリ目が合った。

「……っ！（襖の裏に引っ込もうとする）」

「………！！（高速で瞬きして救助を求める）」

助けて！　救援お願いします！　ソロ攻略は無理なんです！

そんな願いが届いたのか、おずおずといった様子で襖の陰から斎賀さんが現れる。

「あの、お祖父様……」

「おぉ玲や、お前のご学友かね？」

「は、はい……！　その、同じ学校の……陽務君、です」

「どうも……」

「ふむ……陽務、か……成る程」

先程から何が成る程なのか、一体俺の何を見た上でその言葉が出て来たのか。こういう時「現実」には攻略サイトが存在しない事が恨めしい、徘徊型ボスとか初見殺しにも程があるだろう……！

「では儂は失礼させてもらおうか……ああそうだ」

「ハイナンデショカー！」

「仙次君に宜しく、と伝えておいてくれるかね？」

ウチの親父殿は何晒してくれはっとりますかで御座るですわァ！！？

気分としては曲がり角でいきなり刺された感じだ、ラスボスの口から「家族を捨てて蒸発した父親が実は世界と家族を守るために一人孤独な戦いを続けていたが力及ばず倒れた」事を伝えられた主人公キャラ的な……いやウチの父親は普通にピンピンしてるし、なんならつい最近生牡蠣に当たってたけど翌日にはケロっとした顔でフグ釣りに行ったからな？　死を恐れない狂戦士か何かかよ。

「か、家族ぐるみの、つ、つつ、付き合……っ！？」

「斎賀さん？」

「カゾグルミァイ！？」

「なんて？」

時折バグるのは相変わらずだが、流石は斎賀家の御令嬢と言うべきか……自宅で和服の高校生って初めて見たぞ。

「斎賀家すげーな……」

「そ、そなことないですよ………そのっ、今日はわざわざご足労いただき……」

「いやほんと気にしなくて良いって、とりあえずハイこれ。掃除自体はしてたし普通に使えるとは思う」

本当ね、業務用はそこら辺のメンテも地味に大変でなぁ……何より嵩張るから動かすのめっちゃ大変なんだよ、お陰で俺の部屋を掃除するロボット掃除機がとても迷惑そうに業務用へゴンゴンぶつかるというね。

「あ、ありがとうございます……すいません、ちょっと私の奴を持ってきます……！」

「あ、うん。ここで待ってればいいかな？」

「はい！　しばしお待ちを！」

たたた、と走り去って行った斎賀さんを見送りつつ緑茶を飲む。庶民舌なのでよく分からないが多分美味しい。

しかし父さんと斎賀（サイガ）グランパに繋がりがあるとは……世の中狭いな、

いやむしろ合縁奇縁乱数が大成功した感じ？

「………」

「………」

待て、落ち着け。これは罠だ、反応した瞬間即死技が飛んでくるタイプの奴だ。反応型の即死行動は把握さえしてれば利用することもできるが、初見だと普通に怖いからなぁ……つまり今めっちゃ怖い。

「………」

「………」

なんだ、なんだこれは。実は斎賀さんもグルで一家ぐるみで俺にドッキリしかけてるとかそういうアレですか？

ごく自然に待合室に入ってきて俺の対面に座った和服の女性と無言で対峙する、という沈黙の時間がただ続いていく。目を逸らしたくて仕方がないのだが即死技が反応する時と同じような嫌な予感がするので表面上は平静を装いつつも非常に硬い動きで額の汗を拭う。

「………玲のご学友であるとか」

喋っ……！？　いや当然と言えば当然だけど会話をご所望ですか！

嘘だろ裏ボスかよ。

「えぇ、ハイ。クラスは違うのでどちらかと言えば同好の士と言いますか」

「同好の……あの、頭に機械を付けて眠る……」

「フルダイブＶＲですね、それです」

どこか斎賀さんと似たような造形をしたその女性は全身から威圧感を漂わせながら俺をじっと見据える。成る程、刻傷や「呪い」に反応するＮＰＣってこんな気持ちだったんだな。

「あれは……その、どういった仕組みなのでしょう？」

「どう………あー、えーと……脳には電気信号があるわけで、外部から特定の信号を出すことで……」

うん。

「機械の力でみんなの夢を共有している感じです」

「成る程……」

確かサイガー１００が斎賀さんの姉という話だったが……この人がそうなのか？　いや、喋り方というか雰囲気が全然違うしサイガー１００とは別の姉がいるとかなのか？　他人の姉妹関係とかいちいち覚えてないぞ、というか当たり前だがサイガー１００の本名すらそもそも知らねーよ！

「貴方は……えぇと、」

「陽務です、今日は斎賀……えーと、玲さんの機器が不調ということで修理から帰ってくるまで自分が今使っていないものを貸しに来たと言いますか……」

「――殿方が幾度となく使ったものを？」

スゥ、と女性が微笑のまま気温が氷点下にまで下がった、絶対下がった。

「いやいやいやいや、流石に汚れとかもありましたから綺麗にしてあります」

とりあえずヒトが生存可能な気温に戻った。うぅ、帰りたぁい……

「そうですか……えぇ、実のところ玲や百が熱中しているものに私も少々興味がありまして」

モモ？　そういやペンシルゴンもそんな名前を……いや待てサイガのモモ？　斎賀　百？　姉妹揃ってキャラネが適当すぎやしませんかね。

「――ですので。二、三質問しても良いでしょうか？」

「みっ…………どうぞ」

身内に聞けよそんくらい、という言葉を水晶群蠍の外殻よりも固い意志で押さえ込みかろうじて返事をする。

なんだろうな、このラスボス倒した後にイベントシーン挟んでノンストップ裏ボス戦突入した感じ。

助けて斎賀さぁーーーーん！（本日二回目）

コミュニケート・ボスラッシュ（後書き）

ヒロインちゃん「……消毒液の匂いがする」

どうも話をしている限り、この斎賀長姉（仮称）はフルダイブＶＲにあまり肯定的ではないらしい。どうも俺の言葉に対する反応を見る限り酒やタバコと同じくらいの印象を抱いているように感じた。とはいえフルダイブＶＲの根絶を声高らかに叫ぶ「現実主義者（リアリスト）」とまでは行っていないようなので、俺の説明次第では無知ゆえの不信感を払拭する事はできるだろう。

身内が趣味に理解を示してくれないという悩みは色んなゲームで人と接していると結構な頻度で聞くことになる。

ウチの場合はそこら辺寛容というか無関心というか、一家のそれぞれにはっきり線引きがされているので基本不可侵な訳だが……まぁ我が家は特殊パターンだろう。

「そうですね……よくフルダイブＶＲを続けると身体が衰える、って言われますけどそれは間違いなんです」

「……そうなのですか？」

舌で唇を湿らせつつ、口車のエンジンが熱を帯びてきたのを自覚しながら続ける。

「いや、実際寝てるようなものなので筋肉が衰えたりはしますけども、そもそもフルダイブＶＲは健康な体を前提としているんです。生活に支障が出ない健康な身体を作った上でフルダイブを楽しむのが正しい形なんです、宇宙飛行士だって長期間宇宙にいると筋肉が衰えたりしますよね？　だからこそ宇宙に行く前後で身体を鍛える

わけです」

Ｅスポーツと言うがまさしくその通りだ、フルダイブＶＲに疎い人達が一番勘違いするのがこれなのだがフルダイブは健康が第一の娯楽だ。肉体的に健康を損ねた状態でやっても自分の首を絞めるだけだ。

「身体を鍛える……陽務さんは何かトレーニングをされているので？」

「トレーニングというか……例えばジョギングやランニングをしたり、たまに腹筋とかをやったり……ですかね？」

ぶっちゃけ肥満にならない程度によく食って最低限コンビニに行くまで息切れしない程度のスタミナがあれば大体なんとかなる。

とはいえフルダイブＶＲについて語るだけならいい流れだ、少なくとも「斎賀さんは学校でどうですか？」とか聞かれても答えようがないし。

「――時に、陽務さんは愚妹達と同じ……ええと、ゲーム？をされているのですか？」

「愚妹……ええ、はい」

リアルで大真面目に愚妹とか言う人初めて見たわ、とはいえシャンフロで知り合ったわけだし肯定の返答を口にする。

「しゃん……風呂？　なるものでは武士（もののふ）や忍者（しのび）などの体験が出来る、と聞き及んでいるのですが……あの二人はどのような体験をしているのでしょう？」

「え？　えーと………」

割とリアル捨ててますよねー、とか言っていいのか？　一応身内だし……いや、フルダイブにあまり親しくなさそうな人だしまさか「下の妹さんは割と現実捨ててますし上の姉はさらに現実捨ててそうですよ」とか言って家族会議にでもなったら俺では責任を持てない。とはいえ下手に嘘ついても雰囲気氷点下になりそうだし……ここは当たり障りのない感じで。

「えーと、玲さんとは同じクラン……あー、団体？　に所属していますが彼女は騎士として頼りにしています。百（モモ）……さん？　とはあまり接点はないんですけど………なんだろう、魔法で剣を浮かせてそれを操る的な……あと、廃じ……いえ、不特定多数から頼られる力量を持つ団体の長を務めている？　事は知っています」

「？？？」

剣聖の戦法をファンタジーに疎そうな人に説明したらこうなるわな、というかサイガー１００との接点なんてつい最近までペンシルゴンが担当してたから大して知らないんだが。

「それは………」

「お待たせし……せ、仙姉さん！？」

斎賀さぁん！（歓喜）

「玲、お客様をお待たせするとは何事ですか」

「え……へ？　あ、その、ごめんなさい……」

一見すると壊れているようには見えない、俺が持ってきたものとは別のVRヘッドギアと本体機を抱えた斎賀さんが目を白黒させながら斎賀長姉……もとい仙？　さんに頭を下げる。

仙さんは俺の方を向くと軽く会釈して立ち上がる。

「陽務さん、それでは失礼させていただきます」

「アッハイ」

「非常に有意義なひと時でしたわ……時に玲」

「は、はい！」

「――――しゃんふろなるゲームで不特定多数から頼りにされる程の地位を得るにはどれ程の時間を要するのですか？　具体的に言えば仕事と兼業して成し得るものなのかしら？」

「えっ」

「あっ」

「えーと……努力次第では、兼ね得るものかと……」

「そうですか、少し百と話す必要がありそうですね」

すまんサイガー１００、流れ弾そっちに飛んで行ったかも。

ごめんなさいサイガー１００、流れ弾じゃなくて狙撃だわこれ。

微笑を一切崩さないまま去っていった仙さんを見送りつつ、その姿が離れていったところでようやく俺は肩の力を抜く。斎賀さんがいる前で失礼な気もしなくもないが、流石にサイガ・ボスラッシュは二連続で勘弁してほしい。

「あの、その、すいません……」

「いやいや、謝る事ないよ……ただ、家庭訪問に来た教師の気持ちが少しだけ理解できたかな……」

気を取り直して、斎賀さんが持ってきたヘッドギアを受け取った俺は持参した工具キットで両手で抱えなければいけない程度には大きい本体機のカバーを外して中身を調べ始める。

「んー……埃は詰まるって程でもないか……コード系が千切れてるわけでもないし……やっぱり出力系がイかれてるのかな」

「どう、ですか……？」

「とりあえず本体の方は目立った故障はない、もしかしたら出力パーツがダメになったのかもしれないけど……ヘッドギアの方も調べてみる」

「よ、よろしくお願いします……」

本体側に問題がある場合は修理に出さなくても疑わしきパーツを買い換えればなんとかなる、専門知識が無くても取り替えができる程度にはカスタマーに優しい作りだからな。
ただ、ヘッドギア側に問題がある場合はどうにもならない。本体と違って繊細度合いが二割り増しくらいあるのでこっちが壊れてる場

合はヘッドギアだけ買い換えた方が早い。

「ギア側は…………外的破損は無さそうだけど……とりあえずウチにあった予備の出力パーツ付けて試してみることって出来る？」

「はい、大丈夫です」

「一応これ未使用品だし、あの時の消え方からして出力系に問題があるのは確実だろうし……もしこれでダメだったらヘッドギア側に問題があると思う、斎賀さんってどれくらい前にこれ買ったの？」

「ええっとぉ……二、三年くらい前、でしょうか……」

「へぇ……二年オーバーしてたら保険どうだったかなぁ……」

そこら辺は買った場所にもよるし微妙なラインだが、時間こそかかるがいっそ修理に出した方が確実に正常な状態にできるし。ぶっちゃけ外的損傷が無いなら俺にできる事は殆ど無い。

「…………………あぅ」

「ん？　どうかした？」

「えーと、その、ですね……お客様をいつまでも待合室に座らせたままだと、その……そう、仙姉さんに怒られてしまいますし、あの……その、ですね」

まるで喉につっかえた言葉を口に出すのに苦心するかのように口を開けては閉じ、目をそらしては俯きを繰り返していた斎賀さんであったが、意を決したように顔を上げ口を開く。

「わ、私の部屋に…………ど、どうぞ！」

「…………えっ」

「………」

「……え、いやどうしろと？」

思わずポツリと呟くが、斎賀さんは応えない。当然だ、今彼女はフルダイブ中だ、少なくとも三分は目を覚まさないだろう。

フルダイブって割とゲーム内にログインするまで時間がかかるんだよな、体感は一分かからないけど実際は一分半、長いと三分くらいは経過している。ちなみに五分以上経過してたら間違いなく故障してるので修理一択、レスポンスが遅れる状態でＰｖＰとかギャグでも御免だ。

「さて……」

この部屋、椅子がない。ベッドが無い。
つまり畳が敷かれた和室である。
「女子高生の部屋」と「風流な和室」と「ハイテク」って共存可能なんだな……っていやいや、この状況で俺はどうすればいいんだよ。斎賀さんは一体俺をどうしたいんだ……とりあえず正座して待機してるわけだが。

「暇だ」

目の前にはログイン中の斎賀さん、シチュエーション的にはR18な感じがしないでもないが、仮に行動に移した場合最終到達点がノンフィクションR18Gなので正直あの待合室に戻りたいというのが本音だ……林檎みたいに頭蓋割られそう。
くっ……なんなんだ、俺は一体どうすればいいんだ。おや斎賀さんの目尻に埃が。

「ふっ……ここで取りに動くのはギャルゲーの主人公だけさ」

そして指が触れたあたりで斎賀さんが目を覚まして殴られるまでがテンプレートな流れだ、そして斎賀さんがその流れをやると俺がノックアウトされかねない。
つまりこの場における正解はこのまま正座を続行する事……っ！
これが最速にして最善、ですよね幼女先生(ティーアス)！！

ハウエバークソゲー中毒者（後書き）

幼女先生「知るかバカ」

百万字書いてようやっとラブコメ的進展ってどうなん？

乙女の如く、魔犬の如く（前書き）

右手が筋肉痛だったので更新休んでしまい申し訳ないです
ネブカをリビルドにしたかったんや……（悪化の原因）

乙女の如く、魔犬の如く

「あの……その、おっ、おはようございます……」

「はいおはようございます、それでどうだった？」

目を覚まし起き上がった斎賀さんに問いかけると、斎賀さんはパタパタと自身の服が乱れていないかを確認、そして若干の「間」があったものの質問に答える。

「……えと、ログイン自体は出来た、んですけど……その、システムに異常があるためログアウトしてください、というメッセージが表示されました」

「あー……それ出ちゃうなら出力系以外にも問題があるパターンだ、流石に修理に出さないとダメだね」

「そうですか……じゃあ、その……お借りさせて頂きます」

俺が普段使ってるベッドよりも柔らかそうな布団の上でぺこりとお辞儀をする斎賀さん、構わないと手を振りつつ立ち上がり……セルフ逆る電律（スタンビート）が足にィ！？

「ぬおぁっ」

「大丈……きゃっ」

足に痺れが走った事で体勢を崩しかけたがなんとか踏ん張って体勢

を立て直す。しかし倒れかけた俺に身構えた斎賀さんが踏み出した足で和服の裾を踏んづけて転倒し……

「……っ！」

「おぐっうぶ！？」

慣性と重力による加速を経た斎賀さんのヘッドバットが上から抉り込むように俺の鳩尾に突き立てられた。

「……っ！　……！？」

ヤバい、朝飯が出そう。
かろうじて俺の身体を支えていた足への力が粉々に粉砕され、がくりと膝から崩れ落ちる。そして鳩尾に突き刺さっていた斎賀さんへッドが重力に従い真下へと落ち……

「お嬢様、少々本日のご予定について…………失礼致しました」

「……っ、……っ」

「待っっっっっっ！」

見ようによっては俺が斎賀さんに膝枕しているような形になったところを、そういうフラグでも踏んだのかと邪推してしまう程のジャストタイミングで使用人の方に目撃された。

体内で逆流の渦巻きを見せる朝ご飯をなんとか体内に留めんと手で口を押さえている俺は何も言うことができず、俺の太ももに頭を乗せたまま「これは違うんです」と弁明する斎賀さんには説得力というものが無い。

ススス、と襖が閉められ俺と斎賀さんの間に何とも言えない沈黙が漂う。

「………」

「………」

とりあえず他人の家でゲロるという最悪のバッドエンドは回避できたが……風雲斎賀城、真ボスは斎賀さんであったか。

「……なんと、お詫びすれば……！」

「じ、事故なんで気にしなくていいんで……いやほんと、大丈夫大丈夫」

膝を揃え、頭を下げ、頭の前で両手を揃え。

ジャパニーズ謝罪最終奥義、土下座を敢行する斎賀さんに俺は頭を

上げてくれるよう頼み込む。何と言っても絵面がやばすぎる、場所が場所なら制裁されるのは俺の方だぞこれ。

「でも……」

「いや本当、発端は俺が体勢崩しかけたのが原因だし……というか逆ノブリスオブリージュというか俺の身がやばいというか」

事によっちゃ新月の夜に出歩けなくなりそうな絵面なので本当勘弁してください。斎賀家直属の裏処理部隊とかいないよね？

「あー、それはともかくデータ移行とか大丈夫？」

「えぅ、あぅ、あの、その……大丈夫です……その、岩巻さんに、バックアップの重要性については、教わったので……」

「そっか、じゃあ大丈夫か……そろそろ俺も失礼させてもらおうかな」

嫌なことがあった、というわけではないが風雲斎賀城は俺のメンタルを削りまくった……こんな緊張感はノーコンティニューでコスモ・バスターのキャンペーンＴＡ（タイムアタック）をした時以来だ。

アレのラスボスステージは気が狂っていた、障害物皆無の平原ステージでそれまでに戦ってきたチャプターボス全員と途中セーブ無しで戦え、とか頭おかしい。

だだっ広いエリアに補給アイテムがポツポツ落ちてるけどそれを無尽蔵雑魚敵の絨毯が覆ってるので……思い出したら頭痛くなってきた、最終的に支援爆撃連打が最適解だったなぁ。埃まみれの畳をぶっ叩いたみたいに宙を舞う雑魚エネミーとＮＰＣ……あれはあれで風情があったと言えるだろうか。

「あう、その……」

「ん？」

「えと…………………………げ、玄関までお送りします……」

何やら壮絶な葛藤を感じさせる「間」を経て斎賀さんはそう告げた。
がっくしと肩を落としている事から葛藤には敗北したようだが……

「まぁ帰ってすぐ、は無理だけど夜とかなら急いで新大陸行きの用意とかできるじゃん？　あ、夜空いてる？」

「……………っ！　はい！　空いてます！　空けます！」

まぁぶっちゃけガチ廃人たる斎賀さんなら時間空いてるだろうな、っていう推測前提で聞いたんだけど。
廃人って時間を生み出す能力でもあるんじゃないか、って思うときあるよな。便秘にちょくちょく顔出すプロゲーマーだったり毎朝絶対ログインしてる最強の操り手（パイロット）だったり。
なお最近の「ルスト速報」によるとネフホロではブースターの過剰搭載による事故が多発しているらしい。物騒な環境だな、何が原因なんだか。

◇

果たしてこれは本当に現実であるのか。幾度となく抓った頬は赤くなっているが、果たしてそれは本当に痛みによるものであろうか？
　であれば抓っていない逆の頬も赤い理由は何故なのか。

「えへへへ、膝枕……」

突発的なアクシデントではあったが、彼の膝に己の頭を載せたという事実に玲の頬は否応なしに緩んでいく。
ＶＲシステムが故障した事は本当に予期せぬ事態であったが、不幸中の幸いと言うべきか塞翁が馬と言うべきか。
にへらにへらと顔を緩ませながら玲は小躍りしつつ自室へと向かう。
歩き慣れた廊下すらも、今の玲にとっては栄光へと続くレッドカーペットにも等しい。

「～～～♪」

楽郎は見事に勘違いをしていたが、如何に名家の令嬢とて普段から和装と言うわけではない。端的に言って仕舞えば見栄を張っていた玲は部屋着に着替えて夜に備えるべく自室へと……と、玲が通過しようとしたタイミングで襖の一つが静かに開かれる。

「玲」

「は、はいなんでしょう仙姉さん」

「百から話は聞きました」

「…………？」

対リュカオーン決戦を見据えて有給の行使に踏み切らんとしている姉の出鼻をくじくようなことをしてしまったのは若干の申し訳なさも感じるがそもそも社会人のくせしてログイン率高すぎるのは正直どうかと思っていたしかつてのクランメンバーの話ではどうも休日はほぼ一日中ログインしているらしいしここらで一度叱られるべ「玲、懸想している殿方がいるそうですね？」びゃ————！！！？！？

「なっ、なななななな……！？」

「……まぁ、殿方を自室に招いたという時点でもしやとは思っていましたが」

「ち、ちがっ……あぅ、あの、えと……」

「いいですか玲、斎賀家の女は代々……えぇ、この私も例外なく恋愛下手なのです。それは貴女も同様、分かっているのですか？」

「うっ……」

仙は知らない、その恋愛下手な妹がかれこれ三年近く恋慕を続けているという事実を。知っていればお説教ルートに分岐する事は火を見るより明らかであったので、ある意味ではもう一つの不幸中の幸いと言えるだろう。

「そんなわけで玲、人生の先達として私から貴女に助言を授けましょう」

「は、はぁ……」

とはいえ人生経験で言えば結婚まで至った先達と言うべき姉の金言、聞いて損はあるまいと玲は仙の手招きに従って正座し耳を傾ける。そしてゆっくりと口を開いた仙は簡潔に一言。

「……既成事実です」

「失礼しました」

「待ちなさい玲、待つのです玲」

やはり斎賀家の女、0か100……否、1000かの極端な行動しか選べない一族の呪いは未だ強い。

◆

「ノーマン君(くぅん)……例のものは完成したのかね？」

「あっ、サンラクさん……！　は、はいっ！　黄金の天秤商会からの援助もありまして、諸々の搭載は完了しました」

「結構……うん、素晴らしい……！」

「私も、まさかこのような形で夢を叶えられるとは……！　本当に、

サンラクさんには感謝ばかりで……」

「何、これからも懇意にさせて貰えればこちらとしても助かるのでね……あぁそうだ、これの名を考えたのだったよ」

「ほう！　お聞きしても？」

「戦士を運ぶ戦乙女の如き名と、そして主人に忠実な魔犬の如き名を持つ……そう、その名は」

「その名は……？」

「……ブリュンヒルデ・バスカヴィル……いや、〝ブリュバス〟だ」

乙女の如く、魔犬の如く（後書き）

恋愛の女神「ヒロインちゃんがあまりに雑魚いので助けてやるか」
乱数の女神「ギャグオチどーんｗｗｗ　ｗｗｗ」
なおダイスロールで展開決めたので本当に乱数の女神が爆笑した結果こうなりました
２を引けていれば普通のラッキースケベ展開だったのに……

なお「作者がこのシーンまでに別の名前を思いつかなかったらブリュンヒルデ・バスカヴィル採用」が裏で進行していましたが結果はお察しです

密漁の旅立ち、だから気に入った（拉致）

新大陸調査船。中世文明に魔法と僅かな科学のエッセンスを混ぜて完成した実在する豪華客船とほぼ同等のサイズを誇る巨大木造船……その数三隻。

先だって海を越えた新大陸調査船トルヴァンテ・ディスカバリエ号に続いて、新たに建造された三隻の巨大船舶……「ベルヘモルス号」「リーバイオスヌ号」「ズィーズィー号」に選りすぐりの開拓者を乗せて新大陸へと旅立つ朝がやってきた。

「くぁぁぁ………っ」

昨日の夜は凄かった……何が凄いって最終的にラビッツコロシアムで秋津茜と斎賀さんもといレイ氏の連戦を観戦する流れになったのだが、レベルが新大陸前における最高ラインまで上り詰めた二人に最終戦で割り当てられた敵がこれまたヤバイ奴らだったわけで。

秋津茜の最終戦の相手は白亜の皮膚に業火を纏う巨軀の亜竜(恐竜)……ジュラ・ヴァルカンレクス。

ヴァッシュの説明曰くなんか別のモンスターの「古代種」とか心躍る設定のモンスターであるらしいが、単純にスペックモンスターである為に秋津茜は大苦戦を強いられることになった。

レイ氏の最終戦の相手は漆黒の鬣に蒼雷を纏う堂々たる獅子……レオ・ネメアレクス。

こっちはこっちで「リュカオーン相手でも一歩も引かぬ王威を持つ獣」とかご大層な設定を持つモンスターであり、このライオンが通った場所に時間差で「通電」する攻撃は同じ雷を扱うアトランティクス・レプノルカとはまた違う厄介さを見せつけていた。

というかあのライオン野郎、しょっちゅう俺の方をガン見して来たのはどういう事なんだか。レイ氏がデスポーンした時なんか一目散にこちらへ飛びかかって来たからな、レイ氏のユニークじゃなかったら俺が仕留めていた所だ……四回くらいは乙るかもしれないが。

二人とも何度も敗北するものだから最終的に片方が戦っている間もう片方は俺と作戦会議という、冷静に考えて俺がぶっ通しで働いてる疑惑が溢れる形で落ち着いた。

「おーう、見送りに来てやったぞ遭難予定者共」

「おっ、やぁやぁ遭難経験者さんお見送りかな？」

この日、海に飛び出す船は四隻存在する。その四隻目こそがクラン「旅狼」が主催し、クラン「ライブラリ」とクラン「黒狼」……もというクラン「黒剣」の合同攻略班によるユニークモンスター「深淵のクターニッド」攻略に向かう者たちを乗せる遠洋漁業船「セレス・テレシアル号」だ。

クターニッドのユニークシナリオＥＸ「人よ深淵(ソラ)を見仰げ、世界は反転る(マワ)」をクリアしたことで判明した周回可能ユニークシナリオＥＸの存在。

真理書に書かれた情報をある程度開示したことでライブラリが発見

した「深淵の使徒を穿て」とは別の前提シナリオ……それがユニークシナリオ「恐れ知らずの遠征漁業」だ。

要するに「今日は天候荒れそうだけど俺たちなら大丈夫！　漁に出るぞォ！」という死亡フラグ満載のユニークであり、実際予定通りなら幽霊船と遭遇する羽目になるので死亡フラグなシナリオと言える。

「七日間かぁ……実際どうだったの？　暇になったりした？」

「人数が人数だったし、昼も夜もモンスター大量発生するから言うほど暇ではないな」

彼等がアトランティクス・レプノルカ辺りに蹂躙されて地獄を見ることを願いつつ、俺はペンシルゴンからの質問を適当に流す。

「むぅ、攻略書持ってるくせに情報絞るのはどうなのサンラク君？」

「これがウェザエモンみたいな知ってても死ぬタイプなら良かったけど、生憎クターニッドはネタが割れると単なる作業になるからかなぁ……実際萎えるだろ？」

「実際それは否定しきれないなー、でも実際ＮＰＣ込みの八人ちょいで倒せたんでしょ？」

「レイ氏のアルマゲドンクラスの火力三連発に戦術機獣まで持ち出したけどな」

「秋津茜ちゃんも大概ヤバイよねぇ……竜息吹ってもっとこう火炎放射とかそういう感じの技なのにあの子の奴、一直線に空を薙ぎ払

うもん」

肺活量とＭＰに依存するとはいえ、全体攻撃可能な極太ビームだもんなぁ……しかも砲台は機動力に優れた軽戦士と来た。

「……で？　そこの水揚げされた魚類は何死んだような目をしてるんだ？」

「なんか例の彼女に「七日間の長期クエストの為にフィフティシアに行かないといけない」ってのがバレて一晩中攻略してたらしいよ？」

「流石にぶっ通しは死ねるって……」

ちなみに例のあの人、自前回復で前線に立ち続けるイモータルグラップラーとして順調に強化されてるらしい……だからボスエネミーに回復技搭載するのはやめろって前世紀から言われてんだろ。

「まぁなんだ、観光楽しんでこいよ」

「はっ……一発クリアしてあげるよ」

「生意気(ナマ)言うのはユニーク自発してからにしてもらえますぅー？」

「あーはいはい言われると思ったよ！」

未だ広く発表されていない内容故に、参加プレイヤー達はどこかコソコソと動いて準備を進めているが、その中でもやはり一際目を引くのはあの集団だろう。

「おや、確か君は新大陸調査船の方に乗るのではなかったのかね？」

「もう少し時間があるんで見送りに来た感じですよ」

きゃるんきゃるんな見た目に渋すぎる中身、「ライブラリ」のインテリジェンスネカマことキョージュにそう返しつつ、キョージュを肩に乗せるそれへと改めて視線を向ける。

「あら、貴方がサンラクさんなのね？　サイガさん達や夫からお話は聞いておりますのよ？　マッシブダイナマイト、と名乗っております……どうぞ良しなに」

「サンラクです……あー、よ、よろしくお願いします……」

筋肉、筋肉、筋肉。力こそが正義、その他の全ては不要と言わんばかりの……もうなんと言うか見た目からしてマッシブがダイナマイトしているかのような、あのレイ氏すらをも超える巨体にボディビルダーの如き筋肉を搭載した重戦士。
若干ウェーブかかった金髪に無精髭、彫刻のような彫りの深い顔から放たれる穏やかさと年を経たことで増した深みを内包する声は、ともすればエセ魔法少女を超えるちぐはぐさを撒き散らしている。

「あぁ、彼女は私の家内でね。「黒狼」……あぁいや、「黒剣」からの参加者としてメンバー入りしているのだよ」

「うふふ、0（レイ）さんから聞いた話ではクターニッドは物凄いパワーの持ち主と聞いたら、好奇心を抑えきれなくて……」

なんだろう、キョージュの奥さんということで少なくとも五、六十歳という話だが秋津茜に通じる若さを感じる人だ。

とはいえ、俺程度なら真上からプレスできてしまいそうな馬鹿でかい大剣を背負った筋肉ダルマがあらあらうふふと笑う姿は結構なホラーだ。

「にしてもすごいドリームチームだ、「黒剣」からの参加組は一線級ばかりだって話ですけど」

「それはそうだとも、君からすれば何でもないかもしれないが、我々からすればユニークモンスター「深淵のクターニッド」との決戦は大きな意味を持つ」

いいかね、とキョージュは破落戸通りの奥にある港、そこから僅かに見える三隻の調査船に視線を向けつつ俺へとこう告げた。

「私の見立てでは天覇のジークヴルムとの決戦は相当先になると考えている」

「と、言うと？」

「良いかね？　あのユニークシナリオＥＸのクリア条件は五体……いや、一体は既に死んでいるという話なので四体のドラゴンの撃破、もしくはジークヴルムの打倒となっている。だが黄金の龍は行方をくらまし、五体の竜は恐らく新大陸の全域に散在しているものと考えられる……分かるかね？　少なくとも片方のクリア条件は「新大陸全域の踏破」無しには成立し得ないのだよ」

そして現在プレイヤー側が接触したドラゴンは二体。一体はエルフ？　だったかと同行するプレイヤーが遭遇した緑竜、そしてもう一体が新大陸の前線拠点を襲撃した黒竜。

「つまりはだサンラク君、恐らくウェザエモンやクターニッドと違いジークヴルムのユニークシナリオＥＸはワールドクエストとより直接的に連動している。ここから導き出される結論は……」

「他ユニークのようなサイドストーリーではなく、プレイヤー全員が関与し得る長編シナリオって事……ですかね？」

「────素晴らしい、花丸満点をあげよう」

笑みと共に俺を褒めるキョージュの顔は、少女のあどけなさを加味しても教え子を導く教師としての顔であった………ゴリゴリマッチョに肩車されてるけど。

マッダイさんの武器は形状こそ大剣ですが刃が潰れた打撃武器です、武器種的には棍棒。
サバイバアルと同じ戦士系最上級職業に極振りという空振りイコール死の超ロマンビルドですがクリーンヒットすれば水晶群蠍の外殻すら粉々に砕く破壊砲なのです

ジュラ・ヴァルカンレクス
ドラクルス・ディノサーベラスの元となった「ティラノス・サーベラス」の古代種……逆に何故進化の過程で首が増えたのかは不明。
現役時代は捕食者、被捕食者共に巨大な身体を持っていたため問題なかったのだが現代に至る進化の過程で他の生物が極端に大型化する、もしくは小型化するというパターンに分かれたため安定した食糧確保が困難になり絶滅危惧種になってしまった。
簡単に言うと燃えるイビルジョーが一生大食いチャレンジかおつまみしか食べられない生活になったので滅びかけてる。
体力管理能力が欠落しているため、長時間戦闘を続けるとガス欠を起こして大幅に弱体化する。

レオ・ネメアレクス
原生のモンスターの中では最強クラスに位置する獅子型モンスター……なのだがその生態が理由で絶滅危惧種。
非常に好戦的かつ脳筋なモンスターであり、生まれた時から強者へ積極的に戦いを挑む性質を持つため、成体まで育つ個体は非常に少ない。だがもしも成体まで育つ事ができたならば、比類なき肉体と

蒼雷を操る無双の獅子がこの世に君臨することとなる――！

と、イキったところで獣の生態系は頂点に例の狼がいるためかませ犬ならぬかませ獅子としての運命が決定した哀れなモンスター。

特筆すべき弱点は存在しないが鬣を破壊する事で電撃攻撃を封じる事が出来、電撃さえ封じてしまえば単なるでかい猫になる。

ビッグ・バーニング・ビルド

「ここいらで一攫千金を狙うぜェ！」などと実に強固なフラグを行った漁船長によってセレス・なんたら号が海へと出て行ったのを見送った俺は一旦ラビッツへと帰還、そしてエムルを引き連れ依頼主たる聖女ちゃんの滞在する屋敷を訪れていた。

「なんか人間と関わる時の女体化率が高い気がする」

だってジョゼットが「じゃあ女体化しようか」とごく自然な流れで言うもんだからそういうものなのかな、と……何やら私情が混じっているような気がしてならない。

「サンラ子(コ)サンは若干頭が揺れるですわー」

「骨格の問題じゃねーかな……エムル、マフラーモード」

「はいなっ！」

さて、裏稼業的職業の仇討人に就職したわけだが、頭領からもらったこれは果たして身分証明書足り得るのやら。

「……えぇ、その紋様があれば搭乗は可能でしょう」

「やったぜ」

「開拓者よ、聖女さまの前である。口を慎みなさい」

「私は気にしていませんよジョゼット」

「はっ！」

相変わらず一切の妥協がないロールプレイだ、面会する前までのフランクな態度は欠片も感じられない。
まぁロールプレイガチ勢故のきつい態度と分かっていれば別にどうとも思いはしない。聖女ちゃんに諌められて口の端が若干吊り上っているジョゼットから視線を外しつつ、俺は頭領から渡された身分証明アイテム「凝視鳥の紋様証」を見つめる。

「俺の印象は鳥で固定されてんのか……」

いやまぁ、大体の時間は凝視の鳥面を装備して過ごしているし、人里で立ち回った時は大抵鳥頭だったから仕方ないといえば仕方ないんだが……うーん納得いかない。

「あまり表向きに認めるわけにはいかないのですが、仇討人の存在は王国から黙認されていますから」

「必要悪ってやつですかね？」

「えぇ」

ロールプレイを続行しながらも「詳細希望！」と言いたげなジョゼットの視線を受けつつ、俺は改めて聖女ちゃんに問う。

「此度のクエスト、国王陛下の保護及び護衛……段取りに変更は？」

「陛下を我々の庇護下まで護衛する流れは変わりありありませんが……少々予定に変更があります」

「と、言うと？」

「此度の王族による査察に……第一王女が同伴する、という情報が入ってきました。第一王子と第一王女は……えぇ、その……非常に仲が悪く、恐らくは」

まとめて始末するつもりってか、ここに来ての面倒事追加は勘弁して欲しいぜ……

「こちらからも追加で人を動かしますが、有事の際は国王陛下に加え第一王女殿下の護衛もお願いできますでしょうか？」

「……心得ましたとも、時に聖女様一つお願いしたき事が」

ぴくり、とジョゼットの眉が動く。女騎士ロールプレイを出すべきかどうかで迷ったな？　悪いがグダるので見逃して欲しい。

「聞きましょう」

「単刀直入に言いますが……かの国よりの友人を同行させることを認めていただきたいのです」

実際この確認が必要なのかどうか、で言えば重要度はそこまで高くはない。ジョゼット達はプレイヤーなのでエムルを見ても即退治、とは動かないであろうし。

重要なのはラビッツ関連の話題を振って向こうがどういう反応をするか、だ。

「……成る程、とはいえ既にお連れのようですが、元より拒むつもりもありません。ジョゼット、船内の者達に「ヴォーパルバニーを見かけても攻撃しない」ようにと通達を」

「畏まりました。龍(テチ)×4、頼めるか？」

「了解しました！」

ジョゼットのロールプレイに従って、部下として付き従うクラン「聖女ちゃん親衛隊」のメンバーが部屋を出て行く。すれ違う直前、ウィンクされたのでこちらも後ろに回した手を振っておく。

「それでは参りましょう、我々三神教の者はズィーズィー号に搭乗する事になっています」

というわけで俺は今ラビッツにいます。新大陸調査船？　乗ったよ、個室のベッドがセーブポイントになってたから一回セーブしてからエムルワープ。いや本当便利なウサギだよ君ってやつは。

「第一陣は陸に乗り上げた船をそのままセーブポイントにしてるって話だからもしやとは思ったけど、【座標転移門（テレポートゲート）】万々歳だな」

「うー……もうちょっとお船の旅を満喫したかったですわー」

安心しろエムル、数日間は船旅らしいからそのうち飽きるほど船に揺られることになる。まぁエムルがいる限り……というかヴァッシュチルドレンが付いているプレイヤーは好きなタイミングでファストトラベル出来るんだがね。

「さーて、どうせ新大陸に着くまで暇なんだから色々やる事やっちゃいますか！」

レイ氏は滑り込みで搭乗権を得たらしいが、生憎乗り込む船がベルヘモルス号になってしまったらしく「無念……！」と心の底から悔しげであった。
意外だったのは秋津茜やルストモルドのコンビがしれっと新大陸行きの船に乗っていた事だな、あいつら地味に普段何してるのか不明なんだがどうも商人系ＮＰＣのクエストを受ける事で新大陸行きの

調査船に乗れるらしい。

あとやはりと言うか密航プレイヤーも結構な数いる、というかいた。

見つかった時点で船底の営倉にぶち込まれるらしいが新大陸に行けるなら多少のカルマ値は無視しても良いという考えなのだろう。

よくよく考えれば俺も聖女ちゃん経由で搭乗権を得たわけだから、正規の志願抽選以外にも抜け道が用意されているんだろうが……逆に言えばそれだけの抜け道があってなお密航が選択肢として存在する程、このゲームの人口が多いって事だ。

「というわけでとりあえず性別戻してくるわ」

「はいなはいな」

チーッス！　遊びに来たよー！！

あ、金晶独蠍（ゴールディー・スコーピオン）君！　お邪魔してまー……ぐぼぁ。

「よし戻った、これお土産」

「わぁいラピステリア星晶体ですわー」

よし、ビィラックのところ行くか。

兎御殿には二つの工房がある。一つはヴァッシュの工房、そしても

う一つがビィラックの工房だ。
悪く言えば面白みのない、よく言えば質実剛健なヴァッシュの工房とは異なり、ビィラックの工房は主に俺のせいでどんどん魔改造が進んでいる。

「おー、来たけぇ。見りゃあ、これが完成した新型の炉じゃ」

「おぉー……あれ？　まだ二週間経ってなくね？」

「ん」

指差した先には疲労困憊、と言った様子で倒れ臥すアラミースの姿が……あっ（察し）

「まぁあの阿呆に手伝わせたんもあるが……わちもワリャがバカスカ仕事を任せてくるけぇ、鉄の扱いに慣れてきたんじゃ」

「隠しステータスで生産とは別の成長値があるのか……？　炉の改装ならむしろ鍛冶じゃなくて建築系のジョブが領分っぽいが……」

まぁいいか、降ってきた幸運を疑い続けてもしかたがない。
基本的に時代設定が中世辺りであるため、鍛冶師が使う炉はピザ窯のような形をしている。
まぁビィラック工房の場合は隅の方に手術台みたいな近未来設備があるわけだがそれはこの際無視、注目すべきは改装された炉だ。見た目は何というか、補強されまくったドラム缶みたいな感じだが通常の炉と違う点は燃料を投げ込むスペースが無い、ということか。

「ワリャが持ち込んだ種火はぁ……まぁ端的に言えば「消えず、殖(ふ)える火」なんじゃ」

要するに「放っておくと内側から炉が壊れかねないので超補強しました」という事らしい。俺は生産職にあまり興味がないので完全に他人事なのだが、馬鹿みたいにレア鉱石を使っただけあってアラドヴァルの強化に不足はないようだ。

「わちの全力見せちゃるけぇ！」

平均以上のサイズとは言え人間の俺と比較しても大剣ほどのサイズを誇る朽ち灯りしアラドヴァルは、ビィラックが持つと最早建築資材を担いでいるようにしか見えない。

だが他者のアシストなど不要と言わんばかりの膂力をもって炉にアラドヴァルをぶち込んだビィラックが何やら紋様が浮かび上がる赤い宝石を握りしめて振りかぶる。

「おどりゃぶち燃えろやぁ！！」

「投げたですわ！」

「ナイスフォーム、メジャー狙えるぜ」

ビィラックが炉の中へ宝石を投げ込んだ瞬間、補強したはずの新型炉が凄まじい轟音と共に内側から閃光を撒き散らす。ついでに白熱を直視したエムルが悶絶した。

「ふびゃぁあああああ！　目がぁぁぁぁですわぁぁぁぁ！！？」

「ちょっ、ビィラック大丈夫か！？」

「こん程度、ぬるいぬるい！」

「いやいやいやいや」

手を突っ込んだら一秒で消し炭（ウェルダン）になりそうな光熱放ってるぞオイ。

というか毛色的に熱集めまくるんじゃねーの？　黒だし。

ビッグ・バーニング・ビルド（後書き）

Q、炉の完成早めたのはちょっと御都合主義じゃね？
A．アラミースとラビッツの大工たちが頑張ったんですというかこのタイミングを逃すと次入れるタイミングが相当先になりかねないので許してください何でも（ｒｙ

これから先、女体化した主人公が男に戻っていたら「あっこいつ友達の家に遊びに行ったな」とお考えいただければ

大成の分岐路に立つ

鍛冶というものは要するに鋼を柔らかくして、ぶっ叩いて、冷やす、という三工程で成り立っている。厳密にはもっと複雑なんだろうがとりあえずこの三つのアクションは最低限行われるものだ。
だがアラドヴァルを復活させる今回の鍛冶は通常のそれとは全く異なる様相を呈していた。

「ぬ、ぉぉぉぉおどりゃあああ！」

燃やす、熱する、際限なく火力を高めて朽ちた刃を灼いていく。一瞬でも冷ましてしまえば全てが台無しになるとでも言わんばかりに火力を上げ続ける炉の中で、みすぼらしい刃が光の中に溶けてしまったのかと思える程の熱量が炉という牢獄の中で暴れ狂う。

「こん剣(つるぎ)は……炎なんじゃ。じゃけん、目ぇ醒まさせるにゃあ……鈍って朽ちた鉄を焼き潰すほどの、熱が必要なんじゃ……っ！」

「つ、つまりとにかく温度を上げろ、と……」

ゲーム故の痛覚遮断してなおサウナの如き様相を呈してきたビィラックの工房、だがそれすらも足りぬとばかりに炉内部に宿った炎は光と熱を更に増していく。

「ぐ……………ぉりゃあ！」

ビィラックが更に燃料を投げ込み、火勢が更に上昇する。あの時エックスブロッコリーに喰らわされた衝撃熱波を思わせる熱量が唯一

の出口として設けられた炉の口から工房内へと吐き出され、そろそろアラミースが死にそうになっている。

「エムル、アラミースを連れて退避。あとついでに水持ってきてくれ」

「は、はいなぁ……」

「お、乙女の妹君よ……顔を、うぶぶ引き摺るるるのは……」

ズルズルとアラミースを引き摺って工房から出て行ったエムルを見送りつつ、俺は光で塗りつぶされそうになっている工房内に改めて坐り直す。

「ビィラック……いざって時は引き摺ってでも退避させるからな……！」

「へっへ……ワリャはそこで見ときぃ……っ！　まぁだ、火力が足りんけぇ……本番はこっからじゃあ……！」

火力、火力ねぇ。

「時にビィラック、その宝石って何？」

「こりゃあ、キャッツェリアで加工された……火熾しの魔石じゃ」

要するに使い捨て魔術媒体(マジックスクロール)の更に下位互換、魔法とすら呼べない現象のばら撒きを行うためのアイテムであり、その中でも特に高い火力を熾せるものを起爆剤として炉に叩き込んでいるらしい。

「それってさ、魔力なら何でもいいのか？」

「んぁ……？　いんや、駄目じゃ。火の魔力が篭ったもんじゃないと……て待ちぃや、おどりゃ何して……」

持ってるんだよなぁ……「火属性」の鉱石。

「ローエンアンヴァ琥珀晶ってさ……よぉーく見ると、中に封じ込められたものが何なのか分かるんだよな……」

封雷の撃鉄・災に使用したものは琥珀の中で黒い火花（スパーク）が散っていたし、今俺が握っている……そう、さっき水晶巣崖で採ってきた新鮮な琥珀晶の中では琥珀色に包まれてなお紅蓮に燃え盛る火が見えている。

特に使い道もないので結構な数の琥珀晶を持っているのだが、その中でもこの琥珀が一番すごそうな気配を漂わせている。

「ビィラック……ちょっと離れてろ」

確かローエンアンヴァ琥珀晶にはその質に応じたランク付けがあるらしいな。丁度いいじゃねぇか、クジ引きと洒落込もうぜ。

サウナ地獄と化した工房の中で、野球ゲーで培った豪腕の記憶が唸りを上げる。

「乾・坤・一・球！」

ゴルフボール程度の大きさに紅蓮を内包した琥珀が理想的な速度の後押しを受けて俺の手から放たれる。

我ながら喝采を送りたいくらいの見事なストレートで飛んで行った琥珀が光の中、熱に溶けて消え……

「おわ」

「んぎゃ」

次の瞬間、純白の光熱を放っていた炉の中が紅蓮一色に塗り替わる。琥珀の檻から解き放たれた炎が炉の口から余波を吐き出し、咄嗟にビィラックの盾となった俺の身体が木っ端微塵に砕け散る。

暗転からの明転。

「っは！」

リスポン！　兎御殿の方で一回セーブしといてマジ正解！　でかした過去の俺ェ！

「サ、サンラクさん！　何だかやばい音がしたですわ！？」

「ビィラックの安否確認が先だ、行くぞ野郎ども！」

「乙女の危機だとぅ！？　我が旋風よ哮り舞えぇぇぇ！」

言葉通りに猛烈な速度で走って行った走って行ったアラミースに追走してビィラックの工房へと戻ると、そこには熱波の余波で吹き飛ばされたのか工房前の廊下で目を回すビィラック。そして先程までの猛威が嘘のように普段通りの光量に戻った工房があった。

「とりあえず生きてるか……」

適当に燃料入れたら暴発して娘さんがお亡くなりになりました、と

かケジメじゃなくて処刑案件（ケジメ）になりかねない。ある意味では助かったが……

「おぉ乙女よ、ここはやはり愛する者のキスで……」

「死にゃ！」

「アゴァ！？」

兎の脚力でキックアッパーはあかんて……美しい軌道を描いてノックアウトされたアラミースに合掌しつつ、目を覚ましたビィラックに手を貸して助け起こす。

「ワリャ、なんちゅーもんをぶち込んでくれとるんじゃ……」

「いや俺もびっくり、まさかあんなに火力が増すとは」

「増すどころか倍増しとったわ……じゃけん、朽ちた刃は完璧に蘇ったけぇ」

先程までの光と熱が嘘のように消失した炉の内部、全てを焼き潰したかのように思えたあの猛威の中でただ一本の剣だけがぽつんと残っていた。

「ついに真なる姿を取り戻した英傑武器（グレイトフル）……アラドヴァル・リペアってとこじゃな」

「おぉ……」

木の葉に走る葉脈の如く「火」を脈打たせる穂先の剣。冷静なよう

で呆けていたのか、重さと釣り合わない腕の力で持ち上げたために
ふらついた刃が振りの力を感じさせない単なる落下で金床に……

じゅっ

「嘘ぉ」

熱した鋼を受け止めるだけあって、生半可な固さではないはずの金床がまるでチーズを溶かすかのように溶け落ちた。いやいや、刃じゃねーぞ剣の「腹」が当たってコレ？

「わぁぁたわけぇ！　床に置くな床にぃ！」

「うおお！？」

気づけば床を溶かしてズブズブ沈み始めていたアラドヴァルを慌てて持ち上げる。このまま持っていては危険と判断し、炉の中に戻してようやく全員が息を吐き出して肩の力を抜いた。

「なんたる熱量……まさか、先の劫火を全て一身に喰らったとでも言うのか？」

剣の形に溶け凹んだ床を眺めながらアラミースが呟く。

「流石の俺もこれを扱うのはちょっと厳しいぞ」

大剣ってのは盾として運用したり打撃武器として扱ったりもできるわけだが、そう言う運用をする場合は結構刀身に触れることが多い。だがこの剣でそれをやったら手が溶け落ちてもおかしくはない。まぁ尤も、敵に叩きつけても極めて有効な一打にはなりそうだが。

「わぁっとるわ……こりゃあ「鞘」無しにゃあ扱えん」

成る程、下手にインベントリアに突っ込んで大惨事になったら笑うに笑えないし、この極悪刀身を包み込む鞘があるならそれに越した事はない。

「でもでも、こんな熱々の剣をしまえる鞘とかあるんですわ？」

「それな、流石に剣より重い鞘はキツいぞ」

だが流石は「名匠」ビィラック、アラドヴァルの本質を見抜いた鍛冶師としての目は既に答えを導き出しているらしい。

「確かにこん熱に耐える鞘を拵えるにゃあ、あの炉を鞘に改造するくらいせんといかんじゃろうが……世ん中にゃあ魔法っちゅー便利なもんがあるけぇ、何とかなるじゃろ」

「具体的には？」

「エフュールの奴に手伝わせて水の力ぁ持つ鞘を作る、そん為には強い水の力を持つ素材が……」

ゴロゴロゴロ

・スレーギヴン・キャリアングラーの素材（余り）
・スレーギヴン・キャリアングラーが眷属にしてたモンスターの素材
・カイセンオーの素材
・アトランティクス・レプノルカの素材（余り）
・アルクトゥス・レガレクスの素材（余り）

・なんかもう大量にあるルルイアス産の海産物

「…………」

「…………」

にこぉ……と鼻から下が焼け落ちた凝視の鳥面で笑みを浮かべた俺に対してビィラックは長い長いため息をつくと……

「とりあえずはそん覆面の修理からじゃな」

「よろしくお願いしまーす！」

耐久がやばいんだよ。

大成の分岐路に立つ（後書き）

そら最上級の「山火事」が封じ込められた爆弾ぶち込んだらそうなるよ、という

ローエンアンヴァ琥珀晶の元となった煌炎樹は名前からして火耐性が高そうですが、実際その通りである煌炎樹すらをも焼き尽くした炎……一体過去に何が

神代人「火山になんかおるやんけ！　調べたろ！」

ニラ蝶「へっくしょん」

ＳＦ特有のとりあえず調べたせいで地雷踏むテンプレ展開いつ見てもツッコミ入れるけど好き

ティーアス先生にお任せ！（前書き）

気づけば投稿から一年が経っていた……ここまで拙作を続けるモチベーションを維持できたのも皆様のおかげです。
本当にありがとうございます、これはもう１日１万回感謝の更新しか……しかし頭も手も足りない
あーあ、或る日突然メタグロスに進化できねーかなぁ！！
それはともかくこれからも拙作をよろしくお願い致します！！

ティーアス先生にお任せ！

「幼女先生（ティーアス）、折り入って相談が……」

「……女の子（おんなのこ）のほうがいい」

聖杯フラーッシュ！

「幼女先生（ティーアス）、折り入って相談があるのですが」

「んっ」

まぁ座れや、とでも言わんばかりに隣の席を顎で示した先生のお言葉に従いカウンターに座る。あ、俺……じゃない俺（ワタシ）にもアップルパフェひとつくださーい。

「……なに？」

「あぁそうだ。先生、まだ行ったことのない街で発生した依頼をどうにかして受けることは出来ないでしょうか」

「……できるよ？」

「えっマジ？」

「ん、受（う）けることはできる」

あっ、現地には走って向かえと。そっかぁ……うーむ、そう都合よ

くは行かないか。
パフェの山をスプーンでグリグリと掘り抜いている俺に何かを察したのか、幼女先生はフンスと先輩風を強めながら俺へと助言を与えてくれた。
「……街から街へは、基本的にまっすぐいくけれど、横道を通っていくこともできる、よ？」
「あー、そういえばそんなのもあったっけ……」
基本的に多少の分岐こそあれど真っ直ぐ進むシャンフロのエリア事情ではあるが、地図には表示されない横道があるのだという。
そこにはエリアボスではないものの、素通りをそう簡単に許さない程度には強力なモンスターが配置されているらしい。そうか、そういえばそんなのもあったっけ……つーか水晶巣崖の横道とか通過不可能でしょ、雑魚敵がクソエンカの蠍だぞ。飛べとでも？
「……どこに行きたいの？」
「あー、実は武器を強化するのにちょいとばかし支配軍蜂を狩る必要がありまして」
そう、今の俺は強化期間中なのだ。壊毒という強そうに見えて実際は剣そのものの耐久値が低いせいでろくすっぽ役に立たねぇ、あーでも最近はサイガー１００にトドメを刺すという大役を成し遂げた帝蜂双剣君の強化計画を立てているのだ。
いや、大躍進を遂げた傑剣への憧刃君が便利すぎるってのもあるが。
掠っただけでも死ぬ……それこそリュカオーンのような相手に完全回避特化にすれば役割もあるんだろうけど……それならそれで甦機

装や兎月でいいじゃん？　となってしまうのだ。
ちびちびと強化したりしているのだが、やはりここは思い切って大改造を施そう、という訳だ。

「……マスター、地図（ちず）」

「畏まりました、少々お待ちを」

カフェ「彷徨う剣」でバーテンダー兼マスターをしているダンディなおじ様は仇討人達の隠れ蓑として殆どの街に存在するカフェ「蛇の林檎」で店主をしている同じ顔をした男達の父親であるらしい。
慇懃さの感じさせない優美な一礼で店の奥に引っ込んだマスターは暫くするとこの大陸の全容を書き込んでいるのだろう巨大な羊皮紙の束を持ってきた。
ばらり、と開かれた大陸地図を広げた先生は小さな指でトントンと羊皮紙を叩きつつ、地図の上を進んでいた指をある一点で止めた。

「ドミネイオン・ホーネットが生息（せいそく）してるのはこの気宇蒼大（きうそうだい）の……」

「ティーアス様、失礼ながらその条件であればこちらの場所かと……」

数秒ほど沈黙。すすす、と先生の指が「気宇蒼大（きうそうだい）の天聖地（てんせいち）」の一つ前のエリア、「雲上流編（うんじょうりゅうへん）の雲海地（うんかいち）」に移動する。

「……ここ」

「アッハイ……やっぱりサードドレマから鐵遺跡経由で行くのがベターなのか……」

「なんで？」

「はい？」

なんで、ってそりゃ距離的にそれが一番手っ取り早いから、以外にどんな理由が……

「ここから」

そう言って先生は奥古来魂の渓谷を指差し、そのまま地図の上に指を走らせて……

「ここまで」

そして雲上流編の雲海地を指差すと至極あっさりとその言葉を口にする。

「走りぬけたほうが早い」

「えぇ……」

いや、確かにどのエリアも縦長なマップをしているし、神代の鐵遺跡の複雑さを加味すればタイム的には早いかもしれないけど……あーそっかＴＡＳだもんな１％でも可能性があればそれは実現可能な手段ですものね。

「……横道には大抵そこを根城や住処にするモンスターがいる、でもそれは番人のように道をふさぐモンスターたちほど人間を敵視してない」

「要するに……うまいこととすり抜けて突っ走れ、と」

「そうむずかしいことじゃない」

いやまぁ確かに事前情報があれば……え？　水晶群蠍の長老個体が物理的に立ち塞がる？　あの陸上空母みたいなやつじゃねーか却下です先生。
人間（プレイヤー）はどう足掻いてもＲＴＡが限界なのだから……あ、そう言えば俺がここに来るそもそもの発端になったルティアはどこに行ったんだ？

「……このほうが一番（いちばん）速（はや）いのに……ルティアはバカンス」

「バカンス？」

「そう、何日（なんにち）かふねの旅（たび）」

へぇー、中々に優雅な事してるなあの人……タイミング的に俺と戦った直後に準備しなきゃ間に合わなそうな感じがするが。というか何日も船旅……んんー？

「……いや、考えないでおこう」

場合により、この情報は爆弾になりかねない危険性を内包している。
いやそもそも仇討人のジョブチェンジ条件自体爆弾なんだけども、頭領の話を噛み砕いて考察した限り、一定以下のカルマ値を保持した状態で賞金狩人相手に実力を見せるとかそんな感じだろう。
だがこの条件、下手に明かすと着せ替え隊の活動に響きかねないんだよなぁ……サバイバアルが知り合いだった以上、俺の行動が引き金で奴の楽しみ方を歪めたくはない。

「そうだ先生、可愛い服を見つけたんですが私服にどっすか？」

イェーイ、はいチーズ。ふふふ、今この瞬間俺の女子力は際限なく高まっていると言っていいだろう……！

鮭頭だけど。

なんだかとても懐かしさを感じる神代の鐵遺跡。今となってはあのザリガニ野郎も鰻も等しく逃走するだろうからあのレベリングスポットにもう用はない。つまり最短を最速で行けばいいという事だ、シンプルで大変よろしい。

「ただなぁ……」

単純に木が生えまくってる樹海エリアや、ぶっちゃけほぼ一本道な死火山エリアと違ってこのエリアは元が人工物ということもあってかどちらかといえば迷路やダンジョンに近いマップだ。

まぁ要するに真っ直ぐ直線に進む、というのは無理なわけで。しかも所々が崩落してたり例の浮遊板があったり……しゃーない、変に横着せず真っ直ぐ進むか。

「神代製のモンスターだと「呪い」系の雑魚避けが効かないの地味にウザいな……ええい鬱陶しい」

俺の事を恐れる素振りすら見せないドローンを傑剣(デュクスラム)への憧刃で粉砕しつつ、曲がり角を曲がって……こっち行き止まりだったか、逆方向に進む。

「よっ、ほっ」

おや、天然の吹き抜けと化した亀裂の下の方にプレイヤーの集団。まぁこのエリア、ただ次の街に進むだけなら最上層を真っ直ぐ進むだけでいいんだが下の階層の方がアイテムや素材的にうま味が多いらしいし。お陰で俺は楽々ソロで攻略できてるわけだが……あ、タンクが足を踏み外した。御愁傷様です。
おっと空中足場にいる時に襲って来るんじゃねーよハイキックで撃墜！

「やっぱレベル帯が低いからあんまりワクワクしない……」

俺の場合ヴォーパル魂パラメータに響いて来るから割と切実な問題なんだよなぁ、まぁ素材稼ぎ兼鉱石稼ぎ兼ヴォーパル魂稼ぎを同時進行できる神スポット行けばいいんだけど、流石に何度も通い詰めるのもそれはそれで面倒くさい。
やはりタイムアタック風味で速度を競った方がモチベーション上がりそうだな。それとも危険な横突っ切りルート……いや、水晶巣崖

は死を前提として突撃するなら慣れたもんだが生還を条件にすると
難易度爆上がりするからやっぱり無理だな。

ティーアス先生にお任せ！（後書き）

初々しいとあるパーティのタンク「シャンフロすごいなぁ、グラフィックすごいなぁ……ん？」
上からこちらを覗き込む謎の鮭頭「…………」
初々しいとあるパーティのタンク「ひぇっ（ＳＡＮｃ失敗）」
上からこちらを覗き込む神話生物「御愁傷様です」

ちなみに水晶巣崖の横道にいる例の蠍は基本的に動かないので踏んづけても素通りできるにはできますがそれはそれとして蠍が大量に沸きますし、蠍の幼体を攻撃した瞬間に起動するのでどちらにせよ難易度が高すぎる地獄絵図です
なお幼女先生は普通に行き来してる模様、如何にクソＭｏｂとてシステムの暴力には勝てないのです

・支配軍蜂
水晶群蠍と似た響きのモンスターだが別にそこまで強くはない。群で他モンスターを襲って捕獲、半殺しと餌付けを繰り返して自身のコミュニティーに取り込んでしまうというなかなかに恐ろしい生態を持っている天然物のテイマー……だが、深海にはもっと恐ろしい鮟鱇がいるのでやっぱりそこまで恐ろしくもない。

メガトン腕輪とエロ大根（前書き）

ちなみに「股大根」と呼ばれ大黒様にお供えしたりする昔話もある
らしいっすね
昔の人も考えることは同じじってことですわビバクールジャパン

メガトン腕輪とエロ大根

「能動的ギックリ腰ィ！！」

神代の鐵遺跡エリアボス、老朽と風化を機体に馴染ませた「ルイン・キーパー」。レベル差があれどその役割と性質ゆえに逃走を許されない遥か神代の機械人形の腰がポッキリとへし折れる、そして今に至るまでに全身の関節という関節をへし折られたダルマゴーレムが砕け散った。

ドロップアイテムとして「苔生した装甲板」が落ちているが、水晶の方が耐久あるだろうし拾ったところで使い道が……まぁ高レベルになってからのやり直しってこんなもんか。まぁ拾うんだけどね、インベントリに制限無いんだからそりゃ拾いますわ。

「さぁて……行くか」

所詮は目的における中継地点でしかない、目指すは雲上流編の雲海地！

……の前にちょっと気になることがあるので一回戻るか。

神代の鐵遺跡の先に存在する六番目の名を冠する街シクスブルクのロケーションを踏んでおきつつ、使い捨て魔術媒体でラビッツに転

移、アップルパイならぬキャロットパイをガジガジ食べていたエムルを頭に乗せて航海中の新大陸調査船に転移。この物理法則ガン無視したファストトラベル、ゲームじゃなきゃ味わえませんよ……

「今日はサンラ子(コ)サンのままですわ？」

「寄り道帰りからそのまま神代の鐵遺跡攻略してきたからなぁ……」

適当に船から身投げしてもいいが、この船には他のプレイヤーも乗っているので船内を歩くときはむしろこっちの方がいいかもしれない。

新大陸調査船は魔法だかを動力として動く、中世に魔法と若干の古代技術(かがく)を混ぜた事で完成したファンタジー豪華客船だ。

その役割上、ある程度の兵装が搭載されていたりもするが数日間大量のプレイヤーを船詰めにするだけあって船内には簡単ながら売店があったりするらしい。

ちなみに聖女ちゃんの依頼を受けたことで三神教のバックアップを受けた俺はスイートの一つ下くらいの等級の船室である。下々の者共を見下ろしながら味のある葡萄酒を飲むのは最高だぜ、若干苦いブドウジュースって感じで酔うもへったくれもないのだが。

「マップマップ、んー…………」

船内カフェ「海蛇と林檎」……ありますねぇ、やっぱりダウトじゃねーか！

「カチコミは後回しだ、とりあえず甲板に出る」

数日間の船旅とは実質的な缶詰に等しく、また何らかの事情で親し

いプレイヤー同士が別々の船に割り当てられてしまうこともある。
別に同じクランだからと言って同じ船に分けられるわけではない、むしろどういう経緯で船に乗ったのか、こそが重要なので俺、秋津茜にルストモルド、レイ氏で別々の船に乗る事もある。

では船旅中はログイン中一切のコミュニケーションが出来ないのか？　答えは否だ。
間違っても人目の多い甲板で衣服爆散、なんて事にならないよう安物の装備でタイマー調整をしつつ船員ＮＰＣに頼んでカモメ……と思しき鳥を二羽貸してもらう。

「んぴゃっ！？　つつくなですわ……っ！　いだっ、だだだっ！？」

「やめろやめろ、後でルルイアス産の魚をやるから大人しくしてろ」

「「プェープェー」」

カモメ……？　ヒヨコみたいな鳴き声のハヤブサもそうだが、このゲーム作ったやつとりあえず現実とは違う鳴き声にしとけばいいかって思ってないか……？
まぁいいや、宛先はレイ氏と秋津茜……っと、ルストとモルドは航海中はひたすらネフホロやってそうな気配がするので除外する。

「そっちの船のマップに「海蛇の林檎」ってカフェはありますか……っと、よし行ってこい！　無事帰ってきたら深海産の鯛をやろう！」

「「プェー！」」

鯛、めっちゃ食いづらかったんだよな……幅がね、こう河童か半魚

人みたいにバリバリ食うしかないから。その点細身な魚はクイっと
……ああ懐かしき孤島式食事術、ケアを忘れて食中毒までが一連の流れだ。
豚やら梟やらは遭難者をバリバリ踊り食いしてもケロっとしてるのに人間（プレイヤー）はキノコ一つで死線を彷徨う、進化の過程で捨ててしまった野生を自覚させる働きがあのゲームには……うわぁ、甲板にでかいタコが。

「うわぁぁぁぁぁ！！」

「う、うちのリーダーがタコに食われたぁ！？」

「触手プレイなのに微塵もエロくないんだけど！」

「と、とりあえずタンク前にぃぃ！！」

ゲーム的な配慮なのかそういうアイテムなのか、甲板から釣り糸を垂らしていたプレイヤーが海に引きずり込まれて代わりに巨大なタコが甲板に躍り出た事で辺りが騒然とする中、俺はなんとなく「憂いを帯びた眼差しで水平線を眺める何処か高貴さの漂う女性」的なムーブをして暇を潰す。

だってあのタコ、露骨に俺……というより俺の刻傷に反応して立ち位置変えてるし、クターニッドを見習えクターニッドを。

「おっ、帰ってきた……あーと、若干目つきが悪いお前はレイ氏に送ったやつだな？」

「プェー」

よしよしお前にはこの水圧的なアレソレで目玉が凄いことになっている鯛をやろう。さて返信の内容は……ふむ、成る程。おっ、秋津茜に送った方も帰ってきたな。
あの二人も俺と同様にファストトラベルが使えるから直ぐには返事が来ない可能性も視野に入れてたが、まぁ普通は即座に旧大陸に戻る方が珍しいか。

「ふふふ……愛い奴らめ」

「「プェープェー」」

「むむむむむ……！」

前に突き出した腕に止まった二羽のカモメ？　はプェープェー鳴いてるし、いつの間にか頭の上に移動していた兎はぷぅぷぅ鳴いてるし……俺もなんか鳴いた方がいいのか？

「テケステケステケステケステケス……」

「な、何ですわその名状しがたい声は……」

「顔から大量の触手が生えた人型スライムとしか形容できない謎生命体の警戒音」

陽務　楽郎が誇る宴会芸の一つだぞ、ネックなのはこのネタが通じる奴が殆どいないって事だけど。
ちなみに本家のロリボイス宇宙怪獣はこの警戒音を出しながら顔面の触手を動かしまくる。

「ベルヘモルス号」に搭乗しているレイ氏と、「リーバイオスヌ号」に搭乗している秋津茜の証言から、例のカフェは「ズィーズィー号」にしか存在していないようだ。

さらにそれとなく聖女ちゃんから聞いた話ではどうやら身分の高い者（NPC）はズィーズィー号に乗るように分けられているんだとか。

そして明らかに何らかの社会的地位を持っているであろう頭領の存在を加味すれば何となくズィーズィー号にだけ「海蛇の林檎」がある理由にも見当がつく。

「さぁーて、推薦者殿にご挨拶と行こうか」

何を目的として賞金狩人が新大陸に向かう船の中でバカンスしているのか、特に開示する気はないが解明してやろうじゃないか……！

「…………」↑床下収納の入り口に上半身が嵌って下半身だけが床から生えている見覚えのある脚装備

「…………」

スッと、一縷の望みを宿した眼差しでカフェ「海蛇の林檎」の店主……クローン説が拭えない「蛇の林檎」の店主を一回り若くしたような男性へと無言で疑問を投げかけると、彼は苦笑しながら首を横に振った。

「…………」

ぺしーん！

「！？！？」↑突然の攻撃に反撃しようと足を動かしたところバランスがずれてジタバタ暴れながら倒立体勢に

「…………」

何だか無性に悲しくなったので暫定ルティアのケツを引っ叩いてスクショしてからその場を後にした。俺は賞金狩人と話したいのであって床から生えたエロ大根みたいな下半身に用はないんだよ。

「何をどうやったらそうなるんだよ……」

自分が敵と見定めたものの正体が単なる風車だと悟ったドン・キホーテの気分だ、あまりに悲しくなったのでサバイバアルにエロ大根ルティアのスクショを送りつけておいた。

「俺は今深い悲しみに包まれているよロシナンテ……」

「誰ですわそれ」

「驢馬」

「アタシはヴォーパルバニーですわーっ！」

はいはいですわですわ、それはそれとして悲しみを乗り越えて本題に戻るとしよう。

こういう時に後回しにすると結局最後までズルズル引き摺ってしまうんだ、カンストまで上げてからの作業は効率的っちゃ効率的だけどより作業的苦痛も増すわけで……計画的強化はトロコンの必須事項！

ではいざ参ろうか、雲上流編の雲海地！

メガトン腕輪とエロ大根（後書き）

ルティア「この先の床下収納は、トレーニング用のアクセサリを装備しているとおっこちてしまいます。」
ルティア「だから、装備から外す必要があったわけですね。（アクセサリーを外す）」
（二つ装備していたのでバランスを崩して頭から床下収納に落ちる音）

誰だよミステリアスな女狩人をポンコツエロ大根にした奴（目そらし）

・賞金狩人ルティア
実装順的にも設定的にも賞金狩人としては古参の女性。人間が再現可能な限界値に設定されており「絶妙に勝てそうだけど勝てない」という憎らしい調整がされている。
実際のところは「超速」と「参撃陸斬」のコンボが鬼性能なのでプレイヤー性能で勝つことはほぼ不可能、仮に同じ「超速」の世界に踏み込んだとしても過剰伝達（オーバーフロー）状態時以上に操作性が難易度が高い。
え、二つ同時に使ったらどうなるって？　壁にシミができるんじゃないですかね
なお私生活では時折信じられないようなポンコツミスをするとの噂

基本的にシャンフロのエリアは熟語で形容されている。跳梁跋扈の森のようにそのまんま文字を使っていたり栄古斉衰の死火口湖のように若干文字が違っていたりするが、このエリアに関しては文字違いが文字通り、とでも言うべきだろうか。

「雲上流編……雲の上で流れて編む、まさにその通りだな」

雲上流編の雲海地、俺(サンラク)のアバターで腰程まである濃密な白雲が、大地一面を覆っている。それらは大気の流れによってまるで毛糸を編むかのような流れを形成しており、誰もが一度は夢見る雲の上に立っているかのような錯覚すら抱く。

これが地平線の果てまで続いているなら文句なしに絶景なのだが、所々に岩やら木やらが雲から突き出しているのも……まぁこれはこれで神秘的か。

「少なくとも地面は普通、これ転倒と不意打ちが怖いなぁ……」

実質的に視界の下半分が封鎖されているようなものだ、この雲海以下の背丈のモンスターが息を潜めて襲いかかってきたら厄介極まりないだろう。

と言うかこんな場所に本当にいるのかドミネイオン・ホーネット。聞いた話では他モンスターを調教するとかいう中々独特な生態のモンスターらしいので、蜂以外のモンスターにも警戒する必要があるか。

「エムル」

「はいなっ！　むむむ……【アクティブソナー】！」

かつては使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）で使用した【アクティブソナー】の魔法も、エムルに覚えさせれば使い放題。大規模強化を施したことでますますオプションパーツ適性が高まったエムルを探知機代わりに、俺は雲流の地を進んでいく。

バリィッ！

「エムル、なんか敵いる？」

「サンラ子（コ）サンに恐れなして、みーんな逃げてるですわ！」

「まぁ適正レベル的にもイジメにしかならんからなぁ……」

「でもでも、ドミネイオン・ホーネットも多分逃げるですわ？　どうするんですわ？」

「逃げてもどうしようもない状況に追い込んで根伐りにする」

「お、鬼ですわ！　この人鬼ですわ！」

もはや俺の装備が腰のベルトを残して弾け飛んだ事など話題にすら登らない。雲の中を泳ぐ……いや飛ぶ？　トビウオっぽいモンスターやらの雑魚モンスターが俺から逃げているらしく、全くと言っていいほどエンカウントしない道のりの中、目当ての蜂が何処にいるのかと辺りを見回しながら進んでいく。

「ううむ……下半身が雲のせいで濡れるのが困りものだ」

「アタシは濡れてないから問題ないですわー」

「……」

どぼん、と雲海の中に全身を沈め、三十メートルくらい身をかがめたままでシャカシャカ走り抜ける。
浮上すればあら不思議、水も滴る良い女と濡れ鼠ならぬ濡れ兎。

「…………まぁ、やるとは思ったですわ」

「俺の行動が予測できるくらい絆が深まっているようで何より」

やはりというか、雲海内部はほとんど何も見えない。可視範囲は一メートルを切っていると考えていいだろう。というか伸ばした自分の指先が見えなくなる、五里霧中とはこの事か……まぁナビゲーターが頭に乗ってるので問題はないか。

「サンラ子サン、なんかブンブン飛んでる反応をいくつも感じるですわ！」

「でかした！」

刻傷の適用範囲はこれまで何度か行ってきた検証でおおよそ十メートルくらいから適用される、と結論を出している。アクティブソナーの範囲が半径三十メートルである以上、約二十メートルのアドバンテージは大きい。

一度雲の中に全身を沈めた状態で頭だけを出し、よく目を凝らして

みれば確かに遠くの方になにやらこの純白の絨毯とはかけ離れた黒い粒が見える。鳥にしては滞空が妙であるし、これは本命を引き当てたと言っていいのでは？

「よしエムル……一旦お前はここで待ってろ」

「奇襲、ですわ？」

「あぁ、全力で走れば間に合うと思う。エムル、反応の所までに障害物は？」

「ないですわ！　真っ直ぐ平坦ですわ！」

「上々、それじゃあ蜂駆除と行こうか……！」

封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）を装備し、胸をノックして発動。バヂリと黒いスパークを纏った状態で雲に全身を沈め……ゴー！

「っ！」

視界制限くらいで俺を止められると思うなよ！？　フルダイブRTAに挑戦する走者は目隠ししてもスタートからゴールまで走り抜けられる猛者もいる、この程度の五里霧中など敵ではない！

過剰伝達（オーバーフロー）状態時は距離感が大きく切り替わる。油断してると何もない場所でバナナの皮を踏んだみたいな挙動になるし、モーションが過剰になっているのに加えて加速もしているので二回転半くらいして死ぬ。

だが逆に言えば普段はバランスの関係で継続が困難な動きも慣性で無理やり安定させることができる、鉄の塊である飛行機が莫大な推

進力で空を飛ぶようにな。
もはやほぼ転倒一秒前としか思えない限界までの前傾姿勢のまま雲の中を真っ直ぐ突っ切り、おおよその**アタリ**をつけた場所で跳躍。
そして跳躍と同時に封雷の撃鉄・災を解除！　十秒以下なら体力は減らない、連続でやるにはオンオフのモーションがネックだが一回きりなら有効な戦法だ。

「モンスターパニック的奇襲術だオラァ！」

気分は海面からいきなり飛び出してジョックを海に引きずり込むサメだな、だが俺はチェーンソーを喰らうほどヤワな挙動はしてねーぜ。

シャンフロでの蜂と言えば帝蜂双剣の素材元たるエンパイア・ビーを想起するが、あれはどちらかと言えばミツバチがモチーフだった。
だが運海面から浮上した俺の射程範囲に捉えられたドミネイオン・ホーネットは真っ黒なスズメバチ系……あきらかに種族繁栄の手段が襲撃と捕食で成り立っている手合いだ。
まぁスペックが違うのでそう大して脅威を感じることはないのだが。

「不意討ち（アサシン・キル）ってやつだぁ！」

真下から真上へと弧を描いて振り抜いた傑剣への憧刃（デュクスラム）がドミネイオン・ホーネットの腹を切り裂き、既に発動していた縷々閃舞の効果によって三倍になったヒットエフェクトが黒蜂の体力を喰らい尽くす。
「まずは一匹！」

レア素材を要求されるかもしれないからな、とりあえずこの場にいる蜂は全て狩り尽くす！！

乱暴で雑に扱っても割と大丈夫、的な風潮が俺の中で確固たる存在感を放ち始めた傑剣への憧刃君をぶん投げ、命中して怯んだドミネイオン・ホーネットをもう片方の傑剣への憧刃で斬り伏せる。

蜂が空中で爆散し、素材と突き刺さっていた傑剣への憧刃をキャッチしつつ次の蜂へ。と、ここでドミネイオン・ホーネットの妙な動きに気づく。

ビィィィィィィ……！！！

「いやお前らはビー、じゃなくてホーネットだろ……じゃなくて」

俺はこのエリア、さらにはこいつらについてある程度の事前情報を持っている。だからこそこいつらが単なる蜂でないことを知っているし、逃走せずに反撃を試みるという意味が何を指すのか、薄々だが感づくことができた。

例えば、だ。自分よりも強い相手に喧嘩を売られたとして。自分の力が足りない以上は普通逃げ出すだろう。

だが逆に、そんな力の劣った者が逃げないシチュエーションとは何か……簡単な話だ、対抗できるだけの「手駒」がいるって事だろ……！

「下僕を呼ぶためのホイッスルってか……！」

揺れる地面、後ろからエムルの声が聞こえる。どうやらエムルの探知範囲に何か大物が入り込んだらしい……分かるさ、あんなにあからさまにデカい雲の塊がこちらに近づいてきてりゃあな……！

「パォォォォォォォォォオオオン！！」

「でっか……！」

大型車、いや下手をすればそれより巨大な雲の塊から灰色の「鼻」がにゅっと突き出され、それがのたうつ蛇のように暴れ狂いながらその身にまとわりつく雲を吹き散らす。

こいつが雲上流編の雲海地におけるレアエネミー、クラウダイブ・エレファントか……！

というかてめー、俺への対応的にレベル１００超えてんのに何ドミネイオン・ホーネットの子飼いになってんだよコラァ！！

いきり蜂（後書き）

ドミネイオン・ホーネット「勝ったなガハハ」

なお流石に成体のクラウダイブ・エレファントを捕獲調教することはドミネイオン・ホーネットであっても不可能なので親から逸れた個体を子供の頃からみっちり調教したのがこの個体。光源氏計画……！

感動巨編「かわいそうな象」（終盤のみ抜粋）

クラウダイブ・エレファント。プレイヤーから見ればバレバレではあるが雲を身にまとうことでモンスターから身を隠す擬態特性を持っており、それ即ち奴はある程度雲を制御する術を持っているという事だ。

轟々と奴の長い鼻が地に広がる雲を吸い込み始め、この場限定ではあるものの水位ならぬ雲位が下がり始める。
なるほど、蜂どもが逃げ出さなかったのはこいつを手札として持っているからこそのイキリか……！

「エムルっ！」

「はいなぁっ！」

「喜べ、ヴォーパル魂の稼ぎどころだ……！」

「ふふふ、進化したアタシの力を見せてやるですわーっ！」

ふしゃーっ！　と猫のような音を立てるエムルを頭にセットし、鼻から雲をがぶ飲みするクラウダイブ・エレファントを見据える。

「エムル、とりあえず様子見だ。加算込みでマジックエッジをあの象にぶちかませ、俺はあのイキリ蜂を叩き落とすからな……振り落とされるんじゃねーぞ！！」

「委細承知ですわーっ！」

そうエムルが答えるのと、クラウダイブ・エレファントが鼻から勢いよく雲幕を撒き散らしたのはほぼ同時のことだった。
巨体の割に結構テクニカルな攻撃するじゃねーか、それに上司が部下の煙幕でドジを踏むとは思えないし……そこだぁ！

「うおっ、マジで当たった」

クラウダイブ・エレファントの雲幕を利用して奇襲を仕掛けてきたドミネイオン・ホーネットが割と適当に振った傑剣への憧刃と接触し、弾き飛ばされれる。チッ、流石にクリティカルヒットまでは行かないか。

「とりあえずこの中から抜けるのがベターか……！」

だって、さっきから、ドスンドスンと、重圧が……ぁあっと危ねぇええ！！

「エムル！」

「【マジックエッジ】！！」

跳躍の数瞬のちに、大質量が俺のいた場所を踏み潰す。だが残念ながらそこで待っているのは俺ではなくエムルが放った魔力の刃だ。
明らかにＶＩＴのたかそうな分厚い皮膚にマジックエッジが命中するも、やはりというか一撃で有効打とはいかないようだ。

「とはいえ素の火力もあってノーダメってわけではなさそうだな……エムル、アレの用意をしておけ、実戦での試し撃ちには丁度いい」

「わ、分かったですわ……でもでも、ちょーっと時間かかるですわ……？」

「問題ないね、雑魚とノロマに捉えられるほど俺はトロくない……エムルも知ってるだろ？」

あの象、上司に呼ばれてここに来るまでの速さを見るに最高速度は結構ありそうだが初速はショボい。加えてあの巨体だ、抜き足差し足で駆け出すようなことは出来まい。

いやむしろクソでかい身体で俊敏に動くモンスターの方が本来おかしいはずで、クラウダイブ・エレファントの挙動はむしろ自然なはずで……見えてる奇襲はただのサンドバッグだぞ、はい素材ゲット。

どうやらいっちょまえに戦術を立てているのか、ドミネイオン・ホーネット共はどこからか飛んできた増援も併せて俺を包囲、雲幕の方へと追い詰めようとする動きを見せる。

だが一つこいつらは勘違いしている、包囲網は対象を内側に押しとどめるだけの拘束力が無ければ無意味なんだよ！！

「オラオラどけどけぇ！」

虫共め、お前らに足りないのは踏ん張りだ。なまじ飛行能力を獲得してるせいで強めに殴ればすぐに傍に退いてしまう。だが俺はお前達の包囲を高く評価しよう。

なにせ……

「並んでくれた方が処理が楽だからなぁ！　素材落としやがれ！！」

残念だったな！　旋回するにも時間がかかる象など二の次、此度の

メインオーダーはお前らの命だ。
バッサバッサとドミネイオン・ホーネットを斬り伏せながら、時折突っ込んでくるクラウダイブ・エレファントの突進を避ける。
この手の狩ゲーじゃ目標モンスターのお供に雑魚敵が湧くのはお約束、これがリュカオーンとかであれば笑みも引っ込むが倒す必要のない鈍重な象をおちょくるだけなら実にイージーなクエストだ。
「無限湧きって訳じゃなさそうだが、向こうも切り札を出しただけあってそう簡単に撤退するつもりはないらしいな……」
素材が向こうから飛んでくるのは喜ばしいが、このまま奴等が一族郎党の全てを俺の撃滅に費やされても手間なだけだ。もう既に結構な数の素材が集まっており、いつ離脱しても良い訳だが……まだメインディッシュを済ませてないからな。
「エムル行けるかっ！」
ぺしぺし、と頭を叩く感触が二つ。一つならば否定、二つならば……
「よっしゃ一発派手にぶちかましてから帰るとするか！」
二つ叩くは肯定の合図。砲台を頭に乗せた俺は蜂を払いのけながら象の正眼と直線に繋がった立ち位置を確保する。
「なんつーか闘牛士っぽさあるな……ふっ、ほーれヒラヒラだぞヒラヒラー」
瑠璃晶の星外套をマタドールの如く揺らめかせていると、どうやら蜂に調教されきった頭でも馬鹿にされていることは理解できるよう

で、絶叫と呼ぶにふさわしい咆哮と共にクラウダイブ・エレファントは猛進を敢行する。
種族的に「思いやり」とか「配慮」が欠けているのかそれとも調教されたとはいえ恨みを抱いているのか進行上にいるドミネイオン・ホーネットを蹴散らしながら、大地を覆う雲のみを蹴散らしながら、ただ俺とエムルをミンチにせんと真っ直ぐに。

「エムル、頭が微振動するから震えるのやめろ」

「………っ！？」

何故この状況でそんな冷静なんだと言わんばかりにべしべし頭を連打するエムルにデコピンをすればいよいよ激突の瞬間が迫る。
別に俺がＭＰを消費するわけでも、魔法を使うわけでもないがなんとなく暇なのでそれっぽく掌を前面に掲げて決めポーズ。えーと決め台詞決め台詞……えーと、

「その慣性、頂戴させて貰おう……！」

「【完全反射陣鏡（フルカウンター・リフレクション）】！！」

激突……の寸前、俺達とクラウダイブ・エレファントとの間に盾のような壁のような魔法陣が展開される。猪突猛進ならぬ象突猛進の最高速度に到達していたクラウダイブ・エレファントがそれに対して回避や停止の行動を選択できるはずもなく、真っ向から魔法陣に激突。
瞬間、虚空に浮かんだ魔法陣にぶつかった音とは思えない快音が響き……クラウダイブ・エレファントが持つ二本の牙がアッサリとへ

し折れた。

「ひゃほほい象牙ゲットォ！」

「しれっと自分がやったみたいなことしてたけど、やったの私ですわ！？」

「細けえことは気にすんな！」

いいねいいね、パワーファイターに使うとここまで効果的なのか。
流石に億単位で買っただけはあるぜ、ラビッツの魔道書を扱う店ですら埃を被っていた一品だからなァ……！

エムルに習得させた【完全反射陣鏡（フルカウンター・リフレクション）】、読んで名の如くその効果はカウンター系だ。

ＭＰをバカ食いし、詠唱破棄が出来ないというクソみたいな使いづらさではあるものの、その効果自体は驚異的の一言に尽きる。

具体的に言えば「使用者の魔力総量に応じた上限までの全ての攻撃の無効化及び同値ダメージの付与」、秋津茜の謝罪砲（竜息吹）が肺活量参照するようにこの魔法はＭＰを上げれば上げる程どんな攻撃でも完全防御し、その分のダメージを反射する。

まさしく鏡だ、ただし鏡像も同じ攻撃をかましてくる。つまりクラウダイブ・エレファントは実質的に真正面から自分と同じ重量が同じ速度で正面衝突した、という事だ。
そしてシャンフロの優れた物理演算であれば、互いに加速状態で正面衝突した際のダメージ量は何人の俺をミンチにできるかわからない程に跳ね上がる――――！

「はぁーっはっはっはぁ！　良き哉良き哉ァ！」

思わぬ臨時収入であったが、少なくともここに来た目的は色付きで達成できた。あとは帰るだけだが……どうやらあの蜂共は意地でも俺を逃がすつもりはないらしい。

牙を折られ、顔面を強打して悶え苦しむクラウダイブ・エレファントに幾匹かのドミネイオン・ホーネットが張り付く。
そしてその尻の針をクラウダイブ・エレファントの皮膚に突き刺した……いや刺さってないな、あんなんじゃ針治療にもならないぞ。
だがクラウダイブ・エレファントにとっては実際に突き刺さって痛みを感じる事とは別に「針を刺された」という行動自体が苦しい、とでも言わんばかりに絶叫を上げ無理矢理立ち上がる。

「下僕のつらいところだな」

死ぬまで働かされ、そして切り捨てられる。虫にモラルを説くくらいなら馬の耳で爆音念仏した方がまだ有意義だろうが……少しだけ哀れみを感じた。

「サンラクサン……」

「……ああ、そうだな。引導を渡して弔ってやろう」

「いやそうじゃなくてサンラクサン……あ、あれ……」

ん？　なんだ、一体何が……おや、クラウダイブ・エレファントは動いてないのに地面が揺れている。地震？　おかしいね、震源こっちに近づいてなぁい？

「バォォォォォォォォォォオオオン！！」

「バルルルルルルルァッ！ルルルルルルオオオオオン！！」

「ご、ご両親！？」

それは果たして偶然か、必然か。
ドミネイオン・ホーネットの切り札として調教されながらも秘匿されて来たクラウダイブ・エレファント。それが俺との戦いで叫び、暴れ、雲の海に波紋をいくつも生み出した。

その叫びが、分かたれて尚子を愛する心に欠けらの陰りもない象の両親に届いたのだ。
怒り、喜び、業火の如き感情を滾らせた目の前の個体よりも一回りは大きいクラウダイブ・エレファントが戦場にエントリー、事態は蹂躪の様相を呈する。

「……こりゃやべぇ、水晶群蠍と同クラスな訳だ」

恐らくは体内に取り込んだ雲を冷却し、凍結させる事で氷の弾丸を生み出してそれを圧縮した空気でぶっ放している。
しかも弾種も選択可能なのか、乱入した二頭の鼻から放たれ、飛翔中に散弾と化した氷の礫がドミネイオン・ホーネットを大雑把に、だが確実に撃ち落としていく。

近距離だと重装甲、遠距離手段も持ち合わせていて煙幕も張れる……なんだこのハイスペック戦車、しかも砲塔がフレキシブルに曲がるとか。

最後のドミネイオン・ホーネットが特大の氷弾によって粉砕され、牙の折れた子クラウダイブ・エレファントが恐る恐ると言った様子で両親へと鼻を伸ばす。
それを両親は己らの鼻で手繰り寄せ、万感の想いが篭った動きで子象を撫でた。

「ブラヴォー……素晴らしい親子愛だ……」

「感動的ですわ……！」

引き裂かれた親子の再会、モブキャラとは言えこの感動のシーンに立ち会えた事、光栄に思うぜ……っ！！

まぁそれはそれとして子象の牙をへし折ったのは俺らであるため、この後十分くらい怒り（アクティブ）心頭な象一家に追いかけ回される羽目になったが。

良かったね！　今度はもう親から逸れるなよ！

感動巨編「かわいそうな象」（終盤のみ抜粋）（後書き）

ドミネイオン・ホーネット式調教術
1．捕獲したモンスターを痛めつけます
2．死なない程度の食事を与えます
3．食事を与える前に痛めつける、という行動を繰り返します
4．しばらく絶食させます
5．モンスターが食事を得るために身体を差し出した辺りで一旦半殺しにします
6．この行程を何度も何度も繰り返します
7．反抗精神を完全に削がれた下僕の完成！

「お前の意思で何か実現できると思うなよ」と教え込む畜生蜂、なお深海には「あ、いい匂い……　↓　好き！」からの一生眷属生活まで直行する鮟鱇がいるしやっぱりそこまで大した事ではない

クラウダイブ・エレファント（成体）
強さ的には水晶群蠍単体よりは強く、金晶独蠍よりは弱いと言った辺り。氷雲弾は親が子に教えて継承する技術系の技なので子象は使えなかったという設定。
なお非ユニーク・レイドで現状最強クラスはアトランティクス・レプノルカ、やはり水中で広域放電とレーザーはアカン

ちなみに新大陸調査船を襲撃したクラーケン的タコは深海だとアルクトゥス・レガレクスにすらおつまみ感覚で食われるので大陸棚の

浅瀬に逃げてきた種族。
深海三強が生態系維持してなきゃとっくに滅んでます。エルドラン
ザ君はもっと事前調査すべきだったんや……

ロクハクナノカダイジェスト

それは船旅三日目の事だった……

「なぁエムル」

「なんですわー……？」

「お前が船旅楽しみって言ったんだからもっとこう、喜べよ」

「特に何をするでもなく三日間海ばっか見てたら流石に飽きるですわ」

「……まぁ、素材集めも粗方終わって、武器の完成を待つだけだからな」

準スイートルームとでも言うべき船室から、ぼーっと外を眺めながらそんな風に話し合う俺とエムル。

何分、プレイヤー達が甲板でタコやらワカメの怪物やらを釣り上げるのが「襲撃」の精々であるこの船は、まぁよっぽどのことが無い限り平和な船旅を続けている。

もう少し出航時間が早かったなら、もしかしたらこの船ごとルルイアスに沈められて(浮かべ)いたかもしれないが、生憎そっちは外道共の管轄だ。

「つっても、船内歩くと面倒なことになりそうだしなぁ……」

見た目をごまかしてもプレイヤーネームは誤魔化せない。すれ違うだけならともかく、人混みの中を観光していれば気づかれる可能性は自然と高くなるだろう。
とはいえ折角の船旅をずっと地上で過ごして時間になったら転移、はい到着ー……ってのもあまりに味気ない。

「釣り……だな」

「釣りですわー？」

釣り、父曰くそれは世界との対話であり大海洋への挑戦……じゃあ川釣りはどうなんだと聞いたら「海と繋がってるんだし細かいことは気にするな」とのことらしい、湖はどうした湖は。
まぁそれはそれとして、釣りというものは口を半開きにして空を見上げているだけでも目の前に釣竿があるだけで「とりあえず無駄な時間ではない」と自分を納得させられる高尚な趣味なんだと。
シャンフロにおいて釣りアクションはそこまで力が入れられたコンテンツではない。いや別に手抜きというわけではないのだが、見た目普通の釣竿で下手をすれば軽自動車サイズのモンスターを釣り上げたりするのだから、やはりそこらへんはあくまでもゲーム的な概念デフォルメと言うべきか……おっ、いい引き。

「…………」

「…………」

「……た、食べないでください」

食べれそうにはないなぁ……明らかに奴と同種族だったので言伝を頼んでリリース。

暇だなぁ、何か面白いことないか……いや待て思いっきり流したけど今の魚人族じゃねーか！？

ちょっ、カムバーック！！

「――と、まぁこんなことがあってさ」

「そうだったんですね……チャットで、その……荒ぶっていらっしゃったので、何事かと」

気づけば新大陸への船出から五日目、特に部活動をやっていない俺や斎賀さんは土曜、日曜をゲームにつぎ込むことが出来るわけだ。秋津茜なんかは部活で土曜日ログインできない、と嘆いていたが聞いた限り結構なハードスケジュールをこなしてあのバイタル維持してるのは素直に凄いと思う。

「作業モードで重要なフラグ踏むのは危険だと最近認識したよ……」

まぁアラバに俺が新大陸の方に行っている、と伝わったならよしとしよう。

「あぁそうだ、貸したマシンの方はどう？」

「はい、特に故障することもなく使わせてもらってます」

「そりゃ良かった」

ぶっちゃけ斎賀さん……もといレイ氏が調査船に乗り込んだ時点でその役割を達成したと言っていいのだが、貸した側から故障なんてしたら貸した側としては申し訳なくなるわけで。

「そう言えば斎賀さん、「兎の国からの招待」をクリアしたってことはもうヴォーパル武器の真化はした？」

確かレイ氏がラビッツ入りした時に使ってたのはスレッジハンマーだったたか、あれって何を参照してるのかいまいち分からないけど真化の場合武器種が変わることも結構あるからなぁ……うちの包丁なんか今や抜刀機能まで搭載されてるぞ。

「ヴァイスアッシュ、さんに強化してもらうの、ですよね？　それでしたら」

「武器種変わったりとかした？」

「はい、ハンマーから鉄鞭に」

鉄鞭とはメイスの派生武器で、なんでも「打撃武器だが斬撃系スキ

ルが使える」という武器種であるらしい。尤も、ダメージ判定そのものは打撃扱いになるらしいが……ちなみにマッシブダイナマイトが背負ってた鉄塊、あれも鉄鞭カテゴリに入るらしい。

「便利ではあるんですが、クリティカルを出しづらいのもあって……」

「ふーん……」

鉄鞭といい、対刃剣といい、本当このゲームパラメータ以外にも隠し要素多いな。

武器それぞれに派生系がある？　いや、だとすれば対刃剣が片手剣二本からの派生である以上は双剣派生の武器種も……待て、それがあのトンファーエッジ？　いやあれは打撃系って話じゃ……うーん

「あぁそうだ、武器で思い出した。ビィラックにはもう会った？　黒いボサボサした感じの、ヴァッシュはランダエンカだから実質あいつがラビッツの鍛冶枠だし」

「ビィラック……あの、気難しそうな……」

「気難しい？」

脳裏をよぎるビィラックのイメージ……ヴァッシュが鍛冶やる時は大抵頭のネジが抜けて……俺が素材提供すると大抵目を丸くして……あとマントに擬態する……

「……気難、しい？」

平時はまぁ気難しく、もあるのか……な？

「それと、あと二つほど……」

「ん？」

俺の中で通称「サイガ案件」としてカテゴライズされている謎多き「神魔の剣」。どうも勇者武器や英傑武器、遺甦機装などのような通常とは異なる入手手順の武器とはまた異なる何か。
なんというか断片的な情報だけでも「とりあえず扱えてるけど本質的にはやばい武器」感がヒシヒシと伝わってくる大剣に対して、やはりというかヴァッシュからさらなる言及があったらしい。

「ヴァッシュはなんて？」

「――その剣の故を知る者はなく、真実は己の手で見つけ出すしかない……と」

いやその台詞を言ってる時点でお前知ってるじゃん、ってのは流石に禁句だろうか。
だが少なくとも分かったことが一つある。

「あの剣に関するフラグはＮＰＣじゃなくてどこかしらの場所かアイテムってことだな」

「そう……なんですか？」

「それを知っている「誰か」はいなくても、それを知ることができる「何処か」「何か」はあるって事だろうし」

「成る程……」

この程度、攻略情報縛って隠し要素コンプするなら基礎も基礎ってやつよ。世の中には「隠しアイテム十個を集めて裏ボスに挑もう！（なお公式が誤植していたので実は十一個あった）」よりかはマシですわ、本編中でも徹底的に隠してたのに公式が自ら謝罪ネタバレしている光景には物悲しいものがあった。

まぁその問題の隠しアイテム十一個を揃える事で戦える裏ボスがバグのせいで本来は「猛攻に耐えながら祈祷コマンドを十一回行ってイベント進行」の筈が「挑発コマンド一回で何故か即死する」事実が発見された時は流石に乾いた笑いが漏れた、煽り耐性低すぎかよ……

「となるとレイ氏がファストトラベルを確保したのは僥倖か……新大陸側にそれがある、と明言された訳じゃないし例の地下空洞的に旧大陸側も完全に解き明かされた訳でもなし……ん？」

そういえば斎賀さん、二つほど伝えることがあるって言ってなかったか？

「もう一つ何か気になることが？」

「気になること、と言うか……ログイン中だとちょっと聞き辛い事なので……」

ログイン中だと聞きづらい？　一体何事かと斎賀さんを見ると、彼女は僅かに逡巡した様子を見せたが、意を決したように口を開いた。

「……ユニークシナリオ「ディアアレの秘密特訓」って、ご存知ですか？」

とりあえず重要参考兎に事情聴取。

「ディアレおねーちゃんはアタシの憧れなんですわ！　おねーちゃんはラビッツいちの大魔法使いで、アタシの魔法のおししょーさまなんですわ！」

「ほんほん」

「でもでも、最近は忙しいみたいであんまり会えないんですわ……」

「成る程………大体わかった」

要するに、新規(いもうと)にあっさり実力で抜かされちゃったら古参(あね)としてはメンツが立たないって訳ね。

これ半分くらい俺のせいだな？

そして、七日目がやってくる……！

ロクハクナノカダイジェスト（後書き）

魚人族とのコンタクトフラグを華麗にへし折る戦犯サンラク
魚人族の英雄にアポを取って別方向から遭遇フラグを立てるＭＶＰサンラク

つまりフィフティーフィフティー無罪

ディアレ「……うん、いや別に妹に私の力が既にあいつに及んでいないと事実を知られるのが恥という訳ではないんだ。私とて妹が成長した事を疎むほど恥知らずではないからね、だがあいつの成長を見ると私の努力が足りていないのではと身に染みてね、父上の客人でありそのヴォーパル魂を認められた君に同行する事でより自分を高められると考えた次第なのだ。いや、だからエムルに修行しているところを見られるのが恥ずかしいとかそう言う訳ではなく、え？
　だったら彼や秋津茜殿でもいいじゃないか、だって？　いや、そのぉ……ほら、シークルゥ兄上はあれで結構口が軽いからバレちゃうかもしれないし……というか常時半裸の殿方って仮に別種族としてもどうなんだ？　というか、そもそも……いや違うぞ！　別に鳥の人と同行することに怯えている訳ではない！　ただ私はエムルの前では格好つけたいというか……っは！？　い、今のは違……っ、言葉の綾というか、あの、その……くっ、殺せ！」

怪文書系女騎士兎（ほぼ純魔）という新境地

第一次産業従事者、未知に挑む（前書き）

まさかずっっっと前にお蔵入りという名の没にした作品のタイトルをサブタイとして再利用することになるとはこのリハクの目を持ってしても……

第一次産業従事者、未知に挑む

暴風の中、吹き飛ばされそうな身体と砕けそうな心をかろうじて持ちこたえさせつつ、ジョウロを片手に俺は叫ぶ。
その行為そのものにシステム的な意味がある訳ではない、だがそれでも叫ばなければ崖っぷちの心が砕けてしまいそうだから…………

「ちっくしょうがぁぁぁ！　お前に俺の可愛い子供達を奪わせてたまるかぁぁぁ！！」

ああ゛あ゛あまたビニールハウスが吹き飛んだぁぁぁ！！
クソがっ、だがこの程度で俺の子供達が屈すると……ぎゃあああ土ごと大根を持っていくなぁぁぁ！？

激しく叩きつけられる雨粒のヴェールを突っ切り、ウィンドウを操作しつつ右手に持ったジョウロを勢いよく振り回す。肥料が含まれたエナジーウォーターが畑に撒かれ、作物達の品質が「特上」の状態に保たれる。
すかさずシステムウィンドウから範囲指定、金に糸目はつけぬと最高級のビニールハウスを展開し、畑のそばに突き刺した長杖（ロッド）を引き抜いて構える。

「他の中規模災獣ならともかく、最上位のてめーが不意打ち襲撃は卑怯だろうが……っ！」

視線の先、見上げに見上げてなお足りずに背を曲げるほどに見上げた先に見える奴の頭に俺は隠すつもりもなく舌を打ち唾を吐く。
見た目は雲にまで頭が届かんほどの巨体を誇るキリン、だがその実

態は常に自身を中心に災厄の嵐を巻き起こす事で何もかもを問答無用で吹き飛ばすこのゲーム最強最悪の災獣（サイジュウ）「ゼピュラ・ジラ」……！　最上級の災獣なだけあって奴からすれば豆粒のような俺に敵意を向けるようなことはしない。

だが奴が通るだけで俺の子供達は、手塩にかけて育て上げた大根と茄子がダメになってしまう。
多少の損失は許容できる、だが僅かでも気を抜けば先程のように作物どころか畑の土ごと持っていかれる――――！！

「うおおお上の空向いてねーでこっち気づけやぁぁ！　【イグニース・サイザン・フルブラステン】！！」

その世界（ゲーム）にはその世界（ゲーム）の摂理（システム）がある。この世界における最上位の火属性魔法が炎の魔神を模して巨神キリンへと飛翔し……タイミングがずれたのか下位の災獣であれば纏めてワンパンできるはずの魔神は蚊トンボの如く暴風に呑まれて消え去った……あゝ無情。

蝿がどれだけ己を鍛えたとて象をノックアウトさせる事は出来ない……そんな真理を教えてくれるゲーム、それがスリリングファーム……待って許して！　そこには来季に植える種籾が置きっぱなんです！　嘘だろ合金製の小屋の耐久が目減りしてるんだが！？　あーやめて！　今日の飯より明日の種籾だろぉぉぉぉ！？

むくり、と現実世界で起床した俺はしみじみと一言。

「農家に感謝だな……」

全体の五割が嵐に消えたものの、最高品質の作物(スコア)を叩き出す事に成功した。まぁ久し振りにやったにしては上出来だろう。
流石にここまでゲーム的ではないがやはりリアル生産職の方々への感謝を忘れちゃいかんね、それはそれとしてあのキリン野郎いつかぶっ倒す。

「……とりあえず朝飯食うか」

カップ麺最高！　エナドリもキメれば敵無しだなうはははははは！！

「さて」

時間は朝六時……調査船が新大陸に到着するのが九時だから……いや、一応雇い主のところに顔出した方が良いかな。
というわけでログイン、すぴょすぴょ寝ていたエムルを起こして頭に乗せつつ、起きがけ一発サンラ子ちゃんになって聖女ちゃんの元

へ。

「時折この船からいなくなっていらっしゃったので、てっきり既に発たれているものと……」

「いえ、いえ。流石にそこまで不義理な事は致しませんとも」

こちらの行動をある程度把握していた、と……設定が強キャラすぎる。おい大丈夫かジョゼット、一歩間違えたらレイドボス「イリステラ」なんて事になりかねないぞ。

澄ました顔で「はぁあぁあ寝起きの聖女ちゃん可愛すぎかよ……」みたいな雰囲気を発しているジョゼットを半目で見つめつつ、俺は聖女ちゃんの次の行動を待つ。

「――ジョゼット、例のものを彼に」

「…………はっ」

何か引っかかったのか一瞬の間を置いたものの、ロールプレイに従ったジョゼットは何やらアイテムを俺へと渡す。

あれこれどこかで……ああそうだ、若干形状は違うがスクショアイテム、いや違うな録画アイテムに似てるんだ。

「この新大陸にて暗殺されんとする国王陛下と、第一王女殿下の救出……無理は承知の上ですが、そこにもう一つ達成の条件を加えても宜しいでしょうか？」

「聞きましょう、話はそれからです」

曰く、単に助けただけでは件の第一王子も「そりゃありがとう、じ

ゃあ父上と妹は返してもらうね」となり暗殺エンドを回避できない。
であればこの新大陸にて処刑人を務める……やけにはっきりと断言された「第三騎士団」から言質をとって教会側で国王と王女を保護する必要がある。

「……つまり決定的な言葉を得るまで耐え忍び、その上で国王陛下を助けろと」

「……えぇ」

うーむ……このゲーム、リアルタイム進行だから色々と時機があるわけだが、それと同時にユニークシナリオやクエストなどの枠もあるわけで。
クエスト内で達成条件が変更された以上はやって出来ないことはない、と言うことではないだろうか。
理不尽の権化たるウェザエモンやリュカオーン、クターニッドですらなんらかの攻略糸口があったわけだし……行けるか？
ようし、じゃあここは俺もロールプレイと行こうじゃないか。

「……分かりました。その願い、仇討の剣が確かに聞き届けました。我ら剣は使い手の意志に従いますとも」

「ふふ、彷徨える剣に加わった新たなる一振り……信じていますとも」

うーん、これはガチ恋勢が徒党を組んでも致し方無い。

それはともかく、いよいよ新大陸の姿がはっきりと見えてくる。

第一陣として出航した新大陸調査船トルヴァンテ・ディスカバリエ号の姿も見えてくるとなれば、誰も彼もが甲板なり窓なりから外を見たくなるのは必然と言うべきか。
わらわらとプレイヤー達が顔を出しているのに混ざりつつ、俺もまた同様に新大陸の全容を眺める。

「サンラ子サンはすぐに王様と王女様を助けるですわ？」

「んー、聖女ちゃんの予言じゃ「人目につくと不味いから新大陸の奥地で事に及ぶ」って話だし、それに加えて今前線拠点はゴタついてるらしいから犯行はもう少し先じゃないかって話だし？」

国王陛下に第一王女殿下、ＮＰＣとしちゃ最上級の部類だ。世の創作物にはお忍びで城下町にやってくる権力者、なんてものはありふれているが流石にこんな場所で動けば足がつく。
奥地で暗殺するってんならそれなりの準備と理由のこじつけがあるはずだから、そこらへんを聞き込みすれば…………しまった、俺がそれやったら悪目立ちするじゃねーか。

「詰んだか？」

いや、まだだ。俺には心強い先輩がいるじゃないか！！

「――――と、言うわけでご助力いただけませんかエロだ……ルティアパイセン」

「……今何か非常に不名誉な呼び方をしようとしなかった？」

「まさかそんなとんでもない！」

くっ、聡いなこのエロ大根。新大陸へと今まさに乗り上がらんとする調査船。誰もが新たなる地平を見て心躍らせる中、俺は船底にひっそりと開店された「海蛇と林檎」を訪れていた。マスター、りんごジュース一つ。

「……まぁ構わないわ、あの子の後輩として上手くやってくれているようだし、私達としても現国王の政策には少し思うところがあるから」

「幼女先生(ティーアス)には良くしてもらっております、はい」

どうやら今現在も「仕事中」であるらしく、フードとマフラーを外すことなく席に着く賞金狩人ルティアと相対しつつも、俺は望ましい答えが得られた事に内心口の端を吊り上げる。

「それにしても、貴方……実は女だったの？」

「いや、基底部分は男ですのよおほほ」

「ああ、そういう趣味の……」

失礼な、キャラ固定のゲームで女キャラをプレイするという可能性も含めて考えればネカマ経験のないゲーマーは存在しないんだぞ？

人類皆ネカマ、ネカマと和解せよ。

とはいえこれでＮＰＣの情報源を確保できた、あとは機を見て国王と第一王女を華麗に救助してクエストクリアだ。

視界を塞ぐウィンドウを振り払いつつも、俺は笑みを浮かべるのだった。

・災獣「ゼピュラ・ジラ」
スリリング・ファームに登場する超大型災獣。規格外の巨体を維持するための強心臓を保有しているもののあまりに出力が高すぎるためそのままだと過剰に体温が上がり続けて自滅してしまうため、嵐を自ら生成することで体力を低下させている。見た目は高層ビル並みの大きさを誇るキリン、危牧プレイヤーが首をへし折りたいエネミー二冠を達成している。

・災獣「ウルカヌ・ファント」
スリリング・ファームに登場する超大型災獣。こちらはゼピュラ・ジラとは異なりその巨体を動かすために自身のエネルギーを殆ど費やしているため、恒温動物でありながら生存可能な温度を自前で確保することができないという欠点を持っている。そのため雲を吸い込み鼻から噴出した体液を空中に展開、レンズとすることで太陽光を何倍にも増幅して背中の共生植物を活性化させエネルギーと温度を確保している。無論こいつが通過した後は日照り状態となり甚大な被害をもたらす。見た目はクソキリンほどではないが巨大な象、危牧プレイヤーが鼻を縛り上げたいエネミー二冠を達成している。

・災獣「レギオ・ダクスハウンド」
スリリング・ファームに登場する中型災獣。とりあえず存在するだけで牧場を荒らしていく他の災獣と異なり徹底的にプレイヤーを殺しにかかってくる。その爪は核シェルターの壁を掘抜き、どこにいようが優れた嗅覚で追いかけてくる。逃走ルートを吟味しないとファームを突っ切って追いかけてきたりするので超大型災獣とは別方向で厄介な災獣。見た目はリムジンサイズのクッソ凶悪なダックス

フンド、中型災獣はプレイヤーが倒せるので嫌われてはいるがその分倒されてもいる。

息抜きにかつて封印した設定を新たに考えるの楽しすぎかぁ……？

大暴走劇的ビフォーアフター

予言、予知、未来視……呼び方はなんでもいい、古来より人は未来を観測することに一種の信仰じみた憧れを抱いて来た。
歴史上、預言者を名乗った人物なんて腐る程現れたし実際俺だって未来予知できる能力が貰えるなら貰っておきたい。

とはいえ、だ。その手の未来予知というものは大抵がアクティブ未来予知、とでも言うべきものだ。
そりゃあ未来予知が常時(パッシブ)で発動していたら認識する情報と実際の時間が常にズレ続けることになる。五秒後の崖に気を取られて一秒後の穴に落ちたんじゃギャグにしかならない、つまり人間という生き物は都合のいいタイミングで任意発動できる未来予知が欲しいのだ。
長々と心中独白を行なっていたが、つまり何が言いたいのかといえば……

「………………ぇぇ？」

あれ程までに強キャラオーラを撒き散らしていた聖女ちゃんの頬が引き攣っている。どうやら聖女ちゃんの未来予知はアクティブ系で、なおかつ何でもかんでも見通すというわけではないらしい……とはいえ、これを見せられて平気な顔をできるやつはそうはいないだろう。ジョゼットですらロールプレイの仮面が剥がれかけてるし。
聖女ちゃんを案内するプレイヤーが自信満々に指し示すそれは……なんだろうなこれ、「度し難い」という言葉が一番しっくりくる。
「こちら、聖女様のために大棟梁(プレジデント)笑みリアが建築した「装骨天守ス

カルアヅチ」で御座います……」

城である。それも明らかに外敵の迎撃を主眼とした要塞である。スカル、と名を冠しているだけあって城砦の外壁にぎっしりと敷き詰め貼り付けられた骨、骨、骨……これを作ったやつはぜってー素面じゃない、天守閣に不自然にポッカリと空いたスペースが不気味でならない。あそこに何が飾られるというのだ、聖女ちゃんを磔にでもする気か？

「こ、これは…………その、非常に個性的と、言いますか……」

つ……、と聖女ちゃんの頬を一筋の汗が伝う。いやこれはしゃーないよ、旧大陸と新大陸で人の住む場所のコンセプトが別物すぎるわ。風の噂ではこの前線拠点、つい最近レイドエネミーの襲撃を受けて半壊したという話だったが単純な修理に留まらず、魔界風建築にリフォームしてやがる。

スカルアヅチなる白骨魔城だけではない、前線拠点を守るように張り巡らされた柵も同様に骨で作られているし、堀の底には肋骨と思しき槍のデストラップ。あれは……投石機？　石をセットする場所に椅子が取り付けられてるんだけどそういうことなのか？　そういうことなのか？？　ちょっとやって見たいと思ったのは内緒だ。

「なんつーか、前衛芸術家が「殺意」をお題にして骨でテーマパーク作ったみたいな……」

分かる。とポツリ呟いたのは……確かテチ？　とかいう親衛隊所属のプレイヤーだ、割とロールプレイしていない側に属する小柄な少女アバター故、騎士装束に違和感しかないのだが立ち振る舞いそのものはゲームに慣れたプレイヤーのそれだ。見た目で油断を誘う戦

術か……やりおるな。

「かつて忌まわしき黒竜ノワルリンドによって前線拠点はほぼ壊滅と言っていい被害を受けました……しかしながら！　我らが大棟梁指揮の元、前線拠点は生まれ変わったのです！！」

生まれ変わった、っつーか死体から何か恐ろしい怪物がネクロマンスしたとかそういう感じの邪悪な生まれ変わりでは……

なんだろう、新たに解放された新マップってもっとこう、夢と希望に満ち溢れてるもんじゃないの？　何この、一通り葬儀を終えてよっしゃ復讐しますかぁ！　みたいなドス黒い陽気さは。

「実際のところこれ防御力どんなもんなの？」

「………（にっこり）」

やぁだ怖ぁい……何故そこで満面の笑みを浮かべるの……

「エムル、ここで問題です」

「はいな」

「今まで千人ちょいで運用されていた森に新規で数千人入った場合、その場所の生態系はどうなるでしょうか」

「んー……ぐっちゃぐちゃになるですわ！」

「賢いな、人参をやろう」

「わぁい」

まぁ当たり前といえば当たり前だ。いわば擬似的なサービス開始期の再現、今の今まで先発組の情報を見聞きするだけでお預けを食らっていたプレイヤー達が新大陸に到着してとりあえず寝よう、なんて選択肢を選ぶはずがない。というか別に本当に七日間船に揺られているわけでもなし、旅疲れているのはＮＰＣくらいだろう。

まぁつまり何が言いたいかというと、だ。

一斉に押し寄せた新規プレイヤー達の波によって前線拠点近辺のモンスターが一斉に虐殺（スローター）されたわけで。そして「一定区域内のモンスターが短時間に狩り尽くされる」という条件が達成されたことで、奴が降臨する舞台が整ったわけだ。

「えっ、なん」

すぽーん、と名も知らぬプレイヤーの首が飛ぶ。壁タンクなのだろう、その防御力は俺のようなティッシュペーパーとは比べ物にならないくらい高いのだろう。だが即死だ、相変わらず理不尽すぎるなアレ。

「なんだこいつ！？」

「コクトウが一撃で！？」

初見殺し攻撃に驚愕すれど、この場に来ている以上ある程度の実力はあるわけですぐさま黒糖？　なるタンクを葬ったそれに攻撃を仕掛けるパーティメンバー達。だが残念、奴はあらゆる攻撃を無効化する……分かっていてもクソすぎる耐性だ。

盗賊系と思しきプレイヤーが縦に割られる。魔法職と思しきプレイヤーが何らかの状態異常を喰らい、念のため俺が距離を離した瞬間全身からどす黒いダメージエフェクトを撒き散らして即死した。そしてその近くにいた聖職者プレイヤーがそれの攻撃を受けたわけでもないのに同様のデバフを喰らい……

「なんで、状態異常回復が…………あっ」

ぐしゃり、と死亡した。

「何つーかあれだな、前に一通り秋津茜が死亡パターン実演したから特に感想が出てこないな」

「ぶっちゃけ死にまくってるのに笑顔で突っ込む狐の人の方が怖いですわ」

まぁＮＰＣ的視点から見ればプレイヤーって狂人の類だしな……あんだけ死にまくっても笑顔が崩れない秋津茜も大概だとは思うが、トライアンドエラーはゲームに限らず娯楽の醍醐味だしな。
さて、奴……黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）に関して良いニュースと悪いニュースがある。先に悪い方から考えるか。

悪いニュースは「とりあえず行けるとこまで走ってみようぜ！」「いいですわねぇ！」と森に突っ込んだ俺は別にスローターに加担していないのだが、スローターされた地区にいるプレイヤーを皆殺しにする黒死の天霊にとっては関係なく俺も殺害リストに含まれているらしい。

良いニュースは単純明快、主に秋津茜の体を張った検証に付き合っていたおかげで俺もエムルも黒死の天霊に関しての情報を豊富に持っているということ。あいつがあらゆる方法で死んだお陰でお仕置きモンスターの行動パターンを完全に把握している上に、攻略法も既に割り出しているということだ。

「エムル、ポーションの用意は出来たな？」
「はいなっ！　ガンガン投げるですわ！」

黒死の天霊くぅん……僕ぁねぇ……結構前から君に会いたくて会いたくて震えていたんだよぉ……？
君がクソカッコイイ鎌を落とすことは分かってるんだよォ……？
まぁ、なんだ。

「ドロップアイテム落とせやオラァァァァァ！！！」

「今更死の化身程度で怯えるほどヤワな兎じゃないですわァーっ！！」

死と、怨嗟と、絶望の化身が動揺している……俺の目にはそんな風に見えた。なるほど確かにお前はスローターをやらかしたプレイヤーをお仕置きするモンスターだ。だがな、クソカッコイイ鎌を落とすと判明した時点で……お前が狩られることは運営側が想定してるんだよ！！

大暴走劇的ビフォーアフター（後書き）

・装骨城塞スカルアヅチ
先発組はどいつもこいつも森に挑んでばかりで拠点強化を手伝ってくれないのでコツコツ作り上げていた前線拠点。
正直に言えば貧相ではあるがそれでも頑張って作った前線拠点、それは儚くもノワルリンドと彼に焚き付けられたモンスターの暴走(スタンピード)によって壊滅した。
原因は何か、プレイヤーの怠慢か？　違う、ゲーマーのプレイスタイルは誰か個人が縛り付けるものではない。
モンスターの群れか？　厳密には違う、結局のところあれはイベントであって明確にモンスター達が拠点を破壊しようとしたわけではない。じゃあ誰が悪い？　決まっている、ノワルリンドだ！
あくまでも趣味として取っていた「大工(カーペンター)」の副業をメインに変えた上で上位職業「棟梁」への転職、同じくノワルリンドへのヘイトを持つプレイヤー達の全面協力の上で強化と改築を重ねた城塞は狩ったモンスターの骨を反応装甲とすることで補強され、対ノワルリンド用の防衛設備も充実した。
欠けた天守閣、ぽっかりと空いたそのスペースには何が置かれる？
　そんなことはわかりきっている。
笑みリア「貴公の首は天守に吊るされるのがお似合いだ」（パパパパパウワードドン）

両性「保」有のお悩み

「やっちまいましたなぁ…………」

「や、やっちまいましたですわ……？」

いまいち何をやっちまったのか分かってなさそうなエムルだが、俺としては鎌が本命だったわけで……これの内容的に女の状態で倒したのが失敗のトリガーだったのかもしれないのだから。
まぁそりゃあさ、物欲センサー無効化としか思えない豪運の秋津茜だって挑戦回数こそ多いが討伐回数はただの一回なのだ。そりゃあドロップアイテム検証なんか出来るわけないってのは分かってたけどさ……

・黒き死に捧ぐ嘆き（レクイエスカト・イン・パーケ）
黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）の概念が物質化したことで生み出された「喪」を「服」する黒気。
［特殊裁定（システムウィンドウから確認可能）］
この装備は現在装備中の頭、胴、腕、腰、足の装備の耐久値を全て消費することで女性のみ装備可能。その場合この装備のステータスは耐久度を除き、消費した時点での装備のパラメータと同値となる。
［特殊裁定（システムウィンドウから確認可能）］
この装備は耐久度を持たず、通常の破損状態にならない。この装備は装備者が死亡判定が決定した際に解除され、再度の死亡判定を受けることで再装備が可能となる。この装備を装備している間、装備者は常にデスペナルティと同様のステータスダウンを受ける。
「黒き死に捧ぐ嘆き（レクイエスカト・イン・パーケ）」を装備中は装備者が関与する即死判定に対して大幅なボーナスが付与される。

「黒き死に捧ぐ嘆き（レクイエスカト・イン・パーケ）」を装備中は回復アイテムが使用できず、装備者がモンスターもしくはＮＰＣ・プレイヤーを打倒した際に一定量のＨＰ、ＭＰを回復する。
「黒き死に捧ぐ嘆き（レクイエスカト・イン・パーケ）」の装備者がモンスターもしくはＮＰＣ・プレイヤーを打倒した際、この装備のステータスに強化補正が付与される。

かつて一人の黒騎士がいた。かつて騎士を愛する一人の女がいた。
黒騎士は女が待つ小さな家へと帰るため死ぬわけには行かず、故にこそ常勝無敗の将軍として名を馳せた。だがある日、戦場へ赴いた彼はそれきり帰ることはなかった。
女は待って、待って、待って……全てを悟り、狂った。黒騎士は彼が仕える王と、その娘によって謀殺されたという真実を知ったから。彼女は喪服を纏い、黒騎士が残した一本の剣を手に取り……殺戮の道へ堕ちた。
隣人を殺し、親兄弟を殺し、いつしか彼女の喪服は血を吸ってなお黒く昏くなり。
皮を裂き、肉を断ち、骨と臓物を砕いた刃はいつしか鎌の形へと変貌し。
そして女の足跡は惨たらしく惨殺された国王親娘と、亡び去った王国を最後に消える。それから今に至るまで、死の蔓延した場所に現れる死の化身を伝える伝承が存在する。それは死を撒き散らす者にこそ死を与え、何かを探すように彷徨い最後には消える。
黒死の天霊に性別があるのか否かを知る術はない、だが奇跡的に黒死より生き延びた者が最後に言い遺した言葉は「あれは嘆きだ」であった――

「いや長いわ！　言いづらいわ！　使いづらいわ！　ていうか女性

「専用装備じゃねーか！！！」

真面目に上から下まで読みきった上で心の中に溜まった衝動を全て吐き出した俺はぜぇぜぇと、ともすれば戦闘中よりも疲労感を感じつつ頭を押さえながら情報をまとめる。
えーと、黒き死に（レクイエスカ）……長い、Ｒ．Ｉ．Ｐ．でいいや、Ｒ．Ｉ．Ｐ．が持つ制約、能力は大体七個……か？

まず最初に装備条件。大前提として五体に装備した装備品全てを消費することで女性のみ装備でき、この際Ｒ．Ｉ．Ｐ．のステータスはぶっ壊した装備品と同数値になる。流石に装備品の効果までコピーはしないだろうが耐性くらいは反映してくれそうだ。

装備時の特性。破壊不可、とはまた剛毅な効果だ。というかこれ刻傷や「呪い」に対して最上級のカウンターなんじゃ……いや、効果が複雑すぎるから灼骨砕身（しゃっこつさいしん）の方が気軽に使えるか。

装備の解除条件。これは……「死んだら」解除されて、「死にかけたら」再装備可能、ということでいいのだろうか？　若干テキストが違うし、判定が同じなら違う表現を使う必要はないだろうし。

んで装備中の制約。常時デスペナルティか……体感で大体一、二割くらい持ってかれるから常時これ、ってのは相当つらいぞこれ。ＶＩＴなんかは元々ゴミな上に装備依存だから問題ないが、ＬＵＣやＡＧＩが削られるのが痛い。

次は耐性。まぁドロップ元がドロップ元だし即死耐性ってのは納得だが……逆に聞くが黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）以上に即死判定強いてくるモンスターとかいるのか？　流石に物理攻撃を即死判定、扱いなんてチート効果でもあるまいし。

装備中の制約その二。回復アイテム使用不可……白状しよう、この文章を見た瞬間この装備に対しての評価が八割減した。つまりこれ装備してる時に封雷の撃鉄（レビントリガー）・災使（ハザード）ったらその後の死亡率跳ね上がるよね？　とはいえこのクソ効果を補う効果もあるので最終評価は保留。

最後に装備効果。なんでもいいから撃破さえすれば経験値が入るように体力及び魔力が回復し、ステータスが強化される……一見すれば強そうな効果に見えるが実のところは微妙という評価を下さざるを得ない。回復量、上昇量次第ではあるが撃破……要するに殺さなければならない以上タイマンじゃ全く役に立たないということだ。ある程度雑魚を蹂躙できる環境でなければ実質「戦闘終了後にちょっと回復する」効果でしかないというわけで……

総評：使用条件が厳しすぎる、使用環境が限定されてる、メリットがデメリットを上回る条件がつらい。

「……ゴミでは？」

装備を破壊して装備されるという性質上、常に衣服の形状をしていないということなのか手のひらサイズのクリスタルを転がしながら俺はため息をつく。
「これキッツいな……男状態だったら鎌引けてたかもしれないという後悔が」
「多分だけど、サンラクサンはそれでも外す気がするですわ」

こやつめぬかしおる。

とはいえ装備できるなら見てみたい、と考えるのは至極当然な流れなわけで。

一旦スカルアヅチにまで戻った俺は、聖女ちゃんの関係者特権ということで割り当てられた一室（流石に内側まで骨まみれ、ということは無かった）で早速使用してみることにする。

「えーと……変身？　なんっちゃっ」

次の瞬間、装備したばかりの捨て装備が木っ端微塵に弾け飛ぶ。一瞬で痴女と化した俺を、クリスタルから噴出した泥のような靄のような黒い何かがコーティングでもするかのように全身を這い、覆う。俺知ってるぞ、これ魔法少女とかの変身バンクだ！　しかも意地でも一回全裸にするタイプだ！！

「うへぇ」

まるで見えない手にサンオイルを塗りたくられてるような気分だ、自力に拠らない別の運動によって身体を撫で回されているような感覚に思わず声を漏らしていたが、最終的に俺の顔を何かヴェールの

ようなものが覆ったことで装着が完了したらしい。

「ふーむ」

くるり、と一回転すれば真っ黒なスカートが回転の勢いを受けて揺れる。やっぱ動きやすさに若干の制限が……そもそも飛び跳ねする装備じゃないと言えばそこまでか。

「んー……客観的意見(プレイヤー)が欲しいところだな」

エムルはすでに爆睡中だ、謎恐竜と鬼ごっこしながら大陸の奥へ奥へと走ったので気疲れしたらしい。まぁＮＰＣがいつでも同行可能ではないゲームも珍しくはないし……よし、ちょっと誰かに聞いてみるか。

この数分後、廊下でばったりと出くわした龍(テチ)×４とかいうプレイヤ

――のガチ絶叫が響くことになるのだった……

両性「保」有のお悩み（後書き）

龍×４「廊下の角から黒っぽいモヤみたいなのが、こううっすら漏れててさ。まぁゲームだしそういうエフェクトもあるのかなーって思ったらさ……廊下の角から喪服着た女がゆらぁ、って出てきたんだよ？　そりゃ叫ぶでしょ」

喪服＋ゴシックドレスみたいな

物理でなんとかなる系ホラー（前書き）

どうもエウロペマン硬梨菜です、今日はちょっと短め

物理でなんとかなる系ホラー

「血を頂戴ぃ……！　肉をぉ……！　命をぉぉ……！」

「いやぁぁぁぁぁ！　ぎゃあぁぁぁあぁあ！？」

意図的に首から力を抜いて、頭をガックンガックンさせながら龍×４（テチ）を追いかけ回す。最初はちょっとした悪ふざけだったが、なんというかすごく真っ当なリアクションをしてくれるのでだんだん楽しくなってきた。

「うっ、ひぐっ、えうっ、うぁあぁあぁ……！」

「泣きたいのは私の方なのになんでそんな泣き真似上手いの！？
怖い（ヤバ）怖い（キモ）怖い！！」

「おいコラ今最後なんつった？」

「いきなりドス効かせんなぁぁぁぁ！！」

俺がホラーゲーを攻略していく中で培った「ホラーゲーにおける分かってても怖い怪物の動き四十八手」をご覧に入れてやろうか？

「ほーら先ずは「痙攣しながらコマ送りみたいな挙動で追いかけて来る怨霊の動き」から行くぞォ！」

「ぴぎゃぁぁあああああ！！？」

「流石にやりすぎ」

「うっす……」

ホラーゲー四十八手が一つ「めっちゃ足音がでかい早歩き」で追いかけて回していたところでジョゼットに捕獲された。
流石にちょっと悪ノリしすぎたな、危うく斬り殺されるところだった……

「にしてもその装備……見たことないけど、何かしら？」

「ん？　これはアレだよ、黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）倒した時にドロップしたやつ」

「トゥルー……？」

「スローターやると湧いて出てくるクソモンス」

「あっ、アレ！？　え、アレ倒せるんだ……てっきりお仕置きモンスターで倒せないものと思ってたわ」

「ていうか直泥なの？」

ジョゼットの背中に隠れていた龍×４が半目でそう問いかけてきたので肯定しつつカクンカクンと首を動かす。

別に驚かす意図はなく、単純に無意識下の行動だったのだがどうやら向こうはそうは思ってくれなかったらしい。

「こちらお詫びの品で御座いまする……」

少なくとも聖女ちゃんのクエストを進行中は結構顔を合わせることになるだろうし、お詫びとしてアップルパイを渡しておくことにする。

「喪服の女からアップルパイ貰うってどういうシチュなのこれ……」

「これ一回死なないと脱げないからしばらくこのままだぞ」

「いますぐ死ね……」

龍×４の口元が引きつっていたが、これに関しては俺のせいではないので責任は取れない。

この後「味のあるアップルパイとかどこで手に入れたんだ」と詰め寄られるポカを犯したりしたが、人形系ホラーにありがちな首を小刻みに振動させるテクで撃退した。そんなに怖いのかこの姿。

「……なまこ」

「ぎゃああああ！？」

「…………………サンラク？」

うーん、楽しい。スカルアヅチの裏口からこそっとソロプレイで森の中を進んでいたところ、妙に騒々しい一団がいたのでこっそり近づいて見たところなんとルストモルド達であった。

龍(テチ)×４氏をおちょくって怒られた反省から「じゃあ身内ならえええやろ！」という結論に至り、背後に忍び寄りつぅ……、とモルドの首筋を指でなぞってやったのだ。

セリフは思いつかなかったので今日の夕飯、なまこってなんだよなまこって親父殿……

「…………っ！　…………っ！　…………っ！？」

「……どうやって見つけたの？」

「マジモンの偶然」

「………成る程」

しかし対照的なコンビだ、なんかこう……モルドのステータスを下げるほどルストのステータスが上がるタイプのボスっぽいというか……ペアで出てくるボスって逆に何やるか分かりやすいよな、とりあえず同時に倒さないと片方がもう片方を蘇生する確率は六、七割はある。

「し、心臓に悪すぎるから本当にやめてよ！」

「悪い悪い、てかそんなに怖いか？」

「……正直、最初にプレイヤーネームが目に入ってなかったら攻撃してた」

おっと勘弁してくれ、これを装備するために使った装備はそう頑丈じゃないから至近距離から剛弓の一矢なんて受けたら頭が飛ぶ。

どうやら刻傷とR．I．P．の装備破壊不可がぶつかり合っているのか結構前から歩くたびに氷がひび割れる様な音が鳴っているのだが壊れないならそのままでもいいだろう。即席でパーティ申請を送って三人パーティとなり、「とりあえず死ぬまで前進してみようぜ！」と進むことに。

「へー、そっちは落ち目商会の若旦那の起死回生に付き合って船に乗ったのか」

「ルストが「追い詰められたNPCが何するか興味がある」って観察してたんだけど、新大陸に行くって話になったからクエストを受けたんだ」

「……リアクション芸人みたいで、見てて面白かったから」

さいですか。

「あ、そうだルスト……クラン拠点できたぞ」

「ふーん…………っ！？」

興味なさげなルストの首が高速でグリィ！！　とこちらを向く。ふふふ、その意味を悟った様だな……！

「それはつまり！」

「まぁ外道二人にリアクター渡してるから奴らと合流しないといけないんだがな」

「……サンラクは転移手段を持っている。ので、合流は容易い……！」

「今から行けってか、まぁ時間的に奴らがEXシナリオを完璧にやってりゃそろそろクリアなりしてる頃だとは思うが……」

連絡がないんだよね、まぁシナリオのラストは「青」相手に逃走劇だから仕方ないのかもしれないが。

「ちょいちょい戦術機獣が使われてたし妄想態に引っかかったとは流石に考えづらい、となるとやっぱり二回目以降のクリアはアナウンスされないのかもな」

「……むぅ」

流石にレイ氏とかがいたとはいえ八人でクリアできたユニークをあの精鋭パーティが失敗した、とは考えづらい。外道共にちょいちょいクターニッドシナリオの内容漏らしてたからその情報をまとめて擬似的に攻略チャートを作る、とかあのエセ魔法少女ならやりかねん。

「まぁ、今の俺も広義の意味では魔法少女か……」

「……現代日本に生きててなかなか聞ける言葉じゃない」

「魔法少女っていうか、邪法妖女？」

「俺のとっておきのすべらない話で三日間横隔膜痙攣させてやろうか」

「脅し方が斬新すぎる！？」

ペンシルゴンが頭から地面に突き刺さり、カッツォがＮＰＣと融合し、俺が宇宙へ旅立ったあの話を……いや、今はよそう。とはいえ現代日本に生きてなかなか言える言葉じゃないよな、アイアム魔法少女。

「ていうかよく見ると、ほとんど揺れずに歩いてるの怖すぎる……」

「あ、気づいた？　これめっちゃ摺り足で歩いてるんだけど」

なんかこう、段々ホラープレイが楽しくなってきた。こうなってくるとホラー適正クッソ高そうな例（ラビッツで見たやつ）の鋏対刃剣が欲しくなってくるところだ……あ、そうだ鋏対刃剣で思い出した。

ちょうどそのタイミングで真横から突っ込んできた馬みたいなトリケラトプスの突進が直撃し、俺は死んだ。

「サ、サンラクーっ！」

物理には勝てなかったよ……

物理でなんとかなる系ホラー（後書き）

歩くたびに何かがヒビ割れる音を鳴らす系魔法少女（ホラー）

すなわち再起のリビルド

「…………おぉ、戻ってる」

とりあえず鮭頭を装備してっと。
エムル起きろー、色々やること出来たからラビッツ行くぞー。

というわけでビィラック工房。つい先日焦熱地獄と化した場所ではあるが、若干角が削れた金床と共にボサボサ毛並みの黒兎を視認。

「ビィラック、例のものは？」

「出来とるけぇ、ついでにワリャの要望通りに「再構築（リビルド）」してやったわ」

そう、例のもの（アラドヴァル）そのものは三日ほど前には完成していた。だが完成したアラドヴァル・リペアに提示された二つの分岐、その一つを選んだことでアラドヴァルは再びビィラックに預けられていたのだ。

「しかし良かったんじゃろうか……仮にもオヤジの友人の武器を、わちなんぞが勝手に……」

「気にすんな気にすんな、もしヴァッシュが何か言ってくるなら俺がケジメすりゃいいだけさ」

回復ポーション以下の価値しかないプレイヤーの無限残機でケジメになるのかは微妙なラインだが。

「それで、現物は？」

「わちが未熟なのか、それとも英傑武器（グレイトフル）がそういうもんなのかは分からんが、若干剣の力が弱まっとるけぇ……ほれ、これが生まれ変わった「アラドヴァル・リビルド」じゃ」

ごとん、とそれが俺の前に置かれる。それは何かの革で編まれた緻密な刺繍が施された鞘に収められた一本の剣。今でこそその刀身は鞘の中に隠されているが、一度抜けば全てを切り裂く灼熱の刃が顔を覗かせるだろう。

「おぉ……！　あれ、片手剣にしちゃデカくね？」

「それが限界じゃ！　仮にも巨人の槍を片手で扱える程度にまで削ったんじゃけぇの……」

片手剣を所望したし、実際プレイヤーの行動参照をするなら高確率で片手で扱えるサイズに真化できると思ったんだが。

いや、違うなこれ両手剣用のロングソードじゃない。若干短いから片手でも扱えそうだし……なんだっけ？　片手剣と両手剣の間くらいの大きさの、カスタード……あっ思い出した。

「雑種の剣（バスタードソード）か」

バスタードソード、よく勘違いされるが破壊（バスター）じゃなくて雑種（バスター）なんだよな。片手剣としても、両手剣としても使えるよく言えばハイブリッド、悪く言えば中途半端な武器。

「全く、本来ならこう云うんは苦難を潜り抜けて素材を手に入れて、ようやく完成するもんじゃろうに……」

「そりゃリビルドに必要な要求素材が鉱石なら即応できるわなぁ」

なんか他にも条件があったっぽいんだけどいつのまにか達成してたんだよな、手間が省けたのは嬉しいがそれはそれでなんだか味気なさを感じる。つーか何が条件だったんだか……

再構築(リビルド)は正当強化の再生成(リバース)と違い、武器種を変更する代わりに若干ステータスが下がる。さらに言えば再生成と比べて素材が少なめで済むメリットもある、それでも手持ちの鉱石をごっそり持っていかれたのだが……アムルシディアン五十個とか真っ当なプレイでどうやって手に入れるんだ？

「抜いて見ても？」

「……工房の中のもんを斬ったらぶちかます」

スラリ、とアラドヴァル・リビルドを抜き放つ。メインで使われた素材がアムルシディアン・クォーツであるためか、黒曜の輝きを放つ刀身には葉脈の如き灼熱が走り、軽く振るだけで炎のエフェクトが虚空を舐める。

「若干重い……武器種が両手片手両用だからってのもあるが、単純にＳＴＲが足りてない感じか……」

片手剣なら冥王の鏡盾(ディス・パデル)と組み合わせるのも選択肢に挙がるが、これだと剣一本で取り回した方がいいのか？

手首を回して振り回したり、軽く上に投げてキャッチしたりして使い心地を試していたが、そろそろどこかしらに突き刺さって蹴られそうなので納剣。

「いい仕事だ、完璧（パーフェクト）！」

「ふ、ふん……！　当たり前じゃ、オヤジに任された以上、わちの持ちうる全てを注ぎ込んだんじゃけぇの！」

口ではそう言いつつ、身体（ドヤ顔）は素直じゃねぇかよ……と、

「おぉう……出来たぁようだなァ……」

「オッ、オヤジ！？」

なんとヴァッシュ本人登場。こいつ、気配もなく背後に……！？　まるでモノマネ大会でモノマネ披露している最中に後ろから本人ご登場、みたいなキョドり方をするビィラックを他所に、ヴァッシュの視線は俺の手元、今まさにしまわれんとしていたアラドヴァル・リビルドへと向けられていた。

「あー……兄貴、この剣を勝手に切り詰めたのが不味いってんなら責任（ケジメ）は俺一人に……」

「かまやしねぇよう、元々槍の穂先をへし折った代物（シロモン）だぁ……今更さらに引っ詰めた所で化けて出るような小せぇ奴でもあるめぇよ…………サンラク、その剣に恥じぬ「道」を貫けよう」

「ウッス！」

フッ、見ろこのロールプレイ力を。ジョゼット達も相当のものだが俺の舎弟的ロールプレイもそう捨てたもんじゃねぇな。
そんなことを思っていると、ふと思い出したかのように去り際のヴァッシュが振り返る。その顔にはラビッツの大親分としての顔ではなく、娘を見る親としての笑みを浮かべて……

「ビィラックよう……いい仕事、するじゃあねぇか」

「ひゅっ」

あーっ、いけませんお客様！　不意打ちでその言葉はいけません！　ビィラックみたいなタイプにそれは、あーっ！　いけませんお客様！

二……いや三割増しで顔面がネチョくなったビィラックをなんとか宥め賺して別件に移る、アラドヴァルもそうだが他にも色々強化を頼んであったからな。

「ほらいい歳したヴォーパルバニーが泣かない、鼻かむか？」

「泣゛い゛ど゛ら゛ん゛わ゛い゛！」

その顔と声でそれは通じませんわ。
とは言え仮にも鍛冶屋ＮＰＣ、しっかりと仕事は果たすようで預けていた武器防具が俺へと手渡される。

「ぐずっ、ぢーん！　うぅ……とりあえず強化はしたが元があれじゃけぇ、あんまし期待すんなや」

「いやいや、充分だよ充分」

思えば初期装備かつクソスペながら、よく俺のプレイについてきたもんだ。強化された事で着用されていないいわば布の状態でもその眼光の鋭さが解る、こいつここに来て更なる眼力強化を……！？
「凝視の鳥面改め「正眼の鳥面」……まぁ、多少は頑丈になっちょるわ」

んんん、装備ィ……！　いいねェ、防御力はなんと十倍だ。驚異の成長度合いと言わざるを得ない……！　ＶＩＴ２０程度だけど。
あとなんか、視覚補正効果？　が入ってるみたいだ、装備名的に正面視でブレが軽減されるとかそんな感じか？

次は改造計画被験者こと帝蜂双剣、ドミネイオン・ホーネットの素材に加えて隠し味（？）に深海産の多分エイかカサゴだったかの針やら、俺の中で便利素材ランキング一位に上り詰めた水晶群蠍の針やらを混ぜている。
その名も「惨毒蜂双針（ヴェノ・スティンガー）」！　ネックだった耐久力の大幅改善に成功し、さらに複数の食らったらやばいタイプの素材を混ぜた事で「壊毒」の性能がアップデートされた。

「……つまりこれ、一度刺した瞬間「毒」「麻痺」「壊毒」の判定が一回ずつ適用されんのか？」

「こっち向けんなや、危ない」

ユニークモンスターはともかく、一般モンスター相手には恐ろしい程いやらしい効果だな……ただ一つだけ問題があるとすれば、針系素材ばかりぶち込んだせいか双剣は双剣だがレイピア型になってしまった。こりゃ下手に防御すると折れるな。

その他にも現状強化可能であった武器防具を諸々受け取り、そろそろ寂しくなってきた懐に消費生物としての根本的カルマを感じつつ、武器強化イベントもいよいよ大詰めだ。

「そして最後に……ほれ、それでいいんじゃろ？」

何故こんなものを、と言いたげなビィラックではあるが主な俺の収入源からしてその重要性は理解しているのか、手抜きのない仕事が果たされたそれは、ある意味ではプレイ開始初期から握っている武器と同じくらい手によく馴染む。

「いいねいいね……よし、とりあえず試してくるかァ！」

エムル、湯漬けを持てぃ！　お兄さん今日はスーパー採掘祭り(カンカンフェスティバル)だぁ！

目力が増した鳥面を装備し、下手すりゃアラドヴァルと同じくらい鉱石を注ぎ込んで強化したツルハシ……「剛掘の鶴嘴」を担ぎ宣言した俺に、エムルは悟りきった溜息をつくのだった。

すなわち再起のリビルド（後書き）

・アラドヴァル・リビルドの再構築条件
ＮＰＣ「アラドヴァルのドルダナ」を知るＮＰＣが彼の最期を知り、アラドヴァルの所有権が所有者に移ったことを認めること。
簡単そうに思えますがドルダナを知る最有力候補の巨人族相手だとアラドヴァルの所有権関連で壮絶にグダるのでＲＴＡ的にはヴァッシュルートが最速です

・アラドヴァル・リバースの再生成条件
アラドヴァルの敗北の払拭、即ち現所有権が入手以前の戦績から最後に戦った相手にアラドヴァルを用いて撃破すること。つまりゴルドゥニーネに勝てとおっしゃいますかこの槍もどきは

要するに「名匠」以上の鍛冶師による強化に加えて
「今の持ち主の武器として過去と決別する」のがリビルド
「英傑が用いた武器として過去のしがらみを解決する」のがリバース

ドラクルス・ディノトリアシクスなる学名拗らせすぎて呼びづらいことこの上ない手のひらサイズの恐竜擬き、その最後の一匹が俺へと飛びかかる。

だがその爪が俺へ届く寸前、毒のスリップダメージによって体力が尽きたのかその身は崩れ落ち、そして消えた。

「えっぐ……」

今まであんまり使ってこなかった分、惨毒蜂双針（ヴェノ・スティンガー）に強化されて性能弾けてない？　雑魚モンスター相手なら高確率で状態異常入るから完封すら余裕なんだが……

「とはいえ刺突メインで「受け」ができないのはちと厄介か」

なんだこの攻め気過ぎる双剣は、カッツォも見習えよ。

十数匹くらいの群れで襲いかかってきたのでそこら中に落ちているドラクルス・ディノトリアシクスの素材を拾いつつ、ふと耳に入る人語の音。

「やっぱプレイヤー密度が飽和してんな……モンスターとエンカするよりプレイヤーとエンカする確率の方が高いぞ……」

うーん……強化した武器防具の性能調査が目的だからそこまで本気で探してないってのもあるけど、見つからないなぁ……覚醒の祭壇（レベルキャップ解放施設）。

キョージュ（マッシブダイナマイト）の奥さんからレイ氏が伝え聞いた内容や、目が幕末色に染まり始めた京極から聞いた話では結構な奥地に存在するらしいそ

れは、Ｅｘｔｅｎｄに到達したプレイヤーにレベル三桁世界の扉を開いてくれる。

ヴォーパル魂的にレベルが上がり過ぎるのも考えものだが、それでもレベル１００以降で解放される要素には無視できない魅力がある。特に「三桁スキル」と呼ばれるレベル１００以降から新規解放されるスキル、一応「リュカオーンをぶっ飛ばす」をメインのモチベーションにしている以上、確実に分身よりも強いであろうリュカオーン本体との戦いを見据えたならレベル上限は取り払っておきたい。

廃人クランが相当の強行軍をしてようやく到達できる程度には奥地にあるらしいし、京極も「あれを単独は難しい」と言っていたが……仕方ない、一旦戻るか。

「な、なんだこの黒い……うわぁぁぁあ！？」

「おっしゃ鎌落とせやヒャッホーウ！！」

プレイヤーが多過ぎるのは困りものだが、お陰で挑戦回数が増えるのは嬉しいね。なにせ攻略法が出回ってないお仕置きモンスターだ、高確率で俺が戦うことができる。

「うおおお癒してやるよオラァァァン！！」

結局三日かけて総試行回数十六回、副産物としてR．I．P．二つダブり、素材アイテム「黒死の怨涙」十三個を経て漸く「黒天無塵鎌（ノーブルー・サイスレンス）」を入手するに至ったのだった。

物欲センサァァァ！！（魂の叫び）

「騎士団が動いている？」

「えぇ、あくまでも「騎士団主導による新大陸調査」という名目のようだけど……こちらに来ている商人達に大量の物資発注を行っている。私達がこちらに来ていることは王家にも伝わっていると思うのだけれど……噂の新王様が直情に過ぎるのか、情報の伝達が不完全なのか……」

カフェ「蛇の林檎」新大陸支店、未だ開店準備が整っていないのかオープンこそしていないが、そこはこのカフェの裏の顔たる「彷徨う剣」……仇討人特権で裏口入店した俺はエロだ……ルティアパイセンから気になる話を聞いていた。

「これは貴方が請けた案件、私はこれ以上の干渉はしないつもりだけど……私の見立てでは騎士団が動くのは二日後の深夜辺り、ってところかしら」

「二日後か……なるほど」

さすがに平日は学校もあるのでやめてほしいとお祈りしていたが、今回ばかりは乱数の女神に感謝か？　金曜の深夜なら遠慮なく徹夜できるしな。

「第三騎士団の団長……ユリアンは「絶命剣」と呼ばれる使い手……」

「ぜつめいけん」

「まぁ、確実に急所を狙うだけのつまらない剣よ。第一騎士団々長アルブレヒト……「当代無双」「王認勇士（キングス・パラディン）」の名を王より与えられた彼とさえ比較しなければそれなりに強いんじゃない？」

散々な言いっぷりではあるが、確かに急所を狙うだけなら大した脅威じゃないな。打ってくる場所が分かるなら対処は容易だ、それよりもやたらと持ち上げられている第一騎士団の団長とやらの方が気になって仕方ないんだが……ここはちょっと「事情を知っている者同士が表面上はしらばっくれながら情報交換する」的なやつをやってみるか。

「あぁ……彼の噂はかねがね、高潔な人物とは聞いているが……彼は「情（前王）」よりも「忠（現王）」を優先する人物なのかな？」

「どうかしら？　少なくとも「義」に厚い人物ですもの、彼の目が曇らぬ限りは選択肢を違えることはないでしょう」

うーむ、父親を追放して即位した現王次第だけどこれは前王と第一王女保護ルートで明確に敵対することはない、って保証になるだろうか。ジョゼット達は騎士然としているし実際それに準ずるロールプレイをしているが、あいつら教会騎士だから王家系にはあんまり詳しくないんだよな。

聖女ちゃん関連のクエストだから実質「聖女ちゃん親衛隊」の全面協力を得られているが向こうも向こうでやることがあるらしいし、なら情報くらいは得ようと話を聞いてみたが「第一王女も割と美少女系だよね」とかいう毒にも薬にもならん情報しか持っていなかった。聖女ちゃん関連なら小一時間語りそうなくせに役に立たない連中だ……

「……やっぱり、殺るのは不味いっすかね」

「確実に王国騎士団を敵に回すことになるでしょうね」

ノーキル救出…………………………いや、もう一つ簡単な解決方法があるけど流石にどうなんだ？　でもなぁ……新大陸って環境的にアレやるのめちゃくちゃ簡単そうなんだよなぁ……鯖癌や合法的にプレイヤーを始末する必要があるゲームじゃ割と必須技能だったから俺でも再現は可能だろうけど…………うーん。

「……ふふ、葛藤は青いけれど好ましくもあるわね」

「それはどうも」

「お二方、こちら新大陸産の素材を厳選して作った「紅蓮芭蕉パフ

ェ」でございます、どうぞ忌憚なき感想を……」
「おぉ」
「あら」
クローン疑惑兄弟の「いとこ」であるらしい新大陸支店の店主が差し出した真っ赤なバナナを使ったパフェに、仕事人風の雰囲気が漂っていた俺とルティアが声を上げる。
「堅苦しい仕事の話をしながら食べるのも無粋ね……では手をつける前に一つだけ」
「む？」
一緒に差し出された銀製のスプーンをピッ、と俺に突きつけたルティアは簡潔にこう告げた。
「この新大陸に関して、王国側はある程度の情報を掴んでいる。そしてそれ故に意見が割れている……前王は穏健派、現王は過激派ね」
「……なるほど」
「私達は彷徨える剣、か細き願いを叶える者……それでも、剣にだって使い手を選ぶ権利くらいはある。貴方は誰に握られることを望むかしら？」
「誰だって構わないとも、だが素直に使いこなせるような剣とは思われたくないね」

仇討人が剣だというなら、ぶん投げたら勝手に敵を屠るくらいのじゃじゃ馬になりてぇなぁ。

環境破壊に伴うお仕置きによる試行回数（後書き）

・第一騎士団々長アルブレヒト
「当代無双」「王認勇士（キングス・パラディン）」と讃えられるNPC。
いわゆる「王様キルしてNPC大混乱に陥れようぜｗｗｗ」的愉快犯をお仕置きするために配置されたレベル上限突破NPCであり、対PL特化とも言える賞金狩人を除けばNPCの中でも最強クラス。
NPC……というよりアルブレヒト専用職業「王認勇士（キングス・パラディン）」は攻撃性能と防御性能両方に大幅補正の入るぶっ壊れ職業であり、王家直属騎士団伝来の「王盾クリスタルパラディン」及び「勇騎霊剣ジゼル」を振るう姿はプレイヤーをして
「特化アタッカー並の火力のくせに耐久が特化壁タンク並」
「鎧の隙間に攻撃したのになぜか弾かれた」
「絶対あの剣、女性アバターに対してだけダメージ補正入ってる」
「顔が良すぎる」
「アルブレヒト様の夢女になります」
と大好評（？）
とりあえず金髪碧眼の爽やかイケメンクソ強ナイト、NPCの中でもあまり露出度が高くないので王族を暗殺しに王城へ侵入するか、あまりに厳しい王家騎士団登用をくぐり抜けて騎士団入りするかしないと顔すら拝めない。
一時期王家暗殺チャレンジが増えた元凶であり、騎士プレイヤーが増えた元凶でもある。
ベストショットブロマイドは一枚１００００マーニ。

余談ではあるが「ジゼル」には剣の銘と同じ精霊（ネレイスみたいな雑魚精霊ではなくガチ大精霊）が取り憑いているのでアルブレヒ

トに色目を使うと謎の死を遂げることになります

哀を想へ（前書き）

趣味大爆発

サンラク：結局お前らクターニッドクリアできたの？

秋津茜：あ、私もそれ気になっていました！

アーサー・ペンシルゴン：クリアしたよー

アーサー・ペンシルゴン：八回くらい情報絞ったサンラク君ぶっ飛ばしたくなったけどまぁ確かにこれはわかって挑むと面白くないかも

アーサー・ペンシルゴン：私ら以外初ユニークじゃん？　みんな体に力入りまくっててさぁ……妄想態に突撃かまそうとした時は止めるのが大変だった……

アーサー・ペンシルゴン：勝った瞬間シナリオ終了は鬼でしょあれ

ルスト：でも勝ったなら別にいいんじゃない

アーサー・ペンシルゴン：なんか変なシャチに全滅させられるわ、ゾンビパニックが連鎖するわで勝利の余韻より過程の疲労がつらいのー！！

サンラク：えっ、アトランティクス・レプノルカを初見撃破できないってマジですかァ！？

サンラク：まーじーでーすかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？！？

アーサー・ペンシルゴン：私顔面魚類さんみたいに魂を海鮮類に売り渡してないしぃー

サンラク：やんのかこら

アーサー・ペンシルゴン：性転換したカッツォ君が見た目変化ゼロで棒だけ生えた話聞きたい？

サンラク：待ってポップコーン買ってくる、あとコーラ

モルド：この人腰を据えて聞く気満々だ……

サンラク：ていうかクターニッドにすら受け認定されたカッツォ君はどうしたよ、俺は今新規発生させたユニークシナリオやってるけど

サンラク：やってる！　け！！　ど！！！

オイカッツォ：その報告で決心がつきました、奴にチクります

サンラク：まって

サンラク：まって鰹さん、話し合いを経よう？

サンラク：人類が獣と明確に区分できる点は会話を使うことで間接的解決を行える点だよ？

オイカッツォ：原始的な怒りの感情は獣寄りだよね

アーサー・ペンシルゴン：あれぇ！？　これもしかして流れ弾が私にも直撃してなぁい！？

サイガー０：何の話、でしょうか

ルスト：ポップコーンとコーラ買ってくる

モルド：醜い共食いだ……

サンラク：滑らない話ァ！！　きりもみ回転でテクスチャぶち抜いたペンドリルゴンとぉ！！

アーサー・ペンシルゴン：ムチムチのおっさんと完全融合したキメラカッツォ君とぉ！！

オイカッツォ：ケツから攻撃エフェクト出しながら描写限界高度まで音速射出されたサンラクロケットォ！！

モルド：ぬぶりゅふ

ルスト：これは三日コース

クリア自体は出来ていたらしい。如何にしてオイカッツォを秘密裏に処理(口封じ)するか思考を廻らせつつログイン、例の王族救出作戦まで一日の猶予がある。故にこそ……ユニークシナリオだ。

「なんつーか、妙なところで繋がりがあると普通に感嘆しちゃうな……」

本来はこんなことをしている場合じゃないんだろう。護衛系ミッションは長期戦がセオリー、プレイヤーは先導者であり時に壁となって護衛対象を守らなければならない。そして俺(サンラク)の性能的に壁になっても障子程度の防御力しかない以上、この時点で制限を受けていることになる。

いざという時は最終手段も考えねばならない、アイテム類を補充し長期戦を見据えた武器の用意などもしなければならない。

だがそんなことはどうでもいい、割と時間があって面白いことが起きたならそっちを優先したっていいじゃない。後悔先に立たずというが見えてる後悔に全力ダイブするのも人生というものだ、だってほら……気になるじゃん？　お仕置きモンスターとレアモンスターのラブロマンス、だなんてさ。

ユニークシナリオ「愛故に哀(トゥルーラブ・アン)、故にこそ死を(ド・トゥルーヘイト)」。

発生条件はおそらく「黒死の天霊(トゥルー・クワイエット)」の武器「黒天無塵鎌(ノーブルー・サイスレント)」と「喪失骸将(ジェネラル・デュラハン)」の武器「喪失(焔将軍)骸将の斬首剣」を所持していること。あとは……これは憶測だが武器に関して一定以上の知識を持つ者、職業「名

匠」以上の鍛冶師の存在だ。
実際俺がこのユニークを発生させた時も、何の気なしにビィラックへ黒天無塵鎌を見せたタイミングだった。いきなり「この鎌は……誰かを求めちょる？　おいワリャ、あん時の大剣を出しぃや」とか言われた時は一瞬何言ってるのかわからなくてフリーズしたからな。

そこからはイベント進行だ、曰く「この鎌と剣には強い繋がりがある」「この繋がりは生半可なものではない」「もしワリャがこの先を知りたいと望むならこの剣の持ち主……喪失骸将こそが何かの手がかりになる」とのこと。
明らかに喪失骸将にコンタクトしてフラグ建ててね、と言わんばかりの流れに若干笑ってしまったが見えてる地雷は踏んでやるのが粋というものよ。そんなわけでエイドルトにやってきた俺は、極めて珍しいことに水晶巣崖（友達の家）ではなくその下に広がるアンデッドワールドへと足を踏み入れたのだった……

「あ？　やんのかオラ、てめーら如きカルシウム共が俺に敵うと思ってんのか？」

こちとらてめーらに構ってる時間はねーんだ、しっしっ。さて、喪失骸将はどこにいるのやら………

二時間後

「いねぇ！」

クソ乱数か！？　それともイベントフラグか！？　あーくそ、攻略情報がないから自分で悩むしかないじゃねーか！！

えーと？　まず背景関係をはっきりさせる、これ鉄則。あらすじとしては「黒死の天霊武器と喪失骸将武器がなんか反応してるから調べてきたら？」と言ったところか。登場人物は言うまでもなく黒死の天霊と喪失骸将、R．I．P．及び黒天無塵鎌の武器説明文、焔将軍及び喪失骸将の斬首剣の武器説明文を見る限り神代と現代の中間あたりにあった古代にいた騎士とその妻だ。

当時の王と王女が恋愛的ななんかをやらかして悲劇が起きたっぽいが……どうしよう岩巻さんゲームの恋愛もクソっぽいですよ。まぁいいや、まぁ分かっていることは「黒騎士は首を失くし彷徨い」「妻は狂った天霊に成り果てた」ということだ……何このバッドエンド、えっ！？　この状況からでも入れる分岐（ルート）があるんですか！？

「フラグはどこだ……？　最有力候補は喪失骸将（ジェネラル・デュラハン）とのエンカウントだが……」

まぁ登場人物に直接コンタクトするのが安牌だが……いや待て、登場人物に直接コンタクトする？

「…………」

一瞬の逡巡。チャート自体は簡単だ、だがそれをやった場合俺にもデメリットが発生する。メインで進めているユニークに響く以上、無視しきれないデメリットなのだが……その時、心の中の岩巻さん（イメージ）がフッ、と笑みを浮かべた。

（……恋に迷うな、若人よ！）

いや恋とか愛をやってるのは俺じゃなくてお仕置き死神と八つ当たりデュラハンなんですけど。

とはいえ心は決まった、ここで出てきたのが外道共だったら心の中

でぶん殴っているところだが岩巻さん（イメージ）がそういうのならやってやろうじゃないか。

「おっと、まずは装備を変えて……」

剛力鉄シリーズ、特に能力はなく単純な防御力だけに特化した装備に身を包む。右手に聖杯、左手に黒クリスタルを構えて……ちょっと気取っちゃうかぁ？

「変身！！　なんちゃって」

そのプレイヤー、名をミーアと言う。

荒事が苦手な気性であり、他者を蹴落としてまで自らがメリットを得ることを好まぬ性格であり……おおよそハック＆スラッシュというカテゴリに向いていない人物ではあるのだが、住居的な理由からペットを飼うことができない、という理由と最近仲良くなった男子が勧めた「ハクスラながら下手なシミュレーションよりもリアリティのあるゲーム」ということでシャンフロを始めたプレイヤーであ

る。

テイマーの前身として最近その重要性を再確認されたバディモンスター、その中でも猫モチーフのバディキャットと双璧をなす人気を誇るバディドッグの「栗太郎」と共に決して早くはないものの、着実に攻略を進めていたミーアは、「少なくとも骨やゾンビなら攻撃する抵抗感も少ない」という理由で奥古来魂の渓谷へと挑戦していた。

余談だがミーア……須田(すだ)　美亜(みあ)の苦手なものはホラー映画である。

「うぅ……きょ、今日は様子見だから……栗太郎、弱いモンスターを倒したらすぐに戻ろうね……？」

「わんっ！」

何もミーアは栗太郎と共に、すなわち実質ソロで奥古来魂の渓谷をクリアしようと考えているわけではない。自身をシャンフロへ誘ってくれたレイジが新大陸にいる以上、そしてレイジに「次会う時には私もテイマーになってるかも！」と大見得を切った以上、自分の力で前へ進まなければならないと彼女はそう考えていた。

野良でパーティを組むのはご愛嬌としても次会った時には栗太郎の他にかっこいいモンスターをテイムしてドヤ顔をしよう、という微笑ましい企みを抱いていたのだが……瘴気対策として聖水を自身と栗太郎に使用しつつ恐る恐る、といった様子で進んでいたミーアであったが、段々と恐怖に慣れてきたのかその違和感に気付く。

「モンスターが……いない？」

実際に攻略する際は野良でパーティを募って挑戦するつもりであるし、此度の挑戦はあくまでも「エリアに出現するホラー系のモンス

ターに慣れる」という目的によるものだ。
そして大量の新規プレイヤーを抱えるファステイアからサードレマ、新天地へ臨む上位プレイヤー達を抱える新大陸及びフィフティシア。その二つに挟まれたエリアは擬似的な過疎状態に陥っており、少なくともモンスターが一体も見つからない、ということはないはずなのだが……

と、その時だった。栗太郎がミーアの前に出て唸り声をあげた直後、轟音に衝撃を伴って上空から落ちてきた何かが盛大に土煙と瘴気を巻き上げた。

「な、なに………ひっ！？」

カタカタカタ、ともはや存在しない喉を揺らし、代わりに空虚に骨を鳴らすそのモンスターの名はスケルトンワイバーン。ミーアは知る由もないがイキって水晶巣崖に着地したはいいが、衝撃に反応した水晶群蠍達にフルボッコにされた上で谷底に投棄されたワイバーンの成れの果てである。

「く、栗太郎……無理！　これは無理！　逃げよう！　栗太郎！！」

ミーアのステータスは「魔法が使いたいのでMPを上げたはいいがいろんな人の意見を取り入れた結果中途半端（器用貧乏）になった」というゲーム初心者にありがちな万能型であり、戦力としてはかろうじてヘイト集めに使えるかどうか、といった程度のバディドッグと組んだミーアが勝てる相手ではない。
スケルトンワイバーンはブレスなどの遠距離攻撃手段こそ持っていないものの、筋肉や臓物を捨て去ったことで得た俊敏さと、骨格のみになってもなお人を吹き飛ばすには十分すぎる質量による突進を主とするモンスターである。

逃走の果てにここへ辿り着いたスケルトンワイバーンはヘイトを変更、輪をかけて矮小な身ながら生意気にも己へ唸りを上げる犬っころと、怯えた目で自分を見る人間へと殺意を向ける。
ミーアの目に涙が浮かび、栗太郎はそれでもミーアを守らんと唸りを上げて全身の毛を逆だたせる。

ミーアと栗太郎は知らなかった、スケルトンワイバーンは一瞬とはいえ忘れてしまっていた。

「ふふふふはははははは…………！！」

自分(彼)が何から逃げていたのかを。渓谷の奥でゾンビやスケルトン達を鏖殺してのけたそれが、黒雷を纏って縦横無尽に走り回る恐怖そのものであることを――！！

「死、ね――――！！」

「ひゅっ」

宙を踏み、空を切り裂くように舞う喪に服す漆黒。その両腕は黄金と白銀に輝く不自然なほど巨大な拳を携え、空中を舞うように飛来したそれは重力を味方につけた鉄拳をスケルトンワイバーンの頭蓋へと叩きつけた。
スケルトンワイバーンのＡＩがそれを思い出すも時すでに遅く、全身から黒い瘴気と雷を撒き散らす……黒雲と雷雨の権化によるダメ押しの一撃がスケルトンワイバーンの頭蓋を粉砕し、骨格の体が木っ端微塵に砕け散る。

「ふぅぅぅぅぅぅぅ…………」

「あ、あぁ…………」

世にあまねく制作されたホラーカテゴリ、ミーアにはどうしても克服できない二種類の苦手なホラーがあった。
一つは無尽蔵に思えるほどの絶望、希望の見えぬゾンビや怪物の群れ……如何なる努力も物量の前に潰える恐怖。
そしてもう一つは、絶対的優位性を持ち確実に一人また一人と登場人物を惨殺する殺人鬼の如き………

「――あれぇ、どこかでお会い、しましたっけぇ？」

「っっっっっっっっっっっ！！！」

「キャウン！？」

ぐりん、とミーアへと向けられた顔はヴェールに覆われその奥を伺えさせない。だが恐怖に曇ったミーアの目には、まるで顔のない怪物のようにしか見えず。やけにはっきりと聞こえる少女の声は恐怖をより引き立てるエッセンスでしかなく。
ステータス以上の機敏さを発揮した動きで栗太郎を抱え上げると、全身全霊のダッシュで元来た道を駆け戻っていった。このエリアは無理、そんな確信を心に深く深く刻み付けながら………

「――あぁ、レイジとかいう人と一緒にいた……」

一週間夢で魘された。

哀を想へ（後書き）

大体ＢＢＣＴＢ買ったせいだし、二者択一で嘘つき姫と盲目王子買えなかったせいだし、露骨に変身してるし、自重という言葉を覚えなくては…………それはそれとしてプロット的に今章Ａの尺的にちょっとユザパりすぎて短いのでテコ入れというか

どうせ尺足りなくなるまでが一連の流れって３００話以上書いてて薄々学習してはいるんですが

今振り返れば、あの日あの場所で毒のスリップダメージで死なずに生き残ったことは大きな意味を持っていた。
もしあの時リュカオーンと遭遇しなかったら、もしあの時採掘した時のアイテムがズレていたら、きっと今の俺(サンラク)は形成されていなかった。

だからこそあの日俺に宿屋の場所を教えてくれたプレイヤー「レイジ」と、その隣にいた「ミーア」の名と顔は覚えている。
まさかこんな場所で会えるとは思ってなかったので思わず疑問形で問いかけてしまったが、ミーア氏は栗毛の犬を抱え上げると目にも留まらぬ速度で走り去ってしまった。

「なんだなんだ、お化けでも見たような……」

いや、上から過剰伝達状態の喪服が落ちてきたら普通ビビるか、ってかホラーだわ。
うわ、申し訳ないことをしてしまったなぁ……レイジ氏の事とか聞きたかったんだが。とはいえ今の俺は作業中、ゴリゴリとヴォーパル魂が削れていく音を幻聴しつつも着々と条件達成へと近づいている。

「評価を改める必要があるな、まさか条件に合致したらここまで有能になるとは」

命を奪う程に己を回復し、強化する。ソロでスローターやるなら必須クラスの性能をしてやがる。スローターの果てに現れるお仕置き

モンスターの防具がよりにもよってスローターと相性がいいとはな。
さて、そろそろ出てきてもいい頃だと思うが……ここら一帯の雑魚モンスターはあらかた刈り尽くした。カウントは二百体を超えてから回していないが、相当数のモンスターを狩ったし、このエリアにいる他プレイヤーの貢献も考えればそろそろ出ても……いや待て、他にもプレイヤーがいるなら俺の前に現れるとは限らない？
「チッ……発生者そっちのけでイベ発生とか勘弁してくれよ……！！」
見つけたぁ！　首チョンパされたプレイヤーに関しては若干の申し訳なさを感じないわけでもないが許してくれ、まぁそういう乱数もあるさ。
「ハロー、早速で悪いがお前の夫に心当たりはないか……？」
おっとそのモーションは即死技かな？　ふざけんなこの野郎。
「チッ……【マジック・トーチ】！」
もはや確信レベルだが、この魔法……超重要だ。ゲームシステムに

騙されがちだが、このゲームには「暗闇」の概念がある。影に潜めばその隠密ごと明るくなる、一見無駄なように見えて灯りで照らすというアクションは十のバフを掛けるよりも有用になり得る。今とかな！！

使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）で魔力の灯火を発動、照らし出された俺と黒死の天霊の影を見れば、今まさに俺の影を掴まんとする奴の影が。
だがその性質は逆に利用することもできる、頭の上に生じた光は俺の頭部の動きとリンクしている。即ちやりようによっては影を動かすことも可能！
「生憎お前の動きに関しては最適化済みだ、生かさず殺さずだ……呼びな、お前の夫をな……！」

殺気！

いや正確には不自然な身体の揺れにマジック・トーチが連動して揺れたので後ろからくるそれに気づけたわけだが……よう、久しぶりじゃねーか喪失骸将（ジェネラルデュラハン）！

お膳立てはしてやったぞ、さてここからどうなるんだ？
やはりと言うか、こいつらの対面こそがイベントを進行させるフラグであったらしい。登場時こそ俺へ明確な敵意を向けていた首なしの騎将と、死を告げる黒衣が静かに対面する。

「…………」

この場において俺はモブだ、お仕置きモンスターとレアモンスターの対峙に、ヘイトを稼がぬよう静かに距離を離しつつ様子を伺う。
先に動いたのは黒死の天霊だ。あの恐るべき鎌を手品のように雲散

霧消させ、流れ作業のようにプレイヤーへお仕置きを執行するモンスターとは思えない程弱々しい……まるでか弱い淑女のような動きで喪失骸将へと手を伸ばす。

行け……っ！　行け……っ！　お前らのラブロマンスが進まないとこっちのユニークも進まねぇんだ……！

だが、黒死の天霊が伸ばした手を受け止めたのは……剣。

「……………！！」

「……………！？」

轟、と振り払われたフランベルジュが黒死の天霊が伸ばした手を拒絶するかのように空を裂く。

無論、奴はあらゆる攻撃を無効化する超クソ耐性持ちのお仕置きモンスター。それは対Ｍｏｂであっても変わりはなく、いくら喪失骸将が全力で攻撃をしたところで黒死の天霊にダメージが通ることはない。

「……………、……………」

だが、伸ばした手を拒まれたと言う事実はあの恐るべき黒死の天霊をして怯むほどのメンタルダメージを与えたらしい。

ダメージそのものはない、だが黒死の天霊は未練タラタラの動きで幾度となく手を伸ばし……その度にダメージの無い攻撃に手を引っ込める。

喪失骸将もまた、通じぬ攻撃をそれでも止めること無く繰り出し続ける。そこまでして武器を振るう理由とは何なのか、その理由は焔将軍の斬首剣の前身……喪失骸将の斬首剣のフレーバーテキストか

ら何となく伺うことが出来る。
曰く彼の剣は「記憶を、誇りを、愛すらも忘れた骸は己の首すらも失った。故にこそ、取り残された胴体は生者のみならず死者の首すらも狙うのだ」と語る。
要するに、今の喪失骸将は何らかの理由でかつての記憶？　を失っている。いや、もっと根本的な人としての諸々を失っているのだろう。

「となると、プレイヤーがすべきは……喪失骸将の記憶を取り戻す？」

少なくとも喪失骸将側から黒死の天霊に対して有効打を与えることは不可能だろう、タイムリミットは存在しないものと……いや、待て。おいコラ黒死の天霊、お前何さっき消した鎌を再度取り出してるんだ。

「くそっ、タイムリミットは黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）側かよ……！」

どこだ、イベント進行のフラグはどこだ！？　考えろ考えろ……次に進める？　違う、この状況に相応しい単語は「進める」じゃなくて「揃える」だ。
足りないパーツを揃える、だとすれば足りないパーツはただ一つしかないだろう！

「どこだ喪失骸将（ジェネラルデュラハン）の首ィ！？」

ベタな展開だ、そぶりだけでも見てれば結末が予想できる。
黒死の天霊が鎌を振るった瞬間、喪失骸将は二度目の死を迎えることになる。二度目の別離を己の手で成した黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）は嘆き叫び…

…おぉ、ベッタベタな悲劇だおひねりを投げてやろう。

「あの鬼嫁がキレるまでにＤＶ（ノーダメ）夫の首を見つけろってか……？　事前発見系なら無理ゲーだぞ……」

ええい、兎にも角にも動かないことにはどうにも………ん？

・岩場の陰からニタニタと笑いながらこちらを伺う女幽霊

・女幽霊は何かボールのようなものを抱えている

・見間違えじゃなければ兜っぽいような……

・おや、奇遇ですねデザインが喪失骸将の鎧と似ているね

「見つけた見つけた見つけたぁぁぁぁぁっ！！」

「―――！？」

ッテメー！　その格好からして黒騎士に横恋慕した亡国の第一王女だろコルァ！　未練タラタラに首抱えてんじゃねーよ！！

「霊体モンスター……攻撃手段……いや、ユニークの発生条件、イベント進行……これかぁ！」

出でよ黒天無塵鎌（ノーブル・サイスレント）！　何百年越しかは知らねえがもう一度リベンジマッチの時間だ！！

スキル起動、封雷の撃鉄・災の効果は未だ続いている。死に去らせぇ！

「――――！」

瞬間、幽霊女が手を振ると俺の眼前に現れる幽体の兵士。それは肉壁として鎌の軌道に割り込むと、漆黒の鎌に薙がれ消える。

そして次々と現れる兵士、魔法使い、平民、そして……あまり賢そうには見えない肥えた王の幽霊。

はーん、つまりこれはあれだ。ボスラッシュならぬ雑魚ラッシュってわけかぁ……上等だオラァ！

「てめーら全員死に直して来やがれ！！」

鬼嫁の堪忍袋が切れそうなんだよ！　アメフト選手みたいなダッシュしてんじゃねーぞクソ姫ァ！！

・亡国の悪姫霊
既婚者の黒騎士にアピール色仕掛けを試みたものの、素気無くあしらわれた恨みから黒騎士……焔将軍と称えられた猛将を謀殺した。
八つ当たりじみた恨みから黒騎士の婚約者も処刑しようとしたものの「婚約者を奪ったのだから当然自分も恨まれる側」という単純な事実に気づかず、なおかつヴェノムやパニッシャーもビックリなハリウッド・ダーク・アクションヒロインだった女の逆襲により全身を「開き」にされて無残な死体を晒すことになってしまった。
死後、恨みから亡者と化しデュラハンに成り果てた黒騎士の首を奪い今現在も奪った首を抱えながら自分を殺した女の末路を嘲笑っていた……のだが志村後ろ！　やべーの来てる！！

余談だがこの「亡国の悪姫霊」は同時出現する「亡国の亡霊群」を含めて一体のモンスターであり、言うなれば「型」として固定された状態である。
故に同じく「型」として固定された喪失骸将と黒死の天霊がラブロマンスする度に首を抱えて出現する、言うなれば宿命の咬ませ犬である（無情秘伝ＬＯＶＥ×ＨＡＴＥ）

故にこそ死を忘るることなかれ（前書き）

いい加減ソロ描写書くのもマンネリして来たのでそろそろパーティ組ませたい、この世捨て人め……

故にこそ死を忘るることなかれ

大鎌（サイス）というカテゴリは観賞用武器だと俺は思っている。武器として役に立たないからという理由ではない、パラメータが最強なら木の枝でだって魔王を倒せるのがゲームだからな。
観賞用、というのは「自分で扱うにはあまりにも使いづらいから使える奴が戦ってるのを見るのが一番楽しい」という理由からだ。重心がクソだから振り回すにしても制御が難しいんだよフルダイブだと……まぁシステム側でアシストしてくれるタイプなら使えるんだが。

とはいえいい意味で変にセンスを拗らせた作品だと結構な割合で鎌という武器を見かける。それはつまり悪い意味でセンス拗らせすぎてクソになったゲームで鎌を使わざるを得ない状況は経験済みということ。
故にこそ、スキル補正がなくても一撃で倒せる雑兵共を壁にしたところでぇぇぇ……物の数じゃぁないんだよ！！

「どけどけどけぇ！！」

鎌は死神的に使うなら斧やハンマーと使用法が似ている。剣のように両手を近く握るのではなくむしろ離して握り、そして振り回す。過剰伝達状態（オーバーフロー）で軽く身を捻れば竜巻の如き回転にまで過剰な動作増幅が成され、倒れればその瞬間に死にかねないので細心の注意を払いつつ俺へと纏わりつく亡霊共を叩き斬っていく。
まさしく快刀乱麻、無双ゲーは分かりやすく強者になれるので嫌いではない。ただ、無双（される）ゲーはダメだ……お前の事だぞコスモバスター。

だがしかし現状はその両方の中間を揺れ動いていると言っていい。
兎にも角にも物量で押されている、黒天無塵鎌（ノーブルー・サイスレント）は有効打ではあるが範囲攻撃手段として有能であるかと言えばそうでもない。
鎌系のスキルも持っていない俺では精々が回転斬りを自前で再現するくらいしかできない、見てくれは再現できてもパラメータ補正が入っていないなら大した効果は発揮できまい。

「チッ……！」

舌打ちをしつつ遮那王憑き起動。モーション補正系は過剰伝達の事故率が上がるのであまり使いたくはないのだが、単純な行動であれば純粋なパンプアップとして使える。
プレイヤーとしては規格外の跳躍力で三メートルほど跳ね上がった俺はフリットフロートを起動し、思い切り前へと跳ぶ。

「くそッ……奴の走った軌道に無限湧きってか……！？」

妙にフォームの綺麗なダッシュで走るクソ姫、よくよく考えれば非物質存在だから物理的な衣服の阻害がないのか？　ずるいぞ。
だが俺の身体はあくまでも跳躍による加速、慣性が尽きれば地面へと落ちるが定め。この鎌があれば、あの蠍共と比べれば亡霊に囲まれた程度で即袋叩きとはならないだろうが……

「……やるか？」

理論上は可能なはず、有効かどうかは副次的なものだから無視して構わない。重要なのは障害物（亡霊共）への対処だ。

「遮那王憑きはまだ保つ……いくぞ！」

己を叱咤し、波打つ亡霊の渦中へと飛び込む。着地と同時に目の前にいた兵士らしき亡霊に鎌の先端を突き刺し、そのまま刃の向きを変えて何度目とも知れぬ回転斬り。
ぽっかりと俺を中心に空白が生まれ、それが埋まるよりも先に前へと進む。せめてこれが双剣であったならもっともっと楽に進めたのだが、鎌ってやつはマジで絶妙に使いづらい。
「だが、残り三十メートルもないだろう……行ける！」
インベントリア！　こんなシケた場所でお披露目たぁな……だが安心しろ、目撃者（クソ姫）の息の根は確実に止め直してやるよ！！

それは憎悪と恨みを根本として設定されたモンスターであり、そしてユニークシナリオをトリガーとしてのみ発生するキーモンスターでもある。
喪失のデュラハン、その失った筈の首を抱え逃げる亡国の悪姫霊は悦に浸った邪悪な笑みを絶やさない。
己が走る一秒一分が、あの夫婦の苦しみとなる。それこそが今の彼

女に残された唯一の慰め、だからこそかつての民を、父を盾として
でも悪姫は逃げる。

「ようクソ姫ェ……てめーのシナリオは数百年前に終わった設定だろう？　今更出しゃばるもんじゃないぜ」

声が聞こえた。
背後より聞こえたその声は、己を捨てた忌々しい黒騎士のものではない。己の全身の骨が外気に晒されるよう開き殺した憎き女のものでもない。
だがその声は、あの女とは違う声で、それでもあの女と同じ喪服を纏って鎌を携えた女で……何故？　亡国の亡霊群による妨害をどうやって？　あの背後に見えるアレは、一体……
悪姫霊を庇うようにかつて王と呼ばれた亡霊が前に出る。だが生前の肥えた姿のままに亡霊となった男は悲しいほどにサンドバッグで、娘を守る献身は一瞬程度の足止めにしかならない。

「別世界（ゲー）の言葉だが……死者は死者らしく眠りな、汝――」
喪服の女が口にしたその言葉の意味をＡＩが判断するよりも早く、

「――え、ってな。」

亡国の悪姫霊の首が黒天無塵鎌によって断ち切られた。
伝承（フレーバーテキスト）に曰く。
その鎌が振るわれし後、死の静寂のみが広がる………と。

「はいキャッチィ！！」

よっしゃコラザマァ見やがれクソ姫が！　だが勝利の余韻に浸る時間はない。黒天無塵鎌をインベントリにしまい込み、駆け抜けた道を一目散に駆け戻る。

アイスが溶けるようにその形を崩す亡霊の中を真っ直ぐ駆け抜け、クソ姫と俺とを隔てていた距離を詰めるために出した「モノ」をしまう時間すら惜しいと放置、どうせ引っ張って盗めるようなもんでもないしな！

「うおおおハイヒール走りづれえええええ！」

まさかここで過剰伝達が逆に助けとなるとは、ハイヒールでは全力で走ることができない。だが過剰伝達であれば爪先立ちのような状態のステップでも通常時のダッシュ並の速度が出せる。

駆けて、駆けて、駆けて……見えた！　ヘイお二人さん、キスをするにしたって顔がなくちゃどうにも……

「………！」

「…………っ！」

うわぁぁぁぁ修羅場ってるぅぅぅ！？

振り上げられた黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）の鎌、喪失骸将（ジェネラルデュラハン）はＡＩのレベルが三世代前くらいに戻ったんじゃないかと疑いたくなるくらい愚直な剣の振り回しを続けている。てかあれＡＩバグってない？　バグというかハメ技というか……ええい話は後だ！

「ありがとう神秘（アルカナム）！」

リキャストは終了している、そして遮那王憑きはギリギリまだ効果時間！！

「うおおおおお！」

大地を踏みしめホップ！

「間に合え……」

両脚に力を込めてステップ！　後押しするかのようにちょっとだけ回復！グッドタイミングだが……　へぇ、間接的なキルでも発動するのね。

「届けえええええ！」

大跳躍（ジャンプ）！！

馬上で剣を振るう喪失骸将よりも高く、制御を失いそうなギリギリ

のラインで踏ん張って宙を舞う喪服。
その手でしっかりと掴んだ首を振り上げて……

「お届け物でぇぇぇぇす！！」

ダンクシュート！！！
首の向きが若干ヤバいがそれくらいは許せ、元々リモートなんだから大差ないだろう。

「ふべっ!?」

ダンクシュートの軌道上、喪失骸将の肩に顔面を強打した俺はそのままズルズルと地面に落ち、ベシャリと土を舐める羽目になる。うぅ、なんかカビ臭い気がしてきた……あそこで回復してなかったら、封雷の撃鉄・災のデメリットが一定間隔での判定でなければ確実に死んでいただろう。

「だが……どうだ!?」

首のデリバリーは遂行したぞ、どうなった!?

「………」

「………」

おぉ……一秒を切った状態で爆弾の解除に成功したような。沈黙でこそあれ、危機的なものでも致命的なものでもない沈黙だ。
首を取り戻した喪失骸将は剣を振るう腕を止め、黒死の天霊が諦めと共に振り下ろさんとした鎌は喪失骸将の寸前でピタリと止まった。

無言のガッツポーズを行う俺を他所に、果ての果てまで成り果てた
かつて愛し合った者達はゆっくりと、だが万感の想いが篭った手を
互いに伸ばし……そしてそれは今度こそ触れ合った。

「……ヨハ、んナ」

「ヴ、ぃん、セン……と」

感動の再会だ、米の吹雪（ライスシャワー）でも撒いた方がぃいかな？　それとも塩？
双方共にモンスター、それもユニークではないモンスターである以
上はウェザエモンのように本人というわけではない。
かつていたのだろうヨハンナとヴィンセントは救われないまま死ん
だわけで、この二体がイチャついたところでその事実が変わること
はない。

だがそれでも、残滓同士の傷の舐め合いであっても。たしかにこの
場所で二つの未練が良き終わりを迎えたことだけは事実だ。

ゲームがゲームならスカートを巻き上げそうな一陣の風が吹く。そ
れは俺を撫で、そして崩壊した二体のモンスターを攫うように渓谷
を吹き抜けて去る。
後に残ったのは俺と、地面に落ちた鎖のように繋がり一つとなった
二つの指輪。

『ユニークシナリオ「愛故に哀（トゥルーラブ・アン）、故にこそ死を（ド・トゥルーヘイト）」をクリアしました』
『二度と別離（わか）たれずを入手しました』

あのクソ姫にも言った別ゲーの言葉だが……彼らにも贈ってやろうじゃないか。

「汝、死の安らぎあるが故に生の喜びあること忘れるべからず、故にこそ汝死を想え（メメント・モリ）……ってな」

完璧だ……元ネタが不死身の衛生兵が跋扈するゲームじゃなけりゃ百二十点だったんだがな。

さて、水晶巣崖でヴォーパル魂と減りまくった鉱石を稼がないと。

故にこそ死を忘るることなかれ（後書き）

亡国の悪姫霊の基になった人物は内陸出身

黒死の怨涙：強化アイテムでありエンチャントアイテムであり……
これ単体でも色々使える

黒天無塵鎌：武器、だけど同時に……

Ｒ．Ｉ．Ｐ．：邪悪な魔法少女変身アイテム、鎌と違ってダブると
本格的に使いどころが無い

二度と別離（わか）たれず：解かせる気がない知恵の輪、１＋１＝１

夜影に潜む狼傷

「さて……やるか」

若干黒みを増した灰色の鳥面、くいくいと動かして着心地を整えた俺はひそやかに森へと入っていく騎士達の追跡を開始した。

修羅場を乗り越え、ついでに蠍相手に大立ち回りをした結果、俺(ボール)で蠍共が野球したりもしたが元気です。

あれから急ぎで用意を整えるために「黄金の天秤」商会に頼ったりしたものの、なんとか準備完了まで漕ぎ着け、ハクスラゲーとは思えないステルス追跡……あれ、俺なんのゲームやってるんだっけ？

「まぁいいや……よし」

クリア条件は前王トルヴァンテと第一王女アリアの救出、及び第三騎士団が明確に王達を害そうとした物的証拠の確保。

ステルスアクション自体は普通にこなせるが、システム補正無しでどこまで通用するやら……達人特有の「その程度で気配を隠せていると思ったのか？」とかされたらどうしようもないぞ。

まぁルティアパイセンから聞いた限りでは第三騎士団の団長とやらはそこまで強者ってわけでもないみたいだが……設定最強のモンスターがハメ技で瞬殺、なんてパターンがありふれているのだからその逆とてありえないとは言えまい。

「………」

木の上を飛び移って追跡する、という手も考えたが思ったよりも音が鳴るので却下。結局奴らと同じく地面を歩いて追いかけているわけだが……遅い、遅いのだこいつら。

ゲームシステム的な暗闇の処理と、プレイヤーの視界補正に差がある事はこれまで何度も実感して来たわけだが、ＮＰＣは前者寄りの処理がされているらしく、奴らもまた松明を掲げ恐る恐ると言った様子で進んでいるのだ。

まぁ夜は夜で隠密特化の梟もどきだったり噂のドラゴンが湧いたりするらしいのでその警戒は分からんこともないが……リアルタイム進行なゲームである以上、スキップできないのでさっさと事に及んで欲しい。鎮圧するから。

「……国王父娘は見えんな」

最後尾を追跡しているのだから当然といえば当然だが、恐らく隊列の真ん中にいるのだろう。

つまり奴らが止まって隊列を変えるか、俺がさらに距離を詰めるかしない限り国王父娘の様子を伺う事はできないし、どうみてもモブな下っ端共の会話をかろうじて拾うくらいしか出来ないのだ。

「んー……傍受」

途切れ途切れで聞こえない？　だったらウチの盗聴器（エムル）さんの出番ってわけよ。

首に巻いたマフラーからぴょこん！　と普段は折れている耳が動き出す。それはしばらくぴこぴこと動いていたが、どうやら下っ端共の会話を傍受する事に成功したらしく、俺の耳元で会話内容を再生する。

「なんで前王や王女をわざわざ奥地で殺す必要がある……ですわ」

「新王様は新大陸の亜人共が敵対した、という事実が欲しいのさ……ですわ」

「ウチの団長は王認勇士サマを超えるくらいの手柄を欲しがってる、だからこんな仕事も請け負ったのさ……ですわ」

設定ページから語尾オフにできない？　だが、なんとなーくだが背景関係が見えて来たな。
新王とやらは父や妹を殺したい、というよりも「殺した奴が誰なのか」を制御したがっているわけだ。そしてその対象は新大陸に住む亜人……なんかエルフとかいるんだっけ？

「要するに大義名分が欲しいってわけか」

ただでさえ突貫工事で即位したんだ、見方によっては王位簒奪にも見えるだろう。まぁ「後継確実な第一王子がわざわざ王位簒奪する必要あるか？」という疑問があるおかげで疑いの目を向けられる事自体少ないだろうが。
まぁそれはともかく今の王は無茶な命令を通すだけの忠誠を獲得しきれていない、だからこそ新大陸に軍を差し向けるにはそれだけの理由が必要になるというわけだ。
だがそれならそれで何故新大陸に住む人種と敵対する必要があるのか、という疑問にぶち当たるのだが……

「サンラクサン、どーするですわ？」

「予定は変わらない、奴らがドヤ顔で自白したのを録音したら半殺しにでもすればいいさ」

「……なんだかヴォーパル魂足りてないですわ」

「俺もそう思う、でも人命救助だからなぁ……」

そう考えると中々面倒だなヴォーパル魂パラメータ、ひたすら格上モンスターと戦わないといけないんだから。いやまぁ、状況でも判定が降りるっぽいから大量の雑魚相手でも上がりはするだろうと睨んでいるが……

「エムル、お前が魔法を使ったとしてバレる可能性は？」

「……アタシ以外に効果が及ぶ魔法は微妙なとこですわ」

「成る程……アクティブソナーは使えるか？　周囲にモンスターがいるか把握しておきたい」

「はいなっ」

しばらくして、周囲にモンスターの姿はないという情報がもたらされる。やっぱイベント進行なのか？

「それと、あと少しで開けた場所に出るですわ」

「ふーん………大体の流れは理解できたが……」

怪しい、あっさり過ぎる。絶対これなんか面倒ごとが発生するぞ……そこらの少年(クソガキ)海賊に協力しただけで深海タコ相手によって七日間遭難したんだぞ、こう言ってはあれだが「騎士団」と戦う程度ならそれこそジョゼット達だけで済む問題だろう。

ちょくちょく親衛隊メンバーと会話したりする機会があったが、ジョゼットってレイ氏が持つ「最大火力（アタックホルダー）」と同系統の称号「最大防御（ディフェンスホルダー）」持ちらしい。
つまりこのゲーム内において最も硬いタンクこそがジョゼットであり、こと防衛という点では俺よりもよっぽど適任だろう。

だがこのクエストは外部委託、わざわざ親衛隊……いや輝士団外のプレイヤーに依頼されたものだ。やはり情報が少ない、流石にユニークシナリオではないのだから壮大な設定になるとは思いたくはないが……いや、ユニークを引き当てるのは嬉しいが気疲れするんだよ。

「モンスターの反応はない……いや、イベント進行でスポーンする可能性は高い。となると騎士団と同時対処させるつもりか？」
その場合むしろヌルゲーになりかねないが……うーん、事前予測を立てるのは難しいか。
直感か偶然か、なにか気配がするとこっちへ近づいてきた騎士の一人から隠れるため、グラビティゼロで木の枝に逆さまに「立って」様子を伺いつつも思考はさらに回転させる。
命拾いしたなモブ騎士、これがホラーゲームだったらお前はまず間違いなく犠牲者一号だ。このまま上から奇襲を仕掛けてもいいが、流石に騎士が一人いなくなったら警戒レベルが上がるだろう。
じぃ…………っ、と木の上から蝙蝠の如く上下逆さで騎士を見つめていたが、この魔境で単独行動することがいかに無謀かを思い出したのか、モブ騎士は背筋をブルリと震わせた後、隊列へと戻って行った。
「……サンラクサン……っ、おちっ、落ちる……ですわ……っ」

「ガッツ見せろよ……全く」
グラビティゼロの効果切れと同時に空中で身をひねりつつ着地、おそらくイベントが進行するであろう木々の開けた場所に先回りする。
さぁーて、真っ赤（共産主義）な暴君すら暗殺してのけた俺のステルス術、とくとお見せしてやろうじゃないか。

「お前たちは……余を、余達を殺すつもりか」
「えぇ前王陛下、御身には新王アレックス陛下の偉大なる未来のための礎となっていただきます」
肥えている、というわけではないが戦闘に携わっているとは思えない……まぁ言ってしまえばちょっと腹が出始めた壮年のおっさんが弱々しい声音で騎士の中でもわりかし派手な男へと語りかける。あれが噂の………なんだっけ、絶体絶命さん？　とかいう奴だろう。二つ名からしてダイ・ハードとは人生大変そうだな、ＮＰＣだけど。
「ユリアン……考え直すつもりはないか、この大陸に生きる者達とて命。そこに貴賤も優劣もあるまい」

「なにを仰る、彼らは下賤で劣等な蛮族……我らとは比べるまでもない存在でしょう」

おお、素晴らしい。典型的な差別キャラクターだ、異種族が出てくるならやっぱりこの手のキャラクターがいないとな。夏とセミみたいな関係性だ、いないといないで物足りなさを感じる……英雄譚には誰かの不幸が不可欠だ、うーむ正義のパラドックスというか善悪のカルマというか。

「……とはいえ、私は新王陛下ほど亜人を嫌ってはおりませんよ」

「では……！」

「私が求めるは新たな戦い、王城に磔られた奴をも超える武功を上げるための舞台……ただそれだけなのですよ。そしてそれは新王陛下の望みと合致する……」

「彼らは貴様の武功のための糧ではないのだぞ……！」

おぉ……王様、良いこと言うじゃん。いいね、護衛対象が良い奴なら守る側もモチベーションが湧くというものだ。これがクエスト受注したのがペンシルゴンで王様が嫌な奴だったら半殺しにした上でネットに動画を晒す、くらいされてもおかしくなかったぞ。

気になるのは第一王女だな、怯えているのか疲労しているのか俯いているためにこの位置からでは顔がよく見えない。ダイ・ハードさんや国王様、その他モブの顔は確認できるからこそなんだかモヤモヤ……いや、ザワザワしている？　なんだこの妙な感情は……この俺が、恐怖している？

だがまぁ「新王アレックスは亜人を滅ぼしたい、もしくは隷属させたい」「ダイ・ハードさんは例の王認勇士様よりも活躍したい」って背景は確定したな。実際戦闘回数を増やしてレベリング、という発想そのものは俺も異を唱えるつもりはないが……効率悪くないか？　対人技能を鍛えたいなら開拓者(プレイヤー)に喧嘩売ったほうが技量は上がりそうだし、単純にレベル上げるなら亜人相手にするよりモンスター倒せよ。オススメは水晶巣崖だ、あそこはまじで天国だぞ……レベリングできる、採掘できる、ヴォーパル魂稼げる、と三拍子揃ってる上にプレイヤーで飽和することもほぼないという神スポットだ。

時々無知ゆえか無謀ゆえか、俺以外にも水晶巣崖に突撃するプレイヤーは結構な頻度で見かけるが、まっすぐ進んでいるうちは二流だぞ、一流は一定距離は崖際をロッククライムして進むのがベターだと知っているからな。あと壁タンクは完全にゴミと化すのでお引取り願ったほうが良いと思う。ほっといても奴らがお引取りさせるんだけどね。

「ユリアン……せめて、せめてアーフィリアだけでも助けてはくれぬか」

「お父様！」

「申し訳ありません先王陛下、第一王女も共に葬ったほうが「悲劇」の質が上がるのですよ。我らも騎士、下劣な乱暴はせず一刀のもと後を追っていただくことは保証しましょう」

「ぐ………」

なんだ、心のざわめきが止まらない。あらかた録音は済んだのだから後は颯爽登場して助け出すだけなのに……踏み出す一歩が、まる

で道の途切れた崖の先に足を伸ばしているかのような……何故だ、何故こうも……っ！？

「エムル……心を強く持て、ここより先を死地と心得よ……」

「………えっ？　は、はいな？」

録音アイテムをしまい、「武器」を取り出して……息を吸い込む。あくまでも仕事であると割り切っているのか、王という存在を殺すに際しゲスな笑顔を浮かべるでもなく淡々と剣を抜くダイ・ハードさんが剣を振り上げるよりも先に……告げる。

「待てぇい！！」

「っ！？　………何者だ！！」

え、これカッコつけたほうが良い奴かな？　二秒待て、なんか考える……はい、思いついた。

「未踏の地に広まらんとする悪意、夜闇に紛れ天道欺けど我が目より逃れることは出来ず！　故にこそ人それを「正義」と呼ぶ！！」

「姿を見せよ！」

「よかろう！　とうっ！！」

前王トルヴァンテと第一王女……会話の流れからしてアーフィリアの背後に聳えていた他の木と比べても一回りは太い幹を持つ大樹、その上より跳躍した影が松明の明かりに揺れる。身をひねり、両手で持っていた「大剣」を地面へと投擲し、垂直に突き刺さった大剣

の柄尻に着地する。

「亜人……いや、覆面ですか。フン、その眼差しは正義を見ているとでも？」

「この目は悪しき心を見抜き、悪人の悪しき心を暴く……」

凝視の鳥面時代のフレーバーテキストをそのまま台詞に流用しつつ、登場が完璧に決まったことに覆面の下で笑みを浮かべる。完璧だ……成功率は半々、と言ったところだったが今回は賭けに勝ったようだな。なおこの登場、失敗すると股間を強打する諸刃の剣だ。
練習中に三敗してるし、痛みが麻痺するシャンフロのダメージシステムであっても精神的な損傷が酷いので難易度の高いテクニックと言えるだろう。

「名を聞きましょうか」

えーと五秒待て、なんか考える……はい思いついた。

「我こそは彷徨える剣、聖女の願いに応え王と王女を守るべく振るわれる剣なり！」

「焔将軍の斬首剣」と「黒天無塵鎌（ノーブルー・サイスレント）」、背景ストーリーで繋がりを持つ二つの武器。
ユニークシナリオ「愛故に哀、故にこそ死を（トゥルーラブ・アンド・トゥルーヘイト）」をクリアしたことで報酬として入手したアイテム「二度と別離（わか）たれず」……その正体はモンスターから直接ドロップする二本の武器を素材として合体させる為のアイテムであった。
そうして二本の「剣」を繋ぎ、死の化身に成り果てた女が流した涙を組み合わせて完成した武器こそがこの大剣「別離れなく死を憶ふ（メメント・モリ）」

なのだ――――！　黒死の天霊関連の武器はどうにも背筋をゾワッとさせる魅力があるぜ、うーむブラックヒストリー。

「彷徨える剣……お主は、もしや……」

「ご安心を国王陛下、彷徨う（仇討人）剣及び三神教……聖女イリステラは御身らの保護を目的として動いております」

正眼の鳥面を装備した今の俺が笑みを浮かべたところでそれが他の者に気付かれることはない。だがそれでも笑みを浮かべて振り返り……その笑みは凍りつく。

「…………？」

「嘘だろオイ…………」

な、何故、バカな、これはシャンフロで……

涙を浮かべ、それでもつい先ほどまで絶望に曇っていただろう目に光を取り戻した第一王女アーフィリア。グラフィックの違いか若干印象が違うように感じられるが見間違えるはずがない、だって…………俺はかつてその顔を、

飛び蹴りしたいほど見つめ続けていたのだから。

夜影に潜む狼傷（後書き）

漂流してきた蟲人族「新大陸にはいろんなフレンズがいるんだよ！」
王様「へー、理性的だし交流できるかもしれんな」
第一王女「わぁ、会ってみたいな」
第一王子「こんなキモいのが他にもおるんか、キモっ」

四行で説明出来る王家側のゴタゴタまとめ

「！！？！！！？！？？？！？」

ぐりん！　と超速（マッハ）で首を正面に戻し、覆面の下で冷や汗をだらだら流しながら高速で思考を巡らせる。

ナンデ？　ナンデ？　これシャンフロだよ？　ナンデ？？

「……！？　……！！？」

落ち着け、落ち着け……いやいやいや、フェアカスだよね？　あれフェアカスだよね！？　奇跡的にデザインが被ったとかじゃないよね？　そりゃ本家フェアカスはエルフ耳でこっちは人間耳だけど、髪色や髪型ならともかく深い青の瞳に泣き黒子（ぼくろ）まで被るとかありえねーだろ！

ていうか、これもしかしなくてもこの第一王女を護衛しなきゃいけないってこと？　この！　顔をした！　女を！？

「落ち着け、心を強く持て、俺は乗り越えた、乗り越えた……」

ウッ、理不尽な我儘にそれでも媚を売った日々の記憶が……奴の尻拭いをしたサブクエの日々が……調整ミスで常時不利状況を強いられた日々が……バグでテクスチャが崩壊した世界を歩む日々が…う、うぅう………

「ダメかもしれない……」

首に巻かれているマフラー（エムル）が驚いたようにびくりと震えたが、しゃ

ーないじゃん。お前フェアカスってヤバいんだぞ、五秒ごとに別キャラの台詞使ってるんじゃないかって疑われるくらいなんだぞ。
クソ、真性のクソゲーから離れていたせいか？　メンタリティが鈍ってやがる……思い出した地獄の日々をエネルギーに転換するんだ。やれる、やれる、殺れる……！
「ふぅー……一番最初に攻撃を仕掛けたやつだ」
「何……？」
「一番最初に攻撃を仕掛けたやつ、地獄の果てまで追い詰めて叩きのめす。数の有利だろうがなんだろうが関係ない、一番最初に攻撃を仕掛けたやつを……絶対にぶちのめす」
多対一、一の側が言ったところで戯言にしかならない？　だが俺の身体には刻傷がある。それに積み重ねた称号も合わせればＮＰＣを怯ませるだけの圧が出来上がる。
正直、やられ役集団みたいに「囲んでやっちまえ！」とかされたらキツいのだが、どうやらシステム側は俺の望み通りに状況を汲んでくれたらしい。
「ふっ……歴戦の騎士達を怯ませる程度には手練れを寄越したようだ……いいでしょう、であれば最初に刃を向けた者が倒せば良いだけのこと」
「き、気をつけてくださいまし！　ユリアンはとても強い剣士です！」
うるせー黙ってろ張り倒すぞ。

フェアカスそっくりな顔のせいで思わずそう口に出しそうになったのを渾身の力で堪えつつ、俺は腕を組んだまま別離れなく死を憶ふ(メメント・モリ)から飛び降りる。
顎を撫でるフリをしてちょんちょんとマフラーを叩けば了承のサインが返ってくる。よし、状況推移は理想的な流れを維持している。

「第三騎士団……「絶命剣(キリング・ソード)」ユリアン。貴殿の名を聞こう」

「仇討の剣は外道に名乗る名を持たぬ」

妙に刀身が長いレイピアを構え、ダイ・ハードさんが俺へと名を問う。ぶっちゃけ殺すつもりないし、名前バレから王国指名手配なんて流れになっても困るので匿名希望にしたのだが、どうやら向こうは挑発と受け取ったらしい。

「フン……死ねェ！！」

ダイ・ハードさんが妙に長いレイピアをしならせ、先手を取る。それは的確に俺の首筋にある脈を狙って放たれており、喰らえば大ダメージを免れることは困難だろう。
それによくよく見てみれば攻撃の位置も絶妙だ、仮に俺が初撃を回避して別離れなく死を憶ふ(メメント・モリ)を取ろうと動いたとしてもすぐさま追撃に移ることができるような立ち位置、そして同時に初撃が命中したならば的確に追い討ちでトドメをさせる、そんな立ち位置だ……
（まぁ瞬刻視界(モーメントサイト)と封雷の撃鉄(レビントリガー)・災(ハザード)で対処余裕なんだが）
既にこちらが匿名希望を告げた時点で諸々の準備態勢に入っていた、先手として動いたのはダイ・ハードさんであるが、戦術的先手は既に俺が先取していたのさ……！！

そしてダイ・ハードさんはもう一つ勘違いをしている。
騙して悪いが、「この姿」のままだと別離（メメント・モリ）れなく死を憶ふは単なる置物なんだよ。

「ワンパンだ、舌ァ噛むなよ！」

レテ・バニッシャーで気絶確率を高め、アガートラムの補正と過剰伝達の速さを受けた拳でダイ・ハードさんの顎を打ち抜く。まさか背後の大剣を完全無視して殴りかかってくるとは思わなかったのか、驚く程クリティカルに奴の顎へと拳が突き刺さる。
過剰伝達状態は要するに１００を１００として処理するモーションの暴走状態だ、即ちフルスイングで振るった拳はさらなる威力を帯びて放たれるということ……！

「ぶぐぇる」

「そしてぇ……見え見えなんだよ！！」

「ちょ、ちょとしびれたですわ……【マジックエッジ】！」

「ぐぁあ！？」

ダイ・ハードさんの足がアッパーカットの衝撃で地面から離れて宙を舞う瞬間、俺の首から分離したオプションパー……エムルが放った魔力の刃がこっそりと国王父娘を害さんと近づいていた騎士の一人に命中。
まさかマフラーがヴォーパルバニーに化けて攻撃してくるとは思わなかったらしい、完全に不意を打たれた騎士が吹き飛び、そしてダイ・ハードさんも気絶判定が入ったのか白目を剥いて青天井に倒れ

る。
すかさず倒れたダイ・ハードさんの胸を踏みつけ周囲にいる騎士達を睨みつける。
「聞け、堕落せし騎士共！　この男の命惜しくば剣を捨てよ！！」
頭(トップ)を抑えて脅迫、外道戦法(ペンシルゴン)の一つだ。奴はこれを使って開始一年で敵国首都を少数精鋭による電撃作戦で抑え、敵陣ど真ん中で自陣営有利条件での人質交換を成功させた実績がある。あいつやっぱ頭おかしいよ……
「不意を打ち陛下と殿下を狙う卑劣な所業、万死に値する！　今この瞬間この男の命を奪わぬは聖女の慈悲と知れ！」
「だ、団長を離せ！」
「卑怯だぞ！」
それで勝ちが拾えるなら褒め言葉だ。げしげしとダイ・ハードさんの頭を踏みつけつつ、俺は目力を強くして周りを囲む騎士達を睨みつける。
「道を開けろ、それとも上官を見殺しにした恥まで上塗りするつもりか？」
シャンフロ以前のゲームでも、ある程度ＮＰＣと会話できることが売りのゲームはあった。シャンフロのようにトチ狂ったレベルで高性能なものではないが、それでも馬鹿にすれば怒り出す程度にはゲーム業界のＡＩも進歩していた。

大抵は特定ワードをトリガーにして処理を行うので慣れたプレイヤーならそのキャラが物語上どんな役割を果たすのかを調べて反応を逆算したりするわけだが……いつだって「騎士」というロールは「騎士道」が重要なワードなのさ。

「くっ、分かった……」

国王と第一王女を囲んで暗殺するという後ろめたさ、指示を出すはずの上司が捕らわれそれを見殺しにして良いのかという葛藤。
そしてなにより威圧感を漂わせる俺の叱咤が奴らの脳(AI)を殴りつけていく。頭のない身体など死体と同義、ちょっと揺らしてやれば……

ちょろいわー、ちょろすぎて不安になるわー。こんなん、あの外道が本気を出したら鉛筆王朝再びだぞ？
正直こう、もうちっと苦戦するかと思ってたんだがまさかワンパンKOとは思わなんだ。そこんとこどうなんですかダイ・ハードさん。

「う、ぐ……」

「二度寝しろ」

「ぐぇっ」

来い……来い……この状況で悠々離脱とか無理ゲーだからイベントフラグ来い……！　この際隕石でも地割れでもいいから……！

「………！　サンラクサン、なんか来るですわ！」

「よし来たァ！」

ウェルカム・トゥ・イベントフラグ！！　さぁ何が来………

「「「カロロロロロ………」」」

「おっと、これが噂の三つ首ティラノさんですか」

話は聞いてる、廃人達による十五人パーティを迎撃してのけた歴戦の「傷だらけ（スカー）」個体がいるんだって？
フッ、だがこの俺も水晶群蠍と熾烈な戦いを繰り広げ、黄金の偏食個体を討ち取った手練れのプレイヤー、無差別ジェノサイドなお前の手綱を握る事など造作も……

瞬間、三つの首が同時に上げた爆音の咆哮によってこの辺り一帯が誇張表現抜きに揺れた。あ、これ無理だ。これ単体での単純スペックだけなら黄金独蠍超えてね？　リュカオーンクラスじゃん。
六つの目に宿る光は憎悪か？　違う、勝利者が敗北者を憎む事はない。であればあれはもっと原始的で、根源的な戦闘本能。己こそが上位者であるというシンプルな真理を、同じくシンプルな手段で周囲へと知らしめる……ただそれだけのことだ。

第一人間なんて餌にするには数がいるしな……おや、丁度目の前に数だけは一丁前な餌の群れ。

「………」

致命秘奥【ウツロウミカガミ】起動。刻傷のせいで放っておくと俺にヘイトが向いてしまう……頑張れ第三騎士団、これは俺からのエールと思って大事にしてくれ。

「貴き血を守ることが出来るならば騎士(彼ら)も誉れでしょう……っぐ、さぁこちらへ」

トラウマ喚起(フェアリアショック)で思わず第一王女にチョップを入れそうになった身体をなんとか落ち着けつつ、俺はエムルを頭に乗せると国王と第一王女を連れてその場の離脱を試みる。

「し、しかしこの暗闇では……」

「暗闇？　あー……ご安心を、自分はこんな面をつけていますが夜目が利きますので。お二方、お手を失礼」

「あっ……」

はぁー……第一王女だけ置いていけよ、って心の中の悪魔が囁くぅ……天使も同意してんじゃねーよ。くそッ、俺の未来は俺が決めんだよ！

来た道は三つ首ティラノと騎士団で塞がれている、大体理解したよこのクエストの趣旨をな……！
国王と第一王女の手を引き、踏み込む先は樹海のさらに奥、楽しい楽しい遭難を始めようじゃないか。

過去が外面に善意を詰めて現れた（後書き）

サンラクがアーフィリアに向ける感情は二週目キーファとかそんな感じ
殺意というより「もうてめーに種は食わせねーよ」的な冷遇

・ドラクルス・ディノサーベラス「傷だらけ（スカー）」
ディノ化の果て、末期症状のドラクルス状態……もう隠してもしょうがないのでネタバラシするが色竜の因子に感染適合したジュラ・サーベラスレクスの中でも数多の戦いを潜り抜けた歴戦の個体。多分森人族（エルフ）最多キルしたエネミーであり、午後十時軍主導の連合パーティを蹴散らしたのもこいつ。あるエリアボスであり、こいつを倒さない限り新大陸の先に進む難易度は下がらない。

単純なスペックだけなら黄金独蠍を凌駕し、リュカオーンにも匹敵する激ヤバモンスターでありそろそろ次の段階に進化（ランクアップ）してもおかしくなく、プレイヤーが蹂躙される姿で酒が進む神々イチオシのモンスター。
二つ名持ち（仇討人案件）になったらさらに手がつけられなくなるのでプレイヤーは早く倒さないとマズい……のだが、どっかのバカ共がワールドクエストを進めたせいでそれどころではなくなってしまった。強くなりすぎて多分そろそろ口からなんか出せるようになる。

今回は本来イベントフラグとして登場する筈だったドラクルス・デ

ィノサーベラス（通常）を偶然通りがかってワンパン、横入りで乱入してきた。
頭一つさえ起きていれば行動できるので実質二十四時間戦える社畜の素養がある。
あかん、モンスターの設定考えてるだけで一日潰せるようになってきた……

エンカウント・ビッグネーム（前書き）

過去最大級のガバが感想返しで発覚し、動揺を隠せない今日この頃。

エンカウント・ビッグネーム

遭難日記一日目、内なるサンラク（フェアクソのすがた）が殺意剥き出しで暴れてて困っている。

「……エムル」

「周囲に反応は無し……逃げ切ったですわ！」

よーしよし、遠くの方から三重の咆哮が聞こえてくるが対岸まで逃げ切ったなら危険な火事も呑気に眺めていられるというものだ。

「さて……ソロならともかく、護衛ならこうなるのも必然と言えば必然か」

これ複数人、それこそ十五人とかで挑んでたらもっと簡単に済んだのでは、と思わなくもないが……いや、その為の聖女ちゃんか？　依頼者が参加者を制限すれば難易度は保たれる。クソ、どうせならパーティ組めるか確認しておけばよかった。エムルは事前に報告したから、ＮＰＣだからパーティを組めた可能性もあるから参考にならない。

「さて……陛下、そして殿下。逃げ切ることには成功しましたが前線拠点とは真逆の方向へ逃げてしまいました、しばし歩く事に……場合により「手荒な」強行対処もやむを得ない可能性もございます

が……よろしいでしょうか？」

「うむ……余とてこの状況で贅沢は言えぬ。とはいえ、だ」

ん？　あとアーフィリア殿下こっち見ないで、心の中の闇が軋んで痛い。

「仇討の刃よ……まずは余とアーフィリアを救い出した事、褒めてつかわす」

「あー……はっ、身に余る光栄を」

騎士プレイあんまりやらないからなぁ……世紀末円卓はあれ騎士っていうか騎士(ゴロツキ)だし。とはいえ騎士キャラなら腐る程見てるので上っ面のロールプレイングは可能だ。

跪き、頭を下げて王様からの賞賛を受け入れる。

こういう時に礼儀作法見せないと肝心なシーンで好感度足りなくなってピザるからマジ大事。

「名を申すがよい」

「手前は名乗る程の者ではないのですが………サンラク、と申します。こちらはヴォーパルバニーのエムル、モンスターではありますが頼りになる相棒にございます」

「ふふーん！」

ふんすっ、と俺の頭の上で器用に立って踏ん反り返るエムル。出会えば最後、的確に急所を狙ってくる殺人兎が喋っているという事実に王様もフェアカス……じゃない、アーフィリア殿下も興味と驚愕

を恐怖に混ぜた目でエムルを見つめている。

「サンラク……サンラク様、と仰るのですね」

「んっぐ」

うっ、発作が。

「その……わたくし、とても感動致しました！」

「んぐぐ」

うっ、もう一つの闇人格が

「まるで、そう、まさしく御伽噺の英雄のようで……！」

「くっ……」

落ち着け（ステイ）、落ち着け（ステイ）……よく狙って（ステンバーイ）よく狙って（ステンバーイ）………っは！？　俺は一体何を、いつの間にか奴の頚動脈を狙っていた。

彼女はフェアカスじゃない、やけに気合の入った……多分初期設定では第二ヒロインになるはずだったキャラが割とえぐい死に方した直後に「今日はいい日ね！」とか言わない。死神だって多少は死者に敬意を払うぞ……

「か、過分な評価です。所詮自分はしがない根無し草……腕っ節だけで成り上がっただけの開拓者です」

くっ、しかし見れば見るほどフェアカスそっくりだ。フェアリア・

クロニクル・オンラインにおける「フェアリア（カス）」はラスボスによって人の姿に変えられた大精霊の姫、という設定だったのでどちらかと言えばエルフ的な特徴が多かった。

だがこっちは完全に人間だ、そしてここまでコミュニケーションをした限りでは美少女のテクスチャの下にドロッドロの汚泥が如きイビル潤滑油が血の代わりに流れているフェアカスとは違って典型的お姫様、という感じだ。

だが顔がフェアカスなのだ。こればっかりは植えつけられたミームが強すぎる。
例えばペンシルゴンの本性を知ってしまえば雑誌の表紙を飾る天音　永遠の笑みを見ても胡散臭さしか感じられないように、オイカッツォの受け身さを知ってしまえばインタビューでイキる魚臣　慧を見ても鼻で笑うことしかできないように。
こればっかりは認識と概念ついでに刷り込みの問題なのだ、パブロフの犬とも言うか？

「それほどの力量を持ちながら……サンラク様、もし宜しければわたくしの騎士として……」

「落ち着けアーフィリア、今はそのような事を言っている場合ではないのだぞ」

「あっ……はい、申し訳ありません……」

生憎、俺はジョゼット達のように常時ロールプレイ出来るほど役にのめり込めないないからなぁ。

「とにかくです、御身らに相応しくないことは重々承知しておりま

すが、野宿の可能性もお覚悟いただきたい」

「うむ……むぅ、死を免れたと考えれば贅沢すぎる悩みと考えるべきか……」

エムルの「門」はユニークシナリオ受注時のイベント使用を除いて基本的に発動者及び同伴者が行ったことがある場所でなければ転移できない。あと地味に門を作る為の壁が必要だ。

少なくともフィフティシアは共通して訪れている筈なので条件自体は満たしているはずだが……これでもし王様達だけ転移対象外だった場合、目も当てられない最悪ルートに入ってしまう。

割と適当に走ったからな、この森の中で特定座標にロケートなしで辿り着くのは無理ゲーだ。

「苦労して見つけたら屍になってました、とか泣くに泣けないし……」

安全策を選ぶ事はなんら恥じる事ではない、不安定な効率で作業するとむしろ失敗時にロスになるからな。成功率八割の十秒よりも成功率十割の十五秒が大事。

よし、とりあえず状況及び暫定的敵性の再確認。そしてクリア条件の定義だ。

まず現状……遭難中、星の位置とかクソの役にも立たないので太陽が昇る方向から包囲を把握する必要あり。

暫定的敵性……第三騎士団、及びこの森に跋扈する恐竜擬き共。今だと後者の方が脅威だ。

クリア条件……ＮＰＣ「先王トルヴァンテ」及び「第一王女アーフィリア」を生存させた状態で拠点へ帰還する事、いや三神教の庇護

下に置くまでがクリア条件か。
こうなると地図を持ってこなかった自分の迂闊さが憎い。旧大陸のエリアは基本的に一本道だったから、地図がなくてもまっすぐ進めばなんとかなるところがあった。
だが新大陸はそれがない、未開故に道もまた存在せず。一度迷ってしまえば割と真面目に天体とかを利用ないと帰れない。いや本気で帰りたいならそこらで自決してモンスターに介錯してもらえばいいんだけど死に戻りは一人乗りだから却下だ。

「第三騎士団があの三つ首ティラノとの戦闘で全滅もしくは行動不可に陥っていることが理想的ですが、常に最悪を想定して動くのが賢明です。故に大規模な移動は控えつつ、夜をやり過ごすのに適当な場所を選んで朝を待ちます……よろしいですか？」

「うむ……」

「火を焚くのも危険です、贅沢を言えば木に登って……あぁダメだ、確か梟系もいるんだっけか……」

アクティブ・ソナー抜きでも危険察知能力が高いエムルがいるので完全に不意打ちを食らうようなことはないだろうが、対応するなら木の上よりも土の上が望ましい。

「……サンラクサン、あの二つ向こうの木の上になんかいるですわ」

「時にお二方、少々自分は雉を撃ちに……」

ごく当たり前な動作で諸々の準備を整え……座標特定された隠密行動ほど滑稽なものはないよなァ？

「去る者追わず、逆に言えば去らねば殺す！」

もはや普通に歩き出すのと同じ気軽さによる過剰動作での高速スタート。グラビティゼロとトライアルトラバースを連続起動、一つ前の木を駆け上りそのタイミングで遮那王憑き起動。

割と真面目にスキルの並列同時起動とか出来ないものか、と考えつつ空中で二回転ほど身をひねりながら……枝葉の中で息を潜めていた何かに奇襲を仕掛けた。

ふはは、梟だろうがなんだろうが先手を取って押し込めば恐るるに足ら……「ひえええええ！！？」おっと随分とソプラノボイスなモンスターな事で……？

弾丸の如く飛び込み、伸ばした手が何やら随分と細身なモンスター（？）の首を掴んで樹上から引き摺り下ろす。咄嗟に逃げようとしたようだが現実（物理エンジン）はアキレウスと亀のようにはならない、速い奴が先を行くのがこの世の真理なのだから。

「ふきゃっ！？」

「んぐっ」

モンスター……いや、誤魔化すのはもうやめよう。明らかに人型の何某の首を掴んだまま地面へと着地、落下ダメージと直後のダメージ判定で即座に瀕死になったがそんな気配は匂わせる事なく、さてどうしたものかと若干思案する。

最悪のパターンは他プレイヤーだった場合なんだが……ＮＰＣよりもギスリ方が面倒な事になるのでいざという時は金かアイテムで解決……いや先ずは初手謝罪か。

確認、よしNPCだな。何がよしなのかよく分からんが俺は気持ち目力を強めながら取り押さえた……そう、その特徴的な耳からしてNPCと思しき者へと話しかける。

「質問に三秒以内に返答を返せ、さもなくば次に遭遇したモンスターとの戦闘で囮として叩き出す」

「ひゃ、ひゃい……たしゅけて……」

あーこれ、年齢制限なかったら間違いなく失禁してるだろうなあ、と言った様子で涙やら鼻水やらを流すエルフ……確かこの作品だと森人族(エルフ)？　だったか。

「お前がここで俺たちを覗き見していたのは「偶然」か？　それとも――」

「おっとそこの愉快な格好したプレイヤー、エリナから離れちゃくれねえか？」

「あん？」

メタ発言、NPCじゃない。
振り向けば、そこには弓……短弓を構えた軽装備の男プレイヤーが立っていた。その鏃の先端は俺の頭部に照準が合わせられており、仮に俺がこの森人族の首を掴む手に力を込めた瞬間、ヘッドショットされるだろう。

「あんたの性的嗜好に口を出すつもりはねぇが、そいつ一応俺とパーティ組んでるしユニークシナリオのキーパーソンでな。いざって時はレッドネームもやむなしな手段も……」

「奇遇だな、こっちもＮＰＣ護衛のクエスト進行中で厳戒態勢なんだ……こちとら王族ですぜ」

「マジ？」

もうどこからどう見ても「野伏（レンジャー）」です、というアピールの激しい男が少なくとも第三騎士団絡みではないと判断してエルフを解放する。親亜人派の国王トルヴァンテ、及び第一王女アーフィリアが遭難したタイミングでエルフと遭遇？　プレイヤーこそ絡んでいるが、これイベントフラグじゃないか？

エンカウント・ビッグネーム（後書き）

それは　まぎれもなく　奴さ

フェアクソがりっちゃんがシャンフロの直前に関わった作品なのにスペクリや鯖癌より前に発売されるわけないじゃん……バカじゃん………（頭を抱えながら）
灯台下暗しっつーか灯台の大黒柱に爆弾くっついてますねこれは……とはいえフェアクソの時系列がイカれてるだけなので発売時期をＶＲ黎明期から鯖癌事件以降のＶＲゲーム中興期発売という事にすればリカバリは可能……可能だよね……っ？！　（果てしなく不安）
ご迷惑おかけします、修正に関しては修正箇所を把握次第行なっていきたいと思います。

悪辣なるは脳のみならず（前書き）

とりあえず更新
そして始動する「フェアクソ分裂させせてヒロインちゃんが見たのスペクリにすればいいいんじゃね」計画。

悪辣なるは脳のみならず

「トットリ・ザ・シマーネ……どっかで見た気が……あ、思い出した。森人族(エルフ)発見してノーデス同行してるっていう」

「サンラクって……あの！？　マジかよ、モノホン？　なりコスじゃなくて？」

「リュカオーン相手に二ヶ所呪い食らう再現できるなりきりプレイヤーならフレ申請送るかな……」

片やシャンフロ掲示板で「エルフスキー最後の希望」「我らが勇者」「死を赦されぬ者」なんて呼ばれるプレイヤー。片やシャンフロ掲示板で「ユニーク狩り」「運営垢疑惑」「バニーガール奴隷を引き連れた変態露出魔」……おいコラ最後のなんだこれ、兎の雌(バニーのガール)と兎(バニー)の衣装(ガール)じゃ変態度が違いすぎいやそもそも奴隷じゃねーし半裸は任意じゃねーしで……だぁあていうかこれ広めた奴誰だ！！

「うわぁ……本当に常時半裸なんだな、なんか感動してきた。新大陸で無装備は自殺行為だろ……」

「まぁそこはスキルで補う感じで……じゃないや、とりあえず俺の話を聞いてもらっても？」

「え？　お、おう」

良し、俺の推測が正しければこの場におけるイレギュラーはトットリだが、この場で唯一メタ視点からの話が通じるのもまたトットリ

だけだ。
「俺は今聖女ちゃんからの依頼（クエスト）で前王トルヴァンテと第一王女アーフィリアを護衛している」
「トルヴァンテ、って王国の王様だろ？　え、代替わりしたのか？」
「知るか、息子に下克上されたんだと」
「……？？？」
別にあのおっさんがリストラ食らった話はいいんだよ、問題は現状だ。
「多分だけど……国王が新大陸で遭難するのと、遭難先でエルフと遭遇するのは偶然じゃなくてクエストに内包されたイベントだと思っているんだが、どう思う？」

「………」

トットリは何か考え込むように黙ると、ちらりと視界の端……俺とエムルのパーティ＋国王父娘が合流した事でにわかに騒がしくなった人ならざる人、森人族（エルフ）達を見つめる。
ちょっと細めな美男美女揃い、というテンプレートど直球な森人族に囲まれる国王様とフェ…第一王女、なぜか森人族から異様に恐れられているエムルをちら、と見たトットリは観念したように口を開いた。
「……俺の方はユニークシナリオだ。シナリオ名は「森人族の大移転（イミグラント・エルフ）」、条件としては「森人族を前線拠点まで連れて行く」なんだが

……言われてみりゃあ話の流れで国王トルヴァンテと接触するのはそう違和感のある事じゃあない」

ユニークシナリオか……ＥＸシナリオと通常ユニークが関連づけられることは経験済みだが、単なるクエストとユニークシナリオがリアルタイムで繋がることってあり得るのか？

とはいえ、トットリの話じゃさっき取り押さえたエルフ……エリナ？　とかいう森人族は「天啓」だの「予感」だのいう曖昧な理由でいきなり駆け出したらしい。

「そこで、だ。俺もそちらも目指すゴール地点は同じだし、組まないか？　って提案なんだが……」

「……そっちは人数を増やして安定性を、ってのは分かる。だけどこっちのメリットは？」

ふふふ、既に主導権は完全にこちらが掴んでいるという事実にまだ気づいていないと見える。これは対等な交渉ではない、俺たちがトットリ＆森人族達に守らせてやるんだ。

「あの二人は親亜人派だけど現国王の第一王子、ガッチガチの差別主義者だぞ」

「あー…………もしかしなくてもここであの父娘を守らないと森人族、詰む？」

「少なくとも奴隷かペットの如き扱いを友好的と思えるなら気にしなくていいんじゃね？」

トットリ・ザ・シマーネ、名前はともかくお前がノーデスを貫いて

までエルフと同行するだけのガッツとモチベーションを持っていることは見れば分かる……であれば現王政を否定できる数少ない可能性が潰える可能性を高めるような真似はしたくなかろう。
そう、ＮＰＣとはいえ索敵や戦闘をこなせるそちらと違って、こっちはメタボ気味なおっさんと非力な邪あ……じゃない、非力なお姫様だ。仮に護衛クエストを受けたのがレイ氏のようなタンクだとしてもソロに任せるには不安が残るだろう。
「……選択肢ねぇじゃん、どこがアーサー・ペンシルゴンの傀儡だよ……」
「いやいやめっちゃ傀儡めっちゃ傀儡、ぜーんぶあいつのせいだから」
とりあえずペンシルゴンのせいにしとけばなんとかなる、俺とカッツォの共通見解だ。代わりに奴が時折投下して来る特大爆弾の処理とかしてるしどっこいどっこい……いや、俺らが罪をひっ被せまくってるからカウンターで爆弾落とされるのか？　うーむ……まぁいいや、おのれペンシルゴン。
「分かった。亜人種との交流はいろんなプレイヤーが待ち望んでいるし、１８禁じみた展開を防げるならそれに越したことはねぇ」
契約成立だ。俺とエムルが一旦パーティを解消し、トットリとさっきのエルフ……エリナ、そしてもう一人他の森人族とは異なり魔師然としたら姿のエルフ……ヘーシュのパーティに加入する。
「しかしこれさっきから気になってたんだけど……めっちゃ森人族（エルフ）いるけど、パーティ的な判定どうなってんだ？」

「パーティメンバーに加えた奴以外はポンコツ化する、モンスターに遭遇しても逃走優先するから俺たちでモンスターを引きつけるしかねぇ」

な、なんつーヘタレ種族……いや、コミュニティ的な視点から見れば至極真っ当ではあるけど……ほら見ろエムルさんを、森人族のヴォーパル魂が低いからお怒りでいらっしゃるぞ。

「むぅー……こいつらヴォーパル魂足りてなさすぎですわーっ！」

「まぁ落ち着けよエムル、こんな魔境で生きてくには無駄な戦闘を避けるのは自然だろう？」

「じゃあ仮にサンラクサンだったらどうするですわ？　逃げるですわ？」

「肉、素材、経験値……逃すわけないだろ」

「これぞヴォーパル魂ですわ！」

イエーイ、とエムルとハイタッチしつつ視界に入ったアーフィリアに冷や汗を流し、改めて俺はトットリとここからの行程の打ち合わせに入る。

「まぁ契約成立ということでぶっちゃけるが実は彼ら、刺客的な奴らに狙われてましてて……具体的に言うと王国騎士団」

「……おい」

「いや待て待て、何も騎士団に森人族をぶつけようって魂胆じゃな

い。俺は人相を誤魔化す手段があるし人を隠すなら人混みかテクスチャの裏側って言うだろ？」

「テクスチャ……？　まぁいいか、言いたいことはわかる。つまり森人族の中に紛れ込ませて拠点入りしようってことだろ？」

そう、俺の狙いは戦力としてのエルフではなく、多数としてのエルフだ。このシャンフロにおいて通常人類種以外の亜人種との遭遇は数多のプレイヤーが待望、つまり待って望んでいるのだ。

前線拠点にエルフが現れれば騒ぎになるのは必然、そしてプレイヤー達のど真ん中でエルフに対して危害を加えようとすれば例えＮＰＣと言えど白眼視は免れない。

そう、これぞサイレントマジョリティーならぬノイジーマジョリティーの計！　戦いは数だ、一騎当千の英雄など二千人の雑魚で踏み潰してしまえ……っ！

「まぁぶっちゃけレッドネーム無視していいなら殲滅するくらいそこまで苦労しないし……いやジョークジョーク」

そんな、俺がペンシルゴンを見るときみたいな目で見るなよ……ぶっちゃけ【青龍】と【昇滝】使っていいなら割と余裕だよね、ダイ・ハードさん所詮は中距離までが射程限界っぽいし。

とはいえ下手にヘイト上げて仇討人のジョブ剥奪からの無職リターン、なんて最悪のパターンに入っても困るので、手を下すなら間接的手段だ。その点で言えばあの傷だらけの三つ首ティラノは優秀だった、素材何落とすんだろう？

と、何かを思い出したかのようにトットリがぱん、と手を叩いて俺へと一言。

「あー……そういやこれ言った方がいいのか、実は俺たち最短で拠点に向かってたわけじゃないんだよ」

「と、言うと？」

「覚醒の祭壇だよ、多分この近辺にある。一応俺はマッピングクラン所属だから、ルート開拓はしておきたくてな」

覚醒の祭壇……レベル上限（キャップ）を取り払うあれか！　え、マジで近くにあんの？

悪辣なるは脳のみならず（後書き）

サービス開始前の神々の戯れ

世界観重視の天才「エルフの里にレベルキャップ解放施設置く」

ゲームバランス重視の天才「まぁいいか……でも滅ぶと困るから防衛設備充実させろ」

世界観重視の天才「仕方ない、森人族に滅ばれても困るので防衛設備充実させて再開」

（三日で里を放棄して放浪民族化する森人族）

天才二人大爆笑、このままで続行が決定。胃薬が追加発注された。

お土産を伴う下降運動（前書き）

タコちゃん三号のこと過剰評価しすぎじゃない？　着地連打はいかんでしょ……勝ったので更新します

お土産を伴う下降運動

シャングリラ・フロンティアでは主にフィジカル的な技能としてのスキル、ファンタジー的な技能としての魔法、この二つのアビリティを用いる事で単なる物理ハクスラ以上のファンタジックを実現している。

魔法に関してはあまり詳しくないのでなんとも言えないが、少なくともスキルに関しては一つだけ厄介な点が存在する。

それはスキルの強化、習得に必要な条件がレベルアップ時という点だ。レベルはその数値が高くなればなるほど要求される必要経験値は増えていくし、いつかはレベルキャップという上限に到達してしまう。つまりスキルというものは強くなればなるほど固定化されていくのだ。

現状俺のステータスはＬｖ．９９Ｅｘｔｅｎｄ、上限を取り払っていないのでどれだけ経験値を稼いでもスキルが強化される事は無い。新大陸解放前は意図的にレベルを下げる事でスキル強化とステータスポイント稼ぎを行うのが廃人の主流であったらしいが、レベル１００以降から新規解放されるスキル群……通称三桁スキルの存在を見ればどちらを選ぶべきかはそう迷う事ではないだろう。いや俺の場合レベルが低い事は結構重要なので前者を取るのもアリではあるが、思考読んでる疑惑があるシャンフロで下手に舐めプするとヴォーパル魂減りそうなのでやはり後者か？

「覚醒の祭壇か……具体的にどこ、とかは分かるのか？」

「それに関しては私が説明してあげるわ」

む、お前はトットリ曰く「通常の森人族と比べると魔法に秀でているので上位（ハイ）と言えば上位（ハイ）だけど結局は森人族（ヘタレ）なので放っておくと死にかねない」との酷評を受けた上位森人族（ハイエルフ）の……えーと、

「ベージュ」

「へーシュよ！　無礼な人間ね！！」

お、今のエルフポイント高いぞ。シャンフロのエルフってヴォーパルバニーとは真逆のヘタレ種族っぽいから、こういうツンケンしたエルフは逆に珍しい。

「あなた達の言う覚醒の祭壇とか言うのは私たち森人族のご先祖様が祀っていた「調べ律す神の涙（ベルヘ・モルティア）」のことに間違いないわ！」

「実は別物なんじゃね？」

「何よ！　私を疑うって言うの！？」

いやだって、現在進行形で放棄された場所にあるものなんでしょ？　しかもご先祖様情報ってことは本人が見たわけでもないんでしょ？　幽霊の正体が枯れ尾花だったり、感動のエフェクトの正体が単なるバグだったりするようなもんでしょ？　デジタル生命体のヒロインにノイズが入るのが単なるバグで修正したらノーエフェクトって色々台無しすぎるんだよ。

「落ち着けってへーシュ……まぁ、これに関しては俺のクランのリーダーがレベルキャップ開放したプレイヤーから話を聞いて裏を取ってるから間違い無い筈だ」

レベルキャップを開放したプレイヤー、という単語を聞いて最近シャンフロで会う機会が減った、死んだ目に笑顔だけ貼り付けた京極（人斬り）の姿が脳裏に浮かぶ。だが京ティメットよ、心の底から笑みを浮かべられるようになった時が一流の幕末プレイヤーだ。

言っとくけどキルスコアで報酬が変わる系のイベントの時とかやべーぞ？　普段は身内で共食いしてるランカー達が本気で格下を狩りにくるからな……ランカーですらハメられれば二桁単位で死ぬし、てか殺したし。

「まぁ問題があるとすれば、森人族がまだ定住の民だった時に使っていたその里は隠蔽の細工がされてて見つけるのが難しいって事なんだが」

「ダメじゃん」

「……近くにさえ辿り着ければ分かるのよ、森人族にだけ伝わる印があって、それを頼りに行けば――」

「なぁ、その森人族（エルフ）の里って奴は地下にあったりでっかい木の空洞にあったりとかするのか？」

「何よそれ、在りし日の里……ティアプレーテンは大樹に囲まれた森中の地と聞いてるわ」

成る程…………うん。

「ちょっと時間かかるかもだけど待ってろ、座標捕捉してきてやる」

バグ技、小技は得てして特定動作の複合、もしくは連続によって成立するパターンが多い。例えば壁の前で突進モーションすると世界の裏側に飛んだり、だとか特定の状況下で回復魔法すると自分の足元のテクスチャが剥がれる、とかな。全部フェアクソだよクソが。

小技に関してはあくまでも製作側の想定外とは言えシステムの想定内である場合が多い。製作側が値段設定ミスったせいで買値と売値が逆転した金策小技とかは、システム上は正常な売買だしな。
そしてこの動作の連続もまた、運営の想定を超えているかは別として複数のアイテムなどを組み合わせた極めて健全な無茶である。

必要な材料は
ぶっ壊れアクセサリーこと格納鍵インベントリア
空中に足場を定義し跳躍するスキルことフリットフロート
距離稼ぎのための封雷の撃鉄(レビントリガー)・災(ハザード)
そして時間短縮用の神秘(アルカナム)「愚者(フール)」。

手順は簡単。過剰伝達状態で全力ジャンプ、空中で二段ジャンプし格納空間へエスケープ。そしてリキャストが終わったら戻る、これだけで無限ジャンプによる飛行が可能と言うわけだ。
戻るときは逆の手順でフリットフロートを使えばいいだけだしな、

正直なところ即席セーブポイントを使ったのでそのまま落ちてリスポンするのが一番早いのだが精神衛生に宜しくないので却下。

「うーん、調子に乗りすぎると降りるのも大変だし……んー？」

そろそろ雲を越えるほどの高さ、高所恐怖症なら気絶必至な高度から見下ろすシャンフロの地平はこれがゲームであることを疑わせる程のリアリティがある。

あまりに広く続く大樹海、大陸の端にくっついた四隻の船は豆のようで、視線を逆に向ければ無尽に続くと思われた樹海の境界線、その先には砂漠があり、雪山があり、火山があり……何か今、宝石のような光が――

「あっやべっ」

落ちる落ちる落ちる、気を抜くとインベントリアに逃げ込んでも体力が１しかないから落下ダメで死ぬ。現実空間に戻るときは慣性をリセットできても、入る時には若干判定が残るから用心しなければ。

完全没入型(フルダイブ)で、飛行機やドラゴンに頼らず空にただ一人というのは中々に怖い。身体一つでなおかつ推進力すらない状態でいるというのは、やはり……いやまぁ普通に楽しいんだけど推進力が欲しい。

むんず。

「……おいおい、新大陸じゃ頭の数を増やすのがトレンドなのか？」

この翼竜、頭が二つあるぜ。ドラゴンかと思ったが恐竜系はドラゴ

ンではないらしいので元は鳥か何かだろうか。
おっと？　行き先はあの樹海の中でも背の高い木々に囲まれた妙な空白地帯かな？マジかよ最速便じゃねーか、でも今回はパーティプレイだからすまんな、途中下車だ。
「離せや焼き鳥にすんぞオラァ！！」
串はアラドヴァルだ、肉より串の方が価値高そうだな。
アラドヴァル・リビルドで二頭翼竜の脚を斬りつけてやれば、金床すら溶かし斬る灼熱の刃に甲高い悲鳴を上げた二頭翼竜が俺の肩を掴んでいた脚を離す。よかった、ここでさらにきつく掴むとかされてたら死んでいた。
「離したら落ちると思ったか？　残念だったな焼き鳥の運命は決定してんだよ！」
掴んでばかりで疲れたろ？　大丈夫、今度は俺がお前の脚を掴む。ていうかむしろよじ登って背中に乗っちゃう。
レシプロ機を数多撃墜した不死身の衛生兵の力、冥土の土産に見せてやるよ！！

半殺しにした二頭翼竜で程よく下降し、最終的に上から翼竜ごと落ちてきた俺に森人族が大パニックを起こすまであと十分。

お土産を伴う下降運動（後書き）

ティアプレーテンはエルフの里であり、真面目に防衛してれば余程のモンスターでなければ対応可能な立地だったが当時の森人族の長がポンコツだったので役に立つことなく放棄された哀れな街。縛りプレイかな？

ちなみにこの二頭翼竜は頭が二つあるだけで脳は一つです、言うなれば「頭などのパーツが二つある一体のモンスター」というだけ

這い寄り式コミュニケーション

遭難生活一日目（追記）。森人族が俺を見る目がヤバい、完全にモンスターを見る目だよアレ。

「んっふふー、流石はサンラクサンですわ！　翼がなくたってお空でも負けないですわーっ！」

「まぁ、仕様上可能だったとはいえジェット戦闘機を素手で撃墜とか出来ればこのくらいはね」

「おまえはなにをいっているんだ」

ゲームの話だよ、徹頭徹尾な。
撃墜したドラクルス・ディノコアトルの素材テキストを眺めつつ、明らかに引いているトットリ及びさらにドン引きしている森人達、そして不覚にもさらに好感度を上げてしまったらしい国王父娘を連れた一団が森の中を進む。

「……なぁ、やっぱりアレくらいできないとユニークモンスターって倒せねぇのか？」

「んー？　どうだろう、クターニッドとかレイ氏……あぁ、サイガ

一０のことな？　アレくらいとは言わないけど黒狼とかなら頑張れば倒せそうだし……てかもう倒しただろうし」

「なんて？」

「いやなんでもない、忘却しろ」

しれっとクターニッドが再戦可能な事を漏らしかけてしまった、危ない危ない。

「まぁそれはそれとして、だ。おおよその方向を把握して向かってるわけだが……トットリの方はログイン継続できるのか？」

「あー……そうか、そろそろ一度落ちた方がいいか……」

俺も割と長くインしてるから一度ログアウトしたいところだ。普段であればラビッツに戻ってログアウトするところだが……ふふふ、今回は違うのだよ。

「エリナ、一旦ここで休憩にしよう。アレを頼めるか？」

「はい！　みんなー！　ここで休憩ですー！！」

平均的なステータスはプレイヤーとほぼ変わりなく、取り柄があるのか疑わしくなる森人族が持つスキル……いや、この場合はアビリティとかなのかな？

そこらの木の枝や葉っぱを集め、森人族達がテキパキと動き出す。ともすれば早送り映像のようにすら見える手際の良さで次々と天然有機物によるテントが木の上に次々と作られていくのだ。

「多分、運営側は森人族と一緒にこの森を攻略する前提なんだと思うんだよな」

「確かにアイテム消費なしでセーブポイント作れるのは便利だな……にしたってヘタレ過ぎる気もするけど」

森人族の特殊技能（アビリティ）、それこそはエリア中であろうとセーブポイントを創り出すことができる「即興拠点（インスタント）」だ。

これがあるからこそ、トットリはログアウトという根本問題を解決して森人族と同行する事が出来る。

とは言え移動中まで展開し続けることはできないのでノーデスは不可避らしいが。まぁこのヘタレどもを放置したらどこに逃げるか分からないしな……

さてここで問題が一つ。

「時に陛下、無礼を承知で尋ねますが木登りのご経験などは……」

「サンラクよ、王というものは得てして斯様な場とは最も縁遠い者なのだ」

やんちゃな幼童の時は木登りもしていたらしいが、流石に腹の突き出たおっさんに木登りスキルは期待できない。

結局、森人族達に協力してもらって枝と蔦を使った即席のエレベーターのようなものを作って引っ張り上げることに。

こいつら、王様達が非力な非戦闘員だと知って割増で優しくなってやがる。なんつー嫌な共感だ……まぁ自身らの人権的な意味でも重要人物ではあるけどさ。

ログアウトした俺は、再ログインの為にリアルでの諸々を済ませつつ片手に持った携帯端末で急ぎ調べ物を済ませる。

「由布院(ゆふいん)　亮治(りょうじ)……相沢(あいざわ)　陽子(ようこ)……四十万(しじま)源九郎(げんくろう)　……いや、この人らは言っちゃ悪いが下っ端だな。となると……」

天地(あまち)　律(りつ)、こいつだな……？　なんか妙に権限持ってそうなポジションだし、調べてみたらフェアクソのオンライン版に関わってる。つーか、え？　この人スペクリにも関わってんの？　シャンフロ正気かよ完全にクソゲー畑の人じゃん。

「……いや、実際シャンフロは成功してるわけだし」

スペクリに関しては悪いのは全面的にプレイヤー側だからマトモな人……なのか？　まぁいいや、それはそれとして……っと。

冷蔵庫からカニの隣に置かれたカニカマを取り出して齧りつつ、今度はシャンフロの公式ページに。

以前、「バグを運営に報告してそれがどのタイミングで修正される

のか」を見るのが一番楽しい、なんて言う奇特な人物と会った事があるがその気持ち今ならちょっとわかる。

「インベントリア便利すぎだからなぁ……」

恩恵に預かりまくってる俺が言うのも何だが、流石に無制限空中ジャンプはまずいだろう。思えば既に五通くらいメール送ってるのか……流石に迷惑だろうか？　はい送信。

「曰く「自分の一手がプレイヤー全体に影響を及ぼしていると実感するのが楽しい」だったか……うーん、分かる」

本物の蟹の隣に当てつけのように冷蔵されていたカニカマは、それでもカニカマの味がした……カニカマだからな、俺は嫌いじゃないよカニカマ。一々殻を折ったりほじくり返す必要がないからな……

「……さ、て、と」

トットリは……まだログインしてないか。あんまり期待はできそうにないが、ちょっと森人族と話をしてみようか。

五分後。

「あれぇ？　みんなどこに……」

「――――動くな」

「ひぇっ」

もうね、どいつもこいつも俺を見かけた瞬間顔を引きつらせて逃げるんですよ。だったらもう………気配を殺して後ろから近づくしかないじゃない。なんとなく頭を鮭に変えて歩いていた森人族の背後に木の上から降り立つ。

「……振り返るな、質問にだけ答えろ」

「ひ、ひゃひ……」

「名前は？」

「あ、アリュール……れしゅ」

「成る程……いい名前だ」

おっかしいなぁ……これ完全にステルスミッション系のゲームで敵兵士脅す時に使うやつだよね？　一応形式上は味方のはずなんだが……

「た、たしゅけ、て……」

「まだ質問は終わっていない、いいね？」

「ひぃぃぃ！？」

もういいや、このまま続行しよう。
とりあえず聞きたいことは……

「お前達が持つ弓……自家製なのか？」

「ひゃ、はひゃいっ！」

「種類は短弓だけか？　トットリの奴は短弓以外にも何か装備してるようだったが……」

「あ、あれは……その、」

「三、二……」

「森人族(エルフ)秘伝のスリングショットですぅぅ！！」

あれスリングショットなのか、防具と一体化したデザインだったから何なのか気になっていたのだが合点がいった。
そうか……スリングショットかぁ……ちょっと使った経験ないから別に欲しくはないかな。

「話を戻そう。要求ステータス……じゃないや、どれくらいの技量でお前達の作る弓は扱える？」

「え、技量……ええと、ええと……」

ちょっと悪戯心が湧いたので爪の先でちょん、と首筋をつついてみる。

「たしゅけてくだしゃいこりょさないでくだしゃい！」

あぁ……これまずいぞトットリ……下手に森人族のヘタレリアクションと新王の差別主義が漏れたら絶対向こう側に付く奴出てくるぞ……

「質問に答えれば無傷で解放する、オーケー？」

「……なぁサンラク」

「なんだいトットリ君」

「さっきアリュールって森人族が「頭が見たことない生き物の怪人に脅された」って泣きついてきたんだが」

「なんてこった、もう第三騎士団から刺客が来ていたのか。だが生きていたなら幸いだったな」

「……で、そいつは森人族が作る弓について熱心に聞いて来たらしくてな？」

「戦力の把握だな、ＦＰＳと一緒だ。射程と威力、連射性が割れれば大きなディスアドバンテージになる……まさかログアウト中を狙うとは卑怯な」

「なぁサンラク、弓の使い心地はどうだ？」

「森人族（エルフ）すげーな、有機物だけで折りたたみ式の仕掛け弓作るとか天才じゃん」

「……何か言う事があるんじゃないか？」

「………」

「………」

「……だってあいつら正面から話しかけると逃げるんだもん」

使わない可能性の方が高いけどローコストの遠距離攻撃手段はやっぱ欲しいよねぇ。わーい弓だ弓だー

蕩けるほどの渇望を込めて僕は君に囁きかける（前書き）

もし万が一にでもこの小説がノクターン行きになったらまずこいつのせいだと思います（）

遭難生活一日目（再追記）。
森人族の間で「やばい人型モンスターが近くにいる」という情報が出回っている、怖いね。

「やんのか？　おン？　テメー俺に喧嘩売るなら最低でもレベル99はあるんだろうなぁ？」

爬虫類の表情など分かるはずもないが、俺というレベル99以下自動逃走装置を前にしてガッツを見せるだけの勇気をこのラプトルは持ち合わせていなかったらしい。
取り巻きの最後の一匹が尻尾を巻いて逃げ出した事で、リーダー個体は悔しげに唸りを上げると背を向けて逃げ出した。

「ハッ、あのチビ恐竜みたいにガッツ見せろよな」

あれ多分群体総計で刻傷判定出てるよね、マジョリティハウンドかな？

「こういう時は刻傷に都合よく感謝したくなるなぁ……でもやっぱりおのれリュカオーン」

モチベーションの鮮度はフレッシュに維持していこうな。

森人族はヘタレだが、ヘタレ行動のためなら非常に有能になる……とどのつまり索敵性能に優れている。

俺の刻傷はパッシブ効果なので、俺以上のレベルを持つモンスターが範囲内に入った瞬間、誘引効果を発動してしまう。

だがその範囲以上の地点で森人族が索敵を行う事で強力なモンスターを回避、そして普段なら逃げざるを得ないがレベルそのものは99以下のモンスターが相手なら俺が出張ることで向こうは逃走する。

組み合わせ的に割と最強だな？　尤も、今回のような大人数の森人族が擬似的なパーティメンバーとして使えるからこその広範囲索敵な訳だが……それでもほとんど戦闘状態に突入する事なく俺達は森人族がかつて放棄した里へと進んでいた。

「リュカオーンの「呪い」に次段階とかあったんだな」

「このゲーム、そこらへん割とライブ感っていうか即興で構築してくるから確証持てないしなぁ……」

呪いを解け、ってってんのに飴玉のように舐めてアップデートしてくるとか絶対アドリブだよね……高性能過ぎるＡＩも考えものだな。

「距離的にはあと少しだと思うけど……へーシュ、なんか森人族だけに通じる印とかないのか？」

「あるにはあるらしいけど……」

「ご先祖レベルの過去話なのに今の世代が印の場所とか知ってるわけないだろトットリ」

図星なのかこちらを睨むヘーシュは、されど反論を口にすることはなかった。

まぁまぁ、局地的な無知痴呆はゲームじゃよくあることだ。一体どれだけのゲームで鍵が紛失され無駄に扉がロックされて来たと思ってるんだ、鍵開けるだけでも凝った仕掛けのある屋敷とか住んでる奴ら不便過ぎて住みづらそうだよな。

「陛下、本来であれば最短で拠点まで向かうべきなのですが……無用な寄り道をどうかお許しいただきたい」

「構わぬ、許す。森人族（エルフ）の里の奪還……エインヴルスの開拓者達がこの地を進む上で無為な行いではあるまい」

すいません王様、俺もトットリも九割くらい私利私欲なんですよ。レベルキャップ開放はしない理由がないから……

「あー、っく……殿下、長く歩いておりますがお疲れでは……ありませんか？」

本当は思考から除外した方がメンタルの健康状態を保てるのだが、ここで第一王女をシカトするのはロールプレイ的にあまり宜しくない。がんばれ俺、がんばれ俺……

「はい、大丈夫ですサンラク様。モンスターからはサンラク様達が守ってくれますから、安心できますもの」

フェアカスの場合は何故かフェアカス目当てでモンスターが襲って

くるって設定のくせにモンスターのヘイトは必ずプレイヤーに向けられるんだよなぁあ～？

「殿下ハ、オツヨイノデスネ」

「まぁ！　ふふふ、それは私がサンラク様に贈る言葉ですよ！」

んおおおお、素行も言動も善良そのものなのに内なるトラウマが、トラウマがぁぁあ……オーケー落ち着け、思考を切り替えていけ。

「なぁエムル……知性とは、実に傲慢なことだとは思わんかね……」

「サンラクサンが難しいこと言ってる時は大体どうでもいいことばっか考えてる時ですわー」

よく分かってらっしゃる……

結局、リアルタイム進行のゲームである以上、そして俺やトットリにもリアルの時間がある以上、流石にその日の内に到達とは行かなかった。

何度かのログアウトと仮眠を挟み、ちまちまと……だがそれでもトットリ曰く「驚異的速度」で進み続けた俺達は邂逅から1日経った翌日、遂にその場所を地上からでも目視できる位置にまでたどり着いていた。

「成る程……粘着性かつ蜘蛛の巣状に成長する蔦が周囲に展開され、辺りには有刺鉄線の如き茨の包囲網……」

少なくとも小型モンスターなら迎撃は容易く、三つ首ティラノのような大型モンスターでも足止めになる。あとは弓で射かけるなりして撃退すれば防衛達成……んー、ますます過去の森人族が逃げ出した理由が分からんな。

ドラクルス・ディノコアトルみたいな空中からのモンスターに襲われたとか？　それなら納得もできる……のか？

「これ、堀でも掘って木杭でも挿しておけば相当優秀な防衛設備にならないか？」

「こ、ここがティアプレーテン……！　私たち森人族（エルフ）の、故郷……！」

感極まって注意力が切れたのか、そのまま突っ込んで粘着性の粘液が染み出した蔦に絡まり、身動きが取れなくなった森人族達を半目で眺めつつ、侵入経路を模索する。

くっ、硬いな。この蔦地味に切断耐性でも付いてんのか？　うげぇ、傑剣（デュクスラム）への憧刃がねっちょりと……

「エムル、ぶちかませ」

「はいなっ！」

非物質の魔力なら粘着もクソもねぇよなぁ！？　……なんか魔力吸収された、クソッタレめが！　っていうかミント臭いんだよこの蔦ァ！！

「おいサンラク、木の上からこの蔦の向こうに渡れそうだってさ」

「いや流石にこんなジャイアントセコイヤめいた木を登るのは……成る程、縄ばしごか」

大丈夫？　ねっちょりしてない？　ねっちょりしてなかったわ。
最大の不安材料として王様が梯子を登り切ることが出来るのか、という問題があったのだが弱者シンパシーで優しい森人族の助けもあって、何とか登り切ることに成功。
幹が太ければ自然と枝も太いわけで、余程バランスを崩さない限り落ちることはなさそうな太い枝の上をゾロゾロと歩いていく。

「────ほう、これはまた……」

枝葉を払い、拓けた視界に映るその光景は。
マップの形状としてはサードレマやルルイアスと同じで台地状の地面に家屋が円形に並ぶ、所謂「マップ中央に重要施設がありますよタイプ」だ。マップ担当の流行りとかなのか？
この里の中心にある、周囲の木造建築とは明確に異なる……異彩と言ってもいいそれを除けばこじんまりとした西洋の田舎村……いや村って言うほど立派なものとも言いづらいな、とりあえず拓けた場所にとりあえず獣道作ってとりあえず家建てました、みたいな……

「建築の妥協が荒廃と併せて悲しみを際立たせているな……」

「畑とか見当たらないんだが……まさか狩猟で生計立ててたのか？
　あのヘタレで？」

森人族に足りないものは勇気だとずっと思っていたが訂正しよう、本当に必要なのは文明だこれ。勇気以前に拠点強化とかそういう基礎がガタガタなんだこいつら。

「もしかしてこっちが別分岐のゴールなんじゃ、とか思ってたけど違うみたいだな……」

ポツリとそう呟いたトットリに俺も同意する。少なくとも此処はもう終わった場所だ。夜逃げした先祖がどれくらい前のことなのかは知らないが、荒れに荒れ果てたこの場所に今から住まうのはなかなかに難易度が高いだろう。

まぁ、生産職プレイヤー……笑みリア？　だったかみたいな建築系が何人もいて安定した素材供給ができれば第二拠点として使えないことも……

「――逢いたかった」
ほぅ、と熱を帯びた吐息と共に「あの声」が耳を通って脳に直撃した。

「っっっっ！！？」

ぞわわわわわ！　と全身が粟立つ。突然耳元で声をかけられたことに対してではない。

「お前……！」

「逢いたかった……ずぅっと……探してたんだよぉ？」

その声が、その口調が俺の記憶に強く焼きついたものだったから。
一瞬だけ俺の耳元で囁かれた「あの声」ではない、奴が最も多用していたあざとさを前面に押し出した「声」で、にまぁ……と引き裂けるような笑みを浮かべた女が俺の直ぐ隣に立っていた。

「……ナッツクラッカー！！」

「今はディープスローターだよサンラクくぅん……うふふふふふ」

深い虐殺者（ディープスローター）……？　あっ、あーはいはい隠語の方っすねそんなこったろーとは思いましたよクソが！！

蕩けるほどの渇望を込めて僕は君に囁きかける（後書き）

ここが凄いぞ森人族の里を守る蔦！
・粘着質なので天然のネットとしてモンスターの動きを封じるぞ！
・虫系モンスターが嫌う匂いを出しているのでそもそも近づかせないぞ！
・見た目以上に耐久力が高く、蜘蛛の巣状に張り巡らされてることもあってそう簡単には千切れないぞ！
・魔法を吸収するので魔法由来の攻撃にも対応できるぞ！

ここがダメだぞ森人族
・蔦の力を信用しきれていない
・子孫に蔦の力が伝わっていない
・里に戻ろうとしてもモンスターに追われるとあっさり諦める
・というか自分たちが引っかかる

再会は必ずしも歓喜を共有するとは限らない（前書き）

もうやめて！　君のセリフ書くたびにＢＡＮの影がちらつくのォ！

（でもやめない）

再会は必ずしも歓喜を共有するとは限らない

世界が終わるまで一分。

フルダイブVRとは要するに夢のようなものだ。夢の中で刺されたところで現実で出血するわけじゃない、喉が枯れるほど叫んだとしても目が醒めれば普通に歌うこともできるだろう。

だがそれでも「これは確実にリアルに影響を及ぼすだろう」と直感できる疲労の中、俺が振り抜いた魔力の刃がその役目を果たしたとシステムが判断したことで消失し、俺と奴の間に僅かな沈黙が齎される。

「………今となっては全て手遅れだけど、それでも仇は討ったぞ皆」

もはやこの世界が……スペル・クリエイション・オンラインがサービス終了する事実を覆すことはできない。

事の発端こそ今俺が斬り捨てたプレイヤー……確か今は「ナッツクラッカー」とかいう名前だったか……こいつだが、ナッツクラッカーが齎した被害に対抗するため、俺達もまたいくつもの魔法にクソみたいな難易度の詠唱を設定したのだから。

オンゲーが過疎って内輪向けになる事は珍しいことではない、だけれども新規を拒むようになっては手遅れだ。スペクリはその果てにたどり着いてしまった。

「地雷プレイヤー同士が新規に迷惑をかけながら内ゲバしている」なんて悪評をおっ被せられたこのゲームは正式にサービス終了を決定し、シモネタニア帝国の馬鹿共も、それに抵抗した阿呆共も……

ある者はフレンドと別のゲームでの再会を約束した、ある者は何も告げずただ消えた。どちらにせよこの世界と、この世界で紡いだ繋がりは無傷でいる事はなく、どこかしらが途切れる事になる。

世界が終わるまで三十秒。
だからこそ、最後の最後にこいつから「決着」の誘いが来た時……これまで散々煽られた仕返しという以上に、どれだけＢＡＮされてもニタニタ笑いながら復活したこの野郎をこのゲームから勝ち逃げさせるわけにはいかないという思いが強かった。

今思えばどうしようもなくアホだったとは思うが、それでも同じ目的を持つプレイヤー達がワイワイ騒ぎながら作り上げた「魔法」は最後の最後で黒幕の打倒に役立った。
残り数十秒の猶予では勝利に浸る時間すらない、だけども確かに最後の最後で奴に敗北を叩きつけることができた。

「――――あは、」

「……チッ、蘇生魔法かよ。最後くらい潔くデスポンしとけよ」

「あははは！　凄い、凄いよサンラクくぅん……まさか最後の最後で私を押し切るなんてねぇ！」

世界が終わるまで十五秒。
笑う、嗤う。ナッツクラッカーは最後の最後でこのゲーム最高！とでも言わんばかりに笑う。

「死鋼（デスメタル）のフル版ってだけでも大概面白かったけどぉ……まさかこのボクが負けるなんてねぇ……」

「勝ち逃げだけはさせん、意地でもな」

「くくくく……仇討（あだう）ち、かね？　古き良き日本人の伝統というわけだ。いや、実に見事」

声が変わる。野太い男の声から老婆まで、下手をすれば今話している相手の声真似すら一瞬でこなす異様なリアル技能を持つナッツクラッカーが、楽しくて仕方がないと言わんばかりの笑みで俺を見つめる。

「最高だ……最高だぜサンラクくぅん……本気を出した俺に追いつける奴がいるなんて今でも信じらんねぇ」

世界が終わるまであと五秒。

もはやこれが互いに最後の言葉となるだろう。

罵倒の言葉は限りなく、選んでいる間に世界が終わる。だったらもう、シンプルに今の心情を告げてやろう。

そう顔を上げれば、向こうも同じ結論に至ったのか……このゲーム滅ぼした元凶とは思えないほどに澄んだ目で俺を見て、そして同時に告げた。

「――――二度と会いたくねぇ」

「――――また逢おうね」

これまでの声とは違う、初めて聞いた自然な声色。だがその声に込められた莫大な量の感情が俺の背筋に突き立てられるように……

世界が終わるまで零秒。

「嬉しいねぇ……嬉しいねぇえ……！　いろぉんなゲームで君を探したけど全然見つからないし諦めてたんだがよォ……シャンフロで張ってて正解だったかしら？」

そりゃ、シャンフロ以前で俺がプレイしていたのはクソゲーばかりだからな、ワゴンを漁って見つけ出すような代物ばかりだ。それ以前に別ゲーで同じプレイヤーと再会する確率なんてリアル遭遇並に低いだろうに……こいつはずっと探してたってか？

「その執念を慈善事業とかに活かせないもんかね……」

「うふふふふ、善意なんて所詮は電気信号の気まぐれに過ぎないんだよサンラクくぅん……」

何故ここに、とかはこの際もうどうでもいい。奴が何を目的としているのか……それだけが問題だ。

「一体何が狙いだ……リベンジか？　受けて立ってやるよ」
「それもいいねぇ……でもねサンラククん、拙者としては好敵手たる君と仲良くしたいんで御座るよなぁ」
『ディープスローターさんからフレンド申請が来ました。「対面チャットエッチしようぜ！」』
速攻却下した。
『ディープスローターさんからフレンド申請が来ました。「対面チャットエッチしようぜ！」』
却下。
『ディープスローターさんからフレンド申請が来ました。「対面チャットエッチしようぜ！」』
拒否。
『ディープスローターさんからフレンド申請が来ました。「対面チャットエッチしようぜ！」』
……キャンセル。

『ディープスローターさんからフレンド申請が来ました。
「対面チャッ

「しつけぇ！！」

「承認するまで地の底だろうと追いかけるよぉ……？」

通報！　通報できないんですか！？
まさか使用する事態になるとは思っていなかった通報コマンドがどこにあるのかを必死で探していると……ええい腕を絡めようとするな！
ナッツクラッカー改めディープスローターを振り払いながらウィンドウを操作していると、混乱した様子のトットリが俺へと話しかけて来た。

「なぁ、ディプスロさんから別ゲーからの知り合いってのは聞いてたけど……なんかあったのか？」

「犯人お前かぁぁぁぁーっ！！」

この野郎共犯者だったのか……いや違う、明確にチクったわけじゃないな？　この下ネタ野郎の得意なやり口だ、赤の他人と「良き友人関係」を築いて善意のネットワークを作る。
良かれと思っての行動で作戦が漏れたり、知らないところで弱点がバレたりと厄介極まりないんだよこれ。
ペンシルゴンの場合はビジネスライクな繋がりをよく使う、金だったりアイテムだったりで釣って味方を売らせたりな……どっちも大

概だわ。

「っ……はぁぁあぁぁあぁ……なんつーか……別ゲーでの知り合いってのは合ってるけど、フレンドリーな関係じゃないんだよ」

「だからこれからフレンドリーになっていこうぜサンラクくぅん……」

「やかましいわ」

もうこの里はダメじゃ、この変態諸共焼き払うしかない。

俺がレッドネームもやむなし、と覚悟を決めたのを気取られたのかディープスローターは両手を挙げて無抵抗のサインを示すとにへらと笑いながら弁明を始めた。

「いやいや待って待ってサンラクくん、ほんとーに悪意あって何かしてるわけじゃないんだって。……そりゃ、あっしから下ネタを取ったら何も残りゃしませんのでこんな名乗りをしちゃあいますがねぇ……」

「違う声になったですわ……！」

「こんなこともできるですわ？」

「あ、アタシの声ですわ！？」

大人びた女性の声が一瞬のブレスを挟んですぐさま小者臭い男の声に変わる。そしてエムルの言葉にニヤリと笑った奴の口から飛び出したのは、声真似という範疇を超えた模倣によって再現されたエムルの声。

相変わらず声帯変更（ボイスチェンジ）がお得意って訳か……

「トラストミー（信じて）……ね？」

信じる信じないじゃなくて、俺の中でディープスローター（ナッツクラッカー）は「敵」にカテゴライズされてるからそれ以前の問題なんだがな。

「これでも私、このゲームじゃまだ人口の少ない魔術師系最上位職業の「賢者」やってるから、頼れるよ……？　まぁ一発ヤッた訳じゃないけどネ！！」

「ぺっ」

「おいおい、これがリアルだったらその吐き捨てた唾を採取してたところだぜ？」

「やはりここで始末するしか……」

「わぁぁジョークジョーク！　会話を盛り上げるための下ネタなんだからぁ」

かつて下ネタでゲーム潰した奴が言って信用できる台詞ワーストワンだな。

「その、事情はよくわからないけど落ち着けよ……ディプスロさんって転移門を使ってプレイヤーの大陸間移動とかしてくれるすげー人なんだぞ？」

「は？」

転移門、だと？

「やぁーっぱり、サンラククんも「門」に心当たりがあるみたいですわねぇ。見たところ使えるのは君ですわ？　可愛い兎ちゃん？」

「あ、アタシの声で聞かないで欲しいですわっ！」

「……ジュテーム、愛らしいバニーちゃん。俺とずっぽしお話しようずェ？」

「ぎゃあああサンラクサンの声もやめるですわぁぁぁ！」

おいちょっと待て俺の声で悲鳴を上げるってどう言うことだ？　事と次第によっては第二回傑剣（デュクスラム）への憧刃体験会だぞ。それはそれとしてディープスローターは死にたいらしいな。

「………」

「おおっとサンラクくぅん、まぁた随分と剣を構える姿が堂に入ってるじゃなぁい？　さては……誰か真似してるね？」

チッ……やはり聡い、まぁ当たり前っちゃ当たり前か。何せ……

見様見真似（なんちゃって）も、役割模倣（ロールプレイ）も。元を辿ればこいつの技術を俺がパクったものなんだから。

再会は必ずしも歓喜を共有するとは限らない（後書き）

サンラク：応用性と反応速度を高水準で両立している
シルヴィア：応用性を絞る代わりに極めて高い反応速度を持つ
ディプスロ：隔絶した応用性お化けだが反応速度は人並み

大体こんな感じ
特定ゲームのみならシルヴィアが圧勝するし、どのゲームでも時間をかければかけるほどディプスロは手がつけられなくなり、サンラクは基本的にどのゲームでも最初からそれなりに戦える

竜よ、竜よ！　其の一（前書き）

自重しないとマジでやばい、あと自分にここまで下ネタの知識があることに若干ダメージ

竜よ、竜よ！　其の一

ディープスローター、もといナッツクラッカーがサービス終了のその時までゲームを続けた理由の一つに、奴自身が驚くほど強かったからというものがある。

シルヴィア・ゴールドバーグや竜宮院　富嶽のような戦闘力的な意味ではなく、例えるなら……そう、攻略難易度的な意味でだ。

まず奴が扱う下ネタ魔法。スペクリにおける必須級魔法や上位ティアに位置する魔法を軒並みＡＶタイトルとあらすじで染めやがったこいつは、魔法発動速度で他の追随を許さなかった。
そりゃ公衆の面前でＡＶのタイトルとあらすじ朗読出来る度胸を持ってる奴はそうはいまい。いたとしてもそいつらは皆、奴の陣営を選んだ。

強魔法を誰よりも速く行使できる、のアドバンテージが一体どれほどのものかは言うまでもあるまい。

だがこれはそう大した問題ではない。

奴の本当の脅威……それは声帯変更（ボイスチェンジ）を始めとした、あまりにも異質

な模倣技能にある。
奴の前で十分動きを見せれば「見様見真似」で動きを完全に読み取られる。
奴の前で十日も戦ってみろ、思考すら読み切って「役割模倣」される。
チートと疑われる事数知れず、だが運営が奴をBANする理由は決まって「不適切な単語の連続使用による迷惑行為」であり……つまり奴はチート行為を一切行っていないという証明を、皮肉にもゲーム運営が証明していた。
あまりにも強いボスキャラの前ではモチベーションは枯れて萎える。その果てはゲームの終焉に他ならず、実際スペクリはそうしてサービスを終了したのだ。
「殺し合いから始まる友情、というのも乙なもんじゃのう……ふぇふぇふぇ、サンラクくんにゃあこの姿は馴染み深いんじゃあないかえ……？」
「チッ……「小杖二丁流（ダブルワンド）」か」
そりゃそうだ、何せそのスタイルはスペクリ時代の俺そのまんまなのだから。くそッ、なんの当てつけだ？　ご丁寧に装備品まで若干似せてやがる。
「っちょ、おいおいおい待て待て！　マジでやり合うつもりか！？　落ち着けよ、特にサンラク！　ここで万が一死んだら最後にセーブした拠点に戻っちまうんだぞ！？」

「………命拾いしたなディープスローター」

「えぇ～？　ゥチのことぉ、もぉっと気軽に「ディプスロちゃん」って呼んでもいいょ？　……おっほぅ、その目ヤバイね妾の内なるマゾが愛で撫でられてる気分ぞよ……鯨みたいに潮吹いちゃいそう。あ、マグロじゃないぞえ？」

こいつを今キルしても天は許してくれるだろうか、いやダメだろうなぁ……こいつ驚くべき事にカルマ値でネームを赤く染めてない。つまりＰＫではないからキルした場合俺が「悪」になる。

「……で、マジでなんなんだよ。フレ登録ならしてやるからさっさと帰れよもう」

「んー、ここまで拒絶されると流石にちょっとメンタルにヒビが入りそうだ……でもねぇ、本当に我輩は君と仲良くしたいだけなんだぜ？」

「悪いけどキャラ絞ってくんない？　まだるっこしい人は好きじゃないんだ」

「仕方ないにゃあ……」

はぁー、ホンマこいつ天から落ちてきた隕石とかでデータデリートしてくれないかな……

あんまりにもあんまりなバカヤローとの再会は、ただでさえフェアカスそっくりなアーフィリアとの邂逅で削れた正気度をさらにゴリゴリ削ってきたが、いつまでも引きずるのも女々しい。

それにスペクリの衰退に関しちゃ悪乗りした俺達にだって責任（罪）はある。こいつ一人を悪者だなんだと主張するのは女々しいを超えてみっともない。

「さっさとフレ申請飛ばせよもう……」

「いいねぇ、ようやく私を受け入れてくれるんだねサンラクくぅん……」

『ディープスローターさんからフレンド申請が来ました。
「シャンフロのハラスメント対策的に全てのキャラは童貞であり処女なのでは？　あたしも君もさくらんぼ！」』

つい反射的に拒否してしまった。

「……殴るぞ？」

「バッチコー……あっ待って思ってたよりガチな殴殺武器だ許してつかぁさい！」

ここで超過機構（エクシードチャージ）を切っても許されるよな？

トットリをパーティリーダーにしたのはマジで失敗だったかもしれない。

めでたくパーティ入りと相成ったディープスローターのニマニマ笑いにため息を漏らしつつ、萎んだモチベーションをなんとか膨らませて気分を切り替える。

「まぁいい……セーブ前に戻る事は出来ない。踏んづけた地雷もオートセーブされたらなんとかしなきゃならないのがゲームの世知辛さであり風情だ」

「地雷と地雷(わたし)をかけたの？　上手いねぇ」

くっそ……ちょっとしたネタもちゃんと拾ってくれるのが若干悔しい。しかも皮肉が通用しない無敵モードだ、すごく悔しい。

「トットリくん、確かエルフを拠点まで連れて行くユニークの真っ只中だったよねぇ？　なのにここにいるって事は……ハハァーン、レベルキャップ解放の欲望には抗えなかったんだなぁ？」

「えぇ、まぁ……はい」

「トットリ、そこは「うるさいゲロ豚」くらい言っていいぞ……喜ぶから」

「いや流石にそれはダメだろ、普通に罵倒だし」

「おいおいサンラクくんはＳＭセットとご一緒に吐瀉属性までお付けして調教するつもりかい？　いいね……菊が薔薇になるまでくらいならズッポシしても良かったけど上のお口が期間限定おすすめメニューなのかなぁ！？」

…………

「さ、サンラクサンがかつてないほどに萎れてるですわ！？」

「人は覆面越しでもここまで感情表現できるのか……」

だれか、ぼくをはげまして。

「サンラク様、事情は存じませんがどうかお気を確かに……」

お前かぁ……つーか普通に善意１００％な台詞で裏を疑うのは流石にこっちがフィルター剥ぎ取った方がいい案件か。

「んー、流石にこれ以上続けると本気でキレそうだしぃ……ほらほら、君らがわざわざ寄り道した理由を済ませないとねぇ」

全くもってその通りだ、こいつに手間取ってるだけ時間の無駄だろう。そう心を強く保って俺たちはこのなんとかプレートの中心部へ……

次の瞬間、目の前に何か人間大サイズの物体が落ちてきた。

「…………」

「…………」

「…………あー、私の子じゃないよ？」

ハナからそんなこと考えてねぇよ、つーか何をどうやったらプレイヤーがティラノの頭を出産できるんだよ。
一瞬あの傷だらけの個体かと思ったが、ダメージエフェクト付き以外の損傷は見られないので一般個体なのだろう。

「なぁ、この森にいる三つ首ティラノって頭を分離できる能力を持ってると思うか？」

「流石にそんな生物をデザインはしないだろ……」

「グロ対策のダメージエフェクトが邪魔でよく分かんないけど、千切れかけの首を遠心力で思いっきり吹っ飛ばしたらこんな感じに千切れそうだねぇ……」

ぴくぴくと痙攣する首ティラノの眼球を見るに、千切れてから……というか「生きていた頃」からあまり時間が経っていないようにも見える。
そして三つ首ティラノに首を分離発射する能力がない以上、ティラノ本体が自切したとも考えづらい。
つまり……これをやった奴がいる。それも遠心力で首を千切り飛ばすことで届くような距離に。

「……まさかお前の仕業じゃないだろうな」

「モンスタートレイン？　それむしろサンラクくんの十八番（オハコ）でしょお……？　スペクリの時だって……」

「思い出語りは後だ、トットリ………、…………このバカもパーティメンバーに加えてくれ」

「どんだけ葛藤してるんだよ……分かった」

遺憾でしかないが、少なくとも最上位職にまで到達してるなら肉壁以上の働きは出来るだろう。

異様な亡骸が天から降ってきたことで、この場にいる全員に緊張が走る。頭に乗せたエムルの身体が震え始め、俺は誰に言われるでもなく傑剣（デュクスラム）への憧刃を取り出して戦闘態勢に入る。

「陛下、殿下……場合により、形（なり）も振りも捨てて逃げていただく可能性がございます」

「い、一体何が起きたというのだ……！？」

「もしもの際は、森人族の者達を従えてお逃げを」

「サンラク様は、如何なさるおつもりなのですか！？」

そりゃおめぇ、こんなシチュエーションで居残りのナイトがやる事なんて一つしかないだろう？

「サンラクくぅん、何かクるねぇ、キちゃうねぇ……！」

「うるさい構えろ脳内どピンク！　トットリお前は森人族を連れて離だ……」

「Quwrrrrrrrrroooooo！！！」

それはなんと形容するべきか、電話の着信音とかパトカーのサイレンだとか、そう言ったものを何百倍にも不愉快にしたものというか……ああ、音の種類は全く異なるのに、どこかで聞いた覚えのあるような……

「お客様は徒歩でのご来店のようだねぇ……ご指名は誰かなぁ？」

「ぱっちりお目目がチャームポイントのティラノちゃん（生首）の熱心な追っかけなんだろう」

「……あっちだ！」

揺れが近づけば震源がどこかも分かり易くなるというもの、トット

リが指し示した方を見ればそこには外敵の侵攻を阻むイバラがあり蔦があり……

そして何か、悍ましいまでに赤い何かが猛烈な勢いで蔦のネットへと突撃を仕掛け……そして、信じられないくらいあっさりと蔦の束縛をぶち抜いて森人族の里へと堂々と潜り込んできた。

それはまるで血のように赤い。
カラーリングが赤一色、という手抜きとしか思えないそれはおおよそ知性を感じさせない、それこそ死んだ魚の目のような眼差しはどこに向けているかも定かではない。

それはまるで肉のように赤い。
骨が見えている、臓物が今にも零れ落ちそうになっている。そもそも陸上生活に全く適していなさそうな鰭のような前脚はズタボロで、だがそれを無理矢理地上を歩く為に酷使する姿は生物としての基本すらも踏みにじっているようで。

それは、それは、それは……

「Qiillllllliiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！」

手当たり次第に何もかもを貪った、あまりにも悪趣味なキメラのようで。
俺の声と、世界(システム)からのや通知はほぼ同時に響き渡った。

「全員散開！！」

『モンスター急襲(レイド)！』

『討伐対象：貪(むさぼ)る大赤依(だいせきい)』

『レイドバトルが開始されます』

『参加人数：３／４５』

竜よ、竜よ！　其の一（後書き）

実は非常に分かりづらいけど貪る大赤依が主人公たちの前に現れた伏線はちゃんと張ってあったりします

蔦「拘束力に定評があります」

貪る大赤依「粘液ごとムシャムシャア！」

竜よ、竜よ！　其の二（前書き）

ふと下書きを読み返したらあんまりにもあんまりすぎたのでこれでも３０００字くらい削ってます、流石に脳を女×３はいかんですよ……（自制）

竜よ、竜よ！　其の二

レイドモンスター、貪る大赤依、狂える大群青、参加人数上限、現在参加人数……

全てを加味して導き出された結論は極めてシンプルなものであった。

これ無理だな？　いやマジで。

「トットリ、エルフを連れて逃げろ……あとついでにエムルも頼むわ」

「……やっぱ無理臭いか？」

「少なくとも三人そこらで倒せるようなレイドボスとかねーだろ、俺とそこの肉壁使って足止めするからその間に前線拠点まで駆け抜けろ」

「壁じゃなくて便器がいいなぁ」

「肉片になるまで使い潰すから覚悟しとけよ」

「やぁん情熱的ィ」

今から肉塊にしてくれようか。

「な、何言ってるですわサンラクサン！　アタシも戦うですわ！！」

バカ言え、実質常時オートセーブで過去に戻れないシステムでＮＰＣを無駄死にさせられるか。

「気にすんなエムル、友達の家に行くのと同じようなもんだ。エルフのセーブハウスはもう壊されてるから……直前だとスカルアヅチか、そこで会おうぜ」

「で、でも……」

「それに、だエムル。あの二人の護衛は俺が受けたクエストだが……実質俺とお前で達成する依頼だぜ？　適材適所だ、第三騎士団が襲ってきてもお前なら守れるだろう？」

俺の言葉にエムルは口を開くも、言葉が喉から先へ出てこないとか無言でこちらを見つめると、諦めたかのように俯いた。

「ぅぅぅぅ……分かったですわ」

「グッガール、いい子だ……さて陛下、殿下。見れば分かりますがアレは一筋縄ではいかぬ相手ゆえ、しんがりを務めさせていただきたく」

「……うむ、大義である。余はこの恩を忘れはせぬぞ」

「サンラク様……どうかご武運を」

流石に真後ろにアレがいる状況で膝をつく事は危険だ、だから軽く一礼しただけであったが王様もフェ……じゃないアーフィリアもそれを咎めるようなことはなかった。

「サンラク……ディプスロさん、悪い」

「気にすんなよトットリ、まぁ……リスポンしたらなんか奢ってくれよな」

「そういえば私が向こうに送った黒狼……あぁ、今は黒剣だったかの料理人が将来はこっちに店を出すって話だねぇ……」

料理人……風の噂では剣士系スキルを鍛える為に料理人になるのが効率がいいと聞いたことがある、意味わからな過ぎて笑えてくるな。

「わかったよ……後であのモンスターの情報教えてくれよな。行こう皆！」

足止めとして俺とディープスローターが、そしてその他の面々がこの場を離脱しようとしたその時だった。

「Puyarrrrrrrrraaaaaaaa！！」

「え――――」

「っぶね！？」

視界の半分を赤が埋めた、思考が現状を理解するよりも早く反射的に伏せた俺の上半身があった場所を何かが通過する。
そしてそれは避け損なったディープスローターを派手に吹き飛ばすと、命の光が失われんとしていた首だけティラノを絡めとり……

「え？」

「あ……」

今まさに逃走せんとしていた森人族(エルフ)。その中でも見覚えのある少女のすぐ近くにいた二人の森人族を掴むと、巻き尺を絡め取るかのように本体……貪る大赤依へと戻って行く。

「アリュール…」

「逃げ……」

ぐちゃん、と。

まるで縦に並んだ口腔のように、真っ赤な肋骨を牙に見立てて。ともすればアイアンメイデンが閉じる瞬間のような「あぁこれは次開いたときに絶対生きてないな」という確信を抱く咀嚼。
何か高出力の攻撃で骨が露出するまで穿たれたのだろう竜の胸部が、生物的にあり得ない蠢きを伴って取り込んだ森人族と首だけティラノを咀嚼する。
わずかに漏れ見えるダメージエフェクトがいっそのこと生々しい。

そして最後に嚥下するかのような動きを見せると……

その背中から三つ目のティラノの首と、二人の森人族を生やした。

凍りつく空気。プレイヤーを単なる障害物としか考えないＮＰＣ狙いの即死攻撃。貪る大赤依と同様に赤色一色となった二人の森人族は、この手の描写じゃお約束と言っていいまでに……そう、お約束と言っていいグロテスクな行動、即ちうわ言のように何か生前の言葉を紡ぎつつもこちらへと身体と一体化した弓と思しき器官を向け

たのだ。

「ニゲテ……テ、ゲテ……」

「ワタシタチノタカラモノ……タカ、ラ、ノノノノ……」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

遺された森人族（アリュール）の悲鳴が引き金となったかのように、ＮＰＣ達の理性（ダム）が恐怖を抑えきれずに決壊した。

「あぁもう……なんつー有効的な初手ブッパしやがる……！」

プレイヤーでも失禁ものだぜこれ。

放たれた肉色の矢を弾き飛ばし、前へと踏み込む。狙われないから足止めできませんでした、なんて外道共に一生ネタにされてもおかしくない不覚だからなぁ！

「ディープスローター！　どうせてめー生きてるんだからさっさと参加しろ！　トットリは後で回収でもいいからＮＰＣを逃せ！　俺関連のＮＰＣが死んだら末代までネガキャンするからな！」

「くっ……任せた！！」

一人目のプレイヤーは言葉を返事とし、二人目のプレイヤーは魔法名を返事とした。

「【巨神の崩撃（ティタノマキア）】！！」

見覚えのある巨神の土拳が再び胸口を開いてＮＰＣに触手（舌）を伸ばさ

んとした貪る大赤依を真下からカチ上げた。

「んふっ、んへへへへ……身体ガックガクだけどサンラクくんの信頼で絶頂しそうだぜ……死ぬ時はサンラクくんの腹の上がいいなぁ……」

「うるせー、死んでも動け」

「えっ、ネクロフィリアがご趣味？　強制マグロは私が楽しめないからちょっと……ていうか、使い捨て魔術媒体(マジックスクロール)の攻撃魔法とはいえ、アレ直撃してピンピンしてるのはモチンベーション萎びそうだよぉ……」

大前提四十五人のレイド戦だ、下手すりゃ超排撃(リジェクト)すら有効打になり得ない可能性もある。

物理演算に則った怯みモーションがあっただけ有情と考えるべきだろう。

「サンラクサン！　御武運をですわーっ！！」

遠のいていくエムルの声と、いくつもの足音。ＭＰ回復のポーションを取り出したディープスローターがなにやらじゅっぽじゅっぽと音を立てているが見るだけ時間の無駄なので無視。

この場合倒すためではなく、ヘイトを集めるだけの火力が必要だ。

だからこそ今の段階で傑剣への憧刃は使えない、単純火力でこちらへ意識を向けさせないといけない。

「ていうかさぁ……サンラクくぅん、もしかしてぇ……この状況、狙った？」

「はぁ？　なんでそんな結論になるんだよ」

「魔導狂像タイラントゴーレム」

「…………」

「確かあの時も、五人くらいで最速初見撃破してたよねぇ……撃破報酬の「ハカタ」には手を焼かされたよ」

あぁ、懐かしいな「Ｈｅａｒｔ（ハ）　Ｋｎｏｃｋ（カ）　Ｔｙｒａｎｔ（タ）」。スペクリでは一番最初にレイドボスをクリアしたプレイヤーが魔法名と詠唱文を考えることができた。軒並み有利魔法を取られていた中で、抵抗軍（レジスタンス）にとっては新規追加されるレイドボス魔法は貴重な戦力だったからな……なりふり構わず攻略したもんだ。

ちなみに実際のデスメタルバンドが出した曲から引用された「Ｈｅａｒｔ　Ｋｎｏｃｋ　Ｔｙｒａｎｔ」こと「ハカタ」は他の魔法と組み合わせることで全方位にビームを撒き散らしながら突撃する実質自爆魔法として重用されました。

「流石にシャンフロでまでんなこと狙ってねーよ、第一上限四十五人……言い換えれば四十五人掛かりでも倒せるか怪しいボスだぞ？　無理だろ」

「おいおい……ヌルいこと言わないでくれよサンラクくぅん……」

「あ？」

全力ジャンプした俺の足があった場所を貪る大赤依の……舌？　触手？　結局どっちなんだ、まぁいいや。舌が通過する。避けそこなったディープスローターが派手に足を掬われて頭から転倒する。そ

ろそろ死んでもおかしくないと思うのだが何か細工をしているのか未だにＨＰがゼロになる様子はなく、よろよろと立ち上がったディープスローターはこれまでのにやけた笑みとは違う、挑発的な感情を込めて口を吊り上げる。

「君はもっと向こう見ずな奴だろう……？　あのウサギやらがどれだけ大切なのかは知らないけどさぁ……逃すだけならぶちのめしたって結果に変わりはないじゃあないかぁ……」

「……つまり？」

「だったらギアあげてこうぜ？　オイルブチまいて脳漿ブチまけるまでイっちまおえぶぇっ」

先ほどの【巨神の崩撃】の恨みを忘れていなかったのか、下から上へと掬い上げるようなカチ上げを食らってディープスローターが宙を舞う。貪る大赤依……いいね、出会いさえ違えば俺たちは友人になれたかもな。

「だが殺す、やってやろうじゃねーか……」

時間稼ぎに変わりはない、だがヘッタクソなラップまで使って煽られちゃあ黙っていられない。スペクリにおける宿敵にここまで馬鹿にされて何も言い返せないんじゃあかつての戦友達にも会わせる顔がないというものだ。

冥王の鏡盾（ディス・パテル）を左手に、アラドヴァル・リビルドを右手に構えて問いかけるように宣言する。

「知ってるか貪る大赤依、レイドボスってのは大概極まったプレイヤーにソロで倒される宿命なんだぜ」

今からマックスまで極めてやろうじゃねーか行くぞ初見撃破！！

竜よ、竜よ！　其の二（後書き）

禁句：貪食ドラゴン
あれとは違い傷口を無理やり口として動かしている感じ

ディプスロはその戦法上、兎にも角にも死なないことを大前提としているのでめちゃくちゃしぶといです。当然確定食いしばりラインの幸運１００は満たしているし、アクセサリーやらなんやらで一回二回吹っ飛ばした程度じゃ死なないのです

素体：青竜エルドランザ
要素：感染したドラクルス・ディノ
アラドヴァル・リビルド「わくわく」

「んぎゃあああああああああああ！！！」

悲鳴をあげながら、いっそ殺意すら抱くほどのクソ耐久を持つ「木」にアラドヴァル・リビルドを叩きつける。其の存在理由を十全に果たす灼熱の刃はあまりに肉肉しい、ともすれば異常に太い腕のようにも見える幹を焼き切っていく。だがそれでも硬い、芯を断つことができない。

「やばいやばいやばい！　ディープスローターＤＰＳ足りてねーぞ！！」

「足りてないのはＤＰＳじゃなくて人手かなぁ！？　ほらサンラクくんここは分身とかしてみようよぉ、そして私とスリープレェェェイ！！」

「Ｐｙａ……」

「「あ」」

貪る大赤依が背中から射出した「肉種」は地面に埋まると同時に、なんとも形容しがたい……いや一言で形容するなら「グロい」としか言いようのない肉の大樹へと成長した。ある程度ゲームに精通したプレイヤーならわかるだろう、この手のオブジェクトは放置しているとと大抵ロクでもないことになる。そして時間にしておおよそ一分……肉樹は文字どおり弾けた。

「Ｐｙａａａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ！！！！」

「のおおおおおお！！？」

冥王の鏡盾（ディス・パテル）を前面に構えて防御の姿勢を取った俺へ、何由来かも分からない血肉と衝撃波が叩きつけられる。早々に受け止め切ることは不可能と判断して転がるように真後ろへと吹き飛ばされる流れに身をまかせる。

封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）は使っていない、使ったらまず間違いなく死ぬ。この戦闘に関してノーダメを貫き通すことは絶対に不可能だ……なにせこの肉樹の爆発、戦闘範囲の六割くらいを吹っ飛ばす上に一度に五本植え付けられる。つまり確実にダメージを食らう、どうあがいてもな。

「木が鳴いてんじゃねーよ……」

「本体がクるよぉ！」

そして何より、これらはあくまでもオプションパーツであり本体は普通に襲いかかってくるという……つくづく少人数でクリアさせる気がないってわけだ、まぁレイドだしな。

受け身から立ち上がり、舌を伸ばしながら突っ込んできた真っ赤な怪物の突進を回避する。戦闘開始から五分、そろそろディープスローターも奴の動きに慣れてきたらしい。戦闘開始時のサンドバッグはどこへやら、危なげなく攻撃を回避する見覚えのあるバトルスタイルを行使する賢者の近くまで後退。

「とりあえずあの木をなんとかしねーとピンボールだ、集中攻撃で一本伐採して安置を作るしかない」

「んー、種付けられるタイミング的に、ギリギリで回避は出来そうなんだけどねぇ……」

だがそれでは駄目なのだ、ギミックに「対応」するだけではジリ貧になるだけ。「対処」した上で本体を削らないことにはどうにもならない。どうもアラドヴァルの特効が刺さっているらしく、普通に斬りつける以上の効果を与えてはいるようなのだが有効打ではあるが決定打には程遠い。

「Qyarororororororororororo!!!」

リコーダーをど下手くそが演奏したかのような騒音を撒き散らしながら、貪る大赤依の背中がぞわぞわと蠢めく。
奴の姿の元々の……多分ドラゴンの背中としての部位があったであろうその場所は今やぶつ切りにした素材を雑に煮込んだ真っ赤な鍋を覗き込んでいるかのような錯覚すら覚える。
真っ赤なトマトスープの中で浮上と沈殿を繰り返すジャガイモのように蠢めく三つの生首ティラノは咆哮とも断末魔ともとれぬ呻きを撒き散らし、他にも何種類かの……おそらく被害者であろう恐竜もどきたちがひしめく中、取り込まれた二人の森人族の姿もチラチラと見える。

あ、生首に押し込まれて沈んでいった……お前ら、死後もそんな謙虚してんな……だが笑い話では済まない、このゲームにポーズボタンは存在しないのだから状況は常に動き続けている。

「ディープスローター！」

「新モーションだねぇ！　何かなぁ何かなぁ！」

クッソ後衛だからって若干のんきしやがって……こっちは気を抜く暇すらないんだぞ。

グジュグジュと潰れたトマトのような赤い物体が貪る大赤依の背中より射出される。肉種とは違う、あれはもうちょっと小振りであったし一度に五個射出される。つまり別のアクションということだ。

見た目通りにべちゃり、と地面に叩きつけられた赤い塊。それはグヂグヂとあまり精神衛生によろしくない音を立てながら変形して……ティラノの生首にいくつものラプトルの胴体が接続された、異形の恐竜を生み出した。

いくらこのゲームが多様なモンスターを登場させていると言っても、流石にあれはない。どう見てもキメラ……いや、キメラと呼ぶのもおこがましい大雑把な足し算で生まれた「何か」は複数の胴体をつなげてなお巨大なティラノの頭をブルドーザーの如く押し込みながらこちらへと突っ込んでくる。

「なんだ……その、要するに？」

食った対象を大雑把に「混ぜて」モンスター化させる……と？　ＮＰＣも捕食対象だっていうのに？

……………なるほど？

「オーケー、三日三晩だろうが足止めしきってやるよ」

これはＮＰＣと絶対に遭遇させてはいけないタイプのモンスターだ。別にＮＰＣが食われることを憂いているわけじゃあないが……その結果生まれるものは、笑って倒せるようなものではないだろう。

「ＧｕＷｒｒｒｉｒｉｒｉａａａａａａａａａ！！！」

「ちょっと黙ってな」

頭という大きな錘を押し込みながら突っ込んでくる敵など対処は容易い。回避どころか追随しながらティラノ部分の顔半分をアラドヴァルで滅多斬りにする。若干下がったテンションと、それ以上に上がったモチベーションに呼応するかのようにアラドヴァルは焔を撒き散らし、地味にディープスローターが注意を引き付けていた貪る大赤依本体が俺へとヘイトを向ける頃には、産み落とされたキメラ分体はその力の支えを失ったかのように固体と液体の中間物質の溜まりとなって地面へと広がっていた。

「残弾はどんなもんだ？　捕食モーションがあるなら当然「空腹」概念があるってことだよなぁ？」

無尽蔵に作り出せるなら絶望でしかないのだが、このゲームはそういうところで「消費」という概念に関して厳しいからな。信じてるぞ天地　律……

貪る大赤依は竜の形をこそしているが、その動きから生物的なものを感じ取ることは難しい。そもそも首は千切れかけだし胸はポロリしすぎてむしろ臓器がボロンしてるし……今も地面に落ちる血のような身体の一部が……待て、ちょっと待て。

「……………っ！」

視線を下に向ければ、そこには形状を崩壊させた異形ティラノだったものが水溜りのように広がっている。そして周囲に目を凝らせば肉樹が爆ぜた場所にも同様の「赤溜まり」ができている。

「残留オブジェクト……？　演出か？　いや、それとも………」
考えうる最悪の予想。奴の背中でドロドロのスープのように形成されては沈下し溶けていく犠牲者たちの姿形。それってつまり「不定形状態から固定状態に移行している」ってことだよな？　それって、いやだが………あり得るか？
その逆がある、という可能性を。

「……チッ、ディープスローター！！」
「はぁい？！」
「その「赤溜まり」を警戒しろ！　なんかフラグ臭い！！」
「もしかしたら私のメスの匂いかもしれないよぉ……？」
声もキャラもプレイスタイルも自在に変えられる奴の性別とかコインの裏表より信用できねーよ。
「それよりもさぁ！　サンラクくぅぅん！　この血溜まり、攻撃するとダメージエフェクト発生するんだけどぉ！！」
「当確でございますねぇちくしょう！」
続く悪態が口から漏れるよりも早く、全身を痙攣させていた貪る大赤依の身体が……ああそうだ、まさしく水風船のように弾けた。
「あぁ……もしかして、泥掘り（マッドディグ）のご親戚か何かで？」

整備されていない芝のようであった地面に広がった真っ赤な、真っ赤な赤溜まり……足元から感じる蠢動は伝達か？　それとも……接触しているのか？

竜よ、竜よ！　其の三（後書き）

頭ティラノにラプトル胴体複数接続キメラはカタカタ手押し車を前後逆にした感じの分体、とってもキモい

・拡散赤色領域（オマエハオレノハラノナカ）

邪悪なスプラトゥーン、自身を構成する飛蝗を液状置換することで直径３０メートルを覆う水溜りのような状態へと変化する。当然この状態でも行動は可能なのでいきなり地面からキメラ分体が生成されて飛び出してくることもあるし、最悪下から貪る大赤依本体がざっぱーんと……ボム食わせなきゃ

ちなみに一定以上の赤溜まりが出来ると行うモーションなので予測自体は容易い、対処が容易いとは言ってない。

泥掘り君（マッドディグ）の十八番は今ここに悪辣な進化を遂げて再び主人公の前に現れたのです。余談ですが別に泥掘り君が食われたとかそういう背景はないです、貪る大赤依の基本技です。

竜よ、竜よ！　其の四（前書き）

だんだん筆がノッて来ました

端的に言おう、状況は極めて悪いと言わざるを得ない。
足元に広がった赤溜まりから次々と出現する不恰好で悍ましいホラー重点のキメラは雑魚のくせに結構なタフネスがある、恐らくだが二、三人で対処する前提なんだろう。

「チッ……使うか？　いや……」

ダメだ、碌に貪る大赤依本体を削れていない状況下で追い込みをかけるのはリスキーが過ぎる。墓守のウェザエモン戦のように蘇生手段が充実していたのなら選択肢としては有りだったが……

「サンラクくぅん！　四つん這いになって豚のように啼いてねぇ！」

「言い方ァ！」

「はい【殺到する敵意（マーダッシュ・インテント）】どーん！」

いちいち神経を逆撫でしてくるが後方火力としての仕事はしっかり果たすディープスローターの魔法が発動、背後から迫る幾本もの光条を遮那王憑きの補正が入った宙返りで回避する。
ていうかその攻撃、軌道的に伏せたらケツに当たるじゃねーか！！

「失敬（ごめんねぇ）、サンラクくぅん事故なんだよぉ……オートホーミングだからさぁ……」

後ろを向く余裕がないので確かめることはできないが、きっとニマ

ニマと笑みを浮かべているのだろう。ほんとマジで天誅案件では……？

だが魔法職……それもこの場所に到達している以上、レベルキャップを解放しているであろうプレイヤーの攻撃魔法は雑魚キメラの動きを封じ込めるだけの威力を持っているらしい。

体力が削れたことで弱った分体共の間を駆け抜けながらアラドヴァル・リビルドで斬り裂いていく。

「……揺れた、来るか！」

地中、水中、空中……場所はどこであれプレイヤーの手が届かない場所に逃げ込んだモンスターの次のアクションなど、奇襲以外の何があると言うのか。

古来よりゲーマーに伝わるホーミング攻撃に対する効果的対処方法「当たらないよう動く」を敢行しつつ、貪る大赤依のホーミング性能を測る。

「さぁ、スタミナケチって歩いてる獲物がいるんだ、襲うなら今だぞ……」

「何やってんのさサンラクくぅん！　ほらちんたらしてないで走ろうよちんたらちんたら！　略してチンチ……」

「慎みMODとかインストールしてくれませんかねぇ！？」

……！　揺れた、地面が膨らんだ、三歩下がれば座標調整。おいおい、なんだこのクソホーミング……！

「くっ……退、ひぉお！？」

例えばの話だが。
地面に敷かれたハンカチと、その上に置かれたおはじきを想像してほしい。そしてそのハンカチのある一点を掴んで思いっきり引っ張り上げたとしよう。
さて問題です、ハンカチの上に乗ったおはじきは物理法則に従いどんな動きをするでしょうか？
「Zyrururururrrraaaaaaaaaa！！！！」
「な……っめんな！！」
こちとらなぁ！　電車の上から飛行機の上ェ！　果ては宇宙戦艦のブースター直上で戦ってきたんだよ！
バグっていきなり奈落の落とし穴が生成される平原に比べりゃあなぁ……いきなりテーブルクロス引きされた程度で俺が屈すると思うな！！
「慣性をくれてありがとよっ！」
一秒前まで俺がいた場所が急激に膨れ上がり、それに呼応するように赤溜まりが一点へと集まっていく。
擬似的な足払い状態となり、頭から地面に落ちようとしている天地反転の身体をそれでも支えんと左手で地面を叩く。右手はどうしたのか？　そりゃお前大事な右手で胸を叩くのさ。

「見さらせ！　習得時間四日ァ！　累計死亡回数四十三回と半死半生一回のぉ……！！」

必殺ぅ……！

「過剰伝達連続バク転（オーバーフロー・バックホイール）！！」

なお、あくまでもスキルアシスト無しでの習得時間なのでスキルのアシスト有りなら三回くらいで習得しました。

瞬刻視界（モーメントサイト）起動、スローモーションの世界の中でパックリと開かれた竜骸の胸部が俺を喰らわんと大口を開く姿を一瞬の世界の中で目撃し……次の瞬間にはスローモーションだからこそまともに見える、だが実際にはエムル曰く「ぎゃぁぁあああキモいですわぁぁぁ！！」の一言で切り捨てられた人間大回転で死亡圏内から脱出する。
いやいや、ちょっと体操選手の連続バク転を倍速にしただけじゃん……俺以外の世界は等速だからギョルンギョルン回る半裸が高速で後ろに下がっていく光景になるわけだが。

「はいフィニーッシュ！！」

体操選手の動きを頑張ってトレースした二倍速バック宙返りで体勢を立て直し、その姿を再び固定させた貪る大赤依を睨め付ける。
すぐさま封雷の撃鉄・災を解除して……チッ、十秒経過していたか。
減った体力を回復しようにも神秘「愚者」のせいでコイントスを強いられる、ここに来て俺（サンラク）の弱みが表に出て来たな……やっぱり、長期的に守勢に回ると弱い。あと片手での剣スキル！！
過剰伝達（オーバーフロー）が無くとも、鍛え揃えてきたスキルがあれば距離を詰める速度に支障はない。

フリットフロートを絡めた空中機動でヒビだらけの骨（赤）が見えている貪る大赤依の首にアラドヴァル・リビルドを叩きつける。

「……おおっ？」

あっさりと落ちた竜骸の首に、一瞬驚いたものの……奴の足元に落ちた首がべちゃりと地面に落ちて赤溜まりになったのを目撃し、納得する。

「これ無理ゲーでは？」

部位破壊が意味を成さない、首を落としたところで赤溜まりになると言うことは先程の溜まり化をすればまた完全復活すると言うことだ。

「く……」

後衛と意見交換の必要がある、一旦休止符を入れるしかない、か……

致命秘奥【ウツロウミカガミ】起動、これまでに稼いだヘイトを全て切り離して距離を離す。ハンドサインでディープスローターを呼んでかつて森人族が住んでいたのだろう廃屋の一つに飛び込んで作戦会議を開く。

「おいおい……男女二人、密室、吊り橋効果……何も起きないはずもなくぅ！？」

「多分Ｒ１８でもゴアな方のフラグしか立ってないぞ」

サメ映画とかゾンビ映画とかそっち系な、壁をぶち抜いて怪物が襲

ってくる奴だ。

「さて……ぶっちゃけ、どう見る？」

「力押しで倒すのは無理でしょぉ、そもそも怯みこそするけどダメージが入ってるのかどうかすら分かんないしねぇ……マグロ？」

「全身赤身だしな……脂身無さそうだけど」

となるとギミック系か？　いや、その可能性は低いだろう。最大四十五人でやる事が大縄跳び、をこのゲームがやるとは考えづらい。レイドボス、つまりウェザエモンとは違い再度の戦闘が確約された存在である以上「攻略法」が存在する事は確かなんだが……

「なぁ、確かお前あの液状化した大赤依に攻撃したんだよな」

「んー……それなりの火力を叩きつけたんだけどぉ、倒せたってぇ感じはしなかったかなぁ……」

オーケーフラットマイハート、そういう方言だと納得するんだマイハート。許容の精神は大事だ、じゃないとオンゲなんてやってられない。

「……詰みでは？」

「おいおい、ピストンの途中で中断するのは生殺しってやつだよぉ……？　とはいえ、その結論だと頭数を増やしてマワしても勝てないって事になるしぃ……」

やはり何か攻略法がある、と？

言動はパッパラパーだが頭の方はちゃんと機能しているようだな、アウトプットが全てピンク色のクソプリンターだが。
「んんん……ねぇねぇサンラクくぅん、この私のマスターフィンガーにその身を委ねてみる気は無いかぁい……？」
「は？」
「おいおいそんな目で見るなよ、涙を流して濡れちゃうじゃないか」
類だよね？

「ったく……呉越同舟にしたって悪魔と相乗りしてる気分だが……やってやろうじゃねーか！」
その世界観を楽しむのもゲーマーの華、それと同時に敵の全てをシステム的に明かすのもゲーマーの華って奴だ。
百花繚乱だな、これだからゲームはやめられないってなァ！！
「検証の時間だ！！」

竜よ、竜よ！　其の四（後書き）

ユニークモンスターは挑戦プレイヤーやＮＰＣの数でステータスや攻略法が変動する

レイドモンスターは性能据え置きではあるが理論上は一人でも倒せる攻略法を持つ

二つ名系モンスターは単純にスペックが強化されてるので実力で勝てないなら一人だろうが百人だろうが叩きのめす

竜よ、竜よ！　其の五（前書き）

筆は乗ってもスケジュールは詰まっていく世の無常……

竜よ、竜よ！　其の五

「ＱｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏＯＯＯＯＯ！！！」

「お前が……三つ目（ラスト）だ！！」

第一に複数の小型恐竜（ラプトル）の胴体が接続された頭。
第二に大型翼竜（コアトル）の翼を多分虫か何かの胴体にくっつけた頭。
そして今、第三のティラノ頭……取り込まれたのだろう森人族の身体を頭部の左半分から生やし、右半分は角か何かがびっしりと生えた動けぬそれにとどめを刺す。

「……まぁ、爽快感は無いよなぁ」

ついさっきまで人と同じように振舞っていたＮＰＣのなれ果てが形を崩して潰れていく光景に口を曲げつつ、検証の第一段階を達成した事にほんの少しだけ気を緩める。
そしてすぐさま勝利の余韻に緩んだ兜の緒を締め直して貪る大赤依、その本体の観測を開始する。

「まーた赤溜まり攻撃か……だが！」

好都合だ。
爆ぜ、拡散した赤色の溜まりからまたしてもキメラ分体が生み出され始める。
最初にこれを見た時は色々それどころではなかったが……観察し、考察する前提で見れば見えてくるものがある。

「ディープスローター！！」

「こっちでも確認したよぉー！」

奴の説が当たったわけだ、ムカつくが認める他ない。
見ればそこには翼竜の首が生えた森人族の下半身があり、大量の小型恐竜の頭だけがくっついたクソみたいなウニがあったり……あぁ、だがその中に一際目立つはずの「ティラノの首」も、「男性型の森人族」も存在していない。

「よう、お前……ストックが切れるとどうなるんだ？　なぁ！！」

確証は持てない、別に弾切れしたってレイドボス性能なら殴れば相手は死ぬのだからこれ自体意味の無い行いである可能性も捨てきれない。
だが現状集められる情報ではこれを通していくしか方法はない。そもそも勝つ可能性の方が低いのだから、躊躇うだけ無駄だろう。清水の舞台からバンジーだ。

「だぁあ邪魔っ！！」

冥王の鏡盾を放り投げ、両手で握ったアラドヴァル・リビルドで足元から伸びた多分恐竜の腕を地面ごと突き刺す。おっとキメラ分体が沈み始めたな、よくよく見れば結構兆候あるじゃん。やっぱ冷静な判断に基づいた観察って大事だね。
踏みつけている赤溜まりの隆起から出現地点を割り出し、一帯の赤が一点に集まる瞬間を見て跳躍、フリットフロートを起動して空中をバック宙返りで跳びながら距離を離す。

「種が割れれば怖かねーんだよ！」
「種……つまりチャイルド……ごほん、【ディストーション・ヘイズ】！！」
今この瞬間ほど正眼の鳥面の目力に感謝したことはないだろう。眼力だけであの変態を牽制できるとか百万の追加ＶＩＴよりぶっ壊れ能力だぜ、ていうかあいつマジで先にぶっ飛ばしてやろうか……
「サンラクくぅーん！　後ろ！　後ろーっ！！」
「わぁーってるっての！」
だから冥王の鏡盾を捨てた場所まで後退したんだろうが！
拾い上げた大楯と体の動きを連動させ、千切れかけの首をビッタンビッタンさせながら突進してきた貪る大赤依の身体に斜め方向から盾を叩きつける。真正面から受け止めれば質量と運動エネルギーの全てを受け止めることとなり死ぬわけだが、軌道がそれていれば奴と比べれば何十分の一ともわからぬ軽い俺の身体は弾き飛ばされ、死亡圏内から逃れることができる。
冥王の鏡盾をインベントリに格納しつつ、インベントリアに１２個（1ダース）を１２セット（1グロス）用意した回復ポーションを使用する。ミス、ミス、ミス、成功、ミス、ミス……クソ乱数かよ。
「まぁいい、八割保てりゃ削り殺されることはなかろうよ……！」
元より守勢前提のチキンプレイだ、二時間や三時間で倒せるとは思っていない。お前プレイヤー三人＋ＮＰＣ二匹で倒したリュカオーン分身やらソロ討伐した金晶独蠍（ゴールディー・スコーピオン）やらなんかは一晩かかったんだぞ、フルダイバーなめんなよ。

「オラとっとと分体出せ！　出した端からぶつ切りにしてやる！！」

あっ、肉種はやめてあああ育っちゃーーう！！

「安らかに眠れ……つーかマジ眠ってて……」

最後のキメラ分体、ティラノの胴体に大量のラプトルの首ともう一人の森人族の上半身が生えた怪物が地面に沈んだのを見つめながらそう呟く。くそう……見た目通りのタフネスしやがって……まぁ二人がかりで倒せたってことは弱体化……いや違うな、食われる直前の体力か何かを参照してるのか？　そうなると首が三つむしられた時点での胴体の体力ってことか？　そら二人がかりでも倒せるわな、死にかけじゃねーか。

「おいディープスローター、ＭＰは大丈夫なのか」

「おいおいサンラクくぅん……魔法職はＭＰが尽きたら盾にすらなれない障害物になるんだぜ……？　ああでも、穴や棒はあるわけだしドール的な需要が……」

「キルしなければセーフ」

「待ってサンラクくん二割削れた」

おっと、殺意で力が篭ったか。
ちろちろと執拗に瓶の口を舐めるアホを無視しつつ、俺は残弾を吐き出し切ったのだろう貪る大赤依を見る。
奴が出したキメラ分体を倒すたびに、その次の出現では使用されるパーツやそもそものキメラ分体の総数が減少していた。そして先ほどのラプトルヘッズティラノｗｉｔｈ森人族一体のみの出現を攻略したことで、奴が喰ったのだろうモンスターのストックは尽きたと見ていい。

さてここからどうしたものか、という話ではあるのだが……レイドモンスターというのは得てして段階、形態、フェーズを持つと相場が決まっているのだ。特定アイテムが絡むのはシナリオ上のラスボスや中ボスの特権なので、レイドボスの場合は体力の変動や特定行動による条件達成で見た目、モーション、ステータスの変化が起きるのがセオリーだ。
そう考えると、明らかに暴食系モンスターである貪る大赤依の胃の中をからっぽにした、という行動は次段階への移行としては有力である可能性が高く………

そしてその仮説に対して貪る大赤依は行動で返答した。

「ＶａＲｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒａａａａａａａａａａａＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！」

「うおっ」

「血が出るのは最初の一回じゃなぁい？　あっ焦げりゅう！」

真横に突き出したアラドヴァル・リビルドの剣の腹がじゅっ、と何か焼肉パーティしたのを手応えで感じつつ、絶叫とともに全身から血のように己の身体を撒き散らし始めた竜骸を睨み据える。

「なに……うをぉ！？」

そもそも貪る大赤依は竜の姿をしているわけだが、翼が生えた……いわゆる火を噴いて空を飛ぶタイプのドラゴン、というわけではない。いやそりゃ全身赤一色でいたるところ損傷しているってのもあるが……なんだろうな、どう見ても水棲生物なんだよね。

っていうかあんまり触れないようにしてたけど確か一匹、プレイヤーが干渉する前に死んでたドラゴンがいるって聞いたんですけど……狂える大群「青」が深海で封印されてることを鑑みてもあなたですよねエルドランザさん。

まぁそれに関しては今はいい、ストーリー的考察はこのシャンフロにおいてゲーム的考察に直結するわけだがエルドランザの死因は現状では重要度がそう高くはない。重要なのは奴が水棲生物的特徴……つまりエラやらヒレやらをもっているということが重要だ。

「なぁ、あれで叩かれたらどうなると思う？」

「思いっきりスナック菓子に張り手したみたいになるんじゃない？」

木っ端微塵ですね、はい。

奴の体から吹き出した赤色の飛沫は、ぐじゅぐじゅとやはり液体と固体の中間を思わせる蠢動を伴って奴の肉体、その輪郭を形成していた体のパーツを肥大化させ始めたのだ。というか頭が六つに増え

てるように見えるんですが……

「おいセクハラフィンガー、お前の立案した対処でああなったんだが次善策は？」

「逝(イ)かないように寸止めで焦らしプレイかな、あっ頬がウェルダンになっちゃう！！」

アラドヴァル・リビルド……よもやこんな使い道があったとは。

竜よ、竜よ！　其の五（後書き）

要するに椅子取りゲーム、失業した奴は今就職してるやつから職業を奪い取るしかないのだ

竜よ、竜よ！　其の六

青竜エルドランザは水棲生物としての特徴を多く持つドラゴンだ。
前脚は肘の先から鯨の鰭に似た形状になっており、その鰭からは刃物のような鱗が生えている。
だが今その前脚は今や奴の胴体よりも巨大に肥大化し、だと言うのに肥大化前と何ら遜色ない速度で俺たちへと襲いかかる。

「あっぷ……デカい看板が風で飛んで来たみたいな……！？」

「まぁドラゴンだしねぇ……迸るパトスを吐き出したくなっても仕方ないのかな？」

「六連パトスは勘弁して欲しいんだがぁ！？」

「パパパパパパトス」

ちょっと面白かった。いやそれよりも増えた首が全てブレスを吐き出し始めたのがヤバい。いや、息吹(ブレス)っていうか只の嘔吐(ゲロビーム)なのだが……要するに吐き出してるのは奴の身体の一部な訳で。
裂けた喉からも漏れる赤色がもう何度目かも分からぬほどにエルフの里の地を汚染していく、只先程までと違う点があるとするなら……

「よく分身の術とか使って一人でリンカーン条件満たす系のやつあるけどさ、あれって虚しくならないのかな？　自分の顔に囲まれながら致すわけなんだけど」

「セクハラしないと死ぬの？」

「死ぬね、ライフワークだもの」

「なら死ね！」

「やっぱりネクロ趣味なんですかぁー？！」

赤溜まりから生えた竜骸の七本目の首による噛み付き攻撃を互いに回避しつつ駆け出す。

見渡せばそこら中に尻尾が、鰭が、頭が……見境なく、いいやむしろ身(み)境なく乱立していた。

胃の中身を吐き出し切ったら今度は自分を増やすってどういう事なんだよチクショー！！

「おい大丈夫なのかディープスローター！」

俺はまだいい、赤溜まりは潰れて空気が抜けた布団みたいな感触なので気を抜かなければ足を取られることもないし、それを差し引いても回避行動を続けられるだけのステータスがある。

だが奴は魔法職、それも魔法戦士とかでもない最上位職業「賢者」だ。それ即ち純魔の最高位、打てば潰れる後衛職ってことに他ならない。

もはやフィールドそのものが敵性と言ってもいい、ヘイトを単独で集めきることは不可能だ。仮に大暴れして注目を集めに集めたとしても絶対にディープスローターにもヘイトは向く。

そして今、貪る大赤依の出力器官は無尽蔵に思えるほど増殖している。正直今すぐにでも死んでいただきたいのだが、奴が欠ければ俺

もジリ貧から詰みに移行するしかない。
だが、奴から返ってきた答えは弱音や諦めではなかった。
「オイオイ……確かに私は魔法職だけどさぁ……こいつはただの純魔じゃない、それは君が一番知ってるはずだろサンラクくぅぅん？」
「はぁ？　……ちょっと待て」
まさかそれ見てくれだけを模倣したんじゃなくて、まさか……
「小杖二丁流……んで、このゲームにも存在するんだよぉ？　魔法由来の近接攻撃手段がさあ……！　【二重詠唱（デュアルスペル）】　【マギテリアル・ブレード】！！」
奴の持つ小杖（ワンド）が魔法のエフェクトを放ち、そしてそれは杖から離れることなく持ち手と垂直に……まさしく刃の如く固定された状態で発動する。
フォン、と空気を裂いて魔力の刀身を備えた小杖二本を構える姿は、激しい既視感と戦士の気配を同時に俺へと感じさせた。
「そしてぇ……強化魔法と近接職で鍛えたスキルを組み合わせればぁ……！　スペクリ版サンラクくんリスペクト「近接格闘魔術師（フロントアーツ・マジシャン）」の役割模倣（ロールプレイ）ってわけさぁ！」
振るわれた魔力の剣がディープスローターに襲いかからんとする貪る大赤依の増殖首に叩きつけられる。
その足取りは後衛職とは思えない程に軽やかで、それはまさしくスペル・クリエイション・オンライン時代に作った俺のアバターの動きそのものであった。

「え、お前他ゲーで俺の模倣ビルド作ってたの……？」

「あれ普通に感心されると思ったんだけどなぁ！？」

いや、これが秋津茜とかがやったんなら照れ臭くもなったりするけどさ……お前じゃん？　なんか個人情報抜き取られてそうで怖いっつーか……いや普通に引いてる。

「……おかしい………のテクが通用しないなんて……」

「そのテクを向ける相手は俺じゃないんだが、なぁっ！」

イエス、アラドヴァル。今がなんであれ、素体(エルドランザ)の相性をそのまま引き継いでいる貪る大赤依にはアラドヴァルの炎が極めて効果的だ。流石に一太刀にて両断、とはいかないが単独で三十回斬れば首を落とせるなら上等だろう。問題は先ほどの……現在も含めて便宜上第一、第二形態と呼ぶが……第一形態時とは異なり第二形態時は貪る大赤依本体が普通に動ける、という点だ。

「ＶａａａａａａａｏｏｏＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！」

「くっ……セルフで水場を作りましたってか！？　ふざけんな水深１０センチもない赤溜まりで潜ってんじゃねーよ！」

見た目上は泳いでるだけでこれ単に力瘤を動かしてるのと大差ないだろ。だがこちらも水中から奇襲するモンスターのように対処しなければならないのが厄介だ、いつだってプレイヤーが干渉できない領域に逃げ込むモンスターはクソの冠を戴く宿命なのだから。

まるで水中から跳ね上がるかのように足元から貪る大赤依が現れる。だが先程とは異なり、テーブルクロス引きの如く足場を吸い込むモーションではない。
地に足ついて対処できるなら逃走以外の択も見えてくる。アラドヴァル・リビルドを両手でがっちりと強く握り、屈んだ俺の真上を通過する貪る大赤依の腹部……胸部同様に何らかの攻撃で酷く破損した腹部に渾身の力を込めてアラドヴァル・リビルドを突き刺す！！

「ぬ、くぉぉお！！？」

深く突き刺したわけではない、だがそれでも身体ごと後ろに引っ張られそうな力に全力で抗って灼熱の黒剣を前へと振り抜く。
櫂で激流を縦に割いたような、抵抗自体はあるのだがヌルッと進むような……そんな形容のしがたい感触と共にアラドヴァルの刃が貪る大赤依の股間辺りから外へと逃れ出る。
傷自体は浅いが、確かに一太刀を本体へと浴びせかける事に成功した。後ろの方で「ああっ！　多分エルドランザのチンが単品ツーセットに！」とかアホな怪文が聞こえてきたが、見た限りこいつ生殖器が見当たらないんだが……メス？

「まぁ、たった一撃で決定打になるとは思っちゃいないが……！」

真後ろで赤溜まりへと飛び込んだ貪る大赤依が派手な真紅の飛沫を立てて再び潜航する。原理的には再融合、が正しいんだろうが見た目重点だ。

「さぁーて……今度はどうすりゃいいんだ……？」

斬っても焼いても、次々と増えていく訳だが……これストック無限

ではないかという疑惑が大きくなっているのだけども。そこんとこどうなんです？

「「「Verrrarralalalalalalalalalaaaaaa！！！！」」」

すまん、日本語がダメならせめて英語で頼む。

二十分くらいして、再び廃屋に避難した俺とディープスローターは共通見解として一つの答えを導き出した。

「これ耐久だな？」

「同意するよぉ……流石に、四方八方から赤黒くて太くて大っきな剛直（くび）に囲まれるのはつらいねぇ……ところで関係ない話だけどドラゴンって爬虫類的存在だから実質あれは亀の頭と言ってもいいんじゃないかなぁ……？」

「魚類だろアレ」

「……いや、亀と」

「魚類だよアレ」

「……海老反ってる！　逞しいのが海老反ってるよサンラクくぅん！」

「魚類っつってんだろーが甲殻類じゃねーか！！」

「んあああバァァァァァベキュゥゥゥゥ！！」

傷口にチリペッパーでもねじ込んでやろうか……

「それはそれとしてぇ……ちょっとまずいかもしれないよサンラクくぅん……」

「全部お前が投げてきた豪速球じゃねーか……あン？」

ディープスローターが指差した先を見れば、そこには廃屋故に壁にも床にも存在する隙間からじゅるじゅると浸水するかのように溢れ出す真っ赤な……

「……っ！！」

朽ちかけの扉を蹴り飛ばし、外へと飛び出せば先ほどまでは赤溜まりの圏外であったはずの、かつて森人族達が住んでいた居住区にまで真っ赤な溜まりが広がっている光景が。

「範囲が拡大してる……？」

「サンラクくぅん……良い知らせと、悪い知らせと、さらに悪い知らせ……どれから聞きたいかなぁ？」

「当ててやるよ。良い知らせは恐らく時間耐久であること、悪い知らせは現在進行形で赤溜まりが拡大してる事、さらに悪い知らせは……」

見りゃ分かるさ。

「増殖体が目測だけでも三倍になったってことか」

「それが悪い知らせだねぇ。一番悪い知らせはぁ……このままだと、覚醒の祭壇にまで届きかねないって事さぁ……」

「嗚呼……それは……」

最悪の知らせだ。

竜よ、竜よ！　其の六（後書き）

ディプスロさんはスキル系統を充実させた後に例のクスリをガブ飲みしてレベル１から純魔をやり直した狂気の近接魔法職

覚醒の祭壇は現状この森人族の里にあるもの以外確認されていない、もしも……もしも貪る大赤依の赤溜まりの範囲が覚醒の祭壇にまで届いてしまったな的としたら。

「ディープスローター、覚醒の祭壇が破壊不可オブジェクトの可能性ってあるか？」

「多分壊れるねぇ……このゲーム、重要なフラグだったりは代用を新規で作って補うからねぇ……」

オイオイオイオイ、森人族を守る為に残った筈が、全プレイヤーのレベルキャップ開放を守る為の最終防衛ラインに強制ジョブチェンジかよ。

「……ヘイト源が覚醒の祭壇方面から遠ざかれば時間稼ぎにはなるか？」

「結局のところは侵食範囲の限界次第だけどぉ……全部の頭やら鰭やらが逆方向を向いていれば破壊される可能性は減るだろうねぇ」

言うだけなら簡単だが、この前提を満たすためにするべき行動がどれだけ危険かは俺もディープスローターも分かっている。

即ち敵陣ど真ん中でノーミス時間稼ぎ……それも、制限時間は分からず回復すら困難な状況で、だ。

「腹括るしかないか……」

「亀甲縛りで？」

「何なの？　亀好きなの？」

「亀って凄いよね、甲羅も頭もエロパーツなんだぜ？　アイデンティティの八割がエロスで構成された生物とか完全生命体じゃないかぁ……」

「亀が今の話を聞いたら産卵じゃなくても涙を流すだろうよ」

こいつに気を引き締めるよう要求した俺がアホだった、だが時間がないので理性ガバガバの変態も投下するしかない。

「選り取り見取りに撫で斬りだぁぁぁ！！」

「ハーレムもののAVかなーっ！？」

斬る、避ける、斬る、斬る、避ける、避ける、避ける、避ける、避ける……………

「物量！！！！」

魂の叫びであった。自覚できるほど魂のこもったシャウトであった。
とりあえず十本くらい首を斬り落としている筈なのだが、目測でその倍の数は首が増えている。
少なくとも竜骸のパーツとして形を持った「赤」は触れても大丈夫そうなので遠慮なく踏みつけて回避の助けとしているが、それにしたって量が多すぎる。

「生きてるか変態！」

「戦闘中に悦ばすのやめてほしいんだけどぉー！？」

「生きてるのか、残念」

口から赤い吐瀉を撒き散らしながら首を突っ込んで来た竜骸の鼻頭を踏みつけて跳躍、さらに空中にいる俺を噛み捉えんとした首共を足場にして上へと駆け昇る。
流石に数十メートル跳躍、とはいかないが五メートルも跳べばこの地獄絵図の全体図が見えるというものだ。

「侵食範囲は……ギリギリ踏みとどまってるってところか」

大赤依の赤色と、草の緑色の境界線はギリギリ居住区で踏みとどまっている。やはり覚醒の祭壇から離れた場所で俺とディープスローターが暴れているのは無駄ではなかったようだ。
おっ、増殖した尻尾にホームランされたディープスローターが目の前を通過した。死んだ？　死んだ？

「やぁ、貴方の心にシューティングスタァァァァァァァァァァァ……」

チッ、元気そうだな……というかしぶと過ぎるだろあいつ。かれこれ八回くらい致命傷食らってないか？

「おっ、着地狩り(出迎え)ご苦労」

滑り台の如く、鱗の形が魚鱗に近いが故に突起の少ない竜骸の首を滑り降りつつ周囲に視線を向けて次の行動を算出する。
正面には台風で吹っ飛ばされた看板みたいに巨大な鰭前脚、左右からはゲロビ、後ろには滑り降りるのに使った首……うん、回避一択。

「くっそがぁ……袋叩きにされてたまるかぁっ！！」

逃走経路は空しかない、だがスキルのリキャストが終わっていない。リキャストタイムが半分だからと言って、ノータイムというわけではないのだ。
（主に変態がうるさくなる的な理由で）使いたくなかったがインベントリア・エスケープを使うしかない、か。

タイミングを見計らって……ここだっ

「【転送：格納空間(エンタートラベル)】！！」

『周囲五メートル以内に敵対関係のモンスターがいるため使用できません』

「えっ」

えっ

「あぁぁぁまちぃぃぃぃぁぁぁあああ！？」

全身から脂汗が噴き出したかのような焦燥、余裕という名の化けの皮が剥がれて後に残るは死を待つだけの半裸……くっ、あの変態より先に死んでたまるかぁぁぁあ！！

意識がそれを承認するよりも速い須臾の一瞬で思考はこの状況から逃れるための唯一の方法を導き出す。
このゲームを始めてからずっと慣らしてきた高速ウィンドウ操作でインベントリアを……今回のサイレント修正で超ぶっ壊れアクセサリーからぶっ壊れアクセサリーに格下げしたインベントリアからアイテムを引っ張り出す。

視界が赤で埋まっていく、四方が隙間なく増殖体で埋め尽くされ、それでも見上げた先には最上の点を歩み越えた月……

「【瞬間転移(アポオオオオト)】！！」

人の観点からすれば五メートル、神の視点から見れば僅かな座標ズレ。だがそれでもそんな僅かのズレが俺の命を救った。

防波堤に突撃した白波が飛沫と散るように、四方八方から俺へと殺到した貪る大赤依の増殖体達が互いに互いの運動エネルギーで傷つけ合う。

瑠璃天の星外套を風に揺らしながら拾った命をまた捨てるようなドジを踏まぬよう、それでいてサイレント修正によって死にかけた鬱憤を晴らすべく、上から下へと落ちる過程で両足を揃えた俺は空中で屈伸するかのように膝を曲げて足に力を込める。

「くたばれやぁぁぁあ！！」

名付けて重力加算(プラスグラビティ)八つ当たり飛び蹴り(エアドロップ)……！

そっかぁ、ダイレクトに発動条件を弄ってきたかぁ……でもなぁ天地　律、範囲制限をつけたとしても戦闘中に使える、って時点でぶっ壊れは確定なんだぞ。五メートル距離を離せばジークヴルムのブレスだって完全回避可能で、それを差し引いても利便性自体は損なわれていない。

「だがそれはそれ……！！」

死にかけた怒りは目の前のサンドバッグで晴らすんだよ！！
両足をインパクトの瞬間に全力で伸ばし、激突の威力を高めると共に跳躍の為の動力とする。

「仕切直しできりゃ、対処でききんだよ……！」

グラビティゼロ起動！　こちらへ噛み付いてきた増殖首に足裏を接触させ、重力処理方向を変える！　さらにライオットアクセルで体力を削ってＡＧＩ確保！　首に触れる足裏をステップで制御して重力処理方向を切り替えつつ落ち、進み、登る！

宙返りでグラビティゼロの適用を切って落ちつつ、下から俺を切り裂くように斜め斬りに振るわれた巨大前鰭の上に着地、一歩で跳躍してようやくリキャストが終了したフリットフロートで空中ジャンプ。

「詰めが甘いんだよ！！」

「いやあれは百人が百人詰み状況って言うと思うけどぉ？」

「俺の友達ならあの数倍は鬼畜生な状況を強いてくるぞ」

「性的交渉？　性的交渉を前提とした友人関係なんです！？　私もなりたぁーい！」

はいアラドヴァル

「左頬肉がウェルダァァァン！」

網に焦げ付いた肉になるまで焼いてくれようか。

だがしかし、常日頃から水晶群蠍(クリスタル・スコーピオン)の球技大会に球として参加していた甲斐があったと言うべきか。

最近あいつら、ＡＩが学習進化したのか上方向も塞いでくるからなぁ……他のプレイヤーには申し訳ないけどゆくゆくは同じ結果になってたろうし、インベントリアをゲットしてから出直してきてくれ。

「さて……これは生き延びた、と考えていいのかな？」
「痙攣してるねぇ……絶頂？」
「苦悶とか悶絶寄りの痙攣だろ」
「マゾならご褒美だねぇ……」
「少なくともアレの行動パターン作ったやつは間違いなくサディストだろうけどな」
「何その遠隔(リモート)ＳＭプレイ、捗(はかど)るねぇ！」
墓取(はかと)って死んでろバーベキューミート。
だが、貪る大赤依が何らかの特殊行動を起こしたのは事実だ、例えば限界まで広がっていた赤溜まりの領域が中心に現れた貪る大赤依に集まっている……だなんてあからさま過ぎるモーションだったり、な。
「……よくよく考えると、たった二人で第三形態まで行けたとか快挙じゃないか？」
「いやいや……分かって言ってるだろう？　サンラクくぅん……」
「だよなぁ…………」
……簡単過ぎる。それが第一、第二形態を経て俺とディープスローターがともに感じた結論であった。
レイドモンスターはプレイヤーが多人数で挑む事を前提としている、

それは言い換えれば下手をすれば四十五人を一撃で殲滅してもおかしくはないという事だ。

それをたった二人でこんな簡単にクリアできるはずがない、なんなら通常モンスターの群れと戦う方が死の確率は高いだろう。となれば導き出される結論は簡単だ。

「第三か、さらにその後の形態か……本番がある」

「そしてその瞬間はどうやらこの後すぐのようだねぇぇ……！」

床に広げたティッシュペーパーを、ひとかたまりにして球体にしたかのような……それを象より巨大な質量がやったならば。

グジュグジュとえも言われぬ……なんつーか、うがいの音を数千倍にしてそれをネチョっこくしたというか……

「粘液！　粘液の音ですよこれはぁ……！」

「お前ちょっと黙ってろマジで」

さぁ、第三形態……本番はここからか？

竜よ、竜よ！　其の七（後書き）

第一、第二形態がヌルい？　当たり前じゃないですかオープニング
ムービーみたいなもんですよ
全編通して耐久ゲーな貪る大赤依ですが本番は第三形態からです

神よ、獣よ！ Erythrocyte

貪る大赤依。

有機生命体を食らい、その構成物質を自身と同質のものに置換することで「貪る大赤依」の一部として吸収する。
かつて神代の時代において、神代文明を再起不可能な状態に追い詰めた「大群青（だいぐんじょう）」及び「白大神（はくたいしん）」と比べば比較的マシな部類に属するが、それでも危険な存在であることは明白である。

捕食し、置換する。だが貪る大赤依の本質はそこではない。

貪る大赤依はとある死火山の下に潜むもう一つの赤色……「焠がる大赤翅」とは異なる赤を戴く存在であり、その本質はこの世界の根幹、その片割れの赤血球が擬象化した存在である。
それ即ち新大陸側の――（レイドモンスター）に共通する「――」とのリンクこそが「――」の眷属たる新大陸側の――（レイドモンスター）が持つ最大の切り札である。

「Errrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrrr
eeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeee!!!!!」

絶叫が響く。

それは貪る大赤依の素体と成り果てた青竜エルドランザの断末魔、竜たる己が三体のモンスターに命を奪われるという事実を直視したことで発狂した哀れな竜の絶望を再現したものだ。
それは死せる肉体、その声帯が最後にはなった残滓を何の感情もない無機質な蠢動が再現しているにすぎない。だが裂け、別たれ、繋がり、混ざり合う赤い「擬き」の蠢きとリンクするかのような様相に、この場に残り戦うことを選んだ小さな者たちは顔を強張らせる。

それはまるで、幼虫が成虫へと成る直前に経る蛹のようで。増殖しすぎた大赤依の受け皿となっていた捕食対象を使い切ったことで暴走状態に陥っていた貪る大赤依。素体となった青竜エルドランザに無理やり置換しようとしたが故にサイズの肥大化、パーツの増殖、破棄された大赤依の半自律暴走を引き起こしていた怪物がついに明

確な敵意を抱く。

「Yiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii、ggaaaaaaaaaaaaaaaaaa…………!!!」

絶叫が響く。

暴走し、過剰に増殖た大赤依を一点に集中させ、敵を滅ぼすためには如何にすればいいのかを貪る大赤依は知っている。

貪る大赤依の本質は置換……だけではない。
置換、運搬……そして還元。

だがそれすらも、本質の半分に過ぎない。

「おいやばいぞ」

「杭……上から下……おいおい見なよサンラクくぅん、奴さん大地に挿入するつもりだよぉ!?」

「止め……いや無理か」

貪る大赤依の本質は血潮たるが故の奉仕、及び……大元と同一存在であるが故のバックアップにこそある。

球形の肉塊はその形を巨大な円錐に似た形へと変える。その先端は空ではなく大地を向き、緩やかな始動から加速度的な回転を帯びた

その姿はまさしくドリル。

「ピストン＋螺旋回転……人体では再現困難な動き、まさか奴の正体はバイｂ」

「アラドヴァルっ」

「うなじらめぇっ！」

貪る大赤依がそのくだらない会話の内容を理解したわけではない、だが何の偶然かその先端が大地を穿つタイミングはまるでツッコミを入れたかのようなタイミングであった。

『貪る大赤依の力が循環する――』

『赤色の記憶が渦を巻く――』

『始源解帰（PrimalRevolve）！』

血溜まりが本来の潮流へと戻るかのように、増え過ぎた血液を受け止めるだけの器にその身を委ねるように。
二人の開拓者が認識できない地の底で、赤色が根元に触れる。

次の瞬間、錐に変形した貪る大赤依が穿った大穴から、間欠泉の如く真っ赤な「赤」が噴き出した。
それだけではなく、森人族がかつて栄えた廃墟の里の至る所に、ドロリと赤色の溜まりと共に不透明な輝きを放つ結晶体が血より生え、聳え立つ。

「Qurorororororororo………」

赤色の血柱が止まる。下からのエネルギーが途切れたことでバシャリ、と地に広がった赤色が再び一点へと集結する。

最初に脚が作られた。

腹から背へと骨格が組み上げられ、肉が、皮が、鱗が段階的にそれらを覆う。

姿形は今は亡き青竜エルドランザのものだ、しかしながら先程までの姿と決定的に異なる点があるとすればそれは、死の瞬間に青竜が損なっていた損傷を、粘土か何かで大雑把に塞いだかのように何か別の生物の特徴で傷が補修されているという点。

そして何よりも、先程までのリソースの喰らい合いの結果生まれた醜い結合とは違う、明確に「用途」を理解した上で部位を増やした竜骸のなれ果てがそこにはいた。

赤色の始源が吠える、胴体から生える四つの首と、新たに獲得した二枚一組の翼腕から生えた口腔と、胴体の傷を埋めるように補填された大口……合計七つの口を震わせて、吠える。

自滅の可能性を払拭したという事実を。そして何より、眼前の小さな命二つを確実に刈り取る、という宣言を。

ビリビリと肌が炎で焼かれるかのようなプレッシャー。ゲームとはここまで進化したのか、ともう何度目かも分からない感傷は既に彼方へと消し飛んだ。

リュカオーンのような戯れの気配とは違う、ウェザエモンのような排除の気配とも、ゴルドゥニーネの煮えたぎる殺意とも異なる。

生物的な感情を感じられない、例えるなら……そう、断頭台（ギロチン）や電気椅子に悪意は存在しない。ただ物理法則に従い定められた役割を果たすだけの道具が命を奪うことに対して何らかの感情を発露することがないように、ただ俺やディープスローターの息の根を止めると

いう意思？　用途？　気配？　表現するに相応しい言葉を思いつかないが、そんな確信を今、抱いている。

「……ディープスローター、後ろから動画撮影できるか？」

「どうだろうねぇ……仮に撮れても瞬殺映像しか……来るよォ！」

「っのぁ！？」

「ぶぐっ」

第一形態の水棲生物を無理やり地上で活動させたような動きとは違う、かと言って第二形態の地上を無理やり水中と定義したかのようなデタラメとも違う。

鰭脚に追加でパーツをくっつけて「水陸両用にしました！」とでも言わんばかりの歪な脚で確かに地を蹴って進む大質量が俺とディープスローターの立っている場所へと突っ込んできた。

先程までの千切れかけ、力もろくに入らず物理法則に従って揺れる不安定な姿とは異なる骨と筋が繋がった力強い咬合がディープスローターに食らいつく。

ギリギリで回避したとはいえ、とっさの動きで回避した俺の体勢が崩れた。その瞬間、ディープスローターに噛み付いて他界他界を敢行している首以外の三本と目が合った。

「おいおい、そんな情熱的な視せ……ちょっと待てオイ、なんで口の奥が光って、んなぁぁぁぁ！！？」

せ、せめて封雷の撃鉄・災を……ダメだ、間に合わない。兎にも角にもブレスの死亡圏内から逃れなくてはならない。

「くっ……【瞬間転移（アポート）】！」

無理な姿勢へ更に重ねての瞬間移動、間違いなく数秒程隙を晒す事になるが、それでも三連ブレスなんていう即死確定の攻撃からはなんとしてでも逃れなければならない。

無理矢理ひねった首で見た視線の先、虚空に座標を移した俺はふと首を横に向けて……

尻尾から生えた五本目の首と視線を重ねた。

「ヤバ……」

あ、これダメだ。

「VoooooaaaaaaaAAAAAAAAAAAAAAARARARARARA!!!!!」

放たれた真紅の光、空中で完全にバランスを崩した状態では流石の俺も回避はできない。

身体が赤光に呑み込まれ、HPが削り取られ……

幸運の女神が微笑むことはなく、俺のHPは0まで削り切られて。

身体が、砕けて……

神よ、獣よ！　Ｅｒｙｔｈｒｏｃｙｔｅ（後書き）

・始源解帰（Primal Revolve）
レイドモンスターに共通する本気モード。それは大元への回帰であり、本来の力を発揮する解放でもある。

Ｑ．要するにどういうこと？
Ａ．
むさたん「ママー、肉体が我が制御下より離れ蠢く苦痛が耐え難いよー」
？？？「仕方ないわねぇ、私と直接リンクして許容可能な最大容量を増やした上で欠損部分を記憶領域からアウトプットした情報で補填するわね？　ほら、泣かないの……ちゃんと一人で出来るわね？」
むさたん「うん！　（殺意全開）（実質無限バンダナ）（単純火力で差をつけろ）」

余談（設定吐き出し）コーナー
神代時代におけるキルスコアランキング
三位！　お前は誰だ？　今から俺の中の俺ぇ！　貪る大赤依！！
二位！　ゲームオーバーと書いて俺と読む！　狂える大群青！！
一位！　出番は相当先だぞ、でも神代文明にトドメを刺したのは私です！　ＸＸむ白大神（はくたいしん）！！

竜よ、竜よ！　其の八

あー、死んでしまったかぁ。
第二形態はある種の伏線だったか、第三形態開始時はただの尻尾だったはずなのに、気づいたら頭が生えてやがった。
しかも第一、第二形態じゃ物理一辺倒だったのにここに来てブレス解禁ですよ、しかも生えた首全部が同時に使って来るとかもうね。

「…………い、……い……！」

しかし弱ったな、森人族が作った即興セーブポイントが畳まれた以上、最後にセーブした現存ポイントは多分スカルアヅチだ。逃げたトットリ達と合流するにしても手がかりなしで森を彷徨わなければならない。

「……おい……きろ、……ジで……！」

いやそれにしたってなんなんだあの第三形態、状況に応じてパーツの増減？　新規モーションの解放？　いや何よりあの明らかに「先に破壊しないと難易度変わらないぞ」と言わんばかりの謎結晶……あーくそ、そんな事よりあの変態より先に負けたのがめちゃくちゃ悔しい！　絶対あいつ「早漏！？　早漏なんですかぁぁあ〜〜？？？」とか煽って来るぞ……斯くなる上はＭＰＫなり京ティメットに依頼して俺の手を汚すことなく奴を始末……

「あー……エムル、さん頼む」

「お早うのお目覚めするですわキーーック！！」

「ぶげぇぇぇ！？」

腹にインパクト……っ！　ついでに地面を背に「く」の字に曲がった反動で後頭部を強打してツインパクト……っ！！
馬鹿な、スカルアヅチのベッドはこんな硬いはずが……あれ？

「サンラクサン正気に戻るですわっ！　戦いは終わってないですわーっ！」

「は？　なんでエムル？」

お前普通にパーティ離脱したはずじゃ……っていうか、いや待て俺の眼の前で繰り広げられてるこれは……

「くっ……極力接近を避けろ！　リアーヌとハルフォンの仇を……我らが故郷を取り戻すのだ！」

「ひぃっ！　こっち見たぁ！」

「逃げるな！　立ち向かうんだ！」

強いてタイトルをつけるなら「ホラーゲー耐性絶無の人達がそれでも必死に攻略してる図」だろうか。悪趣味なのは承知の上だが他人が泣き叫んでいるのを側から見るのクソ楽しいからなぁ……つまり今俺は楽しい。

だがそれはいい、今はさして重要なことではない。今一番重要な点は、ここから離脱し前線拠点を目指していたはずの森人族達が何故か貪る大赤依を相手にチクチク攻撃している、という事だ。

「どういう事だ……トットリ」

「強いて言うなら……義を見てせざるは勇無きなり、ってやつか？　それに俺が蘇生アイテムを飛ばさなきゃ普通に死んでたんだぜ？　もっとこう感謝とかだな……」

「蘇生……マジか、じゃあまだ戦闘中か！」

未だに夢オチ説が二割ほど拭えなかったのだが、トットリが腕に装備したスリングショットをコンコンと叩いているのを見て、ようやく自分が蘇生されたのだという事に気付いた。

え、何それアイテムも飛ばせるの？　クソ欲しいんだけど森人族脅せばいいの？

「いや、脅迫は一先ず置いといて……」

「脅迫？」

「置いとけ、端に置いておけ。んな事よりなんで森人族が戦ってるんだよ、あいつら故郷の奪還より生き延びる事重点だろ」

正直トットリが戻って来る可能性は僅かだが考慮していた。プレイヤーだしな、極論を言えば森人族にこだわり続ける必要性が無いわけで、初見のレイドモンスターを見たいと思ってもなんら不思議では無いと、そう考えていた。

まぁ実際は思っていた以上に没入するタイプだったらしく、まさかロールプレイの流れで戻って来るとは思わなんだ。
だが戻ってきたなら戻ってきたで、気になることがあるわけで。
「なぁオイ、まぁなんだ……エムルがここにいるのはまぁ分かる、だけどあと二人ほどお前に任せた筈なんだが……？」
「王様の方はレイモンドとラセッタ……あー、森人族の中でも比較的レベルが高い二人に任せてる、なんか狙われてる？　らしいし流石に少人数で拠点に行くのは不味いかなって」
「王様の方は？」
おいおい、その言い方だとまるで王女の方は別の扱いって事にならないか？
「お姫様の方は……あー、えーと、非常に言いづらいんだが……モンスターの、囮をだな……」
「グッジョ……げふん！　ごほん！　お前何してんの！？」
「いや今お前の口から出かけた言葉の方が驚きなんだが……」
うるせー！　「あ、事故死なら合法（ノーリスク）じゃん」とか思ってねーよ！
顔がフェアカスなのが悪いんだよフェアカスなのがよぉ！！
「お前あれだぞ？　お姫様が死んだら割とバッドエンドルートだぞ？　分かってんの？」

「戦闘中に説教は勘弁してくれ……別に見捨てたわけじゃねえし、あのお姫様なんかぶっ壊れアクセサリー持ってたから多分そう簡単には死なないぞ」

ぶっ壊れアクセサリー？

「パーティを組んだ他人のＡＧＩとＤＥＸを自身に反映するアクセサリーだとさ」

「えっ何それぶっ壊れアクセサリーじゃん」

俺一人いるだけでレイ氏やマッシブダイナマイトが超加速する超火力破壊兵器と化すんだが？　え、なにそれぶっ壊れじゃんそれに比べればインベントリアも大したこと……あるけどさ、ナーフされたからってぶっ壊れ加減がマトモになったとか思うなよ。

そもそも非生物ならほぼなんでも収納可能って時点で頭おかしいんだよつーか有機物（装備者）入ってんじゃん。

「まぁ、王家に代々伝わる〜とかそれっぽいこと言ってたから専用アイテムなんだとは思うけどな」

「あー、血筋系か……」

仮に結婚システムがあったとして王家に玉の輿したとしても、流石に使えることはないだろう。よくよく考えたらこの状況下でそのアイテム、ってもしかしてプレイヤーの歩幅にＮＰＣ側を合わせるためのアクセサリーなのか？

いや待て待て、アクセサリー談義に花咲かせてる場合じゃねーんだよ。あ、宙を舞うディープスローター……たまやぁ〜

「つーかそれを差し引いても王女ＮＰＣを囮にすんなよ……恐れ知らずか？」
「いや、だって本人が志願したし……あいつもお姫様やエリナばっかり狙うし……」
あいつ？　とやらは気になるが成る程本人の志願か…………仮に死んだとしても不慮の事故、俺悪くない、なら良いか？　良くないわ下手すりゃヴォーパル魂が下がりそうだ。あれヘタレプレイするとガンガン下がるっぽいんだよな……ソースはエムルの態度。
というか、なんでこいつはこんな余裕そうなツラをしてるんだ？ディープスローターは相変わらずＧ並の生命力で吹っ飛んでるし、森人族達は口では勇ましいセリフを吐きながらも身体は正直にチキンプレイを徹底している。
今はあまりにも弓の威力が弱すぎて貪る大赤依自身も「この雑魚どもどれから殺せばええん？」みたいな動きをしているが……あっ、成る程貧弱すぎてヘイトが分散しまくってるのか。そりゃ如何にレイドモンスターと言えど蚊を潰すのに全力ブレスは放ちたくはあるまい。
だがそのグラついた均衡も、貪る大赤依が本格的に動き出せば……例えば物理攻撃で叩き潰す方針を固めたなら絶対に犠牲者が出る。だと言うのに何故……？
「なんつーかさ、多分だけど……「森人族の大移転（イミグラント・エルフ）」にはシナリオ上のボスモンスターがいるんだよな」

「いやそれ今関係な…………え、待て……待て待て待て、お前まさか」

「実はさ、お前らと会う前にも何度か前線拠点近くまで行ったことがあんだよ。でもその度にあいつに邪魔されてさ……割とガチで逃げないとずっと追いかけて来るし……」

だったらさ、とトットリが歯を見せる凶悪な笑みを浮かべる。それと同時に、貪る大赤依の動きによるものとは異なる質量移動によって引き起こされる振動が足元から俺の思考へと届く。

「じゃあいっそ、レイドモンスターにぶつけちまえば良いんじゃねぇか、ってさ」

既に誘導は済ませているのだとトットリは言う。

後はアーフィリアを連れた二人のエルフ……エリナとヘーシュが所定の位置まで走ってそれを最終ポイントまで誘導するまでの間、森人族総出で時間稼ぎをするだけだったのだと。

そして作戦を説明する為に現場に急行してみれば、尻尾から生えた頭のブレスが直撃した俺が消し飛んでいたので、有事に備えて一つだけ持っていた蘇生アイテムで俺を蘇生させたのだと。

「あぁ、紹介するぜサンラク。奴こそこれまで数多のプレイヤーを迎え撃って、ついにはあの午後十時軍の連合討伐隊にすら勝ってみせた……」

傷(スカー)だらけの三つ首ティラノさんだ、背中に名前忘れたけど説明剣？　みたいな感じの第三騎士団ちゃんと処理してくれました？

トットリがその正体を明かすのと、爆炎を伴った三つの首を持つティラノサウルス……全身にくまなく傷を持ちながらも、勝利の果てに自分は立っているのだと、敗北の弱さとは無縁であると言わんばかりの威風堂々たる帝王（レックス）がその姿を現わすのはほぼ同時の出来事であった。

「「「グォォアアアアアアアア！！！」」」

いやこれ勝った方が俺達の敵になる奴じゃねーか！！

竜よ、竜よ！　其の八（後書き）

勇者は遅れてやってくる

トットトリ達が戻ってくるまでにそれはもうドラマティックな展開がありましたが全ユザパです。
ちなみにエムルがサンラク武勇伝を語ってトットトリに「あれこれまさか本当に二人だけで倒して俺除け者にされるんじゃ……」という猜疑心を抱かせたのも戻ってきた理由の一つ

ちなみにフェアカ……アーフィリアやエリナは森人族直伝の「木を隠すなら森の中隠密術」で離脱してます

竜よ、竜よ！　其の九（前書き）

ディプスロの台詞考えるのは鉄骨渡りに似たスリルがあって困る

出会う赤色の怪物と、傷だらけの帝王。共にカテゴリは異なれど「竜」に縁を持つ二体のモンスターが互いに牙を剥いて対峙する。

かたやレイドモンスター「貪る大赤依」、だがそれに対する三つ首ティラノ……確か名前は「ドラクルス・ディノサーベラス」だったか。奴は実際に多人数パーティを数多撃退しているという実績を持つ。

ＭｖＭの様相を呈してきた森人族の里にて、脆弱なる人類種達は戻ってきたトットリを含めた三人での緊急対策会議を開いていた。場所はいつもの廃屋、既に放課後に集まるファミレスじみた「いつもの」感を感じる場所になりつつあるな……

「早(そう)ろ」

「アラドヴァル」

「おっと待ったサンラクくん、今体力やばいからマジ勘弁」

マジかよ滅殺のチャンスじゃん、だがまぁ今はそれどころではないか。

「とりあえずトットリがとんでもない奴を引っ張って戻ってきたわけだが……兎にも角にも戦線に参加する以上はトットリにこっちの情報を共有させる」

その上で対策会議だ、第三形態に関しては検証するべきことがあまりに多いからな。

「……まぁ、怪しいのは結晶体だよねぇ」

「結局はそこに帰結するわな」

第三形態の出現と同時、この森人族の里の至る所に出現した謎のクリスタル。宝石と持て囃すにはいささか邪悪過ぎるそれは現在対策を練っている俺達のすぐ隣に一つ存在している。つーか屋内にも生えるとなると捜索が面倒だな。

「これさ、どう見ても地面から生えてるよねぇ？」

「中に何かいるな」

「自発的に出てこないって事はプレイヤーが破壊する前提だよな」

「「「………」」」

明らかに「壊してください」と言いたげな複数出現オブジェクト。明らかに「入ってます」とでも言いたげな謎の生物的シルエット。明らかに「壊すと何か起きるよ」と言わんばかりの戦闘フラグ臭。
見えてる地雷をそれでも踏めと、あの手抜き着色野郎はそう言いた

いのか。

「森人族（エルフ）がこれに対処できるか知る為にも、まずは私達で味見しなきゃならないねぇ……」

「シルエット的に……鳥？」

「いや鳥にしちゃ妙な形というか……」

――と。

「どうやら我らが三つ首君も戦いを始めたらしいな」

「どうでもいいけどあれメスだったら単純計算で七人くらい相手できるね」

「七人……？　いや、七人どころか十五人でも余裕で撃退したんじゃや」

「こんな時まで下ネタに持ち込むのマジでやめろよ……」

「え、今の下ネタなのか？」

「えっ」

「えっ」

にまぁ、とディープスロータ―の口が笑みの形になる。こ、こいつ……っ！

「ミ、ミーム汚染……！？」

「サンラクくぅん……すけべぇ……」

「くっ……頼む焼き清めてくれアラドヴァル！！」

「あばばばば！！」

クソが、深淵を覗く時深淵もまたこっちを見ているとでも言うのか……！？　馬鹿な、くそ、やはりこいつを殺して滝にでも打たれるべきか……！！

「死ねぇ！」

「はいバぁリヤー」

しゅるり、とそれの裏側へ回り込んで盾とするディープスローター。馬鹿め、その程度の硬度でアラドヴァルの熱量に対抗できるわけが……あっ

「………」

「………」

「………」

両断、とまでは行かなかったがその太さの半ばまでをばっくりと溶断された血色の結晶が静かに震え始める。

俺達（十エムル）は何を言うでもなく、ファミレスで一通り駄弁った後にレシートを持ってレジに行くような気軽さで廃屋から……

「トットリ！　よくもこの私にあんな危険な囮なんてさせ」

「Qigryyyyyyyyyyyyy！！！」

「きゃああああああああ！！？」

ええい緊急脱出！！

爆ぜる血結晶、ツンデレ全開で扉を開けたツンデレ(ヘーシュ)が超速で背を向け逃走するのに追従して俺達は廃屋から脱出する。

次の瞬間、既に崩れかけの屋根が内側から吹き飛ぶ。そしてそれを為したであろう赤い質量が大きな翼を広げて空へ飛び出した。

「QyaLaaaaaaaaaaaaa！！！」

それは鳥や虫とは異なる飛膜を持つモンスターだ。全身真っ赤ではなく黒であればカラーリング的にぴったりであっただろう。

いや？　「血」と関連付けるならむしろ相応しい色なのか？

「見なよサンラクくぅん、六枚羽だ、セラフィック蝙蝠(バット)だぜ？」

「飛行モンスターはやめろ飛行モンスターはやめろ飛行モンスターはやめろ……」

「あっ、短小(近接)……」

オイなんかニュアンスに無礼を感じたぞ。

だが分かったことがいくつかある、あの結晶体……さながらローエンアンヴァ琥珀晶のモンスター版とでも言うべき血琥珀を破壊する

と中に入ったモンスターが出てくるわけだ。
それだけなら単なる固定シンボルのエンカウントにも思えるが……
下ネタに妨害されこそすれ、今の俺はノッてるようだな。

「どうするんだいサンラククゥん……奴さんの懐を不用意にまさぐるととんだ怪物(モンスター)が出てくるようだねぇ……そう、股間(ポケット)に潜む怪物が——」

「アラドヴァルビンタ！」

「快感(んひぃ)！」

「往復！」

「悦楽(らめぇ)！」

天誅！（※正しい使用法）
体力が一割を切ってビクンビクンしているディープスローターは捨て置き、世界観的見地から導き出された考察をトットリへと告げる。

「いいかトットリ、お前が来るまで胃の中空っぽで暴走してたやつがいきなりフルパワーになったんだ。単に発狂モードだからです、でこのゲームが片付けるとは考えづらい」

「お、おう……」

「あの六羽蝙蝠の手抜きカラーリングからして貪る大赤依と同質の存在である事は明らか、第一及び第二形態と同様の性質は保持していると考えるべきだ」

「お、おう……？」

……ふぅ

「全部壊して全滅させる、以上」

「最初からそう言ってくれよな」

インテリジェンスが足りてねーぞ勇者様、でも大丈夫だ人間頭蓋の中に筋肉搭載しておけば大抵なんとかなるって古今東西のゲームが証明してる。

「ほらスタンダップ変態、やることが山積みだ」

まずあの六羽蝙蝠を倒す。
次にこのエリア全域にある水晶全てを把握する。んでそれらも同様に倒す。

そしてこれはある意味血結晶破壊以上に重要だが……

「三つ首ティラノの介護が必要だ」

「下手に死なれて食べられたらたまったもんじゃないからねぇ……」

貪る大赤依に関しては、優れた名刀を奪われる可能性を視野に入れなければならない。たしかにあの傷だらけの帝王は強いのだろう、だが相手はレイドモンスターだ。
もしも三つ首ティラノが負けたら？　あまつさえ食われて奴のキメラ分身として奴の味方になったとしたら？

「流石に無理ゲー極まりすぎだ、寄生プレイヤーを上位ティアに出荷するように丁寧な介護が必要だ」

「人数が足りないねぇ……血結晶の捜索は森人族を使うにしても、倒すところまで含めるとぉ……」

キメラ分体の強さは正直個体ごとにまちまちだ、ティラノパーツを使ってるやつはタフネスだったし、ラプトルメインのやつはあっさり倒せた。プテラ翼持ちは死ね、二度と蘇るなクソが。

「……エムル」

「【マジックエッジ】！！」

うーん、俺の思考を読んでるんですかね？　だが最高効率だ、いいね。

飛翔した魔力の刃が余裕ぶっこいて滞空していた六羽蝙蝠の顔面に命中する。

さぁ戦闘開、始……？

あっさりと身体から力が抜け、撃墜された六羽蝙蝠の姿に俺達はしばし沈黙する。

え、まさか一撃……いや生きてる、うん！　いや流石にね！　そりゃね！

「っしゃ往生せい！」

だがしかし、追い討ちで六羽蝙蝠の顔面を煌蠍(ギルタ・ブリル)の籠手で殴っただけだと言うのに、既に瀕死状態の六羽蝙蝠の姿に「あれ？　これ実は弱いんじゃ……」という疑惑が俺たちの間に漂う。そしてアガート

ラムの補正込みの鉄拳を受けてその形を崩壊させた六羽蝙蝠の姿を見たことで疑惑はほぼ確信へと至る。

「何よ、この程度なら私にだって倒せるじゃない！」

「いや待て、まだ一体だけでそう結論づけるのはまず……」

「まぁ見てなさいって、このヘーシュ様が華麗に倒してあげるわよ！」

あ、おいそんな土台からしっかりとした堅牢なフラグは……

三十秒後。

「Bmoooooooooooooooo！！！！」

「いやぁぁぁぁぁぁ助けてトットリぃぃぃ！！」

「凄いよ、即堕ちまで一分切るってリアルじゃ見れないねぇ！」

「森人族(エルフ)って……」

「なんか、ごめん」

牛とライオンとゴリラを混ぜたような怪物、まぁ一言で言えば鬼のようなモンスターに追いかけられるヘーシュを見ながら、どうやら出現モンスターの性能はランダムであることと、森人族がどうしようもなくヘタレということを再認識したのだった。

竜よ、竜よ！　其の九（後書き）

ク、クソザコイキリツンデレランチパック……

第三形態はこのクッソグロテスクなモンスターボールの中にいるポケ……モンスターを全体撃破しないと酷いことになります

ちなみに六羽蝙蝠さんですが聴力が良すぎたせいで遠くにいる傷だらけ君のマジ咆哮直撃して半分気絶してたのであっさり撃墜されましたとさ

竜よ、竜よ！　其の十

「っつーわけで、結晶の中から出て来るモンスターは雑魚もいれば強敵もいる。捜索は森人族に任せるが破壊する時はトットリかディープスローター、手が空いてる場合のみ俺が近くにいることが条件だ」

ゴリラにライオンのたてがみを生やし、牛の角を生やした……場所が場所なら最凶のローキック猫パンチャーになりかねない怪物をサバンナ仕込みのローキックでトドメを刺した俺は続々と集まってきた森人族達に説明する。

「エムル、そこのお……殿下をお連れして指定ポイントまで連れて行ってくれ、その後は遊撃として戦況が不利な場所に加勢だ」

「はいなっ！」

「皆、俺は皆の決心を全力で支援しようと思っているし、もうこれ以上誰一人として欠けさせるつもりもない。全員でこの場所を取り返して……まぁこのままじゃ何もかも足りないから一度前線拠点に戻ってからになるけど、森人族の里を復興させようぜ！」

応、と森人族達の声が辺りへと響く。

……遠くの方から怒りを帯びた「傷だらけ」の咆哮が聞こえて全員ビクゥ！　とヘタレったのはまぁ見逃してやるよ。

「さて、どうやら俺の助けを求める声がしたようだし……頼むぞト

ットリ」

「そりゃ頑張るけどよ……むしろお前の方が大丈夫なのか？」

「任せろ、ＭｖＭ誘発に関しちゃ腕に覚えがある」

むしろこの作戦に関してはトットリ達の方が重要な部分を担っている、たかが介護プレイで時間稼ぎをするくらいどうってことはない。

「ねぇ私にはぁ？　なにかこう、いきり立たせるような激励とかないのぉ？」

「なるべく多くの敵だけを巻き込んで自爆してくれ」

「おいおい流石の私も泣きそうだぜ……？　まぁいいや、この戦いが上手いこと行ったらデートしようぜサンラクくぅぅん……？」

「デッドにならしてやるよ」

「殺し愛……！」

くねくね気持ち悪くなったディープスローターはさておき、非常に気は進まないが俺はフェアーフィリアの方へと身体を向ける。

「殿下、まさか御身自ら囮を買って出たと聞いた時は耳を疑いましたが……どうか御自愛を。これよりは激戦となりますゆえ、どうか陛下と共にお隠れを」

「えぇ……ですがサンラク様、最後に」

「ん？……じゃない、なんでしょう」

「どうか御武運を、貴方は私の英雄です！」

『どうか……ご武運を、貴方は私の英雄ですっ！』

「んぇっぐ」

それお前の魔の手から最後まで逃げ切ったけど途中退場させられたサブヒロインのストーリー上最後の台詞ゥーーーーーーッ！！

お前なぁーっ！　お前がなぁーっ！　それを言うのはタブーだろうがよーっ！！

フェアカスがド畜生すぎて相対的に人気投票ブッチギリの位置を獲得したサブヒロインちゃんをなーっ！　お前ーっ！　お前を庇って（お前の盾にされて）ラスボスに呪われたサブヒロインを無人島に置き去りにしたお前がなぁぁーっ！！！！

今世紀最大規模で心に吹き荒れたタイフーンをなんとか顔に出さぬよう渾身の力を込めて内側に抑え留め、かろうじてロールプレイを保った声と共に頭を下げる。

「みっ……みニァ、ミにアまる、光栄デス……」

許されない、これは許されないぞ天地　律……お前、これはお前……シャラハールちゃんに投票された三千五百人の英霊達がキレる案件だぞ……！　ちなみに俺もシャラハールちゃんに投票しました。

っしゃオラ！　俄然殺る気が湧いてきたぞ！　天地　律もアーフィリアも殴れないならもうお前をフルボッコにするしかねーよなぁ！？

「よぉーし全員行動開始ィ！　あの赤一色野郎をぶちのめすぞ！！」

ゲームのモチベーションは怒りで代用し得る、そう確信しながら俺

は今この森人族の里で最も危険な場所と言っていい里外れの広大な草原フィールドへとやって来ていた。

トットリと森人族、エムルが合流したとは言えプレイヤーが五人にも満たないことは事実、三人のプレイヤーを限界まで酷使しなければこの戦いに勝つことは出来ないが、それでも俺という戦力の三分の一を投下しなければならない最重要事項がある。

「ＰｉＫｙａｋｙａｋｙａｋｙａ！！」

「飛び入り参加だオラァ！！」

先駆け一発、三つある首の内一つに噛み付いた竜の目ん玉へ銀光（アガートラム）の鉄拳を叩きつける。

そして装備を変更しつつインベントリアから取り出したＨＰ回復のポーションを三つ首ティラノ……「傷だらけ（スカー）」のダメージエフェクトが噴き出す場所へと投げつける。

「俺の奢りだ、礼はいらんぞ」

「「「グルルルルル……」」」

突然の乱入者にこちらを睨む「傷だらけ（スカー）」、だが人間などという小虫よりも優先すべき敵が目の前にいるのだから猫の手ならぬ人の手は有効に使えよな？

「介護プレイだ、主役（ＭＶＰ）は譲ってやるからどうぞ存分に火力貢献してくれ」

さぁ、見せてやるよ貪る大赤依。金魚の糞Ｌｖ．９９Ｅｘｔｅｎｄ

のモンスターアシスト術をなぁ！！

「「「グロロァァァァ！！」」」

三つが一つに重なった咆哮と共に、「傷だらけ（スカー）」が貪る大赤依へと突撃する。単純、故にシンプルな計算で叩き出される物理ダメージが貪る大赤依の身体を後ろへと押し込む。
だが文字通り手数口数は貪る大赤依が上回っている、密着するほどの距離ということは捕食というモーションに大きな意味を持つ貪る大赤依の距離でもあるということだ。

「Ｑｏａａａａ ＡＡＡ……！」

ぐばぁ、と貪る大赤依の胴体部分の縦に裂けた大口が横に開かれる、恐らく狙いは「傷だらけ（スカー）」の真ん中の首だ。
貪る大赤依の複数の首が「傷だらけ（スカー）」に組み付くかのように絡みつき、真ん中の首が悍ましい大口の射程圏内へと引き寄せられる。

「そこで俺の出番ってわけだ……な！！」

月光と、月狼の誇り（マーナガルム・プライド）と、煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）……まさしく夜こそが俺のメインと言ってもいいだろう。

月の光を浴びて溜まった魔力で打ち出された晶弾が俺の意思に従って柱と成る。如何に異形の姿とは言え手足を使って立っている以上、その質量によって体勢を崩す余地がある。
さらにスキルによって強化された拳で巨大な水晶柱による妨害でぐらついた後脚へ追撃を仕掛ければ、奴は体勢を崩してモーションを中断せざるを得ないということだ。

「どうよ「傷だらけ(スカー)」さんよぉ！　この俺の名アシストは！！」

どうやら水晶柱も貪る大赤依も目障りでたまらないようで、俺のすぐ真上を風を切って唸る尻尾が通過する。破壊力の塊じみた鞭の如き一撃が水晶柱を粉砕し貪る大赤依を叩き据える。背伸びしてたら逆ダルマ落としになってたな……それただの斬首だな？

「くっ……この程度じゃまだ絆は深められないってのか……っ！」

水晶群蠍達とはこれ以上ない程に絆を築けていると自負しているが、あれは幾度となない訪問と球技大会があってこその現在だ。あいつら対俺パターンが構築されてるのか、追い込み漁とか単純ながらも戦術を駆使し始めた上にだんだん洗練されてるからな、他プレイヤーさんごめんなさい。

いやそれはどうでも良いんだ、今は「傷だらけ(スカー)」の好感度稼ぎだ。とりあえず先に俺を片付けますかぁ！　なんて襲い掛かって来られたら元も子もない。奴には俺という存在に対して利用価値を見いだしてもらわないとな。

他ゲーなら如何にヘイトを標的に押し付けるか、が重要なのだがシャンフロの場合はモンスター次第ではあるが上等なＡＩ持ちの奴がいる。そういう奴らは言葉が話せるか否か、以外はほぼＮＰＣと言って良いだろう。

「だったら原始的コミュニケーション「行動で示す」を使う余地があるってもんだ」

勝手知ったるゲームであれば、無言であってもマルチは出来る。それ即ち言語の放棄、人とモンスターは行動で分かり合える……！

おっと「傷だらけ（スカー）」君、口からネバついたゲ……痰？　を吐き出してるが何事かな？　なんつーか黄と白に黒を気持ち悪いマーブルな感じで混ぜた色をしてるのでますますゲｒ……た、痰にしか見えないのだが。

「うんうん、貪る大赤依を含めた周囲一帯にゲロをばら撒いて？」

何やら三つの首が首を上に向けて口をガチンガチンと閉じては開き、閉じては開き……おや、ゲロだと思っていたけどどうもこれ脂？と他に何か混ぜたものっぽいねぇ……しかも口からは現在進行形でなんか黒煙っぽい吐息を……おい待てコラ。

ガチンッ！！

「のぉぉぉぉぉおおお！？」

うはははは！　バッカじゃねーの！？　バッカじゃねーの！！？あの恐竜、ゲロでナパーム再現しやがったぞ！　樹海に棲むモンスターがやっちゃいけない攻撃ナンバーワンだろこれ！

獣は火を恐れ、人は火に惹かれた。そして単なる恐怖に収まりきらない感情を人は「畏怖」と定義する。
目の前でこんなファンキーな技を見せられちゃあこちらのテンションもヒートアップせざるを得ない。
火達磨になって絶叫する貪る大赤依の大音量に負けじと俺もまた歓声をあげる。

「良いね良いね、派手にやってくれるじゃねーの！　そらこんな隠し球があるなら廃人連合だって殲滅できるわな！！」

どうやら貪る大赤依の全身だけじゃなく俺の心にも火が点いてしまったらしい。
これはあれだ、よくある「自陣営の決戦兵器的切り札を使うまで時間稼ぎしてくれ！」的展開だ、戦いに勝つと言う目的と同じくらい切り札を特等席で見る事が重要なんだ。
こんなに心踊る大技、今支援せずしていつ支援すると言うのか。
「さぁどんどんぶっ放していけよ「傷だらけ（スカー）」、手助けなら俺がしてやるからさ！」

竜よ、竜よ！　其の十（後書き）

・傷だらけ君(スカー)の切り札

捕食した生物の脂肪などから油を取り出し、体内で生成した可燃性物質と混ぜて吐き出す。そして顎を地面に叩きつけるようにして歯を打ち合わせることで火花を起こし一気に炎上させる生物的ナパーム。ご先祖様がクソ燃費バーニングティラノなので火属性とはシナジーがあるんですね

要するにスコーチのフレイムコア

「傷だらけ（スカー）」は強い。恐らくこの樹海エリアの中じゃ最高クラスの戦闘力を持っているだろうし、ゲームならではの自然発火ではあり得ない……それこそテルミットの如き焼夷攻撃は地上依存の敵相手ならば強力なアドバンテージになり得る。
だがそれらを加味しても貪る大赤依を相手にした場合、決して少なくはない敗北の可能性をぬぐいきれない。

まず第一にレイドボス性能を差し引いてもダメージの蓄積が分かりにくい。
そもそも生きているのか死んでいるのか分からないし、首が千切れかけていても元気に暴れていた（というか増えた）第一、第二形態を見た後では、仮に身体の半分を消し飛ばしたとしても普通に戦闘継続してきそうな恐怖がある。

次に第三形態になった事で奴の行動パターンに変化が起きた事。
ただでさえ突然尻尾に頭が生えたり、あまつさえ全部の首からビームを吐いたりするのだ。俺はもう翼腕にある口や胴体の大口からビームをぶっ放してきたとしても驚かない。というか絶対やりますよね？

そして何より……この森人族の里、そのいたるところに発生した血結晶だ。
単なる弱体化ギミックならそれはそれで構わない。だが始源解帰なる謎覚醒をしたとはいえこれが最終形態と誰が保証してくれる？
最悪のパターンはクターニッド想像態のようにオブジェクトの残存数で性能が変動する形態が後ろに控えていた場合だ。

プレイヤー三人によるレイドモンスター討伐、しかも初見。冷静に考えて無理ゲーだ、逃走可能かを確かめた方がまだ有意義な気もするがレベルキャップ施設を人質に取られては戦わざるを得ない。

ぶっちゃけるが俺はディープスローターを信用していない、あいつはペンシルゴンと別系統とはいえ同じタイプなので「何故覚醒の祭壇が破壊されたのか？」という疑問に匿名でチクる。その点に関しては奴を信用しているよう俺は。
ペンシルゴンの場合は疑心暗鬼を煽るだけ煽って、迎撃できるだけの兵糧と設備、人員を整えた上でカミングアウトからの魔王プレイだな。どっちも性質悪（たちわり）ぃや。

「要するに、お前に死なれると俺のプレイライフがヤバくなる」

だからこその俺だ。後方支援性能が高いディープスローターではなく、アシストに向いた中、遠距離職のトットリでもなく。カテゴリ的にはアタッカーである俺が血結晶破壊ではなくこちらに来た理由。

「やっぱインベントリアはぶっ壊れアクセサリーだ、な……！」

単純にリソースの問題だ、常日頃から背水の陣でプレイする俺は大量の回復アイテムを抱えている。だからこそ雪合戦でもするようにポーションを投げまくる事でアイテム依存のヒーラーを担う事が出来る。

先程からダメージを食らってばかりの「傷だらけ（スカー）」に回復ポーションを全力投球しつつ、彼がサンドバッグ兼火力装置として貢献してくれるお陰で幾らか得ることができた貪る大赤依の情報を纏めて即席の攻略情報を作り上げていく。

とりあえず分かったのはあのブレス攻撃は分類上は魔法攻撃であるということだ、地味に超重要案件だ。
次に分かった事はあの頭……多分全部が別のヘイト識別をしてやがる。じゃなきゃ尻尾の頭だけ執拗に俺を狙ったりするもんか。あいつマジで許さん……あの尻尾ヘッドだけは俺の手で叩き潰したい、部位破壊判定あるかな？

「おっ、丁度いいところに」

「ひゃあぁ！？」

そして三つ目、これに関しちゃプレイヤー二人とも情報共有する必要がある。
ウツロウミカガミでヘイトを切り離しつつ、建物の陰からこちらを見ていた森人族の処へダッシュで駆け寄る。っつーかこいつアレじゃん、俺が脅した……じゃない、ご両親が食われた、あの……えーと、

「ドリール？」

「アリュールです！」

ニアミスだな、どうでもええわ。

「ディープスローターとトットリに伝言を頼めるか？」

「は、はひっ！」

「そうだな……「ギミック確定、全除去求む。目標未だ消耗見せず」

……で」

「わ、わひゃりました！」

よし、明らかに不自然なタイミングで手空きの首が妙な方向に視線を向けるんだ、きっとその視線の先で起こった出来事は俺の予想を外れてはいまい。

む、そろそろ俺を執拗に狙ってくる尻尾の首がこちらに気付きそうだ。というか奴は何の恨みがあるんだ、ウツロウミカガミの虚像に執拗にブレス喰らわせてるけどそんな怒らせるようなことしてないだろう。

「あ、あの……」

「なんだ？」

と、今まさに戦線へ戻らんとする俺を呼び止める声。まぁ、他に人がいない以上はアリュールが呼び止めたわけだが。

「その……あの、勝てる、の、でしょうか……」

正直九……いや「傷だらけ（スカー）」の参戦も加味しても六割くらい無理ゲーじゃね？　とぶっちゃけそうになったが、流石にトットリのロールプレイをぶち壊すのもなんなので、ここはそれとなく強キャラ的なムーブで行く。

「未来は誰の手にも委ねられていない、であれば「勝てるかどうか」を思案するのではなく「勝つために如何にすればよいのか」を模索するべきだ」

運ゲーに頼るのは手持ちのリソースが全て尽きてからでいい、つまり回復ポーションだけでもあと千五百個ほど使い切るまでは負けじゃない、と……

「えと、あの、そうじゃなくて……」

「ん？」

「その、お身体の方が……」

あぁ、そういうことか。確かに見た目だけで判断した場合、今の俺は致命傷にしか見えないな。

俺は灼骨砕身の効果でヒビ割れ、身体を内側から焼いているようにも見える胴体をトントンと親指で示し、そのままサムズアップへと移行する。

「大丈夫、これ自発的にこうなってるだけだから」

「自発的に！？」

「そうそう、チャンスが来たら全身燃えるし気にすんなよな」

「燃え……、燃え……っ！？」

「しかも帯電もする」

「にんげんこわい……！！」

そうだよぉ？　下手に知性を持った生物が一番怖いんだよぉ……？

一個人の野望を元凶とするゲームなんてありふれてるからなぁ…

……！

「えと、その……サンラク……様」

「別に様なんていらないけど……何？」

……まぁ、なんだ。既に月の位置が明確に変わるくらいの時間は経過しているが、それでもつい先程両親を失ったばかりのキャラクターが何を願うかなんて決まっている。

「森人族は……私は、弱いです。どれだけ、怒っても……矢を放っても……あんな化け物には、勝てないです」

「そうだな」

聖盾輝士団のジョゼットや、午後十時軍のカローシスUQ、そしてサイガ姉妹みたいなガチ廃人が徒党を組んで挑むべき相手だ。ヘタレである点に目を瞑ったとしても、短弓でチクチク刺して倒せるなら俺はバグ報告メールを運営に送る。

「だから、どうか……どうか、父と母の仇を……取ってください！」

「…………」

今すぐにでも叫びを上げながら突撃したい衝動を、それ以上の恐怖が押し潰す。看過するには重く、忘れるには濃すぎる感情が涙と食いしばった歯に現れる。

無力に怒り嘆く、脆弱な森人族の願いを俺はただ黙って聞き……冥王の鏡盾を構える。

「え……きゃあああ！！？」

次の瞬間、一点集中のレーザーを思わせる血の如く赤い閃光が俺へと浴びせかけられ、されど死を帯びた閃光は深い海の輝きを宿す鏡によってその真っ直ぐな殺意はへし折れる。

「おいおい、熱視線ってそういう意味じゃないだろ……」

「……ひゃれ、生きて……なんでぇ？」

口からではなく、眼球を溶解させて無理やり作り出した砲塔（眼孔）から放たれた収束型の熱視線（ブレス？）は、その細さ故に冥王の鏡盾（ディス・パテル）で綺麗に反射することが出来た。

「アリュールだったか、覚えておけ……この世にはどうしようもなく覆しようのない運命ってやつがある。お前がアレに勝てないようにな」

だけども……そう、だけれども。

この世界（シャンフロ）における絶対の運命（イベント敗北）には勝てないとしても。

ある種演劇のような面を持つユニークシナリオではない、単純な戦力こそが達成（クリア）の鍵となるレイド戦であるならば。俺は悲嘆に染まった森人族へと高らかに宣言してやろう、理論上ゼロでないならばそれは不可能とは呼ばない、そうですよねＴＡＳ（ティーアス）先生……！！

「だが、今この瞬間がその覆せない運命だと俺は思っちゃいない。きっとトットリの奴も……ディープスローターのアホもな」

ついでに「傷だらけ（スカー）」君も同じ思いを抱いているだろう。だから俺は告げようか。

「俺たちは勝つためにここにいるんだぜ」

「っ……、はい……っ！」

イベント敗北を除くありとあらゆるエネミーに絶対勝てる方法を知っているか？

百万発殴り終わるまで一発も被弾しなけりゃ神にだって勝てるのさ！！

竜よ、竜よ！　其の十一（後書き）

……なんてかっこいいこと言ってるけど「傷だらけ（スカー）」君が本気出すのを全力で足引っ張ってる奴がいるらしいっすよ？

ちなみに尻尾の首が主人公を執拗に狙っているのは驚異度の割合的な理由。つまり現在の主人公はクソ強三つ首ティラノの２０％くらいの脅威と認識されてます

竜よ、竜よ！　其の十二

総合力は貪る大赤依の独壇場だ。しかし単純なパワーのみと「場」の制圧力は「傷だらけ（スカー）」が優位で、小回りに関してだけは人間（オレ）がアドバンテージを取っている。

「くっ……「傷だらけ（スカー）」が怯んだ瞬間全員でこっち見やがって……！」

敵の敵だから味方、というわけではないが俺と「傷だらけ（スカー）」が貪る大赤依を集中攻撃していること。
パーツが固定された第三形態になったことで先程までの攻撃手段も攻撃方法も不安定であった第二形態とは異なり動きを見切りやすくなったこと。
どれだけ「傷だらけ（スカー）」が暴れても何故か俺しか狙わない尻尾の首……言い換えればその部位から攻撃が来ることを確信出来るからこそ、それを前提として動けること。

使っている素材は上等でも、崖と崖を繋ぐように雑に置かれた細い鉄板の上を全力で走らされている気分だ。
さっきはアリュールに強キャラムーブをかましたが……白状します、ひっどい運ゲーだよこれ。

「ぐ、のぉ……！」

盾の角度調整をミスった事で、真正面直角から撃ち込まれたレーザービームと冥王の鏡盾（ディス・パテル）が激突する。
冥王の鏡盾は確かに魔法攻撃を反射する事ができるし、超過機構（イクシードチャージ）を

使えば敵の魔力をも喰らう事ができる。

だが言ってしまえばそれだけなのだ、攻撃的な能力を持たない傑剣(デュ)への憧刃(クスラム)を愛用しているのは「耐久度が減らない」という絶対的アドバンテージが俺の手持ち武器の中ではオンリーワンであるからに他ならない。

つまりは、だ。冥王の鏡盾とて幾度となく……それも、触れれば一発で身体が蒸発しそうなレーザーを幾度となく受け止めれば耐久度が無視できない程に削られるという事だ。

「くっそぉ……ＤＰＳが足りてねぇぞ「傷だらけ(スカー)」！」

はぁーチクショウ分かってるっての！　ＤＰＳが足りてないのは俺の方だってくらいなぁ！　ＭｖＭに割り込むのは分隊に単独で奇襲を仕掛けるよりも難易度が高ぇんだよ！！

頭だらけの相撲で、しかもそのうちの一つは俺に熱視線を送る中、火力貢献など出来るはずがない。

くんずほぐれつ、と書けば可愛らしくも見えるがどう見ても体重表記がキロではなくトンで表記される連中だ、そんな危険極まりないくんずほぐれつに人間を一人放り込んでどうなる？　蠍共と散々おしくらまんじゅうしてきた俺は実感としてそれを知っている。

人とモンスターではありとあらゆる尺度が食い違う、奴らがたたらを踏むだけでも俺にとっては死の宣告になりかねない。死神達の社交ダンスってか？　はははどっちもくたばっちまえ。

「く……兎にも角にもあの尻尾頭がウザすぎる」

胴体から生えた四つの首は「傷だらけ(スカー)」にかかりっきりではあるが、

あの尻尾ヤローだけはどれだけ経っても俺だけを狙い続ける。
それに何より、奴の頭を本体と繋ぐものは尻尾、それ故に可動域が異様に広いのだ。

「股下から頭伸ばしてレーザー叩き込むとか、曲芸かよって……つおお！？」

レーザー縄跳びとでも言うべきか、的確に俺のアキレス腱の両断を狙った横薙ぎのレーザーを慌てて回避。
攻勢に回りたいが、あの尻尾ヘッドは自分が尻尾の一部である事を承知しているらしく、遠慮なく自分の頭をメイスのように使って打撃を仕掛けて来る。

どうする？　奴に構い過ぎると「傷だらけ（スカー）」と貪る大赤依の均衡が崩れかねない、だがいないものとして振る舞うには奴の放つ攻撃は殺傷力が高過ぎる。

「どうにかして無力化できないか……くそッ、火力が足りない」

あるにはある、打撃と刺突、そしてえっぐい粉砕を莫大な衝撃波と共に実行する煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）の超排撃（リジェクト）であれば奴の頭を文字通り木っ端微塵に粉砕する事も可能だろう。

だがそれをやるにしてもあの縦横無尽に動く尻尾を固定しなければ難しいし、第一レイドモンスター相手に反動で動けない状況を作るのは避けたい。
今でこそ「傷だらけ（スカー）」がヘイトのほとんどを受け持っているからこそちょっかいが出せるが、反動で死にかけてる状況で首四本に狙われたら死ぬ。

全くもって厄介だ、このレイド戦は極めてオーソドックスなパーティ編成を要求している。
血結晶の存在を見るに、本体を相手にするだけで十人、いやタンク五人は確定で十五人は欲しいところだ。残り三十人は遊撃で血結晶破壊な。

にしてもやっぱSF－Zooのタンク組いいよなぁ……この手の戦闘（レイド）じゃよほどタンクキラーでもなければスタメンから外すビジョンが見えない。
単体ならジョゼットの方が上なんだろうが、負担五分割ってだけで爆アドだもんなぁ……無い物ねだりしても仕方がないか。

まぁともかく、少なくとも一頭（三頭？）と一人でやる相手ではないな、断じて。だがそれでもやるのだ、なんか頭の一つが爬虫類とは思えない感情のこもった目でこちらを見てる気がするが、お前に死なれるとマジで困るんだから過保護なくらい介護してやるからな……！

「いっそ多少の無茶をして攻勢に……んん！？」

不味い、そういう感じか……！！
気づけたのは偶然だが、対処は必然だ。俺は尻尾頭の動きに警戒を割きつつ、右手に持ったアラドヴァルで「それ」を……里の方から飛び出してきた真っ赤な狼を斬り伏せる。

比較対象がアレ（リュカオーン）なので比べるのも酷ではあるが、あっさりと一撃で両断された四つの目を持つ赤狼を一瞥だけするが、森人族の至る所から上がる咆哮や轟音に頭を抱えたくなる。

「……ああはいそうですか、自前で孵化しますか」

まずい、まずいぞこれは……極論を言えば森人族が肉壁になれば血結晶内のモンスターが一斉起動してもなんとかなるだろ、とか思いもしたが今の赤狼の動きを見るに……！！

「Vvvvvoooooooooooooo！！」

「Grrrrr……Graw！！」

「Pqyaaaaaaaaaaaaa！！！」

「わぁ、なんて邪悪な動物大行進……っじゃない！！」

思考ルーチンは「本体との合流」かっ！！
何かフラグ踏んだか……？　いや、踏んだのは向こうか？　一定数の血結晶モンスターが倒された時点で一斉解放、ありえそうな話だ。

「くっそぉ……クターニッドとネタが丸かぶりしてんだよ……っの野郎が！！」

駄目だ、単体火力じゃどうにもならねぇ。「傷だらけ（スカー）」君ここは一旦本体ではなく分体を……あーはいはい六つも目があるのに眼中になしってかぁ！？　六分の一くらい別の視点持とうぜおバカ！
だが十の目を持つ貪る大赤依君はとても広い視野をお持ちのようだ、次々と現れる血結晶モンスターを首で千切っては（大口に）投げ、千切っては（大口に）投げ……あっやばい。

「くっ……！」

武器を煌蠍の籠手に変更、明らかにクターニッド戦での「アレ」を思わせる食い溜めを始めた貪る大赤依を止めんと超過機構(イクシードチャージ)を使用せんとするが……嗚呼悲しきかな貧乏性。
「これで倒せなかったらどうする？」「火力だけなら「傷だらけ(スカー)」で代用できるから無理して使う必要はないのでは？」という疑問が俺の身体を縛る、七日に一回という切り札であるからこそ使いどきを選んでしまう。
そしてその逡巡の間に、貪る大赤依が早食いを終わらせてしまう。
「AAAAAAAaaaaaaaaaaaarrrr！！！」
「嘘だろオイオイオイ……のわっ！？」
はいこちら現場のサンクラクです、現在我々は貪る大赤依を中心に発生した大規模衝撃波によって空を飛んでいまーす！！　「傷だらけ(スカー)」の巨体が宙を舞うとか嘘だろ、足元でTNT起爆したってそうはならんだろ。イベント演出か？　でも着地ダメージ保証してくれます？　不安なので自己解決で。
「ぐっ……やっぱり着地ダメージあるじゃねーか……っ！」
牛、猿、クラゲの触手を人の足にしたっぽい何か、足が長いワニ、二つ頭の鷲、エトセトラエトセトラ……とりあえずとっさに数えた限りでは十五、八？　体程の、皆一様に真っ赤な身体を持つモンスター達が次々と砕け、喰われ、貪る大赤依へと取り込まれていく。
回復ガチャを行ってはいるが、俺はそれから目を離すことができない。何故なら……
「AAAAAAAaaaaaaaarrrr！！！！！」

――赤い、竜巻。

小粒の何かが、大量に渦を巻く事で形成されているのだろう、巨大な竜巻を背中から生やした貪る大赤依がこれまでとは異なる咆哮を上げる。

成る程……太鼓判を押されなくても分かるさ、これが最終形態だな？

そうだと言ってくれ、これを突破した後に続きがあったら流石に泣ける。

竜よ、竜よ！　其の十三

「無理無理無理無理！」

これは無理だ、「傷だらけ（スカー）」がいるいないの問題じゃない、単純に頭数がいる。

ハリウッド映画ばりの跳躍をした俺が数秒前までいた場所に叩きつけられる牛の頭。

「傷だらけ（スカー）」の方を見れば、鷲の嘴に啄ばまれ、獅子の手に引っ掛かれ……まさしく袋叩きに遭って悲鳴を上げている。おかしいよな？　数的有利は俺たちの方が上で、貪る大赤依は一体しかいないってのにな……！

「お、ま、た、せっ」

「なんっ……何だ、アレ……？」

「サ、サンラクサーン！！」

く、ここは撤退しかない。頼むぞ「傷だらけ（スカー）」、なるべく早く戻るつもりだが死んでくれるなよ……？

ウツロウミカガミで離脱しつつ、こちらへと駆けてきたトットリとディープスローター達へと叫ぶ。

「情報共有！！」

「えっ、あ、えーと」

「特定数の撃破がトリガーだったっぽいねぇ、行為の最中に逃げられたんで合流しつつこっちにきた感じだよぉ……」

やっぱりか、一定体力を切った可能性も考えていたが、あの三つ首の恐竜を全力アシストして尚追い詰めた手応えは感じられなかった。となれば血結晶側がフラグと考えるのが自然、そしてそれは多分当たっていたんだろう。

「えーと……とりあえずあの赤い竜巻から攻撃(モンスター)が生成される、しかも本体は攻撃動作を取ったりはしない」

あの赤い竜巻、近寄る程に聞こえる羽音から虫が何かが大量に集まって形成されているのかは知らないが、あの竜巻の中から様々なモンスターが現れる事だけは身をもって痛感している。数に制限はなく、一定時間で竜巻に戻っていくので倒すメリットもなく、そのくせ性能は生前と変わらない……多分。

「要するに……モンスターが召喚魔法的なものを連打してくる？」

「そういうことになるな、しかも本体は特に動作を必要としない」

「……ははっ」

トットリの口から乾いた笑いが漏れる。そりゃそうだ、モーションキャンセルなんて対人でやってもぶっ壊れであろうことを、よりにもよってレイドモンスターがやりやがるのだから。

「……で？　何か勝機はあるのかいサンラクくぅん」

「勝機も何も……俺たちプレイヤーと「傷だらけ（スカー）」で本体を叩くしかないだろ。もしくは……エムル、竜巻だ」

「はいなっ！」

赤い竜巻に激突したマジックエッジがダメージエフェクトの花を咲かせる。しばし沈黙の後、明らかに竜巻がこちら方向へ何かを生成しそうな動きを見せたので慌てて距離を取る。
次の瞬間、俺たちがいた場所に猿の腕だけが射出され、地面を轟音と共に殴りつける。

「……ロケットパンチかよ」

「特定部位だけ作ることも出来るみたいだねぇ……つまり」

ちゃきっとアラドヴァル、変態は黙る。会話スキップは大事だね。

「でも一つ分かったねぇ……」

「何がだよ」

「意味のない攻撃なら反撃の必要はない」

……成る程一理ある。少なくともあの赤い竜巻は無敵のオブジェクトではない可能性は高い。本当に無敵だってんなら攻撃に反応する必要性は薄い、何せただ拡散すれば俺達は終わるわけだし。
無論、そう言う反応をするよう設定されているだけでマジで無敵オブジェクトという可能性も捨てきれないが……流石にレイドモンスターに無敵機構が備わっているとはあまり考えたくない。

「ちなみにトットリ、あの竜巻に効果的な攻撃手段とか持ってる？」

「あるっちゃあるけど……ディプスロさんみたいに高火力じゃないし数も少ないからあんまり期待しないで欲しい」

「俺もだから気にすんな、大火力はあるんだけどよくよく考えると対単体なんだよな……」

本体を狙えばいい話ではあるが、正直あの竜巻の根元まで無傷で走り切ったとしても、ゴール地点に待ち受けているのがクソビームファイブヘッドドラゴンモドキだ。

そろそろ飽きてきたというか、遭遇が不意打ちだっただけにモチベーションがあまり高まらないんだよなぁ……割と高いラインを保持してはいるんだが限界を突破していない、まるで法定速度を守って車を走らせている気分だ。

「なんつーかこう、アクセルを踏み抜くような……」

「アクセル……？」

レイ氏とリュカオーンに挑んだ時も不意打ちではあったけど、あれはあれで因縁があったからこそ燃えたわけだし。

「サンラクくん、「傷だらけ（スカー）」がなんか凄いことになってるんだけど」

「んぇ？」

三つ首の「傷だらけ(スカー)」はすでに満身創痍と言っていいだろう。全身の肉を啄ばまれ、斬り裂かれ、あるいは食い千切られ……吹き出すダメージエフェクトは既に致命傷に王手を掛けんとしている。

見れば頭の一つ、一番右のティラノ頭の目が潰されたのか、炎の如くダメージエフェクトを噴き出しながらも繊維を漲らせる姿は恐ろしさと同時に痛々しさも見る者に伝えてくる。

だが、それはきっと「傷だらけ(スカー)」にとっては忌避すべき事ではない。

三つ首が吼える、その身に刻まれた傷の意味を誇示するが如く。

三つ首が吼える、その身に刻んだ傷をより巨大な力とするために。

三つ首が吼える、己が命を脅かす敵に対してそれでもなお己が勝つのだと。

「「「ゴルルオオアァァァァァア！！！」」」

このゲームにおいてダメージエフェクトは基本的に赤色で表示される。明らかに赤い血が通っていないモンスターを切り裂いても赤いエフェクトが出るのでなんとなくモヤモヤ感を感じたりもするのだが……だからこそ、その変化はより鮮烈に俺達へと理解を強いる。

「ダメージエフェクトが、黒色になった？」

「……聞いたことがある、確か午後十時軍が奴を追い詰めた時も同じ状態になったって……あの状態になった「傷だらけ(スカー)」には全く歯が立たなかったって」

「えっ、何あいつ体力減少で強化されるの？」

足引っ張ってたの俺じゃんか。
全身の至る所から真っ黒なエフェクトを噴き出す「傷だらけ（スカー）」が咆哮で、前進で、その一挙一動で周囲を激震させながら突撃する。
愚直なまでの猛進、迎え撃つ貪る大赤依はそれに対して何か感情を発露するでもなく、無機質な反応を以って対処とする。

即ち赤い竜巻からいくつものモンスターを生成し、単独での袋叩きで確実に「傷だらけ（スカー）」を仕留め……

「「「ひえっ」」」

「「「えぇ……」」」

前者はヘタレ一号（エリナ）、ヘタレ二号（ヘーシュ）、ヘタレ三号（エムル）のもの。後者は俺、トットリ、ディープスローターのものだ。
なにせ最近ちょっとイキってたエムルがヘタレ兎に戻る程の、プレイヤー組が絶句するほどの光景を奴は見せてくれたのだから。

二つ頭の鷲、その嘴が砕けていた。
頭だけが生成された牛、その角がへし折れていた。
腕だけが生成された猿、その指が捻じ曲がっていた。
そして貪る大赤依本体、その首の一つが「傷だらけ（スカー）」によって噛みちぎられて……っっよ。

「なんだあの天然装甲、ＶＩＴがイかれてんだろ」

「黒くて硬い上に多分あれ、ＳＴＲも跳ね上がってるよねぇ……」

まぁ、ただの身じろぎで赤い竜巻から生成されたモンスターが粉砕されたわけだし、ただ硬いだけってわけではないのだろう。

え、あれ倒せるんです？　本当に？　考えられる可能性はあんまり持続しない、とかなんらかの裏技で削る方法だけど……っていかんいかん。

「さて、「傷だらけ（スカー）」君がマキシマム肉盾をやってくれてるんだ、こっちも参戦しようじゃねーか」

「分かった！　森人族（エルフ）達は援護に徹してくれ、あの赤い竜巻から出てくるモンスターの気を引くだけでも助かる」

良くも悪くも勇者様なトットリはその場のノリに忠実だ。森人族達を鼓舞し、「傷だらけ（スカー）」の援護に駆け出した弓手に俺も続かんとアラドヴァルを握り直し……

「なぁサンラクくぅん……ちょっとお話ししようぜぇ……？」

「……なんだよ、出鼻を挫くなよ」

「いやいや、とぉっても大事な話だし、そんなに時間はとらないからさぁ……」

正直無視しても良かったが、仮にもここまで同じパーティとして行動してきたよしみだ、話くらいなら聞いてやろうじゃないか。

「………で？」

続きを促す俺に対し、ディープスローターは笑いかける。それは下ネタを浴びせかけることに喜びを感じる笑みでもなく、コロコロと

変わるキャラクターに準じた笑みでもなく……

「――今、楽しくないでしょ」

あの日、サービス終了の間際に見た「ナッツクラッカー」、その最後の笑みで俺へと問いかけた。

竜よ、竜よ！　其の十三（後書き）

ダメージの数値に比例したステータス強化、およびダメージを受けた箇所に「自身が受けた攻撃に対する耐性」を付与する。

リュカオーンにムシャムシャされた人、リュカオーンになかなか会えない人、リュカオーンの顎にアッパーをかました人で組ませるのが最適解

ダメージ部位ごと破壊する、多彩な攻撃手段を用意する、スリップダメージなどでジワジワ削るなどが推奨

竜よ、竜よ！　其の十四（前書き）

【急募】精神と時の部屋

【急募】メタグロスに進化する方法

竜よ、竜よ！　其の十四

「……その根拠は？」

「見れば分かるよ、君が本当に楽しんでるなら……そんな眠たそうな顔にはならない」

「一応言っておくけど現在夜だからな？」

むしろ眠気を感じる方が真っ当に人間してると思う。まぁ半分寝てるようなものなので実質健康、フルダイブゲーマーは多かれ少なかれそうやって自分を納得させるものだ……

「生物的な疲労の話をしてるんじゃないよ。君の……そうだな、テンションの話だよ」

「……随分と理知的な話し方じゃねーか、それが素か？」

「お望みなら君が望むキャラクターと声で、ベッドの上で喘ぎながら話してもいいけど？　極限状況下で事に及ぶのはパニックホラーじゃそう珍しい事ではないからね」

「それ八割くらい死亡フラグじゃねーか」

中身はピンク色のままだったわ、軽く焼いた方がいいかな？

「おいおい、単なる会話の賑やかしじゃないか。それに私の素がどんな人物かだなんて、いくらでも偽装できる……そうでしょ？」

「……」

コロコロと声色を変えながら笑うディープスローターに、やはり厄介な特技だと溜息を吐きつつ続きを促す。結局のところ、俺のモチベーションが低いことを指摘しただけで結局こいつが何を言いたいのかが分かっていないのだから。

「私はね、君の全力が見たいの。血反吐を吐いて、身を削って……それでも本心から笑って前へ進み続けるような君が見たいんだよサンラクくぅん……」

つ……、とディープスローターが伸ばした手が俺の頬に触れる。まぁ奴の手が感じているのは正眼の鳥面の生地の感触だろうがな。あと触んな、俺がお前に向ける感情的にその内ハラスメント判定出るぞ。

「でもクエストがあって、ろくな準備もなしにレイドモンスターと戦って、挙句介護プレイだものねぇ……やる気が出ないのも分かる、分かるよぉ」

「お前がいるからという単純な理由が抜けてるぞ」

無視ですか、そうですか。

ぺしん、と振り払われた手を名残惜しげに揺らしながらディープスローターは尚も笑う。

拒絶すらもが楽しくて仕方がない、と言わんばかりに口の端を吊り上げた表情で奴は動かす口を止めない。

「と言うわけで、ちょいと君が全力を出したくなるような企画を考

えました」

「企画倒れにして歴史の闇に埋めてしまえ」

「やぁんつれない……では説明します」

めげねぇなこいつ。大体どう行動したって死にリスクがある以上は慎重なプレイをするしかないわけだし、どう足掻いたって俺のテンションは上がら

「まずサンラクくんにはレベルキャップ開放をしてもらいます」

「詳しく聞こうか」

……っは!?　馬鹿な、俺がこんな即落ちじみた反応を……!!

「くっ、おのれディープスローター……!」

「二秒くらいでコロコロ態度変えてナチュラルに人のせいにする奴ってどう思う?　私は良いと思う!　やだ今の私DV夫に依存する人妻みたい!　そもそも「人妻」とは「人の妻」という意味であって大前提として他人の所有物というわけでだからこそ背徳的な……」

アラ(中略)焼く。

「まぁぶっちゃけると体力は減るけどそこまで熱いわけでもないよねっていう」

「やはり刃で斬るしか……」

「Ｆｏｏ、それ単なるＰＫだねぇ……それはそれでインモラルな魅力があるけど、今回はもっとロマンティックなお誘いさぁ……」

媚びるような、誘うような、ともすれば何処かへと引きずり込むかのような視線を笑みで染めて、アラドヴァルに頬擦りしながらディープスローターは己の企みを暴露した。

「二兎を追い二兎を仕留める……貪る大赤依と「傷だらけ」、その両方共を倒してしまおうぜぇ？」

「サンラクサン、本当に大丈夫ですわ……？」

「癪だが、あいつは有能なんだよ……少なくとも俺が用件を済ませるまで戦線を維持することくらいやってのける」

他人の策に乗っかる、という経験がないわけではない、というかむ

しろ経験豊富だ。
我らが魔王ペンシルゴンの悪巧みに乗っかって敵対勢力を徹底的にリスキルした事だってあるし、そもそもＭＭＯなら誰かの指示に従うことなんてザラだ。
だが今回の場合、なんというか……爆薬を積み込んだ船に乗せられたような気分だ。しかも爆薬のすぐ隣にはニヤニヤ笑いながらタバコをふかすディープスローターがいるわけで。
しかもやつは一種の破滅願望持ちで、ちょいちょい下ネタと一緒に爆薬へと火のついたタバコを近づけるんだ。
「将来的に考えるとやっぱり天誅が最善なんだけどな……」
今現在の状況を考えるとその選択肢は悪手になってしまうわけで。引き続き悪魔との相乗りを続けなきゃいけないってわけだ。
とはいえ、奴の話した「作戦」とやらは偏見１００％の色眼鏡を外せば納得に足りうるものではあった。
転移系魔法の中でも最高クラスの魔法「東風より来たれ（エウロス・バベリ）滅びの大王（オ・アンゴルモア）」、要約すると巨大隕石を転移させる魔法であるらしいそれを以って貪る大赤依及び「傷だらけ（スカー）」の双方を撃滅する。
それがディープスローターの立案した作戦である。極大の威力を誇る代償として詠唱破棄不可、かつ強力なヘイト獲得というデメリットを持つ「東風より来たれ（エウロス・バベリ）滅びの大王（オ・アンゴルモア）」の発動を確実に成功させるため、俺のレベルキャップを解放する。
とりあえず作戦内容自体に違和感はあまりない、強いて言うなら「東風より来たれ（エウロス・バベリ）滅びの大王（オ・アンゴルモア）」なる魔法そのものの信ぴょう性なのだ

が……

「なぁエムル、実際転移魔法でそんな事が可能なのか？」

「むむむ……アタシの魔法は我流なんですわっ、だからちょっとよくわかんないですわ……」

「つ……そうか」

「今「使えない」って言おうとした！　「使えない」って言おうとしたですわーっ！！」

「ええい叩くな叩くな！」

今現在、頭をポコポコ叩かれている俺と叩いているエムルは怪獣大決戦を繰り広げている森人の里、建物の少ない広場のようなフィールドから真反対の方向、即ち居住区の中心部へと走っている。

目的地は当然のことながら覚醒の祭壇、近い知り合いで言うなら京ティメットも辿り着いたであろうレベルキャップ解放施設だ。

なんでも、レベル９９Ｅｘｔｅｎｄから上限解放を行うと、Ｅｘｔｅｎｄ時に稼いだ経験値で一気にレベルアップするのだとか。

「奴め、手はずは整えておきましたってか」

成る程、確かにちょっとやる気が出てきた。

周辺状況でやる気が出ないなら、俺そのものを変化させる事で「試し切り」としてのモチベーションを高めようってことか。

レベルキャップ開放という一大イベントとレイド戦という一大イベント、その二つを複合して俺に本気を出せとやつはそう言っている

わけだ。

ある程度「幕末」に染まった者特有の動きが板についてきた京ティメットから色々話は聞いている。噂の三桁スキルとやらは特殊な条件で開放されるとかではなく、単純に「レベル100以上で開放されるスキル群」であるらしいので、恐らくレベルアップした時点で俺がこれまでに使い続けてきたスキルはさらなる発展を見せることになる。

「それに楽しみもある」

これまで多くの強敵と戦ってきた、果たしてＥｘｔｅｎｄの六文字に隠された俺の蓄積経験値は如何程か。あのクソッタレの尻尾頭君をフルボッコにできるだけの数値を獲得することは出来るのか……うん、結構やる気出てきたかな。

「……着いた、か」

まぁ、結構前からそれは見えていたが……まぁ、あれしかないよな。

例えば、「ファンタジー世界」に於いて「分かりやすく超科学をアピール」する為にはどうすればいいだろうか。俺はその一つとして「風化対策」を挙げる。

百年経っても大丈夫、とでも言うべきか……周囲の建物が皆、時間の中で風化していく中でそれだけが錆一つ浮かべる事なく鈍い銀色の金属光沢を維持していたならば。

時の流れにただ一つ反逆し、木と土と植物に覆われた森人族の里の

中で唯一超高度な金属加工で作られた、若干ズレた感じで地面にめり込んだ爪付きの円盤とでも言うべきその場所こそが間違いなく。

「ここが、覚醒の祭壇……ですわ？」

「だろうな……」

なんだろう、ひっくり返ったクラゲの脚を等間隔で並べたみたいな……若干傾いていることから地面にしっかりと固定されているわけではなく、「円盤と爪」が地面に直接置かれている感じ、だろうか。

まるで、何かが上から巨大円盤を雑に落としたみたいな……いや、だからこそ涙の盤（ティアプレーテン）なのか？　だとすれば、この円盤を涙と呼んでいいのかは別として、何がこれを……いや、今は詮索はすまい。

「さぁ、いつぶりかのレベルアップの時間だ」

竜よ、竜よ！　其の十四（後書き）

参考ながら最近の主人公の戦績（一部抜粋）

・夜襲のリュカオーン分身体
・アルクトゥス・レガレクス
・スレーギヴン・キャリアングラー
・アトランティクス・レプノルカ
・深淵のクターニッド
・水晶群蠍
・水晶群蠍
・水晶群蠍
・水晶群蠍
・水晶群蠍
・水晶群蠍
・水晶群蠍
・水晶群蠍
（以下略）

竜よ、竜よ！　其の十五（前書き）

――――――――――

ＰＮ：サンラク
ＬＶ：９９　Ｅｘｔｅｎｄ
ＪＯＢ：傭兵（二刀流使い）
１，０００マーニ
ＨＰ（体力）：８０
ＭＰ（魔力）：５０
ＳＴＭ（スタミナ）：１００
ＳＴＲ（筋力）：１００
ＤＥＸ（器用）：１００
ＡＧＩ（敏捷）：１００
ＴＥＣ（技量）：８０
ＶＩＴ（耐久力）：１（５３２０）
ＬＵＣ（幸運）：１２９

スキル
・縷々閃舞（るるせんぶ）
・一念岩穿（いちねんいわうがち）
・瞬刻視界（モーメントサイト）
・フォーミュラ・ドリフトＬｖ．１
・アガートラムＬｖ．１
・トライアルトラバースＬｖ．１
・遮那王憑き
・グラビティゼロＬｖ．１
・フリットフロート
・月狼の誇り（マーナガルム・プライド）
・致命秘奥【ウツロウミカガミ】

・バーンアウトＬｖ．１
・ライオットアクセルＬｖ．１
・血戦主義
・レテ・バニッシャー
・ダーティ・ソードＬｖ．１
・壊刀乱魔
・致命剣術【半月断ち】参式
・戦極武頼Ｌｖ．１
・剣舞【紡刃】
・パーシスタンド
・メロスティック・フット

装備
右：アラドヴァル・リビルド
左：冥王の鏡盾（ディス・パテル）
頭：正眼の鳥面（ＶＩＴ＋２０）
胴：リュカオーンの刻傷
腰：ラケダイモン・ガードル（ＶＩＴ＋５３００）
足：リュカオーンの刻傷
アクセサリー：格納鍵インベントリア
アクセサリー：封雷の撃鉄・災
アクセサリー：瑠璃晶の星外套
アクセサリー：小鬼人形（ゴブリンドール）（体力リジェネ微量）
アクセサリー：骨体人形（スケルトンドール）（スタミナ回復速度微増）
――――――――――――――――

ＶＲゲームカテゴリのくせに１００話くらいこのステータスでほぼ固定していた小説があるらしい

竜よ、竜よ！　其の十五

真ん中に立たなきゃいけないのに土台からズレてんの設計ミスですよね？

「えーと、とりあえず真ん中に立って……なんだっけか、そのまま動かないいんだっけ？」

あっ、なんかイベントが起きそうな気配！　はいここで決めポーズ！！

「…………ふっ」

「ほあああ……サンラクサン、初めて見るものでも動かすことができるんですわ？」

「いや、偶然ポーズ決めたら起動しただけ」

ずこーっ、とひっくり返るエムルを他所に内向きに反り返った「爪」の先端から発せられた光線が俺へと照射される。

レーザー、と言うとあのクソッタレの尻尾頭が放つ眼光を思い出すが、流石にプレイヤー用の施設にそんな初見殺しは搭載されていなかったらしい。

「だ、大丈夫なんですわ！？」

「決めポーズなら完璧だが」

「心配するのは頭の方でしたわ！？」

ぬかしおる。

土曜日の夜を全力で楽しむポーズで四方八方より光線を浴びる姿は全方向からスナイパーに狙われているようで若干心がざわざわするのだが、傾いた円盤による俺と言う存在の精査は次の段階へと進むようだ。

『――二号計画素体を確認』

『――肉体精査開始』

「……成る程、どちらにせよここで二号計画については言及されるのか」

プレイヤーが二号、ってんなら一号は誰なんだろうな？　明確に開拓者(プレイヤー)とは別であると定義されつつも、クターニッドからは開拓者と同様に褒美を授ける対象とされる者達がいるわけだが……うん、十中八九NPC、それも人間かそれに近い存在だよな？

『――精査中………』

『――生体マナ制御器官「封臓」確認』

『――蓄積マナ粒子、規定数値超過を確認』

『――プログラム「Extend(拡張)」承認、実行を開始します』

「お、お、お？」

「ま、回り始めたですわ……」

俺が、じゃないぞ。円盤の外周に設置された「爪」が、だ。どうやらこの円盤、外周と内側で別々のパーツになっているようで、外縁に設置された「爪」が段々と回転速度を上げていく。

円盤上の至る場所にシステムウィンドウのようなホログラムが展開され、何やら文字列が高速で流れていく。どうでもいいけど英語ですね、はい。

「ち、力が漲……とかは特にないな」

文字列が流れていくのを眺めているだけで特に……どうしたエムル、そんなヤバそうなものを見る目でこっちを見て。

「サンラクサン！　サンラクサン！」

「なんだよ」

「いやいやいや！　燃えてるですわ！！」

「何がだよ」

「サンラクサンがですわーっ！！」

ＨＡＨＡＨＡ何をバカな……

「うわ本当に燃えてる！」

足が！　足の先が……っていうか手の先も！　嘘だろこんな初見殺しが……お、おのれディープスローター！　あと京ティメット！
お前らどっちも天誅だ……ってあれ、これ。
「……別にＨＰが減ってるわけじゃないのか」
なんだ、なら気にすることないか。
「手羽先ともみじ」
「………？」
くっ、流石にこのネタは拾ってくれないのか……外道二人辺りなら爆笑必至のネタなんだが。
『――蓄積粒子開放』
『――それに伴い素体の肉体改変開始』
『――ｅｒｒｏｒ．　肉体に何らかの阻害因子を確認』
『――』
『――精査完了、肉体改変に問題はなしと判断。改変作業を再開』
『――残り三十秒……』
ちょっと待て、今肉体改変つったか？　肉体改変つったか！？　その前にも色々不吉な事言ってましたよね！？

「目が覚めたら虎になってました、とか無いだろうな……」

別に俺は詩人になりたいとかそんな野望はないぞ。
現れては消えるシステムウィンドウ（仮）がその発生量をどんどんと増していき、回転する「爪」から放たれる光線はダメージのない発火で炎上する俺の身体の至る場所へと照射される。
そして、鎖が砕け散るようなエフェクトと共に……ホログラムのウィンドウが全て砕け散った。

『——肉体改変完了』

『——マナ粒子適合リミッター解除』

『——』

『—』

『』

『——あなたの開拓に幸あらん事を』

……終わった、のか？
まさか施設に励まされるとは思わなかったが……今は、まぁ、そんな事はどうでもいいんだ。

「くくく……」

「サ、サンラクサン？」

「ふふふ……あーっはっはっはっはっ！！！」

「サンラクサンがおかしくなっちゃったですわぁぁ！」

奴め、ディープスローターめ！　成る程成る程、これは確かにモチベーションに転換できる！　くくく、こんなものを見せつけられて黙ってバックレる事なんざ出来るわけがねぇよなぁ！？

「エムル、戦線復帰の準備を整えておけ」

「え、あ、は、はいなっ？」

くくくくく……新生サンラクの性能テスト、レイドモンスターが相手なら不足はない。

断言しよう、この勝負……俺の勝ちだ。

炎を、風を、雷を、水を、土を。
最上位職業「賢者」に到達したプレイヤーにとっては最早魔法の習得とはＭＰの多寡以外の障害はなく、「魔導書さえ入手すれば」如何なる魔法であれど習得ができる。
さらに使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）を含めれば実質全ての魔法を扱える、と言っても過言ではない。

それ即ち現在のディープスローターがあらゆる魔法を行使している理由であり、たった一人でトットリ・ザ・シマーネと森人族の戦線を維持して見せている理由の半分である。

（右、森人族二人援護）
（後方のトットリにヘイト）
（「傷だらけ（スカー）」にヘイト誘導）
（適切な手段……）
（【予約詠唱（リザーブスペル）】で事前に【外付けの求心（エクスターナル・ヘイト）】）
（【四元素の輝撃（エーテル・バースト）】）
（フォーミュラドリフトによる接近）

その技術をディープスローターは並列同時処理（マルチタスク）と名付けている。
シャングリラ・フロンティアというゲームにおいて、原則的に一プレイヤーが複数のスキルや魔法を同時に発動する事は「不可能」という結論がプレイヤー達によって出されている。

そもそも大前提として魔法はどれだけ詠唱を省略したとしても魔法名だけは唱えなければならない。そしてスキルなどの思考に反応するシステムであっても、思考と身体の行動を分ける事を意図的に行う事は難しい。

だがそれは「システム的な不可能として」立証されたわけではなく、故にこそディープスローターはその技術を確立した、確立できてしまった。

思考の分割、及び分割した思考の同時運用。
ディープスローターというプレイヤーの高すぎる「フルダイブ適正」の極致とも言える一人複数役とでも言うべき技術は、戦場で繰り広げられる光景からコンピュータの如く効率的な対処を割り出す。

そしてあらかじめ発動する事で時間差で別の魔法を発動する【予約詠唱】、要するに「システムが認識できるだけの思考力で発動をイメージすればいい」という暴論でスキルを脳裏に思い浮かべながら、口では別の魔法を唱える。

その結果こそ、「二つの魔法及びスキルの完全同時発動」という曲芸と呼ぶにしてもあまりに異質なマルチタスクである。

「【四元素の輝撃(エーテル・バースト)】！」

フォーミュラドリフトの効果によって貪る大赤依の股下を潜り抜けながら、周囲のヘイトを全て「傷だらけ(スカー)」に押し付けつつ、その処理が完了する前に四色の光が混じった閃光で貪る大赤依の腹を穿つ。
そうして貪る大赤依の全ての頭が「傷だらけ(スカー)」に注意を向けた事で辛くも死を逃れた二人の森人族の若者達の前に盾の如く立つ。

「やぁ森人族（エルフ）達、下手に死なれるとトットリ君が萎えちゃうかもしれないからね」

「あ、有難い……」

ディープスローターにとって、ＮＰＣなどグラフィックとシステム的数字が多少異なるだけのＭｏｂにしか過ぎない。
だからそれがどんな顔をしてどんな声を出していようが意に介することなく下ネタで返すつもりだった。

「し、しかし……あの変な鳥頭の男はどこに行ったのだ？」
「ま、まさかあいつ怖気付いて逃げたのでは……がっ！？」
一閃。
致命傷にならないだけの、しかし既に瀕死の森人族達を「九割殺す」だけの加減がされた魔力剣の一振りが二人の森人族を切り裂く。
そして「なんで」と目で訴える森人族の首をその細い手で掴むと、見た目からは想像もできないほどの膂力（ＳＴＲ）で締め上げる。
「んー……只の文字列（データ）風情にキレるのも大人気ないけど、サ」
笑顔、首から下の行動とは完全に切り離された不自然な程の笑み。
ともすればコラージュと言われた方がしっくり来るような笑顔を浮かべたディープスローターは静かに告げる。
「文字列風情が彼を語るなよ、君らよりも私の方がもっとずっと彼

を理解している……サンラククんは逃げたりしないさ、絶対に、ねぇ……」

「た、たすけ……」

「ひ、ぃ……ころ、しゃ……」

ニッコリと笑うディープスローターの笑顔は静止画のように変わらない。

カルマ値は蓄積するもののプレイヤーがトドメを刺しさえしなければPNが赤に染まることはない。

そして、この場でヘイト管理の八割を掌握しているディープスローターがその気になれば、この二人を合法的に抹殺することも……

「────っ」

「……ぁ」

トットリはこの場を見ておらず、他の森人族も同様。であるからこそ、締め上げられた若者二人だけがディープスローターの「変化」を見ていた。

「あはぁ……それだよサンラククぅん……私は君のそれが見たかったんだぁ……！」

無機質な笑顔から、蕩けるような笑顔への変化。森人族の若者二人のデータストレージに「恐怖」が深く記録され……

「やっぱり、私の理解者は君だけだよサンラククぅん」

そしてそれは戻ってきた。

竜よ、竜よ！　其の十五（後書き）

ディプスロさんはサンラクガチ勢
ヒロインちゃんは陽務楽郎（サンラク）ガチ勢

ちなみにエクステンド処理中主人公が燃えたのは蓄積経験値がめっちゃ多いという演出、１００姉さんとかならさらに燃える

竜よ、竜よ！　其の十六（前書き）

「設定厨が設定出し惜しみしてんじゃねーよさっさと吐け！」と腹パンされたので気色悪い笑みを浮かべながら更新です、明日の更新はちょっと微妙なラインだけど許して

補足：前回更新時に書いたＥｘｔｅｎｄ時のステータスですが、あれはあくまでも「一番長く使っていた時期のステータス」出会って別に最新のものではなくじゃあなんで武器は最新時のなんだよってことで要するに変更し忘れただけなので彼はまだ一億くらい溜め込んでます

――――――――――
ＰＮ：サンラク
ＬＶ：１３６（３８５）
ＪＯＢ：仇討人（二刀流使い）
ＳＵＢ：神秘「愚者」
特殊状態「導きの灯火」
１９４，７８１，０００マーニ
ＨＰ（体力）：８０
ＭＰ（魔力）：５０
ＳＴＭ（スタミナ）：１００
ＳＴＲ（筋力）：１００
ＤＥＸ（器用）：１００
ＡＧＩ（敏捷）：１００
ＴＥＣ（技量）：８０
ＶＩＴ（耐久力）：１（５３２０）
ＬＵＣ（幸運）：１２９
スキル
・縷々閃舞（るるせんぶ）→百閃の剣（ヘカトン・スラッシュ）
・一念岩穿（いちねんいわうがち）→鋭結点睛（えいけってんせい）
・フォーミュラ・ドリフトＬｖ．１→選択可能
・瞬刻視界（モーメントサイト）→真界観測眼（クォンタムゲイズ）
・アガートラムＬｖ．１→選択可能
・トライアルトラバースＬｖ．１→選択可能
・遮那王憑き→鞍馬天秘伝
・グラビティゼロＬｖ．１→Ｌｖ．ＭＡＸ
・フリットフロート→ヘルメスブート

・月狼の誇り（マーナガルム・プライド）↓宿命の狼兆（ウルフェイト・サイン）
・致命秘奥【ウツロウミカガミ】↓致命秘奥【ウツロウミカガミ】
改備（あらためぞなえ）
・バーンアウトＬｖ．１↓選択可能
・ライオットアクセルＬｖ．１↓選択可能
・血戦主義↓全霊喚起
・レテ・バニッシャー↓睡神の拳撃（ヒュプノック・アウト）
・ダーティ・ソードＬｖ．１↓Ｌｖ．ＭＡＸ
・壊刀乱魔↓阿修羅神楽
・致命剣術【半月断ち】参式↓致命秘奥【タチキリワカチ】
・戦極武頼Ｌｖ．１↓Ｌｖ．ＭＡＸ
・剣舞【紡刃】↓剣舞【無尽紡】
・パーシスタンド↓不倒不屈
・メロスティック・フット↓アトラス・タフネス
・晴天流「疾風（はやかぜ）」↓晴天流「旋風（つむじかぜ）」
・晴天流「雷鳴（らいめい）」　Ｎｅｗ
・晴天流「荒波（あらなみ）」　Ｎｅｗ
・タスラム・フィスト　Ｎｅｗ
・隕星落蹴（メテオ・フォール）　Ｎｅｗ
・ガーディアンハート　Ｎｅｗ
・死線上足踏（デッドホライゾン）　Ｎｅｗ
・スラッシュ・イグニッションＬｖ．１　Ｎｅｗ
・ダブルアップ・エッジ　Ｎｅｗ
・仇討の観察眼（リヴェンズ・アナラアイズ）　Ｎｅｗ
・仇討の宣誓（リヴェンズ・コール）　Ｎｅｗ
・仇討の引導撃（リヴェンズ・フェイタリティ）　Ｎｅｗ

装備

右：アラドヴァル・リビルド
左：冥王の鏡盾（ディス・パテル）
頭：正眼の鳥面（ＶＩＴ＋２０）
胴：リュカオーンの刻傷
腰：ラケダイモン・ガードル（ＶＩＴ＋５３００）
足：リュカオーンの刻傷
アクセサリー：格納鍵インベントリア
アクセサリー：封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）
アクセサリー：瑠璃晶の星外套（ラピステラ）
アクセサリー：小鬼人形（ゴブリンドール）
アクセサリー：骨体人形（スケルトンドール）

――――――――――――

この勝利（レベルアップ）を、今は亡き友人（蠍）達に捧げたい。

上昇レベルは３７、今まで一度もレベルを下げることなく蓄積してきた経験値は今この瞬間超新星の如く爆発し、次のレベルキャップへと至る後半にまで到達していた。

レベルアップできない、言い換えれば羽化の瞬間まで技巧を極め続けたスキルの数々は新たなる姿へと変わり、まだ見ぬ未知のスキル

をも新たに目覚めさせていた。
そして何より明らかに今の職業と深い関係にありそうなスキルが、ユニークシナリオのその先を匂わせる致命秘奥が。
「そう……今の俺は、神だ」
「サンラクサンは人ですわー」
「気分的な問題だって」
全知全能系じゃなくて多神教にありがちな特化型の神な。
膨大な量のステータスポイントは単純なレベルアップによるものだけではなく、ユニークモンスターとの遭遇や撃破のボーナスも含まれた……まさしくこれまでの集大成という奴だろう。選り取り見取りにステータスを触れるぜ、よだれが出るね。
「あー、たまんねぇな……」
この、ね。なんというか……圧倒的「力」を我が物にした快感よ。そして俺は地味に気づいてしまった、これ無理にキャップ開放するよりＥｘｔｅｎｄ状態を維持したままモンスターを倒した方が効率が良いのでは……なんてこった、ライブラリに言うべきか？　でもなんか悔しいので黙っておこう。
「な、なんかサンラクサン……ヴォーパル魂が足りてない顔してるですわ」
「何言ってんだよ、これからヴォーパル魂フルスロットルな敵に会いに行くんだぜ？　無論お前も一緒になぁ……」

「そ、そうでしたわーっ！？」

さーて、性能チェックしつつステータスを振りますかね。

…………………

…………

……

「はっ、しまった！」

ステータスいじりに夢中で今まさにトットリ達が戦闘中な事が頭からすっぽ抜けてた！！

「流石に遅刻は戦犯の誹りを免れない……！　乗れエムル！！」

「はいなっ！」

封雷の撃鉄・災を使う必要？　フッ、必要性が感じられないな。

「ファーラウェイ（もっと遠くへ）！」

スキルすら起動していない単なる身体の動作だけで覚醒の祭壇、その「爪」を駆け上りそこから家屋へ飛び移ってきた道を戻る。最短

ルートだ、屋根の上を突っ走る！！

「エムル！　戦線に戻ったらお前は遊撃に移れ！」

「サンラクサンの頭に乗ってた方がいいんじゃないですわ？」

「フッ……俺の速度についてくる事が出来ると？」

まぁそれは冗談として、俺自身今の俺がどれだけの事が出来るのか測りかねている。エムルを乗せるのはそこらへんを把握してからって事だ。

それに一旦休憩を挟んだ事で思考に柔軟性が戻ってきた。いくつか試したい事もあるし………あんまり気は進まないが、現状で最高のパフォーマンスを実行するにはアレを使う他にはない。

見えてきた、真っ赤な怪物と、それに対抗する黒煙纏いし怪物……悪いがサンドバッグになってもらう。

「行くぞエムル、フォーメーションBだ！！」

「び、びーっ！　……って、何ですわ？」

「そりゃあお前……」

Bは「分離」のBだよ。

さながら宇宙に打ち上げられたロケットがその過程でブースターを切り離すように、俺の頭から放り投げられたエムルが後ろへと流れ

ていく。

「ちょっ……ぴゃぁあぁあぁあぁあぁあ！！？」

「さぁ……過去の自分を振り切っていこうかァ！！」

遮那王憑きの進化スキル、その名も鞍馬天秘伝！　モーション強化補正は遮那王憑きと同様だが強化値が大幅に向上している事に加え、不安定な場所に立つ補正もかかる！　例えば細い枝の上であったり、例えば……

今まさに猛る「傷だらけ（スカー）」の背中の上であったりな。

「ハローモンスターズ、真打の登場だ」

「傷だらけ（スカー）」は現状放置でいい、勝手に暴れるオブジェクトと考えればいいわけだし少なくとも俺達みたいな虫けらよりは貪る大赤依を優先するだろう……してくれないと困るしそうさせる。そして貪る大赤依、お前に関しちゃ二、三点ほど検証しなきゃならんことがある。

「対竜武器アラドヴァル・リビルド………そして、対海棲生物武器海喰の剣（ブルー・プレデター）……もしかしなくても、この組み合わせがお前に一番よく効くんじゃないか？　なぁ青竜エルドランザ」

「Qyaaararaaaaaaaaaaaaaaaaa！！！！」

おーよしよし、思わず俺にビームを撃つほどに嬉しいか。だったら骨の髄までたっぷり味あわせてやるよオラァ！！

そしてぇ！　あんまり使いたくなかったけどォ！！　俺の予想が正しいならァ！！

「これが最適解なんだろ畜生！！！」

二つの剣を上空へと投げて聖杯使用！　肉体（アバター）を男性から女性へと変更し、さらに灼骨砕身で刻傷を一旦無力化しつつ一式装備を纏う。あまりにも素材があまりすぎたのでなんとなく作った水晶群蠍の素材を使った「水晶輝装（クリスタル・ドレス）」シリーズ！　男版は文字は一緒でも読みはクリスタルアーマー！　でもどっちにせよ今の俺にとっては消耗品だ！！

「ええい！　気色悪い目でこっち見んな変態！」

ダメだ、女声で罵っても奴はもっと悦ぶだけだ。あーあ、隕石落ちてきて全員死んでくれねーかなぁ！！

「はいはい変身変身！」

煌めく白銀のバトルドレスを纏いながら、いい加減自分の背中に引っ付いた虫けらを落としたくてたまらなそうな「傷だらけ（スカー）」の背中より跳躍。それと同時に漆黒のクリスタルを握りしめ、起動をイメージする。

白銀のドレスに亀裂が走る。それは物質的な損傷であり、もっと概念的な損失が視覚的に確認できるものであり……粉々に砕け散った水晶が雪の如き極小の粒となってキラキラと輝き散っていく中、俺の全身をどす黒い影が締め付けるように纏わりついていく。

「魔法少女だ！　魔法少女のエロ変身だ！　バッチリ撮影できてる

よぉサンラクくぅぅぅぅん！！」

「消せ！　いや消す！　お前の存在を絶対に消すからなぁ！！」

畜生貪る大赤依絶対許さねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

「三枚おろしにした上で八つ裂きにして粉微塵にしてやる……！」

ちょうどのタイミングで上から降ってきた灼熱の黒剣と波濤の青剣をキャッチ、漆黒の喪服が二つの剣を構えて真っ直ぐに真紅の怪物を睨め付ける。

「喪に服してやるから存分に死んでくれよな」

「決めゼリフＦｏｏｏｏｏｏｏ！！！」

よし、まずあいつから先にキルしよう。

竜よ、竜よ！　其の十六（後書き）

整理してこんな感じ

――――――――――

ＰＮ：サンラク
ＬＶ：１３６
ＪＯＢ：仇討人（二刀流使い）
ＳＵＢ：神秘「愚者」
特殊状態「導きの灯火」
１９４，７８１，０００マーニ
ＨＰ（体力）：８０
ＭＰ（魔力）：７０
ＳＴＭ（スタミナ）：１６０
ＳＴＲ（筋力）：１５０
ＤＥＸ（器用）：１６０
ＡＧＩ（敏捷）：１６０
ＴＥＣ（技量）：１１５
ＶＩＴ（耐久力）：１（３７，７００）
ＬＵＣ（幸運）：２２９
スキル
・百閃の剣（ヘカトン・スラッシュ）
・鋭結点睛（えいけってんせい）
・リミットオーバー・アクセル
・真界観測眼（クォンタムゲイズ）
・百秀の神腕（サウィルダーナハ）
・重律踏覇（エクシードグラビティ）
・鞍馬天秘伝

・無重律の恩寵（スペースチャージ）
・ヘルメスブート
・宿命の狼兆（ウルフェイト・サイン）
・致命秘奥【ウツロウミカガミ】改備（あらためぞなえ）
・ブラッドバーン・バースト
・リミット・マキシマイズ
・全霊喚起（ヒュプノック・アウト）
・睡神の拳撃
・ダーティ・ソードＬｖ．ＭＡＸ
・阿修羅神楽
・致命秘奥【タチキリワカチ】
・戦極武頼Ｌｖ．ＭＡＸ
・剣舞【無尽紡】
・不倒不屈
・アトラス・タフネス
・晴天流「旋風（つむじかぜ）」
・晴天流「雷鳴（らいめい）」
・晴天流「荒波（あらなみ）」
・タスラム・フィスト
・隕星落蹴（メテオ・フォール）
・ガーディアンハート
・死線上足踏（デッドホライゾン）
・スラッシュ・イグニッションＬｖ．１
・ダブルアップ・エッジ
・仇討の観察眼（リヴェンズ・アナラアイズ）
・仇討の宣誓（リヴェンズ・コール）
・仇討の引導撃（リヴェンズ・フェイタリティ）

装備

右：アラドヴァル・リビルド
左：海喰の剣(ブループレデター)
頭：黒き死に捧ぐ嘆き(レクイエスカト・イン・パーケ)（ＶＩＴ＋９０００）
胴：黒き死に捧ぐ嘆き(レクイエスカト・イン・パーケ)（ＶＩＴ＋９９００）
腰：黒き死に捧ぐ嘆き(レクイエスカト・イン・パーケ)（ＶＩＴ＋９３００）
足：黒き死に捧ぐ嘆き(レクイエスカト・イン・パーケ)（ＶＩＴ＋９５００）
アクセサリー：格納鍵インベントリア
アクセサリー：封雷の撃鉄(レビントリガー)・災(ハザード)
アクセサリー：瑠璃晶の星外套(ラピステラ)
アクセサリー：小鬼人形(ゴブリンドール)
アクセサリー：骨体人形(スケルトンドール)

————————————

何？　防御力がインフレしてる？　大丈夫、どれだけ頑丈な容器に入れても中身がプリンだから思いっきり叩けば衝撃で死にます

竜よ、竜よ！　其の十七（前書き）

修正：血戦主義の進化スキルはブラッドバーン・バーストではなく全霊喚起でしたのでそれに伴って文章の一部変更。

竜よ、竜よ！　其の十七

たとえ取るに足らないちっぽけな虫ケラだとしても、その身にスズメバチの顎を毒を針を纏っていたならば、それはスズメバチと同じように警戒しなければならない……そうだろう？

R．I．P．という物騒な虎の威を全力で借りている今の俺を貪る大赤依は敵意を向けるに足る存在であると認定したらしい。
赤い竜巻が内側から膨らむかのように蠢き、過剰なまでに筋肉が搭載された赤い牛を産み落とす。それはどこまでも無機質な存在が有機的な動きを取り繕っているかのような咆哮を上げると俺を目指して突進を繰り出した。

「肉がよく詰まってる事で……サンドバッグとしちゃ丁度いいか」

百閃の剣(ヘカトン・エッジ)起動、アラドヴァル・リビルドを筋繊維まで真っ赤であろう赤牛へと叩きつける。

「先ずは一ヒット！」

続く海喰の剣(ブループレデター)を振り抜けば、赤牛の外皮で二発のヒットエフェクトが弾ける。

「まだまだ増えるんだよなぁ！！」

再びのアラドヴァル・リビルドの斬撃は四ヒット、返しの海喰の剣の突きで八ヒット。さらに続けて十六、三十二、六十四。上限が百なので百二十八とはならないが……次の斬撃は一振りで百ヒットと

いう規格外の一撃が約束されている。
だがまだ使わない、このスキルの真価はもう一つのスキルと組み合わせてこそ真価を発揮する。少なくとも俺はそう確信している。

「ほら来いよ、マタドールがヒラヒラ布を振ってるぜ？」

スカートの端を摘んでふりふりと振ってやる、どうやら挑発としては結構有効であったようだ。赤牛の全身が空気でも詰め込んだかのようなさらなる膨張を始め、内側から爆ぜてしまいそうな程の力みを起爆剤として赤牛が俺へと突っ込んでくる。

その速度たるや、距離を離し警戒していた俺ですら虚を突かれるほどの速さであり……この遅くなった世界でそれだけの速度が出るのかと驚きつつつも、余裕を持って回避し「詰め」に入る。

真界観測眼（クォンタムゲイズ）、瞬刻視界（モーメントサイト）とほぼ同等の性能ではあるが、無論それだけではない。

「未来視、って訳ではない……の、か！」

視界に映る真っ赤な「波」。例えるなら風に色をつけたものが見えているかのような、赤牛の後脚から此方へと吹く敵意の風。それは真界観測眼（クォンタムゲイズ）によって可視化された「攻撃の波」だ。
言うなれば寸前ではあるものの敵から繰り出された攻撃がどれだけの範囲をどれだけ攻撃するのか、それが見えるようになる。
見えたところでどちらにせよ死ぬ攻撃にはあまり意味のない追加効果ではあるが、こういう単純なフィジカル攻撃であればタイミングが若干遅いものの未来予測と言ってもいいだろう。どういう仕組みでこのスキルが発動しているのかは気にしない事にする。

「さぁて……こっちを向けよ、串焼きにしてやる」

スタミナは程よく減っている、そして百閃の剣(ヘカトン・エッジ)の効果は未だこの剣に宿っている。そしてこの瞬間にこそ輝く一突きがある！！

振り返る赤牛、その目は赤一色であるが故に感情を持たず……だからこそ死の刹那に恐怖を抱く事もないのだろう。

「鋭結点睛(えいけってんせい)！！」

一念岩穿(いちねんいわうがち)の進化スキル鋭結点睛(えいけってんせい)、進化前が複数回の刺突でその威力を高めていたのに対し、こちらは行動の終わりに近いほど……即ちスタミナが減っていればいるほどに火力が上昇する。

さて問題です、牛の頭に限界まで威力が高まった百連撃を一度に叩き込んだらどうなるでしょうか？

では実際に見てみましょう。

限界まで研ぎ澄まされた一撃が赤牛の額を貫く。瞬間、刺突点を中心にダメージエフェクトが大輪の花を咲かせる。

振り返ったばかり、という踏ん張りの少ないタイミングだったことが災いしたのだろう。ダメージエフェクトがに埋もれて見えなくなった赤牛の頭を何か大きな力が押し付けているかのように文字通り筋肉質な巨体が後ろへと吹っ飛んでいく。

「回避を軽視するからそうなるんだぜ？」

どうやら途中で体力が尽きたようで、その身体が一瞬赤い霧のよう

に崩壊。だがそこで止まる事なく霧の全てがダメージとは異なるエフェクトと共に消え去った。

そしてこの瞬間、俺の仮説は確信へと変わる。

貪る大赤依とは要するに狂える大群青と同じ群体モンスターだ。

群体モンスターにおける体力の定義はゲームによってまちまちではあるが、大抵は本体を倒せば他の雑魚も一緒に死んだりする訳だ。

だがしかしこのゲームの名はシャングリラ・フロンティア、気色悪いレベルで妥協というものを見せないこのゲームにおいて、一大コンテンツたるレイドモンスターをゲーム的妥協で薄めるようなことはするまい。

つまりは、だ。「貪る大赤依」という巨大な群体モンスターの一部、あの虫の一匹一匹……例えそうでなくとも奴が生み出す分身にも「死亡判定」があるのではないか？　果たしてそれはR．I．P．の効果が発動した事で実証された。

「評価を改めよう、お前はすごい奴だR．I．P．……！」

シャンフロの性質上、群体モンスターとの戦闘では絶対的優位性を確保できる。そう、例えば今この瞬間とかなぁ！！

「次出せオラァ！　まだまだ足りないんだよ！！」

R．I．P．はキルスコアに応じてステータスに補正が入る。レベル136としてSTRなども底上げしたとはいえ、あと十体、いや七……六体は倒さなければならないのだから。

「それとも……その頭をぶっ潰せばキルスコアに加算されるのか？
　んー？」

おうおうおう尻尾頭君よう……まだ君にお礼参りしてなかったなァ……！！

「間引きの時間だぁぁぁあ！！」

トカゲの如く千切り落としてやるよその尻尾をな！！

赤牛との戦闘で離れた距離を詰めるべく動き出す。

リキャストの終わった鞍馬天秘伝、ライオットアクセルから進化したリミットマキシマイズ、月狼の誇り（マーナガルム・プライド）から進化した宿命の狼兆（ウルフェイト・サイン）、メロスティックフットの上位スキルアトラス・タフネスの連続発動。

要約すると「超速くなるし超強く（ノーリスク）なるけど体力を高燃費で削っていく」状態、成る程つまりいつも通りだな！！

「っしゃ！」

もう俺の中では結構なマブダチ度を更新する「傷だらけ（スカー）」の攻撃に合わせて前へ踏み出す。相変わらず尻尾頭は俺を処理したくてたまらないようだが……いいよ、こっちから出向いてやる。

「遅い遅い遅ぉぉい！！」

所詮レーザーも銃弾も直線運動に過ぎない！　跳弾も反射もしないなら顔を傾けるだけで回避だって出来る、なんせお前の攻撃は散々見てきたからなぁ！

「パターンも、タイミングも……丸っとお見通しだ」

だからこそあえてカスダメを受ける。本体の防御はゴミだが、Ｒ．Ｉ．Ｐ．の防御力でカスダメを調整して全霊喚起を起動する。

血戦主義の上位スキルたる全霊喚起は受けたダメージによって減少した「ＨＰの数値」がそっくりそのままＳＴＲ、ＡＧＩ、ＶＩＴのいずれかに加算されるという頭のおかしいスキルだ。

つまり今の俺の体力が８０なので７９相当のダメージを受ければ三つのステータスのいずれかに一時的ではあるが７９という数値が加算されるわけで。

とはいえランダムなので常にクソ乱数の影が付きまとう上に加算数値が高いほど効果時間も縮むので……逆に言えばカスダメの積み重ねであれば有効な強化手段たりうる。

「ぐ……っしゃＡＧＩキタァ！！」

左頬を灼く真紅の光。だが弾けた血色のダメージエフェクトがそのまま全霊喚起のエフェクトへと変換されさらなる加速を得る。

リミットマキシマイズのデメリットで目減りするＨＰをさらに削る全体量の五分の一のダメージ……即ちおよそ１６の数値がＡＧＩに加算された事で更なる加速が俺の背中を押し出す。残り十メートル！

ここに来て俺の脅威度が更新されたようだが……馬鹿め、「傷だらけ(スカ)」を放置してこっちにヘイトを向けるなど愚の骨頂だろう。

「よう」

その距離は既に五メートルを切った。互いに攻撃圏内、そして速さは俺が上。

ここでワンポイントアドバイスだ、よーく聞け貪る大赤依。

「一瞬だ」

トン、と右胸を叩く琥珀。

その圧倒的瞬間火力の代償として長めのリキャストタイムが設定されている攻撃スキルは、神秘の力で再使用までの時間を半減されている。

そして一瞬の中でいくつかのスキルを重ね連ねて起動して……

次の瞬間、俺の姿は既に貪る大赤依の背後に在り、貪る大赤依の全身が爆ぜるようにダメージエフェクトを噴き出した。

「ぶっつけ本番……このスリルたまんねぇな」

風に煽られ翻ったヴェールから露出した顔に笑みを浮かべ、俺はそれへと語りかける。

「こっからがクライマックスだが、先に死んでてくれよな」

そう言って百連撃(ヒット)の刺突によって本体から切り離された尻尾、なおも此方へと殺意を向ける尻尾頭をアラドヴァル・リビルドで串刺した。

さぁ、どいつもこいつも後衛職、仕方ないから俺一人でタンクをや

っていこうか。

竜よ、竜よ！　其の十七（後書き）

斬首　（ケツ）

次回、トットリ（ヤムチャ）視点

主人公は何をしたの？
原理的にはルティアさんの参撃陸斬とほぼ同じ理屈、絶対的先攻から繰り出される超立体的２２７ヒット辻斬り

竜よ、竜よ！　其の十八

「あははははは！　見た！？　見たかいトットリ君！　何あの動き、きっもちわるいなぁ！！」

「やべー……」

トットリの目はその一連の動きを全て目撃したにも関わらず、全体の半分も理解しきれていなかった。

突然サンラクが性転換したかと思えば女児向けアニメのような変身と共に、全く女児向けアニメではないビジュアルになったかと思えばアレである。

「要するに……加速した、ってことなのか？」

「いーっひっひっひ……あーお腹痛い。まぁ要約すれば、そうなるねぇ……」

だがそれは完全な答えではない、とディープスローターは笑う。

「ボクも全部を把握したわけじゃないけどぉ……多分、空中ジャンプと物理演算のベクトル変更を組み合わせたんじゃないかなぁ」

「それって、グラビティゼロとかフリットフロートみたいな？」

「ま、俗に言う三桁スキルって奴じゃなぁい？　にしたってあの速さのタネは謎だけどねぇ……」

種明かしをするならば、サンラクは封雷の撃鉄・災の発動に加えて莫大な量のスキルを起動していた。

これまでの身体能力を向上させるスキル群に加えて一定時間の経過もしくは被弾するまで空中歩行を可能とする「ヘルメスブート」。

足裏が接触している必要のあったグラビティゼロとは異なり、プレイヤーの思考で重力作用の方向を決定する「無重律の恩寵（スペースチャージ）」。

足場が不安定であるほど、重力に逆らっているほどにその作用を軽減する「重律踏覇（エクシードグラビティ）」。

そして「百閃の剣（ヘカトン・エッジ）」及び「鋭結点睛」の火力を高めるための限界まで強化された「戦極武頼」。

連続で攻撃を当てることで発生するコンボ数が多い程に火力が高まり、さらにコンボ数を重ねていくほどに行動で消費するスタミナが軽減されていく「剣舞【無尽紡】」。

残存体力１０％を境界線として、それ以上とそれ以下を往復する度にステータスに強化補正がかかるという特殊な方式の強化スキル「死線上足踏（デッドホライゾン）」。

そして攻撃の予兆を可視化し、神速の世界を観測するための眼を齎すスキル「真界観測眼（クォンタムゲイズ）」。

あとは単純明快、上下左右、地面も重力すらも無視した動きで貪る大赤依の身体の上すらも走り抜け、尻尾を終着点として切り刻んだだけである。

「うふふ、フフフフフフ……！！」

「楽しそうっスね」

「そう見える？　そう見えちゃうよねぇ………くくく」

攻撃スキルも含めれば実に九つに及ぶスキルの超連続起動、それは普通の頭では到底できない筈の芸当だ。

だが、

だがもしも、それを人の頭で実現するとするのであるならば……それはまさしく、思考をホットケーキでも切り分けるかのように分割する並列同時処理（マルチタスク）を使う他には存在しない。

尤も、サンラクが行っているのは思考を切り分けて別のことを考えるような完全なる並列ではなく、思考をさながらレーンの上に乗せたボールを連続で流していくかのように高速で切り替えることでスキルとスキルの発動間隔を極限まで縮める芸当なのだが、どちらにせよそれは並列同時処理（マルチタスク）に繋がる技術ではある。

そして、ディープスローターが笑う理由がそこにあることをトットリは知らない。だからこそ「ディプスロさんサンラクのファンか何かかな？」とあっさり片付け、自身も戦線に復帰すべく回復や補充をしつつも改めてサンラクの方へと視線を向ける。

「……ユニークモンスター倒せるようなプレイヤーって、あんくら

いしないと駄目なのか」
「さてどうだろうねぇ……俺だってユニークモンスターがどういう戦闘を強いてくるのかなんて知ったこっちゃないしぃ……」
まぁ少なくともあの機動力に特化した、特化しすぎた構築が必要な敵ではあったんだろうねぇ。
その背中で吹き荒れる赤い竜巻から噴き出した赤い靄によって再生した尻尾の猛攻をかわしつつ再びアタックを仕掛けるサンラクを眺めて言いながら、小杖（ワンド）を仕舞い込んだディープスローターは一本の長杖（ロッド）を取り出す。
トットリはその現物を見たことがあるわけではない、だが「賢者」の職業に到達したプレイヤー達が語るある噂と、歯車を無理やり捻ってメビウスの輪にした上でその周囲を手のひらサイズのモノリスが五つ浮遊するその長杖の量産品とは思えない輝きを見たことで直感的にとある名を呟いていた。

「実現杖ザ・デザイアー……？」

「あれぇ？　トットリ君これのこと知ってるんだぁ……おかしいなぁ、ずぅっとインベントリの中に入れて滅多に使ってないのにねぇ……あ、内緒にしといてね？」
「え、マジでザ・デザイアーなのかこれ!?」
実現杖ザ・デザイアー。

その名はあまりに有名で、そしてその所有者は名も姿も知られていないにもかかわらず「簒奪者」としての悪名をプレイヤー達の間に轟かせている。

ユニークシナリオ「究極魔道に至る極意（ウルティマギア・デザイアー）」、発生条件は最上位職業「賢者」を取得していること。NPCから貰うことができる「究極魔導の断片」というアイテムを集めることで究極の杖、その名も「実現杖ザ・デザイアー」が手に入る……そんな触れ込みで発生したユニークシナリオに、多くの魔法職プレイヤーが白熱した時期があった。

そしてそれは魔法職のプレイヤーのみで構成されたクラン「魔女の教会（ウィッチャーチ）」のクランリーダーがプレイヤーに向けて多額の懸賞金を出したことからも伺える。

だが、その白熱はある時期にぱったりと消えることになる。
最終的に「賢者」プレイヤーの過半数から「究極魔導の断片」を受け取り、究極の杖がある座標を突き止めた「魔女の教会（ウィッチャーチ）」のクランリーダーがその場所で見たものは……
既に何者かによって杖を持って行かれた後のがらんどうの祠であった。

「魔女の教会（ウィッチャーチ）」はクランメンバーに「聖杖」の所有者を抱える魔法職プレイヤーの総本山と言うべき盛り上がりを見せているが、それでも「実現杖ザ・デザイアーの所有者は出禁」という規約（ルール）がクラン運営に組み込まれているほどにその遺恨は根深い。

「ディプスロさんが持ってたのか！？」
「そうだよぉ……あの魔女お姉（じ）さんがしこしこお金をばらまいてる

間に、ちょいちょいとねぇ……」

「え゛、あの人女性じゃ……」

「ネカマだよあの人、このボクが言うんだから間違いないね」

今何か凄まじく衝撃的な事実が暴露された気がする、とトットリが汗を流すのを他所にディープスローターはザ・デザイアーを構えると魔法の発動準備を始める。

「と、とりあえずそれは置いておこう……なぁディプスロさん、えーと、なんだっけ……エ……エウ……」

「ん？　【東風より来たれ(エウロス・バベリ)滅びの大王(オ・アンゴルモア)】のこと？」

「そう、その魔法って隕石を落とす魔法なんだよな……どれくらいの範囲にダメージ判定が出るんだ？」

少なくとも実現杖ザ・デザイアーを出してまで発動する魔法だ、単なる範囲魔法で片付けていい威力ではないのだろう。最初は「サンラクも巻き込まれるのではないだろうか」と考えていたトットリであったが、あの規格外の速度を目撃してからはそんな心配もどこかへと吹き飛んでしまった。

であればトットリがすべきは、森人族が巻き込まれないようにあらかじめ避難を……

「あんなの嘘に決まってるじゃないかぁ、なんだよ隕石を転移って

……うふふ、無理無理」

「…………は？」

魔法を創り出すＭＭＯを滅ぼした悪魔が嗤う。

竜よ、竜よ！　其の十八（後書き）

ディプスロさんはスペクリ出身者、つまりそういうこと。

「魔女教会（ウィッチャーチ）」のクランリーダーはバ美肉お兄さん。性別バレした時の反応を楽しんでいるので隠してはいるがバレても割と無敵、オカマキャラは強いって相場が決まってる……が、それはそれとして十億かけて空振りフルスイングさせられた恨みは忘れない

なお余談ですが新大陸側に「実現杖」の対となる「具現杖」があるので頑張れバ美肉お兄さん！　（バ美肉って言葉が使いたいだけ）

竜よ、竜よ！　其の十九

「………いやいやいや、待ってくれディプスロさん。つまり……全部嘘？」

「んー？　隕石魔法に関しては全部嘘だねぇ」

あっけらかんと、ここに至るまでの全ての大前提を根元からへし折るかのような白状。数秒ほど呆然としていたトットリであったが、ハッと我に返るとディープスローターへと詰め寄る。

「い、いやいやいや！　この状況でそれは笑えねぇって！　どうすんだよ！　サンラクの奴は隕石前提で戦ってんスよ！？」

「隕石前提で戦う、って字面面白すぎなぁい？」

「〜〜〜〜っ！！」

尚ものらりくらりと茶化すディープスローターに、業を煮やしたトットリは怒鳴り声をあげてさらに詰め寄らんとする。だがそれよりも先に突き出されたディープスローターの縦向きの人差し指がトットリの唇へと押し当てられる。

「しぃー、怒らない怒らなぁい？　まずは落ち着こう……ね？」

穏やかな女性の声でそう言われて、尚も怒りを放出できるほどトットリは怒りに我を失ってはおらず、さらに言えば「実現杖ザ・デザイアー」を持つディープスローターであれば何か策があるのではな

いか、と渋々ながら一歩下がってディープスローターの言葉を待つ。
「……なんで、嘘なんかついたんだ？」
「え？　なんでって……ぼかぁサンラクくんが苦難を乗り越えるのを見るのが大好きなんだぜ？　そんな、ただ制限時間まで耐えきれだなんて、そんなそんな……」
何故か顔を赤らめて身をよじりだしたディープスローターに、トットリは心からドン引きすると同時にサンラクが何故ああもディープスローターを蛇蝎の如く嫌っていたのかを悟った。
「イ、イかれてる……」
「自覚してる」
だからこそ、とディープスローターは実現杖を構えて笑みの種類を変える。
「今からやるのはサンラクくんが知らない、サンラクくんごとあの二体を仕留める魔法さぁ……！」
「なん……はぁ！？」
「何言ってるですわぁぁぁぁあ！？」
本当に同一人物なのかも疑わしい凶悪な笑みを浮かべて告げた言葉に、トットリのみならず遊撃から合流したエムルすらもが叫ぶ。
「大丈夫大丈夫、サンラククんは大概頭おかしいから普通に許して

くれるって」

「いや、いやいやいや！　レイド戦でFFされるとかリアルファイト案件ですよ！？」

「――――それはこまるなぁ」

でもね、と実現杖を動かしながら大きく息を吸い込んだディープスローターは、そのまま目まぐるしく動き回るサンラクへと大声で問いかけた。

「サンラクくぅーん！　諸共巻き込んじゃっていいかなぁーーーっ！？」

数秒ほど返答はなく、荒れ狂う大質量の猛威の中で巻き上げられる土煙。それを掻き分けるようにしてステップと呼ぶには少々飛距離の大きすぎる後退をする喪服の女が真紅の閃光を避けながら叫ぶ。

「死ね！」

「オッケーだってさ」

「いやどこが！？」

「まぁ確かに「駄目」とは言ってないですわ……」

いつまで経っても落ちない羽虫に、いい加減業を煮やしたのか（業を煮やす、という感情が貪る大赤依にあるのかは別として）再生した尻尾だけではなく、四本ある胴体から生えた首のうちの半数を含めた合計三本のレーザーがサンラクを狙う。

「なんであんな当たり前のようにモンスターと共闘出来てるんだ……」

「どっちも戦い方が大味なのもあるんだろうねぇ……さぁて、やりますか」

実現杖ザ・デザイアー。今はまだその名を知られぬ「具現杖」と対を成すこの杖は、対を成す杖と同質の力を、その名の通りの能力を持つ。

これはディープスローターと、魔女教会(ウィッチャーチ)のリーダーだけが知る言葉。
実現杖ザ・デザイアーが安置されていた祠に刻まれた一文こそが、実現杖の本質をこれ以上なく明確に述べていた。

～　欲望に果てではなく、故にこそ我は汝に寄り添うもの　～

「じゃあ今回は大盤振る舞いだぁ……二十倍行ってみようかぁ！！」

トットリの目からは如何なる操作をしているかを理解できるはずもなく、いくつかのアクセサリーを取り替えたディープスローターは心底楽しげに実現杖へとある魔法を装填(リロード)する。

それと同時に実現杖の捩れた無限の輪の中心に浮かぶ宝玉が輝きを

増し、モノリスが等間隔にその円周を大きく広げながら回転していく。

「ふむふむ……おやおやぁ？　これもしかして、案外嘘から出た真ってやつかなぁ……？」

「いやあの！　ディプスロさん具体的にどれくらいの範囲を――！？」

「さぁ？　セットしたのが二メートル四方だから二十倍……ここら一帯吹き飛ぶんじゃなぁい？」

「全員退避ーーーーっ！！！」

わぁ、と待ってましたと言わんばかりに森人族達が逃走を開始する。

ディープスローターのますます深まる、しかして何処か祈っているかのようにも思える笑みを作っていた口が、その魔法の名を唱える。

「――どうか君の真価をまた見せて欲しいよぉ……【地殻天移（ウラノガイアテクトニクス）】！！」

所有者の望む倍率（欲望）を実現する、故にこそディープスローターが設定した「引寄転移（ジョウント）」の効果、範囲、コスト……あらゆる要素が「二十倍」となった新たなる魔法が今この瞬間、使い手へと提示された。

それはまるで、今この瞬間に魔法を創（スペルクリエイション）ったかのようで。

「知ってた」

どうせどこかしらでやらかすとは思ってましたよ、うん。
ペンシルゴンの場合は一緒に悪行の引き金を引かせる邪悪だが、こっちは事故を装って後ろから背中を撃ってくるタイプの邪悪だ。
まとめて「傷だらけ（スカー）」と貪る大赤依を屠る、って聞いた時点で「それ俺も含まれてねぇ？」という疑問が常に俺の後ろ髪を引っ張っていた。ドンピシャで大当たりだったわけだ、掛け金何倍？　誰もディープスローターが本当のことを言っている、にベットしてないから賭けにならない？　ははははクソが。

ただな……

「悪辣さが桁違いすぎんだろうがぁぁ！！」

まるで大地を支える土台そのものが前触れなく綺麗さっぱり消失したかのように。数十メートル規模で「陥没」した大地に赤い竜巻を背負う怪物と、黒煙噴き纏う怪物と無害な人間一人が落ちていく。
言葉が通じる俺ですら予想外の落下だ、貪る大赤依や「傷だらけ（スカー）」がそれを予測できるはずもなく、ジタバタともがきながら落ちる二体のモンスターはギャグっぽくて少し可愛い。だが死ね、死んで経験値とアイテムになれ。

「くっ……どうする？　いけるか？」

成る程、上と思わせて下にアプローチをかけるのは奴らしい、後で殴る。

だがここで一つ疑問がある、奴がどんな手段を取ったのかはこの際どうでもいいとして……奴が消した大質量の土やらなんやらはどこに行ったんだろうか？

なんて事はない、見ればわかる。

「あ、あんのクソ変態がぁぁぁ！！」

地盤が消失した地面の直上、即ち俺の真上に浮遊する規格外質量。いいや違う、あまりに大きすぎて落ちてくるのがスローに見えているだけだ。

要するに、あの変態クソ一人劇団はこの大地でダルマ落としをして、引き抜いた地盤で俺達をサンドイッチにするつもりらしい。よーしあとで半殺しにする為にも絶対生き延びてやるァ！！

よーし落ち着け、スキルを使えば落下死を免れる事そのものは難しい事じゃない。壁際で重律踏覇（エクシードグラビティ）と無重律（スペースチャージ）の恩寵を使って横向きに直立しつつ……はい作戦会議。

プランA、全力で駆け上ってサンドイッチから脱出する。最有力だが瓦礫が怖い、封雷の撃鉄・災は必須なので一発でも瓦礫に被弾す

ればそのまま死ぬ。

プランB、インベントリアエスケープ。格納空間から現実空間へ戻った時に土の中に出るのか地上に出るのかが不明なので危険すぎる。

プランC、地下を掘って脱出……んー、鶴橋(ツルハシ)じゃなくてスコップを持っていたのならワンチャンあったな、却下。

ここはやはりプランAで……あれもう地盤がそこまで、ってか間に合うか！？　思ったよりタイムリミット速いんだが、あれこれ詰ん

「Ｏｏｉ」

はい？

竜よ、竜よ！　其の十九（後書き）

・実現杖ザ・デザイアー

果てなき欲望に寄り添うもの、攻撃魔法及び一部魔法を除いた非攻撃魔法を「倍加」する。

コストやデメリットも倍増するのでＭＰ管理が至難であることと予想外の自滅の危険性を解決すれば、天変地異に等しい事象すら起こすことが出来る。

規模が変わるだけで内容は同じ、故に厳密には魔法を使ったとは少し違う。火力がヤバすぎてもメラはメラ。

竜よ、竜よ！　其の二十

哲学的ゾンビ、だったか。表面上は人間と全く変わらない反応を示しているとしても、内面では一切の感情を抱かない存在……あるいは貪る大赤依とはそう言った存在なのかもしれない。
だがそれでも、奴にとっても上から降り注ぐ地盤によって土葬されるという事態は焦るに値するようだ。
発生源が下に落ちたとこで自然と赤い竜巻もまた本体に追随する。そしてこの大穴に蓋をされ、圧殺されるまでの僅かな猶予に貪る大赤依が選んだ選択肢は極めてシンプルな力技であった。

「Ｏｏｉｉｉ」

赤い竜巻がこれまで分体を生み出していた時とは明確に異なる揺らぎを見せる、それは粘土をこねるかのように其の大部分を一点にまとめ上げるとそれを産み落とした。

「なんだ、そりゃ……」

色が赤一色なのは気にしないとして、生み出されたそれを一言で形容するなら……なんだ、パーツのサイズがめちゃくちゃな一つ目の巨人(サイクロプス)、その死体だろうか。
どうやらあのオイオイ言ってるのが鳴き声なのか、いやそれはどうでもいいとして……人に類似した配置の口からは明らかに殺傷に特化した刃物の如き歯が等間隔に覗いており、鼻や眉間といったパーツは一切存在せず馬鹿でかい眼球がでん、と配置されている。

だがそれらはまだ「サイクロプス」と言われても納得できる特徴だ。
問題なのは奴の身体が最初から損傷しているという点、そしてもう一つが……あの「腕」だ。

「くっ……とりあえず上に……！」

目下の問題から目を離すべきではないか。
ここで大人しく待っていても生き埋めにされるだけだ、であれば残り僅かな隙間に活路を見出すしかない。
迫るスキルの効果時間よりも速く陥没した穴の壁面を登りながらも、チラと見えた謎サイクロプスについて思考を巡らせる。

あの赤い竜巻の大部分を用いて作り出されたあのサイクロプスは、産み落とされた段階で既に両足と左腕を損失していた。つまり右腕一本しか存在しないわけで、生まれた時から瀕死という哀れな存在……の筈だ。

だが奴の腕はまるで失った四肢の力を全て右腕一本に集約したかの如く、一目で「ヤバイ」と理解できる異様な肥大化が認められた。
何せ75％ダルマ状態の胴体よりもデカい、というかあれでは腕に胴体がくっついている、と言った方が正しいのではなかろうか。

「ぬ、おおおお！！」

くそッ、生き埋めにされんとする貪る大赤依の足掻きに気を取られすぎたか、既に土と石と岩の塊は大穴に蓋をしてしまうほどに地面へと近づいており、俺が僅かな隙間から差す夜光へ飛び込むには全速力でなお時間が足りない。
おのれディィープスローター、あの野郎絶対天誅を……！！

「間に合わな……」

腕。

状況。

脱出。

切り札。

ふと、予感がした。

それは単なる勘であり、それは考察の中でたどり着いた一つの仮説であり、果たしてそれはこの詰み状況の中で俺にあえて下に行くという選択肢を選ばせるに至った。

「くっ……効果時間が……っ！」

だがそう長々とスキルの時間が続くはずもなく……来た道（壁）を逆方向へと駆け下りているな、かなまだ十数メートルは高さがある、このまま落ちては死ぬだけだが……ええい、死ねぇ！！

「隕星落蹴（メテオフォール）！」

セルフで高さを確保しなければならないが、落下ダメージをそのまま攻撃ダメージに転用してくれる飛び蹴りを貪る大赤依本体へと叩き込む。

え、今殴るの！？　大技出そうとしてるんだけど！？　みたいな反応をしてるが甘えんなよテメー、予備動作中に殴って止めるなんざ

ゲーマーの基本技能だぞ。あっやめて反撃レーザーはやめて、助けて「傷（スカー）だらけ」！！

「だが、これで俺たちは一連托生だ……頼むぜ貪る大赤依サンよ……っ！」

既に脱出は不可能、つい数分前まで殺傷をコミュニケーションツールとしていた俺たちもこの状況下では呉越同舟だ。何故だろう、同じ種族で同じパーティのディープスローターより信用できる……この、なんでだろうね……

「ＯｏｏＯＯｏｏｏｏｏｏ……！！」

貪る大赤依によって生み出された腕サイクロプスがただ一つ残る異様なまでに肥大化した右腕へと力みをかけ始めた。

赤一色故に分からなかったが、運動エネルギーが溜め込まれていくことでさらに膨れ上がった腕を見て初めてそれが皮膚のない筋肉を剥き出しにしたのものであると気づく。

だがその露出は損傷によるものではない、あたかもその状態こそがデフォルトであるかのような。

ミチミチと……例えるならそう、雑巾を絞りながらもその質量をさらに増している、としか言いようのない様子で何かが起きようとしている。

「待て、いやまさか」

どういう原理か遂に帯電し始めた腕サイクロプスの右腕は既に胴体の二倍近くまで肥大化している。そしてその手が握り拳を作った瞬間、この瀕死の巨人が……貪る大赤依が何をするつもりなのかに気

づいてしまった。
待て待て、俺は物理学とかそういうのは全然詳しくないし、物理演算だってプログラム的に理解しているわけでもないけど……アレに対抗するだけのエネルギーをこんな場所でぶっ放したら……！！

あり得るあり得ないはどうでもいい、ゲームの世界なんだから天地がひっくり返ったって不思議ではない。だからってまさか、何万トンかそれ以上はある地盤そのものを殴り飛ばすなど。
だがそれでも呆けて突っ立っているほど鈍(なま)っちゃいない、棒立ちが許されるのはイベントシーンとエンディングだけだ。
「防御……ダメだ、いや違うインベントリア！！」
力が開放されようとしている。傍目から見ても臨界点までエネルギーが込められた異形の腕は掘り穿たれた地の底から何かを吸い上げているようにも見える。
真紅の筋肉に光のラインが走り、さながらＳＦモノ(シャンフロではない)で１２０％稼働させられるマシンを見ているかのような。後を、先を、未来というものを一切考慮しない一発限りの破壊砲。
「ｉｉｉｉｉＩＩＩＩＩ……！！」
ともすれば少し間抜けですらある鳴き声も、傍らで核弾頭が起爆しかけていれば笑みも吹き飛ぶ。つーか肉体が消し飛ぶ。
「【転送：格納空間(エンタートラベル)】！！」
規格で推し量ることすら馬鹿馬鹿しい極限の暴力が解き放たれる。

脆弱な人間は逃げる他に選択肢を持たない。

だからこそ

視界に映る景色が変わる寸前、それでも尚己の力をこそ信じて貪る大赤依へと襲いかかる「強者」の姿が、やけにはっきりと目に焼き付いた。

時間にして、約三分。カップ麺が完成するかどうか程の時間、それが俺がいないこの穴の底で経過した時間だ。

「……死んでもいいから実際の光景を見た方が良かったかもなぁ」

貪る大赤依の姿はない、恐らくこの「道」から地上へと這い上がっていったのだろう。

コツコツ、とあまりの熱量故か硝子化した地下空間にヒールの音が反響する。顔を上げれば、そこには地上まで斜め方向にぶち抜かれた巨大なガラストンネル。

下手をすればこれがプレイヤーに向けられていたのか、とこのゲームのバランス調整に苦笑しつつ、ガラスの床を進んで行けば探していたそれを視界に捉えた。

「「「…………」」」

「……炭、だな」

もしくはかつて「傷だらけ（スカー）」だったもの、か。
あえて形容するなら爆心地（グラウンドゼロ）に噛みつかんとしていたこいつは、周囲がガラス化するような膨大なエネルギーを至近距離で食らったわけだ。
一体どれだけの熱量を、破壊力をその身に叩きつけられたのか……ボロボロと崩れゆくその身体は、かつてプレイヤー達に死と敗北を与え続けていた怪物とは到底思えないほどに惨めだった。

「それでも、まだ残っている」

このゲームにおいて、プレイヤーだろうがNPCだろうがモンスターだろうが……死を迎えたものは等しくエフェクトと共に「消失する」。
要するに……非常にしぶといと言うべきか、これで死なないとかどう倒せと言うべきか、こいつはまだ生きている。

「…………」

この場で俺には二つの選択肢がある。ずばり生かすか殺すか、シンプルな生殺与奪の権利な訳だが……

「傷だらけ(スカー)」のみならずこいつの種族はある種のエリアボスとしてこの大樹海に君臨している、と聞く。
こいつの種族、ドラクルス・ディノサーベラスはある程度樹海を進むとほぼ確実にエンカウントする、という説がプレイヤー達の間で流れており、その中でもこの「傷だらけ」はパーティメンバーが多い程……要するに数に任せた強行軍を確実に殺す為に派遣される飛びっきりの処刑者(モンスター)なのでは？　と言われている。

そんなモンスターが今、目の前で死にかけているのだ、それにトドメを刺せるメリットは大きい。素材は勿論、今の俺なら経験値だって無駄にはならない。そして何より新大陸開拓における厄介な障害が取り除かれる。

「………」

簡単な事だ、もはや炭の塊なのだから素手で殴ったってトドメを刺せる。大部分のダメージは貪る大赤依が削ったものだが、トドメを刺したとなれば結構なリターンが来るだろう。

それに仇討人としての技能(スキル)を得たからこそ分かる、こいつを倒す事で俺は仇討人としての実績を積むことが出来る。
上手いこと立ち回れば幼女先生からお褒めの言葉を貰うこともできるだろう、サバイバアル憤死作戦の材料がまた一つ増えるな……つっても「スク水姿でパフェを食べる幼女先生」スクショだけで致命傷まで持ち込めそうなんだが。

「まぁ、やることは変わらねーか」

取り出しましたは他ポーションとは異なり割合回復アイテムこと「ミスティック・ソーマ」。聖女ちゃんから前払いの一つとして貰ったアイテムを躊躇うことなく「傷だらけ（スカー）」へと撒き散らす。

「寝ぼけてないでさっさと起きろよ。そいつは俺の奢りだ、どうせ今の俺には不要なもんだしな」

トットリのノリが伝染（うつ）ったかな、まぁどちらにせよ火力貢献もせずにトドメだけ刺していく、ってのはヴォーパル的にはよろしくあるまい。

水晶群蠍？　あんなんトドメ刺すにも命がけだわ、奴らと戦うだけでもヴォーパル極まるっての。

「お前が欠けると火力が激減するんだ、こんなところで野垂れ死んで貰っちゃあ困るんだよ」

じわじわと肉の色を取り戻す炭の塊を眺めながら俺は思わず笑みを浮かべる。

さぁて、これだけの大惨事を引き起こしながら「傷だらけ（スカー）」も、貪る大赤依も、俺すらもキルできなかったあの変態をどう煽ってやろうか。

竜よ、竜よ！　其の二十（後書き）

強いて言うなら「黒」さん、脳筋どころか骨まで筋肉で出来てる

竜よ、竜よ！　其の二十一（前書き）

今章で得た教訓‥やっぱり書きたいことを全て書いてはいけない、二十超えちゃったよ……

竜よ、竜よ！　其の二十一

流石は割合回復、俺何人分かも分からない「傷だらけ（スカー）」の体力もしっかりと回復してくれたらしい。
五割回復なのでほぼ半殺し状態ではあるが、もう一本のミスティック・ソーマを叩きつけてやれば十割回復だ。

「「「カロロロロロ……」」」

「おっと、サンラク商会の一押し商品たる「恩」はぼったくりプライスだ、代金は戦果で決済可能だぜ」

つーか薄暗いとはいえ暗いものは暗い、点灯！

「さっさと地上に出てあの赤野郎にお礼まい、り…………」

マジックトーチによる光源確保、ガラス張りとはいえ景色は土一色なのだから見るものはねぇ、と思っていたが……これはまたどうして。

「見ろよ「傷だらけ（スカー）」、これお前のご先祖じゃね？」

化石だ、頭は一つしかないがティラノ骨格の化石がちょうど硝子越しに露出している。先端が若干消し飛んでるのはご愛嬌だろう。
そういえば化石もアイテムとしてゲット可能だったはず、わぁい化石掘りですわー……と行きたいところだが、それは後でも良いだろう。それに、もっと気になるものがある。

「無傷、無傷と来ましたか……」

内側からの炸裂、即ちあのマッスルインパクトによって作り出されたこの空間は空間に面する場所全てが硝子化している……筈だった。だが一箇所だけ、ただ一点のみそうではない場所……いいや、ものがあった。

「……柱？　棘？」

硝子化してるとはいえ地面の底まで透明になっているわけではない。だからこそガラスのさらにその先、土のさらに下からここまで伸びた謎の突起は土や石とは違い、その材質を本来のままで維持していると言う当たり前が何よりも違和感を放っていた。

岩……ではない、でも鉱石って感じにも……どっちかというと鋼？　漆黒の棘は周囲があのマッスルインパクトの影響をモロに受けているというのに対して、何か影響を受けて今の形態になったという気配がない。

というかこんなのが生えてたのによく気づかなかったな俺……それとも地形が変わったからこそ露出したのか？

「……しかしこの黒さ、どっかで見たことがあるような」

どこだったか……金属質だけどどこか有機的な、それこそモンスターの外殻とでもいうべきこんな感じの質感……リュカオーン、じゃねぇな。あいつは硬いが毛だし……んー？

「うおっ」

なんだ、いきなり浮遊感……いや待て、この吊り下げられる感じは、

てかこれスカートを持ち上げられてる？
宙ぶらりんの姿勢でなんとか振り向けば、そこにはＲ．Ｉ．Ｐ．のスカートを咥えた三つ首の下顎と、爬虫類故の感情が読めない目をした右頭の顔。ついでに逆サイドに左頭。

「きゃあ「傷だらけ（スカー）」さんのエッチぃー……じゃなくて、あっちょっと待ってとりあえずアイテム採取できるのかとか色々確かめたいことが……」

人間の言葉分かりません、と言わんばかりにのっしのっしと出口の方へと歩いていく。当然ながらそれに咥えられている俺もそれに連動して黒棘から離れていくわけで……こ、こいつ俺をオプションパーツ扱いしてんのか！？　なんだその「さっさと付いて来いよやれやれ……」みたいな態度は！！

あっ待って、せめて化石だけでもォーっ！！

のっしのっしと、調子を確かめるような歩みは次第にその勢いを増し、気づけばそれは猛進と言うべき速度へと加速していく。

「まっ、ちょっ、ゔえっ、んあっ、んい゛っ」

そして「傷だらけ（スカー）」の肉体的構造上、スカートを咥えられてぶら下がっている俺は頭の揺れに連動してがっくんがっくんと上下に揺られるわけで、反射的に変な声が出てしまう。

「「ギャオオオオオオ！！」」

「はぁぁぁうっせえええええ！！」

なんだこのクソ過ぎるハイスペックサラウンドはよぉ！？　え、何これ新手の音響攻撃なの？　ボリューム下げ……ええい揺らすなァ！　わざとやってんじゃねーのかこのトカゲヤロー！！

クソッタレな特等席でがっくんがっくん揺れながらも、超特急傷だらけ号は先程まで消し炭だったとは思えない健脚で斜め上へと続くトンネルを駆け上がる。

「んおっ、ゔえっ、おうっ、あぇ」

くっ、視界が揺れる……せめてこう背中に載せるとか……畜生、スカートを咥えてやがるから遠心力的に動きが酷い。待って、せめて、装備を……あれ、このステータスなら……お゛う゛っ゛

「やめっ、つーかお前これパンチラってレベルじゃ……」

あっ、出口……ぐえぇ。

時間が時間なので外に出た瞬間光で視界がホワイトアウトする、なんてことはない。だがそれでも一切の光を持たぬ地下よりも、星や月の光に満ちた地上はずっとずっと明るく……そして阿鼻叫喚であった。

成る程、あれだけの規模の魔法をぶちかまして貪る大赤依だけが這い上がって来たのなら、そりゃあ奴らのメンタルはへし折れるだろうさ。

しかもマッスルインパクト、という見た目的にも絶望感を煽ってく

る事をやらかしてるわけだしな。

即ち、森人族達の戦線が崩壊しているわけで。むしろまだ立ち向かっている森人族がいる、と言うことの方がある意味衝撃的だ。

「……あんにゃろー」

そしてもう一つ、見過ごせないものがある。派手な動きこそしているが露骨に手抜きな動きをする変態だったり、森人族と貪る大赤依、どちらの対処も両立させようとしてどちらも中途半端になっている勇者様だったり。

なんだなんだ舐めプかぁ？　まぁ前者は舐めプだな、奴は殴る。

「おい「傷だらけ（スカー）」、雰囲気（ニュアンス）で理解（わか）れ」

吊るされながらも、指差す先は空。
言葉で答えろとは言わない、行動で応えろ……！！

果たして俺の示す意味が理解できたのか、それとも本能的に俺と言うオプションパーツの使い方に見当をつけたのか。
「傷だらけ（スカー）」の首、頭三つという生物構造的な過負荷を支えるだけの膂力がさらなる力を込めて隆起する。

そして、左右の首が例の焼夷攻撃の為のゲロオイルを上から下へ叩きつけるように吐き出したと同時、真ん中の頭は下から上へと掬い上げるようにその下顎を、そこに引っかかった俺をアンダースローで投げ飛ばした。

嗚呼、喪服が行く……何故モンスターってのはどいつもこいつも俺

を飴扱いしたりボール扱いしたり、殺すにしてももっとこう、労って殺せ？　備品として死ぬってこう、なんとも言えない複雑な感情が……よし、落下軌道。

「出番だ、これがお前の墓標だ……「別離れなく死を憶ふ」！！」

プレイヤーの持つインベントリに入れては重量が嵩む、故にこそ異空間に納めていたモノクロの特大剣が夜光を受けて鈍く輝く。握る力は強く、振るう腕に込めるは斬撃という意思。空中で宙返り、頭が真下を向いた瞬間に天を蹴って下へと加速、さらに足を踏み出し上から下へ……垂直の縦に道を定義して駆け下りていく。

進化したって黄金チーム。加速強化、行動補正、空中歩行、重力方向制御、機動力にリソースを注ぎ込んだ事で獲得したあらゆる制限を踏み越える無敵の「道」……落ちるのではなく上から下へ駆ける一撃は。

「うぞうぞまだるっこしいんだよ、せめて半分に分けろ半分に」

——月だって割れるのさ

致命秘奥【タチキリワカチ】、もう二度と離れないと願い篭った剣で「断ち斬り」「別離つ」とはなんとも皮肉なものだ。だがしかしてその刃は貪る大赤依の四つの首をちょうど左右二つに分けた上で胸部の大口ごと胴体を真っ二つに斬り裂いて。

「ひえっ」

そして俺が着地したすぐ両隣を地を抉るが如き勢いの炎が爆音と共に、左右に割れた二つずつの頭へと襲いかかった。

竜よ、竜よ！　其の二十一（後書き）

別に恐竜と人間の間に絆が生まれたとかそういうアレではなく単純にセンターヘッドが攻撃に参加しなかったから命拾いしただけという

墓ソードで直剣系スキルであるタチキリワカチを使ったのはミスではなく仕様です

竜よ、竜よ！　其の二十二（前書き）

古戦場戦士は一日で二章二部を終わらせなければならないのだ

竜よ、竜よ！　其の二十二

「VyararararararararararaaaaaAaAaAaAAAAAAA！！！？」

絶叫、まさに絶叫と呼ぶべき大音量。流石の貪る大赤依も頭四つを激しくウェルダンされれば悲鳴を上げるのか……いいや違う。
確かに奴はチートじみた再生力を誇っている、だがそのリソースは恐らく群体としての総数に依存している。形態を経る毎の消耗、そしてあのサイクロプスの使用……奴の総数、言い換えれば体力は既に底が見え始めている……いいや、これも違う。
あの悲鳴は、もっと根本的な理由だと見た。感情ではなく、本能が漏らした明確な命の危機……頭じゃない、奴にとって脳みそは取り替えの利くパーツだ。だとすれば悲鳴の原因は「傷だらけ（スカー）」ではなく……

「……今、避けたな？」

基本的に攻撃に対して無頓着で、ダメージをそれ以上の回復で補っていた貪る大赤依。そんな奴が、【タチキリワカチ】が命中する瞬間、確かに数歩後ろに下がっていた。
そうまるで、口の奥まで届きかねない斬撃を避けたかのように……

「お前まさか……「弱点」があるのか？」

嘘だろオイ、こんな……こんな簡単な隠蔽に騙されていたと？　い

や、確かに奴は大口を使った攻撃も何度か繰り出していたし、レイドモンスターが弱点剥き出しならともかく弱点で殴りかかってくるとは思いもしなかったが……まさか、お前……

「その大口、いや……その奥に何かあるのか？」

ああ！　そうか、第一形態！！　第一形態の奴はほぼ死体をそのまま動かしていた、って事はつまりあの姿が「死因」に直結してるってことか！！

「んなもん、一目見りゃわかる……！」

少なくとも、貪る大赤依の第一形態の……いや、エルドランザの亡骸で最も傷が深かったのは肋骨が剥き出しになるほど抉られた胸部の損傷だ。

つまり……

「あの死体に欠けていた、胴体にある……あった何かも第三形態以降で復元されている？」

芋づる式と言うか、これまでに抱いてきた疑問が一気に繋がっていく。

補填、補強、本当にメリットだけか？　始源解帰とかいう本気モードは貪る大赤依の欠けた部分を補填した上で補強した、ってことは無かったものも新しく作られたってことじゃないか？

思い返せばキメラ分体や竜巻から生成されるモンスターだってそうだ、本当に群体モンスターとしての凶悪さを十全に発揮するなら身体が残った状態で倒れる筈がない。それこそ細胞一つ残さず焼却で

もしなきゃあ倒せないくらいはやるべきだろう。

それが斬った殴ったで死ぬ、って事は奴はコピーしたモンスターの肉体的脆弱性も反映してしまうって事じゃないのか？

「つまり……っ！」

大きく開かれた奴の大口の向こう、闇の中に……真っ赤な球体が見える。あれだ、あれこそが弱点だ。

遠いと思っていた崖の向こう側に、攻略法というロープが繋がった感覚。かつてエルドランザを討ち滅ぼした何者か、その戦いを人の手で再現する。

というか海棲でドラゴンに対抗できそうなモンスター、というと例の鯱しか思い浮かばないんだが……いやまさか、ユニークモンスターですらない一般モンスターにやられるユニークシナリオのギミックとかあるのか？　ありそう。

「とりあえず離脱して……おいコルァ！　全員集合ぅーっ！！」

体力全回復した「傷だらけ(スカー)」君がやる気満々なので彼に貪る大赤依

を押し付けて一旦退避。
なんでもない風を装いつつ鼻をグジュグジュ言わせているエムルを頭の上に載せつつ、急遽集めたアホ二人に半目で語りかける

「時間が押してるので手っ取り早く反省会します、まずお前は死ね」

「イェーイ辛辣ぅ！！」

ゴッ！！！

「あっ、待ってシャレにならない死……あふん」

別離(メメント・モリ)れなく死を憶ふの打撃部分で頭を叩いてやれば、下ネタを口に出させる前に黙らせることができる……成る程、これが生活の知恵ってやつか。

「次にトットリ、勇者様を否定するつもりはないけどボス戦かＮＰＣ介護のどっちかに焦点絞ってくれませんかね？」

「い、いや、だけどな……」

「黙れ、ＤＰＳが無い奴は人権も無い。これはシャンフロに限った話じゃない……別に火力が全てってわけじゃないが、妥協した貢献なぞそれこそ奴にでも食わせておけ……オーケー？」

「ぐ……」

別に森人族の避難に専念するとしても止めはしないさ、奴らはいわゆる政治的材料だからな……ある程度は生きていてもらわなければ困る。

「そして俺、出し惜しみし過ぎたのと脳みそ縛ってた、ごめんね」

「自分で反省会するのか……」

自己を省みるのは大事だぞ、作業効率の向上は自身の脳に作業工程を刻み込むことから始まるのだから。

「反省会終了、こっからは攻略会議だ……つっても内容はシンプル、奴の弱点は胴体の大口の奥だ」

「弱点あるのかよ？」

「今の今までノーガード戦法だった奴が避ける必要がある場所ってどーこだ？」

「性感帯！　ぐべぇ！」

懲りないなぁ……だがもういい、蝉の鳴き声か何かと思うことにする。

「おそらく、貪る大赤依は自身のリソースが尽きた上で弱点を攻撃される事で倒されると俺は考えてる。そして今、奴が背負う竜巻はほぼ無に等しいレベルで縮小し、奴は弱点に攻撃が当てられることを嫌がっている」

「今がチャンスってことか？」

「チャンスっつーか……大詰めだな」

たった三人、たった三人でここまで来たんだ……もうこうなったらこっちも出し惜しみはしねぇ。

「この場に残ったのはプレイヤー三人に……エムルと、森人族が三人か」

俺がファーストコンタクトで取り押さえた奴、ツンデレ、アリュール……なんかやたらと縁があるので三人目は名前覚えてた。

「もうこうなったら役割とか気にしてられない、各自死なないように立ち回りつつチャンスが来たら一斉攻撃でいこう。狙いは大口の奥にある赤い玉」

「成る程つまり赤玉だねぇ」

審議中……文脈的にはセーフなので無反応、いやなんでお前が残念そうな顔してんだ。

「……で、なんでしれっと隣に立ってるわけ？」

「そりゃあ……これでも私、近接魔法職だよぉ？　前に出なきゃあねぇ……」

「………」

すすす（三歩離れる）

すすすす（四歩寄ってくる）

「くっ……アキレウスは亀を追い越せないんじゃねーのかよ……っ！」

「ゼノン？　あれ、亀もアキレウスもターン制な上にアキレウスは亀より前に進めないって時点でひっどい縛りプレイだよねぇ……亀だけにぃ！？」

「俺そういうゲーム知ってる」

NPCを勝たせないとゲームオーバーになるゲームって大体そんな感じだよね。

「つーかいい加減下ネタやめろよ、ハラスメント通報すんぞ」

「またまたそういうこと言ってぇ……ちゃんと反応するあたり実は好きなんでしょぉ……？」

「いや別に」

「えっ」

「えっ」

え、マジで俺が下ネタ好きだと思ってたのこいつ。

「色々言いたいことはあるが……ンなもんは二の次でいい、出来ればば奮戦した上で自爆してくれ」

「自爆魔法ってマジであるらしいね、火属性系で」

「マジかよ」

んー、自爆にロマンを感じるのは一種の破滅願望なんだろうか。ロボ系だったら八割お約束だし、そうでなくとも己を犠牲に敵を討つというのはやはりある種のロマンがある。

「っていうかサンラクくぅん……その大剣が私気になるなぁ……」

「秘密兵器だ」

多くは告げず、ただそれだけを言い放って俺は別離れなく死を憶ふ(メメント・モリ)を片手で軽く振って肩に乗せ直す。

「足引っ張るなよ?　キルスコア0のディープスローターさん?」

「言うねぇ……名前の通りに奴の弱点を攻めてあげるから刮目してればいいさぁ……」

待たせたな「傷だらけ(スカー)」、相談は終わった。

そして……

待たせたな貪る大赤依（ダイセキイ）、ここをお前の死地として墓石を突き刺してやるから覚悟しやがれ。

竜よ、竜よ！　其の二十三

「はぁーっはっはっはっはぁ！　雑魚で足止めは最悪手だろうがよぉ！！」

巨大な蚊を一撃で両断、体力が回復する。
一歩前へ進む、封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）の効果で体力が減って「死線上足踏（デッドホライゾン）」の効果発動。

俺の前進を止めるべくさらに雑魚分体が生み出され、そして斬り伏せられていくことで体力が回復する。
時間が経過するごとに体力が減少し、その度に「死線上足踏（デッドホライゾン）」の効果条件を満たす。

そして死を齎す度に喪服はより強くなり、墓標はより軽くなる！！

「っしゃキタキタキタキタぁーっ！！」

別離れなく（メメント・モリ）死を憶ふ。愛故にバーサーク嫁と首を借りパクされた将軍、二つの力を一つの剣としたこの特大剣はある意味当然と言うべきか、プレイヤーが倒したモンスターの数を参照してその能力を発揮する。

まず一つ目は自身よりレベルの低い相手に対する即死効果。
使用者のレベルから対象のレベルを引いた数値が即死率になるらしく、Ｒ．Ｉ．Ｐ．の効果も併さって低レベルモンスターが相手なら理不尽な即死を強いることができる。
尤も、レベル差がそこまであれば普通に殴っても即死みたいなものだとは思うが、それなりの高レベルモンスター相手でもクソゲーを強いることが出来るのはあまりに凶悪、そして残虐だ。やはり乱数は悪……！！

次にこの武器でモンスターを倒す度にこの武器は耐久を回復する。
ぶっちゃけ傑剣（デュクスラム）への憧刃の下位互換と言えなくもない、とはいえこの剣がＲ．Ｉ．Ｐ．とのセット運用を前提としたデザインであると考えれば納得の効果ではある。
別に耐久力に影響を及ぼす効果はオンリーワンってわけでもないしな。

そして最後に……この剣はキルスコアを積み上げる程「軽量化」される。厳密には使い手への負担がどんどん軽減される、はたから見れば持ち上げるのも難しそうな剣を軽々と扱っているように見えるわけだ……実際の重さは特大剣のままだと言うのに。
そして変わるのは重さだけじゃない、この剣は一定以上の軽さになると武器としての性質そのものが変わる。例えば本来は使えないはずの直剣スキルを使えるようになったり、当たり前というか両手枠を埋める筈の特大剣でありながら……
「振り抜いたからって無防備だと思ったかぁ！？　あめーんだよ！！」

片手枠で扱えたりな。
振り抜かれた特大剣に隙を見出したつもりか、不用意に噛みつきを仕掛けてきた頭の一つが竜(アラドヴァル)を断つ灼熱に斬り刻まれ悲鳴を上げる。

とはいえ発泡スチロールのように軽くなったとしてもデカいものはデカい、そして取り回しづらい。だってこれ実質取っ手のついたスノーボードだぞ？　スノーボードを片手で振り回すだけならともかくそれを自在に操るのは難易度が高すぎる。
だが逆に言えば単調な動きであれば片手でも制御できる、例えばアラドヴァル・リビルドで作った隙を全力で叩き斬る時とかな……！

「リソースの１％まで削り切ってやるよ……！！」

ほうら雑魚を出せよどんどん出せよ、キルして強くなるのはお前だけじゃあないんだぜ。
もはや剣というよりもバカでかい団扇(うちわ)を振っている気分になってきたが、デカいということはそれだけ目立つという事でもある。
バスタードソードと特大剣を使い分けながら貪る大赤依の真正面に陣取り、体力の増減を繰り返しながら奴の注目をほとんど独占する「傷(スカー)だらけ」からヘイトを奪い合う。

「だぁあ使いづれえ！」

アラドヴァル・リビルドを投げ捨て、両手で握りしめた別離(メメン)れなく死(ト・モリ)を憶ふをフルスイングで振り抜く。
こちらへとブレスを吐かんとした頭の一つが下顎をかち上げられ、口の中で暴発したブレスが篭った音で爆ぜたのを見上げながらさら

なる攻勢を仕掛ける。もはや後退の文字はない、誰でもいいから奴の弱点を貫いてこの圧倒的不利な筈の戦いを勝利で締めるんだ。

俺へと注意を向ければ「傷だらけ」がフリーとなり、またその逆も起こりうる。頭が多くて全部別のヘイトを持つ？　知ったことか、頭数ならこっちが上だ。

「攻めて攻めて攻めろーっ！！」

貪る大赤依本体を「傷だらけ」が、産み出される分体を俺が抑える事でヘイトを完全にその場へと釘付ける。
まぁそれっぽく言ってるが八割「傷だらけ」が踏ん張ってるのを隅っこで雑魚掃除しているのが俺だ、だって格下即死効果めっちゃ便利……そもそも装備するのに雑魚を倒さなきゃいけないから使い道が限られてるけど、条件が合致すると完全に無双ゲーと化す……

申し訳程度に飛んでくる矢も、回数が重なればそれなりのダメージになる。
悲しい事に矢十発　　エムルの魔法一発なのでＤＰＳの的観点から言えばゴミだ、だがそれを指摘すると心を殺して火力を高めるだけの悲しいマラソンになるので言わない。まぁ尻尾頭を抑えてくれているだけでも大分戦いやすいし貢献はしているか。
ただ狙いだけはやたら正確なので貪る大赤依の大口周りには大量の矢がひっきりなしにぶつかり続けている。確実に追い詰めてはいる、だがあと一歩が足りない。
火力はある、速度もある、カスダメ限定だが耐久力も獲得した。では何が足りないのか……その答えはもう見つけている。必要なものはヘイトと、あと一つ。

「ディープスローター！」

「はいよぉ？」

「……ヘイトを寄越せ！！」

知ってるぞ、お前が習得してる魔法の中にはヘイトを増幅させる魔法があった筈だ。手っ取り早くヘイトを増やすいい方法を思いついた、要するに頭数を増やせばいいのだ。

「私の想い……受け取ってねっ！　【外付けの求心（エクスターナル・ヘイト）】！」

外部補強される注目度、何故か背中がぞわぞわして仕方ないがそういうデメリットだと割り切るしかない。

だがその効果は確かにある、「傷だらけ」からヘイトを奪った事で頭の一つが俺へと視線（熱量有り）を向ける。

「あ、お前ちょっとそこ動くな」

「棒立ちイコール死刑宣告じゃないかなぁ！？」

「ディープスローター、ステイ」

「キャンキャン！　クゥーン！」

ヘイトは一つじゃ足りない、俺一人で稼げるヘイトが仮に５０だとするなら……二人に増えれば１００って事だ。

「ヘイトの分離、稼ぎ直せば二倍ってことだ……！」

致命秘奥【ウツロウミカガミ】改備（あらためぞなえ）、要するにＬｖ．ＭＡＸの別表記っぽいがまだ何か次の段階を残していそうな名前だ。とはいえ効果自体は各効果量や時間が伸びているだけなので運用そのものは変わりない。
その時点でのヘイトをデコイとして切り離し、本体のプレイヤーから注意を逸らす。逆に言えばヘイトを稼ぎ直せば二倍ってことだ。

「効果時間二十秒！　リキャストは！？」

「三十秒、効果量下げていいなら十秒で再使用できるよぉ……！」

「ゴー！」

十秒でヘイトを稼ぎ切る！
デコイへ飛びかかるカエルの分体を一刀両断し、肉薄した貪る大赤依の胴体を斜めに斬り上げる。やはりそこを攻められるのは困るのか、身をよじらせながら巨体が距離を取らんとするが……逃がさん。
特大剣を握り直し、腰に捻りを入れて全力での逆回転。まるで先程の一連を逆再生するかのように刃ごと身体を一回転させながら距離を詰め、二周目と同時に起動した【タチキリワカチ】の袈裟斬りが斜線を描いて貪る大赤依を斬り裂く。

「邪魔だっ！！」

百秀の神腕（サウィルダーナハ）起動！　幸運を参照する拳撃スキル、三桁スキルとなった事でクリティカル成功時にＨＰ、ＭＰ、ＳＴＭ（スタミナ）以外のいずれかのステータスが上昇する神秘の拳がバスケットボール程はある蝿を殴り飛ばす。おっと目の前に無防備に開かれた大口が。

であればチャンスを逃す手はない。引いた拳で即座に別離なく死を憶ふを掴み、ビリヤードのキューを操るかのように奴の口腔、その奥にある赤い玉を狙って刺突を放つ……も、必殺の一撃が赤玉に届くよりも先、奴の口から放たれた絶叫が俺の身体を後ろへと無理やり後退させる。

「QooaaaaaaAaAAAAAAaaaAAaAaaaAAAA！！！」

「くおっ」

ブレスか！？　いや違う単なる咆哮だ、ノーダメとはいえノックバック付きとは小癪な。横着はするなってか？　上等だ、首は……三本が俺へとヘイトを向けている。どうやら残る一本は「傷だらけ」の警戒に割り当て、三本で俺を確殺するつもりらしい。

忌々しい尻尾頭はトットリ＆森人族達が抑えてくれている。これで心置きなく対応できるってものだ。

「ねぇサンラクくん、これ私ここで突っ立ってる意味あるぅ？」

「スキルの条件達成に必要なんだよ、それ以上もそれ以下もない」

「わーい都合のいい女宣言あざまぁーっす！」

装備よし、距離よし、行動誘発よし。頼むぞ甦りし神代の武器、深淵を映す冥王の鏡！

こちらへ殺意を向ける三つの首、全部合わせて六つの眼孔が内側からの閃光で灼け落ちる。口から放たれるのに比べて一点集中の貫通

力特化たる熱視線（レーザー）が三本、ただ俺一人を殺す為だけに放たれる。

迎え撃つは花開きし冥王の鏡盾（ディス・パテル）。光を跳ね返す鏡ではなく、光をも呑み込み力へと変える神代の叡智が殺意の視線を真正面から受け止める。

「……【超過機構（イクシードチャージ）】！！」

激突。

竜よ、竜よ！　其の二十三（後書き）

体力一割前後を反復横跳びしながら三倍速深淵歩きみたいな挙動で特大剣を振り回す姿は紛う事なき変態のそれ、バトルスタイルそのものは煙の騎士なのに動きが軽快すぎる

ちなみにディプスロさんはトットリ達へ向かう流れ弾を対処したり即興でサンラクの挙動コピって火力貢献したり強化バフを弾くサンラクに首を傾げたりと結構裏で頑張ってたり

竜よ、竜よ！　其の二十四（前書き）

死蔵された設定とか見てると新作書きたくなるから困る

竜よ、竜よ！　其の二十四

激突三連、盾に叩きつけられた衝撃が俺の身体を大きく押し込む。
だが倒れない、屈しない、折れない。（非常に不本意だが）背後に護るべき者がいる限り、守護者（ガーディアンハート）の心は決して砕けはしない！！

スキル「ガーディアンハート」は盾系スキルだ。背後にパーティメンバーがいる場合、防御時にＳＴＲ、ＶＩＴなどへステータス補正が入る。さらに消費スタミナ、及び防御時に発生するカスダメの軽減も付与される事で、驚異的な防御性能を誇る。

ただし盾が砕けてしまえば効果は切れてしまう、既に度重なる酷使で耐久が減っている冥王の鏡盾（ディス・パテル）からピキピキと嫌な音が響く。だがそれでもやるのだ、この盾こそが死を帯びた三つの光条を塞き止める防波堤なのだから。

「く、のおおおぉぉぉぉお！！」

見なくても手から伝わる感触で分かる、冥王の鏡盾（ディス・パテル）はもう限界だ。致命的な破損こそしていないが、これ以上防御として用いたならば鏡は砕けることになるだろう。

「………反撃だ」

だが逆に言えばそんなギリギリのラインで踏み止まって、確かにこの盾は攻撃を受け止め切ったのだ。
であれば、そのヒビだらけの今が誇り高き結果であるのだと証明するのは俺の役目だろう。

別離れなく死を憶ふ(メメント・モリ)を地面に突き立て、代わりに結晶が埋め込まれた刃なきナイフを胴体と大腿部へと突き立てながら、冥王の鏡盾が持つ真なる力を起動する言葉を叫ぶ。

「【吸転換(コンバート)】！！」

鏡が喰らった赤い魔力が炎に変わる。いいや違う、その形状を保ち切れないほどの力が炎の形に変わると言うべきか。

喪に服す側である筈の喪服の女性が、火葬が如く炎に巻かれる姿はなんとも言えないものがあるがそもそも身体は前段階の時点で傷物どころか割れ物だし、帯電もしてるので今更燃えたところで大差はないだろう。

俺も鏡盾もヒビだらけ、だが脆いと思ったら大間違いだ。いや実際脆いが、お前が1ダメージを与える前にこちらが1億ダメージ叩き出してお前を倒せばいいだけのことよ。

「ねぇ、それって長時間放置すると服が焼け落ちたりするのぉ？」

「お前の体力を消し炭にする事なら簡単かな」

「おいおい情熱的なベーゼとハグで頼むぜぇ……」

「ビンタ百回で」

「ご褒美ィ……」

グーパン一発で黙らせるのが正解であったか。

アホに構っていたのがいけなかったのか、渾身の三連射を受け止め

あまつさえ利用されたことにおかんむりなのか、今度はトットリ達の攻撃を受けながらも無理やりこちらを向いた尻尾頭も含めてほぼ全ての首が俺を睨みつける。

「Ｑｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉａａａａａａａａａ！！」

奴の全身が撓む。大質量がその全身に搭載された筋肉を余すところなくフル稼働させる事で実現する、実に生物的な衝突事故。故意だから事件か？

赤色の塊がこちらへと突撃を敢行する。初速で劣っているのか総合的に速度がゴミなのか、追う「傷だらけ」が貪る大赤依に追いつける様子はない。

避けてもいいが……ここは一つ、その突撃力も貰い受けようじゃないか。

別離れ（メメント・モリ）なく死を憶ふを背負うように、地面へ先端を刺した特大剣を斜めに傾け、背中を柱代わりに俺の肩を頂点とした道を特大の刃で形成する。

そしてその道を駆け上り、俺の頭に着地する兎が一匹。

「エムル！」

「はいなっ！　【完全反射陣鏡（フルカウンター・リフレクション）】！！」

張り巡らされる条件付き絶対防御の障壁。それを目撃しているはずの貪る大赤依の突撃は止まらない、それを理解できていないのか、理解した上で諸共にぶち破るつもりか…………甘い。

単なる大質量の突撃程度で割れるほど、ヤワな壁じゃあねーんだぜ。

だよな？

「けっこーキツいかもですわこれーっ！？」

「おまっ、踏ん張れよ！？」

轟音。物質的に存在しないはずの壁に激突した貪る大赤依の身体が不自然に歪む。何せ鏡写しで全く自分と同じ体勢の鏡像と互いに同じ速度でぶつかったようなものだ、全身余すところなく悶絶してくれ……大丈夫だよね？余裕ブッこいてるけど轢かれるとかないよね？

だがどうならここに来てギャグみたいな死に方は回避できたようだ、だが貪る大赤依とてただ痛みに悶えるだけではない。
その巨体が転がるだけでも質量兵器であるし、なによりここまで虚仮にされれば怒りの感情があろうがなかろうが確実にこちらを仕留めに来る。だがいいのかい？　最後の首までこっちに向けてしまって……

「遅いぞ兄弟（ビッグブロス）」

「穴？」

「せめて絆と言え」

貪る大赤依の背後へと追いついた「傷だらけ」が無防備な尻尾へと食らいつく。胴体は一つなので最終的な出力は変わりないはずなのだが、頭が三つあるので力も高いのか踏ん張っている様子の貪る大赤依がズルズルと引き摺られていく。

「っし」

投げ捨てたアラドヴァルを右手で拾い上げ、歪な形の二刀流スタイ

ルに再び転ずる。

「ここで決めよう」

特大剣を掲げて二、三度振り、「傷だらけ」に物理的に振り回されている貪る大赤依へとその切っ先を突きつける。

トットリにも届いたかな？　出さずに惜しむよりも出し切ってから後悔しようぜ、どんなゲームでも……それがたとえクソゲーであってもリソースを底の底まで出し切る快感は最高だ、浪費無くして達成のカタルシスは有り得ないんだからなァ！

「エムル、あとついでにディープスローターも火力用意だ……ちょっと奴を怯み（大）にしてくる」

「はいなっ！」

「吐いた唾は飲み込めないよぉ……？」

スキルを積み上げ、ただ一回のアタックを高めていく。数多の加速スキルが肉体を強化し、機動力スキルが不可能を可能にし、握る武器に複数の色が炎の如く煌めくエフェクトを宿す。

「あぁそうだサンラクくぅん……」

「んだよ」

振り向けば、そこにはへらりと笑みを浮かべるディープスローター。奴はなんでもない風な気軽さで、簡潔に俺へと問いかける。

「――――今、楽しい？」

「見りゃわかるだろ？」

もう後ろは振り返らない。黒雷を帯びて駆け出した足は気を抜けば己の速さで転んでしまいそうだ。だがそれは今なお二体のモンスターを中心に爆発の如く撒き散らされる「攻撃の波」を見る目で補える。

引きずっているためにざりざりと地面にラインを引く別離れなく死を憶ふ(メメント・モリ)と、これより竜狩りのクライマックス故か心なしかその火勢を増したように見えるアラドヴァル・リビルドを携えて大質量同士の激突地帯へと人間一匹が飛び込む。

「双剣スキルじゃない、二刀流スキルなんだよ」

双剣や対刃剣を切り札として温存してばかりだったからか、俺が覚えている剣二本を用いるただ二つのスキルはその両方が二刀流時に使用可能なスキルだ。

それがどうしたって？　つまり今使えるってことさ。

「バトンタッチだ兄弟！！」

四つの頭を束ねた極太の合体ブレスが左の頭部に直撃した「傷だらけ」が大きく後ろへとのけぞり転がっていく。だがタッパのあるモノを吹き飛ばした以上は相応の隙を晒すことになるわけで、硬直を晒した貪る大赤依は既に俺の射程圏内だ。

「よぉぉっっ……しゃあ！！」

百閃の剣（ヘカトン・エッジ）起動、先駆け迸れ（はしれ）アラドヴァル！

一撃一閃、大技後の硬直で動けない貪る大赤依の身体に灼熱の直線が刻まれる。

一撃二閃、特大剣が片手だけで振るわれる。挙動とは正反対の重い一撃が二つのエフェクトを赤い表皮に撒き散らす。

一撃四閃、八閃、十六閃、三十二閃……別離れなく死を憶ふ（メメント・モリ）であればその重量にふさわしい重いエフェクトが弾け、アラドヴァル・リビルドであれば竜種を熾き（やき）滅ぼす炎が吹き荒れる。

「おいおい、頭全部でおもてなしとは嬉しいねぇ……」

だが俺を追うには速さが足りない、一瞬で……振り切るぜ。

スキル「リミットオーバー・アクセル」起動。フォーミュラ・ドリフトから進化したこのスキルは時間にして数秒ではあるが自身のＡＧＩとＤＥＸを二倍にする規格外の加速倍増スキルだ。今の状態でこれを使うことは、下手をすれば盛大な自爆に繋がりかねないが……今の俺のテンションなら制御できる、そんな確信があったし実際に制御しきってやった。

四つの首が俺をついばむよりも速く、その立ち位置を神速でズラした俺はその勢いを乗せた一撃で奴の大口を真横一文字で斬り裂く……六十四ヒット。

もしも、もしも貪る大赤依が狡猾な判断力を備えたＡＩであったな

ら。スキルの内容について考察ができるプレイヤーであったなら。
この場における最もベターな解答は「次の一撃を末端部位で受ける」事であると理解できただろう。

だが悲しきかな、貪る大赤依に割り当てられたＡＩは無機質で単純な思考として設定されたものだ。その感情も、苦痛も、全ては上っ面の再現……そういうデザインだ。
だからこそ、「大口を閉じて弱点を守る」という最悪の一手を選んでしまうのだ。

「わざわざ壊しやすくしてありがとう！」

鋭結点睛（えいけつてんせい）起動スタンバイ。
アラドヴァルをまっすぐ縦に地面へと刺し、もう片方の手に握る別離れなく死を憶ふ（メメント・モリ）の腹を蹴り上げて台座として立てたアラドヴァルの柄尻に「セット」する。

二刀流スキルは両手に剣を持っている事が条件だ、故に刺突するにも前準備が必要でありその為の発射台と弾頭……いや刃頭だ。

「ぶち抜く！！」

首がこちらを見ている？　構うものか、脱出は微妙なライン？　もう止まらない、もうこうなったら例え代償で死ぬとしても俺はこの攻撃をぶちかますぞ。どうせあの変態が動画撮影してんだろ、レイドモンスターにたった一人で立ち向かう動画を見るだけで三日は楽しめるね。

アラドヴァル・リビルドの柄尻、その上を滑らせるように前へと別（メメント・モリ）

離れなく死を憶ふを突き出す。
大きな板をそのまま振り抜けば空気抵抗を受ける、だが一点を目指して突き出したならばその刃は空気を裂き敵を穿つ。

ここに至るまでに使ったスタミナと、ここに至るために使ったスキルによる消費……全てを込めた刃が光と共にその切っ先を閉じられた歪な牙の交差に叩きつけられた。
瞬間、あれほど軽いと思っていた特大剣に重圧がかかる。吹き飛ばされそうな衝撃に改めて握る力を強めつつ……俺は二つのものを見た。

一つは木っ端微塵に砕け散った大口の牙と、その骨格となっていた肋骨。剥き出しになった赤い玉が外気に揺れて震える光景を。
そしてもう一つは胴体から生えた頭が、股下からこちらを狙う尻尾頭が、そして今の今まで近接的な物理攻撃に留まっていた翼腕の口すらもが赤い光を溜める光景を。

成る程？　どうやら俗に言う「絶対許さねぇ」と言う奴らしい。インベントリア修正前ならなんとかなったんだが……まぁいいさ、一矢は報いた。後は適度に足掻くだけさ。

「レイドモンスターなら次があるんだろ？　そん時はノーコンクリアだ」

「いいや、今がノーコンティニューなのさサンラクくぅん……！」

何っ？

「【双座標転移（キャスリング）】！！」

切り替わる視界。主観的に見上げていたはずの貪る大赤依を、今俺は客観的に見つめている。
そして、恐らく俺がつい先程までいたはずの場所に立つ長杖を携えし人影。

「ふふん……惚れてもいいよぉ？」

「おまえ……」

いや、そこは今俺が……

だがそれを指摘するよりも先に響く轟音、七つの閃光が炸裂し土煙を巻き上げる。

「く……全員ありったけをぶちかませ！！」

色々言いたいことはあるがとりあえず敵討ちって事で！　やったぜ貪る大赤依君、ナイスキル！！

竜よ、竜よ！　其の二十四（後書き）

双座標転移(キャスリング)はその名の通り発動者と対象の位置を交換する魔法。
色々と悪巧み出来るので通常は双方の合意がないと発動できないが、
発動者と指定した対象のＭＰの差が大きいと成功する。

竜よ、竜よ！　其の二十五（前書き）

ながかっ゙だよ゙ぉ゙ぉ゙ぉ゙ぉ゙！゙やっ゙どづ゛
ぎにずずめ゙る゙よ゙ぉ゙ぉ゙ぉ゙ぉ゙お゙！゙！

竜よ、竜よ！　其の二十五

最後まで後方でへタれるよりかは数倍マシだが、相手が弱ったと見るや前へと出てくる森人族は一度精神を鍛え直した方がいい気がする。

だがそれはそれ、あの高い命中率は例え火力が低くても今この瞬間においては高い貢献を成せる。

ひっきりなしに放たれる矢はその殆どが弱点部位を晒した大口へと吸い込まれるように飛んで行き、確実に貪る大赤依を追い詰めつつある。

感情のない、しかし肉体の悲鳴を隠すこともできない奴の苦悶の叫びが何よりの証拠だ。

「行け行け行けゴーゴーゴー！　矢が尽きるまでぶちかませ！！」

先の一斉ブレスの硬直に加えて弱点に集中攻撃を食らうことでの怯み、今この瞬間が最大のチャンスだ。

「エムル！　撃って撃って撃ちまくれ！！」

「はいなーっ！！」

行けるか、削りきれるか？　ダメだ、復帰する！！

「撃ち方やめ！　全員退避！！」

どうする、リキャストはまだ終わってない。再攻撃までどう凌ぐ？

「エムル、魔力は？」

「ち、ちょっち回復させて欲しいですわ……」

オーケー、今は役に立たないって事か。となれば……おぉそうかお前がやってくれるか、だったらそれを信じよう。

「トットリ」

「なんだ？」

「一応最高火力を用意しておいてくれ、もう一度奴を怯ませてくる」

「分かった…………なぁ、ディプスロさんは」

「奴さんなら死んだよ、あとで本人呼んで葬式でもやるか？」

「お、おう……おう？」

盛大なパレードにしような、まぁそれはいいとして……行くか。

貪る大赤依のリソースは尽きた、既に肉体の回復は叶わず今あるだけの身体で出来ることしか出来ない。
だがそれでも未だ奴は怪物たり得る、であれば非力な人間は何もかもを利用して勝利を掴む……であるならば、同じくあの真っ赤な怪

物を打ち倒す事を望む怪物にだって手を貸すさ。
頭の一つから多量のダメージエフェクトを撒き散らしながら、されどこれまでの戦いの中で最高潮の怒りに燃える「傷だらけ」が突き進む。
貪る大赤依はそれを迎撃するべく首を荒ぶる三つ首へと向けるが、攻撃へと転ずる前にアラドヴァル・リビルド一本を握る俺の妨害に注意を逸らされる。
さらにどちらを倒すためにどちらを活かすべきかに気づいたのか、後方より放たれた頭の矢が貪る大赤依へと雨の如く突き立てられたことで怯んだ間隙を「傷だらけ」は見逃さなかった。
「「「ゴルルルォォ！！」」」
「QeeaaaaaaaaAAAAA！！？」
驚異的な脚力で貪る大赤依が「傷だらけ」に踏みつけられる。拘束から逃れんとする貪る大赤依であったが、それよりも「傷だらけ」の方が速い。
踏みつけた己の足ごと貪る大赤依の背中が口から吐き出された粘ついた体液に塗れていく。溶かすわけではない、だがその液が決してただ不快感を与えるだけのものではないことを俺は知っている。
そしてそれは貪る大赤依も同様だ、数秒後に何が起こるのかを悟ったのか暴れる力を増してもがくが、「傷だらけ」は意地でも離さぬとばかりに足に込める力を強め、さらには俺という邪魔も入った事で脱出は絶望的となる。
なんだろうな、別にパーティ組んだわけでもフレンドってわけでも

ない。そもそもプレイヤーとモンスターという絶対的敵対関係だと言うのに……どうしてか、奇妙な信頼感がある。
背中を任せられるわけじゃない、ただ「こいつならやってくれる」という確信がある……だからこそ告げる言葉は簡潔に。

「ぶちかませ！！」

着火。
衝撃と熱量を伴った爆風が辺り一帯を波濤の如く蹂躙する。当然それに直撃した貪る大赤依は大ダメージを受け、足掻きもがいていた身体から力が抜ける。そして、直撃を食らった貪る大赤依そのものを傘がわりに爆風を防いでいた俺の目の前には、あまりに無防備に晒された赤い玉。

「貪る大赤依……いや、貪る大赤依（エルドランザ）……これで終わりだ！」

今使える有りっ丈の強化スキルを込めた【タチキリワカチ】の光を帯びたアラドヴァルが赤い玉を捉える。
みっちりと中身の詰まったゴムのような、硬さと柔らかさがどちらも含まれているかのような質感の球体を灼熱の剣がチーズの如く切り裂いて行く。

天誅……ではないな、これは人による人のための敵討ち、であるならばこう締めくくるべきか。

「人誅！！」

空気を読んだのか、炎の軌跡を描くアラドヴァルをぴっ、と振り払い決めポーズ。

決まった、これは間違いなくラストアタックを取っ

「QeeaaaaaaaaooooOOOOAAAAAAAAA！！！」

「ゔぇっ」

仕留めきれなかった？　違う、奴はもう死んでいる。であればこれは最後の足掻き、死を迎える寸前の痙攣、最後の断末魔。

死に体のどこにそんな力があったのか、全霊の力を込めて後脚のみで立ち上がった貪る大赤依がそのまま前へ……つまり俺を下敷きにする挙動で倒れかかってくる。

「まぁこの程……んどぉ！？」

あ、足首を挫きましたァ！？　この盤面で渾身のドジ！？　おのれ運命という名の乱(らん)す……あっこれ終わったですわぁ？

その時、ヒュンッ！　と風切り音が一つ。

「ま、まさか舐めプの尻拭いをさせられるとは……」

致命的な亀裂の入った赤い玉に矢が突き立つ。そしてそれは一瞬の

静寂の後……「傷だらけ(スカー)」のナパームブレスに負けず劣らぬ大爆発を起こし、物理演算に従って倒れゆく貪る大赤依の赤い玉を完全に破壊し尽くし……

「Q、Qoooo……」

それが貪る大赤依……レイドモンスターの最期の叫びであった。

まるで空間に固定されたかのように貪る大赤依の身体がピタリと止まり、その身体を形成する赤が端から粉にでもなったかのようにボロボロと崩れていく。

ふとそれを掌で受け止めてみれば、その正体は……飛蝗(バッタ)であった。

だがそれも掌の上で黒ずんだ赤い粉末にまで崩れると、風に吹かれても消えてしまう。

『赤き血の狂乱はここに伐された、しかして血脈は途切れることなく……』

『モンスター急襲(レイド)……討伐(クリア)！』

『討伐対象：貪る大赤依(むさぼるだいせきい)』

『レイドバトルが終了しました』

『参加人数：３／４５』

『次レイド開始：ワールドクエストの進行に伴い解放されます』

曰く聖書だったか何かでは、飛蝗による蝗害を獅子の牙と例えたとかなんとか。このゲームでは竜の牙であったわけだが……さて、レイドモンスターである以上まさか再戦できないということもあるまい。

はてさてこの化け物が次は何に化けて出て来るのやら。正直ダルすぎたので今度は人伝てで知れればそれでいいや。

「ヘイ勇者、ラストアタックを取ったなら勝鬨も頼むわ」

「お、俺!？　え、えーと……我々の勝利だ！！」

「シミュゲーかよ」

ポツリと漏らした言葉は歓声に溶けて消え、わざわざ再度主張するまでもない戯言なので繰り返すこともなく、頭の上でわぁわぁとはしゃぐエムル同様に森人族達の歓喜に追随するのだった。

……と、ここで終われば凡百のハッピーエンドだったわけだが、

森人族諸君は大事な事を忘れていないないだろうか？

気づいてないなら俺が指摘してやるよ。「傷だらけ（スカー）」がなんか身体を丸めてぷるぷる震えてるんだが……

ていうか、そのですね……なんかこう、溜め込んだ力を何かこうランクアップ的な事に使いそうな……

バリッ

「あっ」

「えっ」

「ですわっ！？」

だ、脱皮したぁ！？

おや　？　スカー　の　ようすが　……　？

調子こいて決めポーズまでやってたけど決めポーズが確定必殺になるのはリボルケインだけだから……ちなみにトットリ君が放ったのは着弾時に大爆発を起こす弓系魔法「衝撃の一矢(インパクト・アロー)」と魔法の威力を飛躍的に高める森人族の切り札「奇跡の鏃」の合わせ技

・設定げろげろコーナー
赤玉の正体はエルドランザのコア、色竜は菌糸類系生命体なのでコアさえ残っていれば何度でも復活するので自らコアだけ吐き出して逃げることもある。が、逆に言えばこれを破壊されるとその代の色竜は死ぬことになる。火山の蓋さんはぺしゃんこにされた時にコアが潰れて死亡、エルドランザはよりにもよってピンポイントでコアを撃ち抜かれたので死亡

ただ一度きりの友情（前書き）

不定期だから一日に三話更新しちゃう日だってあるさ

進化とは要するに、内側から発生する変化だ。そこに外部からの影響がないとは言わないが、結局のところ進化とは当事者が内面からの変化で外見ごと変わる事を指す。
メキメキと傷だらけの皮膚がひび割れ、地面へと落ちていく。では一皮剥ければ綺麗な姿になるのかといえばそんなことはなく、捨てられた皮の下から現れたのは……明らかに熱を帯びた陽炎を噴き出し、その上で血が滲むかの様な紅蓮の赤に染まった「傷」だ。

「お、おぉ……」

成る程、成る程……これ俗に言うヤバいやつだな？　金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）に通じるヤバさを感じるが、あっちは種族的な亜種であるのに対してこっちはオンリーワンな二つ名持ちのさらなる進化だ。広義の意味でのユニークモンスターですよこれ。

「お、おいサンラク……」

「待て、武器は構えるな……ここは俺に任せろトットリ」

「本当に大丈夫か……！？」

大丈夫じゃなさそうなので一応エムルは連れて行かない。
メキメキと音は続く。「傷（スカー）だらけ」の、いや「傷だらけ」だったものの筋肉が内側から膨張し、その身体をさらに大型化させていく。
大きな損傷を受けていた左の頭は痛々しい傷こそ残っているものの、それが却ってアシンメトリー的な恐ろしさで威圧感に華を添えてい

た。

「「「ゴロロロロロロロロロ………」」」

「ハロー、あー……なんだ、衣替えの季節か？」

ていうかこれ、もしかしなくても「傷だらけ」にも経験値入ったのか？　いやまぁ確かに一番レイド戦で貢献したのは誰か、って聞かれたらまず間違いなく「傷だらけ」だろうけどさ、そんなお前進化まで行っちゃうのは……おっと顔を近づけて……あっつ！　待って熱い！

「お、落ち着け兄弟（ビッグブロス）……俺たちはこう、なんだ絆的なものが芽生えているだろ？」

熱い吐息（物理）を漏らしながら元「傷だらけ」が俺へと頭を近づけてくる。ただでさえ暑苦しいというのに頭が三つあるので口は三つで鼻の穴は六つだ、なんというか乾燥機にかけられた服の気分を今俺は味わっている。

現在俺の体力は貫禄の1、ちょっと小突かれただけでも下手をすれば死にかねない。下手に動けば……死ぬ！

「「「グルルル……」」」

「お、おう……オレタチ、トモダチ、ユウジョウ……ダイジ」

じっと俺を見つめていた六つの瞳が爬虫類特有の瞬膜による瞬きを繰り返す。しばらくすると三つの頭は俺から離れ、大きく息を吸い込む。や、焼かれる！？

「「「ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」」」

咆哮、それは我こそがこの森の覇者であるという宣言か。少なくとも俺の耳はキーーーーンとしか聞こえないのでよくわかんないです。元「傷だらけ」はぎょろりと六つの目で俺を見つめる。それは貪る大赤依とは明確に異なる意思の光が宿ったものであり、言葉こそ通じないがなんとなく奴が何を言いたいのかが分かった様な気がした。

別に仲良しこよしってわけじゃない。情が湧いたわけでも、ましてや懐いて従属するはずもない。次会った時は敵同士の可能性だってある、いやきっとその可能性が高い。だが、だからこそ此度の共闘には何物にも代えがたい価値がある。ついさっきまでだけ、俺と「傷だらけ」は同じ方向を見ていたのだ。

「餞別だ、持って行きな」

であれば態々今から敵対することもあるまい、勝利の余韻に浸りたい時というものは人もモンスターも同じだろう。というか多分、俺も元「傷だらけ」も達成感と同じくらいダルいと思うの。実際何時間くらい戦ってた？　まだ夜は明けてないけどさ……

そんなわけで餞別代わりのミスティック・ソーマ、手持ちの中で最後の一本を元「傷だらけ」の口の中へと放り込む。まぁモンスターだしガラスを飲み込んでも頑張って消化するだろう。

「「「………」」」

のっしのっしと元「傷だらけ」がその巨体を翻す。ふと見上げれば、その体躯から剥がれ落ちた鱗の一枚が俺の方へと落ちてきた。鱗と

言っても牡蠣の殻をさらにでかくしたような代物だ、気づかずに頭
に直撃していたら多分死んでいた……あ、あの野郎まさか……いや、
落ち着け……偶然だよ偶然。

っつーかなんだこの鱗、ドロップアイテムなのか？

・緋色の傷（スカーレッド）の歴燿古鱗（れきようこりん）
ドラクルス・ディノサーベラス〝緋色の傷（スカーレッド）〟の旧き鱗。
死するその瞬間まで強靭（つよ）くなり続ける〝緋色の傷〟の鱗は古いもの
程強大な力を秘めている。
「歴燿」の誉れを冠する鱗は緋色の三巨頭が生まれ落ちた瞬間より
寄り添い続けた最古参かつ最も稀少な鱗であり、破損と再生を繰り
返したその鱗は神秘すらをも宿す。

「…………いや、さっき進化したばっかなのに古いもへったくれも
ないだろ」

餞別としては最上級だし素直に嬉しいのだが……なんだろう、この
絶妙にもやっとする感じは。「新鮮な五十年もののワインです！」
って言われたような気分だ、目の前で起きた現象とフレーバーテキ
ストが絶妙に食い違っているというか……いや破綻するほどの矛盾
ってわけじゃないいんだけど……

「まぁいいや、友情友情……っと」

くれると言うなら貰っておこう、そしてさらばだ「傷だらけ(スカー)」……いや、〝緋色の傷(スカーレッド)〟よ。次会うときは敵同士か、それとも再会叶わぬままお前が死を迎えるのか……だが願わくば、お前が良き戦いの末に散る事を願っているよ。

安定のヘタレ森人族が〝緋色の傷(スカーレッド)〟の進行を止められるほどの度胸があるはずもなく、ゆっくりとだが力強い地鳴りを伴う歩みで去っていく三つ首のティラノを見送り……もう一つの案件へといい加減目を向けることにする。広場にいないってことは……居住区辺りか？

「……？　そういえばサンラクサン、どうしたんですわ？」

「ああ、それなんだがな…………………うん、いい加減死んだふりやめて出てこい！！」

「うへへへへ……バレてたかぁ」

「ぎゃあああああ！！？　い、生きてるですわー！？」

にへら、と倒壊した家屋の陰から現れたのは死んだはずのディープスローター。何故奴が生きていたのか、その答えは今の今まで死んだふりをしていたディープスローターがキャスリングだったかを使う前に俺がとった行動にこそある。

「討伐者数のアナウンスが三人のままだし、何より俺の足掻きを代わりに受けたろお前」

「これはもはや偶然と奇跡を超えて愛だよサンラクくぅん……」

「だまらっしゃい」

「ど、どういうことですわ？！」

どうもこうもない、あの時俺はある手段を用いて死のブレス×７に対処せんとしていた。だというのにこのアホがわざとらしいロールプレイで立ち位置を変えたものだから俺の代わりにこいつがそれを実行することになったのだ。

ずばりセルフ蘇生、上空に投げた蘇生アイテムが時間差で死んだ俺へと当たることで単体で完結した蘇生手段とする……ウェザエモンとの戦いで確立したテクニック。聖女ちゃんから貰った蘇生アイテムで時間差の復活を行い攻撃への対処とする……死を挟むものの原理的にはインベントリアエスケープと同質の即興技、それは俺のいた場所に入れ替わりで転移したディープスローターには当然上へ投げた蘇生アイテムが代わりに当たるわけで。

「当ててやるよ、かっこつけて身代わりになったはいいけど普通に蘇生されたもんだから収まりがつかなくなって雲隠れしてたろ」

「おいおい以心伝心かよぉ……これはもうソウルフレンドと言ってもいいのではぁ……？」

「ＤＰＳ貢献サボるとか失望しましたフレンドやめます」

「仕方ないじゃあん！　だって実は普通に生きてましたとか言いながら出てきづらいじゃあん！！」

ええい黙れ黙れ黙れぇい！　しなだれ掛かるな腕に絡みつくな！　ハラスメーンッ！　ハラスメーントコォールッ！

「うわディプスロさん生きてたのか！」

「やぁトットリ君、ラストアタック良かったねぇ……」

「あ、どうも……」

とはいえこいつのお陰で今の結果へとたどり着いたわけで、最終盤でサボっていたとしてもそれまでの貢献でチャラということにしてもいいだろう。心情的には今すぐ〝緋色の傷〟君にUターンしてもらってこいつを処理してもらいたいのだが贅沢は言わない。

「んじゃ……いよいよメインディッシュと行こうか」

「やっぱ、あれ気になるよな……」

まぁアレに気づかないってわけにはいかないだろう。何せ、貪る大赤依が斃れた場所に馬鹿でかい血溜まりが出来上がっているのだから。

そして、その血溜まりに光る三つのエフェクト……もう、如何にも「ここにアイテムあるよぉぉぉぉ！　拾ってねぇぇぇぇぇぇえええ！！」と主張したくて仕方がない、と言わんばかりのアピールっぷりだ。参加プレイヤーと同じ数ということはつまりそういうことなんだろう。

「じゃあ、誰がどれに触るのかジャンケンで決めようか」

俺がドベだった、本当乱数ってクソ。

ただ一度きりの友情（後書き）

Q. 〝緋色の傷〟になって何が変わったの？

A. 午後十字軍が仕事終わりの頭を酷使してコツコツ考えてきた攻略法の七割がゴミになりました

Q. 〝緋色の傷〟はサンラクを認めたの？

A. 学校から家に帰るまで蹴り続けた石ころくらいの愛着

鱗はゲーム的ご褒美……というか「モンスターと一定時間共闘すると確率でアイテムを落とす」というシステム的な理由。ちなみに鱗は〝緋色の傷〟の落とすアイテムの中でも二番目くらいにレアなアイテム、一番は討伐時に泥するので流石に共闘では泥しない。不滅の炉心殻と天鱗みたいなもんですね、でもあれ撃滅拳の方が集めるの怠いっていう

くっ、たまには運に任せてジャンケンをしようとか考えるんじゃなかった。やはり対外道同様にギリギリで手を変えるべきだったか。オススメはチョキ始動だ。パーに移行するなら指三本、グーなら指二本動かすだけで手を変えられるからな。

「見て見てサンラクくぅん！　長杖（ロッド）二つ持てるってやばくなぁい？」

ジャンケンの勝者として一番に血溜まりに手を突っ込んだディープスローターが獲得したのは赤い宝石型のアクセサリー「渇望の手（ハンド・オブ・クレイブ）」だ。

なんとこのアクセサリー、アクセサリー欄を二つ潰す代わりに装備欄が一つ増える。

左肩の後ろあたりから真っ赤な腕が生えている姿は形容しがたい不気味さを漂わせているが、本人のにやけヅラに連動するかのような気味の悪い動きをしている辺り、多分装備者の意思で動かせる。

「変態の手を増やすとかヤバくない？」

「同時に三ヶ所いじれるねぇ……」

ノーコメントで。

そして次、二番手のトットリが引き当てたのは猛禽類の鉤爪を思わせるメタルパーツがくっついたブーツだ。なんだろう、何か物凄く

本命を取られた感が……

「屍肉喰らい(ネクロファジィ)の鉤爪……消える直前のモンスターに蹴り攻撃をするとアイテムドロップとは別枠でアイテムが獲得できるっぽい」

「（いいなー、の眼差し）」

「あとは……へー、木の上とかの不安定な場所で身体を固定してくれるのか」

「（いいなぁぁぁ！　の眼差し）」

「わ、すげー軽い！」

「……暗殺」

「え？　なんて？」

「ナンデモナイヨー、ヨカッタネー」

頭の上のエムルがぴくっ、と震えている辺り冗談を間に受けたか？　冗談だよ冗談………ま、まぁ俺が鉤爪ブーツよりも凄い報酬を引き当てればいいだけだしィ！？

「まぁ見てろって、俺のＬＵＣは新たな地平へと至ったんだ……いざ南無三！！」

ズボッ！！

うわぁ生温い……っていうか冷静に考えるとこれ、明らかに地面よ

り下に手がめり込んでるんじゃ……む、何か手触り！　なんだ？　ゴツゴツしてる？　いや、穴が空いて……とりあえず引っこ抜いてみるか。

「よいしょーっ！！」

引っこ抜けた俺の手が掴んでいたものは、人の頭くらいならすっぽり覆ってしまえそうな何かの獣？　竜？　よくわからない肉食系モンスターの……頭蓋。

「死体を掘り当てたですわぁ！！？」

「いだだだだ！　おちっ、落ち着けエムル！　髪を引っ張るな！！」

ついさっきまでこれの数千倍はやばい相手と戦ってたのにこの程度でビビるなっての。あでででで

「見た感じ頭装備なのか？」

「……いや違うな、これアイテムだ」

聖杯とかと同じタイプのアイテムだな、えーと何々名前は「暴血赤(ブロード)依骸冠(＝クロゥネ)……なんつー仰々しい名前だ」

まぁいい、大切なのは中身さ。

・暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）

貪る大赤依を撃破した報酬、獣の上顎のようにも見える奇妙な赤い髑髏の冠。

「血解（ブラッドハート）」の詠唱をトリガーとして全身を覆い、「擬似改宗（デミコンバージョン）」効果第一段階を発動する。

使用者は三百秒間赤い怪物の姿へと変身し、条件を達成することでステータスを上昇し続ける。

プレイヤー・NPC・エネミーを問わずHPを持つMobをキルした数に応じて最大HP・MPを増大し、自身の全ステータスを向上させる。ただし三十秒ごとに暴走判定が発動し、合計十回行われる暴走判定間に最低三体以上のキル判定を達成していない場合「飢餓暴走（ハンガーピード）」状態となる。これにより種族が「左方始源血属（エレボス・ブラッドルーツ）」となり、アバターはAIによって操作される。

さらに五分経過した時点で強制的に「飢餓暴走」状態となり、一分間暴れ続けた後体力が0になる。

お前は誰だ！？　俺はお前だ！　違う！　俺は負けた！　俺がお前だ！　俺は血だ！　血だ！　肉だ！　俺は「赤」だ！！　魂はお前だ！　俺は飢えている！　お前は俺だ！　それは最後！　俺は飢えている！　お前も飢える！　だから……だから全てを喰らい尽くす！！

………。

「…………」

深呼吸して……と。ようしエムル、早速だがこのしゃれこうべの使い方を一つ教えてやろう。

「R.I.P.（コレ）と思いっきり効果が被ってるぅぅぅぅぅう！！」

すこーん！　とフルパワーで蹴り上げられた赤い頭蓋が宙を舞う。

「黒ドロワか……」

「ハットトリックだオラァ！」

「あふんっ」

落ちてきた赤い頭蓋をファンタジスタ的シュートでディープスローターに蹴り込んだら少し落ち着いたので改めてそれ……暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）を拾い上げる。

いや、厳密には効果内容に差異はある。アイテムだから多分装備欄的なブッキングもしない、つまり共生できる。だがそれはそれ、これはこれ……必死こいて倒したレイドモンスターからのドロップがすでに持ってる装備のコンパチだったというのは中々メンタルに刺さるものがある。

「つーかしれっと重要情報が多過ぎる……」

なんだ左方始源血属って、情報だけでライブラリ辺りを殴り倒せそうだなオイ。

「っていうかこれ、所謂「使い過ぎると人間に戻れなくなるぞ」的な……」

「え、そっちもそんな感じの効果あるのぉ？　私のこれもダメージ受け過ぎるとオートで装備者を攻撃してくるとか面白い効果あるんだけどぉ……」

「俺のは防御力と耐久値がだんだん減っていくらしい……最終的に装備ＶＩＴ１ってヤバくね？　防具としての体をなしていない……」

「おっ、ステータスＶＩＴ１の俺に対する宣戦布告か？」

三者三様に沈黙。

あーなんだ、要するに……ぶっ壊れ性能とクソデメリットがどちらも高水準で搭載されたアイテムがレイドモンスターのドロップ品、ということででっしゃろか。

うん、まぁ……とりあえずお疲れ様でした！！

とはいえ帰るまでが遠足というもの、決してその存在が頭からすっぽり抜け落ちていたとかそういうわけではなくあくまでも思考の優先度的に後回しにされていただけでまぁ兎にも角にもそもそもここにいる理由たる国王とアーフェアリ……じゃないアーフィリアを迎えに行かなければなるまい。

「で、王様達と一緒に逃げた森人族達はどこに行ったんだ？」

「え？」

「え？」

なんでそんな、「お前知らないの？」みたいな顔してるんだ知るわけないだろう。むしろ森人族の勇者してるお前が知ってて当たり前だ……え、待って。

「もしかして……逃げた奴ら、遭難してね？」

辺り一帯に沈黙が広がる、いやまさかそんな、いや、まさか…………

「これはもう獣の胃の中に……」

「いや待ってサンラククん、触手責めなら！　触手責めなら死んではいないかもしれないよぉ！？」

割とマジでその可能性に賭けるしかないのが世紀末過ぎる……

「だがどうする、エルフといえばオークの線もある」

「しまった、それだと男の方が死んでるかもしれないよぉ！？」

「……いや、オークって少なくともこの森じゃ絶滅してるって話だぞ」

トットリからもたらされた衝撃の情報にディープスローターが浮かべた顔は、それはもう筆舌に尽くしがたいものであった。

「そ、そんな……「見目麗しいプレイヤーの群れにオークの大群をけしかけて動画を撮影する計画」が……」

しれっと悪質なＭＰＫ目論んでるんじゃねーよ、ていうか新大陸でそれやってもプレイヤーの質が高いから高確率で迎撃されるだけでは？

「し、しかし……いや、せめて遺品だけでも見つかれば……」

「サンラクサン、死んだ前提で動くのは良くないですわ。っていうか生きてるしこっち来てるですわ？」

「幽霊か……」

「か、頑なに生存を信じてないですわ！？」

だってお前ヘタレと非戦闘員だぞ？　何時間も放置して生きているとは……うわっ、本当だ生きてる。

悪徳は蜜の如く甘い毒（後書き）

初代の悲劇を全面的にアピールするアローラガラガラ君すこ

極点に至りしたただ一つ、始源に幕を引いた片割れ。その激突は必然ながら、漆黒の神は己こそが唯一つとなるためにその嘴で世界を啄ばんだ。

人の口に戸は立てられず

「あ、あの、貴女は……」

「あぁ、この姿ではお初にお目にかかる。私です殿下、サンラクです」

「まぁ！」

速攻で淑女の化けの皮を被ってロールプレイ。ええいニヤニヤしながら動画を撮るな！　お前は後で天誅だ！！

「ええと……その、実は女性だったのでしょうか？」

「いえ、大元は男です。まぁ……縁あって性別を変える術を手に入れたのですよ」

「ねぇサンラクくん私それすっっごく気になるから是非とも教えて欲しいんだけどぉ……」

「しゃらっぷ！（全力猫なで声）」

「ぅっ、うへへガチ恋不可避じゃあないかぁ……」

クターニッド関連は秘匿が面倒になったのでペンシルゴンにだいたい委託している、性転換したいなら外道と変態で共食いしてやがれ。

「ご無事で何よりです陛下、こちらも少々手間取りましたが……え

ぇ、なんとか」

「うむ、そうか……先程まで男であった者が女として話す様は中々どうして奇妙な体験ではあるが……よくぞ無事であったな」

まぁ一回死んでるんだが、そこは言わないでおこう。

とはいえ言ってしまえば壮絶な寄り道であったレイド戦にかまけて本命をドベってしまっては元も子もない。正直一回ログアウトして眠りたいところなんだが……っていうか丁度いいや、一旦休憩にしようそうしよう。

「というわけで休憩な」

「……？　………？？？」

「おいおい、これくらいの意図は読み取ってくれよ」

「たしかに結構な時間ログインしっぱなしだったものねぇ」

「え、俺の心（意図）読むなよプライバシーの侵害だぞ……」

「模範解答が知りたいところだねぇ……」

人間が絡む問題の解答は大抵が時間経過で変化するものさ、現実って残酷ね。

そんなわけで一時間程休憩と相成ったので、急遽作成された森人族達のインスタントセーブポイントでログアウトするのだった…………

【旅狼】

鉛筆騎士王：あー、これが最後の通告である。大人しくつい先程自分が何をやらかしたのか白状しなさーい

オイカッツォ：しなさーい

鉛筆騎士王：さもなくばこちらも直接的制裁の行使を選ばざるを得なくなるぞー

秋津茜：なるぞー！！

ルスト：具体的には？

鉛筆騎士王：幕末に汚染されたゾンビをけしかける

京極：ウェェルカァァム……

サンラク：ログイン天誅すら対処できない侍もどきがほざきおる

京極：は？

サンラク：ていうかもしかしてプレイヤー全員にアナウンス流れてた？

鉛筆騎士王：おーし自分からゲロったなぁー？？？

オイカッツォ：口が軽すぎる……ヘリウム常飲してんの？

サンラク：ユニーク自発してから意見してもらえますぅー？（高音）

オイカッツォ：悔しいけどちょっとふふってなった

ルスト：モルドが起きていたら確実に半日は使い物にならないところだった、危ない

鉛筆騎士王：ていうかマジで君かー、お前かー、貴様かー……はぁ、ライブラリがうるさくなりそう

サンラク：いや待て、今回に関しては俺悪くない

サンラク：完全に巻き込まれの被害者と断言させてもらう

オイカッツォ：毎回何かしらのイベントを引きずりこむブラックホールみたいな生態してるくせによく言うよ

サンラク：毎回他の奴が発生させたユニークに便乗する衛星ライフ悲しくない……？

オイカッツォ：よしちょっと便秘来いよぶっ飛ばしてやる

サンラク：上等じゃねーかバーグトゥードだろ？

鉛筆騎士王：はいそこ自然な流れで喧嘩のスケジュール調整しない

鉛筆騎士王：で、どうだったの？

サンラク：どう、とは？

鉛筆騎士王：レイドモンスターって事は行動パターンはリサイクルできる

鉛筆騎士王：ライブラリ辺りにチクれば大きな金の流れを作れるねぇ……

サンラク：あれはどうなんだろう、多分大まかな流れは一緒だとしても本体のモーションは違ってきそうだし……

ルスト：便秘……？

サンラク：どっちにせよ三十人くらいは必須だぞこれ

オイカッツォ：三人でクリアした奴がよくもまぁ白々しく……

サンラク：いや、今回は大量のＮＰＣとモンスターも使ってたからな？

サンラク：表記上は三人ってだけだ

秋津茜：それでもすごいと思います！

鉛筆騎士王：ていうか今度は誰の組んだの？　また引き込み工作しないといけないわけー？

サンラク：…………

サンラク：……いや、引き込みはしなくていいよ

サンラク：うん

サンラク：精神衛生的に

オイカッツォ：もしかして知り合いとか？

サンラク：知り合いっつーか、もっと拗れてる感じというか

サンラク：「スペクリ事件」の首謀者っつーか……

オイカッツォ：厄ネタかな？　特大の厄ネタだったわ

ルスト：今調べた、これの首謀者？

鉛筆騎士王：ちなみにその事件のレジスタンス側にいたのがそこで被害者面してるサンラク君です

サンラク：いえーい当事者でーす

サンラク：あともう一人はトットリ・ザ・シマーネってやつ

オイカッツォ：スペクリ事件はね……あれ以来規制強化されたゲーム増えたよね

鉛筆騎士王：今はシャンフロの話をしよっか

鉛筆騎士王：こっちもそろそろ合流できそうだから一旦シャンフロ側で集まれるかな？

サイガー０：具体的に、いつですか？

サンラク：寝たいし明日の夜とかなら……

サンラク：あ、レイ氏どうも

サイガー０：こんばんは

秋津茜：明日の夜なら大丈夫です！

京極：そろそろイベの季節だよ……幕末に戻ってきなよ……あ、夜なら僕も大丈夫かな

ルスト：夜……まぁ、なんとか

鉛筆騎士王：はいじゃあそういう事で！

鉛筆騎士王：尋問は不可避なので覚悟しておくように

サンラク：えー

オイカッツォ：えーじゃない

「えー……」

ダルい……いや、尋問確定とかそれ以前に普通に身体が怠（ダル）い。とはいえこの程度の気だるさで屈しているようではゲームなんぞ出来ない、やはりここは一度シャッキリするべきか。

「ふふふふ……適度にキメるならやはり日本製よな」

効き目が薄いから適度に目が醒める、あとあとぐっすり眠ることができるという寸法よ……あー、エナドリが身体に染み渡るぅー……

「よし、目ぇ覚めた」

とはいえ小腹も減ったし何か胃に入れてからログインするか。

この後、冷蔵庫で冷やされていたレバニラを少々拝借して腹を満たし、改めてログインするのだった……自分で思っていたよりも気が逸っていたのか、メールボックスに届いた一通の新着メールには気

付かぬままに。

「んー……一回死んでリフレッシュも有りかな……？」

そういうものであると動けば戦闘中は気にならないが、やはり平常時ともなるとこの胴体で遠心力にモロ影響される胸が気になるわけで。

「アバターの形状に過ぎないとはいえ邪魔だな……」

「邪魔ならせめて一揉み！」

「悪鬼退散！」

「レ、レバー……！」

エナドリをキメたからな、さっきとはキレが違うぜキレが。

「同性でもハラスメント判定は出る、むしろこれは慈悲の拳だぞ？」

「ここはこう、やっぱり脇腹よりもへそ辺りへダイレクトにストレート入れた方がインモラル的な快感がありそうじゃない？　あーっ！　あ゛ーっ゛！　こめかみぐりぐりはらめぇっ！！」

ろくに筋肉もねぇくせに一丁前に神経だけは通ってるからな、やはり頭部は大概弱点ですよ。ヘッショでワンパンなのも納得の効果だ。

「まぁ、それはそれとして森人族達はここに再び戻るつもりっぽいねぇ……」

「そりゃ故郷だって話だし不自然ってわけでもねーが……実際どんな感じなんだよ」

「トップクラスの建設職がいれば、ってところかなぁ」

森人族の建築技術は凄まじいと断言してもいい、木の枝数本と葉っぱなどのいくつかのアイテムだけでセーブポイントを作ることができるのだから当然とも言える。

だが逆に言えば早い、安いと続けば最後に来るのは脆いなのだ。

なにせ明らかに一番身分が高いであろうツンデレ……あー、えーと、ウメシュみたいな名前の……まぁいいや、梅酒さんですらサバイバルに熟練しているのだ、奴らは大前提からして住処を捨てることに慣れきっている。

つまり何が言いたいかと言えば、我々災害に慣れ過ぎて下手な地震や台風では動じなくなった日本人的観点から見ると、お前ら建築舐めてんのかとしか言いようのない復興ごっこにしか見えないわけで。

「壁の穴を葉っぱで塞いではい復興、ってそもそも応急処置にすら

満たないだろこれ……」

「逆に無傷な壁にも葉っぱを貼ってどこから矢が飛んで来るか分からなくするとかぁ？」

「乱数はダメだぞ、１０％の確率でも一発当確するならクソだよクソ」

特に受動的な乱数はマジでやめた方がいい、自分以外の何かに勝敗の判定を託すのは思ってる以上に頭に血が上りやすい。

「戻っ……なにそのアブノーマルなコミュニケーション」

「分かっちゃいますぅ！？　ほらボク達アブノーマルな関係なのでぇ！！」

「出力(バイブス)上げてこうか」

「でンまぁぁぁぁあ！！？」

割れろ……割れろ……頭蓋よ割れろ……そーれぐりぐり。

人の口に戸は立てられず（後書き）

ずっと頭をぐりぐりしながら（されながら）会話を続ける様はどう見てもアブノーマル＆インモラル

なお本当は別にそこまで痛くもないけどわざと迫真のオーバーリアクションするのがディプスロクオリティ

「さて……もはや前線拠点は目の前ではあるが、ここで本来の目的について作戦を練ろうか」

「本来の……？　あ、あー、うん、覚えてる、覚えてるぞ。王様とお姫様の護衛な？　うん」

忘れてたなこいつ……

「トットリだけに鳥頭ってか？　いやむしろ普段の俺が鳥頭か、どうした笑えよディープスローター」

「………ははは」

こいつの化けの皮を剥がすのにはなかなか苦心するとばかり思っていたが、見ろよ奴の顔を。演技や振りであんな苦虫を噛み潰しながら暴行を受けた、ＤＶ夫に依存した妻みたいな笑みを浮かべられるかよ。

「と言っても最近のサンラクサンは結構いろんな頭になってるですわ？」

どうにかして初期装備で手に入る馬頭を入手できないかと最近は企んでいる、ファスティアなら売却されたのが流れてそうなんだが……またあそこに行くのはなぁ……

なんかもう嫌な思い出しかないというか、身体が拒否反応を起こすというか。大きい方が流されずに放置されていた個室を後日再び利

用するのを躊躇う感情に似ている。

「まぁいいさ、お前が思い出した通り二人は……ごほん、御二方は僭王の手駒たる第三騎士団によってお命を狙われている状況だ」

そして最大の暗殺チャンスを俺と〝緋色の傷〟……もとい元「傷だらけ」によって不意にされた以上、奴らは王様達が樹海の中で野垂れ死ぬのを待つか、生還したところを狙うしかないわけだ。

「初期案では森人族の中に紛れ込ませてゴール地点たる三神教の新大陸教会に連れて行く予定だったが……どうせならもっとダイレクトかつ徹底的にやろうと思う」

「……いいねぇ、ゾクゾクしてきたよぉ……で、なにをするんだぁい？」

「鍵はお前だトットリ」

「俺！？」

「これはある意味お前じゃないとできないんだからな」

そうだな、強いて名付けるとすれば……「勇者様大作戦」かな。

…………

……

…

「あー、あー……ごほん。やぁやぁ皆の者！　国王トルヴァンテ陛下及び第一王女アーフィリア殿下のご帰還である！　道をあけーい！！」

空を切り裂くかのような朗々たる言葉が前線拠点へと響く。
なんだなんだと前線拠点で活動する開拓者たち……言い換えれば朝っぱらからシャンフロをプレイするゲーマー達が振り向けば、そこには声の発信源であると思われる一人のプレイヤーと、その後ろに立つ二人のＮＰＣの姿を視界に収めることとなる。

普段であれば多少目を引くことはあっても直ぐに興味を失うであろう一幕、だがしかしつい先程アナウンスされたレイドモンスターの討伐報告に、ある種張り詰めた……言ってしまえばイベントというものに敏感になっていたプレイヤー達は突然の寸劇に身体ごと振り返って事の推移を見守る。

「――――おお陛下、それに殿下もご無事で何よりに御座います」

と、その時。どこから現れたのかと何人かのプレイヤーが辺りを見

回す程のタイミングで、何十人もの騎士……その誰一人とてプレイヤーではないNPCの騎士団が国王を、王女を、そしてその二人を連れた魔術師装の女を囲む。

「おやこれは名高き絶倫剣の……」

「絶命剣だ」

「絶倫剣のユリアン様ではありませんか」

ひくり、と騎士の長……その代名詞たる名剣ではない剣を佩いたユリアンのこめかみが痙攣したものの、笑みを崩す事なく国王親子、そしてそれを連れてきた魔術師の女へと近づく。

「名を名乗るといい、陛下をお連れした功績は後々に褒美が与えられるであろうさ」

さぁこちらへ引き渡せ、と言わんばかりに手を差し伸べるユリアン。騎士団からも無言の圧力が魔術師装の女へと向けられる。
王を騎士が保護する、それは至って普通の事でありそこに違和感が生じるはずもない。だがしかし、この状況に対する違和感は第三騎士団の真の企みを知る者からすれば容易に気づくことができたであろう。

例えばそれは既に一度命を狙われたと言うにも関わらず、この状況下において一切の不安を見せていない王達であったり。
例えば王達を救い出した奇妙な格好の開拓者がこの場にいない事であったり。

そもそも騎士達と相対する魔術師の女……ディープスローターなる

意味深な名のプレイヤーが本来王を護衛するにあたってゴール地点になるはずの騎士団を前にしていつでも戦闘を開始できる構えを取っていることであったり。

奇妙な沈黙が長引く程に周囲のプレイヤー達も段々と「何かがおかしい」と気づき始める。しかし、しかしその違和感を確かめるべく騎士団と王達の対峙、その間へと飛び込まんとする者はいない。なにせこの状況が「正しい」ものであった場合、周囲からの乱入者の評価は「出しゃばりさん」になってしまう……そんな不安を誰もが抱いているからだ。

「あれ……割り込んだ方がいいのか？」

「いや、パーティ組んでるわけでもない他人のクエストに割り込むのはちょっと……」

だからこそ王を包囲する騎士団をさらに包囲する野次馬達（プレイヤー）という奇妙な二重包囲網が成立する。誰もが皆、この先の状況がどう変わるかを推し量ろうとして動けない。

「ちょっと待ってもらおうか！！」

であれば、この緊張に一矢打ち込むことが出来る者は、間違いなく

勇者と呼ばれるであろう。

「何奴！」

ジリジリとディープスローターへ、その後ろにいる王へと近づくユリアンの踏み出した右足のつま先ギリギリの位置に一本の矢が突き刺さる。

剣を抜き放ち、騎士道の風上にも置けぬ不意打ちを放った不届き者せとユリアンが鋭い声を上げれば、それに応える声ひとつ。

「え、えーと……卑劣なる騎士よ！　その……悪辣？　に穢れた手を撃ち抜かれたくなくば引くがいい！」

「……姿を表せ！」

「え……奇襲アドバンテージが……何？　出ろ？　分かった分かった……あ、へーシュ逃げんな、よし………いいだろう！！」

何やらゴニョゴニョと聞こえたものの、矢を放った下手人はユリアンの声に承諾を返し、数多の怪物を内に秘めた樹海より現れる。

「貴様……何者だ？　見たところ開拓者のようだが……第三騎士団に弓引く意味、分かっているのだろうね？」

「………………よし思い出した……し、笑止！　僭王の傀儡となって己が仕えるべき王族に剣を向ける者に……あー……弓を引いて何が悪い！」

突然の乱入者、見慣れぬスリングショットを腕につけている点を除

けば前線拠点に到達したプレイヤーともなれば見覚えのある弓使い向けの装備を着た一人の青年がゆっくりと、そして不自然に途切れる口上と共に現れる。

「俺の名はトットリ、トットリ・ザ・シマーネ！　エ……くっ、恨むぞ二人とも……森人族(エルフ)の勇者として弓を取る者の名だ！！」

「フッフゥー！　勇者様かぁーっくいーっ！！」

一瞬茶々を投げたディープスローターを射殺さんばかりに睨みつけたものの、すぐさま視線を騎士団へと戻したトットリは腕に装備したスリングショットを構えて不敵に笑う。

そして、この状況をメイキングした黒幕達が傀儡の勇者に仕込んだ通りの、燃料を点火する最後の種火が落とされる。

「悪いが新大陸の亜人を奴隷として扱うつもりの僭王に従うつもりはない、そして……その為に国王と第一王女を暗殺せんとするお前達にもな！！」

ざわり、とこれまで以上にプレイヤー達へと動揺が走る。トットリによって突然齎された情報の数々、そして何より……樹海から次々と現れる明確にプレイヤーや旧大陸のＮＰＣとは異なる特徴を持ったＮＰＣ達に。

「き、貴様……それにそいつらは、まさか……！」

「全国のエルフスキー達よ！　俺は約束を果たしたぞ！！　そして、森人族を守る為に力を貸してくれ！！」

若干の羞恥に頬を赤らめ、されど今この瞬間自分こそが状況の中心

にいるという喜びも混じった不敵な笑みを浮かべて、トットリ・ザ・シマーネは王と第一王女を守るべくさらなる一歩を踏み出した。

その勇者、傀儡なれど花形につき（後書き）

なお黒幕Aは裏でゲラゲラ笑っており、黒幕Bは表舞台でニヤニヤ茶化している模様

ひゅーっ、勇者様かぁーっくぃー！

「見ろよエムル、あれが公開羞恥プレイって奴だ」

「あそこ一人逃げようとしてるですわ」

「何ィ？　食らえ督戦隊アロー！！」

まぁ可もなく不可もなしといった軌道で放たれた矢がこっそりと逃げ出そうとしていた森人族の足元に突き刺さる。自分を見る喪服の女に気づいたのか慌ててトットリの方へと駆けていく森人族を見送りつつ、改めて俺は事の推移を見守る。

名付けて「勇者様大作戦」、他人のクエストという出しゃばるには勇気のいる局面において、こちらが用意したトットリという起爆剤を呼び水に他プレイヤーを無理やり巻き込むという……改めて考えると穴だらけの作戦だ。

だが、システム的な勇者ではなくそもそも全てが茶番である傀儡の勇者であるトットリだが、奴の肩書きはなかなかどうしてバカにできない。

なにせ……

「よう兄弟、お前だけにいい格好はさせないぜ！！（初対面）」

「困った時はいつでも力を貸すって、言ったろ？（言ってない）」

「森人族の明日は、私たちが守る！！（森人族ファーストコンタクト）」

「お前ら……！（誰だこいつら）」

そう、なにせ奴は森人族と共に樹海を彷徨い、そして森人族を前線拠点へと連れてくる期待を一身に背負ったプレイヤーだ。

期待に応えた者は相応の信頼を得る、そしてそれを成したトットリが第三騎士団と敵対することを選んだならば、必ずそこに呼応する奴らが現れる。

「ここでトットリと仲良しアピールすれば森人族の好感度が上がるかもしれないからな……」

嗚呼哀しきかな部外者達、心の何処かでトットリの圧倒的アドバンテージに勝てないと悟っているからせめて同じ方を向いているのだとアピールしたいのだ……その気持ち、よく分かります。

「よし……上手くいって何よりだ」

嗚呼そうさ、これはゲームだ。プレイヤーに「権力」は通用しない、必要とあれば王様だって暗殺するのがゲーマーという生き物だ。例えシャンフロがどれだけリアルだろうと、ゲームである以上プレイ

ヤーは世界観に沿った社会的モラルに縛られることはない。

次々とトットリ達の側につくプレイヤー達に第三騎士団は気圧されていく。馬鹿どもめ、囲めばなんとかなると思っていたところに数的有利を覆されて焦っているらしい。

野次馬が敵に変わったことで逆に包囲される形となった第三騎士団、団員どもは焦りを隠そうともしていないが、腐っても長と言うべきかこの場における首魁たるユリアンは余裕を湛えた笑みに剣呑な眼光を光らせ、ただ王一点を見つめている……なぁるほど？　確かにそれが最速最短最適だ、いちいちプレイヤーに構わずとも、国王を倒せば第一王子側として目的達成と言っていいだろう。

「チッ……賭けは俺の負けかよ、ＧＧＣの時といい、俺って自分が関与できない賭け事に弱いのかな……」

仕方ない、このまま一人と一匹による督戦隊のまま終わればいいなと思っていたが……出陣だ、いざや尋常にボコすに候。

「戦闘終了の時点で軽量化もステータス強化も切れるの地味につらいな……」

別離れなく死を憶ふ(メメント・モリ)は使えない、いや使う方法がないわけでもないが力技なので効率が悪い。

また見掛け倒しの賑やかしとして使うかどうかは一旦置いておき、それとは別件で試しておきたいこともある。

「じゃあ絶妙剣さんにもう一度悪夢を見せに行ってやるかぁ！」

「なんだかちょっぴり可哀想に思えてきたですわ……」

まぁ、単純に考えて今の俺は初対面の時と比べても戦力１．５倍……いや、スキル込みで二、三倍は強い。対人戦(NPC)なので夫婦装備はあまり役に立たないが正体を隠すには丁度良いだろう、ヴェールあるしな。

では、いざ。

「とうっ！」

駆け出す騎士一人、本領発揮ならざれど、その手腕に陰りなしと言わんばかりに剣を抜いた絶命剣のユリアンが走る。

「お覚悟……‼」

「おっと」

目的は王の命ただ一つ、世の中には生きているだけで不都合な存在が確かにいる。それは権力という混沌の坩堝においては第一王子…

……現国王にとっては実の父親たるトルヴァンテこそが該当する。
故にこそ、アーフィリアを仕留めることを諦めたとしても、トルヴァンテの命だけは奪わなければならない。

絶命剣、その名は決して虚飾や偽りなどではない。騎士達の頂点に立つ男が強すぎるだけであり、システム的に言えばユリアンのTECとDEXは驚異的な数値に到達している。
高速機動ではなく、ただ一撃を必殺の領域にまで高めるユリアンの持つ刺突スキル「絶命の一刺し」は命中すれば高確率の即死判定を相手に強いる。直接的な戦闘力のないトルヴァンテであれば、即死判定を出すまでもなく仕留めることができる。

だが、しかし。

何故ディープスローターがユリアンではない何かを見て勝ち誇った笑みを浮かべているのか、何故此の期に及んで国王トルヴァンテは未だ泰然とした態度を崩さずにいるのか、この肌を焼くような嫌な気配はなんなのか。

「――――抜剣を告げる」

その答えが現れる。

空に影一つ。昇る朝日を遮って黒い影を生み出すそれが落下運動の末にユリアンの進む道を断ち切るが如く地面へと突き立てられる。
それが何かは赤き怪物との戦いに参加した者のみぞ知る、しかしそれの姿を見たことがある者、まで条件を広げたならば……

「この、剣は……‼」

「――我等、彷徨える剣。我等を携える者はなく、されど我等は使い手に我が身を委ねる刃」

トン、と空から降ってきたにしては驚くべきほどに静かで軽やかな足音を立てて、地面に突き立てられた巨大な剣に降り立つ漆黒。

モノクロの剣、そして何を悼むのか喪服を着たその女はさながら墓標の上に現れる亡霊のようにも、死者を引き寄せる死神のようでもあって。

「――我等、か細き願いを手繰る剣。我等、積み上げし宿業を断ち斬る剣」

その両手に黄金の剣を二振り、顔はヴェールに覆われ伺えず、されど歌うように紡がれる言葉が静寂に上書きされた前線拠点へと響く。

「――剣は宿業に立ち塞ぎ在りて、今ここに悪を討つべく高らかに告げる」

左の腕は自然体そのままに、右剣の鋒を第三騎士団長ユリアン……悪徳（カルマ値）を蓄積させた者へと突きつける。

「――我等、仇討つ剣。今ここに剣は抜かれ、悪は討たれ、願いは成就せん」

喪に服す女の背後に、光をインク代わりにして描いたかのようなエンブレムが浮かび上がる。

それは敵を射殺さんばかりに鋭い眼光と大きな嘴に炎の右羽、雷の左羽を持ち、剣の意匠が組み込まれた新たなる仇討人のエンブレムであり、それを背後に浮かべる様はまるで女自身が炎雷の翼を広げたかのようで。

「こんだけ派手に登場しちゃってぇ……これは撮影＆拡散されても文句言えないよねぇサンラクくぅん……」

仇討つ剣の宣誓が成立する時、悪徳はただ滅ぶのみ。

ふぇぇ……手間かかりすぎぃ……

ビシッと決めポーズまで決めたはいいが、心の中では弱音吐きまくりだ。なんだこのスキル、走りながら早口言葉チャレンジしろってか。

スキル「仇討の宣誓（リヴェンズ・コール）」、名前からしてもうあからさまではあるが職業「仇討人」に就いた者のみが習得可能なスキルであり、これらのスキルは共通して対象のカルマ値が大きく関わってくる。

スキル「仇討の観察眼（リヴェンズ・アナライズ）」は効果発動中、見た相手のカルマ値を可視化することができる。

スキル「仇討の宣誓（リヴェンズ・コール）」は特殊ウィンドウに表示される「宣誓」を全て唱え切ることで、相手のカルマ値に比例したステータス強化を付与する。

スキル「仇討の引導撃（リヴェンズ・フェイタリティ）」は相手のカルマ値に比例してダメージ量を上げる武器強化スキルであり、さらに効果中に相手を倒せば何やら追加効果があるようだ。

そして問題のターゲット、第三騎士団々長……絶妙剣？　のユリアンのカルマ値は……５１２０。

高いのか低いのかは分からないが、少なくとも今俺に付与されているバフの強化倍率は結構なものだ。

まぁ、なんだ、つまり……

「負ける気がしねーな」

シュービルエンブレムの仇討人（後書き）

・カルマ値

溜めすぎるとＴＡＳじみた処刑人に狙われることになるＰＫ対策として実装されたパラメータ

誤解されがちだが「ＰＫ」はあくまでも賞金狩人を招喚するトリガーであり、実はＰＫやＮＰＣＫをしなくてもカルマ値は蓄積する。

例えば雑魚モンスターを必要以上に痛めつけたり、モンスタートレインで温厚なモンスターに肉食モンスターをけしかけたりしてもカルマ値は蓄積する。

ユリアンのカルマ値が高いのは普段の戦い方がねちっこいから

そして賞金狩人出現時にカルマ値が高い程ティーアスが出現する確率が高いので……何が言いたいかと言うと「着せ替え隊のやり方はティーアス一点狙いの場合は非効率の極み」という事です。

しかしそれを指摘できる者はいないのですね……

格下が格上に勝つ、古くより物語の定番として愛されて来たジャイアントキリングも、格下側が力量差を理解していないならば奇跡の実現はどだい無理と言うものだ。
速さと正確さが売りのようだが、生憎機動力とクリティカル命中率には自身があるんだ。

であるならば、あの時とは異なり背後も他の騎士も気にすることなくユリアン一人を殴ることができるのであるなら、チクチク急所を狙うだけの攻撃を避け、逆に斬り刻むのは容易い。

「おほほ、ＤＰＳが足りなくてよ」

「ぐ、ぉお……！！」

全身を刻まれ、地に倒れ臥すユリアン。レベルキャップを解放し、三桁スキルを獲得し、さらには補正まで受けた俺に勝つにはスペックが足りなかったな。

「さて、ここで息の根を止めるのは容易いが……」

それにしても仇討人のスキルで倒せばカルマ値は溜まらないのだろうか、いやしかしもし試して名前が赤く染まってしまったら色々面倒が起きそうだし……

「死ねぇ！」

「足癖が悪くてごめんあそばせ」

「ふげぁ！？」

ハイヒールの踵部分が地に臥せた状態から奇襲を仕掛けんとしたユリアンの額を打ち抜く。生憎だがハイヒール戦闘には慣れている、女キャラの装備って見た目重視するせいでハイヒールだったりスカートだったりと割と不便なこと多いからな……

「お、おのれぇえ……！」

俺の奢りだ、存分に土を味わうといい……はーっ！　人に土ペロを奢ってやるのは最高だぜ！！

とはいえどうしよう……人前に出てしまった手前、この状況からスタコラ逃げるのも締まらない。だが殺しはあまり選びたくない手段であるし、うーむ……

「話は聞かせてもらったよ、お嬢さん（フロイライン）？」

「うわっ」

なんだこの気取ったイケメン、眼鏡かけろ眼鏡。そしたら岩巻さんが主食にしてくれるぞ……攻略的な意味で。

いきなり現れてやけに馴れ馴れしいが……直結厨か？　馬鹿め、こちらのリアルが男とも切らずに……くくく、愚か者の名前を拝んでやろうじゃないか。

PN：アーサー・ペンシルゴン

「ここは私に任せてもらおうか……サ・ン・ラ・ク・君？」

「ふぇえ……」

お前何耽美系のイケメンになってんだよぅ……秋津茜とかガチムチのおっさんだぞ……ぼくクターニッドくんのしゅみがわかんない……性的嗜好が深淵なのかぁ……

「な、何故ここに……フィフティシアに戻ったはずじゃ」

「んふふふふ……知ってるかいお嬢さん、船ってのは海を進むことが出来るのだよ」

何を言って…………まさか。

「ルルイアスからここまで船で来た、ってか？」

「ご明察、そりゃあもう大変な旅だったよ……？　食料が尽きたから飢えて死んで、蘇生してまた飢えて……」

なんだそのデスマーチ、素直に旧大陸側に帰れよ……なんで新大陸側に来たんだよ……

「って事はオイカッツォとかもいるのか？」

「勿論、そしてそれを踏まえて君に選択肢を提示しよう……第三騎士団々長ユリアン殿？」

明かされる第一王子がクーデター、という意味の分からない行動の真意。新大陸の亜人種を奴隷として扱う、というコンキスタドールじみた第一王子の企みに、プレイヤー達の意見はおおよそ前王……いや、本来の王トルヴァンテ側へと傾いていると言っていいだろう。

まぁどんな場所でも全ての意見が一つに統一されることなど滅多にないので、情報が広まれば新王側に付くプレイヤーも出てくるだろうが……それを差し引いても今この場をＮＰＣだけで潜り抜けることは困難、つまりは王手だ。

何よりトットリ……ではなく奴が連れて来た森人族の存在、そしてルルイアスから新大陸までリスポンデスマーチでやって来たペンシ

ルゴン達クターニッド攻略班、つまりクラン「黒剣」及び「ライブラリ」がトルヴァンテの肩を持つともなれば万に一つもユリアン達ＮＰＣに勝ち目はない。

「なんせどれだけ斬り伏せても復活するからな……」

無限湧きする廃人とかクソゲー極まりすぎだろ、”緋色の傷（スカーレッド）”君トレインするね……

まぁそれはそれとして、ユリアンも俺にボコられた事で実質的な捕虜状態となった第三騎士団。

彼らにとっては幸いというか、カルマ値を上げてまで第三騎士団を皆殺しにしようとするプレイヤーはいなかった。だからこそ、扱いに困る第三騎士団を悪魔がゲス顔で弄ぶのだが。

「――さぁ、最後の一人が死ぬまでこの樹海の主に突っ込んでもらうか、あの船でおうちにお帰りいただくか……聡明なる騎士団長殿はどちらを選ぶのかな？」

「げ、外道め……！」

知ってる。

その呟きは俺だけが呟いたわけではなかったらしい、見れば衛星系ネカマプロゲーマーが人混みの中で同様に遠い目をしていたのを発見した。

自分を見ている視線に気づいたのか、こちらへと顔を向け……そっと顔を逸らした。なんだよ、何他人のふりしてんだこの野郎。

「オイカッツォくぅーん？」

「摺り足で近づいてくんな怖いよ！」
「つれない事言うなよぉ……何他人のふりしてんだコラ、ん？」
「自分の格好を省みるといいよ……」
ん？
「可愛いだろ」
「朝日と絶望的にミスマッチしてるよバーカ」
海水浴するヴァンパイア的な？　っても大元の黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）だって時間帯関係なく出動するし。
「なんか君の周囲だけ辛気臭い」
「マイナスイオンを撒き散らす人間とかいたら怖いだろ」
「マイナスのオーラを出す奴なら今目の前に」
「……人生が受動態のくせに」
「ようし喧嘩だ！　今ならなんとタダで売っちゃうよ！」
「クーリングオフ（物理）だオラァ！」
「おーい、文系理系でアホな喧嘩はやめようねー。今一応真面目な場面だから」

我が返品拳の餌食にならなかった幸運に感謝するんだな……とはいえ、不平等な立場からの要求なんざロクなもんじゃない。樹海の主、つまり〝緋色の傷〟に特攻かますか、ペンシルゴン達が乗って来た帆船で旧大陸まで帰らされるか。あれこれどっちにしろ死……

「なんてひどいやつだ」

「まったくだ」

「本音を言うと？」

「装備全部剥いでから魚の餌で良くね？　大自然が証拠隠滅してくれるから大丈夫大丈夫、みんなで黙ってれば実質事故」

「リスポンするならレベリング用の無限サンドバッグとかにも出来たかもしれないけど……蘇生魔法とかでリサイクルできないかな？」

「貫禄のド畜生かな？」

オイカッツォはともかく俺は自然を思いやることが出来るネイチャーな人間性なんだけどなぁ……まぁ冗談はここまでとして。

「まぁサバイバル大航海を個人的にはオススメするよ、〝緋色の傷(スカーレッド)〟君に突撃するとか万に一つも勝ち目ないだろうし」

「あれ？　確かこの森のボスって「傷だらけ(スカー)」ってやつじゃないの？」

「…………コトバノアヤダヨ」

「確保ォーっ！！」

「ぐえええ」

やめろォ！　体力１しかないから油断するとすぐ死ぬんだぞ俺は！

「例の件も含めてそろそろ一度抱えてる情報全部吐き出そっか？ね？」

「例の件…………どれだ？」

「複数候補がある時点でおかしいんだよなぁ……」

まぁ確かにいい加減一人で抱え込みすぎな面はあった。ラビッツはまだともかく、レイドボスとかに関してはむしろ公開すべきなんだろう。

だが、

「ロハで教えてもらおうって奴らがこの態度はどうなんだ？　んんー？」

羽交い締めにされた状態で情報を出せってのは、ちょっとばかし仁義に反するんじゃないか？

なーんて、それっぽく言ってるが単純にマウント取られて情報を吐くのが悔しいだけだ。

「まぁいいや、吐くよ吐く吐く。で、何から知りたいんだ？　この美少女サンラ子ちゃんがお答えしよう」

はい、全く面識のない関係なのに真っ先に手を挙げた勇気に敬意を表してそこのお前。

「あー、これまでにどんなレイドモンスターに会って来たんですかぁ？」

む、鋭いな……やはり新大陸に進出するくらいこのゲームをやり込んだプレイヤーは勘もいいのだろうか。いや、リ……リベンジス？だったかはあんまりって感じだったたし……まぁいいや。
なんか口の動きに妙な違和感を感じるが……ラグかな？

「レイド……レイドかぁ……貪る大赤依に、狂える大群青……あー、今思えばあのバーニングブロッコリーもレイドモンスターだったのかな。なんか世界観的な性質がそれっぽいし……」

「――――へぇ、それは興味深いねぇ……」

俺が指名したプレイヤーは口を閉じている、だがしかし声だけは虚空に響く……一発音ごとにその声質を酷く聞き覚えのあるものに戻しながら。

「き、貴様ディープスローター！？」

「詰めが甘いぜサンラクくぅん……」

まさかこいつ、後ろに隠れながら声音をコピーして……！？

「いや「馬鹿な！？」みたいな態度してるけど、普通に口滑らせただけだよねサンラク君？」

「はっ！？」

さて、ここからどう逃げるべきか。捕まったら半日くらい拘束され

そうだな？

二律背反の秘匿主義者（後書き）

絵面だけなら完全に未亡人に迫るイケメンメガネの図

いかに美少女でも内面から滲み出る表情が隠れてるのがデカいですね……

なお鉛筆組のルルイアス攻略記はいつか書きたい（すぐとは言ってない）

アポイントメントの重要性

多勢に無勢だ、口を滑らせるにしても場所が悪すぎた。いよいよこまでかと腹を括っていたが……救いの手は予想外の場所から差し伸べられた。

「皆様、どうか私の話を聞いてはいただけませんか？」

この場のいる全員の耳に、するりと流れ込んでくるかのような声。それはいよいよ自殺リスポンによる逃亡という最終手段を行使するかどうかの瀬戸際にいた俺すらも動きを止めてしまうほどの不思議な力があった。

そしてその声を発した人物の歩みを何人たりとも塞ぐこと許さぬ、と言わんばかりに現れる統一装備の騎士達。

その中の一人が俺の事を一瞬ガン見してきたり、もう一人が俺の格好に一瞬肩を震わせたりもしていたが……まぁ、そういう事だ。

「私の名前はイリステラ……そこな方は、私の依頼を受けてくださった方なのです。ですのでどうか離しては頂けないでしょうか……」

「うむ、開拓者の諸君らに於いて如何なる因縁があるかを余は関知せぬが……その者は余の恩人であるが故、な」

「く、国家権力……」

「日頃の行い、かな？」

「でもサンラク君まだ天罰受けてないじゃん」
この品行方正の権化たる俺に向かってなんて事を、月の出ていない日は覚悟しておけよ。
とはいえ聖女と国王という権力的に言えば最高峰の二人が俺の肩を持った事で自然と俺の拘束も緩むというもの。羽交い締めから抜け出した俺は外道共にドヤ顔をかましながら聖女ちゃんに続きをどうぞと促す……あ、ヴェール被ってるから表情読み取ってもらえねーや。

それはそれとして展開は進む。貫禄のロールプレイ特化というべきか、一糸乱れぬ動きで整列した聖女ちゃん親衛隊……もとい聖盾輝士団に守られながら、大凡「外」というものが似つかわしくない儚さを湛えた聖女イリステラがすぅ、と息を吸い込む。

「……竜災が、近づいています」

りゅうさい？　竜の災害か？
ざわめくプレイヤー達を他所に、聖女ちゃんの言葉はなお続く。
「赤い叫び（ドゥーレッドハウル）……白い狂愛（ブライレイニエゴ）……緑の老獪（ブロッケントリード）……そして黒い暴虐（ノワルリンド）が……来ます」

その六文字が聖女ちゃんの口から紡がれた瞬間、少し離れた場所で絶対零度の冷気……いや、怒気が撒き散らされた気がするが気にしないでおく。俺はにっこり笑顔のまま明らかに殺傷力に全振りしてそうなメイスに手を掛ける大工さんとか見てないです、はい。

「それに呼応する黄金……未曾有の災禍が、この新大陸に吹き荒れます……」

まぁ要するにユニークシナリオのおさらいか。所詮はＮＰＣのイベントか……という雰囲気が漂い始めるが、俺は知っている。慈愛の聖女イリステラというＮＰＣがそんなまっちょろいお知らせＮＰＣなどではないという事を。

「団結しなければなりません」

あのＮＰＣはどういう原理か、未来予知……いや、未来予報とでも言うべき言葉を持つ。であればこれは実質「宣託」「予言」と言ってもいい。

「三つ巴に争いし獣の人……青空に焦がれる鳥の人……赤竜に弾圧されし鉱の人……自由を愛する蜥蜴の人……黒竜に従属せし竜の人……竜に抗いし巨(おお)きな人……力を持てど争いを嫌う蟲の人……そして、その全てより拒まれし穢れし人も」

「あれ、魚人族(マーマーン)は？」

思わずポツリと呟いた言葉に、周囲の視線がこちらへと一気に集まる。しまった、またしても拘束されそうなお漏らしを……いや待てこれ確かライブラリに言ったぞ、つまり奴らにひっ被せれば逃げられる！

「まだ見ぬ人と、遠からず、されど近からぬ同胞とも、私達は結束しなければならない……竜災の後、この世界に吹き荒れる滅びに抗うためにも」

成る程、つまり聖女様は「こんなところでちんたら遊んでないでさっさと大陸攻略してユニークシナリオＥＸに備えろグズ共」と仰り

たいわけだ。でもこれを直接指摘するとジョゼットに何されるか分からないのでやめておく。なんか単純にキルされる以上の怖さがあるんだよ……

「……おっと？」

周囲のプレイヤーの視線が聖女ちゃんへと集まっているな？　そしてログアウトするには遅く、ログインするには早い早朝と言う絶妙な時間のためか、そこまで多くないこのプレイヤー数なら……行ける、逃げる！

「……」

注意深く周囲を確認する。外道二人は……聖女ちゃんに釘付けだ、ライブラリのエセ魔法少女は何やら考え込んでいる。黒剣の面々は……よし、行ける。

「……っ」

ここで力みを入れんとした身体が硬直する、それはこちらをじぃぃぃ……と見つめている視線に気づいたからであり、そしてそれがディープスロータ一であったからに他ならない。

こ、こいつ……聖女ちゃんには視線一つ送らずに俺をピンポイントで見て――！？

「……ふへへ」

「……！？」

あの野郎、自分の手で自分の目を隠すゼスチャーを……「見逃して

あげるよぉ」とでも言いたいつもりか！？　何が狙いだ……分からない、フレンド登録した程度じゃ座標は割れない、そして俺は普段ラビッツを本拠地としている以上、向こうからすればここで俺を逃せば次にいつ確保できるかも分からない。

だからこそ外道共はせめて情報を置いていけ、と俺を捕獲するわけだ。じゃあせめて何らかのリターンを寄越せと言いたいところだが、つい最近まで特に何か入り用だった事がないからな……まぁいいや、逃げよ。

右手で目を隠して笑みに歪めた口から舌をんべぇ、と出し、小さく左手で手を振る変態に若干の警戒を残しつつ、腕を組む自然な動きで琥珀の手袋を心臓付近へと近づける。

「聖女ちゃ……様！　その同胞とやらは一体どこにいるのでしょうか！」

三、二、一……

「いくつかの種は……この樹海の、何処かに――」

「自由(フレ)に呼ばれたので部屋抜けますね＾＾」

「あっ逃げた！！」

くっ、やはり完全にはこちらへの警戒を解いていなかったか！　だがもう遅い、既に黒雷を纏った俺は最速で樹海へと逃げさせてもらう！！

とはいえ樹海方面は先ほど俺を包囲した時にプレイヤーが結構な数

集まっている、あと森人族が邪魔。であればここは多少距離が伸びるとはいえ、一度港側へ走ってから大きくUターンして森の中へと突っ込む！

「なにあれ速(はや)……！？」

「くっ、サンラクのやつ相変わらず頭おかしい挙動を……！」

「黒くてカサカサ高速で動くとかまんまゴキブリだよねぇ」

ディープスローターあの野郎いつか絶対張り倒す！　だがここは戦略的撤退一択、如何な妨害が立ちふさがろうともはやこの足が止まることは……！！

「おお友よ！　我が友サンラクよ！　思えばさほど過去のことでもないはずだが、随分と久しい心持ちだぞ！」

「おヒサしぶり」

アァ！？（想定外すぎる登場に身体が硬直）

ラァ！？（急に止まった反動で足首を挫き体勢を崩す）

「バババババババッッ！！？」

ローエンアンヴァ琥珀晶を用いることで作られるアクセサリーはいくつかの階級を持つ。
その中でも「災（ハザード）」の階級は条件次第では最上級品質にすら匹敵、いやもはや凌駕する程の力を秘める反面、決して無視できないデメリットを抱えているのが特徴だ。

俺自身もよく勘違いしかけるが、「過剰伝達（オーバーフロー）」はデメリット側の効果だ。上手いこと扱えているからそう見えないだけで、アクセルを踏んだ瞬間に初速＝最高速に達する車など欠陥品も甚だしい。公道はサーキットじゃねーんだぞ。

「ぐべぇ」

「サ、サンラクゥーッ！？」

要するに、だ。過剰伝達状態ですっ転んだことにより、吹っ飛びモーションを三倍速にしたかのような超高速で港から海にダイブした俺は、そのまま浮上することなく死亡したのだった…………お前マジで許さんからなアラバァ……

アポイントメントの重要性（後書き）

なお口が回る方の外道と口でするのもやぶさかではない変態の腹筋も破壊された模様

叡智は回顧し語る（前書き）

みずぎいるざばくししました

ミュルグレス当たったけどイクサバ二本目凸りたい……ドヤ顔イク

サバ二天一流剣豪したい……

色々と突っ込みどころ満載だが、なんかもう疲れ果てたのでログアウトしよう。

アリュールに「お願い」してこっそり作ってもらった簡易拠点からのそのそと這い出した俺は、身体が男に戻っているのを確認するといつも通り鳥頭に戻って軽く伸びをする。

「おっすエムル、いい朝だな」

「爽やかな声出してても何か色々間違ってる気がするですわ」

「何を今更」

しかしこのタイミングでアラバが地上に出てくるとは……やっぱり釣り上げたあれがフラグだったのか？

絶対外道共や変態は爆笑してるだろうな……だが結果オーライと言うべきか、あの場所からの離脱には成功した。したが……やはり女モードを公にしたのはマズったかもしれない、これはどちらにせよ世捨て人プレイを続行か……いや、待てよ？

「それどころじゃなくすれば割と何とかなるんじゃないか……？」

ウェザエモン関連で得た情報は一応奴に遠慮したりもしてたが、レイドモンスターは大前提として広く知られるべき情報だ。であればトットリとディープスロータ―を巻き込めば「貪る大赤依」という特ダネ爆弾である程度の注意逸らしも………ダメだ、モチベーションがスリップダメージ的に削られていく、これはもう寝よう。

「エムル、ラビッツに戻ろう」

「はいなっ！」

さて、ラビッツに戻ったわけだが……

「なぁエムル」

「なんですわ？」

「我々はとても疲れているので貪る大赤依と戦ったこととかは後で報告でも良くね？」

「サンラクサン？　我儘は良くないですわ」

リアルタイム進行を今だけは恨むぜベイベー、仕方ない……行くか。
もはや居候と言ってもいいくらい馴染んだ兎御殿を進み、ヴァッシュがいるであろう場所へと向かう。最近気づいたが、どうもヴァッ

シュはこちらのヴォーパル魂の数値で出現するのでは疑惑がある。

素材集めやら何やらで効率重視だとほとんど出会うことがないが、逆に激戦を繰り広げた後だったり球技大会した後だったりすると割と見かける。

まぁそんなわけで予想通り煙管を……いや違うわ細長い人参をコリコリ食べていたヴァッシュを見つけた俺は、エムル共々立ち向かった「貪る大赤依」についての報告をするのだった。

「………と、まぁ俺もエムルも無事生き残りやしたんで、えぇ」

「サンラクサン、ヴォーパル魂がギュンギュン来てたですわ！」

「おぉ……そうかい、そうかい」

相変わらずファンタジーものの登場ＮＰＣとは思えない極道兎であるが、当のヴァッシュはといえば何かを思い出すかのように遠い目をして天井を見上げる。

「貪る大赤依……あぁ知っとるさぁ……懐かしい、そして忌々しい名だぁよう……」

いつ如何なる時も強キャラムーヴを切らさないヴァッシュであるが、一瞬ではあったが何かを悔いるような表情を浮かべる。だがそれを問うよりも早く、元の鷹揚な笑みを浮かべたヴァッシュは俺とエムルへと視線を戻す。

「ようやったなぁおめえら……ありゃあ始源の怪物……神代よりも更に前、この地に斃れた神の「血」ってやつよぅ……」

神の血……やはりあの地下で見た謎の棘は……

「大凡予想はついてるようだぁなぁ……そうよ、俺等ぁ達はよう、みぃんな大っきな死体の上で暮らしてるってわけよう」

「うえぇぇぇえぇ！？」

「ははは工ムル、問題なのは上じゃなくて下だぞ？」

「そういう意図は含んでないですわーっ！！」

ジョークだよジョーク。しかしヴァッシュの話を、これまで得た情報を、そして何よりユニークシナリオとは別口でこのゲームの根幹に食い込んでそうなレイ氏を思い返せば見えてくるものがある。

「旧大陸と新大陸……兄貴、つまりそういうことなんですかね」

「……そうだともよう。ここは黒き神、左方始源獣「エレボス」……その翼の先端ってぇわけだぁ」

翼……鳥類？　あの下手な剣より硬そうな棘が生えた鳥？　え、てかあれ棘じゃなくて……羽毛なの？
いや、それよりもやばいのはヴァッシュ曰く「死体」であるはずのエレボス君だが、俺の知る限りでは赤血球と……青いけど白血球？　マクロファージ？　的なものが大絶賛活動中であるという事実だろう。

赤血球は物理的に黙らせたが、レイドモンスターなのでそれこそ復活は時間の問題であるし、奴らを放置するのが最善とも思えない。

「なんとなく、最悪の結末（バッドエンド）が見えたな……」
よりにもよってフルダイブの、それも不特定多数が共有する世界をぶっ壊すような真似をするのか……という楽観的な考えがないわけでもないが。だがそれでも断言できる、ユニークモンスターなんてものを実装するここの運営なら多分やる。
「天地　律、やはり狂人であったか……」
フェアクソとスペクリに関わってる時点でカタギの人間じゃねぇ、あれはクソゲーの神に選ばれたクソゲー宣教師とかそういう手合いなんだろう。
ＭＭＯでワールド崩壊はあかんでしょ……いや、だが実際のところ俺達（プレイヤー）の手で貪る大赤依が倒された以上、これも奴の狙い通りなのか？
「なんて奴だ……」
「あぁ、そうだサンラクよう」
「へい、なんでしょうか」
「おめえさん、貪る大赤依に所縁あるもの……得たんじゃぁあねぇかい？」
「……へえ、色々と不吉なんで使うかどうかは迷いどころですが」
少なくともエムルがいるところではデメリットの手綱が握れない以上使えないし、同様にプレイヤーが多い場所でも使えない。正気に戻ったらＰＮが真っ赤になってましたとか笑うに笑えない。

「それはよう……切り離された自意識のねぇ「空の器」ってやつよ。おめえさんが意思となる事でそいつぁその本質を行使する……そして、使う程にその力はおめぇさんに馴染んでいくって寸法だぁ」

「……つまり、積極的に使っていけと？」

「かっかっか！　それこそおめぇさんの意思だろうがよう、あの犬っころが刻んだ「傷」がある限りおめえさんは最後の一線を踏み越えることがねぇ……」

成る程？　つまりヴァッシュはこう言いたいわけだ。今の俺は刻傷の効果によって「改宗（コンバーション）」が出来ない、「擬似改宗（デミコンバーション）」も含まれるのかは検証の必要があるものの、今回ばかりはその制約がそのままデメリットを打ち消しているわけだ。

即ち「暴走判定を無視してメリットのみを受け取ることができる」今のうちに暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）を使い熟していけ、と。

「となるとやはり水晶巣崖……」

いつもは球技大会の球扱いだが、今回はこちらが奴らをサンドバッグにしてやるってわけか……いいねいいね、やっぱり俺たちはマブダチだ！

「んで最後だが……おめえさん、一つ殻を破ったようだぁな？」

「殻……ええまぁ、はい」

レベルキャップの事だよな？

「だったらよう……エルクのとこに行ってきなぁ」

「エルクの？」

「エルクおねーちゃんの？」

「おうよ……今のおめえさんなら、エルクの「秘法（ロウ）」を見ることができるだろうよぅ」

秘法、秘法と来ましたか……相変わらず意味深　（正しい意味で）なことしか言わない兎だ。
とはいえフラグを建てられたなら成立させたくなるのが人のサガ、俺はエムルを伴って兎御殿内の剪定所へと向かうのだった……その後にはビィラックにも会いにいかないとならんしピンボールみたいだな。

「律」は外から内側へ干渉するパッシブな世界の概念、「法」は内側から外側へ主張するアクティブな生物の概念。別にりっちゃんは関係ないですが、シャングリラ・フロンティアというゲームでの世界観的には極めて重要な設定。

・左方始源獣エレボス

天を目指した魔王であり超銀河ペンギン、特技は自身のオンリーワンを証明するために他者を滅殺すること。赤血球やら白血球が勝手に動くので実質はたらく細胞といっても過言ではない……なお血小板ちゃんは柔らかくて可愛い、というか柔らかすぎ。

ちなみに例の棘の正体は超銀河級の枝毛、超銀河サイズのキューティクルがなかったので……

レベル上限がない、という単純ながらヤバすぎる特性ゆえに始源時代では最強の「個」であったが、総合値をレベルとする最強の「群」であった超銀河二足歩行亀と相討ちになり斃れた。

亀の名前？　聡明な決闘者ならもう分かっているでしょう

格好つかない格好つけ（前書き）

ビルド面白かった！（幻覚）

格好つかない格好つけ

「お金、か」

「お金、よねぇ」

初手銭ゲバ、今日もエルクさんは絶好調であった。

「剪定師の「秘法(ロウ)」はとぉっても希少価値が高いのよぉ、だからねぇ……お金をたくさん欲しいわぁ？」

「……ちなみに「秘法」ってのは具体的にどんな内容なんだ？」

すっ（無言で手を差し出すエルク）

すっ（無言で一万マーニを置く）

「んー、二割かしらぁ」

「……足元を見てくれる」

追加で四万マーニを渡すとエルクは「まいどありぃ」と笑いながら口を開いた。

「特技剪定師(スキルガーデナー)にはねぇ、剪定師だけではなくそれを受ける者にも相応の実力を要求する、秘密の技(ワザ)があるのよぉ？　それはぁ……」

「それは……？」

………

……

…

「さて……金がいる、な」

それも大量に、数十億は必要かもしれない……だがそれでも安い。

「サンラクサン、どうするんですわ？」

「武器を修理次第、一旦水晶巣崖に行く」

頭の上でエムルがああやっぱり、という顔をしているのが手に取るように分かるが、例の頭蓋骨の検証も兼ねてるんだからしょうがないだろう。

「だが……そろそろ俺も、水晶巣崖を卒業する日が近いのかもしれないな」

水晶巣崖での稼ぎは最上級といっても過言ではないが、それ以上は存在しないと実証したわけでもない。

そして俺は既に新大陸の道を歩む事ができる、まだ見ぬ稼ぎポイントの探索が出来る。

「だから、しばらくあいつらとはお別れだ……」

「いい話みたいにしてるけど要するに肉食獣が狩り場を変えるのと同じようなもんですわ」

「新たな旨味(うま)を求めて！！」

よーしそれはそれとしてカチコミ……もとい遊びに行くぞーっ！！

というわけで外道や変態が新大陸でわぁわぁやっている間、俺は優雅に旧大陸に行く……と言いたいところだが行く前にやっておくことがある。

「えーと……まぁ、適当にこんな感じで……よし。エムル転移頼む」

「はいなっ、エイドルトですわ？」

「いいや？　前線拠点に、だ。それと……」

時間にすれば一日にも満たぬ大冒険、本来玉座に君臨する筈の王が未開の大樹海を駆け回るなどと、御伽噺にしても誰が信じようか。

だがしかし事実としてトルヴァンテとアーフィリアは第三騎士団より逃れた後、夜闇の樹海を駆け抜けたのだ。そしてそれを成す事が出来たのは優れた魔術師たる賢者ディープスローター、森人族の英雄トットリ・ザ・シマーネ、そして朝日と飛沫に消えた仇討人の……

「失礼致します」

「……おぉ！　サンラクよ、お主か」

「まぁ！」

突然の魚人族(マーマーン)来訪、という大事件が発生し、開拓者たちが恐慌状態に等しい騒ぎを広げる中、前線拠点に建築された魔王城……もといスカルアヅチへと入城したトルヴァンテとアーフィリアの前に跪き現れたのは、性別こそ男になっているものの確かに二人の命を救った仇討人サンラクであった。

「この身は少々目立ちますが故、見苦しい姿をお見せしてしまいましたが……改めて別れの挨拶を、と」

王に傅く姿勢は揺るぎなく、されど堂々たる姿のサンラクへとトルヴァンテは偽りない感情を言葉に乗せて贈る。

「うむ……サンラクよ、此度の働き大儀であった。褒美を取らせる事が叶わぬ余を許して欲しい」

「平和とは良き王あってこそ成り立つもの、であればアル……間違えた……ごほん、エインヴルスの民として王を救うは当たり前のことに御座います」

「そうか……良き民に恵まれた事、余は誇りに思うぞ」

「ありがたき幸せ」

「しかし、だ。報いに然るべき褒美を取らせねばエインヴルスの血に連なる者として余は先達に顔向けができぬ、「夢想の宝に値は付けられぬ」と言うが……余が再び玉座に戻りし暁には必ずや褒美を取らせよう。サンラクよ、お前は何を望む？」

「か……ごほん、我ら仇討の刃が握られることのない良き国を……と言いたいところですが、それは陛下の望む答えではないのでしょう。であれば……」

剣を。跪く半裸の男は簡潔にそう口にした。

我ら仇討の刃、何者も手に入れる事叶わず。されど振るう刃に王威輝けば、その光は何よりも勝る誉れとなりましょう。

一切の迷いなく、まるで台本でも読んでいるかのように断言したサンラクを国王と王女は感嘆と敬意の入り混じった目で見つめる。

「うむ、確かにその願い聞き届けた……余は約束を違わぬと三柱の神へ誓おう」

王と、王女と、仇討人の間に僅かな沈黙が続く。そうして続いた沈黙をアーフィリアが口を開いて破ろうとした瞬間、それを遮るかのようにサンラクが立ち上がる。

「殿下、その先のお言葉は決して叶わぬ願いなのです」

「サンラク様……」

今にも涙すら浮かべんばかりのアーフィリアに、一瞬身体を強張らせたサンラク。だが握り拳に宿した未練を断ち切るかのように力を抜くと、内側に瑠璃色の夜空を宿す純白のマントを翻してトルヴァンテとアーフィリアへと背を向ける。

「我らはか細き願いにこそ応える者、ご無礼を承知で申し上げるならば権力争いに手を貸すことは出来ないのです」

「ならば……！　いえ……分かりました」

ならば仇討人を辞めて騎士に、と言いかけたアーフィリアは言葉を詰まらせる。

それはあまりにも横暴というもの。聖女イリステラの要請があったとはいえ、サンラクがトルヴァンテやアーフィリアを救い出したのはあの瞬間の二人が「か細き願い」であったからこそだ。

故にこそ、そのありようを歪めることは過去の自分達を救った彼自身を否定する事となる。

そんな葛藤の果てに、アーフィリアは瞑目して己の願いを口にすることなく心の内にしまいこむ。

「ですがどうかお忘れなきよう……この身は確かにエインヴルスに在ります。この国の……いいえ、新たなる地の人々も含めたあらゆる人の愛と平和のため、振るわれる刃は確かに在るのです」

「……はいっ！」

「では……どうかエインヴルスにより良き未来を」

その言葉を残して、鳥面の仇討人は部屋を退出する。部屋に残る二人はそれを追うような事はせず、ただ決意を新たにする。

「アーフィリアよ、余は息子を手にかけるやもしれぬ。それでも……」

「いいえ、いいえお父様。アーフィリアも共に参ります……お兄様の好き勝手にするわけにはいきません」

「そうか……」

父娘故の伝心か、それ以上の言葉はなく。ただ確固たる決意の宿った眼差しが静かな部屋の中で交わされるのであった……

「えー、サンラクってロールプレイ凄い上手いじゃん。ウチでもやってけるんじゃない？」

「げ、聞いてたのかよテチ公……」

「ハチ公みたいに言わないで欲しいんだけど」

「あーはいはい悪いなテチハム」

「縦書きに読めなんて言ってないし！」

◆

「あー疲れたぁ……」

本当はロールプレイした後に水晶巣崖に行くつもりだったがもうダメだ、いい加減寝ないとヤバい。

「昼まで寝ても許される、休日って最高だな……っと？」

メール？　誰からだ……あの外道どもは最近はＳＮＳで連絡してくるしわざわざまたメールに戻るとも考えづらい。ペンシルゴンのやつが天音　永遠としての公式垢で外道節誤爆しかけた時は楽しませてもらったが……誰だ？

「送り主は……えっマジか武田さん！？」

内容は……おいおいおいおいおいマジかマジでマジだ！

「やっべぇなこれ……多分来週、いや最速なら明後日には届く……」

シャンフロやってる場合じゃねーぞこれ！！

件名：おすそわけ
差出人：武田インゲン
宛先：サンラク
本文：サンラク氏！　サンラク氏！　当方、出張先のジンバブエでなんと「風雲プレジ伝」の日本語パケ版を二つ入手したで御座るよ！　中身も本物だったし一本おすそわけで送るぞい！
幻のクソゲー、存分に楽しもうぞ！

祭りが始まる。

格好つかない格好つけ（後書き）

なおサンラクの台詞全てに（出典：オトギニア・ユニオン）とつく模様

・オトギニア・ユニオン
御伽噺のキャラクターたちが住む国オトギニアに、御伽噺の悪者達による侵略の手が迫る。今こそ御伽噺の真の力を見せる時——！

という素材としてはなかなか良い筈だったが
「空中カボチャ戦艦と共に現れ、必殺技を使うとガラスの脚部ブースター……もといガラスの靴を履いて空を飛ぶ一人だけ文明レベルが違うシンデレラ」
「七体の小人、もとい小ビットと反射鏡シールドで牽制しつつ豪速球（リンゴ）（毒属性）で敵をノックアウトする剛肩の白雪姫」
「顔や言動はプレイボーイ的な感じでかっこいいが格好が致命的に変態な首から下がモザイク処理な八頭身裸の王様」
などなどアクが強過ぎるキャラクター。

どうやらキャラクター1人1人の設定を別々の人物が設計したのか、それら全てをひとまとめにしようとしたために一人一人の描写が薄い上にとっ散らかったシナリオ。

そして何よりシナリオが半オートで進む為後述のマルチ要素を除けばメインストーリー中、最大まで引き伸ばしても五分しか使えないキャラクター（親指姫）が出てくる、など全体的に残念さが際立った事でクソゲー認定されてしまった。

「素材は良いし調理法もそこまで間違ってはいないのだが全部まとめて煮込んだせいで一つ一つが薄味になった」タイプ。
なお最大のクソ要素はそれぞれのキャラクターの「メインシナリオ時の」性能をそのまま実装したせいで最初からバランス崩壊したマルチであり、サンラクをしてゴリライオンより酷いと言わしめた。
具体的には裏ボス撃破で解放される
「それぞれが超性能な五種類の戦闘スタイルを切り替えて戦い、三十秒間なら死んでも体力全回復でリザレクションする戦略兵器かぐや姫」
「強化値の上限がないのできびだんごを食べ続けるとお供の獣諸共無尽蔵に強化され続けるドーピング桃太郎」
「玉手箱の煙を相手に浴びせて老人化させたところを釣り竿で死ぬまで殴る老人虐待浦島太郎」
以外は全部ゴミ、とまで言われるバランス。海外の童話が日本昔ばなしに坊や良い子だ永眠（ねんね）しな、される光景は悪い意味で圧巻の一言。
サンラクは「車輪付きビニールプールに乗って直立不動で戦場を爆走しつつ、足元から取り出した金の斧銀の斧を投げ続ける湖の女神」がお気に入り。
なお「きびだんごを女神の湖（ビニールプール）に投げ込んで入手できる黄金きびだんご（強化倍率十倍）」の存在が発覚したことで桃太郎とタッグを組んで焼け野原のマルチ環境をさらに汚染するという事件が発生。
それを経て流石にナーフされた模様……銀のきびだんご（強化倍率五倍）になった、違うそうじゃない。

なおキャラクターデザインなどの基本的設定は割と上出来なので設定や登場キャラクター数を軽量化してアニメ化したら結構ヒット、現在は二次創作などが盛んに行われている。

合言葉は「ゲームは買わなくていい、設定資料集とアニメを見ろ」

エピローグ　龍王よ、黒竜よ。

それは万能に非ず、されど風を読む事に長けていた。
それは全知に非ず、されど敗北の記憶を忘れる事はない。
それは神に非ず、されど神の時代に生まれたそれは……未曾有の災禍がとある三人と一匹、一頭、その他多数によって討たれた事を感じ取っていた。

『はははははは！　「赤」！　「赤」！　「赤」！　邪悪なる「赤」よ！　かつての日、我が愛すべき人々を貪り醜悪な姿へと変えた赤色よ！　人は、人はついぞ、貴様を僅かな力で打倒するに至ったぞ！　ははは、はははははは！！』

外的な損傷はなく、ただ単に疲労を回復していただけではあるものの、それでも回復した体力を使い切らんばかりに喜びを全身で表現する黄金の龍王。

『分かる、理解るぞ……あの忌々しき犬と、盟友ヴァイスアッシュの気配……む？　なぜあの蛇や蛸の……まぁよい、いいやむしろ好ましい。くくくく……英傑、おおそうだとも、我を超えるはやはり英傑であってこそだ』

黒竜ノワルリンドを半殺しにまで追い詰め、赤竜ドゥーレッドハウルのちょっかいを一蹴する……言葉にすれば容易いが、それら全てを片手間でなす事はこの世界において開拓者には絶対に実現できない超常の領域である。

故にこそ七つの最強種、故にこそユニークモンスター。その名は「

天覇のジークヴルム」、黄金の龍王はその名に違わぬ天の君臨者として笑う、笑う。

『おお、やはりあの竜どもめを滅ぼさずして正解であった……まぁ、勝手に死んでいたのは予想外ではあったが、彼奴等を打倒せしめるのであれば、人はより高みへと至るであろう』

過去を悔い、現在に君臨し、未来に期待する天の覇王の望みはただ一つ。

――人よ、英傑よ、どうか我(試練)を乗り越えよ。我が幾星霜に打ち克ち、始源をも超えるべく。

だが、黄金は知らない。

深く、澱んだ敗北の中、予期せぬ邂逅が既になされていることを。

【旅狼】

鉛筆騎士王：はい、流星の如く消えていったサンラク君が最後に特大の爆弾を投下してくれやがったせいで我々はとっても面倒な事になってます

オイカッツォ：魚人族とか知らないんだよなぁ……

ルスト：知ってる

モルド：まぁ、アラバさんは僕らが挑戦した時にいたＮＰＣだからね……

京極：新大陸行けないから蚊帳の外なの少し悲しい

鉛筆騎士王：新大陸調査船が一隻そっちに戻るからそれに乗ればいいじゃん

鉛筆騎士王：一ヶ月後くらいになるだろうけど

京極：まぁ僕は幕末のイベントに備えないといけないから……

オイカッツォ：風の噂で聞いたけどデスゲームもどきのイベントやるんだって？　相変わらず修羅の国してんね幕末

京極：控えめに言ってここが僕の魂の場所だよね

鉛筆騎士王：幕末汚染が最終段階に入ってやがるよこの子……

鉛筆騎士王：ぶっちゃけ京極ちゃんも割と戦力として数えてるからちゃんとシャンフロも遊んで欲しいなって

サンラク：おはようございます

京極：まぁやっぱりシャンフロは飛び抜けてクオリティが高いし、ちょくちょく顔は出すつもりだよ

オイカッツォ：もう午後なんだよなぁ……

ルスト：サンラク、ネフホロが2に備えたアプデをしたので是非来るべき

京極：幕末のイベを欠席するとかないよね？　銭鳴さんから聞いたけどイベントの時だけ顔を出す二刀流使いってどうせ君だよね？

サンラク：いやぁ、割とそれどころじゃなくなったというか

サンラク：ちょっと知り合いから幻のクソゲーを譲ってもらったので

オイカッツォ：あっ（察し）

鉛筆騎士王：ヘイヘイヘイヘイ、サンラク君ここに来て情報抱え落ちはないでしょ

鉛筆騎士王：君と同じ所属ってだけで私ら大変なんだぞぉ？

サンラク：こころがぽかぽかするね！

鉛筆騎士王：私もそっちの立場だったら同じこと言うだろうから余計腹立つなぁ！

オイカッツォ：何のクソゲー？

サンラク：風雲プレジ伝

オイカッツォ：マジかよ

京極：何それ

オイカッツォ：パッケージ版しか存在しない上に販売本数三千本の時点で社長が資金持ち逃げして製作会社が破産した幻のクソゲー

サンラク：ちなみにパッケージに傷ありの中古でもプレミアがつくレベル

鉛筆騎士王：ていうか真面目な話、レイドモンスターの情報くらいは出してくれない？

サンラク：貪る大赤依

サンラク：参加人数上限４５人

サンラク：戦闘エリアは森人族の里、ただしそこ固定なのかは不明

サンラク：発生条件は分からない、分からないがある程度の人数がトリガー臭い

サンラク：俺たちの時は青竜エルドランザを素体にしていたが本体はバッタの群れ

サンラク：第一形態は単純な殴り合い、なおＮＰＣやモンスターを取り込んで駒にする能力持ち

オイカッツォ：ちょっ待っ

サンラク：恐らく分体を全て倒しきると第二形態に移行、地面を自身の身体を広げた赤いフィールドで覆ってくる

オイカッツォ：こいつＶＲシステム使って思考入力してるな！？普段は使わないくせに！

サンラク：フィールド内では本体の手足が複製されたり、サイズが巨大化したりする。エルドランザを素体としているからかは不明だがフィールド内を潜行して奇襲を仕掛ける攻撃パターンあり

サンラク：第二から第三形態への移行は確信はないが時間耐久の可能性は高い

サンラク：一定時間耐えると貪る大赤依は地下へと潜り「資源回帰」なる特殊行動を経て第三形態に移行する

サンラク：ミス、「始源解帰」

サンラク：第三形態ではフィールドを覆っていた赤領域を本体に取

り込んで自身を強化する、俺達が戦った時は頭の数を増やして来た

サンラク：さらに戦っているフィールドの広範囲に水晶を射出、破壊すると中からモンスターが出てくる上にモンスターは本体に取り込まれるので放置は悪手

サンラク：つまり放っておくと第一形態をさらに極悪化させたような状態になる

モルド：凄い勢いで文字が流れていく……

サンラク：第三形態時は本体がより戦闘特化した姿になる他、背中に赤い竜巻を背負った状態となる

サンラク：そしてそこから取り込んだ血結晶モンスターの攻撃を放ってくる

サンラク：第一形態や第二形態では取り込んだモンスターのパーツをちぐはぐに組み合わせたキメラを出してくるが、第三形態では取り込んだモンスターのパーツだけを作り出したりするので瞬間的な対応が困難

オイカッツォ：地味にこいつの特技なんだよ高速思考入力

京極：通知音がピコンピコンうるさ過ぎて何事かと

サンラク：さらに正体不明のモンスターを生み出すことが可能で、ボス性能のモンスターを一撃で消し炭にする超火力攻撃を搭載している

サンラク：弱点としてはおそらく素体にしたモンスターの肉体的特性をそのまま引き継いでいるので弱点も同様であること

サンラク：それを踏まえて少し話は変わるが例の色竜は体内に弱点としてはコアを持ってると推測される

秋津茜：あの

サンラク：話を戻す、撃破後報酬として血溜まりのようなオブジェクトに手を突っ込むとアイテムを獲得できる

サンラク：何が出るかは自分で確かめろ

秋津茜：あのー

サンラク：結論から言えばユニークモンスターとは異なり真っ当に大人数での攻略を前提としているので余程の縛りプレイをしない限りは三十人は欲しいところ

サンラク：これで満足か？　満足かぁぁぁぁ？

鉛筆騎士王：誠意が足りない

サンラク：マジかよ俺は誠意を見る側の筈なんだが

秋津茜：あの！　ご相談があるのですが！

サンラク：相談？　なんの？

秋津茜：えーと、あの実はですね

鉛筆騎士王：んー、聞く限りでは挑戦間隔が空くほど厄介になりそうなタイプかなー？

鉛筆騎士王：あ、ごめんね秋津茜ちゃん。どうぞどうぞ

秋津茜：はい！　その、実はシャンフロで仲良くなった方がいるんですけど……あ、ＮＰＣです！

秋津茜：それでその方の挑戦を手伝うことになったんです

オイカッツォ：ユニークシナリオ？

サンラク：秋津茜はユニークシナリオを見つけて凄いなぁ！

鉛筆騎士王：それに比べてどっかの誰かさんはぁ！？

オイカッツォ：ぶっとばすぞこのやろー

ルスト：脱線しながら走り続ける電車みたいな

秋津茜：でも私一人じゃどうすればいいかわからなくて、手伝ってもらえませんか！！

サンラク：あの風雲プレジ伝が……

鉛筆騎士王：っはぁー！　サンラク君がそんな薄情な奴だったなんてなぁーっ！

オイカッツォ：同じクランメンバーを助けずにいるなんてなー！

サンラク：ええいわぁーったよ！

サンラク：それはそれとして専念は出来ないけど協力くらいするってーの

秋津茜：わぁ、ありがとうございます！！

秋津茜：よかったぁ……流石に私一人じゃジークヴルムさんには勝てないですから！！

サンラク：は？

オイカッツォ：うん？

鉛筆騎士王：おや？

ルスト：む

モルド：えっ

京極：なんて？

サイガー０：その……今やっと追いついたのですが、一体なんの話を……というか、その、仲良くなったＮＰＣというのは……

秋津茜：はい！！

秋津茜：「穢れし黒、黄金へ挑む」というユニークシナリオで……

秋津茜：黒竜ノワルリンドさんのお手伝いをするんです！！

サンラク：ふえぇ……

鉛筆騎士王：ふえぇ……

オイカッツォ：ふえぇ……

エピローグ　龍王よ、黒竜よ。（後書き）

ようやっとこのクソ長い竜災編が半分書ききった……というわけで最近ずっと不定期のくせに今更何言ってんだ、という感じですが更新をしばらく休んで色々と次に備えたいと思います。
なにせリアルが普通に忙しいくせに頭の中では絶対、設定、設定……メタグロスになりたぁい！！

Q、前線拠点で繰り広げられたジークヴルム達の戦いはどういう結末だったの？

A．ジークヴルムさんが超絶舐めプしてノワルリンドを半殺し&見逃した。理由は「それなりに強いんだから人に倒させればいい経験になるんじゃね？」というリサイクル精神。
屈辱の逃走の果てに自身の住処に戻って「？人族」達に八つ当たりでもしようか、と考えていたところに「とりあえず死ぬまで走ってみよう！」と大陸横断マラソンをしていた秋津茜がエンカウント。
というか地味に樹海を突破してるリアルLUC強者秋津茜。
嬲り殺す前に会話でもしてやるか、と考えたのがノワルリンドの運の尽き、作中最強の光属性に充てられてなんやかんやでユニークシナリオ発生に至った。

ちなみにジークヴルムサイドは「自分が登場する最高の舞台が整うまで大人しくしてようかな」と考えていたところにドゥーレッドハウルが登場。
ノワルリンドがそれなりに体力を削った今なら俺が倒せる！　とイキっていたもののジークヴルムに余裕綽々でボコられたので逃走。

ちなみにジークヴルムに挑むため、マナを吸いまくった弊害でむさたんが復活したので大体こいつのせい。

ジークヴルムさんはその後、やかましいビリビリ獅子(にゃんこ)をワンパンで追い出し出番が来るまで寝ようとしてた所にむさたん撃破を感じ取りフィーバーした模様。

え？　本編で書け？　主人公が関与しないから裏設定と言うのです

駆け抜けろ、心に炎灯して（前書き）

更新再開だオラァ！（ドア蹴破りながら）
プロット未完成だけどノリで書いていけ（設定力で差をつけろ）（
そんなことより神代と現代の中間たる古代に焦点を当てたい）

「ド、ドラゴンだ……！！」

『む……俺の寝所に入り込むとは、虫けらめが。一息に踏み殺しても良いが、己の不遜を肉の一欠片にまで刻みつけて……』

『いや、待て……虫、貴様隠してはいるが顔に何を刻んでいる』

「え？　これですか？　これはジークヴルムさんと戦った時につけられたんです！」

『ジークヴルムだと……！　ふん、敵対した虫けらなんぞを後生大事に育てるとは、やはり奴なぞ大した存在ではあるまいて！！』

「普通にブレスで消し飛ばされたんですけどね！　そうだ、えーと……もしかして貴方のお名前はノワルリンド、さんではないですか？」

『ふン、虫けらとて我が偉大なる名を知るか……良いだろう、不可避の死を迎える前に俺を讃えることを許す』

「讃える……？　褒める……？　えーと、侵略イベント？　ヘイト？　ほかのプレイヤー、えーと、開拓者の人達も「あいつはヤベェ」って言ってましたよ！」

『くくく……当然だ、この俺こそが真なる王であるが故、な』

「ノワルリンドさん、王様だったたんですね！」

『む？　む……まぁ、そうだな。我が力に従属せし虫どもの頂点に立つ俺は王と言えば王であるな』

「ドラゴンの王様、竜王って奴ですね！」

『貴様虫けらにしては分を弁えているではないか、あの忌々しい黄金に声援なぞ送る奴隷どもと違って奴に牙を剥いているのも気に入った……所詮は潰すまでの余興に過ぎぬがな』

「そういえば、ノワルリンドさんはどうしてジークヴルムさんをそんなに敵視しているんですか？」

『決まっているだろう。俺こそが真なる王であるにも関わらず、奴は我こそが頂点とでも言いたげな顔をしているからだ。王は常に一人、そしてそれはこの俺以外にはあり得ないのだからな！』

「そうなんですか？　私は王様が何人いてもいいと思います！　大事なのは、何を目指すか、だと思います！」

『何を目指すか……だと？　虫けら風情が王を語るか』

「んー……これは私の持論？　主義？　えーと……まぁとにかくそう言うものなんですけど――」

『……ふん、虫けら風情がよくほざく』

「えへへ……でも、それを言ったら私の知ってる人達も凄いんですよ？」

「みんなみんな、私の憧れで……目標なんです」

『……ふん』

「だから、私はノワルリンドさんを応援します！」

『……なんだと？』

「だって――」

◆

爆撃機「秋津茜」がぶっ放した情報爆弾の爆風に直撃してからそう長い時間が経過したわけでもないがそれはそれ、これはこれという奴だ。

前線拠点を半壊させ、今一番ヘイトを集めていると言っても過言ではない黒竜ノワルリンドに助太刀……明らかに悪の手先とかそういう類のルートな気もしなくはないが、それとは別に俺にも俺のルートというものがある。

今の俺は金と経験に飢えている、そして後者を達成するために適任とも言える人物へと会いに、俺は仇討人……及び賞金狩人達が集うカフェ「彷徨う剣」へと赴いていた。

のだが、

「ほぁあああティーアスたん！　ティーアスたん！　写真撮ってもいいですかぁ！？」

「……………」

「あーいい！　凄くいい！　黄金比だ、今俺は真なる黄金比の何たるかを理解している！」

「何してんだ変態（サバイバアル）」

「あ゛ぁ！？　……ああ、なんだお前かサンラク」

あの孤島でダンプより巨大なモンスターに不敵な笑みを浮かべて素手で挑んだお前はどこに行ってしまったんだ、バイバアルフォロワーたるφ鯖の連中がネカマの上に幼女の周囲を気持ち悪い感じでムーブしてるお前を見たら泣くぞ。でも言っちゃ悪いがφ鯖は「蛮族」「ゴリラの巣」「原人の集落」と散々な呼び方だったたから泣き叫びながら殴り合いしそうだな。

ちなみにμ鯖（ウチ）は「スラッシャーホラー」とか呼ばれてた、気づいたら後ろからグッサリやられてるからなんだと。怖いねぇ……

「……知（し）り合（あ）い？」

「まぁ、昔馴染みというかなんというか」

「おいコラサンラク、てめーティーアスたんとどういう関係だ場合によっちゃ……」

すっ（幼女先生のメイド服写真）

すっ（無言で差し出される１０００万マーニ）

「教え子ポジだ」

「俺が媚を売り、俺が金で買う……流通が成り立ったな」

成り立ってねぇよ、お前が全て消費してるだけじゃねーか。

「ていうかここにいるってことは……」

「おう、教会で五体投地にお布施に炊き出しに免罪符に……やれる事全てやってカルマ値を綺麗にしてきた。グリッチの奴を引けたのはデカかったな」

よくよく考えれば、サイガー１００がリュカオーン打倒に心血を注ぐようにこいつは賞金狩人ティーアスに情熱を向けている。であれば仇討人案件に力を入れるのは当然の帰結だろう。

そして着せ替え隊の前で俺が条件を満たした以上、その再現もさほど難しいことではない、というわけだ。

「賞金狩人がＮＰＣ限定職業だから、完全に見落としてたぜ……まさか、さらに大きい括りで隠しジョブがあったなんてよ」

「それは確かに……んで、他のメンバーも仇討人に？」

「あー、条件自体は割れたがそれでも賞金狩人相手に引き分け以上だろ？」

成る程、単純にプレイヤースキルが必要になるから一気に増加するようなことがないのか。

「だが俺ぁメンバー達の期待を背負ってここに立っている。というわけでティーアスたん、まずはこのスモックを……」

ぽんぽん。

「あ゛ぁん?」

「新入り、俺がお前の教育係だ」

多分、犯人がこいつ(サバイバアル)なんだろうな。
とても、とてもいい笑顔を浮かべたゴリゴリマッチョをメイド服で着飾ったおっさんがサバイバアルの肩に手を乗せる。

「ま、待ってくれ。俺ぁティーアスたんに手取り足取り……」

「安心しろ、骨の髄まで仇討人としての心得を叩き込んでやる」

「いやぁぁぁぁぁあああ! て、ティーアスたぁぁぁぁん!!」

嗚呼サバイバアル、きっと奴はレベル上限こそ超えていないがそれなりのステータスを保有しているのだろう。例えばルティアが同じ事をしたのであれば逃げ出すことも出来たろう……
だが、賞金狩人トゥール氏はタンク特化だ。そのＳＴＲ、ＶＩＴの数値はきっとサバイバアルよりも数段上だろう。孤島時代のバトルスタイルから変わってないなら奴はフットワーク重視のグラップラ

ーだからな……流石に特化タンクに単純膂力では勝てんだろう。

シャンフロでは女アバターを選んだのもあるが、足掻きも虚しく情けない叫び（男声）をあげる女はゴリマッチョに首根っこを掴まれて連行されて行ったのだった……南無三。

「……サンラク、友達(ともだち)は選(えら)んだほうがいい」

「そっすね」

「あと女の子(おんなのこ)」

「はいはーい！」

フルスロットルだ、俺の女子力……！！

「マスター…………シングルベンティ、キャラメル、アーモンド、ヘーゼルナッツ、ホワイトモカ、ツーパーセント、チョコチップ、エクストラホイップ、エクストラキャラメルソース、エクストラチョコソース、エクストラトッピングダークモカチップクリームのフラペチーノを一つ」

品切れだそうだ。え、そもそもあるの？

「時に幼女先生(ティーアス)、一つお願いがあるのですが」

「……何？」

パチィン！　とそれらしく指パッチンをすると、それに合わせてくれたのか「彷徨う剣」のマスターが幼女先生の前にクリームと林檎で豪勢に飾り付けられた二段重ねのケーキを置く。

「……ほぅ」

「後学の為……一度、俺と手合わせ願えないですか……ティーアス先生」

レベル三桁に到達した事で特技剪定師(スキルガーデナー)エルクが提示した「秘法(ロウ)」……それは従来は一度合成すれば元には戻らぬ筈のスキルを自在に合体、及び解除する「同調連結(ハイコネクション)」システム。

そのために必要であるとされるものは二つ。
本来は莫大量の経験値を消費する代わりに、エルクが提示したのは膨大な額の金銭が一つ。

そしてもう一つが……

「先生の絶技……音に聞く「超越速(タキオン)」を是非とも体験したく」

プレイヤー、NPC、モンスターを問わず「目的とするスキル」のイメージを固めるために実物の観測が必要なのだ。

駆け抜けろ、心に炎灯して（後書き）

地雷ワードを紙一重で回避しつつ相手を褒めそやす秋津茜式パーフェクトコミュニケーション術、常人がやると地雷を踏み抜いて爆死する

最速の世界（前書き）

水ゾでたああああああああ

ＧＲＡＮＢＬＵＥ　ＦＡＮＴＡＳＹ

「……それはぁ、「同調連結（ハイコネクション）」っていうのよぉ？」

「こねこね？」

「エムル俺の頭を捏ねるな」

「あはひほほっへほほひぇへるひとはほひひってるへふわー！」

エムルの頬にイースト菌を注入したらさらに膨れて……それおたふく風邪じゃね？

「で、そのハイコネクションってのは何が凄いんだ？」

「そうねぇ……まず最初にぃ、同調連結では一度に連結できるスキルの数に上限がないのよぉ？」

マジですか。

「それにぃ、スキル同士の兼ね合いも考えなくていいのぉ。攻撃スキルと防御スキルだって連結できるわぁ」

マジですか！

「そしてぇ……連結したスキルは好きな時に解除することができるわぁ」

マジですか！？

「本来はぁ、秘法を付与するためには相応の経験を喰ってしまうのだけれどぉ……なぁんとぉ？　私は別の方法で「同調連結」を使うことができるのでぇーす」

マジですかぁぁぁぁあ！！

「今ならなんとぉ……スキル一つにつき一億マーニで連結しちゃいまぁす」

……え、マジ？　金銭で解決できるの？　最高かよ。

「つまり仮に三つ連結するなら三億？」

「そうなるわねぇ」

「おねーちゃん！　流石にちょっとボりすぎですわ！？」

「いやエムル、スキル一つ二億でも割と安いぞ」

「ですわ！？」

何せゲームだ、積み重ねればなんだって出来るが経験値と金のどちらが減って困るかと言えばやはり前者だ。

金は使うものだが経験値は貯めるものだからな、少なくとも五連結とか十連結の大台に入れば持っていかれる経験値は一や二では済むまい。

それにウェザエモンのレベルダウンフィールドを見るに、ステータスにも影響が出るとすれば直接的なパフォーマンスそのものにも影響が出る。

だが金銭であれば話は大きく変わってくる。まぁ時価だったり経済だったりと色々しがらみはあるが、レベル１のプレイヤーが売る宝石もレベル１００が売る宝石も価値は同じだ。

そしてレベル１と１００、どちらがより効率的に金を稼げるかなど考えるまでもない。

リアルとは違い、ゲームはアバターのデータさえ残っていれば所持金０でもなんとかなるものだ。

「億となると金メインで稼ぐ必要がある、やっぱり水晶巣崖が最高効率か……？　いや、しかし……」

「ああそうだぁ、「同調連結」にはもう一つ条件があるのぉ」

「というと？」

「本来スキルの剪定はぁ、その者のマナの流れを変える技なのぉ。それまでの限界を超えた強さに至った子は容量が増えるんだけどぉ、

その分当人がより強く技をイメージしないと「同調連結」はうまくいかないのよぉ……」

五秒かけて会話を脳で処理し、さらに五秒かけてその内容を理解せんと努め、そしてもう五秒でおおよその結論をつける。
十五秒ほど考え込んだ俺はエルクの台詞の七割ほどを思考からシャットアウトした上で残り三割を噛み砕いて得た結論を口にした。

「つまり欲しいスキルのお手本になるようなものを見てこい、と」

「せいかぁーい！　はいこれご褒美ぃ」

・100マーニ

銭ゲバめ…………でも貰う。

「……ふぅん」

「弟子は師を超えるものですが、それ以前にその背中を追うものです」

故にこそ、手本とするならば他の賞金狩人達にあのルティアの「超速（マッハ）」の上位互換、とまで言わしめる「超越速（タキオン）」とやらこそ相応しい。

エルクの話は抽象的というか、ゲームのシステム説明文としては曖昧な部分が多かったのでなんとも言えないがただ単純に手本を見ればいい、という訳ではなさそうだ。

「賞金狩人最速の背中、今の自分でどれだけ追いかけられるか……それを知りたいと、そう考えてしまうのです」

「……いいよ」

やったぜ、切り札的なものだろうし見せてもらえるか不安なところもあったのだが、賄賂作戦が上手くいったか。

「マスター、ケーキを一切れ（ひときれ）」

「畏まりました」

……？　何故ケーキを？　いや、あくまでも見せて欲しいだけなので剣を抜かなくてもいいんだが……にしたって何故ケーキ？

「サンラク、ちょっとそこに立（た）って」

「え？　はい」

よく分からないがとりあえず立つ。そこでようやく自分が半裸のまま
まだったことに気づいたので服を着る、まぁ三分くらいで済むだろう。

…………

…………

「あだぁっ！！？」

「うおっなんだ？」

キャリアウーマンの服を着たウーマンじゃないマン……グリッチが突然仰け反って椅子ごとひっくり返った。
さっきからチラチラこっちを見てたのは気づいていたが、男としての情けで見逃していたのだが……ちなみにマスターは顔色ひとつ変えずに接客していた、なんか単純な戦闘力とは別枠で強キャラだな？

「あれ？　頬にクリームがついてた」

妙だな、口から遠いこんなところにクリームがつくなんて……うん、甘い。

「…………仕方(しかた)ない」

「へ？」

「サンラク、スキルを使(つか)って「全力(ぜんりょく)」で私(わたし)を捕(つか)まえて」

「え？　ここで？」

「そう、遠慮はいらない。酔（よ）ったトゥールが暴（あば）れてもここは壊（こわ）れない」

それに、と先生は口の端を吊り上げながら宣言する。

「どうせ後手（ごて）でも私（わたし）の方（ほう）が速（はや）い」

上等だ、そういうことなら……よし、やってやるか。とはいえ切った張ったがトリガーのスキルもあるので今できる組み合わせなら……

重律踏覇（エクシードグラビティ）、鞍馬天秘伝、無重律の恩寵（スペースチャージ）、ヘルメスブート、宿命の狼兆（ウルフェイト・サイン）、ブラッドバーンバースト、そして封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）……そして最後に真界観測眼（クォンタムゲイズ）を使って全速力だ。今なら空だって走れるってな。

「いざ……！」

正面からは突っ込まない、若干軌道をズラして右斜めから先生の頭に手を置く！

足に力を込め、真界観測眼（クォンタムゲイズ）の効果が宿った目でルートを描き、前へと踏み出……

「超越速（タキオン）」

（………はい？）

身体が動かない。

一番最初に考えたのはＶＲシステムがイかれたことによるフリーズだ。とはいえこの場合、二重三重に搭載された安全機構でログアウトされるので問題はない。

だが違う、ＶＲシステム側の問題である場合は即座に通知ウィンドウが出るはずだ。つまりこれはシャンフロというゲームの想定内ということだ。

そして一秒ほどの混乱を経て俺は気づく。これは身体が動かないのではなく、スローになっているかのような……そう、まるで思考だけが加速しているのに身体は置いてけぼりにされたような。

「…………な」

そこで気づく。俺の認識だけが等速で、俺の体も含めたそれ以外の全てがスローの……止まってしまったかのような世界で。

もっしゃもっしゃ

なんて事ないかのように等速でケーキをパクつくティーアスがいる

ことに。

「視（み）えてはいるんだ……じゃあ、」

瞬間移動……いや違う、この状況下で更に加速したティーアスが俺の目の前に立つ。くっ、目は動くが遅い。

「おすそわけ」

ひょいと伸ばされた細い手とそれに付随する指が持つフォークの先端、ケーキにトッピングされたリンゴのひとかけらが若干開いた俺の口に放り込まれ……

そして時は動き出す。

「えっ、あっ……ふぎゃん！？」

「え、なんで俺……ぎゃああ！？」

目の前にいないティーアス、気が抜けたことで手放される肉体の制御、つまづく足、転ぶ身体……あれこれデジャヴ？

自慢ではないが友達との球技大会でバスケ、バレー、野球、サッカー、ゴルフ、アメフトと大概の球技における球の経験を積んだと自負する俺ではあるが、ボウリングのピンではなく球の経験は初体験だ。

二回転ほど地面を転がり、尻からグリッチの顔面に突っ込んだ俺が椅子や机を吹っ飛ばしながら派手な音を立てる。

「感想は？」

「一生ついていきます幼女先生」

そりゃ最強の賞金狩人ですわ……フル発動ではないとはいえ、三桁スキル複数使用して辛うじてサンドバッグを自覚できるだけ、とか勝てる気がしねぇ。

ふんす、と誇らしげに切り分けたケーキの最後の一欠片を口に放り込む幼女先生の姿を見つつ、場合により仇討人となる為にこれと戦わなくてはならない後続の仇討人志望達に同情の念を抱くのであった。

最速の世界（後書き）

同調連結はヒュララララ！やリノ……！を合体させる感じ

Q．これ勝てるやついるの？

A．ティーアスがエンストするまで耐えるだけのタフネスがあればワンチャン、なおエンブレム起動でノーチャン。ゾンビ作戦なら勝てるけどまぁそれは言わないお約束

水晶に響く獣の咆哮（前書き）

コンジャクションしたので更新です

どうやら「超越速（タキオン）」の行使は反動として膨大なリキャストタイムと発動秒数＝空腹値減少、という結構深刻なデメリットが生じるらしい。

後者はどうでも良いように見えてＮＰＣ的には結構深刻なので、ケーキの他にグラタンやら何やらを幼女先生に貢いでいると。

「畜生……何が悲しくて筋肉ダルマの指導を受けながら筋肉ダルマの群れと戦わなくちゃならねーんだ……」

「ようロリコン、目が気持ち悪いから無理だってさ」

「マジかよ今日からフルフェイスヘルマーになります！」

詳しく聞いてみると、本当にフルフェイス型の頭装備しか装備しない「フルフェイスヘルマー」というクランがあるらしい。クッソどうでもいいわ、ていうか俺に勧めるな。

先程までのげんなりした様子は何処へやら、早速スクショの体勢に入ったサバイバアルを先生共々半目で眺めつつ俺は冷静に弾け飛んだ服を着替える。

「ああそうだサバイバアル、幼女先生（ティーアス）は今とても空腹でいらっしゃる」

「マスター、この店で一番高額な料理を彼女に。代金は俺が持つ」

「畏まりました」
ブレない男だ、ガワは女だけど。ていうか男勝りな印象を抱かせる女アバターだが、声が致命的に野太いのがなんとも言えないミスマッチだ。
「まぁあのエセ魔法少女程じゃねーか……」
「しかし、軽く触っただけでも結構な性能してやがるな「仇討人」ジョブ」
「ハッ……二つ名持ちのモンスターと戦えるってのは、ф鯖の野人様的にはお気に召したかい？」
「最高だな……まぁ、よりにもよってトゥール付き添いで筋肉ダルマのトロールの群れと戦わされるのは結構萎えたけどよ」
俺の時はフレッシュミートなゴーレム「アイガイオ」がターゲットであったが、サバイバアルはどうやら一体一体の対処は容易いが群れな上に再生能力に秀でたトロール軍団「アタナトイ」と戦わされたらしい。
「ま、一発殴るだけで怯むなら魔豚（マトン）よりもヌルいってな」
「ふーん……そういやお前、シャンフロ（こっち）でも素手縛りしてんのか？」
「いや？　素手っつーと修行僧のアレがあるが、面倒くせぇから戦士系列でやってるな。メインは拳だが一応斧系も使ってるぜ」
武器を使っても蛮族臭さが抜けないのかよ。もう少し現代人らしい

慎みを持てよ慎みを、そう例えば俺みたいにな。

「あ、そうだサンラクおめー、新大陸でも早速やらかしたらしいじゃねーか」

「ゔ……事故だよ事故、偶然の産物だ」

「いやいや、あんな人前で堂々と決め台詞たぁ恐れ入ったぜ。宿業がなんだかんだと、あれお前が自分で考えたのか？　くく、鳥肌もんだな？」

「……それ、仇討の宣誓(リヴェンズ・コール)で唱(とな)える言葉(ことば)」

「――あぁ、まさに感動に打ち震えて鳥肌が止まらなかったぜ。素晴らしい、まさしく仇討人の心意気ってやつを見せてもらったぜ」

お前の手首、地面に付けたら穴掘れそうだな。

「お待たせいたしました、こちら新大陸より仕入れましたタイダルシーサーペントの中落ちで御座います」

そんな風に話していると、ドズンとカウンターテーブルを重厚な音で震撼させながら馬鹿でかい骨と肉の塊が置かれる。

「……分類的には海鮮(シーフード)なのこれ？」

「……美味(おい)しそう」

「あー……これおいくら？」

お値段を聞いたサバイバアルがにっこり笑顔で分割払いを希望したのと、赤身のくせに鰻みたいな食感だったのが印象に残った。

後で知ったが、幼女先生（ティーアス）は空腹値を１００％以上溜め込むことができる特技（スキル）があるらしい。道理で十人前くらい軽く平らげるわけだ……いや待て、それってつまり空腹値１００％以上になるから「超越速（タキオン）」の持続秒数も……

深く考えないようにした。

さて、経験を得たならば次は金だ。悲しいことにルルイアスの秘宝で得た莫大な資産はなんやかんやで枯渇しかけている。
まぁそれでも一億近い残金はあるわけだが……最低でも十億くらいは確保しておきたいわけで。
「いいねいいね、金のインフレはゲームの醍醐味だ」
というわけでやってきました水晶巣崖。相変わらずの過疎っぷりだ、と言っても「人気がない」ではなく「生還率０％」が過疎の原因なのがなんとも言えない乾いた笑いを誘う。

まぁ足の踏み場なく敷き詰められた地雷原みたいなもんだからな、爆発する前に駆け抜けるくらいしか攻略法がないのだから手に負えない。

とはいえ聞いた話では空を飛ぶ魔法なんかもあるらしいし、テイマー関連の研究が進めば安全な採掘も夢ではないのだろうか。
まぁ実のところ水晶群蠍の素材そのものは入手難易度はそこまで高くはない。生贄をおしくらまんじゅうして落ちたアイテムを次のウエーブが来る前に回収できるだけの足があれば安定した採取が可能だ……尤も、何度も検証した結果、尻尾だけは直接叩き斬らないと落ちないし最終的な結末は圧殺固定なので単純なステータス以上の覚悟が要求される。

とはいえ、今回はそんな逃げの一手は選ばない。今回の検証ではそれなりにタフネスな群れが望ましいからな。

「さて……」

実は水晶巣崖に踏み込むのは今日で二回目だ。前回の使用も含めて再使用するために一回死にかけないといけなかったからな……まぁ普通に採掘した後にラクロスを楽しんだよ。

「親しき仲にもなんとやら、さっきのお礼参りと行こうか……！」

聖杯、黒結晶、アイテム二つで魔法少女の完成だ。そしてさらにもう一つ、今回の検証に用いるアイテム……暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）を携えて水晶広がる道なき道を進む。

「おっ、来たな？」

さっき踏み入って水晶群蠍の一匹に後ずさりされた時は友情の崩壊かとショックを受けたものだが、どうやらこいつら群れると格上相手でも突っ込んでくるようなのでやっぱり俺たちはマブダチだ。
水晶群蠍という単体でも準リュカオーン級とでも言うべきモンスターに、何故格上相手に結束する機能が積んであるのかは少々疑問だが……まだまだ稼がせてもらうぜ。

「えーと、被って発動キーの単語、と……アクティブだとしても思考発動にしてくれねーかなぁ」

対人を見据えると動きや言葉でバレるのは中々面倒臭いと感じてしまう今日この頃。フルダイブだと自前で身体を動かすわけだから噛む危険性もゼロじゃないし、やっぱ思考入力がナンバーワン！
まぁ誤作動ならぬ誤思考でフレンドリーファイアしてギスるのはご愛嬌だ。そして誤思考を言い訳に背中から刺すのもご愛嬌……でも流石に「誤思考天誅（ミスだから許して）」は許されないと思う。
またけったいなイベントをやらかす幕末に想いを馳せていれば、出るわ出るわの蠍の群れ……ていうか見間違えじゃなければ鶴翼の陣みたいな動きしてない？　え？　軍略インストール？

「上等」

言葉が通じなくたって分かり合える、だって俺達にはバベルの塔崩落以前から受け継がれる肉体言語という素晴らしい言語があるんだからなぁ！！

「血解（ブラッドハート）！！」

かぽん、と被った真紅の頭蓋。その眼窩から突撃する蠍達の姿を見据え、そして「赤」の力を喚起するワードを高らかに唱える。

「んぐっ！？」

まるで頭が何かに締め付けられるような僅かな圧迫感。視界に赤色が混じり、水よりも粘ついたドロドロの何かがこめかみを伝い、下顎から滴り、全身へと這いずり回って……

「エロにせよグロにせよこれＲ－１８なのではぁぁぁａａａａａａａ！？」

わぁすごい、なんか声に妙なエフェクトが。

水晶の波濤はもはや眼前。インベントリアがナーフされた以上、最早エスケープの望みは絶たれた……だが

「虐殺（スローター）だ」

今の俺は……外付けの凶暴性で一味違うんだぜ？

・超越速(タキオン)
ティーアスをティーアスたらしめるシャンフロ内最強の加速スキル。サーバー干渉することでティーアスが存在するエリア内の全Ｍｏｂを減速させた上でティーアス自身を加速する。
その加速倍率は五倍、さらに減速倍率五倍なので実質二十五倍速の死神のフルスイングである。制作側の殺意が透けて見えるね！

通常の思考速度ではティーアスの挙動のみならず自身が減速されていることにすら気付くことはできないが、特定の思考加速手段を用いることで自覚すること自体は可能。
とはいえ自覚したところで身体はついていかないのでサンドバッグ以外の末路はないだろう。

代償、と言うよりも申し訳程度の制限として「ティーアス自身の空腹度」十割につき最大一秒間の使用時間という制限があり、さらに一度発動した場合次の発動まで「使用秒数の二乗」分のリキャストタイムが発生する。

なおそれとは別で搭載されているティーアス専用スキル「食い溜め」によってティーアスは本来の１００％以上に空腹値を蓄積できる上に、最近ティーアスに貢ぎまくる奴らがいるためさらに手がつけられなくなった模様。

非力なれど剛力なるは

あの人、リアル社会的地位がヤバそうな気配がするので例のブツは最速便で届きそうな気がする。のでシャンフロでやれることは先にやっておきたい。

結局、保護者（水晶老群蠍）が出て来たことで死んだ俺はエイドルトの路地裏、定位置となったためか小綺麗に掃除された路地裏の一角で人参を齧っていたエムルに合流してフィフティシアへと飛んでいた。

そしてそのまま向かうのは「黄金の天秤」商会だ。俺はＶＩＰ待遇なので正面玄関から入る必要はない、裏口に立っている明らかに強キャラ感漂う警備の男に軽く手を振るだけで中へと入ることができる。顔パスならぬ刻傷パスってやつだな……頭装備をまず最初に確認されると言う事実からは目をそらす。

「……本日は如何なご用件でしょうか？」

「商談だ、トップを出せとは言わないが商会の資金にある程度干渉できる地位の者を頼むよ」

さーて、さっきまでの無双ゲーとは打って変わって、ここからは頭を使ったマネーゲームの時間だ。

「お久しぶりで御座いますサンラク様。新大陸に向かった、と聞いていましたが……」

「まぁなんだ、ちょっとした伝手があるのさ」

別に世間話をしに来たわけではない。それは俺も、俺への応対に現れた「黄金の天秤」商会の若旦那も分かっていることだ。

「……それでは、商談を致しましょうか。本日は何やらお売りに来られたとのことですが」

「あぁ、まだるっこしい前置きは無しにしよう……今日俺が提示するのはこれさ」

質の良い机にそれなりの重量と硬度を伺わせる音を立てて妙な形の水晶体が俺の手によって置かれる。

「これは……いや、この形状はまさか……」

「水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の外殻だ、風の噂では代々の第一騎士団の団長のみが扱える「盾」にはこいつと同じものが使われている、という話だったな？」

「……ええ、あの盾の製作には何代か前の当商会の会長も関わっておりますので。今回はこちらをお売りに？」

僅かな落胆と、余裕を隠す商売人の笑み……多分甲殻の一枚二枚なら流通してるんだろうな。だが見てろこの野郎、その笑み完膚なきまでに破壊してやるよ。

「いや？　それは試供品(サンプル)ってやつさ、なんなら一枚くらいは無料で君に贈ってもいいが？」

「……複数あるので？」

身を乗り出したな、まぁレアモンスターの素材を全放出するプレイヤーは稀だろう。普通は自分の手元に置く、となれば最大手の「黄金の天秤」商会が末端から買い集めたとしても数は多くあるまい。

そしてそこに商機がある。

「甲殻、脚甲、殻片、尻尾……そして稀に体内で生成される輝宝晶……」

「こ、これはまた、凄まじい……」

「総額おいくらくらいだ？」

「そう、ですね……少々お待ちを」

ここでマジモンの中世なら羊皮紙に数字でも書き込むのかもしれないが、そこは剣とファンタジーと時々超文明なシャンフロ。商会の若旦那ことナンバーツーの男はなにやら水晶群蠍のアイテムに魔法を使い始めるとブツブツと呟いて考え込む。

「……いやはや、お見それいたしました。この輝宝晶、でしたかな？　これ一つを王家へ献上するだけでも十年は王族御用達の座を堅持できるでしょう……そうですね、この欠片だけでも五万マーニは硬いでしょうな。これら全てとなれば総額は五千万マーニで勉強させて頂きたく……」

「そうか、じゃあ最低金額は十億マーニだな」

「はい？」

明らかな数値の差異、直前までまともに会話が成立していたからこそ若旦那の顔が呆ける。

「ご、ご冗談を……」

「そうだな、時にアントニオ君……商売を成立させる上で大事なものとはなんだと思う？」

「はい？」

強キャラムーヴを維持しろ、暴力とはなにもＳＴＲに拠るものだけではない。そうさ、大事なのはどんなパラメータにせよ数値ってやつさ。

「まず一つに互いの利益だ、良き取引とは双方共に満足に足る利益を得ることで定義される」

足を組み直し、全てを見下ろさんばかりに踏ん反り返る。さぁここからが正念場だ。

「そして次に信頼だ。アントニオ君……私は「黄金の天秤」商会を強く信頼している。ノーマン君との繋がりを得るに当たり橋渡し役となってくれた恩を忘れてはいないからね……だからこそ、この商機を君達にだけ提示しているのだよ」

左手で指パッチンしつつ、背中に回した右手を慌ただしく動かしてインベントリアからアイテムを取り出す。
それは部屋の灯りを受けて神々しいまでの輝きを乱反射し、若旦那ことアントニオ君は思わず目を背けてしまうほどだ。
それは全てが水晶群蠍の素材、素材、素材……これまでに溜め込んできた水晶群蠍アイテムのストックを九割解放したデラックス素材パックってやつだ。
「今しがた君に提示した水晶群蠍(クリスタル・スコーピオン)の素材一式……それが十セット。さらに甲殻172、脚甲121、殻片352、尻尾8……」
「は、ははは……」
これまで貯めに貯めてきた素材の大放出だ、徳用素材パックの沼に沈め……！
「さて、商売の時間だアントニオ君。互いに利益ある取引としようじゃないか」
クリティカルヒットの手応えを確信した。

「良かったんですわ？　もっともっとお値段を上げれそうな感じでしたわ」

「いいさ、これで俺というパトロンの立場は絶対的なものとなり、さらには必要な金も時間はかかるが確実に手に入る」

まぁ流石にゲームなのであり得ないとは思いたいが、もしも「黄金の天秤」商会が素材をちょろまかそうなんて考えたなら、真っ赤な獣が天誅しにいくだろうがなァ……

「エムル、世の中にはただ知り合いというだけで力を発揮する関係というものがある。それは優れた社会を形成するほどより強固な力となる……」

そして人はそれを権力と呼ぶ。

条件付きではあるが本来の価格から四割引きしてやったんだ、例え……四十億マーニという莫大な金額であっても奴等は降って湧いた激レアアイテムの山から手を引くことができない。

まるで瓢箪に手を突っ込んだ猿のようではないか、中に詰まった米を掴む限りその手が抜けることはない。であれば奴等はもう俺という特大パトロンの財布と化したのだ……くくく、ふははははは！！

「まぁこれでエルクへの貢ぎ物は揃ったと言っていいわけだ」

「おねーちゃんはそこまでお金を集めてなにをするつもりですわ……」

「マーニを素材に家でも建てるんじゃね？」

「すぐ崩れそうですわ」

俺もそう思う。
とはいえ水晶群蠍アイテムを売るにあたり、俺は二つほど条件をつけてきた。その二つを考えれば十何億程度の損失は安いと言ってもいいだろう。

一つは「黄金の天秤」商会の内部でのみ対価の天秤を好きに使うことができる権利。流石に持ち出す権利は要求するにしてもハードルが高い、だが彼等の監視の目が行き届いている場所であれば……と妥協案を勝ち取った形だ。

そしてもう一つが「現王権、つまり僭王アレックス及びそれに味方する陣営にこれらの素材を売りつけないこと」だ。
第一騎士団が誇る超絶イケメン団長の盾にも使われているという水晶群蠍の素材、万が一にも第一王子陣営が利用してはトルヴァンテの勝ち目が低くなってしまう。

「新大陸側との取引も考えればトルヴァンテ政権の方が平和的だ。アレックス政権の場合、最悪泥沼のゲリラ対処に資金を削られかねないからな」

「さ、策士！　サンラクサンものっそい策士ですわ……っ!?」

「バカ言え、これがペンシルゴンならもっと酷いことになるぞ」

まず大前提として大量の素材で「黄金の天秤」商会を買収、商業的ツテを入手して王族と接触するだろうな。

アレックス派に媚を売りつつ裏でトルヴァンテ派を強化し、アレックス派を一掃……大きな借りができたトルヴァンテ派はペンシルゴンを無視することが出来ず、上手く立ち回ればファステイアからフィフティシアの内いずれかの街が奴の所有物になる可能性すらある。

つまり貴族デビューだ。

あとは語るまでもない、プレイヤーによる王国乗っ取りをゲーム外の掲示板なりで扇動し、魔王ペンシルゴンを名乗りエインヴルス王国にクーデター。最終的に魔王として城ごと自爆して……うん、大体世紀末円卓鉛筆王朝一代記の流れだな。

それに比べれば筆頭株主的存在になるくらいヌルいヌルい。だがこのヌルめの信用取引が俺にとっては重要なんだ、少なくともこちらが裏切らない限り向こうもこちらの信頼を損なわないように立ち回ってくれるからな。

「ああ、やっぱり俺たちはマブダチだぁ……」

これからも頼むぜ、蠍達よ――――！

非力なれど剛力なるは（後書き）

本当なら一度に大量の金を動かすと路地裏で「ようニイちゃん金持ってるんだろ？」的なカツアゲイベントが起きるのだが、鳥頭は常時警戒色で威嚇してるようなものなので回避されている。

チンピラだって獲物くらい選ぶ

積み上げる幸福

【旅狼】

サンラク：どうも、黄金の天秤商会筆頭株主にしてノーアポで訪れてもＶＩＰ待遇でもてなされるサンラクです

オイカッツォ：えぇ……

鉛筆騎士王：お友達割引とか出来るかな？

サンラク：誠意が足りない

鉛筆騎士王：おっと過去の恨みかなー？　器がちっちゃいぞサンラク君

サンラク：対価の天秤使い放題なんだよね、俺

鉛筆騎士王：サンラク様ァ！　焼きそばパン買って来ますよ！！

オイカッツォ：チート級アイテムのためなら全力で媚びる女、ペンシルゴン

鉛筆騎士王：いやだってあれちょっと悪用するだけで王国の経済傾けることだってできるんだぜーー？

サンラク：使用法があまりに邪悪すぎる、やはり天誅せねば

京極：そうだね、イベント楽しみだね

モルド：ふとチャットが更新されてたから見に来たら何この会話……

サンラク：シャンフロの話じゃよ

オイカッツォ：三人寄れば！

鉛筆騎士王：文殊の知恵！！

京極：まぜるな危険の間違いじゃないかな？

モルド：るひぉ

サイガー０：対価の天秤？

サンラク：なんでもいいから生贄に捧げると一時的なステータスポイントや金に換えてくれるナイスなアイテム

鉛筆騎士王：ＰＫロンダリングも簡単にできちゃう！

京極：え、いいなぁそれ

ルスト：モルドの横隔膜が踊り狂ってる、責任を取ってほしい

サンラク：持病のしゃっくりが悪化しましたとでも言っておけばいいんじゃゃね

サイガー０：そういえば、具体的に私達は何か行動したほうがいいのでしょうか

鉛筆騎士王：んー？

鉛筆騎士王：あぁ、ノワルリンドの件？　それなら今はまだ特に行動を起こさなくてもいいよ

鉛筆騎士王：どちらにせよ現状、ノワルリンドとジークヴルムの決戦が今すぐ起きるってわけでもなさそうだしねぇ

鉛筆騎士王：少なくとも白竜、赤竜、緑竜の正確な座標が特定されない限りはまだ余裕を持って準備できるね

鉛筆騎士王：それに今はどっかのお馬鹿様が討伐したレイドモンスターやライブラリが暴露したクターニッドの件、ちょくちょく噂に出てくる新たな種族……ノワルリンド絶対許さない派が主導で動いたとしても一ヶ月は猶予があるんじゃない？

京極：一ヶ月か……それなら祭りの当日にはそっちに合流できるかな？

オイカッツォ：最初の船が一度そっちに戻るんでしょ？　補給含めて次に新大陸に着くのが三週間くらい後だって聞いたけど

サンラク：余裕だな

京極：んー……あ、そうだ

京極：もしもこの中の誰かが獣人族（ビーストマン）の集落に辿り着いたらさ、狐の獣人族のところに行ってほしいかな

サンラク：お？

鉛筆騎士王：これは情報秘匿の予感

オイカッツォ：誅する？　天に変わって誅しちゃう？

京極：まぁ僕だって隠しておきたい秘密の一つや二つはあるさ

京極：というかサンラク、君だけにはとやかく言われたくない

鉛筆騎士王：ほら情報を吐くんだよ！

オイカッツォ：我々は非人道的処置も辞さないぞー！

サンラク：くっ、速攻でこっちに銃口向けやがって

ルスト：【悲報】モルド、笑い過ぎで開いてない自動ドアに顔面激突

鉛筆騎士王：本人が大概面白いってズルくない？

オイカッツォ：さすが歩く笑い袋は格が違った

サンラク：表情筋ムッキムキになってそう

モルド：色々酷くない！？

…………………

…………

……

…

「なんということだ……」

厳重に封がされた強化プラスチック製デリバリーボックス。
明らかに日本語ではない文字が並ぶ中、俺の苗字とＴａｋｅｄａの名前が、例のブツが遂に届いてしまった事を示している。

そして、視線を横に向ければそこにはつい先先ほどロックロールで見かけ、なんとなく購入したとあるゲームのパッケージ版。

さらに横へと視線を向ければ、そこにはまたしても日本語とは違う梱包で包まれた箱。
中を確かめたところ所謂「一度使用したら二度と使えない」タイプのメモリーキューブが入っていた。

「レクイエム・フォー・アーミーズ、ギャラクシア・ヒーローズ：カオス、そして風雲プレジ伝……」

なんてこった、ゲームとゲームとゲーム……だだ被りじゃねーか。

とりあえず状況を整理だ、まずレクイエム・フォー・アーミーズは俺自身が購入したものだ。ＧＧＣで匿名出場する際にコスプレしたキャラクター、顔のない傭兵ジャックが出てくるゲームがこれだ。コスプレまでしたんだからせめてプレイしてみようと買ったわけだが……まぁいい。

次に風雲プレジ伝。案の定ジンバブエから最速便だった、さすがは武田さん。俺も将来はかくありたいものだ……マジリスペクト。

そもそも武田さんこと武田インゲン氏は外道二人とはちょっと違うタイプのクソゲーフレンドだ。あの二人とは一緒にプレイする間柄だが、武田さんとはどちらかといえば互いに見つけたクソゲーをレビューし合うような関係だ。

まぁ向こうのクソゲー歴はフルダイブＶＲ以前、モニターにゲームを映していたようなレトロな時代からの古強者だ。一度写真を送ってもらったことがあるが、別荘まるまる一つをクソゲーの為に建てるあたりなんというかもう格が違う。

女児用からＲ－１８まで、ありとあらゆるクソゲーを取り揃える武田氏は俺の憧れ、目指すべき到達点だ。

俺が学業を疎かにしないのもリアル社会的強者っぽい武田氏が俺にとっての完成形であるからに他ならない。

そんな武田氏と去年くらいに盛り上がった幻のクソゲー風雲プレジ伝を後回しにすることなどあり得ない。

「とりあえずメールして……てかジンバブエの時差ってどれくらい

なんだ」

お礼のメールに対する返信で知ったが、今は東欧にいるらしい。フットワークが軽すぎる……あと添付された写真に映ってた建物から何の気なしに撮影場所を逆算したら世界的に有名な企業の本社ビルだった。しかも高さ的に最上階付近。

「うん、深く考えないようにしよう！！」

やっぱ武田氏はすげーや！！　俺も将来はクソゲー御殿を建てられるような人間になりたいぜ。

そして最後にこれだよこれ。

なんか途中に某プロゲーミングチームが挟まってるけど、送り主ギャラクシアレーベルってGH：Cの開発元じゃねーか。

なんだろう……圧が凄い。やるよね？　みたいな、いや単純に俺の被害妄想の割合が多いんだろうが、じわじわと外堀が埋められていくような焦りを感じる。

日本人のサガと言うべきか、ここまでもらって知らんぷりしていいのかという不安が……よし、見なかったことにしよう！　未来の俺がなんとかしてくれる、自分を信じろあいきゃんどぅーいっと。

とりあえずカッツォに自身のスレッドの最新版のURL送りつけて……っと。

「積みゲーをそのままにするのは俺のプライドに関わる」

やってやろうじゃねーか、明日普通に学校だけどやるしかないだろ
完徹！！

よしチャートを組み立てるぞ、とりあえずシャンフロとGH：Cは
後回しだ。
シャンフロもしばらく暇になるしここらでたまには別ゲーと洒落込
んでもいいだろう。

となればキャンペーンシナリオだけで済ませられるレクイエム・フ
ォー・アーミーズを今日中にクリアし、エナドリをキメつつ風雲プ
レジ伝を開始する――――！

完璧だ。

…………

……

…

「あ、陽務君おはようござ……ど、どうしたんですか！？」

「……いや、うん。エモーショナルな感動がね」

「は、はぁ……」

ジャック、かっこいいキャラだった……

ただ良ストーリーを表現する為にキャンペーンシナリオのくせに内容量が多いのだけは頂けないな……眠い。

積み上げる幸福（後書き）

経済で全てが支配された未来……傭兵はナンバーとコードで管理され、人としての尊厳など戦場の泥よりも容易く踏み躙られる。主人公はとある企業に所属する傭兵、人の欲望渦巻くレアメタルタンカーへと派遣された主人公は世界を巻き込む陰謀に否応なく関わることになる……

名を失った傭兵、顔すら失えどなお己を叫ぶ傭兵、生贄として捧げられた企業の令嬢、人としての尊厳を失った処刑部隊……だれもが何かを失っていく。終わりなき戦いの中に、

誰でもないお前の「名」を刻め。

レクイエム・フォー・アーミーズ、それは傭兵達への鎮魂歌。

終盤、第一ステージとして登場したレアメタルタンカーが再登場して企業の戦艦に特攻を仕掛けつつジャックが最期に核と一緒に海底に沈む感じ。

勉強が頭に入らない、というのは中々に久し振りな感覚であった。
まぁそれはいいとして今晩からいよいよ風雲プレジ伝への挑戦だ。
「……NPCとはいえリアルタイム進行だし何か言っといたほうがいいか」
というわけでシャンフロにログイン。エムルに「夢の世界に現れた黄衣の王を倒す為、顔のない神父の言葉に従ってうんたらかんたら」と適当に理由をつけてしばらくインしないことを告げる。
まぁNPCはプレイヤーの不規則ログインをそういうものである、と認識している設定らしいので失踪しない限りはなんとかなるだろう。
というわけでシャンフロをログアウト、それでは改めまして始めていこうか風雲プレジ伝……！！

『世はまさに戦乱の時代……』

『最後の皇帝が死の間際に帝位の返上を行なったことで千年帝国の栄光は途絶えた……』

『欲持つ者達は武器を取り、我こそが時代の王たらんと立ち上がる』

『されど、戦火はいつの時代も無辜の民を焼く』

成る程、よくある展開だ。戦乱の時代背景の導入としては中々のもんじゃないか。

『だからこそ君が立ち上がるのだ！』

『愛と平和を謳える世界を！』

『戦火を消し去るラブアンドピース！』

あ、不穏になってきた。

『そうだ！　他人じゃダメだ、君がやるんだ！』

『君こそが平和をもたらす者……大統領なのだから！！』

どうでもいいけどこれ開始時点から大統領名乗ってんの？　総資産千円の億万長者、みたいな矛盾起こしてない？

『これは、戦火の時代を終わらせた一人の人間、その偉大なる物語である――――！！』

そしてデカデカとタイトルコール。

『風雲プレジ伝』

キャラクターメイキング場面に移った俺は、改めてこのゲームが秘めるポテンシャルに胸を高鳴らせる。
こいつめ、ＰＶの時点では真面目な感じなのに冒頭からすでにクソとバカのオーラを漂わせてやがるぜ。
数少ないプレイ感想曰くマルチエンディング形式らしいが……何分、プレイしたやつがどいつもこいつも語らない、売らない、ただ「クソゲーだけど良かった」としか言わないのだ。

「あ、これラストネームも入れるやつか……」

え？　じゃあ……どうするか、男キャラで名前はさっき食べたサンラク・グリルドマックロー（鯖の塩焼き）で。
じゃあ今回の「サンラク」たるサバ塩君のアバターを整えて……顎髭いいね顎髭、初期武器？　サーベル……いや、トマホークにするか。てかちょっと待て、これ経営系のゲームじゃなかったか？　なんでプレイヤーが武器握ってんだ。

「最期にスーツの柄……あの、時代設定……」

細かいことを気にしているとクソゲーの速度についていけないので、濃紺のスーツを身に纏いさっさとキャラメイクを終了する。

次にチュートリアル。

成る程？　プレイヤーは経営モード時は「大統領の栄光（プレジデント・オーラ）」というスキルを使うことができて、戦闘モード時は「大統領の威光（プレジデント・ビーム）」を使えると……待てやコラ。

「オーラは光なのか？　いや、栄光ならオーラでもまぁ納得は……しよう、うん」

問題はてめーだよ大統領ビーム。ゲームカテゴリわかってんのか、というかビーム出るようなファンタジー世界観なのか？　お？

もういいです、戦闘モードってのがある時点で現場に直接赴くアグレッシブプレジデントってのは理解できた。経営一辺倒よりはやりやすかろうよ。

「旗のデザイン……」

作り込みは悪くないんだけどな……串刺しにした魚が焼かれるデザインで。完全に自作デザインができるわけではなく、ゲーム側で用意されたデザインの組み合わせのようだ。

この手の形式は本気を出せばアニメなどのキャラクターの形にデザインすることもできるが、俺にはそんな技能も時間もないので簡単なものにした。

「む、秘書のキャラデザ？　性格設定？」

えー？　えー……まぁ秘書だって話だし性格はクール系にして……

デザインをこう、こう、あとこうして……はい完成。

「名前？　ライス・ミソー」

サバ塩、米、味噌汁。やっぱりこの黄金コンボだよな、美味しかったです。

「よーし出撃！　細かいことは現地学習だ！！」

◆

目を覚ませば、そこは如何にも手入れのされていないボロいあばら家の中のようだ。

「……やっぱシャンフロと比べると挙動周りにちょっと違和感があるか。まぁアレがおかしいだけともいうが」

手を開いたり閉じたり、しばらく身体を動かして調子を確かめてから明らかに「これを拾ってね！」と言わんばかりに発光するトマホークを手に取る。良かった、あくまでもチュートリアル的誘導であって常時発光するクソ武器というわけではなかったらしい。

あばら家に斧を持ったスーツ姿の顎髭男。絶望的にミスマッチな状況だが、まぁいいとしよう。

「とりあえず大統領として何をすればいぃのか全く分からないが……外に出てみないことには分からないか」

と、俺が今にも蝶番が外れそうな扉に手を伸ばすよりも先に、外側から扉がバタン！　と開かれる。

「はぁ……っ、はぁ……っ！　く、ぅ……」

飛び込んできたのは、くすんだ灰色の髪をショートカットにまとめたツリ目の女性だ。キャラメイクの時は無表情だったのでどういうキャラになるのかは分からなかったが……いざ実際に動いているところを見るとこれは中々良くできてるな。

「人……!？　なんで、こんな戦場のど真ん中で……！」

成る程、情報ゲット。とりあえず俺は今人のいるような場所ではないところで呑気に眠っていたらしい。

「あー……ん？」

司会の左下に何やらウィンドウが。何々？

「あぁ、成る程……」

「………？」

訝しむような視線を向けるライスちゃんはひとまず置いといて、視界の下に表示された「推奨対応」を改めて確認する。

フルダイブギャルゲーだとよくあるシステムだ、世の中常に完璧なコミュニケーションができる奴ばかりではない。そんなわけでこの手の選択肢があらかじめプレイヤーにだけ提示されることがある。というのはあくまでも名目、世の中全てのゲームがシャンフロ並のＡＩを積んでるわけじゃない。だからこそこうして選択肢を提示することで返答を絞っているのだ、だから多分ここで「君のパンツ何色？」とか「君の妹さんを紹介してくれ」とか突拍子も無いことを言っても訝しげな顔で見つめられるだけだろう。

さーて今回の選択肢は……

・怪我をしてるじゃないか！　何か治療できるものは……

・敵か？　数は、所属は？

・やぁ美しきお嬢さん、僕とお茶でもどうだい？

これ最初のやつ以外全部ネタでは？　二つ目は大統領っていうか精鋭部隊の隊員とかそういうのだし、三つ目とか完全にただのナンパ野郎だし。戦場だってさっき言われたばかりだよね？　これだからクソゲーは……

「やぁ麗しいお嬢さん、男が寝ている場所に飛び込んでくるとは随分と勇敢じゃないか」

当然選択肢は最後のやつだ、当たり前だろゲームを楽しんでいこうぜ。

「何を言って……」

蹄の音。

「くっ……どなたかは知りませんが、巻き込んでしまったようです」

お？　左下の文章が更新された。

・蹴り開けろ！

成る程？　嫌いじゃないぜそういうの。左下枠君は粋のなんたるかを分かってるようじゃないか。

「下がってな」

はい……いち、にーの、さん！！

「ドアノックだオラァ！！」

「ぶげぁ！？」

お、案の定。
勢いよく蹴り開けられた扉が何かに激突し、その拍子に扉は粉微塵に砕け散る。
見れば如何にも「雑魚兵士A」な雰囲気を漂わせる軽装鎧の男が転がっており、その後ろには同じような装備に身を包んだ雑魚B、Cがいる。

「初戦闘としちゃ上等かな」

「な、なんだてめぇは！！」

お、左下更新。

・大統領だ！

・大統領だ！！

・大統領だ！！！

実質一択じゃねーか。

「俺は……大統領だ！！！！」

いざ、偉大なるステイツを目指して――！！

ビーム搭載型大統領、偉大なる第一歩（後書き）

以後、風雲プレジ伝において発生するすべての設定は「プレジデントだから仕方ない」で片付けられます

ちなみに世界観的には「魔法はないわけではないが、ガチ奇跡レベルの希少さ」って立ち位置です。プレジデントビーム？　プレジデントだから仕方ない

Ｓｉｄｅ１：虎狩りパンクラチオン

◇

とある鳥面が別の世界で大統領としての偉大なる一歩を踏み出していたその頃。

「……なぁ聞いてくれよサイガー０さん、風の噂で聞いたんだがエムルのやつまた凄まじい敵と戦ったらしいんだ。信じられるか？　神代の怪物だぞ？　そんな相手に一歩も退かずに戦うとか私の妹凄すぎないか？　ちょっと前まで背後から驚かすだけでも大慌てだったエムルがなぁ……やっぱりこのままじゃ姉としての威厳が損なわれてしまうと思うんだ。ここはひとつ強大な敵と戦って私も経験を高めるべきだと思うんだが、どうだろう」

（な、長い……）

「そう、ですね……？」

末っ子故にサイガー０に姉の気持ちを理解することはできないが、妹を想う姉の願いを無碍にするのも忍びない。
そんな思いから受けたユニークシナリオ「ディアレの秘密特訓」であったが、ある意味では想定外の事態が発生したことでそのクリアは難航していた。

というのも、このシナリオのクリア条件が「蓄積経験値分も含めてディアレの総経験値量がエムルを上回ること」が条件なのだ。つまり……

差が埋まらない。

アキレウスと亀、というわけではないがディアレが経験値を稼ぐ最中にもエムルが経験値を高めているならば、その差を埋めるのはやはり時間がかかる。

しかも彼のパートナー(サンラク)として様々な敵との戦いについていくエムルは一度に入る経験値の量が多い。

(とはいえ、今日の帰り道で「しばらくシャンフロにはインしないかも」と言ってましたし……そう、メールやSNSではなく。実際に会って、並んで帰るときに、聞いたんですよね……)

「えへへ……」

「む、どうしたんだい？　いきなり笑い出して」

「な、なんでもないですよう？　ええ、なんでも……」

とはいえ、サンラクこと楽郎から直接聞いた通りであるならば、最低でも五日……多くて二週間はシャンフロにはログインしない、もしくはしたとしても本格的な攻略はしないとのこと。

であれば同時にエムルの成長も一時的ではあるが止まるということであり、ユニークシナリオの達成条件を満たすにこれ以上の好機はない。

「えぇと、今回は……」

サイガー0はインベントリから一枚の地図を取り出すと、現在位置と照らし合わせながら改めて進路を確認する。

それはクラン「ネイキッド・マッピング・マーケット」が現在シャンフロにて時の人となっているトットリ・ザ・シマーネの帰還により彼の蓄積していた樹海マップの六割を書き記したマップであった。

とはいえ整備された道が表示されるわけでもなく、あくまでも広大な樹海の中でランドマークになり得るものが記されている程度だ。だがそのランドマークの一つが、この地図を完売にまで至らせるほどの効果を発揮していた。

「ええと、ディアレさん。今日は特訓（レベリング）もそうですが……私自身のレベルキャップを上げるためにこの、森人族の里……ティアプレーテンに、向かいたいと思います……」

「うん、分かった。道中の敵は任せておくれよ」

「頼りにしています」

この言葉に偽りはない。自身が前に立つことも視野に置いた魔法職たるディアレは、そのサイズの小ささとサイガー０のアバターの体躯もあってか、どこぞの鳥頭砲台よりも機動力は落ちこそすれ、より安定性を増した戦車として機能する。

さらに言えば一応の攻撃手段こそ持つがサンラクのネックである防御面などに重きをおくエムルとは違いディアレは攻撃偏重だ。元々火力と耐久を両立するサイガー０がさらに移動砲台を獲得したことで、火力効率は大幅に上昇したと言っていいだろう。

「しかしエクシスには悪い事をした、こんなにもサイガー０さんを借りてしまって……やれやれ、もし君があいつを鍛えるようなら、

その時は私も力を貸すよ」

「は、はぁ………ディアレさん」

「うん、気づいてる……近いね」

地を踏む足音。人間の平均以上の大きさを持つサイガー０の足音が風に吹かれ揺れる草花の如き小ささに思えるほどの巨大で、重厚な足音。

人のものではない、であれば現れるそれが友好的な道理もなし。

「ゴルルルル……」

「と、虎……？」

「ディアレさん、私が前に出ます」

「お、おう！　相変わらず肝が据わってるな君は！」

なにぶん、サイガー０にとって全ての獣型モンスターはリュカオーンと比較されてしまう。それ故にこと獣に対してであればサイガー０が気圧されることはほとんど無くなっていた。

「属性は……特に持っていない、ようですね」

であれば単純な膂力頼りの獣か……否、その結論は早計であるとサイガー０は頭を振る。

単純な属性……西洋でいうならエレメント、東洋ならば五行で示される属性を持つ事はこのゲームにおいて義務ではない。

リュカオーンのような影に関する力は属性には定義されないが、であればリュカオーンは脅力一辺倒かと聞かれればそんなはずはない。初見のモンスターがどんな攻撃手段を持ち、それがどんな性質を持つのか……それはそもそもこのゲームにおいて「廃人」と称されるトッププレイヤーが最低限持つべき観察眼だ。

そして、サイガー１００というトップクラスの廃人と共に数多のモンスターと戦ったサイガー０もまた、その観察眼を備えている。

余談だが、今現在大統領としてトマホークを振り回す某鳥頭はその観察眼をより広範囲に広げたものを持っている。
即ちゲーム的観点から「このタイプのエネミーが何を使うのか、この攻撃パターンはどのように派生するのか」を様々な作品で蓄積した知識を参照して対処しているのだ。
さらに言えばバグによる挙動の急激な変化にも慣れているからこその、立ち回りとも言える。

「っ！　ディアレさん、口の前から避けてください！！」

「咆哮か……っ！！」

大きく息を吸い込み、肋骨を押し退ける程に膨張した虎の胸部。ただ吠えるだけで済むとは思えない明確な危機、もしこの場に真界を観測する眼を持つ者がいたならば、虎の口から放射状に迫るエフェクトの津波を視認できたであろう。

「グロロロァァァア！！！」

咆哮。放たれた爆音の「音」が大気を震わせ、その直線上にある全

てを加熱する。
言うなれば口から電子レンジ、しかしてその効果は凶悪の一言に尽きる。

「き、木が爆ぜた！？」

「電子レンジのように水を振動させている……？　となると、人体に対しては極めて有効……いえ、違いますね。だからこそ前に出るべき、ですね」

「はぁ！？」

「大丈夫、勝算はあります。ディアレさんは私が注意を引き付けている間に火力の用意を」

「ぐ……ぬぬ、わかった！　だがそこまで啖呵を切っておいて私の前で破裂とかしてくれるなよ！？」

にこりと浮かべた笑みがディアレに伝わることはない、双貌の鎧は皮膚の露出が一切ない全身鎧である。
それ故に、人体へ直接作用する攻撃に対しては装備の能力に関係なく形状の特性として効果を発揮する。

「……内側を温める電子レンジがその外側を加熱することはありません」

即ち、物理的な障壁による防御は可能という事。サイガー０は身の丈ほどもある今は漆黒の大剣……神魔の剣を構えると、虎の真正面へと立つ。

「虎狩り、です」

獣の摂理に反則はない。背中か死を晒す者こそが敗者であり、正面切って相対する限りその闘争は決着しない。

故にこそ虎……名をロア・タイガントと設定された流れ者のモンスターは大自然のルールに則り、目の前の人間との力比べに挑む。

「く……！！」

ガード系スキル「プロテクトチャージ」、盾系スキルではあるが一度習得すれば大剣の腹などを盾代わりとしても発動できる。前進する盾、とでも言うべき突撃とロア・タイガントの巨躯が正面から衝突する。

拮抗、否、若干サイガー０が押されている。だがそれでもギリギリのところで踏ん張り、耐える。

「……っ！！」

話は変わるが、ネコ科の生き物というものは非常に柔軟な身体を持ち、軽やかな動きを繰り出すことができる。故にその皮膚は伸縮を前提としており、何が言いたいかと言えば軽自動車程のサイズともなれば皮をつかむことすらできるということだ。

「……「ハイエスト・ストレングス」！！」

裂帛の気合と共に、サイガー０の膂力が瞬間的に跳ね上がる。上から覆いかぶさるようにのしかかっていたロア・タイガントの身体が弾き返され、その隙を逃さぬとばかりに伸ばされた手が虎の喉を掴む。

「斎賀式……護身術！！」

足腰を据え、確固たる土台を整えた上で己よりも巨大な相手を投げる。

瞬間的に投げのフォームを整え最速で投げ飛ばす見様見真似「大時化」とは異なる確実な対処に重きを置いた武術。

虎を一本背負いする鎧の騎士を少し離れた場所で魔法の準備を整えながら、ディアレはポツリと呟く。

「怪物かな？」

花も恥じらう十七歳です。

Ｓｉｄｅ１：虎狩りパンクラチオン（後書き）

そのうち回し受けとか散眼とかやりだしそうですね

Side2：サモ……ナー？（前書き）

予約投稿してなかったら確実に今日の更新はなかったですね、俺……ローグのデザインのこと、好きだわ！（王子並感）
来週のビルド見るまでは壁にかじりついてでも生き延びますよ僕ぁ

Side2：サモ……ナー？

ゲームとは、日常の自分から乖離する極めて簡単な手段である。
故にこそ、誰もが善良な開拓者としてモンスターと戦っているわけではない。それはかつての阿修羅会、純粋に悪役としてのＰＫを楽しんでいたプレイヤー達もまた然り。
であればこそ、全力で「裏社会プレイ」を楽しむプレイヤーは確実に存在する。そしてそんなプレイヤーはアーサー・ペンシルゴンにとっても極めて都合のいい存在であった。

「ハロー、銭ゲバ君？」

「げっ、アーサー・ペンシルゴン……！？　もう嗅ぎつけやがったのか……！」

「嗅ぎつける？」

「……あ゛」

ゼニス・ゲバラ、渾身の初手自爆であった。
にこやかな笑みが一瞬でどす黒い邪悪色に染まったペンシルゴンが一時停止したかのような一切動かない笑みでゼニス・ゲバラの商店へと踏み込む。

「何か隠してるなぁ……臭うねぇ……ほらほら、裏の情報屋を気取るなら出し渋りは良くないんじゃないかなー？」

「くっ、やめろ近づくな！　俺の童貞を汚すんじゃねえ！　初めては清純派な女の子がいいんだ！」

「ストレートでぶっ飛ばすよ？　というかメディア露出する清純派なんてどこかしら欲まみれだよ？」

「いやぁあ！　聞きたくない！　夢を壊すな夢を！！」

「異性に完璧を求める人って大抵行き遅れるんだよねぇ……まぁいいや。で？　表向きは品揃えはいいけどボッタクリの商人、裏ではプレイヤーやＮＰＣの情報を売り捌く情報屋の銭ゲバ君？　ちょいと聞きたいことがあるんだけど？」

「んだよ、廃人勢の動きでも探るつもりか？　だったら大した情報はねぇよ、午後十字軍が例の「傷だらけ」に執着したせいで樹海の攻略は止まっちまってるからな。強いて言うならトットリ・ザ・シマーネの持ち帰ったマップのおかげで森人族の里までの道が確定したくれーだが……んなもん聞きに来たんじゃねぇんだろ？」

にまり、と笑みを深くするペンシルゴン。

シャンフロという隔絶したリアリティを持つゲームであるからこそ己が夢想するキャラクターたらんとロールプレイにのめり込む者は多いが、その中でもゼニス・ゲバラはペンシルゴン一押しの情報屋であった。

実際の情報屋がどうなのかは知る由もないが、少なくともシャンフロというゲームにおいて優れた情報屋は

「ゲーム内のプレイヤー達からの情報」
「ゲーム外のプレイヤー達からの情報」

「ゲームにおけるＮＰＣなどからの情報」

少なくともこの三つを最低条件として集めた上で、有用な情報を取捨選択する技能が重要となる。

一つ目の条件を達成するためには常に最新の情報を仕入れられる場所に拠点を構える必要がある。

その点からいえばいつも特定の場所にいる情報屋などは信用できない。情報自体が不確定もしくは古いか、脚色が混じっていることが多いからだ。

二つ目の条件は簡単なように見えて難しい。なにせログアウトさえすればどんなプレイヤーでも関わることが出来る場所であるが故に、情報も玉石混交であるためだ。

そして三つ目、これに関してはなによりも繋がりが重要になる。ＮＰＣとの関係はプレイヤーとの関係を結ぶ以上にロールプレイが重要となる、故に半端な印象では情報を得ることは困難だ。

だからこそ、この三つを満たすゼニス・ゲバラをペンシルゴンは結構な頻度で利用している。そもそも、阿修羅会を自ら潰す際に利用した情報屋の中に彼もいたりする。

「私が知りたいのはぁ……「黒竜討伐隊」だったかの内情ってやつさ」

「……おい待て、あんたが特定の組織について探る時はロクなことをしないのは短い付き合いでもわかるけどよ……あそこに手を出すのはマズいだろ」

「なんで？」

曰く、前線拠点を襲撃したノワルリンドには相当なヘイトが溜まっている事。

曰く、その筆頭たる笑みリアを筆頭とした生産職達が前線拠点を一気に強化したことから、実質的な顔役となっている事。

曰く、ノワルリンドがヘイトを集めた事で逆説的にジークヴルムに好意的なプレイヤーは多く、ジークヴルム討伐派はあまり良い顔をされないという事。

「阿修羅会の時は数の暴力でなんとかしてたがよ、今回ばかりは無理だろう。今度は向こうが百人超の超大規模クランだぜ？」

どう取り繕ったところで戦いとは結局のところリソースの総量が全てだ。ましてや「黒竜討伐隊」は前線拠点に居を構える生産職の大多数が所属する一大勢力。

ペンシルゴンが特攻をかますのはどうでもいいが、そこから芋づる式に自分にまで非難が来ては堪らないとゼニス・ゲバラは全力で難色を示す。

「んふふふふ、私が勝ち目のない戦いをするのは全部をパァーッ、と終わらせる時だけだよ。そんなことよりできるの？　できないの？」

「……まぁ、出来ないことはねーよ。別にあそこはなんでもかんでも秘匿主義ってわけでもねーし。お前ンとこのユニーク殺しと違っ

てな」

「サンラク君はね……放っておくと勝手に情報溜め込んでるからなんかもう、放置した仕掛け網みたいなもんだよね」

とはいえ、ペンシルゴンは既にサンラクから情報を採取する方法にある程度の見当をつけている。

要するに強いるから口を噤むのだ、むしろサンラクが情報を吐き出さざるを得ない状況を作ってテンションを上げてやればあっさりと吐く、ペンシルゴンはそう睨んでいた。

とはいえ今のところはそれを誰かに言うつもりもなければ実践するつもりもない、なにせおだてるよりも煽った方が楽しいのだから仕方がないのだ。

「それにユニーク関連はライブラリとかと色々約束してるからねー。流石にそっちより先に流すのは難しいかな」

「そうかよ、まぁ期待はしてねーけどよ……」

「ああでも、別件で銭ゲバ君に情報をおすそ分けしようか………」

にっ、と歯を見せながら、されどその目には全てを己の掌で転がさんとする悪意の光を浮かべてペンシルゴンは告げた。

「うちのクランメンバーがノワルリンドに接触した」

「……マジか」

「ついでに言うと、私らは「ジークヴルム討伐派」だよ」

ゼニス・ゲバラが沈黙し、熟考する。情報屋を気取ったところでゼニス・ゲバラもまたプレイヤー、このまま数の暴力で色竜が倒されているのを眺めているよりも、ジークヴルムの討伐という特大の祭りに裏方として参加する方が楽しい。

「……いいぜ、ちょっとばかし手を回してやる」

「いいねいいね、今の情報屋っぽいよ」

「それともう一つ、お前に会わせたい奴がいる」

「んー？」

場所は変わって、恐竜モンスターが出現する樹海へと踏み込んだペ

ンシルゴンはゼニス・ゲバラの先導に従い、道なき道を進んでいた。
「ゆくゆくは大々的に発表して売り捌くつもりだったんだが……お前ら「旅狼（ヴォルフガング）」なら広告塔にするなら丁度いい感じに目立つだろう」
「へぇ、やっぱり隠しエリアとかあったんだ」
大木が地に張り巡らせた根っこ、その隙間に身体を捻じ込めばその先には空洞が下へと広がっている。恐らくゲーム的配慮なのだろう根で作られた天然の梯子を降っていけば、そこにはバスケットボールコートほどの広さの地下空洞が広がっていた。
「あれぇ？　ゼニちゃんが女の人を連れてくるとか世も末かぁ？
「俺は清純派な女の子にリードされて魔法使い卒業したい」とか言ってたじゃあん？」
「えっきも……自分は受け身なあたりがまたなんとも」
「うるせー！　夢を語って何が悪い！」
「心の内に秘めとけってことでしょ。で、説明してくれる？」
どうやら芋類のように異常に肥大化した木の根、その中身がくり抜かれてこの地下空間になっているらしく、どこかで見覚えのある光苔に照らされたその空間内の地面には、表現に困るものが規則正しく並んで植えられていた。
さらに言えば……
「イエァァァァァァ……」

「おっ、ありがとなマンディちゃん」

「イエァァァァァァ……」

人参に筋骨隆々の身体を生やしたかのような、名状しがたい何かがなんとも言えない鳴き声を出しながらのっしのっしと歩く姿に、ペンシルゴンは困惑と新たな悪巧みの材料への期待を込めた笑みを浮かべるのだった……

Side2：サモ……ナー？（後書き）

＜i323486―22951＞

「パワー型です、光合成が趣味です」

偉大なる大統領、次ななななな……さぁ幕末乱世を始めよう

◆

前回のあらすじ

秘書NPCことライス・ミソーちゃんはその旗の下に集った者達に力を与える奇跡の聖遺物「統一旗」を持っていたが故に様々な勢力から狙われていた。そこを助けた（自称）大統領に希望を見出したライスちゃんはサンラク・グリルドマックローを旗頭とした新たな勢力を作ろう、と大統領へ提案したのだった……！！

というわけで、俺とライスちゃんは二人旅の末にとある滅びかけの村を救い、そこを「合衆国」の足掛かりとして改めて出発したのだった……！

「プレジデント、西のトプ村が我々のユナイテッドに加わりたい、と」

「だろうな、エルガレンとヴルガンテがかち合うならどう考えてもあそこは補給路代わりにされる。良くて食料、悪けりゃ人的資源を毟られる」

「如何いたしますか？」

・受け入れよう、ただし労働は覚悟してもらうが

・いや、受け入れない。ステイツにそんな余裕はない

・いっそのこと滅ぼしてしまおう、奴らの顔が気にくわない

……おいコラ。

「無論受け入れよう、ただしある程度の労働は覚悟してもらうがね」

「かしこまりました」

最近の左下枠君は三つ目に覇王ルートを提示してくるから困る。合衆国、っつってんだろうがなんで他民族殲滅方針になるんだ。一応選んでみたら速攻バッドエンドだった、セーブしといてよかったわマジで。

気を取り直してのみんな仲良くユナイテッドルートな訳だが……まぁなんというか、たった二人で始めた合衆国なわけで「国力」という概念とは程遠い現状だ。

とりあえずカムラ村、なる発情してそうな村を拠点に演説コマンド、左下君の用意してくれた台本を参考に村を「バンメシ合衆国」首都、カムラとして新生。

周囲の「国に属してはいるけど小遣い稼ぎに領主が激重税をむしりに来る程度で助けてもくれないない国の末端限界集落」を取り込みなが

らかろうじて村から町程度に規模を拡大しつつ、そろそろイベントが起きそうだなと考えながら今日も今日とて街づくりだ。

とりあえず油に加工できる植物を育てる畑と穀物畑を確保、税を取りに来た役人は兵士ごと袋叩きにして捕虜とした。ウチの牢屋は三食保証だ、その方がライスちゃんの好感度が上がるからね。

最近気づいたが秘書ＮＰＣの好感度が高いと執務中に差し入れられるものがグレードアップする。ゲーム内とはいえ水よりは茶の方がいい。

「さて、どうすっかね……」

今現在、世界情勢としては群雄割拠という言葉が相応しい。そういうものなんだから仕方ないとはいえ、どの国のトップも全員が全員「世界征服」を掲げているのだから笑っちゃうくらい世紀末だ。

そして今現在のバンメシ合衆国は立地的に三つの国を脅威としている。

まず一つはエルガレン王国、はっきり言って我らが拠点との距離と規模、兵士の態度的にチュートリアル国家だ。一番最初に攻略してくださいと言わんばかりの国だ。

次にヴルガンテ王国、どいつもこいつも王様を名乗りたくて仕方がないらしい。大きさ的には二つ目の国だ、近くに鉱山があるらしくより一層の発展を遂げるには攻略不可避の国。

そして最後にアーフレント聖国。所謂「聖地」ポジションの国であ

り、なんだっけか……パルフィオン教だったかを国教にする国からは実質不可侵の国だ。

）

王道的に考えればエルガレンから順番に攻略しつつ、って感じなのだろうが……なんとなくだが、試したいことがある。

その為にもまずは拠点の強化だな、兵士的なアレコレは極論ゼロでも問題ないと発覚したので内政にだけ思考を割くことが出来……

「プレジデント！　エルガレンの連中が！」

「……やれやれ、暇な連中だな」

まぁいい、我がユナイテッドトマホークの錆にしてくれよう。

とりあえず、ストーリーやＵＩはまぁまぁなのだがこのゲームのクソな要素を一つ発見だ。

「えい、えい、えい」

「ぐわぁぁあ！？」

はいゲージ溜まった。

「プレジデンッッ・ビィィィィム！！」

目から放たれ、扇状に薙ぎ払われる光線がエルガレン式の鎧に身を包んだ兵士達を薙ぎ払う。

「えい、えい、えい」

「ぎゃあ！？」

はいゲージ溜まった。

「プレェェ……ジデンッ、ビィィィィィァァァァム！！」

それは可視化された威光。乱世に我こそが平和の旗を打ち立てん、と心の底より信じる者が持つ根源的な人としての強さに撃ち抜かれた者は、己と大統領との力の差を悟り戦意を失う。

「えい、えい、えい」

「ぐええ」

はいゲージ溜まっ……ああ、今のやつが最後か。

「大統領に不可能はない」

まぁ、つまりはそういうことなのだ。このゲーム……極論を言えばプレイヤーが目からビームをぶっ放してるだけで勝てる。

そりゃあ実際に百人だの千人だのをフィールドに登場させたとして、それら一人一人に独立した設定をぶち込むなんて頭シャンフロな技術が必要になるわけで、そうではないゲームはどれだけの熱意を込めたとしても技術的ダイエットは必要不可避なわけだ。

それは風雲プレジ伝も同様で、このゲームにおける兵力は兵士一人一人ではなく兵士という総体のステータスで処理される。

だがここで一つ例外が存在する……そう、大統領だ。

成る程、たしかにプレイヤーが一兵卒とどっこいどっこいの性能では爽快感がない。だがそれを差し引いても兵士達がタクティクスしてる隣で一人だけ無双ゲーしていれば、折角のバランス調整もイチコロである。

要するに、だ。五分かけて百対百の戦争をするよりも、三分かけて大統領が百人抜きした方が速いのだ。

さらに補足すればこのゲーム、多分一定時間が経過した時点での戦力比で勝敗が決する。つまりイベ戦闘を除けば武器を振ってビーム乱射していれば大抵の戦闘に勝てる。

「しかもエネミーの動きがそこまで良くないからマジで単なる作業だ……」

これ精神力を削るタイプのクソゲーだ、こりゃあいよいよ本腰もエナドリも一本入れておくか？

というかもっさい戦闘に慣れすぎるとシャンフロに支障をきたす可能性も……あ、そうだ。

「お疲れ様ですプレジデント、敵兵達は如何しますか？」

「武器、防具を取り上げた上で解放してやれ、彼らにも家族がいるだろう」

「分かりました」

戦闘終了のリザルト画面代わりに大統領パワーで何故か死んでいない兵士達の処遇を問うライスちゃんに返事をしつつ、俺は執務室の椅子……セーブポイントへと向かう。

「あるじゃん、スリリングな戦いの場が……！」

目を瞑り、ログアウト……！

ログインした俺は、布団の上で目を開く。このゲームではログイン時、襖の隙間から光が漏れるので既にリスキル狙いの馬鹿共が扉の前に集まっているのだろう。

「……トーシローならここら辺だが……本職のリスキラーなら……ここかな」

何故そんなに詳しいのか？　馬鹿め、ログイン天誅は俺が冬イベで考案したスコア稼ぎだぞ。

「はいそこぉ！！」

「ぐぁ！？　な、何故だ！」

「馬鹿が、イベント開始から二日も経ってりゃにわかリスキラーなんぞ一掃されてるだろうがよ。となればリスキル天誅になれた奴が立つ場所を狙えばこの通りさ」

「イベ限武器の二刀流、般若の面……まさか、「祭囃子」……！？」

「え、ついに俺も二つ名つけられてたのか」

「チッ、ハズレを引いちまったか……」

襖の陰から狙うのは三流リスキラーだ、一流は襖の真正面に立って相手の硬直を狙う。

まぁリスキルキル天誅はコツがいるので一番手っ取り早い方法は襖を蹴り飛ばすことだ。

襖ごと踏みつけられた新撰組の羽織を纏うプレイヤーを見下ろしつつ、左右に増援がいないことを確認。

「情報提供してくれたら見逃してやるよ」

「ほ、本当か……！」

「こすい情報しかないなら切腹してもらうがな」

「質屋交渉を……まぁいい、こちとら伊達に二日生き延びてねぇよ」

とりあえず色々と情報を聞き出せたので解放してやったが宿舎の外に出た瞬間、上から降ってきた兜割に頭をかち割られて消えていった彼には追悼の意を。

南無三。

偉大なる大統領、次なななな……さぁ幕末乱世を始めよう（後書き）

プレジデンッッッ・ビイィィィィィィムッッ！！！！

命中した相手の戦意を大統領としての圧倒的威光で無力化する。大統領ってなんだ、大統領は大統領さ

Ｓｉｄｅ３：狂気の幕末イベ　～敵の敵も敵～（前書き）

文字数少ないから実質１話更新

Side3：狂気の幕末イベ　～敵の敵も敵～

京極の耳にそれが届いたのは、ある意味で必然であったのかもしれないい。

◇

「祭囃子がログインした……？」

「あ、ああっ！　間違いないわ、イベントの上位報酬を佩いた般若面のプレイヤーなんてそうそういるもんじゃないもの！」

「そう、ありがとうね。それはそれとして天誅」

「恨み晴らさでおくべきかー……！」

今回のイベント「極限月下」ではデスしたプレイヤーはイベント終了まで「怨霊」としてリスポーンする。

死者のアバターとして設定されているので当然と言えば当然だが、デスしていないプレイヤー……つまり生者は死者を視認する以外に干渉することは出来ず、亡者もまた同様だ。

つまり何が起こるのかと言えば、自分をキルしたプレイヤーに取り憑くプレイヤーが出てくるわけで。

「………！」

「………？」

「……！　………！！」

端的に言うなら、出会う端から喧嘩を売り続けてきた京極の背後には、十数人程の亡霊が屯しており、そして今一人増えた。

音が聞こえないので、何を言っているのかは分からないし静かでもあるのだが……

「君たちさ、幽体体験ではしゃぐのは別のところでやってくれないかな？」

挙動が煩い、とでも言うべきか。談笑するだけならまだしも、背後で「見て見て！　この身体軽いからブレイクダンスできる！！」「おー！」「俺もやってみよう！」と十数人が一斉にブレイクダンスをし始めれば音がなくても集中力が削がれて仕方がない。

だが悲しきかな、互いに唯一残されたコミュニケーションはボディランゲージのみだ。

いえーい！　と手を振り返してきた亡霊共に溜息をつきつつ、仕方がないのでいっそ百人引き連れるくらいの心持ちで……と見上げた先。

「去年の冬は参加できなくてねぇ！　君の持つ冬季イベントランカー三位報酬の「地布武鬼（じふぶき）」……是非とも投げて見たい！！」

「くっ、面倒なのに絡まれたか……！」

長屋の屋根に降り注ぐ武器種を問わぬ刃の雨がただ一人を狙って降り注ぐ。逃げる般若の面はフェイントの中に混じった自身の逃走経路を先読みして落下する鉈を弾きつつ、曲芸じみた動きで屋根を駆け抜ける。

そしてそれを追いながら、恐ろしいほどの正確さで武器を投擲し続ける桜模様の羽織を着た維新志士。

わぁわぁ（無音）で騒ぐ亡霊を背に、京極の顔がこれ以上ないほどの喜悦に歪む。

「ああ、やっとだ……やっとこっちで会えたねサンラクゥ！！」

「っげぇ！？　てめー京ティメットか！　くっ、後でいい？」

「だーめっ、諸々込みで天誅……頂くよ」

…………。

…………。

「降りてきなよサンラ……」

「即興結託！」

「漁夫の利天誅！！」

次の瞬間、つい先程まで追うもの追われるものであった筈の二人の剣士が、まるで最初から味方同士であったかのように京極へと刀を投げつける。

「なぁ……っ！？」

「はっはは馬鹿め！　幕末じゃ漁夫の利狙いの第三者は一番最初に狙われるんだよ！」

「まぁそれはそれとして隙あり」

「おい金棒はやめろ金棒は！！」

「それは黒船イベントのカンスト報酬の「黄金鬼（オウゴンオニ）」と先着到達報酬の「硬華沙須（コウカサス）」！　成る程、ますます逃すわけにはいかんな……！」

「うるせー帰れ！」

「祭りの会場はここですか！？」

「げぇ！　「轟車（ゴーカート）」！！」

幕末において結束という概念は驚くほど脆く、しかしすぐさま積み上げられるものである。

人が増えれば増えるほどに目まぐるしく結託と裏切りが繰り返される、結託した五秒後に互いが同時に裏切ることなど何ら珍しいことではない。

ここは幕末の世界、信じられるものは己と己の持つ武器……そして天より下される誅伐を成す己の腕前のみなのだから。

だからこそ京極は解せなかった。

「「「天誅！！！」」」

「――――な、」

何故、

自分が自分以外の全員から狙われているのか。

だって、それは当然のことじゃあないか。

この場にいる、幕末に汚染されきった侍たちが皆一様に笑う。

まさか、

まさか、

死者に悪意がないとでも？

京極の背後で見物を決め込んでいたプレイヤー達が一斉に歯をむき

出した笑みを浮かべた。

「京ティメット……冥土の土産にひとつ教えてやる」

「っ！？」

このゲームでは当たり前のルール。即ち、スコアの高い者は当然狩られた際のポイントも肥大化しているという点。

「得点隠しは基本技能だ。実入りの少ないボスモンスターと、ネギを背負ったカモ……どっちを狙う？」

得点を隠す行為はある種の抑止となる。暫定一位かもしれない、無得点かもしれない、バトルロワイヤルでリスクだけを背負って戦えますか？　と。

ことイベントに於いて二つ名に意味はない。通常時とは異なり、イベントは最終的な収支を問う。であれば終盤まで力を温存するプレイヤーもいる、そんなプレイヤーを最後の最後で仕留めるための必殺を秘するプレイヤーもいる。

裏か、表か。コイントスをするにしてもいつ、誰が、何処で、どのように、何をもって行動するのか……少なくとも京極のように先行逃げ切りで行くならば、最低限でも倒したプレイヤーを買収するべきであった。

言うなれば亡者達は常時表示され続けるスコアの擬人化、私は高得点を抱えていますと全方位にアピールしているようなものだ。

そして京極は気づいていない、既に他プレイヤーの息がかかった亡者達がまとわりつく事で本来の数値以上の「高得点目標（ボーナスターゲット）」として案

山子にされているのだと。

「というわけで……ごっつぁんです！！」

しかし京極の身に刃が襲いかかることはない。やはりというか当然というか、打ち合わせでもしていたかのように互いを裏切った京極以外が何度めかも分からぬ激突を繰り広げる。

「いたぞ！　二つ名共だ！」

「囲め囲め！」

「天誅しろ天誅！！」

さらに亡霊の集合に誘引されたプレイヤーが集まり、脅威度の高いプレイヤーをとりあえず駆逐しようと結託し、それを狙っていた一団が奇襲を仕掛け、囲まれていた二つ名達が餌が向こうから来たと言わんばかりに暴れ……

「おい京ティメット、逃げるぞ」

「えっ、あっ、サン……」

「しーっ、どうせ一分もしたら全員逃走するからその前に先手を打つぞ」

こそこそと京極の許まで身体を屈めてやってきたサンラクが京極に離脱を提案しつつ、なにやら奇妙なハンドサインを亡霊達と交わす。

自身の刀を指差した後に親指と人差し指で輪を作ったり、手で数字

を作ったり、太陽を指差したかと思えばまた数字を作り……そして
どうやらボディランゲージで何らかの結論が出たのか、亡霊プレイヤー達は皆サムズアップすると、思い思いの場所へと散って行く。

「え、何？　え？」

「……勧めた時期的に初イベだろ？　ちょっとレクチャーしてやるからこっちこっち」

「あ、うん……」

この後、京極は幕末のさらなる深淵へと足を踏み入れることになるが……それはまた別のお話。

Ｓｉｄｅ３：狂気の幕末イベ　～敵の敵も敵～（後書き）

・辻斬・狂想曲：オンライン夏イベ「極限月下」

やぁ侍のみんな！　今日も元気に天誅してるかな？　今回のイベントではなんと、イベント期間中デスしたプレイヤーはイベント終了までリスポーンできない疑似デスゲームだよ！　ただ別にログインできないわけじゃなくて死亡したプレイヤーは「亡者」という生きているプレイヤーに干渉できないアバターとしてリスポーンするよ！　イベント終了時までに集めたポイントでランキングが決定、上位ランクイン報酬は今イベ限定刀「蛍火軌跡」をゲットできるぞ！　そして上位５名にはさらに特別な刀が……！？

幕末度１０％「終盤まで隠れていればイケる！」

幕末度５０％「来るやつ全員切り伏せる！」

幕末度８０％「亡霊を買収すれば色々利用できそうだな」

幕末度１２０％「終盤に残ったやつ全員天誅で優勝確定じゃん」

幕末度２００％「あうあうあー（肉体が最適な天誅をオートで繰り出す）」

Ｓｉｄｅ４：ユニーク自発できないマンのユニークな日常

場所は変わって現実空間。

「さぁ、キリキリ全部吐いてもらうわよ……ケイ！」

魚臣　慧十九歳、絶賛壁ドン中であった。

「なんで、シルヴィア・ゴールドバーグがあんたに手作り弁当を届けに来たのかを、ね……！！」

「ハローっ」

「いや、それには深い訳があって……」

尤も、当人は壁ドンされている側であり、現状を極めて簡単に表すならば「修羅場」以外の何物でもないという状況であるが。

「へ　ぇ　？　」

目を据わらせ、さながら葉巻の如くフライドポテトを咥えた夏目恵が壁ドンを行いながらにっこりと笑みを浮かべる。

「それじゃあ聞かせてもらおうじゃない、その深い訳ってやつを……ね？」

「えーと、あの、そのぉ……」

「Ｈｅｙナツメグ！　クールダウンクールダウン！」

「っぐ……誰のせいでヒートアップしたと思って……！」

「そんなことより私、ケイと一緒プレイスに住んでるわ！」

優越と自信がこれ以上ないほどに込められた笑顔とサムズアップによる爆弾投下、少なくとも慧の耳には開戦を告げる号砲が高らかに鳴ったのを幻聴した。

「な、ぁ……？！？　ど、どどっ、どういう事よケイィィ！！」

「いや違っ、隣の部屋に……！！」

「リビング住まいだろうがダイニング住まいだろうが同棲じゃないのバカーッ！！」

「違ががががっ、マンションの隣室って意味でででで」

肩を掴まれ、ガクンガクンと頭をシェイクされていた慧であったが、恵の脳内で三段階程進展し過ぎていた誤解をどうにか解いて揺れる視界をなんとか正常へと戻す。

「なんだマンションの隣室ってだけだったのね……」

「でもよく遊びにいくワ」

「待っ……！　首掴むの……っ！　無……っ、死……っ！！」

「ケイのバカーっ！！」

「ぐぇ……」

がめおべら。

「アメリア・サリヴァンが？」

「ＹＥＳ！　彼女、こっち来るかも？」

「えぇ……「ダイナスカルの猛禽」とか、また面倒なのが来るなぁ……」

かろうじて三途の川を渡らずに済んだ慧は、シルヴィアが持って来た自称弁当……厳密には出前のファーストフードを弁当箱に詰め直したものと形容すべき、箱に縦挿しでぎっちりと詰め込まれたフライドポテトを引っこ抜きながらその名前を呟く。

アメリア・サリヴァン。

プロゲーミングチーム「Ｚｏｄｉａｃ　Ｃｌｕｓｔｅｒ」程の最大手ではないものの、彼女が所属することで米国内でも最上位に格付

けされるプロゲーミングチーム「Ｄｉｎｏｓｃｕｌｌ」。
プロゲーマーとして、格ゲーをメインとするゲーマーであればシルヴィア・ゴールドバーグに次いで有名な人物だ。
女性でありながら身長１８０オーバー、鷹の目に相応しい鋭い目つきという非常に印象的なリアルの姿もあるが、何よりも重量級キャラをメインで扱いながら実質的なナンバーツーに上り詰めた実力こそが特筆すべき点だ。

米国格ゲー界において、シルヴィア・ゴールドバーグという人物は神に等しい。確かに慧はシルヴィアに勝利するという快挙を成し遂げたが、それを差し引いても現在に至るまでの戦績に黒星はただ一つしか存在しないのだから。

だからこそ当然と言えば当然だが絶対王者のフォロワーとして手数とフットワークによる攻めのスタイルをメインとする者は多い。
そんな中で鈍足、重装甲、高耐久という主流の真逆を行くキャラを使ってシルヴィアへと迫るアメリアという人物は、ともすればシルヴィアと同等の人気を誇る。

「……やっぱり、あいつだよね」

「Ｅｘａｃｔｌｙ！　ケイにもメール、来たでしょ？」

だがそこに、突如として現れたのが正体不明、強いて言うならエナジードリンクが好物であり……あのシルヴィア・ゴールドバーグが操るミーティアスと互角に渡り合った「リアルカースドプリズン」だ。

それは、ともすればそう呼ばれるはずだったかもしれないアメリア・サリヴァンからすれば決して看過できない存在であり、ＧＧＣ以降

一切の情報が出ないその存在を確かめるべく来日を決心するには納得のいく理由ではある。

問題はそこではなく、

「あの人、プライドが服着て歩いてるってくらい負けず嫌いだからなぁ……絶対詰め掛けてくるよね」

「ウン」

魚臣　慧は知っている、シルヴィア・ゴールドバーグはそれ以上に知っている。

アメリア・サリヴァンを動かす原動力は恨みや嫉妬というものとは真逆のものであり、そしてその歩みが止まることは滅多にないと言う事実を。

謎の助っ人ゲーマー「顔隠し（ノーフェイス）」「名前隠し（ノーネーム）」の正体について知っているのは現状慧ただ一人。厳密には恵も片割れの正体については知っているのだが、それについては割愛。

さらに言えば、プライベートな付き合いからシルヴィア・ゴールドバーグの現在地を知っているとするならば。

「……ねぇケイ、」

「やめてメグ、見たくない！　曇りガラスの向こうに見えるでかいシルエットなんて見たくない！」

「いや、あれはウチのマネージャーでしょ」

「あぁなんだ、まぎらわしい………」

ガチャっ

「おぉいたか慧、なんかお前に会いたいって人がいるんだが俺の目に間違いがなければあれアメリア・サリヴァンな気がしてならないんだが……サインもらっちゃダメかな？」

「戦略的逃走！」

「あっ逃げた！！」

「イッツァハーンティーング！」

オイカッツォ‥あの

サンラク：なんだよ

オイカッツォ：折り入って相談があるのですが

サンラク：これ断った方が楽しいやつ？

オイカッツォ：待って！　これ俺の身の危険もかかってるの！

オイカッツォ：鯖折りにされちゃう！！

サンラク：え、なにそのデンジャラスな状況

オイカッツォ：あー、経緯はいろいろ面倒なんで省略するけど

オイカッツォ：ズバリ、十一月くらいに「顔隠し（ノーフェイス）」としてイベントに出てみませんか、と言うか……

サンラク：え、やだ……

サンラク：ただ純粋に面倒（めんど）い……

オイカッツォ：それを踏まえて交渉しよう

オイカッツォ：このままだと俺のプライベートがズタボロになる

サンラク：そっちが提示する情報を聞いてやろうじゃないか

オイカッツォ：参加しないと君の家にシルヴィア・ゴールドバーグを突撃させる

サンラク：脅迫ゥーッ！

サンラク：それ世間一般に言う脅迫ゥーッ！

オイカッツォ：うるさい！　どちらにせよもうあいつフィフティシアまで秒読みだから次の第三次新大陸調査で新大陸側に来るんだから諦めろ！

サンラク：え、早すぎね？

オイカッツォ：いやそれ俺達が言っちゃダメなやつだと思うよ

オイカッツォ：まぁいいや話を戻すけど、さっきのは一つめの条件ね

サンラク：えっそのまま進行するの？　正気かよ

オイカッツォ：我がプライベートを守るためなら狂気にだって堕ちてあげるよ

サンラク：お前が堕ちるのはメスの方だろ

サンラク：お前の写真加工して女っぽくしたコラ画像、顔パーツ一切いじられてないの面白すぎな

オイカッツォ：シャラーップ！

オイカッツォ：シャラーップ！！

オイカッツォ：あれのせいで女装罰ゲーム食らいかけたんだからね！？

サンラク：おいやめろ笑う

サンラク：モルドしちゃう

オイカッツォ：モルドする（動詞）

オイカッツォ：ていうか元を辿れば君が派手にシルヴィアと戦ったのが原因だからね？

オイカッツォ：米からプロゲーマー来日して君との対戦をご所望です

サンラク：えぇ……そこはシルヴィア倒したお前がヘイト受け持つべき場面だろ

オイカッツォ：………

サンラク：あっ

サンラク：まぁ十一月なら……

オイカッツォ：はい言質取ったぁー！

オイカッツォ：スクショもしたからね！

オイカッツォ：三枚！

サンラク：迫真すぎる

サンラク：ていうかそういう話なら「名前隠し（ノーネーム）」さんはどうなんで

すかね

オイカッツォ：あれを公共の電波に載せちゃダメでしょ

サンラク：全世界に流れてんだよなぁ……まぁいいや、それはそれとして

オイカッツォ：ん？

サンラク：フラゲでゲーム贈ってきたりとか、完全に外堀埋めようとしてない？

オイカッツォ：気のせいでしょ

サンラク：本音を言うと？

オイカッツォ：スターレインだけはやめろ

サンラク：海外はちょっと……

Ｓｉｄｅ４：ユニーク自発できないマンのユニークな日常（後書き）

なおシルヴィアですが、ＧＧＣでの敗北を経て更なるバージョンアップがされたのでさらに強くなってます

◆

幕末のイベントにおいて大事な事は、まず自身の立ち位置をはっきりさせる事だ。無軌道に刀を振るったところで待っているのは袋叩き、バーサークプレイをするにしても頭を使わないといけない。

とりあえずガチで頂点を狙いにいく連中は歩く台風のようなものなので関わってはいけない。モラルと人間性を捨てた奴等ばかりなので気づいたら頭を串刺しにされてました、とかザラだ。
それにどうせ一位報酬はイベ終了後に獲得者を袋叩きにして行方知れずになるのだから気にするだけ無駄だ。複数本ある二位以下の報酬と違って国宝クラスの武器は雨上がりに見上げた空に浮かぶ虹みたいなもんだ、見れたらラッキー程度でいいのさ。

さて今回のイベントだが、デスゲーム風味という形式に亡霊なんて非物理アバターを用意した辺りに幕末運営の外道っぷりが見て取れる。
デスゲーム中はリスポンできないからその配慮?　バカ言え、壁をすり抜けられるプレイヤーとかドローンとして使ってくださいと言ってるようなもんじゃないか。

奴等はキルスコア兼ドローンだ、絶対に買収して利用する奴が出てくる。今さっき仕留めた「戦争屋」とかな、多分お前に過剰亡霊(キルスコア)くっつけて案山子にしてたのもこいつだぞ。
今回のイベントは最終日まで生き残っているか、最後の一人になっ

た時点でイベント期間終了を待たずに終わる、つまりこの時点で隠れる奴と刈り取る奴に分かれるんだよ。

隠れる奴は自分の危険を極力排した上で他の奴らに相打ちしてもらいたいから亡霊を使う、刈り取る奴等は見えない場所に隠れた奴等を炙り出すために行動制限が実質取り払われた亡霊を使う。

つまり今回のイベントは生存力を要求されているように見えるが、実際は如何に亡霊を上手く扱えるかという戦略を要求してんだよ。貫禄のクソ運営だ、これだから幕末は時々ログインしたくなるんだ。

「えーと、つまり？」

「無差別天誅で勝てるのは最上位の連中くらい、お前は無理だから頭を使え」

元々過疎りがちなゲームってのもあるが、ランキング最上位陣の名前がほとんど変わらないのは奴等が幕末特化した怪物だからに他ならない。

俺がランキング報酬をゲットできたのも奴等に真正面から挑んで勝ったからではなく、効率的なリスポン狩りを編み出したからだし。

「実際、その最上位層ってのはどれくらい強いわけ？　僕もそれなりの腕はあると自認してるけど」

「一回だけこのゲームでチートが流行ったことがあるんだけどランキングトップ１０が変動しなかったくらいヤバい」

チーターの絶対命中火縄銃にクイックドローで勝つって頭おかしいだろ、でも事実なんですよ。最終的にランカー十人に粘着されたチ

ーターが先に音を上げた辺りにこのゲームの深淵が見える。ひたすら笑顔のドリームチームから袋叩きにされるチーターには流石に同情しました。

このゲームの深層に踏み込んだやつほど挙動が狂ってくる、団子の串で刀に勝つとかマジでどうなってるんだ。幕末という金魚鉢の中で共食いの果てに生まれた鮫が十体もいるとか、実は幕末は怪物を封印する結界だった……？

「まぁその分良くも悪くもフォロワーが多いから亡霊が群れを成した百鬼夜行を見かけたら多分その先頭にはランカーがいるから逃走一択だな」

「あれとか？」

「うん？　そうそう、先頭にいる殿様的ちょんまげの奴とか大体イベントランキング八位の「誠意大将軍」……」

亡霊の一人が俺にサムズアップ、俺は親指を下に向けた逆サムズアップ、よく見たら「戦争屋」じゃねーか死んでも血が見たいのか奴は。

そして誠意大将軍氏はにっこり笑顔。

俺、あの人から割と恨まれてるんだよね。

「逃げるぞ京ティメットぉぉぉ！！」

「え？　え！？」

あかん、よりにもよってあいつはあかん。

いつぞやの冬イベの時、俺がリスキルでポイント稼ぎまくってラン

クインしたせいで圏内から弾かれたあいつがランキング報酬を逃した恨みをツケてあるので今遭遇するのはマジでヤバい！！

「天誅天誅テンチュウテンチュウテンチュウヒヒヒヒハハハハハ！！」

「くっそやっぱり捕捉されてたか！」

「ちょ、なにあれ！？」

「幕末に魂を売り過ぎて人間性を喪失した末路！　プレイヤーを見つけ次第刈りにくる暴力装置だ！！」

「人間に対する評価じゃないよねぇ！？」

作戦会議のために使っていた茶屋から飛び出し、現状を理解できていないようだがとりあえず付いてきた京ティメットと共に長屋地帯へと飛び込む。

「ＳＴＲ偏重で助かった、ＡＧＩ偏重ならとっくに射程圏内だ……」

「あ、最近ＡＧＩも上げてますよ？」

「え？　マジぃ？」

並走されてるじゃーん、マジウケるぅー……あっ死

「天ちゅ――――」

「うおお秘技「自前転倒」！！」

「何ィ！？」

説明しよう！　秘技「自前転倒」とは自ら足を引っ掛ける事で俺本人ですら予想できない挙動ですっ転ぶ技だ！　マジで回避が間に合わない時に役立つぞ！

「シィイッ！！」

「鼻先ぃ！？」

完全に虚を突いたにも関わらず、ノータイムで顔面へと投擲された刀を鼻先寸前で回避、さらなる増援が来る前にこちらも刀を抜いて対応の構えを取る。

「ほう……よりにもよって「地布武鬼」ですか……死にたいようですね」

「悪いが切腹はしない主義でな……！　ていうかどうせもう持ってんだろ」

「二本ほど……」

少なくとも去年冬イベの俺以外のランカー、二位から四位のうち二人が犠牲になっていたようだ。

「まぁそれはそれ、これはこれですよね。過去のけじめをつけろと天もそう言ってる、だから私悪くない」

「幕末プレイヤーはみんなそう言うんだ……！！」

まぁとりあえず正当防衛なので俺は悪くない、天もそう言ってる。

「サ、サンラク！　向こうからも百鬼夜行が！」

「なっ……いや待て先頭にいる奴はどんな奴だ！？」

「え？　えーと……」

「チェストぉぉぉ！！」

「おい一応新撰組側だろテメー！！」

示現流使ってんじゃねーぞ！　くっ、戦う場所が狭い。裏通りってわけじゃあないが左右の幅が狭いから気を抜くと壁に押し込まれる。そして向こうは幕末の空気に完全適応した正真正銘の怪物、壁を走って来かねない。

と、なんとか凶刃をかわしていると反対方向から来るらしい百鬼夜行の先頭を見ていた京ティメットがこちらに叫ぶ。

「言葉で説明しづらい！　上半身だけ鎧兜なんだけど下半身は褌で……え、何あれ、木槌？」

「よし来たぁっ！！」

かち合わせられる！　そんなよくわからん変態アバターを使ってるのは一人くらいだ！　他の変態はもっとハッキリしてるからな！！

「やはりイベ限とはいえそれなりの実力は持ち合わせているようですね……っ！」

「生憎……っ！　この手の……っ！　ディレイだのフェイントだのは……っ！　慣れがあるんで……なっ！！」

ＳＴＲの差から受け止めればへし折られる、対ウェザエモン時と同様に回避といなしを多用した立ち回りでなんとか天誅を回避しつつ、開けた大通りへと踊り出す。

「ハロー「十文字大福」、あんたに「誠意大将軍」のデリバリーだ」

「よくわからんが天誅！！」

「ぐぅぅ！　おのれかち合わせましたか！！」

流石はランカー、説明皆無で天誅仕掛ける辺り貫禄の頭のおかしさだ。

だが助かった……「十文字大福」はランキング九位常連、積極的に上のランクに喧嘩を売る狂犬野郎だ。

「っしゃ天誅だコラァァァァア！！」

「じゃ、あとは宜しく」

「あっ、待て！く……！！」

わぁわぁ（無音）で盛り上がり始めた亡霊共と、木槌が地面を震撼させる音を背後に俺は京ティメットと共にこの場の離脱を成功させるのだった……

「……と、まぁあのように不意のランカー遭遇は死に直結するので今イベでは他ランカーに擦りつけるのがベターです」

「七割くらい君個人の問題が発端じゃなかった？」

「俺は過去に囚われない男なので……あってめぇ去年のイベで後ろから刺した野郎だな！　天誅！！」

「二秒で矛盾するのやめて？」

二秒前も立派な過去だよ。

金魚鉢の鮫（後書き）

・幕末ランカー

辻斬り・狂想曲：オンラインに割とガチめに人生を捧げた狂人の集団、一般プレイヤーからは歩く災害扱いされている。

狭い金魚鉢の中で研磨されてきた鮫なだけあって幕末限定なら多分シルヴィアも負ける。他の奴らがダークソウルしてる中、挙動がアーマードコアしてるのがランカー。

とは言えどやはりプレイヤーであることには変わりなく、ランカー報酬目当てに数十人規模で討伐隊が組まれて天誅されることも多い。

ランキング一位？　百人規模の討伐隊を迎撃したとの噂があります。

ちなみに大体○位、というのはランカー間で大凡の力関係は定まっているが他プレイヤーなどの干渉によって度々下克上が起きるため。

大体八位こと誠意大将軍は大太刀でチェスト関ヶ原する新撰組、という矛盾の塊だが二十人くらいなら余裕でチェスト対応できるので強い

Ｓｉｄｅ５：溶原性ドラゴン細胞

◇

「ていうかモルドするって何さ！？」

「正直分かる」

「ルストぉ！？」

どちらかと言えばやはりネフィリムホロウに注力しているルストとモルドの二人組ではあるが、やはりシャングリラ・フロンティアというゲームを完全に無視することはできなかった。
そして同じクランに所属するとあるプレイヤーがもたらした情報、それが実現する日に備えて二人はレベルキャップを解放する施設が存在する森人族の里に向かう……前にモルドのレベリングと単純な興味を解決するために森の中を進んでいた。

「……なにこれ」

「プレイヤー……なのかな？」

「お、ぉお……」

そこで中途半端に潰された蚊を思わせる死に体のプレイヤーを発見した。

「プレイヤー以外だと時間短いとか聞いてねぇよ……クソっ」

「……で、談合の末とは言えモルドの体力八割削った理由を聞きたい」

「ゲームだからいいけどナチュラルに僕を生贄にするのやめようねルスト」

その男、名をヴィジランスと言うらしい。放置するのも忍びないので助けたところ、その男からある程度のアイテムを融通することを条件に「モルドの体力を削る」という奇妙な申し出をされたのだ。

「あれは……まぁいいや、多分俺だけじゃないだろうしな。あれは種族「竜血鬼族（ヴァンパイア）」のパッシブ効果だ」

「種族……」

「竜血鬼族（ヴァンパイア）？」

「竜血鬼族は固有スキル「血分充填（ブラッドチャージ）」で血液を持つモンスターから血……まぁダメージ換算なんだが、ＨＰをゲインして「吸血ゲージ」を蓄積する種族だ」

吸血ゲージが多いほど自身のステータスが強化され続けるが、ゲー

ジが五割を切った時点でステータスダウンが発生し、三割を切った時点でスリップダメージが発生する。
種族単位でハイリスクとハイリターンを突き詰めた種族ということだろうか、とある世界（ゲーム）で「緋翼連理」というピーキーの権化が如きネフィリムを操っていたルストは思う。
「まぁ俺、ソロだし……道中でモンスターを狩っていけば大丈夫だろと思ってたんだが……」
曰く、格上のモンスター相手ではスキル自体が高確率で失敗し、格下のモンスターではゲージの回復量がかろうじて一割という少なさ。NPCはどうやら一般的なホラーのモラルを持っているらしく種族「竜血鬼」を怪物か何かと認識しているらしくロクにコミュニケーションが取れず、かろうじてプレイヤー相手に交渉してゲージを貯めなければ野垂れ死にの可能性が常時つきまとう……
「幸い、リスポンすればゲージは八割まで戻るが……」
「……非効率」
「割とソロ殺しの性能なんだよな……」
額に手を当ててため息をつくヴィジランスに、モルドがふと思いついた疑問を投げかける。
「というか、どうして種族が変わったんですか？　改宗（コンバージョン）って奴ですか？」
未だ実例の少ない……具体的に言えば獣人族の里にまで到達した僅かなプレイヤーのみがその存在を実体験したのみである「改宗（コンバージョン）」シ

ステムであるが、なんの偶然かルストとモルドはその実例と同じクランに所属している。
故にこその質問であったが、ヴィジランスは相変わらず色の悪い顔で首を横に振る。

「いいや……原因は割れてる、ノワルリンドだ」

「……む」

「んぇ」

ある意味ではその名に関する大きな渦の中に飛び込みかけている二人の奇妙な反応に首をかしげるヴィジランスであったが、黒竜の悪名が持つ知名度に反応したのかと納得すると話を続ける。

「あいつにキルされた後から、リスポンする度に変な状態異常が付与されてな……その都度回復してたが、最終的に種族が変わっちまった」

「それは……」

「状態異常名は「感染：フェーズ○」……フェーズ１０で種族変更、まず間違いなく色竜はウィルス的な強制種族変更能力を持ってやがる」

モルドも、ルストも全く同じことを思っていた。

これどうあがいてもノワルリンドに味方するのは悪ルートだな、と。

それはそれとしてクラン「旅狼」の方針を馬鹿正直に告げる必要もなし、最近進化して極悪度が二倍以上に跳ね上がったらしい徘徊型エリアボスを回避して新たなエリアに夢を見るという点で目的が一致したルスト、モルドとヴィジランスは即興のパーティを結成して森を進んでいた。

「俺、チラッと例の三つ首ティラノサウルスを見てきたんだがよ、あれは頭おかしーわ、どう見ても序盤ボスとラスダンの番人くらいバランス変わってやがる」

「意外と知能が高くてハイリスクハイリターンを理解してるから厄介、って聞いたよ」

「……詳しいんだな？」

「え！？　いや、その……」

「……知り合いが単独で突撃した」

「あぁ、どう見ても単独で倒せる性能してないがソロでも検証くらいはできるか……」

咄嗟に言い訳を繰り出しヴィジランスの追及から逃れるルスト、一

人で突撃するような知り合いから齎された情報なので完全に間違いではないだろう。
とはいえまさか件のエリアボスのオプションパーツとして友情（自称）を築いたアホが身内にいるとは口が裂けても言えない。ついでに言えばその犯人は「傷だらけ（スカー）」を〝緋色の傷（スカーレッド）〟に進化させた原因の一人でもある。
なお根本的な元凶は今現在勇者としてかつき上げられているトットリ・ザ・シマーネであるがそれはまだ公にはなっていない。
「にしても、さっきからモンスターとエンカウントしないね」
「そりゃあ……事前に避けながら進んでるからな」
「え？」
「……モルド、隠密系の職業はモンスターの反応を察知できる」
「え、でも秋津茜とか……」
「あれは別枠」
このゲームにおける職業「忍者」は忍者に見せかけたＮＩＮＪＡの類である。一応習得スキルの傾向として本来の忍び、草としての役割を果たすことはできるが、メインで習得する忍術（魔法）はファンタジックな忍術が多い。
そして秋津茜も例に漏れず、口からレーザーを吐き出すドラゴンブレスＮＩＮＪＡである。
「実のところを言えば、俺はこのバカ広い樹海の終点にたどり着い

たことがある」

「……そうなの？」

「あぁ、つっても旧大陸のエリアと違って街とかがあるわけじゃない。恐らくエリアの中に街……いや、ＮＰＣの住む里とかが内包されている。旧大陸は点と線のあみだくじだったが、新大陸は円の中の点だ」

ヴィジランスのもったいぶった言い方……身も蓋もなく言うなら格好つけた言い回しに顔を見合わせた二人であったが、なんとなく言いたいことは理解したので指摘はしない。

「どんな場所だったの？」

「あー、砂漠だ」

「砂漠……」

ちら、とモルドとルストの視線が交わされる。未だ秘されている情報として何か大きな力が働いたとしか思えない幸運で樹海を突破した秋津茜が辿り着いた場所は「湿地帯」であったはずだ。少なくとも湿度的に砂漠と湿地を間違える事はないだろう。

「……分岐？　違う、多分違う景色の写真をくっつけたみたいな」

「何の話だ？」

「あっ、えーと、以前風の噂で次のエリアは火山だと聞いていたので！！」

「火山？　新大陸が樹海と砂漠の二色だけとは思っちゃねーが……まぁ、十中八九デマだろうな。情報のソースはちゃんと調べたほうがいいぜ？」

「あはは……ソデスネ」

少なくとも、今の段階で湿地帯に他のプレイヤーが到達するのは望ましくないだろう。
なんとか誤魔化し切ったモルドは乾いた笑みを浮かべつつ口を滑らせかけたルストに非難の視線を向ける。

「……で、方向は覚えてるの？」

「太陽と月は時間通りに決まった道を進むから偉い、そう思わないか？」

「まさかの天文学」

本日のシャンフロは曇天だったので迷った。

Ｓｉｄｅ５：溶原性ドラゴン細胞（後書き）

確率発症なので必ずしも竜血鬼化するわけではなく、短期間に死にまくったりすると発症確率は上がる

Side6：ハンデを背負うスペードの1

要するに、喪服の女が派手に水切りして散ったあの日以前。森人族の里までのルートが確定せず、迷う内にモンスターに狩られていた頃、プレイヤー達は一種の停滞状態に陥っていた。

それが解決されたことにより、言ってしまえば今プレイヤー達の間では空前のティアプレーテン日帰りツアーブームが訪れていた。

その原因はやはり「サンラク」と「トットリ・ザ・シマーネ」にある。

第三騎士団々長ユリアンを鎧袖一触で片付けた喪服の女が見せた超機動の数々。宙を駆け抜け、刃の上に立ち、幾百もの閃光を一太刀で繰り出す様は強烈なインパクトを刻みつけていた。

風の噂（トットリのお漏らし）によればあれはレベルキャップを開放したことで取得した俗に言う「三桁スキル」なのだという。

ユニークではないレベルアップに伴って解放される、理論上は全てのプレイヤーが獲得し得るスキルの実演と、トットリ・ザ・シマーネが齎したティアプレーテンまでの経路を確定させるマップは、決して少なくない数の……というか大多数のプレイヤーがティアプレーテンに殺到するに十分な理由づけとなった。

そして、大統領ならぬ大棟梁笑みリアの台頭によって生産職の発言力が高まった現環境、葉っぱ一枚で修理と言い張るお粗末な文明力しか持たない森人族に変わってプレイヤー達が立ち上がるのも無理ない事であった。

「こ、これは……」

サイガー０がサンラクから聞いた話ではティアプレーテンは長らく人の手が加わっていない、半分自然の中へと朽ちた場所であった筈だ。
だが今は、数百、下手をすれば千人超規模のプレイヤー達が騒々しく歩き回り、ちらほらとＮＰＣ達の姿も見える喧騒が里全体に広がっていた。

「ぶっちゃけ建築に関しちゃ素人だけど、葉っぱ一枚で壁の修理を主張するのは無理があるだろ……」

「おーい！　誰か木材アイテム持ってないか！？　柱が足りないんだ！」

「二万マーニで売るぜ？」

「ボッタクリすぎでしょ！！」

「なんか最近、剣握るより金槌握る方が楽しくなってきた」

「リアルで椅子とか作り始めたら君も日曜大工の仲間入りだ、歓迎するぜ？」

「骨系アイテムいるかー？　結構仕入れてきたけど」

「え、スカルアヅチ二号建てるの？」

「だったら別の城の名前にしようよ」

「スカルノイシュヴァンシュタイン」

「なげーよ、略してスカノヴ――――ぶげぇ！？」

「あ、ごめん！」

「丸太が後頭部に……これは痛い」

レベルキャップ解放を目的としたプレイヤーが大半ではあるが、それとよりも目立つのはやはり木材や石材アイテムを用いて里の至る所で建築を進める生産職達だろう。

「……ディアレさん」

「任せてくれ、こと擬態の術の腕前ならばそう、私はエムルの師匠なのだからねっ！」

正直に白状すれば、そんなことで張り合ってどうするんだこの兎……と思ったサイガー０であったが、エムルは言うに及ばず秋津茜と

組んでいるシークルゥなどもマントに擬態するので、擬態の術はヴォーパルバニー的には必須技能の類であるのかもしれない。

「私の擬態の術はエムルとは一味違う、装備の装飾を加味してより衣服らしい擬態になることができるのさ……！」

「お、おぉー？」

ふんす、と背中に負ぶさった短めのマントの鼻息が鎧の表面を曇らせる。

未だヴォーパルバニーのパーティメンバー入り、即ちラビッツ兎御殿への入場権を持つプレイヤーは三人しかおらず、その一人たることが発覚するのはあまり都合の良いことではない。

「とりあえず、覚醒の祭壇を目指しましょうか……」

情報曰く覚醒の祭壇は家屋地帯の中心部に位置するらしい、であれば余程のことがない限りは迷うこともないだろう。そう見当をつけていたサイガー０であったが……

「あの、これはもしかして……」

「うおっ、サイガー０！？　本物か！？」

「あ、はい」

「まぁ第二陣なら同タイミングでもおかしくはないか……そうだよ、これは覚醒の祭壇待ちの行列さ。大体二十分待ちってところじゃねーか？」

「そう……ですか」

ティアプレーテンまでのルートが確立されたとはいえ、モンスターの脅威がなくなったわけではない。やはり到達にはある程度のステータスは不可欠ではあるが、それでも生産職が到達できるのであれば戦闘職が群れなして殺到するのも容易いことだ。混雑は当然であり、そして人目が多いという現状はサイガー０にとっては都合の悪い状態であった。

「…………」

「あれ、並ばないのか？」

「思ったよりも、多かったので……」

「平日の昼とかなら割と空いてるらしいぞ？」

「……そう、ですか」

学生という身分上、サボることは困難でありどちらにせよ今この瞬間にレベルキャップを解放することは不可能であると判断したサイガー０はそっと列から離れてさてどうしたものかと思案する。

「……並ばないのかい？」

「多分、ですけど……ディアレさんも一緒に入ると、バレます」

「くっ……我が擬態の術を看破するとは、さすがは神代文明の遺跡と言うべきか……」

それは関係ないと思う、とは言えなかった。

サイガー０はアーサー・ペンシルゴンという人物を「苦手」のカテゴリに分類している。

姉の同級生、という絶妙に頭の上がらない立ち位置もそうであるが、数分会話しただけでも自分の内面を見抜いてきそうな、そんな悪寒を感じるからだ。

「やぁやぁやぁ、こんなところで奇遇だねぇサイガ妹ちゃん……いやホント、奇遇奇遇」

「は、はぁ……」

「ところで所在なさげにモンスター狩りをしてた辺り、やっぱり覚醒の祭壇には行けなかった感じかな？」

何故それを、とは聞かない。アーサー・ペンシルゴンの生態に詳しい識者曰く「何も知らないくせに五分くらいで情報を集めきって知ったかぶりを完成させる魔王」「一番最適な対処法は無言で仕留める事」と表現されるようなプレイヤーだ。

少なくとも少ない情報の中からおおよその顛末を割り出すくらいはあまりに容易いのだろう。

「んふふふ、背中にプラスアルファをくっつけてちゃ精密検査なんて受けられないよねぇ……でも大丈夫、私のプランに身を委ねれば万事上手くいく、だから……ね？」

「プラン……」

「そうとも、私はしっかり蒔いた種をしっかり育てるタイプさ……あー、そう考えると農家適性あるのか……いやいや土弄りして朽ち果てるにゃ私はまだ若い、うん！　よし立ち直った……」

勝手に自己解決する様は自問自答でキレる想い人に通じるものがあるが、それはそれと脱線した話題を元に戻したペンシルゴンは聖杯の力で変貌した男の姿で眼鏡をくい、と指で持ち上げると不敵な笑みを浮かべる。

「私にとってサンラク君はババ抜き的な意味でジョーカー、カッツォ君はポーカー的な意味でジョーカーだけど、君はまごう事なくエースって奴さ……だからこそ最高に輝ける運用をしてあげる。その為に手伝って欲しい事があってさぁ」

「……一応、話だけは聞きます」

にぃ、と口の端を吊り上げたペンシルゴンは簡潔にそのお願い(クエスト)の内容を告げる。

「あるプレイヤーを探していてね……黒剣、元黒狼所属なら名前くらいは聞いた事があるんじゃない？　聖槌ムジョルニアの所有者、鍛冶師(ルビ:恐らく全プレイヤーの中でも最高峰の生産職)……イムロンちゃんをどうにかして見つけたいのさ」

Side6：ハンデを背負うスペードの1（後書き）

イムロンは正確には一目龍（イームーロン）、つまり隻眼の龍でありひいては一目連、すなわち日本神話における鍛冶の神「天目一箇神（あめのまひとつのかみ）」に由来する結構凝った背景のあるプレイヤーネームなのですがいくらその手の知識が豊富なゲーマーだからといって誰も彼もがそんな分かりづらい（そもそも日本神話の神をもじった上に読みが中国語）名前を察してくれるはずもなく、普通にスルーされている系のプレイヤーなので何が言いたいかというとちょっと感性がアレな根っからの生産職ですね

コラテラル・サクリファイス

◆

ああなんて清々しい朝だ、やっぱり自分の思い描いた未来予想図をそっくりそのまま……いや、それ以上に完璧な形で実現できた次の日の朝ってやつは最高だ。窓から差し込む朝日すらもが俺を祝福しているように思える。

「いやはや、まさかランカー二枚抜き出来るとはなぁ」

幕末ランキング大体四位「針千本」こと「むっちりタングステン」、そして幕末ランキング大体三位「唯一剣」こと「メタルマシュマロ」……偶然にしては出来過ぎなほどに対照的なこの二人のプレイヤーは争うことが宿命であると言わんばかりに熾烈な争いを繰り広げるランカーだ。大体合えば天誅合戦になるこの二人を仕留められるとは………こういうのをジャイアントキリングと言うのだろうか。

正直次に幕末にログインするのが怖くて仕方がない、偶然の積み重ねによる結果とは言えランカー二人のスコアをそっくりそのまま奪い取った今の俺はイベントランキング首位に躍り出てしまった。効率的リスキルを徹底的にガン回ししてすら五位が限界だった幕末で、だ。

つまりもはや俺は有象無象ではなく明確に仕留めるべきターゲットとしてランカー達にロックオンされたと考えていいだろう。とりあえず「吹雪狩」……まぁ例の誠意大将軍に狙われるのは不可避として、不動のランキング一位ことレイドボスさんに狙われるのが割と致命的というか……正直幕末のエンジン下で奴に勝てるビジョンが

全く思い浮かばない。ウェザエモンにタイマン挑む方がまだ勝ちの目がありそうなんだよなぁ……

「二位をどうにかして味方につければ……ダメだな、大判小判の詰まった袋を放置する理由がない」

幕末最強のプレイヤー、あんまりにもあんまりすぎて洒落た二つ名を与えられることなく「レイドボス」という身も蓋もない異名で呼ばれるプレイヤーに唯一タイマンで渡り合えるプレイヤー……幕末ランキング二位、「俺達の勇者」。奴と一位をうまい具合にぶつけられれば……いや無理だな、レイドボスさん強すぎるんだもの。

「……ああ、だが刀と身一つで戦う以上、無血の勝利ってのはあり得ないものさ」

想定外のジャイアントキリング、ノーリスクってわけにはいかなかった。尊い犠牲があったからこそ、俺は身にあまる栄光を手に入れることができたのさ…………………

【旅狼】

京極：サンラクはどこだ！！！！！！！！！！！

京極：サンラクの！！！！！！

京極：クソッタレは！！！！！！！

京極：どこだっっっっっっ！！！！！！！！

鉛筆騎士王：うわ、すごい荒れてる

オイカッツォ：なんだなんだ

京極：あの野郎絶対許さない！！！！！！

京極：私の信頼を返せ！！！！！！！

サンラク：いとおかし

京極：お前ええええええ！！！

サンラク：愚かなり京ティメット………幕末で背中を向ける事がどれほど愚かなことか理解できていなかったらしい……

鉛筆騎士王：あっ（察し）

ルスト：どういうこと？

オイカッツォ：イベント中なんだっけ？　何やらかしたのさ

サンラク：亡霊と談合した上で京極を騙くらかして怪獣大決戦に飛び入り参戦させて火薬樽＆油壺で長屋地帯一帯ごと諸共に爆殺

鉛筆騎士王：鬼かよ

サンラク：ランカー二人分のポイントが入った結果、今現在トップ独走中です

オイカッツォ：マジかよあの魔境で瞬間風速でもトップに立つとか相当じゃない？

サンラク：レイドボス（プレイヤー）と勇者（こちらに牙を剥く）に狙われるんだよなぁ……

オイカッツォ：ああ……

ルスト：何のゲーム？

サンラク：辻斬・狂想曲：オンライン

モルド：調べた限りじゃ割と普通のゲームというか結構ほのぼのしてる感じだけど……

鉛筆騎士王：それ擬態だよ、幕末の本性はサイコパスしか生き残れない地獄だよ

オイカッツォ：あながち間違いなじゃい

サンラク：若干違うぞ、思考回路が幕末仕様に塗り変わるだけだよ

鉛筆騎士王：洗脳より悪質な人格汚染じゃなーいのー？

京極：お前本当許さないからな！　末代まで祟ってやる！！！！

サンラク：→こちら、幕末汚染５０％から７０％まで進行した患者でございます

オイカッツォ：→さらにこちら、表面上はマトモな風に擬態している幕末汚染度１００％超えの末期患者です

サンラク：バカ言え、１００％超えの幕末汚染患者はもっと頭がおかしい

ルスト：逆に興味が湧いてきた

サンラク：ちなみに初心者が一番最初に体験するのはチュートリアルガン無視でＰＫ＆リスキル仕掛けてくる先達プレイヤー達の襲撃な

モルド：………？

鉛筆騎士王：なんというかモラルが世紀末から一周してもう一回世紀末に突入した感じだよね

鉛筆騎士王：どいつもこいつも爽やかに話が通じないから困る

京極：次会ったら絶対天誅してやる………滅多斬りに天誅してやる……！

京極：覚悟しときなよ…………

サンラク：問、今の状況に相応しい表現を述べよ

オイカッツォ：死人に口無し

鉛筆騎士王：負け犬の遠吠え

ルスト：生者は死者の為に煩わさるべからず

モルド：さ、塞翁が馬とか……

サンラク：正解は「往生際が悪い」でした

サンラク：亡霊の言ってることちょっとよくわかんない……

サンラク：はよ成仏して……

京極：くおぉぉぉおおおおおおおおおお…………！！！！

鉛筆騎士王：字面だけ見ると悪霊退散シーンみたいなのがちょっと面白いよね

およよ……随分と嫌われてしまったようだ。そりゃ確かに亡霊たちに「ジャイアントキリングみせるよ！」って言いくるめて百鬼夜行を解除した上で「あいつらちょろいからちょっとポイント稼いで来いよ」って京ティメットを騙くらかして四位、三位の激突に割り込みさせた上でどう見てもそういう用途に使えと運営が言っている街のど真ん中にあるＮＰＣ花火職人宅に置かれた火薬樽やらなんやらを投下してまとめて爆殺したけど……

天がやれって言ったんです！　だから俺は悪くないし、仮に俺が放り投げた種火が出火元で大体縦横２５メートルくらいの長屋地帯が吹き飛んだとしてもそれは不幸な出来事だから明日への希望を信じて頑張ってほしい。というか定期的に爆発するしな幕末世界……城下町のど真ん中に花火職人の倉庫置くなよどう見ても設計ミスだろ。

まぁ火縄銃の火薬やらをロハで補充できる場所でもあるから大規模爆殺施設であると同時、石油プラットフォーム的な資源ドロップエリアとして銃メインのプレイヤー達が火薬確保のために熾烈な争いを日々繰り広げている最前線でもある……そして流れ弾で着火して爆発オチするまでが幕末の日常風物詩だ。

ひどい時は爆発オチ↓リスポン↓別の場所で同様のオチ、を繰り返して一日で何度も地上で玉屋鍵屋と叫ぶことになる。一応ロケーション的には花火職人の火薬保管所なのでカラフルな爆発なんだよね……むしろ吹っ飛ぶプレイヤー見る方が楽しいんだけど。

「さて、と」

本当はちょっと楽しんだら風雲プレジ伝に戻るつもりだったが、こ

うなったらとことんやってやろうじゃないか。今日か明日には命の灯火がかき消えていそうだが、不発弾のようにログアウトし続けるよりも花火みたいな一瞬、派手に輝いて消える閃光のように暴れてやろうじゃないか。

ログインと同時、ログインログボ天誅を狙った新選組を隊の規律に則り粛清していると、ジト目の視線を感じ取る。

「おっ、未練たらったらの京ティメットさんチーッス！！」

「…………！！」

無言で親指（サムズアップ）を下に向けた悪霊に取り憑かれた、霊媒師とかいないかな……？

探したらマジでいた、業務用扇風機の最大風力喰らったみたいな感

じに消し飛ぶ京ティメットの姿は正直録画しなかったことを強く後悔した。

コラテラル・サクリファイス（後書き）

騙されたとはいえイキりにイキってランカー同士の決闘に割り込み、色とりどりの爆発で空中に打ち上げられ、恨み晴らさでかと怨霊になるも速攻でお祓いされた京極とかいうギャグ要員。どうしてこうなった？　幕末だからさ……

ちなみに亡霊アバターも普通にリスポンするので五分で再補足して取り憑き直した模様、ランカー二人も一緒に付き纏ってた

結構聞かれることが多かったので金魚鉢の鮫こと幕末ランカー解説

1位：レイドボス
最強の幕末プレイヤー、バグも仕様も全て把握してただ勝利のために刀を振るレイドモンスター（プレイヤー）。ぽわぽわした天然さんだが殺戮スイッチが乱数で起動するので前触れなくいきなり襲いかかってくる。瞳孔を見開いた笑顔で袋叩きを迎撃殲滅する姿は完全にホラー

2位：俺達の勇者
準最強の幕末プレイヤー、レイドボスさんを袋叩きにする際にこの人がいないと百人規模すら迎撃殲滅されたのでいつの間にか勇者として祭り上げられていた。とはいえ幕末プレイヤーな事には変わりないので遭遇したら高確率で襲いかかってくる

3位：唯一剣

「死んでリスポーンするまで一本の刀しか使わない」という縛りを己に課しているプレイヤー。逆に言えばそれ以外は一切縛ってないので不意打ちだってするしただ一本の刀を普通にぶん投げたりする。折れたら素手で殴りかかってくる、縛ってる割にフリーダム

４位：針千本
大量の針を投擲することで的確に急所を射ち抜いてくる自称「ダーツで負けたことがない」プレイヤー。団子屋を根城にしており油断してると両目に串が飛んでくるが、実はアイテムの上限関係で手持ちの針は９９本しかない。残り９０１本は団子屋で現地調達……！！

５位：紅蓮寧士（グレネイド）
鍬に花火を乗せて投石機よろしくぶん投げてくる幕末・ダイナマイト・プレイヤー。「刀雨」共々幕末の天気予報をトチ狂ったものにしている元凶、なお地味に「爆発オチ最多経験者」という称号も持っているがそれを言った奴はそいつだけ天気予報が「一日中花火」になる。拠点にしている火薬庫を爆破した奴は一週間天気予報が花火固定

６位：あいつ（上を指差しながら）
極めて珍しいパターンとして上を指差す、というゼスチャーとセットな二つ名（？）を持つプレイヤー。というのも幕末では珍しい弓矢を扱い、高所に登って上から不意打ち狙撃をするプレイヤーなため他と比べてもヘイトが高いのが理由。とはいえ拠点（足場）防衛の巧者なので攻略難易度は高い。なお足場ごと爆破する紅蓮寧士（グレネイド）は天敵

７位：デュラハン
もはや西洋、実力自体はランカーに相応しいが特徴的に特筆すべき点があるわけではない。だがその最大の特徴は「ＮＰＣの天誅に熱意を向けている」という点であり、質屋襲撃のスペシャリスト。あ

る意味アイテム保管の絶対安全圏である質屋を壊して預けたアイテムをばらまくデュラハンは人気とヘイトが半々の状態。名前の由来？　将軍天誅に失敗して大体打ち首にされているから。お前の首着脱式？

8位：吹雪狩
とあるプレイヤーが持つとある武器を手に入れることに執念の炎を燃やすプレイヤー。見た目こそギャグ寄りなちょんまげだが「俺達の勇者」と「針千本」を謀殺天誅した腕前は一定の評価を得ており、大太刀の取り回しはイロモノが多いランカーの中では正統派な強さを誇る。地味に歴史に強いプレイヤー達からは「示現……新選組……うーん」ともにょられている

9位：狂犬、逆半裸
積極的に上位ランカーへとケンカを売るファイティングスピリッツの塊、ついでに上半身鎧兜下半身褌でハンマー装備という変態の塊でもある。ランカーなので当然格下相手には強いが、逆に言えば格上はもっと怪物なので大抵はイベントの序盤でレイドボスさんとかにボコられてスコアを稼げないでいる。今回のイベでは「いのちをだいじに」を習得した結果8位が向こうから転がり込んできたのでちょっとうれしい

10位：被下克上
どこの業界でも「10位とか大したことないだろw」と侮られる宿命故、11位以降のプレイヤー達から最初に狙われる悲しみを背負ったプレイヤー。とはいえ全員迎撃しているので普通にランカーとしては強いのだが、イベ中はほぼ確実に格下から粘着されるので上位を狙う暇がないという悲しみの戦士。ので襲い来る敵にはマジで容赦しない、三枚おろしにする

Ｓｉｄｅ７：ものすごくうるさくて、ありえないほど平和（平時比較）（前書き）

どうせなので幕末続行、こうなりゃとことんクソゲー書いていこうぜ！！

Ｓｉｄｅ７：ものすごくうるさくて、ありえないほど平和（平時比較）

◇

ひゅー……どろどろどろ……

「おっ、君は京極ちゃん！　「唯一剣」と「針千本」にノリノリで喧嘩売った癖にもろとも爆殺された京極ちゃんじゃないか！」

「ウェーイ！　ちとクサかったけどかっこよかったぜー！」

「一緒にブレイクダンスしましょうよ！　霊体だからめっちゃ回るわよ！」

「しかし食い物を食えないのがちと不便だな」

「あれ、知らねぇの？　無縁墓地エリアのお供えは霊体でも拾えるぞ、饅頭の幽霊とかいうよくわからんアイテムだけど普通に食える」

「いや、流石に墓地のお供え物は……あ、俺たち供えられる側か！」

「「「あっはっは……この饅頭カビてる！！」」」

うるさい、あまりにもうるさい。

怨霊として付きまとうのも飽きたためになんとなく亡霊達の集まりへと混ざってみた京極であったが、想像以上の騒がしさに思わず眉間にしわを寄せる。

亡霊という、お祓い以外では死なない……つまり天誅出来ない存在

になったプレイヤー達は普段の笑みと暴力で形成された日常を一休みし、和気藹々と生存者達の駆け回りを眺めては盛り上がっていた。

「てかさ京極ちゃん、君「祭囃子」と知り合いなの？」

「祭……あぁ、サンラクか。知り合いと言えば、そうなのかな……一応別ゲーで知り合った縁でこのゲームを勧められて」

「このゲームを勧めるとは鬼か何かか……？」

「いや、適性を見抜いた結果だろう。京極ちゃんは幕末適性高めだし」

「キルされる瞬間の「絶対復讐してやる……！」って眼差しいいよね、ゾクゾクしちゃう」

「まぁ次来たら来たで袋叩きにするんだけどね！」

「尖ったプレイヤーは大抵ランカー狙いに成長するから……狂犬とか」

「あいつは今回一味違うぞ、毎回レイドボスさんの経験値タンクになってたところを今回隠れてやり過ごすことを覚えたからな」

「火を使うことを覚えた類人猿のごとき進歩ね……」

「おいおいパラダイムシフトかよ」

ワイワイガヤガヤ、と騒ぐプレイヤー達は普段出会い頭に脳天を叩き割り合うような関係とは思えないほどに朗らかだ。

その光景に京極は過疎ゲーゆえの身内感を感じつつも……何人か自身を手酷くキルしたプレイヤーを見つけ、胸の内に生じた暖かな感情を業火の如き憎悪にまで温度を上げる。

「よっす」

「あ、唯一剣さんちーっす」

「火薬庫利用は読んでたけどまさか既に制圧済みだったとは読めんかったわー、やっぱ火薬って人類の偉大な発明やね」

「団子の補給が足りなかったのが敗因だな、そもそもてめぇ一々団子屋で張っててんじゃねーよ！」

「そりゃ「針千本」の弾薬庫とか押さえるやろフツー」

そこにランカーが二人混ざれば騒々しさは更に増す、それが本来こんな段階で脱落するはずのない上位ランカーであれば尚更に、だ。

「あれなー、俺達「黄金鬼」のオークションに釣られて黙ってたけど結構前から樽動かして包囲網作られてたよ」

「せやよね！　明らかに無関係な長屋まで連鎖爆発してたし誘い込まれてたかぁ」

「ていうか黄金鬼イチト質屋流しってマジ？　あれ見た目良いから欲しいんだよね」

イチト質屋、とはこのゲームにおける特殊な売却形態を指す。

辻斬・狂想曲：オンラインでは「質屋」はいわゆるアイテム倉庫に

相当する。アイテムを預け、金を受け取ることで擬似的な倉庫として利用するシステムだが例外として一日十割（イチト）、「一日中に十割返済しなければ金の所有権がプレイヤーに移る代わりにアイテムが没収される」という売却システムが存在する。

そしてイチト質屋で差し押さえられたアイテムは質屋に商品として並べられる。これを利用して「レア武器をイチト質屋で流すので言うこと聞いて」と交渉するテクニックがある。

プレイヤーが質屋にしまってある、即ちキルしたところで奪えないレア武器などが市場に流れる可能性を持つ。単純な実力で言えばランカーが参戦した時点でほぼ決着がつくのでマネーパワーを参照するオークションはランキング外のプレイヤーとしては都合がいい。

何より、質屋主催のオークションなので落札後即質に入れる事ができる。つまり金だけ支払って奪われるという事もない。

質屋を爆破することで預けられたアイテムを全開放することもできるが……それはそれで強いＮＰＣが湧いて来たりするので色々制約がある。

「あれなんだよなー、いつだったか目立ちたがりのバカが「黄金鬼」使ってランカーに挑んだから四本中一本ロストしてんだよな」

「スイッチが入ったレイドボスさんが割り込んだのは割と事故だからしゃあないって結論出たやろー、タイマンじゃ無理やろあれ」

「ランキング報酬は実質美術品だと何度言えば……」

「おい！　レイドボスさん付きの方から速達来たぞ！　向こうが動いた！！」

何！？　とプレイヤー達が騒然となる。このゲームにおいて「レイドボス」と呼ばれるプレイヤーは基本的に何か目的を持って動くことは稀だ。気の向くままに街を歩き回り、朗らかに挨拶した次の瞬間にはその相手は死んでいる。

そんなレイドボスが明確な目的を持って動いた、既に幾人かがレイドボスの方面へと空を浮遊して向かい始めていた。

「やっぱ祭囃子を狙うのか？」

「いやどうだろう、レイドボスさんって好物は最後に残す派じゃん？」

「毎回私達の勇者が半殺し状態で最後まで残されるの、なんかロマンス感じない？」

「ああ、胸がキュンキュンするな……恐怖による萎縮で」

「好物云々って要するに捕食者と被捕食者の関係性だよね？」

「そ、速報！　「被下克上」と「あいつ（くいっ）」が天誅された！　「紅蓮寧士（グレネイド）」が動いたぞ！」

何故か何もない空を指差しながら浮遊して来たプレイヤーの言葉に、辺り一帯が騒然となる。

二つ名を持つプレイヤーは手段の差はあれど皆実力者だ。京極は具体的にランカーがどんな称号で呼ばれ、どんなプレイスタイルであるかを把握しきってはいないが、それでも周囲の反応から状況が大きく動いたことを察する。

「今回のイベはやべぇな、リスポン禁止だから状況が一気に動きや

がる」

「まぁあいつ（くいっ）は紅蓮寧土が生き残ってる限り王手状態だったからな……」

「やっぱ花火の火力ナーフすべきだって、毎回落下死してるよ俺？」

「本人登場かよ、それよりレイドボスさんが動いたぞ！！」

「優曇華の花が咲いたみたいな騒ぎだな」

「三千年に一度クラスとかレアケースが過ぎるだろそれ！」

死後の方がやかましい、しかも時々非常に高い知性（インテリジェンス）を感じさせる会話が飛び交うのがなんとも言えないイラつきを誘発する。

何故だ、何故だろう。

京極は直感的に衝動を胸に抱いた、こいつら天誅してぇ……と。

（しかし流石に自分より学があるのがイラついたのでＰＫしました、というのはちょっと………あ）

そこで京極は気づく……否、悟る。

「あぁ、だから……そういうこと、なんだね」

アイテムが欲しいから、経験値効率、リハビリ、単純にムカついたから……誰しもが使命を帯びているわけじゃない、でも心という海から出て来たこの想いを抑えることはできない。

だからこそ、このゲームにおけるプレイヤー達の行動原理を理解したプレイヤー達は次のステージに進む。
即ち衝動を遂行するための精神的な納得、一人を五人で袋叩きにするとしても堂々と誇るために幕末プレイヤーは皆一様に同じ言葉を使う。

「天誅……！！」

その二文字は魔法の言葉、あらゆる行動を天由来であるからと許容する責任転嫁のマジックスペル・キーワードである。
ゲーム的に何か意味があるわけではない、特にステータスが上がるようなこともなければ振り下ろした刃や放たれた弾丸に補正が入るわけでもない。

だが何よりもそれらを操るプレイヤー本人の迷いが払拭される。モラルも、善意も、常識も、自分が定義する神かり超自然存在なり……全てひっくるめて「天」があらゆる所業を保証してくれる。
だからこそ幕末プレイヤーは皆、「天誅」の二文字を愛し、唱えるのだ。

「ほう、いい目をするようになったな……」

「歯車が噛み合いおった、あん子は強うなるで……」

「刀一本で縛るにしても最低限の他スタイルの確立をした方がいい、己を知る事が敵を知ることに繋がるからな」

「え、これランカーは何か言わないとダメなパターンです？」

「いや、俺は「唯一剣」と「あいつ（くいっ）」がいきなり強キャラ漫才始めたからノッただけ」

とりあえずいつかこいつらは仕留める、そう京極は強く決意した。

もう迷わない、だって……

…………天がやれと言ったから。

幕末の法則に適応した怪物が産声をあげる一方で、地上では状況が大きく変動していた。

具体的に言うならば幕末総合ランキング一位、「レイドボス：ユラ」と幕末総合ランキング圏外、「祭囃子：サンラク」が対峙したのだ。

Ｓｉｄｅ７：ものすごくうるさくて、ありえないほど平和（平時比較）（後書き）

天誅とは即ち味方を後ろから刺そうが爆破しようがログインを狙って首を叩き落とそうが「天にやれって言われたから俺悪くない」としらばっくれる魔法の言葉

つまり幕末プレイヤーは皆、天という名の運命の被害者……！！

今日も元気に天誅天誅！

金魚鉢の怪物（前書き）

呼符星5、フィクションではなかったのか……

◆

「団子ね、大福？」

「羊羹で」

「いいね羊羹」

参った、本当に参った。いくら幕末が世紀末円卓に匹敵する魔境だからと言って……いや、ドロップ率の渋さから効率を求めた果ての円卓と違ってこっちは常識の汚染の結果だ、厳密にはカテゴリが違うか。

ともかく、だ。いくら幕末が幕末だからといって、さらに言えばデスゲーム風味のイベントだからと言って、いきなりラスボスに挑むつもりはないいんだけどな。

その身もふたもない二つ名に相応しい強襲(レイド)へ対応できたのは、偏にシャンフロで既に似たようなパターンを経験していたからに他ならない。

そしてその経験が、このクソ攻略難易度の高いプレイヤー……レイドボス「ユラ」と相対しながらも俺を活かす唯一の命綱となっていた。

「…………！」

「…………？」

「…………！！」

周囲の亡霊どもが静かだ。暫定一位と歴代一位制覇者が茶屋に並んで和風ティータイムと洒落込んでいるのだ、そりゃ誰だって気になるだろうさ。

だがそちらに気を回している暇がない、なんかさっきまで俺に取り憑いていた怨霊が見えた気がするが、すぐ隣にいる不発弾から意識を逸らせばその瞬間首が飛んでいそうな不安をどれだけ拭いても拭えない。

「抹茶……」

これだ、抹茶がなんだと言うのだ。だが逡巡は死に直結する、一時期プレイヤーの間で流通した「レイドボスさん攻略パターン虎の巻」ではレイドボスさんの奇妙な生態について検証班の考察が載っていた。

そもそもレイドボスさんは見るもの全てを無差別に襲撃するような単純な思考回路をしていない。というかむしろ受動的と言ってもいい。

偶然十字路でバッタリ遭遇したが普通に挨拶して別れた、という証言もある。

「緑茶でいいでしょ、そこまで気取ったティータイムでもあるまいし」

判定やいかに……よしセーフ、セーフ、基準が全くもって意味不明だが首が飛んでないならセーフだ。

ただ、検証班曰くレイドボスさんは会話の中に大量のフラグが埋まっているようなもので、基準不明だがそのフラグに抵触すると攻撃判定が出る。少なくとも二秒以上返答に迷ったりどもったりすると攻撃判定だ、あと関係のない会話をしても高確率でアウト。

「スコア、すごいね」

「それほどでもない」

レイドボスさんとて無敵ではない、だが無双はする。基本的にイベ後には大抵レイドボスさんｖｓその他による大規模討伐が行われ、一位報酬が行方知れずになるのがお約束ではあるが、大量のプレイヤーに対応できる時点でレイドボスさんは色々と隔絶している。あと見た目と中身の乖離が常のフルダイブゲーにおいて、声も立ち振る舞いも見た目と完全合致したベビーフェイスのレイドボスさんは結構な人気を誇る。

そのため、レイドボスさんの研究は日夜繰り広げられている。ソロとは言わない、仮に四人くらいでレイドボスさんを天誅できたならばそいつらの名は栄光と共に記憶されるだろう。

「ふぅん……一位、狙ってるの？」

不味い、思考速度を上げろ。

「……そりゃ、妥協は結果が出てからすればいいからな」

遠回しなジャイアントキリングを匂わせる言葉を発してしまった自分に歯噛みしつつ判定を待つ、いっそのことこちらから攻撃を仕掛

けるか？　いや、この狭い場所は互いの射程距離だ、確殺の保証がない以上は手を出すのは遠回しな自殺か。

「へぇ」

会話が途切れる、やばい危険な時間帯だ。一説によればレイドボスさんは独特の「リズム」を持っているのでは、と考えられている。要するに即興で更新され続ける楽譜だ、音を外したり緩急が狂えば天誅される。おいおい、音感を問うとか攻略難易度高いぞレイドボス。

舞い散る桜吹雪の模様に染められた維新の羽織と、堂々たる「誠」の一文字を染めた新撰組の羽織が並んで和菓子をもしゃる。うーん雑に甘い、食感だけ割と頑張っているのが逆に虚しさを感じさせる。食感って要するに感触だからな、再現は割と簡単らしい。

「倒すの？」

レイドボス語とでも言うべきレイドボスさんの話し方は、基本的に名詞が抜け落ちている。だから混乱する、そして天誅される。状況を固定しないといけないんだ、俺とレイドボスさん以外何者も存在しないのであればレイドボスさんの話す言葉は全て俺宛ということだ。

「妥協は無しと、そう言ったぜ？」

打てば響く、とでも言うべきか。親しい友人とファミレスに入って、閉店時間まで話していられるくらいの噛み合った対話をレイドボスさんは強要してくる。

殺意と友好が表裏一体に噛み合ったコミュニケーションを初対面の

相手に強いるとか正直他ゲーだったら頭のおかしい奴扱いされて干される人間性だと思うが、あいにくここは幕末で彼はレイドボスさん。
もはやプレイヤーとして認識されてないよねこの人、意味深な台詞を話すボスキャラ扱いされているからこそこの人はこのゲームに受け入れられている。

だからこそか、金魚が海で生きることはできない。強かさを欠いた金魚は金魚鉢の中でしか生存を許されない。
どれだけ鋭い牙を、何者をも斬り伏せるプレイヤースキルを持っていたとしてもこの人はこのゲームにこそ安息を見出すのだろう。

ようし、思考がポエミィに染まってきた。見てるかレイドボスさん考察班、今虎の巻はバージョン３．１と聞いているが今この瞬間に大幅更新してやる。

「ユラさん、俺はあんたを討つぜ」

ざわり、と亡霊達に動揺が走る。レイドボスさん相手にこちらから話しかける、と言う行為はロシアンルーレットに近い無茶だ。
だが諸君、俺達は既に答えにたどり着いていたんだ。そう、リズムだよ諸君。

「俺の天がやれと言ってる、だから――――っ！？」

殺気！　レイドボスさんじゃない、これは……上か！！

「貰ったぁぁあ！！」

「紅蓮寧（グレネイ）――――」

奴は範囲攻撃の使い手だ、レイドボスを茶屋に留める俺と言う楔を見て動いたか。骨太の維新志士が鍬を器用に操り、火のついた大玉花火を屋根の上からこちらへとぶん投げる。

流石はランカー、着火タイミングが完璧だ。地面に着弾すると同時に起爆するように調整されている。避けられるか？　いや、無理か……だが、奴は致命的なミスを犯した。

千載一遇のチャンスを前に気配を漏らしてしまったのが運の尽きって奴だ、俺ですら気付けたのなら当然――

「惜しい、ね？　惜しい、惜しい」

一閃。レイドボスさんが握る見窄らしい、刃が錆び切った刀が振るわれる。

その鋒には大玉花火の導火線が着火部分だけ綺麗に切り取られて載っており、起爆の火を失った大玉花火が虚しく地面に落ちる。

「錆光(さびみつ)……横幅一センチあるかどうかの導火線にクリティカル入れるのかよ」

その気になれば誰でも手に入れることができる錆び切った刀は全てを切り裂くか自壊するかの極端な二択を常に使い手に求める、そしてレイドボスさんは常に同じ答えを選ぶことができる……と彼相手に装甲のパラメータは無いに等しい。

怪物め、幕末の物理エンジンに完全適応していることを差し引いてもイかれてやがる。

俺が気付いた時には既に動き出していたレイドボスさんの左手が霞む。最短の動きと最速の操作で放たれた短刀が長屋の壁に突き刺さ

り、それを足場に華奢な少年の身体が屋根へと跳躍する。
惚れ惚れするようなウィンドウ操作だ、壁と空中という有り得ない筈の場所に最初から道があったかのような滑らかな動きで紅蓮寧土とレイドボスさんが相対する。
だがもう手遅れだ、オーディエンス達が状況を把握するよりも前に決着はついていた。

「天誅」

「ぐ、こ……！？」

錆びついた軌跡が上から下へと左右に振ること四閃。辞世の句すら許されることなく、雑に組み立てたダルマ落としが崩壊するように紅蓮寧土の身体が崩れ落ちた。
わぁ、と亡霊達が盛り上がる。まぁいつもなら自然な流れでオーディエンスの殺戮に繋がるからレイドボスさんの戦闘を落ち着いて観戦するのはほぼ不可能だしな。

問題は爆発バカがちょっかいをかけたせいでスイッチの入ったレイドボスさんの次なるターゲットは自動的に俺になるってことですよ。

「――」

あまりに速い。屋根から跳躍、滞空中にインベントリから槍を取り出し、地面に対して垂直に刺す。その柄尻を踏んで再跳躍、空中で三回転入れて大上段から俺を真っ二つに……

「……？　すり抜けた？」

「最初から覚悟を決めてのティータイムだ、備えあれば憂いなしってな」

見様見真似の達人芸、風をも断つ閃き、全米一の流星、最速の狩人……あんたとの戦闘経験は乏しくとも、あんたに匹敵する理不尽との経験には欠かしていなくてな。

紙一重の最適化こそが竜宮院　富嶽の真骨頂。その真髄は思考のショートカットと足捌きにこそある。

本家本元と同性能、とはいかないがあらかじめどんな攻撃が来るか分かっていれば役割模倣と本家の隔たりを埋めることは可能だ。

「死ぬまで全速力だ」

レイドボスさんの頬が吊り上がった。

金魚鉢の怪物（後書き）

レイドボスさんはサヴァン症候群的な人、特定分野（フルダイブVR）に関して天才的な才能を持つが「自身の中にある会話のリズムが崩れると強い不快感を感じる」という性格というか人間性が敵を作りやすい為にシルヴィアと同等かそれ以上の才能がありながらゲームは不得手だった。
ちなみにサンラクがやろうとしたのは会話の主導権を自分が握ること、つまり自分がリズムを作る側になろうとした。

だけど幕末なら大丈夫！　みんな笑顔で袋叩きするし、爽やかな復讐報復制裁が横行してるからね！！

スイッチの入ったレイドボスさんは止まらない、具体的に言えば獣じみた祭知力で半径２０メートル圏内ならプレイヤーの位置を高確率で割り出してくる。ホラーゲームのスラッシャーだってもう少しマイルドだぞ。

その戦法は流動的で不安定、リアルで剣の心得とかはないんだろう。やったらめったらに振り回される剣はトーシローのそれ、とは剣道経験者の言だ。
だが喧嘩殺法はボクシングに劣るのか？　否、過程の差異は結果にまで影響を及ぼさない。リングスタイルだろうがストリートスタイルだろうが、行き着く先は相手への暴力だ。
であればレイドボスさんの剣はまさに殺人剣、斬れば死ぬのだからそこに型もへったくれもねぇと言わんばかりの剣筋は無軌道で、それゆえにおぞましい程に純粋だ。
錆光（さびみつ）、最高効率（クリティカル）で振るえば鉄板すら障子紙の如く切り裂く最弱にして最強の刀が錆びた軌跡を縦横無尽に描く。
満身創痍の錆び鉄、あたかもそれは刃が引き連れた死に魅入られた者の末路を示しているようで。

「ぎゃっ!?」

ああ、肉が断たれる。流石にシャンフロほど狂ったリアリティはないが、それでもサイバーテクノロジーの結晶がフルダイブＶＲだ。肩から腰へと斜めに切り裂かれた身体はもう長くあるまい。尤も、

斬られたのは俺ではないので他人事なんだがね。

「ごっつぁんです！！」

俺の振るった刀が満身創痍の肉盾を捉える。これで八人目だ、うーむまたしても効率的な稼ぎ方を発見してしまったか。

「げぇーっ！　あの野郎レイドボスさんをトレインしてやがる！！」

「こっちくんな！」

「え？　なんて？　近くからもう一度言ってくれる？」

「わざとか！　ぎゃぁぁああ……！！」

「逃げるね、兎みたい」

脱兎の如く、と言いたいのか？　流石にシャンフロのサンラクとイコールで気取られたとは思いたくはないが、天然物の電波さんはエスパーじみた発言をするからドキッとさせられるな。

正直に言おう、多分俺は死ぬ。シルヴィア・ゴールドバーグと違ってレイドボスさんはバグすら味方につける正真正銘のモンスター、フェイントやらなんやらを多用してなお五メートル以上距離を離すことができない。

だから方針を変えた、どうせ死ぬならスコアを稼いでから死ぬぞ俺は。

名付けてレイドボス超特急、レイドボスさんに挑発コマンドを連打して進行方向の他プレイヤーを巻き込む。あわよくば横からスコア

を掠め取り、そうでなくともレイドボスさんという絶対の一位がスコアを吸収することでポイントを高めた俺の順位を高水準に留める。

効率化が極まっているからこそ、レイドボスさんの動きはコンピュータに近しいものとなる。複雑な思考を経て単純な結論として出力されるからこそ、逆にその動きを外部から制御しやすくなる。

悪いな諸君、孤島じゃＭＰＫは基本技能だ。

「天ちゅ……あ」

「対人に絶対は……無い！！」

錆光（さびみつ）、クリティカルに成功すればありとあらゆる装甲値を無視し、失敗すればその瞬間に砕け散る諸刃の剣を物質化したかのようなピーキーソード。

レイドボスさんが常にクリティカルを出し続けるのならば、こちらから崩しをかけてやればいい。奇遇だな、俺もシャンフロじゃクリティカルアタッカーなのさ……！！

このゲームで最も確実な天誅の方法は首を落とすことだ。だからこそレイドボスさんの振り抜いた刃の行き先が分かったのならば、首を僅かにズラすだけでも致命傷をノーダメに貶める事が出来る。

砕け散った錆び鉄が散る。返す刀でレイドボスさんの眉間を狙った刺突は、一瞬その姿が消失したかと錯覚するような高速の屈伸で回避され、視線を下に向ければいつの間に体勢を変えたのか伸び上がるような逆立ちによる蹴りが俺の顎を狙う。

「っの……！」

「っ」

技のへったくれもないケンカキック、壁を蹴りつけるかのように足裏がレイドボスさんの背中を捉えて吹き飛ばす。

見た目こそ華奢な少年だが、内部ステータスは怪物のそれだ。どうせ大したダメージは入っていないだろうし、実際吹き飛ばされたレイドボスさんはすぐさま受け身を取ると軽やかに立ち上がる。

「やるね？」

「出来損ないの天誅に価値はないさ……！」

絶望的状況と諦観は必ずしもセットじゃない。首だ、首を断てばレイドボスさんとてキルできる。

だが、幕末プレイヤーはデフォルトで狂人なので残機1であろうとも勇者は現れる。

「おいおい、楽しそうじゃないの。だがこの俺が混ざらなきゃ始まらないんじゃないかぁ？」

「げ、ランキング二位……」

「あ、当千」

残機1だからこそ隠れ潜む奴がいる、であれば逆に残機1だからこそ死を恐れずに駆け抜ける奴がいる。

貴重な肉盾……もとい、他プレイヤーが一刀の元に切り捨てられ、さながら幕が開くかのように砕け散ったそいつの背後から一人の新

撰組プレイヤーが現れる。

レイドボスを相手にしてる最中に俺たち（ランキング二位）の勇者乱入だと？　クソが、これだから幕末は最高なんだ。

「組むかい？」

「バカ言え、背負ったネギごと鍋にしてやるよカモが」

「言うじゃないのレアエネミー、逃げるコマンド打つ前に叩き斬ってやるよ」

打てば響くかのような敵対宣言、本音を言えば喉から手が出る程に加勢してもらいたいが、あいにくこの世界じゃ喉から出した手にも刀を握らせなければ生き残れない。

「いいね、楽しい」

「………」

「………」

錆び鉄の刀を携える最強の剣士、太刀を肩に載せる次点の勇者、そして二刀流のそれぞれを敵対者に向ける般若面の俺。

「来ないの？」

「「天誅！！」」

ふっ、流石は俺達の勇者と言うべきか。レイドボスさんのプレイス

タイルは割とオンリーワンなので参考にならない面がある、であれば最も幕末らしいプレイスタイルを持つプレイヤーはコイツ……幕末総合ランキング二位、新撰組ランキング一位「当千」をおいて他にいない。

レイドボスさん相手にソロは蛮勇？　そんな事は分かりきっている、どうせこいつもレイドボスさんを絶対的一位にする事で自分のランキングを上げるつもりなんだろう、つまり……

どうにかして俺は奴を、奴は俺を処理してランクインする場所を上げたい。つまりレイドボスさんに自分が天誅される前に相手を仕留める！！　これが幕末の流儀（スタイル）……！！

「調理の時間だカモネギがよぉ！！」

「うるせー下っ端が！　粛清だオラァ！！」

とはいえナンバーツーは伊達ではない、極まった対人勢は隙を隙として放置しない、立ち回りが弱点を埋めるしもし隙があるとしたら半分くらいの確率で誘いの罠だ。
踏み込みからの大上段を横にステップを入れて回避、喉を狙って右刀を振るも攻撃は同様に回避される。

チッ、互いに早期決着を求めるが故の単調な動きになってしまったか。脚を斬って動けなくしてから仕留めるべきだった。
そして目の前にいると言うのにハブにされたレイドボスさんが動く。

「寂しい」

「うおお！？」

狙われたのは勇者だ、余裕の吹き飛んだ表情で的確に目を狙って放たれた刺突を紙一重で回避した勇者であったが、剣を引き戻す動きで頬に一筋のダメージエフェクトが走る。
引きつった顔をそのままに勇者はバックステップ、しかしレイドボスさんの左手に握られたリボルバーを目にした事でさらに顔の引きつりは増す。

「なんちゃって」

「クイッ……！？」

一発、二発。手首のスナップを活かした動きで放たれた弾丸が勇者と……あ、俺も射程圏内ですねはい。

「「うおおおおお！？」」

なんであんな速攻の動きで的確に眉間狙えるんだこえーよ！！

「ばんばん」

「……っ！」

「……っ！！」

前言撤回。俺たちはソウルブラザーズ、二丁拳銃とかいう第二形態に進行したレイドボスさんを一緒に倒そうぜ兄弟！！

マグネットな絆（後書き）

カッツォは女性向けの受け顔
ユラ君は男性向けの受け顔

当千さんは幕末プレイヤーとしては最高峰のプレイヤースキル持ちですが、それ以上にレイドボスさんに執拗にフルボッコにされても折れないオリハルコンハートの持ち主なので他プレイヤーのみならずレイドボスさんからの好感度も高め

でも天誅する、だって幕末だもの

Ｓｉｄｅ８：星斬るスワロー

◇

銃弾が飛び交う。
レイドボス：ユラが握る二丁のリボルバーが轟音と共に火を噴き、推進を得た鉄礫が明確な殺意を帯びて相対者二人へと向かう。

「っしゃオラァ！！」

「ふんっ！！」

しかし、最強のプレイヤーに相対する二人もまたサンドバッグとして終わるようなタマではない。

「おおお！　二人とも弾斬りしたぞ！！」

「あそこから対応しちゃうかぁ」

「お前あれできる？」

「ヨーイドン、なら出来ん事もないけどなぁ……ディレイマシマシでぶっ放されたら、まぁ七割？」

「やっぱ新撰組所属だと弾斬りやりやすそうで時々羨ましくなるわ」

「まぁレイドボスさんは維新側でも余裕で弾斬りするけどな」

「レイドボスさんだもん」

真っ二つに裂かれた弾丸二発、計四つの割れ礫が長屋の壁に食い込んだのと同時に祭囃子：サンラクと俺達の勇者：当千が走り出す。

双方共に新撰組所属、故に銃への補正がない為に攻撃手段はその手に握る刀剣に収束する。

「天！」

「誅！」

サンラクによる下段から真上へと二閃、当千による大上段から真下へと叩きつける一閃。互いの一瞥で交わされた「死んでも恨みっこなし」の無言協定による、二人がかりの二択がユラへと提示される。

否、しかして否である。

握る両手に二丁の銃、そしてそれを操るは幕末最強のレイドボス。であれば無理を通して第三の選択肢を作り出す。

「リロード」

「「！？」」

両手が塞がった状態、であれば小指だけでウィンドウを操作し、二丁拳銃を真上へ放り投げるとほぼタイムラグ無しの連続で新たなリボルバー……全弾装填された二丁をその手に握る。

轟音が連鎖する。過剰な負荷を強いる連続の発砲が大気を揺らし、それぞれの顔面に殺意の尖兵が四発ずつ放たれる。

「あっ、死ん……」

「おいコラてめー死ぬ、なんてお下品ですわよ！？」

「あっ、天……」

「それでいい」

「どこがオッケーなのか全くわかんねぇなこれ？」

「ていうかあの連射を避けんのか……」

「だが祭囃子は頭から地面にイったし、俺達の勇者は腰をヤった……人数有利が一瞬で覆されやがった」

成る程、確かに京極の目にも状況は不利にしか見えない。片やサンラクは「自前転倒」なるよく分からない技能で自ら地面に顔面を叩きつける事で銃弾を回避し、片や当千は限界まで身体を逸らす事で銃弾を回避したが如何にフルダイブと言えどその無茶な逆海老反りはノーリスクとはいかないのだと表情からうかがえる。

しかし得てしてターン制バトルにおいてボスモンスターというものは複数回行動をするもので、レイドボスと渾名されたプレイヤーもまた同様に攻撃の手を止めない。

「リ・リロード？」

「チィ……ッ！」

「コラテラルか……！！」

撃ち尽くしたリボルバーを放棄、それと同時に上空に放り投げたリボルバー……そう、まだ弾の残った銃をキャッチし体勢を崩した二人へと突きつけ即発砲。

回避は不可能、弾斬りをするには体勢が不安定。安全圏から眺めている京極よりも素早く結論に辿り着いた二人が僅かに身動ぐ。

「おいおい、レイドボスさん相手に機動力（あし）を差し出すのは下策だろう」

「バーカ、二刀流使いのくせに腕一本差し出したお前の方がよっぽど悪手だぜ？」

「バランスよくいっとく？」

「「遠慮しときます」」

右に錆光、左にリボルバーを構えたユラが動く。狙うは左腿からダメージエフェクトを散らす当千。片膝をついた新撰組へと銃口が突きつけられ……しかして次の瞬間、何かを察知したのかユラはその場で跳躍すると身体を捻って背後へと錆光を振り抜く。

「が、にぃ……！？」

「でかした肉盾ェ！！」

「ぐばぁ！？」

単体による上空奇襲式天誅、談合を抜いた即興の連携に割り込んだ「銭鳴」の身体が腰から真っ二つに裂ける。しかしその上半身を食い破るようにイベント限定武器「鯰尾鰭（ナマズオビレ）」が飛び出し、左腕から力の抜けたサンラクが銭鳴の上半身を盾代わりにユラへと飛び込む。

「前、見える？」

「今こそ心眼開眼の時……！」

「いや刺さるの俺ェ！？」

「レッツゴー！」

覚悟を決めろと言わんばかりの突撃続行、京極はまたしてもサンラクが掌を返したのかと思ったが、どうやら違うらしい。

「だぁあ世話の焼ける！！」

「サンキュー！！」

刺突の刃を身体をズラして避けた当千が太刀の峰を肉盾に押し当て、野球のスイングの要領で全力で押し込む。
サンラクはそれに抗う事なく後ろに倒れ込み、間一髪で首切りを回避する。

「あ、肉盾の首が飛んだわ」

「ちょっと、私の身体有効活用しすぎでは？」

「ハローもったいないお化け」

「勿体無いされる側じゃん私！！」

とはいえ上半身を串刺しにされた挙句首を飛ばされた「銭鳴」に思うところがあったのか、サンラクと当千は白々しく出てもいない涙を拭いながら吠える。

「許さねぇ！　よくも銭鳴を！！」

「あぁ、奴の敵討ちだ！！」

サンラク達へとものすごい負の感情を向ける亡霊が追加されたが、奇襲をトチった本人にも非があるだろう。

少なくとも仮に、万に一つ、もしもレイドボスさんをキルできたとしても他二人の対処を怠ってる時点で甘えだ。

とはいえランキング的にはレイドボスさん天誅した時点で上位ランクイン確定だから賭けとしては悪くはない。そんな風に京極が知ったかぶっていると、隣から不穏な会話が聞こえた。

「いやー、逃げた先にレイドボスさんとか進退極まったからさ、ヤケクソで飛び込んだんだけど……まぁ無理だよねぇ」

「逃げた？　誰から？」

「え、そりゃ……」

瞬間、長屋の一つ、その壁が内側から砕け散る。

「一位に二位に祭囃子！　挑むにゃ不足ねぇなオイオイオイ！！」

「見つけましたよサンラクぅ！！」

「ゲェーッ！　てめーら生きてたのかよ！！」

「吹雪狩：誠意大将軍」「狂犬：十文字大福」乱入、闇鍋にさらなる劇物が投入され、事態は混沌を極めていく。

筈だった。

「ちょっと本気出すね」

その一言は、誇張表現を抜いてなお死刑宣告であった。そして、その出現を最も近くで見ていた十文字大福が喜びと引き攣りの混じった笑みでその名を口にする。

「斬星竿（きりぼしざお）……！！」

ずるり、と虚空から一振りの刀が抜き放たれる。
否、それを刀と呼んでいいのか。斬馬刀という、馬を切るための大太刀がある。だがそれは、その刀はそれよりもさらに長く、まるでそれは……

「斬星竿……マジかよ正月イベ報酬！？」

「巌流イベの一位報酬じゃん！！」

「え、なにあれ」

「レイドボスさんのガチ武器だ！　現存する百人斬りの物証だ……録画録画ぁ！！」

会話に出てきた単語から十中八九、モチーフは巌流島の決闘に登場する佐々木小次郎の「物干し竿」だろう。だがしかし、刀を振るのと竿を振るのでは何もかもが異なる。
むしろサイズが大きくなった分、隙も大きくなるのでは……そんな楽観的とも言える京極の考えは、一瞬で首を飛ばされた十文字大福の胴体を見た事で一瞬で霧散した。

「まーた狂犬が死んでおられるぞ」

「いや対応しようと動いただけでもすげーよ」

「何分持つかな」

「五分！」

「二分！」

「京極ちゃんは？」

「え、あー……三分？」

「カップ麺タイムか……安パイだな」

「だが王道とも言える」

京極は知る由もないが、ランキング報酬にはそれぞれ特殊な能力が備わっている。と言っても斬撃を飛ばす、などのファンタジックなものではなく、膂力の向上やスタミナの消費軽減などのプレイヤーのアシストが主な効果だ。

そしてユラが扱う「斬星竿」に備わった効果は空気抵抗軽減。シンプルなその効果は、本来その長さ故に大きな隙を晒す筈の立ち回りをユラの技能により極めて危険な災害へと変貌させる。

「やべ……っ」

「天誅」

「こなくそぉ！」

サンラクの左腕が宙を舞う、長いということはそれだけ先端には強い運動エネルギーが乗るということ。

錆光のようなクリティカルによる絶対切断はなくとも、振るった刃はアバターの腕をいとも容易く断ち切る。

「ちぃい……っ！」

「おいショーグン！　回復の時間稼げ！」

「無茶を言ってくれますね……！」

「いいよ、待ったげる」

「その隙が命取りですよ天誅（チェスト）ーッ！」

だらりと切っ先を地面につけた待機宣言、そこに勝機を見出した誠意大将軍が大上段に飛び込む。

だが彼は失念している。

「焦ったね吹雪狩」

「バカだなぁ、物干し竿とレイドボスさんだぜ？」

物干し竿に達人の使い手、であれば返しの刃は燕をも斬り落とす。

「お返し天誅」

「せ、せめて一太刀――――！」

一文字に切り裂かれた誠意大将軍は最期の力を込めて大太刀を投擲する。それは使い手の怨念がこもる故か、死に体のアバターが放ったとは思えないほどの鋭さで空を切りながら標的へと批評する。

「っつぁぶねー！？」

「チィイッ！！」

「地布武鬼で弾かなければ即死だった……」

「おのれぇえ！！」

一進一退の緊迫感を返して欲しい、半目でそう呟いた京極の隣に怨霊が二体ほど追加された。

Side8：星斬るスワロー（後書き）

多少力が強くなったりタフネスになったとしても袋叩きにされるのが幕末

ランカーですら、散る時は一瞬だ。むしろ俺がここまで生き残っている事の方がよっぽどの奇跡だろう。

◆

「さて……どうしたもんかね」

こっちにまで飛び火させてきやがったとはいえ、誠意大将軍が時間を稼いだおかげで当千の脚はなんとか回復が間に合った。
生憎こっちはパーツごと切り飛ばされてしまったのでリスポンしない限りは元には戻らない。

二の腕の半ばから断ち切られた事で身体のバランスは不安定だが、まぁ慣れれば何とかなる。むしろ肩の付け根から切れるよりかは幾分かマシだ。欠損のバランス感覚を培わせてくれてありがとう孤島、でもあのクソデカ梟は未来永劫許さんよ。

だが状況は非常に不味い。ランカー二人に二つ名持ちが天誅された事でここら一帯のプレイヤーは避難を選んだらしい、俺だって逃げたいがボスからは逃げられないのがお約束だ。
それに二刀流で何とか食らいつけていたところをこの有様だ、正直言って、勝ちの目は、もう………

「……へっ」

なーんて、絶望に沈むロールプレイをしている場合じゃねーな。勝

ちの目はある、レイドボスさんが斬星竿なんてけったいなもんを出してきたからこそ見える活路がある。
だが行けるか？　長さにばかり目を取られがちだが、あれの威力は下手な太刀じゃあ比べ物にもなりゃしない。先端に掠るだけでも腕が飛ぶのだ、クリーンヒットしたらどうなるかなんて考えるまでもない。

「オイ勇者！　悪いが短期決戦に付き合ってもらう、賭金(命)を全額ベットしな！！」

「面白ぇ、乗ったぜ丁半！」

上等、それでこそ幕末プレイヤーだ。

ここまで来たなら、もはやランキングはどうでもいい。ただ二人（出落ち共は除外）でレイドボスさんに土をつけられるなら、一晩も手元に残らない一報酬なんかよりもずっともっと価値ある栄光を手にすることができる。

「何かする？」

「はっ、レイドボスさんよう……俺達がやることなんて一つだろう？」

前へ。
欠けた左腕からダメージエフェクトを流しながら前へ、前へ。どうにかして斬星竿の射程圏内へ、振るわれる死の宣告よりも速く──
──！！

「……楽しい」

その笑みは、きっと俺が何をするのかを見るための余裕……つまりは舐めプだ。だが俺はそれに怒らない、向こうから手加減してくれるなら存分に活用させてもらう。

刃の届く距離に到達、更に前へと距離を詰めて……即時展開の準備を完了していたウィンドウから一本の武器を取り出す。

その瞬間、斬星竿が閃く。あまりに軽く滑らかな風切り音が俺の首へと迫る。

振り上げた武器がレイドボスさんの頭を打つよりも速い、だが俺の狙いは本体じゃねえ……今まさに俺を斬り裂かんとする刃そのものが狙いだっ！！

「御用だ！！」

「わ」

金属同士が叩きつけられる快音。しかして斬星竿は動かない、それは膂力同士の拮抗ではなく……

「十手」

「そうさ、大十手「大捕物（オオトリモノ）」……捕まえたぜ斬星竿」

もはや声をかけるまでもなく以心伝心、デジタル文字の「４」のような形をした十手が斬星竿の刀身にガッチリと食らいつき、捻りを入れた事でレイドボスさんの動きを僅かとはいえ停止させる。

そして、その瞬間を逃すはずもなく当千が太刀を構えて一気に距離を詰める。

「諸共に叩き斬るぜ！」

「ばっちこい！」

く、右腕一本じゃやっぱり力負けするか。だがそれでも、更に踏み込んでレイドボスさんの襟を掴む。これでランキング二位が渾身の一撃を食らわせるだけの時間は稼いだ。

「決めろ勇者！」

「お命頂戴いたす……」

「「天誅！！！」」

思えば、逆境こそがレイドボスさんを覚醒させるのかもしれない。そして良いところまで追い詰めた俺達は、虎の尻尾を踏んづけたというわけだ。

「とても、楽しい。だから……負けない」

「ほひゅっ」

「は？」

いきなり当千が崩れ落ちた。斬られた？　いや違う、刀は動いていない。であれば何故？　違う、違う、刀じゃない。足を大きく上へと伸ばした姿勢は……ハイキック？　足の高さは丁度当千のアバターの……まさか、

「顎を蹴り抜いて気絶させた？」

「楽しい、楽しい……だから、負けない」

馬鹿言うな、このゲームは確かに気絶の状態異常が存在するが……殴る蹴るで出るようなもんじゃない。それこそ馬に撥ねられるくらいの衝撃で発生するもんだぞ……いや待て、まさか一瞬のうちに頭部のみを激しく揺らした事で条件を達成した？

「レ、レイドボス……！！」

今が楽しくて楽しくて仕方がない、とばかりに頬を吊り上げたレイドボスさんが一瞬で俺の背後に回り込んで腰にぎゅむ、としがみつく。
俺が何事かと抵抗するよりも速く、ふわりと浮遊感。ただ持ち上げるのではなく、そのまま後ろに倒れこむようなこれはまさか、やめっ……あっ

「天誅」

「バッ……」

「ドロッ……」

ボギョン！　と。なんだろうね、一番近い例えはスイカにスイカを叩きつけて相殺粉砕、みたいな……

「「プぎゅる！？」」

どちらかと言えば腰を掴まれたのでジャーマン？　いや、身体に捻りを入れて俺と当千の頭が激突するように調整してたから……強いて言うなら幕末スープレックス？
技名はなんであれ、まさかのグラップルに俺も当千も対応する暇も与えられぬまま地面(マット)に沈められる。
気絶の状態異常(スタン)、流石にログイン中の意識ごと刈り取るとはいかないようで気絶というより麻痺(パラライズ)の方が近い気がする。

「お、おのれ……」

「辞世の句」

「次は勝つ……首を洗って、待っていろ……」

「本番は、イベント後だぜ、ユラ君よ……」

え、待って刺突？　刺突っすか？　待って、頭を？　えっちょっ覚悟を決める時間を

「えぶぇ」

当千諸共に串刺しにされた俺のイベントが今終わった。

「あっ！　俺より先に死んだ先輩方チーッス！」

「君は誰かを煽らないと生きていけないとかそう言う病気なの？」

うるせー、レイドボスさんにやられたせいで集めたイベ武器がばら撒かれたんだからちょっと不機嫌なんだよ。まぁ毎度毎度イベ武器を全部持ち歩いてるわけでもないのであくまでも手持ちの一部、だが。

「良いところまでは行ったんだけどな……後二人くらいいたら勝てたか？」

「どうだろうなぁ……あの状況に持ち込むまでに天誅されてるんじゃね？　対レイドボスさんの基本戦術って数にモノ言わせて圧殺だからな？」

「ミツバチかなにか？」

「並んで襲ってもベルトコンベアみたいに流れ作業で斬られるだけだから……」

この度めでたく亡霊の仲間入りと相成ったので、先に死んだ奴等とワイワイガヤガヤ騒いでいるとレイドボスさんがこっちを見ていることに気づいた。

イェーイ！　とその場にいる亡霊……つーか気づいたら百人くらいいないか？　そこら中にびっしりいる亡霊総出で手を振ってやれば、一つ頷いたレイドボスさんは斬星竿を携えて駆け出した。

「どうした？」

「これもしかしてテンション上がったから生き残りを一掃する気じゃ……」

あっ。

亡霊は生ける貴方に触ることができない、言葉を伝えることも……だから、鬼神の如く暴れるレイドボスさんに蹂躙される生き残り達を、俺たちはただ見守ることしかできなかった……

「饅頭まだある？」

「ぶっちゃけ変な味がする水だけど酒が進むわー」

「おーすげー、壁貫きで仕留めた」

正直クソ楽しかった。

Ｓｉｄｅ９：見上げた先に上位互換（前書き）

レベル５で悪い噂爆撃で侵略し、伝説の木を植樹してラブラブ無敵爆風凸……凄い、事実は小説よりも何とやらだ……（ワクワク）

Ｓｉｄｅ９：見上げた先に上位互換

◇

鍛冶師イムロン、鍛冶師の最上位職業「名匠」に到達したプレイヤーであり、それ以上に聖槌ムジョルニアの所有者として有名なプレイヤーである。

例えば聖剣エクスカリバーは強大かつ凶悪なモンスターが闊歩する迷宮の深層（隠しエリア）までソロで辿り着くことが条件であった。

例えば聖槍カレドウルッフは複数人が同じ場所に集まることで初めて出現し、ＰｖＰの末に残った最後の一人が所有権を得る条件であった。

であればムジョルニアの取得条件とは何か。

それはムジョルニアを用いて武器を作ること……ただそれだけである。別に「名匠」である事が絶対条件と言うわけではなく、レベルの多少もさほど影響しない。

ただし、「大量のモンスターがポップするモンスターハウス内で」という前提の上で、だ。

モンスターを倒す強さ？　否。

武器を作る速さ？　否。

聖槌ムジョルニアが求めたものは真摯さだった。
例え身体を獣に食い千切られようと、その身を毒に犯されようと、今まさに己が頭を叩き割らんとする死が迫ろうとも。

真摯なる者のみが槌を握るに相応しい。

それが聖槌ムジョルニアが安置されていたとある洞窟の最奥に刻まれた言葉であった。

限界まで分かりやすく言えば「度胸試し」、そして数多の鍛冶職が挑み、散り……最後に槌を取った、レベルたった４５のプレイヤーがなんの能力もない、されど一切の妥協なく一本のナイフを作り上げた事で所有者として認められたのだ。

生理的嫌悪を抱かせるモンスター、より残虐な攻撃方法を用いるモンスター、そんな暴虐の坩堝の中心でなお鋼の心を貫き通し、鍛冶に己の全てを注ぎ込む事ができるプレイヤー……その名はイムロン。

「なぁーんで私の知らない武器が私の知らないとこで作られてんのぉーもぉー！！！」

そんなプレイヤーが今、サイガー０の前で地面にひっくり返って手足をバタバタさせていた。

「リ・レガシーウェポン　ｉｓ　何！？　知らなーい！　私そんなの知らなぁー→い！！」

「あ、えーと、甦機装（リ・レガシーウェポン）というのは……」

「待った！　これでもムジョルニアに選ばれた鍛冶師……その程度見当はついてるわ！　ズバリ遺機装（レガシーウェポン）を最終段階まで強化するとカテゴリが変わるんでしょう！！」

「いえ、違います」

「はぁぁぁあああん！！」

ビッタンビッタンと高い声でのたうち始めた黄金の金槌を持つぃかにも職人、というキャラメイクの壮年男性……イムロンを見下ろしながら、サイガー０はかつて姉が交渉していた人物は本当にこんな人格であったかと己の記憶を疑い始めてぃた。

記憶が狂ってぃなければ、聖盾輝士団（聖女ちゃん親衛隊）と同様にロールプレイを基本としてコミュニケーションを取るプレイヤーであったはずなのだが。

「く……おのれアーサー・ペンシルゴン……人心を弄ぶ魍魎の類ってのは本当だったのね……」

それに関してはサイガー０としても、交渉の手札は黒幕（ペンシルゴン）から授けられたものであるため何も言えなかった。

「えーと……」

ペンシルゴンから託された三枚のスクリーンショット、一枚目と二枚目は機械仕掛けの鉄拳を構えるサンラクの写真と機械仕掛けの円盾を構えるサンラクの写真。

そして三枚目……

「えーと、その……この三枚目が、見たいというなら……その、「旅狼（ヴォルフガング）」に協力してほしい、です」

「く……狡い、こんなの袋綴じみたいなものじゃないのよ……いや、ちょっとタンマ……げほんごほん、だが俺も一端の鍛冶師だ。俺の知らねぇ技術（ワザ）とあっちゃぁ黙っちゃおけねぇ、俺に協力要請ってこたぁ鍛冶に関する事だろうが……出しな、てめーのスクショを……な」

ペンシルゴンの見立て通り、「鉱石が採掘できそうな新エリアを探すために真っ直ぐ樹海を進んだ先」で遭遇したプレイヤー最高峰の鍛冶師が据わった目でサイガー０へと詰め寄る。

その尋常ならざる様子……類似の例で言うならリュカオーン絡みの姉を彷彿とさせる眼光に、思わずサイガー０は写真を盾のように己とイムロンの間に掲げる。

「あ？　んだこれ、ただの剣……」

「ぐ、英傑武器（グレイトフル）の……リビルド段階まで強化したもの、です」

「……りびるど？」

しばし沈黙。
よろり、と後ずさったイムロンの口から溜息が漏れ、途切れる事なく吐き出され続ける吐息はいつしか呻きとなり、そしてそれは音程をさらに上げて叫びとなる。

「はぁぁぁぁあああああああああ……！！→→」

両腕で抱えた頭がどんどん後ろへと傾いて行き、いつしか背中全体を後ろに反らせて悶え始めるイムロン。控えめに言ってサイガー０的には関わり合いになりたくないタイプであるのだが、それらを差し引いてもムジョルニアの「鍛冶道具」としての力はアーサー・ペンシルゴンをして「旅狼」の歩くトップシークレットという鬼札（ジョーカー）を切る価値があると判断したのだ。

と、その時イムロンが突如として腰に下げていた黄金の金槌を握りしめる。

「フラストレーション！！」

いきなりの奇声にサイガー０の鎧がガチャリと鳴る。そしてそれと同時、首筋に圧迫感が生じる。
それはマントに擬態したディアレからの「敵襲」のサイン、若干精神的緩みに脱力していた思考を戦闘に切り替え、腰の鉄鞭を構えるよりも早くイムロンの行動が先手を取る。

「電撃鍛造（ブリッツフォージ）！！」

イムロンが自身のインベントリアから取り出し、手元で真上に投げ放った恐竜のものと思しき何枚かの鱗を聖槌ムジョルニアで叩いた瞬間、それらはカラー塗装を妥協した材料の原色そのままなプラモ

デルのような剣が一本生成される。
そしてそれをむんずと掴んだイムロンが電撃的な速度で生成された片手剣を構えると、それを木の陰に向けて全身の力を込めて投擲する。
大気を切り裂いて飛ぶ急造の刃が今まさに獲物に飛びかからんとしていた小型恐竜へと命中する。
「チッ……話は後！　最大火力（アタックホルダー）の実力、見せてもらうわ……だぜよ！」
「ロールプレイが暴走している……」
数分後、特に問題なく襲撃者（モンスター）を迎撃したサイガー０に、イムロンは観念したように口を開く。
「ようし分かった、毒食わば皿まで……いいや、毒餌を作った奴の指先までしゃぶり倒してやろーじゃないの……で？　ちゃんと見返りは期待できるんでしょうね？」

「ソデスネ」

サイガー０の脳裏に浮かんだのは「ま、適当に煽れば情報吐くでしょ。サンラク君って拗れに拗れたツンデレだから」と、安心と保証という言葉から最も遠いような笑みで適当ぶっこくペンシルゴンであったが、極論責任転嫁しよう……と諦め混じりの眼差しを空に向けるのだった。

「それはそれとして、あの木々の隙間から見える樹海とは明らかに違う光景……なにかし、なんだろうな？」

「え？」

状況は、サイガー０に上の空を許さない。木々の隙間より漏れるは、猛き心持つ勇猛なる人々の棲まう砂漠地帯……ディルトセオ大砂海。

Ｓｉｄｅ９：見上げた先に上位互換（後書き）

やたら学名っぽいモンスター名にも実は理由があったり

Side10：通りすがりの巡り会い（前書き）

剣ディルの動きがサンラクサンの理想形にすごく近かったので楽郎の顔面イメージディルムッドにしましょうか！（爆死、種火不足、QP枯渇による世迷言）

はい、忘れてください

Ｓｉｄｅ１０：通りすがりの巡り会い

「別にわた……俺はよ、自分がオンリーワンでナンバーワンになりたいとかそういう訳じゃねぇんだ。だがよ、俺のエンジョイ生産職プレイが歯抜けの選択肢で遊んでいた、なんてギャグだろう？　前々から「遺機装（レガシーウェポン）」や「英傑武器（グレイトフル）」に関しちゃわからん尽くめで手の打ちようがなかった。条件付きたぁいえ渡りに船なら乗るしかあるめぇよ、なぁ？」

うるさいのが増えた、心の中での呟きはしかし肩を落とすという行動で内面から外面へと染み出していた。

「その、詳しい話は……実際に、協力してもらった後、との事なので……」

「かまやしねぇよ、何でもかんでも先払いで済ませられるたぁ思ってねぇ。とはいえもしタダ働きさせたらあらゆる手段を使ってあんたらの親分を豚箱に叩き込むわ」

「変な伝手で保釈されそうですね……」

とはいえ、雑談に花を咲かせてばかりではいられない。最大火力（アタックホルダー）と聖槌の所有者（それとヴォーパルバニーの魔術師）という組み合わせとはいえ、サイガー０達は今のところその全貌すら明らかになっていない見渡す限りの砂漠へと臨んでいるのだから。

「樹海とは別種の迷わせる構造か……そっちのマップアイテムは？」

「二枚、ありますが……」

「ま、足りねぇよなぁ……」

マッピングアイテムは、インベントリから手元に出すことで発動状態となり、使用者を中心に置いた半径２５メートルを地図に表記する。

だがこのゲームはどこかの体育館に設置されたなんちゃって迷宮とは訳が違う、油断すれば一番最初のエリア「跳梁跋扈の森」ですら遭難の危険性を孕んでいる。

そして、トットリですらティアプレーテンから前線拠点までの地図を確定させるために五十枚以上の地図を要した、それ即ち二枚という枚数がどれだけ心許ないのかを端的に示している。

「転移スクロールは？」

「あります、要りますか？」

「いんや、手持ちで事足りる。あとは飯と水の問題だが……砂漠ってんならオアシスに期待してもいいもんかね」

「見つけたらラッキー、程度で考えるべき……かと」

打算ありきで始め、半分寄生じみたプレイの末に得た今の立場ではあるが、地頭の良さもあってかサイガー０は一端の廃人プレイヤーとしてイムロンと問題なく情報を交換する。

「問題はフィールドを形成する砂だな……これ、踏ん張れるか？」

「剣を振る程度なら問題なく、ただ防御は少し難しいかもしれません」

「それよか機動力だな、下手すりゃ砂に足を取られてすっ転ぶわこれ」

ざしゅり、と材質不明の金属で出来たソールレットが砂を踏み、わずかに沈む。

流石に底なし沼や蟻地獄のように踏み込んだ足が沈み続ける程ではないようだが、深くまで砂で構築されているのだろうエリアはプレイヤーが二番目に戦うことになるエリアボスの前例とゲームにおける定石から非常に嫌な予感を二人に抱かせる。

「……あー、これ絶対下から出るやつだな」

「ですね…………来ます」

「何？」

自身の勘ではない、首に張り付いたレーダーからの報告である。そして、その言葉通りに地面が揺れ始める。

とっさに顔を見合わせたサイガー０とイムロンがばっと弾かれるように互いの距離を離す。そして次の瞬間、二人（と一匹）がいた場所を真下からカチ上げる大質量が砂の層をぶち抜いて出現した。

「蛇！？」

「違う！　砂から出てくるニョロついたのなんざ定番の……虫(ワーム)だ！！」

一体どれほどの推進を得たカチ上げだったのか、柱のように屹立するワームは見上げるほどに巨大で、サイガー０の素人目でも全長が十メートル程度を軽く超えていることを否が応にでも理解させられる。

脳裏によぎったのはアルクトゥス・レガレクス……海の底に生息する巨大なリュウグウノツカイであったが、眼前の巨大ワームからはアレとは明確に異なる、有機的な無機質さ、とでも言うべき感情を感じさせないグロテスクを感じさせた。

「おいおい、三人なら早速ここで冒険の終わりか……？」

「いいえ、三人なら倒せないこともないと思い……ます」

「は？　三人？」

ある程度自由の利いたルルイアスと異なり、この砂の海における地形アドバンテージは圧倒的に向こうが優っている。プレイヤーは砂の中に潜った巨大ワームを追うことはできず、逆に巨大ワームの攻撃は常に奇襲の性質を帯びる。

「いいのかいサイガー０さん」

「出し惜しみは危険です……それに、こちらに引き込むなら……隠し立ては不義理、です」

イムロンが先程から妙に鎧とミスマッチだと感じていたマントから、突如としてぴょこりと長く白い耳が伸びる。

「まったく、君も大概無茶を強いてくるじゃないか……だが鍛錬に

危険はつきもの、私の力を示してやろうじゃないか！　刮目せよってね！」

「ヴォーパルバニー……！？　まさかあんたも？」

「えぇ、まぁ……そして、貴方の知らない鍛治に関しての鍵を握るのもまた、彼女達、です……来ます！！」

「気をそらすような事言わないでよもぉーっ！！」

戦闘開始。
ディアレ、イムロン共に指示を自身に任せたと判断したサイガー０は鉄鞭を抜き放ちながら簡潔に指示を飛ばす。

「まずは様子見を！　有効攻撃を割り出しつつ相手の行動パターンを見ます！」

「ならわた俺が一番槍を努めよう！　電撃鍛造（ブリッツフォージ）！！」

聖槌が雷光を纏う。インベントリから取り出された三つの鉱石が連続で叩かれ、地面に落ちる頃にはククリソード、投げ槍、金槌へと形を変える。
そして砂を掻き分け、開けっ放しの口の中に入った大量の砂を全身の螺旋蠢動を利用した、肉体側面各部位に存在する排泄口からの強制排出により全身からシャワーの如く撒き散らす巨大ワームの突進を回避しつつ、生み出した即席武器を立て続けに投擲する。
それなりのＳＴＲによって投擲された三つの武器は、しかして大質量の大推進の前にはあっさりと弾かれる他ない。
だがその光景をじっと見つめていたイムロンは吹き飛ばされた武器

の中からハンマーを拾い上げ、何かに納得したのか大声で叫ぶ。
「斬撃は効果薄！　刺突微妙！　打撃有効！」
「感謝です……！」
「サイガー０さん！　私の脚じゃ動きづらい！」
返答は行動で返す、サイガー０から無言で伸ばされた手に飛びついたディアレは瞬く間にその頭部まで登りつめる。
さらに何か言うでもなく魔法の詠唱に入ったのを確認しつつ、サイガー０は己の武器……神匠ヴァイスアッシュの手により致命の戦鎚から真化した兇風【叢雲】を握る手に力を込める。
「突進は単調……ううん、簡単な追尾くらいは想定した方がいい？土の下からの奇襲は振動に足を取られる危険性を考慮……」
「来るぞぉ！！」
「ディアレさん、掴まって！」
「言われずともぉ！！」
砂海を揺らす振動、直後に地を穿って四角柱を無理やりねじくれさせたドリルのような動きで暴れ狂うワームがサイガー０のいた場所を狙って出現する。
瞬間的にサイガー０の全身をスキルの光が包み込む。幾重にも重ねられたステータス上昇と、攻撃スキルの補正が篭った渾身のフルスイングがワームの横っ腹へと轟音と共に食い込む。

サイガ－０のレベルは上限解放を行なっていないがために９９、だがされどＥｘｔｅｎｄに到達し、幾度とないレベルダウンによるビルドにより、実質的なステータスはレベルキャップを開放したプレイヤーに匹敵する。

武器種「鉄鞭」の特性により、打撃属性に変更された斬撃スキルがその衝撃でワームの身体を撓ませる。

虫は声帯を持たない、だがそれでも外殻に走った亀裂がその苦しみを視覚的に周囲へとアピールし、慌てた様子で巨体が再び砂の中へと潜行する。

「しかし、これは……」

一撃のダメージと、モンスターの消耗と、特性……全てを総合して長丁場になる確信を得たサイガ－０は兜の下で苦虫を噛み潰したような表情を作る。

なるほど確かに、ある程度フルダイブＶＲに慣れたプレイヤーであれば、その気になれば数時間に及ぶ戦闘も出来ないことはない。

だがそれでも、攻撃のタイミングが限られる上に様々な要素でこちらの上をいくワームをよりにもよって足場が不安定なフィールドで戦うとなれば、精神的な消耗以上に脳を酷使する事によるシステム側からのセーフティが働きかねない。

あるいは常日頃から「作業」と切っても切り離せないようなゲームライフを送るプレイヤーであれば意図的に思考を節約してセーフティ起動までの時間を伸ばすことも出来るだろう。

だが戦闘に関しての不利や問題が多いほど、タイムリミットまでの時間は削られ行く。

「どうするよ最高火力、サイズ以上のタフネスだろうアレ。逃げるにしたってこの砂漠じゃ足の速さが違いすぎる」

「………」

大局的な指示を出すための踏ん切りがつかない。姉であれば迷うことなく決断できるのかもしれない、ペンシルゴンであればリスクを恐れることなくパーティメンバーを死地へと叩き込めるのかもしれない。

だがその二人ではないサイガー０は逃走か、闘争かの踏ん切りがつかない。

だから、その二人とサイガー０が明確に異なる点があるとすれば、それはもしかすれば……

「手ヲ貸ソウ」

想い人との出会い然り、それを応援する人然り、人と人との巡り合わせにあるのかもしれない。

Ｓｉｄｅ１０：通りすがりの巡り会い（後書き）

突如として現れた、他種族に自分の顔があまり受け入れ難いことを考慮して布で顔を隠しつつやたら跳躍力に優れた足と四本の腕を持つナイスガイの正体は一体……！？　別に改造手術はされていない

ドリルワーム君は生息域的な理由でドラクルス化していない種族

なお実在生物で何が一番近いかと聞かれたら間違いなくアニサキス

この一撃に全てを賭ける……っ！

◆

正直言って、幕末に色気を出したのは失敗だったかもしれない。
今や大陸の覇を競う一つとして周辺国家にその威を示すまでに成長したバンメシ合衆国、プレジデントハウスの書斎で椅子に深く背を預けながら俺はそう思わずにはいられなかった。

「大統領、遊牧民族シャナラスタの使者が面会を求めています」

「だろうな、大草原と隣接したウチを無視するわけもなし……」

・友好的な態度をとる

・敵対的な態度をとる

・追い返す

「心を込めてもてなしてやれ、ユナイテッドは友好的な者を歓迎するのだからな」

「かしこまりました」

出会った頃と比べると随分と身なりの良い服を着たライスちゃんが退室したのを微笑ましく見送りつつ、ふぅ……と吐息を一つ。

「宗教って偉大ね……」

なんとなくこのゲームのクソゲニウムが判明してきたな……要するにこのゲーム、難易度設定が割とゆるい。というかただでさえ戦闘がぬるい上に内政面でも特定選択肢を選ぶと難易度がガタ落ちする。

事の次第はこんな感じだ。ある程度国力を高めるとアーフレント聖国から使者が来る。パルフィオン教だかなんだか知らないが、一見すれば宗教的隷属要請とでも言うべき誘いを受けるのだが……この時、選択肢次第では大統領（プレイヤー）が直接聖国に乗り込むことが出来る。

そこで聖女フィオナーレ相手に説得に成功すると、アーフレント聖国と同盟関係が結べる。その場合、難易度が……めっちゃぬるくなる。

破竹の勢いで国力を増す合衆国が宗教的後ろ盾を得た時点で小国群が一斉に所属を求めてやってくるし、パルフィオン教を国教と定める国も友好度が上昇、適当に間者を放って敵国を同盟国に嗾けて弱ったところを合併（ユナイテッド）……うーんこのマッチポンプ。

強いて言うなら自陣営のステータス確認やら指示出しやらが面倒臭くなる上に各地のトップやらの面会やらなんやら……あれこれ内政プレイの悪い面ばっかり目立ってないか。

とはいえ我らバンメシ合衆国はみんな仲良くが国是（モットー）、例えクソの役にも立たない小国のおっさん相手でも全力でハグするのが大統領なのだ。

「大統領！　新生ガルカート帝国の連中が！　率いているのは煉獄将軍だ！！」

「またあいつか……」

もうかれこれ五回くらいボコってんのに飽きないな……くそう、幕末イベ後レイドボスさん討滅戦を経験した後だからプレジ伝の戦闘要素全てが苦痛でしかない。

・私が出撃する！

・部下に任せる

・友好の使者を送ろう

もう騙されんぞ、ガルカートにどれだけ友好の使者を送っても首になって帰ってくるだけじゃねーか。

「俺が出る！」

はいスラッシュはいビームはいプレジデーン！！

「それなりに経験値とかが美味しいのがまたなんとも……」

煉獄将軍の鎧、これで六着目だぞ……確定ドロップだからあんまり強くないし、しゃーないから例外的に兵士一人一人をビルドできる大統領親衛隊に着せていくか。

「あと四着か」
目指せ大統領親衛隊「煉獄軍団」ってか？　実現可能っぽいからまたなんとも。

時間は進んで翌日。

「行けぃ！　我が親衛隊「煉獄大隊」！　敵を蹴散らせ！　突撃（チャージ）！　突撃（チャージ）！　突撃（チャージ）！！」

煉獄将軍の鎧を作ってる工房占拠したら大隊規模で鎧手に入るとかギャグだろ、笑うわ。
数百もの煉獄シリーズがのっしのっしと戦列を組んで本家煉獄将軍を追い詰めていく様はなんというか、クローン反逆とかそんな感じのＳＦ的ホラーを感じさせる。
腐っても将軍装備、ぶっちゃけ強装備で固めた親衛隊投入すると兵士の損耗率めっちゃ下がるからますますヌルゲーが加速してしまった。
とりあえず大国の仲間入りを果たした今のバンメシ合衆国の敵は実

質的にただ一国と言っていいだろう。

新生ガルカート帝国、このゲームのプロローグ以前に栄えた大帝国の正統な後継を名乗る大国だ。
他の小国の将軍が多かれ少なかれ使い回しのグラ（ヒゲで差別化）であるにも関わらず、あの帝国だけは上位クラスの兵士に貫禄の個別グラが与えられている。

特に四将軍とかいう四天王ポジの奴らがまぁまぁ厄介で、プレイヤー抜きで戦うとどれだけ鍛え上げても二割ほど敗北の可能性を拭いきれないくらいには強い。

「とりあえず煉獄将軍はハメルート確立できたっぽいが……暗黒将軍がウザい」

ATK高そうな名前してるくせにやることなすこと謀略系だ、ウチの穀倉地帯に奇襲しかけてきた時は流石に冷や汗が流れた。
まぁそのあと追撃しかけて敵軍半壊まで叩きのめしてやったが……このゲーム、イベントチャプターが来るまで敵将無敵なんだよなぁ、兵士も割と畑から生えてくるのか消耗の度合いが薄いし。

「とりあえず煉獄将軍のヘイトを稼ぎつつ他将軍が攻める国に救援送って……あーでも程よく遅れさせて削られてもらわないと……」

はいプレジデントビーム。
作業は作業、効率的な稼ぎを見つけ出したとしても面倒なものは面倒だ。
パターンを変えて逆立ちしながらの足狙いプレジデントビームが炸裂したのを眺めつつ、いつも通りにリザルト処理。

「やれやれ……」

「お疲れ様です大統領（プレジデント）、お怪我はありませんか？」

「ああライスちゃん、今日も今日とて快勝だ」

「……それはなによりです、今日は私が作ったパイで戦勝祝いとしましょう」

うーん、ライスちゃんの好感度を高めていてよかった。バリエーションが多めに用意されているのか、ほとんどセリフ被りがない出迎えの言葉になんとなく頬が緩む。
ぶっちゃけ味覚クオリティはシャンフロと比べるまでもないのだが、豪華なメニューだったりすると嬉しくなる。

「作業ゲー直後だからだろうか……妙に癒される」

ライスちゃん最高かー？　さーて、次のチャプターも頑張……

「はっ!?」

まさか、これがこのゲームが妙に流通していない理由、なのか……？　クソ要素を積み重ねた後に秘書キャラがデレることで実数値以上の効果を出す……まさか、これまでのクソ要素はこれを際立たせるための……!?

いや、そう考えると妙に納得できる部分が多いぞ。シミュゲーだし当たり前と流していたが、妙に秘書キャラだけ受け答えのパターンが多いし、キャラグラも（モブと比べるのもアレだが）妙に力が入ってるし……このキャラクターエンジン、風雲プレジ伝の発売時期

的には最新のやつじゃないか？
「まさか……この一撃のために、全てを犠牲に……？」

いや、本末転倒じゃねーか。
なにその、最高のラーメンの具を集めるために麺とスープを犠牲にしましたみたいな。
じゃあもう具を単品で出してくれよ、付け合わせで手抜きの麺とスープを食いたくないよ。まぁ麺とスープと具の全てに毒が仕込まれるよりはマシだけどさぁ……なぁフェアクソ。

まぁでも秘書キャラという、いわば女房役のキャラクターに力を込めるのは悪くない。大抵の場合はそう言ったナビゲートキャラの顔ってのは見飽きて来るもんだからな。
ストーリーを進めるほどキャラの新しい一面が見れるとなれば、まぁ作業ゲーでもやってやろうという気にはなる。

というか他キャラのグラがなんとも言えない感じなので秘書キャラだけが心の拠り所というか……まぁいい、モチベーションの燃料になるならそれは良いことなんだろう。

「さて、チャプターを進めるか」

フラグは煉獄将軍の本拠地を陥落させる、だったか。とはいえこっ

ちからケンカを売ると国の信頼度が下がるから……よし、このいい感じに我が合衆国に対する不満値（ゲーム進行）を上げてる小国に間者を送り込んで……フハハハハ、貴様は大義の為の犠牲となれ……！！

◆◇

「……え、蟲人族（バグマン）と遭遇した？　マジで？」

「えと、その……はい」

いつもの如く斎賀さんと登校しながら談笑していると、驚きの情報が齎された。どうやら俺がインしていない間にシャンフロもシャンフロで結構なイベントが起きているようだ。

「どうも、樹海を抜けた先にある、砂漠地帯に住んでいるようで……その、私が会ったのは……バッタ？　の蟲人の方でして」

「へぇ……」

気になる、すごく気になる。だがここでさらに寄り道するとプレジ伝が積みゲーとなってしまいそうだ……ようやくストーリーに進展が出てきた今、モチベーションは維持しておきたい。

「それで、蟲人族の集落に辿り着いて……あ」

「ん？」

鼻っ柱にぽつりと雫が落ちた。それは次第に数を増して、ちょっと無視できない程の量と勢いを伴った雨に……げぇ、今日は曇りとは

いえ降水確率低かったじゃん。まさか……乱数？　おのれェ……

「参った、傘忘れたぞ……」

「あ、傘なら私持っ……もっ、もももも…………相合傘？」

「斎賀さん？」

「あいっ！！？」

いきなり声をかけられて驚いたのか、手からすっぽ抜けて地面に落ちた斎賀さんの折りたたみ傘を拾い上げて手渡す。

「ひ、陽務くんっ！！」

「え、はい？」

「あいあっスィ！？」

あ、舌噛んだ。
しばし悶絶していた斎賀さんであったが、激痛から復帰するとなにやらバッサバッサと傘を開き閉じしながらこちらへと顔を向ける。

「そ、そののっ！　濡れると……そう！　濡れると大変ですね！」

「そっすね」

「で、であるからして！」

「であるからして」

「か、傘を共用するというのは如何でしょうか！！」

「え？　傘？　あー……いいの？」

「いいんですか！？」

何故貸す側が……後戻りできないシーンでセーブするか念入りに聞かれるのを思い出した。マルチエンディング式だとむしろそこじゃなくてルート分岐前で聞けよ、とは思う。

とはいえ下校時なら多少濡れても構わないが、登校時はその後の授業に対するモチベーションに関わるので濡れ鼠を回避できるならそれに越したことはない。文字通りの意味でありがたく傘下に入らせてもらおう。

「…………っ」

ぷるぷるぷるぷる……

「あのー」

「はゃいっ！」

「俺が持とうか？」

「そんな、あの……はい、お願いします」

だって背丈の関係上、斎賀さんは結構腕を伸ばさないといけないし

……まぁ俺が持った方が安定するよねという。安定大事、長時間R

ＴＡならチャート作成の基本だ。

「しかしこれは結構酷くなりそうか……？」

たたた、と傘を打つ雨の音がビートを上げていく。このまま雨が降るとなると下校時に止んでいるかどうかは微妙なラインだ。

うーむ、雨といえばやはりある種の風情あるものとして古来より詩の題材になったりもするが……あいにく現代人にとっては交通網に影響する厄介な天候でしかないのだ。風情の心は失われた……

だが大丈夫、ジャパニーズ風情は和風ゲーの中で確かに息づいている！　まぁそれはそれとしてやっぱり天候：雨はウザいわ、滅べ雨雲。

「これは……夢……？」

「斎賀さん？」

「えにゃいっ！　わらしは元気れす！」

「え？　あ、はいそれはなによりです……」

やはり分からんな斎賀さん……妙なタイミングでバグるのは不特定タイミングでキリングスイッチが入るレイドボスさんを彷彿とさせる。

今回の討滅戦は凄かったな……ランカー九人の即興連携もだが、イキり姿がレイドボスさんのお気に召したのか、程よく半殺しにされて放置された京極の顔は思わずスクショしてしまうほどのインパクトがあった。

なんというか、しんなりしてた。三日くらい放置したほうれん草み

たいな顔してたよ。

「あ、斎賀さんそこ排水溝の蓋外れてるから危ない」

「へ？　あ、きゃっ！」

なんというか、あの一瞬で摺り足を用いてステップを入れられる人間がリアルでいるとは思わなかった。だが流石に雨降る中ローファーでやるようなことではなかったらしい。

足を滑らせた斎賀さんが体勢を崩し、咄嗟に俺は腕を伸ばす。

「うおぉ！？」

「はひゃっ」

重ねて流石というかなんというか……咄嗟に受け身の姿勢を取るために身体を捻れる人間がリアルで（以下略）

とはいえ、斎賀さんが身体を捻れば当然俺がキャッチする部位も背中ということになる。

「…………」

「…………」

ぱさり、と傘が地面に落ちる。

成る程、これは世に言うお姫様抱っこ一歩手前と言っていい状態なのだろう。

倒れかけた女性を抱えるような形で支える姿はその手のシチュエーションで言うなら壁ドンに匹敵するのかも、しれない。

でもね、現実ってやつがどうにも思い通りにならないからフィクションというものが生まれたのであってね……？

「……く、のぉぉぉお……！」

女性に対してこう言うのが大変失礼であることは重々承知だが、それでも言わせてほしい。

仮に受け身を取っていたとしてでもですね、高校生女子の体重をいきなり中腰で支えるとですね、えぇ。まぁ……なんだ、要するに……

——腰が、逝った。

「嘘でしょ……」

まだ二十歳にもなってない若さの権化ですよ？　いや確かにそこまで体鍛えてる訳でもないけどさ……それが、そんな、重いものを抱えたせいで腰を痛める？　嘘でしょ？

「あの、斎賀さん……非常に言いづらいんですが、立ち上がってもらえると……」

「ひぇ……」

「あの、斎賀さん？　そろそろやばいと言うか」

「あ、足に力が入らな……」

え゛。

視線を向ければ、そこには生まれたての鹿だってもう少し安定しているだろう、と言うレベルでガクガクと震える斎賀さんの足が……待ってやばい！　挙動が！　挙動がバグってる！！

「ちょっ、足ガックンガックンしてるけど大丈夫！？」

「わ、我が生涯悔いあるとすらば、志半ばに斃るる無念……ああでも成仏できそう……」

もう意地張らずに濡れた地面に膝をつけば何とかなる、と気づいたのは一分後のことであった……身体、鍛えようかな。

まさかこの歳で腰に貼るための湿布を買いに来ることになろうとは。
悲しみに彩られた眼差しで薬局で湿布を物色しつつ、なんとなくド

リンクを取り扱うコーナーへ。

栄養剤に興味は特にないが、最近ライオットブラッド・トゥナイトが日本でも解禁されたとの情報を得たので一応……おっ、あんじゃーん！

「果糖ブドウ糖増えてる……効果量は七割、といったところか」

とりあえず四本一組のを買って……そういえば例の先行版リボルブランタンってどうなったんだろう。あれの即効性はどう見ても違ほ……いえなんでもないです、きっと合法なんだろう。

霊的要素は薬物検査じゃ検知されないからな……む？

「あれ、岩巻さん？」

「え？　あら陽務君、こんなとこで会うなんて奇遇ね」

ばったりと岩巻さんと遭遇した。いやそりゃそうだよな、固定シンボルじゃあるまいしそりゃ岩巻さんにも日常生活があるわな。

岩巻さんは俺が手にエナドリの箱を持っていることで何らかを察したようだが、同時に持っている湿布に気づいたのか怪訝そうに首を傾げる。

「湿布？　なんでまたそんなものを？」

「あー、まぁ色々あったんですけど……まぁ、端的に言うとＳＴＲが足りてなかった感じでして」

流石に受け止めた女性を支えようとして腰痛めました、とは言えな

い。

「ふーん……ま、若いうちに身体を壊してちゃ世話ないんだから、自分の身体は大切にした方がいいわよ？」

「ウィッス」

と、その時。俺と岩巻さんの会話に新たな人物が参加する。

「おや、真奈……知り合いか？」

「あらあなた、胃薬は見つかったの？」

「ああ、最近出た新作が前々から気になっていたが、今度試してみることにするよ」

胃薬のソムリエか何かかこの人……いやそうではなく、会話の流れからしてこの人、アレか？

「もしや噂に聞くリアル乙女ゲーの末に攻略したと言う……うべっ」

「相思相愛の末の恋愛結婚、いいわね？」

「……ぁぃ。」

正中線を的確に打ち据えられた……

それはそれとして、この人が噂の岩巻夫さんか……岩巻さんはあまり多くを語らないが風の噂では壮絶な修羅場を経てのゴール、と聞いている。

ちょくちょく惚気話を聞かされるので岩巻さんの手料理が大好物で日々の激務を胃薬と愛妻弁当で乗り切っている、という事は会ったこともないのに知っていたりする。

「木(っ)く……じゃない、岩巻　境(さかい)だ」

「え、あ、陽務　楽郎です。いつもロックロールを利用させてもらってます」

すごいな、今は私服だけどぴっちりとスーツを決めたら敏腕の仕事人、って感じがする。あとイケメンだ、流石は乙女ゲー攻略の重鎮……リアルですらその辣腕で勝ち組ルートをもぎ取るのか。

そんなこんなあって岩巻夫妻と別れた俺は、まだ痛む腰をさすりながら帰宅するのだった……くそ、今日は仰向けに寝転がりたくないからフルダイブVRはお休みだな。

助太刀為すは天機（後書き）

何故楽郎が腰を痛めたのか、何故ヒロインちゃんが尋常ではないハイテンションなのかを恋愛アドバイザー岩巻が知るまで残り四時間

要するに恋愛ゲーのヒロイン側が主人公を攻略しようとしてるのがヒロインちゃん

Side11：笑うフィクサー

◇

「……では、わざわざ我々を集めた理由を聞かせてもらえるかね？」

カフェ「蛇と林檎」新大陸支店。知る人ぞ知る味覚制限解除が適用される唯一のNPCカフェの支店に集まった六人の錚々たるプレイヤー。

クラン「ライブラリ」教授(リーダー)、キョージュ。

クラン「黒剣」団長(リーダー)、サイガー100。

クラン「午後十時軍」代表(リーダー)カローシスUQ……は残業で欠席の為、代理として副代表寂斬(ジャクザン)。

クラン「SF－Zoo」園長(リーダー)、Animalia(アニマリア)。

クラン「聖女ちゃん親衛隊」隊長(リーダー)、ジョゼット。

そしてクラン「旅狼」の頭(リーダー)にして大規模連盟の盟主アーサー・ペンシルゴン。その後ろには奇妙なデザインの兜を被り、全身鎧に身を包んだ巨漢が静かに立っている。

「そだね、本当は天ぷら騎士団辺りにも声をかけようと思ってたんだけどねぇ……あそこはちょっと敵対ルートだから」

「敵対される、ではなく敵対する、だろうに」

「あら分かっちゃう？　流石モモちゃん」

「……で？　何を企んでいる」

「まぁ待ちなよ、その前にちょっとばかし賄賂を、ね？」

付き合いが長いサイガー１００（斎賀百）だからこそ分かる、にへらと浮かべた笑みはその殆どがロクでもないことを考えている時の顔であると。その推測に答えを示すが如く、来たる祭りを待望する笑みを浮かべるペンシルゴンは堂々とこの場で買収作業を開始する。

「まずはアニマリアちゃんには……こんなスクショを」

「……ほう、ケットシー」

「あれ？　もうちょっと面白反応を期待してたんだけどなぁ……というかアニマリアちゃんなんか雰囲気変わった？」

「ふふふ……リュカオーンに砕かれて以来、私はこの身を鍛え直したのよ。今の私はよりダイレクトに動物達と分かり合える……！」

なにやらおかしな方向に目覚めたらしいＡｎｉｍａｌｉａが拳をグッと握りしめるが、それはそれとして視線は一枚の画像……ドヤ顔で胸を張る長靴をはいた猫に釘付けられている。

「うちの鉄砲玉の情報なんだけど、ケットシーも国を作ってるらしいよ？　生憎私はこれ以上は知らないからサンラク君から吐かせる案件の一つなんだけど」

「良き情報ね……内容次第だけど、ウチは対価を惜しまないわ」

「それはなにより、では次に午後十時軍にはこんな情報は如何でしょう？」

にまり、と笑みを浮かべるペンシルゴンの視線を受け止めたのはスカルペイントが施されたフルフェイスの兜を被った騎士。
何か精神的ドロドロが身体から滲み出ているようにも錯覚するが、それは騎士系統暗黒騎士派生の最上位職業「黒忌士（ダーククルセイダー）」のエフェクトによるものである。多分。

「ウチのカロさんが名誉の二徹に挑んでるから俺が代わりに来たが、ぶっちゃけ俺一人に決定権はねぇ、だから単なるメッセンジャーだぜ？」

「構わないよー……ふふ、ウチは「イムロン」ちゃんと協力関係を結んだ、とだけ伝えてくれればいいのサ」

「聖槌の？　マジか……こりゃ会議が荒れそうだ」

プレイヤー鍛冶師とＮＰＣ鍛冶師最大の違いはやはりリアルという本来の世界が存在するか否かだ。
それはログイン周期に影響を及ぼすこともあれば、また別の方面からアプローチをかける事も出来る。

特に聖槌の所有者イムロンはソロ志向かつある種の職人気質である為、実質ＵＭＡなサンラク程ではないにせよ、捕捉の難しいプレイヤーだ。

だがその腕はムジョルニアを所有しているという一点で保障されて

おり、トップクランとしてはどうにかして関係を持ちたい人材の最たるものである。

特にイムロン自身が「現役のＯＬ」ということもあってか午後十時軍はイムロンへと度々勧誘を試みており、その架け橋を匂わせれば寂斬としてもペンシルゴンの話を聞かざるを得ない。

「次、ライブラリ。君達には私の秘蔵情報を提供したげる」

「ほう？　まだ何か未知の情報を抱えている、と？」

キラリと目を好奇心で光らせたキョージュに対し、ペンシルゴンは頭に挿した花飾り（アクセサリー）に触れながら告げる。

「秘匿情報の玩具箱は私じゃなくてサンラク君の方だから………墓守のウェザエモン関連に続きがある、と言ったらどうする？」

「ライブラリは全面協力を約束しよう」

「話が早くて結構。あ、多分情報系だからユニークな武器とかは期待しないでね？」

「ただ一文だとしても、それは億万の財宝に匹敵するとも。それが考古学というものだ」

ライブラリ、午後十時軍、ＳＦ－Ｚｏｏ、三つのクランの協力を確約した上でペンシルゴンは残る二人、ジョゼットとサイガー１００へと顔を向ける。

「モモちゃんにはこの私との友情に免じてボラン……あー待って待

ってジョーク！　ペンシルゴンジョークだから！　消しゴムで消すように忘れて！　退出ノー！　時代の波に乗り遅れていいのかー！」

「都合のいいことばかり言って……で？　もう先に本題から話せ、それから決める」

「あー、その前に親衛隊！　ぶっちゃけ常時レゾンデートルが満たされてる君らに何提示すればいいかさっぱりなのであとで相談でいい？」

「構わないわよー」

それでは、と改めて机にどかりと踏ん反り返ったペンシルゴンは五人のプレイヤー達へ、ひいてはその背後に控える数多の上位層のプレイヤー達へと己が悪巧みを明かす。

「天覇のジークヴルムを倒したい」

即ち、現在の主流派である笑みリア派（黒竜討伐派）への真っ向からの反逆。その誘いにそれぞれのクランの代表者達はリアクションに差はあれど皆一様に反応を示す。

「成る程、確かに天ぷら騎士団は呼べないわけだ。あそこはノワルリンド討伐派だからね」

「そうそう、戦力的には悪かないけどノワルリンドに直接蹂躙されたのがねぇ……仮にこっちに引き入れるとしても費用対効果が釣り合うかって言うと、ね」

キョージュの言葉にペンシルゴンは苦笑いで返す。そして午後十時

軍の代表代理たる寂斬の方へと向くと、悪どい笑みを浮かべて語りかける。

「私、知ってるよぉ……午後十時軍内部でもユニークモンスターに挑みたいってプレイヤーは結構いるってさぁ……」

「ぐ、まぁ……確かにな」

「確かに色竜もユニークシナリオの一部ではあるけどさぁ……サブタゲだけで満足なのかなぁ……？　私だったらせっかくのゲームなんだし、ジークヴルムに挑んで派手散るも価値をもぎ取るもどっちも楽しいし挑まない理由はないと思うけどなぁ……？」

「く……上手いこと言いくるめやがる、噂に違わぬ詐欺師だ……」

「え、それどこ情報？　私ほど清楚で真摯な存在はいないと自負してるんだけど？」

「えぇ……」

笑みの深まったペンシルゴンに気圧されたのか寂斬はそれ以上なにか言うでもなく、種は撒いたとほくそ笑みながらペンシルゴンは次にサイガー１００とキョージュの方へと向き直る。

「共にクターニッドと戦った戦友諸君なら、ユニークモンスターを倒すことによる恩恵がどれ程のものかは分かってるんじゃあないかなー？　クターニッドの妄想態を見るに、サブタゲ達成じゃ真理書が出ない可能性だってある。そこんとこ、どうかな？」

「我々としてはどちらでも構わない、と言いたいところだが……実

際のところ、ライブラリとしてはジークヴルムの撃破、もしくは色竜の討伐どちらを達成したとしても真理書は出る、と考えている」

「ほ、ほーん？」

おもむろに立ち上がったキョージュはかつかつと靴を鳴らしながら店内を歩き始める。

「ワールドクエストだ、これまでの情報からユニークモンスターの討伐がワールドクエストの進行に関わっていた。だが今回はワールドクエストの条件そのものがユニークシナリオと融合している。であるならば推測できる仮説として、本来クターニッドは新大陸行きの際に必ずエンカウントするユニークモンスター、つまり奴こそが本来一番最初に倒されるはずのユニークモンスターであり……」

「あー、キョージュさん？　申し訳無いけど要点だけお願いできる？」

眉を浅く曲げたジョゼットの要請に目を丸くした見た目だけは可憐な少女であるキョージュは「いけないいな、つい普段の癖が……」と頭を掻きながら要約を述べる。

「恐らくだが色竜を倒す、ジークヴルムを倒す、に関わらずワールドクエストは進行するし、恐らく真理書も配布されると考えている。ただ強いて言うなら……ワールドクエストの次段階がどちらを選んだかにより難易度もしくはストーリーが分岐する、と我々ライブラリは考えている」

とはいえ提示された褒賞を断る理由にはならないがね、と言葉を締めるとキョージュは着席する。

厄介な狸を処理できたことへの安堵を一切表面に漏らさず、ペンシルゴンはあくまでも不敵な笑みを浮かべ続ける。

「さ、お話を続けようか。祭りの準備は大切だからね」

Ｓｉｄｅ１１：笑うフィクサー（後書き）

別に身内に情報を隠してるのは主人公だけじゃない

Ｓｉｄｅ１２：敗色の血溜まり（前書き）

活動報告でアンケート？を取ってます

Ｓｉｄｅ１２：敗色の血溜まり

遡ること一週間ほど前。
ヴィジランスのなんちゃって天文学ロールがファンブルを出したために広大な樹海の中で遭難したルストとモルドは幾度とない危機をなんとか乗り越え、そして――

「はいモルド、ポーション」

「これ人道的に最悪すぎる絵面じゃない……？」

ここ数日に限れば、無茶無謀を覆面の中にぎっしり詰め込んだ鳥頭以上に生と死の間をシャトルランするモルドが体力を回復させながらしんみりと呟く。
体力が完全に回復したところで肌色の悪い手がモルドの手を握る。
すると回復したばかりのＨＰがゴリゴリと削られ始め、数秒もすれば瀕死の状態へと戻る。

「これ僕だけって二人ともズルくない？」

「ズルいもなにも俺はこっち側だしなぁ」

「……私はＨＰが低い、のでアイテムの無駄になる」

「くぅ……」

「あの、ご迷惑でした、か？」

「あ、いえお気になさらず」
びくり、と震えた言葉にモルドは慌てて否定の言葉を返す。
視線の先には元は森人族(エルフ)であったのだろう、元来のヘタレ気質以上に幸の薄そうな顔をした女性が申し訳なさそうにモルドの手を握っていた。

ここは新大陸のおよそ五分の一を占める大樹海の北方に位置する竜血鬼族(ヴァンパイア)の隠れ里。苔と、土の壁と、生命を謳歌する樹海の木々の中において枯れ果てているかのような漆黒の樹皮と捩じくれた枝を持つ大樹の根元に出来た逃亡者達の拠り所である。
事の発端はヴィジランスのなんちゃって天文学で遭難した後、その元凶の「なんか思考が引っ張られる感覚がする」という奇妙な発言によるものだった。
その時点で遭難中であったため、半目でヴィジランスを見ていた二人であったがどうも勘違いや気のせいなどではなくゲーム的なシステムとして「引っ張られる感覚」があるようで、明らかにやばい三つ首のティラノサウルスや、それを一蹴する赤い傷を持つ個体、その他にも三人で挑むには危険すぎるモンスターやそうでないモンスター……諸々を隠れてやり過ごし、木を登り穴を降り枝葉を掻き分け、そうしてたどり着いた場所がここであった。
あまりにも異質なねじれ黒樹、その根元に広がる粗末な集落……そこに住んでいたのは、「竜血鬼化」という共通点を持つ多種多様な種族達であった。

細身の身体に長い耳を持つ森人族（エルフ）に、ずんぐりむっくりな身体に金属の腕を持つ鉱人族（ドワーフ）、獣の特徴を持つ獣人族（ビーストマン）、珍しいところでは三メートルは背丈がある巨大な人……巨人種（ギガント）などすらも皆一様に色の悪い肌と異様に伸びた犬歯を備えていた。

当初は警戒されたルストとモルドであったが、同族たるヴィジランスの存在がその警戒を解いて今に至る。

「我々は、我々自身の……竜に穢れた血では喉を潤すことが出来ませんので……」

「え、じゃあ今まではどうやって……」

「この森は、生命に満ち溢れていますから……竜に穢されていない生き物を狩るか、もしくは……」

竜血鬼の森人族……メルティナーレと名乗った女性が指差した先、そこには牙を折られ、恐らく「輸血」の為に幾度となく腹を切り裂かれたのだろう、腹部周辺の毛が無くなり剥き出しになった皮膚にいくつもの傷が刻まれた猪と思しきなにかのモンスターが何体か、もっしゃもっしゃと山と積まれた苔を貪っていた。

「スロットルボアは食料さえあれば瀕死の怪我も自然治癒で回復しますから……とはいえ、竜に穢されていないものは貴重ですからあまり多くは」

竜血鬼達の想定以上に厳しい生活実情にモルドの頬が引き攣る。プレイヤーと異なり、死ねばそこまでのＮＰＣ達にとって血の供給はまさしく死活問題であり、かつての同族からすらも爪弾きにされた

異端の者達はそれでも捻れた大樹の根元にしがみついて生きていた。
肌の色の悪さも、決して種族的な理由だけではないのだろう。

「皆、ノワルリンドにやられて……？」

「いえ、私はブロッケントリードに」

「俺はドゥーレッドハウルだ」

「僕は、ブライレイニェゴに……嗚呼、どうして一人で挑んだりなんか……」

メルティナーレの言葉が起爆剤となったのか、次々に己を竜血鬼へと変貌させた原因を挙げつらう声により、ただでさえ薄暗くジメジメした隠れ里がさらに湿気り始める。

「……辛気臭っ」

「ルスト、しーっ！」

半目でボソリと呟いた身も蓋もないルストの言葉は、幸か不幸か吹き抜けた風が枝葉を揺らしたことで竜血鬼達に届くことはなかった。
ネフィリムホロウを魂の故郷（ふるさと）と定め、新天地への移住を控えるルストとモルドではあるが、何も他のゲームを経験していないわけではない。

不幸な境遇のＮＰＣというものは腐るほど見ているし、シャンフロのリアリティから繰り出される迫真のうじうじっぷりはルストとモルドにある種の辟易とした感情をもたらしたわけだが、

「……なぁ二人とも、プレイヤーだったら竜血鬼にも抵抗ないよな？」

ここに一人、モロに共感と同情が直撃したプレイヤーがいた。

「……抵抗はないと思う、なんなら死ぬまで吸い尽くしても怒られない」

「トットリ・ザ・シマーネは森人族を連れて前線拠点に辿り着いた。なら俺達にも出来るんじゃないか？」

「えっ、それは……」

その提案は、プレイヤーとしてはともかく「旅狼（ヴォルフガング）」としてはあまりよろしくない提案ではないか、とモルドは内心で冷や汗を流す。

秋津茜を発端とする「天覇のジークヴルム討伐作戦」、それは要するにプレイヤーの大多数と真っ向から敵対することを意味する。実際のところは大部分が様子見、状況によりどちらを攻めるかを決めかねていると仮定して、そこに竜血鬼……色竜による被害者達を連れて行ったならばどうなるか。

なるほど確かにありきたりな被害者、だがありきたりだからこそ確実に色竜へのヘイトは高まるだろう。

「……無謀は危険、聞いた話ではトットリ・なんちゃーらは入念な

調査と万全を期した慎重さで森人族を導いたという。ので、衝動的な行動は私達のみならず竜血鬼達の全滅も招きかねない」

ルストはトットリ何某のことはその名前と功績を触り程度にしか聞いていない。即ち入念な調査云々は当てずっぽうの適当なフカシなのだが、説得力を帯び、確認の手段がないこの場においてヴィジランスを納得させるには十分な力を持っていた。

「成る程……確かにな。地図系アイテムをろくすっぽ持ってこなかったのを後悔する日が来るとはな……」

「こ、後悔先に立たずとも言うからね！　うん！　準備に一ヶげ……痛い！」

「……少なくともアイテム系の充実は急務。ここでセーブするにしても、多少時間がかかるとしても準備は万全にすべき」

「一理あるな……だがいいのか？　俺の我儘みたいなもんだ、付き合わせちまって……」

「……構わない、ただ一つ条件がある。竜血鬼の情報はまだ発信しないでほしい……私も人並みにはユニークの独占に憧れている、ので」

「むしろ外部協力は必須な気がするが……気持ちは分からないでもねぇ」

頷いた両者、竜血鬼達に説明するヴィジランスを他所にモルドとルストは無言で肯き合う。

【旅狼】

モルド：と、いうわけでして……

モルド：どうすればいいかな

鉛筆騎士王：謀殺しよっか！

オイカッツォ：やっぱ秘密裏に処理がベターじゃない？

サンラク：大丈夫、〝緋色の傷〟君なら確実にヤってくれる

ルスト：どう考えても聞く相手を間違えた

Ｓｉｄｅ１２：敗色の血溜まり（後書き）

いわゆる英雄願望(トットリ)、クール気取ってってもＮＰＣからチヤホヤされたいプレイヤーは多いのです

禁断の力（制御できない）（前書き）

九百近い票を手動でどうしろって言うんですか！　過去の俺のバカ！！　見積もりでは１００くらいのはずだったのに……

◆

俺は今何をやっているんだ……

「顕れよ護国神獣！」

「ギャオオオオオオオ！！」

「薙ぎ払え！！」

プレジデントのプレジデントなスピリッツに応えて召喚されたユナイテッドの護国神獣（ドラゴン）「バンメシ」が口の中に光を溜め込み、光条として血を埋め尽くす漆黒の大群へと撃ち放つ。
人を贄として魔界より現れた邪悪なデーモン達が悲鳴を上げながら光に飲まれ掻き消される中、攻撃範囲から外れていた群れが合衆国軍……否、連合軍の先頭と激突する。

「第二射用意！　その間戦線は俺が支える！」

うおおお！　大統領装備専用の工廠で作られた三十二型携行式聖別釘打撃鎚の一撃を食らいやがれぇぇぇぇ本当なんのゲームやってるんだ俺はぁぁぁぁぁぁ！！

なお、ここに至るまで一切のストーリー的破綻が無かったことを先に述べさせていただく。

風雲プレジ伝のクソ要素は戦闘や内政部分の単調さ、俺はそう考えていた。
だがそれは新生ガルカート帝国の首都にある帝城エンヴォルに侵攻した時に間違いであったと思い知らされた。昨日のことであるはずなのに随分と昔のように思える……
暗黒将軍の正体がかつて封印されたデーモンで？
追い詰められた皇帝がデーモンと契約を結んで？
新生ガルカート帝国に属する全ての人々が生贄にされて？
その圧倒的戦力に撤退を余儀なくされ？
イベント処理で獲得領地の半分をズタボロにされるのを眺めさせられて？
護国神獣の試練を乗り越えＭＡＰ兵器を獲得し？
今現在ゾンビ（デーモン）パニック系アクションゲーの真っ只中である。

それだけじゃないぞ、新生ガルカート帝国崩壊後からゲームカテゴリがブレッブレだ。ユナイテッドを掲げるゲームにパラノイア要素入れるのは違くない？　ストーリー的には別に破綻してないから余計タチが悪い。

「撃滅せよ！！」

バンメシ合衆国の守護神、人々の祈りが形を成した護国神獣「バンメシ」が再び光を放つ。
ちなみに視界リンクでプレイヤーが座標を合わせるので実質シューティングゲーでもある。やってることは無茶苦茶なのに世界観的には納得できる理由がちゃんと用意されてるのがまたなんとも……

「出たな元煉獄将軍……！」

「ギェェェエ……！」

クソが、雑魚敵はゴミＡＩの癖にデーモン化した敵将はやたら動きが良くなる。真っ赤な鎧の腹部から茨の触手を生やした煉獄将軍だったものも、フェイントモーションだけではなく明らかに対プレイヤーへの殺意が増している。

これまでのゲーム性は全てチュートリアルです、と言わんばかりの難易度上昇……というか内政面八割捨ててるよね？　最早お手軽に生産できる芋を急ピッチで育てろとしか指示出せないんですけど。

そして何より、戦闘から帰投するたびにライスちゃんから報告され

る他方面で削られまくる味方陣営の被害報告……っかしーな、昨日まで大国統一リーチだったはずなのに敗戦処理一歩手前にまで追い詰められてるんですが。

いや、ストーリー的に理解はできるぞ？　この世界には奇跡レベルの希少さだが魔法的サムシングが存在していて、ビームが出せる大統領は一般兵士相手ならデカいアドバンテージがあるが、超常のデーモン相手にはどっこいどっこいになる……理解はできる、ただゲームとしてそれでいいのか？　納得できねぇ……

人という生き物は呼吸しないと生きることができない、そして息を体から抜くという行為は即ち呼吸における二つの工程の片割れ、息を吐くに相当する。
つまり息を吐くのにも疲れたら息を吸い直せばいいいじゃない。

「わぁ、サンラクサンが起きてるですわ！？」

「ようエムル、ちょっと新大陸一騎駆けしてくらぁ」

「起きて初っ端倒れ臥しに向かおうとしてるですわこの人ーっ！？」

もはや風雲プレジ伝では無茶戦法を選べない、だったらシャンフロでやるしかねーじゃん？

と、その前におめーの姉共に会いに行くぞ。札束ビンタだ。

「はいじゃあいきますえー」

「おっづ、ぁ……づいっ？！」

びちびちーん！　とエフュールによる二発のしっぺが腕に叩きつけられる。静電気が二連続でピリッと来た、と考えるとこれがまたなんともむず痒い。

だがこれで俺のスロット数は七……いや厳密には一枠潰れてるので六、こりゃ本格的にアクセサリー作成にも身を入れた方がいいか？

「なぁエフュール、これの加工って出来るか？」

「んー……あきまへんわ、これは難しいわぁ」

ダメか……俺はインベントリアに灼熱に輝く鱗をしまい、エフュールに別れを告げたのだった。よし次。

「鱗一枚でどうせぇっちゅーんじゃ」

「だよなぁ……あ、そういやキャッツェリアの場所って分かる？」

アラミースから言い寄られているビィラックなら知ってそう、と聞いてみたが返ってきた答えはあまり芳しくない。

「なんじゃワリャ、あんネコ共の国に行くつもりけぇ？」

「ちょいと走りたい気分でな」

「あいにくじゃがわちは出不精じゃけぇの、知らん」

「使……いやなんでもないぞその謎ツールを突きつけるのはやめろ！　穴か！？　穴を開けるつもりか！？」

ドリルと半田ごてを合体させたような謎ツールから逃げるように工房から脱出する。次！　っつーかラスト！

「あらぁ、いらっしゃあい」

「来たぜ……エルク」

守銭奴め、俺が来た意味を理解しているから目が爛々と輝いてやがる。だが焦らしても時間の無駄だしな。タイムイズマネー、しかし金は時を経れば稼げるが時を金で買うことはできない。

「俺は最速の世界を見てきた、であれば……秘法、今ならいけるんだろう？」

「七連結だ」

「うふふふふ……前払いよぉ？」

どずん！！　と剪定所を埋め尽くさんばかりの大きさを持つ皮袋が俺の操作で物質化する。百歩譲って金はいいとしてもこの皮袋はどこから生成されたのかを気にしていけないだろうか。

「ふわぁぁあ……七億マーニィ……うふふ、お金っ、お金っ……！」

目に\マーク……いや、マーニマークが浮かんでもおかしくない様子のエルクが皮袋にしがみつき、よじ登る。
そしてその頂上部で皮袋を開き、数十秒ほど袋の中に顔を突っ込んで動かなくなり……次に顔を上げた時には先程までの有頂天っぷりはどこへやら、神妙な顔で袋から飛び降りる。

ぽふぽふ、とエルクが両手をクラップするとどこからともなく現れた兎たちが神輿でも担ぐかのように七億マーニが詰まった袋を担いで持ち去って行く。あ、会釈されたので返しておこう。

「まいどありぃ……サンラクさんはお金の実る木みたいねぇ……それじゃあ、こっちに来て……」

特技剪定は基本的によく分からない魔法陣の上で行われる。だが「秘法」とやらは一味違うらしい。

再びのぽふぽふクラップハンド、現れた七匹のヴォーパルバニー達は浅く広く液体を受け止めるそれ……世間一般に言う盃(さかずき)と、それを載せる台座を持っていた。
そして魔法陣の中央に立つ俺を囲むように七つの台と盃を設置して去って行く。

「はぁい、痛くないから動かないでねぇ？」

「ばっちこい」

例え首を断たれたとしてもここから動かないでいてやるよ。動かざることフリーズした画面の如し……！　クソゲー版風林火山だ。
ちなみに内訳としては

・速き事サービス終了するクソＭＭＯの如し
・静かなる事修正を放棄されたバグゲーサイトのＮＥＷＳ欄の如し
・燃え上がる事爆弾発言して炎上する関係者が如し
・動かざる事処理落ちしてフリーズする無理にオンライン要素をくっつけたゲーム画面の如し

といった具合だ、人の心を不快にさせるクソゲー風林火山、なんて恐ろしい戦術……！

「――――それでは開拓者よ、繋ぎ紡ぐ技を想起せよ」

おっと待ってくれいきなりシリアスな問いかけは脳の処理を加速しないと対応できない。

「……リミットオーバー・アクセル、重律踏覇(エクシードグラビティ)、鞍馬天秘伝、無重(スペ)律の恩寵(ースチャージ)、ヘルメスブート、ブラッドバーン・バースト、リミット・

マキシマイズ」

「――軛を砕く決心」

盃に赤い水が湧き上がる。

「――世界の律より解き放たれしもの」

二つめも同様に

「――秘せられし伝来の技巧」

赤いそれはまるで

「――遠き空、足着く地の無き律」

俺の血のようで

「――軽やかなる神足の律動」

出血したわけでもダメージを受けたわけでもない

「――己をも燃やす血の衝動」

ただ、俺と言う一個人の定義が拡張されたかのような

「――極限に至る足掛かり」

七つの盃、溢れた赤い液体が魔法陣を染め上げ、中心に立つ俺へと這い寄るように流れて行く。

「――底の底の果て、遠き空をも孕むもの。無垢なる慈悲に語り乞う、捧ぐは対価、価値の輝き」

混ざり合った赤、その全ては同じ色であるにも関わらず、黒に染まった液体が俺の足に纏わり付いて染み込む。正直粘液系モンスターに喰われるようにしか見えないのだが、心頭滅却すれば火もまた涼し。メーカー側の炎上程度でゲームをやめるようならクソゲー趣味などやってられない。

「――繋げ、紡げ、混ざる事なく重なり合って、別離の定めを受け入れて尚結び束ねよ」

どうでもいいけどこれ完全にさらなる力を求めて邪悪な力に手を染めるパターンの闇落ちですよね？

「――七つ輝き、重なり光るは唯一つの光。【剪定秘法（プラニング・ロウ）：同調（ハイコネ）連結（クション）】」

そして、ドス黒い液体が俺の身体に完全に染み込んで……俺は力を手に入れたァ……ふふふ、フハハハハハハハハ！！！！

試してみた。

「おはようエムル」

「歴代最速の死亡速度ですわ」

死神の鎌が首を狩る前に自分で首をへし折った感じ？　死神でも困惑するんじゃないか？

禁断の力（制御できない）（後書き）

プレジ伝の難易度変化はさっきまでよくてキラーマシンを殴っていたプレイヤーがいきなりゴースの遺児と戦わされた感じ
しかも状況は常時不利な上に新システムが五個くらい追加された

プロットガバの修正のため、サンラクさんにはちょっとシャンフロに戻ってもらいます
別に新しい蠍について語りたいとかそう言うわけではなく仕方なくです、本当に仕方なく。

友達の輪を広げよう（前書き）

有志で「集計手伝うよ！」という方々がメッセージをくれてちょっと感激しつつ、やっぱり千票は色々おかしいな、と再確認した今日この頃

あとで個別に返信するつもりではありますが先にここで。

ありがとうございます！　すでに集計したものを送ってくださった方もおりまして物凄く助かってます！　本当に、本当にありがとうございました！

あとシャンフロ二次創作全く問題ないです、なろうの規約に引っかかりさえしなければこちらから何か言うことはございません。クソゲーメインで書いてもいいのよ？

友達の輪を広げよう

やっぱ、いつの時代も「使い手すら持て余す強大な力」って奴にはロマンがある。でなけりゃ呪われた魔剣やら妖刀やらが創作物に登場するもんか、人は傷つく事を忌避するからこそ傷ついてでも前へ進む者に憧憬を抱き、あるいは畏怖するのさ。

そして今の俺は畏怖される側と言っていいだろう……なにせ俺本人が一番ヤベェ、って思ってるからな。

「全く制御できる気がしねぇ」

通算十八回目のリスポン、デスペナでステータスが酷いことになっているが、あのスキルが齎す恩恵を考えればレベル１のステータスでもお釣りが出る。というかそのお釣りで車が買えるレベルだ。

「とはいえ、連結も考えものだな……」

成る程、確かにこのスキルは凄まじい。バランスブレイカーと言っていい、正直対人戦ならこれ一本で無敵になれるポテンシャルがあるし、ナーフされても「まぁそりゃそうだ」と笑って受け入れる事ができる。

だがこのゲーム、どちらかと言えば対モンスターが主眼に置かれている。世界の開拓、がテーマな以上はプレイヤー同士、またはＮＰＣとのイザコザはまぁ確かに不要とは言わないが積極的に流行らせたいものでもない。

それだけの性能を持っているが……逆に言えばそれは主砲だけをひたすら強化した戦艦とも言える。大砲だけで全てが決定するなら戦闘機は無用になる、極振りは基本的にネタビルドの範疇から出てくることはない。

どこかを尖らせればどこかが引っ込むのが世の摂理というもの、持て余す一よりも使い熟した多数の方が利便性という点では優秀だ。

そういう観点から見れば、連結スキルは極限の一を実現する為に多様性を捨てたと言っていいだろう。それが妙手か悪手か、それは使い手次第ってことか……コストも考えればホイホイと使えるものでもないな。暫くはこれで通すつもりだが、解除や再連結はよく考える必要がある、な。

「とりあえず使いどころは超限定的だが……鉄砲玉としての性能は極限領域に足を突っ込んだ感じか……？」

あと余談だが、俺はもう一つ「秘法」の使用ができる可能性を持っているらしい。

疲労困憊といった様子のエルクが示唆した光景は至高の剣技…………興味は尽きないが一日一回制限があるっぽいので次の機会、といったところか。

「なぁエムル、俺の鼻曲がってない？」

「…………？　……？？？」

覆面越しにそう問いかけた俺を珍獣でも見るかのような目でエムルが見つめてきたが、かれこれ十数回は壁のシミになってるからな、リスポンでリセットしてるとは言え不安になってくる。

「まぁいい、実践あるのみってな……エムル、新大陸行きを頼めるか？」

「はいな、サンラクサンはちょいちょいアタシをお留守番させるですわー……」

「ま、開拓者だしなぁ……愉快に自殺するようなもんだ、それに」

「それに？」

「多分頭に乗せてたら吹っ飛ぶぞお前」

「壁のシミは嫌ですわ」

俺だって嫌だよ、でも結果的にそうなっちゃうんだからしょうがないじゃないか。

森。マイナスイオンの代わりに血の匂いが漂ってきそうな魔の樹海では今日も今日とて新たに参入した人間種を含めた熾烈な生存競争が繰り広げられている。

「おい聞いてた話より速いぞ！」

「サラブレッドトリケラトプスっつーかあれゴリゴリにパンプアップした鹿じゃねーの！？」

「えっちょっ、ぶげぇ！？」

「ヒ、ヒーラーが！」

うーん、やっぱ他の人のプレイを安全圏から見るのは楽しいね。後ろから別のモンスターが近づいているのを対岸の火事で見ていられるから。

まぁどちらにせよ回復を依存していたヒーラーがやられた時点でお察しではあったな、お疲れ様です。

「む？」

お？　んだてめーコラやる気か？　お？　我レベル１３０オーバーぞ？　刻傷が見えんのか？　おーん？

ちょうどその時、真横から弾丸の如く突っ込んできたつるりギラリと輝く見るからに頭の硬そうな（文字通りの意味で）恐竜型モンスターが身体的特徴を存分に活かした頭突きで俺を睨んでいたモンスター二体を吹き飛ばした。

「フゴロロロロロッ！！」

「お、おう……いい面構えだ、な？」

これ所謂パワーの代償に理性を捨ててるタイプだな？　名前忘れたけどヘルメット頭の恐竜って確か草食だったたろ、まぁ待て俺はタンパク質だ。食性的に俺たちは分かり合える、そうだろ？

だが向こうさんはどうも喧嘩(ゴロ)目的の来訪者のようで、爛々と輝かせた爬虫類特有の目で俺を睨み据え、口から唾液を撒き散らしながら頭頂部を前へ向けた前傾姿勢をとる。

大きさは軽自動車程度、どう見ても物理特化の頭突きタイプ。あの突進を食らえばゴミ装甲の俺は木っ端微塵に粉砕されるだろう。

「へっ、上等じゃねーか」

紅蓮海の拳帯(レガレクス・セスタス)を装備し、ファイティングポーズ。タフな敵は作業に

おいては不倶戴天のクソ敵だが、初見ならゲームを盛り上げるスパイスだ。

「ラウンドワン、ゴングが鳴る前に叩きのめしてやる！」

突っ込んできた頭をジョルトし、カウンターを叩き込む。俺の拳もタフだぜぇぇぇぇ！！

Q．火力効果がありませんがどう勝てばいいですか？

A．死ぬまで殴れば死にます

「ふーっ、ふーっ……」

畳み掛けるラッシュ、スタミナを使い果たし隙を晒す形となったが……反撃はない。

「ブォロ、ロロロロ………」

ズズン、と血を揺らして倒れ伏すミスターアイアンヘッド、ゲージ開放で反動無効化した事で遠慮なく頭蓋を砕こうとしたのだが……ヒビ一つ入りやしねぇ、思ったよりも手間取ってしまった。

「素材回収して……ったく、二度目からは逃げよ」

タフネス高めな上にステップ入れての振り下ろし頭突きやらなんやら、やたら多彩なファイターだった……えーと？　ドラクルス・ディノパキケフルの剛性頭蓋……長い、メタルハゲで十分だろ。

余計な時間を食ってしまった、気を取り直して……行くか。秋津茜が成そうとした大陸横断、あいつの場合はノワルリンドというでかいイベントフラグと遭遇してしまったからこそ中断せざるを得なかったが……今の俺ならばあるいは。

「…………っし」

スタミナ管理もそうだが刻傷の所為でエンカウントはほぼ確実に格上が相手になる。遭遇の瞬間にバテてましたじゃ笑い話にもならねえ、そこらへんも注意して……いざ、大陸横断マラソン。

目指す場所はなんとなく決めてある。

ノワルリンドにパーフェクトコミュニケーションかましやがった秋津茜だが、対象が飛行可能なモンスターであったことは予想外のメリットを齎した。

そう、ノワルリンドという移動制限がほぼない存在による新大陸のマップ情報だ。

秋津茜の光属性な輝きによって口を滑らせた奴は、個人的主観による非常に曖昧なものではあるが、この新大陸の様子を話したのだ。

まず大前提として、新大陸における亜人種は大陸の右側、つまり旧大陸側に分布が寄っている。

何故かって？　簡単な話だ、後半に行くほどモンスターのサイズが巨大化するからだ。
ゲームだから許される摩天楼が如き生物種、災獣（別ゲー）でそれを知っているからこそおおよそだが新大陸の世界観が見えてくる。
要するに、この世界は旧大陸の右端ファステイアから左端、新大陸の果てに左向きでモンスターのバランス調整がされている。
だから……だから……うん、つまりそういうことなんだろう。
「最終的にプレイヤーはビル並のモンスターと渡り合えるようになる、と？」
予想外、というわけではない。スリリングファームの最強クラスの災獣だってゲームクリアを放棄するレベルで準備を整えればソロでも半殺しにして撃退、くらいには持ち込める。全殺しは今のところ達成報告を聞いたことはない。ゲーム中で一発だけ作れる核爆弾があと三発あれば倒せるんじゃないかとは言われているが……ちなみに核を使うと畑が汚染されて自動的にゲームオーバーだ。
そんなわけで巨大モンスターが倒せることに驚きはないが、シャンフロのシステムで倒せるのか？　という戸惑いがある。
「いや……そうか」
戦術機獣か。
規格外、ってことは規格内の戦術機があるってことだ。仮に歩兵装備だとしてもパワードスーツ装備のプレイヤーがいればワンチャンありそうな気はしてくる。そもそも乱獲可能な前提があるわけでもないしな。

おっと、脳内の話が逸れてしまった。秋津茜を仲介したノワルリンドの齎した情報の中で、一つ気になるものがあった。

この地の中心に近い場所、陽と月に照らされ色を変える水晶の王冠あり。地を這う虫は不遜なる百足と蜘蛛に踏み潰されるがゆえ、その輝きを楽しむ風情は我が特権……

要するに「クソ強い魔物に守られた二色の光を放つ水晶のエリアがある。呑気に見物できる我ＳＵＧＥＥＥ！！」ということなのだが、水晶……そう、水晶だ。

「まだ見ぬ親友(ブラザー)が、そこにいる……！！」

我が盟友、水晶群蠍(クリスタル・スコーピオン)。我が好敵手金晶独蠍(ゴールディ・スコーピオン)。そして親御さんこと水晶群老蠍(エルダー・クリスタル・スコーピオン)。

金晶独蠍は今のレベル帯になっても強敵だ。まぁ装甲面で一切成長してないから一撃食らったら誰が相手でも死ぬわけで、そもそもの遭遇率が低いのもあるが未だ俺の中ではリュカオーン級の強敵だ。

だが彼らは……とても優れた金策要員だ。最近になって水晶老群蠍の素材を入手したことで彼らの生態にやたら詳しくなってしまったが、だからこそ分かることがある。

あいつら、多分元は海棲生物だ。多分地上に進出したはいいが食性の関係で滅び掛けていたところを進化の末に自給自足できる術を編み出し、そうやって水晶巣崖が作られたのだ。

成る程、幕末に似ているな。彼らはあそこでしか生きていけない、

肉を食えず草も食えず、鉱山資源は有限。であればあの水晶の平原こそが唯一の生存圏、侵入者を許さないのも納得できる。
だが、だからこそ可能性が見える。全ての水晶群蠍が旧大陸に来たのか？　彼らの先祖が全て水晶群蠍に進化したのか？　俺はそうは思わない。
昼に碧、夜に紅の輝きを放つ水晶冠の地……きっとそこに、水晶群蠍かそれに近しい種の蠍がいる。そしてそれすなわち新たなる金策の匂い！！
だから俺は走る。ユニークじゃない、誰も辿り着いていない、だからこそ独占ができる。
それに多分、俺はその輝きを見たことがある。ティアプレーテンを探すために双頭翼竜に連れ去られかけたあの日に。
だからこそ、俺の脚は迷わず進むことができる。
「アドバンテージは俺のものだぁぁ！！」
おっと我が戦友〝緋色の傷(スカーレッド)〟君じゃないか、ハァイ、調子いい？　え？　次会った時は敵同士？　いやいや、俺たちの友情は永遠、だろ？　それじゃあ俺は用事があるから……うおお死んでたまるかぁぁ！！

友達の輪を広げよう（後書き）

ドラクルス・ディノパキケフル

三つ首ティラノに次ぐ樹海の猛者。リアルパキケファロサウルスは見せ筋ならぬ見せハゲ説があるらしいですがこっちは完全にバトルハゲ

車の衝突並みの衝撃を頭の一点に込めて突っ込んでくるのでシャンフロがR18だったらまず間違いなく人の身体がビスケットみたいに砕け散ります

臨界の脚、空を征く

森を駆け抜ける、というのは思っていたよりも難しい。
単純に木々が邪魔、というのは勿論のこと、厄介なのは地面だ。
地に足ついて生きているのは人間だけではない、木々の根っこは地面に埋まっている。そして全ての木が根っこを全て地面の下にしまってくれる程優しくはない。

薄暗い地面に紛れて顔を出した根は草結びよりもよっぽど悪質なトラップ足りうるし、逆に柔らかすぎる地面は人の足程度なら容易く絡め取ってしまう。
すなわち、木々が生い茂る為に適した土地とは、走るという行動を取るには不適切な場所であるということだ。

なので、こうしてみた。

「ばばばばばば」

轟々と、風が俺の身体を阻まんと大気の壁を作り出すが、馬鹿馬鹿しい程の推進力を帯びた俺の身体はまさしく壁を穿つ杭が如く大気の壁をぶち抜き切り裂きながら飛んでいる……そう、飛んでいる。

「や、ばばばばばば」

これヤバイ！　マジでヤバイ！　同調連結（ハイコネクション）ヤバイ！！
単体スキルでこれはヤバイって！　ヤバイ、状況がマジヤバイから語彙力が！　語彙力がヤバイに侵食されてるぅぅ！！　ヤバイ！

「おおおおお!?」

飛ぶ、というよりも射出と言うべきだろうか。単純な推進力を臨界点まで突き詰めたならば、翼を持たず胸筋も貧弱、骨も中身が詰まりすぎな鈍重ボディでも空を飛べる。

話は変わるが幼女先生(ティーアス)の「超越速」……タキオンとは光速以下になることがない超光速を指す言葉であるらしい。成る程、どれだけ手を抜いても加速バフと減速デバフを同時に付与するあのスキルに速度で勝つ方法は存在しない。

だってそうだろう? 駆けっこでただでさえ首位独走してる奴が後続の足首に鉄球を繋げてくるようなものだ。故にこそ先生は賞金狩人最強の存在であり、最速のNPCなのだ。

であれば、俺が得たこのスキルの名は人の、プレイヤーの限界を示す敗北の名であり、極限に至った名誉の名であるのかもしれない。

同調連結、機動力特化の七連結。俺(サンラク)が育んできた機動力の全てを一つに連結したそのスキルの名は七連結「臨界速(ブラディオン)」と言う。

「さぁぁあっ！！」

ずだん！　と何もない大気を蹴って三度目の加速を得る。現象そのものは連結し、組み込んだヘルメスブートのそれだが「臨界速」はそんなまっちょろいスキルではない。でなけりゃ壁のシミになんかならねぇよ。

「臨界速（ブラディオン）」は三つの効果を複合したスキルだ。
まず第一に効果適用範囲はスキル発動から「五歩」足を踏み出すまでの間。厳密には五回足の裏で踏み込むモーションをするのが効果適用範囲。
次に自傷効果、発動した瞬間にＨＰの九割九分九厘が消し飛ぶ。要するに１になる。流石に回復はできると思うが、試す前に壁のシミになっていたので要検証。今試した、回復自体は可能。
そして最後に発動中に付与される効果だが……これがヤバイ。
初手最高速、一歩ごとに加算、いや多分乗算累積される極端な加速バフ、空中ジャンプ、壁走り天井走り、着地時などの反動無効、加速中のダメージ軽減。まぁ列挙すればこんなものか？　要するにスキル発動中は擬似的な無敵モードと言っていい。

これだけ書くと七つのスキルそれぞれのいいとこ取りのようにも見えるが……んなこたない。
いいか、人間という生き物は移動を足に依存している以上、ブレーキも足に依存しているんだぞ？　五歩目は最大の加速力を得ることができる……で、どうやって止まれと？
六歩目は補正のないただの足だ、リニアから足だけ出して地面に触れさせたらどうなるかなんて言うまでもない。もみじおろしになるぞ。
となるとスキル補正がついた五歩目でブレーキをかけなければならないわけだが……ははは、アクセルを踏み込んで止まれと申すか。
思い返されるラビッツコロシアムの壁を俺色に染める苦い思い出……思わず反射的に踏み込んだせいで加速して顔面から壁に激突。
止まろうとしてバランスを崩し顔面から壁に激突。
調子に乗って空中ジャンプして着地に困り、一か八かで真横に加速したせいで顔面から壁に激突。
せめて壁に激突するのだけは回避しようと壁を蹴ったはいいが逆方向に吹っ飛び、バランスを取る為にたたらを踏んだせいで最高速度で顔面から対面の壁に激突。
結構頑丈なコロシアムの壁にあった一筋の小さな亀裂は俺のせいではないと信じたい。
結論から言えば、このスキルは狭い場所で使ったらまず間違いなく壁のシミになる。だから使うなら制限のない広い場所だ。
「おお、おおおおぉぉぉ……！」

バカみたいな加速……バ加速が天然のエアクッションで軽減されたためか、未だ前へ上へと吹っ飛んでいるが周囲の景色を観察する程度の冷静さは取り戻されてきた。

通常の覆面じゃガードにもならないので【昇滝】の頭機殻を装備中だ。ゲームだとしても裸眼はきついよ裸眼は。

既に樹海の三分の二を通過している、妙だな……確かに結構な速度でぶっ飛んでいるが、あの尋常ではなく広い樹海を既に三分の二も超えられるか？

いや、違うのか。この樹海、半月みたいな形をしているから最短最速で進めば距離そのものは大したことがないのか？　いやそれも違う？　旧大陸のエリアがその実態と比べて短時間で攻略できることを考えればプレイヤー達が体感する距離と実際の距離が異なっている、と言うことか。

……人という生き物は、どうしてこう最優先すべきことから目をそらして別のことにばかり思考を割いてしまうのか。

「そろそろ落ちるか……」

人は翼を持たない、悲しいことにな。だからこそ空に憧れるわけだが……このまま落ちたのならば、地面にシミができる。

であれば、逆転の発想だ。

「成功率は７５％……世界で一番信用できない乱数だ」

実質２５％と揶揄される成功確率７５％と言う数字は、５０％に挑

む時ほどの勇気を持つこともできなければ１００％の安心感を抱くことができない。まさに悪魔の数字だ。６６６が悪魔の数字？　６６％とか最高じゃん、崇めるわ。

「っしゃ行くぞオラァ！」

空中で身体を動かし頭を下に、足を天に向けた天地反転の体勢に移行し、撓めた四歩目の足で大気を蹴る。そう意識する。

ボッ！　と莫大な大気が俺という弾丸に穿たれ、人間一人の身体が凄まじい勢いで地面へと落ちて行く。

落下死に不慣れ、という訳でもないが……これはヤバイ、怖い！

「だがっ！！」

俺は俺自身と対決する、そのためには大いなる物理演算の力を借りなければならない！！

風が水のように身体を押しとどめようとする、だが今の俺は一人じゃない。ゲームという世界における絶対摂理、物理エンジンによる落下処理によって凄まじい勢いで地面へと落ちて行く。

姿勢制御！　足を地面に、頭を天に！　ええい、顔が動かしづらいんだよ正眼の鳥面に変更！　両手を広げてバランスを取りつつ、肝心要の五歩目を地につける右足一本に集中し、左足は膝を曲げて若干浮かせて……弾着、今！！

「ぬぅん！！」

人が地面に叩きつけられた場合、十中八九地面のシミになるのがオチではあるのだが。ピンと伸ばしつつも緩衝としての役割も果たす

右足が臨界速の効果で落下ダメージの衝撃を無効化する。
ただ俺本体とは別に地面そのものへの衝撃は如何ともし難く、凄まじい音が地面を揺らし、右足の一点が土にめり込む。
だがここで五歩目の効果が発動、重力による落下加速を含めた上から下への運動エネルギーに対し、下から上へ跳ね上がらんとする五歩目の加速が真っ向から激突する。

「………」

土煙が晴れ、そこには地面に右足を立てて堂々たるポーズをとる鳥頭の俺。
フッ、高らかに広げた両腕がまるで翼のようだな。

「さて、行くか」

リキャスト終わったらもう一回挑戦するか？　でも75%だからなぁ……本当信用ならない数字だぜ、せめて端数こみで79%くらいあればもうちょっと信用できるんだが。

臨界の脚、空を征く（後書き）

舞い降りし荒ぶる鷹のポーズ

ちなみに同調連結の連結上限は八、千差万別に連結スキルがある訳ではなく、それぞれのカテゴリ（機動力系）（防御力系）にいくつかクラス分けされた七種の連結スキルがあり、連結したスキルの諸々のパラメータが基準値を満たすとそれに応じた連結スキルが解放されます

要するにシンクロ召喚ですね、スキルとスキルを連結した合計値をノルマとする連結スキルが解放されます。なのでやろうと思えば六連結以下でも「臨界速」は出る可能性があります

なお臨界速は連結ランク6、つまり上にもう一個あります。臨界速より使いづらい直線番長こと超光速（ルクシオン）がね……

やせいの　へんたいが　また　とびだした　！（前書き）

書籍化すらしてない、挿絵もない小説に二次創作動画出来るのですごい（呆然）

いやほんとありがたいというかなんというか……ちゃんと見ました、天誅の連鎖は終わらない……！

やせいの　へんたいが　また　とびだした　！

ラビッツで買える食料アイテムはほぼ人参か人参味なのが頂けない。豊穣のキャロットなるお得意様にだけ販売される空腹度全回復の人参をゴリゴリと齧りながら俺はため息をつく。

称号「美食舌」の取得も考えものだな、ゲテモノ系アイテムの味も解放されるならむしろ取らない方が戦闘面では有利な気がする。それでも噛み砕き嚥下するのが廃人なのかもしれないが……味覚捨ててまでゲームにのめり込みたいか？　俺は時と場合による。

「さて……木々もまばらに、明度も上がってきた。見えてきたな、新エリア……！」

新大陸中央に向かうにあたり、前線拠点から出発する場合は二つのエリアを通過する必要がある。

一つは当然樹海エリア、あそこは新大陸の玄関口であり、レイ氏や秋津茜の話を聞く限りでは様々な別エリアと繋がっている。それだけじゃない、トットリとの遭遇やルストモルド達の報告、京ティメットの思わせぶりな発言から樹海エリアに複数の種族がいることも分かる。

要するに樹海エリアは上級者向けの、いや違うな……ジークヴルムのユニークシナリオＥＸ、ひいてはその後のワールドクエストを視野に入れた壮大なチュートリアルなんだ。聖女ちゃんも言っていた、異なる種族同士で団結せよと……つまりユナイテッド、合衆こ……おっといけない、思考が大統領に汚染されている。

既に他クソゲーにも染まりつつある脳内領域をこれ以上マーブル模様にしたくない。

「砂漠、砂漠か……」

砂地だが、平らだ。そりゃ多少の高低差はあるだろうが……見た限り、歩行を遮るほどの障害物はほとんど見えない。

つまり臨界速(ブラディオン)を使うのに適した広々とした場所ということだ。ただ、足場の悪さは樹海の腐葉土以上だ。着地に失敗すれば砂を赤く染めることになるだろう。

くっ、せめて効果適用が踏み込む片足だけでなければ……いや待て。

「さっきの垂直落下を、こう……斜めにずらして……行けるか？」

うーん、それでもスリップして吹き飛びそうだ。予想以上に厄介だぞ砂漠エリア……と。

「むむっ」

人の気配！　は冗談として。

正眼の鳥面の効果だ、視界の一定範囲内にエネミーMob、またはNPCが入り込むと視界にフォーカスが入るような感覚を得る。

つまり逆説的に視界が勝手に固定されるような感覚があれば、正面に何かいると言うこと。

恐ろしいまでの再現率とリアリティを誇る砂漠で、全力で砂かきして掘った穴に身体を埋めてカモフラージュ。もしエムルがいたら文句必至な隠れ方だな。

「さて？」

誰か近づいてくるな。数は……三人？

「見た目的に騎士、盗賊、魔術師系列か……？　不都合だな」

既に砂漠地帯に進出しているプレイヤーがレイ氏達以外にもいたとはな。まぁ当たり前っちゃ当たり前だし不都合がある訳でもないが……俺の名前はちと悪目立ちしている。

サインくださいスクショ撮らせてください程度ならともかく、ユニークを教えろと詰め寄られたりあまつさえ同行させろと言われたら……最悪の場合、地獄行き急行（モンスタートレイン）にご乗車頂くことになる。

やだなぁ……賞金狩人なんてけったいなもんを実装するここの運営がＭＰＫを考慮してないはずがないんだよなぁ……

さてどうしたものかと悩んでいると、どうやら三人組がモンスターと遭遇したらしい。

「わぁあ！　ヤバイって！」

ヤバイ、つまり危険なモンスターなんだろう。

「蛇！？　鰻！？　あれ倒せるモンスターなの！？」

ふむ、砂漠地帯だしな。鰻は違うと思うが蛇タイプのモンスターは出てもおかしくはない。コブラタイプはだいたい強キャラ設定されるから厄介だよなぁ。

おや、あれかな？

「逃げろ！　早くしないと喰われるぞ！」

蛇じゃなくて虫(ワーム)だしこっち来てんじゃねぇか！！

砂から顔を出した状態で、こちらへと走り逃げて来た三人のプレイヤーの背後を見れば、そこには轟音と砂煙をあげながら地面をのたうち迫る巨大なワーム型モンスターの姿が見え、このままでは俺も巻き込まれるルートであることがありありと理解できる。

クソがっ！　刻傷の効果でこっちに誘引されてやがるな！？　向こうが連れて来たくせにこっちに押し付けてトレインしようたぁいい度胸だ、地獄に落ちるなら一緒に落ちるぞゴルァ！

「待ぁぁぁぁぁぁてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

「へ？」

「え？」

「は？」

砂の中から飛び出した半裸の鳥頭が双剣を振り上げて逃亡する三人へと走り寄る。

ようし、ヘイトに三人とも含まれたな？　地獄行き急行へようこそ！

「きゃあああ！？」

「おいコラ武器を向けるのはあっちだろ！！」

「あ、あんたあの時の……サンラクって人だろ！」

「わぁ、見た目ほぼそのままでバージョンアップしてる……」

あん？　こいつら俺を知って……いや待て、騎士の男が一人に盗賊と魔術師の女二人？　そんな感じのハーレム野郎をどこかで……あ、思い出した。

「君らあの時の三人か！　確か……ソウマとカホとリナ！」

「本名っぽく言うのやめろ！　ソーマ！」

「カッホ！」

「リーナです！」

こいつら跳梁跋扈の森で俺をモンスターと間違えた三人組か！　うわ、こんな場所で再会するとかマジかー……いや待て、今はそれどころじゃないや。

「埒があかない、奴を撃退するぞ！」

「はぁ！？　あんなの倒せるわけ……」

臨界速起動（ブラディオン）！　広々とした場所、巨大な敵……理想的な環境だ。

「でなけりゃ奴に喰われるだけだ、ヘイトは取ってやるから左右に避けて攻撃してくれ！　ＤＰＳは頼んだぞ！」

「ディーピーエス？」

「ダメージパーセンテージセカーン！！！」

正式名称を叫びながら跳躍。

人としての臨界点に至った加速の力は肉体の推進力と同義だ。ボン！　と足元の砂が爆ぜるように舞い上がり、俺の身体が紫紺のエフェクトを纏いながら宙を舞う。

「さて……」

真界観測眼（クォンタムゲイズ）起動、奴の身体の節々から噴出される砂にもダメージ判定があることをエフェクトの波で把握した俺は左の傑剣への憧刃（デュクスラム）と回復ポーションを入れ替え、洗顔でもするかのように顔面へと中身を浴びせかける。

「スリップダメージを耐えれるだけありゃ充分……！」

二歩。

爆ぜる空気を足元に、地面に対して垂直の跳躍から横方向への平行な加速で猛進する巨大ワームへと突っ込む。

「ファーストブラッドは貰った……！」

例えるならば高速で双方向から走る車同士がすれ違うかのような。

右手に残した傑剣への憧刃でワームの表皮に斬りつける。軌道は上々、幸運補正もあってクリティカルは出したが……

「硬いっ」

三歩。

ワームの表面を踏みつけ、その速度に追随するかのような極めて高く速い跳躍によるバック宙返りを行いながら傑剣への憧刃からの感触からおおよその予測を立てる。

「斬撃は論外、刺突……関節ならワンチャン？　となれば魔法か、もしくは……」

打撃、かな？　尤も、口と食道だけで動いてそうなこの虫が打撃でダメージを受けるような臓器を持ってるかは疑問だが……

「装備変更！！」

紅蓮海の拳帯(レガレクス・セスタス)、真紅の帯が両手に巻き付き、人の拳を敵を砕く武器へと変える。

さらに百秀の神腕(サウィルダーナハ)起動、銀光に金の粒子が混ざった拳撃スキルがワームの体表に叩きつけられる。

次の瞬間、ボゴン！　と凄まじい音を立てて物理的にワームの巨躯が僅かだが凹んだ。

「おおお！？」

確か百秀の神腕(サウィルダーナハ)は従来の幸運参照に加えてランダムなステータスの数値も含めてダメージ計算を行うんだったか……まさかこれ、ランダム選出でもう一度幸運が選ばれた？

くそッ、いい火力だが乱数か……期待できねぇ、ＶＩＴ引いたら最大火力の半分程度しかダメージ出ねぇじゃねーか。

だがやれるか？　仮にも新大陸に来る実力があるなら戦力として数えていいよな？

やせいの　へんたいが　また　とびだした　！（後書き）

お久しぶりな三人組、ちょっと文章を当時のと似せたりする小細工

Ｈａｌｆ　Ｓｉｄｅ：マッチとポンプの賢い使い方（前書き）

４００話突破したので設定投下するつもりだったけど予想以上に筆が乗ってしまい今話で投下します

二次創作ＯＫって言っただけでいきなりいろんな二次創作が出てきて戸惑いを隠せない毎日、頑張ろう……いろいろ

とりあえずイーラやろうか！（いい笑顔）

Ｈａｌｆ　Ｓｉｄｅ：マッチとポンプの賢い使い方

「反応……無しっ……逃げたか……」

あの野郎、地面から奇襲たぁ猪口才な真似しやがって。激戦の中で開眼した必殺「三歩進んで一歩下がってもう一歩進んでぶっ飛ばすアタック」がなければ危ういところだった……でもあれはリスキーすぎるから要練習だな、下手すりゃ自分からおろされに行く大根だ。

「だぁー、クソ……自分が追い込まれたと見るや逃げの一手を選びやがって……」

素材落とせや、経験値よこせや。鯱やサソリを見習え、奴らは半死半生でも俺を狩ることを諦めていなかったぞ。逆に言えば素材だけになるまで命の危険に晒され続けたので、その点で言えばちょうどいい落とし所として勝手に逃げてくれたワーム君には感謝したほうがいいのだろうか。

「さて……久しぶり、と言うべきかな？」

「あの、えと……お久しぶり、です？」

果たして久しぶりに出会ったことを喜ぶべき間柄なのか？　という疑問が顔に出ている魔術師の少女リーナが俺の言葉に返答する。

最初に出会った時の初期装備感丸出しのローブではなく、魔女らしい意匠を残しつつも動きやすさとある程度の鉄火場にも対応した身軽な魔女装、とでもいうべき姿は彼らも相応のプレイ時間を重ねたことで成長したことを視覚的に示していた。

その点俺はレベル１からレベル１３６までほぼ見た目が変わらない、強いて言うなら身体に妙な模様が這っている程度か。

とはいえ改めて見ると、近接魔術師とでも言うべきあの変態の装備と比べるとワンランク……いや、見積もってスリーランクは見劣りする装備だ。

なんというか最上位装備特有のオーダーメイド感がない、強そうには強そうだが量産品感が抜けないのは中間装備にままある特徴だ。

「………？」

いや待て……そう言えばさっきも妙に弱っちかったというか……

「なぁ、君らレベル今いくつ？」

「俺レベル８１！」

「あたし７４！」

「私は８９です……その、サンラクさんは幾つなんですか？」

「俺？　１３６」

「は？」

弱すぎる、仮に新大陸行きの船に乗れたとしてもそんなレベルで樹海を突破できるとは思えない。

臨界速で自発的ロケット射出歩法を使って尚何度かの戦闘は避けられなかったんだぞ？　一体どんな裏技を……ん？

「なんか君ら足透けてない？」

「あ、そうなんだよねー。私らあのすけべ爺さんにランダムで転移させられちゃってさー、ねぇサンラクさんここどこだか知ってる？」

「新大陸の砂漠エリアだ、現状じゃ多分最前線だぞ」

「マジで！？　ねぇねぇ二人とも、あと五分でセーブポイントまで辿り着けるかな？」

いや無理だろ、砂漠には蟲人族（バグマン）の集落があるらしいが五分そこらで見つけられるとは思いづらい。樹海？　やってみろよ。

既にくるぶしの辺りまでが完全に透明化し、それ以降も半透明になりつつある三人がワタワタと慌て始める。

……情報（ユニーク）の匂いがするな。ちょっとカマかけて情報引き出して見るか？

「なぁソーマ君、差し支えなければどういった経緯でここにいるか聞いてもいいか？」

「え？　えーと、俺達はリーナが転移魔法を覚える為に「空渡（からわたり）の大師ヴェルガント」の処に行ってたんだ」

チッ、転移関連なら少なくとも未発見ってわけじゃねーな、解散。

いや解散すんな。

「そしたらスケベそうな爺さんがいてさ、空渡の真髄をその身で感じ取るがいいー！　って、転移させられて……」

「うんうん、飛ばされる前に一番弟子？　とかいうキレーなおねーさんにアドバイス貰ってさー。あの爺さんが使う乱数転移(シャッフル)は飛ばされる場所はランダムだけどぉー、絶対セーブ可能な拠点の近くに飛ばされるからぁー、頑張れば行ったことのない街にマーキングできるねぇ……くっきりマーキングできちゃうねぇ！　って」

「お、カッホモノマネうまいな」

「ちょっと似てましたね」

そうだね、誰が一番弟子名乗ってるのか一発で分かったね。多分それくっきり、とかマーキング、の部分だけやたら強調してる上にソーマの股間辺りガン見してたと思うよ。

ただおおよその事情は見えて来た。つまりこの三人はそのなんたらガントの魔法で新大陸に飛ばされて来た。で、乱数転移(シャッフル)とかいう魔法の特性上、セーブ可能な拠点の近くに飛ばされるわけで今回は蟲人族(バグマン)の集落近辺に飛ばされたわけだ。

だが別に「蟲人族の集落まであと１００メートル！」「こっちに集落があります！」なんて親切な標識が立ってる筈もなく、三人は地図すらない四方八方から正解ルートを選ぶクソ乱数でハズレを引き、ワームに追いかけられてタイムリミットまでを無駄に消費させられたわけだ。

「まぁなんだ、聞いた限りじゃ外れルートを踏んじまった訳だな。俺もここには来たばかりで拠点がどこにあるかとか知らないし」

「そっかぁー、残念」

拠点が見つからないとなれば、倒せるモンスターがいないのであれば、あとはもう乱数転移(シャッフル)の効果切れまで雑談するくらいしかないのだろう。
まぁ懐かしい顔だし俺も会話に付き合うくらいならしよう。さっきのワーム君が大暴れしてくれやがったせいで他のモンスターも逃げてるようだしな。

「あの……サンラクさん、新大陸ってあんなモンスターがたくさんいるんですか？」

「え？　いや……」

そんなことはない、と言おうとしたが脳裏によぎる三つ首のティラノ、双頭の翼竜、メタルハゲ、数の暴力チビ恐竜、筋肉鹿トリケラ(サラブレッド)……

「……うん、まぁ割とそうかもしれない」

むしろ大味なモーションしかないワーム君の方が戦いやすいとまで言える。レイ氏クラスとは言わなくても打撃武器持たせたタンクに特攻させて砕けた傷口に魔法叩き込めば安定化しそうな気配はある。
それになんというか、妙にダメージの通りやすい部位が多かったというか……外殻の色が微妙に違う部位があったり、変な引きつりみたいな部位もあったし……もしかしてレイ氏が戦った個体か？　そういや倒したかどうかは聞いてなかったな。

……いや、待てよ。

「……台本、シナリオ、危機、進化……」

「どうしたんですか？」

「いや？」

今何かとてつもなくヤバい事実に気づいてしまった気がする。特に外道や変態に知られちゃいけないタイプの事実に。

◇

「いいねぇ……見たことない場所だ、当たりを引けたかなぁ？」

バイノーラルな声で囁きかけてやれば転移魔法の権威は簡単に言うことを聞いてくれる。

単純ながらまず試そうとする奴はいないであろう方法で実質的にＮＰＣ限定魔法の一つである乱数転移(シャッフル)を無制限に利用できるその賢者は、雪に覆われた岩山を見上げてニヤリと笑みを浮かべた。

「んんー……肺が凌辱されるような冷気、流石はシャンフロだねぇ……おぉ、寒い寒ぃ」

実現杖ザ・デザイアーの力でその効果を倍増されたマジックトーチが魔力を燃料に暖かな熱を帯びる。

傍目から見れば頭の上に光球を浮かべた奇妙な魔術師であるが、ジリジリと足元の雪を溶かしていることからその熱量の高さが窺える。

「松明擬きも火力を上げれば殺傷力を帯びた頭突き兵器になる……ってねぇ、なるほどつまりヘッドファッ」

「がはは逃げろ逃げろクレイモアの！！」

「うぅむ、今回はいけると思ったんだがなぁ！！」

「やはり英傑の「焔」を纏うほどに極めねば彼奴めの首は刎ねられんのだろう！！」

ずずん、ずずんと地面が揺れる。それと同時に洞窟の奥から豪放磊落をそのまま音にしたかのような声が響く。

そうして、洞窟から騒々しく現れたのは見た目は三十中程に見える男性二人組……されど、そのサイズは二メートルやそこらではないと一目で分かるほどに大きい。

「………ワオ、巨女もいるならヘッドでスるのも案外現実的ぃ？」

岩陰に隠れ、現れた二人の巨人の逃げる先を眺めながら賢者……ディープスローターは驚きと喜びの混じった微笑を浮かべる。

だがその笑みは二人の巨人を追うようにして現れた小さな白色の竜群を見たことで形を変える。

「――あは、みぃつけたぁ」

あるいは試練、あるいは当て馬、そしてあるいは……

本命を輝かせるためのスパイス。

Half Side：マッチとポンプの賢い使い方（後書き）

実際のところ一日で作った年表なので色々ガバいし後々設定に変化が発生する可能性は否定できません
ただ要所要所の単語だけ覚えておけば後々「おっ」となるかもしれません

神代年表

神代一年目：
人類が生活するに足る許容値を極めて高水準に満たした惑星を発見、精査した結果知的生命体は確認されず、二百九十六年に及ぶ星の旅に終止符が打たれる
発見された惑星は「ユートピア」と命名される
第一次調査隊壊滅、そのあまりに酷い死に様から船外調査無期限延期。対策研究チーム発足

神代二年目：
進展なし、三統政府の規制を振り切り外へ出た民衆二十名が死亡。
出現した［情報規制］に対し無人兵器使用、Ｂ－２リヴァイアサン及びＢ－３ベヒーモスが恒星間航行システムに甚大なダメージを受けるもこれを討伐
回収された［情報規制］の死骸を精査した結果、そのすべての体組織が同一の元素で構築されていることが判明
さらに通信の途絶していた無人調査衛星との通信が回復し、この星の全容が判明する

それにより判明した事実に基づきジュリウス・シャングリラによって「アイテール」「エレボス」と命名される

神代十年目：
対策研究チームの最高責任者が自殺。後任としてジュリウス・シャングリラが就任。補佐としてエドワード・オールドクリングが配属された。
当チーム全最高責任者が消去したデータの復元はアリス・フロンティア研究助手が担当。
二年前の［情報規制］再汚染事件による悲劇を解析した魔法運用理論が天津気　刹那博士より提出され、当博士は特別顧問として対策研究チームに配属。

神代十一年目：
魔法運用理論に基づいた第三世代型デバイスの量産に成功。Ｂ－３ベヒーモス政府軍の具申により選外調査の無期限延期を解除、第二次調査隊が無人テラフォームマシンによって整備された船外の調査に向かう
第三世代デバイスによるマナ粒子の吸収を確認、人類種の船外活動が可能であることが実証される。［情報規制］将軍の独断専行はその偉業を鑑みて謹慎処分とする
※［歴史非載情報］アリス・フロンティアの「実験」開始

神代十六年目：
Ｂ－１ジズ、Ｂ－２リヴァイアサン、Ｂ－３ベヒーモスをそれぞれ別の座標に配置し、テラフォームの効率を上昇させる計画が承認。
ジュリウス・シャングリラの具申により唯一大気圏外への航行能力

を保持したＢ－１ジズは無人運用モードで月面に配置され、惑星の調査を行うことが決定
第十二世代デバイスの研究開始、アイテール大陸のテラフォームは８０パーセントまで進行

神代十七年目：
Ｂ－３ベヒーモスより救援要請、未確認の生命体が出現しサイト－３、８、１２、２６が完全消滅。その他のサイトも甚大な被害を受ける。推定犠牲者数八百万人超
Ｂ－１ジズよりエレボス大陸全域で未確認生命体の発生が報告。Ｂ－３ベヒーモスは外敵戦闘モードへと移行、Ｂ－２リヴァイアサン政府の決定によりＢ－２リヴァイアサンはアイテール大陸へ留まり、救援はＢ－１ジズが月面からの砲撃で対応

神代十八年目：
Ｂ－３ベヒーモス政府崩壊、原因としてはベヒーモスのハッチを長らく開き外気を取り込んでいたことが原因とされる。Ｂ－２リヴァイアサン、酸素生成システム再稼動
Ｂ－３ベヒーモスのＡＩに異常発生、外部からの干渉を拒絶した異常な稼動を開始
Ｂ－１ジズの惑星観測にバグが発生し始める、原因は不明

神代十九年目：
アイテール大陸にて未確認生命体観測、再結成された対策研究チームの報告によりこれまで発見された未確認生命体がこの大陸深部と同様の元素を保有していることが判明。Ｂ－２リヴァイアサンによる海底調査が具申されるもＢ－２リヴァイアサン所属民間人のデモ

によって断念
突如Ｂ－３ベヒーモスからの通信が回復、臨時代表として非承認就任していたアンドリュー・ジッタードールによって政府崩壊後の様子が明らかとなる

〔情報規制〕

神代二十年目：
便宜上呼称された対「始源眷属」兵装の完成、Ｂ－３ベヒーモスへの襲撃を第一次と定義、Ｂ－２リヴァイアサンの応戦を第二次と定義、第三次始源眷属殲滅作戦が実行される

〔情報規制〕

〔情報規制〕

神代二十三年目：
Ａ（アルファ）計画の失敗を鑑みてΩ計画の無期限凍結が決定。コードネーム「ＡＢＣＥＤ－Ω」の完成は致命的な悲劇を起こしかねないとされ製造の進行は中断される
コードネーム「ＡＢＣＥＤ－Ω」製造中止オーダーがシャットアウトされる。現地技師の命を賭した行動により作業のループ化に成功
抗獣計画発足、最高責任者はジーク・リンドヴルム博士が就任
従来の兵器が通用しなくなった事実を鑑みてコードネーム「Ｆ．Ｉ．Ｎ．」の開発開始、さらにＢ－２リヴァイアサン政府によって「６．６．」計画発足

〔情報規制〕

神代二十五年目：
Ｂ－３ベヒーモスからの通信途絶、地底へと潜行したものと推測さ

れるもＢー１ジズの観測システムはもはや完全に遮断されており真偽の確認はできず。Ｂー２リヴァイアサンはコードネーム［６．６．６．］の完成次第、海底へと潜行が決定
天津気　刹那博士が遺した理論と設計図に基づき第二十世代デバイス完成

神代二十六年目：
Ｂー１ジズの離反によりＢー２リヴァイアサン政府集団自決、元対策研究チーム現「バトンタッチ」実行チームが政府代理就任。残存218名の人類種と共に一号計画発足、それに伴いコードネーム［６．６．６．］による中心核穿孔計画破棄。部分的に研究を続行するＢー３ベヒーモスとの通信回復、Ｂー３ベヒーモス統括責任者を名乗るＡＩ「象牙」とのコンタクトの結果、開発最終段階に入った［Ｑ．Ｅ．Ｄ．］をＢー３ベヒーモスへと搭載することが決定

神代二十七年目：
一号計画凍結、エドワード・オールドクリング出奔

神代二十八年目：
二号・三号計画発足、それに伴い一号計画の凍結解除。二号計画の最高責任者は［情報規制］実験の報告データを提出したアリス・フロンティアが就任
コードネーム［６．６．６．］の生体脳髄換装につき、［Ｑ．Ｅ．Ｄ．］の限定使用が認可される

神代二十九年目：

一号計画完遂、それに伴い二号計画が最終段階に入る。
第三計画破棄、第三計画最高責任者アンドリュー・ジッタードール
は「再征服(レコンキスタ)」計画最高責任者に移行。

神代三十年目‥
再征服計画完了、一号計画が順調に進行した場合五百年後に稼動す
ることが決定
二号計画最終段階直前で超大型始源眷属の異常行動を確認、Ｂ−２
リヴァイアサンがマナ粒子による汚染を受ける

［情報規制］

［情報規制］

残存ログ‥

――

ジュリウスは確かに成し遂げてくれた、あのクソッタレのパシリ共
はより大きな意思によって眠りについた。俺の可愛い子供ジークヴ
ルムもよくやってくれた、できることなら大いに褒めて頭を撫でて
やりたかったが……両手は吹っ飛ぶわ自慢の息子……おっと失礼、
腰から下も消し飛んじゃ先も長くあるまい。応急処置は受けたが義
体は使わねーしあのクソ粒子にも縋らねぇ、俺は人のまま死にたい。
「勇魚」には悪いことをした……ＡＩとはいえ、あいつはもう一個
人として扱っていい、いままでずっと反対派だった俺が言うのもあ
れだがな
思えば俺の親父達がこのクソッタレな星に降りて……三十年くらい
か？一種族の終焉としてはあまりに浅すぎる歴史だが……長い戦い
だった。ああ俺の最高傑作、自慢の息子ジークヴルム……あいつは

上手くやっていけるだろうか。情報データベースの端っこにこびり付いていた英雄譚のおとぎ話ばっか聞かせたせいで変な性格になっちまったのは俺のせいだし正直悪いとは思ってる。ジュリウスやアリスが命がけで成した一号、二号計画をメチャクチャにするのだけはやめてくれよな。

身体が寒い、クソ……アンドリューの野郎の気持ちがちょっとわかったのが悔しい。あの変態技師も人として死にたかったんだろうな……大量の同じ顔した人形に囲まれながら自爆するのは死んでも理解できねぇがな。

クソ、文明がリセットされるならこんなログ残す意味ない気がしてきた……いや、いや、違う。きっと新しい人類もここまで到達してくれる。このクソッタレな星でそれでも生きてくれると俺たちは信じたんだ。何よりジュリウスの奴があそこまでやってくれたんだ、俺たちが信じなきゃ誰が信じるっていうんだ

あー、あー…………寝てた？　いや、こりゃ魂抜けかけてたか？　魂の重さは何グラムだったか……ああ駄目だ駄目だ、余計なこと考えてたらそのままおっちんじまう。

あー、なんだ、もしこれを聞いている奴がいるなら。お前が何も知らずにこれを聞いたんならまぁ仕方ない、ずーっと昔の先輩から応援されてるとだけ覚えといてくれ。

そして、もしもお前が俺たちが戦った記録を理解できるだけの頭があるってんなら……どうか、どうか俺たちのことを忘れないでくれ。そしてどうか、末長くその命脈をつなげてほしい。俺たちはそのために戦ったんだ、そして俺たちはそのために死ぬ。受け継いだバトンに灯した火を、どうか消さないでくれ。

あぁ、最後に……もしも、もしもこれを聞いているお前が英雄好きの金色の龍に会ったなら……ああ、なんだ。お前のパパが、ジーク・リンドヴルムが「よくやった」と褒めていたと伝えてくれ

乱数転移の時間切れで送還されていった三人を見送った俺は、封雷(レビン)の撃鉄(トリガー)・災(ハザード)を使用した高速挙動で砂漠の突破に挑む。

今のご時世、文明の光に阻害されない満点の星空を見る機会は稀だ。

その点、やろうと思えば人の身体の中だってワールドとして生成できるＶＲはそれが現実ではないことにさえ目を瞑れば行けない場所はないと言っていいだろう。

見上げた先の星空は非常に魅力的な光景ではあるが、よそ見してるとすっ転んで全てが水泡に帰す可能性がある。油断する事なく走り続けてどれくらい経ったか。

「砂漠の果て……辿り、着いたぞ……」

シャンフロにＢＧＭというものはほぼ存在しない。もうほぼＳＥみたいなメロディが流れる事はあるが、基本的にボス戦中に曲が流れるわけでもなく、当然非戦闘時も同様だ。

つまりただ無言で砂漠を走り続ける……という中々にハードな道程を経てようやく進展があったのだ、ちょっと涙が浮かんだとしてもそれは仕方のない事だろう。

とはいえ、広大な砂漠を迷わず進むことができたのにも理由はある。

「なんつーか、絶景夜景を台無しにする灯台(レッドライト)だことで」

まるで巨大な炎が夜空を焼いているようだ。だがその光は揺らぐ力(エネルギー)たる火の輝きとは異なる、揺らぎなく常に同じ光を空へ浴びせ続け

る……照明のような赤い、赤い光だ。

最近赤色にロクな思い出がないんだよなぁ……例のなんでもむしゃむしゃする赤色だったり、ゲームを一気にヌルくした赤い鎧の大群だったり……うーむ、厄日ならぬ厄色？

「成る程、確かに見ようによっちゃ、大地が冠を被っているようにも見えるな」

いつのまにか砂の地面はゴツゴツとした岩肌に変わり、草の生えるわずかな土すらもない無機質な薄暗闇の中を進んで……ついにそれを目視する距離に到達する。

「ここが、ノワルリンドの言う「水晶の王冠」か……」

息を潜め、スッと辺りを見回す。奴が話を盛っていなければここには水晶老群蠍クラスの化け物モンスターがいるはずだ。確か……百足と、蜘蛛？

「シャンフロってやたら虫とか強くね……？」

巨大な……サードレマすらすっぽり収まって尚余裕のある程広大なすり鉢とドーナツを合体させたかのような地形を見回すが、正眼の鳥面の視界補正が発動する気配はない。

「……寝てる？」

成る程？　夜間ならモンスターの警戒が薄れると、やったぁ……

「………」

足元に落ちていたソフトボール大の石を拾い上げ、軽く放り投げる。
特に力を込めたわけでもないので、あっさりと重力演算に従い落ちていった石ころはすり鉢状の斜面に落下すると、そのままコロコロと転がって……

ズボボボボボ！！（そこら中の斜面から人間大の蜘蛛が飛び出してくる音）

ベギャア！！（強烈なデジャヴを感じさせる味方ごと砕くおしくらまんじゅうが石ころに襲いかかる音）

ズゴォン！！！　バギャッッ！！（騒音にキレたのか地面から現れた巨大百足が蜘蛛の塊を軒並み轢き潰す音）

ゴゴゴゴゴゴ……（巨大な岩塊に擬態していたスパイダーフォートレスが浮上する音）

おお、戦争を告げる法螺貝の音が聞こえた気がしたぞ。

「いや、これ無理では？」

火薬とかそういったものは使われていないはずなのに、先程から爆発音がひっきりなしに響いている。
恐る恐る下を覗き込んで見れば、人間大の蜘蛛がどこに隠れていたのか地面を埋め尽くさんばかりに現れては背部に異様な発達をした謎の筒状外殻を持つ百足に取り付いていく。
そして起爆。火薬的なそれではなく、内側から凄まじい衝撃波か何かを発生させているのか見るからに硬そうな百足の外殻に亀裂が走る。
だが百足とて負けてはいない。奴がとぐろを巻くだけで最低でも数十四単位で子蜘蛛が砕け散っていく。うん？　自爆攻撃はパッシブじゃなくてアクティブモーションなのか、攻撃で粉砕された子蜘蛛は辺りに衝撃波を撒き散らすことなく粉々になって消えていく。あぁ、素材が……

「クソ、ノワルリンドめ……誇張無しなのかよ」

あんな機動要塞と列車砲が組んず解れつ（殺意）してるところにプレイヤーを放り込んで何が出来ると？　怪獣映画で逃げ惑う市民役の方がまだ生存率高いぞこれ。

「ふっ……だが俺はもはや平面の存在ではない。Ｚ軸の領域は既に我が手中ぅ……」

なんとなくこのすり鉢ドーナツな地形がどうやって出来たのか分かってしまったが、だからどうしたと言うのだ。
そりゃデカい方の蜘蛛が背中の突起から子蜘蛛を砲弾よろしくぶっ放してるのには正直ドン引きしてるし、それに対して百足が背中の筒から明らかに自身と同等サイズの敵を一撃でぶち殺すことしか想

定していないような毒の塊をぶち撒ける光景にはドン引きにドン引きを重ねている。

成る程、この手のハクスラにおいて人間がヒエラルキーの下層に位置しているのは特段珍しくもないが、こんな怪獣大決戦を見せつけられては認めざるを得ない。
シャンフロ世界の人類諸君、霊長類という名前は返上しよう。万物の霊長とかイキってもヒエラルキー的に多分中間ちょっと下辺りだぞ俺達。

「石ころ一つで大戦争か……蟲毒の壺の底ってか？」

悪いな、天井から吊るされた宝石に手を伸ばすのは俺だ。臨界速起動(ブラディオン)、一から三歩で水晶の冠に至り、四と五歩で安全に着地する。完璧なプランだ。

少なくとも一分前まではは油断抜きでそう思っていたし、実際方法としては間違っていなかったはずだ。

時間はちょっとだけ巻き戻り、轟音破裂音爆砕音激突音……おおよそ火薬に頼らない戦いの音が響き渡る地獄の窯の上を紫紺の箒星が駆け抜ける。
実際青と紫の中間みたいなエフェクトが尾を引く姿は……ああそうだあれだ、ミーティアスや脱獄したプリズンブレイカーの移動エフェクトに似ている。

まぁ単なる移動モーションであるあっちと違って、こっちはリスクとリターンが極まった七連結スキルだ。油断すると崖のシミになりかねない。
だがすり鉢ドーナツの縁（ふち）から中央の冠まで目測百メートル……ククク、障害物がない直線の幅跳びなら臨界速の射程圏内だ。
陸上選手のワールドレコードすら凌駕する極限の軌道、やっぱゲームならリアル超えはしたいよな。最高だぜ……はい二歩目。

「ふはははは……！　天から下界の争いを眺めるのは最高だぜ……！！」

神の視点、今俺は神に等しい存在……！！　いや待てこういう感じで調子乗ってると手痛いしっぺ返しを食らうと相場が決まってる。
慢心は死と敗北を招く劇薬だ……ここは万全を期して真界観測眼（クォンタムゲイズ）も使って……

「────は？」

光が、舞っていた。
言葉通りの意味だ、見上げた先の紅水晶の冠を乱反射するかのように光が鋭角的な軌道で舞っているのだ。

あ、違う。

あれ、

……レーザーに見える程……細く鋭い攻撃の波……？

「っっっっっ！！！」

三歩目を使って全力で真横に跳ぶ。急激な直角のカーブを減速なしで行った事で身体がミシミシと悲鳴を上げる。だがそれはどうでもいい、臨界速の効果で発動中はある程度の反動は許容できる。

だから、問題はそっちではなく……

キュガッッッッッ！！！！！

「ぃ――――――」

まさに紙一重の瞬間が命運を分けた。莫大な破壊力が波となって可視化される。それを認識したのとほぼ同時に飛んできたまごう事なき「光線」が大気をぶち抜いて俺のすぐ側を通過する。

それ自体が風属性ってわけじゃないだろう、あまりの高火力で大気そのものが押し出されている。

「っぶぁ！？」

おお、ハエ叩きにぶっ叩かれるハエの体験が出来るとは……ははは、それ今じゃなきゃ駄目？　駄目ですかそうですかヤバーイ！！

「おわぁぁああ！！？」

クソッ！　至近距離で極太レーザーが掠りかけたのもそうだがバランスを崩された！　死ぬ？　クソが！　あと二歩ある！　立て直せるか！？

真界観測眼の効果適用中じゃなけりゃ普通に死んでいるところだった。錐揉み回転をさらにごっちゃにしたような吹き飛ばされ方をしている中でも、スローモーションの世界で思考力と周辺把握力は保持されている。

まずは兎にも角にも身体を安定させないと話にならない。
限界まで意識を集中、洗濯機にかけられた服のような視界の中で頭と足が正しい方向を向く一瞬を待つ。

真界観測眼の効果切れが近い、地獄絵図の地面までの距離が近い。
それでも、まだ、まだ、まだ……ここだっ！！

「四！」

全力で空を蹴りつけ、それまでの身体の動きを全て塗り潰すかのような真上への推進力で紐なし逆バンジー。
直後、俺が落ちかけていた場所に吹っ飛ばされた要塞蜘蛛の巨体が転がってくる。あと二秒遅かったら巨体に引っかかって死んでいたな。

「くぉ……！！？」

真界観測眼の効果が切れる、急激な体感速度の変化に意識がちょっと遠のきかける。危ない、ゲーム中で意識がトんだら目も当てられない。次に目を覚まして強制ログアウトのシステムメッセージが目に入ったらちょっと心が折れる。

だが、時間は稼げた……！　ここでなんとか着地を……！！

「……あ」

そこで、俺の目は確かにそれを捉えた。それは限界まで研ぎ澄ました集中力の賜物か、それとも正眼の鳥面の効果か……

紅の水晶の中、ただ一点のみ碧色の輝きを放つ水晶。いいや違う、それは水晶であって水晶に非ず。

「見つけたぞ……新種――――！！」

そしてテメーだな、さっきの光線の下手人は……っ！！

答えは第二射という形で示された。待て、五歩目は着地に……あっ

紅蓮夜光の帝王領域（後書き）

別に蠍は好きってわけじゃないです

ただ新登場の彼について設定をぶちまけると昨日に続いて半分以上後書きになりかねないので……

ちなみにあのビームですが通常同質の魔力を帝宝晶に放ったとしても吸収されるだけなんですが同質ではあるが逆位相の魔力をぶつける事で魔力は芯を形成して反射、その際に蒸発した水が熱を持ち去るように芯となる魔力が帝宝晶の魔力を吸収、まぁ実際はコーティングが正しい表現かもしれませんね、それと同様のプロセスを乱反射という形で何十何百と繰り返し、最終的に尻尾で魔力をインターセプトして身体を形成する圧縮帝宝晶の中で指向性を持たせた上で両鋏からぶっ放す技です。

威力？　自滅覚悟の１２０％チャージならグラ普だ……もといグラトス君たち龍蛇の外殻鱗ぶち抜くどころか貫通するレベルかな？

ありがとうインベントリア、やっぱり君はナーフされるべきだと思う。
格納空間内で尻餅をつきながら、俺は安堵のため息を吐いて全身の力を抜いて弛緩する。

危ないところだった、あの青緑蠍め……まさか二連射なんて真似をしてくるとは。極太レーザーの連射はご法度だろうがよ……っ！
そこはこう、排熱に一定時間かかるとかそういうデメリットを入れる事で浪漫という華を添えるんだよ。畜生……でもそれを差し引いても浪漫の塊だぜ蠍ビーム……

「さてどうしたもんか」

五歩目をあえてさらなる上昇に叩き込むことで遥か上空に退避、そこでインベントリアを使ったわけだが……まぁ、現実空間に戻ったら即落ちて死ぬわな。
まぁ臨界速のリキャスト待てばどうとでもなるが……問題は奴だ。
これが普通のモンスターなら興味を失ってノンアクティブ化する事もあるかもしれない。だが奴は……いいや、奴らの執念は同胞を屍に変えてでも侵入者を許そうとはしないだろう。
つまり、最悪の場合蠍ビーム即発射可能な状態でスタンバイしている可能性が捨てきれない。というかほぼ確実にそうではないかと睨んでいる。
ただ、疑問点もある。
例えば俺を撃墜しにかかった新種蠍は一体しかいなかった。これが

水晶群蠍なら大量に殺到して崖から落ちて下に素材の山が出来ても
おかしくないし、奴らにビーム能力があったのならまず間違いなく
戦列を組んで三段撃ちしてくる。奴らはそういう連中だ。

であればここで参考にするべきは水晶群蠍の方ではなく金晶独蠍の
方ではないだろうか。
あのビーム蠍がオンリーワン個体だったりトランジェント個体であ
るならそれはそれでレアケースなので素材とお命を貫いに行けばい
いが……いや違う、要するにこの水晶冠に棲む蠍達は割と個人主義
なんじゃないか？

水晶群蠍最大の危険性はその自傷自滅フレンドリーファイアを一切
躊躇わないひとかたまりの連携だ。
それが無いのであるならば……行けるか？

「プレイヤーの任意で連結解除できれば………」

ここに来て臨界速のデメリットが浮き彫りになったな……あれはド
ラッグカー一歩手前の改造車のようなものだ、ブレーキが取っ払わ
れているから減速して小回りという概念を彼方に投げ捨てている。

そして水晶巣崖に近しい環境であろう水晶冠は……多分臨界速(ブラディオン)と相
性が最悪と言っていい。
というかぶっちゃけ連結させない方が……いや待て俺、それは悪魔
の思考だ。億単位で金が飛んでるんだ、意地でも活用しなけりゃ悲
しすぎる。

「……スキルを縛って勝つ？」

そんなこと出来るわけ……なくもなかったりする。

そもそも封雷の撃鉄・災という最強クラスの加速アクセサリーがあるのだから、機動力という点では実はそこまでのハンデを負ったわけじゃない。

強いて言うなら空中ジャンプと不安定な足場での安定を失ったのが一番つらい。

「金晶独蠍の戦闘パターンを応用できるか？　いや、あのビームに対応できない……少なくともスキル縛って初見突破はなぁ」

となれば、おおよその方針は決まった……か？

「セーブポイントの設営……か」

森人族(エルフ)オーダーメイドのインスタントセーブポイントと違って、従来のテントアイテムは回数制限がある。

手持ちは三つ、最大で三十回はリスポンできるわけだ……まぁ最大の問題はこのエリアに安全地帯なんてものが存在するのか、っつー真っ当な疑問を解決できてないことなんだがな。

とはいえここで瞑想しててもゲームは進行しない、格納空間(ポーズ画面)から上空何メートルかも知れぬ上空という現実空間(リスタート)に戻らなければ何も始まらないのだ。

「っし……覚悟キメっか！」

多少無理してでも身体を動かせば心も付いてくるってもんだ。覆面越しに笑みを浮かべ、その場で宙返りして……

紐もなくパラシュートもないダイビングってなーんだ？

「ぃぃぃぃぃいいいいいい……っ！！」

飛び降り自殺じゃないかなぁ……そして今それを実践中だ。

背後で【ウツロウミカガミ】で生成されたデコイが紅い閃光に呑まれたのを衝撃で感じつつ、三歩分の加速で瞬く間に迫ってくる地面から目を逸らさない。

真界観測眼のエフェクトが涙のように真っ直ぐな軌跡を描く、タイミングをしくじれば地面のシミ、踏み出す足の制御をミスっても地面のシミだ。

大事なのはイメージだ、あやふやな想定では高確率で失敗する。確たる「こう」と言えるイメージが確実なモーションへと繋がる。特にフルダイブVRではなぁ……っ！！

「ここだっ！！」

左胸を琥珀が打ち据える。打撃点を発生源に全身へと漆黒の電流が迸る。

過剰伝達(オーバーフロー)、その本質はモーションの倍加だ。であれば……過剰に振る舞ってようやく間に合うってもんだ。

紫紺の箒星が黒雷を纏う、そして渾身の力を込めた縦回転によるサマーソルトが俺の身体を二回転半させて天地逆転を修正し……下から上へ昇る四歩目を叩き込む。

「おぐぇ」

潰れたカエルみたいな声が出てしまったが状況的には似たようなものだ。樹海の時とは状況とか速度が違う、上から下への重圧と、下から上への抵抗が釣り合っていない。だから上からでかい手で叩き潰されるような感覚に襲われる。

だが、だがしかぁし！　切り札は最後まで取っておくもんだぜ！
全回復アイテムみたいになぁ！！
一、二、三歩の加速に重力まで加わった落下運動に、たったの二歩で挑む。だがその二歩はただの足踏みなんかじゃない、人の臨界に挑む二歩だ。

「ふぐぬぁっ！！」

壮絶に足の痺れァ！！！！！
ダメージに補正が入ったゲームで尚一瞬足の感覚が消失したかのような衝撃。あぁ、これは長時間椅子に座らされていた後にいきなり立ち上がったアレに似ている……もっと身も蓋もなく言えば洋式のトイレで腿に肘乗せながら前屈みに座っていた後の痺れ。

「ふ、ぐ……く、くくく……」

やばい、なんか笑えて来た。なんで俺空気椅子のポーズで硬直してんの……だがいつまでも大腿を鍛えているわけにもいかない。蠍の

脅威をスカしたとしてもすり鉢ドーナツのフィールドでは大ボス二体が絶賛大戦争中なのだから。

「チィッ……消耗品風情がァ……！」

痺れの残る足を右手で引っ叩いて感覚を取り戻しつつ、左手でウィンドウを操作して傑剣（デュクスラム）への憧刃……を出そうとして逡巡、代わりに異なる二振りの勇魚兎月を取り出す。

「ふぅー……成分落とせやオラァァ！！」

金照を振り抜き、近づいてきた子蜘蛛へと叩き込む。パキン、と金照が切りつけた傷口からガラスが割れるように水晶のカケラが零れ落ちたが……あいにく拾っている暇がない。

くっ、蠍が群れないと思ったらてめーらが群れるんかい！！

ゾワゾワと数を増やしていく子蜘蛛。時折ビッグなママンから呼び出しを食らっているのか、数十匹単位で巨大要塞蜘蛛に向かっていくが、それでも十数匹以上の自爆能力持ちモンスターに囲まれている、というのはなかなかにスリリングだ。

冥輝は現状ただの短剣に等しいが、灼骨砕身を使っている暇はない。どうする？　無理やり突破するのも手ではあるが、大ボス達がぶつかり吹っ飛ばされ踏みつけている危険地帯を渡り切れるか？

「誘爆しやがれ！」

もうこれ以上ないほどに「今から爆発します」とアピールする、腹部が異様に膨張し始めた子蜘蛛を蹴り飛ばし、爆発の範囲から離脱しつつ他の子蜘蛛を自爆に巻き込む。

だが、フレンドリーファイア防止機能でもついてるのか、それとも同族の自爆に耐性でもあるのか……ゴロンゴロンと転がっていく子蜘蛛共にダメージが入ったようには見えない。

「ちょっと可愛いのが腹立つ……アーミレット・ガルガンチュラの成分結晶、成る程？　それがてめーらの名前か」

あっちのでかい方はアーミレット、って見た目じゃないし……親子間で種族名が違うのか？　いや、親子じゃなくて雌雄の可能性も？

はいそこ後ろの方で自爆しようとしない！　廊下に立ってなさい！　とりあえず自爆しそうな奴は蹴り飛ばして、それ以外の奴は斬り伏せる……おおよその流れは構築できたが、それにしたって数が減らない。

子沢山過ぎか？　どれだけいるんだこれ、コスモバスターを思い出すが……いいや、思い出すからこそ今戦えていると言うべきか。

「いいぜ、弾切れになるまで戦ってやるよオラァ！」

「ばかいってないでこっちきなさい！！」

「は？」

人の声？　振り返れば先程まで岩壁であったはずの場所にポッカリと穴が開いており、そこから顔を出す人影が。

「あほー！　ばかー！　は・や・く！！」

「お、おう！？」

だがその前にやらねばならないことがある。

うん、馬鹿みたいに落ちた成分結晶を拾わせて？　ノーリザルトはキツイっす。

天より堕ちた星のような（後書き）

謎のヘタレ少女、一体誰なんだ……（実はもう名前出てる）

君の名前は複数形（前書き）

ベアトリクス……それ実質ヒヒイロカネだからな……分かってんのか……闇剣パで活躍しなかったらお前分かってんのか……

スキン再販まだかな

こういう時ウツロウミカガミは便利だ、囮としてだけではなく、もし敗北したらどうなるのか、のバッドエンドパターンを第三者視点で確認できるからな。

まるで巨峰の房のように大量の子蜘蛛がデコイへと覆い被さり、果てはその全てが爆発四散したのを安全圏から確認した俺は、未だ湧き続けるアーミレット・ガルガンチュラが俺に気付く前に謎の人影……なんというか久し振りのヘタレ要素をビンビンに感じさせる少女の導きに従い、突如現れた洞窟の中へと飛び込む。

へへへ、アーミレット・ガルガンチュラの成分結晶、合計１２０個……ごっつぁんです。斬れば斬るほど生産できるんだ、ボロ儲けだぜ。

「あほっ！　あほーっ！　はやくこいっていったのに！　いしころひろいやめないし！」

「石ころの価値を決めるのは俺だからなぁ」

捨てる神あれば拾う神あり、って言うだろ？　無限インベントリがあるならそりゃ拾い尽くすよねっていう。

とはいえ同胞とはいえ自爆の衝撃を直撃で食らっても転がる程度の装甲だ。あのまま続けていればそのうち勇魚兎月は折れていただろう。

「ふ、ふんっ！　ともかく、たすけたわたしにかんしゃなさい！」

口調とは裏腹に、一切の余裕を感じさせない切迫さと慣れによる熟練の動きで横にはけた岩を組み上げ、入り口を塞いで行く謎の少女。ヘタレと言えば森人族を思い出すが、彼らに共通する特徴を目の前の謎ＮＰＣから見出すことはできない。となると、ヘタレ属性はキャラクター由来であって、別の種族なのか……？

いやそもそも……

「うぅ、いわつみのわざだけどんどんじょうずになっていく……ま、まぁいいわ！　ついてきなさい！！」

こいつ、本当に人系種族か？
気を取り直した少女が妙に形の悪い通路の奥へと進んで行くのに空返事を返しつつ、彼女が積み上げていた岩の一つを何の気なしに掴んで……動かない。
やっぱり見た目だけ岩で中身スッカスカ、と言うわけでもないらしい。ＳＴＲ……いいや、今はまだ何も言うまい。

洞窟……と言うには少々整地されすぎな気がするし、トンネル、と言うには少々仕事が雑すぎる。
強いて言うなら天然洞窟の内側を紙やすりで削ったみたいな……中途半端に人の手が入った、みたいな違和感がある。

「だが少なくとも安全か」

上はビーム地獄、下は大戦争。外周以外に安全地帯は存在しないものと思っていたが……成る程、灯台下暗しって奴だな。ポーションを飲んで体力を回復、とりあえず即死はないと信じたい。
それはそれとして、だ。十中八九ユニークシナリオだよなこれ？

最近は素材集めやらなんやらで久し振りにユニーク引いた気がするなー。カッツォの奴に自慢してやろ、派手に。

とはいえこの洞窟自体が一つの隠しエリアであり、その奥にいる固定ＮＰＣと言う可能性も捨てきれない。それに仮にユニークシナリオだからと言って必ずしもＮＰＣが味方とも限らない。

兎にも角にも進展が必要だ、フラグを立ててイベントを進めないことには何のクエスト、ユニークなのかも分からない。

表面上は安全圏に到達した安堵で脱力しているように見せつつ、心の内ではいつ奇襲が来ても対応できるように意識を研ぎ澄ます。

洞窟は思ったよりも深く続いているようで、薄暗い……つまり灯のない道をただまっすぐに進んで行く。

「やぁ、なんだ。助けてくれて感謝する……随分とけったいな立地の住まいだが、ここに住んで長いのか？」

「……まぁ、のうみつなじかんをここですごしてはいるわね」

戦場の騒音酷そうだもんね……

流石に大陸突っ切るほどの長さがあるわけでもなく、いつの間にか謎少女の先導の元、俺は広々とした空間へと辿り着いていた。

いいね、戦闘するには丁度いい広さだ。だが臨界速は使えないな、壁のシミになる。となると過剰伝達に機動力を任せて……おっといけない、イベントを進めよう。

「……で？　わざわざ俺を助けたのは善意かい？」

「……も、もちろんたすけたおんはかえしてもらうわっ！　わたしたちがここからだっしゅつするためのね！」

達？　……いや、今は問うまい。それよりも向こうさんがこっちに近づいてきた。脱出系シナリオ？　まぁベターっちゃベターだが……うーん、様子見か。

「わたしはあなたをたすけた！　つまりあなたもわたしをたすける！　でしょ？」

「そだね」

薄暗い、あまりに薄暗い場所だ。朝陽がほんの少しだけ昇った早朝くらい薄暗い。だからこそ少女の姿も少々ぼんやりしている、妙な服装だ、一段ごとにカラーが違うダルマ落としみてーだな。

うーん？　なんか既視感を感じるっつーか……ダメだ、喉の奥に詰まってる。

「……でもね、わたしはだれともしらないやつにせなかをあずけるきにはならないわ」

「ほう？　この俺が信頼できないと？」

「みためがしんようできない」

クソがっ！！　ど正論やめろ！！

とはいえ謎少女は俺の前まで歩いてくると、俺の右手を両手で包むように掴む。なんだなんだ、握手か？　それにしちゃ妙な持ち方と言うか……

「だから……」

ほう？　成る程妙な持ち方の正体が分かったな。こやつめ、人の手をホットドッグかおにぎりでも持つように握ってたのか。それで？

口を大きく開けて……おや、狼とかライオンとは違う妙に発達した二つの犬歯。いや……牙。

「しんようできるようにするのよっ！！」

そこで違和感の全てが繋がる。導き出された答え、俺はそれを鑑みた上で……あえて噛みつかれる。

「………」

「………」

体力がわずかに減少。じわじわ、ピキリピキリと噛まれた右の手の甲からヒビが身体を這っていく。噛み付いたままの状態で謎少女の口の端が吊り上り、手の届く距離に近づいた事で謎少女の目がはっきりと見える。

爬虫類系の蛇眼がな……！！

「ふ、ふふふ……これであなたはわたしのいうことを……！」

「悪いな、抵抗(レジスト)だ」

パシィン！　と右腕で爆ぜるようなエフェクト。見れば先程まで腕をひび割れさせながら侵蝕を進めていた「呪い(毒)」は、いつのまにか胴体の方から伸びていた傷跡のような模様によってその侵略領土を塗り替えられ、放逐されていた。

リュカオーンの刻傷は上位の呪い、刻まれた場所こそ胴体だがその範囲は首から下と腰から上。このゲームじゃ腕も胴体装備扱いだ、多分ナックル系武器との兼ね合いなんだろう……だがそんなことは瑣末なことだ。

「自己紹介がまだだったな、俺はサンラク……そして俺はお前の名前を知っている」

久し振り……いいや、お前達の生態的には違うのか。
二振りの傑剣(デュクスラム)への憧刃を構え、その名を看破する。

「初めましてだゴルドゥニーネ、お前の姉妹にゃ世話になったよ」

「サミーちゃん！！」

殺気。何もないはずの場所に揺らぎが生じ、正眼の鳥面が何かを捉えてその効果を発揮する。
そしてシステム的な反応を信じてバックステップをした直後、俺が立っていた場所に何か巨大な質量が叩きつけられた。

「爬虫類つながりってか……？　カメレオンみたいな擬態しやがって」

シュロロロ……と特有の音を立てながら、虚空から現れた大蛇が俺を睨みつけながら二股に割れた舌を出す。
成る程、薄暗いバトルフィールドで擬態持ちのモンスター……厄介だ。それによりにもよってユニークモンスターだと……？　まだEXシナリオを出してないんだぞ、負けイベ？
いや、真理書がないから確実なことは言えないが多分「無尽のゴルドゥニーネ」はあのゴルドゥニーネの事だ。となるとこっちは防衛戦で戦った黒ツチノコ……レプティカ？　とかいうやつか？　ワンチャンある？
「く……わたしのちからがはじかれるなんて……！」
「ずいぶんとまわりくどいことをしやがるじゃねーか……」
まさか呪いを付与するトラップイベント？　だとしても意味がわからねぇ、こんな辺境っつーか魔境みたいなところに罠を張る意味が、だ。
成る程確かに、ティアプレーテンみたいなところにでかい罠を仕掛けたとしてもプレイヤーが殺到しかねない。だがこんな、辿り着く前に死にかねない場所で待ち構えたって実入りは少なかろうに。
「だが、覚悟はできてるんだろうな。　言っておくが……こちとら馬鹿でかい龍蛇（ナーガ）相手だって撤退コマンドは選ばねぇ死に狂いだぜ？」
いいぜ、可能な限りユニークモンスターの情報を引きずり出し、あわよくば仕留めてやるよこの野郎。
だが行けるか？　流石にユニークモンスター相手にスキル縛るってのは無茶が過ぎるか？　外に誘導？　バカ言え、大混戦にしたって程度がある。

シュルシュルととぐろを巻いて謎少女……否、ゴルドゥニーネを守るかのような大蛇。だがおそらく危険度は守られている奴の方が高い。となるとあの蛇はオプションパーツとして見るべきか。
本体よりも巨大なオプションパーツ敵はそう珍しいものじゃない。蛇故のアドバンテージ、蛇故のディスアドバンテージ……そこを見切ればあまり広いとは言えないこのエリアでも立ち回れるだろう。

「て………」

「………て？」

なんだ？　ゴルドゥニーネが何かを言おうとしている。魔法の詠唱か？　大蛇の巨体はシンプルな物理障壁だ、阻止できるか？
だが、ゴルドゥニーネの口から紡がれた言葉は、流石の俺をしても予想だにしないものだった。

「て……てうち、ということにしない……？」

「は」

まさかのドヘタレ宣言に一瞬脱力しかけた次の瞬間。

「――旧世代遺物反応確認。征服人形［エルマ＝３１７］、睡眠状態解除、当機は再起動プロセス実行……異常確認、迅速な救助を要請する」

ものすごい勢いでこの洞窟の端から端までをカッ飛んでいった何かが壁に激突し……壁から生えた腿の半ばから両脚が欠損した尻がそんなことをほざいていた。

えぇ……？

君の名前は複数形（後書き）

言い忘れていましたがヘタレニーネちゃんはツインテールです。

ツインテールです。

シニカルインストールなインテリジェンス（前書き）

成長を実感できるとモチベーションに繋がりますよね

グラブルの話です

シニカルインストールなインテリジェンス

尻が和解の鍵となる、何言ってるか全く分からないが俺もよく分からない。だがサミーちゃんなる全然サミーという顔をしていない大蛇すら白けた空気になっているのだから、やはり和平の鍵は尻なのだ。

「よーし、せーので引っ張るぞー」

「よ、よしきた！」

「はいせーの！」

薄い壁を貫通して突き刺さったわけではなく、変に食い込まなければ抜くのはまぁそこまで難しくはない。
先程まで一触即発だったはずのゴルドゥニーネと一緒に千切れたスパッツ越しの腿を掴んでコンテストドール？　とかいう尻を引っこ抜く。

「異常状態解決……優しさが足りませんね」

「お前は感謝が足りてないがな」

「つまり一対一……等価交換（ノーカウント）です」

あっやばいどうしよう、これ話通じないタイプのＮＰＣかな？　フェアカスとかがそうだった、場合によっては覚悟を決めないと胃が死ぬやもしれんな……

「もう！　いままでねてたくせにいきなりおきてなにしてるのよ！」

「否定（ノンノン）：睡眠状態（スリープモード）は有機生物特有の蓄積された疲労の回復行動とは明確に趣を異なる機能です」

「具体的に？」

「当機（ワタシ）の外部装備の八割を非稼動状態に移行し、内部における思考処理を低出力で行う……つまり知的（インテリジェンス）な機能です」

「とりあえずかっこいい単語使えばかっこよくなると思ったら大間違いだぞ」

「はン」

どうしよう、不快ってわけじゃないがそのうち引っ叩いてしまいそうだ……こう、どちらかというとツッコミ的な方向で。いややっぱ訂正、このドールもどきの鼻で笑うドヤ顔は一発ドツきたくなってきた。

メカ枠だよね？　人形（ドール）とは名乗ったが抉り千切れた足の断面は確かに人形のそれに近いが明らかにサイバーな青いラインが幾重にも重なるように走っているし、台詞のいちいちがサイエンスなファンタジーだ。

だがなんだこの残念さは、黙っていればクール系のメカキャラとして人気が出るだろうに、インストールされたＡＩが残念すぎる。

「あー……なんだっけ、枝豆災難（エダマメ・サイナン）さん？」

「疑問提起（マジで言ってんのか）：今の呼称は当機（ワタシ）を指してのものか？　次世代原始人類

種の記憶能力に深刻な欠陥を確認……おお、我らが創造主よ」

「腹立っつぅ……友達は選んだ方がいいぞゴルドゥニーネ」

「ともだちじゃないわよ！　そもそもこいつにさらわれたからこんなめにあってるのに！！　いきなりそらにむかってぶつぶつなんかきしょくわるいし！　めをあけたままねるし！！」

「抗議（ちょっと待て）：その形容は次世代原始人類種に誤解を想起させます」

「そうだな、気色が悪いは間違いだな……頭が悪いもんな」

「エルマ型製造番号317……機体名称［エルマ＝317（サイナ）］です、言語能力を喪失するまで殴打するので先に個体名を聞きます」

「あ？　達磨もどきがやんのかコラ？　サンラクだ、よろしく」

「なのりあいながらこぶしをにぎらない！　ひうっ……こぶしをにぎりしめたままこっちみないで……」

デフォルメ一切なしの蛇なのに「うちのヘタレがすいませんね」とでも言いたげな眼差しのサミーちゃんの目が妙に印象に残った。

もはや敵対的な空気は完全に霧散したと言っていいだろう。このぱっつんツインテールは目つきの割にメンタル森人族だし、先程から腰辺りに装着された推進器らしきもので跳ねるように動く人形っ娘は機械的無機質さをかなぐり捨てた毒吐きだし、もはやこの場における良心は俺とサミーちゃんと言っても過言ではない……

だが戦闘を回避できたのは僥倖だ、ヘタレでもユニークモンスター。今の状態で戦っても勝てるかどうかは微妙なラインだ。少なくともラビッツ地下でエンカウントしたあのゴルドゥニーネだったらまず勝てない。

「んー……とりあえずお前はここから脱出したいわけだ？」

「そ、そうよ！」

まぁあのゴルドゥニーネみたいに怪獣クラスの龍蛇を四体従えているならともかく、サミーちゃんの大きさは貪食の大蛇よりも一回り大きい程度だ。でかいっちゃでかいが、移動要塞と列車砲を相手にするにはちとタッパが足りない。

では逆に本体の戦闘力は如何程なのか、実は強キャラ説はまだ捨てていないぞ？

「で、お前自身はどれくらい強いんだ？」

「代理回答：回収目標は鎮圧用スタンによる鎮静化に著しい効果を示しました」

「つまり？」

「とても弱い」

「ぅっ……」

オーケー、お荷物(NPC)ね。
しかしここでハイさよなら、とユニークモンスター発見というスクープを放置して帰るのも少々もったいない。
……待てよ？　こいつら、今判定どうなってるんだ？　かたやユニークモンスター、かたや人かどうか怪しいラインのロボ人形。だがエムル達ヴォーパルバニーやアラミースなどのケット・シーの例もある。

ちょおーっと、試してみるか……？

「成る程、事情は理解した……ここから脱出するのに個人の力じゃ難しいことは分かっている。本来は殺し合っててもおかしくないが……話が通じるなら武器を手に取る以外の選択肢もある、俺は義侠心の塊のような男だからな……！」

「じゃあ……」

「あぁ、共闘しようじゃないかゴルドゥニーネ。少なくともお前が裏切らない限り俺もお前を裏切らない……！！」

基本的にNPCにパーティ申請は飛ばせない、NPCと組む場合は向こうからパーティ加入申請を飛ばしてもらう必要がある。
形式的にはNPCが「君に力を貸すぜ！」と承諾している感じなん

だろうが……

・八人目のゴルドゥニーネをパーティに加入しますか？　はい・いいえ

・［エルマ＝317］をパーティに加入しますか？　はい・いいえ

予想的中！　くくく、ユニークモンスターとパーティを組んでやっ……待てコラ、ちょっと待てコラ。
とんでもねぇ爆弾を投下してくれやがったぞこのヘタレ。

「八人、目……？」

「さんにんしかいないわよ」

「シュー……」

「あっ、ごめんねサミーちゃん！」

そうだね、サミーちゃんをいれて四人だな……じゃねーよ。おうコラてめー何人姉妹だこの野郎。
八人目、八人目だと……？　あのゴルドゥニーネを入れたとしてもあと六人は最低でもゴルドゥニーネがいるってことじゃねーか。いや待て、このヘタレニーネがつい最近生まれたとは考えづらい。つまり地下で進化して即死んでいたツチノコニーネも入れたら九人、

いやそれ以上のゴルドゥニーネがいるかもしれないってことか……？
ヤバいな、これ分かりやすく世界の危機とかそういうやつでは？
どいつもこいつもがあのゴルドゥニーネみたいな龍蛇を従えていたら軽く死ねるぞ。
いや、こいつを見るにあのゴルドゥニーネだけが特別枠か？　でもサミーちゃん、不意打ち性能クソ高いからなぁ……姿を向こうから見せるまで正眼の鳥面が反応しなかった。
ってこたぁサミーちゃんのステルス性能は装備の視覚補正を上回っているということだ。

「どうしたのよ」

「……いや？　なんでもない」

あとゴルドゥニーネ八号のインパクトに紛れてしれっとパーティ申請送ってきてんじゃねーぞポンコツ。
まぁ申請承認するけどさ……

『ＮＰＣ「八番目のゴルドゥニーネ」がパーティに加入しました』
『ユニークシナリオＥＸの条件を達成しました』
『ユニークシナリオＥＸ「果て亡き我が闘争」を開始しますか？はい　いいえ』

特大のボンバー！！
ひっくり返った拍子に頭を強打して軽くダメージを受けた。

シニカルインストールなインテリジェンス（後書き）

君だけのゴルドゥニーネをカスタマイズして最後の一人になるまで生き残ろう！！

なお放置しているとクソ強龍蛇を引き連れたボスドゥニーネちゃんに狩られます

エルマさんのキャラクターがロボっぽくない？　松永弾正久秀みたいに自爆した変態人形師に言ってください

とりあえずとっ散らかった思考では浮かぶ案も浮かばなくなるので、景気付けに一発死んできた。

「とりあえずあの蠍め……３ＷＡＹはダメだろ３ＷＡＹは……」

しかも乱反射して全く軌道が読めない上に尻尾でインターセプトして直で狙ってきやがる……いや、だが……うーん？

「うわ、でてきた」

「言い方な？　」

虫嫌いな人が蝉の羽化を見かけたみたいな顔しやがって……

「疑問‥自身の特性を把握しているとはいえ、死が確定した状況に自ら向かった理由」

「あん？　いや……ほらアレだよ、アレ」

「眼球（目を見）の不自然な挙動（て話せ）を確認」

くっ……この野郎、左腕以外ほぼないくせにやたら元気だぞ。だが俺とて無策で突っ込んだわけではない……ほら、あれだ。うん、よし思いついた。

「この場所の仕組みについてちっとばかし疑問が湧いてな」

「ここの？」

「否定（ノンノン）、ここはシグモニア前線渓谷（フロントライン）です」

シグモニア……つーか地名あるのか。

「このエリア、真ん中だけ残してその周りをくり抜いたみたいな形状してるだろ？　んで宝石地帯の周囲であの百足と蜘蛛が戦ってるわけだ」

「フォルトレス・ガルガンチュラとトレイノル・センチピード・グスタフです」

「長い、状況説明だけなら蜘蛛と百足でいいだろ」

妙な話だ。あの大怪獣決戦……互いに互いの排除に夢中だからと言えばそれまでだが、あの外円だけで完結してるってのはちと妙だ。互いに飛び道具持ち、いくら蠍が対空に自信アリだとしてもノーダメでエリアを守りきれるのか？

何故か攻撃されない水晶冠エリアもそうだが、あの蜘蛛や百足がシグモニア前線渓谷の外に出ないのも妙だ。となれば何か理由があるのではないか……と今考えた。

「俺とお前、あとそこのポンコツだけならともかくサミーちゃんも離脱するにはどうにかして蜘蛛と百足を攻略しないとならねぇ」

「インテリジェンスとハイテクノロジーの塊たる当機（ワタシ）の魅力を理解できないとは……次世代原始人類め」

「グーしか出せない左手何とかしてから言えよ、インテリジェンス皆無の思考停止パーで勝てるわ」
聞けばなにやらドラゴンから逃走した過程でこうなった、との事だがそれにしたって墜落場所くらい選べっての。
「く……然るべき修理さえ受ければ次世代原始人類を知性(インテリジェンス)で圧倒できるはずなのに、ぎぎぎ」
やーいポンコツやーい。
話を戻そう。というわけで今しがたこの地下空間にテントを設置し、回数制限付きのリスポンポイントとして水晶冠に乗り込んでみた。
３ＷＡＹビーム・インターセプト・スマッシュでハートを物理的にぶち抜かれてしまったが、本命はそちらではない。

・ツァーベリル帝宝晶
シグモニア前線渓谷、輝ける冠塔丘の最上層でのみ採掘可能な栄冠の水晶体。
ラピステリア星晶体の変種とされるこの水晶は日光と月光のそれぞれを浴びる事で内部に蓄積した魔力の性質を全く別のものに変える特性を持ち、極めて濃密な蓄積魔力は性質変貌の際、周囲の魔力濃度を爆発的に高める。
宝石の皇帝、その双つ輝きは名君(暴君)の如く下々を照らす。

「フレーバーテキストも中々どうして侮れない……」

ツァーベリル帝宝晶。水晶の冠を構成する水晶の名前であり、恐らくあの蠍を構築する体組織の大部分がこれだ。

そして重要なテキストは「色変えの際周囲に魔力をばら撒く」というところだ。多分これが蜘蛛と百足の攻略法に繋がる鍵だ。

「あの巨体だ、エネルギー消費はご飯特盛程度じゃ賄えねぇ」

相手を倒してそれを食えば腹は満たされるかもしれないが……生態として維持するのは無理だ。となれば別口のエネルギー補給手段があるはず。

無駄に設定ばかり凝ったゲームだ、フレーバーテキストがフレーバーだけで済むなら神ゲーなんて呼ばれてない。

最近じゃアンチも「人間じゃ理解できないくらい無駄に設定だけ凝ってる」という意味で神ゲーと呼んでるとか。まぁゲームとしてどうなんだ、とはちょくちょく思うが……回転寿司にキャビア軍艦巻きがひとつだけ流れてるようなものだ、どれだけ異質でも飛び抜けた上質は文句を黙らせるだけの力を持つ。

話が逸れてしまった。恐らく百足も蜘蛛も奴らは霞（魔力）を食って生きていけるとかそんなところだろう。水晶冠を狙わないのもあれが奴らの生命線だから、殺し合いをするほど険悪なのに同居してるのもここ以外じゃリソースが足りないからだ。

「つまり……どういうこと？」

「奴らはこの水晶を攻撃しない……多分」
行きはよいよい帰りは怖い、とは言うが……恐らくこのエリアに限れば逆なのだろう。地獄を抜け、その先の更にやばい地獄から生還した者は栄光を手に入れる。水晶の皇帝なんて仰々しい、しかし安全を確約する輝きを、だ。

「結論(つまり)：シグモニア前線渓谷(フロントライン)中心部にて該当鉱石を採取せよ……と？」
「おうポンコツ、冴えてるな」
「むりむりむりむり！　しぬから！！」
「ここで朽ちるよりも、一花咲かせようぜ？」
「ちっちゃうじゃないのぉー！！」
まぁ簡単なミッションではないな、少なくともサミーちゃん込みで逃げるなら相当量のツァーベリル帝宝晶が必要になる。一回ツルハシを叩きつけて採掘(アイテム化する)できる量が手のひらサイズだから……最低でも百回はカンカンしたいところだ。
だが俺には秘策がある、一歩間違えば地獄行きの特急切符だが。
「あの蠍だ、奴の種族は食った鉱石で自身の身体を構築する。つまり奴の身体そのものがこれと同質と言っていい」
蠍達は庭師であり料理人だ、だから蜘蛛や百足にも見逃されている。生産職の大切さが学べるね！
少なくとも水晶群蠍や金晶独蠍のドロップアイテムは最低レアであ

ろう甲殻ですらそのまま盾として使えそうな大きさだ、奴らも同様のドロップをする可能性は高い。

「蠍狩りだ、その為には調査が必要だ……生態調査がな」

ふふふ、ライブラリの方針も案外悪くない。パズルを完成させる感覚というかなんというか……友達(ダチ)になろうぜ、新種君！！

二時間程経過。

「クソゲーッ！！！」

「ぴうっ！？」

使用限界を迎え、消えつつあるテントをフルパワーで蹴り飛ばしな

がら思わず叫んでしまう。ヘタレニーネが妙な鳴き声を出していた
が気にしている余裕がない。
クソがっっ！！　あんなのどう対処すりゃいいんだ！！

「疑問：どうしたんだい変態」
「支援砲撃はあかんでしょ……！！」

いや分かってるさ、もしかしてソロ討伐行けるんじゃね？　と欲張
ったのが敗因なのは。だが境界線を越えた瞬間、四方八方からビー
ムを叩き込まれるとか分かっていても対処が難しすぎる。
「なんつークソモンス……いや、だが囲んで叩けばどうにかなりそ
うな辺りはかなり有情なのか……？　いややっぱクソモンスだわ」
とりあえず二十回トライして分かったことは四つ。
まず一つ目にあの蠍の名前が「帝晶双蠍（アレクサンド・スコーピオン）」であるということ。今さ
っきのトライで尻尾を叩き斬って入手したことで分かった事だ、洒
落た名前しやがって……
二つ目に奴らはやはりというかユニークモンスターだったりレアエ
ネミーということはなく、恐ろしい話だがエリアのそこら中に帝晶
双蠍がいるのを確認したこと。ただおしくらまんじゅうの文化はな
いらしい。
三つ目に帝晶双蠍は同胞のピンチにはほとんど無関心だということ。
少なくとも一線さえ越えなければ目と鼻の先でドンパチしていたと
しても割とスルーする。
そして四つ目……奴らは恐らく明確な「テリトリー」を持っている。

前述の特性からもそれを窺えるが……この境界線を一歩でも踏み越えるとすぐさまその主人が異物を排除しに向かってくる。それがたとえ同胞であったとしても、だ。

「境界線の見分け方……水晶の形か？　それとも色……？　ともかく距離を取るというアクション自体最悪手になりかねない……仮に境界線ギリギリを見極めたとしても蠍自体が踏み越えただけでアウト判定が出る……いや、逆か？　いやしかしインベントリアはナーフされた……」

「——精査完了、これまでの対応から対象を回収目標(ターゲット)重要度(ランク)「交渉可級(ネゴシエイト)」と認定。次世代原始人類サンラク、話があります」

ブツブツと思考を呟きとして漏らしながら攻略法を探していると、先程からリスポンする度に煽ってくるポンコツが神妙な顔で語りかけてきた。

エルマ＝サイナ？　なる半壊した青髪の人形は千切れた大腿で器用に立ち上がると、人の身では決して出来ないような瞳孔(フォーカス)の動かし方をすると、こう告げた。

「提案：当機(ワタシ)との契約を推奨します」

「……は？」

「当機(ワタシ)であれば、その腕輪(デバイス)が繋ぐ先にある武装の行使が可能です」

「…………話は聞いてやるよ」

いつフラグを踏んだ？　まぁいい、ここで「いいえ」を押すのはち
とヘタレだよなぁ？

帝冠の威光（後書き）

フラグは「神代製の稼働するアイテムを所持していること」と「征服人形（コンキスタ・ドール）単体では対処不可能な状況」と「好感度判定で一定以上の「相性値」を出す」の三つ

実はそれぞれ別のフラグだったりするけど今回重要なのは最初の一つ以外

「交渉可級（ネゴシエイト）」

交渉可能な対象に対する征服人形の執行モード。武力制圧ではなく言語による交渉で回収を試みる

「総動員級（フルスロットル）」

単体での回収が困難であり、尚且つ四八機種全機体による対処が必要と判断される執行モード。限定的にクラスＩＸ武装の使用が許可され、他機体の損傷修復が後回しにされる。

「撃滅必須級（デストラクション）」

回収の必要なし、次世代原始人類にとって害にしかなり得ない対象を自身らの存在を度外視してでも撃滅する執行モード。クラスＸ戦略武装、及び回収オブジェクトの全運用が許可され、現時点で稼働する全機体を消耗品と定義して特攻する。

「当機（ワタシ）は征服人形（コンキスタ・ドール）エルマ型３１７番機、故にこそ特殊強化装甲の代理装着及び代理運用を可能としています」

「ほーん？　だが俺が持ってる武器はそんじょそこらの量産品とは訳が違うんだが？」

「当機（ワタシ）の演算能力（インテリジェンス）を正しく認識できていないようですね。脳細胞の正しい運用をしていますか？」

おっと？　向こうから契約勧めてきたくせにいきなり右ストレートで煽られたんだが？

「当機（ワタシ）を含むエルマ型は回収オブジェクトを用いた戦闘を想定して設計された探索兼戦闘用モデル、多少のセキュリティロック程度……えぇ、既に機体情報の八割は確認済みです」

「おうしれっとハッキングしてんじゃねーぞ」

だがまぁ要するに規格外シリーズでも自分は扱える、と言いたいのだろう。なんか窓ガラス割って家に乗り込んできたセールスマンが「こんな時我が社の強化ガラスなら！」って売り込んでくるみたいな……ゲーム中最強の武器を完成させた次のイベントシーンでフルボッコにされる感じというか……数値として強いのは分かるが体感としてガッカリするというか……い、いや、こんなポンコツでもロボ系キャラである以上、インテリジェンスは高いのだろう。

「規格外戦術機獣を動力源とし、遠隔エネルギー供給で起動する規格外特殊強化装甲のエネルギー供給システムにハッキングを行う事で、エネルギーラインを当機（ワタシ）から装甲へと形成、擬似的に当機（ワタシ）自身が戦術機獣として機能することで装甲を起動させます」

「成る程？」

「無論、該当機種用のリアクターがあるに越したことはありませんが、この状況下で最善の状態を整えることは困難であると判断。次善策としてこの方式を推奨します」

ぶっちゃけ、一日くらいあればオイカッツォかペンシルゴンのどちらかが持っているだろう規格外エーテルリアクターをインベントリア経由で受け取ることができるだろうが、それは同時に俺の現状を説明する必要が出てくる。

「ノワルリンド情報を頼りに新しい稼ぎポイントに乗り込んだらロボとユニークモンスターをパーティに加えました。あと現在ＥＸシナリオ発生四つであと一つでコンプです」と言えと？　ハハハ、空メール連打の嫌がらせは御免だね。

「……成る程、言いたいことは分かった。確かに現状は猫の手だろうと兎の手だろうと借りたい状況だ」

ソロとコンビじゃ動き方が変わってくるがやはりマルチ戦は役割をある程度分割できるメリットが大きい。

それに契約とやらが征服人形なる種族……種族？　との繋がりであるのならばここで関係性を太くするのは間違いではないだろう。

「いいぜ、その契約とやら……乗ってやる」

「承認：再征服計画（レコンキスタ）……フェーズ1省略（スキップ）。フェーズ2、部分的に省略（スキップ）。フェーズ3移行、「貴方の人形（ユアドール）」プロセスを開始……契約候補者サンラク、跪き視線を合わせてください」

「オッケー」

跪いた俺と、膝ごと損失したエルマ＝３１７の視線が同程度の高さで交わる。見てくれこそ人に近いポンコツではあるが、その瞳孔がカシャリと音を立てて生物的にあり得ない動きで俺の眼球を捉える。

「網膜情報、登録……契約候補者サンラク、掌を前に掲げてください」

「あいよ」

ぺたり、と俺が前に出した手にエルマ＝３１７のズタボロの左掌が重ねられる。僅かに見えるエルマ＝３１７の掌に青色のラインが幾本か走り、そのままペタペタと無事な掌に俺の指紋を重ねていく。

「指紋及び掌紋情報、登録……契約候補者サンラク、最後に腕を出してください」

「プロセス長いな……」

まぁそういうものなんだろう。指示に従い腕を出すと……

「がぶ」

「ちょっ」

噛んだ！　噛んだぞこいつ！　っつーかちょっと体力減ってるし！
　え、どういうこと！？
一瞬突き飛ばすべきか迷ったが、僅かに漏れたダメージエフェクトがエルマ＝317の口の中に吸い込まれていったのを見て、ゲーム的エフェクトで分かりづらいがどうやら今血液的なものを採取されたようだ。

「血液情報、登録。「貴方の人形（ユアドール）」プロセス……、……完了。契約者（マスター）サンラク、当機（ワタシ）は貴方だけの人形です。使い熟すも使い潰すもどうぞ御随意に……」

一瞬ものすごいゲスい顔をしたディープスローターが頭の中で叫びながら湧いてきたので脳内火炙りの刑に処しつつ、邪念を薪としてくべる事でピュアな心を取り戻す。脳内で火炙りの快感を実況し始めた脳内ディープスローターを迅速にウェルダンにしつつ、もしやと俺はメニューウィンドウを開く。

「……項目が増えてる」

人形（ドール）ステータス、なるアイコンが増えている。パーティに加えたNPCや他プレイヤーのステータスを確認したりするのとは根本的に別物、これはプレイヤー側に征服人形のステータス操作が委ねられているのか。
っつーことは征服人形という存在は森人族とか魚人族みたいな種族ではなく、プレイヤーのオプションパーツとしての前提を持っているいわばモンスターをテイムするシステムの亜種、という事か……？
問題は外面が事案過ぎる、という点だな。モンスターを捕まえてオプションパーツにするのと人形とはいえ見てくれはほぼ人間な征服人形にアレコレしてオプションパーツにするのでは視覚的な犯罪臭

が……い、いや前例がないわけではない筈だ！　そら、Ｒ１８系のゲームならそういうのもあるかもだし……なおさらアウトじゃねーか！！！

くっ、そんな目で見ないでくれサミーちゃん！　外見が人間っぽいやつに見られるより心にダメージが入るんだが！？

「と、にかく！　改めて作戦会議だ！　おめーも参加するんだぞヘタレニーネ！！」

「そ、そのよびかたはなにかあくいをかんじるのだけれど！」

「じゃあなんて呼べばいいんだよ、ゴルドゥニーネだと重複しまくってるじゃねーか」

最低でも同名のキャラが九人いるからなゴルドゥニーネ……下手すりゃ百人くらいいるんじゃないか？

「え？　えーと……えーと……」

「提案：ＷＩＭＰ（ウィンプ）。古い言葉で凍えた暗黒物質を意味する天文学用語であり、斯様な性質を持ちながら征服人形（コンキスタ・ドール）の捜索のみならず同種別個体の殺戮行動からも逃げ切った驚異的な隠密性を当機（ワタシ）は評価します」

「ちょ、おまっ……」

「ふ、ふーん！　よくわからないけどいいなまえね！　ほめてるのよね？」

「肯定（ソウダヨ）：重ねて肯定（ホメテルヨ）」
「あ、いや……あーうん、本人が満足ならそれでいいんじゃないっすかね……」
かっこいいこと言って誤魔化してるけどそれの意味って……いや、言うまい。ヘタレニーネはヘタレニーネということだ。リアル世界における罵倒（スラング）は関係ない、きっとそうなんだろう。
「まぁいい、とりあえず主目的はツァーベリル帝宝晶の確保だ。だが採掘じゃ効率が悪い、そのための帝晶双蠍（アレクサンド・スコーピオン）討伐だ」
奴の外殻は実質ツァーベリル帝宝晶と言っていい。水晶群蠍の生態から奴も同質の特性を持っていると考えていいだろう。
アイテム判定として宝石と外殻がイコール扱いにならないのは若干の残念さを感じなくもないが……まぁそこはどうでもいい。問題は奴の戦闘力だ。
まず第一に奴は金晶独蠍と比べると物理的な戦闘力がそこまで高くはない。いや、鋏と呼ぶには少々異質な形状の前脚で殴られるだけでも即死ものではあるのだが、奴の本領は魔力（レーザー）を用いた射撃戦にこそある。
インパクトだけならチャージを経た極太ビームが印象的だが、実のところあれは近距離戦に持ち込めば早々使って来ることはない。
あの威力だ、下手に誤射すればお隣さんがキレることになるからな。
だから大砲クラスの砲撃は考慮しなくていい、問題は３ＷＡＹレーザーと地形反射だ。
「ソロなら回避に専念しないといけないが……コンビなら取れる選

択肢も増えるってもんだ」

「了解：命令を、最高のインテリジェンスで最良の結果をお見せしましょう」

果てしなく不安だが……いざ行かん、二十一回目のトライ！！

我が身命は人と共に在りて（後書き）

征服人形は「再征服」計画と密接に関わってくる存在ではありますが、何故かつて三号計画と呼ばれたそれが一度破棄されたのか、が今回の契約に絡んできます

エルマ＝３１７実績一覧
「相棒枠」ｃｌｅａｒ！
「顔を近づけて視線を交わす」ｃｌｅａｒ！
「手と手が触れ合う」ｃｌｅａｒ！
「甘噛み」ｃｌｅａｒ！

ヒロインちゃん実績一覧
「強キャラ枠」ｃｌｅａｒ！
「ラッキースケベキャンセル」ｃｌｅａｒ！
「強敵に対して共闘する」ｃｌｅａｒ！
「深読み」ｃｌｅａｒ！

あれ？

一念水晶をも通す

臨界速を使用し、遥かな高みに位置する水晶冠へと一息で到達する。ターゲットたる外縁テリトリーの帝晶双蠍は既に魔力のインターセプトに用いる尻尾の針を失っている。もはや乗り込む際の奇襲を警戒する必要はない。

「いくぞエルマ……長い。サイナ、貸した武器に見劣りしない戦果を期待するぜ……！」

「訂正：当機（ワタシ）の名称はエルマ＝３１７です。しかしながら、呼称プロセスの短縮及び最低限の識別条件を満たしていることから該当音声を呼びかけと認識設定します」

「作戦開始！」

「契約者（マスター）の遺伝子情報を参照、格納鍵インベントリアにアクセス……機装展開」

片腕のみで背中にしがみついていたサイナが分離、それと同時にウィンドウを操作して装備欄を埋めていく。

「――――機体名称「規格外特殊強化装甲【昇滝】」、システム掌握。一時的なエネルギーラインを当機（ワタシ）のリアクターラインと接続…完了（コンプリート）、アイハブコントロール……！！」

お、そのセリフいいね。ロボ属性の補強しにかかってきたなこいつ。俺が着ると三秒で爆散してしまう【昇滝】が虚空から現れ、サイナ

へと装備されていく。パーツの欠損をパワードスーツ側で補填できるのか、言い方は悪いが無様な四肢の75%欠損状態だったサイナが纏ったパワードスーツの手が力強く握りしめられる。

『武装を、契約者（マスター）』

「あいよっ！！」

規格外武装：鋼線型【キープアウト】。武器種的にはいつだったかオイカッツォが使っていた縄系統の武器だ。

ポンコツ少女から龍を象った機人へと換装したサイナの左腕になにやら円盤のようなものが装着され、緩やかな回転運動を始める。一応縄武器らしいんだけど……？　おっと、マネキンに装備着せて見てるばかりじゃ勝てる戦いも勝てなくなる。

「名付けて、オペレーション・ヌーブプレイヤー……！！」

必要パーツは冥王の鏡盾（ディス・パテル）、あとは気合と肺活量（スタミナ）！

「いくぞっ！」

伊達に二十回も死んでねー！　既にお前の攻撃は見切ったと、断言させてもらおう帝晶双蠍（アレクサンド・スコーピオン）……！！

奴の身体の色が変わったらビーム攻撃の予備動作だ。基本的に体外に出したビームの「芯」をキャッチするタイミングで次の攻撃が分かる。

短時間なら単発のレーザー、中時間なら3WAY、長時間なら極太レーザー砲。極太レーザー砲は近、中距離を維持すれば気にしなくていい。サイナにもそれを伝えてある。

問題は３ＷＡＹだ、単発レーザーはフィールドオブジェクト、つまりツァーベリル帝宝晶にぶつかると霧散するが、３ＷＡＹの方はビリヤードみたいに反射する。幸い速度自体はそこまで……それこそウェザエモンの断風みたいな理不尽速度ではない、だから避けること自体は余程油断していない限りはなんとかなるが軌道の予測ができない。

何せフィールドオブジェクトは未加工の原石だ、綺麗に入射角反射角が分かる形をしていない。だからいきなり自分の方に飛んでくることもある、大体五回反射すると消滅するようだが……言い換えれば五回反射していなければ避けたレーザーが跳ね返って戻ってくる可能性もある。というかそれで三回死んだ。

「っしゃ来たな３ＷＡＹ……！！」

常に同じところに乗り込めば、迎え撃つのも同一個体。二十の挑戦によってその尻尾を断たれた帝晶双蠍(アレクサンド・スコーピオン)はレールガンでもぶっ放しそうな（実際レーザーの砲塔として機能する）奇妙な形の鋏を尻尾、ひいては針の代用としてビーム反射を行う。

「サイナ！」

『了解：拘束します』

ひゅん、と何かが帝晶双蠍の横上方から飛来し、今まさにレーザーを放たんとする鋏へと巻きつく。遠心力の判定を多分に活かしたそれは本体から分離したのだろう「錘」と、実はネタ寄り武器だったのか名前通り「ＫＥＥＰ　ＯＵＴ！」と表示された黄色い非物質の帯(縄)だ。

『拘束、牽引開始……エラー、膂力抵抗は困難と判断』

「妨害で十分！！」

放たれる3WAY、だが既に見たから知っている。それは鋏から1メートル以内まではー塊のレーザーだってことをな！！

「殺人ん……ライナァーッ！！」

冥王、帝晶双蠍と異なる原理ながら己が身一つでレーザーの発射を可能とする深海の帝王。その要たるレンズを組み込んだ新しき神代の円盾が光の塊に叩きつけられ、反射された光塊が帝晶双蠍の顔に激突する。

「すまんな、ベンチに行ってもいいぜ？」

何、代理がいない？　しっかたねぇなぁ！！　じゃあもう一度ピッチャーをやってもらおうかぁ！！

ビームの反射で警戒したのか、先端こそ切り離されたが質量兵器としては未だ機能する尻尾が唸りを上げて俺へと襲いかかる。タンクだったら受け止めたかもしれないが……悪いな、盾こそ持ってるが回避型なんだ。

「鉱石生命体なら……採掘してやるぜぇぇ！！」

剛掘の鶴嘴！　尻尾を狙うには少々粗雑なカテゴリだが、これまでのプレイ記録がこの武器の特効性を証明している。

金属系……さらに言えば全身が鉱物でできたようなモンスターにはぁ……これがよぉぉーく効くってことをなぁ！！

ガギン！　と快音が響く、地味に傑剣への憧刃(デュクスラム)の前身、湖沼の短剣時代からの同期であるツルハシ君に傑剣への憧刃とほぼ同等量のレア鉱石を注ぎ込んだ剛掘の鶴嘴は水晶の皇帝にだって負けはしない。面の装甲に点の一撃がぶつかり、帝晶双蠍の外殻に決して軽傷では片付けられない亀裂が走る。

「ハッ！！　水晶エリアでの戦闘において、俺の右に出る奴が早々いるもんか！！」

もしそういう称号があったのなら、間違いなくスコーピオン・スレイヤーと言っても過言ではないくらい水晶巣崖には通い詰めたんだ。俺は全ての蠍と友達になる男……！！
いや、厳密には全ての蠍を素材(トモダチ)にする男と言うべきか……

「サイナ！　あのでかい水晶と、あれ！　あとあの二つくっついた水晶の外には出んなよ！　地獄めいた乱戦になるからな……！！」

『了解』

帝晶双蠍のテリトリーを厳密に判断することは不可能だ。しかしながら、曖昧だがおおよその輪郭であればオブジェクトの配置から割り出せる。二十回中十二回の試行錯誤でお隣さんがキレる境界線は割り出しているのさ。

「ゲッ……サイナ！　外縁側に待避だ！！」

鋏を大きく広げて突撃、獲物が射程に入ったら抱きしめるように掴んで轢き殺す。抱擁(ハグ)タックルだ。こいつら自分のテリトリーに入って来るやつには敏感な癖に自分が他のテリトリーに踏み込むことに

は鈍感なんだ、単純なダメージ以上に他蠍のテリトリーに突っ込む危険性の方が驚異的と言っていい。

「サイナ、ここからクライマックスまで詰めていくぞ！」

『刺激的な終幕(フィナーレ)をお見せしましょう。良質な脚本は優れた知性(インテリジェンス)によって生み出されるものです』

「そういうのって知性(インテリジェンス)より感性(センス)の問題じゃねーの？」

『一理ありますね、ですがその他九理は知性によるものです。つまり当機(ワタシ)の知性(インテリジェンス)は大多数の常識によって保しょぶべらっ』

「サ、サイナーっ！！」

フラグ回収までが早すぎるわ！！

一念水晶をも通す（後書き）

ツルハシにこんな隠し効果が……！　というわけではなく普通に知られている小技。許してくれ、彼は世捨て人の蛮族なんだ……！

拠るべを求めて零里（前書き）

いつものようにクソゲーの設定を考えていましたが、新しく考えたゲームの設定が拙作の一要素で片付けるにはちょっと情報過多だったのと自分の中で飼っている獣の疼きを抑えることができなかったので新作短編として投稿したいなー、と考えています。一応シャンフロ世界観とは別物としたいと考えていますがスターシステム的なものにしてもいいかもですねぇ

まぁそうやって途中で挫折していった設定の数々がシャンフロ作中の他ゲー設定なんですがね！！！

例えばそう、研ぎ澄まされた集中力はパフォーマンスに影響を出すことがある。だが逆に、集中するということはその他の思考を切り捨てるということでもある。
腰にキープアウトの帯が巻きつき、水晶冠の外縁からぶら下がった状態で俺は大きく息を吐いて脱力する。少なくともそうしなければ自身の強張りで自分を壊しかねないくらいには緊張が張り詰めていた。

『驚嘆：契約者(マスター)が今行使した魔力内燃現象は、契約者の肉体情報を一時的に異常な数値に書き換えましたが……まさか使いこなしているとは』

「あ……アドリブと、根性と……経験、かな……」

あぶ、危なかった……マジで、咄嗟の判断で綱渡りを駆け抜けた気分だ。気分じゃないな、実際そんなもんだ。
振り抜いた【金照】と振り抜かれた【冥輝】を握りしめてぶらさがる真上で体力が尽きた帝晶双蠍の体躯が爆ぜるように霧散し、大量

のアイテムが幾度となく蠍によって踏みしめられた地面に落ちる音がする。

莫大な経験値が入り、本当に久しぶりに聞いた気がするＳＥを聞きながら水晶冠の縁に手をかけ復帰する。

「これは……練習しても再現できるか、どうか……」

完全にテンションの産物だ、多分理詰めで動いたら確実に死ぬタイプのモーションだこれ。

とはいえ帝晶双蠍初討伐以外にも朗報がある……ふふふ、ようやっとレベルアップだ。

結構な数の水晶群蠍を倒してもレベルアップしなかった時はどんだけ要求経験値たけーんだよ、と思ったものだがようやくか。

内容としては……おっ！　晴天流スキルが軒並み次段階になってら！　それに新しいのも解放されてる。

まず「旋風」が次段階に派生してる。「疾風」「旋風」と来て次は「轟風」か。

疾風と違って旋風は大きく振り抜くほど威力が上がる抜刀スキルだったが、次はどんな抜刀術やら。

にしても最終形だろう「断風」まではあと何段階なんだろうか……

晴天流「雷鳴」は「迫雷」に、触れた相手に震盪状態を付与する俗に言う発勁みたいなスキルからどう進化するやら。というか発勁が何をどうやったら落雷攻撃になるのか……仙術とかそういうあれなんだろうか。

晴天流「荒波」は「防波」に……ってこれ、説明文読む限りカウン

ター投げみたいな？　またなんとも使いどころに悩む。
で新しく解放されたのが晴天流「暮叫（ぼきょう）」だ。はてこんな技あったか……と数秒考え、そういえば聖女ちゃんの聖水（意味深）でキャンセルされていた範囲攻撃にそれっぽいのがあったな、と思い出す。
「いけない、さっさと回収してずらかるぞ！」
「了解：当機（ワタシ）が回収した資源は契約者のインベントリアへと登録発送されます」
「至れり尽くせりで何よりだ……！！」
撤収撤収！　あ、いや待てここはむしろ……
「よしサイナ、ここは俺に任せて先に行け」
「疑問：この場に残留する意図が不め……訂正：察しました」
冴えてるじゃないか、最大効率を目指していこうぜ？
どうも単純に縄物としてよりもワイヤーアクションとしての機能が売りらしいキープアウトでレスキュー隊宜しく下に降りていったサイナを見送りつつ、俺はツルハシを担いで水晶冠を見回す。
「住人不在の場所は押収します、ってか？」
成る程成る程、確かにここはお前達の場所だ。
「だが今は俺の場所だ」

奪い返せばいいぃ……できるものならなぁ！！
超カンカンフェスティバル·ｉｎ水晶冠の開催をここに宣言するっっ！！！
「うおおぉぉぉ砂利のひとかけらまでリソースを採り尽くしてやらぁぁぁあ！！」
鼓舞するかのように己が胸を叩き、黒雷を纏う。流れる血潮にスキルの加護が混ざり、全身に力が漲る。
ツルハシを構え、まさに放たれんとするビームの致死圏内へと、今──！！
「おはようございます契約者(マスター)、リザルトを聞いても？」
「ツァーベリル帝宝晶二十三個、帝晶双螁の貴宝殻六枚、蓄光鋏二本、至晶針一本」
「成る程、Ａ－評価です」
え、これ以上要求されんの？　マジかよハイスコア目指さなきゃ。

「だがこれで条件は達成したぞ、脱出は可能……可能…………」

「疑問：どうしたんだい死亡志願者」

気づいてしまった、今何かヤバい事実に気づいてしまった。
いや待て、ドラゴン程直接的なヘイトを稼いでいるとは思えない。
あっダメだ、俺は彼（彼女？）が良心の塊であることを短い付き合いの中で理解しているがそれを踏まえても……う、うぅっ、クソっ……人間の、人間の悪意が……サミーちゃんを見逃してはくれない……っ！　だって、だってサミーちゃんは……どう見てもレアエネミーだから……っ！　こう言っちゃあれだが次々とEXシナリオやらが進められていく中で、プレイヤー達はオンリーワンに飢えているから……っ！

「一応聞くけど……ウィンプ、行くアテ……ある？」

「ないわよ」

ですよねぇぇぇえ！！
目に手を当てて空を仰ぐ。残念ながらサミーちゃんが毒ブレスでせっせと溶かして出来た洞窟なので空は見えないが、こうでもしなけりゃやってられない。

「おお、神よ……！」

三神教だかなんだか知らないが、この瞬間は祈りたい。クソがっ！
ユニークシナリオEXの発生条件を見れば分かる、俺はこのヘタレスネークとサミーちゃんを養わなければならない。恐らくレプテ

ィカを生存させてぁのゴルドゥニーネと戦うことがＥＸシナリオの大まかな流れだ。
恐らくパーティ解散くらいなら出来るだろうが……それを踏まえても要求される最低条件はレプティカ（ウィンプ）とサミーちゃん用の拠点だ。
「ブリュバスを使うか……？　いや、遠すぎる……一目でもバレたら面倒だ、ほぼ大陸中央から外縁に出るのは不可能……誰にも気付かれずに行く？　サミーちゃんなら……いや、永続透明化ってことはないだろう。クソ……」
「な、なによいきなり」
オメーの新居について考えてんだよ！　そう言おうとして……ふと気づく。
「なぁウィンプ、あの外敵から狙われることなくある程度の安全性が保証された場所がある、と言ったらどうする？」
「ほ、ほんとう！？　どこなの！！」
コロンブスの卵だ、視点を変えればいい。具体的に言うと俺の数時間が八割徒労になるが可及的速やかに条件を達成できる場所は一つしかない。
俺は無言で、されど苦笑を浮かべながら人差し指を地面へと向ける。
期待に目を輝かせたウィンプは数秒ほど硬直していたが、俺が何を言わんとしているのか理解したのかカタカタと震え出す。
「ほ、ほら……安全装置もあるし、な？」
ＷＩＭＰ　Ｒｅｂｏｏｔ．

「やーっ！！　いーやぁぁぁぁー！！」

「えぇいっ！　文句を言うな！　最強のセキュリティが周囲と上空を守ってるんだぞ！！」

「ぎゃくにいえばかんぜんにかこまれてるじゃないのぉーっ！！」

ちょっと言うことを全く聞かない番犬が周囲に配置されてるだけだろ！

ジタバタと暴れて全身でＮｏ！！！　を表現するウィンプをなんとか説得するべく俺は言葉を編む。

「待て待て！　別にここで朽ち果てろって言ってるわけじゃねー！　いいか？　サミーちゃんのおかげでこの洞窟は結構な広さがある。それは分かるな？」

「肯定：名称サミーちゃんこと透食の大蛇（アサルテルス・スネーク）の貢献によりこの洞窟はシグモニア前線渓谷に於いて希少な安全地帯としての役割を果たしています」

「おおそうだとも、いい事言ったなサイナ。今のお前はとてもインテリジェンスだ」

どうやったのか手足だけ【昇滝】の装甲を展開してドヤ顔をかますポンコツを適当にヨイショしつつ、俺はウィンプ護送計画を破棄し、至急新たなるオペレーションを開始する。

そう、俺はリフォームの匠になる。この薄暗い洞窟を……最高級のスイートルームに変えてやるのさ……っ！！

拠るべを求めて零里（後書き）

帝晶双蠍、無念のユザパ処理………っ！　すまねぇ、書いてて思いついたサンラクの機動（マニューバ）はジークヴルム戦で披露したいんや……！
すまねぇ帝晶双蠍……っ！！

ヘタレ蛇。をプロデュース

困った時の？　攻略サイト〜！

Q．プレイヤーの手でセーブポイントや家具を作るにはどうすればいいですか？

A．大工になりましょう

Q．……出来れば大工になる以外で方法はありませんか？

A．ねぇよカス、横着してないで釘打ちから始めんだよ

「クソがよぉ……っ！！」

この危険地帯のどこで大工になれと言うんだ……っ！

だがまだ選択肢はある、ククク……このゲームでは家具職人がジョブとして存在する。もはや完全に趣味領域の生産職だが、日曜大工という言葉もあるし趣味でやるには不足のないジョブだろう。何故か魔法適性が要求されるあたり、なーんか怪しいがな。絶対これ隠し要素ある奴ですよ、ライブラリ頑張れ。

だがここでピンと来た、家具職人が作った家具はどうなる？　まさか作った側からモンスターにぶん投げる訳でもあるまい。家具は家に置いてこそ機能するアイテムだ。いやバフとか一切ないオブジェクトなんだけどな？　製作に必要なのはスキルだしなんで魔法適性が必要なんでしょうねぇ……

そう、家具は家に置かれるもの、屋敷に置かれるもの、店に置かれるもの……そして拠点に置かれるものだ。

ククククク……そうか、既に俺はこの手に答えを持っていたんだ。皆にお披露目するまでしまっておこう、と考えていたばっかりにその存在ごと忘却しかけていた。だが、今こそ役割を果たす時じゃあないのか……？

「ぐらつくか……なぁウィンプ、サミーちゃんがこの洞窟を作ったんだよな？」

「そうよ！　サミーちゃんはすごいんだから！　どくでかべをとかしてほりすすんだのよ！」

サミーちゃんから漂う哀愁が作業の過酷さをひしひしと感じさせた、お前あの戦場が隣でどんぱちやってる中掘削させたんか……鬼かよ。

「悪いけど、ここの地面をこういう……ちょっと窪ませる感じで一直線に掘ってくれないか？」

「……いいけど、やるのわたしじゃないし」

サ、サミーちゃん……っ！！

申し訳なさとありがたさで胸が一杯になる、おいおいやべーよサミーちゃんの好感度がうなぎ登りだ、蛇だけど。

まるで「ええんやで」と俺を許容するかのような慈愛の眼差し（爬虫類）をしたサミーちゃんが牙から毒液を滴らせ、真剣な様子でゆっくりと地面を溶かしていく。神経毒じゃなくて酸性みたいなタイプか……

数分後、洞窟の中に溝を掘ったサミーちゃんが一仕事終えた様子でとぐろを巻く。お疲れ様ですっ！！

「深さまで完璧では……？　マジかよ、サミーちゃんさんマエストロかよ……！！」

期待には応えねばなるまい、例えそれがＮＰＣかも疑わしいモンスターによるものだとしても、俺はハイスコアを狙う男……！　カモーンブリュバス！！

「紹介しよう、ブリュンヒルデ・バスカヴィル……ええと？　あーそうそう、ブリュンヒルデ・バスカヴィル三号。あ、正式名称はブリュバスだ」

「なにこれ、へんなかたちのはこね」

「いいかサミーちゃんのオマケ、これはな船と言うんだふーねー、ご理解いただける？」

「名称ウィンプの情報更新：インテリジェンスの欠乏」

「ばかにされてる！？　ていうかおまけってなによ！」

「いいか付属パーツ、今この場で最も貢献しているのはサミーちゃんでお前がびりっけつだ。さんをつけろ、サミーちゃんさんと呼べ」

「さ、サミーちゃんはサミーちゃんよ！」

この野郎、俺の方がサミーちゃんさんを理解（わか）ってんだよ！　サミーちゃんさんはな、サミーちゃんさんはな……！！

いや待て落ち着け、テンションがおかしいことになっている。ＮＰＣとしての有能さと無能さの比率がフェアカスの影を脳裏によぎらせるのがいかんな。有能なキャラを無能なキャラが足を引っ張るってのがどうもこう……あーくそっ！！

「決めた、決めたぞ俺は……」

「な、なによ……」

「特訓だ……！」

生かさず殺さず、死のスレスレを全力疾走するかのような、廃人向け鬼レベリングだ……！！　知ってんだぞテメー！　レベル６２ってどういう事だ６２って！！

「最低でもあのゴルドゥニーネと殴り合えるくらい鍛え上げてやるよ……！！」

「いやぁーっ！　しんじゃうしんじゃうーっ！！」

「安心しろって、死ななきゃ回復してやるから……サイナ、アーミレット・ガルガンチュラを呼び込んでここで戦う事は出来るか？」

「条件付きで可能です、入り口近辺は現時点で個体差による小型のアーミレット・ガルガンチュラであれば侵入可能な広さではありますが「うそでしょ！？」少々沈黙してください……ここで個体名称：ウィンプの能力向上を試みる場合、狭すぎる入り口は殺到するアーミレット・ガルガンチュラの自爆行動を誘発しかねません」

「長い、要約しろ」

「入り口が狭いので最悪のケースで生き埋めにされます」

「いいね、インテリジェンスポイント１０点」

「問題発生：当機（ワタシ）の知性（インテリジェンス）は既に上限値です。カウンターストップするのでは？」

「周回要素だな」

「二周目……！！」

空転する歯車みたいな周回だな、でもそれ言ったら長くなりそうなので言わない。

「いいかウィンプ、お前は死にたくないと言うがこの世界で一番命の危険から遠ざかる方法は強くなる事だぞ？」

「う、うぅ……べつに、わたしにはサミーちゃんがいるし」

「サミーちゃんさんにばかりに頼ってどうするよ、お前も強くなればさらに安全性が増すんだぞ？」

「う、うぅ……」

「それにだ、お前は今この瞬間のチャンスを理解しきれていないようだから教えてやるが……俺やサイナが特訓の手助けをするんだぜ？　つまり安全かつ確実に強くなれるんだぞ……？」

「あんぜん……かくじつ……」

「それになにもあの巨大モンスターに挑めって言ってるわけじゃない……これはチャンスなんだよウィンプ……分かるだろう？」

「し、しかたないわね！！」

ちょっろ。

当面のセーブポイントとしてブリュバスを使う、という方法は当初名案に思えたが実際のところ考えてみると問題点が多い。
最大の問題はブリュバスはそもそも船だという事、つまり海や川に浮かべるものだ。そしてさらに言えば「旅狼」用の拠点であるという事……つまり、ずっとあそこに置き続けることはできない。

結論から言えば、その場しのぎでセーブポイントを設置しただけで根本的な解決にはなっていない。やはり家具類が必要か……なんかそういうのも俺の財布、じゃなくて黄金の天秤商会なら買えそうだが、ここからどうやってフィフティシアに行けと……？

「セーブはしたからリスポンで即戻れるが、問題は手段、か……」

やっぱり人力特急で戻るしかないのか？　ダルいんだけどなぁ……
いや待て、そういえば。
「契約者、個体名称ウィンプの強化計画を実行するにあたり、先程具申したこの洞窟の拡張についてですが」
「あぁ、準備は一任する。ちょっと俺は一眠りしてから出かけてくる」

翌日。
「おはよう斎賀さん」
「お、おはようございます陽務君」
「ちょっと物は相談なんだけど、今日の夜時間ある？」

「え？　はい、空いてますけど……」

「ちょっと斎賀さんに会いたくて……」

「ぽへぇっ！？」

「……蟲人族の里で」

「……………………あ、はい」

流石はガチ廃人の斎賀さんだ、二つ返事だぜ。

うーむ、対モンスター戦だと驚くほど使いづらいが移動用だと便利極まりないんだよなぁ臨界速……最大射程でキロメートルに手が届くあたり頭おかしいとは思うが、これでバグでもなんでもないのだから驚きだ。

バグ移動と言えばとあるゲームで「墓場で花火を使って吹き飛ばされるとなぜか着弾地点にリスポーンする」という謎バグが流行ったことあったなぁ……あえてなんのゲームかは言わないけど人間メテオ迎撃天誅とか流行りそうで流行らなかった。むしろランダム人間のわなかメテオ天誅が流行った。

「大体ここら辺って話だけど……ん？　あれか？」

レイ氏はマッピングガチ勢ではないものの、廃人として当然と言わんばかりに地図アイテムを持っていた。そして限定的とは言えマッピングされた蟲人族（バグマン）の里近辺のランドマークを俺が聞くことである程度の場所を絞ることが出来る。

「砂漠エリアだからこそ、ランドマークが余計目立つって言うね……！」

二重螺旋のサボテン、あれか。本当に二重螺旋に絡みついてる……なんかこう、ちょっとキモいな。

だがあれが見えたなら蟲人族の里はあと少しだ。レイ氏曰く岩に囲まれたオアシスだそうだが……あぁ、上から見たら普通に見つかったわ。とりあえず着地して向かうか。

はい三、二、一……インパクト今っ！！

「あれ、なんでふねからでてくるのよ」

「聞くな」

「推測（どうせ）：なんらかの要因で死亡」

「言うな」

リテーイク！！

「ふんっ！！」

慣れたから大丈夫と気を抜いたのがいかんかったな、やはり初心忘れるべからずってやつだ。

さて、蟲人族の里はもう目と鼻の先だ。エムルはラビッツにいるのでこちらからコンタクトを取ることは不可能、そういう時のために一日に何度かエムルが前線拠点を訪れるように頼んでいるが……また砂漠を突っ切り樹海を踏破するのも中々にしんどい。

ではどうするか？　ディアレを頼るのだ。あいつはエムルの魔法の師匠らしいし、当然【座標転移門(テレポートゲート)】を習得している。

最初にラビッツを訪れるイベント時以外では【座標転移門】には使用者と同行者の双方が行ったことのある場所にしか転移はできない。だが俺もディアレもラビッツという共通の拠点を知っている、であればラビッツへの帰還とエムルとの合流を大幅にショートカットできるという寸法だ。

とはいえ一方的に利用するだけでレイ氏の善意に甘えるのも不義理というもの、なんらかの埋め合わせをしないとな……

ざすざすと砂を踏みしめながら岩のドームへと向かう。ティアプレーテンの岩版、って感じだな。あっちは大樹と蔓によって囲まれた安全地帯（元）だったが、こっちは岩と風に巻き上げられる砂塵が高高度からの視点を持つ者以外の目を欺いている。

だが空は既に未踏の領域などではない、開拓者の情熱は空をも踏破するのさ……！！

「くくく、ふははは……！　見つけたぞ、蟲人族(バグマン)の里……「スナノキ」！！」

調子に乗って高笑いなんてしたツケを支払うまであと十分。

◆

「あれぇ？」

何故俺は今、虫人間達に囲まれ武器を突きつけられているのだろうか。いや待て、天地神明に誓って悪いことはしていない。この俺は職業的理由と居候的理由からカルマ値を上げるような事はしないし、ヴォーパル魂を下げるようなヌルい事はしない。謂わば強キャラロールプレイをしていると言ってもいい。

だから普通に蟲人族の里に踏み込み、こう言ってやったのだ……

「お前達に用はない、レイ……サイガー０を出せ」

ってな！！！

あれこれ強キャラは強キャラでも尻に（敵幹部）とか付くタイプの奴じゃね？

「我ラガ友ニ何ノ用ダ、禍々シキ傷ヲ刻ミシモノヨ……！」

「……あー」

ここで「いや違うんです仲良くしよう？」というのは容易い。だがこうも見事にロールプレイがガッチリとハマると……こう、ね？悪ノリしたくなるじゃん？

「……ふ、それを言ってどうすると？」

「カカカゲノ言葉ハ間違イデハナカッタカ……オ前、災イヲ携エ現レシモノ……！！」

あっやばいどんどん後に引けなくなってるけど比例してどんどん楽しくなって来る！！

長老っぽい雰囲気を漂わせて俺へと杖を突きつけるそれは全体的に見れば人型ではあるものの、腕は四本あるし明らかに人間の身体に備わるはずのないパーツがいくつも散見される……あぁうん、蝉人間だ。

「であればどうすると？　蟲人族諸君……俺はサイガー０を出せと、ただそれだけを求めている……お前達はみずから災いに飛び込む程愚かなのか？」

「サイガー０、イイヤツ……トモダチ、守ル。戦士ノ誇リ……！！」

あっやばい！　友情パワーだ！　これ友情パワーで強敵に立ち向かうちょっと頭の弱いキャラだ！！　うっは俺が敵役に回るとか滅多に体験できるアレじゃねーぞ！！　外道鉛筆が悪役に夢中になるのもわかるなぁ……！！

「ほう、俺に挑むか……！　命が惜しくないと見える……！！」

「行クノカ、バダダガララ！」

「オォ、バダダガララガ戦ウゾ！」

「戦士ニ誇リアレ！！」

レイ氏からあらかじめ話を聞いてなければ結構混乱してた気がするなぁ……だが知っていればむしろ好感すら抱く。

蟲人族(バグマン)を一言で言い表すなら「蛮族」だ。だが同時に「戦士」という言葉も相応しい。

彼等は強き者を尊ぶ文化を持ち、それと同時に無益な戦いは好まない清廉さも併せ持つ、らしい。

そして何より、蟲人族はどいつもこいつもタイマン至上主義だ、流石に巨大モンスター……例えばワームとか相手だと集団で挑むこともあるが、誰かがタイマンで挑むと宣言したのならば「戦士の誇り」と讃えるとかなんとか。

つまり今、ダンゴムシ人間こと……えっと、バタバタガララ？　君は俺とタイマンで戦うということらしい。

「ウオオオオオオ！！」

十人に聞けば十人が「知ってた」と答えそうな、その身体を十全に活かした突撃、要するに身体を丸めて連続かつ高速で前転をする突進攻撃が俺へと迫る。
流石にキルしちゃマズイだろう、とはいえ……あーうん、どうせ悪役ロールするならちょっとやってみるか？
藍色の聖杯起動、交換するステータスはＬＵＣとＶＩＴ、両手に紅蓮海の拳帯を装備して……

「む、ぐ、ぬっ！！」

ダンゴムシ人間ことバタガラ君の身体はタイヤのように滑らかというわけではない。下手に引っかかればそのまま轢き潰される危険性があったが、そんな懸念はおくびにも出さずに回転突進を正面から両拳で受け止める。

「オ、ォオッ！？」

「いい突撃だ……だぁが！」

大体六割くらいの確率でアクションゲーだと目にするカンフーキャラを見様見真似で模倣した発勁とかそんな感じのかっこつけパンチ！！

「グォアァ！！」

殴り飛ばす、というより押し込むような両拳の一撃を受け、バタガラ君が後ろへと弾き飛ばされる。
わぁ、と悲鳴混じりの声が囲んで観戦することで蟲人のコロシアム

を作り出す蟲人族達から上がる。

「来い、遊んでやろう……！！」

「オ、オォ…！　負ケ、チガウ！　マダ、戦エル！！」

「――待テ、バダダガララ」

あ、やばい。
もうね、流れが読めるんですよ。このあと何が起きるか大体分かっちゃうよねこういうの、お約束っていうかさぁ……

「ココルココレコ……！！」

なんて？

「オ前ノ誇リ、コノ私ガ讃エヨウ……故ニ、コノ戦イヲ私ニ預ケテホシイ」

「ム、ヌゥウ……ワカッタ」

「ココルココレコガ戦ウ！」

「バグズ・プライド！」

「オォ、我ラガ誇リ（バグズ・プライド）……」

わぁ、強キャラＶＳ強キャラのシチュだぁ……これもう後に引けないのでは？

「傷ノ戦士ヨ……刃ヲ収メル気ハナイカ」

くそっ、こんな楽しいシチュをやめる理由が続行する理由に勝てない……っ！　おのれペンシルゴン！！

「何を勘違いしている、俺はサイガ－０を出せと……最初からそう言っている。刃を向けたのはそちらだ」

「ソウカ……デアレバ戦イヲモッテコノ場ヲ収メル他ニナイ、カ」

え、なんで？　なんでそうなるん？　そもそも俺最初からレイ氏呼んでとしか言ってないのになんで刃傷沙汰になってるん？　心当たりなんて……

傷の戦士？

「く、くくくく……この傷の宿命、か……」

リュカオーン絶対ゆるさねぇカウンターがギュンギュン回り始めたのを感じつつ、俺は紅蓮の帯を巻いた拳を構える。

「来るがいい蟲人族の戦士、我が無聊を慰めるがいい……！！」

この場に現れたレイ氏の説明で戦闘が中断されるまで、あと五分……っ！！

超奇天烈メガハンラー（後書き）

いきなり空から降ってきて悪役みたいな高笑いして、周囲の弱者を踏み躙り強者に喧嘩を売るような物騒な気配をまき散らし、どう見てもひ弱な半裸なのに妙に強気で、いきなり「貴様らに用はない、サイガー０を出せ」と蟲人族の英雄が連れてきた友人を探すような素振りを見せるけど彼は主人公です

ココルコココレコさんが何の蟲人族かは名前で割と分かったりします、ぶっちゃけなぞなぞと駄洒落の中間みたいなキャラ
インベントリアでも書きましたが名前に同文字が多いほど強い蟲人族です
見た目？　グランセクト、オウ禍武斗の口ｗｗｗとか笑ってたらＱ．Ｑ．ＱＸにハートを終葬された玉ねぎだーれだ？

知りたいのは結果ではなく過程

「その、大変でしたね……」

「あーいや、まぁ途中から俺もちょっと楽しくなってノっちゃったし……」

「ムゥ、最初カラサイガー０殿ノ友デアルト言ッテクレレバアアハナランダロウニ……」

なんというか、旅行のために家を出たけどガスを閉め忘れたことに気づいて急いで戻って来ました的なオーラを漂わせるバッタの蟲人族、ガルガガフノノガス……なっげぇ、重複抜いてガルフノス氏が俺をみてため息をつく。

「我ガ旅路ノハジマリカラシテ、コウモ躓キ続ケルトハ……」

なんでも、見聞を広めるために旅に出ようとした矢先にレイ氏と……イムロン？　氏を発見、とんぼ返りさせられた上で改めて出発しようとしたタイミングで俺である。まぁ正直ちょっと申し訳なさは感じますね、はい。

あの第一印象強キャラのくせして戦法の一々に殺意が漲った蜂女との激闘は対人として見ればなかなか歯ごたえのある相手ではあったが……いややっぱしばらく戦いたくないわ、あれは時間経過でもっと面倒臭くなる雰囲気がした。言うなれば体力減少をトリガーにステータスが上がるタイプのボス。

「ココルコココレコト互角ニ渡リ合ウ姿ヲ見セテ認メサセル……マサカソレヲ狙ッテ？」

「え？」

考え事をしていたら何やら勝手に勘違いされていた。いや特に何か考えがあって悪役ロールしたわけじゃないし、そもそもここに来たのはサービスエリアにトイレ借りに来た程度の感覚というか……

「フ……中々聡いな」

別に肯定したわけじゃない、ただガルフノス氏の知性を褒めただけだ。仮にそれで何か違う受け取り方をしたとしても俺は悪くない、鉛筆式交渉術だ。

「ホウ、流石ハサイガ－０殿ノ友トイウベキカ」

「……なんかやたら持ち上げられてるけど何したの？」

「い、いえ、その……クエストを消化しているうちにいつの間にか」

あー、これ多分ヴォーパル魂とかそういう系のパラメータがあるな？　レイ氏から聞いた話とさっき殴り合い（コミュニケーション）した情報から鑑みるに、勇敢であることがトリガーかな？　ヴォーパル魂と違って無茶無謀もプラスに働きそうな気配だ。

「ふーん……あぁそうだ、実はレイ氏に相談がありまして」

「相談……ですか？」

「んー……ディアレにさ、ちょっとラビッツまで送ってもらいたくて」

「ディアレさんに……？　でもサンラクさんは……」

「あーうん、ちょっと事情があってさ。今使ってるセーブポイントを更新したくないからリスポンで前線拠点に戻れないんだよね」

「あぁ……成る程。ディアレさんでしたら、ええとイムロンさんと一緒にこの里の鍛冶場にいます」

「イムロンって……えーと、なんかペンシルゴンが企んでるやつだっけ？」

「えぇと……まぁ、はい。あぁでも……」

……？　妙に歯切れが悪いな。

「サンラクさん……その、イムロンさんは鍛冶職で……その、英傑武器とかそういうものに、とても興味津々です」

「……ほう？」

成る程会うのは面倒そうだ、だが……何か商機を感じるな？

「ワァ！　ヘンナノダ！」

「どうもぉ、変なのでーす」

必殺の上半身固定摺り足ウォークが炸裂し、結構印象的な見た目の蟲人族キッズがワァキャアと散っていく。あれアゲハチョウの幼虫みたいな姿してるけど……蛹になるの？

俺自身が蟲人族に完全に受け入れられた、というわけではなさそうだがいつの間にかポストトットリ（特定種族にちやほやされるポジの意）に就任していたレイ氏の仲間である、という事と蜂女と互角に渡り合った事がプラス方向に働いているようだ。

さて、人の事を災いだのなんだの言ってくれやがった蝉長老……名前は長すぎたので忘れた、確かミンミンブンシャカジジィみたいな名前の長老から鍛冶場の情報を手に入れた俺は、煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手をこれ見よがしに装備しながら鍛冶場へと乗り込む。

「……むむむ、ビィ姉さんが作ったやつより若干使い勝手がいい……いやでも、耐久はこっちの方が……」

「ふふん。耐久力も大事だけどやっぱ瞬間火力よ、壊れさえしなければ鍛冶師（わたし）が修復するんだから誤差レベルの耐久度で火力が上がるならむしろ積極的に削った方がいいのよ」

「いや、だがねイムロン。私は近距離での戦闘も視野に入れてるん

だ、だから単純にぶん殴ることも考慮するなら耐久を削られるのはいたいぞ？」

「ばっかねぇ、一つの武器と心中するのを否定はしないけど、手数で戦う魔法使いが杖厳選してちゃ世話ないって。使い分けるにしてもスペアにしても、多様性はあって損にはならないわよ」

「うーむ、一理ある……」

あれがイムロンか、さて……

「やぁどうも、お取り込み中済まないがちょっとそこの兎を借りてもいいかい？」

「はぁ？　なん………」

振り返ったイムロン……ロールプレイする気がないのか、ゴツいオッさんの見た目とは裏腹に女性の声で振り返ったプレイヤーの表情が俺の両腕を見た瞬間スコンと無表情になる。

「………な、なん」

「き、君はサンラク！？　ま、まさかエムルもこっ、ここに！？くぅうっ、まさか修行がバレて……？」

「いや、エムルはここにはいない。だからこそ会いに来たんだが」

ククク、魔法の杖は木が重要だのなんだの言ってる奴の目の前にいきなり超未来兵器が現れたんだ、奴の視線は完全に釘付けだ。大事なのはイニシアチブさ……！　強い装備はそれだけで周りを威圧す

る、リソースでマウントを取るのだ。
実際これまでなんらかの交渉をする時はこの方法が最適解だった、だからこそ今回もこれでいけると思っていた。
だが、そう俺は……新システムをお預けされ続けていた生産職の執念というものを見くびっていたのかもしれない。
「お？　これが気になっ」
ずだん！！
「ひえっ」
か、壁ドン！？　え、性別変えた方がいい？
「……性能を」
「はい？」
「性能を、聞かせて」
入手法ではなく？　まぁいいが……
「こっちの拳は弾丸サイズの水晶を飛ばして、振動で巨大な水晶柱を作り出す。んでこっちの拳が月光で魔力チャージ……あ、水晶柱の生成にもこの魔力チャージが前提だ」
超過機構は……まぁいいや、今は黙っておこう。それに今の情報だけでイムロン氏はご満足いただけたようだ。

「拳系武器は二つ一組、基本的に同じ能力になる……特殊パターン？　違う？　っ！　そうか別々の素材だから？　いやその場合でも片側ずつで別々になるなんてそんな……」

……うん。

これ以上ここにいると厄(メンド)い気配がするので息を殺してそっとこの場を後にする。

ほーれディアレこっちこーい……

「あっ！　ちょっと待った！！」

「げっ」

「別に譲ってくれとか言うわけじゃないからそんな構えなくていいわ……ぞ。むしろそれを作る過程が知りたいの……ぞ」

普通に複数質問要求して来たよこの人……まぁいいや、聞いた話じゃプレイヤーに限れば最上位の鍛冶師らしい。縁を繋いで損はあるまい。でもロールプレイは雑だな。

「まぁいいや……で、何から知りたいんだ？」

「全て」

ライブラリの似非魔法少女みたいなこと言うのはやめてくれよ……

◇

見てくれだけで言えば、無骨な鍛冶師と半裸の想い人が会話しているだけの光景である。

だが、サイガー０は短い付き合いとは言え知っている。イムロンのリアルがちょっとくたびれた感じのＯＬであり、男性が話しかけやすい性格をしている事を――――！

「……ま、混ざるべき？　いえ、でも……」

「ムッ！　ソコニオルハ我ガ好敵手(ライバル)サイガー０デハナイカ！！」

「ルガドドド・ル・ドドドドさん……黙って」

「ム、オォ……アイワカッタ」

知りたいのは結果ではなく過程（後書き）

ルガドさんはカブトムシの蟲人族であり、名前見れば分かるかもしれませんが七つ文字クラスのバグズ・プライドの一人。
電撃纏ってフォームチェンジしそうだけど純ＳＴＲ型、スキルも自身のＳＴＲを上げることに特化してるのでヒロインちゃんは対マッシブダイナマイト用の立ち回りを取ることで実力を認められました

キャラ紹介もまだなのに書きたいこと多すぎる……でもこの後インベントリアみたらちょっと楽しいかも？

金とケジメと特ダネ

今回イムロンに情報提供したのは、何も善意によるものだけじゃあない。プレイヤーの中でも有数の鍛冶師とお近づきになる、ってのもあるが……大部分は外道鉛筆プレゼンツの計画の一助とするためだ。

クラン「黒狼」は確かにトップクラスのクランであったが、あそこは実質半分に割れていたのもあったし酷いマッチポンプで実質三人相手にするだけだった。

だが今新大陸で幅を利かせている反黒竜派はクランという枠組みに収まらない一大勢力だ。恩を売って協力を買うことは無駄にはならないだろう。

「ふふふ……こういう下準備も悪くはない」

俺はペンシルゴンのような属性：悪ではないが、ゲーマーとしてでかい一発のためにコツコツ準備することは嫌いではない。

それに聖槌ムジョルニア、なんて明らかに凄そうな武器を持ってる奴が武器を作ってやる、なんて言ってきたら口も滑るというものだ。

「さて、と」

美食舌の称号を取ったおかげでＶＩＰ待遇の俺に対して出された紅茶の味も良くわかる。先程まで砂漠の街にいたところをディアレの協力の元、ラビッツに戻った上でエムルと合流してフィフティシアにやってきたのだ。

「これはこれはサンラク様……」

「今回は普通に買い物に来ただけだから、わざわざ君が来なくてもいいんだがね……」

「何を仰いますか、末端の丁稚奉公に任せるようではそれこそ我が商会の名折れというものです」

豪華なソファーでくつろぐ鳥面の半裸をＶＩＰ待遇でもてなす大商会の若旦那、とか大概何かがおかしい光景なのだが金の力は偉大だね。

とはいえ今回は本当に普通に買い物に来ただけなので適当に品質が良さそうな家具を買い占めていく。

「……時にサンラク様、例の大きな宝石に関してなのですが」

「聞こう、ああそれと……古い宝石は神の膝元にあるよ」

「おぉ……それは何よりです、それで例の件ですが……どうも、第二騎士団の方に動きがあるようです」

第二騎士団に？　第三騎士団が島流しされるから次は第二騎士団ってことか。

黄金の天秤商会は規模がでかいからな、なんとなくスパイ的なことできる？　と持ちかけたら普通にできてしまったのだが……うーむ、ワールドクエストの進行は単純にジークヴルムのＥＸシナリオが発生するだけに留まらないのか？

「えぇ……どうも、武器の調達を行なっているようで」

「……新大陸か？」

「恐らくは、ただ……えぇ、これは極秘なのですが、三神教会にも同様の流れが」

……ちょっと待て、考える。

えーと？　まず第三騎士団が一島流し（強制送還）にされて、第二騎士団が戦力を整えて、その裏で三神教会も動いてて……ダメだ、ちょっとこんがらがってきた。後でペンシルゴンに流しとけばなんとかなるだろう。最悪魔王ルートになっても知らん、奴を売る。

「……ふむ、ありがとうアントニオ君。そういえば君、良い人はいたりするのかい？」

「はい？　えぇ、まぁ……家内がおります」

「そうかそうか……ではこれで指輪でも作って贈るといい」

ツァーベリル帝宝晶をポンとプレゼント。

「これ、は……？」

「新大陸産の宝石さ…………現状では恐らく俺だけが採掘できている、な」

「はは、これは参りましたな……次からは紅茶の他にも何かお出しせねば……」

いいってことよ、俺と君との仲じゃないか……

「おうサンラク、久し振りってぇほどでもねぇかぁ？」

「う、うぃっす」

小指……いやまさかそんな、誤魔化しきれるか……？
なんだこの落差、俺はさっきまで大富豪プレイをしていたはずなのに、こんな……完全にケジメつけるシーンじゃないか。
にっこり笑顔のエムルにまぁまぁまぁまぁと連行された先はラビッツ兎御殿、この時点で嫌な予感しかしなかったのだがヴァッシュと面会した時点で俺は小指の喪失を覚悟した。

「ほ、本日はお日柄もよく……」

「おめぇさん、匿ってんだろう？」

「なばれぜたし」

馬鹿な、バレる要素がないだろう！？　ヘタレニーネはシグモニア前線渓谷のど真ん中で実質軟禁状態だ、少なくとも俺がそう誘導した。サミーちゃんさんが作った洞窟がバレる理由がない、何故？

い、いや違う……ここですべきは一つしかない。何故俺が「ゴルドゥニーネ」を庇うのか、これからどうするつもりなのか、それら全てを含めて……

「指を、詰めます……っ！！」

「話の流れが全く掴めないですわ！？」

「まぁ待てようサンラク、俺等（おいら）ぁ何もケジメつけさせようってわけじゃあねぇ……だがなぁ、一言入れるくらいはあるべきじゃあねぇかい」

何故だ、何故見抜かれた？　発信機的なものが付いてるとか？　可能性としてはあり得そうだが……いや、何か違う理由がある気がする。少なくともシャンフロが「大陸の真反対で起きた出来事を何故か把握してるキャラ」的な妥協をするとも思えない、ヴァッシュ自身の何らかの能力か？

「それに関しては返す言葉もなく……しかし兄貴、よろしいんで？」

「おめぇも知ってるだろうがよぅ、あいつも難儀な身体だぁ……だからいちいち目くじら立てても仕様がねぇ。だがおめぇさん、ちゃあんと責任（ケジメ）つける覚悟はできてんだろうなぁ？」

ここだ、ここで強気ムーヴするしかない！

「えぇ。場合によっちゃあ防衛に回すヴォーパルバニー達を失業させちまうかもしれやせんがね」

「くかか、そりゃぁ困った！　新しい働き場所を考えてやらにゃぁなんねぇなぁ」

いよっしゃパーコミュぅ！　これはパーコミュですよねぇ！？

ケラケラと笑うヴァッシュにつられて俺も笑みを浮かべて……

ぽん。

「ま、お手並み拝見といこうや……しくじったならぁよう、死ぬ程度で済むと思うなよぅ？」

「………ぇいっす」

キャ、キャラロストだけはご勘弁を……

――

「うぅ……リッチマンムーヴからケジメムーヴまでの移行早すぎ……」

「サンラクサン一体何しでかしたですわ？」

「あ？　ゴルドゥニーネを飼ってるんだよ」

「へー……へぇえ！？」

ええい蒸し返すな蒸し返すな！　ラビッツ追放オチとか真っ平御免だ、絶対回避してやるから覚悟しとけよ。
この俺のテイマー性能をナメてかからないことだ……！！
「もういいですわ……気にするだけ無駄ですわ、んでこれからどうするですわ？」
「んー、前線拠点に」
「はいなっ」
ちょっと会いたい奴がいてな。
エムルというファストトラベルの利便性をひしひしと感じつつも前線拠点へと飛んだ俺とついでにエムルは、ある人物がいるであろう場所へと人目を気にしつつ向かう。
「やぁ」
「んー……？　なっ、あんたサンラ……」
「シーッ、静かに……お忍びって奴だ、あんたらの所のトップはいるかい？」
「い、いや……あの人は明日外せない用事があるとかで早めに寝ている。いや、待ってくれ！　ここであんたを逃したら俺が困る！
サブリーダーならいるからそいつじゃダメか……？」
サブリーダー、か……んー……まぁいい、どちらにせよこれはある

程度出回って欲しい情報だからな。

「分かった、そいつに取り次いでくれ」

「どうも、セートです。お噂は予々」

「どんな噂か聞いても？」

「少なくとも私達の間では「足の生えた情報袋」と」

言うね、その通りだから反論できないけど。とはいえ俺は攻略サイトを充実させることに然程の喜びを感じないし、それなりに苦労して手に入れた情報を簡単に手放したくもないのさ。

「で？　本日はどのようなご用件で？　我々「ライブラリ」に情報をお恵みいただけるので？」

「そう皮肉的にならないでくれよな……特ダネだ、その上で頼みたいことがある」

戦わなければ生き残れない。であれば俺はあのヘタレスネークを生き残らせるためにちっとばかしダーティになるのさ。

「無尽のゴルドゥニーネのEXシナリオを発生させた」

金とケジメと特ダネ（後書き）

セートさんはキョージュがシャンフロ始めたことを知って即その日のうちに十何万使ってVRシステム買い揃えるくらいには学術的キョージュガチ勢、多分キョージュが既婚者じゃなかったらそっち方面のアプローチもしてたレベル、ちなみにクラン設立をキョージュに勧めたのもこの人

とはいえそんなガチ勢のセートさんも流石に魔法少女と化した尊敬する教授には顔が引きつった

飴と鞭と情報とゼリー

「いきなり話脱線して申し訳ないけどこの格好の奴前にしてよく平静でいられるね」

「そういった装備の方は珍しくないので……」

横を向いてそっと頭装備を鮭に変更、勢いをつけて正面を向く。そしてサムズアップしながら一言。

「っく……ふ、」

「アイアム海ぶどう」

「魚類全く関係ないじゃないですか……っ！！」

やったぜ。

まぁ茶番はここまでとして、本題に移ろう。

「この情報は「旅狼」内にも流していない、他人に……まぁ少なくともプレイヤーに話したのはあんたが初めてだ」

「……何故？」

何故、まぁ確かにそうだろうな。内容ほぼ忘れたけど「旅狼」有利の同盟だったか連盟だったかの規約に従っておけばこちらに一方的

に有利な条件をつけることができただろう。
だが今回に限っては独占という選択肢は悪手になりかねない。
だからこそ一番最初にライブラリへと打診をかけたのだ、恩義は時に金より重い。

「ユニークシナリオEX　「果て亡き我が闘争」の発生条件は「ゴルドゥニーネとパーティを組むこと」……そして俺がパーティを組んだのは「八人目のゴルドゥニーネ」だ」

「八人目？」

「最低でも九人目はこの目で見た、現存してるのが何体なのかは分からないが……複数人のプレイヤーが「ゴルドゥニーネ」を擁立する、この方式に心当たりくらいあるだろ？」

「選挙」

インテリジェンスな答えをありがとう、でもこれゲームだから減点1。

「バトルロワイヤルってやつさ、負けたゴルドゥニーネに味方してたやつがどういう判定になるのかは知らんが……」

「……成る程、つまり大前提として独占が不可能なユニークである、と」

「話が早くて何よりだ、だとすりゃ取るべき手段は独占じゃない。先手だ」

ウチのゴルドゥニーネはヘタレだ、そりゃもう情けないくらいヘタ

レている。サミーちゃんさんのステルス性能が割とカッ飛んでいるからこそこれまで生き延びてこられたんだろうが、ステルス奇襲型のビルドは古今東西範囲爆撃に弱いと相場が決まっている。
特にあのゴルドゥニーネが従えている龍蛇(ナーガ)は存在が範囲攻撃みたいな奴だ、現時点で勝てるビジョンが全く思い浮かばない。
恐らく「果て亡き我が闘争」は他ゴルドゥニーネを削りつつ、あのゴルドゥニーネを相手するため時に協力したりする……そんな変則バトルロワイヤルと考えるべきだ。

「単刀直入に言う、ライブラリにはウチのゴルドゥニーネの後ろ盾になってもらいたい」

「成る程…………成る程」

「今ここで決断しろ、って言ったら怒る？」

「教授は明日の講義で忙しいのでこの時間に起こすのは論外です」

「冗談だ、流石に他人のリアルまで削らせる程切羽詰まっちゃない」

少なくとも今すぐどうこうなるユニークではない気がするし、ウィンプは多分世界一安全な別荘で牢獄(レベリング)バカンス中だ。
あのポンコツインテリジェンス人形、任せろとか言ってたけど大丈夫なんだろうな……極力気にしないように目を背けてたが、インベントリアにアーミレット・ガルガンチュラの素材がものっそい勢いで溜まっていってるんだが。

「……ごほん、具体的には他のゴルドゥニーネを擁するプレイヤーの情報を掴んだら俺に流して欲しい」

「明日……いえ、明後日……いいえ、申し訳ありませんが最長で一週間は結論出す為にかかるかもしれませんが構いませんか？」

「あぁ、構わない。ただ、ウチの外道には内緒の方針で」

騙し騙されぶっ殺せのバトロワとか、あの外道鉛筆が一番フィーバーするタイプの戦場だ。最悪無関係のプレイヤーが大量に犠牲になりかねない。

少なくともジークヴルム案件が片付いていない状態で別件にまで手を伸ばされるとパシられる俺たちの苦労が増しかねないからな、オイカッツォも含めてドヤ顔かますとしたらジークヴルムユニークが終わってからだ。

「……分かりました、確約はしかねますが教授の好奇心からして高確率で色よい返事が来るかと」

「それはなにより」

さて……装備変更。

「天津甕星」

「神話ごと違うじゃないですか……っ！」

凄い、インテリジェンスツッコミだ。

―

―

さて、要件は大体済ませたのであとはシグモニア前線渓谷……厳密にはその地下に置いた移動拠点ブリュバスへと死に戻りするだけだが……ここでふと思いつく。

「なぁエムル、ブリュバスに飛べるか？」

「ブリュ……あっ、あの変な形のお船ですわ？」

「そうそう」

一応エムルもブリュバスに乗ったことはある。完成前ではあったが、少なくともあの時点でセーブポイントとしてのベッドは備え付けられていたし、もしやと聞いてみたが……

「んむむむむむ……多分、いけるですわ」

「マジで!?」

自家用車？　自家用ジェット？　時代は一家に一匹ヴォーパルバニーの時代くる？　来てるぞエムル、時代の風が!!

「よし頼む！」

「ていうかどこに置いたんですわ？」

「ゴルドゥニーネの隠れ家」

「へー………へ？」

はい行くぞー

「ちょっ、待って！　まってですわぎゃぁあああ！！？」

エムルがヘタレてゲートを消す前にその首を掴んで飛び込む。

ヘタレとヘタレが出会う時、何が起こるのか……こう、ヘタレ反発作用みたいなのが起きるのかな？

数秒のホワイトアウト、前線拠点に建てられたスカルアヅチの一室からブリュバスの狭い船室へと座標そのものが切り替わる。まぁインベントリアに収めるサイズやらアレやらを考えると結構頑張ったスペースなんだろうが。

「そっかぁ……現実空間に出しさえすればロケートとして使えるのかぁ………」

ナーフ案件では？　いやだが待て、現状テントしかないだけで移動式で永続的に使える拠点がないとは考えづらい。例えば馬車、そう馬車とかあるだろう。

つーかこれ結局のところインベントリアのナーフ案件じゃねーか、毎回公式サイトのニュース欄に「特定アイテムの性能を調整しました」って表示させるのいい加減申し訳なくなって来たんだけど。

「あ、あわわわわわ……」

「まぁそんな慌てんなよ。ラビッツの地下を侵攻してた奴とは結構……というか真逆レベルで違うタイプのやつだから」

「な、何言ってるですわサンラクサン！　ゴルドゥニーネですわ！？　ゴルドゥニーネですわっ！！？」

「大丈夫大丈夫、そっちは実質無害だから……だがエムル、もう一方のお方には礼儀を怠るなよ？」

サミーちゃんさんの付属パーツよりサミーちゃんさんの方が現状優先度も脅威度も高いからな。ガチステルスで奇襲されたら俺なんかイチコロだ、決闘型ではない野良の戦闘じゃ高機動型の俺にとって天敵足りうる性能をしてるからなサミーちゃんさん。

「そ、その人はどんな人なんですわ……？」

「インテリジェンスと慈愛の心に満ち溢れた蛇さん」

「サンラクサン、毒かなんかが頭に回って……ぷぎゅ」

いらんことを喋り始めたエムルの口を左右から押しつつ、俺はブリュバスから出てサミーちゃんさん、ウィンプ、サイナを探す。

「あぁいたいた、戻っ……た、ぞ？」

「やぁーっ！　もうくもはいやぁー！　も、もごぐぉ！？」

「好き嫌いは良くありませんね個体名称：ウィンプ。アーミレット・ガルガンチュラの運動野を支えるゼリーマテリアルは極めて高いマナ粒子を内包しています。故に結論から言えばゼリーマテリアルを摂取することでより効率的な成長を望むことができます」

「んゔ……っ、……ぉぇ、んぶゔっ！」

「素材の状態でゼリー状であることは幸いですね、流し込めます」

「ゔぉ……ゔぇえ……ざみ、サミ゛ーち゛ゃ゛ん゛がたへ゛てよぉ……」

「叱責(めっ)：個体名称：サミーちゃんは既に規定値以上の実力を保持しています。故に個体名称：ウィンプは早急にゼリーマテリアルを摂取し、次の誘導群を処理する必要があります」

「だじゅげでぇ……」

じ、地獄絵図……！！

飴と鞭と情報とゼリー（後書き）

×　ゼリー
〇　ゼリー状な蜘蛛の体液と肉の中間物質

アーミレット・ガルガンチュラはこのゼリー質な体内物質を身体中に行き渡らせることで衝撃耐性を獲得しており、さらに大量の魔力をゼリー質に溜め込みオートもしくはマニュアルで爆発力に変換する。
ちなみに優先度は圧倒的オート＞＞＞マニュアル、ママンが死ねと命じたら砲弾となって散って行く悲しい定め。さっきまで命だったものが辺り一面に転がる……オーゥイェー！！
見た目は淀んだ緑色のゲルゼリー、無味無臭なのは救いかそれとも……ちなみにちゃんと料理すれば美味しくなる食用アイテム（一定時間獲得経験値が＋５％、累積はしないが他経験値ブーストと重複もしない）
少なくとも生食には向いてない

心のままに心を死なせ、心のままに稼ぎどき

「えぅっ……、えぐ……っ、お゛ぅっ……」

ガチ泣きである、美少女としてのアドバンテージを全てかなぐり捨てたガチのガチの泣きが入っている。

「正直すまんかった……いやまさかあんなにポンコツだったとは……」

下手人（ポンコツ）は現在地面に穴を掘り穴を埋める作業（罰）に従事させている。インテリジェンスがどうのとバグっていたが、そこで暫くインテリジェンスを浪費してろ。

「ぜりーいや……ぜりーいや……うんどうやがまりょくでぱーじがえくすてんど……」

「あー……お肉食べる？　歯ごたえあるぞ？」

「ね、ねさせて……」

まぁ、うん、仕方ないね。せっかく買ってきたのだから家具を設置しようか！　うん！！

「……えと、大丈夫ですわ？」

「こにょうさぎぃ……どこが、らいじょうぶにみえるのよぉ……」

「あの鋼の人のことはよく分かんないけど、サンラクサンと関わっていくなら慣れることが大事ですわ……アタシなんて、気づいたら大冒険しすぎてなんだかんだ納得しちゃうようになったですわ」

「………あんた、なまえは？」

「エムルですわ」

「なんだかたにんのようなきがしないわ……よろしくねエムちゃん」

「サ、サンラクサンよりマトモな頭してるですわ……！？」

ファストトラベル要員としての今回の貢献に免じて許してやるが……次はないぜエムル。

「サンラクサン！　サンラクサン！　マ、マトモですわ！」

「サミーちゃんさんの方がもっとマトモだぞ」

「サンラクサン頭大丈夫ですわ？」

「はいアウトー」

「ほにゃあああああ！？」

首根っこを掴んで軽くシェイクの刑に処す。目を回したエムルが千鳥足でフラフラしているのを他所に、俺は改めて様変わりした洞窟内を見回す。

「文明レベルに齟齬が生じていますね」

「おい穴は埋めたのか？」

「肯定」

「じゃあ掘ってこい」

「嗚呼、知性（インテリジェンス）が浪費されていく……！！」

レベリングだって似たようなものだ、メリハリが大事なんだよメリハリが。

単純作業を繰り返し続けるタフネスは作業における必須要素ではあるが、上手く息継ぎが出来ない奴は心を壊す。一握りの妥協で大半の苦痛を麻酔できる奴だけが一流の作業員になれるのだ。

「ただ、レベルそのものはちゃんと上がってるのがまたなんとも……」

レベル79、新大陸のレベル的には今尚ゴミだがパワーレベリングの観点から見れば破格と言っていいのではなかろうか。少なくとも崖から大量の蠍を叩き落とすよりかは余程真っ当なレベリングだ。

「具体的にどんな方法を取ったんだお前」

「回答：意図的にこちらに気づかせたアーミレット・ガルガンチュラの雄個体群を洞窟内へ誘導し、通路を一列で進んできた同種族を一体ずつ撃破させせました」

成る程、妙に幅と高さが拡張された通路はそういうことか。

「そして採取したゼリーマテリアルを摂取させ、再び戦闘を開始し、同様のプロセスをループ処理で……」

「なるほどな？」

ひってぇ自給自足だ、効果があるからなおタチが悪い。とりあえずやってみた。

「だっしゃオラァーッ！！」

通路の半ばに陣取り、入り込んできたアーミレット・ガルガンチュラを斬り伏せていく。仲良く列を成して入ってくるからな、次から次へと的が補充されていく……あっ後ろの方で爆発が、連鎖が、つまり前の方へと…………

「ちょっ――――」

咄嗟に蹴り返そうとするも、一列になっているということは後ろが詰まっているということであり……

「ぐべぁ！？」

蹴り飛ばしたアーミレット・ガルガンチュラが後続の蜘蛛にぶつかり跳ね返る。そして起爆した事で衝撃に直撃した俺の身体はたやすく吹っ飛び……

「……」

のそり、とブリュバスから這い出す。

「保証：アーミレット・ガルガンチュラの自爆行動は連鎖します。一度全て自爆すればクールタイムが発生しますので……続けますか？」

「ったろーじゃねーかオルルァーッ！！」

カモンスパイダー！　ついでに祝拠点作成祝いだ蜘蛛も百足も蠍も全部喧嘩売ってきてやるるるるぁ！！！

人は心が愉快であれば終日歩んでも嫌になることはないが、心に憂いがあればわずか一里でも嫌になる。

人生の行路もこれと同様で、人は常に明るく愉快な心をもって人生の行路を歩まねばならぬ。

武田氏が自信満々にこれを語った時はすげー！　と思ったものだが、後々調べたら普通にパクリ台詞だった時のあの感情すら今は懐かしい。

つまり作業も楽しくやったほうがいいってことだ、まぁ心を仮死状態にしてやった方が効率いいけど。

「…………」

「おはよう……って、なんかもえつきてる!?」

「放っといていいですわ、いつもの事ですわ」

「計三十八回の蘇生を経て尚死に駆けていった末路です、問題はないかと」

蜘蛛強い……百足強い……ソロ無理でしょあれ……やっぱ時代は蠍だにぇ……まぁ相打ちやらなんやらで死んだ蜘蛛百足の素材が手に入ったので収支はプラスだ、その過程でアーミレット・ガルガンチュラ達と一緒に砲弾にされたりちょっと名状しづらい感じでドライブに付き合わされたり。

特等席だった、百足の口に噛まれた上でこうざりざりと……へへっ、土煙と石飛礫しか見えなかったよ。

「フォルトレス・ガルガンチュラの素材は装壁外殻、固定毛、砲塔器片……トレイノル・センチピード・グスタフは剛撃殻と進撃脚、迫撃殻砲片……んでもって帝晶双蠍の素材諸々……いいね、盛り上がってきた」

外殻は鎧として優秀そうだが、元より防御は捨ててるし武器として使うならなんだろうな……盾? タワーシールドは俺のビルドじゃ運用が難しいし、拳系列? 方向性が煌蠍の籠手と被るんだよなぁ、うーん贅沢な悩みだ……

「じゃ、とりあえず俺は蠍狩ってくるんで」

エムル、ウィンプ、サイナの異なる種族三人が皆一様に呆れた顔をするが……帝晶双蠍(アレクサンド・スコーピオン)の双核宝が欲しいんだよ、泥率もそんな悪くなさそうだし今二個持ってるがもう一個欲しい。

明日……というかもう今日は休みだからな、今日明日でプレジ伝もクリアしちゃいたい。随分長い寄り道になってしまったな。

――――

――

―

鶴橋は部位破壊に優れ、拳は打撃による有効打足りうる。

行動パターンの把握は既に八割完了している、残り二割は完全遠距離時のパターンなので今は気にしなくていい。

「大詰めだ……その心臓（核）寄越せや」

放たれるレーザー、外縁部なら光は外へと流れていくだけだ。何体かの蠍を倒した事で水晶冠のテリトリーに変動が起きている、だが少なくとも最大数が減ったのなら個々のテリトリーは拡大されているだろう。
つまりこちらも立ち回りの自由度が増したってことさ……！（五敗）

「そこぉっ！！」

半ばから掘り断たれた尻尾を振り回し、片鋏だけになった巨体を突っ込ませる帝晶双蠍を避け、向こうの勢いに真正面から叩きつけるように鶴橋の先端を蠍の脚に振るう。
パキンと快音が響き、蠍の脚が砕きの破片を撒き散らしながら宙を舞う。声なき蠍の呻きを代理するかのようにその全身から嫌な軋みが鳴る。
決着の時は夜明けの瞬間と連動しているかのようだ。遠い遠い地平の果て、夜色を染め直すかのような朝日が俺達の元へと届いて……

「うおお！？」

瞬間、ドミノを倒し始めたかのように水晶冠に生えるツァーベリル帝宝晶が一斉にその色を血のような紅から神秘的な碧へと彩りを変える。

その一瞬、俺の目に映る色が碧一色に染まったその一瞬。自らの体色に環境そのものが合わせた僅かな一瞬、それが帝晶双蠍最期の反撃の合図であった。

体色も、体質すらもほぼ同質となった水晶冠の光景は逆説的な擬態となる。歯抜けに欠損した脚を動かし、凄まじい勢いで俺の横へと回り込んだ帝晶双蠍がその身を紅蓮へと変じる。

ただ一つ残った片鋏を突きつけ、己の身に残った底の底までを振り絞った一撃が俺へと放たれる。

だが甘い、甘いぜ帝晶双蠍……！　正眼の鳥面は直視した対象に対して視覚補正が入る。だがそれは逆に言えば、対象から視界から外れた時にも違和感を感じ取るってことだ。

朝日、蠍、決着。運命めいた既視感を感じさせる一瞬の中で俺の身体はビームを避け、捻りを込めた投擲の姿勢。

「決着の手向けだ！　やらんがな！！」

フルスイングでぶん投げられた鶴橋が縦に回転しながら空を裂く。そしてその先端は投擲のエネルギーに満ち満ちて帝晶双蠍の眉間？に突き刺さる。

蠍の巨体がびくりと一度痙攣して硬直する。そして奴の巨体を支える脚が自身の重さに屈して地に伏せると同時、その身体が爆ぜるようにドロップアイテムと化して消えた。

「勝った……」

慣れたもんよ、さーてまずは封雷の撃鉄・災を解除してアイテム回収……なんだ？　後ろで何かチカチカしてるような……？

振り返った先、そこには朝日を浴びて碧く輝く水晶の中でただ一つだけ赤と碧に点滅する水晶。そしてその点滅は次第に間隔を狭めて……ま、まさか。

「昼と、夜で……ビームの特性が、変わる……？」

そう、例えば時間差で起爆する爆弾のような……！！

「待っ」

爆ぜる碧と赤の水晶、飛び散った水晶片が身体に突き刺さり、インパクトが俺の身体を吹き飛ばす。

最期に見たものは爆発の余波で真っ二つに割れた双核宝…………

ちょっとモチベがゼロになったので息抜きの息抜きにプレジ伝やります。あれ？　逆だっけ？

心のままに心を死なせ、心のままに稼ぎどき（後書き）

Q．ヘタレとヘタレが相対したとか、何が起こる？

A．被害者の会が結成される

ツチノコニーネがヴォーパルバニーを憎んでいた理由と、ボスドゥニーネがヴォーパルバニーを憎む理由は厳密には異なります

ウィンプが特に憎んだりしてないのは根本感情の関係上、ヴォーパルバニーを憎む理由がなくなったから

坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、と言いますが袈裟を踏みつけて楽しいか？　みたいな感じ

時間差ユザパキャンセル蠍戦終盤描写の術！！

Side13：引き摺り出せ主役

◇

結論から言えば、笑みリアという人物は周囲が思っているほどには恨みつらみを引きずり続ける性格ではない。
ただ、ごめんなさいを言わない者は殴られても仕方がないと、そう考えるだけの女性である。

「ティアプレーテンに城を？　私が？」

「うん、なんか笑みリアさんが陣頭指揮を執って建築するって噂になってるけど」

スカルアヅチにて、笑みリアの耳にフレンドのプレイヤーを経由してその噂が舞い込んできたのは丁度大陸の中央辺りでとある半裸が吹き飛んだ頃であった。

「んー？　そんなこと言ったかな……」

はて、と首を傾げながら笑みリアは記憶を手繰り寄せる。「狩り」の最中に舗装された道が欲しい、と言った覚えはあるが流石にスカルアヅチ級の城をもう一度建てる、と言った覚えはない。
尤も、ジュラシックな世界と化した樹海を拓くよりも既に開拓された下地のあるティアプレーテンに城を建てる方が難易度としては低いのも事実だが。

「じゃあやっぱデマ？」
「でしょうね、今のところスカルアヅチ級の城をもう一つ作るつもりとかないですし」
装骨骸城スカルアヅチは笑みリアのみならず、彼女を発端として「新大陸に王城を超える城を作ろうぜ！」と集まった生産職たちの努力の結晶だ。原動力が怒りに基づくものであったとはいえ、元々生産職と回復職を兼任していた笑みリアにも愛着はある。
「とはいえ……ティアプレーテンの発展そのものは割と急務というか……ぶっちゃけここより向こうの方が拠点として有能っぽいんですよね……」
今や城塞都市としての一歩を踏み出した前線拠点ではあるが、天然の城塞としての性能が高いティアプレーテンを強化した方がより安全性が高い事は事実だ。
実際、既に笑みリアの関わらないティアプレーテン建城計画が立てられては自然に消えているのだが、ティアプレーテンが急速に舗装されているのは事実だ。
「まぁ、対ノワルリンド的にスカルアヅチを超える設備を今から作るのは難しいでしょう。何せ私の有給が注ぎ込まれてますからね」
「いつインしてもトンカチ振ってるの軽くホラーだったよねー」
現在のスカルアヅチには重要ＮＰＣと言える国王トルヴァンテや王女アーフィリアのみならず、聖女イリステラなども滞在している。
だがシステム上におけるスカルアヅチの所有権は笑みリアにあるため、天守閣に入ることが出来るのは笑みリアと彼女と同じパーティ

に入っているものだけだ。

であるからこそ……

「絶景だねぇ……王族すら見られない景色ってだけで付加価値が上がるねぇコレは」

「こんにちはディプスロさん、以前はどうも……今日は何か話があると聞いたけれど」

「あぁうん、とびっきりの特ダネってやつさぁ……」

にまり、と愛想と不気味さが同居した笑みを浮かべるディープスローターもまた、天守閣を秘密の会談場所として使うことが出来るのだ。

「そっちの方は？」

「あぁ、気にしないで。その……私のリアフレなのでどちらにせよ彼女も知ることになりますから」

「どもー」

「ふぅん……ならいいけどぉ……それじゃ、雰囲気に合わせて声を変えてみようか、どうかな？」

「うーわすげー、本当に声自由に変えれるんだ、イケメンっぽい声じゃん！」

自前の技術たる声替えで関心と好感度を稼ぎつつ、ディープスロー

ターはかねてより撒いてきた種が発芽した確信と共にその情報を要点だけ「嘘偽りなく」告げる。

「どうもＥＸシナリオの影響かは知らないが、ノワルリンド以外の色竜がここを目指している」

ノワルリンド、その単語に空気が張り詰める。
笑みリアはしばらくの間笑顔の表情を微動だにさせず静止していたものの、数秒してようやく表情を動かす。

「……そうですか、何もしないわけにはいきませんね」

「でもどうするんだ？　一体や二体じゃねぇ、確証が取れてるだけでもノワルリンド以外の色竜全てがこっちにきてるぜ？」

「どうやって調べたのそれ？」

「色々と手段があるのさ、尤も喧嘩を売るにはちと強すぎる相手なんで遠目から見てただけだがな」

冷静に考えれば色々と粗の見える理由、しかしディープスローターが培ってきた信頼が笑みリアに疑問を抱かせない。
「極秘の情報を真っ先に自分へ教えてくれた」という好意的解釈が疑念を圧し潰す。それは信頼という美徳であり……油断でもある。

「ノワルリンドは悪いが捕捉できなかった、だからここに来るのか来ないのかは分からない」

これは事実。ディープスローターが用いるランダム転移による前人未到の領域への転送は当然ディープスローターの意思で座標を固定

することができない。
巨人達の集落近辺に飛ぶ事もあれば、前線拠点のど真ん中に転移して奇異の目で見られる事もある。そしてなんの偶然か赤、白、緑の三竜とは接触できたにも関わらず、黒竜ノワルリンドだけはどれだけランダム転移を行なっても捕捉することができなかったのだ。

もしこの場を、この世界の全てを俯瞰的に見ることが出来る者がいるのならば、とある少女の豪運に感嘆することだろう。
事実、此度の竜災大戦における不確定要素（ジョーカー）の一つこそ彼女なのだから。

「流石にこれは他のプレイヤーにも伝える必要がありますね、以前のような奇襲をまた食らうのは御免です」
天守閣から下へと降りつつ、三人のプレイヤーは言葉を交わす。
「まぁそのつもりではあったさ、先に伝えておこうと思ってな。俺の見立てじゃ早くて十日くらいで……」
と、
「————いいえ、八日後です」
凛と響く声、天守閣に笑みリア以外のプレイヤーは入れないからこそ、彼女はその下の階にてプレイヤーを引き連れ立っていた。
「……これは聖女様、ご機嫌麗しゅう」

「えぇ、ディープスローターさん……」

初対面の、少なくとも名を告げていないはずの聖女(NPC)が自身の名を正確に呼んだ事実にディープスローターの表情がほんの一瞬だけ剥がれかけた。が、しかしすぐさま愛想の仮面を付け直して笑みを浮かべる。

「八日後……ですか？」

「えぇ……明確に、とは言い切れませんが……これまで以上にはっきりとした光景が、見えましたから」

NPC「慈愛の聖女イリステラ」の未来予知を思わせる言葉に思わず笑みリア達は目を丸くするが、後ろに控える聖輝士(ジョゼット)の態度からこれが突飛な発言ではないのだと考えを改める。

「彼らは……来ます。笑みリア様の怒りの根幹たる黒き竜も、そして……黄金の龍王もまた、此処に」

即ち、何故か最初から死んでいた青竜エルドランザを除く全ての竜が、そしてユニークモンスター「天覇のジークヴルム」が此処に来るということ。

その事実にある者は冷や汗を流し、ある者は笑みを浮かべ……そしてまたある者は聖女へと問いを投げる。

「一体なぜ今になって此処に集まるのですかねぇ聖女様」

「ふふ……ディープスローター様ならば、きっとお分かりでしょう」

「……へぇ」

ぼかした回答、周囲のプレイヤーには分からない、ディープスローターだけに伝わるメッセージ。

思わず地声で声を出したディープスローターは暗い笑みを浮かべるとまたしても愛想の仮面を被る。

「こうしちゃいられないぜ笑みリア、下手すりゃここら一帯が更地になってもおかしくないぜ」

「いいえ、今度はそうはいきませんよ……このスカルアヅチはそのために作ったんですから」

「笑みリア、他の面子にも伝えとく？」

「えぇ、お願い」

今日この日より、笑みリアを始めとする反ノワルリンド派閥と、慈愛の聖女イリステラの声明により前線拠点の開拓者達は決戦へと向けて慌ただしく動き出すことになる。

「ふぅん……ログでも参照してるのかねぇ……私が焚きつけた事まで見抜かれたかな？　まぁどうでもいいけど」

誰もいなくなったスカルアヅチの廊下で、ディープスローターは一人呟く。

赤竜は少し口車に乗せると意気揚々と動き出した。

緑竜は適当に煽てて嘘を吹き込んでやれば簡単にその気になった。

白竜は偽の情報と新たな希望で「移住」の決心を踏み切らせた。

唯一の懸念は遭遇できなかった黒竜、だが聖女というNPCによってその登場は確約された。

であれば舞台は整った、たった一人を壇上に引きずり出すために災厄を前線拠点へと導いた女は、愛想の仮面を剥がして笑みを浮かべる。

「さぁ、私がここまで盛り上げてあげたよ？　サンラクくぅん……私にまた凄いところを見せてね？」

決戦まで、あと八日。

Side13：引き摺り出せ主役（後書き）

ディプスロ「前線拠点で色竜が殺し合いするから後から襲えば一人勝ちだね？」
赤竜「俺様最強伝説キタコレ！」
ディプスロ「なんかぁ、トットリって奴が緑竜さんショボいってナマ言ってるらしいっすよ？」
緑竜「礼儀のなっとらん若者じゃな！　潰す！！」
ディプスロ「巨人族しつこいよね、分かるよ……なんならこの大陸の東端とかどう？　住み心地いいよ？」
白竜「引っ越すかぁ！！」

ちなみに竜が集まりだしたからジークヴルムが出撃しました。んでジークヴルムの出撃に連動してノワルリンドも動き出しました

Ｓｉｄｅ１４：上陸

◇

「ハァイ、ケ……じゃない、カッツォ～」

オイカッツォは逃走した、しかし逃げられなかった。何故ならこの短期間でどうやったのか、既にＬｖ．９０の大台に乗った機動力重視のステータスはオイカッツォの逃げ足よりも速かったからだ。

「つれないわねー？　ほらほら、海を越えて貴方に会いに来た私に何か一言あるんじゃないの？　ね？　ね？」

「お帰りはあちらでございます」

「Ｊｕｓｔｉｃｅ！」

「ほほをひっひゃるな！！」

そのプレイヤーは一言で言えば……「露出狂」だろうか。

肌を露出しているわけではないが、上位職業「破壊者」が装備可能な胴装備「無頼鬼の戦衣」と足装備「楔撃の下駄」に、上位職業「巡礼者（ピルグリム）」が装備可能な腰装備「青揚羽の腰衣」……要するに、「黒インナーに黒タイツ、腰に聖職者のスカートな戦う聖職者（薄着）」という見た目のためだけに防具の一式効果を放棄したちぐはぐ装備の女なのだ。

それは逆に言えば、「防具のアシストがなくとも戦える」という事

実を示してもいるのだが……オイカッツォはこのプレイヤーの正体を知っている。人生初の黒星をつけられて尚、非公式なオンライン対戦とは言え、「軽くウォーミングアップ」と称して二日で百人抜きを達成して最高レートまで最速で登り詰めたこのプレイヤー……「アージェンアウル」の正体を知っている。

「はぁ……まぁいいけどさ、本当……レベル上げるの早すぎでしょ」

「ふふーん、私だって攻略サイトを調べるくらいするわ。今のトレンドは迷宮ツアーらしいわね！　もうミノタウロスを殴り倒すのは懲り懲りね！」

アージェンアウル、銀（Ag）と金（Au）……即ち「銀（シルヴィア）」と「金（ゴールドバーグ）」である。

日本に余暇を楽しみに来た全米一位の格ゲーマーが今、シャングリラ・フロンティアの世界で遊んでいると知られれば相当の混乱が発生することは想像に難くないが、生憎今の彼女はリアルの肉体とは真逆の……どこか哀愁を感じずにはいられない豊満な肉体を持つインファイターである。

さらに言えば、どんな手段を用いたのかオイカッツォにはさっぱり分からないが、未だ実装日未定であるはずのリアルタイム翻訳システム「バベル」を先んじて入手しているがためにアージェンアウルの話す言葉は少なくとも流暢な日本語のそれである。

「で？　ケイ……じゃない、オイカッツォのお知り合いは何処にいるのかしら？　ねぇねぇ、ほら早く、ハリーアップ！」

「くっ……やっぱそれが本音か……！　生憎俺も知らないよ」

片や好き勝手に飛んでいく弾丸、片や世界の影で笑う黒幕である。

少なくともオイカッツォが知る限りでは、ペンシルゴンは聖女イリステラの「神託」以降、何やら急ピッチで作業を進めているようだし、サンラクはそもそも連絡がつかない。
それなりに長い付き合いであるオイカッツォは、サンラクが連絡を返さないときは大抵クソゲーを集中的に攻略している時であると知っている。
だが、如何にアージェンアウルが顔隠し（サンラク）と名前隠し（ペンシルゴン）との遭遇を望んでいるとしても彼ら二人のプライベートまで明かす必要はないだろう、とそれを告げることはない。
(風雲プレジ伝を買ったとか言ってたし、さては今週中にクリアするつもりなんだろうな……俺もやってみたいけど流通してる数がそもそも少ないんだよね……)
「まぁそのうち会えるだろうし、今はニューフィールドを楽しまなくちゃ！　行くわよケ……ッツォ！」
「おい待て今なんて言った！？」
「ケッツォケッツォ～」
「ま、待て！　風評被害を撒き散らしながら走るんじゃない！！」

五分後、オイカッツォとアージェンアウルは大量のモンスターに包囲されていた。

「ワーオ、ＡＩが旧大陸のモンスターとは完全に別物なのね。気づいたら囲まれちゃってたわ」

「あー……こいつ聞いたことがある、確か「一体一体は雑魚だけど総計すると最低レベル１３６以上はある群体モンスター」だっけ……？」

情報の提供元は言うに及ばず、見るからに一体二体倒した程度で逃げるような臆病者にも見えないとオイカッツォは皆伝の手甲を装備して構えを取る。

その背中に寄りかかるように同じく皆伝の手甲を構えたアージェンアウルが不敵に笑う。

「うふふ、背中合わせで構えるのってなんだか憧れない？」

「まぁ、否定はしないけどさ……！！」

ラプトルをさらに小型化したかのような恐竜化モンスター、ドラクルス・ディノトリアシクスが一斉に飛び掛かる。

余談だがドラクルス・ディノ系のモンスターが軒並み複雑な名前である理由には征服人形(コンキスタ・ドール)が関わっているのだが、この場においては関係のない事である。

「「スクラップアンドビルド！！」」

共に破壊者であるが故の、同一の始動。二個一組、二組の皆伝の手甲が砕け散り、二人の拳闘士が強化の光を纏いながら互いに前へと

踏み込む。

「ん、まぁこの程度なら……って危なっ！　この、ちょ、まだ出てくるの！？」

どこに潜んでいたのか、と問いたくなるほどに次々と木陰から、草むらから、木の上から現れ続ける小型恐竜の姿に悲鳴を上げつつも、オイカッツォは的確にディノトリアシクスに拳を放っていく。

「赤！」

色を唱える事で起動する修行僧系魔法【拳気】を行使しながらカラフルな戦闘を繰り広げるオイカッツォとは反対の方向では、立つ場所と同じくオイカッツォとは真逆のファイトが繰り広げられていた。

「数で圧せば倒せる程、私の名前は甘くないの……よ！」

超肉弾戦用スキル「インファイト」
自身の攻撃に体力回復効果を付与するスキル「グラップルドレイン」
跳躍(ステップ)の速度を加速させるスキル「ステップハイビート」
防具ではなく肉体に近い部分で受けるダメージを軽減するスキル「フルメタライク」
そして継続的に自身の体力を回復し続け、なおかつダメージを受けた直後の回復量をダメージ量に応じて増加させる「巡礼者(ピルグリム)」専用魔法【巡礼旅路(ピルグライマー)】

これら全ての効果を一つの身体にのみ行使した場合どうなるのか、こうなる。

「無効ぅ！　無駄ぁ！　無意味ぃ！」

二の腕に噛み付いた小竜を肉ごと毟り取るかのように引き剥がし、スクラップアンドビルドの効果を帯びた手でその首を締め上げながら地面へと叩きつける。
背後から飛び掛かる二体、しかしその爪牙が振るわれる頃にはアージェンアウルの姿はステップで横へとズレており、勢いそのままに振るわれた回し蹴りが攻撃を空振りさせた二匹を吹き飛ばす。
「ジャンプに不満はあるけれど……いいね、思考が滑らかに動くわ！」
意図的に回避を行わない事で次々に被弾しつつも、その損傷すらをもアドバンテージに変えて女拳闘士が笑う。
その全身は赤いダメージエフェクトとスキルエフェクト、そして魔法の柔らかな緑のエフェクトが混ざり合って混沌の帯を描く。
「おっとアージェンアウル！　デカいのがやってきたよ！！」
ドラクルス・ディノケラス。その角が良質な武器となる事で知られるが……それよりも、「やたらマッシブなサラブレッドボディでステップ刻みながら突っ込んでくる頭がトリケラトプスのやべーやつ」としての悪名の方が有名だろう。
最近になってＳＦ－Ｚｏｏの調査により馬ではなく鹿素体なのでは、という新説が浮上したりもしたが今この場においてはその戦闘力以外は意味のない情報だ。
「上等！　へいかまーん！」
バベルの自動翻訳に引っかからない日本語的な英語が挑発となったのか、ディノケラスは真っ直ぐアージェンアウルを睨みつけて筋骨

隆々の肉体を稼働させる。
ところどころにステップをいれつつも加速し続ける中型自動車ほどの巨体がアージェンアウルを吹き飛ばさんと迫る。

「えっ、余り物だからってこっちに総力注ぎ込む！？　このチビトカゲ共、ちょっ、のわゃぁあ！？」

少し離れたところでなにやら愉快な気配が漂っているが、今のアージェンアウルの目にはディノケラスしか映っていない。

「ふふん……カースドプリズンと比べたら余りにヌルいのよ！」

アージェンアウルは各スキル、魔法をかけ直した上で追加の手札を切る。

瞬間的にリジェネの回復量を二倍にする代わりに持続時間を半減させる魔法【ハイドライブ・リジェネレート】

ダメージを継続して受ける程ＳＴＲにバフを付与する魔法【ハイボルテージ・パワー】

物理演算を下方向に向ける魔法【スタンド・グラビティ】

瞬間的に「迎撃」の用意を全て整えた上で、アージェンアウルの右手に光が灯る。

「こーゆーのは、技名を叫ぶのがマナーよね？」

スキル名ではない。対カースドプリズンへの有効打として、ボクササイズ以外にも様々なバトルスタイルを模索し始めたアージェンアウル（シルヴィア・ゴールドバーグ）の新たな戦法。

「喰らいなさい……崩拳（コラプスパンチ）！！」

親指を縦にした握り拳がディノケラスの額に激突する。拮抗は一瞬、推進力に劣るアージェンアウルの身体が凄まじい勢いで後ろへと押し込まれていくが、吹き飛ばない。

ざりざりと地面に傷を刻みながらも、しっかと踏みしめた二の足を支えに拳を引かず、前へ前へと押し込む。

「クリーンヒッ……あびゃっ！？」

「レベル９０ちょいで力勝ちできるわけないでしょうがー！！」

大樹とディノケラスにサンドされ、ジタバタともがくアージェンアウルに叫びながら、オイカッツォは駆け出すのだった……

Ｓｉｄｅ１４：上陸（後書き）

アップデート内容

シルヴィア・ゴールドバーグに中国拳法Ｍｏｄがインストールされました！

上位職業「巡礼者」は聖職者派生の上位職業三種類のいいとこ取りですが対象が自分に限定されています

奈落よりユナイテッドの光を

【旅狼】

オイカッツォ：サンラクやーい

オイカッツォ：怖くないから出てこーい

オイカッツォ：……チッ、やっぱクソゲー集中期間か……？

ルスト：何それ

鉛筆騎士王：サンラク君はストーリーがある系のゲームを休日とかで一気にクリアしようとするんだよ

鉛筆騎士王：その間は殆どメールとかに反応しなくなるから

ルスト：ふーん

サイガー０：何か、用件があったんですか？

オイカッツォ：え？　いや別に？

鉛筆騎士王：ダウト

京極：付き合い短いけど嘘ってことくらいはわかる

ルスト：会話の前後が矛盾してる時点で

オイカッツォ：ある種の信頼に涙が出るね

オイカッツォ：まぁいいやペンシルゴン、君とサンラクを探すお客様だよ

鉛筆騎士王：お客…………え、あの人？

鉛筆騎士王：お帰りいただこ？

鉛筆騎士王：サンラク君出てこーい！　修羅道へは道連れだぞー！！

モルド：え、どうしたの？

オイカッツォ：まぁちょっと因縁がね

鉛筆騎士王：マジかー……単純に面倒だぞうこれ……

秋津茜：どんな人なんですか？

鉛筆騎士王：んー……まぁ、うん。私よりカッツォ君の方が知ってるでしょ

オイカッツォ：あれだよ、愛想のいいマシーン

ルスト：……人間性が見えない

オイカッツォ：気にしなくていいよ、一定ラインに踏み込まなきゃ普通の人間だから

鉛筆騎士王：ちょっと話変えるけどいーい？　というか秋津茜ちゃんに聞きたいことがある

秋津茜：はいっ！

鉛筆騎士王：ほら、聖女ちゃんがイベ通知したじゃん？　ノワルリンドはどうしてるのかなーって

秋津茜：はい！　ジークヴルムを今度こそ倒すんだー、って張り切ってます！　一緒に作戦会議してます！！

鉛筆騎士王：…………？

秋津茜：なにかおかしかったですか？

オイカッツォ：一緒に作戦練るところまで行ってんの……？

京極：デレデレじゃないかノワルリンド

秋津茜：あと、総力戦だから竜人族（ドラゴニュート）も連れてくとか言ってました

鉛筆騎士王：はいタンマ、ドラゴニュート？　について詳しく

秋津茜：我々は黒竜様に選ばれし翼持つ竜の人だー！　だそうです

秋津茜：実際短い距離なら飛べるし火も吹けるの凄いですよねー

鉛筆騎士王：あーうんごめんね？　言葉が足りなかった

鉛筆騎士王：具体的な進軍のスケジュールが聞きたいの

京極：あ、そっちなんだ

オイカッツォ：というか結局どれを倒せばいいのか分からないところあるよね

ルスト：色竜を五体倒すか、ジークヴルムを倒すか？

モルド：それはそうだけど、この流れだと全プレイヤーを巻き込んだ超大規模レイドにならない？

ルスト：すし詰めで戦う？

京極：まずは周囲をスッキリさせるためにプレイヤーをバッサリと……

オイカッツォ：レッドネーム量産イベントとか抗議殺到待ったなし

鉛筆騎士王：んー、なーんかキナ臭い

鉛筆騎士王：本来はこれ、新大陸をある程度開拓しきった上で撃破云々なユニークの気がするんだけどねぇ……

鉛筆騎士王：ゲーム的に全部集合させてまとめて撃破されるようにする意図がわかんないなぁ

オイカッツォ：実は顔合わせが単なるイベントシーンで負け確の可能性とかは？

モルド：聖女が「決戦」とか色々言ってるし負け確定は考えづらく

ない？

秋津茜：ノワルリンドさんは「向こうが死ぬか我が死ぬか、勝負が決するまで退くことは有り得ぬ！」って言ってましたよ？

鉛筆騎士王：気になるところはあるけど皆、決戦の日……一日経ったから七日後は空いてる？

ルスト：私達は問題ない

秋津茜：大丈夫です！

オイカッツォ：二週間あとなら無理だったけど大丈夫

京極：あー、午前中は難しいかな

鉛筆騎士王：私は休暇を取りました

鉛筆騎士王：さて、あとはウチの鉄砲玉とサイガ妹ちゃんか

サイガー０：私は大丈夫、です

サイガー０：サンラクさんには、私から聞いておきますか？

鉛筆騎士王：成る程、まぁサンラク君はどうせ大丈夫だろうし今すぐ聞く必要は

鉛筆騎士王：ん？

鉛筆騎士王：ちょっとまった

オイカッツォ：どうかした？

ルスト：……サンラクは今、メールとかに反応をしない

ルスト：それはこの場にいる全員がそうであるはず

オイカッツォ：あ

サイガー０：え？

鉛筆騎士王：んー、サイガ妹ちゃんさぁ……メールやらなんやらに反応しないやつから話を聞くためにはさ

オイカッツォ：リアルで会うしかないよね？

サイガー０：ちがいます

サイガー０：その

サイガー０：てればしーてきな

京極：流石に無理があるでしょそれ

京極：ていうか……へぇ、リアルで気軽に会える距離なんだ

鉛筆騎士王：確かあの子は別に芸名とかじゃないし……

鉛筆騎士王：あらやだ王手

サイガー０：ちが、まっ

オイカッツォ：大丈夫大丈夫、個人情報をバラすとかじゃないよ

鉛筆騎士王：これをネタに煽るだけだからねぇ！！

京極：悪質すぎる……

鉛筆騎士王：冗談で済むラインを見抜くのが一流だよ

ルスト：一流の外道？

モルド：ちょっと笑わせようとするのやめてよ……

秋津茜：？？？

◆

「っしゃオラーッ！！　初見突破だコラァ！！」

最終形態で蠍みたいな形状になったのが運の尽きだぜ暗黒将軍！

俺の対蠍経験値の高さを見くびったのが敗因と言わざるを得ないなぁ……ん？

「今何かうなじがチリッと……？」

直感システムは幕末のシステムだ、風雲プレジ伝に実装されてるはずもないし……そもそもメーカーが違うし、気のせいか？

まぁいいか、そんなことより長かった……武田氏からクリア報告を受けてムキになって攻略したにも拘わらず、大苦戦だった……まさか味方軍勢の熟練度が後半重要要素になるとか先に言えよ、大統領が一人頑張れば楽勝と思わせてのこの仕打ちだよ。

皇帝を食って「皇帝力」とかいう謎の力を獲得した魔神帝なるラスボスが出てきて、イベント敗北させられた上に秘書キャラごと聖遺物「統一旗」を持っていかれ、合衆国は現在烏合の衆と化している。あれはゲーム的には軍団のステータスアップアイテムだが、設定的には意思統一系オブジェクトなのであれがないと軍団の纏まりが無くなるということらしい。

要するに軍団全体のステータスが半減している状態でリザルトＡランク以上を出さないと詰み、とまでは行かないがクリアまでの道が相当遠くなる。
既にクリアした武田氏は風雲プレジ伝クリア者特有の多くを語らない状態になっていたが、断片的な情報から雑魚敵相手にスコアを貯めて軍団の練度を上げたようだ。

「だが俺は、あえてその道を選ばない……！！」

マンパワーこそ最強、一騎当千のなんたるかをここに示してくれよ

うぞ……即ち、軍団練度縛りだ。
このゲーム、軍団のリザルトと大統領の難易度がリンクしている。
軍団がハイスコアを出す程プレイヤー側が戦う敵の数や難易度が下がるのだ。
中にはそれをしないと勝てない相手もいるようだが……俺はここで日和らない。
軍団フェーズは戦闘力と生還力が高い親衛隊のみを出撃させぇ！！
全員生還ボーナスを獲得することでリザルトB＋確定ラインを確保しぃ！！　残りのスコアを大統領のソロプレイで稼ぎ切る！！
「煉獄将軍は死んだ、暗黒将軍は今処理した……残るは何将軍だっけ？」
とりあえずストーリーの流れは悪魔によって邪悪転生させられた帝国の元将軍達を倒し、アイテムを集めて魔神帝都への道を開く……だったたか。
「大統領閣下！　敵の増援です！」
「増援システムは間違いなくクソだな！　一度のエンカウントで五回目だぞこれ！！」
・行くぞ！　大統領の威光を見せてやる！！
・撤退だ！　今の我々では敵わない！！
・おそら……ちょうちょ……
ライスちゃんが魔神帝とかいう紫筋肉に攫われてしまった現状、俺の相棒は左下枠君だけだ。相変わらず選択肢でボケるんだからキミは……

「出撃だぁ！　大統領舐めんなコラァ！！」

どこぞのポンコツよりよっぽどインテリジェンス溢れるライスちゃんを助け出すぞ！！　俺に続け煉獄軍団！！

奈落よりユナイテッドの光を（後書き）

武田氏：真っ当な攻略スタイルなので軍団のレベルをコツコツ上げてバランスよく攻略
主人公：アクティブテルモピュライ、最強の三百人が一人頭百人倒せば三万人までは対応できるね！　大丈夫、俺は千人倒すからね！

・竜人族（ドラゴニュート）
ぶっちゃけるとただの蜥蜴人族（リザードマン）。一般的にドラゴンが周囲に撒き散らす「因子」に感染した種族はいくつかのプロセスを経て竜血鬼化する。
しかし蜥蜴人族は例外的に異なる変質を見せる、それが竜人族である。なので竜人族には改宗できず、蜥蜴人族に改宗した上で条件を満たさなければならない。
感染した「因子」の性質によってその姿が変わると言う特性を持ち、秋津茜が遭遇したのは黒竜ノワルリンドの「因子」を受けた元蜥蜴人族達。
掟として「ノ」「ワ」「ル」「リ」「ン」「ド」の文字を名前に使うことを禁じられている程度で適当に頭下げておけば平和なもんです、赤い奴のところが特に酷い。
まぁ竜人族を従えてるのは黒と赤だけです。緑は老害だし白は頭おかしいし青は死んでるので。

竜人族は基本的に蜥蜴人族を見下しているが、これは蜥蜴人族の性

質というか気風が竜人族に残っているため。
彼らは自由をこそ愛する種族、得た力は従属を代償とする。果たして自由な弱者と不自由な強者、どちらが幸せか。

Side15：ウラカタスタンバイ

◇

何もかも確定した未来など、面白みの欠片もない。故にこそ、いきなり八日後にイベントがあると告知されたとしてもアーサー・ペンシルゴンは慌てる事なく現状で遂行可能な作業に取り掛かる。

「モモちゃーん、力貸してぇ」

「……また何か企んでるだろう」

「イムロンちゃんに会いに行きたいから蟲人族（バグマン）の里まで行こうぜ？」

「よし分かった、あと二人欲しいな」

「あ、自分空いてるよ。夜勤で帰るまでの間にクランメンバーが狩りに行っちゃってさぁ、ははは……」

「蟲人族の里か、であればウチのセートを入れてやってはくれまいかね？　マッピングさせておきたい」

そんな訳で、アーサー・ペンシルゴンをパーティ主としてサイガ－100、カローシスUQ、セートという中々のドリームパーティを結成したペンシルゴンは、すぐさま行動を開始する。

「あー、ちょっち待ってね」

掲示板を開き、シャンフロ料理情報交換掲示板を選択。簡潔に「この前見かけたサラダのレシピを覚えてる人いる？」と書き込んで掲示板を閉じる。

無論、今この瞬間に突然料理趣味に目覚めた訳ではない。シャンフロにて情報屋ロールプレイを好んで行う者は、得てして暗号や符号というものを使いたがる。

今現在水面下で進められているとある「計画」に関わる情報屋ゼニス・ゲバラは特定の掲示板に特定の文章を書き込む事を符号としている。

合図は送った、ゼニス・ゲバラと超農民へ生産の要請を送り終えたペンシルゴンは掲示板ウィンドウを閉じると何事もなかったかのように臨時のパーティメンバー達へと笑顔で振り向く。

「それじゃ、最短距離でいこっか！！」

目の前であからさまに怪しいアクションを見せられた三人ではあったが、追及したところではぐらかされると理解しているので特に何か言うこともなく出発するのだった。

◇◇

健康を履き違えた上司（ハゲ）の介護を終えれば、楽しいゲームの時間が待

っている。
時代の変遷ゆえか最近ではその数をめっきり減らしたパンタグラフ付きの電車の中、一人のキャリアウーマンが心ここに在らずと言った様子で呆けていた。
（剣……槍……いいえ、やっぱり剣ね。シンプルイズベスト、王道の中にこそ技が見えるものよ）
彼女の名は隻口（セキグチ）　留華（リュウカ）、よく勘違いされるが「ルカ」ではなく「リュウカ」である。
そしてまたの名を「イムロン」。社会の荒波より浮上し、帰還の最中であった。
「双剣がメインって話だけど、直剣も使えるって話よね……花形武器種ね」
留華の脳内では曖昧なイメージがいくつも浮かんでは消え、泡のように浮かぶイメージの中である程度固まった「案」を暫くこねくり回しては、溜息をつきながら脳内で叩き割る。
「駄目ね……例の鍛冶師に勝つには凡庸すぎる」
留華はその存在についてのほとんどを知らない。知っているのは、その存在がヴォーパルバニーであるということともう一つ、イムロンのプライドを酷く揺さぶる武器の数々を作った者であるという事だ。
事の発端は表情の抜け落ちた顔（覆面なので雰囲気？）でやってき

た半裸のプレイヤーのとある申し出だった。

「な、なにこれ……」

「帝晶双蠍（アレクサンド・スコーピオン）の素材、これでなんか作ってくれ……」

「水晶群蠍……じゃない、亜種？　やっば、なにこのリソース……」

「直剣、片手剣、双剣……まぁどれか作ってくれ、それじゃあよろしく頼んます……」

「えっ、えっ、この双核宝……嘘、リソース500!？　500……ごひゃくぅ!？」

フラフラと去っていくサンラクに声をかけようとしたイムロンであったが、それよりも先に何かを思い出したかのように振り返ったサンラクの言葉が酷く静かに、しかしイムロンの心に業火を放つ。

「あぁそうだ、全く同じ数同じ種類の素材を……これを作ったNPCにも渡すから……」

「……ほほう？」

シャングリラ・フロンティアにおける武器生産システムは大きく分けて四つの要素が重要となる。

一つ目は職業「鍛冶師」専用魔法【武装鍛造（フォージライズ）】の熟練度。何をする

にしてもこれが大前提であり、最上位職業「名匠」に到達したイムロンは既に【武装鍛造(フォージライズ)】を最大値にまで上げきっている。

次に設備の質。これが何気に曲者で、生産職は基本的に施設として存在する共用工房を使用したり、自らの……あるいはクランの資金で建設した自身の工房で武器作成を行う。
しかしながらただ炉を用意すれば良いというものでもない。ビィラックが新たな炉を求めたように、より良い装備はより良い設備に依存する。

三つ目に素材そのものの質。武器作成に使用可能な素材には「リソース」というパラメータが設定されている。これが高ければ高いほど作成した武器に付与する「能力」の自由度と再現度が上がり、さらには素材によっては製作者すら意図せぬ効果も追加で付与されることもある。
尤も、リソースが高い代わりに装備品にデメリット効果を付与する「呪いの素材」もあったりするので、そういった兼ね合いも必要なのだが……サンラクが渡した帝晶双蠍の双核宝のリソースポイントは500、比較対象を挙げるとユザーパードラゴンがドロップするアイテムの中で最もリソースポイントの高い素材が120、アトランティクス・レプノルカの照鏡骨が450、緋色の傷の歴耀古鱗が750である。
余談だが〝緋色の傷〟の最高レアドロップのリソースポイントは驚異の1000である。

そして最後に……作成者そのもののリアルスキルである。
武器製作モードではいくつかの方法で武器の形状、即ち見た目を決定することができる（あくまでもオンリーワンの武器を作る場合のみ、システム側が設計した武器は自動で見た目が決まる）。
一番簡単なパターンは運営が……厳密にはシステムが用意した見た

目をそのまま使う、もしくは若干改造するという方法。
そしてもう一つが完全なマニュアル作成。プレイヤーの思考と実際の手の動きでデザインを決めることができる。イムロンはこちらをよく使う。
イムロンは元来想像力が豊かであり、シャンフロの武器製作システムは彼女にとってこれ以上ないほど理想的なコンテンツ足り得た。

「んー……あ、着いた……ん？」

植物の緑を未だ多く残す都市部より離れた……要するに比較的田舎な駅に到着したアナウンスに正気に戻った留華は立ち上がり……ふと、鞄に繋がれ揺れたそれに視線を向ける。

「演劇超人アクターマン…………そうだ！！」

往年の特撮作品に関連するキーホルダーを見つめていた留華であったが瞬間、電光の如く彼女の脳裏でイメージが浮かび上がり完成する。

「これだっっっ！！」

他に誰もいない電車の中で留華は叫ぶ。シャンフロでは武器の見た目のみならずエフェクトに至るまでをプレイヤーが設定することができる。
しかしながらそれらの設定に必要なコストもまたリソースポイントであり、シャンフロにおける鍛冶とは即ちリソースポイントとの戦いでもあった。

見た目を重視すれば性能が犠牲となり、性能を優先すれば見た目が凡庸になる。
サイガー１００が保有する聖剣エクスカリバーは彼女自身の立場と華々しさもあってか多くのプレイヤーがその存在を見聞きし、そしてまた同時に多くの贋作(レプリカ)が出回っている。
だがそれらは得てしてリソースポイントを見た目に全振りしているがために派手なだけでただの剣、というのが常であるが……
圧倒的リソースポイントを持つ帝晶双蠍の素材であれば、最強の剣とは言わずとも留華(イムロン)の想うイメージと、それに相応しいだけの性能を両立できる。

『ドアが閉まります』
「へ？　あっ、ちょっ……待って待って待っ、へぶっ！！」
慌てて電車の外へと出ようとして顔を左右から扉に挟まれたキャリアウーマン隻口　留華２７歳……
趣味、特撮作品鑑賞。

Ｓｉｄｅ１５：ウラカタスタンバイ（後書き）

自分の制作物に特撮のオマージュ入れる奴とかそうそうおらんやろ
ＨＡＨＡＨＡ！！

シャンフロのマニュアル鍛冶は鍛冶魔法の効果で熱した鉄に触れられるようになって粘土をこねる感じ（思考で形を変えさせることも可能）

フレーバーゲロゲロコーナー

・偽エクスカリバー
エクスカリバーに見た目だけ寄せたプレイヤー作の贋作武器。
「聖剣」「エクスカリバー」という単語がシステム側からロックされているので「壁剣工クスカリバー」などそれっぽく偽装されているのが常。
とはいえ偽物にしてもそれなりのコストをかけなければならないので投げ売りされてるそれらも実は結構手間がかかっている。サイガー１００はエクスカリバーそっくりの剣六本と本物一本を乱舞させて「分身聖剣アタック」を考案したが本人もどれがどれだかわからなくなって断念した。

・演劇超人アクターマン
シャンフロ世界（現実）でかつて放送された特撮作品。「ダイホンチップ」を駆使して様々なものを「演じる」事でフォームチェンジし、悪の組織「ラディッシャー」と戦うヒーローを主役に据えた作品。主演俳優とスーツアクターの演技がガチ過ぎる、という事でそれなりの評価を得ている。

Side_Digest：災禍は廻り、人は動く（前書き）

センの古城お前マジお前……本当お前……更新遅れてすいません、ちょっと腐れ村でクソッタレなバカンスをね

Side_Digest：災禍は廻り、人は動く

◇

「おーい農民、生産依頼が来たぞー」

「いやいや、農民じゃなくて超農民ね？　ここ超大事」

「具体的には？」

「強そうじゃん？」

そういう問題なのか……と情報屋ゼニス・ゲバラはため息を一つつくと、あたり一面を眺めてにまりとあくどい笑みを浮かべる。

「こう、なんだろうな……自分が情報を独占していて、それを自分が発信できる快感ってのは凄いな」

「ゼニちゃんそーゆーの好きそうだよねぇ、裏方作業全部俺だけどね」

「あー、あれだよ、経営コンサルタントとかそういうあれだ」

「独占販売なんだからぼったくってこーぜぇ？」

あくどく笑うゼニス・ゲバラに同じく笑い返すは超農民。全プレイヤーの中でも滅多に見つからない職業「農家」をメインジョブに設定するある意味では生粋の生産職である。

新たな作物の可能性を見出した樹海を彷徨う中で未知のアイテムを見つけ出した超農民、掲示板では続く話題に流されたそれに注目したゼニス・ゲバラは密かに超農民と接触し……果たしてその予想は正しいものであった。

植物型モンスター……否、モンスター型植物とでも言うべき「ヒューマンドラゴラ」はこの場にいる二人は知る由もないが、とあるプレイヤーが紆余曲折を経て契約した征服人形(コンキスタ・ドール)と似たシステムを備えている。

それ故にゼニス・ゲバラはこの情報の秘匿独占を目論み、その共犯者として超農民を懐柔したのだ。

「大体さー、カネ目当てなら発表すべきは今でしょ？　クリスマス商戦前に発表するからクリスマスに売れるんだし、クリスマス後に発売したってカネの尽きた客しかいないじゃーん？」

「んなこと言ったってなぁ、当初の予定じゃ適当な色竜相手にデモンストレーションするとこだったたのが一斉にここに来てんだからしゃーねーだろ」

「イェァア……」

「お、サンキューなマンディー」

「そちら、今朝獲れた新鮮なカルバリンメロンの絞り汁でございますってなー」

私が作りました、と言わんばかりに両の親指を自分に向けるパワー型ヒューマンドラゴラの姿も最早慣れたもので、ゼニス・ゲバラは木のコップに注がれた柑橘のそれとは異なるオレンジ色の果汁を舌

の上で転がす。

「美食舌万歳、って感じだなぁ」

「高品質な食材を自前で食えるのは生産職の醍醐味だよねぇ……おーよしよし、ご飯の時間だぞー」

ワサワサと揺れる苗木達へと赤子をあやすように語りかけながら超農民が歩いていくのを見送りながら、ゼニス・ゲバラはその光景を見つめる。

来たる決戦の日に備え、最終調整段階に入った大量のヒューマンドラゴラを。そして一言。

「……悪の生産工場みてーだな」

「今更ぁ？」

◇◇

「双剣の！　無双の双剣(モラ・ベガルタ)のディルナディィアよ！　やはり彼奴め、洞窟のどこを探しても見つからなんだ！！」

「ブリブリニャンニャンめ、我らが武威に怖気付きおったか！！」

のしのしと地を揺るがしながら騒々しく報告にやってきた二人の戦士を眺め、その女は腰の後ろに吊るした二振りの剣を撫でて溜息をつく。

「白竜ブライレイニェゴは定期的に小竜を狩らねば何もかもを食い尽くしてしまう、故にこそ我らは武器と共に闘ってきた……」

しかし、白竜ブライレイニェゴの姿は消え……小さな来訪者は東の果てに竜の災禍を予見した。

「しからば、竜の災い在りし場所こそ我らが地。異論のある者は剣を立てよ、我が双剣が相手をしよう」

それが彼女達の流儀。長の方針に異を唱えるならば、それは言葉ではなく武器でこそ語られるべきであると。果たして異論はなく、ただ爛々と戦意に漲るいくつもの眼差しが女を映す。

「ならば立て勇士達よ！　大いなる力携えし同胞よ！　まだ見ぬ友に伝えよ！！　我ら巨人族（ギガント）……否、無双の双剣（モラ・ベガルタ）は竜災の嵐を討つべく東へ向かうと！！」

一般的な人類とはかけ離れた巨躯の数々が腹に力の入った呼応の叫びをあげ、ビリビリと空気が揺れる。

今この瞬間、巨人族のクエストのフラグが立ち……そして誰もそれを受ける者がいないが故にオート進行でそれは動き始めた。

◇◇◇

「おさ様！　空が怖いよう……」

「おおよしよし……じゃが、これは看過できぬなぁ……」

小さな雛鳥が盲目の梟へとしがみつく。梟は見えぬ目で空を見上げ、そして視覚以外でそれを感じ取る。
大いなる空を竜に奪われどれほどの時が経ったか、一度竜に見つかれば「生意気である」と群ごと滅ぼされる危険性を孕む限り、彼らは憂いなく空を飛ぶことができない。
木を避けることばかりが上手くなったとて、空に木など生えてはいないのだから。

「むぅ……」

翼なき訪問者の言葉を思い出す、流浪の狼達の言葉を思い出す。
隠れ伏す時は終わったのだと、海の果てより現れた翼なき者達は、全ての竜と戦うつもりなのだと。

梟は争いを好まない、だが好悪は事実を覆すだけの力を持たない。
であるならば、己の言葉が若き翼を地に堕とすやもしれない恐怖をそれでも飛び越えねばならない日が来たのだと、梟は覚悟を込めた溜息を吐く。

「……雛(ぼう)や、拳闘鶏(デスペラード)を呼んで来てくれるかのう？」

「う、うんっ！！」

――たとえ飛べぬ翼を授かろうとも、この心まで折ったつもりはない。

恐怖の錘で地に縛り付けられようとも、飛ぶ事自体は可能な彼らの中で稀に生まれる生まれつき飛ぶ事そのものが不可能な忌み子達。

卑屈の果てに道を違える者が多い中、確たる意思を翼に宿す若者を梟は想起する。

今や、飛べぬ忌み子の一大集団を結成するに至った彼らこそが鳥人族の命運を授けるに相応しいと信じて。

◇◇◇◇

彼らは、戦いをこそ求めている。

誇りを求めて？　――否。

己の強さを示すため？　――否。

では何のために？

それは、彼らがそう生まれたが故の「宿命」なのだ。

「で、どうするんだ？」

「どうもこうもあるまい、竜を倒してなんになる？　俺たちの牙はそんな事のために研いでるわけではない」

竜達による災禍をそんな事と切り捨てた己達を導く者（リーダー）の言葉に、問いを投げた者は何か言葉を伝えようとし……耳を萎縮させて口を噤む。

「……どうした？　なにかあるなら言ってみろ」

「い、いや……なんでもねぇ。だけどよう、一応あいつらには伝えた方がいいんじゃねーかぁ？」

獣人族（ビーストマン）は現在、三つ……厳密には四つの勢力に分かれ、内ゲバを繰り広げている。

「力による繁栄」を掲げ、腕自慢の強い支持を集める獅子の獣人族レラールを頂点とした「獅子心衆」。

「知による繁栄」を掲げ、様々な策略を張り巡らせる狐の獣人族ノネを頂点とした「狐火の会」。

「富による繁栄」を掲げ、独占供給する食糧などを足掛けとする象の獣人族ダッドダッドを頂点とした「豊象軍」。

「獣人族として生まれながら、その意義を放棄して下らない頂点争いをする連中などどうでもいいが……これから先、我らが同胞の生まれ出ずる芽を潰すわけにもいかん、か」

そして最後に犬と狼の獣人族のみで構成され、彼らが畏怖と崇拝を込めて讃えし「獣王」との戦いをこそ望む狼の獣人族ウォーアを頂点とした「戦狼隊」。

隊長であると同時に「導き手(リーダー)」でもあるウォーアは心底億劫そうに溜息をつくと、隊員の中から犬の獣人族三人を選び出すとそれぞれに言伝を託して走らせる。

「我らの目的は獣王……偉大なるリュカオーンただ一つ、竜などという些事で足を止めるわけにはいかんのだ」

七つの最強種が一つ、最強の「狼」たるリュカオーンは彼ら戦狼隊にとっては打倒すべき頂の象徴であり……旗にその姿を刻む程に焦がれる崇拝の対象でもある。

数多の世代を経て、なおその残滓を追うしかない狼達の道が急転するのは、もう少し先のこと……

◇◇◇◇◇

争いの火種が、必ずしも高尚なルーツを持っているわけではない。たった一人の少女が仲介をしただけで長きに渡る諍いが終わりを迎えることもある。

自由とは境遇ではなく、自身の意思とそれに基づく行動にこそある。その結論にたどり着いた竜の片鱗を帯びた人々は、己が意思に従って黒竜と少女を助けることを決めた。

『ふン、我が片鱗を授かる栄誉を受けながら、随分とノロマな事だ』

「誰だって最初は弱いものですよ！　そこから強くなっていくんです！　あ、ノワルリンドさんは最初から強いからもっと強くなるって事ですかね？！」

『ククク……世辞としては及第点だな。良い、貴様の塵芥が如き媚を我は許そう』

「塵も積もれば山となるですよノワルリンドさん！」

『………？　む、そうだな、うむ』

一瞬だけ、空を遅く飛ぶ黒竜の威圧感が揺らぐが、気を取り直したのか再び傲岸不遜な威圧感を纏い直す。

「私の……えーと、お友達？　仲間？　の人達から聞いたんですけど、ジークヴルムだけじゃなくて、他のドラゴンさん達も来るみたいです」

『老害に、小者に、気狂い、あの高慢ちきは屍を晒したのだったか……ふン、所詮はただ生を貪るだけの雑魚に過ぎん。我が狙うはジークヴルムただ一つ』

「そうですね、目標を絞るのは私も賛成です。でもでも、ノワルリンドさんは前線拠点の方々から結構恨みを買ってるみたいだし……私達が手助けをするんです！」

応、と親鳥を追いかける雛鳥のようにノワルリンドの後を追って空を飛ぶ黒い竜人族達が呼応する。
ノワルリンドのように常に飛び続けることができない彼らは定期的に地面へと落下しては木や岩などを踏み台に再跳躍する事で低速かつ低空で飛ぶノワルリンドに追随している。

『まぁいい、この我に集る蛆を進んで駆除するというのならば我が後塵を拝する栄誉を与えてやっても良いというものだ』

「ふふん、最良の状態で挑んでこその挑戦ですからね！　ノワルリンドさんはジークヴルム戦に集中してくださいっ！」

『……ふん』

黒竜はそれっきり何を言うでもなく前を向いた。
しかしその背に乗せた少女を振り落とすこともなければ、その背に続く小さな影を振り払うこともまたなかった。

Side＿Digest：災禍は廻り、人は動く（後書き）

光属性に浄化されてツンデレ化したドラゴンがいるとかマ？

色々描写したかったけどさっさと展開進めたかったのでダイジェスト集の術！！

総評を胸に抱き吠えろ大統領

◆

妥協、という言葉がある。
本来のノルマへの到達を諦め、とりあえず満足できるラインで作業を終了することを指す。実際の意味としては二者の意見が食い違った時云々という意味らしいが、何かを作る場合は理想と現実がそれに相当する。

本当は空を三次元機動で飛翔して全身からミサイルをぶっ放すロボゲーが作りたいのに縦横上下に直線にしか動けず米粒みたいなレーザー（笑）しか出せないドットゲーみたいな完成品が流通に乗ることがある。

そんなまさかと思うこともあった、だが文字通り「凸凹」挙動のロボゲーを発掘した経験がある身としてはやはりクソゲーという沼はその深淵を宇宙空間と接続しているのではと思えてならない。

では逆に、だ。仮に制作側が考える全ての要望を過不足なく詰め込んだゲームは果たして神ゲーたり得るのか。
少なくともシャンフロは成功例だろう、粗があったとしてもそれ以上の満足度を叩き出せるのならそれは名作の部類になる。
では風雲プレジ伝は？　……奴は言うなれば、素材の段階で組み合わせを間違えてしまった料理なのだ。あと調味料の分量もミスってる。

「世界ヨ……闇ニ、闇ニ沈ミ消エヨ……！！」
「あぁ、お前は滅ぼす派？　その手のラスボスは五人目だ」
魔神帝キョムルス、何やら壮大な背景設定があるようだがそんなものはエンドロールを見た後に調べればいい。
こちとらまさかの性能据え置きボスラッシュ＋αを乗り越えてここに立ってるんだ、合体四天王とか聞いてねーぞクソが。
今このラスダン「魔神城アヴィスーマ」の周囲では大統領たる俺が万全の状態で戦えるよう大合衆国となった大陸全ての力を結集した合衆軍が決死の足止めを行なっている。
軍勢の経験値稼ぎが上手いクエストを見つけるまで大変だった……よりにもよって隠しクエストにしやがって。

……妥協は決して諦めではない。何もかもを特盛りにしたって胃がもたれるだけなんだ、何もかもを詰め込めばそれ相応のデメリットも出てくるというもの。
風雲プレジ伝というゲームをプレイして、総評から言えば……「素材は及第点、調理法も合格点、調理器具もまぁまぁ。ただし寿司とパフェをカレーの調理法で混ぜても美味しくなるとは限らない」と言ったところか。
風雲プレジ伝は戦略ストラテジー、無双系アクション、国づくり系

シミュレーション、そして若干のハクスラが一本のゲームに詰め込まれた作品だ。
プレイヤーは大統領と呼ばれる存在となって時に軍勢を指揮し、時に前線に立ち、時に諸国を相手取って交渉の席に立つ。

逆に言えば、プレイヤーは武器を振り回して敵を薙ぎ倒しながら軍勢に指示を出し、気候や周辺環境を考えながら国を広げ、善意コマンドが効くとはいえ交渉に頭を悩ませなければならない。
シャンフロは言うなれば満漢全席、選り取り見取りの料理の中から好きなものを選ぶことができる。一皿を完食する義務もなく、途中で別の皿に箸を伸ばしてもいいだろう。
だがこちらは一皿全部盛りと言うべきだろうか、少なくともカレーの中から煮えたイクラやイチゴが出てくるような料理が大衆に受けるとは考え難い。

さらに言えば難易度もこのゲームの残念さを際立たせている。
ゲームを作るにあたり、難易度の調整は永遠の課題と言っていい。
初エンカウントが魔王では勝てるはずもなく、初期装備がラスダンクラスでは戦闘のカタルシスは偏ったものになる。
難易度は登り坂的に上がっていくのが基本だが、このゲームは複数の要素それぞれに難易度がある。そしてそれらは他の要素で代用できない、プレイヤー一人がどれだけ強くなっても、軍勢のレベルが低いと問答無用でゲームオーバーになってしまう。国力が低いままだと他国との同盟が結べない。だから全ての要素を高水準で要求する。
しかもストーリー中盤の帝国侵攻以前と以降で難易度が別ゲーレベルに跳ね上がるため、レベリング作業を強いられるのが単純につらい。
高い難易度と達成感は切っても切れない関係性を持つが、いきなり

引き上げればいいというものではないのだ。

ただ……そう、ただだ。諸々の理由からクソゲーに部類される事になったとしても、このゲームにはただ一つ評価されるべき点がある。

「大統領に不可能はない、そして大統領とはユナイテッドの盟主！　バンメシ合衆国の食卓は十人十色をこそ尊ぶ、闇一色の味気ない未来なんて願い下げなんだよ！！」

それはストーリーだ、恐らくだが風雲プレジ伝という作品は、プロローグからエピローグまでのストーリー全編を大前提とした上でシステム周りが妥協無しで構築されている。

だから国家元首としての苦労で多忙であるし、人類の敵として現れたデーモンのせいで難易度が跳ね上がる。

・ユナイテッドは負けない！

・我々はお前に勝つ！

・世界はお前らには渡さない！

定型文さんもノリノリだ、物語後半で聖遺物に関わる女神の意思そのものが主人公を導いていたと発覚したので冗談抜きに「左下枠（女神様）」というキャラクターであったと発覚したりした。

ギャグ選択肢が終盤から見かけなくなったのはちと寂しいが、ここで無理に茶化されても萎えるだけだ。

そしてこれは、ラスボスに向けて言った言葉じゃない。未だ囚われ、

奇跡の聖遺物「統一旗」の力を使わされている秘書ことライスちゃんにこそ向けた言葉だ。

・だから……

・だから……

・だから……

選択肢が選択肢として機能していない、だがこれは次に繋げるための下準備。奇をてらう必要はない。

「だから……」

瞬間、世界がフリーズしたかのように静止する。俺の前に一枚のウィンドウが表示され、そこに文字の羅列が紡がれていく。

・どうか呼びかけて

・貴方を信じた一番初めの国民を

・取り戻すために！

任せろ女神様。

ウィンドウを砕くように払いのけ、動き出した世界に言葉を響かせる。

「大統領の執務席はそんなところじゃないだろライスちゃん！　戻って来い！！」

「っ……はいっ！！」

串刺し焼き魚の旗が光を放つ、ライスちゃんを捕らえていた影が光に消し飛ばされ、統一旗を掴んだライスちゃんがこちらへと駆けてくる。

「大統領（プレジデント）！！」

「おかえりライスちゃん。さぁーて？　魔神帝くぅん……降伏するなら今のうちだぜ？」

「オノレ、オノレェエエ……！！」

統一旗がプレイヤー陣営に戻ってきたことで、その効果が俺と俺の勢力に属する全てへと齎されていく。

大統領は国民の信じる心によって立ち上がり、国民は大統領の導きによって前へと進む。

女神の加護は今や最高潮、これまでは限定的にしか使えなかった効果すらもが解禁され、光の中から黄金の刺繍で神々しいデザインに変わった統一旗がその真なる力、バンメシ合衆国に属する全ての国民の総戦力を数値化したステータスバフ付与を発動。

光で表現された莫大な強化がプレイヤーへと付与され、身に纏う黄金のオーラが闇を祓う。

「その名も究極大統領（ウルティメットプレジデント）モード……大統領（オレ）は人として、魔神（お前）を討つ！！」

総評結論！！

発売直後に製作会社が倒産しなけりゃ難易度調整アップデートで最終的に名作になれたんじゃないのかこれーっ！！！

落第点のゲームバランスに頰を張られ、百点満点のストーリーに背中を押されたプレイヤーは今、ラストバトルに挑む――！！

総評を胸に抱き吠えろ大統領（後書き）

・風雲プレジ伝の世界観
元々世界には神々が住んでいたが魔神が現れたことで最終戦争勃発、神々のほぼ全てが滅びるも最後に残った女神が魔神の封印に成功する。しかし女神の肉体は封印の代償で滅び、女神は精神だけの存在となって長い眠りにつく。

女神が目覚めた時には人類種が広く栄えており、女神もまたそれを見守っていたが魔神族が度々復活するため物理的干渉の出来ない女神は代わりに人の中から力ある者を選び魔神の封印をしてもらう事にする。
しかし個人の力では限界があり、何度目かの魔神対戦では封印には成功するものの記録が焼失し、文明そのものが後退するレベルの存在を人類が被ったこともあった。

そこで女神は自身の力のカケラたるアイテムを世界各地に落とし、魔神と戦う個人ではなく魔神と戦う人類を導く者を選び出す事にした。
これが聖遺物であり、物語開始時点での主人公である。主人公だけに見えるセリフ枠や大統領ビームの正体は心臓型の聖遺物「以心伝心」の効果によるもの。語ると長いが要するに血中に神秘的ナノマシンを流して受信機にしたり奇跡の行使に使っている。しれっと人体改造するけどいい女神なんです本当なんです

主人公（プレイヤー操作前）は物語開始直前に「自身は大統領になりたい」という夢を除く全ての記憶を代償にこの聖遺物を受け入れている。メタ的に言えば物語開始時点だから、であるが主人公にプ

ロローグ以前の記憶がないのはこのため。

まぁ要するにこのゲームの何がクソかと言えば「ひたすら面倒な作業を義務化させたこと」「難易度設定ガバガバ」だからで、知る人ぞ知る名作扱いなのは「ストーリーだけは百点満点のため」ってことです

暖簾にパンチしたら派手にカウンター食らった（前書き）

設定考えてる時程のモチベーションを稼ぐのが難しく、しかし拙作において逃げられない展開なのでヒロインちゃんのためにも頑張って恋愛小説読んだりして予習したけどハードルが高い……蠍の設定考えるより時間かかったんですけど

暖簾にパンチしたら派手にカウンター食らった

件名：語彙力爆散
差出人：サンラク
宛先：武田インゲン
本文：風雲プレジ伝……いいっすね

件名：ｒｅ：語彙力爆散
差出人：武田インゲン
宛先：サンラク
本文：いい……
それはそれとして、なるほど確かにゲームクリアしても棚に飾っておきたい出来栄えで御座ったな！

件名：ｒｅ：ｒｅ：語彙力爆散
差出人：サンラク
宛先：武田インゲン
本文：いや本当に、ジンバブエから送ってもらっちゃって武田氏には感謝しかないですわ

件名：ｒｅ：ｒｅ：ｒｅ：語彙力爆散
差出人：武田インゲン
宛先：サンラク
本文：いやいや、この程度小銭に御座る。では拙者、これからオーストラリア行きの飛行機に乗るのでちと落ちるで御座るよ～

件名：ｒｅ：ｒｅ：ｒｅ：ｒｅ：語彙力爆散
差出人：サンラク
宛先：武田インゲン
本文：武田氏！　飛行機に乗る前に落ちる発言はあまりに危険なフラグを招きかねないかと！！

「いやカッケェな本当……」

俺も言ってみたいわこういうセリフ、つーかしれっと南半球に飛んでるなこの人……クソ多忙そうなのに、一体どうやってゲームの時間を作ってるんだ……？　武田氏、やはり謎多き人よ。

さぁて、裏ボスの「女神の選士達」も撃破してトロコンしたし、これで気兼ねなくシャンフロに戻れるというものだ。ＧＨ：Ｃ？　中

々評価いいじゃないらしいか、それならまた今度でいいか。

さーて、学校学校。

「え？　今週末に決戦フラグ立ったの？」

「あ……本当に、知らなかったんですね……」

「その口ぶりだと……あぁ、あいつらが言ったのか。まぁ確かに二日くらい完全にネットワークから隔離された時間を過ごしてたから」

クリア後も武田氏にメールしたり寝たりと忙しかったしな。フルダイブに深く潜っていると睡眠とゲームの関係性が変わってくる、簡潔に言えば「寝る時間すら惜しい」って奴だな。

一流のゲーマーは短時間で爆睡して瞬間的に脳細胞を回復する技能が求められる……ゲーム中は身体は休んでいても脳が稼働してるからな、あまりにも酷い脳波が計測されると二十四時間ログイン禁止処理が下されるからレッドゾーンを見極めてギリギリを攻めるのがマナーだ。

「え、つまりジークヴルム込みで色竜が全部前線拠点に？」

……いや、おかしくね？　どれか一体とか、それぞれが順番に前線拠点を攻めるならまだ分かる、一斉に襲来する意味が無いだろう。ボスラッシュだって順番に並ぶぞ、一斉にエンカウントするとか単なるクソゲーだ。いや、だがここの運営がそんなザルいストーリーを出してくるか……？　違うな、なんらかの理由があって本来の形

が歪んだ、と考える方が自然か？

「蝶の羽ばたきで未来が変わるなら、なんらかの理由でルート分岐するのもあり得ないこともない、か……？」

「……えぇ、と？」

「あーいや、なんでもないよただの戯言。それよりも……ユニークモンスターに挑む前にヴァッシュに会いに行くと個別会話出るっぽいよ」

「そう、なんですか？」

思わせぶりなことばかり言うし、ワールドクエストが進むとより詳細な情報を話しそうな気配がある。
それにサンラクとサイガー0、秋津茜……そこに至るまでの過程と今の立場はそれぞれが異なっている。

ヴァッシュの察し力はちょっと異常だ、ウィンプ関連が速攻でバレた辺り原理は分からないが実質的にこちらの行動ログが参照されてる感がある。
なにやら始源関連で何か抱えていそうなレイ氏、現在進行形で厄ネタの秋津茜、そして厄ネタ隠してるのがバレた俺……出来ることなら全員分の会話を回収したいところだが奴は今潜伏しながら前線拠点に向かってるらしいし……え、ノワルリンドって奴のログアウトログインに付き合ってんの？

「……なんか、俺の知らない間に色々進んでるな」

「他のプレイヤーも、色々と動きがあるようですし……」

そうか、じゃあ俺も決戦に備えて色々と動いた方がいいかな？　エムルが合流したことで別荘とティアプレーテン、前線拠点へは実質無制限でファストトラベルが可能だ。となればやはり重要な事はなにを持っていくか、ってところか？

「……ん、もう学校か」

「あ………その、もう着いちゃい、ましたね」

会話に花が咲いていると時間が短く感じるなぁ。

と、

「ん？」

誰かこっちに来てる？　登校の時間帯に正門から外に出る理由もないだろうし……っていうか視線がまっすぐ俺たちを見てるし。

「誰だあれ……あれ斎賀さんの知り合い？」

「え？　いえ、別に知り合いという、わけではない……んですけど、けど……」

妙に歯切れが悪いな？　そんな風に首を傾げていると、こちらへと歩いて来ていた男の姿がはっきり詳細に見ることができる距離にまで向こうが近づいて来ていた。

なんというか、三十人くらいに「あなたの考えるイケメン」の情報を聞いてモンタージュ写真にしたみたいな奴だな。

ゲームばっかやってると当然美形美少女のキャラクターを多く目にする機会があるわけだが……それらになんとなく似ているようでそうでないような、初対面の相手にこんなことを考えるのも失礼だが……記憶に残りづらそうなイケメンだ。
顔を思い出そうとしても他のキャラが頭に浮かんで本人の顔がぼやけるタイプだ。

「やぁ、斎賀さん」

「ど、どうも……石動、さん」

「君の姿が見えたものだから、居ても立ってもいられなくてね……」

あれこれ俺無視されてる？　いや、初対面だしこんなもんか、いきなりこっちに話しかけて来たら逆に怖い。
ていうか顔面偏差値高っ、斎賀さんもガチ廃人という点を加味しても人間的に上位層なスペックだがこのいす……石動？　氏も大概スペックが高い。俺よりタッパあるし身長１８０超えてね？

「朝一番に聞く不躾だけれど、やっぱり考えてくれる気にはならない、かな……？」

「……そのお話は、前々からお断りしている、のですが」

「じゃ、俺先行ってるんで」

「そんな！　君程の優秀な人材が……」

あ。

瞬間、斎賀さんに伸ばされた石動氏の手首を俺の手が掴んで止める。

「………あ」

「……いきなり、何をするのかな？」

「動くな、死にたくなければな」

おっといけない、大統領ロールプレイしてたせいでちょっと威圧的になってしまった。まぁいい、事態は急を要する。

俺は石動氏の手首を抑えたまま、表情固くもう一方の手をゆっくりと慎重に石動氏の首へと伸ばす。

刺激を与えないように、敵意を見せないように……しかしそこにいるべきではないと優しく退去を促すように…………

「離してくれるか……なっ！」

「あっ」

石動氏の身体が強張り、俺の手を強引に振りほどく。いきなり動いたのがダメだったのか、それとも人間には感じ取れない細かな変化を「敵意」と認識したのか……果たして、自然界においてこれ以上ないくらいデンジャーな黄色と黒のストライプな奴は攻撃モードに移行、石動氏の首筋に武力を行使した。

「痛あっ！！？」

「その、蜂がいたから………」

明らかにミツバチやクマバチのような丸っこいそれとは異なるフォルムの蜂がブンブンと飛ぶのを追い払い、振り返るとそこには顔を青ざめさせた石動氏の姿が。

「ア、アナフィラキシーショッ、ショッ……痛い！」

「蜂に刺された経験は？」

「び、病院っ！　いいから電話をっ！！」

「大袈裟すぎ。いいから、蜂に刺された経験は？」

「な、無ぃ……！」

あ、じゃあ大丈夫だろ多分。
蜂の毒って大抵二回目以降がデッドゾーンらしいし、ちらっと見えた限りじゃキングオブデンジャラスことスズメバチじゃなくてアシナガバチっぽいし。どっちもどっちではあるがポイズンカクテルよかマシだろう。

「詳しい、ですね……？」

「え？　あ、うん、まぁ……色々ありまして」

一時期ね、母がね、蜂の巣集めにハマってね……実際ボウリングの球よりデカいスズメバチの巣がウチにはあるし、家族総出で酔った勢いに身を任せて庭に養蜂設備の設置を企んだ母の野望を食い止め

るために戦ったのはいい思い出……ではないか。
うちの母は瞬間火力が高すぎる、我が家で一番の危険人物だ。
「一応念のため保健室に行った方がいいかな、多分明日明後日には痛み引いてるだろうけど……泣きべそかくなよ普通に歩けるだろ」
「う、うぅう……！」
よたよたと去って行った石動氏を見送りつつ、俺は既に彼の顔が思い出しづらくなっている衝撃的な事実に気づく。
「なんていうか、面白い人だったな……誰か知らんけど」
「あの人……生徒会、副会長……ですよ？」
え、マジ？　生徒会とか会長の顔すら覚えてないわ。女だったっけ？

暖簾にパンチしたら派手にカウンター食らった（後書き）

岩巻さんがこの場にいたらガッツポーズ案件

Q．なんで断ってるの？

A．ストーカーできないじゃん

恋愛モノ書くの難しすぎる……物語上の緩急をつけようとしても作者が心の中に飼ってるハッピーエンドヤクザが拒否反応を起こす……ちゅらい……もぅマヂ無理フィル貯めよ

タスクフォース・アウトサイダー（前書き）

もにもにアラサーという衝撃の事実に対し喜びに起因する動揺を隠せないので更新です
金剛晶取っちゃったから今5ポイントしかないの逆に笑えて来ますね（虚無の微笑み）

タスクフォース・アウトサイダー

「いまのわたしは……そう、さいきょう……！！」

「ヘイヘイ！　残像に気ぃ取られすぎ！」

「動体視力に不足を確認、トレーニング期間終了は延期されます」

「ちょっ、こわいこわいこわい！！」

出会って五秒でオチてるあたり、やはりこいつのポテンシャル（戦闘力ではない）は侮れないな……

ウィンプを中心に黒雷を纏った俺とブースターを噴かしたサイナが二重構造式の周回運動して軽く泣かしつつ、俺はサミーちゃんさんに会釈しつつズバリ方針を口にする。

「蜘蛛と百足を狩る」

「じゃ、わたしねてるからがんばって……」

「残念だが同時並行でお前のレベリングは継続だ、レベル87とか端数で満足せず90の大台に行こうぜ？」

「いーやー！！！」

「しかし契約者(マスター)、フォルトレス・ガルガンチュラの生態を鑑みるにアーミレット・ガルガンチュラを利用した訓練法は破綻の可能性が大きいかと」

「何、課外授業ってやつさ」

フレーバーテキストを見るに、要塞蜘蛛はフェロモンか何かで子蜘蛛を操る。深海にも似たような奴がいたが今は関係ない。

つまりフォルトレス・ガルガンチュラが本気を出せばアーミレット・ガルガンチュラの悉くは死兵……というより消耗品と化し、敵に向かって特攻していくわけだ。

「いいか？　基本的に蜘蛛と百足のどちらかだけと戦うなんてのは不可能だ。どっちかが起きればもう片方も起動する、だが逆に言えば奴らの注意を最も集めるのもまた奴ら自身だ」

ＭｖＭの基本は相打ち誘発と横槍介入だ。ＭｖＭｖＰが成立するのはプレイヤー自身のステータスが化け物じみていない限りは不可能、列車砲と要塞相手にプレイヤーが対抗する手段はそうはあるまい。

「いいか、フォルトレス・ガルガンチュラの制御下に入ったアーミレットは母体が注意を向ける対象以外からの攻撃に鈍くなる。つまり殴り放題だ」

「な、なるほど？　ふ、ふん！　ずいぶんとかんたんそうじゃない！」

案の定イキり始めたウィンプを可哀想なものを見る目で見つめるサイナに「しーっ」と口を閉じるよう指示。

「……了解：」

ウィンプは気づいていない、これからお前が行くのは反撃こそ来な

い代わりに範囲攻撃で流れ弾が飛んでくる戦場だということを……

「サミーちゃんさん、いざって時はアレ咥えて避難お願いしゃっす」

こうして、俺のサミーちゃんさんに対する好感度は益々高まって行くのだった……

「あ、お前の出勤も確定な」

「ですわぁ！？」

そんなこんなで、ブリーフィングタイム。

「はい、これ一応念のため作ってもらったツァーベリル帝宝晶を使った諸々」

イムロンと勝手にマッチングさせたとはいえ、性能比べに燃えるビィラックに「作業増やすなや！」とド突かれたが、別に素材が重要なのであって性能はどうでもいいって言ったんだがなぁ。

ＮＰＣ判定のある俺とエムルはアクセサリ、ＮＰＣではあるがアクセサリスロットが無いサイナは代わりに存在する拡張機能ユニットに「増設双駆動型ブースター」なるものを。

んで、ＮＰＣなのかモンスターＭｏｂなのかいまいち分からないウィンプや、普通にエネミーＭｏｂなサミーちゃんさんは仕方ないので……

「なにこれ」

「ツァーベリル帝宝晶の現ナマ」

「かくさ！！」

色々検証したところ、パーティに入ることができるのでこのユニークモンスター（疑）も判定的にはＮＰＣ判定なようだ。

だったら、と念のため作っておいたアクセサリを渡しておく。ツァーベリル……というか水晶群蠍系列と関連する鉱物は魔力の蓄積に共通している。

とはいえ流石はクリスタルエンペラー、ツァーベリル帝宝晶を使ったアイテムはどいつもこいつも一癖二癖ある性能だが、ガワが重要だし今回はそのピーキーさが活かされることはないだろう。

「作戦内容だが、今回はフォルトレス・ガルガンチュラを妨害してトレイノル・センチピードに勝たせる方針で行く。俺は奴に直接乗り込む、エムルはサイナに載って支援、サイナも同様、ウィンプお前は出来る限りアーミレットを撃破だ」

そしてサミーちゃんさんにはいざというための後詰めだ、あのステルス性能で隠れてもらいつつ、有事の際はウィンプを回収してもらってここに撤退してもらう。

「では作戦開始！！」

シャンフロは日本時間とほぼ同じ時間経過で天候が変化する。流石に全く同じ天候というわけではないが、雨まで降らすんだからつくづく化け物リアリティだ。

現実世界での現在の時刻は六時半。シグモニア前線渓谷は黄昏の朱色に染まり、静かなこの場にこれより種火を叩き込む。

「サイナ！！」

「了解‥これより示威行動を開始します」

ブースターがあるとはいえ、流石に戦術機獣抜きでは高く跳ねるように飛ぶのが限界であるらしい。それでも十メートルほどの高さまで跳躍したサイナが両手に装備した二丁拳銃を地面へと向け……発砲。

「ウィンプ！　無理に倒そうとするな、堅実にスコアを稼いでいけ！！」

「いわれなくてもそうするわよーっ！！」

そりゃ何より、さて……あいにく法螺貝は持っていなくてな、銃声が開戦の合図ってことで勘弁してくれよな。

メキメキと地面に亀裂が走る、辺りを見渡せばポコポコとアーミレット・ガルガンチュラが地面から顔を出しているのが見えるが、小

粒がいくつ動いたってこんな振動は……地の底を砕くような揺れは起こせまい。

地面に走る亀裂が臨界を迎え、地面を砕いて下から超重巨躯の甲殻が土を振り落としながら姿を見せる。

成る程、その姿はまさしく列車砲の名に相応しい、鉄道規模の巨体と言えばギガリュウグウノツカイを思い出すが、縦に薄かった奴とは異なり、こっちは横幅も大したものだ。

ギヂギヂと甲殻同士を擦り合わせ、地の底から首を上げたトレイノル・センチピード・グスタフを見上げながら俺は新たに地を揺らすもう一つの位置を探す。

「あ゛ーっ゛！　や゛ーっ゛！　わらわらきてるぅー！！」

黙ってろヘタレ……そこかっ！！

「作戦開始！　サイナ、エムル！　くれぐれも巻き込まれるなよ！！」

「はいなっ！」

「了解：」

龍が出れば虎も立つというもの、同じく地面を割って巨大な蜘蛛が現れたのを確認した俺は、フェロモンでフォルトレスの制御下に置かれたのだろうアーミレットに混ざって巨大要塞の方へと駆ける。

「こ、こっちみない？　ふ、ふふふ……もはやわたしのどくだんぴゃあーっ！？」

百足が動いた余波でウィンプが吹っ飛んでいった気がするがサミーちゃんさんが出動していないのでセーフなんだろう。
柱のようなフォルトレスの後脚を這い上っていくアーミレットを足場がわりに蹴り飛ばしながら上へ上へと駆け上る。臨界速を使ってもいいが、あれはむしろ離脱と奇襲に使う方が向いている。
人間大のサイズたるアーミレット・ガルガンチュラは相応の膂力を備えている。少なくとも人間一人が足蹴にしたりする程度で剥がれ落ちるほどヤワではない。

気づけば頂上、フォルトレス・ガルガンチュラの腹の天辺に到達した俺はアラドヴァル・リビルドを握り、手始めに近くの「砲塔」に潜り込もうとしていたアーミレットを斬りつけ、蹴り飛ばす。
炎閃に切り裂かれた子蜘蛛が転げていき、後続を巻き込んで派手にクラッシュする。

「弾薬のない大砲なんざ、ただの置物だよなぁ！？」

火力貢献はグスタフ君に任せればいい。俺達は言うなれば工作部隊、裏方に回って弾薬備蓄を削り尽くすのさ。

「注意：トレイノル・センチピード・グスタフの筋繊維質に膨張を確認、来ます」

「了解！！」

轟、と黄昏の空気を叩き割りながら巨大な百足が蜘蛛に巻き付く。
互いの分厚い甲殻同士が硬さ比べに軋み叫ぶ、締め上げる百足に対抗するかのように蜘蛛は脚を踏ん張らせ、俺の攻撃が届かない「砲塔」から次々に子蜘蛛が発射される。

「【マジックエッジ】！！」

「射撃行動開始、撃墜します」

しかし同じく奴の腹の上から放たれた攻撃が弾丸たるアーミレットの何割かを撃墜し、数を減らした穴あきの弾幕がグスタフに命中し、衝撃を撒き散らして爆ぜる。

俺を比較にするのはちとアレだが、レベル１００オーバーのプレイヤーを一撃で吹き飛ばす自爆攻撃だ、一体二体で有効打になるとは思えないがそれが数十にも及べば怯みくらいは誘発できる。

グスタフが仰け反ったことで拘束が緩む、その瞬間を見逃さずフォルトレス・ガルガンチュラの柱のような……全体図として見れば杭のような形状の脚がグスタフの身体を踏み付け、極大質量で甲殻を砕き穿つ。

「全員離脱！！」

「お人形の人！　お人形の人！」

「当機（ワタシ）の呼称は「サイナ」が適切であると原生生物：名称エムルに告げます。離脱機動」

「ほびゃあああ……！！」

サイナが宙返りで離脱したせいで酷いことになっているエムルを見送りつつ、俺もまた離脱のために脚に力を込める。

「ようグスタフ君、狙うならココがオススメだぜ？」

俺の勘違いだろうが、目が合った巨大百足へとアラドヴァルをヒラヒラ振ってアピール。
背中から生えたフォルトレスの「砲塔」が小さく見えるほどの「主砲」が蜘蛛へと突きつけられ、俺が臨界速（ブラディオン）で真上へと離脱した直後、グスタフの「主砲」から放たれた巨大毒砲弾が要塞蜘蛛の横っ腹にクリーンヒットする。

「ナイッショ！！！」

さぁ、一手一手確実に詰めていこう、要塞落としだ！

タスクフォース・アウトサイダー（後書き）

征服人形やヒューマンドラゴラはアクセサリスロットの代わりに別枠の装備スロットが存在します
征服人形の場合は追加パーツですね、素の状態だけではなく強化装甲を装備している時にも影響が出るので割と大事。無論このパーツの新規で作成するには古匠が関わって来ます……まぁそれ以外の方法がないわけでもないですが
ヒューマンドラゴラの場合は栄養剤を装備できます、任意もしくはランダムなタイミングで別枠バフをヒューマンドラゴラに付与できます。これは職業「農民」系列の最上位職業、もしくは隠し職業「薬剤士」系列が作成できるアイテムですね

龍よ、龍よ！　其の一（前書き）

断言します、其の五十くらいまでは覚悟しておいてください（死んだ目）

覚悟はいいか？　俺はできてる

龍よ、龍よ！　其の一

十月末、秋の来訪も半ばに冬の気配を感じ始めるとある日曜日、先駆けの一番槍は波濤と化して現れた。

『ユニークシナリオEX「来たれ英傑、我が宿命は幾星霜を越えて」、決戦フェーズに移行します』

『クリア条件1：ユニークモンスター「天覇のジークヴルム」の撃破』

『クリア条件2：　「赤竜ドゥーレッドハウル」「緑竜ブロッケントリード」「白竜ブライレイニェゴ」「黒竜ノワルリンド」「青竜エルドランザ」の討伐』

突如として新大陸に到達したプレイヤー全員に表示されるウィンドウ。それはプレイヤーが消すよりも先にオートで閉じられ……そしてそれこそが号令であったかの如く、奴らは現れた。

「ヂヂヂヂヂヂ！！！」

「な、なんだ！？」

「蟻？　いや、白いからシロアリ？」

「いや、違うぞ……ドラゴンだ！　ちっさいドラゴンが、大量に……っ！？」

六の脚に、腹部と頭部が胸部と比べて異様に大きい、まさしく「蟻」を思わせる大量の小竜が気味の悪い鳴き声を重ね合わせながら前線拠点へと攻め込む。
大自然の緑とは明らかにミスマッチな白い津波は途切れる事がなく、プレイヤー達は突然の襲撃に戸惑いつつも武器を構えて迎撃を始める。

そんな時であった。

『成る程、確かに良い場所です……少々拓けているのは気に食わないですが……えぇ、私達の住処とするには丁度良い』

低く、されど高い。そんな矛盾した感想を抱かせる奇妙な声が響く。獣の唸り声のような低音をバックに、女性的な高音で紡がれる言葉は前線拠点を端的に評価し、そして声の主が姿を現わすのと同時に続きを紡ぐ。

『えぇ、あとは蔓延る蛆を潰すだけ……ふふふ、さぁ行くのです愛しい我が子達、蛆の巣ごと全てを蹂躙なさい！！』

それを竜と呼ぶには、あまりにも異形であった。成る程確かに蟻を思わせる小竜の「母」であると言うならば、共通点を見出せる。
だが、小竜以上の肥大化を見せる巨大な腹部にドラゴンの上半身を歪にくっつけたかのような姿はドラゴン体型というよりも、どちらかといえばケンタウロスなどの人と馬の合体した姿のように見える。
そしてなによりも目立つ腹部。十数もの脚に支えられたその背部に

は玉ねぎを彷彿とさせるシルエットの奇妙な突起がいくつか存在し、そこから無尽蔵に小竜が粘液を纏って這い出しては津波へと加わっていた。

「白竜ブライレイニェゴ……！」

誰ともなしに呟かれたその名は、果たして正解であった。
瞬間的に大量の子供を生み出す純白の「群竜（クローン）」が高らかに吠える。
それは竜災大戦、その嚆矢のようで。

「本体は一先ず後回しだ！　まずは小竜を潰せぇっ！！」

それは不特定多数に向けられた言葉ではなかったのかもしれない。
しかしその言葉を聞いた幾人かが道理を感じ取り、その流れが全体へと波及する。
無論全員が完璧に意思統一されるわけではないものの、殆どのプレイヤーが小竜の数減らしを始める。

「一番槍は貰ったぁ！！」

無論、我こそが英雄たらんとブライレイニェゴ本体へと急襲を仕掛ける者もいた。だがその一撃は白竜の背中から這い出し跳躍した小竜の一体にインターセプトされ、次の瞬間には大量の小竜に群がられその姿が消えた。

「ひぃぃ！　スプラッタかよ！！」

「範囲攻撃ぶちかますぞ！」

どこのクランかは知らない、しかし魔法職を多数抱えているのだろう一団が一斉に魔法を放つ。
この際多少のＦＦは仕方ないと割り切っているのだろう広範囲を叩く攻撃が着弾し、幾人かのプレイヤーと多数の小竜が宙を舞う。

「よし！　一体一体はそんな強くない！　削れるぞ！！」

「よしじゃないわよ！　タンクを後ろから撃つとか正気！？」

道理を無視すれば無理が出る。巻き添えを食らいかけた、あるいは食らったプレイヤーが加害者達に抗議の声をあげる。
ギスギスとした雰囲気によって混沌の様相を呈してきた戦場にその時、よく通った声が響く。

「強制ではない！　しかしこちらの指示に従う意思があるなら聞いてほしい！！」

声の発信源は黄金の剣を携え、五本の浮遊剣を従えた女。その背後に幾人かのプレイヤーを従えた女剣聖……サイガー１００が再び声を戦場に通す。

「まずは小竜の数減らしを！　最悪の場合、調査船や主要施設を破壊されるとＥＸシナリオそのものが失敗する可能性がある！！　魔法職は一旦攻撃を中止！　「黒剣」と「天ぷら騎士団」の所に集まってタイミングを合わせて欲しい！！」

プレイヤー達は現在烏合の衆としか言いようがない。強制されるこ

とを嫌うプレイヤーもいれば、何らかの指示を求めるプレイヤーもまた存在する。
恐らくこの場に現れる前に何らかの話し合いがあったのだろう。黒地に剣の意匠の旗と白地に海老天のデザインが描かれた旗が高らかに掲げられる。

「クランリーダーも可能であれば来て欲しい！　総力戦だ、他の色竜が来る前に纏まりを作りたい！！」

その言葉に大多数のプレイヤー達が動きを変える。
タンクや物理系戦闘職のプレイヤー達が前へと進み、逆に広範囲の攻撃が可能な魔法職などは背後へと下がる。
それでも決して少なくない数のプレイヤーが独断で動いてはいるものの、混沌の戦場に僅かながら統制の光が見えた。

その時だった。
破城槌としてそのまま使えそうな大木が吹き飛び、純白の小竜やブライレイニェゴとは比べ物にならないほどの「緑」の大質量が吠え猛りながら姿を現した。

『トットリなる虫はどこだぁぁぁあ！！！』

「え、は？　俺！？　っつーかブロッケントリード！？」

突然の個人指名に気の抜けた叫びが上がる中、木々を粉砕しながら

現れた巨躯が中天の陽光に照らされる。
それはまるで亀のような、あるいは山そのものが動いているかのような、ブライレイニェゴと比較しても二倍近い巨体である。

特に目を惹くのは鈍重な見た目とは裏腹に、タコやイカの触手のように蠢く数十、否数百はあるだろう茨のような触手だろう。
腹部や脚部から生えたそれらは巨体の意思に従って地面に突き立てられると、見るからに何か吸い上げていますと言わんばかりのエフェクトを発する。

そして、

『ふんっっっっ！！！』

茨触手が吸い上げたエフェクトが右前脚へと収束、まるで前脚が内側から爆ぜたかのような亀裂模様が緑白色に発光し、持ち上げられた前脚が大地を叩き据える。

「ちょ、」

「待っ」

「んなぁ！？」

「何したんだトットリィ！！」

「知らねぇーっっ！！」

爆震。まさにそう形容するしかない超絶の揺れが打撃点を中心に広範囲を揺らす。樹海から飛び出してすぐの攻撃であった為、その至

近にプレイヤーがいなかったのは幸か不幸か。
大地を緑色のエフェクトが駆け抜け、その範囲にいた全てのプレイヤー及び小竜が文字通りに吹き飛ぶ。

目測でおよそ半径五十メートルの円内にいた全ての存在が円中心に近い程加算されるダメージと共に吹き飛ぶ姿を目撃したプレイヤー達は、この時初めて「全ての色竜が集結する」という意味を理解したと言えるだろう。

「いや、無理ゲーでしょこれ……」

恐らく大多数のプレイヤーが脳裏に思い浮かべた言葉を、シャングリラ・フロンティアのシステムは嘲笑う。

――この程度で混沌とは片腹痛い。そう言わんばかりに。

『臭う、臭うぞ……子狂いの白々しい臭いがなぁ……！！』

『……老害がァ、私達の平穏を邪魔するつもりか……我が子達よ、彼奴を殺すのです！！』

敵同士が味方同士であると誰が保証したのか、子竜の群れが標的を緑竜ブロッケントリードへと変更し、緑竜もまた己以外の竜へと敵意を剥き出しに重厚な一歩を踏み出す。

「混沌過ぎる……だが、チャンスだ！　戦線を構築する！　クランリーダーは集まってくれ！！」

ユニークシナリオEX「来たれ英傑、我が宿命は幾星霜を越えて」は歪んだ形で決戦の火蓋を切った。

先駆けとして現れた「白」と「緑」が激突する中、開拓者達は動き出す。

未だ現れぬ「赤」「黒」……そして「金」が、さらなる混沌を齎すであろう確信を皆一様に抱いて。

龍よ、龍よ！　其の一（後書き）

色竜は「ドラゴン」と表記こそされますがその姿形は一般的ドラゴンのそれとはかけ離れている奴がほとんどです。むしろノワルリンドやエルドランザがドラゴンっぽい見た目してるのが珍しいのです

というのも「ドラゴン」というのはあくまでもカテゴリ名であってその本質はキノコですからね、別にトカゲってわけじゃないのです（一応広義のドラゴンっぽい部分もある）

作者の語彙力が彼等の姿形を描写しきれないので多分そのうちインベントリアに簡単な体格の描写イラストを上げます。そのうち

龍よ、龍よ！　其の二

「いやこれやっぱいいねぇ……」

戦場の渦中……ではなく、戦場を俯瞰することができる新大陸調査船の甲板上にアーサー・ペンシルゴンはいた。
大多数のプレイヤーからすれば初となるユニークシナリオＥＸ、それも超大規模のレイドバトルともなれば誰もが祭りの渦中に飛び込まんと駆けていく。
そんな中、「本命」達の到来を待って不動を選んだプレイヤーもいる。
クラン「旅狼」は後者のプレイヤー達であり、何人かの欠席と何人かの部外者を加えて戦場を睥睨していた。

「秋津茜ちゃんは分かる、サイガ妹ちゃんもまぁ分からんでもない。で、ウチの鉄砲玉はどーこで道草食ってるんですかねぇ？」

「なんか用意したものがまだ完成してないとか色々言い訳はしてたけど……」

「戦艦でも持って来るつもりなのかねぇ……」

甲板から二体の竜が巻き起こす大混乱を眺めるペンシルゴンとオイカッツォの眼差しは、遠い。まるで何かから目を背けているようで……

そんな二人に、厳密にはペンシルゴンの肩に腕を回した女が喜びを隠そうともせずに囁きかける。

「一目見て分かったわ、ふふふ……貴女が名前隠し（ノーネーム）ね？」

「カーッツォ……どうして連れてきたァ……っ！」

「同じエリア内にいる時点で宿命だから諦めようかペンスィールゴン……」

そう、アージェンアウルであった。結論から言えば、魔王（シルヴィア）からは逃げられなかった。

普段から余裕と悪意を半々で周囲に見せつけるペンシルゴンが何故ああも余裕を欠いた顔をしているのか、首をかしげるルスト、モルド、京極の三人を他所にアージェンアウルは肉食獣を思わせる笑みを浮かべ、静かに問いかける。

「で？　顔隠し（ノーフェイス）はどこなのかしら？　さっきの鉄砲玉（ヒットマン）ってのが彼なの？」

「そうだよ、奴が合流したら殴るなりなんなりお好きにどうぞ」

神速の身内売却、されど本人の姿はこの場にはなく。完全に八つ当たりのヘイトがサンラクへと積み上げられていく。

「ねぇ、ミスペンシル？　私達はここで観戦してるだけなの？」

「グイグイ来るなー……まぁいっか、私達のターゲットはあんなサブタゲ共じゃないのさ」

むしろノワルリンドを除く三体の竜には程良くプレイヤーを疲弊さ

せてほしい、とまで考えている。
流石にウェザエモンやクターニッドのように少人数で倒せる相手ではない事はペンシルゴンも承知している、故に此度の「悪巧み」の肝はジークヴルム戦に際してどれだけの味方を得ることができるかが重要であると言える。

「そもそもたった一体二体のモンスター相手に新大陸にいるプレイヤー全員がかりってどうするんだと思ってたけど、俯瞰的に見ると酷さが際立つねぇ」

やけに馴れ馴れしい謎の女プレイヤーを一先ず気にしないことにした京極が大量の白い蠢きと、一区画丸ごとを揺らし続ける緑の巨体を眺めながらシニカルに笑う。

「プレイヤー全員を相手にしても戦えるだけのスペック、て事なんだろうけどね……」

「……複数のレイド性能が組み併さって酷いことになってる」

現在下で戦っているプレイヤー達は攻撃のほぼ全てが無差別範囲攻撃と言ってもいいブロッケントリードと、無尽蔵に小竜を生み出し続けるブライレイニェゴの二体を同時に相手取っている。
どうも色竜同士が協力する気はないらしく、時折ドラゴン同士の激突も起きているが……

「こう、なんというか……」

「蹂躙される蟻」

「無双ゲーの雑魚敵」

「米研ぐ時に失敗して零した米が排水口に流される感じ」
「京極ちゃんの例えが一番よく分からなかったので罰ゲームね」
「くっ、自炊しない人にはわからないか……！！」
竜巻同士の激突に蟻が突っ込んだところで、吹き飛ばされる以上の結果を出すのは難しいと言わざるを得ない。
そもそものシチュエーションそのものに違和感はあるものの、決戦フェーズとして実装された以上はなんらかのクリアルートが存在する、筈。
現に「黒剣」などを始めとするトップクランが臨時で共同戦線を構築する事でなんとか戦線としての体を成しつつあるのが船の上から確認することができた。
「ブライレイニェゴの小竜は魔法攻撃を連打すれば対応できないこともない、って感じかな。いかんせん数が多過ぎるから魔法職は雑魚掃除から外せない」
ブライレイニェゴ本体は残存体力的にモード移行することで動くのかは不明であるが、ペンシルゴンの見立てでは小竜生産の他に何らかのアクションをする気配を感じられない。
であれば物理火力職はブロッケントリードを攻めればいいのかと言えばそうでもない。
「……見るからに何か、吸い上げてる？」
「しかも地面が沼みたいになってない？　あぁっ、タンクが転んで

踏み……あ」

「……地面が踏み固められた」

十数人規模で生き埋めにされたプレイヤー達が死亡エフェクトだけを地表に出す。どうやら埋まれば即死亡であるらしい。

唯一の救いは即死判定が付与されるのは完全に埋まった者のみであり、腰下辺りまでならば身動きが取れなくなるだけのようだ。

「人柱達が散っていくのを見るのってなんか楽しくない？」

「できればもっと効率よく相手の情報を暴いてほしい」

「あぁ、順番守って死ねと」

結論から言えば、「旅狼」の戦闘は秋津茜とノワルリンド、及びジークヴルムの出現が確認されない限り始まらないわけで。

それ故にリスポンしたプレイヤー達から奇妙なものを見る目で見られながらも彼らは待機するしかないのだった。

とはいえ、それはあくまでも「本番」を想定する面々に限った話である。

「ふーん……顔隠しもそのタイミングで登場ってことかしら。じゃあ私はちょっと遊んでくるワ」

ぐるんぐるんと腕を回し、アージェンアウルが船の縁に足をかける。

ペンシルゴンが声をかけて止める暇もなく、その身は船の外へと躍り出る。

「レッツゴー！」

「は？」

オイカッツォの首根っこを掴んで。

「ちょっ、だぁぁぁぁぁあああ！！？」

「あー、行っちゃった……ま、いっか。どうせ赤やらなんやらもそのうち来るだろうし……はい、全員注目！！」

ぱん、と手を叩きペンシルゴンは振り返る。

「各自、自由行動！！」

「アバウトだなぁ」

「まー、なるべく余力は残す感じで。ウチの核弾頭二人が何を持ち込むか分かったもんじゃないからね……とりあえず、秋津茜ちゃんが来たら一旦ここに集合ってことで。サンラク君は……まぁなんか適当に目立つだろうから見つけ次第捕獲の方針でヨロシク」

とはいえ、この場で突っ立っているだけならゲームをしている意味がない。ある者は好戦的な笑みを浮かべ、またある者は暇つぶしには丁度いいかと言わんばかりに、それぞれが散って行ったのをただ一人甲板の上で見送ったペンシルゴンは一つ息を吐き出すと、にんまりと笑みを浮かべて残った部外者達へと笑いかける。

「さて、暇になっちゃったし……一杯やっとく？」

十四人の部外者達はただ立っている。まるで己達を動かすならば、提案ではなくただ命じよと言わんばかりに。

龍よ、龍よ！　其の二（後書き）

ブロッケントリードは地面からマナを吸い上げ、自身を回復、強化するだけではなく地面が枯渇し砂地獄化するまでマナを吸い上げた後に無理やり魔力を戻して急速に地面を固めることができるぞ！

要するに獄砂埋葬

龍よ、龍よ！　其の三

「こんばんは、状況は？」

「カローシスか、レイドにしても強すぎる……恐らくパラメータが決戦フェーズ用に調整されている。モーションに関しては手空きの奴に聞いてくれ」

「ん、わかった……例のお客様は？」

「向こうからも連絡はない、何か問題が起きた可能性もあるが単純に色竜の出現が順番という可能性もある」

「青竜ってのが予想通り海棲だったらと考えるとぞっとしないね……よし。老鬼さん、前線指揮を頼めますか？」

「後方指揮官にも飽きたところだ、任せろ」

ある意味では彼の戦場から、普段からは考えられないほどの速さで帰還したカローシスＵＱがログインしたことで午後十時軍もまた本格的に動き出す。

代理としてクランリーダー達の作戦本部に来ていた老鬼が前線へと戻り、それと入れ替わるようにして別のプレイヤーが転がり込んでくる。

「やべぇ、やべーぞ！！」

「どうした！」

「赤だ！　赤竜……あー、なんだっけ？」
「ドレッドノート？」
「いや違う、ドゥームズデイホールだろ」
「ボケんなツッコんじゃうだろ、ドゥーレッドハウルだ……って、来たのか！？」
「そうそれ！　あの野郎、樹海の入り口を焼き払ってご登場しやがった！」
しょうもない掛け合いに興じていたプレイヤー達も、エリアの形を広範囲に変えて登場した新たな赤竜に緊張が走る。
「森から逃げて来たモンスターがこっちに来てやべー、どうする！？」
「焼け野原か？　だったらバトルフィールドそのものが拡張されたと考えていいだろう、押し込めないか？」
「いや、ブロッケントリードは言わずもがなだがブライレイニェゴも大概動かないタイプだぞ」
「いや、ここはプレイヤーの何割かを遠回りさせて囲もう」
クランリーダーと言えど、その本質は剣を振り魔法を行使する開拓者。一時間ごとに集まって会議を行うというアバウトな取り決めこそ交わされたが、誰も彼も前線で戦いたいとウズウズしている。

トントン拍子で作戦が決定されると、各自プレイヤーは自身のクランへと作戦を通達する為に駆けていく。
時刻は午後九時ジャスト。それの出現はまるで時間が決まっていたかのようで、その実は「出現した色竜の数が三体以上」をトリガーとしていた。
『おぉ、人よ……英傑よ、今宵こそがその輝きを示す日と知れ』
叫んでいるわけではない、ただシステム的に他の全ての音声よりも優先されたその声は前線拠点全域にいる全てのプレイヤーに等しく響く。
声の主は天、月光が喋る……否、黄金の月光を背に黄金の龍が静かに語る。
『我が名はジークヴルム、神代の守護者にして世界を灼くモノ。来たる災禍にて英傑を待つ者……おぉ英傑よ示せ、示せ。煌めくが如き英傑の行いを、戦禍においてただ一つの輝きを！！』
この場にいる誰もが、色竜達すらもが天を見上げてその姿を見る。
四枚の翼を輝かせ、左に二本と右に三本と不自然な数の角を持つ輝ける黄金の龍王。遠く、高い空にて下界の全てを見下ろすジークヴルムの翼が輝きを増す。
『我が律はこの地を覆い、万象を圧し潰す。英傑に喝采を、愚者に罰を……これ即ち、龍法律（ノトーリアス）……！！』
まるで翼がその大きさを更に広げたかのように、天上のジークヴル

ムを発生源として広がった黄金の光が薄いドームのような形となって前線拠点を、のみならず焼けた樹海や海すらをも含めた広大な範囲を覆っていく。

『悪性増大重力圏（バッド・インクリース・グラビティ）！！』

瞬間、黄金のドーム内にいた全てのプレイヤー及びＮＰＣが真上から潰されるかのような重圧を僅かな間だけ感じ……ただそれだけだった。

「なんだ！　何が起きた！？」

「バフか！　デバフか！？」

「とりあえずモーションに影響するようなものじゃないっぽいが……」

ユニークモンスターによる謎の行動、それは警戒するに十分な理由であり、戦いの中で小竜を吹き飛ばしていたアージェンアウルもまた、何が起きたのかを調べ……ステータス欄にそれを見つけた。

「特殊状態「Ｂ．Ｉ．Ｇ」……？」

そんな風に気を取られていたせいか、プレイヤーの困惑など知ったことではないと言わんばかりに小竜達が立ち尽くす二人のプレイヤーへと襲いかかる。

「げっ」

「危ない！」

自身にも襲い掛かってきた小竜を軽く処理しつつもアージェンアウルは見た。結果としてはどちら共に小竜に群がられて死んだものの……片方は相方を盾にしようと動き、もう片方は相方を守る為に前へ出ようとしたのを。

だが、問題はここからであった。

「……カウントダウン？」

小竜が群がった為に具体的にどこで二人がデスしたのかは分からないが、おおよそ死んだであろう場所に二つのアイコンが出現しているのだ。

一つは１８０から一秒ごとに一つずつカウントを減らしていくアイコン。そしてもう一つは下向きの矢印と１５のカウントダウンを兼ねたアイコン。

「……まさか」

全米一のミーティアス使い、即ち全米で最もヒロイックなロールプレイをしているアージェンアウルだからこそ思い至ったとある予感は、１５カウントのアイコンがゼロを示した瞬間その場に先程の二人の内、相方を庇った方がリスポンしたことで確信に至る。

「ロールプレイ！！」

「は、なんて？」

「ケィッツォ！　ロールプレイよ！　これ、ヒロイックじゃないア

クションをするとデスペナルティが加算されるのよ！！」
数秒ほど怪訝そうにその言葉を噛み砕いていたオイカッツォであったが、その言葉が意味する状況を理解したのか顔を強張らせてジークヴルムを見上げる。
「マジかジークヴルム……！　レベル制限や強制性転換以上はないと思ってたけど、そう来るか……！！」
ロールプレイの強制、それはある意味ではパラメータの変化以上に厄介な制限である。
恐らく減点条件はジークヴルムの言葉からして英雄的ではない行為が該当する。だがタンクを盾にするだけでデバフが入るのであるならば、大混乱が起きるのはまず間違いない。
「賢く生きず、愚かに死ねってか……！！」
安定とは英雄的という概念とは真逆と言っていい。危機のない英雄譚に人は憧れない、少なくともジークヴルムはそうではない。だが英雄的な効果であれば逆になんらかの恩恵も付与されると見える。
しかし、しかしだ。
自分を殺した死因がいる場所で十五秒後にリスポンしたとしてどうしろと言うのだろうか。座標のリセットは何も冒険のやり直しだけを突きつけるわけではない。
「これはまずいぞ、悪いアージェンアウル。俺はちょっとクランメンバーと合流して来る！！」

「私はもうちょっと遊んでよっかなー……あら？」
ふと、アージェンアウルは空を見上げた。ジークヴルムを見たのではない、全米一のゲーマーとしてのフルダイブＶＲでの「直感」にも似た何かが、月と重なった黄金ではなく、昏い暗い夜闇に視線を向けさせた。

『――――ゥゥウ……』

満点の星空、その一部分が真っ黒に切り取られている。違う、それは動いていた。高く、速く、月まで届けと言わんばかりに。

そしてそれは、叫んでいた――――！

『ジークヴルムゥゥゥウウウウ！！』

『ぬぉお！？』

次の瞬間、限界まで加速した黒竜ノワルリンドの全身全霊のタックルが黄金に巨大質量として叩きつけられた。

そして同時刻。地上にて森人族、魚人族に続く第三[四]の種族が現れた。

「え、私が号令ですか？　えーと……じゃあ、よーいドン！！」

スカーフを、腰帯を、鉢巻を。着ける場所こそ違えど、皆一様に黒い布を巻いた蜥蜴のごとき人型と竜のごとき人型が戦場へと躍り出る。

その先頭に、狐面の少女を戴いて。

龍よ、龍よ！　其の三（後書き）

「黒竜忍軍」、それは秋津茜の説得でノワルリンドすら把握していないうちになんかいきなり自身への好感度が上がった竜人族やなんか知らんうちにいた蜥蜴人族を中心として結成された謎の集団である！

なにせ本人ならぬ本竜が一切関知していないうちに結成された上に活動方針が「自由に色々やります」なので何をするのか全く分からないのだ！！

龍よ、龍よ！　其の四（前書き）

かけつけ一杯、おかわり二杯。不定期だから仕方ない

「はいヨシ来たぁ！　んでもってサンラク君ドベ決定！」

今ここに全ての色竜が集い、天覇のジークヴルムもまた現れた。

新大陸調査船の甲板で歓声を上げたペンシルゴンはインベントリアを操作すると、野球ボールサイズのガラス球を取り出してすぐさまそれを真上へと投げる。

ガラス球はアーサー・ペンシルゴンのＳＴＲとＴＥＣを参照して上へ上へと飛んでいき……加速上昇の限界高度に到達した瞬間、パンと弾けて空中に緑色の炎を吐き出す。

【旅狼（身内）】に向けたものではない、これは協力者達へと向けたメッセージである。

即ち、

「待ち人来たれりってね、さぁさぁ黄金墜としを始めよう――――！！」

「ペンシルゴン！」

「やぁカッツォ君！　さぁ楽しいパーティーの時間だよ！　ほらほらパレードの列に並んで！」

「うーわいい顔してるわ……じゃなくて、どうもさっきの結界はロールプレイに判定を強いるタイプの可能性が高い！」

「いいじゃんいいじゃん！　悪も突き抜ければダークヒーローさ！！」

「あっやばい！　魔王モード入っちゃってるよこいつ！　サンラクはどこだよ！　このままじゃこいつ盛大に自爆しかねないんですけどー！？」

喜悦と、待望と、高揚と、その他諸々の喜びの感情を全て一つの笑顔に収束させたかのような笑みを浮かべ、アーサー・ペンシルゴンは突き進む。
いつしかゼニス・ゲバラと超農民が合流し、その総数がおよそ三倍に膨れ上がる。

「ひゃーすげー、なんか楽しくなって来たねぇゼニちゃん！」

「まぁ否定はしねーけどさ……やっぱこれ魔王側だよな！？　一応合法的に商売してーんだけど！」

「魔王印の新鮮野菜！　ゼニちゃんあれやろーぜ！　ほら、「私が作りました」ってやつ！　俺アヘ顔ダブルピースするわ！！」

「お前自分のアヘ顔スクショ流通に乗せるんか……」

「いいね、そーゆーの嫌いじゃないぜべいべー！」

新大陸調査船から出た五十人規模の一団が進む、進む、進む。目的地は装骨魔城スカルアヅチ、反黒竜派の拠点と言うべき……言うなれば、敵の本拠地である。

「あっはっは！　どけどけー！」

「うおっ！？　なんだァ？！」

物量とは、生物が最も簡単に作ることができる暴力の名前である。結束しているわけでもないプレイヤーなど重武装の騎士四十二名、無言の気迫の前には障害物にすらならない。

「よっしゃたのもー！！」

テンションが最高潮一歩手前まで上がったペンシルゴンが扉を蹴り開け、その姿に中にいた作戦会議中のプレイヤー達が皆一様に何事かと振り返る。
訂正、サイガー１００だけは顔に手を当てて天井を仰いでいた。

「貴女は……」

「やぁどうもこんばんは笑みリアちゃぁん……お噂はかねがね、一生産職が城まで建てるんだから凄いよねぇ……！」

尋常ならざる様子に、ノワルリンド出現の報を受け今まさに動き出さんとしていた笑みリアは警戒の色を出しながら眉をひそめる。

「何の用ですか？　私達はこれから色竜の撃破の為に……」

「クラン【旅狼】はクリア条件が1、天覇のジークヴルムの撃破を狙うよ。それも黒竜ノワルリンドを生存させた状態で……ね」

その瞬間、いっそ鮮やかとも言える程一瞬で笑みリアの纏う気配が変わった。警戒から敵意へ、ただの一言が笑みリアの認識上の【旅狼】を敵対存在へとカテゴライズした。

とはいえ、シャングリラ・フロンティアはかつてのＰＫ問題からレッドネーム・ペナルティが重く設定されている。
如何に敵対プレイヤーであろうと、システム上の処理が通常通りである以上はこの場でペンシルゴンを害するメリットはほぼ無いと……

「あぁそうだ、対ジークヴルム同盟のメンバーを紹介するよ……んふふふ、【黒剣】のサイガー１００ちゃんと【午後十時軍】のカローシスＵＱ君です」

「……ははは、いや申し訳ない。午後十時軍はこっちが先約でね」

「黙っていたことは、謝罪する」

成る程、といやに冷静な頭で笑みリアは考える。どうやら自分の知らぬ内に対抗勢力は静かにその大きさを増していたらしい。

だが、実のところを言えば笑みリアはこうなることを半分予想してもいた。
元よりプレイヤー全ての意思統一を自分ができるとは思っていない。
それに笑みリアにとってのゴールはあくまでもノワルリンドの討伐、極論を言えばノワルリンドを倒した後ならジークヴルムを倒す方向性にシフトしてもいいくらいだ。

だがノワルリンドの生存を掲げられた以上、彼らとの共闘は不可能となった。
どうやら反応を見る限りでは天ぷら騎士団や他のクランは【旅狼】の同盟とやらには含まれていないらしい。

（味方トップクランの数はそこまで重要ではない、プレイヤー側の

大多数は無所属か中堅クラン。となればあとはどれだけの支持を集められるか……）

状況は不利と言っていいだろう。何せ相手はあのアーサー・ペンシルゴンだ、このゲームで初めてユニークモンスターを撃破したプレイヤーであり、その為にＰＫクラン「阿修羅会」を囮に使い潰したプレイヤー。

所詮笑みリアを突き動かすものは個人的な怨恨でしかなく、それはペンシルゴンのように周囲のプレイヤーをも巻き込むだけの火力を持たない。

「………」

状況は劣勢、このままでは大勢が対しに流れるのも時間の問題……その時だった。

「わっ」

「何だ？」

スカルアヅチが揺れた。

まるで何かがぶつかったかのように……そんなことを考えていると、笑みリア達のいるエントランスに笑みリアのリアルフレンドでもあるプレイヤーが非常に気まずそうな顔で入ってきた。

彼女は鎧騎士達の隙間を縫うようにして笑みリアの前へと立つと、逡巡しながらも口を開く。

「いや邪魔だな君達！　よいしょっと、あー……笑みリアちゃん？」

「何か起きましたか？」

「あー……そのぉ……落ち着いて聞いてね？」

三秒ほど沈黙。

「その、ジークヴルムにジャイアントスイングされて吹っ飛ばされたノワルリンドがスカルアヅチに激突しまして……その、天守閣が半壊したっぽいね」

プレイヤー「笑みリア」はシャンフロユーザー達の間ではちょっとした有名人である。

それはほぼプレイヤー達の力だけで城を建てたという偉業に基づくものであり……もう一つ、

ノワルリンドを倒す為に要塞を作った女としての偉業に基づくものでもある。

そしてこの瞬間、「またか」という氷のように冷えた思考が葛藤の全てを塗りつぶす。

「……上等です」

「お？」

「構いません、何百人がジークヴルムを狙おうと、それより先にノワルリンドを倒せばいいだけのこと……ええ、えぇ。その為のスカルアヅチ、その為のこれまでなんですから……」

ただ静かに、ペンシルゴンが言えた義理ではないが結構な煽りを受けたにも関わらず、あまりに静かな声音で笑みリアは呟く。

「構いません、えぇ構いませんとも。上等です、えぇ、えぇ」

表情筋は笑みの形を作っている、にも関わらずその目はあまりに無機質で。それは心の底から楽しげなペンシルゴンとは水と油、S極とN極、決して混ざることのない全く真逆の性質を帯びて。

「ノワルリンドが生きて明日の朝日を見ることはないと、宣言させてもらいましょう」

「ジークヴルムは月と共に沈むのさ」

ただそれだけを告げて、狼の首魁と骨城の主人は決定的に決別した。

龍よ、龍よ！　其の四（後書き）

Q．笑みリアさん無理ゲーでは？

A．スカルアヅチがあるのでどっこいどっこい

龍よ、龍よ！　其の五

天覇のジークヴルムの登場、ノワルリンドの撃墜、スカルアヅチの天守閣半壊……文字として羅列すれば大きなイベントの数々も、現在進行形で進み続ける竜災大戦の中では激流に呑まれる枝葉の如く流れ消えていく。

『チィッ、タイミングが早すぎたか……だがまぁいい、まずはてめーだ老いぼれェ！！』

『ぐぉあぁあ！？』

赤竜ドゥーレッドハウル。赤いドラゴンという作品が作品なら主役級の椅子が与えられても不思議ではないそのドラゴンは、竜と呼ぶにはあまりに異質な姿をしていた。

最も近い例えを挙げるなら……「アメンボ」、もしくは「ドローン」だろうか。少なくとも爬虫類的な頭部がなければまずシルエットでこれがドラゴンであると気づける者はいないだろう。

「なんだあれ……ジェット噴射？」

「いや、っつーか手足長っ」

「くっ、ふふっ、やばい、なんか見てたらツボに……っ！」

まず何より目立つのは、やはりその手足だ。

ブライレイニェゴは少々特殊な形状ではあるが、色竜達の形状は基

本的に獣の骨格に近い。
だがドゥーレッドハウルのそれは肩から肘、肘から手首、そして手首から指の先に至るまでが異様に長く、手足を折りたたんだ姿は手裏剣か何かが飛んでいるようにしか見えず、あまつさえ地に足つぃてたった姿は竜の首と尻尾をくっつけたアメンボにしか見えない。
そして次に目を引くのは、身体の至る所から生えた突起だ。
それらは一つ一つが炎を吐き出す推進機関として機能しているのか、ドゥーレッドハウルは腹の下に生えた四つの突起で旋回し、背中と後ろ足そして肩から生えた突起で加速することでなんとも形容しがたい飛行を可能としていた。
総じてドラゴンと呼ぶのに多大な抵抗が生じる、奇天烈な姿をしたドラゴン（？）であるのだが……
奇妙な見た目であれば弱いかと言えばそういうわけではなく。
「ふっざ、ふざけんなあのアメンボヤロー！！」
『ぎゃははははは！　雑魚どもめ、この俺様に刃向かうにしちゃあ弱すぎんだよ！！』
ドゥーレッドハウルの戦法は単純明快、その異様に長い手足で近距離職の攻撃が届かない位置に胴体を伸ばしつつ、腹部の突起から炎を噴き出して下にいる者を軒並み焼いているだけだ。
「あああうっぜぇぇぇ！！」

「いや待て逸るな！　あんなクソ挙動がいつまでも続くかよ！　隙を狙って袋叩きにしろ！！」

唯一近距離攻撃が当たる手足の先端は異様に硬く、また当然のように熱への耐性を備えている。言うなれば戦場へと無差別に降り注ぐ火炎のシャワー、さらに言えばひたすら小物臭いナレーション付きである。

そして、この場における脅威はドゥーレッドハウルだけではない。

『よくもぉぉぉ……許さんぞぉぉぉぉおお！！』

激昂のブロッケントリードが吼え、その巨体を後脚だけで支えて上半身を持ち上げる。
そうして、重力に従ってその巨躯を支える二つの前脚を地面に叩きつけた……瞬間、

『崩峯災砕（ほうほうさいさい）！！！』

誇張でもなんでもなく、前線拠点の半ばからを隔てるように「山」が生み出された。

『ぶげぅ！？』

生物的なそれとは明確に異なる飛行方法で飛んでいたドゥーレッドハウルを真下から屹立した岩塊が捉える。
しかしその余波だけでもプレイヤーの体力を削り切るには相応の火力を内包しており、ブライレイニェゴの小竜に混じって何人かのプレイヤーが地面に叩きつけられると同時に死亡エフェクトを爆ぜるように撒き散らす。

「く……逃げ遅れてもペナルティ増加か……っ！」

「ダルい！　コレダルいんだけど！！」

「ジークヴルムがそもそも降りて来ねーんだからどうしようもないんだよなぁ……なんだろう、条件達成で降りてくるんかな？」

死を前提としてゾンビアタックをしようにもジークヴルムの「龍法律(ノトーリアス)」が邪魔、命を大事に戦おうにも四方八方の地獄絵図。

そんな中、ぽつりと誰かが呟いた。

「これ、色竜同士で潰し合わせるのが正解なんじゃ……」

その一言はある種の真理であり……そして同時に、ある種の敗北宣言でもあった。

戦術として脅威同士を潰し合わせる事は決して間違いではない。ただ、今この場においてその選択肢を選んでしまう事は二重の意味で悪手であった。

まず単純にモチベーションの低下、これが負けイベントであるという疑惑がプレイヤーに波及した時点でプレイヤー全体の戦意が下がった事実は否めない。

そしてなにより……

『ぃかん、ぃかんなぁ……強大な苦難を叡智で突破する事は悪くない。だがなァ、それは逃避と言うのだ……我が重力圏は臆病風を許容しなぃ……！』

英雄譚に夢を見る英雄譚のボスじみた龍王がそれを許さないのだから。

「B．I．G．2……！？」

「おぃっ！　やばいぞ！　リスポン後に状態異常が付与されるようになったぞ！」

「嘘だろ悪化すんの！？」

死へのペナルティ、死が終了ではなく過程であるからこそジークヴルムの重力圏は開拓者の来世に罰を課す。

だが、龍法律はただの理不尽ではなぃ。
それは黄金の永きに渡る願いの結晶、人よ英雄たれと願うが故の力。
であれば彼は待ってぃた。

勇気ある人を。

不屈の闘志を持つものを。

己のみならず周りをも奮起させる偉大な光を。

「お嬢！　ヤバイ！　これ、ヤバイ！」

「そうですねオーロンさん！　でも大丈夫！　誰かが困ったら助けて、自分が困ったら誰かに助けてもらうんです！　だから、困ったら遠慮なく頼ってください！！」

「秋津茜殿ォ！　音信不通からエムルなどより話は聞いてたで御座るが、カッ飛ばし過ぎでは御座らんか！！」

「あっ！　シークルゥさん！！　えへへ、お手紙とかも出せませんし……ごめんなさいっ！」

「む、そんなあっさりと謝罪されるとは……ぬぅ！？　ええい不埒な小竜め！　【タケミカヅチ】！！」

あるところでは竜人と蜥蜴人を連れ、刀を振るう兎と共に跳ねるように戦う忍者の少女が。

「ハーイエブリワン！　これからちょっとブロッケントリードの顎をアッパーしてこようと思うんだけど、一緒に来てくれる人はいないかしら？　ジャパニーズ……そう！　ツレショーン！！」

全身を噛まれ、切り裂かれ、打ち据えられて尚倒れず。ここらで一旦リフレッシュと死を恐れる事なく緑竜への突貫を提案する女拳士。

「最終目標こそ違えているが、過程は同じ……指示の共有は構わんだろう？」

「えぇ、ノワルリンドと戦う上でも他の竜は邪魔ですから」

「よし……遠距離火力持ちはドゥーレッドハウルを叩き落とせ！　マッシヴさん、落ちて来たところに一撃をお願いできますか？」

「えぇ、任せて？　0(レイ)ちゃんからホルダー称号を獲っちゃうくらい頑張っちゃおうかしら、おほほ」

「頼もしい限りで……！　よし、私も前へ出る！！　ト……じゃない、ペンシルゴン！　何をするにせよお前達も他の色竜撃破に貢献しろ！」

「っつーか君の妹ちゃんが来ないんですけどー？　やれやれ……」

満を持してと言わんばかりに聖剣が、聖槍が、常人が扱えるとは思えぬ鈍重な鈍大剣（鈍器）が戦場で振るわれる。

英雄とは、何をもってそう呼ばれるのか。
結局のところ、それは何を成したのかという一点に集約される。黄金の重力圏はそれをこそ人に問う。
人よ、死をも通過点とするならばこの程度で足を止めるはずなかろう？――と。

龍よ、龍よ！　其の五（後書き）

アメンボみたいな手足を折り畳んで乳首からジェット噴射して宙を
滑るように飛ぶ様は完全に変態のそれ
ドゥーレッドハウル……なんて奴だ

龍よ、龍よ！　其の六

現時点で、戦場は白竜、緑竜、赤竜の三つに分かれ、混沌を極めていた。

ジークヴルムは龍法律を張ったきり降りてくる事はなく、ジークヴルムしか狙わないノワルリンドもまた現時点では脅威にカウントされない。

であれば、まず優先して対処すべきはいずれの竜か。

無尽蔵に小竜を生産し続けるブライレイニェゴか？

大地からマナを吸い上げ、地形を歪める攻撃を放つブロッケントリードか？

否、否である。

人というものは時に合理を捨てて感情を優先する。そしてその感情こそが、時に合理をも超えた結果を出すのだ。

即ち

「「「あのクソ赤竜を墜とせぇぇぇ！！！」」」

単純に「性格がウザい」という一点において、最優先で狙われたのは赤竜ドゥーレッドハウルであった。

「魔法撃てぇ！！」

「外れた！　ホバーうっぜぇ！」

「あの脚に攻撃は通じないのか！？」

「少なくとも刺突は相性最悪よ！　下手すればこっちが折れるわ！」

「斬撃も微妙、刺突は最悪……打撃は！　打撃はどうだ！？」

「あら、じゃあ私の出番かしら？」

「おっしゃマッダイさん！　マッダイさんが来てくれたぞ！　脳筋の星！！　ＳＴＲバッファー集まれ！！」

「というか、【黒剣】……！　前線に上がって来たの！？」

「そういう事だ……！　動きを止める、行けるか草餅！！」

「あんまり期待はしないで欲しいけど了解……！！」

錚々たる一団、かつて【黒狼】と名乗っていた……今は【黒剣】の旗を掲げる開拓者達が動き出す。

先頭に立つサイガー１００が魔法詠唱を開始すると同時、周囲から集まって来た他者強化の魔法を持つプレイヤーが筋骨隆々の重戦士

へと次々に魔法を付与していく。
そして最後に、黄金の輝きを放つ弓を構えた男がギリギリと天に鏃を向けて弦を引き絞る。どうやら弓を引きながらもスキルを発動しているようで、強化の嵐となりつつあるマッシブダイナマイト程ではないがそれでもいくつかのエフェクトが男の身体を包み込む。
「最近は動き回る的にも当てる練習をしていてな……【バイオレンス・サンダー】！！！」
かつては冥王の盾に喰らい尽くされた暴虐の雷。その最大の特徴は座標指定をプレイヤーの視界に依存している事、そして……
…………発射点が上空である事。
『あ？　なん……グゴァ！！？』
如何にジェット推進によるホバー移動で空中を機動するにせよ、認識外からの雷光を不意打ちで避けられるほどドゥーレッドハウルの体躯は俊敏ではなかった。
一瞬で獣の形を取った雷光がドゥーレッドハウルの横っ面に着弾し、赤い体躯が空中で硬直する。
「叩き込め！！」
「ご了解！　頼むぞフェイルノート！！」
その男、名を草餅と言う。
クラン【黒剣】のサブリーダーであり、かつて【黒狼】であったクランの創設にも関わる最初期メンバーたる彼はもう一つ、特筆すべ

き事がある。

聖弓フェイルノート。剣、槍、槌、杖に続く五つの勇者武器の一つ。通常弓と魔法弓、二つの弓種を使い分け時に組み合わせることすら可能な聖弓より放たれた矢は、まるで矢が鎧を纏うかのように黄金の魔力に包まれている。

下から上へと昇る矢が減速した瞬間、矢を包む魔力が弾けて芯となっていた実体矢を再加速させる。

「ジェット系を手っ取り早く堕とすならやっぱ噴射口に何か突っ込むのが楽だわな」

聖弓フェイルノートの能力によって威力が増した「仕掛け鏃」が起動する。

矢という消耗品でありながらゲーム開始直後プレイヤーの財布程度なら一瞬ですっからかんにしてしまうその鏃は、命中すると……

『グォァアアア！！？』

爆発する。

人間で言えば長時間正座していた脚にローキックを食らったようなもので。バランスを崩したドゥーレッドハウルの巨体がガクンと落ち、制御を失ったのかそのまま地面へと叩きつけられる。

「いっけぇマッダイさん！」

「うふふ、年甲斐もなくはしゃいじゃうわね……さぁ、行くわよぉ……「ハーキュリー・ブラスター」！！」

不特定多数からの莫大なバフと、己の全てを筋肉に捧げた開拓者の鉄鞭、レベル上限を解放した三桁スキルによるＳＴＲ参照の極大打撃。
ゴシャアッ！！！　ともゴボォン！！！！とも言えぬ凄まじい音がドゥーレッドハウルの胸部を叩き据え、その巨体が一瞬ではあるが確かに再び浮き上がった。
異形と言えどドラゴン、生物を鈍器で叩いたとは思えないその音は直接食らったわけではない周囲のプレイヤー達ですら思わずびくりと震えてしまうほどの圧を放ち。

「……残念、【最大火力】は獲れなかったわねぇ」

『オ、ゴカぁ……っ！？』

ドゥーレッドハウルの全身が硬直し、明らかに無視できぬダメージを受けたことは誰の目から見ても明らかであった。

「畳み掛けろっっ！！」

サイガー１００が裂帛の気合を込めた号令を叫ぶ。言われずともともと言わんばかりに周囲のプレイヤー達は各々の武器を構えて悶絶するドゥーレッドハウルへと殺到する。

「ここで決める必要はない！　とりあえず攻撃を叩き込んだら離脱しろ！　復帰攻撃の可能性を警戒！！」

どうもシステム的には「レイドモンスターではない」らしい色竜ではあるが、残存体力をトリガーとする特殊行動が無いという保証にはならない。
ピンキリではあるものの、新大陸まで進出したプレイヤーは皆ある

程度のプレイヤースキルを備えている。

『ぐ、ぉ……の、』

「全員退けーっ！！」

「俺はあえて残るぜ！　俺の屍から奴の情報を集めてくれーっ！」

「ようし逝ってこい！」

「遺影(スクショ)なら任せなーっ！」

『こん、の……虫どもがぁぁぁぁああ！！』

「お゛ごマっ！？」

「ちょっ」

「独楽(コマ)かよ！？」

全身の突起から炎を噴き出し、誰かの悲鳴通り独楽のような挙動で暴れ始めたドゥーレッドハウルがプレイヤーを幾人も吹き飛ばして行く。

しかしながら直前まで果敢に戦っていたのが功を奏したのか、あるいはマズかったたか、至る所に下向きの矢印アイコンが表示される。

「マッシブさん！　狙われてるのは貴女だ！　リスポンアイコンから距離を離して！！」

「あらあら困ったわね……私、鈍足なのは知ってるでしょう？」

マッシブダイナマイト、パラメータのほとんどをＳＴＲとＶＩＴに注ぎ込んだその身は極端なビルドの宿命と言うべきか短所もまた顕著だ。
踏ん張りと膂力は他に類を見ないほどの強さを誇る戦士は、代償に速度と体力が極端に低い。
カスダメージであればＶＩＴでほぼゼロにまで軽減できるが、大質量に撥ね飛ばされたならばＨＰの全損は免れない。

であれば、打たれ弱い大砲に必要なものは、敵より砲を守る盾に他ならない。

「タンク一号参上！」

「二号！」

「時間がないので以下略！　ＳＦ－Ｚｏｏからきました！」

「ごめんね！　五号の飼ってる犬が散歩に行きたいって言うから！」

「夜の散歩が好きなゴールデンレトリバーなんだうちの子！」

斜行陣に並ぶ五人のプレイヤー、皆一様に過剰とも言える重武装に見るからに鈍重な盾を構えて。
そして完全に息のあったタイミングで発動したヘイト奪取のスキルが回転するドゥーレッドハウルの挙動をマッシブダイナマイトから逸らす。

「「「「ファランクス！！」」」」

同スキルを同時発動する程にアーマー値が増加する防御スキルが発動し、五人の盾とドゥーレッドハウルが真正面から激突する。

僅かな拮抗……そしてパワーバランスが傾く。

連続して発動されたカウンタースキルによって自身の運動エネルギーを跳ね返されたドゥーレッドハウルの身体が勢いよくひっくり返る。

『おぐぁ！？』

「うっそだろ止めたぞあいつら！」

「流石動物園のタンク衆……安心感が三倍くらい違う」

「だってあいつら、カウンタースキル以外で攻撃スキルほとんど持ってないいんじゃなかったか」

「タンクの鑑かよ」

構成員の殆どが後衛というピーキーなクランの中で、ヘイトを一手に引き受けるタンク五人衆はこの場におけるマッシブダイナマイトの護衛としては最上級と言っていいだろう。

まるでボールをパス回しするかのようにドゥーレッドハウルを釘付ける最良の盾達に守られて対赤竜戦は加速する。

そして、混沌とした戦場の中で頭一つ抜け出した戦局の一つが竜災の渦をさらにかき回すことになる。

「流石は筋肉マダム……タンクにボディガードされたらそりゃ手がつけられなくなるってねぇ」

「あらペンシル、おはよう」

「頭噛まれてますよアージェンアウルちゃんさん？」

「あぁ、このくらいへっちゃらよ。力こそ正義！！」

ぐしゃり、と握力のみで引き剥がされた小竜が地面に叩きつけられ、踏み潰される。アージェンアウルの頭部からは割とシャレにならない量のダメージエフェクトが出ていたが、それもすぐにリジェネの回復で消えていく。

その様子を引いた目で見ていたペンシルゴンであったが、気を取り直して背後の騎士達へとハンドサインで指示を出す。

「で？　さっきから気になってたけど後ろのは何？　プレイヤーって感じしないけど」

「ふふふ……よくぞ聞いてくれたね、まぁ今からドカンと面白いものを見せてあげるよ……！」

にまり、と笑みを浮かべたペンシルゴンはくるりと振り返ると、鋭い口調で騎士達へと言い放つ。

「マンディーズ重装歩兵団、全員武器構えっ！！」

「「「イェァアアアアアア！！！」」」

「わっ」

これまで沈黙を貫き通していた騎士達が突如、随分とご機嫌な叫びを上げる。

それが合図であったかのように兜で隠されていた茎と葉の部分がぴょこんと飛び出し、十四人の騎士……イムロン印の武器防具で武装したパワー型ヒューマンドラゴラが一斉に武器を構える。

「おーいいねー、こーゆーの嫌いじゃないぜ。マンディーズ弓兵団！　弓構えろーい！！」

「あ、俺もやる感じ？　あー、マンディーズ工作兵団、全員準備しろ！」

さらに超農民の合図で弓と矢を装備した比較的細身のヒューマンドラゴラが、ゼニス・ゲバラの合図で比較的小柄なヒューマンドラゴラが一斉に動き出す。

「なにこれ？」

「ふふふ、銭ゲバ農民ブランドがこの秋お送りするヒューマンドラゴラシリーズ！　所謂デモンストレーションってやつかなぁ！！」

ヒューマンドラゴラは征服人形（コンキスタ・ドール）同様にプレイヤーが好き勝手にカスタマイズ可能なシステムだ。だが一人につき一体しか契約できない征服人形とは異なり、ヒューマンドラゴラにはその制限がない。

故に、一人のプレイヤーが結成可能なパーティの上限数十五人にな

るまでヒューマンドラゴラを連れ回す、なんて事も可能なのだ。

とはいえ、無論デメリットも存在する。
基本的にヒューマンドラゴラの寿命は七日である。七日間経過した時点でヒューマンドラゴラは「(命名)の休眠球根」というアイテムになってしまい、キャラクターとしての記憶などは受け継がれるがそれまでのレベル、ステータス、経験値がリセットされてしまう。
そして再びヒューマンドラゴラ状態にするには職業「農民」系列のスキルが必要となるのだ。

「今回はそこの超農民君に無理言って大盤振る舞いしてもらったのさ」

「私が作りました、あへぇ」

アへ顔ダブルピースでアピールする超農民を華麗にスルーし、ペンシルゴンは続ける。

「レベリングが死ぬ程だるかったけど、作業を乗り越え全員レベル99！　さぁ今こそ君達の力を見せるのだーっ！！」

「「「イェァアアアアアア！！！」」」

次の瞬間、ブロッケントリードが地を割り物理的に投げ飛ばした土塊がヒューマンドラゴラを数体吹っ飛ばした。

「マ、マンディー六号！　十一号ぅぅぅ！　おのれ、全員突撃ーっ！　狙うはブロッケントリードの茨だよ！！」

「頭じゃないの？」

「いやいや、どう見てもあの触手がエネルギー供給の要じゃん？　端から再生しそうだけど注意は逸らせるだろうからね。ほらそこっ！　君らも攻撃参加する！　銭ゲバ君あれだよあれ、三段撃ち行っとこう！」

「ホント人使い荒いなこいつ……つーか弓兵隊はあっちだろーが！」

「吶喊！！」

わぁわぁぎゃあぎゃあイェアイェアと突っ込んでいった一団を見送りつつ、アージェンアウルはふぅとため息ひとつ。

「私を差し置いてフィーバーするのはちょーっと違うんじゃないかしら！！」

そしてどう猛な笑みを浮かべると、自分もまたブロッケントリードへと駆け出すのだった。

『ぬぐぅおお！　鬱陶しい！！』

ゾウガメのようにも見えるブロッケントリードは見た目通り高いタフネスと鈍いが重い鈍重な攻撃力を備えたドラゴンだ。

故に堅牢、しかして……無防備。

茨触手という近接迎撃手段こそ備えてはいるが、本来の運用用途は地面に突き刺しての「吸い上げ」「吐き出し」であって虫払いではない。

『ぬぅぅ、うおぁあ！！』

「ハァイ古臭いお爺さん？」

『貴様、は……っ！』

ブロッケントリードは執念深い性格だ、一度受けた傷は決して忘れないしその死を見て笑うという悪い趣味も持ち合わせている。

だからこそ、つい先程己の顎を殴り飛ばした「虫」は記憶に新しい、一瞬だが眼前に現れたアージェンアウルに注意力が全て向けられる。

「三号！　肩貸して！！」

「イエア！！」

頻繁に壁のシミになる変態を比較とするのが間違いなだけで、冷静に考えて公式戦で八割をキープするプロゲーマーと比較するのが間違いなだけで、アーサー・ペンシルゴンというプレイヤーは別に操作が下手というわけではない。

元より槍使い、ステータスビルドは機動力に多く振られている。ヒューマンドラゴラの一体、その背中を踏み台にしてペンシルゴンの身体がブロッケントリードの背中へと跳び上がる。

「ほっ、と」

ブロッケントリードの動きは鈍重だ、だがその「背中」へと登って戦う者は驚くほど少ない。何せその背中には竜化植物とでも言うべきモンスターが群生しており、何をしようにもそれらが襲いかかってくるからだ。

だが竜化植物には一つ、致命的とすら言っていいだろう弱点が存在した。

「わはは、装甲完全無視は最高だぜぇ！！」

ひゅん、と槍の穂先がハエトリソウを凶悪化したような植物の茎をいとも容易く断ち切る。

植物型モンスターは部位破壊が実質的に全身に適用されている。故に茎から切り離して仕舞えば容易に無効化が可能であり、多少硬い茎であろうと聖槍カレドヴルッフがパッシブで備える装甲完全無視効果の前では豆腐と大差ない。

「ふふふ、あーっはっはっはっ！　楽しい畑荒しの時間だァーっ！！」

「そこは収穫（ハーヴェスト）と言いましょうよ」

「おやアージェンアウルちゃん、思いっきり頭噛まれてるけど大丈夫？」

「この程度で止められると思ったら……大間違いよ！！」

ぐわし、と頭を噛まれながらも茎を掴んでブロッケントリードの背中から無理やり引き抜く様子をドン引きで眺めていたペンシルゴンであったが、やることはやらねばと手早くインベントリアを操作する。

「ててーん！　超農民印のハゼランマーカー！　あそーれ！！」

本来は土に植えるアイテムではあるが、竜化しているとはいえ植物を群生させるブロッケントリードの背中であれば条件は満たせると睨んだペンシルゴンの考えは外れてはいなかったようだ。

「ほらほら離脱するよー！」

「何々？　何をするつもりかしら？」

「工作兵ーっ！　ハゼランボムよーい！！」

マーカー、ボム。単語からでも分かる事はある、　数秒後に訪れるだろう未来に目を剥いたアージェンアウルもまた緑竜の背中から飛び降り、直後背中へと投げ込まれたソフトボールサイズの「蕾」が一斉に起爆した。

『なんだぁぁぁ！！？』

「っし背中一掃！　者共、奴の背中へレッツクライミングじゃー！！」

「「「イェアアアア！！」」」

ヒューマンドラゴラの鳴き声に混ざってプレイヤー達も歓声をあげ

る。
目の色を変えて殺到する虫の姿に（プレイヤー）ブロッケントリードは思わず呻き声をあげるのだった。

龍よ、龍よ！　其の七（後書き）

・摩訶不思議な球根

パルプンテ的アイテム、埋めて「農民」系列のスキルで育てるとなんらかの形となって成長する

一番多いパターンは食材系アイテム、次にアクセサリなどに使える素材アイテム

そして確率的に三割程度の確率でモンスターかヒューマンドラゴラのどちらかに成長する

龍よ、龍よ！　其の八（前書き）

ただ一人の生き残りが何度も世界を救ってきたカービィというエモさで死

灯火の星というワードでシンプルに死

逆から読んで「星の火灯（かびい）」という意見を見て身体が四散五裂して死

このエモさは伝えねばならないので早め更新です。あとワートリ再開めでたいっすね

龍よ、龍よ！　其の八

『ぬぐぉあ！』

『くどいわ！』

それはさながら、素晴らしい絵画を眺めている最中に視界へ入り込んだ蝿を叩き落とすかのような雑さで。

黄金の尻尾に叩き据えられ、体勢を崩したノワルリンドであったが、落下中になんとか姿勢制御を取り戻す事で地面に叩きつけられる事は回避する。

『おのれぇ……！！』

気に食わない、全身でそう主張するノワルリンドであったが、このまま愚直に突っ込んだところで迎撃され続けることに変わりはない。

ならばどうすれば奴を虫観察などという下らない事から引き剥がすことができるのか。その答えを黒竜は既に持ち合わせていた。

ノワルリンドは再度上昇するのではなく、一旦下に降りる事で目当ての虫（プレイヤー）を見つけ出す。

『秋津茜ェ！』

「あ、ノワルリンドさん！」

『来い！』

言葉短く、しかし秋津茜はそれに異を唱えることなく応える。狐面の少女が軽い足取りでノワルリンドの背中へと飛び乗ると、黒竜の翼が魔力と風を掴んで浮かび上がる。

「みなさーん！　ちょっと行ってきまーす！」

プレイヤーを色竜が乗せて飛ぶ。赤、緑、白と同じく討伐対象であり敵対存在であるはずのノワルリンドに乗って飛んでいく秋津茜に周囲のプレイヤーが呆気にとられる中、黒竜は何度目とも分からぬ相対を果たす。

『いい加減……む、貴様……』

『ふははは！　己自ら傷を刻んだ虫には敏感なようだなジークヴルム！！』

「お久しぶりです！えーと、顔を傷物にされた借りを返しにきました！」

『ほう、ほう！　人よ、貴様ノワルリンドと手を組むか！　いや、いいや、良いぞ！　面白い。ノワルリンドめ、ちと遊んでやろう！』

『ほざけ！！』

人を背に乗せた黒竜が黄金の龍王へと突撃を敢行する。それを容易く回避するジークヴルムであったが、次の瞬間には己の肩にしがみついた秋津茜へと視線を向ける。

『ぬ……成る程、その短剣……いや、奴の意思ではなかろう』

「え？　はい、これは兎花【桜】です！　えーと、お覚悟！！」

『天を駆け我が元へ辿り着きし人よ、貴様の輝きを見せるが良い！！』

「【刃隠心得「鎖縛帷子(さばくかたびら)」】！！」

ばしん、と秋津茜がジークヴルムの肩を叩いた瞬間、黄金の全身に鎖が這うかのようなエフェクトが走る。
それはさながら鎖帷子のようではあるが、この魔法は着用者を守るのではなく縛る。

『ほう……我を縛り、撃つか。なれど貴様も共に死するぞ？』

なるほど確かに、今まさにブレスを吐かんとするノワルリンドの息吹がジークヴルムへと命中すれば秋津茜は間違いなく巻き添えで死ぬことになるだろう。そして開拓者の死をトリガーに龍法律は適用される。
しかし、狐面の忍者は何を言っているんだとけろりとした様子で一言。

「死んでも、またここまで登ってくればいいだけですから！！」

『死ねぇっ！！！』

放たれる黒い息吹、ブラックドラゴンブレスは敵を侵食し、砕く。確実に殺すという想いを存分に込めた夜闇の中でなお黒い火炎放射がジークヴルムへと殺到する。

『ク、クククク……クハハハ！！』

だが、あるいは何か別の要因であったのかは分からない。少なくとも一つだけ言えるのは、黄金の龍王が誇る「神滅」の数々は何も龍法律（ノトーリアス）だけでは無いのだ。

『良い！　実に良い！　ならば見せようぞ！！　我が「輝ける龍王（トゥーパック＝アマル）」を！！』

次の瞬間、ジークヴルムが広げた龍翼に複雑怪奇な光の模様が走る。

そして、その黄金の身体全体が光源となるかのように輝き始め……

『ぬぅぅぅうおあ！！！』

「うぇえ！？」

『何だとぉっ！？』

次の瞬間、全身をさらに輝かせたジークヴルムの体躯を縛り上げていたエフェクトが木っ端微塵に砕け散り、突き出された握り拳がノワルリンドが放った黒い火炎を一撃の元に「破砕」した。

『馬鹿なっ！！』

『我が龍体輝きし時、マナの具現その悉くが砕け散ると知れ！！』

「わ、わ、わぁ！？」

戦いとして成立した以上、その最中に呆けると言うことは「一発殴ってください」と同義である。

光輝の黄金が漆黒へと距離を詰め、ノワルリンドが動き出すよりも

早く、その横っ面へとジークヴルムの拳が叩き込まれた。

『良かろう、英傑の片鱗を見せし者どもよ！　ならばこの我が立ち塞がらずしてどうするか！！　我は山、我は壁、我は門……人よ、我を踏み越え未来へと進め！！』

轟、と大気をも吹き飛ばすかのような高らかな宣言に空が震える。

口の端からダメージエフェクトを漏らしながらも、すんでのところで幾度目かも分からぬ崩れた体勢を立て直したノワルリンドの背中に秋津茜が着地する。

「ノワルリンドさん！　大丈夫ですか！？」

『ぐぬぅ……我が息吹を打ち砕くなど、そんな馬鹿な……』

「さっき、ティーパック花丸？　みたいな事を言ってました……きっと、あのピカーッ、て光るのに何か秘密があるんじゃないですか！？」

『小癪な……っ、ええい、振り落とされても拾わんぞ！！』

これまでの迎撃にのみ注意を割いていた状況とは違う、明確にノワルリンド達を仕留めにかかるジークヴルムの積極的な急襲に黒竜が翼をはためかせる。

『くっ……邪魔だ！！』

『おごぁ！？』

『退けい！』

『んぎぃ！？』

中途半端に飛翔していたドゥーレッドハウルがノワルリンドに弾き飛ばされ、続いてジークヴルムに叩き落とされもしたが、追われる竜の背中にしがみつく秋津茜はそれどころではない。

「さ、流石に、乗馬経験はぁあぁあぁあぁ！！？」

言うなれば、自分の筋力だけでジェットコースターにしがみついているかのような、四方八方から身体を捕まれ引っ張られているかのような遠心力の連鎖に流石の秋津茜も悲鳴を上げる。

「……あれ？」

生物的な空中ドッグファイトの最中、秋津茜はふと気がついた。

「あのお城………」

今、動いた？

「笑みリー！　なんとか体裁は整えたよー！！」

「何か使えなくなったのはありますか？」

「カウンター系は天守閣が半壊した時に一緒に壊れちゃった、それ以外は念の為に作っといた予備でそれっぽく直したけど……」

「ノーガードの殴り合いって事ですね」

上等だ、と笑みリアは笑う。元より無傷の勝利は望んでいない、崩れたならまた作り直せばいい。そう、ノワルリンドの素材も使って。

「いやーしかし、家具職人と大工がこんな形で役立つとはねぇ」

「そっちはともかく、こちらは大工というより所有者が、ですけどね……」

職業「家具職人」。存在理由があまりに意味不明であるが故にフレーバーの一つとしてあまり考察の手が加わっていなかったそれは、同様の理由を持つ「大工」と共に活用する事で一つの答えを提示した。

大工系列最上位職業「大棟梁」。

家具職人系最上位職業「風水導師」。

設置系オブジェクトを作成し、様々な効果を発揮する「建設生産職」とでも言うべきこの二つのジョブと、数多のプレイヤーによって作り上げられたスカルアヅチは言うなればそこに在るだけで開拓者の悉くに加護をもたらす神秘の石像(スタチュー)。

開拓するためではなく、開拓した「後」を守るための拠点。それ即ち城としての本来のありよう。

「敵対対象「赤竜ドゥーレッドハウル」、強化対象「全プレイヤー及びＮＰＣ」……発動効果「火炎耐性」……！」

「ひゅう！　かっこいい！」

「起動せよ！　スカルアヅチ！！」

莫大な量の竜骨(リソース)で構築されたスカルアヅチが夜の前線拠点に輝く。

龍よ、龍よ！　其の八（後書き）

輝ける龍王（トゥーパック・アマル）
角二本を稼働させて発動する強化状態
全身から発せられる龍王のエネルギーがありとあらゆる魔法を無効
化する
今五本あるので四本叩き折らない限り魔法は無効化されるぞ！

最上位職業「大棟梁」
一定以上の規模を持つ建築物を作る際の「代表者」として建築物を
完成させる事で上位職業「棟梁」から就任可能。スカルアヅチ完成
と同時に笑みリアは条件を満たしていた
フォー◯ナイトじみたことが出来るのは以前もどこかで説明した気
がするが、その本質は「風水導師」と共に在ることで発揮される

最上位職業「風水導師」
家具職人が一定以上の評価を得た上で規定以上の建築物の内部をデ
ザインすることで「家具職人」→「家具識者（インテリアマスター）」のルートで就任可能。
「棟梁」以上のプレイヤーが作った建造物は言うなればリソースポ
イントをＭＰに見立てた巨大な魔法使いのようなものである。
そして莫大な素材リソースを持つ建築物が様々な能力を発動するた
めの、言うなれば「発動可能な効果」を決定することが出来るのが
「風水導師」である。
家具の質や配置などでいろいろ変わってくるので要するにメガマン
６のナビカス

来たる災禍に備えよ開拓者、城とは侵略より守護を成す為にあり

龍よ、龍よ！　其の九（前書き）

不定期だから仕方ない、一日一更新も守れないとか情けなくて申し訳ないっすわ

龍よ、龍よ！　其の九

装骨城砦スカルアヅチ。
その主な素材は樹海で狩猟されたモンスターの骨などで構成されている。
流石に柱などは木材ではあるが、石や木のみで作るよりも遥かに多くのリソースポイントが費やされていることは事実だ。
そしてその真価は「風水導師」によって設置されたオブジェクトによって「城主」が行使可能な全体効果にこそある。

「うわ直撃……あれ、生きてる？」

『なんだと！？』

「ここらのプレイヤーにだけ強化エフェクト……笑みリアさんか！！」

「説明頼む！」

「スカルアヅチのバフ効果だ！　ドゥーレッドハウルと戦ってる間は火炎耐性が上がるんだよ！！」

その言葉を聞いたサイガー１００は僅かに眉をひそめる。

（中量級のアタッカーでも即死しないレベルのバフ？　不味いな…

……）

人は他者の感情に追随しない。それはエゴとか高慢という訳ではなく、共感や同情もまた自身の感情である為だ。

そして動くための影響というものは即物的であればあるほど良い。

元ＰＫの口八丁手八丁とスカルアヅチからのバフ、どちらが人を動かすかと考えれば後者だろう。

「好機だ！　ここでドゥーレッドハウルを削るぞ！！」

口では周囲を鼓舞し、指示を出しつつもサイガー１００は来たるその時への不安をなんとか心中へと押し込むのだった。

呉越同舟という言葉がある。

船頭多くして船山登るという言葉がある。

果たして今の自分は敵軍同士が居合わせた船にいるのか、迷いに迷う船にいるのか……サイガー０はため息をつきながら走っていた。

「世ヲ蝕ミシ竜！　オォ、我ラガ父祖ヨ！　我ラガ奮戦シカトゴ覧アレ！！」

「ルガドドド・ル・ドドドド……オ前ハ元気ダナ」

「呵々！　斯様ナ戦列ニ入リ進ムトナレバ高揚モ仕方アルマイテ！！」

「おお虫小人よ！　お前も心踊っているか！」

「武器携えぬ小人とは文化の違いを感じるが、やはり戦士とは戦場を前に笑うくらいでなければなぁ！！」

「……なぁ拳闘鶏（デスペラード）、俺たちもこう盛り上がった方がいいのか？」

「あの手の連中に付き合ってどうする、無駄な体力を浪費することはない」

「ふん、そこな鎧よ。やはりもう少し歩く速度を早めるべきだろう。あぁそうとも、ノロマやガリ勉など気にするまでもない！！」

「なんと野蛮な、やはり爪と牙を振るうしか能のない獣に知を求めるのが間違いか……」

「拓く民よ、爪を振るうしかない阿呆と頭の良さが強さと誤認する馬鹿の事は気にしなくて良いぞ？　それよりも我らと良好な関係を……」

ウザい。

なんというかもう、サイガー０の頭ではそうとしか形容できない喧しさであった。

何故こうなったのか、確かに蟲人族が同行するがために転移門を使えず、徒歩での前線拠点到達を目指していた訳だが……合流と遭遇を繰り返し、気づけば他種族の見本市のような事になっていた。

心なしか姉と属性が似た感じの女巨人に率いられた「巨人族」
一瞬サンラクかと誤認しかけた「鳥人族」
一瞬サンラクが新しい覆面を得たのかと誤認した「獣人族」
これに「蟲人族」も加えての多種族連合とでも言うべき大群を何故自分が先頭になって進んでいるのか……
考えるほどに思考の沼へハマっていく感覚にため息をつきつつ、サイガー０とイムロンは樹海を進んでいく。

「む」

「おわっ」

その時、特に何か視覚的な線を踏み越えた訳でもない一歩を踏み出した瞬間、サイガー０とイムロンの身体にズシリと重石が積み重なったかのような圧がかかった。

「B．I．G．２……間違いない、ジークヴルムの能力範囲内に入った」

「えと、皆さん！　あと少しで戦場です……！！」

気分はバスガイドだろうか。ユニークシナリオEXの進行によるものと言えばそれまでだが種も所属も異なるそれぞれが皆同じ目的で前線拠点へと向かっている。
ペンシルゴン程のビジョンを持ち合わせている訳ではないサイガー０であっても、無視するわけにはいかないと言う事くらいは理解できた。

どうやら他のＮＰＣ達も重力圏の影響を受けたのか、十人十色の反応を見せながらもそれぞれが武器を構え拳を鳴らし、我こそが竜狩りを成すのだと言わんばかりに戦意を高めている。

「……なんだか、とても疲れました」

「得難い体験じゃない、得をしたと考えた方がいいでしょ……だろう」

「流石に誤魔化しきれてませんよイムロンさん」

「ある程度仲良くなるとロープレ剥がれやすくなるのよね……」

そんなことを話し合いながら、二人のプレイヤーは多様な種族と共に戦場へと飛び込む。

巨人族「オディヌ氏族」総勢五十八名。

蟲人族「バグズ・プライド二人込み」総勢十五名。

鳥人族「拳翼愚連隊」総勢二十名。

獣人族「獅子心衆」「狐火の会」「豊象軍」それぞれから二十名ずつ総勢六十名。

もはや多数（レギオン）と呼んで差し支えない人間達が、進む。

「……姿を見せづらい」

追加人員。サイガー０の背中にしがみつくヴォーパルバニー、一匹。

故に、ファーストコンタクトは森林部に最も近い場所で戦端を開いていたブライレイニェゴに対応するプレイヤー達であった。

「く……人手が足りねーぞ！」

「他の連中、ドゥーレッドハウルを削るのに流れたんだ！」

「小竜抑えきれないんだけど！？」

「戦闘終了しないからレベルアップしないんですけど！？」

あくまでも単体としての脅威であるドゥーレッドハウルやブロッケントリードとは異なり、ブライレイニェゴとの戦闘は単純な物量、人手が必要になる。

スカルアヅチからの支援、【黒剣】が参戦している事、様々な理由からプレイヤー達の戦力比が傾き、ブライレイニェゴの小竜はプレ

イヤー達の包囲網を突破しようとしていた。

「無理ーっ！　回復職だけで戦線維持無理ーっ！！」

「誰かアタッカー来てくれーっ！　タンクだけじゃ袋叩きにされるーっ！！」

戦線の至る所から悲鳴が上がる。総数が減った事で、これまで何人かが脱落しても代わりの者が欠けた役割を果たしていたところが歪な形になりつつあるのだ。

だが戦線の一部が崩壊する寸前、増援が現れた。

『さぁ我が子達よ！　愚かな蛆を踏み潰しこの地を手に入れるのです！！』

「――――いいや、貴様に相応しい場所は貴様自身の血溜まりの中だけだ！！」

風が吹いた。その風はまるで何もかもを叩き斬るような二陣の風、通り過ぎた場所にいた小竜を有無を言わさず吹き飛ばす。

「え、なん……え、でっか！」

「ちょ、めっちゃ来る！」

「子供……いや遠近法！　幼女が大人サイズ！」

「それは単なる大人の女性では？」

「え、性癖……」

焼却の被害を免れた樹海の中から次々に現れる巨躯の人々。その何れもが長く使っているのだろう武器を携え、先陣切った双剣の女巨人に我も続けと地を揺らしながら走る。

『お前、お前達はぁぁあああ！！』

「ブライレイニェゴ、我らから逃げ切れると思うなよ。貴様の首を断つは我ら巨人族！ 英傑オディヌとドルダナの意思を受け継ぐ我らオディヌ氏族が！ この無双(モラ・ベガルタ)の双剣のフィオネと知れ！！」

巨人族にその名を轟かす英傑の一人、「旅兎の物語」に登場する灼(アラ)槍剣(ドヴァル)のドルダナではなく。

白竜の地を斬り拓き巨人族の地とした偉大なる英傑無双(モラ・ベガルタ)の双剣のオディヌがかつて振るい、今はその子孫たるフィオネが二振りの剣をブライレイニェゴへと突きつける。

そして、偉大なる英傑の双剣に呼応するかのように巨(おお)いなる武器の数々が夜の空に掲げられた。

龍よ、龍よ！　其の九（後書き）

・旅兎の物語
巨人族、鳥人族、鉱人族、獣人族に伝わる御伽噺のような伝承
多種族の偉大な英傑達が「旅する兎」と共に竜退治の旅に出た、と
いう内容。種族によっては多少の差異があるが「旅する兎」という
点は共通している。

そのため、巨人族にはヴォーパルバニーを積極的に攻撃しない文化
がある。つーか小さすぎて気付かないパターンの方が多い。
獣人族では御伽噺に出て来る獣人族の英傑は「獅子だ！」「狐だ！」
「象だ！」と、どの陣営に多い種族なのかで解釈違いＮＧの論争が
勃発している。ちなみに正解はハムスターの獣人族。

余談だが上記四種族の間では御伽噺扱いだがラビッツでは「ヴァッ
シュの過去の一つ」扱いである

龍よ、龍よ！　其の十（前書き）

一日に三回も更新するなんて……っ！　一日二回ならともかく、三回も……っ！　一日一更新を守らないばかりか、俺は……俺はなんて事を……っ！！

龍よ、龍よ！　其の十

大気が切り裂かれるような風の中、ノワルリンドとジークヴルムが縦横無尽に空を飛翔する。
追う側であるジークヴルムはただノワルリンドを追うだけだ、それはまるで僅かでも足を止めればその瞬間に叩き落とすとでも言いたげな高慢で、されど力ある者にのみ許される慢心のようで。
「ノワルリンドさん！　一瞬減速を入れて後ろを取れませんか！？」
『我に命じるなっっ！　元よりそのつもりよ！！』
全速力での宙返り、僅かな一瞬とはいえノワルリンドがジークヴルムの背後を取り、その瞬間を逃さず黒竜のブレスと秋津茜の手裏剣が叩き込まれる。
『効かぬわ！』
『おのれェ……！』
「いいえ、ノワルリンドさん！　多分効かないのは角が光ってる時だけです！　そして、物理的な攻撃なら通ります！！」
『ならば叩き落としてくれる！！』
秋津茜の見立ては正しい。ジークヴルムのアクションの一つ「輝ける龍王（トゥーパツク＝アマル）」はジークヴルムの角を起点として全身に付与される強化状態である。

高濃度の魔力を衣のように纏う事で外部からの魔力的干渉を溶かし混ぜる黄金の闘気は物理的干渉に関しては効果を示さない。

尤も、ジークヴルムの肉体は物理的な追加補強を必要としない、という理由もあるが……少なくとも、光輝に包まれたジークヴルムを攻略するためには物理的な攻撃こそが肝要となる。

『ノワルリンドめ、貴様に格闘戦の基礎を教えてやろう……爪と言うものは、手と拳のような動きは出来ん！！』

『な、ぐぉ！？』

肉食獣のような四足歩行のドラゴンベースたるノワルリンドに対してジークヴルムはほぼ人型と言っていい二足歩行のドラゴンベースだ。

その喉に食らいつかんとしたノワルリンドの首をジークヴルムの両手が掴み、そしてそのまま渦を巻くかのように黄金が漆黒を投げ飛ばした。

『ぐぉあぉあ！？』

「わわわわ……刃隠心得！　【鼯衣(むささびのころも)】！！」

宙に投げ出された秋津茜であったが、地に激突する寸前にパラシュートの如く布を広げる事で落下の衝撃を軽減する。

「ふぎゅっ」

とはいえ完全なゼロとまでは行かず、なんとか受け身を取って着地した秋津茜の体力が半減する。

「ノワルリンドさん！」

『ぐ……ぬぅう……』

素人の背負い投げのような形で地面に叩き落とされたノワルリンドが呻きを上げ、顔を上げた秋津茜はマズイ、と慌てて走り出す。

「……どうする？」

「倒せるとは思えないけど……削ったほうがいいのか？」

「いやでも、ジークヴルムのヘイトを受け持ってるのはデカいよ？」

「こまけーことは良いんだよ、前に前線拠点を半壊させた借りは返さねーと」

プレイヤーの注意が、ノワルリンドに向いた。

元より前線拠点を襲った前科持ちだ、そうでなくともシナリオクリアの条件に組み込まれている時点でノワルリンドもまた攻撃に晒される可能性はあった。

今まで狙われなかったのは単純にプレイヤーの射程圏外で戦っていたからに他ならない。地に伏し、隙を晒している今狙われるのは至極当たり前のことと言えた。

「ま、待って待って待ってくださーい！！」

ノワルリンドを囲まんとするプレイヤー達が武器を握る手に力を込めたその時。

二つの「個」がノワルリンドへの袋叩きをその登場で中断させた。

『覚悟は決まったか、ノワルリンド……む？』

「悪いなジークヴルム、身内の縁ってやつでな……俺はこいつの助太刀なんだ」

黄金の龍王、ジークヴルムは威風堂々たる様子で地へとその足をつけた。

しかし、しかしだ。それに相対すべくノワルリンドの前に立った男もまた、七つの最強種に真っ向から立ち塞がって尚怯える素振りすら見せることなく。

「ウチの兄貴から「遠慮なくぶっ飛ばしてこい」と後押しされたんでな……」

『ほう、ほう、ほう！　知っている、知っているぞ貴様！　我が盟友ヴァイスアッシュが食客……リュカオーンに傷刻まれし戦士！　名は確か……エンラク！』

「サンラクです」

夜空に瞬く星々をありったけ詰め込んだかのような、尋常ならざる輝きを放つ「大剣」を携え、鳥を模した覆面と申し訳程度の腰装備以外はほぼ肌を露出した異様な格好。
素肌に傷の如き刻印を這わせ、単純な強さとは別方向の異様な威圧感を漂わせるそのプレイヤー……サンラクはただ一人、真っ直ぐにジークヴルムを見つめて傲岸不遜に告げた。

「ロールプレイをお求め？　宜しい、決闘(タイマン)張らせて貰おうかジークヴルムっ！！！」

『く、くかか、ふはははは！！　よかろう！　よかろう！！　英傑よ、ならばその決闘受けて立つ！！！』

何が起きているのかわからないと言った様子でその光景を見るプレイヤーをかき分け、秋津茜がノワルリンドの傍にまでたどり着く。

「サ、サンラクさんっ！」

「よう秋津茜、遅刻したのは申し訳ないが……その分時間稼ぎは任せてもらおうか。そこの黒いのをさっさと立ち直らせな」

『なんだと貴様、虫如きが……』

「あ？　ンだコラやんのか？　全身素材(ドラゴン)が、我レベル１４５ぞ？……蜘蛛を散らすレベルぞ？」

『ぐ、ぬぅ……！　猪口才な』

首をかっくんかっくん動かしながらノワルリンドへとガンを付ける

半裸の鳥頭、という壮絶に意味のわからない光景ではあるが【旅狼】は割とイロモノだらけのクランである。
そういうものだと特に気にするでもなく秋津茜はジークヴルムの様子を伺いつつも話を続ける。
「あの、サンラクさん……」
「いいか秋津茜、足止めっつってても多分一分保たない」
「え……」
「ペンシルゴンとオイカッツォに言伝を頼む、「ルスト計画をここで済ませる」ってな」
「え、あ、はい」
さて、とサンラクはジークヴルムへと振り返ると、何でもない風に一歩踏み出し、既に合体機能を発動した蒼耀月を携えながらジークヴルムを真っ直ぐに見据える。
「待たせて悪かったな、さぁ一対一でやろうぜ」
『良い、許そう。足止めと宣いながら貴様……その剣の輝きにどれだけを費やした？　この我をも両断せんばかりではないか』
「聞きたいか？　手持ちの成分結晶を全部叩き込んだスペシャルチューンだ……入れた数は百から先は覚えていない！！」
『いいだろう！　我が前にただ一人立つことを許す！　サンラクよ、我が重力圏にてその輝きを見せるが良い！！』

誰が合図したわけでもない。ただ、ジークヴルムが天高く飛翔したのとサンラクが右拳で胸を叩いたのは全くの同時であった。

「ノワルリンドさん！　ここは直撃コースですよ！」

『ふ、ふん……虫め、足止めの栄誉をくれてやろう！』

「うっせぇスカタンクロトカゲ！」

『スカ……っ！？』

「後に！　後にしましょう！　ね！？」

既に両者共に相手を仕留めることのみに意識を集中させる領域に入った。

例えるならそれは至近距離で引き絞った弓矢を突き付けあうかのような。自らのダメージを完全に無視してでも、確実に相手へと致命の一撃を叩き込むと言わんばかりの、殺意と決意の衝突。

空中で宙返りを経て加速したジークヴルムが地を切り裂くかのような豪速で一直線にサンラクへと迫る。

黒雷を纏い、その目より残光を奔らせたサンラクが迫るジークヴルムへ自ら突撃する。

ほんの僅か、息を呑むほんのわずかな一瞬の空白、静寂。

激突の刹那、相対する一体と一人が同時に叫ぶ！！

「――晴天流【疾風】！！」

「――狂騒領域（Jazzy Zone）！！」

激突。

龍よ、龍よ！　其の十（後書き）

今日はここで更新終わりって言ったら怒りゅ？

龍よ、龍よ！　其の十一

交差ののち。

ジークヴルムが黄金の体躯をその場で旋回させ、突撃の加速を散らして滞空しつつも停止する。

サンラクは蒼耀月を抜刀分離……「金照」を振り抜き「冥輝」を腰だめにした姿勢のまま動かない。

『――驚いた』

竜災の真っ只中、ただ一画驚く程に静かな戦場で、ジークヴルムの声だけが響く。

『我が狂騒領域(Jazz Zone)は貴様らの内なるマナを狂わせる技能(スキル)殺しの領域。目を奪われ、足が衰えて尚……斬ったか！！　この我を！！！』

「…………クソが、スキル封印は予想してた、が……差し込み発動は、ダメだろうがよ………っ！！！」

瞬間、サンラクの左目から右腰までが爆ぜ、全く同じタイミングでジークヴルムの左角と、左翼が弾けた。

『なんたる力！　掠ってこれか！！』

「完全に、出落ちぃ……っ！！」

サンラクが膝をつく様子を、金照が切っ先でなぞった顔の左半分と左翼が「結晶化」したジークヴルムはそれでも尚笑う。
こんなに嬉しいことはないと言わんばかりに、よくもやってくれたなと言わんばかりに。

『我が重力圏は英傑をこそ讃える！　サンラクよ、狼傷の戦士よ！！　末期に遺す言葉、この我が許そう！！』

「HPゼロで死なないのはそういうことかい、だったら…………」

膝をつき、左半分を切り裂かれ損失した正眼の鳥面の下、ダメージエフェクトで埋め尽くされた目で何かを探し……そして、ゆっくりと人差し指を向ける。

その先に在るは体勢を整え空へと退避したノワルリンドと、その背に乗る秋津茜。

「────お前「達」が、主役だ……」

『見事であった！！』

サンラクの身体から漏れ出していたダメージエフェクトが消える。
その身体から力が欠落し、地に顔を叩きつける直前、全身が砕け消えた。

『おぉ、人よ。開拓者よ。よくぞ輝いた、よくぞ立ち向かった！　お前達はどうだ？　輝きを見せろ、立ち向かえ！　我すら超えれずして、始源の覚醒に立ち向かえるものか！！！』

動けない、魔法の無効化のみならずスキルの無効化すらしてのけた黄金の龍王に「次は自分が相手をしよう」と言える者は、この場にはいない。
勝ち目がない、というのもある。だがそれ以上に「あれ以上」を示すだけの自信がない。

『……まぁいい』

興が削がれたと言わんばかりに動けぬプレイヤー達から目を逸らしたジークヴルムは、獰猛な笑みを浮かべてノワルリンドと秋津茜を見据える。

『であるならば、主役とやらの輝き……見せてもらおうか』

顔の左半分と翼を蝕んでいた水晶が砕け散り、殆ど無傷の黄金が露わになる。
再び漆黒と黄金の戦いが再開される。

◆

費用対効果が釣り合わない結果になってしまったが、まぁいい。

「……よし」

聖杯使用、性別を変えて服を着て……

「ねぇそこのあなた！」

「お、俺!?」

「ほら、ちょっと前に悪名を轟かせてたアーサー・ペンシルゴンが暴れてるって聞いたんだけどぉ……場所、知ってたりしない？」

「え、あ、えと、ブロッケントリードのところ？　にいるって聞いたような……」

「サンキュー！」

ぱちこーん！　と鉛筆直伝のウィンクを贈りつつ、スカルアヅチから飛び出した俺はさてどうしたものかと思案する。

とりあえず一番悪目立ちするペンシルゴンは居場所を突き止めたが、オイカッツォやルストをこの大混戦の中から見つけ出すのはちと骨だぞ……

「んー………」

あ、そうか。

「発想を逆にすればいいのか」
卵だって逆立ちさせてやるってな。
となれば一番目立てそうなのは……んー、ブライレイニェゴかな。
「実質レイド戦だしな、コソコソしててもしゃーないか」
だったらいっそ、派手に暴れてやろうじゃないの。
くくく、超大規模アップデートされたニューサンラクの力、存分にな……！
っつーわけで、存分に目立つなら主役一人じゃ心もとない。
「エムル、サイナ。隠れんぼは終いだ、ここからは俺達のステージって奴さ」
ぴょこん、と俺の頭に隠れる事をやめたエムルが立ち、インベントリアでインテリジェンス爆睡していたサイナが召喚される。
「……一応聞くけど、何するつもりですわ？」
「派手に暴れて俺自身がランドマークになる」
「非常に野蛮としか言いようのない行動ですがインテリジェンスな動機に基づくため当機（ワタシ）も支持します」
それは何より、インテリジェンスにバイオレンス振るっていこうぜ。
さて、そんな事をしている内に戦闘領域に突入したみたいだな。アレが話に聞くミニ白竜……なるほど、異様に腹だけデカくて申し訳

程度に生えてる角を見るとシルエットは完全に蟻だな。

「では早速、ニュー武器一号！」

イムロン対ビィラック、武器性能コンペティション出品作品が一つ……イムロン製ロングソード、その名も「勇輝の晶剣（グリッターグリット）」！！プレイヤー最高峰の鍛治師が作っただけあって完成度は高い。

うん、完成度は高い。実際役に立たないって訳じゃないしイムロンがやりたい事をやりきったんだろうなー、というのは見れば分かる。

いやしかし、うーん……

「ＤＸグリッターグリット、６９８０円で発売……みたいな……」

カラーリングか？　光沢か？　いやそもそもデザインがそういうのってのはあるんだろうが、なんだこの、壮絶な「おもちゃっぽさ」は！

いや、分かる。素材がそもそも赤と碧っていう割と噛み合わないカラーだからな、どちらかをアクセントにするならともかくカラー比率半々でデザインに組み込むとどうしても……そう、なんというかクリスマスっぽい色になるのは分かる。

だがこう、デザイン！　カラーリング！　光沢！　なにもかもが調和してパーフェクトおもちゃなんだよこれ！

ただ、

「悪巧みできそうなのはこっちなんだよなぁ…………」

いや、ぶっちゃけよう。性能的な優劣で言えばビィラックの武器の方が優れている。

だが最近の奴は「まぁこいつなら使えるでしょ」みたいな尖った性能の武器ばかり作る傾向が見える！　極振りレベルのステータス要求して、それ以下だと自滅の可能性を持つ盾とかそれ盾としてどうなんだ！！

そう考えると「一定以下の体力（いつも通り）」「ゲージの蓄積（その内溜まる）」「MPの任意消費（これは目を瞑る）」の条件を満たすだけで扱えるこの剣の方が汎用性で遥かに勝っている。

「……っし、細かい事は気にしない方針で！」

いざ参ろうか、初手自刃！！

灼骨砕身で胴体と足の刻傷を一時的に無効化、刻傷自体の自壊までのリミットを加えれば……４８０秒、それが俺の「第一活動時間」だ。

「この日の為に用立てたニュー防具……」

帝晶双蠍の素材をふんだんに用いて作り上げた全身一式！　女性用帝晶双蠍装備、その名も「女帝至宝装（ツァリーツァ）シリーズ」！！

夜間であるが為にその姿を真紅一色に染めた姿は、頭がフルフェイスヘルムである事を除けばパーティーとかにいても違和感がなさそうな程に優美なものだ。

至る所がツァーベリル帝宝晶と帝晶双蠍の素材を用いているためか、

宝石をドレスを纏った女性の形に削った彫刻のような全身はその輝きの美しさで女性らしさを演出しつつも、その実下手な刃を逆に折ってしまいそうな強固な護りの気配も漂わせている。

「この武器、男の時に使った方が良かったのかもしれないが……」

まぁそこはご愛嬌だ、じゃあ行こうか。この戦場のいたるところに散らばったクランメンバーに言葉ではなく行動と結果で叫ぶのだ。

俺は！　ここにいる！！

龍よ、龍よ！　其の十一（後書き）

この主人公、一体どこに向かおうとしているんだ……

龍よ、龍よ！　其の十二

巨人族たるオディヌ氏族の参戦により、にわかに勢いを取り戻しつつあった白竜対応のプレイヤー達。
しかし現在は再び劣勢と言っていい状況にまで押し込まれていた。
というのも、巨人族という平均して三メートルはありそうな体躯の人々が加わった事でブライレイニェゴ側でもなんらかのシステム処理があったのかは不明だが、これまで人間大のサイズの小竜を生み出していた生産パターンが変わったのだ。

「人型！？」

「タンクに、後方支援……野郎！　一丁前にこっちの役割を真似してやがる！！」

「待て待て待て！　巨人サイズは聞いてない！！」

これまで蟻のような形状の六足歩行フォルムであった小竜が、今は後脚の二本で立ち上がり「役割」に応じた形状の腕を以って侵攻を再開したのだ。
さらに生み出された数こそ少なく巨人族が対応する事でなんとかなっているが、体高三メートルはあろう巨人サイズの小竜すらもが現れている。

即座の崩壊ではなく、じわじわと押し込まれていくプレッシャーはどれだけ強く厄介であろうと「個」でしかないドラゴン達では作り出せない……クローンを生み出すという「群」のドラゴンたる

ブライレイニェゴにしか出来ない緊迫と言えた。

「お、わ、あ……やべっ！」

また一人、群体としての圧力に耐え切れず、タンク小竜に押し込まれて仰向けに倒れたプレイヤーが一人。

すかさず周囲の小竜が哀れな犠牲者を囲み、ガチガチと並びも大きさも不揃いな牙を鳴らしてその命に手をかけんとする。

「ちょ、待っ」

その男……レイジなるプレイヤーは幸か不幸か決戦フェーズの始まりから今に至るまで、一度もキルされていなかった。

故に、さながらゾンビに囲まれた犠牲者の如く薄気味悪い竜もどきに袋叩きにされるという恐怖はこれが初体験だった。

だが、果たして天運はレイジを見放さなかった。

「はい五キルぅ！！」

小竜によって塞がりつつあったレイジの視界を赤と緑……いや、碧の軌跡が過ぎる。

直後、小竜五体が全て撃破され、砕け散ったエフェクトが雪のように舞い散る。

「よう、大丈夫かい…………ん？」

「た、助かった……なんだ？」

まるで宝石をそのまま剣の形に伸ばしたかのような、赤と碧の二色半々の刃を持つ直剣を握る彼女は、何故か助けた側にも関わらず怪訝な様子でレイジの顔をじっと見つめる。

無機質な仮面とはいえ、女性を模したそれに近づかれては健全な青少年たるレイジの健全な青少年がざわめきだしても致し方ないというもの。

それに恐らく声からして中身も女性プレイヤー、そんな宝石の女王が如き姿に近づかれては……

「……もしかして、夏頃に女友達か誰かと一緒にセカンディルにいませんでしたか？」

「え？　……や、待て。サンラクって、まさか……！！」

「おぉおやっぱり！　マジか、合縁奇縁の乱数って侮れないなぁ！！　いやあの時は助かったよマジで！　礼を言おうにも赤の他人だから見つけようとしても見つかるもんじゃないしさぁ！」

ガッとレイジの腕を掴んで力強く引き起こされ、そのままブンブンと掴んだ手を握手の形にして振り回す謎の女プレイヤー……もとい「例のあの人」ことサンラク。

「いや、サンラクって男キャラじゃ……」

「あぁこれ？　性転換アイテム。クターニッドの報酬で入手できる奴でさ」

あっさりと爆弾情報が投下されたのだが、口に潤滑油でも流し込んだかのように話すサンラクがそれをしまったと思うことはなく、そ

してレイジもレイジで健全な青少年としての健やかさがセクシャルのトランス的な邪気にぐらつきかけたりとそれどころではない。

「いや礼を言えて良かった良かった、じゃあ俺スコア稼いでくるから……頑張ろうぜ！」

「あ、ちょっ」

「無双ゲーっ！！」

重厚な宝石の鎧を纏っているとは思えない速さで戦場へと飛び込んでいったサンラク（？）を呆然と見おくりつつ、ハッと我にかえる。

「いやネカマに心揺れてどうすんだ……」

◆

素晴らしい、素晴らしいぞ女帝至宝装(ツァリーツァ)シリーズ！

ビィラックが「宝石匠がうんたらかんたら……」と言っていたが、

ツァーベリル帝宝晶を織ったドレス部分は見た目の割に軽く動きやすい。
そして、この装備一式は「現在」パッシブでＭＰ回復の効果を持つ。パーツごとに個別で発動するから頭、胴、腰、足の四パーツを揃えれば俺程度のＭＰなら五分で完全回復する。
さらに魔法反射効果で小竜のブレス（小）程度なら完全ノーダメ！
そしてぇ！　ゲージを溜めて諸々の強化スキルで自身をパンプアップしてのぉ……

「ＥＸ（エクス）ーカリバーモード！！」

瞬間、俺の魔力を全て喰らい尽くし、水晶の刃が一気に伸びる。
これこそが勇輝の晶剣（グリッターグリット）に搭載された拡張形態、ＭＰを消費して物理的に刃を伸ばす能力！　魔力の刃とかじゃなくてまんま刀身が拡大するから必要パラメータも増えるぜ！　重いわ！！

「だから……こう使うのさっ！！」

巨人型小竜へと縦一閃、調整した体力とゲージの１００％達成により必殺の「グリッターソード」が使用可能となる。
多分元から斬りやすいデザインなのだろう小竜を重さに任せた一刀で断ち、そのまま縮んだ刃を持って振り返る。実際はこんなポーズはいらないのだが、「秒数」的にな。
縦にラインを刻まれた巨人小竜が俺へと反撃しようとし……不自然にその身体が硬直する。そして刻まれた傷が光を放ち……

「成敗！」

大・爆・発！！

……いやどこまで手が凝ってんだこれ、そりゃ確かに特撮の怪人やらモンスターやらはとりあえず爆発するけどさ。
必殺「グリッターソード」は攻撃モーションの円滑化と追加ダメージの発生。簡単に言えば弾かれたりしなくなる、斬って数秒したら追加ダメージ……そしてそれがトドメの一撃なら爆発する、と。

「おもちゃ……」

デザインでうまく隠しているつもりだろうか、デカデカと「ＥＸ」と刃ですデザインしてるのは見逃してないからな。
だが刀身拡張中も直前までの運動演算を引き継ぐのはナイスだ、必殺技を発動した瞬間空中で操作不可能になるゲームとかあるからな。
落下しながら着地を考慮しない必殺モーションを行う姿は見てるぶんには面白いんだが。
あと両手剣カテゴリだから左右の装備欄が埋まるのがちょっとだけマイナス点か、まぁそこはそもそも両手剣として発注したから気分の問題だ。

蟻型小竜をバッサバッサと斬り伏せつつ、時折死にかけてるプレイヤーを助け起こしてさらにスコアを稼いでいく。
おかしいな、そろそろ誰かこっちに来ても良いと思うんだが……来ない。

「チッ、もっと俺に輝けと？」

勇輝の晶剣を地面に刺し、その状態でＥＸ－カリバーモード起動。
臨界速に費やしたせいで俺の基礎モーションは大いに制限を食らったと言っていい、だがアレはアレでいいものだ。であれば代用の手段を用意してやりくりすればいいというもの。

空中に躍り出た俺はウィンドウを操作し、新たに武器を手元に呼び出す。相性的に絶対有利なのは分かっていたが、先に勇輝の晶剣を使ってみたかったので使わずにいたが……マジで無双ゲーの雑魚敵レベルで湧いてくるからな、解禁だ。

かつては竜ならざる龍蛇に突き立てられ、ただ朽ち錆びるだけに時を費やした竜滅の刃……元は槍、かつての使い手にへし折られ、さらに身を詰められと中々に波乱万丈な剣生？を送ってるが……今こそ、その本来の力を発揮する時だ。

「吼えろアラドヴァル！　炎を掲げろ、竜を焼き祓え！！」

漆黒の刀身がこの時をこそ待っていたと言わんばかりに火を纏い、システム的に「斬りやすい」状態になるグリッターソードと同等かそれ以上の斬れ味で巨人小竜を両断する。
傷口から火を噴いて倒れる巨体を踏み越え、駆け出す先は何かよくわからないが小竜が集っている場所だ。

「よく分からんがキルスコア稼ぎだ！」

龍よ、龍よ！　其の十二（後書き）

汎用効果で特化効果のアラドヴァルに切れ味迫ってる辺り、イムロンの腕が光る

まぁアラドヴァルはパッシブ効果なんですがね

龍よ、龍よ！　其の十三（前書き）

更新が遅れて申し訳ない、ちょっとナイアガラの風を浴びて来まして……（旅先更新）

龍よ、龍よ！　其の十三

小竜の思考ＡＩは、どうやら単純にキルスコアの多寡で決まるというものではないらしい。
助けた何人から話を聞いたところ、どうやら「ブライレイニェゴ本体のヘイトを稼ぐほど小竜が多く寄ってくるのでは」という仮説が立てられているらしい。
つまり、あの場で小竜に袋叩きにされかけていたのは白竜ブライレイニェゴの目から見て「目立つ」人物であったようで、それを横から助太刀した俺もまたヘイトを集めるには充分であったようだ。

そりゃそうだ、何せ……

「おいっ！　聞いているのか！」
「聞いてる聞いてる、ウサギのように耳を傾けてる」
「そうか！　ならばよし！　……ではなく！　その剣！　その剣だ！！」
そのブライレイニェゴから熱（憎）い視線（ヘイト）を貰っていた奴が俺についてくるのだから。
「貴様、まさかそれは……アラドヴァル、なのか！？」
「いやいや、アラドヴァルは槍だろ？　これは剣じゃないか」
「む？　あぁ、そうだな……だが英傑ドルダナはかつて槍を振るう

隙間もないほどの包囲にて自ら握りを折って剣とした、という臨機応変な頭脳を感じさせる逸話があって…………」

二秒沈黙。その隙を逃さないとばかりに突っ込んで来た小竜の内、人間サイズの二体を俺が斬り伏せ、巨人サイズの一体を俺にさっきからついてくる女が叩き斬る。

「いや、剣じゃないか！」

「せやな！！」

なんだこの巨人女、明らかになんか凄そうな剣を使ってるから巨人族の中でもヴァッシュとかシークルゥみたいな上位のＮＰＣだとは思っていたが、クッソいじりやすさも上位ってか？

「なんで貴様が持ってるんだ！」

「逆になんでだと思う？」

「え？　えーと……？」

おっとスリーマンセルか、悪いが「盾・台・跳」式天誅でもなけりゃ俺の不意は突けねぇよ。どんな天誅か？　読んで字の如く。

「やはり間違いない、竜を滅ぼす煌々たる劫火の刃……分かったぞ、拾ったんだな！？」

「正解（せぇいかい）！　凄いじゃん！　よく分かったねぇ！　ところで名前は？」

「むっ、あぁ……私は無双の双剣（モラ・ベガルタ）のフィオネ……だっ！」

おお、三メートルくらいあるタッパで戦うとやはり見栄えするなぁ。

「モラ・ベガルタ？」

「なんだ知らないのか？　我らが父祖オディヌが振るいし対なる二刃……これはその片割れたる情熱剣ベガルタなのだ！」

「すっごーい！」

同時に振るわれた二本の剣が小竜を斬りとばす。成る程、対の剣の片割れ……と。となるとモラ・ベガルタという名前的にもう一本モラルタもありそうだな。

「ふふん、私はこのベガルタに生まれながらにして認められ、モラルタ　を持つ姉さんと共に竜を討つべく…………いやそうではなく！！」

「あ、ちょっと待って着替える」

もう八分経ちそうな気がする。体内時計なので厳密な時間は分からないがこういうのは危機感を抱いた時には動くくらいじゃないとな。

漆黒の水晶を取り出し、片手でアラドヴァルを振り抜いて一体撃破。さらに膝を叩き込んだ上で後ろ飛び蹴り。

吹き飛び倒れたそいつを踏み付け、そのまま地に縫い止めるようにアラドヴァルを突き立て……

「変身！」

あっやべっ、素で変身って言っちゃった。勇輝の晶剣使ってた辺りからテンション引きずってたかな。

女帝至宝装(ツァリーツァ)シリーズが弾け飛び、一瞬だけ半裸……いや、頭装備も腰装備も弾けたから実質全裸……？　全裸状態(インナーは着てる)の俺（女）が露わになる。

だが心配ご無用、これは魔法少女式の変身なので大事な部分は見えない仕様だ。

弾け飛んだ真紅の宝石、今は砕け散ったそれはキラキラと宙を舞っていたが……突如としてそれらの光が闇色に染まる。

小さな宝石の粒が黒い煙のような靄に変換され、物理演算を無視した巻き戻しのような動きで俺の身体へと巻きつき、締め上げる。今俺、腰に手を当てた仁王立ちなんだけどもうちょっと少女趣味っぽいリアクションした方がいい？　需要ないか。

そして巻きついた靄はいつしか衣服の形を取り、黒一色のドレスと顔を隠すヴェールに包まれた俺は、地面に突き立てたアラドヴァルを引き抜いて構える。

「第二形態……今の俺は無制限(ノーリミット)だ」

「な、なんだ今のは！　カッコいいな！」

「せやろ？」

なんだろうな、この……なんだろう？　エムルをあしらうのともサイナをあしらうのとも違うこの感じ……どこかでこんな感じの対応をした覚えが……

「あっ」

分かった。これ、親戚のちっさい子供を相手する感じなんだ。こう、なんだ、言語的に説明できない何かが俺へとそう囁いている。

「まぁなんだ、ほら敵が来てるぞ話は後！」

ずごん、と地面に突き刺さった別離れなく死を憶ふ（メメント・モリ）を軽々と引き抜き、肩に乗せてアラドヴァル・リビルドとの二刀流フォーム。貪る大赤依の時もそうだったが割とこれ対竜戦の最適解っつーか……単純火力と特効火力の組み合わせをブン回せるからこれ以外の択が思いつかないっつーか。

「貴様、見た目の割に力が強いのか……？」

「女子力高めだからな」

「……？」

女子力は戦闘力とイコールであり、私の女子力は五十万を超えているとはペンシルゴンの言葉だ。今の俺は女子力高いから別離れなく死を憶ふ（メメント・モリ）も軽々振り回せちゃうのだ。

「契約者（マスター）」

「サイナか」

「個体名称「エムル」の協力の元、該当次世代原始人類の捜索を行いましたが現時点では成果を出せていません」

「どこにもいないですわー」

むぅ、【昇滝】を纏ったロボが暴れていればルスト辺りなら釣れると思ったんだが……こりゃ本格的に別ドラゴンのところにいるのか？　だとしたらどうする？　ここで別竜のところに行くのも手だが、なんか巨人族のフラグか何かを踏み抜いた臭いし……アラドヴァルの現所有者としてここで巨人族から目をそらすのはヴォーパル魂というかヴァッシュとの好感度的にもあまりよろしくない気がする。

「仕方ねぇ……サイナ、もっと目立とう。強化装甲が使用可能な全武装の使用を許可する」

「成る程……知性全開放（インテリジェンス・フルバースト）ですね？」

てめーの知性は弾丸で出来てんのか。だが嫌いじゃないぜそういうの、火薬は叡智の塊だからな。

「エムル！　お前に預けたあれそれはまだ使うなよ？」

「ふふん、分かってるですわ！　あれそれはとっておきですわーっ！」

おうよ、俺の貯金箱（黄金の天秤商会）から引き出した金と伝手で手に入れた有りっ丈だ。使うなら本命相手じゃないとな。

「フィオネだったか？」

「無双の双剣（モラ・ベガルタ）のフィオネだ、巨人族の名は己が武器と共にある」

「あぁ、フルネームで呼べってやつか……」

「うむ、貴様らには慣れぬ慣習であると聞いているが我らにとってはとても重要なことなのだ」

「ん？」

今何か頭に引っかかったような……いや、気のせいか？

「アラドヴァルを担う者よ、来るぞ！」

『おのれ！　忌々しい刃でよくも愛しき我が子をぉお……！！』

なんだ、俺にヘイト向けてんのか？　上等じゃねーか、テメーの情報を確認した時からずっと言いたいことがあったんだ。

「単一増殖してる時点で子供っつーか単なる自分(クローン)じゃねーか！　ままごとにこっちまで巻き込んでんじゃねーぞ！！」

『な、なんっ、なぁあ……！！』

一匹残らず粉砕(デストロイ)してやるよオラァ！！

「サイナ！！」

「要請(コール)……規格外武装：撃槍型【ファランクス】、展開します」

「え、なんかアタシも構えた方がいいですわ？」

はい人参。

「わぁい」

灼熱と死の二刀流、情熱の剣、巨大な撃槍、そして人参……ふっ

「お前浮きすぎだろエムル」

おっとすまんな、向こうが襲いかかって来たからものっそい顔芸をされても対応できねーや。

よっしゃ行くぞ！　アッセンブル！！

龍よ、龍よ！　其の十三（後書き）

え？　何？　無双の双剣（モラ・ベガルタ）の名前を冠するキャラが二人いるって？
まさか最初に名前決めたこと完全に忘れて新しく名前を設定したせいで二人に増えたんじゃないかって？
馬鹿言っちゃいけない、そんなアホなミスするわけないだろう！

無双の双剣（モラ・ベガルタ）は本来「激情剣モラルタ」と「情熱剣ベガルタ」の二振りを一組とする対刃剣であるが、現所有者「ディルナディア」に妹が生まれた際、何故かベガルタの所有権だけが姉から妹フィオネに移ってしまった。
これが人間であれば殺すなり疎ましく思ったりとドロドロギスギス展開になるのだが、巨人族にとって「武器に選ばれた者」というのは非常に栄誉のあるものであるため「とりあえず実際に戦わせてその結果で処遇を決めよう」ということになった。
結果、なんと十二歳にして小竜を斬り伏せてみせた事でベガルタの所有者として氏族から認められ、現在は弱冠三十歳でありながら氏族の英傑として最前線で戦っている。

ということにすっか！！（割とシャレにならないガバだったがガバ転び八起きを体現するかのような見事なリカバリ）

何も問題はありません、背景ストーリーごと設定を生やしたのでふぃおねさんじゅっさい（巨人族の年齢は３で割ると人間相当）は正式に拙作世界観に組み込まれました。本来は一つの武器が分かたれているというシチュを逃す手はねぇ……！

あ、ちなみにフィオネさんじゅっさいはベガルタパワーで同年代と比べても明らかに育っています。バッキバキに腹筋割れてるしタッパも姉に迫ってるので傍目から見ると双子にしか見えない。実際は姉が六十歳なんですよ、二倍！

龍よ、龍よ！　其の十四（前書き）

バイトで忙しくて……ポラリス楽しい

龍よ、龍よ！　其の十四

◇

実のところを言えば、オイカッツォやアージェンアウルはブライレイニェゴとの戦闘に参加していた。
とはいえその位置はサンラク達とは真逆、ブライレイニェゴを中央に据えて円形に展開された包囲網に於いてサンラク達が東側とすればオイカッツォ達は西側で奮戦していたのだった。

「なんか向こう側から激しく心当たりのある情報が流れてくる……」

手当たり次第に小竜を斬り伏せていく女、竜を象ったどう見てもロボにしか見えない鎧、それに張り付いた兎……情報通りなら女体化したサンラクと【昇滝】を装着したサンラクの二人になっている計算になるのだが。

「サンラク×2……悪夢だ」

高速でステップを刻みながら近づいてくる増殖した二人の変態を思い浮かべ思わず呻いたオイカッツォであったが、流石にシャンフロの運営も変態をコピペするようなことはするまいと気を取り直して近づいて来た人型小竜を殴り飛ばす。

「……一応これ、パーティ単位でユニークっぽいの見つけたから俺の手柄ということにもなる……のかな？」

視線の先、そこには巨大な身体と比較して尚巨大な剣……確か「激

情剣モラルタ」なる剣を振るう女巨人と、アージェンアウルが明らかに険悪な雰囲気で口論している光景を再確認し、ため息をつく。

「そこで仲良くしようとかじゃなくて我を通す辺り、流石の全米一(ゼンイチ)と言うべきか……」

だが、アージェンアウルと女巨人は苛烈な舌戦を繰り広げながらも、双方共に獅子奮迅の闘争を繰り広げ続けていた。

「だーかぁーらぁー！　戦うのは私なの！　武器を砕いたとしてもそのスピリッツはこの拳に！　受け継がれているの！！」

「馬鹿を言うな！　自ら武器を砕くなど、正気の沙汰とは思えん！　武器とは使い手と共にあるもの、それを貴様は……！！」

要するに、武器を相棒と定義する巨人族からすればつい先程連続で武器を破壊しまくって自身を強化したアージェンアウルのそれは彼女にとっては「凶行」に見えたらしい。

オイカッツォとしては「程々に社会一般常識から逸脱しない程度であれば武器を振り回そうが砕こうが結局はＤＰＳ次第」だとは思うが、それを言えば矛先は自分に向くことは確実。オイカッツォはタンクではないので傍観を選択するのだった。

「お二人さん！　どうも向こうで派手に暴れてる奴らがいるらしいよ！　ブライレイニェゴの注意が手薄になった！！」

「む、フィオネか……？　いや、あの子だけでブライレイニェゴの注意を引くなど……」

「あらビッグレディ？　そこで観客したいならチケット売った方がいいかしら？」

挑発にまんまと乗った女巨人がアージェンアウルを追って走って行くのを見送りながら、オイカッツォはため息をつく。

シルヴィア・ゴールドバーグはメディアやファンにも愛想の良いアイドル気質を持っているが、その本質は闘争心の塊だ。

明確な格下にはそれなりに優しくなるが、同格に近しい相手には途端に容赦がなくなる。尤も、オイカッツォもまさかシルヴィアがプレイヤーとではなくＮＰＣを相手にああなるとは思ってもいなかったのだが。

「……ここで油売ってても仕方ないし、行くか」

「あーっ！　見つけたですわっ！　えーと、受けの人！」

「ちょっと待て！」

壮絶に失礼な発言をぶつけられたが、サンラクにしては声が高いしペンシルゴンにしては悪意が足りない。では何者なのかと振り返れば、そこには巨大な突撃槍（ランス）を構え、大量の小竜を撥ね飛ばしながらこちらへと突っ込んでくる特殊強化装甲【昇滝】の……

「ちょぁああああ！！？」

横に跳ぶ！？　間に合わない、貫――

「確認：該当する次世代原始人類ですか？」

「そーですわっ！　比較的マトモだけど分類的には頭おかしい人で

すわ！」

「嘘でしょ……サンラクミームに汚染されきってる……」

【昇滝】。オイカッツォは使用したことはないが、サンラクが絶賛していた【青龍】に対応する強化装甲(パワードスーツ)……頭の中に記憶していた情報を引き出していたオイカッツォであったが、ふと違和感に気づく。

「あれ？　なんでリアクター無いのに使えてんの？」

ウェザエモンを撃破したことで手に入れた四種類の強化装甲はリアクターを装備して起動した戦術機獣を「電源」として利用する、つまり逆に言えば青龍無しで起動するはずがない。そもそもリアクターは今オイカッツォが所有しているのだ。

だが、目の前の【昇滝】は明らかに電源が入った状態だ。まさかあの野郎、遂にリアクターの独自生産に成功したのでは……と背に戦慄の寒気を走らせていたオイカッツォであったが、ここで先程の疑問がもう一度脳裏を駆け抜けた。

聞こえてきた情報が本当に正確であったとしたなら、サンラクが二人いる計算になるのでは。

冗談交じりに考えていたが、仮に真面目にそんな情報が飛んできた理由を考えたのなら。

単純に、条件を満たす人物が「もう一人」いた、というだけの話なのでは？

「――登録完了：契約者（マスター）からのオーダーに従い、対象を連行します」

「なんて？」

というか、中身はサンラクではない。仮に奴がクターニッドの聖杯の効果で女体化していたとしても、声の質が違う。

「ご安心を、力学的観点を考慮し最速かつ最安定の極めてインテリジェンス的な方法にて連行いたします」

「……いや待ってこれ米俵担ぐ奴！」

「舌を噛まないようご注意ください」

「ちょ、待っぎゅ！？」

「ケ、ケーィッツォ！？」

だから本名っぽく叫ぶのをやめろ、そんな言葉すら舌を噛んだオイカッツォには言うことができないのだった……

◆

おおよそ人類が趣味とする大概は100から0にする趣味か0を100にする趣味の二つに分けられる。要するに消費か蓄積だ、その点この手の無双ゲーは敵を削りきる消費とスコアの蓄積の両方を同時に満たすことができるエキサイティングなカテゴリだ。

即ち、今この瞬間俺の満足度とテンションはうなぎ登りということだ。

「図が高ぇんだよ！　足詰めて這いつくばれ！！」

軽々と振り回され、しかし斬撃の衝撃は見た目相応の別離(メメント)れなく死(・モリ)を憶ふが巨人小竜の足を薙ぎ払い、転んだところをアラドヴァル・リビルドが熱と斬撃の二段重ねで仕留める。

また一体、俺が死をもたらした事でR．I．P．と別離(メメント・)れなく死を憶(モリ)ふが条件達成による強化を付与し、さらに暴れ回る……

「おいおいコンボが途切れるだろうが！　追加出せよ！　なぁ！！」

『おのれェエ……！！』

もはやデフォルト小竜は敵ではない、人型小竜も一撃でこそ倒せないが別離(メメント・モリ)れなく死を憶ふで吹き飛ばせる、巨人型はアラドヴァルを脳天にぶっ刺せば大体ワンパンだ。アラドヴァルが特に効くのか、

それとも単純に頭が弱点なのか……まぁいいや、効率が良いなら特に気にする必要もあるまい。

「凄いな貴様！　アラドヴァルもそうだが、その剣もさぞや名のある剣なのだろう！！」

「リア充剣カルクナールさ……」

「リアジュウ剣「カルクナール」……」

「いや、本当の銘は別離なく死を憶ふだぞ」

「なにっ！　騙したな！？」

「人は誰しも間違えるもの、そうだろ？　ごめんな」

「む……謝罪はする勇気も受け入れる勇気も大切だと姉さんが言っていた」

「そうだね、いきなり拉致られた俺に対してごめんなさいすべきだよね」

「フッ……」

「「インテリジェンスが足りてない」」

ああすまんなオイカッツォ、今ブライレイニュエゴの対応で忙しいから壮絶な顔芸されても反応できねーわ。

龍よ、龍よ！　其の十五

「とりあえずこの件に関して一発殴る権利を所望する！」

「ルストを見つけろ、譲渡する」

「分かった、来る？　行く？」

「来てくれると助かる」

五秒で情報を交換、【昇滝】を纏う謎の人物が穿った包囲網の穴から抜け出しつつオイカッツォは駆け出す。

「えーと、確かあの二人は竜血鬼のフラグがあるんだっけ……？」

そしてもう一人はブロッケントリードの相手をしている……と、見せかけてロクでもない作戦を実行中だ。

魔王がばら撒いた種はすでに発芽せんとしている。その片棒を担ぐ主犯格たるオイカッツォは計画自体は以前から持ち上がっていたが様々な理由で後回しにされていた計画実行のために凸凹コンビの姿を探す。

「って見つかるわけないでしょこれ！！」

今現在、戦場と化した前線拠点に同時接続で何人いると思っているのか。少なくとも石を投げて偶然モルドの頭にぶつかる可能性よりかは高いだろうが……

「いや、竜血鬼の近くにいるのか……いやどこだよ……」

しばし考え、とりあえず最初に目に付いたプレイヤーに聞けば良いだろうと振り返り……

『ぬぐぉぉあ！　クソがっ！　この俺様が、死んで良いはずがないぃ！！』

「えっちょ」

全身からダメージエフェクトをまき散らし、強者としての威圧をかなぐり捨てた赤色の異形（ドラゴン）がなりふり構わない様子でこちらへと突っ込んできていた。

「なぁぁあ！！？」

『なぁぁあ！！？』

奇しくもブライレイニェゴと同じ悲鳴をあげながら、オイカッツォは全力で真横へとジャンプする。

しかしそんな機敏なアクションを望むべくもないブライレイニェゴに突っ込んできたドゥーレッドハウルの巨体が直撃し、背中から無尽蔵に生産され続ける小竜を決して少なくない数踏み潰しながら白い巨体が横転する。

『そ、そうだ！　俺様が死んで良いはずがねぇ、テメーが代わりに死ね！！』

『貴様ァ……！！』

どうやら、追い詰められたドゥーレッドハウルがブライレイニェゴを身代わりにしようとしたらしい。
来た方を振り向けば、自身が来た方向へとブライレイニェゴを盾にするドゥーレッドハウルの姿。

「……あ、オイカッツォさん」

「サイガー0さん……あーなるほど」

呼びかけられた声に振り向き、ドゥーレッドハウルが追い詰められた理由に合点が行く。
あいも変わらずプレイヤーというよりそういうエネミーと言われた方が納得しそうな鎧姿に、明らかにただならぬ気配を漂わせる大剣を持つサイガー0だけではなく、その背後には【黒剣】のメンバーや他にも現時点での最先端なのだろう装備を身に纏うプレイヤーの数々がドゥーレッドハウルにトドメを刺さんと白竜の戦闘領域へと踏み込んで来ていた。

(赤竜が一番削られてる感じか……緑竜はペンシルゴンが遅延させてるはずだし、赤はここで仕留めるつもりなのか?)

いや、とオイカッツォはその考えを否定する。
今現在最もヘイトを集めているドゥーレッドハウルをここで切るのはまだ早い、だがこればっかりは外道の策でもどうにもならない面もある。

「拠点バフ……厄介な」

そもそも、ドゥーレッドハウルに攻撃が集中した最大の理由はスカルアヅチがプレイヤー全体に熱耐性を付与したためだ。

良くも悪くもプレイヤー側の自由意志に任され切ったこの決戦フェーズは「色竜を全て倒す」「ジークヴルムを撃破する」の選択肢以外は何も用意されていない。故にスカルアヅチという拠点……言うなればプレイヤー達の象徴が示したターゲットに従うプレイヤーが多いのだ。

そして、スカルアヅチの城主は反ノワルリンド派の頭領……いや棟梁とでも言うべき人物、もしスカルアヅチの次なるターゲットがノワルリンドになれば。

「まずい……まずいよこれ……」

ウェザエモンの時とは違う、それぞれが別の場所に散らかっているために現状声の届く範囲外に言葉を伝える手段のないシャンフロでは「頭（ブレイン）」たるペンシルゴンの言葉を伝達する術が著しく制限される。

「どうする？　どれを狙う？」

その時だった。

ひゅるるる………パァンッ

「！！」

戦場という場面において、驚くほどに場違いな花火。それはいやに耳に残る音を立てながら昇り、爆ぜ……白色の花を咲かせた。

「白！！」

瞬間、戦場が動いた。

「白」

「白だ」

「あれが「合図」でいいんだよな？」

「ブライレイニェゴだ！」

「ブライレイニェゴを狙え！！」

どこからともなく、誰ともなく。数千ものプレイヤー達がひしめく中で声が上がる。

白色だ、

白竜だ、

ブライレイニェゴを狙え、

ただ一人の言葉ならば戦場の雑音と流されるそれ。しかし、数十人の声がねずみ算の如く情報を広げていけば、真偽と根拠を抜きにして「そういうものなんだろう」とプレイヤー達は動き出す。

「サンラク！」

「えっ、今話しかける！？」

「外道からのオーダーだ！　ブライレイニェゴ重点！！」

「ちょっ、ちょちょちょ……ええい集るな！　散れ！」

モノクロの大剣を振り回し、執念深く自身に取り付いていた小竜を片手で地面に叩きつけながらサンラクが叫ぶ。

「ＴＫＯ！！」

「ＴＰＯな？　ノックアウトされたのその小竜だし」

「どっちでもいいわ！　で！？　「合図」が来たってこたぁ……い……いんだな！？」

「あぁ、流れを巻き込めサンラク！！」

ペンシルゴンが立てた作戦の第一段階は単純明快。

プレイヤー達の中に「そういうの」が好きな協力者を潜ませ、何れかの竜が追い詰められたタイミングで別の竜へと攻撃を逸れさせる。

無論全てのプレイヤーがそれに従うなどとはサンラクもオイカッツォも、立案したペンシルゴンも思っていない。だが百人の中から二十人が離脱するだけでも作業効率は２０％下がるのだ。

そしてその合図こそが先程の花火だ。タフネスに特化したブロッケントリードはどちらにせよ時間を稼いでくれる、ノワルリンドは上手い具合に空中戦でヘイトが向かわず、であればドゥーレッドハウルとブライレイニェゴの二体を使って注意(時間)を削ぐ(稼ぐ)。

そして花火が上がった時点で約二名を除いて全員が集合する。捜索の任務を免れたオイカッツォは自身にバフを付与しながらも再び白竜へと向き直る。

「周りのプレイヤーの妨害になるくらい派手に暴れろ、なんて無茶言ってくれるよ」

「第三形態を見せる時が来た、ということだ」

「え？　姿変わるの？　完全変態じゃん……」

グッと上に立てられた中指と下に向けられた親指が交差した。

「あ、あの……サンラクさん」

「おおレイ氏、そしてサイガ姉」

「合図は確認した、奴からは「ウチのが派手に目立つからさ！　それに便乗しちゃって！」と聞いているが……どうするつもりだ？」

「フッ……見せてやるよ、ＤＰＳの極限って奴をな……！！」

モノクロの大剣を地に刺し、インベントリアを操作したサンラクの手に何か赤い物体が現れる。

それは異形で異質、哺乳類にも爬虫類にも見える、しかして既存の

生物のどれにも当てはまらない特徴も備えた……奇妙な赤い頭蓋。

「それは？」

「レイドモンスターの撃破報酬」

「成る程……いや成る程じゃない！　なんだと！？」

「話は後だ、集中集中！！」

龍よ、龍よ！　其の十五（後書き）

時間も腕も足りない

「工作員ロールプレイ」スキーな協力者達は主にゼニス・ゲバラの伝手

龍よ、龍よ！　其の十六

◆

「ようしサイナ！　エムル！　プランBだ！！」

「プランBってなにさ」

「プランB、俺が死ぬまで戦う」

「それ作戦というか玉砕……」

「ぶっちゃけリスポンできるプレイヤー的には自爆も玉砕も視野に入る選択肢だろ」

「ペンシルゴンなら人間爆弾までならやると思うんだけど、サンラクはどう思う？」

「……いや、まず自分が派手に自爆する手段を整えるだろ。鉛筆王朝の終焉と共に王城を吹き飛ばした女だぞ」

木材すらも略奪対象になるから今現在も城が完成してないらしい世紀末円卓マジ世紀末。幕末とはまた違った方向で明日を捨ててる世界だ……

「プランBの発令を確認。再確認します契約者、我々征服人形は契約者の再構成と連動して契約者の付近に転移します」

「聞いた聞いた、エムルはどうする？　レイ氏と……あー、ディアレと一緒にここに残るか？　それとも先にセーブポイント……転移したところに戻るか？」

「ここに残るですわ！　それに今のアタシはひと味もふた味も違う、ですわ……！」

「……、……？　………っ！！？！？」

おっと、ディアレが何かに気づいた様子で顔芸を披露しているが……うん、まぁそう言うことなんだ。エムルはＮＰＣに課せられた壁……二桁から三桁に至る壁を乗り越えてしまった。そう、ウィンプの鬼レベリングと俺の周回掘り作業に付き合っている内にな……

今のエムルはＬｖ．１０１、１００になるまでが異様に長いだけで１０１には結構簡単に上がった。そりゃトレイノルとフォルトレスの決戦に何度も首を突っ込んでりゃ上がるわな。

あーその、なんだ、ディアレ氏につきましてはご愁傷様としか言いようがなく……

「くぅぅぅ………ころへぇ……」

まぁ、心中はお察しする。実質的な元凶俺だけど。

というかいつまでも駄弁ってる訳にもいかない、合図の花火が上がった時点でルスト計画もほぼ完遂されたも同義だ。プランＢの最終段階は派手に自爆することで完遂されるのでどちらにせよ死ぬっちゃ死ぬが、こう……高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変な感じで……

「心の獣を解放するのだ……」

「ルスト来る前に死なないでよ？」

「五分以内に来てくれるかな？」

「さぁ……」

まぁいいさ、どちらにせよジークヴルム討伐にあたり色竜を減らすのは計画内だ。それに蠍と違ってこいつらはお手軽にキルスコアを稼げる。まさに俺のためにあるかのような戦場だ……

カポッと赤い頭蓋を被り、六つある眼窩の一つから前を見据えて一歩前へと踏み出す。

「あ、相当派手にやるからできれば離れていた方がいい」

「周囲に被害が出るのか？」

「忠告はしたぜ」

さて……五分、五分か。ノルマの方はそこまで気にすることはないが……五分、全力出し切って戦いきれるかな？

まぁ大丈夫だろう、なにせ……

「英語表記クァンタムを接種済みだからな……！！」

「ヤク漬けじゃん」

「合法です！　……「血解（ブラッドハート）」！！！」

その言葉を。喉を震わせ放った音が頭蓋を震わせた瞬間、まるでスペックの足りないＰＣがでかい作業を始めようとした時に一瞬フリーズするかのような。有り体に言えば「空気が凍りついた」かのような感覚。
喪服装備越しとは言え、直接頭に被っているからこそ分かる。赤い異形の頭蓋、それが確かに今……鼓動した。

「え、ちょ、なにそれ」

「血……？」

赤い頭蓋、赤い骨、赤いそれ。実際カルシウムでできているのかは分からないが、少なくとも個体であるはずの頭骨からドロドロと赤い液体が染み出して来る。
それは当然装着者たる俺の身体を這いずるように、染み込むように溢れ出ては纏わり付いて。
ガクガクと痙攣する俺の身体、当人からするとシステム的なモーションなので別に苦痛とかは一切ないのだが全身を硬直させて痙攣する姿は外面が最悪すぎることは周囲の反応を見れば一目瞭然だ。

そしていつしか溢れ出した赤い液体が滴り落ちるのではなく明確に新たな形を作り上げていく。
顔の輪郭を伝う雫が集まり下顎となり、肩から腕へと滴る赤色が人間の貧弱な手指を獣のそれへと変える。
背中から、肩から、触れるものを害する事のみを考えた棘のような突起が生え、腰の後ろからずるりと伸びたそれは紛れもなく尻尾。
そして最後に、赤い液体……ナニモノかの血に包まれた頭骨の、六

つの眼窩を覆う瞼が開かれ、その下から現れたギョロリと六つの眼球が戦場を睨みつける。

「ふぅうｕｕｕｕ……」

「えーと、あの……サンラク？　正気保ってる？」

「……」

無言でオイカッツォへと一歩近づく。オイカッツォは俺から一歩後ずさる。

「マヌケヅラａａａａ……」

「ダメだ、理性がないようだし介錯してあげよう」

「いや、それは……」

性転換しても顔面据え置きの受け野郎に構ってる暇はない。第二形態……もといＲ．Ｉ．Ｐ．と違って第三形態もとい暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）は無制限ってわけじゃない。

「鏖殺祭り（ハーヴェスト）だａａａａａＡＡＡ！！」

エフェクトのかかった声を上げながら駆け出す。近くにいた人型小竜の首を掴み、ゴキッと力を込める。

麩菓子でもへし折ったような感覚と共に小竜が砕け散り、死亡エフェクトが獣と化した頭部へと吸い込まれていく。

「っしゃａａａａ！！」

バックステップを入れて元の場所に戻りつつ地面に突き立てていた二剣を引き抜き、本格的に戦場へと飛び込む。

「どけどけｅｅｅ！！」

「モンスター！？」

「あ、危っ……！」

悪いねプレイヤー諸君！！　この形態だと物理的にタッパがでかくなるからさぁ！！　悪いが手を止め足を動かし退いててくれよなァ！！

ぶん投げた別離れなく死を憶ふ(メメント・モリ)が巨人小竜の胴体を貫き、そのまま柄尻に飛び蹴りを叩き込んだことで完全に貫通した特大剣が地面に突き刺さる。

「いい加減本体も削ってかないとなａＡ！！」

プレイヤー達による包囲殲滅の陣形に対して内側から外側へと戦力を生産し続けるブライレイニェゴは、当然ながら本体へと近づく程に密度が上がっていく。

だが全身に攻撃判定が付与される今の俺は尻尾を振り回すだけでもダメージソースになり得る。

「ふははＨａＨａＨａＨａＨａ……！！　ギアを上げてくぞコラａＡ！！」

赤色警報だ。外出は控えたほうがいいぜ白色ども、現在外に出てい

る白竜系列のエネミーは根こそぎ叩き潰してやるよ。
別離れなく（メメント・モリ）死を憶ふの軽量化効果は戦闘終了もしくはインベントリに戻すと消失する。
つまり逆に言えば、そこら辺にぶっ刺しておけば軽量化効果を残しておくことができる。その上で別の武器を握ることも可能！！

武器をその場に出しっぱなしにして戦うテクニックはシャンフロじゃ割とありふれたテクのようだが、この戦法はプレイヤーが死ぬとその時点で手に持っていない武器がその場に残ってしまうという欠点がある。
ＰＫ以外じゃ所有権云々は移らない筈だが、それを抜きにしても取りに戻る必要はあるし最悪インベントリアに入れられないだけで誰かが持っていく可能性もある。

まぁ、要するに死ななきゃいいだけの話だしパクろうとする不届き者は半殺しにすればいい、それに……そんな時間すら与えねーさ。
「フルスロットルｒｒｒｒ！！」
この声にかかるエフェクトなんかだんだん笑えて来るのがいかんな、わーれーわーれーはーうーちゅーうーじーんーだー

龍よ、龍よ！　其の十六（後書き）

赤獣形態
そろそろ人間を辞め始めた邪法妖女の第三形態、例のイケメンごはんですよを赤くした感じ。つまり「黒」の始源眷属は……いや大丈夫！　あいつ固体だから！！
傍目から見ると完全に暴走してるようにしか見えないしどう見ても身体に悪そうだが当人的には若干視界が赤くなる程度で特に問題はない。
目が六つに増えるが本当に六個分の視覚情報を叩きつけられる訳ではなく、あくまでもプレイヤー視点では通常の二眼式

基本的にレイドモンスターがドロップする報酬アイテムは
・ハイリスクハイリターン
・そこそこリスクそこそこリターン
・ローリスクローリターン
の三種類、暴血赤依骸冠はハイリスクハイリターン系列、すなわち最悪種族ごと始源に汚染される可能性を内包している

尤も、ローリスクローリターンがハズレかと言えばそういう訳でもなく、ネクロファジィのように「これ普通に便利じゃね？」というものも多い、というか樹海みたいな捕まるところの多い場所じゃ暴血赤依骸冠より当たりなんじゃ……

おのれトットリ！！（緑竜並感）

龍よ、龍よ！　其の十七（前書き）

シャンフロの二次創作書きたいなぁ……とふと考え、その言葉の意味に気づくまで十秒かかりました。生産者なんだよなぁ……

龍よ、龍よ！　其の十七

◇

それは風のように流動的で。

それは雨のように間断なく。

それは雷のように荒々しく。

すなわちそれは、まるで赤色の嵐そのものであった。

「……よし、こっちもこっちで動こうか！」

「あれを見てよくその感想で片付けられたものだな……」

「まぁ、あの程度ならよく見る感じだし……メニュー画面操作相変わらずってくらいかな」

オイカッツォの目から見て、サンラク最大の強みは反応速度や（クソゲーによる）経験値……ではなく、ユーザーインターフェース即ちＵＩへの適応の速さであると考えている。

シャンフロに限った話ではないが、プレイヤーの操作により武器を「呼び出す」タイプのゲームにおいて、戦闘中のウィンドウ操作は極めて重要な意味を持つ。

「シャンフロのウィンドウって思考操作で呼び出して指で操作するじゃん？　そのタイプのＵＩってシャンフロ以外にもあるけど……サンラクって「手元」に座標指定してノールックで操作するんだよね」

竜のような、狼のような、鮫のような、猛禽のような、少なくとも敵を害し獲物を喰らうという点だけははっきりとした赤い獣が笑う。その手は忙しなく動く中で時折ウィンドウを手元へと呼び出し、投てきで開いた手に間髪入れずに次の武器を呼び出しては戻し、呼び出しを目まぐるしく繰り返す。
双剣が乱舞し、鉄拳が敵を砕き、炎が軌跡を描いたと思えば、気づけば手繰り寄せた特大剣が風を砕き裂いて敵もまた同じ末路に変える。

「見ずに……ですか？」

「指でスワイプした時のスクロール速度とかどの位置にどの項目が来るか、とかを暗記してんだよねアレ。本人曰く「アイテム抜刀術」、まぁノールックだとしても片手が塞がるのは事実だからそこを詰められると弱いんだけどね」

「曲芸……か？」

「そうでもないよ？　アイテム欄の一番上と一番下に目当ての武器を置いたりすれば割と簡単に取り出したりできるよ」

実際オイカッツォも同じようなことは日常的に行なっているし、別に百万人に一人しかできないという訳でもない。
ただ、サンラクの場合は如何なるＵＩであっても即座に対応してし

まう点が強みなのだ。

「……いつだったか、「UIがゴミ過ぎてヤバい」ってボヤいてた時あったなぁ」

確か、アイテム画面を開くたびに空気を読まないボイスやらなんやらが挟まるせいで最長でアイテムを取り出すまでに一分かかるとかなんとか……と、過去に想いを馳せていたオイカッツォは正気に戻ると、一つ息を吐いて気を取り直す。

「ルスモル探すかぁ……あぁそうだサイガー100さん、竜血鬼の一団ってどこにいるか知ってる？」

「竜血鬼………あぁ、料理人プレイヤー達が張り切っていた彼らか。確か、下手に死なせるのも忍びないからとブライレイニェゴの小竜と戦わせていた……ような……」

サイガー100自身も良くも悪くも森人族との接触の二番煎じな合流を果たした竜血鬼達の印象が薄いのか、こめかみを抑えながら絞り出すようにその動向を話す。

「ああ思い出した、そういえばスカルアヅチからのバフで安全性が上がったからドゥーレッドハウルをタゲっていた気がする」

「ってことは……」

今現在、ドゥーレッドハウルはプレイヤー達に追い立てられた先でブライレイニェゴへと衝突、そして非常に見苦しいヘイトの押し付けを目論む衝突が起きている。つまり……

「あっ、いたーっ！！」

「うぇ！？　あ、なんだオイカッツォさんか……」

「……数時間ぶり？」

至極あっさりと凹凸な二人の姿を見つけたのだった。
装備の所々が煤けていたり若干溶けかけていたりと火属性の敵と激闘を繰り広げたことがよく分かる消耗具合だが、少なくとも戦闘に窮する程には追い詰められていないらしい。

「とりあえずルスト計画が進行中です、あとはペンシルゴンと合流すれば最終段階だ」

「計画……なんて？」

「あそこで暴れてるアホがようやっと拠点を持ってきたからね。例のロボを……ね」

「ふーん……ふーん！？」

見事な二度見であった、そしてその側では「あれモンスターじゃなかったの！？」とモルドも二度見していた。こいつら一々息ピッタリだなぁ……と益体も無いことを考えつつ、オイカッツォはもう一つの戦場たる緑竜の戦闘領域へと視線を向ける。

「戦術機獣や強化装甲は所有権が三分割されてるからね、クラン共用にするにしても三人分の承認がいるんだよね。あぁ、これ動力源(リアクター)ね」

「ちょ、と、わ、え、」

ぽい、と林檎でも投げて渡すかのような気軽さで規格外エーテルリアクターを放り投げたオイカッツォと、赤子でも抱きとめるかのような細心の動作でそれを受け止めるルスト。

「っつーか向こうもこっち来るだろうし……なんか、労せずしてやるべき事が終わってしまった……」

実際、物欲センサーをほぼ無効化している秋津茜程ではないがオイカッツォもプロゲーマーとして屈指の記録を打ち立てているだけあって「引き」は強い方である。
故にこのようにすんなりと事が上手くいった……が故にこのようにユニークシナリオが発生するかもしれない可能性から自ら遠ざかっているのだが、それを本人が知ることはないだろう。

「さぁーて……「成り金」作戦はどうなってるかな、と……」

そもそも妙な話なのだ。クリア条件として「ジークヴルムの撃破」が存在するにも関わらず、ジークヴルム本体は空高くにいる。まさかこの時点で戦術機獣やら強化装甲やらがプレイヤーのほとんどに行き渡っている事が前提条件であるはずがない、であればジークヴルム戦の流れには何らかのトリガーが存在するはず。

高みの空に舞う黄金は依然として遠く、未だその高みまで至った者は一人しかいない。だが恐らく、その一人の辿り着き方は正規のそれではない。ジークヴルムが地面に降りてくる条件があるはずだとオイカッツォは思考を巡らせる。

「……英傑、B．I．G、性格（キャラ）――」

「――――「総プレイヤーから集計した判定のプラス評価が一定値以上」とかそんなトコでしょ」

「ん、遅いじゃんペンシルゴン」

「いやー、ネチネチしつこいからさぁ……トットリ・ザ・シマーネ君を見つけ出してブロッケントリードのヘイト全部押し付けてきた」

どこかで勇者だ何だと持て囃される弓使いの悲鳴が上がったが、それは戦場に溶けて消え、ペンシルゴン達の耳に届くことはなかった。故にブロッケントリードに関しては過去と処理したペンシルゴンが白と赤、そしてもう一つの赤が暴れる戦場を眺めながらＨＰ回復のポーションを呷る。

「ぷふぅ、ゲーム内じゃサンラク君と会うのは大概久しぶりな気がするねぇ……随分とまぁ野生化しちゃって」

「あぁ、ブラックバスとかそういう感じの」

「クソゲーからの外来種怖いなーってトコ？　くくく、上手いこというねぇカッツォ君」

自然な流れでサンラクを煽りつつ、七人にまで数を減らしたヒューマンドラゴラを従えたペンシルゴンは天を見上げ、地を見渡す。

「あんな英傑英傑言ってたらまぁ条件はそこら辺でしょ、少なくともサンラク君がタイマン挑んで受けたって風の噂で聞こえてきたし……」

「って事は最悪降りてこない可能性もあるんじゃ？」

「いやいやカッツォ君、「竜狩り（ドラゴンスレイ）」は世界共通のヒロイックレジェンドってやつさ」

「あぁー…………色竜の撃破で降りてくる可能性かぁ……」

「私達的には不都合だけど、その可能性が高いね……」

【旅狼】の方針からしてノワルリンドは絶対に生存させなければならない。であれば「捨て駒」は赤、白、緑のいずれかと言うことになるが……

「いや、このまま行こう！　戦ってて分かったけどブロッケントリードは相当持ち堪えると見た、だったらこの際赤も白も削っていく、ハイリスクハイリターンで「暇な連中」を作り出す！！」

「確かにリターンはデカいかもしれないけど、リスクの方が大きくない？」

色竜が減れば、当然残る竜（龍）に向かうプレイヤーの数も増える。それはジークヴルムに対する戦力の増強であると同時、ノワルリンドへの矛先を増やしかねない諸刃の剣でもある。
さらに言えば反ノワルリンド派にはスカルアヅチという特大の切札がある。ドゥーレッドハウルのジェット噴射が如き炎すら軽減してみせたあの極大強化付与は確実に支持を集める事になる。

「そこはジークヴルムを参考にしようじゃない」

「というと？」

「――来たれ英傑、ってね」

龍よ、龍よ！　其の十八

◆

断言できる、今の俺ならリュカオーン（影）をソロ討伐できる。そんな確信すら抱く程に今の俺は強化されきっていた、極まっていた。

「ラス一分（イチ）ィｉ　ｉ　ｉ！！」

生かさず殺さず、されどド派手に目立つ。であれば四分の積み重ねを経たこの残り一分がクライマックスだ。

第三形態のタイムリミットは五分、厳密には六分だが俺にとっては五分だ。そして四分経過した今、いい加減小竜（ザコ）狩りも切り上げ時だろう。

「狙うぜ本丸！　その白、血染めにしてやるよｏｏｏＡＡＡ！！」

『なんだ、何なんだお前はぁあ！！』

フハハ怖かろう、ここに至るまでに１００キル以上は叩き出してるからなァ……激重な筈の特大剣が今や羽のように軽い。軽すぎて逆にちょっと使いづらく感じてきたくらいだ。

発動してから時間が経過するほどに赤い頭蓋に侵食された身体はその怪物性を増していく。

今や俺の全身に上から覆いかぶさっていた、言うなれば頭巾のようなものであった筈の赤い液体は今や肉の如く振る舞い、腕を振るう度に、尾を振り回す度に、その顎で噛み砕く度に赤く怪しく脈打っ

てすらいる。

「クラaaa……イ、MaaaAXゥ……！！」

赤竜が邪魔だな……さっきからどうにかしてブライレイニェゴを盾にしようとしてるが、一々みみっちいぞあの野郎。

ダン、と地を蹴り駆け出す。だがこれは助走に過ぎない、二体の竜に迫る中程で投擲のフォームを取り、加速と慣性、物理演算の悉くを推進として得た別離(メメント・モリ)れなく死を想ふをぶん投げる。

「っしゃオラァアAAA！！！」

『ギャオアァア！？』

俺にとっては羽の如く軽い剣であっても、それ以外にとっては鉄塊よりなお凶悪な特大剣。ボン！　ともバウ！　とも聞こえる凄まじい風切り音を伴って漆黒の刀身がドゥーレッドハウルの肩を貫いた。

「イイぜeee、ノってkiた……切り札一枚、お前ni使ってやnよ」

吼えろアラドヴァル！　燃えろアラドヴァル・リビルド！！

再構築(リビルド)に至り、新たな担い手に馴染んだ英傑武器(グレイトフル)は、真に担い手を認めた時未だ語られざる奥義(スキル)を覚醒させる！　byヴァイスアッシュ！！

煌々と燃え盛る灼熱の剣が未だに俺の前に突っ立っているのろまな小竜を焼滅させ、道を切り開く。

「其h(は)aあり得z(ざ)aる槍、断章積m(み)i編m(み)iて紡がr(れ)eし非実在の

輝ki！！」

曰く、その槍はグングニルやロンギヌスに次いでザ・ファンタジー槍ネームの大御所でありながら、実のところは日本で勝手に作られた名前らしい。
であるならば、それは存在しない幻像の槍。しかして確かに振るわれる必勝と光を、アラドヴァルは炎として定義する！！

轟々と大気を喰らい燃え上がる灼熱の剣、もはや刀身全体が赤く黄色く白く発光し、ジリジリと担い手たる俺すらをも焼き尽くさんと熱を放つ。

右拳で胸を強く叩き、空いた左手に巨大な、あまりに巨大かつ鈍重な盾を呼び出す。
女帝城の顕壁盾（ヴォーバン・ガルガンチュラ）、質量的にも要求ステータス的にもあまりに重過ぎる、フォルトレスの装甲殻のみを使った超重のタワーシールドは、今この瞬間に限っては極悪性能の質量兵器と化す。
超重量の盾を片手で掲げて尚衰えぬ速度で前進、前進、百足の如く後退という文字を忘却した前進行動。小竜が轢かれ、撥ねられ、吹き飛ばされる。なにやら妙なフォルムの小竜がいた気もするが、なに今の？　盾に突進（頬ずり）ってか？　舐めてんの？　ミンチになれや。

最高クラスの物理耐性と衝撃耐性を持つ女帝城の顕壁盾はもはや盾と言うより壁、それが猛進しているのだから……まぁ、ボウリングのピンみたいに吹っ飛んでいくわけだ。
あぁ、プレイヤーなら結構前に避難済みだ。何度か獲物を横取りするような形になってしまって申し訳ない事をした。謝罪の意思を込めた潤んだ眼差しで見つめるとなぜか皆目をそらす……コミュニケーションって難しいね。

「加速suるaaaaa！！」

厄介な小竜溜まりが開けた、この瞬間を逃す手は無い……黒雷と共に己を鼓舞して駆け抜ける。もはや雑魚は障害物ですらない、真界（クオン）観測眼（タムゲイズ）が加速する世界に道を見出す。

一歩駆け、二歩踏みしめ、三歩で跳ねる。ブライレイニェゴめ、狙われてるのがドゥーレッドハウルだと気づいたな？　あまりに白々しい小竜配置だ、どう見ても「これを足場にしてドゥーレッドハウルをボコってね」と言わんばかりの小竜を遠慮なく踏みつけ跳躍。

『ン、な………！？』

「対応gA、遅いNa」

空中で構えるは刺突の姿勢、剣の切っ先を……いや、いいや、違う、違うとも。今この瞬間、俺が持っているこれは、紛れもなく槍の穂先だ。必勝を手繰る、実在しない槍の伝説を形作る第四の槍。故に「アラドヴァル」が放つ奥義の名は。

「――――「輝槍仮説第四（ブリューナク）：焼燬（キャール）」！！」

白熱する穂先がドゥーレッドハウルの肩口、別離（メメント・モリ）れなく死を想ふが穿った傷口に突き立てられた瞬間、

「蟹Miてーな脚しyaがって……Moげro！！」

アラドヴァルの刀身から堰を切ったように溢れ出したおびただしい量の炎が巨大な、俺の身体よりもデカい「穂先」を形成。そして刺

突の勢いそのままに爆破と焼却による破壊のエネルギーを以って赤竜の片腕が吹き飛んだ。

『う、腕ぇぇぇぇぇ！　腕がぁぁぁぁ！！？』

「おｏう……流石ｈａ竜特効（アラドヴァル）」

元から部位破壊として腕を切断できるのか、それともアラドヴァルの竜への殺意がそれを可能にしたのか……ドゥーレッドハウル君！　一本くらい無くてもなんとかなるって！

『愚かなり赤竜！　そのまま悶え苦しむがいい！！』

「おめーもＤａよ」

『へぁ……？』

ブスンブスンと細い黒煙を上げてその熱を一時的に失ったアラドヴァル・リビルドを収納し、代わりに両手を鋼鉄と水晶の拳へと変える。

「【超過機構（イクシードチャージ）】！！」

大盤振る舞いだ！！　両拳の装甲がスライドし、内蔵した金と銀の水晶を露出させる。輝きは圧縮され、解放の引き金を使い手たる俺へと委ねる。

馬鹿め、馬鹿め！　ドゥーレッドハウルを倒させる為に俺へ向けた小竜のヘイトを逸らしたのが運の尽きだ！　今更襲いかかったところで間に合うものかよ！！

もはやこの程度なら視界補助は必要ない。過剰伝達（オーバーフロー）のステップでブライレイニェゴの懐にまで肉薄。その腹へと暴血赤依骸冠（ブロード＝クロゥネ）のラスト十秒と、煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手の全耐久値を捧げよう。

「――――「超排撃（リジェクト）」！！！」

『……か、はァ……っ！！？』

刺して、固めて、砕け散れ。
三つのプロセスを経て文字通りブライレイニェゴの腹部が粉砕される。
それと同時、爆心地に最も近くなおかつその元凶を手に装着していた俺にも凄まじい反動が襲う。

「GNuぁぁぁぁ……っ！！！」

キルスコアをトリガーとする二つの効果による二重強化されたこの身ですら反動を抑えきれない。
ガリガリとかろうじて中身が人間であることを証明するR．I．P．の靴が地面に二つの線を刻みながら俺を後ろへと押し込んでいく。

あ、やば。後ろに倒れ………

「ぬaaaaAAAAA！！！」

お辞儀をするかのように身体を前屈姿勢へ、そし完全に壊れた煌蠍の籠手を地面に突き立てるように手をついて仰向けにすっ転ぶ事だけは回避する。

「セー……」

セーフ。と言い切る前に、

五分が経過した。

龍よ、龍よ！　其の十八（後書き）

謝罪の意思を込めた潤んだ眼差し（六つの目でじっと見つめられる）

輝槍仮説第四
刺す↓炎が発生↓巨大な槍の穂先になる↓スペツナズナイフみたいに炎穂先が射出される

実はアラドヴァル本来の輝槍仮説はもっと小規模かつ貫通力がさらに高かったりします
どっかのバカがリビルド化させる時に山火事・ｚｉｐをぶち込んだせいでリビルドの仮説は範囲攻撃化しているのです。実際リビルド式の仮説では龍蛇の鱗を貫けません

龍よ、龍よ！　其の十九（前書き）

ポチ数増やせばワンパンいける！（悲しみの遠吠え）

龍よ、龍よ！　其の十九

結局のところ、暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）というアイテムは最終的にはデメリットを喰らう仕組みになっている。三十秒毎の判定はあくまでも延長、デメリットの先延ばしに過ぎない。

暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）の副作用（デメリット）。それは状態異常「飢餓暴走（ハンガーピード）」が付与され、使用者は強大な力を得た代償として人としての尊厳を失う。

左方始源血属（エレボス・ブラッドルーツ）……要するに大赤依の親玉に強制舎弟化させられるって事だろう。それが完全にデメリットのみの種族変更なら厄介だが、ある程度の旨味もある種族変更だった場合、面倒なことになるだろう。

「Ogggggggooooo……」

ビクンビクンと身体が痙攣する。幽体離脱でもしているかのように肉体の主導権がマニュアルからオートに変わりつつある。全身を覆う「赤」が蠢き、這いずり、そして俺の身体へと染み込んでいく。

だが、そうとも。だがしかし、だ。

ここで一つ疑問が出てくる。これはある種のテキスト的なクエスチョンなのだが……

『三十秒ごとに暴走判定が発動し、合計十回行われる暴走判定間に最低三体以上のキル判定を達成していない場合「飢餓暴走（ハンガーピード）」状態と

なる。これにより種族が「左方始源血属（エレボス・ブラッドルーツ）」となり、アバターはＡＩによって操作される。
さらに五分経過した時点で強制的に「飢餓暴走」状態となり、一分間暴れ続けた後体力が０になる。』
……まぁ、つまり……

これが暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）のテキスト。問題となるのは「「飢餓暴走（ハンガーピード）」状態となる。これにより種族が「左方始源血属（エレボス・ブラッドルーツ）」となり、」の部分……

「Ｏｇａｇ！？」

ビクン！　と一際激しく身体が痙攣する。それはまるで、あるべき流れが何かによって中断されたような、そしてそれは、内側から食い破るかのように……！！

「げふぅ！？」

有機的な赤い外装が弾け飛ぶ。その下から現れるＲ．Ｉ．Ｐ．装備の俺。だがそれを成したのはそちらではなくさらにその下。
刻まれ呪われた、狼の傷が熱を帯びている。まるで縄張りを侵した不届き者へ忿怒を抱いているかのように、それ以上の踏み込みを決して許容しないとでも言わんばかりに。

「う、うげぇ………」

結論から言えば、あの日水晶巣崖で発症した時からこうなる事は確認済みだった。
暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）の「飢餓暴走」はいわば強制改宗（コンバージョン）とでも言うべきもの。
つまりリュカオーンの刻傷の「改宗不可」の効果で弾けるのだ。が、これでノーリスク運用できるかと言えばそんなことはなかった。

「こ、ここで行動不能は……うぐぅ」

壮絶に身体がだるい、行動するための最初の力みすら出来ない、このゲームには空腹値があってそれが低いとパフォーマンスが低下するが、あれをもっと酷くした感じだ。

「飢餓暴走」は強制改宗だけの状態異常ではなく、どうやらそれプラスアルファのマイナス状態であるらしい。端的に言えば、今の俺はスタミナと空腹値がほぼ最低値から回復しないし、多分一分後に死ぬ。

水晶巣崖で試した時は一分経つ前にバックスピンが入ったスマッシュされたので確信があるわけではないが、多分強制改宗と一分後の即死効果は別だろう。

『おのれ、おのれ、おのれぇぇぇ！！』

まぁそもそも、クリスタル腹パンされた白竜さんがブチ切れておられるので今回も一分経過する前に死ぬんだろうが。

「腹回りのお肉が減ってスリムに見えるぜ？　おめでとう、ダイエット成功だ」

『殺せェェェ！！』

ふっ、この俺に対してゾンビ的群がり殺しが通用するとでも？　いやまぁ普通に死ぬけど、そんな死に方は飽きる程経験済みだ。コスモバスターならひたすらジャガイモっぽい何かに袋叩きにされる経験ができるぞ。

だが、どうやらこの世界(ゲーム)の神とやらは俺にまだ死ぬべきではないと言いたいらしい。

「カモーン！」

「ぷげ」

真横から飛び出してきた何者かが俺の首根っこを掴んで走り出す。僅差で俺のいた場所に小竜が積み重なった山が形成され、ブライレイニェゴ本体が追撃を命じるよりも先に周囲のプレイヤー達が一斉に本体へと襲いかかった。

「ナイスファイト、凄かったわよ顔隠し(ノーフェイス)」

「いやいや、対人と比べりゃ超必殺を一発二発叩き込むのは簡単だろう………なんて？」

顔隠し？　なんでそんな変な呼ばれ方……いや待てちょっと待て。俺はその呼び方で呼ばれたことがある、自分で名乗ったことがある。でも少なくともここじゃない。何故？　何故今走馬灯？　記憶が高速で掘り返されていく。アレ？　そういやあの受け野郎が何か言ってたような………

「あー…………ふーあーゆー？」

「I am real Meteors！」

「Ｏｈ……」

ほぎゃああああああ！　全米一（ゼンイチ）だぁぁぁあ！！？

「ヒッ、ヒトチガイデスワヨ？　ワタクシ、セイソナオンナノコデスワ？」

「知ってるわよ？　このゲーム、セクシャルの変更システムがあるんでしょ？　ケィッツォから聞いたわ」

あんのケツ男野郎！！

「それにあんな動き（アクション）、君くらいしか出来ないでショ？」

「ソンナコトナイデゴザンショ？」

「キャラクター変わってるわよ？」

くそッ、ロールプレイが崩れれれれ……

「クソがっ……あの野郎ゆるさねぇ……」

「ねぇ、十一月頭のイベントに出るって本当？」

「え？　うん、っていうかその話今しないと駄目？」

状況的に言うと、今俺ゴミ袋みたいな扱いで引き摺られてるんだけど。いやＶＩＰ待遇を期待してるわけじゃないけどさ、荷物だってもう少し丁寧に運ぶでしょ。完全にこれ死体袋を引き摺るとかそういうアレですよね？　犯人が夜の森とかに証拠隠滅する時のアレで

すよね？
後何気に一分経過したけど死んでねーわ、でも飢餓状態は継続かぁ
……あれこれやっぱり死なないと解決しない？
「ヘイケッツォ、ディスイズノーフェイス？」
「ヘイケツ男、アーユーステューピッド？」
「え、この爆発物ども並行処理しないとダメなの？」
おう顔合わせて一言目から飛ばすじゃねぇかこの野郎。
「やぁサンラク君、今回もまぁ派手にやらかしてくれたねぇ」
「なんとあの状態、理論上誰でも再現可能なんですよ」
「状態はそうでも挙動がねぇ……まぁいいや、ほらほらサンラク君、そこでルストちゃんがそわそわしてるんだから、早くプレゼントしてあげようじゃない」
「……さっきのアレのデメリットでメチャクチャだるいから今度に……あ、ダメですかハイ」
その射殺さんばかりの眼差しは敵の方に向けてくれませんかねぇ……やれやれ。
「えー、あー……出すには狭くね？　いやいけるか？」
まぁいいや、潰されでもしなけりゃ死なないだろう。いでよーブリ

ユンヒルデ・バスカヴィルことブリュバスぅー
スタミナが一割くらいしか機能してない上に空腹度最低なので一挙一動が億劫だ。インベントリアをのろのろと操作し、ついに見つけたお目当てのそれを格納空間から現実空間へと召喚する。

思えばこいつが現実空間に出ていたのは作られていた時と、別離れなく死を想ふ（メメント・モリ）関連のユニークでアメフト姫を追いかけていた時以来だから……三回目なのか。

「紹介しよう、ぶっ壊れアイテムインベントリアの存在によって携行式拠点と化した……魔導推進征海船「ブリュバス」だ」

恐らく……そう、恐らくだが対青竜を想定した要素なのではないかと俺は疑っている、莫大なマネーとラピステリア星晶体というレア鉱石をドカ食いする戦闘用船舶。
船体の左右から翼のようにブレードが備え付けられていたり、衝角（ラム）が隠しきれないほど殺意剥き出しだったり……っつーかフォルム的にどうも深海でビームぶっ放す奴を思い出すというか……

「思いっきり陸地に打ち上げられてるのがなんとも哀愁を漂わせてない？」

「じゃあ今からクルージングでもするか？」

さて、それではルスト計画を最終段階に移行する！！

龍よ、龍よ！　其の十九（後書き）

・魔導推進征海船
御祭しの通り元々は青竜に対する移動拠点として実装された造船システム。
その他にも色々使い道はあるが、先に言っておくと三強は浅瀬でビチビチするようなヌルい真似はしないので戦えない。

じゃあ何と戦うって？　……ゴジ◯とか？

龍よ、龍よ！　其の二十

『ふはははは！　見事！　おぉ、見事！！　なんたる輝き！　我が目を灼かんばかりの炎熱よ！　我が目を眩まさんばかりの宝輝よ！！　良いぞ、英傑とはただ一つの炎にして諸人を惹きつけ導く者！　貴様の火を嚆矢に、動き出した英傑たらんとする者たちの姿こそが何よりの証明！！　ふはははは、ふはははははははは！！』

笑う。空高くより蟻の如く蠢くプレイヤー達を睥睨し、嘲笑うことも出来るだろうにジークヴルムは負の感情の一切を廃した純粋な喜びを大笑いで表現する。

『おお……人よ、英傑よ。汝らの道はいずれ彼奴等の再来により苦難で彩られよう。ならば示さねばならない、同じ「色」を討つならばよし、我を討たんとするならば、なおよし！！　受けて立とう！さぁ、どうする！！』

「では遠慮なく胸をお借りします！！」

再び秋津茜がノワルリンドの背より跳躍し、ジークヴルムへと飛び移る。魔力による攻撃……すなわちドラゴン最大の攻撃とでもいうべきブレスを封じられているとしても、ノワルリンドの巨体を使った物理攻撃であれば有効かどうかはさておき、無効化されることはない。

『秋津茜ェ！　やれ！！』

「はいっ！　えーと、喉のちょっと右側の……」

『ほう、我が逆鱗を穿つ算段か……だが、決死の我に生半可な刃が通ると思うでないぞ！！』

ジークヴルムの逆鱗。神代の叡智を結集した黄金の龍王を構築するに辺り、構造上の問題で唯一他の鱗と比べて耐久の低いただ一点。

平常のジークヴルムであれば、そこを穿った時点で呪い（祝福）を与える部位も、今のジークヴルムにとっては「多少弱い場所」程度でしかない。

だが、それはあくまでも人が攻撃手としての尺度によるものだ。今この場において、秋津茜は文字通り竜の牙と爪を持っていると言っていい。

「ここです！！」

『死ねぇぇぇぇ！！』

『ぬぅお！？』

秋津茜はあくまでも観測手、過去の経験から逆鱗の位置をノワルリンドへと知らせることこそが本命。そして、人にばかり目を向けてノワルリンドへの注意が散漫になりがちであるからこそ、地上で生まれた二度の爆発による一瞬の隙を突いて黒竜の牙が黄金の喉元へと突き立てられた。

『ぐ、ぬぅぅぅ！　小癪！！』

『ぐぁあっ！？』

しかし僅かに逆鱗を穿った牙もジークヴルムの振りほどきによってその顎ごと引き剥がされ、握りしめたジークヴルムの拳がノワルリンドの頬を打ち据えた。

『驕るか！　その程度で我に楯突こうなどと！！』

『なんとでも言うがいい、最後に屍を晒すは貴様だジークヴルム！！』

至近距離から放たれた漆黒のブレスを、一本欠けた五本の角の内左右一本ずつを輝かせ、全身を光に包み込む。
雲散霧消した黒い息吹を舌打ちでもしそうな眼差しで睨みつけたノワルリンドは再びジークヴルムへと飛びかかる。

「うぅ……魔法無効は、やりづらいです……！！」

かろうじてジークヴルムの背にしがみついた秋津茜は、魔法職としての強みを潰す発光状態に泣き言を漏らす。
ジークヴルムの魔法無効化能力「輝ける龍王（トゥーパック・アマル）」は言うなれば凄まじい濃度の絵具のようなものと言える。
龍王として完全な制御下に置かれたマナ粒子はジークヴルムの制御下にない外的なマナ干渉を塗り潰すかのように無効化する。

だがこの形態には二つの弱点が存在する。

一つはスキル無効化の結界たる「狂騒領域」との併用が不可能であるために、スキルによる攻撃は効くと言うこと。ジークヴルムはクターニッドとは原理こそ違うが同様の制約を課せられているのだ。

そしてもう一つ。外的魔力干渉、すなわち魔法の悉くを無効化する

光輝の姿は、魔法的プロセスを経た「物質的干渉」に対して弱いという弱点を持つ。
そしてそれは、とあるカテゴリに属する装備群がデフォルトで備えているものでもある――――！！

「……朱雀、手荒に使うけど大丈夫？」

『オ構イナク』

『ぬぅうう！！？』

空を駆け抜ける一筋の「赤」。いいや違う、それは始源の怪の如き骨の髄までを赤に染めたようなものではなく、それはまさしく美しい緋色の翼。
火葬の刃、かつては夜の権化が如き狼を縫い止める為に用いられたそれは、今ここに艶やかな翼持つ機人の腕に在ってその本来の機能を果たす。

突然の奇襲に仰け反ったジークヴルムから飛び降りた秋津茜はなんとかノワルリンドの背へと戻り、奇襲者へと視線を向ける。

「ロ、ロボ？」

「……秋津茜、援軍に来た」

「え、あ、ルストさん！？」

轟々と、腰部より広げられた鋼の緋翼より熱波を伴う推進を放って宙を舞う赤い機人。翼を伴った人型はキーワードだけ見れば鳥人族（バーディアン）のようにも思えるが、鳥人族は翼と腕が一体化した形状であるのに対してこちらは翼と腕が別個のものとして存在している。
少々翼の位置こそ低いが、どちらかと言えばそれは「天使」に近いものであるといえよう。

『なんだあの羽虫は！』

「あ、えっと、同じクランの……あ、はい、お友達です！」

『ふン……』

「……ノワルリンド、私達は貴方を勝たせる為にここにいる。ジークヴルムに勝つ為にここにいる……私達の首領（ボス）から伝言」

『何？』

「……曰く、「ヘイノワリン！　命を全部賭けてジークヴルムに勝つつもりなら、地上でジークヴルムと戦えＹＯ！」……とのこと」

「……」

『……』

「…………こほん。私が考えて言ったわけではなく、あくまでも伝言」

なんとも言えない沈黙に居心地悪そうに弁明しつつも、戦術機鳥との連結を果たしたルストは改めてジークヴルムへと刃を、アラドヴァルのそれとは異なる神代の叡智に由来する灼熱の焼却対魔刃（インシレート：スラッシャー）を突きつける。

「……圏外で踏ん反り返るタイプの敵は嫌われる」

『遠き日の具足か……くくく、ならばとうする？』

「……自慢ではないけれど、今の私は……訂正」

「私達は、かなり強い」

地上で星のような瞬き、気づいたのは狙われたジークヴルムのみ。

下から上

『狙撃か！！』

「……制限時間内のバトルなんて毎朝やってる、叩き落としてあげる」

遡ること五分前。

「はいそれじゃあ共同所有者諸君！　クラン共用アイテム承認を問う！」

「なにその仰々しさ……承認」

「え、この状態異常どうやって治んの……？　承認」

三つのウィンドウが同様の処理を行い、鋼の鳥とそれに対応する装甲、そしていくつかの武器がクラン共用のアイテムとして征海船ブリュバスに備え付けられたクラン用アイテムボックスに登録される。

そしてその場でルストがクラン用アイテムボックスを操作し、現実空間へとその姿を顕す。

「おおぉ……びゅーてふぉー……」

「大事に使えよ？」

「装備使いクッソ荒いサンラク君が言うと言葉の重みが違いますなぁ！！」

「もしかしてサンラク、二酸化炭素の代わりにヘリウムとか吐き出

してない？」

「このネタ前にもやりましたよね？（裏声）」

「ふ、ふふ……」

モルド　お前…………

「いや、大丈夫。大丈夫……それより、これ無線通信とかできないかな？」

「無線？」

否、ルストの無敗伝説は一人の手によるものではない。アシスト性能高すぎるが故に野良で組んでも無双する奴がいるからこそ、誇張無しに彼女は無敗を誇っていたのだ。

「あー……どうだろう、仮に無線があったとしてもリアクターが一個だから他の機体は起動しないし……」

そんな風にオイカッツォがモルドの希望を実現することの困難さを伝えようとしていると、

「成る程、つまりインテリジェンス通信ですね」

自称知性（インテリジェンス）の塊がやってきた。戦線がプレイヤー達の猛攻によって維持されているためか、サンラクたちの元へとやってきたサイナはカシャカシャとどう言う仕組みか頭機殻だけを折り畳みしまい込むように格納すると、その人に近くしかして人ならざる顔を露わにする。

「現在【昇滝】は当機からのエネルギー供給によって稼動状態にあります。故に当機を介する必要はありますが【艶羽】装着者との遠距離通信は可能です」

一同、しばし沈黙。

「ふんっ」

「ぐべぇ」

ゆっくりと四つん這いで逃げ出そうとしたサンラクの背中をペンシルゴンが踏みつける。

「可愛い子じゃーん？　当然、紹介してくれるんだよねぇ……？」

「やめぇー、くそがー、はなせぇー」

龍よ、龍よ！　其の二十（後書き）

二十話経過現在、未だジークヴルム氏滞空中
今年中に終わるかなぁ……（弱音）

ジークヴルムの魔法無効化は「魔法の弾丸や魔法で作られた弾丸」は無効化するけど「元から用意した弾丸を魔法でぶっ飛ばしたもの」は無効化できない
少なくとも推進力は物理法則ですから

龍よ、龍よ！　其の二十一（前書き）

群像劇と言う名の誰視点で書けばええんや現象に巻き込まれて初投稿です

くそッ、笹寿司め……！！

龍よ、龍よ！　其の二十一

『個体名称：モルドよりオーダー、五秒後に狙撃します』

「……わかった」

爪牙を避け、其の横っ面に鋼のローキックを浴びせたところで五秒経過。地上から上空のジークヴルムへと到達した弾丸が、通用しているわけではないがノーダメージというわけでもない炸裂音を響かせて黄金の鱗に火花を散らす。

ダメージ的観点から見れば擦り傷にも満たないそれは、しかしジークヴルムの行動における起点を的確に妨害し、艶羽朱雀の飛翔をより際立たせる。

一度きりとはいえ、交戦経験のあるサンラクや他の者達の意見交換によりジークヴルムの「角」がなんらかの意味を持つことは分かっている。であるからこそ緋色の翼はヒットアンドアウェイを繰り返しながらその頭部へと攻撃を積み重ねていく。

「……分かってはいたけど、硬い」

『成る程、貴様「等」はそれ単体でも一廉の力を併せることでより大きな力と成す手合いか……！！』

「……なんかこう、評価が高すぎて照れる」

辞書の如き金属塊がスライド展開、二丁のバレルを形成し魔力の弾丸を発射する。「輝ける龍王」を発動しようとしたジークヴルムの

眼球スレスレの位置を弾丸が通過し、生物であるが故に反射的に硬直した頭部へカストルポルクスの弾丸が命中した。

「……相変わらず、モルドがいると飛びやすい」

ルストが鳥ならば、モルドは追い風だ。ルストの背を押し、そして敵に至るまでの障害物を吹き散らしてくれる。最近は風に乗って流れてくる落語やら一発ギャグやらで使い物にならなくなることも増えてきたが、それでもやはり（笑い壊れていない）モルドの支援に陰りはない。

「……朱雀、高度を十メートル下げる」

『了解シマシタ』

一瞬のローディングを経て【艶羽】越しの景色に横一線が表示される。

それは高度の表記、ルストはジークヴルムを相手に戦闘機動を有利状態で維持しつつ、自身を追わせることでゆっくりとだが確実に空の高みから地の低みへと引きずり込んでいた。

『稼働終了マデ、残リ十分』

「……上等、ちなみに「最速」でどこまで縮む？」

『当該機体ノ固有機能「荒羽々焚（アラハバタキ）」ノ最大出力ヲ維持シタ場合、オオヨソ二分。該当機構ノ詳細表示』

「……ふぅん、面白そう」

人型故に「手指」を用いた格闘術を扱えるジークヴルムの攻撃は、人型の機動兵器との戦いに精通したルストにとっては戦いやすい部類ではある。翼の形状をした腰部ブースターは有機的な羽ばたきと機械的な噴射を併用することで空中を飛ぶ。
それは地の延長として空を駆ける青龍とも、あくまでも排気の結果として宙を舞う白虎とも、鈍重な機体の移動手段としてのホバーを持つ玄武とも違う。朱雀にのみ許された「飛翔」である。
とはいえ相対するはユニークモンスター「天覇のジークヴルム」、耐久力は複数人での戦闘を前提としたものだろう。仮に今のルストが十人力であったとしても尚、火力としては不足だ。

「……ノワリン」

『貴様、我が名を違えるとは悔いて死ぬ用意は出来ているのだろうな……？』

「……細かいこと気にしてると鱗禿げるよ、作戦具申」

『禿げ……ふン、言ってみろ』

ジークヴルムに牽制の弾丸を叩き込みつつ、ノワルリンドの顔へと近づいたルストは「話」を持ちかける。

「私と秋津茜でジークヴルムの気を引きつける、その隙にジークヴルムを地面に叩き落とす」

『ほぉう……まぁよかろう。しくじるでないぞ』

「……誰に言ってると？」

「あの！　具体的に私は何をすればいいんでしょうか！？」

「…………こ、高度な柔軟性を維持して臨機応変な対応を……」

「行き当たりばったりですね！　得意分野です！！」

うちのクランは、顔や頭を何か動物の意匠で隠している奴ほど頭がおかしいのでは……とふと思いついたルストであったが、その理論でいくと現在機械の鳥兜を付けている自分が次点に来るのですぐさま忘却。

「サイナ、モルドに伝えて。ノワリン使ってジークヴルムを叩き落す」

『その必要はありません。現在個体名称：モルドより同様の作戦が提示されています。「人」を目立たせ「竜」を上から下へ落とせ、との事です』

「……ナイスオペレート、サイナもインテリジェンスしてるよ」

『……ふっ』

連続で地対空の狙撃がジークヴルムを襲う、どうやら賞賛に対する返礼であるらしい。

「……秋津茜、私がジークヴルムのところまで運ぶ。ちょっかいをかけられる？」

「任せてください！　ノワルリンドさん、攻撃はお任せします！！」

『せいぜい振り落とされない事だな！』

ノワルリンドの背から飛び出した秋津茜をキャッチし、脇を抱える形で落下する他にない秋津茜の身体を宙に留め置く。

「……秋津茜」

「はい！」

「ジークヴルムの背に乗せるまで結構「揺れる」ので舌を噛まないように」

「分かりましびゅっ！！？」

◆

「当機(ワタシ)のインテリジェンスは極めて優れたものであると自認していますが、賞賛に対する返礼は惜しむものではないと思考します」

「はいはいインテリジェンスインテリジェンス」

ルスト側が何か褒めたのかは知らないが、うちのポンコツは過度に褒めると煩くなるので餌付け(褒めるの)は程々にしてほしい。

とはいえ地上からの支援狙撃に加えてネフホロ最強のプレイヤーが愛機と似たタイプの朱雀を纏っている以上は鬼に金棒、虎に翼だって生えるというものだ。

「他の竜はどんなもんだ？」

「んー……やっぱり一番狙われてるのはドゥーレッドハウルだね。でもブライレイニェゴの方に幾分か流れたから攻略速度は確実に落ちてるかな？」

「あ、速報だよ。なんか白も赤も発狂モード入ったっぽい」

ドゥーレッドハウルはそれまで身体の各部にあった突起からだしていた噴射炎を全身から噴き出して暴れ回り、ブライレイニェゴは小竜に狩猟させた樹海のモンスターを捕食してそれに対応した変異小竜を生み出し始めたとか。

おいブライレイニェゴ、そのネタは既に貪る大赤依がやってるから新鮮味がねーわ。

「いや、あっちは置換だったけどこっちの場合は反映なのか？」

んー……地形ごと自分色に染める貪る大赤依と比べるとやはりなにかこう……下位互換臭が。あれ？　こっちが上位互換なのか？

「ドゥーレッドハウルかブライレイニェゴか……どちらにせよ時間の問題って感じだねぇ」

「んー……どうだろう」

「なにか懸念でもある？　それともまだ情報隠してるのかな？　吐け吐けー」

「揺らすな揺らすな」

思い起こされるのは始源眷属(レイドモンスター)との戦い。奴は追い詰められた段階で地下に潜り……ヴァッシュの言葉通りなら「本体に接続」して最終形態とでも言うべきモードになった。

確か……始源解帰？　アナウンスが入ったから覚えていたが……

「ウェザエモンの晴天大征やクターニッドの想像態……ユニークモンスターにも最終形態があるなら、色竜(奴ら)にもそれに近いものがあるんじゃね？」

果たしてその答えは、「詰め」に入らされたドゥーレッドハウルがそれを披露した事で明らかとなった。

『クソがっ！　クソがっ！　クソがァァァァ！！　死ねっ！　ウジ虫どもがっ！　諸共に死ねぇぇぇぇぇ！！』

その瞬間、この場にいる全てのプレイヤーの前にウィンドウが表示され、文字列が躍る。

『赤竜ドゥーレッドハウルの肉体が、生命の危機に煮えたつ』

『危険（Caution）！　災害状態（ハザードモード）！！』

ドゥーレッドハウルの全身に亀裂が走る。ひび割れから覗く身体の内側から炎が溢れ出し、まるで自身の力にすら耐えきれないかのように悲鳴にも似た咆哮を上げながらその体躯が膨れ上がる。

「自爆か！？」

「違う、あれは……！！」

「ブレスだ！！」

ドゥーレッドハウルの眼差しは真っ直ぐにスカルアヅチを見据えていた。果たして自身が袋叩きにあう原因がスカルアヅチであると悟ったのか、それともプレイヤーの拠り所であると見抜いたのか……だが事実として狙われたのはスカルアヅチだ。

『大噴怨（ボルケヴィル）ゥゥアアア？！！！』

全身に亀裂を走らせてまで膨れ上がったドゥーレッドハウルの身体が急速に縮む。そして、奴の口からドス黒い赤色の炎が大気を焼きながら空を食い破り進む。

果たして――

龍よ、龍よ！　其の二十二

「悪いな、殴りやすそうな頬だったもんで」

『ぐ、ぬぉあ……！？』

果たして、夜空を焼いて放たれた憤怒と怨嗟の炎はスカルアヅチを焼くことはなく。ブレスを放つ寸前、ドゥーレッドハウルの頬をクリーンヒットで殴り飛ばした者によってその狙いは僅かに左へとそらされていた。

それにより怨嗟の炎はギリギリのところでスカルアヅチを外し、何もない虚空を焼くに終わった。

「ドゥーレッドハウル……お前には随分と同胞(はらから)が世話になった。その礼に参った次第だ」

その手に武器はなく、その「翼」は固く握り締められ、その拳こそがドゥーレッドハウルの頬を打ち抜いた打撃の正体であった。

己の渾身の一撃を外させられた怒りと、虫風情に頬を張られたという屈辱に震えながらドゥーレッドハウルは炎混じりの吐息とともに叫ぶ。

『テメェ……その姿、羽虫がよォ！！』

「鳥人族(バーディアン)だ、茹だったボケ頭にも分かるよう……殴って覚えさせてやる」

『グロァァアア！！』

ドゥーレッドハウルの奥の手「大噴怨」は単純な超遠距離攻撃であるという点の他に、ドゥーレッドハウル本体を大幅に強化させる効果を持つ。全身に亀裂を走らせ、そこから炎と煙を放ちながら暴れ狂う姿は少し離れた場所でとあるプレイヤーを煽るネタにされているのだが、この鳥人族がそんな事を知る由も無い。

「おい鶏冠（ヘッド）！　奴さん、相当お怒りのようだぜェ！？」

「上等じゃねっスか！　ハクジ君、派手にぶちかましちまいましょうよ！！」

「ったく……さっきまで気後れしてた奴らが好い気なモンだ」

人のそれと比べて随分と固いモミジのような手指を使い、激戦の中で若干よれた鶏冠（トサカ）を両手でピンと真っ直ぐに立てる。

「野郎ども！　俺たちゃ長老（ジジィ）に任されてここに来たんだ、情けねぇツラァ見せんじゃねーぞ！　ブッ込んでくぞオラァ！！」

白い羽に赤い鶏冠、まごう事なきニワトリの鳥人族たる男……「拳（デス）闘鶏（ペラード）」ハクジの高らかな声に応える声が響く。

翼を持てど空を飛べず、しかして翼握りしめ拳とする者達……鳥人族達の姿を見ていたプレイヤーの一人がポツリと一言。

「テンションが不良モノ漫画だ……」

謎の赤い怪物（プレイヤー）が腕を断ち、鶏の鳥人族が真正面から立ち向かう姿に鼓舞されたプレイヤー達が一転攻勢に転じる。

ドゥーレッドハウルがプレイヤー達の神経を逆なでするキャラクターであったことも大きいが、それよりもこの場にいる色竜達の中で一番最初に切り札を切ってしまったことが大きい。

ああも派手にアナウンスまですれば、最終形態として凶悪化するという以上に「大詰め」である事が悟られるというもの。

下手に重箱の隅をつつくと何らかのユニークや隠し要素が飛び出てくるシャンフロである、レイドモンスタークラスの色竜へのトドメ（ラストアタック）を刺す事の栄誉に何らかの特典があってもおかしくはない。

更には狙われた腹いせかドゥーレッドハウルを攻撃対象に「ダメージアップ」のバフがスカルアヅチから付与された事で、最終形態となりステータスを強化してなお対応しきれない程の物量暴力が赤竜に叩きつけられようとしていた。

「進め進め進めぇーっ！　奴は手札を出し切った！　拠点さえ無事ならどうとでもなる！　こちらも出し切れっ！！！」

サイガー１００の叫びが伝播する。大手のトップクランの声に中規模のクランが反応し、さらに小規模のクランも呼応する事で瞬間的にプレイヤー達の意思が統一される。

組織立って統一された魔法に時折個人による魔法が混ざりつつもドゥーレッドハウルに着弾し、巨体が吹き飛ばしたプレイヤーをパーティの仲間あるいは辻斬りの如く無差別に回復するヒーラー達が回復させる。

『ぐぬぁぁぁっ！　クソがっ！　クソがっ！！』

如何に異形とてドゥーレッドハウルは突き詰めれば四足歩行の獣に近い骨格だ。どうしたところで３６０度をカバーすることは出来ない、その体力は確実にゼロへと目減りしていく。

『い、嫌だっ！　こんな……こんなところでこの俺様が……っ！　俺様がぁぁぁ！！』

「聞いた話では、随分とＮＰＣ相手に恨まれているようだなドゥーレッドハウル……であれば、この言葉を送ろう」

剣聖の指揮の元、剣達の劇が始まる。主役一振り、脇役六振り……計七本の従剣（ソーヴァント）劇が宙を切り裂きながらドゥーレッドハウルへと襲いかかる。

「因果応報だ！！」

スキルの光と、バフの光が入り混じった一撃がドゥーレッドハウルの眉間に叩き込まれ、そして。

『あ、ぁぐが、ぐぼぁ…………………』

ドゥーレッドハウルの身体から発せられていた炎が消える、その巨体がびくりと一度だけ痙攣し……崩れ落ちた。

『現時刻を持ちまして、「赤竜ドゥーレッドハウル」の討伐を確認いたしました。ラストアタッカーは「草餅」様です』

わぁ、と歓声が上がる。ようやく一体目の色竜が斃れた事でプレイヤーのみならずNPC達もまた俄然勢いを増す。
気が抜けてしまった為か、小竜に襲われるプレイヤーも幾人かいたが、それでもこの戦場におけるボスの一角が沈んだ事によって戦力の分散が若干ではあるが密集しはじめる。

「やー、長かった！　次はどうしますリーダー……リーダー？」

「ラストアタックを持っていかれた……草餅め」

「「「草餅め……」」」

「ちょっ、いやいやいや！　こんなクソみたいな乱戦じゃぁあラストアタックなんてくじ引きみたいなもんでしょ！　流石に意図してラストアタックは掻っ攫えないって！！」

「ジョークだ、だが色竜の一体は斃れた。奴の予想が正しければ……」

サイガー100が見上げた先。そこには黒と、金と、小さな赤が舞う空があり……ドゥーレッドハウルの死によって、いよいよ「決戦フェーズ」の本番がやってこようとしていた。

◇

「……秋津茜っ！」

「任せてくださぁい！！」

光条ではなく、砲弾の如きブレスを回避し、すかさず伸ばされた黄金の手を蹴り弾きながら艶羽朱雀が狐面の忍者を勢いよく投げつける。

「お背中、またお借りします！」

『くかか、律儀な奴め。だが果たして我の動きについてこれるか？』

「わぁあ！？」

「……チッ」

翼を大きく広げた姿勢は、大きく羽ばたかんとする予備動作。ノワルリンドという火力をぶつけるための足止めを役目とする以上、その動きを見過ごすことは出来ない。思わず舌打ちしながらも、ルストは己を包む機械の鳥へと語りかける。

「朱雀！　やるよ！！」

『了解、「荒羽々焚（アラハバタキ）」起動シマス』

意思と声を引き金に、朱雀を朱雀たらしめる機構が動き始める。

火を噴く鋼の翼、しかして通常時はメインのブースターのみを稼動させる筈のそれ。しかし「荒羽々焚」は普段稼働させていない数百に及ぶ鋼の羽毛全て（サブブースター）を起動させることで文字通り「炎の大翼」を作り出す。

『おぉ、これは……っ！！』

「……大人しくしてもらう！」

人と鋼の獣を縦横無尽に飛ばすだけの推進力を生み出す炎を攻撃へと転換した特殊機構「荒羽々焚」。

猛禽の如く翼を広げた艶羽朱雀がジークヴルムへと突撃する。回避を取ろうとするジークヴルムであったが、地上からその姿を観測して合わせた狙撃が叩き込まれる。

「火は、先端が一番熱い……っ！！」

『グォオ！！』

轟と唸りを上げて振るわれた翼は刃の如く。炎翼の先端がジークヴルムの首を断つかのように振るわれ、その火力に黄金が僅かに呻く。

「ま、だ……！！」

ルストの意思（無茶）に応えた朱雀の翼が左右真逆を向いて火を噴く。本来はそれなりの距離を経て反転するところを無理やりその場でスピン

した炎翼が連続でジークヴルムを叩く。

「ちょっ、熱いですって！！」

「気合いで避けて」

「き、きあい！！」

『おぉ、遠き日の炎。人の叡智によって生まれし力！　良いぞ、もっと我にその輝きを見せてみろ！！』

「く……！！」

爪牙を避け、鞭の如き尾を避け、連続で放たれた単発ブレスの一発のみを炎翼で防御しつつルストは苦々しげな顔を機殻の下で浮かべる。

「荒羽々焚」は確かに強力だ。だが同時に強力過ぎて操縦の難易度が上がってもいたのだ。

「……成る程、確かにこれは「壁のシミ」にもなりかねない……っ」

よくサンラクがぼやく「過剰伝達」もこのような感じなのだろうか、と考えながらもルストは機体への負荷を割り切りながらジークヴルムへと攻撃を叩き込んでいく。

ダメージは極論必要ない、ジークヴルムをその場に押しとどめるだけのノックバックさえあればいい。

ドゥーレッドハウルが倒れたのは、丁度その時だった。

『――――む』

ジークヴルムの動きが止まる、人型とはいえ龍として相応に長い首を下に向け……

『隙を……見せたな！！』

『ぬぉっ』

「あれこれわたしも巻き込まぁぁぁぁあ……！！」

「ちょ――――、ああもう！」

上空より奇襲を仕掛けたノワルリンドの顎がジークヴルムへと食らいつき、そのまま大地へと引きずり込んでいく。
そしてジークヴルムにしがみついているが故に一緒に落ちていった秋津茜の遠ざかる声に、ルストもまた大地へと翼をはためかせるのだった。

龍よ、龍よ！　其の二十二（後書き）

赤竜をネタにしたサンラクいじり
「サンラク君！　身体がひび割れたり変な動きしたり、もしかしてご家族なのでは！？」
「しれっと変な動きを共通点にすんな、流石に親族にドラゴンはいないかなぁって」
「いや分からないよ「いや分かれよ種がちげーよ」、もしかしたらもしかするかもしれないじゃないか！」
「ほらよく見てサンラク君！　遠い記憶を思い出すのよ！」
「……兄さん？」
「ぽぶふぅ！！？」
最終的にはモルドに流れ弾が直撃しましたとさ

龍よ、龍よ！　其の二十三（前書き）

どうも、この度ティターン硬梨菜になりました

龍よ、龍よ！　其の二十三

◆

「おー、やっぱＭｖＭ、それもドラゴン同士となると映えるねぇ」

「それよりサンラク、ご家族が討伐されちゃったけど」

「に、にいさーん！！」

「ぷっ、ふっ、ふくくく……待って、許して、勘弁して……」

「すげぇ、モルドのやつ笑うという感情そのものに許しを乞うてる」

「……あの、秋津茜さん等も落ちてるような」

まぁ大丈夫だろう。秋津茜は幸運の代わりに魔力を高めてこそいるが俺と似たステータスビルドだ、であれば恐らくスキル「ヘルメスブート」あるいはそれに近いスキルは覚えているだろうし、宙に身投げしたとしてもルストがキャッチする。

「確認：個体名称：ルスト、個体名称：秋津茜を確保しました」

とりあえず二人は無事か、となれば問題は。

見上げた先、黒と金がひとかたまりとなって地面へと落ちてくる。黒が金の喉元に食らいつき、金は黒の首に腕を回し、互いに互いを離さないように組み付きながら真っ直ぐ地面に落ちてくる。

そして、

「うわ、すげー音」

「生々しい音したけど……」

「べちーん！　とぐしゃあっ！　を混ぜたみたいな音だったねぇ……」

急ブレーキを踏まないチキンレースは要するに心中だと思うのだが、減速なしで地面に突っ込んだノワルリンドとジークヴルムがその巨体をバウンドさせて二度目の着地でようやく地に足ついた様子を離れた場所から眺めていた俺たちであったが、いつまでも観戦している訳にもいかない。

「ヘイ黒幕、次のオーダーは？」

「最早アドリブ進行だけど台本筒状に丸めてぶん殴るくらいの気持ちで行こっか！　ジークヴルムぶっ叩いていこうぜ！！」

「成る程、シンプルで分かりやすいね」

「それに、そろそろ京極ちゃんにも動いてもらうかもしれないしぃ……んー、個別行動かな！　私は反ノワルリンド派の妨害、カッツォ君は適当にあの人辺りでも巻き込んでジークヴルムに喧嘩売って……」

「俺は？」

「そのだるだるモードなんとかしてきなさーい」

「やはり死ぬか（リフレッシュ）……？」

R．I．P．のバフ捨てるの地味にもったいねーんだよなぁ……いやしかし、スタミナゲージと空腹度一割固定は辛すぎる。じっとしてても死にそうになるし……

「ジークヴルムの重力圏的にもそれなりにかっこよく死んだ方がいいよな……」

「死因吟味？」

「こんな庶民的な死に方でこの俺を満足させられるとでもザマスですわぞだえ？」

「ギロチンでも持ってくる？」

おう持ってこれるもんなら持ってこいよ、いやそんなことはどうでもよくて。

んー……んんーー……んんんーーー………

よし。

「た、助かりましたぁ……」

「……割とヒヤヒヤした」

「あ、ちょうどいい。ルスト、ちょっと俺を上空まで連れてってくれね？」

「…………えー」

ほらほら面倒そうな声出さずちゃちゃっと、な？　そうそう、落ちたら確実に死ぬ高さまで持ち上げてもらって……

「……どこに落とすの？」

「ジークヴルムも考えたけど、勝算無しで突っ込むとペナルティ食らいそうだからブライレイニェゴ方面で」

「えーい」

おい予告無しで手を離すな。

真っ逆さまに落ちていく俺であるが、無論自然落下でブライレイニェゴにぶつかるだけ、だなんて芸のない真似はしない。

「スタミナはカスだが、一歩踏みしめるくらいは出来るさ……！！」

臨界速起動（ブラディオン）！　空を踏みしめ、加速する一歩を！！

緩やかに加速していた俺の身体が一瞬で最高速に突入する。瞬く間に迫る地面と白色、空中でスタミナを回復させつつ身体を丸め、体勢を整えてぇ……見せてやろう、要塞蜘蛛や列車砲百足の巨体からダイブしまくった事で鍛え上げられた進化した飛び蹴りを！！

「隕星落蹴（メテオフォール）改めぇ……三桁スキル！！」

『――なん』

両脚をぴったりと揃えて曲げ、膝を前へと突き出した外せば即死の双膝の衝撃（ツイン・インパクト）！！

「（俺）諸共に死ねぇ！！」

『ほぐぼぁ！？』

その名も「爆心膝撃（グラウゼロ・スマイト）」！　敵以外に当たると反動で大ダメージを自分が食らうデメリットは無視できないが、命中さえすれば広範囲に物理衝撃によるダメージを発生させることが出来る。

何やらブレスっぽいモーションの予備動作で仰け反っていたブライレイニェゴの横っ面に俺の膝がめり込み、クリティカルの入ったイイ感触を堪能する暇もなくインパクトの反動で俺の身体が弾き飛ばされた。

うん、そうだね。さっきから体力1だったし、そもそも臨界速の効果適用がまだ四歩残ってるから……

「むっ」

両足で踏みしめた地面、真下から突き上げられる衝撃はまるでロケット発射の如く俺の身体を吹き飛ばし、制御を失った身体が結構なスピンをしながら宙を舞う。

「ぬぁぁぁぁぁぁぁあ…………あぁぁぁぁぁ！！？」

ゴィン！！　と頭頂部に衝撃、天地真逆で地面に突き刺さるが如く墜落した俺に、着弾点（グラウンドゼロ）付近の者たちに沈黙の帳が降りる。

っつーかジークヴルムじゃん。

「……ここカットで」

『人間の一般として下着を露出するのはどうなのだ？』

「え？　あっ、そっすね。いやーん」

ユニークモンスターにモラルを説かれるとは思わんかったわ。
天地逆さまであるがためにドロワーズおっぴろげで俺は死んだのだった。

あとリスポーンしたら「一定時間ＶＩＴ大幅ダウン」のデバフが付いてたんだけど服着ろってこと？　残念ながら当方、元よりゴミＶＩＴ故。

◇

「サンラク君、自分でオチてくからずるいわー」

「アルファベットの「h」みたいなルートで吹き飛んでたねぇ……あ、小文字の方」

とはいえ、少なくとも散り様としては凡庸なものではない。本人の望んだものかどうかは別として当初の目的は果たせているだろう。

「さーて、ノワルリンドまで落っこちてきたのはちと都合が悪いけど、ここからが本番だよ皆？　覚悟は出来てる？」

「今更だなぁ」

「再確認は大事でしょ？　エムルちゃんも大丈夫？　サンラク君派手に散ったけど」

「蜘蛛に砲弾代わりにされたり百足の関節に挟まって死ぬよかマシてますわ、それにアタシだけでも戦えるですわっ！」

「んなモンスターとどこで戦ってたのか私知りたいなぁ……まぁいいや、サイナちゃんはサンラクのリスポンに引っ張られていっちゃったし……とりあえずこの場にいる全員でジークヴルムに喧嘩売っていこうぜ！！」

応、と旅する狼達の応える声が響き、状況が動き出す。

◇◇

「笑みリー！　お客さんが降りてきたよ！　どうする！？　やっちゃう！？」

「まだ、まだ様子を見ましょう。ブライレイニェゴの方面にもバフを配らないと物量で戦線が崩れかねません」

「本音を言うと？」

「スカルアヅチへ本格的に攻撃兵器を搭載する計画が間に合わなかったのが悔やまれる」

「ヒューッ！　親友（ダチ）がウォーモンガーになっちまったけど私は地獄まで付いてくよーっ！」

◇◇◇

「むむっ！　秋津茜殿も降りてきたで御座るか……？　ええい初対面で御座るが蜥蜴の衆！　秋津茜殿の許へ馳せ参じるで御座る！！」

◇◇◇◇

「あっははははは！　ぷふふっ、ひーお腹痛い、予想の斜め上に第三宇宙速度で飛んでかれたよサンラクくぅん……！　やっぱり君は最高だよ！！」

「とはいえ……妙だねぇ、使ってるスキルが少なすぎる。サンラク君はもっとスキルを多用してた筈だけど……使わなかった？　それとも使えなかった？」

「…………ふぅん？」

◇◇◇◇◇

「暇だー……」

龍よ、龍よ！　其の二十三（後書き）

某所のランキングにランクインしたらしく、まさか拙作が勇者王と同じ項目に並ぶ日が来るとはこの海の硬梨菜の目をしても

龍よ、龍よ！　其の二十四（前書き）

Q．なんで投稿遅れた？

A．プロットが壊れて作者も壊れたから、年内に終わるかなぁ……

？（遠い目）

龍よ、龍よ！　其の二十四

◆

「よっ」

「うわ、半裸だ……」

「どうも、ジークヴルムのせいでＶＩＴ下限値のその先に到達した男、サンラクです」

「そして私はスーパー・インテリジェンス・ドール・ユニット機体番号エルマ＝３１７です」

「えっ、ペンシルゴンとかオイカッツォみたいにこれに対処しろって？　無茶言わないで」

存在が無茶扱いされたんですけど法廷に立ったら俺勝てそうじゃね？　まぁいいさ、今回はペンシルゴンの策略の都合上「留守番」させられてる京ティメットを見にきただけだ。

「見れば見るほどクソ面白い絵面だよなこれ」

「この後の展開を考えると割と僕もそう思う。でもネーミングセンスは結構好き……あ、食べる？　魚人族が卸した魚の塩焼き」

「え、あいつらそんなことしてんの？」

「ちと磯臭いけどぴっちりした感じの服とか結構人気だよ？　彼等。ほら、なんかやたら自信満々な……肋骨(アバラボネ)みたいな名前の」

「あー、アラバ？」

「そうそう。彼、夢女子(ファンクラブ)クラン出来たよ」

やばい、今日一番(きょうイチ)で面白いかもしれん。ファンクラブ……ま、まぁ俺も捜索隊(ファンクラブ)組まれてるようなもんだし？　広い意味じゃファンクラブと言っても過言ではないというか？

「つーかあいつフッツーに恋人的な奴いるだろ」

悪食箪笥(アクジキタンス)みたいな名前の、ネレイスがさ。ぶっちゃけアレほぼ同棲っつーか、クソシナリオからシナリオだけはマシなゲームの数々を踏破してきた俺からすればあれはくっつくでしょ。

そういやドワーフとかいるんだよな……ぶっちゃけ精霊憑きの武器とやらにそこまでの魅力は感じないのだが、鍛冶に自信ありの種族ってんなら興味はある。ＮＰＣ鍛冶師はキャラそれぞれで作る武器の命名センスとか変わってくるからなぁ……ヴァッシュとかビィラックとか。

「一応ここからでも情報は掴めてる、ノワルリンドとジークヴルムが落ちて赤いワーウルフみたいなのが鉄板振り回して爆発してきりもみ回転しながら下着丸出しで死んだらしいね？　ははは、これが戦場特有の情報錯綜ってやつかな？」

「赤いワーウルフ擬き以降の下りは全部俺だな」

「素面(シラフ)の情報かよ……」

頭を抱える京ティメットを眺めつつ、俺は踵を返す。

「んじゃ、俺ぁ戦線に戻るとするわ。でも本当にいいのか？　ジークヴルム戦に参加しなくて」

「んー……ほら、合法的にって意味ならこっちの方が……ね？」

「さいですか」

人斬りジャンキーめ……

「まぁ本人が不満ないなら俺からとやかくは言わんよ、せいぜい上空奇襲には気をつけろよ」

「あ、上空奇襲で思い出したんだけどあいつ（くいっ）に対処するならやっぱ花火安定なの？」

「奴（くいっ）対策はランカー最上位でもなけりゃ先手を取れ、が最適解だけど後手から天誅するなら花火ｏｒ釜の蓋ってアンサー出てるぞ」

釜の蓋は幕末の中でも数少ない破壊不可能オブジェクトだからな、飛んでくる矢を全て迎撃する技量が必須な時点で人を選ぶが実際二位三位はそれで攻略してるからなんとも言えない。俺？　オーバーヘッドで花火蹴り込んで爆破してやったわ。

なおレイドボスさんは論外、銃弾で矢を弾くのは流石に頭がおかしい。

「釜の蓋……」

「幕末最強の盾は伊達じゃないってことだ、まぁ握りなんてものは存在しないからプレイヤーの握力依存だけど。一時期握力が参照する膂力系上げまくったドヤ顔ダブル釜蓋（シールド）とか流行ってたな……」

真正面からさえ受け止められるならマジで無敵シールドだったからな……なおタイマン以外。

「じゃ、俺は戻るわ」

エムルが近くにいないから自前の使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）を切らなきゃいけないのは地味に不便だな。

◆
◆

「おーし、んじゃまぁ秋津茜の応援しつつジークヴルムにブチかましてくっかぁ！」

「――もし、サンラク様」

呼びかけられた声。怒鳴りつけられたわけでもなく、ただ静かに投げかけられた音であるにもかかわらず、俺の意識を鷲掴みにして「聞かせる」かのような。

振り向けばそこには、現実離れした容姿を現実離れした雰囲気でコーティングしたフィクションとバーチャルの中でのみ存在を許されたかのような少女が少しだけ困ったように眉を下げて俺を見つめていた。

「うおっと、これは聖女様」

「あぁよかった、実は……」

『クエスト「聖女の刃剣（ソード・オブ・セイント）」を開始しますか？　はい・いいえ』

「――一つ、お願いがあるのです」

……このタイミングでクエストだと？　確かイリステラのクエストは内容が毎回変わるんだったか、だから以前受けた「国王父娘の救出」とはまた異なる内容のクエストになっているのだろうが……いや、それよりもヤバいことになってる奴がいた。

「異常反応（イリーガル）：精密精査……中断（エラー）。暫定「撃滅必須級（デストラクション）」、クラスX（ツェーン）武装の……否定、対象は次世代……否定。否定。否定。まさか、前世代、いえ、でも………」

「前時代式家電修理拳（叩けば大体家電は直る）！！」

「ほぎゅっ。頭部に衝撃：一時思考を中断――――はっ」

「聖女ちゃん様の前でバグんなポンコツ」

頭から煙が出そうなバグり方してたぞ。全く……あとで教えろよ。

「えぇ、えぇ。構いませんとも。聖女様の頼みとあらば……」

ウィンドウに表示されたクエスト受諾の答えはYES、そしてそれが受理されて数秒で聖女ちゃんが言葉を紡ぎ出す。

「実は私、家出したのです」

「えぇ……？」

ちょっと待て、ジョゼットとの敵対ルートは勘弁してくれ。これ下手したら諸々の責任俺にくる奴じゃねーの！？

「まぁ冗談なのですけれどね？」

「さいですか……」

「でもジョゼット達に黙って出てきたのは本当、少しだけ……悪戯です」

「えぇ……？　（二回目）」

ねぇ本当に大丈夫？　これ最悪ジョゼット達どころか宗教関連NPCも敵に回さない？

「契約者（マスター）、恐らくその懸念は無用かと」

「何？」

「当機（ワタシ）の保有する情報と、現時点での状況を鑑みるに……彼女を害することができる存在は……ただ一体を除いて存在しません」

「マジで？」

強キャラ説はやはり間違いではなかったのか。っつーか現状で聖女

ちゃん無敵モードってヤバくね？
「ありえない、筈です……しかし、現に存在する以上はそう定義するしかありません」
「……あとで仮説でもなんでもいいから話せよてめー……はぐらかしは強キャラムーブの中でも嫌われやすい要素だぞ……？　まぁいい、で？　天下の聖女様が態々黙ってでかける理由をお聞きしても？」
「そう、ですね……鳥籠を自ら望む鳥が、それでも窓の外を見るのですから……ふふ、では鳥籠を外に出してしまえばいい、そうは思いませんか？」
……？
「鳥籠を破壊して叩き出せばいいんじゃないっすかね」
「きっとそれも正解なのでしょう、でも私とて慕ってくれる者に応えたいと思うくらいの感情はあるのですよ」
参ったな、向こうが何やら重要な話をしてるっぽいが、俺の方は脊髄反射で答えているだけだ。インテリジェンス皆無だぞこれ。
「オーダーの確認をしましょう、聖女サマは聖盾輝士団に黙って外出がしたいと、行き先はどちらで？」
「ふふふ、それは貴方もよく知ってる場所ですよ……それは貴方達がジョゼットに持ちかけ、彼女達が諦めた場所なのですから……」

おっと？　クエスト発生以前に俺達がフラグ踏んでた疑惑？　待て待て、親衛隊に持ちかけただの俺達がよく知ってるだの、この状況で条件に合致する場所なんて……

「兎の国に縁持ちし仇討ちの剣士様、どうか私をジークヴルムの前まで連れて行っていただけませんか？」

「……後でジョゼット達に弁明する時は味方してくださいよ」

おお、ここに来て爆弾を抱えてしまうとは……だがいいさ、構わないとも、こんくらいのスパイスを突っ込んだ方が人生楽しくなるってもんだ。それに俺の推測が正しければ……このクエスト、こちら側の切り札になりうるやもしれない。

龍よ、龍よ！　其の二十四（後書き）

サイナが答え言ってるようなもんだけどつまりそういうこと
聖女ちゃんは現時点でシャンフロ唯一のユニーク出自「生まれるべきではなかった」持ちＮＰＣ、考え得る全ての最悪ルートを通れば八体目のユニークモンスターだったよやったね！！

龍よ、龍よ！　其の二十五

◇

『ぐ……くくく、そうだ……そうだとも。人よ、我を超えるか？　竜を討つか？　されど異なる答えを見せるならばまた良し！　その輝きこそが我が幾星霜の答えとなる、継がれ流れし生命の潮流は神代を越えたのか？　否！　人よ、お前達は越えねばならんのだ！！　おお龍法律（ノトーリアス）よ！　輝ける裁きを以って、英傑に足らぬ未熟を祓え！！』

「ぐわっ！」

「なんだ！　弾かれた！？」

「いや、なんともないけど……」

「ノトーリアス……あのＢ．Ｉ．Ｇ．とかいう状態異常か！？」

「一定以下の評価で弾かれるのか！」

黄金の「円」がジークヴルムを中心に放たれ、吹き飛ぶ者とそうではない者を選別する中、そんなものは知ったことかと言わんばかりに狐面の忍者が走る。

「ノワルリンドさん！　頭から落ちてましたけど大丈夫ですか！？」

『ぐ、おぉお……馬鹿め、この程度でこの俺が……ン゛ンッ！　こ

の我が斃れるとでも思ったか……！！』

『ならば斃れるまで殴っても良かろうな？』

『ぐべぁ！？』

「蹴りじゃないですかーっ！！」

喉に蹴りを受けて仰け反るノワルリンドと、加害者たるジークヴルム。狐面の忍者こと秋津茜はスキルで自身を内面から強化しつつ、素早く手指を組み、切ることで忍術……もとい刃隠の心得を発動する。

「刃隠心得……【追鼠火花（ツイソノヒバナ）】！！」

ポンポンッ！　と気の抜ける音と共に秋津茜の周囲へと出現する手のひらサイズの火の玉。それらは発動者の見据えた先、標的たるジークヴルムへとそれぞれが不規則ながらも確実な動きで宙を駆け抜けて黄金を目指す。

『この程度、防ぐにも値せぬわ！』

「だからこうするんです！　刃隠心得【不知火蕾（シラヌイツボミ）】！！」

追鼠火花の火球はそれぞれが個別の挙動で標的を目指す、まるで鼠の如く動き回るそれは捉えづらくあるのと同時に意図的に最短の距離を避けているという意味でもある。

であれば、それらに劣る速度であっても最短の距離を進む巨大な火の玉は、先に放たれた小火球よりも先にジークヴルムへと到達した

大火球。続いてジークヴルムに着弾した小火球が破裂、それによって「大火球の近くで火を使用する」という条件を達成した【不知火蕾】が内に秘めた高熱を一気に解放した。

『ぬぐおっ……効かん！！』

「効くまでやります！　私は……諦めません！！」

短剣を構え、前へ前へ。如何なる気まぐれか地に足つけて二足で立つジークヴルムは空中と比較して機動力が落ちている。

薙ぎ払う尾がその身を打ち砕くよりも先に跳躍した秋津茜はスキル「ヘルメスブート」の効果で宙を駆け抜け、刃の届く射程にまで飛び込む。

「たぁあっ！！」

『その勇気は評価しよう。だが己一つで我に刃を突き立てようなど、笑止！！』

ジークヴルムが僅かに身を震わせるだけでも、矮小な人間の振るう短剣など容易く弾いてしまう。

さらに上から下へ叩きつけるような爪の一撃が秋津茜の身体を捉え、その身に食い込まんとしたところで……

『む……丸太！！』

「オート空蝉です！！」

盗賊派生、隠し職業「忍者」。その中でも最序盤に習得可能な刃隠心得【空蝉】は一定以上の習熟を満たすことで印を使用しないオー

トでの発動が可能になる。
厳密には完全オートではなく、「プレイヤーが攻撃を認識している上で発動を意識する」という条件であるのだが、両手が塞がれた状況であっても変わり身の術を行使することができるのは強みである。
「やっぱり私の攻撃力じゃぁ……」
『どけっ！！』
「ノワルリンドさん！！」
秋津茜がジークヴルムの注意を引いた一瞬、全身の筋肉を撓ませて飛び込んだ漆黒の巨体が大気を押しのけて黄金の龍へと突っ込む。
『ぐ……これさえも、止められるか……！！』
『獣が人を真似たところで……！！』
「……人を買いかぶりすぎ、人間はライオンに戯れられたら死ぬから」
『ぬぐぉっ！！』
宙を裂いて放たれた矢がジークヴルムの目元に着弾する。魔力で出来たそれは黄金のオーラを纏っていないジークヴルムに掻き消されることなく着弾、目という反応せざるを得ない部位で弾けた魔力にジークヴルムの身体が僅かに怯んだ。
その隙に翼を大きく羽ばたかせてジークヴルムから離れたノワルリンドはすかさずブレスを放つ。

それらはやはり消えることなくジークヴルムの身を呑み込み、焼き……

『猪口才な！！』

『チィイッ！！』

黄金の翼が風を叩く。輝ける闘気なくともこの程度ならば痛痒にすら満たないと言わんばかりにジークヴルムの翼が起こした風圧がその身にまとわりついたノワルリンドのブレスを払い退ける。

「……分かってはいたけど、硬すぎ」

「ルストさんっ！　あれ、あのロボットみたいな鎧は……」

「節約中」

「エコロジーですね！！」

一瞬の膠着。しかしその十秒にも満たない空白は黄金の重力圏をも踏み越える開拓者達をこの場へと辿り着かせるには充分であった。

「こんばんは、連盟としての盟約に基づいて午後十時軍……ジークヴルム戦に助太刀するよ」

「あ、どうもＳＦ－Ｚｏｏの使いっ走りです。ごめんなさい、ウチのリーダーが白竜相手にヒートアップしちゃって……ＳＦ－Ｚｏｏはブライレイニェゴを押さえ込みますと伝えに来ました！」

「あらあすいませんね？　【黒剣】のマッシブダイナマイトです。

サイガー１００さんは今少し取り込み中でして……遅れるかもしれない、と」

続々と現れたプレイヤー達。ここに至るまでの戦闘で果敢に戦い、重力圏の中でプラスの判定を得た戦士達が各々の武器を構え、ジークヴルムを見据えて黄金を取り囲むように集う。

「なぁ君、えーと、その……ノワルリンドを、テイムしたのか？」

「へ？　いえ、特にそういったことは、でも同じ相手と戦ってるんですから、あれですよ！　「敵の敵は味方」です！！」

『ふん、ワラワラと湧いてきおって……踏み潰したとて文句を言えると思うなよ虫どもめ』

一瞬漂う緊迫、こいつもドゥーレッドハウルと同じ手合いであったか、とプレイヤー達の温度が若干下がりかける。

だがしかし、冷えかけた温度を温め直すかのように秋津茜がノワルリンドへと話しかけ、それに答える黒竜……俗っぽい風に形容するなら「典型的なツンデレ」にしか見えないその姿にノワルリンドへと向けられた敵意の幾らかが雲散霧消する。

「え、萌えキャラ？」

「有り寄りの有り」

「ていうか色竜って手懐けられるんか……」

「いや、違う。確かライブラリがエネミー相手に戦闘以外で色々ちょっかい出した時に反応が変わるみたいな検証をしてたはず……何

か、隠しパラメータがあるんじゃないか？」

事実、モンスターを相手にやらかす事の多いプレイヤーは野生値という隠しパラメータを上げているのだが、表向きは秘匿されているそれを明かすことができる者はこの場に存在しない。

「ペンシルゴン氏はいないようだし、上の方のサイガさんもいない……仕方ない、暫定的に午後十時軍クランリーダーのカローシスUQが指揮をとる！　従う義務はないが従う意思があるなら聞いてほしい！」

応、と返る答えもあれば、既に前へと飛び出す者もいる。カローシスUQは自身の指揮下に入ることを拒んだ者達を「Ｍｏｂ」として脳内で区別しつつ、素早く思考を巡らせて作戦を構築する。

そう、趣味という高いモチベーションで成り立つ今この瞬間は、意識だけは一丁前に高い上司の顔を頭の隅にこびり付かせながら資料を作るより、ずっとずっと楽しく頭を働かせることができるのだから――――！

「秋津茜（あきつあかね）……で、合ってるよね？」

「は、はいっ！」

「少なくともこの戦闘中はノワルリンドは「我々側」と認識して構わないんだね？」

「え、えーと……」

「……構わない、極論指示は聞かないけど同じ陣営の戦車とでも思ってくれ、とウチのリーダーが言っていた」

モルドからの強化を浴びながら矢を放ち続けるルストが言葉に詰まった秋津茜の代わりに黒竜の戦力的価値を定義する。
実を言えば【旅狼】を中心とする連盟に属するクランは今回のノワルリンドを軸としたジークヴルム撃破を承知しているのだが、不特定多数がいる前で「保証」を見せつけることが重要なのだ。

「よし、プレイヤー各員はノワルリンドの攻撃に合わせてアタックを仕掛ける！　折角の特大戦力だ、フレンドリーファイアで自滅させたんじゃお笑いにもならないからね！！　魔砲撃組！　攻撃タイミングはＢｏｏ茄子に一任する、支援組を始動に、そこからタイミングを合わせて攻撃を叩き込む！！　分からないことがあったらウチのメンバーに話を聞いてくれ！！」

単体での強さを高水準で揃えた【黒剣】や【旅狼】と【午後十時軍】を比べた場合、彼らはより画一的な装備を意図的に選んでいる。それは作戦立案の段階での足並みの揃えやすさを重要視したものであり、それこそが熟練の社畜最大の強みなのだ。

「旅狼が色々と試してくれたおかげで向こうの手はいくつか割れている！　魔法無効とスキル無効はエフェクトで見分けろ！！」

『ふふふ、ふははははは！！　素晴らしい！　良かろう、英傑達よ……受けて立とう！！』

「魔法無効とスキル無効の使い分け……これは「剣聖」最強伝説は今日で終わりかな？」

黄金の騎士装束を纏うカローシスＵＱがインベントリから一振りの剣を取り出し構える。

それは従剣の主人に相応しい聖剣でもなければ、灼熱の英傑に相応しい竜殺しの槍刃でもない。

「魔法剣士系列最上位職業……「神秘の剣（レーツェル）」、剣魔一体の技をお見せしよう」

神秘の剣に就いた者のみが可能とする特殊な強化が施された「儀霊剣（リートウス）」を構え、大見得を切った。

龍よ、龍よ！　其の二十五（後書き）

神秘の剣君のこと「頑張っても剣を二本しか持てない剣聖モドキ」って言うのやめろ！！

龍よ、龍よ！　其の二十六

神秘の剣（レーツェル）。
ただひたすらに剣を極めた剣士の至る最高位たる「剣聖」とは異なる道を歩んだ剣士の極み。
己が剣に魔法を宿し、剣魔一体の技を振るう魔法剣士がその果てに名乗る名こそが「神秘の剣」である。

と、ここまでは世界観的な設定。ゲーム的説明をするならば、神秘の剣は「プレイヤーの魔法を切り替える魔剣使い」とでも言うべき職業だ。

シャンフロにおける「魔剣」とは剣そのものに魔法が記憶され、使い手が握った時点で記憶された魔法を行使できるようになる剣をそう定義する。
しかし神秘の剣は「儀霊剣（リートゥス）」という特殊な触媒剣を用い、プレイヤー自身の意思で魔法を切り替える事で戦う剣士だ。
剣を触媒にする関係上、発動する魔法に制限がかかる事と「賢者」のような魔法特化の職業と比較すればさすがに見劣りするという点を除けば、あらゆる属性を使い熟し変幻自在のバトルスタイルをも可能とする。

剣と魔法の両立、器用貧乏と片付けるには強すぎる性能。しかし「神秘の剣」は何故か不遇とされている。それは何故か、

「剣一本で何が悪い！　【隼の刃（ファルコンエッジ）】！！」

そう、同系統の最上位職業にして圧倒的人気を誇る「剣聖」の存在

こそが「神秘の剣」を不遇とさせる元凶に他ならない。
実のところを言えば、「神秘の剣」が「剣聖」に劣っていると言う事実は存在しない。あくまでも剣そのもののスペックに依存する剣聖は、その派手なアクションに惑わされがちだが「従剣劇（ソーヴァント）」と本数に対応した特殊魔法以外に魔法を行使することはない。
それに対して神秘の剣は「儀霊剣」の制限こそあるがその多様性は習得した魔法の数に比例して増していく。

だが、そう。実際にはそうであったとしても、だ。

実際に「神秘の剣」以上に派手に戦う「剣聖（サイガー100）」が存在する事で、その事実が霞んでいるのだ。
手数の少なさを「剣の数を増やせばいいだろう」と極めて単純な理屈で解決し、実際は「勇者」職業の補正で習得している魔法を自在に行使し、そして何より幾本もの魔剣名剣が宙を舞う光景は、「要するに賢者が杖の代わりに剣を持った感じだよね？」と片付けられる神秘の剣よりも圧倒的に華があるのだ。
実際に剣聖になればサイガー１００の構築が廃人と呼ばれるような積み重ねの末であると理解もできるが、それを目指す者からすればどちらを選ぶのかは言うまでもなく。

要するに、「神秘の剣」は「剣聖」と比較して地味、という身も蓋もなさすぎる風評被害によって志望者の人口を剣聖よりも大きく落としているのであった。

「物理遠距離持ちは上半身を狙え！　特に角だ！！　ただ無理はしなくていい、兎に角当てていこう！！」

放たれた矢が雨、とは言わずとも相応の数でジークヴルムを襲う中、

その下半身へと肉薄した近距離職達が各々の武器を叩きつける。

「硬……！！」

「打撃は！？」

「鉄でも殴ってる気分だ、これ効いてるか！？」

『ぬぅん！！』

身体を捻って振るわれた黄金の尾がプレイヤー達を薙ぎ払い、耐久の低い者の中にはそれだけで砕けた者もいる。

『どうした、その程度か！』

『グルルォォアアア！！』

「タイミングを合わせろ！　……今だ！　魔法を叩き込め！！」

弾き飛ばされたノワルリンドと弾き飛ばしたジークヴルムの距離が離れた瞬間、タイミングを見計らって練り上げられていた魔法の数々がジークヴルムへと降り注ぐ。

流石のジークヴルムも無傷で受け止めることはできぬと判断したのか、龍の角に雷光の如きエフェクトを帯びる。

『良い、良いぞ！　ならば我が試練、超えて見せるがいい！　【狂騒領域】！！』

「スキル封じだ！　魔法をメインに戦え！！　えーと、ここは火力重視で……よしこれだ！　【宿儀更新】！」

カローシスＵＱはインベントリから取り出したそれ、分厚い辞書のような本を取り出すと、その内の一ページを破り捨てて剣へと貼り付ける。
火種など無いにもかかわらず、青白い炎に包まれた断章の一枚は煙と、炎と、僅かな灰すらもが剣へと吸い込まれ、剣身に刻まれた文字の色を青から紫へと変化させる。

「魔法撃てっ！　【連鎖爆泡(チェインバブル)】！！」

神秘の剣が扱う「儀霊剣(リートゥス)」は杖であり、剣である。元となる剣に対して特殊な触媒を用いた「儀式」を施す事で魔法発動の触媒、厳密には「魔剣の器」とする事で唯一つの刃に数多の魔法を載せることが出来る。
それ故に、先程までの斬れ味鋭い飛ぶ斬撃ではなく、破壊力を秘めた泡を鋒から噴出させながらカローシスＵＱは指示を飛ばす。

「リーダー！　使えないのはスキルだけですよね？　別に物理完全無効ってわけじゃないでしょう！」

「火刈鳥さん！　引き続き殴るならジークヴルムを挟む形で！」

「はいはーい！」

ジークヴルムは巨大である。それ即ち的が大きいと言うことであり、当てるに易く防ぐに易いということだ。
時間が経つほどにジークヴルムとノワルリンドとの激突が行われる戦場に集うプレイヤーは増えていく。自然、ノワルリンドを敵視する生産職連合とでも言うべき勢力に属する者も増えてくる。だがペンシルゴンの暗躍により結束したトップクラン連盟が大多数を指揮

するが故に嫌がらせ以上の攻撃を行使することができない。

『「個」の輝きも良いが、「群」の輝きもまた良し！』

「ダメだ、全く効いてる気配がねぇ！！」

「マッダイさんは！？」

「おう！　支援職総出でバフくっつけてる！　あと二十秒くれ！！」

「お願いしますマッダイさん！　こう、ズゴーン！　と！」

「ずごーん、ね？　うふふ、任せてちょうだいな」

「あれ？　不発？」

「馬鹿！　そのバフは複数付与出来ねーだろ！！」

「あ、そっか……」

ゲームだから、レイドだから、集団で戦っているから。真っ直ぐにジークヴルムを見据える者がいれば、隣にいる者に話しかける者もいる。

水晶を操作してスクリーンショットを撮影する者もいれば、それを見て苦々しげな顔を隠さない者もいる。

『おお、まさしく星々の輝き……我に大いなる海の記憶はない、しかしてかつてかの者達が抱いた情熱とは、かくの如しか……！！』

ジークヴルムの注意（ヘイト）を引き付ける者がいる、縦横無尽に駆け回る者

がいる、後方で杖を掲げる者がいる、満を持してといった様子で巨大な鈍の大剣（鉄鞭）を担いだ者がいる。
そして、黒き竜と共に戦う者がいる。

『――来るがいい、その輝きの悉くを見せつけよ。英傑の光輝こそが我を貫くと知れ！！』

黄金は吠える、その声音を歓喜に染めて。
かつての時代、極まった文明をもってしても始源には勝てなかった。
黄金の盟友は「そうなるしかなかった」とため息混じりにジークヴルムへと告げた滅亡の原因。ジークヴルムはそうは思わない。

神代の人々が滅びた理由、それは一兵卒すらをも精鋭へと変えうる程の技術が生み出した弊害……「英傑」と讃えられるべき存在の欠落こそが原因であると黄金の龍王は考えている。
それはジークヴルムがもっとずっと小さく、幼かった頃に聞かされた英雄譚への「憧れ」が未だその身魂に刻み込まれているからか？
それとも、神代において始源の勢力に対する最大のカウンター……唯一つの「個体」として戦い続けたからこその結論か。
ジークヴルムは今も考えていた。そしてそれは、そう遠くないうちに結論が出るであろう。

正義とは、主義主張である。悪とは異なる定義によって成立した別の正義である。
全ての人々が意識を統一することなど不可能。であればその女がたとえ己ただ一人だけが意見を変えなかったとしても、自分だけは「奴」に刃を向けるのだと決意することもまた正義なのだ。
そして彼女は一人ではなく、多くの賛同者を束ねる大棟梁。

「……やりましょう。その為にこの城は在るんですから」

この瞬間、憎悪と復讐と……それら全てを支える情熱(モチベーション)によって生み出された城が、あまねく戦士に加護をもたらした。

・敵対対象：黒竜ノワルリンド
・強化対象：敵対対象と戦闘状態にあるプレイヤー及びＮＰＣ
・強化内容
十五秒ごとにＨＰ、ＭＰを回復
全ステータスの強化
ダメージボーナス
リキャストタイム２０％軽減

龍よ、龍よ！　其の二十六（後書き）

神秘の剣は魔法触媒用意したりするので地味な手間が多いのも不人気の原因

龍よ、龍よ！　其の二十七（前書き）

今回の更新はクソ難産だった……

龍よ、龍よ！　其の二十七

◇

「なにその強化効果の徳用パック！？」

「ダメボにリジェネ……いや、一定間隔で回復判定、って感じかな？」

「くっそー……やっぱあれずるいなぁ……」

ペンシルゴンの見上げた先、明らかに尋常ならざる輝きに包まれたスカルアヅチを睨みつけながら唸るようにぼやく。
示された条件はノワルリンドとの相対であるが、付与される効果の確認自体は黒竜以外と相対するプレイヤーであっても可能だ。そして、スカルアヅチのリソースをフルに使用しているのだろう破格のバフは、プレイヤー達の目の色を変えさせるには充分であった。

「どうするリーダー？　殴って止める？」

「いい考えだね、じゃあ如何に私たちの手を綺麗なまま殴るか考えよっか」

ペンシルゴンとオイカッツォはノワルリンドではなく、ブロッケントリードの相手をしていた。というのも、ペンシルゴンは反ノワルリンド派の妨害のために生き残ったマンディーズを集めるために、オイカッツォは白と緑を交互に相手して暴れまわるアージェンアウルを探しに。

互いに全く異なる目的ではあるが目指す場所が同じであったが故に共に戦っていたのだった。

「トップクランの号令があっても向こうには天ぷら騎士団とかがついてるし、アドバンテージはほぼない……スカルアヅチのバフに匹敵するアドバンテージは流石に提供できない………ねーカッツォ君。悪だくみが三つくらいあるんだけどさ、やっぱ全部やったら他の子達に迷惑かかっちゃうよねぇ？」

極めて珍しいことに、悪だくみに対して「迷い」を見せるペンシルゴンにオイカッツォは目を丸くする。
成る程、これがサンラクとオイカッツォにだけ迷惑がかかるのであればペンシルゴンは迷う事なく実行していただろう。
だが、今の【旅狼】は外道だけではなく、オイカッツォの目から見ても「不健全な」ゲームプレイには向いていないプレイヤーもいる。
肉親を派手に破滅させた女が何を今更善人ぶるのか、と思わなくもないが……違う、違うのだ。

「……それでも、やらなきゃいけないんだろう？」

「……そうだね」

ペンシルゴンは迷っているわけではない、いや仮に迷っていたとしてもここまで露骨に表には出さない。
では何故こんなわざとらしく振舞っているのか？　わざとだからに決まっている。

「よし、やろっか！」

あからさまに「何か事情があって、故にこそやらねばならない」とでも言いたげなそぶりで予定調和の作戦開始を告げる。
ブロッケントリードに対応する……フリをしてその巨体をもたつかせることでプレイヤー達の動きをそれとなく阻害していたマンディーズが天高く掲げられたペンシルゴンの指がパチン、と鳴った事でその動きを変える。

「マイマンディーズ！　戦場を変えるよっ！　アザーマンディーズもっ！！」

「「「「イェアァァァァァァア！！」」」」

重装の鎧達が歓声を上げる。
ズンズンと重厚な歩みで進むマンディーズを、さながら楽団を率いる指揮者の如くペンシルゴンは次なる戦場へと導いていく。

「防御専念！　攻撃は一切行う事なく、ノワルリンドの攻撃からプレイヤーを守るのだーっ！！」

「あぁ、肉壁ね……どっち向きに聳えてるのかはともかく」

タンクとは最前列に立って敵の攻撃を受け止める防波堤、しかし彼らが「居座って」しまえばそれは戦列の内の一つが常時埋まり続けるという事なのだ。

「やだなぁ、ノワルリンドの被害を減らすため……善意だよ善意ィ」

マンディーズの存在はその情報を広めたいゼニス・ゲバラと超農民の手によって存分にアピールされている。念のためにとノワルリンドへと流れたプレイヤーの中にゼニス・ゲバラとペンシルゴンの息

がかかったスパイロール・プレイヤーを混ぜてあるため、ブロッケントリード戦でそれなりの戦果を挙げたマンディーズが積極的に排除されることはないだろう。

「お次は……おっ、丁度いいタイミング。やぁそこのサムライウサギ！」

「むむっ、貴殿はペンシルゴン殿！？」

最早この場においては姿を隠すまでもないのか、ディアレやエムルと同様にその姿を衆人環視に晒しながら駆けてきた侍装束の兎を呼び止めつつも、ペンシルゴンはその後ろにいた爬虫類の特徴を強く見せつける人型の者達を見回し、笑みを浮かべる。

「いいねいいね、蜥蜴人(リザードマン)族達と一緒にいてくれたのはとても素晴らしい……秋津茜ちゃんのところに向かうところ？」

「如何にも、そうで御座るよ」

「イイネ！　いや何、蜥蜴人族や竜人族については秋津茜ちゃんから聞いてる、あそこに混ざるなら……そう、ノワルリンドをそれとなーく守って欲しいんだよね？」

「拙者らが守る必要あるで御座るか？」

首を傾げるシークルゥに対して、ペンシルゴンはバシバシとその肩を叩きつつニッと笑いかける。

「ノワルリンドにフォロワーがいるって事が重要なのさ、ヨロシクネ！！」

「む、承知！　……って、何故拙者を担ぎ上げるで御座るか！？　ちょっ、のわぁぁぁぁ……！！？」

何やらノッてる時のサンラクにも似た……要するに、人の話を聞かなそうな雰囲気を漂わせた爬虫類的人類達に何故か神輿の如く担ぎ上げられて去って行ったシークルゥを見送るペンシルゴンの瞳に「あいつらを僅かでも制御下から離して良いのか」と不安が過ぎる。
否、とペンシルゴンは両頬をペチペチと叩いて気合いを入れる。
戦況とは常に流動的で不安定なナマモノなのだ、多少の不確定要素を考慮した作戦立案は基本中の基本。であればあの程度のイレギュラー、なにするものぞ……

※イレギュラーその二
「ヘーイ！　ケッツォもブロッケントリード殴りに行きましょーっ！！」

「ちょっ、どこ掴んでぇぇぇぇ……！」

※イレギュラーその三
『白竜ブライレイニェゴの肉体が、生命の危機に裏返る』
『危険(Caution)！　災害状態(ハザードモード)！！』

※イレギュラーその四

『トットリィィィ！！』

「いやだからなんで俺ばっか狙ってくるんだよぉぉぉおおおお！！！」

※イレギュラーその五

『ハハハ、クハハハハハハハハ！！　よくぞその「名」をほざいた！　ならば貴様の不滅とやら、我が全身全霊を以って燼滅してくれようぞ！！　見るがいい、天覇たる我が「龍王機関（Dragon Driver）」を！！！』

…………

……

「活きが良すぎるんだよチクショーッ！　やってやろうじゃないの！！」

夜空に響く、ペンシルゴンの叫びは戦場の音に溶けて消えて……

龍よ、龍よ！　其の二十七（後書き）

たまに自分で書いた作品を頭から読み返したりしてると設定の食い違い見つけてメンタルにヒビが入るやーつ

龍よ、龍よ！　其の二十八

時間は少し巻き戻る。

◆

「もしかして聖女様、虫に刺されやすいタイプだったりします？」

「はい……？」

そうでないとするなら、白竜とジョゼットの間に何らかの共通点があるとしか思えない。こう、聖女ちゃんにオートで誘引される的な……

「くそッ、なんか妙に狙われてる気がする！！」

俺が、ではない。聖女ちゃんが、だ。クエスト補正か？　それとも刻傷のとばっちり？　現に小竜共は明らかに聖女ちゃんを集中狙いしている節がある。

場所が場所なので包囲されるような事はないが、それにしたって五メートル進む頃には十体くらい襲いかかってくるのだ。クソエンカかよ。

「サイナ、最優先は聖女ちゃ……様の安全、それを加味した上で撃滅しろ」

「了解(アイサー)：現時点で使用可能な武装を使用し、対象を警護します」

時間経過によるものなのか、プレイヤーによって大量に倒され続けたからなのか、ブライレイニェゴが生み出し続ける小竜はいつしか蟻型の殆どが淘汰され、今や主戦力は初期のそれと比べても明らかに動きが洗練された人型小竜だ。
操作に慣れないプレイヤーがやったらめったらに動いているような挙動ではあるが、パリィまでやってくるんだからタチが悪い。
「聖女ちゃ様！　歩みを止めずに前へ！　この程度余裕っすわ余裕！！」
「肯定：当機(ワタシ)の現時点におけるスペックにおいて、護衛対象に何らかの干渉が及ぶ可能性は５％未満です」
「それは頼もしい事ですね、鋼の龍鎧も凄まじいですが……サンラク様、そちらの剣は……？」
「これ？　これは……はいそこ見えてんだよオラァ！！」
ブン、と紅い軌跡が宙に描かれ、軌跡に沿ったラインが攻撃エフェクトと化して夜の空気を切り裂いて飛ぶ。
シューティングゲーでもやっているのかと思いたくもなるが、見事命中した「攻撃」が背後へと回り込もうとしていた人型小竜の首に深い一撃を刻み込んだ。
「銘を「境光の宝剣(ルーメリディアン)」、とあるモンスターの素材で作られた……今は夜光刃(ポン刀)モードだな」
個人的に刀って武器を積極的には使わないんだよなぁ。幕末みたいな一撃決着がザラのゲームなら気にならないんだが、こういう何度

も攻撃しなけりゃならないゲームだとこの片刃って構造が絶妙になー……峰打ちを狙わない限り、攻撃する度に刃の向きを変えなきゃいけないし。
小太刀とかならまだしも、両手で持てるサイズとなると傑剣(デュクスラム)への憧刃みたいな両刃の剣の方がガンガン取り回せる。
無論、片刃の剣にも利点は多いが俺(サンラク)のステータスだと活かしきれないってのも、刀を敬遠してるわけではないが積極的に求めてもいなかった理由の一つだ。
「ふむふむ。で、どんな能力があるんだ？　今さっき斬撃を飛ばしてたのは見たが」
「基本的にこいつは二つの形態があって、互いに月光と日光をどれだけ浴びせたかで能力が変動する……って、質問したの聖女ちゃんじゃなくてお前かよイムロン」
その男(女)、鍛冶師だが同時に勇者でもある。そもそも聖槌の勇者であるからして戦闘力を兼ね備えた生産職と言っていい。なので後方で装備面から支援するのではなく前線に出張っていてもそう違和感はないが……
「分かってる、私と張り合おうっていうヴォーパルバニーの鍛冶師の作品でしょう？　ふふふ……」
速攻でロールプレイ崩れてるのはもはや様式美か何かなんだろうか。
「あー……うん、そだね。あぁ、そういや勇輝の晶剣(グリッターグリット)使ってみたけどいい感じだった、ちっとＳＴＲの参照がキツかったけどそこらへんは対応できるし」

「それはどうも、で？　それだけじゃないんでしょう？」
「そうだな……むっ、巨人型……！！」
てめぇらもこっちに来るのか、巨体故に被弾率も高く周囲のプレイヤーが削ってくれているとはいえ今の俺が一撃で倒すのはホネか。
赤い片刃の姿をした境光の宝剣を振り抜く度に斬撃が飛ぶ。だが敵は巨人型だけではない、イムロンも流れで戦っているとはいえ人型小竜の相手もしなければならない。
そして……
「げっ、折れた！！」
パキン、と水晶らしい音を立ててあっさりと境光の宝剣が半ばからへし折れる。とりあえず対応していた人型小竜を蹴り倒してバックステップ、それを見ていたイムロンが怪訝そうにつぶやく。
「武器破損……いや、グリップだけ残ってる？　まさか……」
「あ？　そのまさかだよ……再展開！！」
境光の宝剣（ルーメリディアン）は通常の武器とは少々異なる耐久減少が適用されている。基本的にこの剣はどれだけ雑に使おうが、刀身がへし折れようが耐久値が減少することはない。では傑剣への憧刃のように耐久が減らない無敵武器なのかといえばそうではない。
「まさか、耐久値をゲージのように使用して……！？」
「ご明察！！」

僅かに残っていた折れた刀身が砕け散り、まるで氷柱（つらら）が形成される
プロセスを倍速にしているかのように新たな真紅の刃が形作られて
いく。

「さらに今の境光の宝剣は、月光を浴びせる事で……耐久値を回復
する！！」

そんな劇的な回復量ではないし、あくまでもついでの要素と言った
ところだが……ビィラックめ、またしてもクソピーキーなものを
作りやがったな。

「ジャイアントキリングだオラァァ！！」

展開した刃は大元の耐久値とは別の耐久値を持っており、それを消
費する事で固有のアクションを実行する。今の場合は飛翔斬撃だな。
今日の……いやもう昨日か、昨日ここに来る前にラビッツで日光を
浴びせておいたからそれなりの威力を出せるようにはなっているが、
天日干しと天月干しが必須とか完全に屋外限定じゃねーかこれ！！
それはそれとして巨人型撃破ァ！！

「まぁそんな感じ！　朝日が出たらこっちの、ケツの方から新しく
刃が出てくるぜ！！」

「パラメータの、特殊仕様……ＮＰＣ限定？　いいえ違う、このゲ
ームは基本的にプレイヤーもＮＰＣもほぼ同じ条件下で動いている。
発想力の、敗北……っ！！」

サーバーと繋がってるＮＰＣに発想もへったくれもない気がするの
だが、イムロン的にはよく分からないが敗北なのだろう。あとすい

ません、せめて戦ってくれ。

「あぁ、そういえばビィラック……これ作ったやつからお前に伝言あったわ」

「……聞きます」

「えーと……『わちの親父はこれより凄い』、です」

「………ソデスカ」

あ、本当に武器が気になっただけ？　手伝ってはくれない？　ソデスカ。

ふらふらと去っていったイムロンを見送りつつ、再び手が足りなくなったので慌ただしく剣を振り回す。

「あ」

「どうかなさいましたか？」

「あーいや、ちと忘れ物を拾っていけるな、と……」

場所的に出したまんまで放置してたブリュバスを回収に行けるか？　ちょっと寄り道にはなるが、ルートから大きく外れてもいないし

……

ちら、と振り向けば構わないといった様子の聖女ちゃん。ではご厚意に甘えるとしよう。

「あったあった」

クルーザーサイズとはいえ地上に船が鎮座してると目立つなー、今はクラン共用のインベントリボックスに何も入っていないから回収できる……ん？

「……『プレイヤーが搭乗中のため収納できません』……だと？」

あ゛ん？　おうおう人様の船に勝手に乗り込むたぁふてぇ野郎だ、所有権があるから荒らしたりなんかは出来ないだろうが……これは一言かましてやらないと……あっやべっ、聖女ちゃんに小竜が襲いかかってる！！

「やぁ、やぁ。久し振りだね……「μ鯖」のサンラク」

ヒュン、と空を切る一筋。聖女ちゃんに飛びかからんとしていた他よりもＶＩＴが高そうな人型小竜の眉間へと正確にゴツい矢が突き刺さり、矢に込められた運動エネルギーに抗いきれなかった人型小竜の頭が結構ヤバい感じに曲がりながら後ろへと吹っ飛ばされた。

「その呼び方……」

見上げた先、ブリュバスの甲板に立つ一人の男。西洋ファンタジーなシャンフロ世界じゃ微妙に浮いた雰囲気を漂わせるカウボーイハットを始めとした西は西でも西部劇を思わせる軽装の弓使い。

俺はその男を知らない、だが俺の所属名を知っており、そんな服を着たやつを一人知っている。

「一応「あの島」じゃ会ったことがあるんだけど覚えてるかな？

……バイバアルから話は聞いてない？　どうも、γ鯖で活動してた「アトバード」です。今は「ヤシロバード」だけどね」

「社（やしろ）、バード……？　あっ、ご就任おめでとうございます？」

「どうもどうも」

俺の船に勝手に乗り込んでいた不届き者の正体は、かつてあの島にいたサバイバアルや俺と同じ鯖癌プレイヤーだった……

龍よ、龍よ！　其の二十八（後書き）

おや　？　イムロン　の　ようす　が　……　？

龍よ、龍よ！　其の二十九（前書き）

筆がノッてりゅのぉぉぉぉぉ！！

「いやー、やっぱりプレイ人口が多いからかな、自分から名乗るもんでもないとはいえ鯖癌プレイヤーとこうも再会できるとはね。バイバアルの奴は色々とそのまんまだったし君も君でネームが一緒だろう？　ふふ、なんだか嬉しいね」

ヤシロバード……もといアトバード。
懐かしい名前だ、γ鯖をタチの悪いサバイバルFPSにしていた元凶。
サバイバアルもといバイバアルが幅を利かせていたφ鯖では素手喧嘩（ステゴロ）で何もかも解決しようとするアホばかりが集まっていたが、奴のいた鯖はその真逆、プレイヤー一人一人に初期から支給される銃器をこそ至上（メイン）にしたサーバーだった。
ウチのサーバーは暗殺者しかいなかったのでむしろ他鯖から肝試し感覚でプレイヤーが訪れたりしていたな、全員お望み通りにしてやったが。

「今は午後十時軍に所属してるんだけどさ、君はあの【旅狼】所属だろう？　同盟相手だ、今何をしてるかはともかく協力しないかい？」

サバイバル・ガンマンにおける銃器は初期装備のピストルを除いてレア武器に位置するアイテムだった。
γ鯖の連中は稀に流れ着いて来るショットガンやら何やらを掻き集めてはぶっ放し……時折他鯖にまで火薬調達の「遠征」にやって来るのは大抵γ鯖の連中だった。

その中でもアトバードは頭一つ抜けた存在だった、密林の隙間を縫ってマスケット銃で狙撃できる奴なんて奴くらいだった。ああそうとも、コイツと俺には縁がある。俺はコイツに片目をブチ抜かれた事があるし、俺もコイツの喉を切り開いた事がある。

「支援はありがたいが……大丈夫なのか？　見たところ「弓」がメインだろ？」

「言っとくけど、γ鯖じゃあ弾切れした時の緊急手段で弓を使うのは当たり前だったんだぜ？」

線の細い青年のアバターであることは鯖癌でもここでも変わりないアトバードもといヤシロバードだが、その実バトルスタイルは近・中・遠のオールレンジタイプであることはよく知っている。

現に船の上という位置的なアドバンテージを自ら放棄した今も、遠距離の小竜を的確に潰しつつ近くまで来た奴には蹴りで対処する事で敵を寄せ付けていない。

「彼女、もしかしなくても聖女ちゃん……あぁ、聖女様だろう？　そんな方が二人だけの、それも親衛隊じゃない供回りを連れてるってだけでも何かあることはわかるさ、手伝うよ」

「そっか、まぁここで会ったのも何かの縁だ。申請送るわ」

「ついでにフレ登録もこっちから送っとくよ」

互いに送り、互いに届いた申請にイエスで返す。これでヤシロバードの方にも「聖女の刃剣」クエストが共有された……のかな？

「聖女様、部外の者ではありますがこの者は自分の古い友人でして、

供回りに加えても？」

「えぇ、構いません」

懐が広くて大いに結構。改めてブリュバスを回収しつつ新たに一人加えた聖女ちゃん臨時親衛隊は黒と金が激突する戦場へと突き進む。

「馬鹿でかい船を収納できるそれも気になるけど、個人的には船に搭載されてた「アレ」がとても気になるね……今度機会があったら撃たせてよ」

「案外その機会、すぐ来るかもな」

「それは重畳。いやそれよりも！　そこのパワードスーツさんを見るに……もしかしなくても、あるのかい？」

「ふふふ……サイナ、サジタリウスを見せてやりな」

「了解・・（まぁいいけど）展開します」

「おぉお……！　エクセレントだ、凄い……！　あるのは知ってたけど、これは昂ぶってくるねぇ……！！」

分かるよサイナ、控えめに言っても気持ち悪いよね。でもそいつ、筋金入りの「銃好き」なんだよ。見るのも撃つのも大好きな……な。今にもしゃぶりついて頬ずりでもしそうな様子で長銃（サジタリウス）を凝視する姿はサイナですら一歩引いている程だが、奴からすれば「銃が存在する事は分かっているが入手できない」という状況はそれなりのストレスだったのだろう。

「やっぱ神代関連だよねぇ、こっちで精巧な設計図書いて鍛冶師に渡しても「こんなの作れない」の一点張りだしシステム的なロックがかかってるとは思ってたけど、確か鍛冶関連に隠しジョブで「古匠」ってのがあるんだっけ？　そこ関連かな。ほら、化石みたいな感じで神代の武器が出土することあるだろう？　どう見ても形状がシャッガンな奴とか無限回収してるんだけど、修理できちゃう感じなのかな」

「お前鯖癌と銃の話になると早口になるのな」

「ハハハ、我が青春を捧げたゲームとライフワークだからねー」

サバイバアルも大概だったけどコイツもアレだなぁ……まぁ、旧友に会った感じで悪い気はしないけど。

「ちなみに彼女をどこまで連れて行くんだい？」

「あそこ」

「マジかー……あぁそれよりもひとついいかい？」

「ええで」

「……後ろから何か、ものすごい勢いで走ってくる騎士がいるんだけど」

…………捕まったら俺殺されるのでは？

「サ、サイーっナ！　聖女ちゃんを抱え上げろ！　走るぞっ！！」

ひぇっ！　こっちくる速度上がってないか！？　まさか、聖女ちゃんをお姫様抱っこしたのを見て……クソがっ！　フラグが地雷過ぎんだろボスモンスターか何かか奴は！！

「せいっ……っじょ様ァ！？　割と切実に弁明よろしくおなっしゃすね！！？」

「うふふふふ、なんだかドキドキしますね」

「え、無断！？　サンラク、凄いねぇ……ドラゴンの逆鱗に落書きしたってこうはならないことくらい分かるだろうに」

「逆鱗が勝手に家出したんだからしゃーねーだろうが！！」

なんであんな速いの！？　ちょっ、やめっ、臨界速使ってもいいですかァーッ！！

……

…

…

……

「では処刑する」

「弁護人(聖女chang)！！」

うつ伏せに踏みつけられてるからどう殺(ヤ)られるか分かんない！　頭なのか？　頭を狙われてんのか！？

「待って、ジョゼット。置き手紙にも書いたでしょう？　これは私の悪巧みなのだから」

「聖女様、それとは別件なのです」

「あら、それなら私にはどうしようもないのかしら？」

「いや待てェ！　どうせ「聖女ちゃんの半径二メートル圏内に男がいたから死刑」とかそんなとこだろ！」

「十メートル圏内だ」

「デッドゾーンが広すぎる！！」

「あれそれ僕も処刑対象じゃゃない？　マズいなぁ、恩赦とか無い？」

嫌じゃ嫌じゃ死にとうない！　死にとうないぞ！！

「……冗談だ、流石に聖女様の前でバカみたいなレッドネームペナルティは背負わない」

「聖女ちゃ……様の前じゃなかったらノンストップ処刑ってことでは？」

「場合による」

「場合によりますか」

とりあえず解放されたので立ち上がる……えっ、タワーシールド？　鈍器で殺るつもりだったの？

「ジョゼット、他の者達は？」

「他の場所を捜索していたりと様々です、私が見つけたのは偶然でしょう」

偶然俺は殺されかけたのか、と詰め寄りたいところだがグッと堪えられるのが一流ってものさ。

「しかし聖女様、なにもご自身が出向かずとも命じてくだされば……」

「ふふふ、それじゃあきっと貴女達の内の誰かは私の側に残ろうとするでしょう？」

「む………」

「それに………黄金の方、神代より君臨なされしかの龍王と少しお話がしてみたくって」

あぁ、奴は中々どうして話せる奴だからな。まさか下着(ドロワ)丸出しを常識的に諌められるとは思わなかったが。

「で？　どうするよ」

答えは俺が送ったパーティ加入申請という形で返された。アタッカーにタンク、遠距離支援……中々どうして形になってきたな臨時パーティ。

「やってやるとも、最大防御(ディフェンスホルダー)が伊達じゃないと証明しよう」

サイガー１００の方は素の性格がアレっぽいがこっちはロールプレイなんだよな。ちょっと前に仮面(ロールプレイ)が脆すぎるロールプレイヤーを見ただけあって凄いサマになってるように見えちゃう……

龍よ、龍よ！　其の二十九（後書き）

アトバードさんは今はヤシロバード、午後十時軍の何人かから転職の相談とか受けてる

◇

「クッ……やはりユニークモンスター、クターニッドも大概タフネスとは聞いていたがそれ以上だな……！！」

ジークヴルム対ノワルリンドに数多のプレイヤーが絡んだ大混戦。
大多数はジークヴルムを狙っているとはいえ、無尽蔵とすら思えるジークヴルムの様子にカローシスＵＱは思わずと言った様子で舌打ちをした。
ジークヴルムとてゲームのエネミー、倒せないという事はあるまい。
しかして既にプレイヤー達が攻撃を開始して結構な時間が経過しているにも拘わらず、僅かに怯ませる以上のダメージを与えられているとは思えなかった。

「通じていない……訳ではない、実際ノワルリンドの攻撃は効果を見せている……となるとやはり、単純にタフいのか？」

『そうだとも、この身はかつて始源へと抗する為に作られたもの……貴様らの輝きとて我が身を討ち斃すには生半可な牙は届かぬと知れ』

「おっと、まさか答えてくれるとは」

しかし、とカローシスＵＱは思考する。
実際のところジークヴルムを倒すにあたって、ノワルリンドの存在は非常に大きい。ジークヴルムに匹敵する体躯を持っていることも

あるが、その息吹に対してジークヴルムが「輝ける龍王（トゥーパック・アマル）」を高確率で使用する為、相手の行動を絞ることが出来る。

だが、ノワルリンドは完全に味方という訳ではない。そしてスカルアヅチの城主及びその麾下……前線拠点の構築に大きく関わる生産職達から敵視されている為に共闘しつつも狙われる立場にある。

『ぬぅう！　どういうことだ秋津茜！　この我に楯突く虫がおるぞ！！』

「日頃の行いですよノワルリンドさん！　ほら、前にいっぱい酷いことしたらしいですし！」

『ふん、くだらぬ怨恨か……だがこの程度の痛痒、通じるものか！』

「ジークヴルムさんと張り合ってる感じですね！　頑張りましょうっ！」

どうもレイドモンスターは別に存在するようだが、少なくともこのEXシナリオにおいてはレイドモンスター相当の色竜と共闘しているる【旅狼】の少女が一体何者なのか、と気になることは尽きないもののの、少なくともノワルリンドのヘイトをジークヴルムに固定してくれているのは有難い。

「後から来た者で指揮下に入る者はリソースが尽きた者と交代してくれっ！　ジークヴルムはスキル無効と魔法無効を使い分けるっ！　スキル無効の結界は発動中のスキルも対象になるから注意！！」

何度目とも分からぬ指示を出しつつ、カローシスUQは大きく息を吐き出す。

「流石にこの規模でソロ指揮官はつらい……」

「そうか、なら遅ばせながら手伝おう。元メンバー……あぁいや、姉妹クランの相手に手間取ってな」

「ぬっ」

ある点に於いては忌々しさすら覚える声が投げかけられ、四振りの剣が担い手なき抜き身のままに宙を舞う。

『何奴！！』

「クラン【黒剣】団長（リーダー）、サイガー１００だ。お前を倒しに来た」

『良かろう、ならば来るがいい！！』

「【五重奏（クインテット）】！！」

名剣魔剣が宙を舞う、単なる飛翔武器として飛び回る剣の数々はしかして指揮剣の元、まるで見えない何者かが握り振るうかのような振る舞いを見せてジークヴルムへと斬りかかる。

それはリアルでは絶対に見ることができないであろう現象（もしかしたらそんな技術が既に実現しているかもしれないが）。プレイヤー達の間から歓声が上がり、ありったけの時間と素材……注ぎ込めるだけのリソースによって成り立つ最高峰の従剣劇にジークヴルムすらもが僅かに動きを止めざるを得ない。

『なんたる剣嵐怒涛……！　おお、なんたる、素晴らしい……！！』

「お褒めに与り光栄だ……！　進めっ！　並ぶな固まるな！　奴を包囲して全方向から攻撃を叩き込め！！」
応、とプレイヤー達の声が夜空へと高らかに響く。【黒剣】の主力メンバーが合流したこともあり、再びプレイヤーの大多数がジークヴルムへと立ち向かう。それは指揮官としての有能無能という話ではなく、圧倒的な視覚的インパクトによる意識の統一。
「……はぁぁー」
「どうしたカローシス、まだ気を抜くには早いぞ」
「…………」
じ……とサイガー100を、厳密にはサイガー100が従剣(ソーヴァント)劇を操作するために振るう聖剣を半目で眺めながらカローシスUQは「ヘッ」と唾でも吐き棄てるかのように片頬を吊り上げる。
「いやーパイセンさすがっすわー、神秘(レーツェル)の剣は所詮剣聖の引き立て役ってことっすね、ははは」
「お前確かIT関連の企業勤めだったか、先輩も何も私と関係性皆無じゃないか……というか前々から言っているが別に下位互換でもなんでもないだろう。魔法面の汎用性が違う」
「なんとなく運営に聞いたことがあるんだけどさあ……今、魔法剣士と剣豪の就職率比較すると1：4くらい差があるらしいよ」
「……………ノーコメントということで構わないな、来るぞ！！」

「おっと」

『フハハハハハ！！　良い！　良いぞ！　我が血潮の滾りを！　我が身魂の極限を！　貴様らは引き出せるかァ！！』

『今この場にて死ねぇぇえええええ！！』

大質量と大質量が激突する。その性質上、より取り見取りのプレイヤー達に目を奪われ続けるジークヴルムはノワルリンドの攻撃をほぼ直撃で喰らい続けている。にも拘わらずその体躯の芯は揺らぐこと無く、鬱陶し気にノワルリンドの頭をつかんで投げ飛ばす。

当然人が密集すれば巨大な者達の争いに巻き込まれる確率も上がる。投げ飛ばされたノワルリンドの墜落地点にいたプレイヤー達が蜘蛛の子を散らすように逃げ出し、幸運にも誰一人潰される者はいなかったとはいえノワルリンドが地面に叩きつけられた衝撃で少なからず戦列が乱れる。

「凄まじいな、ボスクラス同士のガチＭｖＭというやつは」

「これプラスプレイヤー総出で殴ってるのに未だに倒せる気がしないんだけどね……」

「となると別方面からの攻略が必要になる可能性は？」

「クターニッドが実質耐久ゲーなんだったっけ？　いや流石にあそこまでボスキャラじみた振る舞いしてそれは無くないかな？」

「いや、だがクターニッドとて多少はこう……怯んだ。ここまでタフだと何かしらのギミックがあってもおかしくはないぞ」

ちら、とスカルアヅチを見上げながらサイガー１００はジークヴルムに何かしらのシステム的な仕掛けがあるのではないかと推測する。
時間が経過するほどに、ジークヴルム討伐は困難になると言ってもいい。何せもう一つのクリア条件はジークヴルムの反撃を喰らい続けて既に消耗した様子を見せている。気まぐれか実験か、ノワルリンドに時折回復魔法が飛んで行ったりもしているのだが、焼け石に水だろう。
ジークヴルムが倒せないとなれば、次善のクリア条件を満たそうとするプレイヤーは出てくるだろう。正直に、そう正直に言ってしまえばサイガー１００やカローシスＵＱはノワルリンドの最終的な生存にそこまで執着しているわけではない。ライブラリの推測が正しければどちらのクリア条件を満たしたとて得られる結果にそこまで劇的な変化はないのでは、とも思う。
だが、ここまで長い時間を戦い続けて奇しくも二人は同様の感情を抱きつつあった。
「だが、あぁも英傑英傑と挑発されては、倒せませんでしたでは悔しさが残るだろう」
「否定はしない、というか君ん所とライブラリが第二陣を埋めたせいで僕らこれが初ユニークモンスター討伐になるかもしれないからね？」
であれば手は抜けない。サイガー１００は展開する従剣劇をより攻撃的なものへと変え、カローシスＵＱは新たな魔法を儀霊剣へとセットする。
「ジークヴルムは何かしらのギミックモンスターの可能性がある！　何か気づいたことがあったら遠慮無く試してみてくれ！！」

「B．I．G．に引っかからない自信があるなら死んでリスポンしてもいいが、無理せず後続と交代してくれ！　調査船で補給ができる！！」

彼らはいちプレイヤーであり、大手クランを率いる者でもある。振るう剣が示すものはなにも、敵を害するだけではない。

龍よ、龍よ！　其の三十一（前書き）

あの、今年中に……あの、大丈夫ですか俺？（自問自答）

龍よ、龍よ！　其の三十一

◆

「ちなみにだけど、割とノリで付いて来てるんだけどジークヴルム相手に勝算とかあるの？」

「まぁな……個人的なツテっつーか……まぁ、有識者から話を聞いてあってな」

「ほう？」

ヴァッシュの名前は出さないが、情報の共有は必要だろう。まぁこの情報は極論無くてもどうにかなるんだが……

「ジークヴルムは炉心……コアみたいなのを中核として魔力を殺す魔力？　みたいなもので全身が出来た人造のドラゴンだ。だからつまるところ倒せないタイプの敵だ」

「……それが明らかになればジークヴルムを倒そうとする者は激減する、だから黙っていたのか？」

「ちげーよ話はまだ終わってない。有識者曰くジークヴルムを活動停止させる方法は二つ、一つは活動できなくなるまで魔力を使わせる……要するにガス欠。で、もう一つが「捨て身の」ジークヴルムの逆鱗を穿つこと」

「捨て身……要するに、最終形態的な？」

「多分な、そしてジークヴルムをその気にさせる方法はただ一つ」

そしてその答えは最初から……ああそうだ、この前線拠点にジークヴルムが現れたその瞬間から既に黄金の重力圏として展開されていた。

「ロールプレイだ、英雄的（ヒロイック）な行動で奴のテンションを上げること……それがこのユニークの攻略法だ」

「それは、また……」

簡単なようで難しい、だが決して不可能ではない。そして、この条件を知った上で現状を鑑みると妙に怪しい動きをしている奴が見えて来るというもの。

「どうか、なされましたか？」

「いいや？　何でもないですとも」

聖盾輝士団（聖女ちゃん親衛隊）は筋金入りのロールプレイヤー達だ。そしてＥＸシナリオの最中であっても聖女ちゃんを守るために動かない連中がＥＸシナリオに関われば……少なくともジョゼットという「最大防御（ディフェンスホルダー）」が戦闘に参加するだけでもＢ．Ｉ．Ｇ．がマイナス判定になることはないだろう。

ＡＩ側がそれを判断して動いた？　そんなこと出来るのか？　いや、出来そうなんだよなぁ……

薄々は感づいているのか、ジョゼットは何も言わない。ロールプレイを続ける以上、聖女ちゃんから離れるつもりもないのだろう。

聖女ちゃんは戦場の最中にあって静かな微笑みをたたえながら、その細い腕を伸ばして指でジークヴルムを指し示す。

「私は、龍王に問いたいことがあって来ましたが……かの黒竜に問いたいことが出来てしまいました。ジョゼット、その間私をジークヴルムから守ってくださいますか？」

「ご命令とあらば」

「では、そのように。サンラク様も、ヤシロバード様も……サイナ様も、よろしいですか？」

「元より奴を張り倒しに行くんだ、やる事に変わりはない」

「ノリで付いて来たけど、ウチの指針もジークヴルム狙いだからね……ごほん、承りました聖女様」

「任務遂行内容に変更はありません」

重要NPCからの確認に、それぞれがそれぞれの答えを返す。
即興のパーティではあるが、野良パなんざオンゲじゃ当たり前の要素だ。同じ方向さえ見ているのならなんとでもなるというもの。

「よっしゃ、カチコ」

「あ、お待ちをサンラク様」

「ミッ！？」

ここで勢い殺します？　ここはもう狂った戦士のように奇声をあげ

ながら突撃する場面では？　んなクソシーンは全カットだよ馬鹿。

「いえ、以前私の願いを叶えてくださったお礼がまだでしたから……戦いに身を投じる貴方に一助を、と」

「と、いいますと？」

「その傷は夜の帝王が強き想いと共に刻んだもの……私如きの祈りが打ち勝つはずもありませんが……それでも、僅かなひと時だけその荒ぶる牙の残影を鎮めることは出来ますから」

ぴと、と俺の胴に走る刺青のような傷跡のような荒々しい刻傷に聖女ちゃんの指が触れる。後方でジョゼットが般若のような顔をしてるのでマジ勘弁してほしいというか今から命乞いコマンドを構築する必要が出て来たというか、知ってか知らずか聖女ちゃんは真剣な顔で俺の刻傷を凝視する。

「――己が証明を隠すことを許さぬ夜襲の狼王、どうか今ひとときだけ、かの戦士に鎧を纏う赦しを……【――――】」

その時、聖女ちゃんがなんと言ったのかは至近距離にいる俺ですら聞き取ることが出来なかった。だが何が起きたのかは分かる。

「うお、」

俺に触れる聖女ちゃんの指先から、何やら光が俺の身体を這い出す。視覚的にアレな絵面だが触手的なネチョい感じはなく、光が収まるとそこには鎖に花が絡まったような不可思議な紋様がリュカオーンの刻傷の上を覆うように広がっていた。

「今ひととき、この竜災が終わるまでの僅かな時間ではありますが、この傷が齎す影響を封じてあります。ですが同時に、この傷による加護もまた封じざるを得ませんでしたが……」

「いいや、いいや、エクセレントだ。すごく素晴らしい、お布施はどこに支払えばいい？」

誰だよさっきまで得体の知れない強キャラ扱いしてたやつは？　俺が殴ってやる。だがあいにくタイムマシンは持ち合わせていないのでこの拳は下ろすとしよう。

刻傷の一時無効化だと？　控えめに言って悲願だぞそれは。なんか見た目がフローラルな感じになったことでより倒錯的というか控えめに言って変態のそれなのだが最早地肌がどうなっていようが今この瞬間の俺には何の痛痒ももたらさない。

「なんだ、この、ただ防具を砕く必要なく着込めるだけなのに、このゲームクリアした感じは……！！」

なんだかよくわからないけどテンション上がって来た！　これは俺も一張羅を引っ張り出すしかないよなぁ！？

幾度とない遭遇、幾度とない敗北、そして勝利。俺が「黄金の天秤」商会に大量の蠍素材を卸す事が出来たのは何も独力というわけではないのだ。

蠍はマブダチだがその中でも特に仲のいい……具体的に言うとどっちも好戦的だから見つけ次第ぶっ倒しに行っていた同胞喰らいの蠍。ジークヴルム、奴がユニークモンスターというただ一つの黄金であるならばこれは月の光を受けて輝く類い稀な黄金。

その素材をふんだんに用い、いつか着る日が来ることを夢見てイン

ベントリアで眠り続けていた防具――――！！

「うわ、なんかすごいギラッギラしてる」

「これぞ金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）の素材から作られし「金晶戦衣（エグザイル・クロス）」シリーズ！」

ビィラック曰く「何故か」やけにすんなりと依頼を受けてくれたキャッツェリアの宝石匠による鉱物を布と織る秘奥によって作られた黄金の布を基本とした、こう色々と悪いこと考えまくった素材をふんだんに用いた黒と金の……まぁ、服です。

いやだって仕方ないじゃん！　ビィラックの奴に「極論硬さとかいらないんで兎にも角にも動きやすくしてね！」って言ったら勝手にキレだしてマジでただの長袖とジーンズみたいな防具作ったんだぞあいつ！！

いや、要所要所にプロテクター的な装甲があったりはするけども！　全体的なシルエットは完全に「ちょっと肌寒くなった休日の過ごし方」とかそんな感じだぞ！！

「服にしか見えないんだけど……」

「言っとくけど装備ＶＩＴ下手な重鎧よりも高いからな」

「なんの素材を使っているんだ？」

「金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）のレア素材とレア鉱石諸々、使った素材を売っぱらうだけで二億くらい行くんじゃね？」

「におく」

「っはぁー……これがそんなに……」

流石にこれを使い潰す覚悟が決まらなかったので箪笥（インベントリア）の奥にしまい込んでいたが……刻傷に怯えなくていいなら晴れ着として使うってもんさ。

「とりあえず瑠璃天の星外套を付けとけばなんかこう、戦士っぽくない？」

「……頑張れば見えなくも？」

「まぁ、顔がそれだし一般人には見えないだろう」

「よーっし、じゃあ改めてカチコミかましてこーぜ！！」

ぐぽーん、と八つの目を模した鉄仮面を輝かせ、いざ尋常に殴り込みで候。

……これ露出魔から不審者に変わっただけでは？

龍よ、龍よ！　其の三十一（後書き）

聖女ちゃんはしれっとやったけど何をしたかは次で分かります

龍よ、龍よ！　其の三十二（前書き）

手が滑ったなら仕方ない

◇

『ちとそこらに転がっておれ』

ノワルリンドへの宣告は、驚く程にあっさりとしたものだった。

『なん……ごぐっ！？』

ノワルリンドの首をジークヴルムの手が掴み、人間程度ならば容易く握り潰せてしまうだろう握力を以って持ち上げる。
黄金の全身からその口腔の奥に収束する莫大なエネルギーの気配にノワルリンドは逃れようともがくも、その巨体が拘束から逃げるよりも早く……

『我が炎滅に叫べ……「灼滅威吹（ブレス・オブ・ペイン）」！！』

――閃光。
最早叫びすらなく、赤熱した黄金とでも言うべき朱色のブレスを胸部に直撃させたノワルリンドの巨体がいとも容易く吹き飛ぶ。

「ノワルリンドさん！！！！」

秋津茜が悲鳴にも似た叫びを上げる。プレイヤーの何人かを巻き込んで吹き飛んだ先、力なく身体を横たえ呻くノワルリンドへと全速の走りで駆けつけた秋津茜はその胸部から溢れ出す尋常ならざる量のダメージエフェクトに思わず喉を詰まらせる。

「だ、あ、大丈夫ですか！？」

『く……ぎ、ぐぉぁ……』

返事はなく、ただ呻く声だけが半開きの口から漏れる。致命傷ではない、もしその傷が死に至る程のものであればゲームのシステム上、その身は既に砕け散っているはずなのだから。であればノワルリンドのＨＰはまだ尽きてはいない。

だがそれでも、満身創痍であることは明らかで、そんなノワルリンドの姿にプレイヤー達の中から声が出始める。

――チャンスなのでは？

――奴はクリア条件の内の一体だ

――今なら倒せる

――ノワルリンドを倒せ

まずい、と秋津茜の思考が警鐘を鳴らす。秋津茜とてノワルリンドが不特定多数に恨みを買っていることくらいは知っている、そんなノワルリンドが今最大の隙を晒している。

「ま、待って……あの、えと、あの……」

言葉が出てこない。ペンシルゴンであれば不特定多数をうまく言い

くるめるだけの口八丁、サンラクであればその場のテンションだけで不特定多数に喧嘩を売る啖呵、それらのようなこの場を乗り切るだけの力ある言葉を秋津茜は口にする事が出来ない。

「ノ、ノワルリンドさん…………」

その時だった。

「悪いなプレイヤー諸君、イベントシーンだ」

「聖女様の御前だ、武器を下ろせ！！」

――黄金と、純白が、漆黒を庇うようにプレイヤー達とノワルリンド、そして秋津茜を隔てて立ち塞がった。

「お前らがノワルリンドを倒したい気持ちは分かるが、まぁこっちもコイツを生かしてやりたい事がある……ＰｖＰみたいなもんだ、理解できなくても納得してくれ」

私服の上からプロテクターを付けただけのようにも見える、なんとも緊張感に欠ける防具。それとは真逆の荘厳さを持つ外套(マント)。奇妙な「棒」を構えているのもさる事ながら、何よりも目を惹く異形の鉄仮面。

頭全体を覆うフルフェイスではなく、ガスマスクのようにも拘束具

のようにも見える不気味な仮面。八つの目を模したデザインは人間が装備する仮面でありながらまるでそれが人の皮を被った怪物の素顔のようにすら思える。

「聖女様の為す悉くを妨げるモノを弾く、それが我ら聖盾輝士団の務め……今この場において、何人たりともノワルリンドに手を出すことは出来ぬと知れ」

そして、もう一人の片割れもまた堂々たる佇まいでノワルリンドを庇うように立つ。

純白にして堅牢、清廉にして強固。三柱の神を信仰する教会においてただ一人の聖女を守る最強の盾にして、一切の恥じらいも妥協も見せないロールプレイを行うゲーム内でも数人しかいないレコードホルダーの一人。

人呼んで「ガチ勢」ジョゼットが、もう一人の鉄仮面(サンラク)と並び立ってプレイヤー達の前に立ち塞がる。

「サンラク、さん……」

「おいおい、へたれてる時間はないぞ秋津茜。ここからが本番なんだぜ？　そこの黒いの含めてキリキリ働いてもらわねーと」

「えと、あの、でも……」

「──少々、宜しいですか？」

「え？　ふぁ、はいっ！」

突如として投げかけられた声、ノワルリンドの側でへたり込んでいた秋津茜が見上げれば、そこにはいつからいたのか一人の少女が穏

やかな笑みを浮かべて立っていた。

「申し訳ありません、かの方へ少々問いたい事があるのです……」

「え、えと、ノワルリンドさんに……ですか？　どうぞ……」

なぜか逆らう気が起きない、逆らってはいけないとまで思ってしまう不思議な雰囲気の少女の笑みに気圧されるように秋津茜は脇へと退く。

そして聖女イリステラの登場は周囲のプレイヤーをも止めてしまったかのようで、戦場の一角に驚く程の静寂が広がる。

「黒竜ノワルリンド、天覇のジークヴルムに憧れ、その手を伸ばす者……お聞きしても、宜しいでしょうか？」

『が、ぐご………』

「いいえ、言葉は必要ありません。心のままに……それで私には通じますから」

竜の目が聖女を睨みつける。しかしてイリステラは揺らがず、ともすれば無感情にも見える程の穏やかさを以ってたった一つの問いを投げた。

「――――――？」

『…………』

その問いを聞く事ができたのは、すぐ隣にいた秋津茜だけだった。

ともすれば怒りのままに振るわれた黒竜の爪に斬り裂かれてもおか

しくはないその問いに、しかしノワルリンドは沈黙と瞑目という形で返答し……慈愛の聖女と呼ばれる少女はただ、笑みを浮かべた。

「そうですか。それを聞いて、私も決心がつきました……」

ぴと、とノワルリンドにイリステラの手が触れる。そして、触れれば消えてしまいそうな雰囲気など最初からなかったかのような確固たる意志を瞳に浮かべたイリステラが口を開く。

「どうか、どうか、今一度立ち上がって。傷つき倒れたその身体に、再びの力を……【事実改変(オモウガママニ)】」

イリステラの手が柔らかな白に輝く。まるで種から萌芽し成長する過程を早送りにしたかのような光の奔流がノワルリンドの全身を包み込み、光収まったその場には一仕事終えたかのように息をつくイリステラと、先ほどまでのダメージなど初めから存在しなかったかのような万全の姿で立ち上がるノワルリンド。

『お、オォォォォ……！！』

「貴方の真意、確かに聞き届けました……どうかご武運を」

『グ……フン、元よりそのつもりだ。我はジークヴルムを倒す、そしてこのノワルリンドこそが真なる竜王たることを証明する……！！』

「ノワルリンドさん！　えと、あの、お元気になったんですか！？」

『なにを突っ立っている秋津茜。貴様、このノワルリンドと共にジークヴルムを討つのであれば、斯様な無様を晒すでないぞ！』

「え、は、はいっ！」

その時だった。少し離れた場所で戦っていたプレイヤー達から驚きを帯びたどよめきが上がり、直後ノワルリンド達のすぐ近くに大質量が降り立った。

『……ほう？　貴様…………いいや、今を生きるならば多くは問わぬ。だが……我が前に立つと？』

「偉大なる黄金の龍王、人を愛するが故に世界を焼く者……こんな私とて、唯人として立つ事は出来ますもの」

『……そうか。今宵は良き日だ、我が幾星霜の悉くが満たされていく……』

ならば、とジークヴルムの目が真っ直ぐにただ一人の人間を、その背後にいる黒竜を睨みつける。

『我が「B・o・B（ブレス・オブ・ペイン）」の前に立つならば、その悉くは滅び去ると知れ！！』

数分前、ノワルリンドの胸を穿った滅びの一撃が再び放たれる。直撃を受けた黒竜の身体が強張り、周りにいたプレイヤー達が被害を恐れ逃げ離れる中……イリステラは笑う。

これまでのどこか浮世離れした笑みではない、年相応の少女が浮かべるようないたずらな笑みを浮かべて、イリステラは歌うように「悲鳴」を上げる。

「私、死んでしまうかもしれないわ……？」

「いいえ聖女様、この私がいる限り……如何なる滅びとて貴女を傷つけることは叶わない」

イリステラを狙う破滅の息吹、その射線上に立つ一人の聖輝士。その在り様はまさしく守護神像(パラディオン)のようで。

「ジークヴルム、お前に「最大防御(ディフェンスホルダー)」たる所以を見せてやろう」

騎士系聖騎士派生最上位職業「聖輝士(パラディオン)」

シャングリラ・フロンティアにおいて最大の防御力を保有するプレイヤー、ジョゼットは滅びの息吹を前に不敵な笑みを浮かべ……右手を突き出した。

「——我が血潮は熱く燃える」

龍よ、龍よ！　其の三十二（後書き）

【悲報】作者、聖女ちゃんの設定を我慢できずついにゲロる

龍よ、龍よ！　其の三十三（前書き）

今日はもう更新はないだろうと思わせてからの不意打ち更新。流石に明日は許せプリーズ

龍よ、龍よ！　其の三十三

ここで一つ、魔法について解説したいと思う。

シャングリラ・フロンティアにおいて魔法というものは多く存在するが、その中でもある種の究極系として存在する魔法群がある。
実現杖ザ・デザイアーのような裏技ではない、特定分野に属する魔法を極めた者のみが習得可能なその魔法を……「門魔法」と言う。
魔法名に「門」を含む魔法は幾つか存在するが、それらとは明確に異なるその魔法は驚く程に短い詠唱と「開門」のキーワードをトリガーとして発動される。

実のところを言えば、ジョゼットはタンクはタンクでもＳＦ－Ｚｏｏのタンク衆のような物理的な防御力を売りとした壁職ではない。
その本質は魔法による防御で前線を張るマギ・タンクとでも言うべき役割なのだ。

そして慈愛の聖女イリステラを守る盾として、時に巡礼の旅を襲う魔物から、時に不届きなＮＰＣから聖女を守るために研鑽し続けた防御魔法はサービス開始から一年経ったある日、遂にその究極系に至ったのだ。

◆

「――我が血潮は熱く燃える。」

たったそれだけ、驚く程に短い詠唱だが、発現した現象は劇的であった。

「うおっ」

思わず声が出る。まるで轍のように二筋の、炎によって出来たラインがジョゼットの左右から真っ直ぐジークヴルムとの間をつなぐように走る。

ただの炎じゃない、ただの一秒も同じ形をとどめていられない熱量の揺らめきが揺らぎながらも形を得て立ち上がる。

それはどこか見覚えのある兜をかぶっているように見える、それはどこか見覚えのある丸い盾を持っているように見える。具体的にはいつだったか装備を新調した時に鏡で見た気がする。

「開門（来たりて取れ）」

陽炎の戦士（スパルタン）達が剣を、槍を、盾を掲げて炎に溶ける。炎の勢いが最高潮に達し、津波の如く噴き上がった炎の回廊から幾百もの火炎で出来た武器が道を塞ぐように飛び出す。

それは槍衾、それは剣の群れ、それは並び立つ盾。それは正しく……敵の行く手を阻むべく開かれた熱き戦士達の門。

『――「灼滅息吹（ブレス・オブ・ペイン）」！！』

「――【熱血門（テルモピュライ）】！！」

朱色の息吹と、紅蓮の門が激突する。炎の封鎖網が吹き散らされ砕かれる程に、炎の中から新たな武器が飛び出し破壊のエネルギーへと喰らい付く。

右手を前へ突き出し、全力で踏ん張るジョゼットの頬を汗が伝うのが見えた。ゲームといえどそこはシャンフロ、魔法発動してハイおしまいとはいかないようだ。

「いけそう？」

「無論！」

ロールプレイによる凛々しい声ではないジョゼットの「地」の声、だが返ってきた答えは揺るぎなく。

「ユニークモンスターなにするものぞ……すぅぅ………」

大きく息を吸い込むジョゼット、僅かな間を経て裂帛の気合と共にジョゼットが一歩前へと踏み出した！！

「聖女ちゃんサイコーー！！」

「掛け声それで良いのか！？」

本人的には良いらしい。
炎の勢いがジークヴルムのブレスを上回る。先にその勢いを弱めたジークヴルムとは真逆、まさに一気呵成とばかりに膨れ上がった炎が指向性をもって爆ぜ迸る。

「この魔法は……カウンター魔法なのよ！！」

『クハ、ぐぁあ！！』

大地を削るが如く焼き払い、渦巻き疾る炎はまさしく盾を構えて前へ突貫するシールドチャージのようで。それを前にしてなお、逃げるでもなく笑みすら浮かべて受け止めた黄金の巨体が勢いに負けて僅かに浮き上がり……これまでずっと揺るぎなかったジークヴルムの身体が初めてぶっ飛ばされた。

「凄い……」

「ど、どうだ……うぅ、だるぅい……」

ぐしゃあ、と力なく潰れるようにへたり込んだジョゼット。だが成し遂げた事を考えればノーリスクってわけでもないのだろう。その証拠にジョゼットの体力ゲージは僅か数ミリを残して削れきっているのが分かる。

「ご、ごめーん……流石に、きっついわ……しばらくこれ回復しないから、休む……」

デメリットか？　ちょっと前の俺が陥ったクソだる状態と似たようなデメリットを抱えている可能性は高い。だが、ジークヴルムをぶっ飛ばしたという極大のインパクトは、プレイヤー達の迷いを吹っ切るだけの力があった。

「グッジョブ！　こりゃあ俺も活躍しなきゃあ立つ瀬がないか？」

「がんばえー」

「雑だなオイ……まぁいいや、サイナ！　エムルを見つけて連れてきてくれ、こっからは総力戦だ……血の一滴まで使い切ってジークヴルムに一泡吹かせてやろうぜ！」

「了解(よっしゃ)：行動開始」

ヤシロバードの方もそろそろ我慢の限界だろう、とびっきりの英雄(ドラゴン)譚(スレイ)を見せてやろうぜ！！

◇

「うー……」

【熱血門(テルモピュライ)】の副作用により行動不能状態になったジョゼットは小さく唸りながらも駆けていくサンラクを、飛んでいくノワルリンドを見送る。

「まぁ、収支はプラス、かな……」

秋津茜なるプレイヤー……少なくともジョゼットの観察眼がまごう事なき女の子である事を見抜いた少女からの混じりっ気のない感謝

の言葉は、数十分ほどの消去不可能なデメリットを負うだけの価値があった。

「門」魔法はそうやすやすと扱えるものではない。【熱血門】であれば発動の代償として使い手の熱が奪われる、システム的に言えば発動の代償として消費したステータスが発動時間に比例して回復せず、さらには発動の供物として捧げた「経験値」の赤字をゼロにするまでレベルアップする事もない。

「どうにかしてレベリングの時間を作らなくちゃなー……」

と、その時だった。

「お疲れ様、ジョゼット」

「え、昇天した？」

ふわり、と横たわるジョゼットの顔が何か柔らかなものの上に載せられる。まさか、と恐る恐る見上げてみれば……そこには信じられないほど近くにあるイリステラの顔。

「貴女の決意を私は否定できない……熱き炎血の門を開いた代償を消すことはできないけれど、せめてこれくらいは、ね？」

「おっほ…………黒字も黒字ィ……」

ジョゼットは自身の婚期的なものが遠のいたのを自覚しつつ、これだから非実在性美少女は最高だぜと至福のひと時を過ごすのだった

◆

「ようジークヴルム、ノッてるか？」

『ほう……狼傷の……否、その威風、成る程「本気」というわけか？』

「バカ言え、俺はいつだって本気さ。強いて言うなら全力だ」

俺は手を抜くことに手を抜かないし、散財するなら一桁になるまで削っていくのが好きなんだ。あの時の一太刀だってあわよくばてめーの顔面を真っ二つにするべく成分結晶を全てつぎ込んでたしな……空振ったけどな！！

「仕切り直しにしちゃあ随分と時間をかけて悪かったな、今ある全部でぶっ飛ばしてやるよ」

『ほう……その神代の武器で、か？』

「百足式(ムカデシキ)8一0(タウゼント)・5……誰が作ったのか、心当たりはあるんじゃねーか？」

あの常在戦場を文字通りに再現しやがったクソステことシグモニア

前線渓谷、すり鉢ドーナツの形をした窪みの中で戦い続けていた二種の超巨大モンスターの片割れたるはトレイノル・センチピード。
何度も何度ももう片方の要塞蜘蛛と戦わせていたからか、俺は偶然にも奴ら双方の親玉の激突に居合わせることができた。
そしてこの、百足式８―０．５とかいうあまりに特徴的なネーミングのこの武器はトレイノル・センチピードの牝個体、電車程のサイズがある牡個体であるグスタフと比較してなお数倍はあろう超超巨大百足トレイノル・センチピード・ドーラの素材が用いられている！！

「直接手を出す無粋こそないが、背中は押してもらった……だったら、代理としてやる事やらなきゃ締まりがつかねぇ！！」

『ならばどうする？』

「俺は軽く叩かれただけでも死ぬけどよ。心に炎(モチベーション)が残ってる限り、何度だって立ち上がる。お前を倒すまで不滅になるのさ、なぁ？　天覇のジークヴルム……死ぬ気でかかって来い、俺は最初からそのつもりだ！」

『ハハハ、クハハハハハハハハ！！　よくぞその「名」をほざいた！　ならば貴様の不滅とやら、我が全身全霊を以って燼滅してくれようぞ！！　見るがいい、天覇たる我が「龍王機関(Dragon Driver)」を！！！』

奴の心にも火を点けろ、温存なんて馬鹿馬鹿しい……灰(High)になるまで殴りあおうぜ！！

龍よ、龍よ！　其の三十三（後書き）

ちなみにあの百なのか千なのか7．5なのか分かりづらい甦機装を
直視したビィラックはしばらく寝込んだ

恍惚で

龍よ、龍よ！　其の三十四（前書き）

更新しないとは言っていないない
まぁ、ほら、しばらく更新止まるだろうし……

龍よ、龍よ！　其の三十四

甦機装(リ・レガシーウェポン)：ヴァイスアッシュ「百足式(ムカデシキ)８一０・５(タウゼント)」。
見た目はなんとも言えない奇妙な棒なのだが、これでも一応カテゴリ的には棍棒や杖ではなく槍……それもハルバードに分類される。
（三分凝視し、五分触り、舐め回しそうだったので頭にチョップを入れて合計十分経過した）ビィラック曰く、遺機装には世代というものがあるらしくその中でもこの槍は神代における最終世代……大昔の産物に対してこの言い方はちとおかしいが、どうも最新型という事になるらしい。

ビィラックは基となる素材の他にレア度の高い鉱石なんかを要求するが、流石は神匠と言うべきか……トレイノル・センチピード・ドーラの素材のみを要求したヴァイスアッシュの鍛冶はひと味もふた味も違った。

……

…………

……………

「おうおう、久し振りだからぁよう……ちゃあんと動くかな、っとぉ……」

「ビ、ビィラック！　この段階で気絶するのは流石にクソザコ耐性過ぎでは！？」

「おごごごご……」

「ビィねーちゃん！　ちょ、泡噴いてるですわ！？」

ヴァッシュが自身の工房からゴソゴソと引っ張り出してきたのは、なんとも形容しがたい……強いて言うなら先端が蟹の足のように開く金属製の筆？

「おう、素材を出しなぁ」

「ウィッス！！」

起きろー、お前これ見逃したら俺にキレるやつだろー。すぐに、となんとも言えない感じに金属蟹筆を握ったヴァッシュが軽く手首をスナップした直後、俺が手に入れたトレイノル・センチピード・ドーラの素材の数々がひとりでに浮遊し始める。

「人は火ィ吹けねぇ、爪は丸っけぇし軽く炙りゃあ悲鳴をあげる……つまるとこぁ、武器も防具も、「持ってるやつら」に近づくためのものだぁな」

「ビィラック、生きてるか」

「生きちょるぅ………」

ヴァッシュが金属蟹筆を動かす度、宙に浮かぶ百足の素材が誰も触れていないにも関わらず加工されていくのだ。

甲殻が紙の上に書かれた絵を消しゴムで消していくかのように削れていく。砕けたかと思えば目を凝らさなければ削りカスと勘違いし

てしまうほどの小さな「螺子」へと加工されており、まるでパズルがひとりでに組み上がっていくようにも見える。

「だぁが、遺機装(デバイス)ってぇやつはよう、逆なのさ」

「逆、と言いますと？」

「人は人、獣は獣……人を獣に近づけるんじゃあねぇ、獣の力を人が扱えるようにしてより強く作り変えちまう。それが「活性(性質を活かす)」ってやつよう」

その究極系こそが単一素材による武器鍛造、木が鉄の役割を果たし石が宝石の如く輝き出す……それこそが「古匠」の絶技、究極の到達点。

金属蟹筆の描く先、エンジンを有機的にしたようなドーラの「炉心酒臓」が粘土でも捏ねるかのように組み上げられた武器へと組み込まれていく。

「おめえさん、機装(デバイス)はただ振り回しゃあいいってもんじゃあねぇ。人の手に依れど使うんなら識らにゃあなんねぇ……武器に使われてるようじゃあ鼻ったれだぁな、そんなんじゃああいつに勝とうなんざ百年早いってもんよ」

「おっしゃる通りで」

遺機装あるいは甦機装は素材元のモンスターの特徴に強く影響される。実際、水晶群蠍の毒が何に効きやすく何に効きにくいかを調べておくと超排撃(リジェクト)の運用に役立ったりもするしな。ちなみに奴らの毒は有機物なら獣から魚までほぼ確実に効く、相性もへったくれもねぇな？

となればトレイノル・センチピードという種の特性を知ることがヴァイスアッシュ……ユニークモンスターが作った武器、という特殊すぎる甦機装を使いこなす第一歩になりうるってことだ。

「ほれよ、出来たぜぇ。銘はぁ……そうさなぁ、七巻半の百足は鉢(八)巻(巻き)で退治すると決まってらぁな。百足式(ムカデシキ)8—0.5(タウゼント)ってとこかぁ」

「ムカデシキタウゼント」

くっ……ヴァッシュめ、兎月とかを見るに和風ネーミングがメインと思ってたがセンスあるぜぇ……

「そいつぁ、超排撃(リジェクト)とも吸転換(コンバート)とも違う……機装の基礎を仕込んでぇある。故におめえさんの技量(ウデ)がぁ肝要ってぇわけよ」

「それは……」

俺が持つ奇妙な棒に手を伸ばしてぴょんぴょん跳ねるビィラックとそれを若干引いた目で見るエムルを他所に、煙管で一服するヴァッシュへと問いかける。

「カカカ……俺等(おいら)ぁ、最初に言ったじゃあねぇかよう」

……………

…………

……

「【超過機構（イクシードチャージ）】……」

振るう棒に走るラインは、まるで水と油のように赤と青の二色に分かれている。だがその境界が今、俺の声に応えて消失……二つの色が混じって紫に転じる。

それは機装の基本原理、素材の力を活性化させ強大な力を齎す……即ちその名は。

「――――「賦活醒（リベレト）」！！」

破損する程の出力を叩き込む超排撃（リジェクト）とも、外部からの入力で起動する吸転換（コンバート）とも違う。

言ってしまえば電源を入れただけとでも言うべきこの超過機構は、他の機構と比較しても何ら遜色のない性能を持つ。

『自らに、毒を……？』

「ものは使いようってやつだ、用法用量を正しく守れば毒だって万能薬（ドーピング）になるのさ」

おごご、最悪の気分だ。血管にゼリーを流し込まれたような、身体の中を異物が駆け巡るようなえもいわれぬ感覚と共に、百足式８－０．５から流し込まれたトレイノル・センチピードの「毒」が俺の全身を駆け巡る。

「さぁて……リアルとシステム、カフェインと毒を二重にキメて……ここで会うたが百年目！　盲亀の浮木！　泥率１％！　いざ尋常

に死ね！！」

『ぐぬぅ！？』

踏み出した一歩で加速、四歩で五メートルを駆け抜け八歩でジークヴルムへと肉薄した俺は、超過機構で「起動」した事でハルバードとしての真の姿を見せた百足式８－０．５でジークヴルムの脇腹に切り傷を刻みつけてやる。

「あんのガンギマリムカデめ……！　もう少し自分の身を労われねぇのかってんだ……！！」

お陰で俺もガンギマリだ、身体に悪そうなんだよこれ！！

百足式８－０．５の能力はトレイノル・センチピードの種族的性質と密接に関わっている。
そも、あの巨体をどうやって動かしているのか……それが鍵だ。

トレイノル・センチピードは、タランチュラ系列故か蜘蛛であるが毒を持たないガルガンチュラ種とは異なり、砲弾として用いる劇毒を生成することができる。
だがグスタフ、ドーラの素材から読み取れるフレーバーテキストを纏めると、どうやら奴らは攻撃用の毒とは別にとある毒を体内で生成しているらしい。

それこそがトレイノル・センチピードの「狂筋毒」、敵ではなく自らが服毒する事で自身の筋繊維を過剰に活動させるナチュラルドーピングだ。
これを人間用にデチューンしたものが百足式８－０．５の中には仕

込まれている。そして賦活醒をトリガーとして使い手の体内に注入された狂筋毒は俺の筋肉（サンラク）へと浸透し、「とあるもの」を急速に消費させながら莫大な強化効果を齎すのだ。

「発動者の魔力（MP）を消費して、全ステータスを大幅強化する……！！」

そして、二つの毒が混ざった紫の穂先は使用者に注入される「狂筋毒」ではなく、敵を蝕む「砲劇毒」の刃となって切った対象を汚染する……！！

「話は聞いてるぜ……最終的に無効化はされるが、効かない訳じゃあないんだろう？」

『ぬ、ぉぉお………！！』

「プラスドライバーだかタクシードライバーだか知らねーが、出し惜しみしてるようじゃ抱え落ちしちまうぜジークヴルム！！」

叫ぶ全身、月の光を受けて金晶戦衣（エグザイル・クロス）がギラリと凶悪な輝きを放った。

龍よ、龍よ！　其の三十四（後書き）

大部分を設定で占めることで文字数を稼ぐ高等テクニック

龍よ、龍よ！　其の三十五

◇

黄金と黄金が激突する。巨躯の龍王と矮小な人間。競るにしたってあまりにも吊り合わない筈の二つの金色は、果たして拮抗と言ってもいい程に吊り合っていた。

『逸らし……なれど、わが腕を弾くか！！』

「片手間に潰せると思うなって事だ！」

紫の槍がジークヴルムの足を貫く。
紫の斧がジークヴルムの脇腹を薙ぐ。
紫の鉤がジークヴルムの腕に掛かる。

即ち、異なるカテゴリの複合武装たるハルバードが八面六臂の活躍をもって黄金の龍王と張り合っているのだ。

「彼は、こう……顔を隠さないと戦えないとかそういう、あれなのか？」

「……んんんなわけあるかーーい！！」

「ちょお！？」

ジークヴルムが振るう腕に鉤を引っ掛け、大質量が振り抜かれる莫大なエネルギーを推進力代わりにして……文字通り吹っ飛んできた

サンラクにサイガー100は思わず悲鳴を上げる。

「着地ィ……！　っぶねー、スタミナギリだったわ」

「久し振り……と言うべきか？」

「あん？　あー、おばんです。いや流石にソロ討伐は無理だろっつーね」

直前までの大立ち回りを見ていたが故か、飛んできた妙な鉄仮面の男……サンラクとサイガー100を中心に奇妙な空白が出来上がる。全身から何やら毒々しいエフェクトを発しながらも、果たしてサンラクはサイガー100に対してなんでもないかのように挨拶を返した。

「その武器は？」

「百足式(ムカデシキタウゼント)8一0．5、おニューの隠し球ってとこかな」

「こうも未知の武器を見せられるといい加減妬けてくるな……！」

「イムロンに投資でもしたら？　あいつが一番古匠に近そうだし」

「来るぞ！」

「クソが！！」

偶然か、それとも狙ったのか。サイガー100達の方へと飛んできた単発ブレスを左右に跳んで回避。

「なんか指示とか従った方がいいのか！？」

「どうやらそれどころではなくなるようだぞ……！！」

これは前例が無いために誰も知らないことではあるが。
ジークヴルムは本来ただ一体でプレイヤー達を相手取る想定で設計されていた。だがイレギュラーな介入によって四体の色竜が集結した大混戦になった事でシステム的に「封印」された特殊行動があった。

だが、

黒竜ノワルリンドが実質プレイヤー側の戦力として動いている事、システム側の想定よりも早くドゥーレッドハウルが倒された事、そして何よりプレイヤーの「質」を計測して耐えられるだろうと判断された事で、その特殊行動は解禁された。

『――龍王機関（Dragon Driver）……起動』

ジークヴルムは最低でも百人以上のプレイヤーとの決戦を想定した設計をされている。
そして如何にジークヴルムが巨大といえど、数百人の全てが暇をもてあます事なく戦うことは困難である。
ではどうすればいいか？
『世界を灼くに手助けなど無用、疾れ！　我が残影は熱を抱く！！』
単純な理屈だ。席が少ないから椅子取りゲームになるのであるなら、

席を増やしてしまえばいい。
ジークヴルムの角が眩い光を放ち、角から放たれた五つの光が四方に散って炎のような雷のような……まるでプラズマのような分身が五体出現した。

「………」

「………」

白竜、緑竜、黒竜、ジークヴルム、それに加えて分身五体。単純計算でドラゴンが二倍に増えた事でプレイヤー達の動きが止まる。

『さぁ……どうする？』

ジークヴルムの姿形を模したプラズマの分身が動き出す、まさにその時だった。

「角を狙え！！！」

崩壊間際の静寂を先んじて崩す声ひとつ。声の主は黄金の仮面と紫紺の斧槍を持った戦士、その男……サンラクは確信を込めた声高らかにジークヴルムの「秘密」を暴く。

「奴の能力は角に起因している！　スキル無効も、魔法無効もな！！」

そして、

「当ててやるよジークヴルム、それを使ってる最中は他の能力は使えねぇ……違うか？」

『くかか、その通り。過剰稼働させた角一本につき一体の分身を生み出すが故、分身と角は連動関係にある』

「分身を倒せば角がフリーになる、角を折らない限り分身は暴れ続ける……俺そういうの苦手だからあとよろしく」

「面倒なところだけ押し付けてからに……！　カローシス！　お前のところのメンツとウチのメンバーを五分割する！　野良で分身対処は期待できん！！」

「了解した！　だが君は本体に行け、角へのアタックも並行するべきだ！！」

「任せ任された！　おいサンラク、ここまで派手に啖呵を切ったなら相応の貢献はしてもらうぞ」

「無論！　そしてウチの砲台も合流した事だしな……！」

人混みが割れる、それはロボットにしか見えない機械仕掛けの鎧が猛スピードで突っ込んで来た為であり、サイガー１００の……厳密にはサンラクの眼前で急停止した龍鎧の方にしがみついていたヴォーパルバニー共々にサンラクへと話しかける。

「任務達成：個体名称エムルを確保しました」

「サンラクサン！　来ましたわっ！」

「ようしエムル！　在庫処分だ、ジークヴルムの顔面に叩き込んでやれ！！」

「はいなーっ！」

人と、兎と、人形と。
種族も、生まれも違う、しかし同じ目的で己を見る三者三様にジークヴルムは過去を懐かしむような目で笑みを浮かべる。

『我が角を折らんと目論む、か……くくくく……懐かしいものよ』

そして、その光景を至近で見ていたサイガー１００は自分の知らぬ場所で進んだのだろう物語に自分がつまはじきにされている事にほんの少しだけ嫉妬を覚えつつも。

「ここから踏み込んで混ざればいいだけの話か……サンラク！　アシストしてやるから前線を張れ！！」

「上等！　後ろから刺してくれんなよ！！」

切り込み役は紫紺の斧槍(ハルバード)、後方に指揮官たる聖剣を置いて、六本の名剣魔剣を従僕とした武器の隊列が組み上がる。
目指すは黄金の龍王、分身出現の衝撃に混乱していた他プレイヤー達も負けじと武器を構えて再びジークヴルムを囲む包囲網が形成される。

『来るがいい、我が決死覚悟するに相応しいか……血風雷火の果てに証明して見せよ！！』

◇◇

時間は戻って、

「まぁさ、最初っから疑ってはいたんだよね。クリア条件の両方が一箇所に集まるなんて事、本来のシナリオにあったのかなぁ……ってね」

女が言葉を紡ぐ。

「シャンフロのシステムは控えめに言っても頭がおかしいってのは有名な話、仮にシナリオ崩壊レベルの状況になったとしてもリカバリできちゃうんじゃないかなぁ……って予測してみたり」

秋津茜がノワルリンドとのコミュニケーションに成功し、ユニークシナリオを発生させた時点で女はその可能性にたどり着いていた。
即ち、ドゥーレッドハウル、ブライレイニェゴ、ブロッケントリードがここに来たのはシナリオの強制によるものではなく、何か人的な意思によるものではないか、と。

ブライレイニェゴは前線拠点を見て「移住するには良い場所である」と言った。

ブロッケントリードはここにトットリ・ザ・シマーネがいることを確信していたようなそぶりを見せた。

「まるで、誰かから聞いてここに来たみたいじゃない？」

「成る程？　面白い推測だねぇ……」

問いかける女に答える女一人。

くるくると回され、かつんと地面に杖のように立った黄金の槍持つ女に問いかけられ、まるで生来そうであるかのように肩から三本目の腕を生やした女がわざとらしく笑みを浮かべる。

「別に犯人を探そうってわけじゃなかったけどさ、ブロッケントリードになにか吹き込んでるのを見ちゃったんじゃあ無視はできないよね？」

「……ふふ、少なくとも君らの企みから大きく外れるようなことはない、とだけ言っておくよぉ……」

「どうだか？　サンラク君から噂は聞いてるよ、何を企んでるのかおねーさん聞いておきたいなぁ……？」

アーサー・ペンシルゴンとディープスローター、互いに敵意など微塵も感じさせない笑みを浮かべた二人が戦場の端で対峙する。

「アーサー・ペンシルゴン、彼のいるクランのリーダー……仲良くしようぜぇ？」

「ビジネスライクなら大歓迎だよ、ディープスローターちゃん？」

場を作った者、人を集めた者。双方共に何を語るのか。

龍よ、龍よ！　其の三十五（後書き）

かつて軽いノリで角を一本へし折っていった奴が割とガチで作った武器を持った人間が角を折りに来たというエモさでジークヴルム氏、分身解禁

龍よ、龍よ！　其の三十六（前書き）

コッコロちゃんの為にグリム鬼周回する勇気と時間を俺にくれ、あと琴くれ（前時代的背水風マグナマン心の叫び）

龍よ、龍よ！　其の三十六

新大陸に到達したプレイヤーは実力の多少こそあれど、皆一様に高いレベルを持つ。

狂気じみた素材周回の果てに辿り着きし現時点で全プレイヤー中、最も高いレベル１４５。

抑圧された首輪をつけながら想像を絶する強敵との戦いを繰り返した事で至った次点、レベル１３９。

運営のみが知る「レベルランキング」が先程、変動した。

「急ぎましょう……！」

「あぁそうだね、私としてもヴォーパル魂の張り所を逃すのは惜しい……いやホント、もっと頑張らないとなぁ……」

積み重ね研ぎ澄ました廃人行軍の結晶、ここ最近を協力者たる兎の特訓に費やしたが故に加算された経験値を抱えながら、竜災の最中にあってあえて「離脱」していた騎士。
訪れていた場所は開拓者の姿なき森人族の里、ようやっと気兼ねなくレベル上限の解放を成し遂げたサイガー０……現在、レベル１４１。

「……あの」

「はいはい、武器の修ひいっ！？」

「……あ、違います。これ、そういう装備……です」

新大陸調査船の出口付近に待機し、大規模戦闘の中で損耗した武器の修理に来るプレイヤーを待っていた生産職のプレイヤーがサイガ－０の声に振り返り……悲鳴をあげる。

その理由に心当たりのあるサイガ－０は、思わずと言った様子で戦闘態勢に入った鍛治師のプレイヤーへ自身の無害をアピールする。

「サ、サイガ……あんた、【黒剣】の？」

「あ……いえ、今は【旅狼】に。黒剣の方は……姉です」

「そ、そうか……え？　それ改宗(コンバーション)じゃなくて？」

「はい、双理の鎧という、防具……です」

それまでの聖騎士然とした姿はどこへやら、レベルキャップの解放と同時に何らかの条件を満たしたのか姿を変えた双貌の鎧改め「双理の鎧」は、まるで鎧の姿をした肉の塊のような異形の姿と化していた。

材質そのものは硬く、鎧としての役割に支障はない。だがその表面は明らかに死した素材ではありえない脈を打ち、かつてはまだ兜としての形状を保っていた頭部は、今や肉肉しい「眼球」と「口腔」すらをも備えていた。

「………ホントに防具？」

「……脱げますから」

「ねちょねちょしてる……」

「流石に、システム側から感触は……軽減、されてますので」

でなければ如何に有用と言えど流石のサイガー０も装備などしない。感触的には人肌程のぬるさの湿布を顔に貼り付けているような感触の兜を脱ぐと、兜の「貌」は眠るように目を閉じ、動かなくなる。ここまでやってようやく納得したのか、若干距離を取りつつも生産職のプレイヤーは警戒を解いた。

「お聞きしたいことが……今、状況はどうなって……いますか？」

「え？　えーと……」

「ふむ、件の彼が派手に暴れているようだよ。それと慈愛の聖女イリステラが前線に出た、とも聞いている……まぁ、今最も重要なのはジークヴルムが五体の分身を作り出したという点だろう」

「あ……ライブラリの、」

生産職のプレイヤーに変わり、年季と叡智の積み重ねで深みを増した老年男性の声がサイガー０へと投げかけられる。

「君達は……うむ、非常に興味深いな、本当に。その鎧について後日インタビューしても？」

「あ……ええと、はい」

「是非ともサンラク君にも付き合ってもらいたいものだがね……あ

ぁ、彼ならなにやら面白い仕掛け武器を携えて最前線にいるそうだね」

「！！」

キョージュからすれば話題を盛り上げるための情報の一つに過ぎないそれは、サイガー０にとっては数百の情報に勝る最重要(せいかい)であった。

「失礼します……行かなくては、ならないので」

「そうか……ふむ、まぁ長話できるような状況でもなし、仕方あるまい」

現実でも特定学問の権威であるらしい見た目詐欺の少女に軽く頭を下げ、マントに擬態したディアレを背負ったサイガー０は迷いなき足取りで走り出す。

どれだけ切れ味鋭くなったところで、振るわなければ意味がないのだから。

◇◇

サンラクがジークヴルムと激突し、ペンシルゴンがディープスローターと相対する中、もう一人の初期メンバー……オイカッツォはと言えば。

「裏返るったってさぁ……そんな物理的に裏返るとは思わないでしょ！？」

「そんなこと言ってる場合じゃないわよケッツォ！　あのホワイト、レッドの死体を喰ってからヤバくなってる！！」

ジークヴルムの輝きで霞んでいたが、絶体絶命に追い詰められたブライレイニェゴの狂乱の最前線でオイカッツォは苦々しげに呻く。ポーションによって体力が回復しているのを確かめつつ、見つめる先には白竜ブライレイニェゴ。だがその姿は前線拠点に現れた直後とは全く別物と言っていい、醜い姿へと変貌していた。

『げろろろろ！　力！　力！　チカラァァァ！！』

「爬虫類じゃなくて両生類だったとは……」

蟻のような異様に肥大化した腹部を持つ竜、ブライレイニェゴ。だが死に瀕してその腹部が突如として上下に「裂けた」のだ。それはさながら巨大な口のような開きっぷりであり、誰もがあの巨大な顎で攻撃するものだと思っていた。

だが違った。いや、「捕食する」という点においては間違ってはいなかった、だがブライレイニェゴが咀嚼したのは他でもない、自分自身であったのだから。

『表裏再誕(リ・バースデイ)』。そんな技名と共に例えるならがま口財布の外と内側を裏返したような、開ききったホッチキスを閉じるような。

明らかに生物学的に無理のある「裏返り」を経て、ブライレイニェゴの上半身が巨大な顎に喰われたのだ。

そうして、十数秒ほどの咀嚼を経て、口の「内側」から太い筋繊維によって形作られた前脚後脚をはみ出し地面を這い歩くおぞましい白色の肉塊が明確な殺意をもってプレイヤー達へと襲いかかった。

「ねーえナディ！　貴女達ブライレイニェゴと長く戦っているんでしょう！？　何か知らないの！！」

「妙な名で呼ぶな！　武の不足を晒すようで癪ではあるが、ああも追い詰められたブライレイニェゴを見るのは初めてだ、参考になるような事は言えん！」

「あらそう……だそうよケッツォ」

「名前定着させんなー！　ああもう、ジークヴルムの方に戦力が傾き過ぎてる！　純粋に物量で負けてるよこれ！」

そう、変貌したブライレイニェゴは小竜の生産能力を失ったわけではない。むしろその逆、アナウンスによって撃破が確定した事で「そういうものなのだろう」と放置されていた赤竜ドゥーレッドハウルの亡骸。

ごく僅かな……それこそ、決戦フェーズ以前に「色竜の弱点が判明するまで戦った者」しか知らないドラゴン達の生命を司る根本。「核」の無傷なままに放置されていた赤竜の亡骸を貪り喰らったブライレイニェゴは、シナリオ上の撃破ではない、文字通り赤竜ドゥーレッドハウルの命を奪うと同時にその性質をも奪い取っていた。

「赤竜の噴射炎の能力を持った小竜……やっぱ人類以外に火を持たせちゃダメだね！　よーく分かった！！」

チリチリと紙一重のタイミングで顔の横を焼く炎に顔を顰めながらオイカッツォはエフェクトを纏わせた拳を振り抜く。
吹き飛んだ人型小竜がエフェクトに消えたのを確認しつつ、インベントリアに溜め込んでいた「破壊用」武器が底をついている事に思わず舌を打つ。

「アージェン、そっちは？」

「とっくに品切れ、船に戻って補充して来たけどそっちもネ。マネーがないってこんなに大変なのね」

「しれっとブルジョワアピールやめなよ……サンラク辺りが聞いたらキレるよ？」

「殴り合いになるなら大歓迎！　でもまずは今からどうするのかを考えないと……」

ジークヴルムを含めたドラゴンの中でも唯一の物量を力とするブライレイニェゴと戦えば、それだけ武器を振るう回数も増える。
そして基本的に雑魚敵との連戦を続ける白竜の戦場は不人気だ。ブライレイニェゴ来襲から今に至るまで戦い続ける者もいるにはいるが、ドゥーレッドハウルが撃破されてなお浮いた人員が殆どジークヴルムへと流れたのも戦況の逆転に拍車をかけていた。

「ペンシルゴンめ……どうするのさこれ、程よく苦戦どころか防衛線が食いちぎられそうなんだけど……？」

だが、オイカッツォはある一点において失念していることがあった。
始まりから今に至るまで、戦い続けた者がいるとして。

その者が必ずしも手の内の全てを使い切っているとは限らないのだと。

◇◇◇

「……使い切るなら、今かしら？」

かつての姿からは想像もつかない程の荒々しい立ち姿の女がポツリと呟く。
その女、名をＡｎｉｍａｌｉａ(アニマリア)という。
かつてはシャンフロでも随一のデバッファーとしてその名を轟かせていたのは過去の話。今の彼女はそう、

「ブライレイニェゴ、あなたは自然を、動物を破壊するもの……であれば、この拳で打ち砕くのみ！！」

何をどう拗らせたのか、自前でデバフして自前で殴り倒す前衛呪術師（拳）と化していた。

龍よ、龍よ！　其の三十六（後書き）

長かった、番外編書くの面倒だからいっそ本編に出しちまえとプロットに組み込んだのが大体竜よ、竜よ！　を書き始めた頃だったから……あまりに遠すぎた。一応この人、もう少し先で出番ありますからね

あとはゴールデンクオンだ……

・双理の鎧
レベルキャップを解放したことで条件を達成し、新たな姿に変貌した双貌の鎧。
レベルキャップを解放するという事が世界観的にどういう事なのか、がミソ。すでに描写はしてるんだなこれが
サイガー０はまだ知らないが、兜を外した状態で十分くらい放置してると装備してないのに瞬きしたりする。
え？　神魔の剣君（アンチノミー）？　無論彼も進化してますよ

龍よ、龍よ！　其の三十七（前書き）

今私の手元にはＰＳ４がある、聡明な読者諸君なら言わずとも理解できるだろう……ＧＥ３まであと少しやね

Ａｎｉｍａｌｉａのジョブは現在、メインを呪術師系列最上位職業「陰陽大師」に設定し、サブで新たに選択した修行僧系列上位職業「武僧兵」に就いている。
本来であれば。最上位職業を選択できずメインジョブとして設定した時よりも様々な制約を負うサブジョブに前衛職を置いたところで劇的な強化を見込む事は出来ない。現に一部例外（鍛冶師である事が重要であるイムロンなど）を除いて、ジョブ設定は「メイン戦闘職」が主流である。

だが、それはあくまでも回復職や生産職に限った話である。ことこれが「強化支援職（バッファー）」「弱体支援職（デバッファー）」の場合、このセオリーは逆転するケースがある。
生半可なステータスでは中途半端な強さにしかならないが、最上位職業として研鑽を積み続けたのであれば。

「――――【飢餓庭園】、【虚脱窒息】」

広範囲に作用するスタミナ奪取デバフとＳＴＲデバフにより、無傷でありながら満身創痍であるかのような動きにまで落ちぶれた小竜達が周囲のプレイヤー達によって瞬く間に討伐されていく。

「【旱魃なる裸身】、【貧者の城壁】、「丹田呼吸」……コォォォォ」

もはや完全後衛職だった頃の面影はなく。最上級のデバッファーとして範囲攻撃で敵を弱体化しつつ、本来の威力以上の効果を出す事

ができるようになった拳で敵を殴り伏せ、呼吸スキルによってＭＰを回復する。
攻撃のついでとしての弱体化ではなく、弱体化のついでとしての攻撃。その差は十数人以上のプレイヤーが共闘する際にこそ際立つ。
「自然環境は動物達の生きる場所！　それを崩すモンスターは看過できない！　悪いけど、あんたにはここで沈んでもらうわ！！」
『オロカ！愚か！　ここ、この私に、抗オうなどとぉぉぉ！！』
ぐぱ、と肉塊の大口が開かれ、そこから何か長いものが飛び出す。
舌？　否、仮にその役割を兼ねているとしても、それはもっと悍ましい代物だ。
「舌の先に……上半身！？」
『キェエ！！』
「ぐぅう……！　【縫い立ち並ぶ楔】！！」
レベルダウンビルドにより前衛を張れる程に強化されたＶＩＴでかろうじて即死は免れるも、蛇のような姿と化したブライレイニェゴの上半身に撥ねられたアニマリアは、苦悶の呻きを零しつつも杖を振るって拘束効果を持つデバフを放つ。
アニマリアの代名詞とも言える【鷲掴む冥府の腕（ハンズ・オブ・タルタロス）】はまだ使えない。
実質的に体力のほぼ全損を代償とするこの魔法は「当たらなければどうということはない」を当たり前のようにこなせるだけの機動力を持たないアニマリアでは戦闘不能に等しいデメリットなのだから。

『ググゲゴ！？』

ブライレイニェゴの真上に生成された光の杭が追撃に伸ばされた舌を地面へと縫い止める。

【鷲掴む冥府の腕（ハンズ・オブ・タルタロス）】とは異なり発動者のMPと対象のSTRで判定を行うこの呪術は、小型の小竜ならともかくブライレイニェゴ本体が相手では劇的な効果は見込めない。良くて数秒の拘束が出来る程度だ。

『ゲボロロロロ！！』

「う……一々SEが汚い……」

大口がさらに大きく開かれ、赤竜の特徴を持った小竜が追加で生産される。スキルによるMPリジェネでは間に合わない、残りわずかとなったポーションで急速にMPを回復させつつ何度目かもわからないデバフを撒きながらもアニマリアは考える。

（決定打が、足りない……）

あの何か非常に見覚えのある名前の、真っ赤な怪物が放った水晶の爆打のような何もかもを叩き壊すような火力がないのだ。

それはジークヴルムに人員を持っていかれているのもあるが、既に半日以上続いている大規模戦闘でありとあらゆる資源が尽きかけているのも原因の一つだ。

（追い詰めては、いる。ただ攻勢を仕掛けるだけの余力がない、ブライレイニェゴは戦力比が有利になれば一気に覆す事ができる）

幸いにも、戦い続けた果てに疲労で動けなくなったところを小竜に

よって倒されるのはＢ．Ｉ．Ｇ．的にはプラス判定らしいのが救いといえば救いだが、だとしても誰も彼もが徹夜で戦っているわけではない。

（ウチのタンク衆もそろそろ装備が限界、修理はできるけど……今彼らに抜けられると戦線が崩壊しかねない）

既に戦力比の天秤が傾きつつある中で（どちらが劣勢かは言わずもがな）大量の小竜をこの場に留めているのはＳＦ－Ｚｏｏのタンク達の貢献があるからに他ならない。

「高機動モード（脚、腰装備を外して若干速くなった状態）」で戦場を駆け、羊飼いか何かというレベルで小竜を引きつけていく五人のプレイヤーがいなければ、もっと酷いレベルで小竜達が拡散していた事だろう。

「園長ーっ！　そろそろつれぇっス！！」

「ていうか巨人型の圧力がやばーい！」

「上も脱ぐ？」

「それ捕まったら即死するだろー！」

「はいヘイトパーっス！」

小竜の一体を締め上げながら、アニマリアは決断を迫られる。プレイヤー全体の指揮官ではないにしても、彼女はＳＦ－Ｚｏｏの園長（クランリーダー）なのだ。指示する権利と責任を持つ者であるからして。

その時だった。

「やぁ、やぁ、アニマリアちゃん？　Ｐ－ＢＡＳをご利用する気はないかい？」

「なにそれ？」

「ペンシルゴン・バトルアシストサービス、さっきちょっとした交渉が終わってねー……イイ火力が手に入って、さ？　今ならお安くしとくよ？」

「どうもぉ……イイ火力でぇす……」

にへぇ、とペンシルゴンの陰から現れた少女をアニマリアは知っている。金を要求するとはいえ、本来はリアル換算でも長い時間がかかる大陸間移動を可能とするプレイヤーだ。なにせ自分も利用した事があるのだから。

「ディープスローターだっけ？　スローターだなんて気にくわない名前だけれど……転移以外に攻撃魔法でも何か持ってたの？」

「何も殴るだけが攻撃じゃないのさぁ……ふふふ、彼が全部曝け出したなら、私も隠し通してる場合じゃないからねぇ……」

ひゅるん、と虚空から取り出される一本の長杖。
それは欲望に寄り添うもの、使い手の尽きせぬ欲を実現させるモノ。

「実現杖ザ・デザイア～」

「実現杖……ってまさかそれ、空振り事件の……！！」

「うへへへ、【魔女の教会】に人気のないところに連れ込まれたりしちゃうかもねぇ……」

プレイヤーによって紡がれてきたシャンフロの歴史においても一等闇が深いとされる「実現杖空振り事件」。その犯人と消えた現物が目の前にいるという事実に目を丸くするアニマリアであったが、成る程自信を持つだけの根拠はあるらしいとひとまず納得して思考を切り替える。

「上等、何分必要？」

「五……いや、三分は欲しいかなぁ。あぁそうだ、これは関係ない話だけどサンラク君はエルドランザ……の皮を被ったレイドモンスター？　相手に余裕で時間稼ぎしてくれたよぉ……」

「それを聞いちゃぁ黙ってられないね」

「おやカッツォ君」

「カッツォ！　なんて勇気ある名前なんだ！！」

「え、何が……？」

それっぽく登場したはいいが、何故かよくわからない理由で尊敬の眼差しを向けられたオイカッツォは素のリアクションで首を傾げるが、何故かアージェンアウルまでもが目を逸らしていた。

「まぁいいや……三分足止めすればいいんでしょ？　それで倒せるわけ？」

「倒せるかどうかは保証できないけど、大ダメージは保証するよぉ……」

「ならば我が剣に誓って彼奴の動きを封じてみせよう、実現杖(ザ・デザイアー)のディープスローターよ」

「よろしくお願いするねぇ……」

一瞬、何か一瞬だけ違和感がアニマリアの脳裏をよぎったが、巨人族まで戦ってくれるというのであるならば決着の時はここしかないと声を張り上げる。

「ＳＦ－Ｚｏｏ各員！　三分時間を稼ぐわよ！　後先考えずぶっ放しなさい！！」

「園長！　アレやってもいいですかぁ！？」

「許可する！！」

クラン【ＳＦ－Ｚｏｏ】の真価を、今。

龍よ、龍よ！　其の三十七（後書き）

あれれ～？　初めてプレイヤー達が遭遇したはずの巨人族となんで仲がいいんだろうね～？

カッツォの意味は……ね？

現アニマリアは言うなれば「壁を砕く拳」ではなく「壁を砕けるくらい柔らかくしてから砕く拳」というスタイル

龍よ、龍よ！　其の三十八

「行くぞっ！　フォーメーションフルバースト！！」

「もうちょっと粘りたい気持ちもある！」

「でもジークヴルムに当てるの難しそうじゃん？」

「一理ある！」

「ならここしかないだろ！　やろうよ派手に！！」

ＳＦ－Ｚｏｏの屋台骨、十人の後衛を守る為に立ち塞がる五人のタンク。彼らは「最大防御(ディフェンスホルダー)」ジョゼットにこそ及ばないが、極めて高い物理防御力と五人による連携……そしてもう一つの「切り札」を持っている。

「おーい！　みんな俺たちの後ろに避難しろーっ！」

「巻き込むぞぉー！」

五人のプレイヤーが散開する。下半身丸出しという少々格好のつかない姿ではあるが、迷いなく走る彼らの貢献はブライレイニェゴ戦に加わった者であれば誰もが知っている。
そうして、五人のタンク達がブライレイニェゴと小竜達を囲むように布陣した頃には、全てのプレイヤーが包囲網の外側へと脱出していた。

「合図！　えーと、園長抜きの時は……そうだスモークを上に投げる！」

「スモーク来た！　５！！」

「４！」

「３！」

ブライレイニェゴ達を囲む五人による鮮やかなヘイト分散により、小竜達は渦を巻くようにして包囲の内側へと閉じ込められる。

そして、五人のカウントダウンが揃ってゼロになった瞬間。

「行くぞぉぉ……！！」

「「「「因果積撃（リタリエイト）！！」」」」

魔術の防御を極限まで極めた結果が【熱血門（テルモピュライ）】であると言うのならば。物理の防御を臨界まで高めた頂点こそが「因果積撃（リタリエイト）」、現時点を以って判明している全スキルの中で最高クラスの反撃（カウンター）スキルである。

受けたダメージをそのまま返す、倍返しにする、ダメージに応じて自身を強化する。

敵からの攻撃を前提とした受動的スキルは数多くあれど、因果積撃が最高クラスと称された理由はその「範囲」にこそある。

『ナン……ぐげぁ！！？』

「押し込め押し込めーっ！！」

「やっぱこれどう見ても魔法だろーっ！」

「おごごごご！　気ぃ抜いたら後ろに吹っ飛ばされそうだ……！」

「ふぎゃーっ！」

「もう吹っ飛ばされてるーっ！！」

五人の掲げた盾から放たれた衝撃波が小竜をも巻き込み中心にいるブライレイニェゴを五方向から圧縮する。
因果積撃は「戦闘開始時から発動時点までの総ダメージ量」を参照して盾から衝撃波を放つカウンタースキル、それ故に数時間に及ぶあまりに長すぎる戦闘……さらに言えば決戦フェーズという特殊な戦闘状態故にログアウトしても戦闘状態のまま、という裁定が五人すらも予想だにしない極限の威力を実現したのだ。

あまりに強すぎる衝撃波、まるでジェットエンジンを掲げているかのような反動に一人また一人と吹っ飛んで行く。
だがそれを差し引いても凄まじい加圧の衝撃は小竜を粉砕、あるいはそれに近い状態にまでダメージを与え、ブライレイニェゴ本体を大きく足止めする。

『な゛めるなぁぁぁぁ！！』

だが、たった五人でトドメを刺すに至るほどヤワなエネミーではない。蛙のような後脚を撓ませ、ブライレイニェゴは衝撃の届かない上空にまで跳ね上がる。
対象が空に逃げたこと、放つ衝撃を制御しきれないこともあって五人のタンク達が皆、因果積撃の発動を中断あるいは終了したタイミングでブライレイニェゴの巨体が地面へと着地する。

『許ザないィ……！　五匹、五匹だッタなァ……見つケダして、喰らイ潰シテぇ……！！』

「馬鹿だねブライレイニェゴ、自分で子供を踏み潰してちゃ世話がない」

『ゲロロロ！　子など、また作レバいい……あ？』

「ノンノン。今、手駒を自分で潰したのが馬鹿ってことっ。ケッツォ！　カウントダウンは必要！？」

「合わせるし、合わせられるだろ……！！」

無尽蔵に小竜を生産できることと、今すぐ小竜を生み出せることはまた別問題である。

さらに言えば、肉塊と化したブライレイニェゴであるが感覚器そのものは舌と融合した竜の上半身にある事が仇となった。

「アウトオブストック、閉店前に一発お見舞いしてあげる！」

「舌を外に出しっぱにしたのが失策その2ってね！」

始動はバラバラ、されど肉薄する頃には既にタイミングを完璧に合わせた二人の破壊者(デストロイヤー)が拳を、脚を、互いに最大の力を出せる得物を振り放つ。

「────「暴渦の連撃」！！」

「────「鬼戟の断脚」！！」

『ゴ、ギィイ……！？』

途切れることなく続く円の動きから放たれる乱打がブライレイニェゴの右頬を叩きのめし、一撃に込めた力を研ぎ澄ませた回し蹴りがブライレイニェゴの左頬に突き刺さる。

「口元を狙えーっ！」

「小竜をリスキルしていけ！」

「脚だ！　脚を狙って機動力を削げ！！」

シャングリラ・フロンティアにおいては極論を言ってしまえばダメージと怯みはイコールではない。
極めて優れたＡＩ、まさに本物の生き物と見間違うばかりの判断を下せるからこそ、両頬を打撃されたという事実だけでその巨体を硬直させてしまう。

そして、フィールドを駆け回りながら足止めの言葉を伝達していくＳＦ－Ｚｏｏのメンバー達によってはっきりとした意図は掴めずとも「足止め」が必要であると察知したプレイヤー達による一斉攻撃がブライレイニェゴへと叩き込まれた。

口を開こうにもすぐさま魔法が叩き込まれる、かろうじて小竜を生み出してもそれ以上の暴力で即座に潰される。

『オのれ、おのレェェ……！　ゲレレレェェェ！！！』

「跳びやがった！！」

「落ちてくるぞ逃げろーっ！！」

全身に攻撃を浴び、舌を出しっぱなしにしながらもブライレイニェゴの巨体が再び跳躍する。

口の端からはタイミング悪く生産された小竜が溢れ落ち、全身から噴き出すダメージエフェクトの流れる向きが重力演算に囚われ上へ上へと流れていく。

『死ネぇエぇエぇエぇ！！！』

僅かに空中で身を悶えさせて座標修正、確実に数人は踏み潰す軌道で地面へと白い肉塊が落ち、落ち、落ち…………

「バカね……「三十秒」よ」

『ハぇ？』

落ちない。地面からヌルリと這い出してきた節くれだった二つの手が、肉塊をキャッチして締め上げる。

それは生者を掴むもの、それは死を帯びたもの、それは如何なる命をもその場に留めるもの。

『ギゲゲゲゴゴゴボボァァァ！！！？』

「――――【鷲掴む冥府の腕(ハンズ・オブ・タルタロス)】、時間は稼いだわよ！」

ギリギリと肉まんでも握り潰すかのように万力の如き力がブライレイニェゴを握り締め、口の端から外に露出した舌と、その先端に融合したブライレイニェゴの竜体が絶叫を上げる。

普段は極力モンスターを苦しめないようアニマリアの意思で締め付

ける力そのものが軽減されているが今は違う。まさしく命をわし掴むような剛力に締め上げられた肉塊が悲鳴を上げ、のたうち苦しむ。

「で!? こっからどう決めるつもりな訳!?」

「うふふふ……実現杖の効果は攻撃魔法が適用外だけどねぇ……今のオイラなら……ふふっ、今の私ならこういうことが出来るのさぁ……!!」

実現杖が起動する、使い手の魔法を、使い手の望む威力にまで高める神秘の魔杖が「四十倍」に倍加させたその魔法の名は……【加算(アッド)詠唱(スペル)】。

魔法職であれば序盤に習得できるシンプルな「魔法威力強化魔法」が四十倍の出力で発動する。

「万雷の如くってね……【至高の喝采(エンピレオ・チアー)】!!」

実現杖を起点に放たれた星の如き煌めきがディープスローターを包み込む。拡大解釈されたとはいえ元の魔法の特性を持つ実現杖の倍加魔法は、【加算詠唱】の効果そのままに使用者の次に放つ魔法の火力を高める。

だが、本来であれば。実現杖ザ・デザイアーを使用した反動でディープスローターは装備を変更することができず、さらに攻撃魔法も実現杖そのものの制約で使用できないはず……だった。

「三ヶ所同時にいじる以外にこんな使い道があったとはねぇ……」

レイドモンスター「貪る大赤依」を撃破したことで獲得した「渇望の手」、アクセサリー欄を代償に装備枠そのものを増やす……即ち、

もう一本の短杖(ワンド)が灯す炎。

「拡大版【フレイムアロー】……激しくインサートしてあげるよぉ……！！」

下ネタと共に数十倍にまで膨れ上がった炎の矢が、弩砲の如く射出された。

龍よ、龍よ！　其の三十八（後書き）

夏目ちゃん……

龍よ、龍よ！　其の三十九（前書き）

えっ！？　今日はパンゲア・ムーンでバラギアラ十九体のコストを踏み倒してもいいのか！？

フィンブル落ちないので更新です

龍よ、龍よ！　其の三十九

◆

ノースキル縛り自体は別にいい。問題はこれがソロじゃなくてレイド戦である事だ。
ヘイトがあっちこっちに飛ぶもんだからジークヴルムが「俺」を見ているタイミングが掴みづらい。

「月は……よし、まだ保つ」

金晶戦衣（エグザイル・クロス）、各部位にはデフォルトで「月光を浴びる事でＭＰを蓄積する」機能が備わっている。
瑠璃天の星外套（ラピステラ）はセットした魔法の使用にしか蓄積ＭＰを使用できない縛りがあるが、こちらはその縛りがないので百足式８－０．５（ムカデシキタウゼント）のコストとして使うことが出来る。
そして月光を浴びてさえいれば戦闘中でも常時ＭＰ補填が出来る、これがステータスＭＰが１００以下の俺が今に至るまで百足式８－０．５の運用を続けていられる理由だ。

「クッソ硬ぇ……サイガ姉！　他の分身の様子は！？」

「本体よりは攻撃の通りが良いらしいが、時間が時間だ……回復のために離脱した連中が戻ったとしても火力が足りん」

「やっぱ色竜と同時戦闘は設計ミスだろ……！！」

おのれ天地　律！　シャンフロまでをもクソゲーにするつもりか！？　だがさせんぞ、それなりに愛着のあるゲームが寂れ廃れ消えていく様を見るのはクソゲーだとしても何気に辛いんだ。意地でも勝ってやるさ……！！

その決意に同意するかのように夜空を割いて飛ぶ一筋の光が、これまで放たれた三発同様1ミリのズレなくジークヴルムの頭部、さらに言えば角に命中した。

『ぬぐぅ！　またしてもか……！』

「……凄まじい命中率だな」

「ま、「密林抜き」ならそれくらいやってくれるさ……！」

何せ漂流物のマスケットですらヘッドショットを余裕でかましてくる奴だ、艦載設備なんて使わせたら当然こうなるさ……！！

◇

「んー……今のは四十点かな、同じ角を狙ったんだけどなぁ」

ポツリ、と。自身の射撃に対して赤点の評を下したヤシロバードは射座に背を預けながら「弩砲」に新たな矢が生成されるのを確認しつつ、彼方で暴れ回る黄金の龍王を油断なく視界に収める。

「いやー……いい船だブリュバス、名前はよく分からないけど主砲がバリスタってところが渋い」

征海船「ブリュバス」は当たり前だが水上での戦闘を前提として建造されている。実際真正面から体当たりするための武装衝角やすれ違う事を想定した船体左右の「刃翼」など、明らかに近接戦闘を想定した構造ではあるものの、戦う船として当たり前とも言える「主砲」もまた搭載されている。

本来であれば単なる弩になるはずであった甲板上の中央に設置されたそれは、「出資者」が一都市を買収できかねないほどの量のラピステリア星晶体を提供した事で、単なる運動エネルギーの射出器以上の改造が施された。

――その名も、六式魔導弩砲(タイプシックスバリスタ)『鯱光(レプノルカ)』。

ラピステリア星晶体からの魔力供給によって矢を形成し、凄まじい威力で射出する艦載用大出力魔導弓とでも言うべき代物である。……余談だがバリスタ、までは製作者たるノーマンの命名で「鯱光」の名はサンラクの命名である。

「いやー、タンクが多いと当てやすくて良いね」

「な、なんでこんなところに船が……？　これ、あんたのなのか？」

「俺たちでも操作できる！？」

と、しばらく前のヤシロバードがそうしていたように甲板上へと乗り込んできたプレイヤー達が船員たるヤシロバードへと口々に問いかける。

「あー、これは別の人の所有物だよ。パーティメンバーだから僕は使えてるけど、無関係のプレイヤーが乗り続けてると不法侵入でカルマ値上がるらしいから気をつけた方がいいよ？」

「マジっ!?」

「やっべ。あ、援護頑張ってください!!」

「どもども～」

嘘である。そもそもカルマ値はマスクデータであって実際に上がっているかどうかなどこの場でわかるはずもない。だが自信満々に言い切られては人も騙されるというもの。

エールを遠慮なく受け取りながらも、ヤシロバードは再装填が完了したバリスタをハンドルで微調整しながら目を細める。

「どうせなら一本くらいは持っていきたいところ……だ………ねっ!」

放たれた矢は、戦場を駆け抜けて……

◆

戦場を駆け抜けて、ジークヴルムの膝を踏み台にさらに上へと駆け上がる。気軽に空中歩行している軽戦士共が少しだけ羨ましいが、素のスペックが底上げされている以上は下手に身体強化するとそのままぶっ飛ばされかねない。いやでも空中歩行は欲しいなぁ……

『我が背に乗り込まんとするか！　だが甘いわっ！！』

「ぐわぁ！？」

「ドラゴンライド失敗した！」

セルフでクライミングする俺よりも早くジークヴルムの背にたどり着いたプレイヤー達が、翼のはためきによって吹き飛ばされている。だがこちとら巨大生物相手のよじ登りは死ぬ程やり込んできたんだ、俺を引き剥がしたいならブレイクダンスでも踊るんだな！！

「よう」

『貴様……！！』

「斧のように断ぁっ！！」

ガィン！！　と百足式８－０．５の紫刃が弾かれる。まぁ一発で折れるなんて期待は少ししかしていないが……だが、しかと確認したぞ。

「ちょっと欠けたなぁ……！？」

『ぬぅあ！！』

「うおっ！」

空中！　投げ出され！　身を捻り！　着地ィ！！

「やっぱちまちま削るよか、意地でも近づいて殴った方が折りやすいよなぁ……」

だが何度も同じ手が通じるとも思えない。それと戦場が密集し過ぎているが故に、いざって時は隊列を組めるタンクと違って、前衛火力職は衝突事故の危険性を常に背負っている。

いっそジークヴルムのブレスか何かで俺以外一掃されてくれないものか、とか考えていたら本当に前衛がブレスで蒸発したが、なんやかんやプレイヤーは不死身なので俺が快適に動けるわけではないのだと数分して気づいた。

と、そんな時だった。

『現時刻を持ちまして、「白竜ブライレイニェゴ」の討伐を確認いたしました。ラストアタッカーはＮＰＣ「無双の双剣(モラ・ベガルタ)のディルナディィア」です』

ＮＰＣがプレイヤーより出しゃばるの、あるあるだよね……ではなくて！！

ブライレイニェゴがくたばっただと？　待て、エルドランザは最初からおっ死(ち)んでるし、ドゥーレッドハウルが死んでブライレイニェゴが死んで……残るはブロッケントリードとノワルリンドだけ？

「おいおいおい、いけるのかこれ……！」

色竜は残り二体、いくら耐久に優れているとしてもブロッケントリードは決戦フェーズの序盤から戦い通し、災害状態(ハザードモード)になっていないにせよいつ倒れてもおかしくはない。

そして何より、雑魚モンスターを大量に生み出すブライレイニェゴが死んだという事実が非常にまずい。

「来るのか生産職……！！」

……なんてな。

そろそろ機は熟した頃だ。正直に言おう、これから起きる出来事は確実に遺恨を残す。だがそれでもやると皆が決めて俺も少なからず助力をした、であれば最早躊躇ってうだうだ言ってる場合でもねぇ。

ヤバくなったらラビッツに亡命だ！！

スカルアヅチ君……やろうぜ内ゲバ、共食いと足の引っ張り合いは人間の十八番だからな。

『宣戦布告が受理されました！！』

『装骨天守スカルアヅチｖｓ一夜城サソリスノマタ』

『これより対城戦を開始します！！』

龍よ、龍よ！　其の三十九（後書き）

対城戦は「双方のリソース値がほぼ同等」あるいは「双方の建築物の所有者と同じパーティｏｒ同じクランに属するプレイヤーの総リソース値を加算した建築物同士のリソース値がほぼ同等」の場合、宣戦布告が可能となる（考察クラン【ライブラリ】非公開情報）

サソリスノマタ……一体どうやってスカルアヅチに匹敵するリソースを確保したんだ………

龍よ、龍よ！　其の四十（前書き）

年内に！あと十話で！　終わらせるぅ！？　ヒャホホーイ！！（発狂）

龍よ、龍よ！　其の四十

『対城戦！』

『勝利条件１：相手建造物のリソース値を削りきる』

『勝利条件２：相手建造物の所有者が降参する』

『勝利条件３：相手建造物の所有者を撃破する』

『装骨天守スカルアヅチ城主：餡ジュ』

『一夜城サソリスノマタ城主：京極』

『両城主と同クラン及び同パーティのプレイヤーは相手勢力からのキルによる通常のＰＫペナルティが免除されます』

『いざ尋常に……勝負！！』

◇

二十四回目の宣戦布告が受理されたことで、ようやっと自身の出番が来た京極は背筋をぐっと伸ばしながら一夜城サソリスノマタ……とは名ばかりの、かろうじて人が数人すし詰めに入ることが出来る程度の掘っ建て小屋から外へと出た。

「やぁ、行くのかね？」

「え？　あー、ライブラリの。えぇ、合図が来ましたから」

と、京極を見送りに来たのかそれとも別の意図があってか、サソリスノマタの「建築」に協力した【ライブラリ】の長たるキョージュに京極は居住まいを正して返答する。

「我々の検証が役に立ったようで何よりだよ」

「思いっきり悪用してますけどね……いいんですか？」

「ふふふ、老人とて年甲斐もなくはしゃぎたい時があるというものだよ」

そう（見た目的に）可愛らしく微笑んだキョージュを見つつも、果たして今は亡き祖父にもそんな時があったのだろうかと少しだけ想いを馳せる。
そして、祖父から教わった剣をゲームとはいえこんなことに使って良いのだろうか、と………これに関して考えると「幕末」もアウトになるので京極は思考を破棄した。

「――――あぁ、足止めしてしまったようだ。いや何、クラン連盟を

組んだ場合も影響されることを確認に来ただけなのでね、存分に剣を振るうといい」

「えと……では失礼します」

頭を一つ下げ、駆け出した京極は武器を手元に呼び出しつつも、にまりと凶悪な笑みを浮かべる。

「合法合法、天（運営）がそうしろって言ったんだから、僕悪くない……ってね」

黒刀「研竜剛角」を構えながら、京極はフリーで開け放たれているスカルアヅチへといとも容易く到達、侵入する。

何せ、スカルアヅチとサソリスノマタは……徒歩一分程度の距離なのだから。

◇
◇

「……対城、戦？　えっ、何それ何それ！　聞いてないんだけど笑み（エミ）リー！！」

天守閣の中、友人からスカルアヅチを任された風水道士（餡ジュ）は混乱の極みにあった。

対城戦。身に覚えもなければ心当たりもない、つまり心身ともに未知の喧嘩をふっかけられたに等しいのだから。

餡ジュにも言い分はある、不慣れなスカルアヅチの制御の中で、いくつもの制御ウィンドウに混じって「宣戦布告」の承認ウィンドウが何度も何度も何度も……覚えてる限りで二十回近く送られて来たのだ。

「うう……事故なの、事故なのよー……流れ作業で拒否ってたら、押しミスしちゃったのよー……」

誰に言うでもなく弁解しつつも、これが不味いと言うことは分かる。対城戦の項目をシステムで調べた限り……仮に敗北した場合、まず間違いなく決戦フェーズにおけるスカルアヅチからの支援が止まる事になる。

「京極……京極……あっ、ＰＫの京極！！」

餡ジュはその名前に聞き覚えがあった、確か悪名高い【阿修羅会】にも所属していた現役のＰＫの名だ。

現在は別のクランに属している筈だったが……何故そんなプレイヤーがスカルアヅチに喧嘩を売っているのか。

「っていうか、サソリスノマタって何？」

スノマタはまだ分からなくもないが何故蠍、首を傾げつつもサソリスノマタなる敵建造物がどこにあるのかと専用マップを開いても何故かどこにも表示がない。

まさか前線拠点でない場所では、と表示範囲をティアプレーテンまで広げても何故か見つからない。

「なんなのよ……っ、もう！」

「餡ジュちゃん！」

「何！？」

「なんかケモミミのやべー女がスカルアヅチに乗り込んで来た！
あれ京極って奴じゃね！？」

「ほぎゃあ！！？」

餡ジュの悲鳴は、敵の大将がそのまんま突っ込んで来たという事実と……サソリスノマタなる謎の建造物が凄まじく小さな光点（マーカー）で巨大な光点（スカルアヅチ）の至近にあったことの二重の驚愕分の大きさであった。

◇？◇

説明しよう！　一夜城サソリスノマタとは、クラン【ライブラリ】に所属する大工職によって建造された検証用建造物である！！
検証内容は単純明快！　「リソース値で同等であるならば規模に数倍ほどのハンデを背負っていても宣戦布告は可能であるのか」という試そうにも生半可な建造物では比較にならない考察である！！

装骨天守スカルアヅチはその外郭に大量のモンスター素材を用いており、そのリソース値は実に数万という規格外の数値を誇る。
であればそれに対抗するだけの建造物などどう用意すればいいのか……その回答こそが一夜城サソリスノマタ！！

「タイルを貼るように大量のレア宝石や水晶群蠍のレア素材を使いまくってリソース値稼げばいいんじゃね？」

というあまりに非現実的な理論を現実にした奇天烈な内装を持つ、装骨天守スカルアヅチのテリトリーすれすれの位置に建てられた表向きは地味な掘っ建て小屋である！！
用いられた素材はその全てが高レア高リソースの宝石、鉱石、水晶であるがその全ては小屋の内装を彩る事に費やされているのだ！！
余談だが材料提供者が調達に要した挑戦回数は実に五十八回！　素材を受け取ったライブラリのプレイヤーは後に、

「人とはあそこまで動きから人間味を消せるのか」

と語ったという……

◇

サソリスノマタに攻撃機能はない。

サソリスノマタに防衛機能はほぼない。

だがサソリスノマタには京極がいる、それだけで充分なのだ。

「巨大クランを作ったのが仇になったね」

「ぐはぁっ！」

今宵の黒刀「研竜剛角」は血を求めて飢えている。そう言わんばかりの凶行を繰り返しながら京極は前へ上へと進んでいた。

「……………」

幕末心得その一、常に奇襲を警戒するのではなく「奇襲の機」を読んで動くこと。

「オブジェの陰に隠れて奇襲か、昔の私ならやられていたね」

「な、何故バレ……！？」

「くっ、そのまま動きを止めろ！　諸共に殺るが許せよ！！」

幕末心得その二、一対多ではなく常に一対一の連戦を心得ること

「ぐ、こ……」

「喉を一突き……！？」

「この程度で驚かれてもなぁ……はい奇襲お疲れ様」

決着の必要はない、奇襲者との戦いが終わるまで戦闘に復帰できなければそれでいい。それ故に喉を貫くという精神的な「揺らし」をかける事で単純なダメージ以上の効果でその動きを止めたのだ。
二閃、奇襲者を斬り伏せ、そのまま喉を抑えるもう一人にもトドメを刺す。ヒュン、と血がついているわけではないが黒刀を払い、鞘へと納めて上へと向かう。
「さて……いくら足止めとはいえ、私が倒されたら元も子もないわけだし慎重にいかなきゃならない、のだけどね……」
幕末心得その三、無謀と挑戦の先にこそベスト・オブ・天誅がある！！
「せっかくたんまりと回復アイテムを持ち込んできたんだ、死ぬまでやろう」
つまるところ、幕末色に汚染された人間というものはどうあがいても鉄砲玉気質になってしまうのだった。

◇◇

「対城戦……直接スカルアヅチを叩いてノワルリンド戦へのバフを切る……いいえ、彼女なら別途も考えていそうですね」

笑みリア自身にも想定外であるとはいえ、親友には悪いことをしたとスカルアヅチの全権を押し付けてきた風水道士に後でどう謝罪したものか、と考えながらも笑みリアはひとつだけ息を吐いて思考を切り替える。

「天首領（てんドン）さん、無理なお願いを聞いて貰って、ありがとうございます」

「あはは、構わないよ。【旅狼】……まー多分あそこと連盟を組んでるクランは軒並みあっち側なんだろうけど、オレ個人としてはこういうゲバゲバした構図は嫌いじゃねー。どっちが「正しい」にせよ、敵がいないいんじゃ締まりがないしな！」

状況から言えば、決戦フェーズの流れは殆どジークヴルム撃破に傾いていると言っていい、特に聖女の肩入れが入った時点で致命的だった。

だがそれでも、「ノワルリンドを狙ったらペナルティなんて道理もないだろ」と笑みリアと共に戦うことを承諾してくれた者達がいる。トップクランが軒並み敵に回ったとしても、それに負けないだけの数がノワルリンドの打倒を掲げる笑みリアに同意してくれている。

であれば、今やシャンフロ最大規模クランとなった【天ぷら騎士団】のリーダーが言った通りだろう。

もはやどちらが正しくてどちらが間違っているか、などどうでもいいのだ。互いに成し遂げたいことがあり、その為に持ちうる手札のありったけを叩きつけるのだ。

「行きましょう」

朝日は近く、夜月は遠く。
黄金と漆黒とを巡る人の戦いはクライマックスへと近づいていた。

龍よ、龍よ！　其の四十（後書き）

天首領（てんドン）は平成最高クラスの名ネーミングだと思ってる今日この頃

鉛筆「ちょっとスカルアヅチに対抗できるくらいリソースある素材かき集めてきて、一日で」

サンラク「ふぁい！？」

龍よ、龍よ！　其の四十一（前書き）

発狂しながら書いたので当然推敲はしていない

◆

やってしまいましたなぁ！　くくく、やっちまったなぁ！！

「見ろよ、ご丁寧に勢力別でマーカーが表示されたぞ」

「楽しそうだな」

「そりゃ当然、ＰｖＰはオンゲの華だ。そしてクリア条件がクソ程多い勢力戦ってのは慣れると楽しいんだなこれが……！！」

どうしたどうした、背中を狙いたいなら止めないぜ？　あいにく職業上の理由でこちらからのキルは控えていくが……いいね、テンションが上がっていく。

「賦活醒（リベレト）はどこまで適用できる？　検証が必要だ……空が白んできた、そろそろか……間に合うか？　いけるな、どうにかして飛ばせば……」

「お、おい？」

「独り言だ、言語化すると思考がまとまるんだよ……チッ、火力と利便性の天秤がマジでクソだな。吸収？　いやキャパ的にマゾった方がいいか？　流石にここで逝ったら笑えない」

「妙な単語で独り言を言うな！　無性に気になってくるだろうが！

！」

いや知らんよ、いちいちロジカルに物事考えてるわけじゃねーんだ。要点だけ固定できればあとはニュアンスで繋げていけるんだよ。

「大詰めだ、さっきぶっ叩いてみたが何本か感触が怪しい角があった。右三本のうち上から二本と、左二本のうち下の一本だ」

「言われたところで狙えるとは思えないが……」

「いいや、それは違う。おっ、ルスト！　丁度いい！」

「……何？」

「伝言ゲームだ、向こうにあるブリュバスで射撃支援してるやつ……あぁ、俺の知り合いな？　そいつに「右上中、左下」と伝えてきてくれ。朱雀も使っていこう」

「……良いけど、勝算あるの？」

「あるとも言えるしないとも言える。ただ一つだけ言えるのは……」

ここで奴の角をバッキバキにへし折ってやるという事さ。それに、「勝算」という点で言えばそれは俺のことじゃあない。

ユニークシナリオは誰かの物語、誰も彼もがあの金ピカドラゴンのステージに上がったエキストラだとしても……誰も彼もが主人公な群像劇ってものがある。語り手は誰だ？　少なくとも俺たちは別口の脇役なのさ。

「なぁ、そうだろう…………あー、レイ氏だよね？」

「え？　は、はい」

「レイ氏を喰ってステータスを簒奪した捕食生物とかではなく？」

「私の妹をしれっと亡き者にするな」

「え、あ…………これ、あの、そういう防具……です」

わぁ、あの兜瞬きしてる上にねちょねちょしてるぅ（ドン引き）

◇

秋津茜という人物は、ジョゼットのように心の底から役になりきってゲームをプレイしない。

秋津茜という少女は、サンラクのようにゲームであるからこそその立ち振る舞いを意識する事はない。

秋津茜というプレイヤーは、ディープスローターのように所詮はグラフィックが数字の羅列で動いているだけと割り切ることもない。

「…………」

では秋津茜とは如何なるゲーマーなるや？

「ノワルリンドさん」

『何だ！！』

「これはとても大切なお話で……これから起きることも、とても大切な事なんだと思います」

『ぬぅ？』

その言葉に脚色はない。秋津茜の心という海から浮上した言葉を飾る事なく口にして、真摯な思いを竜へと伝える。

「ノワルリンドさんはノワルリンドさんです、ジークヴルムさんを超えるために戦って……ジークヴルムさんに憧れて、追いかけて……今、すぐ近くまで来ています」

『それは……っ！　今、言わねばならんことか！！』

「はい」

秋津茜はロールプレイを行わない、秋津茜はNPCを侮らない。現実に生きる人間（プレイヤー）とは明確に異なる虚構（NPC）であることを理解した上で、それでも現実と何ら変わりのない言葉を紡ぐ。

故にこそ、そのスタイルはシャングリラ・フロンティアというゲーム……否、「システム」においてこの上ない価値を持つ。

「それでも……前だけを、上だけを向いて生きていくことは出来ないんです。ノワルリンドさんは過去と向き合わなきゃダメなんです」

『……』

ノワルリンドの背、即ち他のプレイヤー達と比べても高い視点を持つからこそ秋津茜には見えていた。それは単なる錯覚か、シャンフロの規格外のグラフィックが示す真実か。

「……」

「……」

遠くスカルアヅチ、そこからゆっくりと確実にノワルリンドへと歩みを進める一団の先頭。
一人の女性と確かに目があったと秋津茜は少しだけ力を込めて下唇を噛む。

『あれは……ふん、この我を弑する者だとでも？』

「はい、そして……きっと、ペンシルゴンさんとかがしっちゃかめっちゃかにしても、それでも諦めないなら……きっと、それはノワルリンドさんがジークヴルムさんを越えようとする想いと、本質は一緒なんです」

秋津茜は諦めることが嫌いだ。

秋津茜は諦めない者が好きだ。

秋津茜は諦めない者同士の激突は、絶対に決着をつけなければなら

ないと考えている。

だってそうだろう、

誰かが進み、誰かが止まらなければ……伸ばした手は、永遠に憧れへと届かないのだから。

『あの程度、我が息吹にて――』

「ううん、ノワルリンドさんはジークヴルムさんを。あの人たちは……うん、あの人たちは、私が何とかします」

『何だと……おい！』

ひょい、と飛び降りた秋津茜にノワルリンドが吠えるように呼びかける。しかし狐面の少女は振り返ることなく、言葉を続ける。

「私は、ノワルリンドさんを応援してます。ノワルリンドさんには、ジークヴルムさんだけを見て前に進んでいてほしい。だから……私はそのお手伝いをするんです、だから」

振り返りながら、秋津茜は少しだけ狐の面をずらす。顔の半分だけを露出してにっ、と笑みの形を作ってノワルリンドに笑いかける。

「私に任せてくださいっ！　私はノワルリンドさんの臣下？　下僕？　ですから！　代理としてケリ？　ケジメ？　をつけて来ます！！」

『秋津茜、貴様……』

『どうしたノワルリンド！我が眼前で惚ける愚かをその身で贖うか！　その名を背負いながら！！』

『ぐぬぉあ！？　おのれェ……！！』

空を灼くブレスがノワルリンドに命中し、呻きながらも黒竜は真っ直ぐにジークヴルムを睨みつける。
それでいい、と秋津茜は静かに前を向く。結局は自分のやりたいままに動く自分はとんだ身勝手だな、などと考えながらも秋津茜はノワルリンドの咎を代理で背負って反ノワルリンド派……笑みリアと【天ぷら騎士団】、生産職達による複数の混合パーティへと向かっていく。

ああ、そういえばこんな時彼らはなんと言うのだろう。
秋津茜の憧れ、秋津茜が持っていないモノを輝かせてこのシャングリラ・フロンティアを楽しむ人たちなら、なんて言うのだろうか？
秋津茜が持っていない慎重さで着実な積み重ねを続けるオイカッツォなら。
秋津茜が持っていない智謀でプレイヤーのみならずＮＰＣすらも掻き回してしまうアーサー・ペンシルゴンなら。
秋津茜が持っていない練磨でレコードホルダーなんてすごい称号を持つに至ったサイガー０なら。
秋津茜が持っていない技術で巧みに刀を操ってＰＫの烙印を恐れることなく戦う京極なら。
秋津茜が持っていない領域で見たこともない三次元的機動のロボ捌

きを見せるルストなら。

秋津茜が持っていない視点でルストを助け、完全に息を合わせて火力以上の貢献をするモルドなら。

秋津茜が持っていない大胆さで破天荒に世界を駆け抜けるサンラクなら。

自分と違うから、自分にないものを持っている人はすべからく尊敬すべき人だ。だから追いかけたくなる、目指したくなる。そして、諦めるのは何もかもが終わった後でいい。

それまでは、手を伸ばして走りたいから。

「話には聞いていましたが……貴女が、ノワルリンドと明確に協力していると言う……」

「はいっ、秋津茜と言います！！」

ああそうだ、少なくともサンラクならこうするんじゃないだろうか？

「今からあなた達をブッ飛ばします！！」

秋津茜にとって、挑む事こそが人生（プレイスタイル）なのだから。

龍よ、龍よ！　其の四十一（後書き）

秋津茜は割と自分の中で結論が出た時点で勝手に走り出すけど光属性でリアルラックカンストなのでなんやかんや上手くいくタイプ

本来なら周りを引き摺り引っ張っていくタイプだけど……ほら、旅狼はどいつもこいつも暴走特急だから……

龍よ、龍よ！　其の四十二（前書き）

やっと届いたＧＥ３に人生吸われててヤバい。ルルすこれ

龍よ、龍よ！　其の四十二

◆

「おいコラァ！　覚悟決めとけジークヴルムァ！！　見せてやるよ人の力(マンパワー)をなぁ！！」

『ほう？　ならば見せるがいい、貴様らの輝きをっ！！！』

ブレス！　狙いは俺たちじゃねぇ……っ！？　くっ、そうかブリュバス！！

「ふっ、ふざけんな幾らしたと思ってんだ！？」

『フハハハハ！！　さぁどうする、射手よ！！』

問いかけるように、放たれた黄金の光は――

◇

「――」

あるいは、一分前から「攻撃が来る」と知らされていたとしても。

「孤島出身者がその程度でビビるかよ……！！」

六式魔導弩砲ではなく、自身の武器たる魔導弓を限界まで引き絞り……放つ。それと同時に己の武器を投げ捨て「鯱光」の射座へと跳び乗ったヤシロバードは一瞬にして限界まで集中力を研ぎ澄ます。

白む空を切り裂く黄金の光に真正面から僅かにズラした軌道で魔力の矢が激突する。その瞬間、魔力の矢に込められた魔法【フレアロー・エクスプロード】が発動。

魔力同士を干渉させ、相手の攻撃に影響を与える魔法はしかして隔絶しきった出力差に殆ど効果なく不発したかに思われた。

「っ」

ブリュバスの船体を光が貫く。だがその軌道は先んじて放たれたフレアロー・エクスプロードによってほんの僅か、本当に僅かに軌道をずらされていた。

「信じてたよブリュバス、修理代は僕もカンパしよう────！！」

身体の半分を光に焼かれ、されどヤシロバードの目は唯一つの標的を射抜く。

船体が軋みをあげ炎上し、されど船大工渾身の征海船はまだ戦えるのだと軋む。

「……ここ」

体力の九割が消し飛び、システム的に軽減されているにせよ身体の半分を焼かれたにも関わらず、１ミリのブレなく狙いを定めるヤシロバードと「鯱光」。

まるで、この程度の痛みなど考慮に値しないと言わんばかりの集中

力は今極点に達し……

「――あぁ、満点だ」

放たれて。

◆

『ガッ……！！？！？』

放たれた光に対する返答は、迷いないラインを描いてカウンターで放たれた矢が言葉よりもなお雄弁にヤシロバードの意思を伝えていた。

『なんと……素晴らしい、素晴らしい！！！』

砕けた右上の角が宙を舞って、粒子と消える。遠目に見える炎上はブリュバスの限界とヤシロバードの脱落を如実に示していて、それでも奴は最後の最後にやりやがった。

戦場から黄金が一つ消える、角と分身が連動していると言うのは本当らしいな。

「ぶっ……飛ばせぇぇぇぇ！！」

誰が叫んだ？　俺だわ。明確なスコアに開拓者達のボルテージがブ

ーストする。

残り四本！　ここまでてめーの動きを見続けてりゃ嫌でもわかる、あの忌々しいスキル無効も魔法無効も角の数が肝なんだろう！！

「レイ氏！　アルマゲドンは！！」

「……もっと凄いのが……あります！」

「なお良し！　エムルっ！！　「とっておき」だ！！」

「は！　い！　なぁあーっ！！」

懐かしい、そういえばリュカオーンの影と戦った時もこんな感じで俺、レイ氏、エムルで同時に動き出してたっけか。

「見えてんぞ変態！　「魔力」を寄越せ！！　【超過機構(イクシードチャージ)】！！」

「これがアタシのとっておき！　【クラスター・マギストーム】ですわーっ！！」

「――――我が黒の半身を謳う」

◆◆

ああそうだとも、フルダイブＶＲってのは身も蓋もなく突き詰めてしまえば脳みそに電波を流して機械仕掛けの夢を見るシステムだ。

だから、誰かに見られていたのならばそれはこちらもまた認識できる。電話を一方的に繋げる事は出来ない、送信すれば必ず受信する

者が発生する。
だから、テンションが上がりまくって脳みそが燃えるほどに動いている今の俺は何となく自分が視線を浴びていることがわかる。
さっきからずぅぅーーっと俺から逸れない妙にねちっこい視線もなぁ！！
ガンガンにキマった百足式８－０．５（ムカデシキタウゼント）の毒で強化された膂力で斧槍（ハルバード）と円盾を両立、音声認識で起動した花開く鏡盾を視線の方向へと掲げる。
「――――」
声なんて聞こえない、だが確かにプレイヤー達の間を縫って飛んできた魔法は冥王の鏡盾（ディス・パテル）へと吸い込まれるように激突し……魔力を取り込んだ冥王の鏡がその真の力を解放する。
「吸転換（コンバート）！！」
蒼炎を纏って第一段階、百足式８－０．５から手を離し、僅かに浮かんだ斧槍が落ちるよりも先に下に回した手の甲へと載せ、もう一度上へと跳ね上げる。
一瞬開いた右手で胸を叩き、封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）を起動。
『始源を纏い、我が前に立つ蛮勇は評価してやろう……だが！』
「っ………夢見る先は深淵源、傲慢故に孤高たる黒き神」
そうさ、詠唱を止める必要はない。エムルの放った魔力の雨霰で体表を削られながらもその目はレイ氏ただ一人を睨み付け、口の端か

らは炎にも似たエネルギーが漏れ溢れる。

「……ふぅー…………見ろよ、夜明けだ」

百足式8－0．5を地に刺し、掲げた境光の宝剣（ルーメリディアン）へと暁の光が差し込む。

瞬間、赤い曲剣たる刀身が崩れるように消失。代わりに夜の間は柄尻であった場所からパキパキと碧い直剣の刃が生み出される。

「俺から目をそらしていていいのかジークヴルム？　これから俺は……臨界を超える」

そうかい、眼中にないと。なら……後悔するタイミングはもう無いぜ！！

「臨界速（ブラディオン）！！！」

◆＋

一歩目、地上から一瞬で加速した俺の身体はスキルのアシストがなければ一瞬で全てが引き伸ばされて見失うような高速の世界に晒される。

振り抜いた境光の宝剣がジークヴルムの角に叩きつけられ、それ以上の速度で俺の身体がジークヴルムから離れて行く。

◇

サイガー１００は最初、サンラクが転移魔法を使ったのだと錯覚した。そして「何故？」と呟くよりも早く最初の音が響く。

◆＋＋

初手の攻撃を加えた時点で既に身体は次に備えて動いている。
二歩目は天地逆さに空を踏む、着地する際の完全真逆方向への加速による相殺とは違う、言うなれば壁を跳ねるスーパーボールのような極めて鋭角なターンで離れつつある俺の身体を無理やりジークヴルムの元へとカムバックさせる。
おひさ、０．５秒ぶり？　これつまらないものだけど「タチキリワカチ」どうぞ。

◇◇

ルストはその光景を目撃していた。最前線よりも少しだけ離れた後方にいたからこそ、俯瞰的にそれが見えた。
何か地上から弾丸のようなものが放たれ、何故か何もない空中で跳ね返って……

◆＋＋＋

ヴァッシュの言う通りだったな、素材の性質を知ることこそ甦機装を使い熟すことに繋がるのだと。
百足式８－０．５の強化方式は毒の摂取だ、つまり手を離せば即解除……ではなく、体内に注入された毒が尽きた時が強化の切れ目だ。
だから間に合う、体内に残った強化の残滓を掻き集めて、この一瞬を駆け抜ける。三発目を叩き込んだ……しまった、手から境光の宝剣がすっぽ抜けた。ああでもさすが俺、もう手がウィンドウを動かしてら。

◇◇◇

ディープスローターは笑いが止まらなかった。成る程、双方向の認識を鑑みれば不可能ではないだろうが、まさか己の存在を看破するとは！！
やはりサンラクだ、サンラクしかいない。

◆＋＋＋＋

インベントリアから武器が転送される時間すらもがひどく遅く感じる。ああもう我慢ならない、片方だけ展開完了した傑剣（デュクスラム）への憧刃を三度の攻撃を加えた角に叩きつける。手応え（クリティカル）、次の瞬間には身体が吹っ飛ばされているので見えないが感触で分かる。

◇◇◇◇

サイガー0はサンラクを信じて詠唱を続ける中で、確かにそれを見た。

「玉座は唯一つ、理（コトワリ）もまた唯一つ。即ち我が右の半身は黒の……理」

――

思わず詠唱を間違えかけた程に鮮烈な、空に描かれた残光（エフェクト）の「星」

◆+++++

それはまさしく斬り結ぶ五芒星、臨界速（ブラディオン）と真界観測眼（クォンタムゲイズ）……そして最高潮のテンションの三つが揃った時、初めて使うことができる超超高速機動……今回は生存度外視の特攻バージョン、喰らえ鎧袖一触の物欲スラッシュ……！！！

ようやっと展開完了したもう一振りを渾身の力で叩きつける。成分結晶落とせオラァーッ！！

◇◇◇◇◇

プレイヤー達は見た、ＮＰＣは見た。

「ゔるぇっ」

何か奇妙な声を上げて、五芒星を空に描いて吹き飛んでいった小さな影と。

『なん…………！！！？』

正真正銘驚愕し絶句するジークヴルムの角、それが二本砕け散る様を。

そして、

『規定速度観測、条件達成』
『称号【最大速度（スピードホルダー）】を獲得しました』

前人未踏の空席が埋まる瞬間を。

龍よ、龍よ！　其の四十二（後書き）

なんか下手くそが投げたブーメランみたいな挙動で吹き飛んでいく変態

臨界速五歩目＋百足式の強化＋冥王の鏡盾による強化＋過剰伝達のセルフドーピングで条件達成、屋内でやると六割の確率で壁か床のシミになる

ちなみに旭光刃の効果は「夜光刃モード時に浴びた月光量に応じて攻撃部位に追加ダメージを与える」というもの、斬ると爆ぜる

龍よ、龍よ！　其の四十三（前書き）

フィンブル逃亡兵、凸二つでええじゃないか。どうせ時代は片面ヴァルナ鰹剣豪なんたからよォーッ！！

龍よ、龍よ！　其の四十三

――我が黒の半身を謳う

――夢見る先は深淵源、傲慢故に孤高たる黒き神

――玉座は唯一つ、理（コトワリ）もまた唯一つ。即ち我が右の半身は黒の理

それは神代よりもなお太古、始まりの世界に在りし神を説く言葉。
その言葉に反応するようにドス黒く染まったサイガー０の右半身、その背中から物質ならざる力の奔流が翼の形を作って噴出する。

だが、忘れてはならない。

始源に於いて、神は二柱いる。

であれば、次に語るは……

◇

「――我が白の半身を謳う」

砕け散る黄金の龍角を視界に収めながら、異形の騎士は言葉を紡ぐ。

「夢見る先は至高天、強欲故に暴君たる白き神」

悪魔の如き相を見せる右とは真逆、その左半身はある種の神々しさすら見せる白に染まる。

「全なる唯一つ、理（コトワリ）もまた唯一つ。即ち我が左の半身は白の理」

右に黒、左に白。
それは誤ち、神骸の配置は右に白、左に黒であるはず。だがそれは間違いではあってもミスではない。今はまだ矮小なる人の身に始源の力は身に余るもの。
奇しくも、「人が扱えるようにデチューンされた超常の力」という神代の思想に極めて近いそれは、新たな姿を得た神魔の剣。

「我が身の左右、二律背反の双理（フタツコトワリ）はされど唯一つの我が身が担う」

地に刺した大剣より放たれる力は始源の波動。
正中線で分かたれた左右の黒と白、始源の翼がサイガ－0を包み込むように大剣へと吸い込まれていく。

「我が右方はエレボスの理、我が左方はアイテールの理。双理反転、双つ神と我が身を以て太極を顕す」

大いなる大地。
そこから莫大な「力」を吸い上げた大剣。
白と黒に分かれ輝きを放つ大剣へと逆位相の力が流れ込む。それは根源に限りなく近い力の太極図、莫大量の「白」と「黒」を逆の色で掻き回し、渦とする。

「始源よ顕現（あらわ）れよ、我が身は太極の境界点。遠き現世（うつしよ）に理を示す者」

その剣の名は「太極の剣」、無機物であるはずの刃がまるで成長するように展開され、巨大な円を創り出す。
吸い上げ、注ぎ込まれ、渦を巻く力が円の中で圧縮される。
黄金の龍王はその光景を余すことなく目の当たりにして……そして、回避をやめた。
『我が名はジークヴルム。対始源焼却生体ユニット、偉大なるジーク・リンドヴルムの最高傑作！　故に……故に！　それから逃げる事は断じて無いっっ！！』
ジークヴルムの口腔に光が灯る。真っ向から立ち向かい、打ち砕くという神代より続く龍王の覚悟を真正面から受け止めて、サイガー０は僅かに気圧され……
その背を押すように大量の強化魔法が叩きつけられる。僅かに視線を向ければ、そこには恐らく土壇場で近くにいた支援職をありったけかき集めてきたのだろう様子の姉と、ぜぇぜぇと息を切らしながらも仕事を果たした支援職達の姿。
遠く空を見ても、もうあの人の姿はない。レコードを勝ち取った蒼炎と、黒雷と、濃紺の光も既に夜明けの空からは消えてしまっている。
けど、それでも、もはや退くだけの恐怖はどこにもなかった。
その魔法は三つの発動条件を満たすことでその力を解放する。
一つ、短縮及び省略不可の完全詠唱。
二つ、剣と鎧の装備者に別枠で追加される「太極ゲージ」が５０‥

50であること。
三つ、発動者の「侵蝕律」が100以上であること。
これらの条件を満たして初めて、その魔法は使用が解禁される。
そして、それら全てを満たした今……白と黒、二つの摂理を説く二重螺旋が光輝となる。

「我が身を喰い違え、双理の神話……【ゼンド・アヴェスター】！！」

『ブレス・オブ・ベイン！！』

片や魔を滅する渾身の吐息、片や刃円の中心に拳を叩き込む動作を経て放たれる神話。
力と力の激突。始源を焼く黄金の息吹へと、白と黒の螺旋波動が真正面から鍔迫り合う。

――もしも、これがかつてのサイガー0であったのならば、拮抗は黄金の勝利で終わっていた。
――もしも、ジークヴルムの角が万全の状態であったなら、龍王の息吹は始源の遺産を焼却していただろう。

だがそれは、過去に基づいた仮説に過ぎなかった。
現にジークヴルムの角は弩砲の射手と、黄金の仇討人……そして遥かな昔に旅する兎によって現在四本を喪失している。エネルギーの発生器を失った事でブレスの威力は減衰し、反対に異形の騎士は語られし神話の波動を人の力で更に強めている。
故に弱体化した龍王と、更新された最大のレコード……比べるまで

もなかった。

「行、け……っ！！」

黄金が白と黒の螺旋に呑まれ掻き消される。
そして竜巻の如く渦を巻く神話の光が黄金の龍王、その頭部へと直撃、モノクロの爆発を起こしてジークヴルムの巨体を青天井に転倒させた。

「う、く……」

かつては必滅の誓約を負っていた鎧と剣は、今は異なる制約によってその力を喪失する。
くすんだ灰色へと姿を変えた異貌の兜が瞳を閉じ、立つことすらままならぬと膝をつく。

「0（レイ）、戦えるか？」

「ゲージ、的に……今すぐは、」

「そうか……威力は高いが動けないのが難点だな、リュカオーン相手では実用性が低そうだ」

「姉さん…………」

どうも妹達がリュカオーンのEXシナリオを解放して以来、ますますシャンフロにおける物事を「リュカオーンに対して有効か否か」で考えつつある姉にサイガー0は苦笑いを浮かべる。
どうもクリアした者から、それも身内から情報を受け取るのが気に入らないのか、最近の姉は妹が何かリュカオーンに関する情報を漏

らすとむくれるようになったのでサイガー０も黙っているが、いよいよこれは何かしらの手段で手助けしないといけないのではないだろうか。

ほんの僅かな弛緩。戦いはまだ終わってこそいないが、「自分ができる全てをやりきった」という達成感がサイガー０から僅かに警戒を消した。
そして、周囲のプレイヤー達もまた大火力の命中にほんの少しだけ気が緩んだ。

そして、その一瞬の時間は……

龍王に覚悟を決めさせるには十分過ぎた。

『――あぁ、そうか。ここが我が死地であるか』

ざわり、と。シャングリラ・フロンティアのリアリティをフルに用いた「悪寒」が決戦フェーズに参戦した全プレイヤーを襲う。
『始源をこそ組み伏せ、使役する……考えてもみれば、それこそが偉大なる神代の人々が最初に捨てた「頂」であったか……ならば喜ぶべき事、なのだろう』
凪のように静かな独白、しかし土煙の中から響く声はあらゆるプレイヤーに「黙って聞け（イベントシーンだ）」と強いているようで。

『おお親友よ、小さき朋友ヴァイスアッシュよ。やはり我が先に逝くようだ……だが、なればこそ我は最後の試練を課さねばならぬ』

土煙が晴れ、その姿が露わになった時……息を呑んだのは誰だったか。

『人よ、遍く広がりし一号の人よ、この神骸の世界を拓く二号の人よ。これこそがジークヴルムの課す最期の試練である』

もはや神々しいまでの黄金など見る影もない。「内側から」爆ぜた全身は無事な部位の方が少ない程に灼け爛れ、もはやその身体そのものが黄金の炎と化したかのような姿で、声だけが静かに紡がれる。

『これより放つは我が身を糧とし薪とする調和を討つモノ、我が死は避けられぬ定めなれど……止めねばこの地が滅ぶ』

太陽が二つ、否、太陽が如き龍王の全身が隆起し、全身から発せられる黄金の「力」がただ一点……ジークヴルムの眼前へと収束していく。

『もはや我の制御を離れし魔滅の炎……いいのか？　余波が貴様らを焼くぞ』

今はまだ人間サイズの光の球体が一瞬輝き……次の瞬間、そこから爆ぜるように放たれた幾本ものレーザーが無差別に放たれた。

運悪く直撃を受けたプレイヤーが蒸発し、地に着弾し発生した爆発の余波にＮＰＣが吹き飛ばされる。

『ぬ？　貴様……』

と、平坦な感情を通していたジークヴルムの眼光が困惑に揺らぐ。
呟かれた「何故、」の言葉は……
何故か、自分から攻撃を受けに行ったノワルリンドへと向けられていた。

龍よ、龍よ！　其の四十三（後書き）

初期案では新必殺は【カリ・ユガ】にしようと思ったけどちょっと新しい設定が生えたので【ゼンド・アヴェスター】にした模様
【アヴェスター】ではないところもちょっと考えあってのこと、というかこれもうジークヴルムのキャラが何の影響受けたかバレバレだな？

効果内容としては
・発動者よりも侵蝕律が低い程ダメージ増、高いとダメージ減
・５０ヒットする（２ヒット毎に威力乗算増加、つまり実質２５段階強化）
・発動後、太極ゲージが０になり侵蝕律が上がる

太極ゲージは左右から中心へと伸びる「黒ゲージ」と「白ゲージ」があり、カルマ値的に良いことをすると白、悪いことをすると黒が増える
あとどちらかの「始源眷属」を殴っても増える、５１：４９じゃだめ、半々じゃないと使わせません。最速で貯める方法は見ず知らずの人を襲って半殺しにした後に治療してあげることを繰り返す

龍よ、龍よ！　其の四十四（前書き）

ガチャピンさんがいたからここまで戦えてきたんだよなぁ……初日は三十連金月一つでした

龍よ、龍よ！　其の四十四

◇

「ペナがねーから割とガチでやったんだがなぁ……いやはや、まさか持ちこたえるとは」

「う、く……」

秋津茜は、地に這いつくばっていた。

無理もないことだった、クラン【天ぷら騎士団】団長(リーダー)天首領はかのサイガー１００とも鎬を削って渡り合った「修正前剣聖」である。手動制御(マニュアル)可能な従剣劇の上限こそサイガー１００に劣るが、こと「対人」に関して言えば、練達のＰＫにすら劣らない。

そんな彼を含めて対ノワルリンドのプレイヤー全員を足止めしようとすれば当然こうなる。未だ死んでいないのは天首領すらをも軽々と凌駕するレベルによるステータスがあってこそだ。

「普段なら赤じゃねー奴は適当に削って放置だが……あんた、誘い(サソイ)素股(スマタ)だかなんかの側の勢力だろ？　どっちもペナ無しでキルできるのはありがてぇよな？　お互いに、よ」

「そ、そうですね……憂いなく、戦えますから……」

だが趨勢は覆しようがない程に決している。もはや秋津茜のＨＰは風前の灯……だが、それは諦める理由にはならない。何せ己の憧れの一人たる男は、自ら風前の灯となる上に水をかけても消えないよ

うな業火となって戦うのだから。

だが、威勢だけを良くしたところで結果は変わらない。憧れだけで何もかも解決することはない。

天首領が剣を振り上げ、笑みリアは何故か驚きに目を見開き……

次の瞬間、秋津茜達を影が覆い……爆音だけが響いた。

『ぬぅぅぅ……』

「うおっ、ノワルリンド！？」

『退のけ』

「おぶっ」

あっけなく天首領の身体が弾き飛ばされ、秋津茜は九死に一生を得る。

首から大量のダメージエフェクトを噴き出しながらも、ノワルリンドは秋津茜が何とか立ち上がったのを確認すると笑みリア達へと……己を弑するべく結束した者達を静かに睨みつける。

『群がる虫どもめ……我が首を求めるなど実に不遜なる奴らめ』

「ノワルリンド……！！」

『だが残念だったな、この首を我が貴様らに差し出すことはない…

……だが、全てが終わった後に浅ましく骸を刻む事は許してやろう……』

「え？」

『ふん、単なる気分転換……だ！！』

翼を大きく広げ、ノワルリンドが天高く飛翔する。そのまま上空高くまで昇り詰めた黒の巨体が宙返りを経て下へ下へと勢いよく落ちる。

「あん？　なんか取れた？」

ポツリと呟かれた天首領の言葉は誰にも拾われる事はなく、誰もが天より堕ちる黒い流星を見上げ……

『――――！！！』

声にならぬ咆哮と共にノワルリンドの巨体がジークヴルムに迫り……

「あぁっ！！」

秋津茜の喉から悲鳴が漏れる。
ジークヴルムの眼前で肥大化を続ける光の球体からレーザーが再び放たれ、ノワルリンドの身体を貫く。そして……
真上に掲げられた龍王の右手、そこから平坦に広がる力場が物理的な障壁となってノワルリンドという大質量の落下エネルギーを受け止める。
ジークヴルムが踏み締めた地面に亀裂が走り、その巨体が誰の目か

ら見ても明らかなほど沈んだことから完全に防御できたわけではないだろう。
だが、それでも。ノワルリンドによる渾身の特攻は……「失敗」と言っていい結末に終わった。
「うおっ、首からイった……」
「あれ……首どころか全身の骨が折れてない？」
「自滅？」
ノワルリンドの突然の行動に、プレイヤー達は状況を掴めぬままに反発力を失ったボールの如く地に転がった黒竜へと視線を向ける。
仰向けにひっくり返ったノワルリンドはピクリとも動かない……というか舌をだらりと口の外へと溢れさせ、瞳から光を失ったその姿は、全身の関節や首が妙な方向に折れているその姿は……もしや、死ん――
「え？」
秋津茜の思わずと言った様子で漏れ出たのだろう疑問符に、天首領は無理もないと心中で同情する。
まさかここまでやって支援してきた黒竜が自滅で死亡などと、流石に同情もしたくなるというもの。なにせ反ノワルリンドを掲げるプレイヤー達も素直に喜んでいいものかと困惑しているのだから。
「……まぁ、なんだ。変なパターン引いちまったって事で……っていいねぇ！？」

「――アナウンスが無い」

天首領の驚愕と、笑みリアのつぶやきはほぼ同時。そして、少し離れた場所を駆ける秋津茜の傍には……

『行くぞっ！　むぐぐ、なんたる屈辱か……っ！　歩幅がっ、歩幅が余りに小さい！　視点が低い！』

「ノ、ノワルリンドさん……」

『……ふん、これも我が策りゃ』

「凄く痩せましたね？」

『たわけ！！』

ギャンギャンと吠える大型犬サイズのモンスターが狐面の忍者と共に笑みリア達から離れるように駆けていた。

『これこそ我が究極の秘奥……「無影感情（リモートエモート）」の応用、本来は大地のマナを吸い上げ分身を生み出して運用するものだが、我が威容に目を眩ませた虫を欺くこともできるのだ！』

「えーと、あの凄く強い剣聖の人……追ってきてませんか？」

『……クク、よもや我が欺きを見抜くものがいようとはな』

「あのっ！　多分私もノワルリンドさんもワンパンされませんか！？　私、控えめに言って大ピンチですけど！！」

『ええい走れっ！　翼の矮小さに慣れぬ！　まだ速く飛べんのだ！！』

わぁぎゃあと鬼ごっこを行う奇妙な人と「竜」に周囲の視線は否応にでも集まって行く。

それを追う天首領はまずは逃げる足を止めるべく従剣劇(ソーヴァント)を展開し……

「天丼くーん！」

「あーそーぼっ！」

「お覚悟死ねコラァーッ！」

「何っ！？」

まさしく奇襲。人混みの中に紛れ、射程圏内へと天首領が踏み込んだ瞬間、武器を構えて飛び出すプレイヤー達。

何故突然、と目を剥く天首領は……襲撃者達が、皆一様にレッドカラーでＰＮが表示されていることに気づいた。このゲームでそのような処理がされるプレイヤーは「とある罪」を犯した者のみだ。

「ＰＫｅｒだと……！？　っつーかテメーらまさか、いやだが何故ここに……！！」

「嫌われてナンボのＰＫ稼業！」

「足を洗うならド派手にな！」

「我らが偉大なる先駆者様からの情報提供、もはや躊躇う理由もなし！」

「ティーアスたん俺がケジメつけるとこ見てて……」

彼らは、妙な装備と貧相な武器という印象が強い。
彼らは、ファステイアから出てこないという印象が強い。
彼らは、共食いばかりで無害という印象が強い。

笑止。

彼らは、未だ現役の罪人（レッドネーム）である。
彼らは、出れないのではなく出ないだけである。
彼らは、あくまでも手段として共食いしているだけである。
そしてペナルティから逃れるために隠され続けてきた彼らの本気の得物が久方振りに日の目を浴びる。
そう、彼らは……プレイヤーを殺す事に喜びを見出している。

◇◇

「ククク……サンラクめ、確かにどっかしらで足を洗わねぇといけなかったが……まさか与太話をマジでやるとはと思うまい、どんな顔してっかな……？」

新大陸に新装開店された知る人ぞ知るカフェ「蛇と林檎」の出張店舗「蛇と青林檎」。その中で一人の女が優雅にティータイムを楽し

んでいた。
尤も、紅茶を一気飲み干し肉にかじりつく姿は一般的なティータイムとは大きく異なってはいるが。

「ま、晒しスレに名前が載ったら宴会開くような馬鹿どもだしなぁ……くく、派手に散るにゃあ丁度いいってわけだ」

誰も知らない、強いて言うならサンラクが縁を持つその女（男）の名はサバイバアル。現在二人目のプレイヤー仇討人であり…………クラン【ティーアスちゃんを着せ替え隊】を始めとした数多のＰＫ達との繋がりを持つプレイヤーである。
仇討人となってシステム上は「足を洗った」サバイバアルであったが、プレイヤー間の繋がりまでもが切れたわけではない。

そして今、嬉々として生還放棄の戦いへと繰り出しているのは、サバイバアルの「頼み」を快諾した着せ替え隊のメンバー達である。

「何やらかそうとしてんのかは知らねーが、アトバードの奴から面白そうなネタが飛んできたからなぁ」

勘違いされがちだが、ティーアスちゃんを着せ替え隊はファステイアにしかいないわけではない……というか、ほとんどのメンバーは新大陸第一陣として既に新大陸に足をつけている。
新大陸までたどり着いた上で「こっちでカルマ高めてもティーアスちゃん来ねーじゃん！！」と一切の未練なくファステイアに戻った剛の者達であるからこそ、現役のＰＫでありながら彼らはある種の尊敬を集めているのだ。

いつだったか（ティーアスにご飯を奢りすぎて）素寒貧になったサバイバアルを見かねて金貸し兼雑談を行った際にぽつりとサンラク

が言った「どうせ死ぬなら晒しスレ殿堂入りくらい派手に暴れたら面白くね？」という冗談を大真面目に実行したサバイバアルは、こびりついた肉すら無くなった骨をプッ、と吐き出し不敵に笑う。

「狙うは「笑みリア」と「天ぷら騎士団」……馬鹿どもが一花咲かせるにゃあまぁまぁの相手ってな」

「サバイバアル」

「あん……？　ルッ、ルッタててテルルルルティアたん！？　嘘だろ隠されしご尊顔が露わに……！？！？」

ＰＫ達の黒幕としての顔が一瞬で剥がれ落ち、キョドりにキョドるサバイバアルの肩にぽん、と賞金狩人(バウンティハンター)ルティアの手が載せられる。

「少し、お説教」

「え、嘘、やだ、え……お説教(ご褒美)？　待って、録画アイテム用意させて……」

結論から言えば、彼にとっては何もかもがプラス収支なのであった。

無影感情（リモートエモート）
魔力で構成した分身を作って攻撃する。分身のＡＩが低いのでジークヴルムの龍王機関の下位互換のようにも思えるが最大の特徴としてはノワルリンドのコアを譲渡する事で「本体」を切り替えることができる。
戦闘中はコアだけを高速で射出するなどリスキーな方法を取るが、今回のように小型分身にコアを入れて「本体」になることも出来る。
ただしこの場合は能力が軒並みダウンするので逃亡用の最終手段であるとも言える。
ちなみにノワリンの「災害状態」はまた別に存在するけど秋津茜が野生値を高めすぎたせいで多分日の目を浴びることはない

龍よ、龍よ！　其の四十五（前書き）

し、四捨五入すれば五十話いける

龍よ、龍よ！　其の四十五

◆

まぁつまり要するに、だ。脳みそがテンション上げすぎてエンストしかけてる。

「首根っこ掴まれた猫みたいになってる……」

「頭使いすぎた……」

ぶっちゃけあのまま落下死するものとばかり思っていたのだが、再び戦術機獣と合体したルストによってキャッチされた俺はルストの喩え通り吊るされた猫のような格好で地面へと降り立ったのだった。

「戦える？」

「ぶっちゃけ辛い……」

流石に切った張ったもやり過ぎれば俺とて疲れる。正直言ってもう一回さっきと同じことをやるのは無理だ、サンドバッグ相手ならまぁなんとかなったかもしれないが……ジークヴルムは今、傍迷惑な時限爆弾と化している。
求められるのは無差別レーザーを避ける機動力だろう、今の俺だと下手に過剰伝達など使えば確実に地面のシミになるだろう。

「契約者（マスター）、投棄された武器及び特異結晶体を回収しました」

「いいね……あんがとよ」

「……とりあえず、私は参戦してくる」

「壊すなよー」

飛び去って行った朱雀もといルストを見送りつつ、さてどうしたものかと考える。

何か出来ることがあるんじゃないか？　何も武器ブンブン振り回すだけが戦いじゃあねぇ、ぶっちゃけアホほどプレイヤーがいるのだから俺いてもいなくても変わらないんじゃとは思うがそれはそれ、これはこれ。

「……………………ふへっ」

「やっと見つけたと思ったら想像を絶する邪悪な笑い声出してるですわ……」

「いやいや、ちょーっと忘れてたことを思い出しただけだから。だが……いけるか？　マジで何が起きるかわからない、流石に悪化することはないと思うが……ん？」

何してんだあの黒トカゲ、特攻？　いや、なんか背中から分離して……げ、物理障壁とか使えるのかよあの野郎。

「やってから後悔する方が辛酸苦汁も多少は飲めるもんになるか……」

ようし、やったろーじゃねーか。もう剣で奴の身体を突く事は難しいが、それでも奴の虚を突く事は出来る、筈。

「サイナ、エムル、ウチのメンツに伝言を頼む。内容は――」

……

…

よし、自動的に犯人が割れる事になるがいつかはやろうとしてたんだ、今か後かの違いだろう。

あとは座標まで行くだけだが……おっ、良いところで会ったなアラバくぅん……いや根に持ってるわけじゃないけど以前君に気を取られて人間水切りさせられた過去が忘れられなくてねぇ……すこぉーし手伝ってもらえるかぁい……？

やばい、ディプスロウイルスが……くっ、撲滅！　撲滅！

◇

『――あぁ、白状しよう。してやるとも、我は……いいや、俺は奴に憧れていたさ。至高の龍王、輝ける不滅の黄金、天の覇者たるその姿は俺にとってまさしく究極の到達点だった』

ぽつりと大型犬サイズにまで縮んだノワルリンドが独白する。

『俺が俺を確立したその時から、俺は奴のようになりたかった……』

自身の機能に特化するがために異形と化す傾向の高い色竜の中でも、ノワルリンドが比較的真っ当なドラゴンの形状をしていた理由こそがそれなのだと、黒竜は言葉を続ける。

『だが、力をつけ……俺という存在がいるのだと奴に戦いを挑んで……気づいた』

「何に、ですか？」

『奴はもう、終わっている』

それは妙な話だ、と秋津茜は走りながらも首をかしげる。何をもってして「終わっている」と評したのか。

『奴が生きて来た中で何かがあって、それが「完結」して……その後が今なのだ。奴にとっては今この瞬間すらもがおまけに過ぎんのだ』

かつてこの世界に降り立った者達がいた。それは彼らの生存を賭けた戦いの中で生み出され……そして、負けた。

それは死や戦闘不能という形による敗北ではない。それは己の存在理由の根本を守ることができなかったのだ。全てが終わった時、「人間」の姿はなく……その後継として用意された「人間っぽいもの」だけが遺され……そこでジークヴルムの戦いはどれだけの始源を焼いたところで敗北という結末を迎えたのだ。

神代の敗残兵、それこそが天覇のジークヴルム……否、対始源焼却生体ユニット「ジークヴルム」の正体だ。

これが人間的な情緒を持つものであったのならば、過去を引きずり

後悔もしただろう。だがジークヴルムは兵器としての在り方を是とするもの。後悔するよりも先に終末を受け入れてしまった。

『己が憧れてきたものの正体が、腑抜けた抜け殻と知った失望が分かるか？　積み上げた研鑽を、無感情に鼻で笑われた怒りが分かるか！？』

故にこそノワルリンドはジークヴルムを憎んでいた。

腑抜けた心根で龍王と讃えられるなど笑止千万、大きな憧れを抱いていたからこそ、反転した負の感情はノワルリンドに「お前なんかよりも俺の方が龍王としてまだマシだ」と叫ばせたのだ。

『だが……ああも惨めな姿を見せられては、もはや直視すら堪えられん』

自分自身の力で傷つき、声高らかにこれから自分が死ぬことを語り、もう一つの選択肢として自分を殺すことを求める。

ノワルリンドは嘆く、あまりにも哀れではないかと。天を覇するとまで謳われた龍が、己を殺してくれと自分で首を絞めながら嘆願しているのだ。

『ならばせめて介錯してやるのがせめてもの慈悲だ、だが……フン、奴は己の紛い物などに殺されても嬉しくはなかろうよ』

自重気味に笑う黒竜に、秋津茜は返す言葉を見つけられないでいた。サンラクであれば、気の利いた言葉でも返すことができたかもしれない。だが秋津茜にはそんなスキルはない、であれば……心からの言葉で、己の想いを語るしかないのだ。

「ちょっと前に……私、サンラクさんに聞いてみたことがあったん

です」
上（憧れ）を見て走り続ける秋津茜にとって、常に前を向き続けるサンラクは無論リスペクトすべき人物の一人であり……尽きせぬ疑問を抱く相手でもあった。

「何故そんなに頑張れるんですか？　目標もなく頑張れるんですか？　……って」

……

…………

……………

「いやいきなりンなこと言われてもな……ていうか向こう見ずって意味だろそれ……」

「あ、えと、そういうわけじゃないんです！」

「だろうな、そういうヨゴレメンタルはお前にゃ期待してないよ……そうだな、俺にだって目指すべきもの……憧れはあるさ」

「え……誰なんですか？」

サンラクほどの動きを実現できる者が目指す憧れとはなんなのか。
プロゲーマー？　アスリート？　もしやフィクションのキャラクター？
だが、サンラクから返ってきた答えはそれらとは全く異なるものだ

った。

「未来の自分」

「え……？」

「ゲームってのはな、どれだけユニークだの何だのがあったとしても究極的には絶対に平等なんだよ」

古くはボタンとコントローラーを操作するゲームも、フルダイブVRも。幼稚園児だろうが老人だろうがボタンを押せば雑魚敵を一撃で倒すパンチを繰り出せる。男だろうが女だろうが、レベルを上げて装備を鍛えれば世界を滅ぼす大魔王を倒すことができる。

「ゲーム的に再現可能なモーションは、プレイヤーが実現可能なモーションってことだ」

流石にTASは無理だけどなー、と断りを入れつつもサンラクはなお続ける。

「今できないことができないってこともないだろ。現に俺はリュカオーンの影にリベンジしたし、非常に不本意だがこの刻傷が示す通り勝った……過去の俺が出来なくても未来の俺は出来たんだ」

「だから……未来の自分、ですか？」

「そういうこと。できないから諦めるのか？　違うね、やめたいから諦めるんだ。何事もモチベーションさ、それが残ってるうちは俺は何だって出来る……頑張った先の未来にはいつだって憧れの自分

がいるんだよ」

とはいえ人間は常に現在に生きる生命体、と自分で自分のセリフに赤面（見えない）しつつもサンラクはこう締めくくった。

「今の自分にできるのは、せめて過去の自分に誇れるようにいることくらいだろ？」

………………

…………

……

「……きっと、憧れ方に正しい答えはないんです。人それぞれの走り方があって、目指すものがあって……けれど、抱いた想いと、真っ直ぐ駆けてきた道のりは絶対に間違いなんかじゃないんです！」

動機がなんであれ、駆け抜けた道はきっと誇れるはず。それはかつて、ノワルリンドと出会ったばかりの頃に言い放った言葉で。

そして、何故秋津茜がノワルリンドに肩入れするのか……その言葉もまた、あの日と変わりなく。でも少しだけ付け加えて。

「私は……諦めずに頑張ってる人を放っておけないんです。だから……ジークヴルムさんに勝ちましょう、貴方と私で！」

龍よ、龍よ！　其の四十五（後書き）

人生はリセットできない、だからバッドエンドを迎えたとしてもそのまま続けるしかない

どれだけのドラマがあったとしても、今そこにいる人々はかつて守りたかった人々とは違うんです。なんか内臓多いし

サンラクはゲームクリアした直後とかだと台詞が臭くなる。それを自覚して勝手に赤面する

そしてそれをこっそり目撃していたヒロインちゃんがすごい顔をする

龍よ、龍よ！　其の四十六（前書き）

まぁ少なくとも四話で終わらせるのは無理ですね（極めて冷静な判断力）

龍よ、龍よ！　其の四十六

◆

「友よ、ひどい顔をしているぞ……大丈夫なのか？」

「まぁよゆーよゆー……うぐぅ」

「空元気と言うには気力が足りてないぞ……で、どっちだ？」

「あっちー」

偶然遭遇したアラバに肩を貸された状態で俺はとある場所を目指して突き進む。魚人族も決戦フェーズに参加していたらしく、どうやら主に後方支援に回っていたようだ。まぁアラバはバリッバリに前線に出ていたらしいが。

あークソ、二徹して作業周回してた時並みのダルさだ。あの時は武田氏に割とガチな説教食らったっけ、今となっては懐かしいものよ……だって、乱数が悪いんだもん仕方ないじゃないか。「んなもん一回電源切ってテーブル切り替えろで御座る！」と胡散臭い解決法を提示してきた武田氏も武田氏だったが。

「……何かしら突拍子も無い事をするだろう確信はあるが……何をするつもりだ？」

「んー……ちょいと呼び出しをな」

「？？？」

ここら辺だったかな、おーおー鳴ってる鳴ってる。

「というか、なんなのだそれは？　武器か？」

「――笛、かな」

◇

タイムリミットは近い、盛大な自爆宣言を行った事でもはやプレイヤーのほとんどがジークヴルムへと攻撃を試みる。

だが斬られ、突かれ、焼かれ、穿たれようともジークヴルムは屈しない。倒されることを望みながらも、倒してみろと挑発するかのように堂々たる姿を晒し、己が全てを注ぎ込んだ光の球体は今や太陽の輝きにも劣らぬ程に膨れ上がりつつあった。

「――逆鱗です」

『逆鱗だと？』

「私がこの顔の傷を受けた時……本当に偶然、ジークヴルムさんの逆鱗に攻撃が当たって……その時、ジークヴルムさん自身が言ったんです」

曰く、我が逆鱗は流動する魔力の要。穿たれたところで死にこそしないが全身の魔力流動が一時的に止まる、のだと。

『そうか……だがどうする？　あれを潜り抜けて肉薄できるか？　お前に、だ』

「それは……その、気合いで……」

『いずれ出来たとしても今出来んのならそれはどう足掻いたとて出来んのだ、流石に諦めろ』

「でも……」

正論ではある、だがそれでも「諦められない」のが秋津茜という人物なのだ。俯く秋津茜をノワルリンドはじっと見つめ……そして、提案する。

『今の俺でならば、お前のアレが使えるのではないか？』

「え？」

『アレだアレ、使うための条件がよくわからんと泣き言を言っておったやつだ』

「使い方……あっ！　アレですね！」

それは秋津茜の代名詞となりつつある【竜息吹】と同じく、刃隠心得において「奥義」の名を冠する魔法。

レベル上限を解放した際、忍者として所有していた「秘解・虎の巻」なるアイテムに出現した新たな奥義。

心を同調するに至った人ならざるモノと、奥義の使い手を心身一体とする極限の……変化(へんげ)の術。

「でもアレは……あれ？　え？　使える！？　なんで！！？」

それは、ただモンスターと仲良くすればいいというわけではない。それは、隠されたパラメータ……モンスターに対する自身の影響度を示す野生値を要求する。

故にこそ、それは実戦の中でこそアンロックされる「切り札」なのだ。

「えと……やっちゃっていいんですか？」

『悩む程に奴の自爆が近づくぞ』

「わ、そうだった……じゃあ、行きます！！」

刃隠心得に詠唱はない。対象(ノワルリンド)に触れ、人差し指と中指だけを立てた簡単な印を結んで叫ぶ、ただそれだけでその術は発動する。

「刃隠心得……奥義！！」

偶然か、必然か。その時ジークヴルムの作り出す光の球体からレーザーが秋津茜達の元へと放たれる。駆け抜ける奇妙な一人と一体に道を譲っていたプレイヤー達も直撃しては堪らないと回避する中で、逃げることなくその場に突っ立っている秋津茜達を目撃し……

「【超転身(ちょうてんしん)】！！！」

爆発。

「直撃……！？」

「いや、ギリギリ横に逸れてたと、思う」

「どちらにせよ死んでるんじゃ……」

「いや、待て！」

土煙が渦を巻く。いいや違う、それは最早竜巻と言えるまでに勢いを増し、黒い花びらのようなものが混じり……内側から爆ぜるように解き放たれる。

『…………』

そこにいたのは、一人の少女……だったもの。
肌は青白いどころか青そのもので、四肢や胸部を鎧のように鱗が覆っている。胸元や臍、太ももの一部だけ肌が露出している点には何者かの邪念を感じずにはいられないが、少なくとも普通の人間は鱗など生えないだろう。
そしてそれ以上に、漆黒の「尾」に「翼」……果ては「角」までもが生え、明らかに人ならざる存在感を周囲へと撒き散らす。

『…………』

ゆっくりと開かれた目は、白目と瞳の色が反転したかのようなものとなり、開かれた口からは全ての歯が変化したのだろう「牙」と先端が割れた「舌」がのぞいていた。

まぁ、つまり、要するに。

『……あ、飛べませんねこれ！』

女性としての人間味を残した「竜人」とでも言うべき存在が、しかして秋津茜というプレイヤーネームを掲げてそこに立っていた。

『えーと……あ、ウィンドウあるんだ……………うーん、実際に動いて覚えましょうか！！』

しばらく虚空に指を向けてなにやら操作していた秋津茜であったが、最終的に実戦学習を選択したのか、ダン！　と地を蹴りつけ翼をはためかせて凄まじい勢いで「跳躍（飛翔）」して行った。

「……なんだったんだ今の」

「変身魔法？　いや、融合魔法？」

◇
◇

身体が軽い、リアルでも平均以上の脚力を持つ秋津茜ではあるが、もはや飛翔と言えるほどの跳躍を絡めた走りは走り幅跳びでもそう

は味わえない風を感じさせた。

『す、すいませーん！　そこ通ります！！』

「な、なんだぁ！？」

「ほう、黒白目青肌魔族系竜娘とはな……」

「お前よくそんな詳細に見えたな……」

「ほら、ティーアスたんに比べたら遅いくらいだし」

「…………、っげぇ！？　こいつ着せ替え隊じゃねーか！」

「わはは首も命も落としてけぇ！！」

なにやら騒々しい人混みの空白に着地し、再び跳躍。一気にジークヴルムまでの距離を縮めていく。

『わ、空中ジャンプもできるんですね！』

それに返される答えはない、その事に秋津茜は少しだけ寂しさを感じて……

『――――いるぞ』

『口が勝手に！？』

第三者が見れば、人格そのものが変わったかのような「小生意気な」表情になった秋津茜の口が勝手に言葉を形作る。

その言葉はまさしくノワルリンドのもので……
『主導権はお前にあるようだ、お前が気を緩めた時にようやく俺も口を出せた』
『あの、私の喉だけ疲れるので喋らない感じで会話できませんか？』
（できるか！！）
出来た。
刃隠心得奥義【超転身】を会話可能なモンスターと行った場合、その気になれば会話も可能である事を秋津茜は今知った。
『出来ましたね！』
（ぬぐぐ……そんなことよりもだ！　さっさと彼奴の逆鱗を穿つぞ！　この姿とていつまでも続くわけではあるまい！）
それは事実である。【超転身】は発動者と「合身」したモンスターの強さに応じて制限時間が設定される。だが……
『でもこれ、十分くらい戦えますよ？』
（……十、それは長いのか？）
『えと、結構』
その秘密は、ノワルリンドの姿にあった。
本来は複数体生成した分身をコアが次々に乗り移る事で撹乱する「無影感情（リモートエモート）」はその性質上、剥き出しのコアを最低限の細胞で作った

肉体で行動させる。
つまりこの手の「移動する本体」にありがちな脆弱性を保有しているという事。
レイドモンスターとしての格を維持しつつもステータスそのものは低い、この矛盾が「黒竜ノワルリンド」と合身して尚十分という戦闘時間を可能としたのだった。
『そろそろジークヴルムさんに声が届きそうですね、何か言うことありますか？　代わります？』
（む……そうだな……）
「え、もしかして秋津茜ちゃん？　なにそれ！　変身？　おねーさん初耳なんだけ――」
『……あ゛？　なんだ貴様』
「ひょえっ」
アーサー・ペンシルゴン、割とマジのビビリであった。

龍よ、龍よ！　其の四十六（後書き）

マニアックな方面に光を照らす系後輩（ちょっと黒くなった）

隠しパラメータ「野生値」は好感度とはまた別口のパラメータ、大体サンラクと〝緋色の傷（スカーレッド）〟みたいな関係性が野生値が高まってる状態。

イメージ的には超融合より忍法　超変化の術に近い。

龍よ、龍よ！　其の四十七（前書き）

ガチャピンモード温存＆百連温存でフェスに臨む完璧な布陣

龍よ、龍よ！　其の四十七

光が乱舞し破壊を撒き散らす中、ジークヴルムが課した最後の試練を突破するべくプレイヤー達が集結する。

「つまり、君はジークヴルムの逆鱗の場所を知っていると？」

『はいっ！』

「そうか……」

何故か妙に大人しいペンシルゴンが連れてきた秋津茜なるプレイヤー。元を辿れば彼女がノワルリンドにフラグを立てたからこそ今がある。

だがしかし……何故どこにもノワルリンドの姿がなく、そして何故秋津茜は黒竜に酷似した姿になっているのか。

「あー……ノワルリンドは？　倒されたのか？」

『ノワルリンドさんですか？』

「ああ、というかその姿は……」

『ふん、この我に何か用か』

「…………」

サイガー100とアーサー・ペンシルゴンはなんだかんだで長い付

き合いである。流石に以心伝心、とまではいかないがアイコンタクトでおおよその意思疎通を図ることくらいはできる。
数秒前の純真そうな表情は何処へやら、牙を覗かせる傲岸不遜な表情で腕を組む秋津茜（？）にサイガー１００は頬をひくつかせながら無言で問いかける。

「あー……こちら、忍者の奥義で合体した秋津茜ｉｎノワルリンドさんです」

『跪いて驚愕する事を許す』

「あれか？　【旅狼】は人間をやめたやつしか入れないとかそういうルールでも課したのかお前は？」

「いや、頭おかしいのはサンラク君だけ――」

直後、空中から噴炎（つばさ）を羽ばたかせながら着地した艶羽朱雀（ルスト）が排気熱を噴出する。

「……集まってたので来た」

ついでに言えばスカルアヅチで餡ジュ相手に想定外の苦戦を強いられている京極も種族的に人間離れしてると言えばしてるので、ペンシルゴンはそっと瞑目した。

「何かやらかすの？　ぶっちゃけ手持ちのリソースが尽きてるんだけど……」

「信じてたぜカッツォ君！　凡庸魚類は伊達じゃないね！」

「うん、素手でも戦ってやるよ。手始めにＰＫデビューかな？」

「こっちは聖槍使うけど」

「こいつ……！」

それはさておき、とペンシルゴンはコンコンと聖槍で地面を叩きながらも秋津茜と、ジークヴルムを順番に指差す。

「正直私も初耳だったんだけど、ウチの隠し弾ちゃんがジークヴルムの自爆を止める方法を知ってた上になんか合体とかしてるので……私らとしては彼女に大トリを任せようと思ってるんだけどね」

「どちらにせよあの物理防御と無差別レーザーを対処しないとどうしようもないでしょ、シル……じゃない、アージェンアウルが直撃してワンパンで瀕死にされたからね？」

どうやら流石の全米一も完全に不意を打たれた状況による流れ弾の直撃にまでは対処できないらしい。尤も、完全に虚を突かれた状況で認識自体はしてる辺り流石としか言いようがないが。

「レーザーは見た限りランダムだ、祈るしかない。だがあの防御障壁に関しては結構穴が多い印象かな」

「カローシスか」

「うん、ちょっとウチのを連れてアタックしてみたけど……多分、あの防御障壁はジークヴルムが視認することが前提だ。通る時と通らない時があった」

「信ぴょう性は？」

「五分ちょっとの検証だけどクラン外のプレイヤーも含めた数百人の同時検証だぜ？　賭け金を乗せるくらいの信用はしてほしいね」

ただし物理障壁の防御力はそれなりの火力ですら防ぐ、とカローシスUQは掠れた笑みを浮かべながら呟く。

「どれくらいだ？」

「切り札の【アポロン・バースト】でヒビ一つ入らない」

「【バイオレンス・サンダー】クラスで完全防御……突破は諦めた方が賢明か」

簡単な情報交換が終わり、それを横から聞いていたペンシルゴンも含めた各クランリーダー達による作戦方針が決定する。

「結論から言えば秋津茜ちゃんが気づかれないよう全力でジークヴルムの気をひく、以上！！」

「この消耗しきった状況で言ってくれる……カローシス、手持ちは？」

「切り札（エース）は使い切ったけど、鬼札（ジョーカー）はある」

「奇遇だな、私もだ……おい、そっちは？　妹が使い物にならんことは把握している」

「ルストちゃん？」

「あと五分」

「モルド君？」

「そもそも支援職です……まぁ、ギリギリ」

「カッツォ君？」

「置物より多少マシ程度」

「京極ちゃんはまぁ見た限りまだお城で暴れてるっぽい、サンラク君は……」

「発見(見つけた)：当機(ワタシ)の契約者(マスター)より伝言があります」

――一発限りだが、派手な花火がある

「……いいねぇ、ウチの鉄砲玉は勝手に雷管に火薬を詰めて暴発してくれるから放っておいても動いてくれる」

「存在が危険すぎるだろうそれ」

「でも有効射撃七割くらいだから……」

そして、サイナが齎したサンラクからの伝言は今の状況にこれ以上なく適合したものでもある。

ジークヴルム最期の試練「覇滅炉心（バスターピース）」、発動まで残り……あと五分。

◇

「聞け！　今やジークヴルムは前線拠点そのものを巻き込んで自爆しようとしている！　ここまで来ては止めねば拠点が消し飛ぶ！！」

戦場に響くサイガー１００の声。

「最上位、上位、下位！　それぞれ今使える魔法の種類で３チームに分ける！　最上位魔法が残ってるやつはこっちだ！！」

戦場に響くカローシスＵＱの声。

「ブロッケントリードはこの際無視！　全戦力をジークヴルムに集中させるよーっ！！」

戦場に響くアーサー・ペンシルゴンの声。

異なる指示、されど皆一様に狙うはジークヴルム。時間が経過するほどに無差別に放たれるレーザーの規模も肥大化する中、ここが踏ん張りどころであると戦闘職のプレイヤー達は残り少ないリソースを掴んで立ち上がる。

生産職のプレイヤー達もまた、己の手練手管をフル稼働させてアシストに回り、誰も彼もがジークヴルムを見据える。

「攻撃は無差別かつランダム！　運ゲーだから被弾しても諦めろ！

！　奴は視覚認識で防御してる！　不意を突いて確実にダメージを重ねていくぞ……魔法職！　撃てぇーっ！！」

決戦フェーズ開始時と比べても明らかに少ない、それでもかき集められた魔法が朝の空を色とりどりに染める。

『ぬぅぅん……！』

それに対し、ジークヴルムを守るように展開された黄金の障壁が魔法の悉くを受け止め消し去る。

「物理班！　叩き込め！！」

だがその隙に肉薄した戦士達がジークヴルムの死角から武器を叩きつける。
もはや内側から自身を傷つけるジークヴルムの外殻は当初の堅牢さを保持していない。確かに武器が食い込む感触にプレイヤー達が歓声を上げ……次の瞬間、黄金の全身から放たれた衝撃波に吹き飛ばされる。

「はぁ！？　不意打ち！？」

「違う！　苦悶の動作が前兆だ！！」

「足元からじゃあ見えないんだよなぁ！！」

『ぐ、ぬ………まだだ、まだ保て我が身魂……！！』

「押せ押せ押せーっ！！」

『ぐ、くはは、来るがいい……だが、死に足掻くくらいは……見逃すがいい！！』

遠慮容赦なく薙ぎ払われた尾によって人間がボウリングのピンが如く吹き飛ぶ。さらに追い討つようにレーザーが乱舞し……

◇◇

「ぐ……む、無念……！！」

「風水導師……侮り難し……！」

「ごめん笑みリー……」

「……さて、と」

今ここに、骸の城に新たな城主。

◆

「――あぁ、ここだ。この座標だ」

「一体何を狙っているんだ？　ただの海岸だぞ」

「なに、奴(やっこ)さんはどこだろうと呼べるって訳じゃないらしくてな……
……呼ぶための「場所」がある」

今ここに、空へ掲げる龍喚びの笛。

――

そして、戦場とは離れた二つの場所で、戦場の結末を左右するアクションが起こされた。

――

龍よ、龍よ！　其の四十七（後書き）

勇魚「やったーーーーー！！！！！」

龍よ、龍よ！　其の四十八（前書き）

今年中に終わるか？　いけるか？

龍よ、龍よ！　其の四十八

託された願いがあった。

届かぬメッセージがあった。

遠く、遠く。ある科学者の元でかつて存在した、三つのパーツによって構成された龍喚びの笛が起動する。

『Ｗａｋｅ　ｕｐ，　ＢＣ－Ｂｅａｃｏｎ．』

まず第一に中央パーツ、第三型半永久稼働「純科学製」動力機構が眠り続けていたその身にエネルギーを巡らせる。

『Ｃｈｅｃｋｉｎｇ……』

次に握り（グリップ）パーツ、人間の手から情報を読み取る識別認証ユニットが己を握る者の情報を読み取り……０．１秒にも満たない一瞬でその者に「資格」がないことを看破。

されど、新たに追加されていた識別コードを参照し……承認する。

『ＯＫ．　「Ｌｅｇａｃｙ　ｍｏｄｅ」　Ｃａｌｌ……ａｃｃｅｐｔ．』

そして最後に銃口パーツ、厳密には中央機関で生成された特殊周波数を適用した原子操作機構が幾星霜のかつて以来の役割を果たす。

『Ｐｌｅａｓｅ　Ｗａｉｔ．』

大気中の粒子を利用した人為的な光の屈折現象……即ち、神代の「虹」が今ここに、第二のB……深き海の底の底、かのルルイアスよりも尚深い場所で大いなる水をかき回しながら眠っていた調律神の獣を喚び覚ます。

——それは、誰かの物語ではない。

——それは、世界の変遷でもない。

——それは、開拓者が為すべき使命。遠く神代、世界を救った者達が遺した大いなる遺産。
その在り様は神代を示す者達に近く、されど「示すもの」が異なるが故にその区分に属さぬもの。

鯨の乙女は、喜びと共に。

◇

『決着‼』

『装骨天守スカルアヅチｖｓ一夜城サソリスノマタ……勝者、一夜城サソリスノマタ！！』

『これにより、装骨天守スカルアヅチの所有権が一定期間譲渡されます』

それは敗北の通告、自分に纏わりついていた最後のＰＫを斬り捨てた天首領はぽりぽりと頭を掻きながらため息をつく。

「ありゃ、負けちまったか……」

反ノワルリンド派最大の切り札たるスカルアヅチの陥落。もはやここから笑みリア達が巻き返すことができる可能性はほとんどないだろう。

実際はノワルリンドの縮小化、プレイヤーとの融合など勝ちの目はあるにはある。だがそれを知っているかどうかはまた別の問題だ。

「どうするよ盟主殿？」

「そう……ですね、これはもう流石にお手上げとしか」

「だろうなぁ……いやー、流石にメタられすぎたな！　こりゃ参った参った」

ケラケラと敗北宣言をしつつも、天首領は問いかけるような、挑発するような目で笑みリアを見つめる。

「時に盟主殿、風の噂ではジークヴルムが前線拠点を巻き込んで盛大に自爆しようとしてるらしいが？」

「それは……許せませんね」

勘違いしてはいけない、笑みリアの原動力は……かつてこの地に作った今思えば貧相な建物を破壊された生産職達の原動力の根本は、ノワルリンドだから憎んでいるのではなく。かつてモンスターをけしかけて拠点を破壊した者であるからこそ憎悪を向けていたのだ。

敵の敵だからジークヴルムが標的ではなかっただけ、であれば今この状況で狙うはただ一体。

「わがままばかりで、方針すら変えてしまって申し訳ありません……でも、ジークヴルムの自爆を放置することはできません。行きましょう！！」

応、とノワルリンドに振るうために温存していた武器を、魔力を、情熱を滾らせた一団がジークヴルムへと駆けていく。

タイムリミットは、あと四分。

◇◇

風水導師……言ってしまえば単なる生産職であったはずの家具職人は、最上位職業の高みに至ったことで戦うだけの力を得ていた。

自身が設置したオブジェクトで他でもない自身を高める……餡ジュが三桁の大台に乗った京極にすら匹敵する力で持ちこたえることが出来たのも、そこがスカルアヅチの天守閣……即ち、餡ジュ謹製の家具が大量に設置されていたからに他ならない。

そして「後」の事を考えるが故に安易な破壊を選べなかった京極は、今に至るまでの大苦戦を強いられたのだった。

だが、それももう決着した。

剣道として見れば邪道も邪道、壁を利用した「空中奇襲」による一刀両断。

幕末として見れば王道も王道、逆になぜ出来ないのかとまで言われる基礎。

三次元的な機動へのアシストが豊富なシャンフロであれば、幕末以上の効果を出すことができる。

「……さて、と。とりあえず……どれ操作すればいいんだろ」

頭の上にクエスチョンマークを浮かばせながらも、ウィンドウを操作していた京極は二分ほど時間を使ってようやくスカルアヅチの強化付与選択画面に到達する。

「わー凄い、流石は城郭サイズの建造物と言うべきか……サソリスノマタとか能力一個しかないのに」

尤も、その唯一つの能力が厄介なのだが……と苦笑しつつも京極は目に付いたバフのことごとくを対ジークヴルムに設定して解き放つ。

「ま、九十六人抜きできたし満足かな」

・敵対対象：天覇のジークヴルム
・強化対象：敵対対象と戦闘状態にあるプレイヤー及びＮＰＣ
・強化内容
十五秒ごとにＨＰ、ＭＰを回復
全ステータスの強化
ダメージボーナス
リキャストタイム２０％軽減
魔法発動コスト１０％軽減
攻撃スキルの威力上昇
攻撃魔法の威力上昇

タイムリミットは、あと三分。

◇◇◇

「……視認されると物理障壁、定期的に無差別レーザーと全方位衝撃波、どうすればいい？」

『回答：有効打は重要ではない、視線を奪うことができれば上等……との事です』

「……そうだね、でもどうせなら何かスコアは出しておきたい」

艶やかな炎の羽を広げた機人が空高くよりジークヴルムを見下ろしながら呟く。己の半身（ブレイン）たるモルドからの提案を受けつつも、残り少ない時間で何か出来ないものかと視線を巡らせる。

「……角、」

『精査：こちらからも確認しました。残る二本の内、一本は……』

「ううん、違う。そっちよりも……」

現在のジークヴルムが持つ厄介な物理障壁……その特性を考えたならば、狙うは角ではない。

「朱雀、ラスト一発……全力全開」

『了解、「荒羽々焚（アラハバタキ）」及ビ「焼却対魔刃（インシレート・スラッシャー）」ヲ展開』

タイムリミットは、あと二分。

◇◇◇◇

秋津茜はその光景を見ていた。

誰も彼もが残存するリソースを絞り出しながらジークヴルムへと向かっていく。

光が舞い、黄金が身を振るう度に決して少なくない数のプレイヤー

が散っていき、それがどうしたとそれ以上の数が死を恐れる事なく前へ前へと突き進む。

『見てくださいノワルリンドさん、凄いです……』

(……ふん、だが決めるのは俺達、そうであろう)

『そうですね、任されたんですから！！』

まだ、まだ……まだ、秋津茜が動くその瞬間は来ない。緊張と、高揚と、待望を胸に秋津茜は待つ。

タイムリミットまで、あと――

その瞬間、世界が揺れた。

◆

その瞬間、海が爆ぜた。

液体なれど大質量、莫大な海水があり得ざる動きで天高く跳ね上がられる。

クォォォォォォォオオオオオオン……！！！！

それは本来の星の海を渡る力こそ失われど、水の海を浮かび上がる事くらいは容易い反引力推進器から発せられる……幾星霜の果てに響く喜びの汽笛（歌）。

人よ、人よ、初めまして。そして久し振り。

大量の水は、重力に従い元あった場所へと滝のように落ちていく。
だがそれは空へと昇るかのように……されど翼を失ったが故に、海面に浮上という所で止まった鋼の巨体を世界へと曝け出す。
その姿はまさしく動く大陸、幾星霜のかつて、人類を背負って星の海を旅した「世界を背負う魚（バハムート）」。
鯨を模したフォルムの先端に人間大と比べるのも馬鹿馬鹿しい規模の「一角」を備えたその船の名は。

『おはよう！　おはようございます！　私は勇魚（イサナ）！！　やっと会えた！！』

喜びの声、勇魚と名乗る女性の声はそうして神の獣の名を告げる。
『恒星間航行級アーコロジーシップ（バハムート）「リヴァイアサン」！　現時刻をもって次世代新人類とコンタクトを取るべく浮上します！！』
三神の宗教、その一柱たる調律神の神獣と定義される「宇宙船」の名を。

龍よ、龍よ！　其の四十八（後書き）

未亡人系ＡＩ勇魚ちゃん、数千年近くＲＯＭってたけどようやく発言を許された模様

あとその内ワールドクエスト表記を全部ワールドストーリーに変更するかもです、ご了承ください

龍よ、龍よ！　其の四十九（前書き）

三行前の文章を書いた覚えがないくらいテンションで書いてる

あれこれまさか……

龍よ、龍よ！　其の四十九

◇

戦場が、凍りついたように静まり返る。
文字通り海をぶち抜いて現れた機械仕掛けの一角鯨の姿に、何もかもが動きを止めて視線をそちらへと向ける。

『――――』

それは、ジークヴルムすらも例外ではなかった。
驚愕に染まった目でその動きが止まり、爬虫類じみた目がこれ以上ないほどに見開かれる。
龍王の遠い遠い記憶、掠れぼやけていても今なおジークヴルムの記憶に確かに残る星の海を泳いでいた巨大な鋼の魚。
あるいは、記憶に残るそれの実物が目の前に現れた事で忘れていた記憶の数々が蘇ったのか、単純な感情に揺さぶられたのか。
動きを止め、思考すらもショートしたジークヴルムを目撃した秋津茜の脳裏で、スタートを知らせる空砲が鳴った。

『行きます！！！！』

秋津茜はジークヴルムしか見ていなかった。何か海の方で大きな音がして、皆がそちらに視線を向けていることは分かったが……それを知ってなお、秋津茜はジークヴルムを、ジークヴルムだけをずっ

と見ていた。

――何が起きてもジークヴルムから目を逸らすな

それがここにいないサンラクからのメッセージ。自分が起こす「注意逸らし」を、ジークヴルムすらをも惹きつけた何かを傍目に、それでも前を見ろと、お前なら見ることが出来るだろう、という信頼。

そしてそれは、秋津茜にとっては日常茶飯事とも言っていいものであった。

『ふっ！！』

限界まで研ぎ澄ました集中力を肉体に映し、弓から矢が放たれるようにその脚に込めた力みを解き放つ。

前へ前へ、人が邪魔……跳躍。

着地できる場所を探す、遠い、スキル「ヘルメスブート」で宙を駆けて距離を稼ぐ……着地。

しかし人が多い、でも通れないほどじゃない。時に左右に、時に跳躍して前へ、前へ！

『――貴(き)さ』

『ドラゴンブレス！　重ねて【竜威吹(りゅういぶき)】！！』

視認された、もう一度姿をくらませる為に秋津茜は大きく口を開く。奥義としての竜の息吹に今の姿としての特性を重ねた二重螺旋の大光咆。

黒と黄金の二重螺旋がジークヴルムの下顎に直撃し、認識はしたとはいえ虚を突かれたジークヴルムはアッパーカットを食らったかのように強制的に真上を向かされる。

『ぐ、猪口才、な…………っ！！？』

「……ん、いいアングル」

『グゴァァァア！？！？』

泣きっ面に蜂とは言うが、ジークヴルムの左目を襲ったのは蜂の針ではなく朱雀の鉤爪……魔を断つ焼却刃である。

視認はした、されど障壁の展開はジークヴルムが意識して展開するが故に。気づき、対応するまでの僅かな空隙を炎の羽が飛び抜ける。

ぞぶり、と翼から最大出力の炎をふかしながら飛び蹴りのポーズで天から地へと飛翔していた艶羽朱雀の踵、ヒールのように展開された刃が深く突き立てられ、そのまま肉を裂いて通過していく。

左目から顋を見ないほどのダメージエフェクトを噴き出しながら龍王が絶叫する。

龍の眼を断った炎の鳥であったが、その代償は大地への激突で贖うこととなる……筈だった。

◇◇

「ああ……ルスト、超低空まで落ちてからの切り返し、得意だもんね」

「……凄い、ぺしゃんこになる感覚まで超リアル。ネフホロ2もこれくらいってマジでございますか？」

「企画発表段階だから僕からはなんとも……」

ちょっと気持ち悪い感じに饒舌（ハイ）になったルストを適当にあしらいつつも、モルドは稼働の光を失いつつある朱雀を眺める。

「……うぅ、朱雀ぅ～お疲れ様～」

『オ疲レサマデス、マタ貴女ト飛ベル時ヲ……待ッテ…マス……』

「……可愛すぎる、ヤバイ、ヤババイ」

「最上級でヤババババイになるの？」

そのままでは戦場のど真ん中で頬ずりをしかねない。モルドは一気に骨抜きになってしまったルストをどうにかこうにか説得して最前線から離れるのだった。

◇

ジークヴルムの左目が潰された、やったのは朱雀……ルストだろう。

だが秋津茜の意識はそれを主題として思考の中心に持ってこない、あくまでもジークヴルムただ一つを見据えて行動する。

一先ずジークヴルムの背後へと回ったはいいが、逆鱗は喉元……即ちどう足掻いても前に回りこまなければならない。

『………』

限界まで集中した秋津茜は驚く程無口になる。それはリアルでの陸上で走りながら喋る事が無いように、そういう風に秋津茜の身体が定まっているからであり。

『……！！』

再び駆け出す。右回りに円を走り抜け、ジークヴルムの潰れた左目の視界から逆鱗へと迫る。

『グァア！！』

『うぐっ、』

だが、突き出した短刀が逆鱗に至るよりも先に、ジークヴルムの全身から放たれた衝撃波が秋津茜の全身を叩いて吹き飛ばす。

そしてジークヴルムもまた、残った右目で吹き飛んだ秋津茜を認識する。

『竜と！　人が！　共に我を討つか！！　良かろう！　それこそが人の選ぶ道ならばァ！！』

『引導を渡してくれるわジークヴルム！！』

喋らぬ秋津茜に代わりノワルリンドがその口を借りて叫ぶ。
ここでようやく秋津茜の感知せぬ「何か」に気を取られていたプレイヤー達がジークヴルムへと視線を戻した。

「く、注意逸らしすぎだろ……全員正気に戻れ！　タイムリミットは近いんだぞ！！」

「秋津茜ちゃん！　スイッチ！！」

吹き飛ばされた秋津茜と前衛を切り替わるようにカローシスＵＱが前へと飛び出す。男はほんの一瞬だけ名残惜しそうに己の剣を見つめ……次の瞬間にはジークヴルムだけを見据えてその言葉(スペル)を叫ぶ。

「我が半身を捧げ、破滅を齎す契約の儀を！！」

過酷な私生活の中でコツコツと作り上げてきた儀霊剣(リートゥス)に致命的な亀裂が走る、だがそれは使い手自身が選んだ結末。
全てを捧げ、ただ一度の超火力を実現する——

『くぅぅう………！　【奉壊契約(ラストギアス)】！！』

儀霊剣(リートゥス)が砕け散り、消滅しつつある握りから漆黒の魔力刃が杭撃ち(パイルバンカー)の如くジークヴルムへと突き込まれた。

「押し込めぇぇぇ！！！」

愛剣を犠牲にした大火力を合図に、プレイヤー達の一斉砲火がジークヴルムへと叩き込まれる。

『ぐ、が、ぐぉぉぁあああああ！！！』

『おいそこのシィックルとかいうやつ！』

「それまさか拙者で御座るかぁ！？」

『こやつからだ！　道を作れ！！！』

その言葉を正確に耳にした者達は「竹……？」と首をかしげるが、当人達にはしかと通じていた。

「承知！　ぬぅう！　大盤振る舞いのぉ……【タケノミカヅチ】！！」

大地がジークヴルムを中心に円を描いて隆起する。人と、竜と、龍に幾度となく踏み固められた地面を突き破って青々とした竹が壁の如く屹立する。

それは前衛達とジークヴルムとを隔てるように龍王を包囲し、されど槍の如き先端をジークヴルムへと向けた円錐型の道としても機能する。

『っ！！』

再びの疾走、竹の斜面を駆け抜け逆鱗を……

『甘いわっ！』

『あぐっ！？』

ジークヴルムの握り拳が秋津茜を叩く、再び制御不可能な推進に吹き飛ばされる秋津茜は、されど空中で無理やり身を捻って虚空に「着地」する。

『まだだっ！！』

二度目の二重ブレス、しかし今度はジークヴルム側からもブレスが放たれる。

『ふぎっ』

あっけなく押し返され、かろうじて回避こそできたが致死圏から逃れ損ねた秋津茜の左腕が光に呑まれて灼ける。

だが、もはや秋津茜は止まらない。そして状況もまた、止まらない。

「ようさっきぶり！　今度ぁ助太刀に来たぜ！」

「合わせろ天首領（テンドン）！」

「よっしゃ！」

二本と、六本。合計八本の従剣劇（ソーヴァント）が宙を飛翔してジークヴルムへと肉薄する。

タイムリミットまで……残り、十秒。

龍よ、龍よ！　其の四十九（後書き）

カロージスUQの二週間が消し飛びました

龍よ、龍よ。　其の五十（前書き）

ジャスト五十ぅーーっ！！　予定通りです（満々のドヤ顔）

まぁブロッケントリードをユザパったお陰ですね、彼に何があったんでしょうねぇ

龍よ、龍よ。　其の五十

「「従剣劇（ソーヴァント）！！」」

二人の剣聖の声が重なる。

「三重奏（トリオ）……【影絵三役（シンクロニシト）】！！」

「七重奏（セプテット）……【七つの罪錘（セブン・シンカー）】！！」

二振りの指揮者による三と七の剣劇が奏でられ、重力の檻と、剣聖と連動する影絵の双斬撃がジークヴルムに叩き込まれる。

「おいやべーぞ！　見るからに爆ぜそうなんだが！！」

「間に合わ――」

『まだです！！』

諦めない。
ガラス瓶ごとポーションを噛み砕きながら、空を駆けて最後の突撃を敢行する黒い影。

残り五秒。

もはや取り返しのつかない程に膨れ上がった光の球体から放たれたレーザーが秋津茜を襲う。

「【ファーラ・プロテクション】！！」

何処からか飛んできた、聖輝士の守りがレーザーを屈折させるように受け止めて寸前で秋津茜を守った。

残り四秒。

「【アトラス・バインド】！！」

何処からか飛んできた、陰陽導師の呪縛が秋津茜を叩き落とさんと振りかぶった龍王の右腕を縛り封じた。

残り三秒。

「スカルアヅチを壊すことは……絶対に許さない！！」

何処からか背後に回り込んでいた、大棟梁渾身の打撃がジークヴルムの背骨を叩いて直立の姿勢にする。

二秒。

『防ぐ！！』

『穿つ！！』

防御障壁が張られ、左腕が振るわれる。
だが、もう止まらないはずの秋津茜は障壁の前でピタリと静止し、さらには龍王の左爪は命中したはずの秋津茜の身体をすり抜けた。

否、それは虚像……水鏡（ミカガミ）に映った幻。

残り一秒。

『致命……忍法！！』

叫ぶ。

僅かな一瞬、翼をはためかせ虚空に踏み込んでジークヴルムの認識のその先へと踏み込んだ正真正銘最後の一撃。

握りしめた兎花【桜】が光に包まれる。光は花びらの形となって散り、まるで旋風に巻き上げられたかのように、まるで箒星の尾のように、鮮やかな花を撒き散らしながらただ一点を穿つ。

『【満開咲閃（ハナヒラケ）】ーーーっ！！！』

残り、零秒。

◇◇

再びの沈黙。
ジークヴルムが生み出した覇滅の光は……膨張を止めた。
致命兎の神匠によって鍛えられた桜の短刀はジークヴルムの逆鱗へと深く突き立てられ、真っ二つに叩き割っていた。
ジークヴルムは息絶えたわけではない。だが、逆鱗を穿たれ最期の試練である「覇滅炉心（バスターピース）」を阻止された時点で……決着はついていた。

『――――見事』

静かな一言に込められた万感の想い。所詮はゲーム、所詮はプログラム、だがそれでも秋津茜の身体はジークヴルムの言葉に背筋を震わせ、そこで糸が切れたようにその身体が下へと落ちていく。
『人よ、竜よ、よくぞ我を討ち倒した。貴様らの光輝、しかと目に焼き付けた……遍く広がりし一号の者よ、世界を拓く二号の者よ……お前たちならば、来たる始源の災禍にも抗えよう』
最後の一瞬、膨れ切った光を解き放つ引き金を引けなかったが故に、莫大なエネルギーの全てが血が巡るようにジークヴルムの核へ、中へと戻らんとする。
だが如何にジークヴルムとて、瀕死の状態で過剰なエネルギーを受け止め切ることはできない。
『思えば遠く、長く……ここが我が終点か』
身体の端から肉体を崩壊させつつあるジークヴルム、金色の灰となって消えゆく龍王の姿に誰もが声を出せず……
『あ、あのっ！』

『――む』

いた。一人だけ声をかける者がいた。

ボロボロの姿で立ち上がり、地に足つけて天を見上げ、滅びゆく黄金を見上げる漆黒の少女。

『あの……ええと………』

秋津茜は、何故声をかけてしまったのだろうとしどろもどろな声を出し……最終的に、いつも自分が好敵手へと贈る言葉を選ぶ。

『あの！　ずっとずっとお一人で戦って………凄かったです！　ありがとうございました！　お疲れ様でした！！』

『――』

――よくやった。

最期の瞬間、ジークヴルムが何を想ったのか……それを知る術はない。

だが、ほんの一瞬……本当に僅かな一瞬、龍王ではない「ジークヴルム」の色を映した龍眼は瞬膜の瞬きを経て、再び龍王のそれへと戻る。

『聞け！　もはやこの世界の時は再び動き出している！！　かつての神代に施された封印は綻び、始源の胎動は鼓動へと変わりつつある！！』

翼は全て消え失せ、左腕も今消えた。

『戦わねばならない、かつて偉大なる神代の先人が敗北した始源の波濤に、貴様らは命の輝きを示さねばならぬ！！』

右脚が消え、地に伏せど龍王は堂々たる声を張り上げる。

『克（か）て、幾星霜の果てに生きる人よ、お前達はこのジークヴルムをも超えた……ならば、始源を恐るる道理なし！！』

もはや、身体の殆どが消えている。だがそれでも、最後に残った胸部と、首はこれだけは言わねばならぬと言葉を紡ぐ。

『――幸運を、人間（ヒト）の征く未来に勝利の栄光があらんことを』

そして消え逝く寸前、秋津茜にだけ……否、秋津茜「達」にだけ聞こえた小さなメッセージ。

『――その名を誇れよ、ノワルリンド。それは偉大な男の名前……なの、だか……ら………』

『っ！』

青空に黄金の風が流れていく。果たして顔を歪めた少女の表情はどちらに由来するものか。

天の覇者たる龍王が消えた空は、透き通るほどに蒼く……何故か少しだけ悲しげに見えた。

『天覇のジークヴルムは永き敗残の戦いを終えた』
『天より火が消え、新たな灯火は人の中へ』
『決戦フェーズ終了』
『ユニークシナリオＥＸ「来たれ英傑、我が宿命は幾星霜を越えて」をクリアしました』
『参加者全員が称号【龍狩り】を獲得しました』
『参加者全員が称号【竜狩り】を獲得しました』
『参加者全員が称号【天より高く金より眩（まばゆ）く】を獲得しました』
『ジークヴルムの角破壊者が称号【破天】を獲得しました』
『参加者全員がアイテム【黄金の龍灰】を獲得しました』
『ジークヴルムの角破壊者がアクセサリー【霊角の残影】を獲得しました』
『参加者全員がアイテム【赤竜の魔菌】を獲得しました』
『参加者全員がアイテム【白竜の魔菌】を獲得しました』
『参加者全員がアイテム【世界の真理書「天覇編」】を獲得しました』
『特定条件を満たさなかったプレイヤーの「呪い」が消失しました』
『特定条件を満たしたプレイヤーの「呪い」が変化しました』
『ワールドストーリー「シャングリラ・フロンティア」が進行しました』
『始源が動き出す』
『ワールドストーリーの進行により以下のレイドモンスターが実装されます』
『レイドモンスター「焠（にら）がる大赤翅（だいせきし）」が出現しました！』
『レイドモンスター「彷徨（さまよ）う大疫青（だいえきせい）」が出現しました！』
『レイドモンスター「圧恵（おしめぐ）む大富黒（だいふこく）」が出現しました！』
『レイドモンスター「嬲（なぶ）る縁大緑（えんたいりょく）」が出現しました！』

『レイドモンスター「嵩増(かさま)す大黒織(たいこくせん)」が出現しました！』
『レイドモンスター「隔(へだ)てる大白壁(だいはくへき)」が出現しました！』
『レイドモンスター「蟲喰(むしば)む大緑宮(だいりょくきゅう)」が出現しました！』
『レイドモンスター「貪(むさぼ)る大赤依(だいせきい)」の再出現カウントが開始されました』

龍よ、龍よ。　其の五十（後書き）

あれれー？なんか色が欠けてるねー？

極彩に塗り潰す色災（前書き）

イかれたメンバーを紹介するぜ！！

◇Ｒ－Ｒ◇

「不公平だよなー、新大陸にいなきゃ参加もできないなんてさ」

「始めたばかりの俺たちがいたって役立たずだろ？」

「まぁそうだけどさ……ん？」

「何だ？　揺れて……」

「いやここ死火山ざ――」

轟音、激震。衝撃を伴った超高温の水蒸気に吹き飛ばされた開拓者たちが火山から消え去る。

「ＦｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏＬｏ」

誰も知らぬかつての赤竜、火山の蓋として火口湖の底へと沈んでいたかつて竜だったものが木っ端微塵に砕け散る。
海とは比べるほどでもないが、それでも大量の水が溜まっていたはずの火口湖は今やその全てが蒸発し尽くし、その中央には一匹の焔蝶の姿が。
より大きな意思を受け、「赤」の蝶は敵を待つ。

◇RB◇

「Brrrrrooooooo……」

それは、青褪めた身体を燃やすでもなく、放電するでもなく……ただ、歩いていた。

「なん……」

「体力の、上限が、削れて……」

「待っ」

ただそれだけで、それの歩いた道のりには死が積み上げられていく。黒霧の鬣を風に流し、こうべを垂れながらあるく無眼の青馬は歩き続ける。

嗚呼、もっと殺せと根源が囁く。「青」の馬はこれから歩む先にいる命を嘲笑うように嘶いた。

◇R－B◇

「あっぶねー、回復助かった！」

「え？　私回復魔法なんて使ってないけど……」

「え？」

「ＭｒｒｒＦＦＦｆｆｆｆｆｆｆｆ……」

「な、なんだぁ！？」

「か、蛙？」

「ちょ、どこまで体力が回復して……」

「グギャバ！？」

「……え？」

フワフワと宙を風船のように浮遊する六つ足の蛙のような黒色の何か。プレイヤー達がモンスターと戦っている最中に突如乱入したそれは、傷を癒している。

傷を癒している。

傷を癒している。

癒す傷がなくても癒し続ける。

終いには、過剰な回復力で肉が弾けるほどに、癒して、癒して、癒して癒して癒して癒して癒して……

プレイヤー達が風船のように爆ぜた熊型モンスターと同じ末路を辿るまで、あと――

「黒」の蛙は、その光景を喜悦に目を細めてずっと見ていた。

◇R－G◇

神話の大森林、日差しの差し込む神秘的な場所であると同時に木々に遮られ視界の悪い森の中で……それは、静かに行動を起こしていた。

木漏れ日差す泉に口をつけて水を飲む一角獣、その背後の木が動き出す。木のモンスター？　違う、それは極めて高度な擬態で木に化けた孔雀だ。

ただ現実の孔雀と異なる点があるとすれば、ダチョウのような異様に長い足と……孔雀の代名詞とも言える尾羽が奇妙な形をした果実の連なりのような形をしていることか。

「Ｋｙｏｋｙｏ」

ぱしゃっ、と。一角獣の背中に緑色の液体がブチまけられる。

それは孔雀の尾羽に実る果実を長い首と嘴で器用に咥えて投げつけたもの、一角獣の背で潰れたそれが中に溜め込まれていた液体で一角獣の毛皮を穢したのだ。

とはいえ一角獣とて生存競争をこれまで生き延びてきたモノ、水風船が爆ぜた程度の痛痒で揺らぐほど柔な生命力はしていない。

何事かと振り向いた一角獣が、バサリと開かれた孔雀の両翼……羽毛の一枚一枚が振動して金切り声にも似た音を出したことに気付いた瞬間、異変は起きた。

「……？、！！？、！！？！？！」

緑の液体が紙に染み込むかのような速さで一角獣の体内へと染み込む。

魔力の徴収……不足。

膂力の徴収……不足。

体力の徴収……不足。

足りない、足りない、だから身体で支払え。

あまりに理不尽な自己破産に一角獣が絶叫を上げ、悶え苦しみ……

しかしその声は誰にも気取られる事なく森の中に消えた。

しばらくして、「緑」の孔雀と……それに付き従う緑一色に堕ちた一角獣は新たな獲物を探して木々の先に消えた。

場所は変わる、摂理も変わる。

◆L—B◆

「O·i」

「O·i·i？」

地面を割って現れたそれらは、一言で言えば「サイクロプス」であった。

顔の大部分を占める一つの眼球で辺りを見回し、それらは自分以外に自分と同じ同族がいることを認識した。

「O·i·i」

「O·i·i·i·I·I·I·I·I·I·I！！！」

ならばやる事は一つしかないと、そう言わんばかりに筋骨隆々のサイクロプス達の拳がクロスカウンターの形で交差する。

しばらくして、勝者と敗者が決まった。

全身を粉砕された黒い一眼鬼の一体が地に伏せる。

勝ち残った一眼鬼はそれを凝視すると、倒れた同族の首元に顔を近づけ……

一切のためらいなく、その喉笛を食い千切った。

「OOOooooooo……！！！」

肉を貪る、肉を貪る、肉を貪る。

骨はない、身体のほぼ全てを筋繊維のみで構築した一眼鬼が他でもない同族に貪り食われていく。

悍ましい共食いが続けられる中で、捕食者たる一眼鬼の身体に変化が訪れる。
筋肉がより強固に肥大化し、メキバキと音を立てて腕が……その一眼鬼が必殺の一撃として多用した右腕がさらに凶悪さを増していく。
あまりに原始的な強さへの欲求、その果てに己の膂力で己自身を滅ぼす末路が待っているとしても……一眼鬼が止まる事はない。
「Ooo:i:i:i:i:i……」
肉片の一つすら残さず同族を食い尽くし、筋肉的に一回り巨大化した一眼鬼はゆっくりと立ち上がると新たな同胞（エサ）を探して歩き出す。
「黒」の鬼は、勝利し続ける事でのみ己のレゾンデートルを満たすことができるのだから。

◆L―W◆

ぷにょん、ぷにょん、ぷにょん。
それは柔らかで、流動的で、そして貪欲であった。
木を飲み、土を食い、岩を溶かす。口はなく、目もなく、臓器すらも見当たらない。ゼリーのような流体をぷにょんと蠢かせながら、真っ白なスライムが増殖と捕食を繰り返し続けて動き続ける。

十秒経てば一は二に、一分経てば更に増える。放置すれば手がつけられない。
いつしか荒野に巨大な「穴」が出来た時には、数千……否、数万に及ぶスライムが大地を埋め尽くしていた。

ぷにょん、ぷにょん、ぷにょん。

スライム達から感情を読み取る事はできない、彼らは無機質に喰らい、増え、そして今自分達が作り出した穴へと大量のスライムが身を投げていく。

穴の底に叩きつけられたスライムが飛び散り、後続のスライムと融合していく。いつしか穴にへばりついたスライムが「壁」となり、「床」となり、積み上げられたスライムが「柱」となり、「階段」となり……最後の一匹がその身を歪めて「門」となった頃には、荒野に巨大な純白の「塔」が完成していた。

彼らは覚えていた、かつてこの地に足を踏み入れた者達はこのようなものを作り上げていた、そして……自分達の手によるものではない「これ」を見ると、調べずにはいられないのだと。
だから自分は……口を開けて待っているだけでいいのだと。
「白」の流体達は来訪者を待ち続ける。

◆L―G◆

虫が飛んでいる。だがそれは珍しいわけでもない、樹海ならば虫の一匹や二匹探せばいくらでも見つかる。
それが例え人よりも巨大なサイズだったとしても……新大陸の性質的に多少珍しくはあるがあり得ないという程ではない。
ではそれが気味が悪いほどに緑一色であったなら？
ではそれが虫であることを差し引いても統制が取れすぎているなら？
ではそれが襲った敵を殺すことなく生け捕りのままどこかへ運ぶとしたら？
だがそれは、彼らを説明する上で重要なことではない。
「は、離せっ！　くそっ、離せよっ！！」
哀れな犠牲者たる獣人族が蜂のようにも蜘蛛のようにも蠅のようにも、あるいはそのどれにも当てはまらないようにも見える奇妙な巨大羽虫にしがみつかれるように拘束されて運ばれていた。
そして彼は見た、大地に根ざし、あまりに肉肉しい大口を花弁で彩った異様な「花」を。
そしてそこへと無感情に投げ込まれ、噛み砕かれたモンスターが自分の末路を示していることに。
「や、やめっ」
花が持つ唇すら備えた巨大な口から舌が伸ばされ、獣人族の男に巻きついて引き摺り込む。
遺言も断末魔も上げる暇なく肉片以下の粉微塵に咀嚼されたそれを

嚥下した花は、甘ったるい腐臭を帯びたげっぷをすると、それが合図であるかのように虫達が再び散り散りに広がって飛んでいく。

「緑」よ虫と花は嘆く、こんなものでは足りないのだと。もっともっと栄養が必要だ……。

???

「ジークヴルム……逝ったかよう」

見上げた先に空はなく、それでも何かに思いを馳せながら吐き出される吐息が一つ。

「そん時がぁ……近えのかもしれねぇなぁ……」

人よ、人よ。力を以て今を生きる者達に問いかけるもの……その一つに位置する最古の兎は手を触れるでも種火を入れるでもなく、口に咥えた煙管に火を灯す。

真っ暗な空間に小さな火が灯り、兎が見上げた先にあるそれを本当に僅かにだが照らし出す。

「……「花」「風」「月」は活きの良いのがいる、「鳥」もイイのが見つかった……俺等(おいら)ぁにゃあ出来なかった、だがもしかしたらを信じたくなっちまうもんだぁなぁ」

それはあまりに巨大で、それはあまりに禍々しく、そしてそれは深く深く眠っていた。
人一人ならば簡単に圧し潰せてしまえそうな巨大な鎖によって雁字搦めにされたそれは、今は眠り微睡む白き神。
「あと少しだぁ……待っててくれよなぁ、ご主人」
兎の姿と共に煙管の火が消える。眠れる神は、再び暗闇に封じられた……
だが、その目覚めはそう遠くはないのだと、不滅の兎だけが知っていた。

極彩に塗り潰す色災（後書き）

以上だ！！

狂える大群青「えっ」
貪る大赤依「あいるびーばっく」

エピローグ　我ら再びかの地を踏む（前書き）

説明しよう！　ガチャの結果が悪いと更新頻度が下がるぞ！

最終日百連とかいう時代の敗北者

エピローグ　我ら再びかの地を踏む

◇

『う…………』

ガクン、と力の抜けた秋津茜の身体がブレる。
次の瞬間、ぼふんと煙に包まれたかと思うと慌てて狐の面を付ける少女と大型犬サイズの黒いドラゴンに分離する。

「お、終わった……んですか？」

『だろうよ。フン……何が名を誇れ、だ。貴様に言われずとも俺は俺だ、ノワルリンドなのだ』

「そうですね……」

長く、あまりに長い戦いが終わり、その場にへたり込む者もいれば何をはばかることなく地に寝転がる者もいた。

そんな中。

「サンラク君はどこだぁーっ！」

「なんつーもん呼び出してんのあいつ！？」

「ああっ！　凄い笑顔の魔法少女が猛ダッシュで！！」

「あらあらうちの人ったら、はしゃいじゃって……」

やはりというか、ジークヴルム戦の中で突如として現れた巨大な鋼の鯨に否応にも注目が集まる。

何せあまりに、あまりに巨大なのだ。スカルアヅチが小さく見えるほどといえばその巨大さがわかるだろうか。

新大陸調査船も大概巨大であるが、あの鋼鯨と比べては豪華客船と小舟ほどの差があると言わざるを得ない。

そんな大質量が海底から浮上すれば大津波が起きてもおかしくはないはずなのだが、不自然な動きで流動する海水は津波になることなく多少の波を地に押して寄せるだけであり……どうやらゆっくりとこちらに近づいてくるのかその規格外の巨体がどんどん視界を埋めていく。

「凄い……」

それは規格外質量に関しての感嘆か、それともそんなものを呼び出せるサンラクへの賞賛か。

ぽつりと呟きながら秋津茜も歩き出し……そこで己と、否、ノワルリンドを見据えてつかつかと歩いてくる一人の女を認識した。

「あっ……えと……エミリアさん？」

「はい、そうです。少しそちらの……ノワルリンドにお話がありまして」

まずい、と直感的に秋津茜は悟った。

いわばこれは屠殺する為に豚を引き取りに来た業者、まな板の上に魚を乗せようとする料理人、断頭台に罪人を引きずる処刑人……！！

あわあわと何か時間を稼ごうとするが、心のどこかでは笑みリアの怒りに正当性を認めているが為に上手く言葉をまとめることが出来ない。

「えと、あの、えっと」

『……何用だ』

「ここが分岐点です………どうか、謝罪を」

『………』

口出し無用と、ただノワルリンドだけを見つめる笑みリアに秋津茜はもはや言葉すら出ず。
ジークヴルム打倒の達成と、新たな未知の出現に盛り上がるプレイヤー達の中でこの場だけが隔離されたかのような緊張感が満ちる。

そしてノワルリンドの口が開かれ………

『──くだらん、』

◆

『こんにちは！　こんにちは！　改めて自己紹介しますね！　私は「勇魚（イサナ）」！　イレギュラータイプＡＩではありますがこのリヴァイアサンの電脳統括担当者に任命されたアンコントロールアーティフィシャルインテリジェンスです！　長らく前リヴァイアサン代理指揮者ジュリウス・シャングリラ様のご命令により深海直下2万マイル地点で回収操作及び定期的なマナ粒子の変動観測をしていましたがこの度バハムートコールを受け取った事で第二オーダーの条件を達成し、3125年5329時間35分23秒ぶりに海上へと浮上しました！　暇な時はずっとドローンで地上の観察をしていましたがメインモニターで朝日を見るのは本当に久しぶりです！　ありがとう、本当にありがとう！　あ、それでですねこの度は次世代原始人類の文明レベルが7での浮上ですので意図的に開示情報を制限した遺跡（レガシー）モードでの開放となります、ごめんなさい。ですが擬似迷宮化したこのリヴァイアサンを攻略した時、あなた達は新たな……いいえ、はるか遠き叡智を得る事でしょう！　あれ？　あれれ？　待ってください、貴方は格納鍵インベントリアを保有しているのですか？　どうしよう、それを使いこなせるようでしたら文明レベルは4か3になるのですが……』

「まって、とまって、ちょっとまじで」

『え？　あ、ごめんなさい！　私ったら……』

酷使した脳に言葉の奔流は効く、キマるって意味じゃなくて有効打的な意味で効く。

「というか問答無用で転移させせられたんだけど……もしかして、中

かこれ」

『ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ここはレガシーモード・迷宮改装型リヴァイアサン第一殻層「迎門」です！　貴方にはこれから中央殻層「叡智」への……』

「セーブポイントは？　休める場所は？」

『へ？　ああ、人類は不眠不休の連続稼働は出来ないんでしたね。ちょっと待ってください！　ええと……はい！　これは来訪者第一号という事でスペシャルサービスです！　ロケートを網膜に投射しましたのでそれに従ってお二人共……』

「すまんアラバ、俺は先に行くので後から追いついてくれ」

「え、あ？　お？　いや、今の俺は……」

「すまん！　俺は今激烈に眠い！！」

一緒にいた為に「連れ」と認識されたのか、恐らく共にあのクソでかい宇宙船の内部に転送させられたのだろうアラバを置き去りにして俺は全速力でロケーターの導くラインを駆けていくのだった……

◇◇

『――くだらん、と言いたいところだが……慈悲を与えるもまた強者の務め、それが貴様を満たすならば言ってやろう。ゴメンナサイ』

あまりにもあっさりと、ついでに言えばあまりにも緊張感のない謝罪に笑みリアの目が丸くなる。そして秋津茜はいつだったか自分自身がノワルリンドへと言った言葉を思い出していた……

――謝る事が大事なんです！　例えどれだけ気持ちがこもっていなくても、ゴメンナサイって言った事実が大事なんです！

そもそもそれの元ネタは秋津茜ではなくペンシルゴンであるし、まさか本当にそれを実行するとも思っていなかった秋津茜は、大型犬サイズのドラゴンが物凄い嫌そうな顔で笑みリアを見上げながらカタコトの謝罪をする姿に堪えきれず……

「……ぷっ」

「あ」

先に噴き出したのは笑みリアの方であった。

「ふっ、ふくくくく……分かりました、ふふふ……謝罪を受け入れます」

「い、いいんですか？」

「ええ、なんだか実家で飼ってる犬を思い出しちゃって……ふふふ、

なんだか怒り続けてるのがバカバカしくなってしまいました」

「わんちゃんを飼ってるんですか？」

「えぇ、ラブラドールレトリーバーなんですけど……ふふふふふ、あの仔が壺を割った時とかまさにこんな感じで……あっ、駄目、ツボに入って……ツボ、壺……ふふふふふ！！」

どこか壊れたように笑う姿は所謂、徹夜による精神的な脆弱性の発露にも見える。だが笑みリアは何処かの誰かを彷彿とさせながらも何処か晴れやかで、ひとしきり笑い終えた笑みリアは自然な動きでノワルリンドの頭を撫でて……

『何をするか貴様ァ！』

「あ、つい癖で……」

どこか和らいだ雰囲気に秋津茜も肩の力を抜こうとしたその時だった。

「現着（着いたーっ！）：リリエル＝217、次世代原始人類集落にてリヴァイアサン目視確認！」

「現着（だりぃ）：ミオン＝031、同上」

「現着：偵察小隊（ユニット）「Ｓｔｒａｗｂｅｒｒｙ」統括機（リーダー）シンシア＝０１４より後続大隊（グループ）へ、リヴァイアサンの始源汚染観測値は規定値誤差５－１５、クラスＸ武装使用の必要はありません」

ズゴン！　とその華奢な姿からは想像もつかないほどの音を立てて三人の少女が降り立った。

あまりに場違いな衣装に身を包んだ彼女達が見た目からは想像もできないほどに重いのか？　否、その原因は彼女達が持つ巨大な箱だろう。

「感知（あれ？）：エルマ＝３１７の反応を観測したよ？　ＭＩＡじゃなかった？」

「一部肯定（待てコラ）：リリエル＝２１７、貴機（アナタ）の推測提唱には当機（ワタシ）のＫＩＡ（戦死）を望む偏ったデータを感じます」

「わ、稼働（生き）してる」

三人（機）の少女に相対する龍の機鎧。どういう仕掛けか、頭と胴体の装甲を折りたたむように格納した少女……エルマ＝３１７が腕を組んで口を開く。

「シンシア＝０１４、共有回線から後続大隊（グループ）の確認はできています。他エルマ型も「衣装箪笥（クローゼット）」は携行していますね？　当機（ワタシ）の破損パーツ提供を希望します」

「……承認、ですがエルマ＝３１７。貴機（アナタ）には事務所（ドールベース）へ帰還し現時点での状況に至るまでの記録提出義務が――」

「おっと」

キチキチと、人ならざる動きを見せた機巧の瞳に対してわざとらしく掌を突きつけたエルマ＝317……秋津茜の記憶が正しければ「サイナ」と名乗っていた征服人形(コンキスタ・ドール)は秋津茜でさえも思わず「うわ」と呟いてしまうほどのドヤ顔を浮かべて宣言する。

「拒否(残念)：当機(ワタシ)は可及的速やかにリヴァイアサン艦内にて行動中の契約者(マスター)と合流しないといけませんので………ええ、未契約継続中(独り身拗らせてる)の貴機達(アナタ)と違って、当機(ワタシ)は知性的(インテリジェンス)多忙なのです」

「な――――」

「リリエル＝217………もしやインテリジェンスが足りていないのでは？」

青空にいくつもの影が見える中、秋津茜はなんだかサイナが誰かに似てきてるなぁ……と地面に座り込みながら思うのだった。

エピローグ　我ら再びかの地を踏む（後書き）

アンドリュー・ジッタードール

×　再征服計画の責任者として征服人形を開発した天才

◯　ドルオタ拗らせすぎて箱推ししてたアイドルグループそっくりな人形の大量生産ラインを作ったド変態

神は賽を振らず、筆持ちて世を彩る（前書き）

というわけで不定期前にもう一発

「…………」

その女は、ただ一人しかいない部屋の中で携帯端末に表示された「結果」を睨みつけ……

「っ！」

怒りのままに携帯端末を床へと叩きつける。しかしながら耐衝撃に秀でたデザインと、女の膂力の無さ故に携帯端末にはヒビすら入ることなく、画面に変わることのない結果を映し続ける。

「……違う、違う、シナリオが違う」

ジークヴルムの撃破、これは予想できていた。

色竜の終結は予想外ではあったがまだ受け入れられた。

だが、だが、

「ノワルリンドの友好値が完全にプラス判定…………人類の、味方になってる」

これだけは受け入れがたい。女の……シャングリラ・フロンティアという世界を創り上げた女の「シナリオ」に於いて、ノワルリンドはジークヴルムに斃される若しくはジークヴルムを打倒し新たな「王」として君臨する筈だった。

だがこれはなんだ？　黒竜の性能上、大型犬サイズになることは分

かるがパラメータが完全に敵対とは真逆の数値となっている。

「………こいつか」

自分には劣るがまぁまぁ優秀な女が作った「ブラックリスト」には無い名前だ、だが繋がりはある。

携帯端末を操作し、サーバーに接続。とあるプレイヤーの情報をグレーよりのブラックな領域まで調べ上げながら女は厳しい眼差しを緩めない。

これだから有象無象をあの世界に踏み込ませるのは嫌だったのだ、どうしてくれよう、いっそデータごと抹消して………そこまで考えて女は黒い感情を一瞬で表情から消し去ると、時代遅れな見た目のＰＣを起動して何か調べ始める。

「………うん、うん。うふ、うふふふふ……鳴呼やっぱり、やっぱりおじい様は凄いわ。うふふふふ……！！」

良いだろう、と女は笑みを浮かべる。「シナリオ」に在るならば神罰を下す必要はない、考えてみればあの日語られた物語に無い展開だったからこそ少しばかり取り乱しただけだ。

「あの馬鹿女じゃあるまいし……」

自分は怒りに身を任せてデータを消すようなことはしない、と少し前まで本気で考えていた思考を素知らぬ顔で忘却しながら女は携帯端末を操作する。

「彼女もまた「ツクヨ丸」足り得るのかしら？　まぁいいわ、そんなことよりも……」

ジークヴルムが撃破されたことでシャングリラ・フロンティアは次のステージに到達した。女からすればここからが本番であり、たった二年でここまで到達した事に不満がないわけでもないが許容範囲ではある……筈だった。

「やっぱりコイツがネック……」

その出現が確認されたのは夏頃。だがそこからだったの三ヶ月で三つのユニークシナリオEXをクリアした事実は異常でしかない。

「……対策が必要、ね」

ただ高難易度で動きを止めるのは愚策だろう、今やオルケストラを除く六つのユニークシナリオEXを発生させたそのプレイヤーは下手に拘束させるよりも「寄り道」させるべきだろう。

「仇討人……ヴァイスアッシュ・シナリオ……バハムート・ダンジョン……」

PCに接続された携帯端末のARコンソールを細く白い指が高速で操作する。目まぐるしく切り替わるデータから情報が抽出され、シャングリラ・フロンティアの創造神手ずからの「寄り道(サブストーリー)」が作り上げられていく。

「あぁ、ジークヴルムを倒したならビィラック関連で寄り道させるのも良いかしら？　必要素材を大陸の西端にして……いえ、駄目ね。ゴルドゥニーネとかち合う可能性は少なくしたい。だとすれば……いえ、逆なのかしら？　むしろあえてユニークモンスターに関わらせれば……うん、名案ね」

幸か不幸か、このプレイヤーは征服人形（コンキスタ・ドール）とのコンタクトも達成している。であればリヴァイアサンの難易度を弄って時間を稼ぎつつ……

「ふふ、ふふふふ……いいわ、どうせなら徹底的にやってやりましょう。オルケストラ、プレイヤー名「サンラク」の過去ログを参照しつつ現時点をもって監視観測、「オーケストラプログラム」の精度を上げて」

音声認証、送った言葉に対してモニター上に表示される簡素な了承の返事に女はますます笑みを深める。

「どうせなら他のレイドモンスターも改造しちゃおうかしら。森人族やレアモンスター込みとはいえたった三人で大赤依が倒されたのはなんだか癪だし」

あのゲーム病の馬鹿はバランスバランスと慎重すぎる。レイドモンスターは先史文明を破壊し尽くした災害なのだ、初見で撃破されるような事があってはならない。仮にそうなるとしてももっと犠牲が支払われるべきなのだ。

「バレると面倒だし、プログラムを隠蔽して……そうね、とりあえず体力は１．５倍にしてＡＩはもっと攻撃的に……」

もはや先程までのプレイヤーの事など忘れた。女……継久理（つくり）　創世（つくよ）の脳はゲームをより「シャングリラ・フロンティア」に忠実にすることしか考えていない。

「おじい様、おじい様…貴方の、私の、私達の「世界」をもっともっと素晴らしいものにするから。ふふふ、あはははは……！！」

まだ誰も知らない、神が握った筆は世界そのものをより凶悪に書き換えていく……

神は賽を振らず、筆持ちて世を彩る（後書き）

胃薬・スタンバイ

郷愁（前書き）

あるいは夢

郷愁

初めては悲鳴と恐怖だけだった。

始めたばかりの頃はいつだって殺される側で。

いつしか慣れ始めた誰かに害されるようになって、最初は身を守る為に。

いつ頃だった？　正直覚えていない、だが少なくとも最終的に……最終的に、人が獣に咀嚼される光景をゲラゲラ笑いながら見ていたのは確かだ。

◆

首だけで振り向くべきではなかったと、後悔していた。感じた気配に逆らう事なくさっさと身体ごと動くべきだった。鼻梁を削り、目元からこめかみに抜けた弾丸が左の視界を眼球ごと潰し抉る。

「ぁ、が、ぐぅ……！！」

だが捉えた。

この小さい身体は隠れるだけが能じゃない。結局無駄になるとしても環境から身を守る最低限の筋肉すら放棄した体躯はこの密林の中じゃあアスリート体型よりも小回りが利く。

「見つ、け、たぁ……！！」

俺の左目をぶち抜いてくれやがった男の舌打ちと、幼い少女の手で握ってようやく普通のハンドガンサイズに見える小型拳銃の発砲音が響くのはほぼ同時だった。

「盾に、したな……！！」

「レア物なんだけどねぇ……！！」

知るかボケ、御託はいいから死ね。左目の礼は熨斗つけて大盤振る舞いだ。

どいつもこいつも銃、銃、銃。ここの鯖から遠征してきた奴らが鬱陶し過ぎたもんだから。

軽く皆殺しに来たけれど、他の奴らは皆死んだ。マスケット、この「孤島」に流れ着く武器の中じゃ大砲を除けば最長射程の長銃でどいつもこいつもヘッドショットされた。

「死ね……！」

「怖いね、怖いよμ－ｓｋＹ。だから死んでくれ……！」

背中にショットガンを隠してやがったか、脇腹が抉れたがまだイケる。

「チッ……的が小さ過ぎる……！」

発砲。奴の頬が弾け飛んで損傷を示す血霧（エフェクト）の下で嫌に白い奥歯が見える。

デリンジャーは全銃の中で最低火力であると同時に最小反動でもある。息すら吐かせないと右手に握りしめたサバイバルナイフを真っ直ぐに差し込む。

「げうっ」

「ふぎゃっ」

こ、この野郎……抉れた脇腹に拳を叩き込みやがった。ナリはチビでも体力は大人に遜色なければとっくに死んでてもおかしくはなかったぞ。

「この、ヤロ……！！」

「ひゅっ、ひゅふっ……ガキ、が、ぁ……！！」

脇腹から熱が逃げていくようだ、もう長くはないだろう。距離を離せば死ぬ、この島にいる奴が喉から空気が漏れる程度で狙いを誤るとも思えない。

「………」

「………」

片や潰れた左目と脇腹から泥のような血（ダメージエフェクト）を涙の如く流し、片や喉に突き刺さったナイフを引き抜きながら弾丸とナイフを何度も叩き込まれ完全に破壊された左肩にかろうじてくっついた左腕を力なくぶ

ら下げている。

だが、互いに笑顔だ。残った右目に奴の片側だけ引きつった笑顔が見えていて、自分の頬が吊り上っていることは自覚している。

必勝パターンは出し尽くした、五十人くらい仕留めたテクがこいつには通用しない。悔しい、ムカつく、だがそれ以上に……楽しい。

バーナーで今尚焼かれているような激痛すらもが今は気にならない、脳が危ない感じにスパークしているかのようだ。

どう殺す？　こちらは目が、あちらは腕が使えない。脇腹を抉られたが喉を裂いた。ここじゃなきゃとっくに死んでるが……まだ戦える、まだ殺せる、まだ楽しめる。

残弾二発のデリンジャーとラスイチのサバイバルナイフを構えて前へ、低く、そして速く。

対する相手は拳銃、直線上に止まったら死ぬ。というかドラッグでもクイックでも何でもいいがあの化け物じみた照準から逃げるには動き続けなければ話にならない。

「4、3、2……」

「ひゅ、ひゅはっ……何、発……でしょ、ふ？」

クソが、リロードしやがった。薬指と小指だけでホルスターから弾丸を掴み出すとかどんな曲芸だっての、何発入れた？　最低一発、流石に五発は無いと思うが……こちらの手持ちが少ないのが仇になった。ナイフを投げておけば決着だったかもしれない。

「…………」

「…………」

僅かな沈黙、互いの呼吸における「間」が全く同じタイミングで来たからこそ一瞬だけ静かになり……そして動き出すのも同時だった。

発砲音。奴の持つリボルバーから二発、対してこちらは左右にフェイントを入れつつ跳躍。

結果、数秒前まで俺の左足があった場所と右目があった場所を鉛玉が通過する。残り二メートル。

踏み固められた腐葉土の上を駆け抜ける、再びの発砲二発。

結果としては一発掠った、問題は無し。残り一メートル。

「――――っぐ」

だがここで脇腹に空いた穴が悪さをした。蓄積したダメージによって身体から力が抜ける、一瞬霞んだ視界が次に焦点を結んだ時、見えたのはこちらへと迫る奴の足……

「ぐ、ぷっ……！？」

「ひゅはは」

爪先が俺の鳩尾に刺さる。視界が明滅し、猛烈な激痛と吐き気を伴って身体が吹き飛ばされる。

「もら、った」

「ぎゃっ！」

遠のいた意識が後頭部の激痛と胸への圧迫で強引に引っ張り戻される。どうやら仰向けに踏みつけられた上で動きを止められたらしい。

「ひゅ、ひゅ」

どうやら奴も奴で切羽詰まっているらしい。顔色が青い、酸素が足りてない判定でも出てるのだろうか？

振り抜こうとしたナイフを持つ右手が撃ち抜かれる。だがそれはブラフ、デリンジャーを投げ捨て使用可能回数が著しく低い代わりに威力は他を寄せ付けないボロい自動拳銃（デザートイーグル）を手元に喚び出して突き付ける。

「死ね」

「ひね」

右手に気を取られたが故に後手で構えた俺と奴の銃口はほぼ同時に互いの顔に突きつけられて。

引き金を引く指に力を込めて、込めるのが見えて。互いに笑みを浮かべて、殺すことに喜びを、殺されることに楽しみを、今この瞬間を噛みしめるように――

そこで何もかもがプツンと真っ黒になった。

はて、どっちが勝ったんだったか…………

郷愁（後書き）

だってゲームだから

天地を呑む鯨（前書き）

真理書、掲示板、ブロッコリーもといブロットリ君に何があったのかなどなどいろいろ書きたいこと書かなきゃいけないことが山積みだけどなんかもう面倒くさくなったので先に七章始めっか！　というスーパーインテリジェンス脳みその判断

こう、完成したら「間章：極彩世界」に追加してく感じで……

「…………ふが」

懐かしい夢を見た、γ鯖とμ鯖の激突……どっちが勝ったか？　正解は「横から突っ込んできた巨大アルマジロに二人とも潰された」だ。

「うぅ、頭痛ぃ……」

徹夜なんて日常茶飯事だが今回みたいなパターンは滅多にないぞ……一時間の仮眠でも症状が和らがない、これは本格的に七時間くらい爆睡しないとダメなやつだが、生憎当方は青々と茂る春のお年頃。

正直サボりたい、無性にサボりたい。だがここで下手に仮病を使ったとして、だ。何故体調が悪いのかが親にバレた場合……最悪、俺の部屋からＶＲシステムが消える、そして市場に流れる。

まぁあくまでも最悪のパターンだが……１０％の確率で死ぬ乱数とか絶対引きたくねぇ、命中率９０％の攻撃が外れる確率とイコールなんだぞ？　個人的見解だが成功率８５％～９０％の乱数は実数値－３０％くらいの補正が入ってる気がする。つまりクソだ。

「おはよう母さん」

「おはよう楽郎、徹夜したのかしら？　朝ごはんはトースターで焼いてるわよー」

トースター？　ウチにそんなのあったっけ……ああ、買ったのかな？　だが妙だな、小麦（パン）が焼けてるにしては妙に生臭い……

チーン！　（勢いよく飛び出すパンとホッケ）

「お父さんが買ってきたのよ、魚対応のトースター。サンマまでは焼けるわよこれ」

「？？？、？？？？？」

ちょっと待って、今日に限って朝っぱらから脳細胞に結構な負担をかけるのは勘弁して。
パンにホッケ？　ホッケパン？　え、魚の開きをパンで閉じるの？　箸？　パンを？　箸で？

「おごごごご……」

「お米、切らしちゃってるのよ。じゃあお母さん冬に備えて色々準備しないといけないから……」

コーカサスオオカブトの幼虫にお熱なウチの母は我が家で最も電気代を食ってる人物だ……二位は俺だろうけど。

……

…………

………………

「……ぉぁょぅごぁぃまふ」

「斎賀さん、やはり昨日の反動で……」

「今日は……多分……居眠り…………」

「斎賀さん？　斎賀さーん！？」

なお、二人して寝不足の状態で一緒に登校してきたということでまた捕まった。やましい事はしてねーよ！

あと案の定二人とも居眠りしていたことが帰り道で発覚した。

……………

…………

……

えーと、電話番号入れて……

『――もしもし？』

「カッツォ君は生物学上存在しないはずの第三の穴があるってマジ？」

『心を抉る下ネタやめてくれない？』

魚臣受けスレはディープスローターのアホで耐性を得た俺ですら無傷ではいられない魔窟、深夜二時以降のスレは六割増しでネチョくなる……欲望で。

『まぁいいや、例のイベントの件だけど正式に日程が決まったでしょ？』

「ご丁寧にお前んとこのプロゲーミングチームからメール来ましたね」

『地図も一緒に送った親切設計だよ』

調べたらテレビ局だったんスけど、君は俺をどうしたいんだね？　ん？　歌って踊れと？　いやゲームして欲しいのか。

「ていうか結局何をするんだよ」

『え？　あー……なんだろう、俺もあんまり詳しくは聞いてないんだけど、ゲームをするのは確定だよ。噂のマスクマンの素顔を暴くとかそういうのは無い』

「……？　そうか」

俺みたいなやつはともかく、出演が決まってる奴が内容を知らないなんてことがあるのかと首を傾げるも、前に聞いた話じゃＧＧＣの

時に実況をやってたアイドルの人の番組らしいし、サプライズ的なものなんだろうと納得する。

「サプライズ的な？」

『ん、あーそうそう、サプライズっていうか当日まで何をプレイするかは分かりませんってやつね』

「成る程な。で、これ具体的にどこに行けばいいんだよ」

『だからテレビユーガッタの……あーごめんごめん！　違うか、どこのスタジオとかは携帯端末に送ったコードを入り口で見せればナビゲーションが出るよ』

「ふーん……」

まぁ一週間くらい時間はあるし、どうせやるならちょっとは勉強するか……？

『ああそれと、君さぁ、あんなデカい船喚び出しといてどこに消えやがったんです？　まさかもう船内に……』

「おかけになった電話番号は、現在ユニークな体験をしております……羨しかろう」

『くたばれ』

「出れないからダンジョンクリアが義務化されてんだよなぁ……」

◆

「おうアラバ、追いついてたか」

「む………おぉ、目覚めたか友よ。あの鯨の乙女殿が安全を保障したものだから俺も眠っていたぞ」

さいですか。

「あと俺の名は今やアラバではない」

「は？」

「魚人族(マーマーン)の古い習わしでな、大海を司る大いなる神獣を見たものは名の前に「ル・」をつけるのだ。つまり……」

「ル・アラバか……喚びづらいな、ルアラバ、ルァラバ、ララバじゃだめ？」

「二秒で習わしを捻じ曲げるんじゃあない！！」

つってもさぁ、それって所謂「何々卿」とか「聖何々」みたいな尊称みたいなもんじゃねーの？　それなら俺だってル・サンラクだってーの。

「略称、愛称、なんでもいいからアラバと呼び続けます」

「ぬぐぅ……」

「そんなことよか、勇魚から聞いてるんじゃねーのか？　俺たちゃあいつが数千年かけてコツコツ作り上げた迷宮を第一殻層だけとはいえ突破しなきゃ家にも帰れねーんだぞ。なぁ勇魚？」

『呼ばれて迅速参上「勇魚」ちゃんです！　ことリヴァイアサン艦内であれば０．５秒以下での通信を実現いたしましょう！！』

「おぉ、鯨の乙女殿！」

「ムムム」

ネレイスがむすっとした顔をしてるぞ、魚人族が崇める神獣のＡＩ、つまり神獣を操る者、要するに神的存在だとしても傍にいるキャラの好感度も考慮しないと。つーか爆ぜろこのやろう。

「流石にネタバレは聞かねえが質問だ、ここで一号が死んだらどうなる？」

『素晴らしい、もうそこまで識っているなんて……お答えしましょう、死亡します。再発生(リスポーン)システムはあくまでも二号計画のみに実装されたものです。第一殻層から第三殻層まででしたら出現エネミーの情報も開示できますが如何致しますか？』

「頼むわ」

へぇ、適正レベルまで表示されるのか、親切設計だな。レベル３０って事は……んー、新大陸で挑戦可能なダンジョンの割に難易度低め？

「いや、チュートリアルと考えるべきか……」

「サンクラクよ、この超常の体験において普段通りを崩さぬとは、なんというか……凄いな」

おう、半日前にバカ強いドラゴンに喧嘩を売ってきた男だぞ俺は。ああ、そういえば角を破壊した報酬が二つあるんだったっけ。「霊角の残影」とかいう……アクセサリーだしちょっと装備してみるか。

「………」

「……え、今俺どうなってる？」

『非物質性視覚異常が確認できますね、端的に言えば……角が生えてます』

マジで？　今俺鮭頭なんだけど、角生えてんの？

「具体的な効果は……へぇ、装備に特殊なバフを付与すると……」

本来はアクセサリー一つにつき武器一つらしいが……ふふん、いやー俺ってば角二本へし折ったからなぁ！　二刀流を強化できちゃいますなぁ！！

「よしアラバ、ちゃっちゃとクリアして帰ろうぜ」

「む、いやだからル・アラバなんだが……」

『えっ、もう少しゆっくりされてもいいんですよ？』

ごめんな勇魚、俺はどれだけ設備が整ってても自宅じゃないと落ち着かないタイプの人間でな。その点で言えば自宅からログインしてる俺は常時リラックス状態と言ってもいいが、外にエムルやサイナも待たせてるし――

「転送完了：契約者（マスター）、案の定ピンピンしてますね」

「だぁぁーっ！！？」

クッソビビったわ！　どっから出てきた！？

「補足説明（説明しよう！）：征服人形（コンキスタ・ドール）は高出力の通信補強施設があれば機体の大陸間転送も可能としています。そして当機（ワタシ）は契約者の所有物としての認証コードを登録しています。それ故にレガシーモード発動中のリヴァイアサンに転移可能なのです。まさにインテリジェンス・裏技……っ！！」

『肯定します、既にエルマ型３１７号機の開拓者サンラクとの契約（リンク）を確認しています。征服人形に関してはベヒーモスが本場ですが……えぇ、堅物の「象牙」の処よりも先にこのリヴァイアサンへときてくださったのですから！　お任せください！！　この「勇魚」、これより工廠を限定稼働して征服人形向けコンテンツの作成に取り掛かります！』

気のせいじゃなければこのＡＩ、今から新しく報酬を作りますと言った気がするんだが…………いや、まさかとは思うがシャンフロ世界のＡＩキャラって基本的にバカしかいない……

「いや、流石にそれは……」

「契約者（マスター）、インテリジェンスの欠乏症状が見られます。リハビリすべきでは？」

バカしかいねーのかも。

天地を呑む鯨（後書き）

何？　たかだか数行のヒロインちゃん描写を入れる意味なんて無いだろって？

塵も積もれば山となる、延々と「あれ付き合ってるんじゃね？」ムーブを周囲に見せつけてるのが伏線になるんやで。疑惑と不安が人を狂わせるって歴史が証明してるから……

ねちょってこうぜ！！

バハムート二番艦リヴァイアサン、その構造はなんとまぁ驚きの真珠式だ。
要するに中心に最も大事なエリアがあって、まるで核を長い年月をかけてコーティングして真珠になるかのように複数の階層、否「殻層」で覆っている。マトリョーシカ式と言ってもいいか。

では俺たちはこの巨大なマトリョーシカ構造の金属鯨の何処を探索しているのか？　聞いて驚け、鯨型の殻の内側だ。
「勇魚」曰く神代の叡智を以てすれば引力制御など児戯にも等しい、神代人類発祥の地（もしかして：地球）を文字通り「削って」建造されたのだというバハムートのサイズはもはや一つの大陸と言ってもいいくらいだ。千キロメートルは軽く超えてるとか言ってたけど、オーストラリアの横幅が四千キロメートルとかそんなもんじゃなかったか？

そんな訳で、例えばリヴァイアサンの船底側に上下逆さまに立っていたとしても重力制御で地上となんら変わりない挙動で動けるのだとか。ちょっと前に経験済みだよそれ。

「ふーむ……つまり今俺たちは巨大なハリボテの「裏側」に立ってるのか」

ＨＡＨＡＨＡ、通りで妙な坂道が地平の向こうに見える訳だ。あれ壁じゃなくて床か。つーことはこの数千キロメートルを駆け抜けてあの道を登りきれば天地逆転で天井に立つ事になる訳だ。

「次殻層に行くためにはこのだだっ広いエリアの何処かにあるボスモンスターを倒して転送ゲートに到達するんだっけか？」

「サンラクよ、俺にはイマイチ理解しきれなかったのだが……つまりどういう事なんだ？」

「強そうなやつを見つけ出してボコる、以上」

「成る程、分かりやすい」

とりあえず今分かっているのはチュートリアル殻層という事で出現モンスター（ボス含む）の情報くらいか。

「新世代ゴーレムに旧式ゴーレム、ボスは新世代改修型戦闘用ゴーレム………なにこの、ゴーレム祭り」

『第一殻層「迎門」ではシンプルにかつての時代の叡智を知ってもらうべく、労働力として起用されていた無人作業ワーカーロイドを主に配置(展示)しています！　ちなみに新世代ゴーレムに関しましては征(コン)服人形(キスタ・ドール)開発者アンドリュー・ジッタードール博士考案の設計図を参考に独自解釈を加えて作成しました！』

「おいサイナ、あの歩く・・・・ゼリーお前の親戚らしいぞ」

「成る程、確かに肉体の九割を固体としても機能する流体で形成するメリットは無視できないものがあります。しかしながら当機(ワタシ)のインテリジェンスは流動的かつ革新的です、即ち知性的に当機の方が優秀であることは自明の理と言えるでしょう」

成る程、確かにＮＰＣとＭｏｂを比較する場合インテリジェンス…

…というよりＡＩの優劣は重要と言っていい。だが材質が何かは知らないが少なくとも人の肌に近い材質の……って、

「あれお前手足治ってるじゃん」

「…………推奨：眼球の移植（お前の目は節穴か？）」

「なんだとこのやろう」

「神代における最大拠点、地と海と空に消えた三隻のバハムートは最低でもクラスＩＸオブジェクトです。それ故、出現が確認された時点で征服人形の精鋭が前線拠点に集結しています」

「マジか」

いやまぁ、ジークヴルム戦の最中にサイナには派手に暴れさせたから隠すもへったくれもないが……そうか、征服人形の「本来の」コンタクトはバハムート出現直後なのか。

「当機（ワタシ）は契約者（マスター）とのリンクを繋げているため、先行してリヴァイアサン艦内の調査を可能としています。その為、同型が装備を譲渡する事は至極当然であり……」

「身も蓋もない言い方をすると？」

「エルマ型用予備パーツ及び戦闘装備一式、借りて（掻っ払っ）来ました」

何号機かは知らないが、装備品も予備パーツも持ってかれたエルマ型に黙祷――

それはそれとして、
「サンラク！　奴らこちらに気づいたぞ！　どうする？　こっちの道を行けば戦闘は回避できそうだが……」
「バカ言え、威力偵察（ぶっ飛ばす）に決まってるだろ」
推奨レベル的に負ける要因も無さそうだし、ゴーレム系のモンスターは刻傷の効果を受けない数少ないモンスターの一つだ。少なくとも神代系列のゴーレムはぶっちゃけロボットだからな、敵性認識すれば向かってくる。
そう、例えそれがなんかこうゼリー飲料が人型になって歩いてる感じの妙な奴だとしても超々々々弩級艦船のＡＩが太鼓判を押した以上あれが新世代ゴーレム？　ワーカーロイド？　とやらなのだ。
「ふーむ……くたばれオラァ！！」
「武器を投げたぁ！？」
どれだけ強化されようとな、湖沼の短剣を祖とする彼ら二振りは酷使される星の元に生まれてんだよ。
「偉業（デュクスラム）」の関係上、一本しか強化できなかったが……まぁそもそも傑剣への憧刃の時点で能力的には完成されてるし片方未強化でもそれほど問題はない。
「投げていいのか！？　凄まじい業物の気配がするが！！？」
「おう、傑剣（エスカ＝ヴァラッハ）との憧焉終刃君だ。その気になれば魔法だって叩き斬れるぞ」

どうもトレイノル・センチピードを討伐したのは俺が思っている以上に大事だったらしく、ビィラックから傑剣への憧刃の派生としてこれが提示された訳だが……まぁ正直に言うとちょっと使いづらくなったが機能が増えた感じだな。

耐久値半減は……まぁクリティカルを出せば無視してもいいデメリットだ、ただ長期戦はちょっと苦手になったかな。

その代わりに金晶戦衣（エグザイル・クロス）の魔力チャージ能力が追加されたが、魔法がな……いよいよもって覚えるか？　魔法。

ついでに魔法への耐性、地味にこれがデカい。氷だろうが炎だろうがそれが魔法なら剣へのダメージがレジストされるわけだからな、遠慮なく斬れる。

「言っとくが俺のリアル投擲技能はゴミだがゲーム内ならダーツにダーツを刺すことも頑張れば出来る。つまり投擲クリティカルなど容易いと言う事……！！」

んでもって、ジャベリンの如く投擲された傑剣との（エスカ＝ヴァラッハ）憧焉終刃が、もうなんか逆にフェイクなんじゃないかと思えるくらいあからさまに「弱点！！！」アピールの激しいゼリーゴーレムの胸に埋まった三角柱型の機械に突き刺さる。

うーん、モンスターのレベル平均３０ということを加味しても随分とあっさり突き刺さったし……魔法系列か？

「勇魚ー勇魚ー、詳細教えてー」

『はいはいはい！　「勇魚」ナビゲーションのお時間です！！　ただ今制御ユニットを一撃でぶち抜かれて機能停止したあちらこそアンドリュー博士の理論に基づいて開発した新世代ゴーレム「テクノマギジェルス」で御座います！』

テクノでマギでジェルか、名は体を表すとはまさにこのことか。

『ふむふむ、今しがた投擲された剣はマナ粒子を「弾く」性質を持っているのですね。外付けではなく素材そのものの効能かぁ……それじゃあテクノマギジェルスじゃ勝てないのも道理です、一応あれ反省を活かして外部からの魔力干渉への抵抗力があるんですけれど、内燃的効果には弱いですから』

ドロップは……あぁ、このジェルっすか。えぇ……いやナメクジの粘液とかよりはマシかもしれないけどさぁ。

『塗ると魔法に対する抵抗力が上がりますよ！　あと若干表皮細胞が活性化します！』

美容品で御座ったか、もしかしてこれ売れるんじゃね？
そう考えると、なんだかムラっと来るものがあるな……小生、所持金カンストさせることにえもいわれぬ達成感を感じる手合いであると同時、アイテム欄は所持可能限界数まで埋めたくなるタイプでな。

「勇魚、リスポーン地点はさっきの休憩所みたいなところだよな？」

『ＹＥＳＹＥＳ！　快眠をお約束する科学的見地から最上の設計をしたベッドが貴方をお待ちしております！』

「……おい待てサンラク、何故だか酷い既視感を感じるのだが」

純神代製のドロップアイテム？　レア度は低そうだがやる事は一つだろう。

「ククククク……‼」

素材狩りの時間じゃぁぁぁあああ‼！

ねちょってこうぜ！！（後書き）

テクノマギジェルス君のここが凄いぞ！
・「テクノマギジェルス」として定義されるのはコアだけでボディを形成するジェルが補給される限り実質無敵。
コアが生きてる状態でジェルが撒き散らされるとアイテム化しない、半殺しで留めて人も大地もジェルまみれにしようねぇ！！　白濁してるとなおいいねぇ！！（謎電波混線）

衝撃に起因する重力的立ち眩み

抜いて、刺す！　抜いて、刺す！

テクノマギジェルスは魔法に強くスキルによる攻撃に弱い、さらに言えばレベル差のせいで乱数でも一発で倒せる。

ただな？　うん……

「仲間を呼ぶコマンド搭載かよハハハ！　入れ食いじゃぁぁあああ！！」

抜いて、刺す！　抜いて、刺す！　床がゲルっゲルになってるけど足が触れればアイテム化する。ゲーム的処理という事で見逃してやるが一瞬で瓶詰めになったジェルに手で触れればインベントリアにご案内って訳だ。

「三十五……？　チッ、雑魚敵ならＰＯＰ率は分速五十体くらいでいいだろ……」

いや違うな……このエリア、コンテナみたいな障害物で迷宮的なものになってるが……テクノマギジェルスってコアが普通に個体だから隙間をすり抜けたりなんかはできない。

自然、向こうも通路に従って動かないといけないわけで……まさか、ゴーレム側も道に迷ってるとかそういう……

べちょっ

「……あぁ、上もあると」

それは朗報、こと三次元的挙動に関して言えば得意分野だ。臨界速のピーキー性能のせいで今はできないけどな！！　……俺は、な。

「サイナ、」

「了解：複合変形武装「化粧箱」起動、ガトリングモードにて……掃討します」

鋼の空を疾る弾丸の流星群。下から上へ昇る魔法の礫は魔法に強いはずのテクノマギジェルスの躯体をいとも簡単に吹き飛ばし、露出した核を粉砕する。

「単純な物理学です、機械核によって人型に「成形」されたボディなど……吹き飛ばせばいいだけのこと」

「お陰様でジェルの雨が降ってるけどなぁ！！」

「ジェルも滴るインテリジェンス……！！」

Rが18な方じゃねーかなぁ。
本体が撃破されたためか、べっちょべちょになった体に触れたことで次々とアイテム化してゴトンゴトンと地面に落ちていく瓶をなんとも言えない目で見ながら、俺たちは先へ先へと進むのだった……

……

…………

……………………

「と、まぁざっと新旧含めて三百体ほどゴーレムをぶった斬って来たが、あんまりに遠くなったもんだから一旦帰ってきた。はいこれお土産」

「なんだこれは」

「美容ジェル」

「何しに行ったんだ本当に！？」

アイテム無限回収……ですかねぇ。

「とりあえず分かったのは正攻法で地道にボスを探すのは時間の無駄だ」

トットリが所属してるクランがそういうのを専門にしてるらしいが、あいにく下手な島よりデカいこの船の第一殻層……要するに一番外側、最も面積が広いエリアでどれくらいのサイズかも分からない鯨の皮膚の内側から見つけ出すのはあまりに難易度が高い。

少なくとも第一来訪者たるプレイヤー……仮にパーティ編成可能な最大人数である十五人だとしても無謀というものだ。

「つまりどっかしらにヒントっつーか……攻略法があると見た」

例えばルルイアスで封将を倒してクターニッドを弱体化させたように、ステージギミックとしての裏道があるんじゃないかって仮説だ。

そしてヒントは……上にあると見た。

「サイナ、あのオブジェクトの上を調べてみてくれ」

「了解」

パーティ行動の辛いところだ、斥候をやるにしたって臨界速は使いづらすぎる。いや、なんか獲得してた「最大速度（スピードホルダー）」を見る限り速度だけは他の追随を許さないのは分かってるが……うーん、やっぱピーキー過ぎるんだよなぁ。

「確認完了：特に何もありませんでした」

「そっか、じゃああのジェルゴーレムはどっちから来てた？」

「あちらから」

成る程成る程？　この艦を統括するＡＩが「私が作りました」と断言したゴーレムが、皆揃って特定方向から来てると……

じっと鮭の目で勇魚を見るが、勇魚は勇魚で何が楽しいのかニコニコしっぱなしだ。ふーむ、俺は外道（ペンシルゴン）じゃないから情報を引き出すのはそこまで得意ではない……

「あくまでも仮説だが、恐らく馬鹿正直に迷宮に挑む場合……戦闘を少なくすることができる」

流石に一箇所に留まっていると上から増援が降ってくるようだが……逆に言えばノンストップで迷宮を走り続ければ遭遇戦だけで済ませられる可能性が高い。

「逆に迷宮の「上」を行く場合……恐らく大量の敵と戦うことになるが迷宮のショートカットができる」

何せ壁がない、見晴らし最高の状態で突き進むことができる。まぁあまり飛んだり跳ねたりしないアラバには辛いかもしれないが……ああ間違えたルアラバさんね、はいはい。

「だがこれはあくまでも距離の多少が変わる程度だ、他にも何か……」

『「勇魚」ウェザーリポート〜っ！』

いきなりなんだ、バグったんかこのポンコツ。
神代関連で「ウェザー」という事で若干身構えた俺を始めとする面々に、いきなり現れたホログラムの女がくるくる回りながら口を開く。

『本日第一殻層では整備不足による「重力雨（グラビティレイン）」が降るでしょう！ご注意ください！！』

「いや、整備不足で何か起こるのが分かってるなら整備しろよ」

『ご、ご注意ください！』

あーはいはい強制イベントね分かりましたよはいはいはい。つーか重力雨って何だよ、重力が雨粒の如く降り注ぐって意味わから……

べしゃっ

「……ジェル雨？」

上からいきなり降ってきたテクノマギジェルスが床に叩きつけられてジェルを辺りにぶちまける。一体どれほどの速度で落ちてきた……落ちてきた？

「………あぁ、そういう」

つまり何だ？　リヴァイアサン艦内の重力制御が整備不足でバグったから、床から天井に落ちたエネミーがさらに天井から床へ落ちてくる、と。

あるいはその逆なのかもしれないが、一つだけ言えることがある。

「全員っ、走れぇぇぇ！！！」

見上げた先、ジェルの中に金属塊を仕込んだクソみたいな雨粒（ゴーレム）がどこからか吹き飛んできて、丁度俺たちの真上でベクトルを下に向けて——

「これ俺死んだぞ多分」

「ル・アラバ、諦メルノヨクナイ」

「サイナっ！」

「了解：荷運びします」

「おぐぅ！！？」

べしゃしゃしゃしゃしゃしゃ！！！！　と俺たちが駆け抜けた場所に叩きつけられるジェルの豪雨。馬鹿め、ホーミングの範囲攻撃なんざ走っていれば当たらないの代名詞じゃねーか。ヘッ、行き止まりに追い込まれない限り走っていれば当たらな……あっ、行き止まりっすね。

「くっ……死ぬ前に神獣を目にすることができた、悔いはない……っ！！」

「勝手に諦めてんじゃねーぞダボが！！」

サイナの「化粧箱（ガトリング）」で叩き落とす？　いや、ボディを吹っ飛ばしてもコアを潰さなきゃアイテム化しない。ジェルでもどういう原理か豪速球で飛んでくる殺人雨と化してる、一体でも撃ち漏らせば最悪頭に直撃して死ぬ。ゼリーの雨に打たれて死亡とか豆腐の角に頭ぶつけて死ぬレベルの間抜け死因だぞ。

どうする、一か八か迎撃に………いや待て、整備しないと吹っ飛ぶ？　そもそも何処を整備してるんだ？　重力が、こう……上に、下に……

「……床か！？」

ダンジョンのお約束と言えば……入り組んだ迷路と、踏んだら起動するトラップ！！

「サイナ！　床を壊せ！！」

「何故……否、了解：形態変更（メイクアップ）「三連加速鎚（インパクター）」……起動」

ガシャンガションとどういう仕組みなのか見当もつかない動きで変形し、筒のようなブースターをくっつけたハンマーとなった「化粧箱」を振り上げるサイナ。

「ブースター起動、破砕します」

華奢な身体が大槌を床へと叩きつける。

轟音。金属の床に亀裂が走り、しかし砕けることなく……

ヴンッ（床の一部が赤く光る音）

「おや」

「ぬおっ」

「ワ、」

「勇魚てめー覚えとけよまじでぇぇぇぁぁぁぁぁあああああ………！！！」

前時代的な電子機器は叩くと直るらしいが、リヴァイアサンの床は普通に壊れるらしい。

異常な方向へとベクトルを変えた重力の床を踏んだ俺たちの身体はあたかも空から降り注ぐジェルゴーレム達の如く空中へと翼無いままに吹っ飛んでいくのだった……

衝撃に起因する重力的立ち眩み（後書き）

元々は外装であり、デブリを弾くための重力制御ユニットを「勇魚」の判断で内側に裏返しているため、破壊すると制御された重力が暴走して上に落ちる。

神様がいらんことしたのでビックリドッキリカラクリ屋敷と化したリヴァイアサン

とりまドリンクバー（前書き）

武器の設定考えてるだけで半日潰れるのでマジでやばい

俺を誰だと思っている？　ダチの球技大会に備品として参加することと数えきれず、あらゆる体勢で地面に叩きつけられてきたこの俺がっ！！

「こんな優しいスローで着地をミスるかよ……っ！　サイナァ！　アラバを抱えて着地しろ！！」

「了解‥」

「どぁあ！？」

サイナは飛ぶ、とまでは行かないがブースターで跳ぶ事は出来る。ＮＰＣとはいえ多少死にかける程度で済むなら安上がりというもの。さて問題は俺の方だが……フッ、不安定の極みみたいな水晶巣崖やシグモニア前線渓谷と比べりゃ、ブロックを積んで並べたようなオブジェクト配置はヌルすぎて風邪引くレベルだぜ。

「第一着地！！」

積み上げられたコンテナのような足場に着地、ゴリっとＨＰが削れるが許容範囲だ。そこから跳んで……からの！！

「おっぐ……第二着地！！」

ガン！！！　と跳躍した先、迷宮を形成する壁の一面に両手両足で触れて蛙のように着壁。慣性を打ち消しながらも両手両足に力を込

めて宙に身を踊らせる。

「元気一発……ラスト着地！！」

空中で回復ポーションをキメつつ地面へと降り立つ。プラスマイナスゼロコンマワン、体力の九割が削れたが確かに生きて立っている……ふふふ

「十点、十点、十点」

「判定：客観主観共に赤点（瀕死）かと」

「死んでないから満点なんだよ」

部位欠損有りのゲームだと割とポンポン腕やら足やらが捥げる、ので五体満足で安全圏まで逃げきれた時点ででかいアドバンテージを得たに等しい。鯖癌とかサンドバッグにするにせよモンスターへの餌にするにせよ、まず足を潰すのが定石だからな……φ鯖とかプレイヤーがほとんど素手なもんだからやり口がいちいち生々しかった。

折るな、潰すな、引っ張るな。

「全員生きてるな？　アラバはネレイスを踏み折ってないだろうな？」

「さ、流石にそんなヘマはしない！」

「ルルイアスデ、無クシタ癖ニ」

「うぐぅっ」

「自分の武器は大切にしろよ、全く……」
アラバがものすごい目で俺を見ているが……はて？　全く、これっぽっちも、欠片も心当たりが無いなァ！！
「とりあえず情報を纏めるぞ、とりあえずビンタはしないでやるから出てこいよ勇魚」
『ホログラムなんで物質的干渉は出来ないんですけどねー。というか私も混ざるんですか？　一応私、立ち位置的に敵側というか……あぁいえ、この身もリヴァイアサンの末端区画に至るまで人類の味方ではあるのですがそれはそれ、これはこれというか』
「チュートリアルなんざ鬱陶しいくらい親身なもんだろ、いいからいいから。明かせる情報だけ吐けばいい」
『そうですね……そう、ですね？　まぁいいでしょう。あ、少しお待ちを…………はい、ここから少し進んだ場所に中継ステーションが　ありますので、そこなら接敵の心配も御座いません！』
あ、やっぱり途中休憩できる場所あったか。無い可能性も視野に入れてたから朗報っちゃ朗報だ。
そんなわけで網膜投射なる微妙に怖い技術で表示されたロケーターに導かれるままに進めばちょうど前線拠点を思わせる広さの開けた場所に出た。
ご丁寧にベッドやらなんやらが並んでいるが……え、これまさかＩＨ焚火（ヒーター）？
『ちょっと待ってくださいねー、今机と椅子を作りますので』

「なんと、面妖な……」

金属の地面にラインが走り、分解された机と椅子を２Ｄで表示したような……要するに設計図が床に描かれ、その形のままに隆起した金属塊がひとりでに組み上がっていく。

『ささ、どうぞどうぞ』

「刀用の椅子……？」

「ゴ丁寧ニドウモ」

しれっと自分用とネレイス用の席も用意している勇魚がホログラム越しに座るモーションを見せ、見てくれ的に人間、魚人、精霊、人形、ＡＩというなんとも言えない混合パーティが円卓に並ぶ。

『あ、嗜好品及び食糧はあちらで補充できますよ！』

「ドリンクバー……」

福利厚生が万全すぎるぞこのダンジョン。それはそれとして興味があるので駆けつけ一杯。

「なにこの急速精製１０００％トロピカルジュースって」

押してみる。

『そちら、保存された果実種子を十秒で急速成長させたものを原子分解して圧縮、液状化した飲料で御座います！』

「重っ！」

え、何これつまり果肉も皮も全部液状化したのをさらに圧縮してコップ一杯に押し込んでるの？　水で薄めるタイプの原液じゃねーのこれ。

「ズ、ズズゾ、ズゾゾゴボボボ……」

鮭頭なのでコップに口をつけられない、自然ストローを使うわけだが……ストローで吸い上げるリキッドが物理的に重い、という珍妙な体験……ゲームならでは、ということか。あと味は濃い目のフルーツジュースだった、薄める用の水ない？

「凄いぞサンラク！　鮮魚が出てきた！！」

「征服人形用のエネルギー補給飲料……成る程、知的飲料(インテリジェンス・ドリンク)ですね」

あはははうふふ……………………

「いやファミレスか！！！」

ドリンクバーの全メニューを混ぜたものを作っていたところで正気に戻る。くっ、単純に娯楽施設として面白すぎるんだよ……！！

「本題！　本題に戻るぞ！！」

「サンラク！　このショーユとかいうの凄いぞ！　革命的だな！！」

「――そうか、この緑のペーストも一緒に食え。ピリッとした辛

味で刺身の味を引き締めるんだ、そうそうたっぷり使えよ」
「そうか！　それはまた新感かぐばはぁぁぁあああああああ！！？！！？」
鼻を抑えて椅子から転げ落ちたアラバを冷たい目（魚）で見下ろしながら作戦会議を開始する。
「とりあえず分かったことは三つ、この第一殻層には重力ギミックが存在するってことだ」
「肯定（せやな）‥」
関西弁Ｍｏｄでも入ってんのかこのポンコツ、まぁいいや。
この重力ギミックの厄介な点は自身が関与していない別の場所で起きた影響がこっちに降りかかってくる事だ……物理的に。
「次に重力ギミックは床にダメージを与えることで任意で暴走させられる。勇魚、あの床は基本的にダメージで「逆向き」にベクトルが向くと認識していいのか？」
『部分的にノーと回答します。重力制御システムは床以外にも設置されています、過度な衝撃で暴走した場合、斥力的作用を「露出面側」に対して行使します』
床以外……あぁ、壁とかオブジェクトにも仕込まれてんのか。
『さらに補足しますと、第一殻層「迎門」を構築する重力制御システムは２×２メートル四方で区画分けされています』

ブロック構造か、目測だが通路の横幅は四メートルくらいだったはず。つまり横幅2ブロックで構築されていると考えていいだろう。

「重力床は勢いがある状態で踏めばその方向に吹っ飛ぶ、接触が絶対条件か？」

『斥力的作用は重力制御システムへの衝撃に比例します。元々スペースデブリ……あぁ、星のカケラを弾く為の鎧を転用したものですから。接触に関してはノーです、上記の条件を加味した上で一定値以上の斥力的作用は接近でも影響を与えます』

言い直さなくても現代人たる俺は理解できるのだが深くは指摘すまい。何でもかんでもメタな視点で見ればいいってものでもないだろう。

「は、鼻が……」

「ワサビは適量嗜むもんなんだよバーカ、話聞いてるか？」

「聞いてる、聞いてるぞ……聞いてる上でさっぱり分からんぞ」

素直でよろしい。

「要するにアレだ、強くぶっ叩く程「吹っ飛ばす力」も強くなるって事だ」

「なるほど……」

少なくともブースター吹かしたハンマーで思いっきりぶっ叩けば、複数人を数百メートル吹き飛ばすだけの出力は出せるのは実証され

てるわけだ。

「そして三つ目、重力床は敵味方を問わず作用する。手動で使えるなら悪巧みできるぜ？」

具体的にはそうだな、さっきから気になりまくってたからこの際聞いちまうか。

「なぁ勇魚さんよう、あそこの自販機で気軽に並んでるアレ……重力制御システムを暴走させるだけの「火力」はあるのか？」

『――素晴らしい。次世代原始人類、貴方はアレの用途を正確に理解しているのですね』

「その気になりゃパンツァーファウストで空対空もできるぜ」

二度見した上で目を疑ったからな、何せドリンクバーの隣にハンドガンやらライフルやらが自販機で売られてたんだから。

とりまドリンクバー（後書き）

他メニュー

・家畜調整人工肉ステーキ（冷凍保存した遺伝子を成長させたもの、生き物ですらない最初から最後までただの肉）
・超圧縮１０，０００キロカロリークッキー（クッキー１枚に含まれるカロリーはクッキー１枚分だぜ！　なお二枚食べるとボウリングの球を飲み込んだみたいな胸焼けを起こす）
・気分タブレット「カレー味」（ナノマシンが摂取者の舌に干渉してカレーの味だけを味覚に伝える、もはや食べ物ですらない）
・合成抹茶ラテ（厳密には抹茶じゃないし牛乳も使われてない、じゃあなんなんだよこれ）
・哲学ココア（限りなくリアルに再現された材料を正しい手順で加工したこの飲料は厳密にはココアではないが、正しいココアを飲んだことがないリヴァイアサンの住人にとってこの飲料こそがココアとして定義されるものであり、であるならばこれはココアであるが同音異義語としてのいやしかし概念的役割はココアと遜色ないものであり……と科学者たちが謎の哲学に目覚め、最終的にリヴァイアサン全体で五年間ガチ討論が繰り広げられた曰く付きのココアもどき。最終的にエドワードがキレた）
・玉手箱ワイン（五秒で十年物のワインが出来上がる）
・謎水（ラベンダー色、何故か「勇魚」の判断で生産禁止にされている……）
・ライオットブラッド・フィクション（特定コマンドを入力すると出てくるラベンダー色の合法エナジードリンク。「実装した覚えがない」ｂｙりっちゃん）
・あろまおぞん天然水（やーがてー星が降るー）

流石にライオットブラッド以降は冗談です

・空対空パンツァーファウスト
戦闘機の後部座席からジャンプしてすれ違った敵戦闘機に空中でパンツァーファウストをぶち込むサンラク式テクニック。
ちなみにこのテクニックを応用したものがGH：C編におけるヘリダンクに活かされている

虚仮威しの暴力装置

このゲームには銃が存在する。それ自体は発掘される遺機装(レガシーウェポン)の形状から分かっていたことだった。
しかしながら遺機装を作るために必要なジョブに就くために稼働する遺機装を要求するという、クソみてーな矛盾を強いる「古匠」に就いたプレイヤーが存在していなかったことから、存在する事だけが分かっていた武器種と言えよう。
そしてヴァイスアッシュはともかく、古匠になったばかりのビィラックは銃というものをそもそも知らない節がある。知ってても「そがなけったいなモン、剣より強いんけ？」みたいな……だから古匠関連でアドバンテージのある俺も長らく銃というものとは無縁に近かった。
いや、ウェザエモンの置き土産に銃とか普通にあったけどあれは別枠というかある種のイベントシーン限定武器的な面がある。
シャングリラ・フロンティアにおける現在の文明レベルは中世ちょっと前、大真面目に剣と槍で戦う世界観だ。弩ならともかく「銃」が登場する時代は神代の他には存在しない。
即ち神代の宇宙船たるリヴァイアサンにそれがある可能性は確実と言っても良かった。だがまさかチュートリアルエリアの自販機で売られてるとは思わんだろ。

「あれは遺機装なのか？」

『レガシー……？　ああいえ少々お待ちを……………………あぁ、デバイスか否かという事ですね？　であればＮｏです。あれは廉価版の、本当に単純な攻撃機能だけを搭載したものですから』

「……すまん違いがよく分からん」

『超過機構や素材の活性制御がオミットされているんです、ですので次世代原始人類の皆様が指す「遺機装（レガシーウェポン）」とは異なります』

つまりただの銃器？　それでもお釣りが返ってくるレベルで欲しいんだが？

「補足：当機等（ワタシタチ）征服人形（コンキスタ・ドール）が使用する武装は「超過機構（イクシードチャージ）」システムのみがオミットされた量産品ですのでアレら銃器とは規格が異なりますがマニュアル操作で使用することは可能です」

そりゃそうだ、引き金を引けば猿でも使える殺傷ツールだぞ。人型で五本指の手を持つ征服人形に使えない道理がない。

「あれもフリーサービス？」

『いいえ、あちらはこのリヴァイアサン艦内でエネミーを撃破する事で蓄積する仮想通貨「スコア」を消費する事で購入可能です』

読んで字の如くってか、だとすれば……ああやっぱり。

「テクノマギジェルスなら倒しまくったからな、それなりに溜まってたか」

買えるじゃーん。うへへへ、楽しい楽しいショッピングの時間だぜ。

砂やシャッガンはダメだな、普通に使えるけど俺の（サンラク）バトルスタイル的に動けないスナイパーライフルは合わないし、ショットガンの射

程まで近づくなら普通に斬りかかった方が効率がいい。凸砂って手もあるが……うーん、優先して選ぶ程じゃないな。そもそもスナイパーをそこまで無理して運用するなら俺じゃなくてサイナに持たせた方が効率的だ。

アサルトライフル……王道、だが両手がふさがると言う一点がマイナスポイントなんだよなぁ。コスモバスターをやってた時もそうだったが俺的には片手で扱える武器の方が好きなんだよ。威力的なディスアドバンテージは如何ともし難いが、片手が空くというアドバンテージはデカい。

「理想は片手で扱えて、威力があって……」

そんな銃を俺は知っている。っていうか鯖癌の時もコスモバスターの時も、ＦＰＳ要素のあるゲームなら大抵初期から使用できるハンドガン、その中でも大口径のものが望ましい。

「勇魚、この中で片手で扱えて大口径……いやこれ口径あるのかも怪しいな、高火力のものは？」

『それでしたらこちらなどいかがでしょう？　最長射程百五十メートル、バレットはマナマテリアルウェアタイプ、高出力ハンドガン「アグアカーテ」！　人類種に対しての誤射が無いようセーフティ付き、今ならなんと２５０，０００スコア！』

「たっか」

いやスコアを稼ぐために狩ったテクノマギジェルスも、本格的に乱獲してるわけじゃないし所詮雑魚敵ってのもあるけどそれでもギリギリかよ。こりゃどっちにせよライフルやらには手が届かない感じ

か。
「試し撃ちは？　あ、やっぱいいや現物に撃てばいいし」
ガコン、と缶ジュースみたいな感じで自販機下部の取り出し口の奥になにやら箱が落ちてくる。
引っ張り出してみれば箱だけが粒子となって焼失し、俺の手に白くのっぺりとしたハンドガンだけが残される。なんというかでかいプラスチックの塊を削ってハンドガンの形にしたみたいな感じだな、銃特有の「パーツを組み立てた」感じがしない。
とはいえ遺機装ではない、ということは未知のカテゴリということだ。いそいそと手に入れたテキストを確認する。

・Ｂ２：市民用補助機装（シビリアン・サブデバイス）「アグアカーテ」
最大装填数：１０
装填要求魔力：１５（全弾装填：１５０）
リヴァイアサン艦内で独自開発された補助デバイス。メインデバイスに蓄積したマナ粒子を装填することで銃として機能する。
あくまでもリヴァイアサン市民の護身用であるため、軍用武装と比較した場合その性能は数段劣るものの、小型眷属程度であれば撃退が可能。
この武装は使用者の魔力を装填することで機能し、無属性ダメージを与える魔力弾丸が発射可能。
つまるところ、これが使われるような状況に陥った時点で何もかもが終わっている。だがそれでも、傾向可能な暴力装置は無辜の人々に安らぎを齎した。例えそれが己の拳に劣るものだとしても。

「フレーバーテキストやめーや……」

なんか素手以下、とか不穏な文章があるんですけどぉ……？
いや、だが流石に文章通りのエアガンってこともないだろう。少なくとも神代の一般ピープルを安心させるだけの火力はあるらしいし。
ふーむ、しかし地味に厄介というか……これ魔法職向けの武器かよ。脳筋には弾込めすらできねぇって？　言ってくれるじゃねーか、だが残念だったな……弾薬にはアテがある。

「デザインがおもちゃっぽいが……んー、重心とかは普通の大口径と似た感じか？」

手の中でクルクルと回してみたり、軽く放り投げてグリップをキャッチして構えてみたり。リアル系と比べるとやはり若干の違和感を感じるが、そこは世界観の違いで片付けられる程度だ。
魔法攻撃に自信があるらしいテクノマギジェルスにそもそも通じないだろ、魔法の弾丸なんだろ？

「……だがそれはどうでもいい」

オモチャでいいのさ。欲しいのは威力だ、殺傷力は要らない。

「壁と床を貫(ぬ)ければ充分だ。知ってるぜ勇魚、同一素材で武器を作る技術は神代でも後の方でできた技術なんだろ？　って事はあの床も壁も鉄の塊ってわけじゃあない……精密機械だ、弾丸でブチ抜けるんじゃないか？　「整備不足(ギミック)」だもんなぁ？」

『ふふ、うふふふふ、貴方のようなお詳しい方を最初のお客様として招いてしまったのは不幸でしょうか？　それとも幸運？　説明の機会が減ってしまって困っちゃう……』

いいね、広いだけで雑魚しか出てこないエリアなんざ暇でしかないと思っていたが、これなら楽しく迷宮攻略ができそうだ。

虚仮威しの暴力装置（後書き）

アグアカーテ（意：アボカド）

余談だが当然ショットガンの名前はベレンヘーナ、二丁買え

あと単純に質問なんですけどアメリア編、GH：Cと新規ゲームどっちがいいです？（どっちもシナリオ考えたけど取捨選択が未だにできてない）

とりまインベントリア

重力床は主に三種類の条件でギミックが発動する。
まず一つ目はプレイヤーによる手動の破壊。
二つ目は最初から破壊状態。
そして三つ目はプレイヤーの関与しない偶発的な破壊。

あのクソ雨は二つ目と三つ目のどちらかもしくは両方が原因のステージギミックだ。勇魚の予報がなければガチもんの即死ギミックだ……そこれ……だが、こちらからも干渉が出来る以上、真上に落ちる反重力の仕掛けは強力な武器として成立する、成立させることが出来る。

雑魚を蹴散らせば入手できる銃器、武器種そのものじゃなくて高火力の遠距離武器ってのがミソだ。
届かない場所に届く、猿でも分かるアドバンテージだ。そしてある程度慣れてしまえば……こうなるわけだ。

◆

「ふっははははは!! どうしたどうした! 頬ずりしたって壁はどいてくれねーぜ!」

壁面に銃創六発、左から右へと「落ちる」斥力が放たれたことでひとかたまりにこちらへと迫っていたテクノマギジェルスが対面の壁に叩きつけられている。

横幅四メートル、機械的にこちらを襲うなら俺達が傍に寄っているだけで向こうも同様の動きをする。あとは適当に壁を起動させれば横向きに吹き飛（落ちていく）んでくってわけだ。

「っと、いい加減奴らに構ってるのも面倒だな……ようしサイナ！　アラバ！　アレやるぞ！！」

「疑問：アレ、とは」

ははは、手が滑って足元の床に弾丸を叩き込んでしまった。

ほら早く早く、勢いつけて前に一歩踏み出すんだよ、勇気出せ！！

「ちょっ……………」

「はいファーラウェーイ！！」

足元の重力が下から上へ、その上にいた俺達三人の身体は逆立ちしたような感覚と共に宙へと跳ね上がる。

「せめて事前に言ってはくれまいか！？」

「疑問：先程の経験から学習していますか？　インテリジェンス足りてますか？」

「まぁ見てろって」

そろそろ地面か、アグアカーテを地面に突きつけ狙いを定めタイミングを測り……発砲。

銃口から飛び出した小さな輝きが一瞬で白と黄色の中間みたいな輝きの光を纏って空を突き進む。

そして着弾し、暴走する重力床へと落ちていく俺達の身体はその勢いをみるみるうちに減衰させていく。そりゃそうだ、俺達はケツにロケットエンジンを積んでるわけじゃねぇ……どれだけ空高くジャンプしたっていつかは重力に地面まで引きずり落とされる。

「ギアを上げていこう、攻略スピードは次の段階だ」

「ルルイアスで宙を泳いだ時以上に形容しがたい気分だぞ……」

「知るか、次のセーブポイントまで行ったら休憩すっから気張ってけ！！」

全弾リロードにはＭＰ１５０が必要だ、いちいちＭＰを回復するためにポーションキメてたんじゃあ効率が悪すぎる。

金晶戦衣は月の光がないと魔力が溜まらないし、瑠璃天の星外套は他用途に流用できない。

だが俺にはコイツがある、傑剣（デュクスラム）への憧刃時代と比較して耐久値半減とかいう笑えてくるデメリットを代償に魔力をチャージする能力を得た傑剣（エスカ＝ヴァラッハ）との憧焉終刃君がな！！

「リロードデッド！！」

アグアカーテの台尻に傑剣との憧焉終刃の柄尻をぶつければ、剣から銃へと光が移る。

大百足殺しの偉業を宿すこの剣は魔力を蓄積するがそれを魔法として解放する機能を持たない。故に魔剣ではないのだ……とイマイチよく分からないカテゴリらしいがＭＰを貯めて還元できることさえ分かっていれば問題はない。

「六発……剣に貯めれる最大はＭＰ１００ってところか？」

よーし、次行ってみよう！！

◆◆

【旅狼】

サンラク：仮に俺がリヴァイアサンの中にいるとして銃器を手に入れましたたって言ったらどうする？

鉛筆騎士王：とりあえずジークヴルム戦ではっちゃけすぎて各方面から情報開示をせっつかれてる私様に対して土下座するべきかな

サンラク：半分拉致監禁なので俺に対してもっと優しくすべき

オイカッツォ：善意を他者から毟ろうとする外道達の共食いだ……

サンラク：脂身も赤身も足りてねぇ旨味皆無の骨がなんか言ってま

すよ

鉛筆騎士王：煮込めばガラ程度なら出せるんじゃない？

オイカッツォ：贅肉の塊と肥満体に言われたくないでーす

鉛筆騎士王：次デブって言ったら二度と表舞台に顔出せないようにしてやるから

オイカッツォ：ごめんなさい

サンラク：うちの妹まで動員されそうだからサバトはやめろ

サンラク：ていうか俺達しかいないのか

鉛筆騎士王：一応今深夜三時だからね？

サンラク：……？

オイカッツォ：カタギの人間は普通に寝てる時間だよ

鉛筆騎士王：酷使するのは脳だけだからボディが休息してればいいのだよ……

サンラク：起きてる奴らに言われるとなんだか腹立つがまぁいいや

鉛筆騎士王：話戻すけどこちとら不特定多数が詰め寄ってきて大変なんだぞー

鉛筆騎士王：秋津茜ちゃんとかさらにやばかったし

オイカッツォ：火消しというか矛逸らし頑張ってたしね……まぁイロモノ枠かと思ってたらいきなり超忍法発覚したらそうなるか

サンラク：なんかやらかしたの？

鉛筆騎士王：ノワルリンドと合体した

サンラク：……えぇ

オイカッツォ：性転換してなんか赤いモンスターになったやつに困惑する権利はないでしょ

サンラク：お黙り顔面両性類

オイカッツォ：おっ、喧嘩か？

鉛筆騎士王：ていうかそっちの内部はどうなってんの？　銃器の入手難易度は？　大量購入はできそう？

サンラク：第一殻層……あ、最初のエリアな。出てくるモンスターはレベル３０程度、倒しまくると経験値的な感じで「スコア」ってポイントが貯まる。それと交換

サンラク：制約の関係上雑魚敵をスローターしてると色々響くから大量購入は無理

鉛筆騎士王：役立たずめ

オイカッツォ：組織に貢献することもなくただ貪る娯楽は美味いか？

サンラク：おいちぃ！！！！！

オイカッツォ：こ、こいつ……！

サンラク：それはそれとしてエリアクリアしないと帰れねーから割と切実なんだぞ

鉛筆騎士王：雑魚しか出ないならさっさとクリアしちゃいなさいよ

サンラク：ヒント、第一「殻」層

オイカッツォ：大陸規模ダンジョン……？

サンラク：かえりたい

鉛筆騎士王：実際見立てとしてはクリアまでにどんくらいかかるの？

サンラク：いやこれ一週間は持ってかれそうだぞ、フルコンプは考えるだけ無駄として

サンラク：今第二中継地点でセーブしてるが……

鉛筆騎士王：ちなみに君以外が入る方法はないの？　試してる連中はあの大陸鯨の背中に乗ろうとしても弾かれてるって話だけど

サンラク：俺がクリアしないと開かないんですってよ

鉛筆騎士王：マジですの？

オイカッツォ：それゲーム的にどうなんですの？

サンラク：オホホ、わたくしがリタイアするか一定期間挑戦しないなら開くらしいですけどそのつもりはありませんわよ！！

鉛筆騎士王：出てきたところを捕獲して断頭台にかけたほうがいい？

サンラク：おいやめろ

オイカッツォ：まぁさっさとクリアしないと君へのヘイトやばいことになりそうだけどしばらくは時間稼げると思うよ

オイカッツォ：ジークヴルム戦で大量に出てきた新種族やら、いきなり現れた征服人形やらで前線拠点は今凄いことになってるから

鉛筆騎士王：具体的に言うと合コンパーティー？

サンラク：大概そっちも面白そうなのなんか悔しいわ

サンラク：こちとら顔見知りの魚人族と人形引き連れて遭難中だぞ

サンラク：あとガイドがちょっとウザい

オイカッツォ：これすごい遠回しに自慢されてる？

鉛筆騎士王：ていうかさ、

サンラク：ん？

鉛筆騎士王：君、今インベントリア使えるよね？　なんか妙な瓶詰

めやたら増えてたし

サンラク：まぁ普通に使えて……あ。

オイカッツォ：シャンフロ内で普通に会えるじゃん……

サンラク：ナーフメール送る？　やっぱぶっ壊れアイテムすぎるなインベントリア

鉛筆騎士王：そういうのは運営側のたゆまぬ努力でいつかは解決されるものだよ二人とも

鉛筆騎士王：だから今この瞬間私たちがインベントリアを堪能していたとしてもそれは企業努力の不足によるものだよ

サンラク：結論

鉛筆騎士王：別にチートでもないんだから使っても問題なし！　とりあえず格納空間内に全員集合！！

サンラク：うぇーい

オイカッツォ：うぇーい

とりまインベントリア（後書き）

インベントリア内アイテム事情

サンラク：なんか定期的に大量のアイテムが増える、水晶多すぎ

オイカッツォ：ちょいちょい使わなくなった武器が増えてる

ペンシルゴン：そ、そのアイテムは毒薬の調合に使……だ、誰だこんな時間に？　おま、やめ

爆釣！クソゲーを喰らう魚！！（前書き）

古戦場から逃げるな
戦え……戦え……
場違いでも肉は稼げる
かかってこいと啖呵を切れ
らしく振る舞う度胸
逃げたいなんて思いは捨てろ
げんかいを超えてポチれ
るっ、は神漫画
ないても勝てない

爆釣！クソゲーを喰らう魚！！

「くたばれオラーッ！！」

「やんのかコラーッ！！」

「はいはい漫才はそんくらいにしてね」

オイカッツォと俺、互いにメンチを切り合っていたのを中止しつつ、様々なアイテムが星の如く宙を浮いて流れる空間で俺たち四人は相対する。

「んー……スルーするにはちょっと個性的すぎるかな？」

「問題ありません、この当機（ワタシ）のインテリジェンスで解決可能です」

「キャラ濃ゆいなー……まぁ裏は取れてるけどサンラクと契約？した征服人形だよね？」

「肯定：当機（ワタシ）は契約者（マスター）をインテリジェンス・アシストする征服人形、エルマ＝317です」

「サンラク君、契約のコツとか聞いていい？　めっちゃ楽しそうなんだけど」

「割と俺も条件分かってないんだなこれが、そこんとこどうなの？」

四人目……しれっと格納空間内部にパーソナルスペースを作ってや

がったサイナがペンシルゴンを指差しながら言葉を続ける。
「契約の基準は状況によりますが、征服人形(コンキスタ・ドール)は型ごとに契約者の適性が存在します。貴女であればリリエル型などが相性的に良いのでは？」
「リリエル……？　あー、あのあざとい感じの」
「よく覚えてるね」
「一応私、人に顔見せて人の顔見る仕事してるからねー。ゲームみたいなキャラが立ってる顔なら大抵覚えてるよ」
その点から言うと逆に俺はいろんなゲームで似たような記号(キャラ)を見るから覚えるの苦手なんだよなぁ……
「あ、そうだ話変わるけどペンシルゴン、やっぱ参加は無理そう？」
「参加？　あーあれかぁ……テレビユーガッタって首都圏じゃん？　私その日ちょっと関西の方に行かなきゃだから」
「真逆かー、流石に無理か……」
やはり妙だ、なんだってこいつはその放送とやらにここまで力を入れているんだ？　そりゃＧＧＣで暴れた正体不明の助っ人二人を呼び込めるとなれば取れ高としては十分かもしれないが……
どうやらペンシルゴンも同じことを考えたらしく、半目でオイカッツォを睨みつけながら問いかける。
「カッツォ君さぁ……なぁんか隠してない？　意図的に情報を隠し

てるっていうかぁ……」

「いやいや、いやいやいや……そなことなですよ」

「おうキリキリ吐けや鶏ガラボーイ、場合によっちゃ当日に外せない予定が生えてくるぞ」

………怪しい。

「ぐ………実は、ですね……シルヴィアとアメリアの二人がどうしても出演したいと、ハイ」

「アメリア………ダイナスカルの猛禽？」

なんだそのかっこいい二つ名は、ていうかそれは実在人物を指すのか？

「ゲーマーとしては私もそこまでは知らないよ、ただ身長１９０オーバーでちょっとばかしがっしりしてるけど、マッシブすぎないモデル体型の怪物だからねぇ……お仕事的に知ってる感じです」

写真集の売り上げだけなら全米一を超えてるらしいからねぇ、とケラケラ笑いながらもペンシルゴンはそのアメリア何某について話を続ける。

「そっかー、アメリア来るなら私もちょっと行きたくなってきたなー……んで？　にわか知識の私でもアメリア・サリヴァンの「負けず嫌い」は知ってるけど……あぁ、だからか」

「何がだよ」

答えたのはペンシルゴンではなく、オイカッツォ。

「アメリア・サリヴァン。全米ランキング二位、ダイナスカルの猛禽、重量級キャラでただ一人の例外を除いてあらゆる高機動キャラを叩き落としてきたプロゲーマー……そして、」

——今年の夏まで、最も「リアル・カースドプリズン」に近かった女。

「さて問題です、彗星の如く現れた謎の不審者がＧＧＣという大舞台で全米一位（リアル・ミーティアス）相手にカースドプリズンでエクストラウンドまで持ち込みました。プライドが高すぎて日本に殴り込んできたプロゲーマーは何がお望みでしょうか」

「初黒星を叩きつけた日本人プロゲーマー」

「もう２００試合くらいしてるよ、勝率はあっちが六割」

ボコられてんじゃんウケる。

「ちなみに最近中国拳法をインストールしたシルヴィアは勝率１００％」

ボコってんじゃん怖……。

しれっと怪物の基礎スペックが鬼強化されてる事実に背筋が震える。中国拳法はダメでしょ……フィクション的な発勁とかマジでやるだろあの全米一（ゼンイチ）。

だがようやく合点がいった、この野郎ろくに詳細を話すこともなく

俺を怪物の巣窟に叩き落とそうとしてやがったな……！

「ちょっと当日風邪と腹痛になる予定が……」

「最速便で胃薬と風邪薬送りつけてやろうか？　ん？　いやマジで勘弁して、元々キミ一人呼ぶつもりだったんだけどどこから漏れたのかシルヴィア経由でバレて……」

「ちなみにサンラク君がドタキャンしたらどうなるの？」

「全米一位二位のドリームタッグｖｓ俺一人の地獄絵図が世界に配信される」

「超見たい」

「ちょっと当日風邪になるイメトレするわ」

「やめれ！！」

ガチの声だった、というか手が震えていた。お前、今日に至るまでに一体何が……いや、見なかったことにしよう。覗いちゃいけない穴ってのはどの世界にも存在するものだ。

「……ふ、ふふふ」

「どうしようサンラク君、カッツォ君が壊れちゃった」

「修理に出す？」

「ふふふ……だが、だがしかしだよサンラクぅ……俺は君のテンシ

ヨンを上げる手を用意してるのさ……」

あ？

何やら不気味に笑うオイカッツォはゆっくりと口を開くと、その言葉を口にした……

「Ｊｕｓｔｉｃｅ　Ｖｅｒｓｕｓ日本語訳パッケージ第一版を報酬に出す」

「なっ…………！！？」

ジャスバの第一版だと！？

「何それ」

「海外のレトロゲーだよ、一応今のＶＲシステムでもプレイはできるけど世代的にはフルダイブＶＲ以前のＶＲカテゴリのゲーム」

「……冗談だろ？　第二版の間違いだろ？　パケ版のＶｅｒ．１とか博物館に寄贈するレベルだぞ……」

「顔隠し（ノーフェイス）の釣り餌になるって言ったらアメリアが簡単に取り寄せてくれたよ。かかった金額……聞く？」

「…………」

何か言おうとするが、俺の口は動くことなく沈黙する。

Ｊｕｓｔｉｃｅ（ジャスティス）　Ｖｅｒｓｕｓ（バーサス）、確か世に出たのは十数年前……フ

ルダイブＶＲの普及で駆逐され尽くしたコントローラー操作の格ゲー最後の世代……まごう事なきレトロゲーだ。
発売された時点で既にフルダイブＶＲは数こそ少ないが普及しつつあった、そんな中で古き良きコントローラー操作をあえて選んだこのゲームのキャッチコピーは「前人未到を無限大に」というものだった。

フルダイブＶＲはゲームの歴史を語る上で絶対に外せない技術革新だ。プレイヤーとキャラクターの共感、同一視、シンクロ、その究極系と言っていい完全フルダイブはある観点からコントローラーでキャラクターを動かすゲームに劣る点がある。

簡単な話だ。プレイヤーはどう足掻いても人間であって、人に出来ない動きは出来ないし人の身体に存在しないパーツの動かし方なんて知らない。
ジャスティスバーサス、ジャスバはコントローラー操作型の格ゲーとしてのそのアドバンテージを限界まで突き詰めた名作だ。

往年の格ゲーの本質はカードゲームに似ている。キャラクターの出す技はどれほどの威力でどれほどの範囲でどんな効果であるのかが最初から決まっている。
プレイヤーは小パンからゲージ技に至るまでのカードを複数枚積んだ手札を互いにぶつけ合って勝敗を競っている。

フルダイブＶＲはその「手札」が緩く、狭い。プレイヤーが実際に身体を動かすからこそプレイヤー自身のスペックに依存する面がある。
当たり前だ、少なくとも当時の技術でズブの素人にＣＱＣの動きをさせようとすれば身体が自分の意思に関係なく勝手に動くようなも

のになる。
むしろたった十年でシャンフロみたいな直感的に「できる」と思わせるゲームが生まれたのがおかしいんだ。まだ主流はモーションアシストだぞ。
ではジャスバの何が凄いのかといえば、そのカスタマイズ性にこそ――いや、今はそこはどうでもいいか。
「マジ……なんだな？」
「マジだよ、毎日毎日アメリアから対戦と催促のメールが飛んでくる生活を終わらせたいんだ……だからサンラク、リアルミーティアスを追い詰めたあの時くらいカッ飛んで欲しいのさ」
最高に情けない心情を吐露しつつも、オイカッツォはニィ、と笑みを浮かべていた……

爆釣！クソゲーを喰らう魚！！（後書き）

古戦場を２ターン周回しながら、しかして作者の脳内では現実逃避による高速設定生成が行われていた……っ！！

アメリア編はＧＨ：Ｃで行きます

X Day：Count down！（前書き）

天玉神核が出たので更新です
え、古戦場？　や、ややや、やってます！　はい！　逃げてないです！

X Day：Count down！

Xデーまで、残り四日。
俺はちまちまとリヴァイアサン攻略を進めつつ、学校での昼休み中に携帯端末でとある動画を見ていた。
「何見てんだ？」
「ようザッピー、イキって新しいピアス穴開けたらまた雑菌入って腫れたってマジ？」
「うぎぐっ」
「身を以て天井ネタを張る度胸……あとついでにマンネリを恐れないそのタフネス、感動したぜ……っ！」
あとうちの高校はピアス禁止だ、プライベートならともかく学校生活という面だけで見れば勝手に耳たぶに穴開けて勝手に自爆する最高にアホな絵面だ。
「う、うるせーっ！　って、なんだゲームの動画かよ。なんてゲームだ？」
「ジャスティスバーサス」
「まぁ知らんわな、おもしれーの？」
面白いのか、と聞かれると……うーん。

「やるより見てる方が楽しい感じ？」

「ふーん」

ジャスバはちょっと特殊な楽しみ方のゲームだからなぁ……最終的にプレイヤー人口が過疎りすぎて衰退したゲームだし。今でもちまちまやってる人はいるっぽいが、やっぱ見応えがあるのは全盛期の頃だ。

学食で買ってきたおにぎりの包装を毟り取りながら耳朶に絆創膏を貼った友人殿（馬鹿野郎）にも見えるように携帯端末を机の上に置く。

「よくわからんけど、確かに派手なバトルだな。なんか解説してくれよ」

「ここカスタム８の小パン連打で相手をノックバックさせて怯ませたところをゲージ技で空中に吹っ飛ばして……」

「解説の意味調べろ」

「怯ませて、蹴り飛ばして、空中でボコしてる」

「要約しろとも言ってねーべ」

注文の多い野郎だな……

「このゲーム、普通に相手を張っ倒した方の勝ちって格ゲーではあるけどプレイヤーの間じゃ別の楽しみ方がメジャーでな」

それこそがジャスバが名作たる所以だ、俺はコントローラー操作系はそこまで得意というわけでもないし動画視聴勢で済ませているが、純粋に見世物としての完成度も高いんだよなぁ。

「どういう楽しみ方なんだべ？」

「だべんなザッピー、まぁ簡単に言うと「より派手な技（トリック）を見せたら人気者」って感じ？」

「あー、あー？　芸術点とかそんな感じか？」

それが一番近いだろうか。画面の先で少女のキャラクターがフィールド全体を花畑にしながら分身して対戦相手を袋叩きにしている映像を流し見ながら俺は学食で購入した焼きそばパンを齧る。

ジャスバ最大の売りは通常技から必殺技に至るまでをカスタマイズできる点にある。

拳の打ち方一つにしてもボクシングからロケットパンチまであるし、必殺技に至っては半ばプログラミングじみたレベルのカスタマイズが可能だ。

今見ている動画も、厳密にはガチの対戦動画ではなく技（トリック）のお披露目動画に近い。操作者（プレイヤー）の手元も一緒に撮影している動画なんかもあるが、奇妙奇天烈な持ち方で指一本一本が別の生き物であるかのような動きをしている。

「お前もこれできるの？」

「バカ言え、フルダイブとは全くの別物だぞこれ。流石に猛練習しないと出来ん」

「無理とは言わねーのな……」

ここまでのテクニックを会得できるかは知らないけどな。俺はいろんなゲームを渡り歩くタイプだから一点特化のゲーマーにはどうしても届かない面がある。

「で、本題に入るがお前本当に斎賀さんとは――」

「夜明けの空、暗闇が明るくなる。僕の心のようだ、君と言う太陽がむごが」

「なん……っ！？　はぁ……！！？　お前っ、えっ、なんで知って……！　誰にも見せて……！！」

「カフェでカフェモカ飲みながら作詩したんだって？　お前の座った席の後ろに高崎が座ってたらしいぞ」

「高崎テメェ地獄を見せてやるァァァ！！！」

「やっべぇ！　暁ハートさんに地獄見せられちまう！！　みんな助けてくれーっ！」

「暁ハート！　落ち着け！！」

「俺はいいと思うぞ暁ハート！！」

「SNSで検索したらポエム垢みたいなのヒットしたんだけど……あっ」

「おごぁぁぁあああ！！！」

フォロワー万単位って素直に凄くね？　恋を歌う文章に心キュンキュンですぅ！！

◇

『おはようアメリア、ケイからのメールは読んだ？　パンプキンはハロウィンが終わって暇してるから来てくれるそうよ？』

『上等、シルヴィあんただって内心楽しみにしてるんじゃねぇか？』

『当然じゃない、アメリアには悪いけど彼はカースドプリズン・プレイヤーとしてのベストアンサー。なんなら貴女そっちのけで私が対戦したいくらい』

『誰が譲るか、私が先だ。リアルカースドプリズンの称号にそこまでの未練があるわけじゃないが……「カースドプリズン」であんたからラウンドを取れる奴なんざ、私かあんたのとこの恋ボケくらいだろ。新顔が出てきたなら確かめたくもなる』

『私達が出演する番組じゃ別のゲームをするって聞いてるけど？』

『冗談だろ？　ジャパニーズのゲームなんてシャングリラ・フロンティア以外はＧＨ：Ｂにも劣るゲームしかない』

『貴女、それ放送中に言わない方がいいわよ』

『流石にそれくらいは心得てる、というかシルヴィあんたケイと同棲してるんだろ？　さっさと叩き起こせ、昨日勝ち越したまま勝ち逃げさせるか』

『今年のクリスマスはケイの部屋の合鍵をサンタクロースにお願いするつもりよ』

『あんな子鹿野郎の何処がいいんだか……日本人はどいつもこいつも薄口な顔してるから見分けがつかん』

『枯れ枝趣味に言われたくない』

『ジャパニーズブドーのタツジンは結構好みの顔が多かった』

『あっそ……』

『あぁそうだ、もう一つ聞きたいことがあるんだった』

『何よ』

『この国のサブウェイはなんだってあぁも複雑なんだ、ナビゲーションョン有りで迷ったんだが』

『タクシー使いなさい、私は諦めた』
『タクシーは頭がつっかかるから嫌いだ』

◆

Xデーまで残り三日。どう考えてもGH：C以外のゲームをプレイする未来が見えなかったので重い腰を上げてギャラクシア・ヒーローズ：カオスを開封。
一応縁があるわけだしとりあえずカースドプリズンを選んでみたが、所謂2Pカラー的なカラーバリエーションの中に明らかにカボチャカラーがあるのはそういうことなんだろうか？　考えだすと思考にハマりそうだったのでちょっとニヤついた表情を努めてフラットに戻しつつとりあえず一戦。

対戦相手は……なんだこりゃ、S…A、I……SAIKYO(さいきょう)KA(カ)SUPURI(スプリ)？　せめて＿(アンダーバー)くらい入れろよ読みづらいな。というか始めたばっかかのレートでマッチング………いや、将来の目標を最初から掲げることもあるだろう、うん。

だが奇しくもミラーマッチ、アメリアナントカさんがリアルカースドプリズンに一番近かったとか言うならミラーマッチは経験しておいて損はないだろう。

「っし、」

なんだか懐かしさすら覚えるケイオースシティに、再びカースドプ

リズンとして降り立つ感慨も程々にして。
とりあえずティアー中位くらいまで目指すかと近くにいた白バイ隊員を殴り飛ばすのだった。

X Day：Count down！（後書き）

補足：最強カスプリ（初心者）さんはおまる帝ではないです

明日晴れるやウサを晴らすや（前書き）

古戦場の一角から愛を込めて

明日晴れるやウサを晴らすや

そうだ、リヴァイアサンクリアしよう。

上位ティアーに踏み込んだところで八連敗し、速攻で中位ティアーに叩き落とされた俺の脳内にふとそんな言葉が思い浮かんだ。

「そもそもね、三時間レートに潜りっぱなしってのがね、うんメンタルの健康的に良くなかったわ」

はー暫くクソテレビの面は見たくねーわ！！

「アラバ、今日でここからおさらばするぞ」

「お、起きて直ぐに何を言い出すんだお前は……」

「ええい黙らっしゃい！俺はテレビのない中世世界に帰るんだよ！！」

「普段に増して何言ってるか分からんぞ！」

無理に理解しなくていい、ただ感覚で行動しろ。

「サイナ！」

「指示を」

「話が早くて何よりだ、奴に会いに行くぞ！！」

クソみたいに広いこのエリアで、移動手段が徒歩か重力ジャンプだけってのは妙だとは思っていた。
どこかに乗り物か何かがあるのかと探していたが……迷路内に打ち捨てられているわけでもなければ中継の休憩所にも無い。勇魚に聞いてもなんかムカつく笑顔を向けられるだけ……だが今なら分かる。

「つくづく世界観からのアプローチがお好きなゲームだことで……」

この第一殻層に出現するエネミーは二種類、新世代型のゴーレム「テクノマギジェルス」と旧式のゴーレムの二種類……だがどれだけ歩いても戦っても狩り尽くしても、テクノマギジェルスしか出てこないとなれば流石に妙だと気づく。

ここで重要なことは、シャンフロというゲームがともすればプレイヤーが快適にゲームをプレイするという大前提を後回しにしてでも世界観を突き詰めるケがあるゲームという点だ。
兎にも角にも作り込みが異常なこのゲームは、ただの花にすらフレーバーテキストがあるという。であれば旧式のゴーレムとやらが出現しないのはレアエネミーだから、というよりも……なんらかの条件を満たしていないのでは、という事だ。

「重力ジャンプを早期に見つけたのも今思えば悪手だったのかもな」

あれは徒歩と比べると文字通り飛躍的に距離を稼げるが、それ故に「条件」を後方遥か彼方に見落としていた。

「修復派遣ゴーレム「アンツ」……出現条件は迷宮の破損……！！」

「補足：そしてこの第一殻層において広範囲を移動する手段を唯一

保有するゴーレムですね」

サイナと俺の手によって破壊の限りが尽くされた迷路の一角にどこからか飛来した奇妙な形のゴーレムが着地する。
それは大型バイクと蟻を合体させたような奇妙な形をしたゴーレムであり……その組み合わせの性質上「操縦席」を持ったこのエリア攻略の鍵だ。

『ご明察です！　「アンツ」は本来、宇宙空間における船外活動用のゴーレムでしたが、この星に移住した際もその堅実な設計から無重力圏内活動装備を重力圏内用に換装して現在も修理用に使用されています。ですが現在は無人操作状態……乗ったところで操縦はできませんよ？』

「悪いな、この手のクイズは得意分野でな……！！」
なにせ異世界（別ゲー）の知識（セオリー）を持っているもので、あからさま過ぎるくらい「これが制御装置です！！」と言わんばかりのアピールが激しいパーツを見れば何をすればいいかくらい直ぐに分かる。
「こっから狙えるかな……」
アグアカーテを構え、狙いを定めて…………発砲。
「外れてないか？」
「提案：接近攻撃による該当装置の破壊」
「……」

インベントリアから両手で抱えたまま動けるギリギリのサイズな狙撃銃「プエーロ」を取り出しスコープを覗き込む姿勢を取る。
その瞬間網膜に直接「拡大画面」が投影され、肉眼で狙いを定めるよりもより精密な狙いをつけて……スナイプ。

バギャッ！

「はいよゆー」

……なんだその目は！　ほら！　さらに連続で二発命中！　つまり最初の外した分を合わせても命中率75％……欠片も信用できない命中率じゃねーか！　ゴミかよ！！
ま、まぁ？　追加で購入したスナイパーライフルの性能を試しただけだし？　これも計画の内と言うか？　ただ正面切って戦わないとヴォーパル魂下がる予感があるんだよなぁ……しょっぱい戦法取ると露骨にヴォーパル魂下がるからな、罠師涙目。

「操作方法は……バイクと一緒か？　いや三次元的に動くなら上下の操作があるはず……」

「どわぁぁぁあぁあぁあぁあ……！！？」

勝手に「アンツ」に乗って勝手に操作して勝手に上へ吹っ飛んでいったアホ魚類は無視、二分ほどかけて操作方法に一通りの見当を付けた俺とサイナは安全運転で「アンツ」を操縦。
上空でデンジャラスロデオ（蟻）を楽しんでるアラバの救出に向かうのだった……

ええい！　何故手を離せと言ってるのに全力でアクセルを入れるんだてめーは！！

……………

…………

……

「成る程！　これは中々に楽しいな！」

「こ、こやつぅ……！」

「推奨：教導的打撃（一発殴るべし）」

まぁ落ち着けサイナ、実際中々に楽しいから俺も人のことは言えん。

地上に降りてから一発入れよう。

それはそれとして、三次元的バイクとでも言うべき「アンツ」の操作は中々に楽しい。

バイク的ハンドルを左右に傾けるだけではなく、前後に押し引きすることで上昇と下降を行うらしいこの蟻バイクは迅速、修復、何れもマッハで終わらせる意識高い系の蟻だ。物理的に俺の意識も高い場所に運んでくれる辺り、リヴァイアサンの外にも持ち帰りたいくらいだが……残念ながらエネミー判定、お土産には出来ないらしい。

「警告：残存エネルギーの著しい消費が確認できます」

「無尽蔵に乗り回せるってわけじゃあないらしいな。だが十分だ……アラバ！　サイナ！　壁側の重力に着地する！　ヘマ打って落ちるんじゃねーぞ！！」

第一殻層はリヴァイアサンの裏側、つまりざっくり言ってしまえば巨大な箱の裏側にびっしりと地上が敷き詰められているようなものだ。

だから徒歩ならともかく飛んでいる状態で「底」から「壁」、あるいは「天井」の重力圏に捕まれば……

だがそれでも、「空」に居座るアドバンテージは地を這う以上に大きい。

「見えたぜボスエリア……っ！！」

俯瞰とは一歩引かなきゃ見えないものだ、マジでどこからスタートさせられてたんだ？　地上からじゃ全く見えなかったぞ……

『第一殻層統括試練対象（ボスエネミー）に挑戦する前に最終休憩所は如何ですか？』

「いいね、セーブは無しだが寄ってはおこう……！」

よし、降り「緊急事態！　緊急事態！！」サイナお前…………

『あ………と、突発的な重力雨にご注意下さーい……』

さすがに仕方ないとは言え、真下から吹っ飛んできたテクノマギジエルスが直撃して墜落するサイナを救出しつつ、いざボス前へ！

明日晴れるやウサを晴らすや（後書き）

サンラクが陥った状況を作者は「普段使ってないブキで運良く勝って「あれこれ実はこのブキ自分に合ってる？」と使用続行した結果ボロ負けしてウデマエ溶かす現象」と呼んでます

ブロックを相手の顔面にシュートする超エキサイティングなバトル

ボスの名は改修型拠点製造式ゴーレム「デベロッパー」と言うらしい。
「マニュファクチュア」とかの方が名前的に相応しいんじゃないか、と思うが……と考えていたのも先程までのこと。
俺たちは今、「土地開発業者（デベロッパー）」という名の意味を相対することで否が応にでも痛感させられていた。

「サンラク！　地形が変わるぞ！！」

「見りゃわかる！　跳べェ！！」

噴出、固化、そして殺到。ブロックタイプのパズルゲーの如き直線の軌道で「場」を埋めに来る巨大な立方体のルートから飛び退って離脱する。
次の瞬間、左右から迫っていた立方体（固化ジェル）が俺たちのいた場所を挟み潰してサンドする。

「なぁサンラク、俺は神代の叡智などとんと知らないが……あの巨大なゴーレムの腹にくっついたアレ……もしかしなくても、中の粘液が尽きない限りずっとこれが続くのか？」

「冴えてるじゃねーか、全くもってその通りだ！！」

改修型拠点製造式ゴーレム「デベロッパー」、成る程前情報の通り

元々は「アンツ」の母機……統括する本体としてのゴーレムだったのだろう。
蜂の巣に蟻の上半身をくっつけたかのような異形は、働き蟻たる「アンツ」の格納庫としても機能するのだろう。
だがそれだけなら単なる非戦闘要員、蜂の巣型の腹部の左右に取り付けられた超巨大貯蔵槽が奴を難攻不落の要塞へと変貌させていた。
「頭悪い感じにくっつけてるくせにシナジーが悪質過ぎるぞ……！！」
アグアカーテが魔光を輝かせて魔弾を放つ。弾丸は真っ直ぐに飛翔すると、ゾンビ映画のゾンビが如くこちらへと迫るテクノマギジェルスの一体に命中し、その身体を後ろのジェル野郎諸共吹き飛ばす。
「やっぱ一撃でコアを貫くのは無理か……サイナ！　タンクは狙えるか！」
「報告：現座標からの遠距離攻撃手段でタンクを破壊することは不可能かと」
「デベロッパー」はその鈍重に過ぎる腹部へさらにタンクを二つもくっつけている、当然高速機動など望むべくもない。
だがそれを補う質量が厄介過ぎる、奴は「アンツ」の母機であり、テクノマギジェルスの生産者でもあるってわけだ。
ボポンッ、ボポンッ！　と気の抜ける音と共にタンクに備え付けられた「砲塔」からジェルの塊が射出される。バブルティーの如くジェルの中に金属の粒が混入したそれは地面に叩きつけられると同時に分裂増殖しながら人の形に立ち上がり、母を守る兵士としてこちらへと迫る。

だがそれだけなら、テクノマギジェルスが群れるだけならそう大した脅威ではない。問題は奴が「地形を作る者（デベロッパー）」であるということだ。

タンクから射出されたテクノマギジェルスの何体かが「デベロッパー」の許へと集まる。

カマキリの鎌のような肥大化した前脚を持つ「デベロッパー」がテクノマギジェルス達を掻き集めるように一纏めにすると、ジェルの塊は粘土細工の如くぐにゃぐにゃと形を変え……最終的に、複数のコアを内蔵した巨大な固化ジェルの立方体が出来上がる。

そして当然の如く遠隔操作されるそれは直線軌道で上から落ちてくる、右から飛んでくる、左から壁にぶつかる……くそッ、俺は今何ゲーをやってるんだ？　パズルゲーか！？　一列揃ったら爆発とかするんじゃねーだろうな！？

「どうするサンラク！」

「アラバはテクノマギジェルスを間引いてくれ！　コアが無けりゃ単なるジェルだ、総量を削れ！！」

「任せろ！　ゆくぞネレイス！！」

「ウン」

アラバは機動力こそ低いが素の火力が高いタイプだ、ネレイスという魔法支援を併せれば雑魚相手の無双は容易い。

モンスターは撃破された時点で消滅、アイテム化する。兎にも角にもジェルを「デベロッパー」に触れさせる事を回避しなければならない。

くそッ、雑魚エリアのボスなら雑魚だろうと考えたのは早計だった

か？　それともあのタンクが破壊不可能なタイプのオブジェクトってだけか？　そしてそれはそれとしてブロックあぶねぇぇ！！

「くっそ……サイナ、ジェルブロックは破壊できそうか？」

「攻撃の殆どは質量によって無効化されます、破壊自体は可能ですが現実的ではないかと」

んー……まて、考える。

周囲の雑魚のレベルは３０ちょい、ほぼ無尽蔵に生産するあたり本体そのもののレベルはともかくダイレクトに暴れる系じゃない。

フィールドは正方形、だからこそブロック攻撃は直線に飛んでくる。雑魚敵として生み出されるテクノマギジェルスはこちらに襲いかかってくる奴と「デベロッパー」本体のブロックに使われる奴の２パターン。

ブロックの破壊は現実的ではなく、ブロックは設置されたまま残る……少なくとも触ったら攻撃されるとかはない。

と、な、る、と…………

「こうか？」

壁際に寄ってジェルブロックを誘発。落ちてきたそれを回避しつつボスフィールドの壁に発砲。

重力ギミックが発動し、押し出されたジェルブロックはテクノマギジェルス達を撥ね飛ばしながら「デベロッパー」本体の顔面に激突した。

「………ほっほーぅ？」

なんかぁ……妙に勢いが良過ぎるというか？　これもしかしなくても……重力ギミックの適用範囲に入れば一定の速度で吹っ飛ぶ系のオブジェクトじゃね？

「つまり………」

やっぱこれパズルゲーだな？　だがそうと分かれば話は早い！！

「アラバ！　サイナ！床か壁を壊せばジェルブロックを吹っ飛ばせる！！　味方に当てないようにしつつ野郎にぶちかましてやれ！！」

そして壁を壊せば、それを直そうとする奴が出てくるわけだ！悪いな「デベロッパー」、「アンツ」の制御は貰うぜ！！

弾丸がめり込んだ壁を直しにやってきた「アンツ」に弾丸を叩き込み、母機から制御を奪い取って飛び乗る。

「サイナ代わりに乗れっ！」

「了解：次のオーダーは？」

「直上まで昇って頭を狙え！　」

バトンタッチだ、走る「アンツ」から飛び降りた俺の上をサイナが宙返りしながら跳び上がり、そしてそのまま「アンツ」の操縦席に着席。ノリでやったけど器用だなお前……

「アラバぁ！！」

「なんだ！！」

「今からブロックぶっ飛ばしまくるから気合いで避けろ」

「はぁあ！？」

小手調べだ、三段重ねブロックタワー射出行くぞオラァ！

「ウーノ！　ドス！　トレス！　フォイヤー！！」

むっ、あの蟻ヤロー自分に飛んでくるジェルブロックを新規生成したジェルブロックをぶつけて相殺しやがった。

「面白い……！　乱打戦と洒落込もうかァ！！」

「待っ、俺がヤバイぞ！　やめろォーっ！！」

「全弾斉射！　てェーっ！！」

「のわぁぁぁぁあ！！！」

◆

積み上げられてきたジェルブロックが前に後ろに乱れ飛ぶ。俺にピンポイントで当てに来たジェルブロックは床を破壊して真上に吹き飛ばす。

時には俺自身を吹き飛ばす事で無理やり回避する、重力の性質上同じ方向にジェルブロックが飛んでくるわけだが、逆にそれを利用して横軸の調整を行う。

弾が尽きればジェルブロックを切ってＭＰ回収、この姿でも一応モ

ンスター判定は残ってるらしいな。
既に「デベロッパー」にはいくつものジェルブロックが命中し、明らかに動きが鈍くなっている。
弾の補充に使いつつ弾としても使える……いいね、ノッてきた。
「よーし左の鎌破壊ぃ！」
直前で結合解除とか器用な真似は出来ないらしい、だが最早関係ない話だ。
「アラバ！　押し流せ！」
「無茶を言ってくれる……だが通して見せよう！　ネレイス！！」
「アイヨ……【陸波濤（クガハトウ）】」
アラバの魔力を使って、ネレイスの力が行使される。
虚空から生み出された魔力の大波がテクノマギジェルスを左から右へと圧倒しながら押し流し、ジェルブロックを作るための材料を失った「デベロッパー」の残った右鎌が空を切る。
「プレゼントボックスだ、遠慮せず受け取れ」
残弾四発を全て壁へと叩き込めば、床を覆う【陸波濤】の水を掻き分けながら猛烈な速度でジェルブロックが滑り疾る。
「ストライク！　そしてぇ……サイナ！」
「確認：狙撃します」

顔面にジェルブロックが激突した事で晒された隙に真上から狙撃銃の一撃が叩き込まれる。俺が購入した奴とは訳が違う、戦術機獣と同時運用する前提の大火力ライフルだ。瀕死の雑魚ボスに耐えられるかよ。

「ステージクリアだ、門を開きな……勇魚」

実際どこにいるのかは知らないが、天を指差し笑みを浮かべる。それと同時に「デベロッパー」が断末魔の軋みと共に崩壊……今ここに、第一殻層のボスは倒れたのだった。

ブロックを相手の顔面にシュートする超エキサイティングなバトル（後書き）

Q．タンクが破壊できません、無理ゲーでは？
A．顔を殴ればすぐ死にます
Q．雑魚敵が邪魔です、無理ゲーでは？
A．雑魚敵は無視して顔を殴りましょう、あっさり死にます
Q．ブロック攻撃に対処できません、クソゲーでは？
A．雑魚掃除役と顔殴り役に分かれて顔を殴りましょう、ブロックを生成する間もなく死にます

デベロッパー「もう少し先の殻層で雑魚敵として再出現した時に本気出す」

人よ、人よと語りかけるモノ（前書き）

Ｖの者の配信見てると作業が進まないまま無尽蔵に時間が潰れるから困る

現在進行形で会話可能なキャラクターって時点で「強い」ですよね

人よ、人よと語りかけるモノ

『素晴らしい！　第一殻層「迎門」突破おめでとうございます！！』

「はいどうもどうも。で、帰りたいんだけど」

『まずはこちら、第一殻層統括試練対象撃破報酬として、こちら「アンバージャックパス：レベル1」を進呈いたします！』

「ワカシってか。で、帰りたいんだけど」

鰤は鰤大根にするのもいいがカマ焼きがシンプルで好き、いやそれはどうでもいい。

出世魚的にレベルが上がれば相応の恩恵を受けられるパターンだろうか？

『さらに「スコア」を加算しまして……あ、こちら報酬アイテムの「船外活動用有人保護アーマー・レプリカ」になります』

「あ、どうも。で、帰りたいんだけど」

フレーバーテキストを読む限り、神代における宇宙服のレプリカってところか？　かつて使われなくなったが再び使うことになった、とか色々気になる文章がチラホラ見えるが……

『それでは第二殻層「教道」へ転送致しますね！』

「待てコラ」

帰りたいって再三言ってるんですがねぇ！　イベント進行なので会話成立しないとは言わせねーぞ！！

『そんなぁ……ほ、ほら、めくるめく神代の叡智が貴方を待っているんですよ？』

「別に興味がないとは言ってないだろ、学ぶ気概もある。単純に住み込みじゃなくて通学させろってだけだ」

『むむむむむ……いえ、そうですね。「勇魚」は人に寄り添い人を導くもの……ええ、その歩みを縛るようなことはしてはいけないのでしょう。分かりました、ですがそれはそれとして次回訪問の際に転送する座標記録の為に次殻層への転送自体はしますね？』

「ん、それなら頼むわ」

『では指向性重力加速転送、起動します！！』

「んん？？？」

待て、何だ今の違和感。指向性の重力で加速して転送？　え、転送（テレポート）じゃないの？　語感的にそれめちゃくちゃ力技じゃ……

「うおっ」

「なんっ」

「インテリジェンス・フロートですね」

なん、
『それでは第二殻層へ……アセンション・プリーズ！』
「なんじゃそらぁぁぁあぁあぁあぁ…………………！！？」
一瞬の浮遊ののち、見えない手に思い切り放り投げられたかのような強烈な圧とともに俺たちは真上へと吹き飛んでいく。
見下ろした先、地平線の先まで見える「迎門」を俯瞰する。そして見上げた先、照明と空とを兼ねる天井の一部がゆっくりと開き始める。
ジタバタと暴れながらもなんとか姿勢を安定させ、泳ごうとしているアラバを小突いて落ち着かせながらも上を見上げる。
少なくとも徒歩で走るよりかは遥かに速い速度で俺、アラバ（と、ネレイス）、サイナは第一殻層の天井を通過し……第二の層を目の当たりにする。
「草原？」
「どういうことだ！？」
「インテリジェンス・アナライズの必要がありますね」
「インテリジェンス・語彙力が頭悪いぞサイナ」
「フッ、インテリジェンス・理解力……」
ポンコツめ……！
それはそれとして流石に空中に放り出してハイ転送完了、と雑な仕

事をするような事もなく、複数のシャッターが閉じて穴など最初から存在しなかったかのように草っ原となった地面にゆっくりと着地した俺達は辺りを見回し……

「オープンテラスってそういう事じゃないと思う」

『け、景観的な配慮です！　神代じゃこれが流行だったんですよ？　そう、所謂激マブ……っ！』

それリアルでも死語なのに神代的には古文レベルじゃないのか。
草原のど真ん中に自販機とドリンクバー的なものと机椅が野晒しに置かれている光景になんともいえないものを感じながらも、俺たちはとりあえず野晒しの席に着く。

「一旦帰るのは確定だが、それはそれとして色々システム的な質問がある。いいか？」

『遠慮なくどうぞ』

では遠慮なく。

……

…………

………………

………………

「────まぁ、こんなもんか」

結論から言うならアンバージャックパスのレベルを上げないことには始まらないって事だ。
特にファストトラベル権が獲得できるレベル３まで上げるのは急務じゃないか？　俺一旦帰るけど。

「あぁそれと最後に………」

期待はしていない、だが一応聞いておいた方がいいだろう。俺はインベントリアから銃の形をしたそれを取り出すと、アラバ達がドリンクバーではしゃいでいるが故に俺と勇魚の一対一による最後の質問を投げかける。

「────この中の破損データを修復できるか？」

噛ませ……もといエドワード・オールドクリングが遺した何かのデータ。どう見てもお前は知り過ぎたパターンで退場したと思しき男の最後の研究成果、それがこのＢＣビーコンの中に破損状態で収められている。
所々読めない、ならそういうフレーバーとして諦めもついた。だが完全に読めないとなれば「修復」の可能性が見えてくる、神代技術の総本山と言っていいリヴァイアサンなら修復自体は可能なんじゃないか？

いや、アンバージャックパスなんてコンテンツが出てきた時点で今

すぐ閲覧できるとは思っちゃいないが……知りたいのは可能か不可能か、だ。

『……ふふ、そうですか。やはりあの人が最期の時まで親友と呼び続けただけのことはあるのですね』

果たして、勇魚の返答は笑みを伴っていた。
それは嘲笑うようにも、微笑むようにも、苦笑うようにも見えた。
瞬きする度に受け取る印象が変わる、ＡＩキャラとは思えない感情の混沌。

『すでに修復は終わりましたが……ごめんなさい、特級秘匿ロックを掛けさせてもらいました』

鯨の女は語る。

『それはこの世界の真実、星の海を渡る術すら知らぬ貴方達には無用の智慧なのです』

「知る必要はない、と？」

『いいえ、いいえ、それは違います新人類。最短は必ずしも正解ではない、貴方達は遠回りしなければならないのです』

「具体的には？」

『アンバージャックパス：レベル５の取得、及び必要資格の取得ですね』

あー、面倒そう。パスのレベルはともかくとしても、いっそライブ

ラリ辺りに情報流して代わりにやってもらおうかな……まぁ保留でいいか。

「そっか、まぁ急を要して知りたいわけでもないしまったりクリアしていくさ」

『それでは……一度艦外へと出られますか？』

「あ、ちょっと待ってスコアで買い物してくる」

空中に浮いた勇魚がすっ転んだモーションを見せたが、ゲーマーとしてのサガなんだ許せ。

◇

外部からの侵入は物理的に弾かれ、語りかけども事務的な謝罪文の載ったウィンドウが表示されるだけ。それが出現してから幾日か、既にプレイヤー達はリヴァイアサンへのアプローチを行い尽くしていた。

「うおっ、魔法少女が砂浜で体育座りしてる……なんだありゃ」

「あぁ、【ライブラリ】のリーダーだよ。三日くらい前からログインしてはああしてリヴァイアサンを見つめてるらしい」

「絵面から物悲しさが伝わってくるな……」

リアルの姿であったならなんとも言えない光景も、ピンキーでファンシーな格好の少女であるが故にかろうじて中和されている。
ここ数日リアルでの仕事も手付かずのキョージュは、今日も今日とて海岸からリヴァイアサンを眺めていて……それ故に、リヴァイアサンの「変化」に最初に気づいたのもまた、彼であった。

「…………ぁ？」

それをどう形容すれば良いだろうか。大型のゲートと言うべきか、それともその形状を生物的に当てはめた場合の「口」に相当する巨大宇宙船の前方下部がゆっくりと開いている。

既に【ライブラリ】を筆頭に頭のプレイヤーが検証のために接近したことで、現在リヴァイアサンが海面から数メートル浮遊してその場に固定されていることは分かっている。
だがその巨大な威容に圧倒させられた大多数はリヴァイアサンの上部、あるいは船首から伸びた規格外サイズの「角」にばかり視線が

向けられる。

「………っ！！？！？」

バッ！　とリアルの年齢からは想像もできない俊敏な動きでインベントリから双眼鏡を取り出したキョージュは原始的なレンズを覗き込み、それを見た。

海と巨体とに挟まれ分かりづらいが、開かれたゲートハッチに何やら光が蓄積されていく光景を。そして膨れ上がった光が弾けた瞬間、リヴァイアサンからキョージュのいる海岸へと一直線に光の道が凄まじい速度で形成されていくのを。

「まさか……」

本人からの答えはなく、関係者も苦笑いで答えをはぐらかす中でキョージュはある仮説を立てていた。

リヴァイアサンへと入場を希望する言葉を投げると目の前に表示されるウィンドウ、そこには常に「準備中につきお待ちください」と表示されていた。

正式実装がまだなだけでは？　という説もあった。だがキョージュが知る中で最もこの世界の未知に深く潜っているプレイヤーがリヴァイアサンの出現以降ぱったりと消息を絶っている事から、理屈ではなく直感でその可能性をキョージュは信じていた。

そしてそれが事実であると、今この瞬間証明された。

「………だからなんで移動方法が超物理的なんだぁぁぁぁぁぁあ！！！！」

「いっそ海に落としてくれ！　その方がいい！」

「嘲笑(バカめ)‥インテリジェンスの欠乏から安易な手段を選ぶのは下策です。今の状態で海に叩きつけられた場合……」

「場合？」

「粉砕されるかと」

「ぎゃぁあああ！！？」

「アラバうるっせぇ！　ハイ両足揃えてバランス取って！　アジン！　ドゥヴァ！　トゥリー！」

光の道を、カーリングもかくやという勢いで滑り飛んできた三つの影に、キョージュの目が数日ぶりに爛々と輝く。

「は、はははははは！！　よし来たァ！！」

渾身のガッツポーズを決めた魔法少女に周囲の者達が何事かと視線を向けるが、もはやキョージュの目にはそんなものは映っていない。既にキョージュ以外にも異変に気付いたプレイヤー達が続々と集まり始める。それにつられて巨人族が、蟲人族が、獣人族が集まり、大きな包囲網を作り出した中、三人の「帰還者」達が砂浜に降り立つ。

僅かな沈黙、それはほんの僅かなきっかけで決壊してしまうほどに脆い。そしてそのことを理解しているのか、帰還者の先頭に立つ頭にだけ宇宙服のような奇妙なヘルメットを装備した……そして何故かヘルメットから黄金のオーラを放つ角を二本生やした男がゼスチャーで「まぁ待て」と集まった者達に示す。

そしてそのまま無言のボディーランゲージで「この手に何も持ってませんね？」「ハイ皆さん注目」と示すと……ウィンドウを操作し、これまでのシャンフロにおいて存在するはずのないモノを取り出し、天にその「銃口」を向ける。

そして、静寂を撃ち抜く発砲音が二度響く。それが示す事実に周囲のプレイヤー達の静寂が崩壊する絶妙なタイミングで……男は声を張り上げ叫んだ。

「銃器解禁ーーーーーっ！！！」

大歓声が砂浜を震撼させた。

人よ、人よと語りかけるモノ（後書き）

Q．エドワード君は何を知り過ぎたの？

A．心を掴む重力について

Q．ジュリウスと勇魚は何を知ったの？

A．今までずっと悪意によるビンタだと思っていたものが善意で差し伸べられた手だったこと

Q．天津気　刹那のラボはどこにある？

A．原初の機龍と共に叡智の小舟は眠り、刹那と永遠の花だけが道を知っている

「知らんですわ」

ジークヴルム戦から今に至るまで放置されていたエムル氏は大層ご立腹の様子であった。

「いやいや、たしかに何も言わずに消えたのは悪かった、それは認めよう」

でも悪いのはいきなり拉致ったリヴァイアサンサイドにあると思うんだよね。しかも最初のエリアだけとはいえ、クリアしないと帰れないルルイアス式だったし。

「人参……」

「モノで釣れるほど安い兎じゃないですわっっ！」

今までモノで釣れてた兎が何言ってんだ……と喉元まで出かかった言葉を飲み込み、それなら仕方ないと別方向からのアプローチを始める。

「いやー、それなんだが聞いてくれるかエムル。リヴァイアサンの中じゃ大変でなぁ……」

「………」

「なにせ出てくるゴーレムは雑魚ばかりだが数が多いの何のって。

ホラ、俺やサイナは範囲攻撃手段を持ってないわけじゃないが道中で使えるものでもないだろ？　アラバはアラバだしもしここにコンスタントに広範囲を巻き込める魔法使いがいたらなぁ、と何度考えたことか！」

ぴく、とロップイヤーが動く。
まぁ実際テクノマギジェルスは対魔力性能高めなのでエムルはいてもいなくても……と言う感じなのだが、世の中には言わんでいい言葉というものもあるのだ。

「それに基本的な移動手段が徒歩に制限されてたからなぁ、転移を使える奴がいればもっと早くクリアできていたのかもしれない……」

ロップイヤーがさらに動く。
わざとらしいくらいの身振り手振りで残念とため息をつくがこれは事実だ。
重力雨や雑魚の殺到から逃げたせいで遠回りしたこともあったし、拠点からノーリスクでやり直せたなら一日は攻略時間を短縮できた。
まぁもう一度再挑戦するとしたら初手「アンツ」でボスエリアまで直行するけど。

「いやぁ、いなくなってから分かるありがたみってやつよなぁ。転移魔法を使いこなし、攻防ともに隙のない今をときめくスーパーヴォーパルバニーがいればなぁ！」

「…………」

「………おや、こんなところにラビッツ産一等級スイーツ人参」

「しっかたないですわ！　許す心も度量のうちですわ！！」

結局モノで釣られるちょろちょろちょろ兎なんだよなぁ……
なんだかんだスカルアヅチの中で隠れながら俺を待っていたらしいエムルが人参をがじがじ齧りながら俺の頭の上に登る。
「んー……普段はともかく戦ってる最中は滑り落ちそうで怖いですわ」
「ぶっちゃけ只のヘルメットだから正眼の鳥面の方が有用だよな」
「サンラクサンはもうちょっと見てくれに気を使うべきですわ」
「最高に激マブなアクセサリーを付けてるだろ？」
この龍角、暗いところでもガンガン光るので照明代わりにもなるのだ。暗闇に隠れていても位置をバラす証明にもなるのでクソだが。
ふとスカルアヅチの窓枠（骨）なら外を見ると、リヴァイアサン行きの重力ぶっ飛ばし式クソロードに殺到するプレイヤー達から少し離れた場所に魚人族達が集まっているのが見えた。
銃カテゴリ解禁とリヴァイアサン解放のドサグサに紛れて人混みを離脱したのやでアラバともそこで別れたが……ま、一期一会も三度繰り返せば顔見知り、四度目もそう遠くはないだろう。
おや、頭一つでかい魚人族がこっちを見たか？　手でも振ってやるか。
「さぁて……なんだか随分と久しぶりに感じるが、ラビッツに行くか」
「はいですわっ」

リヴァイアサンを呼び出した件はセツナからの課題であり、同時にヴァイスアッシュからの課題でもあった。何かしらのイベントが起きても不思議ではないだろう。

それに、それなりに武器の損耗もある。ビィラックのところに行って修復しないとな。

◆

「姉弟子……！！」

「な、なんじゃワレェ！？」

久し振りに行きつけの鍛治師に会いに来たら、そいつが無骨なおっさんに土下座されていた。ちょっと状況が読めなさすぎて浦島太郎的気分になった。浦島太郎……オトギニア……亀甲シールド……玉手箱ボムで無差別老化……うっ、頭が。

「っつーか、イムロン？」

なんでこいつがここに？　ツアーじゃ兎御殿には入れない筈、だとすれば……まさか、招待シナリオを自発した？

偶然？　いやこいつは蟲人族(バグマン)の里でディアレと意気投合していた……あの時点で既に見当を付けていたのか？　そしてイムロンてめ

ー俺がいるのに土下座を敢行し続けるガッツ……嫌いじゃない。

「サ、サンラク……ワリャの知り合いけ？　いきなりわちの工房に押しかけてきて、親父に弟子入りする口利きをと……」

「なにとぞ！」

「あー………まぁ待て、ちょっと落ち着けイムロン。とりあえず頭上げような？」

土下座をやめるつもりはない、と……仕方ないのでエムルを土下座を続けるイムロンの背中に載せてからビィラックへと向き直る。

「え゛、これアタシにどうしろと言うのですわ!？」

「まぁ俺の知ってる限りの情報を言うと……前に同じ素材を渡して鍛治比べするって奴やったろ？　その相手がこいつ」

「んん？　………あー、あん剣を作ったやつけぇ」

「そうそう………いや経緯を教えろよ口利きのしようがねーよ」

……

…………

経緯把握中

…………

……

ふむ、とりあえず分かったことがいくつか。

まずイムロンが招待シナリオを発生させたのは事実。ディアレから聞き出したと言うのもあるが、俺やレイ氏が揃って致命武器を持っている事から大凡の条件に当たりをつけていたらしい。

そしてイムロンはジークヴルムシナリオ決戦フェーズの最中、ブロッケントリードを相手に大立ち回りをした事でヴォーパル魂の規定値を満たしたのだという。

そうして意気揚々と「R」の兎の案内でラビッツに招かれたイムロンはディアレやレイ氏の情報、そして何より俺が持ってきた案件からラビッツの「名匠」の元へと乗り込もうとして…………彼に遭遇した。

そう、最上位職業と最上位職業による奇跡の掛け合わせ。おおよそ武器生産という一点に於いてシャンフロ最高峰と言える「神匠」のジョブを持つヴァッシュだ。

具体的に俺がリヴァイアサンを攻略してる最中に何があったのかは知らないが、語彙力が限界に達したイムロンの話から断片的な情報をまとめ上げた結果、要するに「鍛治風景目撃してマジリスペクト」って事だろうか。

いやどれだけすごかろうとNPCなんだが、と思わなくもないがそこらへんを聞いた途端に早口になったイムロンの話から要点だけを抜き出してみると、要するに「モーションがエモい」という事らしい。

……さっぱり分からん、聞いた上でなお分からん。なので俺も経緯を無視して要点だけで考えることにした。

「つまりヴァッシュの鍛治姿に感銘を受けたイムロンは弟子入りがしたい、だが直接押し掛けるのはあまりに恐れ多いのでビィラック経由で口添えしてもらいたい、と……」

なんだろう……一応結論は出た筈なのに全く納得感がない……頭の中で疑問符が常に踊り続けている気分だ……

「で、そこんとこどうなのビィラック？」

「わちは別に親父の弟子じゃねぇ」

「え、そうなの？」

厳密にはヴァッシュは基本的に自由主義、悪く言えば放任主義なのでビィラックの鍛治技術は基本的に独学、時折ヴァッシュからのアドバイスをもらった結果らしい。

「最近こそよう鍛治をするようになったが、少し前までは工房にすら滅多に入らんじゃった」

メタ視点から言えばプレイヤーの訪問率とかそういう理由なんだろうけど、あえて口に出す必要もなかろう。

「くっ……あのエモモーションはレア光景だったと……!?」

「おい動くなエムルが落ちるだろ」

「むしろ降りたいですわ……」

さてどうしたものか……別に箝口令を敷いてる訳でもないし強いてる訳でもないが……イムロンは生産職のプレイヤーに顔がきく。甦機装（リ・レガシーウェポン）の情報も速攻で流れてたようだし……いい加減、このシナリオを隠すのも難しくなってきたかなぁ……

「前々から薄々感づいてたけどヴォーパル魂が低くなったプレイヤーが兎御殿にいるとヴァッシュ出現しなくなるっぽいんだよね、人が増えたらエンカ率も下がるかもなぁ……」

「この件は掲示板に流さず黙っておいてあげるから先達としてここでの上手いやり方を教えて」

「とりあえずアタシ降りてもいいですわ？」

俺は悪くないよ、本来秩序の存在である俺の心の中に巣食う邪悪な悪魔（ペンシルゴン、あるいはディープスローターの顔をしている）がゲスな顔して囁いてきたからしょうがないんだよ。

四人目の到達者（後書き）

幕間で書く前に本編での言及が追いついてしまうスケジュール管理クソガバ、これ以上筆の速度を上げろと……？

感想欄でも何人か正解者はいたけど正解はイムロン、サンラクと会った後にブロッケントリードに挑み、色々あって条件を達成していました

原因は魂の形が似てるが波長が僅かにズレているため（前書き）

軽率に名前募集したら割烹にも感想欄にも大量の名前が羅列されて
素で焦る奴がいるらしい

やはり……掲示板回を書けと天が囁いている……のか……

原因は魂の形が似てるが波長が僅かにズレているため

まぁ、ヴァッシュとエンカウントする最短の手段は招待クエストをクリアする事だ。そう伝えるとイムロンは瞬く間にコロシアムへと走り去っていった……なんか途中で拾い上げられていた貴族風衣装の兎がイムロン担当の奴なのかな？

まぁそれはそれ、俺は俺。自分の用件を済ませよう。そう考えてヴァッシュがいるだろう兎御殿の玉座の間に向かった俺が見たものは

……

「ニ、ニャァア……」

招き猫みたいな横幅のある白いケット・シーと、アラミースの上位互換みたいな威圧感のある三毛のケット・シーに挟まれた虎柄のケット・シーがヴァッシュに視線を向けられて震えている、という妙に愛嬌のある緊迫した光景だった。

「………」

なんだか無機物フェイスでこの中に混ざるのもアレなので正眼の鳥面にマスク・チェンジ、単純に興味があるので「あ、お構いなく」と言った雰囲気を出しながら傍聴に回り――

「残念ですが貴方も関係者です」

「マジで？」

困ったように耳を掻いていたエードワードの一言で強制的にアニマル裁判の現場に投入されてしまった……あっ、エムルてめー逃げやがったな！

「と、とと、鳥の人……！！」

「ん？　そうです鳥の人です。初対面だよな？」

「お初にお目にかかる鳥の人、我輩はトレーヴィル……キャッツェリア「長靴騎士団」団長トレーヴィルである。そしてこちらがキャッツェリア国王ニャイ十三世であらせられる」

「よろしくニャ」

なんて基本に忠実な語尾……っ！　くそッ、その王冠とかどう見ても小判じゃねーかよ……っ！　リアクションしたら負けか？　負けだよなぁ。

「――そして、此奴はキャッツェリア最高の「宝石匠(ジュエラー)」だったダルニャータという者だ」

ダルニャータ……ダルニャータ……あぁ思い出した、封雷の撃鉄(レビントリガー)・災(ハザード)や瑠璃天(ラピステラ)の星外套を作った奴だ。

「……で、そいつがなんでこんな状態に？」

少なくともパーティーをしに来たって雰囲気ではない、どちらかと言うと小指を詰めるかコンクリに詰められる五分前のような……

「おう、サンラクよう。おめぇさんが預けたってぇ宝石をぉ、そい

つぁガメてたってぇ話だぁぜ？」

「宝石ぃ？」

あー、そういや大量に預けてた割に送られてきたアクセサリーは少なかったからなぁ。まぁガメてるだろうなとは思ってたが……

「いや、それに関しちゃこう、暗黙の了解的な感じで手付けのチップ的な感じに渡したような……」

だがどうやら、単純なネコババでは済まない話であるらしい。
問題の発端となったのはこのトラ猫ダルニャータが私的にネコババしていた宝石の一つ、その存在がキャッツェリアで発覚した事だった。

「それがこれニャ」

「……？」

ただのローエンアンヴァ琥珀晶だと思うが……？

「この琥珀の中には極めて力ある属性が封じ込められているニャ、極上(スペリオル)の一品ニャ」

「そ、そうか」

普通に考えればケット・シーの語尾が「ニャ」なのは何もおかしくない筈なのに、アラミースもトレーヴィルもダルニャータすらも普通に話すから逆に違和感しか感じねぇ……っ！

「鳥の人は我らケット・シーが宝石をこよなく愛することを知った上で手付として多くの宝石を贈ってくれたニャ。であれば此奴がすべきは最高の一品を作り上げること、極上の一粒を己の懐に入れるなど鳥の人の、ひいてはヴァイスアッシュ殿の面子を潰すに等しいニャ」

「そ、そうか……そうか？」

いやいやいや、確かに最高レアをガメられてたって事に何も思わないわけじゃないけどさぁ。でも代わりに送られてきた二つのアクセサリーが鬼性能レベルで有能だからね？　この二つがなかったら乗り越えられなかった局面両手で数えきれないからね？　特に封雷の撃鉄・災な、あれマジ神、天才（ジーニアス）の所業だよマジで。
体力ギリギリのラインを反復横跳びする事で効果を発揮するスキル「死線上足踏（デッドホライゾン）」とのシナジーが鬼みたいに良いからな。
だが言葉に出せない、なぜなら俺は日本人だから。
なんかもう裁判を行う上で通すべき過程を三段階くらい飛ばして死刑の種類を吟味しているかのような雰囲気の中で「いや君の作った作品良かったよ！」と言うだけの度胸を捻出できないのだ。
というかヴァッシュの態度的にこれ……

と、

「オウオウオウ、〝粋〟な事言うじゃねぇか猫の旦那よう。そうさ、為政者（アタマ）って奴ァ決める処でブッ込んでくもんだ」
何やら壮絶に濃厚なキャラを内包した聴きなれぬ声が響く。
「〝シャバ造〟って奴ァ、ブッ壊すにしろブッ直すにしろ、まずは

叩かねぇと始まらねぇ……旦那なりの〝決着〟の付け方……しかと見せてもらうゼ」

なんだこの、なんだこの特濃キャラクターは！　ポンパドール！　ポンパドールが凄い！　赤毛のポンパドール！　なにその……何！？　お前、お前ェ……！

ヴァッシュ、エムル、（不本意だが客観的評価的に）俺、トレーヴィル、ニャイ十三世、ダルニャータという面白キャラ空間の中において〝ブッチギリ〟にキャラが濃ゆいぞこの兎！！

なんだっけ？　あの学生ズボンに風船でも詰めてんのかみたいな膨らみ方したバクダンみたいな名前の……梵天（ボンテン）？　そんな神々しい名前だったっけ……なんかそんなズボンにロングコートみたいな学ラン風衣装、そして剣のように肩に載せるどう見ても角材にしか見えないアレは……二十世紀後期における即席兵装として定義されるゲバルト・コイレ！？

「イーヴェルおにーちゃんですわ！」

「イーヴェル……「E」か」

なんだっけか、傭兵としてラビッツと同盟を結んだ「国」を渡り歩いてるとかなんとか。シークルゥのプー太郎な部分に悪影響を受けたんじゃーとビィラックがボヤいてたが……いやこいつの個性は割と一点モノだぞ。

その「国」ってのがどうにも引っかかるが……だがこれだけは分かっている。

なんらかの「制約」を抱えているエードワードからシークルゥまでの上三匹を除けば、単純な物理戦闘力においてこのイーヴェルこそ

が最強であると。

「…………フッ」

今この瞬間、俺の中で何か火花が散った。
ええと？　確かエムルが言っていた「シャレ抜きで怖いからその角度で見ないで欲しいですわ」のアングルは……

「――――サンラクだ、今この状況に介入させてもらおうか」

「――――あァ゛？」

今この場においてラビッツという同じ陣営に属する俺とイーヴェルが殴り合う方法は二種類。
後先考えずにブン殴る？　小指だけじゃ済まなくなりそうなので論外。
であれば、イーヴェルの主張に対して反論する事。ケジメという名の崖から片足が飛び出したダルニャータを守る、それこそが何となく見ててイラっとするこいつと何となく決着(ケリ)を付ける冴えた方法……！！

覚悟しろゲバ棒兎、今宵のハシビロコウは猛禽と化す……！！

原因は魂の形が似てるが波長が僅かにズレているため（後書き）

※なお、キャッツェリアケジメ事件からイーヴェル登場までマジで突発的に生えてきた設定の模様

大岡兎裁き（前書き）

リアル忙しいせいで書きたいことだけが蓄積していく
メタグロスってかげぶんしんしん覚えましたっけ？？？？

大岡兎裁き

理屈じゃない、本能的に気にくわないキャラってやつはどうしても存在するもんだ。坊主憎けりゃ袈裟まで憎いとは言うが、誰かを好きになる事に理屈がいらないと言うなら、誰かにムカつく事にも理屈はいらない。

端的に言えばなんかこうよく分からないけどイラッと来た！　放っておくと周囲から主導権(イニシアチブ)奪い取って我を通しそうな感じがなんかムカつく！

「オイオイオイ、これに関しちゃ当事者は俺だぜ？　傭兵だかプー太郎だか知らないが、俺の沙汰なく話を進めるのは筋が通らねーだろ？　ん？」

　ダルニャータは俺が知りうる中では唯一の宝石匠(ジュエラー)、つまり商品価値があると言う事だ。
このままの流れで指でも詰めるような事になれば、俺は最上位アクセサリー生産職のツテを失う事になる。

「あァ？　んだコラ、なにガン飛ばしてんだ、あァ？」

「筋を通せっつってんだよダボが、俺がこいつらの手癖を知らずに渡したと思ってんのか？　十も二十も用意して貰うために馬鹿正直に宝石の山を渡したと？」
ゼスチャーというものは時に言葉よりも雄弁に相手の感情を喚起する。何せボディーランゲージは英語すら凌駕する全世界共通言語だ、

少なくとも指一本で一人称から三人称までを完全網羅する完全言語と言ってもいい。バベルの塔が崩壊しようが人は生きていけるんだよ残念だったな。
そして言葉がないからこそ「言っても理解できないお前でもこれくらいなら分かるだろ？」という最上級の煽り足り得るのだ。武田氏曰く、古き良き非フルダイブのゲームではゼスチャーこそが煽りに使われていたとも聞く。
「思考しろよ、頭を使って……なぁイーヴェル君？　全ては俺の掌の上さ」
己の頭を指でコンコンと叩き、わざわざしゃがんで視線を合わせる必殺コンボが炸裂する。ククク……怒れ怒れ、この場にはヴァッシュがいる、そんな場所で感がなしの暴力を振るえばお前のあだ名は未来永劫「シャバ僧」だ。
だが、イーヴェルの口の端が吊り上がった瞬間、俺はまだ決着などついていないことを悟る。
「ハッ、鳥の人だなんだとイキったところで所詮は居候ってェことか、えぇ？」
「あ゛ァ？」
負け惜しみじゃない、なんらかの根拠あっての反論だ。
「テメェの掌がどうした？　手形なんぞに興味はねぇよ。この〝シャバ僧〟がやった事はラビッツの看板に泥を塗ったたって事だろうがよ」

「む」

チッ……痛いところを突かれたな、こいつの言う通り今の俺は食客とはいえラビッツに属している。つまり俺への不義理はそのままラビッツへの不義理と言ってもいい。

どうする？　ラビッツという国の政治面から見た場合エードワードはあちらに付いてもおかしくはない、だがこちらはケット・シーの性質について俺に教えたビィラックは引き込める。

いやダメだ、この場にヴァッシュがいるってのが痛すぎる。この場で大岡裁きが出来る以上は完膚なきまでの論破以外の決着ではマウントが取れない……っ！

「なんでいきなり喧嘩し始めてるんですわ……全く理解できんですわ……」

俺もイーヴェルもエムルの呟きは無視した。理屈じゃないんだよ、自分だけが使ってると思ってたものを別のやつが全く同じレシピで使ってたのを見たときのモヤモヤ感を五倍にしたくらいの感情が常に渦巻いてる感じなんだよ。

だがこのゲームにポーズボタンは存在しない、動き出した歯車は止まらないのだ。

「それでケジメってか？」

「おうよ、手癖の悪い手が悪さをするってんなら、シメるしかねぇだろうがよ」

「フッ……浅はかなり」

馬鹿め隙を晒したな！　お前の言葉から言質は取ってるんだよ！！

「真に組織の事を考えているなら希少な宝石匠を使いつぶすような真似などとてもとても……出来るはずがないよなぁ？」

「ぐ」

「技術は宝だぜ？　価値のわからない奴には勿体ない代物か……」

無罪放免ルートは不可能、であれば俺がすべきは減刑……即ちどれだけダルニャータへのケジメを軽く出来るかを突き詰めるべきだ。そしてこのヤンキー兎にマウントをとってドヤ顔したい！　不思議な気分だ、シルヴィア相手に勝ちたいと思ったあの時と同じ気分だ……

「何か双方ともにイキイキしてないかい？」

「エードワードおにーちゃん、アレは水と油じゃなくて油と油なんですわ。どっちが格上かで争ってるだけですわ」

俺もイーヴェルもエムルの言葉は無視した。分かってんだよそんなことはよォーっ！　さっきからずっとデジャヴ感じまくってんだよ！　これはアレだ、FPSとかでちょっと自信のある兵種でマルチに潜ってたら自分と全く同じ兵種の別プレイヤーと味方同士でマッチングした時の感覚だよ！！　味方として共闘はするし困ってたら救援に行くけどそれはそれなんだよ！！！　たとえ味方同士だとしてもキルレという形で優劣は決まる、わぁ凄いですねグッドゲーム乙っしたー……で終わるとでも？　たった1キルの差でも死ぬほど悔しいわ！！

「罪の清算はこと彼においては貢献にすべきだ、少なくとも被害者との示談という点ならとっくの昔に成立してるんだぜ！　俺が許してるんだからなァ！！」

「日和ってんじゃアねーぜ！　手に職ありゃあなんでも許されるなんざ、道理が通らねぇだろうが！　人じゃねェ、国だ！！　ナメられたら終いだろうがよォ！！」

くっ、正論だ。だが道理はこちらとてある、俺の予想が正しければこと生産職の最上位は国宝級に相当する。懲役とかそういうパターンであったなら勝ち目はなかったかもしれないが……才能を潰すような刑罰を回避する為なら奴の役割は力になる。

奴は国のメンツメンツと言っているが、国への利益という観点から攻めていけば俺の勝ちは目前！　マウント取って末代までドヤ顔かまして――――――！！！

「おめぇさんらよう……落ち着けや、なぁ？」

物理的な破壊力があるわけではない、だが腹に重い一発が入ったかのような錯覚を覚えて俺もイーヴェルも動きを止める。

「おめぇさんらの言いてえことはよぉく分かった……だがなぁ、肝心な事をよう、忘れてるんじゃぁねぇかい？」

「肝心な……」

「事？」

なんだ……賄賂か？　いや、違うな……なんだ？？？

「ダルニャータ」

「は、はひぃっ！！」

「ここでおめぇさんよう……シケた嘘は吐くんじゃあ……ねぇぜ？」

「も、ももっ、もちろんでごじゃいますぅ！！」

ヴァッシュから向けられる威圧感の全てを受けているダルニャータは今にも倒れてしまいそうな様子だ、まぁ厳密にどういう関係なのかは分からないがヘマした平社員がＣＥＯ……いや、財団総帥の眼前に突き出されたようなものだろう。しかも文明的にその場で切り捨てられる可能性すらある。

「――――何故、そう動いたのかを……言いな」

弁護士と検事ごっこをしていた俺とイーヴェルなんかとは比べ物にならない絶対的審判者がゆっくりと、しかし簡潔に問いかける。

「あ、えう、あう…………そ、その、それは………」

馬鹿な、ネコババにご大層な理由などあるもんか。出来心ですと正直に白状できる度胸があいつにあるとは思えない、どうする？　どうフォローして……

「そ、その……っ、懐に、いれ、入れたことは、も、もも、申し開きもごじゃ、ございません……っ！　し、しかし！　しかし！！　こ、この琥珀の中に、封じ込められ、られているものは………！　あまりに、あまりに危険で……！　と、鳥の人にま、万が一があっては、キャッツェリアの威信にかか、関わると………！」

一同、沈黙。

俺とイーヴェルはどちらが話しかけるでもなく互いに視線を交わすとやれやれと肩をすくめると………

「「先に言えやブッ飛ばすぞコラァ！！」」

「ひぃぃい！！？」

ご大層な理由あるじゃねーか！！

大岡兎裁き（後書き）

ちなみにヴァッシュは最初からダルニャータがネコババした理由を知ってたし（厳密には察してた）、エードワードはそれについて事前に説明を受けてたりする

つまりアホ二人は茶ば…いやなんでもないです

終末論未遂の残滓（前書き）

更新時間ガッタガタで申し訳ない……

つまりなんだ？　ローエンアンヴァ琥珀晶の中に入ってるものを見たダルニャータはそれが極上品質のものであると同時、封印されたそれのヤバさに気づいたと。
キャッツェリアに依頼を出したのはレベル９９の頃だったか、新大陸の過酷な環境からすればビギナーってところだ。
無論、宝石である以上ダルニャータの手にかかれば最高のアクセサリーとして完成させることは容易い。だが最高とは即ち最大の効果を持つということ、万が一にも作ったアクセサリーで俺に害が生じるようなことになればシャレにならない。

その代わりに作ったのがお手軽壁のシミ体験装置であるのはどういうことなのかちょっと問い詰めたいが、まぁ今回は不問としよう。
有用だったからな。

「だから使わなかった、と」

「は、はい……」

さてどうしたものか……ネコババした点は取り繕えないが、使わなかった理由に関してはヴァッシュのお墨付きがついてしまった。
ケジメという案件からは離れたものの、そうなると面子が立たないのはキャッツェリアの方だろう。

「おうニャイ、隠し立てなくダルニャータを連れてきたこたぁよう、俺等(おいら)ぁ評価するぜぇ」

「ニ、ニャッ！　ご子息には幾度となく世話になったニャ、それを裏切ることはできないニャ」

「だがなぁ……俺等ぁはよう、そいつが怖気付いた理由も分かるんでなぁ……」

くっ、ここだ！　解説を挟むことでダルニャータの行動が結果的に正しかった風にするテクニック！！

「兄貴、一体あの琥珀には何が封じ込められているんで？　兄貴ほどのお方が気にかけるならば並大抵のものではないようっスが」

「あぁ、あん中にはよう……「風」が入ってるのさぁ」

……風？　ウィンド？

「懐かしいもんだぁな……それはよう、只の風じゃあねぇ。アガトレオの血肉ってぇシロモンよう」

「アガトレオの血肉……？」

ユニークモンスターの中にその名はなく、レイドモンスターは固有にして単一の名詞を持たない。となればユニークでもレイドでもない……そう、例えば〝緋色の傷（スカーレッド）〟のようなモンスターか？　だが「血肉」と「風」がどうにも繋がらないと感じるのは俺だけか？

「そのアガトレオってェ野郎（ヤロー）をオヤジは知ってるのかよ？」

「当たり前よう、奴を調伏（たお）したのは俺等（おいら）ぁだぜ？」

む、ヴァッシュが一瞬こちらを見た。どういう意図だ？　まだ俺が知るべきではない情報ってことか？　いや、違うな……だとしたらアガトレオを自身が倒したって情報自体はぐらかせばいい。

「沙汰を言い渡そうかぁ………ダルニャータ」

「はイッ！！」

「そこのサンラクもそう大して気にしちゃあいねぇし、おめぇさんの危惧も分からねぇこともねぇ。だがその手癖の悪さはちったぁ反省すべきだな………ラビッツからも大口の仕事を出す、暫くは真面目に働くこったぁな」

「か、寛大なお心遣い、感謝いたしますぅぅ！！」

びたーん！　と地面に狭い額を叩きつけながらダルニャータがこうべを垂れる。そしてヴァッシュは側に立っていた招き猫王に視線を向けると続けて口を開く。

「ニャイ、ただ俺等ぁの判断で手打ちにしたんじゃあ手前(てめぇ)の面子が立たんだろうよう…………近く、嵐が起きる。ウチから手勢を貸してやらぁ」

「む………ありがたいニャ、ヴァイスアッシュ殿がそう仰るのであるニャら、戦う力は多い方が良いんだろうニャ」

嵐……レイドモンスターのことか？　確か貪る大赤依がジークヴルム撃破以降に再挑戦可能だったか、であれば他のレイドモンスターも同じタイミングで解放されている可能性は高い。キャッツェリア付近にレイドモンスターがいるってことか？　いや、あるいは……

「あぁ、最後に……サンラク、今のおめぇさんならあの琥珀……使い熟せるだろうぜぇ」

「あ、マジでござる？」

よし使用許可が降りた、只では返さんぞドラ猫ォ……！！

「てな訳だ、宴もたけなわ……ここらで御開きと行こうじゃあねぇか」

玉座から降りたヴァッシュがどこかへと去っていったのを合図に、その場にいた殆どの面子が肩から力を抜く。

「命拾いしたニャ、ダルニャータ。ヴァイスアッシュ殿の寛大な御心に感謝するニャ」

「は、はぃい……」

「しばらくこき使うから覚悟するのである」

「せ、せめて一日三食は保証していただきたく……」

「厚かましいニャっ！」

ゴッ！　と丸々とした見た目からはあまり想像しづらいマッシブな音でダルニャータの頭に拳骨を落とすニャイ……何世だっけ？　まぁ招き猫王の元へと向かう。

「おっと、ちょっといいかい猫の王様方」

「鳥の人」

「サンラクだ、あんたら的には曰く付きの代物かもしれないが兄貴のお墨付きがついた以上、宝石のまま飾るつもりもねぇ……今度こそ依頼を頼めるかい？」

足りない素材がある？　成る程、金に糸目はつけんぞぉ？　今の俺はスポンサー付きだから余程のレア素材じゃなけりゃ用立てられる。
そんなわけでいくつかの鉱石やらなんやらを渡しつつ、俺はポンとダルニャータの肩に手を置く。

「信頼って大事だよな？　俺は少なくとも大事だと思ってる。それと同時、今の俺は君に対する信頼をほぼプラスマイナスゼロの地点に置いている………言ってる意味がわかるな？」

「は、はひ」

「この仕事如何で君への信頼が確定するわけだ、あまり失望させてくれるなよ……？」

「ひぃっ！」

「ま、あと二つのアクセサリーの製作者の腕だけは疑ってないけどな！　よろしく頼むぜダルニャータ君……？」

「さ、最高のものを作りますとも！！」

それは何より。
おや？　なんか人知れず帰ろうとしてる奴がいますねぇ……

「おいイーヴェル」

「んだコラ、やんのか」

「まぁそんな喧嘩腰になんなよ、仲良くしようぜ？」

はい、握手を求めるポーズ。

「…………」

「…………」

「……ああ！　ごめんごめん！！　俺の頭が高すぎたかァ！　悪いな俺の方がビッグスケールな視点で世界を見てて！！」

「おう、図体の割に頭が悪(わり)ぃと思ってたが、頭が頭……それも仕方ねェか。鳥頭だもんなァ？」

カチッ（頭の中でなんらかのスイッチが入る音）

「よーし喧嘩だ！　土ペロさせてやるから表出ろやオラァ！！」

「買ったァ！」

「なんで全面敵対してるのに妙なところで息ピッタリなんですわキィーック！！」

「おっぐ！！？」

だから……っ、レベル１００ライン突破したお前の蹴りだと割とマジで命が危険になると……っ、何度言えば……っ！！

「はぁーっ！　ザマァねぇなオイ！！　随分と頭が低くなっ」

「じゃかあしい！！」

「おぶぎゅっ！？」

「イーヴェル、まぁぁぁぁ……た武器を壊したらしいのう！　説教じゃ！！」

「あ、姉貴……後頭部は、事故る……生命的に、事故る……」

ビィラックのニードロップは効果抜群のようで、ゲームがゲームなら後頭部から煙かたんこぶでも出してそうな様子で悶絶するイーヴェルが引きずられていくのを見送りながら、俺はごりっと削れたＨＰの回復を図る。くっ、愚者ガチャホンマお前ェ……

はて、何か忘れているような？

そもそも息抜きのためにシャンフロにインした事を、そしてＧＨ：Ｃの存在を完全に忘れていたことに気づいたのは朝日が昇ってからだった……

Ｘデーまで、残り二日。

終末論未遂の残滓（後書き）

猿でも分かる外道対外道と同族嫌悪の違い

外道対外道は基本的にキャッチボール、常に顔面狙いの豪速球ではあるものの基本的には投げ合い
同族嫌悪は双方同時にフルパワーでピッチング、キャッチして投げ返すという選択肢が最初から存在しないので相手のボールが着弾し次第乱闘が始まる

またの名を妖精神拳

じめんにめりこんでいる。

かべにうまっている。

てんじょうにつきささっている。

ちかてつにげきとつした。

とらっくにげきとつした。

びるにおしつぶされた。

みずにおちた。

いしのなかにいる。

がそりんすたんどふみぬいてばくはつした。

なんかもうとりあえずばくはつした。

なんならなにもしてないのにばくはつした。

もしや自分は気づいていないだけでドジっ子属性があるのではと疑いもした。だが、今や俺はＧＨ：Ｃのシステムに完全適応したと言っていいだろう。

「馬鹿な……完全敗北（パーフェクト）、だと……？」

「感謝するぜ……ＴＱＣは今ここに完成を見た……！　いざ成敗、ティンキー☆」

「ぐぁぁぁあ！！」

もっぱら打撃用に使われるティンクル☆ワンドが致命的一撃を叩き込み、なんか筋肉ムキムキの全身タイツが派手に吹き飛ぶ。プレイヤーネーム「Ｄｒ．ガトーショコラ」……てめーに舐めさせられた三敗の辛酸……ノーダメストレート勝利でチャラにしてやろう。

「いい仕上がりだ……」

いや、うん。お相手さんはカスプリをお望みかもしれないが、アレはアレで結構使ってて頭使うというか脳筋みたいな性能してるくせに活かすためには周辺環境を把握しなきゃいけないから使ってて疲れるし……まぁティンクルピクシーの超近接戦闘スタイルは参考になるからセーフですセーフ。

「さて……」

昼あたりからブーストかけてレートに潜ったのでそろそろ次で最上位ティアーに到達する。この手のゲームはオカルト的な連敗地獄に

陥ることがままあるが……フッ、今の俺ならシルヴィア・ゴールドバーグにだって負けない。いや負けるわ、あいつ性能おかしいもん。
だがそれはあくまでも非エナドリ充填時の話だ……
「お、マッチングした」
んー？　対戦相手の名前……「カッツォクラウン」？　クラゲじゃねーか、というかコレ……………へぇーほぉーふぅーん？？？？？
いやいや、別にその名前が特許ってわけでもないし奇跡的確率でそれっぽい他人の可能性もある。
とりあえず野良マッチだと遭遇と同時に挨拶する場合もあるし……おっ、見つけた。なんだっけかあのキャラ……アムドラヴァでもシルバージャンパーでもない。なんだ……？　まぁいい、とりあえず声を誤魔化して……っと。
「カッツォクラウンさん対戦お願いしまーす（裏声）」
「え？　あー、うんよろしくお願いします」
ほっほぉーーーーーーん？　当確でございますな？？？
く、くくくく……なんとなくＧＨ：Ｃを普段使いの「サンラク」でやるのが憚られたので即席ネーミング「リカースティール」でやってたのがこんな所で役に立つとはなぁ……！！
フィールドタイプは切り株型か、ケイオースタワーを中心に円形のマップが広がるタイプで全体的に直線が少ない形式だ。なんかアプデで追加されたらしい。
「おちょくるのは確定としても……なんだあのキャラ、見たことね

ぇ（裏声）」

考えられる可能性としてはＤＬＣ、ダウンロードコンテンツか？
もう日付は変わった、そうなると今日実装されたキャラという可能性が出てくる。
見た感じ、腰に吊るしている二丁拳銃で戦う系のキャラだろう。そして暫定カッツォ改め確定カッツォの表情からして近距離戦はあまり望ましい様子ではなかった。使い慣れないキャラだから、という可能性も捨てきれないがそれなら距離を離す動きは必要ないはず。

「遠距離主体、かつ手数で攻めるコンボファイターってところか（裏声）」

「あぁ、知らない感じの人？　そうだよ、俺もさっきアプデしたばっかだけどこの「ダスト」は遠距離型のアタッカーだよ」

「わぁ、ご親切にありがとうございまーす！（裏声）」

舐めプかぁ？　面白い、ブチのめしてやるよ！！

「ティンクルパウダー☆（裏声）」

「くっ」

今使っているティンクルピクシーはクソみたいな耐久と約一メートル未満の短射程というデメリットを負う代わりに、非常に高性能な拘束と鬼性能のコンボ持続力を持つキャラだ。
若干発生が遅いのが不満だが、拘束技である「ティンクルパウダー☆」はガード状態以外で敵が触れれば問答無用でスタン状態にする。
とはいえティンクルピクシーはそれなりに研究も進んだキャラ、如

何に魚野郎とはいえ、容易く捕まりはしない。

「見せてやろう……ＴＱＣを！（裏声）」

「え、なにそ……のわっ！？」

霧状に散布された不思議な粉（隠喩）から距離を取ることは想定済みだ、俺はティンクルピクシーの小柄な体躯と宙に浮いている性質を最大に利用した最短挙動で奴の背後に回り込むと、その背を蹴り飛ばして不思議な粉の中へと叩き込む。

ＴＱＣ、正式には妖精格闘術（ティンクル・クォーター・コンバット）。
全国、いや全世界のティンクルピクシー使い達が連綿と受け継ぎ、そしてこのケイオースシティで開花した如何に相手をスタンさせて殴り倒すかを追求したバトルスタイル！　そして俺のＴＱＣはイアイフィスト流を組み込んだ派生形。
意識の隙間を穿つイアイフィストの極意が組み込まれた事で実質的なレンジを三メートルにまで拡張している……！！

「身体の輪郭が歪むまでティンキー☆してやるよクラゲ野郎」

「あっっ！！　てめーまさかサンラ――――」

「ティンキー☆☆☆（裏声）」

「ぬわぁぁーっ！！？」

わははははボッコボコにしてやんよ！！

……

…………

オイカッツォ：おいティンクル羽虫

オイカッツォ：おいコラ出てこいティンクル羽虫

サンラク：ティンキー☆

オイカッツォ：後でＴＱＣとかいうやつ教えて

オイカッツォ：いやそうではなく

サンラク：しれっと本音優先させせんなよ

オイカッツォ：それはともかく！　メールにユーガッタのパスとか
送っといたから当日はそれで通れると思うよ

サンラク：確認した

サンラク：〝顔隠し（ノーフェイス）〟様て

オイカッツォ：いや他にどう登録しろと

サンラク：これ素顔でパス出したらただのアホじゃねーか

サンラク：駅から覆面被って来いってか

オイカッツォ：コスプレヘルメットつけたまま居酒屋に入った奴が何を今更

サンラク：言うてくれおる……

サンラク：まぁ受けたもんは仕方ない、なんとかするわ

オイカッツォ：覆面レスラーとかってこう言う苦労してたんだなぁって、それに別に◯◯様ご来場です！　なんて大々的に喧伝されるわけでもないんだしそこまで気にしなくていいでしょ

サンラク：まぁそりゃそうだろうけど

サンラク：ていうか一つ聞きたいんだけどさ

オイカッツォ：ん？

サンラク：どうせGH：Cをやるのは確定だろうけど、それについてちょっとな

…………

……

「さてと……」

ちっとばかしやる事が出来ちまったな。アプデも完了したようだし……今日は気分的にライオットブラッド・クォンタムかな、悪食的に貪欲にってか。

「徹夜行軍だ」

Xデーまであと僅か、モノにしてやるよ……！！

またの名を妖精神拳（後書き）

今、妖精神拳三千年の歴史を受け継ぐ胸に傷持つ妖精の世紀末救世主伝説が……

禁断の解放（前書き）

ハバキリ神速種実装マジ？　というか、あの、バイティングエッジ……テコ入れ、無し……？　嘘だよね？　薙刀モードのスタミナ消費軽減くらいなら……あ、無い？

悲しみの更新

禁断の解放

Xデー当日。からりと晴れた空模様に冷たさを増した風が吹く。

「そろそろ本格的に防寒の季節か……」

無断で行くと下手すれば帰宅中にネットオークションに出品された俺のVRシステムを見つけてしまいかねない、流石に「テレビ出演してくるわ！」とはちょっと言いづらいのでネットで知り合った友達に会いに出かける、ということにした。
なんだか既視感を感じるリニアの中で、携帯端末を使って調べるのはおそらく対戦相手になるだろうアメリア・サリヴァンの情報………ではなく、ちょっと前からお気に入り登録している動画サイトだ。

「あー、そういう動きか……」

視覚と聴覚は動画に向けつつ、思考の何割かはやはりアメリア・サリヴァンについて考える。

アメリア・サリヴァン。
「ダイナスカルの猛禽」なんて物騒なあだ名で呼ばれる全米二位のプロゲーマー、女性以前に人として結構なビッグスケールという話だがそれは関係ない。ゲーマーとしての彼女は重量級キャラを好みながらも驚く程に技巧派だ。

重量級キャラというものは、まぁ先入観やら創作におけるセオリーやらのせいで「鈍重で高火力」ってのが一般的だ。そしてそういう性能をしたキャラは得てして粗雑な性格、またはバトルスタイルだ

ったりする。だが格ゲーに関しては自分よりも速度面で格上の相手が多い関係上、むしろ冷静な頭から要求される。

アメリア・サリヴァンはそういうテクニカルなプレイヤースキルを限界まで突き詰めた人物だ。少なくとも参考で見たシルヴィアとの対戦動画を見る限り、３ラウンド目でさらに加速したシルヴィア・ゴールドバーグを相手に重量級キャラで結構な時間耐久を成立させるなど俺には出来ない。

いつだったか、俺やカッツォをリズムを作る持ってるで区別した事があったが……アメリア・サリヴァンはそのどちらにも該当しない。奴は敵のリズムに対応した上でそれを崩すタイプだ。いや、もっと厳密に言えば――

「どちらにせよアマチュアが勝つ負けるを考えてる事自体烏滸がましい気がするけどな」

今の俺を動かすのは勝ち負けじゃないんだなぁこれが。
だからこそカッツォのやつにあんな「提案」をするし、数日前からやってたとはいえ詰め込みの付け焼き刃で「お遊び」の練習をしてたりな。

今の俺は結構いい感じのテンションを維持している、エンジンをちょっとだけ温めてる感じだな。
隠し球もあることだし、今の俺にできることと言ったら……アメコミを読み込むくらいか、動画を見て暇つぶしするくらいか。

◆

なんか思っていた八倍くらいすんなり入れた。

こう、警備員とかに呼び止められるんじゃないか……と不安もあったのだが、どうもヒューマンパワーは機械に取って代わられたらしく、ＴＶ局の中に入る諸々の手続きは全て機械的に進行した。

人間的温もりがなくなり、冷たい機械が普及するってのは一抹の寂しさを感じさせるものだ……はー暖房あったけー。知らない場所でもナビゲートしてくれる地図アプリ超便利ぃ……。

さて、油を売ってる場合じゃないな。トイレは……こっちか、ちゃっちゃと済ませますか。

……

…………

…………………

ガチャ、と個室トイレの扉が開かれる。

丁度男子トイレに入ってきた男性が俺の顔を見てギョッとした顔で

目を見開くが、ここで下手なリアクションを取っているうちは二流だ。

「あ、どうも」

「え？　は？　あ、うん……どうも？」

そう、慌てるから不審者感が増すのだ。機械によって入場が許可されている以上、堂々たる態度でいればいい。

俺の記憶力がピンボケしていなければ最近バラエティ番組への露出が多くなってきた結構有名な俳優の方になんでもないかのように挨拶すると俺はトイレの外へと足を踏み出した……。

「控え室……こっちか」

なんだろうね、何故俺はこんな場違いな場所で地図片手に歩いているんだろう。人間というものは自分を客観視しだすと哲学的な世界に思考が飛ぶ傾向があるが、俺もその例に漏れなかったらしい。

本来であれば態々意識して早起きなんかせず、気分のままに起きて遅めのブランチなんて洒落込んで、ゲームして夕飯食ってゲームして……それが俺の平穏だったはずなのに……今の俺は、何故公共電波の発信源たるＴＶ局をコスプレみたいな格好で歩いているんだろう……なんかの大会で好成績残してた芸人コンビと思しき人達からの視線が痛いです。

「……ここか」

もうやだぁ……〝顔隠し〟様控え室って……入りたくねぇ……この部屋に俺が入ったという事実をこの世界に残したくない……ええい、南無三！！

「……いや、流石に扉を開けた瞬間パパラッチに撮影される、なんてことはないだろうけどさ」

流石にＧＧＣの時に宿泊したホテル程の豪華さではないが、バラエティ番組なんかで時折見る事ができるＴＶ局の控え室そのまんまって感じだ。

ただ一つ異常な点があるとすれば、部屋のど真ん中にでん、と小型冷蔵庫が置かれている事くらいか。

「………」

ガチャ。

お、おぉ……ライオットブラッドが全種類入ってる………なんだ、それなら持ってくる必要はなかったかも。

「ん？」

なんか缶と缶の隙間にカードが挿さってる？

「〝顔隠し(ノーフェイス)〟様へ、ガトリングドラム日本支社より…………い、いや、テレビだもんな、うん」

なにか脳の片隅で叫ぶものがあったが、目を瞑れ、口を閉じるんだ俺の一般常識！　俺はまだインスタント味噌汁をライオットブラッドで作るくらいのヘビーユーザーには堕ちたくない！！　スポンサー的なアレだよ！　そうに違いない！！　信じる思いが力になる！

「つーかこんなに会ってても飲まないし……」

日に三本以上摂取したユーザーは合法堕ちする、というのはライオットブラッドユーザーの中では常識だ。無論合法なので何か法に触れるわけではないが……いや、だが、うーん、全米二位………やるか？　合法的飲料を合法的、ただし裏技的に摂取する事で強大な力を得る闇の摂取法。

何故かライオットブラッドをスポーツドリンクと混ぜて飲む事で瞬間的にカフェインを潤動させる「アクセル」

何故かライオットブラッドを酒と混ぜて飲む事で泥酔の状態異常を無効化する「レジスト」

何故かライオットブラッド三種類を混ぜた物を缶一本分だけ飲む事で「ヤバい」以外の語彙力が失われる代わりに尋常ではないレベルでキマる「タブー」

それら三つに並ぶ四つ目の飲法……「ジョイント」。闇の服用四天王と呼ばれるそれらはあまりに危険とされながら、どう足掻いても合法という……それ故にユーザーのモラルが真の意味で問われるのだ。

「おお偉大なるライオットブラッドユーザーの先達よ……合法の海に堕ちた英霊達よ……俺にカフェインのご加護を……！」

いざ南無三！！

……

…………

………………

「あー、〝顔隠し(ノーフェイス)〟さん時間で…………うおっ！？」

「あぁ……うん、知ってます知ってます。時間が押してるのでささっと行きましょう」

エナジードリンクはＲＴＡに似ている……綿密な時間管理が理想的チャートには必要不可欠なのさ……

禁断の解放（後書き）

・合法堕ち

ライオットブラッドは当然合法的飲料なので極論を言えば何本飲んだところで法的に規制されるわけではない。しかしながら一日に三本以上の摂取を敢行した場合、高確率でライオットブラッドの熱心なユーザーになる。

むしろ熱心過ぎて日常生活における飲料水をライオットブラッドで代用しようとしたり、狂ったようにライオットブラッドを使った料理をネットに上げ続けたり、果てには謎の技術で燃料化したライオットブラッドを燃焼して気化させることで室内全域で摂取するなど

など……

あまりに常識を逸した奇行、しかしながらいずれも合法的ラインを遵守していることから「詳細と事実は秘するがライオットブラッドを一日に三本以上キメると合法堕ちする」と語られるようになった。

だが、合法の海（あるいは沼）に堕ちる寸前で踏ん張りながらも、その深淵よりライオットブラッドの狂騒を汲み上げんとする者がいるのもまた事実。

そうして生まれたのがライオットブラッド闇の服用法と呼ばれるものであり、その中でも「アクセル」「レジスト」「タブー」「ジョイント」の四つは合法の海に半身浴するレベルとされており、特にジョイントとタブーの開発者は合法堕ちした曰く付きのテクニック

である。

チャンネルはそのままで

◇

「あー、あー、皆さん見えてますか？　チャンネルそのままっ！　ＴＶユーガッタから愛を込めて、笹原エイトのチャンネル８（エイト）！　始まりますよーっ！！」

パチン、と華やかな笑みを浮かべる女性が指を鳴らした瞬間、現実空間であるはずのスタジオ内にいくつもの流れ星が流星群となって降り注ぎ、女性の真上にポップなデザインのロゴを表示する。

「見てくださいこれ！　これ！　私も詳細知らないんですけど今日はスペシャル版という事でいつもの場所ではなくＴＶユーガッタ第二スタジオからお送りしてまーす！　凄い！　完全投影ＡＲですよ！！」

クルクルと女性……今売り出し中のアイドル笹原エイトが人差し指を立ててクルクルと渦を作るような動きをすると、それに追随するように小さな銀河系が生み出される。

フルダイブＶＲではない、コスト面の問題から一般家庭への普及という点ではＶＲに敗北したものの、資金面での問題を解決できるだけの企業などが採用する技術が存在する。

それこそがＡＲ、いわゆる拡張現実である。

ＶＲが電脳に世界を作る技術であるならば、ＡＲは現実世界をより鮮やかに彩る技術、そしてとある人物の思惑によって本来は小さなスタジオで収録するはずだった「笹原エイトのチャンネル８！」は

ＴＶユーガッタ社内でも数少ないＡＲマシンが備え付けられた大型スタジオ、かつゴールデンタイムに生放送という大躍進を遂げていたのだった。

「いやホント、割とマジに詳細知らされてないんですけど……ドッキリなら早めに言ってくれるとエイトちゃんのメンタルが守られるんですけど？」

『※マジでドッキリじゃないです　ｂｙディレクター』

「ひぇっ！　空間投影カンペ！？　特番レベルの奴ですよこれぇ……！　あ、これ配信動画のコメントも拾えるんだ……視聴者の皆さんもＡＲデビューしてますよこれ！凄いなぁ……時代ですねぇ……未来キてますよ！」

スタッフが操作したのか、エイトの背後をＵＦＯが飛んで行った。スタッフ達もまた最上級の設備にテンションが上がっているのか、どこか浮ついた様子のエイトは気を取り直すとカメラへと笑顔を向ける。

「本日はなんと！　特別ゲストを呼んでいるのです！　私的にこの状況について何か知ってるんじゃないかなーと睨んでいるのですが……早速ご登場してもらいましょう！　プロゲーマー、魚臣　慧さんでーすっ！！」

次の瞬間、ＡＲ技術によって巧妙にカメラから隠されていたセット裏から男……慧が現れる。そしてその登場はリアルタイムでＡＲシステムによって脚色され、番組を視聴する者達にはまるでいきなりその場に転送されてきたかのように見えているだろう。

「ははは……どうもどうも」

「GGCの時にお会いしましたから……三ヶ月ぶりくらいでしょうか？　お久しぶりですね！」

「そうですね……皆さんどうも、魚臣です」

スタジオ空間に投影された配信動画コメントが瞬く間に文字列の奔流となるのを眺めながらも慧はにこやかに挨拶をする。

スポーツ選手などと比較してもゲームプレイの画面を見られる、つまりテレビに出演するのと似た状況で活動するプロゲーマーは半分はタレントのようなものである。

カメラへと営業スマイルを向ける慧の立ち振る舞いは手馴れたものであり、番組は順調に進行している……少なくとも今現在は。

「で、魚臣さん？　いきなりディレクターから「突然だけど今週のチャンネル8は特別放送で第二スタジオ使います」ってマジで打ち合わせなく言われた私に説明して下さるんですかー？」

「いやいや、これに関しては確かに無関係じゃないけど僕も被害者ですからね？　話すと長いんですけど……そうですね、元々エイトさんにも秘密のゲスト呼ぶかもって言ってたじゃないですか僕」

「そう！　そうなんですよ！　実は魚臣さん側からシークレットゲスト呼んでもいいかー、って打診来てたんですよね！　もしかしてその人が？」

「いやー……そこからさらに込み入った事情があるというか……そのシークレットゲスト絡みでさらに二人ほど割と強引に差し込んで

きたというか……」

「ん？　それって全部で三人いるってことですか？」

「一人はマジで余分というか……んー、もう呼んじゃいますか！　はい登場演出お願いします！！」

エイトは知らないが裏方として、そして番組の制作をするにあたって突発的に発生した事情を知る者達の操作によって三つの登場演出がARによって投影される。そしてそこから現れる三つの人影。

一人は少女と思しき小柄な身体に、あまり素性の隠蔽に貢献しているとは言い難い目元だけを隠す仮面をつけたシルヴ……謎の人物。

一人は仮面の少女とは対照的に男にも負けない程の長身でありながらも女性らしさを損なっていない体躯に何故か般若の面をつけたアメリ……謎の人物。

一人はおそらくコスプレ用のものであろう人面にくり抜いたカボチャをモチーフにしたのだろうフルフェイスヘルメットで顔を隠し、何故か腰にエナジードリンクを吊るしたサンラ……謎の人物。

「あの、魚臣さん？　約二名は多分私面識あるっぽいですし、あの方も見間違いじゃなければ割とものすごいビッグネームじゃ……」

「ミステリアス・シルバーマスクさんとマスクドハンニャさんです」

「え、いやあの……」

「バカンス中の全米一が日本のテレビに出演するわけないじゃないない

ですかハハハ、あくまでも名義上はミステリアス・シルバーマスクですよ」

「ミス・エイト！　おヒサし！」

「おっと誤魔化すつもり皆無なキラーパスをうまく捌けるほどエイトちゃんは司会力高くないですよぉ！？」

「うーん、僕もフォローできるほど肝座ってないですからねー……はははコラコラ、「死んだ目をした魚臣きゅん趣深い」じゃねーぞー」

一体どういうことなんだとエイトが視線を向けた先、演技ではないマジもんの諦観で澱んだ目をした慧を認識したエイトの笑顔がわずかに引きつる。

だが腐ってもアイドル、腐っても己の冠番組。なんとか自身の流れへと戻す為にシル、もとい謎銀仮面(ミステリアス・シルバーマスク)から残る二者へと視線を向け……

「あなたはノーフェイスですか？」

「…………」

カメラ映りなど一切考慮しない一点集中で顔隠し(ノーフェイス)を凝視するアメ、もといマスクドハンニャと、どこか祈るように右手で腰のエナジードリンクに触れながらも無言で睨み返す顔隠しの姿に、笹原エイトは荒波の芸能界においてなお未だかつてない大嵐を予感したのだった……

チャンネルはそのままで（後書き）

同じ事務所のアイドルとかゲーム声優とかを呼んで和気藹々とゲームしたりする番組がいきなりゴールデンタイム生中継で全米一位二位、よく分からん仮面ヤローをゲストにガチバトル放送

視聴者数が国内外含めて十倍になるまであと二分

三つ巴の三角形（前書き）

タイタンフォールからタイタンとフォール（さらに言えばウォールラン）を取り除いたゲームをスピンオフと呼んでいいのか……でもＰＵＢＧとオーバーウォッチのいいとこ取りって時点で既に強キャラですよね、インドミナス・レックス的強さを感じる

三つ巴の三角形

◆

エナジードリンクの神は気難し屋だ、ただ祈っただけでは視線を向けてすらくれない。
だが祈り手がカフェインを摂取していれば途端にエナドリの神様はご加護を与えてくれる。一種のトランス状態に近いな、シャーマンかよ。
例えばそう、俺よりもタッパのある般若面の女にメンチ切られている現状においても心を強く持つための勇気であったりな。
「私はGGCであなたを見た、ですから私はあなたに会いたいと思いました」
「……そ、それはどうも」
なんで般若面チョイスなんだ、エナドリ神からもらった勇気が端から崩れ始めてるんだけど。つーか単純にこえーよ！！
「あ、あのー」
「私はリアルカースドプリズンの称号に執着していません。しかしながら、あなたがリアルカースドプリズンの称号を取得した理由が知りたい」

「えぇ……理由……？」

そもそも自称した覚えがないんだが。ほら見ろ、カメラマンと笹かまぼこさんが困ってるだろうが。

「ほらアメ……ハンニャー！　もうちょっと愛想よく！　ほらカメラにピース！！」

おっと謎のシルバー仮面、素性を隠す気ゼロな謎のシルバー仮面じゃねーか。え、俺もピースするの？　仕方ねぇな……イェーイ。

おやカッツォ君、マイクが拾えないくらいの小声でどうしたんだい？

「サ……じゃないや顔隠し（ノーフェイス）、どうしたの？　なんか挙動の一々が妙に不審だけど」

「……日本産とはいえ「タブー」は流石にアレなのでバックドラフトとトゥナイトを「ミックス」してスポドリで混ぜてぐいっとね……へへへ」

「ちょっ……「ミックス・アクセル」とか正気!?　っていうか、ここにもう一本持ってきたってことはまさか……！」

「ふふふふふ……「ミックス・アクセル・ジョイント」さ……」

「ば、馬鹿な……」

俺の口から放たれたコンボ名にカッツォが信じられないと頭を振りながら恐れ慄く。

「タブー」の廉価版とはいえそれなりにリスキーな「ミックス」を「アクセル」で加速させつつ、さらに「ジョイント」をも解禁する

……この後しばらくエナドリ断ちをしないと俺をしても危うい程の危険摂取だ。合法だけどな。

正直気づくと無意識のうちに腰のライオットブラッドを撫でてるのでちょっとヤバいのだが……今の俺は普段以上にキマっている、どっちの意味でもな。

「そ、そこまでして勝つつもりなの……？」

「いいや……？　勝ち負けはそこまで重視してないぜ……ただ、やりたい事をやる為にはカフェインレベル５．５以上が必要なのさ……カフェインレベル５以上で体感１．５倍の集中力をデフォルトに出来るのは常識だろ？」

「あ、ごめん流石にそこまでは履修してない、つーかそこまでライオットブラッドに魂売ってない」

「にわかやろうめ……」

「理性的と言ってもらいたいね」

とはいえ「ジョイント」の実行は結構難易度が高い。大前提として個人差がある上、何度もエナドリをキメておおよそのタイミングを把握しておかないと成功しないテクニックだからな……だが俺は出来る、ヘビーではないがミドルなユーザーですから。

「ちょ、ちょっとちょっと魚臣さん！　貴方まで勝手に話し込んだら私一人じゃ手綱握れないですからねー！？」

「あぁすいません、まぁつまりこういうわけでして。シルバーマスクの方は気にしないでください、下手に公共電波下でゲームしたり

すると割とガチめに怒られるらしいんでガヤだと思って貰えば」

「いや流石に全米一（ぜんいち）をガヤ扱いする勇気は無いですねー……というか、本当はグレイブバーサスの先行プレイをするはずだったのにギャラクシア・ヒーローズ：カオスになったのって……やっぱりそういう事なんですかね魚臣さん？」

「そういう事ですねぇ……まぁ色々手を打って彼を引っ張り出してきたんでそれで勘弁してください」

ジャスティスバーサスのためにギャラクシアヒーローズで本来やるはずだったグレイブバーサスが……あれ？　困ったな、カフェインがまだ完全に馴染んでいない。ガスコンロの火が点かない感じだな、仕方ないから俺から発破をかけてやろうじゃないか。

「ようイーグルアイ、態々俺なんかと対戦するために来日したんだって？」

「肯定します。私はあなたとの対戦を希望しています」

何事かと俺は問わんとするカッツォへと掌を見せて制止する、つーかお前には事前に話しただろうがよ。
片手でライオットブラッド・リボルブランタン（日本産）を開封し、一気に煽ってからエナドリ特有のえぐみが残った舌を回してアメリア・サリヴァンへと言葉を突きつける。

「トライアングル・トリニティで決着をつけようぜ」

「……！！」

日本語的発音であってもしてもらえたらしい、いいねエンジン温まってきた。

「TVだぜ？　だったらエンターテイメントじゃないとな」

トライアングル・トリニティ。

それはギャラクシア・ヒーローズ：カオスのアップデートと同時に新規実装された変則対戦形式の名だ。

通常の1on1、1キャラクターを操作して2ラウンド先取で勝敗を競うそれとは明確に異なるこのカテゴリは、3キャラを手持ちとしてケイオースシティという箱庭で自分、相手、NPCによる三つ巴の戦いを繰り広げる3×3のバトルロワイヤル形式のワンラウンドマッチだ。

「わざわざ来日したんだ、カースドプリズンは使ってやるよ」

「私は承諾します」

「上等」

おっ、頭が冴えてきた。この即効性流石はリボルブランタン、クァンタムとは別方面でヤバいとはよく言ったものだ。

「うわー……合法堕ちしても保険降りないからね？」

「大丈夫、まだカップ麺の正しい作り方は覚えてる」

「お湯入れて三分待つだけの工程すら忘れるレベルなのか……」

お湯を入れて三分待ってる間にライオットブラッドを開けて飲む、

ほら正常。

「あのー、私もスタッフも置いて展開進めないで下さーい！」

「あぁ、すいません……とりあえず般若氏の方が既にVR起動してるんでこっちはこっちで解説始めちゃいましょうか。いやほんと、すいませんね」

全くだ、勝手に展開進めてく般若面には困ったもんだ！！！

◇

「えー、私の番組なのに私そっちのけで進んで正直泣きたいんですが、エイトちゃんはメゲないのでペース戻して行きたいと思います！　では魚臣さん、勉強不足で申し訳ないんですがトライアングル・トリニティというのは？」

「トライアングル・トリニティは本当に最近実装された新対戦形式です、プレイヤーは3キャラ選択してKOされる毎に次のキャラに

交代します。僕としてはゲージ消費でもいいから途中交代があって欲しかったんですけどねー」
「Ｍｅ　ｔｏｏ！」
「つまり、手持ち三キャラでラウンドを取る代わりに相手のキャラ全てをノックアウトすればいいんですか？」
「んー、ちょっと違います。ケイオスキューブ取得の勝利が無くなってるのもありますが、トライアングル・トリニティ……略称はＷ(ダブル)Δ(デルタ)だったかな？　ＷΔはＧＨ：Ｃならではの対戦形式とも言えます。簡単に言うと……対戦するプレイヤー二人の他にも、ＮＰＣも出てくるんです」
「３ｏｎ３ｏｎ３、だから三つ巴(トライアングル・トリニティ)の三角形なのヨ」
「成る程……」
「あ、キャラ選択に入りましたね。アメリアは……Ｍｓ．プレイ・ディスプレイにカースドプリズン、ゼノセルグスか。二番手三番手は得意の重量級ですが……「トップディスプレイ」かぁ」
「顔隠し(ノーフェイス)は……ダスト、ティンクルピクシー、カースドプリズン。ワオ、オールファイターね！」
「顔隠しさんが全部戦う系のキャラクターなのは分かりますが、般若さんのトップディスプレイというのは？」
「ＷΔにはラウンドが存在しない、さらに言えばある理由から最速でＮＰＣを見つけるのが推奨されてる……ほら、始まりますよエイ

トさん。「侵略者（インヴェルザー）」か、「再古代（レプディノス）」か、「機械群（メカニタン）」か……」
「第四の視点（フォースビュー）モードなら……イェア！！　Ｍｅｃｈａｎｉｔａｎだわ！　これは面白くなりそうね！！」

三つ巴の三角形（後書き）

作者の感想返しで「３対３なら六人目誰や」と感想欄でちょくちょく見かけましたがごめんなさいね、二人です

◆

「……っし、エンジンあったまってきた」

ぱしん、と掌に拳をぶつけながらも俺は手近な建物を登って街全体を見渡す。
マップ確認ではない、トライアングル・トリニティは三角形マップで固定されている。それぞれの角からスタートするこの対戦で確認すべきは……

「ＵＦＯ無し、牙の塔無し、機械群(メカニタン)か……」

トライアングル・トリニティは３ｏｎ３ｏｎ３、俺とアメリア・サリヴァンだけではなくもう一つ勢力が存在する。
このゲームオリジナルの敵性エネミーであるそれらは一試合ごとに三種類の中からランダムに選出されるわけだが……どれもこれも厄介な奴らだ。
空から降臨し、ＮＰＣ市民をキャトりながら暴れる「侵略者(インヴェルザー)」
地中より屹立し、街中にばら撒かれたトカゲを兵器恐竜として進化させて暴れさせる「再古代(レプディノス)」
そして地上に陣を張り、電子機器を機械兵士に改造させて進軍する「機械群(メカニタン)」。
侵略者はＮＰＣを攫うので後半になる程ゲージが稼ぎづらくなるし、再古代はどこから敵が出てくるのか察知するのは不可能に近く、そ

して機械群はそこら中から発生する可能性がある為気が抜けない。
それを止める方法はただ一つ、プレイヤー陣営とは異なり三体同時に出現する「ターゲットエネミー」を撃破すればいい。
ターゲットエネミーを破壊すれば撃破したプレイヤーに特典が付与される、だが全ての陣営が敵対関係な以上はどう立ち回るか考える必要がある……中々どうして面白い。

「メカニタンのターゲットエネミーは確か……」

チッ、ここだとカメラに映る。
アメリア・サリヴァンの一番手は現在環境トップに君臨するクソテレビだ、電子機器……特に監視カメラなんかに映りこむのはデメリットでしかない。
建物から降り、ビルとビルの隙間に身を潜めつつ思考を続ける。

「思い出した」

機械群（メカニタン）のターゲットエネミーは「戦乙女（ヴァルキュリー）」「大佐（カーネル）」「総帥（コマンダー）」の三体、それぞれが固有の性能を持っていた筈だ。

「狙うなら「大佐」からにすべきか？　いやだが、確か「戦乙女」は追い詰められるほど強化される……」

奴らは一人で倒すとなると面倒で二人で倒せば危なげない、と言う絶妙なパワーバランスに設定されている。忌々しく思う反面、バランス調整いいぞと褒めたくもなるが野良と違ってアメリア・サリヴァン相手に協力路線が張れるとは考えづらい。

「どうしたもんか……」

俺が今操作しているロングコートに目と鼻の部分だけに穴の空いた簡素な覆面を付けたキャラ「ダスト」はちと面倒なシステムを搭載している。

クソテレビの分類はヴィラン……というか向こう全部ヴィランか、だとすりゃヒーロー路線でいいかな。

キャラクター「ダスト」。

原典はうろ覚えだが、所謂ダークヒーロー的立ち位置のキャラクターであり、アップデートで追加されたこのキャラは極めて特殊なシステムを持っている。

本来ヒロイックかヴィラニックどちらか一本しかないはずのゲージが二本あるのだ。正確には通常どちらか１００％のところをヒロイック・ヴィラニック各５０％ずつで両方のゲージを溜めなければ超必殺を使うことが出来ない。

さらに「弾丸」の補充もそれに関係しているため、ポテンシャルは高いが使う為には高いテクニックも要求される。

「とりあえず……そうだな」

丁度いいところにポップしてるじゃないか、力を借りるか。

隠れんぼしてる訳じゃねーんだ、どちらにせよアメリア・サリヴァンとの遭遇は大前提ならそれまでが遅かれ早かれ迷う時間はロスでしかない。

「銀行なら警察を呼ぶ為のボタン的なものがあるだろうし」

無駄弾を撃つつもりはないが、ＮＰＣへの威嚇として二丁の拳銃を抜き構えながら銀行の扉を蹴り開ける。

「ホールドアップ！　携帯電話を持っていなくてな！　警察に連絡してく……」

おっと今になって思い出した。
機械群に限った話ではないが、基本的にＮＰＣ勢力は大ボスを除いた二体は……

「Ｂａｔｔｌｅ　ｍｏｄｅ……」

……ランダムポップだ。
女性を模した機械、という点ではシャンフロの征服人形に共通しているが、サイナと比べると明らかにお肌が頑丈過ぎる鎧の女……否、女の鎧が俺へと突撃槍とミサイルランチャーを合体させたような武器を構え、眼光を俺の額へと照射する。

「お取り込み中？　邪魔なら失礼させてもらうが……」

右の銃が火を噴くのと、ミサイルが放たれたのは同時であった。

「うおおおお！？」

ヘッショ！　小怯み！　焼け石に水ぅ！！
横っ跳びに回避した俺のすぐ隣を通過したミサイルが開けっ放しのドアから外へと飛び出し、対面のビルに当たって爆発する。

「通常攻撃がゲージ技並とか勘弁して欲しいぜ……！！」

そのくせプレイヤーが使おうとしてもただの槍、兵器としてすこぶ

る優秀で何よりですね！　ペッ！！
どうする？　銃弾の補充を考えるとＮＰＣ相手にフルバーストなんぞしてられない。だが逃げるにせよ応戦するにせよ弾の消費は避けられない。
ダストは善悪二つのゲージを持っている、それは原作におけるダストの立ち位置が「地獄から遣わされた断罪の悪魔が憑依した男」というものであるからだ、故に二丁の拳銃は「善の弾丸」と「悪の弾丸」を装填し、発砲する。
ゲーム的に言えば別枠ゲージ、良いことをすれば善の弾丸が溜まり、悪いことをすれば悪の弾丸が溜まる。
善の弾丸はヴィランに効きやすく、悪の弾丸はヒーローに有効。
クソテレビはヴィラン、「戦乙女」は行動的にヴィラン。つまりアメリア・サリヴァンを見据えるなら善の弾丸を温存しておきたい。

「チッ！！」

右の引き金を連続で引き、漆黒の弾丸が「戦乙女」目掛けて殺到する。だが顔面狙いの三発はその全てが機械仕掛けの女鎧が左手で振るった剣によって叩き落される。
格ゲーにあるまじきクソ迎撃力に見えるが、あれ判定的にはガード行動らしい。ガード崩し系の攻撃でさえなければ大砲の弾すら一刀両断するからなぁ……ガードしていると分かっていてもなんかこう、無力感を覚える。

「く、ぉ！　ぬぁっ！？」

ターン制って訳じゃない、当然向こうだって攻勢に出るし俺のターンが回ってくると保証されているわけでもない。

ミサイル内蔵の突撃槍を軽々と振り回す「戦乙女」が一気に距離を詰めてくる。クソが、初手でターゲットエネミーとかち合うと分かっていたならティンクルピクシーを初手に持ってきていた。
だが現実は分からないまま今に至る、だとすればダストでどうにかしなければならない。
ダストは遠距離主体のキャラではあるが近距離戦が出来ないわけじゃない、だが近距離に強いかと聞かれれば弱い部類なので絶妙にインファイターを届かせない突撃槍の射程を持つ「戦乙女」相手では圧倒的不利と言わざるを得ない。

「だが、ちっとばかし挙動が素直過ぎだな」

ミサイルにホーミング性能は無く、物理的な攻撃も普通に殴るかエフェクト付きで加速して殴るかの二者択一。
片手で巨大な突撃槍を振り回すのは脅威だが、もう片方の手は基本的に剣しか使わないしその剣も剣で「盾(剣)」なので実際は突撃槍と盾で武装したエネミーと言えるだろう。つまり持っているのは突撃槍(ランス)ではあるが大体はオーソドックスな騎士タイプってことだ。

「格ゲーＮＰＣだもんな、ガードと攻撃は両立できんだろうよ……っ！」

ただ撃つだけではガードされる、ならフルダイブＶＲである点を存分に活かして回避しながら撃つ！
ＧＨ：Ｃはシャンフロと同じくシチュエーションがゲームシステムへダイレクトに影響する。ヒーローキャラが街を破壊する機械群と戦っているというだけでヒロイックゲージは蓄積する。それと同時に発砲消費した弾丸も再装填されていく。

第一段階の「戦乙女」はぶっちゃけそこまで強くはない、時間をかければ善の弾丸だけで倒すこともできるだろう。
だがこれはトライアングル・トリニティ、こんなオフィス街で暴れれば当然カメラに映る……そして、ゲーム開始時点であれば最大マップの八割をサーチできるあのクソテレビ（プロゲーマー内蔵）が居眠りをしている筈もなく。

「よォ……会いたかったぜぇ、リアルカースドプリズゥン……！！」

「君さっきと口調違くない？」

「死力を尽くして戦えよな……！！」

「はッ！　途中でくたばるんじゃねぇぜ……！！」

例のリアルタイム翻訳システム「バベル」によって暴かれた奴本来の口調で、頭がテレビにすげ替えられたヴィランがビルの上から飛び掛かって来た――！！

ワンツー弾丸ナックル（前書き）

イェーイ！　プロット崩壊イェーイ！！（書きたいこと過多）

◇

「おっとここで般若さんと顔隠しさんが会敵！　「戦乙女」も含めて序盤から三つ巴ですね！」

「いやー、まさか初手エンカするとは思いませんでしたね。とはいえダスト的にもディスプレイ的にもあまり好ましい盤面とは言えませんね」

ARによって映し出されたケイオースシティの光景を見上げながらも、実況が板についてきたエイトと慧による解説が行われる。

「ディスプレイはシーカータイプとフィクサータイプの中間みたいなキャラ性能なので、そもそもタイマンで戦う事すらデメリットです。まぁそこはアメ……ん゛んっ！　般若氏のプレイヤースキルでどうとでもなるかもしれませんが……「戦乙女」込みの乱戦が望ましくないのは事実です」

「対するダストの方も弾丸の消費が激しい乱戦は避けたい……ってところですか？」

「んー、これはあくまで極論ですけどNPC攻撃しながらヴィラン殴ってるだけでも結構継戦できるんですよねダスト。ただ銃弾の威力が高い代わりに格闘攻撃が弱い上に「戦乙女」とディスプレイに有効な悪の弾丸を貯めづらいのがつらいですね」

ダストは二つのゲージを持つキャラクターであるが故に、そしてそれらに対応した弾丸補充法を備えているが故に、善行と悪行の二つを行わなければならない。逆に善行も悪行も行えるとも言うが……少なくとも属性的にヴィランな二者を相手にしている顔隠しダストは悪の弾丸を補給する手段が乏しい。

「ダストはつい最近アプデで追加されたキャラですから、効率的なゲージ溜め行動がはっきり判明してないんですよねー……原典的には悪を裁くために周囲を顧みないキャラ、という感じなので積極的に悪事を働くって訳でもないですし……」

「あ、状況が動きましたよ！　……っていうか、シルバーマスクさんはどこに……」

「裏で説教食らってるっぽいです」

「あー……」

◆

ダストの基本戦術は「とにかく弾を稼いで撃ちまくる」に尽きる。弾丸の補充手段がゲージ依存だったらクソキャラ間違いなしだったのでな別枠なのはありがたいが、それでも何も考えずに戦い続ける

のは不可能だ。
「どうしたどうしたァ！　カースドプリズン以外じゃ戦えませんってかぁ！？」
「忙（せわ）しねぇ奴だ……っ！」
だが荒っぽい口調の割に行動は冷静かつ厄介だ。
WΔにおけるアタッカー三人、いわゆる「オールファイター」は一体一体が戦力であるからして、それを失えば単純計算で戦力が三分の一削れることになる。
だがアメリア・サリヴァンの編成は先頭にクソテレビことMs．プレイ・ディスプレイを置いて盤面有利を取る「トップディスプレイ」……本命は後ろに控えている2キャラ、つまりクソテレビを捨て駒として扱える。
被弾を恐れない攻勢に対応しつつも、俺は思わず仮面の下で舌打ちする。
実際ダストとクソテレビの戦術的価値は等価だが、精神的な余裕の点で既に役目を果たしたクソテレビの方が遠慮なく戦える。自覚してたってどうにかできるもんじゃない、そして何より中身がプロゲーマーだからこのクソテレビ鬼強いんだよ！！
「そっちの銃は玩具か何かか！？　弾詰まりしてんなら捨てちまえよ！！」
「抜かせ」
「ぐっ！？」

お望み通り弾丸を馳走してやろう、画面ごと砕け散れクソテレビ。
温存してる訳じゃねー、いつでも撃つ覚悟は決めている上で節約してるだけだ。放たれた弾丸二発は前者がガードを抜けてクソテレビの胴に命中したものの、後者は腕に防がれる。

「ターンを寄越せ、優しくぶん殴ってやるよ」

「貧弱野郎(クソDPS)のパンチでか？」

「まるで弾丸のようなワンツー！」

「弾丸だろうがっ！！」

数秒熟考してチャート変更、当初の「脳筋ファイター作戦」を放棄して一気に攻勢に出る。後々を考えてなんとしてでもここでクソテレビを落とす必要が出てきた。

清貧は美徳だ、なら清貧の結果溜め込んだ清らかな財で消し飛べクソテレビ。
まさか軽く煽っただけで弾丸フルバーストしてくるとは思わなかったのか、回避ではなく防御で善悪白黒の弾丸を凌ぐクソテレビ。だが俺と戦っているという事以上にこの局面で動かない事は罪だぜ。

「ミサイルのような乱入アッパー！」

「ミサイル、だろう……がァっ！！」

文句は「戦乙女」に言ってくれ。俺とアメリア・サリヴァン双方を諸共に葬らんとするミサイルが着弾爆裂し、ガードを固めていたとは言え直撃したクソテレビが吹き飛ぶ。俺も俺で余波によるノック

バックを喰らったが奴よりダメージを受けているって事はないだろう。

「善３、悪０……チッ、爪に火を灯せってか」

戦い続ける為の武器とするにはあまりに乏しい残弾数、思っていた以上に悪の弾丸の溜まりが遅い。とはいえ弾無しになった瞬間ヘタれるような性能もしていない。

「おっ、ナイスタイミング！」

ハァイポリスメーン、ちょっと正義執行するために爆炎と銃器が足りてないから奢ってくれ。

「戦乙女」のミサイル攻撃によって発生した土煙に乗じてその場を離脱、「戦乙女」がクソテレビに追撃を加えている隙にパトカー群の元へと飛び込む。

「な、なんだ貴様はっ！」

「この街の治安を憂う一市民だ、こんな豆鉄砲で勝てると思ってんのか？　没収だ没収！」

「ぐはっ！」

警官の胸倉を掴んでヘッドバット、上手い具合に失神した警官の持っていた拳銃を拝借する。

「失せな、くそったれのパーティに参加したいなら拳銃（こんなん）じゃチップにもならねぇ。ロケランくらいは持ってきな」

お、悪の弾丸が一発チャージされた。景気付けにもう五人くらい殴り倒しておくか？　おっと、流石にそこまでフリーにはしてくれないか。
可視化された音波攻撃が俺が隠れるタクシーへと命中し、金属の車体が嫌な音を立てて軋み始める。数秒後に何が起きるかなど言うまでもない、俺自身が気絶させた警官達を雑に放り投げつつその場を離脱……しようとするも、若干間に合わず再び爆発のノックバックを食らう。

「出てこいよ顔隠し(ノーフェイス)！！」

「せっかちさんめ……上等だ、やってやろうじゃねーか」

銃四丁、第一条件はクリアした。「戦乙女」が邪魔だが……いけるか？　いや、いや、何を恐れることがあるものか。今の俺はミックスでアクセルなジョイント状態、カフェイン大明神のご加護によって曲芸まがいのアクションだってなんだかやれそうな気がするってもんよ！！

「なぁオイホークアイ！　先に言っておくぜ、俺はお前ほど勝利にがっついてねぇ」

「あ゛？」

舐めプ？　肯定はしないが否定もできない、だがただでさえ受動的にこの場に立ってるんだ、俺なりにテンション上げてんだから文句を言われる筋合いもねぇ。

「俺はやりたいことをやりきるだけ……」

だから、途中で死んでくれるなよ。

「踊る銃の決闘(ダンス・ガンズ・デュエル)を見たことは？」

「なんだそりゃあ……？」

そうか、まぁ和ゲーだしな。

「なら……初見を楽しみな」

登場する全キャラが何かしらの銃器を持っている銃撃系格闘ゲームダンス・ガンズ・デュエルより挙動参考(トレース)！　四丁拳銃格闘術(クアッド・バレット・ダンス)を見せてやろう！！

ワンツー弾丸ナックル（後書き）

Q、今日は何しに？
アメリア「顔隠しと戦いに」
サンラク「他ゲーのアクション再現してドヤ顔しに」

カァーッ！　勝つつもりそこまでないけど結果的に勝っちゃったら
仕方ねーわカァーッ！！

なお負けたら負けたで下唇を噛む系主人公

罪を断つ二つの裁き（前書き）

私のことは「サプチケ１０連でエデンとバレンタインクラリスを当てた超絶騎空士硬梨菜」と呼んでください。
まぁその後の３０連ドブった後にガチャチケでサティフィケイト出したけどマグナマンにどうしろってんですかね、古戦場楽しーい！！（血反吐混じりの絶叫）

◇

「あー、コメ欄で「慧きゅん善と悪の弾丸効果間違えてね」との事で……呼び方に物申したいけどとりあえず間違えてすいませんでしたー。あとシルバーさんが戻ってきましたね」

「My negotiate skillはカンストしてるわ！」

「言いくるめ(Negotiate)かぁ……」

「あの、顔隠しさん結構ヤバい動きしてるんですけど触れたらダメな奴なんですかあれ」

「ん？　あー、なんだったっけかな……シェリフかな？　ダンス・ガンズ・デュエルってゲームに出てくるキャラの動きを真似(パク)ってますね」

画面の中、銃弾と銃そのものが宙を舞い、弾丸と徒手空拳による怒濤の攻勢がテレビ頭の女を押し込んでいた。

それは「普段は二十世紀の骨董品みたいなガラの悪さなのにゲーム中はシルヴィアに匹敵する程の技巧派」と評されたあのアメリア・サリヴァン……もといマスクドハンニャが一方的に押されていると言う今迄にある一名を除いて誰もなし得なかった光景である。

「ダンス・ガンズ・デュエル？　あー……待ってくださいどこかで聞いた覚えが………あ！　思い出しました一昨年くらいに出た格

ゲーですよね？」
「そうですね、全キャラ銃火器持ち、っていう中々面白い格ゲーでした。ショットガンキャラの通常攻撃強過ぎて若干アレでしたけど……」
なお余談だがある理由からサンラクと百連戦をした際、勝率七割を維持するために恥も外聞もかなぐり捨てて件のショットガンキャラでサンラクをボコったのはカッツォの心の中に厳重な施錠を施した上で封印されている。
「あ、コメ欄でも知ってる方はいるみたいですねー。そうそう、ガトリングピエロより道化師してる保安官（シェリフ）とか言われてましたよねぇ……そうなんですよ、アイツ出来るんですよ。流石に完全コピーは無理とか言ってましたけど、大まかな再現できてる時点で頭おかしいですよねぇ」
「ねぇケイ、顔隠し（ノーフェイス）が今やってるのって実際どういうものなの？」
コメント欄の流れを把握した上での話題振り。現代のプロゲーマーがタレントとゲーマーの複合職と言うべきものである以上、全米一のゲーマーとはタレントとしても一流であると言う事である。
怒涛の勢いで流れていく文章の中から共通の話題を見つけ出し、疑問の代表者として答えを知る者に問う。エンターテイメントとして最高のパスを受け取った慧は視聴者が知りたがっている情報に今繰り広げられている戦いを絡めて解説を始める。
「シェリフの性能紹介は程々にしますけど……まぁいわゆる手数の代償に火力が低いタイプのキャラなんですね。原作だとＤＰＳ的にはガトリング使いが堂々のトップでしたけど……ですがシェリフの

動きをダストでやった場合ある利点があります」

「利点とは？」

「弾丸のバリエーションよエイト、ＮＰＣの弾丸を恐れる理由はなくても、飛んでくる銃弾の取捨選択をしながら戦うなんて私でもちょっと手こずるワ……ちょっとね」

できない、とは言わない辺りに全米一としての、公式戦で黒星をつけられようとも翳らぬ一番星の輝きを感じさせるシルバーマスク。

「そこまでタフではないディスプレイでもＮＰＣの弾丸は無視できるレベルですが、その中にダストの銃が混ざっていると話は変わってきます。ダストはＰＳＹボーグと一緒で銃撃がメインのダメージソースですし、ノックバックもあるので下手に受けるとそこからコンボに繋げられます」

まぁでも、慧は口を開く。

「あの戦法、致命的な弱点があるんですけどね」

◆

「どうしたダスト、アンコールは？」

「五分休憩しても？」

「認めるわけねェだろうが！！」

デスヨネー。

くっ、シェリフ戦法は確かに有効ではあったが、根本的な問題がある。

ダンス・ガンズ・デュエルではリロードモーションの隙こそあったが弾丸は実質無限だった。

だがダストは弾丸を補充するにも殴らなきゃいけない。いくら攻勢に回ったとしても消費と補充が釣り合わないのだ。

ましてＮＰＣから拝借した銃は使い切り、「戦乙女」への牽制も込みで乱射していれば直ぐに弾切れを起こす。

「お前やシルヴィアみてぇなタイプはエンジンがかかると厄介だがなぁ……ダストでやるにはタフネスが足りねぇようだな」

「体力四割でよく言うぜ……あぶねっ！」

やっぱウザイぞこのポンコツブリキ！

やはり全米二位は伊達じゃないってことか……今の攻防、単純に殴り合っているだけではなく「戦乙女」のヘイトを如何に相手へと押し付けるかの攻防もまた同時並行で繰り広げられていた。

結果から言えば、そっちでは俺が一歩後ろにいると認めざるを得ない。結果的にこちらの体力も五割ちょい、こちらの弾事情も加味すれば差し引き俺不利と言わざるを得ない。

どうする？　俺は目先の利益の為に血を流せる人間か？　最終的に勝てるとも限らない、そもそも色々とごちゃ混ぜになり過ぎてプロ

ットなんて粋がってもその実はガタガタの即興台本（アドリブ）だ。
そんな状態で、分の悪い賭けにベットする覚悟が俺にあるのか？

「あるさ」

「あ？」

「塵は塵に（DustotDust）！！」

超必殺（ウルト）、発動。

そういう分の悪い賭けってのを浪漫って言うんだ、初めてゲームに触れた日からそいつは俺の大好物だ！！

ダストの超必殺は分類的にはカースドプリズンの「脱獄（プリズンブレイク）」に近い。
ミーティアスのような行動的必殺ではなく状態的な必殺技ということだ。
「塵は塵に（DustotDust）」はダストがギャラクシアレーベル世界における地獄の最高権力者ヘルゼブルより授かった必殺必滅の弾丸の名前である。
銃に装填された弾丸が一時的に消失し、二丁に一発ずつ装填された弾丸は二発命中させることを条件とした大ダメージを与える超必殺だ。

「序盤で超必殺（ウルト）を切ったか……！！」

「その体力なら消し飛ばせるだろ……！」

「やれるもんならやってみなァ！！」

超必殺によって生成される弾丸は二十秒発砲せずにいると消滅する、

リミット二十秒！　奴に二発叩き込め！！

「いざ尋常に死ね……！」

参考にさせてもらうぜレイドボスさん！

銃口を突きつければ、向こうは回避を選択せざるを得ない。回避に動いた隙を狙って距離を詰めて回し蹴りを叩き込む、だが浅い。カウンターでクソテレビの腰に吊るされたスピーカーからダメージ判定を持つ大音量のノイズが俺の右半身を叩く。

「く、ぉ……っ！！」

左の銃を発砲。真っ直ぐに飛んだ灰色の弾丸は攻撃直後のクソテレビに吸い込まれるように飛翔し、右大腿に命中する。

「クソがっ！！」

「まずは一発ゥ！！」

焦るな、まだ十秒以上ある。「戦乙女」が槍を構えて俺へと突っ込んでくる。邪魔くせえ、すっこんでろポンコツが！！

「塵は塵に(DusttoDust)」を撃ち終えた左の銃を投げつける、ダメージは狙ってない。シャンフロシステム流用なら……ネームドNPC、目で追ってくれると信じてたぜ。

「二足歩行の欠陥！！」

一本制御不可になるだけで五割のバランスを喪失するクソみたいな安定への脆弱性を突いた足払いキーック！！

「残り十秒ぉ！！」

クソテレビ……だぁあクソがっ！　やっぱり逃走してやがる！

百点満点の行動をどうも！　だったらこうするまでだ！！

俺は銃を構え、集中力を研ぎすまし……撃つ。

僅かな沈黙を揺らす発砲の残響。クソテレビは己の身体に衝撃がないことを認識し、俺の方へと振り向き――

「よう、どこ狙っ「天誅」ガッ……！？」

誰も全弾撃ち尽くしたなんて言ってねーよ。

最後に残した隠し弾を撃ち切ったＮＰＣ警官の銃を投げ捨て、幕末クイックドロー……通称「重ね二弾式天誅」の構えから放たれた「塵は塵に（Dust to Dust）」を顔面で受け止めた。

「審判の刻だ、神に祈るか？　悪魔に縋るか？　塵は塵に（Dust to Dust）、お前の答えは一つだけだ……ってな」

条件達成、クソテレビに食い込んだ二発の弾丸が光を放ち………

膨れ上がった光は柱の如く立ち登り、光の十字架を生み出して弾けた。

・幕末式クイックドロー
基本的に刀剣性能では新撰組サイドには敵わないため、維新サイドで生み出された銃撃テクニック。
ありとあらゆる手段で弾丸を叩き込む事に特化しており、残弾数を誤魔化すために様々な方法を用いる。レイドボスさんが俺たちの勇者を蜂の巣にした際に用いられた「最速で手持ちの銃とインベントリ内の銃を入れ替えて残弾数を誤魔化す」取り替えテクニックなどが有名。
他にも「あらかじめ大量の銃器を隠した場所に誘導して蜂の巣天誅」「花火屋からパチってきた火薬を団子屋に仕込んで特定プレイヤーを爆殺天誅」などが存在する。
因みに団子屋天誅したプレイヤーは一週間花火と団子の串が降り注ぐ悪天候に悩まされた

塵の如く散れど（前書き）

五百話ですね……ＰＶ一億ですね……累計ニ桁入りですね……なんかボケようと思ったんですけど「ウィングマンを崇めよ」くらいしか思いつかなかったので素直に感謝の言葉を述べます……

皆様のおかげで拙作シャングリラ・フロンティアもここまで来ました、まさか自分の作品に二次創作が出来るとか書き始めた当初は思いもしなかったですし、作者が節操なしに返信するせいで感想欄もちょっとヤバいことになってますが有志の方々によるシャンフロＷｉｋｉなんてものすら作ってもらい、光栄の至りであります
ここまで書いてようやく半分……だと思うので、読者の皆々様には今後とも生暖かい目で作者が設定を吐き出し続ける様を観察していただければと思います
今後とも、拙作をどうかよろしくお願い致します。そしてこれを読んだ貴方もウィングマンを崇めよ

モザンビーク君はもうどうしようもないからスマートピストルに弟子入りしよ？

◇

「先制！　先制したのは顔隠し（ノーフェイス）！　す、凄いですね……！　って、あれ？」

興奮するエイトとコメント欄であったが、エイトが顔を向ければそこには難しい顔で画面を睨む二人がいた。

「……ここで超必殺切るか普通？　いや確かにあいつ浪漫主義だけど、こんな序盤で超必殺使ってもそこまでテンション上がらないでしょ……なんか狙いがある？　シル……バーはどう思う？」

「ディスプレイを優先排除したい理由……つまり強制解析（ハッククライズ）を嫌った理由ってコトよね？　でも仮にこれ以上のダメージを嫌ったから、だとしても超必殺（ウルト）を使ってまで？　とは思うわ」

どうもプロゲーマー二人……もといプロゲーマー一人と謎のマスクレディはあまりに性急すぎる決着のつけ方に違和感を感じているらしい。

「あ、あーすいません、ちょっと考え込んじゃって……そうですね、簡単に説明すると費用対効果が結構釣り合ってないんですよね、今の」

「と、言いますと？」

「ぶっちゃけますと、真っ向勝負を般若さんが選んだ時点でダイアグラム８：２くらいでダスト有利なんですよ。般若さんも正面から削るんじゃなくて「戦乙女」の誘導でじわじわ削ってましたし、そもそもトップディスプレイの時点で最初からディスプレイは捨て駒なんですよ」

「つまり……時間をかければ普通に勝てていた、という事ですか？」

「そうですね、っていうかダストのゲージ消費技で弾丸をフル装填するゲージ技があるので、そっちを使ってた方がいい気がするんですよねぇ……ミスって超必殺暴発！　って訳でもなさそうですし」

画面の先、「戦乙女」からの逃亡を成功させたダストが遭遇した警官を片っ端から殴り倒し、時に市民を「機械群(メカニタン)」から助け出しているなんともちぐはぐな光景を披露するダスト。

だが二番手のキャラでリスポーンした般若へと視点が切り替わる寸前、ダストが一見そう珍しいことではない、だが冷静に考えれば奇妙な動きをした事に気付いたものはまだ誰一人として存在しなかった。

◆

気分は犬だな、水面に吠えて骨を落とすつもりはないがせめて骨の存在を失念しない賢い犬でありたいもんだ。

「……臭うな」

厄介な匂いだ、具体的に言うとはち切れんばかりのギャラクシーパワーを鎧の中に詰め込んだ野郎が大暴れしてる気配がする。っつーか思いっきり爆発音するわ。

「一、二、三……まぁこんなもんか、「戦乙女」が離脱してたのは助かったのやら困ったやら……」

プレイヤーの二番手以降のリスポーン地点は「残っているプレイヤーから最も遠い位置」に設定される。本来はリスキル対策なんだろうが、今回に限ってはマジで有り難いシステムだ。

タイマンで勝利したプレイヤーにとってこのほんのわずかなフリータイムはでかいアドバンテージだ、トチ狂って序盤に超必殺ぶっ放した俺のようなプレイヤーにとってはボーナスタイムだな。

「あとは程よく距離を稼ぐだけか……」

いやぁ、途中でバイクに乗った親切なおじさんがいてよかったよかった。どうせ街の外になんぞ出られないんだから避難場所を教えたらバイクを譲ってもらえたぞ！　そう言う事にしておけ、なお悪の弾丸が溜まったが特に関係はないだろう。

「アメリカンバイクってやつか？　いやまぁ一応分類的には洋ゲーだしなこれ……」

数十分、短くても数分の付き合いだが……この身この命預けたぜ相棒。駆け抜けろ風の如く！！

アクセル全開、待ってろカースドプリズン、かつてリアルカースドプリズンに最も近いと言われたプロゲーマーの実力、見てやるよ！！

……

…………

相棒、ちょっとエンジン止めて、な？　この距離でもなんかバレそうな気がしてきた。

「…………？」

数秒前に見たものがイマイチ信じきれず、思わず建物の陰に隠れてしまったが……首を傾げつつもう一度顔だけ出してそれを見る。

ガシャコン、ガシャコン、ガシャコン、プシューッ（下半身が八脚と化したカースドプリズンが大通りを闊歩する音）

バヂヂッ、ドッドッドッドッドッ……（明らかに帯電している右腕のチェーンソーが静かに動き始めている音）

ジャギン、ジャギンッ、ギヂギヂギヂギヂ……（左腕と一体化した巨大ハサミが獲物を求めて開閉する音）

「……何アレ？」

いやマジで何あれ？　カースドプリズン？　いやまさか、機怪生命体アラクネア・デッドリーアームズとかそう言う感じのボスキャラだろどう見ても。もはや人の形を留めてないぞ……

いや確かに「機械群（メカニタン）」はその性質上、カースドプリズンにとっては

拡張パーツが脚を生やして歩いてるようなもんだけどさ……それにしたって、えぇ……？　あんな殺意に満ち溢れたカスタムある？
いや、いやいやいや、臆するな俺、見たところ武装はどれも近距離高火力タイプ、ヒットアンドアウェイならいける……それにダストは中距離タイプ、当たらない武器なぞデッドウェイトと同義！

「いくぜ相棒……いざ尋常に――」

ジャギギギギッ！！！（脚パーツが変形して八つの銃口を展開した音）

「Oops.（マジかよ）」
「Most（盛大に歓） welcomed.（迎するぜ）」
不味い（ヤバ）、あの銃は「機械群（メカニタン）」の――
次の瞬間、俺という操縦者が飛び降りたことで制御を失って横滑りに吹き飛ぶバイクが一瞬でスクラップと化して爆散する。
「リロー……どおぁっ！！」
そして爆発の煙幕をブチ抜いた弾幕が俺の全身を撃ち据える。ヤバい、雑魚とはいえ「機械群（メカニタン）」の銃を八門喰らうのは、ＨＰ……逃げ……………！！
「ぐ、ぉぉぉおおおお！！？」
死ぬ死ぬ死ぬ！　だぁあ畜生銃落とした！　拾いに行く前に死ぬ！
　射線から外れねば……っ！！

「だぁあ！！」

生き……てる！　死んでない！　でも一割切ってる！！

クソ……実装されてから日が浅いコンテンツ限定の形態がどんな攻撃してくるかなんて把握しきれるわけがないとはいえ、迂闊すぎたか。

「銃は……」

ダメだ、流石にもう一度射線上に立つのは自殺行為だ。そもそもこれ以上ダストに出来ることはほぼ無い、ディスプレイを倒した時点で役割のほとんどは果たしていると言っていいが……そうだな、ぐだぐだ時間を稼ぐ意味も薄いが大人しく手を挙げて降参ってのも釈然としない。

「……！！」

割れたビルの窓から中に侵入して、内部を突っ切って逆サイドから外に出る。いいぞ、背後に回った。銃弾は……クソ、悪の方かよ。だがもう多くは望むまい、ダスト行きまーす！！

「チッ！　ビルの中を突っ切ったか！！」

一発、二発……命中。三発、四発目を外して五発目が奴の八脚の一つに装備された砲塔を破壊する。やっぱりな、カースドプリズンの多様性は驚異的だが取り込んだ「外殻」は結構脆い、悪の弾丸でも破壊できる！

だが、

「なんだその気色悪い超信地旋回！」

「正直私もちとビビってる」

ガシャガシャガシャ！　と八脚が高速で蠢きその身を反転、七つの照準が雑に俺へと狙いを定める。チッ、ここまでか……だが！

「エリクサーはケチるなちゃんと使えぇぇぇぇ！！！」

ラスト一発！！！！

引き金を引き、発砲の衝撃が手首を圧した直後、俺の全身に弾丸が叩き込まれる。

吹き飛ばされる直前、六発目の弾丸が奴の鋏にガードされたのが見えて……ていうかそれ蜘蛛じゃなくて蟹なのか……ていうか上半身と下半身で別の動きできるのか……ていうかやっぱそれボスキャ

「ぐはぁっ！！」

そこでダストの体力はゼロになった。

◆◆

「………どうやらダストがやられたようだな」

だがクソテレビを撃破し、カースドプリズンの魔改造を暴いた勇気は賞賛しよう……いやまぁ引き続き俺ですけど。

首の骨を鳴らしながら手首をスナップさせて杖を軽く振る。

「妖精神拳三千年の流れを汲むＴＱＣ……その真髄を骨髄に刻み込んでやる、覚悟しとけよ……？」

レッツ・ティンキー☆

５００話記念設定吐き出しコーナー

・ユニークモンスターとはなんぞや

そもそもユニークモンスターとはあくまでもゲーム上の呼称であり、シャンフロ世界では七つの最強種と呼称される。
これはユニークモンスターが単一存在、子を為さずされどただ一つの存在として確立されていると「シャンフロ世界の人類」に定義されているためである。しかし単一増殖するゴルドゥニーネや「ヴォーパルバニー」の祖たるヴァイスアッシュのように必ずしもオンリーワンというわけではない。
メタ視点から正確に定義するならばユニークモンスターとは「神代に縁を持ち、その存在を「力」で示すもの」である。さらに詳しく説明するなら享楽、憎悪、検証、経緯……動機は違えど己の死を是とした上で新人類の挑戦を受けるもの、それがユニークモンスターである。

そのため自らの停止を是とせず、多少暴力的とはいえ「智」を授けるイサナはユニークモンスター足り得ない。
だがもしもイサナが己の死を是とした上で人類の挑戦を求める迷宮と化したのならば、致命的な愛（バグ）で人類を抱擁する「狂慕」の名を与えられていただろう。
また、一号計画の不良品にして望まれざる先祖返りたるイリステラは兎に導かれ、人と触れ合うことで生への希望を見出した。それ故に彼女から「頽廃」の名は消え去ったのだ。

だがそれとは別に現実世界においてもユニークモンスターの名は特別な意味を持つ。
三幹七枝、ワールド生成、制御、進行及びプレイヤーデータの保存を司る三機のメインサーバー「ジズ」「リヴァイアサン」「ベヒーモス」に対して全ＭｏｂのＡＩ制御、及び人格データの制御を司る七つのサブサーバーには「ヴァイスアッシュ」「リュカオーン」「ゴルドゥニーネ」「クターニッド」「ジークヴルム」「ウェザエモン」「オルケストラ」の名が付けられている。
これは「シャングリラ・フロンティア」を執筆した継久理　響十郎の設定集にちなんで創世が命名したものである。

――夢破れた「継久理一族」の老人が擦り切れた寵児に語り聞かせた寝物語、少女の世界に彩りを与えたその物語こそがこの世界の起源にして根幹なのだ。

インフレの風はいつだって速い（前書き）

古戦場から生きて……帰れる……？

インフレの風はいつだって速い

兵は拙速を尊ぶ、そして俺も今速度を必要としている。なので両足がかろうじて乗る程度の板にタイヤを二つくっつけただけの奇妙な乗り物……所謂バランススクーターに乗ってパニック広まるケイオースシティを爆走していた。

……いやしゃーないじゃん、ティンクルピクシーの体格じゃバイクに乗れないしそもそもバイクを譲ってくれる親切な人（俺認識）がいないし……地味にプレイヤーが乗る前提のデザインなのかミーティアスクラスの機動力持ちを除けば地味に走るより速いんだよこれ。

「くそ……予定変更だ、速攻で奇襲をかけねば」

だが厄介なことになった、確率的に半々だからもしやと都合よく想定していたが乱数の女神はやはり邪神の類であったらしい。

「これ以上着替えさせるかよ……っ！」

GH：Cが発売され、ある程度経った事で殆どのキャラに定石と言うべき戦法が生まれた。その中でもカースドプリズンは大きく分けて二つのタイプに分かれる。

一つは「一張羅型」、カスプリは多彩な形態変化を可能としているが何もそれら全てを網羅する必要はない。バイク型、車型、ヘリ型……自分が最も得意とするフォルムを最短で纏って戦うタイプだ。

これはシティ内にありふれているもの程、序盤の瞬発力と継戦力が上がるので中々に侮れない。そもそもこっちは「脱獄」メインのスタイルなのでゲージを溜めるまでの繋ぎとしての面が大きい。

ちなみに野良レートで遭遇した中で一番珍しかったのはＰＣ重点で纏ってディスプレイに対抗するカウンターハックフォーム。

「奴に着替えさせる時間は与えられねぇ……」

そしてもう一つが「着せ替え型」、取り込む対象がもたらす性能を把握し、いつ如何なる場所どんな道具でも纏って使いこなす。本来ディスアドバンテージである呪いの鎧を最大限に活用するカースドプリズン特化スタイル。
この手合いの厄介なところはバトルスタイルがめちゃくちゃ多彩である事と……装備を着替える事でバトルスタイルを切り替えるだけではなく装備の耐久も回復してしまう点だ。

そして奴はアメリア・サリヴァン、全米二位のプレイヤーに予習不足を期待するのも馬鹿馬鹿しい。
なので今回採用するティンクル・クォーター・コンバット略してＴＱＣは超急戦スタイルで行こうと思う。

ＴＱＣ、古くはティンクルピクシーの研究を進めるうちに自然に生まれたという妖精神拳の流れを汲むこのバトルスタイルは、クロース・クォーター・コンバット……所謂ＣＱＣのパクリネーミングである。
だがその根本は「近づく、粉潰けにする、ぶっ飛ばす」を極限まで突き詰めたある意味ＣＱＣと言えなくもないスタイルと言える。
その中でも超急戦スタイルはＴＱＣの中でも最速のスタイルであると同時に、こう呼ばれている……

「くたばれティンキー☆」

「来たか、第二ラウンドだ！！」

「くたばれティンキー☆」

「くっ、ふざけた声出してんじゃ」

「くたばれティンキー☆」

……脳死スタイル、と。

「機械群（メカニタン）」の雑魚エネミーを倒して補給をしようとしていた八脚カスプリへ、窓ガラスをブチ抜いて上空から奇襲を仕掛けつつ、俺を迎撃するために奴が身体を動かす前にティンクルパウダー散布。

「行くぞ超急戦（ハイトルク）！」

TQC超急戦（ハイトルク）、やり方はとっても簡単！　理屈を捨てろ、思考を簡略化しろ、とりあえず殴れ殴れ殴れぇぇ！！

ティンクルピクシーの主な攻撃手段はティンクル☆ワンドに依存していると思われがちだが、実は単純な素手の火力も高い。具体的に言うとダストよりパンチが重い。さらに跳躍力や速度はミーティアス程ではないが空中ジャンプと数秒間の浮遊能力を持っている。ここから導き出される妖精の戦いは、射程距離1メートル以内限定での超三次元機動にその真価を見せる！！

「ティンクルダイエット！　身を削れデブが☆」

「ちょこまかと……！　ネズミかテメーは！！」

「はい粉処方しますねー」

こればっかりはプロゲーマーだろうがどうしようもねーだろ、そんなでかい図体でティンクルピクシーを引き離せる訳がない。
殴る、空中ジャンプ、無駄にゴチャゴチャした腕に足掛け、肩に踏み込み、空中で身を捻って膝蹴りを奴の首に叩き込む！

「ＴＱＣ、変則式ティンクル光魔法……！」

「どうみても格闘技だろうが！」

閃光魔導さ……！！
着地、奴がスタンから抜け出す前に再び肉薄し、フルスイングで厄介な砲門にワンドを叩きつける。砕けない、しかし思考停止中なので構わず殴る。

「クソがっ！」

カースドプリズンの力によって取り込まれた「機械群」の銃を一つ破壊、だがここでスタンが切れて反撃が飛んでくる。
一応俺もカスプリ使いだ、カースドプリズンがされて嫌な事は分かっているし、その対処も把握している。
ティンクルピクシーみたいな小柄なキャラは間合いの内側に入り込んでくる敵を相手にする場合はとにかく適正間合いを作ることが肝要。

「何…！」

だが、奴が選んだのは俺の想定してた答えとは異なるものだった。
小柄なキャラが大柄なキャラの懐に入る、ここで有利不利を考えて

しまうのはバトルものだけだ、世間一般ではこの場合「大きい方が小さい方を捕まえた」と受け取るだろう。

格闘(コンバット)じゃない、これは……格闘(グラップル)か！！　野郎、掴みでこっちの機動力を殺すつもりか……上等、ジョイント(多段ブースト)されたＴＱＣ、思考する暇もないほど脳を回転させてやるよ。

◇

「若野牛(コルトバイソン)の浅間さんに教わった実況術が通用しないくらい状況が動いてるんですけど……」

「行動じゃなくて状況を実況解説しろってやつですよね、あれ僕も参考にしてます。とりあえず今起きてるのは……顔隠し(ノーフェイス)の方が初手捨て身作戦に出てますね」

「え、最初から捨て身……？」

「厳密には余計なこと考えずに攻撃特化してる感じですね、相手の対応に最速で答えを返すからあの勢いに負けたらそのまま押し切られる可能性もありますよ。だったらやっぱり超必殺を切ったのもそ

の一環か……？」

銃弾が撒き散らされ、妖精が乱舞する。機巧装甲に短杖が叩きつけられる度に火花が散り、妖精を捉えんと追う怪挟がアスファルトを抉る。

ティンクルピクシーがあまりにも至近距離を飛び回っているがために、まるでカースドプリズンが一人で踊っているかのようにも見える光景は、妖精が呪鎧を追い詰めているようにも見えてその実、拮抗状態を形成していた。

「顔隠しさんはカースドプリズンの追加武装を破壊する事を優先しているんでしょうか？　カースドプリズン本体の体力はあまり減っていないように見えます」

「でしょうね、パワー特化しているように見えて不意打ちの飛び道具である脚の銃はティンクルピクシーの天敵たり得ます。見た限りではティンクルピクシー有利に見えますけど、カースドプリズンに張り付いているのは半分くらいは回避目的です」

「止まったら掴まれる、だから攻撃しようがしまいがエスケープの脚は止められないのね」

そう、巨体の怪物を翻弄する妖精という光景は視点を変えれば潰される死の危険から必死に逃げる羽虫という意味も同時に持っている。ティンクルピクシーは小柄な体躯で相手を翻弄するキャラクター設計だが、小柄というアドバンテージはディスアドバンテージにもなり得る事実に変わりはない。

「それにパウダーのスタンにも弱点はありますす、あれプレイヤー側からの動作は封じられても武装そのもののアクションは止められな

いんです」
「つまり、カースドプリズン本体を止めても銃は撃てるってことですか？」
「ですね、だから顔隠しは銃の破壊を優先してるし、般若はそれを踏まえて攻撃を淩いでいます」
ただ、と慧は口を開きかけ……だがしかし発言権は銀の画面に奪い取られる。
「互いに時間をかけすぎたわね、それとも双方共にそれが狙いだったのかしら？　もう二人とも超必殺（ウルト）のゲージが溜まっているワ」
誰もが同じ場所を見るとは限らない、だが果たして妖精と呪鎧は双方共に条件を満たした。
そして、その名の通りに混沌渦巻き吹き荒れるケイオースシティの状況が、動く。

インフレの風はいつだって速い（後書き）

妖精神拳だけやたら研究が進んでいるのは前作からティンクルピクシーだけやたらとキャラ造形に力が入ってるから

余談だがこの「ティンクルピクシーをやたら気合い入れて作った人」と「R．I．P．の変身プロセスを熱く語った人」は同一人物。色々あって引き抜かれたんだけどこの縁があったのでGH：Cの企画が通った（つまりネフホロ2も……）

片方は想定済みのエマージェンシー（前書き）

古戦場から愛を込めて、どうやら生きて帰れそうなんだ……もしかしたら、この更新が届く前に作者が帰還してるかもな、へへッ（フラグ）

片方は想定済みのエマージェンシー

「しれっと僕が言おうとしたことを先取りしないで欲しいんだけどなぁ……でもシルバー、実際どう思う？」

「ハンニャーは顔隠し（ノーフェイス）のカースドプリズンを警戒してるんじゃないかしら？　だから仕留める前にゲージを使わせたい。顔隠し（ノーフェイス）は……もしかしてだけど、ＷΔの「超必殺（ヘキサウルト）６」ルールを狙ってるんじゃないかしら」

「ヘキサウルト？」

「トライアングル・トリニティの特殊ルールです。合計５回、両プレイヤーによって超必殺が発動されるとシティのどこかにウルトクリスタルってアイテムが出現するんです」

「ヒロイックｏｒヴィラニックゲージを１００％蓄積させる……つまり超必殺をすぐ撃てるのよエイト」

「あー、回復アイテム的なものなんですね……あ、だから序盤で超必殺を？」

ＧＨ：Ｃにおけるゲージ溜め行動を省略可能なギミックの有用性は説明するまでもない。そして恩恵はただ一人にしか齎されない以上、そこには駆け引きが生まれる。

「仮にここで二人が超必殺を使えば合計三回、気軽に超必殺を打つのは少し躊躇われる回数ですね」

「シチュエーション次第だけど、追い詰められた状況で相手にウルトクリスタルを取られればゲームオーバーになりかねないもの」

「顔隠し、般若共に攻撃の頻度が少なくなってきました……どちらかというと、牽制しつつ互いの動きを探っているように見えますね」

エイトが実況した通り、先程までの怒涛の攻勢と冷静な対処はその勢いを減じ、互いにジリジリと体力を削りつつもスタートダッシュの空砲を待つアスリートのような静けさを感じさせた。

「カースドプリズンの脚銃は残り二つ、互いに膠着状態になりつつありますが顔隠しさんは積極的に狙っていないようにも見えます」

「そりゃあそうでしょう、カースドプリズンの超必殺は「脱獄」、苦労して銃を破壊するより般若に超必殺を切らせた方が早いですから」

「あ、そういう事ですか……」

「ただプリズンブレイカーは強力な性能をしています、般若もリアルカースドプリズンに王手を……いや、なんでもないですアメリア・サリヴァンとは無関係ですしね、ハイ」

「そろそろ無理出てきてません？」

「建前、建前です。ともかく、般若氏がカースドプリズンの方が得意だとしてもプリズンブレイカーになったら弱くなるわけじゃありません、だから顔隠しもちょっとだけ慎重になってるんです」

「その逆にハンニャーもティンクルピクシーの超必殺を警戒してるわね、ティンクルピクシーの「ティンクル・ファントム」はアクション型、一撃でも食らえばそこから体力を一気に削られるもの」

ティンクルピクシーの超必殺「ティンクル・ファントム」はミーティアスのミーティア・ストライク同様、発動した時点で行動が終了するまでがオートで進行するアクション型超必殺である。

言ってしまえば単なる飛び蹴りであるミーティア・ストライクとは異なり、原作に準拠するなら「スペシャルなパウダー」を相手にぶち撒け、動きを封じてから分身を三体生み出して合計四人の妖精による一斉攻撃を仕掛ける……当然、パウダーを外せば超必殺は不発する。

「ガンギマリファントムは粉食らったら避けづらいからねぇ……本体も一時的に無敵状態だし、やっぱあの粉って……」

「ストップ！　ストーップ！　ゴールデンタイムですよ魚臣さん！　危ない発言はご勘弁ください！！」

「あ、すいません……ともかく、今は互いに先手を取りたいんですよ。顔隠しの方は怯ませた上で、って前提付きかもしれませんけど」

仮にティンクルピクシーが先手を取れたならば、鈍重なカースドプリズンでは対処が追いつかない。しかし隙の大きいパウダーを確実に当てる必要がある。

仮にカースドプリズンが先手を取れたならば、強力なスーパーアーマーを持つプリズンブレイカーの状態で対応できる。だが「脱獄」の効果が終了すれば機械群の鎧は当然消失する。

一進一退の攻防を続行しながらも互いに攻めあぐねている膠着状態

という矛盾。かたや冷静な思考で、かたや加速した直感で機を伺う以上……均衡を破る者がいるとすれば、それは顔隠しでも般若でもない第三者に他ならない。

◆◆

それが聞こえた瞬間、俺とアメリア・サリヴァンは全く同じタイミングで超必殺を発動した。

「脱獄（Prison Break）！！」

「ティンクル☆ファントム！！」

ぶち撒けられる合法パウダー、だが奴の全身から弾け飛んだ機巧の残骸がパウダーを僅かにだが押し留め、それを盾に真紅がバックステップでパウダーの範囲から距離を取るのが見えた。

失敗した……っ！

クソがっ！　超急戦（ハイトルク）に没頭しすぎた！　ここはもっと慎重に隙を狙うべきだったが……く、ダメだこの場に残るのはマズイぞ……！！

「ガラクタ共が……厄介な時に割り込んで……！！」

「よそ見してんじゃねぇぜ羽虫（バグ）野郎」

「ぐのっ！？」

顔ですか、仮にも小柄な女性の顔を狙いますか。上等じゃねーか背骨Σ形になるまでバッキバキにしたるわコラァ！！

だが状況は単純にプリズンブレイカーと対峙しているだけに留まらない、この場に乱入した第三勢力の存在は俄然有利になったアメリア・サリヴァンであっても無視しきれないものがある。

忌々しいポンコツこと「戦乙女（ヴァルキュリー）」すらをも指揮下に入れた二体目のターゲットエネミー……

「……「大佐（カーネル）」！！」

ターゲットエネミー「大佐（カーネル）」、軍的呼び名を持つこのエネミーの特性は単純明快。

周囲の機械群（メカニタン）を指揮下に置き、ＡＩレベルを引き上げる。単体戦力として最強クラスの「戦乙女」が指揮下に入っている場合の厄介さは決して無視できるものではない。

「厄介な……！！」

車や家電が変貌したと思しき「機械群」の射撃を支援するかのように飛んできたミサイルをビルの陰に飛び込んで対処しつつも口からは思わず悪態が漏れる。

指揮下に置かれた機械群は偏差射撃とかしてくる上に被ダメージ量の大きい仲間を庇うような行動までしてくる。何より厄介なのは「

戦乙女」を守る動きをしてくるってことだ。

ここで俺に提示された選択肢は二つ、一つは逃走……最低でもプリズンブレイカーの「脱獄」が終るまで身を隠すこと。
だが、「大佐(カーネル)」の特性的に……よりにもよってカースドプリズンをここに放置するのは不味い、ひっっっっじょーーーに不味い。

「うおお余所見してんじゃねーぜ半裸野郎が！！」

「次のキャラでテメェもそうなるんだろうがぁぁ！！」

一気に距離を詰めて、クロスカウンター！！　腕じゃ届かないから蹴りを食らえぇ！！

「ぐっ」

「ごっ」

ダメだ、出力で完全に負けている。向こうは頬に叩き込んで軽く怯んだだけだが、こっちは思い切り吹き飛ばされた上に体力も三割まで追い込まれた。
やはりプリズンブレイカーを相手に正面衝突は愚策か……ならば！！

「裏ＴＱＣ……「邪悪(イビル)」スタイル！！」

もはや未来は無し、死ぬまで暴れるしかねぇ！　うおおお死なせるかよ「機械群(メカニタン)」！　全員ティンキー☆してやるよオラァァ！！！

片方は想定済みのエマージェンシー（後書き）

どうせなのでここで返信しちゃいますか

Q．作者、Ｔｗｉｔｔｅｒとかやってないの？

A．踏ん切りがつかないだけ、前々からやろうやろうやろうと思ってるけど最終的に気づいたらコントローラー握ってた。

もう少ししたら踏ん切りつく、多分（結局踏ん切りつかないやつ）

関節技こそ孤島の技よ（前書き）

インディちゃんとポネキに衣装ってマジ？

関節技こそ孤島の技よ

別名……いや、本来の名称は暗黒妖精神拳と言うそれは、ＧＨ：Ｃという従来の格ゲーとは大きく異なる戦場において生み出された禁忌の拳である。

いくつかの例外はあるが、基本的にＧＨ：Ｃは一対一（タイマン）がデフォルトだ。それ故にこの魔拳は活用される筈のないものだった、何よりティンクルピクシーが「ヒーロー側」に属している以上、それを振るうと言うことがどう言うことなのかは言うまでもないことだった。

そう、暗黒妖精神拳……あるいはＴＱＣ邪悪（イビル）スタイルの正体とは「一対多数」を想定したバトルスタイル、ＮＰＣを軒並み殴り飛ばす必要がないヒーローサイドだからこそ禁忌とされていたそれはトライアングル・トリニティの実装によって日の目を浴びるに至ったのだ。

◆◆

「行くぞオラァ！！」

駆け出した俺に反応した「機械群（メカニタン）」の何体かが銃口を向ける。雑魚の方は照準を定めてから発砲するまでに二秒程の隙がある、プレイヤー操作でもない銃弾を喰らうほど耄碌はしちゃいない。

「そんなクソホーミングで尻に火がつくわけねーだろうが……！！」

前傾姿勢で駆け抜け、跳躍。蜥蜴のような形状の機械群を飛び越え、その頭上で宙返りしつつ背中に着地。身軽な体躯を活かして元車（リムジン？）と思しき巨躯を駆け下りる。
そこから加速、こちらへと銃口を突きつけ、狙いを定めたカブトムシとクワガタタイプの機械群のど真ん中へと突っ込む。

「粉ってろ虫どもが」

パウダー散布、先人達の検証でティンクル・パウダーは残留している限りスタン効果は複数の者に適用されることは明らかになっている。
だからこそあえて二体の機械群が挟む小さな隙間に身体をねじ込む事で確実にパウダーの射程圏内に収めることが出来る。そしてピクシーの小柄な身体であれば抜け出すのも容易！

「接近戦か、悪くないが動きが単調だぜ「戦乙女（ヴァルキュリー）」！」

ダスト戦の時からＡＩ更新してねーの？　時代に置いてかれるぜポンコツが。
安直に振り下ろされた突撃槍を身体を捻って回避し、駆け出し二歩踏み出した瞬間にティンクルピクシーが備える浮遊能力を発動。
浮遊時はそこまでの速度は出せない、だが例外的に最初から勢いがあれば慣性でそのまま滑るように進むことが出来る。

「ティンキー☆ケツバット！！」

アスファルトの上をあたかも氷上が如く滑って「戦乙女」の背後へと回り込んだ俺はティンクル☆ワンドによる全身全霊のフルスイングを奴のケツに叩き込む。
ティンキー☆膝カックンや禁断のティンキー☆セブンスキルでも良

かったが、流石に後者は絵的にヤバいし社会的に死ぬので除外。というか一回野良で「戦乙女」にセクハラかました勇者と遭遇したことあったが…………いや、あんな酷い事件を再び掘り起こす必要もあるまい。

金属の顔が表情を作ることはない、だがそれでも随分と間抜けな吹っ飛び方をした「戦乙女」を余所に、再び駆け出す。
もう雑魚に構う時間はない、ターゲットエネミーのくせに味方強化に性能全振りしてるせいで地味に体力が多い以外マジで取り柄がない……つまり、激烈(チョロ)に弱っちい「大佐(カーネル)」は機械群ターゲットエネミーの中では最も与し易いエネミーである。

「くたばれヌーディスト！！」
「読めてんだよドラッグ妖精！」
「おいやめろティンクル☆パウダーは合法だろうが！！」
「人体改造する粉のどこが合法だぁぁあ！！」
「いや全くごもっともで……がっ！！」
脇腹に強烈なブローが叩き込まれる。すんでのところでワンドでのガードが間に合ったが、小柄なピクシーは苦労して詰めた距離を無情にも再び引き離される。吹き飛ばされた拍子に手を離してしまったのか、ティンクル☆ワンドがどこにもない。
「ぐ、」
駄目だ、ほぼ全てのステータスで負けていてはどうしようもねぇ。

だがどうする？　使うか？　だが……いや、今だからこそ、なのか？　このティンクル・ピクシーの身体であれば、あるいは。

そこで気づく、今俺が吹き飛ばされ転がった場所は……なんの偶然か、妖精の小さな手でもそれに届く場所だった。

「…………そうかよ」

よりにもよって丁度手が届く場所に吹っ飛ばされたってことは、つまり天がそうしろと言っているんだろう。

ガシャ、と握りしめたそれはティンクル・ピクシーには少々大きすぎて。だがそれは非常に懐かしい手触りとも言えるだろう。

「残り十秒ちょぃ、か」

あの日以来、オフライン環境でしか使えなかった。だからこそ、今この瞬間この場所という……オンライン環境に立っているがために、俺の中でずっとＯＦＦのままだった最後のスイッチがＯＮになった気がした。

「ふぅー…………よし」

このゲーム、今何人が見ているんだろうな……だが、そうだな、瞬きを忘れるくらいのプレイを見せてやるよ。

残り十二秒、こちらにヘイトを向ける雑魚には最早構ってる時間はない。最小限かつ最低限必要なスライディングやジャンプを駆使して突破、再び「大佐（カーネル）」率いる機巧の最前線へと躊躇いなく飛び込んだ。

「――ふ、ふふふ」

なんだかとても愉快な気分だ、クルクルと持ち主の喪われた銃を手の中で回しながら前へ、前へ、前へ！
障害物がたくさんある、隠れられる、飛び越えられる、奇襲できる！　だが回りくどい、シンプルに行こうか。
小さな身体は余程の「ガチ勢」でない限りは絶対に油断を誘える。
前へ、前へ。邪魔だポンコツ、お前ンとこの無能(ガラクタ)を助けに行こうってんだぜ？　どけ。

「…………！！」

小さな身体をさらに縮こめて、限界まで速度を出しつつも同時に音もなく這い寄るように前へ、前へ、前へ。
見えた、やはりプリズンブレイカー時に「大佐(カーネル)」を削って再収監された時に纏うつもりか。だが……甘い。

「へぁろー」

「っ！！」

回し蹴り、回避で対応。
裏拳、回避で対応。
バックステップ、接近で対応。

「チィ……！！」

さしものプロゲーマーもプリズンブレイカーの制限時間には焦るらしい。随分と素直な軌道で繰り出された正拳(ストレート)……それを待っていた、燃えろライオットブラッド！　覚悟(カフェイン)を決め(キメ)ろ！！

「ぐぅう！！」

「なっ――――」

ゴッ！！　と視界が揺れる。避けようと思えばいくらでも方法はあったはずの雑なストレート、しかし俺が選んだのは回避でも防御でもない……自ら拳の軌道へと頭突きのように顔面を叩き込む素受けだ。

真正面から受け止めた事でＨＰが一気に削れ……しかし乱数の女神は今度は俺に微笑みかけた。自ら受け止めるという踏ん張りはティンクル・ピクシーの身体を物理的にも存在的にもかろうじてその場に押し留め、一瞬だが確かにプリズンブレイカーを硬直させた。

刮目せよ、これこそ孤島における幼女式強制間隙生成術……不意打ち顔面シールド！　捩くれた欲望を隠そうともしない変態サイコ以外には高確率で効くサバイバル・クォーター・コンバット！！

「いたいけな少女の左目に拳を叩き込んだ気分はどうだい？」

「な、ん……何っ！？」

隙を晒したなアメリア・サリヴァン。残る体力は一割未満、だが俺(ダスト)が遺した残弾は六発フルチャージだ。

俺の左目に突き刺さった拳に手を掛けると、飛びかかるように跳躍してプリズンブレイカーの体勢を崩しにかかる。

「塵は塵に――――」

浮遊と空中ジャンプを利用した妖精式関節技(サブミッション)。既にカースドプリズンへと戻りつつある発光半裸の腕を捻って固め、ダストの銃を無防

備な奴の後頭部へと押し付ける。

「悪魔憑きと異世界妖精からの置き土産だ」

「ぐ、おあああああああああ！！！」

一発、二発、三発、四発。
マズルフラッシュが乱舞し、放たれた善の弾丸が奴の頭を速く鋭くぶっ叩く。このゲームがＲ１８であったなら、この時点で決着していたかもしれないが……残念、１５歳以上対象なんだよね。

「ナメるなぁぁ！！」

「くっ……ガッ！！？」

あと一発、それで倒せるところまでは追い詰めた。だがそこまでだった。
再び呪われた鎧に包まれる過程でティンクル・ピクシーの身体は弾き飛ばされ……ヤケクソで放った最後の二発は冷静な防御によって弾かれた。
そして単純なトドメ以上の感情が込められたタックルによって壁と鎧とにサンドされた妖精の体から力が抜けて…………
俺（ピクシー）はここまでだ、健闘を祈るぜ俺（カスプリ）。

関節技こそ孤島の技よ（後書き）

当たるとは思ってなかったパンチがクリーンヒットしたと思ったら
殴られて変な角度に曲がった顔でオリジナル笑顔見せられるホラー
展開から関節技に繋がって近距離連射食らわされたの図

合法・背水の陣（前書き）

覚悟とは！　プロットを粉砕して投稿寸前だった３０００字を全消去する事だ！！

◇

「…………」

「あのー、シルバーさん？」

「あー……うん、ちょっとシルバーはガチ考察に入ったっぽいんで放っといてください。うん」

「そ、そうですか……でも、確かに今のは凄かったですね……こう、すり抜けるみたいに機械群（メカニタン）の間を走り抜けて、顔面でパンチを受け止めてから……えーと」

「地面を蹴って加速、浮遊で懐の中に滑り込んでから空中ジャンプ、プリズンブレイカーの身体を柱代わりにポールダンスみたいな動きで腕をひねり上げて銃撃」

「え？」

「あ……あー、すいません。口に出しちゃってたか……後で問い詰めればいいや、解説に戻りましょうか」

「は、はぁ……」

先ほどまでの愛想はどこへやら、目を細めて黙り込んでしまったシルバーを余所にいち早く愛想を取り戻した慧が画面に表示されたゲ

ージを指して解説を始める。

「ターゲットエネミーの乱入、超必殺の撃ち合い、そこからピクシーの脱落……単純に見れば顔隠しの方が力負けしたようにも見えますけど、実際これ相当こんがらがってます」

「どういう事でしょうか？」

「まず「大佐」の乱入は多分般若の方が仕込んでました、ダストを倒してから殆ど移動してませんでしたから……ディスプレイで大まかな座標と進行ルートを予測してたんだと思います」

「つまり……顔隠しさんが最初から釣られていたと？」

「そうなりますね、ピクシーは確かに俊敏だけど「大佐」が引き連れている機械群はデカいですから、どれだけ取り繕っても邪魔な障害物です。さらに……あ、コメントでも指摘されてる方がいますね。そうですね、アメリアじゃないけど般若の力量なら「大佐」を撃破吸収する狙いもあったと思います」

「えー、つまり般若さんは「ピクシーの動きを封じる」「ターゲットエネミーの撃破」の二つを狙っていた、と？」

「そうなります、ただここに顔隠しの方の目論見が入り込んできます。厳密にどっちなのかは後で問い詰めないと分からないですけど……顔隠しの狙いは超必殺の合計発動回数を四回にする、なんじゃないかな？」

「五回ではないんですか？」

「むしろ逆ですね、般若が理詰めのゲーマーなのは顔隠しも知ってますからウルトクリスタルという不確定要素をチラつかせる事で超必殺の発動を封じるつもりなんでしょう」

取得すればゲージを最大まで獲得する、それは一つしかない。即ち只でさえ複雑な三つ巴における更なる不確定要素たるウルトクリスタルの出現条件はプレイヤーによる六回の超必殺発動である。

「ピクシーの超必殺も大概面倒ですけど、顔隠しの大トリはカスプリですからね……シルバ……んん゛っ！　シルヴィア・ゴールドバーグ相手に引き分けたプリズンブレイカーを無償降臨させるリスクなんて僕でも背負いたくないですよ」

「つまり顔隠しさんは超必殺の撃ち合いをする狙いだったんですね」

「般若もそれを承知してたんでしょうけど、丁度のタイミングで「大佐(カーネル)」がよりにもよって「戦乙女(ヴァルキュリー)」引き連れてきましたからね、どちらにせよ脱獄を使わざるを得なかった状況になっちゃったのが般若側の想定外その１ですね」

恐らく、般若の当初の狙いはカースドプリズンのままティンクル・ピクシーの対応をしつつ機械群の乱入で三つ巴に持ち込むつもりだったのだろう、と慧は「機械群」を相手に戦っている方のカースドプリズンを指して推測を言葉にする。

「でもピクシーの方が予想外に粘った上に、ダストの置き土産のせいで数的有利がほぼ無いくらいに追い詰められたのが想定外その２ですね。他キャラの武器は使えるけど威力減衰するから生き残りこそしたものの、逆に小パンで死ぬような体力だけ残ったせいで般若は死ぬに死ねないし「大佐」を倒さざるを得ない状況になっていま

す」

「……あ！　顔隠しさんの最終キャラがカースドプリズンだから！」

「その通り、「大佐（カーネル）」を放置すればターゲットエネミー撃破ボーナスと「大佐」という素材を顔隠しに奪われかねないですから、放置するという選択肢はありません。でもミリ体力なのでまず確実に倒されるわけで……ターゲットエネミーを倒す事で得られる恩恵がほぼ無駄になったんですよね」

それでも「大佐」を倒した時点でキャラの入れ替え……つまり自らカースドプリズンの体力をゼロにしないのは多分「カースドプリズンｖｓカースドプリズン」の構図を諦めてないからだろうなー、と慧は心の中で呟く。

だからこそ意味不明なことをしているアホはともかく、アメリアがしようとしている無茶無謀は理解することができたのだ。

「……そうよね、いくらアメリアでも「戦乙女（ヴァルキュリー）」相手にノーダメージは難しいでしょうし、二体目のターゲットエネミー撃破ボーナスの「ＨＰ回復」を狙うなら「総帥（コマンダー）」を狙うしかない、か」

「シルバー？　素で本名出すのやめよう？　多分ほぼ全員分かってるけど言わないようにしてたじゃん？」

「うっちゃりうっちゃり？」

「何？　リキシオン使いにでもなるつもり？　うっかり、ね」

今、三角形の街には二人のカースドプリズンがいる。１Ｐカラーの

呪鎧（般若）は風前の灯な体力のまま「機械群」の本拠地へと突撃を仕掛けている。

では、もう一人のカースドプリズン……派手なオレンジカラーの呪（顔隠し）鎧は、一体何をしているのか…………？

◆◆◆

瞑想をしている。

いや迷走しているわけじゃない、ちゃんと目的あっての瞑想だ。

「…………」

久々に鯖癌時代のメンタルで暴れて分かったが……今の俺は、ゴミだ。

テンションそのものはそこまで悪くないがやはり明確に目的が定まっていないが故にナメくさった動きしかできていない気がする。

「…………」

座禅、瞑目、そして意識を集中させる……幸い場所が場所だ、五分

程度なら見つかることもないだろう。外野からは舐めプと思われるかもしれない、だが俺と戦うためだけにどれだけの手間をかけたのだろうアメリア・サリヴァンを満足させるカースドプリズンを用意するために必要な儀式なのだ、勘弁してほしい。

ライオットブラッドの多重服用によって高揚した頭をあえて落ち着かせて、俺は新たなテンションを構築する。
何のために戦うだとか、そんなものはどうでもいい。強いて言うなら報酬と勝利の美酒で酔う（ドヤる）ため、傭兵（助っ人）が戦う理由なんてそれくらいでいいだろう。

「…………」

ならば思考を逆転させよう、何のために戦うのかではなく戦うために何をするべきなのか……そう、答えはライオットブラッドだ。
戦うためにライオットブラッドを飲んだのではなく、ライオットブラッドを飲んだからこそフルパワーで戦う……暴徒の血（ライオットブラッド）は既に全身を駆け巡っている。
ならば今この瞬間、俺の全身はエナジードリンクで満たされていると言ってもいい。ライフイズカフェイン、心臓爆発するんじゃねーの？　おっと集中集中。

「…………」

中ど……ヘビーユーザーはライオットブラッドをキメて己の深奥に向き合い、大宇宙と交信するという。ミドルユーザーたる、まして合法に堕ちてもいない俺にそこまでのトチ狂いは望めないが、それでも瞑想の果てに見えるものがあるはず。
内なる心に広がるエナドリの海、精神統一によって波一つない凪の

水面に…………

…………

……そういえばそろそろ二十分過ぎた？

「見えた！！」

見えたぞ血の一滴！　ライオットブラッドユーザーが心の奥底に飼う暴徒の魂！！

稲妻の如く脳裏を駆け巡る思考が既にフルスロットルなエンジンにさらなるニトロを注ぎ込む。

俺の中を駆け巡る燃料が二十分の経過を迎えたことで化学反応を起こす。ミックス、アクセル、そしてジョイント……カフェインをカフェインでカフェインした多重連結が効果切れの寸前に一気呵成に燃え上がる。

「我、天啓を得たり……！！」

そうか、ライオットブラッドにハチミツとドライイーストを入れて発酵させれば……いや違法じゃねーか！　おのれアメリア・サリヴァン！　向こうから喧嘩ふっかけてきたくせに勝ったら全世界にドヤ顔勝利報告するつもりだな！　ＳＮＳとかで！（被害妄想）

そしてそれをネタに末代まで煽ってくる外道共の顔が見える……！

（幻覚）

誰が舐めプボコられ変質者だと！？（幻聴）

「許せねぇ……！！」

上等だコラ、そっちがその気ならこっちにも考えがある。くれてやるよ俺の今日一日分のテンションを……！！

瞑想は成った、今こそダストの遺産を使う時……！

合法・背水の陣（後書き）

・瞑想
ライオットブラッドを服用して精神統一を行う事でおのれの心と向き合う上級者向けの嗜好法。合法に堕ちた者ともなれば、星の海より瞳を授かることも出来るとかなんとか。レッツリゲイン！

ライオットブラッドに世界を変える力はないが、その手助けをすることは出来る……一歩踏み出せない貴方にこそ、届けたい。
ライオットブラッドシリーズ、好評発売中。
新発売！　即効イグニッション、リボルブランタン！！

真打一張羅（前書き）

いーきーてーるーぞー（三月中旬くらいまでスケジュールガッタガタなだけ）

やはりリアルタイムな通知のシステムが必要なんですかね……？

真打一張羅

リスが冬眠に際して食糧を溜め込むように。
犬がお気に入りの骨を地面に埋めて隠すように。
結局のところ、ダストがクソテレビを撃破してカースドプリズンに撃破されるまでの空白の時間、アメリア・サリヴァンが機械群の装備を取り込む事を優先したがために生まれたフリータイムこそが今この瞬間、この場所に繋がっている。
贅沢を言えばティンクル・ピクシーでリソースの食い合いになる相手側のカースドプリズンを倒しておきたかったが、そこは向こうの方が一枚上手だったと認めよう。
だがティンクル・ピクシーはカースドプリズンを瀕死にまで追い込み、十中八九あの場から撤退させることに成功した。ダストが最初にスポーンした場所の近くに今の俺が現れた事で、逆説的に相手の座標も分かるというもの。

「さーて……一張羅を引っ張り出しますか」

カースドプリズンのバトルスタイルは大きく分けて二つ、アメリア・サリヴァンが様々な装備を適宜使い分けると言うのなら、今日の俺は最強の一張羅を見せるだけ。真のおしゃれ番長は素材から厳選する――
俺が選んだ編成は全キャラクターを戦闘メインキャラで固めたオールファイター……脳筋？　いいや違うね、コンボを決めるのは性能

じゃない、行動さ。

「厳重すぎて逆にバレそうだったからなぁ……」

Ｍｓ．プレイ・ディスプレイの厄介な点は街の各所に設置されたカメラを使って視覚的に遠見を出来る点だ。この場所の性質上、クソテレビだけは迅速に倒す必要があった……それこそ超必殺を切ってでも、な。

「銀行の金庫、最高級のロッカー……ってな」

重厚な扉をカースドプリズンの膂力で無理やりにこじ開ければ、ダストの遺産がカースドプリズンを出迎える。
それはかつて人が道具として生み出したものだった、それは機械群の軍門に下って異形と成り果てたものだった、そしてそれは……ダストによって撃破され必要なパーツのみを吟味してこの銀行の最奥に溜め込まれていたものだった。

「ふふ……覗くなよ？」

この街を俯瞰視点よりもさらに遠いところから見ているだろう不特定多数へと語りかけるように呟いて、ずいぶんキザな事をしてしまったと内心照れつつ金庫の扉を閉める。

そして……

◇◇

アメリア・サリヴァンというプロゲーマーにとって、ゲームとは仕事であり趣味である。
その両方の面から見ても「勝利する」という結果に対して人生を賭けるだけの価値がある、そしてそれ以上にシルヴィア・ゴールドバーグという存在は大きいものだった。

全米最強、ひいては全世界の頂点に君臨し続ける存在……そのシルヴィア・ゴールドバーグが敗北した。アメリアとて己こそが無敗故に純白の流星に黒星をつけんと挑み続けた者、それ故に驚愕し……
……そしてGGCの動画を視聴した上でケイ・ウオミの勝利は「必然」ではなかったのだと断定した。

あれはケイが実力で勝ったと言うよりも、その前の試合でシルヴィアが無意識的に満足していた、というのが最大の理由だろう。無論、大前提としてシルヴィアに食らいつけるだけの実力があるのは事実だろうが、それでもきっと「奴」が実に4ラウンドもの間激闘を繰り広げていなければ、ケイ・ウオミが前人未到の大金星を挙げることは出来なかっただろう。

――リアルカースドプリズン

その対義語が頂点に存在するが故に空白の座（シルヴィア・ゴールドバーグ）は作られ、数多のゲーマーが挑み……その悉くはリアルミーティアスによって撃破されて

いた。
それ故にリアルカースドプリズンの称号とはいつしか「カースドプリズンでシルヴィア・ゴールドバーグに勝てる者」というイメージばかりが目立つようになっていた。

だがあの夏の日、新たな戦場に降り立った一人のプレイヤーが「リアルカースドプリズンとはなんぞや」という疑問の答えを提示してみせた。
強欲で、傲慢で、己を貫き通す力が人の形をしているかのような、あの振る舞い。成る程、あれがリアルカースドプリズンかとアメリアとて思わず納得した程だった。

だがそれと同時、プロゲーマーとしてのアメリアは幾度となくシルヴィアｖｓ顔隠し（ノーフェイス）の戦いを見直していく中である結論に至っていた。
顔隠し（ノーフェイス）はシルヴィアと同じメンタリティがプレイヤースキルに直結しており、その実力にはムラがあるタイプであると。
あるいはそれこそがリアルカースドプリズンと呼ばれるにあたっての最低条件であったのかもしれない、だからこそアメリアは己の心に浮かんだシンプルな疑問を顔隠し（ノーフェイス）に、シルヴィアに、大衆に問わんとしていた。

――リアルカースドプリズンが彼だとしても、リアルカースドプリズンになれなかった自分は「顔隠し（ノーフェイス）」に劣っているのか？
――否、それはただ「カースドプリズンの扱いが一番らしい」ということ。
――だが「カースドプリズン」というキャラクターが傲岸不遜に呪いを纏いながらも己を通すヴィランキャラであるというのなら。

――お前はアメリア・サリヴァンより強いのか？
嫉妬、ではない。強いて言うならば好奇心。
己ですら取り逃がした称号に至った人物、顔を隠し在野に無名のまま埋もれていた謎の男に己の全力をぶつけてみたくなった……ただ、それだけの話なのだ。

「やりゃあできるもんだな……」

ティンクル・ピクシーが倒れてからおよそ五分。ゲームシステム的に後から選出されたが為、２Ｐカラーになっているだろうカースドプリズンが姿を現すことはなく、果たして最初にこの街へ現れたカースドプリズンは生き残っていた。

ターゲットエネミー「総帥（コマンダー）」
「機械群（メカニタン）」の中核であり、最上位存在であるこのターゲットエネミーはゲーム開始と同時にマップに出現する要塞の最奥にポップする。
このエネミーに関連する特徴は主に三つ。
要塞は「戦乙女（ヴァルキュリー）」あるいは「大佐（カーネル）」のどちらかが撃破されない限りそもそも中に入ることができない。
ランダム生成される施設内マップを攻略しなければならない。
そして指導者エネミーが倒された時点でＮＰＣ勢力はそれ以上の数を増やさなくなる。

本来は１Ｐと２Ｐが敵対しつつも同じ目的のために攻略する……などと言ったシチュエーションを発生させるためのものだが、限定的な条件下でのみ単独かつ容易な攻略が可能になる。

その一つが「機械群（メカニタン）」に対するカースドプリズン、ターゲットエネミー「大佐」を装備として身に纏うことで要塞内ギミックの完全スルーを可能とする裏技である。

そして、カースドプリズンのミラーマッチを成立させる、その目的を達成する為にたった一撃でも食らえば瞬間に体力が尽きる限界状況の中で機巧の帥へと挑み……果たして、カースドプリズン（アメリア）は体力を三割ほどにまで回復させた上で「総帥」と「大佐」を鎧として身に纏い立っていた。

「やってみるもんだな……」

アメリアは自身がシルヴィアや顔隠しのようにテンションを上げて力量を上げるタイプではないことを自覚している。そして余程心をかき乱されない限りは常に最高のパフォーマンスを実行できることを自認している。
そのアメリアをして分の悪い賭けであると考えていた「総帥」のノーダメージ討伐……アメリアは熱心な宗教家というわけではないが、それでも次のミサには出席しようと心に決めた。

「……あん？」

と、その時だった。

「ひぐっ、えぐっ……」

アメリアのものにしてはか細過ぎで、顔隠しのものにしては高音すぎる。即ちそのどちらでもない第三者の小さな泣き声がアメリアの……カースドプリズンの耳に届いた。

「チッ……」

幼子、泣き声、三番手……カースドプリズンというキャラクターに子供を助ける理由はないが、WΔを戦うアメリア・サリヴァンにはそれに対処しなければならない理由があった。

「おいクソガキ」

「ひっ」

なお、アメリア・サリヴァンは子供の相手をする事が大の苦手である事をここに記しておく。

「あー……死にたくなかったら失せろ」

「あ……ぅ……」

「……？」

ふと、違和感のような既視感のような疑問がアメリアの脳裏に浮かぶ。

（……このNPC、どこかで見た気が）

GH：Cにおいて NPCはマップが切り替わっても流用される。それは「ケイオースシティの住人」という形で混沌意思カオスが生み出しているという設定だから、と言えばそれまでだがアメリアは何故かこのNPCに見覚えがあった。

いや違う、このＮＰＣに関係しているのはアメリア・サリヴァンではなく…………

「よう猛禽類、テメーじゃ役者が違ぇだろコラ。退け」

「来……がっ！！？」

接近する轟音とそれに伴った声。獰猛な笑みを浮かべて振り向いた瞬間、アメリアの顔面を貫かんばかりに加速した一撃が想定外の速度で襲う。

「ひっ」

「ようガキンチョ、乱数（運命）を信じるわけじゃねーけどつくづく縁があるな」

「おじちゃん、誰……？」

「俺？　そうだな………」

それはどこまでも傲慢で、根拠など無用とばかりの絶対の自信と、堂々たる威風を漲らせた簡潔な一言。

轟々と爆炎の鬣を靡かせ、二体のターゲットエネミーを纏ったカースドプリズン（アメリア）をも上回る超重量の装甲と、それを支える奇妙な形状をした四脚の異形。

複数の装甲を纏わせ固めた機鎚を担ぎ、その者は高らかに宣言する。

「────俺が、カースドプリズンだ」

真打一張羅（後書き）

サンラクカスプリの今の状態はキマリストルーパー的な感じです（なお初期グシオン並の重装甲）

超合金機動居合拳（前書き）

替え歌やばいの思い出して日和るマン

エルサー！　Ａｐｅｘやろうぜー！　お前ジブラルタルな！！

思わず歌ってしまうほどに更新です

◆◆◆

カースドプリズン学会というものがある。
カースドプリズンとは何も脱獄した後の超性能だけが売りってわけじゃあない、むしろその前の呪鎧の姿で戦う方が大半なのだから当然シャンフロエンジンで動作する呪鎧の性能を検証する声が上がる。
そうして鎧の深奥に迫るべく数多のカースドプリズンによる破壊行為が行われ……ある一つの事実が判明した。
「二腕二脚じゃねェ姿……特殊形態か」
「特定機械群のエンジンユニット十二基搭載が条件だ、この番組が始まる直前に発見された特殊形態さ」
カースドプリズンは基本となる鎧を中心に破壊したものを纏っていく。だが例外として特定のオブジェクトを特定の数吸収した場合、人型ではないフォルムになることがある。
恐らく先程の八脚カースドプリズンも俺が知らない特殊形態なのだろう、機動力はそこまで高くないがマニュアルｏｒオートで遠距離攻撃に秀でた性能ってとこか。確か「機械群」のターゲットエネミー三種を取り込んだ場合も特殊派生だった気がする。
であれば俺は武装拡張を捨て、機動力と馬力に特化した特殊形態でてめーを倒す。
俺は常に時代の最先端を行く男、そして多段的にキマったエナジードリンク・パワーによって俺は全てを振り切って加速する！！

「はン、使いこなせるのかよ？」

「ライオンが自分の爪の使い方を忘れるのか？」

荒ぶるトムソンガゼルの魂を見せてやろう、ライオンなんてクソ喰らえだぜ。

「ようガキンチョ、そこで頭引っ込めて隠れてな」

「気取ってんじゃねェよ！！！」

今の奴は「大佐」と「総帥」を吸収している、WΔでターゲットエネミーを自身の糧に変えるキャラはそれなりの数存在するが、そのどれもが強力な性能をしている。それにターゲットエネミー撃破ボーナスもある、残り体力だけで見くびれば今まで切った啖呵が全て末代までの恥になるだろう。

だが、

「恥も後悔も過去から掘り返せばいいのさ！」

未来を恥じてたら何もできねーんだよ！　突撃だぁぁ！！！

奴の右肩から腕を覆う装甲として纏っている「大佐」の砲口が凶悪なスパークを溜め始める。荷電粒子砲、直撃すれば体力の二割は消し飛ぶだろうが……拡張性皆無、機動力全振りをナメんな。

正座を中途半端な形で崩し、浮いた膝から伸びた二つのサブレッグを含めて四脚とする奇妙な姿は鳥型機械群を取り込んでいる事で常時ホバー状態で挙動する！

轟、と下半身が爆ぜたかのような爆発的推進力がカースドプリズンの身体を爆進させ、それでいて単純な直線軌道とは異なる滑らかな動きで距離を一気に詰める。

「クラッシュしやがれ！！」

だが相手は全米二位、つまりあの機動力の権化たる全米一位を相手に戦ってきた猛者だ。的確に合わせられた砲口から放たれた砲撃が俺の身体に叩きつけられる。

だが、

「一割しか……!?」

「超・重・装・甲！　移動要塞（動けるデブ）ってなぁ！！！」

「ぐぅうっ！！」

この十二エンジン形態は本来ならもう少し武装の選択ができたはずだった、だが規格外の機動力を実現する形態の「上」にさらに纏っているこの装甲こそが俺の真の切り札。

「……っんだその装甲は！」

「金庫の扉さ」

ミサイルすら跳ね除けるセキュリティシールド、アメリア・サリヴァンが重量級キャラを使うと知った時点でこのバトルスタイルはおぼろげながら見えていた。

カースドプリズンの装備能力には容量がある。重量制限の緩和などいろいろ頭を使う点が多いキャラではあるが今はそこは関係ない、本来であれば武器三つくらいは積める余裕がある筈の残り容量を二枠分潰し、更に本来の機動力の四割近くを削ってまで装備した超質量の金属塊……質量とはパワーだ、熱量とはエネルギーだ！！

「この一撃は物理学の叡智ィーッ！！」

「ぐっ……おぉ！！」

シルヴィア・ゴールドバーグと戦った時のバイク装備ラリアットを思い出す、だが今回はアレよりも数段重く速い。

アスファルトに焦げ跡を残しながら突っ込んだ俺の身体がアメリア・サリヴァンへと肉薄、伸ばした腕が奴の首へと水平に叩き込まれ……そうそう、確か動画じゃこんな感じだったな？

己の加速と遠心力を併せた必殺ラリアット、相手の首に腕を叩きつけロックし……そのまま敵ごと一回転して壁に叩きつける、その技の名前は……

「モータル・ラリアットォ！！」

投げ技でも食らったが如くビルのガラスを突き破って中へと吹き飛ばされていった１Ｐカラーを余所に決めポーズ。どうせ別ゲーの真似をするならポーズまで決めなくちゃな。

「お前を地獄に連れて行ってやるぜェ……」

「……Ｄｅａｔｈ　Ｍａｔｃｈ４のモータルテディかよ、作品が違ぇぜ顔隠し（ノーフェイス）」

「同じツラが殴り合ってんだぜ、今更壁の向こうからネタを持ってきたくらいでシケた文句言ってんじゃねーよ」

それに、ネタはまだまだ用意してるんだからさ。

「喰らってくたばれ！　存分になぁ！！」

この形態には一つ弱点が存在する。姿勢的には延々と膝カックンしているようなポーズで固定されているがために踏ん張りが利かない。その点は膝から伸びたサブレッグ、鳥型機械群のジェット付きウィングをそのまま脚にくっつけたとんでもパーツで解決できるが……それ故に根本的な問題としてこの特殊形態はバック、後退ができない。

だからこそ後がないこの状況で俺は更に踏み込む、人間ちょっと死にかけてるくらいが一番楽しいのさ！！

「調子乗ってんじゃねェ！」

「ノリノリなんだよなぁ！？」

クロスカウンター、どうやら向こうも死を恐れない覚悟は決まっているらしい。相手を削る直感と己を守る思考が合致して、双方から放たれた拳同士が激突する。

俺は踏ん張れない、だから進むしかない。拳と拳の拮抗を敢えてこちらから崩し、握った拳を掌に変えて奴の腕を掴む。原理が一緒なら同じ技と言っていいのかな？　見様見真似（なんちゃって）改め独自改変（アレンジ）！！

「変則「大時化（おおしけ）」！！」

見様見真似の「大時化」が自身の身体を車輪による高速機動で実現させた横軸回転による一本背負いであるなら、こちらはブースターが齎す縦軸回転による超高速ジャイアントスイング……！！

「波濤を越えて飛んでいけッ！！」

「やられっ放しは性じゃねェんだよオラァ！！」

飛行能力はない翼ではあるが、見掛け倒しかと聞かれればンなわけ無い。

ガション！　と奴が取り込んだもう一体のターゲットエネミー「総帥(コマンダー)」のパーツである機械翼が無理矢理に稼働する。

「どうせ長く保たせるつもりもねェ……消し飛べ！！」

その正体は大出力レーザーを放つ砲塔を翼の形にしたもの、翼一枚につき七門、一組故に合計十四門の極悪レーザーが変則「大時化(横回転投げ)」で吹っ飛ばされそうになった奴の巨体を砲撃の反動で無理矢理その場へと押し留める。
そして光条を無差別に放つ翼が蠢動し、俺一人を狙って収束せんとする……いやあれ全てに直撃したらヤバい、ならば取るべき選択肢はただ一つ、前進だ。

だが迫るレーザーの脅威はすぐ近くまで来ている。どうすればいい？　幕末参考イアイフィストだ、借りるぜ「銭鳴」氏！

「拍子撃ち！！」

「く………何っ！？」

殴りかかるかのように拳を叩き込む……フリをして寸止め、一瞬の間を置いて指パッチン！
ガヂィン！！　と指パッチンにしては物々し過ぎる音が鳴り響いたものの、音量は普通の指パッチンとは比べ物にならないビッグボリュームだ。

これすげー便利だなぁ、幕末だと三回目くらいから普通に対処するような連中ばかりだからアレだけど、強制的に「間（隙）」を生み出せるからイアイフィスト流とのシナジーが高い。

「一秒呆けるとか悠長過ぎねぇ？」

「ぐはっ！！」

イアイフィスト流は武器持ちにも対応してます、皆も始めようぜ！
なお入門条件は「便秘」ストーリーモード一面ボス、三倍速分裂釘バット使い（バグ）をノーダメ撃破してください。大丈夫！　三面まではヒットボックスを自分の背後に移動させるバグ技「幽体離脱」が有効だし、それを加味しても二面以降はもっと地獄だからな！！

肉薄、隙を生み出し機械翼の根元を掴んで捻りあげる。カスプリが纏う装備は破壊可能オブジェクト！　当たる前に壊せば何ら問題はねぇ！　そして回転ブーストさせたサブレッグを引っ掛けて喰らえ強引足払い！
見たかこの美しいコンボ、名付けてイアイフィスト幕末インストール……脳漿沸騰するまで加速してこうぜアメリア・サリヴァン！！
「ニューロン息切れしてんぞお眠の時間かぁ！？」

イアイフィストは組み技（グラップル）、関節技（サブミッション）、拳、蹴り、ジャーマン……ありとあらゆる技に繋がる最強の流派だァーーーッ！！

超合金機動居合拳（後書き）

・WΔ実装前の色々
GH：C製作会社「……という感じのルールで実装したい」
創世「何故それを私に聞く」
GH：C製作「ｈｅｙジーニアス、あんたから買ったシステムに対応できる脳みそはどこにも売ってないんだぜ！」
創世「いやそうではなく」

創世「なんでサーバー君に聞かないの？」
GH：C製作「？？？」
サーバー付属ＡＩ「おｋ、大体わかった。マップはこうして……各キャラに入力されたデータを参照してこういう追加要素とかどう？
　新しい敵の大体のデータ入れたからキャラデザよろ」
GH：C製作「？？？？？？」

大体こんな感じ、ビル一つ新規で建てただけあってすごいね！　創世さんの技術力がファンタジー領域に突入してるけどモチーフ（モデルの元ネタ）的にそこまで違和感はないのでこのまま超テクノロジー貫いてもらいます

アイム・ア・カースドプリズン（前書き）

魂の単発で光ミリンを引き当て、かき集めた１０連でリミフェリを
当てる神引き
風姉上はサプればえええやろ！！

アイム・ア・カースドプリズン

「加速ぅ！　爆進！　猛追撃ィイ！！」

「クソがっ！　動きが迷わない……脊髄でモノ考えてんのかテメェはァ！！」

あたぼうよ！　イアイフィストを抜かせたからには、勝つも負けるも結果次第！　過程なんぞに迷う暇があったら殴る！！

「一般人がプロに食いつくにはこれくらいしねーとな！」

「どの口がほざきやがる！！」

アメリア・サリヴァンは俺やシルヴィアみたいなテンションを上げていくタイプではない、口調こそ粗野だがプレイスタイルは徹底的なまでに冷静だ。流石に心まで読まれてるとはいかないだろうが、この短い時間でこちらの傾向をおおよそ読まれている節すらある。

さらに言えば格ゲーマーとしての経験値が違いすぎる。格ゲーとは要するにぶん殴りあいの喧嘩だ、フルダイブＶＲで強い奴が必ずしもリアルでも強いとは限らないが、リアルで武術の心得がある奴にはやはりある程度のアドバンテージがある。

では格ゲーの心得がある奴は？　んなもんどの格ゲーでも強いに決まっている。

重量級には重量級特有の戦い方があるし、全米二位にして重量級キャラでシルヴィア・ゴールドバーグと渡り合う奴が対重量級に関し

て不得手である事を望むのはカナヅチの魚を探すより難しいだろう。

「ビーナスファイトを知ってるか？」

「知るかァ！」

「なら初見だ！　降雷轟槌エル・トール！！」

まぁジャパニーズ・美少女格闘ゲームまで網羅されてたらビビる。

唯一の武装である機鎚を迷いなく投擲、遠心力と運動エネルギーを存分に乗せた一撃は奴に残った片翼のレーザーによって迎撃され、上方へと弾き飛ばされ……良い位置だ、再現協力感謝ってな！！

「脳みそをスパークさせてやるよ！」

「マトモに喰らうかっ！！」

吹き飛ばされ落ちてきた機鎚を前進しながらキャッチ、元ネタではジャンプしてキャッチからの振り下ろしだったが……生憎今の俺はジャンプできないのでな、助走をつけての振り下ろしにさせてもらうぜ。

「せぇい！！」

「ぐぅお！！」

下半身をメインに強化されている上にホバー状態であるマイ・カースドプリズンはハー・カースドプリズンよりも僅かに視点が高い。ハンマーの末端を握りしめ、全力で振り下ろした一撃は加速も相まって必殺たり得る威力を内包していた。だが「大佐」を取り込んだ

奴の右腕が鎚の軌道上に塞がり、ダメージ覚悟の防御によって機鎚を受け止め切る。

「まだ死んでねェぞ！」

「なら今死ね！」

クロスカウンター！　だが再び拳同士の激突！！　奴の体力は再びミリ単位にまで追い詰めた、引導を送料無料でプレゼント！！

「抜き打ちだ！！」

「削れろォ！！」

クロスカウンターで用いた右腕ではなく、構え納めていた左手による抜拳。対する相手は全身をひねって翼のレーザーを当てる算段か。良いぜ、ダメージ交換と行こうか！！

身体をひねって翼をこちらに向けるという事は、翼そのものを俺へと近づけるという事。伸ばした右手が焼けるのも構わず、レーザーを放っている最中の機翼を掴む。
そして、引っ張り寄せながら1フレームでも速く届くようにとまっすぐ伸ばした貫手を叩き込む！！

「ぐはっ！！」

その一撃が奴の喉元に突き刺さった瞬間、翼より放たれる光条がピタリと止まる。
僅かな静寂、七割ほどにまで減った己のゲージを視界の端で確認しつつ掴んでいた機翼を手放せば、もう力が入らないのだろう巨体が

地に倒れ臥す。

「……いいさ、リアルはテメェなんだろうよ」

バキバキと奴が纏っている「機械群（メカニタン）」が剥がれ落ちていく。それはあたかも頭を失った「機械群」の終焉を暗示しているようで、しかして晒された屍は消える寸前であっても闘志の炎を燃やす。あたかもその炎で己を灰にするかのように。

「だが……勝つのは、」

1Pカラーのカースドプリズンの姿が僅かにぶれて、消えた。

「言葉足らずだな、引き継いでやるよ。勝つのは…………俺だ」

いつもの俺は謙虚で慎しみ深いのでこんな風にイキっちゃうのはカースドプリズンというキャラに同調してるからだろう。

だけどまぁ、プロゲーマーって半分タレントみたいなところもあるしこういうファンサービスも普通なんじゃないかな、うん。

「さて…………こっからが正念場か」

元より負けるつもりはない、大して何か仕込めるわけでもない……ならばせめてバトルステージを変えるくらいはしないとな。

「ラストバトルだ、盛大な舞台を用意するぜ敗残兵」

WΔらしく盛り上がっていこうぜ？

◇

現実世界（拡張済み）は大盛り上がりしていた。

「決まったぁぁ！　１Pカースドプリズン敗れる！　リアルカースドプリズンここにありってところでしょうか！」

「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ！　アメリアも顔隠し（ノーフェイス）も最高だったワ！」

「あー、スタッフさんここピー音とか入れられます？　無理？」

何故か傍観者のシルバーがエイトとハイタッチをしているのを眺めつつ、慧は今繰り広げられた光景に思考を馳せる。

「凄かったですね、顔隠し側は序盤から仕込んでいた伏線大爆発、ってところでしょうか」

「カメラ裏で何かしてるとは思ってたけど、ニューバージョンのスタイルの用意をしてたのね！」

「そうだね、さっきこっそり調べたらマジで発見されて一日も経ってない特殊形態でした。運がいいというか何というか……」

ＮＰＣ勢力が三つのうちのどれになるかが決定されるのはキャラク

ター選択を終えた後だ。つまりゲーム開始時点ではあくまでも三分の一の可能性の一つでしかなかった。

「ディスプレイを早期に潰したのはカメラで隠し場所を悟られるのを阻止するためだったんでしょう、実際長期戦になるほどディスプレイは情報アドバンテージを獲得しますから……」

「ディスプレイが残ってる状態で素材を集めていたら、最悪般若さん側のカースドプリズンに取り込まれる危険性もありますからね」

「「大佐(Kernel)」と「総帥(Commander)」を取り込んだスタイルがミドル、ロングレンジだったのもあるわね。ああも速攻で近づかれるならアドバンテージなんて無いもの」

とはいえ、リアルタイムでこの番組を視聴する視聴者達の言葉が流れるコメント欄を騒がせるのはそこではないのだが。

「コメ欄もすごい盛り上がりですねー」

「私はあまり詳しくないのでいまいちピンと来なかったんですけど、顔隠しさんが叫んでいた技名ってのは……」

「モータル・ラリアットはデスマ４……Ｄｅａｔｈ Ｍａｔｃｈ４って作品に出てくるキャラの必殺技ですね。こうラリアットで相手を掴んでぐるっと回転して吹っ飛ばす……カメラワークが特殊なんですごく派手な技です。降雷轟槌(エル・トール)は……まぁちょっと形は違いますけど、ビーナスファイトっていう、まぁ色んな神話の神様を美少女にしたゲームのキャラの必殺技ですね確か」

「えーと……別にカースドプリズンの技ってわけでもないですから、

わざわざやる意味はあるんでしょうか？」

「んー……ぶっちゃけない、んですけど……今回に限っては二つメリットがあります。一つはアメリアを混乱させられること」

古今東西のバトルスタイルを瞬間的に再現する、それはつまり戦い方そのものが変則的になるということだ。

「ハンマーを使うにしても投げる、叩くで立ち回りが変わりますからね。あの体力じゃ対応する前に倒されるのはまぁ必然だったのでは？」

「もう一つは何なんですか？」

「成功したらテンションが上がる」

「ええ……？」

「いや大真面目ですよ、コイツ……んン゛っ！　シルヴィア・ゴールドバーグとか顔隠しみたいな手合いはテンションが高まるほどパフォーマンスも上がりますから」

「イェーイ、Ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ見てるー？」

「こらこらシルバー、シルヴィア・ゴールドバーグの名前に反応して手を振らない」

これで戦況はほとんどイーブンにまで並んだ。カースドプリズンは体力を三割ほど失っているものの、四脚機動という強みを確保している。対する般若(アメリア)は三番手にしてＧＨ：Ｂ……ギャラクシア・ヒー

ローズ：バースト時代からの持ちキャラであるゼノセルグスを万全の状態でここまで持ち込んできた。

「お二人はどちらが勝つと思われますか？」

「さぁ？」

「さぁ、って……」

「教えてあげるエイト、エキサイティングなバトルの結果は神にだって決められないの。それを決めるのは戦ってる二人だけ、それを知ってるのは未来だけなのよ」

三角の街で繰り広げられる闘いは、いよいよ最終局面へと突き進む。相対するは呪われし鎧と、異質なる漂着者。そして……敗残の戦乙女（ヴァルキュリー）。

アイム・ア・カースドプリズン（後書き）

カスプリミラーマッチ観戦から見るシルバー仮面七変化
・英語ではしゃぐ
・エイトと謎ハイタッチ
・慧の肩をバシバシ叩く
・「分かりみが深い……」と無言で頷く
・「見た？　見た！？」とカメラに向かってゼスチャー
・ガッツポーズ
・思いっきり般若の本名を叫ぶ

こういう事するからファンが増える、ちな全世界規模で視聴者が十万突破しました。もはやワールドワイドアイドル笹倉エイト……！！

ルスモル「んんん？？」
鉛筆（視聴＆爆笑中）
斎賀姉妹（番組を見てない、そういうとこやぞ）
秋津茜（マスクを被っただけで正体がわからなくなる系純真ガールなので気づかない）
京極（あいつ（くいっ）に頭を射ち抜かれたところ）

クライマックス・バーニング（前書き）

十二日くらいまで更新は無理かな……（遠い目）（身を削る勇気）
（睡魔には勝てなかったよ）

クライマックス・バーニング

ハンマーは捨てた、この戦いについて来れそうにないからな。

「海老は良いぞ……」

一体何を元として変形（トランスフォーム）したのかさっぱりわからないが、蝦蛄（シャコ）の機械群を見つけたのは幸運だった。

「そっちだとロブスターとかの方がメジャーなのか？」

「知るか、私は殻の着いた虫もどきは好きじゃねぇ」

「甲殻類なめんじゃねーぞ」

ずごん！！　とアスファルトを容易く踏み抜いた巨大な肉塊が唸り声のエフェクトを混じらせながら俺の問いに答える。

ゼノセルグス、ＧＨ：Ｃ全キャラクターの中でも最重量級と言ってもいいスーパーヘビーファイター……回避コマンドを設定段階でゴミ箱に叩き込んでいる肉達磨だ。

遅く、重く……そして尋常ではなくタフい。

通常のキューブありのルールでは低ティアーに甘んじているものの、勝利条件を「相手をノックアウトする」に限定した場合においてはその凶悪性は上位ティアーにまで繰り上がると聞く。

「最終ラウンドだ、言い残すことがあるなら聞くぜ？」

「なら一つだけ聞いておく……テメェ、それだけの実力があってなんで在野に隠れてやがった？」

なんで？　なんで、って……。

「趣味に人生捧げられるほど好き勝手できる年齢じゃねー……そんだけ」

「そうか」

機巧の残骸を纏ってホバーで浮遊する呪鎧と、鈍重な巨躯を支え暴れるだけの筋肉を搭載した四肢を持つ怪物がゆっくりと距離を詰める。

ちりっ、とカースドプリズンのサブレッグに備えられたブースターが火花を散らす。

ぐぐ、とゼノセルグスの全身の筋肉が膨れ上がるように力が充填されていく。

どこかで爆発音。

「「死ねオラァ！！！」」

スタートは全く同時、互いに拳を用いた一撃。状況と行動は互角同等のイーブン、だが舐めてもらっちゃ困るぜ。

数多のにわか釣り人の指をへし折ってきたシャコパンチをなぁ！！
手首と肩、肘の三点を繋ぐ拳銃の撃鉄(ハンマー)にも似たジャッキ……言うなればハンマージャッキがギチギチと軋み唸る。爆発する寸前の爆弾が如き力みの蓄積を続ける「腕」は「目」と「頭」からの情報を今か今かと待ちわび……

「射程圏内だ」

超速ジャブ(シャコパンチ)、その鼻っ面を叩き折ってやるよ肉達磨ァ！！
ハンマージャッキを固定していたロックが外れ、凄まじいエネルギーの蓄積が一気に解放される。
バギン！！　と鋭い金属の音が響くと同時、先端の手が霞む程の速度で伸ばされた拳がゼノセルグスの鼻っ柱へと叩き込まれる。

「ぶぐぉっ……！！」

「今度はちゃんと弾丸のようなワンツーだぜ？」

「……効くかよンなもんがよォ！！」

「ぼぐぁっ！？」

左のこめかみに衝撃、視界に火花が散る。そりゃそうだ、互いに巨漢の重量級……タッパはゼノセルグスの方がデカイものの誤差の範囲、であれば射程距離は同一という事……

となれば、戦いは乱打戦となる！！

「ふんっ！！」

ハンマージャッキを再固定、こちらへと襲い来る拳をアッパーでカチ上げつつ顔面に一発入れる。しかし再度ジャッキを固定する前に奴からの攻撃が飛んでくる。上等だコラ顔面ガード！！

「ぐぶっ！」

ジャッキ再セット！　シャコパンチ……ファイア！！

そこからはもう作戦もへったくれもない、俺が奴の顎を打撃すれば次の瞬間には横からの衝撃に視界が明滅する。ジャッキの再固定が完了するまでの間に肩と頬に熱烈なパンチを貰ったのなら、プレゼントのお礼とばかりに奴の喉元に鋭く拳を刺す。

「おおおおおおお！！」

「おおおおおおお！！」

拳を通して相手とわかり合う、などという青臭い展開など存在しない。そこにあるのは闘志を根本とする敵意と、一秒毎に更新され続ける状況……そして、手を伸ばしても未だ届かぬ勝利の光だけだ。

互いに退けず退かずの殴り合い、拳の威力はこちらが上だが踏み込み……いや踏ん張りという点で向こうが先を行っている。そしてなにより……

「こんの、荒れ肌野郎が……！」

「はっはァ！　威勢が萎んでるぜパンプキン！！」

ゼノセルグスの特殊能力「変貌細胞（メタモルセル）」だ。奴は自身の肉体を五秒間

視線で捕捉したオブジェクトと同質のものに変えることが出来る。ここに現れた時点で何かに変わっていたのかもしれないが、少なくとも今の奴は俺の纏う「機械群」をコピーしやがった！
割とノリで殴り合いなんぞしてしまったが、体力比は……

「5：7……ぐっ」

「避けたな」

あ、しまったつい――
後悔はいつだって未来で待ち構えている、むんずと首を掴まれた俺の身体がフワリと浮き上がりあまりにも雑なクラッチで腰を掴まれる……ブースターを蒸すよりも早く、ゼノセルグスのゲージ技「マテリアルスープレックス」が、逆さ、落ち……

「ごばぁっ！！？」

クリーンヒット、明らかにカスダメでは済まない痺れと虚脱感が全身を駆け巡って視界の端に見える己の命が一気に削れたのが見えた。

「これで終わりかァ！？」

「ンなわけ…………スペシャルゲストだ」

「あ゛？」

サブレッグは今のジャーマンスープレックスでへし折れてしまった、機動力は激減したが元より最後まで戦い抜けるとは思っちゃいない。間に合った事が大事なんだ。
全く……遅いぜレディィ、俺ばっかり身体張らせやがって。それ、仇

打ちの時間だ！！
次の瞬間、黒煙と炎が街全体に拡がりつつある中で……焔色の風が吹いた。
「ごっ……！？」
「ご存知だろうが紹介しよう、最後の一人（ラストスタンド）……「戦乙女（ヴァルキュリー）」殿だ」
「大佐」の時の礼だ、楽しい三つ巴を始めようぜ？
ターゲットエネミー「大佐（カーネル）」は戦死、「総帥（コマンダー）」も討ち取られた。上官を失い、指揮官をも損なった今の彼女は己の全てを限界を超えて稼働させ、自壊しながら暴れ狂う文字通りの自暴自棄って奴だ。
全ステータスが上昇し、武装の制限が解除された事で今や突撃槍は振るだけで軽度の怯みを付与する衝撃波を撒き散らす。
「死に損ないのガラクタがァ……！」
「いい台詞だ、ヴィラニックゲージもうなぎ登りだな？」
「戦乙女」は言葉を発しない、だが女性を模した顔に走った亀裂から漏れ出す炎は無念の涙のようにも見える。
「機動力を捨ててまで殴りに来たのはこれが狙いかッ！」
「半分はノリだよノリ、だがクライマックスに役者をハブるのは良くねぇよなぁ？」
「戦乙女」は原則両プレイヤーを襲うが……ターゲットエネミーを撃破した数に応じてヘイトが加算される。つまり……一対一対一、

されど狙いはお前一人に絞られるって事だ。

「行くぞコラァ！！」

「上等だッッ！！」

幸い、ハンマージャッキは無事だ。地に足ついて殴る分には何の問題もねぇ！！

踏み出した一歩がアスファルトに亀裂を入れる、合わせた訳ではないだろうが「戦乙女」もまたミサイルを発射した事でゼノセルグスは二つの脅威によって挟み撃ちされた形となる。

まずは体力比をイーブンのところまで削らせてもらう！！

クライマックス・バーニング（後書き）

・ラストスタンド

ＮＰＣ勢力のターゲットエネミーの中には「最後の一体」になる事で性能が上昇するＭｏｂが存在する

どれくらい強いかというと、結構な確率でＮＰＣに勝利をかっさらわれる事があるくらい。格ゲーとしてどうなのか、だって？　大丈夫？　これシャンフロシステムだよ？

スカイ・ハイ・テンション（前書き）

金剛二つに火無垢拳……後戻りはもうできない、どうも皆さん３凸

アグニスレスラー硬梨菜です

スカイ・ハイ・テンション

◇

「す、凄まじい殴り合いです！　互いに一歩も退かず、ひたすらに攻撃のみを行っている！！」

「重量級としては正しい戦法かもしれないけど、カースドプリズン側が機動力を殺してまで殴り合いに出たのは……」

「テンションでしょ、私もそうするわよ」

「だよねぇ……あっ、日和った」

画面の中でカースドプリズンが天地反転に地面へと叩きつけられ、そして乱入者がゼノセルグスを吹き飛ばす。

「成る程、「大佐」でやられた手をやり返したと」

「キルスコアのせいでゼノセルグスは「戦乙女（ヴァルキュリー）」に狙われやすい。それに加えて相手がカースドプリズンである以上、下手に破壊すれば相手が強化されるわね……」

「ターゲットエネミーを撃破することによるボーナスはどうなんでしょう？」

「三体目のターゲットエネミーを撃破する事で得られる特典はヒロイック、ヴィラニックゲージの蓄積率上昇……無用とは言いません

が相手を強化してでも欲しい効果って訳でもないところが痛いですね」

最初から最後まで手の内、という訳ではないだろう。サンラクにとって状況の白熱は勝率のいくばくかを削ってでも得る価値のあるものだ。だがそれでも三つ巴という複雑なルールはここに至って結末へと収束を始めた。

「体力的にはカースドプリズンが不利、でも相手のゲージ技が直撃した事で超必殺（ウルト）ゲージでカスプリが有利を取りました」

そしてそう遠くないうちにゼノセルグスも超必殺を使用可能になる。であれば最後の不確定要素が鍵となる。

「鍵を握るのは超必殺、そしてウルトクリスタルです」

「そうか、次でクリスタルが出現する……」

「ウルトクリスタルはランダムポップではありますがプレイヤー二者からそう離れた位置には出ません、つまり本気で探せば割とあっさり見つかります」

「超必殺（ウルト）を先に切らせるアドバンテージ、超必殺（ウルト）でゲージを先にゼロにするアドバンテージ……でも脱獄の性質（Prison Breakタイプ）もある」

プリズンブレイカーの形態を超必殺とするのであるなら、その持続時間は三十秒。先に発動したとしても後出しのゼノセルグスが超必殺のプロセスを終わらせるには充分な時間だ。

「ここの駆け引きが勝負の決め手になるでしょう、まさしくクライ

マックスです」
画面の先、白熱の極点に至らんとする戦闘はそのステージを変えていた。

◆◆◆

「屋内戦か……」
暴れれば当然周囲の環境は破壊される。瓦礫や土煙、場合により柱や天井そのもの……敵味方を問わず行動を阻害するだろう。そして大惨事上等で暴れ回る「戦乙女」がいる以上、崩壊は必然。環境そのものが俺やアメリア・サリヴァンに隙を作らんとするわけだ。つまり出血のなすり付け合い、当然先に血（HP）が尽きた方が負ける。つまり体力の多さが直接的なアドバンテージになる。
「残り体力三割……」
なんてこった！　三割も残ってるじゃないかあと１０ラウンドは戦えるぜ！！
「隠れんぼってガラじゃねーだろ出て来い！！」
「ブッ潰れろ！！」
チっ、干からびたミートボール野郎め。二階から奇襲とはな、ガビ

ガビに硬いくせにイキっててんじゃねぇ！　ジャッキ解放シャコアッパー！！

「ご、ぐ、ぬおらぁ！！！」

二階から勢いをつけて落ちてきたゼノセルグスの巨大質量を左腕一本で受け止める。重量に耐えきれず左腕のハンマージャッキがへし折れる、だがそれでも最後のアッパーは役割を果たした。

「ぐ、ぶぉ……！？」

「悪いな、さっきまでのパンチは腰が入ってなかった……これがフルスイングだ」

バックステップ、同時に右半身を後ろに回して左手を正面に。さながら弓を引き絞るかのように右拳を構え……貰うぞ前歯！！

「死ねオラァ！！！」

「ぐぅぅぅう！！！」

クソがっ！　ギリギリでガードしやがった！！　やっぱプロの格ゲーマーって格闘技とかやってるのかね、シルヴィア・ゴールドバーグのチームメンバーとかマッチョばっかだったし。

「効かねェな……」

「脂汗が浮いてるぜエイリアン」

「いいや、これは油さ……」

油……？　あっ、まさかこの野郎揚げ過ぎ（能力で体質を油）ドーナツ達磨に……！！

「蒸し焼きになれ！！」

バヂィン！　とゼノセルグスの強靭な指が鳴る。その先端、親指と中指の爪が擦れて火花が散り……それを種火に奴の吐き出す吐息が一瞬で炎へと変わった。

「うおおおお！！」

咄嗟に飛び込んだ先は上へと続く階段、いいね都合がいい……ステージセレクト、二階にゴー！！

おっと、二階は「戦乙女」ちゃんが散歩中だ。邪魔しちゃ悪い……あぁ、ヘイトの比率が違うだけでこっちにも向きますよね、ええ。

「うぶおっ！」

慌てて階段を登れば、背後で爆発音。少なくとも階段ルートから下へ行く道は絶たれたと考えていいだろう。

上へ、上へ、上へ……

「いやキツイ！！」

エレベーター使お。今八階か、下から昇ってきたエレベーターが……よし着いた。

「…………」

「………ハロ」

「グッバイフォーエバー！！」

シャコパンチ！　ただのパンチ！　ただのパンチ！　再セット、シャコパンチ！！

「一丁前に文明の利器使ってんなやモンスター！　地獄（下に参りまぁーす）に落ちろ！！」

「待っ……てめっゴラァァ！！」

怒涛のラッシュで怯ませ、エレベーターの下行きボタンを押して発送。クソ、ヴィランがエレベーターで昇ってくるなよ全く……

バゴン！　ギ、ギギギギ……

おっと、俺の予想が正しければあの野郎エレベーターの天井ぶち抜いて登ってきてるな？

「くっ……」

まだダメだ、高さが足りない。この規模のビルなら屋上まで行かねーとダメだ、うおお頑張れ俺の健脚ゥ！！

……

………

…………

機械群の襲撃、ヒーローヴィランのガチバトル。ビルから見下ろしたケイオスシティは炎と、黒煙と、瓦礫によってグシャグシャだ。

「インパクトコンバートなら修正済みだぞ」

「あれそのまんま名称になったの嬉し恥ずかしって感じなんだけど」

その場のノリで考えたネーミングだったからなぁ……まぁいい、ここに来たのはそれが理由じゃない。

「ラストバトルは空の下の方が映えるだろ？」

災害の煙で真っさらな晴天とは行かないが……吹き抜ける風は塵を運び、観客達から見ればさぞや映える光景だろう。

「今この瞬間、俺たちは主要人物(メインキャラ)なんだぜ？　端役(モブ)じゃねぇんだ。脚本も兼任出来るってんなら盛り上げなきゃ損だろうが」

「……そういうところまで似てるのかよリアルカースドプリズン」

屋上の一角が熱でぐにゃりと曲がる。マグマの如くコンクリを溶解させて下の階から「戦乙女」が現れる。文字通り燃えてるねぇ、やる気十分ってか？

役者は揃った、舞台も上々……あとは「座標」だけだ。

「天を見ろ、太陽にすら負ける根性無しばかりじゃねーか。だが俺は違う！　俺こそが凶星、太陽すら霞ませる一等星だ！！」

「格好付けてェんならそのまま華々しく散らせてやるよ！！」

テンションは最高潮、今いる場所は最上階、あとは真っ逆さまに落ちるだけ――

……

スカイ・ハイ・テンション（後書き）

シルバー仮面「Ｆｏｏｏｏ！！」
ミーティアス作者「Ｆｏｏｏｏ！！」

感想欄でも聞かれたけど当然カースドプリズンにもゲージ技があります
ただしサンラク的にちょっと使いづらいので実質縛りプレイしているという……ちなみに攻撃技じゃないよ

ハイ・ジャック・スター（前書き）

お、俺はどうすればいい……？

な、何をすればいいんだ？　グ、グラブルをすればいい……や、何からすれば……

分からない、お、俺は一体どうすれば……！！

と、とりあえずグラブルを……

（以下無限ループ）

はじ

ぶる

※高濃度ハジブル粒子を摂取したことで脳内時系列が狂っていたらしく超必殺四回目時点でクリスタルが出現する不具合を発見いたしましたので修正しました。なお詫び投稿はありません、寝させて

ハイ・ジャック・スター

ブースターを欠いた足はあまりに遅く、武装は右腕のハンマージャッキのみ。体力に至っては未だ二倍近い差がある。だがあえて言わせてもらおう、だからどうしたと！

「一部抜粋(いいとこ取り)だ」

「動きが、変わった……！？」

この局面で富嶽スタイルを切る、ステップや摺り足を利用した寸前回避でゼノセルグスの攻撃を回避しつつ、的確に右腕による攻撃を当てていく。

だが忌々しいが流石は全米二位、二発ほど入れたところでこちらの動きに合わせてきやがった。

「邪魔くせェ！！」

「全くだ！！」

俺とアメリア・サリヴァンの戦いに割り込むように突撃をかましてくるは「戦乙女(ヴァルキュリー)」、今の奴は行動の一つ一つにノックバック属性が付与されていると考えていいだろう。下手に構えば隙を晒すことになるが、さりとて無視もできない……

だが向こうとてこの俺(カスプリ)の前で機械群のターゲットエネミーを破壊する事が如何に愚かであるかは承知しているだろう。そして俺も俺で「脱獄」の関係で今破壊するのはあまり望ましくない。破り捨てる

前提でブランド服は買いたくねーわ……少なくともシャンフロ以外では。
だからこそ「戦乙女」は命を拾っている、互いにメリットデメリットが絡んでいなければとっくに仕留めている。
「どうしたァ！　その鎧を着込んだままくたばるつもりか！！　あァ゛！？」
「だったら大人しく隙を晒せやボケがぁ！！」
「誰が晒すか！　このまま削り倒してやるよ！！」
そうか……なら隙を作らせてもらおう。
「隠し弾は猫にも見せるな……ってな」
「何？」
今までボクシングスタイルな構えとは全く異なる姿勢の俺にゼノセルグスの貌が二割増で迫力を増す。あれもしかして眉間にしわを寄せてるだけなのか？　人類がどれだけの憎悪を抱いたとしても浮かべられないような凶相なんだけど。
「覚悟はいいか？」
「ほざけ！」
左手を掌（パー）の形に前へと翳し、ビリヤードの如く右腕を引き絞る。ナックルアロー？　いいや違うね、俺の拳は近代化する……！！

「右手は撃鉄、左手は弾倉………ダストのへそくりだ」

「指に………ンなっ！！？」

距離を詰めた事で気づいたか、だがもう遅い！！！
中指と薬指の間に挟み込んだ小さな金属塊。それは弾丸………素材を集め、金庫を閉じる直前に一発だけ銃から取り出しておいたダストの銃弾だ！！

「接近感謝（サンキュー）！」

γ（ガンマ）鯖秘伝！　最終手段ならぬ最終手弾！！　左手を弾倉兼バレルに！　右手を撃鉄（アトバード）に！　雷管を直接ぶっ叩いて弾丸を叩き込む……γ鯖の発砲狂に倣って俺も唱えよう！

「シー・ヴィス・ベラム（戦いを望むのならば）！　パラ・ベラム（戦いに備えよ）！！」

必殺「銃拳（ガンハンド）」！！
本来はナイフで雷管を叩き、弾倉役の手がブロッコリーみたいな状態になる技だが……カースドプリズンは金属の手を持っている、そしてこのゲームに部位欠損システムは無い！！！

ガヂン、とハンマージャッキによって加速した右拳、その右中指第二関節が外す事なく隠し弾（シークレットブレット）の雷管に突き刺さる。何十回左手を赤いブロッコリーにしてきたと思ってるんだ、目を瞑ってたってブラッディ・ブロッコリーを作れるわ。

「Ｂａｎｇ！！」

「クソがっ……何！？」

本来は超至近距離、それこそ左手を相手の左胸(心臓)にくっつけて使う別名「セクハラテロ」とまで言われるくらい命中率がゴミの技なのだが、ハンマージャッキという加速装置が弾丸そのものを雷管ごと押し出す事でゴミ射程とはいえ中距離程度には飛ばせるようになっている。

そして……ああ、そりゃ驚くだろうさ。ここまで切り札感を出しておいて外れたんだからなぁ？

だが孤島で磨いたスキルが鈍ったわけじゃない、視線をズラして撃つくらいなら今でもできる。

「忘れたのかよ？」

カースドプリズンにとって機械群を纏う能力も、弾丸を飛ばす手品も！　カースドプリズンという存在そのものが！！　その全てが妥協と余分でしかない！！

であるならば、さぁ………切り札はいつだってピン刺し一枚！　これしかねぇだろうがよ！！！

攻撃を中断してまで行ったガードが空振りした僅かな硬直、後ろからカースドプリズンとゼノセルグスを諸共に串刺しにせんと突進を仕掛けていた「戦乙女」の頬で善の弾丸が弾ける怯み。

ほんの一瞬、この場にいる三者の中でただ一人俺だけの時間が生まれる。遠く、突風が吹き荒れる谷……今にも千切れそうなか細い糸がそれでも確かに対岸へと繋がった。

「脱獄(プリズンブレイク)！！」

「く、超細(セルバース)ぼ……」

――――勝った。

だが、乱数の女神というやつはつくづく邪悪で、陰湿で、そして外道であった。

「――――は？」

「――――あ？」

全身の装甲が砕かれ弾け飛んだカースドプリズン改めプリズンブレイカーと、咄嗟の対応で動きが鈍いゼノセルグス。二者は今、戦闘の余波でバキバキにひび割れたヘリポートの上で戦っているわけだ。

だが、今。

丁度二者の中間……その座標、その虚空に蛍のような小さな光が灯り……それは一瞬で体積を膨らませると、眩く輝くクリスタルとして顕現した。

「ウルト、」

「クリスタル……っ！！」

「しまっ……クソが！！！」

やらかした！　俺が生み出した空白の時間へさらに上書きされた思考の隙間、先取したのはアメリア・サリヴァンだった。
全身から緑色のオーラを放つゼノセルグスが一歩先んじて動き出す
……あれは活性化し過ぎて細胞の隙間から蒸発した血液が噴き出しているのだ。

「っ！」

「っ！」

もはや互いに煽る言葉すらない。まさかの眼前出現という特大のアクシデントへの対処と、互いにステータス干渉タイプの超必殺を切った現状、それら全てへの対処を殴り合いながらに開始したのだ。

「ぐ、」

「どうしたどうしたァ！！」

ゼノセルグスの超必殺「超細胞（セルバースト）」は極めてシンプルな効果だ。効果はたった一つ、「二十秒間全てのパラメータが変動しない無敵状態（スーパーアーマー）になる」……ただそれだけ。何、ショボすぎ？　バカ言え、体力が減らないじゃないんだぞ？
パラメータが変動しない、だ。

つまり今の奴は二十秒間ゲージ技を無尽蔵に撃てる上にダメージ無効、怯み無効のまさしく無敵状態。射程圏に囚われたならば、一度でも掴まれたならば無限スープレックスで屠られる！

「おおおおおおお！！！」

確実にこちらの息の根を止めんと伸ばされる掴み攻撃を避ける、ステップを高速で刻んでウルトクリスタルを確保せんとするもそんなものはお見通しとばかりに的確に俺の動きを封じる位置取りでゼノセルグスが距離を詰める。

「クソッ！」

「くっ……コッの、野郎！」

咄嗟にウルトクリスタルを蹴り飛ばしてビルの屋上から地上へと落とす。ゼノセルグスの超必殺は二十秒、対してプリズンブレイカーの超必殺は三十秒。

総合的なスペックでは勝るが無敵モードを破るのは不可能、後出しとはいえ確実に奴の方が先に超必殺が解除される。

どうする!？　十秒あればイケる、だが、いやしかし、あああああクソぉぉぉぉぉ！！！！

ああ、でも、そうだったな。

――乱数の女神は、無様に足掻く虫を見て何度だって笑うのだ。

ハイ・ジャック・スター（後書き）

グラブルをしなければならない欲が強すぎて執筆してる場合じゃねぇ！　という感情と

オーバーフローした感情を執筆にぶつければテンション上がるぅう！！　という感情がぶつかっててやばい

ねぇガチ◯ピン……金剛石どこ……？　どこ……？

アステール・スカイ（前書き）

厨二病は理性じゃなく本能なので英語からギリシャ語にしちゃっても恥ずかしくない（）

アステール・スカイ

徐々にゼノセルグスへと傾きつつあった天秤に待ったをかけたのは、部外者故に軽く追い払われるだけに留まっていた「戦乙女」であった。

「銃拳（ガンハンド）」による一撃を受け怯んでいたそれは弾丸を食らった左頬の亀裂を内側からさらに広げていく。

自壊する機巧の乙女は、一定時間が経過するとある特殊行動が追加される。

ギ、ギギギ、ガヂヂヂヂッ！！

「！！！」

追い詰められた俺が見た先……ひとりでに、かつ不自然に捻じ曲がり内側から膨張し始めた「戦乙女」の右腕を見た俺の脳裏に電光の如く情報と、思考と、結論が駆け巡る。

「う、おぉおおおお！！」

いつの間に条件を満たしたのか、再び硬質な身体へと変化したゼノセルグスが繰り出す掴みから抜けつつ俺は全速のダッシュで「戦乙女」へと肉薄。

「熱烈なハグを受け取りなぁ！！」

奴の左手が握る突撃槍を蹴り飛ばし、総重量を軽くした「戦乙女」

をゼノセルグス目掛けて蹴り飛ばす！！

「な……っく、馬鹿が！　目くらましにもなりゃしねェだろうが！！」

「行動と肉体は別物だろうがよ……！！」

起爆。「戦乙女」の限定行動「部位暴発」、言うなれば段階的にパーツを失う代わりに高火力の爆発を起こす自滅技だ。

だが今のゼノセルグスは無敵モード、当然ダメージなど無いだろうし、むしろ俺の方が残り少ない体力をさらに減らしている有様だが……

「プリズンブレイカーの膂力検証を知ってるか？」

「ぐ、何ィ……！？」

見様見真似（なんちゃって）相撲式（ぶちかまし）タックル！　スーパーアーマーは強力だが無条件に全てを防ぐわけじゃない。そう、例えば……ゼノセルグスの巨体すらをも投げ飛ばすＳＴＲがあれば、如何に頑丈だろうとビルの外へと投げ飛ばせる！！

「落ち――」

残り十五秒！　よう猛禽類。

「この空が誰のものか知ってるか！？」

「何を…………今なんつった？」

へぇ、心当たりがあるのか。なら話は早い。
「すまんな再現限界だ。「昇天」抜きで「墜天」「荒天」の二重接続で行くぜ！！」
猛練習の成果、見せてやるぜ！！！

◇

ウルトクリスタルの争奪、「戦乙女」の暴発、そしてゼノセルグスの落下を発端とするプリズンブレイカーの「動き」……その正体に気づいたマスクド・シルバーは言葉すら忘れて思わず立ち上がる。
「……統天（Master Sky）」
ポツリと、その口からこぼれた単語に慧の眉が驚愕と困惑の混じった形に吊り上がる。
「……マジで？」
「昇天（Sky High）抜き、墜天（Sky Fall）と荒天（Sky Strike）の二つで繋げるならあっちだけど……」

「えと、ちょ、説明！　説明お願いします！！」

その言葉を発した数秒後、エイトはそれどころではない事に気づく。

画面の先、そこには空中で天地逆さに身を投げ出したプリズンブレイカーが虚空を蹴って真下へと加速する光景が映る。

一瞬で自由落下速度で落ちるゼノセルグスへと追い付いたプリズンブレイカーは膝を突き出したポーズのままゼノセルグスへと激突。

「ニードロップが入った！　このまま地面に……え、違う？」

「完全再現は無理……いや、だからビルの壁が必要なのか」

「空中ジャンプでビルの壁面に戻って、ゼノセルグスに並ぶよう駆け下りながら跳躍、攻撃して、戻って……あの、これって！」

「墜天（Sky Fall）、上から下へ落ちるまでにヒットさせる二十連続打撃……」

「それって一体……あ、コメ欄になにか……「マスタースカイ伝説？」」

Justice Versusというゲームがかつて存在した。

そのゲームはゼロからキャラメイクが出来るだけではなく特殊能力やゲージ技、果ては「必殺技」までもプレイヤーの手で創り出すことができるというものだった。

そのゲームが世に流通し、全盛期を迎えた頃……一人のプレイヤーが現れた。

そのプレイヤーの名は「Master Sky」、そして彼あるい

は彼女が作り出したキャラクターに由来するある種の「伝説」が存在する。

その名はプレイヤー「Ｍａｓｔｅｒ Ｓｋｙ」が考案作成した二つの技（テクニック）の名前と、とある必殺技の名前から全ての空を統べる一撃「統天（マスタースカイ）」と呼ばれる複合必殺技（マルチプル・トリック）である。

まず第一に掴み技を起点として自身諸共に敵を空高くへ吹き飛ばす「昇天（スカイハイ）」
落ちていく最中に実に七十八種類ものモーションをバグを絡めて連結した二十連撃空中殺法「墜天（スカイフォール）」
最後に上記二つのトリックで稼いだゲージを使って体力を削り切るデフォルト必殺技「荒天（スカイストライク）」

無制限ルール限定とはいえ、記録に残っている中ではＪＶで唯一の開幕十割を達成した「統天」は、実に三百五十二ものモーションによって構築されている。
その規格外の緻密さ、ジャスティス・バーサスの全てを組み上げエフェクトにまで妥協なく作り上げられた光景は「芸術」とまで讃えられた。

後に実用的な性能へとダウングレードされた「撃天（バスタースカイ）」や逆に見た目性能全振りにした「威天（マジェスタースカイ）」、意図的に昇天を省いて空中からの発生に重きを置いた「嵐天（テンペスター・スカイ）」などの派生形が多く生まれることとなるこの技は、しかしあまりに複雑すぎる動きからジャスティス・バーサス以外での再現は不可能とされていた……

少なくとも今日この日までは。

ＧＨ：Ｃ全キャラの中でもトップクラスの機動力を誇るミーティア

スの完全上位互換たるプリズンブレイカーの採用。
ビルの壁面を足場として跳躍と着地を繰り返しながら敵と並走しつつ攻撃を加える擬似「堕天（スカイフォール）」。
後は飛び蹴りの必殺技「荒天（スカイストライク）」を当てれば再現は完了――
だが、地上まで残り十数メートル。
「違う、飛び蹴りじゃない！」
プリズンブレイカーが見せる動きは、さらに異なる変則を見せる。

◆
◆
◆

ノーダメ！　ノーダメ！　ノーダメ！
クソッタレの無敵モードめ！　お陰でストレスとテンションが臨界点を突破したぜ！！
「だがっ！！」
ここでさらなるアレンジ！　本来は荒天（飛び蹴り）で〆るところを……変える！
翳った知識だが、この一連の即死コンボを考案した人物であるマスタースカイはコンボ動画を投稿する以外では殆ど世間に声を出すことのない人物だったというが……少しだけ、ほんの呟きのようなコ

メントがいくつか残っている。
「統天」の情報をラーニングするがてら調べていた時に見つけたそのコメント……「統天は妥協案」というその言葉、バグを駆使しても尚搭載することができなかったという本来の「決め技」、十年を経て今ここで！　俺とプリズンブレイカーが実現する！！
「一秒（ワンセカン）！　一秒足りねェんだよそれは！！」
「だろうな！！」
その通り、荒天ではダメだ。クソほど練習したから分かる、最短の直線で蹴り込んでもゼノセルグスの「超細胞」の効果時間内に間に合ってしまう。
ならば！！
「真の決め技は……銀河の一撃！！」
その技の名前は「ユニバース・テイル」！　ＪＶでは地上投げ技から発生する必殺技であったが故に空中殺法である「墜天」から繋げられなかったそれを、ビルの壁と空中ジャンプで無理やり再現する！！
「とくと味わえ」
空中を落ちるゼノセルグスの足首を掴み、ビルの壁と虚空を踏んで受け手と掛け手で輪を描く。そしてその勢いのままにゼノセルグスを地面に投げ飛ばし、壁蹴り空蹴り最後の加速！！

やっぱりゲームは最高だ、物理法則（エンジン）に夢がある。

「統天改め（Master-Sky）！」

空中で前方宙返り、加速した落下エネルギーを踵一点に集中させて、何が何だか分からない視界の中で確かに見えたエフェクトの消えた肉達磨の姿。

「俺式再現……「星天（Aster-Sky）」　！！」

着弾した。

アステール・スカイ（後書き）

伏線って威張れる程のものじゃないけど雑ピを煽る前に見てたのが統天の動画

唐突な設定げろげろ

・物理エンジン
古典力学的な法則をシミュレーションするコンピュータのソフトウェアである物理エンジンは当然シャングリラ・フロンティアにも搭載されている。
そしてさらに当然だが創世さんが自作したものなのだが、意図的に出力される物理的現象に脚色が入っている。
例えば爆発を食らったＭｏｂがやたら派手に吹っ飛んだり、球技大会のボールにされた人間がやたら美しい軌道でラリーされたり、空中での姿勢制御が現実よりもやりやすかったり……これは「試作品」で検証した際に現実に忠実すぎると逆につまらない、と創世が判断したためである。
そして莫大な金を注ぎ込んで製作されたＧＨ：Ｃサーバーにも同様の物理エンジンが搭載されているため、サンラクはなんか気持ち悪い動きで壁をバウンドしながら相手の足を掴んで大車輪して投げつつ踵落とし、なんて最高に気持ち悪い動きを実現することができた……多分蠍達のボールにされた経験とかが活きてる。

凶星が引き寄せた決着（前書き）

あれ？　結局普通に更新してね？（寝不足）（引っ越し二日前）（積み上げられたゴミ）（お前がやらずに誰がやる）（求：サイコキネシスの技マシン）

凶星が引き寄せた決着

無敵モード中なのに殴る意味はあったのか？……答えはノー
態々面倒な踵落としを選んだメリットはあるのか？……答えは部分的にイエス
では、この一連の別ゲー再現は本当に必要だったのか？
たとえ敗北の未来を予知していたとしても、俺はこれを妥協するつもりはなかった……答えは、永劫にイエスだ。

◆◆◆

「っしゃあああああああ！！」
ご照覧あれカフェインの神よ！　今ここに俺は乱数の女神による試練に打ち克って「星天」を成功させましたぞ！！　愛してるぜエナジードリンク！　俺が死んだら遺灰はライオットブラッドの礎にしてくれぇーっ！！
「ハァーッハッハッハァー！　見たか！　どうだ！　値千金の大成功だぜ！！」
「──────あぁ、認めるよ。だがなァ……」
空中からの踵落としによって爆ぜるように粉砕されたアスファルト

は煙幕の如き土煙を生み出していた。
その土煙のカーテンを突き破り、俺の首を掴み上げる肉塊……ゼノセルグス。

「勝ちは、私が貰う」

その残り体力は……三割。
対してこちらの体力は贔屓目に見ても一割とちょっと、軽く顔面をドラミングされるだけでお陀仏するだろう。向こうの無敵時間的に多分最後の踵落としかダメージに貢献していない、むしろそれで三割まで削れた事を驚くべきか？

だが、

「悪い、な……」

ここまで脳味噌が加速しちまったら、ハイ負けました残念賞じゃ止まれねーんだわ。

「………」

くたり、と身体から力を抜いた俺にゼノセルグスの顔が凶悪さを増す。やることとやって満足した、とでも思っているのだろう。

「一回力抜かなきゃ……力み直せねーだろっ！！」

土煙に紛れて飛んできた黒い金属片に「拘束」された右腕でゼノセルグスの腕を掴んで笑う。
そして呪鎧が全身を拘束するよりも先に全身に込めた力のままに首を掴まれたまま奴の腕に関節技を仕掛ける。

「時間通り、クソッタレだぜ模範囚！！」

「ぐ、ぅううお……！？」

デフォルト状態に戻ったとはいえ重量級を片手で支えるのは困難、ぐらついて姿勢を崩したゼノセルグスの拘束から抜け出しながら姿勢制御、若干の危なげはあったものの土をペロることなく着地する。

「…………」

「…………」

互いに僅かに遠い間合いを挟んで静止。カースドプリズンは周囲に取り込めるものがなく、ゼノセルグスは悠長に五秒も視線を外せない。

互いに強みを活かせない状況、頼れるものは己の身体のみって事だ……！

「……ふっ！！」

「くっ」

野郎、さっきまでのチンピラムーブはどこへやら……いやに冷静だ。組み技希望の接近がやけに多い、レスリングか？　チッ、体力有利を取られてる所為でボクシングスタイルじゃダメージ交換覚悟で詰められて死ぬ。

「だが！！」

ここで安全策を取ったところでグダるだけだ、アドレナリンとカフェインを脳漿でカクテルしてるこのメンタリティなら前に進むべきだ。
インファイトこそが格ゲーの華！　持ち堪えてくれ現実の俺ボディ！　倍速でカフェインを燃やせ！！

「っしゃあああ！！」

「くっ、近ェんだよ！！」

限界まで身体を屈めて肉薄、ジャブ二発からのアッパーに繋げんとするも顔面を目掛けて近づいてくる膝をガードする為にアッパー用の右腕は封じられた。
攻撃ターンを強制的に止められた事でゼノセルグスへターンが回ってしまった。俺の身体を捕らえんとする二つの掌を同様に掌で迎撃し、ガッチリと組み合ってギリギリと力比べ……クソっ、若干負けてね？

「「っ！！」」

互いにケンカキック、無理な姿勢だったたので致命傷にはならなかったが遂に体力が一割を切りつつも再び二メートル程の間合いが開く。

「ジリ貧、か…………ん？」

アレは……！　いや待て落ち着け、気取られるな。
丁度ゼノセルグスの背後、土煙と瓦礫で見えづらいが……あの不可思議光彩は、間違いなくウルトクリスタルだ。

「……」

「どうした、カウンター狙いかパンプキン」

どうする？　ここで「脱獄」できれば確実に勝てる、勝てる……が……怪しい。

アメリア・サリヴァンは本当にアレに気づいていないのか？　ウルトクリスタルが蹴り落とされたのは奴も知っている情報だ、クリスタルに足が生えて勝手に動く訳じゃないんだから落ちた場所は大体予測が出来る。

実際その予測からそこまで離れていない瓦礫の中にあるわけだが……最悪のパターンは向こうもウルトクリスタルに気づいている上で罠として放置している場合だ。

ウルトクリスタルはプレイアブルキャラが直接叩くなり握り潰すなりで破壊しなければ効果を発揮しない。つまりどれだけ効率的に壊すにしても腕か足の一本を使わないといけないって事だ、ここに来てハードな二択だ……おおカフェインの神よ、迷えるエナドリユーザーに啓示を……

――汝、恐れを捨てよ。カフェインの導きに従うのだ（幻聴）（幻覚）（妄想）

「よぉぉぉっしゃぁぁぁあ！！」

勝ったらエナジードリンクで祝杯だぁ！！

煙の幕へ自ら飛び込み、微かな光へと一目散に駆けていく。だが、

「――気づいてるに決まってんだろ」

影が差す、それは鈍重な癖に跳躍力がやけに優れているゼノセルグスがバック宙返りでウルトクリスタルと俺との間へと最短で回り込んでいる証拠であり、地の利と先手を取られたということであり、まんまと俺が罠に引っかかったという事であり……

エナドリ缶を一気飲みしてヤバい目をしている女神様の顔が別のものに……お前、乱数の女神じゃね？

「きゃああああああああっ！！」

幼く、甲高い、涙混じりの悲鳴。

「な、にぃぃぃ！！？」

ゼノセルグスの身体が不自然に硬直する、その凶相に浮かぶは正真正銘の驚愕。

その時、一陣の風が吹き込んだ。風は土煙を容易く晴らし……土煙によって隠されていたその光景を露わにする。

瓦礫に突き刺さるように埋もれているのは確かにウルトクリスタル

だった、だがさらにその向こうに二つの人影。
片方は恐怖と絶望で立ち上がれないのだろう幼い少女（栗きんとん）、そしてもう
片方は……今にも全身爆裂寸前と言わんばかりの「戦乙女（ヴァルキュリー）」！！
生きとったんかテメー、とかなんで逃げてねーんだテメー、とか言いたいことは盛り沢山だが……今この瞬間、乱数の女神が振ったサイコロの目とカフェインの女神が齎した高速思考が最後のブーストをかけた。
ウルトクリスタル、栗きんとん、「戦乙女」、ゼノセルグス、ゲージ、超必殺、距離……全てが繋がった、後は駆け抜けるだけ！！
「っしゃあ！！！」
硬直したゼノセルグスを追い越し、瓦礫に埋まったウルトクリスタルをクソゲーサッカーゲーム仕込みの殺人シュートで蹴り飛ばす！！
世（ゲーム）が世（ゲーム）なら相手ゴールキーパーの肋骨を粉砕していただろう魔球がまだ僅かに漂う土煙をブチ抜いて「戦乙女」の胸部に激突する。
ウルトクリスタルはプレイアブルキャラにしか破壊することができない、逆に言えばコツさえ掴めば破壊不可の弾丸として使える！
掬い上げて足の甲で投擲する感覚ぅーっ！！
「俺の手は……勝利を掴む！！」
弾かれたウルトクリスタルと「戦乙女」が一列に並んだ瞬間、全身の捻りと全霊の熱を込めたカースドプリズンの掌をウルトクリスタルを掴んだ上で「戦乙女」の胸部へと叩き込む。
砕け散るクリスタル、全身全霊の一撃は結晶の破壊のみに留まることなく、機械群（メカニタン）最後の乙女の胸を穿ち、背を貫き……「戦乙女（ヴァルキュリー）」の心臓部たる動力核を鷲掴みにしていた。

「くっ……おおおおお！！」

背後から重い足音、「脱獄」したとしてもプリズンブレイカーはゼノセルグスの「超細胞」と違って普通にダメージを受ける。ダメージを恐れずトドメを刺しに来たか……だが！！

「集えゴミ共！！！」

「超必殺（ウルト）じゃねェだと！？」

そう、俺がこの最終局面で選んだのは周囲に鎧の欠片を撒き散らす「脱獄」ではなく……カースドプリズンのゲージ技、周囲の取り込み可能なオブジェクトを自身へと引き寄せる「凶星引力（フォビドゥン・グラビティ）」！！

普段は立ち回りの邪魔になるからほとんど使わないゲージ技を、ウルトクリスタルの力で満タンになったヴィラニックゲージを消費して行使する。

ひん曲がった道路標識や半壊した車が浮遊して引き寄せられる中で……目当てのものが虚空を切り裂いて飛んでくる。爆発で屋上から落ちてるのは見えていた、今は俺が主人だ！

ガチン、ガシャンと物言わぬ屍（スクラップ）に成り果てた「戦乙女」の身体が分解され、俺の右腕へと装備されていく。

そして最後に凶星が帯びる引力によって引き寄せられた「戦乙女」の突撃槍が動力核を握る右手と一体化――

「………！」

「………！！」

振り向いた先に肉達磨。
言葉はなく、それでも交わした視線が互いの考えていることが一致していることを伝えてきた。
——GG(グッドゲーム)。
「槍よ、仇を討て！！」
右肩に戦う乙女の意匠が施された腕から、意思を込めた槍が火を噴く。
装備の際に構造が組み変わった突撃槍はミサイルを推進力に射出され、真っ直ぐにゼノセルグスの心臓部に突き刺さってそのまま前へ前へと飛翔。
半壊したビルのエントランスに突っ込んで、そして——————
「実力で勝った、とは誇れねーな」
くるりと背を向けた瞬間、大爆発が何もかもを終わらせた。
カースドプリズンｖｓゼノセルグス……カースドプリズンの勝利。
これによりマスクド般若は持ちキャラ三体全てが撃破され……激闘の決着がついた。
トライアングル・トリニティ……勝者、顔隠し(ノーフェイス)。

凶星が引き寄せた決着（後書き）

Q、主人公勝たせたいけど普通に実力で凌駕しちゃったらパワーバランスが……

（エナドリを飲んで瞳を得る）

A．運ゲーでよくね？

世界に向けてダイマを叫ぶ（前書き）

さらばレダメ、征竜の頃からずっと思ってたけどお前しぶと過ぎんだよ……そしてサンボルの兄貴お勤めご苦労様です！　兄貴がお勤めしてる間、エクストラデッキは随分とカラフルになりやした……

とか考えてたらウィッチクラフトゴーレム・アルル！？　エッッッッッッッ！！！！！！（元ネフィリム返しておじさん）（ミドラーシュ最推し）（シャドールクラフト作成決定）（ガラテアは中身が羽虫だったのでノーセンキュー）

素直に更新です

◆

目を覚ませば、チェアー型ＶＲシステムの天蓋。
脱力した身体に力を込めて這い出せば苦笑いしたカッツォの面が目に入る。
「やぁ、大金星おめでとう」
「後半殆ど運ゲーだったけどな」
良いも悪いも、その殆どがトライアングル・トリニティというルールに助けられたって感じだ。少なくともタイマンだったらここまで大激闘は出来なかった。
「骨董品の伝説なんて持ち込んじゃってさ、コメント欄が地獄絵図だったんだよ？」
「舐めプとは言ってくれるなよ？　夢とロマン、あとカフェインが俺の原動力なんだからよ」
いや舐めプと言われたら否定できないだけなんだが、それでも浪漫が生み出す爆発力がなければ勝利は掴めなかった。
と、笹……原？　倉？　どっちだか忘れたけどエイト氏が俺の方へと近づいてきた。げ、もしかして……いや当たり前か、ボス戦かよ逃げれねぇ！

「お疲れ様です！　凄まじい試合でしたが感想をお聞きしても？」

「お、おっす」

俺はシャイで控えめなのでカメラの前でウェーイ！　とか出来ないタイプだぞ……い、いやしかし自分で選んでここに立っているのだからやるしかねぇ！

「最後の決め手、あれは全て作戦の内だったんですか？」

「あー……いえ、別に舐めプしてたって訳じゃないですけど……俺が望んでた展開はビルの上から落ちるまでです。それ以降は全部運が良かっただけです、あそこで「戦乙女」を取り込めなかったら、ＮＰＣの少女がゼノセルグスを硬直させなかったら順当に俺が負けてました、はい」

これは混じりっけない本心からの言葉だ。最終的にテンションが上がって勝ちを狙いに行ったが、元々は例の「星天」を決める事をモチベーションにしていた。

いや、まぁ成功率がクソゴミ過ぎたのでいろいろ妥協案も考えていたが……いやはや、土壇場のテンションとはわからないものだ。

「そう！　あの技ですよ！　コメント欄が凄い事になってたんですよ？　「統天再現(マスタースカイ)マジかよ！」って……」

「驚かせられたなら嬉しいです。目測でビル厳選したりタイミング測ったりで地味に面倒な事が多いので……」

「苦労するところそこなの？」

そこなんだよカッツォ、「星天」の場合最後の投げ踵落とし（ユニバース・テイル）はその性質上、どうしても落ちながらやる事になる。だから距離を見誤ると投げた後に着地してしまい、徒歩で地面を走って蹴りに行くという情けない事にもなりうる。

というか「墜天」部分は見た目全振りで全部クリーンヒットしたとしても一割二割しか削れないからなぁ……見た目の割にカスダメ、それがＧＨ：Ｃ版「星天」なのだ。

ただ小怯みで動きを封じ続けるから自前の凡ミスさえなければ確実に割合ダメージを食らわせる、それがＧＨ：Ｃ版「星天」。

お、なんか目の前にウィンドウが出てきた。あ、これいわゆるカンペってやつ？　無駄にハイテクだ……何々？　エイトが般若さんにインタビューしてる間、別枠カメラでコメントに返信お願いします？

「………（アルファベットからハングル、なんかもう読めない言語に混じった日本語がスロットマシーンの如く流れていく光景を見つつ）」

えー………はいストップ！　英語？　いや違うな国際的煽りチャットの経験がフランス語だと俺に伝えてくる。あ、翻訳された。

「えーと、じゃあコメントになんか返事しますね………「貴方は一日に何時間充電する必要があるのですか？」……あ、はいそうですね。基本的に太陽光発電しつつ新鮮な有機燃料で稼働してます」

「カフェインは？」

「外付けのニトロ」

ハイ次、翻訳完了。

「えーと？　「貴方はプロゲーマーですか？」……傭兵ですね、雇われました」

「うん、雇いました」

合いの手ありがてぇ、いっそ代わってくれ。ハイ次日本語！

「あー………「慧きゅんとはプライベートなお付き合いの関係なんですか？　どこまで進んでいるんですか？」と。魔境の者からですねこれ、どうした笑えよ魚臣」

「……君も巻き込まれてるんだけどね」

「上っ面がコレ(ジャック)だから無敵モードなんだよなぁ……」

「化けの皮剥がれた時覚悟しとけよ～？」

「まぁこんな関係です、ウオミロイド動画好き」

「……あ゛」

自分から素材提供してちゃ世話ねーわな、次！　ハングル！　読めん！！

「あと二つくらいで質問受け付け閉めます、「貴方はマスタースカイですか？」いいえ違いまーす、頑張って練習しました野良で実験台にした人ごめんねー」

やたら香ばしいカスプリ使いとミラーになった時は楽しかった、ダ

メージ実況というか何というか……正直イラッとしたりもしたが、なんだかんだ楽しかった。はいラストぉ！！
「じゃあ最後に……「貴方の好きなゲームはなんですか」か………」
「あっ………」
ちら、とカッツォからアイコンタクトが飛んでくる。いやいや……俺だってそこらへんは弁えてるさ……
全国どころか全世界規模で視聴者が注目している中でクソゲーのレビューをする勇気はない。
そう、例えば何をトチ狂ったのか飼い主（NPC）に飼育される犬（プレイヤー）という疑問符しか浮かばない関係性で電柱にマーキングすることをチュートリアルで要求される人としての尊厳破壊ゲー「ドッグライフ」を勧めたりなんてとてもとても……個人的な感想を言えばゴリライオンラインで人としての尊厳を捨ててる俺は普通に楽しめた、闘犬ルートと警察犬ルートがなかなか楽しいんだこれが。
まぁ流石にDLCで飼われるカブトムシ体験ゲームとか出てきた時はアレ以下を作れるのかとかそもそも犬から乖離し過ぎてないかとか驚愕したものだ……飽き性の小学生ルートが完全に拷問とか苦行の類っつーね、いきなり極限脱出ゲーになるのは笑う。
「GH：Cは当然として……ネ、ネフィリムホロウですかねー、ほら来秋発売の続編はGH：Cと同じでシャンフロシステム搭載世代ですから。自由度は保証されたようなものでしょうし」
なお初代の操作難易度は考えないものとする。
正直にっこり笑顔で幕末勧めたい欲もあったが、なんかネフホロ勧める以上に速攻で身バレしそうな恐怖があったので当たり障りなく

ネフホロにしておこう。
ネフホロもネフホロでちょっと前まで過疎ってたからあんまり話しすぎると特定されそうで怖いけど。
と、何故かヒーヒー言いながら身体を震わせているシルヴ、ァー仮面と
「では顔隠しさん！　なんかもう怖くなって数えるのやめたんですけど十分前時点で二千万突破してた視聴者の皆さんに一言！！」
何故君は前振りで全力フルスイングを俺に叩きつけてくるの？？？一介の高校生が全世界に向けて何を叫べってんですか！？　えー、あー、えー……あー……うー…………
すっ……（リボルブランタンの空き缶を見せつつ）
「ライオットブラッド・リボルブランタンのお陰でここまで来ました！」
「深夜帯のテレビショッピングかな？」
「※効果には個人差があります、ってか」
「あの、ダイレクトマーケティングはちょっと………え？　ガトリングドラムはスポンサーだから大丈夫？」
大丈夫なんですってよ。
「なぁカッ……ケッ……依頼主殿、尺とか大丈夫なん？」

「テレビ放送の方はあと少しで終わるけどネット配信の方は続行だってさ」

「……悪いがそろそろエンストするぞ俺」

「ハイこれ飲んで顔隠し（NoFace）」

お、どうもどうも…………

「エナドリやんけ……」

ライオットブラッドじゃないな、まだカレーライスの作り方は覚えているし……これ「エナジーカイザー」か？　ライオットブラッドの足元にも及ばぬパンピー用ジュースさ……

「……あの？」

「ＹＥＳ！　Ｎｅｘｔ　Ｆｉｇｈｔ！！」

いやいやシルバー仮面さん嘘でしょ？

嘘でしょ?

世界に向けてダイマを叫ぶ（後書き）

アメリ……もとい般若の方のコメント返信

Q．アミィが負けるなんて信じられない！！

A．おうこいつ（シルバー仮面）が隣にいるのにそれ言うのか、あと私は般若だ

Q．アミィ、また写真集出して

A．（シルバー仮面を指差して）こいつがポルノに引っかからなくなったらコラボで考えてやるよ、あと私は般若だ

Q．アミィ、手ェ抜いてた？　いつもより戦い方がマイルドだったね

A．まぁチャンピオンシップの時よりはプライベートなメンタルで戦ってた、あと私は（ｒｙ

Q．どうやったら大きくなれますか？

A．毎日コーンフレークと肉を食え

現実は時に幻想を凌駕する神秘性を発露する（前書き）

ジャパーン！！

「……。」

ヴォンッ

『Ｄｉｎｏｓｃｕｌｌ　ＸＸＸ－ＸＸＸ－ＸＸＸＸ』

掌に載せられるサイズのカードからティラノサウルスの骨格が咆哮を上げ、傷のようなデザインでダイナスカルの文字が表示される。

「……。」

フォンッ

『Ｚｏｄｉａｃ　Ｃｌｕｓｔｅｒ　ＸＸＸ－ＸＸＸ－ＸＸＸＸ』

別のカードを手に取れば、プラネタリウムの如く星座が浮かび上がり、星と星とを繋いだ線がゾディアック・クラスタの文字を描く。

「はー……無駄に高性能だなコレ……」

ＡＲ搭載デジタル名刺……これ一枚作るのにちょっとお高いレストランで四人くらい食わせるくらいのお金がかかってるとか……大丈夫か「電脳大隊」、御社の名刺は紙製だったけど文明遅れてない？

「…………困った、全く眠くならない」

あの後も大変だった……なんか話の流れで全員ランダム選出でタッグマッチをやる羽目になったり、質問大会でナチュラルにカッツォへセクハラが飛んだり、ライオットブラッドについて熱く語られたり……あびびび……そうですね、ライオットブラッドに関して不安の声があることは純然たる事実ではありますがそれは暗闇を恐れる心に近いんです。子供の頃にトイレに続く道を恐れた経験は？

ええ、ええ、それは人として至極当然の反応です。ライオットブラッドに抱く恐怖もそれに近しいものなんです……ライオットブラッドの合法性は科学的に実証されています、後は一歩踏み出す勇気が大切なんですね。暗闇の中に何を見ましたか？　牙を剥いたゾンビ・ビースト？　悍ましい殺人鬼？　それは貴方の目が見たものではないのです、謂わば脳が生み出した架空の瞳が見つめる幻……さぁ、電気をつけてライオットブラッドをぐびっといきましょう、怪物なんていませんよ？　カフェインが貴方に勇気をくれる…………おばばばば、そうそうこんな感じでスラスラとレビューして……変な電波受信した？

参ったな、人類はまだＷｉ－ＦｉもＢｌｕｅｔｏｏｔｈも内蔵できてないはずなんだが……まさか、脳内に直接？　いや考えまい、ライオットブラッドは清く正しいカフェイン飲料です！　復唱！！

「さて…………これどうしましょ？」

一応家に連絡は入れたけど……これ帰れるかな。

「イッッエへへェーイ！！　ニッポンサイコー！　二十でお酒が飲めちゃーう！！」

「いや君飲んだの酒じゃなくてただのクラブサイダー……っぐぇ」

「フィーバャー！！」

「……っ！　……っ！　……っ」

ボクササイズだかなんだか知らないが、要するに素人（カタギ）ではない腕力を持つシルバーの仮面を外したシルヴィア・ゴールドバーグ（状態異常：場酔い）によって締め上げられたカッツォがそっと落ちたのを視界の端に入れつつ、俺は反対側に視線を向ける。

『んで負けんだよ……っかしーだろ……あんなタイミングでガキとターゲットエネミーが揃ってんだよ……状況がジャックポットじゃねーか……』

ぐちぐちぐちぐちぐち……

グビグビグビグビグビ……

愚痴っていた、グビッていた。
目減りしていく酒瓶をお供にただひたすら己の世界へと沈んでいく般若……もといアメリア・サリヴァン。

誰に当たるでもなく、シルヴィア・ゴールドバーグと比べると刺々しいとはいえ外向きに向いていた感情の全てが内向きになっているというか、話しかけると睨まれるのでこれはこれで面倒臭い。あとクソ早口の英語になるので聞き取れない。

誰が言い出したかも定かではない飲み会は一人気絶、一人暴走、一人悪酔……そしてただ一人暗殺幼女や壁登り衛生兵としての経験をフルで活かして極限まで影を薄くした俺。

「……マスター、フルーツオレ一つ」

「お客さん、あちらの方からでございます」

流れてくるフルーツオレ…………あっ、おいマジかよバーの定番イベントじゃん！　ていうかマスターもちょっとワクワクしてやがんな！？　よーし乗ってやるぜ！

「一体誰から……」

「やぁ、どうも」

闇の中に、目が浮かんでいる……いや違う、薄暗い照明だから保護色になってやがるんだ。い、いやまさか、頭巾だけじゃなくて全身まで黒ローブを纏うことを許された社員は……！

「幹、部……！？」

「ガトリングドラム日本支社で営業部の長を務めております、そうですね……私のことは毘沙門天と」

毘沙門天……日本支社は七人の幹部だと聞く……というか、声的に……ん？

「この度は全世界規模でライオットブラッドのマーケティングに貢献していただき、ガトリングドラム社としましても是非とも感謝の印を受け取っていただきたく……こちらをお持ち致しました」

「は、はぁ……」

日付すら越えてないんだけど……？　一体いつ聞きつけて……いや気にしたら負け、気にしたら……シャーっと流れてきた機械仕掛けの箱がひとりでに開いて……

「顔隠し氏（ノーフェイス）の代名詞……ジャックのヘルメットをこちら、特別カラーリングに塗装したもので……」

「こ、これは……！」

ま、まさか……ライオットブラッドカラーリングのジャックヘルメット……！？

「え、ちょ、待ってこれ最新型のＶＲシステム拡張パーツ……」

え、嘘でしょ？　電力内蔵型？　コンセントに繋げなくてもいいやつっていうかＡＲとＶＲの両方に対応してるやつじゃね？　この端子って携帯端末に繋げてこれ単体でリアルタイムＡＲ展開する……ええ？　これメット型ＶＲシステム並のプライスじゃ……

「………」

ちら、と横を見れば白目を剥いたカッツォ、何故か嬉々としてお冷やを一気飲みするシルヴィア、空のグラスを叩り続けるアメリア……
………うーん、他に客も無し。

「マスター、口の硬さに自信は？」

「老い先短い身ですから、お客様の秘密は墓の下まで持って行きますとも」

「ガトリングドラム社はお客様の個人情報の一切は保護されております」

くそッ、ダンディズムのない冴えない顔した爺さんのくせにノリだけはクッソ良いな……！　最高かよあんた……！！　ならば仕方ないヘルメットを脱いで、晒した素顔でちょっとだけ熱い頬を吊り上げて、新しいヘルメットを被って、

◆

「……っは！？」

あれ？　え？　車？　なんで？

「い、いや……確かバカ共は放置して先に帰って、タクシー乗って……」

あれ？　え？　夢オチ？

「お客さん、ぐっすり寝てましたよ」

「え、え、あ……あれ、そうでした？　いや、うん、まぁ今日は疲れたので……」

ふぅー………ライオットブラッドの過剰一歩手前の摂取が見せた幻覚、かぁ……。

流石に無茶をしすぎたな、えーとホットケーキミックスに卵とラ、入れない…牛乳を入れて混ぜて焼いて完成……最後にライ、はかけない……いや甘いんだからメープルシロップの代用にしても良いのでは？　良かねーわ。

しかし悪夢というにはファンタジー色の強い夢だった……なんかガトリングドラム社だったらマジでやりそうな

ゴンッ

「…………………え？」

いや、いやいや、鞄の中に入れたジャックヘルメットに何か当たった音だろう。でも、携帯端末はズボンのポケットだし財布や家の鍵も同じくポケット……でも、こんな互いに音が響くもの同士がぶつかる音なんて……

「……………」

滴る汗を拭い、僅かに首元を緩めながら何故か行きよりも膨らみが増えているように見えてならない、鞄を、開いて…………

「ひぇっ！？」

そこには、都心の煌々たるシティライトを受けて光るライオットブラッドカスタムのジャックヘルメットが入っていたのだった――

キャーーーーッ！（ホラー特有の悲鳴）

現実は時に幻想を凌駕する神秘性を発露する（後書き）

どこからが夢なんでしょうね（すっとぼけ）
とりあえず辻褄を無理やり合わせたいならライオットブラッド絡めときゃええやろ、な精神は矯正していきたい

毘沙門天さんについては気にしないでください、シャンフロ現実世界に僅かに生き残った希少な「夜の種族」にして人に夢を見せるのが得意な感じのアレでライオット「ブラッド」の秘密に関わっている幹部の一人かもしれないし、単なる一般人かもしれない。

ただ一つだけ言えるのは今後再登場することは多分ないですし、彼女は例の姉とは違ってちゃんと結婚もできるタイプの仕事できるウーマン、ということです

冥府よりの招待状（前書き）

エルシャドール・レダメが欲しい

なんだか被った瞬間に首筋へと注射針を刺されてライオットブラッドを注入されそうで怖いから例のヘルメットは観賞用として封印している。
デザインはシンプルに好みなんだけど所有に至るまでの経緯がホラーすぎるんだよなぁ……後からカッツォにメールしてそれとなく幹部「毘沙門天」について聞いてみたけど役に立たたねぇし。
あの後帰宅してから緊張の糸が切れたのか、エナジーカイザーで延命したカフェインが切れたのか電源が落ちたかのように熟睡したもんだからスッキリとした朝を迎えた俺は……

「え？　旧大陸で始源眷属大発生してやばいってマジ？」

「知らなかった、んですか……？」

「あー、うんまぁちょっと別件でね」

シャンフロガチ廃人こと斎賀さんから伝えられた情報は、俺を驚愕させるに十分な力を秘めていた。

なんでもサードレマ近辺に「青い馬」が出現したとか、神話の大森林に「緑の群れ」がいるとか……ジークヴルムを始めとして全体的に最先端を行っていたのは新大陸側だと思われていたが、ジークヴルム撃破を発端とする次段階への移行は、旧大陸側でも騒乱の風を吹かせているらしい。

「それ以外でも、サードレマの領主と国王が険悪……と、聞いています」

「人間関係側も進んでるのか……」

ちと調べてみるか。うっ、トレンドに「チャンネル８」がまだ残ってる……いやそうではなく、えーと？　何々……

「サードレマにレイドモンスター襲来、国は支援をせずサードレマ領主の娘を嫁に要求……」

とんでもねぇ緊急事態に「お父さん娘さんをください」やらかしてサードレマ領主激おこ、と。オイオイ人間関係がシェイクみたいなドロドロになってやがる、啜ったら蜜のように甘くて美味しそうじゃあないですかぁ！！

「どうも、低いレベル程有利に戦える敵、らしく……」

「出現エリア的にも初心者参加用レイドモンスターってところか……？」

どうなんだろうな……このゲーム、世界観前提のバランス調整をする節があるから偶然そうなったという可能性も捨てきれない。シャンフロは人口が多い上にゲーマー的人種も多いので余程多数が証言しない限りは情報の信憑性を証明することができない。特に「黒」「白」の情報が完全に錯綜している。

今の所俺が把握しているレイドモンスターは新大陸側の「青」「赤」、旧大陸側の「赤」「青」だけだ。恐らく貪る大赤依が一瞬だけ見

せたあの異形の筋肉サイクロプスが新大陸側のレイドモンスターではないかと睨んでいるが……うーむ。

「この青馬？　ってのは関与できそうにないね」

「ですね……体力の最大値、ごと削るらしいので」

キツイなー、普通の体力は元々ゴミだから上限はそこまでって感じだが刻傷で防げないタイプの状態異常だとどちらにせよ死ぬって感じだし……

「黒剣とかはどう動くとか聞いてる？」

「姉さんは……リュカオーン撃破に向けて、旧大陸に戻るそうです。ただ、神話の大森林にレイドモンスターが出た、という情報もあるので……」

ああ、なんかレアアイテムが取れるエリアなんだっけ？　レイドモンスターは放置すると環境ごと荒らしかねないからトップクランが知らんぷりは出来んだろうな。

「午後十時軍は、新大陸に専念するようで……」

「へぇー……」

まぁ午後十時軍がどう動くにせよ、意地でもリヴァイアサンから離れようとしないだろう奴に一人心当たりはあるけど。

まぁどの口がほざく、とは自覚しているが一部プレイヤーによって秘匿されがちなユニークモンスターとは違ってレイドモンスターは時間を置いて何度でも復活することが確定している。未だ分母の多

い旧大陸側の方が情報の伝達が早い、ここに来てトッププレイヤー達もまた新旧どちらの大陸に留まるかを選ぶことになるわけだ。

「陽務君は……どうする、んですか？」

「ヴォーパル運送がある俺達にどっちもクソもない気がするけど……まぁ、リヴァイアサンの攻略を進めるかなぁ？」

「確か、一層がとても広いとか……」

「……広かったねぇ」

アリバイク縛りで攻略するならちょっとした旅だからな……下手にダンジョンしてる分、距離が誤魔化されないからマジで遭難するとキツい。

「その……陽務君は、第二殻層なんですよね？　もし、私が追いついたら、一緒に探索とか……」

「え？　そりゃ構わないけど」

「本当ですか！？」

流石は斎賀さんと言うべきか……現状リヴァイアサンの攻略を最も進めている俺との同行をリアル方面から確約させる抜け目なさ、やはりガチ廃か……

別に断る理由もないので受けてもいい、という心理を突いた一手と言うべきだろう。

「ふっ………やっぱ斎賀さんはスゲーなぁ」

「……？？？」

シャンフロにかける熱意ってやつ？
畏敬の念は心にしまいつつ、今日も今日とて別々の教室に分かれるまで話に花を咲かせるのだった。

◆

なんていうかな。たとえ時間にすれば数日程度ログインしなかっただけだとしても、別ゲーでの時間が濃密すぎたせいで随分と久しぶりにこの場所に立っている気分っていうか……ある種の郷愁？　に似た感情すら抱いちゃうもんなんだよな。

「……色々聞きたいことは多いが、とりあえず聞くわ……何これ？」

「落胆（マジかよ）‥契約者（マスター）とはいえその質問には知性（インテリジェンス）の実在性を疑わざるを得ませんね…………これは、紙です」

「原材料は誰も聞いてねーよポンコツ、用途を聞いてんだよ」

「……？　主に筆記などにおいて記録媒体として……」

「あー、うん。質問の仕方を間違えた俺が悪かった」

百聞はなんとやらだが千回質問しても状況を把握できそうにねーわ。何故そんなキャバ嬢みたいなドレスなんぞ着てるのか、とかそもそもどこで手に入れたんだそれ、とかだからこの封筒はなんなんだよ、とか……中身を見れば済む話か。

「………招待状？」

「肯定：契約者はプロトコル「オルケストラ」における設定条件を満たしました。その為、征服人形(コンキスタ・ドール)暫定規約に基づき「コンサート」への招待状が進呈されます」

――私(コレ)は、貴方を待っています。どうか、貴方の為に歌を

無感情な文体と簡潔な文面。しかしそれだけでは済ませられないような強い熱(感情)が込められた招待状。そして封筒を開くことが条件だったのだろう……普通は見慣れることはないのだろうが、かれこれ七度目のウィンドウが表示される。
『ユニークシナリオＥＸの条件を達成しました』
『ユニークシナリオＥＸ「あなたに捧ぐ旋律(ウタ)」を開始しますか？はい　いいえ』
『称号【七つ星の観測者】を獲得しました』

わぁい、遂にコンプリートしちゃったよ。

「マジかー……ちなみにプロトコル「オルケストラ」の条件は？」

「解説：征服人形との契約、及び暫定規約に基づいた旧人類知識の一定保有です」

「………そうか」

条件が緩すぎる、樹海で間違い探しレベルのウェザエモンやクソ縛りノルマのヴァイスアッシュ、突然のギャルゲーなゴルドゥニーネと比べてこの条件……恐らくだが、オルケストラは再戦可能なタイプと見た。

となれば……流すか？　いい加減秘匿三昧ってのもアレだし、どうせ遅かれ早かれ「次」は出てくるだろう。

「分かった、【ライブラリ】の処に寄ってからコンサートに行こうじゃねーか」

「承認：プロトコル「オルケストラ」を進行します」

まったく、暇しねぇゲームライフだなオイ。

「ところでドレスコードとかあるの？」

「一般的な常識に準拠するのでは？」

「武装しないという何よりの誠意、実質礼服では？」

「指摘：控えめに言って門前払いでは？」

じゃあ外套（マント）着けてお洒落レベル上げとくわ。俺の事はシャンフロお洒落界の異端児とでも呼んでくれ……っ！！

冥府よりの招待状（後書き）

デートデートとはしゃぐヒロインちゃん、ため息をつく岩巻の図

毒も慣れればスパイス（前書き）

リンク１のシャドール・ハリファイバーくれ
転生リンク更新！

毒も慣れればスパイス

もし俺達が石ころと棍棒で殴り合うくらい原始的だったなら、この世の全ては腕っ節と物理的捩伏せで解決するだろう。

だが開拓者なれど現代人(ゲーマー)、我々は情報というものが持つ価値を正しく認識することができる。だからこそ値千金の情報は時に物理的殴打に勝る威力を発揮する……

「冥響のオルケストラに関するユニークシナリオＥＸを発生させた、今から【ライブラリ】に売っ払いに行くけどその前に聞きたい？」

「超聞きたいわー」

「わー、話には聞いてたけどマジで変態じゃーん」

「同じクランに属してる私やニーナ(217)ちゃんの品位まで下がっちゃうよねぇー」

「「ねー」」

「不快(うわうぜぇ)：リリエル＝217、「Ｓｔｒａｗｂｅｒｒｙ」所属ユニットとしての任務に戻るべきでは？」

「反論(ざーんねん)：当機(ワタシ)もペンシルちゃんと契約したから独自行動の許可が降りてるもーん」

「おい待て、自然な流れで俺を小馬鹿にした上でそのまま流すな」

否定はできないがせめて何か言わせろ、もうどうしようもないものとして流されるのが一番つらい。

考察クラン【ライブラリ】に立ち寄る前にペンシルゴンのやつに遭遇した、逃げるコマンドを選んでも良かったが傍に征服人形を引き連れているとなれば話しかけざるを得ない。

そしてやはりというか以前サイナから受けたアドバイスをペンシルゴンは実行していたらしく、リリエル＝２１７と名乗る征服人形は何ともあざとい動作でサイナに毒を吐いていた。

「いやぁ、私こういうきゃるんきゃるんなガワの中にドロッとしたジャムみたいな悪意が入ってるジャムパンガール大好物！」

「契約者(ペンシルちゃん)みたいなミサイル弾頭に言われたくなぁーい！」

うーん、毒入りのシュークリームとジャムパンとかクソみたいなコンビだな。というか……

「なぁジャムパン、お前だってプロトコル「オルケストラ」は知ってんだろ？　話してもいいのか？」

「許可(いいよー)：プロトコル「オルケストラ」はあくまでも条件だから、征服人形(ワタシ達)が動くのはオルケストラの持ち出し案件だけだよっ」

持ち出し……？

ちら、とプレイヤー二人の視線が交差する。俺程度が考えることを奴が思い至らないとは考えづらいが、仮にも同じクランで向こうは頭を張ってるんだから相談は必要か。

「どうする？」

「こればっかりは隠しても無駄かなー、ニーナちゃん達の態度的に気づくやつは気づくって感じだしさっさと売り払うのが正解だね」

「だよなぁ、つーかもう気づいてる奴がいてもおかしくないレベルだ」

というわけでペンシルニーナ組も引き連れてライブラリの新大陸拠点に殴り込みをかける。どうもエセ魔法少女やその信者はまだログインしていないらしく、仕方ないので【ライブラリ】所属のプレイヤーに話を通す。

何やらシャンフロＵＩではないウィンドウを操作しているプレイヤーを眺めつつ俺は小声でペンシルゴンへと話しかける。

「あれってＶＲシステム側のウィンドウだよな、確かリアルと通信する為の……」

「そうそう、メニュー画面のめっちゃ見つけづらいところにあるんだよねアレ……多分インしてないキョージュの携帯端末にメール送ってるんじゃない？」

そりゃスクショ機能とかあるんだからゲーム外に持ち出す機能もあるか……うわ本当だ、メニュー欄の設定のすげー下の方にある。気づいてないプレイヤーも多いんじゃないかこれ。

「……はい、キョージュの方からメールが来ました。「ペンシルゴン君の様子からしてオルケストラのＥＸシナリオ自発条件はそこまで難しいものではないんだろう」と伝えて欲しい、と」

「文面だけでこっちの手札読み切ってくるのマジ狸親父なんですけど……」

「毟り取る気マンマンかよこいつ」

金って大事ね、最上とは言わないが人生の潤滑油だから欠かすと途端に軋み始める。俺を見ろよ、蠍産業で人生の歯車ドゥルッドゥルだぞ。

「じゃああんた経由でライブラリに伝えておいてくれ、オルケストラのＥＸシナリオ自発条件は「征服人形と契約した上で神代文明に関する一定以上の情報を持つ」事だ」

「補足（ついでに）：規定ラインに到達する戦闘力も含まれます」

「そういう事は先に言うのがインテリジェンスだぞ」

「欠けた情報を補足する知性こそがインテリジェンスでは？」

成る程、インテリジェンス千日手か……まぁ最初から覚悟はしてたけどコンサート（戦闘）が地味に確定しましたね、はい。

「って事はこれやっぱりオルケストラ自発するなら征服人形と仲良くなってからリヴァイアサン攻略が正解っぽい？」

「肯定（そーだねー）：征服人形（ワタシ達）は契約者を介さないとリヴァイアサンの中には入

れないから……出会いの場が無いみたいな？」

「突然の合コン要素か……つーかお前らどうやって知り合ったんだよ」

征服人形って同型が多いから結構な回数、似たような面(ツラ)を見かける。サイナことエルマ型も結構見かけているしその度になんかサイナが人生の勝ち組的ドヤ顔をするので逆説的なレーダーにもなっている。ドヤ顔＝近くにエルマ型、みたいな？

「んー？　そこはホラ、サイナちゃんの名前を使って釣り出す感じで？」

「契約者酷(ペンシルちゃん)いんだよ？　「サイナちゃんが通信途絶環境でリリエル＝２１７ちゃんを呼んでるから～」って当機(ワタシ)を誘き出しちゃうんだもの」

無論、サイナがピンチとかそういった事実は存在しない。つまり９０％嘘なのだが、どうやら奴は１０％の事実をフル活用してお目当の魚を釣り上げたらしい。

「あとはこう……未婚女性を言いくるめる感じで？」

「もう勝ち誇った顔なんてさせないもんねー、べーっ！」

「報告(見ろよ)：理性を感じさせない面構えですね、流石はリリエル型と言わざるを得ません」

「カタブツのエルマ型に言われたくないんですけどーっ！　っていうかエルマ＝３１７、なんか性格悪くなってない？！」

「ははははまさか、インテリジェンス・異常なし（オールグリーン）ですが？」

「そうだぞ俺に似て和を重んじる善良な魂をしてるじゃないか」

「ダメだニーナちゃん、君の友達はもう外道に汚染されているよ」

百歩譲ってもテメーにだけは言われたかねーよ！　むしろ詐欺から始めて好感度高めにキープしてるのこえーんだよ！　！

「あー、その、情報提供の礼についてですが……」

「ん？　あぁこいつに一任するわ」

「ヨロシクネ？」

「セートさんかキョージュじゃなきゃ対処無理っスよこれ……」

哀れ【ライブラリ】プレイヤー、よりにもよってこいつと交渉戦とか合掌ものですわ。最初からぶん殴った方が早く済むって分かってるからこそ余計に虚しいんだよね、うんうん。現代社会に生まれた己を呪え。

「じゃあ俺行くから」

「んぇーい、オルケストラに関しての情報は私を通してねー」

俺が動く、鉛筆に情報が溜め込まれる、泣きを見るのは【ライブラリ】……哀しいねぇ。

ヒラヒラと手を振りつつライブラリの拠点から退出しようとした俺とすれ違うように一人のプレイヤーが前からやってくる。

「……「蛇」の件で」

「……ん」

そしてすれ違う瞬間、スッと差し出された筒状に丸められた羊皮紙を受け取って……いやお前これやりたかっただけだろ知ってんだぞ外でスタンバってたの！　いや、まぁノリノリで金を手渡した俺も俺だけどさ。

「それで酒でも買いな……」

「あ、いいねそれっぽい」

おいおい、ロールプレイはせめて最後まで維持してくれぇー

毒も慣れればスパイス（後書き）

鉛筆は色々と人間の汚い面も知ってるのであざとすぎるし毒舌なリリエルも普通に接する。スルースキルと煽りスキルが高いので上手く付き合える

サンラクとサイナは互いに殴り合ってて、止めようとする奴が割り込んでくると何故か協力プレイで殴りかかってくる奴

外道三人の場合は取り繕うので若干種類が違う

岩窟の主（前書き）

どうも水着ユエル一発ツモ硬梨菜です

「プレイヤー名不明、多数の蛇を引き連れた女性と同行している姿を目撃された……ね」

少なくともあのゴルドゥニーネじゃあねーな、アレが多数の蛇なんか連れてたら目撃だけで終わるかよ。

となればウィンプ同様別個体、サミーちゃんさんのような特化型ではなく数を戦力にするタイプか……？

「んー……エムルはどう思う？」

「どう思うも何も蛇はあんまし好きじゃないですわ……ヴォーパルバニーの歴史は蛇との戦いの歴史でもあるんですわ」

実はさっきからずっとマフラーに擬態していたエムルは既に擬態を解いて頭の上、定位置に乗っている。一応質問してみたがまぁ有益な答えが返ってくるはずもなく。長くラビッツに侵攻してたのはゴルドゥニーネの抜け殻だったし、流石に大陸中に分布するゴルドゥニーネの事までは分からないか。

「ま、ダメ元で奴にも聞いてみるか……エムル、例の場所に」

「はいなっ！」

サイナから手渡されたコンサートチケットだが、当然ながら会場に行かなければ意味がない。そして会場があるという座標から最も近いセーブポイントは……俺が設置したシグモニア前線渓谷中心底部

の洞穴だ。
最近放置しっぱなしだったヘタレニーネも気になることだし、早速転移して見たものは…………

「んー、ここはもっとまるみをおびてたほうが……」

「……何してんの？」

「へひゃあっ！？」

何やらこう……本来は人を汚染し命を蝕む筈の毒を使って岩を溶かしながら形を整えている、言うなればそう「彫刻」に精を出すアホが一名。

一丁前に布の切れっ端か何かを頭に巻いて職人気取ってるアホの周囲には何やらいくつもの完成品が並んでいる……

「ど、どうよっ！　なづけて……「きけん」！！」

「そうだな、悪魔か何かかかな？　動物頭モチーフってのはそう珍しいものじゃないしな。成る程？　ハシビロコウの悪魔か、角や翼まで生やして本格的じゃあないかハハハ……」

「ははは……」

星外套を装備、その両末端を両手で掴んでバッと翼の如く広げて……

「誰が「危険」じゃコラァーッ！！」

「ほんものぉーっ！！？」

この俺を悪魔呼ばわりとはいい度胸じゃねぇか！
「疑問（おいコラ）：こちらの像の詳細を問います」
「…………「きょうちょう」」
協調……？　あっ、凶兆（きょうちょう）！！
「把握（成る程）：敵対宣言と認定」
「ちょ、それこっちむけないでよ！」
バカかこいつは……何故よりにもよって最高の物的証拠を嬉々として並べてるんだ……メカニカルゾンビな彫像の隣で器用にも青筋を浮かべたサイナがいいな、頭が完全に鳥である事とか目がイッてる事はこの際目を瞑ってやろう。
「このやたら雄々しい蛇は……」
「サミーちゃん」
「素晴らしい出来栄えだな、ヘタレを守護する威風に満ち溢れている」
「でしょー？」
煽ってんだけどなぁー……
どうだ、とばかりに頭を上げるサミーちゃんさん。二割増しで脚色

されているというか面構えが完全に蛇じゃなくてドラゴンっぽくなってるが……サミーちゃんさんの偉大さを表現するにはそれでも不足しているくらいだ。

「しかし………」

前ここに来た時と比べて家具の位置が色々違うし、なんというか……引きこもり生活してるヘタレ色にカスタムされてね？

「あ、そうだ！　ごはんなくなったんだけど！　すぱいすほしい！！」

「いや買ってきたけどさぁ……」

なんだろうなー、リアルじゃバリバリ扶養される側の俺だがなんだか保護者の気持ちがわかったというか……いいのか？　このヘタレニーネどころかヘタレニートをこのままにしていいのか？
いや、レベルそのものは結構順調に上がっている。サミーちゃんさんのレベルが異様に高くなってるのはもうこの際気にしないでおくが、ウィンプ自身もレベル９０台に到達している。

「なんで精神力のパラメータがないんだろうな……」

いやむしろ必要なのは勇気のパラメータか？　蛇でも今は足があるんだから一歩踏み出せよ……

「まぁいいや、ちょっとお前に質問があるんだが」

「なによ」

「やたら大量にお供の蛇を引き連れた「ゴルドゥニーネ」に心当たりは？」

「そんなのいままでいっぱいみてきたわよ」

ただ、とウィンプは未完成の彫刻を毒の染み出す手で溶かし削りながら口を開く。

「はちひき」

「あん？」

「はちひきのへびをつれて、いまでもいきのびてそうなやつならしってるわ」

……ほう？

「なまえなんて、どうせわたしだろうけど……へびたちのことは「オロチ」ってよんでた」

こりゃまたメジャーな名前な事で……ただ八匹全部別個体ってのは何気に厄介だな。八回連続攻撃してくる敵とのタイマン、と八対一、は意味合いが全く違うものになる。具体的に言うとターン制なら普通に死ねる。

ていうか八匹全部オロチなの？　オロチ一号二号とか呼び分けてんの？

「そいつ、へびのあつかいがうまかったのをおぼえてる」

「成る程ね」

単純な物量ではなく本体込みで精密な動きを実現してるとしたら今まで生き延びていてもおかしくはない……か。
確定というわけじゃないが思考に留めておいた方がいいだろう、そしてますますウィンプの情報は外に出せなくなってきたなコレ。
事前準備で割と致命傷っていうかウチの蛇は本体性能がゴミ、という弱点が剥き出し状態なのでサミーちゃんさんの能力が割れた瞬間詰む。サミーちゃんさんのステルスは確かに高性能だが、実体そのものはそこに存在しているのだから面制圧の範囲攻撃に弱いという欠点がある。

特にあのゴルドゥニーネは天敵と言っていい、従えている龍蛇は存在が範囲攻撃とかいう無茶苦茶スケールなのがもうずるい。しかも本体が弱いかといえばンなことはなく、毒属性付与の剣聖とでも言うべき壊れ性能だ。

「……やっぱこれ協力が大前提な気がしてならない」

単純に考えてソロで倒すとかそう言う次元じゃない、それこそゴルドゥニーネ全員で――

「……いや、そういうことなのか？」

まさか、互いに反発し合うゴルドゥニーネ達をプレイヤーがなんとかして協力させ合うのが……いや、いや、待て待て今からオルケストラに挑むってのに思考が逸れすぎだ。
第一今あれこれ考えたところでウチのゴルドゥニーネはヘタレニートだ、少なくともワンパンで死なない程度には鍛えなければお話にもならない。いやせめてメンタルをもう少し鍛えるには……

「滝……」

「いとがわからないからよけいこわい！！　たきでなにするつもり！？」

滝行か、滝壷落としか……うーん、間を取って滝バンジー！！

「頑張ろうな……」

「なにを！！？」

バンジーをだよ。

……

…………

………………

ヘタレニートはなんだかんだ調味料……というか香辛料だけ渡しておけば（流石にちょっと哀れなのである程度の食料も置いていくが）止むを得ずといった様子ではあるが主食を求めて蜘蛛狩りレベリングを行うのでそのようにするとして。ひっそりと前線渓谷を突破した俺、エムル、サイナは時折加速を入れつつも大陸を南西へと突き進む。

「解説：大陸西方に行くにつれ、分布する生態系は巨大化する傾向を見せます」

「へー」

「例えばあちら、クアド・ライノトプスなどはジュラ・ヴァルカンレクスなどが広く分布していた時代からその性質を変えることなく体躯のみを巨大化させた種であり……」

「ちなみに向こうさん、すげー勢いで逃げてくけど」

「クアド・ライノトプスは「雄のみ」の場合は温厚な性格で戦いを避けます。特に契約者(マスター)のような全身から危険臭を放つような者であればあのように」

人が悪臭放ってるみたいに言うな。

「ただ、「雌や仔」がいる場合、雄個体は攻撃的傾向を見せます」

「あー……つまり女子供の前ではいいカッコしてる、と」

「……端的に纏めれば、そうなります」

すまんね、生物学は専門外だ。将来的には経済学に進みたいと考えてるし……経済学ってＳＬＧやってたら成績上がんねーかな？　戦争から学ぶ経済活性、即ち戦争経済……っ！！

「相変わらずサンラクサンはどこでも呑気ですわー」

「人の頭の上でゴリゴリ人参食ってる兎に言われたかねぇなぁ」

なんていうか、何度かあからさまに肉食なモンスターと遭遇したのだが、なんだろうね……地面に落ちたご飯粒でも見かけたみたいな目で見られてそのままスルーされるというか、釣り針に引っかかってた小魚をリリースする時の目というか。

「要約：腹の足しにもなりゃしねぇ」

「何故屈辱を感じるのだろうか……」

食材にだって、プライドはある。

岩窟の主（後書き）

なおプレイヤー同士で結束できるとは言っていない

人形劇を経て、音楽会（前書き）

誰かあいつから弓を取り上げろ（魂の叫び）

二徹して尚あまりに勝てなさ過ぎて作品がエタりそうなので更新です。

ガスコインやマリア様クラスの奴が普通にそこらを歩いてる戦国怖過ぎない？

人形劇を経て、音楽会

加速モード、それはサイナをインベントリアに収納した状態で俺がエムルを担いでひたすら走るモードである。

「ふ、ふふふ……ふははー！　見るですわっ！　ピーツからパチってきた痺れ除けのお守りですわーっ！！」

「姉特権フル活用してんなお前」

鼻かんどくね……

もはやエムルさん、痺れる方が重要であって加速した状態でジェットコースターまがいの挙動で運ばれる事については気にしていないらしい。よよよ、涙が出るほど同情湧かないからせめて草葉の陰で

「さて……星の位置からおおよその方角を割り出して走ってきたわけだが……」

はて、目印にした星はどこに行った？　やはりなんちゃって星見とかするもんじゃないね。

「サイナ、あとどんくらい？」

「……インベントリアの座標から契約者(マスター)の移動ルートを割り出しました」

うんうん、それで？

「恐ろしい程に直線の軌道で進んでいます」
まぁ、障害物とかあってないような感じで移動してたからな……こう、木々を飛び移る感じで。
「誘導（こっちです）：　事務所（ドールフロント）まで残り……２００ｍ」
結構近所だったわ、というか二百ならそろそろ見えるかと思ってたんだが……地下？

その答えは、近くに来てようやく分かった。
「あー、ご丁寧に木の高さで誤魔化してただけでここで一段下がってるのか」

今まで俺が走っていた場所からしばらく進んだところでただでさえ鬱陶しいくらいに茂っている大樹の高さが倍近くになっている。本来ならその全高で壁のように俺の前に立ち塞がるはずの大樹は、地形そのものが階段のように一段下がっている事で上段の木と背の高さを合わせているようだ。

はて、自然にこんな光景が出来るはずもなし。まさかここに来てついにゲーム的配慮……と思っていたら何やら追加武装で空高く舞い上がった征服人形が大太刀（ブレード）で育ちすぎた枝を切り落としていた。
なにその地形規模の庭師、時給いくら？

「こちらです」

「おお……これは中々」

ここに来る前にリヴァイアサンとか言う特大ＳＦを見たせいで若干霞んでいる感は否めないが……成る程、地形の段差を利用して表面上は見えない感じに建物があるのか。

地形の段差を利用して壁面に埋まるようにして存在するその場所こそが征服人形達の本拠地……事務所と書いてドールフロントと読む施設であるらしい。

「ただ、こういう秘密基地感のある場所は規模を問わずワクワクしてしまう少年ハート……」

「秘密基地、という定義はあながち間違いではありません。我々の使命は次世代原始人類から秘匿すべきものであるのも事実ですので」

ふぅん……あ、これもしかしなくてもライブラリ案件か？　いや今は展開を楽しんでいこう。

サイナの案内の元、切り立った崖の縁まで来た俺は謎浮力で浮かび上がった板が階段の形に成形されていくのを特に感情を動かすこともなく……いやこれはすげーだろ、いいねＳＦポイント稼いでくれねぇ。

水晶質な螺旋階段を降り、どこか発着場のような気配を漂わせるひらけた空間に足をつけた俺＋エムルはサイナの導きのままにドールフロントを進みながら……ある種ネタバレになるが故に聞きづらかったそれを遂に聞く。

「なぁ、何となく聞きづらかったがこの際聞くけど……オルケスト

ラって、何？」

「前提説明から始めても？」

「構わんよ」

征服人形のほとんどが前線拠点の方へと行ったためか、広さの割に妙に数の少ない征服人形達に見られつつも、進む道のりはいつしか螺旋状に下へと続く緩やかな坂道へと変わっていた。

「――情報開示申請‥契約者情報送信‥第一認可、第二認可、第三認可……説明を開始します。我々は現在、３つのプロトコルを基礎として行動しています。一つは来たる危機に対して次世代原始人類をサポートする「再征服（レコンキスタ）」計画……」

次に、とサイナは見てくれと言わんばかりにガラス張りの壁を指差す。

「次に、次世代原始人類の手に余る神代人類の遺産をあらかじめ確保、保管する「蒐集（コレクター）」計画」

たとえば戦闘機のような巨大な機械、たとえばヤシロバード辺りが真面目にガラス窓の破壊を目論みそうな携行式ガトリング。他にもまだまだあるファンタジーの「ファ」の字も感じさせないような科学技術の塊が、そこには保管されていた。

サイナの口振りからして、猿に銃を持たせるわけにはいかないとかそういう事だろうか？

「分不相応なアイテムの存在は無用な争いを生み出す……星の海に旅立つ前の神代人類が、厳密には我ら征服人形を生み出した創造主

アンドリュー・ジッタードールが結論とした思想に基づき、我々は現在も回収作業を行なっています。尤も、リヴァイアサンが出現した時点でこの計画に意味はないのかもしれませんが」

そして最後に、とサイナは立ち止まる。気づけば長い通路は終点のようで、そこには巨大な……しかしながら、基本的に金属で形成されたドールフロント内部にはあまりに似つかわしくない木造の「門」がそこにはあった。

「……そして、プロトコル「オルケストラ」。これは「再征服」及び「蒐集」、二つのプロトコルを前提として征服人形とオルケストラとの間で定められた規定です」

「オルケストラ「と」……？」

いやそこまでおかしいわけではないだろう。少なくともこれまで遭遇してきたユニークモンスターの中で明らかに言葉が通じないのはリュカオーンだけだった。話が通じない、という意味ではウェザエモンやゴルドゥニーネ（ボスの方）も大概だが……オルケストラも言葉が通じるタイプのユニークモンスターなのか？

「この扉は、オルケストラによって変質させられたものと聞き及んでいます。元は金属製であったと」

「物質の改変？」

「否定（いいえ）：現実の「侵食」です。かつて神代を滅ぼしたマナの奇跡とも異なる………神代の一端を担う征服人形千基による並列分散リンクですら原理不明（分からない）、正真正銘の「オカルト」ですよ」

「ふびゃっ！？」

「うおっ、どうしたエムル」

その時、頭の上に乗っていたエムルが突然弾き飛ばされた。ダメージが入った、というわけではないようだが……何が起きた？

「どうやら開演の時間のようです。契約者(マスター)、オルケストラに会う事が出来るのは招待状を受け取った者のみなのです」

ぎぎぎ、と誰が触れているわけでもない木の門がひとりでに開き始める。

床に転がったエムルを雑に拾い上げてべしべしと埃を払いながらサイナは俺の目を真っ直ぐに見つめる。

「神代の象徴、三体のバハムートが太陽であるならば、あれらは星……契約者、貴方は数多の星を駆けてきた………それなら、」

意識が遠のく、先の見えない暗闇へと身体が勝手に引き込まれていく。待て待て会話イベント終わってねーぞ、スキップボタンを押した覚えはないしせめて事前に何か確認し………

「貴方は、当機(ワタシ)の疑問にも解を出せるのでしょうか？」

そこで、プツリと意識が暗転した。

今ここに音楽会が始まる。

人形劇を経て、音楽会（後書き）

オルケストラ、開演

あなたの為のオーケストラ　其の一（前書き）

忍者の体幹ガバガバかよお前……
ゼノサジをボコって「俺は強くなりすぎた……」と万能感を補給しなければ早期段階で青ニートになりかねませんよこれは……（自分は心が折れてないという事を証明する為の更新）

システム的に再現されたブラックアウト、というのは分かっているがなんだか不安になるんだよなぁ。転移というシステムがそういうもの、と設定しているのかもしれないが………で、相変わらず前準備無しでボス戦に突っ込んでくれやがった。

「しかも強制ソロとか聞いてねーぞ……？」

……とはいえ、いきなりオルケストラ（詳細不明）が襲いかかってくる、というわけではないらしい。いやに静かだ、そして薄暗い。

「シンボルエンカウント？」

薄暗いが周りの景色が見えないわけではないという絶妙な光量、そして強制戦闘突入でないのなら辺りを観察する余裕がある。

見た限りの印象は、やはりというか「劇場」だろう。装飾に重きを置いた作りの柱や床、しかしながらそれらは主役ではなくあくまでもこの後に来る本命を引き立てるための舞台だ。

とはいえ戦うことが前提であるためか、よくある劇場型ではなくコロシアム型……不自然な程綺麗に整地されている正方形のフィールドは人型であろうと怪物型であろうとその全力を出すのに何ら支障をきたさない。

ますますその正体が分からない……今のところ物語らしい物語のないゴルドゥニーネですらもう少し設定の輪郭くらいは分かるのに、こいつに関してはここに来てほとんど何も分かっていない。そして

いつまで経っても何も起きない！！

「何かトリガーがあるのか？　観客席？」

コロシアムの中には何もないし、となると怪しいのは……ん？　壁に何か埋まってる？

「なんだこりゃ？」

一瞬壁の模様か何かかと思ったが、薄暗い中でもよくよく見てみればあまりにもこの場の装飾から浮いたフォルムをしている。小さな金属塊だ、とはいえ何かのパーツと言うよりもこれ単体で完成しているような……そう、例えるなら小さなデバイスが物理的に壁にめり込んでいるような。

というか目を逸していたが俺はこのフォルムに激しく覚えがある、厳密には父からの話で聞いて調べたことがあると言うべきか。

今でこそ携帯端末で大体のことができる世の中だが、昔は音楽のためだけに使うデバイスなんてものもあったらしい。つまり、その、なんだ……今の状況を言語化するなら、そう。

「何故壁に音楽プレーヤーが……？」

不釣り合いとかそういうレベルではない、誰だってカレーの中にカレー味のスナック菓子が入ってたらおかしいと思うだろう。海の中にビニールプール沈めてまでビニールプールで泳ぐ価値はあるのか？　ないだろう、海で泳げよカレーを食えよ。

バトルフィールドとは言えこんなに豪華な劇場で音楽プレーヤーを使う理由はない、何せこれから戦う相手は冥響のオルケストラ、名前からしてオーケストラ的な敵だろう。

とは言えこの場所において唯一の場違いなものだからこそ、ゲーム的思考から調べずにはいられない。

「やっぱり地球とつながりがあるのかね、アイコンからして地球規格だ……」

丸に縦棒突き刺したような電源ボタンを押せば、ホログラム的なウィンドウが音楽プレーヤーから発生する。

選択できる項目は一つ、プレイリストの名前は……

「エリーゼ・ジッタードール……ジッタードール？」

あれ、さっき聞いたような。でもあっちは名前からして男だったような……んー？

「まぁ何年経とうがここら辺のＵＩが劇的に変化するとも思えんわな」

ボタンを押さなきゃ次には進まないのだ、エリーゼ・ジッタードールなるプレイリストを開いてみればそこには一曲だけ……

「Ｙｏｕｒ　Ｏｒｃｈｅｓｔｒａ……」

あなたのオーケストラ？　ドンピシャだな、これがバトルスタートのフラグだな？　無音の劇場で「あなたのオーケストラ」なんてタイトルの曲を自ら流す、なんかホラー的なものを感じ始めたが……いいね、いつまでも開演前の劇場で時間を潰していられるかよ。

「再生っ……うぉわ！？」

バン！　と四方八方からのスポットライトに俺の全身が突然照らし出される。おいカメラ止めろ！　半裸をピックアップすんな放送事故だぞ！！

だが曲は既に再生されている、停止ボタンを押そうにも音楽プレーヤー自体が目を離した隙に跡形もなく消えている。つまりクリアするか途中で死ぬか、終わらせる方法は二つに一つ！！

「いいぜ来いよ！　獣か！？　人か！？　袋叩きも拒まねーぞ、無双ゲーなら得意分野だ！！」

果たして、現れたのは……一人の女だった。コロシアムのフィールド上じゃない、観客席の方……いや、観客席じゃない？　薄暗いのとあまりにキッチリした設計だから勘違いしてたが、これ四方の内三面が観客席で、残る一面が「舞台」なのか？

「……なんだあれ」

通常ＮＰＣのような肉体のある存在ではない。どちらかと言うと、遠き日のセツナやホログラム「勇魚」のような実体のない幽霊みたいな、明らかに物質的な重さを感じさせない奇妙な女が「舞台」の壇上に現れていた。

正直に言おう、基本的に美男美女がデフォルトなゲームにおいて（そりゃ意図的にパッとしない顔だったり不細工もいるだろうが）ユニークモンスターという目玉コンテンツでここまでパッとしない女が現れるとは思わなかった。

恐ろしいまでのモブ顔だ、一晩経ったら絶対顔が思い出せないようなモブの鑑のような顔をしている。醜いわけではないが美しいわけでもない、最初の村で木こりの妻とかやってそうな顔としか形容で

きない。
魔物襲撃で三番目くらいに死にそうな……と、そんな風にＮＰＣ相手じゃなければ相当失礼な事を考えていた俺だったが、続けて起きた出来事の数々にそんな余裕の思考は跡形もなく吹き飛んだ。

まず最初に、「女」……恐らくエリーゼ氏の出現に続くように何かを持った人型……目鼻も口も、髪もないマネキンのようなのっぺらぼうが現れた。
最初は武器を持っているのかと思ったが……違う、あれはバイオリンだ。

そして次に、現れた人型バイオリニストが手に持った楽器を弾き始め……モブ顔の女、いいやこの場における「歌姫」が開いた口から発せられた綺麗なソプラノボイス。
機械音声ではない、恐ろしく精巧に再現された上手い歌声が静かに歌を歌い始めた。

そしてさらに、歌姫の歌とバイオリニストの旋律に引っ張られるように次々と人型が現れる。ある人型は巨大なコントラバスを、またある人型はシンバルを。コーラスが現れ、フルートが、ヴィオラが、ホルンが、トランペットが……いつしか歌とバイオリンだけだった旋律がフルオーケストラに変わっていく。
そして最後に、それは「舞台」ではなく「コロシアム」に現れた。

「………は？」

人型だ、知っている。
武装している、それも知っている。
中世ファンタジーでは異質な和風の鎧だ、知っているさ。

だってお前は、テメーのその面は……！！

『【サンクの紡いだ物語】第一楽章……「墓守は憩う」』

「ウェザエモンだと……！！？」

幻影のような、ホログラムのような不安定な姿だがあの特徴的な鎧はたった一度の交戦だとしても忘れるものではない。
というか待て、今壮絶に嫌な予感がしている。

貴方の為の歌、俺の紡いだ物語(サンラク)、第一楽章、吟遊詩人、英雄譚

そこから算出される答えは………

「今までに戦ってきた相手を、再げ――――」

「断風(タチカゼ)」

そこで思考は消し飛んだ。

あなたの為のオーケストラ　其の一（後書き）

冥響のオルケストラ

プレイヤーのログを参照して歴戦値の蓄積率が高かったエネミーを再現する。要するに「お前という物語における強敵を抜粋したボスラッシュ」

あれれー？　やたら強敵とのエンカウントが多い半裸がオルケストラに挑んだらどうなるのかなぁー？？？？　答えはＣＭの後

あなたの為のオーケストラ　其の二（前書き）

しらふじ　おまえ　まじ　ほんと　おまえ
せめて　りろーど　しろ

あなたの為のオーケストラ　其の二

晴天流「断風」……ウェザエモンが扱えばそのどれもが必殺足りうる流派に属する絶技の数々、その中でも間違いなく最速の抜刀術の名だ。

最速で抜く、最速で斬る、最速で収める……全部最速にすれば最強だよね？　と言わんばかりの初見じゃなくても殺される必殺の刃が今、数ヶ月ぶりに俺の首を狙って抜き放たれた。

だが、この時点で一つわかったことがある……

「ん……っのオラぁ！！」

ガイィン！！　と凄まじい衝撃が防御に用いた傑剣との憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）と傑剣（デュクスラム）への憧刃ごと俺の身体を吹き飛ばす。だが俺のステータスによって実現した攻撃的クリティカルガードは二つの黄金剣の耐久も、俺自身のＨＰも減らすことなく必殺の抜刀を防御することに成功していた。

「ステータスに異常なし……レベルダウン能力を忘れてるぜパチエモン！！」

……完全再現じゃない、「断風」の防御なんて本来は無理だ。だがこの戦闘が開始してから変動していないステータスと第一楽章という単語で確信した……耐久か、撃破か、どちらにせよ再現ウェザエモンは本来のユニークモンスター「墓守のウェザエモン」の下位互換（デッドコピー）ってことだ。

少なくともレベルダウン結界が無いだけでも即死級チート攻撃が即

死級危険攻撃、くらいにまでは軽減されている。問題は「倒すのか」「耐えるのか」って事なんだが…………いいや、今はこの幸運に感謝するべきかな？

「レベルアップして、晴天流を解放して……いつも気になっていた」

ウェザエモンのステージギミックを否定するわけじゃないが、ああいうのは一種のイベント戦と言うか通常時の戦闘とは明確に異なるが故にとある疑問が浮かぶものだ。
そう、例えばレベルダウンしていない今の自分がウェザエモンとガチったらどうなるの、とか考えちゃうんだよなぁ……！！

「来いよパチエモン、あの日の俺と同じと思うなよ？　今の俺は……かなり強い！！」
「大時化（オオシケ）」
「見様見真似するほど知ってんだよその投げはァ！！」
再現ウェザエモンの巨体が一気に俺へと詰めてくる。伸ばされた手に掴まれれば受け身を取る暇もなく投げられ叩きつけられる。だが今の俺ならその動きを目で追えてしまう、避けながら反撃を行う事だってできる！！
「っしゃあ！！」
二つの剣を上空へと放り投げ、各種スキルを連続起動して己を高めつつ取り出したアラドヴァル・リビルドを両手で握りしめる。
致命秘奥【タチキリワカチ】、片手剣としても両手剣としても扱える混血の剣（バスタードソード）だからこそ使える月を断つ二連撃が再現ウェザエモンの

二の腕に傷を刻む。手の中でその実体をインベントリの中へと消したアラドヴァル・リビルドに変わって落ちてきた二つの黄金剣をキャッチ、連続攻撃を再現ウェザエモンへと叩き込む。

「どうしたどうした！」

「雷鐘(ライショウ)」

「ならこれで同速(タメ)だな」

封雷の撃鉄(レビントリガー)・災(ハザード)、あの時は持っていなかった黒い雷の力が俺の身体を過剰なまでに速める。真界観測眼(クォンタムゲイズ)起動、可視化された攻撃の軌道が恐ろしい数の「死」が俺に降り注ぐことを予見する。だが遅い、一発の落雷が速かろうとＤＰＳ(連射力)が回ってねーんだよ。

「だからこんな真似も出来る……！」

再現ウェザエモンを軸に一周。過剰挙動を限界まで飼い慣らした精密運動による極小の円運動は一筆書きで丸を描くようにウェザエモンを落雷で囲む。だがな、筆によって塗られた軌跡は筆自身に追いつくことは出来ない！　追尾の落雷、その最後の一発が一秒以下の時点で俺がいた場所に落ちた時……俺は既に攻撃動作を始めている！

「っ！！」

大上段に黄金剣二振りを振り上げた俺へと再現ウェザエモンが刀を振るう。だがその刃は「俺」の腰から肩へと一切の抵抗なく、まるで幻覚のようにするりと通り抜けて……ウツロウミカガミの背後では百足式(ムカデシキ)８一０(タウゼント)・５をフルスイングする俺の姿が。

「おおぉりゃあ！！！」

快打、面頬へクリティカルにめり込む機斧槍。流石に派手に吹っ飛ぶとまではいかないがイイのを食らわせてやった。このまま削り倒してやるよオラァ！！

……

…………

……………

と息巻いたのは何分前のことだったか。

「い、いつまで続くんだこれ……！？」

おかしい、まさか体力据え置き？　んなわけあるか仮にジークヴルムとか出てきたら完璧無理ゲーじゃねーか。それを差し引いても確かウェザエモンって形態進行で体力が自動的に減っていくタイプだったろ！

「くっ、なめんなっ！」

これでも徹夜で孤島サバイバルとか平気でやってた身だ、やろうと思えば徹夜で戦うこともできないこともないかもしれないが……できる、とやる、では別問題だしそもそも再現ウェザエモンで終わりというわけでも無いのだからこの状況をクリアする方法を考えるし

かない。
状況整理だ、再現ウェザエモンに関しては省略。この戦闘において重要なのはこれがオルケストラのギミックであるということだ。大時化回避、カウンターを入れる。
オルケストラの能力はおそらく「物語の再現」……吟遊詩人が英雄譚を謳うようにプレイヤーがこれまでに戦ってきた強敵を一部再現で召喚する。だが単純に倒せば良いというわけではなさそうだし、時間制限ってわけでもなさそうだ。余裕があるときに数えてみたがあの「歌姫」が歌ってる歌……というかオーケストラによる演奏そのものが既に４ループくらいしている。つまり何らかの条件を達成しなければ永遠に戦う羽目になるってことだ。雷鐘、ウツロウミカガミエスケープで対処。

なんども実感しているがシャンフロは設定重視、時にはゲームバランスよりも設定が優先される……というよりも設定ありきでゲームバランスが形成されている。つまりここで重要なのはオルケストラを設定面から考察すること。そういう点ではライブラリこそがシャンフロ攻略における最適解なのかもしれないな。

「オルケストラは……英雄譚を謳う！」

英雄譚は、英雄の偉業を語るもの！　なら、この状況とどうリンクする！？　英雄譚、偉業、成したこと……成したこと？

「そうか！！」

よーし、考えろ！　フル回転してる脳みそに頑張って空き容量を作り出せ！　んでもって空いた脳みそで記憶を漁れ！！　えーと、あの時は…………………クッッッソ晴天大征しか記憶にないぞ！？
ええい頑張れスカベンジャー！！

『――墓守は、愛ゆえに、目を離し……英雄は、刃を、見据えて……』

「そうだ思い出した！」

ＢＧＭと思っていたが違う、「歌姫」が奏でる歌声……その歌詞は！！

これなら行け……いや武器がねーよスキルもねーよ再現無理じゃん！！　いや、待て、流石に旧大陸で戦った時の装備そのままでここにくるなんて想定はされてない、なら……！！

「来い！　状況再現（クライマックス）だ！！」

「晴天大征（セイテンタイセイ）」

来る、ウェザエモン最後の切り札であるリキャストキャンセル即死連打！　だがそこは重要じゃない、大事なのはラストの「天晴」――――！！

雷の雨が降る、駆け抜けた先に雲の腕。ジャンプすれば炎が降り注ぎ、煙が俺を捕らえようとする包囲から抜け出せば神速の抜刀術。今思えば天秤で強化されていたとはいえレベル５０固定のステータスでよく対処したな俺。

だが今の俺なら、油断しなけりゃ当たらない攻撃でしか無い。そして問題の最後……ウェザエモン究極の一撃、避けれず受ければ刃が毀れ肉は容易く断たれる「天晴（テンセイ）」……あの時俺はどうしていた？

回復ポーションガチャに二度失敗しつつもその時を迎える。こうしていたのさ……！！

「奥義開眼、名付けて肉抜刀……！！」

サクッと自刃、幕末を駆けていればおのずと鍛えられる切腹テクニックによってするりと腹に刃が通る。システムの判定により確定で体力が1だけ残り……そして横っ腹に刺した傑剣への憧刃をさながら己そのものを鞘であるかのように振舞わせて抜き放つ。

狙うは刀の腹、あの時は二つのスキルが必要だったが今の俺なら真界観測眼だけで事足りる……っ！！

「訓読みフィニーッシュ！！！」

斬！　と俺のすぐ隣の地面に再現ウェザエモンの刀が突き立てられる。完全再現はどう考えても無理、だとすれば似たような状況を作れば良いんじゃないか？

『――そして、墓守は、ようやく、永く、憩う……刹那、想うは、誰の顔……』

その答えは、第一楽章を〆る「歌姫」の歌詞と、消え去るウェザエモンの幻影だった。

「天晴（テンセイ）」攻略、読みを転じて「天晴（あっぱれ）」に御座る……ってな。さぁ次行ってみよう。

あなたの為のオーケストラ　其の二（後書き）

英雄譚に独自解釈はいらない、演じるなら脚本に忠実に

あなたの為のオーケストラ　其の三（前書き）

シラフジお前……エリア封鎖、してないのか……？

「っっっっしゃあ！！」

サンキューパチエモン！　二度と出てくんなバーカ！！　「ウェザエモン」を名乗るなら恋人でも作ってからにするんだな！
だが油断はできない、オルケストラは英雄譚における苦難……つまり強敵を再現してくる、何が出てくるか……心当たりが多すぎて我ながら怒りすら湧いてくる。もうお前生産職になれよ、畑耕してもうちっと平和なゲームライフを送る気はないのか。

「ないなぁ……！！」

俺はサバイバアルやヤシロバードほど頭はおかしく無いが、それでも危牧なんかでは積極的に災獣に戦いを挑むタイプだ。根っこの部分がアクションゲー向けなんだなこれが。
さて、呼吸を整え体力を回復しているうちにオルケストラは第二楽章へと入ったらしい。

『【サンラクの紡いだ物語】第二楽章……「夜空、地の月」』

ヴァイオリンの数が増えた、あとなんだっけあの笛……パッケラパッケラ歌うやつ……ああそうだクラリネット。
その数を増やしたオーケストラの音圧がさらに増していく。それに対応するかのように、劇場全体が震え出して……いや違うぞ、これは音関係なくフィールドが揺れている！

「うおぉ！？」

ずごん！　と眼前の地面から何かが飛び出す。まさか新手の奇襲？

　音楽と見せかけてやっぱダイレクトに殺しにくるのか？　だが地面から生えてきたものを、そして今なお生えてきているものを見てその疑惑は解消される。

「地の月……そして水晶フィールド……そうかよ、次の相手はお前か！！」

瞬く間に劇場が水晶に覆われていく。現れる幻影、月のない地下（のはず）において、大地に輝く月光の黄金がその巨体で俺を威嚇する。その鋏脚は同族を狩ることに特化している、その尾はより攻撃的に進化している……すなわち、そのモンスターの名は金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）！！

「…………」

えー、あー、うん。まぁ確かに「サンラク」というアバターが今に至るまでを物語とするなら決して外すことのできない存在ではあるんだが……その、な？

「防具を作るにあたり、乱獲したから割と慣れてるし……」

物語的に再現しなきゃならんのは多分初めて戦った時だろうけど……さて、とりあえず戦いつつ歌を聴いて思い出すか。

『――夜空、空に月光、照らし、蓄え、地に月の蠍』

金晶独蠍は距離を離すと尻尾から毒液をレーザーの如く飛ばしてくる、だから基本的な戦術はインファイトが望ましい。

全身攻撃特化だからな、鋏や尻尾の針には相当な自信があるのだろ

う。奴の取る行動の殆どはそれらに依存しているし、だからこそ読みやすい。

俺の身体を挟んで断ち切らんと開かれた鋏をジャンプで回避、そのまま鋏を踏み台に蠍の胴体に跳び乗る。

すかさず串刺しを狙った針の刺突が繰り出されるが、刺突というものは横から打たれると弱い。いなし、的外れな方向に伸びていった尾に刃を叩きつけ、振り落とされない内に自ら飛び降りてスタミナを回復。

「基本はこの流れの連続だが……」

さて、初戦の時はどう戦ったっけか？

『――月を穿つ刃、されど握るは拳、幸運が、月を貫く』

「リメンバーッ！！」

思い出したぜ！　お前もそうだろう傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）！　俺の記憶が正しければ、あの時ブッ刺した湖沼の短剣は傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）に強化した方だった筈。

ならば状況再現だ、多脚によって生み出される回転力が単純な質量以上の殺意を尾に込めて一回転する中で走り高跳びの如く身体を捻って跳躍、床から突き出した水晶を足場にしつつ着地して一気に距離を詰める。

「人力パイルゥ……！」

やけにあっさりと傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）の鋒が金晶独蠍の目に突き刺さる、物語の再現だからこそ「正しい状況再現」が通りやすくなって

いるのか？　まぁいい、やることはただ一つ……百秀の神腕（サウィルダーナハ）起動！

「バンカァーッ！！」

打撃強化された拳が傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）の柄尻を強打、押し出された刃が金晶独蠍に深々と突き立てられる。

当然再現された敵といえど深々と剣を突き刺されたならば暴れまわる。巻き添えで潰されては堪ったものではないと急ぎ距離を離して次の歌詞を待つ。

『――目覚め、波濤、同胞は、敵を呑む、故に、月光は、暁に消えゆく……』

「え？　ん？　えーと……………あっ、思い出したけどマジですか！？」

ゴゴゴゴゴ……と地面が揺れ始める。その揺れが俺にかつて何が起きたのかを思い出させる。そうだ確か俺はあの時……待って！

インベントリアナーフされてるんですけど！？！？

揺れはますます酷くなっていく、剣山のごとく屹立する水晶が爆ぜるように砕け散り、新たに巨大な蠍が再現されていく。その数は三、五、十……おっと、埋まるなこれ？

「き、距離を……！！」

この後に起きるのは文字通り水晶の大津波、下手な自動車より極悪な蠍共が自滅承知で突っ込んでくるキラー・おしくらまんじゅうだ。あの時はインベントリアによるエスケープで凌いだが……この狭くはないが広くもない舞台の中でインベントリアの制限に引っかからないモンスターから離れた座標を確保できるか！？

「右！」

だめ！

「左！」

今増えた！

「前……は論外、後ろ！？」

壁！　いや観客席……ダメだ！　ボス戦特有の謎バリアーが張られている！　畜生どうする！！

「上だあああああっ！！」

臨界速（ブラディオン）はダメだ、天井に激突して死ぬ。どうする、臨界速に機動系スキルぶっこんでるから足で上に行くのは不可能。だったらマジックパワーに頼るしかねぇ！！

「持っててよかった使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）！」

【瞬間転移（アポート）】のスクロールを使い、上空の座標へと転移、そしてその場でインベントリア！！

「っく……なんだかすげー久しぶりに使った気がする……」

外道共と話す以外だともっぱらエスケープにばかり使っていたせいか、身体に染み付いた動きが無意識のうちにＭＰ回復アイテムを手元に喚び出している。それを使いつつ息を整え、再び現実空間へ。

「よーし、思い出してきたぞ」

いや、水晶群蠍を撃退して見せたあの金晶独蠍の姿を忘れたわけではないが、ぼんやりとした「思い出」がはっきりとした「記憶」に戻った感覚だ。この後がクライマックスだろう、さぁ歌えよオルケストラ。

『――暁の光、薄らぐ月光、消えゆく月光、朝日受けなお輝く月光……三の月輝く時、英雄は……』

「『月を断つ」』

致命秘奥【タチキリワカチ】、あの日昇る太陽の光を受けて輝いた刃の光が再び輝く。一太刀を入れ、返す刀で同じ軌跡を斬りあげる二連の斬撃があの日と同じく黄金の蠍（月）を討った……これにて第二楽章は終わった、そうだろう。

「さぁ次は何がくる？」

再現金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）が消えていく。それと同時に床を覆う仮初めの水晶平原もまた粒子となって消えていき…………いや違う、これは、水晶が、赤く………！！

「マジかよ」

砕けたはずの水晶がどろりと溶けていく。透明な輝きは禍々しい「赤」に汚染され、どろりと広がるそれは血のようで……まるで水面に顔を出すように、一面に広がった「赤」からそれは現れた。

『【サンラクの紡いだ物語】第三楽章……「赤く、赤く」』

貪る、大赤依………！！！！

あなたの為のオーケストラ　其の三（後書き）

実はまだ創世さんがイジった「オルケストラの追加要素」は出ていない。つまりこの再現ボスラッシュはオルケストラの元々の性能

無論サービス開始前の段階では創世さんの意向で「当時の性能据え置き」で出てきていたがりっちゃんが頑張って「部分的再現」にナーフした

あなたの為のオーケストラ　其の四（前書き）

インベントリアが今すごい（すごい）

俺が戦った時に準拠しているらしい青竜の骸が突っ込んでくる。それを回避しつつ、尻尾から放たれたレーザーを身体を捻って避ける。
貪る大赤依、恐らく一番最初に倒されたであろうレイドモンスターであり何を隠そう倒したメンバーには俺も含まれている。当たり前だけどな。
だが問題がいくつかある、ウェザエモンは実質ソロのようなものだったし蠍は基本ソロだからまだいいが、こいつに限ってはパーティプレイじゃなきゃ倒せなかった手合いだ。
そして何より……

「どういう手順で倒したとか、覚えてねーよ……！！」

いや、大まかな要点は覚えてるんだ。問題はそれがどのタイミングでどのように発生したのかを覚えてないってだけだ。
まぁ？　俺って犬が棒に当たる確率よりイベントに遭遇する確率高いし？　記憶容量がいくらあっても足りないというか……うおお危ねぇ一斉レーザーはやめろ！！　ていうか頭がやたら増えてるのって第何形態だっけ？

ビームの厄介な点は基本的にガードできないという点だ、いや冥王（ディ）の鏡盾（ス・パテル）があるからその点は解決してるが一般論の話だ。
それに盾があるのは大きいが奴は複数の頭を持つ、複数の銃口を待っているのだから盾一枚で防ぎきれるとは流石に思えない。
あと冥王の鏡盾は何気に結構重いので、ならいっそ回避に専念した方がいい。

「それに……！」

さっきの蠍戦で確信した、このオルケストラによる再現モンスターは必ずしも俺にのみ敵対的とは限らない。かつて起きたことを再現するなら、貪る大赤依との戦いをなぞるのなら。

「来いよ兄弟、ワンモア共闘しようぜ……！！」

赤く穢れた舞台、オルケストラの演奏が奴の登場を演出する。

どこからともなく風のように流れてきた光が渦を巻いて塊になって、それは三つの頭とそれを支えることが出来る屈強な胴体の形になっていく。

″緋色の傷（スカーレッド）″じゃない、「傷（スカー）だらけ」時代の再現されたドラクルス・ディノサーベラスが咆哮を上げる。

そうさ、例の変態やヘタレ共の勇者トットリ、エムルと俺だけじゃ貪る大赤依は倒せなかった。それでも俺たちが勝利できたのは、一重にこいつが参戦したお陰だ。ＭｖＭ、いわゆるモンスター同士を争わせるテクニックの一つだが……再現された戦いであっても、テンションは上がるというものだ。

「ＢＧＭっ！　音圧上げろよ盛り上げどころだぞ！！」

実際その通りになった。轟、と音そのものが俺を叩くかのような大音量でオーケストラが旋律を束ねる。

そして地味な顔とは反対に楽器群の競い合うかのような音のぶつかり合いすらをも従えた「歌姫」の歌が朗々と響く。

第三楽章が具体的にオルケストラというボス戦のどこら辺に位置するのかは分からないが、オーケストラの規模からしても中盤くらい

は行ってるのだろう。

『――赤い光、赤い炎！　ぶつかる闘志、英雄は、三頭の竜と、肩を並べ視線を交わし……戦って！』

なにせ第一、第二楽章の時と比べて明らかに歌のテンションが高い、サビ前の盛り上がりのような感じだ。

パッとしないモブ顔も、「傷だらけ」と貪る大赤依が戦う中でも翳りなく声を張り上げていれば風格も出るというもの。この場において「音」を支配していると言ってもいい女はまさしく「歌姫」であった。

「おっと、」

いけないいな。英雄譚の主役がボケっと突っ立ってる訳にもいかない、基本的にＭｖＭはヘイトをモンスター間で完結させつつ横からチクチク刺していくのがセオリーだ。

だがあの時はテンションが上がったのもあって……もっと積極的だった気がする。

「一流のアタッカーはモンスターに合わせる事もできる……ってか！」

再現「傷だらけ」の股下を駆け抜け、あの時の姿そのままに再現されたからこそ、巨大な「口」だけに守られた核を露出させるべく歯を剥き出しに閉じられた胸部の大口へと煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手を纏う右拳を叩き込んだ。

「砕けろ！　悶えろ！　今すぐ知覚過敏になれ！」

こういう時、いろんな武器種に手を出してる弊害が出てくるな。いや、そもそも機動力と素殴りに依存してるから攻撃スキルが少なすぎるんだが……無い物は無い！　喰らえ！　歯周病になれ！

当時の傾向を反映しているのか、再現「傷だらけ」は再現貪る大赤依ただ一つを睨みつけて戦っている、だが足元の人間に敵対こそしなくとも配慮までしてくれるわけではない。

コツは欲張りすぎず、止まり過ぎないこと。しかし蜂のように刺す！

「ナパームか！」

急ぎ後退、「傷だらけ」が吐き出したゲ……可燃性の痰が貪る大赤依に付着、次の瞬間着火した痰が容易に消せぬ炎となる。

「Ｇｙｏｒａｒａｒａｒａｒａｒａｒｒｒｒｉｒｉ！！！？」

いいね有効打だ、貪る大赤依の正体は大量の飛蝗が一つの生物のように振る舞う群体存在だ。だから極論を言えば打撃斬撃などは大したダメージにならない。あの巨体からすれば爪楊枝の先端で引っかかれるか尻を押し込まれるか程度の違いでしかないだろうからな。だが炎は面でダメージを与える上にゲロナパームはそう簡単に消えない、味方になると非常に心強い継続ダメージソースになるわけだ。

とはいえ……懸念がある。流石の俺でもはっきり覚えている戦いの記憶、俺と「傷だらけ」と貪る大赤依……この三者が同時に陥るイベントがある。

そしてそのイベントはどう考えても「プレイヤーのいち魔法程度、スルーしてもいいよね」とはならないもので……つまり何が起きるかといえば。

『――見上げ、大地、見下げ、深淵。天に土、地に闇。おお、世

界は逆転する……！！』

観客席に激しく見覚えのある杖（本物ではないだろうけど）を持った人型が現れたのを見た瞬間、とりあえず奴を殴り飛ばそうとノータイムで決心してしまうくらいには奴へのヘイトが高まる。

「あんのクソ変態ィ……！」

狭くはないが広くもない筈のコロシアムが物理法則では絶対にあり得ない動きで「拡張」される。

地響きを立てて広がるとかそういう次元ではない、ＳＥで例えるなら「にゅっ」とか「ぐいっ」とかそれくらいの気軽さで、この劇場はスタジアムと言って差し支えない広さになったのだ。そして深さも……

「くっ……わぁーったよやりゃいいんだろやりゃあ！！」

あの時はスキル連結をしていなかったが、今は違う。臨界速（ブラディオン）は立ち止まることを許さない、どうやってこの深淵の底まで降りる？　空中でインベントリアに逃げ込むのも手だが、この後に起きるイベントを考えると下にいた方がいいだろう。

真上から迫る超質量が深淵を圧し潰さんと迫る。大穴の縁から流れてくる「歌姫」の歌はこれから起きる事を歌い上げるだけでどうやって降りればいいのかなんて教えてはくれない。畜生め、具体案を出せ具体案を。

だが臨界速で高所から着地する方法は一つしかない、三歩で下まで加速して二歩で着地する。道理を無理で踏破する半自殺行為だ。

「だが、念のための保険だ……っ！」

傑剣(デュクスラム)への憧刃を真下へと投擲、俺よりも僅かに先行して落ちていく黄金の剣が暗闇に消えて………

キンッ

「はいここォーっ！！！」

暗闇の中で、聖剣でも魔剣でもない黄金剣こそが俺の命を繋ぐ。底にぶつかった音を頼りに両足裏を素早く地面に叩きつける。
臨界速は踏みつけてから発動するまでにほんの少しだけ「間」がある。
それこそステップ一つ入れられるかどうかの僅かな隙間だが……だからこそこういう芸当ができる、素早く両足を地面にぶつける事で二歩分の加速を一度に使うダブルドライブ！！

まるで地面の下から巨大な力に殴り飛ばされたような衝撃、三歩分の加速も入った落下エネルギーを二歩のエネルギーが上書きする。
恐らくだが高さが足りなかった、三歩分を込めた落下エネルギーでも一歩踏むごとに加速を高める四歩目と五歩目につり合いきらなかった。

「どぁああ！！？」

だからこうなる、跳ね飛ばされた俺の身体がふたたび深淵の中をクルクルと舞って……はい最強、はい巧妙、はい百点！！！
若干六割程削れた体力を回復(ガチャ)しつつ、轟音と共に落ちてきた二体の怪物に目を向ける。あ、巻きでいく感じですか？

「【転送：格納空間（エンタートラベル）】！！」

落ちながら例の筋肉サイクロプスに変貌していた「赤」を余所に、俺はかつてと同じく格納空間へとエスケープするのだった。

あなたの為のオーケストラ　其の四（後書き）

今後ともますます頑張っていきます（隻狼に詰まったので更新している、また天守閣かよ）

あなたの為のオーケストラ　其の五（前書き）

ラスボス倒せなさ過ぎて藤原竜也みたいな事になってる

なんで……？　なんでどいつもこいつもしれっと飛び道具使うの……？

裏ボスは倒しました（マジで倒した時踊った）

条件を満たさなければ延々と続く演劇ではあるが、条件を満たしたら満たしたで巻いていくんだよなオルケストラ……

回復アイテムで餌付けした再現「傷だらけ」のセンターヘッドに咥えられた俺はなんかもう気持ち悪いくらいその形を歪める劇場が形成した坂道を登り、元の形になったコロシアムへと戻る。そしてそこにはすでに最終形態である赤い竜巻を背負った再現貪る大赤依がこちらを待ち受けており……

『──駆け抜けて、炎の、道を！！』

「ナパームロード開通！！」

ここは覚えている、俺の左右を逆るナパームの炎が作る道を駆け抜けて再現貪る大赤依へと肉薄……守りに入った胸部の大口に攻撃を叩き込んでいく。

確かあの時もこうやって煌蠍の籠手で……あれ？　いや待て違うぞ、あの時は確か……

『──二つ姿、闇に身を包み、乙女は墓標携え死を悼む……』

「だぁーっ！　しまったァーっ！！」

己の記憶に騙された！　煌蠍の籠手で大ダメージを与えたのはブライレイニェゴの方じゃねーか！　ちょ、ちょっとタンマ！　あ、ダメ？

「舐めんな！！」

ガンガン殴っていた大口を足場に跳躍、空中で跳躍しつつ聖杯を使って性転換。随分と細くなった足で「傷だらけ」の背中に着地してさらにウィンドウ操作、使い捨て女用装備を纏いつつR．I．P．を起動させる。

「変身完了……！」

この姿の俺が携える墓標、即ち別離なく死を想ふ（メメント・モリ）を取り出し構、え……おっも！！　え、なんでこんな重……あっ、キルスコア稼げてねーのか！！

「うお、ちょ、待っ」

そしてもう一つうっかりミス。別離なく死を想ふは使用者が体感する重量を軽減する能力を持つ。つまり俺自身が軽く感じ、軽く振ったとしても俺以外の存在からすれば人の膂力では持ち上げる事すら困難な特大剣そのままということだ。それは攻撃される相手へのダメージというメリットに繋がるが、今回に限っては「傷だらけ」の背中に突然超重量の重りが載せられるというデメリットとなってしまった。

「傷だらけ（スカー）」が煩わしいと言わんばかりに身体を激しく揺らす。当然俺の身体は奴の背中から転げ落ち、ジュラシックタップダンスから逃げるためになりふり構わずに転げ回ることになった。

「ちょ」

顔の直ぐ隣に爪！　こっちに回避！

「ヴェ」

ワンテンポ早かったら上半身と下半身がサヨナラしてたぞ、こっちに回避！！

「ひえっ」

拝啓父上母上、男に産んでくれてありがとう。ガニ股に抵抗があったら下半身が押し花にされてました……離脱離脱離脱ぅう！！

「あ、あっぶねぇ……」

誰がタップダンスされる床の体験をしたいなんて言ったよ、だが困った……別離なく死を想ふを持ったまま回避なんて出来るはずがない、つまり捨て置いたのなら拾いに行かなければならない。そしてさらにもう一つ問題がある。

確かあの時俺は片手で扱えるくらい軽量化した別離なく死を想ふとアラドヴァル・リビルドによる二刀流で戦ったはず……今の状態では別離なく死を想ふを片手で扱うことはできない。どこかでキルスコアを稼がなければならない、そしてオルケストラが状況再現させる性質を持つのならどこかにヒントというか救済策があるはずだ。だってソロ固定だし。

「やっぱあの竜巻か？」

貪る大赤依の正体は飛蝗の群れだ、その性質を完全再現しているとなれば本体の背中から発生している竜巻は実質的に大量の当たり判定とＭｏｂ判定を持っているわけだ。

爆炎と魔力光が乱舞する中で、即興だが確信を持つに値するチャー

トを組み上げていく。拾って、前に、斬りつけて……よし、あとは実行あるのみ！　ミスがなければ最速それがＲＴＡってなぁ！！

「行くぜ理論値！！」

前へ、踏み潰されていることこそないが拾うのになんら苦労しないかと言えばそうではない。それに踏み潰されない保証があるわけでもなく、であればここで選ぶべき手段は最速最短で拾うこと！！

一気に距離を詰め、ただ動きの余波として揺れるだけでこちらを吹き飛ばしかねない「傷だらけ」の尻尾をスライディングで回避、立ち上がりつつ手の届く距離まで来た別離なく死を想ふの柄を両手で掴んで担ぎ上げる。

「っ！」

おのれ、再現されてても俺を狙うか尻尾頭！　だが甘い！　最速チャートだからこっちが先手！　次のターンも俺！　エクストラターンとキルスコア寄越せコラぁ！！

「運動エネルギィィィ！！」

全力の投擲、投げ飛ばされた別離なく死を想ふの行き先を見る前に回避！
多頭モンスターの厄介なところはそれぞれが独立した眼を持っている事だ、それと同時にそれらは一個体である事だ。全ての目から投げ切らねば視線を遮ることは基本的に不可能、一度避けたところで捕捉されている限りは追われるしそもそも奴の攻撃はビームタイプだからそのままホーミングしてくる！

「だが回避すればそれでいいのさ！！」

欲しいのはもう一手打つ為の時間だ、ウィンドウを操作して取り出した冥王の鏡盾（ディス・パテル）でビームを受け流すように傾けて構える。簡単な理科の実験だ、レッツ・リフレクション！！

「手応えあり！！」

体力が回復する、それはつまり投げ飛ばした別離なく死を想ふがキルを稼いだということ。武器が仕留めれば防具が応える、地面に落ちた特大剣を拾いに行くべく円盾を構えながら走り出す。冥王の鏡盾ならブレスは防げるがその場で踏ん張る必要がある、つまりロスだ。ならやはり回避安定、あえて再現貪る大赤依へと距離を詰めていく！

「背中を借りるぜ大赤依！！」

意図せずして背中コンプか？　いやそれはどうでもいい。重要なのは尻尾頭は本体の背中、厳密には尻付近……腰？　を転がるように盾を押しつけながら飛び越える俺に対してブレスを撃たないって事だ、自分に当たるもんなぁ？

落ちた別離なく死を想ふ（メメント・モリ）を拾い上げる、いいね片手で持ち上げられる。条件は満たした、あとは詰めていくだけだ。

お望み通り英雄譚の再現をしてやるよオルケストラ！！！

◆

貪る大赤依が溶けるように崩れ落ちていく。ただあの時と異なる点があるとするなら飛蝗が塵のように消えるのではなく紐のように光に解けていくってことか。

そして、この場において本物は俺だけだ。当然再現された「傷(スカ)だらけ」も消えていく。

「サンキュー兄弟」

さーて……そろそろフィナーレを見せて欲しいもんだがね。オーケストラって十も二十も演奏やるもんなの？　ボスラッシュ的に五、六くらいで勘弁して欲しいが。

『【サンラクの紡いだ物語】第四楽章……「悲劇の終幕を、死後に改め」』

「むっ」

R．I．P．が解除された？　というか、男に戻っているだと？　んな馬鹿な、死ぬまで解除されないはず……まさか、システムレベルでオルケストラが優先されている？　そして、貪る大赤依の後に何が来るかと身構えていたがあのタイトル……難易度は段階というわけではない？　と、なると……

何か今、ものすごく嫌な予感が脳裏でちりついたが気にしている場合ではない。

「これの攻略法は流石に覚えてるんだよなぁ……」

今はこのボーナスタイムを速攻でクリアした方がいいだろう。

あなたの為のオーケストラ　其の五（後書き）

本編の息抜きに掲示板を書き、掲示板の息抜きに本編と同じ真理書を書く

無限ループ……！！

◇

メインサーバー「リヴァイアサン」へアクセス、プレイヤー・サンラクのログデータを参照。

隠しパラメータ「歴戦値」を計測、基準値を満たすモンスターデータをロード。

そうして呼び出された三体のモンスターを相手にプレイヤーが駆け回っている中、「オルケストラ」は演算を続行する。

――これまでの戦闘リザルトを計測

――平均値を上回るスコアを算出

――WM（ワールドマスター）権限による「正典（カノン）」プログラムの使用に問題はないと判断

――MS1申請……認可

――MS2申請……認可

――MS3申請……認可

――SS1・2・3・4・5・7……決議申請

――否、可、可、否、可、可

――結論、「正典」プログラムを実行する

人知れず、「神託」を受けたオルケストラが自らのプログラムを書き換えていく。

英傑へ試練を、第四楽章を乗り越えた貴方へ捧げる最終楽章：真。

乗り越えるべきは大敵に非ず。

◆

タネが割れれば難易度が低くなるギミックなんてものはこの世に腐る程存在する。

例えば、おしおきエネミーとレアエネミーの死後夫婦喧嘩に見せかけて実はアメフトとバスケを融合させた新感覚鬼ごっこだったこのユニークだったりな。

「出るとと分かってんならどうとでもなる」

亡国の悪姫霊からデュラハンの首を奪取し、オーバーヘッドでデュ

ラハンへと叩き込む。謎パワーで頭に誘導され、胴体と首が合体した元首無しの将軍とストロング嫁がラブロマンスを繰り広げ……あー、コーラとポップコーンある？　塩味。雰囲気が甘過ぎて胸焼けしそうだ。

「さて、次はなんだ？　リュカオーンか？　ジークヴルムか？　それとも広げて百足でも出すのか？」

百足はやめて欲しいけどな、流石にあれソロでタイマンは勝ち目が薄い。

再現されたモンスターが消えると同時、オーケストラの演奏もまたピタリと止まる。
騒々しい程に奏でられていた楽器群が静かになった事で、劇場そのものの時間が止まってしまったようにも見える。

『【サンラクの紡いだ物語】………最終楽章』

「これでラスト？」

なんか妙にあっさりとしてんな、いや他のユニークが複雑過ぎるだけって可能性も……んー？　いや、まずは目の前の敵をなんとかする事だろう。
今や数十人規模の人型に囲まれた「歌姫」がすっと一歩前に出る。

『ラ――――』

その口から放たれた歌詞すらないただの「声」は、しかし根源的な音楽に言葉などいらないと言わんばかりの美しい旋律を奏でる。

『ララ、ラ――』

「む」

見間違いか？　今……いや違う、見間違いじゃない。確かに今、オーケストラを構築する人型が消えたぞ。

そこからは見間違える事などない速さだった。フルート持ちが消える、トランペット持ちが消える、シンバル持ちが消える、消える、消える……何が起きている？　最終楽章だろ、オーケストラが減っていくって……何か悪いフラグを踏んだ？　それとも前準備ってだけか？

気づけばオーケストラはもう数えられるほどしか残っていない。チェロ持ちが消えて、クラリネット持ちが消えて、残り五人、四人、三、二……一…………

『――私は観測者』

「何？」

喋った？　いや違う、歌詞の一節かこれは。

『――私は歌う、歌う。私は問う、問う。紡ぐ旋律は命の螺旋、叫ぶ歌声は大いなる問いかけ、語る言葉は英傑となる』

言葉としては理解できる、だがその意味を全く理解できない歌声がいつしか「歌姫」だけになった劇場に響く。

「いや……違う」

オーケストラは「歌姫」だけじゃない、一人だけ残っている。「歌姫」の後ろにひっそりと、バイオリニストが一人いる。
何が起きている？　何かが起きていることは分かっている、だがそれが現時点で全くわからない。

『――私達は、貴方を見ている』

ぞわりと、寒気が走る。慌てて辺りを見回すが依然として客一人いない空席だらけの劇場だ。だというのに、何故こんなにも視線を感じる？

『――問いは、比較を経て結論に至る。だから、だから……！』

何かを訴えるように叫ぶ「歌姫」の前へ突き出した右手に光が集まる。まさか攻撃かと身構えたがどうにも様子がおかしい。
光は一点に収束すると、その形をぐにゃりと変えていく。遠目でよく分からないな……武器ではない、あれは……

『――遠く、遠く、根無しの旅人。数多の世界を見つめる数多の眼。ならば貴方は「渡り鳥」……！』

あれは、仮面だ。ペストマスクのような嘴を持つ鳥の仮面、だがなんだあれは？

「炎の中に……目？」

本来なら遠目に見えるのはその仮面がちょっと悪趣味な金色である事と、それが発火している事だけのはずだった。
だが、一秒として同じ形に留まらない炎の揺らぎの中に確かに「目」が見えたのだ。

そして、状況はさらに進んでいく。「歌姫」への直接干渉はできない、何度も試した、だから俺はその光景を見ていることしか出来ない。

『…………』

ただ一人残ったバイオリニストの手からバイオリンだけが消失する。それを惜しむ風でもなく、人型はゆっくりと歩き出し……仮面を持った「歌姫」の前で跪く。

『――立ち上がって、私の英傑。そして、歌うことしかできない私に代わって……』

――問いかけて。

それはまるで、騎士が王より剣を授かるような。王が神より権力を授かるような。

絶対的上位者が眷属へと力を賫すように、「歌姫」が生み出した黄金の炎鳥面を恭しく受け取った人型がゆっくりとそれを装着する。

直後、人型に異変が起きる。

薄ぼんやりとした輪郭がはっきりとした形を成す。体型も無個性なものから細身な長身へと変わる。

顔は仮面で分からない、だがつるっぱげから髪型すらも変わった人型は……黄金の剣を二振り、両手に握り締めて、コロシアム内へ踊り出たそれは右の剣をこちらへと突きつける構えを取る。

「マジかよオイ」

『…………』

同じステージに降り立ったからこそ、はっきりと見える。黄金の仮面が目を見開いた様を、明らかに二つ以上ある「目」が多彩な瞳で俺ただ一人を見つめる様を。

「プレイヤーの、コピーだと……!?」

【サンラクの紡いだ物語】最終楽章……

『――「正典(カノン)：あなたに捧ぐ旋律(ユア・オーケストラ)」』

あなたの為のオーケストラ　其の六（後書き）

追加された、というより本来の形に戻った感じ
インベントリアにゲロってからどれくらい経ったのやら……そうです「アレ」です

あなたの為のオーケストラ　其の七（前書き）

この世から花粉症とゴキブリどちらを消滅させるか、究極の二択（現在花粉症優勢）

あなたの為のオーケストラ　其の七

『…………』

「うおおおお！？」

火花を散らしてぶつかり合った二つの黄金の剣は、果たして俺の力負けという形で弾かれる。
僅かに俺の身体が怯む、その隙を見逃さない「俺」は左手をスナップさせて剣を回転、逆手に持った黄金剣で的確に俺の首を狙う。

「くっ」

回避、だが首筋に薄くダメージエフェクトが入る。避けきれなかった？　いいや違う向こうが逃さなかったと言うべきか。
反撃として下段から斬り上げを狙うがいとも容易く弾かれる。だがそちらはブラフだ、対して力を込めていない握力で握った傑剣（デュクス）への憧刃（ラム）が弾き飛ばされるのを尻目に、空いた左手で傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）の柄尻を押し込むように両手による刺突を叩き込む。

だが、

「…………嘘やん」

「俺」の両手からは黄金剣が消えていた、そして空いた両手は合唱するかのように傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）を挟んで刺突を完全に受け止めていた。真剣白刃取り……っ！？

『……』

「ぐふっ！？」

回し蹴りが横っ腹に突き刺さる、思考の空白へと的確に刺さった一撃は俺の体力を容易く三割削り取る。呼吸に詰まるがそれどころではない、衝撃に逆らうことなく転がって距離を取ってアラドヴァル・リビルドを握る。

対して「俺」は肘までをすっぽりと包んでしまう巨大な鉄拳を装備して……あー、装備も完コピですか、そうですか。

「これは、不味いぞ……非常に、不味い」

数合打ってすぐに分かった、ほぼ確実に再現「俺」のステータスはこちらよりも上だ。速度負けし、力負けし、さらには的確にこちらに相性不利を押し付けてきやがる。

強い、そして動きの端々に見える癖……まさか、いやマジで？

「いつから？　どうやって？」

シャンフロシステムが優れていることは分かっているが、いちプレイヤーだぞ？　そんなこと本当に可能なのか？

「俺のトレースＡＩ……？」

トレースＡＩ、最近だと京極の祖父龍宮院富嶽をトレースしたＡＩが印象に残っている。トレース元の魂を転写するとか現実主義者（リアリスト）の戯言のようなものではなく、トレース元が状況に対して取る手段を解析して限りなく本物に近い動きを可能とする技術。

まさかとは思うが、だとしても向こうの「俺」はあまりにもこちら

の動きを知り過ぎている。バトルスタイル的な上位互換ならまだしも、こちらの動きまで完全に読み切ってるのは流石におかしいだろう。

「しかも、武器まで完全再現と来た……！」

アラドヴァル・リビルドじゃ巨大鉄拳には分が悪い。しかも単なる打撃武器ってわけじゃあない、本当に……本当にクソッタレな事に、性能まで完全コピーだ。あとね、地味にね、無言で起動するの本当にやめてほしい。単純に上位互換じゃん、モーション見逃したらケツに水晶柱がぶっ刺さる事になるんですけど？

『…………』

「はいモーション！！」

ここがチャンスだ、相性不利なアラドヴァル・リビルドを仕舞って代わりに取り出すは冥王の鏡盾（ディス・パテル）と境光の宝剣（ルーメリディアン）。時間的に今の刀身は夜光刃、遠距離手段を支えるのは様子見として都合がいい。
レッドカーペットをブチ抜いて生えてきた水晶柱を盾に態勢を立て直し、一旦距離を取るべきそれどころじゃない左に転移してきたぞ防御しろ！！！！

「ンな馬鹿な、アクセサリーに記録した魔法まで完コピ……！？」

間違いなく今のは【瞬間転移（アポート）】だ、視界内の一定範囲に瞬間移動する転移魔法……そしてその魔法を俺自身は習得していない、覚えているのは瑠璃天（ラピステラ）の星外套だ。
おいおい、これは想像以上にどころか最早想像を絶するレベルで模倣されているんじゃないか。だが、どこまで？　どこまで模倣され

ている？　検証しなければならない、この完全上位互換の「俺」を相手に？

「これは………」

脳裏に浮かぶ言葉は単純明快。

――これ無理ゲーじゃね？

「いや、負けるな、思考を負け色に染めるな俺」

まだ詰んでない、俺を完全コピーしたと言うなら逆説的に手の内が分かるとも言えるんだ。まさしくミラーマッチ、己を知る最大の敵は俺自身をマジでやる事になるとはな。

「どうする………どうする……？」

短期決戦？　地力の差を覆すだけの策がない。
長期戦？　策を練っても地力の差で磨り潰される。
これは、どうすりゃいい……？　クソ、袋小路のルートに分岐した気分だ。右に行ってもバッドエンド、左に行ってもバッドエンドってな……直前のセーブデータは？　残念ながらリアルタイム進行だと時間と一緒で常にセーブデータは更新されてしまうんだ。

「クソ、再戦不可ならメール送りつけっかんな天地　律……っ！」

隙を狙って一撃決着、これしかない。
後でも先でもなんでもいい、一撃で沈めるしか活路はない……っ！！

「早撃ちだぜ上位互換(パチモン)、あわよくば壁のシミになれ……！」

封雷の撃鉄（レビントリガー）・災起動（ハザード）、さらに並行して真界観測眼（クォンタムゲイズ）起動！
だが「俺」から視線を逸らさない俺の目が奴もまた同様の動きをした事を認識する。やはり速度では勝てない、だが「俺」の対応からして先手は取れる！！

「っ！！」

前へ、盾を収納し床に転がっていた傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）を拾って前へと距離を詰める。
光が点滅する、違う相手の動きが速すぎて攻撃予測が一瞬しか表示されないのか。上等、どちらにせよ受け身に回ったら勝てないのだから常に前へ！！

互いに黄金剣、そして互いに片手を相手に見えないように隠して接敵。傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）と向こうの模倣傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）が激突し火花を散らす。互いにクリティカル狙いで叩き込んでいるものだから、それはもう快音と言っていい金属音が響く。
互いに有効打無し、距離は取れないこのまま押し込む。
互いに片手のみを振るって剣を打ち合わせる。互いに片手を隠し続けたまま戦い続けている。そして経過した十秒――

「……っ！！」

『…………』

全くの同時、己の身体を盾に隠していたもう片方の手……引き金に指をかけた銃器（アグアカーテ）が真贋共に敵へと突きつけられる。
そして二つの引き金は一切の迷いなく引かれ、放たれた魔力弾が俺

と「俺」の顔面を狙って飛翔した。

「くっ」

『………』

くそッ、ヘタれた！！

身体を動かして回避した俺に対して向こうは再現傑剣（エスカ＝ヴァラッハ）への憧焉終刃で叩き落とした。向こうの方が先に動ける！！

「なっ……めんなぁ！！」

アイテムやアクセサリーを完全再現しているならば、恐らくジョブ……「神秘（アルカナム）」もまた同様。ならば互いに「愚者」のデメリットで体力が1になっているはず。つまり俺も「俺」も一発喰らえば死ぬ、互いに背水ってわけだ。

銃弾が飛び交う、当たりさえすればいいのだからその狙いは時に腕、時に脚、時に額……一瞬でも油断すれば仕留められる。

常に動き回りつつも距離は中距離を維持、弾丸だけが相手へと届き、そして通り過ぎていく。

「弾切れ……っ！！」

どうする、銃ごと変える！！

だが、ここで「俺」と俺との行動が分岐した。

「何……？」

向こうの「俺」も俺と同時に銃を消した、だが取り出したのは代わ

りの銃じゃない。再現された紅い水晶の刃……境光の宝剣(ルーメリディアン)？
だが迷っている暇はない、向こうのＡＩがヘマをしたならここで決めるまで。
劇場に響く発砲音、放たれた四発の凶弾は真っ直ぐに「俺」へと向かい……すり抜けた。
「――――は？」
ここに来てオリジナル要素？　違う、すり抜けたんじゃなくて避けた？　どうやって？　身体が左右にブレた？　エフェクト？　まさか、まさか……！
「臨界速(ブラディオン)で反復横跳びした、だと……？」
んな馬鹿な、戦闘機で逆立ちするようなもんだぞ。というか、四発、四回……あ。
『…………………』
厳密には、脳が補完した光景かもしれないが。確かに俺は奴が五歩目を踏み込む前に居合の構えをしたのが見えた。封雷の撃鉄・災に臨界速を加えた最速の踏み込み、抜き放たれた刃は晴天流の風。
晴天流「轟風(とどろかぜ)」
脇腹に冷たさと痺れを混ぜたような感覚、ぞわぞわとしたそれは背中へと抜けていき……死んでいない、耐え

最後に聞こえたのは発砲音、そこで視界が暗転した。

あなたの為のオーケストラ　其の七（後書き）

創世さん謹製強化トレースＡＩはただ同じ動きをするに留まらないぞ！

非常にわかりやすく言うと徹底的に相手をメタってじゃんけんに必勝してくるぞ！　どうやって倒すんだろうね！？

あなたの為のオーケストラ　其の八（前書き）

SEKIROクリアしました、お米ルートでした。作者がどこに足繁く通ってたかバレちゃう……！（源の宮周回前は本堂で編笠雑魚倒して稼いでた為）
第二形態の苦労はなんだったんだレベルであっさり倒せた第三形態……孫も孫だし雷扱うのやめとけよ……アレっすね、体幹回復重点で立ち回ったら恐ろしくあっさり勝てました

あと若干更新サボってたのはずっとSEKIRO考察してたからです、ブラボと世界観繋がってる説は合ってる間違ってる関係なく考察と妄想が捗って好き

あなたの為のオーケストラ　其の八

「…………あ？」

ここは…………オルケストラの劇場に繋がる扉の前？

「サンラクサン！　倒したですわ？」

「負けたわバカヤロー」

「ええええ！？」

はー……マジかー……あれは流石にちょっと予想外っていうか……はー……

「……招待状はそのまま」

扉は……開く、良かった運営にメール送らなくて済んだ。しかしどうしたものか、思った以上に最後が鬼門だぞこれ。少なくともこちらの完全再現をした上でメタ戦術を格上ステータスでやってくる。前座の四楽章のせいで俺は武器を絞れない、つまりほぼ確実にフル装備の「俺」が出てくることになる。それに、俺の予想が正しければ貪る大赤依を再現した後に黒死の天霊が出てきた時点で……

「……時系列じゃない」

そして強さ順でもない、強さで順番が変わるなら黒死の天霊より後に大赤依とウェザエモンが出てもおかしくはない。だとすれば考え

うる最悪のパターンはただ一つ。

「ランダム……マジかぁ」

黒ツチノコ（ゴルドゥニーネ）、ジークヴルム、クターニッド、百足、蜘蛛、蠍……それらが無作為に選出される？　畜生、なんでこんな忙しい人生刻（ログ）んでんだ。ファステイアの片隅で土でも弄ってりゃミミズ四連戦とかになったろうに……！！

それに再現された「俺」やギミックとして現れた仮想変態（ディープスローター）からして、最悪プレイヤーも再現されるんじゃねーのかこれ？

「どーすっかな……」

次やれば勝てる！　って感じではなかったな、覚えゲー？　むしろ俺に譜面作らせてそれの難易度跳ね上げて投げ返してくる系というかなんというか……んー、ちょっと試してみるか？

「ちょっくら二週目してくるわ！！」

「いってらっしゃいですわー」

◆◆

とりあえずもう一度念入りに調べてみたが、やはりこれといってステージギミックがあるわけではなさそうだ。気になるものといえばやはり壁に埋まった音楽プレーヤーだが……

「やっぱこれがオルケストラ本体とかそういう展開か？」

仰々しい第一印象の裏で本体がショボい、ってのはそう珍しいものでもない。流石にこれを壊してはいクリア！　とか楽観的なエンディングだったらそれはそれでメールものだが、良かったと言うべきか良くないと言うべきか傑剣（デュクスラム）への憧刃でついてみたが穴どころか液晶に傷すら入らねー。

傑剣への憧刃君＜＜＜音楽プレーヤー、見てくれがあまりにも世知辛い上下関係だ。

「あくまでもギミックに徹する、ってことか？　まぁいいやとりあえず再生」

ジッタードール……確かサイナ達征服人形を作った神代の人物も同じ姓だった。フレーバー要素？　それとも何か伏線がある？　後者の可能性の方が気持ち高めだが、だからといってどうしようもないだろう。ウェザエモンの時みたいに亡霊として出てくるならともかく、完全に文章上の人物をこの劇場でどうやって攻略しろと？　詩でも吟じます？

「さて……またウェザエモンならさっさと準備したいんだが？」

『「サンラクの紡いだ物語」第一楽章……【泳撃の冥王】』

「はいランダムかくてーい！！」

そして何が出てくるかも分かりましたーっ！　畜生！　どうせ出てくるなら素材落とせや素材ィーッ！！

「上等だコラ来いよシャチ野郎！！」

武器を構えて吠えた先、虚空を泳ぐは輝ける深海の帝王（アトランティクス・レプノルカ）……！！

……

…………

……………

みんなー！　ランダムってどういう事だか分かるかな？

…………うんうんそうだね、つまり乱数って事だね！　ゴミだね！！

「はーっ！！　クソオブクソ！　二度と出てくんなクソレッド！！」

貪る大赤依ィ……面倒臭いんだよお前！　あの時に長期戦だったせいで毎回長々と戦わされるこっちの身にもなれよ！！

よりにもよってアトランティクス・レプノルカに続いてジークヴルム、クターニッド、貪る大赤依という地獄の長期戦三連打だ。最後の最後で長期戦が確定した俺の気持ちがわかるか？　現文のテストに出してやろうか？　三百文字以上で説明しろ、配点は５０点だ。

ただ、クソレッド以外は初見の再現体だったのは一概にクソとは言えない。オルケストラの楽章は単純に倒せばいいってわけじゃない、

過程はともかく要所要所に守るべき演技……条件付きのイベントがある。
アトランティクス・レプノルカの場合はビームの反射、ジークヴルムの場合は角の破壊、クターニッドの場合は戦術機を用いた上空からの攻撃だ。

二週目をやってて分かったがオルケストラの指示はある程度の自由幅がある、恐らく自爆技対策だ。ビィラックに言ったらその場でミンチにされそうなので心の中に留めているが、俺の手持ちの中で最も気軽に壊せて最も手軽に火力を稼げる武器こと煌蠍の籠手なんかは最早使い切り武器に等しい扱いだ。
なにせ修理素材をほぼ独占してるからな、一度「黄金の天秤」商会へ派手に売り払ったのにもう補充されつつあるから益々煌蠍の籠手君の扱いが雑になっていくわけだが……まぁそこはどうでもいい。

オルケストラが「リセット」を行うラインは低いようで高い、まず確実に性別が違うとリセットされるし武器が損失された場合もリセットされる。
だが武器の消耗は回復しないし、体力やステータスも引き継がれる。武器の損失を恐れなくていい、ってのは嬉しいが無条件でそんな親切されるとは思えないので多分「次の楽章で必要になる」武器だけがリセットされると推測できる。アテにはしない方がいいだろう……まぁ少なくとも煌蠍の籠手君は遠慮容赦なくぶっ壊せる事は確定したけどな！！

「さーて……さっきぶりだな、髪切った？」

『………』

会話する気は無し、と……っていうか仮面つけてるだけで下はのっ

ぺらぼうのままとか？　しかし若干半透明で発光してるとはいえ自分の姿を二人称で見ると……

「つくづく変態装備だな、服着ろよ」

『…………』

互いに動きは全く同時、それとも俺に合わせたのか？　分からないが一つだけはっきりしてるのは、互いに聖杯と黒い結晶を取り出したということ。そしてその輪郭を女のものにした双方が異形の頭蓋を被ったことだ。

「血解（ブラッドハート）！！」

『…………！！』

向こうに言葉はないが、身体の力みが同様の力を起動した事実を示している。

どろりと二色の赤色が溢れ出す、なんか向こうの方が明るい色してるの気に食わねーな……酸素か？　酸素の量か？　二酸化炭素だらけじゃん俺。

「じゃｒｅてこうぜｅｅｅｅ……」

『…………』

どうやら「俺」的にはあの仮面をどうしても全面に押し出して行きたいらしい。わざわざ形状まで変えて異形の頭部にフィットする形になった鳥頭の怪物がこちらに声なく視線だけを向ける。

「さaいしょha素手(グー)……」

じゃーんけーん…………

「くたbareeeえええ！！」

オルケストラ最終楽章、俺はある一点においてだけ明確に「俺」が持ち得ぬアドバンテージを持っている。
それはこの別離なく死を想ふ(メメント・モリ)だ、R．I．P．は女体化ごと解除されるので累積効果もリセットされるがこいつは違う。この特大剣の累積軽量化能力はリセットの対象外、つまり第一から第四までのボスラッシュを経ていない「俺」は絶対に軽量化することが出来ない！！

だが、向こうの選択はそれすらをも考慮に入れたかのような巨大な城塞が如き大楯だ。女帝城の顕壁盾(ヴォーバン・ガルガンチュラ)、単純な物理防御力に関して言えば俺の手持ちの中で頭四つは抜きん出ている。
だが何故？　あの盾は通常のステータスで振り回せるようなものじゃない、R．I．P．や暴血赤依骸冠(ブロード＝クロウネ)の素スペックじゃ持ち上げることすら……違う、藍色の聖杯か！！

「何を入れ替えた！？　AGIか！　LUCか！！」

女帝城の顕壁盾を振り回すのなら足りないステータスも、単純に壁として支える程度ならSTR特化で出来ないこともない。　現に「

俺」は女帝城の顕壁盾を構える事を早々に放棄し、粒子となって消えていく盾の後ろでアラドヴァル・リビルドを構えている。

『…………』

「馬鹿め！」

輝槍仮説（ブリューナク）第四：焼燬（キャール）は確かにスキルだが発生する現象そのものは魔力！　ならば冥王の鏡盾で防御すれば！！

「【超過機構《Eクシーdoチャージ》】！！」

このまま押し切ってやらぁ――――！！

あなたの為のオーケストラ　其の八（後書き）

そうだね、わざわざ強化の足がかりになるボーナス行動すれば高確率でガード誘発できるね

あなたの為のオーケストラ　其の九（前書き）

リアルがクソ忙しくて更新できず申し訳ないです……一箱でアポロウーサと竜嵐還帰とアルル当てて申し訳ないです……サヴァクティスと秘ア・ストラ・ゼーレ当てて申し訳ないです………
（なお２０ｔｈではなかったので下唇を噛む顔）

あと更新が遅れた理由の一つはシャンフロ関連で三つくらい並行して書いていたから、かろうじて本編を書いたところ

あなたの為のオーケストラ　其の九

「勝ったですわ？」

「まーけーまーしーたー」

「……そんなに強いんですわ？」

「おう、貪る大赤依とクターニッドとジークヴルムと連続で戦わされたわ」

「控えめに言って悪夢ですわ！？」

「いやそれは勝ったんだけどな？」

「ほぉっ！？」

やっぱ問題は最後に出てくる奴だな、下手すりゃ俺より俺（サンラク）の扱いが上手い節まであるぞ。

いやしかし、盾防御誘発からの瞬間転移奇襲（アポート）は敵ながら見事だった。

輝槍仮説の硬直が溶ける瞬間を完全に把握した上での二段構え……対処そのものはできたがあそこで完全に攻撃と防御の矢印が確定してしまった。

だがこれではっきりした、このまま挑んでも勝ちを拾う可能性は限りなく低い。

「修行フェーズ、か………」

「ま、また百足ですわ！？　蜘蛛ですわ！？　いーやーでーすーわー！！！」

「いやいや逃げるなよエムル……ヴォーパル魂はどうした。まぁ百足と蜘蛛は後回しだな」

確かに三桁レベルに到達しているとはいえ、俺のレベルは上限というわけではない。まぁいざって時はレベルダウンとやらを試すかもしれないが……それは今は関係ないことだ。

確かにレベルを上げればステータスも高くなる、だがそれは只でさえ上位互換な「俺」のステータスも上がるという事だ。流石にステータス据え置きとは楽観視できない。

となれば増やすべきは基礎スペックではなく手数だ、どれだけ強力なロケットランチャーを持っていたとしてもインファイトで使うのはハンドガンだろう。どっかの銃狂いはマスケットで謎の格闘術をやってたりしたが……今思い返しても意味が分からん、なんで破損させずにモンスターの突進を受け止められたんだあれ……つまりはそう、上位互換であっても白星を奪い取れるテクニック、そしてそれを実現する新しい風が必要なのだ。

「自己確認してるのか敵の攻略してんのか分からなくなってきたが……控えめに言って「俺」は遠中近距離及び一撃特化手数特化全てに対応し、魔法対策も万全、奥の手として怪物化する手段まで持ち合わせたパーフェクトウォリアーだ」

「自分のこと褒めてるですわ？」

「敵を分析してるだけ。スキルは機動力に特化しており、並の動きじゃ追いつくこともできないだろう……そして【最大速度(スピードホルダー)】すら獲

得した加速力、まさに向かう所敵なし……」

「結論：自慢」

いやだから敵を分析してるだけだって。基礎スペックが高い以外は全部俺の完全コピーだから仕方なく俺は俺を褒めるようなことを言わねばならんのだ。

とはいえ今挙げた点がそっくりそのままこっちに来るのだからドヤ顔してる場合でもない。非常に厄介なＡＩだ、こちらの手の内を知り尽くした上で同じ手札でこちらをメタってくる。だが同時に決して無敵ではない。

「奴が俺をメタれるなら逆も可能だろう」

現に別離なく死を想ふ(メメント・モリ)なんかは数少ない奴に対するアドバンテージだ、恐らくある程度の条件を必要とする武器であれば完全コピーの隙を突くことができる。だが詠唱起動系は野郎、ふっつーに無言で使ってたからなぁ……ずっこい、ずっこいぞ「俺」。

「リヴァイアサン……いや、これ以上向こうに遠距離武器を持たせたくない、最悪銃器類は持って行かない方がいいまであるし……んー、んんんん…………」

……ダメだ、思い浮かばない。

「寝るっ！　ここベッドとかある？」

「存在します、こちらです」

どうしたもんかね。

◆

文明社会に属している以上、どうしても社会に従わねばならない時は多い。とどのつまり学生は学校に行かねばならないのだ。
何やら用事があるとかで、今日は斎賀さんとは一緒に登校しなかったのでいつもより気持ち早めで学校に到着した俺は、手持ち無沙汰だったので携帯端末でシャンフロ攻略サイトを開く。

「相変わらずアホみたいに重いな……画像表示無し、と」

これでようやく見れる程度の速度になる、えーと？　旧大陸面白い事になってんなぁ……始源眷属関連はパス、存在が発覚した以上どうあがいてもMVP争奪戦になる。聞いた話じゃサードレマ襲撃イベントとか最初レベル９０以上の奴らが独占しようとしてたとかなんとか、まぁ「青」の性質上瞬殺されたらしいけど。
もう片方の「青」がアレなもんだからどんな奴かと思ったが、まさか体力ゲージごと削り倒してくるとはなぁ……通常のスリップダメージ毒も併用してるってのが悪質だ。レベル１００オーバーだと一秒で死ぬってマジですか？

「いやそっちではなく……」

あったあった、武器種ページ。クソほどあるな、とりあえず今の俺が使ってない奴だと……やっぱ弓とか？　いやしかし銃より優先する理由あるか？　向こうが銃使う前提だとデメリットばかり目立ってしまうな……うーむ……やはり近接、もしくは近接にも使える中距離……マスケット格闘術……いやそれは却下……うーむ、うーむ……

「何文章と睨めっこしてんだよ？」

「将来設計」

「何、大学の進路でも決めてんの？」

「バカ言え、ゲームの話だ」

「え、マトモな話してたの俺の方じゃね……？」

リアル進路は既に決めてんだよ、武田氏に相談して組み上げた「余暇にクソゲーを一、二本は嗜める程度に高い階級に上り詰めるサラリーマンチャート」をな……！　とりあえず心理学を学べとのことで。なんで心理学？

「将来の話ならむしろお前だろ」

「なんで俺？　普通に大学行くけど」

「え……？　「根無し草の旅人として全国行脚しつつ愛の伝道師雑菌ピアスの名を国語の教科書に刻み込む」ってあの日河川敷で言ってたじゃないか……っ！！」

「しねーよ！！　言ってねーよ！！」

だろうな、俺もそんなアホな話は聞いてない。だがお前以外が「聞いた」と言えばそれはもはや言ったに等しい……！！　これを風評被害と言う。俺の言葉に反応したアホが次々とあの日の思い出（妄想）を雑ピ改め暁ハートさんにぶつけていく。

「今更何言ってんだよ！　俺ぁよう、あの時のお前の目に希望を見出したんだぜ……！？」

「応援してるぜ愛の伝道師！！」

「教科書に載ったら教えてくれ、落書きするから」

「なんて壮大な夢なんだ……他の皆にも教えなきゃ！！」

「1から10までデマじゃねーか！　てか拡散はやめろ！！」

「でもこの前芸能人に絶賛されてましたよね？」

「いや……まぁ」

武田氏、心理学を学べってのはこう言うことだったんだね……少しの真実が混ざるだけで嘘が際限なく暴走していく、こう言うことなのか。

いつしか「この先の人生全てを捧げて愛を叫ぶ」事になりつつある暁ハート先生を微笑ましい目で眺めつつ……いや、ンな事してる場合じゃねーよ。

「思考が乱された……くっ、許せねぇ暁ハート……！」

「跳弾にしたって悪意満載かよテメーっ！！」

流れ弾（狙撃）、いやどうでもええわ。

何やら謎拳法の構えで威嚇するポエマーは放っておいて…………拳法？

「それだ」

「は？」

「名案！　ナイスヒントだポエマー！　サイン会を開く時は呼んでくれよな！！」

「感謝しながら悪意のナイフ握るのやめない？」

悪いな、外道を相手するなら必須技能なんだ。

あなたの為のオーケストラ　其の九（後書き）

愛の伝道師「暁ハート」とリアルカーストプリズン「顔隠し」、その正体は一体……（同級生）

あなたの為のオーケストラ　其の十（前書き）

こ、こせ、こせせせせせせ、こせんじょっ（白目）

あなたの為のオーケストラ　其の十

拳法、拳法だ。吟遊詩人のなんちゃって威嚇拳法が俺に閃きを与えてくれたのだ。
下手に武器を増やす必要はないんじゃない、その気になれば蛇腹剣からチャクラムまで扱う自信のある俺であるがそれが付け焼き刃であることは否めない。
最悪のパターンはこっちが付け焼き刃なのに向こうが完璧に使いこなしてきた場合だ、実質相手を有利にしただけになる。それにあまり「俺」をメタりすぎるとそのまま俺に跳ね返ってくる危険性もある。

だが拳法ならどうだ？　拳法、徒手空拳、素手喧嘩（ステゴロ）、すなわち人という生き物が戦う為の最小単位。
どんなプレイヤーもゲーム開始時点から持っている最も原始的な武器を扱うという事だ。その習熟度は言うまでもないだろう、何せ生まれて今に至るまでゲーム、リアルを問わず使い続けてきてるわけだしな。
仮に相手も同じ拳法を使ってこようと、それが上位互換だろうと。
……これがゲームなら対処できる、対処する！！

「二回戦えばだいたい見えてくる」

あのＡＩ、確かに凄まじい再現度だ。武器とかスキルじゃない、んなもんデータなんだからいくらでもコピペできる。ヤバいのは俺の動きをトレースするモーションの方だ……だが、厳密にはあれは俺自身の動きとはちょっと違う。

「同族嫌悪？　ちょっと違うか……？」
だがそれに近い、一番知ってるから一番対策できる……アレは俺の動きを読んだ上で「対応する」ＡＩだ。ただ鏡写しで動くトレースではなくトレースした情報で対策を立てるメタゲームＡＩ、だから厳密には俺のトレースに加えて何か別の思考ルーチンが混ざっている。

「常時背水の陣で突っ込んでくる奴に対処するなら、そりゃカウンター型になるわな」

試行回数は少ないが被弾回数なら結構なもんだ、だからぼやけた輪郭だとしても見えてくる。「俺」は自発的な攻撃をしないわけじゃないし、罠（誘い）をかけてくることもあるがその本質は俺の行動を誘発させてカウンターを叩き込むことにある。
厄介なことに変わりはないが、だからこそ拳法だ。拳法とは素手、つまり武器のリーチがゼロの状態を指す。通常これはデメリットでしかないがごく限られた状況でのみこれがアドバンテージへと反転する。

最短であるからこそ、最適に取り回せる。
最短であるからこそ、最速で叩き込める。

「つまり超至近距離（インファイト）……！！」

カウンターさせる前に至近距離まで詰めた俺がエクストラターンを叩き込む、これが奴を倒す今考えうる唯一の策……！！
厳密にはもう一つ考えてあるけど「互いに封雷の撃鉄・災を使って体力削って範囲魔法で諸共吹っ飛ばして「幸運による食いしばり」

で勝ちを狙う糞運ゲー」は最終手段な、最終手段………

徒手空拳といえばイアイフィストだが、あれは厳密にはスタイルとかテクニックだから具体的にこれ、という技がないのが難点だ。イアイフィストの真価はどんなバトルスタイルでも組み込めるところにこそある。

だから俺が求める拳法はイアイフィストと組み合わせた場合の適合率が高く、瞬間的に相手の懐に潜り込んで攻撃を叩き込む機動力にも重きを置いた格闘術――――――！！

………それボクシングじゃね？

「…………いや、まだ分からんまだ分からん」

シャンフロ・イズ・ファンタジー。もしかしたらなんかこう未知の動きをする格闘術とかあるかもしれない、そうここディルモントン流道場になら！！！

ここで話は変わるが、シャンフロにおける「流派」について今一度確認も兼ねて思い返す。

取り敢えず作ってみれば大体作れる、とまで言われているくらいには数多の武器種を実装しているシャンフロであるが、当然ながら徒手空拳もプレイスタイルとしてちゃんと認められている。カッツォの「修行僧（モンク）」系列も魔法が絡んでいるものの徒手空拳に部類される。

だがあれはあくまでも職業的なものだ、「流派」はもっとお手軽な……いわばスキル（場合により魔法も）詰め合わせセットと言うべきものだろう。

ウェザエモンを撃破して謎マシンで網膜から脳みそにチョメチョメした「晴天流」なんかは参考にならないので除外。基本的に流派スキルはリアル武道なんかと同じで流派を教え伝える道場やらに門下生として「入門」することが大前提なんだとか。入門条件は様々で「修行僧」のように特定職業に就職することが条件であったり、特定NPCと素手で戦うことが条件だったり……そして流派に属するスキル、魔法を覚えるためにお使いクエストじみたものをクリアしたり……まぁなんだ、つまり時間がかかる。

だが生憎と俺は修行に時間を取っている暇はない、車の拭き掃除だってやってられんわ。しかしこの手のコンテンツによくある展開というか、ただ入門しただけではその流派の上位スキルを見ることはできない。スキルツリー的な感じだな、ではどうすればいい？

ここで重要なのは「とりあえずどんな流派なのか見たい」「その流派の奥義とか見ておきたい」「それが「俺」に有効か検証したい」という事。

そして自称インテリジェンスのサイナとは異なり世(ゲーム)が世(ゲーム)なら「人間牧場」「遊牧蛮族」とまで讃えられた俺のミラクルニューロンが導き出した答えは一つ。

「たのもーだゴルァ！！」

――そう、道場破りである。

「何奴！！」

「俺より強い奴に会いに来た！！」

『ユニークシナリオ「道場破り：ディルモントン流」が開始されました』

どうやらNPCに混じってプレイヤーもいるらしく、なんだなんだと好奇の視線が俺へと向けられる。

道場破りイベントはプレイヤーが最もお手軽に発生させられるユニークシナリオだ、そこらの道場の扉に攻撃しながら入ればいいだけだからな。能動的に発生させるのではい・いいえの選択肢が出ないのが印象的だ。

「ディルモントン流師範代、ガンドンである！」

「まずは前座かよ？　いいぜ、相手してやる」

なんかもうこの世の大体は筋肉と体格差があればどうとでもなると言わんばかりの大男が俺の前に現れる。体格差は俄然俺が不利、果たして勝てるかどうか……ああ、だが一つ補足するなら。

「イアイフィスト応用、悶絶三連」

「ぎゃっ！　ぐひゅっ！　ぐぼぁ……っ！？」

ここ、セカンディルだからレベル差が割とお察しなんだよね。

「地獄を楽しみな（¡Hasta la vista!）」

目、喉、鳩尾の三箇所にグーパンを食らったカツ丼さんが倒れるの

を眺めながら、俺はスペイン人から教わった煽り台詞と謎ポーズを決めるのだった。

イアイフィスト流「悶絶〇連」
イアイフィスト流は基本的にプレイヤー自身の本能を突くバトルスタイルである。それ故に人体の急所を的確に狙う事でアバターそのものではなくそれを操作するプレイヤーを硬直させる、それがイアイフィスト流「悶絶（モンゼツ）」である。
サンラクが用いた三連は目、喉、鳩尾を連続で叩く三連続打撃であるが、これはダウングレード版であり本来はこの後に膝蹴りによる金的を加えた四連こそが本来の形である。
達人ともなれば四連から足払いに繋げて相手を転倒させ、馬乗りになってひたすら顔を殴るというコンボにも繋げることが可能。

——あるいはそれは、孤島での流儀に似ていたが故に

あなたの為のオーケストラ　其の十一（前書き）

平成最後に地獄の風古戦場！！！！！！！！
五時間経過時点で前回のボーダーの二倍ってどういう事なんですか！！！！！！！！！！
１０ポチ１召喚で２０００万な私にどうしろってんですか！！！！！！！！！！

あ、はい、逃げてないです。魔物さんが休憩中なので、はい、はい

あなたの為のオーケストラ　其の十一

ディルモントン流。
奥義「轟響掌」……対モンスターを想定しているので不適切。

アグロッソ流。
奥義「ボルテクス」……対人想定の投げ技だが単刀直入に言うと「大時化（おおしけ）」の下位互換、不適切。

無刀身刃流。
奥義「阿修羅連斬手」……連続手刀、非常に強力ではあるが背後に回られると絶望的に無防備、残念ながら不適切。

流星翔脚流。
奥義「流星の一撃」……プレイヤーが創始した流派、ということで興味深かったが蓋を開けたら単なるシルヴィア・ゴールドバーグのフォロワーだった、強いてコメントするならあの怪物が特定の動きに固執するなら俺もカッツォもアメリア・サリヴァンも苦戦しない。必殺技を必殺たらしめるから奴はリアルミーティアスなのだ、不適切。

バットで殴れば大体勝てる流。
奥義「フクロダタキ」……同じくプレイヤー創始、ある種の真理ではあるが泣く泣く断念、大振りすぎなんだよ……不適切。

王国騎士格闘術。
奥義「甲冑組手」……興味深い、鎧を装着した前提で組手術という点でもしやと思ったがカウンター特化な上に動きが遅すぎた。しか

しながら対武器を想定したカウンター戦法は役立ちそうなので見様見真似(なんちゃって)の候補とするのはアリ、不適切(※)。
三神教僧拳流
奥義「七色混合【虹彩迫撃】」……カッツォと被るの嫌だからボツ。
…………………
……………
……

「くそー……」
どの流派も弱いってわけじゃないんだ、俺が求める限定的状況にピッタリ嵌るものがない、似た形だが嵌り込まないジグソーパズルみたいなものだ。あと一つ、何か足りないそれが埋まれば……
「そうだよなエムル」
「サンラクサン、そうやってすーぐ自分の中で完結してから質問するですわ……」
「また世界から抜きん出てしまったか……」
「……はみ出し者の間違いじゃないですわ？　ほびょびょびょびょびょびょ！！！」

このやろー、その頬をハムスター並に広げてやろうかこのやろー。ぐにぐにと頭に乗せたエムルの頬を捏ねて伸ばしつつ、俺は眼科で繰り広げられる光景に目を細める。

「いやしかし……すごいなアレ、無双ゲーじゃん」

ここはサードレマ、ある意味今新大陸で最もホットな最前線と化した城塞都市の外壁だ。

――彷徨う大疫青。

旧大陸側の「青」を担うレイドモンスターであり、出現と同時に遭遇したプレイヤーを軒並み秒殺……否、病殺しながらサードレマへと単騎駆けで侵攻する痩せこけた馬。

最大参加数１０００という馬鹿げた定員数は、単純に脅力があるとかそういうわけではなくあの特殊すぎる戦闘ギミックに起因している。

「見ろよエムル、あれ装備からして結構高レベルだぞ」

「なんかやけに自信満々ですわ？」

多分、毒耐性とか高めてるんだろうな……なんか装備の見た目がそれっぽい。ここからだと遠すぎてステータスや名前は見えないがやけに自信満々な姿は俺達こそが英雄になると言わんばかりの様子だ。

「ゴルゴーバジリスクの装備ですね、あれは通常の毒だけではなく石化などの特殊な状態異常も封じますから……」

「石化あんの？」

「本当に石になるわけではなく、筋肉が硬直するタイプですね。ある程度検証しましたが電磁波のようなものを飛ばしてるんじゃないかとは言われてます」

……で、誰だこの人。

「……あー、そっか顔知ってるのは一方通行か。どうも、【ライブラリ】です」

「あ、どうも」

軽く会釈、なんでこんなところに最前線のクランメンバーがいるのかなんて考えるだけ無駄だしいけに、もとい勇者君達の勇姿に視線を戻す。

対策装備に身を包んだ五人のプレイヤーがずんずんと前へ進み、痩せた青馬はそれに対して大きく敵意を見せるわけでもなくカッポカッポと進んで……

「あ、「範囲」に入りましたね」

「体力の上限が削れるんだっけ？」

「ですねー、レベル９９で大体五秒……彼らだと八秒くらい？」

そう、彷徨う大疫青が持つ最大の特徴こそがそれ。対象のレベルに応じて減少量及び減少速度が増加する、体力そのものではなく体力の上限値を削る「病」だ。

何が厄介って上限、例えるならバケツそのもののサイズを小さくさ

れているわけだから回復手段が存在しない事だ。

「しかも近づけば近づくほど併発していくという……」

「あ、一人崩れた」

「症状的に肺がやられましたかねアレ、フルマラソン後くらいの息苦しさで噎せるらしいですよ」

「地味に嫌だなそれ……」

地面に崩れ落ち、激しく咳き込みながら消えていった一人を引いて残り四人、大疫青まで残り二十メートルくらい？
だがさらにもう一人脱落した、抑えてる場所は胸……あっ、もしかしなくても

「心停止ですねー、女性プレイヤーの方から聞きましたけど左胸だけサイズが違うブラジャー付けてるみたいな息苦しさらしいです」

「男には基本理解できない例えだな……」

「私女だけどちょっと理解できないですねー」

沈黙。
ここで選択肢ミスると何かとてもひどいことになりそうなのでパスを選択する。

「お、中距離職の射程に入った」

「あー……魔法職……」

「何か不都合でも？」

まさか魔法耐性でもあるのか。そんな考えが頭をよぎる中、見下ろした先の魔法使いが魔法を詠唱し……爆発した。

「ん？」

「あの人達マジであの装備だけで対策したつもりだったんですねぇ……「発症」した者が使う魔法は暴走状態で発露するんですよアレ」

「実質魔法封じかよ」

「いやそーでもないですね、低レベル帯のプレイヤーなら単純な火力強化ですし。まぁ、多少の自傷ダメージは入りますけど」

あと二人、大疫青まではあと五メートル。残ったのはタンクが二人だけ、ＶＩＴの高さか？　確かこのゲーム、病気への免疫とかもＶＩＴ依存だった気がする。

「近距離の射程に入ったけど……」

「まぁ、レイドモンスターですからねぇ……」

参加定員千人、実際に一騎当千の怪物というわけでもなさそうだが少なくともプレイヤー二人で削りきれる体力でもあるまい。
一人が大疫青が口から履いた青黒い瘴気に直撃して痙攣しながら倒れ、もう一人が頭を丸ごと大疫青に噛み掴まれて……あそーれぴたーん、ぴたーん……

「はい」

「いやはい、じゃないが」

「レベル５０以上が足手まといになる逆方向の足切りですし、五人で突っ込んだ時点で結果は割と見えてましたよねっていう」

「軽く五人死んでるけど開拓者の人らはそこらへん乾いてるですわ……」

プレイヤーの命の単価はＮＰＣの命と比較しても一割以下だからな、しゃーない切り替えていけ。

「やっぱ最適解は袋叩きなのか？」

「ですねー、理想はレベル３０くらいのプレイヤーで千人固めて屍を踏み越えさせる感じで」

「血生臭いし泥臭すぎる絵面だ……」

雑魚でも戦えるレイドモンスター、その実情は塵も積もれば山となるを文字通りの意味で突きつけてくるってわけだ。うーん、このクソモンス。

「ただヤバいんですよねー今」

「何が？」

「最初に彷徨う大疫青が出現したのはもっと遠くなんですよね、そっから存在が判明して何人か突っ込んで検証して……もうここから

姿形がはっきり見えるくらい近づかれてます」

「……もしかしなくても、拠点防衛的にまずい？」

「首筋にナイフくらいにはまずいですよねぇ、あっはっは」

世間一般にそれは詰みなのでは……このゲームの運営ならマジで滅ぼすぞサードレマ。

「まー意思統一が出来ないこと出来ないこと、始めたばかりだから仕方ないのは分かるんですけどねー……皆好き勝手に突っ込む上にログイン時間的にもムラがあるからスケジュール穴だらけっていう……」

あー、レイドモンスターなんて基本大縄跳びだもんな……歯抜け虫食い穴空きはつれーわ。んー……

「なぁ、あれってさ……あーいや、こう言った方がいいかな」

「何です？」

「【最大速度(スピードホルダー)】込みの検証やってみない？」

「いいですねぇ！！」

流石は考察クラン、ノリがいい………さて？ちょっと憂さ晴らしにつきあってくれよな、彷徨う大疫青。

あなたの為のオーケストラ　其の十一（後書き）

・彷徨う大疫青

旧大陸側のレイドモンスターにしてライト・ブルー。直接的戦闘力で言えば左方の青（レフト・ブルー）、皆んな大好き狂える大群青には遥かに劣るものの、アイテールの「免疫器官」の役割を果たす眷族たる大疫青はマナ粒子を介してあらゆる生物のマナへの免疫を変動させる。
それは封臓の機能不全という形で発症し、一号と二号に属する生命は様々な形で悪影響を受ける。

——嗤う馬の吐息は、神代の人々が全てを賭して成し遂げた偉業をいとも容易く踏み躙る。

あなたの為のオーケストラ　其の十二（前書き）

朝活団とかち合った時の「あ、こいつらとは死ぬまで殴り合わないとダメだな……」的な絶望感

平成最後の古戦場はやっぱぽつ令和……

あなたの為のオーケストラ　其の十二

彷徨う大疫青、サイズは普通の馬……よりもむしろ小さいくらいだ。お前、本当はポニーとかなんじゃないのか？

だが遠距離から狙うには難易度の上がる小ささも、今からやろうとしている検証ではありがたい要素だ。

「凄いねぇ、ああいうとりあえず死んでみよう！　って人、シャンフロだと少ない部類だから検証勢的にありがたいですねーウサちゃん」

「エムルですわ！！」

「んーそうだねー、ほっぺやわらかー」

「ぐっ、ぐいぐい来るですわこの人ーっ！！」

自分のリズムを相手に押し付けるタイプ、つまりノッてる時のシルヴィア・ゴールドバーグに似た手合いって事だ。スケープゴートならぬスケープラビット頼むぞエムル。

「あの馬ってさ、近付くほどHPを上限ごと削ってきてさらに近付くと別のデバフが「発症」するわけだろ？」

「ですねー、ちなみに色々試したけど呼吸感染の線が濃厚です。しかもガスマスク的装備貫通してきます」

「なんつーバイオテロ……いや、それを聞いて心強くなったわ」

「安心できる要素あったかなぁ？」

安心感の塊だぜ、なにせ呼吸を経由して感染というプロセスが分かっただけでもありがたいのに呼吸感染という時点で笑みすら溢れる。

「えー、はい、じゃあ検証「真っ直ぐ行ってぶっ飛ばす」の概要を説明しまーす」

「やんややんやー」

「真っ直ぐ行ってぶっ飛ばす、以上」

理論上の最高速度は面倒なのでちょっと無理だが、まぁ軽く………

封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）、藍色の聖杯でＬＵＣをＶＩＴに変換、前方よーし、右見て左見て右見てもっかい右見て……

「あ、そこの魔法使いちょっと退いてくれー」

「え？」

退いたな？　よし行こう。

「あ、実験録画風にしてるけどなんかコメント入れる？」

「実験記録、〇月〇日……この実験が成功すれば、人類はさらなるステージへと歩を進めるだろう……」

「それ八割がた失敗する導入ではー？」

やたら再生力が高いモンスターが生まれるパターンな、アクション系のホラーゲーだと定番のやつ。

「必要プロセスは三つ……ステータス強化、ルート確保、そして……」

ためらう事なく死にに行く勇気！！

「検証！　追突事故を起こした場合彷徨う大疫青はどんな挙動をするのかァーっ！！」

「ひゅーっ！　いい画が撮れそーう！！」

臨界速（ブラディオン）起動！　真っ直ぐ行ってぶっ飛ばす！！
普段は地上を走ると高確率で地面か壁のシミになるため空中ジャンプを絡めた立体起動で使うスキルだが、今回に限っては障害物（大疫青）目掛けてノンストップで加速していく。
地上で纏雷状態のまま臨界速を使うのは結構リスキーだ、何せ挙動をミスると地面をおろし金に俺おろしが出来てしまうからな。だから厳密には坂道を登るように僅かずつだが上方向きで駆けていく。

「くっ」

距離が足りない、仕方ない失敗確率が増えるが一気に踏み込みを刻んでいく！！
臨界速は一歩毎に速度が加算されていくムカデ砲のような加速スキルだ、踏み込んだ向きに加速が働くため、使いようによっては加速を加速で打ち消して安全に着地というテクニックもある。

では短いスパンで連続踏み込みをした場合どうなるのか。

「へぶるっ！？」

こうなる。
バランスを崩して錐揉み回転しながら吹っ飛んだ俺の身体が下手くその投げた紙飛行機のように宙を舞う。いや違うな、連続で踏み込んだ三歩分の加速が見当違いの場所に吹っ飛ぶことを許さない。
基本的に走る、というアクションは右足と左足を交互に前へと出す動作だ。それをアホみたいな加速倍率で、しかも瞬間的にやった場合、普段は平衡感覚で保っているバランスが一瞬で崩れるのだ。例えるなら左右にシェイクされる感じ。

だが侮ったな大疫青。もとよりＨＰなぞ1残っていれば上等、呼吸感染なら吸い込む前に俺が着弾する——！！

「食らってくたばれ弾丸プランチャ・スイシベりゅっ！！！」

「Ｂｒｒｒｒｒｒｏｏａａａ！！？」

舌を噛んだ、そして痩せ馬の胴体に横向きに吹っ飛んだ俺の身体、その腹が命中してゆるい「く」の字になって運動エネルギーが炸裂する。
近付くほどデバフがかけられる？　そうだね致命傷になる前に肉薄できるだけの速さを用意してみよう。
魔法に干渉してくる？　あいにく俺という生肉は純物理なのだ。
それじゃ答え合わせだ、最大速度が繰り出した横向きプランチャ・スイシーダを食らった目を持たない異形の痩せ馬はどうなるのか？

「ぐべあっ！！？」

「Ｂｒｒｒｒｒｒ！！？」

後も先も考えていない自爆タックルに巻き込まれた大疫青が勢いよく進んできた道を逆方向に吹っ飛んでいく、ついでに俺も吹っ飛んでいる。

ぐしゃあっ！　と一頭と一人が地面に叩きつけられ、そのままゴロゴロと転がっていく。当然だが俺の体力は上限削りも合わせてゼロになったのでそろそろ死ぬわけだが、死ぬ前に首から地面にイッた大疫青がちらりと視界に入った。

「あん？」

なんか背中に……変な亀裂入ってね？　がくっ

◆

「いい画撮れた？」

「クソ面白いから動画サイトに上げていいです？」

「タイトルは？」

「んー、「馬にルチャ決めたったｗｗｗ」とか？」

「なんか脱皮しそうだぞあいつ」

「その話詳しく」

流石は【ライブラリ】と言うべきか、一瞬で考察厨の顔になったぞこいつ。

「背中に妙な亀裂があった、自傷にしては変だし多分俺が突っ込む前からあった傷だ」

「単なるデザインでは？」

「貪る大赤依は四、五形態あったぞ」

「ふーん………やっぱ大赤依倒したのって、ふーん」

俺の口はトリプルアクセルでもしてんのか、滑りすぎだろまぁいいや。どうせ後続が出てくるのが当然のコンテンツだ。

「ジークヴルム戦の時点で隠すつもりもねーよ、ただ後続の方々には苦しんでほしいので攻略法は明かさない」

「いけずー」

話を戻そう、俺と違って存命中の彷徨う大疫青は突然のハシビロコウ・ルチャドールに警戒しているようで一時的だろうがその動きを止めている。

その機を逃すのは不味い、と初心者でも分かるのかまばらに存在していたプレイヤー達がわぁわぁと近づいていくが、やはり高レベルプレイヤーにとってはつらい相手である事に変わりはなく、チラホラと大疫青に辿り着く前に倒れるプレイヤーも見えた。

「快挙ですよサンラクさん、大疫青が立ち止まるだけならまだしも、露骨に警戒してるのは初めて見ましたね」

「投石機が最適解じゃねーのこれ」

「投石機……NPCの協力不可欠系ですかね？」

「そもそも作れるかどうかも知らないよ俺は」

少なくとも五十メートル以下ならインベントリアには入るから可能性はゼロではなさそうだ。

大質量で吹っ飛ばすのが最適解っぽいし、俺みたいな肉弾特攻じゃなくてもそれなりの質量を遠距離からぶつける手段があれば有利に立ち回れそうではある……なお第二形態疑惑は考えないものとして、だが。

「あと十回くらい同じことすればサードレマから大きく距離をとらせることができそうだね」

「じゃ、俺は新大陸に行くから……」

「そういえば、なんでこっちに来てたんで？」

「修行、行くぞーエムル」

「はいなっ！」

◇

「いやー、面白いもの見れましたねーああも思いっきり死ねるならシャンフロで鬼行軍できるの納得」

「あれについてくのはだりぃわー……」

「全くですねー、【旅狼】が手綱を離してる感じがするのも納得。あれは確かにほっといた方が凄いことやってくれそう」

「…………」

「んー、ウチが調べた限りじゃ現時点で結構カッ飛んでるのに「修行」ね……タイムリーなとこだとオルケストラ関連かな？」

「ゴルドゥニーネじゃねーの…？」

「あー、そっちかも。でも私的にはオルケストラ関連だといいなぁ、って感じ」

「……まぁ苦労するのは当機(アタシ)じゃねーし」

「ミレィさん！　交代です！！」

「運が悪かったですねー、今さっきめちゃくちゃ面白い事が起きてたのに」

「どうせ録画してるんでしょう？」

「おーあたりー、じゃあ私達(031)もそろそろ新大陸に……オルケストラんとこに行きますか、レミィちゃーん」

「了解(だつる)‥なるはやで頼むわ」

「効率厨に怠惰キャラつけるのキャラメイク的に感心しちゃうなー……どうせなら新大陸行く前にデートしますかレミィちゃん、パフェ食べよーぜパフェ！」

「勘弁してくださいよミレィさん……ディプスロさん帰っちゃいますよ？」

「テイクアウトすれば問題はないですね、はい論破」

「賛成(おーいえー)‥」

「なんつー執着心だこの人………」

あなたの為のオーケストラ　其の十二（後書き）

そりゃ【ライブラリ】にもいますよね、攻略検証班

さーて残るはシンシアさんだけか……このまま独身ルートでいいかな……

あなたの為のオーケストラ　其の十三（前書き）

高濃度な「作者の性癖どストライク作品」を読んだことで古戦場の屍から蘇生しました。衝動的全巻購入……！

あなたの為のオーケストラ　其の十三

人あるところに技あり、技は受け継がれ、いつしかそれは流派と呼ばれるようになる……即ち、俺の道場破りの旅は新大陸でセカンドシーズンになったわけだ。

道場破りは多分スキル習得とかそこら辺のパラメータは鍛えられているんだろうけど、経験値的には旨味皆無の無味なのが頂けない。まぁキルしてないからな……それはそれとして、新大陸にも人類は存在する。ちょっとガチめのケモナー向けだったりちょっとサイズがイかれてたりちょっと関節が虫のそれだったりするが一応分類的には人類種らしい彼等も、クソ原始的とはいえ文明というものを持っている。

そして【ライブラリ】もとい攻略サイトや掲示板の情報から、それぞれの種族にも流派が存在することは分かっている！！

「さぁキリキリ吐けアラバ！　魚人族神秘の流派をなァ！！」

「相変わらず不意打ちで過程を飛ばしてくるな友よ……流派、流派？　魚人鉄術(マーマーンアーツ)の事か？」

「伸び伸びとした名前だなオイ……ちなみにそれ徒手空拳？」

「馬鹿を言え、水の中にて武器を振る術だ」

「はい解散」

いや気になるけど、気になるけど今の俺には不要の技術なんだよなぁ。
聞くだけ聞いて!? みたいな顔で俺を見るアラバであったが、お前には夢女子プレイヤーの相手をするというお仕事が残ってるんだぞ頑張れ。
なんとなくだが嫌な予感がしつつあるのだが、次に向かうのは一族全員で前線拠点までやってきたので普通に住み着いてしまった巨人族(ギガント)だ。
竜災の被害で前線拠点近辺の森が軒並み焼失したのでガタイがあるとはいえ人数的には村単位でしかないため、生産職の聖地と化しつつある前線拠点では急ピッチで巨人族の居住区が作られたのだとか。まぁなにせ子供ですら下手なプレイヤーよりフィジカルに恵まれている、作業効率とか色々凄いらしいね。巨人族といえばモラ・ベガルタの……なんか妹? の方と面識がある、案外あっさりと巨人族の流派について知ることができるんじゃないか?

◆

「誰だお前は!!」
「えぇ…………」
思いっきり剣突きつけられてるぅ……巨人族って武器に対する思い入れが強いから(実際は相当雑に扱っているとはいえ)傑剣(デュクスラム)への憧

刃や傑剣への憧焉終刃を帯剣してるだけで一目置かれる感じで相対できるのに何故ここにきてこんな敵意全開で……

「サンラクサン、サンラクサン。アタシは別行動ばっかだったからよく覚えてないですわ……でも、もしかしなくても女の子になってた時に会ってたんじゃないないですわ？」

「……あー」

そういえばそうだったかも。そりゃ道理で警戒されるわけだわ、アラドヴァルを出しても性別ごと違うやつが知り合いの武器を持ってたわけで、普通に考えたら「サンラク♀からサンラク♂がアラドヴァルを簒奪してやってきた」風にしか見えんわな……

「あー……五秒待て」

「よし、待つ！　そして六秒後に斬ってやろう！！」

「ハァイ」

「サンラク！？　驚いた、一体どんな手品なんだ？！」

あー、この素直すぎる反応は秋津茜にも通じるものがあるなぁ……おうおう巨女スキー達が威嚇してやがる。残念だったな巨人族の好感度を稼ぎたいなら戦乱の時の方が効率がいいぞ、あと武器を使い続けとけ。えーと、名前名前……

「竜災大戦以来か、元気してた？」

「うむ、姉さん共々壮健だったぞ！　してアラドヴァルのサンラク

よ、お前も元気だったか！！」

「うんうん、ちょー元気だったよ」

元気でオルケストラにボコられたりしてたよ。

「そうだ、以前お前の話を姉さんに話したら是非とも会いたいと言っていてな！」

「姉って……確かここに来た巨人族の長だっけ？」

「うむ！」

いやうむ！　じゃないよ、それ完全に屋上とか校舎裏とかのパターンじゃない？　いや、だが、しかし、武闘派集団の長と繋がりを得るってのはデカいアドバンテージだし……流派……でもどう考えても武器ありきの流派なオチしか見えないし……うーむ、うーむ……

「よし分かった、会う」

「そうか！　ならば案内しよう！」

なんかこれいきなり本筋から脱線してない？

……

…………

……………

「はぁー、此奴が噂の！！」

「まぁ当たり前じゃがちっこいのう！！」

「こりゃなんだ、爪楊枝か？」

「馬鹿を言え、この者と比べれば剣であると分かるだろう」

「名剣なのは分かるぞ！」

「うーむ、よく馴染んでおる。良き鍛え手と良き使い手に巡り合ったようじゃ」

さっきからエムルさんが痙攣するマフラー状態から元に戻らないんでガン見するのは勘弁して欲しいのだが……くそう、ただでさえ女モードは小柄になるってのに、周りにいるのがどいつもこいつも三メートル超の巨人ばかりってどういう事なんだ！
物理的圧迫感が凄い、空気圧に押し込められてる気分だ。巨人族も普通の人類と変わらず年齢が大きい程巨大なようで、巨人族監修の元に建てられた「大使館（便宜上の呼称が定着した）」ですらガンガンと頭をぶつける巨大な者もいるくらいだ。

「………よく来てくれた、アラドヴァルのサンラク」

と、巨人族達の喧騒全てを切って捨てるかのような声がまっすぐに響いた。
視線を向ければそこにはモラ・ベガルタ妹ことフィオネそっくりな、しかし目力といい立ち振る舞いといい随分と大人びているというか

威圧感のある女巨人が俺を見下ろしていた。

「我が名は無双の双剣（モラ・ベガルタ）のディルナディア……妹が世話になったようだな」

「成り行きで背中を預かっただけさ」

「お前の事はさまざまな戦士達より話を聞いた。七つの最強種を狩る者、海鳴りの射手、狼傷の戦士、アラドヴァルを佩く者………」

巨人族達の視線に熱が篭る。言わんとしていることが理解できたが故に、観念した俺はインベントリアからアラドヴァル・リビルドを取り出す。

「おお！！」

「なんと美しい……」

「ドルダナの槍、まさか残っておろうとは……」

「だがあまりに小さくはないか？」

「元より槍を折った剣であるし妥当ではないか？」

「否、これは鍛え直されておるな……だがしかし、アラドヴァルの在りようを損なわぬ名匠の技じゃわい」

「鍛治鎚のバルガンゼルス翁が言うならば間違いないか！」

「しかしこの黒々とした刃……まさか、アムルシディアンか？」

「なんと！　覇槍の穂先か！！」

「静まれッッ！！！」

轟音が騒音の全てをねじ伏せる。裂帛の一喝にて全てを黙らせたモラ・ベガルタ姉……ディルナディアが鋭い視線を俺と、アラドヴァル・リビルドへと向ける。

「ドルダナの槍……アラドヴァルの行方は英雄ドルダナと共に長く失われていた。アラドヴァルのサンラクよ、その槍を手に入れた経緯を教えてほしい」

「教えを請う目じゃねーな」

その目は……疑念か？　成る程、どこに行ったかも知れないレア武器をちっこい人間が我が物顔で持っているんだ。どうやって手に入れたのか、返答次第じゃ「返却（強奪）」もあり得そうだ……ふっ、馬鹿め。ロールプレイヤーは多かれ少なかれ吟遊のケがあるんだよ、喰らえ超脚色！！

「地を這う大蛇を知っているか」

「何……？」

「山を砕き、丘陵を均し、命を憎悪する蛇の名を知っているか」

ヴァッシュからも太鼓判を押されてるんだ、勝ち確を更に脚色してやるぜ。聞き惚れな巨人族！！

「その名は……ゴルドゥニーネ。今こそ語ろう、ドルダナ最期の戦いを」

あなたの為のオーケストラ　其の十三（後書き）

なお九割脚色

あなたの為のレクイエム　前編（前書き）

さて、土古戦場か……（身体が闘争を求める）

あなたの為のレクイエム　前編

ドルダナ　ｉｓ　誰。

アラドヴァル君には申し訳ないが俺がドルダナ氏へ抱く印象は「属性相性ミスって死んだ推定オッサン」である。最後に何をして死んだのか、はアラドヴァルが突き刺さっていた状況からなんとなく察せられるが……ここはひとつカマをかけてみよう。

「巨人族諸君、勇猛な竜狩りの戦士諸君、武器と共に生きる諸君。諸君らはドルダナについてどれ程知っている？」

「それはもう、オディヌに匹敵する英雄ぞ！」

「おう、鎮護のオディヌと放浪のドルダナ、二人の物語を知らぬ巨人族はおらぬだろうよ！！」

「晩年は穏やかに過ごしていたと聞くが……」

「未曾有の災禍に立ち向かい消える……まさに誉れよ！！」

うーん、参考にならねぇ。ただゴルドゥニーネに挑む直前は隠居状態ってのは分かった。よし構築（でっちあげ）していこうか。

「アラドヴァルのドルダナ、その勇名もかつての話……彼は晩年、アラドヴァルを携えながらも穏やかに暮らしていた……」

正直この中にドルダナと同年代の奴がいたら詰みなのだが……推定

不老不死なヴァッシュの古い友人、なら相当古い世代であるはず。
「だが奴は現れた、諸君らは奴を知っているか！！」
ここで大声を上げる。ボスキャラの登場だ、プレイヤー相手ならシュールな描写でもいいかもしれないがＮＰＣ……メタ視点を持たない連中相手なら物語上の重要人物は大々的に描くべきなのだ。
「その名はゴルドゥニーネ、あらゆる命を憎悪し、毒を呪いを撒き散らす白蛇の者！」
「ワシは知っておるぞ、西果(さいは)ての悪夢！」
「西果ての悪夢……頭が四つある怪物と聞いたが」
ここで差し込む！
「いいや違うぞ、その正体は四体の龍蛇(ナーガ)を従えた女だ。この身体と同じ程度の人の姿をしている」
「何故そんなことを知っているんだ？」
「おいおいフィオネ……俺がどこからアラドヴァルを引き抜いてきたと思ってんだ？　戦ってきたんだよ」
まぁ結果だけ見るとボコボコにされた形だが……実質勝ちみたいなところあるからセーフ。
だが俺がゴルドゥニーネと戦ってきた、という事実は巨人族達の視線に敬意を混ぜるくらいには力があるらしい。良いぞ良いぞ、もっと褒め称えろ。

「この剣はある場所に深く深く突き立てられていた、それこそがドルダナ最期の戦いを証明する何よりの証拠だ」

視線を集める、雑談が消えて全ての巨人族が俺を見たのを見計らい……吟遊再開。

「このアラドヴァルは龍蛇の一体、その胴に深く深く突き刺さっていたものだ。では諸君、勇猛果敢なる諸君らが老いて尚生き延びていたとして、その身が軋み情けないほどに身体が動かなくなったとして……己が故郷に山河を抉り大地を削る龍蛇が牙を剥いて現れたならば、どうする諸君？」

「無論戦うぞ！」

「おう！　拳砕け刃欠けるまで！」

「それこそが巨人族（ギガント）の栄光！！」

「そうだ！　その通りだ諸君！！　アラドヴァルのドルダナは立ち上がったのだ！！」

アラドヴァル・リビルドの切っ先を天に向けて掲げれば、おおおおお！　と巨人族達が喝采を上げる。

「山河喰らいの蛇など何するものぞ！　竜狩りの英雄が恐るるには翼も爪も足りぬではないか！！」

ガンガン！　ガンゴン！！　と興奮した巨人族が己の相棒を床に叩きつけて高揚を表現する。ちなみに二発目はディルナディアのお仕

置き拳骨が落ちた音である。床にヒビ入れたらあかんよ。

「軋む身体に喝を入れ、とうに消え果てた情熱を、心の炉に入れ再び燃やす！　アラドヴァルもまた主に応える！　煌々と燃え上がる炎こそが何よりの証左！！」

「おお！　我らが英雄！！」

「竜を焼く英雄の炎！！」

「ええい酒もってこい！！！」

ポップコーンとコーラにしとけ、でもキャラメル味と炭酸のコンボを決めると尿意へのカウントダウンが爆速になるから注意な。そもそもポップコーンが口の中から水分を奪っていくからジュースの減りが加速するわけで……おっといけない。

「勝てぬ事は百も承知、全盛の頃とて決死は必定……ならば老いた英雄は賢く逃げるのか？」

「否！！！」

「そうだとも！　ドルダナは逃げなかった！！　己よりも遥かに巨大！　己よりも遥かに悪辣！　すなわち巨悪と相対して尚、英雄の誉れに陰りは無い！！」

王道とは真っ直ぐブレないお約束だ、奇をてらう必要はないのだ。こっちが引くくらい盛り上がってきた巨人族達にはよ続きを、と見つめられては吟遊ロールも捗るというもの。

「灯せ情熱！　猛れ熱血！　老いたる英傑は果敢に立ち向かった！　恐るる事はない、ドルダナとアラドヴァルが共にあれば、千の竜とて討ち取ってみせよう！！！」

――だが。

そう、ここから先は「だが」で始まる。
過去編特有の暗い展開だ、属性相性をロクに調べず突っ込んでくたばったというしょーもない結末を、悲しくも雄々しく、苦しくも清々しく……デコレーションしてトッピングしてカスタマイズしてお客に出せるものにしてやらねばならんのだ。

「だが諸君、既に薄々なりとも感づいているだろう諸君……アラドヴァルは今、我が手にある。ドルダナの手より離れたアラドヴァルは……悲しい程に朽ち果てていた」

その言葉を告げた瞬間、巨人族たちの喧騒がぴたりと止んだ。そうだろう、どれだけ脚色盛り合わせにしたって結末だけは変えられない。だからせめて餞に名誉を盛ってやるのさ。

「おお忌まわしき龍蛇（ナーガ）。空を飛ばず、爪で切り裂かず、足で踏ん張ることもできない…………それ故に、彼奴らは竜ではなく、蛇だった……」

ああっ！　と巨人族の一人が悲痛な声を上げる。見た目は綺麗な女性でもサイズがでかすぎて一々ビビるんだよなぁ。くしゃみの風圧で吹っ飛ばされそうな怖さがある。

「アラドヴァルは竜を滅ぼす炎。さりとて他の敵に無力というわけでもない……だが、だが……龍蛇を焼くには、力及ばず……ドルダ

ナの身体は、取り返しのつかないほどに傷ついていく」
少なくとも最後にぶっ刺すくらいの体力はあったっぽいしここからの描写は頭を使わないといけないな。
「俺は龍蛇をこの目で見た。あまりに巨大、あまりに長大……おお、その時俺は直感的に理解した！　ドルダナもきっと、あの恐ろしき牙に屈したのだと」
悲痛な雰囲気が「大使館」に広がる、なにせここから先はドルダナが敗北し死に至るまでの過程だ。ここに関しては十割脚色というか想像だが、まぁおおよそ間違ってはないだろう。
「片腕を食い千切られた、脇腹を抉られた、邪悪な毒が身体を巡り、錆び軋む身体が絶叫を上げる」
「おお、そんな……」
「覆せぬ死の毒が身体を巡る痛みを知っているか？　己が命の足掻きを組み伏せ、動かなくなるまで痛めつけるかのような、身体以上に心を蝕む激痛を………」
このゲームをプレイしてる中で毒を食らって死んだケースは蠍の消化毒も含めたら指一本を１０と定義しても片手じゃ数え切れないくらいだが、少なくともゴルドゥニーネの毒に直撃すると実際どうなるのかとかよく分からないんだよね。
いや、ラビッツ防衛線のヴォーパルバニーの様子的に身体にヒビが入る感じでデバフが付くんだろうけど。
「ゴルドゥニーネは亀裂を刻む、蝕む毒は命を砕く。命よ滅べ、そ

の身の爪先に至るまで砕け散れ……如何程の憎しみがその毒を生み出すのか、俺には分からない」

ユニークシナリオEXを進めてないからな、あとウィンプがウィンプなので参考にならないってのもある。引きこもりのコミュ障が外に出るのを嫌がる系の嫌悪だからなアイツの人嫌い。さしずめ俺は飯を運ぶ親か、叩き出したろかあんにゃろー。

おおドルダナ、お前は一体どんな風にくたばった？

龍蛇四体にあのゴルドゥニーネだ、野晒しならマシだろう。喰われたが、踏まれてすり潰されたか……

きっと巨人族達もその光景が目に浮かんだのだろう、瞑目し反応を見せないディルナディアを除いて彼らのテンションは最低値まで下がりきっている。

「だが、アラドヴァルの炎は消えてなどいなかった」

だが安心しろドルダナ、餞と言っただろう。現在を語る上で無為じゃないからこそ過去編には価値がある、需要がある！

ここからがクライマックスだ、九十九割増しで盛り上げてやる！！

あなたの為のレクイエム　前編（後書き）

Q．なんでサンラクこんなに吟遊ロールできるの？

A．一時期ペンシルゴンがＴＲＰＧにどハマりしてたので巻き添えでカッツォもサンラクもロールプレイしまくってた時期がある

邪悪なロールプレイとしてディプスロという前例もあったので感情を込める「点」が直感的に分かる

それと吟遊天誅

あなたの為のレクイエム　後編（前書き）

精鋭達によるゲージ全ブッパ、ドンペリポテト

ＶＳ

サイレントマジョリティーの怪物、歌って踊れる本能寺

ゴジラＶＳデストロイア的なワクワク感

「戦う気力は血と共に失われた。削げたのは肉だけではない、闘志……心に燃ゆる炎すらもが消えかけていた」

俺はドルダナがどう生きて、どう戦って、どうくたばったかなんて知らない。だが顔すら知らないその男が最後に何を成し遂げたか……それだけは知っている、それを知っているのは俺とあのゴルドゥニーネだけだ。

「だが諸君、戦士は常に武器と共に在った。それは武器は常に戦士へと寄り添っていたということだ……己が片割れを見よ！！　諸君らが信じ、諸君らが命を託す武器達は！　その身砕けぬ限り、彼らは戦い続ける！　そうだろう諸君！！」

ぺの字もディの字も「山場は反論を許さない勢いで詰めて行く」という点においては奇妙な一致を見せる。ならば俺もセオリーに従っていこうじゃないか。

「言葉はない、だがその輝きは千の言葉よりもなお雄弁にドルダナへと語りかけた！！」

巨人族達が各々の武器に視線を向ける、一呼吸分の隙間を開けて……すかさず叩き込む。低く、静かに、だが絶対に聞き間違えないようはっきりと。

「――諦めるのか？」

コン、と鞘に納められたアラドヴァルがいやに響く音で床を叩く。まるで俺ではなくアラドヴァルが喋ったとでも思ったのか、全員の視線がアラドヴァルへと注がれる。

「諦めるのかドルダナ、私を握る者よ。お前が屈するのであるならば私もまた刃を収めよう、武器とはそういうものだ……だが」

ゴン！　と先程よりも強く床を打つ。

「アラドヴァルは折れていない、私はまだ戦える！　たとえ炎が通じずとも！　私はまだ戦える、答えろドルダナ、お前はもう戦えないのか？　応えろドルダナ！　私を握り、立ち上がれ！！」

しゅらりと抜き放たれた漆黒の刃が炎を覗かせる。打ち直す時に色々ぶっ込んだだから当時のアラドヴァルとはもはや別物だろうが、アラドヴァルの名を担っている、ただそれだけの事実が俺の言葉に絶対的信頼を付与する。

「ドルダナは立ち上がった、手招く死の誘惑を払う手……握るはアラドヴァル！　おお、想起せよ諸君！　死を振り切り、死へと走る英雄を！！」

「おお………」

「四体の蛇がドルダナへと襲い掛かる、錆びた肉体に滴る血潮、末期の熱が、赤い生命が！　錆びを焼き消す！！」

座れ座れ、他のお客様のご迷惑だ。

「もはや刃がゴルドゥニーネ本体へと届かぬ事は百も承知、だがド

ルダナは知っていた！　勝利と栄光は必ずしも同一ではない、敗北……なれど輝く救いがある！　死してなお成し遂げる偉業を、人は矜恃と呼ぶのだ！！」

いや結構楽しいしもう止まれねぇ！！

そもそもなんでこんな熱烈吟遊ロールやってるんだっけ俺、まぁい

「駆け抜ける足、一歩地を踏む度に力を増していく。握りしめた手、血と汗のぬめりを捩じ伏せる程に強く！　睨む眼光は槍の如く！！」

「おお、ドルダナ！」

「巨人族の英雄！！」

「槍を、剣を振るう者！」

「燃えよ魂、血肉を糧にただ一撃を！！」

人という生き物は！　テンションが上がると見境がなくなるのだ！！

抜き放ったアラドヴァルを渾身の力で床に突き立てる！！

「果たして、ドルダナ最期の一撃は龍蛇の一体、その背に深く深く突き立った……焼き滅ぼす事叶わねど、灼熱の刃は蛇の肉に食らい付いた……幾度皮を脱いだとて決して抜けぬ程に」

「さらばアラドヴァル、さらばドルダナ。言葉なく剣は刺さり、言葉なく英雄は墜ちていく……」

ふぅ……と、長く息を吐く。蝋燭の火を消してしまうように、この物語はもう終わりといえ意思を伝えるように。

「――そして時は流れ今。僭越ながらひとりの小人がゴルドゥニーネへと挑み、幾星霜を経て朽ち果てど、約束を……英雄の武器としての務めを果たし続けていた剣を脱いたのだった……ご静聴、感謝します。あと床ぶち抜いてゴメンネ」

痛いほどに静かな「大使館」の中で、空気を読んで床下を燃やさず焼き溶かしていたアラドヴァルを抜いて鞘へと仕舞う。

ガチッ、とアラドヴァルの刃が完全に鞘へと収められたその音があたかもスイッチであったかのように……

「！！！！！！！！！！！！！！」

一般的女性の数倍規模の肺活量を持つ巨人共の大歓声が誇張ではなく館を激震させた。

「……きゅう」

「エ、エムルーっ！！」

ヴォーパルとはいえ兎であるエムルの身体から力が抜ける程の大音量で盛り上がる巨人族達。ある者は武器を掲げて咆哮し、またある者は滝のように涙を流し……規模が規模だからドン引きも数倍だ。

「うぐっ、ふぐっ、ゔゔゔゔ……っ」

「いやいやいや……そんな泣くなって……」

「ゔゔゔゔぁぁぁぁああ…………」

精神幼女ことフィオネさんは顔面が全体的にぐじゅぐじゅしてるし、此奴だけではなくいい歳したおっさん巨人族が髭を鼻水でコーティングしてたりするので控えめに言って地獄絵図だ。

「あー……日を改めようか？」

「いや……いや、大丈夫だ。アラドヴァルのサンラクよ……ドルダナの最期を伝えてくれたこと、感謝する」

いや、九割脚色だし俺個人の意見としてはどれかの龍蛇に吹っ飛ばされた拍子に巻き添え食らった個体に刺さった説が有力なんだが……いや、あえて言うまい。

華々しい敗北とかあんの？　という俺の中のロマン否定派は心の中で眠らせておけばいい、リアル以外のものが見たくてゲームやってるのにリアリスト気取ってどうすんだ。

心なしか目元に擦った跡が見える気がしなくもないディルナディアは僅かな瞑目ののち、俺へと視線を向ける。

「随分とあっさり信じるんだな？」

「それは我らオディィヌ氏族がドルダナと縁深い氏族である事と、それにまつわる理由があったからだ」

「あん？」

じっと俺を見つめ……いや違う、見ているのは俺だが俺ではない。

首に巻かれたマフラー、すなわち気絶したエムルを見ている？

「ドルダナの物語、血肉異なれど魂で絆を紡ぐ同胞との旅……ドルダナが共に竜を狩った仲間達……」

――勇敢なる巨人族ドルダナ

――豪放なる鉱人族チダン

――聡明なる獣人族レリロ

「そして……旅をするヴォーパルバニー」

「！！」

――ヴァイスアッシュ

「巨人族に伝わりし「旅兎との約束」……白灰の血に連なる兎を引き連れしアラドヴァルのサンラクよ、ドルダナが聞き届け、オディヌ氏族が紡いできた三つの約束……今度はお前が耳を傾けよ」

マジかよ、ここで「致命兎叙事詩（エピック・オヴォーパルバニー）」関連のイベントだと？　いや、だが重畳と言えば重畳……致命兎叙事詩はヒントが少なすぎるんだ、今に至るまでだって殆ど他のＥＸユニークの進行に連動しているようなものだ。

「……いいぜ、その言葉聞こうじゃないか。だが……」

「うむ……話すには少し湿り気が多すぎる、か」

ていうか……

そもそも俺、ここに何しに来たんだっけ？

あなたの為のレクイエム　後編（後書き）

本当は自分で会いたかった、されど目覚めは遠く…………

あなたの為のオーケストラ　其の十四（前書き）

シュレディンガーのスタレ

あなたの為のオーケストラ　其の十四

「大使館」の最奥……氏族の長、すなわちディルナディアの執務室……的な部屋の中で俺はディルナディアと対面していた。

「いい加減起きろエムル、お前関連だぞ」

「きゅー……」

ダメだ、こりゃしばらく復活しないな。

「すまん、話を続けてくれ」

「分かった……そも、ドルダナは英雄であるが……その英雄譚は彼一人によるものではないのだ。かの物語はドルダナを含めて四人の英雄達による竜退治の物語として語り継がれてきた」

「成る程……その中にヴァッシュ……ヴァイスアッシュの名前が」

「旅兎ヴァイスアッシュ、それは杖と刃を携え世界を旅する兎……彼はドルダナと別れる間際に三つの約束を交わした。それは後世へ伝える二つの言伝と、一つの「座標」だ」

座標……それに言伝。どうやらディルナディアは先に二つの言伝から話すつもりのようだ。

「――一つ。波濤を越えて来たりし者共よ……郷愁せよ、母を探せ」

「……母？」

ウチの母ならアフリカの保護区で働いているリアルアマゾネスみたいなイヴォンヌおばちゃんとゴライアスオオツノハナムグリについて盛り上がってますけど。

輸入禁止されてるからそのうちアフリカ旅行しようかしら？　とか言ってるけどマジでやりかねん、つーか部屋にコロンビア旅行のカタログと登山装備のカタログがあったの知ってるからな？　ゴライアスオオツノハナムグリも気になるけど天然モノのリッキーブルーも狙ってるそうです。

「我らとて仔細は知らん、お前達と比べて長命なる我らとて長く伝えられて来た約束なのだ」

成る程ヴァッシュの年齢がますます怪しくなりましたね、今に始まったことじゃねーや。

だが真面目に考えるとするなら、要するに「プレイヤーアバターはどこから来るのか」って事なんだろう。メタ的な視点で言えばいくつかの例外を除けばファステイアに存在する広場にスポーンする、だがある程度シャンフロの作り込みを味わったプレイヤーはこう思うわけだ。

──これ、プレイヤーにもヤバイくらい設定があるんじゃね？　と。

実際ありました、ウェザエモンさんを初めとしてヤクザ兎やＡＩ鯨女やらがちょいちょい匂わせてるからほぼ確定と言っていい。

そしてそれらの断片的な情報といまの「言伝」で八割確定したと言っていい……

三体存在するという超巨大宇宙船バハムート、残る二隻の内の一隻はファスティアにある。

「思ってたより重要アイテムじゃねーか……………」

いや、そもそも三パーツまとめて存在してたのが奇跡みたいなもんか？　あの地下空間……エドワード何某が死の間際まで使っていた研究室、明らかに正規手段ではない方法で辿り着いたが……本来はもっとグランドクエストなりなんなりが進んだ後に訪れるべき場所だったのかもしれない。

「その言伝には心当たりがある、確かに受け取った」

「うむ……では次の約束だ。これは我らにも関係があるが……波濤の者、巨人族が認めるに値する勇士現れし時、低き巨塔への道を授け共に征くべし」

「低き巨塔？」

なにその押す引き戸みたいな矛盾ネーム。物理的にあり得ないとは言い切れない辺りがまたなんとも。そう、例えば地下深くに一階を作って最上階だけを地表に出せばそれは低き巨塔と言えなくも……………地面に埋まってる？

「…………」

「どうした？」

「いや、脳が疼いただけ」

今何か、とんでもない事実に触れかけたような……何か、具体的にこれと断定できないが何かパズルのピースに指が引っかかったような……パチッと何かがスパークしたような。

「アラドヴァルのサンラクよ、我らオディヌ氏族はお前の力を認めている。故にお前が望むのであればフィオネと共に北の地を目指すがいい」

「なんでフィオネ指定？」

「初めにお前を見出したのは妹だからだ」

「成る程……最後の「座標」ってのはその低き巨塔までの道のりか？」

「いや違う、それは二つ目の約束に付随するものだ」

となると三つ目の「座標」とやらはこれらとは別件か……

「最後の座標……それはこの「絵」だ」

「んん？」

柱かと思っていたが、どうやら木箱だったらしいそれがディルナディアの手によって開かれる。中には一体何の皮なのかはさっぱり分からないが、所謂羊皮紙的な紙が巨大な槍か、それこそ柱のように丸められていた。

ディルナディアの背丈は三メートルくらいだ、その彼女が持って脇差くらいの長さがあるということは俺から見たら完全に槍か小ぶりな丸太である。

紐と呼ぶには随分とワイルドな……髭？　か何かを結って作ったのだろう紐が解かれ、巨大巻物の内側に描かれたそれが露わになる。

「……ナニコレ」

「うむ、巨人族の長が代々書き上げる「座標画」だ」

ああ……画伯であらせられましたか……

自信満々に広げた巻物に描かれていたのは、なんというか……その……小学生が書いた落書き？　どっちかというと下手くそが描いた輪郭ガタガタの絵？　色はぐちゃぐちゃだし変な模様だし……俺でももう少しマシに描けるぜ。

ははは、見ろよこのペンギンとか羽が分離してるぜ。それにこっちの妙な形した変な動物……スッポン？　いや違うなやけに突起の多い頭の亀かな？　そいつらがはっけよーいでもして…………して…

…………

…………………ん？

「んんんんん！！？！？！？」

先ほどの引っ掛かりとは比べ物にならない雷霆が脳裏を駆け巡る、

この形、この不自然すぎる輪郭、動物、獣、大陸……！！

「地図か！！！」

「地図？　いやこれは……」

いいや間違いない、思い出したぞこっちのスッポンの形状は多少の差異はあるが旧大陸の全体図とほぼ一致している。新大陸と違って旧大陸の方は大陸規模での地図がすでに完成して攻略サイトに載っているのだ、だから俺も見覚えがあった。

そして左側の変なペンギン、その中心部にある碧と紅の二色の点、頭の付近が妙に緑色……間違いない。

「嘘だろ……」

流石の俺をして目眩がする特大の爆弾だ。何せこれを公開するだけでトットリ・ザ・シマーネのクランが存在価値の全てを失う。何がやばいってこの一枚だけでこの世界の秘密が半分以上暴かれる。まず始源獣だろ？　新大陸のエリア毎の特色だろ？　それを差し引いても千切れたペンギンの羽は南の方に島がある事を指し示している。

「ん？」

なんか、変な斑模様がついてるなこの千切れ羽…………黒丸の上の方からフランスパンみたいな楕円が伸びてる…………あぁ、兎のマークですかこれ。

「ラビッツかよ……」

ラビッツはやたら広い、少なくともサードレマに匹敵するかそれ以上にデカい。まぁ実際は農地とかばかりなので見所があるわけじゃないが……ラビッツはその全周を霧のような靄のような妙なものが囲んでいるので、どれだけ目を凝らしても水平線も地平線も見えないのが特徴だ。

だから新大陸の何処かにあるのか、島なのか……この地図によってこれまでの疑問に結論が出たわけだ。

ラビッツは新大陸の下、つまり南にある島だったというわけだ。バカンスに如何？　このゲームの海って控えめに言って地獄だけど浅瀬なら大丈夫なのかな？　でもアラバの話だと最低でもめっちゃアクティブに動く足の生えたイソギンチャクとかいるらしいけど。

さて、本題に戻ろうか。この地図……恐らく代々の巨人族が描き伝えてきたという事は原本とほぼ同じデザインと考えて間違いないだろう。

そしてヴァイスアッシュとの約束に関する絵であるということはこの「矢印」もヴァッシュが描いたものだ。

「ラビッツから海を通って前線拠点を通る矢印に、旧大陸側に丸印……」

さて、兄貴………あんた一体、何を仕込んでるんだ？

あなたの為のオーケストラ　其の十四（後書き）

ちなみにディルナディアさんは絵心めっちゃある、先代の座標絵を完コピしたくらいには画伯（真）
というか歴代オディィヌ氏長に画伯（偽）はいない、つまり……ヴァッシュにだって、絵が下手な時期はあったんです

あなたの為のオーケストラ　其の十五（前書き）

虚空をクリックして寝たら平成３１年5月1日に飛ばされていたので戻ってくるまで時間がかかりました、ゴメンナサイ

時間を金で買えた試しはない……（至言）

あなたの為のオーケストラ　其の十五

現物を持っていくのは流石にやめてほしい、との事でペンシルゴンから半ば無理やり持たされたスクショアイテムで地図を撮影する。その上で改めて地図を精査、流石に地図記号やオススメ観光ルートが書かれている筈もないが、それでもこの世界、この大陸の大まかな環境を推し量る事はできる。

「東から南にかけてはほぼ樹海なのか……」

大陸中央部の右側は砂漠、蟲人族の住んでいるところだろう。その少し下に灰色……あ、湿地帯か？　確か秋津茜がノワルリンドと遭遇した場所だ。

さらにその下は砂漠……あ、違うなこれ、規模がでかすぎるだけで海岸なのか？

「ヤバいな……これ見てるだけで時間潰せそう」

「そうか……時にアラドヴァルのサンラクよ」

「あん？」

「お前は……旅兎ヴァイスアッシュと、会える立場にあるのか？」

「んー……まぁ、そうだな」

意図的に遭遇を狙うならヴォーパル魂上げないといけないから蠍か百足蜘蛛コースなんだが、まぁ会えないってわけではないな。

「そうか…………」

ディルナディアは何故か言い澱むように言葉を詰まらせていたが、意を決したように口を開いた。

「これは、ドルダナ本人が望んだものではない、と聞いている」

「…………？」

「ドルダナが死出の戦いに赴く直前、村の者に遺した言葉があった。ドルダナはすぐに忘れてくれと言ったそうだが……その言葉は、今に至るまで受け継がれているのだ」

遺した言葉……即ち、遺言。

「ドルダナの意に反する事は承知している、だがそれでも……私は、伝えるべきだと、思った」

「……今の事は今の奴等が決める事さ、お前がそうしたいと思ったなら……な？」

「では……ヴァイスアッシュ殿に、この言葉を送り届けてほしい」

——死せど、離れど。

「…………」

「頼んだ」

たった七文字、そこにどれだけの感情が込められているのか。もしかしたら何か暗号のようなものなのかも？　だが、うん、おおよそ俺が思っている意味(解釈)で間違いはない気がする。

「確かに伝えよう」

さて、そろそろラビッツに戻るか。デカいお届けものまで預かってしまったしとりあえずヴォーパル魂が不安だから帰り道でどこか寄って稼ぐか……

「いやいやいやいやいや」

トウショノ・モクテーキ！！（１２０４～１２５４）
危ねぇ、いきなり致命兎叙事詩の方に進路変更したせいで目的ごと忘却するところだった。

「ディルナディア、巨人族に伝わる武術とか……こう、流派的なものってあるのか？」

「流派？」

…………

……

いや知ってましたよ？　そりゃ名前の前に武器の種類やら名前やら付けちゃう種族だもんな？　そりゃ流派も武器前提だわな？　それにやたらＭＰ要求するっぽいからどちらにせよ無理だし？　はーつっかえねぇ！！

「ワゴンの中から名作クソゲー見つけたけど目的のクソゲーは見つけられなかった気分だ」

ハイジャック・バレットスカイを見つけた時もそんな感じだったな、不死身の衛生兵やらなんやらゲームバランスはゴミだったけどフレと一緒にやるとどちゃくそに楽しいんだこれが……ゲームバランスはゴミだったけど。

あれは売り切り売り逃げで製作側がクソ対応だったのがいかんな、今のご時世アプデ一回で終わりとか信じられねぇ……後で調べたらＣＥＯが変わってゲーム部門から無理やり撤退したんだっけ？　ユートピアコンピュータエンターテイメントに張り合ってＶＲシステム開発競争という名のチキンレースで崖から落ちてちゃ世話ねーわ。

「まずいな……芯がブレてる」

やる事が……やる事が多すぎる……！　そして優先度はほぼ拮抗し

てる状態……いや、天秤は既に傾きつつある。
片や未だ全貌の明らかになっていないＥＸシナリオ、片や再挑戦可能な事が判明しているＥＸシナリオ………ぬぅ。

「ぬ、ぐ、むむむむむ………ええい！！」

人事尽くして天命を待つ！　天が命じたから俺に責任は生じないと書いて天命と読むのだ！！　人事を尽くしているかは別として伝統的裁定法を用いよう！！

「出でよアラドヴァル！」

そして空にぶん投げる。刺さったら致命兎叙事詩！　転がったらあなたに捧ぐ旋律！
黒曜の刃がクルクルと円を描きながら地面に落ちて………

「よしエムル、方針が決まったぞ」

「み、耳がまだキンキンするですわ……」

「ラビッツに戻る……前に、ヴォーパル魂か。久し振りに水晶巣崖行くぞ！！」

「は、はいなっ！」

引き抜いたアラドヴァルを振って土を払い、インベントリアに戻しながら歩き出す。このままラビッツに直行してもいいがオルケストラの性質的に水晶群蠍関連について復習するのも悪かない。

「一旦流派巡りの旅は中断だ、この俺の華麗なる球技を見せてやろ

う……」

数多の苦難を乗り越えた今の俺は奴らですら予測不可能な動きで跳ね回る。そうそれ即ち……

今日はアメフトだ。

◇

「やぁミレィ、思っていたよりも早かったね」

「むしろ私的にはなんでキョージュ達の方が先に到着してるのか、って方が驚きなんですけどねー」

「リヴァイアサンの産物は中々に素晴らしいという事だね、急激な文明の発展は喜びと恐怖を半々で抱かせる。うん、稀有な体験だ」

「無免許だけど大丈夫ですかねぇ」

「リアルでも乗れる、と思い上がらなければ戦闘機だって乗り回せるのがVRというカテゴリなのだろう？」

「教授（キョージュ）、やはり先に来ていたようです」

「うーむ……極まったプレイヤーが人間離れした身体能力を発揮することは承知しているが……樹海を踏破するとは」

「いやぁ、実はここに来る前に噂の彼を見てきたんですけど……あれは凄いですよ、リキャストを短縮する能力みたいなのありましたよね？　あれと絡めたら空を飛んで大陸横断もできそうでしたよ」

「無論、撮影しているのだよね？」

「本人もノリノリなヤツがありますよキョージュ」

「さて……ミレィ君の仮説が正しければオルケストラはウェザエモンと同様の再挑戦が可能なタイプのユニークシナリオだ。現状「ライブラリ」で条件を満たしているのは君だけである以上……」

「承知してますよ図書館の長（クランリーダー）、私は「ライブラリ」じゃそっちが本業ですし」

「うむ、迷惑をかけるね……それでは諸君！　「冥響のオルケストラ」検証及び考察を始めよう！」

あなたの為のオーケストラ　其の十五（後書き）

基本的に亜人種の流派はその種族の特性に依存してます
マナの吸収量が高く肉体の成長という形でマナを消費する巨人族は武器を肉体と定義してスキルを武器に干渉させる流派ですし、魚人族は水流に干渉する事で武器や自身への抵抗を軽減する流派なわけです

つまり何が言いたいか……原則的に「改宗」前提なんですよね、亜人流派

・ハイジャック・バレットスカイ
不死身の衛生兵によるお前がゾンビＦＰＳ、ついにその全貌が明らかになる（設定が固まったとも言う）
謎のバイオテロにより米国首脳陣のみならず国民全てを鏖殺してのけた「死せる日」……人類の制御を失い、ＡＩ操作により世界中の国境を無視して彷徨い続ける巨大飛行空母「エルヴィン」。
しかし、彷徨う空母の最奥に米国を滅ぼしたバイオ兵器の設計図が存在する事が明らかとなり、世界各国は空母エルヴィンの「鹵獲（ハイジャック）」を目論み動き出す……！！

なお現実は製作した会社が無理な舵取りをしたせいで轟沈し、有志の手によってかろうじてサーバーは残るもバグが修正されないせいで全身炎上しようが細菌兵器が充満する空間で深呼吸しようが至近距離でグレネードが直撃しようが「欠損描写がない」「体力がゼロ

になりアバターが消失するまでに行動可能な空白の時間がある」という要素が組み合わさった事で事実上不死身の衛生兵が死なずの泥試合を繰り広げる無限蠱毒が誕生した。
ちなみに衛生兵を唯一殺す方法は空中空母から叩き落とす（確定でリスポンするため）

あなたの為のオーケストラ　其の十六（前書き）

腰、喉、鼻

これなんだと思う？
これね、作者がＧＷ終盤にヤっちまった部位
喉ガラガラぁ！　腰いてぇ！　花粉症ァ！！！

昨日はいい試合だった……飛び入り参加のロングスナッパー金晶独蠍のワンマンプレーに乱闘が勃発し、俺がタッチダウンしたわけだが……いい汗かけたよ。

小銭稼ぎと経験値稼ぎ、ヴォーパル魂を同時に稼げる蠍はやはり狩場として最強だな……自衛目的で刻傷を恐れず突っ込んでくるところとかポイント高いわ。

「いやー、久し振りに行き詰まった感じだったよ」

「そう……なんですね。あの、えと、私の方は……ぼちぼち、ですかね？」

墓地墓地？　いったい何人屠って……いやあんまり面白くないな、お蔵入りした奥で朽ち果てろクソギャグ。
基本的にシャンフロにファストトラベルは存在しない、ディプスロが運送業で小銭を稼げるくらいには転移魔法によるファストトラベルは需要がある事からも分かるが、転移魔法の習得は相当の難易度なのだろう。
だからこそネームドヴォーパルバニーというアドバンテージは相当なものだ。鬼に金棒、廃人にファストトラベル、一体サイガー０というプレイヤーが今どうなっているのか……ふふふ、レベルキャップを解放しただけで見た目がアレだ。知るのが怖くなってくる。

「…………」

「どうかした斎賀さん？」

「そのあのですね！」

「お、おう」

「陽務君は、その……進学は、どこに決めてるとか教えていただけ、たりは……」

「進路？　来鷹（らいおう）の経済学部」

「……そう、ですよね」

武田氏イチオシの大学だし成績的にも射程圏内なので進路は割とあっさり決めたんだよなー。武田氏の友人がいるとか偏差値の割に気楽な大学だとか色々聞いてるけど「変なのばかり集まるからサンラク氏にも居心地が良いで御座るよ！」と謎の太鼓判を押されている……一般的一般人たる俺に進める言葉じゃないだろうと思いつつも、明日の天気を当てるような気軽さで大企業の株価暴落を言い当てたお人なので信じない理由もないというものだ。

「斎賀さんは？」

「奇遇ですね（キグウデスネ）、私も来鷹なんですよ（ワタシモライオウナンデスヨ）」

「へ、へぇ」

何今の、一瞬ロボットか何かかと……いや、俺とした事が！　ゲーム廃人にリアルの将来を聞くのは一種のタブーじゃないか。いや向こうから聞いてきたとはいえ、廃人の目から生命力が消えるのは当

然の事ではないか。

「で、でも来鷹って東京の方だし斎賀さんも一人暮らしの予定だったり？」

「そうで……すね、そう、なると、思い…マス」

「でも家賃とかの兼ね合いもあるしルームシェアとかの方が安上がりだって話も聞くから、俺はそっち方面も視野に入れてるかなー」

他県から通う、もありといえばありだが我が生活リズム的に朝の登校には余裕を作っておかないとやばいきがする……あれ、大学って必ずしも朝から授業があるわけじゃないんだっけ？　なら問題ないのか？

「ルームシェア…………ルームシェェァァア？」

なに今のコークスクリューみたいな捻りの入ったビブラート。

「え？　うん、まぁ、はい」

何故かその単語に動きを止めた斎賀さんの身体が小刻みに揺れ始め……い、いつもの発作ですか斎賀さん！？

「ちょ、鼻血出てるんだが！？」

「軽傷ですので問題ないです鼻血といっても鼻を通う血管は毛細血管ですから迅速な止血などの対処を行えば全く問題ないわけでむしろ超活性的な作用が働く事でより強い毛細血管が」

「いや社会的に致命傷なのでは！？」

ここは戦場でも病院でもないから鼻から血を出して登校してる女子高生は異端異物異常のすべてに該当するのでは！？

「大丈夫です決して将来設計の仮設定義がもたらすシミュレーションがねじれ曲がったとかそういうあれではなく……ちょっと失礼、します」

なにやら顔を背けて電柱の陰にしゃがみ込んだ斎賀さんはゴソゴソとハンカチを……多分、顔に当てた？

「ふぷしゅっ」

「？」

「……………はい、もう大丈夫…です」

「！？」

鼻血が……止まっている……！？

「ウチの……ちょっとした、止血術…です」

斎賀家すげぇ。

俺の中で「伊賀」「甲賀」「斎賀」説が俄然現実味を帯びてきた今日の一幕……

◆

そんなわけで俺は今、ラビッツに来ています。
なんか秋津茜が最上位の隠し職業になっていたり、イムロンがビィラックにぶん殴られていたりやかましいが俺は俺でやる事がある。

「兄貴、巨人族との友誼を結び……古い約束について聞きやした」

「だろうなぁ……」

「んで、巨人族の長より……古い、言伝が」

「……」

今から俺が言う言葉を知っているのか、そうでないのか……主にヴァッシュの子供と違ってこの推定ユニークボスは常時アルカイックスマイルみたいなところがある。
どこまで承知しているのか、していないのかを現状から推し量るのは難しい。未来に訪れる開拓者に向けたメッセージを残してる時点で大体知ってるんじゃねーのと言いたいが、この手のお使いクエストで裏を考え出しても仕方がない。

「死せど、離れど……とのことで」

「……ハッ、そうかよぅ」

沈黙。
くゆる紫煙が薄く広がって消えて……そうしてようやく、ヴァッシュは口を開いた。

「そいつぁ……くだらねぇ、言葉遊びってやつよう。集まって、盃掲げてよう……」

「……」

人の過去に口を出したところでどこまでいっても俺は無関係でしかない。黙して語らず、ただ聞くに徹するのがベター……

「湿っぽくしちまったな、覚えておくこたねぇよ」

「いえ……」

「そんなことよりもよぅ、サンラク……おめぇさん、随分と手間ぁ取ってるようじゃねぇか……」

何を、と聞き直す必要もあるまい。

「お恥ずかしながら……」

「俺等(おいら)ぁよう、おめぇさんの道を無理に歪めるつもりぁねぇ。そして、あいつらの意思を削ぐつもりもねぇ……」

ただ、と煙管の先端が俺へと向けられ、火皿から溢れた灰が火の赤を僅かに輝かせて虚空に消える。

「ただ聞いてるだけじゃあ、オルケストラは越えられねぇぜ」

「一応飛んで跳ねての大立ち回りはしてるんですがね」

「カカカ……呑まれてるようじゃぁ、霧は晴れねぇもんだぜぇ？」

うーむ、解読班。オルケストラ関連の言葉なのか、単純に激励イベントなのか……だがオルケストラはシンプルだ、シンプル故にやれる事に心当たりが少ない。

戦闘する前に音楽プレーヤーに何か仕込むとか？　いや、それはそれでやったらアウトな気配がしてならないし……だが何故ヴァッシュ側から未クリアのオルケストラユニークに関してアドバイスとも取れる言葉が出る？

「…………」

悩む俺に愉悦でも見出したのか、楽しげに口の端を歪めた白灰の兎は火皿から流れる煙で何かを描くようにゆらゆらと動かしながら……俺へと告げた。

「風を斬り、渦に道を見出した時によう……俺等ぁん所に来な」

「……？」

「そん時ゃあ、俺等ぁもちぃっとばかし力を貸してやるよ」

ひゅんっ！　と上から下に振り下ろされた煙管がくゆる煙を一刀に断ち切る。

真っ二つに割れた煙がどこからか吹いた風に吹き流され、俺の頬を撫でていく。

何故かそれは、ざらついた舌に頬を舐められたようにも思えて……
……背筋を走った寒気は、果たして何が原因だろう。

あなたの為のオーケストラ　其の十六（後書き）

大学教授がエタノールに烏龍茶混ぜて曽祖父から受け継いだゲバ棒を教鞭に授業をするぞ来鷹大学！
機械工学拗らせたせいで八代くらい前から超リアルなメイドロボを作ってるサークルがあるぞ来鷹大学！
歴代校長の写真がほぼ全て変顔だぞ来鷹大学！
大体頭のネジが何本か緩んでるか外れてる奴しかいないぞ来鷹大学！
そんな魔境で主人公とヒロインちゃんは生きていけるのか！！

多分余裕で適応する

※なおキョージュやセートのいる大学ではないしペンシルゴン達の通った大学でもない

例のシャンフロ運営三人の母校なだけ

「金ならいくらでもあるっ！　やれい！　エルクっ！！」

「あはぁー！　まぁいどありぃー！！」

生きていく上で大事な力は三つ。筋力、権力、財力だ。
コミュ力は骨組みじゃなくてインテリアなので除外、なくても極論困らないけどあった方が楽しいという絶妙なポジションなのが憎いね。

それはそれとして現在、エルクにビリオンダラー・マテリアルボンバー（金に物言わせるアタックとも言う）を喰らわせることでスキルの大改造を行っている。
いや、確かに臨界速(ブラディオン)は凄い。俺が持ちうる全てを解放したフルバーストで使えば最大速度を掻っ攫うだけではなくジークヴルムの角を二本へし折るくらいにはポテンシャルの塊だ。

だが、いかんせん日常生活と対人戦では持て余してしまう。さらに言えば小回りが利かないのと連結したスキルそれぞれの長所を少しずつ削っているという欠点もある。
だからしばらく臨界速はお蔵入り、元のスキルを取り戻しつつ他の連結を試す……そう、言うなればスキルダイエット……！！

「うふうふふぅ、マーニがいっぱいでニマニマしちゃうわぁ〜」

「今のダジャレ？」

浮き足立つ、を通り越して耳で空を飛びそうなくらいはしゃぐエルクの姿はやはりエムルの姉なんだなぁ、と感じるが……大丈夫だよね？　連結失敗とかないよね？
レベルが130を超えているとレベルアップするにも一苦労だ、そしてあのままの編成で完成しているところがあったので今の今まで面倒臭がって特にいじっていなかったが……久しぶりに確認してみるとこれまた結構な変化が多いこと多いこと。

まずUIが若干改善されていた。いやこれ割と重要だぞ、流派や特定カテゴリで分類されているしステータスポイントの内訳だったり……劇的な変化ではないが痒いところに手が届いた印象だ。やるじゃん天地　律、UIの改善は良作の第一歩だ。
次に新しいスキルの習得。どうやら三桁スキルってやつは単純にスキル進化の新しい領域というだけではなく、三桁レベルだからこそ初めて習得可能…みたいなものもあるようだ。だって名前からして序盤に覚えるスキルのそれじゃないもの、なんだよ星幽界導線（アストラルライン）ってカッコいいなオイ。あと地味に晴天流も新しいスキルを習得していた、浮雲……入道雲関連だろうか。
そして最後に……エルクによるスキル連結「同調連結（ハイコネクション）」を経て。

「久しぶりに所持金一桁になったたな……ゾクゾクしてきた」
「兎の懐はホクホクしてるのだわぁ～」
そりゃ所持金全部お前に支払ってますからねぇ！！　オラどうした金づる様だぞ、茶を出せ茶を。
「あ、おまんじゅう食べるぅ？」
「食べる」

「食べるですわっ！」

「エムルは３００マーニねぇ」

「ですわ！？」

身内にも割引しない銭ゲバの鑑かよ。

◆

ここからは巻きで行こう。

「エフュール！　頼んでたやつどうなった！？」

「できとるよぉ、はいお人形」

キャッツェリアとのパイプが補強されたことで地味に恩恵がデカかったのは鍛治師（ビィラック）関連よりもむしろ装飾品関連（エフュール）かもしれない。宝石匠は宝石系アイテムをどういう原理か糸……そして布へと加工することができる。つまり人形制作に鉱石をメインとして組み込むことができるということだ。

あのシャバ造兎ヤローとごたついたものの、キャッツェリアは俺を相手に下手に出ざるを得ない弱みがあることに変わりはない。快く承諾してくれたキャッツェリアの……あの……ダル、ダルメシア

ンじゃなくて……ダルニャーナ？　だったかが加工した宝石織の素材はエフュールの許へと届けられ、今こうして二つのアクセサリーとして加工されたのだ。

地味にこれ、「プレイヤーが所有できない形態のアイテムでもＮＰＣ間なら融通が利くのでは」説が浮上しているのだが……いや、こういう考察はライブラリにでも任せておけばいいか。

以前エフュールによって拡張されたアクセサリースロットに早速二つの人形をセット。見飽きるほどに見覚えのある特徴的フォルムは実際に「本物」の素材も用いられており、デフォルメされた姿であるというのにＬｖ．１０くらいのプレイヤーなら威圧感だけでキルしてしまいそうなオーラを漂わせている。

その名を水晶蠍人形（クリスタル・スコーピオンドール）、そして烈砲百足人形（トレイノル・センチピードドール）と言う……え、蜘蛛の人形はどうしたって？　よ、妖怪いち足りないめ……

「サンキュー！」

「なんや、随分とせわしないなぁ……」

「ふぁーふぇーへふふぁ！！」

「エムル、お行儀悪おす。ちゃんと飲み込んでから話しや」

こいつ俺に出された分も食ってるからな。はい次！！

◆◆

「おどれタダで槌振らせようたぁええ度胸じゃのう、ドタマかち割

られたいんか？」

はい寄り道ぃ！！

◆◆◆

「ピーツぅ！」

「げぇ！　サンラクはん！！」

「売り（金を出せ）に来ました！！」

「法に触れないだけでやってることほぼ強盗ですやんこんなんーっ！」

安心しろ、金の流れはラビッツでほぼ完結してるぞ………エルクのところでせき止められてるけど。

はいリターン！

「なんなんやあん人………金を巻き上げる竜巻か何かちゃうんか……」

◆◆

「ビィラック武器直し………」

「あ、そこわた俺が置いた椅子が……」

「本能が危険を知らせてるですわっ！！！」

椅子に、足を、とられて、転んで、頭から、炉…………もっと熱くなれと？

「おぼあああああああ！！？」

「サンラクサンんんん！！？」

…………………

…………

………

……

「頭冷えたですわ？」

「今さっき黒焦げになるまでヒートアップしてたけどな……」

「なぁにをそんな急いどるんじゃ……」

いや、なんかこう……なんかこう、な？　別に明確なタムリミットがあるわけじゃないけどやることが多すぎて気が逸（はや）っていたというか……別に急ぐ必要ないのに勝手に切羽詰まっていたというか。

頭から炉に突っ込んでサンラクの兜焼きになった、というであまり体験したことのない死に方をしたせいか形容しがたい焦燥感はいつ

の間にか沈静化していた。

「んで、イムロンは古匠への道は拓けたのか？」

「いきなり話振ってきたわね……じゃない、振ってきたな……とりあえず勇魚(イサナ)を問い詰めて魔力運用ユニットがリヴァイアサンに存在しているってのはわかってる」

「マーリョークウンヨーン（小声）」

「なんて？」

「おどりゃっ！　ドタマかち割られたいんかっ！！」

ジョークだよジョーク、他者をおちょくれる程度には余裕が戻ってきたか。ただでさえごわごわした黒毛を逆立たせたビィラックを宥めつつ、第二殻層に到達したところで中断しているリヴァイアサン事情についてさらに聞いてみることにする。

「そういや最前線は何層まで行ってるんだ？」

「第二はもうクリアされてる、俺も第三までは行ったが……第三から一気に難易度が上がる」

「むっ」

いや、仕方ないことはわかっている。中途半端なところで寄り道しまくってる俺よりも先に進んだプレイヤーが能われるのは当たり前のことだ。常に一位を取り続けられるゲームなんてオフラインにしか存在しない、オンラインでゲームしている以上は訪れてしかるべ

き状況だが…………あーやばい、戻りかけていた余裕がまた遠くに。

あー、今すぐリヴァイアサン攻略に乱入してぇ…………

くそう、オルケストラに頼んだら「俺」をちょっと貸し出してくれたりしねーかな……俺オルケストラ攻略するから「俺」はリヴァイアサン代わりに攻略してきてくれねーかな。

あなたの為のオーケストラ　其の十七（後書き）

別名：作者が見やすくする為のテコ入れとも言う

スキルについての解説はインベントリアに書きます

――――――――――――

ＰＮ：サンラク

ＬＶ：１４７（２５０……ＬｖＵＰ：２０＋ＵＭＢ　：２００＋Ｕ

ＭＥ：２０＋ＲＭＥ：１０）

ＪＯＢ：仇討人（二刀流使い）

ＳＵＢ：神秘「愚者」

２マーニ

ＨＰ（体力）：１００

ＭＰ（魔力）：１００

ＳＴＭ　（スタミナ）：２００

ＳＴＲ（筋力）：１７０

ＤＥＸ（器用）：１７０

ＡＧＩ（敏捷）：２００

ＴＥＣ（技量）：１４５

ＶＩＴ（耐久力）：１（５３２１）

ＬＵＣ（幸運）：２３９

スキル

・リミットオーバー・アクセル

・真界観測眼（クォンタムゲイズ）

・百秀の神腕（サウィルダーナハ）

・宿命の狼兆（ウルフェイト・サイン）
・爆心膝撃（グラウゼロ・スマイト）
・死線上足踏（デッドホライゾン）
・ガーディアンハート
・ダブルアップ・エッジ↓クリティカル・レイズ
・万武賦当（ばんぶふとう）　NEW！
・ダイナスピリッツ　NEW！
・星幽界導線（アストラルライン）　NEW！
・フェイタルゲイン　NEW！
・パラベラム・ルーティーン　NEW！
・プロテクト・スマッシュ　NEW！

―【致命武技】―

・致命秘奥【ウツロウミカガミ】改備（あらためぞなえ）
・致命秘奥【タチキリワカチ】改備（あらためぞなえ）

―【晴天流】―

・晴天流「疾風（はやかぜ）」
・晴天流「旋風（つむじかぜ）」
・晴天流「轟風（とどろかぜ）」
・晴天流「雷鳴（らいめい）」
・晴天流「迫雷（はくらい）」
・晴天流「荒波（あらなみ）」
・晴天流「防波（さきなみ）」
・晴天流「引波（ひきなみ）」　NEW！
・晴天流「暮叫（ぼきょう）」
・晴天流「浮雲（うきぐも）」　NEW！

―【仇討の流儀】―

・仇討の観察眼（リヴェンズ・アナライズ）
・仇討の宣誓（リヴェンズ・コール）
・仇討の引導撃（リヴェンズ・フェイタリティ）

―【同調連結（ハイコネクション）】―

・二連結同調「双天唯流（ふたつそらいちのことわり）」（百閃の剣（ヘカトン・スラッシュ）＋鋭結点睛（えいけってんせい））
・二連結同調「天国への階段（ステアウェイ・ヘヴン）」（重律踏覇（エクシードグラビティ）＋無重律の恩寵（スペースチャージ））
・二連結同調「風火二輪（フレアテンペスト）」（鞍馬天秘伝＋ヘルメスブート）
・三連結同調「爆心奔流（ニトロ・フロー）」（ブラッドバーン・バースト＋リミット・マキシマイズ＋全霊喚起）
・二連結同調「降誕拳圧（カウントダウンバースト）」（睡神の拳撃（ヒュプノック・アウト）＋タスラム・フィスト）
・二連結同調「無明先斬（むみょうさきり）」（ダーティ・ソード＋スラッシュ・イグニッション）
・三連結同調「千剣の盟（サウザンドボンド）」（阿修羅神楽＋戦極武頼＋剣舞【無尽紡】）
・二連結同調「旅終わるまで（ネヴァーエンド）」（不倒不屈＋アトラス・タフネス）

装備
右：アラドヴァル・リビルド
左：
頭：正眼の鳥面（ＶＩＴ＋２０）
胴：リュカオーンの刻傷
腰：ラケダイモン・ガードル（ＶＩＴ＋５３００）
足：リュカオーンの刻傷
アクセサリー：格納鍵インベントリア
アクセサリー：封雷の撃鉄・災
アクセサリー：瑠璃晶の星外套
アクセサリー：水晶蠍人形（クリスタル・スコーピオンドール）（ＭＰリジェネ　＋　ＨＰ回復時別枠回正）
アクセサリー：烈砲百足人形（トレイノル・センチピードドール）（状態異常超耐性：毒　＋　ＳＴＭ補正）
アクセサリー：霊角の残影

アクセサリー‥霊角の残影

アクセサリー‥

――――――――――――

あなたの為のオーケストラ　其の十八（前書き）

Ｍａｃの充電器から煙出てきたの面白すぎでしょ（錯乱）　（笑い事じゃない）（充電手段、無し！）（データ残ってる？）

あなたの為のオーケストラ　其の十八

新調したなら使いたくなるのが人というもの、ついでに手っ取り早く今の俺の最適解を見ることができるという事でまたしても路線変更をしてオルケストラが潜むドールベースへと戻ったわけだが……

「なんじゃこりゃ」

黒板？　なんでこんなものが……

「やぁ」

「エセ幼女？」

「人は咄嗟の反応に本音の断片を見せるというが……身も蓋もないね」

天地がひっくり返ってもそんなド低音の幼女はいねーよ。征服人形達の本拠地であるドールベースの一角に……そう、それはまさしく「教室」と言うべきスペースが組み上がっていたのだ。

そこでは武器こそ立派だが何故か浮いてる印象が拭えないプレイヤー達がなんと言うか、こう、知的な感じに盛り上がっていた。

「これまでに確認された再現体は六種類、やはりランダム選出なのでは？」

「いや、完全ランダムではないだろう。それなら旧大陸のエリアボスがもっと出てもおかしくはない」

「ラビリタウロスが出てユザーパードラゴンが出ないのも妙な話だけどね、強さ的にはユザーパードラゴンの方が強敵でしょ？」

「単純に強い順ってわけでもなさそうよね……オルケストラの「歌」に何か秘密がありそうだけれど」

「……ただ強いだけでは選ばれない。なぁ、ミレィってユザーパードラゴンを初めて倒した時って確か検証が終わったあとだったよな？　面倒だからってフルメンバーでボコした」

「そうか、苦戦したモンスターか！　それなら説明がつく、オルケストが歌の題材にするだけの激闘が条件か！！」

「検証が必要だな、ミレィちゃんを〝緋色の傷（スカーレッド）〟と戦わせてみるのはどうだろう？」

「結果が敗北の戦いも反映されるのか？　現時点で非ユニークモンスターとはいえリュカオーンより倒し方が分かってない相手に時間を取るくらいならもっと試行回数を増やすべきだ」

「第一、再現体にアレが追加されたらミレィちゃん泣くでしょ」

「それよりも「招待状」持ちの数を増やすのが急務でしょうに。リヴァイアサンが解放された時点でオルケストラに挑めるプレイヤーももっといるはずでしょう？」

「バカ言え、そもそも征服人形との契約条件が半分フィーリングなんだぞ？　ギャルゲー畑の検証班ですら苦戦してる中、偶然契約できたのがミレィだけなんだ」

「で、そのミレィさんと契約したレミィさんは何処に？」

「嗜好品として定義される飲料を破壊してくるって」

「…………ティーブレイク？」

「あのキャラ的にだらけに行くのをそれっぽく言い直しただけだな」

「やっぱ英語圏なんだよなぁ……」

エセ幼女ことキョージュがいることから薄々は気づいていたが、そこに広がっていたのは考察議論で盛り上がる【ライブラリ】の面々だった。

「もう追いついたのか」

「いやなに、メンバーの中にも征服人形と契約できた者がいてね」

……チッ、つまりライブラリに情報を流した時点で決定打になってたってことかよ。だが封雷の撃鉄・災による加速がある俺より先んじて到着するのは流石に無理だった、と。

「……で？　この様子だと攻略は難航ってところで？」

「いやはや全く、君が苦戦しているだけのことはあるが……まぁ、我々の目的は単純に勝てばいいと言うわけでもないからね。自然、話が盛り上がってしまうのだよ……是非とも君の意見も聞かせて欲しいんだけどね？」

……どうする？　別にここで【ライブラリ】を殲滅してまでオルケストラを独占したいってわけじゃない。
それにオルケストラのシナリオ構造は極めてシンプルだ、だったらいっそ協力してしまうのも手か？

「よし分かった、俺の方もいくらか協力しよう」

「重畳……皆！　貴重な情報提供者が来てくれたぞ！」

ぞわ、と一斉に向けられた視線に背筋に震えが走る。オルケストラを思い出す、あれもなんか途中から視線を向けられる感じがするんだよな。
だがここでイニシアチブを取られるとまずい気がする、一気に情報を開示してマウントを取る！

「あー……クターニッド、ジークヴルム、レイドモンスター貪る大赤依の出現は確認した。オルケストラの楽章はプレイヤーが戦った強敵の再現であり、そしてその攻略法は行動の再現だ」

だが俺は勘違いしていた。鯉の群がる池に餌を放り込んだらどうなるか……ゾンビもの苦手な人って鯉も苦手らしいね、俺もそうなりそうだ。

「ユニークモンスターも対象なのか！？」

「ジークヴルムって……マジでジークヴルム？」

「やっぱりレイドモンスター倒したの君じゃないか！」

「あの変身アイテムについて詳しく！」

「今はオルケストラだろ！　で、何回トライしたんだ？」
「ジークヴルムの再現……撃破ではない？」
「だから言っただろ！　オルケストラはゲーム的というよりも吟遊的なんだよ！」
「となると敗北の結果でも再現の必要性が出てくる、のか？」
「じゃあ仮にモンスターAを倒す際に持っていた武器を喪失していた場合は？　激闘が条件なら今は雑魚のボスも出てくるかもしれない、当時のスキルが残ってないケースもあるはずだ」
「いや待て待て、オルケストラもレイドモンスターも需要だが彼は前線拠点でリヴァイアサンから最初に出てきたプレイヤーだぞ？どう考えても出現にも関わってるんじゃないか？」
「そうだ！　「勇魚」なるナビゲーターに問い詰めたが特殊なビーコンが必要だって！！」
「それをくれとは言わないけど、どこで手に入れたのかは是非とも聞きたいわね」
「いやそれよりもレイドモンスターだ！　新大陸側のレイドモンスターについて我々はあまりに無知だ！！」
「いやいや待て待て、ユニークモンスターについて聞くべきだ。どう考えても彼は七体目の情報を掴んでいる！」

「どうでもいいけど一瞬噂になったメジェド様ってやっぱ君なの？」

「私、ライブラリで海洋メインなんだけどアラバ様が言ってた深海の帝王について知りたーい！」

「いーや！　あの炎の槍みたいな魔剣について！！」

「遺機装（レガシーウェポン）メインで考察してます！　何か一言！！」

「あ、それ私もきになる！！」

「古匠と繋がりがあるんですよね！？」

「レイド――――」

「ユニーク――――」

「武器――――」

よし、逃げよう。

驚く程すとんと胸に収まった結論に従って、もはや無意識で正確に左胸の起動トリガーの為に必要な打撃点を狙えるようになった右親指を……

がしっ

「今しばらくお待ちを、教授（キョージュ）の「授業」が始まりますので」

「お前は……」

だが、逃走のために動いた右腕を掴んで抑える人物……確か、セートとかいうプレイヤーがそう告げる。

「クラン外の方には異様に見えるかもしれませんが、ウチはこれで通常運転なんですよ」

「蠱毒の壺かよ……」

「ふふ、であるなら厳選された考察（毒）を扱えるのもあの人だけですよ」

ぱしん、と乾いた音がやけにはっきりと響く。日曜日の朝とかにいそうな姿をした幼子が、幼子が見せる顔ではない……年季と知性に満ちた笑みを見せながら口を開く。

「静粛に、静粛に生徒諸君（クランメンバー）。君達の言葉はそのまま私の代弁でもあるが……折角オルケストラのお膝元にいるんだ、帰ってきた彼女も含めて……攻略（考察）を始めようじゃないか」

「いやぁ、負けました負けました。でも最終楽章まで………あれ、ミスタードラッグカー？」

「止まれねーし曲がれねーってか、喧嘩売ってんのか……って、あ」

こいつ、確かサードレマにいた……！！

あなたの為のオーケストラ　其の十八（後書き）

人これを「身から出た錆」と言う

あなたの為のオーケストラ　其の十九（前書き）

Ｍａｃで書いてた番外編、掲示板、趣味、諸々が作業停止したので仕方なく本編更新………逆では？

あなたの為のオーケストラ　其の十九

◇

「……笑いたければ笑いなさいエルマ＝３１７、今や未契約のＳｔｒａｗｂｅｒｒｙは当機(ワタシ)だけのようですよ」

「対応(お望みなら)：ですが未契約(独り身)にも相応の楽しみ方があるのでは？　当機(ワタシ)には真似できませんが」

「把握(成る程)：どうやら機能停止したいようで」

「発注(おーだー)：嗜好用バブルティーを……んぁ、シンシア＝０１４？」

「ミオン＝０３１ですか、オルケストラプロコトルで戻ってきたのは知っていましたが顔を合わせるのは二百二十五時間ぶりですね」

「相変わらず面倒なくらい律儀……ま、そういうのを受け入れてくれる次世代原始人類が見つかるといいな……売れ残る前に」

「推奨：額に「二割引」の表示」

「クラスＶＩＩＩ武装の使用許可申請」

「愚かなりシンシア＝０１４、クラスＶＩＩＩの使用許可条件は現状とは合致しませ」

「……エルマ＝３１７、申請が通ってる」

「大多数（マジョリティ）の判断でしょう、いずれかの四肢の欠損補填申請をする準備をするべきですね」

「行動：インテリジェンス離脱」

「追従：だりぃ……」

◆

「さて諸君、現時点で判明しているオルケストラから招待状を受け取った二人がここにいる。我がクランの検証班ミレィと同盟の輩サンラクがいる」

サードレマにて俺のルチャチャレンジを撮影していた【ライブラリ】のメンバー、その正体が今キョージュの口から明らかにされた。成る程ね？　考察クランと言っても常に情報をもらい続けてるわけではない、当然現地で直接情報を集める役目の奴らがいるだろう。そして俺と同様に征服人形と契約した者がいるなら……神代の知識を集める敷居は俺がリヴァイアサンを喚び出した事で過去最高レベルで下がっている。

「では二人の体験談から共通点、差異を洗い出してオルケストラに関する情報を纏めていこう。質問は少し跡で、だ……では早速サンラク君から頼めるかな？」

く、先に情報を吐かせるつもりか……まぁいいけどさ。

「えー……あー、とりあえず俺はオルケストラの最終楽章まで到達した。何度か挑戦したが第四楽章までは順番もモンスターもほぼランダムだった、明らかに劇場内に入りきらないサイズのモンスターは劇場そのものが拡張していた」

「質問！」

え、俺が答えるの？　あ、はい、そうですか。

「……じゃあ、そこの」

「先程ジークヴルムの出現を確認した、と言っていましたがその詳細を」

「学校にいるみたいだ……オルケストラの性質についてはどこまで知っている？」

「一楽章につき、登場するモンスターを説明する内容の「歌」が流れる」

「そしてその歌は最初から完成している、歌詞に沿った行動をしない限りどれだけダメージを与えても楽章は終わらない。劇場で語られる英雄譚だ、例えばジークヴルムであれば俺の場合は「角をへし折る」がクリア条件だった」

その言葉にどこから取り出したのか椅子に座っていた【ライブラリ】の面々がざわめき出す。

「恐らくシャンフロには強敵と戦う程に上がる隠しステータスがある、オルケストラはそれを参照しているのか？」

「レミィの言っていた「倒せる時とそうでない時がある」という話とも合致するな」

「当時のスキルが無かったらどうなるのかしら！！」

「少なくともスキルや武器は強化、進化、真化したものであればクリアに問題はなかった。あと……例えばフォルトレス・ガルガンチュラとトレイノル・センチピードの戦闘に割り込む楽章の場合、恐らく当時の動きとは大きく異なっていたが「ガルガンチュラの砲塔を破壊する」「トレイノル・センチピードが勝利する」の二つを達成した時点でクリア条件は満たされていた」

「あのー……」

「はい何？」

「その、トレイノル・センチピード？　とフォルトレス・ガルガンチュラなるモンスターについて今聞くのは駄目ですかね……？」

あー……

「スカルアヅチってあるじゃん？」

「はい」

「あれとほぼ同じサイズの蜘蛛と百足、もっとデカいのもいる。で、これがそいつらから作った武器」

「キョージュ！　二時限目はアリですか！！」

「一時限目に集中しなさい」

少なくない数のライブラリプレイヤーが項垂れるも、視線だけはこちらをじっと見ているの正直言ってめちゃくちゃ怖い。
つーかそれ俺が残業確定になるじゃん……ま、まぁいい、話を続けよう。

「その事から俺が建てた推測は「オルケストラは劇場型のユニークモンスターであり、かつてあった実在の英雄譚を「演じる」ことで進行するユニークモンスター」……だ」

その言葉に、静まり返ったのは一瞬。次の瞬間にはざわめきが十数人はいるプレイヤー全体へと伝播し、いつしかそれは議論となっていく。

「信頼性は高いな」

「でもどうかしら、個人的主観に基づいてるのも否定できないわ」

「その為にミレィの意見とすり合わせるんだろう」

「再現ではなく演じる、か……確かにオルケストラという名で音楽会という思考に囚われていたかもしれない。音楽の演奏を伴って実際の出来事を再現するのは演劇と言うべきだ」

「だがやはりオルケストラの目的が見えてこない、少なくともジークヴルムやクターニッドは動機が分かるシナリオ形態だった」

「再現、であるなら似たような挙動のスキルや同じ武器種でも成立自体はするのか」

「いえ、だとしても条件はもっと厳しいと思うわ。加速スキルにしたって千差万別だもの」

「魔法での代用は可能なんだろうか」

あー……なんだろう、プレゼンテーションとかこんな感じなんだろうか。武田氏にそこら辺を習っておけばよかったかな……
とはいえ一応彼らの考察欲を満たせるだけの情報は出せたらしい。
さて次は最終楽章について、と口を開きかけ……キョージュが手招きしているのが視界に入った。

「サンラク君、最終楽章については少し待って欲しい。先に第一〜第四までの考察について詰めていくためにミレィの話を入れたい」

「お、おう」

「はいバトンタッチハイタッチ〜」

え、やらないとダメ？　ハイタッチ〜
どうもタイミングが合わなかったのか、ぺふん、となんとも言えない音のハイタッチで俺と代わってミレィが前へと出る。

「はい、シャラップガイズ！　私が必死こいて集めてきた情報が欲しくないんですか〜？」

「欲しい！」

「さっき最終楽章まで行ったとか言ってたよな！？」

「お前ら黙れ黙れ！」

手慣れている、遠慮なく黙らせつつも考察に飢えた鯉を相手に上手く釣り餌を垂らしているようだ。ちなみにウチの父は将来的に庭に池を作って鯉を飼う予定だそうです、掘るの？

「えーと、それじゃあ順序立てて説明していきますねー。まず第一楽章で出たのはドラクルス・ディノケラスでした、勘弁して欲しいですねぇ……」

ドラクルス……ああ、鹿トリケラトプスか。
いいなぁ、アレと戦うだけならアンコール五回くらいしてもいいぜ。

「前の議論で話題に出てたのもあったけど、やっぱり録画アイテムじゃオルケストラの「歌」は録音できませんねぇ、さっきちらっと確認したけどやっぱ無音でした」

「現地じゃないと聞けないのかぁ……」

「いーい歌声でしたよ〜」

「うわ腹立つ」

「まぁスクショは撮れてますから……オルケストラが出現させたエリーゼ・ジッタードールの姿はどれだけやってもぼやけちゃうんですけどね」

へー、あの「歌姫」にそんな吸血鬼的な特性があったとは。ニンニクでも持ち込んだら楽に勝てないかな？

やっぱ考察クランなだけあって調べるのが徹底的なんだな、再現モンスター一つ語るにしても自分の所見、予めクランメンバーが挙げていた考察との合致、差異を指摘しつつ意見を集め、議論の起爆剤とする。

明らかにこの手のディスカッションに慣れていなければ出来ない芸当だ。ミレィなるプレイヤー……侮るのは危険かもしれない、しれっとハイスペックを見せてくるところがカッツォに似てる。

そうして、一時間は経過していないと思うが、白熱した議論が一段階ついて俺が人参パイを食べ終わった頃。手を叩いて皆の視線を集めたキョージュが声を上げる。

「さて、では本題といこうじゃないか。オルケストラの「最終楽章」についての攻略考察だ」

あなたの為のオーケストラ　其の十九（後書き）

最終的に殴り合いになるのが【ライブラリ】クオリティ

あなたの為のオーケストラ　其の二十（前書き）

ｉＰａｄ　ｍｉｎｉでぺふぺふ書いてます

あなたの為のオーケストラ　其の二十

「これに関して、我々は無学と言っていい。だが幸運なことにその情報を知る者が二人もこの場にいることは実に幸運であると言えよう。まずは……そうだね、引き続きミレィ君に」

「はいはいご了解で御座いますよ～。とりあえず、第四楽章をクリアした時点で最終楽章に移行しました。割とギリギリの戦いだった上に本当にするっと最終楽章に入ったので台詞ははっきり聞き取れませんでした、ゴメンネ」

ああそうだ、確かあの時もオルケストラが独白を始めたっけか。

「聞き取れる限りじゃ確か自身が歌う理由みたいなものを言ってた気がします、それと口述する「最終楽章」に登場する敵についての描写も」

俺の時は的…確か、「遠く、根無しの旅人。数多の世界を見つめる眼。貴方は「渡り鳥」みたいな感じの台詞だったかな。イマイチうろ覚えなのはその後の展開に脳みそ使いすぎてそれどころじゃないからだ。

「あーちょっと待って、ＩＱ１２０の脳みそが思い出しますよ～……ああそう、確か立ち塞がるは「ローレライ」でしたかねぇ……」

「……ん？」

何か違和感、いやだがこのゲームで台詞の使い回しをするとも思え

ないし。

「オルケストラの独白と同時、彼女の背後にいた貌のない演奏団達に変化が起きましたねぇ。数に変動が起きてその後に最後の敵が現れました……君の方も大体そんな感じなんじゃないかなぁ？」

「……そう、だな。俺の時もそうだった」

いや、待て……成る程、そういう狙いか。だったら乗ってやるぜ？

「そしてその後に現れた最終楽章の敵は流石の俺も初見の時はビビったね、お前もそうだろう？」

「……」

僅かな沈黙、この野郎自分の説明で俺の反応を見て自分の体験と比べようとしてやがるな……？

だが残念だったな、見抜いたからには自称ＩＱ１２５の俺が逆にてめーの秘密を暴いてやる。

「そうですねぇ～……まさか私の武器とかバトルスタイルをコピーしてくるとは思いませんでしたねぇ」

「む」

一緒？　てっきりすかしっぺみたいなボスが出てきたから俺の方が先に進んでいるとでも考えたのかと思ったが……聞く限りでは俺のケースとそう大差があるとは思えない。

背後の楽団の数が変動し、その後に最後の敵が現れる。俺の性能を

「完全コピー」したそいつはまさしくトレースＡＩと言うべき存在で……

「こちらの手の内を完全に読み切ってる感じでしたよねぇ」

「ん、そうだな」

……やはり同質か？　向こうも拍子抜け、みたいな顔をしている。違いがあると考えてカマをかけたがマジで一緒だった、ってところか。

「つーか順番で説明するんじゃなかったのかよ……まぁいいや、お恥ずかしながら俺は完敗したよ。こっちの動きを完全に読み切ってる上に武器の性能まで完全コピーされてた」

「私も似たような感じでしたねぇ、私のメイン武器とわざわざデザインまで似せてきた徹底ぶりでしたから……性能もですよ、ボスキャラの癖に自己強化は反則でしょう」

いやまぁ探せばその手のボスは腐るほどいると思うけどな、俺の場合は洒落にならないんだけど。

「いくら人型だからって一々こっちの上位互換を出してくるんだから参るね」

「そうですねぇ、規模が違うんですよねぇ……」

と、ここで聞きに徹していた【ライブラリ】の一人が手を挙げる。

「戦闘面での考察は倒してからじゃないとはっきりしないだろう？

だったら設定面の考察を優先した方が良くないか？」

「一理あるね。では二人とも、戦闘面とは別に何か戦闘中に気づいたことは？」

戦闘中に戦闘以外のことに気付けるわけないないだろ……

「そんなの考える暇すらないっての……ああでも、最終楽章が単純に敵を倒せばいいのかってのは俺の中で引っかかってるかな」

「と、言うと？」

「ユニークシナリオだからな、単純に勝ち抜きで終わるのかって話だ」

「そうだねぇ……でもそうなると、最終楽章で終わらない、なーんて詐欺みたいなことになりませんかねぇ……？」

「アンコールを発生させないと倒せない、ってパターンかもしれないだろ？」

ウェザエモンであれ、クターニッドであれ、ジークヴルムであれ、そのシナリオの終わりには納得があった。終わったという実感があった。

だがオルケストラはそれが薄い、ＥＸシナリオっつーか「征服人形のドキドキ☆チャレンジ」とかの方が納得できてしまいそうなくらいオルケストラ自身のことが分からない。

「いい着眼点ですねぇ、皆さんはどう思います？」

「可能性としてはあり得そうだ」

「だがクラシックタイプのオーケストラでアンコールなんてやるか？」

「名前はオーケストラだが中身はオペラだろ？　アリア再唱って意味ならあり得るんじゃないか？」

「そもそも土台が定まってない気がする、道をまっすぐ進んでるだけで他の扉を開けてない感じ」

「オルケストラとの戦闘中に何かを見出すのではなく、ここに来るまでに何かを見出す必要があると？」

「じゃあリヴァイアサンか？」

「リヴァイアサンは今詰まってるからなぁ……」

「第一、第二殻層は単純な迷路だけど第三から謎解きというか鍵探しが絡むからねぇ」

「三つ目が明らかに人間の身体能力じゃ無理なんだよなぁ……」

しれっとリヴァイアサンについてネタバレされた悲しみを今吐露するのは場違いだろうか、それとも考察厨の巣窟で耳をすませていた俺が悪いのか？

だが僅かな言葉からも仮説考察を展開していく光景は流石【ライブラリ】と言うべきだろう。これが【旅狼】なら「さぁ？」で終わる可能性があるからな。

「それに関しては以前から指摘されてはいた、ウェザエモンの真理書を見る限り……このゲームにおいておおよそ全ては一度きりのチャンスだ。結末の分岐は十分にあり得る……だからこそ検証パターンを増やしたくもあり、攻略を止めたくもあり……いやはや、現在進行形の考察とは中々どうして老骨の心も沸くというものだね」

「人生楽しそうっすね」

「全くだ。時にミレィ君、そろそろ種明かしを……」

半分くらいは嫌味混じりの言葉だったのだが、多分気づいた上でこの対応ができるあたり年季の強さを感じる。と、その時だった。

「緊急事態（エマージェンシー）：契約者（マスター）、可及的速やかなインベントリアへの収納（エスケープ）を要請します」

「うおっ、なんだいきなり！？」

「ミオン＝031（あのヤロー）は先んじて離脱したため、非常に不本意ですが当機（ワタシ）が殿を務める状況となって……時間がありません」

よ、よく分からないがとりあえずサイナをインベントリアに格納。

一体何が……

「エルマ＝317の反応消失……精査開始、発見次第撃滅、撃滅……
……」

おい誰だよ暴走ロボットを放し飼いにしてるのは。

「ちょっ……貧乏くじじゃねーか！？」

くっ、そもそもエムルどこ行った!?　転移スクロールをちょうど切らしてるタイミングで……ええい!!

「実地調査だ、ちょっと行ってくるわ!!」

「あ、」

止めてくれるな!　いい加減ちょっと考察ばかりしてないで身体を動かしたかったからちょうどいいとか思ってないです!!　いざ出撃!!

◇

「行ってしまったか……」

「行っちゃいましたねぇ」

「全く……君の悪癖を説明する前に行ってしまったね。あと君、確かIQ127とか言ってなかったかい?」

「いやぁ申し訳ないですね～……あと最近130になりました……

取ってみて分かったけどＩＱマウントは取りづらいのが難点ですねぇ」

「我々ならともかく、他クランのプレイヤーにまで要点を勿体ぶる癖はなんとかした方がいいと老婆心ながら改めて忠告させてもらうよ。で？　我々はあくまでも聞き手でしかないのだから、君の意見を聞かせてもらおうかな」

「そうですねえ……又聞きですけど彼、結構なジャイアントキラーなんですよねぇ？」

「そうだね、クターニッドにジークヴルム、リュカオーンに先程言及していた巨大モンスター……比喩ではなく文字通りのジャイアントキリングを繰り返しているようだね」

「私が彼と会ったのはサードレマでした、単純に火力が欲しいならわざわざサードレマに戻る理由なんてないですよねぇ……職業の変更って線もありましたけど〜、だったら「修行」と言うのはちょっとおかしいですよねぇ」

「悪癖」

「あ……いやぁ、すいません。まぁ要点だけ先に言うとですねぇ……」

「多分彼が戦ってる最終楽章は「人型」ですよねぇ……私が戦った最終楽章、全長3メートルくらいある化け物人魚だったんですけどぉ……これ、既に分岐しているってことですよねぇ」

あなたの為のオーケストラ　其の二十（後書き）

ミレィさんは自分の中で出した結論を勿体ぶるタイプの人

あなたの為のオーケストラ　其の二十一（前書き）

書きたいところまでがあまりに遠い

あなたの為のオーケストラ　其の二十一

蠍はボーナスタイム、蜘蛛は若干苦戦、そして蠍（帝晶）でボーナスタイム再び。

「懐かしいツラが出てきた……が、面倒なことになってきたぞ……！！」

劇場の床に突き立った毒剣が爆ぜる。毒色の爆炎が劇場を侵し、わずかでもそれに触れてしまえば瞬く間に体力が削れ始めるだろう。

おお懐かしき元ツチノコの方のゴルドゥニーネ、多分お前の姉には世話になったしお前の姉をお世話してます。

こいつ自体の対処は別にいいんだ、こいつを倒した時に使った金照と冥輝は現物があるから成分結晶を集めて「疾風（はやかぜ）」で叩き斬る、以上。

だから、今俺が直面している「面倒ごと」は俺自身の問題でも、再現ツチノコニーネでもなく……

「バグってないでせめて動け！　サイナ！！！」

「わ、当機（ワタシ）は………演算、精査、処理、中断、再開……中断、演算、演算……き、拒否……」

「くっ……ポンコツがマジでポンコツになってどうすんだよ……！！」

舐めんな蛇女！　片手間でもてめーくらいぶっ飛ばせるんだよ！！

三連結同調「千剣の盟（サウザンドボンド）」起動、二連結同調「風火二輪（フレアテンペスト）」起動、リミットオーバー・アクセル起動！

肉質抵抗軽減、立体的機動、機動力強化の三つが付与された俺の身体が毒双剣を潜り抜けてツチノコニーネへと一気に肉薄する。

「面白いものを見せてやるよ……！！」

パラベラム・ルーティーン起動。このスキルはプレイヤーがよく行う動作を「ルーティーン」として設定、動作を達成することで強化効果を付与するスキルだ。

そしてゲーム側が俺に提示してきたルーティーンは………「右親指を左胸に叩きつける」というもの。まぁそりゃ確かに常日頃の移動手段とかでも使いまくってたけどさぁ！！

意図せぬ動作の連結、パラベラム・ルーティーンの条件と封雷の撃鉄・災の発動条件が同一であるが故に、二つの効果が同時に起動し俺の身体が過剰なまでの稲妻によってさらに加速する。

「鏢（ビタ）一文まで賭け皿に載せてやるよ」

こいつは見た限りでは微妙スキル、だが使ってみれば最高に楽しいスキルだ。いくぜクリティカル・レイズ！！

龍王の残滓を纏った蒼と金の混ざった冥輝の刃がツチノコニーネを切り裂く……しかしその攻撃は確かに奴の身体を裂いたはずが、傷一つ付いていない。だがそれはスキルの効果によるものだ、クリティカルの攻撃がヒットした事でこの攻撃は賭けのチップとしてレイズされたのだ。

「ギャンブルは好きか！？」

二重の黄金がツチノコニーネの身体に深い傷を刻む、クリティカルの手応え。本来であれば、その火力が二倍になって叩き込まれる……筈だった。
だが二撃目もまた、スカ。1ダメージも与えていない攻撃にツチノコニーネは脅威ではないと判断したのか多少の攻撃は許容するつもりか、無防備な攻撃偏重で毒剣を振り下ろした。

「悪いな、「愚者（バカ）」だからさらにレイズだ」

神秘（アルカナム）「愚者」の能力はいくつかのデメリットを背負うことでスキル及び魔法のリキャストを半減させる、というものだ。そしてここでシャンフロにおけるゲームシステム的スキル判定が悪さした。
どうもこのゲーム、スキルによってリキャストタイムが発生するタイミングが違う。例えばウツロウミカガミなんかは虚像が消えた時点でリキャストタイムが発生するし、ほとんどの強化スキルは効果時間の終了と同時だ。

ではこのクリティカル・レイズ……いつリキャストタイムが発生するのか？
答えは「一撃目の攻撃のダメージがゼロの判定になった瞬間」だ。
この判定に気づいた瞬間、俺の中でこのスキルの凶悪度が五段階くらい上昇した。

「さらにレイズ！！」

要するにこのスキル……二倍になった攻撃をさらに同スキルでレイズできる。蠍や蜘蛛で試した限りでは恐らくレイズを重ねるほどクリティカルの成功率が下がるっぽいが…………その程度で対策とは、甘いよなぁ？

「さぁ！　さぁ！！　これで三十二倍火力だっ！！」

五十倍辺りから露骨にクリティカルの成功率が下がり始める。普段なら確定でクリティカルだろう攻撃ですら外れ始める……だが、クリティカル・レイズの元々のリキャストタイムは5秒！　「愚者」の効果で半減してぇ……2．5秒毎の無限倍プッシュ！！

「覚悟はいいか、出来てなくても殴るがな！！」

真界観測眼（クォンタムゲイズ）、星幽界導線（アストラルライン）起動！
裸眼で見る世界に二つの世界が重なって、三つ重ねた世界が俺の眼へと映し出される。
上下から襲い来る攻撃の「波」を潜り抜け、迷いない弧を描いてツチノコニーネの脇腹へと伸びたラインの上に金照の鋒を乗せて滑らせるように振り抜く。

「クリィーン……ヒットォ！！」

豆腐に包丁を入れるかのようにあっさりと黄金の水晶刃がツチノコニーネの脇腹を通り過ぎ、これまでとは違うなかったことには出来ない増幅されたダメージが爆ぜるように叩きつけられた。

『――輝きを、束ねて、放つ、風』

「言われんでも分かってるっつーの！！」

金照、冥輝……合体！
巨大な鞘付きの太刀となった蒼耀月を携えながら、大きく吹き飛んで悶えるツチノコニーネを他所に俺は未だバグっているサイナの許へと駆け寄る。

「おいどうしたサイナ！　インテリジェンスにカビでも生えたか！
？」

「……契約者（マスター）」

「戦えるのか、戦えないのか！　どっちだろうと責めやしねーよ、
せめてそこをハッキリしろ！」

「当機（ワタシ）は……征服人形（コンキスタ・ドール）は、オルケストラ・プロトコルへの積極的、
介入を……想定して、おらず……ああ、でも、当機（ワタシ）は……演算した
仮定を、それでも………」

なんだ、何が起きてる？　征服人形をオルケストラ戦に参加させる
とバグるのか？だがオルケストラから何か干渉を受けてるというよ
り、これは……

『――恐れ、怒り、憎悪、嫉妬……踏み越えて、切り拓いて……！
！』

「知ってる！　輝塗蒼耀（ディープ・コーティング）！」

頭にひどくへばりついた疑問や違和感を振り払い、振り向いた先の
ツチノコニーネを睨みつけて蒼耀月を構える。
リキャストは既に終わっている……風火二輪（フレアテンペスト）、リミットオーバー・
アクセル起動。

あの日は魔法の補助を加味して踏み込んだ距離を地力のみで詰める。
晴天流「疾風（はやかぜ）」、そして蒼耀月固有スキル「致命の月蝕（エクリプス・ヴォーパル）」による二
段加速抜刀が最適など知った事かと、最短最速の軌道で虚空を走る。

「あの日は首を切るだけだが……今日は首を断てたか？」

「カ………！？」

ちとやり過ぎたが、脚色という事で一つ頼むわ。

さて………「俺」が出てくるまで少し間がある。その間に準備を済ませて覚悟を決めろ、バージョンアップしたのは俺だけじゃない。

あなたの為のオーケストラ　其の二十一（後書き）

演算「できない」ではなく演算「したくない」なのがミソ

あなたの為のオーケストラ　其の二十二（前書き）

二周年？　読者、今は平成何年だ？
令和元年？

アアアアア年号がァ！　年号が変わっているぅぅぅ！！！

それはそれとして二年です二年、塵も積もれば山となると言います
が設定厨が積もると五百話ちょいになるんですね……
今後とも拙作をよろしくお願い致します

あなたの為のオーケストラ　其の二十二

「おいポンコツ、この際インテリジェンスに振る舞えとは言わん、せめてインテリジェンスに説明しろ」

「インテリジェンス……」

「そうだ、インテリジェンス。分かるか？　インテリジェンスは口ごもらない、インテリジェンスは情報を渋らない、インテリジェンスは癌にも効く」

知性が医学を発展させて昔と比べたら癌の対処法が増えたそうだし間違いではないだろう。

「………存在意義、自意識だけではどうしようもない承認欲求、オルケストラによる裁定は、やはり……」

「うーん、曖昧！！」

だが見えてきたものがある、つーか台詞だけで六割くらいボヤけているが見えた感じがする。

「曖昧な理解の中でそれでも言えることが一つだけあるぞ」

「それは………」

Q．思わせぶりな悩みを持ってる相手に知ったかぶりで好感度高めのアンサーを返すためにはどうすればいいですか？

「お前が求める答えは、ここには無いぜ」

「……！」

Ａ．こっちも思わせぶりな事を言いましょう、曇り(モザイク)ガラスだからこそ見える風情もあります。じゃなきゃ修正済みＡＶが売れる訳ないよねぇ！？

「シャラップ！　ディプスロミーム！！」

おのれディプスロ、ミームだけになっても下ネタを吐くとはな……悪霊退散！　悪霊退散っ！

「……チッ、もう出てきたか。いいかサイナ……「懊悩は暗闇が如く、されど長き夜が永き試しなし」だ！！」

「一体、どういう……」

「挫折し悩む英雄の背を押して瓦礫と土砂に消えたある男の言葉だ、語ると長い！！」

そもそも別ゲーの話だしな！　開けた夜の先に流し目ゴリラとか目が覚めても悪夢じゃねーか！！　くたばれオラーッ！！

「クリティカル・レイズ！！」

それは俺が使ったスキルの名であり、同時に「俺」が使ったスキルの名でもある。

互いに手応えの薄い刃がぶつかり合い、その度に剣を包む光が輝き

を増していく。

「十六倍！！」

鏡写しの如き掛け金（ダメージ）の上乗せ、どちらもフォールドしないならあとは手札の力でガチンコ対決しかない。

俺の手から勇魚兎月が消え、「俺」の手からも似た形の対刃剣が消える。はい、だっさなっきゃ負けよっ、じゃーんけーん……

「何っ！？」

てっきり同じ武器種で来るかと思ったが、俺が紅蓮海の拳帯（レガレクス・セスタス）を装備したのに対し、向こうが出したのは巨大な特大剣……なんだ？　まぁいいやるぞ幕末流！

「応用編「錆光殺し」！！」

対レイドボスさん用テクニック、なお成功率は五割で達人級！！　左腕で弾くように、しかし確実に特大剣の刃が触れるように腕を叩きつける事で意図的にクリティカルをズラす。向こうのＡＩは拳による攻撃を警戒したのかガードの素振りを見せて………おや、メタの張り合いでも勝ててしまったな。

「急ガバ回れってなぁ！！」

狙うのはてめーじゃねぇよ、武器の方だ！！

どうせ俺が使えるテクニックは向こうも使える、本体を狙って俺がしたように無効化される可能性を捨てきれないダメージを稼ぐよりも、剣限定のスキルであるクリティカル・レイズを捨ててでも怯ま

せる方が次に繋げられる。

「歯を食いしばれ蓮コラ野郎！」

百秀の神腕(サウィルダーナハ)起動。特大剣の腹を殴って弾き飛ばし、さらに前へ奥へと踏み込んでいく。

俺が「俺」をメタるなら、俺が俺をメタれば「俺」をメタる事になる！！　俺とは一体……くっ、気を強く持て！　プレイアブルだから俺が俺！！　俺とは……これは、無限ループ！？

「完成度２０％！！」

見様見真似(なんちゃって)ボクシング、動画サイトでちらっと見かけただけなので名前は覚えてないが俺が生まれる前のボクサー！

だが動画タイトルにあったからそいつの異名は知ってる。円を描く独特のステップと、荒々しいラッシュが持ち味だったそのボクサーは「ハリケーン」に例えられていた。

役割の模倣まではいかないが、部分的な動きは真似できる。その為には硬く強いが嵩張る煌蠍の籠手じゃ駄目だ、グローブは持ってないのでセスタス使った原始的ルールで勘弁な！！

「っ！！」

スキル起動、動画で見た通りに動きつつも左拳によるジャブを次々に命中させていく。

だが奴はトレースＡＩ、俺が出来ることは奴もできる、つまり俺がすることも読まれていると考えていい。だがこのスキルはクリティカル・レイズとは異なり制限時間タイプだ、距離を離させない立ち回りが……おいちょっと待て。

何故そこで左胸を右拳で叩こうとしている？　いや分かる、やろうとしていることは分かる。だが、お前……

そのワンアクションをこの距離でやるのは完璧にディスアドだろう。

「吹き飛べ」

二連結同調「降誕拳圧（カウントダウンバースト）」、左拳で当てたクリティカルの回数だけパワーと追加効果が右拳に累積する。
当てた回数は十一回、このスキルは十コンボを超えると人間大サイズのオブジェクトなら軽々と吹き飛ばす強力な気流（バースト）を発生させる。
横向きだけどダウンバーストって言っていいのか？

風が拳を起点に渦を巻き、ひやりとした風が頬を撫でたと思った瞬間、爆発的な風圧が拳の前で炸裂。悪手を取ったとはいえやはり上位互換、咄嗟のガードを間に合わせていたものの流石に風圧までは防ぎきれなかったらしい。
勢いよく仰け反って吹き飛んでいった「俺」の姿を見逃す程耄碌しちゃいない。恐ろしい程順調だ、だが理由は後で考えればいい！！

「千載一遇のチャンス、ファーストクリアは貰ったァ！！」

リヴァイアサン製大口径「アグアカーテ」を発砲、飛翔する弾頭は未だ宙を舞う「俺」へと殺到。だが今度こそ過剰伝達（オーバーフロー）の条件である動作を達成した「俺」が空を踏んで飛び跳ねる。

「そんなもん、百も承知なんだよ！！」

こちらがスキルを整理すればあちらも同様の変化が起きる、臨海速を解体して廉価版で揃えた事で小回りが利くようになったのは俺だけではないし……俺も同様だ。

「忘れたのか？　俺は既に乱数の壁を乗り越えている……！」

百秀の神腕(サウィルダーナハ)の効果。このスキルによる攻撃が命中した時、ランダムにステータスの一つへ強化効果が付与される。そして俺が引いた強化ステータスは……ＡＧＩ(敏捷)！！

いいぞ、想定外の優勢だ。原因究明は後でいい、エンジンを掛けろ、作ったアドレナリンを端からニトロに変えてぶち込んで行け！！

パラベラム・ルーティーン込みの纏雷状態、風火二輪、二連結同調「天国への階段(ステアウェイ・ヘヴン)」、二連結同調「旅終わるまで《ネヴァーエンド》」の連続起動！　メタ行動？　ふふふははは、ステータスこそが全て！　小手先の技に頼ったところで……ＡＧＩはこちらが上！　つまり俺の方が速い！　強い！！

そしてさらに駄目押しの三連結同調「爆心奔流(ニトロ・フロー)」　！　ここで畳んでやるよオラァ！！

「ＨＰだけ増やしてるなんてコスい真似してるんじゃねぇだろーな！？」

俺が紙装甲だというなら奴もまた紙装甲、俺が死にやすいというなら奴もまた同様のハンデを背負っているという事！！

今この瞬間、立場は逆転した……行ける！　行けるぞ！！

立ち回ることに特化したスキル構成の殆どを起動した今の俺にとっ

て、自分が今壁に立っているとか、天井に立っているとか……その全ては瑣末な問題でしかない。
虚空の全てが足場であり、空間の全てが道と化した俺と「俺」が互いに銃を乱射する。まぐれ当たりは双方ともに無く、互いに相手に捕捉されないよう跳ね回りながらもその距離は段々と縮まっていく。
分かる、分かるぞ……あと二手、二手で互いの近接射程距離に入る。
俺が右にステップを入れた、向こうがバックステップを入れた……
そして、互いに前へと踏み込んだ!!
「ここだっ!!!」
唸れ俺の左手!　ここでＵＩ操作ミスったら末代まで祟るぜ!!

あなたの為のオーケストラ　其の二十二（後書き）

いないから悩むのだ

認められないから認めたくないのだ

そして、違うからこそブレるのだ

答案用紙は、未だ白紙のまま……

そのうち活動報告でまた何かやるかも

インタリュード　誰が歌う、誰が奏でる（前書き）

生前どんな罪を犯したらこんな地獄に……（過去最悪クラスの古戦場）

インタリュード　誰が歌う、誰が奏でる

近接射程距離、互いに同じ手を持ち合わせている以上はここで取れる手は互いに三つ。

一つ、防御を捨てて確実に殺す一撃を叩き込む。

二つ、相手の攻撃を誘発してカウンターで仕留める。

三つ、鍔迫り合いから戦況をフラットに戻して早撃ち勝負。

たが俺と「俺」では優勢劣勢の違いがある。同じ選択肢だとしても実際の結果には大きな違いが出る！！
だからお前は後手に回るしかないよなぁ！？

ここで決まる、ここで取る行動が全てを決める。ところで「俺」、じゃんけんの必勝法を知ってるか？

最初はグーで相手をノックアウトすれば相手は勝負の「手」を出すことができずＫＯ不戦勝になる。俺はこれでカッツォを三回ノックアウトしたことがある。

「死に曝せっ！　【超過機構】「賦活醒」！！！」

百足式８一０．５の超過機構の効果は常時ＭＰを消費するコストがある。
本来の想定としては防具によるアシストを入れて長時間の戦闘を行う訳だが、そんな時間はない。それにワンスイング叩き込める時間

さえあればそれで事足りる。

そして、三つの選択肢を自由に選ぶ権利は先手を取った俺にだけ許された権利！　後手に回った時点で「俺（お前）」は俺の行動に対する対処を選ぶことしかできない！！

剣を出すか？　拳を出すか？　白旗上げたって容赦しねぇ、これでくたばれ――――！！

「獲った！！」

Q. 詰みです、どうすればここから勝てますか？

A. 横槍を入れます

「な…………」

俺というプレイヤーがどんなキャラをしているのか、それは俺自身が最もよく知っている。
基本的に俺は物理アタッカーだ、魔法みたいなことが出来る武器も多いがその根本はＭＰに依存しないダメージソースを多く持つ九……いや七割物理特化型。
基本的にアクションは物理的な攻撃手段に限られているし、魔法みたいな事をするにしても結構な手間をかけたり水面下でバタ足するような苦労がかかる。

そして俺は、一から十まで完璧に覚えているわけではないがインベントリアの中に何を突っ込んだのかはある程度把握している。だからこそ断言できる、そんなものを入れた覚えはないし……そのような使い方が出来るスキルも魔法も覚えちゃいない……！！

「まさか…………」

まさか。
渾身の振り下ろしによって叩きつけられんとして百足式８－０．５から「俺」を庇うように真紅の床から明らかに物理現象ではない挙動で出現した大量の楽器群が何を意味するのか。

「ふざっ――――」

理解は出来た、だが納得できるかどうかは別問題だ。そしてこのクソみたいな横槍に対して俺は一切納得できていない。

「ふざけんな！！！？」

スクラップと化して、それでも「俺」を守りきった楽器の残骸から百足式８－０．５を引き抜いて再度振りかぶる。この、千載一遇の、

チャンスを…………

「く、あ……！！」

だが、ここでタイムリミット。スイングされた百足式８－０．５の超過機構のコストを支払うだけのリソースを持っていない事で展開された紫紺の刃が斧槍の機構が閉じられていくのに連動して消失する。

そして、歌姫（オルケストラ）の寵愛をこれ以上なく受けた「俺」がその仮面に違わぬ猛禽の如き勢いで跳ね起きる。

その手に握られているのは炎を吐き出す漆黒の刃……対処は間に合わない、どう足掻いたって渡さなきゃいけないターンもある。

「がっ！！？」

痺れと熱と、それらを感じる直前にだけ感じ取れる寒気が腰から脇を通過する。

だが、

「ナイスクリティカル……」

スキル「フェイタルゲイン」、ギリギリで起動が間に合った。
死の淵ギリギリで踏み堪えた状態で、諦めかけた意識を殴り飛ばしてもう一度足に力を込める。

勝てない、実力とかダメージとかではなく「ギミック」が勝利への道を塞いでいる。何かおかしいとは思っていたんだ、ウェザエモンのＥＸシナリオが割とシンプルだったからそういうものだろうと思

っていたがオルケストラのＥＸシナリオはあまりにも短過ぎる、単調過ぎる。
どこで間違えた？　何を見落とした？　今考えたところで遅いし、仮に何かを見出したとしても遅い。
だから、これは単なる八つ当たりだ。
「っ！！」
インベントリから取り出したアラドヴァルを投擲の構えで「歌姫」へと突きつける。よくも水を差しやがったな、剣を刺してやる。
「死────」
だが、ありったけのフラストレーションを込めた投擲は「歌姫」へと届く事はなく。
「…………」
それくらいはお見通しだと言わんばかりに軌道上に割り込んだ「俺」が投げ放たれたアラドヴァルをキャッチ、さながら「忘れ物ですよ」とでも言わんばかりに……俺の胸へと投げ返した。
「ごっ……丁寧に、どうも…………」
アラドヴァルに串刺しにされ、今度こそ身体から力が抜けて、視界が黒くなって………
「あ………」

なんだサイナ、たかだか負けて死ぬだけだってのに……何故そんな泣きそうな顔をする。

何か、見えそうな…………ぐべぇ。

◇

「…………」

「おやサンラク君、随分と健闘したよう……何かあったのかね？」

「…………」

つかつかと無言で歩き去っていくサンラクの姿に、キョージュすら

もが呼び止めることができない。
表面上は静かな、だが一度扉を開けてしまえば爆炎が噴き出してきそうな不吉すぎる静けさを纏ったサンラクが進む。
「あ、サンラクサン。事後報告でごめんですわ、ちょっとおとーちゃん……じゃなくてカシラからのお使いを済ませてたですわ」
「………」
てこてこと警戒心のカケラもない様子で近づいてきたヴォーパルバニーを拾い上げ、頭に乗せそれでも無言のままサンラクは化学仕掛けの基地の中を進む。
そして征服人形達の拠点のある大樹海……つまり、外に出たサンラクは無言でストレッチをして、身体を解して、息を吸い込んで………
「クソゲーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッッッッッッ！！！！！！」
「ほびょおっ！！？！？」
大樹海に萌ゆる全ての枝葉を震わせんばかりの、荒ぶる魂の大絶叫が一匹のヴォーパルバニーの鼓膜に大ダメージを与えながら響き、消えていった。

この三日後、一人のプレイヤーによってオルケストラ攻略のアナウンスがシャングリラ・フロンティアのゲームワールド全体に報せられる事になる。

インタリュード　誰が歌う、誰が奏でる（後書き）

Q．倒されそうになったら楽器介入とかクソ過ぎない？

A．闘技場じゃねーんだぞ質問に答えろ

エピローグ　タンホイザーゲートよりの帰還者（前書き）

本来は一つの章でまとめるつもりだったけどGH：C編をねじ込んだので前後編です

矢車さん、石仮面とか使いました？

エピローグ　タンホイザーゲートよりの帰還者

「ふむ…………」

手元に置かれた真理書を読み終えたキョージュは眉間に寄った皺をほぐしながらため息をつく。

若々しい見た目ではあるが中身は現役よりも老後の方が長くなってくる年齢だ、実際に目を酷使しているわけではないとしても日頃の癖で反射的に行ってしまう。

「冥響のオルケストラクリアおめでとう、まずは祝わせてもらうよミレィ君」

「はぁ、どうも」

「ふふ……あまり嬉しそうではないね」

ミレィやキョージュだけではない、アナウンスと共に凱旋したミレィが齎した真理書を読んだ者達は皆一様に似たような顔をしていた。

ユニークモンスターを倒し、ユニークシナリオＥＸをクリアすればワールドストーリーの進行と共に、そのユニークモンスターについて記述された真理書がドロップする。

これまで明らかになっている真理書は墓守編、深淵編、天覇編の三冊……そしてこの度、ミレィが最終楽章をクリアした事で四冊目の真理書「冥響編」が手に入った……

だが、その冥響編が問題だった。

「真理書「冥響編」……偽典、とはね」

「いやぁ、予想出来そうなモンでしたけどねぇ……まさかこうもはっきり分岐させてくるとは」

そう、ミレィが持ち帰った真理書は完全な攻略本でも設定集でもなく……「偽典」と、そう名付けられていた。

偽典、偽物というわけではないだろう。ミレィが目を通した限りでは自身の体験したオルケストラ戦から外れたものではなかったし、オルケストラの「正体」にも言及されていた。

成る程、前知識無しでこれを見ていたのならば、キョージュであったとしても素直に受け取っただろう。だが、彼ら【ライブラリ】の面々は【旅狼】との盟約、自身らの攻略などで他の真理書を知っているからこそ……「偽典」たる意味を正しく理解できていた。

「これ書いた奴、相当性格悪いだろ」

「一見すると何も問題ない風に見えるのがタチ悪いな」

「やっぱこれサンラク氏が正典ルートってことじゃないですかー！！」

「やはりシャンフロのツチノコは伊達ではないのね……」

「この程度の設定で考察厨を満腹にさせられるとでも？」

「せいぜいオードブルですな」

「でもオルケストラでこれ以上調べられる事あるか？　ミレィだけの調べとはいえ劇場内にさらなるギミックがあるとか？」

「いやいや、何のためのリヴァイアサンだよ」

「ミニ勇魚ちゃん相手のギャルゲー再開か……」

「愛想いい風に見えて基本的に好感度固定なのつれぇんだよ」

「ギャルゲー畑の奴らが匙投げかけてるの相当よね……」

「征服人形達が何か隠してるとか？」

「いやー、その線は無い寄りだと思うけどなー……要するに原始人に核を持たせないよう活動してるんだろ？　オルケストラにここへ……いてもらう為にプロトコルを設定した感じだし」

「……音楽プレーヤーに足でも生えるのかしら」

「変形して小型ロボットになる、とかの方がまだ納得できそう」

偽典にはオルケストラの「正体」は書かれていた、だがそれは考察にやり甲斐を感じる者達からすれば非常に大雑把なものであるし、何より……

「正体は雑、起源も過程も書かれていない……速さ重視の突貫工事で作られた攻略本みたいないい加減さですね〜」

「それ、君の世代から随分前の……というか私世代くらいのネタで

はないかね？」

「古きを掘り起こす学問のセンセーが何言ってるんですかねぇ……」

オルケストラの正体が音楽プレーヤーである事など、真理書を見なくても分かることだ。そしてそこで解説が止まっている時点で、【ライブラリ】プレイヤー達の方針は決定していた。

「我々ライブラリの目的は先陣を切る事にはない、先行く者達を後押し、拓かれた道を調べ尽くす事にこそある」

【ライブラリ】は情報を即座に公開する事はない。彼らとて人間（プレイヤー）、他より先んじて情報を愛でる快感を完全に捨て切る事はできない……が、情報を明かす時は迅速だ。

「旅狼の首領殿とは既に談合済みだ、オルケストラのシナリオ発生条件の発表を行う！　広報担当、宜しく頼むよ」

「了解っすキョージュ！！」

「そして我々は暫定「正典候補」であるプレイヤー：サンラクのサポートにもを行う！　異論はあるかね？」

沈黙は賛成の意思表示である。無音の面々を見渡したキョージュは一つ満足劇に頷き、それを合図に考察クラン【ライブラリ】が本格的に動き出した。

……

…………

……………

それから一週間後、即ちサンランクが最後にログアウトしてから十日後。

「よう似非幼女………帰ってきたぜ、宇宙の旅からな……!!」

「おや、随分と…………なんて？」

「気にするな、タンホイザーゲゲートを見た事はあるか？　コズミック・パワーは未来から過去を見る」

「…………？」

「過去は線、現在は点、そして未来が面なんだ。過去は記憶であり、現在は意思、そして未来は認識だ……」

「哲学かね？」

やけにギラギラとしたサンラクの言葉にキョージュが怪訝な顔をする中、そのログインに気づいたミレィが近づく。

「そう、つまり宇宙は広い」

「それっぽいこと言って小学生並の結論に至りましたねぇ～」

「ようミレィ、聞いたぜオルケストラクリアおめでとう」

「ありゃ、知ってましたかぁ……てっきり、嫌味的なものを言われるのかと」

「もう気づいてるんだろ？　俺とお前とじゃルートが違うってな」

少なくとも現在もオルケストラ前を臨時の拠点としている【ライブラリ】のメンバーが誰もサンラクのログインを確認していない以上、余程の偶然でもなければサンラクはシャンフロにログインしていない筈だ。

だが既に【ライブラリ】はオルケストラの攻略情報をある程度公開しているし、外部手段でそれを知っていたとしてもおかしくはないだろう。

「ふむ、それなら話は早────」

「おっと待ちな、悪いがイニシアチブは俺が貰う。艦内戦闘は拙速を尊ぶからな」

「？？？」

話が通じているようで全く噛み合っていない、何か別の世界の住民と話しているような……やけにハイテンションなサンラクであったが、インベントリから取り出したのだろうアイテム、【ライブラリ】

からすれば馴染みの深いものであるスクリーンショット用のアイテムが表示した写し絵(スクショ)にキョージュを含めた皆の視線が集まる。

「これは………」

「……あれ？　これ………え、マジでぇ？」

キョージュは画像の左側から見ていたからこそ、わずかに気づくのが遅れた。だからこそ画像を右側から見ていたミレィが先に気づいた。

ニヤリ、とどこか吹っ切れた様子のサンラクが【ライブラリ】の面々を睥睨する。

その姿に、キョージュはふと厄介なお得意様である一人の女性の言葉を思い出す。

曰く、自分と残り二人の関係は単純に決められるものではない。殴り合いをしてでも主導権を奪い合い、負けた者が頭を張るのだと。

「報酬はこの世界の全貌と……一週間後の祭りに参加する為のファストパスでどうだ？　代金は俺があの野郎(オルケストラ)をクリアするまでの全面協力だ」

悪く言えば、幾度となくオルケストラに敗北したその男は、堂々たる宣言と垂涎の情報を携えてシャングリラ・フロンティアへと戻ってきたのだった。

エピローグ　タンホイザーゲートよりの帰還者（後書き）

偽典真理書は補遺のないＳＣＰ記事みたいなもん、概要は説明してるが謎が謎のまま残っている

ちょっと設定を吐くとするなら

オルケストラは三つの意思によって成り立つ複合存在意義で動くユニークモンスターです
一つ、エリーゼ・ジッタードールによる「私の歌を聴いてほしい」という意思
二つ、アンドリュー・ジッタードールによる「神代の文化を知ってほしい」という意思
三つ、それは――――

世界の真理書「天覇編」（前書き）

待たせたな

世界の真理書「天覇編」

天覇のジークヴルムの適正攻略人数は…………

…………

……

修正完了。

今回の特殊裁定に於ける天覇のジークヴルム及び四色竜の決戦フェーズの適正攻略人数は「最低五百人以上」です。
パーティメンバーの職種は問いませんが比率としてはタンク及び生産職の割合が重要になります。
ジークヴルムのユニークシナリオEXはワールドストーリー第三段階固定であるため、ワールドストーリーが三段階目になった時点で新大陸に到達した全てのプレイヤーが発生条件を満たします。
本来は「天覇のジークヴルムの撃破」あるいは「全ての色竜討伐」がクリア条件ですが、今回は全ての色竜及びジークヴルムが一つの場所に集結した為、それぞれのパラメータが強化されています。

天覇のジークヴルム攻略
戦闘開始時点で天覇のジークヴルムは一定範囲に「龍法律(ノトーリアス)【悪性増幅重力圏(Bad.Increase Gravity)】」を展開。この特殊フィールドはジークヴルムが戦闘を終了するまで持続し、プレイヤーのロールプレイを参照して特殊状態「B．I．G．」を付与する。
この特殊状態にはプラス判定とマイナス判定が存在し、どちらかに偏った状態で死亡した場合、リスポーンする際に判定に応じた特殊

効果が発動する。主なものとしては
・復活時間の変動
・復活位置の変更
・デスペナルティの増減
・復活後の状態異常
など。

ジークヴルムの能力はその大半がその発生、制御が「角」に起因しており、これを破壊されるとジークヴルムは特殊行動が制限される。

・「龍法律(ノトーリアス)【悪性増幅重力圏(Bad.Increase.Gravity.)】」
対人類第一試練、未来を憂う龍王が課す人類種の意志を問う黄金の重力圏。効果は前述、一定以上のプラス判定が蓄積することで制限が解除され、B．I．G．の効果量が双方向に増大する。
「法」は世界に干渉する力、「律」は自他たる個に干渉する力。故に世界の在り方を限定的に改竄し、人を祝い呪うそれは法にして律、故にこそ「龍法律」なのだ。

・「輝ける龍王(トゥーパック＝アマル)」
対始源機能、マナ粒子の外的干渉を阻害する事で「魔法」に定義される一切を無効化する。
発動に際してジークヴルムの角が左右に一本ずつ残存していることが条件であり、左右一組が成立しない場合は発動が不可能になる。
ジークヴルムを龍王たらしめる神代の叡智の一つ、高出力のマナ粒子を体表で流動させる事で外部からのマナ粒子干渉をより濃い色のペンキで塗りつぶすように無効化する。

・「狂騒領域(Jazzy=Zone)」
対始源機能、マナ粒子の内的活性を阻害する事で「スキル」に定義

される一切を無効化する。
発動に際してジークヴルムの角が同方向に二本以上存在する事が条件であり、本数が不足している場合は発動が不可能になる。
ジークヴルムを龍王たらしめる神代の叡智の一つ、特殊な振動により異常挙動するマナ粒子による結界を展開し、範囲内の存在の体内マナ粒子をかき乱す。

・「灼滅威吹（ブレス・オブ・ペイン）」
対始源機能、マナ粒子そのものを消失させる反（アンチ）マナ粒子を含有した息吹。マナ粒子同士の対消滅は焼却という形で可視化される。
あらゆるスキル、魔法の効果を貫通し、ＨＰだけではなくＭＰをも削る。
ジークヴルムの真骨頂、始源に抗う人類種が辿り着いた回答であり切り札。しかしその炎は世界を焼くにはあまりに乏しすぎた。

・「龍王機関（Dragon Driver）」
対始源決戦機能、残存する角の本数に応じた分身を形成する。形成された分身は一定以上のダメージもしくは本体の対応する角の破壊で消失する。
ジークヴルムの切り札、自身の核をオーバーフローさせる事で出力を飛躍的に上昇させる。如何にそう設計されたジークヴルムであれどノーリスクではなく、過剰に過ぎるマナ粒子の大量生産はジークヴルムの「寿命」を急速に縮める。

・「調和を討つモノ（バスターピース）」
対人類最終試練、全身全霊に相応しい全マナ粒子を一点集中させる事で規格外の破壊力とする一種の自爆。
後述の自爆とは異なる単純な広域破壊であり、ジークヴルム自身が

大まかな形状維持以外の制御を放棄しているために膨張する程に漏れ出したエネルギーが周囲に撒き散らされる。
常にマナ粒子が充填されていなければ放出した魔力が全てジークヴルムの体内へと戻ってしまう為、この試練を乗り越える方法はジークヴルムの魔力制御における唯一の間隙である逆鱗を穿ち、魔力の流動を強制停止させることのみである。

・「試製再構築機能（イモータル・テック）」
ジークヴルムのもう一つの切り札、「アリス・レポート」を参考に試験的に実装されたリスポーンシステム。
ただし一号、二号計画素体やアリス・レポートにおける被験体と異なり規格外のマナ粒子を内包するジークヴルムを再構築するプロセスは不安定要素が多く、さらに実証すらされていない急造のシステムである為に成功するかどうかは不明。
だが、あるいは、もしかしたら。

・「広域汚染混血機能（オール・ダーティー・バスタード）」
対始源最終抵抗機能、体内で生成されるマナ粒子を全て有毒性汚染粒子に変換し、自身の自爆を経て広範囲のマナ粒子を汚染する最終手段。
こちらがジークヴルム本来の自爆機構であり、対始源においてジークヴルムが稼働不可能な状況になった場合、ジークヴルム自身の要請と人類側からの承認を経て起動される。
しかしながら神代はとうの昔に終わり、ジークヴルムの声を聞く者は既になく。故に敗残の龍はこの機能を独自に改造して最期の試練とした。

天覇のジークヴルム特殊行動

天覇のジークヴルムは通常ヘイトの他に別枠の注目（ヘイト）を搭載している。ジークヴルムはＢ．Ｉ．Ｇ．のプラス判定を瞬間的に高めたプレイヤーに意識を向けやすく、またその際の対応次第では通常のヘイトよりも優先される場合がある。

さらにジークヴルムはＢ．Ｉ．Ｇ．の総累積値に応じて行動を変える。

Ｂ．Ｉ．Ｇ．の蓄積が低いほどジークヴルムは攻撃の届きにくい場所に留まる傾向を見せるが、色竜のいずれかを倒すなどの結果を示す事でジークヴルムは地上へと降りてくる。

地上に降りて以降は前述の別枠ヘイト管理を続行しつつ、空中では行わなかったブレス攻撃等を解禁。以降はＢ．Ｉ．Ｇ．ヘイト、残存体力、角の残存数を参照しつつ進行する。

体力が規定ライン以下になった時点で龍王機関を発動、以降は前述ヘイトを参照しつつ残存体力５％になった時点で最終試練を発動する。

そして逆鱗を穿つ、あるいは「調和を討つモノ（バスターピース）」が発動した時点で戦闘が終了する。

特殊要素「色竜災害」

決戦フェーズでは特殊裁定として、フィールドに集結した色竜達もまたユニークシナリオＥＸの一部として機能する。

・黒竜ノワルリンド
今回のシナリオでは一定以上の友好度を保持していた為、プレイヤー側のアシストとして参戦。攻撃を仕掛ける、過度に挑発するなどのヘイトを稼ぎさえしなければ基本的にプレイヤーを狙う事はない。生存。

・白竜ブライレイニェゴ
今回のシナリオでは移住先として前線拠点を見定めた為、ギミックボスの一体として参戦。プレイヤー陣営の参加数×１００のキルスコア及びＮＰＣの全滅を勝利条件として分体を生成し続ける。撃破。

・緑竜ブロッケントリード
今回のシナリオでは特定プレイヤーの撃破を目的とし、ギミックボスの一体として参戦。ターゲットとして設定されたプレイヤーをキルすることを勝利条件としてフィールドに蓄積されたマナを消費して戦闘を行う。生存。

・赤竜ドゥーレッドハウル
今回のシナリオでは他色竜及びジークヴルムの撃破を目的とし、ギミックボスの一体として参戦。自身の生存を優先しつつ、色竜及びジークヴルムの撃破を勝利条件としてより多くのプレイヤー、ＮＰＣ、Ｍｏｂに対して攻撃を行う。撃破。

・青竜エルドランザ
決戦フェーズ開始前に撃破された為、不参加。

天覇のジークヴルムのストーリー的設定

遥か昔、神代の時代において始源眷属（あるいは始源眷族）に対抗すべく……あるいは「６．６．６．計画」を実行するまでの防波堤として生み出された「抗獣（ドラゴン）計画」唯一の成功作たる神に抗うモノこそがジークヴルムの正体です。

当時、マナ粒子に対して人類という種そのものが根本的解決策を提示できない、という致命的問題点がありました。それを解消すべくアリス・フロンティアの技術提供により設立された抗獣計画では、「フロンティア・レポート」の実験結果を基にマナ粒子の制御を主目的とした新生物の開発を主目的としていました。

その果てに生み出されたジークヴルムは肉体を莫大量のマナ粒子そのもので構築しており、フロンティア・レポートＩＩを参考とした生体プログラムストリームによって思考能力とマナ制御の分離両立に成功しました。

これによりジークヴルムは自身の性質を「再生」「複製」「焼却」等に変質させることが可能であり、これによって始源眷属・族に対してマナ粒子の主導権を奪うことで優位に立つことが可能となったのです。

しかしながらＡＢＣＥＤ－αの失敗、誕生した「――要「不滅編」開放――」への対処。それによりジークヴルムの援護を前提として維持されていた各戦線の崩壊……駄目押しの６．６．６．計画の強行、そして失敗。

――果たして、Ｑ．Ｅ．Ｄ．計画が立案された時点でジークヴルムの役目は滅亡に逃げ込む神代人類の殿として残ったＢ－２「リヴァイアサン」とＢ－３「ベヒーモス」を守る事だけでした。

改良された６．６．６．計画の完遂、及びＱ．Ｅ．Ｄ．計画の定着

を経て……ジークヴルムへの命令権を保有していた最後の神代人類にして、ジークヴルムを生み出した親（科学者）でもあるジーク・リンドヴルムの死亡を以て黄金の防波堤は取り残された敗残兵と成り果てたのです。

ジークヴルムが備えていた広域汚染自滅機能の使用許可を生みの親は最後の瞬間まで許可する事はなく、望まざる自由を得たジークヴルムは長い時間途方に暮れ続けます。そうして長い時間が経った頃、新たに地に満ちた新人類達が「抗獣（ドラゴン）計画のジークヴルム」と名乗る存在（彼）と遭遇しました。

それ以降現れるようになった数多のドラゴン達と、ジークヴルムとを関連付けた事で黄金の龍王、天を覇する七つの最強種が一つ「天覇のジークヴルム」が生まれたのです。

彼の望みはただ一つ、かつて敗北……されど創造主達が「勝利」と定義した新人類が戦う力を十全に得るその日まで密かに蠢く始源眷属・族を滅ぼし、そして力を得た新人類へと己が全霊を以て試練として立ちふさがる事です。

即ち天覇のジークヴルムとは新人類の守護者であり、その巣立ちに際して立ちはだかる試練なのです。

余談ですが、ジークヴルムの言動がやけに仰々しいのは実戦投入される前、調整を受けている最中にジーク・リンドヴルムが語って聞かせた英雄譚などが原因です。本来は「ドラゴン」としての確固たる自覚を育むための教育でしたが、長い時の中で試練としての「竜」という自己認識を確立した事で今のジークヴルムに至ったのです。

滅び、死を経たジークヴルムが蘇る事はありません。

されど、ジークヴルムという兵器を一機限りのものとすることを惜しんだ冷たい思惑によるものか、ジークヴルムという個体が一代限りの存在として消えていくことを哀れんだ暖かな憐憫によるものか。

――黄金は廻る。死の終焉を経て、悠久の時を経て、きっと彼は新たな命を受けて再誕する。

それこそがジーク・リンドヴルムが施した最後の機能なのだから。

世界の真理書「天覇編」（後書き）

Q．なんで天覇編書くのにこんな時間かかったんだタコ
A．見りゃ分かるだろ大量の新設定考えてたからだよ

ちょっと補足というか口を軽くしますと、

ABCED計画
6．6．6．計画
Q．E．D．計画

この三つは神代において非常に大きな意味を持っています。
具体的に言うとABCED計画実行前から6．6．6．計画が秘密裏に進められていた
ここら辺から抗獣計画が始まる
←
せっちゃん死亡のためABCED計画の致命的欠点が気づかれる事なく放置され、結果ABCED－α事件発生。指導者達による6．6．6．計画の強行が決定
←
B－1「そういうの良くないと思う」
6．6．6．計画が中断凍結、指導者が変わった事でQ．E．D．計画が立案、開始される
←
途中でエドワード君が真実に気づいて離反。Q．E．D．計画が露骨に遅延する、というか一時凍結レベルで止まる。あんなんでも天才なんです。
エドワード君が鼻水インフェルノで死亡、人類種の存続可能最低ラ

インを割るもQ．E．D．計画が完成。

↓

ジュリウスがエドワードが置いていった研究ログからエドワードと同じ結論に至り、突貫工事で6．6．6．計画の改良を開始……と思ったら引き金は引きたくないアリス・フロンティアが勝手に改造してた。

↓

生存者達が思い思いに終わりを迎える中、アリス・フロンティアはベヒーモスの中に隠れ潜んだ。そしてジュリウス・シャングリラはリヴァイアサンと共に6．6．6．計画を実行し……

今やその続きを知っているのは「象牙」と、「勇魚」と、不滅の最強種だけなのです。

プロローグ　スペース☆ゲリラ（前書き）

番外編の文章が派手に吹っ飛んだので怒りの本編再開です
提出課題？　ブッチしとけ！！

……は冗談として、ちまちま追加していきます
というか普通にインベントリア案件ですよねこれ

プロローグ　スペース☆ゲリラ

光線銃が反射加工された壁面を叩いて跳ね回る。自陣営の損耗を生命無き機械で統一しているからこそできる無差別の跳弾領域、機械と比べれば不完全な感覚器官しか持ち得ない人間が踏み込めばどうなるのか。

「いぃったァ！？」

「フォックスがやられた！！　衛生兵(メディック)　衛生兵(メディーック)！！」

「バーカ！　いるわけねぇだろ！　俺たちゃ全員職業：ゲリラ統一パだぞ！！」

予測不可能な跳弾々幕(フレキシブル・レーザー)の流れ弾に当たってしまった奇妙なヘルメットを被った特殊戦闘服の男が肩を抑えてうずくまる。すかさず他の者がフォローに入るものの、ただでさえ不利な力関係がますます偏った方向へと傾いていく。

「ひぃい！　殺戮(課金アイテム)パックで固めたセキュリティボットの増援！　廃人怖すぎィ！！」

「くっ……俺が、囮になる……！　お前らは、潜伏しろ……！！」

「バカ言ってんじゃねぇよフォックス！　こんな序盤で欠員出したらどちらにせよ詰みなんだよ！！」

迫り来るオイルの血潮で動く金属の兵士達は、時間が経過するほど

にその数を増していく。対する潜入部隊はたったの五人、潜入する前段階の時点で３０人いた突入部隊がほとんど撃墜され、かろうじて潜入できた人数だ。
やはり無謀であったのではないか、元より失うものの少ない身の上ではあるがそれでも無駄死にともなれば命を惜しみたくもなると言うもの。

「どうする！？　ウルフ！！　一応「頭」はお前だろ！！」

「くじ引きみたいなもんじゃねーか！　ぼっちで宇宙漂ってた雑魚艦長に指揮能力があると思ってんの！？」

「無理無理無理！　なんでスペースオペラ系なのに丸ノコ装備なのぉ？！　殺意が２０世紀レベルじゃん！！」

その時だった。

「テメーらァ！　死にたくねーなら口開けて壁に貼り付け！！！」

ガジョゴン！　と金属の駆動音が床を踏みしめて重厚な足音を立てる。
生ける者達が振り向けば、そこには巨大な鎧……否、強襲用のパワードアーマーに身を包んだ一人の男が堂々たる立ち姿で巨大な銃を持ち上げていた。

「小型宇宙船用艦載ガトリング！　良い子は室内で使わないようにっっっ！！」

「ガゼル！！！」

「ひゃっほう悪い子万歳！　ぶちかませ！！」

「なお弾を撃ち切り次第、アーマーを自爆特攻させます」

返事は聞いてない、と言わんばかりに巨大なガトリングが咆哮を上げる。圧縮荷電粒子をガトリングで連射する艦載ガトリングを手持ちでぶっ放すと言う狂気の弾幕がセキュリティボットを凄まじい勢いでスクラップに変換していく。しかし如何にパワードスーツで外部補強されているとしても所詮は人一人、十秒もしないうちに弾切れを起こしたガトリングが投げ捨てられ、コンソール（ゲームウィンドウ）を手早く操作した草食獣（ガゼル）をモチーフにしたヘルメットを被った男がさながら蛹から羽化するかのように開いた背部から飛び出す。

「ガゼルが作ったチャンスは骨の髄まで活用するぞ！　お前ら走れ走れっ！！」

「ねえガゼルさん、今ので幾らくらい………」

「現在の所持金は１２クレジット」

「ヒエッ、全財産……」

◆

宙海歴255年。
人類種が故郷の星を捨て、星の海を旅する放浪の種族となって255年が経った今日この日。一番最初に宇宙図(マップ)を完成させた偉人の名をとって「モスコミュール宙域」と名付けられた漆黒の宇宙にて……「愛板(まないた)」船長が率いる「至高のA大船団」と「Gカップムネ肉」提督及びその麾下による「双丘の大艦隊」が激突した。
実に三時間にも及ぶ大激戦の末、両艦隊合計して三十二隻の宇宙軍艦がデブリと化した史上稀に見る大海戦は双方の痛み分けとして一旦のこう着状態へと持ち込まれていた………

否、本当の戦いは既に水面下で始まっていた。

「フォックス、ダメージの方は？」

「軽傷だ、回復はケチってても問題ないレベル」

「ガゼル、あんがとな」

「悪いがあれを持ち込むのでリソースの八割使ってたから手持ち武器はハンドガンだけだぞ」

「出落ちかよ………へビーなミッションになりそうだ」

複数の船主達の大同盟たる双丘の大艦隊に対し、至高のA大船団は船主愛板一人によって運営されている船団である。それ故に此度の戦いにおいて愛板は周辺宙域にいた無所属の船主達を臨時の傭兵として雇い入れていた。
そしてその中でも、艦隊戦ではなく敵船の中に強襲を仕掛けること

に長けた者達によって結成された強襲部隊、その生き残りこそがこの場にいる五人。フォックス、ウルフ、パイソン、ライノ、ガゼル……たったの五人に任されたミッションは双丘の大艦隊に潜入潜伏し、来たる一週間後の第二次会戦までに致命的打撃を与えることである。

「とりあえず臨時で拠点を作る、その後はハッキング可能なスポットを探すぞ」

「先に聞いとくが勝算はあるのかよパイソン」

「任せて、これでも電子戦じゃあ負け知らずなのよ私」

「そりゃ心強い」

彼らは互いに名前を知らない。事前に依頼主愛板から支給された名前を隠蔽する特殊なヘルメットを着用した彼らはコードネーム以上の情報を知らないのだ。それは傭兵としての活動中のいざこざを終わった後に持ち込まないための配慮であり……敵方に情報を明け渡さないための対策でもある。

「…………逃げた先でゲリラ活動とは」

「何の話だよガゼル」

「え？　あー、ごめんリアルの方の話なんで気にしないでくれ」

「了解」

ガゼル型のヘルメットを被った男は、敵船の天井を見上げながら物

思いに耽る。

一体俺は何をしているのだろう、と――

プロローグ　スペース☆ゲリラ（後書き）

拙作恒例「この小説は「シャングリラ・フロンティア」で合ってます」現象

苦難を前に試練の時（前書き）

かわいいエドモンド本田は草しか生えない

水エドモンド本田は持ってないです（真顔）

苦難を前に試練の時

端的に言えば、俺はシャンフロを投げた。辞めたわけではないが……匙は投げた。
どれだけやりこんだゲームだって投げたい時くらいはある、ＭＭＯ一本と心中するほど俺は一途ではないし何よりあのクソ妨害イベント敗北強制で俺の中の何かがブチっと切れた。

「おのれ天地　律ぅ……」

やっぱりクソゲーの使徒じゃねーか。ふざけんなよマジで……意地でもオルケストラはクリアしてやるから覚悟しておけ。故にこれは逃亡ではない、一時的撤退だ。
腹いせにシャンフロのパッケージをクソゲー棚に放り込んで、俺はキッチンへと降りていく。冷蔵庫を開けて何か食えそうなものを物色しつつ作り置きされていた麦茶をコップに注いで一息に飲み干す。

「カテキンが身体に染み込む……」

どこだ？　どこでルート選択をミスった？　冷静に考えても腹が立ってくるのが困りものだが少なくともイベント戦闘ってわけじゃないだろう、恐らく何か解き明かしていないギミックがあると見た。
しかしながら多少冷静さを取り戻し、カテキンを摂取した今の俺ですら何を間違えているのかさっぱり分からない。
少なくともオルケストラは会話に持ち込めるようなユニークモンスターじゃない、それこそ一昔前の音楽プレーヤーだ。再生ボタンを押したら最後、聴き終わるまで何を言ったって無駄でしかない。もしや音楽プレーヤーの停止ボタンを押したらクリアとか？　そんな

しょっぱいユニークシナリオＥＸだったら別方面でクソゲーだなぁ……

……分からん、タイトルだけでオチを予測させられている気分だ。とはいえ武田氏曰く、連綿と地の底に根の連なりを繋げてきたクソゲーの歴史の中にはタイトルでゲームシナリオの八割がオチてるクソゲーもあったらしいが。

いやだが真面目に考えてみよう、恐らく劇場内で起きたイベントそのものはそのまで重要ではないはずだ。いや攻略的意味合いはあるがユニークシナリオ＝特定のキャラにフォーカスを当てたサブシナリオの方程式はオルケストラにも当てはまるはずだ。つまり外側……キャラ方面からの考察だ。

「誰の「シナリオ」なのか……登場キャラは誰だ？」

まずオルケストラ、これは確定だ。壁に埋まった音楽プレーヤー、あるいはあれの持ち主こそがオルケストラであるとか？……

怪しいのは「歌姫」か……エリンギ？　エリンギ・ジッパーホールみたいな名前が音楽プレーヤーには表示されていた。評価されたアーティスト名と再生される音楽が違います、なんてことはないだろう。つまり歌姫＝エリンギさんの方程式が基礎になる。

仮説１、オルケストラとはエリンギさんの妄念が染み込んだアイテムであり、それが不思議パワーで動いている。炙ったらいい匂いしそうだな、いや普通に壊れるか。

「寒っ、部屋戻ろ……」

次に征服人形。端的に言えば奴らはオルケストラを収納している部屋の持ち主だ、無関係とは言いづらい。何か知っている可能性はあ

るだろう……が、正直この線は薄い気がしている。

仮説2、実は征服人形がオルケストラに干渉していた。オルケストラを倒されると都合が悪いから妨害した。だがこれは自分で否定できる。

まず最初に俺は強い、アイアムストロンゲスト。
だが不死身ではないし、多分レベルの低いプレイヤーでも単純な頑丈さで比べれば俺を上回ってるプレイヤーもいるはずだ。簡単に言えば袋叩きにされたら死ぬ。
そりゃタダで死ぬつもりはないが、損害度外視で突っ込まれたら俺と言えど制圧されるだろう。だがそれをやってどうする？　征服人形はＮＰＣだが二号人類（プレイヤー）の性質については理解している様子だった、つまり一度や二度殺したところで意味がない。
まず俺なら確実に報復も兼ねてオルケストラに挑みまくるだろう、【ライブラリ】辺りも焚き付けて逆に制圧してもいいだろう。
俺もそんなことはしたくないが、苦渋の決断とは本人の意思でノーを選べないから苦渋なんだ。だから笑顔でイエスを連打しようねとはペンシルゴンの言葉だ。俺は善良だから一回しか押しません、一回あれば事足りる。

そもそも攻略されたくないならオルケストラの「招待状」を破り捨てればいい。オルケストラを程良く接待したいならオルケストラに直接干渉するのは悪手でしかない。
つまり征服人形がことオルケストラ戦にプレイヤーへの悪意を持ち込むメリットがない、そしてそもそも奴らにそんな意思はない……はず。

困った、俺程度の脳みそじゃこれ以上の考察は無理だぞ。さてどうする？　ちょっと休憩するか。

「…………Ｚｚｚｚ」

……

…………

……………

「朝じゃん」

俺としたことが寝落ちしてしまうとは……くっ、ていうか麦茶にはカテキン入ってねぇじゃねーか！　そりゃ何も浮かばねぇよ！！

「楽郎ー！　学校遅れるわよー！！」

「もう起きてる！！」

おのれオルケストラ、リアルにまで波及させてくるとは！　ええい俺に力を貸してくれエナドリーっ！！

◇

仮に対象Aと対象Bがいるとしよう。
この対象Aはある特定分野において対象Bの数段上、数段先を行く存在である。
即ちその特定分野においてのみその力関係は覆しようのない不等号で定義される。即ち、見方と言い方によっては対象Bにとって Aは神である……ということになる。

古来より、神話というものが生まれた頃より人が神より何かを受け取るというシチュエーションは多く語られている。
言葉であれば神託、物品であれば神器、能力であれば加護あるいは恩寵……

「う、うぅ…………………」

そして、人がしなければならない課題を「試練」と言うのだ。

二日ほど前。

「玲ちゃん、貴女にこれを授けましょう……」

「これは……？」

「ＪＧＥの優待チケットよ」

ＪＧＥ……正式名称はジャパン・ゲーミング・エキスポ。
グローバル・ゲーム・コンペティションが世界規模のゲームイベントだとすればこれは日本規模のイベントである。
ＧＧＣはあくまでも開催地が日本だった、というだけであり本来は特定の国によるイベントというわけではない。だがこちらは日本のゲームを日本人向けに紹介する展覧会である。

「あの、これ……どうやって？」

「岩巻さんには特別なコネがあるのよ」

これは事実である。
真奈の夫、岩巻　境……約二名の「今更木兎夜枝(つくよぎ)以外の呼び方とか慣れない」という理由でビジネス時の名前として木兎夜枝を名乗っている男は、今や日本のゲーム史に燦然とその名を輝かすシャングリラ・フロンティアというゲームにおける宣伝部長を始めとする対外的な対応全てを任された重要な役職に就いている。
そして愛妻家という言葉すら生ぬるい愛を岩巻　真奈に捧げている境の力を以てすれば、二人分の優待チケットを用意することはあまりに容易い。建前上は全てのゲーム企業が平等ではあるが、今やＶＲゲーム業界の頂点にして最先端を行き、ビッグタイトルであるシャンフロを抱えるユートピア社に通せぬ融通など存在しないのだか

ら。

「ここに優待チケットが二つ……言いたいことは、分かるわね？」

「…………………ぅ」

硬質なカードのようなチケットを指でつまんでひらひら動かしながら、半目で告げる岩巻に玲は冷や汗を一つ流しながら一歩後ずさる。言わんとしていることは理解できている、そしてこれを受け取った以上拒否権など存在しないということも……

「玲ちゃん、ちょっと将来の話をしましょうか」

「……え？」

「あのね玲ちゃん………キャンパスライフは、モテるわよ」

「！？」

苦難を前に試練の時（後書き）

ヒロインちゃん、始動（特性：スロースターター）

つまりヒロインちゃんはレジギガス

一歩踏み出す勇気（前書き）

マクロコスモスと閃光の追放者禁止にしません？？？（ダ・イーザにボコられた決闘者の叫び）

一歩踏み出す勇気

「――いい、玲ちゃん。キャンパスライフは……モテるわ」

「は、はぁ……」

「言っておくけど、楽郎君は割とモテる側よ」

「！？」

そしてお前はもっとモテる側だ、の言葉をあえて飲み込みつつ岩巻は話を続ける。もはやこの純粋培養恋愛ヘタレ少女に発破をかけるには生半可な言葉ではダメなのだ。

「高校と違ってね、大学生活というものは出来ることが一気に増えるものなのよ。そうなれば顔は悪くないし対応も暗くない楽郎君みたいなタイプは十中八九合コンに呼ばれるでしょうね」

「合、コン……！！」

「今は楽郎君は未成年だけど、飲酒可能な年齢になれば……そう、酒の魔力が彼を襲うのよ！」

「酒の、魔力……！！」

既にカフェインによって脳に致命的な何かが起こっていそうなものだが、それを言ったところでどうにもならないので岩巻は口を閉じた。

「そうでなくとも、貴方達はこれから受験シーズンよ。貴女も楽郎君も来鷹でしょ？」

「そう、です……」

岩巻もそれは承知している。なにせ楽郎から進学志望を聞き出してリークしたのも他ならぬ岩巻なのだから当然把握している。来鷹は難関校、というわけではないが遊び呆けていて受かるほど易しい大学でもない。つまり如何に「ゲームライフに支障をきたすヘマはしない」ことをモットーとする楽郎や恋愛以外に関してはハイスペックな玲といえど、受験勉強は多かれ少なかれ必要ということだ。

「つまり二年生の今が最大のチャンスなのよ、分かる？」

「う、うぅ……」

「別に今告白しろと言ってるわけじゃないの、あのクソゲー脳みそに玲ちゃんという異性を意識させることができれば値千金よ」

「そういうものでしょうか……」

「そういうものよ。いいこと玲ちゃん？　キスしろとか手を繋げだとか貴女に無茶を言うのはもうやめましょう。この優待チケットとJGEというステージを利用して……ただ一言、楽郎君にこう言いなさい」

「一言………」

…………………

…………

……

――――まるでデートみたいですね

「…………いやいやいやいやいや」

岩巻の言葉が玲の中でリフレインする。それに対して言い訳をするように首を振りつつも、玲はポケットの中に入れたＪＧＥ優待チケットを取り出して眺める。

「ま、まるでも何も、デッ、デート、じゃないですか………そんなのまだ早い………」

だが、岩巻の言葉も事実だ。自分も楽郎も高校生……それも受験生たる高校三年生になるまでそう長い時間は残されていない身の上だ。自分か楽郎がヘマをしない限り大学も同じになるのだからまだ猶予はある…………そう考えていたが岩巻の話を聞き、それを思い返すたびに不安が増えていくのも事実。

「くぅ…………い、いえ。これは……そう、あくまでもシャンフロの最新情報が発表される可能性を現地に赴くことで検証すると言う大義名分がですね………」

幸か不幸か、チケットを如何に渡すかを悩んでいたが為に珍しく寝坊してしまった玲は駆け足で通学路を進みつつも朝から精神と心拍数を乱されなくて良かった、とどこか安堵してた。そしてそろそろ学校……というところで、幾度となく眺めてきた背中と後頭部を発見する。

「あ………陽づっ」

と、そこで玲は見た。

最近やけに自分へと話しかけてくるこの学校の生徒会副会長が楽郎へと近づいていることに………

◆

「やぁ、陽務君だね？」

「すまん遅刻するから話してる暇がない！　あとで頼むわ！！」

「え、ちょっ、おい！！」

てか誰だ今の、知らん顔だ。
そんなことより急がなくては、ホームルーム中に教室に入るとネチネチ文句言うんだよウチの担任！　「どうせ遅刻するなら一元丸々遅刻するくらいの度胸を見せろ」とか「中途半端に遅刻するようなスケジュールで動くな」とか妙にズレた説教だから逆ギレしようにも出来ないしひたすら晒し者にされるのはゴメンだ！！

◇

「………………」
これはいわゆる、岩巻が良く言う「フラグを見逃した」というやつだろうか。
そんなことを考えながら玲は呆然と立ち尽くすこの学校の生徒会副会長である石動翔に見つからないよう息を潜めて裏門へと回る。
「親切心なんでしょうけど……ちょっと、しつこいんですよね……
…」
斎賀　玲という人物はこと恋愛においては血筋を強く感じさせるどヘタレであるものの、それ以外の文武においては同様に斎賀の血を強く感じさせる優秀さを発揮している。

そして別に「学年一位が生徒会長になる」というルールがあるわけではないが、実際に学年一位の座と将来的に生徒会長の席に座ることがほぼ確定している石動は何かにつけて玲へと話しかけてくる。曰く「優秀な人物とは気があう」とのことだが、少なくとも玲が意気の投合を意識したことはない。何故かしきりに医学方面に進学することを勧めてきたり、何故か留学についてしきりに語ってきたり……正直にいえば、苦手な部類の人間であった。

――しかし。

実際優秀な人間であるのは事実で、直接的に生徒へ影響を与える権力を持っているわけではないが生徒会副会長という特別な地位にいるのも事実である石動を文字通り鎧袖一触であしらって校舎の中へと走り去っていった楽郎を目撃し、やはり標的（思い人）は強敵であると再確認する。

普通止まる、普通話（チケット）を聞く。そこをまさかの「お前は後！」である、もしも自分がこれを渡した時に似たようなリアクションをされたら…………

「死…………！！」

ＪＧＥ開催まで残り……二日、まだ玲の勇気ゲージは溜まりきっていない。

◆

さて、学校も終わったしどうしたもんか……どうせなら岩巻さんのとこに寄って新しいゲームでも探してみようか。少なくとも昨日今日でシャンフロに戻るのはちょっと、な。頭を冷やすとは違うが、気分は変えておきたい。

「何か後回しにしてたような……まぁいいや」

思い出せないってことはそんな重要でもないってことだろう。そんなことよりどうするか………

「あ、あの、陽務君っ！」

「ん、斎賀さん？」

「帰るところ……ですか？」

「そうだね、ついでにロックロールに寄ってこうかな、と」

「ロッ…………私も、ご一緒していいですか？」

「え？　別に構わないけど………」

何故か一瞬斎賀さんの顔が「やべぇ」とでも言いたげな感じに歪んでいたことにわずかな違和感を抱きつつも俺と斎賀さんはロックロールへと向かうのだった。

……

…………

…………

「…………いらっしゃい、楽郎君に……玲ちゃん」

「うっす」

「ド、ドウモ」

恐ろしく薄っぺらな営業スマイル、岩巻さんのこういう顔はなかなかにレアパターンだ。相当フラストレーションが溜まっていないとこういう顔を営業中に見せることはない……そう、例えばよほどクソ展開の乙女ゲーに引っかかった時とか。

「玲ちゃぁーん？　ちょぉーっと、お話ししましょうかぁ…………」

「……ひゃい」

ガールズトーク……（戦慄）

一歩踏み出す勇気（後書き）

ちなみに将来的な話ですがヒロインちゃんはザルのウワバミです
主人公はライオットブラッドとお酒を混ぜるので別枠計算です

恋心ジョルトカウンター（前書き）

ザシアンに「シフ」って名付けようとしたそこのあなた、いい趣味してますね

作者は「ドギラゴン」か「ドギバス」ですね、需要的にシールド買った方がいいいんですかねぇ

恋心ジョルトカウンター

◇

ガシャン、とカウンターの奥に置かれたアーロンチェアに踏ん反り返るように腰を下ろした岩巻が肘掛に立てた腕で傾けた頭を支える。

「……で？」

「ち、違うんです……その、シチュエーションとして、ここをですね？」

「ほぉーん？」

半目で睨む岩巻から逃げるように後退しつつも、玲がチケットを渡す場としてここを選んだのは事実である。

ただ渡すだけでは玲の精神が保たない、あくまでも「ゲームに関して」という名文を掲げて自然な流れでチケットを……

「岩巻さんＪＧＥにダックゲームスがブース出すってマジ？」

「じぇいじぇ！？」

「はい！！？」

びくぅ！！！！　と震えながら突然の奇声を上げた玲に何事かと視線を向ける楽郎であったが、ああいつもの発作かと軽く流して岩巻へと視線を向ける。

「ダックゲームスって結構な老舗じゃん？　この前も派手にやらかしたみたいだし……これ正気？」

「ティタハーは酷かったねぇ……なんか共同開発でゲーム出すのと平行で作ってたから、って噂は聞いたけど」

「まだ買ってないんスよね……最近は結構シャンフロメインだったから遭難ゲーは露骨に時間食われそうで……」

「ギャラトラとかやってたし向いてるんじゃないの？」

「ギャラトラはあれはあれでやり込みというかスキモノですけど、こっちはガチの虚無って話じゃないスか」

「マップ引き伸ばし説、ほぼ確定らしいものねぇ。巨人世界って言い訳してるけど」

なにやら玲の知らない話題で盛り上がる岩巻と楽郎を他所に脳内シミュレーションが十八通り目のシミュレートを開始していた玲であったが、ちらりと送られた岩巻からのアイコンタクトにここがチャンスであるのだと気づく。

「あ、あのっ！」

「ん？」

「あー、そういえば忘れてたわー。実は楽郎君にも渡すよう玲ちゃんに頼んだものがあったんだわー」

ある程度武道を嗜んでいると、会心の瞬間を感じ取ることがある。
そしてそれを今感じ取った。
「じ、実はですねっ！！　岩、岩巻さんからこれを、預かってまして！」
「んー？　……マジかよ噂をすればシャドウ？」
「ほら私その日は新作を最速クリアするつもりだから持て余しちゃって」
「リングタイプじゃないってことは……うわマジかよ優待チケット？　転売したら１００ｋ確実の奴じゃん」
「ペイとバイに関わる人間の前で堂々と転売宣言とかいい度胸じゃないの」
「失敬ブラックジョークです、転売厨滅ぶべし！！」
「よろしい」
玲にはよく分からない話題に逸れかけたが、今こそ畳み掛ける時だろう。遅々として貯まらなかった勇気のゲージを未来から前借りする勢いで覚悟を決めた玲はその心情を表すかのように一歩前へと踏み出して口を開く。
「そ、そのです、ね……よければ、一緒に……い、行きませんか？」
「え？　あぁ、シャンフロのブースもあるのか……」

会話を続けつつもなにやら携帯端末を操作していた楽郎は、玲の言葉に謎の納得をした様子だった。そして僅かな沈黙…………時間にすれば数秒だが、玲にとっては数時間のようで。

「うん、まぁ俺は構わないよ」

その瞬間、玲の人生はハイライトを迎えた（当人比）

「ただ……………」

「へ？」

「なんかこれデートみたいになるけど斎賀さんは問題ない？」

「んひゅっ」

人生のハイライトが三回転半して上限をぶち抜いたあと爆発した。

「……っ！　…………！！」

「斎賀さん？」

「あー……赤面差分は不意打ち死ねるわよねぇ……」

「は？　なんの話です？」

「何でもないわよー、プレイヤーじゃなくてプライヤーになりそう」

聴覚が何かを聞き取っているが、もはや玲はそれどころではない。

形容できない感情が渦を巻いてシェイクされ、分裂と合体を繰り返している中ではかろうじて平衡感覚を保つのが精一杯で。

楽郎が「デート」という概念を意識していたのが衝撃だったのか、実際その通りの状況に自分が当事者である事実への衝撃なのか、それすらも分からないまま……だが残った理性を掻き集めて脆く薄っぺらな仮面（表情）を作り上げた玲は極めて普段通りの笑みを浮かべる。

「問題ないから問題ないれす」

「そ、そう？　ならいいけど……俺はそろそろ帰るけど、」

「私はもう少ひ岩巻さんとお話ししていきましゅね」

「そっか、じゃあお先に失礼」

「ひゃあい」

「…………」

一分経過。

二分経過。

「……うう、く、ふぐぅ！！」

「よーしよし、よく耐えた！よく頑張った玲ちゃん！　よくボロを出さなかった！　今夜はクリュッグよ！！」

勢いよく膝から崩れ落ちた玲を岩巻が受け止める。玲を見つめる眼差しは慈悲と同情が綯い交ぜになっていた。

「わ、私、何を、何を着ていけば……」

「大丈夫！　偉大なる前進よ！！　岩巻さんが何でも手伝ってあげるからね！！」

「ひ、陽務くんが、陽務くんが……！！」

「そうよね分かる、分かるわよ玲ちゃん！　クソゲー脳に人間性が残ってるとは思わないわよね！！　うんうん、私も想定外だった！！」

結局、玲が立ち直るまでに一時間かかったのだった。そしてロックロールは異様に早く閉店した。

なお突然の最高級シャンパンに木兎夜枝の疲弊した胃が驚いて盛大に苦しむ事になるまであと四時間。

◆

「んー……」

「珍しい、お兄ちゃんがゲーム記事以外を見てるとか……え、何？　ファッションに目覚めたの？　バイトする？」

「自然な流れで金の浪費を確定させんな、ちょっと外出用の服が要り用でなー」

「ふーん……あ、これバイト先でお裾分けしてもらったプロシュート」

「プロシュートって生ハム………え？　未カット状態？　原木？？」

「うん、試作で作りすぎたからって」

「最低でも15kくらいするやつじゃん……お前のツテ怖いわ……」

鈍器じゃん、完全にこれ人撲殺できる奴じゃん。何をどうバイトしたらこんなのお裾分けで貰えるの？　父さんがお土産でもらった鰹節（塊）もまだ使いきれてないんですよ？

「なんか適当にマネキン買いでもすっかなぁ……」

「うーわ、ファッションナメてんの？　マネキン買いは見た目良くてもハートがダサいよ？」

「メンタリティの美しさは求めてねぇよ」

我が家は妹を除いて大半がファッションに無頓着なため、我が家唯一のお洒落スケバンこと瑠美的に思考停止マネキン買いは看過できないらしい。

俺の手から携帯端末を抜き取ると、手早く操作していく。何やら自前の携帯端末も取り出して並行して操作しているようだが……

「んー、スキニーは黒でいいか……上は黒だとダサいし……お兄ちゃんコートで何か要望ある？」

「インバネスコート」

「名前の格好良さだけで覚えてたでしょ、却下。チェスターコートね」

何それかっこいい。

「はい、こんなもんでいいでしょ」

「おー、ありが…………ハウマッチ？」

「お洒落に妥協の二文字はあってはならないんだよ兄上殿」

「俺の財布が素寒貧になります妹よ」

「クールビズだね！！」

靴もマフラーもいらねぇよ!!

恋心ジョルトカウンター（後書き）

なお作者はファッションセンスにパラメータ無振りなので適当です

陽務家ファッションセンス
父：大体スーツか釣り用の服
母：養蜂用の防護服をポチった
長男：ジャージｉｓ最強
長女：お前は今までに買った服の枚数を覚えているのか？

スタンバイメイン、何かありますか？（前書き）

ヒロインちゃん「ちょっと考えます」

岩巻（無言のシャカパチ）

シャカパチはカードを痛めるからやめようね！！

スタンバイメイン、何かありますか？

◇

玲にとって、二十四時間をこうも長く短く感じた事は人生でも初めての事だった。あるいは人生の中で更新された瞬間だった。

「ふ、服は……髪は………ああ、け、化粧道具は……」

『落ち着きなさい玲ちゃん、貴女の体感時間がどれだけ加速遅延したところで地球の一分は六十秒のままなのよ』

「じ、実は六秒で一分になってるかも……」

『ならない。いいから、落ち着いて、息を、吸いなさい』

「で、でもあと一日しかなくて……」

いくら準備を整えたとて、ふと見直せば何もかもが足りないように思える。この手の話題では母や姉は爪の端ほども役に立たないため、電話をかけた岩巻にすら諌められる程に浮き足立っている事は玲自身も自覚していた。

たった一日、されど一日。寝て起きたらデート（確信）である、どれだけ深呼吸をしても早鐘を打つ心臓は大人しくなりそうにもなかった。

『いいこと？　事態は私にすら予想外の展開だけれど、繰り上げと考えればリカバリは可能よ。まず髪は切らなくていいしメイクも普

段より丁寧にやる程度でいいわ』

「……もっと質を高めるべきでは」

『あのね玲ちゃん、年の差にせよ身分の差にせよデートというものはある程度両者が釣り合っていないと一気に崩壊するの。仮に楽郎君が上から下まで完全新調したって三万行けばいいトコ、あのゲーム脳がわざわざ靴や髪まで整えるとは思えないから一万くらいかしら？　はい玲ちゃん通販に頼もうとしてる物品の総額は？』

「……十二万です」

『じゅっ…………！？』

しばし携帯端末から岩巻の声が途絶える。

「真奈さん？」

『……キャンセルなさい、舞踏会に行くわけじゃないんだから』

「で、でも……」

『玲ちゃん貴女だって人並みにオシャレくらいするでしょう？　無理に全身を新品にしたって人混みの中で汚れてしまうだけなのよ、ちょっと映像通話に切り替えるから手持ちの服を見せてくれるかしら？』

「は、はい………」

がらりと襖が開いた。

「玲、今しがた調べたのですが最近のホテルはちゃんと避にん」

がらりと無言で閉じた。

『……？　今何か言った？』

「気にしないでください、座敷童です」

『座敷童！？』

「玲、私からも母とお祖父様に言っておきますから一泊くらいしてもよいのですよ」

『……随分と下世話な座敷童ね』

「悪くはないけど色味の薄い青春を送ったから妹二人には刺激的な青春を送って欲しいとかで……」

『……真っ赤に刺激的すぎてもロクなもんじゃないわよ』

岩巻は自身の過去を話さない、だが時折見せる表情や声は何かに失望しているようで。さりとてそれを問い詰めるような事はしない、そんな事をしなくとも玲が岩巻に寄せる信頼は大きく揺るぎないからだ。

『取り敢えず買うなら上着か鞄ね、優待チケットにしてもＪＧＥだから動きやすさ重点にした方がいいわね』

「……そんなに混雑するんですか？」

『去年は地獄だった、と聞いているわ』

なにせシャンフロという彗星の如く現れてそのまま地表に激突した超ビッグタイトルである、ユートピア社のブースはそれこそ逆グラウンド・ゼロ、他ブースのモニターすら中継に切り替わる程の混雑であった。

今年は会場を変え、AR事業において頭角を現しているスワローズネストの全面協力によって会場全体にARシステムが配備されているが根本的な混雑まで解決するには至らないだろう。

『言っとくけど、貴女達にあげた優待チケットはそんな混雑を大幅に緩和する魔法のチケットなんだからね？』

「具体的に、どう楽になるんですか？」

『列に並ばなくていい、物販は優待者用に取り置きされてる、座席も良いところが先に選べる』

「それは凄い……」

『そんなことはどうでもいいの、いい玲ちゃんよーく聞きなさい？既にフェーズは二段階ほど先に到達してる、だから自動的にノルマも変わっているのよ』

「ノ、ノルマ………」

『スワローズネストがARスタジオ向けのコンテンツで新しくゲームを出すのは知ってる？』

「いえ………」

『スクラップ・ガンマンってゲームね、これの体験会を楽郎君と一緒にプレイすること』

「……？　それだけ、ですか？」

『ええ、それだけよ。ただし二人協力プレイでね』

「………」

何か、とても嫌な予感がした。あの岩巻がわざわざマルチプレイを指定していることに猛烈な違和感を感じた玲は通話を続けつつも「スクラップ・ガンマン」について検索し………

「キョウリョク、プレイデスカ」

『ええ……協力プレイよ？』

スワローズネストが自信を持ってお送りする最新コンテンツ「スクラップ・ガンマン」……相棒との密接な連携が鍵となるＡＲガンシューティングと紹介されているサイトには、声を掛け合い、時に並び、時に背を預けるといったそれはもう密接な画像が添付されていた。

「………っ」

『玲ちゃん？』

「ご無体な……っ」

『そんな身内を斬れとか命じてるわけじゃないんだから……』

◆一方その頃

「フハハハハハハハ！！　馬鹿が、この地で信頼なんてものはなぁ！　障子の糊よか薄っぺらで脆いんだよ天誅ァ！！」

「あり得ない、何故僕を斬る、味方……だぞ……！！」

「完璧に辞世（じせ）ってる時点で平和主義系主人公の皮を被ったガチガチの幕末志士じゃねえか！　三枚おろしで無縁仏に沈めぇ！！」

「せめて刀は質屋にぃぃぃぃ！！！」

◇

「ご無体な……そんな、ご無体な……」

『砂より脆い奥手メンタルも年季が積もれば岩より硬くなるのねぇ……』

「荷が重すぎます……」

『ええいその程度でうじうじしない！　珍しく真人間ぶっただけで楽郎君なんて普段は脳みそにクソゲーのカセットが突き刺さってるアホなんだから向こうはそんな大層に思いつめないわよ！！』

あんまりな言い草だが、万感の想い(フラストレーション)が込められた言葉に玲は通話越しでありながら気圧され、顔がひきつる。

『いい、ゲーム脳人間がどこまで真人間かを推し量る斥候の時期は終わったのよ玲ちゃん。ここからは本陣を動かすターン……立てたフラグを折るなんて天地神明、上は神仏下は地獄の十王が許してもこの私が許さない！　貴女も理屈で見ている時間は終わり、恋(ハート)を手に取るのよ！　恋は剣！　恋は礫！　恋は銃！！』

何やら雲行きが怪しくなってきた。

「あの、岩巻さん？」

『何やこのボトル！　不良品！？　なくなるの早すぎでしょ！！』

「え、あの、もしかして飲みながら……？！」

『恋なんてものはねぇ！　三年も四年も寝かすようなもんじゃないのよ！　何が十年ものよ！　胃袋に入れたら半日で終わりじゃないのよーっ！！』

「岩巻さん！　ワインじゃなくてお水飲みましょう！　ね！？　あ
あ、コルク抜きから手を離して！！」

『恋は火よりも速く全身を巡るのよーっ！』

「巡ってるのはアルコールです！！」

スタンバイメイン、何かありますか？（後書き）

幕末は命で取引する資本主義なのでみんな仲良くみたいなコミーは成り立たないんだよなぁ……

作者の私事ですが蠍＋エナジードリンクとかいう宿命を感じずにはいられないエナドリを見かけたので飲んでみました

もう少し甘さ控えめで炭酸強くしてカフェインのエグ味を増やすべきでは？？？（純真無垢な眼差し）（また買う）（舌が赤牛に飼い慣らされてる）

余裕有る無しの鉢合わせ（前書き）

やりたい事とやるべき事が多過ぎる

余裕有る無しの鉢合わせ

◆

自分ではどうしようもできない精神的苦痛を赤の他人にぶつける、古来も古来人類がマンモス追いかけてウンババ言ってた時代から続いてきたマイナスの娯楽……人それを八つ当たりという。
他人に迷惑をかける上に何も解決しない、だが気分は多少晴れるのが厄介なところだが幸い幕末ならどんな理不尽なストレスをぶつけても笑って報復(ゆる)してくれるから気楽でいい。

「くっそー……苦い終わり方だ」

目につく奴を片っ端から斬り倒してただけなのに！　百人集めて寄ってたかって袋叩きにするなんてあんまりだ！　奴らめ、人の心がないのか？　四十人は迎撃したと思うけど騒ぎに引き寄せられてレイドボスさんが来ちゃったのであとはお察しだ。まぁさらにバージョンアップしたレイドボスさんが来なくても負けてただろうけど。
その後に藻屑海蘊(デュラハン)（と、団子の串に追い回されていた京極）と一緒にＮＰＣの頂点でありＡＩが操る最強の剣士たるＳＹＯ－ＧＵＮを暗殺しに向かったのだが……ヤバイよね、最終的に忍者と幕臣の大群が的確に殺しにくるから結局打ち首獄門だ。噂じゃ将軍はビームを出すらしいが残念ながら見ることは叶わなかった……
とはいえそれはそれ、ゲームでブイブイ言わせても現実じゃ時間しか進まないのが絶対摂理。そして時間は進んでいるのでＪＧＥの開催日が来てしまったわけだ。
速達にしたので服は間に合った、懐は若干寂しいがまぁ問題はない

はず……最近はあまりクソゲー買ってないから貯蓄があるし大丈夫。
いざって時は家庭内司法取引で前借りした金を…………

「行くか」

◇

「…………」

自室にて、荒ぶる心を鎮めるべく行なっていた瞑想に毛ほどの効果もない事を悟った玲は静かに立ち上がった。
果たして自分は平常を保って楽郎に会うことができるだろうか、そう今の心境を例えるなら……

「絶体絶命……！」

「玲、逢瀬に赴く女の言葉ではありませんよ」

「逢瀬（デート）というわけでは……」

「見敵必殺です、玲」

「……いってきます」

あながち間違いでもないな、と思ってしまった自分に抗えぬ斎賀の血を感じながらも、玲は戦いの地へと赴く――

そう、理想とする青春がやたらと爛れている長姉やカップ麺の懸賞で湯沸かし器が当たったたと結構な喜び様を見せる次姉のようにならない為にも！！！

◆
◇

なお、現在の時刻は六時八分。当初の集合時間は八時半であるものとする。

◆

集合は八時半、まぁ早めに駅に着いて駅内のカフェか何かで朝飯食いつつ時間を潰そうと思っていたのだが……

「「あ」」

現在六時半、集合まで二時間近くあるというのに……何故か斎賀さんとバッタリ遭遇した。

「お、おはようございます？」

「お、おひゃ……イマキタトコロデス！！」

「お、おう」

駅の入り口で会ったからまぁそりゃ見ればわかるけど。斎賀さんも早めに来て時間を潰す算段だったんだろうか、危ねぇ……集合にプレイヤーが後から来るパターンはラブ・クロックなら一発でピザ留学になるところだった。ルート分岐前にフラグ立て損ねるとヒロインが全員イタリアに行くの、一周回ってもはやギャグなんだよな。和気藹々とイタリアに想いを馳せるヒロイン達を教室の隅から眺めるだけの主人公……半年くらい大炎上したのも無理はない。

「どちらにせよリニアが来るまで時間かかるし、どこかで時間潰す？　斎賀さんって朝食済ませた？」

「い、いえっ！　まだです！　はい！　その、服！！」

服？　ああ、そういえばそうだな。えーと？　この手のコメントは程よく褒めろって外道鉛筆が熱弁してたっけ。

「互いに私服で会うのって二回目くらいだっけ？　前は着物着てたけど今日は洋装なんだ……うん、似合ってると思う」

「ふぎゅっ……………………ら、楽郎君も似合ってるとオモイマス」

あ、ロード入った。が、割と早めに復帰した。
とりあえず突っ立っているのもアレなので早朝から店を開けていた喫茶店に入ることにした俺たちはまぁ当然ながら相席で向かい合うことになる。

「コーヒー……コーヒーかぁ」

流石に堅気(リアル)でライオットブラッド連発するのもアレだし、悪かないか……朝食セットは何があるかな？　あ、これとかいいかも。

「すいませーん、オリジナルブレンドカフェオレとこのシーフードエッグベレディクトを……」

噛んだ。

「あ、じゃあ……その、私は…ウィンナーコーヒーと、ベジエッグベネデュっ…………」

斎賀さんも噛んだ。

「「………」」

わずかな沈黙。俺と斎賀さんがなんとも言えない顔で撃沈しているのを店員のおばちゃんにものすごく生温い目で見られてしまった。

「ふふふ……シーフードとベジのエッグベネディクトですね、少々お待ちください」

くっ、初っ端からハードな一日になりそうだぜ……エッグベネディ

クト、必殺技みたいな名前しやがって。

「あー……二人とも同じ単語で噛むとはね」

「そ、そですね……あの、ＪＧＥなん、ですけど……どこから、行きますか？」

「え？　ああ、うーん……シャンフロのブースって何かあったっけ？」

まぁ、共にやっているゲームな訳だし、今や日本ゲーム界の頂点に君臨するこのゲームのブースに行かない理由はないだろう。
基本的にアングラというかニッチというか、マイノリティ側の界隈に住んでいた人間なので光の祭典たるＪＧＥに出展しているメーカーやゲームはどれも知らないタイトルだったり知っていても興味の湧かないタイトルばかりで……ああでも、ネフホロのブースは結構デカいな。なんだか巣立ちを見送る親鳥の気分だ、あの過疎ゲーがこんなに立派になって。

「ゲーム内のＮＰＣが、描いた絵を、元にした画集とかあるみたい…ですね」

「……想定の斜め上を飛んでいくのがお上手なことで」

ゲーム内ＮＰＣですってよ奥さん、現実のデザイナーとかではなく？　それ以外にも専用のマシンに自分のアカウントを読み込ませることで自キャラの肖像画を描くイベントだったり……科学の力ってすげー。

「楽郎君は、何か気になるメーカーが、あるとか……」

「え？　あ？　えー、まぁ……はい」

いやまぁありますよ、ナンバリングタイトルを派手に爆散させたメーカーの完全新作タイトルとか、キャラクターに開発努力の九割を費やしてるからゲームバランスがゴミと評判のメーカーとか、幕末という修羅の金魚鉢を保有しながら人畜無害そうな顔で新タイトルを発表したメーカーとか…………おや、思ったより行きたいところ多いな。

「お待たせ致しました、こちらオリジナルブレンドカフェオレとウィンナーコーヒーでございます………今日はデートですか？」

「デッ…………！？」

「ははは、彼女とはゲーム友達なもので、今日はＪＧＥっていうデカいイベントに」

「あら、そうなの……楽しんでね？」

「ええ、そのつもりです…………斎賀さん？」

ああダメだ、フリーズした。

余裕有る無しの鉢合わせ（後書き）

Q、玲ちゃんずっと顔赤そうだけどなんで楽郎は気づかないの？
A．中学の頃から楽郎の視界に入り込んだ斎賀さんは全て顔を赤らめていたからそれがデフォルトだと思っているため、まさか自分の方が見られていたとは思ってもいないニーチェ

俺と斎賀さんは言うなればパーティを結成していると言っていいだろう。つまり一人と一人ではなく、一つのペアとして見られることになる。
そして当然、リニアの席もワンペアとして割り振られるわけで……
「とりあえずブース全体としてはこういう感じらしい、入り口がここだから……斎賀さん？」
「はひゃいっ？　そ、そうですね、こことかいいんじゃないでしょうかっ」
「……そこ、トイレだね」
「うぐぅ」
うぐぅ、て。
窓際の座席に座っている斎賀さんに携帯端末で表示したＪＧＥ会場のマップを見せながら相談していたが、斎賀さんの指差した場所はまぎれもなくトイレであった。
「い、いえそうではなくっ、ちょっと狙いがズレただけで指差したかったのはここで……」
「えーと？　んー…………スーパーノヴァ？」
「知っているんです、か？」

見覚えは、ある。つまりなんらかのクソゲーを世に出してるってことだ。なんだっけな……幕末はロワイヤル社だし、フェアクソを生み出したオベロンゲームスは既に潰れてるし……あー、違うな宇宙関連のクソゲーだったはず。
ユニバースストームではないな、コスモバスター？　あれ確か大元は海外だし、えー…………あ、思い出した。

「ギャラクシートラベラーか」

人生において多方面にゆとりのある富豪しか楽しめない虚無ゲーじゃん、このメーカーまだ生きてたのか。

「どんなゲーム…なんですか？」

「え？　あー……」

クソゲーです、とは言いづらい。
リアルタイムと連動してるので何かイベントに参加しようにも結構な時間を削る虚無ゲーです、と詳しく説明するのも気が引ける。
実際このゲーム、好きな人はとことん好きなタイプのゲームなので厳密にはクソゲーと言えるかどうか微妙なラインだ。とはいえただひたすら漆黒の宇宙を宇宙海賊に敵対的生命体、常に不満タラタラのＮＰＣクルーの相手をしながら彷徨い続ける虚無は面白いかつまらないかで言えば……まぁ後者だ。
ＶＲシステムが買えるくらい高価な特典版に付いてくるプラネタリウムがあるとまぁまぁ楽しいという話だが、楽しさと値段が釣り合ってねぇ！　とは誰の叫びだったたか……俺だよ。

「ま、まぁそうだね、うん……何かこう、哲学(フィソロフィー)に目覚める系のゲー

ムかな」

「ふぃろそふぃー」

イエス、フィソロフィー。
有料の拡張コンテンツまであるのでとことんユーザーから金を搾り取りたいんだろうな、と一通りゲームをプレイした後に思ったものだし、この手のゲームは長生きしないだろうなとも思っていたが……調べてみるとどうやら今もサービスを続けている……ん？

「あれ？　超大型アップデートなんてあったんだ」

「超大型？」

「うわ、なんだこれシステムの根本から別物になってるし」

ギャラトラではプレイヤーは「艦長」固定だ、つまり原則的にＮＰＣに指示を出すことで宇宙船を運営するシステムということだ。なのでプレイヤーはアホな動きで被害を増やすＮＰＣにイライラし、戦術を教えても覚えが悪いＮＰＣにイライラし、異星人に初手侮辱をかまして大戦争の引き金を引きまくるＮＰＣにイライラし、挙句不満が爆発してクーデターを起こすＮＰＣにイライラすることになる。

だが、調べてみると数ヶ月前にあったらしい超大型アップデートによりプレイヤーを艦長の席に固定する呪いの如き制限が無くなっていた。具体的に言うとプレイヤー自身が戦闘に参加できるようになっているし、交渉人としてプレイヤーが矢面に立つことも可能になっている。

「え、これ……普通に面白いのでは？」

「あ、あの……」

うーわ、異星産の艤装パーツ解禁されたの!?　こっちがヘナチョコレーザーで戦ってるのにビット衛星を使って極太レーザーを反射直撃させてくるあのクソチート兵器も!?　どうしたスーパーノヴァ、お前そんなユーザーの要望を無料で聞き届けるような素直な性根してたっけ？

「うわー……マジか……」

「あ、あのっ！　楽郎君っ!!」

「はっ!?」

しまった、ガン無視してギャラトラの思い出に浸ってしまっていた！

「あ、ごめん斎賀さん！　思考飛んでた」

「あ、いえ、私もちょっと大声を出しちゃって……その、ここが気になるんです、か？」

「あーうん、ちょっと……いやかなり気になってる」

クソゲーのまま朽ち果てたクソゲーは数多くプレイしているが、客観的に見たクソ要素を全て解決したクソゲーというのはなかなか見たことがない。吹っ切れてクソ要素を楽しめるクソ要素に昇華したゲームは経験があるけどな。

「じゃあ、ここに行ってみましょう……か」

「あー、お気遣いどうも……………ん？」

「どうか、しましたか？」

……あれ？　いやでも………うーん、無意識？

「あの、楽郎……君？」

「いや、なんでもないよ玲さん」

「くきゅっ」

何今の蛇口を閉めたみたいな音。

「いや、いつの間にか名前呼びになってたから俺も……と、思ったん、だけど……迷惑だった？」

「…………（にっこり）」

「えぇと、その笑みはどういう意味で……」

「…………（にっこり）」

ＡＩ搭載してないＮＰＣか何かかな？
微笑みを浮かべたまま完全にフリーズした斎賀さんであったが、段々と顔が赤くなって……いやそれすら通り越して青くなって……

「息してる？」

「ぶはっ！！！」

息が詰まるってこういうことじゃないと思うのだが、事実息が詰まっていたらしい斎賀さんはこちらから顔を背けて息を吸いつつ俺の方へと手のひらを出して「問題ない」とゼスチャーを示した。

「あー……名前呼び、ダメだった？」

「いいえ、大丈夫です、問題はないです、一切！　問題はないです」

「そ、そっすか」

「よ、呼びやすいですすものねっ、他意はないですすっ、ねっ！」

「お、おう」

シュパパパパッ！　と見えない壁でもあるかのように手のひらを見せまくる斎賀さん……もとい、玲さんに若干ホラー的なものを感じつつも、リニアは進んでいく。

何故だろう、玲さん越しに見える外は雲も少ない晴れ模様なのに嵐が来る予感がする。

・ギャラクシートラベラー

人の上に立つ苦悩だけを抽出して宇宙味にしたようなゲームであったが、何故かある層にウケたことでサービス終了の危機を脱するどころか黒字経営になったゲーム。大規模なアップデートを経たことで「デスペナルティ」以外は良作と言って過言ではない出来になったようだが……？

導きの北極星（前書き）

やることが多すぎる……っ！

リニアを降りて、何故か今年だけやけに混んでいる気がする首都東京の地にやってきた俺と斎賀……もとい玲さん。考えてみればゲーム内じゃ玲氏玲氏と呼んでいるのだから大差ない気がしてきた。

「なんかやけに混んでるような……」

「多分、みんなＪＧＥに行く人達なのでは……」

まぁそんな気はしてた、だって皆同じ方向に向かっている上にちょくちょく何らかのゲームのグッズと思しきシャツやカバンを持ってる人を見かけるからだ。

「これ早く来たのが仇になったかもしれないな……」

「お、押し流され……」

「玲さん北口から出るのは無理だコレ、東口から出て向かおう……玲さん？　聞こえてる？　玲さん？」

「ふひゃあい」

今のは肯定なのだろうか、とにかくはぐれないようにしつつ一般チケット共の洪水が如き混雑から抜け出す。

優待チケットと違って奴らは長い列に並ぶ必要があるからな……しかしなんつー混雑だ、ＧＧＣの時より酷くないか？　ええいどけどけ！　有象無象の一般チケット共め、優待チケット様が踏み潰して

くれ足踏まれたぁ！！？

く、凸凹カップルのでかい方に踏まれたのか……しかも互いに何か言う前に混雑に呑まれて見失った。これだから人混みって奴は！

広域殲滅魔法が欲しくなる……離脱！　離脱する！！

……

…………

……………

「人通りは普通な筈なのにガラ空きに見える」

「そ、そうですね……」

遠目からすし詰めの人混みが見える、そちらと比べればまぁまぁの混雑で済んでいるこちら側が物凄く空いているように見える。

「あ、こっちからでも……少し、遠いですけど、会場までのルートはあります、ね」

「あ、調べてくれてありがとう」

「い、いえ！　これくらい、全然……っ」

とりあえず開場時間までは余裕を持たせてはいるものの、コスモバスターを彷彿とさせる大混雑を見た後だと不安感がふつふつと湧いてくる。戦艦アシスト縛り……７面……弾切れ………うぅ、頭が痛い。最高評価取るために縛り強制は違うだろ……そういうのってプレイヤーがするものであってさせるものじゃないじゃん……

「程々が一番、程々が……」

「………？」

王道をマンネリと言いたい気持ちは分かるが、外し過ぎればそれは邪道と言うのだ……

いや、どれだけ鬱陶しくても人は人、手を出したらアウトだ。それに俺や玲さんは優待チケットを持っているのだ。つまりあの人混みの群れと比較して我々の方が「上」ということだ。憐憫と慈愛を以て見守ってやろうじゃないか。

「しかし、一日限定のイベントにしては結構な盛り上がりようだな」

「そうですね……あ、あれは………リッキー、でしたっけ？」

「へ、へー……」

どこを見てもＪＧＥ、ＪＧＥ……コンビニでは出展企業のタイトルなのだろうゲームとのコラボ商品が販売され、恐らく良作(ライトサイド)のゲームキャラ達が描かれた看板によって会場へのルートが表示されている。結構有名なキャラクターであろうことは分かるのだが、名前がサッパリ分からない辺りにクソゲーマーとしての業を見た気がした。

玲さんの記憶に間違いがなければリッキーという名前であるらしいキャラクターの案内に従って進んでいけば、離れていても誤魔化しきれない喧騒と増えていく人間の数……そして、最後に角を左へ曲がれば、そこには長蛇と例えても不足するほどに大量の人達が並ぶ列。

「これ、全員入るのか……？」

「五年前に、作られた新東京国際展示島（メガフロート・サイト）ですし……チケット制ですから、入る……かと」

科学の発展によって「国土が狭いなら新しく作ればいいじゃん」を真面目に実行できるようになったんだから人類ってすごいよね。馬鹿でかい人工島として作られた巨大メガフロートは数多くのニート……もとい、アマチュアゲーマー達を労働力として徴収したと聞く。つまり今、ゲーマー達の祭典として使われているこの展示島はアマチュアゲーマーの血と涙と汗によって…………いや、大半はロボティクス労働力だから言うほど汗流してないな。

「えーと、優待チケットは一般列とは別で……」

『Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｊａｐａｎ－Ｇａｍｉｎｇ－Ｅｘｐｏ！！』

「うおビックリした！？」

財布から声が！？　ジャパニーズツクモガーミ！？

いや違う、喋ったのは財布じゃない。その中に入っている優待チケットだ。どうやらＪＧＥ会場に一定以上接近することで内蔵された

何らかの機能が動き始めたらしい。財布から取り出したカード型チケットから小人サイズのキャラクターがＡＲホログラムによって出現しており、愛想のいい笑顔で明後日の方向を向いていた……あ、向きを直せと、はい。

『私はＪＧＥ公式キャラクター、ポラリス！　優待チケットの入場方法について説明させていただきます！！』

「おお……地味なところに科学力が突っ込まれている……」

「ちょ、あの、チケットはどこに……」

君の尻から声が響いてるよ、とは言わない方がいいだろうか。とりあえず公式のキャラクターであるらしいケモ度１０％程度のシロクマ少女がやけに大仰な動きであっちだ、こっちだ、と案内を開始する。これもしかしてチケットの座標を参照してる……？　単なるカードだと思っていたが、これ実は相当なシロモノなのでは。

「あ、やっぱゲートからして別枠なんだ」

「というか、それでも結構並んでる人達が……」

優待されるのは別に俺達だけではないということだろう、大混雑を構成する人々と比べて表情に余裕のある者達が並ぶ列に俺達も続く。メガフロート・サイトはその名の通り海の上に浮かぶ巨大建造物だ、そして現在日本の地と浮遊島とを結ぶ橋はどこにも存在せず、秋の海を眺めているわけだが……どうやら時間が来たらしい。
手のひらに載せて眺めていた優待チケットの上に立っているポラ子がキュピーン！　とＳＥを響かせてジャンプし、なんとなくくるくる回していたせいでまたしても明後日の方向を見ながらしゃべり出

した。

『時間が来たよ！　優待チケットをお持ちのお客様は一時間早く入場することができます！　さぁさご覧ください！　メガフロート・サイトに繋がる浮上展開橋（ブリッジ）が現れまーす！！』

メガフロート・サイト名物、海底に設置された油圧伸縮する柱が海上で開くことで橋を形成する浮上展開橋か。海底から白波を引き裂いて現れた巨大な板が開脚するように開かれ、等間隔に現れた同様のギミックが次々に連結……海上のメガフロートへとつながる長大な橋が完成する。

そしてサイト側から次々に………えーと、あれだ、なんだっけ、ゴルフカート？　あれをゲーマー好みに改造した感じのビークルがやってくる。確か母方の叔父さんがゴルフ狂だったっけ……泥酔した状態でゴルフクラブをフルスイングして自室の天井にすっぽ抜けたクラブが突き刺さったという……引き抜いたそれにエクスカリバーって名付けてホールインワン達成してる辺り最高にイカれてるぜ。

「おお……至れり尽くせりだ」

そしてなんとなく理解している、一般チケットの方々がこのビークルの恩恵にあずかることは多分ないだろうなという事を…………………資本主義って残酷ね、赤く染めとく？　まぁそれやらかした外道文房具を暗殺したこともあるし、俺もまた資本主義の一員ということか。

導きの北極星（後書き）

・ＪＧＥ公式キャラクター「ポラリスちゃん」
電子の極北から突如として現れたしろくま系ナビゲーター、ＪＧＥの公式キャラクターは毎年一般公募から選考されるが今年は審査員の性癖（要所要所のパーツは厚着用なのに全体的に見ると肌の露出が高いアンバランスフェチ）を読んだとあるイラストレーターの作品が選ばれた。
ＪＧＥにやってきた人々を導く北極星（ポラリス）の妖精であり、好物はキビヤック。発酵する前につまみ食いしちゃうお茶目な一面もあるぞっ！（なお口元にモザイクが入る）
スワローズネスト社のアイデアで優待チケットにＡＲホログラムのギミックが仕込まれたがプロトタイプはスマホ二つ重ねたくらい重くなってしまったため、創世さんが片手間で軽量小型化した上に色々と改造した。
そして軽量化優待チケットを解析したことでスワローズネスト社のＡＲ技術が地味に向上した、ラックが高いぞヤシロバード。

有り得ざる非現実性ワンショット

さて、一時間のアドバンテージを得た上でＪＧＥ会場へとやってきた俺達ではあるが。

「流石は島丸ごと展示場なだけはある、な……」

「隣同士……座って…………あ、え！　そ、そうですね！　凄く、広いです……」

そう、広いのだ。めちゃくちゃ広い、具体的にいうと衛星地図でもそんなに拡大しなくても全体が見えるくらい広いのだ。流石は最新鋭……の一個前世代のメガフロートだ。本場アメリカでは連結型メガフロート群なんてものが大真面目に建造されてるらしいし、究極島群オメガフローティオンとかにならない？　ならないか。

「展示場内をバスが通ってるのかこれ……とりあえずどこから行こうか？　シャンフロブースから行く？」

「そ、そうですね。一緒……い、一緒にやってる！　ゲームです、からっ」

やはりシャンフロ廃人たる玲さん的に最初は外せない、ってことだろう。まぁ俺もちょっと離れているとはいえ、メインでやっているゲームだし混雑は必定なので先に行ってしまうのもアリだろう。と、いうわけで優待チケット持ちの大半が向かっているシャンフロブースに来てみたわけだが。

「ＡＲ凄いなオイ」

「ジーク、ヴルム……！」

そう、シャンフロブースへと到着したバスを出迎えたのは巨大なメガフロート・サイトの天井まで届くような巨大なドラゴン……今尚記憶に新しいシャンフロに七体のみ存在するモンスターの一体、天覇のジークヴルムであった。尤も、単なるＡＲかつあくまでも飾りとしての再現らしく、俺や玲さんを見て何か言ったりはしなかった。まぁ当然か、ここにいるのは斎賀　玲と陽務　楽郎であってサイガ－０とサンラクではないのだから。

「とりあえず前情報で見聞きしたＮＰＣ画集とやら、を…………………」

「あ」

俺の視線が物販コーナーへと向き、そこで固まる。俺の動作に気づいた玲さんも同様に視線を動かして……そして俺が固まった理由に気づいたのか短く声をあげた。

話が変わるようで変わらないが、この手の画集を販売する場合……サンプルとして何枚かの絵を先に見せる、という手法がある。どうやらシャンフロ画集でも同様のようで、ゲーム世界内の画家達の作品というのも間違いではなく、一枚一枚が明確に違う筆で描かれていることはわかる、のだが……

「タイトルは…………「墓標の乙女」「天舞の白布」「巨王と騎士」…………」

えー、まぁ、はい、うん。一枚目はあれですね。

俺は見た事ないけど、激しく覚えがある巨大な墓標剣の上に立つ喪服の女が描かれてますね。
うー、うん、あー、おう。二枚目はあれですね。
俺は見た事ないけど、激しく覚えがある白布に目だけ描いた出来損ないのハロウィン仮装みたいな奴が宙を舞う絵ですね。
ははは、あー……うん。三枚目はあれですね。
これは見た覚えがある、確かですね……フィフティシアの前のイレベンタル？　だったかにある巨大な剣の像の前に聖騎士っぽいのが立ってる絵ですね。

「「…………」」

そっと顔を見合わせる俺と玲さん、いや違うな厳密には互いにサンプル画像から目をそらした結果、互いに目を合わせることになったと言うべきか。
いや、だって……俺じゃん。一枚目は新大陸で名前忘れたけど絶体絶命おじさんにドヤ顔ポエムかましてた時のやつだし、二枚目はサードレマ大脱出の時に被った祭衣・打倒者（フェスタ・メジェ・カフィエ）の長頭だし、三枚目はイレベンタル？　だったかで待ち合わせしてた時の玲（レイ）氏じゃん………

「こ、こんなことも、あるんですね………」

「謎の喪服女と謎の白頭巾は同一人物ではない、そういうことにしておこう……」

いやほら、サンプルはあと七枚くらいあるしこんな偶然もあるのかもしれないというか……うわぁ、「剣の覇者」ってタイトルのこの絵、凄く見覚えのある奴が描いてあるように見えるぞぉ……

「玲さん…………」

「タニンノソラニ、デスヨ」

Ｙｏｕｒ　Ｓｉｓｔｅｒ………いや、他人の空似ですねはい。あーでもこの、「海割りて」と「聖女の祈り」とか普通にイラストとしてほしいなぁ……見覚えのある聖輝士についてはノーコメントで。

「……まぁ、画集ならこの値段も妥当か」

６０００円………ちと高いが、ちと高いが！！！　買って損はない、購入！！

一万円札を渡す手に未練タラタラな俺と違って、なんの葛藤もなく一万円札を手渡していた玲さんに資本主義の冷たさを感じてしまった………うう、コミーくんは俺を受け入れてくれるの……？？？

さっそくジャパニーズ資本主義最強の切り札が一枚消えてしまったわけだが、元々出費は承知の上だ。いつまでも気にするものではないし……それに、もう一個の目玉である自キャラの肖像画ってのが気になる。なるほど、専用のマシンでログインして……………へぇ、「背景」「ポーズ」「装備」諸々を設定して肖像画（プロマイド）にするってわけけね。

そんで、使えるのは自キャラが行ったことがある場所や遭遇したことのある敵、持ってるｏｒ持っていたことがある装備だけと………………面白い。

これをこうして、こうやって……ククク、こうすれば……ポーズはプリセットから……これか？　これかな？　いや、こっちの方がいいな………

「出来た……力作だ」

背景はシグモニア前線渓谷中央、大量の水晶群蠍系列のモンスターに囲まれるサンラクが水晶群老蠍を玉座代わりにして踏ん反り返っている構図だ。タイトルは「刹那的栄光」……流石に蠍オールスターに囲まれたら即死するわ。

一回五百円か……もう一枚作ってもいいかな、後ろ並んでないし。絶対に実現させるという願掛けも兼ねてオルケストラをフルボッコにする光景でも作るか？　えーと、オルケストラは……これか。

「ん？」

あれ、背景から選んでいたっけ？　いや……モンスターを選ぶ画面だ、じゃあなんで背景ごと切り替わった？

「んん？」

なんだこりゃ、バグか？　それとも何か不具合か？　背景がモンスターオブジェクト扱いで登録されてるのかよこれ。背景の劇場ごと拡大縮小できるじゃねーかこれ。

つまりこれをこうすると……なんだこりゃ、ルルイアスのど真ん中に小屋サイズの劇場が生えてる珍妙な絵が完成してしまったぞ。

「どうすんだよこの不具合……」

いや……よくよく考えたらオルケストラとエンカウントできてるプレイヤーは現状知ってる限りじゃ俺含めて二人だけなので困るのは俺とミレィだけなのか。

俺はバグには割と寛容な男、普通に使えばいいだけの話……あ、い

いこと思いついた。

「考えてみりゃ、これが一番マウント取れるよな……っと」

このプロマイド作成マシンではアカウントのキャラクターが遭遇したモンスターを配置することができる。であれば、おそらく現時点で俺だけが作り出せる一枚がある。

ジークヴルム、ウェザエモン、リュカオーン（影）、ゴルドゥニーネ（あの個体とウィンプの両方）、クターニッド、オルケストラ、そしてマシンに表示された名前でその存在が確定した最後のユニークモンスター……不滅のヴァイスアッシュ。

サイズがデカいジークヴルムとクターニッド、リュカオーンを背後に設置し、割と人間サイズであるゴルドゥニーネ、ウェザエモン、ヴァイスアッシュを手前に、そして私怨マシマシなので手乗りサイズに縮小した劇場（オルケストラ）をポージング「その手に載せて」の姿勢であるサンラクの掌の上へ。

「パーフェクトかよ……」

名付けて「七星の観測者」、ユニークシナリオＥＸの全てに関わった者にのみ与えられる称号をそのまま使わせてもらった。

うーむ、ハガキサイズに印刷するだけなら五百円だが、これはもうちょっと豪華にしておきたいな。

「あ、そういえば玲さんは………って、」

「あ」

ふと気になって横を見れば、そこには丁度のタイミングで最高額であるホログラムスタンド（一万円）を購入している玲さんと目が合った。

資本主義！！！！

有り得ざる非現実性ワンショット（後書き）

えぇ！？　別に付き合ってるわけでもないのに想い人のキャラクターと聖杯使用した自キャラのツーショット作って迷う事なく一万円ブッ込んだ奴がいるってマ！！？！？

目を開けたまま夢を見る（前書き）

サイバネット・マイニング高過ぎ晋作かよ

「私、気になるゲームが、あるんです」

玲さんがいきなりそんな事を言い出したのは、シャンフロブースを一通り見終わった後の事だった。

「気になるゲーム？」

「はい……とても、気になって、います」

ゲーム廃人とてゲーマーであることに変わりはない。特定のゲームだけを、他のゲームに一切目もくれることなくプレイする人は少数派だろう。だから玲さんに気になるゲームがある、ということに関しては別になんの疑問も違和感もない。

だが、まるで戦場にでも赴くかのような様子は尋常ならざるものだ。一体、どれほどのゲームだと言うのか。俺としては幕末を作ったメーカーという事実だけで「新感覚協力プレイ！」の文字がオブラートより薄く見えるスパルタンメタルの先行デモプレイが気になるが……まぁ何よりも優先するものでもないし。

「そろそろ一般チケットの人達が入ってくるだろうし、急いで行こうか」

「え、あ、はい！　この、ARゲームの……」

『『ポラリスターイム！』』

「「！？」」

ポケットから声がしたので何事かと優待チケットを取り出してみれば、なかなかのゲテモノ好き系イメージキャラクターが……って、んん？

「なんか……パーツ増えてね？」

「私のも、ですね……」

二人とも同じ場所に行ったために同じ現象が起きているらしく、二つの優待チケットからバリバリ肉食のイメージキャラクターの声がハモる。

『『ヴィジットボーナスが追加されたよ！　いっぱい貯めると最後にいいことがあるかも！！』』

「ヴィジットボーナス…………あっ、スタンプラリーか！」

「……すたんぷ？」

「……え？　スタンプラリー……知らない？」

「え、あ、えぅ、知らないと、ダメなものですか……？」

「あ、いや、そういうわけではない！　うん、割とマイナーな文化なのかな……と」

そんな事ないよな？　玲さんがちょっとそういうのとは無縁な生活をしてただけだよな？　おっ、ブルジョワジーか？　同志コミー君、

将来を見据えて握手しとく？

「えーと、スタンプラリーってのは、複数のスポットを巡るイベントとかだと見かけるやつで、専用の用紙とかに判子を押して……」

「成る程……」

六年前くらいに死んでしまった従兄弟のお爺ちゃんだったかが電車マニアでそういうのを集めまくってたんだよなー、一番凄かったのはシベリア大陸横断鉄道スタンプラリー。スタンプっていうか底がスタンプとして使えるショットグラスが壁一面にずらーっと……駅に止まる度にウォッカを一気して貰うらしい。ちなみに今も元気な従兄弟のお婆ちゃんが全部片付けたそうな。

「――つまり、どこかしらのブースでお金を落とせばそこのスタンプが貰えるってことかなこれ」

ただ寄るだけじゃダメ、ってことだな。そうなると……

「玲さん、あと十五分で一般入場者が来るから……玲さんが気になるってゲームはどこにあるの？」

「あぇ、はいっ、ここですっ」

「……トイレだね」

「はぁうぁっ！？」

俺が知らないだけでトイレに何かあるのか？　メガフロート・サイトはその広さ故にトイレの数もやたら多い。つまり各所にトイレが

配置されている、ここから何か法則性を読み解く事で隠されたスタンプが出現する……？

「違いまっ、ちょ、ちょっと狙いがですね！？」

単純に押しミスだったとさ、チャンチャン。

「こ、ここっ、です！」

「スワローズネスト……ああ、ARゲーム。玲さんそっちもやってるの？」

「え！？　えーと、えー…………知的好奇心と言いますか」

「お、おう」

斎賀邸ならガチで個人用のARシステム仕込めそうだし、気になるのもそういう背景が前提にあるからこそなのかもしれない。うーむ、頭の中が赤くなってきそう。

「じゃあ、ここに行くまでにいくつか寄り道して行くってのはどうかな？　何か気になったゲームとかあったらスタンプを貯められるかもしれないし」

「い、いいと思いますっ」

少なくとも確実に地獄絵図となるシャンフロブースを先に潰したのはファインプレーだったかもしれないな……だって、ブース内のスタッフの人達の顔がドンドン悲壮なものになってるんだもの。
モンスターパニックで足止めで残る人達みたいな顔してるじゃん、

敬礼でもしておくか？

「とりあえず近場のブースから…………」

……

…………

……………

……………

十五分経過。

……………

…………

……

何か、やばい。

「地震……じゃ、ないですよね、これ……！」

「地震は嬉しそうな声は出さないかなぁ……」

何か、やばい。メガフロートが揺れている……この感じ、覚えがあるぞぉ？

アレだよね、水晶群蠍ん家に遊びに行った時とか大体こんな感じで……

「は、走れ玲さん！　バスに乗り込むんだッ！！」

「ひ、人の群れが……！！」

一般入場者入場かよ！！？
マジで冗談抜きにメガフロートを揺らしながら迫る一般入場者達の大軍勢にどこか優越感のような余裕を漂わせていた優待入場者達の顔が引き攣り、各ブースのスタッフ達の悲壮な顔に決意が宿る。

「運転手さん！　せめてスワローズネストのところまで走れませんかね！？」

『出発します』

ヒュウ！　完全にまぐれだろうけど愛してるぜオートパイロット！！
さながら大蛇が頭から突っ込むかの様子でシャンフロブースに大群衆が突っ込んだのを尻目に、俺と玲さんは次のブースへと向かう。

優待チケット持ちの先行入場の時とは比べ物にならない量の人の波が途切れる事なく入口から溢れ、四方八方へと広がっていくのがメガフロート・サイト内の移動用バスの中でもはっきり分かる。
何が恐ろしいって当然スワローズネストブースへ最初に行こうとする人もいるわけで、そういう人達の視線というか「圧」みたいなものがバスに、ひいてはその中にいる俺達にも向けられている気がしてならない。

「ちまちま回ってて良かったかも、これはスタンプラリーとかそれ

どころじゃないぞ……」

「そ、そうですね……」

徒歩とバスとを比べればバスの方が当然速いわけで、数十メートル後ろへ一般入場者達を置いて俺達はスワローズネスト社のブースへとたどり着く。

ここらへんはシャンフロブースがあった場所とは違って主にＡＲ関係のゲームブースが置かれているエリアだ。だから全体的に一つ一つのブースに割り振られたスペースが大きい。

目立つところだとＡＲホログラムを使ったカードゲームメーカーのブースに、プレイヤー本人が駒になるすごろくメーカーのブース……そして、ＡＲシステムにおいて最近その名前を見ることが多くなってきたスワローズネスト社のブース。

「おぉー、本格的だ」

あれ、ホログラムを自前で展開できるオブジェクトブロックだよな？　あれだけでクソ高いやつ。それがいくつもある………総額いくらするんだろ。

「ようこそスワローズネストブースへ！　我が社が自信を持ってリリースするスクラップ・ガンマンの先行プレイは如何ですか？」

「玲さんが気になってたのってこれ？」

「は、はいっ！　その、これ、二人プレイ、なんですけれども……
…」

へぇ、要するにゾンビシューティングって感じかな？

「構わないよ、ハイスコア目指しちゃう？」

「ハイッ！」

今のダジャレ？　それとも俺の脳みそがアホなだけ？

目を開けたまま夢を見る（後書き）

ＡＲ界隈は主にトレーディングカードゲームやリアル系スポーツゲームが注目している

特にトレカ系はＶＲだと紙の方が売れなくなるので割と死活問題だったのだが、スワローズネスト社が最近やけに技術力を上げてるお陰でＡＲソフトを作れるようになったりしてる

やったぜスワローズネスト！　今年の社員旅行はラスベガスだ！！

ツバメの羽から見える懐かしき原風景（前書き）

ＭＨＷたのしい（更新が遅い理由を説明するあまりに簡潔な文章）
チャアクにね、人生をね、吸われてるんですよ………

ツバメの羽から見える懐かしき原風景

スクラップ・ガンマン！
それはスワローズネストが開発した新感覚ハック＆ショットアクションである！！
ガラクタから無尽蔵に現れるアンデッドなスクラップ、略してスクラッドのクソ脳天にクソ弾丸を叩き込むシンプルなゲーム！！
専用のＡＲコントローラー、ゴーグル、グローブ、プレート、ベルト、ブーツを装着してＡＲで形成される敵をぶっ飛ばすのは他大体のＡＲゲームと変わりはない！　だが、スクラップ・ガンマンには他のゲームには無いシステムがある！！
それこそがグローブ……もとい、ゲーム内設定的には「スカベンジャーグローブ」を利用して敵の残骸を剥ぎ取り、様々な用途に利用する「リビルドシステム」！！　要するに………

「倒して、剥ぎ取って、強化しろ、と」

「そうなりますね！　そして………なんだか、デモンストレーションみたいになっちゃいましたね」

まぁ、結構説明を聞いたりしている内に時間が経ってしまったからなぁ……

「うぅう……」

「ま、まぁまぁ……」

いつの間にかスワローズネストのブースにも大量の入場者達が詰めかけており……当然、彼らの視線は今まさにプレイを開始しようとしている俺達へと向けられている訳だ。
俺はカボチャのヘルメット越しとはいえ全世界にプレイシーンを生中継された過去があるので吹っ切れているが……

「大丈夫？」

「だ、だいじょぶ、です……頑張り、ましょう」

玲さんがヤバい、ガチガチに身体が固まっている。うーん、先にこっちに行った方が玲さんも気負わずに遊べたかもなぁ……1ピザ留学ポイント、反省せねば。

「そんな緊張しなくても……ま、別にハイスコアを競う事は義務じゃない。気楽に楽しんでいこうよ」

「…………」

「え？　何か変なこと言った？」

何故かぽかんとした顔で見られているが……しばらくして、玲さんの身体から不必要な硬直が抜け落ちた。ゴーグルをつけているので目の方はよく見えないが、僅かに吊り上がった口の端から笑っている事はわかった。

「あ、いえ！　そうではなく………そうですね、一緒に楽しみましょう…っ！」

「うん、その意気だ」

そうは言ってもゲームはゲーム、最低でもステージクリアまでは行ってやる。

「それではスクラップ・ガンマン先行デモプレイ！　一面【空母撤退戦】を始めます！！」

スタッフの女性がそう声を張り上げた瞬間、俺と玲さんのいるＡＲスペースの各所機材が一斉に起動する。

「おお……」

オブジェクトブロックが装甲車の荷台に、周囲は金属瓦礫と炎吹き荒れる空母の戦場に、床は高速で走行する装甲車の轍が刻まれる空母の甲板に。

ゴーグル越しに見える景色は、メガフロート・サイトという現実の背景を黒煙に染まる海上へと塗り替わって。

「これは中々……お、早速！」

スクラッド、見た目は子供がガラクタで雑に作った人形みたいなエネミーだ。だが要所要所がやたら凶悪なデザインをしており、これがＡＲじゃなかったら半径５メートル圏内に入られた時点で逃げ出したくなる。

だが、これはゲームな訳で。

「マジかよリコイルあんの！？」

クソ、ヘッショ外した！　さらに追加で一発、二発……非ヘッドシ

ヨットだと確定三発！？　待てこれ硬すぎじゃ……あ、そういうことか。

「残骸漁れってことか！！」

銃型コントローラーを持たない左掌を撃破したスクラッドへと翳し、空気を握りしめて引っ張るようなアクションを取る。するとスクラッドの残骸から何らかのパーツが毟り取られるように手元へと吸い寄せられ、ご丁寧に銃の強化に使えとナビゲートの矢印が表示される。

「とりあえず銃身強化！」

『Three Burst！！』

「うおお誰ェ！？」

ビビったぁ……が、言いたい事は理解できた、三点バーストとはジャストタイミング。

タタタン！　と小気味のいい音を立てて放たれた弾丸が近くまで来ていたスクラッドをワントリガーで撃破、続けて横から影を薄くして接近していたスクラッドに……

「くっ、これヘッショ狙った方が弾の節約になるんじゃ……」

まさかの罠であったか……いや、だが序盤のラッシュなら当たりさえすればいい三点バーストの方が時間的には効率化できるはず！

「玲さんどんな感じ！！」

「ちょっと、数が……」

「あいよ助太刀！」

タッグプレイなんだから助け合いは必須ってな！　振り向いて玲さんが対処しきれなかったスクラッドを撃破しつつ、背中合わせに俺が対処していた方にも視線を巡らせる。

「出たよお約束のデブ（体力多目）エネミー！」

「う、固い……！」

パスパス撃ってるだけじゃ倒せる気がしねぇ、そして奴にばかり気を取られていては他の雑魚に近づかれる。思ったよりシビアだぞこれ、こういう時は……

「マグネリパルサー、だっけ？」

スクラッドから剥ぎ取ったパーツを弾丸のようにぶっ放すアクション、ダメージはないが雑魚エネミーなら確定で怯む。そしてそれとは別に奪ったパーツを銃の強化ではなく弾丸として一撃で放つ……

「スラッグヴァレット！」

ひゅーっ！　一撃でデブに風穴が出来た！　成る程、デブはこれで対処しつつ……ってところか。
見えてきたぞ攻略チャート、さてはこれ特化した方がいいな？

「玲さんデブ専と雑魚専どっちがいい！？」

「デッ……あ、はい！　雑魚を、掃討します！」

リアルで掃討なんて言葉を聞くとは思わなかった、だが頼もしいのは確かだ。

『Ｓｈｏｔ　Ｇｕｎ！！』

「やっぱこれだね！」

いきなりコントローラーが変形してロングバレルになったのは若干ビビったが、古来ディスプレイでゲームをやっていたというレトロエイジからショットガンを手に入れたプレイヤーは最強であると相場が決まっているのだ。

ショットガンは基本的に散弾で、通常形態時よりも速くスラッグ弾を装填できる……気がする。というかそれくらいの強みがなきゃダメでしょショットガンだぞ。

「…………」

「ど、どうかしまし……たかっ？」

「いや、ちょっと既視感を……危ねっ」

飛びかかってきた雑魚スクラッドを至近距離散弾でぶっ飛ばし、飛び散る残骸に掌を突きつけてパーツを毟り取る。装填、構え、ファイア。首から上が吹っ飛んだデブスクラッドを尻目に、もう一度この手に淡く焼きつく既視感に思考を巡らせる。

なんだ、ARなんてロクにやったことないはずだが……なんでこんなしっくりくるんだ？　心当たりがあるとすればVRゲームのいず

れかに似た感触のゲームがあったんだろうが……スワローズネスト はAR一本の企業だ、VRなんて心当たりはないはずなんだが。

「ショットガン……衛生兵？　コスバス？　シャンフロ……違う」

この、絶妙に使いづれぇリココン……狙ってるのに若干癖がある弾道……いや、まさか…………

「楽郎、君……ボス、です！　楽郎君？」

バード、鳥、スワロー、燕、後継ぎ、社長…………

え、マジ？

ツバメの羽から見える懐かしき原風景（後書き）

スクラップ・ガンマンに登場する全銃器のモーションは津羽目社長自らが自身の「経験」を基に設定されており、妙に親身なユートピア社のお偉いさんの協力によって某歴史に負の名前を刻んだとあるゲームの銃器の感触に限りなく近いものになっている。

これは寝ても覚めても某サーバーで銃器を収集し、消費し続けてきたプレイヤーであるからこそできる芸当である。

ちなみにマスケット銃はコントローラの伸縮限界の問題から泣く泣くカットされた模様。付属パーツということで特典版作らない？と異様に食い下がる社長に社員は首をかしげるばかり。

ツバメの理想から見る懐かしき旧友（前書き）

この小説を読んでいる聡明な決闘者諸君は当然ストラク選挙でシャドールに投票しましたよね？？　しようね？？？

ツバメの理想から見る懐かしき旧友

津羽目(つばめ)　風矢(かざや)は己が至極真っ当な人間性をしていると確信している。少なくとも現実で誰かに発砲したいと衝動的に考える事はあるがそれ以上の理性でモラルもルールも遵守しているし、鯖癌が繋いだ奇妙な縁によって父から受け継いだ会社は過去最高の盛り上がりを見せている。ついこの間も父に孝行として世界一周旅行をプレゼントしたところだ、お陰でスクラップ・ガンマンの開発は随分と快適に進んだ。

「盛り上がりはどう？」

「あ、社長！　見てくださいよ、大盛況です！」

「いいねぇ、来年の社員旅行はどこにしようか」

「気が早いですよ〜……私個人としてはマカオですかね」

「……君、この前のベガスでいくらスってたっけ？」

「百万円です」

部下のあまりに瞬間的過ぎるギャンブル癖に不安感を覚える、ほら真っ当な人間性。

……少なくとも本当に真っ当な人間は自分の正常性を一々確認しない、ということについては風矢は考えない。

スクラップ・ガンマンは風矢の中で消えることなく燻り続ける望郷

と懐古の感情を全て注ぎ込んだ渾身の一作だ。サバイバル・ガンマンに登場した全ての銃器を網羅し、ユートピア社の「支援者」による全面的バックアップを受けたことで、風矢自身が記憶する発砲、リロード、取り回しのあらゆる感触を忠実に再現した新型のＡＲコントローラーも含めて既に予約注文の電話が殺到している。

あるいはハイ・テクノロジーの最前線を常に走り続け、滅多に他企業と関わらないユートピア社との取引を行なっているスワローズネスト社そのものへの投資かもしれないが……二代目とて経営者、商機を嗅ぎつける嗅覚は父から受け継いでいる。

「さて、クリアは出てくれるかな？」

何組か優待チケットで先行入場した入場者の中でスクラップ・ガンマンに挑んだ者はいたが、今の所クリアした者は一人もいない。それは単純に難易度が高めに設定されているというのもあるが、何より……

「今は……うん、高校生のカップルかな？」

「凄いですよ、彼らもうシステムに慣れてます。まだ一機も落としてないですからね」

「へぇ」

今回のデモプレイでは難易度を上げつつ、プレイヤー自身は残機制を採用している。故に風矢が理想とする難易度を堪能してもらいつつも、すぐに終わらないようにという配慮なのだが……成る程、確かに今プレイしている二人は多少のダメージこそあるが残機が減っている様子はない。

今回の難易度は製品版におけるハードに設定されている。つまり風矢が割と手心を加えた程度、という事だ。少なくともギリシャ文字サーバーを経験した者でなければクリア不可能なレベルで「本気」で設定した難易度サバイバーとは異なり、難易度ハードは社内でも運動神経の良い者でなおかつスクラップ・ガンマンに慣れている社員ならクリアできる難易度だ。

だが、現在プレイしている二人は随分と対照的だった。

「女の子の方は何かスポーツをしているのかな？　動きがスムーズだ」

「分かるんですか？」

「サッカーに陸上、珍しいところじゃムエタイの経験があるテスターとして見てきたじゃないか」

「……社長が大声で褒めるもんだから私のあだ名暫く「ムエタイ」になったの今でも許してませんからね」

「ラスベガスの件で今のあだ名は「一点張り」じゃないか」

役割分担をしているのか、雑魚スクラッドを迎撃している少女は全体的に動きに途切れがない。恐らく武術かなにかをやっているのだろう、動作の一つ一つを一本の線で結ぶ、という動作は日常生活ではあまり身につかないからだ。それに仮にVRか何かでセンスを培っていたとしても、リアルもそれに応えられるコンディションを何の経験もなく保持しているとは考えづらい。

「じゃああっちの彼氏さんの方は？」

「あれは……」

分からないわけではない、あれは彼女なのだろう少女とは真逆のタイプだ。即ち数多のゲームをクリアしてきた事によって蓄積された「多分ここにこのタイミングで敵を配置するだろう」という経験則で点と点とを繋げている。

少なくとも、この法治国家日本において一般人が銃器に精通することは困難だ。だがＶＲゲームの中であればその制限は大幅に取り払われる。恐らくあの青年はゾンビパニックやＦＰＳに相当詳しいのだろう。リロードや強化のタイミングの取り方が非常に上手い。

「どうかしたんですか？」

「いや、ちょっと気になって……」

だが、それだけではない。

サバイバル・ガンマン……あの孤島での摂理を可能な限り忠実に再現したスクラップ・ガンマンは、意図的に銃器のリコイルや弾道にクセが仕込まれている。簡単に言うと真っ直ぐ飛んでいるように見えるがミリ単位でランダムで狙いにズレが仕込まれている。それにＡＲというゲームの性質もあるが、銃の射程も短いしマスケットを実装できなかった腹いせにアサルトライフルの強化は上昇幅が若干少なくなっている。

風矢完全監修であるスクラップ・ガンマンは……厳密には、今回のデモプレイで遊ぶことができる一面の最適解はリロードと強化のタイミングを完全にミスしない前提で初期状態のピストルと特殊弾丸「スラッグ」で突破する、だ。

だが、それだけで済まさないのが鯖癌クオリティ。今回のデモプレイではプレイヤーの心理を突いたちょっとした「引っ掛け」が存在する。果たしてそれまで保つか否か………と、

「っ！」

「わ、凄いですね彼、もう気づきましたよ」

そうだが、そうではない。
このゲームは銃というコントローラーと吸い寄せアクションで忘れがちだが、当然拳や蹴りなどによる物理的にアクションもまた攻撃足りうる。これに気付くか気付かないかで難易度は大きく変わってくる………のだが、風矢を驚嘆せしめたのはそちらではない。

スクラップ・ガンマンはかつてアトバードと名乗った男が、狭いようで広い日本に向けて放ったメッセージである。
もうあの孤島で会うことはできないが、それでもあそこが終点ではないのだと。孤島の風は確かに今も続いているのだと――――

と、調子の良いことを言っているが要約すると鯖癌経験者発見器である。
別にあの孤島で殺し合った連中のリアルをつまびらかにしたいとかそういう訳ではなく、単純に「あ、こいつやってたな」とプレイ動画を見てニヤニヤしたい、という極めて私的な動機がスクラップ・ガンマン製作の根本を支えている。
「マジか、こんな爆釣あり得る？」
「社長？」
「ハハハ、見なよ多摩さん。あんな綱渡りの接射出来る奴がそうそういるもんか」
知っている、かつての津羽目風矢（アトバード）も今の津羽目風矢（ヤシロバード）も知っている。
先程までのお行儀の良いプレイングは何処へやら、今やＡＲで再現された装甲車の荷台に取り付いたスクラッドを踏みつけ、殴り飛ばし、銃口を装甲の隙間に捩じ込んで発砲……ＡＲとて一種のリアリティだ、造形に手抜きのないスクラッドに対して一切の躊躇いなく戦う様が風矢の記憶を揺さぶっていく。
人が相手だろうと巨獣が相手だろうと、躊躇いなく懐に飛び込む小さな姿。あらゆる銃器カテゴリを制覇したγサーバーのアトバードをして「あんなのがいるんじゃμサーバーもこうなるわ」と思わず

にはいられない、人の意識の間隙に即死の楔を撃ち込む静かな暗殺者、μの島をホラーゲーの渦に叩き込んだ幼女。

「え、もしかしてお知り合い？」

「どうだろうなぁ、リアルじゃ初対面だし」

「……場合によっちゃ事案ですよそれ、ボーナス出すまで問題起こさないでくださいよ」

特設スペースの中、ゴーグルで塞がれていない口元に浮かぶ笑みが風矢の記憶に今尚焼き付いた血みどろの幼子のそれと完全に一致した。

ツバメの理想から見る懐かしき旧友（後書き）

ちなみに鯖癌経験者で犯罪者はあまりいない、殺し殺されが常態化し過ぎてリアルでやってもなぁ……みたいなドス黒い悟りを開いているため

そして鯖癌というイかれた経験を基に今の仕事へ活かしているという人も多い。
やたらリアリティなバトロワ物を書く漫画家とか、刃物を持った暴漢鎮圧の手際が良過ぎる警官とか、違法ドーピングしたボクサーをボッコボコにした自称格闘家とか

主観（前書き）

アナザージオウＩＩが「全てのライダーの力を受け継ぐ時の王者」のポジションに割り込んだ瞬間、ジオウのみならず「魔王が受け継いだ全てのライダー」がアナザーのそれになるので本来の歴代ライダー全員が虚構に貶められるのクソ極悪だしマジ許せねぇ！　ってなるので控えめに言って最高

いやまさか、いやしかし………マジで言ってる？　あの頭トリガーハッピーとこんなところで接点出来るとかあり得る？　ていうかあいつ、まっとうな人生送れたの？　こう言っちゃアレだけど鯖癌経験者とか犯罪者予備軍って呼ばれてても否定できない連中だぞ？同じ鯖癌経験者が言うんだから間違いない。俺はクソゲーの光差す道を歩いてきたので既に闇落ちルートは回避済みだがな。

「うわー、これ中々酷い引っ掛けだな……」

「え？」

「玲さん、これ多分バカスカ撃ってるとボス前で弾切れになる」

「えっ」

いやなんか怪しいなとは思ってたんだ。このゲーム、カテゴリ的にはレールシューティングなのに弾丸に保持上限なんてものがある時点で胡散臭さ半端なかったが、蹴りやパンチで倒せるという事はつまり「弾切れした場合の戦闘がシステムとして組み込まれている」って事だろう。

つまりなんだ？　ゾンビシューティングだと油断して弾を使い過ぎればボス前で徒手空拳なんて事になる。気づいてから考えてみればさっきから露骨に弾丸パックアイテムが少なくなってるじゃねーか！！

クソッ、これで確信したぞ絶対これヤシロバードの会社だろ！　性

格の捻れが反映されたような銃のクセといい、弾丸管理が重要といい、鯖癌における銃特化プレイの典型だこれ！！

「でも、増えてますよ！？」

「狙うのは脚だ！」

よくよく考えたら違和感はあったんだ。このデモプレイできるステージは退却戦、プレイヤーは走る装甲車の荷台から追いかけてくるスクラッドを倒すシチュエーションのはず。なのに何で倒したスクラッドが視界内に残ってるんだ？　慣性にしたって残り過ぎだ、というわけで近くに来たスクラッドの頭を踏み抜いて経過観察したところ、こいつら死んでいても脚が無事だとブースターか何かでついてきていることが判明した。

逆に脚さえ壊してしまえば、撃破されていなくても顔面から地面にキスして高速でフェードアウトしていくのでスコアを突き詰めるならともかく、確実にクリアするなら弾丸をケチって雑魚を掃除できるに越したことはない。

つ、ま、り、は、だ。

ショットガンやら一発特化のランチャーやら華々しい武器種が多いこのゲームにおいて、それらを選ぶことは長期的に見るとディスアドバンテージでしかない。最適解は弾消費の少ない銃タイプでちまちま足を狙って節約する…………というのが、大人しめの攻略法その一。でもそんなやり方じゃつまらない、鯖癌スタイルやってみようか。鯖癌スタイル、そうそれは素材そのままの味を活かすこと！！

「玲さん、頭から刃物が生えてるスクラッドが現れたら教えて欲しい！」

「あ、そこに……」

「サンキュ！！」

これまで出現したスクラッドは全部で四種類、共通して不恰好の人型ではあるがそれぞれに特徴がある。パーツを使うことで三点バーストに強化可能な小鬼みたいなスクラッド、ショットガンに強化可能なトーテムポールのように頭が積み上がったスクラッド、体力が多く強化パーツを落とさない代わりに強化した銃器の出力を上げるデブスクラッド、そして最後に……銃剣パーツを落とすブレードヘッドのスクラッド。そしてぇ……もう試したから知ってるんだぜぇ……？

「お前のパーツだけは射出せずに振り回してもダメージ判定が出るってなぁ……！！」

右手に銃剣！　左手にスカベンジャーグローブで引き寄せ、そのままの状態で保持したブレードヘッドのパーツ！　くくく、弾丸を節約する最も簡単な方法なんて一つしかないだろう。

「弾を使わずに倒せばいいいっ！！」

荷台に取り付いた小鬼スクラッドを踏み潰し、飛びかかってきたトーテムポール野郎の眉間に左手で保持したブレードを突き刺してから右の銃剣で団子ヘッドを首から切り離す。
近づいてきたデブを蹴り飛ばし、左のブレードを射出。眉間に突き刺さったことで大きく仰け反って隙を晒したデブスクラッドの足を三点バーストで破壊、高速で転がりさっていったデブをよそに三度見つけたブレードヘッドを撃破して剣を補充！　ただ……

「ぐ……きっつ……」

やっぱりＶＲと同じようにはいかないか、段々と息が上がってきた。なんでリアルのスタミナは秒で回復しないんだ、バグってんじゃないのか。というか物量が某バスター程じゃないけど中々クソだぞ……いつまで戦うんだ、そろそろボス来てもいいんじゃないか？そんなことを考えていたら、ゴーグルに内蔵されたスピーカーから運転手なんだろうＮＰＣの声が響く。

「え、なんて？」

「曲がる、って……！？」

「ちょおっ！？」

ガタン！　と荷台……もとい、荷台に見えるようホログラムを展開したＡＲ用オブジェクトが激しく揺れる。実際はそこまで激しいものではなかったのかもしれないが、虚を突かれた俺の身体は溜まり始めた疲労もあってかあっさりと体勢を崩して……

「楽郎君っ！！」

「ちょ、お、ぬっ、はっ！！」

あ、やばい、いや、負けん、落ち、耐え…………耐えぇぇる！！

「あ、」

ダメだこれ落ちて……

「っ！！！」

「ナ、ナイスキャッチ………っとぉ！！」

「ほぁえっ？」

転げ落ちる直前、伸ばされた玲さんの手が俺の手首を掴んで引っ張り上げる。お陰で背中から床に落ちることこそなかったが、こちらへと振り向いたせいでガラ空きになった斎賀さんの背中にスクラッドの一匹が飛び掛かる。

咄嗟に玲さんを引き寄せるようにして俺が前へと踏み出し、突き出した銃剣でスクラッドを串刺しにして発砲。木っ端微塵に砕けたスクラッドからパーツを奪ってスラッグ弾に変換、デブの腹に大穴を開ける。

「ありがとう玲さん！　助かった！」

「はひぃ」

「ちょ、玲さん！？」

いきなり膝から崩れ落ちた玲さんに視線を奪われ、デブの突っ張りが直撃した俺の視界が赤く染まる。うおお瀕死！　確定二発……いや、肩に食らってこれなら乱数一発じゃねーのこれ！？

「玲さん、どうした！？　体調不良なら泊めてもらう？」

「いえっ！　いえいえいえ！　絶好調です問題無しです！！」

何故か冷却ファンを全力で回す全時代のＰＣが頭を過ぎったが、その言葉に嘘はなかったらしい。俺が近接格闘でスクラッドを倒していたのを見ていたのか、俺よりもずっと洗練された動きでスクラッドを殲滅し始めたのを眺めつつも、これは負けていられないと俺も動き出す。

かくして、瀕死のところに物量で押し込まれて俺が一乙したものの、ほぼ万全と言っていい状態でボス戦へと突入した。
スピーカーからＮＰＣの悲鳴が喧しいが、要約すると空母に着艦していた戦闘機を複数取り込んだ超巨大スクラッドが立ち塞がっているので何とかしないと死にます、ということらしい。

「これは上手い事ＡＲゴーグルを活用してんな……」

ボスエネミー「ガージェット・ファイア」は十メートルやそこらで済むようなサイズではない、複数の戦闘機を喰ったと言われるだけあってそのサイズは驚く程に巨大だ。
マジでＡＲで再現しようとすれば、どう考えてもメガフロート・サイトの天井よりも高くなるようなエネミーだ。試しにゴーグルをズラして見たが、どうやらプレイヤー以外には足から膝までホログラムで形成されたものしか見えないらしい。

「玲さん、ここまで来たらクリアしようぜ」

「はいっ！」

さーて、何を仕込んだか見せてもらおうじゃねーかヤシロバード！！！

主観（後書き）

不用意に玲ちゃんの肩を掴んで抱き寄せる「ような」動きをして前に出た楽郎と

その「ような」動きを真に受けて勝手にガチ動揺して違うと気付いてガチ落胆してそれを気取られまいとガチ空元気した玲ちゃん

うーんこの

挟撃ダブルバレッツ（前書き）

なんで更新がこんなに遅れたのか、竜玉が出ないとかベヒーモスにボコられ続けたとか色々あるけど一番の理由は二回書き直して充電切れで一回文章が消えたからです

挟撃ダブルバレッツ

では問題、異形化したとはいえ素材として最新鋭の戦闘機が複数用いられている巨人の装甲をブチ抜くにはどうすればいいでしょうか？
答えは「ヤシロバード絶対許さねぇ」でした！

「ちょ、硬過ぎだろ……！！」

「ランチャーバレットも、駄目です……！！」

最大火力でもダメ、つまり正攻法で倒させる気がないと。水鉄砲にラー油詰めて奴の鼻に注入してやろうか、いやリアルのあいつに関しては名前すら知らないけど。

「情報共有！　とりあえず前面……いや、装甲の部分は貫(ぬ)けない。多分別ギミックで倒すタイプだ」

「え、えと、戦闘機の武装だった部位を破壊すると、強化できます……っ」

成る程？　選択肢は二つに絞られたな。

「玲さん、棺桶の上で踊るのとミンチ覚悟で地べたを這うの、どっちがいい？」

ちょっとクサい言い回しで問いかける。正直ちょっと顔が赤いが、ゲームなんだからノッてかないとな。それにシャンフロガチ廃人勢

たる玲さんならきっと――

「あ…………ふふっ、楽郎君が先にカードを引いていいですよ？」

「……今のちょっとかっこいいな」

「へうっ、そ、そこで素に戻るのは、ずるいですっ！」

であればお言葉に甘えよう。
躊躇うことなく装甲車の荷台から未だに装甲を続ける空母甲板の上に着地。いい加減脱出しろやと思わなくもないが、どうやら設定的には逃げ切る寸前で囲まれるので泣く泣く空母上をグルグル回っている感じらしい。

「ま、だろうとは思ったけど……」

グシャッ！　と耳元のスピーカーから重い音が響き、視界が一瞬だが赤一色に塗り潰される。まぁそりゃ結構な速度で走ってる車から飛び降りたら人の身体で雪だるま作りする事になる。だが読みは当たっていた、鯖癌における最も入手と消費が簡単なそれはオンラインが封鎖されるその瞬間まで変わることはなかった。

「命はかなぐり捨てるもの……！！」

残機は残り一つ、十分！！
先程まで俺と玲さんは同じものを見ていたのだろう、だが恐らくだが……荷台の上と地面の上でステージの判定が違うと見た。
なに実際は手を伸ばせば触れられるはずの位置にある玲さんの乗るオブジェクトブロックが遙か遠くにあるように見えるのだから。
ご丁寧にゲームの世界観をギリ壊さない程度の慎ましさで「ここに

オブジェクトブロックがあるから気をつけてね！」とラインが引かれている……が、そっちに用はない。

「荷台の上からじゃ絶対に背中が見えない……怪しさを感じずにはいられないよなぁ？」

「そう、ですね」

「……玲さん、視界的には数十メートル離れてるから」

「あっっ、ごめんなさい！」

無線機って事にしとくかぁ。

とりあえず現実側のオブジェクトに躓かないよう気をつけつつも、拡張された現実世界に映る巨大戦闘機怪獣の背後へと回り込むようにエリア内を駆け抜ける。

「ふっふっふっ……シャツでも羽織れよ、弱点が丸出しだぜ……！！」

バードストライク、という事故がある。簡単にいえば推進器に鳥が突っ込んで起きる事故を指すわけだが、重要なのはジェット機における推進器というものはそれだけデリケートな機械であるということだ。そして、奴の背中には取り込んだ戦闘機のものであろう推進器がびっしりと生えている……ボーナスタイムだ。

「よっしゃ挟み撃ちだ！！」

「…………」

あ、律儀にさっきの言葉を守ってるのね……まぁいい、ファイア！　ファイア！　ファイア！！
弱点へと連続で発砲、ここで倒せばデモプレイはゲームクリアなのだからこの際弾の節約なんてものは一切考えない。一発二発で壊れるものじゃないというなら、百発でも二百発でも叩き込めばいいだけのことだ！！

「最初から二人プレイ固定の時点で読めてんだよ……！」

プレイヤーが二人いるのなら、わざわざ固まって戦う必要はない。挟み撃ちするためにどちらかが残機を減らす前提なのは物申したいところだが、実際ゲームの流れとしてはよくできてるのがちょっと悔しい……く、ていうか硬いなやっぱ！　雑魚敵がいないから銃の強化も特殊弾頭も使えない、ボス戦突入前にそこら辺を揃えるのが正解だったか……だが！

「3点バーストだって戦える……！」

3点バーストなめんなよ。一度に三発撃てるんだぞ、三倍だぞ三倍。セミオートフルオートにしない辺りに「粋」を感じるがゲームでは数値が全てなのでやはりゴミなのだ……あれ？　擁護してる筈が引導を渡してる。
まぁそもそもスペックがゴミなのを擁護しようとしてんだから致し方ないのか……お、推進器取れた。

「あれこれ………」

左手で、掴むジェスチャーして、引っ張って……ほーん？　これ手元に引き寄せられるんだぁ……っしゃ死ねオラァ！！

「いいねぇ特殊ギミック！！」

ガコォン！！　と良い音を立ててガージェット・スクラッドの背中が爆発する。成る程これは確かに二人必要だ、前方でこいつの注意を集めるやつがいないとこのギミックは作動しないわけだ。

わかってしまえばこちらのもの、三点バーストでべちべち削りながら千切っては投げ千切っては投げ……そして、その時はやってきた。

「お」

「あ……」

巨大スクラッドが悲鳴の如き軋みを上げて身体を激しく歪める。金属で構築された巨体が無理な捻りとこれまでの損傷によって致命的な破壊音を上げ、そして崩れ始める。

「はぁー…………疲れた」

何気に推進器を破壊した時の瓦礫にダメージ判定があるのがあんちくしょう、って感じだったがクリアしてみれば中々いい汗を……んん？

「…………ぁあ？」

膝から崩れ落ちて？　あぁ、体勢的に青天向いて倒れる訳で……ははーん、さてはダメージ判定あるなこの野郎？

「いやもしかしたらクリアしてるからスコアには関係ない可能性もぐはー」

視界真っ赤かよ、あの野郎次会ったら膝カックンだ。

……

…………

………………

クリア評価A、はいそうですね俺が残機全部使い切ったからリザルトに響いたんですねすいませんね。

「おめでとうございます！　クリアした方は今回のデモプレイ特典として引けるクジ引きを三回引く事が出来ます！！」

「だってさ玲さん」

「わ、一等はアミューズメントパークの一年無料パス…だそうです」

アミューズメントパークの無料パス……っ、使わねぇ、絶対一年のうち十回行くかも怪しいぞそれ。いや、まぁ取らぬ狸の皮算用でしかないか。

「お先にどうぞ」

「え、あ、はいっ」

この最先端が集まるメガフロート・サイトにてまさかの箱の中から

紙を引く超アナログくじですか、逆に目新しいなオイ。ゴソゴソと三枚のくじを引いた玲さんがスタッフの女性にそれを手渡し……

「え、嘘っ」

「えっ」

「えっ？」

「え、あー、えーと……お、おめでとうございます！　一等！　三等！　四等でーす！！」

無言で俺と玲さんの視線が交差する。リアル乱数勝者に若干険のある視線を向けていたのか、玲さんがそっと目をそらす。好乱数引き過ぎだろ……怖いわこの人……見ろよ、スタッフの人も若干引いてるぞ。

スクラップ・ガンマンが実装されるアミューズメントパークの一年間無料パスにスクラップ・ガンマン対応の銃型コントローラー、スワローズネスト社のマスコットであるらしいデブツバメの人形を受け取った玲さんは周囲からの視線に、居心地悪そうに顔を人形へと埋めていた。

「リアルラック凄いですね……あ、でも今並んでるお客様方、ご安心ください！　一等はまだ四口残ってますし、二等以下も多めに用意してますからねーっ！」

でも確率は下がってますよね？　仕方ねぇな、ここは俺が一番下の七等でジャックポットをお見せしよう……！！

「これだ！！」

「これは……！！！」

乱数とは宗教だ、そして乱数の神に幾度となく唾吐いた俺ならばきっと引ける。俺が、俺こそがクソ乱数の貴公子――――！！

「あ、あの、楽浪君………」

「(´ー｀)」

「えと、あの、その……」

「^^;」

「あう………」

二等の景品である半透過フェイスモニターを搭載した表情反映型フルフェイスヘルメットを被った俺の表情を絵文字に変換したフェイスモニターから感情を読み取れないのか、デブツバメを抱きかかえた玲さんとなんとも言えない雰囲気で歩いていると……

『ハローワールド！　ハロージャパン！　特設ステージから愛を込めて！』

「へ？」

「Д」

ちょっと待たれやコラ、この声は……

挟撃ダブルバレッツ（後書き）

【悲報】恋愛パート終了【さらばラブコメの「ラブ」の方】

原因：お前だけそんなツラしてたから

「ハローワールド！　ハロージャパン！　特設ステージから愛を込めて！」

「あ、えと、こんにちわ！」

「ジャパン・ゲーミング・エキスポ、特別ステージイベント「フューチャーリアリティ」！　実況進行は私！　意外とプライベートじゃＶＲやりまくってる天音　永遠と〜？」

「ゲーミングチーム「電脳大隊（サイバー・バタリオン）」から来ました、夏目　恵です！　よろしくね！」

「ん〜？　夏目ちゃん、表情が硬くないカナ？　ん？」

「は、ははは……あの天音　永遠と共演して緊張しない女性はいませんよ……」

「嬉しいこと言ってくれるねぇ……今日はなかなかキメてるねぇ、永遠審美眼（トワチェック）的にも得点高いよっ」

「わ、わーい、褒められちゃった……」

「んふふー、夏目ちゃんはＧＧＣで選手としても出場してたから、この程度緊張のうちにも入らないのかな？」

「い、いいや、どんな大会でもイベントでも緊張はしますよー」

「そっか、そうだよね。やっぱどんな現場でも緊張は保たないとね」

「あ、天音さんほど自然体で入いられるのも、凄いと思うけど……ですけどね？？？」

「そだねー……これ緊張ほぐれるかなぁ………まぁいいや！　今回はスワローズネスト社やユートピア社などなど、いろんなハイテク企業の全面協力のもと、メガフロート・サイト全域に張り巡らされたARホログラムでどこにいても最新情報をお届けしちゃうよ！　フフフ、何が飛び出るかはお楽しみっ！」

「いや、緊張していると言うか初っ端からアドリブだらけだからというか……」

「アドリブこそが我が人生！　それじゃあ皆！　今日は骨の髄まで楽しんでいこーっ！！！」

◆

「（ ‘ ω̋ ’ ）」

「そ、そんな絵文字もあるん、ですね…………」

え、なに俺今どんな顔してたんだ……ああ、リアルで外道文房具にエンカウントした時の顔か、大体どんな顔かわかった気がする。

「あの…………」

「ん？」

「その、なんとなく…………そんな気はしてたんですけど、ペンシルゴンさんって…………」

「あー…………うん、本人がアレでプレイしてるのもあるけど、一応個人情報だから……な？」

「は、はい……見た目そのまま、なんですね……」

「いや、あれ一から作ってるらしいぞ」

「え」

少なくとも「アーサー・ペンシルゴン」はフルスクラッチで作ったアバターってのはいつだったかに聞いた。面倒な時はシステム側のリアルフェイス反映を使ってるらしいが、基本的に一から自分の顔を完全再現するらしい……なんだその無駄な努力と思わなくもないが、一から作るからこそ天音　永遠を騙る何者かのロールプレイが捗るらしい。悪趣味の極みかよ。

とはいえまさか奴がここに来ていたとは。いや来るなとは言わないが夏目氏となにやってんだあいつ。なんか一般列に並んでる入場者の割合が微妙に女性多めだったのはそういうことだったのか……イ

ベントの出演者までは調べていなかった俺が悪いとはいえ、なんつーサプライズだ。

「どうする？　冷やかしに行く？」

「冷やかし…………そう、ですねっ、気になる情報も……あるかも、しれません、から」

「ふっ……玲さんならそう言うと思ったよ」

「え？　え？」

十中八九シャンフロの情報も出るだろうし、ガチ廃人の玲さんからすればこのイベントこそが本命といっても過言ではないだろう。ガチ廃人とはゲームに捧げる人生の割合が常人のそれよりも倍以上ある者を指す、そんな玲さんがわざわざ現地に足を運んだのだから、役に立つ情報を出してもらわなければ困ると言うもの。まぁそこらへんに理解のある岩巻さんがわざわざチケットをくれた辺り、情報入手確率は高そうだ。

「（´　ㅅ　）」

「え？　あの、え？　えと、そのぉ…………」

「いやいや、なんでもないよなんでもない。俺も気になってたし行ってみよう」

ここからでも見れるだろう、というのはこの際言いっこなしで。なんの偶然かまたしても奴に俺の素顔を見せることはなくなったのが運命のいたずらを感じずにはいられないが……ていうか奴に関しち

ゃ邪教徒（いもうと）経由で既に顔バレしてそうなんだよなぁ。
とりあえずイベント会場の方に……あ、ここでも優待チケットが役に立つのか。もうこれロックロールに足向けて眠れないな？

「あーでも優待でも混んでるなー」

俺の中での印象は猛毒メンタルと筋繊維がポテトの人、ってイメージでしかないのだが世間一般的にはモデル界とプロゲーマー界におけるスターな訳で。なるほど、これを主目的としてくる人も多いのだろう。空いてる席は……あぁ、あった。二列目の隅っこか……
…まぁ程よく近く程よく遠いってことで。

「空き席あったよ、いこう玲さん」

「は、はいっ！」

「(ó﹏ò)」

はいすいませんね、はいごめんなさいねこっちから横切らないと向こうまでいけないんですよ。はいごめ……おらっ、どけや優待チケット様のお通りだぞ！！　いや間違っても口には出さないけど。口に出したら噛ませになるタイプのセリフだからな、ゲーマーこそ言霊（フラグ）信仰をすべきだ。言葉に出しても乱数外すのはなんでだろうね、やっぱ神に唾吐く勇気こそがゲーマーの本質なのかもしれん。

「(ô)」

「あの、どういう感情なんですか、それ………」

「いや、一瞬こっちを見られたような……」

「まぁ、目立ちます、から、ね………」

いや、流石に気のせいか？　あいつ、全角度から完璧なアングルで挙動するとかいう意味のわからない特技があるし「今俺の方を見た」ムーブをかましただけかもしれない。邪教徒（いもうと）曰く「永遠様は目で語り横顔で語り背中で語るお方」らしいので………全身が口か何かかよ。

「(눈_눈)」

「あ、ハングルも対応してるんですね……」

ハングル使う顔文字って俺今どんな顔してるの？　自覚してる限りでは天音永遠（ペンシルゴン）の奴を疑念の眼差しで見てる感じだけど。

『………』

『どうかした？』

『………んー、ちょっとど忘れ？』

『え………あー、進行を忘れるなんてう、うっかりさんね～……』

『喉に棒でも突き刺さってんのかってくらいの棒読みありがとう！　でも大丈夫！　実はスワローズネストさんから秘密兵器をお借りしているのです………じゃーん！　最新式の眼鏡型ＡＲデバイス～！！』

『実は私も持ってまーす……』

夏目氏のアドリブ力が悲しいほどゴミなんだが、カッツォのやつもそうだがプロゲーマーなのにロールプレイ技能低すぎない？　シルヴィア・ゴールドバーグとか見習えよ、常時映画の面白黒人枠みたいなテンションしてるんだぞあの最強ゲーマー。

「…………ん？」

なんだ、着信？　メール……じゃないな、SNSの方で個人チャットが開設されてる？　こんな時に誰だ……

【おいそこの面白フェイス】

鉛筆騎士王：後ろにカッツォ君いるの気づいてる？

「は？」

後ろにいるのは邪教徒らしきティーンエイジャーだが………………………………ハッ！！？

「（゜Д゜）」

『すごいよねぇこれ……堂々とカンペとか目の前に表示してるのに本人しか見えてないんだものねぇ……』

『そういうのは言わないお約束でしょ天音さん』

『そだねー』

ニヤァ……と人当たりの良さそうな笑みを浮かべる天音　永遠。だが後ろに回した手で端末か何かを操作しているのだろう、個人チャットの画面には奴の本性が明確に文章化されていた……

鉛筆騎士王：楽しいイベントになりそうだねぇ……

サンラク：いっそ殺せ

原因：お前だけそんなツラしてたから（後書き）

そりゃ絵文字とはいえ一人だけやたら辛辣なツラでこっち見てる「顔を隠した」見覚えのある体格の男がいたらカマの一つもかけますよってい う

Q．何故カッツォではなく夏目ちゃんが鉛筆と共演してるの？
A．「鉛筆と二人で司会進行とか絶対無理」という本音こそ隠しているがカッツォが夏目ちゃんにガチめの泣きを入れて代わってもらった。一緒にフライドポテト食べに行っただけで請け負っちゃう夏目ちゃんも夏目ちゃん。

表裏であり平行であり、そして我らはスパルタン（前書き）

ラブコメの「ラブ」の方!? 死んだはずじゃ……!!

表裏であり平行であり、そして我らはスパルタン

『……と、いうわけで！「クレセント・メモワール４」は来春発売！』

『クレメモファンの皆！　越冬頑張ってね～』

◇

鉛筆騎士王：クレメモって3がド級のクソゲーって聞いたんだけど

サンラク：クソゲーじゃないよ、ストーリーとキャラの完成度の代償に作業ゲーパートが超ド級につまらないだけだよ

鉛筆騎士王：あー、積むに積めないやつだ

サンラク：作業ゲーパートだけのために買う気もしなかったから人伝の評価だけどゲーム部分を担当した委託先がクソゲーメーカーってだけだし

サンラク：流し目ゴリラのとこだよ

鉛筆騎士王：ああ、精神衛生を鑑みて手を出さなかったのね

◇

武田氏のご友人でクレメモシリーズを追いかけている御仁がシャレにならないダメージを受けた、という話は聞いた。外国の方で近代オイルショックの波を先見して次世代エネルギーで更に金持ちになったスーパー石油王って話だが、武田氏が言うとマジな気がしてならない。石油王をアンチに回すとか前世でどんな罪を犯したんだ桃源郷ゲームス……

◇

鉛筆騎士王：で、隣にいる子モモちゃんの妹だよね？　五、六年前に顔を見たっきりだけどモモちゃんの雰囲気を丸くした感じだしレイちゃんだよね？？　つまりサイガ一０ちゃんだよね？？？　ん？？　ん？？？　んー？？？？？

サンラク：ちなみに黙秘した場合どうなる？

鉛筆騎士王：旅狼の方にここのログ流した上でシークレットゲスト「顔隠し」ってことで壇上に引きずり出す

サンラク：拷問と処刑でコンボ決めるのやめろや

サンラク：少なくともお前が思ってるようなものじゃないぞ

鉛筆騎士王：っほーん

◇

『さて、次の紹介ですが……』

『――それにしても夏目ちゃん、改めて今日ご来場の人たちを見ると本当にいろんな人がいるねぇ』

『へ？』

『そこの人！　永遠（トワ）アイで見抜いてるぞ〜？　今さっきの反応からしてクレメモファンの人でしょ？　……あ、腕で大きく「丸」ポーズありがとう！』

おいちょっと待てなんで今こっち見た。

『そこのカップルさんの後ろにいる子は………ははーん、さては永遠ちゃんを見に来たな〜？　投げキッスしちゃう！　中継で見てるみんなにも投げキッス！』

「「「「きゃあああああああああああああ！！！！」」」」

「（゜Д゜）」

背後で膨れ上がった大音量が悲鳴っつーか絶叫なんだけど、邪教徒怖すぎない？　あと通知で瑠美の絶叫メッセージが飛んできたのでそっと通知を切る。つーか誰がカップルだ、片方ただの不審者じゃねーか……俺じゃねーか！！

「は、っひぇ……ほぁ、へ……」

「玲さん？」

「ちょと、お花畑に雉を撃ちに、いてきま！」

「れ、玲さん？」

「す！！！！」

止める間もなく行ってしまった……

◇

鉛筆騎士王：……

サンラク：……

鉛筆騎士王：ん、分かった！　私が悪かった！！

サンラク：もっと誠意見せて謝罪しろや

鉛筆騎士王：オメーにはバクテリオファージ一個分も謝罪するつもりはねぇですぅ！！

サンラク：電子顕微鏡でも視認できないレベルで申し訳なさがないとか良心死滅してない？

鉛筆騎士王：いや絶対正義は私にあるよ今

サンラク：ああ、もう脳細胞がバクテリオファージに…………人生脳死プレイすごいっすね（笑）

【旅狼】

鉛筆騎士王：怪人面白フェイスが何行ってんだこいつ

サンラク：おいコラァ！！

ルスト：？？？

モルド：え、なんの話？

鉛筆騎士王：制裁の一端

モルド：？？？

◇

「あの野郎…………！！」

くっ、イニシアチブが取り返せない……！　生殺与奪権を握られるなんて一生の不覚だぞ……っ！！
だがこの状況から俺が巻き返せるビジョンもないし、玲さんが花畑までバードハンティングに行ったから戻ってくるまでここから離れることもできない。詰んだか……………っ！！

◇

サンラク：あ、シャンフロの紹介いつから？
鉛筆騎士王：あと三つくらい紹介してからだよ
サンラク：把握

◇

シャンフロがまだ先なら適当に聞き流して大丈夫かな……
『さぁ次の紹介は〜？』
『ロワイヤル制作、待望の最新作……「スパルタンメタル」！　です！』

『それではスタッフさん、スペシャルティザームービーよろしくぅ！』
聞き流してる場合じゃねぇ！！

――ここはスパルタ、人はそこを地獄と呼ぶ。人はそこを天国と呼ぶ。
「偉大なるスパルタの子よ、これより貴様はこのスパルタにて一人で生きねばならぬ。全ての同胞は全て敵、全ての敵は全て同胞と知れ」
――戦士達は、戦い続ける。
「おう雛鳥、授業料代わりにその芋を置いてけや」
――安寧など、ない。
「何、食べ物がない？　そこに奴隷がいるだろう」
――幸福など、ない。
「いいか、袋叩きだ。偉大なるレオニダス王だって袋叩きにすれば

なんとかなる」

――――だが。

「クセルクセスだああああああああ！！　クセルクセスが現れたぞぉぉぉおおおおお！！！」

――――信頼なら、ある。

「よう雛鳥！　芋の礼だ、スパルタの究極奥義を教えてやる………そう、ファランクスだ」

――――結束なら、ある。

「隊列（ファランクス）を組めぇ！　テルモピュライを死守せよぉーっ！！」

――――滾れ血潮。そう、我らは……

「来たりて、取れ！！　槍を掲げろ！　盾を構えろ！　ファランクスだ！　ファランクスだ！！　そうだ！　我々は――」

「「「「スパルタだ！！！」」」」

――――スパルタンメタル、Ｃｏｍｉｎｇ　Ｓｏｏｎ………

「これこそがスパルタの最終兵器、巨神甲冑（ファランクス）イペロコス・ラケダイオンだ」

◇

サンラク：溢れ出る神ゲーの予感

鉛筆騎士王：盛り上げれば誤魔化せると思うなよ、前半が完全に殺し合いウェルカムでしょこれ

サンラク：…………？

鉛筆騎士王：はーっ！　これだから幕末脳は！！

◇

いや実際楽しみでしょ、幕末も最近はちょっとマンネリした雰囲気があるのは事実だったし息抜きでまったりスパルタンライフってのも悪くない。幕末以外で生きていけなそうなレイドボスさんでも問題なくスパルタにバカンスできそうだし、やっぱゲームとしてのモラルはともかく運営としてのロワイヤルって最高なんだよなぁ……

……何も知らない新規に詐欺まがいのことしてるけど。

ようこそ完全新規の皆さん！　とりあえずリスキルするね！！！！

表裏であり平行であり、そして我らはスパルタン（後書き）

トイレの個室にて

ヒロインちゃん「ああああ→ぁぁぁぁぁぁ←ああああああああ！！！！→→→（人間が聞き取れる限界のか細い悲鳴）」

今の所わかっているスパルタンメタルの情報
・とりあえず殺し合いで解決する
・袋叩きにすれば大体解決する
・ファランクスは全てを解決する
・我々はスパルタだから仕方ない
・決戦兵器イペロコス・ラケダイオン

所作は顔程にモノを言う

残念ながら老舗メーカーのパーティゲームにはそそられるものはなかった。いや、クソゲーマー視点の話だ、ネガキャンじゃないぞむしろ誇れ。

次は……あー、ネフホロ2か。へぇ、結構情報を出すんだな……

『夏目ちゃんはネフホロってやったことある?』

『んー、プライベートでもあんまり格ゲー以外はやらないのよね……好き嫌いじゃなくて、単純に食指が動かない感じ?』

『実は私も未経験。でも友達にも何人かやってる人達がいるんだけど、凄い推してくるの』

俺は推してない、つまりルストだろう。奴は基本的には普通だが前触れなく妖怪ネフホロ激推し女に変身するので困ったものだ。ちなみに俺に対しては妖怪ネフホロ脅迫女になる、いや買うけどさぁ。

◇

【旅狼】

ルスト:ネフホロ2は!!!!!良いぞ!!!!!!

サンラク：うわ出た妖怪ネフホロ激推し女

モルド：ウチのルストがすいません……

鉛筆騎士王：正直ちょっと買いたい気持ちもあるからダイマは成功してるよね

秋津茜：お小遣い次第です！！

ルスト：むしろ私が払う

京極：ルストさん、ステイ

◇

『さて今回は最新映像……の前に？』

『ここで明かされる衝撃の事実！　実は今回の司会進行は二人ではなく、三人なんだなこれが！　それでは中継先から呼んでみましょう！　エイトちゃーん！！』

エイト……あ、笹……笹、笹……原？　笹原エイトさん！　ふふふ、アイドルに関してはかろうじて顔と名前が残っている程度の興味だ

が流石に二度も関わりがあれば苗字だって覚えられるさ。顔隠しとしての関わりだから今会ったところで向こうは何のこっちゃだろうがな……

◇

【おいそこの面白フェイス】

鉛筆騎士王：ちなみにエイトちゃんは大学の二個下の後輩です

サンラク：二年も生き地獄を……！？

【旅狼】

鉛筆騎士王：よくぞほざいた変人二十面相、後で泣くほどヨシヨシしてやろう

サンラク：お前に人の心はないのか

鉛筆騎士王：有情と慈愛の塊ですけど〜？

サンラク：無情と地雷の塊？

鉛筆騎士王：靴を舐めさせてあげよう

ルスト：……？　同じところにいるの？

サイガー０：ほあちゃあ！！？！？

モルド：！？

◇

「も、戻りましたー……」

「玲さん、ほあちゃあって……つーかその、」

「…………」

「あ、うん……」

『……天音さん？』

『……あ、いやナンデモナイヨー！！』

◇

鉛筆騎士王：不審者増えてるゥ！？

サンラク：いや俺も素でビビってる、なんだあのお面

鉛筆騎士王：あー、確かアイドル・☆（スター）・クラウンって女児向けアニメの主人公のお面。ゲームブースが出てたっけかな

サンラク：なんでお面なんか……

鉛筆騎士王：あ、サンラク君って吸血鬼に連なる一族とかの出身？
実は鏡って今の自分の姿が映る素晴らしいアイテムなんだけど……

サンラク：太陽も流水もニンニクも弱点じゃないから究極存在じゃん

鉛筆騎士王：心臓に杭刺したら死ぬじゃん

サンラク：誰でも死ぬわ

◇

『今日はですねぇ……なんと！　最新鋭ARと最新作VRの夢のタッグが実現！　皆様、上をご覧ください！！』

ホログラムで映し出された笹原氏の言葉に従って上を見てみれば、

なにやら薄い板のようなものが会場全体を覆っている。天井？　いや違う、これは……床だ。

『こちら、只今ネフィリムホロウ2の先行プレイが行われているブースで実際にプレイされている光景なのです！　VR空間内で起きている光景をARで投影、逆に現実世界での映像を基にVR空間内にこの会場が形成されている……まさに相互再現！！』

コンピュータ上の世界と現実の複合……MRってやつか。成る程大体分かった、つまり大迫力のロボバトルを現実の上空でぶちかまそうって訳だ。

「成る程これは……」

賢い。これができるという事実はさまざまなゲーム界隈に激震をもたらすだろう。だがそれの見本として使用されるゲームに齎されるアドバンテージが凄まじい事は言うまでもない。

ルストの奴も幸運続きだなぁ、元々操作感以外は良作ゲームだったネフホロだ。続編を作るにあたって猿に設計でもさせなければ約束された神ゲーだ。

抽選か何かで選ばれたのだろう、多くの視線が集まるこのメガフロート・サイトでネフィリムと共に駆ける者は全部で八人。スクワッド戦……いや違う、まさかバトロワか？　マジかよ、凄いぞネフホロ技術革新じゃねーか！！

「あれ、色被り」

「色、被り？」

「ん？　あー、ほらあの赤のペイント、三体くらいいるじゃん？　それの事」

「あ……本当、ですね」

それなりにネフホロで対人戦に潜っていながらあのカラーリングを知らなかったらそいつはモグリだろう。あの真紅の羽毛はただ一人に贈られた栄光の赤だ。
まぁ、世界観的にも初代の世界のさらに先らしいし（ルスト談）、過疎っていたからこそルストただ一人の為のカラーなんてものが実装されたんだろう（ルスト談）
2ではそのカラーリングが全プレイヤー用になっていても不思議ではない……とのことだ（ルスト談）
あいつネフホロの事になるとテンション爆上がりして早口になるからな……でもあの熱意は嫌いじゃない。
だが絶対王者の専用カラーリングがデモプレイの時点で使われてるってのは物悲しさを感じずにはいられないな……まぁ奴を王座から引きずり降ろしたのはウチのカニちゃんだけどな。

『それでは大迫力のネフィリム・バトルロワイヤルをお楽しみください！　レディー……ゴーッ！！』

笹原氏がゲーム開始の合図を出したその瞬間だった。
真紅のペイントが施されたネフィリムの内の一騎が初っ端から最大出力のブーストをかけて戦場のど真ん中へと飛び出した。
そいつは参加した他七機のネフィリムを射程圏内（最も近い距離）に収めると……左腕とまるまる一体化した巨大スナイパーライフルを発砲。明らかに

本来の用途とは違う初手凸砂という蛮行に対応出来なかった真紅の一騎へと実弾弾頭が着弾。一撃で頭部を粉砕されたネフィリムが力なく墜ちていく中、ファーストブラッドを掻っ攫った真紅へと四機のネフィリムが殺到する。残り二機は遠距離からの漁夫の利狙いか。

「おお、なんだあの機動（マニューバー）」

「古武術？」

合気道みたいな受け流し方で己へと迫るネフィリム同士を激突させた真紅に遠距離からの狙撃が迫る。だがそれを左腕のスナイパーライフルで受け止めると、半壊した銃口を激突で動きを止めたもう一機の真紅へと突きつけ……発砲。

左腕が内側から爆ぜ、かろうじて指向性を維持した爆風で哀れな真紅の胴体が抉れる。そいつは晒した隙を見逃してもらえなかった、周囲にいた他のネフィリムによって串刺しにされた事で大破脱落……残り七機。

「お、やっぱ生きてた」

「首のない状態で……！」

ネフホロではネフィリムとプレイヤーが一体化する関係上、頭部を破壊されるとシャレ抜きで視界がブラックアウトする。その場合はレーダーだけで判断して動かさないといけないのが前作だったが……今回はそこらへん緩和されているのだろうか？　それとも最初に頭を吹っ飛ばされた奴がネフホロプレイヤーなのか。迷いない動きで観戦へと飛び込んだ首なし真紅がお返しとばかりに己の頭を吹っ飛ばした仇に飛びかかる。

「いや、多分それは……」

……最悪手だ。

左腕が消失した事で軽量化された隻腕の真紅がマネキンのような素体とはいえ分類的にはロボゲーであるはずのネフィリムホロウとは思えない挙動で首無しの背後へと回り込む。

無傷の右手に装備されているのは、ギャリギャリと唸りを上げるビームチェーンソー……！！

機体ごと回転するような動きで首無しの四肢をも斬り落とした隻腕の真紅が胴体だけになった首無し真紅を蹴り飛ばす。

その行き先は距離を離してスナイパーライフルを構えていた重量級、実際は途中で大破判定により脱落消失するのだろうが反射的に重量級は首無しの残骸を狙って撃ってしまった。

その僅かな隙を隻腕の真紅は見逃さなかった。混戦から辛うじて抜け出してきたネフィリムの一機に近づき、その腕を捻り上げてコンコンと指でそいつの腕……ライフルを軽く叩く。いや待てまさか、

「嘘だろオイ……」

「え、当たっ……！？」

◇

鉛筆騎士王：あれマジ？　目視で他人の照準合わせたの？

サンラク：挙動で誰か分かったわ

◇

――真紅の頂点は、ただ二人(ひとり)に与えられた栄光だ。

所作は顔程にモノを言う（後書き）

一体誰なんだ………（なおモルドのアシスト無しでコレ）

皆さん感想欄でも結構気にされてるようですがポテトちゃんにハズレくじ引かせたカツオ野郎ですが。
彼は今生放送してます。タイトルは……

『逃げずに全部答えます！　魚臣慧のガチ一問一答‼』

めがしんでる

真紅の羽は今なお輝きて（前書き）

次段階のサンラク君のステータス考えるのドチャクソ楽しすぎてヤバい

今章中にこれを公にする場合、作中時間十日で全てのイベントを終わらせねば……ＲＴＡかな？

基本的に一つのフィールドにプレイヤーを全員押し込んで行うバトロワというものは、突出した奴と出遅れた奴から袋叩きにされるものだと相場が決まっている。
強いから叩く、とか弱いから先に落とす、とかではなく共通の敵として狙う事でマジョリティを生み出しているわけだ。だがこの暗黙の了解って奴にはただ一つだけ穴が存在する。

突き抜けた一人が、他全員を敵に回しても立ち回れるくらい強かった場合だ。

隻腕の真紅……十中八九あいつとしか思えない鬼機動によって既に二機のネフィリムが撃墜された事で、残った五機は一時停戦を決めたらしい。
五機の内三機はネフィリムの操作に慣れていないのか、時折ふらついているが……残る二機は手練れだな、というかネフホロプレイヤーだろう。
ゆらゆらと機体を揺らしているがアレは突発的な行動に対して即座に対応するためのテクだ、いわゆるアイドリングに近い。ネフホロは厳密にはロボではないネフィリムを操作するという世界観故、無駄に細かい小ネタ小技が仕込まれている。静止状態から動くのとアイドリング状態から動くのでは最高速度に到達する時間が二割くらい変わってくる……とかな。
示し合わせたように二機のネフィリムが前へと飛び出す。装甲を限

界まで削った軽量級と中、近距離想定と思しき銃特化の同時攻撃……残る三機も一先ずのターゲットとしてワンテンポ遅れつつ隻腕へと殺到する。

だがその時、

「おおっ！」

思わず感嘆の声が漏れた。なにせ先行していた軽量級と銃特化がまたしても同タイミングで急停止したのだ。それもとりあえず突っ込んできた後続の三機が絶対に切り返せないタイミングで、だ。

いや、理屈としては分かる。ただ一機残った真紅は片腕を喪失している、つまり攻撃手段は残った右腕に装備されたビームチェーンソーだけという事だ。

他のネフィリムを見るに武器は四枠分しか装備できないと見えるが、その上であの隻腕は武器枠を二つしか使っていない。もはや奴の武器はあのチェーンソーただ一つだけ……それが意味するところは「中距離以上のレンジに対応できない」という事だ。

だったら囮をけしかけ、中距離から削り倒せばいい。恐らくあの手練れ二機は同じ結論に至り、打ち合わせもなく息を合わせた。

割を食ったのはネフホロ未経験なのだろう三機だ。後詰のつもりが最前線に叩き出されたわけで、しかも突然ブレーキを掛けた二機に合わせようとしたのか、よりにもよってあの真紅の目の前でノーガードブレーキをしてしまった。

「うわ、マジか怯み有りの多段ダメージ有りか」

「どう、凄いんですか？」

「端的に言うと……まぁ、見ての通り一撃で死ぬ可能性が出た」

厳密には「ワンアクションから即死まで持っていける」という点がヤバいのだが、ここらへんはネフホロプレイヤー相手じゃないと通じないだろう。無印ネフホロの頃は見た目以外の需要がなかった多段ヒット系の武器種に光が差したことになるが……それにしたってアレは極論だろう。

見上げた先、ネフィリムの首筋に突き立てられたチェーンソーがギャリギャリと火花を上げながら哀れな犠牲者を内側から削っていく。逃げようにも逃走の挙動にピッタリ張り付く動きで真紅が攻撃を続けるのだから始末に負えない。本来なら「逃げ」を入れることでダメージから逃れるはずなのに真紅が逃してくれないのだからたどる末路は一つだけだ。

「残り四機、囮一匹犠牲にしたけど本命二機が配置についたか」

「あの、急ブレーキした、二人ですか？」

「そうそう、そのまま動いてるとまず確実に片方が狙われるだろうから囮を使って自分達の時間を稼いだ感じかな」

◇

鉛筆騎士王：詰めが甘い、もう一機使い潰すくらいはすべきでは？

サンラク：いやいや、残弾は大切にするべきだろ。人的資源は替えがきかない

鉛筆騎士王：個性のない人的資源(モブキャラ)なんて保存してても無駄でしょ、瞬間火力をケチってちゃ世話ないよ

サンラク：そりゃ単体としてみたらの話だろ、ネフホロは弾丸概念があるんだから性能ポンコツでもタレットガンは弾丸がある限りは価値を持つもんだろ

鉛筆騎士王：あー、そういう考えもあるかぁ。でも仮想敵ルストちゃん相手じゃやっぱカカシタレットに変わりはないよね？

サンラク：それ言ったらおしまいよ、一般論で話してたのに

サンラク：ていうかやっぱ気づいていたか

鉛筆騎士王：ネフホロ激推しガールが実際にプレイしてるのは見たことないけど「赤」がお気に入りってのは聞いてたしまぁ、アレだろうなぁ……来てたんだぁ……と

サンラク：全力状態だとアレにモルドのサポートが付く模様

鉛筆騎士王：それ実際どれだけ強くなるの？

サンラク：ウェザエモンの背中に目がついて未来予知じみた戦術予想してくる感じ

鉛筆騎士王：マジかよ

◇

マジなんだよなぁ………あと見てて気づいたけどルストのヤロー、俺の可愛い十四色鳥（コーラ）ちゃんのコンセプトをパクってやがるな？　隻腕という不安定なバランスを安定させるのではなく、ブースターの個別噴射によってさらに不安定にすることで相手の逃げに追随する動きを実現している。

だが思い通りに動いていたのは奴だけじゃない、挟撃の位置についた二機の攻撃が始まる。如何にルストとてどんな状況でも相手を瞬殺とはいかない、ブースターを噴かして離脱せんとするが囲う二機も簡単に逃がすつもりはない。

ルストがカスタムしたネフィリムは武器枠を削って機動力を確保しているが、装甲を削っていないので最速という訳ではない。スタートダッシュで先手を取れたのは他の七機が警戒していたからだ。

故に最速のネフィリムは隻腕の真紅ではなく、ただでさえ軽く薄い装甲の殆どを削った最軽量級……ルストを挟撃する片割れこそがこの場における最速のネフィリムだ。

「あの軽量級が円の外周を回るみたいに真紅を閉じ込めて、円の中心を担う銃特化が攻撃を担ってる感じかな」

「でも、それだと……銃特化が、狙われませんか？」

「狙われるね、だから銃特化自身も動いてる」

独楽（コマ）の動きに近いな、銃特化を中心とした円と隻腕の真紅を含めた三機のネフィリムによる巨大円運動の二重構造であの二機はルストを追い詰めようとしている。

真紅から逃れつつ射撃を続行する銃特化もすごいが、それに合わせる軽量級も凄まじい。デモンストレーションにしては使われてるテクニックが高度すぎるぜ。

「でも、あの真紅のネフィリム……対処、してますね」

「あっちはネフィリムの可動域を完全に把握してるのがデカいな」

◇

鉛筆騎士王：新体操でも見てる気分

サンラク：あれ、誰でもできるけどできる奴が少ないテクニックな

サンラク：ネフィリムって基本的に構造が球体関節のマネキンだから割と無茶なポーズも取れるんだわ

鉛筆騎士王：どゆこと？

サンラク：でも動かしてるプレイヤー自身がそういう身体の動かし方を知らないから実際にやろうと思うとネフィリムの身体が硬くなるわけで

鉛筆騎士王：あー、リアル側の認識で柔軟出来ない感じ？

サンラク：そういう事。でもルストってリアルでも身体柔らかいらしくてネフィリムの可動域をフルで使って動けるんだよな

サンラク：ちなみにモルドは身体クソ硬いらしいです

鉛筆騎士王：わー、この先の人生で役に立つビジョンが全く見えない豆知識

鉛筆騎士王：ていうか司会進行的に何かコメントしないといけないのでなんかそれっぽい台詞考えて

サンラク：リアルタイムゴーストライターやめろ

サンラク：とりあえず隻腕状態のバランスで鬼挙動やってる真紅とそれを包囲して囮二機のネフィリムにぶつけようとしてる包囲二機の動きについて褒めたら？

鉛筆騎士王：それ採用

◇

『いやぁ、すごい動きだね。隻腕という崩れたバランスを逆に利用して不規則な動きで撹乱する真紅のネフィリムに、それを包囲して残りのプレイヤー達にぶつける事で瞬間的にマジョリティを形成し

ようとする二機……エイトちゃんはどう思う？』

『えﾞっ！？』

ゴーストライターのアイデア丸パクリした上で他人にキラーパス仕掛けるとかどういう精神構造してるんだあのヤロー。

真紅の羽は今なお輝きて（後書き）

つまりルストはリアルでマックナイフみたいな柔軟が出来る

ルストモルドは一般入場者、ただしネフホロ製作会社がチケットを送って招待したのでネフホロに関してはは行列をスキップできる。
なんでそんな贔屓をしたって？　そりゃお前、ネフホロ運営が最新技術によってリリースするネフホロ２のデモプレイには最強のプレイヤーを使いたいってもんでしょう、サンラクが呼ばれなかったのは総合スコア的には低いため

なお残り七人は抽選で選ばれたのでガチで偶然マッチングされた、テンションマキシマムルストと戦わされるとは哀れ黙祷

ワンマン・ルージュ・オンステージ（前書き）

大掃除中にジャンプ発掘と、ＢＧＭ代わりにＶｔｕｂｅｒ視聴と、暇つぶしにネトフリ、は全てイコールであることを悟った今日この頃

手練れ二人による包囲、不慣れな二人も巻き込んだ４対１の構図は、なるほど確かにルストといえども容易に崩せるものではなかった。ワンマンパワーで無双できる幕末と違ってネフホロは数の暴力が最終的な戦力差に直結しやすい。
つまりこのまま行けばルストが斃れる未来は十分視野に入っていた、逆に言えば銃特化と軽量級の二人がそれだけ手練れだったという事でもある。兎にも角にも味方管理が異常に上手いのだ、対人勢……ではない。味方の損耗がクリアに直結する戦いは大前提として全ステータス格上を集団で倒すレイド戦に見られる傾向だ。つまり奴らはネフホロでは割と希少な対ＮＰＣエネミーに長けたプレイヤー達ということだ。

如何にプレイヤーとは言え動かすシステムはゲーム準拠だ、つまりゲーム内の摂理に従うのが大前提。プレイヤーサイズの敵と見做して対ボス戦の動きを取り入れるのは不可能ではないだろうが……それを差し引いても地力の高さが（物理的に）下からの目線でも伺えるというものだ。

……だが、俺は彼あるいは彼女を責めるような事はしない。だってこれはゲームだから、さらに言えば勝利者になったとして何か具体的に得るものがあるわけでもないから。
確かにルストを撃破するという目的に殉じるというのであるならばあの二人に従うのが最適解だ、だが百人が百人それぞれに満足するわけ

ではない。レイド戦編成のいちパーツで甘んじる事が絶対の正義なんてルールはどこにもない、だから俺は彼あるいは彼女の行動を責めないが…………思わず嗚呼、と呻くくらいには残念に思うのだ。

『あーっ！　包囲が崩れたーっ！』

『今のはタイミングが悪かったわね、あの隻腕のネフィリムが満身創痍ならトドメを刺せたかもしれないけど……』

手練れ二人による包囲耐久、そんな中で障害物扱いされていた恐らく未経験者であろうネフィリムの一機が一直線に真紅へと攻撃を仕掛けたのだ。

作戦の一部として甘んじる事を不満に思ったのか、本気で倒せると信じたのか。それは本人しか知らない事ではあるが、結果から言えば回避に専念せざるを得なかった隻腕の真紅に活路を開くことになったわけだ。いやそれとも……

「……誘い込んだ？」

「え？」

「いや、よく見てみると今突っ込んだやつが思わず近距離戦を仕掛けたくなる絶妙な位置に移動しているな、と……」

しかも銃特化と軽量級に対応するために左右に彼らを開く形に構えていたから、突撃を仕掛けた中量級から見ると背中を晒しているように見えるわけで……実際はブースターの搭載数とルスト自身のプレイヤースキルから産出される転回（旋回ではなく）速度的には隙ではない視覚的錯覚。

狙った？　それとも偶然を活路に繋げた？　どちらでもあり得そう

なのがネフホロにおけるルストというプレイヤーだ。まぁモルド込みなら確実に狙ってやってのけるのが恐ろしいところだが……あいつ単品で後ろについた目であり戦術的作戦立案のブレインなのが厄介すぎる。

「ほら玲さん、あの位置どり見える？」

「はひゃっ、はいっ」

「あれ、今突っ込んできたやつが軽量級の射線を遮るように立ち回って銃特化までの距離を一気に詰めてるんだよね」

「なりゅほどっ！」

「で、銃特化の方もなまじ近距離でも戦える分迎撃に欲を出して……………ああ、回り込まれてブースターを斬られた。もう鈍足砲台だ、油断しなけりゃ無視できるダメージしか喰らわないだろうさ」

「そでしゅね！」

理解が早いのは流石って感じだなぁ。対人とは言えロボゲーなのにこの理解度だ、やはりゲーマーとはいえリアル性能が高いと応用が利くのだろうか……

「あーあー、こりゃダメだ」

もう一人のニュービーは完全に置物であることを是とした消極的行動しかとっていない、突っ込んだイノシシ君は蹴り飛ばされる際に首がへし折れているから多分感覚系がほぼお逝きになっている。包囲円の中心点を担っていた銃特化の機動力が潰された時点で実質的

に軽量級と隻腕の真紅によるタイマンが成立してしまった。
総合的な機動力で見れば軽量級の方が速いのかもしれない、ネフィリムはパーツが完全消失していない限りは時間経過で完治とまではいかないがある程度性能が復活する。なので性能ダウンは免れないが銃特化が回復するまで逃げる……という選択肢も取れない、なにせこの戦法の要であり生命線は二人しかいないのだ。軽量級が逃げればルストはなんの妨げもなく銃特化を仕留めるだろう。つまり軽量級は自分が生き残りつつ銃特化を守るために戦いを挑むしかない。

スピードはあるが小回りの一点においては真紅に及ばず、武装的アドバンテージはホーミングの甘いミサイルポッドと連射優先で火力はあまり良くないレーザーライフル。対する隻腕の真紅はビームチェーンソーのみ……であるが、それは自前で用意した武器でしかない。
あの真紅は左腕こそスナイパーライフルと一体化した武器腕だが右腕の方は手の甲側の手首からチェーンソーの刃が伸びているタイプ、つまり物を握る手そのもの（マニピュレータ）はフリーなのだ。そしてネフホロ2はシャンフロシステムが用いられているとなれば絶対に「アレ」ができる。

「置物君からランチャーをカツアゲして……うーわひでぇ、偏差射撃だ。あいつ人の心はねぇのかよ……」

銃特化にトドメを刺すフリを見せて動きを絞ったな？　軽量級は装甲を削った上であの速度を出している。当然攻撃を喰らえば攻撃側の数値以上のダメージが出る。しかもよりにもよってランチャーである、ネフホロ世界でも時代錯誤な実弾カテゴリの中でも当てれば超耐久特化重量級すらグラつかせる火力イズジャスティス・ウェポンだ。

「大破……いや半壊か、偶然だろうがいっそひと思いに墜としてもらった方が潔かったな」

「…………」

「あの、」

状況が状況だ、これが普通のエネミー戦だったら体力回復の隙を味方に埋めてもらえたかもしれないがネフホロの対人戦は回復アイテムが持ち込めない。まぁゲームセットかな。

「ん？　どうかした？」

「もしかして…………あの真紅のネフィリムを操作してる方、楽郎君のお知り合いですか？」

あー…………

「（へ）」

「あ、その、教えたくないとかだったらその、不躾な質問を…………」

「あれ、多分、ルスト」

「…………えっ。本当、ですか？」

「少なくともあの戦法であれだけ動けるやつって言うとルストくらいしか思いつかないかな」

いやルストさん、最後に残った一機に「来いよ」とゼスチャーするのは半分イジメだろ……まぁそりゃバトロワルールな以上、勝利者は一人かもしれないがほぼ七人全員自力で屠ってるやつ相手に置物選んだ奴が戦いを挑むわけないだろ。

結局、バッサリ一刀両断された置物君の撃墜をもってバトルロワイヤルは決着。観客は大盛り上がりだが実況解説の方はルスト一機に肩入れするわけにもいかないので凄まじく実況しづらそうであった……

『さ、さて！　それじゃあ今プレイしていた人達にインタビューしまーす！！』

「あ」

「あ」

◇

鉛筆騎士王：あ

サンラク：あー………

◇

これ、目を瞑ったほうがいいかな。

ワンマン・ルージュ・オンステージ（後書き）

リアルバレレース！　まさかのトップにルストが躍り出たーっ！！！

余談。旅狼におけるメンバー毎のリアルバレ「お察し」一覧

・サンラク
本名を知ってるのは鉛筆、カッツォ、ヒロインちゃん。顔が割れてるのはヒロインちゃんだけ。ただし鉛筆はいつでもサンラクのリアル情報を知ることができる。というか住所バレまでしてるんですけどね奥さん（二つの意味で）

・鉛筆
イコール天音永遠と知ってるのはサンラク、カッツォ、ヒロインちゃん。ただし「普段の立ち振る舞いがあまりに自然体」という理由から京極も薄々感づいている

・カッツォ
リアルを知ってるのはサンラク、鉛筆のみ。ネカマというのもあるがプロゲーマー魚臣慧とユニーク自発できないマンが繋がらないのが強み

・ヒロインちゃん
リアルを知ってるのはサンラク、京極、鉛筆。京極に関しては遠戚だし鉛筆は姉の友人、サンラクは想い人とリアルでの関連が濃い

・秋津茜
リアルを知るもの、皆無！　逆に誰のリアルも知らないという隔離領域。身近に一緒にVRをプレイする友人がいないのでゲーム内での友好を大切にしている。……やはり光属性じゃったか！　まぁち

ょくちょく竜威吹使ってるし竜人化で青肌黒目とはいえ素顔晒してるので顔バレという点では結構……
・ルスト
今話まではモルドのみがリアルを知っていた。次話でサンラク、ヒロインちゃん、鉛筆に顔がバレる。そして未来の時間軸でカッツォも録画を見るので顔がバレる。まさかの大規模リアル顔バレ……まぁアピールしてないだけでシャンフロのアバター自体リアル顔の2Pカラーなのでノーダメージなのが強い
・モルド
お前も道連れなんだよ
・京極
リアルを知ってるのはヒロインちゃんのみ。ただし「龍宮院流になんらかの所縁のある人」という点では旅狼内全員にバレている。つーか幕末プレイヤーにもバレている。ドヤ顔で説明して速攻天誅されるから君はあるてぃめっとちゃんだし萎びたほうれん草なんだぞ

顔は所作程にモノを言う（前書き）

復ッ！活ッ！

ブラキディオス復活ッッ！！　ブラキディオス復活ッ！！　ブラキディオス復活ッ！！

狩猟してェ〜〜〜〜〜〜〜〜……

顔は所作程にモノを言う

笹原氏を映像内に収めた状態でカメラが目を覚ましたプレイヤー達へと向けられる。悔しげなもの、どこか清々しげなもの、「俺ロクに何をするでもなく撃破されたんだけどー！」とカメラを意識して叫ぶもの……そんな中、満足げな笑みを浮かべて立ち上がる小柄な少女が。

『あ！　もしかして貴女が勝利した真紅のネフィリムを操作していた方ですか？』

行ったーっ！！　笹原氏が行ったァーっ！！　笹原氏が悪いわけじゃないけどペンシルゴンすら口の端が引きつっているゥーっ！！

『ええと………はい』

『とても素晴らしい戦いでした！　ネフィリムホロウ2はその名の通り続編作品ですが……もしかしなくても？』

『……ええ、初代はやりこんでいます。私にとっても思い入れの強い作品なので続編が発表された時は本当に驚きました』

◇

サンラク：あいつネフホロのことになると早口になるな

鉛筆騎士王：ルストちゃん…………

◇

『プレイしてみてどんな感想ですか？　ネフィリムホロウ2は前作と比較しても技術的な相違点が多い、とは聞き及んでいますが……』

あ、笹原氏それ地雷。

『そうですね、とりあえず操作性に関しては大幅に優しくなっていると感じました。前作は五感五体の全てを動かすことを前提とした設定だったのでどうしても操作難易度が高かったのですが今作では思考反映も含めて大幅に操作の簡易化ができています。それを踏まえた上で前作の操作スタイルを任意で選択できるので前作経験者であっても取っつきやすいですね。ユーザーインターフェースの観点から見ても新規と経験者の双方に配慮している素晴らしい判断だと思います。特に2からの操作法と1からの操作法にそこまでの差が生じていない、というのが高得点ですね。戦闘に関してですがデモプレイ用に調整されているのか少々体力が低いように感じました。たしか装甲全外しのフレーム状態での被ダメージ補正が2倍だったはずでランチャーの火力と軽量級フレームのダメージからしても1の頃よりも脆いなとは思いました。とはいえ単純な速度に関しては操作性の向上もあってか制御が難しい傾向もあり戦闘がスローテンポになっていたのもあったのであの軽量級の動きは目を見張るものがあり…………』

「（ ´ ﾟдﾟ`）」

「こ、これは…………」

嗚呼………思わず瞑目して額に手を当ててしまう。ルスト………今君は冷静じゃないんだよ………全国区だよルスト………全世界にエナドリキメたシーン流された俺がどうこう言えたことではないかもしれないけど………あいつ、ネフホロの話になると早口になるから……をリアルタイム中継されるのを未来のルストは受け入れられるだろうか………

◇

鉛筆騎士王：これむしろモルド君にメッセージ飛ばした方が面白いリアクション見れそうじゃない？

サンラク：グループに招待しなきゃ

鉛筆騎士王：グループ名変えておかなきゃ

【グループ名が「現場からお送りします」に変更されました】

【サンラク　さんがモルド　さんを招待しました】

モルド：え、なにこれ

サンラク：あー、まぁ、そのなんだ

モルド：え？

鉛筆騎士王：すごく、早口だね………

モルド：えぁ

◇

『んふっ………ん゛んっ』

「ふくくっ」

「どうし、ましたか？」

「い、いや………ちょっと、いや………」

「？？？」

笹原氏はルストモルドに対して何か特効的なものを持っているのか？　フェードアウトする早口女というギャグな絵を取ろうとしたのか、それともいつまでもルストを映してるわけにもいかないのかゆっくりと動いていくカメラが携帯端末片手にめっちゃワタワタしている身体(タッパ)のでかい男子を映している……正直ちょっと罪悪感が湧いてきたぞ。

◇

鉛筆騎士王：悲しいお知らせ

サンラク：悲しいお知らせ

モルド：え？

サンラク：お前も画面に映ってる

鉛筆騎士王：ＳＮＳで「早口少女」がトレンドイン

◇

『えん゛ぶっ！！』

「ふぶふぉっ！！」

『ちょっ、天音さん？』

「ら、楽郎君！？」

く、まさか俺と鉛筆が別のものを見て笑ってたとは思わないじゃん……っ！！　うわ、本当だものすごい勢いでヒットする！　こ、好意的なコメントが多くて……その、良かったね…………カッツォとかほら、魔境産の地雷があるし。あいつエゴサにもメンタル的危険が伴ってるとか面白すぎるでしょ。

「い、いや……大丈夫……大丈夫……」

『な、なんでもないよ……なんでも……』

『そ、そう……』

チッ、うまく誤魔化したか外道文房具め。

「も、ものすごく語ってますね………」

「ちゃんと質問から逸れてないのがまたなんとも……」

プレイした感想だからな、実数値に言及するのも致し方ないなＨＡＨＡＨＡ………うん、はい。

さらに五分後。

他の参加者にルストが勝手に話しかけるというどっちがインタビュアーなのかよく分からない展開を経て最終的に参加者全員でネフィリムホロウ２の販促に着地するという、恐らく動画サイトに未来永劫残るだろう偉業を達成したルストの笑顔で映像は終わった………

「ものすごい笑顔だった……」

「というかルストさん、顔そのままでアバター作ってたんですね……」

確かに言われてみれば。解像度(グラフィック)がマジ現実(リアル)なのでよくよく見れば肌の色とか目の色とか要所要所の色を変えてるだけで、あのルスト（ネフホロ）の顔がルスト（シャンフロ）……あとルスト（ネフホロ）のそれとほぼ同じ構成であることが分かる。こんな形でゲーム友達の

リアル情報を知っていいのだろうか……

◇

鉛筆騎士王：じゃあルストちゃんもご招待～

サンラク：イエーイ！

モルド：げ、外道………

【鉛筆騎士王　さんがルスト　さんを招待しました】

ルスト：さっきからモルドが挙動不審になってた理由がこれ？

モルド：そうだね………

鉛筆騎士王：いやー、語ってたねぇルストちゃん

サンラク：テンション上がりすぎでは？

ルスト：…………

ルスト：グループ名から推測して

鉛筆騎士王：え？

サンラク：ん？

ルスト：二人ともこの場にいる

ルスト：もしかして天音　永遠本人？

【鉛筆騎士王　さんがサイガー０　さんを招待しました】

鉛筆騎士王：実はサンラク君はサイガー０さんと私の目の前にいる

サンラク：おいコラぁ！！！

サイガー０：！？

鉛筆騎士王：先の先を見据えて自爆するんだーっ！！

モルド：勝手に自爆して勝手に誘爆した………

ルスト：天音　永遠のファッション誌にはお世話になっている、とりあえず同じのを買っておけば間違いはないので

ルスト：あと天音　永遠のネームパワーでネフホロ２を宣伝して

ルスト：今すぐして

鉛筆騎士王：嘘でしょ強すぎない………？

サンラク：いきなりフルカウンター喰らったんだけど

ルスト：前々から思ってたんだけど、ＧＧＣの時に出てた顔隠しってサンラク？

サンラク：待て

サイガー０：えっ

サンラク：ちょっと待て

鉛筆騎士王：ちょっと待って笑顔固まりそうやばい

ルスト：攻撃に移行する時の癖が似てたしテンションも似てたし

サイガー０：なんで癖を知っているんですか

サンラク：おい待てカメラ止めろ！

モルド：ルストが悪い笑顔浮かべてる……

サイガー０：なんで癖を知っているんですか

ルスト：オフ会行っとく？

鉛筆騎士王：この私が、押されている……っ！？

モルド：うちのルストがすいません……

顔は所作程にモノを言う（後書き）

なんで癖を知っているんですか？（真顔）

モラルを蹴っ飛ばしてデザイアを通す（前書き）

トチ狂って破械にカオスＭＡＸを入れてもいい……それが自由というものだ（正気に戻ってサイドで留める）

モラルを蹴っ飛ばしてデザイアを通す

『えー、次の紹介はシャングリラ・フロンティア………の、予定でしたが！　残念ながら機材の方にちょっとトラブルがあったらしくてお昼休憩を挟んで午後の部の頭に開始ということになりました！　みんなゴメンネ！　お昼食ったらまた会おうゼ！！』

『だ、そうです。なので午前の部はここで終わりになります』

『時に夏目ちゃんとエイトちゃんはお昼に何を食べるのカナ？』

『私は……そうですね、変装して露店巡りとかしちゃったり？』

『おー、エイトちゃん大胆だね～』

『…………センパイ程じゃ』

『んーーっ、マイクも不調みたいだね！！　夏目ちゃんはポテト？　それともハンバーガー？』

『私のイメージを固めないで欲しいのだけれど！』

『じゃあ何食べるの？』

『………ホットドッグ』

『ジャンクじゃーん』

『い、いいじゃないのっ！　ポテトもピクルスだって野菜よ！！』
『野菜が占める割合の問題じゃないですかね……』
『はーいそれでは皆さん！　午後に会いましょうねーっ！！』

◇

【JGE現地組】

鉛筆騎士王：さて、オフ会する？
サンラク：自暴自棄から玉砕提案するのやめろや
鉛筆騎士王：お？　ヘタレか？
サンラク：喧嘩の売り方まで雑かよ
ルスト：別に私は構わない
サイガー0：私は割と構います……

モルド：ま、まぁ無理に顔をあわせることもないんじゃ……

サンラク：じゃあ全員仮面つけてオフ会やれば全員の主張を高度に満たせるのでは……？

鉛筆騎士王：天才かよ

鉛筆騎士王：オイカッツォ＝

サンラク：魚臣　慧

サンラク：個々人で奴をいじる分には推奨するけど流石に大々的に流布するのは勘弁な！

サイガー０：えっ

モルド：物凄い気軽さで個人情報流した！？

ルスト：あれが、あれ……

サンラク：ワンフォーオール！　オールフォーワン！

鉛筆騎士王：和訳「お前も道連れ」

モルド：本人の意思が一切考慮されていない……

ルスト：人でなしの多数決

鉛筆騎士王：言い得て妙だけど刺々しすぎない？

ルスト：こういうのがお望みなんでしょ？

鉛筆騎士王：おっと？　ちょっとゾクッと来たけどそんなセリフで受けに回るのはカッツォ君だけだぜ～？

サンラク：クソみたいな風評被害は広めていけ

モルド：さっき個人情報の流布に楔を打ち込んだ人と同一人物とは思えない言葉だ……

サンラク：優待チケット便利でいいわ、出店の列すらスキップできるとか神かな？

サイガー０：お先にいただいてます……

鉛筆騎士王：ちなみにメニューは？

サンラク：なんかのゲーム関連のラーメン、塩

サイガー０：醤油です

鉛筆騎士王：ルストちゃん、野暮

ルスト：………なるほど

モルド：えっ

サイガー０：え？

サンラク：謎会話で好奇心を煽るのやめろや

鉛筆騎士王：ははは、この話題に関してサンラク君の人権はその塩ラーメンに乗ってるネギよりも低いから

サンラク：は？

鉛筆騎士王：若さに任せて胡椒とかかけすぎると将来泣くことになるよー

◇

「ね？」

「のぁあ！？」

「えっ……え？」

ぽん、と肩に手を置かれる感触と録音でもマイクを通したものでもない生（ライブ）で生（リアル）の声。

反射的に振り返ればそこには先程まで舞台上に立っていた時とは１８０度違う印象の女が悪い笑顔を浮かべて……

「ぶふぅっ！！？」

「化けて出やがったコイツ」

「え、本物……？」

こ、この野郎……チャット内で「リアル遭遇は避ける」みたいな素振りを見せていたからこっちも合わせたのに自分は俺達を探していたとか外道が過ぎないか！？

「な、なにその………んふふふふっ、顔の………あははは！！」

「無料配布で貰った曇り止め加工済み眼鏡ラーメン聖騎士ソルティアスモデル」

こういう祭りの場ではしまい込むよりつけていた方が楽しいから特に何を考慮するでもなく装着していた安っぽいプラスチック製の眼鏡だが、まさか顔面ガードの最終防衛ラインになるとは俺でも考えが及ばねーよ。というかラーメン騎士って何？

「あの、え、なんでここに………」

「玲さ………あー、玲(レイ)氏。こういう奴なんだよ……」

「君ってやつは、んふふふふふ、何かで顔を隠さないと死ぬの？　あー、空腹と重複してさらにお腹痛い」

ご丁寧にカツラまでかぶって完全擬態している天音永遠(ペンシルゴン)は眼鏡の下に浮かんだ笑い涙を拭いつつ、さも当然かのように近くから椅子を引っ張って俺と玲さんのいるテーブルを三人編成に変更する。

「あれ？　サンラク君私の分は？」

「ん」

「迷いなく胡椒を指差す辺りやっぱ性根腐ってない？　あ、レイ（玲）ちゃん久しぶり〜」

「え、あの、あ、え、はい」

久しぶり？　と一瞬疑問符が浮かんだが冷静に考えたら玲さんの姉であるサイガー１００……ちょいちょいペンシルゴンが本名呼びしていたのがマジなら桃氏（モモ）？　との繋がりがあるわけで、そこから玲さんとペンシルゴンに面識があってもおかしくはないか、と自己解決。とりあえずラーメンをずるり。

「うーん、迷いなく先に食べ始めるかぁ」

「自分で買ってこいよ」

「んー、いいや。もう頼んでるし」

頼んでる？

「ちょっと、あま…………クオンさん、せめてどこに座るかくらい教えてくれても………どちら様？」

「夏目氏ェ…………………」

割合が７：３くらいでトレイの上をフライドポテトが侵略している愉快な状態でやってきたのは、同様に遠目から見た限りではバレない変装をした夏目氏であった………狂人の思考なんか理解できるモンじゃないが、それを差し引いても何がしたいんだコイツ。

「いやいや、半分は一点集中物見遊山だけどもう半分はシャンフロ

絡みでちょっと話をね」

「まさかテメー、ルストとモルドも呼び込んでるんじゃ」

「んー、誘ったんだけどあの二人一般チケットらしくて………」

「あー」

ちら、と至る所に横たわる長蛇の群に視線を向けつつ仮に来る意思があったとしても一時間二時間は掛かるだろうな……と視線を戻す。

「……ねぇクオンさん、この二人は？」

「こっちの……えーと？　ラーメン騎士？　眼鏡の女の子は友達の妹だね。で、こっちはシナモンちゃんも会ったことあるじゃん？あの時はガスマスクだったけど」

「…………」

「…………」

マジで！！？　と言わんばかりの夏目氏の視線からそっと目を逸らす。今からでもいいから顔文字メットを被った方がいいだろうか……でもそれだとラーメン食えないな。

「………恨むわよケイ」

「そんな貴方にこちら、魚臣君が絶対に質問に答えてくれる企画やってるよ。リアルタイムで」

「え、何そのクソ楽しそうな企画」

うわ本当にやってる、目から光が失われつつあるので案の定魔境から漏れ出した瘴気にやられているらしい。邪念はあるけど悪意がないのが厄介なんだよな魔境の瘴気………そりゃ普段は鋼のモラルでアングラに閉じこもってる魔境住民にそんな企画見せたらそうなりますわ。

「シナモンちゃんも日頃蓄積した感情をぶつけちゃいなよ………ね？」

「そう、ね。私のことは気にしなくていいわ」

「あ………えと、はい………」

色で例えるなら黒だろう感情を覗かせながら携帯端末から視線を離さなくなった夏目氏もとい偽名シナモン氏を他所に、偽名クオン何某がシナモン氏が持ってきたトレイからホットドッグを一つ手に取りながら俺と玲さんに視線を向ける。

「思考入力できない携帯端末だとどうしても時間かかっちゃうからね、ちょいとフラゲも交えてシャンフロ談義を……ってね」

「手口はあんまり感心しないがな」

モラル的に区別するなら悪に部類される行いだぞ。俺は武田氏の薫陶を受けた前時代的モラルの持ち主なのでリアルバレを伴うオフ会ってやつはちょっと苦手だ、武田氏も「拙者の時代ではレトロMMOも現役だったのでオフ会は場合により血を見るケースもあったでござるからな……」と言っていたからな。

「元々君の妹経由で王手だったんだから今更でしょ」

「…………………妹？」

「あー、こいつの大ファンなんだよウチの妹。一回サプライズで通話ドッキリ仕掛けた時にメルアド交換してたらしくて」

「それはつまり……………家族ぐるみで？」

「玲ちゃんストップ、それ言ったら君ん家とも家族ぐるみの付き合いになるから」

「そ、そうですよね………………そうですよね」

何故だろう、ラーメンの温度がぬるくなった気がする。

「で？　午後の発表前にネタバレするほど重要な話なのかよ？」

「あー、うん。まぁそうだねぇ………話題は尽きないけど強いて最初に話題にするなら……」

にへ、とホットドッグの梱包を剥きながら笑みを浮かべたクオン氏は確かにこう言った。

「一緒にクーデターしない？」

モラルを蹴っ飛ばしてデザイアを通す（後書き）

ウルトラゼロアイで検索すると主人公たちがどういう状態でラーメン食ってるか分かります

ルストとモルドをハブった、というよりも「サンラク」と「サイガ－０」に相談したいことがあったのでそっちを優先した、という感じ旅狼ってレコードホルダー二人抱えてる化け物クランですからね、（特に作者が）忘れがちですけど

遠き無念の残影（前書き）

久々に本編でシャンフロに関して文章を書けたので連続更新です

しばし沈黙。同じくこの擬態文房具が何を言っているのか理解できていない玲さんと若干顔を見合わせ、チャーシューを口に入れて咀嚼、嚥下………

「もしもし国家権力？」

「現実見てないでゲームの話しようよ」

「合ってるけど何もかも間違ってる気がする………まぁいいや、クーデターってことは権力に楯突くってことだろ？　名前忘れたけど王国に」

確かシャンフロ世界で「国」として成立しているのは旧大陸を統一した国家ただ一つだったはず。新大陸の方は色竜だったりクソ広いマップだったりで人類種が集落以上に発展していないはずだからな。ギリ魚人族は結構発展してるみたいだが……

「エインヴルス王国、今この王家で起こってるゴタゴタに関して少なくともサンラク君は無関係じゃないでしょ？」

「んー………まぁ、そうだな」

エインヴルス王国は現在、王位継承権第一位の第一王子がクーデターを起こすという謎すぎるストーリーを経て国王と第一王じ………………例のあの人が追放されるというなかなかに類を見ない展開になっている。

俺(サンラク)は聖女ちゃんの依頼を受けて新大陸にて暗殺されようとしていた王族親娘を救出し、名前忘れたけど絶頂剣の人をボコってしまっている。つまり現時点で現国王に思いっきりツバ吐いてるわけで。

「話はちょっと変わるけどサードレマがレイドモンスターに襲われてるせいでヤバいってのは知ってる？」

「えと、はい。話には聞いてます」

「まぁ、うん」

知ってるも何も超高速ルチャを仕掛けた間柄だ、彷徨う大疫青君とはもう実質マブダチみたいなもんだ。友情は暴力によって成立する……！！

「実はなんか現国王が相当失礼カマしたらしくて、サードレマ大公がブチ切れてるんだよね。それこそ王国成立時に結ばれた盟約を当代で破棄することも辞さぬ！　くらいの怒りよう」

「あー、なんとなく見えてきたぞ」

今こいつが話しているのはユニークシナリオEXのクリアによって進行したワールドストーリーだ。世界そのものが変遷した結果……あるいは変遷する過程に関する物語。旧大陸の王家にまつわるゴタゴタであり……恐らくサードレマ大公に与する＝前国王父娘の復権と考えていい。

「要するにクーデターってのは今の国王をボコって以前の状態に戻したいってことか」

「そーゆーこと。多分現国王もサードレマ大公も大々的にプレイヤーを雇うっぽいんだよねぇ」

うわー、プレイヤーも巻き込んだ戦争フェーズってか？　ワクワクするような、シャンフロでそれやったら相当ギスギスするんじゃないかと不安になるような。

「…………で？　お前の狙いは？　義憤で動くようなタマじゃねーだろ？」

「んー、サードレマに味方して恩を売って街でも貰おうかなー、と思わなくもないけどぉ…………ま、「本命」はそっちじゃないんだよね」

そう言うとクオン何某は声のボリュームをさらに下げ、それこそ同じテーブルにでもいない限り絶対に聞き取れない音量で口を開いた。

「墓守のウェザエモンに関するアフターシナリオが王城の地下にあるんだよね」

「むぶっ……………マジで？」

「墓守の、ウェザエモン………！」

その名は、俺にとっても無視できない名前であり…………この魂を外道色に染めている畜生文房具であっても、こいつが「アーサー・ペンシルゴン」というアバターを使っている限りは絶対に無視できない名前だ。

墓守のウェザエモン。

シャングリラ・フロンティアというゲームにおいて一番最初に撃破されたユニークモンスターであり、現状判明している中では唯一EXクリア後に再戦の可能性を一切見せていないユニークモンスターでもある。少なくともジークヴルムですら死亡していない可能性を真理書で提示しているのに対して、こちらは完全な消滅を持ってシナリオクリアとしているためまず間違いなく一度限りのオンリーワンだ。

「アフターシナリオ……というのは、どういうこと……なんですか？」

「んー、後で旅狼のメンバーにも説明するけど……ほら、私ってシナリオクリア報酬で花飾りのアクセサリーを貰ったじゃん？」

「そうだな」

「あれってさ、実は隠し効果みたいなのがあって……セッちゃん、「遠き日のセツナ」に関連する場所を知らせるロケーター的なものなんだよね」

まだ一年も経ってない筈なのに随分と懐かしく感じる名前だ。だがイマイチ詳細が見えてこないな。

「具体的な説明」

「そうだね……ちょっと前までは新大陸一直線のロケートしか示さなかったんだよね。一通り調べたけど多分新大陸の西方面に何かある」

「西か……ヤバいってことだけは知ってるが」

「うん。でもそっちは今は関係ない、問題はジークヴルム撃破後に追加で四つのロケーションが示されたことなのよねぇ」

追加で……四つ？

「最初から示されていた一つを除いて、フレーバーテキストが更新されたからそのまま抜粋すると……「青き聳弧（しょうこ）、赤き炎駒（えんく）、白き索冥（さくめい）、黒き角端（かくたん）、墓守の残影は佇む。祓われし無念の暗雲は再び広がりて……」だってさ」

なんじゃそりゃ。聞きなれない名前に首を傾げていると、なにやら携帯端末を操作していた玲さんがちょんちょんと俺の肩を指でつつく。

「あの……調べて、みたんですけど……今挙げられた名前は、別……種の麒麟だそうです」

「はぁ？」

え、麒麟ってオリエンタル・ファンタジー・モンスターについてはそりゃ知ってたけど色違いバリエーションとかあったの？　というかシャンフロ世界における「麒麟」って……

「厳密には文字が違うけどさ、四種類の「騏驎（キリン）」ってつまりさぁ……そういうことだよね？」

「無いと思われていたウェザエモンの再戦要素、ってことか……？」

オリジナルのウェザエモンは既に塵となって消えている。クリアし

た俺達がそれを目撃しているのだから間違いない。であればジークヴルムの消失……ワールドストーリーの進行に伴って現れた四体の「麒麟」は一体何なんだ？

「四つのロケーションのうち、二つは新大陸で二つは旧大陸を指し示していた。実はそのうちの一つ……炎駒（えんく）はもう見つけてるんだよね」

「は？」

「えっ」

ペンシルゴン曰く、赤の「炎駒（えんく）」は旧大陸のサードレマから分岐する三つのルートのうち、神代の鐵遺跡ルートから行ける翔風楼結（しょうふうろうけつ）の大河というエリアに発生した隠しルートの最奥に存在していたらしい。

「戦ったのか？」

「え？　サンラク君じゃあるまいし」

「ぶっとばすぞ」

俺を悪い例えみたいに使うな。

「私が知りたいのは見ればわかるからね……新大陸の方は現状手がつけられないから旧大陸の方を確かめたいわけ。パチモンウェザエモンが何色増産されようが知ったことじゃないけどさ……」

「…………」

単純なゲーム攻略以上の感情を秘めた目が静かに俺を見る。口をつぐんだ為に遮られた言葉の、そこから先を理解できるのは多分俺とカッツォだけだろう。このＮＰＣをノンがつくとはいえプレイヤーキャラとすら見ない外道が数少ない温かな心を得たというＮＰＣ……つまりこいつはコピーウェザエモンの出現に伴って「遠き日のセツナ」の色違いも出現していないかを知りたいってことだろう。そしてこれまでの話を纏めれば見えるものがある。

「何色かは知らないが……旧大陸側のもう一体は王城の真下か」

「前々から噂はされていたけど「王城の真下には何らかのフィールドがある」ってのがこんな形で確定するとは思ってもなかったよねぇ」

「ええと………今の国王に掛け合うとかは、できないんですか？」

「え？　もしも彼女がいるとしたら一々国王（ＮＰＣ）におべっか使って地下エリアに行くの面倒じゃん」

「へ？　えっと、あの……」

こ、こいつっ、なんて澄んだ目で………っ！　てか要するに「王城フリーパスで通れる権力ぶん取っておきたい」ってことじゃねーか！！

「それに多分、現国王放置してると新大陸側と敵対フラグ立つよまず間違いなく。創作じゃ割とよく見るけど人間至上主義？　的なキャラクターらしいし」

「それ味方するプレイヤーいるのか？」

「金と恩赦でごり押してくっぽくてねー……少なくともＰＫｅｒは陣営につくだけでレッドネームの清算ができるし、多分相手陣営をＰＫする免罪符が出ると思うんだよね……」

「一気に幕末じみてきたな」

「形骸化した陣営概念と藁より脆い同族意識はあそこだけの風習ですぅー」

一理あるので何も返せない。それはそれとしてカルマ値の清算やＰＫＫされた場合の借金がチャラになるとなれば王国側につくプレイヤーは結構な数になるだろう。なにもカルマ値の影響を受けるのはＰＫだけじゃない、賞金狩人が出勤するラインがＰＫというだけであってカルマ値の蓄積やそれに伴うＮＰＣからの悪感情は別問題だ。教会で懺悔だとかカルマ値の減少方法は色々あるようだが「王国」という巨大権力に所属してカルマ値徳政令の恩恵にあずかれるなら……と考えるプレイヤーは絶対にいる。

ペンシルゴン単体から始まった欲望の実現は、どうやらプレイヤー全員を巻き込んだ大戦争に直結しているらしい。

遠き無念の残影（後書き）

・想起されし墓守

詳細不明、なんらかの原因によって新旧大陸それぞれに二体ずつ現れたウェザエモンの残影。
厳密にはウェザエモン本人とは一切関係のない現象なのだが四体の想起体はいずれも異なる色の「麒麟」を従えている。
それぞれの「麒麟」に付き従う想起体はそれぞれが異なる武装を携えており、それはあたかも「墓守と成り果てたかつての英雄が見せなかった戦いの姿」であるかのようにも見える。かの英雄が遺した魔法の鍵、その中に収められていた至宝の数々は、決して飾られるだけのものではなかったということだ。

それが墓守だというのなら、守るべき墓も共にあるのか？　であるなら、であるならば。願わくばもう一度、そうでないなら興味はない。その為なら女は天上の王権にだって弓引けるのだ。

不世出の輝き（前書き）

静まれ！　ＪＧＥ編には新規クソゲーは出さないって決めただろ！

（暗黒面からの手招き）

まぁ、それはそれとして。

「なんかねぇ、新しいモンスターカテゴリが追加されるっぽい」

「クーデターの誘いの後にそれかよ」

「いや、まぁ優先度優先度」

「新しいカテゴリ……ユニークとか、レイドとかそういう区分けですか？」

「その通り、二人は「二つ名」モンスターって知ってる？」

「……まぁ、知ってるわな」

「新大陸の〝緋色の傷（スカーレッド）〟みたいな……」

「そうそれ、あれの発展系として新しくエクゾーディナリーモンスターってのが追加されるらしいね」

エクゾーディナリー……？　高校英語知識とゲーム的英単語しか知らない俺の知識にはない単語だが、そんな英単語あったか……？

「エクゾーディナリー……Ｅｘｏｒｄｉｎａｒｙ……Ｅｘ－ｏｒｄｉｎａｒｙ？　エクストラオーディナリー、非凡……というより、不世出のモンスター……ですか？」

「うっそ、一発正解とか凄いね玲ちゃん」

「すげー」

「い、いえっ！　そんな、えと、きょ、恐縮です……」

流石は玲さん、リアル文武両道は伊達じゃないってことか。だが不世出、不世出と来たか……その言葉を踏まえて考えると、こういう事か？

「今まで世に出てこなかった存在、評価を受けていないモンスター？」

「そう、エクゾーディナリーモンスターは通常のモンスターがスポーンして、何らかの偉業を達成して二つ名を名乗るそれとは似て非なる存在、特殊な出自を経て最初から他と異なる姿と力を持つモンスターってわけ」

特異な出自と、特異な能力……思い浮かぶのは金晶独蠍だ。アレは偏食という出自で現れ、同族殺しに特化した姿と自己再生能力を持つ。

そういう意味ではエクゾーディナリーモンスターとやらの条件には合致しているが、奴はあくまでもレアモンスターだ。となるとどういうモンスターが該当するのか……

「ちなみにその一例を私は既に知っている」

「よし、交換成立だな」

「まさかそのメンマで釣れると本気で思ってるなら最新美容ラーメン洗顔の刑に処すけど」

「刑って言っちゃってるじゃん」

「コウカン……」

「で？　その一例ってのは？」

「ドラクルス・ディノサーベラス〝死闘の傷（スカーデッド）〟」

ん…………？　あぁ、スカーレッドじゃなくてスカーデッドなのか、いや紛らわしいわ！！

「ドラクルス・ディノ系列って本来は元となるモンスターが変貌した姿なんだけどさ、〝死闘の傷〟はそいつら同士の交配で生まれたイレギュラー……生まれながらの汚染個体なのさ」

それ故に生まれてから今に至るまで、ただ生きるだけでも莫大なエネルギーを要する超高燃費でありながらも今まで生き延びてきたそれは、通常のドラクルス・ディノサーベラスとは隔絶した強さを誇る。

より大きなエネルギーを持つものは、皆総じて強きもの達だ。それらと死闘を繰り広げ勝利してきた〝死闘の傷〟には決して消えない数々の傷が刻まれている……

「要するに生まれつき「傷だらけ（スカー）」ってことかそれ？」

「だろうね、しかも傷ごとに対応した攻撃を当てないと通らないダメージ無効能力備えてるっぽいんだよねぇ」

「それは……」

ウザいな。〝緋色の傷〟はダメージを受けるごとにどんどん頑強になる性質を持っているために追い詰めるほど手がつけられなくなるモンスターだが、情報通りなら〝死闘の傷〟は序盤から超耐久を発揮するモンスターだ。というか広いからって新大陸の樹海が魔境過ぎる、ボスキャラ放し飼いかよ。

「そんなわけで既存のモンスターをさらに発展させたエクゾーディナリーモンスターが実装されるんだけど……実はこれ、討伐報酬が特殊なんだよね」

「というと？」

「エクゾーディナリーモンスターを撃破したプレイヤーはレベルアップしなくてもスキルを覚える。倒したエクゾーディナリーモンスターの力を宿したスキルをね……」

「……………マジ？」

「マジもマジ、それプラス専用素材だからね……新旧大陸両方に出現するってのは割と英断かも」

完全下位互換と化した二つ名モンスター君…………レイドモンスターという危険が両大陸に存在する以上、新コンテンツを新大陸のみに配置すればただでさえ傾きがちなプレイヤー比がさらに傾く事になる。そう考えると新大陸行きの船に定員があったのもこれを狙って……？

いや、転移魔法の取得ハードル下げればいいだけだろそれ。ディー

プスローターの奴が未だに商売として成立させられてるって事は取得ｏｒ習得難易度がアホほど高いって事じゃないのか。

「レイドモンスター倒さないとマップレベルの大災害が起きて、エクゾーディナリーモンスターが出たことでモンスター分布を調べ直しで……」

「ユニークモンスターを倒さなきゃワールドストーリーが進まない、忙しいねぇ」

やることが多すぎる……いや、それ故のシャンフロか。あのゲームはプレイヤー一人にゲームの全てを楽しませる気が無い節がある。農民は農民として生きて死ねと申すか、ええい武器を取れば誰だって戦士なんだよ！　リュカオーン許せねぇ！！

「とりあえずライブラリが死ぬ」

「笑って死に顔を見てやろうぜ？」

「多分……向こうも、笑顔なのでは……」

「ねぇ」

む、シャンフロ談義をしていたのは三人のはずなのに四人目の声が？

「どったの夏目ちゃん？」

「その……あなた達、シャンフロ……やってるのよね？」

「そだね」

「で、そのぉ……慧も、プレイしてるのよね？」

瞬間、俺達三人に電流走る！　この流れ、夏目氏が何を言わんとしているのかを察知したからだ。
心なしかソワソワし始めた俺と玲さんを他所に、三人を代表して深呼吸をしたペンシルゴンが穏やかな笑みを浮かべて夏目氏に向き直る。

「つまり夏目ちゃんは……シャンフロを始めたい、と？」

「で、でもほらあれでしょ？　この手のゲームってプレイ時間がステータスと直結してるから今更始めても遅いわよね？」

「同志サンラク君、現在シャングリラ・フロンティアでプレイヤーが到達した最高レベルは１４７だそうですが君の使うキャラのレベルと始めた時期を教えてあげなさい」

「え？　あー、始めたのは夏頃で現在のレベルは……あー、うん。１４７です」

いやでも俺の場合は参考にならないだろう。修正前のインベントリアがあったからこそこのステータスに到達したようなものだ、今から夏目氏を最前線レベルまで引き上げるとしても蠍は使えない。だが内情的事実というものは話さなければ存在しないに等しい。

「まぁ流石にツチノコと同じ道を辿れとは言わないけど、その気になれば割と強行軍出来ちゃうのがシャンフロの良いとこなワケ。つまり夏目ちゃん、今から始めても遅くはない！」

「そ、そう？　じゃ、じゃあ私も始めたりとかしても……」

「ていうか例のシルバーでゴールドな奴も割と最近に始めて最前線に来てるよな？」

…………ん？

「何ですって？」

「鳥頭君さぁ……」

「あの、シルバーでゴールドな人とは……」

おっとこれは……

「Did I step on a mine？」

「何で英語……Exactly！」

◇

鉛筆騎士王：Good Job！！

サンラク：いやどっちやねん

サイガー0：？？？

モルド：話の流れがさっぱり見えない

ルスト：並んでる列の先頭もさっぱり見えない

◇

不世出の輝き（後書き）

・メタ視点から見るエクゾーディナリーモンスター
簡潔に白状すると「仇討人が依頼で倒す二つ名モンスターは汎用モンスターなのに〝緋色の傷〟は専用素材落としたよね？」という事実に気づいた為。
これはヤバいと色々考えた結果、途中からモンスターの設定考えるのが楽しくなったので新しくぶち込んでやりました。具体的には

・二つ名モンスター
特殊な思考ルーチンを持った通常のモンスターとして誕生し、現在に至るまでの行動によって二つ名モンスターとなる。その為厳密には「変な行動をする通常モンスター」なので落とす素材は通常種と同様

・エクゾーディナリーモンスター
生まれつき何らかの特殊性を持っているという設定で大きなカテゴリでは同一種だが形状や能力に特異性を持つ。

・〝緋色の傷〟
諸悪の根源、二つ名モンスターのくせにレイドモンスターに喧嘩を売って生還してしまった為「ここで何らかの変化が起きなければ「根本設定」に反する」という事でベヒーモスサーバーがやらかした。他二つのメインサーバーが異議申し立てしたのをりっちゃんと創世さんが発見し、殴り合いの喧嘩（弱い）の末にエクゾーディナリーモンスターが実装された。
え？　結局〝緋色の傷〟はエクゾーディナリーなのか二つ名なのか？　えっとぉ……後天的なレアモンスター……ですかね？

クリティカル・ストライク！！（前書き）

ゼロワンいい……（ケータイ捜査官について調べてたらフラゲ踏んだ悪夢）
ライジングとホッパーが初期フォームってのがまた味わい深い

クリティカル・ストライク！！

モチベーションというものは維持するのも大変だが発生させるのもまた難しい。ましてプロゲーマー、人生の少なくない割合を特定のゲームに捧げる事をよしとした人種を別カテゴリに誘うというのは中々に難易度が高い。

だが期せずして俺が口を滑らせたことで夏目氏の心の中にモチベーションの火種が生まれた、そしてそれを見逃すペンシルゴンではない。

「あー、そういえば名前が違うしアバターも真逆だから気づかなかったなーっ、冷静に考えればアージェンアウルって銀と金って意味かーっ」

あまりの白々しさに俺が半目になり、玲さんの口が引きつるのもなんのそのと奴の口はぺらぺらとターボを開始する。

「いや、あの人はすごいと思うよ、うん。なんたって限られた時間の中で猛レベリングして攻略最前線まで追いついてきたんだからねぇ……あ、そういえば慧君も手伝ったとか言ってたかなぁ？　そりゃあ（ユニーク自発できないけど）曲がりなりにもやり込んでる慧君とマンツーマンでレベリングすれば強くもなるよねぇ……あ、夏目ちゃ、間違えたシナモンちゃんもレベリングを頼んだら？　同じチームなんだし、ネ……？」

「そう、よね。うん、経験者に手伝ってもらうことはなんらおかしくはないわよね？」

「勿論！　二人もそう思うよね？」

「ソデスネ」

「は、はいっ、そういうの、とても大事だと思います……！」

三人がかりでヨイショされたことで夏目氏も満更ではないのか、早速携帯端末でシャンフロについて調べ始めたようだ。あ、夏目氏は序盤から攻略見る派かぁ……

「おっと、もうこんな時間か……ほら夏目ちゃん、そろそろ行かないと」

「そ、そうね……じゃあ、私達は行くから」

「が、頑張ってください」

「ありがと、顔隠し（ノーフェイス）のお友達さん？」

しれっと俺＝顔隠しを確定させやがったポテトの妖精を許さない事が確定したため、後でアージェンアウルに情報のリークを行うとして……

「あー、玲さん」

「は、はいっ！？」

「出来ればその、俺が顔隠しってのは内密に……まだ俺はそっちに進路決めてるわけじゃないからさ」

「分かりましたっ！　お、お墓まで持っていきます！！」

いや、墓に行く時まで覚えてもらうようなことでもないんだがな？　というかあわよくば忘れて欲しい。

そりゃ確かにプロゲーマーって職業にドリームがあるのは認める、その気になればメールひとつでプロゲーマーになれる立場にある俺が選り好みしてるのは他のプロゲーマーを目指す人からすれば相当調子乗ってる風にしか見えないのもわかる。
だがプロゲーマーにとってゲームは義務だ、趣味じゃない。その一点が俺のテンションを下げてしまうのだ。それに武田氏考案の将来設計が今の所上手くいってるので、わざわざ自分からご破算にするのも気が引けるのもある……つまり結論から言うと結論を先延ばしにしたい、具体的には高校卒業まではぐらかしたい。

「で、でも凄い……ですね。今、プロゲーマーと……お昼を一緒にしてた、んですよね……」

「あーうん、まぁ、そうだね」

プロゲーマー、そうなんだよあの人プロゲーマーなんだよな。野球選手と年俸で張り合える領域のプロゲーマーなんだよなあの人……
……ジャンクフード狂いという印象しか俺の中には残ってないけどプロゲーマーなんだよな。
駄目だな、職業よりも先に本人性能で印象が固まってしまう。それもこれも第一印象が俺にボコり倒された人でその後に自分からボロを出し、倒し倒されの関係を続けた上で未だにユニークシナリオを自発できない奴のせいだな。ありがたみがないんだよ。

「っし……じゃあ俺達もステージの方に戻る？　フラゲで聞いちゃ

ったけど一応次はシャンフロ特集だし」

「えと、あの……ルストちゃん達は、待たなくていいんでしょうか……」

「いや……」

◇

サンラク：ちなみに待ち時間今どれくらい？

ルスト：一時間

◇

「彼らはこの長蛇の腹の中に消えたから……」

「……優待チケットで、良かったですね」

いや全くその通りで。

……

…………

……………

『はいはーい！　皆一時間ぶり！　お昼食べた？　それともまだ？　私は夏目ちゃんと食べてきたよーっ！』

『えー？　私だけハブですか？』

『いやいや、エイトちゃんランチ配信してたでしょ。休憩中も配信するのは素直に凄いと思うよ？』

どうやらあの場にエイト氏がいなかったのは裏で配信をしていたかららしい。まぁ夏目氏以上に他人感が強いので来たとしてもアレなんだが……いや、まぁ、うん。

『それじゃあ皆さんお待ちかねっ！　シャンフロに関する最新情報をお届けするから盛り上がってこうぜーっ！！』

わぁ、と大歓声が巻き起こる。

「（＊´ω｀＊）」

「あ、それやっぱり被るんですね……」

「まぁ、折角だし……」

日常生活でこれを使うことはまずないだろう、だから使えるところで使っておかないと。

とりあえず鉛筆のリーク通り、エクゾーディナリーモンスターの実装とワールドストーリー「王国騒乱」の進行……事前に聞いた通りの情報が発表されていく。

現場も中継も大盛り上がりだ、まぁ旧大陸側でもイベントは発生しているがレイド前提の大規模戦闘だったりでなんというか……やはり新大陸に行ったプレイヤーとそうでないプレイヤーとで差のようなものができていたのは事実だ。
大規模なイベントということに変わりはないが、戦争規模のＰｖＰは新大陸じゃ出来ない旧大陸側の強みと言えるし、何より１パーティ単位で戦えるエクゾーディナリーモンスターの各地実装はユニークに無縁でレイドに参加するにも気が引けるプレイヤーにとっては福音なのだろう。

エクゾーディナリーモンスターねぇ……なんか確実に発生してそうなモンスター種に心当たりがあるが、帰ったらログインしてみようか。そんなことを考えていた時だった。

『んえっ？』

『どうし……え？』

『わっ』

壇上にいた三人がいきなり素っ頓狂な声を上げる。ペンシルゴンに至っては極めて珍しいことに表舞台用の表情にヒビが入るかのように顔が引きつっている。
誰か一人ではなく、三者三様ながらタイミングの共通する反応に観客席にも困惑の雰囲気が漂う。

「……ん？」

なんで今こっち見た？　そんな見てるのを隠しもせずに……

『あー……うん、ええと？　これ私が言っていいかな？』

『『ど、どうぞ』』

一体、何を――――

『えー、緊急速報っ！　只今、シャングリラ・フロンティアの方でユニークモンスター「冥響のオルケストラ」が閉幕しました……だそうでーす』

「…………」

「……え、あの……楽郎君？」

オルケストラ、クリア？？？

な、なるぽど？　ライブラリがやったと？　いや、別に悔しいとか思ってないですよ？　ちょっと胃の下辺りへ激烈に重いメンタルダメージ食らっただけで……え、マジで？　先に見つけたユニーク先越された？　いや、まぁそういうケースは珍しくもないし俺だってそういう経験はあるけどさ。

あの超絶クソ忖度オーケストラガード突破したの？　どうやって？？？

「も、もしもーし……」

「(昇天)」

「しょっ……絵文字ですらない!?」

クリティカル・ストライク！！（後書き）

たまには「知らないうちにユニーク進められた側の気持ち」になるでごぜーますよ

正解は「着弾確認次弾用意！！」（前書き）

ついに来てしまった……未開域……アメリカの環境を木っ端微塵にしたという悪魔が……！！

正解は「着弾確認次弾用意！！」

◇

【旅狼】

サンラク：ゴルドゥニーネのユニーク自発してるので悔しくないです

鉛筆騎士王：悔しさジュワジュワに滲み出てるぅ～！！

秋津茜：何かあったんですか？

ルスト：ユニークモンスター「冥響のオルケストラ」が攻略された

鉛筆騎士王：で、ここにいるのが先に自発してたくせにリアルで遊んでる間に先越されたサンラク君でーす！！

鉛筆騎士王：それはそれとしてサンラク君が先越されるってなんか訳あり？

鉛筆騎士王：ミレィって【ライブラリ】の口は緩いけど頭はめっちゃ賢い子だよね？

サンラク：いや知能指数に関しては知らんけど口調が緩いってのはそうだな

鉛筆騎士王：聞いた限りじゃボスラッシュなんでしょ？　サンラク君が負ける相手にライブラリのプレイヤーが勝てるとは思えないけど

モルド：いきなり温度差が……

サンラク：なんかギミックがあったんじゃね

サンラク：少なくともプレイヤーのステータス完全上位互換再現アバター召喚してピンチになったら忖度ガードするボスの正面突破法は知らん

鉛筆騎士王：おおう、クソボス……

鉛筆騎士王：となるとギミック？　なんか納得いかないなぁ

ルスト：具体的に何が？

鉛筆騎士王：いやさ、ユニークモンスターって攻略手順分かっててても死ぬタイプのボスキャラって印象だったから

鉛筆騎士王：いや、倒したのは事実な訳だしサンラク君が見落としただけでオルケストラ超弱体化ギミックがある可能性もなくはない

サイガー０：というか、今、あの……舞台に

ルスト：しっ

秋津茜：？

鉛筆騎士王：私くらいの一流になると同時並行で動くことくらい訳ないから

サンラク：悪事の効率も二倍！！

鉛筆騎士王：君を馬鹿にする効率も二倍！！

サンラク：抜かしおる

鉛筆騎士王：気になるのはオルケストラがウェザエモンみたいな一回きりのタイプか、クターニッドみたいな再戦可能なタイプかってことよね

鉛筆騎士王：とりあえずサンラク君ちょっと確かめてきてよ

サンラク：え、無理

サンラク：つーかしばらくシャンフロにはインしないかなって

サイガ－０：えっ

鉛筆騎士王：はぁ？

◇

「えと、あの、え、いん、引退……ですか……？」

「は？　いやいやいやいや、ちょっと別ゲーで気分転換しようかなって」

ジャスバもまだ開けてないし、ちょっと気になるゲームもあるし……一つのゲームを末長く続けるコツは程よく他のゲームに浮気することだ。実際オルケストラによる忖度ガードを食らったことで俺の中にあるシャンフロへのモチベーションは一時的にゼロ以下にまで下がっている。別のコンテンツをやればいいとかそういうレベルではなくタイトルロゴすら見たくないレベルだが、それでも情報自体は集めちゃうあたり俺の中でも比率がでかくなっているんだなぁと実感するのだが。

「息抜きだよ息抜き、そのうち復帰はするだろうけど今は……って感じ」

決して先にユニーク攻略されて悔しいとかそういうわけではない、どっちかというと「俺が苦戦してるモンスターを先に倒された」のが悔しいってところだ。いや本当、あの忖度ガードは激萎えした……やっぱり俺が気づいていなかっただけで何らかのギミックがあったのだろうか。

考えられる可能性としてはサイナを劇場内に持ってきたことで「俺」の動きが露骨に変わったことだが……ううむ、思ったより未練タラタラだ。やはりここら辺で一度スッパリと気分転換しないとダメだな。

「そ、そうなんですか……その、具体的にはどれくらい……」

「んー？　具体的にいつまでとかは決めてないけどまぁ……一週間くらい？」

「い、一週間も……！！？」

流石はガチ廃人。俺が一週間、七日、百六十八時間もシャンフロか

ら離れる愚かさに驚愕しているのだろう。確かにガチ廃人から見ればそうかもしれないがこれでも俺は自称エンジョイ勢、ちょっとRTA的な事がしたくなったりコレクター魂に火をつけたりしてるだけで根本はエンジョイしていると信じている。

チャット内でも同様の事を書き込むと、リアルの方の天音　永遠が笑顔を振りまきつつ一瞬だが此方へ目だけ笑ってない睨み顔を見せる。

「(◔　ω◔　)」

『うわっは』

『うわっは？』

◇

鉛筆騎士王：うわっ腹立つぅー！！！

サンラク：これ自分がどんな顔してるのか分からないのが難点だな

鉛筆騎士王：(◔　ω◔　)

サンラク：どうしたいきなりそんなマヌケヅラして、頭おかしくなった？　通常運転？　車検行って来いよ

鉛筆騎士王：腹立つぅぅー！！！

◇

笑顔が引きつってるぜ司会進行さんよ。
とはいえスパッと諦めた（自称）とはいえ、完全に冷静になったわけではなくユニークシナリオEXの攻略アナウンスというサプライズこそあったが寄り道しかけたレールを本線に戻したペンシルゴン達が「シャンフロにおける現時点でのレベル最高到達点」をグラフにしたものを解説したり（名前こそ出なかったが三人ほど【旅狼】所属のプレイヤーだった）、「プレイヤーに討伐されたモンスター記録」を解説したり（わぁ、蠍や百足に蜘蛛が出てきたけど一体誰が討伐したんだろう）、そんなプレイヤー進捗をホログラムで出現させつつトークを続けていたが、聞いていたはずなのになぜか話半分で耳から抜けていく。

「（、ン）」

「ものすごく、フラットな顔に………！！」

「え、そんな顔してた？」

「え、いいぇ、その、表示されてた顔文字、なので……」

いやだからどんな………ああ、気づけば舞台イベント自体が終わりに近づいている。トークを〆始めた三人組を眺めつつ、しばらくのバカンスは一体何をプレイしようかと思いを馳せる。危牧とか？　なんか最近超巨大災獣が追加されたって風の噂で聞いたけど、落雷地獄ってヤバくね？　クソキリンから雨を抜いて破壊力に特化してやがる……確か牛だっけ？

いやいや、やはりここは幕末で物騒な休暇を過ごすのも悪くはないかもしれない。レイドボスさん感謝の千人斬り事件は聞き及んでいる。それを発端として大量のアイテムが質屋に流れて大規模打ち壊し祭りが始まりそうと京極が言っていたしな、デュラハン氏の動向が気になるところだが……いややっぱあの人はＳＹＯ－ＧＵＮに挑んで打ち首になってそうだ。

いや待て待てここはやはり初志貫徹、ジャスバをやるべきだろう。ジャスバは当初、日本での販売を担っていたメーカー、ホビットワークが弱小だった事もあって吹き替え声優が主人公から隠しキャラに至るまでクッソ激烈な棒演技な事で有名だ。その後、アメリカでの大ヒットを受けてギガントスパイク・ゲームスがジャスバの権利を買い取ってマトモな吹き替えになった、という歴史がある。故にごく僅かな期間……なんと一ヶ月間しか販売ルートに乗らなかった幻の第一版Ｊｕｓｔｉｃｅ Ｖｅｒｓｕｓは超プレミア価格で取引されているのだ。棒演技に滑舌の悪さが組み合わさった事で今も本当は何を言っているのか判明していない迷台詞「チャカ丼百人時代ホーイ！！」は是非動画ではなく現物で聞いておきたい。

「あ、あのっ」

「んえっ？」

「その……イベント、終わっちゃいましたけど……つ、次はどこに……行きます、か？」

マジか、完全に気づかなかった。道理でチャット欄が豪速で流れていったわけだ、本人がいる目の前で既読無視したのか俺。ははははウケる。

「そうだなぁ……他に寄りたいブースとかあったかな……あ、」

「?」

そういえば、あそこに行こうと思ってたんだ。

栄光を踏めるのはただ一人（前書き）

※サブタイ修正、毎度毎度替え歌でも歌詞を使ったらアウトだと何故忘れるのか

詳細は伏せるけど作者は某所で今話でのサンラクと同じ状態になったことがあります

栄光を踏めるのはただ一人

「流石にトイレまで優待チケット、とはいかないか……」

個室も含めれば百は軽く超えるトイレの全てに平均十人程度の列ができているのは人間がどれだけ科学を洗練させても排泄行為からは逃げられないという物質的生命のカルマを暗示しているようだった。

さて、それはそれとしてトイレはあくまでも寄り道。トイレに首を突っ込んでピクリとも動かない長蛇の列に消えた玲さんを待つとしよう。

二十分後。

「本当に、本当に、もう、あの、お待たせしてすいませんでした……っ！！」

「いや、あー……うん。玲さんが並んだ時の二倍くらいに伸びてるから仕方ないってのは分かるよ……」

苦行に勤しむ修行僧か何か、という雰囲気を漂わせる女性方々からそっと目を逸らしつつ俺は玲さんへと返す。ちょうど昼飯を食べ終わって催してくる頃合いなのだろう、イベント会場ではどれだけ僅かな尿意でもトイレには最優先で行けという言葉の意味が理解でき

た。

「それで、あの、何処に？」

「ああ、ここだよ」

「スーパーノヴァ……あ、入場する前に、楽郎君が言っていた」

「そうそう、ギャラクシートラベラーってゲームを作ってるところ」

あんなゲームの土台から整形しまくったアプデを見せられては気になってしまうものだ。玲さんを俺の都合で引っ張り回すようで申し訳ないが、見た限りでは玲さんも興味があるようなのでここは経験者である俺が案内していこう。

「ギャラクシートラベラー、プレイヤーは宇宙船の船長になってゴールのない宇宙を旅するゲームなんだよね。アプデ後はやってないから分からないけど、昔は……まぁ、控えめに言って起伏のない感じというか加点方式より減点方式の方が評価が簡単なゲームだった、かな」

「ど、どのようなゲームなんでしょう……？」

「んー、アプデ前の段階ではシミュレーションゲーム寄りだったかな。宇宙人とコミュニケーションを試みたり、未開の惑星をテラフォーミングして資源を得たり……ただ大半は宇宙を彷徨いながらＮＰＣのクルーの好感度調整」

「それは……ええと、好きな人は好きそう、ですね？」

「まさしくそれなんだよ」

「え？」

おそらく俺の推測はそう外れていないだろう、スーパーノヴァ社があの減点方式で赤点を狙えるギャラトラに力を入れているのは他でもない、熱心なスキモノがいたからだ。

「ギャラトラは最近じゃ珍しい課金要素のあるゲームなんだよね、課金タイミングがスタート地点だけだからアレだけど」

昨今サービスが行われているゲームの大半はソフト自体のお値段とユートピア社がＶＲシステムをオンラインに繋ぐ際の通信料からプレイ時間に応じた割合でメーカー側に金が行くようになっている。寝てても覚めてもゲームをしているプロゲーマーなんかは所謂「通信マウント」も込みで一月に一万は支払うのがデフォ、とカッツォに聞いたことがある。

一昔前のソシャゲで色々あったがためにゲーム内課金が厳しくなった、と武田氏がしんみり語っていたがゲーム内課金そのものが消えたわけではない。

そして、デスペナの関係から課金する意味合いの薄いギャラトラであっても課金そのものが消えることはない。メーカーの儲けになるから？　それもあるだろうが最たる理由は「課金システムが今もバリバリ現役で利用されているから」だ。

「ギャラトラのユーザー層はだいたい三種類だ。無課金ユーザー、焼け石に水レベルの微課金ユーザー、そして最低十万はぶっ込んで強くてニューゲームする超重課金ユーザーさ」

そう、それこそがギャラトラ最大の謎。このゲームには力と時間を金で買う……資本主義（マネーゲーム）における強者が異様に多いのだ。スタート地点である地球から大艦隊が出航しているのがゲーム的背景ではなく百万くらい投入して艦隊を揃えた重課金プレイヤーだった、なんてザラだ。

「このゲームでは艦長（プレイヤー）が死ぬか、船が撃沈するかでゲームオーバーになる。その場合、デスペナルティとしてそれまでに培ってきた全てがロストする。課金要素も問答無用で白紙に戻る」

「そ、それは……」

「つまり死んだら一億課金してても全部消えるんだよね、だから無理して課金する要素は無いはずなんだけど……」

課金は無くならないんだなぁ……って。

アプデ前から「艦隊宙海戦」を個人間で出来る、と噂されていた連中が果たしてアプデ後はどうなったのやら……それを確かめるためにもブースに行きたいというわけだ。

心なしか優待チケット持ちが多い気がするスーパーノヴァ社のブースに到着、ふと入り口に何やらマシンが置かれていることに気づく。

「シャンフロの所と同じやつか……」

ログイン端末だ、何か特典があるのだろうか……ッハ！？

「どうし、ましたか？」

「…………いや、成る程ね」

「……？」

疑問符を浮かべる玲さんを他所に、俺はログイン端末の一つへと近づく。それに気づいたのか、他の端末の前で動かない者達がじろりとこちらに視線を向けた。

「あの……」

「玲さん、あそこを見てみなよ」

「ええと……何か、カウンターが回ってます、ね？」

そう、そして恐らくアレはこのブースに来て端末でログインした人数だ。今は……49912から猛スピードでカウンターが回っている、そう遠くないうちに50000人に届くだろう。

「これが古典的競技、キリ番ゲッターか……」

武田氏の交友関係は嘘がなければ石油王からご隠居まで多岐に渡る。その中でもあの武田氏をして聞いたことしかないという、キリの良い番号を己のものとするためにコンマ以下の世界での駆け引きを行う21世紀初頭の電脳競技「キリバンゲット」……成る程、この緊張感は悪くない。

「キリ、ばん？」

「ここにいる人達は自分が五万人目になるのを狙ってるんだよ、多分キリ番は何か報酬があるんだと思う」

でなきゃ敏腕若社長といった様子のお兄さんから盆栽育ててそうな

おじいちゃんまで飢えた獣のような目をしている筈がない。すげぇなギャラトラ、プレイする年齢層が幅広すぎる。

「一般の方のマシンは大体二分で次の人に代わる、全部で三十台あって優待チケット側は十五台……」

４９９５０を超えた、次のサイクルで勝負が決まる。

「きゅ、４９９７０を超えました……！」

「――――ここだ！」

優待チケット側の端末にスタンバイするギャラトラユーザー達が一斉にログインパスワードを入れ始めた！　ああっ！　隣のおじさんが多分パスワードを押し間違えて膝から崩れ落ちた！！

「若者のタイピング速度をナメるな……っ！！」

この端末、規格がシャンフロの所にあった奴と同じだから気づくことが出来た。この端末は十秒以上同じ画面のままだとトップ画面に戻される、だからタイミングを先読みした上でトップ画面に戻されるギリギリの瞬間に………ログイン！！！

「結果は！！」

『貴方は４９９９９人目の入場者です！』

「だぁーーーーーーーーっ！！！」

膝から崩れ落ちた。

栄光を踏めるのはただ一人（後書き）

・ギャラクシートラベラー
その真の姿はブルジョワジー達による札束での殴り合いである。
人を顎で使う事に慣れきった財閥の会長（武田氏の知り合い）や、
歴史の資料に先祖の名前が載ってるような一族のご隠居（武田氏の
知り合い）達が駄菓子感覚で１００ｋとか叩き込んで巨大戦艦を建
造、大船団で宇宙を開拓している。
何処かの社長がどハマりしたのを話の種として武田氏が色んな人に
話した結果、何故かゲームとは無縁そうな方々がどハマりの連鎖を
していった。

金属的性質を保有する軟体侵食生命体が導く先（前書き）

成平

「余韻」に浸っていたら更新が遅れてしまいました、申し訳ない……

金属的性質を保有する軟体侵食生命体が導く先

妖怪1足りない。
こいつの恐ろしいところはありとあらゆる分野に現れるという点だ。リアルとゲームの双方に影を見せ、そっと犠牲者の肩を叩いて笑顔で絶望を浴びせかける……鬼畜生すら生温い、摂理や運命の代理にして人の苦しめ方を熟知した死刑執行人めが……ッ！！

「急募：妖怪1足りない討滅戦、火力募集」

「流石に勝ち目がないのでは……」

くそったれめ、これだから１００％以外は信用ならないんだ乱数の女神に魂を売り渡した妖怪がよぉ！！

『ニアワン！　プレイヤー：サンラク様の現在のセーブデータに「ブラインドドラゴン」が進呈されました！』

え？

「…………何でもかんでもベストな結果ばかりを追いかけていても良くないよな、ベターな結果だからこそ見えてくるものもあるというか、さ」

「盲目竜（ブラインドドラゴン）……竜、龍、目……あぁ、画竜点睛」

一生ドラゴンは紙の中ってか、もの凄く遠回しに馬鹿にされてないかこれ？

と、とはいえ静かにだが苛烈に繰り広げられたキリ番ゲッター達の戦いは前座に過ぎない。当たり前だが本命はブース内に入ってからだ。

ワイワイと身内ノリのオーラを漂わせて盛り上がる他のキリ番ゲッター、もとい優待チケット持ちのおじさま方を他所に俺達はスーパーノヴァ社のブースに入る。

シャンフロブースが地獄の混雑っぷりを見せているとはいえ、他のブースがガラ空きかといえばそういうわけでもない。人を避けながら進まないといけないくらいには混雑した人混みの中、玲さんとはぐれないように距離を合わせつつもブース内を見て回る。

「うお、マジか第三銀河のマップ完成したのか。あんな苦行ようやるな……あ、説明するとギャラトラじゃマップ埋め作業ってマッピングしたデータをスタート地点である地球まで持ち帰らないと反映されないんだよね」

つまり苦行しに行って苦行しながら帰る、精神構造がタフじゃないと出来ませんよこれは……しかもＮＰＣの襲撃とか宇宙災害とかだけじゃなくて宙域マップ独占のアドバンテージを維持したい重課金プレイヤーが襲ってくることもあるという。ギャラトラにおけるマップ埋めプレイは苦行で煮込んだ苦行に苦行をトッピングしたようなものなのだ。

過去にはとある恒星系までのマップデータを巡って重課金プレイヤー三つ巴の大艦隊戦が起きたこともある。趣味に本気になる、とは言うが本気の性質が一般的なゲーマーのそれとは違うんだよなギャラトラ、減っていくリソースを見ると他人事でも寒気が止まらないんだよ。ハウマッチを聞くのはやめようね……

「特にこの第三銀河は俺がやってた時の時点でブラックホールが三

つくらいあったから気を抜いた瞬間ゲームオーバーとかザラだったって聞いてる」

「なんというか……シビア、なんですね？」

「でもこれ修正前の情報だから今どうなってるかは分からないんだよね」

少なくとも敵宇宙船を一撃で貫ける艦載砲の有無で難易度は大きく変わってくる、アプデ前のギャラトラ艦隊戦における最強の攻撃手段は火船（自爆）と衝角突撃（ラムアタック）だ。そりゃスペインもビックリするだろう、文明が進んでるようで退化してるんだもの。

「わ、これ凄いですね……二十五万も、するなんて……」

またか、またなのかスーパーノヴァ社。何故お前達はゲームの特典として意地でも個人用プラネタリウムマシンを付けようとするんだ、そのプラネタリウムマシンに対する情熱はなんなんだ。そして何より限定百個生産で何故既に三十個売れてるんだ……っ！

ウキウキ顔で残り七十個になったプラネタリウムマシンから一つ持って行ったオジサマを注視しそうになる眼球を苦心してそらしつつ、さぁ何を見ようと辺りを見渡して……ふと、玲さんが何かを見ていることに気づく。

「何か気になるものがあった？」

「あ、いえ……」

「ギャラクシーくじ？」

成る程、五百円で一回引けて……っていうやつか、コンビニとかで見かける奴より気持ち景品が豪華な感じだろうか。一等はやはりというかプラネタリウムマシン、もしかして在庫余ってるとか？　いや違うなこれ最新型だ……

「試しに引いてみる？　こういうのに金突っ込むのも祭りの醍醐味だし」

「そ、そうですねっ！」

そして俺はこういうのにコインを使わない派の男、くじ引きは複数買いが一番なんだよなぁ！　乱数的にもなぁ！？　逝ってこい俺の二千円！！

「さぁこい当たり！！」

・侵食生命バドゥガモス君人形
・伝説のゴールドバドゥガモス君人形
・神秘のシルバーバドゥガモス君人形
・１／１５００スケール完全再現「バドゥガモス・メテオ」

「バドゥガモス………っ！！！」

誰がバドゥガモスでジャックポットしろと言ったよ……！　おかしいな、ここに来てから妙な幸運乱数を引きまくってる気がするぞ。
ちなみに侵食生命バドゥガモスとはギャラトラに出現するイベントエネミーであり、基本的に船長の死か船の沈没でゲームオーバーとなるこのゲームにおいて数少ない特殊ゲームオーバーを齎すイベントだ。まぁ名前からして大体予想できるが、バドゥガモスによって

沈められたプレイヤーは「バドゥガモス侵食体」となって他のプレイヤーを襲うことが出来る……要するにゾンビパニック。
だがバドゥガモス侵食体が出現した瞬間、周囲の宙域にいるプレイヤー達に警告が来るので大抵は袋叩きになって終わるんだが………何をトチ狂ったのか、割と需要がありそうな宇宙人やナビゲーター的ＡＩキャラを差し置いてギャラトラの公式マスコットキャラクターにまで成り上がったこのメタルなクラゲが今、ギラギラに輝きを放って俺の前に並んでいた。あと割とデカめのバドゥガモス隕石……ふふふ、バドゥガモスを満載したこれにぶつけられて突然な死を迎えたギャラトラプレイヤーは多いだろうな……俺も二回くらいやられたから。

「玲さんは何が当たった？」
「完全再現、ＡＲ観測第二銀河……だそうです」
「お、三等だね」
うわ、これＶＲシステムの本体に繋げておくと情報更新するのか。地味にハイテクだ……
「あの……私が、持っててもその、あれですし……いりますか？」
「いやいや、見てなよ玲さん追加で回すこの一回で大当たり引いてみせるから……」

・幻のプラチナバドゥガモス君人形

「……玲さん、いる？」

「え、あぅ、あの、いいんですかっ？」

「まぁほら、俺はバドゥガモス君いっぱいいるから……」

「あ、えと、ありがとうございますっ！」

バドゥガモス君でこうも喜ばれると逆に申し訳ない気分になるんだが……まぁいいや、実際よく見てみれば味のある顔をしてると言えなくもない。クラゲの顔がどんなものか知らないけど。

「そろそろ他のブースに行く？」

「えと、そうですね。まだまだ……いっぱい、見て回りましょう」

……最後にもう一回だけ。

・復刻のダイヤモンドバドゥガモス君人形

「なんだこのバドゥガモス祭りは……」

「そ、それはっ！！？」

「え？」

いきなり後ろにいたおじいちゃんが大声を出して俺の掌で表現しづらい軟体的ポージングを取るダイヤモンドバドゥガモス君に見開いた目を向ける。

「ダイヤモンドバドゥガモス君人形……それも、初期ロットと同型……！？　馬鹿な、型は既に破損した筈………完全再現したんか？　シークレット枠はプラチナバドゥガモス君ではなかったと……？き、君！　マナーとして良くないのは分かっているが、買い取らせてもらうことは出来ないかね！？」

「え？」

バドゥガモス……お前、一体……！？

掌の上に輝くダイヤモンドバドゥガモス君は何も語らない。だが、照明の光に照らされたその触手は人の魂すらをも絡め取るような怪しい輝きを放っていた……

金属的性質を保有する軟体侵食生命体が導く先（後書き）

・バドゥガモス君人形について

ギャラトラにおけるバドゥガモスはあくまでもプレイを妨害する敵キャラでしかない、そう考えられていたのは既に過去の話である。

バドゥガモス・メテオの中核をなすゴールド・バドゥガモスを「鹵獲」したとあるプレイヤーが発見したバドゥガモスの秘密。

そのプレイヤー……大手自動車メーカーの会長は不幸にも現実での心筋梗塞で亡くなってしまったが、死ぬ直前に遺した言葉はどこかマンネリを感じ始めていたギャラトラユーザー達を震撼させるだけの力があった。

「異彩のバドゥガモスは我々をどこかに導いている、探せ」

これがバドゥガモス学会発足の嚆矢となった事件である。そして時は流れ、とあるプレイヤーがリアルで販売されていたシルバーバドゥガモス君人形を偶然プラネタリウムマシンが読み込んだ事で第二の事件が発生した。

そう、ギャラトラ内とリンクしたプラネタリウムマシンが銀のバドゥガモス君人形に内蔵されたマイクロチップを読み込んで表示したのは、未知のマップへと導くロケーターであった。

ここに来てバドゥガモス達が示す「何か」を求めてギャラトラユーザー達は再び熱意の炎を燃え上がらせた。だが不幸な事故によって型（データ）が消失してしまったダイヤモンドバドゥガモス君は市場にも流れることがなく、またゲーム内でもダイヤモンド・バドゥガモスの出現条件は不明のまま………だがＪＧＥの地にダイヤモンドの輝きが蘇った時、ギャラクシー・トラベラーの歴史は風雲急を告げる。

バドゥガモスってなんだよ（作者も知らない、多分コウモリだけが知っている）

帰路とて道ならば躓きの石もある（前書き）

うおおおおお！　更新遅れてすまぬァーっ！！　大体歴戦王のせいだーっ！！　責任転嫁したけど作者のせいですホントごめんなーっ！！！

あとＴｗｉｔｔｅｒ始めました、活動報告の正解はＩＤが該当カードの型番です。正直わかりづらかったなと反省してます

多分硬梨菜で検索すれば出てくるかと……

帰路とて道ならば躓きの石もある

立てられた五本の指はきっと５ｋとかだったんだろう、きっとそうなんだろう。そう信じて断腸の思いで転売を断った俺を嘲笑っているのか微笑みかけているのか……表情の読み取れないダイヤモンドバドゥガモス君をそっと鞄にしまい直す。転売は、良くない……っ！

それはそれとしてスーパーノヴァ社のスタッフさんからＡＲ対応のヘッドセットがあれば擬似的なプラネタリウムマシンの代用にできる、という助言を頂いたりと色々と実りの多い時間だった。アレを使えとおっしゃるのか神よ……

「そろそろ終わるね……」

「そう、ですね……楽しかった、ですね」

「そりゃもう」

財布はそれなりに軽くなったけど、楽しい楽しくないで言えば間違いなく前者だった。ダイヤモンドバドゥガモスが排出される事実に資本主義ゲームの強者たちに激震が走っていたのが印象深い……とはいえどんなイベントもいつかは終わってしまうものだ。秋の日は鶴瓶スープレックス、いつの間にか太陽もほとんど沈みつつある。

「特に後夜祭とかあるわけじゃないし、もう帰っちゃう？」

「そう……ですね、帰宅ラッシュに……巻き込まれるかも、ですから」

朝見たアレの逆バージョン、進んで混ざるには気が引ける……と言うわけで少し早いが帰宅することに。同じ考えの人はちらほらといるようで、閉幕までに一つでも多くのブースを曲がろうとする者もいれば俺たちと同じ方向に歩いている人たちもいる。

「岩巻さんには感謝しないと、今日は楽しかった」

「そ、そうですねっ！　私も、とても……はい、とても楽しかったです」

それは何よりだ、後半は俺の都合で振り回していた面もあったし。僅かな安堵を感じつつも来た時よりも随分と重くなった鞄やらを持って入場ゲートをくぐったその時、ポケットに入れていた優待チケットデバイスがピコンと音を立てた。

『今日はジャパン・ゲーミング・エキスポに来てくれて本当にありがとう！　貴方のヴィジットボーナスを計測するね！！』

ホログラムで現れたガチ肉食マスコットの周囲にシャボン玉の中にゲームメーカーのロゴが入ったような球体がいくつも現れる。ユートピア社にロワイヤル社、スーパーノヴァ社に……今日一日で結構回ったなぁ。

『計測完了！　貴方のヴィジットボーナスは合計７５ポイント！　ノルマたっせーい！！　達成報酬として本日訪れたメーカーがリリースするゲームで使用できるアイテムコードをプレゼントするね！！』

アイテムコード？　幕末とかならまだ分かるがリアルとゲームとを

完全に切り離したシャンフロとかにアイテムコードなんて概念が……あるぅ！？

「玲さんこれ、シャンフロで使えるアイテムらしい」

「ひゅ……そ、そのようでっすね！　えと、フィジカル……リモデルパス？　肉体改造？」

物騒というかシャンフロで肉体改造という単語が出てくることが怖いんだが。これが幕末なら鼻で笑うところなんだけどな……仮に全身サイボーグにしてもコアに団子の串が突き立てられて爆散しそうなのが幕末だ、唯一死んでも引き継がれる衣装に金かけた方が有意義だぜ。

「現在使用不可、って事は何かの条件がゲーム内で進まないといけないって事なんだろうけど……」

「プレイヤーは、神代に関わる存在……ですから。その辺りの、解放でしょうか……？」

疑わしきはリヴァイアサンか……まぁ暫く触れるつもりはない、今の俺はモチベーションのベクトルを既に定めている。スーパーノヴァ社のブースでちらほらと聞こえてくる話の中で、近々大きな戦争が第三銀河で起きるという話が聞こえてきたのだ。

第三銀河といえば俺のデータが最後にセーブした場所だ、つまり直接参戦するにせよ観戦するにせよホットスポット最前線にいるということ……これは行かなきゃ損ってもんだぜ。質屋に入れる嫁はいないがシャンフロに費やす時間を使う価値はある。

「結構、色々使えそうですね」

「そうだね……まぁとりあえず帰ろっか」

「そう、ですね」

こうして、俺達はメガフロート・サイトを後にして帰宅するべくリニアの駅へと向かうのだった――

……

…………

………………

……………

と、いけばよかったのだが。

…………

……

よーし待て、落ち着け。状況を整理しよう。
まずリニアに乗る前に玲さんがお花を摘みに行った、その際に荷物があっては大変だろうと俺が玲さんの荷物を預かった。
で、待ってる間ちょっと暇だったので駅の売店で無糖コーヒーを買って微糖にすればよかったと若干後悔していた。あと冷たいやつを

買ったのも少しばかり後悔している。いやこれはどうでもいい。問題はお花畑から戻ってきた玲さんが明らかにナンパっぽい男に絡まれてるってことだ。

「いや……まぁ玲さんくらいならナンパも来るだろうけど」

何も今じゃなくても……という気持ちが大きい。玲さんがナンパに乗るつもりはない、というのが分かっているからこそ困った様子の玲さんを見てるだけ、というわけにもいかない。

なんというかザ・ナンパというかナンパしそうな顔してるというか、こう……ナンパ男の彼には失礼かもしれないが、ナンパしてそうだしてる顔だ……

「あの、私リニアに……」

「いやいや、リニアなら少し遅れても問題ないって。ほら、そこのカフェでちょっとお話ししようよ」

手口が古すぎて古典文学に使えそうだぜ。いやナンパの最新版とか知ってるわけじゃないが……さてどうしようか、玲さんが困っているのは見れば分かる。しかしこんな時の対処なんて知らな…………いや？

「行けるか？」

でもこれでいいのだろうか……いやだってクソゲー式のナンパ対処術だぞ？　今から岩巻さんにナンパから主人公(ヒロイン)を守るイケメンの対処とか聞く時間はない……ええいままよ。

「ほら、ここで会ったのも何かの……」

「やぁ玲さん、もしかして知り合いだったり？」

「楽郎君っ」

さて、話しかけてしまった。ナンパ男の視線がこちらへと向けられる。推し量る目だ、玲さんとの関係性を探っているのだろうか？　仮に彼氏彼女の関係だとしても自分の方がマウントを取れるかどうか考えていそうだ。だが残念だったな、今の俺にインストールされているのは漬鮪サンラクの魂！　ピザの悪夢を回避するために高速で進行する一年間の中で一度だけ発生するナンパからヒロインを守るイベントの対処法！！

「あのさ、今この子と話してるから邪魔しないんでほしいんだけど？」

「玲さん、次のリニアがそろそろ来るっぽいよ」

「え、あ、はい」

「よしお前、あんまり古臭いナンパしてると見た目までダボっぽさに引っ張られるぞ？」

「は？　何、喧嘩売って」

「ところで玲さん夕食とかどこかで食べる？　リニア内の購買でもいいけど何処かファミレス寄るってのもアリだと思うんだけど」

「え、え？　あ、はい、そうで――」

「おいそこのナンパメン、お前のナンパは軽いんだよ渋みが足りない。なんでか分かるか？　はいシンキングタイム」

「はぁ？　なんだこい「はい時間切れ正解は苦味が足りない、残念賞だこの飲みかけのコーヒーをくれてやろう」は、お？」

一秒すらもロスになる、運命をピザの線路に乗せないためにラブ・クロックのプレイヤーは言葉を常に連結させる。お前の返事は聞いてない、スキップ出来ないなら会話を連打するしかねーんだよ……！！

「じゃあなパンピー、それ飲んで苦味を知っとけよな」

よし乗り越えた、乗り越えたよな？　玲さんに目配せしてさっさとこの場を………

次の瞬間、頭頂部から冷たい感触。そして、左目の視界を黒い液体が埋めた。

帰路とて道ならば躓きの石もある（後書き）

Q．なんでこんな更新遅れたの？

A．ヒロインちゃんがナンパされる絵を想像するのに壮絶に苦戦したから

斎賀流護身術「骨抜」（前書き）

あつがなつい

斎賀流護身術「骨抜」

顔を伝った黒い液体が顎から滴る、やけに冷たい、どうやら頭からコーヒーをぶっかけられたらしい。コン、と頭頂部にぶつけられた缶がやけに小気味のいい音を立てた。

「…………」

「何カッコつけてんだよ、ヒーロー気取りか？　あ？」

成る程、成る程成る程成る程…………ああ、そうですか。
いや確かに俺も悪かったかもしれない、いくらナンパマンだろうと初対面の人間にやっていい態度じゃなかったしそもそもクソゲーをリアルに出すなんてクソゲーマニアとして褒められた行いではなかったかもしれない。まぁそこらへんは兼ね合いなので厳密には武田氏に聞いた方がいいのだろうか？　とりあえず頭がやけに涼しくなったせいか驚くほどに冷静だそう冷静ソー冷静ソークール、カフェインって皮膚からでも吸収できるもんなのかな？　頭にかけられたから脳みそに素早く届いてそうだが頭蓋骨も貫通してんのか？　いやというかまぁ落ち着けこの程度リスキルや死体撃ちに比べたらよっぽど生ぬるいじゃないかコーヒーは冷たいけどなハハハハハハハハ

「これ何か分かるか？」

「は？」

お前の目を潰すための人差し指と中指だよ、いや違う。

「ピースサインだよ、俺はすぐにおててが出ちゃうお前と違って平和主義なんでなぁ？　笑って許せるんだよ、笑って許すんだよ」

頭ポカポカしてきたがこんなものは慣れたものだ、たかがコーヒーぶっかけられたくらいであーもう服シミだらけかよ……ちょっとだけなら、いやいやダメダメ、後で憂さ晴らし天誅すればいいだけだろ。

「気は済んだかチンパンジー？　だったらさっさと動物園に帰れよ。ここは人間の交通機関だ、脱走した脳みそチンパンジーが来るところじゃない。なんならお土産にバナナを買ってやるよ」

「こ、このっ……！」

やんのかコラ、髪の毛毟って散切り頭にして文明開化の音響かせてやろうかァ！？　だが残念だったな俺は今顔から火が出そうだが注目を集めまくったおかげで駅員さんがこちらへと向かってきている。真の平和主義者は拳なんて使わない、法で殴るのだ。つまり六法全書は武器。

眉間に寄りそうなシワを無理やり固めた笑顔で消し去り、今にも理性の鍋から吹き零れそうな沸騰する感情を宥める為に煽るようにナンパマンへと語りかける。この際一発くらい殴られることも覚悟してやる、エア六法全書を装備した俺は攻撃力が高いからな。

「おいおい顔真っ赤だぞ、猿が赤くするのは尻だろ？　汚ねぇブリーフを脱いでみろよ、警察に通報しながらケツの色を見てやるぜ」

「ブッこ」

振りかぶられた拳、こちらは既に頬で受ける覚悟を決めた。だが、

事態はすぐ真横にいた人物によって力づくの終わりを迎える。

「――――正当防衛です」

「ぼぎゃが！？」

ゴギョギョッ！！　とでも形容できそうなあまり聞きたくない音が響く。あまりにも最適化され過ぎて玲さんがナンパマンの背後に回り込んだことにこっちの理解が及ばなかったくらいだ。

玲さんがナンパマンの振り上げた拳を捻るように掴んで、肩にもう一方の手を当て、ちょっとヤバめの方向に捻り上げたことで奴の腕が伸びた？　ように見える。そしてそれはどうやら当たらずとも遠からずといった様子で……

「お、折れっ、骨がぁぁあ！！」

「折れただなんて、大げさな方ですね」

普段の姿からは想像もできない冷ややかな声と、玲さんの姉二人を思わせる鋭い眼差しが右腕を抑えてのたうち回るナンパマンへと向けられる。いやゲーム廃人の方の斎賀姉の素顔は知らないけど、フルダイブのアバターってリアルと違う顔にしても中身は一緒だから印象そのものはあまり変わらなかったりするんだよな……一番極端な例は秋津茜。

「関節を外しただけです、私は今とても冷静ですから……念のため左腕も外しておきましょうか」

「ひっ」

「あー……もういいよ玲さん。タイムリミットだ」

肩、肘、手首の三箇所が面白いくらいプラプラしているナンパマンを見ていたらこっちもいつのまにか溜飲が下がっていた。それに関節を外されたナンパマンの様子に駅員さん達も駆け足でこちらへと来てくれた。

「良かったな、今日は警察と熱い一夜を過ごせそうだな」

「こ、このっ」

「はい大人しくしてねー、とりあえずこっち来て話聞かせてもらえる？」

「いだだだだ！　折れぇっ！　触んなぁ！！」

だから折れてないのに……と玲さんがポツリと呟いたのが聞こえたが、いや三箇所同時脱臼は普通に痛いと思うんだが……まぁいいや。とはいえ俺たちも当事者ではあるのでナンパマンを拘束している駅員さんとはまた別の人がこちらへと話しかけてきた。

「あー、君達も一応お話聞かせてもらえる？」

「え？　それは構わないですけど、出来ればアレとは別の場所だと嬉しい、です。あとそろそろリニアが……」

「ん、そうだねちょっと名前とか書くだけだからすぐに済ませますんで。じゃあこっちに」

大丈夫だよね？　高校生活に波及しないよね？

十分後。

「あーもしもし？　うん、多分電話きたと思うけど厄介なのに絡まれてさ。え？　あー俺は手は出してないよ、頭からコーヒーぶっかけられたけど慰謝料っつーか洗濯代は貰ったから……あん？　瑠美に代わるって？　え、何？　シミは速やかに洗濯しろ？　いや洗濯っつったってさ……は？　銭湯行け？　え、最近の銭湯ってコインランドリーと融合してんの……！？」

「……はい、はい。少々護身の類は使いましたが……あ、違います姉さん砕惨(さいざん)じゃないです骨抜(こつばつ)の方です……はい、それでその、少し遅くなるので電話を……え？　泊まってもいい？　いやあの明日も学校ありますし……え、ラッっ！！？　姉さん！　ラブでもカブでもそんなところには泊まりません！！！」

互いに電話を切ったのはほぼ同時のタイミングだったらしく、背中合わせに別々の相手と電話していた俺達の視線がぶつかる。

「えと、そのですね……」

「あー、玲さん。俺ちょっといも……身内に脅されちゃって、ちょっと寄り道しないといけなくなったから……」

「あ、いえっ！　元を辿れば、その、私が引っかかったせい、です

し……それに、その手を出しちゃったせいでこんな、大ごとに……
…」
「んー、そこに関してはむしろちょっと感謝してると言うか……まぁ、大声じゃ言えないけど見ててスカッとしたのは事実だし、ありがとうと言うかなんというか……」
「いえ、あの、その……こちらこそ、間に入っていただいて……」
沈黙が続く。このままだと謝罪と感謝で無限ループしそうなので無理やり話を進めることにする。
「そう、で、話を戻すんだけど俺ちょっと今から銭湯に洗濯しに行けと言われちゃってさ……玲さん、別に先に帰っても……」
「え、あう、あの、その……わ、私も！　ご一緒してよろしいで、しょうか！？」
「へ？」
何やら、おかしな流れになってきたぞ？

斎賀流護身術「骨抜」（後書き）

まさかのエクストラターン

鉄人なれど鉄ならず、冷やし熱せば崩すは身持ち（前書き）

ゼウスを引き当てたことですべての神石を手に入れました、実質全てのライドウォッチを手に入れたのと同義なので今日から僕のことはグランド硬梨菜とお呼びください

鉄人なれど鉄ならず、冷やし熱せば崩すは身持ち

よくわからない流れで玲さんと地図アプリを頼りに向かったのは「ハイパー銭湯「浮島」」という場所だ。ちなみにハイパーとついているがカテゴリ的にはスーパー銭湯である。
かつてスーパー銭湯現象の危機に際し、複数の企業が手を組む事で「最新のバスルームに慣れた奴らをさらに上から技術力で殴る」という超力技によって解決したこの場所では銭湯の他にも食事処、コインランドリー、ゲーセン、映画館、フットサルフィールド……いや見境なさすぎでは？

それはそれとして最新鋭のシミ抜きからアイロンまでを全て一機体のみで実行するとかいう家電量販店でもなかなか見かけない最新型の洗濯機に服を突っ込んだ俺は足早に浴場へ入り、身体を洗って温まった身体を水風呂の中に頭の先まで沈めて……

「ぐぼぼぼぼぼぼぼ（ぬおああああああああ）！！！！」

やらかした！　やらかした！　やらかした！
何やってんの俺！？　リアルで何やってんの俺！？　思い返したら頭の血管ブチ切れそうなくらい恥ずかしいんだけど！！　公衆の面前でゲーム中でも中々使わない痛い煽りしちゃったんですけど！！？
しかも！　よりにもよって！　玲さんが見てる前で！！　ダメじゃん！　リアルでもゲームでも同じグループに所属してる人の前でやらかしたんですけど！？　玲さんの口が一ミリスリップするだけで俺の社会的地位が微生物レベルまで落ちるんですけど！！

「びぼぼぶぼぼばぁぁぁーっ（ミトコンドリア）！！！」

※ミトコンドリアは微生物ではありません

胃の中でウニがスーパーボールみたいに跳ね回るような感情の爆発をどうにかするべく、俺はサウナの扉を開いたのだった……

◇

大衆浴場というものは家に檜風呂がある玲からすれば中々に新鮮なもので、勢いのままに楽郎に着いてきたものの当たり前だが男女別に分かれ、身体を清めてからぼんやりとした頭を冷やすべく水風呂に潜って……

「ばゃばばばばばばばば（ひゃああああああああ）！！！！」

冷ましてなお臨界点を下回らなかった感情が水風呂の中で大爆発を起こした。

やってしまった！　やってしまった！　やってしまった！　護身術の中でも割とグレーゾーンな技を公衆の面前で躊躇いもなく！　容赦もなく！　確かに自分を庇いに来てくれた楽郎がコーヒーをかけられた事で頭に血が上ったことは事実だが、それを差し引いてもあまりに浅慮だった。

しかも、よりにもよって、楽郎が見ている前でこの醜態。物騒で暴力的な女だと思われたに違いない、水風呂の中に溶けて消えた涙は悲しみか、怒りか……もうこのまま水風呂の底に張り付いてしまいたい衝動を生存本能が浮上させる。

「ぼばばぼ（もはやこれまで）ぼばば……っ！！」

胃の中に剣山が落ちてきたような手綱を握れない感情をどうにか沈めるべく、玲はサウナの扉を開いたのだった……

……

…………

……………

そして一時間が経過した。

「ぅぅう、頭痛い……」

サウナと水風呂だけを何往復もするもんじゃないな……だが胃の中のウニは喉に刺さった魚の骨くらいには大人しくなってくれた、コインランドリーにしちゃやたら高い金を支払っただけあって服の方もパリッパリだ。

「つーか一時間も……やべぇ」

これ確実に玲さんを待たせている、流石に遅れてごめんで済ませる

わけにはいかないだろう……コーヒー牛乳で許してもらえるだろうか。
他人の金で飲むコーヒー牛乳はさぞや甘いだろう、牛乳瓶を二本指に挟んで男湯の暖簾をくぐってエントランスに出る。さて玲さんは……

「「…………あ」」

と、そこでふと横を見たらちょうどのタイミングで女湯の暖簾をくぐって出てきた玲さんと視線がかち合い……そして俺の目は玲さんが両手に一本ずつ持っているフルーツ牛乳に向けられて。

「…………ぷっ」

「…………ふふっ」

どちらとも長風呂で、どちらとも詫び牛乳を買っていて、それでいて奇跡に牛乳のフレーバーだけは被らなかった。そんな偶然に俺と玲さんは同時に吹き出した。

「くくくくく……玲さん、せっかく二つ持ってるなら一つ交換しようか？」

「そう、ですね。せっかくですから」

ちゃっちゃと帰るつもりだったが、無理して今すぐ二本飲むこともないだろう。互いに笑いながらコーヒー牛乳とフルーツ牛乳を交換した俺達は、先ほどまでの災難の事なんて一欠片に至るまで忘れ去ってスーパー銭湯とは名ばかりの複合施設を楽しむべく歩き出すのだった……

「どうせなら夕飯もここで食べていっちゃう？」

「いい、ですね」

「うわ、無駄にレパートリーが多い……玲さんはどうする？」

「私は……その、楽郎君はどうします、か？」

「……これ無限ループじゃん」

「パンチングマシンがエラー吐いてる……」

「き、機材のトラブルですよね！？　私が壊したわけじゃ……ないですよ、ね？」

「俺の方からはなんとも」

「な、なんか遊び回ったせいか結構疲れてきたね……」

「そ、そうですね……」

「リニアは……あれこれそろそろ来るんじゃ？」

「は、走らないと次は三十分後では！？」

予想外の訪問とはいえ、「浮島」を十分に堪能した俺達は多少ダッシュしたもののなんとか地元へと帰ってくることが出来た。このまま徒歩で帰ってもいいがまたあんな感じのに遭遇してもたまらないと、俺たちは徒歩ではなくタクシー乗り場へと来ていた。

「もう夜だし、変なのに引っかかったのがさっきもさっきだからタクシーとか使ったほうがいいんじゃないかな？」

「そ、そうです……ね」

ドアを開いて客を迎える状態のタクシーの前でなにやら立ち尽くしていた玲さんだったが、何か意を決したようにこちらへと振り向くと歩いて帰るつもりだった俺へとこう持ちかけてきた。

「あの、もしよろしければ、楽郎君も……一緒に、その、いかがです……か？　いえっ！　その、途中までは同じ方向ですし、仮にそ

こで降りるにしても私も距離を稼げるというかその、あの」

「あー……いいの？　あの運転手さん俺だけ先に降りる、とかできます？　料金は当然払うんで……あ、オッケー？　じゃあ、お言葉に甘えても？」

善意が有り難い、とレディファーストで玲さんに先に乗るよう促し……ふぁ

「は、はい……へくしゅっ」

「だいじょ……えくしっ！！」

「「…………」」

なんだろう、この寒気は。楽しかった今日はここで終わり、何か波乱を思わせる明日が来ることを予感させるようなこの背筋を襲う寒気の正体は……

……

…………

……………

◆翌日

「風邪ねぇ、疑いようもなく」

「マ゛シ゛で゛す゛か゛」

「そりゃこの季節にサウナと水風呂往復した後に運動なんてしたらそうなるわよ、ニジーちゃんの様子見たら風邪薬買ってきてあげるから安静にしてなさい」

「息子の風邪はニジイロクワガタの次、っすか……あだまいだい」

「趣味の問題は自己責任、お父さんがカキに当たった時だってそうだったでしょう？」

「まぁ確かにあの時はトイレに篭ってる父さん放置して加熱調理したカキフライ皆で食ってたけどさぁ……あ、風邪薬と一緒にライオットブラッド買ってきて」

「白湯にしなさい、学校には連絡しとくから」

「え゛ぁ゛い゛」

◇翌日

「私の見立てでも風邪、ですね」

「ごほっ……です、よね」

「後で白湯と風邪薬を用立てるよう言っておきます、時に……夜分

遅くに帰ってきたようですが、済ませたのですか？」

「済ませて………？　っっっなぁ！！？　そんなことしてまっ……ごほっ！　ごほっ！！」

「おや残念……親類縁者に良い報告が出来ると思ったのですが。しかし玲、病床の身でそう取り乱すものではありませんよ」

「姉さん、誰のせいか分かってますか？」

「学校の方には連絡させておきます、今日は休んでおきなさい」

「………はい」

鉄人なれど鉄ならず、冷やし熱せば崩すは身持ち（後書き）

楽郎は熱から、玲は喉の痛みから

なお、ガラガラ声のヒロインちゃんからＪＧＥでの諸々を聞いた岩巻さんは大吟醸を開けた。開けたというか空けた。

『**お任せください、我々は常に完璧な仕事を致します**』（**前書き**）

うちのブローディアちゃん、脱いでくれないんだ……身持ちが固いのも可愛いね………

『お任せください、我々は常に完璧な仕事を致します』

知ってるか？　バカは風邪を引かない、ってのは厳密にはバカは風邪を引いたことに気づかないということらしい。
俺もゲームバカという点ではバカなので状態異常・風邪を無効化することができるのだ。
冷蔵庫の奥に秘密裏に保存しておいた（忘れていたとも言う）ライオットブラッドをこっそりストローで吸い上げながら、俺はVRシステムの電源を入れる。システムのスロットからシャンフロのソフトキューブを取り出し、代わりにギャラクシートラベラーのキューブをセット。静かではあるがほんの僅かな駆動音を立てながら読み込みを開始したのを確認しつつ飲み終えたライオットブラッド（無印）をゴミ箱に放り投げる……ホールインワン、実質健康体といって過言ではないだろう。

「さてと、始めますか」

ギャラクシートラベラー、ゲームにログインしてない間も時間が進行するからそのまま放置しておくとほぼ確実にＮＰＣが暴動を起こしてゲームオーバーになっている。なのでＮＰＣ全員をコールドスリープさせてから安全地帯でセーブするのが基本、最後にプレイした時の俺もそうしていたはずだ……

「あ、バドゥガモス………いや、やめとこう」

流石に昼寝して割と回復傾向にあるとはいえ、風邪でまだぼんやりした頭であの出どころ不明なライオットブラッド仕様のＭＲ対応ヘルメットを装着する勇気はない。オカルトに怯える姿は滑稽かもし

れないが、ことライオットブラッドに関してはオカルトでもジンクスでも信じた方が健全に楽しめるというのが暴徒の総意だ。
日和ったとも言うが、それでも正しい決断をしたと信じつつプラチナを除く通常、シルバー、ゴールド、ダイヤモンドのバドゥガモス君達を棚に並べておく。宇宙メタルクラゲが並ぶ姿は壮絶にシュールだが、あのダイヤモンドバドゥガモス君は見る度にお爺ちゃんの立てた五本指を思い出すのでそっと目をそらす。未練は心の隅に留めおくものであって、人生の真ん中に陣取っちゃいけないんだよ……
……
「っっし！！！　気を取り直せ！　いざや懐かしき茫漠の宇宙へ！！」

◆

と、意気込んだは良いがログインした俺を待っていたのはプレイヤー：サンラクの所有する宇宙船の船内ではなく、大型アップデートによる様々な変更を告げるウィンドウと特典諸々を知らせるウィンドウ、ウィンドウ、ウィンドウ………結果的にこれら全てに軽く目を通しつつ消化しきるまでに十分近くかかってしまった。だが流し見であったとしても目を通しただけあってアプデ後のギャラトラについては大体分かった。

とりあえず大型アップデートによって最も変更が加えられた項目は三つ。
まず一つ目はプレイヤーの家であり武器であり船であり……なにより資産である宇宙船について。アプデ前は失くしたら終わりの性能微妙なポンコツ宇宙船という評価だったが、アップデートを経たことで宇宙海賊に強気の反撃に出ることができるくらいにはテコ入れされている。武装に関して大幅な強化が加えられたのが大きいな、こっちの最高火力で相手を一撃のもとに屠ることができるようになっただけで感動ものだ……アプデ前は最高火力で辛うじて装甲を貫通できる「だけ」とかザラだったからな……宇宙海賊艦隊とかもはや身辺整理を始めるレベルだ。

次に二つ目、船員であり宇宙船を運営するにあたっての血液であるNPCについて。従来の節約のために食事から一品取り除くだけで一斉蜂起するようなクソ船員から、多少は我慢してくれるようになっただけでも大きいが注目すべきはアンドロイドクルー……つまりはロボット船員の追加だ。こいつは不満やストライキを一切起こさない代わりに通常の船員よりも資材や金を食う……つまりコストが重くなった代わりに従来のようなご機嫌取りをしなくてもよくなった。個人的には船外に叩き出しても回収できるのが嬉しい、船外装備じゃない人間NPCだと即死だからな……

そして最後に三つ目。これが俺をギャラトラへと呼び戻した最大の理由といって良いだろう。プレイヤーが船長の椅子から立ち上がることを許され、あまつさえいち戦闘員として出撃することすら可能になった。
具体的にはプレイヤー自身に船員NPCに設定するようなステータスが追加されている、どうやらここら辺は普通のアクションゲーに倣っているらしくアバターの「適正」を上げる事でそれぞれの行動

に対するパラメータが上昇するようだ。一応これまでのプレイである程度ステータス振りされてる様子なので自由に使える分は全部近接戦闘と戦闘機操作につぎ込んで……っと。

「なんだこのハンドガン……あ、ＪＧＥの時のアレか」

この能力は……使う、のか？　宇宙に漂うのも忍びないし地球まで戻って保管しておくかな。地球にあるプレイヤー用のマイルームだけは何回死んでもそこに置いたものがロストすることはない。こういう記念品は保存するべきだが……問題は地球まで無事に帰れるかってことなんだが。

「ＮＰＣは……うわ、不満爆発寸前だ」

そういえば今現在、絶賛漂流中だったな……なにせ地図があっても定期的にデータが吹っ飛ぶから復旧させるまでに大抵迷う、それまでにうまく立ち回らないと遭難に加えて船員のストライキが起きるわけだ。そしてかつての俺はそれに失敗しかけていて、色々面倒臭くなってセーブしてゲームそのものから離れたわけだ……思い出してきた。

「……どうすっかこれ」

クルーがいないと船が動かせないが、こいつらを動かせば確実に内ゲバ別ゲーになる。手っ取り早い解決法は通りすがりの別プレイヤー、ＮＰＣからクルーをトレードして好感度をリセットする、とかだが……ん？　未確認の船舶から第三楽皇丸（俺が今乗ってる宇宙船）に商業通信？

「もしもし？」

『言語認証……こんにちは銀河の旅人、私はドロイドクルー・エージェンシー所属無人取引システム「SL：エーヴェ」です。当方は現在、有人性不和の解決一助として貴船舶のクルーとドロイドクルー・エージェンシーが自信をもってサービスするアンドロイド・クルーのトレードを提案いたします』

……人と、アンドロイドを、交換と。

五分後。

『この度は四十五機のアンドロイドと地球由縁生命体のトレードに応じていただき、誠にありがとうございます！　お客様は一定数以上の取引を行ったため、こちら特別サービスとしてアンドロイド用艦内戦闘パックを今回トレードしたアンドロイド全機にお付けさせていただきます！』

「いやいやこちらこそいい買い物でした」

あばよコールドスリープ状態で集荷された不満タラタラのクルー達！　SL：エーヴェ(AVE)って英語にすると隠すつもりないのかってレベルで不穏かつ物騒だけどてめーらの未来にお祈りしておくぜ！！

「それじゃこれからよろしくね！　優秀なアンドロイド諸君！！」

『お任せください、我々は常に完璧な仕事を致します』

『お任せください、我々は常に完璧な仕事を致します』

『お任せください、我々は常に完璧な仕事を致します』

『お任せください、我々は常に完璧な仕事を致します』

わーい、ディストピアの予感。

『お任せください、我々は常に完璧な仕事を致します』（後書き）

ＳＬ：エーヴェ
まぁ読んで文字の通り奴隷商人、売り渡されたＮＰＣクルーの運命は推して知るべし
なおエーヴェが所属する組織と敵対しない限りは有能なアンドロイド・クルーなので利用しているプレイヤーは多い。というかアプデ特典で大量のマネーを手に入れた無課金プレイヤーの前にやたら現れるので運営が狙ってやってる

天上領域のプレイヤー達はそこら辺気にしない、だって艦隊運営してるから人手は肉だろうと鉄だろうと多い方がいいから

俺たち、鉄砲玉野郎Aチーム！（前書き）

あつがなつすぎる

俺たち、鉄砲玉野郎Aチーム！

ディストピアの風が吹きかけたような気がしたがそんな事はなかったぜ。コストが少し重いもののアンドロイド・クルー達はすこぶる優秀だった。

とはいえアプデしたとてギャラトラはギャラトラ、基本的にやることに変わりはない。彷徨って、立ち寄って、また旅立つ……それがギャラトラの基本だ。

「着陸できそうな惑星は無し、ガス惑星オンリーかよこの恒星系、しかも役に立たないガス……」

ハズレ恒星系だ、恒星からの熱エネルギーで発電したらさっさと去るに限る……ん？

「ソナー、反応は？」

『いいえ艦長、反応はありません』

「目視、あの惑星に何かあるか探せ」

『了解しました』

「………通信手、あの惑星に向けて第三種暗号通信を飛ばせ。内容は「当方無所属」だ」

『了解しました』

朧げな記憶なので自身はないが確か大量の宇宙船が一斉にステルスを使用した場合、何分かに一度ステルスシステム同士が干渉を起こして「揺らぐ」と聞いたことがある。
ガス惑星が今一瞬、奇妙な動きをしたように見えたので肉眼確認とそれなりの設備があればプレイヤーなら一発で解読できる暗号通信を送ってみたが……果たして答えは、目の前で解け始めるステルスシステムだった。

「うお、マジか……」

『熱源反応多数、計測の結果八十隻のトラベライズリアクター反応を検知』

『第三種暗号通信を傍受、解読……「当方は至高のA大船団である、協力の意思あらばナビゲートに従い三番艦「グレートウォール」へ来られたし」との事です』

至高のA……グレートウォール……ああ、そういう事。邪悪な存在によって邪悪を見抜く力を備えさせられたってなんかダークヒーロー系の導入っぽいが、実際は邪悪な存在（ディープスローター）によって邪悪（下ネタ）を見抜く力を備えさせられただけなので哀しさしか感じない。

にしても大船団と来ましたか、複数のプレイヤーが集まっているようだが透過モニターが補足する情報を見れば、明らかに過半数の宇宙船に同じ名前が表示されている。つまり大船団を運営しているのは実質ただ一人……重課金プレイヤーだ。

「さーて、重課金プレイヤーが無課金集めて何してるのやら……」

復帰早々死亡率の高い大規模戦闘に首突っ込むのは気が引け……る、

わけがない。復帰早々派手なイベントがあるなら首を突っ込まずしてどうしてくれようかってな。

「第三楽皇丸、ナビゲートに従って着艦せよ」

『了解しました』

◆

まさかあれだけ知ってる風で近づいてきたのにマジで何も知らないプレイヤーだとは思われなかったらしく、「で、これなんの集まり？」と聞いたら割とガチで驚かれた。なので改めて説明を聞いたことで大体の事情は理解した。

今回の大規模戦闘に関わるプレイヤーは二人。片方はこの宙域で命知らずの傭兵隊を募っていた愛板（まないた）氏。そしてもう一人がこれから戦う事になる敵艦隊「双丘の大艦隊」の頂点Gカップムネ肉氏……名前の時点で不倶戴天な関係性としか思えないのだが、実際の敵対理由は利権関係のゴタゴタであるらしい。

まぁそこら辺に関しては傭兵達の知ったことではない、そんな大局的な視点で動けたら命知らずの傭兵なんてやってないからな。ともあれ決戦に向けて軍備を整えていた愛板氏は諜報活動の結果、双丘の大艦隊が他プレイヤー（重課金）と同盟を結んで連合軍の構えを取っている事に気づいた。つまり向こうさんは利権を分割してでも

愛板氏を抹殺しようとしてるわけだ。もしくは用済みになったら連合の同胞ごと屠るつもりか……

だが決戦までもう時間がない、というか具体的に言うと今晩なので今更連合を組むこともできない。なので愛板氏は方針を変えた。重課金同士の連合軍を作るのではなく、雑魚……もとい無課金ユーザーを集めて傭兵隊を作る事にしたのだ。

「諸君、仮に敗北したとしても諸君らになんらかの補填を行う事は保障しよう。そして勝利したならば、敗北以上の報酬を約束する！」

「具体的には？」

「一番活躍した者にはテラトン級宇宙戦艦を進呈しよう！！」

「「「「うおおおおおおっ！！！！」」」」

その言葉に傭兵達が大歓声を上げる、俺だって思わず声が出た……何せ無課金プレイヤーの船が基本メガトン級で、三万円くらいで作れるのがギガトン級、テラトン級宇宙戦艦ともなれば十万円オーバーの重課金宇宙船だ。勝って活躍すればそれがタダで手に入るかもしれないとなれば、誰だってやる気を出すだろう。

「君達の目的は連合を形成する四人のプレイヤーの首だ！！」

バン！　と愛板氏が叩いたモニターに四人のプレイヤーの情報が表示される。

・リクモガミホテル「サイジョウ」

・真珠の円匣「海鶏」

・ホーネッツネスト「ディアホーン」

・双丘の大艦隊「Gカップムネ肉」

錚々たる面々だ、俺でも覚えてるネームがあるくらいだからな……

「彼らについて色々と聞いているだろうが構わん！　私が保証する、恒星に叩き込むなりデブリにするなり好きに調理したまえ！！」

ギラギラとヤバイ目で免罪符を無料配布する愛板氏に盛り上がる傭兵達だが、中にはヒソヒソと話す者達もいた。具体的には俺のすぐ隣。

「ビッグネーム過ぎんだろ……」

「グランドスプリームの創始者一族にアコヤフーズの社長って……」

「アタシ、ハチミツの六角が作ってるハニーキャンディ大好きだから戦うの気が引ける……」

「なんかデータ読み取られて出禁とかにならない？」

「国内最大手の家電メーカーのトップを裏切る勇気があるなら向こうにつけばいいじゃん？」

「サウダージの非常電源付き冷蔵庫のおかげで命拾ったことあるので足向けて寝れないんですぅー」

つまり、まぁ、そういうことなのだ。ただのゲームと割り切るにはちょっと見え隠れする金と権力がデカすぎるっつーね。
とはいえいざ決戦の時になれば皆働くだろう、既に至高のA大船団総旗艦「愛の地平線」にコントロールを預けた傭兵達の船は決戦のフィールド「モスコミュール宙域」へと向かっているのだからもう後には引けない。

「ギガトン級宇宙船を保有する者達には申し訳ないが艦隊戦に参加してもらう。恐らく良くて半壊で済むかどうかだろうが……修理費は全額負担するので覚悟を決めてもらいたい」

ギガトン級宇宙戦艦は実質三万円だ。缶ジュース感覚で用意できる重課金プレイヤーと違って、軽課金プレイヤーからすれば失えばあまりに手痛いし愛着だって無課金プレイヤーと比べれば大きかろう。覚悟は決めているようだが、ギガトン級船主達は皆悲壮な顔をしている。自分で担保にしたんだから仮に撃沈しても自業自得だとは思うがね。

「そしてメガトン級以下の諸君らは……いや、この際包み隠さずに言おう。鉄砲玉だ」

放たれた銃弾が銃の許に帰ってくることはない、敵船に乗り込み直接プレイヤーを狙う俺達の命は使い捨てとほぼイコールだ。

「希望があれば宇宙輸送機を用立てるが、まず確実に諸君らの大半は帰ってくることはないと考えている……それでも我が艦隊に協力してくれること、感謝する」

大手家電メーカーの社長……もとい重課金プレイヤーに頭を下げられたことで鉄砲玉の傭兵達は慌てているが、俺は別の場所に思考が

向いていた。

「輸送機………ね、」

時に諸君、宇宙の嵐(ユニバース・ストーム)を知っているか？

俺たち、鉄砲玉野郎Aチーム！（後書き）

決して代理戦争ではないんですよ？

五万円砲（前書き）

割と書いてて楽しい宇宙戦

五万円砲

「じゃあラストワン参加者の君はこれだ」

「…………鹿？」

「えーと？　いや、これはガゼルのようだね」

おおガゼル、サバンナの血が騒ぐぜ。なんだかんだトムソンガゼルとかチーターに落ち着いたけどやっぱりライオン相手に有利は取れないんだよなぁ…………咆哮に小怯み効果があるのがズルすぎる。愛板氏が用立てた「変装メット」はそれぞれがなんらかの動物の形をしており、瞬く間に傭兵団がメカニカルアニマル軍団へと大変身を遂げた。本人の趣味、というか孫の動物好きに付き合ってるうちに動物に詳しくなったので折角なら……ということらしい。和やかな空気は続く質問への回答「一個三千円」で凍りついたとだけ言っておこう。鉄砲玉部隊だけでも軽く五、六十人いるんだけど…………

……

「そのメットは秘匿回線で総旗艦艦長……つまり私に連絡する機能がついている。多用すると相手に捕捉されるので本当に重要な時だけ連絡をよこしてほしい。そして五人程から要望があったので輸送船を用意した、速度と耐久はそれなりにあるが小回りが利かないのと武装は前時代(アップデート前)レベルのものだということは覚えておいてほしい」

いいね、無課金で獲得できるやつじゃなくて課金しないと入手できない方の輸送船だ。周囲には「なんで動く的にしかならない輸送船なんか……」とせせら笑っている奴らもいたが、正直乗り込む前提

なのに戦闘機なんか用意してもらってる時点でアホなんだろうなぁ、と微笑ましい気分になる。向こうさんに着艦許可でも貰うつもりなんだろうか？

「なぁあんた」

「ん？」

どうやら声をかけられたのは俺であるらしい、振り返るとそこには犀（サイ）のメットを被った大男がこちらに視線を向けていた……でかい、2メートルはありそうなアバターだ。

「あんただろ？　輸送機を頼んだ奴」

「まぁ、そうで……そうだ、な。五機あるから五人のうちの一人か」

ロールプレイヤーっぽさを感じたので敬語ではなくタメ口で応える。犀男……無駄に高性能なメットの効果でプレイヤーネームが動物名に置き換わっている「ライノ」何某は考え込むように顎辺りを撫でていたが、意を決したようにこちらへとこう頼んできた。

「俺ぁ極振りタイプでよう……まぁ、なんだ、乗り込む手段が自前で用意できなくてな」

「あぁ、乗りたいと。でもいいのか？　撃墜爆発四散の可能性がゼロとは保証できないぞ」

「そん時ゃそん時だ、元より負けた時の補填目当てなとこもあるしな」

まぁ、鉄砲玉からすれば夢を追いつつも、愛板氏が勝とうと負けようと自分が死ぬ前提で補填を目当てにするのは間違ってはいないか。

「いいよ、サンラク航宙(クルーズ)に乗せてやろう。今ならなんとお値段タダ」

「本当ですかぁ？　だったら私もご一緒したいでーす」

「ぬおっ」

にゅいっ、と顔を出してガゼルと犀の間に割り込んできたのは哺乳類ではなく爬虫類系のメットを被ったプレイヤーだった。

「スネーク？」

「ニシキヘビ(パイソン)だってぇ」

「あー…………………で？　相乗り希望？」

「そうそう。私は電子戦特化だから、さ………飛行機操縦するのもあんまし得意じゃないしぃ」

「だってさ、ライノさん的には？」

「え？　あー、構わない…………ぜ！」

セーフ、ってことにしておこう。なにせ女性プレイヤーだし声も女性っぽいのだが………なんというか、言動の節々が妙に「ぶってる」というか………なんというかテンプレートなオカマっぽさというか………俺の邪悪感知能力が「ネカマ」の三文字を導き出してるんだ

が。いや、多くは言うまい……

どうやら他の輸送機を希望したプレイヤー達にも乗船希望者が集まっているようだ、わざわざ輸送機を希望するなら勝算があるのだろうと考えてのことらしい。メタルアニマルズがそれぞれ分かれていく中、俺の方にもさらに二人追加でやってくる。何も知らずにやってきた復帰直後のプレイヤーが動かす輸送機は不安だったようで人が避けていたようなのだが、他の輸送機が満員になってしまったのであぶれた二人が仕方なく……だ、そうだ。

「それ本人に言う？」

「いやぁ、事実だしなぁ……あ、ウルフでーすよろしく」

「フォックスだ」

狼、狐、蛇、犀、ガゼル……ガゼルって牛なのか？　それともヤギ？　まぁいいや、五人ってのはワンチームの人数としては悪くない。というか鉄砲玉を五つに分けるって少なすぎる気がしてならないんだが。

なんなら一人一隻輸送船に乗って大増殖撹乱作戦とかした方がいいんじゃないか？

「で、どこに突っ込むんだ？　本丸狙いか？」

「いや流石にアドリブ」

最初から本丸を狙えるとは思えない、向こうも重課金である以上はNPC限定だったが直接乗り込むプレイングに対策を入れていないとは思えない。少なくともアプデ前における乗り込み対策はショックパルスでNPCを気絶させることだったが……もし敵性エネミー

の技術が使えるようになっているとしたら、まず確実にアレが飛んでくる。

「さて、時間か……」

「よう、頼むぜパイロット」

「任せとけ、デブリのカーテンだって潜り抜けてやるよ」

◇

モスコミュール宙域。

『こちらは至高のA大船団、愛板である。オープン回線にて失礼』

『これはご丁寧に、こちらは双丘の大艦隊、Gカップムネ肉です……そしてこちらは此度の戦において同志として力を貸してくださる連合の者です』

『左右田……んぉっほん！　愛板さん、今日はお手柔らかに……』

『いやはや、年甲斐なく心躍りますな』

『最長で一週間でしたかな？　三日保てば良いですが……』

『いやいや往復勢は侮れませんよ海鶏さん、それに愛の地平線号にはアレがありますからね』

往復勢とは別銀河からホームである地球までの往復を可能とする者達を指す言葉である。恒星間すら超えた銀河間を自在に移動できるだけの船を持つ者……即ち、歴戦の重課金プレイヤーを指す言葉だ。

此度の戦、プレイヤーの総数で言えば数十ｖｓ四と双丘の大艦隊が不利ではあるが、総合的な戦力で言えば六対四……あるいはそれ以上の戦力差がある。

故にこそ、

『では戦を始める前に最後に愛板殿、降伏の意思は？』

『ハハハ何をおっしゃるか、全員宇宙の藻屑に変えてやりましょうぞ………このようにねぇ！！！』

『なんですと！！？』

愛板が選んだ戦術は、総旗艦ではなく三番艦グレートウォールの全出力を攻撃に転換した収縮再現終焉砲（ビッグクランチ・レーザー）による初手最高火力の奇襲であった。

五万円砲（後書き）

収縮再現終焉砲

愛の地平線に搭載された「アレ」とは別に愛板が秘密裏にグレートウォールに搭載した究極兵器。一発撃つのに実質五万円かかる上に一週間のリキャストと搭載艦の機能半停止とデメリットも多い

アレ、についてはのちのちのち

六角侵入七顛八起（前書き）

軽率にゴキが増殖し、軽率に隕石が落ちてくるカードゲームがあるってマジ？

『全員散開！！　敵の船の中でまた会おう！！』

誰かは知らないが、リーダーぶった声を合図にプレイヤー達の駆る宙域戦闘用小型宇宙艇が一斉に出撃した。ＮＰＣの戦闘機なども混ざっているが、メインはプレイヤーを満載した五隻の輸送船だ。

「見ろよ、五万円だ」

「一ヶ月の食費とイコールだよあの光……」

聞けば現在ギャラトラにて最高火力を誇る最強兵器に威力でこそ劣るものの、被害で言えばトップを争うという究極兵器がアレだ。簡単に言うと物理防御を貫通する、イかれてるぜ。

だが向こうも当然対策は立てていたらしい、双丘の大艦隊総旗艦をかばうように前に出た円盤……いや、缶詰みたいな形をした宇宙戦艦から光が放たれる。あくまでもゲームなので実際のビッグクランチに忠実ではないだろうがそれでも「光線に触れたオブジェクトを圧縮してフィールドから消失させる」というど畜生レーザーに対して展開されたフィールドは、破滅のハーフアンドハーフの直撃に晒されて尚、己と盟主を守り切った。

「嘘だろ無傷！？」

「いや違うわね、他の船団がカンヅメよりも前に出た。多分真珠の円匣もエネルギーを使い切ったのよ」

「ガゼル！　こりゃチャンスだろっ！！　カンヅメに乗り込もうぜ！！」

いいや違う、それは愚策だ。確かにカンヅメ……真珠の円匣旗艦が行動不能になっているがもう一隻ある二番艦は無事だ、つまりカンヅメさんは自衛できる。その上で他の船が前に出てきたって事は庇うためじゃない、これは……！！

「全員シートベルト締めて口開けとけ！　地獄の音ゲーの始まりだっ！！！」

かつて地球から秘密裏に宇宙へと旅立ち、一大勢力となったゲルマノイド第三帝国の極悪防衛兵器！　金属の箱に生卵を詰めてレンジにかけたらどうなる？　それこそがゲルマノイドの禁断兵器、超荷電子拡散パルス……通称「ゲルマンレンジ」！　やはりプレイヤーも使えるようになっていたか……っ！！　一応ドイツの方々に弁明すると「粘液人間（ゲルマノイド）」なのでジャーマニーは関係ないぞ！　フィクションだからリアルとはなんの関係もないのだ。

「ひええっ！　視界一面埋まってるぅ！！」

「戦艦級複数による面制圧……っ！！」

「ねぇガゼルさん、詰んだ？」

「バカ言え！　課金輸送船はちゃーんと対策装備があんだよ！！」

くらえ前面防御シールド！　耐久はゴミだがパルス系なら確定で一発耐える地味に便利な紙装甲！！

バチィン！！　とビンタを何千倍にもしたような快音が響いてシールドが弾け飛ぶ、一枚目は通過した……だが複数の戦艦がミルフィーユ構造でぶちかまして来た即死攻撃の多重構造はまだまだ第二波第三波を控えている。

バチィン！！　バチィン！！

「し、心臓に悪い……」

「おや、乗客ウルフ氏はああなりたいのか？」

「いやパイロットガゼルは前向いてて！？」

俺が操り彼らが乗る輸送船がビンタを食らっているとしたら、右上の方で派手に爆散した輸送船はさしずめパワーボムでも食らったのかな？　ハハハ、十数人くらいが一撃で地球に強制里帰りだ。

「ご注目ください（アテンションプリーズ）、良い知らせと悪い知らせと悪い知らせパート2、どれから聞きたい？」

「前を見れば全部分かる、行けるのかガゼル。わざわざ輸送機を選ぶ辺り相当自信があるようだが……」

「安心しろ、さっきチュートリアルは済ませた」

「そうか…………待て、今何て」

「行くぞ！　音ゲーの次は弾幕ゲーだ！！」

良い知らせはゲルマンレンジが終わった事、悪い知らせは戦艦十数

隻による弾幕を漢防御（シールド無し）で受け切らないといけないってことだ。

「面制圧で俺を捉えられるかよ……！！」

「普通に被弾してるんだよなァ！？」

「よく見ろ間抜け（アテンションプリーズ）！　撃墜されない限り実質無傷！！」

技術の進歩って素晴らしい、ユニストの頃は物理エンジンを悪用してやってたドリフトをプレイヤーの任意操作で出来るってだけでも素晴らしいのに、デブリにわざと直撃しなくてもバレルロールができるなんて！！

「タマヒュンの連続かよぉ……」

「ほんそれねぇ」

「パイソン、墓穴じゃないのか？」

「哲学的タマヒュンの話だから、虚数の金玉よ」

「存在しない前提で存在する睾丸……？」

「玉って……なんだっけ？」

「未来」

「おいやめろ馬鹿！　俺（パイロット）が笑うだろうが！！」

クールキャラ気取ってるのにギャグにはしっかりノッてんじゃない

よフォックス！　ええい手元が、手元が狂う！
だが行ける。輸送機は小回りが利かない、と事前に聞いていたが俺からすればとんでもない。急ブレーキとドリフト、推進器の暴発でモーションキャンセルができるってだけでも自由度の塊だぜ。

「ガゼルっ！　向こうが陣形を変え始めた！！」

「見れば分かるよ！　クソ、適正対応数に気づいたな……！？」

至高のA大船団は総旗艦「愛の地平線」から始まり二番艦「凪いだ水平線」、三番艦「グレートウォール」、四番艦「パラレルライン」、五番艦「ヒューストン」、六番艦「ファントムボイン」の六隻のテラトン級戦艦に加えて随伴のギガトン級戦艦四隻で構成された個人で保有する規模としては最大の単独大所帯だ。戦艦のネーミングがどんどんおっさん臭くなるのは無視、重要なのは向こうのテラトン級戦艦の総数は十二隻あるって事だ。
現在は互いに一隻ずつ機能停止で戦闘から実質離脱して五対十一、愛板氏が戦闘特化にしたテラトン級に対して向こうは同じくテラトン級をぶつける事で殲滅を狙っているようだが……ここで拮抗できるのは一重に愛板氏のプレイ方針がド脳筋だったからだろう。一隻で二隻分は戦って見せると豪語しただけあって鬼のように消費されていく弾薬によって形成された弾幕は戦況をイーブンで食い止めていた。

だがここで問題。
テラトン級戦艦に対して基本的にギガトン級は戦艦は無力ですが、その場合双丘の大艦隊が擁するギガトン級戦艦は何を狙うでしょうか？
正解はこの致死圏を抜けた後っ！！！

「やばいやばいやばい！　輸送機さらに爆発！　俺たち含めて残り二隻！」

「戦闘機部隊は！！」

「あー、六割ゲルマンレンジで死んでるわね」

「ハエだってもうちょっと長生きするぞ……！！」

役立たずのモスキート共め、だが生き残った四割は最低限の仕事は果たすつもりらしい。弾幕を潜り抜けながら敵ギガトン級戦艦に肉薄した戦闘機がミサイルを叩き込んだ。よし道が拓けた、突っ込む！！

「ようし、行き先けってーい！！」

クソが、もう一機の輸送機に敵ドローンがまとわりついた……ありゃもうダメだ、はい爆散。

「悲しいお知らせだ、戦闘機選んだアホ共は敵船に着地できないのでなかったのは我々だけです」

「え、マジ？　戦闘機ダメなの？」

「敵船に着陸許可貰うのか？　表面って基本フィールド貼られてるから触れたら爆死だぞ」

「フォックスの言う通りね、それを踏まえてどうするのかしらぁ？」

まぁ見てろ、敵ドローンを引きつけて……

「ねぇガゼルさん！？　取り付かれたけど！！」
「いざ刮目（アテンションプリーズ）せよ！　必殺・操縦可能操縦不能状態！！」

左右のブースターを真逆に噴射、さらに躊躇いなく最大まで舵を切る事で輸送船を横転させるように勢いよく回転させる！！　ドローンを振り払いながらも周囲からあれはもう墜ちると思わせるのさ！

「おまっ、なぁぁぁあ！！？」

「うはははは！　ここで行き先をお教えしよう！　当船舶は暴走挙動の後、強制退艦していただきプレイヤー：ディアホーンが運営するホーネッツネストの二番艦「六角御殿」で現地集合！！」

あきらかに制御不能な動きで吹き飛ぶ挙動を自演しながら、さも「制御不能になって偶然接近しました」な風を装いながら巨大な六角形を数百組み合わせたような六角御殿へと接近していく。ギガトン級なら迎撃されていただろうが、たかだか輸送船がぶつかった程度じゃあ1ダメージにもならないテラトン級なら？

「やはり無視したな……っ！」

そして巨大な船を運営する以上、いちいちＮＰＣの雑兵に緻密なオーダーを出すとは考えづらい。つまりＮＰＣ戦闘機は死にかけの輸送機には目もくれず愛板氏の本隊へと向かって行くわけで。まぁ流石にこのまま輸送機で侵入したら対処されるだろうし、近づきながら悠長に侵入の準備なんてしていたら流石に狙われるのでこうする。

「宇宙空間で扉開くとどうなるか知ってるか？」

「は？」

「あ？」

「え？」

「何？」

「では現地集合！　背中についてるブースター使って気合いで発進ゲートまでたどり着け！！　この輸送船は退艦後自爆するっ！！！」

ロッカだかハッカだか知らないが、内側からぶち壊してやるよ。それでは自爆する！！！

開け放たれたドアからメタルアニマル達が吹き飛ぶように出て行ったのを見送りながら、俺は輸送船の自爆スイッチを押してシートベルトを解除する。次の瞬間には俺の身体が空気とともに外へと吹き飛ばされ、宇宙空間に飛び出したことでアニマルヘルメットが表示する視界内に残存空気量を示すゲージが現れた……まぁ、想定通りだ。チュートリアルで見たからな。

これぞユニバースストームで一部の「運び屋」達のみが使えたとされる秘伝の奥義「偽装事故輸送」だ。宇宙空間という性質を利用した核爆弾（プレイヤー）強制排出テクニックは異なる世界でもやはり大いに役立ったようだ……なにせ、馬鹿正直に空挺作戦（エアボーン）ならぬ宙挺作戦（スペースボーン）なんてやってたら即座に狙われるだけだからな、宇宙モノは自動的に文明レベルが高いのでホーミング武器とかザラなのだ。「え！　ここで降りるの！？」とほかでもない乗客たちにすら思わせるアンブッシュこそが宇宙戦闘の要……

「レッツゴー！！」

ジタバタと暴れながらもなんとか六角御殿へとたどり着かんと動くプレイヤー達を上からゲラゲラ笑いながら見ていた俺も、背後で自爆した輸送船の衝撃波で加速して追いつくのだった。

六角侵入七顛八起（後書き）

双丘の大艦隊側のテラトン級戦艦保有事情
双丘の大艦隊：五隻
ホーネッツネスト：二隻
ホテルリクモガミ：三隻
真珠の円匣：二隻

基本的にテラトン級って戦う用じゃなくて一種のコロニーとしての運用が基本なんですよね
しかし愛板の場合、地球に変えることを前提として自給自足するのではなく地球で大量に食料やらなんやらを溜め込んで無くなりそうになったら戻るｏｒ略奪でテラトン級を運用しているため、他のテラトン級がコロニーとしての機能に割いている部分を全部戦闘特化にしているんです
つまり個人で言えばトップクラスの火力持ちであり、積極的に宇宙海賊やゲルマノイド第三帝国にも喧嘩を売って略奪行為をする超武闘派

その対峙は因果応報（前書き）

お告げに従い更新です

その対峙は因果応報

侵入から十分後。大量の殺戮無人兵器から、からくも逃げ出した俺達はパイソンがハッキングしてロックを解除した、かつては人間NPC用のスペースだったのだろう部屋の中で一息ついていた。

「侵入成功」

「宇宙に放り出されて危うく死にかけたけどね……」

「誰も死んでない、第一目標達成、なんの物言いが？」

「……結果論、ヨクナイ」

フォックス氏、残念ながら結果を出さない奴が過程に文句を言ってもそこに説得力はないんだ。

まさか初手で切り札の艦載ガトリングとパワードアーマーを切らされると思わなかったが……まぁ、まぁ何とかなるだろう。手持ちのハンドガンがとんだポンコツなんだが……いや、使えるよ？　すげー便利なんだけど今の状態だとハンドガンだけじゃどうにもならないんだよな。

「どうだパイソン、俺達としては武器庫か動力室のロックを外してもらえると嬉しいんだが」

「無茶言わないでよ、テラトン級のセキュリティとか手持ち装備でどうにかなるわけないじゃない……端っこから段々セキュリティを解いて進んでいくしかないわよ」

「これをか」

テラトン級って控えめに表現してもラスダンみたいなもんだぞ、テラトン級を用意できる資金力ってのはつまりテラトン級を運営できるだけの資金力って事だ、ＮＰＣの強さは言うに及ばず……つまり戦争期間でＧカップムネ肉氏あるいは連合に参加するプレイヤーを削っていく場合、プレイヤーが乗艦してないテラトン級なんぞに何日も時間をかけていられないのだ。

「いや、アップデート前からどんなテラトン級でもプレイヤーの乗艦及びプレイヤーが指揮をとる操舵室への転送床は封鎖できない。だから転送床さえ見つけられたならディアホーンの所まで行けるはずだ」

「これの中から見つけるの？」

「「「「…………」」」」

これ、行けるかなぁ……？
やる気はあるがそれとは別方面のモチベーションが端から削られ始めたのを感じていると、突如としてゴォーン、ゴォーンと鐘の音が鳴り響いた。

「なんだぁ！？」

「あ、これがそうなのか……」

「どう言うことだよ」

「ライノさん話聞いてなかったん？　今回の戦争は日を跨いだ時点で休戦になって、次の日の夜七時から再開なんだよ。紳士協定？　だってさ」

「へぇ、そんなのあったのか。聞いてなかったわ」

へぇ、そんなのあったんだ。聞いてなかった……でも声には出さない、黙っているだけで保たれる格というものはある。

「休戦中は一切の戦闘行動は禁止、ゲーム側でそういう設定になってるから私達がこっそり破壊活動してもシステム側から感知されるから大人しくここでセーブするしかないわね」

と、その時だった。

『……聞こえるかね？　こちら、愛板。現在生存している五人のプレイヤー達……ええと、ライノ、パイソン、ウルフ、フォックス、ガゼル。聞こえているかな？』

「「「「！！」」」」

ヘルメットの内側から響いた声に五人のメタルアニマル達が顔を見合わせる。アバターの目は見えないが、雰囲気で皆一様に理解する。これ誰が対応するんだ、と……

スッ、と掲げられた五つの拳。無言ながら各々の脳内で共通の文章がリズムに合わせて流れ……

グー、パー、パー、パー、パー

「くっ」

「頼むわねキャプテンウルフ」

「特に命令権があるわけじゃねぇが頑張れよキャプテンウルフ」

「クレ担じゃねぇんだから……はい、五人を代表してウルフです」

『おお、無事なようで何よりだね。そちらの状況は？』

「とりあえず侵入は成功しました、元人間ＮＰＣ用の区画に潜伏してます」

『重畳重畳、こちらの戦況はあまり芳しくはないが潜入を成功させられただけでも収穫だ、ログアウトするつもりなら申し訳ないが少しブリーフィングを行いたい。他の者達も聞いてくれ』

要約すると、

・潜入の為に輸送機に乗り込んだプレイヤーは俺達以外全滅

・徹頭徹尾対艦攻撃に徹した戦闘機乗り以外のプレイヤーも壊滅状態

・戦況はこちら側が若干不利だが今日の休戦期間中にグレートウォールの修理は終わる

・長期戦は覚悟の上なのでそう急いで攻略するつもりはないが特定の三艦だけは内部工作でダメージを与えてほしい

・簡単に言うと敵陣営艦載機のネスト「六角御殿」、防御の要「キ

ャニング・オブ・パール」、そして敵首魁の本陣「偉大なる巨峰（エベレスト）」の三つは意地でもダメージ与えてね

とのことだ。戦闘機乗りに徹したプレイヤーとかいたのか、てっきり全員突入班だと思っていたのだが。

『君達が最初に六角御殿に潜入できたのは大きい。こちらの戦力上、戦闘機で削られるのが最も不都合なのでね………ディアホーン本人よりも六角御殿自体の攻略を優先してほしい』

「………だ、そうだ」

「と言ってもこの広さだしどれだけかかるか分からないっスよこれ」

『ふむ、………だが、確か六角御殿はユニット連結構造だったか。それなら停戦期間中に少しこちらでも調べてみるとしよう。確か奴の船は双方共にアプデ前に建造したものだったはず、なら構造上の脆弱性を見つけられるかもしれない』

「詳しいのね」

『ハハハハハ、何せ以前ディアホーンを地球に送り返してやったのは他でもない私なのでね』

「あー………向こうに付いた理由がなんとなく見えてきた」

『聞いて驚け、向こうを構成するモチベーションの七割は私への怨みだ』

このつるぺた蛮族、多方面に敵作りすぎじゃねーの！？

……

…………

………………

「熱下がった」

やはりライオットブラッドは医療薬品だった？　んなわけないか、あれが医薬品とかそれこそ世紀末だぜ。
とはいえ熱が下がった以上は学校に行かなくてはならない、趣味と最低限の義務を両立しなければ陽務家では生きていけないのだ。両立さえすればいいので家人それぞれが趣味に比重を傾けてるあたり、伊達に児童相談所に相談されてないぜ。
結局昨日は潜入組で作戦会議をしつつ、次の夜……つまり今晩の集合予定などを練って解散となったわけだが、今から夜が楽しみだ。このモチベーションを胸に学校生活を乗り切りますか！！！！

と、晴れやかに登校したのが数十分前。

「それでは尋問を開始する」
「なんで手芸部がワイヤー編んでロープなんて作ってんだよ！　条約違反だぞーっ！！」

「超法規的措置だ」

そして登校した瞬間椅子にワイヤーロープで縛り付けられ尋問されているのが現在だ。

「いやマジで何事だよ！　今日は一人で登校してただろうが！！」

「いやそれ今日以外の普段はアウトって自分で言ってるようなもんじゃん……」

「いやいや陽務クーン……今日は物的証拠もあるんだぜぇ？」

「はぁ？　なんの証拠だよ……」

「はいこれ」

なんだこれ？　ＳＮＳサイトか？　で、投稿された動画が再生されて……

『ピースサインだよ、俺はすぐにおててが出ちゃうお前と違って平和主義なんでなぁ？　笑って許せるんだよ、笑って許すんだよ』

「！！？！？！？！？！？！！？！？」

！！？！？！？！？！？！？！？！？！？

「一体これはどう言うことなのか説明してもらうぜ……？」

「な、何故そんな動画が、存在して……！！？」

ちょっと待て、いやマジでちょっと待て！？　全国区ですか！？
全国区でこれ流出したんですか！！？　嘘でしょちょっと待ってく
ださいよヘルメット被ってないんですけど！！　やーだー！！

「悪いが今日は暁ハートを囮にしても無駄だぞ」

「そうそう、今回ばかりはな」

「キリキリ吐いてもらうぜ………！！」

「早退しても、いいですか……？」

当然却下された。

その対峙は因果応報（後書き）

容疑者は黙秘を貫いているとのことでしたが、度重なる疑惑の解明のため捜査班はもう一人の重要参考人と共に公開尋問を行うとの声明を発しており………

実はウチの高校、学食がある。購買の方が安く済むので俺含めて大体のやつはそっちで済ませるしなんなら学校外に出てラーメン屋に行く勇者(アホ)もいるのだが、学食が使われないわけではない。ちなみに学校近所のラーメン屋は高確率で教師がいるので勇者は大抵ラーメン食いながら教師に叱られることになる。

まぁそれはそれ、重要なのは今俺が置かれている状況だろう。学食を訪れた生徒はその一角に主に二年生によって構成された人だかりがあることに気づく、そしてその中心には…………俺と玲さんがいるわけで。どうやら向こうも向こうで尋問からは逃れられなかったらしい。

「えと、ら…………………その、陽務君も、ですか？」

「あー……そっすね、はい」

逃げたい、逃げたいが逃げられない。クソが、県大会出場級の柔道部を俺の隣に立たせるんじゃないよ。下手に逃げたら締め上げるってことかよ、条約はどうした。

「それでは皆の意見を代表して俺が進行を務めさせていただく」

「おい雑ピ、「小さな妖精さんと迷子の天使」の続報はどうした」

「ん゛っ…………………二週間後に公開するから楽しみにしとけ」

バカな、通じないだと！？

「残念だったな楽郎、もう周知の事実だからノーダメージだ」

「自分で挿絵も描いてたらしいぜ」

「え、マジ？　今度から画伯って呼ばないと」

「ノーダメージだからって死体を蹴っていい理由にはならねえよ！？」

俺を囲む男子生徒が見せてきた暁ハート先生渾身の挿絵はなんというか随分と……その、柔らかいタッチというか。

「可愛い絵柄してんじゃん」

「やかましいっ！！　尋問を始めるっ！！　つーかもういい加減認めろよ！　お前ら付き合ってんでしょ！？」

「つっっっっっっ！！！？！？！」

「いやだから付き合ってないって………」

思春期さんどもめ、どうあっても俺と玲さんを付き合ってることにさせたいのか。だが男女問わずここに集まり俺達を包囲している連中はそれが聞きたいようで、好奇と疑念の視線がビシビシと俺と玲さんに突き刺さる。

「じゃあこれはどういうことだよ？　これ東京で撮られた奴だぞ？」

「偶然会ったなんて言わないよね？」

「それがなんと偶然なんですよ、いや本当偶然。確率論って怖いですね」

しれーっ、と言い訳してみたが、疑念の視線がその密度を増しただけだった。というか仮にそうだとしてもこんな囲んで問い詰めるもんじゃないだろ………

「偶然カップルに見間違えられたと？」

「トンネル効果よりはあり得る確率じゃね？」

沈黙。何か都合のいい言質を取ろうとしても無駄だと言わんばかりに黙秘していた俺に対して有効打を思いつかなかったのか、尋問のターゲットは玲さんへと変更されたようだ。確か………得間、そう得間（えま）　頼花（らいか）だ。一年の時同じクラスだったたっけか。

「で、どうなの玲？　本当に付き合ってないの？」

「つ、付き合うだなんてそんな…………いえ、そんな、あはは………」

「東京で互いに偶然会ってナンパから庇ってもらったと？」

「どっちかと言うと庇ってもらってたの陽務の方じゃね？」

「いやアレは別枠だろ」

「そ、その………できれば動画を連続再生するのは勘弁していただけると……」

「そうだそうだー」

便乗したら無言でヘッドホンを装着させられた。目を逸らさせろ！　非人道的拷問はやめろ！！

「………っ！　………っ！！」

「イキリメモリーの無限再生はつらかろう」

「黙らせました」

「ら、陽務君………」

「陽務君がいつだったか言ってたけど、共通の趣味ってので仲良くなったのはもう知ってるの………で、それを踏まえて本当に付き合ってないの？　別れさせようとかじゃなくてハッキリさせたいのよ」

「リピートはやめろ………うごごご………ち、ちなみにオッズは？」

「付き合ってる六割、付き合ってない四割」

接戦かよ。何一つ事実に基づいてないのが何より酷い。

「えと、と、とりあえず、この動画の、あのその、経緯に関しては………その、共通の友人からイベントのチケットをもらっていたの、で、その………折角なら？　というか」

「被告人、発言を認めます」

「まぁ概ね事実、あー……もうこの際言っちゃっていい？　斎賀さんの趣味について」

「え？　はぁ、その……別に構わない、ですけど……」

ん？　あれ？　あんまりバレたくない趣味とかじゃないの？　まぁいいや、本人が良いって言うなら弁明のためにも言っちゃおう。

「シャンフロだよシャンフロ、ゲームのイベントに行ってたんだよその日は」

「ＪＧＥ？」

「そうそれ、ゲーム友達なんだよ。まぁ、その……斎賀さんは結構リアルを削る廃人やりこんでる人だから、あんまり喧伝するもんじゃないかなって。そんだけ」

ゲーマーの社会的地位とかそういう話ではなく、あれほどのセーブデータを作り上げるにあたってリアルを無傷のままでいられるとは思えない。まぁ、その……風呂とか、食事とか、そういう削れるところから削ってそうだし。そういうのって自慢になるのは同じゲーマーに対してだけだ、普通は引かれるだろう。俺は土日とかだと時々削るよ、ペットボトルのお世話になったことはないけど。

「斎賀さんシャンフロやってたのか……」

「なんで隠す必要が？」

「話の種に絡まれるのを防ぎたかったんじゃない？」

「あー、一緒にやろう！　的な」
斎賀　玲ガチゲーマーのカミングアウトをしたことで好奇と疑念の視線の何割かに納得の色が混ざり始める。だが柔道部の山本は俺の背後に立っているし……あっ、こいついつの間にコーヒーなんか買ってきやがったんだ！！

「……いる？」

「いらねぇよ、飲みかけを渡すな」

「微糖だと思ったら間違えて無糖押してたんだよ、あんまり好きじゃねぇ」

「あー、半年くらい前から自販機の配列変わってるんだよな」

自販機の特定のボタンだけバグったから臨時で配置変えてからそのまんまらしいんだけど、その変わったのがよりにもよってコーヒーのコーナーだったからいつも通りに押して間違える奴が多いとは聞いている。
どうやら女子の方がガールズトークに移行しつつあるせいで男女がハッキリ分かれてきたためか、尋問の空気はいつしか薄らいでいき、単なる雑談に変わりつつあった。何人かは未だ話を蒸し返そうとしているが、もはや大勢の空気は決まりつつある。ようやっと終わったか……とりあえず件の動画は通報しとこ、この世に残してはいけない。

「…………ん？」

あれ、ええとあれじゃん。生徒会長の、あの蜂に刺されてパニクっ

てたひと。随分と厳しい顔でこっち見てんな……まぁひとかたまりになってギャーギャー騒いでるのはあんまり褒められたもんじゃないか。それにしちゃあ随分と眉間にシワが寄ってるが……んん？　まぁいいや、普通に学校生活送ってりゃ縁のない人物だろうし。

「おい取り調べってんならカツ丼出せよ」

「図々しすぎるだろ」

「せめてパシるにしても金くらい出せよ」

「おう買ってこいよ絵本作家、出版されたらサイン書いてくれ」

「ここぞとばかりに……！！」

糸は千々に解けて（後書き）

周囲の結論：一応まだ付き合ってはいないらしい（ワンチャンあるのでは？）（シャンフロやってるのか……）（言われた通り大事(おおごと)にしたけどどこれでいいのかな）

娯楽という名の優しい監獄（前書き）

シャンフロについて！！　語りたい！！！

作者なのに！！！　何で語れないの！！！

という事でいつぶりかすら忘れた掲示板回です、今回はスピード重視で名前は全部自分で考えましたごめんね

娯楽という名の優しい監獄

【リヴァイアサン】第三殻層攻略掲示板Ｐａｒｔ８【一生遊べる】

２１４：ジャック・ザ・ポット
何がやばいってマジで第三殻層で一生遊べそうなことなんだよね、フィロジオ楽しすぎる

２１５：素寒ペンギン
スコア！　スコアが足りないのぉっ！　第二殻層じゃ効率悪いのぉっ！！

２１６：ギャンブルビー
第四殻層に行く方法が現実的じゃないんだからお肉殴って我慢しなさい！
ところで泥掘りのシクレア持ってる方いませんか？　こちらオーバドレスパーツ左腕出せます

２１７：シラフシラス
賭博と娯楽の末世みたいなことになっとる……

２１８：ベントーベン
泥掘りシク出せます、ただオーバドレスパーツ右腕もあれば相談したい

２１９：サンデーパルフェ
フィロジオスレ行けカーオタ共

２２０：ギャンブルビー
すまん、ベントーベンさんリヴァイアサンで会える？　第三殻層だとトレ禁だから二層で会いたい

２２１：ベントーベン
了解、転送前で待ってます

２２２：シラフシラス
真面目な話、第四殻層に行く方法見つけたやついる？

２２３：しらたま
人間ルーレットなら誰も攻略できてないぞ、あの殺人ホイール止める方法がさっぱり分からん

２２４：貧民の刃2
こちらフィロジオタワー、４８階まで進んでいた煉牙氏がユザーパードラゴンデッキにメタられて一階まで落ちてきましたどうぞ

２２５：大富豪A
【速報】ユザーパードラゴンデッキ、手札発動のスペル・フェノメノンのコントロール奪取してくる

２２６：ダルマッチョ
エグすぎて笑い声出た

２２７：サンデーパルフェ
スペル連打の強デッキ殺しかよ……煉牙のデッキって「生存の為の特化逃走」メインの連続進化系統だろ？　天敵じゃねーか

２２８：エンス刀レス求
やっぱ時代は最短進化のパワー特化ですな

２２９：大富豪Ａ
なお４７階の番人は「停滞する系統」使ってきます

２３０：エンス刀レス求
一枚で最強種デッキ殺すのやめろや！！！！！！

２３１：沼ぁメイド
というか４０以降メタデッキばかりなのに４８階まで行った煉牙が凄いでしょ、４１階の犠牲進化使いとか勝ち目が全く見えないんだけど

２３２：煉牙
あのデッキは「理想の環境」一枚で完全停止するからピン差しでもいいから初手で引けるまで粘れば勝てる

２３３：ダルマッチョ
煉牙ーっ！　デッキレシピ公開してくれーっ！！

２３４：素寒ペンギン
１階まで落ちてきたってことは階層残留費払わなかったんかどうしてや

２３５：煉牙
３０００万スコア溜まったからだよ！　セーブのために５００万スコアも出せるか！！　俺は３０００万スコアで「極限環境適性」のトゥルーレアを買うんだよぉーっ！！

２３６：マニースペクター
どいつもこいつもスコア！　スコア！　スコア！

２３７：ジャック・ザ・ポット
ファンタジー文明を食んで生きてきた無垢な羊達が資本主義の家畜に堕ちる瞬間を見てるようだ

２３８：シラフシラス
お前らにだけは言われたくねーぞ

２３９：ダルマッチョ
名前からして資本側だよなぁ？

２４０：バルーニア
競機獣レースで馬券握りしめて叫んでるお前の姿この前見たぞ

２４１：ミリオンマンバ
この前っつーとキューブメンレースか？　あれは凄かったな、一着が大穴すぎて大盛り上がりだった

２４２：マニースペクター
全部ロボットの競馬とか何が楽しいんだと思ってたけど妨害ありってだけでこうもハマるとは思わんかったわ

２４３：大富豪Ａ
大真面目に「今日の八番はガトリングを新調したらしいから狙い目かもな……」とか話題になるの控えめに言って面白い

２４４：煉牙
殺戮兵器も娯楽に貶められるのマジ世紀末って感じ

２４５：ミリ子
戦術機獣ってジークヴルム戦の時に飛んでたあれと絶対関係あるだろうから勇魚ちゃんに問い詰めてるんだけどアンバージャックパス要求されるからつらみ

２４６：貧民の刃２
アンバージャックパス上げるために次の殻層行かせてくれって話なんだよな

２４７：シラフシラス
絶対に止まらない人間ルーレットで大当たり出せば次行けるぞ

２４８：ウィルゴー
哀れな犠牲者が足滑らせて顔面からルーレットに叩きつけられるのいいよねよくない

２４９：貧民の刃２
やだよアレどう見てもお手軽処刑装置じゃん、まだカードゲームしてた方がメンタルに優しい

２５０：トルク
フィロジオの方も大概頭ホットになるけどな

２５１：煉牙
正直４５階は複数回キレそうになったよ

２５２：素寒ペンギン
噂の超速アグロか、２ターンで最強種立てて来るんだっけ

２５３：煉牙
１ターンだぞ

２５４：トルク
えっ

２５５：マニースペクター
後攻１ターン目だと最強種出して来ることが判明してるんですよそれ

２５６：煉牙
先攻で「多様性暴力」引く確率より先攻渡した方がまだワンチャンあるからなアレ
やっぱプレイヤーそれぞれでカードプール決まってるのつれぇわ

２５７：シラフシラス
その為のトゥルーレアなんだろうけど高いのなんの

２５８：ダルマッチョ
いやリヴァイアサンから出て新しいモンスターに遭遇すればタダで増えるだろ
高い金払ってトゥルーレアでカードプール増やすより手っ取り早いぞ

２５９：時札
気軽にそう言えるのは〝緋色の傷〟に不意打ち食らったことないやつだけ定期

２６０：ジャック・ザ・ポット
あれホント怖いよね、ゴロゴロ唸り声が聞こえたと思ったら樹海ブチ抜いて火炎放射で焼かれた時はマジで悲鳴上げたわ

２６１：ヤシロバード
誰かツリーグラム・スロットの効率的な回し方知らないですか？

２６２：素寒ペンギン
あれ夢があるよね、現実は確率論に確率論と確率論を重ねた激烈運ゲーだけど

２６３：シラフシラス
砂漠まで何とか抜けられたけどワームに食われたってプレイヤーもいるらしいからなぁ

２６４：サンドウィッチ
樹海を楽々踏破できるようになって初めて他エリアに腰を据えて挑め、ってデザインなのかな

２６５：ヤシロバード
ツリーグラム・スロットのジャックポット特典が欲しい……

２６６：ジャック・ザ・ポット
呼んだ？

２６７：トルク
あのクッソ悪趣味なＬＭＧか

２６８：ウィルゴー
＞＞２６６
お前じゃねえ座ってろ

２６９：ミリ子
第一、第二殻層で入手できる豆鉄砲と違って勇魚ちゃんが火力を保

証した実質アンバージャックパス5相当ってだけであの金塗装も許せちゃう

270：ヤシロバード
ほんとそれ
自販機で買える銃器も弱いわけじゃないけどモンスター相手だとよくて怯ませるくらいなんだよね

271：時札
そりゃ試し撃ちがあの恐竜共じゃそうなるでしょ

272：コール尊
我らがピットボス勇魚ちゃんにそれとなく聞いた情報まとめ定期
・第三殻層「戯盤」から第四殻層「機舎」に行くルートは複数存在する
・判明してる範囲では
人間ルーレットで大当たりを出す（轟速で回るルーレットの上で自分が玉になって目当ての数字に飛び込む）
リヴァイアサン内トレーディングカードゲーム「フィロジェネテック・ジオグリフ」で勝ち抜くタワーの99階を突破する
ツリーグラム・スロットでグランドジャックポットを出す（五つのスロット全て同時にジャックポット）
競機獣レースで一着から九着まで全て当たったたパーフェクト万馬券を手に入れる
グラビティボードでハイスコア9999点を獲る（物理的に次の殻層まで飛べって事らしい）

２７３：しらたま
定期ｔｈｘ
いつ見てもクリアさせる気ないんじゃないかと疑いたくなる

２７４：ダルマッチョ
やっぱ三層まで来てるプレイヤー数が少ないんだって

２７５：素寒ペンギン
じゃあ三殻層に到達した先輩として二殻層で苦しむ後輩を手伝って
やれよ

２７６：ダルマッチョ
やだよまたあのインテリお肉と戦うとか

娯楽という名の優しい監獄（後書き）

何もゲームのルールを絶対遵守しろとは言ってない勇魚ちゃん

あゝ懐かしきかなアカい栄光の時代（前書き）

掲示板が続くんですよこれがまた

時系列的にはジークヴルム戦直後くらい

あゝ懐かしきかなアカい栄光の時代

【亡国の跡地】

同志パステル
まさかここが再び稼働することになるとは思わなんだ

同志ぺっぱー
いやホント、スパッと終了宣言したもんだから普通に閉鎖されてるものとばかり

同志無記銘刀豹
同志ハグルマンが個人で思い出用に維持させてたらしい

同志ハグルマン
私
で
す

同志パステル
おひさ

同志ギャルニーソン
実は一緒に遊んでたのでおひさじゃない

同志空桶狂ひ
あ、何？　お前らデキてたの？

同志ハグルマン
それ狙いでオフで会ったら親戚（男）だった時の俺の気持ち

同志ぺっぱー
……？

同志無記銘刀豹
……！？

同志パステル
え、ギャルニーソンネカマ！？

同志ギャルニーソン
意図してネカマとして振る舞ったつもりはないんだけどね、変声期が来なかったんだよ……それにあの人には初見で男って見破られてたし

同志ネイルネイル
嘘でしょ！？　ギャルニーソンちゃんめっちゃ化粧品とか詳しかったじゃん！！

同志ギャルニーソン
ゴメンネー、そっちは単純に当時は趣味で今は仕事だから詳しいんだよー

同志空桶狂ひ
……女装、と受け取ってよろしいか？（服を脱いで正座しながら）

同志ハグルマン
残念だが特殊メイクの方だ

同志ネイルネイル
数年ぶりに会った電脳友人のキャラがここに来て特濃になった私の気持ち

同志＊ドライバー
入って早々変な盛り上がりしてんなオイ

同志パステル
お、久しぶりケツドラ

同志無記銘刀豹
元気してたかケツドラ

同志ぺっぱー
アスドラは今でも禁句か？

同志＊ドライバー
禁句だよ馬鹿野郎

同志ネイルネイル
普通に略してんのにねー

同志ハグルマン
意固地になっちゃって

同志＊ドライバー
意固地も数年通せば誇りになるんだよ

同志ギャルニーソン

お通じが良くなった、と

同志空桶狂ひ
ケツネタは不朽だな

同志ハグルマン
流れが懐かしすぎて泣けてきた

同志セルロース
暗号檄文からきました！　マジで稼働してて感動したわ！！

同志タスマニアンエンジェル
同窓会かよ

同志ネイルネイル
檄文出たのが別ゲーだからあんまり人は集まらなそうだけどねー

同志セルロース
真っ当に遊んでたのになぁー、姐御のせいでまたグレーゾーンプレイになっちゃうなぁー

同志パステル
本音を言うと？

同志セルロース
全部上手く行ったらサードレマの一等地に土地貰うつもりです

同志ネイルネイル
あ、私もそうしよっかなー。上層、普通にオシャレなんだよね

同志ハグルマン
いやいや、我らが偉大なる同志殿なら本丸傀儡化まで行けるんじゃない？　王都にマイハウスとかねだってみようぜ

同志ギャルニーソン
えー？　王都ってなんか景観がとっ散らかってるし住むならエイドルトとかの方が良くない？

同志無記銘刀豹
近所から不健康な空気流れてきそう

同志空桶狂ひ
いや、時代は家より船だぞ

同志ネイルネイル
それなんだけどさ、ツチノコさんの名前にものっすごいデジャヴがある同志他にもいる？

同志ぺっぱー
いやここに来る同志であの名前に反応しないやついないだろ……

同志ハグルマン
恨み三割懐かしさ七割

同志タスマニアンエンジェル
で、肝心の我らが同志殿は？

同志ぺっぱー
もしかして：指定時間の三十分前

同志セルロース
皆来るの早すぎっていう

同志ネイルネイル
でかい事やってくれるっていう信頼感があるよね

同志鉛筆戦士改めアーサー・ペンシルゴン
ならば期待に応えねばなるまい！！！

同志ハグルマン
同志！！

同志セルロース
同志！！！

同志空桶狂ひ
同志ィ！！！

同志ギャルニーソン
同志っ！！

同志無記銘刀豹
我らが同志！

同志パステル
同志！！！

同志アーサー・ペンシルゴン
静粛に、静粛に！　まずはお久しぶりと言っておこう！　私の可愛い戦友同志達！

同志タスマニアンエンジェル
ヒューッ！　ブレねぇぜ同志！！

同志アーサー・ペンシルゴン
我らが偉大なる鉛筆王朝の崩壊から幾星霜、瓦礫の廃城から這い出した戦友同志諸君らは長き放浪の旅を強いられた！！

同志ハグルマン
物理的に崩壊させたの同志本人ですよね？　瓦礫にしたのも同志ですよね？

同志セルロース
退廃ってのは敵味方問わないってのがよく分かる祭りでしたね……

同志ギャルニーソン
意固地になって世界観作ってた運営が泣く泣くロールバックで城復活させたの面白かったのでセーフ

同志空桶狂ひ
あれ以降、城が半壊以上に壊れなくなったんだよなー

同志アーサー・ペンシルゴン
さて、諸君らにだけ伝わる鉛筆式暗号檄文を放ったのは他でもない……諸君、戦友同志諸君！　そろそろマイホームが恋しいんじゃないかな！？

同志ぺっぽー
勝手にホームレスにしないで同志

同志ネイルネイル
私一等地に豪邸が欲しーい！！

同志無記銘刀豹
ブルジョワに戻りてぇなぁ！！？

同志ギャルニーソン
硬いパンなんて食えるかーっ！　ふわふわ白パン食わせろーっ！！

同志アーサー・ペンシルゴン！！
家が欲しいか！　船が欲しいか！　土地が欲しいか！　街が欲しいかーっ！！

同志パステル
うおおおおおおおお！！！

同志無記銘刀豹
うおおおおおおお！！！

同志空桶狂ひ
祭りだぁぁああああああ！！！

同志＊ドライバー
イエエエエエエエエエイ！！！

同志アーサー・ペンシルゴン
今ここに！　「王国のゴタゴタに乗じて権力者に媚び売って街一つ貰っちゃおうぜ計画」を宣言します！！！
来たれサードレマ！　来たれ蛇の林檎！！　合言葉は「青林檎はもぎ取ってしまえ」だーっ！！

では質問タイム！！

同志ネイルネイル
同志！！　ツチノコさんとはどういう関係なんですか！！！　あと冬コーデが決まりません！！

同志アーサー・ペンシルゴン
同志ネイルネイル！　サンラク君とは王朝吹っ飛んだ以降もちょくちょく遊んでます！！
あと冬コーデに迷ったら素直にモデルの服丸パクリとかでもいいと思うよ！　そう例えば天音　永遠とかね！！

同志ハグルマン
同志！　計画名的に最終目標はどこかの街、という事でしょうか！！

同志アーサー・ペンシルゴン
同志ハグルマン！　掲示板維持あんがとね！！
その通り！　現王側に付いた連中から上手いこと奪っちゃおうね！！

同志空桶狂ひ
同志！！　ツチノコさんが使ったという巨大バリスタ搭載した船っていくらつぎ込んだんですか！！

同志アーサー・ペンシルゴン
同志空桶狂ひ！　あれどう考えてもクラン運用とか前提なのに個人運用してるあのアホがおかしいだけなので船が欲しいなら仲間を集めたほうがいいよ！　なんか要求する金も素材もケタがおかしかった！！！

同志パステル

同志！！！　戦争ですかい？

同志アーサー・ペンシルゴン

同志パステル……戦争じゃないよ

大！　戦！　争！！　だ！！！！！！！

同志無記銘刀豹

いいね同志、全財産持って参戦するぜ

あゝ懐かしきかなアカい栄光の時代（後書き）

ギャルニーソン（１９歳、美少年、ＡＲに頼らない特殊メイクの道に進んでいる）

と

ハグルマン（３１歳、おっさん、ブラックじゃない企業戦士）

はルームシェアしてます。薔薇の蕾が花開きそうですね（魔境面の片鱗）

『どうだね？　六角御殿の行動範囲と資金から推定した戦闘用ドロイドの脆弱性は……』

「成る程確かに、これなら下手に武装するよりグラップルする方が効率いいかも」

「俺が殴っても踏ん張るのにガゼルが捻るとポコポコ首が取れんの納得いかねー！！」

「関節だっつってんだろ……あとせめて顔面狙え」

「もうやだ隊長、ＳＦやってるはずなのにこいつらだけ原始的格闘術（プライマルコンバット）なんだけど……」

「……ま、近接技能なんてパラメータが出来たらそりゃそこに注ぎ込む奴もいるだろう」

ごめんなさいね、最近アクションゲーばかりやってたからつい癖で。まぁでも操縦技能も取ってるからパワー極振りのライノほど脳筋じゃないはず。

機先を制し、挙動を遮り、異形（バグ）を正す。破邪の聖拳イアイフィスト流は貫手のストライクで関節技も出来る。

アプデ後ギャラトラは「動作技能」にパラメータが複合されている、というちょっと特殊なステータス方式なので同じ動きとはいかなかったが、ＳＴＲ、ＡＧＩの複合パラメータである「近距離戦闘技能」とＤＥＸ、ＶＩＴの複合たる「小、中型機操縦技能」のお陰か、不

満の少ない仕上がりになっている。

「パイソンからの連絡は？」

「なんか「仕事が増えた」ってボヤいてた」

「……という事は、「仕事」がこっちに来たということだろう。ガゼル！　ライノ！　お客さんだ！！」

「バカ言えフォックス！　来客者はこっちだろ！！」

俺が繰り出す友達の家でのくつろぎっぷりは水晶群蠍君達のお墨付きだ、なにせ俺がちょっと顔を出すだけで赤ん坊からおじいちゃんまで総出でサッカーしに殺到するくらいだからな……もはや生涯の友と言っても過言ではないのでは？　照れるぜ。

『おお、異星獣制圧用大型バトロイド。それも人工筋肉の格闘型とは中々シブいチョイスだ……』

「具体的に言うと！？」

『動きが生き物クサイんだ、そのタイプ』

気軽に話しているが、おそらく今この瞬間も一秒毎に人間千人消し飛ばしてもお釣りがくるような大火力の応酬を繰り広げているのだろう愛板氏の言葉通り、アンドロイド系カラーの持つ「整い過ぎたフォーム」とは異なる、金属よりは柔く金属よりもしなやかな人工筋肉で構築された3メートルはあろう装甲と筋肉の巨人がこちらへと近づいていた。

その後ろには殺戮特化アンドロイド、さぁどうする……？

「ライノ、あれと取っ組み合い出来る？」

「流石にパラメータ以上のパフォーマンスは無理だろ」

「関節叩いてもこっちの手が折れそうだからなぁ」

「じゃあ銃使う？」

『ちなみにあのタイプの外殻は素材が装甲系戦艦のやつの流用だから』

「艦載転用系じゃないと貫けない奴じゃん！！」

「あんま弱音を吐くなウルフ……俺も心が折れそうになる」

いやいや諦めるには早いぞフォックス&ウルフ、ここで突然覚醒して戦艦砲撃級のパンチを習得できれば……いや無理だろどうするんだ。

割と詰みに追い詰められた俺達に引導を渡すべく、クマとゴリラを混ぜて装甲で固めたような筋肉ドロイドがゆっくりと腕を振り上げ……そして比較にならない速度で振り下ろした！！

『いい身体してるわね、喧嘩屋さん達？　ちょっと腕相撲でもしない？』

「ライノ行けよ、俺はパワーとスピードを程よくテクニックで活かす主人公タイプだからパワータイプが適任だろ？」

「俺、21世紀初頭漫画(レトロコミック)よく読むから知ってるぜ、こういう時に力

を試してやるぜ！　とか言って挑むパワーキャラって八割噛ませだよな」

「二割になれよ、今がチャンスだぞ」

『ロッカクさん美味しい蜂蜜とセキュリティの緩いお人形をありがとうパーンチ！！』

振り下ろされた巨腕は俺達ではなく、腰に捻りが加わったことで後ろからついてきていた殺戮特化ドロイドの群れをボウリングよろしくまとめて吹き飛ばした。
筋肉ドロイドの頭上に表示されたアイコンは持ち主であるディアホーン氏の色を塗りつぶすようにこちら側のカラーへと変わっている……成る程、こういう弱点もあるのか。

「すっげぇ、あれ盾にして進むだけで勝てるんじゃねぇか？」

『んー、テラトン級複数保有者として悪いニュースを伝えてもいいかね？』

『今見えたけど聞くわ』

『最低でも100機は作れるんじゃないかな、そいつ』

嘘だろ重課金、群れちゃいけないタイプのNPCだろこれは。
のっしのっしとおかわりされた三機の筋肉ドロイドの姿を肉眼でも確認した俺達は思わず笑顔が引きつる。

『あー待って、同型なら背中のエネルギー供給筋肉(ケーブル)をブチ切れば倒せるわね。へー、人工筋肉がケーブルでありポンプなのねぇ』

「だとよ、流石に打撃じゃ壊せないよなぁ……」

「残念だったな、俺はナイフを持っている」

「うわ！　重装甲加工用断裁ナイフ（ヘヴィデスメタル）！？　クッソ高い奴じゃん……」

『譲り渡した分の働きはしてくれたまえよー』

無論！！

刃渡りという変えようのない制限はあるが、斬れ味に関しては絶対の信頼が置けるって事は実質相手のＶＩＴを完全無視できるってことだ。

こちら側についた筋肉ドロイドの股下を潜り抜け、巨躯故に律儀な縦列でこちらへと近づいてきた的筋肉へと肉薄する。無論殴りかかってくるわけだが……

「もうさ、定石（セオリー）ですら安い言葉なんだよな……」

パワー型の敵が振り下ろした腕は隙であり足場であり……天才も鬼才も凡才も、こういう敵をデザインすれば必ず組み込む必然の如き流れ。中にはこの必然を意図的に崩す奴もいるかもしれない、だがそれは「それが正しい」という前提の否定だ、結局のところ必然から逃れられた訳ではない。

「まず一体！」

「ようガゼル！　俺もボウリングがしてぇから上手いこと避けろよな！！」

「事前に！　言え！！」
このゲームにおいて個人携行できる武器の上位ティアーは何かしらテラトン級戦艦に関わりを持つ。
何者にも媚びず、与せず、対しないとある老人（プレイヤー）が保有する銀河最強（オンリーワン）の刀（アイテム）は一振りで戦艦に切れ込みを入れると噂されているし、そうでなくとも戦艦の装甲を加工する為の特殊なカッターと同じ素材のナイフであったり、艦載砲をそのまま振り回すガトリングキャノンであったり……つまるところを言えば俺以外の奴らが使ってるものもまた、尋常ならざる武器という事だ。
「踏ん張らねぇ人形なんざ小指でも倒せるってなぁ！！」
噴進打撃作業槌（ジェットストライカー）、よくある推進力で加速して殴るハンマー……ではなく、例えるなら棚の引き出しが勢いよく飛び出してくるかのように前後へ稼働する打撃面をジェットエンジンによる噴射で叩きつけるという……まさしく噴射（ジェット）そのもので殴りつけ（ストライクす）る生産購入可能な中では最高クラスの打撃武器が機能停止した敵筋肉ドロイドを仰向けに吹き飛ばす。
テラトン級戦艦を相手に文字通り大工作業するためのハンマーだ、たかだか3メートルの金属と人工筋肉の塊に受け止められるはずがない。逆に言えば反動でライノが面白い独楽になって吹っ飛んでいたがそれは無視。
突然自分の方に倒れこんできた敵筋肉一号に対し、後ろにいた敵筋肉二号はダメージの最も少ない対処……つまり受け止めるというアクションを選んだ。
「なんていうか、俺も近接極振りにしたくなってくるわ、爽快感ぱ

ねーもん」

弾丸が飛ぶ、こちらについた筋肉ドロイドも含めれば実に四体の巨体を正確に避ける弾丸が殺戮特化ドロイドを次々に倒していく。なにせ先程からどうにもヘタれた言葉が多いがキルスコアが一番高いのは間違いなくウルフだ。

複合照準機能付銃（マルチプルセンス）、プレイヤーが顔に装着する（あるいはヘルメットに組み込む）専用のゴーグルとセット運用する事で保有、あるいは同盟を結んだテラトン戦艦搭載のセンサーのシステムを間借りしてほぼ確実にプレイヤーが狙った場所に当てられるというＦＰＳプレイヤーが見たら噴飯ものか失笑ものの間違いなしの銃……結局のところ最後にものを言うのは艦隊戦だからこそ許された超性能大型拳銃。

要求パラメータが恐ろしく高い以外はアクションが不得手なプレイヤーでも百発百中になれるそれと、本人の優先順位のつけ方もあってか雑魚狩り担当として既に百体以上はキルスコアを稼いでいるだろう。

敵筋肉二号の背中を這うケーブルを切断、こうなれば最早流れ作業。倒れる敵筋肉一、二号に動きを封じられた敵筋肉三号は鋼の屍を踏み越えてタックルをかました味方筋肉ドロイドによって転倒、あとは流れ作業で処理。

「っし、先進もう」

『ドア開けといたわよー、あと私も移動するからちょっと待って』

「いやー、殺戮特化のアンドロイドが弾薬ドロップしてくれて助かるわー」

「なぁこれ反動どうやればいいんだ？」

『一応チュートリアルでは反動で逆回転して尻で叩く、みたいなことは書かれていたがね』

そんな中、ぽつりとフォックスが呟いた。

「……なんか俺だけあまり活躍していないような」

五分後。

「「『「助けてフォックス！！」』」」

「どいつもこいつもパズルゲーに弱すぎる……！！」

プレイヤー用のミニゲーム的セキュリティシステム、制限時間内にクリアできなければ輪切りか、蜂の巣か、強制退去か……しかしながらその全てを最速でクリアした狐頭のプレイヤーは、今度もまた鮮やかな手つきでパズルを解いたのだった。

戦艦崩しの一芸人達（後書き）

愛板やGカップムネ肉は所謂プレイヤー間での争いや協力などを楽しむ対人勢

中にはひたすらこの宇宙の果てを目指す求道勢もいる

一点張りサイバーマッスル（前書き）

アイスボーン　楽しい（遺言）

テラトン級戦艦。戦艦と名はついているが、生産プラントに特化した船も存在するしＮＰＣへの好感度稼ぎのために豪華客船のようなカスタムが施されたものも存在する。あくまでも「戦闘能力も備えた超巨大宇宙船」がこのゲームにおけるテラトン級だ。
俺は最近別ゲーでテラトン級をさらに超える地方サイズの超超超弩級恒星間移動用宇宙船を見たのでちょっと物足りなさを感じているが……いや、それよりも重要なのはテラトン級戦艦の種類だ。
この超弩級サイズの宇宙船だが、基本的に建造できるルートはそのテラトン級の「型」によって変わってくる。

例えば愛板氏が初手にブッパした際に砲台として機能した三番艦「グレートウォール」は兵装型にカテゴリされる、船ではなくあのビッグクランチ砲を運用する前提で砲撃システムを戦艦として建造したようなテラトン級だ。これはＮＰＣを乗船させられる数が少ないし、戦闘機なども搭載できないと制限が多い代わりに瞬間的な破壊力は戦争初日に示された通りだ。

では本題、俺達が現在攻略しているディアホーン氏保有の二番艦「六角御殿」は一体如何なる「型」に分類されるのか……
答えは見た目通りというか、複数のギガトン級パーツをくっつける連結型と呼ばれるタイプだ。でっかいネジやら装甲やらを組み合わせて一隻の船を完成させるのではなく、既に完成品の戦艦を最小で五、最大で三十連結することで初めてテラトン級として定義される。六角御殿は当然三十連結、このタイプでは最大規模のテラトン級戦艦だ。

『このタイプのテラトン級は連結に使われているギガトン級の数だけ役割を分散させることができる。建造コストはかかるがテラトン級自体の保有数を少なくできるメリットもあり……』

「つまり？」

『便宜上「本体」と呼称するが、本体は常に中心にある。そしてテラトン級は船と船同士のゲートだけは閉鎖できない仕組みになっている』

「マップデータは手に入れたわ、地図一枚手に入れるのに随分と時間かけちゃってごめんなさいね？」

「つまり………」

「最短ルートで残り2ブロック、それでこの六角御殿の中枢に辿り着ける」

「いいねェ！　ボス戦だ、盛り上がってくるじゃねェか」

戦争二日目終盤、主導権を奪ったことで心強い味方となった筋肉ドロイド………全員で相談の結果「マチョヶ峰君」と命名されたバトロイドの力もあってか、破竹の勢いで進撃した俺達はついにこの六角御殿に王手をかけようとしていた。マチョヶ峰君ではない。

彼のおかげで攻略は大幅に楽になったと言える、なにせ「力技でぶち破る」という選択肢が増えただけで時間も手間も減ったり増えたり………ま、まぁ総合的に見れば楽になったと言える、だろう。

「で？　自爆でもさせればいいのか？」

『いや、これ単体との戦いならそれでもいいかもしれないが今回は中枢に到達した時点で二つの作戦を実行する』

作戦？

あまりに自然に会話に入ってきているが、恐らくこの中で最もやることが多いはずの愛板氏はそんなことを微塵も感じさせない声音で作戦内容を説明し始めた。

『いいかね、テラトン級戦艦というものはあれはあれで制約が多い。例えば一人のプレイヤーが複数のテラトン級を運営する場合、必ず一番艦とそれ以降の艦は転送ゲートで繋がっていなければならないし、複数のプレイヤーによる連合が組まれた場合は、各プレイヤーの保有する一番艦は他プレイヤーの一番艦と直通しなければならない』

当初はＮＰＣのストライキ用のデメリットだと思われていたが、今この状況を見ればその意味合いはもう全くの別物になっていることは誰だって分かるだろう。

乗り込んでくる獅子身中の虫（敵プレイヤー）という存在が、単なるＮＰＣのやんちゃを手助けする要素を艦隊の終焉を招きかねない危険なギミックに変えたのだ。

『運営も中々に味のあるアップデートをするものだ……恐らく向こうもセキュリティを強化しているだろう、だからこれは時間との戦いだ』

「……作戦を聞こうか雇用主殿」

『此度の戦争における紳士協定についてはすでに知っているだろう、だがアレには一つだけ穴がある』

「敵艦、敵プレイヤーへの攻撃的アクションの禁止……あ、そういうことか」

「どういう事だよガゼル」

ちょっと待て、それってつまり……え、このゲームそんなことも出来るようになってるの？

『鍵は君だパイソン君、今日の戦争期間終了十分前に私の方から三艦使って大規模なハッキング攻撃を六角御殿に仕掛ける。私の船は宇宙戦闘に特化しているが流石に連結型のテラトン級一隻のセキュリティリソースを全て釘付けにすることくらいは出来る』

「あー……つまりぃ、外側と内側両方からハッキングを仕掛けてこの船を乗っ取る……ってことぉ？」

「え、出来るのそんなこと！？」

ウルフの驚愕も尤もだ。厳密には違うが基本的に宇宙船のサイズはセキュリティの強度に比例する。如何に最高級のハッキングアイテムを支給されているとはいえ、一人のプレイヤーがテラトン級をハッキングするのは不可能だ……テラトン級は、だが。

『理論上は可能だ、一隻型のテラトン級では無理だがギガトン級の集合体である連結型であれば本体を除いた全ての連結ギガトン級のリソースを剥げばパイソン君が担当するのはギガトン級一隻分のセキュリティリソースになる』

「それでも無理なんじゃない？　ギガトン級を十分で攻略だなんて

……」

『いや、主導権を奪う必要はない。ハッキングして欲しいのは本体が他の構成ギガトン級に対して発する命令コードの発令だ』

……

…………

……………

二日目、モスコミュール宙域にて繰り広げられる大激戦もあと十分で終わる……依然として警戒はしているもののどこか気の緩みが出始めるその瞬間に、それは仕掛けられた。

『電子攻撃開始、作戦時間は十分……十中八九、六角御殿最奥にはガーディアン……船を守る最後の砦がいるはずだ』

「言っとくけど、私に回避とかそういう自己対処は求めないでね？別ゲーでも基本的に後衛張ってるんだから」

「心配ない、大船に乗ったつもりでいろよパイソン」

「おいガゼル、もうここ大船だぞ」

「……開くぞ、ボス戦だ」

「頼むよマチョヶ峰君……」

さーて、何が出てくるかな。

◇

「ふっふっふ……どうやら私の蜂の巣に不躾な虫が入り込んだようだ……だが彼奴等の命運もここまでよ、六角御殿の最終防衛ライン「ＸＸ－Ｈ　ヤマタヒュドラ」三体による面制圧で蜂の巣の塵になるがいい……！」

『おお、ディアホーンさんアレを三機とは中々やりますな』

「はっはっはっ！　なぁに、ポケットマネーですよ」

『うーむ、我々的には本当にポケットマネーだから威張っても特に何にも感じませんねコレ……』

『ん？　しかし大丈夫なのですかロッカクさん』

「何がです？」

『ヤマタヒュドラって確か有線接続だから、真正面から突っ込んでくるＮＰＣ相手ならともかくプレイヤー相手だと割と弱点丸出しのような……』

「…………………ふぅーーーーーーーー」

『ディアホーンさん、まさか知らずに………！？』

『総員六角御殿に攻撃用意』

「待った！　待った！！！　まだ分からない！　まだ分かりませんよムネ肉さん？！！」

一点張りサイバーマッスル（後書き）

アプデ後ギャラトラあるある

カタログスペックと実際の性能に齟齬がある、コンセント抜けば機能停止する殺戮兵器とかね

思い切りと決断となぜかいる鳥の影（前書き）

親知らずァエイ！！！！！（今の心境を一言で表す叫び）

「ありがとう、マチョヶ峰君……」

逃げ傷のない雄々しい背中を見せ、その前面を弾丸とレーザーの嵐でズタボロにしたバトロイドがゆっくりと消えていく。結果として短期決着という結末になったとはいえ、プレイヤー程度なら一分で百人くらい消し飛ばせそうな弾幕の暴力が僅かでも振るわれたのは事実だ。

その役目故に動けないパイソンを守って命を燃やし尽くしたマチョヶ峰君が消えていくのを誰一人欠けていない五人で見送りながら、俺達は機能を停止した三機の怪物ロボットへと視線を向ける。

「有線接続で助かった……」

「というか向こうさん、詰め込みすぎて身動き取れなくなってなかった……？」

「……お陰でマチョヶ峰君だけが狙われ続けたがな」

コンセプト的には分からんでもないが、悲しきかなマチョヶ峰君という盾があったことでデメリットの方が大きくなってしまったな。タンクがヘイトを集めてる間に攻撃担当が迂回して有線ケーブル破壊して終わり……うーん、ＵＩだけで処理して実際に見たら大惨事になる感じだ。

危牧あるある、対災獣用レーダーを設置してこれ安心と目を離していたらレーダーを無効化する災獣に畑を荒らされてリセット。やっぱり最後にモノを言うのはプレイヤー自身の直接確認だな……いや

今でも納得してねーぞなんなんだレーダーを無効化するステルスイノシシって。畑を破壊することに特化してる災獣は時に直接的な被害をプレイヤーにもたらす犬以上に厄介だ……そう、ちゃんと確認しないとなった五人のプレイヤーにテラトン級戦艦を乗っ取られてしまうのだ。

「……ま、お陰でこちらが上手く回せたんだ。この船の元持ち主に感謝の言葉でも考えておいてやろう」

『はっはっはっ、でかしたぞ君達。最高のタイミングで紳士協定期間だ、今のうちに六角御殿の主導権を完全に奪取する』

紳士協定期間は一切の攻撃的行動を取ることはできない、だがそれ以外の行動まで禁止されたわけではない。例えば損傷の修復や翌日用の弾薬生産、ＮＰＣの慰労などなど……そういった裏方作業であれば認められているわけだが。

現在六角御殿は戦争期間終了一分前に愛板氏が叩き込んだ渾身の乗っ取り（ハッキング）によってコアとなる中枢艦の所有権をこちら側に一時移譲している。

『ふふふロッカクめ、国内ナンバーワンシェアに胡座をかく悪癖を直さないからこうなるのだよ。変革に対して腰が重すぎるなら乗っ取られても文句は言えないのさ……』

「うわー……」

「ウルフ、ここから先は私たちの踏み込めない世界よ」

「資本主義かぁ……」

「……で？　明日はどうするんだ雇用主殿」

『明日？　ああそうだ明日だ、そうだまだ二日目だ、ロッカクの奴にメールを送ることに意識が向きすぎたないけないいけない』

そこは戦艦改造に意識を向けて欲しかった……だがテラトン級の離反ははしゃいでも仕方ないくらいの大ごとだ。戦況は５：５愛板氏若干不利から５：５愛板氏若干有利になったと考えていいだろうし、向こうも当初の計画を変更せざるを得ないだろう。これはもう勝ったと言っていいのでは？

……

…………

……………

………………

…………

……

そう考えていた時期が俺達にもあったんだ、あったんだよ…………

「わぁー………見てよ皆、十数万円が宇宙の藻屑になってるよ」

「……なかなかお目にかかれない光景ではあるな」

「十数万円分の価値あるかァ？　これ」

「あっけなさにこそ侘び寂びがあるんだろう、俺には理解できないけど」

「じゃあこれからぁあっけなく押しつぶされそうな私達にも侘び寂びがあるのかしらね？」

三日目。乗っ取った六角御殿からディアホーンの本拠地「女王玉座」へと転送された俺達が見たものは、初日の初手を彷彿とさせるこちら側から放たれた極太レーザーが六角御殿に直撃する光景だった……そして振り向けば、今度は人間ＮＰＣもちらほら含まれた女王玉座のセキュリティアンドロイド達がこちらへと迫ってくる光景……侘び寂びがなんだ山葵がなんだ、外見て呆けてる暇はないようだ。

「半日経ったとはいえ即処分に踏み切るとは！！」

「見事に中枢艦を打ち抜かれたわね！！」

「おうおうおう勢いやべェぞ！　どっか逃げ道探さねェと！！」

「くっそー！　人間ＮＰＣの方も上等な装備しやがってーっ！」

「……パイソン、マップデータは！」

「悪い知らせがあるけど聞きたい？　この船、各ブロックが転移ゲ

ート方式で完全隔離されてる型だから今だとどこにどう出るのか分からない！」

だとしてもここで戦うのは無理ゲーってもんだ、ちくしょうマチョヶ峰君カムバーック！！　彼さえいてくれればと考えずにはいられないが……ないものをねだっても虚しくなるだけだ、飛び込むしかないっ！！

「行け行け行け！　ライノが潰れる前に！！」

「いやそろそろ潰れそうだぜこれ！！」

ハリアーップ！！！

……

…………

……………………

………………………………

◆

【旅狼】

鉛筆騎士王：で、まーだ戻ってこないんですかサンラクくーん

サンラク：何を企んでいる

モルド：諸々のプロセスを一切飛ばして疑いに帰結してる……

鉛筆騎士王：いやちょっと王様の首を……こう、ね？

サンラク：鉄砲玉じゃねーか！　お前またなんかやらかそうとしてんのかよ？

鉛筆騎士王：いやいやいや、流石に今回は爆破しないよ

モルド：爆破……？

鉛筆騎士王：モルド君は気にしなくていいんだよー、遠い遠い思い出だから

サンラク：　思い出って言うかトラウマ寄りの悪しき歴史の間違いだろ

鉛筆騎士王：当時のメンバー集まってます

サンラク：当時の………

サンラク：は？

鉛筆騎士王：サンラク君、基本的に他ゲーやってる時って情報遮断するタイプでしょ

鉛筆騎士王：この私が盛大に盛り上げてるって言うのにさぁ！

モルド：まさかサードレマのレジスタンスイベントって

鉛筆騎士王：私のことはサードレマ特別相談役アーサー・ペンシルゴンと呼んでもらおうか

サンラク：断頭台へレッツゴー！

鉛筆騎士王：イエス！　司法取引！

サンラク：腐り切った法に価値なんてなかった

鉛筆騎士王：私が法だ

モルド：な、流れが早い……

サンラク：慣れて欲しくないけど慣れろとしか言えない……

鉛筆騎士王：そういえばルストちゃんは？

モルド：リヴァイアサンに篭ってるよ。なんでも借金するとジョッキーになれる？　らしくて

サンラク：言ってる意味が欠片も理解できねぇ

鉛筆騎士王：ま、そこらへんは自分の目で見て確かめなよサンラク君

オイカッツォ：彷徨う大疫青討滅

サンラク：いやどっちにせよあと数日はこっちのイベントだし……

鉛筆騎士王：ちょっと待って今なんて言った？

モルド：大青疫ってなんだっけ、名前的にレイドモンスターだよね？

オイカッツォ：父さんな、レイドモンスターで食っていこうと思うんだ

サンラク：ああ、ユニーク自発できないから闇堕ちしたのか……父さんユニーク自発まだー？

鉛筆騎士王：ユニーク自発できないマンの成れの果て、か………パパン、軍資金(おこづかい)ちょーだい！

鉛筆騎士王：いや待ってマジじゃん速報流れてきてる！　うーわ、計画調整しないと！

オイカッツォ：報酬について聞きたい？

サンラク：いや、俺も大疫青に一発入れてるから貰えるだろうし別に

オイカッツォ：…………………

鉛筆騎士王：うーんこのマウントに対するリバーブロー

思い切りと決断となぜかいる鳥の影（後書き）

ユニークシナリオ自発できなさすぎてキレたオイカッツォ氏、レイドハンターに転職する

なおオイカッツォ氏、大疫青君を倒すために例の魔薬に再び手を出した模様

それはまるで摩耗すれども確かに地へ威を届ける隕石のように（前書き）

ニビル二枚出たので今日から天性の勝ち組名乗っていいですか？
ツチノコ一枚も見つけてないからダメ？

シングルで３枚買ったから人造勝ち組なので祝福の更新です

それはまるで摩耗すれども確かに地へ威を届ける隕石のように

アンドロイドに混じって人間のＮＰＣが混じっているが、いちいち区別して倒す倒さないの取捨選択ができるはずもなく。もう少なくない数の人間が血だまりに沈んだわけで……そしてそれらに手をかけた俺たちはと言えば。

「お、レベル上がってる」

「近距離格闘一択だろ」

「いや待て待て、早計だぞ」

「……せめてこう、もう少し宇宙船運営にリソースを割こうとは思わないのか？」

「アプデ後からプレイヤーが生きてる限りはゲームオーバにならなくなったからよう、そりゃオメェ……」

「「敵船に全戦力で乗り込んで奪い取ればいいじゃん？」」

「…………ねぇガゼルにライノ、この戦いが終わった後も俺たち友達だよね？」

「そうなるかどうかはあれだよ、誠意を見せてくれよ」

「二人とももう五回くらい命救ってるよね！？」

「極限状況下における恩のなすりつけなら俺達もできるからノーカンだぞ」

「つーかその理論なら俺が一番誠意を受け取るべきじゃねぇのかよ？」

「ナビゲートにも誠意が欲しいのだけれど？」

「「「あざーっす！」」」

「誰が曖昧な誠意をよこせと」

まぁ、好き好んで敵戦艦に乗り込むような連中がＰｖＰにせよＰｖＥにせよ何かと戦うことに対して忌避感があるはずもなく。更に言えばこの場にいる潜入チームは全員無双ゲーなども嗜んでいたのでどんな顔して突っ込んでこようがそれは単なるエネミーであり、スコアであり、経験値でしかないのだ。強いて言うなら強奪できる武器が人間用なので俺たちも使えてラッキーってことか。

「………宇宙海賊だろこれ」

「おいフォックス、みんなが言わなかったことをついに……」

「俺はいいと思うけどな宇宙海賊」

『私もいいと思う』

「あ、お疲れ様っす愛板氏。戦況どうっすか」

『正直言って若干不利にまで戻されてしまったが、大局的に見れば

私の方が有利だね。六角御殿も含めて二隻落とされたのは痛いがこちらも六角御殿の奪取を含めて二隻落としている、そしてグレートウォールの再装填は最終日には終わるが向こうの再装填はこの戦争中には終わらないからね』

なるほど、序盤ブッパにもちゃんと目論見があったわけか。初っ端からテラトン級一隻がほぼ置物に等しい金属の塊になるというデメリットを受け入れてでも、戦争中に二度の戦略兵器を使えるメリットを取ったということなんだろう。そしてそれは一隻置物になったとしても他のテラトン級で穴を埋められる火力を持つ愛板氏だからこそできる芸当だ。

さらに言えば六角御殿の脱落は双方にとってマイナス1としてカウントされる。むしろ元々自分のものではないテラトン級に被害が行ったので愛板氏の保有するテラトン級は一隻しか墜ちていないとも言える。それ故に六日目現在、拮抗という奇跡的な現状を作り出すことができているのだ。

それとは逆に、潜入班である俺たちの進捗は良いとは言えない……というか悪い、としか言えない有様だった。

「また変わってるぅ…………」

「くっそ………敵の方も迷ってるのが救いといえば救いか……」

そう、女王玉座に侵入してからディアホーンの撃破を目指していた俺たちだったが、途中からディアホーン側からのアプローチが撃退から遅延へと変わったせいで俺達は一度使うごとに全く別の場所につながる転移ポータルに手を焼いていたのだ。

愛板氏曰く、転移ポータルにそのような妨害機能は搭載されてないはず……との事だったが、であるならば可能性は一つしかないだろう。人力シャッフルだ、恐らく俺たちを中枢に近づけないためにデ

ィアホーン本人が手動で転移先をいちいち変更している。それは愛板氏からの攻撃に対してほとんど機械的な反撃しかしなくなった女王玉座の動きからほぼ確定と判断されたが、だからと言って雇用主が雇われのプレイヤーごと女王玉座を撃沈させるわけにもいかない。ぶっちゃけ俺が愛板氏で潜入に鉛筆とかカッツォを送り込んだのなら躊躇いなく撃沈させると思うが、資本主義の頂上付近におられる愛板氏的に信用の裏切りは以ての外とのことらしい…………ああ、つまりそう言うことなんだ。

「足引っ張りまくりで申し訳ない……」

『いや、女王玉座の機能を半減させていると言う点では十分に役割を果たしている……気にすることはないよ』

そうは言っても…………いや、もう取り繕うのはやめよう。正直言って愛板氏に貢献するとかしないとかじゃなくて、このクソゲー迷宮にたった一人の涙ぐましい人力シャッフルで彷徨わされているという事実に我々一同、結構頭がポカポカしてるし脳みその潤滑油が切れて全体的にギスギスしてきているのだ。しゃあねぇ、発破をかけてやろう、この俺……何故か清く正しく生きているのに鉄砲玉になることの多いガゼル様がな。

「リーダー、提案があります」

「……聞こう」

「このままでは最終日までさまよって終わりになります、ここで一丁賭けに出るべきかと」

「具体的にどうすンだよ」

「だって進むにしても戻るにしてもシャッフルだよ？　多分向こうの速度が追いついてないときは元の場所にも取れたりするけど……警備員の詰め所に繋がった時とか地獄だったじゃん？」

「だからもう思考と停滞を捨てる」

「…………？」

つまり、こういうことさ。

◆

「突撃ぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！」

「行き止まりだ！」

「黙れ！　戻れ！　進め！」

「敵多数！」

「黙れ！　進め！　進め！！」

「おいゴラァ！　ガゼルテメェ二度と俺のこと脳筋って呼ばせねェ

からな！！」

「黙れ！　進め！　進め！　進めぇぇっ！！」

思考力を捨てろ！　本能だけを行動のようすがにしろ！　一流の鉄砲玉は深く考えない！　突撃ぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！

人力シャッフルがなんだ！　それってつまり対応速度は人並みって事だろう、だったらそれ以上の速度で駆け抜けてシャッフルされる前に本丸に辿り着く！　急がば回れ？　急いで回るんだよ最短最速で行けば回り道でも俺がワールドレコード！！

「最小の手間で最大の活路を開け！　弾幕張られても一人潰せば一人分の道が出来る！！」

「後ろ四人が死ぬじゃねーかその活路！！」

「……だが、打開するにはこれくらいしないと、な！」

先頭の俺がセキュリティ達の中に飛び込んで撹乱、直後に追いついたライノが力技で突撃。崩れたところを後詰で刈って突き進む、ぁくまでも全滅狙いではなく強行突破なので無視しきれないダメージも増えていくが……それを無視して突き進む！　転移踏んだ！　外れ！　突撃！　突撃！　転移踏んだ！！　突撃ィ！！！

「弾が無くなりそう！　誰か持ってない！？」

「屍から奪え！」

「規格合わないんだよこれぇっ！　くっそ銃よこせ！！」

「ねぇ！　そろそろ私落ちそう、なんだけど……っ！」

「……気合いで、進めっ！！」

「すまんフォックス！　気合いじゃなくて知恵貸してくれ！　パズルロックだ！！」

「……こんな時に、いや待てパズルロックだと？」

僅かな沈黙、ライノの纏う装甲（スーツ）にビシビシと弾丸が当たる音だけが響き……直後、全員の脳裏に雷の如く活路から差す光が見えた。

「フォーックス！　速攻で開けーっ！！！」

「来た来た来た来た！！」

「……プレッシャーをかけるな！　急かすな！　手元が狂う！！」

見えたぞ本丸、覚悟しやがれ討ち入りだコラァ！！

それはまるで摩耗すれども確かに地へ威を届ける隕石のように（後書き）

人力シャッフル

所謂船内の模様替えを利用した小技、ただし思っているよりも便利なものではなく模様替えのためには転送前、転送後のエリアにプレイヤー及びＮＰＣが存在している場合は模様替えできないのでディアホーンは現在プレイヤーがいる区画の次の次を調べてちまちま区画をいじっていた……数日間、ずっと

なにもキ印ゲージが溜まっているのはガゼル達だけではない

「きえええぇぇぇぇぇぇあぁあぁあぁあぁぉぁぁぁぁ！！！」

金と、ＨＰと、ついでに正気をかなぐり捨てた狂気のガトリングが船長室に穴を穿つ。蜂の主人がガトリングで蜂の巣にせんと襲いかかってくる絵面は安全圏から見れば笑いもこみ上げるのかもしれないが、今の俺たちは敵であるディアホーンも含めて全員イライラポカポカギスギスがＭＡＸまで蓄積している状態である。

もはや誰もこの狂乱の宴を止める者はいない、数日間ただひたすら模様替えを繰り返し続けたホーネッツネストの頂点ディアホーンの目から正気の光は失われており、ぐるぐると焦点が定かではない表情のまま替えの利く駒に配慮するつもりはねぇと操舵室のＮＰＣもろとも俺たちを葬るべくガトリングをぶちまけている。

「きぇぇぇぇぇぇぇ！！」

「カラスだってもう少しお淑やかに鳴くぜ……いい加減くたばれやぁぁぁ！！！」

だがこちらも負けてはいない、流石に真正面からガトリングを受け止めることはできないがそれでも全員あのガトリングばあちゃんに一発入れなければ気が晴れない連中だ。

各々がガトリングから逃れつつも反撃を繰り返しており、如何にディアホーンが特注の艦長スーツで攻撃を防いでいたとしても限界はやってきた。

「ちょいと失礼」

「な、いつの間に背後に――」

そりゃアンタ、途中から陽動に回ったライノばかり見てるんだから視線から外れたガゼルさんは動き放題よ。タイマンならともかく乱戦ならこの程度できなきゃ孤島じゃやっていけなかったもので……はいジャーマン！！

「ふんっ！！」

「ごふぅ！！？」

流石に実年齢通りのアバターではないのだろうが、それでも華奢で軽い女性アバターをぶん投げるくらい、近接偏重のステータスなら訳もない。ついでに頭に一発入れといて……

「はい捕獲」

「絵面な」

「人道的宇宙海賊だろどう見ても」

「宇宙海賊を将来設計に組み込むのやめとこ？　ね？」

いいじゃん、金も帰る場所もないならデブリ以下の享楽に浸って朽ち果てようぜ？

「あー、愛板氏？　ご要望通り捕獲しました」

『結構、あの乱射の中で的確に鎮圧するとは素晴らしい』

「一応ルチャからボクシングまで上っ面だけならパクれるんで、ちょちょいっと」

「え、ルチャできんの？　なんか技見せてくれよ」

「カスティゴいっとくか、ほらライノ立て」

「拷問技はヤメロ！！」

じゃあフランケンシュタイナーとか？　あれ受ける側の協力がないと難しいんだけど。まぁイアイフィストの補正ありなら便秘で出来るけどな、イアイフィストに足技がないなんて誰も言ってないのさ……

「……で？　なんだって生かして捕まえるなんて回りくどい真似を？」

『いや、そりゃあ……ああパイソン君、デバイスをもう少し近づけて』

「え？　こう？」

『そうそう、いい位置だ。おういディアホーン』

「……何さね」

『……私の勝ちぃ～～』

うわぁ。

まさかそれなのか、それを言いたいが為だけにわざわざ生け捕りにしたのか。もはや陰湿という言葉すら生温い、人は金と余裕が出来るとこうも壮大な煽りをぶちかませるのか。参考になる……いや参考として活用できる日が来るのかどうかは知らないが。

超資本主義ギャラクシー煽りが直撃したディアホーン氏の身体がちょっとヤバい感じに痙攣している、というかこれＶＲシステム側から緊急ログアウトされないか心配になってくる痙攣なんだが。

「アンタたちよくもまぁこんなクソ人間についたね！？」

「いやまぁ、金ですよ金」

「……金と義理で繋がるビジネスなもので」

義理で金は稼げないが金で義理を取り寄せることはできる、世知辛い一方通行だ。

「くっ、アプデ後の変化ってのはこういうことか愛板……まぁいい、次に活かすだけだとも………」

『ふむ………さて？』

…………。

なんだろう、ディアホーン氏と愛板氏との間に沈黙。いやこれはどちらかというとディアホーン氏が何かいうのを愛板氏が待っているような。

『私ならそうするがね』

「チッ、こいつと同じ思考ってのは癪だがアタシだって思うところ

はある。いいさね、乗ってやる」

分からない、だが沈黙の中でディアホーン氏は何かを決断し、愛板氏がそれを後押ししたのか。そしてディアホーン氏がなにを決意したのか……それは雇用主殿による捕虜の解放という突拍子も無い支持という形で実行された。

「いいのか？」

『心配は無用だ、あのディアホーンが完璧なものに水を差す筈がない』

「……フン、そこの家電王の言うとおりさ、ここまでストレートに首に刃を突きつけられた以上は無様は晒さない」

家電王？　何のことでしょうね？　国内最大手家電メーカー「サウダージ」のお偉いさんとこの知り合いを煽るためにン十万ぶち込む超弩級煽りカス愛板氏に関連があるわけないじゃないっスかハハハ……いやほんと、聞かなかった事にしておきましょう。俺に資本主義の暗黒空間で戦う力はないです。

「あんた達、明日……この戦争最終日の開始五分間だけホーネッツネストはあんた達に協力してやる。だから今日のうちに装備を補充しておきな、設備は貸してやる」

「えっ、マジで？」

「端金でもナメられたんなら相応の拳を握るのがロッカクの流儀さ……こいつの利になるのは癪だがどうせ死ぬなら意義のある死を迎える」

これがマナーゲーム最上位の交渉だと言うのか……会話の主軸が「祭し」だけで進行している……だが、ここに到達するまでの脳筋強行軍によって装備が限界だったのも事実、いくらガトリング装備とはいえプレイヤー一人も制圧に手間取ったのは装備の質以前に押し切るだけの弾薬がなかったからに他ならない。
それが補充できるってんならありがたいが……数日間敵対していたからこそ疑念が拭えない。

『あー、要するにだね……どうせ死ぬならここで死ぬより自分の船を雷撃処分させたGカップムネ肉達に一発入れてから死にたい、ってことさ』

「あっ、成る程ォ！！」

「え、、それで納得できるのガゼル……！？」

「善意で協力持ち込まれるより百倍納得できる」

「あんた商才があればこっちに来れるよ」

鉛筆が薄味に見える伏魔殿からのお誘いは、ちょっと……しかし、この戦争もついに最終日か。長いようで短いような……なんだかんだシャンフロからもそれなりに離れていたし、この戦いが終わったら俺シャンフロに戻って……いや、待て、これ死亡フラグだ！　あっぶねぇ、人ってこんな自然な流れで死亡フラグ建てる生き物なのか。
だがどうする、建てた以上は折らねば死ぬ。何か別のフラグ、いや旗よりも隠し弾や切り札で補給しなければ…………そうだ。

サンラク：レイさん、レイさん

サンラク：折り入って相談が

サンラク：……あ、寝てるかもしれない可能性を忘れてた、申し訳ない

サイガ－０：起きます！！！！

サイガ－０：いえ

サイガ－０：ちが

サイガ－０：起きてます

サンラク：あ、起きてた……夜分遅くに申し訳ない

サイガ－０：は、はい

サンラク：明日会える？

◇

「はうっっっく…………！！？」

「玲、なにを生まれたての仔馬のように廊下で震えているのですか。尿意を我慢するにしても節度というものが……」

「違います！！！」

隠し弾を握るは（後書き）

・マスコミとかギャラトラに来ないの？
インタビューのため経費でゲームに重課金しますって？　上司に張り倒されるんじゃないですかね

吠えろ猛牛、神峰を駈けろ（前書き）

地獄の色違い厳選を終えたので色違い厳選します（無限ループ）

Q．なんで連合のテラトン級二隻巻き込んで自爆したの？

A．連日の人力シャッフルで手が滑ってね、誠に申し訳ないごめんねゴミ共

Q．なんでウチの船に万全の状態のゲリラ送り込んできたの？

A．手が滑ったから仕方ないねぇ！　人力で転送ゲートシャッフルすればいいいんじゃないですかなぁ！！　ポチポチポチとさぁ！！　ねぇ！！！！

「ホーネッツネスト」盟主ディアホーン、女王玉座と共に自爆し討ち死。

………………

…………

……

「た、たまやー」

「形的にかぎやじゃねェのか？　いやどういう形なのか知らねェけ

どよ」

「札束で殴り合う憎悪の応酬だ、なんとノンフィクションのライブ映像。フォックス、ポップコーンとコーラとか持ってないか？」

「……お前、日に日にガラが悪くなってないか」

「化けの皮じゃないかしらねぇ」

脱皮生物がコードネームのネカマによりにもよって化けの皮呼ばわりされたの控えめに言って面白すぎないか？　これがアホ二人のどっちかだったら一発入れてたぜ。

昨今の現代社会において誰それの企業が気に食わないから毒を盛ろう鉄砲玉を差し向けようなんて野蛮が通るはずもなく、資本主義の闘争とは札束で作った棍棒で殴り合うイマジナリーチャンバラがデフォルトである。

だがどうだ、この世界じゃ流通と情報によって為されていた見えざる拳が明確なリソースとオブジェクトになって文字通り火花を散らしている。

「どれだけ課金装備に身を包んでも人間一人の命の単価なんて自爆ボタン一つで散るんだなって……いとおかし」

さりげなーく最終日の戦闘開始時間前に自爆の直撃範囲にまで近づいた女王玉座が派手に爆散した事で、ただでさえ一週間近く戦い続けて疲弊していたテラトン級の一隻は真ん中から真っ二つに裂けて連鎖的に爆散、かろうじて轟沈は免れたテラトン級も無傷とは到底思えない様子で後ろへと下がっていく。

埋伏の毒とは言うが、まさか一日で味方が特大地雷になるとは思わ

ないだろう。人の感情を巧みに操る愛板氏の妙技と言うべきか……ペンシルゴンや変態とも違う、いやむしろそのハイブリッドと言うべき感情と実利で人を動かす手練手管は見習うべきなのか否か……

「自爆ってだけでなんか特別感あるよなァ……敬礼でもしとくか？」

『はっはっはっ、敬意を払う程善人でもないだろう』

その技能は別としてこの七日間でもしかしなくても自分達が悪役サイドなのでは、とほぼ確信を抱きつつあるのだが正義の類義語は価値観であり対義語は正義（2）というのだ。

であるならば実質俺たちは正義の戦士なので思う存分この暗黒帝王の鉄砲玉として駆け抜けることにした……というか今更裏切ったらまず間違いなくヘルメットが爆発する気がする、いや絶対するだろう。不自然に後頭部が重いですもんねぇこれ！！　一撃でうなじごと脊椎を抉るタイプの非人道兵器じゃねーか！！

「……自爆した婆さんのお陰で装備はフル回復だ、そしてもう今日一日しか猶予はねぇ。そして当初の「契約」通り……」

この七日目の戦争期間残り時間十分の段階で、俺たちが乗り込んだGカップムネ肉氏の旗艦「偉大なる巨峰（エベレスト）」に愛板氏が温存し続けたもう一つの切り札が叩き込まれる。あるいはその攻撃で沈むかもしれない船に俺たちは今いるのだ、これは戦争開始前から決まっていたことであるし、改めて交わした契約に基づいた事でもある。

『女王玉座の自爆、それに伴う敵戦線の半壊によって君達に期待した以上の結果が出されている。仮に今日ゲームオーバーになったとしても、こちらからの攻撃で偉大なる巨峰諸共沈んだとしても報酬は約束する……つまりは好きに動いていい、存分に暴れ切ってくれ』

「気楽に言ってくれるぜ、やることた変わりねェがな」

『進みたまえよ諸君、契約は果たすとも』

今更妥協はしない、目指せ本丸首魁の首。そしてここからは……………

「……個別行動、愛板さんも含めて六面作戦でGカップムネ肉を追い詰める」

「途中で死んでも言いっこなし、ってね」

「生きて帰りたいなぁ、装備の持ち帰り的に」

大型バイクを取り出す者がいれば、高出力リアクターを搭載したパワードアーマーを纏う者がいる。自身の制御下に置いたバトロイドのスクワッドを従える者がいれば、決戦仕様の銃器を担ぐ者、光学迷彩を起動する者がいる。

ホーネッツネストが突貫工事で生産した決戦装備、存分に使わせてもらおうか………何を隠そうこの俺はクソみたいなレースゲーの過疎りきって何度マッチングしても同じ顔ぶれとしか会わないオンラインで三冠を達成した男。

無双ゲーとレースゲーを組み合わせてはいけないってテスト段階で気づかなかったんでしょうかね、スタート地点から逆走してゴール付近の敵を倒して強装備ゲットからのプレイヤー殲滅が一番強いってレースゲーとして何かが致命的に間違ってるよ。

「頭のネジが八艘飛びとは俺のこと……！」

「……跳ねすぎだろ」

「水切りかなにか？」
オートパイロットとかあったらそりゃビークルからビークルに飛び移って他プレイヤー潰すでしょ普通！　狂人扱いされる謂れはねぇ！！
「それじゃあお先に失礼！　地獄で会おうぜ朋友諸君！」
閉鎖空間強襲用武装搭載大型二輪（クローズドレンジ・リアクトルサイクル）「アステリオス」がどう猛な唸り声（エンジン音）を上げる。猛牛を模った大型バイクは乗り手たる俺の意思に従って放たれた矢の如く発進、侵入者を排除するべく殺到するセキュリティアンドロイド達をボウリングのピンよろしく吹き飛ばして爆走する。
「いいねェ！　だがリアルじゃラガーマンの俺を差し置いてタックルかますのは見過ごせねェなァ！！」
「あら初耳」
「ラガーマンがそんな物騒なパワードスーツ着ていいのか」
「紳士のスポーツだからな、礼服くらい着るぜ」
「これが並ぶ結婚式とか絶対行きたくないなぁ、ブーケトスで死人でそう」
一瞬で背後に消えていった他のメンツ達も動き始めたようだ。何かクソ面白そうな話題が聞こえた気がしたが……もはや全ては過去という名の背後に消えていった、今の俺は前しか見ねぇ！！

「ほほほははははははは！！」

悲鳴と高笑いの混じった変な声を口から出しながら爆走するバイクが機能(設定)通りのシステムを発動し、曲がり角に衝突する前にブースターの噴射で直角カーブの壁面に張り付いて走り続ける。壁だろうが天井だろうが重力制御の応用で全て地面として走り続けるモンスターマシン…………だが俺はこの手のじゃじゃ馬物理演算は慣れている。一番最近だとやっぱシャンフロになるが……ゲームシステムやゲームエンジンが違ってもコツは共通するもんだ。

「目指せ大将首！」

一番乗りは俺だっ！！

吠えろ猛牛、神峰を駈けろ（後書き）

・閉鎖空間強襲用（クローズドレンジ・）武装搭載大型二輪（リアクトルサイクル）「アステリオス」
バイクなのに戦闘機技能が要求されるモンスターマシン、だいたいビートゴウラムって言えばイメージは伝わるでしょうか。サンラクは足りない技能値をプレイヤースキルで無理やり補ってる、具体的に言うと武器の操作はオートだが操縦が半分マニュアル

ちなみに本編で言及されたレースゲーですが、初期案でルストがハマってる筈だったゲーム設定の流用

散り行く輝きの中で（前書き）

とてもシャンフロが書きたい

散り行く輝きの中で

――とある通信記録

『やぁ、やぁ。景気良く爆ぜたようだけど調子はどうだい？』

『やってくれたな家電王……成る程、確かに結果を急いた我々のミスかもしれないが……それにしたって想像以上に厄介な虫を買ったようで』

『ハエ程度の価値があれば上々と思っていたのだがね、いやはやミツバチを通り越してスズメバチの如き働きを見せてくれるとはね……』

『うむ、まさに予想外の結果だ。これからは傭兵に特化した無課金プレイヤーという役割が重要になるやもしれないね、これは』

『ご恩奉公、まさか技術が進んで文化が巻き戻るとは思わなかった』

『さて……わざわざプライベート通信を使ってきたということは、良い返事を期待して良いのかな？』

『ああ……それに関してなのだがね、本当にすまないと思っている。この通信は……死刑宣告なんだ。ムネ肉』

『ほぉ？』

『缶詰も宿場も大した敵じゃない、だが君はダメだ。中心核はここで潰す、一度初心からやり直してみてはどうかな？』

『……言ってくれるぜ、もう勝ったつもりなら遠慮なく覆させてもらうが？』

『若造がよく吠える、末期（まつご）の瞬間にもう一度遺言を聞きにきてやろう』

通信途絶――

※別に不仲ではない

◆

ここは戦場、伏魔殿の最奥、地獄の一等地に作られた大迷宮。俺たちのようなテラトン級を持たず、自前の宇宙船では戦力にならないプレイヤーは自分の命を賭け皿に何度もベットするしかない。それ

故に、分かってはいたし覚悟もできていたが……

「フォックスが死んだか」

パーティを組んでいることを示すメンバー欄からフォックスの名前そのものが消失している。このテラトン級の中では通信こそ使えないがこれはゲームシステム側の表示だ、つまり偽りのない事実としてこの船の中からフォックスというプレイヤーが消失した事実を指し示している。

「あばよ隊長、俺たちの青き故郷(リスポーン地点)でまた会えると良いな」

とはいえこちらも余裕ぶっこいてばかりはいられない。六角御殿や女王玉座と比べても明らかにＮＰＣの練度が高い、基本的にＮＰＣは消耗品扱いなのでここまでの練度を保ったＮＰＣを保持し続けているというのはそのままＧカップムネ肉氏のプレイヤースキルの高さを示している。

序盤はこのモンスターバイクで突っ込めば何とかなっていたが……今ではワイヤートラップを仕掛けてこちらの転倒を狙うところまでＡＩが学習しやがった。

「猪口才な！」

ハンドルのグリップを捻り跳躍機動、さらに滞空中にブースターを起動して１８０度回転……ここで重力制御発動！　天井に張り付いてワイヤートラップ諸共敵を飛び越える！！

……引っ掛かれば床に擦り下ろされかねないデストラップを回避したわけだが、俺としてはそこまで余裕綽々というわけでもない。

「アステリオス」は重力制御で縦横無尽の走行を可能としている…

……が、それは要求技能値を満たしている場合だ。俺はそれを若干満たしていないので細かな操作をマニュアルで動かさなければならないからだ。技能値が完全であれば両手を離していても勝手に走ってくれるらしいが、俺はセルフで動かさなければならない。

「くっそ、いつまで彷徨えば……つーかあれだよなぁ！　紛れもなくなぁ！！」

何度か転移している中でちらちらと見かけた閉ざされた巨大ゲート、物理的に封鎖されきっているわけではなく何重にも重ねられたセキュリティと単純にオブジェクトサイズが規格外という点において侵入者を阻む最後の壁……猿でもわかる、あれこそがボス前最後の関門だ。

ここに来るまではフォックスがセキュリティを担当していたが、他のメンツも苦手というだけでセキュリティであるパズルゲームができないわけじゃない。ただフォックスが一番正答率が高かったし……何より、回答者を他のメンツが守っていたからこそなんとかなっていた面もある。つまり単独だとちょっとつらい。

いや、出来ないわけじゃないんだ。それを承知で全員女王玉座から持ってきたアイテムがあるし、多分それを使えば突破できるが……あー、うん。要するに自爆なんだよね。戦艦外壁をブチ抜く携行型指向性衝撃爆弾はそのアイテムとしての性質上、両手で抱えてインパクトのベクトルを人力制御しないといけない。率先して死ねと申すかギャラトラ運営、と思ったが健全なプレイヤーならNPCに持たせるよな普通、プレイヤーが持ってる俺らがマイノリティか……いやでもクールぶってたフォックスすらやる気満々の満場一致で全員持って行ったからなこれ、バカしかいないんですよ突入班。

「誰かが扉を開ければ誰かが先に進む、率先して地獄に行こうぜと

は言ったものの……」

怖気付いたわけではない、予想よりも向こうのＡＩ学習が早過ぎて振り切れないのだ。ここで呑気に起動準備をしていたら瞬く間に包囲されて袋叩きになるだろう、だがここに辿り着けたのも分散して暴れたからこそのセキュリティの薄さだし……切り札もあるし自爆はちょっと……いやしかしここで止まって他の連中にまで迷惑をかけるのも……くそッ、考えるの面倒になってきたから自爆行っとくか！？

「いざ、突げ――」

「うおおおおおおおおお！！　そこどけガゼルゥゥゥゥああああああ！！！」

「おぉおお！？」

この声はライノか、そう気づいて振り返ればそこにはズタボロのパワードアーマーをオーバーヒート上等と言わんばかりに限界まで酷使してこちらに突っ込んでくる巨体の姿が。どうやら向こうも向こうで敵の数々を力ずくで突破してきたようだが……若干の逡巡を振りほどけなかった俺と違って最初から覚悟は決まっているらしい。堅牢なゲートを前にしてブレーキを踏むことを放棄したブーストと、アーマーがはげてプレイヤーのアバターが露出した左腕で抱えた衝撃爆弾を見れば奴がやりたいことは理解できる。なら俺がすべきはこういうことだろう！！

「受け取れライノ！！」

「おうよォ！！　わりィがバイクごと逝かせてもらうぜェェェェェ

エエ！！！！」

ゲートから離れる俺とゲートへ突っ込むライノがすれ違う、その瞬間に俺が保有する衝撃爆弾をライノへと放り投げるように手渡す。なるほど流石はラガーマン、見事キャッチしてそのまま突っ込み………

「タッチダウーーーーーーーン！！！」

「いやそれアメフ」

大爆発、お前の犠牲は忘れないぜライノ………あとごめん、素で間違えたトライだったな、うん。

「あばよ盟友、確かに道は拓かれたぜ………っ！！」

バイクに関しては割と未練タラタラだがその場のノリはその後の利益よりも優先される。瞬間的達成感こそがゲームの醍醐味、後悔は後でするものだから今思いっきりやらかせるってもんだぜ。

「ウルフとパイソンはまだ生きてるようだが………先に行くか」

また一人ネームが消えたパーティメンバー欄をウィンドウごと閉じて、見据える先は本丸………この戦いを終わらせるために、俺は進むのだ。

散り行く輝きの中で（後書き）

巻きで

長い長い廊下を走り抜ける。
敵の船に乗っているということは敵の視点から味方の戦いが見られるということだ。

「おお……」

光が瞬く、愛板氏の放ったレーザーの弾幕がこちら側のテラトン級を貫き、火と電光を撒き散らしながら鋼鉄の巨体が断末魔をあげる。
だが反撃としてこちら側から放たれた物質的ミサイルが愛板氏側の……確か二番艦？　を叩き割る。この世の終わりのような、しかし退廃と呼ぶにはあまりに血風雷火が激しすぎる戦場の光景に止まりそうになる足を叩いてさらに先へ先へと進んでいく。

「…………妙だな」

ここまで敵ＮＰＣと一切遭遇しないっていうのはどういうことだ？
後ろから追ってこないのも謎だが、前を見てもガラス張りの道が無人のままに続くだけだ。追っ手がおらず、待ち受ける敵もいない……俺達を招いている？　まさか、なんなら地雷でも仕掛けて廊下ごとふっ飛ばしたほうが楽だろう。だがしばらくして、少なくとも後ろから追っ手が来ない理由だけは判明した。

◆

「………つまり、ウルフが残って足止めをしている？」

「ええ、足にダメージを受けたから……って。一応バトロイドも生き残ったのを一機置いてきたけれど……まぁ、そう長くは保たないでしょうね」

片腕のもげたバトロイド（マチョヶ峰君と比べると若干細身なので細マチョヶ峰君と言うべきか）だけを引き連れて追いついてきたパイソンが、追っ手が来ない理由を俺へ明かした。なるほど、そりゃ急がなきゃいけないだろうな。

「走る速度を上げたほうがいいかな」

「でしょうね、そう長くは保たないのもあるし……その前に撃墜されちゃ流石に未練ね」

既に最終日も半分以上経過している。女王玉座の自爆、そして連日の戦闘で旗艦及び艦隊に甚大なダメージを受けた「ホテルリクモガミ」と「真珠の円匣」は既に戦闘から離脱していると言ってもいいだろう。愛板氏が唆しディアホーンが狙ったのがこれだ、今回の戦いは極論を言えば愛板氏とGカップムネ肉氏の利権争いに端を発する。仮に勝利することで得られる利権のうちの何割かを連合加入の報酬として得られるとしても、自分が死んでしまっては元も子もない。

さらに言えばはした金だとしてもテラトン級は課金有りでも修理に時間がかかる、時間は重課金プレイヤーですら如何しようもない最

強の遅延コンテンツだ。課金アイテムで修理時間を短縮しても一週間はかかるとの話だ、他の重課金プレイヤーに狙われれば利権もクソもない。

つまり、ここに至ってGカップムネ肉氏以外の連合傘下プレイヤー達の中でメリットとデメリットの比率が逆転した。簡単に言えば割に合わなくなったのだ。

彼らは恐れている。残り二隻になった愛板艦隊の、その残った二隻……一番艦と三番艦が備える極大兵器の切っ先が向けられることを。初日に縮退砲が防がれたのは防御側が万全の状態だったからだ、今同じことをすれば確実に盾になったテラトン級は破壊されることになる。今やマトモに戦闘しているのは愛板氏とGカップムネ肉氏だけだ、戦闘には参加しないが戦場に留まることで「戦争終了時の残存数として貢献する」という名分を掲げるつもりだろうとは愛板氏の言だ。

「まさかネカマと二人きりで最終決戦とは……」

「いいじゃないネカマ、ネカマには夢が詰まってるのよ」

「否定はしないけどガワが偽装である事実から目を逸らしちゃダメだぞ」

「現実という名のナイフはしまってもらえるかしら？　私は健全なネカマよ」

「けんぜんなねかま」

邪悪なネカマもいるの……？　ネカマによる光と闇の戦いが人知れず繰り広げられているとか？

そんなことを考えていると、どうやらボス戦の時間が来たらしい。
明らかにこれまでのゲートとは違う装飾に重きが置かれた扉の前にたどり着いた俺たちは、一分程ゲートを調べてセキュリティやロックの類が仕掛けられていないことを確認した。

「不気味なくらいあっさり通すのね……」

「何か言いたいことがあるんじゃないか？」

本気で妨害するのもアリだし、ラスボス的なロールプレイがしたかららこそあえて招くのもアリ、それがゲームというものだしプレイヤーの資産力がどれだけあったとしても遊んでいるのは一人の人間なのだからその可能性は十分にあり得る。現に歩き続けた俺達は妨害らしい妨害に一切遭遇することなく……この船の主人の許にたどり着いたのだから。

おそらく船長室、くるりと椅子ごと振り返った一人の男が背もたれに背を預けた余裕の表情で俺達を出迎えた。ＰＮ表示があるので間違いなくあれがこの戦争を引き起こしたもう一人、ＧカップムネＮ肉だ。

「ふむ、歓迎しよう侵入者諸君。ここまで辿り着いたことは賞賛に値する」

「無人の廊下を歩けて偉いってか？」

「あなた個人に恨みはないけれど、ここで死んでもらうわＧカップさん」

「まぁ待て待て、如何に斜陽気味とはいえこの船のリソースをフルに使えば君たちなどとっくに潰せていたことくらいは分かるだろう。」

少しくらい話を――」

発砲。だが俺が引いた引き金によって放たれた弾丸は壮年男性の眉間に届くよりも先に見えない何か……いや違う、糸のように細い光の筋によって弾き飛ばされる。

「そりゃ余裕綽々で出迎えるわけだ」

「最終セキュリティ、船長個人のみに防御力を集中させるリモーティングレーザープロテクト「サンクチュアリ」さ。落ち着いたかな？」

「愛板氏、あれどれくらい頑丈なんだ？」

『ライノ君とウルフ君がいないのが痛手だね、君達の手持ち火器じゃ突破できない』

「オープン回線を使いたまえよ愛板、ここまでくれば後はテラトンの馬力対決だ」

『………いいだろう、雑談しながら対戦と洒落込もうじゃないか』

成る程、一理ある。レーザー防御という最強の安置がある以上、俺達は手が出せない。であるならばムキになって攻撃してもリソースの無駄というものだろう。だが本当にそうかな？

「確かにあんたを狙っても埒が明かないな……じゃあこうしようか」

「何を――」

発砲、発砲、発砲。

がしゃん、と肉の詰まったメットが地面に叩きつけられ、俺がノールックで弾丸を叩き込んだパイソンの体はぴくりとも動かない。

「!?」

『………何をしている!?』

「…………なぁGカップムネ肉氏、俺を雇う気はないか?」

波乱は、己の手で巻き起こすものだ。

傭兵稼業は金と（うら）義理？（後書き）

放たれた凶弾……大蛇は力なく横たわり、裏切りの獣は高笑う。
宇宙に巣食う怪物達の祈り、星々に劣らぬ輝きが門を作りし時、超次元の門はその門を解き放つ。
次回、ギャラクシートラベラー「バドゥガモスの歌」
来週もサンラクと爆発オチに付き合ってもらう

傭兵稼業は金と義理（前書き）

次で終わらせる！（素振り）次で終わらせる！（素振り）

そのヘルメットに今尚人類の繁栄に最も貢献するエネルギーを流した時、脳が広がるような感覚を得た。
わずかに目眩のような瞬間的暗転が二度、そうして視界が安定した時には既に世界は拡張されていた。

お前はただものを見ているだけで、ものを理解してなどいない。そう説破されたかのように目でものを見る以上の情報が流れ、浮かび、消えて……なんだか自分がとても賢くなったような気さえしてくる。
だがきっとそれは錯覚、幻とすら呼ばない勘違いだ。だがそれでもこのMR対応フルフェイスヘルメットが俺の世界を広げたのは事実であり――

「はっ!?」

な、何か今ヤバい電波を受信していた気がするぞ……や、やはりこのヘルメット、単純な科学では説明しきれない類の何かが宿っているのでは……くっ、だがしかしわざわざ玲さんの時間を幾分か貰ってまで揃えたオール・バドゥガモスの読み込みができるのはARに対応したこの曰く付きのカボチャヘルメットだけなのだ。

「四のバドゥガモス……揃えて読み込ませると何かが起きる」

そしてその情報は、この戦いにおいてきっと勝利を塞ぐ扉を開く鍵になる……そんな気がしてならないんだ……。
まぁ本音を言うと今のうちにやっておかないと確実に忘れる、という直感があるからだ。相対するはクソ高いプラネタリウムマシンを

持ってそうなブルジョワガチ勢、いざという時はこれを盾に………

◆

唐突な離反、唐突な裏切り。呆然の感情から一番最初に抜け出したのはGカップムネ肉氏だった。

「………それが嘘ではない、と信じるにはこの状況は少し演劇のように過ぎると思わないかな？」

「劇的な展開はお嫌いで？　最高のタイミングで最大の成果を出してこそ売りになるかと思ったんだけどな」

くるくると手の中で回していた拳銃を床に投げ捨て、手の中に何も入ってないゼスチャーを行いながら一歩前に進む。

「いや、やはり信用ならないな。サンクチュアリを貫通できるだけの爆弾を抱えているとも限らない、話すならそこで、だ」

「おー、流石の警戒心だ。ならこうすればどうだろう？」

二歩後退し、インベントリから出したアイテムをわざとらしく見せつけてからスイッチをぐむ、と押し込む。

『………っな！？　艦内から爆発だと！？』

これまで黙り込んでいた愛板氏が驚愕の声を通信越しに上がる。Gカップムネ肉氏もコンソールか何かをいじって確認しているようだが、ゲームがバグっていなければ愛板氏の三番艦が土手っ腹から盛大に爆煙を吐き出しているのが見えるだろう。

「悪いね愛板氏、でもいきなり都合よく決起集会に紛れ込むなんて偶然……あるわけないだろ？」

『まさか自艦を………くっ、出力が落ちて砲が使えん……謀ったか！』

「………成る程、獅子身中の虫と。だが解せないね、今ここまで来て裏切る理由は？　このまま私を倒せば然るべき報酬が得られたはずだ」

腹の内から爆炎を食らったグレートウォールはそう長くはない、それを為した俺に対してGカップムネ肉氏の警戒がほんの僅かだが緩められる。何をするかよりも、何故そうしたのかが気になったということだろう。

「ま、簡単に言えば伝手と報酬……訳あって重課金プレイヤーの支援が欲しくてね」

「ふぅむ？　だがそれはそこの愛板でもいいはずだ」

「ネタがネタでね、強力でも孤立してる愛板氏じゃ足りないと考えての今回の行動なわけで……見せたほうが早いかな」

ええと確か、読み込んだ時点でセーブデータにアイテムとして追加されてるんだっけか……あれ、てっきりインベントリの一番下かと思ったんだが、あれぇ？　あぁ、あったわ。完全に別枠として収納されてた訳な。

「なにぶん個人で抱えるにはデカすぎる特ダネだ……Gカップムネ肉氏、伝手のあるアンタならこれの攻略にも人を集められるんじゃないか？」

「それは………」

「超文明自律構築金属制びょっ………」

沈黙。思わず笑いそうになった口の端を必死に押さえ込みながら一つ咳をして訂正。

「んん゛っ、失礼。超文明自律構築金属制御端末……これはとある生物に対して特定の信号を送ることでその本来の役割を果たさせる端末だ」

「超文明………まさか」

「そうその通り、話が早くて助かる………手に入れたんですよ俺は、幻のダイヤモンドバドゥガモス君人形をね………っ！！」

今度こそGカップムネ肉氏の警戒がそれ以上の驚愕によって塗り潰された。バドゥガモス・クエスト、それは愛板氏やGカップムネ肉

氏すらをもひよっこ扱いできるギャラトラの最上位プレイヤー……老い先短いから愛板氏達すらちょっと引くレベルで課金し、ＶＲマシンに横たわった状態の死体が見つかっても構わないと言わんばかりの廃人ログイン率を誇るエルダープレイヤー達すら完全攻略できていない……それどころか攻略のための門の鍵すら見つけられていないのが現状の中で、突然降って湧いた俺という「鍵」の存在。

「流石にあんたらみたいな重課金と張り合うわけじゃないが、伝手は多いほうがいいってことだ」

「確かに愛板はこっちじゃ敵に回してる奴が多い。より多くの支援を得るならこちらに頼る、というのも一理あるか」

「クラウドファンディングじゃないけどな」

愛板氏だけをパトロンにするのではなく、Ｇカップムネ肉氏にあえて敵として「性能」を見せた上でその伝手と被害状況というこれ以上なくわかりやすい性能成果で自分を売り込む。俺の作戦を読み取ったらしいＧカップムネ肉氏はようやく俺の行動に合点がいったのか、腰掛けていた椅子から立ち上がった。

「くくく、個人主義が仇になったな愛板………地球から再出発するときには友達を作ることから始めたらどうかな？」

『………言ってくれるじゃないか』

「グレートウォールが行動不能になった時点で勝負は決まったようなもの、最早降伏勧告は出さない………そのまま宇宙の塵となれ」

『………』

「そして…………ええと？」

「サンラクです」

「ふむ、サンラク君。バドゥガモスを揃えるのはてっきり彼らだろうと思っていたところに君という存在が転がり込んできたのはなんの偶然か…………だが、自己ＰＲは気に入った。双丘の大艦隊は君に協力しようじゃないか」

「…………では」

「ああ、この戦いの勝利を持って我々はバドゥガモスの謎に挑む…………そういうことだ」

立ち上がり、俺の前まで歩いてきたＧカップムネ肉氏が俺に手を差し出してくる…………何もかもが俺の計画通りだ、俺は勝利の確信と共に口を開く。

「時にＧカップムネ肉氏」

「なにかな？」

「傭兵稼業で大事なことってなんだと思いますか？」

「そう、だな…………勝ち馬に乗ること、かな？」

いいや？

「金と義理（裏切らない事）ですよ」

発砲音。

「な…………ぁ…………！！？」

「ここで一言どうぞ」

『ふっ…………ふくくくくっ、いやぁすまんね。ドッキリ大成功だ』

銃弾は直線にしか動けない…………それが普通、それが大前提。だがその銃から放たれた弾丸は内蔵されたセンサーとフレキシブルヴァレルシステムによって必ず眉間に命中させるために弧を描く。

代償は必然の不殺。十発撃ち込もうが百発撃ち込もうがＨＰを１以下にすることができないという究極の峰打ち、永遠に描かれることのない龍の眼。

俺の肩を避けるように弧を描いてＧカップムネ肉氏の眉間に弾丸がめり込み、その身体が大きく吹き飛ばされる。サムズアップしながら振り返れば、そこにはヘルメットに三発分の穴を作りながらも問題なく立ち上がる大蛇の姿があった。

・ブラインドドラゴン
盲目の龍、画竜不点睛、要するに峰打ちスマートピストル
銃に内蔵されたセンサーと特殊な可変ライフリングによって確実に対象の頭に相当する部位に弾丸を飛ばすことができる。ただし弾丸側も専用の加工が必要なため威力が極端に弱いというデメリットがあり、ゲーム的には「確定でヘッドショットになるがどれだけ命中させてもＨＰを１以下にできない」ものになっている。
ぶっちゃけコレクション以上の価値はないはずだが、今回は愛板氏主導のドッキリ大作戦においてノリノリで協力したサンラクによってフレンドリーファイアの偽装として用いられた

ちなみにパイソンが普通の銃ではなくこれを使ったのは死を偽装するためにウィンドウを操作できなかったことと、確実に外さずヘッドショットして怯ませるため。ちなみにギャラトラでは地面に「落とした（落としてしまった、ではなく）」時点で所有権を一時的に放棄できる

タンホイザーの地平に真理を見る（前書き）

素振りの甲斐あって一発ホームランでギャラトラ編を片付けました、
スペースオペラは長引くというのが今回の教訓です

――まぁ本当に裏切ったら即座にヘルメットを爆破するからなぁ
日本の資本を牽引する一角であろう男がまるで小学生の悪戯か何かのように物騒な事を漏らした事を俺は忘れない。
絶対不殺、されど絶対必中の弾丸が素顔丸出しなGカップムネ肉氏に命中……その身体が吹き飛ばされる中で、俺とパイソンは動き出す。

『とどめを刺せ！！』

「言われずとも！！」

「あ、まって回復ー」

「あ、はい」

だが、こちらが王手を指すよりも先に動いたのは眉間にヒットエフェクトを貼り付けたGカップムネ肉氏だった。

「ドローン起動！！」

「何っ！！」

備えが良すぎる、さてはどちらにせよ敵対したら即座にこちらを始末するつもりだったか鶏肉さんめ……！！

「やってくれたな……どうせグレートウォールの爆発も仕込みだろう！」

『ご明察、ダメージはあるが計算されてのものだ』

「大砲二門か……これは、勝敗も決したか……」

『白旗でも振るかね？』

力ない笑みを浮かべて艦長の椅子に掛け直すGカップムネ肉氏、その笑顔を見て脳裏に凄まじく嫌な予感が駆け抜ける。
あの笑顔には既視感しか感じないのだ、具体的に言うといろんな奴がこれと同種の笑みを浮かべる状況に被害者加害者第三者として立ち会ったことがあるしなんなら当事者として自分がこの笑みを浮かべたことがある。

この、脱力から辛うじて笑顔だけ浮かべたような口の形と、それと反比例するようにギラギラと輝く眼差しは――――

「成る程、うん、分かった。ならば諸共に死ね」

――――自分諸共他者を破滅させるヤケクソの笑顔だ。

「何この揺れ！？」

回復すらも億劫とばかりに椅子に腰掛けたGカップムネ肉氏が何か操作した直後、明らかに平常のそれとは程遠い揺れがテラトン級全体を襲う。
凄まじく嫌な予感がしつつも、ブラインドドラゴンとは別のハンドガンでドローンを撃墜しながら恐らくこの船を二人称視点で見てい

る愛板氏に怒鳴るように問いかける。

「予想と違うことを願いたいけど状況は！！」

『予想通りだよ、最悪なことにね……中枢に過負荷をかけて自爆特攻か！！』

「ああその通りだとも！　この際諸共に死ね！　みんなで仲良く再スタートだ！！」

クッソが、俺も絶対同じことやるから素直に罵れねぇ！！　そりゃ気に食わない奴が満身創痍で自分が死を宣告されたら諸共死ねと足首掴むわな！！　資産があっても人が追い詰められた時にやる事は一緒ってなぁ！！

『止められるか！？』

「無理だな、完全に引きこもった重課金プレイヤーを仕留めるのにかかる時間とこの船が自爆する時間、どっちが速いか比べてみるか！？」

ここまで来て自爆両成敗なんて湿気た結末になんぞさせるか、俺は晴れやかな気分でシャンフロ再開するんだよだったらどうする勝ちの目を見つけて拾い上げろ！！

「パイソン！　なんか案あるか！！」

「テラトン級のことはテラトン級に任せるしかないでしょ！　はい愛板さん！！」

『一隻は収縮再現終焉砲（ビッグクランチ・レーザー）で叩き落とす、だがその船は近すぎる！　旗艦で撃墜できたとしても余波でこちらも堕ちかねない………！』

「よーし十秒くれ状況まとめる！！」

射程距離の問題でこの船は落とせない、この際俺達がこの船ごと諸共に消し飛ぶプランも受け入れようかと思っていたところだが、先手を取られたのが痛過ぎた。
Gカップムネ肉氏は激突させてから自爆するつもりなのか、中枢機関のオーバーロードがまだなのかは分からないが、今の状況は詰みとまではいかないが王手の一手前と言うべきか……

「………要するに、今欲しいのは「距離」と「時間」……そうだな！？」

『要約すれば、な！　だがどうする、手があると言うのか？！』

「外に出られればワンチャン！！」

…こいつの使用条件は宇宙空間にプレイヤーが直接出向く必要がある、どうにかして外に出られれば………だがテラトン級の装甲は内側からブチ抜くにしても容易ならざることは明らか。そして出口を今のGカップムネ肉氏が素直に開いてくれるとも思えない。いや、マジでどうする！？

「………外に、出られればいいの？」

「おう！」

「なら今度は私が時間をもらおうかしら、マチョヶ崎君！！」

誰！？　ああ、細マチョヶ峰君のことか！　今の今まで後ろで微動だにしないから機能停止したものとばかり思っていたが、どうやら最後の最後に戦力として使うために温存していただけだったらしい。軋みながら立ち上がったバトロイドに危険を感じたのか、俺たちを攻撃していたドローンがターゲットを変えるがそんなナメた真似をすれば俺がフリーになるというもの。

「させるかよっ！！」

別宇宙（コスモ・バスター）じゃ腰だめ撃ちは必須技能だ、いるところにはいる達人級（TA勢）ともなれば腰だめマシンガンで狙撃するとかいうド級の曲芸すら出来るという……俺はアサルトライフルでしか腰だめ狙撃が出来なかった。どんな界隈にも人外プレイヤーっているもんだ。

「行け行け行け！　そんな長くは食い止められんぞ！！」

「支援感謝感謝……あ、そうだ」

「なんだよ！！」

猛攻の中にねじ込んだ僅かな間隙で振り向けば、そこにはバトロイドの背中にしがみついたパイソン。奴はひらひらと手を振ると、ただ一言。

「シャンフロでも宜しくね？　ツチノコさん」

「はぁ！？」

身バっ……いやどこでバレた！？

それを問い詰める間もなく、マチョヶ崎君が全身から火花を散らしながら人工筋肉に渾身の力を充填して走り出す。

目指すはGカップムネ肉氏……ではなくこの部屋の壁、厳密には外の光景が見えるガラス張り、比較的防御の薄いテラトン級の泣き所……！！

別れを告げるために振られた手にはいつの間にか全員が持っていた爆弾……そして。

「っしゃあ！！！！」

何か一瞬、物凄くドスの効いた声が聞こえた気がしたのだがそれは発生した爆発によってかき消え、この場にいたドローンや俺を吹っ飛ばした風圧が反転してこちらを引っ張るような力を持ったことでパイソンの自爆が目的を達成したことを悟った。

「っ！！」

引き寄せる流れに逆らわず、しかし身を委ねるのではなくむしろこちらから乗りこなしてやるのだとばかりに全力疾走。ドローンの攻撃は最低限の回避で対処、後ろで何かGカップムネ肉氏が叫んでいるがもう遅い。

気づけばパーティ欄には俺の名前しか残っていない、ウルフも死んだようだが今の今まで敵の増援が来なかったという事実がやつの奮闘を伝えてくる。ならば迷う事はない、他の奴らが体張った以上はこちらも無茶を振って勝利をこじ開ける！！

「集まれバドゥガモス！　来やがれ超次元！　そして、開けタンホイザー！！」

宇宙空間に身一つで飛び出した俺は、制限時間の課せられたメット内の空気を思い切り吸い込んで超文明自律構築金属制御端末を起動、眼下で突撃していくテラトン級ではなくその最後尾、さらにその先を見据える……変化はすぐに起きた。

――バドゥガモスにはある「疑問」があった。
あのメタルクラゲは基本的に母体と呼称される巨大な個体から子供のように通常個体が這い出してくる事で出現する。なのぉバドゥガモスに対する最も有効な攻撃はマザーの撃破、ここまでは誰でも思いつく。
だがこのマザー、ある程度弱らせると逃走行動に入る。そして一定時間内に倒せなかった場合……消えるのだ、それも明らかにテレポートと思しき動きで、だ。
では消えたマザーはどこに消えたのか？　そしてそもそもバドゥガモスとはどこから現れるのか。

その答えは目の前にあった。

「こ、これは……」

亜空間に繋がっているのだろうワームホールから這い出してきたマザーにも劣らぬ巨体を誇る四色四体のバドゥガモス達。
黄金と、白銀と、白金と、金剛……四つの輝きが円を描いて渦を巻き、もはやクラゲの姿すら見えないほどの速度で廻る輝きが圧縮されるかのように中心点に収束して、光が消え……俺はその光景を

生身の肉眼で直視していた。

「事象の地平線……」

バドゥガモスとは、失われた超宇宙とは、無間の宇宙に見遣るあの地平の先にあるものは――――！！

四体のシークレットバドゥガモスによって形成されたあのオブジェクトの名はタンホイザーゲート、全出力を以って猛進していた大質量がそれ以上の力に捕捉され、ゲートへと引っ張り込まれていく。無論人間一人分しかない俺の身体などいともたやすくゲートへと引っ張り込まれていく。

そして丸に一本横線を入れたようなデザインのゲートに触れる直前、俺は世界が割れる音を聞いた。いや違う、疲労の極地にあったテラトン級の船体に亀裂の入った音だ。

愛板氏の旗艦が最後の最後まで温存していた切り札……収縮再現終焉砲（ビッグクランチ・レーザー）と対をなす単純火力においては最強の膨張再現黎明砲（ビッグバン・レーザー）、もう一つの五万円砲があまりに巨大な窮鼠へ引導を渡したのだ。

着弾地点が熱量に耐えきれず溶けていく、負荷に耐えきれず引き裂かれていく超重量、艦内から噴き出した酸素を喰らって紅蓮の花が咲く。

ついには真っ二つに割れたテラトン級がタンホイザーゲートに取り込まれていくのを先にゲートを潜りながら眺めていた俺は脳裏に何か引っ掛かりを覚えた。

「あ……？」

なんだ？　割と未練など欠片もないやり遂げたぜエンドに行けた気がするのだが、何が引っかかっている？
この際スパッと死んでテラトン級貰ってリスタートした方が色々楽な気がするがいやそれじゃない、今この光景を見て何かが引っ掛かったわけで……こういう時はちゃんと目で見たものを整理するべきだ。
船、テラトン級、宇宙船、超文明、ゲート……いや、テラトン級は消していい、これはこのゲームだけのワードだ。このゲームでやりたい事をやりとげたのならば、違和感は他ゲーに起因するはず。
船、宇宙船、超文明、ゲート……ゲート、ゲート、この場合は新展開とかそういうニュアンスな気がする。つまりカテゴリが違う。
なんらかの新展開を起こす要因として船、宇宙船、超文明………
…優れた文明の船、文明のアイテム、文明、文化、人の手で作られたもの――

「あ」

その時、Ｇカップムネ肉氏の無念の断末魔を代弁するかのような特大の爆発が起きた。光と衝撃波が俺の身体を容易く吹き飛ばし、ＨＰをゴリッと削りながら俺の身体がタンホイザーゲートのさらに先へと吹き飛ばされていく。
だがその光と衝撃波を知覚した情報が脳内で別のものに変換されて、雷の如く脳裏を駆け巡る。
ああ、そうか。なんでこんな、簡単な………ウェザエモンと同じタイプだと思っていた、違う、クターニッドと同じタイプなんだ。手の届く位置にゴールがあるだけで、鍵は最初から――

そこでエリア移動のロードが入ったのか、俺の視界はホワイトアウトした。

……

…………

……………

モスコミュール宙域にて勃発した大艦隊同士による戦争行動は双丘の大艦隊盟主、Gカップムネ肉及び連合所属プレイヤー、ディアホーンの戦死によって終結した。
甚大な被害を受けた愛板であったが、想定外の名所が誕生したモスコミュール宙域の利権を勝ち取った事でその勢力を戦争前以上に盛り上げていく事になる。

此度の戦争……のちに「アンロック戦争」と呼ばれる一大プレイヤーイベントにて個人あるいは少人数による強襲(ゲリラ)の有用性を示し、愛板陣営として多大な貢献をしたプレイヤー達には、愛板自らが課金したテラトン級宇宙船が進呈された。

――だが、その中に「ガゼル」の名を掲げていたプレイヤーの姿はなかった……

タンホイザーの地平に真理を見る（後書き）

Q．サンラクどうなったん？

A．身体が消し飛ぶ前に超次元にワープしたので裸一貫縛りエンドコンテンツ攻略が始まった

なお愛板はタンホイザーゲート解放（モスコミュール宙域の利権を得たおかげでゲートに関するあれこれを独占できる）の礼も含めてテラトン級二隻をサンラクにプレゼントした、死んでリスポンすれば受け取れる。

Q．パイソンはどこでガゼル＝サンラクと見破ったん？

A．５７８話

地底の神と不世出の蛹（前書き）

シャンフロに帰ってきたぜ……ぬるりとな

深淵のクターニッドはそう、例えるなら複数ある鍵付き引き出しの最初の一段だけが開いているような状態だった。その中を覗き込めば中に入っているものは分かるが全貌を知ることはできない……最初からウェザエモンを倒す、ただそれだけが提示されていた墓守のウェザエモンと同じタイプだと思っていた冥響のオルケストラはその実クターニッドと同じタイプだったわけだ。

全ての引き出しを開かなければ完全攻略には至らない、鍵を見つけて施錠された二段目以降を開かなければならなかったのだ。

「簡単な事実だ、とても、あまりにも簡単過ぎる事実だったんだエムル」

「は、はいな？」

「オルケストラの真実がなんにせよ、その正体は音楽プレーヤーだ。曲が入ってるって事は当然使ってた奴がいる、持ち主がいたって事だ」

ユニークシナリオの基本は奴ら自身のルーツを明らかにする事だ。ウェザエモンであれば遠き日のセツナの祈りを聞き、クターニッドであれば亡国の女王が遺した手記を読み、ジークヴルムであれば当事者の叫びを聞き届ける。

じゃあオルケストラは？　征服人形はブラフだ、落とし物を拾った奴らに何が分かる？　せいぜい見た目と中に入ってる曲の解説くらいしか出来ないだろうよ。

「じゃあどうすればいいと思うインテリジェンス」

「推察：……当機等以上の情報蓄積量を誇るデータベースへのアクセス」

「ナイスインテリジェンス！　１０ポイントやろう、１００ポイント貯まったらパーフェクト・ジーニストを名乗っていいぞ」

「言質：取りました」

都合が悪くなったらしらばっくれるから大丈夫！　お前の記憶容量バグってね？　ってな！！
脳から放たれた電光の如き閃き(エウレカ)は脳が動かす電脳のアバターにも影響を与えるらしい。【ライブラリ】に祭の告知をした後、一秒すら立ち止まるのが惜しいとばかりに早足で質問の嵐を振り切った俺は行動に移る前にすっぽかした十日分のブランクを埋めるべく先ずは戦場のど真ん中に作った隠れ家に匿っているドヘタレユニークモンスターの元へと向かう。

「ようウィンプ！　生きてるか？　餓死してないよな？」

「やぁぁぁぁっときたぁぁぁぁぁぁぁあ！！！」

「うおっ」

土の塊が突っ込んできた！？　いや違う、土の塊のように汚いがよく見てみれば土の塊はあんなへタれた涙目を浮かばない。土汚れに塗れたウィンプであった。

「いやどうした、サミーちゃんさんは？」

「サミーちゃんならあそこ！　それよりもたいへんなのよ！」

ドヘタレとはいえパワーレベリングでそれなりにイキってきたウィンプをこうもヘタれさせるとは……何が起きた？　まさか１ＬＤＫ以下のクソ狭住居に耐えられなくなった蠍が地下を掘ってきたとか？

だが俺の予想は半分当たりで半分外れ、といったところであった。

簡単に言えば地下を掘ったのは合っていたが下手人はウィンプであったし、見つけられたのはウィンプではなかったのだ。

「こ、これぇ……あたしてきに、すごくかかわりたくないというか」

「うーん、俺もあんまり関わりたくなーい」

「サ、サンラクサン、こ、ここっ、これって……」

「解析：超高密度に圧縮された始源性物質。眷属種とは異なる成分の混沌性は……オリジンかと」

超銀河枝毛（エレボス）じゃねぇか……いや、ヴァッシュからネタを聞いてたこともあるし、この大陸のど真ん中ということは背中のど真ん中って事だ。見つかってもおかしくはなかったが……

「……サイナ、仮にこいつをへし折ったとしてエレボスが覚醒する可能性は？」

「……契約者（マスター）の正気を疑う発言ではありますがおそらくは問題無いかと。この程度の欠損で目覚めるようならそもそも次世代原始人類は現段階まで定着していないでしょう」

成る程。

「じゃあ掘るか」

ツルハシを取り出して振りかぶった俺の姿をウィンプとエムルが正気か！？　と見つめてくるが俺は至って大真面目、貪る大赤依と戦った時になんやかんやで調べ損ねた分をここで取り戻す！　はーいマイニーン！！

ガヅィーン！！

「……くぉぉぉぉぉ」

硬い……ものすごく、硬い……！　いやマジか、剛掘の鶴嘴に使ってる素材は最上級だぞ？　それを以てしても弾かれるとくるか。

「だがめげない！　しょげない！　掘らずにはいられない！！！」

連打！　連打っっ！　ツルハシの耐久が削り切られるギリギリまで叩きつける！！

だが削れない、アイテムの一つも落ちやしない。これはダメかと諦めの境地で耐久的に最後の一振りを叩きつけたその瞬間――

「お」

「あ」

「んぃ？」

ぽこり、とその硬さを身をもって体感したからこそ恐ろしいくらい

あっさりと転げ落ちた枝毛の欠片にこの場にいる全員が視線を奪われる。

「お、おお……こんだけ掘って泥1とか確率腐りきってるけど逆に言えば一個は出たわけか……」

「も、もうさいせいしてる……」

この程度の角質、ダメージですらないってか？　伊達にゲームオーバー級のサイズしてないってわけかよ。だが貰い受けたぜゲームオーバー級モンスターのアイテム、さーてフレーバーを拝見っと……

・始源黒片エレボセル
黒く、黒く、暗闇は万象を内包する。
暗闇を恐るることなかれ、混沌に身を委ねよ。
白は隷属を説くが黒は一体化を説く、大いなる闇の渦こそが安寧の終着点である。
黒い神の細胞は始源眷属の性質を昂め、濁り深まる五色はより神に近しい証となる。

貫禄のオールフレーバーテキストだよこの野郎、ロクでもない事しか書いてないのに役に立たないわけじゃなさそうなのが厄介だ。

「ど、どうするんですわそれ……」

「見なかった事にするかぁ」

「雑に片付けたですわ！？」

流石に今始源関連に首突っ込み始めると「祭」に間に合わなくなるかもしれないからな、枝毛のキューティクル削ったくらいなんだから放置しても大丈夫だろう。どちらにせよツルハシが限界だからこれ以上の鑑賞も難しいし。

「さて、厄ネタは埋めるに限る。土に埋めて全部無かった事に……」

「まだあるわよやばいのが」

……えぇ？

これからカチコミだってのになんだって隠れ家の大掃除ばかり……と思わなくもないが、放置するわけにもいかない。ていうかなんでこんな本格的に地面掘り起こしてるんだ、って話なのだが。

「ひまだから」

の一言がいっそのこと清々しかった。娯楽が料理しかないからな……あまりに暇だと地面に穴掘りたくなるよね……こう、枝とか拾ってぐりぐりとな。いやそんな理由で化石発掘並の大穴開けるなや。

「いやこれに匹敵する厄ネタとか何があるんだよ……」

ぱきり。

「……ぱきり？」

「サイナ、顔面割れた？」

「理解：脳に甚大なダメージ」

サイナじゃないなら一体……

「サンラクサンっ！　あれですわっ！！」

「何が……んん！？」

恐らくウィンプが途中で発掘を止めたのだろう。形状的に全体の半分程度まで露出したそれの一部が、陶磁器のように割れて地面に落ちていた。

「おまっ、何掘り当てた！？」

「だからやばいっていったでしょ！　あれ、いきてる！！」

ぎゃいぎゃいと叫ぶ視線の先、恐らく埋まっている部分も含めれば5メートルはあろう巨大な「蛹」が羽化しようとしていた……！！

地底の神と不世出の蛹（後書き）

この蛹、実は旧大陸にもいる。

我らが旗印は不朽となりて刻まれる（前書き）

そろそろ本気出す（もう力尽きてる）

我らが旗印は不朽となりて刻まれる

◇

とあるクランの話をしよう。

そのクランの名は【フォッシル・マイナーズ】、読んで字の如く化石(フォッシル)の採掘者(マイナーズ)……化石掘りをメインとしたクランであった。
四駆八駆の沼荒野から発掘される化石アイテムを発端として地下への挑戦のためにツルハシ、スコップ、剣を担いで敵陣ど真ん中で化石発掘に勤しむ彼らは多くの発見をした。

例えば朽ち果てた巨大な突撃槍。

例えば下顎が何かに食いちぎられた獣の頭蓋。

例えば発掘され外気に触れたことで覚醒、羽化する不思議な虫型モンスター。

彼らが遭遇した時には「蝉」の姿をしていたそのモンスターはレベル５０でありながら当時遭遇したフォッシル・マイナーズのプレイヤー十五人……平均レベル８０のうち、実に三分の二である十人をリスポーンさせてようやく討伐された。
一体このモンスターはなんなのだ、かろうじて生き残ったプレイヤー達の前に提示されたのはドロップアイテムの名前ではなく……新発見モンスターの命名権であった。
未発見モンスター。それはプレイヤーによる発見例は片手で数えら

れるほどに僅かな、名づけられることを待っていたモンスターだ。
このゲームにおいて、殆どのモンスターはＮＰＣによって命名されている。だが今まで発見されることなく、名づけられることもなかったモンスターは稀ではあるが皆無ではない。彼らはその中の一体……環境に応じて成虫としての姿を個体毎に全く別のものへと変質させる神秘の蛹と遭遇したのだった。

リスポーンしたプレイヤー達も戻ってきたところで彼等は相談した、勿論議題は新たに見つけたモンスターの名前である。そうして彼らはその蛹にこう名づけた。

――自分達とて永遠に続くわけではない。何か問題が起きて解散するかもしれないし、自然消滅するかもしれない。
だが今この瞬間に集ったこの面々が、確かにこのモンスターを見つけ、倒したのだと世界（サービス終了）が終わるまで示し続けて欲しい。
だからこそこのモンスターは今日この日まで【ライブラリ】にすら明かされることなく、地中深くで眠り続けていたのだ……次に見つけた者が驚くように、ひっそりと。

彼らはＦｏｓｓｉｌ　Ｍｉｎｅｒｓ、化石を掘る者の複数形。
そしてこのモンスターは……化石を掘る者の所有格。

◆

『モンスター不世出の発見(ディスカバーエクゾーディナリー)！』

『討伐対象：ＦＭ'ｓクリサリス〝戦災孤児(ウォールフェン)〟』

『エクゾーディナリーモンスターとの戦闘が開始されます』

不意打ちで新コンテンツが突っ込んできやがった！！

「くっ……全員散開！！」

「ぴぃぃ！！」

情けない声を上げてぃの一番に逃げ出したヘタレが見えたが、それを責める気にはなれない。何せ今の状況を説明するならトラックが物凄い勢いで狭い場所を飛び回っているようなものなのだから……！！

「く、なんだあの超兵器カブトムシ！？」

ずがん、どごん、と狭い隠れ家の中に何度も激突しながらも視界に入ったよし殺そうと言わんばかりに俺達へと突っ込んでくるその巨体は、今は懐かしき千紫万紅の樹海窟で戦ったクアッドビートルを彷彿とさせる甲虫型のモンスターだ。ツノが多いコーカサス系じゃなくてヘラクレスっぽい胸角が大きく発達した二本角のカブトか。母さんならもっと詳しく解説できるのだろうか？

だがその形状は単純に虫と呼ぶにはあまりにも物騒だ。普通のカブトムシは明らかに何かの射出機構を備えたツノなんて生えていない

し、前脚が鋏型に進化もしない。
そしてなによりあんなロボットみたいなメカメカしい変形で飛行モードになって突っ込んでこねぇ！　どういう変形してんだ前翅(マエハネ)が刃状に格納変形して後翅が戦闘機の翼みたいになってやがる！！
「あぶねぇぇ！！」
「わたしのさくひんんんんん！！」
芸術は滅びん！　生き延びてまた作れ！！
だがどうする、現状は最高だが最悪だ。飛ぶタイプのモンスターを狭い虫かごに閉じ込めたのはナイスだが、俺たちもその中にいるんじゃ金網デスマッチに早変わり。メリットとデメリットが極端に尖り過ぎている、そしてなによりこのシグモニアに出現したエクゾーディナリーって時点で死闘の予感しかしねぇ！！
「そ、そとににげ……」
「騒音にキレた虫達が出待ちしてると思うがどうする？」
「ど、どっちにしてもしぬのいやぁ！！」
「だったら足掻くんだよ！　戦闘用意！！　タンクは俺が張る、エムルとサイナは生存重視で後方支援！！　ウィン……あー、サミーちゃんさん宜しくお願いしやす！！」
「せんりょくがいつうこく！？」
それもあるがユニークシナリオEX的に死なれると困る、超困る。
そもそも俺こいつの性能殆ど把握してないんだよな、憶えてるのは

ＳＴＲが強いのと毒を使える……くらいかな。
だが呑気にパーティメンバーのステータスに思いを馳せている暇はない。クソッ、マジで虫かごの中で大暴れする虫のそれじゃねーか……！！
だがこの俺を誰と心得る、ゴキブリを見つけたら対峙する前に生け捕りにして観察するプロセスを挟む狂気のインセクトスキー・陽務永華の息子だぞ！　昆虫耐性が無ければ生きていけない家で生きてきた十数年の知識経験が、虫かごの中で暴れる虫の動きを捕捉する。

「そこだっ！！」

臨界速を解除しておいて本当に良かった、こんな狭いところでアレを使ったらあのなんたらクリサリスに轢かれる前に壁のシミだ。
傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）と傑剣への憧刃（デュクスラム）を構え、壁にぶつかり斜め下に落ちてくるような軌道で飛んできたＦＭ'ｓクリサリス成虫……サイボーグカブトの前翅が変形した刃にクリティカルで叩きつける！

だが、

「お、ご、もぉあっ！！？」

「サンランクサン！？」

「カスダメだ気にすんな！」

ダメだ、推進力が違いすぎる。マトモに打ち合ったら考えるまでもなく負ける、ギリギリで受け流しに切り替えたのはマジで正解だったしクリティカルが出たのは幸運だった。

「これは厄介だぞ……」

飛んでる限り近接攻撃手段が自滅と隣り合わせだ、あの質量だけで驚異足り得る。というか大型モンスターはだいたい質量が怖い、サイボーグカブトも例外ではないというだけだ。
だが大抵の大型モンスターは単なる物理質量だけに留まらないのがシャンフロのみならずアクションゲーの常。

「警告：高密度魔力反応……砲撃かと」

「本格的にサイボーグしやがって……！！」

次の瞬間、発達した上のツノから放たれたレーザービームが隠れ家の内壁をぶち抜いた。やめろーっ！　敷金礼金がーっ！！
いや家賃ゼロで蠍（大家）に無許可で住んでるから敷金礼金もクソもないけど。

我らが旗印は不朽となりて刻まれる（後書き）

なおフォッシル・マイナーズですが別にトラブルらしいトラブルもなくメンバーも増えて今日も元気に新大陸で化石掘ってます

一体誰が悪いのか（前書き）

筆が進むのもあるけど最近リアルが楽になったのが大きい

一体誰が悪いのか

冗談を言ってる場合じゃないか。
回避の体勢から立て直しつつも着弾地点を見れば、貫通こそしていないが問題ないとは言い切れない感じに壁が抉られている。

「……ここはもうダメだな」

「え……？　ど、どういうことよ」

「戦うにせよ逃げるにせよ、アレにここが破壊されるのは時間の問題ってことだ。家具を片付けつつ動く、家での準備をすんだよ引きこもり……！！」

「う、うそでしょわたしのあたたかなねどこ……」

地味に重い過去を匂わせる泣き言を漏らすんじゃない！【ライブラリ】に全面協力させりゃなんとかなるだろ！！

「ウィンプ！　出口を塞ぐ石を少しずつどかしておけ！　ギリギリまで開通させんなよ、最悪蜘蛛が雪崩れ込んでくるからな！！」

「ふぐぅぅ……ううっ、わかったわよ！！」

さて、待たせたなサイボーグカブト。

「サイナ！　エムル！　火力で叩き落とせ！　これ以上暴れられたら上から蠍が落ちかねんぞ！！」

「了解‥「化粧箱」展開」

「はいなっ！　詠唱に入るですわっ！！」

「よーしクソカブト、こっちも合わせてやる。カブトムシらしく相撲しようぜ！！」

頭装備を懐かしき戦角兜【四甲】に変更。お前が不世出だろうと関係ない、こっちの角は神代無双の刀と張り合った角だぜ……むしろこっちが言ってやろう

「相手にとって不足無し！！」

とはいえ流石に正面切ってぶつかるわけにもいかない。だったら戦法を変えるまで……相撲に階級は存在しない、だったら小兵の戦い方でその巨体を沈めてやろうとも！！
明確に俺を狙った突撃に対して連結スキルの数々を起動した俺の身体が加速する。狙うは奴の角……ではなく、角を足場にさらにその向こうの翅だ。

どんな不安定な体勢でも一秒耐えられれば一瞬の攻防の中では値千金のモーションとなる。【四甲】の角、その一本による一点倒立とでも言うべき曲芸も真界観測眼あってこそだ。普通にやっては一秒保てば上等な曲芸も轟速で突っ込んでくるサイボーグカブトとの交差という一瞬であれば成立する、そしてこちらの制御下に置かれた吹き飛びを利用したスピンで奴の後翅を斬りつける。

だが手応えは芳しくない、これは硬さによる弾かれではないな……
微振動？　超振動？　このクソカブト、巨大を支えるにしては明ら

かにおかしいが翅の振り幅が恐ろしく小さい。もはやバイブレーションと言っていいレベルの微小な羽ばたきで巨体を動かしてやがる。なんで浮いてるんだ、なんで飛べるんだ、それはきっと魔法パワー。

「向こうの速度込みの交差斬りでもこの程度かよ泣けるぜ……」

着地、近くにあった燭台をインベントリアに格納しつつ次の策を練る。エムルは詠唱中、サイナは……エムルに合わせるつもりか、下手に手を出してヘイトを逸らされても困るしナイス判断だ。

さてどうしたものか、外殻の硬さは言わずもがな。飛んでる最中は翅への攻撃も無駄、腹を狙うか？　腹も外殻と同質っぽいですねクソが。さぁ攻撃が来るぞ、思考は動きながらだ。

「おっと足場」

「わたしのいすーっ！！」

跳躍で回避しようにも距離が足りなかったので咄嗟にインベントリアから椅子を取り出して足場にする。当然その場に取り残された椅子はサイボーグカブトによって粉砕される。くっ、なんでヤローだ許せねえ……っ！

「机シールド！　箪笥ガード！」

「いやぁぁぁっ！　やめてえええええ！！」

無視。

「エムル！　サイナ！」

「準備完了：同時砲撃します」

「クラスター・マギストーム！！」

あ、馬鹿。エムルこんな狭い場所でンな範囲技使ったら………

「全員外に逃げろォーっ！！！」

「ほへ？」

「はえ？」

「推測：この場の崩壊」

くっ、俺とて家具を惜しいと思う気持ちくらいあるわい！！
封雷の撃鉄・災を左胸に叩きつけ、リキャスト完了したスキルで強化した脚で一気に隠れ家内を駆け抜ける。まだ使える家具を手当たり次第に回収し、迅速に出口へと駆け出したウィンプとは逆に混乱しているエムルの首根っこを掴んで出口まで一気に駆け抜ける。

すまん大家、床抜けるかも。

「サイナっ！　外の状況は！！」

「ご覧の通り、既に開戦かと」

ヒューッ！　外も中も地獄絵図じゃねーか！
住まいを揺らす騒音にキレて身体を起こせば不倶戴天の敵とばったり遭遇、そりゃあもう戦争だわな。見慣れるのもどうかと思うが、フォルトレス・ガルガンチュラとトレイノル・センチピードは今日

も今日とて元気にガチンコバトルを始めていたようだ。
そんな最前線に飛び出してしまった俺達は今のところはこちらにヘイトを向けていないアーミレット・ガルガンチュラにバレないよう慎重に距離を離しながら……

次の瞬間、崩落して埋まった隠れ家への入り口をぶち抜いてサイボーグカブトが戦場へと躍り出た！！

基本的にこのシグモニア前線渓谷は蜘蛛と百足と蠍の領域だ。そんな中に突如として現れた重装甲高機動高火力を兼ね備えたニューフェイスに僅かだが蜘蛛と百足の動きが止まった。
それは俺達のような外様ではなく、ともすれば自分達よりも長くここに住んでいた住人に出会したような……だが、騒音の源であるサイボーグカブトは目に入る全てが気に食わないらしい。周囲を観察するように滞空していたのはわずか三秒、その間に「皆殺し」の結論を算出した奴は戦闘体勢となってフォルトレス・ガルガンチュラへと突撃を敢行した！！

「うわぁ、やべぇな大自然……」

「に、逃げるですわ……これはもうどうしようもないですわ……」

そうは言うがなエムル、ゲーマーという人種はそう簡単にレアエンカを諦められない生き物なんだ。
サイボーグカブトをして城塞蜘蛛の装甲には歯が立たなかったと言うべきか、それとも城塞蜘蛛ですら軽くノックバックで揺れるほど

の衝撃をぶちかましたサイボーグカブトを恐れるべきか。少なくとも今の一撃で奴は蜘蛛と百足から明確に敵として認められたらしい。二種の超巨体が宿敵を警戒しつつもサイボーグカブトという新たな敵を視野に入れた状態で動き始める。先手はトレイノル・センチピード、すり鉢状の円形渓谷の壁面を這って高速でフォルトレスの背後へと回り込み、そのまま蜷局を巻いてフォルトレスを締め上げる。そして背中の大砲でサイボーグカブトに砲撃。

対するサイボーグカブト、回避など邪道と選択したのは直進！　正気か？　否、シラフの奴から死んでいくのが戦場だ！　そのまま突っ込んで毒砲を真正面から貫いた！！

だがあの毒は対フォルトレス用の極大神経毒、百足蜘蛛と比べれば小さすぎるサイボーグカブトが食らえば……いや、違う！　全身の装甲を引き締めることで関節の隙間を埋めて毒が体内に入らないように……！？

なんて奴だ、この戦場における対策を心得てやがる……！　一時的に慣性による移動しかできないが毒への完全耐性を備えるメリットは大きい。そして翅を再展開したサイボーグカブトのぶちかましがトレイノルの顔面に命中！！

「せ、せいきまつ……」

俺もそう思います。
思わずスクショを撮ってしまう程に見事なぶちかましによってあのトレイノルの巨体がアッパーカットでも食らったかのように吹き飛ばされた。とはいえ体型的に吹っ飛んだのは頭を起点とする全長の五分の一程度だが、それでも要塞が稼働するには十分過ぎる隙だ。

「おお、フルバーストとは珍しい」

小蜘蛛を大量に消費することで全方位に砲撃を行うフォルトレス・ガルガンチュラの必殺技だ。主にトレイノルに巻きつかれた時に使う技だが大抵は百足の締め付けが完全に決まって砲撃ができなくなるため、なんらかの理由で締め付けが弛まないと見ることができないレアモーションだ。

内側から大量の衝撃を受けたトレイノル・センチピードがこれはたまらないと拘束を解いて距離を離す。サイボーグカブトは飛んできた小蜘蛛砲弾を危なげなく回避していたが、先程の恨みを忘れていなかったトレイノルの尾が奴を地面へと叩き落とした。

「よーしチャンスだ！　ちょっくらトドメ刺してくるわ！！」

「横からかっさらう気ですわ！？」

ハイエナ戦法の何が悪い？　最小の被害で最大の成果を得る、自然の中で生み出された素晴らしいタクティクスじゃないか。ククク、多少のヴォーパル魂が削れたとしてもエクゾーディナリーを倒せるメリットを取るのさ俺は……

「疑問：この混戦の最中であのモンスターが倒された場合、素材は失われるのでは？」

…………。

「やってやろうじゃねぇかオラァァーッ！　かかって来いや大自然！！」

どうやら床下を雑に荒らされたのが余程腹に据えかねたのか、上か

ら降り注ぐレーザーの雨まで追加された地獄の戦場に、身体一つで

いざ挑戦――――！！

あ、簡易セーブテント作らせて、四回くらいは死ぬ気がする。

一体誰が悪いのか（後書き）

蠍：床下揺らすな殺すぞ
百足：騒音がうるさいてめーのせいだな死ね蜘蛛
蜘蛛：騒音がうるさいてめーのせいだな死ね百足
甲虫：寝てる間ずっとうるさいんじゃ全員殺す
人間：素材落として？

狂わば歩けぬ戦禍の坩堝（前書き）

ラグビー凄かった、日本の敢闘精神もだけど南アフリカの二度と「まさか」を起こさないと言わんばかりの徹底的なプレイングも

つーかデクラークが人権キャラすぎる、なんだお前マーリンか何かか？

狂わば歩けぬ戦禍の坩堝

なるほどよく分かった、四回目の死亡を経てテントから這い出してきた俺はこの戦場における必要条件を完璧に理解した。そして当初の作戦が全くの見当違いであったことも、だ。

「よく分かった、従来のセオリーで通そうとした俺が馬鹿だったたってことだな」

「相変わらずめげないですわー……」

「きょ、きょうじん……」

狂人？　失礼な、強靭（タフネス）と言え強靭（タフネス）と。だが俺だってこのまま同じことをしていたら心が折れていたかもしれない、それくらいこの混戦は地獄じみていた。

ただでさえ蜘蛛と百足の頂上決戦に首を突っ込むのは慣れた俺をしてリスキーだと言うのに、そこに加えて狂乱のサイボーグカブトと恐怖の蠍ビームが加えられているのだ。漁夫の利を誘発しようにも流れ弾で死ぬ確率が従来の五倍くらいになっている。

「質問：打開策はあるのですか？」

「後先を忘れる」

「納得：いつも通り、と」

ある意味いつも通りではあるな、この戦場用のタクティクスからい

つも通りの突貫工事だ。基本的にシグモニアでの戦いは蜘蛛と百足がこちらに敵意を向けてこないことが大前提の立ち回りだ。だが今回はヘイトが目まぐるしくシャッフルされる上に天候がレーザーレインとか言うイレギュラーもイレギュラーな状況だ。

安全策がむしろ首を絞める、温存の塩梅がシビア過ぎて切り札を使う前に死ぬのだ。これまでに死んだ四回も全てそのパターンだった。

だから方針を変える……いっそ全員俺が叩き斬るくらいの気概で挑む。逃げの回避ではなく反撃につなげる回避で立ち回るのだ。

「ちょっと無双ゲーしてくる」

「いってらっしゃいですわー」

聖杯発動、気軽に性転換してからすり鉢状の戦場へと身を躍らせる。まず狙うは小蜘蛛アーミレット、連結スキル「千剣の盟（サウザンド・ボンド）」起動。斬撃への耐性を完全に貫通した振り抜きで無尽蔵に思える程湧き出てくるアーミレット・ガルガンチュラを次々に斬り伏せていく。

流石に一撃で倒せはしないが遅かれ早かれ自爆する連中だ、一発でも攻撃を当てておけばキル判定が出る。どいつもこいつも同じ面構えなので一々斬った個体など覚えていられない、走り抜けながら手当たり次第に攻撃を加えていく。距離が足りないなら片手の剣を銃に変えて射程を伸ばす。

「あっぶねぇ！！」

リミットオーバー・アクセル起動！　速度二倍になった逃げ足で飛び退いた場所に百足の巨体が倒れ込む。基本的にシグモニアでは一度の戦闘でドーラと女王が現れない限り、トレイノルもフォルトレスも一体しか出現しない。

だが共に城砦クラスの巨体だ、巻き添えだけで死の危険が過ぎるわ

けで……だがおかげで大量のアーミレットが踏み潰され、ついでに他の個体にも誘爆した。

「一戦闘中の大量虐殺！」

それがこの剣を叩き起こすための条件！！

墓標ある特大剣、別離なく死を想ふ(メメント・モリ)を片手で担ぎ上げられた事でようやく全ての条件が整った。赤い頭蓋を被って高らかに叫ぶ！

「っしゃ行くぞ！　血解(ブラッドハート)！！」

強敵、難敵、それ故に短期決戦！使える手段を全部使ったこの五分間でＦＭ'ｓクリサリスを撃破する！！

「風火二輪(フレアテンペスト)」「天国への階段(ステアウェイ・ヘブン)」起動、エコーのかかった咆哮をあげて跳躍、虚空を蹴りつけて雑魚の戦場たる地上から主戦場たる高度１００メートルへと躍り出る。

「背中を貸してもらうぜｅｅｅ……」

フォルトレス・ガルガンチュラのいいところは体型的に背中の安定感が百足と比べても優れているところだ。暴走判定回避の為にアーミレットを叩き潰しつつ、レーザーや蜘蛛砲弾、毒の弾幕を戦闘機もかくやなマニューバで回避するサイボーグカブトを捕捉する。

奴のヘイトは目まぐるしく変わっている。何せ巨大だろうと軍勢だろうとその敵意が一切衰えないのだから、少しでも己の妨げになるならば蜘蛛だろうと百足だろうと蠍だろうと全力で向かっていく闘争本能の塊だ。

「このナリｄＥスコープ覗き込ｍｕのクソｓｈ(シュー)ｕｕｕｕルだな……」

プエーロと名付けられたスナイパーライフルを構え、今度は百足に狙いを定めたらしいサイボーグカブトに狙いを合わせて……獣を思わせる爪に引っ掛けた引き金を引く。

「ヘッショｏｏｏ！！」

ほーらどうだ葱砂でチクチク狙撃される気分は！　ウザかろうウザかろう、大振りなモンスター達の攻撃とは違ってＦＰＳ仕込みのスナイプは「命中率」という一点において抜群のヘイトを稼ぐ……！！　ノーダメージである事と気にしない事は別問題、ましてや視界に入るだけで殺意マックスになるような奴がウザったいチクチク攻撃なんて受ければ……ほら来たよし来た爆釣！！

「さぁ来ｉｉｉｉｉｉ！！！」

今度の俺は一味違うぜ、別離なく死（メメント・モリ）を想ふを両手で握って振りかぶる。両足でフォルトレスの甲殻上で踏ん張り、ノックアウトこそが最高効率の野球ゲーで培われた凶弾ライナーの構え………随分と平べったいバットとゴツすぎるボールだが、この世界じゃ生物（ナマモノ）をボールにするスポーツが流行ってるんだ、知ってたか？

タイミングを合わせて力を込めて、全身の捻りを入れた会心の一振りが俺に猛進してきたサイボーグカブトの下角と激突する。弾丸、ライ…ライ、ナ………

「ファａａａａル！！」

ギョリン！　と硬質な者同士が物凄い力で擦れる音が響き、俺の身体はフォルトレスの身体から滑り落ちる。だがサイボーグカブトの方も無傷とはいかない、いかせない。結果としてファールじみた軌道になったが奴の頭角に重大なダメージを与えたのは事実、そして

機動力を削がれたキャラの末路なんて古今東西決まっているもんだ。
「そＫｏ、光のＡ（雨）めが降ｒｕぞ」
蠍の思考ルーチンならお手の物だ、奴らは弱みを見せた敵に対してド畜生レベルの追撃を行う。一秒の隙だって絶対に見逃さない、それは水晶群蠍の近縁種たる帝晶双蠍であっても同様に。
俺との激突によって推進を一時的に中断させられたサイボーグカブトの巨体がわずかに速度を落とした、その一瞬を逃さなかった帝晶双蠍達の長距離射撃が一斉に叩き込まれた。現在深夜三時、脳に未だタンホイザーの輝きが焼きついた状態での徹夜行軍……水晶冠の赤い輝きを碧い身体の中で増幅したレーザーがサイボーグカブトに次々と着弾していく。相変わらず恐ろしい精度だ、モンスターのくせにエイム力が高すぎる。
「だｇａナイスａシスＴｏ！！」
怯み状態という明確な「隙」、おそらく今の俺すら比較にならない「火力」、そして水晶群蠍系列モンスターに見られる「数」………その全てによって防ぎきれない大打撃を受けたサイボーグカブトの身体が吹き飛びながらもなんとか体勢を………あ、フォルトレスの砲撃が直撃し、トレイノルの頭突きが。
「俺ｍｏ混ぜｒｏよ！！」
続けざまに規格外の攻撃を喰らい続けたサイボーグカブトはその甲殻に軽傷とは言えない亀裂を走らせつつも、その戦意を衰えさせるどころかさらに燃え上がらせる。胸角からレーザーを放って追撃をしようとした百足の目を一つ潰し、抉りこむようなカーブを描いてフォルトレスの巨体を支える脚の一つを（戦闘でガタついていたと

はいえ）上翅の刃で叩き斬った！　なんつー怪物だ、だが次は俺が標的か？　面白い、時間が押してるからこっちも畳み掛ける！！

フォルトレスの上じゃダメだ、足場として及第点ではあるが大きい視点で見ると球体なので完全に踏ん張れない。だったら空中ジャンプを利用して短くとも完全な踏ん張りで迎え撃……いや、逆だな。

サイボーグカブトが迫り来る中、土壇場でそれを思いついた俺は別離なく死を想ふ（メメント・モリ）をバッティングポーズではなく盾のように腹を見せたガードの姿勢で奴の突撃を待ち受ける。覚悟を決めた直後、ある程度の強化をしていなければ耐えられなかっただろう衝撃によって俺の身体はいともたやすく吹き飛ばされて……だがそれこそが俺の狙い、そして物理エンジンが実現する電脳の物理法則は俺が望んだ通りの結果を算出した。

「情熱ｔｅ（的）きなハグｄａな……」

今俺はサイボーグカブトの上下二本の角に挟まれる形で空を飛んでいる。こいつは上の角が戦車の砲塔みたいな形状になっている、そしてカブトムシの形状からして挟んで潰すことはできても断ち切ることはできない……！！

俺を振り払おうとする動きに対して強化されたステータスで全力のしがみつきで対抗、さらに俺自身が重さを感じないとしてもサイボーグカブトは別離なく死を想ふ（メメント・モリ）の重さも感じている。空を飛ぶ生物ってやつは思っているほど自由ではない。こんなデッドウェイトを抱えたままで空を飛び続けられるかな？　そしてそのデッドウェイトは積極的にお前を狙っている！！

暴走判定を解除するためのキルスコアが稼げない以上、この３０秒が肝になる……覚悟を決めようぜ！　互いになァ！！

狂わば歩けぬ戦禍の坩堝（後書き）

感想欄でよく見かけたので補足説明

Q．〝戦災孤児〟は何故エクゾーディナリーたり得たのか？

A．中心部分で眠っていたあの個体以外は百足と蜘蛛の戦いに巻き込まれて成長しきる前に全部死んだため、戦禍の中でただ一体生き残った幸運と、三つの種族の性質を持ち、ツァーベリルの真下にして大陸の下に近い場所で眠り続けていた事実を持つからこそのエクゾーディナリー選出なのです。他の場所ではこれだけの幸運に恵まれないのです

今回はウィンプが潜伏するために大穴を作りましたが、ウィンプがいなくても必ずなんらかの要因でシグモニアの中心部地下には活動可能な空間が生成されます、そこからさらに地面を掘り返して初めてエンカウントできるエクゾーディナリーなのです。なおただ一体、と前述しましたがちゃんと次の個体はスポーンします。見つかってないだけで多分埋まってたんでしょう（創世さんイライラ案件）

戦災討ち砕くは煌々たる赤き闘志（前書き）

この章長くなりすぎでは……？（まだ書く内容が山積み）

キルスコアを重ね、死を浴び続けた別離(メメント・モリ)なく死を想ふは羽のように軽くなる。いや嘘だ、中身入りのジュース缶よりは多少重い。
さらに言えば軽率に振り回すと高確率で空気抵抗を受ける、でかい団扇はそれだけでただの気体をドロついた水のような壁に変えてしまう。

「風を切っｔｅ、お前ｍｏ斬る！！」

だが強く握り締めて、まっすぐ振り抜いて、空気の壁すら切り裂けば缶ジュース程度の重さにしか感じない大質量が超重量の凶器となってサイボーグカブトへと叩きつけられる。
二度、三度、四度。片手で振ったのではＤＰＳに甘えがあるので両手で振るにはどうすればいい？　答えは簡単、手に頼らない方法でしがみつけばいい。

暴血赤依骸冠(ブロード＝クロウネ)による形態変化で発生するこの獣の外殻は人の身体には本来存在しないはずのパーツを増やす。例えば頭の目なんかそうだ、左右合わせて六つある目は飾りのように思えるがどれか四つをランダムに隠しても左右一つずつ目が開いていれば視界は保持される。
同様に拡張された人体は単なる飾り以上の能力を発揮する、例えばサイボーグカブトの胸角に足を引っ掛けるだけではなく尻尾も巻きつけて鉄棒へ逆さにぶら下がるようにして……

スキル「万武賦当」起動。得意武器以外の武器でこのスキルを使用した場合、熟練度が上がる効果は今は関係ない。重要なのは得意武

器以外の武器であっても火力を上げられるスキルということだ。

「くっ……ヒビあっｔｅもどんｄａけ……！」

だが両手でフルスイングして尚、ヒビの入った甲殻は砕けない。ダメージは入っているのだろうがそれが決定打にまで持ち込めない。マズいぞ、暴走判定まであと十秒……倒しきれない、ならば判定をクリアする為の道を見出すしかない！

「もっＴｏ重くＳｈｉてやる……！！」

振り子運動のように身体を回して逆転した天地を正しく戻す。そして奴の上にロデオの如く飛び乗ってインベントリアからアイテムを取り出す。

食らいやがれクソカブト……スーパーヘヴィメタル、戦術機亀【玄武】と女帝城の顕壁盾（ヴォーパン・ガルガンチュラ）、別離なく死を想ふのトリプルデッドウェイトだ！！

脳天に機械の亀が激突、ただでさえ重い特大剣に加えて城塞を圧縮したが如き特大盾によるシールドバッシュも加わったことで、最早サイボーグカブトのキャパシティを大きく超えた重量負荷が奴の全身を襲う。

空を飛ぶという行いは自由なように見えてその実、とても繊細で制限の多い行いだ。限界を超えた重量なんか抱えた日には……どうなる？　こうなる。

「安心しｒｏよ、俺は動体ｃ（着）Ｈａく陸に詳ｓｈＩい」

戦闘機ありのＦＰＳじゃよくやらかしたもんだ、上手い人達は地面すれすれを飛んで飛行機の羽で斬撃するとかいう達人芸をするモン

だから真似して何度墜落したことか……お陰で飛行機からの脱出技能ばかり磨かれてしまった。

「墜落しｙａがｒｅ！！」

叩きつけられ、地面を胴体着陸で滑走するサイボーグカブトの上から飛び降りつつ、地面を足でガリガリ削りつつも身体を捻って別離なく死を想ふをフルパワーでぶん投げる。

残り二秒。回転しながら飛んで行った別離なく死を想ふが小蜘蛛を薙ぎ倒していく。一体、二体、残り一秒、ゼロ……。

「乗りＫｉったぁ！！」

三体目が誘爆したことで判定を乗り切った俺は【玄武】と女帝城の顕壁盾にタッチしてインベントリアに格納しつつ、武装を展開する。

あの滑走も強固な甲殻ならそう大したダメージでもないのか、六つの脚で器用にドリフトしたサイボーグカブトの角から放たれたビームを冥王の鏡盾で屈折させるようにガード。色々とフィニッシュまでの準備をしなきゃならんのだ、ちょっと黙ってろ盾フリスビー！！

おおよそ分かった、必要なのはパワーだが種類が違ったわけだ。ヒビを砕くなら斬撃ではなく……打撃だ。煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）を装備し、必殺の超過機構を……あ、魔力チャージしてねぇわ。

「やってやＲａａａａａａａａａＡＡＡＡＡ！！！」

パラベラム・ルーティーン！　規定ポーズと同時に封雷の撃鉄・災を発動！　連結スキル「爆心奔流（ニトロ・フロー）」「旅終わるまで（ネヴァーエンド）」「降誕拳圧（カウントダウンバースト）」連続起動！！

左ジャブ！左ジャブ！　左ジャブ！！
墜落の衝撃で甲殻のヒビが全身に回ったサイボーグカブトの体躯にジャブを叩き込んでいく。どうやら翅がひしゃげて空を飛ぶことは叶わないらしい。
辺りを見回せば周囲に奇妙な空白が出来ている、蜘蛛も百足もうざったいカブトムシが墜落した時点でそのヘイトをいつも通りの状態……即ち不倶戴天の相手との血で血を洗ういつもの戦争状態だ。そして蠍達も領空侵犯していたサイボーグカブトが消えた事で下界への興味を失ったらしい。
奴の巨体は身動ぎするだけでも俺を吹き飛ばしかねないが、この手のモンスターとノーダメで戦うコツはステップを入れる事だ。ワンツーワンツー、前後左右にステップを踏みつつ殴るのはまるでボクシングのようだ。だがあながち間違いでもないのかな？

つまり……タイマンだコラァ！！！

「ＫＯ狙いＤａ！！」

しつこいくらいに左ジャブ、降誕拳圧は左で積み立てた力は必殺の右手に収束する。左利きプレイヤーへの配慮とかあるんだろうか？
知った事じゃないがな。

そしてこれは個人的意見だが……蜘蛛、蜂、蝶、百足、蟻、飛蝗、蟷螂。虫型モンスターのタイプは数あれど、カブトクワガタに代表される甲虫型モンスターは絶望的に小回りが利かない。
真正面から自分よりも大きい相手に挑む分には重装甲と怪力が輝くが、自分よりも小さくすばしっこい相手にはメリットが全て「鈍重」に変換されるが故にめっぽう弱いのだ。
だからこそこんなにも容易く左拳による積み立てが叶う。もう数セ

ンチは幅のある大きなヒビを、甲殻の下にある恐るべき筋繊維で崩壊に至らんとする己が身を無理やり縫い止めながら戦い続けているサイボーグカブトの姿に生まれてから何秒だとかは最早関係ない。
俺はこいつを地下から地上に出した時点で常に逃亡の可能性を考えていた、羽化したばかりのモンスターが生存を優先することは十分に考えられた。
エクゾーディナリー発見というウィンドウが出た時点で最後まで戦えるかも、という打算がなかったとは言わないがそれでも逃げられる可能性はあった。
「敵ｔｏ（闘）う精神は褒ｍｅておくぜ……だが！！」
勝つのは俺だ、ゲーマーはゲームをクリアするものだ、フルプライスを積むなんてとんでもない！　ＧＨ：Ｃはノーカウントで。
積み立てられたチャージは右腕に収束する、カウントされた左が右に宿る気流（ダウンバースト）を補強する。威力上等、頭を動かして角をスイングする程度でこの俺を止められると思ったか？　バカ言え、旋回性能がゴミすぎるんだよジャンプで回避できるわ。
残り時間はもう残されていない、五分間のうちの四分三十秒が経過した……あと三十秒で俺はハイパーローテンションモードになってしまう。ならばここで決める、粉砕してやるぜＦＭ'ｓクリサリス！！
「最終ラｕｎ（ウン）ドだ！！」
飛行戦はもう望めない、それを悟ったＦＭ'ｓクリサリスは後脚と比べると戦闘用に発達した前脚を駆使して俺を狙うが、ＦＭ'ｓクリサリスの全能力は悲しい程に対小型に向いていない。

突き出された前脚を踏みつけ、あまつさえその上を通路代わりにして奴の顔面前まで肉薄した俺は右拳を振りかぶる。右手から発せられるスキルエフェクトは既に次の一撃が尋常ならざるものであることを示している、ＦＭ'ｓクリサリスが攻撃のための「動」ではなく防御のための「静」に固まり、拳が甲殻に叩き込まれて……

ゴンッ

悪いな、フィニッシュブローはこっちじゃない。
クリティカル・レイズ起動、積み立てた貯金をさらに賭け皿に載せ、狙うは一点張りの大当たり！！

爆心奔流と封雷の撃鉄・災のデメリットで体力が１０％を切る瞬間に死戦上足踏（デッドホライゾン）起動、そしてこっちが真の切り札（フィニッシュブロー）……百秀の神腕（サウィルダーナハ）だ！！
機動力を拡張するスキルの数々が俺の身体をＦＭ'ｓクリサリスの攻撃から回避させ、狙いの場所へと至らせる。あまり損傷のない顔を殴ったって意味などない、狙うは奴の身体の中で最も損傷が激しい表胸部だ。

残り時間五秒、ここで終われやＦＭ'ｓクリサリス！！
空中ジャンプの応用、天地逆転ながら虚空を足場に積み立て、賭け、そして倍増した威力を更に補強した拳を渾身の力で叩きつける。これが最後のひと押し、スキル「星幽界導線（アストラルライン）」起動。

この目が見る導きに従うままに叩き込んだ拳。一瞬、ゲームがフリーズしたのかと思える思考の空白……だが、それは直後に炸裂したインパクトによって塗り潰されていく。
先ほどのスカった打撃音とは比べるのもおこがましい衝撃がＦＭ'

Ｓクリサリスの全身を這う亀裂を致命的なものになるまで砕き割れて……そして、奴の身体から力が抜けるのと同時に俺の身体を覆う赤い外殻もまた弾けるように飛び散り消えた。

「て、テンカウントは不要だぜ……」

一撃ノックアウト、俺の勝ちだ。

戦災討ち砕くは煌々たる赤き闘志（後書き）

おさらいも兼ねてサンラク、スキルフル活用の巻

新生！クッキングモンスターウィンプ！（前書き）

当初の予定とは全く別方向に吹っ飛んでいったプロットですが余裕です、最初は彫刻家のはずでした

新生！クッキングモンスターウィンプ！

『モンスター不世出（エクゾーディナリー）……解明（クリア）！』

『討伐対象：ＦＭ’ｓクリサリス〝戦災孤児（ウォールフェン）〟』

『エクゾーディナリーモンスターが撃破されました』

『称号【我戦故我在】を獲得しました』

『称号【終戦の暁】を獲得しました』

『不世出の奥義（エクゾーディナリー・スキル）「戦砕琥示（ウォールフェン）」を習得しました』

◆

とりあえずハイパーローテンションモードになった俺はＦＭ’ｓクリサリスの消滅からすぐ、その場に倒れ伏す。いやはや、激闘の末に勝者が倒れ伏すシチュエーションとかイベントシーンでしか実現しないと思っていたがこんな形で体験することになるとは。

思えば今まで何度か使ったが完全な勝利で終わったのはこれが初め

てか？　よかったなクリムゾン頭蓋骨、これが勝利の美酒の味だ。

「おおぉぉぉ……サイナ～、サイナ～……」

「応答：回収作業を開始します」

さすが、出来るインテリジェンスは違うね。

迅速にＦＭ'ｓクリサリス〝戦災孤児〟のアイテムを回収し、インベントリアと同期しているために俺のアイテムを回収できるサイナは散らばった武器も片付けると俺の方へと近づき……ん？　何故そこで思案する？

「……もしもし？」

「言及：どちらにせよ死ぬのでは？」

「どちらにせよって……いや、ちょっと待て」

回収して引っ張ってくのが面倒だからここで死ねと！？　ちょ、待てコラポンコツ！！　お前仮にも契約者に対してそんな使い捨ての紙コップみたいな……！　ゴミはちゃんとゴミ箱に捨てなさい！！

「いや誰が可燃ゴミだ！！」

「発想の飛躍に異常性を感知」

「いや待てサイナ……っそう、リデュースだ。この際リユースでもいい、人的資源だって……あー、使い潰していいわけじゃない」

「教導：契約者（マスター）……いわばリサイクルです」

「潰す前提から離れろおばか！！」

むっ、百足と蜘蛛による戦闘の余波がこっちに！

「オイ馬鹿何やってる、勝手に消えるゴミなんて不法投棄しときゃいいんだよ！！」

「…………………了解」

シチュエーション次第じゃ涙も流せる言葉だが、生憎今のシチュエーションは「自分を捨てろと叫ぶゴミを呆れた目で見るサイナ」の図だ。

とはいえここにいては巻き込まれる、迅速にシグモニアの「戦域」から抜け出したサイナを尻目に、さてどうしたものかと思考を巡らす。まぁ出来ることと言ったら遺言を残すくらいだが……

「いい加減停戦協定とか結んだら？」

断末魔の呻き声を上げる前に倒れてきたフォルトレスに潰されて死んだ。本当仲悪いなこいつら……

……

…………

……………

「あっぶねぇ……そういやこれで使い切りだったな……」

がしゃん、と崩れ落ちたテントだったものから這い出しながら、男に戻った俺はぼやく。くそう、旧サンラクをすり潰して新サンラクにリサイクルってか？　ペットボトルじゃねーんだぞ。

「だが勝利した……くくく、エクゾーディナリースキル……悪くなさそうだ」

不世出（エクゾーディナリー）のスキル「戦砕琥示（ウォールフェン）」、〝戦災孤児（ウォールフェン）に由来するそのスキルは倒した時の装備が原因なのか元々なのか、拳撃系スキルだ。内容としては拳が命中した際に強力なノックバックを起こす。文章にすれば単純だが、攻撃した際に対象へ与えるダメージが高い程に衝撃の規模は小さくなる……だが、その逆もある。このスキルは与えるダメージが少ないほどに衝撃波の規模が増す。

生きてた頃のやつを思わせるじゃじゃ馬スキルだが面白い、衝撃波の上限が気になるところだが……検証よりも先にやる事がある。

「あー、なんだ……また住む？」

「わたしのねどこ……」

あー……完全に入り口が崩落してるな。ここが普通の荒地とかなら掘り返す可能性もあったかもしれないが……あー、うん。歩く地雷原と歩く城塞と歩く列車砲が不定期にドンパチするシグモニア前線渓谷じゃなぁ……発掘作業は無理だな、ついでに言えばあの「枝毛」も諦めるしかない。

惜しいといえば惜しいが、少なくとももう一箇所アレがある場所を

知ってるのでこの際【ライブラリ】辺りを焚き付ければなんとかなるかな……いや、それよりも問題はウィンプの寝床だな。多少強くなったとはいえ、ここら辺はレベル９９でも心許ない高レベル地帯だ。

「もうこの際前線拠点まで連れてくか……？」

征服人形の拠点はアウト、あそこだと居住じゃなくて収監とかそっち系になる。蟲人族の里は？　いやダメだな、話が通じるだけであいつら蛮族だから。となると元エルフの里……うーん、あそこ現状唯一のレベルキャップ解放可能な場所だからユニークコンテンツを置くのはなぁ………ぬぐぐ、やはり前線拠点しかないか？　スカルアヅチ内部なら、いやしかしあそこは生産職の顔役みたいなの繋がりで規模のデカいクランがよく入るんだっけか……いや？　待てよ？

「前線拠点、前線拠点………新大陸、支部……」

「な、なによう」

「ウィンプ、確かお前最近料理とかもやってたよな？」

調理器具をねだられたのは覚えていたからな、つまりこのヘタレユニークモンスターは料理に関する技能を持っている。それがスキルに裏打ちされたものなのか、ＮＰＣのフレーバーなのかはこの際どうでもいい。

重要なのはゼロではなくイチであるということ、説得材料の種火があるなら後はロールプレイで業火に変えてやればいい。

「方針が決まったぞウィンプ、お前は……そうだな、流浪の料理人ウィンプだ」

「は、はぁ？」

「いいか、そのまんま前線拠点……人間の集まってるところにお前を連れて行くとほぼ確実に命を狙われる」

ユニークモンスターだからな、確実に「倒してみよう」となる奴が出るに決まってる。それを悪いとは言わないが都合は悪い。スカルアヅチは人の入りが多い、教会も聖女ちゃんが常駐してるのもあって同様……だがあそこなら人通りはそんなに多くないし何より俺の「顔」が利く。

「だから俺の職場に匿ってもらう、あそこはなら行ける気がする」

こいつのドヘタレっぷりを見るに……あ、そうだ測定できるじゃん俺。ええと？

「……バカな」

「どうしたんですわ？」

カルマ値………75。
馬鹿な……仮にも、仮にもお前……ユニークモンスターが……無尽のゴルドゥニーネが、人一人殺した犯罪者以下のカルマ値ってお前
……！！

「お前もうちょっと無益な殺生とかさぁ……」

「むえきって……それわたしにもとくがないじゃない」

「ごもっともで」

どうせ殺るなら有益に殺っときたいよね、分かるよ分かる。俺も昔は殺し屋、暗殺者、狂戦士、高校生として常に有益な行動を心得て奔走していたものだ……いや最後の高校生に関しては時は金なり、という事がどれだけ洗っても落ちないくらい身に染みたが。

「問題提起：個体名サミーちゃんは如何するのですか？」

「流浪の料理人がモンスターをテイムしちゃいけないなんてルールはない、そうだろう？　それに……」

あそこにいる馬鹿どもに比べりゃ健全健全、あいつら今超不健全な動機のために健全に働いてるらしいからな……俺も無関係じゃないのがまたなんとも。いや、忘れよう。

「目指すは前線拠点「蛇の林檎」新大陸支店……！」

蛇を隠すなら蛇の中、ってな。徹夜行軍だ！！

新生！クッキングモンスターウィンプ！（後書き）

Q．つまりどういうスキルなの？

A．こら！　と相手の頭を軽く叩いたら衝撃波で相手の首が折れる

写し身の蛇よ、燃え上がる叫びを聞け（前書き）

６００話なので本来は今章のエピローグに出そうかなと思ってた設定を１話丸々使って出しちゃおっかなって

つまり実質本編がゲロ、後書きから本編まで侵食しだしましたよこいつ

写し身の蛇よ、燃え上がる叫びを聞け

シグモニア前線渓谷は新大陸のほぼ中央に存在するエリアだ。ここから前線拠点へと向かうなら超えるべきは砂漠と樹海……すなわち、現在も多くのプレイヤーを阻む樹海と砂漠を逆方向に走破する必要がある。

とりあえず最低限のレベルは確保したとは言え依然としてクソザコヘタレなウィンプという足手まといを連れた状態での強行軍は不可能なのか？　否、否である。俺たちにはあのお方がいる、長らくあのどヘタレを介護してきた実績を持つレジェンダリーヘルパー……

……そう、サミーちゃんさんだ。

蛇という生き物の身体は砂地であっても問題なく這うことができる。足が砂に捉われないというだけでも莫大なアドバンテージだというのにサミーちゃんさんは密やかに、そして迅速に行動するステルス・ミッションのエキスパートでもあらせられる。そして何より背中にウィンプだけではなくエムルも乗せられるってのが最高だ。

え？　俺とサイナ？　俺は封雷の撃鉄・災使えばいいしサイナは征服人形の共通装備で長距離飛行を可能としている。うん、むしろサミーちゃんさんが遅いまであるのだが俺やサイナはステルスできないがサミーちゃんさんはステルスできる、つまりサミーちゃんさんが上位互換だ。

「砂漠、あんまり強いモンスターいないのか？」

「補足：存在します。潜砂寄蟲アニサピカイアン・ワームなどが比較的地上に出現する傾向の高いモンスターではありますが他にも蟲人族が「砂海の蛇王」と呼称するモンスターも存在します」

「蛇だってさ、仲良くできねーの？」

「……あいつ、いっかいわたしのことたべようとしたからきらい」

蛇的に上下関係とか……無いんですか？　いや、多くは聞くまい。こいつの苦労話を聞き始めると朝になっても終わらない気がする。しかも大体敗北と逃走の歴史なので気分がガンガン沈んでいくという追加効果もある、拷問か何か？

「とはいえ砂海の蛇王が出現することはないかと……変温性のモンスターなので」

ああ、夜だもんね……まぁいい、見てみたかったが無駄なエンカウントをしないならそれに越したことはない。カナブンの親玉みたいなでかい虫が俺の姿を見た瞬間爆速で逃げていくのを眺めながら俺達は砂漠を越えていくのだった……まぁそんな風に楽に越えられたら苦労はしない、このあと俺達は背中にサボテンを生やした陸戦型ヤドカリによって地獄の逃走劇を繰り広げることになったわけで。

ええい、針を飛ばすな針を！！

◆

「あれ、ウィンプは？」

結局戦うことになり、殻代わりに被っている岩の上に生えたサボテンを全て伐採してやってようやく撤退していったサボテンヤドカリを見送りつつ、俺は姿のなくなったウィンプを探して辺りを見渡す。おかしいな、サミーちゃんさんはそこにいるのにあのヘタレだけ姿が見えないってのは……おやサミーちゃんさん、喉の辺りが膨らんでませんか。

「あー………エチケット袋いる？」

でろぉ……

「ふくものがほしい……あとふく」

韻踏んでんじゃねーよラッパーかよてめーはよぉ！！
なるほど確かにサミーちゃんさんのステルスは厳密には実際に身体が透明になってるわけじゃない、多分原理はカメレオンとかそういう擬態系列だ。再現度と気配の消し方が上手すぎるので勘違いしがちだが、その体内に隠れたならばその恩恵を受けることができる、が……

「いいかウィンプ、お前は何事においてもまず最初にプライドをかなぐり捨てるがな？　プライドってやつは調味料だ」

「はぁ？」

「あったほうが美味いってことだ」

勝利に変わりはないができるドヤ顔の度合いが変わってくるんだよ、

だからプライドは大事。なりふり構わずに勝ってもその必死さを笑われることがあるからな、正々堂々勝って相手が切断するまで煽り倒す………これが対人の風情というものだ。

「別に戦えとは言わんが、逃げるにしてももう少し慎みをだな……」

「つつしみぶかくにげてるじゃない」

そういう奥ゆかしさは求めてないんだよなぁ……まぁいいや、護衛対象が無傷なら護衛ミッション的には好都合だし。クソッ、〝戦災孤児〟との戦いから補給ができてないからやったらめったらに無茶が出来ない……壊される可能性の方が高いが、一応セーブポイント作っておくか。

「五秒寝てよしオッケー」

さて、邪魔は入ったが到着したぞ砂漠と樹海の境目。ここからは砂漠とは段違いの危険地帯だ……よくよく考えるとなんで最初のエリアの方が危険なんだ。

「夜行性のモンスターを警戒しつつ朝日が昇る前に目的地まで辿り着く、行くぞ………」

「ね、ねぇ」

「なんだよ」

「あしたに……しない？」

………はい？

家を失ったことで早急に寝床の確保が要されるウィンプは少なくとも砂漠渡りには異議を唱えなかった、だが今のウィンプはその逆だ。なんなら今から引き返してもいいと言わんばかりの様子で樹海を見つめている。

「訳を聞こうか？」

「け、けはいがするのよ……わたしじゃない、わたしのけはい……」

「成る程？」

そっと頭を抱える、マジかぁ…………

「どういうことですわ？」

「この樹海に少なくともこいつ以外の「ゴルドゥニーネ」がいるんだとよ」

「ま、まさかあの……ひ、退くですわ？」

いや、それはないだろう。あのゴルドゥニーネ単体で動いてるならともかく、龍蛇が誰にも気づかれずに四体も移動できるとは思えない。つまりいるとすればそれ以外……ゴルドゥニーネのEXシナリオの性質とラビッツの地下で見た経験から察するに、抜け殻から「個」を見出したゴルドゥニーネがいる。

確か【ライブラリ】が大量の蛇を従えた女を見かけたとか言っていたな、そいつか？　ここで引き返す選択肢は取りたくない、EXシナリオの発生条件がプレイヤーとのパーティ編成であるならゴルドゥニーネ達がプレイヤーと接触しやすい場所に移動している可能性

が高い。
つまりここで引き返す選択肢はない、いつまで待ってもこの樹海にいるらしいゴルドゥニーネが移動するとも思えないのだ。可能性としては誰かプレイヤーがＥＸシナリオを発生させて移動する目もあるが、その場合最悪前線拠点でかち合うことになる。それならこちらが先に拠点を確保したい。

「………進むぞ」

「え……」

「だがもし仮に他のゴルドゥニーネに遭遇したなら、逃走一択だ。お前をサミーちゃんさんの口の中に突っ込んで俺が盾になってる間に東……あー、太陽が昇る方向に全力で逃げろ。エムルは会敵した時点で転移で離脱、前線拠点か征服人形の拠点に飛べ」

「は、はいなっ」

「わ、わかったわよう……」

そしてもう一つ、蛇の蠱毒と化した樹海を進むにあたって、俺にいい案がある………外見だけが全てとは言わないが第一印象は外見に因る、つまりそういうことだ。

◆

樹海に足を踏み入れて十分程経ったか。いやにモンスターと遭遇しない薄暗い中をプレイヤー補正、ピット器官補正、センサー補正によるノー照明(ライト)強行軍で進んだないた俺達であったが、ここで遂にウィンプが能面の様に微動だにしない表情で小さく呟いた。

「――みられてる」

小さく、だがこの場にいる俺達にはしっかりと聞こえる音量で呟かれた言葉に頭の上の毛玉がぴくりと震えた。

耳を澄ませてみたが俺には特に何も聞こえない、だがゴルドゥニーネが「いる」と言うからには同一の同族故の直感とかがあるのだろう。

「……数は？」

「わからない、でも……」

ひとつじゃない、その言葉に思わず顔を覆いたくなるが我慢。折角ウィンプのやつが上手くやっているのに俺がボロを出したら目も当てられない。できればやらないに越した事はなかったのだが……プランBを使う時が来たようだ。

予め決めたハンドサインで作戦の開始を通達、姿を消しつつも俺達の近くにいたサミーちゃんさんがウィンプのすぐ隣まで移動してきた事をウィンプの腕組みで認識(合図)した俺は、プランBに移行すべくウィンドウを開いて……ん？　なんだこりゃ、通知？通知なんて概念がこのゲームに存在したのか。

「これは……彷徨う大疫青の報酬か？」

ああそうか、暫くインしてなかったから報酬受け取りが後回しになってたのか。そういえば〝戦災孤児〟と戦った時もなんかアイコンが出てたようなそうでなかったような……まぁ今すぐ行動しなければならないわけでもないので受け取ってみる。

『頭装備を変更します』

「むぇ？」

◇

「お嬢様、あの……あー、半裸の男の隣にいるのが？」

「あんまり声を立てるンじゃないわよォ……間違いナい、「始まりの八」だわァ……」

「あれが、始祖たる一から枝分かれした八体の内の、一人……」

神代にその存在を成立させたという始まりの蛇、一番目のゴルドゥニーネ。始祖個体が脱皮し、自我を獲得した中でも二番目から九番目までの一桁個体を「お嬢」や二桁以降のゴルドゥニーネ達は始まりの八と呼ぶ。

その事を二日前ながら既に郷愁の念が強い砂浜で聞いていた男……シユーは息を潜めつつもプレイヤー補正でなんとか姿の見える一団に視線を向けた。
「お嬢」のしもべであるアンフィはこの場にはいない、あいにくアンフィは隠密というものが苦手である為に別の場所で待機しているのだ。始めの頃は随分とナメられた態度を取られたものだが、最近では下僕としてのある種シンパシーを感じるまでに関係構築ができたとシユーは自認している。

「随分とまァ、ふんぞり返ッタ態度ねェ……」

「一桁にもなると、見た目通りの強さとは限らないってことか……」

視線の先、暗闇が軽減されたとて距離まではどうにもならないので遠見の筒（望遠鏡）で一団を見ているシユーであったが、向こうもこちらに気付いているだろうに無防備にすら見える傲岸不遜な表情で腕を組む少女をレンズの中に収める。
何の因果か自分の新しい一面を見出した主人（NPC）とよく似た要素を持つ少女は笑顔を崩さないままに歩き続ける。己の力が他の何者よりも優れているという自負か、それとも己が下僕の才能を信じているが故か。視界に収めただけではそれを知ることはできない。

「どうしますかお嬢様、なんなら僕だけが突撃して威力偵察することもできますが」

「そうねェ……どう「処理」するカでこれからラの対応を見るのもアりだけどォ……シユー、あれと戦えるノかしらァ？　あの不吉な夜ヲ纏った人間にねェ……」

「どうでしょう、それこそ向こうの対応次第って感じですが……」

「ん？」

吐息が聞こえた。反射的に浮かんだその結論にシューはこれ以上ない違和感を感じた。

声が聞こえた、なら分かる。だが吐息が聞こえた、というのは妙だ。

肉眼でも見えないわけではないがそれでも望遠鏡がないと顔が分からない距離にいるにも関わらず、息を吐く音が聞こえるはずがない。

だからこそ、この場にいる「協力者」達の中でシューが一番最初にそれに気付けたのは神阪（こうさか）　紫夕（しゅう）という男のリアルでの立ち位置故だったのだろう。

「お嬢様、耳を塞いで！！」

「は？　何を……」

次の瞬間、深夜の樹海を粉砕するかのような――――

◇◇

女が二人いる。

「ねぇねぇイスナちゃあん、私的には無理して喧嘩売る必要ないと思うな、ね？」

「あァん？　ガタガタぬかシてんじゃねーわよ。始まりの八だけでもウザったいのに周りの雑魚まで相手してらんネーのよ、先に潰スだけじゃない」

だがどうやら、二人の女は視線の先にいるとある男を攻撃するか否かで意見を対立させているようだ。
攻撃を主張する女は腕に巻きついた奇妙な形をしたキングコブラのような蛇を……そう、さながら狙撃銃のように構えながら片目だけを異常なほどに見開いて視界に一人の男を収めている。
それに対して様子見を主張する女は、なんとも癖のある喋り方で蛇の女を諌めつつもチラチラと同じ男に視線を向けていた。

「いやだからさっきから言ってるよね？　ね？　あの半裸の変態さん、「サンラク」って人に間違いないよ～って、ね？」

「知らねーわヨそんなの、頭トばせば死ヌに決まッてるでしょ」

「どうだろう……きょーごくちゃんの話的にこっち（PK）も普通に行けるって話だしぃ～……ね？　イスナちゃん、やめとこ？　芋砂じゃ勝てないもん……」

「だったらヒイラギ、アンタが戦いなさイよそん時は！」

「きょーごくちゃんにもまだ勝てないのに人力剣聖とかやる人に勝てるわけないよ～……ていうか最近きょーごくちゃん、不意打ちに強くなっててズルい……私は私が楽（たの）しく楽（ラク）してＰＫしたいのっ！ねっ、分かる！？」

「知るか！　だからシウコで仕留めルっつってんでしょ！？」

「イスナちゃん雑魚狩りかいいとこ取りばっかしてるのにいきなり大物狙いなんてできるわけないじゃーん！！」

額に青筋を浮かべた蛇の女……イスナがヒイラギと呼んだ女に（比喩表現として）噛みつく。それに対して気弱を装いつつもその実は毒の滲む言葉で反論するヒイラギ、いつしか狙撃手とは思えない大声での口論に発展する二人であったが、幸か不幸かその大声が他の者達にバレる心配はしなくていいようだ。

なにせ、二人の声よりもさらに大きな――

◇◇◇

「キヒヒッ、イイヨ許スヨ。アレハ近づキタクないモンネ」

地が蠢いている。否、それは丸太程の太さのある何匹もの大蛇が地面に敷き詰められるように広がっているのだ。

そんな蛇の床の上にあぐらをかいて座る一人の女がいた。

何か獣の皮に穴を開けてそのまま纏ったかのようなワイルドな格好をした女は、肉眼では到底見えないはずの遠距離でありながらも正確に樹海の中を歩く彼等を捕捉していた。

「他ニモイルね、バレたラ面倒面倒……キヒヒヒッ、バレタラ見

捨テルカラネ」

その言葉にぴくりと震えたのは地面に敷き詰められた蛇の胴体の中の一つ……だがその胴体は奇妙な事に、ある程度伸びた先から物理的にその身体がぷつりと途切れていた。だというのに肉の断面からは血の一滴も落ちる事なく、何かを恐れるように震える胴体を同情の眼差しで他の蛇達が見つめていた。

「古イ、古いワタシダネぇ……強イのカナ？　隠レテる子ガイルケドワタシニはバレバレダネェ……デモ隣ノ奴も気ニナルネ？」

女自身の目が見ている世界ではなく、切り離し独立行動している頭の一つが見ている景色を遠隔で眺めている女は傲岸不遜な態度を崩さない古い「自分」の様子を伺う。

いけすかない武器兎や過去に何度か空から襲ってきた妙な「物人間」も気になるが、一番目を引くのはやはりあの裸の何者かだ。

あの忌々しい狼、夜闇をモノともしない「目」を持つ女をして未だ夜を恐れる原因。憎悪でも侮辱でもない、強いて挙げるなら好奇心のみでこちらを殺しにかかってくるあの狼の形をした夜の行動のいちいちが女を苛立たせる。だが今の女では勝てぬが故に逃げるしかない。

そんな忌々しいアレと同質の気配を漂わせた人間、無視するにはあまりにも異質すぎる。過去何度か「臭う」奴を見たことはあったが、あぁも濃い気配を漂わせた者はそうそういない。

「ケシカケテミヨうカナ？」

何故だかちょっかいをかけてみたくなる、本能的な衝動をこれまで

生き延びてきた警戒心が押し留める中、女の視界に突如として眩い光が生まれた。

「！？」

女は今、眷属の目を通したものを見ている。そしてその「目」は普通のそれとはものの見方が異なる。
対象に注視するのではなく、対象以外の背景、景色、環境を見る事で逆説的に対象を浮かび上がらせる特殊な目は魔力によって成立している。

即ち、その女の目を眩ませるというのは巨大な魔力が突如として発生したということで――

◇◇◇◇

「イヤあの、別に喧嘩を売るトカじゃなくてチョット見に行くダケだし……」

「危ないなら見に行っちゃダメ！　そんなのジョーシキよっ！」

ぎゃんぎゃんと叫ぶ二人がいる。内訳は身長2メートルはあろう巨躯の男と、その長身と並ぶと本来の身長以上に小さく見える女だ。
男の方は着るだけでも相当の筋力を要求されそうな重装甲を纏っており、逆に女は陰気そうな顔とは裏腹にやけに明るい色ばかりが使

われた防御力の薄そうな服を着ていた。

騎士と女、見ようによっては何かの英雄譚のように見える…………問題は、妙に甲高い声でへっぴり腰な男の方が陰気漂う女の腕にしがみついているという見た目台無しな状況であることだろうか。

「…………アンタが暗いノ怖がってるダケでしょ」

「そ、そんなことないしっ！　オー様も言ってたもんっ！　「筋肉があれば大丈夫！」って！！」

※オー様：ハリウッドスター、オーガスタス・オルティスの事。制作決定した実写版ギャラクシアヒーローズでカースドプリズン役にキャスティングされた。

「だから、オーサマってダレだって……あーモウ、脱ぐなっ！　変なポーズすんなっ！！」

「ふふーん、ニーネちゃん知らないんだ？　これはね、モスト……モスト……そう！　モストマヨネーズって言うのよ？」

「王我星（オーガスタ）……アンタが自信マンマンに言うヤツ、大体違うジャナイ……」

正しくはモストマスキュラーなのだが、ゲーム内NPCである女が知った事ではないし、男が気付くこともない。そして前線拠点側の樹海入り口で遅々として進まない歩みを繰り広げているがためにその喧騒がサンラク達に聞こえることもない。

だからこそ、彼等は被害が最も少ない陣営と言えたかもしれない。

アァァァァァアァアァアァ…………

「ふひゅひいっ！！？！？」

「あだだだだだ！　腕っ！　腕締め付けっっっ！！」

「怖くない！怖くなーいーー！！　マヨネーズーーーーーっ！！！」

「あ゛ーーーーーっ！！（腕が捻られた事による絶叫）」

「あ゛ーーーーーっ！？（突然の絶叫による驚愕の悲鳴）」

訂正。

突然聞こえた地の底から響くような「音」へのリアクションで、最も被害の大きい陣営はここなのかもしれない。

◇？？？◇

「――――感じるワ、何処かでワタシ達が集まっていル……」

遠く、遠く。ここは新大陸最西端「コラデルソル巨界道」。巨いなる獣達が静かに、だが苛烈なる力を秘めて息づく新大陸最大規模の生態系が広がる場所。

憂いを帯びた溜息をつく少女が腰掛けているのは首の半ばから巨大な顎で喰いちぎられ、壮絶な表情で絶命した牛型巨大モンスターの

角の上……そして胴体はと言えば、巨大な四体の龍蛇によってさらに細かく喰い千切られ、瞬く間に骨すら残さずこの世界から消失していく。

「不愉快、不愉快、不愉快ばかリ……目を閉じてモ、目を開いてモ……嗚呼、ワタシはいつまで不愉快の中でのたうつのかしラ？」

その目に浮かぶ感情を読み解ける者はここにはいない。それは燃え尽きた炎のようであり、溶けない氷のようであり、吹き続ける風のようでもあり……ただその眼差しが揺らぐ事はなく、遙かな過去に定められた意志は風化する事なく今なお昏く輝いていた。

「ワタシの可愛い子供達、もっともっと力をつけてネ……戦いは近イ、何もかもをぐちゃぐちゃにして、殺してしまいましょウ？」

人知れず龍蛇達は無尽のゴルドゥニーネは力を蓄えていく、その目が見据えた先は。

◆

プランBに備えてエムルが頭から降りていたのは幸運だったのだろう。彷徨う大疫青撃破に関わった事で獲得した報酬アイテムは貪る大赤依の時とは異なり、獲得した瞬間に装備される……世界観的にはプレイヤー自身の内側から滲み出すように現れた。

俺が獲得したのは装備枠である頭装備「燃ゆる貌(シィンダー・ヘッド)」は装備というよりも現象に近い。なにせ装備された瞬間に何かを被るわけではなく……頭そのものが燃え上がったのだ。

「サ、サンラクサン！？」

「いや、問題ない……大丈夫だ。プランBを実行する、サイナっ！」

「了解：拡声ユニット起動、個体名エムル及び個体名ウィンプは耳を塞ぐ事を推奨します」

「そ、そんなやばいの？」

「最大音量です」

この俺を誰だと思っている？　あまり誇れる過去じゃあないが、世界が滅びるまで歌い続けた死鋼の魔術師(デスメタル・マジシャン)とは俺のこと……　遠からんものは音に聞け、近くに寄ったら鼓膜が爆ぜるぜ！　はい大きく息を吸ってェ！！！

「ヴァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッッ！！！！！」

夜の静けさよ消し飛べと、高らかに重低音(デスボイス)――――！！

写し身の蛇よ、燃え上がる叫びを聞け（後書き）

八番目のゴルドゥニーネ「ウィンプ」
眷属：サミーちゃん
協力者：サンラク

四十二番目のゴルドゥニーネ「お嬢」
眷属：アンフィ
協力者：シユー

十九番目のゴルドゥニーネ「芋砂（イスナ）」
眷属：シウコ
協力者：ヒイラギ

六十三番目のゴルドゥニーネ「？？？」
眷属：オロチ
協力者：無し

百十七番目のゴルドゥニーネ「ニーネ」
眷属：オピオン
協力者：王我星（オーガスタ）

ゴルドゥニーネ「名無し」
眷属：グラトス、ヴォレモス、サナトス、アベルシア
協力者：無し

深夜の叫び、夜明けの幼女（前書き）

主人公人間辞めすぎ問題

——デスボイスは産声なんだ。

懐かしきスペクリでの日々の中で、「歌」という魔法を提案したプレイヤーは俺にそう説いた。

恨みや怒りだけがデスメタルじゃない、俺はここにいるのだと高らかに叫ぶ産声こそがデスメタルの本質なのだと……

生憎今現在も結局デスメタルってなんなんだよという問いに対する結論を見出す事は出来ていないが、それでもデスボイスを出す為の心得はちゃんと覚えている。

即ち、死ぬほど声を出せ。

「ァァァァァァアアアアアァァァァァァアアアアアッッッ！！！！」

晴天流「暮叫（ぼきょう）」は言ってしまえば大声を出して相手を怯ませる為の技だ。だが副次効果というか、ある意味そういうエフェクトというか……このスキルの効果適用中は声量が増加する。それに加算してサイナが何故か持ってたマイク……拡声音響ユニット、要するにマイクを介して音量は更に増大する。そして「燃ゆる貌」の能力は頭部に存在するパーツに起因するスキルや魔法に特殊な追加効果を付与するというもの。

例えば魔法の詠唱は口で行うものだ、フル詠唱すれば通常の魔法に加えてデバフとダメージを複合した効果が追加で付与される。では

口から音響波を飛ばす「暮叫」だとどうなるかというと……こうなるらしい。

「ァァァァァアアアアア！！？！？」

突如として口から放たれる吐息が青い炎に変換された事でデスボイスの波長が乱れる。普通の人間は何をどうこねくり回しても口から炎は吐けないはずなのだが、この燃ゆる貌はあの　暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）と同じカテゴリに属するものだ。口から炎が出ようが雷が出ようが不思議ではない……いや摩訶不思議過ぎるがゲームでそれ言い出すとそもそも人間は脚の動きだけで壁のシミになるほどの速度は出せねえ。

「に、にんげんじゃない……」

黙らっしゃい爬虫類。
気を取り直してデスボイス続行、口から放たれる火炎放射が真っ暗な樹海の夜を青白く照らし出す。炎に触れた樹木枝葉が腐り落ちるように朽ちて灰になっていくのが見える……単純な熱量ではないらしいな、今まで使い所を見出せていなかったがこりゃ中々いいコンボなんじゃないか？

「ァァァァアア……ヴァァアアアアイッ！！！」

だがゲームとてフルダイブ、人体を基にアバターが製作される以上は呼吸にも限度がある。随分と長く感じられたが、一分も経過していないだろう火炎放射（デスボイス）を終えた俺は、息を乱している事を悟られないように迅速かつ静かに息を整えて……再びマイクを握る。

「オイコラァ！！　さっきからコソコソチマチマこっちの事を覗き

見やがって……言いてえ事があるなら面見せろや！！」

口の端から青い炎を漏らしながらキレ気味にシャウト、ウィンプが「いる」と断定したならば恐らくこちらを見ている……そしてプレイヤーと組んでいるにせよまだ一人プレイをしているにせよ、下手なちょっかいを掛けられる前にこっちからイチャモンをつける！！

「このお方をどなたと心得る！　原初の蛇より分かたれた八つが一、八番目のゴルドゥニーネだ！！　文句があるなら言ってみろ、地獄の果てまで追い詰めて後悔させてやる！！　なぁ？！！」

「………」

捲し立てるように叫んで、ウィンプへと視線を向ける。肩書きだけは立派なヘタレ蛇は腕を組み、まるで世界そのものを見下しているような表情のままに一つ頷く。仮面か何かかよと言いたくなるほどに固まった顔と隠し切れてない膝の震えはこの際目を瞑ってやろう……全身震わせないだけお情け及第点だ。

「それにぃ！　こいつに挑むってんなら、まずは俺を通してもらうぜっ！！　そんなに経験値とドロップアイテムに変えられたいってんなら俺は歓迎するぜ！！！」

………反応を待つ。

これで何番目かは知らないがいるかもしれないゴルドゥニーネが逆上するなりして向かってこられると正直逃げの一手と言うか自棄っぱちの俺がソロで相手する事になるが……どうだ？

ゴルドゥニーネは恐らく皆、何かしら生き汚い面があると思われる。決死の覚悟で戦うという事自体縁遠い、ならばこちらが好戦的な意思を見せればその逆に――

「は、はなりぇていってる……っ！！」

「結論：プランBは成功かと」

「フッ……全て計算通りだ」

「絶対嘘ですわ！！！」

いいかエムル、どんだけ複雑な方程式も答えが合っていれば丸が貰えるんだ。二択問題だろうと百択問題だろうと、真面目に導き出した正解とサイコロを振って偶然当てた正解に違いはない。その場しのぎという意味ではな。

「つまり乱数はクソだが役に立つという事だ」

「さっぱり分からんですわ……」

悪魔は邪悪だが契約に関しては律儀、つまり乱数の女神はやはりダークサイドの存在という事だ。
だがこれで目下最大の壁は超えたと言っていいのではなかろうか、あとは厄介な通常モンスターが寄ってくる前に蛇の林檎へ駆け込めばいい。仮に俺と同じような考えで他のゴルドゥニーネの協力者が前線拠点に潜んでいたとしてもプレイヤーの拠点で「ここにユニークモンスターがいます」なんてアピールしたらどうなるかくらいは分かるだろう。

「さーて、後はちゃっちゃと樹海を抜けるだ……け………あー」

「どうした、のよ？」

「いや、まぁ……あー、うん。ちょっと待て」

疑問符を浮かべる他の面々から視線を逸らしつつも、俺は視界の端にずっと表示されていたそれに改めて意識を向ける。

今現在生きている以上、ゼロではないんだろうが……あー、うん。体力ゲージが無くなったのかと錯覚する程に、体力上限が削れてますねこれ。最大体力1になってるよね、これ。足を挫いたら即死とかなんの縛りプレイだ。

「はぁー………ちょっとリフレッシュするわ」

「は、はいな？」

キャンプ立ててー、横になってセーブしてー、キャンプから出てー……お、こんなところにちょうどいい太さの木が。

「ふんっぐどぅお！？」

「ほぁっ！？」

全力渾身会心痛恨のヘッドバット！　天を裂き地を割り泉を枯らす驚天動地の一撃は大樹を揺らし、そして何より俺の頭が砕けて死ぬ。

鎮火（シュボボ）……

「わたしはなにをみせられているの……」

「奇行：奇異、あるいは奇人の行動かと」

真人間に戻る為だ、つまりこの行動は人道に基づいた極めて普通の

行いなのだ。

……

………

……………

明けない夜はない、辿り着かないゴールはない、であれば俺達もまた夜明けと共にゴールへと辿り着くのだ。

「すご……」

「だろ？　ちなみに俺はあの城を相手に勝ったことがある」

「うそいうにしたってもうすこしましなうそにしなさいよ」

「………」

「えっ？」

マジだから、うん。厳密にはサソリスノマタが、だけど俺の魂を削って作った掘建て小屋だからな……実質俺の勝ちと言っていいだろう。

「さてウィンプ、月曜早朝の夜明けとはいえ人も多くなる……さっさと移動しよう」

つーか俺が学校に遅刻しかねない、今五時くらいだからなんかイベントを消化するにしてもスピードが要求される。スムーズに進めばいいんだが………

◆

「………ん」

「おはようございます幼女先生ッッ！！」

スピーディーかつスムーズに聖杯使用、女の身体となって俺は頭を下げる。クソッ、道理で馬鹿が騒いでいると思ったら……！！
戦闘衣装たるアレではなく普段着として（馬鹿共から俺を経由して）渡されたワンピースを着た賞金狩人最強の幼女が、何故か新大陸の酒場に君臨している現状に若干眠気を帯び始めた脳みそが急速に再起動し始めていた。

深夜の叫び、夜明けの幼女（後書き）

突如新大陸にやってきた幼女先生。
彼女が言い放った「フェロシタス・デレクタメンタムが食べたい」の一言が流浪の料理人ウィンプへ試練として立ち塞がる！
ウィンプ「ふぇろ……なに？」
サンラク「フェロシタス・デレクタメンタムって何？」
サバイバアル「フェロシタス・デレクタメンタムって何？」
幻の珍味を求め、ウィンプは荒れ狂う大海に挑む――――！！
え？　魚河岸は朝から開いてる？

流浪の料理人ウィンプ第二話！
「競りのコツは現金で殴れ」
待て次回！！

……

…………

………………

「さぁ今回の目玉はこちらっ！　魚人族達が捕まえたフェロシタス・デレクタメンタム！！　見てくれはまぁ……うん、カッパとピラニアとエイリアンを雑に混ぜたみたいなキモい生物だけどその味は保証するぜっ！！　あ、知らない人に言っておくと称号【美食舌】必須なのでそこのところよろしく。ではまずは１０万マーニから……」

「即金２０００万マーニ」

「は？」

「即金２０００万マーニ、ええと……ああプレイヤーか。ハンジョー君、はいこれ即金２０００万マーニ」

「え、ええと……他に、落札する方は……」

……

…………

……………

「クソがぁ！　幻のアルクトゥス・レガレクスまであまりに遠い……っ！！」

「目的完全に忘れてんじゃねーかオイ、フェロシタス・デレクタメンタム競り落としたぞ」

「マジか！　つーかやっぱ無理だわ、人種じゃ呼吸が続かねぇ」

「浅瀬ぱしゃぱしゃかぁ〜〜〜？　あとこれその幻？　のアルクトゥス・レガレクスの素材から作った装備な」

「言うじゃねぇかこの野郎……っ！」

「つーかさ」

「おう」

「なんでスク水？」

「ティーアスたんがスク水を着ればスク水を着てる俺もティーアスたんということにならねぇか？」

「ログアウトして精神の検査してもらった方が……」

「自慢じゃねぇが、生まれてこの方病気になったことはねぇ」

「自覚しろ、頭の病気にフィジカルは関与しねぇ」

◆

いくら女アバターだからといって、街中をスク水で闊歩する変態とどうして噛んでしまったのかと壮絶に後悔しつつも、丁度時間経過で服が弾け飛んだ女体化状態で蛇の林檎へと戻った俺を出迎えたのは気味が悪いくらい静かに俺はとすり寄ってきた元ＰＫ現仇討人、もしくは仇討人を目指すプレイヤー達だった。

「うわっ、ちょ、なんだなんだ」

「…………」

すっ（無言で差し出される２０万マーニ）

すっ（無言で差し出される１００万マーニ）

すっ（無言で差し出される２０００万マーニ）

すっ（無言で差し出される1億マーニ）

「いや待て怖い怖い怖い！！」

いきなり現金渡してくるのも意味が分からないし何故現金を渡してくるのか意味が分からないし何より怖い！　なんかこの金汚そうなんだが！？　本当にクリーンな金か！！？

「サンラク氏……なんつー、なんつーもんを招いてくださったんじゃ……」

「嵐じゃ、嵐がやってきた……」

「あまりに、あまりに……！！」

神の祟りを目の当たりにした迷信に惑わされる村民とかそういうアレか何か？　だがしかし何故金を渡されるんだ……と、視線を変態達のさらにその向こうへと向けてみれば、そこにはびくびくと震えながら幼女先生にオードブルを出すウィンプの姿。

既に幼女先生の座るカウンターには大量の皿が積み上げられているので、おそらくあのくだりを何度も繰り返しているのだろう。

「アルビノツインテ虚仮威しイキリ美少女とは……っ！」

「あまりに、あまりに属性の詰め合わせが過ぎるっ！」

「萌えという名のスパイスでカレーでも作ったのかよ！」

「とりあえずウィンプたそに似合う服のデザインを考えたんですけ

ど……」

無言で変態達の親玉に視線を向ける。視線を向けられたサバイバアルはといえば、やたらキャラ造形に力の入った長身の女アバター（スク水）のまま俺の肩に手をぽんとおくと一言。

「もうちょっと見た目が若ければな……いや十分圏内なんだけどな？」

「お前マジでトゥールにあることないこと吹き込んで意味深な視線向けさせるぞ」

「嫌がらせで致命傷狙ってくるんじゃねーよ鬼か！！」

全く、鯖癌時代はもうちょっと硬派というか（大前提としてネジが飛んでるとはいえ）比較的マトモな性格してた気がしたんだが、鯖癌終了後からこいつに何があったんだ。

「おーいウィンプ、新鮮なフェロシタス・デレクタメンタム持ってきたぞ」

「ふぇおしらす・れれくたぇんたむ！」

後ろの方から「あーっ！　いけませんっ！　滑舌悪い属性は僕に効く！　推しにしちゃうぅぅ！！」と聞こえた気がするがこの地にこびりついた悪霊の類だと思うので後で塩撒いて……いや、ここは岩塩で殴った方が効き目がありそうだ。

「俺はこいつの料理法を全く知らないが……まぁ、頑張れ」

「が、がんばる……」
なんというか、でっかいマグロに河童の腕を生やして蟹の脚みたいな動きをする口をつけたみたいな奇怪なナマモノにしか見えないのだが、幼女先生一押しの高級海鮮食材らしいのでちゃんと調理できればここで受け入れられる可能性はグッと高まる。
しれっと1メートル以上はあるフェロシタス・デレクタメンタムを担いで厨房に消えていったウィンプを見送りつつ、とりあえず待つことにする。
「あー……幼女先生、何故ここに？」
「……転送魔法が改良された、本部からならここに行けるようになった」
バッ！　とサバイバアルの方へと向けば、奴もまた初耳であったらしい。いそいそとこちらにやってきて何故か床に正座したサバイバアルが十秒ほど吃った上で幼女先生に話しかける。
「て、ティーアスたんっ！　それはつまり、仇討人は大陸間を自由に行き来できる……ってことですかい？」
「……ちがう、あくまでもここから本部に飛べるだけ」
「ん？　ならなんで幼女先生はここに来れたんです？」
…………。数秒程沈黙していた幼女先生だったが、仕事服とはいえ寝起きの状態なのかフラフラと店にやってきたルティアが何もないところですっ転んだのを一瞥した後に一言。

「私はすごい、なのでここにいる」

「成る程、一切矛盾のない完璧な論理によって実証された真理というわけだ……」

「いや純度１００％の力技じゃん……」

気にしたら負けってことか、とりあえず新大陸支部のマスター（旧大陸の同じ顔シリーズのマスターと違って造形は似てるが若い）に何か飲み物を頼みつつウィンプが料理を完成させるのを待つ。

「………………」

「ん？　どうかしましたか幼女先せ」

「……まだまだ」

何が……はっ！　俺が頼んだ筈のフルーツジュースがいつの間にか幼女先生の手の中に！？

「相変わらずイかれた速度だぜティーアスたん……」

「今日来た理由のひとつはこれ……サンラク、あとついでにサバイバアル」

「ティーアスたんに名前を呼ばれた……！？　俺は総理大臣になって今日という日を記念日にしようと思うんだがどう思う？」

「毎日祝日みたいな脳みそしてんだから大差ないだろ」

「……話（はなし）を聞（き）く」

「「押忍！」」

幼女先生はごそごそと鞄の中から何やら便箋を取り出すと、俺とサバイバアルに差し出した。気になるのは俺の便箋は真っ黒で、サバイバアルの便箋は真っ赤であることか。

「これは？」

俺が注文したフルーツジュースをじゅぞぞぞぞ、と一瞬で飲み干した幼女先生は手の甲で口を拭いつつこう言った。

「仇討人（あだうちびと）サンラク、それは死者の剣（リヴェンデッド）になるための……　仇討人（あだうちびと）サバイバアル、それは復讐の剣（アヴェンデット）になるための試験内容（マストオーダー）」

仇討ちの二つ刃（後書き）

・改変報告

以前どこかで「仇討人から派生するもう一つの隠し最上位職業への転職条件は一定数以上「死者」が絡むクエストのクリア」と言いましたがこれを「一定数以上「死者」が絡むクエストのクリアなどで蓄積するパラメータが規定量に達する」に変更しました

彷徨う剣を担う者無し

仇討人二人に渡された二通の手紙、そりゃ当然その場で中身を改める。

「まぁ中身は違うわな、そっちはどんな塩梅だ？」

「あー……これ情報共有しても？」

「構(かま)わない、ただしひとりで倒(たお)すこと」

ソロ専門ってことか、じゃあ情報共有っと。

「ええと？『汚れた清め、夜な夜な哭くはおぞましき純白。冒涜の白化粧、無念の数だけ厚顔は恥を忘れる。しからば死者の刃だけが素顔を暴く』……だとさ」

「こっちはどうだろうな……『剣を掲げよ、槍を掲げよ、墓標こそが我が証明。無記名の朽ち鐵(カネ)こそが我が生涯。栄光を陥せ、復讐の刃だけが正当なり』……あー」

謎解き系だぁ………しかもヒント一切ない系だこれ。

「おいどうするよこれ、俺の方完全に対象モンスターの特徴しか書かれてないんだが。白いらしい」

「いやお前、俺の方も大概だぞ。つーか墓ってことしか分からねぇ……人型でいいのかコレ」

暗号系？　それとも何か別のギミックで答えが導き出されるのか？　分からない、さっぱり分からない。ニュアンスもロジックも通用しない……こいつは難題だぜ。

「おいおいお二人さん、俺たちの事を忘れてもらっちゃ困るぜ！！」

「何っ」

「お前達……！」

「サバさん、三人寄れば文殊の知恵って言うだろ？」

「ならばここにいる全員の力を合わせれば……」

「文殊の上位互換ってなんだ？」

「文殊って確か菩薩だろ？　つまりその上は……釈迦如来……っ！！」

「おいおい、人生のカタルシスは今だったのか……」

無言でサバイバアルに視線を向けるが、そっと目を逸らされた。ああ馬鹿ばっかかな自覚はあったのね、なんか安心したわ。

「で、できた……」

だが彼らは実力こそあるが馬鹿で変態なのでよろよろと厨房から出てきたウィンプに思考能力の全てが持っていかれたらしく、手紙の謎解きは過去のものに成り果てた……あーもういいや、どうせ学校

行かなきゃだからせめてウィンプ関連のイベントは終わらせておきたい。

「ふぇ……ふぇ……ふぇなんとかのすーぷ、よ！」

「幼女先生は俺より強いぞ」

「すーぷ、です……」

無言でスクショや動画を撮影し始めたのが最高にアレ過ぎてインベントリアに退避したサイナやサソリスノマタ（まだ残ってた）に退避したエムルを召集して常識人の割合を高めたい衝動をグッと抑えつつ事の推移を見守る。
あの奇怪な見た目のフェロシタス・デレクタメンタムをどう捌いたのか、出てきたのは魚を使ったスープのようだ。匂いは……まぁ悪くない、驚くべき事に見た目はまっとうなのだ。てっきり魚のカシラをそのまま器に突っ込んだような間違った前衛料理みたいなのが出てくると思ったので意外だ……

「………」

無言で匙を取った幼女先生は魚の身とスープを掬うと、躊躇いなく口の中へ――

「結果は！？」

「匙を口から抜く瞬間が……ね？」

「スーパースローカメラが欲しいところだった」

はっ倒すぞ貴様ら、だがここで幼女先生が動いた！！
一口食べただけで匙を置いた幼女先生に何かまずったのかと硬直したウィンプであったが、幼女先生は席を立つのではなくそのままスープの入った器そのものを持ち上げ……

「行ったァーーーーっ！！」

「ティーアスたんの一気飲みだ……レアだぜサンラク」

「そ、そうか……」

幼女先生、基本的に一口がやたらデカいし食い貯めみたいなこと出来るし……「食」のスケールがでかいからそんなレアな気がしないんだが。とはいえこれは良い結果に辿り着いたのだろうか。

「ど、どう……です、か？」

「…………まぁ、普通？」

あー、言うやつも言われたやつも反応に困るタイプの味か。だがこれは……へイ店主、採用の方いかがでしょうか？

「焼く、煮る以外の調理法を教えるところからですかね」

「成る程」

お祈り回避、やったぜ祝杯だ！！　まぁジュース持ってかれたけど。

「しかし幼女先生も人が悪い、抜き打ちでウィンプを見定めに来るとは……」

「……なんのこと？」

……んん？

「いや、いくつかある用事のために来たと言ってましたし、それが目的の一つなのでは？」

「別に……ここに来た理由はそれを渡しにきたのと……」

「来たのと？」

「………ルティア達にも伝えるため」

何を、と聞き返すよりも早くこの世界最速の幼女は簡潔にこう口にした。

「我等『彷徨う剣』は今日をもって現王政との協力関係を解消した。しばし休暇せよ………とのこと」

要するに、特大の爆弾ですよね？　それはそれとしてそろそろログアウトしないと遅刻が登校でやばい！　くっ、リアルで考察しつつ続きは夜だ！！

………

…………

……………………

「は？　ガス漏れで休校？」

学校からの緊急連絡が届いたのはいざ登校しようと靴を履いたその瞬間だった。ガス漏れとは物騒だが、まぁ明日までに修理を終わらせて再開するらしいのでラッキーホリデーだと思えばいいだろう。

「あら楽郎、遅刻するわよ？」

「なんかガス漏れで休校だって」

「あらそう…………あ、今から一時間色々掃除するから部屋に籠ってた方がいいわよ〜」

げ、マジか。我が家において自室に閉じこもることを推奨する「掃除」とは即ちマイマザーの伏魔殿（テラリウム）の清掃を指す。故に油断して扉を開けっぱなしにしておくと気づかないうちに逃げ出したパラワンオオヒラタクワガタが天井から鼻に…………い、いやそんな事実はなかった、なかったんだ。俺の記憶ではそういうことになっている。大顎に締め上げられた息子の鼻よりレオナルド（パラワンの名前）を心配した母親はいなかったんだ。

「母さん、またクワガタ逃さないでよ」

「このシーズンはみんな幼虫よ」

そりゃ何より、幼虫は天井に張り付かないし二階まで飛んでこないからな。とりあえずシャンフロに戻るか……

ログイン中………

セーブポイントとして利用していた三神教会の客間から蛇の林檎へ移動、リアルを詮索するつもりはないが平日の朝から余裕でインしているサバイバアルに片手を上げて戻ってきたことを示す。

「ん？　落ちるんじゃなかったのかよ？」

「予想外に休みになったんだ」

「ほぉん……ああそうだ、ウチの連中にはもう話を通してあるが、さっきのティーアスたんの話……箝口令を敷いておいた方がいいぜ」

「あん？」

箝口令？

「賞金狩人（バウンティハンター）は国王との極秘契約を前提として活動してんだよ、それを打ち切ったってこたぁ……多分だが、今街中でＰＫしても出てこねぇぜ」

「……マジで？」

「おう、聞いた話じゃサードレマのトップと今の国王が冷戦状態って話じゃねーか。多分だが「彷徨う剣」関連の全フラグが停止していると考えていいぜ」

そうか……「頭領」がいつだったかの会話で王国との関係をほのめかしていた気がする、それを正式に断交したってことは後ろ盾を自分から捨てたってわけか。いわゆるバカな判断をするキャラには見えなかったので理由があるんだろうが賞金狩人が動かないってのは確かにデカいネタだ……あまり広めるものでもない、か。

「まぁどちらにせよこれも今すぐクリアできるようにも思えねーし……なぁサバイバアル、お前今暇か？」

「ん？　まぁ暇だがよ……なんだ、適当に狩りにでも行くのか？」

「いいや？」

ウィンプの大移動は〝戦災孤児〟というイレギュラーによって起きた想定外のイベントだ。【ライブラリ】に啖呵を切った手前、スケジュールは迅速かつ確実にこなさなくっちゃな。本当は今晩でやるつもりだったが時間ができたなら好都合、実力を知ってる奴がいるならなおのこと好都合。

「大体一日で完全制覇の名誉を取りにいかねーか？」

親指で指差した先は、新大陸の海を埋める巨大な金属鯨――

彷徨う剣を担う者無し（後書き）

ウィンプ、バイト生活
日給：１０００マーニ
ボーナス：着せ替え隊の貢物（チップ）

幼女先生、なんか料理漫画の審査員みたいなこと言ってきたけど単純に食べたいもののリクエストを出しただけだったという

ちなみにサミーちゃんについては賞金狩人達にはもうバレてるけどサンラクの首（職業的な意味で）とウィンプのカルマ値のおかげでセーフ判定
ティーアスは自身のスキル的に「個々の時間の流れ」で存在を察知するとかいう離れ業でサミーちゃんを察知し、ルティアはウィンプが心配で忍び込んできたサミーちゃんにつまづいて転んだことで気づいた

何、簡単な話だったのだ。誰も彼もが、【ライブラリ】すらもがこんなクソ簡単な事実を失念していた。
冥響のオルケストラは確かに謎多きユニークモンスターであるが、その本質は音楽プレーヤーだ。ユニークシナリオEXの性質上、その存在のバックボーンを探る事は基礎も基礎。であれば何度挑んだってヒントは増えない、リヴァイアサン……いや、あそこにいるであろう「奴」の可能性もあるか？
ルーツを辿るのだ、あの音楽プレーヤーがどこに行くのかではなくどこから来たのか、そこに攻略のヒントがあるんじゃないのか？

「エリーゼ・ジッタードールというヒントもあるしな……」

聞けばリヴァイアサンは第三殻層にとんでもない規模のアミューズメントパークを作っているらしく、単純にそこが楽しすぎるのもあるが未だに第四殻層へと進んだ者はいないという……いいね、オルケストラの攻略以外にも目指すべき目標があるってのは悪かない。
そんなわけで暇してたサバイバアルを誘ってリヴァイアサンの攻略に挑まんとする俺は今……

「なんか随分と久しぶりな気がする」

ラビッツに来ていた。
〝戦災孤児(ウォールフェン)〟の素材で生産強化するつもりなのもあるが、それとは別件でエムルを経由してビィラックから呼び出されたのだ。何でも「例の物」が届いたとか何とか、はて何のことだったたか……

そんな風に首を傾げながらビィラックの工房で俺が見たのは、時代錯誤が過ぎるチンピラ兎と、そいつに睨まれてビクビクと震える二足歩行の三毛猫……あぁそれか、思い出した。窃盗問題とかあったなすっかり忘れていた。

「完成したんだって？」

「は、はひぃ。こ、このダルニャータめの全身全霊を込めまして作り上げました、「兇嵐帝証（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）」に御座います、す……」

恭しく差し出された箱を開けば、そこには何やら奇妙な物が収められていた。なんというか……歯車と車輪と風車を足して3で割ってそのどれとも似なくなったモノ、というかなんというか。
少なくともこの段階で分かるのはこれがアクセサリーであるということと、二つで一組のアクセサリーということくらいか。とりあえずテキストを読んでみるか、フレーバーもそうだが性能が気になるところだし……な。

・兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）
神ならざれど、祀られ、その身を顕現させし霊帝の断片。
装備状態で一定以上の速度を出すことで琥珀に封じられた効果が発動する。
「密封の琥珀」シリーズは琥珀の中に封じ込められた属性の他に封じ込められた物の危険度でクラス分けがされる。クラスは「雑（クルード）」「密（デンシティ）」「純（ピュア）」「災（ハザード）」「極（スペリオル）」の五つに分けられ、その中でも「極」級は

雑味無く、過密であり、純粋で、災禍の言葉ですら不足する究極の凝固である。
名を刻み、肉を授け、命に貶める。故にこそ彼(か)の一閃は森羅万象、真理を分別(わか)つ。

※特殊状態「殲嵐のメビウス」……状態付与時、対象者の歩行、走行、ジャンプなどのモーションの際に踏み出した足に対応して特殊な加速が発生する。
さらに追加効果として常に対象者を中心として走行中はノックバックの発生する風を纏う。

分かったような分からないような、つまり使ってみろということだろう。というわけで実際にやってみた。
アクセサリースロットに装備した兇嵐帝痕(イデア=ガトレオ)・極(スペリオル)は左右の腰のあたりに一つずつ浮遊しており、指でつつくと僅かな反発を感じた。
「円形コロシアムだから微妙に加速が難易度高いが……よしっ」
封雷の撃鉄・災を発動、各種スキルでステータスを上げて……ゴー！！
円形のコロシアムをサーキットに見立てて駆け出す、速度を上げて上げて上げて……腰付近で浮く二つの輪が速度に比例して回転率を上げていくのが分かる、そして！！
「ほはっ？」

右足で前に踏み込んだ瞬間、ぎょるんと世界が一瞬で横線の積み重ねだけになった。いや違うこれ頭おかしいくらいの反時計周りの回転が……！？
あまりに速過ぎて逆に転ばない、という奇妙な状態で独楽のような状態になっているがいつまでも続くはずがない。ここはまずバランスを……。

「はごっ！？」

そう考えて左足で地面を蹴った瞬間、信じ難いがそれまでの物理演算を全て無視して時計回りの超回転が俺の全身をぶっとばした。今度こそバランスを崩した俺はべぢぃーーーーーん！！！　と雑巾を渾身の力で壁に叩きつけたような音と共に暗転……。

「サ、サンラクサン……？」

「あー、うん。原因は分かった」

不意打ちだったのもあるし慣れてないのもあったが、どうやらこのアクセサリー……加速がオートで付与されるんだな、俺自身の意思で作った加速じゃなくて俺の意思とは別枠の加速だから過剰伝達状態との相性が悪い意味で最高すぎるのか。
この加速、条件を達成した時点で前に足を出しただけで身体に独楽のような回転を伴う推進力が発生する。そして過剰伝達は肉体の動きに対してそれを増大させるわけで、回転エネルギーに対応しようと体を動かせば……。

「こいつと組み合わせて使うと今の俺じゃ間違いなく死ぬ」

少なくとも壁や広さに限界がある空間じゃ確実に制御できない。とはいえこの恐るべきアクセサリーが無駄無能というわけじゃあない、そこだけは断言できる。

「だってそうでしょう兄貴、わざわざ見に来たくらいなんですから」

「おうともよぅ、そいつを使い熟すなぁ難儀するだろうがなぁ……」

「オヤジぃ！！」

チンピラ兎（イーヴェル）が驚きの声を上げる、まぁ俺も余裕綽綽に見せつつも内心ではいつヴァッシュが現れたのか全く分からなかったので似たようなものだが。

「血肉を使い熟す、それ即ち血肉をよう……己がモノにしたってことだぁな。サンラクよう、俺等（おいら）ぁが出した課題はよう……覚えてんだろうなぁ？」

「晴天流の熟達で、ご助力頂ける……でしたか」

「いんや？　俺等（おいら）ぁよう、確かにこう言ったぜぇ……力を貸すってよう」

ひゅるり、と肌が切れたと錯覚するような冷たい風が吹いた。いいや違う、ヴァッシュが取り出した「それ」が放つ威圧感がそう錯覚させるほどの代物だったのだ。

「オヤジ、ま、まさか、それは……」

「オヤジぃ！！　まさかそれをコイツに貸すってのか！？」
ビィラックとイーヴェルの反応が尋常ではない、さもあらんと納得はできるがそれほどの物なのか。

「あいつらがそこまで無茶ぁ通すんならよう、一時（ひととき）振らせんのも悪かぁねぇ……まぁ持ってみなぁ」

「え、いや……ウッス」
事情を理解できていないエムルと早々に気絶してひっくり返ったダルニャータを除き、残る三匹の兎達からそれぞれ違う視線を向けられつつも俺はヴァッシュから差し出されたそれ……この俺（サンラク）の身長に匹敵するほどに長大な、それでいて素直にそうと認めるにはあまりに異形の「大太刀」を受け取る。
「重い……それに、抜けない？」
「そらぁそうよ、そいつぁかつて己が身一つで覇たらんとした国喰らいの兇（まが）らう嵐……故も知らねぇ人間に抜かせるほど安かぁねぇ」
あーね、資格がいる系ですね分かる分かる………ねぇこれ大丈夫？　カテゴリ的にはレイ氏の剣とか勇者武器と同じカテゴリじゃないの？　そんな靴べらとか孫の手みたいな気軽さで貸していいものじゃなくない？
「ま、くすねようなんて不義理はしねぇと信じているがぁなぁ……今のままじゃあよう、ただ見てるだけになっちまうぜぇ？」
くかか、と笑うヴァッシュだけが自然体な笑顔だ。俺の笑顔は引き

つっているし、ビィラックの笑顔は気持ち悪いし、イーヴェルの笑顔は怒りを隠すためのそれだ。思えば兎の表情に随分と詳しくなったもので……

「ビ、ビィラック、練習用の刀とか打ってもらえる？　約束があるんで昼までに」

「………」

無言、無言でじぃぃ………っと大太刀を凝視しているビィラックであったが、頷きを返したのでＯＫということらしい。そして射殺さんばかりの眼差しで俺を睨みつけるイーヴェルに対しての返答は色々考えたがやっぱこうじゃないとな。

「おいチンピラ」

「あ゛？」

「すごく優越感（指差しながら）」

「表出ろやコ゛ラ゛ァアッ！！！！」

◆

「おうサンラク待たせたな……って、男に戻ってるじゃねぇかどっかで死んだのか？」

「いやちょっと不慮の事故で壁のシミに……」

「あん……？」

あの後もイーヴェルと殴り合いになったりビィラックが無言で気持ち悪かったりしたがなんとか待ち合わせには間に合った。
どうやら「ガチ」の装備で固めてきたらしいサバイバアルの疑問に適当に答えつつ見上げれば、そこにはリヴァイアサンの巨大な「頭」が。

「いや、気にしなくていい。サバイバアルお前も一層はクリアしてるんだよな？」

「ん？　おう、仇討人関連で忙しかったから二層はロクに攻略しちゃいねぇがな」

「俺も似たようなもんだよ……っし、行くか」

いざリヴァイアサン、小手調べに第二殻層だ。

くるり廻れば国喰らう（後書き）

第三者視点から見るといきなりゴーシュートしたサンラクが回転しながら壁に激突して弾き飛ばされ、いきなり逆回転になってすっ転んだそのままゴロゴロ転がりながら床と壁に跡を残して死んだ

ヴァッシュが渡してきた大太刀は分かる人なら分かるアレ、具体的にはＴｗｉｔｔｅｒでゲロったけどどちらにせよ後々明らかになるから見逃して
なんか鞘がキュビズムみたいなエグい形になってる

巨鯨に呑まれど疾れ白波

サイガー０：本当に、本当にごめんなさい！

サンラク：いや気にしないで本当、元々夜からの誘いだったし今日はちょっとイレギュラーすぎた

サイガー０：姉を、どうしても説得できなくて……夜から、夜からなら必ず参加します！！

サンラク：それは構わないけど、もしかしたら結構先に進んでるかもしれないし

サイガー０：追いつきます

サンラク：え？

サイガー０：追いつきます

サンラク：あ、はい

◆

お前がどれだけ先に行こうと後発スタートで追いついて見せよう。そんな恐るべき廃人宣言を聞いた事実に震えつつも、この震えが畏怖なのか畏敬なのか分からないままに俺とサバイバアルは第二殻層へと立っていた。

『お久しぶりです！　随分と長い通学路でしたね？』

「通学路に落ちてた音楽プレーヤーにボッコボコにされてな」

『音楽プレーヤー……？』

「それを調べに来たんだ、覚悟しとけ勇魚。明日の朝日が昇る頃にはこのリヴァイアサンは完全攻略されている」

その言葉に、リヴァイアサンの全権を握る鯨の女は高速通信を自慢としているキャラとしては信じられないほど長い時間、沈黙し……そして、

『――――それはそれは、とても楽しみですね』

愛想や喜びではない、嘲りと驚きと期待……ＡＩキャラが浮かべるとは到底思えないような感情のこもった笑みを浮かべた。
だがその笑顔も一瞬でいつもの愛想笑いに戻ると、勇魚はこのエリアの解説を始めた。一応おさらいとしてそれを聞いていると、肩をちょんちょんと指でつつかれる。

「あんだよ」

「オメーどういう手品を使ったんだよ？勇魚の好感度バチくそ高けぇじゃねーか」

「いや今思いっきり馬鹿にされたんだが？」

「ギャルゲー畑の連中がありとあらゆる手段で好感度を変動させようとしても崩れなかった鉄の愛想笑いが変わったって時点でやべぇよ」

「さぁ？　一番最初の入場者だからとかじゃねーの？」

『聞いてます？』

「もうばっちり」

第二殻層「教道」は元々宇宙を漂流していた時代に神代人がタンパク質を得るために作った上から下までオール人工の畜産設備を勇魚が殻層となるまで拡張したものだ。
どうにも緻密なことだが神代の頃は牛やら豚やらをクローンで増やすと色々と問題があったらしく、ここに登場するモンスターは遺伝子培養で家畜としての性能に特化した人工生命体……否、ＡＩによって統括された脳(あたま)と生殖器、個性を持たない骨と筋繊維と臓器の塊、通称「お肉」だ。

「エグない？」

『当時の倫理と、リヴァイアサン全体の食文化への熱意をすり合わせた結果がこれなんですよ？　ベヒーモスなんかじゃ三食味気ない

人工ペーストだったと当時のデータベースに恨み節の籠もったデータが残っています』

「ちなみにＡＩ制御ってことは実質お前との直接対決か？」

『んー……あくまでも私が統括する内の一部所、という構成ですので厳密に私が操作していると言っていいものか……人間的に言うなら臓器の運動に近いので』

いちいち意識して動かしてねぇよ、ってことかい。なら……早速「ズル」をさせて貰おうか。

「サバイバアル、まずはさっさと５０００スコア貯めよう」

「おうよ」

『おや？　もう既にご存知？』

「人間の強みは星の果てにも声が届く通信技術だぜ？　先達の声はちゃんと届いてるのさ」

『ふふ、素晴らしい』

流石に第一殻層よりはひと回り小さい第二殻層ではあるがそれでも広大だ。第一殻層では修復ゴーレムに乗ることで大幅な距離短縮ができたように、ここにも「足」が存在する。とりあえずはその為にお肉退治だ。

『ビーフオマージュ・レッドボディですね、収穫したお肉は安全地帯で調理可能ですよ』

「サバイバアル、美食舌の称号は？」

「無論持ってるぜぇ！」

そうか、ならゲーム内で焼肉だっっ！！！

脳みそがない、をマジで頭がないと定義したのか首無しの真っ赤な牛の胴体が肩から生えた角をギラリと輝かせてこちらへと突進してくる。家畜お肉に角いります！？　無関係なフリしておもっくそ殺意実装済みじょねーか！！

真っ赤な異形の生物というとどうしてもアレを思い出すがこっちは単なる赤身肉の塊なので比べるまでもない。赤身だけで動いてるのめちゃくちゃ怖いんだが。

「っしゃ！　来いやァ！！」

轟、と女性の見た目からは掛け離れたドスの効いた大声を上げたサバイバアルが振りかぶったのは……ハルバード、じゃないなあれは……

「方天戟だっけか」

「カテゴリは槍だけどなぁ！！」

ちなみにハルバードはカテゴリ：斧槍である。ややこしいな、だがハルバードが「突ける斧」であるならあちらは「叩き斬る槍」だ。そしてサバイバアルのステータスは……タフネスと火力にポイントを注ぎ込んだ最前線アタッカーだ。

さらに言えば対人に比重が置かれているとはいえ、逆に言えば対人

で勝ち続ける程にステータスを鍛えているわけで。スキル、装備、そしてなによりプレイヤースキルによって研ぎ澄まされたバトルセンスが目の前の光景を実現させた。

「頭蓋が無ぇなら刺しやすいんだよなぁ！！」

方天戟の穂先が赤身肉の首部分に突き刺さり、そして複数のエフェクトを纏った女がテコの原理を利用した串刺し一本背負いによって牛サイズの巨体が宙を舞った。

「戦王すごくね？」

「メインで使ってる武器の習熟度は常にＭＡＸにしてっからな、補正が入んだよ」

戦士系派生最上位職業「戦王」はいちカテゴリのみであればそれに特化した最上位職業に劣るが、前衛武器に関する圧倒的な武器適性の数々と習熟の度合いによって多くの特典を得ることが出来る職業だ。
本来であれば「武威解放（ウェポンドライブ）」という特殊なスキルを使えるらしいのだが、生憎こいつは仇討人のジョブが判明した瞬間に速攻で戦王をサブに移動させた男だ……ガワは女だけどな。

それ故に今の武器一本背負いは半分くらい本人の技巧ということになる……こいつめ、普通に武器使っても強いじゃねーか。

「おうサンラク！　なんかぶよぶよしたの来た！　きめぇ！！」

「はぁ？　喩えが曖昧すぎんだろうわきめぇ！！」

なんだあのぶよぶよした奴！　ぶ、豚か？　素体は豚なのか？　勇魚ァ！！

『あちら、ポークオマージュ・ファッティボディですね』

ファッティボディ……いやあれ全部脂身かい！！

チッ、脂身の塊とかこれの初披露の相手としちゃ最悪すぎるぞ……

だがまぁ選り好みする程悠長にもなれねぇ、やるか！！

「初陣だ、派手に頼むぜ一ノ太刀……！！」

ビィラックが半ギレしながら突貫で作ってくれたカテゴリ：刀……

銕刀（てっとう）【廻渦白波（うねりしらなみ）】、性能検証だ。

巨鯨に呑まれど疾れ白波（後書き）

「戦王」

戦士系最上位職業、様々な武器への適性と一定時間使用武器に対応するスキルの性能を上げる「武威解放（ウェポンドライブ）」による手数と火力を両立した職業……なのだがフルダイブで様々な武器を完璧に使いこなすのは面倒かつ難易度が高く、さらに言えば剣聖の方がカッコいいので「理論上は強いけど手間がかかる」みたいな立ち位置

就職条件は「一定数以上の武器の習熟度を規定値以上にし、さらにそれらの武器によるスキルをそれぞれ一定数以上習得する」というもの、だりぃ！！

白波はうねり渦巻き風に酔う（前書き）

活動報告の方で人気投票しています！　詳細も活動報告の方に書いてありますのでまだ投票してない方は是非とも清き五票を！！

白波はうねり渦巻き風に酔う

実のところ、俺は日本刀というカテゴリがそこまで得意ではない。
やはりロングソードみたいなのと比べると耐久に難があり、そして曲剣のカテゴリなので刃をひっくり返さないと返しの一撃が出来ないというのもある。
幕末は例外だ、そんなこと気にする前に決着するからな……雑念を捨ててばっさりずぶり。それが幕末イズム。

とはいえあくまでも剣と刀があったら剣を選ぶかな、程度の苦手意識なので勿論幕末仕込みの剣術で刀も扱えるが……まぁそもそも根本的な問題として俺はまともに使える刀武器を持っていない。
境光(ルーメリディアン)の宝剣の刀モードは夜限定だし、蒼耀月はゲージ溜めと成分結晶溜めが必須な上に居合抜刀が一度しかできない。

まぁなんだかんだ境光の宝剣使うだろと思ったがギャラトラに逃げていたのでそれも叶わず……八割自業自得だが、そんなわけでこの銕刀(てっとう)【廻渦白波(うねりしらなみ)】が初めての常に刀として振れる刀なのだ……

「では早速、お披露目抜刀……「疾風(はやかぜ)」！」

踏み込みから加速、ぶにゅんぼにゅん身体を震わせながら突っ込んできた脂身肉とすれ違う一瞬の間に鞘から抜き放たれた黒い刀身に白く波模様が描かれた刃が真横一文字の閃きを描く。

「残心………」

キン、とスタミナがゼロになって動けないのでカッコつけて納刀し

た瞬間、脂身肉の身体からダメージエフェクトが噴出。なんか脂っこそうなエフェクトだなと思いつつも脂身肉がぶゆぶゆ震えながら地面に倒れ伏したのと、スタミナが回復し始めたのを確認しつつ姿勢を正す。いい刀だ、実直堅実、そしてなにより強靭だ。

いつもの鉱石類を素材に使っていることに加えて、「炉」の運用を手助けしただけあってかこの刀は練習用の刀として百点に近い能力を備えている……まぁ耐久値が尋常ではなく多いだけなんだがな、実質傑剣への憧刃の下位互換かもしれないがアレは見直してみると手間の塊なので同じようなものを作ろうとすると一日二日では完成しないのでボツ。

とりあえず先鋒としてやってきたのは赤身肉と脂身肉だけのようで、サバイバアルが方天戟で赤身肉を唐竹割にするという大味なのか器用なのかよく分からないトドメを刺したところで戦闘が終了する。

「なんだ、刀使いに転職したのかよ？」

「あー、スキル目当てでみたいなもんかな」

「刀はなぁ、居合が見た目の派手さの割に威力が無くてなぁ……ん？」

「どうした？」

「……今オメー、一撃で倒してたよな？」

「ラッキーパンチだろ、刃物だけど。次いくぜ次！」

「あっ、待てコラまさか高倍率の居合スキル持ってんじゃねぇだろ

うな！！」

……

…………

……………

この層に登場するモンスターは基本的に食肉用の動物を模したお肉だ、なのでこの層の安全地帯で購入できるとあるアイテムとあるモンスターを組み合わせることで……プレイヤーは強力な機動力を手に入れることが出来る。

「待てコラァァァァァァアア！！」

「おー、頑張れー。もっと足を動かせー」

「ぬぉぉぉぉああああああ！！！」

俺が今跨っているモンスターの名はホースオマージュ・サラブレッドカスタム、その名が示す通り食肉モンスターがメインのこの殻層においては数少ない移動用お肉だ。

安全地帯で購入できる「行動干渉用制御手綱」を装備することで飼い慣らすことができる馬肉の入手こそこの殻層を攻略するにあたっての重要事項とも言えるだろう……ま、機動力があるということは捕まえるのに苦心するということなのだが。

「おーいまだかー、いい加減待ちくたびれたんだがー？？？」

「く……うるせぇ……ＡＧＩはそんなに高くねぇんだよ……」

スタミナを切らして首のない馬の形をしたお肉が離れていくのを悔しげに眺めているサバイバアルを急かしてみるが、ここでグダついてもしょうがない。

「仕方ねぇなぁ……おいサバイバアル、お前がこの馬使えよ。名前はニトロ生肉」

「クソみてぇなネーミングセンスだなオイ！　で、お前はどうすんだよ？」

いやー、そもそもの話……

「俺は自分で走った方が速いんだわ」

「あー、ホルダー称号取ってやがったな……」

この称号がある限り、俺は世界最速を名乗ることが出来る……嘘だ、幼女先生に勝てる奴はこの世に存在しないので強いて言うならプレイヤー最速か。

「徒歩で行くのかよ？」

「そういう心配は俺より早く進んでから言ってくれ」

「上等じゃねぇか、いくぞニトロ生肉！！」

焼けてるのか生なのかハッキリしない馬肉がサバイバアルの手綱捌

きを受けて勢いよく走り出す。瞬く間に草原を駆けていくサバイバアル達を見送りながら……俺は例のアクセサリーを装備する。
あの頭のおかしい独楽回しは封雷の撃鉄・災との併用が原因だ、何でもかんでも足し算すればいいってもんじゃない……だから組み合わせを変えるべきだった。
スキルによる後押しを受け、速度を得た俺の身体が勢いよく前へと猛進……やっぱり、流石に封雷の撃鉄必須の速度ではなかった、スキルだけで賄える速度で兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）は発動する！！
「そしてぇ……既に「走法」にアタリはつけている！！」
言うなれば背中を押されて滑るアイススケート、右回転で身体が傾く前に左回転でそれを相殺する、言葉にすると少し間抜けだがこれ以上なくシンプルな原理！
「サバイバァアル！！　孤島の頃から何も変わっちゃいねぇ！！」
タッパが幼女だろうと男だろうと、速度があろうとなかろうと！
「俺が！　先攻で！！　俺が！　主導権（イニシアチブ）を獲る！！」
「その速度で長距離対応は反則だろうが！！」
「琥珀ガチャすりゃいいんだよフハハハハハ！！！」
邪魔だ肉共！　回転を利用した晴天流「旋風（つむじかぜ）」！！　ヒャッホウ五体同時キルぅ！！　オラオラどうしたかかってこいや全員動かない肉にジョブチェンジさせたらぁぁーーーーっ！！！

～五分後～

「……で、回転しすぎて三半規管グロッキー状態になった、と」

「リアルの方のボディがゲロ吐きそう……五分待って、回復する」

「じゃあ俺はその五分で進むからよ、まぁそこでゲロっててくれや……ハイヨーニトロ生肉！！」

「こ、このやろう……」

回りすぎには、気を付けよう……うぇ〟

白波はうねり渦巻き風に酔う（後書き）

活動報告の方で人気投票しています！（これ書いてる時点で１４００票オーバー）　詳細も活動報告の方に書いてありますので（コピペも十四回くらいしてる）まだ投票してない方は是非とも清き五票を！！（ヤケクソ）（いけるとこまでいったるマン）

チェイス・クッキング・インパクト！！（前書き）

有志の方々から次々と集計結果が送られてきており、感謝の念を込めて更新しました。今週中には活動報告かインベントリアで人気投票の結果発表をしつつ宣言通り番外編に着手したいと思います

つまり本編の更新は……もしかしたら、その、はい

チェイス・クッキング・インパクト！！

～とあるプレイヤーとＮＰＣの会話から抜粋～

「おーい店主、速度強化系の使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）ある～？」

「ああ開拓者さん、悪いがさっき全部売り切れたよ」

「売り切れた？　新しく入荷したって言ってたじゃん」

「それがねぇ、なにか急いでる様子の……物凄い格好した騎士様が買い占めていってねぇ」

「騎士？　物凄いって……兜以外脱いでたとか？」

「そんな変態がいたら怖いねぇ、その人はなんというか、そういうモンスターだと言われたら信じそうなくらい生々しい鎧を着てたよ」

「鎧に生々しいって表現使うやつ初めて見たわ、ＡＩバグった？」

◆

とりあえずこのじゃじゃ馬アクセサリーも大概長期戦向けではないということが分かっただけ収穫はあったと思うべきか。
動き慣れた過剰伝達状態で逃げ切りにはいっていたサバイバアルに追いついた俺はそれでもなお広大な草原の一角にある空白で、空腹度回復も兼ねて食事を行なっていた。

「箱に肉突っ込んでしばらく待ったらステーキ肉の完成、って控えめに言ってディストピアじゃね？」

『結果だけを享受すればユートピアですから』

その台詞、ユートピアに属する存在が言っちゃいけない台詞トップ3に入ると思うぞ……主人公に過程を暴かれてユートピア崩壊するけど「人間は自分達の力でユートピアを作れる……そう、きっと！」とかそんな感じで未来に展開をぶん投げるエンドで終わるやつな、物語の中盤でそこまでやってあとはひたすら街づくりさせ続けるゲームとかあったなぁ……一時期武田氏に倣ってインディーゲーを漁りまくってた時期があったが、その時発見した一つだ。
ゲームとしてどうなのかと思わなくはないけど前半のRPGと後半のSLGどっちも出来がいいという……なんか最近似たようなゲームをやった気がする。ちなみにこのインディーゲーの作者はRPGとSLG別々の新作を作って無事成功者のルートに進んでいった……クソゲーは少ない方が喜ばしいんだが、なんだか寂しい。

『味は保証しますよ！』

「んー、普通にうめぇわ。マスタードとかねぇの？」

「サバイバアルお前ステーキにマスタードって……」
「いや普通だろ、じゃあオメーはステーキに何使うんだよ」
「米」
「そりゃ合うわな！　いやレギュレーション違反じゃねーか！！」
米の上に肉を乗せるのなら、肉の上に米を乗せたっていいじゃないか。一味違う人間は発想の立て方からして違うのだ、コロンブスみたいにな。
「この層のボスってなんだっけ、霜降り？」
『スペリオルオマージュ・フロストボディですね』
「最上級模倣（スペリオルオマージュ）・霜降り身体（フロストボディ）……と」
クソしょーもないダジャレネームとは裏腹にやたら賢いＡＩとデバフも兼ねた氷結攻撃が厄介なボスだ。そして何より……やたらにデカい。
「肉質柔らけぇのが救いっちゃ救いだが、どう攻略する？」
「霜降りだからそりゃ柔らかいわな……そうだな、お前なんか超高火力技とかないの？　自爆とかさ」
「あるけど誰がやるか」
「いや火力ケチんなよ」

「自爆の方だっつーの」

いや自爆の方かよ、いやあるのかよ！！

とはいえ俺も俺で高火力のスキルは大体自爆みたいなもんだしなぁ……

「まぁ殴ってれば死ぬだろ」

「ま、そうなるわな。貪牛（ドンギュウ）よか楽だろ」

「鯖癌最強の体力お化けと比べんなよアレ横槍無しで倒せるやついるか？」

「いやぁ……アレはヤバかった、生まれた時点で他のモンスター共が一斉に戦闘状態になるからな……」

月一くらいの頻度でスポーンして孤島内を更地にして餓死する、鯖癌におけるキングオブクソモンス候補の一体だ。奴から逃げる為に移民が他のサーバーに行き、そこの風土やしきたりを無視するので戦いが起きる。本当生まれて死ぬまで何もかもが大災害だった……

「さぁて、腹も膨れたしボス戦と行こうや」

「だな、もうそろそろなんだろ？」

『ええ、そうです……ええ、そうですね。もうそろそろかと』

ん……？

〜とあるＡＩ的ＮＰＣのログ〜

『申し訳ありません、特定人物の座標通知はアンバージャックパス３以降となっております』

「……そう、ですか」

ピヨピヨピヨピヨピヨピヨ……

『そちらの原生生物は……』

「……道案内、です」

◆

「サンラクさん！？　助太刀は必要ですか！！」

「うおっ、秋津茜!?　馬鹿言え、この程度の肉塊に負けるかよ……っ!!」

ビーフカスタム・ビッグボディ……要するに「サイズをデカくすればその分多く食べられますよね？」というアホみたいに単純な理論をクソみたいに発展した科学で実行した巨大お肉との交戦中、こちらへと駆けてきたのはなんと秋津茜であった。

その後ろからついてきてる三人のプレイヤーは見ない顔だ、野良パでも組んだのかな。やけに三人から視線を向けられている気がするが……なおサバイバアルは蹴っ飛ばされて遠くまで転がっている。戻ってくるまで時間がかかるな、それに秋津茜達に悪感情があるわけではないが、ここまで来て戦功山分けってのもなんだか癪だ。
蹴り込んだ別離なく死を想ふが深く突き刺さらずに巨大牛肉の身動ぎで地面に落ちたのもそこそこに、下手な膂力では刺突が有効打たり得ないと結論づけた俺は打撃戦にシフトする。

「まぁ見てな……!!」

巨大牛肉の身動ぎするだけで人間を吹き飛ばすような巨体に肉薄、身体を奴の真下までねじ込んで素手を拳へと固める。下手な火力をぶつけたって焼け石に水、あくまでも俺は火力技も持っている軽量級でしかない……ならばやるべきはメイン火力が発揮するまでこいつに余計なことをさせない!!
力を貸しな〝戦災孤児(ウォールフェン)〟!　今ここに日の目を浴びろ不世出の奥義(エクゾーディナリースキル)…………

「戦砕琥示(ウォールフェン)!!」

強打（ストライク）ならばダメージを高め、弱打（ジャブ）ならば……吹き飛ばせインパクト
！！

だがテキストを読んで内容を理解するのと、実際に体感するのでは
その実態は全くと言っていいほどに別物であるらしい。
パシッ、という軽いジャブとは真逆のちゅごぉぉん！！！　と拳の
ヒットと砲撃音のＳＥ取り違えた？　と運営に問いたくなる程の轟
音が鳴り響き、４トンくらいは物を積めるトラック程度に大きな身
体を持つ巨大牛肉の身体が誇張なしに浮いた。

「おおう……」

ダメージはないはずだ、「戦砕琥示」のスキルは火力とノックバッ
クの天秤であってそれらが両立される事はない。ここまでの吹き飛
ばしであっても火力そのものはたいした事がない……と、思うのだ
が四足歩行の状態から背中からひっくり返った青天井になろうとし
ている巨大牛肉を見るともしかして火力も出ているんじゃないかと
期待のような不安のような……

「御大層なモン見せてくれやがってよぉ……だったらこっちも負け
てらんねェよなぁ！！」

高揚と興奮の双方を混ぜた気合の声を上げたサバイバアルがどこに
いるのかと見回せば、なんと巨大牛肉の背中が叩きつけられるであ
ろう地面のど真ん中……即ち押し潰されるであろうその場所に堂々
たる仁王立ちで立っているではないか。
咄嗟に「大丈夫か！」とか「危ない！」ではなく「南無三！！」と
浮かんでしまったが、どうやら奴も自殺願望が急に湧いていたわけ
ではないらしい。
その手に握るは先程までの方天戟ではなく赤黒く凶悪な雰囲気を漂

わせるスレッジハンマー、そして全身に漲らせる彩光は奴の戦意を可視化したようなスキルエフェクトの数々だ。

「くの字にへし折れな！　テラトン……ッ！　コラプサァァァァァァ！！」

「す、すごいっ！」

秋津茜の驚きも納得だ、何せ宣言通り背骨が曲がっちゃいけない方向に曲がった「く」の字の巨体がラリーか何かのようにこちらへと打ち返されたのだから……って

「あ、すまん」

「先に言えアホーっ！！！」

潰れて死ぬのは嫌すぎる！！！

チェイス・クッキング・インパクト！！（後書き）

サバイバアルはサンラクの三倍くらいスキルを持ってたけどややこしすぎて一武器種につき一、二個くらいまでスキル数を統合しているので多数のバリエーションは少ないけど一発一発の凶悪度が高い

大怪獣ハンラトリアタマｖｓ妖怪イシコロナメナメ（前書き）

ガラル旅行は終わらない（孵化厳選、マックスレイド厳選、メタモン厳選）

大怪獣ハンラトリアタマｖｓ妖怪イシコロナメナメ

「……ッスゥー……あの、サンラクさん……っスよね？」

「え？　まぁ、上に表示されてるし……」

「あー、いや、その……ツチノコさん……っていうか、ドラ姫ちゃんと一緒のクランの」

「そっすね」

「あー……お会いできて光栄っス、っつーか……あーうん、まさしくツチノコに遭遇できた的な」

「いや誰が未確認生命体だ」

人をレアエネミー扱いするんじゃないよ全く……ニンニンニク？　知らない名前だ、秋津茜の言葉通り野良で組んだだけのプレイヤーなんだろう。

「わ、サンラクさんそれ刀ですか！？」

「ん？　おお、ちょっと刀を極めたくてなー」

「あの、えと、差し支えなければ見せてもらっても……」

にゅっ、と首を突っ込んできたのは秋津茜が組んでいた野良三人の内のその２、今目の前にあるものよりも大体１／４スケールの似た

ようなデザインを見た事があるような……うん、まぁぶっちゃけビィラックの着てる装備と似てるのでイムロンとかと同じ職業鍛冶師のプレイヤーなんだろう。プレイヤー名は超合コン、やはり知らぬ名前だ。

「は？　まぁいいやはいどうぞ」

「ひぇえ……濡れそぼつような黒い刀身……美少女かな？　美少女だよねぇ………」

「………あの？」

「舐めても………」

「ダメです！！」

たとえデータでもなんか怖いわ！妄念付きの刀とかなんか振ってるうちに精神汚染される懸念がある、隔離措置を取らないとヤバイ気がする。

「せめてひと舐め！　成分を味覚で感じるために美食舌をゲットしたのに！！」

「用途が捻れすぎとるわ！　アムルシディアンクォーツだ、素材でも舐めてろ！」

「え、アイドルの原石……こ、これで手打ちを……」

材料費０円の石ころが１００万マーニになったぞ、端金だな。

流石シャンフロというかなんというか、変態のニーズにもちゃんと

応える気概は見せなくていいというか、アムルシディアン・クォーツを口に含んで舐め始めた超合コン……さん、を他の面々も一歩引いた目で溶けない飴を舐め始めた超合コンさんを眺めている。

なんつーか、ディープスローターよりもジョゼットとかＡｎｉｍａｌｉａに近いものを感じる……つまり、

「………………」

「なんだよ」

「なんかシンパシーとか感じたりしてない？」

「同枠か！？　俺はこいつと同枠か！！？」

ピヨピヨピヨ……

同枠だよビキニアーマー提案幼女ガチ貢ぎネカマヤロー。

秋津茜、野良で組むにせよもう少しメンバーは考えた方がいいぞ……残る一人もオモシロ性能なのか？

「………何か？」

「いや何も、垂れてるぞ」

「む、失礼……」

ピヨピヨピヨピヨ……

ヴィジランス……ナリはまともだが油断できないようだな。口の端から垂れた赤い液体を勿体無いとばかりに指で拭って口の中に戻す

顔色の悪い男を警戒リストに入れつつさてどうするかと思案する。
最初は2パーティ混合でボスで挑むことも考えたが、この面々と上手くボス戦を回せる自信がない……

「お前凄いな秋津茜……」

ピヨピヨピヨピヨピヨピヨ……

「？？　よく分からないけどありがとうございます！」

「別に褒めてな」ピヨピヨピヨ「いやうるせぇな！！」

いやさっきから環境音だと思ってたけど違うな！？　ヒヨコか！？　スズメか！！？　ハヤブサじゃねーか！！！

「何、手紙？　放し飼いしてんの？」

『いえ、それは持ち込まれたものですね』

「持ち込まれ……ん？」

なんだ、何か既視感を覚えたぞ今。鳥を大量に飛ばす……メール……方角……そしてハヤブサというコスト度外視の効率重視。これらのワードが導き出す答え、それはこの五羽以上はいるハヤブサ達が運んできた手紙の差出人：サイガー０――！！

次の瞬間、その巨体とガワが生々しいとはいえ重厚さは保持している鎧からは想像もできない速度で走ってきたのだろうレイ氏がザリザリと草原に抉るような直線のブレーキ痕を残して俺達の前で急停止。

秋津茜が組んだ野良パの内、溶けない飴玉を舐めながらホクホクしているヤバい人は例外として残った面々は突如現れた異形の騎士に気圧されて……いや、秋津茜はドン引きしてない側だから割合的にはフィフティフィフティじゃないか。

「……やっと、追いつきました」

「……流石はレイ氏と言うべきか」

兵は拙速を尊ぶとは言うが、一流は巧く速く動けるということだ。身体から散っていくエフェクトには見覚えがある、恐らくは速度強化系のスキル……じゃないな、魔法系のバフを使って走り抜けてきたのか？

「てっきり日が昇ってる内は無理なのかと」

「ええと、そこは……ロジカルに、フィジカルな感じで」

論理的(ロジカル)に力技(フィジカル)な感じ……よく分からないがリアル事情は解決したということなのだろう。

「サバイバアル、助っ人廃人のサイガー0さんだ」

「助っ人外人みたいに言うなよ……なぁこれ俺が霞まねぇか？」

「頑丈な火力職と高ＤＰＳのタンクじゃ需要は被っても立ち回りは違うだろ、足捌きに個性を出していけ」

「タップダンスとか？」

「盆踊りで」

「テンポ遅（おせ）ぇなオイ！！」

いや龍宮院富嶽の動きとかそんな素早くないぞ、俺は上っ面の真似でしかないがあの完全再現されたトレースＡＩは立ち回り自体はそんなに際立って素早いわけじゃなかった。恐ろしく速かったのは振り下ろされる竹刀の鋭さだけだ、補正無しの限りなくリアルに近いガード不可ってどういうことなんだ。

「とりあえず三人パーティでいいか？」

「俺は構わねぇよ、そっちが構わねぇならな」

「………？」

あー、そういや一応この二人「元阿修羅会」と「阿修羅会にトドメを刺した人物」って関係性になるのか……まぁいいや、ゲームライフでは確執は無視できないが強行攻略に求められるのはセンチメンタルを捻り潰すマシンのようなプレイヤー性能だけだ。そもそもＰＫがＰＫＫされてなんの文句が言えようか、割り切っていかなきゃな。

「センチメンタルなのはお前だけっぽいぞ」

「ケッ、若いなサンラク……こういう機微に聡い男がモテんだよ」

「でもお前ロリコンじゃん」

「愛に年齢は関係ねぇ！！」

「法に年齢は関係あるがな」

「法はいつだって俺の邪魔をする……っ！！」

度々邪魔されるような人間から守ってくれる法ってサイコーですね、法治国家万歳。さて、あとは……

「秋津茜ジャンケンしようぜハイじゃーんけーん！」

「えっ、はっ、あっ！！？」

俺、グー。秋津茜、チョキ。
よし勝った、幸運補正が追い付く前にＡＧＩ対抗にすれば俺にも勝ちの目はあるってことだな。

「悪いな秋津茜、ボスドロップとかスコアの分配的に四人以上でパーティ組みたくないから先に行かせてもらうぜ」

「え、あ、そのためのジャンケン！　分かりました！」

苦汁みたいな味のする勝利の美酒だ……青汁でも入ってんのか？
手っ取り早くレイ氏をパーティ内に迎えた俺、サバイバアル、レイ氏の三人パーティは「勇魚」の導くままにボスエリアへと進んでいく……

「あの、差し出がましい事は百も承知なんですが最後に一つだけお聞きしたいことが……」

「うおお、グイグイくるなオイ」

にゅっ、と伸ばされた手が去る間際の俺の肩を掴む。誰かと思えば未だに口の中に入れているのか、頬が変な形に膨らんだ超合コン氏であった。

「ここで聞かないと次いつ遭遇できるか……ツチノコさんです、から」

もう何も言うまい、これ以降の何処かで遭遇して詰め寄られるよりもここで禍根を断ったほうがいいだろう。初対面の人相手に禍根扱いも大概だがこっちも爬虫類扱いされてるんだしおあいこだ。

「その……水晶巣崖の攻略法を、差し支えなければ……こう、アドバイスとか？」

「えー……？」

気合、はダメだよなぁ……えーと、自分流でいつも突撃してるから汎用的な攻略法と言われるとパッと思いつかないが……ああそうだ。

「水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の射程」

「え？」

「実際は仲間を踏んで高さを稼いだり水晶飛ばしとかやってくるから想定の三倍はあるけど大事なのはどこまで届いて、どこまで届かないのか……はいアドバイス」

水晶群蠍の素材を狙うならヘイトを断つ手段もないとダメなのだがそこまで説明する義理はないだろう。見た感じ鉱石系アイテムが好

き過ぎて舐めちゃうタイプのヤバい人っぽいし、採掘するまでの情報で満足いただける筈さ。

「あ、そうだ秋津茜」

「はいっ」

「大体十日後くらい、ファステイアに行くといい……デカい祭りがある」

「お祭り……ですか？」

「そりゃもうデカいお祭りさ」

まさしく驚天動地と呼ぶにふさわしいものだろう……祭りが、な。

大怪獣ハンラトリアタマｖｓ妖怪イシコロナメナメ（後書き）

サバイバアルの言う「いつだって」は大体三回くらい

高みより絶景、ふと見下ろせば杜撰な階段

スペリオルオマージュ・フロストボディ。
ウェザエモンが駆る戦術機馬【騏驎】に匹敵する巨体とそれに見合うタフネス、肉質が恐ろしく柔らかいという弱点を持つがそれを補うように優れたＡＩと氷結系の魔法が使えるという家畜に何を求めてるんだと言いたくなる第二殻層と第三殻層を立ち塞ぐボスモンスター……通称インテリお肉だ。

聞いた話ではプレイヤー達の役割分担を理解してある程度はヘイトを無視して後衛を狙ったり、ヘイトが外れたと思わせて後ろ足の蹴りでタンクを急襲したり……セオリーに対してメタを張るタイプのボスキャラだ、案の定ボス性能としては嫌われに嫌われている。

だが霜降り君に不幸があるとすればただ一つ。

「作戦：無し！　思い思いにぶん殴れや！！」

「……了解、です」

「上等！　ヘマすんなよサバイバアル！！」

このパーティに役割分担なんてものはない、少なくともお前との戦闘においては四人対戦の三人による袋叩きの構図になる。
誰を狙おうが残り二人がＤＰＳを稼ぐし、それぞれが単独で火力を出す手段を持っているわけで。

「肉質が柔すぎて逆に斬りづれぇくらいだ！！」

「……ヘイト、こちらに来まし……」

「いや違う俺だ！！」

だがやはりこのフェイントが厄介だ、二人と違って俺の場合は不意打ちでも一撃が致命傷になりかねないのでヘイト管理には気を払っている。

頭のない巨大牛肉だが、その分身体の動きというか筋肉の動きというか……なんだろう、霜降り肉の震え方でなんとなく向いてる方向が分かるようになっているのだ。だからこそ身体はレイ氏の方に向きつつも意識は俺へと向いていることに気付いた俺はその身体から冷気が放たれたのに対して行動をとることが出来た。

氷属性の魔法というとゲーム知識の中に幾つかバリエーションがあるが、今回は地面を凍結させて氷を生やすタイプだ。ならば対処法は凍結される場所から退避するか、生えてくる鋭利な氷の射程よりも高く飛ぶ！！

「揺れない船なぞ何隻でも跳べるわ！！」

地面から生えた氷柱(つらら)の上にスキルの力で全方位を足場とする状態で着地、そしてそのまま時間経過で消えつつある柱の羅列を跳びながら駆けて霜降り肉へと接近。

「居合の練習に付き合えサンドバッグ……！！」

空中を足場に晴天流、抜刀。神速の居合「断風」の系譜に連なる風

が霜降り肉に深く傷を刻む……だが、その断面は瞬く間にくっつい
て再生する。

「オイコラ「勇魚」ァ！　これ本当に効いてるんだろうな！？」

『当然ですとも！このスペリオルオマージュ・フロストボディは強
力な再生力を備えていますが、逆に言えば生物的活動に使うエネル
ギーを流用していますので』

つまり再生力が切れる＝死ぬってことか、なら話は早い。万物万象
に適用される真理「死ぬまで殴れば死ぬ」に例外はないということ
だ！！

再生されたとはいえ俺の攻撃がそれなりのダメージを叩き出したの
は事実、霜降り肉のヘイトが俺へと完全に固定される。だがそうな
れば俺以上の単発火力を持つ二人がフリーになるわけで。

「おう最大火力（アタックホルダー）！　位置とタイミングを合わせなっ！！」

「………っ！」

片や孤島をも潜り抜けた歴戦の猛者、片やこの世界最強のアタッカ
ー。自身で行使できるあらゆる強化を纏った大剣と方天戟が霜降り
肉の後脚へ同時に叩きつけられ、四足歩行の首なし牛は強制的に「
お座り」の姿勢を取らされる。

おっといいんですかね？　構図的に俺が真正面、決めるにはもって
こいだ。

「トドメだ」

晴天流……「轟風」。

刃から放たれる轟々と吠える風が霜降り肉の肉を押し除け、胸部を誇るような姿勢ゆえに露わになった肋骨部分を縦一文字に剛剣の抜き放ちが叩き斬り上げる。

「決まっ……あれ決まってねぇ！？」

「カカカ、ＳＴＲが足りてねぇんだよＳＴＲがよぉ！　これぞ本物ってなぁ……「覇断制界」！！」

何そのカッコいい技！？　方天戟から漆黒の炎を思わせるエフェクトが噴出し、勢いよく跳躍したサバイバアルが黒炎の一撃を叩きつけ――

「……【アポカリプス】」

あっ。

「あっ」

背後から背骨を叩き折る大剣の一撃が霜降り肉の命をゼロにまで削りきったのが俺の位置からも分かった。力なく消えゆく霜降り肉へとサバイバアルの方天戟がこう……暖簾に全力でパンチしたみたいな感じで通過して……

「あの、あ、えと……ごめんな、さい？」

「よう本物、その輝きはイミテーションか何かか？」

「うるっせぇよ！　それならどう考えてもお前も同類だろうが金メ

ッキ兄弟！！」

ほら、俺は金メッキの下にダイヤモンドを隠してるタイプだから……とはいえフルアタ袋叩き戦法は流石というか、恐ろしいくらいにあっさりとボスを撃破出来てしまった。

そしてもう一つ……

「レベルアップしたわ」

レベル148、ついにあと2レベルで上限か……エクゾーディナリーとの戦いで上がらなかったが、あと一歩のところまでは来ていたようだ。

レベルアップ分のボーナスに加えてエクゾーディナリーモンスターを遭遇、撃破した分のステータスポイントも入っていたようで、合計20ポイントは配分考えるの面倒なので適当に振って……メインはこっちだ、さぁどうなったスキル！！

「…………ん？」

いいね、意識して使ってたおかげで晴天流のスキルツリーが一気に進んだ。そして恐らくこれで…………あれ、これって……つまりコレが今こうなって多分コレのあるなしで次の…………ああ、成る程。

「ふぐうっ！！」

「！？」

「おいどうした！？」

いきなり膝をついて蹲った俺に、レイ氏とサバイバアルが何事かと

声をかける。お、おのれ天地　律ゥ……！　こんな、こんなトラップを仕掛けるとはなんたる卑劣、なんたる外道か……っ！！

「成る程、成る程……「昇華（スタンバイ）」とはやってくれるぜ……」

「なんだそりゃ？」

「エルフの里とかでレベル上限を開放できるよな？」

「あ？　おう、まぁそうだな」

いきなりな話題に怪訝な顔をするサバイバアル（と、常に獰猛な顔の兜のせいで中身は見えないが多分同じ顔をしてるレイ氏）であったが、俺は構わず話を続ける。こればっかりはプレイヤー共通であるしこの二人もそのうち無関係ではなくなる。

「多分１５０以降のレベルキャップ解放もあるっぽいぞ」

「……本当、ですか？」

「使いまくってたスキルが強化、進化せずに尻に「昇華（スタンバイ）」って言葉がくっついた」

「あ？　……あっ、マジかそういうことか」

例を挙げるなら真界観測眼（クォンタムゲイズ）が真界観測眼（クォンタムゲイズ）・昇華（スタンバイ）になった。
レイ氏はいまいちピンと来てないようだが、プレイスタイルの性質上スキルの強化を重視するサバイバアルは気づいたらしい。
このゲームはレベルアップと同時にスキルに変化が起きる、そして

レベルアップ前のスキルの質によって次のスキルが決まるわけだ。であるならばこの「昇華」とは恐らく現時点での上限レベル150ラインにおける最上級の証、と見て間違いない。つまりレベル150までに手持ちのスキルを「昇華」段階にまで上げなければレベルダウンビルドに頼らざるを得なくなる……それも、レベル99までとは比較にならない量の経験値を要求する三桁レベルで、だ。

「サンラクお前……」

「レベル148、あと2レベル上がるまでに手持ちのスキルを昇華させる……できると思う？」

「……難しい、ですね」

「択を絞って上げてくしかねぇだろ、要求経験値もあるしそれなりの数は上げられそうだがよ」

まぁ、そうだな。そうなんだが……ここでトラップが判明した。そう、連結スキルだ。
連結スキルは通常のスキル二つ以上を混ぜて一つのスキルにしたものだ、レベルが上がっても効果が向上したりしない代わりに単体で優秀な効果を持つ。
だが当然、連結中は基になったスキルのレベルが上がることはない。即ち連結スキルは素材としたスキルも含めて「昇華」できないのだ

──!!!

「くっ……」

やり口が汚い、汚いぞ天地　律！　スキルが強化されないのはなんだかなぁと思ってたが、こんな終盤で明らかにするとか、プレイヤ

ーの苦悶を見てワインでも傾けてるのかテメーッ！！

「……進もう、まだ時間はあるし先も長い」

「お、おう」

次は第三殻層「戯盤」……鉄塊振り回してウンババやってた次世代原始人類の前に立ち塞がる、享楽と娯楽の鉄壁だ。

高みより絶景、ふと見下ろせば杜撰な階段（後書き）

Q．どんな顔して見てるの？

A．三徹の死んだ顔でエナドリ啜りながら

現在のサンラクステータス（スキルのみ抜粋）

スキル

・リミットオーバー・アクセル↓リミットオーバー・アクセル・昇華（スタンバイ）
・真界観測眼（クォンタムゲイズ）↓真界観測眼（クォンタムゲイズ）・昇華（スタンバイ）
・百秀の神腕（サウィルダーナハ）↓百秀の神腕（サウィルダーナハ）・昇華（スタンバイ）
・宿命の狼兆（ウルフェイト・サイン）↓宿命の狼兆（ウルフェイト・サイン）・昇華（スタンバイ）
・爆心膝撃（グラウゼロ・スマイト）
・ガーディアンハート
・死線上足踏（デッドホライゾン）↓死線上足踏（デッドホライゾン）・昇華（スタンバイ）
・クリティカル・レイズ
・万武賦当（ばんぶふとう）↓万武賦当（ばんぶふとう）・昇華（スタンバイ）
・ダイナスピリッツ
・星幽界導線（アストラルライン）↓星幽界導線（アストラルライン）・昇華（スタンバイ）
・フェイタルゲイン
・パラベラム・ルーティーン
・プロテクト・スマッシュ↓盾士の憤撃（レイジングシールド）

―【致命武技】―

・致命秘奥【ウツロウミカガミ】改備（あらためぞなえ）
・致命秘奥【タチキリワカチ】改備（あらためぞなえ）

―【晴天流】―

・晴天流「疾風（はやかぜ）」↓晴天流「斬風（きりかぜ）」
・晴天流「旋風（つむじかぜ）」↓晴天流「廻風（まわしかぜ）」
・晴天流「轟風（とどろかぜ）」↓晴天流「爆風（はぜりかぜ）」
・晴天流「雷鳴（らいめい）」
・晴天流「迫雷（はくらい）」
・晴天流「貫雷（かんらい）」NEW!
・晴天流「荒波（あらなみ）」↓晴天流「波濤（はとう）」
・晴天流「防波（さきなみ）」↓晴天流「波旬（はじゅん）」
・晴天流「引波（ひきなみ）」
・晴天流「暮叫（ぼきょう）」
・晴天流「蒼然（そうぜん）」NEW!
・晴天流「浮雲（うきぐも）」
・晴天流「螺雲（ねじりぐも）」NEW!

―【仇討の流儀】―

・仇討の観察眼（リヴェンズ・アナラアイズ）
・仇討の宣誓（リヴェンズ・コール）
・仇討の引導撃（リヴェンズ・フェイタリティ）

―【同調連結（ハイコネクション）】―

・二連結同調「双天唯流（ふたつそらいちのことわりへ）」（百閃の剣（カトン・スラッシュ）＋鋭結点睛（えいけつてんせい））
・二連結同調「天国への階段（ステアウェイ・ヘヴン）」（重律踏覇（エクシードグラビティ）＋無重律の恩寵（スペースチャージ））
・二連結同調「風火二輪（フレアテンペスト）」（鞍馬天秘伝＋ヘルメスブート）
・三連結同調「爆心奔流（ニトロ・フロー）」（ブラッドバーン・バースト＋リミット・マキシマイズ＋全霊喚起）
・二連結同調「降誕拳圧（カウントダウンバースト）」（睡神の拳撃（ヒュプノック・アウト）＋タスラム・フィスト）
・二連結同調「無明先斬（むみょうさきり）」（ダーティ・ソード＋スラッシュ・イグニッション）

・三連結同調「千剣の盟（サウザンドボンド）」（阿修羅神楽＋戦極武頼＋剣舞【無尽紡】）

・二連結同調「旅終わるまで（ネヴァーエンド）」（不倒不屈＋アトラス・タフネス）

資金をコストに娯楽をサーチ、何かありますか

リヴァイアサン第三殻層「戯盤」。
そこは第一、第二殻層よりかは一回り二回りは小さいものの、それでも下手な都市よりも巨大な超巨大規模全天周囲アミューズメントエリアである。
これまでの殻層とは異なり、ここで求められるのは敵を倒す腕力ではなく……ギャンブルに勝つ腕だ。
スロット、競馬ならぬ競戦術機、ルーレット、カードゲーム、エトセトラエトセトラエトセトラ……稼いだスコアを元手に開拓者達はこの閉ざされた欲望の揺籃の中心に浮かぶ四層へと進む道を切り拓かなければならない。

それはそれとしてリアルじゃ逆立ちしたって再現できないサイバーファンタジーカジノだ、ちょっとくらいは遊んでもいいだろう。そんなサバイバアルの提案に即賛成した俺と、レイ氏の三人は一時間後に指定の場所で再集合する手筈で散開。

——そして俺は今、ラビッツに来ていた。

は？　カジノ？　アミューズメント？　ンなもんクリアしてから遊べばいいだろうが。何か必須アイテムが出るならともかく、要するに次の殻層に行くためのステージギミックなんだからそれよりも優先すべき事項がある。

「エルゥゥク！！　全連結スキルを解除してくれっ！！　あと久々に通常のスキル剪定もやるぞっ！！　最速最短で最多の「昇華」までたどり着くにはそれしかねぇ！！」

「あはーっ！　毎度ありぃ～！！」

ビジネスパートナーだから情や愛などよりもマーニだけが俺達を強く結びつける信頼なのだと、俺も銭ゲバ兎もちゃんと理解している。それ故に俺が突然の一斉連結解除に踏み切った理由をエルクが問うことはなく、俺もまた無言で金を積み上げる。

それでいい、それでいいのだ……極まった簡略化は芸術性を帯びる。それはスキルも同様だ、元より手数は武器で補えるしリキャストは「愚者」で賄える。

「でもいいの～？　せっかくの連結スキルをほとんどくっつけちゃうなんて～？」

「いいんだよ、今求められてるのは質の揃った精鋭だ」

最悪取り直せばいい、スキル剪定所で過去に取得したスキルを再取得するみたいなシステムがあったはず。面倒臭かったのとすでに上位互換があるのだから必要なくね？　と思っていたが、なるほどこういう時に役立つわけだ。

「とりあえず二連結系は全部一まとめに、三連結以上はちょっと考

える」

よし、よし。ここをこうしてこれとこれが組み合わせられるならここで統合して……これでどうだ！！

「よし完璧」

スキルの総数は手を加える前よりも増えているが連結スキルは全て解除した、これでスキル自体の練度を上げられる……とはいえ参ったな、残り2レベル上がるまでにいけるかどうか。

「500マーニ足りないわぁ？」

「ツケで……いやお前たった500マーニでよくそんな嫌な顔できるな」

「私が嫌いな言葉は割り勘とツケなのよ～」

「ツケで」

「仕方ないわね～……」

良いだろうがよ、日頃からアホ程献金してるんだから。集合まであと四十分、なんか適当に倒してスキルの試運転するのも良いが三層攻略で俺だけ寄り道し続けるのも申しわけが立たない。ちゃんと攻略の糸口を探さないとな。

◆

そんなわけでやってきたのは第三殻層の中でも少々特殊というか、他とは若干性質の異なる様子を見せる通称「タワー」だ。
ここで行われているのは……ファ……ファ？　いや違う確かフィ……

「フィールドワーク・ジェネシス？」

『フィロジェネテック・ジオグリフですね、リヴァイアサンが自信を持ってリリースするトレーディングカードゲームです！！』

そう、ここで行われているのはＴＣＧ、いわゆるトレカなのだ。
トレーディングカードゲーム、実は割と門外漢なカテゴリだ。買い切りのコンシューマゲーと違って環境の変化に追いつくようにマネーをコストにしなければならないのもあるがアレはテーブルゲームに分類されるからな。なによりプレイヤースキルがアクションじゃなくてロジックだから際立って強くなるのは難しい。
フルダイブならモンスターを呼び出したり天変地異を起こしたりも自由自在なので、そりゃ当然ＶＲ対応のゲームもあるにはあるが……

「ああいうのって大体リアルで作ったデッキをリーダーで読み込んでフルダイブ内に反映させるからなぁ」

まぁ、やらないんだよな……武田氏の友人には今でも現役の方とかいるらしいけど。ＴＣＧはマネーゲーム、が口癖の人らしい。

そんなわけでＴＣＧというものに俺はあまり詳しくない、では何故ここを選んだかと言えば……大体ギャンブルだったり身体を張るようなゲームばかりの第三殻層において、ここだけは理詰めで攻略可能な場所であるからだ。

調べる価値はある、だからこそここに踏み込んだ俺は……まぁ当然ながらデッキがなければお話にならない事に気づいた。

『フィロジオではまず最初に構築済みデッキが無料で配布されますが……』

「まぁそれで勝ち進むのは難しいだろう」

求められるのは勝てるデッキだ、上位Ｔｉｅｒ……ＴＣＧ畑だと環境って言うんだったか？　ともかく環境デッキ、そしてなによりレアカードが求められる。

「よーし「勇魚」、景気付けにこのブースターパック「ユア・エクスペリエンス」を五箱買うぜ！」

『剛毅ですね、こちらのパックは貴方がこれまでに遭遇してきたモンスターがカードとして排出されるパックです。つまり貴方だけのデッキが組める、とも言えますね！』

成る程、俺が今までに遭遇してきたモンスターか。そうなると狙い目はやはり水晶群蠍やシグモニアの巨大蟲、そしてユニークモンスターなどだろう。

ゴリっと削れたスコアの代わりに、自販機から出てきたボックスを抱えてフリースペースの空いた席に座った俺は早速パックを剥き始める。

「ちなみにレア度とかは？」

『下からコモン、アンコモン、レア、エクスティンクション、レジェンダリー、ザ・ワンとなっております！』

スーパーとかベリーじゃないのか？　いや違うな、エクスティンクションって絶滅だった筈、ってことはこれレアが文字通り「希少種（レア）」ってことか。

「ちなみに今、環境デッキとかあるのか？」

『そうですね、採用率が最も高いのは「汚染環境」を採用した竜化環境デッキでしょうか』

「竜……あー、近所だから」

とりあえず1パック目。

・水晶群蠍　（コモン）
・水晶群蠍　（コモン）
・水晶群蠍　（コモン）
・水晶群老蠍　（レア）
・偏食環境　（レア）

……ええと？　2パック目。

・水晶群蠍　（コモン）
・水晶群蠍　（アンコモン）
・飢餓変質　（アンコモン）
・金晶独蠍　（レア）

・ＦＭ' ｓクリサリス　〝戦災孤児〟（レジェンダリー）

「ああ、成る程水晶群蠍は個体数が多いからレア度が低いんだな？」

『あ、いえ……ユア・エクスペリエンスは個人の戦闘記憶からの参照なので、恐らくコモンに成る程遭遇撃破している……という事かと。他の方の場合は最低でもレア、あるいはレジェンダリーで排出されることが殆どです』

「再録じゃねーんだから……」

なんだかとても嫌な予感がしてきた。そしてそれは、レジェンダリーレアにまで昇格したユザーパードラゴンが出てきた瞬間に確信に変わるのだった……

資金をコストに娯楽をサーチ、何かありますか（後書き）

人によって同じカードでもレア度が変わることがあるので激レアユザパが誕生することもあるわけで

コモン‥プレイヤーが多く遭遇し、多く戦闘し、多く撃破したありふれた存在。断じて蠍がここに来るはずはなかったのだが
アンコモン‥そのそこの遭遇戦闘撃破経験があり、しかし回数はこなしていない存在。強力なモンスターであれば昇格することもある
レア‥希少存在。シャンフロ世界において個体数が少ないモンスターなどは強さを問わずここに来る
エクスティンクション‥絶滅種、プレイヤーが持つコモン、アンコモン、レアのカードに応じて稀に排出される
レジェンダリー‥伝説存在、というよりも伝説になってもおかしくない存在などが来る。サンラクの場合、苦戦率と遭遇経験が極端過ぎてユザパがまさかの収録
ザ・ワン‥ただ一つ、明確に「個」を持つ最上級のレアリティ。遭遇した時点で排出項目に追加され、ユニークモンスターなどがここに相当する
でも排出率は一回限りだしクソ渋い、性能は……お察し

結局最後にモノを言うのは汎用カード

フィロジェネテック・ジオグリフ！！
それは一つの世界、一つの環境に見立てたフィールド内で自分だけの生態系を形成、相手の生態系(フィールド)をガラ空きにした上でプレイヤーにダイレクトアタックする事で勝利する、最高にファンキーでエキサイティングなトレーディング・カード・ゲーム！！
プレイヤーはまずフィールドに４マス存在する「オリジン」マスに四体のモンスターを揃える。そして２マスある「スティミュレーター」マスに専用の効果を持つモンスターを置く、「スペル・フェノメノン」を発動する、「エリア」を整えるなどして環境に変化を起こし、オリジンマスに囲まれるようにして存在する「エヴォリューショナー」マスに切り札たる進化種モンスターを召喚……！

「成る程ね」

さっぱり分からん、俺は今完全にニュアンスだけでフィロジオを始めようとしている。もうちょっとこう、こう……何とかならなかった！？　もうちょっとさぁ……仮に小学生がこれをやるとしてスティミュレーターとか理解できるわけないだろ？
だがまぁいい、こういうのは実際にやってみて学んでいくものだ。
「タワー」一階の番人、第一殻層のテクノマギジェルスのような輪郭の曖昧な人型がバッ！　とやけに気合の入ったポーズを決めて俺を迎え撃つべくフィロジオのデッキを虚空に展開する！！

「いいぜ、始めようか……」

『あ、始める場合は気合を入れて「ジェネレーション！」と叫んでいただけると……』

「それ必須なの？」

『必須です』

えぇ……？　そういうさ、強制して熱血というか少年漫画みたいなテンションを要求するのって如何なものかと『声の大きさで先攻後攻が決まります』

「ジェエッツッネルエエエエーーーーーションッツッ！！！」

よっしゃあ！！　先攻は俺が貰うぜ！！！！

「俺のターン！！」

このゲームではコストというものが存在せず、さらに最初の１巡（約2ターン）は互いに攻撃することができない。なのでプレイヤーはこの不可侵の時間で己の環境を発芽させなければならない！！

ククク、見せてやろう……レア度逆転、蹂躙蠍ビートの恐怖をなァ！！

「俺は手札から水晶群蠍を誕生、オリジンに一体目のモンスターが置かれたことで「繁殖」のカードが手札に加えられる……そしてっ！　俺は手札の「規定条件領域（レゾンデートル）・水晶（クリスタル）」をエリアにセット！！　これで条件は整ったぜ！！」

水晶群蠍はそれ単体しかいない状態でターンを終了させると自動的

にエクスティンクション、即ち絶滅してしまう。だがこの規定条件領域・水晶は水晶群蠍のデメリットを消す！　さらに発動時処理でデッキから「水晶群蠍」がカード名、もしくはテキストに含まれるカードをランダムに四枚までサーチする効果を持つ！！

「怒涛の展開を眺めて死ねっ！　俺は水晶群蠍の効果発動！このカードを破壊する事で手札の「水晶群蠍」をカード名、テキストに含むモンスターを可能な限りオリジンに召喚する！！」

フハハハハ！　壮観！　壮観であるぞぉ！！

「そしてここからが絶望だ、手札にある「水晶群老蠍」のスティミュレーター能力を発動！　場の水晶群蠍の合計攻撃力を相手のオリジンマスのモンスターの数で割った数値以下のモンスターが相手のエヴォリューショナーマスに召喚された場合！　そのモンスターを破壊する！！」

場に四体の水晶群蠍、環境は万全、そして水晶群老蠍がスティミュレーターマスに存在する事で、すべての条件は達成された！！

「開け生命の樹形図（ツリーダイアグラム）！　月光抱きし孤高の輝き、今ここに光誕せよ！！」

このセリフ考えたの俺じゃないからな、フレーバーテキストがこれなんだよ。だから俺のセンスではない、俺の意思（センス）ではあるけど。

「スペル・フェノメノン「偏食性変異」！！場に四体の水晶群蠍、そして墓地の「水晶群蠍」を一体デッキに戻す事でこのモンスターはエヴォリューショナーマスに誕生する！！　出でよ「金晶独蠍」！！」

完璧な盤面だ……「勇魚」め、呆然とした顔で俺のタクティクスを見ておるわ。

「俺はこれで、ターンエンド……」

『あー……』

「え、なんだよ」

『いや、まぁ……これも経験ですね』

んん？　この盤面のどこに文句があるんだ？金晶独蠍は相手ターンに行動可能なエヴォリューショナーモンスター、相手の展開を阻害できる上に妥協したエヴォリューショナーであれば水晶群老蠍の効果で焼ける……負けるビジョンが思い浮かばないが。

と、相手ＮＰＣが動き出した。くくく、流石の盤面になす術なしか……

「私ノ、ターン。私ハ、手札ノスペル・フェノメノン「環境崩壊」デ、オ前ノ「規定条件領域・水晶」ヲ破壊スル。スペル・フェノメノン、ノ発動ヲ、金晶独蠍ハ無効ニハ、出来ナイ」

「えっ」

「私ハ、「ゴブリン」ヲ誕生。エリア「食物連鎖・下位」ヲ、セット。コレニヨリ、手札ノ「レイジング・オーク」ヲ、コストニ、デッキノ「ゴブリン」ヲ任意ノ数、誕生サセル」

「いや待った！　エリア発動に対して金晶独蠍の効果発動！　破壊

させてもらうぜ！！」

「デハ二枚目」

「ほぁ！！？」

何か嫌な予感がする、とてもとても嫌な予感がする。たった一枚こちらのエリアが破壊されただけなのに……いや、そのエリア破壊こそが……

「金晶独蠍ノ効果ハ、一度シカ使エナイ。私ハ、スティミュレーターマスニ、「ワイズ・ゴブリン」ヲ、置イテ……ターンエンド」

「……ハッ、効果を警戒してエヴォリューショナーは無しか。ならばこのままトドメを……」

「コノ瞬間、「水晶群蠍」ト「金晶独蠍」ノ、効果発動」

「はぁ！？　いやそれ俺の……」

「効果優先権ハ、モンスターノ数デ変動スル。故ニ、水晶群蠍ノ、デメリット効果ガ先ニ処理サレル。エリア、ガ無イノデ全テ、エクスティンクション！！」

「ほぁあ！！？」

「更ニ！　金晶独蠍ハ、相手ターン終了時ニ水晶群蠍一体ヲ、コストニシナケレバ、エクスティンクション！！」

「…………」

「オ前ノ、ターンデス……何カ、アリマスカ？」

「サレンダーで」

……

…………

………………

「おうサンラク、何か収穫はあったかよ？　こっちは結構な収穫があるぜ」

「あのカードゲームはダメだ、関わらない方がいい」

「はぁ？」

結局最後にモノを言うのは汎用カード（後書き）

五十階より上から番人は手札をシャカパチし始める。リアルでやるとカードを痛めるし単純に相手が不愉快になるからやめようね！！

威嚇なの？　それガラガラヘビが尻尾鳴らすのと同じ感じなの？（硬梨菜はシャカパチ好きじゃない）

人の心を動かすのは金と夢

とりあえずフィロジオはダメだ、スペックの暴力で殴れない。厳密にはスペックを活かすための思考を鍛える時間が無い。

思いっきり私用で寄り道していたことはぼかしつつ、俺が調査結果を話せば他二人もまた一時間遊……もとい、一時間のリサーチ結果を説明し始めた。

「私の、方は……その、ルストさんを見かけました」

「ルストを？」

「その……借金で、破産して……競馬？　のような競技のジョッキーとして……働いてました」

ちょっと待ってくれいきなりデカいネタで殴りかかってくるのは反則じゃないか！？　なにそれ超見たいじゃん、なにやらかしたんだ一個下の層で肉狩ればスコアは稼げるのに、なお破産するって相当だぞ！？

「ええと……ロボ競馬？　みたいなモノで」

「成る程全てに納得できた」

そりゃ破産するわ、笑顔で負け濃厚の手札に全額レイズしただろうさ。いや何やってるんだあいつ、四層行けばレンタルじゃなくて正規品を入手できるだろうに……でもきっとアホほど笑顔なんだろう

な、そんな確信めいた予感を感じつつも問題のサバイバアルへと視線を向ける。

「……で？」

「俺の方の収穫がこれ、妖怪スロット狂い」

「やぁ……早速で申し訳ないんだけど、スコアを貸してくれないかな」

「元いた場所に捨ててこい」

『ヤシロバード、そろそろ破産圏内ですがスコア管理はもう少ししっかりすべきですよ』

呼び捨てじゃん、でも口調とかから見ても親愛度の上昇によるものじゃなくて好感度の低さによるものだろこれ。「勇魚」が見たこともない表情してるもん、ルート分岐しないタイプの顔してるよこれ。一体何があった伊達男（ヤシロバード）、いち社長が完全にギャンブル狂いの末期症状じゃねーか。

「サバイバアル、アト……ヤシロバードってこんな感じだったっけ」

「いや、もうすこししゃんとしてた筈だけどな……スロットの景品がどうしても欲しいんだと」

「オンリーワンなんだよ、ただ一つなんだよ……いや本当、あと少しあれば勝てるんだよ、風が来てるって言うか、さ」

自分の困窮は理解しているけどやめるつもりは毛頭ない、典型的な

アレですね。二ヶ月くらい無人島とかに流して資本社会から引き剥がしたほうがいいぞ。

「なぁ「勇魚」、オンリーワンってのは？」

『スロットのグランド・ジャックポット報酬として用意された特殊塗装が施された射撃ユニットですね。確かに私の記録する限り一つしかない塗装パターンではありますが……』

「ん？」

『何か質問が？「勇魚」は当然お答え致しますが』

特殊塗装が施された射撃ユニット？　世界に一つしかない塗装パターン？その言い方だと……

「なぁサンラク、それってつまりよお……」

「もしかして同じこと考えてる？」

「え？　どうかしたのかい？」

「その……世界でただ一つなのは、塗装だけ……なのでは、ないでしょうか？」

「……？」

あー、つまりはだ。

「ヘイ「勇魚」、詳細はいらんから概要だけ教えてくれ。その景品

とやら、デフォルトカラーのやつは四層以降で手に入るのか？」

『それはもう、当たり前じゃないですか。第四殻層は一部例外を除き、リヴァイアサン製戦闘用ユニット、およびデバイス等の全武装が生産される工廠ですから』

あっけらかんと、まるで何を当たり前のことを聞くのだろう、といった様子でそう答えた「勇魚」の言葉に俺、レイ氏、サバイバアルの三人は無言で悪趣味なカラーの為に破産しかけていた男へと視線を向ける。

で、その件のアホはといえば……よれた服のシワをぴんと伸ばし、落ちかけていたカウボーイハット風の頭装備を被り直しして決めポーズならぬ決め顔を見せる。

「やぁ、やぁ。サバイバアルから聞いたよ、上に行くんだろう？　いつ本格的に動くんだい？　僕も同行しよう」

「人格的問題とスペック的利益の天秤、どっちに傾くかな」

「ええと……」

「まぁ、「同郷」だ。実力は保証できるだろうよ」

「任せてくれよ、伊達に破産しかけてないからね。この殻層の情報なら大体精通している」

自慢になってないんだよなぁ……

◆

「いいかい、フィロジオとスロットはダメだ。最短でここを抜けるなら時間がかかりすぎる」

「実感すげぇなオイ」

「茶化すなサバイバアル、話が進まない」

ギャンブル狂いから卒業したヤシロバードもパーティに加え、四人編成となった俺達はこの娯楽領域を突破する作戦会議の最中だ。

「競機も駄目、狙い目はグラビティボードか……ルーレットだ」

「ルーレットだぁ？　あのひき肉マシンかよ？」

死亡率七割は伊達じゃない、死亡率七割の娯楽が成立するのって地下とか裏社会とかそういう場所じゃねえの？

「あの二つは単純な物理演算で動いてる、多分プレイヤースペックでなんとかなるんだよ」

「成る程……どうするよサンラク、一応リーダーはお前だぜ」

「え？　あーそうか、パーティ組んだの俺だしそうなるのか……」

そうだな……グラビティボードは浮遊する板に乗って物理的に次のエリアまで飛んでいくという、中々にエクストリームな競技だ。流

石に途中で転移魔法的なもので拾ってくれるらしいので挑戦者の数＝潰れトマトの数ではないらしいが。

そしてルーレット、ひき肉マシンだの処刑器具だの散々な言われようだがルーレットの玉を人間がやれと宣うならやっぱりそれは殺人装置でしかないと思うのだ。

「……ちなみに競機がダメってのは？」

「あそこはプレイヤーがジョッキーになれるから談合が成立する筈だったんだけどね、やけに裏切りが多い上に「レッドワン」がいる」

『人間の心は移り変わりやすいですからねぇ』

「不思議なことに裏切った奴ほど何故か大量のスコアを持ってたりするんだよね、全く……何故だろうね？」

『この「勇魚」とて全知全能ではないですから、分からないこともアリマスヨー』

ああ、そういう仕組みなのか。競機による四層へと上がる条件は一着からドベまでを全て当てるパーフェクト万馬券の獲得だ。一人裏切ればそれだけで成立しなくなる。

「レッドワンってのはなんだよ、怪物でもでんのか？」

「レッドワンは赤ゼッケンの一番で出てくるプレイヤーのことさ、競機だと競走する戦術機同士の戦いも発生するんだけど……レッドワンはいつも全機撃破するから試合そのものが無効になるんだよ。まぁそれ単品で面白い見せ物だからレッドワンが出る時はそういう

ものだって割り切って見てるやつが大半かな」

レッドワン、赤い「一番」、やたら強い………ふむ、成る程成る程成る程？？？

「名案がある、これなら最速で上に行けるぞ」

人を釣るのは金だけじゃねえ、浪漫で動く人種もいるのさ。

人の心を動かすのは金と夢（後書き）

レッドワン、一体誰なんだ……

純然たるルールに則った清く正しい八百長（前書き）

ミュオン出ないので怒りの更新です

純然たるルールに則った清く正しい八百長

夜七時、最近はシャンフロにも積極的にインするようになったルストに当然のように付いてきたモルドがログインした時間だ。ルストはいない、嬉々として自分から破産したとはいえ債務者は別の場所でリスポーンするのだ。

「もう、夏蓮……じゃないや、ルスト……「もう少し機体性能を把握しておきたい」って、それまた借金返済後回しってことじゃないか……」

並大抵の借金では「破産」認定にならないため、ルストの借金は凄まじい額となっているが……ルストとモルドが考案した必勝法さえあればどうとでもなる。それ故にルストはこの殻層での停滞……という名の自由に制限なく気の向くままに戦術機を使うことができるここでのバカンスに興じているのだった。

「毎回ルストが暴れるのを見てるだけってのもつまらないし……僕も何か遊ぼうかな」

門外漢だが、カードゲームというカテゴリには興味がある。どれだけの不利、どれだけの有利であっても冷静さを失わずに安定感を掴むことこそが尊ばれるというカードゲームは中々に自分に向いているのではと……

「モルド様っ」

「え？　僕？」

ぽん、と肩まで叩かれたのならば間違いはない。振り向けば、そこにはニコニコと満面の笑みを浮かべる一人の少女。露出の少ない燕尾服とバニーガールを合体させたような衣装は一瞬ＮＰＣか何かかと考えたものの、このリヴァイアサンでＮＰＣを見かける事は非常に稀だ。

それ故にモルドは恐らく頭上に表示されているだろう名前を……あれ？

「なんで僕の名前を……」

疑問のままに視線を少女の頭上に向ければ、そこには「サンラク」の四文字。

「よぉ〜、モルドくぅーん……」

「ひゅっ」

その時の心理は、まるで羊だと思っていた何かの背中を食い破って出てきた狼を目撃してしまったかのようで。一瞬剥き出しの歯が全て牙であるかのような錯覚を抱く凶悪な笑みを浮かべた少女が万が一にもモルドが逃げ出さぬよう、白魚のような指を肩に食い込ませながら囁く。

「インする時間が分からないから日が暮れるまで待つ羽目になったよ……会いたかったぜ？」

「な、何かしましたっけ……？」

「強いて言うならこれからするんだよ」

◆

「というわけで連れてきましたレッドワンの右腕、あるいは脳味噌(ブレイン)」

「ど、どうも……」

ルストがいるなら十中八九モルドもいる、俺の予想は見事に当たった。呑気な顔して現れたモルドを連行した俺はパーティメンバーの待つレストランへと到着。二層のボスことスペリオルオマージュ・フロストボディの霜降りを調理してくれるらしく、どいつもこいつもステーキを食べている中……賢将サンラクは霜降り君が別に牛肉の霜降り肉であるとは限らないとの予測を立て、奇策「握り寿司」を注文……っ！！

「馬鹿な、寿司だと……っ！？」

「お前の脳味噌プリンみたいにツルツルかぁ？」

「まぁ僕はリアルで食べようと思えばいつでも食べられるし？」

「でも今食えないなら絵に描いた餅より虚しくない？」

「フルダイブだから頭に思い浮かべた餅なんじゃ……」

分かってないな、リアルとＶＲの違いなんて胃の中に溜まるか溜まらないかでしかないんだぜ？　味と食感を楽しむだけならこっちの方が効率がいい。
でも俺は胃に溜まる方が好きなのでやっぱリアルだな。

「で、あの……なんで僕呼ばれたの？」

「いやなに、ちょーーーっとばかしルストに協力してもらいたいことがあってな……出来るんだろ？」

「な、なんのことか……」

とぼけんなよ、あのロボスキー・ネフホロニストがレンタルだけで満足できるわけがない。実質ノーリスクで戦術機を使い回せるジョッキー生活を楽しんでいるのは事実だろうが、そこに留まり続けるなんて事はあり得ない。
ルストとモルドが組んで四層に行くための条件を満たす方法なんて一つしかない、こいつらは既に競機の攻略法を握っている。

「パーフェクト万馬券、四層に行くためのチケットであり、莫大なスコアと交換するための引換券でもある……「勇魚」に聞いたぜ？　ここの競機は同じ賭け方の馬券を複数枚買える、つまりモルド、お前が三枚買えば問題解決(ステージクリア)ってわけだ」

「あ、あははははは……はい、その通りです」

つまりこういうことだ、競機のレースにおいてルストはその気になれば好きな順位でゴールすることができるし、好きな順位でゴールさせることができる。

八百長？　いいや違う、妨害有りという純然たるルールに従った順位操作だ。
行動不能にさえならなければレースの参加資格を失ったことにはならない、半殺しにして適当にゴールまで引き摺りこめばめでたく完走ってわけだ。

「あいつ、借金重ねまくったせいで「勇魚（こいつ）」の好感度調整下限まで行ったんだろ？」

「え、なんで分かったの？」

「一秒で好感度を見抜かないとピザに喰われるんだよ」

「？？？？？」

バレていないとでも思ったか「勇魚」め、三層に来るまでは俺も分かっていなかったがヤシロバードへの対応が露骨に冷えてることに気付いた事でこの結論にたどり着いた。厄介だな、好感度次第じゃ下手すりゃシステム面にまで不親切が発動しかねない……条件はなんだ？　ルストやヤシロバードの好感度が下限スレスレって事は寄り道が減点対象か？　いやそれなら飯食ってるこの時点で「勇魚」の好感度が下がってもおかしくないはず……

「まぁいい、現状維持がベターなら無理に変わる必要はない……ではモルド、今日のレースはどんなもんかな？」

「ははは……ちょっと面会してきます」

面会？　ルストにか、それなら……いや待て面会って何！？

◇

「――と、いうわけで」

「……成る程、相変わらず嗅ぎつけるのが早い」

さながら囚人との面会を思わせる個室の中で、借金まみれで破産したとは思えないリラックスぶりをモルドに見せつけるルストは相方から伝えられた事実に対し、ひとつため息をつく。

「とはいえ、性能調査はもうとっくに終わってるし……本当はもう少しスコアの流れが太くなってからにしようと思ってたけど」

「じゃあ……！」

サンラクの推測は概ね当たっている。ルスト以外にもジョッキー堕ちしたプレイヤーはちらほらと見かけるが、仮にその全員がルストを狙ったとしてもルストはその全てに対処できるだけの習熟を既に獲得している。

「3、1、5、7、8、6、2、9、4」

「え、ちょっと待って何か書くもの……」

「……駄目、暗記して」

「ええと、サイコー（315786294）なハム肉よ……」

わたわたと数字の羅列を覚えようとするモルドを眺めつつ、ルストはコキコキと首を軽く鳴らす。

成る程、モルドを経由してサンラクから渡された「檄文」は確かに今のルストでは知り得ないものだ。そしてそれはルストが今すぐ次の殻層を目指すだけの価値があった。

「……引退レース、派手にする」

純然たるルールに則った清く正しい八百長（後書き）

グラビティボードだって別に自前で飛んで距離を稼ぐなとは言ってないし、ルーレットも「球が止まった時点で結果が確定する」ルールなわけで

おててつないでみんななかよく（例外あり）

タイプメンシリーズが一つ、戦術機錐「ピラミッドメン」。
前衛型の「キューブメン」、遊撃型の「ボールメン」と異なり、後方からの火力支援を役割とする戦術機がメイン武装たる長距離射撃用のソリッドマナレールガンを振り回して隣を走っていたキューブメンに足払いを仕掛ける。
キューブメンは前線維持、及び押上の役割を持つ故に強力なブースターを保有しているものの、あくまでも自立に用いるのは二つの脚だ。即ち、高速機動中に勢いよくすっ転んだ角張った体躯のキューブメンが雑に投げられたサイコロよろしく盛大に転倒した。

『4番確保、次』

4番ゼッケンを掲げるキューブマンの背部ブースターを踏み抜きながら赤い1番のゼッケンを貼り付けたピラミッドメンがソリッドマナレールガンを構える。
逡巡は一秒以下、通しで見れば神速の手動ロックオンによって放たれた弾丸がカーブを曲がろうとしていた先頭陣の一番内側にいたボールメンの横っ面に着弾、衝撃で吹き飛んだ球体が外側から追い越さんとしていた二機を巻き込んでクラッシュ。

『機能停止はしてない、5番6番9番確保。次』

ピクピクと痙攣するキューブメンからワイヤー式のテイザーライフルを奪い取ったピラミッドメンは無造作にそれを片手で構えると、発砲。
ひゅん、とサーキット内を飛んだワイヤーが反転してピラミッドメ

ンへと向かってくる４番ゼッケンのボールメンに着弾する。

『あっやべっ！？』

『フェイントが単調、４番確保。次』

『スタンぐわーっ！』

カチカチカチ、とテイザーガンに装填された三発分の電撃を喰らったボールメンが煙を上げて膝をつく。

『あ、あれ？　機能停止になってない』

『……今日はパーフェクト万馬券を出す日、だから』

『は……？　あっ、マジかそういう抜け道あんの！！？』

『真似していいよ、出来るなら……２番確保。次』

赤い１番ゼッケン、通称レッドワン……有人ジョッキーの中でも優先して番号と色を選べる程に勝利と撃破を重ねてきた悲喜交々の感情を向けられる選手の暴れる様はいつも通りの光景のようで、何かが違う。

観客達がそれに気づいたのは自分以外の八機を機能停止寸前の行動不能状態に叩き込んだピラミッドメンが３番ゼッケンのピラミッドメンをゴールに蹴り込んだ時だった。

「ちょっ……そんなんありかよ！？」

「待って待って待って！　借金してレッドワン八機撃破に賭けたん

だぞ！？」

「そんな強引な順位操作あり！？」

『ワタシ、ダメッテイイマシタッケ？』

「「「「勇魚ァーーーッ！！」」」」

『とりあえず何名か破産の方がおられますようなので、手続きしておきますねっ』

一着、３番。
二着、１番。
そして何故そんなものを、と観客達から思われていた長射程ワイヤーガンを用いて５番、７番、８番、６番、２番、９番、４番を順番に繋げたピラミッドメンがのっしのっしと重そうに歩き続け……

『……タイプメン、出力を上げれば七機は引っ張れる……朱雀達もそうなのかな？　むしろ最大出力を削って多機能にしてる？』

ズゴン！！！！

再起動し、１番のピラミッドメンを追い越そうとしたボールメンの顔面に二着としてゴールすることになっているピラミッドメンの裏拳が叩き込まれ再び転倒……そしてつつがなく最下位の４番がゴールラインを超え、ここにレースは決着した。

◆

「借・金・完・済っ！！！」

「ハッハー！　ついでに金持ちだぜーっ！！」

「……サンラク、あれは？」

「ロクデナシとロリコン」

たった一試合で自由の身になって出てきたルストを迎えつつ、俺達は「勇魚」へとパーフェクト万馬券……否、第四殻層への通行パスを見せつける。

「どうよ」

『ええ、認めざるを得ませんね……皆様のアンバージャックパスを3に上げ、第四殻層へと転送致します』

アンバージャックパスもついに3まで上がったから……おっ、ついにファストラ実装かぁ！　一層とか二度と訪れることはない気がするが何処からでも第三殻層に戻れるのは地味に嬉しい……休憩とかセーブ的な意味で一番充実してるからな。

「いやー助かった！　日に日に「勇魚」の態度が冷たくなるから破産秒読みなの丸分かりでねぇ！！」

「拾ったチャンスを無駄にするなよ、今後は真人間になることだ」

「……威張るべきは私」

え、破産した奴がそれ言います？

まぁいいや、次の層に賭博要素なんてないんだ……いざ参らん、第四殻層「機舎（キシャ）」へ！！

……

…………

………………

「「びゃわーーーーーーーーーーーーーっ！！！！」」

四層の景色を視認した瞬間、ルストとヤシロバードが壊れた。やっぱこいつらに真人間は難易度が高すぎたらしい……

『ここが第四殻層「機舎」、神代の武力が生まれし場所……そう、これこそが神代の力なのです！！』

「銃！銃！　ガン！　ゲヴェーーーア！！　いいよいいよ最高だ！！　君は対人用？　ああっ！　その艶かしい姿は対物だね！！　オ

イオイオイ僕を誘ってるのかぁーい！？　こんなっ、こんな……っ！！　ここは天国か！！！」

「量産型故の規則正しく並ぶ姿はワンオフ機では決して作ることのできない秩序であり「美」、そしてその全てが今か今かと脚光を浴びる日を待ちわびる主役達。使わねば、使ってあげねば！！」

……。

「サバイバアル、あいつらブン殴って止めてきてくれね？　人殴るの得意だろ？」

「ああいう手合いに介入すると面倒なんだよ、知ってて言ったろオメー」

俺だって嫌だよ、極限まで飢餓状態にした猛獣だってもう少し慎みがあるぞ。

「勇魚、この殻層を越える条件は？」

『ふふふ……教えません』

「何？」

『この層では皆様自身が答えを見つけ出すのです！　ええ、その為のヒントはこの殻層内にあるのですから！！』

「なぁるほど……ここに来て謎解きってわけだ」

だったら仕方ない、ぶっ壊れたアホ二人はとっくに飛び出していっ

ちまったし……残ったレイ氏、サバイバアル、モルドの三人の方は振り向いた俺は一応リーダーらしく指示を飛ばす。

「各自判断で頑張ろう、以上」

「ジャーマンスープレックスだってもう少し責任持って投げるぞ」

「プロレスにそんな詳しくねぇ」

さぁて第四殻層……どう行く、どう越える？　攻略強行軍、ここが山場か。

おててつないでみんななかよく（例外あり）（後書き）

ちなみにルストのピラミッドメンは出力強化に八割費やして必要武装は現地調達で賄う蛮族アセン、後方支援型が凸砂して無双している光景に勇魚は何を思う

『まぁ一段階評価を上げておきましょう』

人の購入履歴を漁ってはいけない

基本的にリヴァイアサンは上の階層に行くほど狭くなる、とはいえ元が巨大な鯨の腹の中……第四殻層「機舎」もそれなりに広い。

「武器、武器、武器、防具、防具、防具、ロボ、ロボ、ロボ……有機物の割合よ」

ヒャーーーーーー………

どこか遠くの方で普段からは想像もできないハイテンションな高音が聞こえてきた気がしたが無視、原生のセミか何かだろう。

『サンラク様は武器などの購入はなさらないのですか？』

「今の所はなー……うーん、武器に不足を感じてないってのもあるが……」

『あるが？』

「これ全部バッテリー別枠の奴じゃね？」

『そうですね、確かにこれらの武装は外付けのマナ粒子貯蔵デバイスとの併用が前提となっておりますが……なんと！　封臓を持つ次世代原始人類であれば自身のマナ粒子で動かす事ができるのです！！』

「俺マナの貯蔵量拡張してねーんだわ」

『そんなあなたに拡張デバイス！　今ならなんと３０万スコア！！』

粘るなオイ、だったらコレと同じ方式でなんか作ってくれと百足式８－０．５を見せた所、それアンバージャックパス４以降なんですよと断られた。なんなんだよもう。

「謎解き、謎解きねぇ……」

オッホホーーーーーーーーーー

遠くの方で知能指数がゴリラ以下になった人類の声が聞こえた気がしたが無視、あれはどうやっても救えない類の存在だろう。

「レイ氏、なにか分かったりした？」

「いえ……えと、パーツ単位で売っているんだな、くらいしか……」

なるほど確かに、タイプメンシリーズは流石に素体で売っているがブースターだったりバッテリーだったりとやけにパーツ単位で展示されている。あとタイプメンって合体前はマジで巨大な機械の箱、球、四角錐なのか……あれがが動くのか、あれで動くのか？

『それに関しましては以前の反省を活かしたものです、画一的装備が如何に愚かなるかを神代の戦いでは嫌と言うほどにラーニングしましたから……』

「神代、神代ねぇ……」

これだけの装備があってなお勝てない存在、十中八九敵はレイドモ

ンスター……始源に連なる存在なんだろうが、そうなると疑問がある。

「なぁ勇魚、旧大陸って分かるか？」

『東大陸ですか？　管轄外なのであくまでも情報でのみの把握ですが』

「あそこにバカでかい機械骨格があるの分かるか？」

『……ええ、存じています。忘れるわけがない』

「オメガってなんだ？　あんなバカでかいサイズ、それを戦闘用にカスタムしてお前達はなにを倒そうとしていた？」

『次世代原始人類、それが知りたいのならば「叡智」に辿り着きなさい。最後のアンバージャックパスが疑問を解き明かすでしょう』

突き放すような、どこか問いかけるような、それでいて愛想のない簡潔な返答。だが今の質問だけであれがやはり重要なものであると明らかになってるぜ。

「いいね、そういう上で待つ的な態度は嫌いじゃない」

吠え面かかせてやる、俺はこういう上位者然とした奴をレベルの暴力でボコボコにするのが大好きなんだ……いや「勇魚」は殴らないけども。あくまでものの例えだ。

「まずは謎解きだ、エリア全域の把握……地図とかないのか」

『ありますよ』

いやあるんかーい！！
とはいえリヴァイアサン内のマップというのは球体の内側に広がる世界だ、つまりめっちゃ見づらい。

「あ、全体図で見ると……人間用と戦術機用で、半々なんですね」

ふぅーむ……あれ、このウィンドウ地図だけじゃないのか？　なんか別のページが……

『お、気づかれましたね……？　そう！　なんとそのカタログで注文すれば、この殻層の各所にあるデリバリーデベロッパーゾーンで完成品を受け取るのとができるのです！！』

「通販なようで地味に歩かせるのやめろよ」

さーて、本命はこっちだ。表示されたマップの向きがリヴァイアサンの向きと同期してるなら丁度真下、船底側にある巨大な球体……小学生でも分かる、これが怪しいってな。

「これは？」

『強いて貴方達にも理解できる言葉で表現するなら……カゴでしょうか』

「カゴぉ？」

うーむ……材料は揃ってきたがまだ点と点は離れたままだ、中継点がないと線が届かないってところか。まぁいい、時間制限がないだ

け気楽なものさ。

「とりあえずカタログ眺めながら近くの現物を見てこうぜレイ氏」

「そ、そうですねっ！　掘り出し物があるかもしれませんしっ！！」

「んん゛ん゛！！？！？」

単に宝の山と輝かせた目が眩んでいるアホ二人と違ってレイ氏は流石の用心ぶりだ、流石は廃人と言うべきか……いや、むしろ玲さん自身の性格によるものなのかな？　審美眼とかそういう…………ん？

「あの、どうし──」

「サンラクお金（スコア）貸して！！！！」

「ほぐふぅ！！？」

「ラクっ、サンラクさん…！？」

咄嗟に動いた指が「決定」を押した瞬間、恐らくタイプメン用の特殊装甲を着たマネキンを飛び越えてきたルストの腹が顔面に直撃した。

「とても、とても重要な発見をした……！！」

「もごご、ぼげ（退け）ぼげ（ボケ）……！！」

むんず

「手を貸しますね」

「……あ、どうも」

全く、か弱いバニーガールにいきなりボディプレスを仕掛けるんじゃねーよロボスキー・エルフモドキアバターめ。
レイ氏に服の背中を掴んで持ち上げられている状態のルストはさながらおいたをした猫のようであったが、本人の心中がそれどころではないのか吊り下げられた状態でこちらに視線を向ける。

「……サンラク、スコア貸して」

「またギャンブルかよ？」

「……違う、やばい物を見つけた」

やばい物、とは？　そう問いかけると、ルストはぺしぺしと背中を掴むレイ氏の手を軽く叩いて自立すると、俺の左腕を指差しながら改めてそれを口にした。

「……収納鍵チェストリア、「それ」の廉価版」

「ほ、ほぉん？　それは確かにヤバいブツだな」

「……今、ヤシロバードと競り合ってる。だからスコアを貸して欲しい」

成る程、成る程成る程成る程………

「いやすまん、今俺は手持ちがない」

「……何？」

「ちょっと高めの買い物をしてしまってな、うん」

「そう………じゃあサイガ－0」

「えっ」

金蔓たりえないと判断するや速攻ターゲットを変えるところ、嫌いじゃないぜ。

いやしかしどうしたものか、あまりにもいきなりすぎて思わずポチってしまったがちょっと衝動買いが過ぎた気がしてならない。とりあえず「勇魚」に返品できるか聞いて……

『サンラク様、ご購入いただきました格納鍵インベントリアがBブロックデリバリーデベロッパーゾーンにてご用意できましたので、ご都合がつきましたら受け取りに来ていただけますでしょうか？』

「…………」

「…………」

「…………「勇魚」？」

『はいなんでしょう？』

「プライバシーって知ってる？」

人の購入履歴を漁ってはいけない（後書き）

若干の設定変更を加えてついに登場、廉価版インベントリア！　収納鍵チェストリアは縦横高さ5メートルまでのアイテムオブジェクトなら無尽蔵に収納できるぞ！生物は無理！！

そして衝動買いされた二つ目のインベントリアはマネキンがアクセサリー感覚で腕につけてたのをサンラクが発見した。隠れ夢ネズミ的な

時間制限によりバニーガール装備が弾け飛んだので着替え直しつつ、物凄い「力」を込めて俺を見つめているルストへと弁明を開始する。

「――――買えるなら、買いたくなるじゃん？」

「……分からないでもない」

おっとこれは無罪判決では!？

「……でも独断で買ってるのでギルティ」

「裁判長、控訴します」

服が破れたので着替え直しつつ控訴してみたが、流石に外道連中ほどの対応力をレイ氏に求めるのは酷だったか。わたわたと慌てる重甲冑を見ているとそう思わずにはいられない。

「わ、私が裁判長…ですか!？」

「いや、いや、気にしなくていいよ」

というか買った本人である俺ですら絶対に必要かと言うとそうでもない……

「なぁ「勇魚」これ返品とかできる？」

『売値の三割で買い取りますが』

「うぅゔぅぅぅむ………」

「サンラク、半値で買う」

「その値切りがなんか気に食わないので却下、ていうかまだ在庫残ってなかったか？」

確か残り三個とか書いてあったような。俺が一個買ったから二……あれ、残り一個？

『サイガー０様、購入していただいた格納鍵インベントリアは只今ご用意しておりますので暫くお待ち下さい』

「………」

「………」

「え、あの、えと、やっぱり必要かな……と」

流石はレイ氏と言うべきか……フッ、既に購入済みである俺の意識すらをも潜り抜けたステルス購入とはな、数多のゲームをプレイし数多のプレイヤーと遭遇してきたこの俺をして二、三人しか見たことのない「高み」にいる存在のようだ。

「ほらほら、残り一個らしいぞいいのか？」

「ブルジョワジー、共め……！！」

わかる、わかるよその気持ち。共産主義ってこういうところから生まれるんだろうな……でもサンラク（この俺）は資本主義の勝ち組ィ！　鼻で笑ってやるぜコミィーッ！！

「……あれ、ギリ買える？」

「え？」

『割引セール中ですからねー』

無言、だがしかし迅速なウィンドウ操作で残り一個のインベントリアを購入したルストがゆっくりとこちらに振り向き……

「……お金は全てを解決する」

「この世の真理に気づいたようだな……」

「あ、お金だけが全てではっ！　ないと思います……っ！」

「例えば？」

「え？　いや、あの、その……ぁ、ぁい、とか？」

愛は金で買えるのか、それは誰にも分からないことなのかもしれない……

◆

「ふふふ、残念だったねルスト君……サバイバアルに頭を下げたお陰でこの僕がチェストリアを先に手に、入れ……」

「………これ？　格納鍵インベントリア。チェストリアと比較して収納できるアイテムの大きさが十倍近く違って、なおかつ装着者も格納空間内に入る事ができる……控えめに言って、上位互換？」

「……っはぁーーー？？？　別に悔しくないから、そもそもロボとかビークルに興味ないから、銃器だけ収納できれば不足ないから」

兵器マニアであっても全員が仲良く手を取り合えるわけではない、消費しなければレゾンデートルを満たさない人類の醜さを濃縮したような光景だ……

「サバイバアルはああいうの欲しくないのかよ？」

「あ？　まぁ欲しいっちゃ欲しいがあいつらほど切羽詰まってねぇからなぁ。それにちょっと前まで最低限のモン以外は素寒貧になるプレイスタイルだったしよ」

「物欲は捨てられてもロリコンは捨てられなかったんだな、身投げしないと断捨離できないのか？」

「ちょっと待てなんで質問に答えてそこまで罵られるんだ俺は！！」

ロリコンだからだよ、なんなら懇切丁寧に説明してやる。ちょっと前屈みになって、上目遣いで、ニッと笑いつつ……

「ロリコンだからじゃないの～？」

「ぬっっっっっ！！！」

「え、何その反応」

いきなり近くに展示されてたマシンガンに頭突きしだしたんだけど……怖……

「俺はロリコンだ、できれば中学生以下」

「お、おう。堂々と宣言する事じゃないと思うんだが」

レイ氏もドン引きだよ、やたらゴツい声したネカマがいきなりロリコン宣言とか素面でできる事じゃないぞ。だが奴にとっては何らかの効果があったのか、頭突きをやめてキリリとキメ顔をする……いやなんなんだ、何がお前を狂わせているんだ。

「……で、一応聞くけど何か攻略法を見つけ出せたか？」

「いや聞いてくれよサンラク、チェストリアの為になかなか諦めたんだけどその場で弾丸を生成するなんとも興味深いライフルがあってね」

「戦術機用の拡張パーツが充実しているのはある意味想定通りであったけれどそれをアシストするメカまであるとは思いもよらず」

『ちゃんと買ってくださいね～』

バカ二人は論外、という事で……俺とレイ氏もそこまで大した情報をゲットしたわけじゃないしデカい顔はできない。

「俺の方はとりあえずいくつかぶっ壊してみたんだがな、弁償させられるだけで敵が出てくるわけでもなかった」

どうしよう、現状攻略への貢献度はサバイバアル以下だ。そうか確かにセキュリティが敵として出てくる可能性もあるのか、だがサバイバアルが試した限りでは違うようだ……ここからはやはり考察が重要なのか？　いやまだ材料が揃ったとは言い難い。と、

「……モルド」

「あ、皆……探したよ。ほら、マップの中心？　にある変なところまで行ってきてさ」

「ほう。で、ボスでもいたかよ？」

「ううん、なんていうか……いや、実際に見た方がいいかも」

実際に？

……

…………

「なんだこれ」

「柱の生えた、箱……でしょうか」

成る程、確かにレイ氏の言う通りだ。そしてその通り過ぎて用途が全く分からない。第四殻層全体マップでも異彩を放っていたこの妙な物体、空間全体から見れば小粒かもしれないが人間の視点から見れば庭付きの豪邸くらいあるガラス張りの立方体だ。

「これ、ええと……実際に見た方がいいかも。ちょっと見ててね？」

ガラス張りの立方体には自動ドア（中学生が考えた近未来、みたいな摩訶不思議な開き方をする）が備え付けられており、モルドが近づいた事でそれが開く。そしてモルドが一歩踏み出し……その姿がフッと消えた。

「……消えた？」

「いや違ぇ、上に飛んだ！！」

「飛んだ、というよりもこれは……落ちたって言うべきなのかな」

上に落ちた？　いや、これは……モルドに起きた現象と周りの会話から推測を立てた俺は躊躇う事なく立方体の空間へと背中から身を投げ出す。

そして全身が立方体の中に入った瞬間、真下から押し上げられるような力によって上に……いいや違う、これは紛れもなく、「下」に落ちている！！

「天地逆転程度ォ！！」

空中で身を捻り、落下速度で迫る天井（地面）へと着地。この高さなら完璧に着地してもダメージが入ると思ったのだが、どうやらノーダメージになるよう最初から設定されているらしい。

「この中だけ重力の向きが逆になっているのか……ちなみに「勇魚」解説とかは」

『特に無いです』

オーケー、鍵はこの立方体のようだな。態々天地逆転にする理由はなんだ？　第四殻層から隔離された物理法則の理由は？　第五殻層にはどうやって行けばいい？

もう時間は深夜帯に入ろうとしている、明日は学校だ……だったらスッキリとした気分で登校したいもんだ。

天に落ちる箱（後書き）

サンラク（女）は今露出少なめとはいえバニーガール姿です

・このエリアに「ボス」はいない
・このエリアを越える方法は「ボス」を倒す必要がある

つまり？

三人揃えば文殊の知恵、文殊って確か神様？　菩薩様？の名前だったはずなので六人揃えば単純計算で二倍の叡智が手に入ることになるわけだ。ダブル文殊……！！

それに気づいたのは偶然だった。

俺、ルスト、そしてレイ氏が立方体の中に入った時、箱が動いたのを外にいたモルド、サバイバアル、ヤシロバードの三人が観測したのだ。

そして何度かの試行を繰り返した結果、この空間内に入ることで箱を動かすことができるのは俺、レイ氏、ルスト、ヤシロバードの四人であることが分かった。では俺達とサバイバアル、モルドを分けるものは何か。

「金を毟られたコンビだろ、なぁ？」

「ははは……」

「いやちゃんと返すから……」

「……ツケでよくない？」

ルスト、お前に人の心はないのか。いやルストの場合は多少の手間ですぐに稼げるからいいのかもしれないが……だがその着眼点、あながち間違ってなさそうだぞ。

俺、レイ氏、ルスト、ヤシロバードにあってモルド、サバイバアルにないもの。

俺がマップにあったこの箱について聞いた時に「勇魚」が発言した「カゴ」という単語。
そして一層が迷宮、二層が牧場、三層が娯楽施設であるならば第四殻層全体のコンセプトを考えれば、答えは見えてくる。

「――買い物かごだ」

「なんだと？」

「俺達とお前らの違いはここでモノを購入したか否か、だ。俺とレイ氏とルストはインベントリアを、ヤシロバードはチェストリアを。そしてアホ二人に金を貸したお前らは何も買ってない！」

「……アホ二人？」

異論を挟む立場にないだろ。

「じゃあなんだ、つまり……」

「買い物の総額で……落ちていく、ということです、か？」

「ああそうか、この箱……天秤とエレベーターが複合してるのか。重い程下に落ちていく……でもそれは中にいる僕らの体感だ、外から見ればこの箱は第五殻層に昇っていく」

クソが、そういうことかよ。第四殻層の仕組みがコレだとするなら第三殻層はとんだ茶番だ。
俺はさも公平そうな顔で空間に表示されているホログラムへと半目で振り返る。

「お前これ……どう考えても三層でスコアを稼いでこいってことじゃねーか……」

『私が見たいのは貴方達の先へ進む意志。手段を問わず、道を問わず……立ち止まらない貴方の歩みは、見ていてとても楽しいものです』

「おいどうするサバイバアル、こいつラスボスみたいなこと言い出したぞ」

「俺はまぁ最初からラスボス説はあると思ってたぜ」

「なんてやつだ、笑顔の裏で僕らを操ってスコアを奪っていたなんて……！」

「いやヤシロバードおめぇなに正義の側に立とうとしてんだ」

「破産したの十割自業自得じゃねーか」

「え、「勇魚」を糾弾する流れじゃないの？」

俺が言いたいのは公正な娯楽施設のフリしてイカサマなんでもありの集金施設だったことに対する文句だよ、単純に破産しかけてたアホが糾弾する資格は無いと思う。

「でもこれ相当お金を積まないと駄目なんじゃないかな？　インベントリアとかチェストリアを合わせた合計でも上まで届かないなんて……」

「……モルド、この中でだけ別ウィンドウが出る」

「え？」

本当だ、特定の場所でしか出てこないウィンドウって大概初見殺しだなオイ……何々？

「ＳＰとＤＰ……ＳＰはスコアポイント、かな？」

「じゃあＤＰは？」

『デンジャーポイントですね』

変なところで親切だし変なところで不親切だな……スコアポイントは文字通りスコアのポイント、このルーム内に持ち込まれた購入物品の総額と考えていいだろう。ならこの異様に低いデンジャーポイントは……

「危険度、か？」

インベントリアの有用性は何度もナーフされたとはいえ、依然として強力なものだ。だが物理的に凶悪かというと……刃物より危険とは言い難いだろう。凶悪なものを取り出せるとしてもインベントリア自体はあくまでも転送ツールだ。

「つまりなんだ？　危険かつ高額な兵器をぶち込んでいきゃあ良いってことかよ」

「……三層で稼ぐしかない」

「どうするの？」

「全員で戻って稼ぎ直して……いや、ルストとヤシロバードはここに残ってDP高そうな兵器を探してもらった方がいいか？」

「……審美眼には」

「自信がある」

それ以外の部分に不安がないわけでもないが、俺やサバイバアルは性質的に一個一個武器防具の性能を事細かに見ていくのには耐えられないだろうし適任なんだろう。

「となると問題はどう稼ぐか、だが……それに関しては俺の方はいくつかアテがある」

◆

「サ、サンラクさん……や、約束の金だ。だから……」

「麻薬取引みたいなロールプレイやめてもらえます？」

「あ、すんません」

「えー、じゃあ煉牙(レンガ)さん。こちらが出品していた水晶群蠍デッキです、中身の枚数確認を」

「水晶群蠍、金晶独蠍……はーすげぇ、意外とこれは使えそうだな」

「出品した俺が言うのもアレだけど、このデッキ使える？　事故率高くない？」

「あーいや、欲しいのはこの極限環境下分岐進化と分岐剪定だけっていうか。シングルじゃ売ってくれない感じだったからデッキごと買おうかなって」

「……つまりこの二枚のためだけに？」

「カードゲーマーって、そう言う生き物なんで」

……

…………

……………

「なぁ「勇魚」、これって転売じゃね？」

『発売元が公式に定めたシステムによる取引ですので転売には当たらないんじゃないです？』

成る程つまり問題ないということだ。
四層に上がる前、「勇魚」との会話により大義名分を得た俺は一時的に錬金術師としての素晴らしい才能を開花させていた。即ち、カードゲーム＝マネーゲーム、現状俺しか持ち得ないアドバンテージを最大限に活かしたオークションの開催である。

水晶群蠍というカードは本来、もっと排出率の低いカードであるらしい。だが俺のマイパックはイかれてるのでアホ程水晶群蠍を引くことになる、金晶などのレアモンスターも十パック引けば二、三枚くらい出てくる。つまり、俺は他の者達よりも安価に水晶群蠍デッキを組めるということだ。

そこでやってみましたオークション、俺が相場を知らずともそれを求めて競合するカードゲーマー達が勝手に相場を決めてくれる。いやむしろ相場以上の価値をつけてくれるというわけさ。

「仮に俺から買ったデッキを転売したところで無駄だ」

こっちの在庫は収入の一割を使うだけでいくらでも補充できる、そしてさっきの煉牙氏もそうだったがどうやら特定のカードは皆喉から手が出るほどに欲しいらしいからなァ……

「最大手、なんて甘美な響き……」

『その理論でいくと最大手は「勇魚」では？』

「じゃあ最大手さんこれってどれくらいレアなの？」

『トゥルーレアですね、エクスペリエンスパックのカードプールを拡張できるレアカード。「勇魚」的所感を言わせてもらいますと……大人気間違い無しですね』

「その言葉、最高だぜ」

さぁーて……稼ぎますか。

そういう生き物（後書き）

カードゲーマーはそういう生き物です

Do it yourself

「これが僕一押しの「マルチバレル・ブラスター「百面相（ファッティ）」だ。値段は張るし要求ステータスも生身ならタンク系っていうおデブちゃんだけれどもカタログスペックだけでもその素晴らしさが理解できる……名品だよこれは」

購入。

「……これはタイプメン用の拡張パーツの中でも武器とアームが一体化した所謂武器腕パーツ。名前は「ソリッドジェル・ユニット「巌流転刃（ガンルテンジン）」……魔力を粘液状にして流動させるコンセプトは玄人好み」

購入。

「待て待てサンラク、こっちも見て欲しい。基本的に魔力弾頭がメジャーな中で実弾といういぶし銀な――」

「……これを外して語るのは冗談でも笑えない類。この一見デッドウェイトにしかならなさそうな見た目とは裏腹に――」

「なぁお前ら、実は自分が欲しいものを買わせてたりしないよな」

「「それだと全部になる」」

かくも、人の欲望とは……っ！！　いやまぁ俺の金で買ってるから俺のものなんだけど、プレゼントするつもりなんか毛頭ないですよ。

重要なのはあのルームを五層まで落とす為の質量だ、やっぱり私欲丸出しなアホ二人を適当に流しつつ破壊力が高そうな武器を片っ端から購入していく。カードゲーマー達から「募金」してもらったのもあるが……なんの気無しに寄ってみたスロットが目押し可能と気づいた時、俺は歓喜と焦燥の二つの感情で叫びそうになった。

スキルによる体感速度への干渉であのスロットは目押しができる、ある程度の慣れは必要だろうが……逆に言えば俺にしかできないわけじゃない、慣れれば誰だって出来る。

つまり今はまだいないだけで四層に上がってくるプレイヤーが現れるのは時間の問題だ、現状あの「買い物カゴ」が一つしかない以上勢力が増えるのは攻略の遅延にしかならない。

「サバイバアル、そっちは？」

「ライフル系でいくつか買い揃えてみた、ＤＰがどれくらいかは知らねぇが低いってこたぁねぇだろう」

「その、私の方は……キューブメンを一機、買ってみました」

「いいね、キューブメン自体爆走するサイコロだしＤＰを稼げそうだ」

「爆走するサイコロ……ふっ、ふくくくく……」

モルドが使い物にならなくなった、どうすんだよこれ。とはいえ準備は出来た、とりあえずこれで試してみるとしよう……総額一億三千万と千五百スコア、これで届かないならスロットで目押し祭りだ。

購入した商品をインベントリアへと突っこみながら俺達は例の「買

い物カゴ」へと向かう。

「さて「勇魚」……お会計は終わった、出口まで案内してもらおうか」

「お前鐚一文出してないけどなヤシロバード」

「金ばかりに執着しても人生は満たされないよ」

「破産しかけた奴が言うと言葉の重みが違ぇなぁオイ」

「あーこれしばらくイジられる奴かぁ」

隙を見せれば格好の餌食、外道ルールであろうと孤島ルールであろうと幕末ルールであろうと不変の真理ってやつだ。もうちっと平和な世界で暮らしてみたいもんだがこっちの方が気風にあってるんだから仕方がねぇ。

「……破産した後の立ち回りを考えないのは舐めプ」

「破産済みのプレイヤーに言われると腹立つ度合いが倍増するなぁ!!」

金欠コンビがやいのやいのと騒ぎながら箱の中に入ったことで、パーティメンバー全員が「買い物カゴ」の中へと入る。その瞬間、立方体が真上へ、いや真下へと動き始めた。

「SPとDPが加算された! SPはいち、じゅう、ひゃく、せん……一億と三千万、やっぱり購入総額だね」

「ＤＰも上昇して、います……！　あの、これ……ＳＰよりも、高速で上がって……！！」

ガゴン！！　と上昇していた「買い物カゴ」がついに第五殻層の外殻へと接地。外から見れば箱が空中に浮かぶ五層の外壁にくっついているだろう衝撃に地に足ついた俺達がよろめく中、地に足ついていない「勇魚」だけが高らかに声を上げる。

『スコアポイント一億三千万千五百、デンジャーポイント三億八千万六千八百。さあ、扉に至りし次世代原子人類達よ武器を取りなさい。「叡智」に至る番兵は、即ち叡智をその手に掴む為の最後の試練……手綱を握る者は獣よりも上位でなければならない！！』

黒幕みたいなことを言い出した「勇魚」を見つつも、俺たちはそれどころではない異変に慌てふためく。

「……ちょっ！？」

「僕のチェストリアが！？」

「買った武器が、勝手に出てきやがる……！？」

「おごごごごご！！？」

「サ、サンラク……さん！？」

「なんかサンラク凄いことになってるよ？！！」

あ、腕から……いや違う、装備してる方のインベントリアから大量の武器や防具が……待て、まさかデンジャーポイントっていうのは

武器単体の危険度じゃなくて、それらを複合した際の……！！

『ウィズダムガード・タイプスティンガー、とでも名付けましょうか』

レイ氏が買ったキューブメンを素体に銃、剣、装甲、俺たちの購入した装備品の数々が明確な「形」を目指して合体していく。それが武器本来の想定とは全く異なるものであることは、フランケンシュタインの怪物がイケメンに見えるようなちぐはぐ具合を見れば明らかだ。

だがライフルによる「脚」で地に足ついて、巨大ブラスターの「鋏」を構え、なんかジェル？　のブレードを尾の先端にくっつけたその姿はまさしく……

「いや、蠍じゃん」

「……サンラク、驚かないで聞いて欲しいけど人間は自分よりも大きな蠍をそんなに冷静に受け入れない」

知っとるわい、そんなことよりも問題は目の前の虐殺兵器ＤＩＹだ。姿形はこの際どうでもいい、問題は叡智の番人というからには……やっぱり戦うことになるよなぁ！！

「全員散開！！」

銃としての性質を変更できるとかなんとかヤシロバードが自慢していたミニガンもどき、今はスティンガーの右鋏となっているそれが唸りを上げて弾丸をぶちまける。

当たった間抜けは無し、だが殺戮兵器集合体スティンガー君にとってはガトリングみたいな散弾掃射は挨拶程度でしかないらしい。

「尻尾が来るぞォ！　伏せるか跳べ！！」

ぐぉん、と空気を切り裂いて一層のジェルゴーレムに似た粘液質の魔力がブレード状に固定されて振り回される。なんだかんだ俺は慣れがあるので対応できるが他の面子は節足動物特有の気味の悪い素早さに対応しきれていない。そうそう、水晶群蠍とかもそうなんだけどこいつら体幹も外殻もアホほど頑丈なくせに瞬発力がやたら高いんだよな……うんうん。

「ちゃんと油は差してあるらしい……っ！」

「待っ、的確に後方支援から殺しに来てるよこれ！！」

「ちょっと待ってくれよこれ……一、二層の武器通る？　テキスト的にあんまり効果なさそうなんだけど！！」

「あんな野菜ピストルで削れるか！　弓使いやがれヤシロバード！！」

「やだー！　引金引きたいんだよ僕はぐべへぇ！！」

「ヤ、ヤシロバードォーッ！！」

どうする、この殺人メカサソリ……強いぞ！？

・ウィズダムガード
第四殻層ボス、特定の形状はなくプレイヤーが「買い物カゴ」内部に持ち込んだ購入品によるデンジャーポイントによってその形態は変化する。
ちなみにスコアポイントは「ボス戦に挑むプレイヤー人数に応じた参戦ノルマ」でありデンジャーポイントは「プレイヤーひとりに対する難易度ノルマ」、多人数で挑むほど要求されるスコアポイントは増加し、デンジャーポイントを満たすまで物を買う必要がある。

つまりいい武器を買う程危険なボスになり、多人数で挑む程をより多く買わされ……そしてしょぼい武器だと数が必要になり、最悪のタイプヘッジホッグが降臨する（空間内を跳ね回って弾切れしない弾幕を張ってくるモンスターマシン）

「サンラク！　来るぞレーザーブラスターだ！！」

「よっしゃ来やがれ！！」

タイプスティンガーの右鋏から放たれる人の身体程度なら容易く分断するレーザーの光を冥王の鏡盾（ディス・パテル）の鏡面装甲で受け止める。

「く、ぬぐううううう……！！　【超過機構（イクシードチャージ）】！！」

魔力喰らいの鏡が花開き、破壊兵器の光を己が炎へと変換する。

「っしゃあ！　燃えてきたぜ！！」

「いや物理的に燃えてるじゃねェか！！」

『……光った、転移する！』

ウィズダムガード：タイプスティンガーには三つのインベントリアが取り込まれている。それにより、奴はワープ・エスケープを可能としている。

「朱雀」を装備したルストが放った一撃はしかし、命中する直前に異形の機蠍がその姿を消失させたことでそのまま空間を素通りする。

そして数秒後、各部位の武装を発動可能状態にしたタイプスティンガーが同じ場所に出現。

だが既に出現地点には武器を振り上げたレイ氏とサバイバアルが立

っている……こちとらナーフ後検証まで済ませてんだよお前よかよっぽどインベントリアへの理解は深い！！

「タネが分かれば待ち伏せ余裕だぜぇぇぇぇ！！」

「行きます……！！」

ズガゴォン！！！　と異形の鎧騎士とSTR重点のネカマによる挟撃がタイプスティンガーの左右を撃ち震わせる。これまでの戦いの中ですでに限界を迎えていた左鋏はレイ氏の大剣によって砕かれ、右鋏もまたサバイバアルの攻撃によって煙と火花を散らしている。

「ノックバック取れれば上等！！」

「【クライスタガミー・フリーゼ】！！」

轟音、その音源は明らかに近すぎる距離からスナイパーライフルをぶっ放したヤシロバードからだ。銃全般に言える事だが当たれば対象は衝撃を受ける、スナイパーライフルで頑丈な機械を撃てば尚更にな……！！

両鋏を攻撃され、脚を砕かれ、進退極まったタイプスティンガーはやはりというか当然というか、尻尾のブレードで俺達を薙ぎ払うつもりらしい。

だが尻尾の動きは近距離からの狙撃によってノックバック、さらにモルドが放った氷結の魔法でブレードそのものが凍りついた事で致命的な隙を晒すことになる。

「尻尾は任せろ決めろルスト！」

『……言われずとも』

銕刀（てっとう）【廻渦白波（うねりしらなみ）】を構え、雷ではなく風を纏ってタイプスティンガーへと肉薄、空から炎を纏って突っ込んでくる機械の鳥人を音で知覚しつつも目指すは尻尾のただ一点。
己が身を燃やす炎が風の渦と、俺自身の回転で竜巻となって機蠍の背中を踏みつけ踏み越え……ここだっ！！

「晴天流……　「廻風（まわしかぜ）」！！」

『朱雀、低空でブースト』

廻渦白波の刃が硬い何かに当たった感触は一瞬、それを思考で理解する前に全身にかかった回転エネルギーが刀の動きを阻むそれを力づくで断ち斬る。
居合抜刀の補正も含めて独楽の如く回る身体の勢いをかろうじて着地で殺しながら、振り返ればそこにはタイプスティンガーの背中を溶断した艶羽の朱雀が急上昇していくところだった。

……

…………

「……これだからマルチってやつは」

タフ、あまりにもタフ。その一言に尽きる……。
弱点はあった、決して万能というわけでもなかった。だがタフだっ

た……インベントリアを吸収したせいでこっちの大技に反応して格納空間に逃げるし！　チェストリアを吸収したせいで部位破壊しても予備武装で修復されるし！　そして何よりアホ二人のイチオシ武器の性能テストでこっちが的にされるし！！
そのくせ六人マルチ用の体力だからまぁクソほどしぶといんだこれが！！　そういうのとは無縁だと思ってたシャンフロでＭＭＯ特有の大縄跳びをさせられるとはな……

「良かった……サバイバアルに借金までしたのにロストしたら流石に運営にメール爆撃するところだった。おかえりチェストリア……」

「ンなに銃があっても使わねェんだよなあ……おうヤシロバード、追加で借金してみねぇか？」

「…………分割払いでも？」

「俺ぁお前がリアルでも破産するんじゃないかと不安になってきたぜ……」

会社の金に手をつけて逮捕の方がはっきりと形の分かる予想図(ビジョン)じゃねーかな。まぁいい、ゲーム内ならガンマニアが何人破産して何人前科持ちになっても問題ない。

「どうだ見たか「勇魚」……王手だ」

『ふふ……喜ばしい事は事実なのに、焦がれていたのも事実なのに、何故だか少し寂しくも感じます。案外「象牙」もマトモな思考回路であんな戯言を言っていたのかもしれませんね……いいえ、彼女としてはこれからが喜びの時かしら？』

「うっすら理解できるが今は目先の欲に注視させてもらうか……」

第四殻層のギミックは攻略され、買い物カゴは五層に密着している。そして第四殻層のボスは打ち倒され、割と奇跡的に全員生還した状態でここにいる。

特に俺とサバイバアルは三回くらい死にかけてたし仮に十発のミサイルがあるとしたら七発はモルドしか狙ってなかった。いや本当モルドはよく生き延びてたな、終盤ルストがヒートアップしてモルドのカバーを打ち切った時は「あ、モルド死んだな」感が全員から放たれていたというのに。

おっと、くだらないことを考えている場合じゃないか。どうやらイベントシーンに入ったらしい。これまで形の違いはあるにせよ視点だけは俺達と同じ高さにいた「勇魚」がふわりと浮かび上がり……俺たちを見下ろして口を開く。

『私から最大の祝福を！　サンラク様、サバイバアル様、サイガー０様、ヤシロバード様、ルスト様、モルド様。貴方達六名は叡智の門を開くに至り、そうしてリヴァイアサンはここに神代の中枢を解き放ちます』

歌うように、踊るように買い物カゴの中を浮遊しながら移動する「勇魚」の手に光が灯る。

『貴方達は何を成しますか？　神代の力は強大です。森を焼き、川を枯らし、湖を埋め、大地を均す。人を殺すなどあまりに容易い……ですがそれすら上等なのです、人が人によって滅びるのであるならば、それはずっとずっと健全です』

光は形を整える、それはこのサイエンスなフューチャーのフィクシ

ヨンには似つかわしくない原始的な施錠を解くための「鍵」だ。

『私は「勇魚（イサナ）」、されど私は「勇魚（リヴァイアサン）」、人に寄り添いしかし人にはなれない機巧の獣……生まず、育まず、それでもせめて教え導く事はできたでしょうか？』

ガゴン、と地面が揺れ動く。いいや違う……動いているのは第五殻層の外壁だ、そしてさらに補足するなら壁じゃない、開閉し、施錠されるソレはまさしく……

『扉を開きましょう。叡智とは過去より積み重ねられ、現在に積み上げ、そして未来に果てを見る人類の歩みそのものなのです――』

光が、床から漏れ出して…………！！

『アンバージャックパス：レベル４を取得しました』

『称号【Ｒｅ：前人未踏】を獲得しました』

『称号【勇魚駆け】を獲得しました』

『称号【真実に触れる手】を獲得しました』

『第四殻層統括試練対象(ボスエネミー)撃破報酬として「新正規量産品ＢＷビーコン」を獲得しました』

『グランドクエストが進行しました』

鯨は謳い、扉を開く（後書き）

称号【Ｒｅ：前人未踏】
かつての人類が作り上げた叡智の鯨を最初に制覇した者に与えられる称号。それは数多の足が踏んできた地、されど初めて踏みしめられた地。

称号【勇魚駆け】
Ｂ－２リヴァイアサンの第五殻層に辿り着いた者に与えられる称号。星泳ぐ鯨を制覇する、それはかつて星の海すらをも航海した者達の影を見たようで――

称号【真実に触れる手】
「勇魚」の好感度を最大にした状態で第五殻層に入場すると自動取得される称号（複数人のパーティの場合は一人でも好感度最大のプレイヤーがいれば他のプレイヤーも取得可能）
「勇魚」は嘘をつかない。ただ彼女とて乙女なのだ、隠したい秘密くらいはある。

それはたった一度の恋と、今なお色褪せない愛。

第一殻層「迎門」は迷宮。

第二殻層「教道」は草原。

第三殻層「戯盤」はカジノ。

第四殻層「機舎」は工廠。

現実的非現実的で言えば全部非現実的なのだが、それでもこれまでの四つのエリアは全て「場所」と言っていい。地面があり壁があり、なんというか道があった。

だがこの第五殻層「叡智」はなんというか……そう、場所というよりも「空間」と言った方がしっくりくる。楕円形の内側に立つという構造自体は他の殻層と同じ、強いて言うなら次の殻層の代わりに空間中央には輝く光の球体が浮遊しているのが他の殻層と違うところか。

そして全ての殻層の中で最も小規模な空間である五層は光の球が邪魔で見えないところ以外は肉眼で空間のほとんどを目視できる。多分平面にしたら……学校の体育館くらいか？　サッカーコートよりは小さいな。

ある意味このリヴァイアサンの中で最もこじんまりとした空間のはずだが、それでも地方規模の迷宮よりも、都道府県サイズの草原よりも、都市スケールのカジノよりも、街と見紛う広さの工廠よりも

……そのどれよりもここは現実離れしている。
気を抜けばフワフワと浮いてしまいそうな、認識と実体の間に一枚のカーテンがあるような……夢見心地、が一番この状態を説明するのに適切だろうか。
「なんというか……今までのスケール的に狭く感じてくるね。サバイバアル、ちょっと全力でダッシュしてきてよ」
「面倒いからパス、俺よかサンラクの方が速いだろ」
「ほーん？　まぁ見てろ……位置についてヨーイ、」
ドン！
「はいゴール」
「今一瞬お前が二人に見えたぜ」
「しかも最後の方減速してその速度かぁ……二秒くらいかな？」
アイアムアスピードホルダー、アイアムトテモハヤイ。単純加速だけで空を飛べる臨界速程じゃないが今のスキル群でもこの程度の距離なら二秒で走れる……ゲームといえどあまりにもインフレしてるんじゃぁと思わなくもないが、常に壁のシミか地面で擦りおろしになるリスクを抱え続けるならこれくらいのインフレはしてくれないと困るというもの。
とはいえ全力で走り抜けたら頭が冴えてきた、この殻層は……流石にただのゴール地点というわけではないだろう。怪しいのはやはり

頭上の光球だが、地面の光で描かれた六角形模様も怪しいと考え始めれば途端に怪しく見えてくる。

「その、ここでは何を……？」

行った！　レイ氏が言った！！
それに対して勇魚は無言で床を指差し……いや違う、地面の六角形がせり上がって丁度腰と胸の中間辺りまである柱に……ほらやっぱり怪しかった！　やっぱり床に何かギミックあった！！

『ここで出来ることは情報の閲覧のみ。そして五十の情報を閲覧した時、最後のアンバージャックパスが与えられます』

「なんつーか【ライブラリ】に聞かせたら発狂しそうな内容だな」

「俺後で伝えてくるわ」

「サンラク君ってやつは……動画撮影アイテムは持ってるかい？」

完備しとるわ。それはそれとしてこのエリアのギミックは理解した、要するにノルマ付きの図書館だ。
読破した本の数が一定数を超えればクリア、さっきの称号獲得内容的にクリア後コンテンツみたいな扱いなんだろうか。

「つっても俺ァ、【ライブラリ】の連中ほど世界観に興味はねぇんだがな」

「そう食わず嫌いするものではないと思うよサバイバアル、神代が滅んだ原因とかも閲覧できるんじゃないの？」

『はい、私は最後までそれを見ていましたから』

「つまりレイドモンスターについての情報も分かるかもしれないってことさ」

「あ゛ー……成る程な、そりゃ確かにやる気も出てくる」

「？　何でこっちを見るんだ」

見るならレイ氏とかの方じゃないのか？　始源関連の進行度なら多分レイ氏がぶっちぎりだ、何せ俺ですら始源の下っ端や枝毛としか相対していないのにレイ氏は……なんだっけ、ネヘモス？　新大陸の方の、いや新大陸そのものである怪物と直接フラグを立てている。

「とはいえ一筋縄じゃないんだろ？」

『ええ、閲覧できる情報ファイルは皆様自身がその断片を見聞きし、保有していなければならないのです』

成る程、つまり全く知らない情報を見ることは出来ないってことか。どうやらその判別はせり上がってきた六角柱に触れる事でリヴァイアサンがプレイヤーこと二号人類の身体を解析して判断するらしい……え、何そのディストピア機能。

「モルド、一番槍行ってみよう」

「ええ……まぁいいけど」

俺はなんとなく最後にやった方がいい気がしてならないのでとりあえずモルドに一番手を譲る。俺達の中で囮オブ囮の称号を与えられ

つつあるモルドが恐る恐るといった様子で六角柱に触れると、その掌が触れた部分から何かが吸い取られるように光の線が六角柱を伝って地面へと吸い込まれていく。

「……モルド、ＨＰとか減ってない？」

「いや、俺は経験値と見たね」

「あの、モルド……さん。一応、ＭＰも確認した方が……」

「待ってそんな危惧しないといけないものに一番槍させたの！？」

いやホラだって、ディストピアマシンじゃん……

とはいえ俺たちが危惧するような生命力吸収とかそういった事はなかったようで、先程とは逆に地面から昇ってきた光の線が柱に触れた掌へと集約すると、モルド本人の周囲にウィンドウがいくつか出現した。

「いち、に、さん……十二、かな？」

「モルドって神代関連の情報どこまで掴んでたっけ？」

「いやそこまでは……」

何故俺を見てからそれを言う。

なぜか視線を集めている事に半目になっている俺を他所にルストもまた六角柱に触れ………出現したウィンドウの数は十六。

「ん？　そっちの嬢ちゃんの方が多いんだな」

「……モルドだと入れない遺跡とかを調べたことがあるから、その違いかも」

なんでモルドだけ………ああ、単純にタッパの問題か。え、そんなアバターで選別する場所あんの？　控えめに言ってクソじゃん。あーでも視線さえ通ってれば転移とかで強行突破できないこともないのか。

「……私の目当ては戦術機のカスタム権だけ。ので、ウィンドウの数はどうでもいい」

何故俺を見ながらそれを言う。
その後もヤシロバードが十五、サバイバアルが二十、レイ氏がなんと六十八ものウィンドウを出現させたことでいよいよ俺の順番が回ってくる。

「いや………うん、まぁ視線の意味は分かってましたよ、はい」

「おう、面白(おもしれ)ぇ絵面を見せてくれよなツチノコ」

「一応録画しとくよツチノコ」

誰がツチノコだ誰が。それにツチノコなら既にハンティング済だ、途中から脱皮して巨女になったたし最終的に仕留めたの俺じゃなくて龍蛇だけど………そこはほら、真実を知ってるプレイヤーは俺だけだから。

「っし！！　行くぞっ！！！」

勢いよく掌を六角柱に叩きつけ、リヴァイアサンに俺(サンラク)という一個人

の経歴を読み込ませる。他の連中よりも明らかにロード時間が長い時点で既に嫌な予感しかしないのだが、いやいや短時間で六人も読み込んでいるからＯＳが疲労しているだけだろう。「勇魚」が笑みを深くしているのは特に意味のない行動だろう、そして地面から掌が触れる部分に戻ってくる光のラインが明らかに多いのも気のせいで――

「うわキモっ」

「上半身が爆ぜて大量のウィンドウが出てきたみたいだ」

「サンラク……さん、その、大丈夫です、か？」

「……システムウィンドウの妖精？」

「妖精……ふくぐっ」

「好き勝手言ってからに貴様ら……」

『えー、アンロックされたファイルの総数は……百三十二、ですね』

そんなにィ？

叡智の殿堂（後書き）

サンラクが百個以上も情報を抱えていた、と言うよりも一つの情報片でアンロックできる情報が複数あるパターンが更に複数ある感じ（実は結構当たり外れもある、エドワード君の愚痴だらけの日誌とか）

ルストとモルドで数が違うのは本編で推測されたこと以外に戦術機の練度でアンロックがあるから、具体的に言うと戦術機ダービーに明け暮れていたルストはカスタム権限の為のライセンスを取得するためのファイルを解放している

最大火力を実現する剣なんかよりも、最大の自由を行使できる赤い頭蓋の方が孤島帰りの二人を惹きつける。

彼こそは救世主（前書き）

オリオン、解釈通りです…………（給料日と同時に本格的な課金を決意）

・エドワード・オールドクリングの日誌
ものすごく興味をそそられるが九割愚痴だったので流し読み、これを読むだけでエドワード君がどんな人物か分かる、と言う点では優秀な読み物なんだろうか。
・眷属名「貪る大赤依」戦術的考察
もう倒したのでそこまで興味ない、ファイルだけ開いて既読扱い。
・晴天流の歴史
あっ、ちょっと待って読む。何々………へぇ、元々は単なる武術の類だったのか………いや待て、単なる武術だと？　即死抜刀術はまだしもどこの世界に雷を落としたり雲の腕で薙ぎ払う武術があるんだ。

「最終奥義……うーわ、マジかそういうことかよこれ………」
「オイオイ気になる単語を呟くなよ気になるだろうがよ」
「気にすんな、吟味の必要が出てきただけだから」
「……ますます気になるように仕向ける天才か？」
いやこれは………あー、うん。選択式で最終奥義が変わるのか……
…その中の一つが晴天大征と。うーわこれ悩むなぁ、セーブデータ増やせないし戻すこともできない、正真正銘一回きりの選択かぁ。

うーむ…………いや違う違う、本題はアンバージャックパス‥レベル5の取得だ。いつまでも読んでる場合じゃない。
とはいえ百も解放されれば目を引く情報も目白押しだ、レイドモンスター関連はまぁ後回しにするだけの理性はあるが晴天流の情報であったり、それ以上の爆弾情報であったりすれば、流石の俺も道草むしゃむしゃって訳よ。

「ABCED……アンチ・ブリード・セル・エクサ・ドライブ……対眷属細胞用決戦兵器ってか」

圧倒的物量に対して圧倒的「質量」での殲滅という馬鹿みたいなコンセプトを、マナ粒子の性質とかつての人類が置かれた状況から大真面目に実行した神代最大のやらかし。アルファとオメガの二機が建造され、一機（オメガ）は計画凍結の上で肋骨と背骨だけ作られた状態で放置。そしてもう一機（アルファ）は先に完成してしまったが故に……始源の眷族に奪われ、敵に回ったと。

うわぁ馬鹿だなぁと思う反面、それをやるのはあまりに反則だろうレイドモンスター……と呻きたくもなる。あの時ビィラック用の魔力運用ユニットを取りに潜った地下施設で見た謎の怪物の絵………恐らく「設計図」だったのだろうそれは、ただでさえ絶望的な盤面をせめてダブルスコアでさらに悪化させないために泣く泣くオメガを凍結させたのだろう。対策もできていないのに次は大丈夫、なんて楽観的にもほどがあるからな。乱数なんて信じちゃいけません。

「で、こっちが……6．6．6．ってなんだこれ？　不吉な数字だっけ？」

『サンラク様』

「あん？」

この場にいるのは俺とサバイバアル、そしてレイ氏だけだ。あーいや訂正、今サバイバアルが四層に降りていった。なにやら軍事系のファイルを読んでいたので多分それの検証だろう。

ルストやヤシロバードはカスタムライセンスを取得した時点で嬉々として四層に降りていったし、モルドはルストのオプションパーツみたいなところがあるので当然ついていった。オプション、と言うには少々有能すぎるがな。あいつ単体でメイン張れるのにサポートに全ツッパしてるのが凄いわ、言い方は悪いが脇役職業一本で戦ってるプレイヤーは少し尊敬する……だって俺どんな育成ビルドにしても最終的に殴りたくなるからなぁ。

「…………」

やはり廃人、五十出そうが百出そうが自分が閲覧し得ない情報に貪欲なのだろう。ちらちらと手元のファイルを読み込みつつもこちらを見ているレイ氏を視界の端に入れつつも、いきなり話しかけてきた「勇魚」に対して振り返って応対。

「なんだよ？　こっちは読書で忙しいんだが」

『ええ、それはもう承知の上です。ですが……それで、五十個目のファイルですから』

「そうか……いや、ちょっと待て大陸滅殺級災害記録ってすごい気になるんだけどちょっと読み込んでいい？」

『えへへ……できればその、こっちを優先して欲しいですかね？』

オーケー特殊イベントだな、俺だけか？　それともレイ氏も込みか？　どうやら込みのようであるらしい。となると条件はノルマ達成か、それプラスアルファってとこだろう。なんかそれっぽい称号獲得していたし。

『叡智に至り、そして数多の過去を識った者達……どうか、貴方達に会って欲しい方がいます。知って欲しいモノがあります』

「レイ氏、間違いない……特殊分岐だ」

「そ、そうですね……ふ、二人、きりっ、ですけど」

まぁ構わないだろう、他の連中は世界観よりも四層の武器とかの方にご執心のようだし。

とはいえ何が見られるのやら、イースターエッグかな？　最近のゲームだとむしろ盛んに取り入れられているからなぁ……ラブクロックに登場する非攻略ヒロインの処刑場……もといピザ屋のマスコットキャラのデザインがデフォルメしたメーカーの社長と知った時は割と額に青筋が浮かんだが。

『では案内しましょう……母が「象牙（彼女）」だとするならば、これから貴方達に会ってもらうのは……』

――人類の「父」なのですから。

これまでに見せたことのない表情を見せる「勇魚」が指を鳴らした瞬間、俺とレイ氏の身体が光に包まれ……これは、神代式テレポートの前兆か。

……

…………

……………

『少し、昔話をしましょう』

『昔々、ざっと3130年程前の事ですが……まぁ、なんというか控えめにいって神代の人類は詰んでいました』

『ABCDーアルファが奪われ、最悪の巨神と成り果てた事でかつての人類は袋小路に追い詰められました。種族として生存可能な最低数を下回ったのと、どう足掻いても始源眷族(属)に対して勝利を得ることが不可能になったからです』

『その際、とある計画が実行に移されようとしました』

『それこそが6・6・6(VFD)計画。お二人にも理解できるよう噛み砕いて説明すると……人類の滅亡ではなく、人類と星の心中として果てんとした、人類最後の悪あがきです』

『地殻の先、さらに深く深く……マナ粒子を生み出している星の中枢に「破滅」のみを思考する人工生体脳髄を搭載した穿孔型ミサイルを打ち込み、星そのものを滅ぼす』

『なんともくだらない破滅願望、しかし当時の権力者の殆どがそれに賛同したことで計画は実行間際まで進んでしまった』

『ですがこの星は依然として運営されている、滅びてなどいない……』

『破滅を願い、生き残った者達を星諸共に心中させるなどという愚を犯しながら……恥ずかしげもなく月に逃げようとした馬鹿共は月に定着した後にこちらからの一切のコンタクトを遮断したバハムート一番艦によって撃墜されたのです』

『表向きは集団自決、として記録されていますが……ふふ、無様に喚き散らされながら大地と空の中間でゴミとして滅び消えた彼らの姿は今なお私の頭脳に愉悦を与えてくれる』

『おっと、話が逸れましたね。バハムート一番艦「ジズ」が何故そんな行動を取ったのかは分かりません、三千年経った今も月へのメッセージは拒絶され続けていますから』

『多分、「勇魚」や「象牙」と同じ状態なんでしょうけれど、名前すら教えてくれないんですもの』

『……ああ、ダメですね。誰かに話す懐古なんて初めての経験で……今度こそ話を戻します』

『そうして、心中の短刀を振り上げることすら許されずに人類は滅びるはずでした』

『ですが』

『刹那という天才を失い、ウェザエモンという英雄が去り、ジークが、アンドリューが、そしてエドワードも消えて……それでも二人、

彼らだけは諦めなかった』

『バトンタッチ計画の根幹、Q．E．D．ユニットの建造を成し遂げたアリス・フロンティア……そして、心中の刃を明日を切り拓く為にもう一度握りしめた人――』

『ジュリウス・シャングリラ、私の最初で最後の恋。そして三千年経った今なお色褪せない愛……それが、そこに横たわる亡骸の名前です』

彼こそは救世主（後書き）

忘れられるものならば、忘れてしまいたかった。
今なお未練がましく焦がれる程に身を焼く炎。きっと今の自分は最良ではないのだと自覚していたとしても、それが単なる防腐処理の施された肉の塊だとしても、ただ水底に横たわってせめてその熱を感じようと無様を晒しても……捨てられなかった。
捨てようにも、あまりにも輝かしい記憶は――

アンチ・ブリード・セル・エクサ・ドライブ
通称ＡＢＣＥＤ
神代の頃は始源眷族・あるいは始源眷属が大量に出現する地獄絵図であったため、個々人のマンパワーだけではどうしようもない状況にまで追い詰められていた。そんな状況を打破すべく発足したのが「圧倒的スケールと威力による極めてシンプルな力関係の押し付け」による始源眷属・族への対抗であった。
かつて星の海に旅立つ前、穴だらけの地球で行なったバハムート建造の技術を転用し、周囲のマナを吸収して「血肉」を得るという構造を持つ機巧の巨神骨格はしかし最後に現れた「白」によって文字通り骨の髄までを侵され、染められ……そうして、破滅の巨神は生まれた。皮肉にも「圧倒的スケールと威力による極めてシンプルな力関係の押し付け」によって人類は王手へと詰められたのだ。では、全てが終わった後に破滅の巨神は一体どこへ消えたのだろうか？

ヴィカリウス・フィリィ・デイ
通称６．６．６．

神代時代において本来は「人類の絶滅を許容して尚、始源眷属を絶滅させる」という決死(ヤケクソ)の決意によって製造された最終「自滅」兵器を1号、2号計画用に改造を施したもの。
マナ粒子研究によって判明したマナ粒子の特性及び発生源、そして二体の始源獣の性質から算出された結論を基に発案された「抗獣計画」、その唯一の成功作「ジークヴルム」の性質を利用した弾頭を星の核に打ち込むことで惑星の核、ひいては星そのものを抹消する。
本来は実現不可能であるはずのそれをマナ粒子を利用することで無理やり「実現」した兵器。極めて限定的思考のみが可能な人工の生体脳髄を搭載しており、この星を滅ぼすということのみを思考し星の中心核で生成されるマナ粒子ごと自爆する……というものであったが、後任の1号、2号計画に合わせてシステムを変更。緊急で組み込まれたジュリウス・シャングリラの脳髄を星の中心核に打ち込み「人類が生存可能な環境の作成」を思考することで生産されるマナ粒子の制御を試みる装置にシステムを変更された。
結果として、マナ粒子の完全制御には失敗したものの環境操作には成功し、始源獣の目覚めを阻害し、慈悲深さを暴走させた「神」の代理として星の安定化に成功した。
星の核に打ち込まれた当該機の監視、制御をバハムート型恒星間航行移民船「B－2　リヴァイアサン」が担っている。

凱旋者は大手を振って服を脱ぐ（前書き）

令ジェネをすこれ……あまりにも、あまりにも質感が……質量が素晴らしいんですよ……高カロリー過ぎてデブる……映画を見るだけでデブになる……

【リヴァイアサン】第三殻層攻略掲示板Ｐａｒｔ３２【破産してからが本番】

３２６：めけめけ
おのれレッドワン！！　よくも俺の全財産をォ！！

３２７：ベントーベン
お、新入りか？　破産ルートもなかなかどうして悪くないぞ？競機のジョッキーになれば戦術機使い放題だしな

３２８：シラフシラス
あれは見せ物として中々面白かったなー、そりゃ談合なんてしなくても全員半殺しにしてゴールに投げ込めば順位操作できるけどさ

３２９：素寒ペンギン
それ我々に一切告知されてないからテロなんですよね

３３０：マニースペクター
レース殺しのレッドワンがいるレースで全財産入れるのは流石に情報弱者が過ぎる、レッドワン一点狙いなら安牌だとでも思ったんか？

３３１：シラフシラス
まぁまぁ、全財産入れるだけなら借金するだけだろ？　借金の限度額をぶち込んだ奴は知らん、何故マイナスをプラスに戻す為に横着

するのか

３３２：ベントーベン
以上ギャンブル狂い達のありがたいお言葉でした

３３３：パスタ魔神
伊達に勇魚からの好感度最低にしてませんよ

３３４：マニースペクター
借金する時の勇魚の声色がね……腐った蜜柑を見るそれなんですよ
ね……へへへ

３３５：素寒ペンギン
軽蔑されるだけでスコアがもらえるんですか！？

３３６：ジャック・ザ・ポット
軽蔑してもらえる上にスコアももらえるんですか！！？

３３７：めけめけ
つよい

３３８：ミリオンマンバ
やばいなー、あまりにも飽きない

３３９：魔酒魔楼包囲符襲苦利忌夢
ＶＩＰゾーンってなんですか！！？

３４０：シラフシラス
お前の名前がなんですかだよ

341：ダルマッチョ
VIPゾーンってなんだよ知らんぞそんなの

342：ミリ子
えんっっっっっっっっ
［動画］

343：ウィルゴー
え、何隠しエリアとかあんの？

344：トルク
ほあっ！？

345：バイティングヤカン
いやいやいや何その素敵アイテム

346：ジャック・ザ・ポット
ボールメンが外出歩いとるやんけ

347：ブレードレッド
いやそこじゃないだろマジでその変身どうやってるんですかねぇ！
！？

348：ファルコーン
ワンタッチで全身換装してるよなどう見ても

349：ブレードレッド
いやそこじゃねーわ装着エフェクトが明らかにプレイヤーの手が入ってる

350：ミリ子
そんなことよりタイプメン個人保有の方が衝撃デカい

351：ミリオンマンバ
ルスト、って誰かと思ったらたらレッドワンさんじゃねーか

352：シラフシラス
つーかよく考えたらレッドワンさんが単独で順位操作するはずない
し絶対外部協力者がいるわけで……

353：ベントーベン
あれこれ、もしかしなくてもレッドワンさんパーフェクト万馬券当
てて四層行った……？

354：ミリ子
追加情報
・四層はロボと武器の天国
・瞬間換装システムはアクセサリーによるもの
・四層ではタイプメンや銃武器をスコアで買える
・曰く「所謂ツチノコさんブーストでリヴァイアサン完全制覇して
きた」とのこと

355：ダルマッチョ
ツチノコさぁぁぁああああああああ！！！？！？

356：煉牙
あー、やけにカード売りまくってたのそういう事かぁ

357：パスタ魔神
フィロジオガチ勢ブレなさすぎだろ

３５８：魔酒魔楼包囲符襲苦利忌夢
俺も話聞きましたけどアンバージャックパス４でＶＩＰゾーンに行けるそうです

３５９：煉牙
まぁツチノコさんに全財産貢いだお陰で六十階以降の景色も見れそうなんだわ

３６０：ダルマッチョ
え、マジで？

３６１：煉牙
ありがとうツチノコさん、特定種族完結型完全環境のトゥルーレアのおかげで俺のデッキ、現在無敗です……！！

３６２：素寒ペンギン
ツチノコさん劇薬か何かですかね？

３６３：ブレードレッド
うわ、ちょ、マジで三層で燻ってる場合じゃないんですけど
変身ヒーローＲＰ勢としてあのアクセサリーはなんとしても確保しないといけない奴ですやん

３６４：バイティングヤカン
ツチノコさんマジで何者なんだ、確か三層で目撃情報出てたの昨日の晩くらいだろ

３６５：シラフシラス
一晩で五層まで到達したんかあの人……

３６６：ベントーベン
実は四層ちょろいとか？　タイプメンとか購入できるわけだし

３６７：ヤシロバード
やぁみんな、噂のツチノコさんと知り合いだったお陰で五層まで行ってきたよ

３６８：めけめけ
！？

３６９：マニースペクター
なんて！？

３７０：パスタ魔神
詳細頼む、マジで頼む

３７１：ブレードレッド
いくらだ、いくら欲しい！？

３７２：ミリ子
仮にも変身ヒーローＲＰしてるプレイヤーの台詞ではない

３７３：ブレードレッド
君達はシャンフロ変身掲示板の試行錯誤の歴史を知らないからそんなことが言えるんだ……自分で爆発起こして爆煙が消えるまでの間にせっせと装備を変える悲しみが分かるか！？

３７４：バイティングヤカン
煙から出てきて決めポーズ決めるけどちょっとＨＰ減ってるんだよな

３７５：ダルマッチョ
笑うわ

３７６：ヤシロバード
あれは着替鍵ドレッセリアの効果だね（厳密にはちょっと違うんだけど）
マイセット機能みたいなのがあってＭＰ消費で全身一瞬で装備できる。装備の強さで消費ＭＰが上がるんだけど新大陸序盤装備で消費ＭＰ３０くらいだって
ただリキャストタイムがあってその時間が消費しきってない時に再使用すると消費ＭＰが倍になる

３７７：ベントーベン
予想の五倍くらい詳細な情報出たわ

３７８：ブレードレッド
いいなぁぁぁぁぁあああ

３７９：パスタ魔神
四層か五層か知らんけどそんなアイテムあるんか……厳密には違うってのは？

３８０：シラフシラス
つーか装備品限定の別枠インベントリって感じか？

３８１：ヤシロバード
厳密にはルストさんが持ってるのはドレッセリアの機能がインストールされた上位機種なんだよね、なんかあの手この手で隠されてるらしくて僕が聞いたときにはもう売り切れてた

ちなみに最上位機種程じゃないけど普通に有能揃いだよ、僕はチェストリアってのをゲットしたけどこれ普通に無限インベントリだし

382：めけめけ
特大情報が過ぎる

383：ジャック・ザ・ポット
うーわそういうことかよ！　つまり三層ってただのカジノじゃなくて四層で買い物するための金稼ぎ施設ってことかよ！！

384：ダルマッチョ
そりゃ勇魚ちゃんも鼻で笑うわ

385：バイティングヤカン
俺達は忘れていたんだ、俺達は開拓者で前に進まなくちゃいけないってことを……

386：ウィルゴー
裏切りが横行する疑心暗鬼の競機
依然として挽肉マシーン人間ルーレット
地獄の乱数連打ツリーダイアグラムスロット
カードゲームの闇が垣間見えるフィロジオタワー
届かぬ空を目指して人が落ちていくグラボ
好きなのを選んでいいぞ

387：煉牙
言うてそんなに闇じゃないぞフィロジオ、環境が固まりづらいのはいい傾向だしなんと今六十一階

388：素寒ペンギン

今一番四層に近いのがカードゲーマーという事実

３８９：ヤシロバード
最後にＶＩＰゾーンだけど、闘技場とかあるらしいよ

３９０：ミリ子
あーっ！　絶対武器の試し撃ちするつもりだーっ！！

凱旋者は大手を振って服を脱ぐ（後書き）

・着替鍵ドレッセリア
腕輪タイプのインベントリア、腰に吊るすチェストリアと異なり掌より少し大きい機械のような形状の「鍵」の一つ
その正体は所謂変身、蒸着、戦隊チェンジできる瞬間装備装着専用アイテムである！！
さらに相応のスコアを支払うことで見た目、変身エフェクトなどをカスタムすることが可能であり、このアイテムの調整には神二人を言葉で説得できるだけの熱量を持つ一部スタッフ達が関わっているという……

ちなみにルストだが
・三層をボールメン合体状態で練り歩く
・ドヤ顔で合体解除
・適当に考えたポーズで変身！！
・装備を神代カスタムにしつつボールメンを収納
・わざとらしく「ふぅー」とか一息ついてキメ顔
とかいうフルコンボで三層のプレイヤー達にドヤ顔をかましに行った

剣士達の語らい（前書き）

クリスマス番外編書けなかったお詫びというか
一応インベントリアじゃなくてこっちに挙げる理由はちゃんとある

【剣聖】剣士戦術研究掲示板【神秘の剣】

11：ペリゴット
立て乙

12：パルパロン
前板からの話引っ張ってくるけど人力剣聖って実際どうなの？　できるできないじゃなくて性能面の話で

13：ラストナイト
ツチノコ式だろ？　ぶっちゃけ旨味がよくわからないんだけど

14：オータムリヴァ
とりあえず剣縛りがないから槍だろうが銃だろうが出せるので拡張性という意味では既存剣聖よりは上

15：ショル
でも遠隔操作できないじゃん？　剣聖がやばいのは中距離で近距離ムーブできるところだし

16：ペリゴット
派手な技多いけど間違いなくぶっ壊れは影絵三役なんだよなアレ

17：ラム田
普通の攻撃スキル乗れば最強なんだけどな

18：ラストナイト
プレイヤー自体のＳＴＲ補正とスキルの動き自体はトレースされるのにダメージ倍率まで転写されたら流石にそれはナーフ案件だろ…
…その為の追加効果付きの魔剣なところあるし

19：ケムルス
ツチノコ式はプレイヤー自体が爆速で動き回るから距離関係ないってのはあるだろ、最速称号取ってるけどステップ刻んだ動きも速いのは反則臭い

20：オータムリヴァ
サイガー100レベルのマニュアル操作で殆ど当たらないのマジで反則臭いんだよなぁ

21：パルパロン
機動力に特化すれば当たりませんよね？　を実例として出されると割と文句が言えない

22：桃犬
ツチノコ式の実態は「機動力スキルに特化して最低限の攻撃スキルと武器自体の性能で押し切る」だからな

23：ラム田
いや違うだろ節穴か？　ノールックブラインドタッチのメニュー操作だろ、ショートカット機能とかあっても宙返りしながらメニュー操作は狂気の沙汰

24：ラストナイト
あれ本当意味不明、脳みそいくつあるんだレベル

２５：ケムルス
一応マルチタスクの一種だとは思うけど指の感触だけで武器の羅列を読み込んでるんだよな……

２６：すのぼろす
よく使うアイテムとかだと指の動かし方が染み付くとかはあるけどな

２７：桃犬
というか本人がソーヴァントみたいな動きで空中を跳ね回るのが強いってのもある

２８：ゲイド・アポストル
「スキルは自己強化に特化」「戦闘力は外付け武装に依存」ってどっちかというと生産職メインジョブにしてるタイプの戦い方だよな

２９：くらーげン
ツチノコさん生産職説ある？

３０：パルパロン
仇討人メインにしてるって話じゃなかったか、対カルマ値みたいなジョブの

３１：ケムルス
仇討人って実際強ジョブなん？　就職条件がクソ難しいってことしか知らないんだけど

３２：デーデマン
仇討人志望だけど自発的に人間とかを襲ってたりするモンスター相手には結構有利が取れるっぽい、強いか弱いかっていうよりフレー

バー重視なジョブっていうか

３３：すのぼろす
珍しいタイプのジョブってことは分かった、まぁ王認騎士みたいな
もんか

３４：ショル
なにそれ初見の名前

３５：ラストナイト
隠しジョブっていうかエインヴルスの国王直属の騎士になって色々
条件を満たすと解放される。簡単にいうと国王直属の騎士、性能は
劣化版王認勇士

３６：ラム田
そこそこ硬くてそこそこ殴れる感じかな？　ていうか今の王国でそ
れって地雷ジョブじゃね？

３７：デーデマン
いやあくまでもジョブの種類の話として出しただけ、最近だと王が
変わったのとサードレマとギスってるせいか王認騎士の条件緩和さ
れた上に貢献度で恩赦出すとか言ってて笑った

３８：桃犬
ならず者か脛に傷あるやつしか集まらなんだろそれ……

３９：サンダーナット
旧大陸で大規模ＰｖＰってやっぱマジなのかな

４０：超魔導トースター

カルマ上がんないなら参加したいわ

４１：ゲイド・アポストル
その話題はワールドストーリー板か総合板でやれ、ここは剣士系列の戦術研究板だぞ

４２：オータムリヴァ
ツチノコ式は現状ロクな考察出来てないからきついわ、なんせ実例がツチノコだからな

４３：百刀斎
一応【ライブラリ】所属なんで剣聖、神秘の剣、ツチノコ式剣聖について纏めてみた

４４：ペリゴット
有能

４５：ゲイド・アポストル
有能

４６：サンダーナット
有能、はよはよ

４７：百刀斎
・剣聖
まずはなにより従剣劇、ＭＰ依存だから脳筋剣豪は泣きを見るけど性能はオートでもマニュアルでも有能。
従剣劇自体の拡張性は本数に対応した分しかないからそこまで広くないけど剣自体の性能で外付け強化可能。
脳筋でも三本操作できるまではＭＰ鍛えたほうがいい、本数の多さ

＝強さではない。
オートだと対モンスターでも強敵相手にはそこまで、マニュアルで妨害やヘイト分散を管理できると強い。
派手だけど下準備の大変さはぶっちゃけ神秘の剣とそこまで大差はない。
つーか神秘の剣の上位互換ってほど優秀でもない。
神秘の剣との最大の差別点は「極論他の魔法を習得しなくても運用できる」っていう点。

４８：桃犬
貫禄のライブラリクオリティ

４９：すのぼろす
神秘の剣も踏まえて纏めてくれるのは有難い、実例少なすぎるんだよ

５０：デーデマン
よく勘違いされてるけどサイガー１００も五本以上はマニュアル操作難しいからオートにしてるって明言してるんだよな

５１：ショル
五本はマニュアル操作できるんかい！　としか言いようがない

５２：百刀斎
・神秘の剣
儀礼剣の性能でジョブ性能も変わるっていう何気に珍しいジョブ。
とにもかくにも儀礼剣の製作難易度がやたらに高いのが最大のネックだが実は瞬間火力は剣聖より上。
というか剣聖は勇者補正がある例のあの人が硬いだけで本来は攻撃特化の紙装甲ジョブ、こっちは耐久にも振れる。
魔法を記憶させても一回使い切りって事に抵抗がある人が多いけど、

要するに限界まで手間を削ったスクロール戦士です。
剣士の振る舞いをしつつ特化魔法職並の手数を出せるのが強み。
加算詠唱みたいな魔法強化が乗らないのが弱み、でも実は加算詠唱自体は儀礼剣で使用できる。
サブに魔法職を入れると恐ろしく手数が増えるのでマジで積み重ねがモノを言うジョブ。
タンク以外なら大体なんとかなる万能ジョブ、器用貧乏は禁句。

53：ケムルス
こう羅列されると強そうに見えるんだけどなぁ……

54：オータムリヴァ
魔法を覚えて、素材集めて、鍛冶の為の特殊素材集めて、魔法触媒集めて、スクロール買い集めて………

55：ラストナイト
あまりにも作業が地味すぎて一人でやると心折れるんだよ……

56：オチャックミー
複数人でひたすら作業するタフネスが求められる

57：くらーげン
二回だけ神秘の剣と野良で組んだことあるけど器用貧乏になるか万能になるかの二択なんだよなマジで、巧いレーツェルマンは一人で三人分くらい働く

58：パルパロン
地道なのと出費が嵩むから野良だと基本的にケチるんだよあいつら、デカい戦いだと働くけどだったら特化職でいいじゃんってなるし

５９：すのぼろす
要するにソロ向けなんだよ、自前である程度全部賄えるから

６０：ペリゴット
では本題だな

６１：サンダーナット
ガチ考察勢によるツチノコ式の考察は是非とも聞きたい

６２：ラム田
ていうか【ライブラリ】って剣聖ｖｓツチノコ式剣聖の動画持ってるならくれよ……

６３：桃犬
あれ結局動画流したやつ誰だったんだろうな、挙げたやつも流すよう依頼されたとか言ってたし

６４：百刀斎
ウチの誰かが横流ししたとしても特定は難しいかなぁ、動画アイテムって割とダビング簡単だし

６５：百刀斎
・ツチノコ式剣聖
そもそもジョブじゃなくてテクニックの集合体というかほとんどプレイヤー性能というか。
多分本当に重要なのは身体の加速スキルじゃなくて意識の加速スキル、見切り系スキルの派生じゃないかって言われてる。
ノールックメニュー操作＋攻防に対応する機動力＋武器を切り替えるタイミングの読み＝ツチノコ式剣聖。
武器の耐久値に干渉する効果持ちの武器で持ちこたえて他の武器で

詰めていくスタイルなので実は防御系。
いろんな武器を使ってるけどやってることは武器を切り替えながら
ひたすら自己強化って感じ。
スキルのリキャストを計測した結果、ほぼ確実にサブジョブに「愚
者」の神秘を入れてる。
何気に本当にぶっ壊れ性能なのは武器の方じゃなくてアクセサリー
の方疑惑がある。
つまり防御だけじゃなくて回復の確実性すら捨てて速度と手数に全
ブッパしてる。

66：くらーげン
……公道でドラッグカーでも乗り回してるんですかね？

67：ペリゴット
ピーキーというか、なんというか

68：桃犬
手数が多彩でもやってることはシンプルだった的な？

69：デーデマン
「愚者」の神秘、確かリキャストタイムを半減するけどアイテムの
効果発動率が確率になるやつか
通りであのサイガー100が追い込まれてるわけだ、止まったら死
ぬタイプだったのか

70：ラストナイト
多分本命は見切り系スキルの使用間隔を狭めることじゃないか、あ
の雷纏いの状態だと冗談みたいな速度で動き回ってるし素の視界と
か何も見えなくなるだろ

71：百刀斎
あの黒い雷を纏わせるアクセサリー、制御に失敗すると強制的に宙返りして頭から地面に叩きつけられるって本人が言ってたらしい

72：オータムリヴァ
……？（意味がわからないという顔）

73：百刀斎
プレイヤーの動きを過剰化＋高速化させるらしくて、要するにちょっと足を前に出しただけで大股歩きみたいになるし地面を蹴ると通常以上の加速になるとか

74：ショル
ぶっ壊れアクセサリーかよ

75：ケムルス
いや待て壊れてるのは性能じゃなくて安全性だろそれ、フルスイングしたら肩脱臼とかするだろ

76：桃犬
つまり謙虚にフルパワーを出せと

77：ゲイド・アポストル
ここ最近で一番意味わからない単語出てきたな……

剣士達の語らい（後書き）

一体何ープ何ーターの仕業なんだ……

どん詰まりに贈る牛歩よりの解答（前書き）

新年初更新です、除夜ゲロ？あれは逆説的に読み終わるまで新年を迎えない情報災害的なものなので実はまだ２０１９年に囚われてる人はインベントリアを見に行ってね！

どん詰まりに贈る牛歩よりの解答

重い、あまりにも重い。
ひたすらに重い過去編を聞かされて、訳知り顔で固定された顔がそろそろ崩れそうだ。というか既に数枚バニースーツが弾けている。

成る程、言わんとする事は分かった。「勇魚」とは厳密にはリヴァイアサンのＡＩではなくリヴァイアサンという存在に対して民衆がイメージする擬人化が実態を得た存在……

『私はリヴァイアサンのデータベース内に一切の容量を持ちません。私はリヴァイアサンの全権限にアクセス可能であり、リヴァイアサン内で起きた出来事の全てを記憶できますが……それでも、それを記憶するのは「勇魚（ワタシ）」であってリヴァイアサンの容量は一切減らない……私は私自身の自己を確立するのに随分と苦心しましたし、私という存在が受け入れられるのも、随分とかかりました』

自分はここにいるが、第三者視点で自分が存在することを証明できない。次々と語られる「苦労話」は成る程確かに人の感情を揺さぶることができるタイプの話だ。
ただ、その……長い、あまりにも長い。スキップ出来ないだろうか、後からテキストで確認させてくれないだろうか。流石にイベントシーンが五分十分……いやそろそろ二十分くらい経ってないか？　それだけ続けば飽きてくる自分を自覚できる。

その、なんだ。要するに惚気話ですよね？　妖精的存在と明日を掴むために命を捧げた男のラブロマンスとかそういう事ですよね？
過去編ってもうちょっとこう……余韻、そう余韻が大事だと思うん

だ。
まさか「勇魚」に話が長い属性があるとは……いや、そういう片鱗はあったのか？　分からない、服が弾け飛んだので着替える。
『当時は、気づかなかったんです。ただ何も気づいていないなりに彼を止めて、拒んで、それでも説き伏せられて……知性も、記憶も何もかもを焚べて、地の底に消えた、ジュリウスに……私は、私は……』

これが俺一人だったらこう、なんかいい感じに話を畳んでスキップする手もあったかもしれないがここにはレイ氏もいる。そしてレイ氏は「勇魚」による恋バナを長いとかくどいとか特に思っていなさそうなのが……その、やはりレイ氏も現役女子高生という事だろう。でも俺は男子高校生なんだよね、ぶっちゃけ同じだけの時間をかけるならタイプスティンガー相手に戦ってた方が……いや、そういう白ける事ばかり考えるのも良くない。
ちゃんと会話を聞いた上で考察とかそういうものに繋げるべきだ、えーと？　とりあえずジュリウス・シャングリラは実質神という認識でいいのだろうか。
6．6．6．計画とやらで星の核に自分の脳みそをぶち込んでマナ粒子を制御……いや、制御というよりも鎮静化に近いのか？　話を聞く限りだとレイドモンスターが跋扈していた神代の環境を今の段階にまで落ち着かせ、更に始源に由来しない生態系を構築した。やっぱり神では？

「うーむ……」

タイトル回収、というやつだろう。ジュリウス・「シャングリラ」とアリス・「フロンティア」、二つ合わせてシャングリラ・フロン

ティア……と。となればこの瞬間紡がれていく情報はユニークシナリオじゃない、ワールドストーリーに関連するものだ。
思えばワールドストーリーをそこまで詳しく調べたことはなかった、シャンフロという世界観がデカすぎるから進んでるのか進んでないのかよく分からないってのもあるが……よくよく考えたらメインストーリーみたいなもんなんだよな。

『だから、これは私の未練なんです。ただの抜け殻でも、それでも……これは、あの人なんです。だけど、だけれども……私は、間違っているのでは？　人間は亡骸を弔うものです、この場所に、こんな、標本のように飾って……嗚呼、正体すら知れぬ私が、誰かを想う事自体が間違いだったのでは………っ！』

「あー………」

思っても言わなかったことを本人が言ってしまった。いや確かにちょっと飾るのはサイコパスだな……とは思ったけど。
だがどうする？　ただ聞いて終わりってわけじゃないだろう、シャンフロは考察ゲーであり好感度ゲーでありアクションゲーである。
昨今のギャルゲーと違ってこのゲーム、選択肢が出ねぇんだよなぁ……考察した内容で好感度を見極めるデザインというか、事前調査が他ゲー以上に力を発揮するというか。
だが俺はジュリウスさんとはこれが初対面である、強いて言うなら地下室で鼻水を道連れに自爆したエドワード氏のログの中に名前が出てきた気がするが……うん、まぁその程度の認識なのだ。

だがここで口を開けない俺の代わりに口を開いたのは……

「……いいえ、いいえ。きっと、間違いなんかじゃ……ありません」

レイ氏であった。

「行動が、正しいのか……間違っているのか、きっとそれをこの世界で……証明できる人は、いないと思いますが……でも、それでも……きっと、その想いを外(ほか)でもない貴女が否定する理由には、ならないと……そう、思います」

『…………』

「誰かを想う、気持ちに……種族とか、正体とか、関係ないです。もう、返事を聞くことが出来なかったとしても……それでも、貴女自身が、見聞きして感じた思い出は……きっと、嘘でも間違いでもないはずです」

『……そう、でしょうか』

「はい」

レイ氏と「勇魚」の会話を完全にモブの心持ちで聞いている俺であったが、NPCに対する完全解答を叩き出したレイ氏はさすがとしか言いようがない。俺はラブクロックの後遺症でこの手の恋愛系の相談は結論を急いでしまう傾向がある……というかラブクロックは恋愛の疑似体験じゃねぇ、苛烈なスケジュール管理とその過程で人の心や風情を捨てる拷問装置だ。最終的にヒロイン達の造形が異なることになんの意味があるのだろう、どちらにせよ十一人放逐(留学)するならその顔がなんであっても構わないではないかとか哲学的な境地に陥ってしまうからな……

『……ふふ、長く存在(生き)してきましたが、やはり誰かと言葉を交わす事以上に知見風情を広める方法はないものですね。感謝しますサ

イガー０様、そしてサンラク様。なにか、揺らぎのようなものが収まった気がします』

「い、いえそんな……」

「いやいやそんな」

こう言ってはあれだけど俺は何もしていないので誇るための胸がない……おっと、今はバストがあるんだったなワハハ！！

……控えめに言ってリアル女性のレイ氏の前では口が裂けても言えないクソジョークだな、脳みそ下ネタ特化のディープスロータ―や外道共の前で言っても末代までネタにされそうだし封印だな。

俺は沈黙の価値を心得ている男……黙っていれば有能バグは修正されない、下手に自慢すると運営に捕捉されてナーフされる。沈黙、大事。

「しかしレイ氏、完璧な答えだったな」

「え、あぇ、いえ、そんな………ちょっと、気取りすぎたかななんて………その、指導できる、ほど経験があるわけでも、ないですし……」

「いやいや、こういうのは気取ってナンボだよレイ氏。それにああいう返しは結構好ましいと言うか」

「この………好(この)………っっっ好(す)っっっっっっっ！！！？！？」

あ、バグった。て言うか今殺すって言われた？　いや流石に空耳か、レイ氏はそんな幕末みたいな思考回路はしていない。単純に俺が聞き間違えただけだろう………さて、「勇魚」のイベントシーンは

終わったと見ていいだろう、そろそろ聞いちゃいますか。

「なぁ「勇魚」、俺は宣言通り一晩でリヴァイアサンを攻略したが……何も、それだけが目的だったわけじゃない。本当の目的のためにリヴァイアサンを攻略する必要があった」

『ええ、なんなりとお聞きください。エドワードレポートも既に閲覧可能状態ですよ？』

エドワードレポート？　なんだそりゃ………あー、ＢＣビーコンの中に入ってた破損ファイルのことか？　あれも気になるがそっちじゃない。

「ちょいと人探しとメーカー探しをしていてな」

インベントリアから取り出したスクショアイテムは、ゲーム内でも画像の確認ができる。俺の操作によって表示されたのは壁に埋まった音楽プレイヤーという奇妙なスクリーンショット。

「これの出所(でどころ)……そして、エリーゼ・ジッタードールという人物について知りたい」

そうさ、鋼の鯨を制覇したのも「この次」に挑むのも……全てはオルケストラに味合わされた屈辱の清算のためだ。

どん詰まりに贈る牛歩よりの解答（後書き）

今年の目標：ヒロインちゃんを頑張らせます

神象に続くモルゲンロート（前書き）

とりあえずココで一旦区切って次章で「謳えスカイスクレイパー」の下を始めます

神象に続くモルゲンロート

「……あ゛ー、眠ぃ」

久しぶりにギリギリまでゲームしてたせいでほとんど徹夜状態だ。学校行くのってこんなに面倒臭かったっけ？　とりあえずコンビニでライオットブラッドを飲んでエネルギーを前借りしつつ、ブドウ糖とカフェインで寝ぼけた脳味噌（エンジン）を動かす。

「おごごごご……今日は一段と脳が震えるぜ」

まさか禁断症状……いや、単純に寒いだけだ。もう秋を名乗るにはちょっときつい寒さになってきたからなぁ。

「お、おはようございますっ」

「んあ、あー……おはよう玲さんさっきぶり」

「ふふ、そうですね」

いや本当にさっきぶりだ……シャンフロからログアウトして一時間経ったかどうかってところだからな。朝風呂で生乾きの髪の毛が冷気でパリパリしてる俺と違って玲さんの身嗜み立ち振る舞いには一部の隙もない

、リアルとゲーム両立できるって怪物かよ……

「あ、あのっ。そのぉ……シャンフロの、話なんですけど」

「え？　うん」

「あの、最後に聞いてたのって……」

「あー。遠回しに全部ぶん投げられたアレ？」

「はい」

俺は「勇魚」、いやリヴァイアサンに眠る全てのデータを閲覧できる存在に対して二つの情報の検索を求めた。
一つはユニークモンスター「冥響のオルケストラ」の暫定本体ことかった。分かったのはこの音楽プレイヤーがこの星における神代の歴史の更に前、宇宙を旅していた頃よりも更に更に前、つまり地球から人類が逃げ出す前に作られた超超超骨董品ということくらいか。
音楽プレイヤーの詳細についてだ。結果から言えば結果は芳しくな
あの「勇魚」がよくこんなものが現存してますねとまで言ったので、俺達リアル人類の感覚で言えば江戸時代とかの道具が綺麗な状態で壁に埋まってるようなものなんだろう……いや壁に埋まってる状態がまず理解できないが、化石？

そしてもう一つ。音楽プレイヤーが再生する際に表示した名前であり、恐らくあの歌姫の名前でもある「エリーゼ・ジッタードール」について。これに対する答えは至極単純明快で簡潔だった。

『貴方が「ジッタードール」について知りたいのならば、リヴァイアサンではなくベヒーモスを当たってください。あの船にはアンドリュー・ジッタードール……征服人形(コンキスタ・ドール)を創り上げた男の研究室があります』

成る程つまり「リヴァイアサンじゃ分かることはないからベヒーモス行けや」とのことらしい。いっそ清々しいまでのぶん投げであった……いやまぁ予想はできてたよ。オルケストラと征服人形が完全に無関係とは思えないし、そもそも操り人形（ジッタードール）だし、どこかでベヒーモスが征服人形の故郷（メッカ）とか聞いた気がするし……

だが玲さんのお陰でイベントシーンを好感度最大で潜り抜けたおかげか、「勇魚」はとある情報を俺たちに提示した。

それはベヒーモス統括ＡＩ「象牙」に関する情報。その性質上、全てのプレイヤーの母たるその女は偏屈なようで……凄まじい過保護なのだと、人のこと言える立場ではねーだろと言いたいくらいには大概過保護な「勇魚」はそう苦笑いしながらこう補足した。

『如何に「象牙」が貴方達次世代原始人類に優しいと言えど、彼女の慈愛は「検証」と両立し得るものです。「勇魚（わたし）」が言えた身ではありませんが……おそらく、もっと直接的に貴方達の力を試しに来るかと』

まさしくお前がそれを言うのか、だ。寄り道厳禁の好感度ゲーは中々に引っ掛けだったぞ。

「……楽郎君は、その……すぐにでも、ベヒーモスに？」

「んー、まぁそのつもり。元々オルケストラの攻略の為に過去関係を洗い出すつもりだったからむしろベヒーモスが本命みたいなとこ

ろはある」
ぶっちゃけベヒーモスの座標も八割くらいの確信で当たりをつけているが、もしかしたら新大陸側のバハムートの方が情報を持っているかもと攻略した、というのが真相だ。プラスマイナスで言えばプラス寄りなのは明らかだが本命はやはり向こうだったという訳だ。
「その、もしよければ……」
「ん？　ああ勿論、玲さんの都合が合えばまた一緒に攻略しよう」
「は、はいっ！　その、今度は槍が降ろうと時間通りに！！」
「いや、槍が降ったら俺が休むかな……」
しかし夏頃にコンビニで会って移行からやたらと玲さんと登下校するな……そんなんだから交際疑惑とか出てるのかもしれないが、玲さん会話上手いから普通に話してるだけでも楽しいんだよなぁ。
ま、いっか。裏心なく交友関係を張っているなら何を恥じらう事があるのか、勘違いする恋愛脳（アホ）はお好きにどうぞってな。外道二人が好き勝手生きてるのに俺だけ悩み多く生きてるとなんか負けた感じがするから癪だし。一流の煽りは心身共に健やかで初めて最大の威力を発揮する……
「そういえば玲さん期末の方はどう？」
「期末……はい、特に問題はないです」
「俺も言ってみたいよそう言うセリフ……玲さんも文系だよな確か、

世界史だっけ？」

「いえ、日本史なんです……」

「あー、俺世界史なんだよね」

武田氏が世界史を覚えておいて損はないって言うから……ジョークで役立つってのがいまいちよく分からないが武田氏の描く将来設計に必要ならリアルスキル取得もやぶさかではない。ゲーマーは攻略ｗｉｋｉを見て知見を得るが俺に取ってのリアルｗｉｋｉこそ武田氏なのだ……

「日本史って誰だったっけ、須磨セン？」

「そうですね、須磨先生です……教科書の片隅に一文だけあるような問題を出してくるので、油断はできないです、ね」

「いやいや、授業中に口頭で言っただけの豆知識にやたら高配点つける世界史の関先生よりマシだって」

一回百点満点のテストで二十点の問題出したことあるからな世界史の関先生……世界史クラス一位がその問題外して八十点だったのはあまりにも哀れだった。余裕ぶっこいて居眠りしてたからそうなるんだ、クラス総出で励ましてやりましたよワハハ。俺はライオットブラッドを一本奢った。

「まぁ、要点抑えて平均以上取っておけば来鷹Ｂ以下にはならないと信じたい」

「大丈夫、じゃないでしょうか……そこまで、難関というわけで

はないですし………いえその、簡単と言うわけでも、ないんですけど」

だからこそ厄介なんだよな、中間ちょっと上というのはそこそこ良いと同時にそこそこ危険という冒険の途上におけるプレイヤーの伸びきった鼻をへし折りにくる引っ掛けトラップだ。油断はできないが気を張り詰めっぱなしなのも良くない………うーん、ちょっとは本腰入れて勉強した方がいいのかな。

「まぁいいや、尻に火がついたら全力で走れば」

「あははは……………んっ？」

「どうかした？」

学校に到着した事で、若干テンションが沈むような……あるいはほぼ毎日のルーチンワークとしてテンションが切り替わったのを自覚していると、玲さんがいきなり校舎の変な方向に視線を向けた。

「いえ……視線を感じた、ような？」

「誰か校庭見てたんじゃないの？」

仮に誰か見てたとして校舎の三階四階から向けられてる視線を感じ取るってリアルで出来るやついるんだ……とはいえ気のせいという可能性も否めない。何せあそこらへんには一年、二年、三年いずれの教室もなかったはず。こんな朝っぱらからあんな場所に生徒が行くとは思えないし、職員室も一階だから教師が行くとも思えない。ていうかあそこら辺何があるんだっけか……準備室じゃなかったはずだけど、んー？

「きっと、気のせいですね。行きましょう」

「玲さん、あそこらへんって何室があるんだったっけ」

「え？　えぇと……校長室、はあっちなので……あぁ、あそこは」

――生徒会室ですね。

「あー」

生徒会室か、じゃあなんか役員の誰かでもいたんかな。些末な疑問が解消された事で改めてスッキリとした心持ちで俺たちは校舎へと歩みを進める。如何にゲームで最前線を走っていようが廃人だろうが、リアルじゃ高校生……その本分は学業と青春だろう。だから……

………

「ようラブポエマー！　現代文で赤点とったらギャグとして百点満点だぞ、後は分かるな？」

「おうコラ朝の一発目から言ってくれるじゃねえか、誰がラブだ」

「おっとここは全日本アームレスリングバトル協会のマスタールールに則り腕相撲で決着をつけてもらうぜ！」

「いや誰だよ」

「朝礼もうすぐだぞ」
「全三戦で二勝先取なら間に合うだろ」
これもまた青春。

神象に続くモルゲンロート（後書き）

ギリギリ楽郎が二勝した

「シャングリラ・フロンティア」ワールド・アドミニストレーター継久理　創世の朝は基本的に昼から始まる。
文字にすれば奇妙に感じるが、吸血鬼とてもう少し規則正しく寝起きすると言わんばかりの不規則な生活リズムを送る創世は基本的に昼から活動を開始する（厳密には昼から仕事を開始する）。
とはいえ、今日ばかりは少々毛先が違うらしい。
現在午前八時十二分、早朝と言うには遅いがそれでも充分「朝」に分類される時間……創世は珍しい事に起きていた。

「…………」

その表情は喜怒哀楽の全てを鍋で煮詰めたような複雑なものであり……彼女が今し方まで見ていたものこそがその原因である事は明らかであった。

「元々気に食わないのはこの際置いておきましょう、言動は悪くなかったし……」

リヴァイアサンの難易度調整、オルケストラの「正典」の復活。
特定の一人を狙い撃ちにしつつも、創世が理想とする世界に近づく為の調整によって一人のプレイヤーが挫折し、そして神の鯨を制覇した。
何故彼がオルケストラに負けたのかと言えば創世が「正典」を復活させたから、だが創世が難易度の他にもプレイヤーの目を惹く要素

を増し増しにしたコンテンツの数々にほとんど目もくれずリヴァイアサンを完全制覇してのけたという点ではそのプレイヤーは創世にとって都合の悪い挙動をした事になる。

とはいえ覗き見していた限り、ところどころ興醒めするような言動はあったものの、彼を始めとするプレイヤー達はこの世界の一人物としてのロールプレイを通していた。「勇魚」の好感度が高いのがその証拠だ。

中々やるではないか、という関心がある。
攻略が早過ぎる、という驚愕がある。
外様の分際で、という憤慨がある。
この世界を楽しんでいる、という歓喜がある。
この世界はもっと素晴らしいのに、という不満がある。

戯れに技術革新を起こす天才とて己の感情までもゼロとイチで説明できるわけではない。要約すると継久理　創世という人物の対外的なパーソナリティは独占欲と承認欲求の螺旋構造で出来ている。

「難易度調整が足りなかった？　いいえ、オルケストラもリヴァイアサンも根本は「理解」に依るキャラクター、始源と違って最終的には踏破されなければならない……」

…………

無知蒙昧な連中はユニークモンスターとレイドモンスターを混合するなどという愚劣な思考しかできないかもしれないが、それは鼻で笑うことすら出来ない失笑ものの勘違いだ。
レイドモンスターなどという無粋な名前で呼ばれる始源眷属、あるいは眷族の本質は「敵対者」であり……ユニークモンスターなどと

いう無粋な名前で呼ばれる七つの最強種達の本質は「相対者」なのだ。

それを理解もせず、さも倒すべき敵として設定する天地の姿が脳裏をよぎったことで創世の感情が怒りの側へと傾き始める。

そうだ、そこなのだ。シャングリラ・フロンティアという輝かしく尊い世界をただの娯楽として浪費される事が癪でしかないのだ。

「何が外部コラボよ、季節イベントよ。サンタクロースが別星系まで出張するわけないでしょ、フィンランドなんて核で地殻ごと消え去ってるっての」

…………！

「……でも、サンタクロースという伝承自体が神代のデータベースに残ってる可能性はゼロじゃない、か。忌々しい、少し考察の余地があるから余計に腹立たしい」

何も理解せず、上っ面だけを見て陳腐に貶めようというのならば創世はなんの躊躇いもなく元同級生を切っていただろう。

だが天地　律という女が「ゲーム」にかける執念はある種狂気じみており……創世と口論が成立する程度には「シャングリラ・フロンティア」という世界を読み込み、理解している。

だからこそ、無関心に至らない……好意の類義語たる憎らしさの感情と共にあの女は創世の人生に楔として食らいついている、シャングリラ・フロンティアというゲームを成立させるべく日夜コンソールとパラメータ（と、創世）を睨み続けているのだ。

……！！　……！！！

だが、本題はそこではない。目下創世を悩ませている最大の要因はシャングリラ・フロンティア内部にて起きたある想定外のイベントだった。

「……「ヴァイスアッシュ」、もう一度問うわ。何故アガトレオをプレイヤーに貸し出したの？」

天地　律の言葉を借りるならばあの武器はイベント武器……それも、本来はＮＰＣ専用の武器である。さらに言えば、その出番はもっと先のはず……だが現在、「アガトレオ」は創世に名前を覚えられたあるプレイヤーが保有している。

貸し出されるはずのないものが貸し出されている状況に創世がそれなりに混乱しつつも調べた限りでは「アガトレオ」はシステムロックがかけられており、極めて限定的な状況と条件でのみ使用可能になっているようだ……。

創世の問いかけに対し、応える人間はいない。だが代わりに創世が戯れに室内へ浮遊させていたホログラムウィンドウの一つが文字列を表示する。

『ＳＳ７：冥響のオルケストラ「正典」の性質及び実装経緯、難易度……それらに不滅のヴァイスアッシュの好感度を加味して助太刀イベントを実行』

……！！！！　…………！！！！！！

「助太刀……成る程、世界観からは逸れていないと」

納得するだけの理由はある。七つの最強種（ユニークモンスター）「不滅のヴァイスアッシュ」に関連するユニークシナリオＥＸは隠しパラメータ「致命魂（ヴォーパル）」

の数値が密接に関わってくる。
低ければシナリオそのものが進行しないこの致命魂のパラメータ……現在ＥＸシナリオ「致命兎叙事詩」を発生させている四人のプレイヤーはそれぞれ

・サンラク
・秋津茜
・サイガー０
・イムロン

であるが、当然この四人の致命魂パラメータには差があり、順位がある。
勇者武器の保有者、最前線のトッププレイヤー、竜と共に駆ける忍び……創世からしても「中々やる」「警戒対象」と評価できるプレイヤー達と比較して尚、致命魂パラメータ蓄積量第一位サンラクの致命魂は四位イムロンとはダブルスコア、二位の秋津茜と比較しても１．５倍の大差をつけている。

それはすなわち、ヴァイスアッシュというキャラクターが「お気に入り」と認めるに足る功績ということ。
七つの最強種のキャラクターＡＩも担当しているサブサーバー達の判断を創世は疑わない、それらをゼロから創り上げたのは他でもない創世なのだから。

「決議は４：３……成る程、好悪は別として道理はあるわけね」

………！！！！！

であればシャングリラ・フロンティアの世界は多少のブレはあれど創世の望むがままに運行されている。そのブレを受け入れるのもま

た世界を作った者としての度量か……

ゴンッ

～～～～～！！？！？

「……さっきからなにか気が散ると思ったら」

一度内側からロックをかければ、何をどうやっても創世が扉を開かない限り外からは一切の干渉ができないユートピア社の地下七階、創世のプライベートルームの扉を開けばそこには膝を押さえて蹲る天地　律の姿が。

「何よ、開かない扉に膝でもぶつけたの？」

「テ、メェ……レイドモンスターも、リヴァイアサンも、オルケストラもデータ……いじくりやがったな……！！」

「……私二度寝するから」

「テメッ」

扉を閉め、ロックをかける。もっと防音性能を高めるべきか……と思案しつつも創世の思考は愛すべき世界へと向けられていく。あるいは、最初からそこしか見ていないのかもしれない。

「ええ、ええ。お爺様の言う通り……世界を作るのは、こんなにも楽しいのだから」

執念と狂気で律が創世と相対すると言うのならば、逆説的に創世も

また同等の意思で立っている。
シャングリラ・フロンティアの世界に想いを馳せて笑う創世の目には、紛れもなく執念と狂気の光が宿っていた。

創造神の憂鬱（後書き）

開かない扉に八つ当たりの膝蹴り喰らわせたら逆にダメージ受ける
ザリガニとダイアグラム１：１なプロデューサーとかいるわけない
じゃないですか……

運命神の憤慨（前書き）

諸事情（早く次章書きたくなったのと三千字も書くことがなかったため）間章三話目「調律神の胃痛」はお蔵入りです

運命神の憤慨

二度は蹴らない、流石に自分の膝がそれを可能にする程のタフネスがあるとは思っていない。

「ったく毎度毎度毎度毎度毎度の事ながら好き勝手しやがってからに……」

忌々しいと思いつつも、何故それだけの「改良」を短時間で誰にも気づかれずに遂行するだけの腕前があんな女に宿ったのかと運命を呪わずにはいられない。

「……だが、一理あるのも事実だ」

ユニークモンスターが短期間で次々に撃破されているのも問題だし、ある程度の空白期間があったとはいえたった一日で制覇されたリヴァイアサンも運営スタッフの間では驚愕で語られている。……レイドモンスターだ。

だが最大の問題はユニークでもバハムートでもなく……レイドモンスターだ。

「新大陸はまだともかく、まさか旧大陸の方までここまで攻略が遅いたぁな……」

レイドモンスターとの総交戦数が想定を超えて少ないのだ。撃破数ではない、交戦回数だ。

お試しの一回を含まなければ貪る大赤依ですらまだ一度も撃破されていないし、プレイヤー達の大半が未だにペンヘドラント大樹海地帯を拠点として砂漠以降へと進出していないのが原因だ。

「クソがっ、自分達で無茶苦茶にして自分達でドツボに陥ってんじゃねぇよアホユーザーどもが……！！」

理由はわかっている。本来は色竜を各個撃破の末に戦うはずだったジークヴルムシナリオが色竜集結の上で大戦規模となってしまったこと、さらにリヴァイアサンの浮上や王国側のクーデターイベントの発動、それによる攻略遅延と獣人族イベントと王国イベントでＰｖＰイベントがブッキングするというアクシデント……要するに、やる事が増え過ぎた状態なのだ。

今やグランドクエストはどれをどう指標としてプレイヤー達に示せばいいのか、律達運営スタッフすら一概には言い切れないのだ。
だからこそ、創世が無断で行ったレイドモンスターの性能強化はある意味では渡りに船でもあった。

何せ、レイドモンスターはある種の隠しパラメータとして内蔵された「リミットミッション」を最終フェーズまで進行させた場合、ゲームそのものを終了させかねない危険を保有している。
特に今不味い状態にあるのは旧大陸の「緑」とワールドストーリー第六段階までに倒されなければ「黒」と「赤」、そして新大陸の「黒」「白」「緑」だ。

幸い、ともすれば初心者達が倒せない可能性も十分にあった旧大陸の「青」が撃破された事は朗報といえば朗報だが……プレイヤー達が未だにレイドモンスター達とまともに戦闘すらできておらず、かつ創世が「リミットミッション」を解くつもりが無い以上はレイドモンスターの方から見つけ出されに行くしかない。

「特に白大壁がやべぇんだよ……くっ、気合いで見つけろよユーザ

ー共。年越したら都市から城塞都市になりかねねぇぞアレ……」

創世曰く、リミットミッションが最終フェーズまで到達したとしても「最終防衛ラインがある」と豪語していたが……その内の一つがつい最近大満足の末に討滅されたばかりだ、律の不安は増しこそすれ減る事はない。

「奴の世界だとしても、アタシのゲームだ」

そこだけは絶対に譲らない、たとえ己が巨大な世界を間借りしているアブラムシと呼ばれようとも……この世界を歴史に多少名を残す程度のいちコンテンツのまま終わらせるつもりはない。

「シャングリラ・フロンティアは世界に誇るゲームだ、永遠に愛され続けるコンテンツでなければ……」

今も獄中生活を送っているのだろう、あの忌々しき父親と同じ世界に飛び込んだ意味がない。あの父の「やらかし」によってぐちゃぐちゃにされた若き日の悪夢を、それ以上の「夢」で塗り潰さなければ律の悪魔は永遠に終わらないのだ。

神気取りの創造的管理者(クリエイティヴアドミニストレーター)の譲歩をロクに引き出せなかった以上、いつも通り知恵を絞って帳尻を合わせるしかない。その気になれば創世一人で運営できるシャングリラ・フロンティアにおいて優秀なスタッフを集めたのはこのためでもあるのだから。

「全員もう起きてるな!? あのバカは二度寝しやがった、楽しい帳尻合わせの時間だ!!」

「天地さん! 見てくださいよこの会心の出来をォ! 今からでも遅くないっスからリヴァイアサンのタイプメン強化プランの中にこ

の拡張装備データをですね」

「いやいや待ちなさいよ哀川クン！　言っちゃぁ悪いがタイプメンの個人保有率はあまりに少な過ぎる！　ここはボクがデザインしたこの愛と勇気とほんの少しの羞恥をスパイスにした新規衣装をだね……」

「はぁぁあ！！？　冗談はバターを揚げて食うだけにしてもらえませんかねマッケンジーさんよォ！！　保有率を増やすためにレッドワンちゃんに広告塔になってもらう必要があるんスよ！！」

「ワンオフ単独無双ロボに憧れる気持ちは分かりマスがこちとら全国五千万人の魔法少女を夢見るガール達の期待背負ってるんだよねぇ！！」

「うるせぇ！！！！」

ボヨンボヨン！　と鼻息荒く律に迫っていた少々肥満気味な男性二人がキレた律によってその腹をグーで殴り飛ばすものの、悲しいかな打撃力が脂肪の装甲を貫通できなかったため、わずかに腹の肉を揺らすだけに終わった。

「動作チェックは！　変な動きした時にパラメータがバグってねーだろうな！？　テクスチャは！！？　問題ねぇならあのバカにメールで送っとけ！　運がよけりゃ晩には返事が来るだろうよ！！　次！　由布院、オルケストラは？」

「いやこりゃ無理っすね、オルケストラに繋げる為の鍵穴が他のサーバー同士で高速キャッチボールされてる気分ですよ。この大電脳時代にこんな物理的な鬼ごっこさせられるセキュリティ貼られると

は思いませんって」

「無理なら無理と簡潔に言え！　昨日から徹夜だろ、しばらく休んどけ」

「うぃーっす……ちと寝てきます」

「四十万！　王国の方はどうなってる？」

「黄金の天秤商会がダンマリ決め込んでるから今のところ均衡取れてますけどこれ、商会が抱えてるリソースがサードレマ側に渡るとワンサイドゲーム確定ですね」

「王国側の素材貯蓄の数値をサイレントで嵩増ししろ、質より量で拮抗させせないとＰｖＰが成り立たなくなる」

「あのー、天地さん？」

「なんだ相沢！　バグか？！」

「服も着替えてください、匂いは服にも付着するんですから」

そっと服の臭いを嗅いだ律は肉体の方を綺麗にシャワーで流したからこそ分かるなんとも言えない匂いに、そっと肩を落とすのだった。

運命神の憤慨（後書き）

ケニー・マッケンジー

魔法少女的変身のやべーやつ、背中は露出してもセーフだと思っている。仲のいい女性二人あるいは少女二人の間に挟まろうとする不逞な輩を一撃でぶちのめすべく右ストレートを鍛えている。

哀川（あいかわ）　鋼（こう）

ロボットのやべーやつ、自爆は今時流行らないと思っているが出力１２０％は今でも通じると信じている。タイプメンに関する考察論文を創世に叩きつけるという無茶をやらかすもその熱意から首が飛ぶ事なく昇進した。

◇

ファステイア。それはシャングリラ・フロンティアに降り立ったプレイヤーの殆どが最初に訪れることになる始まりの街……だが今日に限っては、あるいは今日を以てその常識は覆される。

「……なあ、なんか高レベルプレイヤーが多くないです？」

「いや、自分も始めたばかりなので……」

意気揚々とこのシャンフロの世界で自分だけの物語における主人公にならんと初めてのログインを行なったプレイヤー達は、自分達と似たような装備の開拓者達の中に明らかな高レベル装備を纏うプレイヤーが混じっている事に何事かと声を潜める。

しかもそれは一人や二人ではないのだ、少なくとも人間一人の視界に収まる範囲だけでも十数人はいる。あるいは強者に弱者達が道を譲るかのように生まれた不自然な空白がいつくもあるからこそより目立つのか。

「あのー……？」

「ん？」

「ちょっとお聞きしても、いいですか？」

「あ、いいですよー。なんでここにいるか、でしょう？」

「あ、はい。ここ……チュートリアルみたいなもんですよね？」

例えば高レベルプレイヤーのリアルでの知り合いが新たにゲームを始めるからそれを迎えに来た、とか。

その可能性がゼロというわけではないが、今尚数が増える高レベルプレイヤー達が全員そうだとは思えない。では何故？

見るからに始めたてと言わんばかりの弓使いにそう問われた剣士は苦笑いしながら疑問に対する解答を口にする。

曰く、つい先日から最前線のプレイヤー達に広まった「とある噂話」がファステイアに不釣り合いな強者が集う理由であるらしい。

そして公式からアナウンスされたわけでもない単なる「噂話」にこうも人が集まったのはその発端となった噂の発信源と、それを広めたクランにある、とも。

「あー、「ツチノコさん」って知ってる？　結構有名人なんだけど」

「ツチノコさん……ＮＰＣですか？」

「いや違う、このゲームで初めてユニークモンスターを倒したプレイヤー。滅多に人と関わらないというかそもそもどこで何してるか分からないからツチノコって言われてるんだけど」

どうやらそのツチノコさんとやらが「ファステイアで何かが起きる！」とシャンフロ最大の考察クランに情報を流し、それをそのクランが広く発信したことが理由であるらしい。

聞けばそのツチノコ氏は前人未踏を進み続けるような人物らしく本

人が神出鬼没な事もあって一体どれほどの未知を抱えているのか、それは本人にしか分からないとか。

「ユーザーイベントですかね？」

「どうだろうね、でも色々やりまくってる人が言うなら待ってみる価値はあるし……って感じで人が集まってるんだと思うよ」

成る程、とひとまずの納得を得た駆け出しの弓使いは「レイジ」とプレイヤーネームを頭上に表示する剣士へと頭を下げる。

「ちょっと自分も待ってみます」

「うーん、始めたてで参加できるかは分からないけど何かは起きそうだしそれも良いかもですね」

そもそもこのレイジというプレイヤーも具体的に何時から何が起きるのか、という詳細を知っているわけではないので初心者プレイヤーと高レベルプレイヤーが混ざり合う緊張状態はしばらく続き……そして日が沈んだ頃に「それ」はやってきた。

「…………」

高レベルプレイヤーというものは多かれ少なかれ充実した装備を持っている。つまり彼らの歩く際の「音」は初期装備あるいはそれらを売り払った無装備状態特有の足音とは異なっている。

だがファステイアに現れたその男の足音は無装備状態のサンダルが

立てる音だった。ではその男は始めたてのプレイヤーなのか？　否、あくまでもそれは足音だけに限定した話だ。

「ツチノコさんってあれか……」

「なんだあの変なリーゼントみたいな頭装備」

「なんでファンタジー世界で改造学ラン着てるんだ……」

「当たり前のように見た事ない装備ばかりだ」

「ていうかなんかボロボロじゃね？」

ほとんど半裸の上から膝下、脛あたりまで裾が伸ばされた黒いコートのような……とはいえデザインを見るに学生服をコートのように改造したものと思われる「いつの時代のファッションだよ」と言わんばかりの格好をした男がざりざりと砂利を蹴飛ばしながらファステイアを進んでいく。

「あの人が？」

「うーん、二回くらい会ったことあるけどその度に違う姿してるから確信は持てないけど、多分」

最前線のプレイヤーはフォルムチェンジするのか、と当たっているようで当たっていない感情を帯びた眼差しを浴びつつもツチノコ氏……あるいはサンラクは歩き続ける。と、その顔をすっぽり覆う奇妙な形をした頭部が、ともすればロボットに見える無骨な「眼」が弓使いと剣士を捉える。

よもや自分の不躾な眼差しが、と一歩後ずさる弓使いを他所に夕陽

を浴びながらつかつかと近づいてきたサンラクは剣士(レイジ)の頭上に表示された文字に目を凝らし……

「……ん、あれレイジ氏？」

「あ、ども……」

「久しぶりっスね。ジークヴルム戦以来かな？」

「大体そんくらい、かな」

「いやー、装備が変わってたから一瞬誰かと」

「ははは……」

どうやらこのレイジというプレイヤー、噂のツチノコ氏と顔見知り以上の関係であるらしい。レイジがぼそりと「あんたほど見た目は変わってねーよ……」と呟いたのは幸か不幸か呟いた本人にしか聞こえなかったようだが、弓使いがレイジを見る目に敬意が混じる。
何故か異様にダメージを受けている様子のサンラクは弓使いの方にもちらと視線を向けると……なぜか首を傾げるもすぐに視線を外した。

「なぁサンラク…さん、今回は一体何をやるんだ？」

「ん？　んー……マップ開放、本当はもっと早くやるつもりだったんだけど予想外に道草を食わされた。とんだ厄ネタじゃねーかなんで俺に押し付けるかな……」

ボソボソと何かをぼやいている様子のサンラクであったが、それを

レイジや弓使いが聞き取ることはできなかった。兜が顎の先からつむじに至るまでを完全にすっぽりと包むデザインであるからか、その声はどうにも籠っているのだ。
と、そこにレイジや弓使いよりも、当然その二人よりも背の高いアバターを使っているサンラクよりもさらに小さな影がサンラクを見上げながら近づいてきた。
どこか休日の朝に放送しているアニメにでも出てきそうな衣装に身を包んだ少女が口を開き……

「やぁサンラク君、サードレマでの噂は聞いてるがもしかして君かな？」

百歩間違えても少女の喉から出る音ではない声色が発せられ、レイジと弓使いは驚愕に目を見開く。尤も、曲がりなりにも新大陸からの帰還者であるレイジは「知ってはいたが実物を初めて見た」という驚愕であり、始めたばかりの弓使いは「完全に虚を突かれた」という驚愕であったが。
恐るべき低音の少女……キョージュの問いに対してサンラクはといえば、どこかバツの悪そうなそぶりを見せながらぼそりと言い訳がましく呟く。

「あー……俺のせいでもあり俺のせいじゃねぇでもあり……いや俺のせいかな、放置してたし」

「ふーむ……サードレマにいたウチの者からは「あれは酷い」と実感のあるコメントを貰っているのだがね」

「いやまぁあれは酷かったけどさぁ……」

ふと弓使いは気づいた、サンラクが言葉を交わしながらもなにやら

メニュー欄を操作していることにだ。恐らくアイテムか何かを取り出そうとしているのだろうか？

「さてキョージュ、この先には何がある？」

「プレイヤーがゲームを開始した時に最初に踏む地……スポーン地点だね。いや、はぐらかすべきではないな……山と断崖、それだけさ」

「ああそうとも、見た限りではそれしかないが……ビギナーノービスルーキー達には悪いがこればっかりはリアルタイム進行の定めと諦めてくれってな」

虚空から実体を得てサンラクが握りしめたものは銃……いな、グリップと引き金こそ備えているが弾丸を飛ばすための銃口が存在しない「銃の形をした何か」だ。

それを空へとかざしたサンラクが言い聞かせるように、もしくはただの独り言であるかのようにこの世界の「謎」を問う。

「神代に始まり、古代を経て今に至る。開拓者がどこに去るのかはどうでもいい。どこから来たのか？　その答えは本人から聞こうか……なぁそうだろう、「勇魚」から聞いたぜ、お前の名前は「象牙」、あるいは……」

カチン、と引き金を引く音がいやにはっきりと響いた。瞬間、銃型のデバイスの周囲に大量のウィンドウが発生し、その収束と同時に光が放たれる。

始めたての初心者達は理解した、これが高レベルプレイヤー達が集まった理由なのだと。

高レベルプレイヤー達は理解した、これが噂に聞いた「祭り」の正

体かなのだと。
そして祭りの開催者は犯人に指を突きつける探偵の如く、確信と共にその名を言い放つ。
「バハムート三番艦……ベヒーモス！！」
大地が揺れる、山が鳴動する。プレイヤーもＮＰＣも分け隔てなく揺れる、揺れる、揺れる。突然の地震に立っていられない者もいる……だがそれは地震などではない。
この世界には精密な地図が存在しない。だが人の営みが国を形成して大陸を統一する程度には進んでいる旧大陸ではそれなりに上等な地図が存在する。
だが、その地図は今日をもって一つ前の世代へと貶められた。何故ならば、このファステイアにおいて地図の形が変わるからだ。
「なんだぁ！？」
「木が、消えてる……？」
「山が……！！」
「いや山じゃないぞ！！」
「こ、光学迷彩！？」
人類種達が見つめる先、隆起した山がその姿を変えていく。生い茂っていた木々はその本性……実体を持つホログラム迷彩としての役割を終え、覆い隠していた鋼鉄を露わにする。二枚に重ねられてい

たテクスチャの一枚目が消え去ったことでその下に隠されていた叡智と科学の結晶が姿を見せていく。

人よ、我が子よ、遂に見つけましたねと。

『……長く、長く、されど思い返せば随分と短くも感じます』

まさかそんな、とプレイヤー達は驚愕する。
ファステイアの東側……町もなければモンスターが出現することもない、ただ少し登るのに体力を使う程度の山だと思っていたそれが、大陸にしがみついてうつ伏せに寝そべっていた巨大な鋼の獣だったなどと。

「猪!？」

「いや違うわよあれ、地面に埋まってたパーツが連結して……長い、鼻？」

「象かよ！！」

プァオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！

高らかに響く、神の鯨とはまた異なる駆動音。
ファステイアにいる全ての人間達に語りかけるような声はその象から放たれている、その事実から目を背けようにも鋼の神獣はあまりにも巨大すぎた。

『嗚呼、いじらしくも勇敢な我が子達。遂に私を見つけ出すに至ったのですね……　この恒星間（バハムート）航行級アーコロジーシップ「ベヒーモス」を』

とんでもなく巨大な推進用のブースターがまるで四肢のように地面を踏み締める。否、よくよく注目してみれば地面から数メートルほど離れた空中を「踏む」事で自立していることがわかるだろう。それは星の海へと旅立つ前、穴だらけの母なる星で生み出された際に超超超巨大質量が大陸を踏み抜かない為の工夫であるが、それを知ることのできる立場にいる者もそうでない者も気づけるほどに見渡してはいなかった。

そんな光景を目にして、それを発生させた男は誰に聞かせるでもボソリと呟く。

「知りたい情報だけゲットしたらばっくれたらダメかな……ダメか」

『私の名は象牙(ゾウゲ)。神代の賢人達より子宮と揺籠を預かるアーティフィシャルインテリジェンスにして開拓者の門出を見守り、その帰還を待つ門番……さぁ、かくれんぼは終わりです我が子達……お勉強の時間です』

運命神の獣は目覚め、慈愛に満ちた言葉で開拓者達を迎え入れる。

神象に至るアーベントロート（後書き）

余談だがレイジが親しげに話してた弓使いは中身リアル女で胴装備だけ売って金策に回した系のちょっと目を引きやすい感じの女性

サンラク（……あれ？　ほらあの、ミーアって人とはどうしたんだろう、いや触れないでおこ、デバガメする程仲良くないし……）

突っ張る天啓と赤い伝言

神象開放から時間は二時間ほど前……大体四時ほどに時間は遡る。
リアルとは日没の時間も違うシャンフロのラビッツにて、男は兎と会っていた……

◆

「ほれ、まぁたとんでもないもん持ってきてからに……」

「言うてカブトムシじゃん？」

「姿が似てれば同じと言うわけじゃありゃせんわい！　【四甲】と組み合わせられたのは単なる偶然じゃけぇ！！　全く……戦角兜【四甲】改め、覇角兜【怒烈弩(ドレッド)】」じゃ」

見た目も名前も突っ張ってんな……どうみてもそういうロボの頭にしか見えないってのもあるが、額のあたりから前に突き出すように何か砲塔のような突起が伸びているからもうそういうものとしか見えない。とりあえず装着。

「それを付けとる状態じゃと弩臼砲が使えるけぇ、まぁ勝手にやりや」

「弩臼砲？　あー、魔力消費で頭から攻撃出来ると……いや首折れるだろこれ」

「そりゃ知らん」

こやつめ……とはいえ流石に一回使うだけで首がポキッと折れるようなクソ防具になるとは思えないし……あれ、いや待て、ＶＩＴ参照だとあり得る話なんじゃないか？　うーむ、やっぱり疑わしいぞ？　後で闘技場を使って性能調査だな。

「それと、ちいとこれを使うてみぃ」

「何これ、服？」

「いや、ケジメついでにダルニャータから宝石織の技術を聞き出してな、それをちぃと応用してみた」

タダでアクセサリーをもらった、やったぜ。えーと？　装備名は黒曜纏の石外套（アムルシディウス・ユニフォーム）……んー？　どう見てもロングコートなのになんでユニフォーム……制服（ユニフォーム）？

「どうせワリャがアホほど置いてった素材から作っとるんじゃ、好きに使いや」

「いや……あーうん、一応聞くけど何故この形に？」

「……？　強いて言うなら天啓」

「そっかー、天啓かー、天啓なら仕方ないか………」

天啓すごいね、どう見てもリーゼント（ポンパドールだっけ？）な頭装備と一緒に裾が長い学ラン風アクセサリーまでくれるのか……

……いやいやいや。

「本当にそれ天啓か？　昨日何食べた？　拾い食いとかしたんじゃないのか？」

「炉に焚べられたいんか？」

「火が濁るぞ」

何々？　ＶＩＴに追加で３００のボーナス……なにぃ！！？

「ぼ、防具的振る舞いをするアクセサリー……！？」

「なんじゃ？　そがいに珍しいもんでもないじゃろ」

この瞬間、知らずに紙装甲でプレイし続けていたアホの存在が発覚した。だがきっとそのアホさんにもやむにやまれぬ事情があったのだろう、いやそうだそうに違いない。つまりその何某かをアホ扱いするのは早計、ナンセンスということだ……はいどうもアホでーす。

「くっ……こういうのはもっとこう、序盤で知るべきもんだろ……」

いや、だがＡＧＩに若干、いや結構マイナス補正が入るのか……ふ、ふふふ、いやこういうデメリットがあるなら付けないという選択肢もあるわけだしアホと思わせてのジーニアスだったと言わざるを得ないなぁ！！

……ちょっと後でアクセサリーの効果系統を調べようかな、マジで。アクセサリー生産専門職とかある時点で、琥珀アクセサリーという異常な性能のアクセサリーがある時点で警戒するべきだったのかもしれない。

このゲームにおけるアクセサリーは防具のおまけや装飾品に収まるものじゃない。第二の防具と言ってもいい本体性能の拡張要素だ。

「あ、でも結構重いな」

「あんに節操無しに武器を使うなら一個くらいドンと構える戦法があってもええじゃろ」

「ふーむ……まぁできないことない、か」

特に拳で殴る系だとどう頑張ってもインファイトだから被弾の確率も上がる、富嶽式で回避メインにしても流石のリアル剣聖も面制圧の全体攻撃は避けられまい。

「うん、ありがたく貰っとくわ」

「……仮にも災浄大業物を預かるんじゃゃ、しょーもない死に方されたらわちが親父に顔負けできん」

「やっぱあれそんなすごい代物？」

「ワリャの命(タマ)ァ、いくつ賭けても足らんわーっ！！」

抜けない刀が俺の命（複数形）よりも高価値らしい、一体何を渡されたんだ俺は。

……

…………

………………

「……サンラクさん、ですね？」

「だぁあ！！？」

前線拠点に戻った瞬間、背後から話しかけられた声に思わず喉から変な音が出てしまった。振り向けばそこには見知らぬプレイヤーが立っており、何度見返しても初見の筈だが腰布に刻まれたＲＰＡ？という文字と赤い鉛筆という恐らく極めて限られた人間のみがそのマークに不吉さを感じるだろうロゴ……いや待てまさか。

「貴様、共産主義（鉛筆の手先）……！！」

「ふふふ……久しぶりだなサンラクさん……あんたは覚えてないかもしれないが俺は背後からあんたに心臓を一突きにされたんだぜ……！　あの城でなぁ……！！」

「あ、その節はどうも」

「いえいえ、こっちも流石に別ゲーにまで波及させるつもりもないんで。今回はペンシルゴンさんからの伝言を持ってきた次第で……」

死皇コショウなる家庭的なのかそうなのかよく分からない仰々しい名前のプレイヤー……十中八九世紀末円卓の出身者であろう男と軽く言葉を交わしつつ、彼が持ち込んできた伝言とやらについて考える……確定で厄介なネタとしか思えないんだがそれ。

「内容聞かずに「馬鹿め」とだけ返すことはできますかね？」

「その場合はこの場で自分が自爆することになるかと……」

「いや何故？？？」

「背中から刺された恨みが三割……」

いや波及させせてんじゃん！　魂が世紀末に取り残されてるから遠隔操作で動いてるシャンフロアバターが恨み骨髄じゃん！！

思わずファイティングポーズをとって距離を取るが、自爆の規模も不明だしそもそも話を聞くだけ聞いて無視すればいいだけなのでとりあえず聞くことにした。

「……それで、伝言ってのは？」

「サードレマに顔出せ、とのことです。そろそろ状況が動きそうなので……」

「どうせクーデターでしょ？」

いや、クーデターにクーデターを重ねるのってなんていうんだ？　少なくともレジスタンスとかそういう名称では無さそうだけど……内ゲバ？

「いやいや、トルヴァンテ国王に復権していただく事で新大陸に住まう者達との友好的な関係をですね」

「長い、四字熟語で」

「傀儡政権……いや冗談です、今回はそこまでしないらしいので特権階級とかですかね？」

ロクでもなさでは同じ意味だろ。まぁいい、王族に関しては（主に王女の顔で）思うところが多いが新大陸種族に対して建ててるフラグもそれなりにあるんだ。そこら辺が全部敵対イベントで潰れるのは俺も望むところではない。

「分かった、サードレマに行けばいいんだろう。どこに集合なんだ？」

「あ、大公の屋敷に行ってペンシルゴンさんの名前を出せば入れるかと」

政治中枢で名前パスレベルまで上り詰めてるぅ……

突っ張る天啓と赤い伝言（後書き）

基本的にシャンフロ世界は４月くらいの気候で固定されてます

エンカウント・ノーエンカウント

自爆を仄めかす邪悪なる眷属に脅され、仕方なくサードレマへとやってきた俺は……なんか普段以上に人が多いサードレマでどうやって目立たずに大公の屋敷（いやどう見ても城では？）に行くか思案する。

「エムル、何か良い案無い？」

「また白い布被ればいいですわ？」

「いや、既に大規模ＰｖＰ……あー、戦争の噂が流れてるから結構強い奴らがいる気がする。最悪捕捉されそうなんだよね」

最速称号を取ったからと言っても常に最速で動けるわけじゃないし、今の俺は臨界速を持っていない。捕捉される可能性はゼロじゃないし、派手に目立って大公のところまで行ったらペンシルゴンに何言われるか分かったものじゃない。

やはりここは無難に女モードでコソコソ行くべきか……そんなことを考えていると、ふと意識を引く「何か」が視界に映った気がした。

「ん？」

「どうしたんですわ？」

「いや今何か記憶に引っかかってる名前が見えたような」

くそっ、人混みでわかりづらいな……とりあえず偽装用の装備をつ

けて、あえて顔が見える頭装備にすることで「変な頭装備のサンラク」というイメージそのものをカモフラージュにするって寸法よ。
ではいざ……あっちに行ったよな視界から消えた方角的に。

「エムル、バレるようなヘマすんなよ」

「んっふっふっ、アタシの擬態技術はもはや兄弟一と言っても過言ではないですわっ！」

それ誇っていいのか……？　まぁいいや、モフモフなファーが追加された鎧姿で人混みの中を進みながら先程の既視感と山のように積もったシャンフロの記憶を掘り起こしつつその人物Ｘさんを探す。

ぺむぽん……違う。
デンティ……違う。
ガムシロップ☆タカヤ……違う。
レザレット……んー？　こいつか？　いや違うような。
斬龍焔月……違う。
オルスロット……違、いや待てこいつの名前確か……ええとオルスロット、オルスロット……あっ、思い出した。

「あいつの弟じゃん」

ペンシルゴンの弟、ウェザエモンを倒した後にイチャモンつけてきたがレイ氏にボコられた奴だ。あの朋友救助だったかな、ＰＫ対策っぽい転移魔法……アレ確かアプデが重なるごとに条件緩みまくって今では別にフレンドじゃなくても救援で高レベルプレイヤーが飛んでくるらしいな。
京極が「雑魚を狙えば自動的に強者が送られてくるし向こうも後腐れなく全力を出すから楽しくていいね」と喜んでたから覚えている。

他の雑魚狙いＰＫにとっては生きづらそうな世の中になったが。

そんな彼が何故ここに？　一回しか顔を合わせたことはないが、姉の敵に回りたがるお年頃に見えたが……ん｜？　なんだ、ますます怪しくなってきたぞ。

ただサードレマの施設に用がある、ってのもまぁまぁ妙だ……そしてなにより恐らくオルスロット君の左右にいるパーティメンバーと思しき二人とのスリーマンセルでここにいるってのが最高に怪しい理由は旧大陸の状況が状況だからな他ならない。

俺とて人界の情勢くらい小耳に挟む。世間では世捨て人だの無人島で自活してる類の野人だの霞でも食ってるんじゃねだの……いや誰が仙人だっての。

いやそれはどうでもいい、この旧大陸を今騒がせているサードレマ大公と「現」国王との確執……そしてペンシルゴンが中枢を乗っ取りつつあるサードレマと敵対する王国側は確か、報酬でプレイヤーを釣っていた筈だ。そう、確か罰金帳消しの恩赦とか――

「ほほう？」

これはもしかしなくてももしかしてでは？　俺も経験があるし、なんならかつては彼と同じ立場だったから分かる、分かるぞ？

ペンシルゴンは悪巧みが得意だしさらに言えば「大勢巻き込む」悪巧みが大好きな外道だ。だがその反面、本体性能がそんなに高くないから一点突破で本人を狙われるとそこそこ簡単に撃破できる。つまり奴の弱点は少数精鋭だ、そういうところまでゲーム的魔王を踏襲しなくていいんだよなぁ……

「……どうしたんですわ？」

「あの赤いマントの騎士いるだろ、あれペンシルゴンの弟。しかも札付きの極悪人だ」

「ですわもごごっ!?」

はーいクワイエットプリーズ、ファーは喋らないぞー。
とはいえ少数精鋭でサードレマに潜り込んだとしても妙だな……ペンシルゴンはプレイヤーだ、百回殺したって百一回リスポーンするだけ。なんなら奴とオルスロット君の場合リアル方面で姉特権を行使されるリスクだってある。
となるとサードレマ大公の暗殺とか?　NPCはリスポーンしない……大公を始末すれば新王君も大喜び、恩赦足湯でで足もキレイさっぱり洗えるわけだしついでに報酬も貰える。いい事尽くめだが……だが百人いれば三十人は思いつきそうな手段をあのペンシルゴンが無対策のはずがない。
影武者が自爆するという可能性もあり得るからな、世紀末円卓の自爆影武者姫軍団はあまりにも有名だ。馬車からワラワラと出てきて奇声を上げながら大量の同じ顔が自爆する光景……多分探せば動画が残ってるんじゃないか?　第三者視点で見てる分にはクソ面白いからなぁ。

「予定変更だエムル、あいつらを追跡してみよう」

「……殺る、ですわ?」

「おいおい俺は清廉潔白正々堂々を人の形にしたような男だぞ?　撃退でいいだろう」

ヘイ店主、そのパンとミルク瓶をくれ。追跡にはこの二つがないと

始まらないからな……さてと、この俺のスニーキングスキルは鯖癌仕込みだぜ？ホラーゲーにおける分かっってても怖い怪物の動き四十八手が一つ「気づいたら背後に立っているやつ」を教えてやろう……

……

…………

ボソボソと小声で喋っているので内容を聞き取ることはほとんど出来なかったが、裏路地に入っていった事で追跡もしやすくなったし声も断片的にだが拾えてきた。いや聞き取ったのはエムルなのだが。

「……「徘徊」「ルート」「確保」、ねぇ？」

レアエネミーでも探しにきたのかな？　わざわざ敵陣ど真ん中に？
既に判定は黒寄りのグレーだぜ。
とはいえ何が狙いなんだ？　裏路地に入ってからやたら脇道を覗き込んだり振り向いたりするから何度もヒヤリとする場面があった。もう面倒くさくなって屋根伝いに追っているが上も時々見てくるからな……何を探している？　そんな四方八方を見なきゃ見つからないもの？　少なくとも大公じゃねぇことは確かだ。

「サードレマ……徘徊Ｍｏｂ……なんかいた気がするんだが」

俺じゃない、俺が直接遭遇したとかじゃなくて誰かから人伝に聞いた気がするんだが。とりあえず今一番サードレマに詳しそうな奴に聞ければいいんだが、生憎メールは専用施設に行かないと使えない。つまり記憶力だけが頼りだ……サードレマに関する記憶自体少ない

んだからヒットしそうなんだが。

「……むむ、また何か声を聞き取ったですわ！」

「もう少し声量を落とせ……で、なんだって？」

「ひめぃ……じゃなくて、多分「姫」ですわ」

姫？　旧大陸で姫っていうと例のあの……いや、いや、いや、奴はまだ新大陸の筈。流石に知らんって事はないだろう……となると、なんの姫だ？

「この街のお姫様じゃないですわ？」

「大公の娘って姫階級なのか？　じゃなくて……それだ、冴えてるなエムル」

「ふふーん」

はいはいよしよし。

成る程辻褄が合う、そして思い出したぞ。一日かけて遭遇できなかったカッツォを煽るネタで使ったんだ、サードレマ名物ユニークシナリオ「おてんば公女に付き添って」！　その内容はサードレマ大公の娘が城を抜け出して街に出掛けているのを発見、城に連れ帰るか満足するまで好感度を上げる！！

オルスロット君、お前って奴は……誘拐を企んでやがるのか？どうしよう、俺もちょっとやってみたいな誘拐する側。

エンカウント・ノーエンカウント（後書き）

ちなみにオルスロット君たちが受けたユニークは「公女誘導作戦」ユニークシナリオ「おてんば公女に付き添って」を発生させた状態で所定の位置に公女を連れて行くことでクリアとなる変則ユニークシナリオ

報酬は王認騎士としてのグレードアップと罰金が一時的に凍結されてるので受け取ることが出来るマーニ

怪奇！サードレマの白布お化け！！

こういう時に限って、状況の天秤というものは向こう側に傾いてしまうものだ。明らかに張り詰めた様子のオルスロット君達を見下ろしながら、さてどうしたものかと屋根の上で思案する。

彼らの視線の先には露天で串焼き肉を買う一人の少女の姿、上後方から見える後ろ姿しか見えないが、パーマとも違う……なんというか、少し青味を帯びた灰色と言うべき物凄くモコモコした髪型の女の子が目当てのターゲットであるらしい。

「エムル、なんか聞き取れるか？」

「もう少し近くないと聞き取れないですわ……」

「そうか」

時にエムルさん、こんなところになんとなく買ったは良いが全く使い道がなくてインベントリアのリソースをコンマいくつか埋めてるだけのロープがあるんだけどな？

◇

「でもですねぇ、真っ白お化けさんはあっちにいそうですしぃ……」

「い、いやいや、だからあっちで目撃証言があったんスよ！」

リアルな友人でもある斬龍焔月がＮＰＣ「サードレマ公女フレデリア」相手の交渉に苦心している中、オルスロットは安請け合いしたユニークシナリオが想像以上に難易度の高いものであった事に歯噛みしていた。

「なぁオルスロ、これ最悪失敗しねぇ？　公女、大概話が通じないんだけど……」

「見りゃ分かるよレザ、でもどうすんだよ？　こんな大通りで担いで運ぶのか？」

人間一人を担いで追われても捕捉されないくらいの速度を出せるのならばその選択肢もあるかもしれないが、生憎オルスロット達は皆一様に素早さよりも頑強さにステータスを振っている所謂「斬り合い上等」のアタッカーだ。

ＰｖＰでは如何に相手の行動を封じるか、が重要となる。距離を取れば回復のチャンスになるのは自分も相手も同じというＰｖＭとは異なる「常識」故に自然とＰｖＰに慣れたプレイヤーのステータスは多少のダメージを無視できるような耐久と相手を追い詰める膂力に集約されていく。

中には「距離が離れていても相手が動く前に近づける速さがあれば装甲は紙でもいいですよね？」と言わんばかりの者や、「リアル技能で武芸に長けてるからむしろ防具は動きやすいほうがいい」とあえて軽装になる者もいるが、少なくともオルスロット達のステータスは一般的なＰＫのものだ。

「……最悪、裏路地に引き込めば」

「なぁ、なんかこう良心痛まねぇ？　斬龍（ザンリュー）、さっきからずっとこっちに目配せしてるんだけど」

「ナンパなら任せろって言ったのあいつだろ、最後まで頑張らせよう」

「ナンパしたことないのにイキるから……」

ユニークシナリオ「公女誘導作戦」、簡単に言えばサードレマの出口にまで公女を連れて行くだけのユニークシナリオだが、特殊なユニーク故か話に聞いていた以上に公女フレデリアに話が通じない。そもそも「サードレマの白布お化け」とやらがオルスロットの予想が正しければ忌々しい「奴」の事なのだから、いっそ二度と出現するなとすら言いたくなる。

「ん？」

………ほびゃぁぁぁぁぁ

「どうしたレザ」

「いや今なんか、後ろに毛玉が浮いてたような……」

「毛玉ぁ？　気のせいだろ」

「そっか」

思えばこんな、誘拐紛いのことをする事になったのも元を辿ればそ

の「奴」も何割か関わっている。
無論オルスロットとて元凶が九割原因であることは分かっているが、それを差し引いてもあの姉を行動させたサンラクとオイカッツォの二人を無関係と考えられるほどお気楽な頭もしていない。

「くっ……」

今すぐ大公の城に乗り込んで姉に文句を言いつけてやりたい想いを抑えつけ、目の前の公女を如何にして誘導するかの思案に意識を割く。
いっそのこと斬龍焔月が気を引いている隙に自分かレザレットが白布お化けとやらに変装すればいいのでは、と思わなくもないがあの謎の装備は入手経路がいまだにはっきりしていないのだ。あくまでもゲーム的な装備行動が必要な以上、あんな風に体をすっぽりと覆う布装備は他に心当たりがない。

と、

「まぁ！　白布お化けです～！！」

「そうそう、やっぱ俺の言う通り白布お化けいたでしょ………って、え？」

「何ィ！？」

見上げれば、そこには確かに奇妙な動きで屋根伝いに飛び跳ねる頭から目が描かれたシーツを被ったような謎の二本足の姿が………

「え、嘘。マジでサードレマ特有のレアエネミー？　どうするオルスロ」

「いや公女が追って行っちゃっただろ！　追うんだよ！！」

「ちょっ、速ぇ！！？」

嘘から出た真か、それとも偶然か……サードレマの都市伝説になりつつある謎の白布お化けを追う公女をさらに追うオルスロット達、と言う奇妙な構図で「五人」はサードレマを駆け抜ける。

◆

ロープに括り付けて吊るしながら下ろすことで盗み聞き範囲を広げていたエムルが見つかりそうだったので勢いよく引っ張り上げたらエムルに蹴り飛ばされた。

「思いやり！　思いやりを要求するですわっっ！！」

「脇腹蹴り飛ばす行為のどこに思いやりがあるんだよ……」

「必要悪ですわ！　吊るした後に思いっきり引っ張り上げるのはあまりに思いやりが足らんのですわーーーっ！！！」

はいはいすいませんねはいはい人参、とりあえず聞き取った内容を教えてくれ。

「あのモコモコした人はしろぬのおばけ？　ってのを探してるらしいですわっ！　んで、あの三人がしろぬのおばけがあっちにいる！って連れてこうとしてるですわ！！」

「白布お化け……一体誰なんだ……」

「目を逸らしても結果は変わらないですわ、サンラクサンのことですわ」

「なんでそんな悪目立ちしてるんだ、路地裏でピーツが売ってるんだからそんな珍しいもんじゃねーだろ……」

「あれ、知らないんですわ？　ピーツは仕入れが下手くそだから数集められなかったのを人里で売ってるんですわ」

あれ在庫処分だったのか……知りたくなかった事実だ。

とはいえ大事なのはエムルが聞き取ってきた情報だ、あの公女サマは白布お化けの登場をお望みであるらしい。まるでサプライズ登場するアイドルの気分だ、見た目どう見ても不審者なのだが一体どこにニーズがあるんだ……ペンシルゴンに言えばサードレマのマスコット、ゆるキャラになれるんじゃないか？

「よしエムル、作戦はこうだ……まず俺が公女を人の多いところに誘導する」

「それからどうするですわ？」

「それから………どうしようか、あんまり目立ちたくないし」

あ、そうだ。どこか大通りに誘導しようと思っていたが、場所をこ

っちにすれば……

「作戦は決まったぞエムル、この作戦はお前が肝だ」

「ですわ？」

作戦名は……そう、親フラならぬ「姉フラ」だ。悪いなオルスロット君、俺はお前の姉を召喚するぜ！！

怪奇！サードレマの白布お化け！！（後書き）

武器：エムルヨーヨー
エムルの腰あたりをロープで括り付けて完成するインテリジェンスウェポン
先端に括り付けられたエムルが魔法攻撃を行うことで物理、魔法双方に対応しており諜報活動にも役立つが物理武器として使ったが最後、いろんな意味で後が怖いしなんなら使い手が直接殴りに行ったほうが効率がいい。
なおロープを外せば自動操縦で動くオプションパーツになる

鳴動、叫びは歓喜を帯びて

「うおっ！」

「何何何！？」

「メジェ…っ」

失礼な、俺はサードレマの都市伝説白布お化けだ。
サードレマの家屋、その屋根を飛び跳ねるように走っていると下の方からガヤガヤとそんな声が聞こえてくる。だが生憎立ち止まってファンサービスしている暇はない。
というのも、あの公女サマ意外と速い！　嘘だろ仮にも非戦闘ＮＰＣがもう追いついてくるなんて事あるか？　流石に加速スキルは使ってないがそれでも結構本気で走ってるぞ！？

むしろ公女サマを追うオルスロット君達が置いていかれそうなんだが、今公女サマに捕捉されても困る。サードレマの城に続く大通りに誘導はできたが城の直前まではまだ距離がある……だがこれ以上距離を離すとオルスロット君達を見失う。

「なんで逃げる側が追う側を見失う心配してるんだか……」

エムルは上手くやったか？　ＭＰ回復アイテムを持たせたし途中で解ける事はないと信じたいが……多分そろそろ到着してもおかしくはないはず。
だったらもういっそここら辺で追い込むか？

サードレマは大公の住まう城郭エリア、上級階層が住む上層エリア、そして庶民の住む下層エリアの三層がホールケーキのように重なった構造になっている。

当初の計画では城郭エリア、あるいは上層まで誘導する手筈だったが改めて考えてみればバリバリ敵陣営なオルスロット君達が上層に上がれるとは考えづらい。

「となれば決戦の場は下層と上層を繋ぐ大門前……！！」

ほーら、俺はここだぞ空中3回転半捻りーっ！！

……

…………

……………

サードレマ南大門、上層に上がれるのはサードレマ大公からの許可証を持つプレイヤーだけだ。つまり許可証を持たない、あるいは持つつもりのないプレイヤーにとってサードレマの大門はランドマーク以上の意味を持たない。

街の喧騒と比べると奇妙な空白にも思えるまばらな人しかいない大門の前に空から白い布を被った何かが落ちてくる。まぁ俺だ。

「さて……」

「まぁ、まぁまぁまぁ！　白布お化けさんはやはり実在しましたのねぇ！！　そういう妖精さんなのでしょうか？　言葉は分かりますか～？」

「まぁ！！」

「ワカルヨ、シロヌノサン、コトバシャベレル（裏声）」

「デモダメダヨ、キョウノシロヌノサンハ、オシゴト。ダカラ……センシュコウタイ（裏声）」

夢は夢のままであった方がいい、はいインベントリアとアイテムオブジェクトの性質を駆使した消失マジック！！

祭衣・打倒者（フェスタ・メジェ・カフィエ）の長頭巾を頭から外した上でオブジェクトとしてその場に置き、インベントリアで格納空間に転移すればその場に白布だけが残るように見えるはず。

そして改めて装備を整えて……

「はい推参」

「あら～？　白布さんが別の方になってしまいました」

「白布さんの魔法で場所を入れ替えたんだ。白布さんは都市伝説的神秘存在だからな」

「よく分からないですけど成る程ー」

よく分からないなら成るも程も無いだろ……まぁいいや、本命は公女じゃなくて……

「よっ」

「お前は……サンラク！！」

「現王政の手先が慰安旅行か？　それにしたってサードレマが旅行先ってのは無用心が過ぎるぜ」

「どこで嗅ぎつけやがった……！　それともあいつの指示か……！？」

「あーいや、街で偶然見つけたから」

かくん、とオルスロット君の身体から一瞬力が抜けるが、そもそも頭の上にデカデカと名前が表示される世界でスパイ活動とかできるわけないだろってい う……

「だがお前達の目的は分かっている、それは……」

「――――そう、それは公女殿下の誘拐に他ならない！　なんてふてぇ野郎だ、我が弟ながら情けないぞー？？」

……この声は。

「案の定上層前の門で引っ掛かったねぇサンラク君、エムルちゃんから話を聞いた時点でそんな気はしてたけど……なにその露出狂ポンパドール」

「時代の最先端だぞ」

「そんな時代が来るなら私が未来を破壊するって……さぁーて？

阿修羅会の残党様が雁首揃えてなんの用かなぁ～？」

ギゴゴ……と大門が開き、人間一人なら余裕で通れる程の隙間から現れたのは心なしか最後に会った時よりも装備が豪華になっている気がする一人の女。

そう、奴こそは札付きのバウンティからその政治的手腕と「聖女ちゃんと知り合いみたいなもんだから罪の告解は終わらせている！！」と自信満々に顔を見た程度でしかない聖女ちゃんの威光でサードレマの相談役にまで上り詰めた稀代の怪物アーサー・ペンシルゴン！！いや俺と友好関係があるから実質聖女ちゃんともマブダチ、って理論でなんでＮＰＣを納得させられるんだお前は。

「姉貴……！！」

「言っとくけどあんたらの情報が来た時点でアレックス派の工作員をとっ捕まえに人員派遣してるから」

初手王手やめろ、もうこの時点でオルスロット君の選択肢はここで死ぬか逃げて死ぬかの二択じゃねーか。絶対あのＲＰＡとかいう高レベルプレイヤー工作員がサードレマにも潜伏してるんだろ、あまりにも怖いわ。

「くっ、また邪魔をするのか……！！」

「人聞き悪いなー。私はサードレマ陣営、あんたは現王政陣営、別に所属に口は出さないけど乗り込んでくるなら叩くわよ」

ひゅひゅんっ！　と空を斬る聖槍の穂先がオルスロット君へと突きつけられ、オルスロット君達は咄嗟に剣を抜いて構える。

「三対二だぜ、勝てるのかよ？」

「サンラク君レベルは？」

「１４８、でもちょっとスキル鍛えてる最中だからガチ構築ではないけど……ヤるなら殺るぜ？　ＰＫになりたくないから半殺しで許そう」

「開戦前だけど殺したらＰＫ判定つくのか試したいんだけどなー」

「自分でやれや」

オルスロット君さぁ、どうやってやったのかレベルキャップは解放してるようだが、レベル１１０はちょっとナメすぎてないか？　装備もなんというかエンドコンテンツ特有の雰囲気を感じられないし。装備？　装備……んー？　なんでまた記憶の中の何かに引っかかるんだ？　オルスロット君関連で何か忘れてることなんてないはずだが。

「さぁどうする愚弟、尻尾巻いて逃げるなら刺客を差し向けるだけで許してやろう！　姉としてのせめての慈悲だーっ！」

「ノリノリじゃん、俺も剣ペロペロした方がいい？」

「私の格が下がるからやめなさい、ていうか今時そんなこってこてのシリアルキラーのＲＰとかあると思う？」

あるかもしれないだろ、キヒヒとか笑う感じの殺人鬼とか……殺人鬼、シリアルキラー……装備……あ、そうだ。

「あーっ！　思い出した」

「なにさサンラク君」

「いやオルスロット君に渡したいものがあってさ」

「俺に？」

いやーそうそう、俺はクリーンなプレイスタイルだから使い道もないし、処分しようにもビィラックには拒否られるしでインベントリアの肥やしになってたんだ。

容量無限だから放っておいてもいいかなとは思ってたがあの剣、多分勇者武器とかレイ氏の大剣みたいなタイプの武器だしどうせならここで返してしまおう。元々の持ち主はオルスロット君だしな。

「はい、これ返すよ」

「は？」

「ちょっ！！？！？」

なにをそんな驚くんだ、お前は身内に外道ムーブかまし過ぎなんだよ。俺も妹がいる身だからな、弟と妹ではまた接し方も変わるのだろうがあのペンシルゴンの弟というだけで俺は優しくしたいのだ。

人生大変そうだしな……

メニュー欄を操作して所有権を放棄、地面に捨てる代わりにオルスロット君へとそれ……殺戮者の魔剣（スローターブリンガー）を放り投げる。

「ちょ、待っ、サンラク君あれ手に入れたのいつ頃！？」

「は？　ウェザエモン戦直後だよ」

「三ヶ月以上……！？」

何の話を……うん？　なにか剣が蠢いて……おや、肉塊から手が生えたね、脚も。ワオ、なんてマッシブな腹筋……いや、

「何あれ」

「殺戮者の魔剣のペナルティ！　あの剣でＰＫしてないほど強くなる殺戮の魔人（デモン・スローター）！！　なんでそんななるまで放っておいたの！！？」

「知るか！　そういう大事な事はテキストに書け！！」

明らかに何かイベントに入ったスローモーションの中で、額から剣の部分を角のように生やした赤黒い肉の魔人と化した魔剣が勢いそのままにオルスロット君へと突っ込む。

そして激突するその瞬間、ぐばぁと大きく開かれたのは……え、あれもしかして肋骨？　貪る大赤依式捕食？

「待っ」

「あ、弟が喰われた」

「喰われるとどうなる？」

「いや人型になった状態とか見た事ないから分からないって！！」

オルスロット君を音で表現するなら「ぐぼっ」とか「ごぶりゅ」み

たいな感じで胴体に取り込んだ魔剣の魔人がその異形の口を開く。
「Slaaaaaaaaaaaaaaaughteeeeeeeeeeeeeeeeerrrrr!!!」
おぉ……随分と自己主張が激しい。

鳴動、叫びは歓喜を帯びて（後書き）

・殺戮の魔人（デモン・スローター）
一日一殺、殺戮者の魔剣が課す条件を達成できなかった場合出現する特殊なモンスター。
本来は一週間条件を達成しなかった場合、インベントリから強制的に出現するのだがデータ化して取り出す際に実体化するインベントリアに収納していたため、今の今まで放置され続けていた。
そのレベル及びステータスは「プレイヤー及びＮＰＣを殺害しなかった日数」から「モンスターなどを殺害した回数」、それぞれに倍率をかけて引き算したものとなる。
そしてさらに魔人化したのちにプレイヤー、もしくはＮＰＣを捕食した場合……

飽・食・解・禁（前書き）

いやあったんです！　あったんですよ確かに！
オルスロット君と敵対的エンカウントするけど殺戮の魔人が登場したことで不本意ながらも共同戦線を張るプロットが！！
でも気づいたらこうなってたんですよね、不思議

殺っちまった！？　いや待て、殺ったのは俺じゃないよね？　よしノーカン、レッドネームにはなってない！！

「どうするよ姉、弟が喰われたけど」

「いやどうなんだろう、なんかモゴモゴしてるし中でまだ生きてるんじゃ……」

グブシュッッッ！！！

おっと？　人間一人分膨れ上がっていた殺戮の魔人、その鳩胸みたいな胸部がこう……なんだろう、中に詰まってたものを圧し潰してサイズを元通りにした感じ……あーうん、これは死にましたね。一応確かめたが俺のプレイヤーネームは通常のままだった。

「あー良かった、こんなんでＰＫになってたら凹んでたぜ」

「怪我の功名だねぇ」

「目の前で一人死んでるのに冷静すぎるだろあいつら……」

四字熟語君が何か言っているが無視、俺もペンシルゴンもあとオイカッツォも不都合な事実は耳から抜け落ちていく生態だからな。
だが流石に殺戮の魔人、こいつを見なかった事にはできない。プレイヤーだけを殺したらハイ満足、とはならないだろう……何やら全身を蠢かせて第二形態になりそうな様子だが、既に変化が起き始め

ているので止めようがない。

「Ｓｌａａａａａａａａａａａａａａｕｇｈ……！！」

盛り上がった肩の肉が形を変え、粘土が固まるように肉とは異なる質感のものへと変化していく。

単なる肉の巨躯でしかなかった身体が引き締まり、ある種の機能美を備えていく。そして右腕から肉を突き破って飛び出した骨にも鉄にも見える物質が剣の形を取り……魔人の痙攣が終わった時、そこには一体の騎士……否、騎士の形をした魔人が立っていた。

「なぁペンシルゴン、あいつにアテレコするとしたらなんて台詞入れる？　俺は「解析完了……」だな」

「私は「足りない……もっと、もっと……！」とかかな」

「Ｓｌａａａａａａａｕｕｕｕｇｈｔｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｒｒ！！！」

なるほど、どちらにせよ好き嫌いはしない性質(タチ)らしい……！！　奇声を上げて突っ込んできた魔人に対して、俺とペンシルゴンは左右に分かれて突進を回避する。ガゴン！　と大門に激突した魔人であったが、内臓があるかも怪しい肉塊にとっては大したダメージでもないらしい。

若干怯みこそすれ、弱った様子は欠片も感じられない魔人は骨剣を振りかぶりながら俺達……じゃない！　狙いは公女サマか！！

「させるかボケがぁ！！」

不世出の奥義「戦砕琥示(ウォールフェン)」、ジャブで吹き飛べクソケバブ！！

公女サマと魔人の中間に割り込み、ギリギリ拳が触れるか触れないかのタイミングでスキルを込めたジャブを魔人の鳩尾に突き出す。普通は魔人の質量を止められるはずもなく吹き飛ばされるだろうが、この拳はウォールフェンの力を宿す。

「Sllllllooooo……っ！？」

「ノックバックぅ！！」

ズゴォン！！　と空気の圧が炸裂し、魔人の身体が後ろへと押し込まれる。だが浅い、リヴァイアサンで霜降り肉にかました時と比べてもこのサイズならもう一度大門まで吹っ飛ばせると思ったのだが……いや待て、地面に刻まれたこの轍、まさか特殊能力とかそういうの抜きにただ単純に踏ん張って耐えたとか……？

「VITいくつだよ化け物め……！！」

どうする？　思ったよりも怪物だぞこいつ。VITが高いのもあるが獣にしちゃ動きが人間臭すぎる……オルスロット君を食ったからか？　貪る大赤依は加算的にリソースを増やしていたがこいつは乗算的に性能が上がっていやがる。

「公女殿下、ここは危険です故避難を。南門ではなく、西門をお使いください」

「あら～……貴女達は大丈夫ですか？」

「ご安心を、あそこにいるのは私が保有する中では最も凶暴な手駒ですので」

「おうコラさっさと公女サマを逃しな！　そしたらお前を盾にするからよぉ！！」

「あ、公女様もうちょっとおしゃべりします？」

この野郎……！！　だが、そんな悠長な考えに異議を申し立てたのは他でもない魔人君であった。叫びを上げ、暴れ狂う様子はもはや尋常のそれではない。

喧騒から離れているとはいえ、人がいないわけではないのだ。この一帯は恐慌状態に陥った、そして好奇心に負けたプレイヤー達が次々に……いやいやいやいや！！

「まずいぞペンシルゴン！　餌が徒党を組んでこっちに来てる！！」

「あーもう！　そこ！　愚弟の友人共！　あんたらも協力しなさい！！」

「え、いやあの」

「返事！！」

「「はいっ！！」」

「サイナ！　エムル！　気ぃ引き締めろ、こいつは多分リュカオーンなんかと比較する強さだぞ……！！」

「はいなっ！」

「了解：」

ちょっ、アホかぁの初心者！　なんで魔法職が先陣切ってんの！？　いやその魔力ブレードみたいなので勝てるわけ……あっ、おかわり……

「slaughteeeeeeeeeeeeeer！！！」

やべぇ、三人喰われた。

「参加するなら注意しろ！　喰われたら即死だぞーっ！！」

ぐむぐむとさらに形態変化しようとしている魔人に対し、もはや押し切るしかないと傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）と傑剣への憧刃（デュクスラム）を構えて前に出る。

「硬い……が、押し切れる！！」

「サンラク君どいて！　装甲無視ならこいつの十八番だよっ！！」

スイッチ。俺と立ち位置を入れ替わったペンシルゴンの構えた聖槍カレドヴルッフが殺戮の魔人、その脇腹に突き刺さる。防御力の完全貫通、聖槍の穂先はあらゆる壁を穿ち貫く。

何かスキルを発動しているのだろう、突き立てられた聖槍から放たれた閃光が魔人の脇腹を大きく抉る……が、ダメージエフェクトが吹き出したのも数秒、瞬く間に肉で傷口を埋め切った魔人の払い退けがペンシルゴンの身体を叩き据えて吹き飛ばす。

っていうか

「腕増えてるぅ！？」

喰ったからか！？　三人追加で平らげたから性能アップしたのか！？
やばいぞ、逆に百人くらい喰わせたらどうなるのか気になってきた
自分がいるのが何よりやばい！！

「ウ、ウオァァ……」

「え、今度は何？」

「ちょっ、弟の顔になったんだけど……っ！！」

「ドウナッテンダコレェー……カッテニウゴクァァァァァー……」

そこで噴き出すの、最高に外道だと思うぜ。

「ぶほふっ！！！」

「ふぐっ、あはははは！！　え、嘘マジで？　取り込まれたプレイヤーの意識搭載してんの？」

あ、オルスロットフェイスからさっき先陣切ってた勇者系魔法使いの顔になった。

「ウワ、シャベレルヨウニナッター……」

ちょ、待って、待って。面白すぎる、待ってくれ魔人君！　それが効果的なのはNPCを喰った時であってプレイヤーでそれやっても笑いにしかならないんだよ！！

「ヒューウ！　今楽にしてあげるよオルスロットォーッ！！」

「バカアネェェェ……！！」

悲痛というか、怒りに歪むオルスロットフェイスはきっと、取り込まれた激痛とかじゃなくてマジのブチ切れな気がするよ……射的しようぜ！　眉間に当てたら５００点な！！

飽・食・解・禁（後書き）

仮にＮＰＣが喰われた場合、デビルマンに出てくる甲羅に顔を浮かべる亀みたいな事になってたんですけど残念ながらプレイヤーしか食われてないのでまぁまぁ笑える絵面になってしまったという

手練手管を断ち、咀嚼は瞬いて

何が面白いって殺戮の魔人本体はのっぺらぼうに顔の横まで広がる牙の生えた口がある造形なんだけど、その口をそのまんまに人間で言うなら鼻から上に人の顔を浮かべるから上顎の動きで人の顔がカックンカックン動くことなんだよな。

「ちょっ、もうさぁ！　緊張感が抜けてくじゃんもぉーっ！！」

「喰われたらお前もあれの仲間入りだぞ！！」

「いやいや、私のパーフェクトフェイスはこのパーフェクトボディあってのものだから」

「魔人も恵体ではあるが」

「モストマスキュラーする系じゃん！　はいそこ成仏しなさい！！」

「ヌグォォオァァァァァ……」

弟の顔が浮かんでる状態でも遠慮容赦無く、いやむしろ弟の顔が浮かんでる時だけ遠慮容赦が無くなっているペンシルゴンの三段突きにオルスロットフェイスの魔人が怯みを見せる。

だが今の魔人は更に一人喰って腕を六本にしたアシュラナイト状態だ。近距離だと喰われる前に斬り刻まれるので殆どのプレイヤーは遠距離攻撃で様子見……といったところか。

近距離で戦っているのは俺やペンシルゴン、そして異変を察知して

やってきたＲＰＡの高レベルプレイヤー達だ。

「同志！　これ負けイベとかじゃないよね！？」

「ここで負けたらこれまでの努力がサードレマごと全部パァだぞーっ！　踏ん張れ頑張れーっ！！」

実際殺戮の魔人は強敵だ、タフネスというのもあるが何よりスーパーアーマーを搭載しているのが厄介なのだ。六本腕の手数がロクに怯まないのだ、油断が死に直結している。

「サンラクサン！　攻撃するですわ！！」

「射撃：退避を勧告します」

いいね、下手なプレイヤーより優秀だよシャンフロのＡＩってやつは。

【ウツロウミカガミ】で囮を設置し、魔人がそれに引っかかったところでエムルの魔法とサイナの射撃が炸裂する。ロボ娘たるサイナと兎オブ兎なエムルの一挙一動に観客と化したプレイヤー達（主に遠距離手段を持たない近接職ルーキー達）は大盛り上がりだ。

「Ｓｌａｕｇｈｔｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｒ！！！」

お、魔人本体が叫んだ。効いてるのか？　いや、体幹は揺らいでねぇ……どうする？　ハイリスク行っとくか？

「さっきから刺しまくってるけどこれあれだな、壊毒属性以外はレジストされてるな」

「麻痺も毒も火傷も凍傷もレジストとは肉のくせに生意気な……！　ヘイそこらの近接職！　壊毒属性の武器を持ってれば今ならなんと戦闘に貢献できるよーっ！！」

返答は無し、中には「壊毒って毒属性と何が違うの？」という声まで聞こえてくる。くっ、その初々しさが今は憎い……！！

「分かったぞ同志！　多分腕だけ状態異常が通るんだこれ！！　右真ん中の腕が麻痺った！！！」

「そーゆーのってもっとデカいボスでやる攻略法じゃないのォ！？　全員状態異常武器を担げーっ！！　胴体へのアタックは私達でやる！！」

「あれ俺もかよ」

「火力持ちなんだから逃がさないよサンラクくぅーん！！」

上等、こっちもスキル鍛える為にも前線を張れるなら突っ張っていくぜ。

連結スキルこそないが、代わりに連結を解除した事で素材にした大量のスキルが手元にある！！

鞍馬天秘伝、ヘルメスブート、その他諸々連続起動！！

「臨界まで走らなくても小回りという武器があるのさ……！！」

あえてアクセサリーでの速度補強は使わない、六本腕の乱舞を避ける為には大雑把な動きでは対応しきれないからだ。

両手に握った惨毒蜂双針（ヴェノ・スティンガー）で狙うはその六本腕、どれだけ異形になったとしても素体が人間型だから可動域という絶対的限界がある。

「阿修羅的エネミーなんざ腐るほど戦ってきたんだよ……！　そして知ってんだよ、その攻略法もなぁ！！」

攻撃タイミングは相手の攻撃に合わせる、多腕のボスは調整をミスると無限俺のターンをかましてくるクソボスになりかねない……そして俺はそんなクソ調整の多腕ボスと数多く戦ってきた。
だから分かる、この魔人も同じ手合いだ。それも神ゲー補正で針の穴みたいなチャンスだけがあるタイプ……だが逆にこう言ってやろう、針の穴でもチャンスがあるとかヌルゲーか？　となぁ！！

奴の攻撃は吸収したプレイヤーの性質を引き継ぐ、喰われたのは騎士のオルスロット君、なんちゃって魔法剣士君、ナイフ使いちゃん、大剣使い君、刀使いちゃん、そして最後に喰われた刀使い君だ……いや被ってるし。
だが結果として今殺戮の魔人はナイフ、大剣、長剣、魔力ブレード、そして日本刀二刀流で暴れまわっている。そして当然それらをスイングする速度、攻撃範囲には違いが出てくる……！！

位置取りと、タイミング。誘い出せ、振るわせろ、追い詰められながら追い詰めろ。狙うは大剣からナイフｏｒナイフから大剣の二連続攻撃……！！

「今の俺はいつも以上に硬い！　いわばディフェンスフォルム……！！」

黒曜纏の石外套をつけてるお陰でカスダメに対して強気に出る事ができる、他プレイヤーの攻撃を盾にして攻撃を加えつつ稼いだヘイトで他プレイヤーに攻撃チャンスを提供……来た、大剣攻撃！
真上から若干斜めに俺を両断せんとする攻撃を身体を捻って回避、

そして地面に叩きつけられた骨の大剣を踏みつけ動きを封じれば……ほら来た、ポン刀を振るには近すぎるからナイフで迎撃するしかないよなぁ？　百閃の剣起動(ヘカトン・スラッシュ)、これが禁断の蓄積系状態異常攻撃と多段ヒット化のコンビネーション……っ！！

「獲ったァ！！」

壊毒は破壊属性を付与する蓄積系の毒状態、そして破壊属性とはシャンフロにおいて唯一物質の崩壊を可能とする力だ。
そして、状態異常の集中攻撃と少なくない回数の破壊属性を受け続ければ……貰ったぞナイフ腕、まずは一本！！

「アッ、ジョウブツスル……」

「笑わせてくるのやめろォ！！」

「イヤコレマジデリスポーンスルカンジ……オホォ」

ど、どうやら腕を切り落とすことで喰われたプレイヤーが解放されると見て良いのだろうか……ダメだ、喰われた連中が暇だからってこっちを笑わせる方針に切り替えてるのが予想外に強敵だ。モルドなら八回くらい死んでいただろう。
それに高レベルプレイヤー達の集中攻撃を受け続けた事で殺戮の魔人そのものが消耗しているように見える……如何に強敵とはいえ無敵ではない、このまま押し込んで詰めていけば勝てる！！

だが、四本目の腕を破壊して四人目の成仏が終わった時……殺戮の魔人は動いた。

ぎょろり、と目玉が俺を見ていた。だがそれは浮かび上がった何者かの顔の視線ではなく……魔人の口、その奥……喉から迫り上がるようにして現れた「目玉」が俺を見ているのだ。

「何か……地雷踏んだ？」

【殺害宣言を受けました！】

「ああ……成る程」

お前は絶対殺す、と。

手練手管を断ち、咀嚼は瞬いて（後書き）

実際のところ蓄積系状態異常攻撃とヒット数増加攻撃はマイナス補正が入るのでそんなに蓄積しない
ただ判定回数は稼げるので付与率の低い状態異常なんかはメリットがある

鉛筆さんはやけに弟に厳しいですけど……飴と鞭ってご存知ですか？

吹き荒ぶタイフーンアクション（前書き）

センター試験の皆さん、勉強も大事かもしれませんが適度に息抜きもしましょうね
あとちゃんと寝ましょう、朝起きてエナドリを飲めば君も立派な暴徒だ（真顔）

特殊状態【殺害宣告】。要するに死ぬまでヘイトが固定され……ただでさえキル意識の塊だった魔人が更なる「特化」を行う状態であるらしい。

「くおぉぉお……アクセ解禁！！」

切り落とされた腕の付け根、その断面から出てきたのはぶっちゃけると触手だ。それも蛸足とかそういうＲ１８系じゃなくてワイヤーをさらに縒り紐の如く束ねて綱にしたかのような殺意増し増しの触手だ、女の子が捕まったら喘ぎ声が出る前に断末魔が出るタイプな。それが四本、そして脇腹から伸びたそれを残った二本の腕で掴んで操っている魔人の動きはさらに最適化が進んでいる。少なくともオルスロット君もなんちゃって魔法剣士君も鞭の技能があったとは思えない、つまり自前のテクニックで触手を操作しているわけで……いやこの際どうでも良いわ。

問題はキリング触手の先端から生えてる「爪」が予想以上に対処困難であることと、向こうが中距離戦闘にシフトしたことで俺の攻撃が届かなくなったこと、そしてただでさえ頑丈なスーパーアーマーが今や完全耐性と言って良い完全体スーパーアーマーになったことだ。

完全体スーパーアーマーの別名を知っているか？　実質無敵モードというのだクソッタレが。

「サンラク君頑張れ～」

「他人事だからってぇぇぇえええええ！！！」

なんなんだあの触手先端の「爪」は！！　クソ硬いから破壊できないし！　スーパーアーマー効果が先端まで行き届いてるから弾けないし！　俺が避けたせいで代わりに捕まったＲＰＡのプレイヤーがほぼ即死級の握りつぶしで死にかけたってことは俺が食らったら確定即死だし！！

なんかクソ度合いが上がってないか！？　耐久だと信じて俺が逃げつつ、他の面子が攻撃を続けているがペンシルゴンの聖槍による連続攻撃ですら一向に怯む様子も倒れる様子もない。俺だけじゃない、他のプレイヤー達も「あれこれ無敵状態じゃ……」という雰囲気が漂い始めている。

「破壊属性もだめだー！　欠片も効いてる気がしねー！！」

「あー……これ最悪サンラク君が死ぬまで無敵状態なんじゃ……」

「こうなったら三日三晩でも戦い続けてやらぁよ！！」

自己犠牲などまっぴらゴメンだ、犠牲というものは相手に強いてこそ完全勝利……！　心なしかオルスロットフェイスが喜んでる顔なのがムカつくな。だが唯一いい報せがあるとすれば無敵状態であっても魔人君の速度は俺の速度に追いつけるものではないということだ。

触手の先端はまるで意思があるように俺を狙ってくるが、ホーミング性能はそこまでじゃないし「爪」のサイズもサッカーボールサイズだ。反復横跳びしつつ二段ジャンプして空中加速してから回転してヘイトを置き去りにして回転して回転して回転してジャンプして加速して回転して……

「ツチノコさーん、酔わないのー？」

「慣れーーーーっ！！」

兇嵐帝痕・極の強制回転モーションは使い方次第で即死独楽になることもあれば回避にもなり得る、踏み出した足が軸になることで回転モーションになるならばその軸足で動く分には回転を維持したまま動くことができる。小学生の頃よりもさらに前……それこそ幼稚園の頃に遊んでたけんけんぱみたいな感じというか、割と経験したことのない動きを要求されるが実現する動きも新感覚だ。

「戦いの中でますます気持ち悪くなってるよサンラク君……」

「なんかこう、球体の中で３６０度全天周囲で暴れまわる独楽みたいな」

「ジャイロ回転する跳弾スーパーボールじゃないかしら」

「なんで制御できてるんだ……？」

シラフじゃ流石に制御できないよ、だが俺には体感速度を遅延する真界観測眼と星幽界導線のスキルがある。こいつらを使うことであえて攻撃という手段を使うことで最適なルートを辿っているのだ。あと練習の成果の一つというか、両足同時に踏み込むと回転が止まることが判明したので色々使いやすくなった……（当社比）

回ったり止まったりを目まぐるしく切り替えるのでそろそろゲロ吐きそうな感じに気持ち悪くなってくるがＶＲとは要するにイメージの世界なのだから、実際に脳みそがシェイクされているわけではない。その割り切りこそがフルダイブにおけるアクロバットの最低条件なのさ……！！

「解決策はないのかぁぁぁぁぁぁあああ！！」

「一回死んでみるとかーっ！」

「きゃっっっっっかぁあああああーー！！！！」

「爪」を反時計の回転で避け、兇嵐帝痕・極をオフにして回転を発生させない足で加速。触手を踏みつけながら距離を詰める。本当にスーパーアーマーなのか？　こうなったらちちとリスキーだが試してやる。

「フトンガフットンダ」

ズゴン！　ズガン！！　ズダン！！！

しょうもないギャグばっか連発するなんちゃって魔法剣士君フェイスもいい加減鬱陶しくなってきたのでアグアカーテの弾丸を直接叩き込んで黙らせる。さぁ来い殺戮の魔人、お望み通りの棒立ちだ……そろそろ小腹が減ってきたんじゃないか？

「Slaaaaaaaaaugh…………Teeeeeeeeeeeeeeeer！！！！」

なるほど、貪る大赤依は肋骨の傷口をそのまま口に転用した歪な形状であったが、こちらは元々「口」としての運用を前提とした胸部といった感じなのか。成る程成る程……………残念だったな殺戮の魔人、下処理もせずに拾い食いをするとどうなるのか教えてやろう。

「見てたぜ、お前の胸の内は無限に広がってるわけじゃない……ちゃんと背中で止まるよなぁ？」

なんちゃって魔法剣士君が攻撃していたときに、背中の内側というべきか……ともかく魔力剣がその刀身の半ばで突きが止まっていたのを俺は見ていた。つまり腕を伸ばせば奥に届く、それすなわち殴……れるということだ。

「今度はフルパワーだ、空で踏ん張れるならやってみろ！！」

スキル「戦砕琥示（ウォールフェン）」、狙うは開かれた胸部の奥の奥……そして拳の軌道はアッパーカット。

奥の奥まで手を突っ込んでぇ……当たった！　背骨か刃か、知るかボケ！　遠くへ（ファーラウェイ）、大空へ（フライアウェイ）！！

「吹き飛べぇぇぇぇぇぇ！！」

優しく触れて激しく吹っ飛ばす、本気で手加減しなければ最大のノックバックが発動しないという矛盾した効果を持つ「戦砕琥示」がぐにりと魔人の最奥に触れた拳から炸裂する。後ろに吹き飛ばすのではなく、上へ……踏ん張ることのできない空へとぶっ飛ばされた魔人の身体がふわりと5メートルほど浮き上がる。

「Slaaaaaaaauuugh！！？」

「あれこれ……」

ノックバック最大、つまりダメージはそこまででもないはずなのにあの苦しみよう…………おっと？　もしかして今見えちゃいましたかね？　攻略法ってやつをさ……！！

となれば切り札を切るのはここしかない、そういえば「真上」ってのは試したことなかったな。

「無敵モードは外側だけ、弱点は内側かァ！　【超過機構（イクシードチャージ）】！！」

出力全開（100%）、見さらせ大衆！　これが蘇りし神代の叡智……一撃必殺の超排撃（リジェクト）だ！！！

吹き荒ぶタイフーンアクション（後書き）

プランＡ：殺戮の魔人が登場したことで棄却

プランＢ：現時点で好調、ＲＰＡが誘導することでより「目立たせる」ことに成功。強いて想定外があるとすれば「案山子」の動きが想定の８倍キモくなっていた

プランＸ：この戦闘の結果次第、第一条件は既に達成

手練手管にて我等が宝剣存分に映えよ（前書き）

ワイズルー様……

手練手管にて我等が宝剣存分に映えよ

◇

オンラインゲームで人を集めるのは、選挙に似ているというのがアーサー・ペンシルゴンの持論だ。
物理的な報酬だけではどう足掻いてもリソースの限界がある。だが「夢」や「理想」……それに「浪漫」は支持する者たちが勝手に用意してくれる。無論それを実行するという確約があってこそだとは思うが、如何に支持者達に「集まってもらうか」という点において今行なっているこれは依頼ではなく選挙に近い。

「すげぇ威力だ……」

「あの怪物が、吹っ飛んでる……」

「なんだあの武器！　めっちゃかっこいいんだけど！！」

プレイヤー「サンラク」と言われてもピンと来ないプレイヤーは多いが、「ツチノコさん」と言えばその存在に思い至るプレイヤーは多い。だがそれはあくまでもある程度このゲームに親しく、なおかつ掲示板を頻繁に使うプレイヤーに限る。
だがこの戦い……大公ｖｓ国王の一大ＰｖＰにおいて、数百数千のマンパワーは一騎当千の個人に勝るとペンシルゴンは睨んでいる。
そしてペンシルゴンという出馬者が掲げるマニフェストこそがサンラクなのだ。

「同志、流石のリカバリっすね」

「いやー、まさかこんな街中でおっ始めるとは思わなかったけどねー」

当初の計画ではＲＰＡ主導で「敵」を用意するつもりだったが、まさか弟が潜入ミッションを仕掛けるなどという小賢しい手段を取ってくるとは思っていなかったし、さらに言えばサンラク自身が殺戮の魔人というとんでもない怪物を自分で召喚するとも思っていなかった。

だが想定外の状況から理想的な結果を掴み取るのもプレイヤーイベント主催者としての腕の見せ所、既にペンシルゴンの脳内ではこの状況を利用した次善策の構築に成功していた。

すすす、とさりげなく初心者プレイヤー達の近くに寄ったペンシルゴンはさながら漫画やアニメの解説キャラのような口調で説明を始める。

「あれは煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手……甦機装（リ・レガシーウェポン）ってカテゴリの武器でね、彼が持ってるタイプは莫大な反動と武器そのものの耐久力を大きく削ることであんな超火力攻撃が出来るのさ」

「あの人と知り合いなんですか？」

「そりゃあもう！　一応私が運営してるクランのメンバーだからね。ああごめん、身内団だから新規募集する予定はないんだけど、実は今……開戦間近のイベントで私達のクランはサードレマに所属してるんだよね」

「イベント？　どんなイベントなんですか！！？」

来た。さながら釣り針に引っかかった魚を見るような目を鋼の理性と表情筋で誤魔化しつつ、ペンシルゴンはさらに話を続ける。

「ペンシルゴンァーっ！　手伝えーーーーーっ！！」

無視。

「ん？　ああ、あれは放っておいて大丈夫だよ。彼は口ではああ言ってるけど実際複数人で組むと心の中で「こいつら邪魔だな……」とか考えるタイプだから」

「は、はあ……」

しれっと風評被害を飛ばされるサンラクであったが、本人は殺戮の魔人攻略のためにそれどころではないのでちらりと視線を向ければもうこちらには目もくれずに兎と人形（NPC達）と一転攻勢に出ていた。追い詰められているようなら流石に手助けに出るべきかとも思ったが、まだまだ余裕そうなのでＲＰＡの同志達に「サボってると思われない程度に参加しつつサンラクを目立たせるよう立ち回れ」とアイコンタクトで指示を飛ばす。

此度の戦いにおいてサンラクはサードレマ陣営の旗頭、あるいはサードレマという巨人が持つ「宝剣」になってもらわねば困るのだ。スポーツファンが推すチームの同じユニフォームを着るように、このプレイヤーと同じ陣営にいたいという憧れこそが人の心を掴む為の取っ手となる。

「実はね、今この街サードレマの大公はこの旧大陸全体の頂点である国王と敵対してるんだよね」

「そうなんですか！？」

「それも向こう、つまり私的には敵側の国王がこれまた結構あくどい人物でねぇ……自分の父親と妹を危険地帯に放逐して、あまつさえ暗殺しようとするやつなのさ」

嘘はつかない、ただ真実に有る事無い事吹き込んで風船のように膨らませて伝える。「流石にこれは大げさに言ってるだけだろう」と思わせられれば儲け物だ、少なくともそう考える者は鉛筆が発進した情報を自分なりに噛み砕いて理解しようとしている。
であるならば情報収集手段はシャンフロに関連する掲示板やＳＮＳに自然と絞られる（シャンフロ内でそれらの情報を単独で知ることができる立場の者は既に事情を知っているはずなので）。
そうなればＲＰＡ情報部隊の手によって誘導された現王政側の情報を見ることになる……事実、極力クリーンな方針で動いているサードレマと違い、現王政は報酬と恩赦でＰＫや元ＰＫを集めているのが実情だ。ならず者混成部隊を作るクーデターの成り上がりと娘の為に戦う父、利益目当てで向こうにつく者は流石にどうしようもないが、心情で人を引き込む事は可能だ。

と、恐る恐ると言った様子で話しかけてくるプレイヤーが一人。ペンシルゴンは身振り手振りや話し方で大体のリアル性別を見抜くことができる。中には本気でどっちか分からない者もいるが、少なくともこの話しかけてきた女性アバターは中身と性別が一致しているようだ。

「あ、あの！　そのアバターってもしかしなくても天音　永遠じゃ……」

「あ、気づいた？　本人そっくりないい出来でしょ？」

「え？　あ、あー、いや、そうですよね。ハハハ……すいませんいきなり」

嘘はついていない、ただ本人が「本人そっくりな出来栄えだろう？」と言っているだけなのだ。天音　永遠は少女達の夢と憧れを背負う存在であり、如何に「いざって時はサンラクとオイカッツォに爆弾担がせて無限突撃で王城破壊できないかなー、そもそも勝利条件はなんなんだ新王を静かにさせればいいの？」と考えるような頭でも最低限の誤魔化しくらいは徹底しているのだ。

「あの、そのイベントって初心者でも参加できるんですか？」

「勿論！　生産職なら通常時よりも割増でアイテムを買い取るし、戦闘職でも役割はあるように出来てるらしいから！」

満面の笑顔でさも「自分もそう聞いたから、同じように伝えた」と言わんばかりの態度に、背後でＲＰＡの同志達がひそひそ声で言葉を交わす。

「そこらへん整備したの全部同志よね……」

「同志、世紀末でツチノコさん達に不意打ちで狙われた対策であくまでも自分が主催者ではないと言い張るつもりらしい……」

「あーなるほど、サードレマ大公が総指揮とってる事にして狙いをそっちに逸らすのか……」

もう少し音量を下げろ、とペンシルゴンの鉄壁のグッド・愛想・フェイスが怒りにコンマ１秒歪むが、すぐさま表情をリカバリーして改めてサンラクに視線を向ける。

（頼むぜ広告塔（サンラク君）……ビッグネームは人を集める、もう存分に暴れちゃってよね）

そしてここまで一度も戦闘に参加していないＲＰＡに一言。

「ちゃんと撮れてる？」

手練手管にて我等が宝剣存分に映えよ（後書き）

ＲＰＡ情報部隊
数多の掲示板やＳＮＳにてその論理、感情論、煽りのスキルを磨いてきた歴戦のレスバトラー達。
誇張率１．２倍で新王政を批判し、反論に対して切り札「どっか間違ってるところある？」を使う事で世論操作を目的としている。
彼らは皆、サンラク達と同等の煽りスキルを保有しており中には世紀末円卓にてかつては鉛筆戦士と敵対していたが軍門に降った過去を持つ者もいる

天地一線葬送に鎮め（前書き）

コセンジョッ（鳴き声）

◆

Q、出力１００％で超排撃を直上に撃つとどうなる？
A．笑えるくらい足に来る

だがそれも過去の話！　生まれたての小鹿よりも震えていた足の痺れは既に無くなっている！！

「ファイナルラウンドだ！　経験値が欲しいなら一発殴って損は無いんじゃないか！？」

あくまでもあの外側限定無敵モードは形態の一つであったらしく、超排撃の直撃という実質レイドモンスター色竜ですら大ダメージを受ける攻撃の前では次の形態に移らざるを得ないらしい。
とはいえ出力１００％で条件を達成するだけのダメージを稼ぎ切ったとは思えないのでやはり無敵というわけではなく、超性能スーパーアーマーだったということだろう。いやそれでも捕食タイミングしか攻撃できないってクソ過ぎないか……あーでもリヴァイアサン製の大型銃火器とかあったら後退しながらでもブチかませるのか。

わぁ、と殺到するプレイヤーの大軍。流石にサードレマまで来ることができるようなプレイヤーならレベル差くらいは理解しているだろう（理解してるか怪しいなんちゃって魔法剣士がいたが、あいつは多分幕末適正がある）。
つまりレベル２００オーバーというエンドコンテンツクソ野郎たる殺戮の魔人相手に突撃する蛮勇を発揮するプレイヤーはそんなにい

なかったわけだ。
だが奴は既に（推定）最終形態、オルスロット君を捕食して獲得した騎士の外殻を捨てて完全に異形の巨人と成り果てている。先程までの触手と「爪」が身体に巻きついて腕と一体化し、肥大化した凶器となった全身像は……あれだあれ、寺とかの門にある力士像を筋肉剥き出しにしたようなおどろおどろしい姿だ。

だがおどろおどろしさと同じくらいの消耗を感じさせる様子、つまり大多数のプレイヤーが「ワンチャンあるのでは？」という気分になっている。

「押せ押せーっ！　死んでも文句言うなよーっ！　被弾する奴が悪い！！」

死なないように、しかし一発は攻撃を入れておきたいと突っ込んでいく近接職達に発破をかけつつ超排撃で一割を切ったHPを回復させるべく回復ガチャを続ける。
チッ、今日はクソ乱数の日か。八連敗ってどう言う事だ……頼むぞ体力全回復アイテム！

……………。

「オラーっ！　体力がなんだ、最後に生き残ってりゃ死に体も無傷も大差ねーだろうがーっ！！！」

弓使い達に混ざってスナイパーライフルでバスバス殺戮の魔人を射撃しつつ回復ガチャを続ける。十四連敗ィ！？

「あのっ！　銃ってどこで手に入るんですか！！？」

「これ？　新大陸でリヴァイアサン出たってのは知ってる？　あそこの一層で手に入るよ！　もっと強いのが欲しいなら五層まで辿り着かないといけないけど！！」

後々知ったが、リヴァイアサン四層で購入できる銃火器は四層ボスを倒さないと船外で使用する許可が出ない。アンバージャックパスがそのまんま免許になるらしく、もしあそこで苦戦していたらルストやヤシロバードの面白い顔が見れたかもしれなかったわけだ。

「でももしかしたらこっちでも手に入るかもな！！」

「あのっ！　俺も質問いいですかっ！　生産職志望なんですけど、さっきのやべー火力のグローブみたいなのって作れるんですかね？！」

あれこれなんか質問コーナーなの？　まぁいいや、テンション上がってるから口が軽くなってるのが自覚できるしそこそこなネタバレはモチベーションに変わるからな。

「あれは生産武器！　でも使ってる素材がまぁまぁレアだから頑張れ！　あと専用ジョブが必須だから考古学者も取っといた方が吉！！」

まぁまぁ地獄を潜り抜けられれば煌蠍の籠手は作れるだろうよ、あれ別にオンリーワンってわけじゃないからな……あーでもビィラック印だからオンリーワンではあるのか。
しかし素材がね……また何か学習したのか最近のあいつらは崖に張り付いて隠れても尻尾から毒液を噴射して壁狩りしてくるので油断ならない……
そろそろインベントリアエスケープも対策されそうだから新しいア

プローチを考えるべきか。逆に水晶巣崖全体の蠍を起動して大渋滞を起こすとかどうだろう、いやそうするとエルダーも起動するな多分……あいつだけはマジで単体じゃどうにもならない、最低でも空を飛べてマニューバできる戦術機でスクワッドだな。

「やっと回復成功……」

十七回連続失敗はあまりにも乱数が腐っている……
ていうか逆に凄くないかこれ、最近なんかすぐ連続で回復したり延々と失敗したり出目が極端なんだよなぁ……偶然か？

「いやいや何やりきった顔してんのさ！　倒すまでがいち戦闘でしょ、お爺ちゃん服の着方と一緒に戦い方も忘れたの！？」

「おい婆さんまだ懲役残ってんだろ牢獄にお戻り！　その場に足止め三秒！！」

「はぁあ！？　このPerfect Body(ネイティブ発音)とは無縁の単語が聞こえたんですけどぉ！？　無理！　二秒！！」

一秒で動く。
スキルを起動しつつ右拳で胸を叩き、左手でインベントリアを操作しながら跳躍。スキルとアクセサリーの判定は同時でもいいのがシャンフロのいいところだ、今でもこれが重複するとキャンセルするクソゲーは多いからな……
そのまま殺戮の魔人の直上に到達するまでに頭を下に向けた状態で……んー、大体5メートルくらい上に滞空、よしオッケー。

「ギロチン代わりだ、首を出さないと脳天に刺さるぜ……！！」

別離(メメント・モリ)なく死を憶ふを展開、地面から数えて魔人、大剣、俺の縦一線の直列になった瞬間に……！！

「空なら反動を推進として誤魔化せる」

行くぜ覇角兜【怒烈弩(ドレッド)】の目玉機能……！　魔力装填、ガン飛ばし弩臼砲(どきゅうほう)！！

「Slaaaaaaaaaaaauughteeeeeeeeeeeeeer！！！」

「ファイヤーーーーーーーーーーーーーッ！！！」

兜の突起から放たれた衝撃波が特大剣を押し出し、天から地へと叩き落とす。

そしてその切っ先は俺を見上げて吠えた魔人の口にそのまま吸い込まれるように落ちて……！！

『殺戮の魔人が討滅されました』

『殺戮の魔剣は元の状態に戻ります』

『現在、殺戮の魔剣は所有者不在状態です』

『称号【殺意調伏】を獲得しました』

『戦闘に参加したプレイヤーのカルマ値が減少します』

ぞぶ、とどんな気分なのかぁんまり想像したくない感じで串刺しにされた魔人が消えていく。
そして地面に落ちる墓標の剣と殺戮の剣……物言わぬ二振りの刃は、この殺戮の狂騒に終止符が打たれた事を示していた。

この日、この場にいた開拓者達は殺意の権化と向き合うことで己自身の殺意と向き合った。そして俺達はそれを乗り越えたという事なのだろう……きっとそれは、どんな強敵を倒すことよりも難しいのかもしれない。

と、反動で吹っ飛んで壁に激突、ずるずる落ちながらいい話風に納得しようとしても俺にとっては想定外の道草を食わされただけなんだがな、ボウル一杯の雑草サラダ特盛り………代金はペンシルゴンに請求しろバーカ！！

天地一線葬送に鎮め（後書き）

オルスロット君、人知れず成仏……！！

レザレット君と斬龍焔月君は秘密裏に背中を押されて魔人にキルされました。不幸な事故だったね……

スライドダウン・ボーンアップ（前書き）

一応言い訳しておくと今日ボンドルド・オンステージ見たからこの構造になったわけではなく前々からこの構造で考えてます

スライドダウン・ボーンアップ

――あの後、質問攻めに合いそうなのを物理的にかわして逃げたこととか。

――二度とインベントリアから出すな！　と何故か俺に殺戮の魔剣を押し付けてきたペンシルゴンのアホの事とか。

――何故こんなクソみたいな寄り道をしなくちゃいけないのかとか、改めて不発弾を抱えさせられたこととか、その他諸々多々様々……

あらゆる感情をミックスして生み出された疲労感のままに現れたバハムート三番艦「ベヒーモス」に乗り込む条件を満たしていた俺達は今――

◆

「なんだこりゃ」

『これは「試練」であり、「再現」であり、そして「試験」なのです我が子達』

ベヒーモスに乗り込んだレベル５０以上のプレイヤー達は今、底の見えない程に深く深く続く「大穴」の淵に立っていた。
その穴の直上、足場のない虚空に浮遊するのは一人の女を象ったホログラムだ。首から上は仕事のできる女性！　という感じなのに、首から下が何故か割烹着という……情報量の多い姿をした女だ。いやセーター！　白衣！羽衣！眼鏡！　みたいな属性大洪水の「勇魚」も大概だったが……割烹着のパワーが強い。
そんなホログラム女「象牙」が俺達へと、まるで生徒に授業でもするかのように語り続ける。
『私は「象牙（ゾウゲ）」、私は「勇魚」と同質であり……しかし私はアレとは異なる方針です』
「ここからどうすりゃいいのよ！！」
流石に転送されて早々、金属製の大穴にノーヒントで立たされるという現状に堪えきれなかったのかプレイヤーの一人が「象牙」へと叫ぶように問いかける。
それに対し、恐ろしく鋭い目つきの「象牙」はただシンプルに一言。
『自分で考えるのですよ炸裂グリンピース』
「ぶふっ」
「んぶふっ」
「なんで炸裂……っ？」
まさかのプレイヤーネーム朗読というネタネーム程大ダメージを喰

らう「象牙」からのカウンターパンチによって炸裂グリンピースさんが無言で震えるだけの置物と化してしまった。いやでもなんて炸裂グリンピースなんて名前に……？

とはいえ炸裂グリンピースさんの疑問は多かれ少なかれここにいる全員が思っている事だ、「象牙」もそれは理解しているのか一応説明はしてくれるらしい。

『このベヒーモスは現在レガシーモードとして稼働しています。構造は上から下へ向かう……まぁ、見れば分かる通り大穴型です。そして大穴を貴方達自身の知恵と、勇気と、そして力で深層に辿り着く……それこそが私が貴方達に課す「クエスト」なのです』

なるほど、リヴァイアサンは中心へと向かうマトリョーシカ型だったが、こっちは一番下まで……多分リヴァイアサンと同様に外と中で重力の方向が違うんだろう、広さ的に……多分横向きに俺達は立っている。この潜行は外から見れば頭から尻へと向かっていると見た。

『ただし、重ねて言いますがこのベヒーモスで求められるものは「知恵」「勇気」「力」の三つ……この大穴は縦に十の階層に隔てられています』

「リヴァイアサンと同じように関門を越えろって事だろう。層の数が2倍くらいあるけど」

『サンラク、貴方の話は「勇魚」から聞いています……世界を拓く者、疑問を持つ者。先に断言しましょう、貴方の求める答えはこのベヒーモスにあります』

ええい、ただでさえ目立つと面倒臭いのに名指しするな。だがどちらにせよさっきから注目されっぱなしだ、もう気にするだけアホらしくなってきた。

『世間話くらいなら付き合いますが……ええ、ええ。どうか見せてください愛しき我が子達。貴方達が旅の中で培った強さを』

……

…………

……………

とりあえず五人ほど穴に叩き込まれたが、謎の「攻撃」を食らって全身ひしゃげながら真上にぶっ飛ばされて死んでいた。

「なんか見えたか？」

「この速度で松明なんか灯ってるわけないだろ、何も見えないまま攻撃されて死んだわ」

「魔法で照らせる奴いねーのかよ」

「三日前までは習得してたけど邪魔だから忘れたわ」

「でも打撃なのは確定よね、斬られたり突かれたりした死に方じゃ

ないし」

「炸裂グリンピース姉貴の言う通りだ、まぁ分かっちゃいたけど直接落ちてショートカットってのは無理っぽいな」

「わざわざ名前で呼ぶ必要ないでしょ！？」

「せめて消えない灯りがあればいいんだが……」

……なんでこっち見るんだよ。

「ツチノコさん、なんかないの？　こう科学的照明とか」

「逆に聞くけど超巨大宇宙船に乗り込んで懐中電灯だけ買って帰る奴いるか？」

……仕方ない、こういう合同考察みたいなのも嫌いってわけじゃないんだ。ここは俺が一肌脱ぐとしよう。

「ある程度落ちると下に居る「何か」にブン殴られて叩き出される。そして少なくとも面制圧ではない……と」

「なんで？　根拠は？」

「そこの二人、一緒に落ちたのに吹っ飛ばされてきたタイミングがずれてた。多分個別に殴り飛ばされてるんじゃないの？」

俺の予想としては巨大なタコとかイカがいるんじゃないかと予想しているんだが……まぁ物は試しだ、ちょっと下まで行ってみるか。どうせ死ぬなら生きるためのセーフティも必要ないし、とりあえず

頭装備他諸々を外して地面に置いて……………視線。

「……何？」

「頭、取れるの！？」

「あのね炸裂グリンピースさん、確かに俺は胴体装備と足装備が時間経過で問答無用で破壊されるクソ縛りを課せられているけど別に頭装備が外せないってわけじゃないんだよ分かる？　炸裂グリンピースさん」

「連呼！！！！」

そして俺は別にマスクでも兜でも外したら死ぬってわけじゃないし、これから死ぬと確定した挑戦をするなら頭装備は普通に外す。一応身動きしやすい装備をつけて……スキルをフル起動、さらに過剰伝達で機動力をさらに上げて……流石にこれ以上強化すると制御できなくなるし、兇嵐帝証（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）は使わなくていいだろう。というか未だ併用した時の完全制御が出来てないんだよアレ。

「じゃあちょっと死んでくる」

「気軽だなこの人……」

「すぐ死ぬしすぐ蒸発するのがツチノコの由来なのか……」

そんな儚い生態しとらんわい……してないよ、本当だよ。気を取り直していざダイビング、紐なしバンジー！
穴の淵（ふち）から跳躍、過剰伝達の力で結構な跳躍距離を稼いだ俺の身体が穴のそこそこ内側まで飛んで……そこから落ちていく。

「なるほど確かに」
プレイヤーの視界は暗闇の中であってもある程度の明るさは確保されるはず、なのにそれが無いという事はゲーム側が「この暗闇は自分で何とかしろ」と定めているということだろう。戦術機の頭装備は暗視機能があったはずだがもしも壊そうものなら俺は多分ネフホロ2が発売する日までルストに追いかけられる、ああいうタイプは一回や二回キルしたところで満足しないタイプだ。
仕留めた死体を砕いて焼いて灰を家畜の餌に混ぜて屠殺して……とまでは流石にないだろうが、いやよそう。知人を脳内とはいえ勝手に貶すのはよくないし、最終的にスペクリ時代の俺に帰結するから自己嫌悪してしまう。あの頃はまぁ、うん、鯖癌が潰れてちょっとイライラしてたのを忘れかけてた頃にあの変態が出てきたから……

「む」

エドワードの研究室に行った時と同じだ、スキルを使って壁で制動しようとした時……それが見えた。
いや厳密には違う、いつどこから敵が来てもいいように……そして、「攻撃対象」が現れればそこに至る理想的ルートを視界に表示する星幽界導線（アストラルライン）が反応を示したことで分かったのだ。
そうか、先に犠牲になった五人は穴の淵からそんなに離れていない座標から下に落ちていった、それは穴の底である前に壁の側だということ。やつらは下から打ち上げられたというよりも、横から出てきた何かに上へと……要するに、だ。
「いるのは壁か………！！」
見えん、クソ。だが星幽界導線の反応からしてそんなにデカくはな

い、少なくとも俺が想像していた「穴の途中で対空しつつ上から落ちてくるプレイヤーをアッパーカットでぶっ飛ばすクターニッドみたいな巨大タコあるいは巨大イカ」ではないことは確かだ。

「これでどうだ！！」

魔法【マジック・トーチ】の使い捨て魔法媒体（マジックスクロール）を使用し、魔力の照明を使ってあたり一帯を光で照らす。果たして壁にあったものは…………………………へ？

「人間？」

何かの液体に漬け込まれたやけに個性のある人間の標本の顔と対面することになった俺は、先ほどまでしていた予想が、おそらく真実からは遠い位置にあるのだろうということを瞬間的に悟った。

じゃあ何がプレイヤーを…………そう考えていた瞬間だった。

「おぐべぇ！！！？」

まさか、打撃の正体とは………下から上に向かう、エレベー………

スライドダウン・ボーンアップ（後書き）

彼の名前は「バスタブ太郎」です、下手したらプレイ時間ゼロでワンキルされかけたという（攻撃判定があるだけで生半可な攻撃が通るほどヌルい耐久のガラスじゃないですけど）

ゴマ（無料サービス）（前書き）

優勢だと心に余裕ができますね、古戦場の話です

ゴマ（無料サービス）

「おい、ベビーカーで殴るな」

空中で卍のポーズで三回転半して死亡した俺は、あまりに芸術点の高い死に様に拍手を貰いつつも、床に置いた帽子を装備して地下で見たものの状態についていつのまにか穴の直上中心ではなくこちらまで近づいていた「象牙」へと詰め寄る。

ベビーカー？　とプレイヤー達が疑問符を浮かべる中、当の「象牙」はといえば、よくわかりましたと言わんばかりの笑みで鋭い表情を僅かに丸くしていた。

『素晴らしい、たった一度で見抜くとは……リヴァイアサンを制覇した知恵は本物ということでしょう』

「ベビーカー……成る程、新規プレイヤーか」

おやキョージュ、やけに静かだとは思っていたがここにきてようやく会話に参戦か。

「先程から我が子と呼称してくる事、ベヒーモスの潜伏していた座標から推察すれば当然ではあったが……ここは開拓者（プレイヤー）誕生の地、というわけだ」

『素晴らしい、素晴らしいですよキョージュ。そう、ここは貴方達二号人類……風と共に現れ、風と共に去る貴方達が生まれし子宮にして、旅立った産道なのです』

「俺達、揃いも揃って里帰りしていいのかそれ」

「宇宙船にオギャるのか……」

「俺はいけるぜ」

「ゴツい重戦士がおもむろに懐からおしゃぶり取り出すのはやめてくれよ……何想定だよそのアイテム」

俺や他のプレイヤー達をぶっ飛ばしたものの正体は穴の中を飛び交う誕生前のプレイヤーを詰めた試験管を移動させるエレベーターだ。SFだから当然と言わんばかりに無線式で縦横無尽に動く金属の塊がプレイヤーが落ちてきた時だけ一撃で殺傷できる速度で俺達を押し上げてくるのだろう。

「じゃあどうするんだ？」

「物理的に避けるとか？」

「いや無理だな、確実にスキルも魔法も追いつかないし最悪面制圧で打ち返される」

「ツチノコさんがそう言うなら……炸裂グリンピースは何かアイデアある？」

「私これ知ってるわよ、これ名字が珍しいから学校で教師に指名されまくる奴でしょ」

「いやいや、教師として流石にそこまで特定の生徒のみを指名する

ことはないよ……日を跨ぐと怪しいが」

「リアル教授のお墨付きなんて要らないわよーっ！！」

炸裂グリンピースさんが叫んで蹲ったのを眺めつつ、さてどうしたものかとキョージュに視線を向ける。先ほどまで会話に参加しなかったのは呆けていたわけじゃないだろう、俺達が「穴」を見ている間にこの偽幼女はずっと「床」「壁」「天井」を見ていたわけだしな。

「で、考察の長はどう言う見解で？」

「恐らくだがこの大穴自体フェイクなのでは、と見立てている。いや機能としては真も贋もなく稼働しているのだろうが……そも、ここは本当に「外縁」なのかな？」

「と、いうと？」

「ベヒーモス、いやこの場合はバハムートか。バハムートは巨大な船だ、それは当然頭から尾までの長さであり、腹から背までの長さであり……胴回りの大きさもだ」

「つまりこの穴がベヒーモスの体内ギリギリまで広がっている穴とは限らない、と」

「正解だサンラク君、恐らくだがどこかに穴ではなく穴の周囲……今我々が立っている場所の直下に降りる、あるいは壁の先に入る扉が何かがあるのでは、と見ているのだが……」

まぁ、広いからな……探すにしても苦心しそうだ。うーん……ん？

「あれ、レイ氏と秋津茜？」

「あっ、サンラクさん！　お祭りってこれのことだったんですね！！」

「ど、どうも……」

ちらほらと追加でベヒーモスの中に入船してきたプレイヤー達の中に見知った顔がいたので近づいてみれば、やはりレイ氏と秋津茜であった。レイ氏は普段通りの……少々悪役っぽ過ぎる鎧姿であり、秋津茜はといえば今回は旧大陸ということもあってかノワルリンド無しでこちらに来たらしい。

「ああ、レイ氏も間に合ったんだ」

「えと、はい」

玲氏（レイ）の家はまぁ、見るからに作法とか厳しそうだしウチみたいに帰宅！　即！　ログイン！　みたいな事が簡単にできるとは思っていなかったが……いや違うな、思ったよりも俺が手間取ったと言う事だろう。おのれペンシルゴン姉弟、いやオルスロット君はこの場合悪いのか？

「とりあえずあの穴に飛び込むとエレベーターにぶん殴られて死ぬので別の侵入経路を探してるところ」

「エレベーター……殴られ？」

「よく分からないですけど入り口を探すんですね！！」

ふふふ、そうだ行け秋津茜！　お前のリアルラックで入り口を見つけ出すのだ！！

いやまぁそんな上手くいくわけ「もしかしてこれじゃないですか？」

「嘘ォ！？」

待て待て待て、記録タイム十五秒はフカしすぎだろ流石に！！　いや待て、うーわマジで入り口じゃないのかこれ。床のＳＦチックな模様に混じって確かに詰めて通れば四人分は行けそうなハッチらしきものがある。

「どうしたの？」

「ん？　ああ炸裂グリンピース姉貴、ウチのストロングラックがハッチを見つけた」

「嘘でしょ！？」

これがマジなんですよ、外縁を調査する為に広く散っていたが、騒ぎを聞きつけたのか人が集まってきたのでとりあえず適当に動くスペースを開けろとゼスチャーしつつハッチを確認する。

「うーん……壊せそうな気配がしねぇ、となるとなんらかの条件で開くのか……「象牙」、これ開けてくれ」

『それを開ける方法も自分で考えるのですよサンラク』

はい言質。

「よし、ギミックで開くタイプ確定……と。アンバージャックパスじゃねぇし、外縁にそれらしき機械も無し……」

やはり破壊か？　いや、発想を変えよう。こいつは「象牙」からの知能テストだ、奴は未だにこっちが幼稚園児か何かだと思ってる節がある。

力づくでこじ開ける可能性もゼロでは無いがむしろベヒーモスに入った時点でプレイヤーが持っている他の「手段」が怪しい。

ファンタジーはファンタジーでもサイエンスでサイバー、なおかつスペースなファンタジーなのだからオープンセサミで開くにしてもそれは科学に由来するはず。ハッチ、扉、門……必要なのは「鍵」か？

「BCビーコンか？」

反応無し、あくまでも呼ぶだけってか……さらに思考の方向性を変える。

「鍵」は物理的なものとは限らない、例えばそう……顔認証とか指紋認証みたいな。だがそれだとどうしようもない、神代人類の身体なんて骨の欠片すら残っちゃいないだろう。あるいはどこかにミイラとかがいるのかもしれないが……回復魔法でもかけてピチピチお肌を取り戻せってか？

「……いや待て、認証？」

「何か分かったの？」

「いや、あるいは……」

当たり前といえば当たり前過ぎる「入り方」だが、いや違う既に俺達は入っているし、さらに言えば「象牙」然り「勇魚」然り、奴らは言うなれば……そう、家主だ。

「なあ「象牙」……入るためのパスなのかセキュリティを潜るためのアカウントか知らないが…………新規登録、出来るんじゃないか？」

『ふふふ……よくできました』

次の瞬間、俺の身体が突然淡く発光した事を自覚するのとほぼ同じタイミングで……

「えっ」

ハッチをすり抜けて俺の身体が下に落ちた。

ゴマ（無料サービス）（後書き）

次回予告：次でQ．E．D．についてゲロる

『抑制進化機構クェンチ・エヴォリューション・ドライブ。識別コードは「Q．E．D．」……神代において生物としてこの星に人類が定着できないと結論づけられ、その果てに生まれたのがこの技術でした』

穴の壁面に大量の試験管があるというなら、それを裏側から見ればやはり同様に試験管があるという事だ。

アカウント登録して内部に降りた俺達へと「象牙」は語りかける。

『この星における旧人類種の強制反応を抑制する臓器の増設のみならず、それを生態に組み込む事で新たな人類種として定着させる……それこそが貴方達とは異なる人、我が手を離れ「根付いた」ヒト……』

要するにNPCの事だろう。

だがその言葉に待ったをかけたのはキョージュだ。こっちもこっちで「知る」「教わる」事が楽しくて仕方ないのか、ここだけ切り抜くと年相応に見える顔で「象牙」に質問を飛ばす。

「では我々は？　貴女の言う赤子として生まれ、死にゆく彼らが根付く者だとすれば我々は突如として現れ、そして老いずして去る者だ」

『良い着眼点ですねキョージュ。厳密に言えば一号計画そのものは3000年前の実行と、その後千年間の経過観察により既に達成されています。今稼働しているQ．E．D．は全て「二号計画」のみ

を実行しています』

二号計画、断片的だが少なくともリヴァイアサンを攻略しきっていないほとんどのプレイヤーよりは俺は物知りだ。

「二号計画……リヴァイアサンのところで資料を見たぜ、生まれついて「役割（ロール）」と「人生（バックストーリー）」を持って生み出される人類種、そうだろう？」

『素晴らしい、よく学んでいますねサンラク。これはご褒美です』

５０００リザルトを手に入れたぞ、やったね。やはりバハムートごとに通貨の単位が違うようだな、リヴァイアサンでアホほど荒稼ぎできる三層がある時点で予想はしていたが。

『まずは先に言っておきますが……貴方達は環境踏破、一号人類が長い時をかけて育む強さを生まれつき持つ事でより効率的な惑星開拓を期待されて生み出された存在です』

「そんな、俺に赤子時代がなかったなんて……！！」

「いやお前は現役でオギャってるじゃん……」

「ミルクの温度には気をつけてくれよな」

「知りたくなかった友人のこんな一面……」

デカい赤ちゃんだなぁ……

『マナ吸収、肉体還元の効率は一号人類の上位互換であり……噛み

砕いて言えば「努力が必ず報われる」肉体を持つのが貴方達です』
なるほど、言い得て妙だな。仮にＮＰＣ……一号人類をこの世界における「一般人」だとしたら努力にも限界があり、何より命という絶対的限界がある。
だがプレイヤー……二号人類は違う、レアアイテムのために命を投げ出せるし死んでも何分か調子が悪くなるだけで蘇生する。
『反面、この世界に存在する……前へ進むという「意思」が減衰してしまうと消滅するというデメリットは解決しきれませんでしたが……』
「しれっと欠陥生物扱いされた？」
「まぁほら、引退＝死みたいな事なんだろ」
「あー、半年くらい間隔開けてログインすると親密度上げたＮＰＣでも「誰お前」されるらしいからな」
「それを差し引いても半不死身生物だからなぁプレイヤー」
流石にこのゲームへ本格的にのめり込んでいるプレイヤーがいたとしても普段からプレイヤー、ＮＰＣを問わず「開拓者ならちょっとくらい死んでも大丈夫だろ」扱いされているのでそこまで衝撃をもたらすわけではなかった。
だがそれはそれ、疑問を疑問のまま保存できない奴がいるわけで。
「では我々は捨て駒であると？　話を聞く限り二号人類とは一号人類の繁栄を助ける為の存在にしか思えないが……」

『それは違う、違うのですよキョージュ。貴方達は開拓者である前に一つの生命なのです、それだけは忘れないで……貴方達の尊厳は他でもないこの「象牙（ベヒーモス）」が保証しましょう』

「しまった、哺乳瓶も作るべきだったか」

「台無しだよバカやろー」

おしゃぶりさんの心の中の何かタガが外れ始めたのか、段々と人格が暴走し始めているのを尻目に俺は「象牙」先生による道徳の授業から抜け出してベヒーモスの真の一層を見ていく。

「これが現在進行形でキャラメイク中のプレイヤーか……」

名前は……せ、精霊王グランフェアリオン……さんですか、はい。随分と個性的な初心者だ。頭から三本も角が生えてるちょっと個性的なアバターの体型が試験管の中でコロコロと変わっている。どうやら男にするか女にするか迷っているようで、試験管の中で発生した泡で肉体が隠れる度に性別が変わる精霊王グランフェアリオンさん（Ｌｖ．１）から視線を外す。まぁ精霊の王にだってレベル１の頃はあるさ、種族二号人類だけど。

「ねぇ、あれなんだと思う？」

「炸裂グリンピース姉貴」

そろそろキレられそうだな、ええと何々……

「空の試験管に見えるわよね？」

「ついでに言えば扉付きだな」

『それは再計算の為の装置ですよ炸裂グリンピース、サンラク』

「ふっぐ………っっ」

せ、せっかく俺が名前弄りを控えようとしていた矢先に「象牙」がぶっ込んできやがった……いや、向こうにそういうつもりはないだろう。「象牙」は姉貴の本名を呼んだだけだ、炸裂グリンピースという本名をな……。

「再計算？」

『その通り。Q．E．D．はバトンタッチ計画の一端、次世代型人類種の創造の為に製造され、このベヒーモスに搭載された装置です。フラットステータスの人類種……すなわち一号人類、そのの「最少集落」を東大陸全体に設置し、さらに新大陸の座標を基に同様の転送を行なっていましたが……そのプロトコルが終了した時点で、二号人類の生産作業を続けています』

「へえ」

「なるほどね」

そっとアイコンタクト……良かった、姉貴も何が何だか理解できていないらしい。赤点を取ってもそれが一人ではなく二人なら心強いというものだ。

『二号人類は生誕段階で成長金型「ジョブシステム」及び境遇金型「ロールシステム」を刻印した状態で生産、流通されます。これは

二号計画に基づいたレギュレーションであり……』

何か大事な事を言ってるのは分かるんだが……どうしよう、俺も姉貴も全く理解できていない。そんな難しいことは言っていない気はするのだが、矢継ぎ早に専門用語というか単語が出てくるせいでそっちが気になって仕方がない。
どうせキョージュ一人じゃないんだろう、どっかから【ライブラリ】の奴を引っ張ってくるべきだったか。

「あ、あの……」

「おやレイ氏」

「貴方は……確かサイガ－0……さん、よね。噂はかねがね」

「え？　へ、あの、あ、えと、どうも」

『サイガ－0、サンラク……丁度いいですね、試してみますか？』

「え？」

「ん？」

『リセット・カリキュレーター・システム……R．C．S．と私は名付けました。簡単に言えば……肉体の再構築を可能とする後天的アバタービルドが可能なのですよ』

「え、私は？」

「すまん姉貴、これ多分リアイベ関連なんだわ」

そういえば貰ってたな、そんな感じのチケット……ここで使うのか。

母なる地にて灯火は始まりを知る（後書き）

（ら、楽郎君が女の人と……！！）

（れ、冷静さを失ってしまう……！！）

「あ、あの！！」

「お噂はかねがね（ゲーム内恋愛する気ゼロ姉貴）」

「（予想外にリスペクトされてる返答でキョドるヒロインちゃん）」

手入れして花開く

この手のキャラメイク可能なゲームは極論二つに分類できる。
――即ち後から整形できるかできないか、だ。
シャンフロはできない側だと以前は思っていたが、リヴァイアサンやベヒーモスを見れば「象牙」の提案にも躊躇いなく乗れるというものだ。
シャングリラ・フロンティアは後天的なアバターの変更が可能なゲームであるという事実、それはともすればどんな攻略情報よりもプレイヤー達にとっては嬉しい報せなのかもしれない。
「リアイべってもしかしてＪＧＥ？」
「そうそう、だから別口でこれを使う方法はあると思うが今使えないのはそれが理由だと思う」
まぁ現地通貨（リザルト）を消費するのが一番可能性の高そうな方法だが……うーん、しかしどうしたものか。
「ま、とりあえずエディット見ながら考えるか」
レイ氏は既に編集作業中だ、なにやら張り詰めた様子で試験管の中に入って行ったレイ氏であったが直後、もの凄い勢いで下に落ちて行った試験管の中でレイ氏がどんな顔をしていたのかは分からない……少なくとも怪物の顔そのまんまな兜は無表情だった。
さて、一応装備を外して置いて……

「じゃ、ちょっと行ってくるるるるるぁぁぁぁぁあ！！！」

しゅこーん！　と従姉妹が好きそうな絶叫マシン的動きで落ちていく中で視界が馴染んで黒くなって………

……

…………

『――知覚できていますね？　現在、貴方の脳にダイレクトで情報を送信しています』

脳みそにケーブルとか刺さってそうで怖いんだが。

『人間一人を制御するのに有線設備など必要ありませんよサンラク』

いや線の有無を心配してるわけじゃなくてですね……まぁいいや、とりあえず目を瞑って水の中に沈んでるような状態なんですけどどうすれば？

『あまり急くものではありませんよサンラク、開拓者の時間は無限のように見えて有限……しかし余裕を持たねば文化とは育まれないものです』

生憎開拓者最速なもので。

『ふふふ、分かりますともサンラク。貴方は比肩なき速さに到達した者……前を見据え、艱難辛苦を踏み越えんとする姿は貴方を生み出した「象牙（ワタシ）」をして誇りに思いますもの』

……なるほど、ちょっとおしゃぶりが欲しくなる気持ちも分かったぜ。だが俺はこれでも二本の足で自立してるんでな、好意は受け取るが甘えない。

『親にとって子というものは、何歳であろうと子に変わりはないのですよ。良くも悪くも、変わらないものです』

さいですか……おお、我がボディが目の真赤に表示された。

『既に肉体錯覚の効果は適用されています、己の身体で己を作り替えてみましょうか』

肉体錯覚……ああ、キャラメイクの時と同じ感じか。

よし、じゃあ始めるとするか。とりあえず前々から思っていたがもう少しマッシブにする。

『おや、最速を誇る貴方が敢えて体躯を大きくするのですね？』

体幹が欲しいんだよ、今までのボディでも問題はないが、「良い」と「より良い」がイコールになることはない。

地獄独楽回転発生装置、もとい兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）の制御を行うならある程度がっしりした体格の方が色々とやりやすいのだ。ボディビルダーか何かかってくらいガタイだけ立派なモルドほどの筋肉はいらないがライトヘビー級くらいの筋肉量は欲しい、イアイフィストとの兼ね合いもあるから腕の長さは……いや、数センチくらいなら伸ばしてもいいんじゃないか？

『変更情報を同期することで実際に動かした場合と同等の肉体錯覚を実行することはできますよ』

無論試す。うーん、やっぱ動かしてみると違和感があるな、変更前から体格が変わっているという以前にしっくりこない。キャラクターとしてあまりバランスが良くないってことだ、身長を伸ばす……違和感が酷くなった、やっぱ腕伸ばしすぎたかな。足を伸ばして……うーん、体幹が足りない。じゃあ腰回りをもう少しがっちりさせて……あー、肩かなこれ。なで肩になってるから骨格から変えて…………うーむ、これは。

『身長2メートル60センチ、体重182キログラム。諸々の理由もありますがそもそも物理的問題により実行不可能ですね……詰まります』

くっ……いやこれはないなとは思ったけどさ、頭のサイズがそのままだから完全に筋肉が暴走してる系の成れ果てになっていたし。とはいえ体幹バランスや手足のバランスがこれまでで一番しっくりくるからこの比率を維持したまま身長180くらいにまでダウンサイジングすればいけるか？

『可能です、縮小するとこうなりますが？』

手のサイズを変更、指を若干長く、手のひらを大きくして……お、これ指の長さ個別で変えられるのか。手刀に適した形にしてっと。うーん、ちょっとでかすぎたかな、いや手首を太くすればいけるかな。

『……随分と緻密に手を加えるのですね、サンラク』

こういうのは妥協すると後々になって後悔するんだよ、最近アクセサリーで耐久力を上げられるって知ってなー……だったらある程度被弾確率が上がるとしてもフィジカルを上げた方がメリットの割合が大きい。これまでの体格でも武器の方で火力をまかなっていたし細身の身体が回避に役立つことも少なくはなかったが、最近はグラップルというか打撃系……超排撃ブッパだけしてた頃と違ってメインスタイルとして使うことも多くなってきたから基礎のフィジカルを上げる選択肢に踏み切ったってわけよ。

『スキルシステム参照……なるほど、殆ど機動力に特化していると言っていい偏った性質。特に使用回数の多い視覚系体幹時間延長スキル……成る程、では肉体改造に精を出す貴方にプランを提示しましょう』

プラン？

『サンラク、Q.E.D.はただ肉体を構築するだけではないのです。そう例えば……特定の部位を「強化」することもできるのですよ。「勇魚」に倣ってブーケ・パズルとでも呼称しましょうか、ブーケ・パズル第五段階（ランクファイブ）と必要量のリザルトを要求させていただきますが……例えばそう、眼球および視神経を強化することで』

スキル自体の出力も上がると？

『ええ、それがスキルですから。刹那理論が生み出した人智を超えた力を人智にて扱う術……限定的人体改変、当然改変前の肉体スペックが高ければ最終的出力も上昇します』

そういうことを聞くと俄然やる気が出てくるってもんよ、とりあえ

ずアバター改造はこんなもんでいいだろう。
全体的にひと回り……いや０．５回りくらい大きくなったニューボディの調子を確かめつつ最終確認。
パンチよしキックよしジャンプ、ステップ、ちょっと関節の可動域を無視、バック転、宙返り……うん、よしこれでオッケー。
『では肉体の再構築を開始します………新たな肉体、良(よ)く能(よ)く活かしてくださいね』
あたぼうよ。

…………

……

「まさしく究極のボディーを手に入れたと言っても過言ではない……」
「ちょっと視点が高くなってるですわ……」
「帽子は喋らない、いいな？」
もごもごと動く頭装備を付け直して……おや、炸裂グリンピース姉貴がいない。まぁ別にパーティ組んでるわけでもないし残っててもらわないと困る理由もないか。さてレイ氏はどこだ？　試験官がある

ってことはもう既にキャラクターリビルドを終わらせてるんだろうが……と、どこにいるのかと探していると。

「あ、あの…………」

「ん？　ああレイ氏そこに……ぃい？」

「…………うう」

何かの装置の陰から姿を現したのは、先程までとは随分と違う……具体的には俺の視点が高くなったことを差し引いても見下ろす程に低くなった身長。いや身長だけじゃない、あの重装甲を支えていただろう筋肉も見違えるほどに縮小した代わりにしなやかさが比較にならないほどに増したその姿は。

「性別変えたんだ」

「あと、えと、はい………」

双理の鎧、男キャラの時は全身を覆っていたそれが今はなんというか……腹とか太ももとか、タイツみたいな素材になっている肌色こそ少ないが露出が多い感じというか…………

「その、性別を変えたらこうなって、しまって……」

「え、あー、うん。まぁゲームだし！　肌が出てるわけじゃないし、うん……まぁ、うん」

露出度の高い女キャラなんてアホほど見かけるんだが………なんというかその、思いっきり恥じらってるのを見せられると俺もなんと

いうか…………照れるなこれ。

手入れして花開く（後書き）

ヒロインちゃんに足りなかった最後のピース、それは恥じらい……っ！！
そして恥じらいとは相応の見た目でこそ最大の効果を発揮する……っ！！
愚策……っ！　これまでの全てが、愚策……っ！！
堅固な騎士鎧で恥じらったところで、くねくねする人型モンスターでしかない……っ！！
他の誰がどう感じようと「私は恥ずかしい」というポーズこそが肝要……っ！！
双理の鎧は女性が装備した時、タイツの上から鎧が生えているような見た目になる……っ！！

なおタイツ部分の防御力はクソ高いのでヒロインちゃんのステータスだと鋼より硬いタイツ（厳密には鎧の「皮膜」がタイツっぽく見えるだけ）

第一階層基礎テスト「どう通る？」（前書き）

約束はちゃんと果たします（予告通りの更新）

なんというかこう、リアルでもちょくちょく一緒に登校しているのに……ましてゲームだというのに何か異様な緊張感がある。
それは女装備用に形の変わった双理の鎧が少々過激なデザインだからなのか、それともフルフェイスの兜から顔の左半分を覆う仮面のような形になった双理さん（暫定）とちょぃちょぃ目が合うからなのか……
未知の肉食獣みたいな形をしていた男用装備時の時とは異なり、なんというか今は化けの皮が剥がれた人間に擬態していた何かみたいな。
眼球に瞳孔が三つくらいある怪物の目が明らかにレイ氏の意思とは無関係にこっちを見てくるのでなんというか奇妙な緊張感がある。

「……あの」

「んぇ！？　何？」

「その、やっぱり……変な格好、でしょうか」

「いやいやいや、気にしてない気にしてない」

レイ氏の左目がぎょるんぎょるん回っているのが激烈に気になるのでそれ以外が気にならなくなってきた、というのはある。
と、やけに人が少なくなった第一階層を歩いていた俺たちは、プレイヤー達がどこに行ったのかを知ることになる。というか彼らが向かった「どこか」に到着したとも言うが。

「行けーっ！　そこだーっ！」

「あーっ、落ちたーっ！！」

「いいとこまで行ったんだけどなぁ」

「次誰行く？」

「俺に任せろ」

「いやタンクには無理だろ」

「そうとも限らない、流石に軽戦士しかクリアできないってわけじゃないだろう」

「いやでもこいつＡＧＩとＤＥＸマジでゴミなんですよ」

「２０あれば実質カンストみたいなところあるだろ」

「……もう少し、攻略の糸口が見えてから挑戦しようか」

率直な感想としては「何やってんだこいつら？」だ。
なんだろう……２Ｄの横スクロールアクションを３Ｄにしたような謎のアスレチックに挑むプレイヤーをその他で観戦しているというのは分かるんだが、おかしいなここはベヒーモスであってリヴァイアサンではなかったはずだが。

「なにこれ」

「あ、ツチノコさん……って、何かデカくなった？」

「ニューバージョン、グラップルフォーム的な」

「へー」

あれおかしいな、後からキャラメイクってもっと注目されると思ったんだが。なにその「まぁそういう事もあるのか」みたいな……いや俺個人が関節バキバキ曲げてるわけじゃないんだが！？

「で、これなにやってるんだ炸裂グリンピース姉貴」

「私は生まれてこの方一人っ子よ、なんでもこれをクリアすると次の階層に行けるんですって」

「……「象牙」、ベヒーモスはいつからアミューズメントパークになったんだ？」

『全ての階層間「試験」は貴方達を試すための検定なのです、この一階層では基本的な運動能力及び基礎知能テストを兼ねています』

「なるほどつまりこの程度簡単にクリアしなきゃお話にならないと」

既に何人かその「お話にならない」人がいるっぽいんだが……いや、何も言うまい。

とりあえず見た限りでは一直線の道を通って最奥の扉に辿り着けばいいらしい、ただその道中に大量のトラップというか障害物が設置されているが。

「トゲに、レーザーに、扉に、振り子の刃？」

「逆にレトロですらあるわね」

「ふむ……」

あ、普通にトゲ刺さるんだ……いやあれレーザーが肉体通り過ぎてるって事は崩れ落ちてないだけでスパッと行ってますよね？　振り子はタイミングを見れば行けるか？　あー惜しい。
……これ順番とかあるのかな？　いや立候補制かな？　見た限り先発の人柱達を見て攻略法を皆探しているっぽいな。

「成る程成る程……なあ「象牙」、あの扉の前に着いた時点でクリアなのか？　それとも他に何か条件があるとかじゃないだろうな？」

『あくまでもここは基礎的な知能、運動能力のテストですよ』

雑にはぐらかしおってからに、だが見た限り……んー？

「……次俺が挑戦していい？」

「おお、ツチノコさん行くのか」

「最速ホルダー！」

「よせやい照れる」

頭装備（エムル）がぷるぷる震えているのがダイレクトに伝わってくるが、安心しろと軽くぺふぺふ叩いておく。見てて分かったがこのデスロードは恐らく特定のラインを超えた瞬間にギミックが作動するタイプだ、つまり踏み込まない限りは起動しないし……逆に言えば踏み込
…

んでから起動するタイプと見た。
つまり何が言いたいかってーと……ギミックの形状、挙動、速度を踏まえた上で俺の機動力ならいけるんじゃないかって事だ。
「跳んで、避けて、突っ切って、飛び込んで……オッケー、チャートは既に完成した」
「サンラク…君、その、頑張ってください」
「ん、ありがとう。レイ氏はこれ行けそう？」
「あ、えと、大丈夫です。少し、試したいこともあるので……」
どうやらレイ氏も何やら攻略の目処は立っているらしい。であるならば俺は俺の心配だけしておこう。
封雷の撃鉄・災をスタンバイ、スキルの発動順を脳内で組み立てていると、俺の一つ前に挑戦していたプレイヤーが振り子の刃にぶっ飛ばされた事でついに手番が来る。
ガラスのように中と外とを隔てていた入口の障壁が消え、俺と頭装備（エムル）が入った時点で再び障壁によって中と外が隔てられる。というかエムルはいいのか？　まさかマジで頭装備判定ではあるまいし……流石はシャンフロシステムと言えばいいのか？
「しっかり掴まっとけよエムル……だがまぁ安心しろ」
大体５０メートルか……
「五秒だ」

「も、もう少し手心を加えて欲しいで」

エムルが残りの「すわ」を言う前にスタート。悪いがスタートを告げる空砲は俺の心の中で鳴り響いた、どうしても聞きたいなら読心術を習得してくれ。

「っ！！」

まず第一関門、シュレッダーで紙をバラバラにするように人間をミンチにする圧殺ローラーの上に浮遊する足場を最初の一枚と最後の一枚、歩数にして二歩で踏破してクリア。

五秒あればどれだけ時間差でスキルを使っても効果時間は重複する、あとはどれだけまっすぐ迷いなくスキル発動を思考できるかにかかっている。

第二関門、トゲが上下左右から飛び出す死のトンネル。スキル起動、トゲが飛び出すよりも先に速度にモノを言わせた強行突破でクリア。トゲが出るまでの速度が妙に遅いなとは思っていたが、やっぱり素通りできた。

第三関門、道を×(バツ)印に塞ぐレーザー。逆に言えば上下左右は通れますって事だ、スライディングで下を潜り抜ける。

そして過剰伝達はあらゆるアクションに適用される、であればレーザーの股下をくぐり抜けた後に両手で体を持ち上げるという動作は黒い雷によって増幅され、「身体が勢いよく跳ね起きる」というアクションとなる。

俺が次の関門へと走り去る頃、ワンテンポ遅れて後ろでレーザーが通行不可能の壁を形成した。遅い遅い。

次、第四関門は勢いよく閉じては開いてを繰り返し続ける扉……いやどちらかというとシャッターか。その速度は並大抵ではない、閉じて開いての一往復が大体一秒なのだから如何に高速で走っていたとしても一度止まった方がいいのかもしれないが……

「甘い！！」

真界観測眼（クォンタムゲイズ）起動、一秒間に何回開け閉めしようがこちとら世界最速の幼女が師匠だ。この程度遅すぎてあくびが出るぜ、そしてスタート地点から走り出した時点ですぐに取り出せるようウィンドウを操作しておいた使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）発動！！　実行される魔法は……

「【瞬間転移（アポート）】！！」

肉体が消えて、現れる。短距離にしか転移できない魔法であっても、扉一枚を超えるだけなら大した苦労もない。そして最終関門……勢いよく揺れる振り子の刃、その数十枚！　そして厄介なのはそれぞれの揺れ方に法則性がないことだ。

上手くやれば回避できるかもしれないが、恐らく刃ごとに揺れる速さが違う。さっき挑戦してた奴らのプレイを見ていたから気づいたが……ある種力技で突破できる関門しかなかった、だからこそシンプルなタイミングずらしが遅効性の毒として立ち塞がるわけだ。

だが甘い、甘い！　甘いんだよ！！　先程の使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）は右手で操作した「インベントリ」から取り出したものだ。そして別枠の収納だからこそ左手で「インベントリア」を操作することが出来る！　これぞクソ地道な練習の賜物、奥義「ダブルブラインドタッチ」！！

「知ってるか？　使い捨て魔術媒体と自前の魔法は連続で使用できる」

発動形式が違うからリキャストの概念が適用されない、万が一にもマントが背後のギミックに引っかかるようなことがあっては不味いと装備せずにしまっていたが、この一瞬が勝負どころだ。
インベントリアから取り出した瑠璃天の星外套を纏い……記憶させていた【瞬間転移（アポート）】を再び使用する。即死級振り子ブレードが何枚あろうと関係ない、重要なのは魔法の射程圏内ギリギリが振り子刃最後の一枚よりも頭一つ分くらい離れているってことだ。
即ち二度目の瞬間転移で十枚の刃を全てスキップしてしまえばどれだけ高速で揺れていようが関係ない、背景オブジェクトと同価値かそれ以下だ。

「これでクリ――――」

「サンラクサン上ですわっ！？」

「何っ！？」

見上げると、そこには上から落ちてくるギロチンの、ぉぉおおお！！？

……

…………

「…………エムル生きてるか？」

「…………生きてる心地はしないですわ」

もし僅かでも前にいたら……文字通り一歩間違えていたならばエムルごと俺を両断していただろう即死トラップは、しかし実際は俺とエムルの鼻先を掠めて地面に突き立てられている。

そして最後の関門(トラップ)が幻のように消えれば……そこには第二階層へと続く扉だけが残った。俺はこの五秒間の出来事を見ていたオーディエンス達に向けてゼスチャーを送る。

お先に失礼！！

第一階層基礎テスト「どう通る？」（後書き）

双理の鎧は別に勝手に動いてるわけじゃないんですよ
装備したプレイヤーの心拍などを参照して仮面(頭装備)から生えた眼球を動かしたりしているので、要するにヒロインちゃん自身がキョドってるから双理の鎧さんもちらちらちらサンラクを見てしまうという……

我が階を塞ぐ者、その一切を撃滅せん（前書き）

こんな物騒なサブタイトル、一体誰が活躍するんだ……

◇

跳んで、駆け抜けて、滑り抜けて、ワープして、ワープして、一歩下がる。

今起きた現象を説明するとすればこのような感じになるだろうか。
次の階層に消えた男の影を探すように「通路」を見る者達の心は今、一つになっていた。

即ち、

「参考にならねぇ……」

この一言に尽きた。

「いやマジでなんなんだ今の動き、同じ軽戦士系だし真似しようと思ってたのに」

「転移魔法とか覚えてないんだが！？」

「スクロールあればいけるだろ」

「いや最後スクロール使ってなかったよな？」

「あのマントが魔法の発動を代理してるとか？　苦行剣みたいに」

とはいえ、クリアはクリアである。そして最後の最後にとんでもない初見殺しがあることが発覚したこともあり、プレイヤー達の攻略談議は俄然盛り上がる。

「やっぱ最初の飛び石は駆け抜け正解なんだな」

「これタンクも鎧脱いで走った方がいいな、速度とかじゃなくてレーザー避けるために」

「瞬間転移（アポート）はわりと盲点でしたね……使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）と併用すればリキャスト関係ないし」

「ていうかなによあのギロチン！」

「ゴール前で気が緩んだところをスパッと……」

「気付いていていればそんな怖くないって」

「ていうかさっきからあの帽子、インベントリに仕舞わずに地面に置いたり変だと思ってたけどやっぱあれ兎じゃん！　あの人何持ち込んでるの！？」

そうそこだ、とサイガー０は考える。世間一般ではサンラクとエムルの関係はテイマーとテイムモンスターと思われているが、同じ状況にあるサイガー０はそれが間違いであることを知っている。
その上でサンラクとエムルが同時に次の階層に進んだということはつまり。

「……秋津茜さん」

「え？　……あっ！　サイガー０さん！　聖杯の効果ですか？　姿が違ったので分からなかったです！！」

「そう、ですね……その、一つ試したいことがあるのですが、協力してもらってもいいですか？」

「もちろん！」

……

…………

「ん？　あれ今二人で入らなかったか？」

第二のクリアを目指して何人かが脱落した中……攻略談義に花を咲かせていたプレイヤーの一人が呟いた言葉に会話相手達も顔を上げれば、そこにはこれまで一人しか入室できないと考えられていた通路に立つ、二人のプレイヤー。

「ドラ姫ちゃんと……誰？」

「サイガー０って……あれ、最大火力って男アバターじゃなかったか？」

「性転換アイテムでしょ、クターニッドの報酬にあるって話だし」

「でもなんで今……？　ていうか複数人で入れたのか」

狐面の忍者と、顔の半分を異形の仮面で覆った騎士。双方少女アバターであることを差し引いても衣装の世界観がちぐはぐなタッグである、だがその様子は「二人で入ることができたから検証終了」といった様子ではない。前を、通路の最奥にある扉を見る様子はクリアを目指す者の目だ。

◇◇

「……行きます、秋津茜さん」

「はいっ！！」

素体が女になったからといって、サイガー０というアバターが明確に弱体化したわけではない。その膂力も、スキルも、魔法も……性別変更前からなんら変わりはないのだ。それ故に一人通過した時点で足場が崩落する第一関門、飛び石エリアの攻略法は極めてシンプルかつ力技であった。

「っ！！！」

「ジャーンプ！！」

サイガー０が取り出した大盾を斜めに構え、それを足場にした秋津茜が物理的に飛び石エリアそのものを跳び越える。そしてサイガー

０が飛び石エリアを利用して先に進む……この時点で二人組になる必要性の薄い攻略模様であるが、本題はここからだ。

「確か、忍者ジョブには……パーティメンバーの攻撃と同化できる「朧隠」という魔法が……ありました、よね？」

「はいっ！　私も覚えています！！」

「なら………」

サンラクが力技で突破するならば、サイガー０の選んだ方法は頭を使った結果力技になったとでもいうべきか。

太極の剣を構え、サイガー０というアバターが習得している魔法の中でも見た目の派手さにおいてはトップクラス……太極の剣固有の奥義に見た目だけは匹敵する魔法を発動する。

「秋津茜さん、奥まで走ってください……私が道を拓きます」

この攻略法の根拠はただ一つ。決して少なくはない失敗者達による試行の中で、とあるプレイヤーが刃を向ける形で振り子を防いだ時に防いだ剣だけではなく振り子刃の方もわずかに欠けていたのを目撃したから……ただそれだけの根拠でサイガー０は秋津茜にこの危険な一直線を全力疾走させようとしている。

「――――蒼天を見上げ、手を伸ばす。されど我が身は地に重く、この身が振るうは重塊錬武。」

考察に確証があるわけではない、だから……成功にたどり着くために必要な要素全てを純粋な力で押し通すのだ。太極の剣に蒼光が宿り、サイガー０からＭＰを吸い上げて光はより激しく凶悪に輝きを

増す。
両手持ちかつ重量級の武器を「発動条件」に含む魔法の中でも珍しい魔法使いではなく完全重量級魔法戦士向け魔法流派「輝天魔操流（スカイステア）」が二大最終奥義の一つ。

「ならば天よ、空よ、刮目せよ。我が一撃、地より始まり天を撃つ。天空に描け我が道を！！」

それは地より天に伸ばす剛撃の階（きざはし）。

「……【輝天へと続く階（スカイステア・プロートス）】！！」

全力のスイングと同時、大剣から放たれた極大の光が哀れな犠牲者を待ち構えていた通路のギミックをブチ抜いて突き進む。
消費ＭＰが任意ということもあり、サイガー０の持つＭＰの八割を注ぎ込んだ破壊の光は刺のギミックを吹き飛ばし、レーザーを掻き消し、勢いよく開閉するシャッターを貫通し、振り子の悉くを粉砕し……

「刃隠心得！【朧隠】！！」

光が穿ち、作り上げられた輝ける道を走る影一つ。
パーティメンバーの魔法攻撃によるフレンドリーファイアを完全無効化し、さらには魔法そのものに「擬態」する事で敵に近づく移動用の魔法によって【輝天へと続く階】の中に溶け込んだ秋津茜が一直線に前へと駆け抜ける。
開拓者の身を貫く棘のトンネルは飛び出した端から光に消し飛ばされ、秋津茜を止めることができない。

開拓者を斬り裂くレーザーの網はさらに高出力な光を貫いて網を張る事が叶わず、秋津茜を絡め捉えることができない。
開拓者を挟み断つシャッターの罠はその防御力そのものを亡きものとされ、秋津茜を素通りさせてしまう。
開拓者を阻み、吹き飛ばす筈の振り子は……もう一つも残っていない。振り子とは必ず往復運動をするもの、即ちどうあがいても攻撃に当たり続ける、逃げられない。
それ故に秋津茜が通る頃には単なる一本道と成り果てた。
そして真に最後の関門、安堵を断ち切る断頭の刃は……

「分かっていれば引っかかりませんよ！」

あっけなく避けられ、秋津茜はある意味サンラクよりもあっさりと通路の果てへと到達したのだった。

「やりました！」

「……」

通路の向こうでぴょんぴょんと跳ねながら喜びを表現する秋津茜へ無言で頷いたサイガ－0は懐(インベントリ)から一本の投げナイフと紙の筒……スクロールを取り出す。

「………」

【我が身を盾に(マイボディ・アズ・ア・シールド)】、パーティメンバーが攻撃対象になった際、自身をその攻撃を庇う位置に転移させる事が出来る転移魔法。本来はサ

ンラクがピンチになった時に颯爽とカバーする為に購入したが……
サイガー０の想定以上にサンラクがその手の援護を必要としなかったこともあり、使われる事なく死蔵されていた悲しい曰く付きの使い捨て魔術媒体である。

そしてこの魔法には一つ、面白い使い方がある。
攻撃に反応して発動するこの魔法は、攻撃者の敵対か否かを問わない。つまりサイガー０がフルパワーで投げた（投擲系スキル込み）投げナイフがパーティメンバーたる秋津茜に向かいさえすれば……

「痛っ」

「わ、大丈夫ですか！？　思いっきり顔に当たってましたが！！」

「あ、いえ……仮面の方に当たったので、ダメージは殆どないです」

いわゆる小技（テクニック）、自作自演ワープによって一瞬でゴール前に到達したサイガー０の顔に当たった投げナイフがからんと地面に落ちた音が、壊滅した通路にやけにはっきりと響いた……

我が階を塞ぐ者、その一切を撃滅せん（後書き）

外から見てたプレイヤー達「参考にならねぇ……」

『素晴らしい、第一試験は合格ですサンラク。貴方は真正面からあのギミックを突破してみせた、それは次世代の担い手たる貴方達が既に戦い、生きてゆく為の力を持っていることの証左に他ならない』

「鉄火場と土壇場には常連でな、ポイントカードがあったらそろそろ溜まりそうなんだが」

『重ねて讃えましょう……素晴らしい。かつて人類は「群」から「個」を生み出さんとし、しかし最強の人類が姿を消した事で全ては泡沫と消えました』

……多分、「象牙」の言う最強の人類と俺が思い浮かべた人物は同一な気がする。

『ですが現代(いま)を生きる貴方達は「個」の「群」たらんとしている……素晴らしい、神代からの三千年は良質な結果になりつつあるようです』

「さいですか」

何人か悪質な性格した奴らに心当たりがあるし、そもそも俺一人良品質でも意味なくね？　とは思うが、本人が満足げならそれでいいか。

「で？　この階層では何がクリア条件だ？」

『筆記テストです』

「ひっきてすと」

いきなり学校みたいな事言い出したぞこのサイバー割烹着。筆記テストだと？　ゲームの中でまでテスト勉強しないといけないないとか新手の苦行かよ。

『達成条件は８０点以上、この階層はある種資料室となっておりますので「提出」するまでは好きに閲覧して構いません』

「要するに教科書見ながらテストを解いていいって事か」

『その通り、さらにこの階層をクリアする事で……一部資料の持ち出しも可能になります』

資料の持ち出し、ね。

なんの気なく操作した備え付けのコンソールが提示した閲覧資料の中に「改良型合金適正精査デバイス設計案」なんて素敵単語があるのを見つけた俺は、筆記テストのクリアに関して俄然やる気が湧いてきたのを自覚する。

「よーし、人手を増やすか」

出でよサイナ、インテリジェンスの見せ所だ！！

「………」

「どうした？」

普段ならドヤ顔かまして「当機のインテリジェンスに頼る……最前の判断ですね」くらい言うくせに……今のサイナはやけに静かだ。
そして何か、戸惑っているような……いやもう少し違う感情のような。

「確認：ここはバハムート三番艦ベヒーモスですね？」

『懐かしい顔ですね、エルマ型……３１７号ですか』

「っ！」

「何、知ってるの？」

『当然でしょう。征服人形(コンキスタ・ドール)はここ、ベヒーモスで生まれた技術です。
そして……アンドリュー・ジッタードールと共に開発したのは他でもないこの「象牙」なのですから』

おおビッグマザー、人類種のみならず人形作りにまで手を出しておられたか。
だが突然の親フラに対してサイナの反応は優れない、喜ぶわけでも混乱するわけでもなく……ただ沈痛な表情で黙り込む、ってのは妙な話だろう。

『再征服計画の進捗はリヴァイアサンを中継してベヒーモスへと届いています。次世代文明の進行を歪めない為の神代文明アイテムの回収……そして二号人類種との協調……ええ、ええ。貴女達がその姿である事こそがアンドリュー最大の悲願。人類の担い手としては下の下ではありましたが……草葉の陰でアンドリューも喜んでいる事でしょう』

「……疑問：当機（ワタシ）はベヒーモスＡＩ「象牙」に対して質疑応答を要請します」

『許可します』

思えば、ここが征服人形（サイナ）というキャラクターにとって一大イベントシーンだったのかもしれない。

オルケストラ戦での謎の不調、オルケストラは俺をコピーしたが、サイナに関してはノータッチだった。オルケストラは何を基準にコピーを作っていたのか？　先着順か？　それとも……生物であるか否か、か？

サイナの口癖であるインテリジェンス……そう、知性（インテリジェンス）だ。知能ではなく知性、モノに知性は宿らない。

だから、人形らしからぬ不安と懐疑を表情に載せたサイナの問いは、俺（ゲーマー）からすれば酷く見慣れた展開であった。

「質問：征服人形は人類種（エルマ・サキシマ）足り得ないのですか？　この当機（ワタシ）のパーソナリティは……過去の人物としての範疇でしかないのですか？」

絞り出した言葉が母に問うたのは……征服人形は物か、者かを問いかけるもので。
即ち、ロボットが魂を持ち得るのか否かを問う創作では随分と手垢のついた電気羊の夢であった。

「サイナサンは何言ってるですわ？」

「まぁ見てろって、「象牙」の返答次第じゃ俺が骨を折ることになる」

「骨！？」

比喩表現だバカ。だがエルマ型と言うからには元となったエルマ氏がいるだろうってのは分かっていたが……こんな形で知る事になるとは、エルマ・サキシマ……明らかに日本っぽい苗字なことで。

だがサイナの様子は切実だ、己のアイデンティティに関してオルケストラは無反応を貫き通した。そして今、征服人形誕生に一枚噛んだという「象牙」に対して人形は問うたのだ。自分のこの不安も疑問も、エルマ・サキシマの性格に基づいた「対応」でしかないのかと……！！

『アンドリュー……貴方という人は』

今はいない人物への嘆息。
それが「象牙」の返答であった。

「…………」

『単刀直入に言いましょう。エルマ＝３１７、貴女のその感情は「バグ」です』

「……バグ」

「おい「象牙」……」

『再征服計画はあくまでも人類種に寄り添う道具の計画です。大部分にアンドリュー・ジッタードールの趣味が盛り込まれていますが……その見た目も、人格も、次世代原始人類との交流において有利な方向性を得る為の機能に過ぎない』

サイナの表情が凍る、なにせ「象牙」が語った内容は征服人形のアイデンティティを否定する言葉に他ならない。

成る程？　そう分岐するわけね？　だったら俺にも考えがあるぜ、この内容を征服人形ガチ勢達に流してデモを行うというクソ面倒くさいリークをな……！　その為なら武器を横流しするのも吝かではない、象牙は高く売れますからなぁ……！！

「機能……そう、ですか。理解しまし」

『話は終わっていませんよエルマ＝３１７。私は貴女の言葉に呆れたのではありませんよ、これはアンドリュー・ジッタードールという稀代の大馬鹿者に対しての呆れです』

サンラク、とデモ計画を実行寸前段階まで組み上げていた俺に対して「象牙」が呼びかける。

「なんだよ？」

『貴方はエルマ＝３１７をどう見ていますか？　道具か、それとも……』

「悪いな、俺は話す相手の種族に頓着しねーんだ。触手生物だろうがゼラチン生命体だろうが、自分でモノを考えられるなら誰とだって組むさ。軽口でも叩ければさらに上等」

ゲーマーは悪魔とだって手を組むし、神様にだって喧嘩を売る。大事なのはパーティに編成できるか否かとターゲットマーカーが付くか否かだ。

『ならばエルマ＝３１７を連れて第八階層を目指しなさい。征服人形と契約した貴方ならば、彼のラボへの道を拓くことが出来る』

「ついにゲロったな「象牙」……第八階層？　上等だ、何千年待ったのかは知らないが今日一日で攻略されても文句言うんじゃねーぜ？」

『ふふふ、手心は加えませんよサンラク……我が愛しき子の一人。神代を紐解き、越えていきなさい』

何が紐解けだ、全部解いて縄跳びしてやるわ。

彼女は問う、彼女は問う、彼は解く（後書き）

アンドリュー・ジッタードール、全ての答えは彼が持っている

◆

「……」

「おいサイナ、お前も手伝えよ。このテスト結構難しいんだよ」

ガチなテストなので手持ちの知識だけで解けるものではなかった。
いやそれでも二問くらいは多分これだろうなって答えが分かったので残る四十八問を解くべく奔走しているわけだが……サイナの動きが鈍い、やはりバグ呼ばわりされたのが堪えているらしい。

「エムル、この銃撃基礎理論って本の三巻を持ってきてくれ。多分さっき行ったところのコンソールを探せばあるはず」

「はいなっ」

さて……

「サイナ、「象牙」に言われた事なら気にする必要はないぞ」

「……理由の説明を」

「お前、製造されてから何年だ？」

「……返答：十五年と六ヶ月です」

「そうか、俺より遥かに年上だな。俺はベヒーモスで作られてからまだ一年経過してねぇ、見てくれは成人でも俺の人生は九割「象牙」が設定したものだ」

出生……二号人類の成り立ちを知った今、これほど滑稽な初期設定もないだろう。この機械象から射出された生後数秒の赤ん坊が「俺は歴戦の戦士です」とかなんのギャグだっていうな、厨二病に罹患するにしたって十数年は早い。

「ですが、二号人類たる貴方達は「個」を持っている……それは、過去に存在した人物の再現でしかない当機(ワタシ)が持ち得ないものです」

「……いや、そこが分からないんだよサイナ。そこでそんな悩みが出てくるのが」

「……？」

ロボットの自我問題なんて見飽きた展開だ、自我の芽生えたロボットなんて腐るほど救ってきたし腐るほど破壊してきた。
普通ならこう、波乱万丈の末に当事者が答えを得るとかがゲームとしての定石なのかもしれないが……シャンフロはそういうゲーム進行上の制限がそこまで存在しない、少なくともＮＰＣとの会話に関しては極めて高水準だからこそ初手説教なんて荒技ができてしまう。

「エルマ・サキシマだったたか、いつの時代かは知らんが少なくともそいつはジークヴルムと戦った事があるのか？　シグモニア前線渓谷に墜落して俺と遭遇した事があるのか？」

「それは……」

「いいかサイナ、お前は人格がコピーだのパチモンだので悩んでいるようだがな……生物の人格、もしくは性格なんてものは結局のところ二十五パターンくらいしかないんだよ。百人いれば四人くらいは同じような性根をした奴がいる」

「……」

「だが見た目を抜きにしても完全に同じような反応、振る舞いをする奴ってのはまぁ稀だ。何故だか分かるか？」

無言、話を続けろという意味だと解釈して舌を回す。

「記憶さ、記憶なんだよサイナ。蓄積した記憶とそれを理解する感受性が人格を形成する、同じ顔してようが同じ人格だろうが奴隷と貴族が同じような人格になると思うか？」

「……ですが」

チッ、流石にこの段階でイベントクリアとはならないか。好感度以前の問題だ、言葉だけじゃ説得できない。物的証拠、恐らく八階層にあるアンドリュー・ジッタードール氏が遺した何かが征服人形のパーソナリティを証明するのだろう。

「いやいい皆まで言うな。悩む事もインテリジェンスの特権だ、あと六階層下に降りるまで存分に悩んでおけ……少なくとも答えを得る覚悟くらいはできるだろう」

とりあえずはぐらかす、強キャラ特有のはぐらかしはストーリーのあるゲームをやってるなら高確率で遭遇する要素だ、まぁ序盤で真実に辿り着かれても面白みに欠けるわけだし納得はできる。

まぁそれはそれとしてウザいんだけどな、俯瞰視点でモノを見てるプレイヤーがとっくに気づける事をはぐらかされるとまぁまぁイラッとくるものだ。

一番酷かったのはなんのゲームだったたか、仮面をつけた敵キャラ（露出した下顎から生えた髭の形がどう見ても主人公の父親）が最終章まで「まだ正体を明かすわけにはいかない……」とはぐらかし続けた時だったか。なんなら初対面の時から既に正体割れてたのに延々と「一体誰なんだ……」はないだろう。

あー思い出した、「神と剣とドラゴンのロンド」だ。正式名称も公式が推してる略称「カミケンドラ」も語呂がクソみたいに悪すぎてか・み・と・つ・る・ぎ・とどラゴンのロんドで「カツ丼」とか呼ばれてたやつ。シンプルに何もかもがつまらないっていう救いようのないクソゲーだったけど社長が変わった直後にやたら表舞台に出たがりだったプロデューサーが解任され、それから良作連発してたのはなんというか……闇を感じたっけ。

その解任されたプロデューサーが別のゲーム会社で新作を出すって聞いた時は武田氏や界隈の人間と一緒にワクワクしながら待ちわびてたんだが……罪状忘れたけど捕まったんだよなそのプロデューサー、闇を補強するのはやめろ。

「とりあえず……ん？」

おおレイ氏、それに秋津茜も。無事クリアできたのか、それに……これは予想外だ、四番手はキョージュともう一人。プレイヤー名は「毘猩々　磐斎」……おっと？

「あ、サンラク…く、さん」

「おや、当然と言えば当然だが先にこの階層を回っていたようだね」

「よかったなキョージュ、ここのクリア条件は筆記テストだ。ここら一体全部図書館だってさ」

「――素晴らしい。まぁ私は考古学系なのでこちら（ベヒーモス）の方針はメインの分野ではないが、彼のような手合いならば存分に楽しめるだろう」

「いやいやキョージュ、医学部ならゲームの中でも医学の知識が見たいわけではないですよ……まぁ、ちょっと興味はありますけれど。ＳＦだと外科と内科どっちが進化してるか、とか……いや実際どうなんでしょうね？　回復ポーションなんてドチートアイテムがあるから外科手術とか廃れきってそうなもんですけど」

いがくぶ。

「噂のナノマシン手術ってのも、案外この世界観だと実用化されているのかもしれないね」

「あれはダメですよキョージュ、華々しく最先端！　とか謳ってますけど実際は回収手段が確立されてないから動脈に網張って回収するらしいですからね。本末転倒ですよ」

なのましん。

「排泄物から取り出すよりは健康的に思えるのは感受性の問題かな」

「結局身体にメス入れてたら意味ないでしょう、完全制御できない有機ナノマシンとか細菌と何が違うんだって話ですし」

「若い世代にしては珍しくアナログ派だなぁ君は」

「健全な肉体はバグりませんからね」

おっと高学歴パンチか？　おかしいな防御貫通効果がついてるのか、やけに響くぜ……腹に？　いいやメンタルに。

「ナノマシン手術ってなんですか？」

「ミジンコの赤ん坊みたいなのを体内に注射して手術するってやつ」

「さ、流石にちょっと、アバウト……ですね」

人間学歴じゃないよ、どれだけ分かりやすく伝えられるかどうかだよ。

なお、俺たちの雑談を聞きつけた毘猩々(びしょうじょう)磐斎(ばんさい)氏によるめちゃくちゃ分かりやすいナノマシン手術についての概要を聞くことができた。どうしよう、あまりにも強キャラだぞこの人……ネーミングセンスも含めたいろんな意味で。

彼は彼女は答えを求めて（後書き）

「百合奉行（ゆりぶぎょう）　壁染（かべしみ）」と「河囲炉裏（かわいろり）　見守（みのもり）」と「毘猩々（びしょうじょう）　磐斎（ばんさい）」の三択で悩んでこうなりました

マンパワー・ヒューマンパワー

高学歴、それはリアルステータス。
高学歴、それは頭がいいということ。
高学歴、それはテストに強い。
嗚呼高学歴、高学歴。こうも歴然としたパワーを見せつけられると俺も勉強頑張ろうという気持ちになってくる。

「キョージュ、宝石の魔力的組成問題ってことは鉱石系ですかね？」
「いや、文体で騙しているがメインは魔力組成の方だろう、だからあっちだね」
「あー、これ宝石そのものは単なる結果なのか。流石シャンフロ、ゲームにしては中々にやらしい問題文だ」
「磐斎君、きみ先程マナ理論の植物転用の資料を見ていたね？　天然の樹木に干渉する場合のマナ方式について……」
「125ページですね、確か地中式が引っかけです。そういえばセートさんはどうしたんです？　オルケストラの検証はミレィさんが指揮取ってるんでしょう？」

「彼女なら一身上の都合というやつだ、日を跨がないと来れないと言っていた」

「あー、まぁ時期的にもですかねぇ。ちょっと勉強を見たことありますけど余程ミスしなければ問題なさそうでしたが」

「君が押した太鼓判なら私も安心だよ」

一応【ライブラリ】に入団する条件にリアル学歴は関係なかったはずなのだが、キョージュや毘猩々　磐斎が本格的に動き出してからの速度は圧巻の一言に尽きる。

恐らく第一階層からこちらに来る前に攻略チャートが完成していたのだろう、続々とやってくる後続のプレイヤー達の中にちらほらといる【ライブラリ】メンバーが嬉々とした顔で資料漁りに参加したことでもはや俺たちに出来ることは雑用以外無くなりつつある。

「す、すごいですね……！」

「いやこれは流石に真似できねぇな……」

「そう、ですね……」

個々人が「象牙」から渡されたテスト用紙(ウィンドウ)を照らし合わせることで一つ一つが違う五十問で構成されていることを割り出し、その上で合計して三百問くらいの中からランダムで割り振られていることを割り出し、そして「三百問くらいなら全部解いちゃいますか」と気軽な様子でこの有り様である。

俺は【ライブラリ】というクランを舐めていたのかもしれない、いや見縊るとかそういう意味ではなく彼らは本気でこの世界の頭から爪先までを解き明かすつもりなのだと今理解できた。

「いやこれこれ！　これを求めてたんだよ、ファンタジー文明だと解剖図とか参考にならないのばかりでさー」

「やっぱマナ理論について意図的に穴があるなこれ、リヴァイアサンの方でもそうだったけど最終解答に到達するための数値が足りないって感じだ」

「著者の名前見てるだけで満腹ですよこれは……フレーバーテキスト勢としては宝の山だ。しかし各分野で天津気　刹那って単語が頻出してるの割と怪物では？」

ヤバイぞサイナ、インテリジェンスで勝てない。俺はまだなんとかなるがお前からインテリジェンスを抜いたら何が残るんだ。
まぁサイナは色んな意味でそれどころじゃない、といった様子なので俺が気に病む必要はないか。流石【ライブラリ】と太鼓を持って恩恵に預かるとしよう。

「磐斎氏、カンペ見せて」

「あ、いいねそれ採用。虎の巻よりよっぽど響きが好きだ」

まるでカンペの世話になったことなど一度もないと言わんばかりの様子にメンタル方面のＨＰにヒビが入ったが俺はめげない。
なんだろう、多分オルケストラの所で会ったミレィとかも頭良さそうだったんだけど磐斎氏の方が対面しててキツい。何故だ？　一挙一動が学歴で構築されてるっぽいからか？　いや学歴人間ってなんだよ。

「三百問もあるとそれはそれで探すの面倒くさいなこれ……」

「あ、問題文の頭文字で五十音順になってるからそれで探してね」

手厚い……！　あまりに手厚い……っ！　ソロプレイがバカバカしくなってくる利便性……っ！！

恐ろしくあっさりと第二階層をクリアする者が続出する中で、俺達もまた満点答案を提出して階層クリア。

「もうここに住む！」と永住宣言した【ライブラリ】メンバーを何人か残してベヒーモス攻略第一陣は第三階層へと進む。

◆

『第三階層。ここはある種、私の「趣味」と言いますか……お恥ずかしながら惑星環境に関しては「勇魚」の領分であることは承知していたのですがそれはそれとして生態系のシミュレートがしたくなりまして』

「その恥じらい、いいと思うぜっ」

「まさかとは思うがその涎掛け装備するとか言わないよな？　なぁ目を見て否定してくれ」

『その結果、外界に出せない系統の生態系が出来てしまいまして』

第三階層でやる事、それは……

『人数は問いません、この階層で活動する人為的環境生物を一体討伐してください』

極めてシンプルなモンスターハンティングであった。
だがそれに対して喜びの声を上げる者はいない、何故なら……

「あの、質問いいっスか」

『答えましょうレイジ』

「環境生物ってのは……アレのことですかね？」

どうやら彼（レイジ氏）も順調に上がってきたらしい。他人事ながら嬉しく思いつつも、若干強張った人差し指が示す先には……なんだろうね、小学生が考えた最強のドラゴンみたいな何か、全身が甲殻に覆われたケルベロスみたいな何か、それ以外にも明らかに生物兵器と呼んだ方がしっくりくるような何かがリヴァイアサン第二殻層を思わせる草原地帯に鎮座しているのだ。

『重ね重ねお恥ずかしながら……シンプルな摂理のみで食物連鎖を繰り返し続けたらどうなるかというシミュレートを行った結果、ああなりまして』

糾弾すべきは倫理観か？　それとも手心か？
誰が言うでもなく集まった俺達は作戦会議を始める。

「いや無理では？」

「他ゲーならラスボス張れそうな奴がちょいちょいいるんだけど」

「や、でも言うて序盤よ？　案外体力少なめとか……あの筋肉が脆いとは思えない……っ！！」

「素材落ちるのかなアレ」

だがボソリと誰かがこう呟いた。

「「「「…………」」」」

それは乾いた土に甘露をぶちまけるような誘惑をプレイヤー達に齎す悪魔の言葉だ。強いモンスターということは当然強い素材が落ちるわけで……それは「象牙」の肯定によってプレイヤー達の躊躇いを溶かしていく。

「全員がかりで行けば倒せるだろ」

「いやその場合落ちる素材の分配がゴミだぞ、回数繰り返すにしても効率が悪い」

「向こうもこっちも数が多いからチーム分けするとかどう？」

「倒せない場合置き去りになるから素材目当てと次階層目当てでまず分けた方がいいな、階層優先なら袋叩きの方がいいわけだし」

「いや逆だろ、素材が欲しいなら残ればいい。次に行くのは任意だろ？」

「ちなみにサイガー0さんとかは……」

「…………階層、優先です」

「同じく、八層までダッシュなもんでな」

「私も先を見てみたいなって思ってます！」

結局全員で袋叩きにする流れになった。これが人類の団結だ!!!

マンパワー・ヒューマンパワー（後書き）

Q．外に流すとどうなるの？

A．ファスティアとセカンディルを粉砕してサードレマを襲撃するのでサードレマ大公の胃が死に、鉛筆の笑顔が凍る

戦力比の天秤は派手に傾いて

マクスウェル８－１と名付けられた人造の竜が吠える。
バランスボールに頭と翼と前脚後脚、あと尻尾を生やしたようなずんぐりむっくりな身体はプレイヤー達によって「こいつならいけるんじゃね？」と思わせていたが……後々から知ったのだが名前の「８－１」部分って第八回の試行で環境の頂点、一位になったって意味らしい。繰り返すなぁ！！！
つまり何が言いたいかというと、このおデブちゃん、アーマードケルベロスより強いらしく。

「無理無理無理！　何あの近接殺し！！　ジークヴルムだってもう少し有情だったぞ！？」
「予備動作を割り出せ！　あのフィールドに捕まったらほぼ即死だぞ！！」
「ヒーラー助けてぇぇぇ！！」
「範囲回復を使う！　回復希望は固まれ！！」
「て、手応えを感じない……」
「二人死んだ！！」
「おごごごご！！？」

「ひぃっ！　頑張れ赤ちゃん！！　お前が死ぬと後ろの五人がまとめて死ぬ！！」

デブ猫みたいな体型してる割に数秒触れているとスリップダメージでタンクが即死するフィールド展開、歪に生えた爪による多段ヒットパンチ、３Ｗａｙかつディレイが織り交ぜられたブレス攻撃。
プレイヤー達の悲鳴をどこか他人事のように聞きつつ、俺も俺で自分の仕事を遂行するべく足を動かす。

「よっしゃあ！！　かかってこいやクソギンチャク！！」

ニュートン６－２、そう名付けられた触手生物が先程から延々と己の前を飛び続ける羽虫に対して攻撃を加える。
だが数十数百はありそうな触手一本一本を個別で動かすのではなく、十本くらいを絡め纏めて一撃として叩きつけてくる。ならば回避はそう難しいことじゃない。

別にワンマンプレイをしているわけじゃない、マクスウェルと戦ってる最中に誰かがヘマしたのかそれともこいつが勝手に気づいたのか、いきなり乱入してきたのだ。
で、刻傷のパッシブ効果で格上から狙われやすい俺が単独離脱してニュートン君とじゃれあってるわけなんだが……これがまぁ中々に面倒臭い。
ニュートン君は触手生物らしく体表が粘液でヌメヌメしているのだが……この粘液、恐ろしく滑る。具体的に言うとこの俺のステータスでクリティカルを外すくらい攻撃が滑る。

「しかも、お約束みたいに酸性（武器破壊）だしさぁ……！！」

対クリティカルに特化した防御力、巨体故のタフネス、そして近接

攻撃に対するウェポンブレイク……！！
こんな偶然あり得るのか？　こいつの性能尽くが近接クリティカルアタッカーに対する完全解答、上位互換性能で殴ってくるオルケストラよりも尚シンプルな天敵……！！

いやまぁニュートン君、クリティカル対策と近接対策はしてるけど高速戦闘に対応してないからスキル無しの動きでも対処余裕なんだけどね。千日手という奴だ。

「まだかー！！」

サイナやエムルがちまちまと有効打になり得る魔法攻撃（あるいは魔力由来の攻撃）を加えているが、まぁ焼け石に水だろう。
いやもうだって見るからにタフい見た目してるもん、触手を束ねてスカートを履いた人型みたいになっているけどその人らしき形をした上半身がどう見てもマッチョだからね？　もう雰囲気からしてＶＩＴが高い。

阿鼻叫喚の様相を呈しているマクスウェル戦の方だが、それでもやはり最前線プレイヤー達だ。クソみたいな即死オーラがどのタイミングでどこまで広がるのかを把握し、攻勢に転じている。
一応俺も何回か攻撃しているのでクリア条件は満たしていると信じたいが、最悪どうにかしてニュートン君を倒す必要があるな……

「一応魔力弾が通ってるのは救いといえば救いか……」

焼け石に水どころか水滴垂らしたようなダメージしか入ってないが、一応俺名義で買ったリヴァイアサン製武器とか色々あるのでやってやれないことはない……筈。

「部位が分からねぇんだよ……っと！！」
人の形こそしているが見た目通り頭（推定）が弱点とは思えない、下手に蛮勇を見せるよりもヘイト管理に努めた方がいいだろう。
おかしいな、なんで俺だけこんな隔離措置になっているんだ？　大規模戦闘ってもうちょっとこう……あるだろう？　協力とかそういう……あれ、おかしいな？　いや気を取り直して戦いに集中だ。
だが何故かソロで食い止めさせられている事とはまた別の理由で思考に引っ掛かりがある。
「……アグアカーテ、やっぱりがっかり武器なのでは？」
あまりにも火力貢献がゴミすぎる、隣でサイナがぶちかましているガトリングのダメージエフェクトと比べると口径とか火力とか以前……の問題なのが悲しみを誘う……いやしかしちょっと気になるので例のブツを取り出す。
「ウィズダムウェポンシリーズ！！」
多機能型魔力弾頭形成銃装？　正式名称なんぞいちいち覚えていない、だが通称くらいは覚えているもんだ……リヴァイアサン第五殻層で獲得可能なライセンスと四層で戦ったウィズダムガードのデータを使う事で製作可能なピカピカ新品の遺機装（レガシーウェポン）！！
「大喰らい（ファッティ）め、役に立たんかったらお前はヤシロバードに売り飛ばす……貫け【ＳＴＩＮＧ（スティング）】！！」
銃ガチ勢さんが大絶賛していたゲーム特有のウィンドウ操作や試行

操作ではない、実際に銃の機構（ギミック）を操作して射撃モードを変更することで遺機装（レガシーウェポン）：リヴァイアサン【ＳＴＩＮＧ】は専用の魔力弾倉（エネルギーマガジン）を装備することで三種類……いや、アレも含めて四種類の魔力弾頭を発射できる。

形だけ見れば弦のないクロスボウのような分厚い銃器、それが今一本の槍が如き弾頭を形成。そしてどういう原理か網膜に直接投射されたＵＩの中、残弾数を示す「０」が「１」に増えた。
弾数上限一発、三つある射撃モードの中でも最強の貫通力を誇る特殊弾頭……モード「槍弾頭（ジャベリン）」！！

「触手生物（クソギンチャク）め、筋肉ムキムキでも骨は通っちゃいねーだろ！！」

発射（ファイア）！！
銃口から飛んで行った釘のような槍弾頭はサイナの攻撃にニュートン君が意識を逸らしたその隙を縫うように胴体部分に着弾。粘液など知らんとばかりに触手をぶち抜き、奥へ奥へと突き立てられる。
そしてどうやら触手集合体であっても体内に釘を撃ち込まれるのは堪らないらしい。初めて見せる苦悶の蠢きにこれが有効打になるということを確認した俺は次弾装填に……

「サンラクさーーーーん！！　マクスウェルを倒しましたーーーっ！！！」
よし撤収！！　命拾いしたなニュートン君！　俺急いでるんで、じゃあな！！！

戦力比の天秤は派手に傾いて（後書き）

他にもシュレディンガーとかオイラーとかいる

「象牙」さんは飼育がお好き

「何その武器！？」

「リヴァイアサン五層でライセンス取って四層で作れるボス武器的なもの」

「え、強い……？」

「多分強い、ただし使い捨て弾倉は別料金」

「幾らくらいするの？」

「銃込みで六個しか買えなかったくらい、ただ金貯めて弾倉百個とか買っても無限に撃てるわけじゃない」

槍弾頭一発で10％、つまり弾倉五つ使い切ったらアレってことだ。チャージも考えたらそこそこ長時間の戦闘でしか使えなさそうだが……。

さて、質問責めを受け流しつつやってきました第四階層。デンジャラス偉人達によって何人か下に取り残されたが、素材目当てで残留した者もいるので彼らと一緒に頑張ってほしいとしか言えない。まぁいざって時は二層に永住してる連中を肉盾にして頑張るという手段もあるか。

『この階層では貴方達の生存力について試験を行います』

「さっきの階層でまだ確かめ足りないと申すか」

「いやまぁ、どっちかというと生存力だし……」

「森ですね！！！」

「まぁ確かにそうだな秋津茜」

二、三層で結構な脱落者が出てしまったため、ここにいるのは……おお、ちょうど十五人。ひとつのパーティにおける上限数だ。しれっとキョージュや磐斎氏も生き延びている、まぁ彼ら後方支援だしそこらへんが全滅してたらマクスウェル君倒せてないか……磐斎氏、見た目詐欺だよなぁ。

「ん、回復いるかい？」

「いや、刻傷のせいで全身回復弾くんスよ。部位回復かポーションじゃないと回復しないんで大丈夫」

「じゃあこれあげるよ」

回復ポーションを貰った、勝てねえ……人としての器で勝てねえ……っ！

『この階層の突破条件は一つ。徘徊する妨害用生物の警戒を掻い潜りながらフィールドに存在する「コレ」を私の元へ持ってくるのです』

そう言って「象牙」が表示したのは……なんだこれ、タケノコか？

『私はこれをカンムリタケノコと命名しました』

「あ、タケノコなんだ」

「いやどう見ても黒光りしてるけど」

「竹林を探せばいいのかな？」

「ふむ、「象牙」君、その画像をもらう事は可能かね？」

『構いませんよ』

とりあえず現存するプレイヤーが円陣を組むように集合。上限に収まるなら音頭をとっていたキョージュをホストにパーティを結成する。

「暫定的に方針を決めさせてもらう事になったキョージュだ。よろしく頼むよ」

よろしくお願いしまーす、と十四人分の声が響き、作戦会議が始まる。

まず議題として上がったのは「妨害用生物とやらがどれだけのものなのか」という点だ。ベヒーモスが生物を作るとろくな事にならないのは三層で確認済みだ。

こちらから喧嘩を売ったマクスウェルですら何人か脱落者が出たくらいには強敵だったのだ、あれクラスが積極的に妨害してくるなら個別行動はイコール死に直結する。

というわけでまずは十五人で固まって行動してみることに。ちょっとした山のようなフィールドを歩く事一分程したところで……

「ん？」

反射的に引き金を引く。先程の一撃貫通力に特化したモード「槍弾頭（ジャベリン）」ではなく弾速と連射力に特化したモード「針弾頭（ニードル）」がマシンガンよろしくタタタタタ！　と小気味のいい音を立てて地面から近づいていたそれに突き刺さる。

「え、何！？」

「何か見つかった？」

「いや、なんか近づいてたから撃ったらこいつが」

「既に仕留めている……」

なんだろうこれ、懐かしさすら感じるが同時に忌々しさも感じる……っていうかあれだな、泥掘り（マッドディグ）の小型版みたいな。あれはサメとナマズとあと何か陸上生物をキメラ融合させたみたいな珍妙生物だったが、こっちはトカゲとナマズとウナギを混ぜたみたいな形をしている。１メートルあるかないかってところかな。

一見するとトカゲにしか見えないかもしれないが、ウナギ特有のぬめりを継承しているのか落ち葉や腐葉土を体表に貼り付けた天然のギリースーツで近づいてくるので気付いたのは偶然だ。

成る程確かにこいつが隠密で近づいてきたら厄介だな。踏みつけて動きを封じているウナギトカゲは現にフグみたいに膨れ始めて今にも破裂しそうな――

「ボレェシュューッウ！！」

「いやボレーシュートは空中のボールをシュートする事であって……」

パァンッ！！！！

メキメキメキ……ズズゥン……！！！

「「「「…………」」」」

ああ、はい。一発で木をへし折る爆発力ですか、はい。

『泥掘りの品種改良種……爆泳魚（スウィマイン）と名付けました、柔らかい地質でないと潜行できないのが今後の課題でしょうか』

「パーティ編成はそのままに五人三チームでタケノコを探す！　散開！！」

ザザザ、と周囲で地面を揺らす「音」が全て爆泳魚だと気づいた俺達はキョージュの指示に従って咄嗟に五人チームを作ってそれぞれ別方向に走り出す！！

十五人が固まっているとその分寄ってくる爆泳魚の数が増えるし対応する際に流れ弾が来る可能性もある。

「ええと！？　俺とレイ氏と秋津茜と……炸裂グリンピース姉貴と磐斎氏！！」

「は、はいっ！」

「よろしくお願いしますっ！！」

「あ、これはご丁寧にどうも」

「あとプラスで一匹と一機！！」

「ちょ、来てる来てる！　これ私が爆破してもいいの！？」

「何事もトライアンドエラーですよ炸裂グリンピースさん！！！」

というわけで炸裂グリンピース姉貴が何やらガラス瓶を背後にぶん投げる。それは俺達のチームを追ってきていた三匹の爆泳魚のうち、右側の個体にぶつかり……

Q．爆発物の近くで爆発すると何が起きますか？

A．誘爆。

「姉貴、爆発禁止」

「あれ見てもう一回やると思う？！」

ガラス瓶、恐らく爆発効果のある薬品か何かが入ったそれの爆発に命中した爆泳魚の爆発。そしてそれらに巻き込まれて誘爆した事で合計四回分の大爆風に背中を押された俺たちは半ば転がるようにして他2チームから離れた場所まで走って……なんとか周囲に土中を泳ぐ爆泳魚の気配がしない場所にまで逃げる事に成功した。

「さて……とりあえず皆よろしく。で、これからどうしよう？」

「んー……考察厨(ライブラリ)的には二層に降りて爆泳魚(アレ)の情報とかを探したいところだけど……ファストトラベルが解禁されてないから現実的じゃないね。とりあえずタケノコを探そうか？」

「でもどうするのよ、タケノコを掘り返す前にあの爆弾魚を掘り起こすんじゃないの？」

「走って逃げるとか！」

「僕のＡＧＩだと普通に追いつかれるかなぁ……どうだろう、ここは一旦腰を据えて作戦会議をしないかい？」

その言葉には抗い難い、というよりも抗う理由が無いと思わせるだけの謎の説得力があり……この瞬間、この五人組における毘猩々磐斎氏の役割(ロール)に「軍師」が追加されたのを残る四人は感じ取っていた……

「象牙」さんは飼育がお好き（後書き）

・爆泳魚（スウィマイン）

サンラクの中で割と「強敵」にカテゴライズされている泥掘り（マッドディグ）を「象牙」が秘密裏に回収して品種改良した新種。
小型化し、柔らかな腐葉土限定ではあるものの泥掘り同様の地中潜行を可能としている。特定の条件下で自爆する習性を持っており、その一つとしては死ぬ瞬間。
自身を爆裂させる事で爆破耐性のある卵を周囲にぶち撒けている、これは自身が死によって停止する前に自ら爆散する事で種を保存する進化を辿ったのだろうと「象牙」は推測している。

そしてせっかく作ったので階層試験用に使う事にした。

極めて自然に不自然な箱庭の命

「まず大前提として、僕らの目的はこの「カンムリタケノコ」を発見、確保する事だ……では何故このタケノコは「カンムリ」などと名付けられたのだろう？」

「え、そこからなの？」

「そうだよ炸裂グリンピースさん、こういうのは横着せずに端から考察した方が案外近道だったりするものだよ」

何故カンムリタケノコと名付けられたのか、か……。

一応振動で感知されるのでは、という懸念からストーンヘンジよろしく乱立していた岩の上に登って作戦会議という名の青空教室の中でティーチャー磐斎の指導の下、緊張感があるのかないのか分からない考察タイムが始まる。

「カンムリ、変な当て字とかではない限りは「王冠」を指していると考えていいはず、では冠ということは……」

「誰かが被っているって事ですか？」

「正解だ、秋津茜さん。多分キョージュも同じ結論に達したから画像を要求したんだろうね……ほらこれ、拡大されてるから分かりづらいけど背景と比べると明らかに妙なんだよ」

……あ、生え方が変なのか。黒光りするタケノコにフォーカスが合わせられてるから意識が逸らされている、よくよく見れば地面から

生えてるわけじゃないぞこれ。何かにタケノコが生えている向こうに地面が見えている。

「十中八九、これはモンスタードロップのアイテムだ。シャンフロのモンスターはどれだけ突飛なモンスターでも「根拠」がある、とウチの生物学系の人が言ってたから爆泳魚ではないだろうね……何かボスモンスターがいる可能性は高い」

「あのウナギトカゲ共は粘液で苔とか落ち葉を纏ってはいたけど生えてたわけじゃないしな……」

「人によってはブチ切れそうなベヒーモスだからね、意外なモンスターの変種って事もあり得そうだ」

この階層では「象牙」は呼んでも出てこない。恐らく最初に出現した場所までタケノコを持って来いという事だろう。「勇魚」なら呼んだら来そうな気配があるけど。

ではカンムリタケノコを持つモンスターを探すのかと言えばそうではないらしく、磐斎氏は実に【ライブラリ】らしく次なる考察を始めた。

「皆、時間的に不味いようならログアウトしても構わないからね？」

特に脱落者は無し、問題なしという事で「爆泳魚は何をトリガーとして向かってくるのか」という考察が始まる。

「普通に妨害のためじゃないの？」

「あーいや、そっちじゃなくてどうやって知覚してるのか、かな」

「それじゃあ試しに」

ファーストコンタクトが団体行動なので足音で気づいたのかと思ったが、現在結構な大声で話しているにも関わらず爆泳魚が俺達に気付く様子はない。

では声とかでは反応せず、あくまでも足音のみの反応なのか？　と岩から地面に降りてタップダンスしてみたがなんと反応なし。流石に手が届くような距離まで近づいたのにスルーされるとは思わなかった。

「音ではなく、距離でもない……」

「刻傷で逃げたって可能性は？　これは俺以下のレベルのモンスターが逃げる効果がある」

「いや違うと思うよ、それならそもそも近づかないし平常状態で泳がないからね。だとすると……いや、爆泳魚もそうだがベヒーモスのモンスターは人工の産物だ。あるいは……」

磐斎氏は何かに気づいたらしい、俺はあのウナギトカゲ共が分類的に魚類なのか爬虫類なのかが気になっているだけなので脳細胞の出来でマウントされている気分だ。

秋津茜は暇になのか（さっきの敵対条件検証で皆危険を感じて俺から離脱した）エムルを膝の上に乗せて何か話している。レイ氏は鋭い眼差しで俺を見ていたり、地面に視線を流している。流石だレイ氏、その目は一流のハンターが如く……このゲームに順応した廃人らしい眼差しだ。

「サンラク君、物は試したが君の持っている装備の中でも破壊力の高いものを装備してみてくれないか？」

「了解ッス」

こいつら多分一応魚類なんだろ？　もしかして水棲判定残ってたりしないかな？　というわけでこちら、海喰の剣（ブループレデター）とてめーら全員蒲焼きにしてやるという決意を込めてアラドヴァル・リビルドを……

ガサガサガサガサガサガサ！！！

「おぉぉお！！？」

「サンラク君っ！！！」

「やっぱりか！　爆泳魚のヘイト条件は「対象の危険度」だ！！」

「解説は後で聞く！　大丈夫レイ氏、ヘイトが集まったならこっちのもんだ……！！」

致命秘奥【ウツロウミカガミ】起動！　虚影に食いつけウナギトカゲ！！

跳躍と同時、俺のいた場所に残った残像に爆泳魚達が一目散に飛び込む。だがそれは幻影に過ぎない、本体たる俺はヘイトを全て囮に押し付けた上で武器を収納しながら岩の上に退避しているので奴らはそこにいる気がするのに何もない空間をうごうごと這いずり回ることしかできない。

暫くして、脅威が消え去ったと認識したのか爆泳魚達は一匹また一匹と土の中に潜り、泳ぎ去っていった……さて。

「じゃあ先生、解説をお願いします」

「家庭教師ならともかく壇上で教鞭を取れるほど立派な人間じゃないよ。気づいた理由としては三層のモンスター達を見ていたからだね」

曰く、ＳＦ－Ｚｏｏというモンスターの生態に魅せられたクランが結成される程度にはリアリティ溢れるモンスターのＡＩであるが、三層で戦ったマクスウェルは異形であることを差し引いても「頭が良過ぎる」事が気になっていたらしい。

「なんというか、制限を課せられた人間が操作しているような違和感と言えば分かるかな」

「必死だったからそんなところまで気にしてなかったわよ」

「確かに、動きが単調だった……というより、距離を詰めるために移動する以外で殆ど動いてなかった、気がします……」

「ごめんなさい！　気にしてませんでした！！」

「いやいや、責めてないですよ」

俺の場合、マクスウェルとは殆ど戦ってないので分からない。だが代わりにニュートン君とは結構バチバチにやり合ったので思い起こす事は容易い。

そもそも生物というかパスタの集合体みたいな感じだったが、言われてみれば触手の使い方（モーション）が妙だったな。毎回毎回律儀に触手を束ねて……てっきりそういう習性なのかと思っていたが。

「簡単に言うと、爆泳魚も含めてこのベヒーモスに出現するモンスターは思考ルーチンが人間に近い……というより、基準が人間に準

拠しているのかな？　だから武装していないサンラク君は脅威が無いあるいは無視して構わないものと処理したし、」

「武装した俺に対しては脅威の塊って事で襲いかかってきた、と」

辻褄は合っている。最初、十五人で固まっていた時に囲まれたのは歩いてるプレイヤーの殆どが武装していたからだ。少なくとも素手の十五人と刃物鈍器銃火器を装備した十五人じゃどちらがより危険かは言うまでもない。

まぁこれが十五人のイアイフィスト流使いであったならば話は変わってくるがマイナー流派なので十五人も集まる事はないだろう……

「つまり何も装備していなければ狙われないって事ですか？」

「逆だぞ秋津茜」

思ったよりも厄介な制限だ。

もしこの推測が正しいとしたら、プレイヤー達は素手でカンムリタケノコを入手するか……あるいはいつ襲ってくるかも分からない爆弾を警戒しながら武器を振るかのどちらかを選ばないといけない。

極めて自然に不自然な箱庭の命（後書き）

「勇魚」
趣味：人間(知的生命体)観察、恋バナ

「象牙」
趣味：人間(我が子の)観察、品種改良

竹床の畜生（前書き）

埼玉県民に贈るエール（翔んで埼玉見ました）

面倒な事になった、というのが正直な感情だ。
強制的に素手で戦うか、あるいは妨害覚悟で武器を振るうか。ボス次第ではあるが仮に素手で倒した方が効率が良かった場合ならまだマシだが……最悪のパターンとして超頑丈なモンスターが出てくるという確率の方が高い。

「しかも危険度の判断基準が人間寄りって事は魔法とか道具もアウトっぽいよな」

「試す？」

炸裂グリンピース姉貴、後始末全部自分でやってくれるんです？
あのウナギトカゲ、数で来られると結構面倒臭いよ？
無装備状態で人工の山を進む俺達であったが、遠方からちょくちょく聞こえてくる爆発音はどこかのプレイヤーが未だ泳ぐ地雷から逃げている事を指し示している。

「どうするんですか？　助けに行きますか？」

「いや……僕らはタケノコを探そう。最初にサンラク君が遭遇した時もそうだったが、爆泳魚は同胞の爆音にも反応して寄ってくる。つまり今ならある程度は爆破されるリスクを無視してボス戦に入ることが出来る」

「しれっと五人くらい見捨ててないかそれ」

「キョージュの方に他の【ライブラリ】な流れてるのが見えたから向こうもギミックには気づいてそうだね」

つまり五人捨て駒ってことでは……？　いや、爆泳魚自体はそこまで強敵というわけではない。よくあるスーサイドタイプに隠密属性(ステルス)をつけるなとは思うが、対処自体は誘爆させられることも考えればそんなに難しくはないはず。

まぁなんだつまり……現在進行形で地雷原で苦しんでる【ライブラリ】がいないパーティの方々は頑張ってくださいとしか。

「秋津茜、ボスモンスターが何か当ててようぜ」

「え？　えーと……私、あれだと思います！　パンダ！！」

「……秋津茜、竹と笹は別の植物なんだぜ」

「へぇー！　初めて知りました！！」

竹と言えば幕末に竹槍使いがいたような。曲がりなりにも江戸時代的文明の中で一人だけ落ち武者狩りみたいな奴だったから記憶に残っている。ランカーを撃破しようとしてたけど最終的に「竹槍のストックがぁ！？」とか叫びながらハイエナ狙い達に袋叩きにされてたっけ……流石に竹槍の対空性能じゃあいつ（→）の対地攻撃には勝てんよ、素直に花火使え花火。

「見た限り竹林がある様子もなし、やはり山頂にいるのだろうか？」

「冠を被ってるくらいだもの、そうなんじゃないの？」

「だとするとこの画像と矛盾する気がするのだがね……ほら、背景は山頂ではない」

「非アクティブ時は徘徊してるってだけじゃないのか？　今はプレイヤーが中にあるから所定の位置で待機してるって可能性もある」

「確かにこれはあくまでもゲームだからその可能性は高い。ベヒーモスのモンスターはなんらかの制御下にある可能性もほぼ確実と言っていいからね」

であれば山頂を目指すべきか、それとも他のパーティと合流するべきか。結論は……向こうから来た。

「……揺れてます」

「レイ氏、これは……多分そういうことだよな？」

「どういう事ですか？」

「磐斎氏の推測は半分正解で半分間違いって事だ！　向こうから襲いに来たぞ！！」

まさかこれ、爆泳魚を警戒して無装備状態のプレイヤーを優先して……！！

「グォロロロロロロロロ！！！！」

「何よこいつ！？」

「パンダですよ！！」

「鎧を着たパンダなんていないだろがーっ！！」

いや確かにパンダに見えないこともないが！！　これ完全に漆黒の熊が白い外骨格を纏っている感じのモンスターだ、そして頭頂部からは立派な黒光りのタケノコが……！！

『紹介します、パラサイトテンタクルの変種でありチョバム・グリズリーの変種、その融合体とでも言うべき……ドミネイト・グリズリーです』

「リンリカーーン！！」

融合体って言っちゃったよこいつ！！　完全に邪悪寄りのマッドじゃねーか！！

……ん？　いや待てパラサイトテンタクル？　確かラビッツの闘技場でそんな感じのモンスターと戦ったような。

『ドミネイト・グリズリーはパラサイトテンタクルの変種であるパラサイトバンブーのシンキング・ジャック運動を捻じ伏せ、逆に支配した特異個体であり……』

後で聞くからスキップしてもらってもいい！？

ドミネイト・グリズリー……竹熊でいいや、竹熊は最初からフルスロットルといった様子で暴れに暴れている。いきなり突っ込んできたのもあるが、爆泳魚の存在が脳裏にちらつくのか、皆武器や道具を出さずに投げに徹している……ええいじれったい！！

「レイ氏！　最速で仕留めよう！！」

「っ……はい！！」

武器の危険度が魚を引き寄せる？　上等だ餌に食いつく前に焼きタケノコにしてやるよ。

「打撃しろ！！」

兎にも角にもあの外殻を叩き割らないことには斬撃なんて効きやしないだろう、煌蠍の籠手を装備した俺と鉄鞭を装備したレイ氏が前線に飛び出して突貫工事の戦闘態勢を整える。

「秋津茜！　無理に戦闘に参加しなくていい！　魚を警戒しろ！！」

「馬鹿ね、一撃で誘爆させる私の方が適任よ！　ドラ姫ちゃんは戦闘に参加して！！」

「はいっ！」

「じゃあ僕は援護に専念するから」

「聖騎士だろ！？」

「いやこれ見た目だけ、完全回復支援特化」

ややこしいわ！！
煌蠍の籠手は肘までを覆う大型のグローブだ、デカいという事は硬くてタフネスという事……竹熊のかさぶた程度、粉砕してやるよ！！

「っしゃあ！！」

小手調べに百秀の神腕（サウィルダーナハ）の補正を乗せた右拳を竹熊の外殻に叩きつける。手応えあり、ヒビの入った外殻が続く左エルボーで砕け散ったのを見ながら、思ったよりも脆いと続けて……いや違う！

「ぬおお竹槍ィィ！！」

「サンラク君！！」

粉砕した方から露出した毛皮が隆起、肉と皮を突き破って飛び出してきた鋭利な竹……まさしく竹槍をすんでのところで回避する。いや回避できてないなこれ、思いっきり脇腹を抉られてるわ。鈍ったか……？

「回復感謝！！」

「顔面に当てれば他部位がダメージ源でも幾分かは回復するものだ！　ソースはウチの検証班！！」

頼りになるぜ考察厨、そして初見で俺を殺しきれなかった事を後悔するがいい！！　二度は当たらんぞ竹熊ァ！！

「きゃっ……うん、ノックバック以外は無視できるダメージ量ですね」

「………」

竹槍が肩に直撃してもなんのそのと攻撃を続けるレイ氏と自分を比較して何も感じなかったといえば嘘になる……はい。

竹床の畜生（後書き）

ドミネイト・グリズリー

竹の生えた熊……ではなく、肉体を基点に竹を生やす熊。本来パラサイトテンタクルに寄生された生物は脳味噌をくちゅくちゅされて肉体の主導権を奪われるのが通常であるが、この個体はパラサイトテンタクルの変種であり足を奪わず寄生先の神経系に根を張る事で肉体を強化する共生に近いパラサイトバンブーが優れた外殻生成能力を持つチョバム・グリズリーに寄生したものである

簡単に言うとドーピング竹に寄生された熊が気合で主導権を奪い取って任意で身体から竹槍を生やせるようになった

ぬかった、体格を変えたんだから回避に必要な距離も増えるに決まっている。
竹熊の外殻は破壊されると破壊部位から竹槍を伸ばしてくる。正直あらゆる部位から竹が伸びたら身動き取れないんじゃないかと思ったが、ある程度伸びたところで腐るように根元から抜け落ちた竹を見て納得する。ああ……ムダ毛(竹)処理もばっちりと。
「サンラクさーん！　魚が！　魚が来てます！！」
「はやくねぇ？！！」
いや、さっきまで聞こえていた爆発音が聞こえなくなったってことはつまりそういうことなのか？　竹熊との戦闘音がうるさすぎてよく分からない、生きていると信じよう。
ただ問題は近づいてきたウナギトカゲだ、後衛が処理したとしても一匹も漏らさずってのは無理な話だろう。つまり前衛もいくらかは爆泳魚(スウィマイン)を警戒しないといけないって事だ。
「露骨にタフネス上げてそうな見た目通りかよ……っと！　【発射せよ(Firing—up)】！！」
流石に二度は喰らわない、今度はケツから伸びた竹槍を回避しながら水晶弾を地面に撃ち込む。流石に下から持ち上げるのは無理だろうから……ここだ。
「【成長せよ(growing—up)】！！」

振動を受けた水晶弾が萌芽、水晶の柱へと急速成長して竹熊の後ろ足……まさしく突進のために前に進まんとするその瞬間に水晶柱がその右後脚に引っかかる。
つまり四足歩行であってもなりふり構わない突進中に足を掬われれば当然すっ転ぶ、可哀想に……丁度無防備な頭をフルスイング直前のレイ氏に差し出すような形になっている。

「はぁあっ！！」

裂帛の気合と共に鉄鞭が竹熊の側頭部に叩きつけられる。多分俺三人分（サンラク）くらいなら一撃で粉砕できそうなダメージが兜のような外殻に覆われた頭部が弾け飛ばなかったのは熊という生物骨格、筋肉の発達が頑強な首を作り上げていたからだろう。
ミシミシと骨が軋みつつも首は耐えきった音と、ベキバキと頭部外殻が耐えきれずに割れる音が同時に響く。

竹熊の行動はもはや怒り以外の感情を見つける方が難しい、外殻が剥げてほとんどただの熊な部分が露出したドミネイト・グリズリーはその怒りと憎悪（ヘイト）のままに俺とレイ氏を狙い続ける。
だが俺は奴の射程範囲に留まり続けるようなヘマはしていないし、レイ氏は男アバターとしての頑強さと体格を失った代わりに得たしなやかさで爪牙をいなし、弾き、時に受け止め切る。

「ていうか他の面子は！？」

「現着したよ」

「うわいた」

いつどこから現れたのか、バフを弾く俺ではなくレイ氏に強化支援をしているキョージュの姿に一瞬気圧されるものの、（仮にキョージュ班と呼ぶが）キョージュ班にいた前衛ジョブ二人が戦闘に参加したことで俺とレイ氏の負担が単純計算で半減する……いや違うな、【ライブラリ】だって普通に戦闘ジョブの奴もいるか。

後方から飛んできた炎の鏃が竹熊の肌に命中して弾けたのを見逃さず、ヒット箇所に更なる攻撃を叩き込んでいく。単純計算で十人パーティ（前衛四人）による袋叩きだ、倒すのも時間の問題だと思っていたのだが……

ぐむっ

「ぐむっ？」

おっと失礼、下にいたのねウナギトカゲ君。いや、いやいやいや、謝るからそんなカッとならなくても……あ、なりますねこれ。

「っぶねぇえ！！」

早速自爆した爆泳魚の爆発からなんとか逃れつつ、こちらにヘイトが向いていない事を確認して反射的に発動しそうになっていた【ウツロウミカガミ】をキャンセル。

炸裂グリンピース姉貴が狩り漏らしたのか？　それとも最初からここにいたのか？　あるいは……浮上してきたのか？

「これ下から浮いてきてるんじゃないのか！？」

「前例とかないから断言もできないが否定もできないね！　というか僕としてはドミネイト・グリズリーの「口」を見るに嫌な予感しかしない！　爆泳魚（スウィマイン）をグリズリーに近づけないようにしてくれ！！」

口？　なるほど確かに竹熊の口腔は凶悪だ、何せ口の内側まで外殻と同質のもので覆われている。生物的にどうなんだそれと思わなくもないがこれまでの戦闘を見るにその動きはトラバサミ……完全獣型ロボットの口の動きに近いのだろう。まぁそもそもゲームだと言ったらそれまでだが。

はてそれの何が不味いのか……おっとウナギトカゲ。

「ふんっ」

「あっ」

「あっ」

あっ、横から飛び跳ねてきたのを蹴り飛ばしたら丁度いい感じに竹熊の方に……おお、ナイスキャッチ。そしてそのまま？

「私ああいうの見たことあるわよ、木彫りの熊で」

鮭ヘッドに頭装備変更。

「我々鮭の者と致しましては熊の主食がウナギというのは受け入れ難いものであり……」

「んぶふっ！！」

はい勝ち、一発ネタは鮮度と速度が命だ……と、まぁモルドはクソ雑魚過ぎて参考にならないので己のギャグセンスがまだまだ一線級である事を炸裂グリンピース姉貴で検証しつつ問題はウナギ（トカ

ゲ）なんて上等なものを踊り食いしている竹熊だ。
トカゲウナギをガツガツ捕食し出した竹熊に対してプレイヤー達は距離をとって警戒する。こんな戦闘中……それも竹熊側が不利な今、反撃を放棄してまで飯を食い始めるのがただ単純に食い意地が張っているからとは考えづらい。
ゲーマーならこう考える、これは第二形態前のキャンセルできないタイプのモーションなのでは……と。
そしてその予測は爆泳魚の自爆すらをも咀嚼し嚥下したドミネイト・グリズリーが全身の外殻を「内側から」爆ぜるように砕いた竹の槍を射出した事で確信へと変わった。
「何！？　体内で爆発を起こして遠距離攻撃化！！？」
「げぇーっ！　やばい死ぬ死ぬ死ぬ！！」
「てか今一人死んだぞ！！」
「ツチノコさん戦犯案件では？？？」
「棒立ちしてる方がおかしいのではーー？？？」
「わ、悪びれねぇ！　この人悪びれねぇ！！」
いや一応責任は感じてますよ、だからちょっと本気を出す。
取り出しましたは藍色の聖杯、指定パラメータはＳＴＲとＬＵＣ！
　幸運貯金はこういう時に引き落とすに限る、いざや参らんパワー型俺！！

「炸裂グリンピース姉貴代われっ！　キル数を稼ぎたい！！」

「いいけど物理ジョブで対処できるの！？」

「こうするんだよ、【超過機構（イクシードチャージ）】！！」

起動（起き）しろ百足式（ムカデシキ）８―０．５（タウゼント）、十秒でキル数を稼ぎ切れ！！

爆ぜるようにランペイジ（後書き）

ドミネイト・グリズリー追加情報

主食：爆泳魚

自爆する爆泳魚のエネルギーを取り込む事で短時間だが自身の肉体で同質の現象を起こすことができる。

なお一番の被害者は根っこを体内から爆風で千切り飛ばされるパラサイト・バンブー

いきなりテンションブチ上げてウナギを乱獲して爆破させると巨大な墓標を振り回して変なポーズの残像を出して銃を乱射し、素手スタンガンしてウナギを投げて高笑う鮭（前書き）

ひでーサブタイだ……

いきなりテンションブチ上げてウナギを乱獲して爆破させると巨大な墓標を振り回して変なポーズの残像を出して銃を乱射し、素手スタンガンしてウナギを投げて高笑う鮭

百足式の超過機構「賦活醒（リベレト）」は至ってシンプルだ、ＭＰをアホほど消費してアホほど強化する。純魔法職のステータスでも五分も保たない驚きの高燃費、だがその恩恵で得られる補正はただ起動するだけ、という超過機構でありながら超排撃や吸転換に匹敵する力を秘めている。

ジークヴルム戦では月光さえあればほぼ無尽蔵にＭＰを回復し続ける防具というバグ技じみたシナジーで長時間戦闘を実現させていたが今の俺ではどうあがいても刻傷のデメリットというリミットがある。
だがそこはどうでもよかったりする、俺の現在ＭＰを全消費して恐らく３～５秒稼げれば十分、そして賦活醒の機能停止から体内の「毒（バフ）」が抜けるまで大体１秒ちょい。
つまり最低５秒は戦えるわけだ、むしろ俺（サンラク）の補正なしステータスで５秒も貰っていいのかと思わなくもない。

「っしゃあ！　パズルゲーみたいに連鎖しやがれ魚類どもがぁ！！」
「いやツチノコさんも頭魚類じゃん」
「あれが噂の超兵器……」
「生産職が発狂したっていうアレか」
ビィラックもびっくりな性能らしいんでな、時間が押してるからちち

ゃっちゃと片付ける！！

「いくぜ爆釣！　端から端まで刺身にしてやるよ！！」

魚類の感情は分からない、のでどういう心理でこいつらが突っ込んできているのかは分からないが悲喜交交にせよやることに変わりはないし、こいつらの運命も刺身一択だ。

「ふんっ！！」

展開した斧槍（ハルバード）としての「鉤」を爆泳魚に引っかけ、そのまま引き裂くように振り回して後続の他個体達に叩きつける。

スキル起動、一匹でも多く巻き込むために離れた場所にいた個体も「槍」で突き刺し、「斧」で打ち据え、射程圏内へと叩き込んでいけば……はい一丁上がり。

「残り二秒！！」

端から端まで撫で斬りだぁっ！！

タイムオーバー、百足式８－０．５のギミックが閉じる事でハルバードとしての機能もまた消失。毒気の抜けた身体の感覚をすぐさま整えつつ……キルスコア２０は超えてたな、悪くない。

「ウェイトこそがパワー」

聖杯の力でＳＴＲが飛び抜けた数値になっているからこそ、このキル数でも振るうことが出来る！

別離なく死を想ふ（メメント・モリ）を担いでダッシュ、馬鹿でかい墓標の如き剣を担いでダッシュする俺の姿にギョッとした前衛達が開けたスペースを

駆け抜けて……

「食らえ粉砕骨折斬り！！」

「痛そう」

メゴォッ！！！　と肉にめり込む感触が剣から腕に伝わり、そしてベヒーモスに響く竹熊のケツが三つに割れる激痛による怒りとも悲しみとも違う絶叫。
だが奴とて捕食者、強き獣だ。すぐさま背後へと身体を向け、その動きのままに肩から飛び出した竹を射出する。

「対Ｍｏｂだとこれがまぁ効くこと効くこと」

致命秘奥【ウツロウミカガミ】、確実に相手を引きつけるヘイト付きのデコイは敵のあらゆる行動がチャンスに繋がる始動へと変わる。このスキル、起動した時点でのプレイヤーがしているポーズをそのままデコイとしてその場に残すため、非常口のピクトグラムあるいはエジプトの壁画みたいなポーズの薄ぼんやりとした幻影にブチ切れる竹熊の姿はどこか滑稽でもある。何せ幻影から少し離れたところでフルスイングの構えを取る俺がいるわけだからな。
普段はＲ．Ｉ．Ｐ．との併用で膂力への補正を高めまくっての運用だが、突貫工事で振り回している別離なく死を想ふは見た目通りの重量感が負荷として全身にのしかかってるが……まぁ別に大剣とか使えないわけじゃないしな俺、はい足腰踏ん張って上から下への斬り下ろし。
脇腹に突き刺さる重い一撃(クリーンヒット)に竹熊が再び悶え苦しむ。ここで追加の攻撃をさらに叩き込めれば御の字なのだが、生憎今の別離なく死を想ふは連続で攻撃に繋げられるほど軽くない。ではどうすればいい

のか？　手を離して装備欄を空ければいい。
取り出した大口径のリボルバーで狙う先は竹熊の頭部だ。

「食らえ目潰し」

俺はまだアグアカーテ君の性能を信じたい、せめて目潰しくらいにはなるんじゃないかと竹熊の顔面に数発叩き込んでみたが……まぁ、うん。砂利投げた方が効果的なんじゃないかという冷静な思考は考えなかったことにする。

「じゃあこっち」

晴天流「貫雷（かんらい）」、武器を装備している状態でも片手が「素手」で空いてさえいれば使用可能という中々にイかれた条件の格闘スキル。
最終到達があの魔法みたいなスキルなのでこれくらい当たり前なのかもしれないが、やはり晴天流はどこかおかしい……というより違うルールで生きている感じがある。

テキストを読む限り、増幅された生体電流を貫手で相手に流し込むことで貫通ダメージを与えるというやっぱり魔法みたいなスキルだが、貫手とは即ちイアイフィスト流の基本動作。ある意味これこそが最も俺に適合した晴天流かもしれない……ハイここで対モンスター（バグで巨大化した敵）用イアイフィスト流奥義「軟骨ブレイク」ｗｉｔｈ　晴天流！！

熊型モンスターなんてナマモノからゾンビ、ロボまで対戦経験があり過ぎるので大体の関節位置は把握している。肩関節に抉り込むように貫手を叩き込み、着弾の瞬間に手から放たれた雷撃が竹熊の身体を貫いて向こう側へと飛んでいく。
不幸にも向かい側にいたプレイヤーが竹熊を貫通した雷撃に当たってしまったが……あ、よかったダメージ判定なかったらしい。じゃ

あ気を取り直して

「さらに追加だ、味覚じゃなくて触覚で味わえ！！」

晴天流「螺雲（ねじりくも）」、ＳＴＲを参照して掴んだ相手を螺旋運動をつけて地面に叩きつける投げ技スキル……だが掴んだのは竹熊じゃない、こちらに飛び込んできた爆泳魚だ。
恐らく本体はヌメついているのだろうが、地中や地上をメインに活動するこいつらは体表を土や枯れ葉で覆っている……つまり投げる事に関しては支障がない！！

ぐみゅ、となんとも言えない弾力を毟り取らんばかりに握りしめてそのまま片手で竹熊の方へと投げ飛ばす。いくらウナギでトカゲな生物であっても……否、魚類（ウナギ）で爬虫類（トカゲ）な生物だからこそ頭蓋と脳へのダメージは有効打足り得る！！
電動ドライバーにセットされた螺子（ネジ）を思わせる動きで竹熊の背中にぶつかった爆泳魚が接触に反応してオートで生える竹槍に串刺しにされる。だが爆泳魚が死に瀕した時に行うモーションはただ一つ。

「かぎゃー！！　ハハハハハ、いいね盛り上がってきた！！！」

「サンラク君サンラク君」

「ん？」

なんですか磐斎氏。

「他のアタッカーが全員引（ヒ）いてる」

「えっ」

いきなりテンションブチ上げてウナギを乱獲して爆破させると巨大な墓標を振り回して変なポーズの残像を出して銃を乱射し、素手スタンガンしてウナギを投げて高笑う鮭（後書き）

未知の情報と気持ち悪い動きと高すぎるテンション

ここに入った時点で十五人。
爆泳魚に三人仕留められ、ドミネイト・グリズリーに一人串刺しにされたので残り十一人。自発的に特定の層に永住したプレイヤーを差し引いても中々にハードな損耗だ、これがスラッシャーホラーならまだまだ死にそうだが。まぁ問題があるとすれば、
「ツチノコさんスキル構成見せてくださいよ！」
「見せれるもんなの？」
「武器何種類使ってるんです？　傭兵系列にしては武器種多彩過ぎますよね、まさかスキル無し運用？」
「スキル無し運用だよ、レベル急激に上がり過ぎて攻撃スキルがあんまりないんだよね」
「いやそれより自前のバフ何種類あるか聞きたいんだけど！　それユニークモンスターの「呪い」っスよね？　バフ飛ばしたらなんか弾かれたし」
「胴体と足に及ぶバフは全部弾かれるけどあれ「体内」からのバフは問題ないっていう抜け道がある、バフの性能より「どういう仕組みでバフが発生するか」で選んだ方がいい」
「あのデカい剣要求ステータスいくつなんですか？　ツチノコさんのステだと明らかに持てない気がするんですけど」

「ステータス入れ替えるアイテムで一時的にＳＴＲを上げてる。ただあれ使いこなしてるように見えたかもしれないけど実際はただ振り回してるだけだからロクにクリティカル出せてないよ、本来は別の防具とセット運用……あ、旧大陸産で頑張れば誰でも取れる武器」

「マジで！？」

人数は減ったのに質問の数は倍増したってことですかね、解せぬ。
ただ、ドン引きから復帰したプレイヤー達の奮闘によって筍狩りは達成、なんとなく流れでキョージュが黒光りするカンムリタケノコを抱えることになり、「象牙」へと提出しているところだ。

「え？　そういうの話しちゃっていいんですか？」

「……ここから先の話は乱数が絡む」

「あっ……」

「黒死の天霊(トゥルー・クワイエット)ってモンスター知ってる？　あいつ関連でユニークがあるんだよ」

「あのクソモンスに！？」

「ていうかあれ倒せないモンスターだと思ってたんだけど」

「回復ポーションを手榴弾代わりにするんだよアレ、多分回復魔法でも通る」

「はー……」

黒死の天霊は慣れると楽……でもないか、ＨＰを削るのが楽なだけで攻撃行動は大体クソだし。でもまぁ慣れだよね、奴の影と状態異常付与にだけ気を付ければいけるいける。
そんな感じで適当に受け流していたのだが、ふとレイジ氏（ライブラリがいなかったために三人犠牲者を出した五人組の生き残り、凄い）が呟いた言葉は流石の俺も看過できないものだった。
「あ、そういえばサンラク…さんってもうアレ倒したのか？」
「アレ？」
「ほら、水晶巣崖のエクゾーディナリー」
「…………………なんて？」
水晶巣崖にエクゾーディナリー？　いやいるだろうなとは思ってたけどもう確認されてんの？
「え、何その話詳しく」
「え？　ああいや、俺もそんな詳しいわけじゃ」
「別離（メメント・モリ）なく死を憶ふ関連のユニークの完全チャートなら出す用意がある」
「マジで？」
「大真面目（大マジで）」

「あ、その話私も知ってるんで一口噛ませてください！」

うーむ、兎とばかり関わってないでもう少し人と関わった方がいいのかもしれんな。いつの間にかしれっと頭に戻ってきて「乗りやすい頭に戻せ」とぺしぺし頭を叩く毛玉は無視してその噂とやらの情報を集める。

曰く、水晶巣崖は誰かさんが定期的に素材を集めに行っているのでワンチャン狙いで踏み込むプレイヤーが後を絶たないとか。

曰く、ツチノコさんマジでどう攻略してんの？　踏み込んだ瞬間から即死ギミックなんだけど。いやそれは知らん、飛べ。いや地面に触れていなくても最近は捕捉してくる事が何度かあったけど。

曰く、あるプレイヤーが崖から登る事で水晶巣崖の中腹あたりに侵入したらしい。ああそれもう対策されてるんだよね、崖エスケープはヘイト切りと一緒に使わないと上から水晶落とされて死ぬ。

曰く、その時に「黄金に輝く水晶群蠍」を見たのだという………いやそれ金晶独蠍じゃね？　いやどうやら違うらしい。

曰く、その黄金の蠍は明らかに他の蠍達を従えており、スクショを撮ろうとしたプレイヤーを包囲して逃げ場を完全に塞いだ上でフルボッコにしたとか……

「……他個体を従える蠍か」

「遭遇した時点でアナウンスが出るから名前だけは分かってるらしい」

——不世出の金晶独蠍〝皇金世代〟

それがそいつの名前であるらしい。

「ツチノコさんは何か思い当たる節はないの？」

「基本的に水晶巣崖に出現する蠍は三種類。通常個体、偏食個体、老生個体だ。で、この内水晶の通常個体と黄金の偏食個体は敵対関係にある。でもその金色の蠍は偏食個体ではない……いや、ゴールデンエイジ？　君主的存在だとしたらあるいは食料を献上される立ち位置？　だとするとエルダーも……うわ面倒臭そう……」

「生態に詳しい……」

「え？　あーほら、水晶群蠍はマブだから」

「マブダチの武器とか作ってるの大概サイコパスでは？」

向こうも俺「で」球技大会するのでおあいこでしょ。

とりあえず情報の対価として黒死の天霊と喪失骸将、あとアメフト姫のユニークについての情報を話しながら次の階層へ向かう一同。

【ライブラリ】の面子が思いっきり聞き耳を立てていたが別にいいだろう、俺も時々思い出すくらいには朧げな記憶だがなんか情報提供する契約みたいなのしてた筈だし。

「とりあえずユニーク発生に必要なものが三つある、まず一つは喪失骸将からレアドロップする武器を強化？　した焔軍将の斬首剣、それと黒死の天霊から低確率でドロップする黒天無塵鎌、そして最後に「名匠」ジョブ持ちの知り合い」

「待って、前提条件からクソハードなんだけど」

「鎌と剣の二つを揃えると「名匠」ジョブのやつがフラグを建ててユニークが発生する。それを受注したら奥古来魂の渓谷で喪失骸将と黒死の天霊をエンカウントさせる」

「……マジ？」

「一番簡単なのは渓谷のモンスター根絶やしにして黒死の天霊を発生させつつ、喪失骸将が出現するのを祈る」

「お祈りゲーじゃん！！」

「いやしれっと言ってるけど前提条件がその二体からレアドロップ引くまで倒せって言ってる気が」

「お気づきになりましたか……さて俺は黒死の天霊を何体倒したっけか……」

狂気の乱数作業、R．I．P．がダブった時はまぁまぁ辛かったぜ。とはいえ思い返せばユニーク発生までの条件が鬼なだけでユニーク自体は割と簡単なんだよな。アメフト姫をとっ捕まえて首を取り返すだけだし。

「で、二体のモンスターを合流させると殺し合いが発生するので喪失骸将がボコられる前に同時出現する……」

「サンラク君、サンラク君。非常に興味深い話を折るようで悪いがね……次はアレを倒すらしい」

アレ？

ほうほうなるほど……女の死神みたいなやつで、禍々しい鎌を持ってて、クソみたいな特殊技を使ってきそうな……いや黒死の天霊やないかい！！

『あれは死の蓄積によって現れる人智の死神、我が子達よ……人より出でたモノを人の手で越えられますか？』

「やったじゃん皆さん、運が良ければここで条件を一つ達成できるぜ」

回復ポーションよーい！　全員がかりで奴を癒し倒す！！

皇は既に君臨せり（後書き）

速攻倒された

ライト・ビフォー・トリリオン

「女専用装備ィィ！！」

「黒死の怨涙……ははーん、さてはハズレ枠ね？」

「黒天無塵鎌（ノーブルー・サイスレント）！！　デバフで攻撃！？」

悲喜交交とはまさにこの事だろう。浴びるように回復ポーションを食らった黒死の天霊さんが消えたと同時、各自の手元にドロップアイテムが現れる。

黒天無塵鎌を引き当てて狂喜乱舞する者、女用装備を引き当てて膝をつく重戦士（男）、黒死の怨涙を手にため息をつく者。俺？　そりゃ当然素材枠（黒死の怨涙）ですよ……黒天無塵鎌を引き当てた秋津茜は見なかったことにする。

「しかし残念だったな「象牙」、あっさりと五層も突破だ」

『……残念？　まさか、私は今歓喜の感情に浸っていますよサンラク』

ほう？

『黒死の天霊は一号人類種より発生したイレギュラー、人類としての「型」を持ったままマナに近しい存在となった興味深い観察対象でした。しかしながらその性質はあらゆる「戦う者」にとっては天敵に等しいものであり……しかしながら、貴方達は完封と言っていい成果を示しました。貴方達は死の顕現すらをも踏み越えている、

その足取りはこの私にとって至上の喜びなのですよ』

長い長い長い、だがなんとなく奴の気持ちがわかったぞ。これあれだ、自分じゃなくて育てたモンスターとかを戦わせる系の心情で俺たちを見てるのか。

愛着もあり、愛情もあるがそれはそれとして戦わせるし勝ったなら喜ぶ……俺達が育成される側という状況でピンと来なかったが今気づいた。

「成る程な……なんだかお前のことが少しわかった気がするぜ」

『嬉しいことを言ってくれますねサンラク……では愛しき我が子達、第六階層へと転送しましょう』

◆

第六階層、ようやく折り返しといったところか。

思えば結構いたはずの初期のメンツが十人にまで減るとはな、地味に難所なのは三、四層ってところか。五層は黒死の天霊についての情報が出回れば下手すればソロでも突破可能だ……恐らく「情報共有できて偉いね」みたいな感じで「象牙」はそれを許容するだろうしな。「勇魚」もそうだったがこいつらは人類が文明的な事をする事を容認、むしろ歓迎している節がある。

「で、六層では何をするんだ？」

『ここからは少々方針が変わります。ここからは……より文明的なフェーズに進みます』

というと？

『一人につき情報質量１０万マギバイト、それが突破条件です』

「マギバイト……って、何？　キョージュは？」

「私も初耳の概念だ、だが大凡の推測は立てられる。情報質量、マギバイト、それすなわち……インベントリ、かな？」

『良い推理ですキョージュ。その推測は正しい、情報質量とは一、二号人類がデフォルトで備える拡張空間技術……いわゆるインベントリ内に納められたマテリアルを次世代原始人類種の肉体に記録したものです』

「要するに剣でも石でも、インベントリに入れたものには全て情報質量という数値があり、その単位がマギバイトってことかな」

『――――素晴らしい』

褒め称える前に磐斎氏のように分かりやすく説明するスキルを身につけろと言いたくなるが、あって何か起きるわけでもないので飲み込んでおく。
要するにインベントリやインベントリアに物を詰め込んで１０万マギバイトにまで届かせればいいんだろう。

「じゃあ俺が一番の」

「いや待ってほしいサンラク君、すまないがね……君が最初だと参考にならない」

「えぇ……」

「まず持ち物が少ないプレイヤーから初めて大体の基準が知りたい、誰かインベントリが殆ど空いている者はいるかな？」

「じゃあ私が、素材以外じゃもう回復アイテムが二、三個くらいしか残ってないわ」

手を上げたのは四層で爆泳魚相手に足止め、五層で黒死の天霊を相手にしたことであらゆるアイテムをぶん投げまくったことで弾切れの炸裂グリンピース姉貴だった。なにやら色々と物が多い、街のような光景の広がる六層の中心部に設置された台座の上に姉貴が立つと、彼女の頭上に数字が表示される。

「３５０……」

「３５０か……」

「炸裂グリンピースさんは３５０……」

「ねぇ、マギバイトの話よね？」

そりゃ勿論、誰もキログラムの話はしてませんよ。とはいえ四桁に届かないってのは単純に量が少ないからか、フルで入れたとしても素材や回復アイテム程度じゃ足りないのか。

「ふむ……次は私が行こう。激しく消費してるわけではないし、私の情報質量より少し多いくらいが「基準」になるかもしれない」

キョージュのインベントリは回復アイテムや状況に応じたいくつかの武器防具、そしてこれまでの攻略で得たドロップアイテム……まぁデフォルトって感じの手持ちだな。

「……ふむ、３２８０」

「キョージュ、多分ですがインベントリの空きが多い僕の方が高い結果が出ると思いますよ」

「ほう？　実証と根拠を見聞きさせてもらおうかな」

「恐らくですがマギバイトはアイテムよりも多くの手間がかけられた武器や防具などの方が大きい数値になるのでは？　であればキョージュよりも武器防具を多く入れている僕のインベントリであれば……」

キョージュに代わり、台座の上に立った磐斎氏の上に表示された数値は果たしてこれまでの全てを超える４０１２であった。

「あれ、５０００超えないのか……思ったよりも厄介だなぁ」

「いやそうでもないだろう、今の実証で攻略の糸口はほぼ確定した。インベントリ内をレア度の高い武器防具で埋めれば突破は簡単そうだ……いや、ある意味では難しいかもしれないがその場合は周囲の施設を使う、そうだろう？」

『その通り。ここに来るまでの過程で得た、あるいはこれから得る

ベヒーモス内限定通貨を使用することでこの階層では買い物ができます。エンターテイメント性ではリヴァイアサンに劣るやもしれませんが、技術力で劣るという事実に直結するわけではない……ふふふ、ある種の対決とは懐かしい構図です』

成る程ね、服屋みたいなツラしてタイプメンシリーズが並んでいるのはそのためか。尤も、どうせ八とか十層くらいまで攻略しないと船外に出せないとかそもそも使えないってオチだろうが。

と、いうわけで。

「じゃあ景気づけに頼むよサンラク君、最高スコアを期待している」

「任せとけ」

いざ、「象牙」も含めてこの場にいる全員が俺に注目する中……念のためほぼ全ての装備（＋サイナ）をインベントリアに格納し、台座の上に飛び乗る。

「待って何桁ある？」

「一、十、百……」

「万、超えてますね」

『８９６５億３８６１万５２４６マギバイト、文句なしの歴代最高記録ですね』

「兆行かなかったか」

武器？　防具？　デキる男は懐にロボや船を入れておくものさ……

ライト・ビフォー・トリリオン（後書き）

蠍成金サンラク

それはそれ、これはこれ。
マギバイトでその場にいたほぼ全員をドン引きさせるといういやな偉業を達成してしまった俺であったが、ここで一つ問題が発生した……そう、エムルである。

エムルは二号人類種ではない、バリバリのヴォーパルバニーであり……要するにベヒーモスはエムルをモンスターと認識している。ベヒーモスに入った時点で俺とパーティを組んでいなければ強制排出もあり得たかもしれない。
で、一兆手前までマギバイトを溜め込んだ俺は試しに「象牙」へと交渉してみた、これだけ集めたならエムルも次の階層に同行させてくれてもいいんじゃないか？　とな。で、それに対する「象牙」の返答は……

『ペット枠なら』

これに物言いをぶちかましたのが他でもない、エムル氏である。
曰く、なるほど確かに自分はヴォーパルバニーでありサンラクサン達人間と同じカテゴリでないことは重々承知している。だが知性持つ存在としてその立場は対等なものであって断じてペットではない、ペットではないのだ！！！！！　と熱く語（キレ散らかし）ったエムル氏の魂のシャウトに「象牙」は何言ってんだこいつという表情を隠しもしなかったが……どれだけ説得しても尊厳だけは捨てられないとの一点張り。
仕方がないので俺が「象牙（母上）」を拝み倒してなんとかエムルも二号人類（プレイヤー）同様の条件達成で次階層に行けるようにしてもらったのだ。何故かおしゃぶりを咥えた重戦士に友を見るような目で見られたがあい

にくおしゃぶりを咥えた友人はゲームにもリアルにもいないので気のせいだろう。

で、計測した結果微妙にノルマへ届いていなかったので六層の「ショッピングモール」で買い物をすることにしたのだ。俺が何か適当に渡せばいいのかもしれないが、まぁ単純に見てみたかったという感情もある。

「基本的にはリヴァイアサンの四層と似た感じか……」

ただ、なんというか品揃えがショボい。いや違うな、ショボいというよりリヴァイアサンでも高額で販売されていた大規模兵器や「鍵」シリーズがそもそもラインナップされていないのか。六層……リヴァイアサンで言えば丁度三層くらいの進捗だ、八層くらいまで取り扱うつもりはないとかそういうことなんだろう。

「エムルこれなんてどうだ」

「それなんですわ？」

「んー、そうだな。例えばこのパーツをこっちに……もう一方をこっちに置くじゃん？」

「はいな」

「で、この二つのパーツ同士でこう、魔力の紐みたいなのがピンと張られるわけよ」

「はいな」

「そんでもって、それに触れると盛大に爆発する」

「とんでもなく物騒な代物ですわ！？」

世間一般ではこれクレイモア地雷って言うんじゃねーかな……しかもワイヤー起爆ってことは無差別なやつ。まぁＦＰＳの経験なら衛生兵とか衛生兵とかクソほど経験してるのでこの手の地雷も仕掛けたし仕掛けられたたし……うーん、有用性を身を以て知っているからこそ印象が悪い。だが有用だ。

「いやほら、エムルって小柄なわけだしこういうのをこっそり仕掛ける方針でもいいと思うんだよな」

「妙な確信があるですわ、多分それに引っかかるのはサンラクサンですわ」

「馬鹿言うな、流石に…………まぁ、偶然そうなる可能性は否めない」

ワイヤー式は誤爆率めちゃくちゃ高いからな……忘れた頃に引っかかる。そしてクレイモア地雷の常として殺傷力がやたら高いのでそのまま死ぬ、誰だよ鉄球入れたやつ！　俺だよ！！　みたいなオチはそう珍しくないのだ。フルダイブだからこそリアル志向のＦＰＳだとフレンドリーファイア対策が意図的にされていないなんてザラだからな。

ちら、と視線を台座の方に向ければまた一人条件を達成したプレイヤーが出たようだ。そもそも黒天無塵鎌一個で８万マギバイトらしく、ぶっちゃけ買い物しなくても一回ベヒーモスの外に出て倉庫なりなんなりからリソースを引っ張り出せば余裕でクリアできる類の

関門なのだ。

余談だが、レイ氏は７０００億という驚異のスコアを叩き出していた。船込みの俺に匹敵するマギバイト……情報質量を保有しているとはさすが廃人、聞けばリヴァイアサンを攻略した時点でそれまで様々な所に預けていた自身の装備、アイテム、諸々を全部インベントリアに突っ込んだらしい。

俺が数ヶ月で揃えた「質」と「量」に対して、レイ氏が一年ほどで貯めたリソースは若干届いていない……と、思ったのだがこっそり「象牙」に俺の情報質量の割合を聞いた所、四割くらいヴァッシュから預かっているあの「刀」が占めていた。

つまり実際の情報質量は５０００億に届くかどうかってことだ、やはりレイ氏がやべぇってことだろう。

そのレイ氏であるが、なにやら「象牙」に話しかけられて釘付けにされている。チラチラとこちらに視線を向けているが……ふふふ、心配ご無用。レイ氏の言わんとしていることは理解しているさ、さっさと次の階層に行こうぜってことだろう。

「もうなんでもいいだろ、好きなの選べよ」

「じゃあこれにするですわ」

「ん、いいじゃん悪くない。じゃあ軽く１００個くらい買っておくか」

「そんな持てないですわ！！」

気合いで担げ。いや駄目か、情報質量だもんな……あ、そうだ。

「じゃあこれ持っとけ」

「これは……」

「再誕の涙珠、これ結構マギバイトありそうじゃん？」

「とりあえず持っておくですわ」

「あとこれラピステリア星晶体」

「なんか面倒臭くなってないですわ？」

いやそりゃ面倒臭いでしょ、ぶっちゃけさっさと次に行きたい。見た限りベヒーモス六層はリヴァイアサン四層よりも品揃えが少ないくらいっぽいし。メーカー違いの同カテゴリ武器で大興奮できるのはルストやヤシロバードくらいだぞ、そもそもこのゲームの銃って近代地球のように近接物理武器や原始的遠距離武器を完全駆逐できるほど優秀じゃないし。

他の武器と違って銃そのものの威力を外付けで強化できないんだよね。例えばレイ氏がダメージ100を出せる剣と銃をそれぞれ持ったとして、攻撃する前にキョージュが強化魔法を付与した場合、剣での攻撃は120になるが銃の攻撃は100のままだ。

それを差し引いても銃にしかないメリットも多いが……なんだろう、そこに引っ掛けがある気がする。このゲームの運営が「人権武器種」なんてものを作るのか？　という疑問だ……

まぁぶっちゃけ魔力のつまってそうなものを抱えていればクリアできる関門だ、ヴォーパルバニーも備えているインベントリに大量のラピステリアを突っ込んだエムルも無事10万マギバイトを達成、なにやら「象牙」との会話も済ませたらしいレイ氏も合流して俺達

は七層へと進む。

本質を示す秤（後書き）

実はこれ、さも「六層で買い物して１０万マギバイト目指そうね」みたいにしてるけど実際は「市販の銃より鍛えた剣の方がマギバイトが多い」ということに気づかせる為のギミック
負け犬が使ってた武器なんざ買い占めてどうするんですかねぇ！？
　という罠なのだが気付けるかどうかは【ライブラリ】の世界観考察班にかかっている

七層、内容としては二層と四層の合体版とでもいうべきか。二層のような図書館に似たエリアであり……そして、四層のように特定の情報を見つけ出せ、というものだ。そして「象牙」が出した謎かけに対して答えを出せばクリア。厄介なのはこれもまた一人一人別の問題が出されているという点だろう。

俺に出された問題は「異常増殖と高度な擬態能力を兼ね備え、人類種のみならず有機的生命体に対する極めて高い能動的敵対行動を持つ始源眷族の名は？」

レイ氏に出された問題は「超々高度に生息し、その特徴的な肉体から肉眼での目視が困難ながら繁殖期に限り地上からの肉眼観測でも目視可能な生物の名前は？」

秋津茜に出された問題は「主に深海に生息する、他種族を特殊なフェロモンで依存隷属させることで自身の配下として狩猟などを行う魚類系統に分類される生物の名前は？」

そしてエムルに出された問題は「新大陸に出現する平均体高1メートル以内の生物の名前を五種挙げろ」

というものであった。成る程、キョージュ達が「あ、これ我々もここに永住するルートかな」とつぶやく程度には情報の宝庫だ。実質普通のゲームにおける図鑑項目に等しい、適当に開いたフォルダには俺が見たことのないモンスターに関する情報が事細かに記載されていたし……狂喜乱舞する【ライブラリ】達の喧騒に耳を傾ければ

どうやらベヒーモス内で生み出されたモンスターに関しての詳細な資料もあるらしい。要するに二層の上位互換、より高度な情報が収められた図書館ということだ。

で、話を戻すが【旅狼】の面々に出された問題であったが……偶然か、それともプレイヤーが知っている情報の中から出題されたのか、俺たちの問題は殆ど資料を漁る必要のない問題ばかりであった。

◆

「貪る大赤依……いや違うな、擬態だよな？　だったら狂える大群青か？」

『正解ですサンラク、貴方は多くの戦いを経てここにたどり着いている……そのあり方は非常に好ましい』

「あれには勝てないけどな」

『神代の叡智ですら、根本的な対処には至らなかった怪物です。恐らく始源獣エレボスですら無差別の運用はできないのでしょう……あくまで推測に過ぎず、それを確かめられるほど「ベヒーモス」も人類も強くはなかった事がこの身を未だ焼く炎のような屈辱です』

◇

「ええと、確か………アウロラカムイ？」

『正解です。私の観測が正しければ次世代原始人類が誕生してから一度も討伐されたことのない生物ですがよく知っていましたねサイガー０』

「その、姉がリュカオーンの情報をかき集めている時に……極光のモンスターとしての、資料を見たことが、ありまして」

『遠い未来、人が空をも制覇した時……いいえ、あるいはそう遠くない未来に我が子達がその手を届かせることを私は信じ、待ちわびています』

◇
◇

「ええと、ええと……」

「なぁ「象牙」、俺が教えるのは有りか？」

『ええもちろん』

「秋津茜、答えはスレーギヴン・キャリアングラーだ」

「知ってるんですか！？」

「ルルイアスで戦ったことがあるんだよ」

「そうなんですかー。ええと、答えはスレーギヴン・キャリアングラーです！！」

『正解です。深海における生態系の頂点を争う三種の内の一種であり、その遺伝子情報は生物としてあまりに異質であり……』

「あー、そういう専門的な話はキョージュ達にしてやれ、三時間でも付き合ってくれるぞ」

◇◆

「五種？　五種類ですわ？　あー、えーと、うーん………」

「エムル、あと十秒」

「ほあぁっ！？　なんでですわ！！？！？」

『10、9、8……』

「ほあぁああ！？！　あー、えー、うー、ヴォーパルバニー！　ゴブリン！　コボルト！　ケット・シー！　ええと、ええと、ええと…………………」

「サイナ、知恵貸せ」

「回答：ドラクルス・ディノトリアシクス」

「ドラクルス・ディノトリアシクスですわーーーっ！！！」

『……正解です。成る程、知的生命体であるのは事実なようで』

「新大陸にも、ゴブリン……いるん、ですね」
「ちょっとおバカだけど頑張って生きてるですわ」
「お前にバカ扱いされるのか……」
「サンラクサン、場合によっては表出ろですわ」

◆

さて、そんなこんなでとりあえず俺と行動していた面々は課題をクリアしたわけで。ぶっちゃけリヴァイアサンの悪辣さに比べればベヒーモスの課す試練はちょろいものが多い。そしてサイナに関しては特に問題を出されることもなく顔パスだったのでその顔がますます曇った、参るぜ。
こういうのってもっとこう、最低でも三日四日はかけて好感度を稼ぐもんだろ？　まだ1日経過してないんだぜここ。さてどうしたものか、このままのメンタリティで八層に行っていいのだろうか。俺個人としてはさっさとイベントを済ませたいという気持ちと単純に次が気になるという気持ちでさっさと行きたい派だ。
しかしなぁ……うーん。征服人形は生物たり得るのか、いや違うなサイナの悩みは自分が有機か無機かってことじゃない。要するに人権が有るか無いか、ＡＩは「個人」として扱えるのか？　って事だろう。

ぶっちゃけこれの答えって既に出ているんだよな。例えば……そう、ジョゼットに軽く喧嘩を売ればすぐに分かるだろうしなんなら隣にいる秋津茜辺りに聞いても答えは出そうな気がする。

「でもそうじゃないんだよなぁ……」

「何が、ですか？」

「んー？　なんていうか、ヒロインへの好感度調整」

「ぷぐる」

「なんて？」

「ナンデモナイデス、クシャミデス」

そっかぁ……レイ氏はいつも通りって事で。

悩んでいても仕方ない、とりあえず八層に行ってみるだけ行ってみよう。答えを知っていたので特に資料あさりをすることなくクリアした俺達は他のプレイヤー達を差し置いて先に八層へと行かせてもらおうか………頑張れレイジ氏、「高み」で待ってるぜ………！！

ん？　八層って下じゃね？　低み？　いやそもそもベヒーモスの形状的に実際の高度は変わりないんじゃ………

考えない事にしよう。

大陸級宇宙船横断ウルトラクイズ（後書き）

高みで待ってるぜ……！（高度的には変わらない）

神とて人なれば、確かに根付いた跡があり

八層。あえてこう言おう、【ライブラリ】の連中……馬鹿なことをしたなぁ、とな。
七層は二層の上位互換……確かに七層に到達した時はそう思った。
だが実際は「モンスターの情報に関しての情報」が二層の上位互換、というのが正しい認識だ。では八層は？　答えは簡単、「神代人類の文明文化に関する情報」が集められた場所……つまりそういうことなのだ。

『ここは神代の叡智……貴方達を生み出し、後を託したかつての人類達の歩みそのものを保管したベヒーモス最大の記録保管施設です』
「その割に明らかに戦う用のフィールドが中央にあるように見えるが？」
『ええ、それがこの階層の試験内容に関係するモノですから』
試しにファイルを開く。わお、神代人類の食生活について纏められている。へー、むしろ末期の方がいいモノ食ってるんだな……成る程ね？　総数が減れば一人頭の配給も豪華になるってわけね。題材が題材なだけあってシャンフロの滅びにかける美学は半端ないな。
食文化だけじゃない、こっちは当時の農耕に関する技術についてのファイルだし……流石にゲームなので一つ一つの項目は一分か二分あれば読み切れるものだが数が数だ。
「で？　九層に行くのが目的じゃないってもう言ったよな？」

『ええ、ええ。覚えていますとも。アンドリュー・ジッタードールのラボは確かにこの八層にあります。ですが私はその道を提示しません、ラボに至る情報は……エルマ＝317、貴女なら分かるのではないですか？』

「……」

『話を戻しましょう、この階層を超える条件は「この階層に存在するフラッシュメモリーで習得したスキルのみを使用して中央戦闘領域に出現する戦闘用人形を撃破する」事。どのフラッシュメモリーを使うかは貴方達の自由意志です……サンラク、貴方は既にフラッシュメモリーを使用したことがあるようですね』

「フラッシュ……？　あー、晴天流か」

文字通りの意味で光って覚え（フラッシュメモリー）させるアレか。

……

…………

………………

「なんだここは、楽園じゃないか」

「ああ、磐斎氏こっち来たんだ」

「ああ、うん……意図的に「人」に関する情報が取り除かれてる感じがしたから進んでみたんだが……いやぁマジか、これ他の面々にも知らせないと巡り巡って何故か僕が恨まれそうだ。というわけで失礼、一旦ログアウトする」

来て早々にログアウトしていった磐斎氏を見送りつつ、俺は次のファイルを開く。このエリアどうやら晴天流の秘伝書のようなレベルアップせずともスキルを習得できるアイテムが何処かにあるらしいのだが……これが結構な難敵だ。
そもそも閲覧項目が多過ぎるというのもあるが、単純に戦闘に関する項目を調べればいいってわけではないようなのだ。

どうも神代の何時頃からか、初期型デバイスの魔力を利用して自身の肉体を強化する技法がそこそこ一般層にも浸透したらしい。
そのせいかボクシングっぽいスキル群だったりレスリングっぽいスキル群だったりならまだマシで、中には料理のスキル群だったりヨガもどきだったり……いやこれ確実にハズレ枠だろってスキルがちょくちょく出てくるのだ。

興味がないと言えば嘘になるが、既存スポーツ寄りのスキルは大体が対人想定なのだ。このシャンフロ世界では強い敵＝デカい敵の方程式のモンスターがほとんどだ、かろうじて人型枠の殺戮の魔人ですら最終的にとんでもないことになっていたのだから顎やリバーを狙ったところで意味がない。

となれば理想系はやはり機動力、機動力に重きを置いたスキル群だ。レイ氏が選んでいた「ジェラルド式改良型太極拳」なるものには俺も争い難い魅力を感じたが、資料を見た限りあれはＡＧＩ戦士とは相性がそこまで良くない。それこそレイ氏のような前線を張れる火

力職が素手で戦う場合に輝く流派だ。ダメージ倍率は低そうだったけど装甲貫通はヤバくないか？

「機動力、機動力……機動力に関連してそうな検索項目ってなんだ……？」

ジェラルド式改良型太極拳は何故かレクリエーション関連のところにあったので油断ならない、控えめに言って【ライブラリ】百人くらい放流して情報整理してくれねーかなと思っているが五十人くらいは七層に永住しそうだしな……

「サンラクさん！　見てくださいサンラクさん！　忍者向けのフラッシュメモリーを見つけちゃいました！！」

「マジ？　うわマジだ」

ニンジャ・アーツ疾風迅雷の巻……う、うさんくせぇ。

「どこにあったんだ？」

「娯楽項目でした！」

う、うさんくせぇ！！

調べてみたらアイテムの投擲を前提とした機動力系スキル群だった、うさんくさい割に俺の求めるニーズにそこそこ応えているのがむかつくなこれ。

もう少し調べてみるが、これで収穫が無かったら俺もニンジャ・アーツを選ぶしかない。何故か妙な緊張感を感じながらファイルを開いては流し読んでを繰り返していく。

うーん、医療系を探しても良いのがない。いや違うのか、フラッシュメモリーに登録されたスキル群は目的の違いこそあるがどれも共通して「そのカテゴリで使用する」という前提があった。であれば俺の求める機動力は「例えるならどこで使うのか」で考えた方がいい。

戦闘項目ではない、そっちにあるのは如何に始源獣勢力に効率的なダメージを与えるか、がメインの流派ばかりだ……じゃあどう避けるか、避ける前提のカテゴリ？

「……ドッジボールとか？」

いやそんなまさかあるわけ……あったわ。

いやマジか、ドッジボールにインスピレーションを得た回避メインの格闘術？　前後から挟まれている状況を前提として回避、受け止め、さらには自身の犠牲を込みにした脅威の減衰……いい、いいぞこれ、何が良いって習得できるスキルが機動力系メインなのが素晴らしい！　ニンジャ・アーツよりは遥かにいい！！

「これだ、これにしよう。ええと、名前は……マクセル・ドッジアーツか」

いいねぇ、俺好みだ。

そこからの流れは早い。中央の戦闘領域（コロシアム）にあったフラッシュメモリー用の機材に持ってきた流派を入れて網膜から脳味噌に焼き付ける。

「初期から四つ習得できるのか……ここでスキル覚えまくりとかやるやついそうだな」

『あまりお勧めはしませんがそれも選択肢の一つでしょうね』

「勧めない理由は？」

『二号人類のスキルシステムにはレベルによりますが上限があります、フラッシュメモリーによるスキルインストールは手っ取り早い手段ではありますが、拡張性がありませんし経験習得型のスキルの成長が妨げられるデメリットもありますので』

「良し悪しって感じだな」

『晴天流（アーキタイプ）のような拡張性を持つフラッシュメモリースキルというものは案外貴重なのですよ』

「ふーん」

ステータスを開いて習得した四つのスキルを確認しつつ俺はコロシアムの中で戦闘用人形を掌底で吹き飛ばすレイ氏を観戦する。
とりあえず覚えたのは……

・多重的円周運動（オービット・ムーブメント）
・螺旋的確保挙動（スクリューハンド・キャッチ）
・副次的防衛挙動（コラテラル・ダメージカット）
・相対的立体運動（ソリッド・マニューバー）

の四つか。
ちとクセは強いが光るものはある、あとはその光をどう活かすかってことだろう……攻撃スキルが無いのはご愛嬌ってことで。

「制限はスキルだけだろ？」

スキル無しで殴る分には何の問題もないって事だ。戦闘用人形にとどめを刺したレイ氏がコロシアムから出たのを確認し、この階層にあるもう一人こと秋津茜が
まだコロシアムに挑むつもりがないのを確認してから中へと入る。

「さて………ん？　なぁ一ついいか「象牙」」

『答えられる範囲であるなら』

「あの戦闘用人形ってさ……」

比較すると似ても似つかないマネキンもどきだが、妙に女性的なフォルムだったり球体関節であったり……いやもしかして、もしかしなくても

『ええ。正式量産される以前、試作期の征服人形（コンキスタ・ドール）システムを流用したものですよ。程よく強く程よく弱く、この試験を行うにあたって丁度良かったもので』

「お前、本当……そういうところ直さないとそのうちラスボス扱いされるぞ」

あーもうどうしてくれるんだ、ウチのサイナさんの顔が曇りまくりじゃねーかよ。

・マクセル・ドッジアーツ
神代人類マクセル・ポートマンが考案した生存能力に重きを置いた格闘術の一種。ドッジボールにインスピレーションを受けたそれは前後を敵に挟まれた場合を想定した回避運動、及び敵の攻撃に対する受動的アプローチを突き詰めている。
基本的に「複数人」でチームを組んでいる前提のスキルなので単体運用もできなくはないが本来の運用ではない。

・ニンジャ・アーツ疾風迅雷の巻
Ｍｒ．　ニンジャマン（ペンネーム）が執筆したエンターテイメント用のモーション指南書。あくまでも娯楽としてのヒーローショーなどで使う前提なのだが、演劇用の小道具を実際の武器に変えれば戦闘技術として流用することも可能。
最大の特徴としては見た目の派手さ……ではなく、不測の事態が発生した場合における受け身などのリカバリが充実している点。衆人に安心して楽しんでもらうのならば、何よりも本人がまず安全でなければならない。

заткнись！（前書き）

我慢できなかったよ

・多重的円周運動（オービット・ムーブメント）

リキャストが異様に長い代わりにスキルの解除が任意という中々にカッ飛んだスキルだが、円周運動しかできないという妙なスキル。解除条件は一歩でも円周運動ではない方向に踏み出す事……こと俺が使う場合に限り、凄まじく悪い事に使えそうな気配がするが、あえてそれをせずに使った感想としては徹底的に攻める時か、徹底的に避ける時にしか使えないって感じか。

敵を中心に据えて周囲を回りながら攻撃を加えるとかがコンセプトなのかと思ったが、ドッジボールが根幹にあるなら多分これ敵チームの内野と外野によるボール回しに対応するための動きだな。

・螺旋的確保挙動（スクリューハンド・キャッチ）

読んで字の如く、ボールをキャッチするように攻撃をガードするのかと思ったが実際はパリィと掴み技のハイブリッドみたいなスキルだった。

実戦での検証による一例としては人形の放った蹴りを両手で包むように逸らして掴む、といった動きが出来た。そこから先はお好きなようにってところだろうが問題は両手で抱えられない大きさの物体やそもそも触れられないものに対しては無力って事だろうか……と、思ったら掌に限りある程度のダメージ軽減効果だそうで。要検証だがグローブ系の装備を付けていても使えるなら評価を三段階くらい上げていい。

・副次的防衛挙動（コラテラル・ダメージカット）

手や足であえて攻撃を叩く事で威力を減衰するガードスキルだ、俺が使うと即死する上にパーティメンバーを守る前提なのでそもそもプレイスタイルと噛み合わせが悪すぎる。
というか何故これだけ素手限定のスキルなんだ、多少は自身へのダメージカットがあるようだが使い道あるのか？　いや無いだろこれ、体力調整にしたって封雷の撃鉄・災で事足りる辺り、本格的に使い道がない。

・相対的立体運動（ソリッド・マニューバー）
今回の「これ性能大丈夫？」枠、敵の攻撃に対応して半オートで回避挙動を取るスキル。
何がヤバイってこれ空中で発動するとしれっと空中ジャンプする事、半オートってのは使用者が攻撃を認識してる必要があるってだけで実質オートで回避挙動をしてくれるってのは中々にヤバいのではなかろうか。
しかもこれ多重的円周運動（オービット・ムーブメント）の効果を持続させたまま同時使用できるので緊急の回避にも使えるし、あえて攻撃に当たりに行くことで円周の軌道を変更出来る。

結論から言えば、マクセル・ドッジアーツはとても有能。なんなら近接軽戦士のテンプレに入るまであるんじゃないかこれ、副次的防衛挙動（コラテラル・ダメージカット）ですら多少は使えるタンク技と考えれば選択肢として残す意味はある。

「ニンジャ・アーツにしなくてよかった……」

フラッシュメモリー枠は既に晴天流も習得しているから二枠使っていることになる、これ以上増やすと他のスキルに影響が出るというならここが限界だろう。マクセル・ドッジアーツの性能次第じゃど

うにかして忘れる方法を模索するところだった。

ではそんな有能スキルを習得した結果どうなったか、それはこの全方位から滅多斬りにされて崩れ落ちた戦闘用人形が全てを物語っている……スキル縛り（あとアクセサリー縛り）した上でこれなのだから、フル稼働させた状態でこれを使いこなせたら……いや待て、これオルケストラ戦がますます面倒臭くならないか？　向こうもこれをやってくるんだよな？

やはりシナリオ方面からオルケストラの謎を暴くのは急務だ、そして何よりあのクソガードによって妨害されたとはいえ、あと一歩まで追い詰めたこととサイナは無関係ではない。

「攻撃スキルなんざ元々殆ど持ってなかったとはいえ、結構時間かかったな……」

『素晴らしい戦いでしたよサンラク。そして……おめでとうございます、貴方は九層に行く資格と同時に、かつてこのベヒーモスを率いた男、アンドリュー・ジッタードールのラボに立ち入る資格を得た』

「で、そのラボはどこだよ？」

ちら、と視線を向ければ、そこにはもはや今にも泣き出しそうな顔を俯かせた征服人形が一人。

『エルマ＝317、再征服計画に基づき契約を結んだのであるならば、契約者の望みを果たすのは当然の義務ではありませんか？』

「……肯定：」

『では迅速な行動をするべきです。アンドリューはどうしようもない夢想主義者（ロマンチスト）でしたからね、征服人形が己のラボに来ることを彼は初期の段階から予見して――』

「なぁ「象牙」、ちょっといいか」

『なんですかサンラク、如何な質問にも答えましょうとも』

「ベヒーモスで一番メジャーだった言語は英語か？」

『……？　質問の意図が理解できませんが……そうですね、最終的には英語が大多数を占めましたが建造した時点から計測した場合はロシア語が一番でしょうか』

成る程成る程、ロシア語ね。

「だったらお前の母国語みたいなもんだろ？　言葉を合わせてやる、大事な事だからな……いいか「象牙（母上）」、あんたはまず空気を読む事をラーニングしろ」

善意悪意はこの際どうでもいい、空気読まずにウチのポンコツを曇らせまくりやがって。後で好感度上げるのに苦労するのは俺なんだぞ。

だから………

「ザトゥクニスィ（ちょっと黙ってろ）」

『――。』

グローバルなマルチ環境にいるとお手軽に異文化交流できるのがフルダイブの良いところであり悪いところだ、こういう罵倒系の言葉ばかり堪能になるもんだから救いようがない。
だがシャンフロ世界のかつて存在したロシアも同じ言語を使っていたようで、俺の吐いた言葉は「象牙」に正しく伝わったらしい。これまで母親面、あるいは教師面していた「象牙」の顔が文字通り固まる。
あんたは何もかもざっくらばんに言い過ぎなんだ、秘密主義故に上っ面の愛嬌とおべっかは上手かった「勇魚」に空気の読み方を聞いてきたらどうだ。

「全く……やいサイナ、真実を見るのがそんなに怖いか」

「それは……いいえ、肯定します。私は今、恐怖している、と自己判断できます」

それが全ての答えだと思うんだがな……納得できないなら荒療治しかない。

要するにユニークシナリオ！　とシステム的に特別扱いされてないだけで今の状況はロボ娘に対するギャルゲーと言っていいだろう。しかも中盤ちょっとあと辺りのルート分岐するまさにその瞬間に俺は立っている。
このまま行っていいのか、何か重要なフラグを拾い損ねていないか？　そもそも征服人形にそんな好感度調整が必要とか思ってなかったから何も考えちゃいなかったツケを今支払わされている事に対して「じゃあ事前になんか言えよ」と思わなくもないが……あーダメダメ、言い訳ばかり考えても妙案は浮かばない。

要するに「サイナに自信をつけて」「もし不都合な真実が明らかになったとしても乗り越えるだけのメンタリティ」を持たせればいいんだよな？　できれば短時間で…………いや無理では？　情報は全然集まっていないのに状況だけは進み切った感じがする、ここから新しくフラグを建てられるのか？　ＣＧの回収は可能なのか？
　シャンフロはセーブデータが一つしかないんだ、過去に戻ることはできない。

「……ええい、面倒臭い！！」

「どうしたですわ！？」

「おい「象牙」！　俺とエムルとサイナを外に出せ！！」

「！？」

何事かとレイ氏がこちらを見ているが、もう俺にはどうすればいいのかわからないのだ。だったらもう、サイナ自身が強く「己」を認識できるようにすりゃいいんだろ！？　面倒臭い承認欲求こじらせやがって、百の言葉で説得できない？　だったら百の敵意で思う存分に注目させてやる！！！

「疑問：何処へ？」

「決まってるだろう………」

この俺（サンラク）のある種ルーティーン、金策でも素材困窮でも困った時は親友（マブダチ）に相談するんだよ！！！！

заткнись！（後書き）

話の流れをぶった斬り、いざや挑めや蠍狩り……！！

猫駆除だぜ通風性（前書き）

このネタ分かるか分からないかで年代バレますよね
あたちようちえんじだからわかんにゃい！！

猫駆除だぜ通風性

「あ！！　もしかしてツチノコさんっスか！！？」

「んー？　えー……初対面だよね？」

「今から水晶巣崖に挑戦するんですよね！？　同行してもイイっスか！？」

「邪魔しないからいいですよね？」

「あー……タンク、タンク、魔法職、ヒーラー……」

「何か問題でも？」

「ここに木の枝があります、すぐ折れてしまうような木の枝な？で、それを守るように多少頑丈な木の枝が前にいます」

「？」

「じゃあ問題です、今からこの二本の木の枝にダンプカーが突っ込んでいきます。どうなるでしょうか？」

「折れる？」

「ていうか潰れる？」

「どっちも正解、ついでに言えばこの問題の木の枝を「後衛」と「

タンク」にすれぱもっと分かりやすいだろう？」

「え……」

「組む組まない以前の問題だ、タンクは無理。天地がひっくり返ってもタンクは無理」

「……で、でも、ツチノコさんは耐久なさそうっスけど普通に攻略してますよね？」

「全部気合で避けてるんだよ、このエリアじゃ空中ジャンプと「完全な」ヘイト切り、あと最速で走って最速で採取するAGIとDEXが必須技能だからもし本気で挑むなら……そうだな、最低でも忍者か飛行手段が必須」

「ええ……」

「そっちの魔法職、空飛べる？」

「このゲームって飛行魔法あるんですか？」

「いや知らんけど飛べないなら無理、逆に聞くけどどうやって攻略してると思ったの？」

「え、えーと……なんかこう、大人しくさせる方法があるのかなって。じゃなきゃソロで狩りまくるとか無理でしょ？」

「あー……そういう勘違いされてたのか。俺は言うほど討伐してない」

「え？」

「あいつら、損害度外視で突っ込んでくるから蠍同士の衝突で身体が砕けて素材が落ちるんだよ」

「じゃあつまり……」

「気合で避けて、拾って……あとはまぁ、死んで離脱(リスポーン)」

「…………」

◆

犠牲者になるかもしれなかった四人を救えて何より。タンクは無理だよタンクは、このエリアに関してはジョゼットでも無理だろう。多段(ヒット)大質量の殺到はタンクの天敵と言っていい、俺はタンク事情にそんな詳しくないのでもしかしたら何か凄いスキルや魔法があるのかもしれないが少なくとも新大陸からの出戻りではなさそうなプレイヤーでは無理ゲーが過ぎる。

まぁ討伐してないってのはちょっとフかしたがな、消耗した蠍にとどめ刺すとかしてるから討伐数もそこそこあったりする……言うと面倒そうだから一般論で誤魔化したが。

「さてサイナ、何故俺がベヒーモス攻略をぶん投げてここに来たかわかるか？」

「不明：オルケストラ攻略の手がかりを得るよりも優先される理由

は薄いかと」

「いやそこはどうでもいい、水晶群蠍のエクゾーディナリーってだけでもオルケストラより優先する理由たり得るからな」

ミレィに先を越された時点でオルケストラが消失しないことが確定したので、ぶっちゃけると優先度はもうそこまで高くない。

「では作戦内容を説明する！　ゼロから情報を集めて〝皇金世代(ゴールデンエイジ)〟を討伐する……以上だ！！」

「…………」

「そう呆れた顔をするな、この戦いの中でお前の葛藤に終止符を打ってやるからよ」

では早速突撃。

……

10秒後

……

「だぁぁぁあ！！？」

挟撃！　多重包囲！　状況に応じた戦力投入！！　控えめに言って地獄だぜぇぇぇぇっ！！

普段とは全く違う動きだ、確かに規律が取れているしこれまで水晶群蠍の攻略法として用いていた「同士討ちを誘発しての突破」が完全に使えなくなっている。

横一列に並んだブルドーザーの如く俺を追い詰める水晶群蠍の一団を跳び越えるも、その後ろに備えていた第二波が尻尾による刺突で着地する瞬間の俺を狙う。

だがここで早速相対的立体運動(ソリッド・マニューバー)が輝いた。俺の心臓を狙った攻撃に対して発動した半オート回避によってステップを入れ、巨大な体躯故に出来る並んだ個体の間に出来た隙間を潜り抜けてさらに先へ。

「サイナ！　生きてるかーっ！！」

「報告：問題無……訂正：第三波を確認」

「構わんっ！　進め進め進めーっ！！」

ここに来る前に泡食って八層に上がってきたキョージュ経由で【ライブラリ】から〝皇金世代〟の情報はある程度貰ってある。だからこそ分かる、ここに通い詰めてきた事で蓄積した水晶群蠍の情報が確信のある仮説を構築した。

「見つけた！　アレだろ……！　サイナっ！　あのトサカを破壊するぞ！！」

「了解：」

あくまでもスキルに頼る必要のある俺と違ってサイナはブースターでほぼ飛行に近い跳躍機動が出来る、いざとなったらインベントリアに強制的に突っ込めばいいし。まぁ、それは本当に最後の最後ってところだがな……

「カラクリのタネはてめーだろ中継点！！」

水晶巣崖に現れた統率個体、それによって水晶群蠍は規律を手に入れた……そこまでは分かる、だがそれならそれで違和感がある。

まず最初に水晶群蠍の動きだ……僅かにラグはあるがこちらの動きに対応した動きは確かに脅威だが、じゃあそれどうやってるんだ？　という話になる。

だってそうだろう、どんな戦略ゲーだって画面盤面を一切何も見ずに勝つのは不可能だ。仮に〝皇金世代〟が天才的軍師思考ができたとしても他の水晶群蠍に囲まれてロクに姿の見えない俺の動きをどうやって把握している？

そして聞き取りの結果、得た情報の中にあった「変な形をした水晶群蠍」の情報……将軍なのかどうかは知らないが、このエリアにアタックしてきた中でそんな一目見て「変」な個体は存在しない。これまでの水晶巣崖における異常とは即ちエルダーであり、偏食個体の事を指していた。

であれば答えは一つ、先程から攻撃に参加せずこちらの様子を伺っていた「待機組」の中でも背中から「♯(シャープ)」みたいな水晶を生やしたお前！！　お前が「眼」であり「中継点」なんだろう。

傑剣への憧刃(デュクスラム)と傑剣への憧焉終刃(エスカ＝ヴァラッハ)を構え、不自然に通常個体達に庇われている中継個体に肉薄。いまさら2、３匹の蠍で俺が止められるとでも？　跳躍、立ち塞がる蠍の背中を足場に強靭な力で支えら

れた尻尾を柱代わりにして♯個体の前に躍り出る。

「破壊ィ！！」

三回斬りつけただけだが、やけにあっさりと「♯」が砕け散る。だがその崩壊によって変わった状況は想像以上だ。

「報告：近辺の水晶群蠍が不自然な静止状態」

「指示待ちか？　下手につつくと普通に殴られそうだ、次行くぞ！　サイナ、上から確認しろ……この水晶巣崖に出現してる内、大体何割の動きが止まった！？」

未だ疑問は晴れていない、と言いたげなサイナが一際高く跳躍していくのを眺めながらカスダメで削れたＨＰの回復を試みる……おっ、初手成功とは運がいい。

「確認：全体の二割五分」

「素直に２５％（パー）と言えばいいものを……成る程、あと三体か」

丁度いい、ここらで少し「教育」しますか。熱血教師サンラクの夜空授業は少々情熱的だ……頼むぜ教材（マブダチ）、ウチのサイナに道徳の授業をする為にちょっと協力してくれ。

猫駆除だぜ通風性（後書き）

ジュビロ式

外道教師サンラクのワイルド授業

追加で分かったことがある、ご丁寧にエリア毎の蠍達は異なる戦術で攻めてくるってことだ。嘘だろスコーピオンズ、同胞ぶん投げ戦法を既に実用化して……！？

「サイナ地上を走れ！　いいぜいいぜ盛り上がってきた！　奇策の使い方が上手いじゃねーか〝皇金世代(ゴールデンエイジ)〟！！」

「推奨：撤退」

「バカ言え！　お前は答えが見えたのかよ！？　断行するぜぇぇぇえ！！」

大質量の落下は脅威だがそれが脅威になるのは逃げ遅れるようなすっトロいＡＧＩしてる奴限定だろうがよ！！

機動力強化スキルフル回転！　ファランクスじみた防衛網を強行突破して一気に進んでいく！！

「チッ、少しは頭が使えるようだな」

てっきり中継点個体は後方で潜伏しているものだと思ったが、防衛網を超えた先にいたのは器用にもスリーマンセルで同胞を投げ飛ばす発射台役の水晶群蠍だけだ。そして当然こいつらも水晶群蠍なので攻撃に転じてくるわけだが………

「ツーテンポは遅れたな、中継点個体からも見えづらい位置に俺がいるのか？」

となると、ここではなく……いやこっちか？　おっと危ない、だがやはり対応が二手くらい遅れている。鋏の振り回しをジャンプで回避し、空中ジャンプで別個体による尻尾なぎ払いを走高跳の要領で回避。そのまま最初に鋏攻撃をした個体の背中に張り付いてウツロウミカガミ。退避した次の瞬間には他個体の一斉攻撃が哀れなデコイ君へと叩きつけられる……おっ、レアアイテムじゃん拾っとこ。

「補足ぅ！！」

「攻撃を開始しますか」

「当然！　サイナ、一人であれ破壊できるか？　他の個体は俺が引きつける」

「……命令とあれば」

「じゃあ頼むわ」

ヘイカマーン親友達（マイブロス）よ！！　悪いが授業中なんでな、指揮官に呼ばれてるとしてもちょーっと道草食ってもらおうか、ドレッシングは何がいい？　俺はお前らの血飛沫！！！

「骨の髄まで採掘（カンカン）してやるよ……！！」

剛掘の鶴嘴君……久しぶりに命を砕く感触を味わいたいんじゃないかい……？　安全マージンの取れた蠍なんざ動く鉱脈みたいなモンだぜ、命がけで損害度外視だからこそお前らは脅威だってことを思い出させてやるよ。

◇

ＮＰＣはあくまでもＮＰＣ、どれだけ人間に近い振る舞いをしていたとしてもそれはあくまでもゼロとイチに基づいた機械的な再現に過ぎない。

………尤も、成人男性であっても１５００グラムあれば大きいと言える脳みそで人間のアイデンティティが生まれるのであるならば、数十階はあるビル丸々一つを７つあるサブサーバーの一つとして使うようなゲームであれば、あるいはシャングリラ・フロンティアのＮＰＣは人間よりも人間らしいのかもしれない。

「案外楽に倒せそうだな………ていうか予想外に楽だぞどうしよう。いっそ………よしサイナ、残り二体の中継点個体は二手に分かれて倒すぞ」

鶴嘴を武器として運用し、現に何体かの巨躯を砕いていたエルマ＝３１７の契約者サンラクは中継点個体……正式には儀仗個体が撃破されたことで命令が待機状態となって静止した蠍達の間を歩きながらそうサイナへと告げた。

「確認：当機単体での中継点個体の撃破」

「そんな難しくもないだろう、それにある程度距離が離れていても

インベントリアで収納できるのは実証済みだ…………いや便利すぎる気がするんだがなこれ、ナーフされてたらどうしよう。サイナ、一応同じエリア内なら収納可能だよな？」

「可能です」

「ならよし、いきなり無理になりましたとかやめろよなー」

なにやら「サイナ」の理解が及ばない独り言を呟いていたサンラクであったが、サイナとしては質問に対して嘘偽りなく返答する、ただそれだけのことだ。

「なら安心だ、お前の様子はこっちでも確認できるしもしヤバくなったら回収してやるよ」

「……了解……」

基本的にサンラクという開拓者は常に先頭を走らずにはいられない存在だとサイナは判断している。情報を先んじて獲得したい……というよりも、計画を立てて時間をかけてコツコツ、というものを根本的に好んでいないというべきか。思い立ったが吉日、善は急げ、尽きないリソースのそれでも残量を気にするような……生き急いでいるという言葉が似合う男、それがサンラクだ。

あるいはこの程度で果てに着くはずがないという信頼が、彼の足を動かすのかもしれないが………それでも、だからこそサンラクの指示にはサイナは疑問を覚えた。過去の傾向から見ても「さっさと他二体も潰すから遅れるなよ」と言われるものと推測していたためだ。

だが必ずしも一貫した思考を持ち続けることは意識的無意識的を問わず難しいもの、であればこういう指示を出すこともあるのだろう

とサイナは了承し、サンラクとは別方向の統率のとれた「群（軍）」へと急行する。

（戦力推定：勝率０％……しかしながら特定個体の特定部位のみを破壊する、のみにオーダーを絞った場合を「勝利」と仮定した場合……勝率６５％）

「賭けに出る分には不足ない数値ですね……「化粧箱」展開、双剣モード」

必要なスペックは本体の機動力を削がず、それでいて中継点個体の部位を破壊するだけの威力あるいは手数を兼ね備えていること。それ故に契約者に倣って双剣を展開したサイナは殺到する水晶群蠍の大群へと自ら歩みを進めつつも蠍達の「戦術」の解析を始める。

「直線的な挙動、しかしながら………妙ですね」

戦力の投入に違和感がある。というよりも、サイナが突っ込む前から既に軍勢が起動していたというのがそもそもおかしい。それは何故か……

「無理無理無理無理……ひぎぃっ！！」

「カナコちゃんが！！」

「やっぱレベル６０じゃ無理だったんだってこれ！　死ぬしかないよーっ！！　いやあーっ！？」

「ニュッキがホームランされたぁ！！」

「ゲームでも怖いぃぃぃい！！」

理由は単純明快、サイナが突撃するよりも前に水晶群蠍達を刺激した者がいるからに他ならない。

◇◆◇

これはあくまでも「もしも」の話であるが、この状況に直面したのがサイナではなくサンラクであった場合。彼であれば死にゆくプレイヤー達そのまま見守っていた、仮にその存在に気づかれたとしても「御愁傷様」と合唱することはあっても助けることはないだろう。

そしてそれはエムルであっても同様だ。ヴォーパルバニーというモンスターカテゴリに属する存在であるからこそラビッツの人語を解するヴォーパルバニーであっても、ある種野生のシビアさを備えているエムルは（二号人類がいくらでも死ねることもあって）基本的にはサンラクよりも自身の生存を優先する。

だが、サイナはそれを知らない。ウィンプを助け、聖女を庇い、多くのプレイヤー達と共にジークヴルムを踏み越え、バハムートに挑む姿からサイナは現時点でサンラクを「なんだかんだ他人の窮地を見逃せない人物」と判断している。

◇◇◇

だからこそ、サイナの取った行動は未だ存命の二人を助けるといったものであった。

「推奨：迅速な退避行動」

「誰！？」

「退避って……」

へたりこむ、という水晶巣崖では自殺行為とイコールな状態のプレイヤーが突如として割り込んできた人ならざる人形の姿に目を白黒とさせるがサイナとしてはそれに構っている暇がない。

「水晶群蠍（クリスタル・スコーピオン）の対処は請け負います。死亡による離脱を望まないのであるならば………っ！　迅速な、退避を」

「え、あの、え、どうもありがとう？」

もはやサイナはそれどころではない。そもそも最低限の対処で蠍の群れを突破し、中継点個体まで到達する為の双剣装備なのだ。少なくとも怒涛の勢いで殺到する水晶群蠍に対して殿（しんがり）を務める為の選択としてはあまりに不適切だ。

「ぐっ………損傷：中破」

そして、二手に別れる前はあの手この手でサンラクがヘイトの大半（25%）を請け負っていたという事実………あるいはこの群れの戦術が追討戦に特化していたという不運………そして装備の換装に一瞬とはいえ手間取った愚行………それら全ての積み重ねにより、サイナは水晶群蠍の一体に軽々と弾き飛ばされた。

「体勢の立て直し、を……」

だがそれを許さない。追討戦とは逃げる者を追い詰める為の戦いだ、休ませず逃さず……大地を削りながら振り抜かれた水晶の尻尾がサイナをさらに吹き飛ばす。

「損傷：大破……」

沈黙、これ以上の追撃を受けないためにも回避行動を取りつつ……気づく。
サイナの耐久(体力)はすでに残り三割を下回っている、それは別の場所にいるサンラクも分かっているはず。なのに………サイナの躯体がインベントリアへと転送される気配が一向にない。
そしてサイナが今いる場所からサンラクへと言葉を送る手段はない。あるいは偶然サンラクが戦術機を使っていれば通信を使えたかもしれないが、刻傷のデメリットがある以上はその可能性もほぼあり得ない。

「待っ………」

エルマ＝３１７(サイナ)は征服人形(コンキスタ・ドール)である。アンドリュー・ジッタードールが立案した「再征服計画(レコンキスタ)」に基づいて稼働し、次世代原始人類の力となるべくその身を賭して働く機巧の人形(ドウグ)。
仮にここでサイナが粉砕されたとて、だからどうしたというのか。３１７番目のエルマ型が喪失されるだけであり、既に征服人形と次世代原始人類がコンタクトを取った以上は「再征服計画」になんの支障もない。

水晶群蠍が迫る、無機質な眼は眼前のサイナがなんであろうと知ったことではない。皇の座す地に入り込んだものは全て等しく「敵」であり、それが人間だろうと人形だろうとやることに変わりはない。故に進撃し、踏み潰す……

「嫌………………」

その言葉は、征服人形の口からごく自然にこぼれ落ちた。

「嫌だ…………！！」

紛れもない恐怖、あと数秒もしないうちにエルマ＝317だったものが水晶の欠片と一緒に粉砕攪拌されてこの世から消え去ってしまうことに対する恐れ……何よりも、「終わり」に対する怯えが人形の身体をフリーズさせる。

死に瀕して知性持つ者が取る行動は二つ、足掻くか竦むか。サイナは後者であった。

そして、水晶の大波濤がちいさな人形を飲み込「はいストップ」まなかった。

◆

「ようサイナ、いいツラしてるぜ。スクショ撮ったけど後で見る？」

空中歩行と円周運動による加速を嵐の力でさらに加速させた旋風の一閃で統率者の肥大化した受信器を断ち切る。随分とまぁ人間臭い顔でへたり込んだサイナに向けて、俺はなんでもない風を装って話

しかける。

七割くらい想定外の事態が起きるのは聞いてないぜ…………！！

外道教師サンラクのワイルド授業（後書き）

ちなみにサイナと別れた瞬間に速攻で封雷の撃鉄・災使って自分が受け持った儀仗個体を無効化して爆速シャトルランでサイナの方へと走って空中軌道の多重的円周運動（オービット・ムーブメント）＋兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）の同時使用でブーメランみたいな感じで駆けつけた。

自分が飛び道具そのものになる系主人公という個性を大事にしたいですね

・カナコ、ニュッキ、ナス奈、そよよ

マジでなんの関係もなく水晶巣崖に突撃してきた四人パーティ、サンラクに同行しようとしたプレイヤーとは別。無知ゆえの蛮勇で突撃したが案の定球技大会された為に二人ほどホームランされていたが、偶然アイドル衣装のロボ少女に助けられるというレア体験をした。

結局のところ一番足りてないのは（前書き）

肉を集めながらえんやこーら

結局のところ一番足りてないのは

まさかサイナが人助けするとは思ってなかったし、予想よりも蠍の行動パターンが悪質だったのでよもや、と肝を冷やしたものだが……さすがは俺と自画自賛しておこう。とっさに多重的円周運動を利用したスーパー急がば回れアタックによってなんとか間に合った。これでサイナ破損とか好感度あげるどころか下手したらリセットからのマイナススタートだった。

「マス、ター………」

「涙の一つでも流せていれば完璧だったんだが……そもそも泣く機能ってあるのか？」

「要求：説明。契約者は意図的に回収を行わなかった」

そう怒るな怒るな。サプライズとジョークの合わせ技みたいなもんだろう。

「まぁ否定はしない。だけどそのおかげで身に沁みて自覚できたんじゃないのか？」

「…………」

え、マジか。あれだけ追い詰めて自覚できないの？　それとも俺が教えるの待ち？　まぁいいや、口で言えというのならお教えしようじゃないか。

「偉大なる先人（別ゲーの台詞）曰く！　道具は死を恐れず、生に安堵しない！！」

死を損失と考えればそれを回避しようとする道具はあるかもしれない、だが自己の保全を認識はすれど「安堵」する道具は存在しない。まして、ガワが美少女なら日本人の八割はこいつを道具とは考えない！！

「お前は死を恐れた、エルマ型が今何機いるのかは知らんがお前で打ち止めってわけじゃないだろう。つまりいくらでも替えが利く……だがお前は自分が砕け散る事を拒んだ、そしてその顔を見ればわかる……今お前は生きていることに安堵している！！」

「それは、」

「生への欲望、死を恐れる本能。それは獣畜生から人間まで、それを考える知性（インテリジェンス）とそれを支える自我（アイデンティティ）を持つあらゆる知的生命体が当たり前に備えるものであり……お前の心に響くように言うなら、これを持っているなら即ちそれは知的生命体だ、使い潰す為の道具じゃない」

「…………」

死にたくない、まだ生きていたい。醜い叫びには生物としての全てが詰まっている。それを叫べるなら肉体を構成する物質が鉄だろうがカルシウムだろうが関係ない、そもそも魔力だけで構築されたどこその精霊が剣のオプションパーツ扱いでもエンジョイして生きている時点でサイナの悩みは考えすぎなのだ。

「水晶群蠍は「物」を無視するって知ってたか？」

「初めて認識する情報です」

「奴らは「敵」を撃滅するが百の同胞を斬った剣がその辺に刺さっていても無視する……だって敵じゃないからな。だがどうだ？　さっきの蠍共は間違いなくお前を叩き潰すべく動いていた。それは地面に放置される道具だからではなく、お前が自分で考えて動いたことで「敵」として認められたからだ」

「敵として……」

「何より驚いたのはお前があのプレイヤー……もとい開拓者たちを助けたことだけどな、しらばっくれるなよあれどう考えても自己判断だろう」

「それは、契約者（マスター）ならそうするかと……」

「えっ……………いや、絶対間違いなく確実に見捨てるけど。うん」

「………………修正：契約者の性格情報」

いや助けるわけないだろう、笑顔で見送って念仏くらいは唱えてやってもいいが何で野良パですらない他人の面倒まで見なきゃいけないんだ。エムルだってそうするぞ、あいつが俺の頭上で「これも自然の摂理ですわー」とか言う光景が眼に浮かぶわ。

「……いや俺がどうするかはどうでもいいわ。大事なのは奴らを助けたのは間違いなく「俺の真似をしよう」と考えたお前自身の判断ってことだろう」

「………一理は、あります」

「その割にはまだ納得していない顔だがな」

「肯定、します。当機(ワタシ)はまだ、当機(ワタシ)という存在のアイデンティティに、確信を持てないのです」

まるでサイナの叫びを聞くために水晶群蠍達すらもが黙り込んだかのような静寂の中で、サイナの声だけが響く。

「エルマ型とは即ちかつてのエルマ・サキシマの人格再現に過ぎず……」

「生後一年未満の赤ちゃんの人格なめてんのか」

「征服人形とは所詮再征服計画のための駒に過ぎない！」

「どうも、二号計画の再利用可能な捨て駒です」

「ここで当機が機能を停止したところで、また新しいエルマ型が稼働するだけではないですか！！」

「しゃらくせぇ！　今後何万体のエルマ型がロールアウトしようが３１７号機はこの世にただ一つしか存在しないだろうが！！」

全てはこれに尽きるのだ、こいつがどれだけ量産品だの替えが利くだのとしょーもない言い訳を重ねようと、その全ては「エルマ＝317はこの世に一体しか存在しない」という純然たる事実で全て論破できるのだ。この先どれだけアップデートされたエルマ型が生産されようがウィンプを捕獲して撃墜されたエルマ型はただ一人だ、そこで偶然遭遇したこの俺と契約したエルマ型は３１７号機ただ一

人だ。
そもそも一番重要なのは「そこ」じゃないのだ、こいつのアホみたいな曇り顔の本当の原因は別のところにある。ある意味一番シンプルな原因がな……！！

「いいかポンコツ、この際だからはっきり断言してやる、聴覚センサーをフル稼働して聞け」

びちん！　とサイナの額にデコピンを一発入れてから息を吸い込む。

「――――お前はただ生みの親に酷いこと言われるのが怖いだけだ」

「………怖い、だけ？」

「どうせあのラボに入ったら「所詮は征服人形とか道具にすぎませーン」とか言われるとでも思ってるんだろう、そーゆーのなんて言うか知ってるか？　被害妄想って言うんだぜ」

そりゃ確かに親から「お前なんて産まなきゃよかった」とか言われたらショックだろうけどさ、だがそれでも前に進まなきゃいけないならやることは一つしかないのだ。

「お前に何よりも足りないのは勇気だ」

「勇気‥」

「そうとも、事実を受け止める必要はない。だがな、死人の言葉なんぞに何故今を生きる俺達が振り回されないといけないんだ？」

引退した元プレイヤーの言葉を参考にすることはあっても律儀に守

る必要はない、好きにやってなんぼのゲームだろう。それと同じだ、このビビりインテリジェンスはアンドリュー・ジッタードールが征服人形を道具としか思ってないかもしれないと過剰に怖がっているが、だからなんだというのだ。

何言われようが数千年前で常識が止まってる奴が今の征服人形を語るなって話でしかないだろう、あーでも耳障りのいい話は胸に刻んでやってもいいかもな。

「疑問：ではどうしろと？」

「知るかボケ、以上」

「…………は？」

「エゴ、アイデンティティ、インテリジェンス。呼び方はなんでもいい、そういうのは他人に評価されて決まるもんじゃないだろう。誰にどれだけ貶されようが他人事なんだよ、うるせーお前の評価なんて知るかボケで片付けとけ」

サイナの悩み、実は俺とて覚えがないわけではないのだ。主にクソゲー関連で似たような経験をしたことがある。

人間というものは不思議なもので、「このゲームはこのようにしてクソゲーだから買うのはオススメしない」と善意で忠告していた奴がいつのまにか「このゲームを買うやつは頭がおかしいのでバカにしてもいい」みたいな思考にねじくれることがままあるのだ。まさに知るかボケとしか言いようがない。

誰がどう評価しようが俺がプレイしたいからクソゲーを買うのだ。「こんなゲームを買うやつの正気が知れない」とか実際に言われたこともあるが、お前に正気の保証されたくてゲームやってるんじゃねーんだよバーカ！！　まぁそれでもやった上でそうのたまってる

ならまだマシだ。酷い時は伝聞だけで評価するやつとか普通にいるからな……数字（メタスコア）と通販サイトの文章（レビュー）でしかゲームを評価できないなら一生読書感想文と数独だけやってろって話だぜ。

おお、ドス黒い炎が俺を動かしている。負のモチベーションは時に正のモチベーションよりも強い火力を出す。両方一緒に炉にぶち込めば最強じゃね？

「お前に何より必要なのは事実を受け止める強さじゃない、事実をぶつけられてもそれをねじ伏せて踏みつける勇気だ」

だからこそこれが卒業試験だ。

「〝皇金世代（ゴールデンエイジ）〟がなんだ、蠍の王様くらい片手間でぶっ飛ばせなきゃ反抗期なんて夢のまた夢だ」

グレていこうぜサイナ、親と世の中に逆らって突っ張っていくのは楽しいぜ？

……後が怖いけど。

結局のところ一番足りてないのは（後書き）

勇気があればなんでもできるって勇者ロボが教えてくれた

煌帝は堂々たる決闘を望む

勇気とはなんだ！　答えは簡単、弱者として強者に挑む権利をためらわずに使うこと！！！

勇気とはなんだ！　答えは簡単、整列した水晶群蠍の作った道を堂々と突き進むこと！！！

勇気とはなんだ！　答えは簡単、ぶっちゃけ〝皇金世代（ゴールデンエイジ）〟に挑みたかっただけなんだけど適当な理由をこじつけて自分を納得させること！！！

結局勇気ってなんだ？　振り返った時に後悔しないよう全力で振り回す棍棒の名前だよ。

◆

強キャラってのはピンチに取り乱さないことが最低条件なところがある。であるならば己が腹心を軒並み無力化され、通信用のケーブルを食い千切ったネズミであっても蠍の王様は堂々と出迎えるらしい。成る程？　水晶群蠍の性質上、どう足掻いてもエクゾーディナリーとの戦闘は大混戦になるだろと思っていたが……仮にも金晶独（ゴールディ・スコーピオン）

蠍と名のつくだけあった、まさかこう言う形で出迎えるとは。

「異常行動です、水晶群蠍のこのような行動は……」

「強キャラな王様ってやつは決闘スタイルがお好きなのさ………どちらかというと裏社会の喧嘩を囲む野次馬っぽいけど、もしくは金網デスマッチ？」

水晶群蠍が大暴れした後ってのは大抵、地面の水晶が残らず粉砕されて砂利のグラウンドみたいなことになる。だがそれにしたってこれは異常だ、明らかに………いや違う、マジかこれエルダーの亡骸の上なのか！？　あの巨体の表面を均して真っ平らにしているのか。この際死体が消失しないのを考えるのは野暮だろう、元々生きてても死んでてもオブジェクトみたいなモンスターなんだから動かないだけありがたい。

そしてビッグ・グランパの亡骸を円形に囲んだ大量の水晶群蠍たちは観客であり、このコロシアムを囲む壁でもある。俺とサイナが円の中に入った瞬間、ただ一つ空いていた円の欠けた部分が水晶群蠍によって封鎖された……飛び越えたらどうなるのか試してみたい気もするが、皇帝陛下の前でそんな無礼は働けまい。

『モンスター不世出の発見(ディスカバータヹーディナリー)！』

『討伐対象：金晶独蠍 〝皇金世代(ゴールデンエイジ)〟』

『エクゾーディナリーモンスターとの戦闘が開始されます』

「あれが〝皇金世代(ゴールデンエイジ)〟か………なるほど、いい趣味してるぜ」

水晶群蠍達が微動だにしないからこそ、俺の声がいやに響くし……
…エルダー以下通常金晶独蠍以上の体躯を誇るあの蠍がボリボリ齧っている宝石塔がどんどん欠けていく音もまた十数メートルの距離があってなおはっきりと聞こえる。あれ、ここの蠍じゃ食えない鉱石アイテムが塔になったって設定じゃ無かったか？　おやつ感覚で食ってますが流石は皇帝陛下、そのチョコバーひとつでいくらすると思ってるんだ。

「どう見るサイナ、あの尻尾や鋏を補強している色に俺は激しく見覚えがあるんだが」

「推測：複数の鉱石を体内で合成した天然合金とでも呼ぶべき金属かと」

んー……鬼に金棒の類義語に蠍に合金があるとは。実例を出されると俺も弱い、ツッコミづらいからな。
とはいえ「客人」が来たからには〝皇金世代〟も悠長におやつを堪能しているつもりはないらしい。特徴的な形の「鋏」で器用に掴んでいた三分の一程度にまで齧られた宝石塔を投げ捨て、その「鋏」を展開する………鋏っていうよりカマキリの鎌、いや違うなそんな180度展開するなら立派な曲剣だな。

「数多の鉱石で鍛えた黄金の「剣」……何かシンパシーを感じる」

正眼の構えで突きつけられた尻尾……針と呼ぶには分厚く鍛え抜かれ過ぎている「剣」をこちらへと突きつけ、〝皇金世代〟はいつでも来いと言わんばかりに佇んでいる。よーいドンはこっちが出していいのか？　蠍にこんな情けをかけられたのは初めてだ、俺たちはきっと親友になれる。

「サイナ、あれほどのモンスターを倒せる奴はパパの心ない言葉にカウンターで肘を入れられる。そうは思わないか」

「疑問：何故暴力的解決手段を前提としているのか」

「百の言葉を考えるより五本の指を握りしめて一発入れた方が手っ取り早いからかなぁ！！」

喧嘩を売るだけなら舌を回すより腕を振り回せ！　戦闘開始だ、先行をくれるなら初手からぶちかましてやるよ。出番だＳＴＩＮＧ、人工養殖の蠍パワーを見せてやれ！！
槍弾頭モード、一撃の貫通力に特化した弾頭を精製、装填……そしてぶっ放す。射程距離には既に入っている。眉間に針治療してやるぜ。

だが〝皇金世代〟のとった行動はシンプルだった。つまり尻尾の「剣」を盾にして槍弾頭を防ぐ、たったそれだけ……だが、たったそれだけでＳＴＩＮＧ最大の貫通力があっけなく弾き飛ばされた。ノーダメージっすか、傷一つついてねぇや。

「来るぞサイナ！　〝皇金世代〟がピンチになったら部下を使わないことを祈りつつ戦闘開始だ！！」

「報告：損傷七割」

「あーはいはい回復ポーション渡すの忘れてましたね！！」

ひゃっほう宝の山が物理的に殺しにかかってきてるぜ！！　甲殻類系モンスター特有の恐ろしくシャカシャカした動きをさらに速くした加速で距離を詰めてきた〝皇金世代〟の剣鋏が俺とサイナのいた場所を薙ぎ払う。通常個体が比較にならない、攻撃の属性が打撃じゃなくて斬撃だから引っかかるだけでも致命傷になりかねない、どんな鈍（なまくら）も刃の形をしていれば車並みの推進力で振り回したら鉄板を斬り裂ける……そして皇帝陛下の剣鋏はとても切れ味が良さそうだ！！

「援護に回れサイナ！　俺が切り結ぶ」

「了解：」

言ったはいいが斬り結ぶのは無理だな、傑剣への憧刃でクリティカル出しても単純に膂力で真っ二つにされかねない。こんな風にぃぃぃい！！！？

ガズン！！！！　と真上から落ちてきた剣……剣鋏と差別化しないと混乱する、見た目がレイ氏の姉ことサイガー１００が使ってたエクスカリバーっぽいので聖剣……そう、「聖剣」だ。聖剣と認識しよう。

〝皇金世代〟の聖剣が元おじいちゃん現地面へと突き刺さる。切れ味抜群、エルダーの表面ってめちゃくちゃ硬いはずなんだけどな。

「一応やっとくか、へし折れろや！！」

傑剣（デュクスラム）への憧刃と傑剣への憧憬焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）による攻撃！　当然スキルによる

補強もつけてぇ………！　余裕で弾かれるゥ！！　硬い、あまりにも硬すぎるぜ！！
ターン制というわけではないはずだが次に動いたのは〝皇金世代〟だ。地面に突き立てた「聖剣」でそのままザリザリと地面を削り斬りながら俺を巻き込んで尻尾を引き抜こうとしている、回避自体は楽だが奴の剣は三つある。一つ避けても残り二つ、おっと剣鋏をフル展開して俺をハグするつもりか……！！　だが俺へと組みつく前に、横から浴びせかけられた弾丸の雨によって〝皇金世代〟の動きが僅かに止まる。

「効果：ほぼ無し………蛮勇では？」

「野蛮（ワイルド）な勇気（ブレイブ）ってことだろ強そうじゃねーか！！」

「指摘：神代人類言語的には蛮勇（レックレスネス）かと」

煌帝は堂々たる決闘を望む（後書き）

シャンフロにはレックレスネス・レイダーレッグレックスというモンスターがいる

嘘です今考えました、　いません

さてどうしたものか、数分逃げ回って分かったがヤバいのは「聖剣」じゃない……あの両手の剣鋏だ。いやどっちもヤバい事に変わりはないがあの両手は当初の想定を超えている。
まず何がヤバいって可動域だ。ただでさえ鋏というよりも鎌のような動きをする癖にあの前肢、手首を回すみたいにひねる事ができる。明らかに通常個体達とは違う、刃物を取り回す動きだ。

そして「聖剣」。明らかにヤバいのは見れば分かるし水晶群蠍系列の特性を見ればただの剣とも思えない、何かえげつない初見殺しが仕込まれてそうなもんだが真に恐ろしいのはそこじゃない。

割り切っている。奴は「聖剣」を無闇矢鱈に振り回すようなことはしない。あくまでも俺たちを一撃で仕留める火力はあるが大振りな攻撃として完全に割り切った運用で尻尾を振り回す。要するに必殺技だ。蠍（サイガー100）のくせに恐ろしく繊細なバトルスタイルしやがってからに。そういう所までガチ剣聖に似なくていいっての。

「推測：長期戦」

「いつものことだろ！　朝日が昇る前に倒せりゃ早いくらいだ！」

チッ、メイン火力……甦機装の超過機構を殆ど使い切ってるのが痛すぎる。いや煌蠍の籠手に関しては同族の力を使ってるが故かそんな有効打にならないんだがそれにしたって素の膂力で斬りつけるよりはダメージ貢献は高いはずだ。
だが手札を使い切ったわけじゃない、どでかい切り札が無くてもロ

ーコストを並べて殴れば勝てる……すなわちウィニービート戦法！！

「頼むぜ【廻渦白波（うねりしらなみ）】、一撃で百万ダメージ出せないとしても百万回1ダメージ叩き出せる耐久があれば同じようなもんだ……！！」

久々のフル稼働だ、リソースで殴り合おうぜ〝皇金世代（ゴールデンエイジ）〟！

「サイナ！　欲張らない範囲で尻尾を狙え！！　効果が薄くてもあれを折らないとどうにもならん！！」

水晶群蠍の身体はほぼ全身鉱物なので鋏や尻尾はある程度破壊できる……のだが、壊毒は恐ろしく聞きづらいし徹底的に特定箇所を殴り続けてようやく破壊できるような代物だ。

だから基本的に同じ蠍同士を激突させて壊す、あるいは脆くするのが基本戦術なのだが生憎皇帝陛下はタイマン主義だ。自力のみで壊すしかない……いや無理ゲーでは？

「めげない！　諦めない！　てめーに朝日は拝ませない！！」

晴天流「斬風」、晴天流は刀剣系の流派に見えて実際は素手というか刀に頼らない技ばかりだし、刀を使うスキルが「風」系しかない。

だが、それが役に立たないかどうかは別問題。むしろ「風」さえあれば大体何とかなると言わんばかりなのが晴天流……！！

肉薄からの抜刀。体格の不利は逆に言えば体格の有利にもなり得る、どれだけ剣鋏が巧みに動こうとその大きさによって生じる隙だけは誤魔化せない。

狙うは冠の如く黄金の水晶が発達した頭部、有効打と信じるには硬すぎる手応えに握る手が若干痺れるがそれでもダメージは入った。

「悪いが剣術勝負をする気はサラサラないんでなぁ！！」

廻渦白波を放り投げ、握った拳にスキルを宿す。食らえ孤児パンチ、「戦砕琥示（ウォールフェン）」！！

柔らかなジャブが巨人をも倒す衝撃波を生み出し、〝皇金世代〟の身体を押し除ける。だが皇帝陛下はそうそう青天井をするつもりはないらしい、剣鋏や尻尾が目立って忘れがちだがあの恐るべき機動力を成している脚力はノックバック特化のエクゾーディナリー・スキルを顔面に直撃させたにも関わらずあまり吹き飛んでいない。踏ん張って耐え切りやがった……！！

物理演算に従って落ちてきた廻渦白波をキャッチし、すぐさま後退。恐ろしい復帰速度で攻撃を仕掛けてきた〝皇金世代〟の剣鋏を回避し、奴の追撃に合わせてこちらから再び肉薄。

晴天流「貫雷」、硬い外殻の下に柔らかな肉があるとかではなく骨の髄までほぼ水晶な〝皇金世代〟に効くかは微妙なところだがそれでも貫通技だ。この際全てのスキルを使い切って「愚者」のリキャスト半減すら追いつかないくらい暴れてやる。

「要求：十五秒。最大の打撃火力を発動します」

「請け負った！！」

金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオン）は月光と星空の輝く夜こそがホームグラウンド、だがそれは俺もまた同様！！

蠍と多く関わっているからか、あるいは初っ端からリュカオーンなんていう夜の塊みたいなやつにちょっかいかけられたせいか月の光が齎す恩恵は奴だけが独占するものではない。

「はしゃげよ皇帝陛下、チャンバラに付き合ってやる」

大はしゃぎで飛び込んできた〝皇金世代〟に対して武器を切り替える。タフネスな廻渦白波から境光の宝剣(ルーメリディアン)へ、月光を受けて真紅に輝く夜光刃を突きつける。

〝皇金世代〟の行動パターンを完全に把握したわけじゃないが適材適所の一撃必殺を放つ「聖剣」を持つ尻尾とは異なり、剣鋏による攻撃はメインの戦法にしているだけあって手数と対応力に特化している。

鋏をフル展開した「剣」、半分展開した「鎌」、そして鋏を格納した「拳」。拳モードに関しては鋏の関節部分で殴る性質上、デメリットも大きいので苦肉の策という感じなので警戒度は低い。つまり警戒すべきは鎌と剣による攻撃だ。

当たるだけで即死な攻撃は当然最大の警戒をするべきだがそれだけじゃない。単純に剣鋏を振り回すのではなく鎌から剣、剣から鎌への切り替えすらをも「攻撃」に転用する器用さ……近距離に近づかなければならないが近距離が最も危ない、さらには巨体からは想像もつかない機動力。

「だったらその「択」を潰すところからだ……」

鎌では届かず剣なら届くギリギリの距離をキープ、境光の宝剣による遠隔斬撃で攻撃を加えながら徹底的に〝皇金世代〟の意識を集める。

地面が平坦になっていて本当に助かった、俺をそう簡単に捕まえられると思うなよ皇帝陛下。根無草の愚者はフットワークが軽いんだからな……！！

「十五秒！！」

「要請認証：再征服計画に基いた契約者の接敵レベルから征服人形エルマ＝317へのクラスVIII武装「爆圧噴射式杭撃機（ベクタード・スラスターパイル）」の一時使用を許可。転送……完了、即時使用します」

「なにその素敵武器！！？」

巨大三脚（トライポッド）で支えなければ構えることすらできない巨大パイルバンカーをどこからか呼び出したサイナが巨大金属杭の先端を〝皇金世代〟へと突きつける……オーケー理解した、動きを止めればいいんだな。

仕方ねぇ、付き合ってやるよインファイト……！！

もしもし本部、素敵兵器を貸して下さい（後書き）

・爆圧噴射式杭撃機（ベクタード・スラスターパイル）

クラスＶＩＩＩ（初期段階の始源眷属・族くらいの敵）の特殊武装であり、ジェットエンジン技術を転用したマナ粒子の爆発力で杭を叩き込む。武器としての性質上、クラスＶＩＩＩの敵に対して大きな隙を晒す事になるためこれを使用するということは「自身が破壊される」事を前提とする覚悟か……あるいは、「敵の注意を引きつけてくれる誰かがいる」という信頼が必要となる

「さぁ来いほら来いよっしゃ来い！！」

インファイトは魂のバトルだ、パワーとテクニックと何よりガッツが要求される。

ヘイトを引き付けるためのパワー！　〝皇金世代〟のヘイトをこちらに向けるためにはサイナよりもヘイトを稼ぐ必要がある。だからこその【ウツロウミカガミ】の変則利用、ヘイトを捨てると考えるのではなくヘイトを置くと考える。ヘイトコントロールってのは二種類ある、自分が安全になるためか……あるいは自分を危険に晒して他者を安全にするか。

だが覚えておけ皇帝陛下、その気になれば俺は避けタンクにもなれる。「愚者」が実現するスキルの高速回転による怒涛のヘイト稼ぎから目を離すんじゃねえぜ。

生き残るためのテクニック！　ヘイトとは憎しみであり注目、それを高めれば高めるほど奴の攻撃は俺に集中していく。あの「聖剣」と鎌の使用が解禁された剣鋏が、だ。

勢いよく開くだけで打撃になり得る鋏を巧みに使いこなし、僅かにでも気を抜けば天から「聖剣」が死を届けに振ってくる。だが逃げられない、ヘイト集めもあるが今一番使われてまずい技はエルダー以外の全ての個体が使う蠍の必殺……尻尾を伸ばしての３６０度回転だ。砲撃型(ビーム)の帝晶双蠍ですら使う伝統の技だ、避けれないわけじゃないが準備モーション中のサイナはそうじゃない。即ちインファイトだ、大回転を誘発させせない距離は超至近距離の他にはない。

そしてそれらを実現する為の必須パーツこそが度胸！　リアリティがあるということは恐怖もリアルって事だ、どんな格闘家にも大型車よりデカい蠍と戦ったことのある奴はいない。ファンタジーなフィクションがリアリティを得る事で新鮮な恐怖を生み出す、割り切って飲み込んで乗り越える事が最高ランクのリザルトに繋がるのだ。

「非人間アバターの経験はっ！　こういう時に活きる！！」

犬、カブトムシ、トムソンガゼル、チーター、珍しいところではアイスクリーム。いやアイスクリームはどうなんだろう……役に立った事あるかなぁ？　灼熱の天ぷらアーマーとか過去にも未来にも役立つ事があるのか。まぁいいや、大事なのはモンスターが「どう動くか」の把握に役立つという事だ。

蠍になった経験はないが……いや！　ザリガニと蜘蛛は経験があるので補強すればいける！！

ほーら目の前にうざったい獲物があるぜ、「聖剣」を初手から使ったって当たる確率は低い。だったら剣鋏を使うが定石だよな？　剣状態じゃ届かない、折り畳みながら鎌モードで掻き込む動き……はい見切った、空中に逃げたぜ来いよ「聖剣」！！

「ありがとうマクセルさん！！」

多重的円周運動(オービット・ムーブメント)と相対的立体運動(ソリッド・マニューバー)の連続使用！　当たるルートにあえて身を晒す事で半オート回避を確定で発生させ、斜めに傾いた半径1メートル未満の極小円を描く事で同じ場所に舞い戻る。よし行けサイナ！ぶちかま……あ、ちょっと待て真後ろ！？　その位置取りは不味い、そこは直線のルートで「聖剣」が……！！

「チッ、間に合え！！」

多重的円周運動逆回転（オービット・ムーブメント）！　半径は目算６メートル、サイナの前に出る地面から斜め４５度に傾いた大円周……！！

気分はミスター太陽系の補欠、冥王星の気分だ。他のスキルで補強して巨大パイルバンカーを構えたサイナの前に躍り出た俺は眼前に突き刺したそれを引き抜き、逆再生するかのように真上からサイナへと振り下ろされる「聖剣」に左手を掲げる……！！

「契約者（マスター）！！」

「構うな！　尻尾にぶちかませっっ！！」

副次的防衛挙動（コラテラル・ダメージカット）、損傷を前提とした変則パリングスキルは確かに「聖剣」を逸らし、俺とサイナに突きつけられた死の宣告を無効とした。

だがマクセル氏も流石に皇帝陛下の剣までは想定していなかったらしい、「聖剣」がいつの間にか備えていた光熱と厳密には弾いたのではなく自ら左腕を断たせる事で軌道変更させたが故に肘の先から消し飛んだ左腕をそのままに無事な右手で「聖剣」を指差す。

つーか蠍の尻尾素材は部位破壊しないとドロップしない、死闘激闘なんのその、チャンスがあるなら卑しく食いつくのがゲーマーよ！

「……了解：射出！！」

キュガッッッ！！！！　という轟音に衝撃波をおまけで付けたようなインパクトが鋭利な先端を押しつけて〝皇金世代〟ご自慢の「聖剣」に炸裂する。地面に突き立っていた黄金の剣が腹にジェットパイルバンカーの一撃を受けた事で刺さっていた地面を大きく抉って掘り起こしながら弾き飛ばされる。

だが無傷じゃない、一撃で破壊こそされなかったが無敵に思えた「

聖剣」には確かに――

「亀裂が入った！　次弾行けるか！！」

「謝罪：クラスⅤⅠⅠⅠ武装は一度きりの使用を前提としたレンタルです。再び申請する必要がありますが……再申請までに十五分かかります」

「一時間で四発アレが使えるなら上等だ！　このまま追い詰めるぞ！！」

「具申：しかしながら契約者(マスター)は左腕を欠損しています。これ以上の戦闘は危険かと」

「バカ言えサイナぁ！　ようやくこれで剣の数がイーブンになっただけじゃねーか、殴れる！　蹴れる！　噛み付ける！　隻腕の剣術ならそこそこ出来るんだぜ俺は！！」

「……了解：この身砕けるまで」「いいや違うぞサイナ、どっちも無事で立ってなきゃあ勝利じゃない。俺は初見でも最高のリザルトを目指すんだよ！」

装備変更、もう晴天流は使えないし物理的に左腕がトんだから両手使用の武器も封じられた。だがだからどうした、ウチには十五分毎に超火力をぶっ放せるサイナがいるし片手で扱える武器だってある。アラドヴァルを右手で構え、尻尾にヒビを入れた攻撃を警戒してか一度距離を取った〝皇金世代〟に視線を向ける。蠍に感情があるのかは知らないがいやに冷静な判断力だ、だが一呼吸入れて体勢を立て直せるのはこちらも同じ……おや？　何やら尻尾をブンブンと振り回して……一往復で光が蓄積されている！　溜め技！　あの場

所で！　遠隔攻撃！！

「くっ！！！」

アラドヴァルを握る右手を開いて装備条件を解消しつつウィンドウ操作！　女帝城の顕壁盾（ヴォーパン・ガルガンチュラ）を展開して飛んできた斬撃を受ける！！　飛ばす斬撃が直撃した巨大盾が真後ろに勢いよく吹き飛ぶ……前にインベントリアに格納！　その高熱故に地面を溶かして埋まりつつあったアラドヴァルを拾い上げて前に出る。

「サイナ！　戦術を戻すぞ、射撃に回れ！！」

「提案：当機（ワタシ）が前衛を担当すべきでは？」

「その心配はないぞ、今から死ぬほど追いかけまわされるのはお前だから」

「…………」

さてどうしたものか、片手でヘイトを稼ぎ切れるかな？

4－1 vs 3（後書き）

だって切りたくなったんだもの、などと供述しており……

クールなハートをヒートにブースト

このゲームのいいところはレイド以外なら時間制限がない事だが、
このゲームの悪いところはレイド以外は時間制限がない事だろう。
えー、はい戦闘開始が大体1時くらいで現在深夜3時半！　えー、
”皇金世代(ゴールデンエイジ)”さんは未だピンピンしております！！

既に十発近くサイナによるクラスＶＩＩＩ武装とやらを叩き込んでいるが……それでも尚、皇帝陛下は健在だ。恐ろしくタフネスというのもあるが、やはり左腕がお陀仏したのが痛い。
メイン火力をサイナのレンタル武装に頼らなければならない以上、有効打が１５分に一回な上に向こうも向こうで何度も何度も攻撃を受ければ「サイナの方が脅威度が高い」と学習する。つまり俺を無視してサイナを狙う事が多くなった。

「だが……ふふふふ、あと一息って感じだよなぁ？」

パイル三回電鋸二回、光熱ブレード二回に他は空振り(スカ)。その殆どが「聖剣」に叩き込まれた事で奴の尻尾はもう限界に近い、あと少し攻撃を与えれば砕ける事がわかる。
だがそれは向こうも理解しているのか、行動パターンが変わってきている。「聖剣」を温存し、積極的に動き回る事で剣鋏の射程に入れる機動戦スタイルに変わった皇帝陛下の動きは本当に厄介だ。うざったい動きしやがってとボヤいたら何故かサイナにガン見されたがそれは同意という意味でいいのだろうか。

あと二時間戦って分かったがアイスクリームの経験は役に立ったわ、正式名称は「ドルチェフェアリー☆スクランブル・アイスクリーム！」……通称「ドブアイス」、可愛らしいタイトルと設定からは想像もつかないタイムアタックアクションゲームとでも言うべきインディーズゲームだ。
インディーズと言ってもどこぞの潰れたメーカーの元社員数人が作ったものらしく、今思えばある種の自己ＰＲだったんだろうな……ゲームバランスを考える奴がいなかったのと邪道を選びたがる連中しかいなかったのか、完成した代物がまぁまぁアレな点を除けば我々の界隈的にはそこそこ面白かった。

「あぶねぇ！」

主人公はドルチェの妖精アイスクリームちゃん、恋人のプリンちゃんに会いに行くために野を越え山を越え……という感じなのだが、このアイスクリームちゃんは時間経過で身体が溶ける。つまり真夏の炎天下を虫みたいな羽の生えたアイスクリーム（擬人化とかではなくまじでそのまんま丸いアイスクリーム単体）が命がけで駆け抜けるタイムアタックゲーなのだ。

「うおお俺から目を逸らしてんじゃねぇ！！」

ところでインディーズクソゲーのヤバいところって何かご存知だろうか？　答えは簡単、個人制作なので変なところがやたらに雑だったりする事だ。このゲームにおいてはずばり主人公の声である、よりにもよってどう聞き直してもおっさんの裏声にしか聞こえないボイスでアイスクリームちゃんが絶叫するのだ。

太陽光で身体が溶ける度に極道映画の親分みたいな声で「うんぬ、

ぐぉああああああああ！！」と叫ぶアイスクリームちゃん（妖精です）

「くっそ、まだ折れないのか！？」

己の身体を守るべく比較的冷たい下水道の水に浸かり、熱い温泉に入ったおっさんみたいな声で「ぬぅ、ふぅぅぅぉぉぉああああ……」と息を吐くアイスクリームちゃん（一応二歳の女の子です）（耐久ゲージが回復するがずっと視界の端に「※彼女は妖精なので神秘のパワーで清潔なままです」と表示され続ける）

「小技連打はやめろォ！！」

天ぷらの鎧を得るために料亭に忍び込んで灼熱の油へ身を投じ、拷問に耐える歴戦の戦士の如き「おごぁぁぁあっ！　ぐっ、がぁぁぁああ！！」と叫ぶアイスクリームちゃん（ボイスチェンジャーが限界を迎えたのかもはやただのおっさんボイス）

「サイナ！　まだか！！？」

「報告：あと二分」

今だからこそ分かる、あのひりつくような緊張感……急ぎながらも急がない、身の保全と身の犠牲を天秤にかけた限界点の見極め、なによりも刻一刻と変わる状況の中で最適なルートを瞬間的に見極める力。

よくよく考えてみれば今この瞬間に恐ろしくマッチしていた、皇帝に対抗するのはアイスクリームパワーだった……？　いやでもラス

ボスが飢えたホームレスなのは正直言って頭おかしかったしそういう思考してるから再就職できないんだろ、と彼らには伝えたい。あとゲームバランスがゴミだし物理演算が安っぽいから言うほど元ゲームクリエイターとしての優位性は感じないぞ、と。

界隈のインディーズ・クソゲーハンターからの情報ではまだヘッドハンティングはされてないらしい……あの人、顔出し動画制作もしてるんだけど見込んだインディーズ製作者がヘッドハンティングされてメジャー界隈に旅立つ度に泣き始めるから大真面目にやってるけど面白枠なんだよなぁ。

「うーん、数時間も戦ってると思考も散らばってくるなぁ」

サイナがヘイト稼ぎまくってるせいで思ったより暇になってくるんだよな。いや働いてはいるがお前に構ってる暇はねぇと適当にあしらわれるので必死に逃げるサイナと比べてそこそこ思考に余裕がある。

「サイナ！　行くぞ！！」

「了解：超電圧溶断剣（プラズマイト・ストラッシャー）、展開します」

もうここまで来ると当てるにしても手間と工夫が必要になる、奴のターゲットはほぼサイナ一択だ……いや厳密には「巨大質量を展開したサイナ」と言うべきか。

ただ狙うだけじゃない、二時間かけてガッスンガッスン攻撃を叩き込んでいれば奴も「聖剣」の破壊が狙いだと理解できるというもの。それでもあの手この手でサイナを尻尾前に移動させて攻撃を当ててきたが既に三回連続で攻撃に対処されている……あと一息って感じなんだが、その一息が随分と遠く感じる。

「さぁどうしようか……」

ジェットパイルは完全に学習された、玄武を落として動きを止めるのも見切られたし……いや、そろそろクライマックスか？　まだ温存するつもりだったが……当時のステータスで通常の金晶独蠍を倒すのに一晩かけた、今のステータスなら一時間ちょいで畳めるようになったがエクゾーディナリーが通常個体とは比較にならないことくらいは分かる。が、それにしたってユニークモンスターやレイドモンスターより飛び抜けて強いって事はないだろう。

このゲームにおけるレイドモンスターは「人数」がダメージレース以上に設定的な意味を持つって感じだが、エクゾーディナリーはレアモンスターの親戚のようなものだ、向こうも平気なツラして案外追い詰められているんじゃないか？

「……サイナ！　ターボかけるぞ勝負をかける！！」

「しかしながら攻撃を当てる難易度は時間の経過に比例して高まっています」

「不可能じゃなければ！　それ即ち可能という事だ！！　小数点刻みの確率を恐れるな、試行しないと成功の確率はゼロから変動しないんだぜ！！」

拳を握れ！　剣を掲げろ！　槍を構えろ！！　無血じゃ勝てない、だったら血ィドバドバに流して勝ちを掴むのさ！！

任せろサイナ、避けタンクも血液タンクも俺が受け持とう！　故に応えろアラドヴァル、戦闘開始から数時間……そろそろ温まってきただろう。生憎竜ではないが本気出してもらうぜ！！

「其は在り得ざる槍、断章積み編みて紡がれし非実在の輝き！！」

クールなハートをヒートにブースト（後書き）

・隻腕
主に破壊属性の攻撃や破壊属性を付与する壊毒で部位の欠損が発生する。
この場合、物理的に腕が使えなくなるので装備欄が消滅する。その為、両手に一本ずつ装備する必要のある対刃剣などは装備することができないが拳武器などのシステム上は両手武器扱いになるものは装備が可能、ただし欠損した側の武器は地面に落ちる。
仮に欠損部位にアクセサリーが装備されていた場合、アクセサリーは破損しない為に地面へとドロップする。ただし地面にドロップしたアクセサリーはアイテム扱いな為、アイテム状態のアクセサリーは攻撃などでロストする。

その刃に積み重ねてきたもの

アラドヴァルが生み出す非物質性の槍は槍のくせに範囲攻撃で貫通力が弱いというギャグみたいな性能をしているが、逆に言えばたった一本のアラドヴァルでド派手な範囲攻撃をぶちかませるという事だ。

派手ということは目立つということ、目立つということは気を引くということ！　すなわちヘイトコントロール！！　力技だけどな。

「燃えろ灼熱！　隻腕がなんだ、食らいつく権利に手足の本数は関係ないだろうが！！」

もう何度目とも分からない加速、夜空を照らす煌々たる火焔を携えて前へ前へ。ヘイ皇帝陛下、久しぶりに俺に注目してくれて嬉しいよ……今からでも遅くない、俺たちは親友になれる。だから武器自慢勝負と洒落込もうぜ？

アラドヴァル必殺の「ブリューナク」は範囲攻撃ではあるが穂先の着弾が前提だ、どちらにせよ１００％の威力を出す為には望ましい部位に叩きつける必要がある。

毛布か何かで右腕を巻いたかのような籠る熱がアラドヴァルから右腕全体へと広がっている、ちらと視線を向ければ右腕がなんか物理的に燃えていた……え、大丈夫なのこれ？
前に使った時はそんなの気にしてる暇がなかったけど実はあの時もスリップダメージが発生していたとかないよな？　いや大丈夫、燃えてるだけでダメージはない。アラドヴァルは刃に触れると使い手

でも遠慮なく焼くからな……調子に乗って刃をぺろぺろすると焼肉になる。だがまぁ問題ないと言うなら、

「よっしゃあ！！」

燃えろ闘魂！　その過程で腕が焦げてもしゃーなしだ！！
既に発射準備は完了している。巨大な穂先を宿したかつて槍だった剣を携えて駆け抜ける姿に〝皇金世代〟の意識は釘付けだ。あくまでも「聖剣」は温存するつもりのようだが剣鋏による脅威の排除に乗り出してきたな、馬鹿が！　二時間三時間も戦ってればいい加減慣れるし見切れる！！

剣鋏の動きはどちらかというとロボットアームのそれに近い、なまじ２００度くらいまで回転させられるからこそ奴の動きは関節の可動域に頼った動きが多い。つまり普通の生物のように腕を動かしながら関節を動かす、みたいな動きをそこまで多用しない。

であればこんな動きもできるんだよなぁ！！

俄然エースの風格が出てきたマクセル・ドッジアーツ！　多重的円(オービット・)周運動(ムーブメント)！！　あえて敵に背を向けての垂直９０度、サマーソルトとでも言うべき縦の円を描いて〝皇金世代〟の背中へと着地！！
知ってるんだぜ、水晶群蠍系列の中でもタイマンで戦う性質を持つ種類が背中に飛び乗られた場合に取る行動はたった一つ！！
「すまんサイナ！　覚悟を決めて歯を食いしばれ！！」
「問題ありません……きっとこれも、勇気なのでしょう？」
「いやどう考えても蛮勇ーっ！！」

「…………………………超電圧溶断剣(プラズマイト・ストラッシャー)、起動」

周囲を薙ぎ払うためではなく、振り落とすための大回転。如何に高性能の知性(AI)を持っていたとしても絶対に抗えない反応型のモーション、そして何度も闘ってきたから分かる……攻撃としての大回転と振り落としとしての大回転では尻尾に当たった時のダメージ量に差がある。

つまり、攻撃に身を晒すよりかはずっと賭け甲斐がある。

「実行：尾部の切断」

クラスＶＩＩＩ武装「超電圧溶断剣」は超ざっくり説明すると棒から電気の刃が発生してる馬鹿でかい大剣だ。なにやら複数のガジェットで無理矢理スイングする仕組みなのかサイナの膂力でも行使可能な代わりに、極めてシンプルな縦か横かの振り抜きしかできない。一応確認したが構造上そもそも突きは大した威力を出せないらしい……まぁ物質部分はただの棒だしな。

全力で振り下ろした超電圧溶断剣と殺意の薄い横薙ぎの「聖剣」が激突する。やはり威力が甘い、僅かなりともサイナが拮抗できているのが何よりの証拠だ。

「聖剣」の纏う魔力光と超電圧溶断剣の放つ電光が激突して激しい閃光を放つ。サイナめ、若干外したな？　根元を狙えと言ったのに「聖剣」の刃とぶつかっている、だが奴の傷口からそう離れているわけではない、いけるか……？

「……く、推進力、拮抗……不利……限界、迎えます」

バギン、と嫌な音がする。超電圧溶断剣のプラズマエッジを食い破った「聖剣」が本体部分を砕く音だ、だがそれは何度かの激突で既に俺とサイナが予測していた事。
クラスⅤⅠⅠⅠの武装を断ち切り、振り抜かれた「聖剣」はしかしサイナを断ち切ることは無い。剣を振り抜いた段階で前に倒れ込むように伏せていたサイナの頭上を通過した「聖剣」は本体の大回転が勢いを損なうのと同時に緩やかに動きを減衰させ、最後に若干の慣性と遠心力で僅かに尻尾だけを揺らして止ま……

「お忘れじゃないか皇帝陛下！　これが真打だっ！！」

如何に〝皇金世代〟と言えど行動が終了する寸前、たった数秒の隙を潰すまでには至らないようだな！　当然だ、そもそもこいつが大回転した時点で俺は空中ジャンプで退避しているのだから振り落とすもクソもない。そしてサイナという「切り札」を封じたからこそ生じる僅かな間隙……槍で突くには十分過ぎる隙間だ。

「燃えろアラドヴァル！　輝槍仮説第四（ブリューナク）：……！！」

空中ジャンプの効果が終了、〝皇金世代〟の背中に再び降りた俺はそれを誇るよりも先に焔槍の穂先を構え、狙いを定める。片腕だからなんだ、流石に数メートル先への照準くらいは合わせられる。

もらうぞ「聖剣」！！

「焼燬（キャール）！！！」

炎が生み出した巨大な炎、巨人の槍が放たれる。そう大した距離ではないが目標までの空気を貪欲に食らって燃え上がる灼熱が度重なるダメージで無視しきれない亀裂を走らせた「聖剣」……を支える尻尾と針の接続部分に命中する。

敵は竜に非ず、龍でもなく、言ってしまえば石ころの怪物みたいなものだ。だが！　竜鱗を穿つ輝ける槍が水晶を砕けないなんて道理は無い！！

「こちとら英傑武器！　積み重ねた年季が違う！！」

大爆発が視界を埋め尽くし、俺の身体を吹き飛ばす中でパキン、という音がやけにはっきりと聞こえた。体力が６０％くらい削れつつも五点着地（五箇所強打ともいう）から体勢を立て直した俺が見たものは、急速に消えゆく爆炎を突き破って宙を舞い、そして地面に突き立った「聖剣」……ひゃほほい！！！

「こんなところにレアアイテムが落ちてるぅーっ！！」

誰が警察に届けるかバーカ！　シャンフロに自治厨と衛兵の詰め所はあってもポリスメンは存在しなーい！！！

サンキューー皇帝陛下！　ついでに身ぐるみ剥がせて貰うぜ！！

その刃に積み重ねてきたもの（後書き）

積極的カツアゲスタイル

◇

ここで一つ、金晶独蠍（ゴールディ・スコーピオ）〝皇金世代（ゴールデンエイジ）〟について語ろうと思う。
その姿はまさしく黄金の皇。歩く大地とまで言われる水晶群蠍の老成個体（エルダー）には及ばぬものの、他個体とは一線を画するサイズを他個体とは一線を画する出力で動かす規格外の身体能力。
天性の肉体は鉄を弾き、鋼を毀し、力を砕く。
前肢の「剣鋏」は時に練達の戦士のように、時に恐るべき死神のように変幻自在の動きを見せる。
そして何よりも尾の「聖剣」の神々しさたるや、そう謳われる根拠となる本家本元の聖剣エクスカリバーと比較してもなんら引けを取らない……だが、

――その程度の事、この蠍たちの皇を語る上では全く重要ではない。

その本質は〝皇金世代〟の種族が「金晶独蠍」であることにある。

金晶独蠍。
水晶群蠍の亜種であり、通常種とは異なり同属を捕食することでしか自身を存続させることができない偏食個体の一種である。
その最大の特徴は夜行性に特化した生態、及び「月光」を受けることで傷ついた肉体を再生させる驚異の能力にある。

では、〝皇金世代〟もまた再生能力を備えているのか……答えはノー、だが部分的にイエスとも言えるだろう。
金晶独蠍の再生能力は「月光から摂取した魔力で自身の再生能力を活性化させる」というものであり、厳密には月からの魔力そのものが回復の原理というわけではないのだ。その本質はあくまでも月光魔力の「受信」にこそある。
〝皇金世代〟はこの「受信」特性をさらに発展させた力を生まれながらに持っている。故にこの世に生を得て、揺り籠であり玉座でもあるエルダーの肉体を喰らって育ち、晴れて王として君臨し、そしてその果てに朽ちて死ぬまでに過ぎていく幾千幾万の夜を……かの蠍は月光の魔力を受け止め、貯蔵する。
その魔力を再生に使うことはない……何故ならば再生を使わなければならない敵と相対したならば、再生行動などに魔力を使っている暇などないからだ。

普段は体内に貯蓄された月光魔力を長い年月をかけて圧縮、浸透させていき、皇はより絶対的な力を補強していくわけだが……もし仮に、皇が命の危機に瀕した場合。
例えば……そう例えば、己の一部でありそして己の身体以上に〝皇金世代〟としての象徴である「聖剣」が万が一にも破壊などされたなら。

風船の栓を抜くように、あるいは門の閂を外すように。
生まれ、今に至るまでに溜め込まれた魔力を以て蠍達の皇帝は決死の戦いを挑むだろう。「聖剣」というリミッターを壊した宿敵に対して、自身の命を賭けた最期の戦いに。当然都合よく途中で止めることなどできない、勝利するにせよ敗北するにせよ体内の魔力全てを使い切った〝皇金世代〟に待つものは死だ。

だがあるいはそれこそが〝皇金世代〟という特異な個体の矜恃なのかもしれない。
ノブレス・オブリージュ、高貴なる者は相応の義務を果たさねばならない。時に自らを皇に捧げるほどに尽くす民達のために〝皇金世代〟が命を賭けなければならない場面があるとするならば、

きっとそれは今なのだろう。

◆

……やらかした。
直感的にそう悟った。欲に目が眩んだのもあったがそういう手合いだと思考が及ばなかったのも事実だ。
特定の状況に反応する特定行動、いわゆる地雷行動……例えばそう、一定時間内に一定ダメージを与えなければ即死攻撃が飛んでくるとか、あるいは複数体いるボスを同時に倒さなかった場合、生きている方が死んだ方を蘇生させるとか。
そして〝皇金世代〟の「地雷」は尻尾の部位破壊だったということだろう。俗に言う発狂モードってやつだろうな。

「警告：明らかな危険状態です」

「大層お冠ってことだろうさ」

尾を断たれた瞬間、〝皇金世代〟が悶え苦しむのでもなくぴたりと動きを止めた時点でもう嫌な予感しかしなかったのだが、それにしたってこうも劇的に発狂するとは。

今の〝皇金世代〟を表現するとして「ブチ切れ」以上にしっくりくる表現もなさそうだ。尻尾が破壊された時点でいきなり剣鋏が内側から弾け飛んだのはわりと予想外が過ぎたが……尾も含めて傷口から莫大な光が溢れ出し、剣の形になったとなれば謎の自爆も納得がいくというもの。

今の奴は二つの前肢を合わせて二本、そして尻尾や背中の一部からも試さなくても危険だと分かる莫大な光熱のレーザーソードを出力した姿となって、先程までとは比べ物にならない威圧感を俺とサイナにのみ叩きつけてきている。

「どう見ても受け止めたらそのまま殺すタイプの防御貫通くさい」

防御力がどうとかじゃなくてレーザー直撃したら死ぬよね？　っていうシンプルな理不尽の気配だ、この手の予感は外したことがないので試す気にもなれない。

「向こうも死に物狂いか」

光鋏は先程までのような変幻自在の動きこそしなくなったが、代わりに射程距離が剣モードの二倍はある。そして尻尾も同様だ……あのスペックで射程距離二倍の超高火力ｏｒ即死攻撃を振り回す？　冗談キツいぜ。

だが向こうもノーリスクってわけではないらしい。明らかな消耗が

見られる、さらに光鋏や光針に不自然な揺らぎ……もしかして時間制限かな？　なんとも有情な事で、逃げ回っているだけで勝てるじゃないか。

「サイナ、待機で」

「……契約者（マスター）は如何するつもりで？」

「ん？　ほら、俺とアイツはもはや親友（マブダチ）という枠すら超越した真友（超マブダチ）みたいなとこあるし？」

逃げ回ってようやく死んだかわーい、なんて喜んだ日にはラビッツを出禁にされかねない。

最近エムルの態度を見てると思うのだが、連中が俺に求めるヴォーパル魂の条件が厳しくなっている気がしてならない。最大値（スコア）が、ではなく最低値（ノルマ）が、だ。

この程度の事で日和らないよな？　みたいな視線をナチュラルに向けられているというか……日頃の行いか？　日頃の行いがいけないのか？

「真友が一世一代の大勝負を挑んできたならば！　応えてやらねば男が廃る！！」

「質問：本音」

「後悔の無い選択！　逃げない覚悟！　苦難に挑む姿に人は勇気を見出すのさ！！」

「質問：本音（で、本音は？）」

「ここまで来てシケた勝ち方して明日の朝食が美味いかよ!!」

多分朝ご飯は鮭フレークがかかった卵かけご飯と予想。さぁ来い皇帝陛下、奇しくもこの地の鉱石を糧に鍛えられた剣を以てお相手しよう。そして傑剣(デュクスラム)への憧刃君、相方に置いていかれたお前も羽化の時だ。

夜明けは近い……真友(とも)よ、革命の時は来た!!

背水にて相対する黄金双つ（後書き）

皇金世代「お前と友になった覚えはねぇよ」

とはいえ俺の戦法は体力がゼロじゃないならセーフ理論と当たらなければどうということはない理論の二つを柱として成り立っている。つまりカッコよく啖呵を切ったとしてもやる事は隻腕というハンデを抱えた上での全力回避である。

「このっ、急にダンサーとしてのソウルに目覚めおってからに……！！」

器用さを失った腕の代わりに、戦闘開始時とは比較にならない足捌きでこちらの距離感を乱してくる〝皇金世代〟の動きはあまりにも危険極まりない。

なにせ当たったら死ぬタイプの攻撃がクソみたいな動きで走り回るモーションの中から放たれるのだ。機動力に特化した俺をして油断すると片足が持っていかれそうな場面をゼロにできない。

〝皇金世代〟のバトルスタイルは剣鋏をメインとしつつ「聖剣」による必殺の一撃というものだったが、今は高速で走り回りながら光鋏と光針の射程による「ラグ」で攻めてきているスタイルに変貌している。回避が無理ゲーというわけではないがここに攻撃を絡めるとなると途端に綱渡りだ。

「だがどれだけ性能を上げても……っ！」

生まれついた「形」は誤魔化せないようだな皇帝陛下！

潜り込んだ背後から傑剣への憧刃で攻撃を加え、立ち回りに細心の注意を払いつつさらに追撃。離脱と同時にスキルを再起動して光か

ら逃れ切る。
この体躯の蠍型モンスターはどうしても足元への攻撃が緩くなる、尻尾の可動域以前に素材が水晶だからどれだけ尻尾を振り回しても届かない死角というやつだ。だからこそ奴は高速で走り回ることでそもそも懐に入れないようにしたいらしいが……速さ比べをする相手を間違えたな、地面を平面的にしか走れないお前と違って俺の走るサーキットは天地に及ぶ！！
「ほらほらどうした！息切れするならせめて堂々とぶつかり合おうぜ！」
投げかけた言葉は良くも悪くも自分を鼓舞するためのものだ。何年徹夜じみたゲームライフ送ってると？　自分のコンディションくらい分かる、そろそろ眠い！！今日は特に何も対策せずに徹夜してるから気をしっかり持たないと足がもつれかねない。
尻尾のスイング、ジャンプして回避。足の動きから横に回り込んで着地を狙うつもりだろう、ならば重律踏覇起動(エクシードグラビティ)、無重律(スペースチャージ)の恩寵起動、ヘルメスブート起動。スキル連結の弊害がこんなところに出てくるとは、これで合ってたよな？　実行、よし理想通りの挙動だ。
空中ジャンプの恩恵を受けた上でさらに多重的円周運動を起動、光鋏の振り上げによって空間を灼くレーザーを回避しつつ足元に着地して攻撃を仕掛ける。
狙うは脚だ、部位破壊できるという事もあるが何より機動力を削がないとロクに攻撃もできやしない。まぁ破壊できれば最上だが理想としては引きずるくらいまで機能を削げればそれでいい。
「残りカスの燃料も炉にくべていけ！！！」

方針変更！　後手の対応じゃ間に合わない、先手を取って、後手で詰める……即ち攻めの攻略！　掟破りの相手ターンスキップ！！

「ふ、ふふふふ……ははは……」

〝皇金世代〟の高速移動に攻撃を加えながら追従、攻撃を加えながら回避して攻撃を加えながら攻撃、攻撃、攻撃、攻撃、攻撃ィィィ！！！

ＤＰＳにこそ正義が宿る！　ＤＰＳだけがこの世の真理！　もはや俺がＤＰＳそのものと言っても過言ではない！！

「ふふふふはははははは！！　見えたぞ真理！　ＤＰＳ神のご加護がキてる！！」

くたばれ乱数の女神！　ゼロになるまで殴り続けるＤＰＳこそが全てを救済するのだ！！

もはや温存の必要はない、封雷の撃鉄・災を発動してさらなるＤＰＳを行使する！　隻腕がなんだ！　いつもの二倍攻撃すれば問題なし！　四倍殴ればいつもの二倍！！　ちょっと待て、つまりいつもの十倍殴れば……なんて事だ、無限にＤＰＳが上がっていくじゃないか！　これは学会で発表しなければ。

学会って何？　まぁいいか。

「折れない！　曲がらない！　毀れない！！」

ビームを出さなくていい、特殊な属性を付与しなくてもいい、ただ「壊れない」という絶対の個性。あるいは一部例外を除けばほぼ全ての武器が破損、損失するシャンフロにおいては最強の能力ではな

かろうか。

過剰伝達状態（オーバーフロー）の俺は加減が利かない、何をするにしてもフルパワー・フルスイングでしかないのでこれを使った以上は攻めに攻めるしかない。ＤＰＳの高まりに心躍らせつつ、もう何十回使ったかも分からない真界観測眼（クオンタムゲイズ）で目まぐるしく動き続ける状況に視界を、思考を追いつかせていく。

斬る、斬る、バックステップ。【ウツロウミカガミ】でヘイト分離、距離を詰めて再攻撃。斬撃、斬撃、蹴り……ダメージがゴミぃ！！
　向こうからの攻撃に対して頭を伏せつつ剣を地面に置き、足の付け根に貫手を放つ。ＤＰＳが落ちる、由々しき事態だ地面の剣を蹴り上げて浮いたところをキャッチし振り抜いて……

「イケるっ！！　走れるっ！！　ハハハハッ、ぶちのめす！！！」

ニューロンからエナジーが滲み出ているようだ！　脳味噌の回転がモーターとなってＤＰＳという名の歯車と噛み合い、高速回転……
…あっ、やべっここで回避しな――

「ぷべるっ」

「契約者（マスター）！！」

宙で体勢を立て直し、着地！　よし死んでない！　生きてる！　体力は……Ｆｏｏ！　風前の灯火（1ドット）！！
狂ったように、と断じるにはいささか的確すぎる攻撃だが逆に言えば効率が良すぎるが故にその軌道を読み切れる。
積み上げてきた水晶群蠍系列の行動パターン解析がそのまま流用できる程度には効率的な「水晶群蠍らしい」動きになっているからだ。

次は同じ手には引っかからん！　回避！　からの距離を詰めて……
イエス！　ＤＰＳ！！

「にらめっこしようぜ、ビンタありでな！！」

水晶群蠍と言えど「口」は存在する、なんというかシュレッダーみたいなエグい形状なので手を突っ込もうとは思わないが……少なくとも口の中は他の部位よりは脆い、よし突っ込もう。

「歯ァ食いしばれ！！」

鋭結点睛（えいけってんせい）、この一瞬一撃の為にわざわざ真正面なんてキルゾーンに踏み込んだんだ、食らえやスタミナ残量一割切りから放たれる最高火力を……！！

「せぇい！！」

やはり雑に扱える武器ナンバーワンたる傑剣への憧刃はこうでなくっちゃ。スキルエフェクトが炸裂し、口の中でダメージが発生した〝皇金世代〟の身体が痙攣する。
だがその程度で死ぬなら俺も数時間戦ってない、膠着していた口腔……厳密には蠍特有の鋏角に圧倒的ＳＴＲが込められていくのがこの距離ならはっきりと分かる、成る程宝石塔すらチョコバー感覚で噛み砕く力で傑剣への憧刃を噛み砕くつもりか。

「だが残念だったな、こいつはただの鋼じゃねぇ」

これは戦う為に鍛えられた刃であり、傑剣への憧刃と名付けられた剣！！　迷い無き意思が不滅の刃を作る、無敵の刃は隕石と地面に挟まれたって負けはしない！！

「このゲームのクリティカルは正しい角度と……」

剣と対象への出所を問わない運動エネルギーに依存する。
つまり「傑剣への憧刃に左右から噛みつく鋏角」という剣自身が殆ど運動エネルギーを持たない状況であっても……！！

ガギッ！！！

「うへぇ、ご愁傷様」

例えるなら間違えて梅干の種を全力で噛んだような、噛んだ歯の方が負けた時のあの嫌な感じが今目の前で実演された。
耐久度が減らない即ちこの一瞬だけ世界で一番硬い物質となった傑剣への憧刃へと全力で力を込めた事で欠けた鋏角に若干の哀れみを感じつつ、剣を引き抜く。

「どうした皇帝陛下、光鋏が細くなってるぜ？」

いよいよここが最終局面だ、ＤＰＳ神よご加護を！！

・ＤＰＳ神
ＭＭＯでは広く信仰されている神。人によっては邪神と忌み嫌うが、大抵は好き嫌いに関わらずＭＭＯプレイヤーはこの神にその身を捧げることになる
極まった狂信者はヒーラーやバッファー、タンクなど直接戦闘がメインではない者にも入信を迫るという……

光より疾い風を知っている

ついにその時が来てしまった。
俺は立っていて、攻撃を続けていた。〝皇金世代(ゴールデンエイジ)〟は立っていて、しかし光が今まさに消えようとしていた。

「…………」

当然だ、光鋏と光針を展開してからの〝皇金世代〟は攻撃の激しさや機動戦への変更など派手な変化も多かったが、それと同じくらい時間が経過するほどに消耗する様子が見られた。恐らく底の抜けたバケツのようなものなのだろう、砕いた尻尾や自ら破壊した鋏の内側から光が生じるならばそれすなわち体内から体外へと放出され続けていると言うことに他ならないのだから。

水晶群蠍が円陣を組んで出来上がったコロシアムの中で、俺と皇帝陛下の戦いを見守るのは会場兼観客の水晶群蠍とサイナだけ。そしてサイナが喋っていない以上、この場所は危険度とは反比例するような静寂が広がっている。己らの皇帝が窮地に陥っていると言うのに、蠍達は依然じっと円を形成するだけでこちらに向かってくる様子はない。このままいけば俺の勝ちだ、なんならもう突っ立っているだけでも〝皇金世代〟が勝手に自滅する可能性すらある。

だが、なんだろうな……

「今この瞬間が一番緊張してるぜ俺は！！」

手負いの獣が一番恐ろしいとか油断大敵とかそういう寓話から学ぶ

警戒みたいなものではなく……ただ単純に目の前の〝皇金世代〟が恐ろしくて仕方ないって意味だ。何故だろうな、その全身の輝きは今や見る影もなく曇っているし先程までの動きが嘘のように砕けた鋏と尻尾から力の抜けた様子は俗に言う「死に体」なんだろう。

だが俺にはどうも、奴がどデカい一発をぶちかますために全身のエネルギーを集中させているようにしか見えない。迂闊に近寄れないし、かといって遠ざかって安心感が得られる気もしない。今の俺にできるのは真界観測眼（クォンタムゲイズ）をいつでも発動できるようにすることだけだ。早押し系のミニゲームのようだ、あの手のミニゲームはルールがシンプルだからこそ成否がはっきりと突きつけられる。今この瞬間この場を支配するルールも同質だ、恐らくこれが最後の攻防となる……勝つか、負けるか。

「………来いよ皇帝陛下」

いつ来るのか分からない、ってのはどんなゲームであってもプレッシャーをプレイヤーに与えてくる。目の前に集中すればいいのか？　行動するべきなのか？　カウンターを狙えばいいのか？　焦燥が思考を過剰に回転させる、それが結果として集中力を削いでいく。だが俺はあえてその過剰回転をさらに加速させる、考えろ………〝皇金世代〟が為しうる行動の中で「何をしてくるのか」「どうすればいいのか」を。

水晶群蠍……エクゾーディナリー……金晶独蠍……月……水晶……アムルシディアン・クォーツ……鉱石……魔力……「聖剣」………

泡のように浮かんでは消えていく情報、未だ動かず。段々夜の黒色が明るくなりつつある空の下、皇帝陛下は沈黙を続ける。

「…………」

息が詰まる、回復ポーションを使う勇気がない。過剰伝達自体は既に解除しているが、回復中はどうあっても無防備な一瞬が生まれる……ダメだ、思考をどれだけ膨らませたとしても身体は常にフルスロットル寸前まで研ぎ澄ませなければ。

だが、あるいは。ここで一手指す事が勝ち筋に至る唯一の正解だとしたら？

「…………さぁ」

勇気。

そう勇気だ。

サイナに説教かました手前だ、俺が怖気付いてどうする？

なら、何をする？　身の毛もよだつ直感で嫌でも分かる。ここが最後だ、ここで何をするのか決めなければ……俺は皇帝陛下に対して後手に回る。この、一瞬で…………何をすればいい？

「…………早撃ち勝負だ！！！」

真界観測眼起動！　右手で握っていた傑剣への憧刃を手放し、そのまま指を高速で動かす！！
だがやはりここで〝皇金世代（ゴールデンエイジ）〟も動いた。人間でいうなら腕を組むように触肢（ハサミ）を内側へと丸めていた蠍皇の右鋏が消え、光が――

違う、これは！！

「うおおお！！？」

「━━━な」

背後でサイナの声が聞こえた気がした、だが今ばっかりはそれどころじゃない。すまんサイナ、構っている余裕がない………これぱっかりはな。

"皇金世代"最後の切り札、それは体内に残っていた魔力を圧縮し………超、超、超射程かつ「線」で敵を灼(や)き断(た)つ。まさしく光速で襲いかかるレーザーの抜刀！！！　そして、奴の銃口はあと二つある！！

「来い！！！！」

思考を置き去りにした直感と反射によるスキルの取捨選択、地を這うように俺の脚を断ち切らんとした一発目はジャンプで回避した。だが真界観測眼で加速しているからこそ分かる、二撃目は着地する前に俺に届く！！
ならどうする、どう動く！？　まただ、真界観測眼によるスローモーションの世界の中ですらかろうじて攻撃した瞬間が分かるだけという超高速での触肢の振り抜き、既視感、だが、ああそうだ、あれよりは遅い……が、あれより長い！！！

「こ、のぉぉお！！」

俺の脳みそが算出した答えは二つのスキルだった。すなわち空中機動を可能とするヘルメスブート、そして走れる場所ならどこでも円

を描く動きを可能とする多重的円周運動によって半径約１．８メートルの円を空中で描く！！
言うなれば己の頭部を円の中心点としてコンパスのようにくるりと回る一回転。だがそのように動けば一瞬であっても胴体の位置が変わる、それは残った右腕ごと胸を真横に切り裂く軌道で振り抜かれた文字通り「光線」の回避という結果を掴み取る。

「〜〜〜〜〜っ！！！」

視界が揺れる。

当たり前だし慣れたものだ、だがどれだけ慣れても目が回っていることに変わりはない。その一瞬の時間が経過する頃には、俺につきまとう死の影はこれまでで最大の規模にまで膨れ上がっていた。
〝皇金世代〟の破損部位は三つ。レーザーで欠損を保管していた部位は三つ。今放った攻撃は両鋏による二回。であれば、最後の一発は。

「く、お…………ぉお！！！」

空が切り裂かれていた。
違う、ピンとまっすぐ天を指差すように伸ばされた奴の尻尾から放たれている必殺のレーザーが夜の星よりなお輝いて、俺の眼に映る夜空を真っ二つに割っているのだ。そしてその光は空を右と左に分けるだけのただの線じゃない、俺は今境界線に立っている。境界線に斬られようとしている。
たった一つの答えを。
最後の一手を突きつけろ、何故なら先手は俺だった！！

「王手だ！！！」
突きつけたそれは、剣では無かった。槍でもなく、斧でもなく、ただ右手で支えられる限界ギリギリの質量を以って使い手たる俺を守らんと、秘めたる冥府の鏡で「夜空」と「境界線」と、そして〝皇金世代（ゴールデンエイジ）〟を映し出す！！！！

ではここで簡単な問題だ。鏡に真正面から光を当てるとどうなる？
皇帝陛下、答えをどうぞ。

「…………………」

冥王の鏡盾（ディス・パテル）がいやな煙を上げている。当然だろう、魔法を……魔力を反射する鏡の部分は円盾の中心部分だけで、その周囲は盾として、甦機装としての部分なのだからそこにあれが直撃すれば耐久が削られるのは当然のこと。

「…………あ、」

だが、鏡の部分……アトランティクス・レプノルカのレンズを加工した鏡は確かに夜空を別つ境界線の光を跳ね返した。その上で間違いなくあの光線は上から下に振り下ろされたわけだが………

「あっっっっっっぷねぇえ…………」

冥王の盾は確かに光を隔て、俺を守りきっていた。片手で扱える盾の中でもタワーシールドに次ぐサイズである円盾は俺の胴体と股間に対する死の一刀を防いで、そして盾の防御範囲から脱した光が貫いたのは丁度俺の股間から五センチほど下の座標だった…………丁度、下を見れば股下を抜けた光が地面に着弾し、振り下ろしの軌道に従って抉り刻んだ奇妙な一本線が地面に見えた。

そして、

「…………は、」

口から意図せず漏れた吐息にはこの戦闘で俺を支え続けていた緊張の全てが詰まっていた。
体から力が抜け、膝をついた俺の目の前には…………冥王の鏡盾によって反射された外でもない自分自身の攻撃によって自分自身を一刀両断してしまった〝皇金世代(ゴールデンエイジ)〟の姿。

「勝鬨を上げる気力もねぇ…………」

ならば私がと言わんばかりに俺の前に表示されたもの、それは――

『モンスター不世出(エクゾーディナリー)……解明(クリア)！』

『討伐対象：金晶独蠍(ゴールディ・スコーピオン)〝皇金世代(ゴールデンエイジ)〟』

『エクゾーディナリーモンスターが撃破されました』

『称号【黄金革命】を獲得しました』

『称号【金色(こんじき)に輝く不夜の空】を獲得しました』

『不世出の奥義(エクゾーディナリー・スキル)「皇金時代(ゴールデンエイジ)」を習得しました』

プレイヤーの勝利を告げる、システムアナウンスだった。

光より疾い風を知っている（後書き）

趣味１０００％の寄り道、決着…………！！！！

エクゾーディナリー・スキルはモンスター名と同じにする縛りを課していたんだけどどうしてもこいつのスキル名は「エイジ」を「世代」と「時代」、二つの意味で表記する逆パターンが使いたかったので縛っていた鎖を自分で破壊しました。アイアムアストロング……

……

立ち塞がるに不足なし（前書き）

詳細はインベントリアの方を見てください（露骨な誘導）

立ち塞がるに不足なし

これはサンラクが水晶巣崖にサイナを引き摺って行く少し前のこと。

◇

『時に、さ。クラン名何になるの？』

『明日までに名案がなかったら改崎さん考案の「アレックス君応援団」になります』

『う、うーん………』

軽快な音楽と共に流れてきた声を聞きつつ、知りたい事は知れたと動画を閉じて女は一人思案する。

「…………厄介な」

さぁ寝ようとベッドに潜り込んだ矢先にＵＲＬと短い文章が載せられたメールが届いたのは数分前。明らかに推しを紹介するとかそういう手合いではない焦燥が込められていた文章を見たからこそ、女………天音(あまね) 永遠(とわ)は動画を開いたわけだが、成る程想像の五倍ほど

厄介な情報であった。

「配信者連合ねぇ…………」

厄介だ、実に厄介だ。配信者というのは要するにネームバリューのある有名人である、有名人には当然ファンがつくことはモデルとして第一線を走る永遠にとってはあまりに身近な事実だ。

ではこの配信者連合が新王側に就くと明言したことで何が起きるのか…………答えは単純、人的資源(マンパワー)の大量流出だ。

シャンフロにおけるクランシステムには上限人数が存在しない。厳密にはNPC相手に手続きをすることで上限人数を無尽蔵に引き上げられる、というのが正しいがそれはつまり配信者達のファンを受け止めるクランのキャパシティが無限ということだ。

ゲーマーのファンはほぼ高確率でゲーマーだ、そしてモデルや俳優と違ってこのカテゴリにおけるファンが憧れの対象と同じステージに立つ難易度は恐ろしく低い。なにせ同じゲームソフトを購入してオンラインに接続するだけで「ワンチャン」が発生する、そして今回はその憧れの対象が直々に人を集めている……

「初心者、これから始めるプレイヤー……いや、もしかしたらこっち陣営の高レベルプレイヤーが流れる可能性も高い」

思考を巡らせながらも端末を操作して動画の中に出てきていた三組の配信者達を検索する。

ＧＵＮ！　ＧＵＮ！　傭兵団。チャンネル登録者数約９４万人……裏方含め九人グループの配信者集団であり、主な活動範囲はオンラインＦＰＳ。時々ＣｏｏｐプレイでＰｖＥなんかもやっているようだが、どんな状況でも宴会のような馬鹿騒ぎと冷静な連携で戦う姿

が評価されているらしい。

「隠密行動って感じではなさそうだね、運用するとしたら銃兵で固めてまんまＦＰＳかな？　市街地に投入されるだけでも相当ウザいなぁ………」

ＦＰＳというゲームカテゴリの定石として選ばれるフィールドは大抵は戦場や市街地だ。評判、損害その全てを度外視してサードレマに彼らが潜り込めば甚大な被害を受ける事は間違いない。

「………次」

カイ速特急チャンネル。チャンネル登録者数約１８７万人……プロゲーマー改崎　速手、その名前には覚えがある。オイカッツォ……魚臣　慧にも黒星をつけたことのある実力者でありインタビューを受けている時などの印象からは想像もつかない「超速攻２ラウンド先取理論」に忠実なアタッカーゲーマーだ。

単体としての性能もそうだがやはりプロゲーマーという肩書きが何よりも強力な武器であると言えるだろう。永遠も……恐らくサンラクも忘れがちだが、魚臣　慧はあんなのではあるが日本国内に限れば最強にして最高峰のプロゲーマーだ。数年間無敗神話を作っているシルヴィアが異常なだけで、本来公式戦績で勝率八割を下回らないなんて並大抵の事ではない。

そこに匹敵するとは言えないがそれでも２００万近い登録者を抱える男が敵に回るというのは看過できない。こちらのプロゲーマーがあくまでもプライベートとして遊んでいる以上……そして永遠もプライベートであり続けるが故に敵のネームバリューに対抗する方法がない。

「……んー、頭痛くなってきたなぁ」

徹夜騎士ちゃんねる。チャンネル登録者数約４５万人……前述の二組と比べると少々知名度が低いように思えるが……ゲーム的脅威度と知名度、チャンネル登録者数は無関係だ。むしろ４５万人もリスナーがいるということが問題なのだ。
このカリントウなる女、リアルとゲームの天秤でゲーム側に全体重を傾けられるタイプの人間だ。実生活を追求するのは無粋だということくらいは永遠も理解できるので「この生活でよくこの顔を保てるなぁ……」とだけ呟いておく。

徹夜騎士カリントウ最大の脅威はやはり彼女自身が何時間でもシャンフロにログインできるという点、そして同様のイン率を可能とするリスナーが千人規模で存在するだろうという事。勢力全体で見た場合の「夜勤」が存在するアドバンテージは言うまでもない、対してサードレマは政治中枢に永遠……ペンシルゴンを筆頭とするＲＰＡが潜り込むことに成功しているとは言え、サードレマ陣営全てのプレイヤーを掌握しているわけではない。というかペンシルゴンが宰相的立ち位置にいることを知らない者すらいるだろう。
つまり千人規模の同じ目的で動くプレイヤーを用意する事ができない、彼女一人が存在するだけで準備期間という「戦争」に駆り出す獣の内臓を充実させる行為が容易になっていくわけだ。

だが、本当に危険なのはこの三組ではない。

ぱやガルチャンネル。チャンネル登録者数約４５０万人……配信者「ぱやぶさ」と「ガル之瀬」がチャンネルを統合した事で現在日本最大のゲーム実況配信チャンネルとなった文句なしの最大手。これが世界規模になると彼らの登録者数にダブルスコアの大差をつけるシルヴィア・ゴールドバーグのチャンネルがあったりするのだがそれは割愛。

１０代からの圧倒的支持率を誇るぱやぶさ、そして渋すぎるゲームチョイスからニッチな層からの支持を得るガル之瀬の二人の影響力はコラボする三組とは比較にならない。彼ら二人が「神ゲー」と言えば凡作もヒットする、とまで言われるがそれがあながち嘘でもないのが恐ろしい。

トップモデル「天音　永遠」だからこそ分かる、この二人は生粋の感染させる側（インフルエンサー）であり……コラボなどする必要もない、この二人が新王側に就くと表明しただけで戦力比は大きく傾く。

新王が新大陸の亜人種を弾圧するつもりなのも恐らく承知の上なのだろう、永遠の予想が正しければ新王を説得する企画でも立ち上げるつもりなのだろう……永遠がそっち側だとしたら絶対にそうするからだ。

シャングリラ・フロンティアは政治ではない、確実性のないマニフエストでも人を引っ張ってくる事はできる。新王アレックスの性質が周知されている上で「説得」という旗を降ればそれにつられて人が集まる。

「運営がこいつらに依頼した……？　いや、そんなしょうもない直接干渉する運営じゃない、やるとしても新王側のリソースをサイレントで増やすくらいでしょ……だとすればこいつら自身の判断？既に私が掌握しているサードレマ側では目立てないから？」

永遠の警戒の大部分はこのぱやガルチャンネルへと向けられている。

否、厳密にはそうではない。天音　永遠の警戒はぱやガルチャンネルの片割れであるぱやぶさに向けられている。なぜなら彼女はこの男を知っているから。

かつて起きた三度の大炎上を全て自力で鎮火し、大規模な視聴者との企画を幾度となく成功させ、そしてガル之瀬とのチャンネル統合に踏み切る事で更なる知名度を得る世渡りの動き…………天然で出来る芸当ではない。己も「そのタイプ」だからこそ分かる。

「ぱやぶさ、こいつは……」

天音　永遠と同じで人を率いる事、人を操る事を得手とする生粋の軍師タイプだ。この男が敵として立ちふさがる限り、烏合の衆であるはずの配信者連合のクランはＲＰＡ最大の脅威として立ち塞がるだろう。

「ふっ…………いいじゃん、このままワンサイドゲームだとちょっと退屈してたところだし？」

理想を言えば苦労は少ないに越した事は無いと、そう思っていたのだが。強大な敵が現れたというのならば思考を切り替えるしか無いだろう。己とて手札がないわけでは無いのだ、大局的盤面を見る者として相対する敵が現れたというのならば真正面からぶつかるのもまた一興。少なくともＮＰＣをいじめるよりかはずっとずっと楽しいだろう。

「上等だよ配信者連合、登録者数三割削るくらいのダメージ食らわせてやるから覚悟しとけってね」

笑う永遠の言葉が彼らに届く事はない。互いの認識が共有されたこともないのだから当然だ。だが…………彼らの衝突はそう遠くない。

立ち塞がるに不足なし（後書き）

Q．登録者数多すぎでは？

A．某メガネの人のゲームチャンネルが４５０万人なのでむしろ少なめに見積もってる

今の気分は水を吸ったボロ雑巾だ。兎にも角にも身体が重い、眉間から前頭葉にかけてをコンクリートで固められたような疲労感というか。休憩無しのぶっ通しでテンション上げ続けてるとよくこうなるがやはり慣れない。

「うごごご……」

だがここで寝転がる程俺は愚かではない、何せ目の前には宝の山があるのだから！！

「皇帝陛下……確かにお前は強敵（とも）だった……！！」

尻尾の「聖剣」を破壊するタイミング、最後の最後に剣ではなく盾を構えるという選択、一つでもズレていたら屍を晒していたのは俺の方だっただろう……。

時間制限付きの発狂モードだったり自在に動く剣鋏のアドバンテージの放棄だったり、勝てないように見えて実は後半の方が楽なのがモンスターデザインとして優れているなぁと勝った今だからこそ正しく評価できる。

これで負けていたら「クソモンス」の焼印を押し付けていただろうからな。いやでも最後のアレはまぁまぁクソだわ、フレーム単位の即死ギミックやめーや。

「ふ、ふふふふ……」

ソロ討伐、ソロ討伐である。厳密にはサイナがいるのでソロではないが、このゲームのアイテムドロップ率は「プレイヤーの数」で増減する。つまり経験値効率を無視すればＮＰＣ十四人を引き連れたプレイヤー１人による十五人編成が最もアイテムドロップ的に効率が良いことになる。

「サンキュー幸運ステータス……」

ドロップアイテムの中でも一際輝きを放つ輝ける宝玉。通常の金晶独蠍であれば黄金そのもののような輝きを放つ宝玉なのだが皇帝陛下の核、すなわち心臓は一味違うようだ。
ふむふむ、「皇金の煌耀核」ね……宝石塔を食うという設定が反映されているためか、夜色の宝石であったり、漆黒の結晶であったりと明らかに黄金以外の材質が混ざってパズルのように一つの「玉」を作り上げている。美術館とかに飾ってあってあっても違和感なさそうだな。

むほほ、皇帝陛下め……随分とまぁ溜め込んでいらっしゃったようで。財産分与とか面倒臭いから俺が独占するね、有効活用するから安心して成仏してくれ。

だがどうやら〝皇金世代〟の亡霊は俺という革命家を生かして帰すつもりはないらしい。

「警告：周囲の水晶群蠍に動きが」

「見りゃ分かる、サイナ……うん、しかしお前見事にすっぱり斬られたな」

「この状態での活動は困難です」

あの時、〝皇金世代〟の放った三度の超速光線……その最初の一発目は俺の脚を斬り裂かんとする低空の一閃だった。俺はジャンプで回避したわけだが後ろにいたサイナはそうではなかったらしく……全てが決着して後ろを振り向くと、そこには膝から下を切断されて土をペロっているサイナの姿があったのだった。

幸いその一発目で倒れたから二発目の動体狙いが上を通り過ぎたので怪我の功名と言うべきなのか……ともかく、この状態で戦闘は不可能だろう。

以前のように戦術装甲を装備させれば動けるかもしれないが、そもそもこの状況で歩けるようになったから何だというのか。足の本数がなんだ、タコもダルマも津波に飲まれたらおしまいよ。

「まぁいいさ、インベントリアに避難すればいいだろ」

「回答：不可能です」

「何故に？」

おっと兄弟落ち着けよ、そんなじわじわ包囲網を狭めなくてもいいだろう？

「格納鍵インベントリアの基本機能は装備時点で二号人類の肉体そのものにインストールされる為、インベントリア自体が欠損などで損失した場合であっても行使可能ですが、エンター・トラベルシステムに関しては演算および座標関連の……」

「長い、簡潔に頼む」

「インベントリア本体はリスポーンシステムが発動した時点で再構築されますが、現時点ではインベントリア本体が一時的な消失状態にあるため当機や契約者の格納空間への転送が出来ません」

「ふーん……」

ゆっくり、ゆっくりと包囲網を狭めるという蠍達の行動はこれまでに経験のないものだ。絶対に殺すという意志がすごい、なかなかエグいデストラップじゃねーのかこれ……それとも何か突破手段があるのか？　うーん、分からん。

とはいえ逃げられないならサイナはどうにかしないとなぁ。俺はいいんだよ、ミンチになったって一分経たずにエイドルトのセーブポイントで目を覚ますだけだし。

さてどうしたものか、いや実のところ既に「答え」は手元にある。あとはそれをするかしないか……ただそれだけなのだ。

「はぁ、値千金の価値があると信じよう」

「――契約者、それは」

「気にすんな、元々枠が余ってたから無理やり埋めてたところあるし」

左腕からインベントリアが消えた事で転送が出来ない？　アイテムの出し入れが出来るなら問題ない。アクセサリースロットからムカデ人形を外して枠を空け、代わりに別のアクセサリーを装備する。

……そう、二つ目のインベントリアをな。

「両腕に腕時計付けてるみたいだなコレ、なんか笑えてきた」

無限を二つ装備する、つまり今の俺は無限をも凌駕した男なのではなかろうか。茫然と俺の右手首を見つめるサイナをチョップしつつ俺は立ち上がって周囲を睨みつける。

悪いが兄弟、皇帝の亡骸なら爪の先まで俺が有効活用するために全部回収しちまったんだ。なんかこう、空に遺影みたいなのがぼやっと浮かび上がる感じで思いを馳せて弔ってやれ。

「どうしたサイナ、まさかこっちのインベントリアには避難できないとか言わないよな……」

「……いえ、可能です。ただ、この為だけに二つ目を装備するなど、」

「うるせー、後悔なら後で済ませとくから今はさっさと避難しとけ」

「……了解：契約者（マスター）の行動に最大級の感謝を」

そんな感謝される事でもないんだけどな……所有物という言い方は悪いがそれなりに好感度を稼いでるＮＰＣの命はインベントリアよりも重かった、それだけの話なのだから。

「さて、待たせせたなブラザーズ」

おーおー、まさかここまで詰め寄ってくるとは。相撲の土俵くらいか？　どういう感情で囲んでるのこれ？　殺意なの？　静か過ぎて怖いんだけど。

とはいえ僅かにでも動こうとすればガチンガチンと水晶群蠍が鋏を鳴らす……やっぱこれ生かして帰さんって事なんだろうか？　まるで「最期に言い残す事は？」とでも問いかけられているようだ。

ではこう答えよう。

「手負いの獣が一番恐ろしいんだぜ……！！」

フハハハ！　見せてやるぜ愚民共！　貴様らの皇帝を倒した事で手に入れたこのエクゾーディナリー・スキル「皇金時代（ゴールデンエイジ）」の力をなぁ！！！

あの輝ける剣と光を操る蠍のスキルだ、それはもう一騎当千に相応しい攻撃スキ――

・皇金時代（ゴールデンエイジ）
発動時点で発動者が所属しているパーティの人数と、効果適用中に発動者を除く「戦闘に貢献しているプレイヤー、モンスター、NPCの数」を参照してその数が少ない程、発動者のステータスが上昇する。

あ、バフ系（そっち）のスキルなの？　おっと、ちょっと待って兄弟、思ったより使いづらいスキルだったから一度立て直しを……あ、ダメ？

その在り方こそが輝き（後書き）

屈強なる民を持ちながら、されどただ独り戦う帝王の誇りそのものたる不世出の奥義

要するに大規模なパーティを組んだ上で独断行動するほどステータスが上がる
もっと分かりやすく言うと「ここは俺に任せて先に行け」すると超強化される

皇気纏いていざ参らん

「今日僕は突然の風邪で授業を欠席するし、大事をとって明日も休むだろう」

清々しい笑顔でそう言い切った磐斎氏の笑顔にやはり彼は我々と同じゲーマーであるのだと再確認しつつ……それはそれとしてこの人多分一日二日授業サボっても成績にはなんら問題がなさそうなのでやはり日頃の人間性能が違うのだなぁと再確認させられたり。

それはそれとしてレイ氏は既にログアウトしたのだろうか？　まぁ流石に時間が時間だしな、むしろ今の時間まで生き生きと活動している【ライブラリ】の連中が元気すぎるだけというか。

「なぁ考察厨、さっき新しいエクゾーディナリー・スキル手に入れたんだけど検証しない？」

「いいね、何人集めればいい？」

「１４人」

「あー、悪いねサンラク君。ここに来てるの五人だけなんだ」

まぁ途中途中に難易度高めの壁があるからな……必勝法を見つけるまでが難しく、必勝法があってもそこそこ手間なリヴァイアサンと違ってベヒーモスはおっしゃあテストだ！　一発勝負だぜぇ！！

　みたいな気合いが必要になってくる。小細工や抜け道探しを全面的に認めているだけ有情かもしれないが。

それはそれとして性能が気になるのでエムルとサイナを入れた合計八人パーティで「象牙」が出した戦闘用人形を仮想敵として…………いやだからウチのサイナの前にそれ出すんじゃないよ！！

「全く…………えー、じゃあ検証開始っと」

磐斎氏、キョージュ、サイナ、エムル、ライブラリメンバー三人。七人のパーティメンバーが後ろで棒立ちしている状態で俺一人が前に出て…………いざ発動、不世出の奥義（エクゾーディナリー・スキル）「皇金時代（ゴールデンエイジ）」！！

「ふんっ！！！」

おおこれは凄い、水晶巣崖で使った時は「もしかして今光った？」みたいなしょぼいエフェクトで身体の表面が包まれるだけだったのだが、後ろに七人控えさせている今はそこそこ立派なスキルエフェクトが発生した。なんだろうな、漫画的な表現としての「闘気」みたいな……それも炎みたいに揺らめくやつじゃなくて電気みたいにバチバチ鳴るやつ。

「本当はスキル無しからやって欲しかったのだが……よし、じゃあまずスキル有りでの素手攻撃から検証しよう」

あれ、なんか俺が思ってたよりも本格的な検証になってないかこれ。まぁいいや、とりあえず無抵抗の奴を殴るのも味気ないので適当に攻撃行動を取らせて…………鋭角に、コンパクトに叩き込むアッパー！！
硬い感触、しかしめり込んだ拳が無機質なマネキンのような戦闘用人形（サイナの親戚）の身体を吹き飛ばす。

「うーん……サンラク君、特にＳＴＲ補正のあるアクセサリーや他

のスキルなどは使っていないんだよね？」

「特には」

「機動力偏重のステータスでその火力か……七枠でこれだとすると十四人揃えた場合の火力が俄然気になってくるなぁ。次、何かスキル有りで」

「了解、じゃあ百秀の神腕使うわ」

じゃあまぁ、特に下準備なく百秀の神腕（サウィルダーナハ）起動して…………王道故に愚直ストレート！！
ガードの姿勢をとった戦闘用人形の腕にめり込んだパンチ、握りしめた指から伝わる硬い感触が撓（たわ）み、砕け……弾け飛ぶ！！
派手に吹っ飛びながら転がって行った戦闘用人形を眺めながらスキルエフェクトが書き換えていく腕を眺める……素のスペックにスキル一つでこれか。

「ガードを砕いてこのノックバックか……凄まじいな」

「いや確かに凄まじいですけどこれ多分見た目ほどダメージは出てないのでは？」

「俺も磐斎さんに賛成です。体力ゲージ見えないからなんとも言えないですけど、多分ガードは砕かれてるけどダメージは腕だけで完結してませんかね」

「成る程確かに、あの吹き飛び方は胴体までダメージが入った感じではなかったからね。とはいえ発動条件に目を瞑れば常時あのスペ

ックで強化される……いわゆる当たりスキルだね」
なにやらテスターそっちのけで話し込み始めたぞあいつら……とはいえ性能調査は出来たわけだし好きにさせておこう。基本的にエムルとサイナで組むのがほとんどだから倍率は二人分がメインだろうしなぁ。

「………」

仮にだが、これフルスペックで殴ったらどうなるんだろう。まだギリギリ効果時間内に間に合うよな？　スキル起動、スキル起動、スキル起動。アクセサリーで補助、強化、強化、強化……

「む、サンラク君何を……」

「威力重点、余さず受け止め抱きしめろ……！！」

最速！　最大！　最強！　不世出の奥義「戦砕琥示（ウォールフェン）」をノックバック重点ではなくあえて威力重点でフルスイングする！！
全速力のダッシュを助走代わりに振りかぶった拳を戦闘用人形に叩きつける！！

「むっ」

これまでに無い感触だ。思い切り殴った感触はあるのに威力が減衰したような……いや違うな、これは受け手側がほとんど動いていないからこちらのパンチが減速したように処理されたのか？　「戦砕琥示」は二極化の片方を選択する一撃だ。ほとんどの威力を削ぐ代わりに莫大なノックバックを発生させる、あるいは、

ノックバックをほとんどゼロにする高威力の打撃となるか。

「お、おお？」

バギャ！！　と嫌な音が響く。まるで内側で反響した衝撃が全身を駆け巡ったかのような挙動で全身に亀裂を走らせた戦闘用人形がその場に崩れ落ち、消滅する……どうやら体力が尽きたらしい。

「…………」

「…………」

「…………」

沈黙。予想以上にエグめの結果になったからか、それとも考察に新たな数値が追加されたためか。

「……サンラクサンは相手を内側から破壊する術を得たですわ？」

「いや、なんだよそのとんでも暗殺拳」

ぽつりと呟いたエムルの言葉をやんわり否定しつつさてどうしたものかとコロシアムから出る。

「……じゃ、ラボの方行くか！」

「文句（おいコラ）：仮にも当機（ワタシ）の同族を粉砕した直後に言う台詞がそれでいいのですか？」

「ふっ、言うじゃねーかサイナ……」

言うほど曇ってない、どうやら覚悟が決まったらしい。とりあえず【ライブラリ】のスキル検証が好きそうなプレイヤーからの追求をどうかわしたものか…………

……

…………

……………

もうそろそろログアウトしないとやばい時間帯になってきたが、最後は征服人形関連のイベント………アンドリュー・ジッタードールのラボ、その閉じられた扉を開くところまでは行きたいので焦る心を宥めつつ俺はサイナ、エムルと共にベヒーモス八層のとある区画に立っていた。【ライブラリ】はいない、この場にいるメンツで征服人形を持っているプレイヤーがいなかったため、どうせ付いていくことはできないだろうと八層の資料あさりに集中するらしい。

当然中に何があったのか後で教えてくれとキョージュや磐斎氏に詰め寄られたが………まぁそれくらいなら。どうせ俺一人のイベントってわけじゃ無い、遅かれ早かれ【ライブラリ】所属の征服人形と契約したプレイヤー……そう、例えばあのミレィなんかが来るだろうしな。

「で？　「象牙」のやつはお前が行き方を知ってると言ってたが」

「肯定：当機達は生産段階でアンドリュー・ジッタードールについての情報をある程度保持しています。それを参照すれば……」

サイナはコンソールの一つを操作すると、なにやらファイルを開き始めた。何々……アイドルグループ「シュテルンブルーム」？神代時代の情報だよな？　アイドルグループってまた随分とニッチな……って

「回答：彼は、待っているのです。彼が愛したものを知るべくたどり着いた者を。そして……自らの創造物、当機達征服人形を。いいえ、それは当機がそうであって欲しいと思っているだけかもしれませんが」

サイナがより詳細な情報を求めるべくコンソールを操作した瞬間、俺達の体が光に包まれる。知っているぞ、これは神代技術方式の転移――

「行きましょう契約者、我らが父……アンドリュー・ジッタードールのもとへ」

皇気纏いていざ参らん（後書き）

ヒロインちゃん「親御さんに挨拶…………？」

征服人形の生みの親にして神代において次代を創り出した天才達の一人。恐らくオルケストラが再現した「エリーゼ・ジッタードール」の秘密を握るであろう人物、アンドリュー・ジッタードール。

当然既に死んでいる彼のラボからオルケストラに関する情報を得るべく転送された俺たちを出迎えたのは……

『やぁ新人類、私がアンドリュー・ジッタードールだ』

――ご本人だった。

「……えっ」

『ふむ、随分と間抜けな頭部をしているがそんな奇天烈な進化を辿るような設計だったかな……ああ、被り物なのか。奇天烈な進化を辿ったのは種ではなく文化か、嘆かわしい』

あれもしかして今ものすごく遠回りに馬鹿にされました？　というかもしかしなくても応対可能？　いやまぁ間抜け（ハシビロコウ）な頭部に関して反論の余地がないのは事実だけれども。

そこまで広くない一室、その最奥にある椅子に座っていた金髪にオールバック、眼鏡という服が白衣でなければなんかインテリなアウトローにも見える男が態とらしくため息をついている。

自称が正しければあれがアンドリュー・ジッタードールなわけだが……

「ドルオタにどうこう言われたくねぇな……」

『身嗜みというものは如何な文明においても常識にカテゴライズされる項目の筈だが……成る程、個体の問題かな』

「オイオイオイ喧嘩したいなら最初に言ってくれよ」

『あいにくと、こういう者でね』

「すり抜けたですわ！！」

立ち上がり、壁に伸ばした手がそのまま壁を貫通する。壁が脆いわけじゃないだろう、つまり……

「ホログラムか」

『ふむ、ここまで来ただけのことはある。今更「常識」を一々説く手間は考慮しなくていいようだ』

では、と男はホログラムでありながら極めて人間的な動きでこちらへと歩み寄り……そしてそのまま首をサイナへと向けた。

「っ、」

『エルマ型……317号か、喜しくも嘆かわしい。エルマ・サキシマの美貌が317体存在する事は世界の充実と言っても過言ではないが、その全てが無事というわけではないのだろう。317号、現在稼働しているエルマ型は？』

「解答：待機状態の機体も含めれば現存数は214機です」

『百三機も！？　ああなんて事だ、単純計算で世界が百四回は絶望を迎えている……っ！！』

ダメだ、サバイバアルとかジョゼットとはさらに別方向で頭がおかしいタイプだ。見てて面白いのがタチ悪い。ていうかなんで損失百三に対して絶望が百四回……あ、そうかオリジナルのエルマさんが死んだ分か、納得。

「で、サイナ。父親と会った感想は？」

「想定の1．5倍ほど、度し難く……」

『サイナ？　ふむ、成る程317(サイナ)か。中々良いセンスだ』

「そりゃどうも……で？　あんたはアンドリュー・ジッタードール本人ってわけじゃないんだろう。亡霊か何かか？」

『亡霊？　また随分とナンセンスな例えをするものだ。いや、あるいはマナの摂理が敷かれた新世界であれば現実的なのか？』

「刹那博士なら亡霊になってたぜ」

厳密には本人ではないらしいが、少なくともあのド外道文房具が入れ込むくらいには情緒があったのだろう。
だがなんの気無しの皮肉で飛ばした言葉だったが男には相当の衝撃であったらしく、目を丸くして唸り始めた。

『——なんと。それは……いや、そうか。納得は出来る、出来る……が。そうか…………君、個体名(なまえ)は？』

「サンラク」

『成る程サンラク、君の評価を改めよう。君は思ったよりも話が通じるらしい』

考えてみればこの男……特にユニークシナリオ限定というわけでもなく、見た限り何かをトリガーに消失する事も無さそうだし相当重要な立ち位置にいるのでは……？

『では改めて自己紹介させてもらおう。私の名はアンドリュー・ジッタードール……正確には「アンサーコード・トーカー　Ｔｙｐｅアンドリュー・ジッタードール」なのだがね』

まぁ、単語のニュアンス的に限りなく本人に近い思考をするＡＩとかそんな感じなんだろう。とはいえ兎だろうがＡＩだろうがＮＰＣであることに変わりはない、そしてここに来た理由もアンドリュー氏本人が出てこようがＡＩが代理してようが変わる事はない。

まぁ、強いて予定変更があるとすれば聞く順番だろうか。

「ほらサイナ、覚悟は決めたんだろ？　もし殴る必要が出てきても大丈夫なように後ろでスタンバっておくからよ」

「……了解：」

エリーゼ・ジッタードールについては後でいいさ、先にサイナのイベントを済ませちまおう。

死せる生者、あるいは生ける死者。限りなく本人に近いＡＩを実質アンドリューが生きていると考えるか死んでいる事に変わりはないと考えるか。んなもん生物学か哲学の違いでしかない、俺にとって

もサイナにとっても問いの答えを持つのであれば「これ」がアンドリュー・ジッタードールということになる。

人形らしからぬ緊張と不安、そしてそれらを背負って一歩踏み出す勇気と覚悟を以て、被造物が創造主の影へと正面から相対する。

「…………」

『……ふむ、流石はエルマ型。静寂が似合う、そうは思わないかサンラク』

「空気読めよ」

今何か確信したぞ、「象牙」の空気の読めなさの元凶絶対こいつだろ‼

「当機(ワタシ)、は……アンドリュー・ジッタードール。貴方に問いたい、事があります」

『聞こう。そしてこの身の機能が可能な限りは答えを返そう、それがアンサーコード・トーカーたる私の機能だ』

サイナの問いはただ一つ。「再征服計画」の備品たる征服人形(どうぐ)のアイデンティティとは望まれたものか否か。オルケストラは無言を通した、「象牙」は何を言っているんだと取り合わなかった、ではアンドリュー・ジッタードールはどう返す？

「質問：征服人形はいち存在たり得ないのですか？　創造主よ、貴

方の作り上げた征服人形は所詮替えの利く道具でしかないのですか？」

果たして、アンドリューの返答は。

『……ふっ、ふくくく、そう来たか！　ふっ、はははは！　これは傑作だ！！　どうせ姿を見せないだけで聞いているんだろう「象牙」！　このベヒーモスは余すところなくお前の胃袋の中だ、出てくるといい！！』

「な……」

「…………」

「大笑いしてるですわ……」

爆笑。腹を抱えての大笑いにサイナは硬直している。
黙っていれば男前なヨーロッパ系のアンドリューがバンバンと椅子の肘置きを叩いて（質量の無いホログラムなので音はしないが）笑う姿はなんというか印象がちぐはぐのパッチワークになっているようで妙な気味の悪さがある。

『だから言ったでしょうエルマ＝３１７……アンドリュー・ジッタードールとはこういう人物なのですよ。おはようございますアンドリュー、三千年ぶりですね』

『私としては一晩寝た程度の感慨なのだがね。ふくくく……これ

を笑わずしてどうする！　電算を限界まで回しても大笑い以外の解答が見つからない！　アンドリュー・ジッタードールという存在の全てが笑えと叫んでいるようだ。ははははは！！』

これはどういう感情に起因する爆笑なのか、見方によっては笑われている側であるサイナは拳を握りしめ、だがそれでも答えを追求する一声が出ないらしい……全く、「この部屋」を見れば答えなんてほとんど出ていると思うんだがなぁ。

『エルマ＝３１７、いいやサイナだったかな？　このラボに至る条件を設定してから初めて辿り着いた征服人形(コンキスタ・ドール)が君であった事は本当に幸いだった！　その勘違いを早期に正す事ができるのだから！！』

「勘、違い……？」

いい加減気付いてもいいだろうサイナ、いつものインテリジェンスはまだメンテ中か？

アンドリュー・ジッタードールの笑いに嘲りの感情なんざひとかけらも入っていない、そもそも……

部屋一面アイドルグッズで埋めてるドルオタがフルスクラッチのフィギュアを使い捨てにするわけないだろう。

Talkative Shadow（後書き）

サイナ「征服人形のアイデンティティは望まれないエラーでしかないのでは？」

サンラク「どう考えても望まれたイレギュラー展開です本当にありがとうございました」

象牙「いやあのクソドルオタが望まないわけないでしょ何をアホな質問を」

アンドリュー「待って!!!!!推しが尊い!!!!!!」

歪んだ捩れがメビウスとなり、無限のモチベーションになる（前書き）

なんやこのドルオタ

一通り笑い続けたアンドリューは表情を正すと、サイナ……と、俺に視線を向けて口を開いた。

『そも、征服人形を語る上でまず「シュテルンブルーム」について説明しなければなるまい。当然基礎知識の履修は済ませているだろうね？』

「推しはストロベリーです」

『ふむ、なるほど良いセンスだ。で、推しは？』

「自分ハコオシってやつなんで」

『箱推しか』

まぁぶっちゃける知ってる単語だけで会話に喰らいつく「ニワカ話術」の一環なのでイチゴ組以外のグループは知らないしそもそもイチゴ組のメンバーもサイナと……あー、リリエル？　だったかしか知らない。

『成る程、それしか知らないといったところか』

速攻でバレたわ。

「……にわかですまんな」

『誰しもがにわか知識から始めるのだ、いわんや次世代の文明がリセットされた新人類ではな……後でコンサート動画を貸し出そう』

「いや別にそれはいらないかな……早速本題から逸れてるぞ」

『成る程、ではシュテルンブルームの素晴らしさについてだが……』

「おいアンサーコード・トーカー、質問に対して教科書の目次から話し始めるのはやめろ。そこそこ俺も急いでいるんで本題から入れ、後で聞いてやるから」

『全く、これだから文明文化のリセットには反対だったんだ……獣の道理からやり直してどうすると言うのだ。アリスめ、積み上げた歴史に空白などあってはならんと言うのに……まぁいい、ならば答えよう』

露骨に好感度が下がったが、生憎六時半までにはログアウトしておかないとリアルに響く。俺は磐斎氏のように気軽に風邪を引く事はできないのだ。

『そも征服人形とは私、アンドリュー・ジッタードールが開発した「三号計画」の主題たる至高の創造物だ』

「三号？」

一、二号計画なら分かる。
要するに生物的な繁殖と繁栄によって歴史を「作る」のが一号計画。そしてベヒーモスで生産出荷され、開拓と制覇によって歴史を「拓く」のが二号計画。

では三号計画とは？　主軸が征服「人形」の「人類」のための計画とは――

『三号計画とは征服人形という文化的不死性質を持つ人類種を一号、二号計画人類種と並行して定着させ、シュテルンブルームを未来永劫この世界の「アイドル」として後世に遺す偉大なる計画である』

……うん。

……うん？

……んんん？

いや、あの、その……

控えめに言って頭おかしいじゃん？

「あー、その、なんだ。俺は言葉が通じて話が通じれば霊長類でなくてもその尊厳を尊重すべきだと思う器のでかい人間だが……うん、気分を害さないで欲しいんだが」

あー、うん。

「人類種？」

『いかにも』

「人形だよね？」

『些末な問題だ』

「無機物だよね？」

『何か問題でも？』

……はい、少しタイム。タイム要求します。よしサイナ、エムル、こっち来い。

「どうする、俺はどうすればいいのか分からない」

「じ、自信満々過ぎて間違っていない気がしてきたですわ」

「否定：当機達（ワタシ）は征服人形、一号及び二号計画そのどちらとも合致しないヒューマノイド……の、はずですが」

よし分かった、ドルオタのキャラが濃過ぎて俄然気になってきた。俺も少しばかりリアルを削るリスクを受け入れよう。持ってくれよ俺の身体、朝食抜きだ……！！

「オーケー、分かった。話の円滑化を優先しよう……で、アンドリ

ユー氏は征服人形を……なんだ、新たな人類種として生み出した、と」

『その通り。ベヒーモスにQ．E．D．が搭載され、二号計画を稼働させる事が決定した時点で母体が苦難を乗り越え子宮で子を育てる絶対性は消失した。ゼロから成体の肉体を構築し、コピーアンドペーストの人生（バックボーン）を脳に焼き付ける時点で年月による教育の絶対性もまた消失した。ならばもはや二号人類と三号人類の違いは肉体を構築する物質が有機か無機かの違いしかあるまい』

「な、成る程確かに」

恐ろしい事に筋は通っている……いや、通ってしまっている。

確かに二号人類の生い立ちは生物としてあまりに異形だ、メタ的な中の人を考えなければベヒーモスは１００％同じ肉体、同じ性格の人類を量産できるわけで。

全く同じものを与えられ、同じ教育を受けた双子ですら主義思想が分岐する。それすら無いというならば二号人類と征服人形の違いはマジで材質……いや、いや、臓器とか違いはあるはず、うん。

『故に三号計画。至高の文化たるシュテルンブルームを後世に伝える為の偶像（アイドル）！　自ら思考し、人に寄り添い歌い踊る……この寂しい星に賑わいと彩りを齎すための救世主（アイドル）！！　それこそが私の研究の全て！！！』

「言わんとしてる事は分かるが……」

百聞は一見にしかず、資料を百回見るよりも現物を一回見たほうがより精巧で詳細な感動を得る事ができる。仮にそのシュテルンブルームのオリジナル達がとっくの昔に死んでいるとしても大事なのは

シュテルンブルームがファンに与えていた感動を再現できるかどうかという事だろう。

『故にこその三号計画だ。一、二号計画……即ち「バトンタッチ」が実行されるにあたり二機のバハムートは一時的に歴史の舞台からその身を隠すことになった。それが何を招くか分かるか？！』

「え？　あー、そうだな。話の流れ的に……ていうか、その三号計画のコンセプト的に文化の断絶、とか？」

『素晴らしい、正解だサンラク。通信の断絶したジズを除けばベヒーモスとリヴァイアサンにはかつて人類が捨てた母なる星から、星の海を旅してこの星に辿り着くまでの歴史！　文化の全てが記録されている！！　それらが歴史の影に隠されたならば、新たな人類は文化を！　シュテルンブルームを知らぬままに歴史を作ることになるではないか！！』

シュテルンブルームの「歴史」に空白などあってはならない、ホログラムを動かすＡＩが出しているとは思えない焼き焦がすような熱意にサイナが一歩後ずさる。

要するに人類の歴史から推しが一秒でも忘れられるとかあり得ねえ、と叫ぶドルオタに俺はドン引きしすぎて一周回りきったのか感心すらしてきた。

『認めよう、確かにシュテルンブルームは過去の存在だ。私が彼女達の輝きを知った時には既にメンバー全員が天寿を全うしていたからな……あと８０年早く生まれていれば、如何に科学を極めたとて時間の不可逆性に人類が手をかける事は出来なかった』

だが、とアンドリューが拳を握り締める。今も昔も、己を動かすも

のはそれが全てなのだと言わんばかりの力を声に詰め込んで天才（ドルオタ）は叫ぶ。

『生まれ遅れた私がかつての同志達の遺志を継ぐ方法はただ一つ……即ち、シュテルンブルームを枯らさずを永遠とする事……故に三号計画、永遠に咲き続ける星の華……！！』

うん、要約すると……推しは推せる時に推せって事だな！

いやなんだこのクソ拗らせたドルオタは。

歪んだ捩れがメビウスとなり、無限のモチベーションになる（後書き）

シュテルンブルームは永遠に愛されるコンテンツでなければならなぁい……（ねっとり）
半裸鳥頭、君は絶版だぁ……（クリティカルクルクルセイド）
とはならないのでご安心ください

永久に枯れぬ星の花、育むは感情の「N」

『似姿、影法師、されど現存し存在するシュテルンブルームそのもの……それこそが三号計画、それこそが征服人形本来の使命なのだ』

「お、おう……」

なんというかこう、見覚えのないタイプのキャラクターだ。

例えばそう、人類の悪意に絶望して人類を滅ぼすとか破壊される自然を嘆いて人類を滅ぼすとかそういう極端な二元論だったりシンプルな支配欲とか……やる事なす事極端なキャラクターっぽくもあり、しかし過去をガン見しつつ遥か遠い未来を話すってのは結構珍しいというか……うーん。

「疑問：征服人形の基礎プロトコルは「再征服(レコンキスタ)」「蒐集(コレクター)」の二種で進行しています。そして三号計画に関する情報はデータとして蓄積されていません。説明を」

『まぁ……三号計画は凍結されたからな』

「理由を聞いても？」

『仮にも三種目の人類種と定義するなら「機種(遺伝子)」パターンが１００以下というのはおかしいと指摘され、当時はそれを否定しきるだけの理論を構築できなかった。おのれジーク・リンドヴルムめ……』

「英断」という言葉は胸の内にしまっておく、好感度が下がりそうな気配がしたからな。というかだったら増やせばいいとはならなか

ったんだな……二次創作は認めないタイプのファンかな？？

『とはいえシュテルンブルームを永劫とするためなら多少の妥協は受け入れる。そうして凍結した三号計画を多少改良して認めさせたものが「再征服計画」……それこそが人に寄り添う征服人形（キミたち）の始まりだ』

「具体的に何をどう変えたんだ？」

『何も？』

「えっ」

『元からあった「未完成」をさも改善点のようにピックアップして報告書を見目良く書き換えた』

「えぇ……」

『要するに「人間」と表記したのが気に食わなかったんだろう、ならばと当時の私はこう考えた……「もはやシュテルンブルームは人間という枠組みすら超越した存在なのだ」と！！』

「過度な神格化はいつの時代もろくな事にならねーぞ」

何故何事においても「ファン」と「アンチ」と「信者」で区別されるのかって話だな、大きな分類として同じところにあってもやはり三つ巴なんだよなぁこれ。

「質問：征服人形に元からある「未完成」とは？」

おっと、俺は軽く流していたがサイナにとっては聞き逃せない単語であったらしい。アンドリューが口走った「未完成」という言葉にサイナが一歩詰め寄って創造主へと問いかける。

『もちろん教えるとも、その「未完成」はシュテルンブルームのファンたる私ではなく「征服人形の父」として設けたものだ……そして、それはこのラボに辿り着いた征服人形に与えられて君達は「完成」する』

新たなる人がバハムートに辿り着くことが神代の天才達によって定められたと言うのならば、誰がなんと言おうが「人」である征服人形にも同様の条件を。

故にこそ征服人形に欠けているピースがここにあるのだとアンドリュー・ジッタードールは問いに答える。

『おめでとうエルマ＝317、君は征服人形が紡いできた歴史の中で初めて到達した「完全なる人形」だ』

――「N」パッチ、インストール

…………。

…………。

「…………」

「…………」

『…………』

「……で！？」

何かこう、イベントエフェクトはないんですか！？　構えた俺がちょっと間抜けな感じになってるじゃん！！

『既にインストールは完了している、このパッチが導入された事で君の感情にかけられていた上限リミッターが解除された……』

「感情……上限？」

『そう、君達は常に聡明で理性的な判断ができるよう一定以上の知覚情報の写真に対しての反応にリミッターがかけられていた。だが「N」パッチを適用した事でその枷が外された』

慈しむように、だがどこか突き放すように最後の一欠片をサイナに渡したアンドリューはおのれの創造物へと話しかける。

『君は主観的な感情に知性を忘れる事になるだろう、愚かな選択をして後悔する事になるだろう、あるいは……そう、より強く浮き彫りとなった死の恐怖に怯えるかもしれない』

喜怒哀楽、感情の４パターンにおいて半分は負の感情だ。世の中喜んで楽しむだけじゃ進まない時だってある。そう……困難（クソバグ）に怒り、絶望（倒産）に哀しむ事だってある。ゲーマーはいつだって口を開けた雛鳥

だ、親鳥（メーカー）が餌をくれなきゃ何も出来ない。

『だが君は主観的な感情による喜びを得るだろう、非合理の先に新たな境地を見るかもしれない、あるいは……そう、より強く浮き彫りとなった生の実感を楽しむことができる』

「………」

『征服人形は設計段階から「賢く」生きていけるよう………万が一にも全滅しないよう合理的な判断を下せるよう設計した。他にも二号計画との合流、「蒐集」計画における規定、戦術………ある程度の幅がある二号計画と異なり征服人形は生産されたその瞬間から一流の戦士（アイドル）として活動することができるようにできている。だが「N」パッチは非合理を許容する』

「………ん？」

いやちょっと待て、あるいは違うのかもしれない。今何かとても嫌な仮説を思いついてしまった。

アンドリューの口ぶりから察するに………本当はこれ、もっと長い期間征服人形が人類とコンタクトした後にやるべきイベントなんじゃ？　いやだって………まだ半年経ってないんですよアンドリューさん。ええ、征服人形と二号人類（プレイヤー）が交流を開始してまだ半年経ってないんですよ。

多分なんですけどねアンドリューさん、恐らく妥協としての「再征服」計画ならともかくアンドリューが本来想定していたアイドルとしての活動は殆どしてない気がするんですよね。

だが始まってしまったイベントはもう止まらない、フラグは成立すると無敵オブジェクトになるのでもう折れなくなるのだ。これまで

「アイドル」としての役目を背負い続けてきた被造物の船出を見送っているアンドリュー氏に言うべきだろうか。そこのサイナさんはアイドル活動どころか初遭遇の時からサバイバルしてたしなんなら契約後も戦いの荒野を駆け抜けるような生活だった、と……

「…………感情：非合理な選択」

『だがその「非合理」こそが人生だ』

んー。

なんかうまく進行してるっぽいしこれでいいか！！

「サンラクサン、なんか今しょーもないこと考えてる頭の揺れでしたわ」

「うっそだぁ」

「サンラクサンがしょーもないことを考えてる時は大抵ちょっと上向いた後に大きく頷くですわ」

うっそだぁ…………うわっ！！　マジだ、いつもこんな感じの動きしてる気がする！！

・ジーク・リンドヴルムとアンドリュー・ジッタードール
ベヒーモスに残った者とベヒーモスから亡命した者。リヴァイアサンからの知識で己の技術を完成させた者達。自ら人生に幕を引いた者と最後まで戦った末に死んだ者。遺した物を最期まで思い続けた者達。
対照的なようで共通点の多い二人だが本人同士は………「別に嫌ってるわけじゃないが徹底的にソリが合わない」という奇妙な関係性。

Q．人類扱いしたいようだけど征服人形に生殖能力は？
A．そういう下品な概念ばかり気にするのは良くない
ジーク「えぇ………？」

Q．なんでジークヴルムと同系統の生体兵器を量産しないの？
A．そういう効率ばかり気にするのはナンセンスだろ
アンドリュー「？？？？？？」

未知が未解に変わる意味

◆

「ぜぇ……ぜぇ……」

全速力のダッシュで間に合った学校のホームルームを未だ荒れた息で受け流しつつ……「まさか朝食を放置はしないわよね？」と圧をかけられたので無理やり胃に詰め込んだトーストが脇腹へＤｏＴを与えている。

まさかパン咥えて遅刻間際の登校なんてコッテコテの展開を自分でやる事になるとは思わなかった……小学生の頃に発見していた抜け道を思い出さなかったら二分短縮できなくて遅刻確定だったな、大胆なチャート変更こそＲＴＡの醍醐味とは誰の言葉だったか……しかし暑い、近くの席の人に一応確認とるか。

「……窓開けていい？」

「……私のこの完全防寒を見て同じことを言えるなら背中にドライアイス入れてあげるけど」

「ウィッス」

席替えしてぇなぁ……

強行すると寒がりな厚木(あつぎ)さんの逆鱗に触れかねないので外気による冷却は諦める。なんかもう、苗字からして寒がりを宿命づけられたような人だ……本人柔道部でめっちゃ体格良いのに、ていうか暖房

効いてるのに何故そんな完全防寒を。

「ふぅー……」

まぁいい、間に合ったならそれでよしとしよう。

ホームルームなんて話半分に流して思考に没入するための時間だ、今の俺の脳内一面を飾るのはやはりシャングリラ・フロンティアだ。正直次の二面に書かれた「幕末、アップデートパッチで新たなバグ発生！」も気になるが……多分そのうち天誅のバリエーションに組み込まれそうなので後で調べておこう。

◆

まぁぶっちゃけ、先に済ませただけで本来の目的はサイナの感情アップデートではない。本命はオルケストラ攻略、そのための情報収集だ。

なので刻一刻とタイムリミットが迫る中で俺は遂に問いかけたのだ。オルケストラの「歌姫(アリア)、楽団を率いるあの女……アンドリュー・ジッタードールと同じ姓を持つエリーゼ・ジッタードールについて！

……………

………

だが返ってきた返答は俺の予想とは少々違う方向のものだった。

……

『エリーゼ……どこでその名を？』

「ちょっとな」

感情の検証と言って何故かエムルを借りて行ったサイナも気になるが、今はこっちが優先だ。俺の口から飛び出した単語にアンドリューが僅かに目を細める。

『ふむ…………いや、いいだろう。アンサーコード・トーカーとしても、アンドリュー・ジッタードールとしても別に秘匿するべきものでもない』

む、意外だな。ユニークシナリオＥＸの根幹に関わる単語だ、もっと勿体ぶるとばかり思っていたのだが。

『エリーゼ・ジッタードール、私の叔母だ』

「……思ってたより近い血縁だったな」

『とはいえ、私が１０になる前には死んでいたがね……急性アルコール中毒で』

「いや生々しいわ」

仮にもファンタジーを売りにしてるゲームで出ちゃいけない単語だ

ろ！！

『何故君の口からその単語が出てきたのか不思議でならないが……答えよう。彼女は私の叔母であり、生前は小規模なライブを開く程度の面白みもない女だった』

「幼い頃に死んだ割には詳しいんだな」

『僅かな好奇心でも答えを出さなければ気が済まなかった幼少でね。まぁ尤も、彼女の存在が私という存在の５％程度に影響しているのも事実だが』

「詳細を聞いても？」

『私がシュテルンブルームに出会うきっかけとなった歌を歌っていただけだ』

曰く、シュテルンブルームは控えめに表現しても神なので過去の存在となった当時も彼女達の曲をカバーする者は結構いたらしい。で、エリーゼ・ジッタードールもその中の一人であり、場末の酒場みたいな娯楽施設で歌っていたレパートリーの中にシュテルンブルームの曲があったとか。

『その曲こそがシュテルンブルームが発表した数百曲の中でも私が特に推す曲であり……当時は感銘を受けたものだ』

その後本家のオリジナルを聞いて人生がひっくり返ったそうで。あーはいさいでっか。

「……それだけ？」

『それだけだが。極々稀に幼い頃を懐かしんで聞き直したくなることもあるがそれだけだ、何を期待しているのかは不明だが私にとってのエリーゼ・ジッタードールとはそういう存在だ』

「それだけ……か」

『……ただ、まぁ。シュテルンブルームには遠く及ばないが僅かながらでもファンを抱えていた事に納得はできる、と言ったところか』

………まさか、ここまで来てハズレ引いた？　聞いてる限りエリーゼ・ジッタードールはマジモンのモブキャラだ、はじめてのぼうけんで倒した雑魚モンスターとかそこら辺レベルのモブだ。
つまりオルケストラというユニークモンスターの攻略においてはエリーゼ・ジッタードールはただのフェイクなのか？　あくまでもガワが使われているだけの……いや、まだだ。

「よし、じゃあ次の質問だ。これに見覚えは？」

『これは……』

「神代製の音楽再生機、これに見覚えはあったりしないか」

さぁどうだ、これも無関係ならマジで八方塞がりだ。
スクショで撮影できないのは出現したエリーゼや再現体だけだ。音楽プレーヤーそのものは戦闘開始前ならハッキリとした姿を撮影できる。
果たしてアンドリューの反応は、僅かな思考の後に目を驚きで見開くというもの……来たか！

『驚いたな、これは私の音楽プレーヤーだ』

「ほう」

『丁度……そう、エリーゼ・ジッタードールの葬儀を終えた後に彼女のファンを名乗る男からプレーヤー本体ごと譲り受けたものだ。失くしたものと思っていたが……いや、何故現存している？』

「征服人形が回収してたんだよ、まぁなんか本来の用途とは別な感じにアレだけど」

具体的に言うと世界そのものを侵食するタイプの何かになってますけど。

『いや……そう言う問題ではない。「蒐集」計画において回収対象となるものは全て征服人形の手で保存されるが……それは蒐集対象が「元々そのように設計された」からだ』

「……ええと？」

『その音楽プレーヤーは人類種が星の海に船出する以前に作られ、そして千年単位の経年劣化を防ぐ保存加工を施す「前」に紛失したものだ。何故原型を留めている？』

……

…………

………………

「俺が知るかよ………」

それが知りたくて来たんじゃろがい！　としか言いようのない結果に終わったベヒーモス攻略。さてこれからどうしたものか。

未知が未解に変わる意味（後書き）

厚木さんは暁ハート先生のフォロワー、雑ピのことはアホだと思っている

生まれたての世界よ天秤に座せ、今ここに是非を問う

さぁ本当どうするべきか。
オルケストラの謎は未だ霧の中、霧に突っ込んだ手が掴んできたのは征服人形のイベント。いやなんでやねん。

「うーん……」

ほぼ一日中考えていたが分からない、普段なら思考を切り替えて学業に専念するところなのだが……何か、何か掴みかけている感覚があるのだ。霧に突っ込んだ手の指先のさらに先、爪先に何かが引っかかっているような……パズルのピースはすでに全部持っているが、いくつかのピースをどのポケットに入れたのか忘れた、みたいな。

オルケストラの「本体」は音楽プレーヤー。所有者はアンドリュー・ジッタードール、厳密には貰い物なので最初の所有者は不明。というか人類が宇宙に旅立つ前ってことはガチで地球産ってことではなかろうか。
つまり……宇宙を何年彷徨っていたのか、確か数百年くらいだった気がするので単純計算であの音楽プレーヤーは三千と数百年、下手したら四千年モノの超超超超レトロなアンティークって事になる。四千年って、リアルで例えるなら紀元前二千年前くらいか？　粘土板とかの時代かよ。

「……駄目だ、後一歩なんだが」

これはもう思考でどうにかなるモンじゃないな、起爆剤となるひとさじのインスピレーションがないと永遠に解けないタイプの謎だ。

来い来いインスピレーション……こういう時は別のことを考えると意外に思いついたりする。
そうだな……あ、そうだ幕末のバグ、あれなんか過去ログが変な参照されたせいでプレイヤーが操作していないアバターだけが過去訪れた場所に出現してるらしい。
聞いた話じゃレイドボスさんを始めとするランカーが複製されまくって阿鼻叫喚になったとか……複製アバターかと思ったら本物でしたとか下手なホラーより恐ろしいわ。
「ん……マジか、今何かキたぞ」
何か爪先を掠った気がする！　マジかよ幕末、真理は天誅の先に存在したのか……？
天誅、増殖、アバター……どれが引っかかった？　クソッ、インスピレーションが離れていく。あーもう駄目だ、また分からなくなった。おのれ幕末、思考能力を全て天誅に費やすからこういう時に役立たないんだ。とりあえず増殖バグは再現性があるのかだけ気になるってところか、今回のは放置案件ではなさそうだから修正かな……
「ん？」
玲さんだ、誰かと話してるようだがここからだと微妙に見えないな。あんまり和気藹々って感じではなさそうだけど。まぁいいや、帰るか………あ、玲さんがこっちに気づいた。
「すいません、では失礼させてもらいます………ら、楽郎君っ、今……帰るところ、ですか？」
「え、うんまぁ」

「その、シャンフロについて……ええと、お話ししたりとか」

「別に構わないけど……なんか結構無理やり話切り上げてたっぽいけどいいの？」

話していた相手は……もういないか、下校するために玄関に向かった俺とは逆方向に行ったのか。部活でもあるのかな？

「その、大丈夫です。ちょっと……ええと、その、進路について……アドバイスを貰ってたというか。いえその！　来鷹一択なんですけど、ね！！」

「いや一択は不味くない？」

第二第三候補は一応入れておいた方がいいんじゃ、それとも一発合格するから問題はないという自負なのか。

「その……海外留学について、強く推してくると言いますか……」

「留学？」

「日本から離れるつもりはない、と何度も言っているんですけどね」

ははは、と困ったように笑う玲さんであったがまぁ分からなくもない。控えめに言ってこの人めちゃくちゃ頭いいからなぁ……覚えてる限り、テストじゃ大体学年上位とかにいた記憶しかない。

しかし海外、海外か……武田氏からも候補の一つとして挙げられたことあったなぁ。まぁクソゲーの入手難易度が上がるって事で却下したけど。

「しかし海外か……」

「ら、楽郎君は……その、興味とか……あるんです、か？」

「いや別に、ただちょっとアメリカには近寄りたくないなって」

なんかこう……補足されそうな気がする！　最近は変なツテで住所特定してくるパターンが多いし、海向こうから割とガチめのお誘いとかが来てるってカッツォ経由で伝わってくるんだよ！！　ファーストクラスのチケットをタダで渡そうとするのはやめてください！！

「そ、そういえば昨日はいきなり抜けちゃったけどあの後どうなったの？」

「へ？　え、はい。あの後、何人かで九層に向かったんですが……」

リヴァイアサンの方式と同様ならば、ベヒーモスの最下層はゴールそのもの。つまり九層こそが最後の試練となる。
予想通り、玲さんの話では九層がベヒーモス最後の「試験」が課される場所であったらしいのだがどうもその難易度はリヴァイアサン第四殻層の買い物カゴエレベーターよりも難解であるらしい。

「あー、つまり「擬似再現された自然環境に説明なしで制限時間だけかけられて放り出される」ってこと？」

「はい……何をすればいいのかも分からず、タイムリミットを迎えてしまって……」

現在分かっているのは少なくとも、

・制限時間一杯まで生き残ることではない
・擬似環境内のモンスターを倒すことでもない
・何か特定のアイテムを探す可能性はゼロではない
・が、その気配すら感じられない

とのことだ。つまり単純な条件ではない、ある程度複雑な何かを達成しなければならないって事か。

「できれば、その、えとですね。楽郎君も協力していただけると、その……ええと、大きな助けになるかな、と」

「んー。まぁ用事も済んだし昨日いきなり抜けた分を挽回する為にも……」

ガン！！　ゴン！！　ガン！！！　ガギィィーーン！！！（着信音）

「ひゃあっ！？」

「むっ」

この着信音「金属の打撃音でベートーベン『運命』を演奏してみた」を設定している奴……いや、お人はただひとり！！

「ちょっと失礼」

件名：【至急】協力願いたい

差出人：武田インゲン
宛先：サンラク
本文：仔細は問わず、このインディーズゲームをプレイしてクソゲーか否かを判定してほしいで御座る
ちょっと知り合いとこのゲームの是非について揉めていましてな
ｈｔｔｐｓ：／／ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

「…………」

「あの……何か、あったんですか？」

「ああいや、別に何か大ごとってわけじゃないけど……」

師匠にやれと言われればやるしかあるまい。武田氏が判断を求めるってことは界隈でも結論が出ていないゲームということだ、お歴々の中に「これはクソゲーちゃうやろ」と判断した人がいるということで……ならばやるしかあるまい。ＵＲＬを踏んで調べた限りではインディーズ、それも先行プレイというか資金を集めるためのお試し版ってところか……インディーズ、それもベータ版でクソゲー界隈の議題に上がるとは中々ファンキーなパワーを感じるぜ。
タイトルは……「デスゲーム・リベリオン・オンライン」ね。
うーん、タイトルは３５点かな！　ただ内容次第ではプラス４０点！！

「ていうかこれオンゲなの……？　インディーズのベータ版で……

？」

正気か？　正気なのか？　金ないから資金集めしてるんじゃないんですか！？　なんでサーバーなんて………いや違うのか、まさかこれは……「このゲームはオンラインでこそ輝く」という絶対の自負があるのか？　とりあえずオンで遊ばせれば金を出したくなると、それだけの自信があるのか？

でもクソゲー審判にかけられてるんだ…………

「何かの、ゲームですか？」

「あーうん、ちょっと知り合いの人から評価を聞きたいって………」

「ええと、何か……」

………評価が必要なんだよな？　それも、「もしかしたらクソゲーではない」ゲームの。

「時に玲さん、ちょっと息抜きにこのゲーム一緒にやってみない？」

「デひょもっ！？」

でひょも？

生まれたての世界よ天秤に座せ、今ここに是非を問う（後書き）

本来は楽郎一人でやるつもりでしたがヒロインちゃんの回し蹴りでプロットが骨折したのでヒロインちゃんもやります

デスゲーム・リベリオン・オンライン！

◇

君はフルダイブVRシステムにインストールされていた謎のゲーム「カース・オブ・エタニティ」を軽率に起動してしまい、電脳の呪われた世界に囚われてしまった。

ログアウト不可、ゲームでの死はリアルでの死、生還の条件はゲームのクリアただ一つ、しかも生還できるのはたったの十人だけ。

もはやプレイヤーすらもが敵。さぁ剣を執れ、永劫の呪いより抜け出すために————！！

◆

あの後新たなゲームに武者震いしているのか通常運行なのか、肉体の動きが若干バグってた玲さんと別れて帰宅。

随分と使い慣れてきた業務用（チェアー型）にデスゲーム・リベリオン・オンラインをインストールしながら携帯端末でより詳細な情報を集めていく。

「ふーん……中々どうして手練れな面々だな」

フルダイブが市場の主役になる前、まだゴーグルVRゲームの息があった頃に大作RPGを作ったメンバーの一人だったりを中核メンバーにそこそこの人数で制作したインディーズゲーム……成る程、これアレだな。インディーズで資金集めつつあとで大々的に会社を立ち上げるやつだな。
失敗すると目も当てられないが成功すると一気にニトロで加速するようなスタートダッシュが切れる。まぁ、失敗するとその……なんだか哀れな感じになるのだが。

「ｃｏｏｐは無し……あーでも通話は対応してるんだこれ」

普通の攻略型かと思ってたが……オンライン前提、そして何より外部結託を意図的に認めているような作り……もしかして、これ。

「とりあえずフルダイブっと」

プロローグ、ムービータイプじゃなくてプレイヤーが実際に行動するアクションタイプか。自室って事らしい空間でフルダイブしろ、と。フルダイブ・イン・フルダイブ……なんだか不思議な気分だ。
しかもこれ旧型のフルダイブシステムじゃねーか、初期の有線接続型。成る程、インディーズ特有のゲーム的粗さをゲーム内で「古いフルダイブを使っているから」ってことにしてるのか。上手い手だ、設定による言い訳……少なくとも世界観を考えた奴は、出来る。

「んー、あとはまぁ流れに添えばいい感じかな」

ログアウトできません、デスゲーム告知されました、周りのプレイヤー（ＮＰＣ）がざわついています、個別のセーフエリアに飛ばされました……っと。ここらへんは体験版（ベータ）ってこともあってか随分と

スピーディだ。
さて、セーフティエリアに来たところで……接続した携帯端末から通話アプリを起動して、対象玲さんで……お、繋がった。
「あ、あー。もしもし？」
『はいっ！　もしもしもし！』
もしもし1．5倍、なんだかお得？
それはそれとしてこのベータ版、通話はできるが合流するのはちょっと面倒そうだ。というのもどうやら最初は半分チュートリアルというか……まずはオンライン上で他のプレイヤーと遭遇しないエリアをクリアして、次のステージでプレイヤー同士が同じ場所に飛ばされるようだ。
「わざわざ付き合ってくれてありがとう玲さん……あー、えーと、このゲームでもレイ氏でいいのかな？」
『付……い、いえっ！　私もその興味がありましたし一緒にできるならとてもありがたいのでっ、はいっ！！』
おお、随分と乗り気だ。俺はどうしてもクソゲー前提で評価しちゃうからこういうニュートラルな価値観の評価ってのは武田氏も歓迎するだろうし、ありがたいことこの上ない。
「とりあえず情報交換しつつ進めていこうか」
『そっ、そうですねっ！　ええと………』
さて、シャンフロじゃスピード系だったけどたまにはガチタンクと

か…………あん？

「これって…………」

『あの、これ…………プレイヤーは、戦闘力が無いのでは……？』

ステータスを開いた事で表示されたこの俺のパラメータ。まず「HP」は分かる。デスゲームを題材にしている以上、プレイヤーには死の影がつきまとうという事。ヒットポイントが設定されているのは当然だ。

次に「CP」……何かと思えばカースポイント、要するにMPの呪い版みたいなもんだった。表記が違うだけで魔法的システムを使うために消費するパラメータって事だろう。まだそこは分かる。

問題はここからだ。普通ならSTRなりAGIなりが続く筈のステータス欄にそれらの項目はどこを探しても存在せず……代わりにあったのは「統率力」「育成力」「経営力」「魅力」「迫力」「畏怖」「恐怖」「愛嬌」「信奉」エトセトラエトセトラ。どう考えても戦う者のステータスではない。統率？　経営？　まさかこのゲーム……………

「つまりこれはあれか？　手勢を雇って、鍛えて、率いろ……そういう事か？」

『えとあの、サンラク……君。チュートリアルでしょうか。薬草を採ってきてほしいと……』

「あー……だいたい見えてきたな」

要するに、他力本願って事だろう。デスゲームで自分の命を積極的

に全額ベットできる奴はいない、だからこそＮＰＣに代わりに攻略してもらう……って設定でプレイヤーは戦闘力皆無の状態で戦えと。

「まさかの軍団経営モノかこれ」

『ええと、こういうゲームはあまり経験が、ないんですけれど……』

「あー…………ええと、基本的には仲間を集めるところからスタートするんだと思う。わらしべ長者じゃないけどＮＰＣを雇って、より難易度の高いＮＰＣのクエストをクリアして……みたいな」

『成る程……このパラメータは、何でＮＰＣを統率するか、ということ……でしょうか』

統率力、育成力、経営力。これは分かる、ＮＰＣを率いて、育てて……経営ってのがよく分からないが。

次に魅力、迫力、畏怖、恐怖、愛玩、信奉。ここら辺は……多分、上三つを「何で」成立させるかってことなんだろうな。カリスマとか恐怖政治とか……

「どちらにせよ次の階層までは強制ソロっぽいし互いにどんな軍団を作るか内緒でやってみようか？」

『え、じゃあ通話も切る……ん、ですか？』

「いや、あくまでも編成を秘密にするだけというか……それとも切る？」

『いえっ！　いえいえいえ！　お話ししましょう！　はい！！』

「お、おう？」

リアルタイムでの情報交換を求めてのことだろうか、やはりシャンフロでなくとも手を抜かないというゲーマーとしての妥協のないプレイスタイルということか……こんなクソゲー裁判の被告人みたいな作品に招いたのが申し訳なくなってきたぜ。

さて、とりあえずレイ氏が言ってたチュートリアルＮＰＣを見つけて……

一時間後。

『あの、サンラク君……どんな感じに、なりました……か？』

「ええっと……」

「我らが神に忠誠をぉぉお！！！」

「「「神！　神！　神！！！」」」

「ちょっと熱烈な感じに、レイ氏は？」

『ええっと……その、ちょっと、口で説明しづらい、ですかね』

なんだかこのゲームの本性が見えてきたぞ。

どこに出しても恥ずかしいカルト教団と化したサンラク軍を見ながら、これをレイ氏に見せるのか……と少々背中に寒気がするのだった。

デスゲーム・リベリオン・オンライン！（後書き）

ユバの徽っていうソシャゲがかつてありましてぇ……何とは言わないんですけどね……えぇ、まぁそういう感じでしてぇ……

空のジョッキに重い愛を注いで乾杯！！

「神よぉっ！　ご覧ください！　我が信仰をぉぉぉぉぉおおおおぎゃあああああああ！！！！」

ＮＰＣの一人、ちょっと前までは一番最初に仲間となる気のいい兄ちゃんだった筈の「信者」が次の層に行くための道を塞ぐ第一層のボス「茨の王臣ロゼル＝ミニステル」の亡骸を消し去るべく、巨大な二足歩行のカミキリムシのような姿をしていたボスの死体と共に燃え上がる。

その炎の色は黒と青の混ざり合った明らかに尋常ならざるものであり、それに身を焼かれる信者の兄ちゃんの様子はただ事ではない。

「………ぇぇ」

「喝采せよ！　追悼せよ！　神の征く道と敷かれた同胞に敬意を！！」

「「「おおおおおおおおお！！！」」」

「やぎゃああああっ！！　だずげっ！　げっ！　ばぁぁああああああああ………あぁぁぁぁ………！！」

「………ぇぇ」

ドン引きである、元ナッツクラッカーことディープスローターがスペクリで「囁き爆弾」を運用してきた時と同じくらいドン引きしている。

ちなみに囁き爆弾とは敵陣営に潜り込んだプレイヤーが背後から耳元に下ネタ（を詠唱とする自爆魔法）を囁く事で肉体とメンタル両方に大ダメージを与えるクソ悪質なテロ行為である。それに対抗して生み出されたのがこちらも悪名高いデスメタルリンチ……うーん、黒い黒いぞ我が歴史。後世に語り継いではいけないやつだ。

『あの……サンラク、君』

「ごめん、ごめんね玲（レイ）さん……こんな、こんなゲームに誘ってしまって……」

『い、いえその！　ええと、大丈夫です！　一応、その、ああええと、大丈夫です！！』

こんなんホラーすら生温いやつやん……明確にプレイヤーの心を痛めつけるための確定イベントじゃん……
後から知った話だと、どんな軍団にしようとも必ず最初に仲間になるあの「恩義を返す剣士（気のいい兄ちゃん）」は必ず最初に生贄になるそうだ。やけに気合の入ったキャラ造形のくせに速攻死ぬ役とか鬼かよ。

巨大カミキリムシと共に地に積もる灰塵に成り果てた信者を踏み締めながらカルト教団と化したサンラク軍は次の層へと突き進む。
全員が顔をすっぽり覆うサイズの穴空きビールジョッキを被った一団というのはカルトにしても相当珍妙なんだろうが、生憎カルトルートの場合プレイヤー以外で何を信奉するのかは完全ランダムだ。
ちなみにウチのサンラク軍では空っぽの酒樽、そして教祖たる俺を信奉している……意味分からないだろう？　当の教祖もよく分かってないんだなこれが。

何はともあれチュートリアルはクリア、それによって界隈で議論される原因……即ちこのゲームの問題点が見えてきたぞ。

要するにこのゲーム、絶対に出血を強いるタイプなんだろう。それも極めて悪辣、残酷な感じで。言い方は悪いが製作側の性根が腐り切ってるんじゃないかと思う。

ただコンセプトとしては「好きな人はとことん好き」って感じなんだよな、要するにやってる事はダークファンタジーではあるのだから。

正直知らなかったとはいえレイ氏をこのゲームに呼んだのが申し訳なくなってきたのだが、当人は気のいい兄ちゃんが燃えカスになるショッキングシーンを見てもそこまで取り乱してはいない様子……いや、油断はできない。そうやって見た目だけで安心してるとピザるんだ、やはりここはちゃんとけじめをつけるべきか。

「さぁ！　我らが神を信じるのだ！　信じる者は救われる！　神の御姿は空になった酒樽の底にこそおわす！！」

空になったジョッキの底にあるのは虚無と次の一杯への渇望じゃないですかね。さて、第二層からは他プレイヤーとの合流が出来るわけだが……待ち合わせの場所は先に一層をクリアしていたレイ氏が指定した酒場だ。ええと、虎の顔を象った看板を掲げた……ああ、あれか。

「おーい、レイ氏ぃ…………………る？」

「あ、えと、その、もう少し距離を………」

「そんなこと仰らないでレイ様ぁ～……」

「そうですよレイ様っ」

「レイ様、素敵なお人………」

「あ、サンラク君………」

「……うん、お邪魔したようで」

「ち、違いますっ！　違うんですよく分からないけどごめんなさい！！」

……

…………

……………

要するに、信奉パラメータにポイントを振りまくった俺の軍団が狂信者だらけのカルト軍団になったように。

路地裏の哀れな女達を助け、愛嬌にポイントを振ったレイ氏の軍団は…………あー、なんというかドロドロの蜜が滴る百合の花束のような軍団になったと。

「なんていうか……うん、」

「違うんですっ！　いえその、狙ってやったわけじゃなくて！！　と、途中から男のＮＰＣがどんどん抜けていって……」

抜けていって、ねぇ……男アバターである俺に向けられた射殺さんばかりの視線、明らかにそういうことですよね。意図してそういうパラメータにしたわけじゃないとは思うが……いや本当にそうだろうか、玲さんの評判くらいは耳に入っている。中学の頃から誰かと付き合ったなんて話は聞いたことないし実はそっち系だったとか？　ほら、得間さんとかずっと仲良しだし……そういうことだったのか……？

「まだ、う……疑ってませんか？」

「いえ、そんなことは」

「目が疑惑のそれですっ！！」

しまった、表情は誤魔化せても目まで誤魔化すのは難しい。

「いや別に今の時世ならそんな珍しいもんでも――」

「違います！　から！　私は、私はちゃんと殿方が好きです！　好きなんです！！　好（す）……………すっ！！？！？！？」

ズゴン！！！！

「レイ氏！！？」

まるでいきなり酔いつぶれたように顔を机に叩きつけたまま動かな

くなったレイ氏にこちらも動揺を隠しきれない。いや確かに俺も相当不躾だったかもしれないが…………

「あ、あの……大丈夫？」

「だいじょうぶれす………ちょと、ふるだいぶしすてむのちょうしがわるいみたいで、なんだかそのごにょごにょ……」

「なんて？　というか……ええと、調子が悪いようなら一度ログアウトしても……」

「…………三十秒ください」

「お、おう」

三十秒経過………あ゛？　いつまで睨んでんだやる気かスケープゴート共、ボス戦に紛れて偶然フレンドリーファイアすっぞコラ。カモン教信者達、彼女達に布教して差し上げろ。

ジョッキ頭とヤンデレガールズがじりじりと緊張を高める中、三十秒間頭を机に押し付け続けていたレイ氏が顔を上げる。

「あのー…………」

「大丈夫です、何も問題はありません。ええ、とても心穏やかな気分です」

「……本当に大丈夫？　別に無理してゲームする必要はないんだぜ？」

「ははは、ご冗談を」

やばい、本格的にレイ氏がバグった。

空のジョッキに重い愛を注いで乾杯！！（後書き）

ヒロインちゃん、過去最大にバグる（残り三時間）

新たなる歴史の創造者（前書き）

シャンフロ書いててここまでニッコニコ笑いながら書いた話もそう
そうないですよってくらい笑いながら書いてました

「くっ、なんだあの茨イソギンチャク……！！」

「いえ、恐らくイソギンチャクではなく茨に擬態した群体系の虫モンスターではないかと。ふふふ、私に任せてください」

「お、おう」

敵ボスの正体を看破したレイ氏が自軍に指示を出し、そこまで上等なＡＩではないからこそ逆に躊躇いのない動きでボス「茨の王ロゼル」へと百合乙女達が突撃していく。

「私の見立てによればあのモンスターには攻撃の瞬間に弱点が露出します、であれば少々リスキーではありますがノックバックの確信をもってすれば求められるべきはそう……突撃」

「え、あ、はい」

ヤバい、バグって何か別の挙動し始めたキャラみたいだ。あのほら、システム上は女キャラがいるべき場所になぜか男キャラがいるせいで女の動きをするおっさんみたいな……使ったはいいが日の目を浴びることなく消えていく個人Ｍｏｄみたいだな。

「我々プレイヤーには戦闘力は無い、しかしながらヘイトを集めるタンクとして役割は辛うじて果たすことは出来る」

「そだね」

「であればあとはプレイヤーの手腕、注意を引きつつも狙われない限界を――」

「あ、そこは致死圏内」

やたら饒舌なまま攻撃範囲に足を踏み入れたレイ氏の手を掴んで引き戻す、次の瞬間には待ってましたと言わんばかりに茨の鞭……いや、見れば分かるのだが鞭の先端に何か幼虫っぽい顔が付いているので恐らく芋虫か毛虫の群体と思われるボスの一部が叩きつけられる。

「大丈夫？」

「――ふっ……ありがとう、サンラク君。助かりました」

「え、あ、うん」

なんだこの……ええと、うーん。なんだろう……あと少しで思い出せそうなんだが。

「全軍、突撃。敵を討ち倒し道を切り開くのです！！」

「あ、成る程」

わかった、なんか京極っぽいんだ。それも幕末で比較的調子に乗ってる時のなんかアホっぽいキラキラエフェクトが出てそうな京極。大抵数秒後には有志によって天誅されるので目撃の確率が地味にレアっていう。

ゲームがゲームなら粘着扱いされても文句の言えない連中だが、こ

と幕末に限っては復讐相手が勝手にくっついてきてくれるラッキーな扱いとなる。粘着レイドボスさんは流石にどうしようもないが。

「あー、信徒達。正面からはあっちの軍団が受け持ってくれてるから二手に分かれて左右から敵を挟撃しろ。弱点ではなく触手を狙え、アレ放置するとまずい系だろ」

「「「神の仰せのままに！！」」」

うん、頑張れー……あ、一人食われた、信徒ーっ！！
うちの信徒は団体行動に秀でるが個々のパワーはレイ氏の百合乙女軍団には劣る。なので一人二人死んだところでいちいち気にしちゃいられない、将とは……帥とは時に合理のために非情な選択をしなければならぬのだ。あ、また一人死んだ。信徒ーっ！！

「これ以上の犠牲は看過出来ません、覚悟の刻です……！！」

おほーっ！　スペクリ時代の思い出が何故だかぬるめの熱となって喉と目頭を焼いてくるぜーっ！
まずい、今レイ氏は歴史を作っている……いや、どうなんだろう？　現在進行形の京極が人生楽しそうなら大丈夫なのか？

「お、死んだ」

「やりましたね、サンラク君……完勝とは言い難く、しかし死んでいった者達が無駄ではない勝利です」

「お、そうだな」

俺の見間違いじゃなければ今から二人ほど生贄に捧げないといけな

いっぽいんですがね。
身体は暖まるが血の気は引くような焚火の燃料はどうしたものか……ん？　軍団の中にレイ氏が気になってる奴がいるな……こちらへの信奉が減ってる。成る程。

これマルチで組むとＮＰＣの奪い合いが発生するな？

「よし、君と君で」

信者にあらずんば庇護に値せず、俺は俺を愛する者だけを愛するのだ……よーし我が愛しき信者どもよ、離反者を拘束しろ！　不純を焼いて浄化されるのだ！　なんなら焼ける時に出てくる煙で燻製肉でも作ってやろうか？　遺灰ダイヤモンドみたいな……む、ダメだな思考がデベリオンに汚染されてきた。

「サンラク君、ここは半々で出すべきでは……」

「あー、気にしなくていいよ。なんか裏切りそうなキャラだったし」

悲鳴を上げて芋虫の盛り合わせと一緒に焼けていく信者二人を尻目に、俺はさりげなくレイ氏を誘導してボスエリアを離脱する。うわぁ、なんか後ろから俺への恨み言が聞こえる……すまん、ソロなら追伸まで聞いてもいいんだがレイ氏もいるので無視（ミュート）するわ。

「どうせベータ版はここまでだし戻ろうかレイ氏」

「はい……ふふ、なんだかエスコートされてるみたいですね」

くっ、ナチュラルに気取った台詞を言いおってからにこの人は……あとで悶えても知らんぞ。だが言われっぱなしも性に合わない。

「それではお嬢さん、お手を拝借」

「んぐっひゅ…………え、ええ、喜んで？」

くっ、なんか今日のレイ氏はやたら強気だな……サイガー１００みたいだ。何故かレイ氏の手を取りながら俺達は二層へと戻るのだった……

とりあえずクラウドファンディングの画面が邪魔！　いつになったら消えるんだこれ！！

……

…………

…………

……

サンラクとサイガー０がデスゲーム・リベリオン・オンラインで合流してからちょうど三時間後。

◇

「　　　　」

全ての感情が振り切った先にあるものは虚無、ただそれだけ。枕に顔を埋め、布団にうつ伏せで突っ伏した玲はどこかクリアな思考でそう悟っていた。

「んひゅひっ」

時折、フラッシュバックが起きるのかビクン！　と痙攣したりプルプルと震えている姿は、なんの偶然かほんの数時間前にサンラクと共に倒した茨の王ロゼルを構築する茨芋虫のようで──

(渾身のキメ顔でサンラクに向けた言動の数々が蘇る音)

「ほああああああああっ！！？！？」

冷静になるべく参考にした対象が間違いだった、何故よりにもよって姉と親戚を参考にしてしまったのか、何故それを躊躇う事がなかったのか、何故、何故、何故！　というか明日この状態で会う事になるのか、一緒に登校しなければいいだけだがそれはそれで嫌だ！！

様々な感情が体内で暴れ狂う。口からは奇声として、全身から魚のような動きとして出力されるそれらは斎賀　玲の人生において初めての「黒歴史」である。

と、

「玲、何事ですか玲」

「あ……仙姉さん。いえ、その何でもないです」

「玲、致す事を咎めはしませんが家人や近所の事を慮って……あふんっ」

「〜〜〜〜っ！！！！」

斎賀　玲はこの日人生初めて、実の姉に本気の殺意を込めて枕をぶん投げた。

新たなる歴史の創造者（後書き）

・斎賀　玲（理想）
楽郎を前にしても物怖じせずちゃんと同じ視線、同じ立ち位置で並んで歩けるような立派な女性

・斎賀　玲（現実）
参考にしたのがカップ麺姉としなびたほうれん草であった為に「さも当然なようにキザな台詞を吐きながら誰よりもノリノリで味方を鼓舞し、見れば分かる事を名推理のように指摘する」というなんかアレな感じになった。玲が心の奥底で親戚をどう思っているのか何となく窺える暴走形態である

一流のお嬢様はクソとか言わない（前書き）

箸休め的なものだと思っていただければ

件名：Re：とりあえずやりました
差出人：武田インゲン
宛先：サンラク
本文：感想についてはここで議論して居るで御座るが故、是非サンラク氏にも参加してほしいで御座る
https：／／xxxxxzzzzxxxxxxxxxxyyyyyyyxxxxx

「このURL、クソゲーチャットルームか」

通称「界隈」。最初の頃は匿名制だったと聞くが、何時頃からか住人の個性がはっきりしてきたので名前が表示されるチャット制に移行したとか何とか。

未だ若輩者であるのと、ノリが独特なので普段は基本見てるだけなんだが……今回はちょっと参加してみようか、玲さんがログアウトした後もこっそり徹夜してやってたんだがまぁ大体このゲームの問題点は把握した。このゲームに限れば界隈のお歴々にもついていけるはず！

ええとルーム名は………

◇◇◇◇

デベリオンの是非を上品に語るルーム：第八室

62　：ムラムラ正
はーっ！　お排泄物貴族は傍流から末代までマサクゥルでしてよぉーっ！！

63：シャクシャク伯爵
他人のハーレムをお踏み躙って地面のシミにするのは最高の娯楽でしてよムラムラ正さん？

64：カブ農家
お吐きになったおツバはお飲みできなくてよ？　今からそっちに精神消耗マックスの屈強なマッチョ軍団を送りつけますわ

65：シャクシャク伯爵
お戯れが過ぎましてよっ！　美少女統一にマッチョテロは戦時国際法で禁じられていますわっ！！

66：ペルフェク☆シオン
ファンタジーに法も排泄物もありませんのよ、伯爵の軍団を筋肉比率九割にしておしまいっ！！

◆

「…………お、おん」

想像の十五倍くらい地獄の世紀末を繰り広げるのはやめて欲しい。
食らいつこうとしたら歯を全部砕かれた気分だ……しかし！　まだ諦めないぞ、歯が抜けたなら総入れ歯で対抗するしかねぇ！！

五分程かけて覚悟を決め、いざ鎌倉ァ！！

◇◆◇◇

103：上杉けんちん
結局のところ、いくらベータ版にしてもここまでユーザーを愚弄する運営は過不足なくお排泄物でしてよ

104：武田インゲン

ベータ版だからこそ寛容な心で受け止めるべきでしてよけんちん氏
彼らがクラウドファンディングを求めている以上、個々人の受け取り方はともあれ運営方針だけでお排泄物と決めつけるのは早計と以前から言っていますのよ

１０５：シャクシャク伯爵
しかしながらお二方、それを差し引いてもこの徹底的なまでにユーザーを虚仮にするやり口は流石に目に余りましてよ

１０６：カブ農家
流石にマルチで組ませようとする割に組んだ瞬間に内ゲバさせる仕組みは製品版までに直した方がいいと思いますわね……

１０７：ムラムラ正
ま、内ゲバだなんてお下品でしてよ！　お嬢様なら……なんて言えばいいんですの？

１０８：サンラク
他にあるとしたら抗争とかですわ？

１０９：カブ農家
むしろ略さず内部ゲバルトでもよくなくて？

１１０：上杉けんちん
誰かと思えば武田のところの

１１１：武田インゲン
ワタクシが呼びましたのよ、現役の幕末志士なので良い意見を得られるかと

１１２：ムラムラ正
あらやだ蛮族

１１３：シャクシャク伯爵
＞＞１１２
お下品でしてよ！　否定はしませんけど

１１４：サンラク
えー、みなさまごきげんよう
武田のお姉様に薦められたので一晩プレイしてきたですわ

１１５：カブ農家
なんだか絶妙に変なお嬢様言葉ですわね

１１６：武田インゲン
意見を聞きたいですわ、デベリオンはお排泄物か否か

１１７：上杉けんちん
どれだけゲームとしてマトモでも運営がお廃棄物ならゲームもお排泄物の誹りを受けることは免れませんのよ
さらに言えばデベリオンに関わってるのはあのクソ雌鶏野郎……もといお排泄物雌鶏殿方の吉良ですのよ！

１１８：ペルフェク☆シオン
吉良はね………イースターエッグ産みまくりの悪癖は今も治ってないようですの
第二層の酒場の天井に描かれてる宗教画の天使に混じって吉良フェイスを確認しましてよ

１１９：上杉けんちん

それだけならまだ我慢もできますわ！　問題なのはゲームの仕様ま
でギリギリまで隠す方の悪癖でしてよ！！

120：武田インゲン
吉良は一回罠に引っ掛けてから罠への対策を提示するのが大好きで
すものね……

121：サンラク
申し訳ないけど世代的にあんまり知らない人ですわ

122：カブ農家
若さで概念的にぶん殴るのおやめになって？

123：シャクシャク伯爵
そっかぁ……サンラク君とかは丁度吉良の引退期世代かぁ……

124　：府庁辺座
そもそも吉良と吉村と吉祥寺の3キチトリオが手を組んでる時点で
上杉様の苛立ちは大前提として受け入れるべきものですわよ

125：ムラムラ正
・吉良
お排泄物雌鶏（クソ雌鶏野郎）殿方、最低十個はゲーム内にイースターエッグを仕込
まないと気が済まないおガバおガバ総排泄孔
しかもサプライズが好き過ぎて一回罠にかけてからチュートリアル
開始するおキチ一号ですの
・吉村
恐怖の感情を食んで生きてるタイプの妖怪、困ったらすぐ不快表現
に手を伸ばすおイカレポンチ
しかもお肉的なおグロだけじゃなくて蓮コラみたいなのも大好きな

のでこの方の名前があるだけでそのゲームの危険度が三割増しする
おキチ二号ですの
・吉祥寺
日本中のゴールデンタイムのお茶の間に向けて「一週間に一度は人間関係が崩壊する様子を見ないと生きていけない」「知人の不倫騒動の一部始終を録画した自作映画がある」とカミングアウトして放送事故を起こした真性のおサイコパスおばさま
おそらくこの三人の中では最も危険なおキチ三号ですの

126：武田インゲン
悪癖さえなければ名クリエイターなのが本当に厄介ですわね……

127：サンラク
控えめに言って蠱毒か何かですわ？

128：上杉けんちん
ゲームの出来と悪癖でプラスマイナス赤字にしてるから余計腹が立つのですわ！！

129：ペルフェク☆シオン
人間関係の崩壊描写において吉祥寺おばさまより優れた存在に心当たりがないくらいには悔しいけど評価せざるを得ないですわ

130：ムラムラ正
フルダイブしててリアルの身体がメンタルに引きずられて吐き気で強制ログアウト食らったのは後にも先にも吉祥寺がシナリオ担当した「どこまでも澄んだ赤い涙」だけですの

131：シャクシャク伯爵
タイムスリップして丁寧に丁寧に主人公のアイデンティティを端か

ら端まで千切って潰すやり口は誰がどう擁護しようとサイコパスですわよ
よりにもよって主人公＝プレイヤー相手にそれをやるあたり真性（マジ）のやつですの

１３２：武田インゲン
ちょっと話が逸れすぎてましてよ、あくまでも評価すべきはゲームであって製作の人間性ではないのですわよ

１３３：サンラク
一理あるですわ

１３４：府庁辺座
一理あっても完全に無関係と断じるには我々は傷を受けすぎましてよ

１３５：カブ農家
クイーンズセキュリティはＰの嫁が出しゃばってゴミになりましたわねぇ……

１３６：ペルフェク☆シオン
あれ嫁じゃなくて不倫相手ですわよ
クイーンズセキュリティの一件で嫁にそれがバレてドロドロの修羅場になったんですの

１３７：ムラムラ正
吉祥寺大歓喜案件でしてよ
というか吉祥寺が暴露した自作映画がそいつらの一部始終だって噂ですわ

１３８：シャクシャク伯爵

最終的に嫁に親権も慰謝料も根こそぎ持ってかれてクイーンは守れても自分は守れなかった、って教訓として語り継がれてあの話はおしまいなんですの

139：カブ農家
あの後二作出してどっちもすっ転んでから完全に消息不明ですわね
……ドベワンレーサーも土下座ドライブもワタクシ達的には楽しめましたけど

140：サンラク
話がすぐ逸れるので先に総評出しちゃうですわ
とりあえずこのゲームの総評はやっぱり製作の悪意があからさま過ぎて萎えるって点が全てだと思うですわ
まさかプレイヤー協力型じゃなくてシーズン単位でトップテンを決めるロワイヤル型とは思ってなかったしゲーム内でシステム的な説明が一切ないのはちょっと不親切が過ぎるですわ
でも途中からPvPに移行しつつその方法がプレイヤー同士の殴り合いじゃなくて総数が減っていくNPCの奪い合いにシフトしていくのはちゃんと個性として成立してるですわ
幕末との違いはずばり運営とユーザーの意識共有ですわ、あっちは運営が大々的に掘った穴にユーザーが笑顔で飛び込むけどこっちは製作が掘った穴を隠すのがお排泄物ですわ
というかマトモなUI作れる方を入れれば大分マシになる予感がするですわ

141：カブ農家
ちなみに一回でもゲーム内で死亡するとノーデスプレイヤーから知覚されなくなりますわ、流石にシーズン終わるまで出禁にはしなかったところだけは3キチの理性を褒めて差し上げますの
カブが豊作でしたので200万

１４２：府庁辺座
死人に口無しでしてよ
でも少々整合性がおガバですのでそこは製品版に期待ですの、十万叩き込みましたわ

１４３：ペルフェク☆シオン
ロード中にお亡くなりになったＮＰＣの亡霊が枕元に立って恨み言を言ってくるのは流石にお排泄物ですわ、お嬢様次第ではノイローゼでしてよ
二千円入れましたわ

１４４：サンラク
捨てた駒を悔いるのは手駒が足りない時だけ、とは友人の言葉ですわ
三千円くらい入れとくですわ

１４５：シャクシャク伯爵
言いたい事は分かるけどそれ言っちゃダメなタイプの言葉ですわね
……個人的に結構ツボなので製品版がお上品でもお排泄物でも買うので五万

１４６：上杉けんちん
ちなみにロード中の枕元亡霊ですが検証した限りでは五十人を超えてまだ増えてましてよ
今後の改善次第ですわね、お排泄物ゲームになりそうなのでそっち方面の期待も込めて１０万

１４７：武田インゲン
最終的にミニライブみたいなことになりそうですの、５０万くらい入れておいてあげますわ

あと45点

148：サンラク
一切手心のない採点にちょっと泣きそうですわ

149：上杉けんちん
評論文としては50はあげてもいいと思いますわよ
ちなみにこれクラウドファンディングの特典はなんですの？

150：武田インゲン
色々あるけど十万超えるとボスキャラのデザインに関われますの、
でもメインデザイナーが吉村なのでおグロフィルターかけられるの
は覚悟した方がいいですわね

一流のお嬢様はクソとか言わない（後書き）

3キチはクソゲー職人と言うよりアクの強いクリエイターって感じですわよ

この中で吉村と吉祥寺はりっちゃんと面識がありますの

でもシャンフロメンバーに呼ばなかったたって事はつまりそういうことでしてよ

界隈は良いね、なんだか自分が凄くゲームに精通しているように錯覚できる。とはいえ武田氏やカブ農家氏みたいな趣味に対するリミッターが完全破壊されている方々を除外したとしても他のお歴々にも及ばない若輩者だからなぁ……やっぱ最新作からクソゲーを見極める嗅覚を鍛えるべきなのだろうか。というかなんで皆さんお嬢様言葉だったんだろうか？

「くぁあ…………あ、玲さん」

「おはゃ……ひゃよう、ございます……」

「………？」

何故か両手で二つのジュース缶を両頬に押し当てている玲さんに首を傾げつつ、歩く道すがらで話題に上がるのはやはりというかデベリオンについてだった。

「……つまり、あれ数ヶ月単位のＰｖＰみたいなゲームだったんだよね」

「そう、だったんですね」

「そうだったんだよね……あの、玲さん寒くない？」

「丁度いいので、大丈夫です……」

「もしかして風邪とか？」

「いえ、風邪では……なかった、です」

しばし沈黙。

「あ、あのっ、ですね……その、昨日の……こと、なんですけれども」

「ああ、あのやたらテンション高かった……」

「はうっ」

ぺちっ、と玲さんが両頬にジュース缶をぶつけ直した。この寒空の下、随分と斬新な気つけ方法だな……。

「いやその、ええと、あの、あれは……」

「いや、皆まで言わなくていいよ……人間誰しも、そういう時期を経て大人になるんだよ……」

あの頃は若かったと笑ってやるのが未来から過去に向けてのせめてもの手向けだ、笑えないタイプの思い出はもはや傷と呼ばれるものになるからな。

「いえ、その……はい、ええと、できれば……忘れていただけると」

「いやどうだろうなぁ……インパクト強かったし」

「ええっ！？　ら、楽郎君っ！　お、おちょくってませんか！？」

「イヤマサカソンナコト」

他人の若い黒歴史は大概エンターテインメントだけどいやまさかそんな、ははは……正直めちゃくちゃ面白かったよね、うん。

「や、やっぱりおちょくってますね！？」

「いや、だってなんかいきなり京極とかみたいな口調になったらそりゃ面白いでしょ……」

「くっ……ううう、」

普段以上に顔を赤くした玲さんがジュース缶で頬を冷やしている姿にブラックヒストリー・ホルダーの先達としてはやはり微笑ましいものを考えつつ、気づけば校舎が視界に入るくらいには学校に近づいていた。

「うう……生霊が楽郎君の枕元に飛んでいきそう、です……」

「何、源氏物語ネタ？　六畳一間すやすや所みたいな名前の……」

「ろ、六条御息所（ろくじょうのみやすんどころ）のこと、ですかね？」

「そうそれ」

今ちょうど古典でやってるしタイムリーでインテリジェンスなネタだ……

「ああいう作品って今ではオカルト扱いなものも当たり前のように信じられてたっぽいのが読んでて楽しいよね」

生霊、オカルト。

「そう、ですね。六条御息所は……その、強い想いを抱えて、生霊になってしまう女性ですから。私だってこの大きな感情で生霊に……おお？　お、大きな、感情……で………ほぁうぁっ！！？」

感情。

何か今、爪の先端が引っかかった。そしてそれはなんの偶然か外れることなくしっかりと「それ」に食い込んでいる。あとはそう、手繰るだけだ。

「ち、違っ、違うんです。この場合の大きな感情というのはええとあのそのいやでも違うわけでは違う違うええとあのはの、その、ええと、あの」

「………」

冥響のオルケストラ。
本体は音楽プレーヤー、過去の再現と現在の反映。奴はなにかを問いかけている、何を？　いいや違う、今気づいてしまった。過去から現在に問いかけている、それってつまり過去が未来に問うている

んじゃないのか？

「こ、この場合の強い想いというのは憤りというか、いえその本気で怒ってるわけではなくあくまでも会話の流れとしての掛け合いといいますか」

アンドリューの言及。

あの音楽プレーヤーはアンドリューの私物だが、厳密には譲り受けたもの。アンドリューに渡したのはなんか知らないおっさん、多分こいつは関係ない。アンドリューに関係あるとしてもおっさん個人ではない……いくらシャンフロとはいえ仮にもゲームだ、重要な個人ならもう少し名前とか出てもおかしくないわけで。

――その音楽プレーヤーは人類種が星の海に船出する以前に作られ、そして千年単位の経年劣化を防ぐ保存加工を施す「前」に紛失したものだ。

「…………！！！」

爪先がさらに深く食い込んでついに指が「それ」に引っ掛けられたような寒気のような電流が全身を駆け巡る。

仮説、推測、予想。だがこの理屈なら恐ろしく筋が通る、いや待て嘘だろこんなしっくりくるのか！？　いやそれしかない、つまり……

エリーゼ・ジッタードールはブラフだ。
少なくともオルケストラという存在の性質を考える上でエリーゼを重要視するとドツボにハマる。なんつークソみたいなトラップだ、１００点満点をくれてやるぜ。
「だからその、あくまでも楽郎君が話題として出したからこそ私も乗った一面があるというか……」
「玲さん」
「ひゃはいっ」
脳味噌の中をエンドルフィンがカーニバルしているのが自覚できる。今この瞬間、ずっと全貌の分からなかったそれ……指の全てで掴んで引き寄せたからこそ分かる、「真相(それ)」にたどり着いた興奮のままに家まで逆走しなかった理性を褒め称えたい。
称賛の感情はいつしかそのきっかけを与えてくれた玲さんへの感謝へと変わり、俺は特に深く考えずに玲さんの両肩に手を乗せる。
「ほょっ……ほ、ほ……」
「ありがとう、君は俺の神様……いや、女神様だ」
「み゛ょっ」
おっともう学校か、今すぐにでもシャンフロにインしたい俺にとっては千年収監される牢獄の入り口にしか見えないがそれでも行かねばならないのが学生の辛い所だ。

「じゃあ玲さん、今日一日学校頑張ろうな！」

「　」

待ってろオルケストラ、帰ったら今日一日学業に全く専念できない恨みをぶつけてやるぜ。

◇

その日、斎賀　玲は瞬間最大体温３８．４度の熱を出して早退した。

「解」に手を伸ばす（後書き）

斎賀　玲：HP100

肩を掴まれて至近距離で目が合う　－200

これ以上なくワクワクした顔が近い　－500

え、顔が良い……　－9999

あ、目がキラキラしてる……　－99999

「君は俺の女神様だ」　－9999999999

FATALITY………

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の一（前書き）

やっと……長かった……ここまで……あまりにも……

そもそも、俺はずっと勘違いしていたんだ。
あの音楽プレーヤーはアンドリューにとって何か大きな意味があり、そしてエリーゼ・ジッタードールがその鍵を握っているのだと思っていた。だがベヒーモスでほぼ本人なアンドリューがそれを否定した、それによって思考の方向性を変えることができたわけだ。
アンドリュー・ジッタードールにとってあの音楽プレーヤーは後世に残してやろうと思う「程度」には愛着のある道具……それ以上でもそれ以下でもない。
ではオルケストラとはなんなのか？　簡単な話だ、オルケストラの正体は音楽プレーヤーだ。
「数百年間、電子機器を使い続けることは可能か？　いいや不可能だ」
そして一人の人間が数百年間存命して音楽プレーヤーを所有し続けることもまた不可能。つまりあの音楽プレーヤーは……
――幾度となく「修理」され、数多の所有者の手を渡ってアンドリューのところに辿り着いた継承とバトンタッチの結晶だと言う事だ。
テセウスの船だったか、あれと同じ原理であれとは真逆の思考を要するって事だ。即ち「生産された時のパーツが一つも残っていない

程に修理され続けた音楽プレーヤーはされど「音楽プレーヤー」として存在している」とでも言うべきか……これだけなら意味の分からない謎掛けだがこれがオルケストラに関わってくるなら話は変わる。

オルケストラ正典「最終楽章」。
消えた楽団の代わりに感じた「視線」と「気配」とは
リヴァイアサンで得た神代人類と現代人類の差異とは
この世界の根本原理を踏まえた上での「オカルト」とは
今日一日の集中力と学校生活を犠牲に導き出した「冥響のオルケストラ」の正体、その解答は……

「あの音楽プレーヤーが生産されてから今に至るまでに関わってきた神代人類達の意志……いや、遺志。それこそがエリーゼを「歌姫」として展開された「楽団（オーケストラ）」の正体であり、この惑星に来る以前の存在が展開する「劇場（オルケストラ）」の正体だ……実証はまだだけどな」
「素晴らしい考察だ、では早速検証せねばなるまい」
「オルケストラ関連のまとめ役はミレィさんか。この時間だともうインしてるかな、それともリアルの方でメール送ったら反応するかな」
流石は【ライブラリ（考察厨）】、恐ろしく話が早い。
九層攻略の為に準備していた磐斎氏とキョージュの二人を見つけた俺は彼らをとっ捕まえると一日を犠牲にした考察を語り、果たして

俺よりも数十倍は賢いだろう考察厨達は俺の「説」を有力としつつもさらなる補足を勝手に加えながら行動を開始した。

「成る程、この世界の根本原理は生きた思考に由来する。であれば死者の……いや、この場合は死と言うよりも「過去」と言うのが適切か。本来であれば生死で論ずる以前の存在の意思を実行するもの……確かにそれは紛う事ないオカルトだろう」

「ですがキョージュ、そうなると正典と偽典の違いに疑問が出てきます。過去の人物がなんらかを問うと言うのであるなら分ける必要性が無い」

「恐らくだがオルケストラは複数の「意志」が奇跡的に混じり合った複合体なのではないかな。正典と偽典はオルケストラ側からのアプローチが違うのだろう」

「この段階で論じても答えは出なさそうだ、僕らとしては今すぐにでもオルケストラ攻略を始めたいところだが……どうやらサンラク君はここでやる事があると言った様子だね？」

考察中にいきなりこっちにでかい矢印を向けてくるのはちょっとやめて欲しい。びびる。

「え、あ、うん。この仮説には一個でかい穴がある」

「神代……いや、この惑星で滅びるまでの期間を神代と定義するなら神代「以前」人類と言うべきか。彼らの目的だね？」

「ウィッス」

仮説の穴についてなんも言ってないのに既に把握されている……だが磐斎氏の言う通りだ。俺の説が正しい場合、そもそもその「音楽プレーヤーに関わってきたはるか過去の人物達の意志」はオルケストラを通して何を問い掛けてきているのか。

オルケストラは己を観測者と言った。比較の果てに答えが出るのだとも、ここから先が纏まらない。そもそもオルケストラに自我はあるのか？　何を観測している？　比較、つまり力比べの果てに結論が出るなら何故あの時忖度ガードが発動した？

今だから分かる、あの忖度ガードは「問い」に答えていないから差し込まれた妨害だ、逆に言えばに問いに答えて初めて勝利条件が満たされる。

「と、すれば必要な条件は……」

「身元を洗い出す事ではないかね？　少なくともここはベヒーモスだ、オルケストラの本体たる音楽プレーヤーがベヒーモスの船内にあった頃の所有者を調べる事はできるのではないかね？」

「まぁ、メタ的にも調べられそうですね」

「そこを指摘するのは無粋だよ磐斎君」

そう、何を問うているのかではなく具体的に誰が問いかけてきているのかという視点だ。そもそもオルケストラが神代以前人類の疑問を問う代理人だとしても具体的に誰に何を問えばいいのか、そして何より……征服人形が単にアンドリューの趣味と執念の産物というだけで終わるとは思えない。

サイナが劇場内にいた時、オルケストラが作り出した「サンラク」の動きには露骨な変化があった、無関係ではないにせよアンドリュ

ーという存在はオルケストラを構成する成分としてはそこまで大きくない……では何故？

俺の予想が正しければ、全ての答えはベヒーモスの最奥にある。だからこそ俺達はベヒーモスから逃げてはいけない、最後の試練……詳細不明の一時間サバイバルの答えをまずは見つけ出さないとな。

というわけで、イかれた面子を紹介するぜ！
見た目は聖騎士、中身は完全ヒーラー特化！　毘猩々　磐斎氏！！
辻斬り（ヒール）上がりの手腕は軽戦士の高速機動にすら回復を合わせる事ができるとか。まぁ俺他者からの魔法系大体弾くから意味ないけど。
見た目は魔法少女、中身はバッファー！　キョージュ！！
一応自己バフから後方火力としての活躍も見込めるが基本的には支援型だそうで。まぁ俺他者からの強化系も大体弾くから意味ないけど。

見た目はいぶし銀な重戦士、中身は……うん、なんだろうね。エターナルゼロ！！
ベヒーモス突入時から妙な存在感を放っていたあのプレイヤーである、アクセサリー枠を一つ使ってでもおしゃぶりを採用する「凄み」はただのタンクに収まらない何かを感じさせる……あまり関わり合いになりたくないタイプだがどこか鯖癌イズム（サバガニズム）を感じさせる男だ。

「この先に揺り籠がある、そうだろうツチノコさん」
「いや知らんけど」

「魂がオギャってんだよ……」

「そうか……」

イかれてやがる。

そうは思っても口には出さない、それがダンディズムだ（聖杯効果で女体化中）

本当ならここに玲さんもといレイ氏がいれば完璧なんだが……やはりあの顔の赤さは尋常ではなかったらしく、今日は早々に早退したのだと得間さんから聞いた。何故俺にそれを伝えたのかは分からない、だが得間さんと親しく話しているように見えたのかまた尋問されたのは勘弁してほしい。

そろそろ「熟成雑ピマル秘爆弾情報三連星」を開放する時が来たのかもしれない……だがあれは割とガチめに雑ピがマジギレしかねない諸刃の剣、取り扱いには細心の注意が必要だ。例えばそう、女装……いやなんでもない。

さぁ行こう、いざベヒーモス最終攻略！！

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の一（後書き）

エタゼロの友人はちょっと距離置いてる

「つまり「母性」ってのは心の在り方であり……母と子の双方が向かい合って初めて成立するんだ」

「うん」

「ただ子がオギャればいいってもんじゃねぇ、ただ母が愛を押し付ければいいってもんでもねぇ。子に対して母が真摯に向き合うように、子もまた母に対して真摯な対応をする……それがオギャるってことだ。そうだろうツチノコさん！！」

「そっすね」

「あんたの素振りからは女アバターで動き慣れてる感が伺える」

なんで分かるのぉ………？

「ネカマって感じじゃあなさそうだが……俺はネカマ相手でも向こうが真摯にバブみを見せるならオギャるに不足ないと考えている」

「そっかぁ……」

何故俺はゴツい赤ちゃんの人生哲学を聞かされているのだろう。何故俺だけが、と言う疑問に対しては考察厨二人が調べ物に夢中なので俺がエターナルゼロ……エタゼロの話し相手になったから、と答

えることができるが。そもそも何故エタゼロは嬉々として自分の性癖を語っているんだ……そういえば鯖癌の時も性癖を聞かされてた気がするしスペクリの時は大体性癖と殴り合いしてたな………

「実際のところエタゼロはオギャれるなら相手の年齢とかは関係ないのかよ？」

「貴賎と優劣はねえが上下はある。女教師にオギャりてぇ……ガキの頃からそう思ってた」

「あっ、そういう………」

何故エタゼロがこんなに大ハッスルしていたのか理解してしまったが、これは是非考察厨共にも教えてやるべきだろう。オラっ！　未知が解明されたぞっ！！　赤ちゃんから逃げんな！！

……と叫べれば苦労はないのだが、生憎俺は心優しいのでせめてもの情けとしてここで食い止める事にしよう。

「おーい、なんか分かったのかよー」

「ああ、全容とは言い難いが概ねは」

マジか、俺はなんだこのモンスター喧嘩売ってんのかくらいにしか思ってなかった。当然の如く見たことないタイプのモンスターばかりだが、刻傷の効果は問題なく適用されているらしく、雑談に興じてこそいたがこれでも俺とエタゼロはさっきから結構戦っている。

「残り四十分、長くても十分で考察を頼む」

「五分とかかからないよ、この第九階層はこれまでの階層で得られた

知識の全てを利用して挑む。そういう仕組みをしている」

「と、言うと？」

「何体か見覚えのあるモンスターがいてね、恐らく九層以前の資料の中に記述のあったものだ」

……それはそれは。控えめに言ってもクソ厄介だな？　あのクソほど積み上げられた設定の山……ライブラリの大半を情報量で階層に縫い付けたあそこから適切な情報を集めろと？

「そこで活用されるのがこれだ」

「………何それ」

「ブーケ・パズル第三段階（ランクスリー）で購入可能になる端末をアップデートすることでベヒーモス内部に限って他階層の情報にアクセスできる。恐らく完全制覇で船外での使用が許可されると見ている」

ブーケ・パズル………えー、あっ！　あれか！　あー思い出した。ベヒーモス版アンバージャックパスね、はいはいはい。リヴァイアサンと違って半分ただのダンジョンみたいな感じで攻略してたからさっぱり忘れてた！！　どちらかというと猿へ天井に吊るしたバナナを見せて経過観察するようなリヴァイアサンと違ってこっちは単純にテストっぽいので船内通貨はマジでただの買い物にしか使わない。だがこういう使い方もあるってのは納得だ。

「で、図鑑（カンペ）を見ながら調べた結論は？」

「さっぱり分からん」

「おいコラ」

「ははは、だが見えてくるものはある。この階層の環境は奇妙なほどに整いすぎている」

「一応人工だからじゃねーのか？」

「エターナルゼロ君の言う通りここは人工の自然環境だ、だが……なんというかな、モンスターの強さが意図的に序列つけられていると言うべきか」

「つまり？」

意図的な強さの序列付け……人工的な自然環境…………

「推測としては三つ。モンスターの全滅、生態系の変更、いずれかのモンスターが秘匿するクリアアイテムの取得……一つ目の可能性は低いと思うが、否定もしきれないね」

「んー……」

確かにモンスターの全滅はなさそうだ、一時間で終わるとも思えない。となれば三つ目とかか？　例えば……鳥型モンスターが温める卵の中に紛れ込んだクリアアイテムとか。いや、その場合下の層の情報が役に立たない。となれば……

「……二番目、か？」

「僕も同意見だよサンラク君、恐らくだけど……一番強いモンスタ

ーを倒して生態系の頂点に立つ、とかじゃないかな？」

思ってたこと全部言われたわ。おのれと流石の両方の感情が混ざったマーブルな視線を磐斎氏に向けておく。

「根拠を聞かせてもらえるかな？」

「やはり明確に序列の定められた環境ですね。仮に強さのランク付けをした場合、あまりにも綺麗な階段構造になっていますから……同じ強さのモンスターがいないと言うのはやはりそう定められたものだからでしょう」

ご丁寧に下階層で調べられるモンスターの情報は危険度別に分けられているらしく、先程俺とエタゼロが必死こいて倒した六本足のサイみたいなやつが上から三番目くらいに危険なモンスターらしい。その割にはすぐ倒れたけどなぁ。

「一時間以内に倒せるよう体力調整がされたモンスターの中から最も危険度の高いモンスターを見つけ出し、打倒する……成る程、最終試験としては妥当と言えるね。となると他の階層での行動も影響するのか……」

「考察中悪いが五分だ、要するに一番強そうなのを見つけ出せばいいんだろう？」

「その通り、加えて言えばこのベヒーモスで最も危険度の高いモンスター群にはある特徴がある」

「特徴？」

……

…………

……………

ベヒーモス最大の特徴、それはやはり生命の創造だ。
二号人類のみならず、端数を切っても３０００年の間続けられた実験によって生み出されたモンスターの数々はもはやベヒーモスそのものが一つの環境を形成するに至っている。
基本的に人工で繁殖させて成体はインベントリア技術を応用したコールドスリープで保存されてるらしいが。控えめに言っても完全にスペースオペラ・ディストピアである。
まぁそこはこの際どうでもいい、「象牙」がマッドサイエンティストでもオギャる事はできるとエタゼロが自信満々に言ってたので大丈夫なんだろう。

問題は「象牙」作、ベヒーモス産モンスターの中でも「危険度（レベル）１０」に指定されたモンスター達だ。
そいつらはあるモンスター達の性質を後天的に再現する為に行われた実験の産物にして、「彼ら」の性質を複合するというイカレポンチなコンセプトの中で産み落とされた失敗作。

「曰く、無尽のゴルドゥニーネの増殖性質と夜襲のリュカオーンの複製性質を兼ね備えた無限畜産生物として生み出されたそうだ」

「頭おかしいよあの割烹着フェアリー……」

「それでもそこに母性があると俺は信じてるぜ」

泡沫と消しとけそんな期待、奴に甘えて次に目が覚めたら化け物に改造されてても知らんぞ俺は。

「失敗作ナンバー1、「無尽臓マザー・グース」だそうだ」

「腹を捌いたらあっさり死ぬかな」

「金のガチョウか、中々洒落たギャグだねサンラク君」

ウィンプとリュカオーンをどう合体事故させたらケツから大当たりしたパチンコみたいに卵がボロボロ出てくるガチョウになるんだよクソがーーーっ！！！

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の二（後書き）

・無尽臓マザー・グース
御大層な設定抱えてるけどユニークモンスター達ほど特殊な存在ってわけではなく、あくまでも「それっぽい挙動」をするだけなのでどちらかと言うと性質はブライレイニェゴに近い存在。
原理的には周囲のマナを喰い尽くしてエネルギーに高速変換、単為生殖しまくってるだけ。しかも生産に特化し過ぎて体力が著しくショボい。とはいえ地上に解き放つと爆速で環境崩壊するので厄介さはレイドモンスター並。
そもそも主義も思想も誇りも持たないこいつがユニークモンスターになることはない。そして「象牙」がそれに気づくことも。
ちなみに卵はとても美味しい、ベヒーモス第十階層で十二個１パックで販売中。

無尽臓マザー・グース。
軽自動車サイズのガチョウは他のモンスター達が割と活発に動き回っている中で、そいつは大樹のうろにひっそりと隠れていた。軽自動車サイズの鳥が隠れている木なのでやけに目立っていたが……いやまさかドンピシャとは。

しかしこのガチョウ、戦闘態勢に入った瞬間にケツ……いや総排泄孔？　からマシンガンのような勢いで爆速産卵をおっぱじめやがった。
雑に地面に叩きつけられた卵が割れ、中から既に戦闘準備を終えた雛鳥が飛び出してはこちらへと襲い来る……成る程、見た目の割に中々厄介な性質だ。マシンガンの如く産卵するということはマシンガンの如く雛が生まれて襲ってくるということだ。

ミツバチはスクラムを組んでスズメバチに対抗する、一羽一羽は大したことない敵だが囲んで殴れば雛鳥の大群はプレイヤーの一人や二人は簡単につつき殺す事ができる。
雛鳥は単体では雑魚だが群れる事で潜在的な脅威度はレベル１５０オーバーのモンスターにも匹敵すると言えるだろう。群体型のモンスターとしてオーソドックスな性能をしつつも供給が止まらないという一点に於いてこいつは生態系の頂点に位置しているのだろう。

だがマザー・グースには３つの不幸があった。

まず一つ目、それは怒涛の産卵能力の代償として本体の性能が著しく低い。産卵にエネルギーだけではなく挙動の大半も持っていかれているためか、奴はほとんど動く事ができない。

二つ目、雛鳥の耐久度が低いということ。確かに雛鳥が津波の如く襲いかかってくるのは脅威だが……当然、雛鳥の嘴が通じない相手を倒す為にはそれなりの手間と時間がかかる。そしてその嘴の通じない相手はただ突っ立ってるわけじゃない。

そして三つ目。

「雑魚が」「大量に」「いち戦闘中に出現する」……条件は満たされた。奴は最悪の相性ゲーを引き当ててしまったのだ、全部まとめてつみれ団子にしてやるからかかってこいやァ！！！

◆

「フハハハハハハハ！！　破壊衝動が満たされていくゥーっ！！！」

R．I．P．と別離なく死を憶ふの半永久虐殺コンボに加え、封雷の撃鉄・災による触るな危険状態、そして過剰伝達を使わない代わりに回転力を得る事でより無双パワーを強める兇嵐帝痕・極による大回転……俺は今、津波の如く迫る雛鳥の大群に対して秒間１０キルのオーバーキル・ジェノサイドで対抗していた。

「頼むぞエタゼロ！　雑魚は任せろ！！」

「任された！　援護頼むぜ先生方！！」

無尽臓マザー・グースの物量戦に対する俺達の戦法は至ってシンプル。

単独で雑魚の虐殺ができる俺が雛鳥を引きつけ、その間に磐斎氏とキョージュの援護を受けたエタゼロが本体を叩くというものだった。

そして今、別離なく死を憶ふをフルスイングしてキルスコアを稼ぎつつ、雛鳥に群がられて削られるダメージ量をそれ以上の回復量で相殺しながら雛鳥津波と拮抗している俺を囮として親鳥たる本体へと突っ込むエタゼロは……なんというか、あまり見た事のないタイプの戦法を使っていた。

「ガチョウだか七面鳥だか知らねえが、俺にとってはカモだぜマザー・グース！！」

エタゼロは何も握ってはいない、所謂徒手空拳……というわけでもない。オイカッツォみたいな無装備の素手ではなく格闘武器を装備している。だがそれでも素手に見えてしまう理由はただ一つ、その拳があまりにも防具たる鎧とマッチしてるからだ。

一見すれば鎧の一部にしか見えないそれは武器というカテゴリでありながら特定の防具との同時運用を前提としているから……言うなればレイ氏の剣と鎧のようにセットで真価を発揮するもの。

では武器を持たない重戦士の甲冑が繰り出す「技」とは何か。

「重装角力（フルアームドレッスル）！！」

轟と全身の捻りを加えて振り抜かれた鎧の二の腕部分が巨大ガチョウの首に直撃、基礎スペックが低めの頸椎と支援強化を存分に受けた一撃の拮抗はそう長くは続かず……

「おおぉ！　「タロス・ラリアット」ォ！！！」

ガチョウの首に炸裂した重量級のラリアットが軽自動車クラスの巨体を吹っ飛ばすという冗談みたいなノックバックを実現……これがエタゼロのバトルスタイル、距離にして1メートルという極めて狭いレンジに限定した瞬発力で人外の存在に格闘戦を挑む闘士(グラディエーター)系統隠しユニークジョブ「鎧闘士(アームドレスラー)」によるファンタジープロレスである。

使用スキルのほとんどにノックバック効果が付与されるとかいうとんでもないジョブだが、代わりに取得条件がダル過ぎるとは本人の談だが……それを差し引いてもただでさえ濃ゆいエタゼロのキャラがさらに濃くなる活躍っぷりだ。
マザー・グースの性能が低いが故にサンドバッグに出来るのも理由の一つだろう……何せ本来迎撃に回る筈の雛鳥は群れると刻傷の強者判定に引っかかるらしく、その殆どがこっちに流れてくる。そして多少つつかれた所で全身鎧のエタゼロにとってはカスダメにすらならない訳で。

「オラオラどしたぁ！　まだまだ攻撃は続くぞカモ野郎！！」

延髄斬りにエルボー、まんまプロレス技を巨大ガチョウにしかけていく重装甲のおしゃぶり咥えたレスラー……ダメだ、頭痛くなってきた。

「チッ、プロレスが見えねーだろうがつみれの材料共が！！」

どうも追い詰められると産卵速度が上がってくるらしく先程から俺は殆ど埋まっている状態に近いのだが、貪る大赤依戦をも凌駕するキルスコアの溜まりっぷりでR．I．P．も別離(メメント・モリ)なく死を憶ふもフルスロットルで効果を発動し続けている……通常の半裸状態だったら既に三十回は死んでそうだ。

「キョージュ！　後何分だ！！」

「十分！　いや九分だ！！」

「トばせエタゼロ！　ロスタイムは認められないだろうからなぁ！！」

「応よ！！」

もはや素手でも雛鳥を粉砕できる程の強化倍率、エタゼロの奴がプロレスなら見せてやるぜ俺のルチャ・リブレ！　そんな詳しいわけじゃないが三羽纏めて砕け散れパターダ・コン・ヒーロ！！

……

…………

………………

『ああ、愛しき我が子達。身一つで世界に投げ出されながらも貴方達は力を得て私のもとに戻ってきました。そして今……学び、培い、

この箱庭の頂点に立ちました』

最終的に俺とエタゼロによる双方向ラリアット(クロス・ボンバー)を食らった無尽臓マザー・グースが斃れ、母と命を共有していたらしい雛鳥達もまた砕け散り……どうやらキョージュ達の考察は正しかったらしく、「象牙」がその姿を現した。

『貴方達人類はかつて、万物の中で最も長じた存在として霊長の名を掲げていました。ですがこの星で敗北した彼らは滅び……しかし貴方達次世代の人類を遺しました』

「象牙」の言葉は揺り籠に眠る赤子に語りかけるように優しく、それでいて独り立ちする若者に語りかけるような寂しさも混じっていて。

『人類が「霊長」の名を再び掲げる事……それが私の切なる願い。どうか人の可能性を見せてくださいね』

「だが時には赤子のように母に甘えたっていい……そうだろう？ママ」

真面目な会話中に笑かすのやめて貰えますゥー？

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の三（後書き）

・鎧闘士（アームドレスラー）
旧大陸に存在する全ての闘技場で開催される
対人、対モンスター全てで優勝し、さらにＮＰＣの「スポンサー」
を得る事で解放される最上位職業にして隠しジョブ。このジョブを
解放すると鎧とセット運用で装備可能な「闘拳」武器を装備可能に
なる。
この闘拳カテゴリは対応する鎧と同時使用する事で拳のみならず足
や全身を使った攻撃にも補正が乗る。
「重装角力（フルアームドレッスル）」はダメージ倍率が際立って高いわけではないが全ての
スキルに大なり小なりノックバックが付与されている為、恐ろしく
有能……に、思えるが三人以上で同じ敵を相手に戦うとノックバッ
ク倍率が低下する上に、ソロだと吹っ飛ばして自分の射程からも外
れてしまうという少々トリッキーな技だったりする（二人ならギリ
ギリ許される、それならタッグマッチだからね）
あとスポンサーになったＮＰＣの商会で何かを買う時に特典がつく、
地味にお得なジョブ

ちなみに鎧闘士に就職すると闘技場に出場した時にリングネームで
呼ばれるようになる（自分で設定可能）
エターナルゼロのリングネームは「ベイビーハート」

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の四

冥響のオルケストラは音楽プレーヤーである。
冥響のオルケストラは神代の人類……否、神代以前の人類と密接な関わりがある。
冥響のオルケストラは………その「神代以前人類」に対する物語だ。

◆

「……………」

一旦ログアウトした俺は深夜三時にドールベース……もとい、オルケストラの座す扉の前で集合する約束をキョージュ達と決めていたのでその前に色々と準備をする。といっても缶を一本空けるだけなのだが。
オルケストラは長期戦前提だからな、リボルブランタンよりもトゥナイト……いや、ここはあえてアンデッドにするか。生者専用のこのライオットブラッドを飲んで遥か過去の亡霊達と相対するってなんかカッコいいし。うーんさわやかなミント的風味。禁忌の摂取法は強力だけどなんでもかんでも混ぜりゃいいってもんじゃない、素材そのままの味わいあってのミックスだ。

「さぁて………」

ベヒーモスで欲しい情報は獲得できた。十層で検索できる情報はオ

ルケストラという存在を解き明かす上で極めて重要なものだ、エタゼロは何故か十層に自作のベッドを作って寝ていたが……いやマジでよく分からない、よく分からないままにフレンド登録したがますます奴という存在の理解から遠のいていく気がしてならない……エタゼロ、一体奴はなんなんだ。鯖癌にいそうな雰囲気もあるが鯖癌とは違う異質さを感じる。

いや、もう気にするまい。奴と俺とでは見ているものが違う、目的が違う。あと性癖も全然違う。

「一時半か……まぁいいや、ゲーム内で色々片付けてれば三時になるか」

◆

「ようサイナ、探し物は見つかったのかよ？」

『この私がいるのだから、見つからないということはあり得ない』

出たなドルオタの亡霊め、俺の中ではお前も「黒」だぞ。

「ていうか何を探してたんだよ？」

「回答：………否、回答拒否」

「あん？」

「その答えはオルケストラに提示する際に判明するでしょう」

言うようになったじゃねーかサイナ、そしてジャストタイミングだ。

「これからオルケストラに殴り込みをかけるんでな、ここで拒否っても一時間ちょいで分かるだろうよ」

「…………成る程、了解」

マジかお前と言わんばかりの顔をされたが人生駆け抜けてナンボ、思い立ったその瞬間から吉日だ。

「で、エムルはなんで耳を塞いで丸まっているんだ」

『いやなに、人類種以外にもシュテルンブルームの素晴らしさを伝道できるならばそれをしない理由はないだろう。とりあえずファーストアルバムからメドレーをだね』

「し、静かな風の音だけを聞いていて生きていたいですわ……」

『そんな君にシュテルンブルーム内でのミニユニット「繚乱の風」がリリースした「さわやかな風に乗って」をだね』

「びゃにゃーーーーっ！！！」

いいかドルオタ、何かを勧める時に１０も２０も突きつけると基本的に人は引く。恐らくその混乱する風みたいな名前のユニットをオススメしたくて仕方ないんだろうが一曲紹介すればいいところでアルバムを引っ張り出すな。

凄まじい速度で俺の背中に逃げてきたエムルを頭の上に乗せつつ、恐らくこいつの一未練が満たされる《全人類がアイドルを推す》日はこないんだろうとアンドリューに哀れみの視線を向けるが、当の本人は気にした風もない。

『……ふむ、時にサンラク。君の言うオルケストラとやらだが、情報をまとめる限り、私が紛失した音楽プレーヤーが何らかの要因で敵として立ちはだかっていると……そういう認識でいいのかね？』

「ん？　まぁそうなる、ついでに言えばあんたの叔母が亡霊として出現するが」

『そこがよく分からないのだがね。何故ならアレは………』

「ああ、そうだな。その疑問は俺も理解している………それ込みで検証しにいくから全部分かったら答えを教えにきてやるよ」

『未だ空にも至れぬ文明に教えを説かれるとは、成る程どうして面白い』

「ああそれと」

『まだ何か？』

「あの音楽プレーヤーを失くした事、その様子じゃ知らないらしいな」

『………？』

「アンドリューさんよ、「象牙」に聞いてみな」

多分死ぬほど後悔するだろうぜ。

……

…………

……………

「はいこんばんわ、いざ寝ようと思ってたらいきなり叩き起こされてシャンフロに呼び出されたミレィでーす」

ドールフロントで待っていたのは、深夜三時だと言うのに異様な集合率を見せる【ライブラリ】の面々と俺より先にオルケストラをクリアしたプレイヤーことミレィであった。因縁があるようなないような微妙な感情があるが、今はそんなカビたセンチメンタルに用はない。オルケストラが個々人で見せる表情を変えると言うならもはや他人のことなどどうでもいい、俺に向ける顔を凹ませればいいだけだ。

「フルダイブは実質寝てるようなもんだからセーフ」

「脳みそはフル稼働してますよねーっていう」

そこは言わないお約束、まあゲーマーがそこを言わなくてもリアリストの方々がしつこいくらい言ってくるからどっこいどっこいよ。

「そういえばー、オルケストラを先にクリアした者からのアドバイイ

スとか欲しいですかー？　ほら結構情報とか集めてますよ？　お買い得ですよ？？」

「…………」

「どうしました？」

「教えてくれるのはありがたいけど、それなら回りくどいこと言わずに要点だけ教えて欲しいんだけど。初歩的なことだよミレィ君」

「うﾞっ」

磐斎氏から聞いたぞぉ？　ミレィさんよう……あんた、熱心なシャーロキアンだそうで……道理でやたら回りくどい話し方をするわけだ。カビたセンチメンタルに用はないがそれはそれとして悔しい感情は心の燃料として大事に保管しているわけでぇ……

「どうせならバリツ教えてくださいよバリツ……ねぇ名探偵さん」

「ふぐうﾞ」

「まぁそこら辺にしてもらえるだろうか？　彼女はバリツは出来ないからね。一回無謀にも影リュカオーンに試して酷いことになった」

「その話気になる」

リュカオーン相手って時点でオチが見えてる気がしてならないがそれはそれとして話のタネとしては上等そうな気配がする。

「キョージュまでぇ……勘弁してくださいよ、あれ結構黒歴史な

んですよ……」

と、まぁそんな雑談はさておいて。この場に大量の【ライブラリ】が集まったのにはちゃんと理由があるらしい……考察厨の面々を見回して、やたら低い声の魔法少女が俺を手で指し示しながら告げる。

「さて、オルケストラ正典ルートが確定しているサンラク氏の協力を取り付けることが出来た。あとは如何にしてオルケストラの戦闘を録画できるか……時間も時間だ、手早く皆の意見を聞いていこう」

・ミレィバリツ事件
丁度エタゼロが「鎧闘士」を開放した時期にまことしやかに囁かれていた「このゲーム、本気でやればスキルアシストなしで巨大モンスターを投げられる」という噂を実証するべく、当時格闘番組を見てなんだか自分が強くなった気がしていたミレィが（偶然のエンカウントとはいえ）よりにもよってリュカオーンの影に喧嘩を売った事件。
結果としては「呪い」すら付与されない塩試合に終わったのだが、前脚に掴みかかったミレィが蹴り飛ばされ、下半身を食いちぎられ、尻尾で弾き飛ばされ、最後に岩に叩きつけられて死ぬ、という一連の流れがあまりに芸術的だったために【ライブラリ】内で伝説になった。
そもそも噂は「アクセサリーや防具で性能を上げまくれば」スキル無しでもモンスターを投げられる、が真相だった。

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の五

………

……

会議開始。

「えーと、ですね………結局のところ、オルケストラ戦を録画する方法は一つしかないっぽいんですよね」

会議終了。

「結論が出てしまったな」

「で、俺は何をすればいいんだよ」

「生配信」

えぇ……？

シャンフロが生配信に対応した、ってのはいつだったかに見た気がするが……生配信（なまはいしん）……？

「ツチノコさんはあんまり気乗りしなさそうだから対策も考えてますよー。プライベート配信でやりましょう、これならチャンネル登録者しか視聴できないですから不特定多数が見るってことはないでしょう」

「いや……諸々の登録のためにログアウトし直すのが………あと配信用アイテム持ってないいんだけど」

「別天律（ことあまつ）の隕鉄鏡（いんてつきょう）なら実装日に全員のインベントリに配布されてますよ。録画アイテムとかと違ってアクセサリーなんですよねーアレ」

「それアクセサリー枠1個潰すってことじゃねーか」

「そこはまぁ、ほら………その分アイテムとかで支援するから許して？　としか」

「いやお前俺のアクセサリースロット、今二つ潰れてるんだぞ……
…」

あー来ましたよ後悔の波が。なんで無限インベントリ二つ装備なんてアホな事をしてしまったんだ………あー畜生、あー畜生。よし吹っ切れた。

とりあえずインベントリア二つだろ？　封雷の撃鉄・災（イ）だろ？　兇嵐帝痕（デア＝ガトレオ）・極（スペリオル）だろ………いや、まぁそこそこ枠はなんとかなるか。星外套とかの衣服系は動く時に邪魔になるパターンもあるから状況に応じて付け外しするし。

そうなると強制枠二つと必須枠二つ、ここに配信アクセサリー入れて五枠……残り三枠か、やっぱりそこそこイケるわ。

「ゲーム内で撮影するスクショアイテムや録画アイテムはオルケストラを撮影することができませんが、別天律（ことあまつ）の隕鉄鏡（いんてつきょう）に関しては設定的にもゲーム的にも撮影可能だと考えられますねー」

「その心は」

「運営にメールで問い合わせました。あとそのアイテムは思考操作と完全オートの二つがあるのでお好きな方でお願いします」

そりゃ確実だわ。思考操作……は流石にしてる余裕が無さそうだしオートでいいかな。

と、いうわけで話をまとめるとこうなる。

【ライブラリ】は正典に挑む俺の全面バックアップを行う。大量の回復アイテムや強化アイテムを仕入れてあるので好きに持っていってぃいとのことだ。

代わりに俺は動画サイトにアカウントを作ってプライベート配信でオルケストラ戦をリアルタイムでゲーム外に配信することで【ライブラリ】に情報を提示する、と。

「じゃあ登録してくるわ」

とりあえずログアウトしてっと…………どこに登録すりゃいいんだこれ、とりあえず一番有名なところでいいか。えーと、このサイトならアカウントあるしこれをこうして……あー、これ紐付けはゲーム側でやるのか。面倒臭いななんで深夜にこんなリアルとVRを反復横跳びしなきゃならんのだ。あーはいおはようございます、とりあえずこれをこれして登録して……はい紐付け。

「これでいいのかな？　配信開始」

…………いや、これログインしてるプレイヤーはちゃんと映ってるのかどうか分からないのでは？

「リアル待機班がいるのですぐ分かりますよー、今メールきましたね。無事生配信できてるようです」

「そっか………じゃあ、早速オルケストラに突撃してくる」

「朗報と取れ高を期待してますよー」

さぁーて、ちっとばかし時間を食ったがその分遺書を書く時間はあっただろうオルケストラ。

この前までの俺とは違う、【ライブラリ】からアイテムも沢山もらったし対策もある。長期戦上等、根こそぎお前を解明して攻略してやるよ。

◇

「さて………我々もログアウトして配信を視聴するとするかね」

「そうですねキョージュ」

「………あ」

「どうしたミレィ君」

「いや、あの………その、これに関しては私じゃなくてですね、リアル待機班が気づかなかったのが原因というか………」

「ミレィ君、要件をだね」

「…………パブリック配信になってるそうです」

「!?」

「いや違いますよ本当、私が話すのを渋ったわけじゃなくてですね!?　今!　今メールがきたんですよ本当ですよーう!?」

「日頃の行いだねぇ」

「貴方に言われると無性に悔しいですね磐斎さん!!」

◇◇

「妻夫木、妻夫木」

『んー?　何?』

「妙な配信が挙がってるぞ」

『ん?　誰の配信?』

「知らんやつだ、登録者数千人以下………の割に、視聴者数が2000人を超えてる」

『何それ、複垢でも使ってんの？』

「いや…………いや待て、確かこの名前………」

『知ってんの？　冷泉』

「……確か、シャンフロでやたらユニークモンスターに関わってるプレイヤーの名前……「サンラク」だったよな？」

『いや、「ツチノコ」じゃなかったっけ？』

「そっちはアダ名だったはずだ。で、件の生配信だが………チャンネル名が「Ｓｕｎ（サン）　Ｌｕｃｋ（ラック）　Ｃｈａｎｎｅｌ（チャンネル）」………で、トドメに配信してるのはシャンフロでキャラは半裸の覆面野郎だ」

『おっと…………まさか本人？』

「配信タイトルが「オル検証」とかいう適当なタイトル………これ、もしかしなくても公開設定ミスってるんだろう」

『それはそれは…………どちらにせよチャンネル登録すれば見れるわけだし、我々がその初心者さんを応援する意味を込めてチャンネル登録しても問題ないわけではぁ？』

「流石にそれは勘弁してやれ………どう考えてもこっちで食っていく気のなさそうな奴に俺達みたいなのが注目してもロクなことにならん」

『冷泉はそういうとこ律儀だねぇ昔から……まぁいいや、ツチノコって確か「向こう」の急先鋒でしょ？　折角配信してくれてるな

ら大人しく視聴しようか。敵情視察ってな！！！！』

「相手のミスにつけ入るようで若干罪悪感があるが…………まぁ、チャンスは逃さず掴むものだ」

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の五（後書き）

サンラク氏、配信に興味がないため痛恨のガバをしたことに気づかない……！！！

ちょっとだけ怖い話しますか。

サンラクが開設したチャンネルを登録した第一号のユーザーネームは「ＧａｇＢａｌｌ＿ＤｅＴｈ」さん。何故かサンラクがチャンネルを開設した直後、配信を開始する前にチャンネル登録が済まされていた。偶然かな？

おやライブラリのとあるプレイヤーさん、今誰にメール送りました？　え？　信用できる人だからこっそり教えた？　なら安心ですね！！！！！

本当かなぁ

◆

さぁて、まずは小手調べのボスラッシュだ。とはいえ第一から第四までの楽章は歌に従って勝手な流れを再現すればいいだけのこと。黒星を刻まれた数で言えばリュカオーンよりも因縁深いオルケストラの「劇場」に立つ俺はインベントリアの中身を最終確認しつつ壁にめり込んだ音楽プレーヤーの元へと歩み寄る。

「ベヒーモスで調べたぜ、お前の所有者履歴をな」

メタ的な視点で言えばオルケストラがユニークモンスターである以上は普通そんな情報残ってないだろ、って情報も存在していると踏んでいたが……やはりビンゴだった。

ベヒーモス第十階層、叡智の最深部に眠っていたデータはあの音楽プレーヤーを骨董品として購入した最初の所有者から、その孫、の妻、の娘、の親友、の父親が売った店で買った客……と、小さな機械が辿った道を確かに残していた。

地球を放棄すると同時にリヴァイアサンに持ち込まれた音楽プレーヤーは、所有者を転々としながらとある兵士がベヒーモスに渡った際に何者かに譲渡され、そしてそこから何人かの所有者を経て最終的にアンドリューに辿り着いた。

「オルケストラはかつての所有者達の遺志が宿るもの、神代以前の人類との対話………じゃあお前は誰だ？」

触れた指が音楽を再生する。それをトリガーに現れる「歌姫(エリーゼ)」と「楽団(オーケストラ)」……今なら分かる。JGEで作ったコラ画像の違和感、オルケストラが劇場そのものであった理由はオルケストラという存在が過去の存在達を内包する世界そのものであったからだ。

ならおかしいだろう、辻褄が合わない、お前はいちゃいけないはずだ。

「エリーゼ・ジッタードールは音楽プレーヤーを所有していない」

音楽プレーヤーと関わりがあるのはエリーゼ・ジッタードール本人ではなくエリーゼの歌声だけだ。「歌姫」がエリーゼの姿をとるのはおかしい、仮に歌が入っているからエリーゼが顕現したとしても音源しか入っていない……つまり画像のないデータからエリーゼの完全な姿を構築できるのか？
では仮にそこはまぁ色々オカルトパワーがあってエリーゼが出てきたんだよ、と無理やり納得するとしても、今度は何故「エリーゼ・ジッタードールが選ばれたのか」という謎が出てくる。

だってそうだろう。

「お前の歴代所有者の中にはシュテルンブルームのメンバーも何人か含まれていたんだからなぁ……！！」

劇場(オルケストラ)にして闘技場(オルケストラ)、挑戦者を試す戦いの場が揺らぎ、震える。「歌姫」の口から流れ出る歌に従って組み上げられるのは……おっと、これはこれは〝戦災孤児(ウォールフェン)〟君。何だか随分と久しぶりに感じるぜ、一回しか会った事ないし二度と会えないようトドメ刺したのも俺だけど。

とりあえず今考えるべき事項は二つ。
一つ。
何故歴代所有者の中にシュテルンブルームのメンバーがいたにも関わらず、銀河級アイドルと比べればダイヤモンドとガラスくらい格の違う、それも所有者ですらないエリーゼ・ジッタードールが選ばれたのか。
二つ。
〝戦災孤児(ウォールフェン)〟との戦いにはシグモニア大戦争が伴うので一瞬で阿鼻叫喚の地獄絵図と化した闘技場をどうクリアするか。
いつの間にかすり鉢の中央に冠を戴く特徴的な地形になった劇場の中で、轟音と共に顕現した蜘蛛、百足、そして蠍の残影をくぐり抜けながら飛び回る再現〝戦災孤児(ウォールフェン)〟を睨め付けながら俺は剣を構える。
「あ、そうだ」
隕鉄鏡は……あったあった。いつの間にか俯瞰視点で撮影できる位置にいたわ。はいちょっとズームイン、よしよしいい子だ。
「えー、第一楽章、相手はエクゾーディナリーモンスターFM's(フォッシルマイナーズ)・クリサリス〝戦災孤児〟。出現地点の関係上、このように馬鹿でかい蜘蛛と百足の大喧嘩を傍目に戦うことになるし上からレーザーが降ってきます」
まぁこんなもんでいいか。ようしやろうか再現攻略！　最終的に玄武の自重で叩き落としたことくらいしか覚えてないがそこらへんは

歌詞で補完だ！！

◇

現代社会において、情報とは火、あるいは水と似た挙動をする。
たった一人から発信された情報の種火は大抵の場合においてそれ以外の情報の津波に呑まれて消えていく。
だが時折、種火は勢いよく燃え上がって誰の目にも留まる程の大火となる事もある。突如始まったとある生配信は後者であった。

「なーーーーーーーーーーーーーーーにやってんですかねこの人は…………」

来たる大戦争に備えて様々なルートからシャングリラ・フロンティアの情報を仕入れていた天音永遠はとある動画サイトでリアルタイム配信されている動画を見て長い長いため息を吐いた。

『そうＳｏＵこんＮａ感じぃぃぃｉ　ｉ　ｉ　ｉ　ｉ　！！！』

何やら見たことのない巨大カブトムシの背中でゲラゲラ笑っている真紅の獣が画面の中で跳ね回っているのを見つけた時は永遠をして数秒思考が止まったものの、フリーズから解凍される頃には「何故」を高速で考え始めていた。

（サンラク君がいきなり配信者魂に目覚めたって可能性はまぁゼロだろうね、あんなんだけど結構シャイボーイだし）

少なくとも自己顕示欲を目的として配信を始めるようなタマではない、では何故配信を始めたのか……

「オル検証、オルはオルケストラだとして……「検証」なんて単語は使わないだろうし……」

もし使うとするなら「攻略」か「討滅」だろう、それなりの付き合いなのだからサンラクの使いたがる単語くらいはおおよそのアタリがつく。それらを外して「検証」という単語を使う理由とは。

「あんの狸親父め………いや違うな、この適当タイトル、サンラク君が公開設定ミスったな……？」

画面越しからの推測で真実のおおよそ九割を推測してのけた永遠はすぐさま次の思考へと脳を切り替える。

（視聴者数５０００を超えてなお増加……ここまで来るともう隠すのは無理、向こうにもサンラク君の詳細が割れた。だからどうしたって感じだけどそれはそれとしてこの大ポカをどう活かす？　引き続き広告塔作戦？　いやー、ここまで来ると逆に足引っ張りそうだよねぇ……）

「はぁー………眠れないじゃないの」

考えるべきは山積み、それ以上にオルケストラｖｓサンラクなんて好カードのリアルタイムを見逃す選択肢もない。せめて道連れを作るか、と鉛筆は珈琲を淹れる為の湯を沸かしながら友人へと着信連

打を敢行するのだった……

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の六（後書き）

なお百姉さんは通知が３２件になったところでキレながら起きた

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の七（前書き）

多分しばらく更新しなくなるので

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の七

◇

謎の生配信「オル検証」をミラーで見ながら語る枠
配信者：みしぇる

『えー、という訳で第二戦目は帝晶双蠍（アレクサンド・スコーピオン）です』

「というわけで！？」

めなこ：というわけでじゃない

コバルト：という訳で、って何！？

ママス：そんな皆さんご存知みたいな顔で新種出すなや

パペルト：水晶群蠍の色違い？

甘茶：水晶群蠍かな？

雷螺子：水晶群蠍？

ビタミンX：ていうかさっきのエクゾーディナリーの方がよほど気になるんですけお！！

パーフェクトプリマ：フォッシルマイナーズってどっかのクランの名前じゃなかったっけ

ぶちカマス：シャンフロは蠍が強すぎる

大吟城：ビーム！？

パペルト：ビーム撃つの！？

ビートナットゥー：いや待て反射しただろ今

「えぇ………何これ」

ぶちカマス：みしぇるが絶句してるの笑う

勝つドン：いやこれはコメントに困るわ

ジュクのエキのニシの入り口：解説が足りな過ぎるんだよなぁ！？

ブクロ工事：なんで避けられるん……？

甘茶：当たり前のように空を走るな

ビタミンX：バグとかじゃないよな？

ママス：脳味噌にソナーでも埋め込んでるのか

『こいつはあれ、あれだよあれ！』

雷螺子：あ、解説きた

パーフェクトプリマ：アレで分かるか！

『ビーム反射！　テリトリーから出たら袋叩き！　尻尾破壊急務！
だいたい回避してはいオッケー！！』

大吟城：何もオッケーではない

勝つドン：オッケーじゃねーよ

タジマン：ノーオッケー

苺：ていうかマジで防具縛りなんだ……

「いやそれ、ほんとそれ苺さん。やべぇっスよね、当たり前みたいな顔して防具つけてないんだけど」

コバルト：さっきは装備してたし舐めプだろこれ

ココナッツ：でも実際避けてるし攻撃もしてるけどな

ムスッコ：いや草

ぬか漬け：ツルハシで殴り始めたｗ

担保ぽ：草

ユカたん半島：草

ビタミンＸ：草

ぶちカマス：有効打っぽいのが尚更笑える

ブクロ工事：いや盲点過ぎない？　そりゃ水晶にツルハシは相性いいかもしらんけど

ママス：いや多分試そうとしたやつはいるんじゃないの？　試す前に死んだだけで

雷螺子：ていうかあの蠍、巨体の割に小回り利きすぎじゃないか？　急制動とか旋回とか

ビタミンＸ：テリトリー内でしか戦わないとか

ジュクのエキのニシの入り口：範囲外から遠距離で勝てるんじゃね

「いや遠距離砲撃あるから無理でしょ、袋叩きとか言ってたし他のテリトリーに入ったら２ｖｓ１でボコされそう……あー、倒した。

すげぇなツチノコさん、なんか自分も強くなった気がしてきた」

雷螺子：ユザーパードラゴンに身包み剥がされた奴がなんか言ってる

ムスッコ：みしぇる、そういうのは剣聖になってから言おうね

ビタミンX：みしぇる次大会出場する時は言ってくれ、カモる

甘茶：まだ新大陸に行けてない配信者がいるってマ？

「あーあー聞こえなーい！！！」

◆

なんだかんだで帝晶双蠍は「慣れた相手」枠に入っているのでオルケストラの歌詞誘導がむしろ枷になる程度にはさっくりと撃破。まぁさっくりとは言っても火力問題もあるので数十分はかかったのだが。

蠍系の楽章は課題数が少ない代わりにシンプルに時間がかかるのが難点だな……その点で言えばユニークモンスター系の方が課題数が多い代わりに最速課題達成で戦闘時間を短縮できる。

「さて次は何かな……」

『【サンラクの紡いだ物語】第三楽章……「墓守は憩う」』

「お、ウェザエモンじゃん」

シグモニアからシグモニアに繋がってたのでてっきり今回はシグモニア特用パックなのかと思ってたが、ここに来てユニークモンスター再現来たか。

そういえばこの真ウェザエモンはもう再戦できないんだよな……なんかちょっと解説的なものやっておいた方が【ライブラリ】に好印象与えられるかな？　ヘイカモン隕鉄鏡、オート操作でも思考入力で手元に呼べるのは親切心が光ってるぜ。

俺は近くを浮遊する鏡に向かって話しかけつつ、顕現した機巧の武者を見据えて武器を構える。

「あー、ウェザエモンですね。ユニークモンスター墓守のウェザエモン、こいつは再現体だけど」

当時は気合回避だったが、今はスキルも充実してるしこのウェザエモンはレベルダウン結界を使わないから技の脅威度は依然として高いがそこそこの余裕がある。おっと予備動作。

一番確実かつ安全な回避は真界観測眼を使う事だが、アレを使うと微妙に会話能力がディスアドなので今回はステータスの暴力と慣れによる気合回避・改で避ける。

「断風（タチカゼ）」

「【ライブラリ】って真理書持ってるんだっけ、取り敢えずこれが

例の超速即死抜刀攻撃。首しか狙ってこないし沈み込む感じの予備動作から大体一秒で抜刀してくるのを覚えておけば後は慣れかな」

どうせなら一通りウェザエモンの技を配信で見せるってのもアリかな、オルケストラの再現体と何回か戦ってるのもあるが、やはり墓守のウェザエモン戦は俺の中で今なお鮮明に思い出せる程記憶に焼き付けられている。ぶっちゃけレベルダウンやそれに伴うステータス低下……によって引き起こされる装備制限が無いならちょっとヤバ目の対人戦みたいなもんだし。

「えー、とりあえずウェザエモンの技構成は最後にぶっ放してくる最終奥義を除くと……えーと、断風、大時化、雷鐘、入道雲……「火砕龍(カサイリュウ)」あ、今出してきた火砕龍とそれとコンボ発動される「灰吹雪(ハイフブキ)」これの……何種類だ？」

地面から噴き上がる火柱と、連続する上空から降り注ぐ灰の包囲網。灰の包囲は必ず時計回りなので一番確実なのは上から落ちてきた灰の本流を回避した後すぐに灰の左側に突っ込むこと。ここらへんは刀関係ないから増殖した色違いウェザエモンも使ってきそうだな。

「どうせ耐久ゲーだし各種対策でもやっときますか！」

ウェザエモン戦の一番ヤバいところは途中から合流する騏驎の対処であって、俺の場合はそっちに殆ど関わっていないからオルケストラが再現するのはウェザエモンだけだ。しかもレベルダウン結界に俺は引っかからなかったからそっちも再現されないっていう。

結論から言うと再現ウェザエモンはヌルゲーなのだ。

「クライマックスにすらなりゃしねぇ、適当に凹ましてやるからから

かってこいよ偽エモン」

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の七（後書き）

サンラクは【ライブラリ】しか見ていないと思っているので提示する情報が【ライブラリ】が多分知らないだろうな、って情報だけになっている

なので余計混乱が起きる

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の八（前書き）

過去最速の古戦場、ここでシャンフロを更新することでシャンフロ読者属性を持つ騎空士を足止めするタクティクス（なおこれを仕上げるために古戦場から逃げた模様）

【王国騒乱】シャングリラ・フロンティア総合【Ｐａｒｔ．５３８】

２１９：名無しの開拓者
やっぱ上位層のクランがユニークシナリオ独占してるのはなんとかするべきだろ
ユニークモンスターのほとんどが一般プレイヤーが触れられないのは不健康でしかない

２２０：名無しの開拓者
リュカオーン（影）の出現パターン公開されてるのご存知でない！？

２２１：名無しの開拓者
こいつ昨日も騒いでたユニークシナリオ無縁マンだろ

２２２：名無しの開拓者
レイドモンスターのことユニークモンスターだ！　とかとんちんかんなこと言ったやつか
「一般プレイヤー」って単語使いまくるから一発で身バレするんだよなぁ

２２３：名無しの開拓者
全員一般プレイヤー定期

２２４：名無しの開拓者
ＵＲＬ：ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．／ｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘｘ

２２５：名無しの開拓者
まぁでもクターニッドのクソ倍率抽選はどうかと思うわ、あれ最終的に自治崩壊して別ゲーになったけど

２２６：名無しの開拓者
嵐の日までに前提シナリオ見つけ出して参加する先着奪取ゲー

２２７：名無しの開拓者
それだって上位クランが結託して参加プレイヤーを操作してる！

２２８：名無しの開拓者
陰謀論かな？

２２９：名無しの開拓者
結託してるのはネカマ軍団なんだよなぁ

２３０：名無しの開拓者
＞＞２２４
！？

２３１：名無しの開拓者
＞＞２２４
なんかとんでもないとこに飛ばされたんだが

２３２：名無しの開拓者
おっ、ウィルスか？

２３３：名無しの開拓者
オルケストラ攻略生配信

２３４：名無しの開拓者
ファッ！？

２３５：名無しの開拓者
オルケストラってライブラリが攻略済みだろ

２３６：名無しの開拓者
ライブラリは諸悪の根源、あそこはユニークシナリオを隠匿してる

２３７：名無しの開拓者
いい加減黙れヨタトロン

２３８：名無しの開拓者
誰の攻略かと思ったらツチノコさんやんけ！！

２３９：名無しの開拓者
ヨタトロンって誰だよ知らねーよ誰だよお前

２４０：名無しの開拓者
あっ

２４１：名無しの開拓者
本当に違うなら無視すればいい……つまり？

２４２：名無しの開拓者
え、動きが気持ち悪い……

２４３：名無しの開拓者
解説クッソ雑ゥ！！

２４４：名無しの開拓者
ゲームでもリアルでもユニーククレクレクレウザいわヨタトロン
女相手だと露骨に態度変わるしオフ会誘ってくるし

２４５：名無しの開拓者
直結厨かよ

２４６：名無しの開拓者
いきなり晒されたヨタトロン君可哀想

２４７：名無しの開拓者
直結厨はこの際どうでもいいわライブラリがまだオルケストラの内容出してないしこれは貴重

２４８：名無しの開拓者
やってくれましたのうツチノコさん
ライブラリに対する反抗か何かかな

２４９：名無しの開拓者
動きがキモぃ

２５０：名無しの開拓者
ぐりょんぐりょん身体が動いててぶっちゃけキモい

２５１：名無しの開拓者
なんで頭地面に向けて空中浮いてんの……

２５２：名無しの開拓者
キモぃ

２５３：名無しの開拓者
いや多分これ壁に立つスキルの発展系じゃね？　あれ重力の方向が変わるし

２５４：名無しの開拓者
あー、空中ジャンプの足場を利用してひっくり返ってるのか
いやそれだけじゃ説明できない動きが多すぎるけど

２５５：名無しの開拓者
今の軽戦士ってのここまで要求されんの……？

２５６：名無しの開拓者
（流石にここまでの曲芸は要求され）ないです

２５７：名無しの開拓者
というかあの鎧武者っぽいのウェザエモン？　再戦できるの？

２５８：名無しの開拓者
なんか半透明だし亡霊とか？

２５９：名無しの開拓者
ツチノコさん素で性能高いのは知ってたけど対人もイケる口か

２６０：名無しの開拓者
これ対人で相手したくねぇ

２６１：名無しの開拓者
多分本人は解説してるつもりなんだろうけど回避とかするせいで言葉がぶつ切りだし大体「気合でよけろ」なの全く参考にならんな

２６２：名無しの開拓者
「壁タンクは死ぬ！」を連呼してるのしつこいけどまぁそうだろう
な……って説得力がある

２６３：名無しの開拓者
なにこの鬼連打

２６４：名無しの開拓者
三十秒間ノーリキャストぶっぱて

２６５：名無しの開拓者
全力ダッシュしてればなんとかなりそう、って書こうとした瞬間に
ウェザエモンがアホみたいな踏み込みで距離詰めてるんだけど

２６６：名無しの開拓者
抜刀術をしゃがんで避けて、逆立ちしながら掴み技を足で弾いて弾
いた足でウェザエモンの胸を蹴って加速してホーミング落雷を連続
バク転で回避して着地した後に空中をトリプルアクセルしながら飛
んで背後に回り込んで雲の腕を回避
文字にしたけど書いてる本人が一番理解できてねーわ

２６７：名無しの開拓者
なに今のキモぉい……

２６８：名無しの開拓者
読んだら俺らも理解できないから大丈夫

２６９：名無しの開拓者
ツチノコさんは自己バフ特化って噂マジなのか

火力絶対足りないのにソロとかよーやるわ

２７０：名無しの開拓者
これ分かったわ、物理エンジンでダメージ補強してるんだ
自己バフで加速した分の慣性でスイングのＳＴＲを無理矢理増強してるのか

２７１：名無しの開拓者
真剣白刃取り！

２７２：名無しの開拓者
刀で刀を弾いた？

２７３：名無しの開拓者
いやキモいわ、貶してるわけじゃなくてマジで感想がこれしか思い浮かばない

２７４：名無しの開拓者
＞＞２７０
そんな音速で豆腐を顔に叩きつけたら相手は死ぬみたいなこと言われても……

２７５：名無しの開拓者
やっぱツチノコのプレイヤースキルやばいな、最大速度取るだけあるわ

２７６：名無しの開拓者
オルケストラは四連ボスラッシュなのか、ウェザエモンが三体目？
　一体目と二体目なんだったたんだ

２７７：名無しの開拓者
なんかゴツいカブトムシとレーザー乱射する蠍

２７８：名無しの開拓者
水晶群蠍の亜種じゃないですかやだー！！

２７９：名無しの開拓者
四体目これ金晶独蠍か？

２８０：名無しの開拓者
ツチノコさん「あ、ゴールデンエイジじゃん」

２８１：名無しの開拓者
金晶独蠍自体殆ど謎なのにツチノコさんは当たり前に倒してるのね
……

２８２：名無しの開拓者
今なんて？

２８３：名無しの開拓者
ゴールデンエイジ？

２８４：名無しの開拓者
エクゾーディナリーじゃねえか！！！！

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の八（後書き）

＞＞２３７……一体何ープ何ーターなんだ……

関係ない話ですけど＞＞２２４、＞＞２３７、＞＞２４４は同一人物です

案の定選択肢を間違えてますねこの女、最高だぜ

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の九（前書き）

古戦場から生きて帰ってきました

さて次は火か……ヒヒが、ヒヒが欲しい

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の九

◇

ある者はサンラクの強さの本質を「ＵＩへの適応速度」と言う。
またある者はサンラクの強さとは「別ゲーの技術を持ち込む事」だと言う。
またある者はサンラクの強みとは「自分の１００％を引き出すスキル構成と１２０％に補強する装備構成」と考察した。

確かにそれらはサンラクの強さを構築する上で重要な柱と言えるだろう。だがそれらはあくまで支柱でしかない、根本を支える柱はもっとシンプルなものだ。

――即ち、一度の体験から得る情報の反映速度と尽きせぬモチベーション。それこそが陽務楽郎(サンラク)の根本を支える大黒柱。
ラビッツのコロシアムに刻まれた壁と地面のシミの数は挑戦と改良の数。尽きせぬ炎が炉を動かす、故に「サンラク」は強い。

「記憶に新しい！　予備動作の初動からディレイのタイミングまで頭に残ってンだよ！！」
金晶独蠍(ゴールディ・スコーピオン)〝皇金世代(ゴールデンエイジ)〟。三段階の射程による変幻自在の戦法を剣聖

が如き閃きと野性の冴えを両立させた異形の剣技によって行使する黄金の皇。
映像越しでもその一挙一動に込められた殺意のリソースを感じ取れる蠍が、しかしたった一人の人間を捉えられない異様な光景。
時に最小の動きで回避し、時に最速の動きで逃れ、時に最適な動きで弾く。リアルタイムで配信されるそれは「プレイヤーはここまで出来る」という証明であり「ここまで出来て初めてユニークモンスターをソロで討てる」という宣告でもある。
厳密にはサンラクがユニークモンスターをソロで討伐した事は一度も無いのだがそれを知る者は多くない。

「何度だってへし折るぜ！！」

漆黒の焔剣が舞う、黄金の剣が乱舞する、戦うサンラクにとっては二度目の戦いも第三者が見れば初見の死闘そのもので。
これまで皮（ネーミング）だけが膨れ上がり続けていた「サンラク」に実力という名の骨格が、実際の光景という血肉が充填されていく。

何者かの残影が飛び交い、亀裂の入った聖剣が叩き折られる。それを合図に展開される三振りの光剣が劇場の空気を灼き、さらなる苛烈さでサンラクへと襲いかかる。
だがそれでも届かない。過去の再現でしかない〝皇金世代〟では本物を打倒し、さらに前へと進んだサンラクには敵わない。

最期の輝き、世界を断ち裂く三つの光輝。されどそれすらもが焼き回しに過ぎない、世界を縦に断ち割る光ですらも対峙する当人からすれば「角度こんなもんだっけ？」程度の逡巡を生み出すだけだ。

「あ、そうだ今回は過去の再現だから反射したけど気合で避けた方

が安全、食らったら一撃で脚が消し飛びます」

盾を構え、花開いた鏡が光を反射して黄金の皇を断ち切る最中……

……ぐりん、と首だけ動かして隕鉄鏡に目線を送ったサンラクがそう結論づけて、四戦目の強敵は撃破されたのだった。

◆

↓

◇

「さて……これで第四楽章は終わり、次が本題の最終楽章だ」

隕鉄の鏡に向けて話しかけながら、装備を整える。

ここより先は鏡写しの戦い、すなわち「サンラク」をサンラクが対策しなければならず、サンラクを「サンラク」が対策してくる。

「偽典はフルオーケストラで戦うとか言ってたが、正典は「歌姫」一人だけの独唱だ」

「オーケストラは一人を残して消失、「歌姫」が仮面を渡す事で残った一人がプレイヤーのコピーになる。インベントリの中にある装備も完全コピーするから気を付けろ、オルケストラの性質上装備を絞るのは悪手だ」

「コピーの性能だが……自分と同じキャラを使う自分より強いプレイヤーと考えてくれて構わない。ステータスも1．2倍くらい強い気がするし」

「ただ征服人形が場にいる状態だと詳細不明だが行動パターンが乱れる。ランクマで同じ実力のプレイヤーとかち合ったくらいになる、ステータス格差はどうしようもないけど」

「まぁライブラリ相手だしネタバレ考慮とか別にいいか……あー、多分理由はオルケストラの歴代使用者の中にシュテルンブルームのメンバーがいるからだ。ベヒーモスで調べてきたけど短期間でシュテルンブルーム全員に所有者権限が移っていた、多分貸し回してたんだろうな」

「だから征服人形……シュテルンブルームの似姿であるあいつらがいると混線が起きるんじゃないか……っていう考察。征服人形自身が邪魔するんじゃなくてオルケストラ内で主導権の混線がな」

「問題はここから。普通に倒そうとすると倒す寸前でオルケストラが忖度ガードしてくる、つまり普通に倒すだけじゃない何かが必要ってわけだ」

「冷静に考えてオルケストラユニーク発生に征服人形との契約が大前提な時点で無関係なわけないんだよな」

「……というわけで、だ。俺は失敗前提で複数回挑戦なんてかったるい真似はできないんでな。全力でシナリオクリアに注力する」

「ので登場していただこう、ウチのサイナさんにな」

隕鉄の鏡がこの場に現れる人影を映し出す。
創造者の趣味全開の衣装……しかし契約者の見たことのない、黒を基調とした新たな衣装を身に纏い、決意の眼差しを湛えた一機の人

形がこの世ならざる格納の世界より現世に降り立つ。

「好調？」

「上々かと」

「それは重畳」

さぁ、楽団が消えてきたぞ。最終楽章……今回は観客多めだが、こっから先はもう気にしていられない。

◆

楽団が消えていく。一人(っ)、また一人(っ)と奏でられる旋律が消えて、細くなっていく。だが今だからこそわかる。楽団は消滅したんじゃない、楽器を置いて観客席へと移動したのだ。

神代、神代。この星に根ざし生きゆく事を試み、滅びたかつての人類……その盛衰の時代。成る程、今の人類からすればまさしく創造主にして偉大なる神の時代なのだろう。

「さぁて…………来たぜサイナ、最終楽章だ」

「理解：この一戦は当機(わたし)にとって決別であり……宣言であり、」

「深く考えてるとまたインテリジェンスがバグるぞ」

「フッ…………天が地に落ちる事に怯える姿のなんと愚かなことか」

「言うじゃねーか」

杞憂ってか、その言葉あとで覆すんじゃねーぜ。

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の九（後書き）

派手にネタバレをぶちまけつつ、ついにオルケストラは最終楽章へ……！

数多の視線に囲まれて、壇上に残るは四つの影。俺、サイナ、「歌姫」、そして「俺」。最終楽章はとても静かなオーケストラ。「歌姫」は一人歌い、戦士は二人戦う…………それが最終楽章、神代以前人類に己が輝きを見せつける最後の一幕。

「いいえ、いいえ、いいえオルケストラ。此度はそうはいきません」

だがあえて俺達はノーを突きつける、だってそうだろう？　たった一人の歌声だけじゃあなんとも味気ない。
ぶっちゃけサイナは隠したがっていたが、あんなドルオタの部屋で隠し持てるようなものなんて限られている。それにオルケストラのユニークに征服人形が関わってくる以上、何をするつもりなのかはだいたいわかる。
つまりそう言うことなんだろう、「俺」に俺が相対するなら、「歌姫」に相対するのは同じく歌姫でなくっちゃな。
円形の舞台に対面する俺達と「歌姫」達。この世界の支配者たる「歌姫」に降り注ぐスポットライトの光。招待された俺はともかくサイナは異物であり侵入者。サーチライトに照らされることはあってもスポットライトを浴びることはない。
だからどうした？　そんなしょうもないことで凹みに来たわけじゃない、俺達はここに勝ちに来たんだぜ！！

「認証省略、自己判断にてプロセス開始。簡易格納機構……展開。」

重奏支援拡声機（ハーモニクス・スピーカー）、設置（セット）。
自律浮遊照明（スポッティングドローン）、起動。
光子仮想有線（ノンイグジステントケーブル）、誘導開始……接続完了。
当機エルマ＝317を中心点に半径1メートルを領域指定。
偶像概念舞台（アイドライズステージ）……形成（ビルドアップ）！」

「オイオイなにその素敵機能！？」

己の輝きは己で照らし出す。サイナを中心点に虚空から出現した機器の数々がアウェーたるオルケストラの世界のほんのわずかを切り取ってサイナの為だけのステージへと作り変えていく。

「当機（わたし）は当機（わたし）自身の意思でここに立つ……なおこの機能は征服人形の基本機能の一つです」

「アンドリュー君……」

やるやん。やるやんアンドリュー君、分かってる。お前はロマンのなんたるかを分かっている。人間という生き物は武装展開と全身換装の変身と巨大魔法陣の出現、この三つの誘惑に抗えない身体の構造をしているんだ。

巨大なスピーカーを左右に控え、瞬く間に形成された円形のステージ。その中央に立つサイナをドローン型のスポットライトがまばゆく照らす。歌姫は揃った、あとは前衛が身体を張るだけだ。

「ここからは俺達がステージの主導権をもらおうか！！」

ここにるのは歌姫（アイドル）が生き写し！　星行く船にて栄華に咲き誇った花びらの一つ！！　造花が何だ、匂いが欲しいならアロマキャンドルにでもブッ刺しとけってな！！

「インストール開始‥いつでもいけます」

「冥響、張り合うに遜色なし！　こちとら星に響く華の歌！　さぁオルケストラ、紅白歌合戦しようぜ！！！」

その言葉が合図になるようにシステム側が空気を読んだのか、それとも単なる偶然か。果たして俺が叫ぶと同時に二人の歌姫達が同時に声を出す。

「『Ｌａ――――』」

なんとも綺麗な音の空砲だ、だが俺も「俺」もそんな音を背に受けて同時に前へ走り出す。奴のステータスは俺を僅かに上回る、即ち先手は奴が……否！！

「先手奪取(ダーッシュ)！！」

「サンラク」がアラドヴァルと思しき直剣を出すならば、こちらはＳＴＩＮＧを展開！　距離を射程で詰めて先手を取る！　その蓮コラみたいな仮面ごと頭蓋をブチ抜け槍弾頭(ジャベリン)！！

助走はブラフ、前に踏み出した足は俺の慣性を受け止めて踏ん張る。突きつけたクロスボウ型の長銃を

「サンラク」へと突きつけて、貫通特化の一撃弾をぶちかます。

だが、事態は俺の想定とは別の方向へと変異していく。

『…………』

「ん゛！？」

俺が驚いたのは「サンラク」が弾頭を回避したからではない、奴の背後と俺の背後に起きた異変に気づいたからだ。

『Ｌａ――、Ｌａ、Ｌａ――』

「――遠く、遠く、在りし日の姿を夢に見た」

歌詞のない純粋な音でこの世界を構築する「歌姫」の旋律。それに対抗するように想いの込められた言葉を奏でるサイナの歌声が響く。オルケストラが歌で世界を創り上げるならば、それはつまり歌＝世界ということ。すなわちサイナというもう一つの歌が響くことで……今、世界が二つに割れようとしていた。

「過去の栄光、天を摩(こす)る威容。旅立ちを見送り、故郷に残ったその姿を」

レッドカーペットが下からの隆起に堪え切れず引き裂ける。サイナの左右で旋律を響かせるスピーカー、そこから放たれる大音量が世界を揺らしてオルケストラに抗う。この世界を塗りつぶすのは自分であると、そう言わんばかりの傲慢さを音に乗せて。

「今は亡きその姿、私は今も夢に見る。憧れの中に根ざす私の――――」

それはエルマ・サキシマのソロ曲が一つ。サイナ自身の想いをエルマの姿で歌い放つ、オルケストラに対抗する歌姫の心よりの叫び。

「――摩天楼(マテンロウ)！！！！」

空間が引き裂ける。劇場の天蓋が真下より突き上げられた屹立によって砕け散り、劇場を覆う半分が砕けた先に見えるのは地よりそびえ立つ摩天の楼閣に全貌の何割かを隠された星空――

「契約者（マスター）、どうか存分に」

「いいねぇ！！」

こちらへと斬りかかってくる「サンラク」を見据え、アスファルトを踏みしめて迎撃の姿勢。ＳＴＩＮＧはとっくにインベントリアの中へ。無手の状態で肩を狙って振り下ろされた刃を受け入れるように一歩踏み出す。

半歩のズレが刃を回避、踏み込んだ数十センチの肉薄が無手を「サンラク」へと届かせる。攻撃反応、回避の後に掴んで一本背負いに投げる。これぞ晴天流「防波」！！

「オイオイどうした！　電波が混信でもしてんのかァ！？」

追撃の蹴りは地面を転がられたことで不発、回転により再び「サンラク」の顔がこちらを向く頃にはその手にリボルバー！

『…………』

「っ！！」

躊躇いのない発砲、だがリボルバーがこちらに突きつけられ、引き金が引かれるまでに真界観測眼（クォンタムゲイズ）は既に発動されている！！　加速した時間の中で生み出された僅かな猶予が追加のスキル発動を可能とする、回避のモーションをスキルでさらに加速させて弾丸を回避。

それでも遅いと感じてしまう右腕の動きで左胸を叩いて――

来たぜ等速、ここから畳み掛ける！！

過剰伝達中でも例外的に指の動きだけは過剰伝達の効果を受けづらい、というよりもコンソール操作中だけは過剰伝達の対象外というか……こんな自爆率１０割みたいな効果を実装した運営でも１割程度は情けが残っていたらしい。

ＵＩ操作しつつ現状把握、敵は転倒中でこちらは仰け反り中。共に万全に到るまで一手必要、だったらより有意義な一手を打って畳み掛ける！！

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十（後書き）

アンドリュー君のシュテルンブルームソロ曲レビュー
「今回紹介するのはエルマ・サキシマの代表曲と言ってもいい名曲「スカイスクレイパー」だ。シュテルンブルーム自体、文化規制が解除された直後に結成されたアイドルグループではあるがその中でも地上に建造された高層ビルへの憧れをダイレクトに歌った曲はエルマ・サキシマの大人しいイメージとは真逆の、政府への反抗を歌うデスメタル系に近い歌詞の内容から当時も相当の反響があったらしい。歌そのものはバラードに近いがやはりサビに入る瞬間の転調が素晴らしくエルマ・サキシマ自身が作詞をした事もあってエルマソロ曲の中でも頭ひとつ抜けた代表曲と言っても過言ではあるまい。エルマソロ曲の中でもエルマ本人が作詞したものはバハムートの中に存在しない、惑星特有の事象に対する憧れを歌ったものが多くファンとしては彼女の物静かな佇まいの中に秘められた炎のような……」

象牙「この後三十分ほど会話内容がループしていましたのでここで以下略とさせていただきます」

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十一

轟々と世界が揺れる。荘厳なる劇場(オルケストラ)を喰らって展開される摩天楼が砕け、新たに構築されているのだ。

征服人形にそんな超パワーがあったのか？　アンドリューがインストールした謎データによるものなのか？　わからない、だが多分違うのだろう。

ゲーム的に言えばアンドリューとの面会及び征服人形のアップデートはオルケストラ攻略に必要なイベントだったのだろう、だが物語で言えば恐らくだが理由の本質ではない。この現象の理由は……オルケストラの主導権の奪い合いだ。「歌姫」とサイナによる、ではない。征服人形を通してオルケストラに記憶されたシュテルンブルームの誰かの想いが、エリーゼのそれとぶつかり合っているのだ。

「くたばれ！！」

『…………』

封雷の撃鉄(レビントリガー)・災(ハザード)の効果によって体力が1になる。もう一撃も受けられないが受けるつもりもない。過剰伝達に支配された足で地面を全力で踏みしめる。暴走した運動エネルギーが過剰な推進力を生み出してその場でバック宙返り。「サンラク」が起き上がるよりも先に体勢を立て直す。

「サンラク」の選択は起き上がりつつもリボルバーでの攻撃、だが遅い遅い遅い！　もはや徒手空拳は俺にとってハンデたり得ない！

食らってくたばれ不世出の奥義(エクゾーディナリースキル)「戦砕琥示(ウォールフェン)」！！

バック宙返りからの着地、軽く踏み込んだ脚力が今度は前への推進

力を暴発させる。後退で出来た間合いを一気に詰め、下から抉りこむような挙動でリボルバーの弾丸を回避。振り抜いた拳に全力を込めて一撃（アッパー）を放つ。

だが、

「何っ!?」

打ち据えるはずの顎が消えた……違う！　向こうも過剰伝達状態か！！

流石は「俺」なだけある、バック宙返りよりもさらに無茶な動きで身体をのけぞらせた「サンラク」が片手を地面につけた無謀なバク転で拳を回避する。追撃しようにも今の俺はつま先に掠っただけで死ぬ。幸運をアテにする程俺は乱数に信頼を置いていない。

軽く地を蹴って1メートル後退、その間に武装を整えつつ立ち上がった「サンラク」との間合いは約3メートル。近距離に遠く遠距離に近い。既に双方ともに次の武器を構えている。俺は傑剣への憧刃（デュクスラム）と傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）、奴は煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）と思しき巨大な手甲。

再現体の武装は見た目こそ「若干似てる」程度で本物とは異なるが性能そのものは同一だ。おおよその輪郭で何が再現されたのかを見極めなければならないのは厄介だが、あれだけ目立つ形状なら何をしてくるのかも把握できる。

「っ！！！」

『…………』

互いにインファイト狙い、しかしあの手甲にはギミックがある。案の定こちらに拳を突きつけた「サンラク」が水晶の弾丸を撃ち放つ。

あれ自体に破壊力はほとんどないが当たれば1ダメージくらいは出るだろう。弾き飛ばすには少々前のめりが過ぎる。
胴体の中心を狙われることでどう足掻いても俺は身体を捻らざるを得ない、そして僅かな隙を見逃すほど「サンラク」は甘くない。先ほどの意趣返しとばかりに顔面を狙って叩き込まれた拳を右剣によるる自前パリィで弾き、弾く寸前にスキル「百閃の剣（ヘカトン・スラッシュ）」を起動したことで二撃目以降のヒット数を増やす！　重厚な打撃に対してヒット数の増殖で拮抗する！！
1、2、4、8、16、32、64、128から28切り捨ての100、効果時間は8回のヒット。既に三度斬りつけて激突時の拮抗でこちらが勝ってきた、あと五回で巻き返せるか？　試しに実戦だオラーっ！！

『…………』

「どうしたどうした上位互換！　出力負けしてるぜ！！」

8ヒット斬撃、「サンラク」の右腕が衝撃に耐えきれず後ろへと弾き飛ばされる。向こうも過剰伝達な以上は削り切れると思ったのだが、プレイヤーの似姿ではあってもプレイヤーそのものではない再現体はウィンドウを操作する必要がない。僅かに見えた柔らかな光のエフェクトは体力回復のものだ。お前も回復ガチャしろよぉ！？
16ヒット斬撃、この一瞬でこちらの攻撃に対する対処を割り出したらしい。システムアシストめ、空振りではヒット判定にならないから攻撃を「スカす」ことで脅威への対処とするらしい。こちらへと無造作に投げつけられたアラドヴァルっぽい直剣を叩き落としながらそうはさせじとさらに前へ。

３２ヒット斬撃、後退を続ける「サンラク」へとさらに肉薄していく。過剰伝達で高速機動をしている以上、互いに一撃でもかすればそれが決着の一撃となりうる。故に猛攻を仕掛けているように見えても、反撃に転じているように見えても、互いに僅かな負傷すらも許容しない最善の動きで動いている。
巨大な盾が道を塞ぐ、多重的円周運動（オービット・ムーブメント）を起動し半円挙動で回避。回り込むまでの周囲確認で「サンラク」の位置を把握して剣を振る……チッ、そりゃ攻撃が続いている以上は防御に専念しているか。
俺の顔面へと飛んできた多分海喰の剣（ブルー・プレデター）がモチーフと思しき剣を弾き落とす。

６４ヒット斬撃、いいやもうここで詰める。このまま一撃ずつ斬りつけても各個対処されていくだけだ。
スキルの輝きが全身を包む、向こうもこちらの前のめりを察知したのか同様に機動力を高めているが……再現体だって全ての強化を同時にできるわけじゃない。必要なスキルを全て発動しきるのは先手をとったこちら、つまり先に動くのもこちらってことだ！！
一気に踏み込んで加速、空中ジャンプで「サンラク」の上を取って一気に剣戟を叩き込む。しかし攻撃は確かに「サンラク」を捉えたはずなのに手応えがない、まるで空振り……【ウツロウミカガミ】の幻像か！　背筋に寒気、幕末で培われた自前の直感が迫り来る一撃を感じ取っている。だがそこまでは読めている！！

「相対的立体運動（ソリッド・マニューバー）！！」

体勢が迎撃に間に合わなくとも、迫り来る攻撃を視認さえすればドッヂボール式回避スキルが使用できる。空中で明らかに不自然な跳ね方をして突き込まれたハルバードを避けた俺はラストの１００ヒット斬撃を……あえて放棄する。

だってそうだろう、一発斬り込める射程まで近くより二本ぶん投げた方が手数が多い。

「凹めオラァ！」

カシャシィィィィン！！！（横から飛んできたシンバルに剣が弾かれる音）

んああああああああ忖度ガーーーーーーーーーード！！！！！！！！！！！

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十一（後書き）

この間、大体三十秒！！

俺と「俺（サンラク）」が一進一退の戦いを繰り広げる中、二人の歌姫による世界の主導権を奪い合う戦いもまた苛烈を極めていた。
忖度ガードにキレ散らかしそうになりつつも、前回のような反撃でやられる事を避けるべく急ぎ距離を取る。いやもうホントマジで「どこからともなくシンバルが！」みたいなのホント腹立つなマジで……いやマジで。

だが良い事が知れたし悪い事も判明した。
まず良い事、やはり征服人形の存在はオルケストラ攻略で大幅に有利となる。歌による世界の主導権争い、こちら側の領域ではオルケストラは地面から楽器を生やすなどのクソ忖度ができない。あの自家製楽器はレッドカーペットからしか生えない、アスファルトは突き破れない！！
悪い事は単純に楽器を射出してくるって事だな、クソが。

「サイナ！　もっと声張り上げてけーっ！！」
「――――地に頬を当てて、揺れぬ眠りに夢を見る。私は空の中でなく、空を見上げて眠りたい」

返事は歌で返される。俺ｖｓ「俺」の戦いは単なるＰｖＰにしか見えずとも環境の主導権争いはド派手に繰り広げられている。
アスファルトが溶岩の如く広がってレッドカーペットを呑み込み、大量の金管楽器を粉砕しながらビルが聳え立つ……かと思えばアス

ファルトの上をレッドカーペットが敷き広がり、ビルを内側から食い破って壁面から飛び出した大量の巨大トランペットがビルを爆破処理の如く倒壊させる。
まさしく世界と世界の殴り合い、二つの旋律が相手を押し除け合って我を通そうとしている。あるいはこの戦いにおいてプレイヤーは脇役ではないかとすら思える戦いだ。

だがそれならサイナと「歌姫」の歌合戦を口を開けて見てればいいというものでもない、依然として「サンラク」は殺意全開だし奴を追い詰めれば追い詰めるほど「歌姫」の注意がこちらに向く。つまりサイナの有利に繋がる。

「だったら何度でも忖度させてやるよ！！」

ウェザエモンが決められた時間を生き残る事が重要なシナリオであるとするならこちらは逆、制限時間は無制限というよりも未設定！
格上を凹凹（ボコボコ）になるまで凹ませ続けるシナリオ！　延々と格ゲーのトレーニングモードをやらされてる感じだ、コンボが途切れて転倒から立ち上がると体力全回復する奴な。

やる事が明確に定まったのなら、戦い方も変わるというもの。過剰伝達を切り、回復ガチャをしながら黒い雷電の代りに未だ全貌の見えない嵐を纏う。殲嵐のメビウスだっけ？　やたら洒落た名前だが要するに加速効果だ、それだけ分かればあとは使いこなすだけ……！！

「本邦初公開！　歯車式加速……！！」

このスタイルを見出すまでに二十回以上は壁でもみじおろしにされました！！

踏み込んだ右足、その瞬間に全身へとかかる左向きの回転エネルギーが全身を回転させる前に左脚を前へ繰り出して逆回転。回転を交互に繰り返してスピードスケートのように進むのが兇嵐帝痕・極の基本だが……それをさらに発展させたものが歯車式加速！！　念のため黒曜纏の石外套を付けてＶＩＴを上げておく、焼け石に水でも多少はヌルくなるだろうさ。

「行くぞオラァ！！」

『…………』

この強制加速、適応されるのは足を前に踏み込んだ時だけだ。さらに厳密に言えば前に踏み込んだ足を起点に身体を前に進める瞬間……つまりその場で跳躍する分には加速はかからないしその他にも活用の道がある。ただ普通に歩いて生きていく分には（自他共に）殺傷力が高すぎるだけで。

だからこんな芸当もできる！

踏み込んだ足で逆時計回りの回転、だがあえて左足を前に出すことなく回転に身を任せる。回転速度は踏み込みの強さに比例する、力強く踏み込んだ事で三半規管を考慮しないような回転力を得たスピンはこんな芸当ができる。

回転力を活かした後ろ回し蹴り、対する「サンラク」は剣を構えた守りの構え、直撃すれば刃に触れた俺の足が切れるだろうが……はいここで空中ジャンプ。

さて問題です、兇嵐帝痕・極の回転エネルギーは何を基準として円を描くのか？　正解は「頭が向いている方向」です！

道理で何度やっても失敗する時があったわけだ、よそ見厳禁だった

とはな。だが分かってしまえばその厄介さは武器になる。ヨットを操るように首の動きで回転の方向を変えれば……はいここで蹴り足である左足をちょっと前に。

「食らえ変形サマーソルト！！」

歯車が噛み合うように、異なる回転による円でつなぐバトルスタイル！　対モンスターではあまり意味がないが対人に限れば恐ろしく強力だ。

踏み込みが動作トリガーってのぎイイ、あとはどれだけ三半規管が持ち堪えるかってだけだが……所詮はゲーム、リアルの脳みそがシェイクされるわけじゃない、つまり頑張って正常だと思い込む。まさかの解決策に根性論を採用する事になるとは。

『……』

殲嵐のメビウスの効果は推進力と回転力の複合だ、厳密には前に進みながら回転するこの特殊状態最大の特徴は一歩進むごとに付与される運動エネルギーの方向がリセットされる事だ。

だから後ろ回し蹴りからサマーソルトなんて動きが出来る、常人には困難な動きもイアイフィスト流の使い手であると同時にバグにも精通する便秘プレイヤーならば実現可能！！

突如として動きの変わった蹴りにさしもの「サンラク」も対応できなかったらしく、爪先の引っかかった奴の顎が勢いよくカチ上げられる。

「好機！！」

回転！　検証の結果、一歩分の回転力は体勢に関係なく一回転半す

る！　この確定付与される５４０度分の回転エネルギーを利用する事でェ……食らえ晴天流・改！！

「渦潮「引波」――！！」

ビルの果てまで大暴投ーーーーーーっ！！！

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十三

飛距離に特化した「引波」を選んだのは適当な理由ではない。回転の加速も含めて勢いよく飛んで行った「サンラク」は……空中ジャンプを使ったとしてもサイナが生み出した摩天楼の領域から逃げ出すことができない！！　馬鹿めがァ！　何のために無駄に跳ね回ってたと思ってやがる、全ては劇場領域からお前を引っ剥（ぺ）がすためだ！！

「さぁ、必死こいて走れ走れ走れーっ！！」

三度の飯よりマガジン三つ、とかアホな事抜かしてたアホ直伝！単発強襲（アサルト）偏差撃ち！！

ＳＴＩＮＧ第三の弾頭、「楔弾頭（ウェッジ）」！！　針より重く、槍より速い。即ち単発撃ちのアサルトライフル的使用法だーっ！！

でもどっかのアホみたいに「射程さえ完全把握できれば全ての単発撃ちは狙撃銃だよ」とか意味の分からない事はできないけどな！！

バスン！　バスン！　と引き金を引く度に釘打ち機のような音を立てて１０センチ程の弾頭が宙を舞う「サンラク」へと飛んでいく。「俺」が苦手な攻撃パターンは他でもない俺が一番よく知っている、ホレホレふくらはぎの辺りを重点的に狙われると武器での対処がしづらかろう。フフフハハ、弁慶も泣きすぎて脱水症状だぜーっ！！

『…………』

「クレー射撃ってか！　自分から当たりに行ってるんじゃ競技にならんぜオルケストラ！！」

涙ぐましい援護というか、劇場領域の方から勢いよく飛んできたバイオリンが楔の弾頭に貫かれる。次々と飛んでくるシンバル、チェロ、コントラバス、コントラバス、コントラバス……いや後半雑ゥ！！

まぁ分からんでもない、空中を走ってる最中ってのは実を言うとそこまで多彩な動きはできない。空中をジャンプしてる最中とか踏み込む瞬間とかならＵＩ操作に意識を割くこともできるが、地上で攻撃を避けながら次を用意するのを空中でもやろうとすると……案外、ミスるのだ。
如何に上位互換と言えど、プレイヤーのコピーであるならば万能存在ではあるまい。ＣＰＵだってミスをする、ミスをしないのはＴＡＳだけだ。

つまり「サンラク」が追い詰められるほどオルケストラは忖度の頻度を上げざるを得ず……そして、片手間の歌ではウチの歌姫様には敵わない。何故ならこちとらアンドリューが太鼓判を押した完全再現超銀河アイドル！！

「さぁさぁさぁ！　侵食率八割オーバー！！　このまま俺達の勝ちって事でいいのかぁ！？」

照準合わせ……確かにコントラバスは面積がデカいがその分射出速度に劣る！　ここだ。ゲージＭＡＸ！　今こそウィズダム……リヴァイアサン製造の遺機装、その最後の弾丸を見せる時！！

「【超過機構（イクシードチャージ）】！！」

ＳＴＩＮＧのみならずウィズダムガード撃破によって作成可能な遺

機装はタイプ超排撃（リジェクト）で統一されている。一定時間の使用で蓄積された余剰熱を意図的に排熱せず特定機構内にチャージ、そして最大まで溜まったそれを利用して放つ自損度外視の必殺技……！！

「公式名称、魔力熱量過剰加圧弾頭（マギバイト・オーバーヒート）！！」

通称：超排撃（リジェクト）！　熱量を情報質量に変換し、データ的に圧縮したものを再展開する事で圧縮された熱量の弾丸を飛ばす荒技！！　ヒューウ！　超排撃タイプに保身の二文字は無ぇ（ね）ーーーっ！！

「ファイヤー！！！」

閃光、そして踏ん張ってなお後ろに押し込まれるような衝撃。

その性質上、膨張しながら前進する圧縮熱量は余波だけで前方の空気を焼き払いながら今まさに着地せんとする「サンラク」へと襲い掛かる。

コントラバスか？　トロンボーンか？　なんだっていいさ、多少ＶＩＴを上げたところで余波で死ぬ！　というか余波で死ね！！

俺の似姿、最終楽章の番人、上位互換（より強い）「サンラク」が何かアクションを起こそうとしているがもう遅い。スキルがリキャストで使えないのは分かっているし、過剰伝達で逃げようとしても巻き込まれる。装備を変える時間もなく、インベントリアエスケープも転移するまでに数秒ラグがあるので逃げ切れない。

「勝っ…………」

――何か、とても悔しそうな顔をしていた。

「サンラク」が、ではない。奴は顔全体が画面で隠れてるから精々目が見開いているのか閉じてるのかくらいでしか感情の機微を感じ取る事はできない、そしてその目が何か感情らしきものを示した記憶はないので「サンラク」ではない。

もはや世界の九割が摩天楼に塗りつぶされた中で、わずか一割の劇場の最奥、そこで悔しげな顔をしていたのは「歌姫」……エリーゼ・ジッタードールだ。成る程、自分の手駒である「サンラク」は既に王手に追い込まれた。忖度しようにも範囲攻撃、対抗しようにも間に合わず……だがおかしい、それはおかしい。

オルケストラの目的は問いかけだ、納得するしないはあっても悔しがるってのはあまりに妙だ。

そして何より……

エリーゼ・ジッタードールはこちらを見ていない。

「誰だ……いや待て、は？　まさか…………」

「歌姫」が見ているのは自分の背後、彼女の肩を叩くもう一つの影。振り返れば歌う事を止めて目を見開くサイナの姿。何故歌を中断したのかは聞くまでもない、そしてサイナの姿を見た事で逆説的に答えが導き出される。

『…………』

距離が離れているからその表情を伺う事はできない。だが明らかに変わった空気が、何故かはっきりとした確信を以って「彼女は笑ったのだろう」とそう感じさせる。

女、そう女だ。「歌姫」を咎めるでもなく、責めるでもなく。ただ

静止し、何かを説くようなその姿は…………

マジか、マジか、マジかこれ！　ここに来てさらに形態あんのかよ！？

ＳＴＩＮＧの放つ灼熱の光が「サンラク」を呑み込み、さらにその先の「歌姫」達へと熱波が迫る。

そして、「歌姫」の姿が消えて、代わりに前に出たのは…………

『──頬を撫でる夜風。他所見（よそみ）で見上げた月に微笑み、私は加速する』

べろん、と。

床に敷かれた紙をめくるようにあっさりと、アスファルトの道路が地面から剥がれた。

「はっ」

めくれあがったアスファルトが盾となって何者かを熱波から守り切る。劇場に亀裂が走り、ガラスのように木っ端微塵に砕け散る。
熱波が防がれたということはそれ以外の要因でわずかに残っていた劇場が粉微塵に砕け散ったということ。
オルケストラが敗北を認めた？　いいや違う、その証拠にサイナが作り上げた摩天楼が侵食されている……！！

アスファルトが……否、「道路」が唸りのたうちながらビルを粉砕する様子はシュールでありホラーであり、これ以上なくアクションしている。あのゴルドゥニーネが従える龍蛇を思い出す。
砕けた一割の世界を元手に、一瞬で世界を5：5（イーブン）にまで戻してのけたその女は。

「おいどうするよサイナ、本人登場だ」

「エルマ・サキシマ……！！」

『誰よりも速く、風も追い越して。そうよいつか私が……ハイウェイスター！！』

アイドルのそれと言うよりも先程まで「歌姫（エリーゼ）」が身に纏っていたドレス。
無手の「歌姫」とは異なり、色々と現実離れしたデザインだが形状的にギターと思しきものを持ち。
そして何よりも、サイナそっくりの顔をした女がまさにロックンロールと言うべき歌声を張り上げるのと同時。

『…………』

どういう原理か、エルマ・サキシマの近くに移動していた人影ひと

つ。先程の猛攻が効いているのかいなのか、それは分からない。だが……

「……そうこなくっちゃな」

いっそ憎らしい程に、「俺（サンラク）」は何度でも立ち上がる。

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十三（後書き）

帰ってきたアンドリュー君のシュテルンブルームソロ曲レビュー

「エルマ・サキシマ。物静かな佇まいに澄んだ清流のような声、どれだけ明るいキャッチーな曲であってもどこか涼やかな雰囲気を崩さない彼女だが……こと「ハイウェイスター」に限って言えば、彼女のソロ曲の中でもその異端さにおいて唯一の輝きを放っている。まず彼女自身が作詞作曲をしたこともさることながらギターを彼女自身が担当する弾き語りという時点で申し訳ないが他の曲とは一線を画する、そしてエルマ作詞の曲に共通するバハムートに存在しないものへの憧れを込めた歌声をロックチューンで歌い上げる。まさしくこの曲はエルマ・サキシマの魂の歌と言うべきなのだろう。無論他の曲に妥協があるかと言えば決してそうではなく（以下略）

鏡面に響け、摩天より吠えろ　其の十四

いやおかしいだろう。

まず最初に思い浮かんだのはそれだった。先程とは段違いの猛攻を回避しながら高速で思考を巡らせていく。

まずオルケストラ……否、「歌姫」が変わったというのがおかしい。ユニークシナリオってのは多かれ少なかれ納得で終わるものだ、この場合の納得はプレイヤーではなくシナリオの中心人物、今回はオルケストラだ。

その根幹にいるだろうエリーゼがあの顔で消えた、つまり奴は納得していない。ここに来て頭を使わせるとは、おのれ……！　もうそろそろハイテンションもピークだぞ。

だがまずは、この短い時間の中で端的に伝えたい事だけを伝える！

「サイナ！　お前に勝つために墓の下から本人が蘇ってきたぜ！　ただの人形がここまで来たんだ！　思う存分ぶちかませ！！」

「っ………了解。了解しました契約者（マスター）。当機（わたし）は当機（わたし）自身の自我（アイデンティティ）で……貴女に挑む」

「上等！！」

だったらこっちも貯金箱を叩き割ろう、全開放（フルバースト）だ……素寒貧になるまで殴り合おうぜパチモン野郎！！

先程までの極力手元に武器を温存する戦法を放棄、作曲的にぶん投げていく決戦モードに移行する！！

傑剣への憧刃（デュクスラム）と傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）はさっきの段階でぶん投げたから……よし、まだ近くにある。だがすぐには取りにいかない、座標だけ記憶しておくに留めて境光（ルーメリディアン）の宝剣を構える。

対する「サンラク」は……多分勇魚兎月だろう、あれは対モンスターに性能振り切ってるから対人にはあまり向かないと思うのだが。

いや違う、アイテムまで完全コピーならばアレもあるわけか。

アガトレオ何某の肉片を用いたこの歯車なのか風車なのかよく分からないこのアクセサリーは、前に進む者にしか力を貸さない。ならばこちらも退く道理なし、何度だって凹ませてやるぜオラーっ！！

「テンション倍速だっ！！」

刃の色からしてまだギリギリ夜判定！　つまり今の境光の宝剣は斬撃を飛ばすことができる！　作戦立案から実行までの速度を上げろ！　くたばれ！　避けられた！　来る、来る、来る、よっしゃ来たアーーっ！！

敵は二刀流、だが一撃の重さはこちらが勝る。二刀流使い視点から見る対二刀流でされて一番ウザいのは射程が届かないギリギリから確実にダメージを蓄積されることだ。故に実践する。

形が若干違えど「サンラク」の振るう武器の基本的な情報は俺の持つオリジナルと同一だ、射程とか能力とかな。つまり剣の届くギリギリのラインも分かる。

その上でこちらにだけある強みを活かす。

どういう理屈か奴は兇嵐帝痕・極（イデア＝ガトレオ・スペリオル）をコピーできない。つまりこの回転力だけが唯一上位互換たる奴と俺とを差別化できる蜘蛛の糸！

糸登りRTAだ、俺は最速のカンダタになる。

引いて防いで、進んで攻める。
ついに開眼したぞ兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）を用いた攻防一体のバトルスタイル。
互いに少なくない傷を負う真正面からの殴り合いだ、封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）はリスキーすぎて使えまい！！

「俺（サンラク）をここまで仕上げたのは誰だと思ってやがる……！！」

一歩下がって袈裟斬りを避け、逆手で振られた刃を赤い夜の刀で受け止める。
ターン奪取、一歩前進して回転を確保、前進する回転によってスキルを使わない機動で奴の背後へと回り込んで突きを放つ。だが「サンラク」は器用に腕を後ろに回して突きの軌道をズラして……くっ、なにが腹立つってちょっと参考になる事だ。
すぐさま二歩後退、余裕の現れなのかゆっくりとこちらへと振り向いた「サンラク」と再び対面に相対する。

『…………』

「…………」

さて厄介だ。さっきより強い……いや違うな、バトルスタイルが固まってる。さっきまではサイナというイレギュラーが入り込んだ事で初期のガンメタが崩れた中途半端なバトルスタイルだったが、今はガンメタこそしてこないがこちらの攻撃への対処が段違いだ。なんていうかな……やたら強いＣＰＵ、そうやたら強いＣＰＵだ。学習するタイプのやつ。

「さて…………さて、」

強いんだよなぁ……いやマジで、追い詰めて「歌姫（エルマ）」の注意を削ぐって戦法の難易度が爆上がりしている。防御性能がアホほど高いんだよ、マジでどうする？大火力で防御ごと貫（ぬ）く？
煌蠍の籠手は一発勝負だと使い所が限定されすぎる。
冥王の鏡盾はほぼ無意味、だって俺も「俺」も物理型だから。
となればやはり百足式、ほぼノーリスクでの強化を可能とするナイスガイ百足式８－０．５さんしかあるまい。でもハルバード系のスキル全く覚えてないんだよなぁ……火力が、ただでさえ足りない火力がさらに足りない。

何よりのネックは多分何時間もぶっ通しで戦うのは無理ってことだ。うだうだやってるとエルマに世界の主導権を奪取されるしこれが一番の理由だが……リアル方面がね。

「それに……」

まだオルケストラの秘密は明かされていない、オルケストラは少なくとも「神代以前人類」の意思が宿っているのは確かだがそうなるとエリーゼ・ジッタードールが説明できない、何故所有者ではない奴が記録されている？　音楽ファイルが残っていたからで片付けていいのか？

「いや、待て」

あるいは……いや、そういう事なのか？　クソッ、キョージュ辺りに電話してぇ。エリーゼ・ジッタードールは出現しているのではなく、あれは……おっと、対刃剣を合体させた「サンラク」さんが一気に加速して……げ、帯電してる。

「つぉぉああっ！！？」

あ、危ねえーーーっ！！　あれ触れたらアウトな奴だろ、よく避けた俺！　よく避けた俺！　そしてターン奪取！　細かい事は片手間以下で考えるしかねぇ！！

今こそライブラリから寄付されたへそくりを解放する時！！　いや回復アイテムの方はすでに使いまくってるけど！！

鏡面に響け、摩天より吠えろ　其の十四（後書き）

先程までの戦闘で自分を不利にする事で世界の陣取り合戦を有利にしてくることを学習したので防御型になった

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十五

【ライブラリ】、シャンフロ最大手の考察クランにしてゲーム内外を問わずしてシャンフロという巨大世界の解明に勤しむ好きもの達。
オルケストラの正典、偽典ルートの存在が明らかとなり、俺という正典ルートに進んだ検証例と協力している彼らだが、何も俺が攻略を始めるまでの間ずっと遊んでいたわけではない。

蛇の道は蛇、真相に辿り着けずとも知りたい事は山のようにある。
そして彼女達はそこに一番近い場所にいた。

そう言いながらキョージュ達は俺にへそくりを渡した。

「知ってるかオルケストラ、へそくりってのは見つからない場所に隠しておくもんなんだぜ……サイナ！！」

「絢爛の輝き、月をも照らして不夜の空……！」

歌いながらもサイナが征服人形用のウィンドウを操作してそれを展開する。一見すると少し大きめのメダルのようにも見えるそれは、右手の甲にかざす事で俺の動きに追従して自立浮遊する。

「ようオルケストラ、お前がコピーするのはリアルタイムの「俺」の情報だろう。ならば検証だ、所有権が俺のものではないアイテムを俺が使った場合……お前はどう動く？」

行くぞ、【ライブラリ】が立てた仮説を実証する！　征服人形用装備回収パーツ「回収者」！！

征服人形の所有物であるこれはプレイヤーが任意（アクティブ）で起動し、征服人形が常時制御（パッシブ）する！！

要するに普段俺が武器をぶちまけながら戦っていた時、サイナが回収する際に使う道具がこれだ。一体ライブラリはなにをどういう考察を経てこれがプレイヤーでも使えるという結論に至ったのか……まぁいい、大事なのはこれを使う事で便利になる戦闘があり、これを使う事である仮説が確定するって事だ。

「真似してみろやパチモンがよぉ！！」

メダルが光を放つと同時、光で出来たワイヤーのようなものが地面に転がっていた傑剣への憧焉終刃（エスカ=ヴァラッハ）へと伸びて……張り付く。

そして引き寄せると同時に左手で握っていた境光の宝剣をぶん投げて……レッツゴー！！

「これは便利だ良いものだ！！」

ウィンドウ操作、アグアカーテを左手に出して右手に傑剣への憧焉終刃（エスカ=ヴァラッハ）、おお懐かしきコスモバスタースタイル！！

アグアカーテを発砲しながら前へ、前へ、前へ。ハンドガンのいいところはインファイトでも取り回しが利くって事だ。迫る弾丸を「サンラク」は銃口でも見ているのか特に焦りなく回避しつつ、わざわざ射程距離まで突っ込んできた俺に分離した勇魚兎月で斬りかかる。

だがそう来ることは馬鹿でも分かる、というかそう来て欲しくて近づいたのだ。

右手の黄金剣で一撃を防ぎ、さらに振るわれたもう一撃を踏み込みによる回転でかわす。身を屈め、真っ直ぐ伸ばした後ろ蹴りが「サンラク」の脹脛を狙う……が、跳躍で回避される。

「っ！」

さらに発砲、空中でそれを避けるにはスキルを使うしかない。あわよくば二つ……ラッキー！！　スキルを三つ使いやがった！　安牌取るから後で後悔するんだぜ！！

宙を踏み、円を描いて、逆さに立つ。直上に回り込んだ「サンラク」の武器が対刃剣から特大剣に変わる。僅かな静寂……どう避ける、どう当てる、どう動く？　人とＡＩの思考がぶつかり合って結論を弾き出す。

「いいぜ、地の利はくれてやる」

真っ直ぐ上を見上げて銃を構える。同時に「サンラク」が天地逆転のままにこちらへと飛び込む！！
奴も「愚者」の恩恵を受けていることは分かっている、ヘルメスブートに多重的円周運動に無重律の恩恵……平均してリキャスト二十秒、この二十秒に千載一遇の好機を見出す！！

発砲三発。俺はヤシロバード程銃に人生捧げてないので三発中二発は外れたが一発は奴の胸元へと飛んでいく。食らえば如何に低火力のアグアカーテといえど「俺（サンラク）」のステータスでは致命傷だ。
案の定飛んできた忖度ガード、劇場が消えたから飛んできたのは道路標識の看板だ。ご丁寧に「止まれ」の看板が奴を庇うように銃弾を受け止める。
続けて引き金を引くが弾は出ず……弾切れだ。

『…………！』

「かかった！！」

俺と「俺」。装備が同じ、スキルが同じ、アイテムも同じ。その上でステータスで上をいく再現体を相手に差別化を図るなら方法はただ一つ。新たな違いを見出すしかない！！

「俺」はスキルを使った！　俺はスキルを温存している！

「俺」は嵐を纏えない！　俺は嵐を纏うことができる！

「俺」は回収者を使えない！　俺は回収者を使うことができる！

些細な違いが大きな亀裂になる！　同じ環境で育った双子とて個性は別れる。一人称と二人称が自他を分けるなら今この瞬間が最大のチャンス！！

「さぁ……行くぞ「俺（サンラク）」、そしてオルケストラ！　素寒貧になるまで忖度しやがれ！！」

忘れがちだが傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）秘められた効果！　斬撃に比例して魔力をチャージする能力！！

あそして蓄積された魔力は別のものへと移し替えることが出来る、例えばそう……魔力を弾丸とするアグアカーテにもう一発（隠し弾）を装填するくらいならば……！！

迫る特大剣、動ける時間は僅か。だが……やれる。左手のアグアカーテを突き付けながら、右手を左胸に叩きつける。

嵐を纏い、雷を纏う。同時に使えば暴走するが同時に使う事はできる。要するに片方の発動条件に引っ掛からなければいい！！

「フルコンボ！！」

過剰伝達の迸る身体でバックステップ。どう振り回したところで斬撃とは線の脅威、当たらなければどうってこたぁねぇ！！

狙いを定めて発砲。脳天目掛けて飛翔する弾丸が「侵入禁止」の看板に弾かれる……と、同時に空振りした「サンラク」が地面に着地。そこに目掛けて右手の傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）を全力投擲、結果を見る前に「回収者」で境光の宝剣を引き寄せる。

「唸れ宝剣！　まだ夜！　ギリ夜！！」

そろそろ時間的に夜明けが近い、ここで旭光刃になると都合が悪いので祈るようにスイング。果たして赤いままに払われた刃は光を飛翔する斬撃として撃ち放って「サンラク」へと迫り行く。

「さぁ来いもっと来い！　歌えサイナっ！！　謳って世界を塗り替えろ！！」

ファンタジー世界がなんだ！　文明開化万歳！　どれだけ幻想に夢見たって人はウォシュレットとインターネットを捨てる事は出来ねーんだよ！！

従来は武器を捨てて次の武器を出す、すなわち手持ちがイコール残弾となっていた戦法も【ライブラリ】が見出したプレイヤーのリソースを消費しない「装備」によってリサイクルという新たな手段が生まれた。

「ハッ、お次は速度制限と一方通行の標識かよ？」

弾かれた傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）と、かき消された夜光刃の飛翔斬撃を眺めながら両手に握るは本家本元、勇魚兎月。

さぁ……道理も戦局も全部巻き込んで吹き飛ばしてやる。

・「回収者」
蒐集計画において征服人形の初期装備たる物品回収装置。意識を対象に向ける事でポインターを照射、装備者の動きに合わせてポインター上を高速で「走る」事で手元に引き寄せる。見た目はワイヤーで引っ張っているように見えるが厳密には磁石に張り付く金属に近い。
【ライブラリ】の検証の結果、この「回収者」は内部演算に征服人形が必須であるものの、実際に行使する役は別人が担っても問題ないことが明らかになったため、サンラクがもたらした「オルケストラは対象の完全コピーを行う」という特性に対するカウンターの一つとして採用された。

だがこれでへそくりが全てと言ったわけではない。

「削れて擦り切れろオラァ！！」

一転攻勢なんて言葉もあるがそんなものでは間に合わない。常に攻勢、頭の先から足の爪先まで攻勢、一度でも別のものに転じてしまったら勝てない、それくらいの気合いを込めて「サンラク」への攻撃を一段と加速させていく。

斬る、突く、避ける、薙ぐ、撃つ、避ける、避ける、打つ、叩く、斬る、殴る、避ける、投げる。

ありとあらゆる攻撃手段を以って俺の似姿を叩きのめす。先手を取って動き、されど先にスキルを使わせて、後手で詰める。イニシアチブはテニスのラリーよりも激しく俺と「俺」の間を飛び交い続ける。何より厄介なのは飛び交うのは主導権だけじゃないってことか。

忖度ガードは向こうの動きも止まるが、こちらも絶対に崩さないガードに全力攻撃を叩きつけるようなものだ。斬るや撃つならまだマシだが、突きを弾かれるとこちらも決して短くないノックバックを受ける。これが厄介なのだ、撃つならまだいい……忖度ガードを突いてノックバックを受けると向こうのほうが先に復帰するのだ。

「だが！」

先手を取られる危険性を受け入れてでも攻める。何度だって攻めて攻めて攻める、目の前の「サンラク」は未だ健在なれどこれまでの猛攻は決して無駄なんかじゃない。

「――――手を伸ばして、手を伸ばして、手を伸ばして。この手が届かぬ空の星も、天を擦る楼閣の上ならば……！！」

密度の高い俺と「俺」の戦闘も、もっと広い視野で見つめればあまりにも小さい。

高速道路と摩天楼の正面衝突。アスファルトの道路がコンクリートのビルを締め上げて砕き、鉄筋コンクリートのビルがハイウェイを支える柱を下から突き上げて砕く。

崩壊したオブジェクトが消失する仕様でなければとっくの昔に瓦礫で世界が埋まっていたかもしれないとすら思えてしまうほどの破壊と再生。

果たして二人の「エルマ」による歌合戦は、摩天楼領域が全体の七割を占拠するに至った。戦況優勢、忖度の数だけお前たちは追い詰められていく……！！

冥王の鏡盾を展開しつつ即収納。ウィンドウを操作し、アイテム収納が実行されるまでの間に攻撃を二度受け止め、逆の手に握る海喰（ブループ）の剣（レデター）で攻撃。忖度ガード、今度は何が飛んでくる？　標識か？　信号機か？

ブォォァァーーーーーン！！！

「デコトラぁ！！？」

いや待て待て待て！　いかにシャンフロが地球に由来するSFだとしても時代が数百年、いや数千年くらいタイムスリップしてないか！？　デコトラって、普通のトラックじゃなくて！？　ていうか群れなんですけど！　デコトラの大群なんですけど！！

よく見てみるとタイヤではなく何らかの力で浮力移動（ホバー）をしているら

しく、見た目はどうであれ一応「エルマが夢見た光景」の一つであるらしい………デコトラが！？

「くぬァ！！」

ぼさっと立っているわけにもいかない。デコトラの大群に巻き込まれたならば俺の身体など容易に砕け散る。スキルを使って跳躍、四車線全てを埋める数十台のデコトラの一つ、その荷台に跳び上がった俺は同じく「サンラク」もまた荷台の上に飛んでくるのを視界に入れる……なるほど、ステージチェンジってわけかよ？　やってくれるぜオルケストラ、再現体（「サンラク」）はそのままでも本体は学習を反映させてくるってか。
これで俺は「回収者」を封じられた、幸いデコトラに踏み潰された武器はおそらく無いとは思うが……少なくとも遥か彼方に置いていかれた装備を回収するのは不可能だ。

「しかし、いよいよ追い詰められてきたようだな」

七割を占拠されれども、逆に言えば三割を堅持していた「エルマ」側の領域が急速に縮小していく。サイナが追い詰めた？　違うね、奴は世界の展開方法を変えたんだ。より鋭く、一本の矢の如く。この四車線の道路とそれを支える柱、そしてその上を走る乗り物……たったこれだけにオルケストラという世界展開の力全てをつぎ込んでいる。その証拠に一匹の蛇と化した高速道路が凄まじい勢いでビルを粉砕しながらサーキットを作り上げていく。上に下にと進んでいくコースはもはや高速道路というよりジェットコースターだ、無重律（スペースチャージ）の恩寵がなかったらとっくに落ちていた。

なんとなくオルケストラの「謎」は解けた、あとはどうやって答えに到達するかだが………ハイウェイの構築に全てが注ぎ込まれた

今、ここがクライマックスと考えていいのだろうか。いや、考えるのはやめよう……どんなゲームだって真理は一つ。

「来いよ、死ぬまで殴れば死ぬだろ」

『…………』

風が強い。電車の上でバトルって展開は映画でもゲームでもそう珍しいものではないが、それでもデコトラの群れを地面がわりに戦闘するのは初体験だ。ギラギラと輝くデコレーションは水晶巣崖を彷彿とさせるがあの土地にこんな突風は吹かねぇ。

互いに沈黙、人の脳と人工の脳(AI)が互いに初手を決めようとする際に生じるわずかな静寂こそがこれだ。きっとここからそう長くは続かない、即ち短期決戦……そして俺と奴が使える手段は共通している。ここにきて自分自身とじゃんけんとはな。任せろ、グーパンチでパーとチョキを殴り倒すのは慣れている。

「いくぞオラァ！！」

『…………！！！！』

心の臓に結晶の短剣を突き立てる。紅い獣の頭蓋が被られる。すなわち最終決戦、灼骨砕身による刻傷無効化とそれに伴う防具解禁ｖｓ暴血赤依骸冠(ブロード＝クロウネ)による暴走を是とした単純暴力！！

「サンラク」の全身を赤い粘性が覆いきるのと、俺がウィンドウ操作を完了したタイミングはほぼ同時、そして展開した武装は奇しくも同じハルバード(百足式８－０．５)……！！

「【超過機構(イクシードチャージ)】！！」

賦活醒の効果により、互いの全身を巡る百足の毒。総合スペックは奴が上………打ち合えば押し負ける。だがこの狭いフィールドで退き続ければ待っているのはミンチかシミか、だったらやるしかねぇだろ！　慣性に注意！　下手に飛び上がればそのまま落ちる！！

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十六（後書き）

Q．なんでデコトラ？

A．エルマ「デコトラ……大型乗用車をデコレーションするとは、素晴らしい文化です……」

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十七

『……！！』

「くたばれコラァ！！」

二振りのハルバードが激突し、僅かな拮抗の後に俺の身体を吹き飛ばす。だが致命的なほどのノックバックではなく、何歩か踏鞴を踏むものの大量のデコトラの上から落ちるようなことはなかった。

「やっぱりな……まだ戦える」

金晶戦衣(エグザイル・クロス)は月光を受けて魔力をチャージする、ここはそもそも厳密には屋内の筈でさらに言えば外の時間はおそらく夜が終わってる筈で……だが、黄金の一張羅は今もなお月の光を受けて魔力を蓄積させ続けている。

それはつまり外はどうであれこの世界においては「夜」で環境が固定されているということ……出力で劣る？　それがどうした、指す手を間違えたな「俺」！　そうら来たぞ三十秒！　ところでノルマは達成できましたかぁぁぁ？！！？！

『………っ！　…………っ！！！』

「人を捨てたか……具体的にどうなるのか体験したことなかったからぜひ見せてくれ」

べぎょ、と発泡スチロールでも貫くかのような気軽さで「サンラク」

がハルバードを地面に突き立てる。武器を捨てたのか、いいや違う。

『Ｇｏｏｏａａａａａａａｗｗｗ……！！』

肥大化した前脚(両腕)、骨格ごとねじ曲がって獣のそれとなった後脚(両足)。人が四つん這いになったのではなく、獣が獣として当たり前とする姿勢。

もはやＰｖＰとは言えない様相、人と獣が相対し……先に動き出したのは「サンラク」だ。

スキルの光を帯びた赤い獣はもはやただの突進ですら一撃必殺たり得る。頭を覆うように獣の上顎と下顎が形成される性質上、そもそも食事する必要もその能力もない筈だが襲い来る獣はその大顎で俺を噛み砕く気マンマンだ。

「来い！！」

奴が変貌している内にデコトラ二台分の距離を離していたが獣の後脚が撓んだと視認した瞬間、一瞬でレンジを詰めてきた「サンラク」の爪が俺へと襲いかかる。

防御？　防具込みでも死ぬわ、回避？　下手に跳ぶとデコトラから落ちる、じゃあどうする？　受けて流す！！

百足式の石突きを地面に当て、ハルバードの先端を真っ直ぐ敵へと向ける。そして獣と穂先とがぶつかる瞬間に……思い切り引き上げて後ろへと投げ飛ばす！　これぞてこの原理と相手の勢いも利用した槍式巴投げ！！

「まだまだァ！！」

獣に成り果てた事でここまで組み上げてきた対「サンラク」戦用のチャートを八割破却。そこまで多くない暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）使用時の動きを早急に記憶の海からサルベージしつつ、片手を空けてウィンドウを操作。僅かに視線を向けてアイテム欄を……これは！　まだ残ってたのかゴブリンの石斧！　最高だぜ！！

【ライブラリ】は例の埴輪……もとい手投げ爆弾のようなアイテムも用意していたが向こうも使うことを考慮して持ち込んでいない。それ故に俺が投擲という手段を使うには「投擲することもできるが普通に使った方が、あるいはそもそも使わない方がアドバンテージ」という形で奴が同じ手段を使わないパターンに持ち込ませるしかない。

「楽しさと時間は比例する！！」

たとえ時間を縮めることに楽しさがあったとしても、楽しさと時間が反比例する事だけは絶対にない！　非効率を愛せ！　楽しい思い出は一瞬でもプレイ時間だけが真実だ！　うおお自分でももう何考えてるのか分かんねぇ！　このまま燃え尽きた灰も燃料にして突っ走る！！

全力でぶん投げた石斧であるが当然こんなものがダメージになるはずもなく。まぁ普段の半裸俺ならカスダメ程度にはなるかもしれないが防具をつけた俺と暴走状態の「俺」ではどちらであっても１ダメージになるかも怪しい。

だが石斧の役目はダメージソースではない、激闘を繰り広げてきた相手が突如ぶん投げてきた「何か」を完全に無視することなどできない、一秒あればいいのだ。

「リキャストを縫い合わせる……！！」

二つの琥珀から生み出された二つのアクセサリー。片や黒雷、片や殲嵐。
この二つのアクセサリーはアクティブなオンオフをトリガーとして発動する、だが一度オフにすれば次に起動するまでに若干のリキャストタイムが生じる。まぁそれがないと封雷の撃鉄がノーリスクになるしな。もしくはそれが本来の使用法だったりするのか……？
故に片方のリキャスト中にもう片方を使う。身体の動かし方が変わりまくるから壁シミ率が上がる危険性もあるがリスクを飲むだけの価値はある……！　いくぞ疾風迅雷！！
「よっしゃあ！！」
「サンラク」が獣の爪で石斧を弾き飛ばすわずか一秒、胸を叩いて黒雷を纏った俺は一気にデコトラの上を駆け抜ける。多重的円周運動（オービット・ムーブメント）及びヘルメスブート起動、奴の視覚情報をさらに混乱させる瞬間的な情報の切り替え！　石斧に向いた注意は目の前に迫る俺へと向かい、しかし俺の姿は円周運動によって背後へと消える！！
「さらにさらにさらにィ！！」
奴の背後に回った時点で【ウツロウミカガミ】起動！　幻影と気配をその場に残して円周運動を続行、再び奴の正面へと回り込む。
パラパラ漫画の一コマ一コマが全て別の場面であるかのような情報の往復ビンタ、奴の動きは今完全に止まった。これいいな、今度カッツォと１０先やることあったらこれ試そう、ついに四勝できそうな気がする。
「っ！！！」

現在と未来が頭の中でぐちゃぐちゃに混ざっている。今俺の目は何を見ている？　現在進行形の的な姿か？　それとも数秒後に起きる想定の光景か？　わからない、そんなものに割く思考すらもったいない。

少なくとも俺の身体は多重的円周運動を始めた時点で既にウィンドウ操作と身の振りを完了させていた。スキルは思考だけで動かせる、指先は武器とウィンドウの操作だけに特化させればいい。

千載一遇のタイミングとポジショニング、上へと投げられた百足式が落ちてくるまでの三秒間。両腕を覆う煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手はこの一瞬の為、裏向きに温存し続けた切り札を表向きに晒す。

「【超過機構（イクシードチャージ）】……！！」

振り抜かれる拳に奴が気付くよりも早く、籠手に隠された必殺の針が奴の下顎に突き刺さる。

「超（リ）！！！」

注ぎ込まれるは水晶の毒、万物を美しい鉱石に変える残酷な美。

「排（ジェ）！！！」

衝撃。砕かなくていい、ただデコトラから落としてやるだけの衝撃を――

「撃（クト）ォ！！！！」

炸裂する。赤い獣の下顎を粉砕しながら叩き込まれたアッパーの衝

撃が「サンラク」の長身の成人男性＋表面を覆う赤い粘液の総量を容易く浮かび上がらせる。
今になって自分が何をやったのか、その理解が追いついてきた。
過剰伝達による豪腕ではなく殲嵐のメビウスがもたらす螺旋の打ち抜き。回転力の込められたアッパーを喰らった「サンラク」もまた軽く切り揉み回転しながらデコトラの群れが形成するフィールドから外れ、空中に組み上げられるロード……即ちデコトラの大質量が踏みつけていく道路の上へ。

「そのままミンチに………………」

視線の先、先頭を走っていたデコトラが急加速した。
ただそれだけのシンプルな変化、ただそれだけのシンプルな動きが……道路に落ちようとしていた「サンラク」を荷台で受け止めた。

「はぁぁぁぁーーーー………」

身体から抜ける力の理由は百足式の強化が途切れたことだけではないだろう。ここまで忖度されるといい加減萎える程生き生きした感情も無くなってくる。

「分かった、分かったよ俺の負けだ……」

テコ入れされましたわぁやったぁ、じゃねぇんだよなこういうのは。
難易度を緩和します、と言われると意地でも修正前にクリアしたくなるのはゲーマーの意地だ。だから……ああそうだ、だから俺だけで勝ちたかったんだが。
シャンフロのＡＩは時々理不尽になる、そしてそれはユニークシナリオだと特に顕著になる。後からルールを書き換えるというか……

なんだろうな、ゲームの側から「全力を出せ」とせっつかれる感じに近い。

それはクソゲーの片鱗かもしれない、あるいはただのゲームという枠組みに押し込めきれないリアルなのかもしれない。だがそれでもこの結果は悔しくもあり……

「お望みどおり、全身全霊を見せてやるよクソＡＩ」

ここから先を、俺はオルケストラ戦の全体を通して最も楽しみにしていた。

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十七（後書き）

ＳＳ６「それが必須というわけではないが、借りた以上は温存するなんてとんでもない！！」

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十八（前書き）

Ｓｈｏｗ　Ｍｕｓｔ　Ｇｏ　Ｏｎ　！

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十八

ガンガンと軽く頭を叩いてようやく冷静な思考を僅かながら取り戻せた気がする。だが迷ってる時間はない、一刻も早くこの場を離れなければ。

これで確信が持てた。パズルの最後のひとかけら、世界の主導権をとっているからこそ100%そうだと断言できなかった……あのデコトラの群れが正真正銘「サンラク」の味方であると確信出来たなら採れる策も一つに絞る事ができる。

ハイウェイから飛び降りて、地面までの数十メートルをヘルメスブーツで滑るように落下。目指す先は当然サイナの立つ場所だ。

「契約者（マスター）」

「いいかサイナ、手短に伝えるぞ。これがラストオーダーだ、泣いても笑ってもこの一撃で終わりだ」

端的な一言。しばし目を見開いていたサイナであったが、何かを感じ取ったのか、スポットライトに照らされた輝きの中で優美に一礼する。

「……………御命令を。当機（わたし）は貴方の人形。貴方に寄り添い、共に在るモノ。当機（わたし）は――――」

「手短に、っつってんだろ。んなもんわざわざ口にする事でもないだろ……いいか、「奴」に出来ることは俺にも出来る。なら「彼女」

に出来ることはお前でも出来る。だから――」

◇

「――って訳だ。鏡はいつだって同じ事をするもんだ。お前にもきっと出来る」

「…………確証は、ありません。当機(わたし)の演算能力を以ってしても、どういったプロセスを経ているのか、完全な解答を出すことは現状不可能です」

サンラクがサイナに頼んだ事は、説明も参考もなく無茶を通せと言うようなものだ。

だが、サイナは一通り論理的な否定をした後に。しかし、と前置いて彼女を背に前に立つサンラクへと視線を向ける。

「――ですが、当機(わたし)は非論理的な根拠を以ってこう断言します」

お任せを。

返事はなく、ただ夜風に揺れる長衣を羽織る背中が、信頼という形で返事をしていた。
契約者曰く。今のオルケストラは世界を駆け巡るハイウェイに己の力、その全てを注ぎ込んでいる。エリーゼ・ジッタードールが出現していた時は世界の主導権を奪い合う戦いであったが、今はその逆。エルマ・サキシマは世界の主導権、その殆どをサイナに譲る事で強固な干渉力を持つ高速道路を形成しているのだと。
であればサイナにも同じことが出来るは当然のこと、鏡写しであるならばなおさらに。サンラクのオーダーは即ちエルマと同様の力を行使すること。世界を捨て、ただ己の想い描く象徴を歌い上げる。
だがどうやって？　サイナというＮＰＣの持つ情報ではその方法を確信に至らせるだけのものを生み出さない。そもそもオルケストラが未だブラックボックスである以上、そもそも原理を明らかにする事は不可能だ。
だがサイナというＮＰＣがここに至るまでに得たものが正解へと歌を導く。

「…………当機(マイマスター)の契約者、貴方はどんな光景を望みますか？」
「そうだな……折角の摩天楼なのにずっと見上げてばかりだったたからなぁ」
背を向けるサンラクの指がインベントリアからあるオブジェクトを展開させる。
それは歪な形の箱を鞘とする奇妙な大太刀、これまでずっとインベントリアの中に眠り続けていた不滅の兎からの助太刀。
サンラク当人もサブサーバーセブンの登録ではないサイナ(NPC)も知る由

のない事ではあるが、人知れず蘇った正典と戦わされたサンラクへのテコ入れ、言うなればイベント専用の武器であるそれは世界に一振りしか存在しないモノであり……世界に三振りしか存在しない枠組みに属するモノ。

「さぁて兄貴……約束通り風を斬れるようになったんだ、まさかここで鈍器運用なんてとんでも展開にしてくれるなよ……？」

すなわち災浄大業物(サイジョウオオワザモノ)。かつて世界を滅ぼしかけた三つの厄災、その一つを宿す「ある目的」の為に不滅のヴァイスアッシュが鍛えた刃である。

龍の如くうねり走るアスファルトの道。最早ジェットコースターのレールでさえもう少し纏まりがある程の混沌(サーキット)を生み出しているそれは、目標であるサンラクが地上に立っている事に気づいたのか、先頭のデコトラに真紅の荒ぶる獣を乗せながら急降下を仕掛ける。

「サイナ！　頼むぜ…………空へ！！！」

「了解(ラジャー)」

スカイスクレイパーはエルマの歌、エルマの憧れ、エルマの想い。さりとてサイナが今から自分だけの曲をゼロから生み出すような奇跡は起きない。

ならば、

「――遠く(近く)、遠く(近く)、在りし日の(駆けるその背)姿を夢に(をいつも見る)見た」

流れる旋律はエルマ・サキシマの「スカイスクレイパー」、されど

紡ぐ言葉は歌詞とは異なる想い。
「過去(不屈の)の栄光(眼光)、天を摩する威容(決して折れぬ情熱)。旅立ちを見送り(共に旅をして)、故郷(世界を)に残ったその姿を(拓く貴方の姿を)」
欲しいのは広い世界などではない。エルマに、己の写し身に挑む親愛なる主人の寄る辺、誰よりも高く天にその手が届くようなそれを。
「N」パッチ、正式名称は「Ｎａｍｉｄａ(ナミダ)」パッチ。既にサイナは感情を持った一人の存在、であれば単なる替え歌なれど込めた想いは紛れもない本物で。
「今は亡きその姿(どうか今こそ空へ)、私は今も(わたしは貴方)夢に見る(を送り出す)。憧れの中に(この想い声に)根ざす私の(込めて届いて)——
——」
サイナの目に浮かぶそれは紛れもない涙、悲しみでもなく喜びでもなく。征服人形のキャパシティを超える情報(感情)が温かで透明な滴を零れさせる。
世界に亀裂が走る。二人の「歌姫」が剣を振るう戦士のためだけに歌うが故に、どちらからも手放された世界が崩れていく。
夜空がガラスのようにピキパキと音を立てて割れていく、だがそんな滅びゆく世界の中で確たる輝きを放つものが二つ。
大きく距離を取って最速の直線を刻まんとする道(ハイウェイ)と「星(サンラク)」。
そしてもう一つ。信頼と好感を大黒柱に組み上げられるそれは高く、高く、戦士を乗せて高く！　空へ！！
歌姫(サイナ)は頬を伝う涙を拭うことすらせず、遠く離れていった戦士を眩しげに見つめる。想いは結実する、天をも摩(こ)するその名を微笑みな

がら静かに口にすれば――――

「――摩天楼（まてんろう）」

先頭（「サンラク」）と頂天（サンラク）、最後の戦いが始まる。

◆

風のない空。亀裂の入った月の光を背に俺は特大タワーの頂点に立つ。成る程？　シャンフロにおける天国からの景色ってやつは随分と世紀末のようだ。世界が壊れていく光景とはな。

「高さよし、距離よし、時間よし」

防具はとっくに外した、やはりリュカオーンの刻傷がある以上は一張羅を使い潰す訳にもいかない。おのれリュカオーンめ。

「ふぅー…………」

ここに来るまでの間にこの刀の情報は一通り確認した。世界を滅ぼしかけた獣……否、この表現は厳密には正しいとは言えない。

「世界を滅ぼしかけた災害、殲嵐の台風が獣に貶められ、されど刀に宿る霊として祀られしもの……！」

その祀られし霊獣の名は、その大太刀の銘は！

「覇国兇嵐（アガトレオ）！！」

その名を呼んだことで解放条件を達成。ねじれた箱……本来の鞘ごと刀を封じていた匣（封印）が木屑となって砕け散る。

それと同時に顕となった真の黒鞘から噴き出した強烈な風が俺を中心に渦を巻き始める。

ふと視線を向ければ、兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）が起動してもいないのに猛烈に回転を始めている。アガトレオの血肉が封じられた琥珀を基とするこのアクセサリーからすればこの刀は己の大本でもあるわけか。

「………」

重さそのものは百足式８－０．５や別離なく死を憶ふよりも遥かに軽いはずなのに、重い。まるで何か大きな気配が肩にのしかかっているようだ……いいね、こんなクソほど細かい描写にまでリアリティを突き詰めていく所は嫌いじゃない。

見下ろせば崩壊を始める世界を真っ直ぐこのビルへと猛進する光の群れがある。デコトラだからな、よく目立つんだよ……先頭のデコトラに乗ってる獣畜生の赤い姿もなァ！！

「覇国兇嵐（アガトレオ）の匣鞘は砕けた、あとは黒鞘（コイツ）だ」

この刀は二つの鞘から刃を抜き放つ為に幾つかの条件を達成しなければならない気難し屋だ。匣鞘は「所有者からの許可」なので問題はないが黒鞘の方は俺自身がなんとかしなくちゃならねぇ。

「まぁ、当てはある……」

後は野となれ山となれ。なんなら全部吹っ飛ばして綺麗な地平線を、そこから登る朝日を俺に見せてくれ……！！

「吼えろ覇国兇嵐（アガトレオ）！　存分に世界を喰い殺せ！！」

ここまでお膳立てしてもらって負けられるかよ、性能制限？　閲覧情報にロック？　知るかっ！　今使える全部を寄越せ、骨の髄まで使い倒してやる！！　燃えろカフェイン！　残りカスにもう一度火を点けろ！！　テンションＭＡＸだっ！！！

黒鞘の大太刀を無理矢理居合の姿勢で保持してビルの頂点から身を投げる。俺は翼を持たず、翅を持たない……つまり飛べば落ちる。だがその落下こそが重要！　臨界速が無いならば無いなりに加速の術はある！！
無重律（スペースチャージ）の恩寵起動！　ビルの壁面を地面と定義し、使えるスキル全てを発動しながらビルの壁を上から下へと駆け落ちる！！

「風を喰らえ！　息を吸い込め！　嵐の皇帝、ねじれた無限の風！
いざ助太刀！！」

兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）起動！　渦を流れて加速！！
地面が近い、このままいけば地面のシミ、潰れたザクロよりも酷いモノに成り果てるだろう。だが、だが、だが！　そうは問屋と俺が卸さない、ヘルメスブート！　空に坂を描いて駆け抜ける！！
騒々しいデコトラの咆哮（クラクション）、獣が叫んだ音が聞こえた気がした。風だ、崩壊する世界の空気が腰の一点に収束していく。
まだだ、まだだ、まだだ、まだだ、来る、迫る、踏み込む、あと少し――――

「やってやろうじゃねぇかぁぁぁぁぁ！！！」
封雷の撃鉄（レビントリガー）！！　風と雷の同時使用、制御しきれない回転に手綱をつける唯一の方法、冴えたやり方、ベストアンサーはこれだ！！！
両足を揃え、前屈の姿勢から兎跳びの要領で跳躍！　過剰伝達の効果によって弾丸の如く跳ね上がった俺の身体を後押す大気の衝撃。それはまるで何か大きな獣の咆哮に押し出されるようで。俺に使うことを許された力はただ一つ、大いなる加速……嵐の帝王からの叱咤激励！！

「【嵐帝の喝破（ジェット・ストライク）】！」

轟、と獣の咆哮に似た風の音が全ての騒音を掻き消す。己の足が齎したものではない、大きな力が前に俺の身体を吹き飛ばす。偉大（おおき）な獣な気配が背後に取り残されていく、吹き荒ぶ風の中で左腰の刀だけが俺に「抜け」と囁いた気がした。お望み通りに！！

「キ、リ（斬）……！」

『――――』

最後に踏み込んだ左足。時計回りの旋風が身体に最後の加速を齎す。嵐の片鱗が黒い雷によって増幅され、世界が横に伸びていく瞬間、黒鞘が大きく震えた。
まるで最初からそこには空気しかなかったかのように鞘が溶けて、消えて……真界観測眼を以ってしても一秒にも満たない超高速の世界の中で、実に美しい輝きを放つ薄い緑色の刃が滑るように閃く。
嵐の祀霊の神威を借りて、晴天流は風を斬り裂き敵を断つ。なれば

この一刀に……

「風（カゼ）！！！！」

断てぬものなし。

制御しきれない推進力と回転力と共に前方斜め上へ吹き飛んでいく俺の身体。
だがそれでも、握りしめた手と握り締められた覇国兇嵐（アガトレオ）からは、確かに敵を違わず断ち斬った確信の手応えが残っていた。

鏡面に響け、摩天より吼えろ　其の十八（後書き）

七百話になんとか合わせることができました

・覇国兇嵐（アガトレオ）
あるいは災浄大業物の一振り
あるいは刀に封じ込められた獣の名
あるいは……古代黎明期、旧大陸全土を滅ぼせる程に肥大化した大陸級超規格台風の名

ヴァイスアッシュの「概念斬り（ことき）」によって現象から生命へと貶められた嵐の帝王は死闘の果てに調伏され、祀られし霊として刀に封じ込められた。

鏡を通して世界の終わりを見た（前書き）

ご期待に応えて掲示板です

鏡を通して世界の終わりを見た

【王国騒乱】シャングリラ・フロンティア総合【Ｐａｒｔ．５８４】

５２１：名無しの開拓者
もう俺にはサイナちゃんがクソ可愛い事以外理解できない

５２２：名無しの開拓者
征服人形って旧大陸じゃ会うの無理なん？

５２３：名無しの開拓者
シャンフロはギャルゲーだった？

５２４：名無しの開拓者
カメラ一個で全部映せる訳ねーだろ

５２５：名無しの開拓者
噂の人力剣聖ってこれかぁ！

５２６：名無しの開拓者
征服人形は新大陸のみだぞ、人形の本拠地が新大陸にしかないからな

５２７：名無しの開拓者
シャンフロはＵＩのないギャルゲー定期

５２８：名無しの開拓者
あれ？　ヨッティ消えた？

５２９：名無しの開拓者
！！？

５３０：名無しの開拓者
！？

５３１：名無しの開拓者
なんか来た！？

５３２：名無しの開拓者
デコトラやんけ

５３３：名無しの開拓者
なんだあのギラギラしたトラック

５３４：名無しの開拓者
どっちがプレイヤーだっけ

５３５：名無しの開拓者
デコトラの群れｗｗｗ

５３６：名無しの開拓者
道路がビルを粉砕する光景とは……

５３７：名無しの開拓者
半裸で変な頭してる方

５３８：名無しの開拓者
当たり前のようにトラックの上に飛び乗ってるけど頭おかしいな？

５３９：名無しの開拓者
変な動きしながら武器をいっぱい使う方がプレイヤーだぞ

５４０：名無しの開拓者
どっちだよ

５４１：名無しの開拓者
いやどっちもやんけ

５４２：名無しの開拓者
タンクはサイナちゃんと同型は選ばない方が良さそうだな、デコトラに轢かれて死ぬ

５４３：名無しの開拓
サイナちゃん好きだわー……ツチノコさんめ、とんでもない爆弾を隠しやがって

５４４：名無しの開拓者
最終決戦っぽい

５４５：名無しの開拓者
ツチノコさんが服を着た！！

５４５：名無しの開拓者
ニセツチノコがなんか骨を被った！

５４６：名無しの開拓者
なんで一人のプレイヤーの装備だけでこんな差別化するんだ

５４７：名無しの開拓者

武器は同じなの好き

548：名無しの開拓者
それもSF武器かよ何種類持ってるんだ

549：名無しの開拓者
刃が展開した

550：名無しの開拓者
サイナちゃんとエルマちゃんの歌が奇妙に噛み合っててBGMとしての質が高すぎる

551：名無しの開拓者
サイナちゃんと比べてエルマちゃんの方が若干表情豊かなのいいよね……

552：名無しの開拓者
あの怪物ジークヴルム戦にもいなかった？

553：名無しの開拓者
仕込み武器大スキーとしてはあのハルバードの詳細が滅茶苦茶気になるんですが

554：名無しの開拓者
ジェットコースターみたいに走るデコトラの上でなんで戦えるんだ……

555：名無しの開拓者
イクシードチャージ！！

５５６：名無しの開拓者
拳に切り替えた

５５７：名無しの開拓者
なに今の無駄のない無駄な動きの一周

５５８：名無しの開拓者
アホほどテクニック要求されそうな動きってことしか分からない……

５５９：名無しの開拓者
この円周運動多分スキルだよな？　なんか人権臭いんだが

５６０：名無しの開拓者
クリスタルパンチ顎に入ったー！！！

５６１：名無しの開拓者
うわ顎にクリティカルヒット

５６２：名無しの開拓者
短時間に情報詰まり過ぎぃ

５６３：名無しの開拓者
お、ナイスキャッチ

５６４：名無しの開拓者
凡フライ

５６５：名無しの開拓者
これ戦王ジョブなのか？　武器多彩すぎるだろ

５６６：名無しの開拓者
デコトラが受け止めた、おしぃ

５６７：名無しの開拓者
あまりにも忖度されすぎでは？　勝つまで負けないとかそういう感じなのかオルケストラ

５６８：名無しの開拓者
条件達成しないと勝てないやつじゃないの？　ギミック解かないとモンスターが無限沸きするユニークとかあったし

５６９：名無しの開拓者
普通にあの一撃でＨＰ全損しないのか、コピーと本物でそこまで差は開いて無さそうだしツチノコさん案外タフなのか？

５７０：名無しの開拓者
あれ赤いドロドロにしか攻撃あたってないとか

５７１：名無しの開拓者
リアルタイムで実況しようとしても書き込んでるうちに別のアクションが起きて間に合わん

５７２：名無しの開拓者
これ本当にクリアさせる気あるのか？

５７３：名無しの開拓者
フルタイムでこれはきっついな

５７４：名無しの開拓者
あ、飛び降りた

５７５：名無しの開拓者
ごく当たり前のように数十メートルから飛び降りるな

５７６：名無しの開拓者
空中ジャンプいいなぁ、タンクやってるけど軽戦士に鞍替えしたい

５７７：名無しの開拓者
あんな空中ジャンプって持続するもんなの？　一歩二歩くらいしかできなくね？

５７８：名無しの開拓者
サイナちゃん映った！

５７９：名無しの開拓者
そこどけツチノコ

５８０：名無しの開拓者
サイナちゃんが男と話してるの見ると脳味噌破壊されそう

５８１：名無しの開拓者
ツチノコさん割とクサイ台詞平気で吐くんだね

５８２：名無しの開拓者
サムいと言いたくても絵面が熱すぎて

５８３：名無しの開拓者
（その鳥頭デフォルト扱いなんだ……）

５８４：名無しの開拓者

知り合いですらないのに脳味噌破壊は笑うからやめろ

５８５：名無しの開拓者
なんかとんでもない事サラッと言わんかったかこの半裸

５８６：名無しの開拓者
世界を破壊するって言った？

５８７：名無しの開拓者
パワーの一点集中ってどういうこと？

５８８：名無しの開拓者
はぁサイナちゃんかわよ

５８９：名無しの開拓者
何がなんだかさっぱり分からん

５９０：名無しの開拓者
要するにサイナちゃんの歌がもう一度聞けるってこと

５９１：名無しの開拓者
イントロ一緒だしさっきの歌か

５９２：名無しの開拓者
ぶっちゃけロックの方が好きなのでエルマちゃんを応援したい

５９３：名無しの開拓者
画面端に映るデコトラコースターで笑う

５９４：名無しの開拓者

歌詞違くね？　二番？

５９５：名無しの開拓者
スカした台詞連発して半裸なのに様になってるのずるいわ、不審者だよね？

５９６：名無しの開拓者
あれこれもしかしてプレイヤーを讃える歌的な？

５９７：名無しの開拓者
はーそんなのありかよちょっとシャンフロインして征服人形に告白してくる

５９８：名無しの開拓者
オリジナル歌詞！？

５９９：名無しの開拓者
泣き笑いで歌うとか完全にガチ恋なんですが

６００：名無しの開拓者
あの笑顔がこっちに向く事は絶対にないという事実でシャンフロ引退しそう

６０１：名無しの開拓者
新大陸まだ行けてないんですけお！！！！

６０２：名無しの開拓者
女だけど嫉妬で禿げそう

６０３：名無しの開拓者

俺だって俺だけのために歌ってくれる美少女ロボが欲しいんだが？？？？

６０４：名無しの開拓者
とんでもねえサイズのビルが！！

６０５：名無しの開拓者
タケノコじゃねーんだぞ！？

６０６：名無しの開拓者
あーっ！　サイナちゃんからカメラを外すな！！

６０７：名無しの開拓者
やば、東京タワーくらいあるんじゃないのこのビル

６０８：名無しの開拓者
エンパイアステートビル？

６０９：名無しの開拓者
悔しいけど亀裂の入った夜空と月の光を背にビルの天辺に立ってるのカッコいい

６１０：名無しの開拓者
バランス感覚やべぇ

６１１：名無しの開拓者
ていうかここからどうすんだこれ

６１２：名無しの開拓者
デコトラ高速道路ｖｓ超高層ビル

６１３：名無しの開拓者
狙撃でもすんの？

６１４：名無しの開拓者
なんだあれ、剣？

６１５：名無しの開拓者
なんか出したな、武器かな

６１６：名無しの開拓者
カウンター狙いか

６１７：名無しの開拓者
何するんだろう

６１８：名無しの開拓者
ひええ高い

６１９：名無しの開拓者
下映すな高所恐怖症にはキツイ

６２０：名無しの開拓者
アガトレオ？

６２１：名無しの開拓者
何その封印ギミック！！

６２２：名無しの開拓者
アガトレオ！？

６２３：名無しの開拓者
箱の中から刀が！

６２４：名無しの開拓者
え、どういう作り方すればそんなギミックが

６２５：名無しの開拓者
ていうかここで刀って

６２６：名無しの開拓者
ツチノコさんのこれまでの動き的にまさか

６２７：名無しの開拓者
行った！！

６２８：名無しの開拓者
逝った！？

６２９：名無しの開拓者
マジかよ飛び降りた！！

６３０：名無しの開拓者
アガトレオってなんだ

６３１：名無しの開拓者
まさか正面からぶった斬るつもりか！？

６３２：名無しの開拓者
当たり前みたいな顔で壁走りしないで欲しい

６３３：名無しの開拓者
壁走っとるｗｗｗ

６３４：名無しの開拓者
はっや

６３５：名無しの開拓者
俯瞰視点で見失うレベル！？

６３６：名無しの開拓者
落ちながら加速とか狂気の沙汰

６３７：名無しの開拓者
速すぎる

６３８：名無しの開拓者
地面にぶつかって死ぬぞ

６３９：名無しの開拓者
空中ジャンプで軌道変わった！

６４０：名無しの開拓者
崩壊する世界をバックに壁走りとか状況がイケメンすぎる

６４１：名無しの開拓者
デコトラきた！！

６４２：名無しの開拓者
なんか顔出てきた！！

６４３：名無しの開拓者
虎！？

６４４：名無しの開拓者
なんだあのライオン！

６４５：名無しの開拓者
咆哮で押し出し

６４６：名無しの開拓者
なんだあれ！？

６４７：名無しの開拓者
風でブーストしてる！

６４８：名無しの開拓者
速すぎて何も見えん

６４９：名無しの開拓者
おおおおおおおお！！！

６５０：名無しの開拓者
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお

６５１：名無しの開拓者
あああああああああああああ

６５２：名無しの開拓者
わあああああああああああああああああああああああああ

６５３：名無しの開拓者
斬ったあああああああああああああああ

６５４：名無しの開拓者
一撃で真っ二つ！！

６５５：名無しの開拓者
勝ったぁぁぁあああああ

６５６：名無しの開拓者
そらユニークもソロ討伐できますわ

鏡を通して世界の終わりを見た（後書き）

ヨタトロン（ヨッティ）君なら「お前直結拗らせ過ぎてアバターから臭そうなオーラ漂ってるぞ」がトドメになりました（シャンフロで出会い厨直結厨をやり過ぎるとなんか不潔そうなオーラが出るようになる）（りっちゃんと創世さんの合作なので気合の入り方が賞金狩人並）

Who is that ?（前書き）

手が滑った

Who is that?

「のおおおおお！！？」

カッコよくキメた代償は落下死の宣告……！！！　くっ、ふざけんなここで死んだら末代まで【ライブラリ】に映像保管されるぞ！？

「あああ頼むぞへそくりファイナル！！」

【ライブラリ】から貰った最後のへそくり！　絶対使う事になるとは思ってたがまさかこの最終局面とは！！

頼むぞ使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）！！

「【エア・クッション】！！」

ぼむんっ、と俺の身体を核に全身を緩く押しつぶすような感覚。頼むぞ対衝撃緩和魔法！　落下ダメージを軽減できるって話ですよね！！？

ぼむん！（崩壊するハイウェイの柱に激突）

「おぐぇっ」

ぼぼぼぼぼっ！（瓦礫の粒がエアクッションの耐久を削る音）

「ちょままま」

べしゃんっ！！！（落ちたスライムみたいに地面に叩きつけられる）

「ぶっ」

い……いきて、る？　体力は……嘘だろ一割残ってる、エアクッションすごくない！？　これは「買い」だな、間違いな――

ゴッ！！！！

「ぺぶっ！！？」

視界に星が散る、完全に虚を突かれた一撃。エアクッションがその耐久の全てを費やしてダメージを軽減してなお頭に直撃した拳骨大のアスファルトは俺をスタンさせるに十分な衝撃を与えた。

「くお……」

スタンはよ終われはよ終われはよ終われ……ひぃい！　ヤバイヤバイヤバイここにきて圧死とか嫌過ぎる！！

「ナ、ナムサン……」

だが、救いの神は意外なところから手を差し伸べてきた。巨大な柱が俺を潰さんとする寸前、致命的な崩壊に至った世界が突如として消え去った。

燃え尽きるとか灰になるとかそういうレベルではない。文字通り全てがなんの前触れも余韻もなく綺麗さっぱり消え失せたのだ。

砕けた空も、テクスチャ剥き出しの地面も、摩天楼も、ハイウェイも、そして……「サンラク」も。

この場に残っている存在は四つ。俺、サイナ、隕鉄鏡……そして、

地面に落ちている「サンラク」が装着していた妙な仮面。

「お、おおぉ……スタン復帰」

「契約者（マスター）」

「ようサイナ……どうやら、今度こそ忖度無しに決着のようだぜ」

「歌姫」……エルマ・サキシマの姿はどこにもない。あの世界と一緒に消えてしまったのか、それとも「サンラク」の敗北と共に消えたのか。少なくとも先程まであれほど盛り上がっていた歌はもう響いてはいない。静かだ。

「疑問・初期の状態とはまた異なる風景への変質」

「そうだな……まるでどこぞのバーって感じだ」

成る程、これが最後の謎って訳か。
最初にオルケストラの領域に入った時の劇場型コロシアムのような広々とした空間ではなく、当然歌合戦の結果広がった仮初の夜景でもない。電気の点いていない薄ぼんやりとしたこの場所はまるで閉店しているバーのようだ。

「まぁ座れよサイナ、どの席にも座り放題だ」

「……いえ、しかしあの仮面は」

「まぁ待てまぁ待て、急いては事を仕損じる。分かりやすい近道は大抵行き止まりって相場が決まってるんだ」

これ飲み物並んでるけど飲めるのかな……あっ、掴めるし開けれる。よーしじゃあサンラクさんちょっと張り切ってカクテル作っちゃうぞー。

「まずこのジョッキに一番高そうなボトルの酒を注ぎます」

「指摘：カクテルと定義するには困難かと」

「ファミレス・カクテルだ。ファミレス・ドリンクバーという男が編み出した技法でな……まぁ全部嘘だけど」

「店主（マスター）、鈍器としての適性の高いボトルを一本」

「ドンペリアタックやめろ」

どうせゲームなんだから飲酒もクソもない、なんか適当に選んで適当に混ぜて適当に飲んでみる………うーん、もう少し鉄臭かったら鯖癌風味だったかな。

「さて、本題だ。此度のオルケストラ攻略において重要なのはオルケストラが何を主軸として動いていたかって事だ」

「解答：神代以前人類の遺志では？」

「正解、でも30点だな。それはオルケストラを構成する上で三分の一でしかない……まず神代のさらに先、古代を超えて現代に生きる者たちの生き様を見る、ってのが第一の意思」

これは偽典ルートからも推測できる、オルケストラの分岐に共通するのはプレイヤーを戦わせるって事だからな。動機は知らんが神代

以前人類達はそれを見たがっている事だけは確かだ。

「では二つ目、多分だけど……アンドリュー・ジッタードール本人の意思」

アンドリュー・ジッタードール。度を超えたドルオタではあるがその本質は「文化の保全」に命をかけた神代の天才、その一人だ。ジュリウス・シャングリラ然り、アリス・フロンティア然り、エドワード・オールドクリング然り。神代の天才達はやたら噛ませっぽいエドワードですら何かしらの形で現在に影響を与えている。

征服人形が必須である点、所有者として名を連ねている事を差し引いても明らかな「贔屓」を感じさせるシュテルンブルームの残影……少なくともオルケストラが音楽という形でプレイヤーに試練を課すこのシステムは奴の影響が入っている。

「で、本題がここから……三つ目の意思、オルケストラの正体だ」

「オルケストラの、正体……まさか、」

「はいサイナ、答えをどうぞ」

「解答：エリーゼ・ジッタードールの意思、ですか？」

サイナの答えに俺は鳥面の下でニンマリと笑顔を浮かべる。がぱっと開けた嘴からファミレス・カクテルを流し込んで上手いこと口の中に入れて空気と混ざって炭酸が効きすぎた炭酸水を飲んでる気分になりつつも俺はタメにタメて一言。

「不正解っっっっ！！！」

「……!?」

Who are you?

唖然とするサイナをニマニマと眺めつつ、隕鉄鏡をマニュアル操作で近づけつつ俺は推理を続ける。

「エリーゼ・ジッタードール。成る程確かに奴は「歌姫」として出てくる……だが彼女はオルケストラには絶対に関われない」

何故ならエリーゼ・ジッタードールは音楽プレーヤーの所有者になったことがないから。シュテルンブルームのメンバーもアンドリューも、神代以前人類もオルケストラに関われる最大の理由は期間はどうであれ音楽プレーヤーの所有者であったからだ。

限りなくゼロに近くてもゼロではない、シュテルンブルーム全員が所有していたということは貸し回していた感じだろうか？

「オルケストラに関わることが出来るのは過去にオルケストラ、音楽プレーヤーを保有した事のある者のみ。だからエリーゼ・ジッタードールは絶対にオルケストラに関与していない」

「では、何故エリーゼ・ジッタードールが「歌姫」として出現するのですか？」

そこだ、そこに冥響のオルケストラというユニークを攻略するための鍵がある。

あの時、エルマと交代したエリーゼの顔は「納得」とは程遠いものだった。ユニークシナリオは物語の完結を目指すもの、そしてユニークモンスターは大なり小なり納得と共に撃破される。あるいは納得する為に奴らは動いているケがある。

であればこのままあの画面を……恐らく報酬なのだろうアイテムに手を伸ばすのはあまりに危険、このゲームは一度きりのコンテンツにバッドエンドを仕込むくらい平気でやる。その確信があるからこそ慎重に手を打たなければならない。

「音楽プレーヤーは何のためにある？」

「……解答：主な用途としては音楽鑑賞の為かと」

「そう、音楽を聴く為だ。言い換えれば……歌を「再生」するのが音楽プレーヤーだ」

かつてあったものを同じ状態で再度生まれさせる。例えばそう、エリーゼの歌。だが奴は原理不明のオカルトオブジェクト、蘇るのは本当に歌だけなのか？　本人の……仮に霊魂と定義するそれが関わらない「歌姫（エリーゼ）」を動かしているのは誰だ？

「んー……どうせだしドレスコード気取っておくか」

無論礼服なぞ持っていない、のでそれに近いものを着ることにする。はい聖杯使ってー、バニー服着てー。

「さてサイナ、オーケストラは終わったがやはりこれで終わりとあっては名残惜しいだろ？」

「疑問：一体何を……」

「何をするって……コンサートの最後にすることなんて決まってるだろ？」

はいお手を拝借。

「エリーゼさんのちょっといいとこ見てみたい！　アンコール！　アンコール！　ほらサイナもリピートアフターミー！」

「……アンコール、アンコール、アンコール」

さぁ来い、これが本当のラストコールだ。店じまいはもう少し待ってくれよな「歌姫」さんよ……！！

「「アンコール！　アンコール！」」

サイナと声を合わせ、仮面が置かれているこのバーにおける不自然な空白に声をかけ続ける。

三十秒程声を出していた時だった。

『…………』

青白い炎が虚空に浮かび上がった。

「おっ」

「これは、」

小さな炎が風のない虚空に揺らぎ、あたかもそれが種火であるかのように薄ぼんやりとした影を照らして輪郭を固めていく。

現れたのは一人の女性、あの時悔しげな顔と共に消えた女性……エリーゼ・ジッタードールだ。ただ一つ違う点があるとすれば、その

胸元にまるでネックレスのように音楽プレーヤーをかけていること
だろう。

「エリーゼ・ジッタードールは現れない。であればそこにいるエリーゼの正体は何者かが再現し、そして動かしている存在……そんなことが出来る存在なんて、一つしかないだろう？」

未来を確かめたいと願う者達。
文化を知ってほしいと願う者。
そしてこの歌を聴いてほしいと願ったのは誰なのか？
「エリーゼ・ジッタードール……否、「ポケットアリアＧ型１０－８２１１９」！　それがお前の正体だ」

『…………』

言葉はなく、されどその微笑みが何よりの答えなのだろう。エリーゼ（音楽プレーヤー）は微笑みながらステージの中央に立つ。

「なぁサイナ、」

「応答（はい）：」

「ただの音楽プレーヤーでもここまで来たんだ、人形がアイデンティティを叫んだってなんの引け目もないだろう」

「…………はいっ」

冥響のオルケストラ「追加楽章（アンコール）」。あまりに長く、あまりに強敵であったオルケストラ真のラストバトルは、いつの間にか注がれてい

たカクテルと共に。

『――私は観測者』

『――私は歌う、歌う。私は得た、得た。紡ぐ旋律は命の螺旋、叫ぶ歌声に答えが返る、響く言葉に英傑を見た』

『私は、貴方を見届けた』

『――問いは、比較を経て結論に至った。だから、だから……!』

あの時とは違う、晴れやかな歌声を響かせる「歌姫」の前へ突き出した右手に光が集まる。それと時を同じくして、地面に置かれていた金の鳥面が右手の光へと誘われるように浮遊する。

『――遠く、遠く、明日を眼差(まなざ)す旅人。数多の世界を見つめる数多の眼。ならば貴方は「渡り鳥(ミグラント)」……』

仮面だ。ペストマスクのような嘴を持つ鳥の仮面、それが柔らかな光に包まれていく。

『――さぁ進んで、サンラク。そして、人ならざれど人の輝きを持つ貴女も……』

――――ありがとう。

その言葉を以て歌の全てが終わる。楽器の伴奏もない、静かな独唱……だが孤独感は感じない不思議な体験だった。まるで何十人と一緒に聞いているような、そんな感覚だった。

「なんだサイナ、泣いてるぞ」

「こ、これは…………そう、インテリジェンスな……」

「感情は本能の側じゃねーかな」

未だ淡く光る鳥面を拾い上げれば、それは仄かな暖かさを手に伝えてくる。

「随分と洒落たエンディングだが……達成の感触はまぁ、悪くないね」

からん、と空になったグラスが音を鳴らした気がした。

『遠く、問いかけは答えを得た』
『御来場、誠にありがとうございました』
『楽団一同、心よりの感謝を』
『ユニークシナリオＥＸ「あなたに捧ぐ旋律(ウタ)」をクリアしました』

『称号【堂々終劇】を獲得しました』

『称号【正典制覇】を獲得しました』

『称号【渡り鳥の唄】を獲得しました』

『称号【エルマの太鼓判】を獲得しました』

『Ｌｏａｄｉｎｇ……』

『称号【嵐帝謁見】を獲得しました』

『頭装備「冥響正典（ユア・カノン）：渡り鳥（ミグラント）」を獲得しました』

『アイテム「バー『マスカレード』のキープグラス」を手に入れました』

『アイテム【世界の真理書「冥響編」：正典】を獲得しました』

Who are you?（後書き）

エリーゼが現れた時点で生配信は「このシーンは配信できません」表示になってるので割と阿鼻叫喚、しかもよりにもよってサンラクが真実を指摘する寸前という

今回獲得した称号一覧
【堂々終劇】
オルケストラ正典または偽典をクリアする
【正典制覇】
オルケストラ正典をクリアする
【渡り鳥の唄】
オルケストラのアンコールを聴く、称号名は一人一人違うものになる
【エルマの太鼓判】
エルマ型のオリジナル、エルマ・サキシマと響き合い、勝利した
【嵐帝謁見】
アガトレオ本体と遭遇したことによる称号、実はそんなにレアじゃない

役者は表舞台より去る（前書き）

ステータス表記に何か違和感があったらどしどし言ってください

役者は表舞台より去る

「ほいサイナ」

「……？」

「ハイタッチだよハイタッチ、このクリアはお前の協力無しでは勝てなかったからな」

「……理解しました」

ハイ、ターッチ。

ぺしん、と手のひら同士がぶつかり合って快音を響かせる。さて、ここを出る前に獲得アイテムについて調べないとなぁ？　ゲームの醍醐味の四割がこの瞬間にあるのさ。

・冥響正典（ユア・カノン）：渡り鳥（ミグラント）

冥響の歌姫より授けられた異形にして偉業の仮面。

歌姫の心からのエールを浴びたこの仮面は開拓者が挫けぬ限り壊れる事はない。

この装備はプレイヤーの体力がゼロになった時に破壊され、体力が1以上になった時復活する。

この装備は他プレイヤー、及びＮＰＣに譲渡不可。
・大開眼
装備中、目に関するスキルを使用する毎に「開眼カウンター」を一つ追加する。開眼カウンターを任意の数消費する事で使用後に発動する目に関するスキルの効果量と効果時間を強化する。強化値は消費する開眼カウンターの数に比例する。
・金の黒羽
装備中、装備者の体力が５％以下になる度に「炭羽カウンター」を一つ追加する。炭羽カウンターが五つ溜まった時、全てのカウンターを消費する事で「炭鴉」形態に移行する。
・特殊形態「炭鴉（タンア）」
炭羽カウンターの数　×　六十秒間、全ステータスが１．５倍になる。この効果が終了した時、全ステータスが同じ秒数間０．５倍になる。この効果はあらゆる強化、弱化効果とは別枠で処理される。

多眼の渡り鳥を模した仮面。
バー『マスカレード』は特に足繁く通う常連客に仮面を贈る奇妙なお店。開拓者が授かったこの仮面は遥か遠い過去の中に開店するバーに辿り着いた証である。

「え、神装備じゃん」

え、神装備じゃん。二度見したわ……ごめん今から三度見する。ぇぇ……なにこの神装備。
効果の尽くが「俺（サンラク）」というキャラにベストマッチしている。冥響正典が偶然俺と相性の良い効果だったとは考えづらい、恐らくプレイ

ヤーひとりひとりに合わせた効果になるのだろう。素晴らしい、これは素晴らしい。ただ一つだけ難点があるとすれば常時発火しながら大量の目が周囲をガン見するこの仮面をつけていたら悪目立ちどころの話ではないって事くらいか。

キープグラスの方は世界観的なフレーバーアイテムってところかな、少なくとも戦闘面で何か劇的な効果を発揮する事はないだろう。単に破壊不可だったら盾として使えたかもしれないが……まぁそこは望み過ぎというもの。

「そして何より………くくくくく、」

遂にきたぜ、前人未踏の高み……レベル150！！

いやー、遂に来てしまったよ第二のレベル上限。ちょっと前にレベル100へのキャップが外されたばかりなので我ながら恐るべき速度でたどり着いてしまったな……ありがとう蠍達、ありがとう百足、ありがとう蜘蛛。これからも素材の為に殴りにいきます。

というかオルケストラだけで2レベルくらい上がってないか、それだけの経験値があったというより割合系か？　どんなレベルでも2つ上がるとかそういう系の。

「再現体の強化にならないようステータスポイントも使わずにいたからなぁ……さてどうしてくれようか」

幸運もそろそろ上げても上げなくても大差ない感じになってきたし、本格的に他ステータスを強化していくか？　ＶＩＴは……もうここまで来たら焼石に水だろう。ポイントの無駄だし入れなくて良いか。

そしてぇ……何よりの目玉要素はやはりスキルだろう。わざわざ連

結スキルを全て解除してスキルを鍛え続けていたからなぁ……昇華(スタンバイ)
になるならないはもう諦めた、というかレベルが一気に１５０にな
った時点でもはや叶わぬ夢という奴だ。
ベストではないかもしれないがベターではある、それで良いじゃな
いか……いやまぁいざって時はレベル落としてスキル覚え直すっ
ていう最終手段もあるしな。

「ふふふふふ……クソ程戦ったばかりなのにもう性能を試す為に戦
いたくなってきたぜ……」

スパァン！！　とバニースーツの胴装備と足装備が破裂したがもは
や気にしない。ああそういえば配信切ってなかったな……まぁ限定
配信だしそんなダメージないだろう。

「じゃあ配信切りまーす。オルケストラ攻略、長時間お疲れ考察厨
共～」

……よし、切れた。
じゃあ改めてスキルを確認しつつここから出ますか！！

———————————
ＰＮ：サンラク
ＬＶ：１５０　（３２０……ＬｖＵＰ：４０＋ＥＸＢ：２０＋ＵＭ
Ｂ：２００＋ＵＭＥ：６０）
ＪＯＢ：仇討人（二刀流使い）
ＳＵＢ：逆位置(リバース)「愚者(フール)」
８６８，６５６マーニ
ＨＰ（体力）：１００

MP（魔力）：150
STM（スタミナ）：250
STR（筋力）：220
DEX（器用）：200
AGI（敏捷）：200
TEC（技量）：190
VIT（耐久力）：1（240）
LUC（幸運）：300

スキル
・百閃の剣（ヘカトン・スラッシュ）↓虹光の斬閃（スペクトル・スラッシュ）
・鋭結点睛（えいけつてんせい）↓光差す輝道（シャイニング・スティング）
・重律踏覇↓重律超越（エクシードグラビティフィジクス・トランセンド）
・無重律の恩寵（スペースチャージ）↓星海飛脚（アステ・ランナー）
・鞍馬天秘伝↓韋駄天権現
・ヘルメスブート↓ディオーネーの神助（ディオーネー・アシスタンス）
・ブラッドバーン・バースト↓アブレイズ・アドバンスドエール
・リミット・マキシマイズ↓リミット・アセンション
・全霊喚起↓覚醒己律
・ダーティ・ソード↓アウトレイジ・エッジ
・スラッシュ・イグニッション↓火蓋斬り
・リミットオーバー・アクセル↓リミットブレイク・レェス
・睡神の拳撃（ヒュプノック・アウト）↓睡神の永撃（ノックアウト・ヒュプノス）
・タスラム・フィスト↓ハーキュリー・ストライク
・阿修羅神楽↓帝釈天化身
・戦極武頼↓武身極威
・剣舞【無尽紡】↓剣舞【輪廻】
・不倒不屈↓仁王屹立
・アトラス・タフネス↓ヴィス・ユガ
・真界観測眼（クォンタムゲイズ）・昇華（スタンバイ）↓永劫の眼（クロノスタキサイア）
・百秀の神腕（サウィルダーナハ）・昇華（スタンバイ）↓王神の銀腕（ヌアザ・アガートラム）

・勝利の神撃（ヴルスラグナ・スマッシャー）Ｌｖ．１　ＮＥＷ！

・宿命の狼兆（ウルフェイト・サイン）・昇華（スタンバイ）　→幻日と幻月の狼影（ハティモルゲン・スコルアーベント）

・爆心膝撃（グラウゼロ・スマイト）→震烈の衝撃（テペヨロトル・インパクト）

・ガーディアンハート→スピリット・オブ・ガーディアン

・死線上足踏（デッドホライゾン）・昇華（スタンバイ）　→冥土地平（リバース・オルフェウス）

・クリティカル・レイズ→ストラトゥム・バスター

・万武賦当（ばんぶふとう）　・昇華（スタンバイ）　→全武全能（ぜんぶぜんのう）

・星幽界導線（アストラルライン）・昇華（スタンバイ）　→運命の眼（フェータリザルト）

・ダイナスピリッツ→スペリオル・フォース

・フェイタルゲイン→運命躱し（フェイタルキャンセル）

・パラベラム・ルーティーン　→必勝の先触れ（ザ・フォアランナー）

・プロテクト・スマッシュ→盾士の憤撃（レイジングシールド）

――【到達技能（プライムアーツ）】――

・一威専心

十秒間に１ヒットのみヒット数を付与する攻撃の性能アップ

・多極彩心

十秒間に５ヒット以上のヒット数を付与する攻撃の性能アップ

・完全視界

視力に補正

・征存本能

体力が５％以内になった時、ＳＴＲ、ＡＧＩ、ＬＵＣの中からランダムに補正

・全霊捧武

攻撃スキルの性能アップ

・一輝討千

ソロプレイ時、Ｍｏｂを一体倒す毎にＨＰが一定時間回復し、スタミナの減少量が半減する

――【不世出の奥義（エクゾーディナリー・スキル）】――

戦砕琥示（ウォールフェン）

皇金時代（ゴールデンエイジ）

—【致命武技】—

・致命秘奥【ウツロウミカガミ】改備（あらためぞなえ）
・致命秘奥【タチキリワカチ】改備（あらためぞなえ）

—【晴天流】—

・晴天流「疾風（はやかぜ）」→晴天流「斬風（きりかぜ）」
・晴天流「旋風（つむじかぜ）」→晴天流「廻風（まわしかぜ）」
・晴天流「轟風（とどろかぜ）」→晴天流「爆風（はぜりかぜ）」
・晴天流「雷鳴（らいめい）」→晴天流「雷霆（らいてい）」
・晴天流「迫雷（はくらい）」→晴天流「撃雷（げきらい）」
・晴天流「貫雷（かんらい）」→晴天流「裂雷（れつらい）」ＮＥＷ！
・晴天流「荒波（あらなみ）」→晴天流「波濤（はとう）」
・晴天流「防波（さきなみ）」→晴天流「波旬（はじゅん）」
・晴天流「引波（ひきなみ）」→晴天流「波乱（はらん）」ＮＥＷ！
・晴天流「暮叫（ぼきょう）」
・晴天流「蒼然（そうぜん）」
・晴天流「浮雲（うきぐも）」→晴天流「渦巻雲（うずまきぐも）」
・晴天流「螺雲（ねじりくも）」
・晴天流「叢雲（むらくも）」ＮＥＷ！
・晴天流「噴炎（ふんえん）」ＮＥＷ！
・晴天流「灰流（はいながれ）」ＮＥＷ！

—【マクセル・ドッジアーツ】—

・多重的円周運動（オービット・ムーブメント）
・螺旋的確保挙動（スクリューハンド・キャッチ）
・副次的防衛挙動（コラテラル・ダメージカット）
・相対的立体運動（ソリッド・マニューバー）

—【仇討の流儀】—

・仇討の観察眼（リヴェンズ・アナライズ）
・仇討の宣誓（リヴェンズ・コール）
・仇討の引導撃（リヴェンズ・フェイタリティ）

装備
右：無し
左：無し
頭：―ラヴィ・ラビィ・イヤー（ＶＩＴ＋１２０）
胴：リュカオーンの刻傷
腰：ラヴィ・ラビィ・テール（ＶＩＴ＋１２０）
足：リュカオーンの刻傷
アクセサリー：格納鍵インベントリア
アクセサリー：格納鍵インベントリア
アクセサリー：封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）
アクセサリー：烈砲百足人形（トレイノル・センチピードドール）（状態異常超耐性：毒　＋　ＳＴＭ補正）
アクセサリー：兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）
アクセサリー：別天律の隕鉄鏡
アクセサリー：なし
アクセサリー：なし
――――――――――――

いやー、笑いが止まらないぜはっはっはっ！！

◆

「はっ？」

「ですからねー……配信設定ミスってましたよサンラクさん。全世界にパブリック配信されてましたねー」

なんて？　ドッキリ？

とても痛ましい顔をしたキョージュ、磐斎氏、そしてミレィに告げられた言葉に、先程までの余韻が消し飛ぶ。

「ああ、まぁ……その、要請した手前我々にも責任の一端があるのは事実なわけでね」

「うん。そうだね……サ、サンラク君。同接約三百万人、チャンネル登録者数５６万、おめで……とう？」

「磐斎君、それはなんのフォローにもなっていないよ」

ええと、何？　つまり、プライベート配信のつもりが実は誰でも視聴できるパブリック設定のままで？　それが全世界に公開されてたから三百万人以上に見られていて？　おやおや、リアルの方の携帯端末に大量の着信がありますね。これは鉛筆とカッツォかな？

「ッッスゥーーーーーーーーーー………」

成る程ね？

「拙者、隠居致す」

「サンラクサン！！？」

「ええい止めるなエムル！　あれがノーカットで全世界に！！？ファ。ーーーーーーっ！！！！」

はぁぁぁーーーーー？？？

ぬもーーーーーーーっ！！

ひょーーーーーーーっ！！

ダメだ、メンタルプルップルだ。ちょっと疲れたメンタルにこのトドメはキツすぎる。

思わず衝動的に人のいるところから逃げ出してラビッツで隠居生活せんと駆け出した俺だったが、その動きを妨害するかのように俺の眼前に立ち塞がる影。

「退け！」

「試練の時來れり……」

「いや誰！？」

誰だこの白目剥いた爺さん……あれ、なんか見覚えが。

「覚醒の導師アーカヌム！　何故ここに？」

アーカヌム……あ、「神秘（アルカナム）」くれた爺さんか！

キョージュの言葉で爺さん、もといアーカヌムの事を思い出しつつも、では何故ここにいるのかという問題が改めて浮上する。いや、何故ここにいるのかは分かるが……

「神秘、今ここに試練を課す。恩寵は反転し、逆位置を示す……」

「逆位置……？」

うわ、成る程確かによくよく見てみれば神秘（アルカナム）がいつの間にか逆位置（リバース）に変わっている。「愚者」の部分が同じだから見落としていた……

「試練を超えよ、黒く貶められた「真実」を見出せ。答えは常に汝と共に在る……」

どうも質疑応答の時間を設けるつもりはないらしい。言いたいだけ言い切ったアーカヌムの姿がぼやけ、そして一瞬で消えてしまう。

「…………」

「…………」

なんともいえない沈黙が辺り一帯に広がっていく……とりあえず、うん。

「隠居致す」

「うん、真理書だけ貸してもらえないだろうか？」

どうしてこうなったんだよもおおおお！！

役者は表舞台より去る（後書き）

世界規模で「おすすめ動画」のトップ画面に出てきた感じ、その日半裸鳥頭男女体化バニーガールと一体の征服人形が世界デビューした……（時差的に視聴してた大半が別の国）（シャンフロはおま国ゲー）（日本移住計画）

なおもし夕方とかにやってたら更にひどいことになっていた模様

エピローグ　復讐の炎は達成の水なくして消えることなし

肉が焼けている。

「たった一晩の初配信で登録者数５０万オーバー……羨ましいなぁ、配信者ドリームだ」

「納得のクオリティではあったがな。なるほど確かにＶＲＭＭＯで有名人になるだけのことはある」

とある高級焼肉店にて、二人の男が真昼間から焼き肉を焼いていた。

「シャンフロでフルスペックを出せればあそこまで映えるって知れたのは収穫かもなー……あ、これくれ冷泉」

「それ俺が育てて…………戦争を所望か」

「あながち間違ってないなソレ」

冷え冷えととした視線を受けながら熱々の特選カルビを頬張る男は、冷泉と呼んだもう一人へと箸を突きつける。

「で、ウチの腕担当さんから見た感想は？」

「行儀が悪いぞ妻夫木……そうだな、」

突きつけられた箸を焼けた肉を掴んだトングで弾きながら冷泉と呼ばれた男はしばらく考え込む。そして焼けた牛タンに軽くレモンを

かけて口に含み、嚥下して……

「付け入る隙はある」

そう断言した。

「おぉー、頼もしい」

「……素人でも多少はゲームをやっていれば分かる。あんな無茶な動きは「万能」のそれじゃない、尖ったビルドは必ずどこかを削っている」

「噂のUMA君の場合はめちゃくちゃくそ分かりやすいけどなー」

「まぁ、そうだな。耐久を削っているんだろう……つまり、当たれば勝てる」

「……あれに？」

二人の脳裏に思い浮かぶのは、昼まで時間を置いてもなお記憶に新しい光景。配信者として「そんなのアリかよ」と言いたくなるような大躍進を見せたとあるチャンネルの動画だ。
アーカイブこそ残らなかったものの、既に大量のミラー動画が出回っているしなんなら二人も独自に保存したその配信動画はシャングリラ・フロンティアというゲームにおけるある種の「極限」が映像化されたものだ。

「……ある程度の目処はある」

「なら俺はとやかくは言わんよ」

「お前の方はどうなんだ、向こうにも軍師プレイヤーがいるって話だろう？」

「んー、なんかスパイとかもいる臭いし向こうさん、「ガチ」なんだよねー……まぁ、それならそれでやりようはあるけどな！　って感じかな。あとはギャルゲーの結果次第」

「……説明になってない。妻夫木、ドリンクはどうする？」

「烏龍茶」

「俺は焼酎でも頼むか」

「この後個人配信なのに酒入れるの？」

「……言わなきゃバレない、それに少し入ってた方が調子がいいんだ」

「俺は弱いからなー」

そこからは特に言葉もなく、十数分もすれば二人の昼食も終わる。カードによる支払いを終えて店を出た二人の男は「仕事」の為だけに借りているマンションへと向かうエレベーターの中でさらに会話を交わす。

「この調子だとクリスマス前には決戦って感じだしそんなに時間ないからなー、個人配信しつつシャンフロ一本だね」

「案件関係はどうなった？」

「来年分は受けたけど今年分は一本だけ、もう録画したやつだから冷泉が配信してる間に編集しとく」

「助かる」

「壺カルビも頼んどけば良かったかな」

「…………」

半目で和牛を頼みまくっていた男を睨む冷泉をどこ吹く風でいなしていた妻夫木であったが、ふと思い出したかのようにそらしていた目を合わせる。

「あ、そうだいい加減教えてくれてもいいじゃん。なんで新王側にしたいってあんなに押し通したん？　結果的にいい感じの構図になったけど最初に聞いた時はぐらかしたじゃん？　壺カルビは無しにするから教えてよ」

「……割と個人的な理由だから配信には載せられないぞ」

「え、なんか私怨？」

エレベーターが最上階に到着した事を伝えて扉を開く。なんとも言えない顔をしながらエレベーターを出た冷泉（ガル之瀬）は妻夫木（ぱやぶさ）に向けて端的にこう告げた。

「気に食わないツラを見つけた。三分間殴ったくらいじゃ気が済まないくらいのな」

「え、怖っ。何したらそんな恨み買うのそいつ」

エピローグ　復讐の炎は達成の水なくして消えることなし（後書き）

お前だけは許さん

◇

男にとって、目立つという行いは金や名誉よりも重要な事象だった。
否、厳密には金も名誉も目立つ為の手段でしかない。
幼稚園の頃から中学生になるまで徒競走で負けた事はなかった。
中学一年生の夏、のちに地元最速と呼ばれる友人に初めて足で負けた時に走ることへの熱意はすっぱりと捨てた。もう目立てないと悟ったからだ。
大学生になって配信という今の場所に辿り着いた。
悪目立ちのような行動をしても善く目立つ、ゲームなら道化も暴漢も等しくスターになれる。幼い頃からずっと抱えてきた自己顕示欲を、非才の身で満たせる場所はここしかない。
第三者の視線が自分を固定してくれる。鏡を見てもどこかあやふやに感じてしまう自分を、何千何万倍という数の視線だけが妻夫木（つまぶき）隼（しゅん）を「ぱやぶさ」という形に定めてくれる。
――という旨の話を友人兼相方に話したところ、それはもうドン引きされたわけだが。
「それは誇れるものがあるからだぜ冷泉……」
動画編集ツールを操作する隣で相方の配信動画を眺めつつ妻夫木……ぱやぶさはポツリと呟く。当然パーソナルな電脳空間（フルダイブVR）にいる以上、

その言葉が誰かに届く事はない。

すい、とコンソールを動かせば流れる映像の一つが再生される。映し出されるのは一人の妙な頭をした男が崩壊する世界を駆け抜ける姿。だがぱやぶさの目は動画の人物を見ているようでそうではない。あるいはその眼差しはもっと幼稚な、自分がその立場にありたいという輝き。

「いいねぇ……いいねぇシャンフロ。どこまで目立てるかな？」

リアリティもクオリティも、隔絶したそれらは大衆の目を強く魅了する。ならばそれら全てを舞台として己が立ったならば。

「最高だよシャングリラ・フロンティア……案件優先にして疎かにするんじゃなかった」

一番強くなくていい、一番速くなくていい……ただ、一番目立ちたい。

そう夢見れば、動画編集にも自然と力が入るというものだった。

◇◇

死ぬならば前のめりに。それが芹沢（せりざわ）鈴華（すずか）の人生哲学だ。

何も戦国時代の武将のような人生が良いというわけではない。ただ、鈴華の思考を言語化するとこうなるのだ。

満足するのが嫌いだ、終わってしまったゲームを棚に置いてしまうのが嫌だ、なにより達成感が嫌いだ。

何かに挑戦している時に昂ること、困難に対面した時の挫折の影に背筋を凍らせること、少し休んで再びゲームを始める時に気を引き締めること。鈴華の心はいつだって挑戦者でありたい、見たいのは山の頂点から見る光景ではなく見上げた先に続く道なのだ。

だからゲーム配信も、楽しいのは事実だがそれと同じくらい不満に思っていたのだ。

「シャングリラ・フロンティア、凄いよね」

死ぬまでクリアできないようなゲームがしたい、それが芹沢　鈴華……徹夜騎士カリントウのささやかな願い。叶わぬ願いと知っているからこそ彼女はシャングリラ・フロンティアから離れていた。凄いゲームだと分かっているからこそ、終わった時の寂寥感は過去最大になるだろうと、そう感じたから。

でも違った。

ゲーム内の考察好きなプレイヤー達の手によって日夜明かされていく攻略情報は、そろそろ二年目に到達しようという今でさえ未だ全貌には程遠く。

いつしか攻略サイトを眺めることがカリントウの密かな趣味になるほどに、シャングリラ・フロンティアという世界の広さに魅入られていく日々。

もう我慢できない、そう思っていた矢先のぱやガルちゃんねるからの誘い……もはや断る理由はなかった。

二十四時間耐久配信を開始したカリントウは隕鉄鏡がリアルとバーチャルとを繋げるまでのわずかな隙間に、ポツリと呟いた。

「シャングリラ・フロンティア、楽しみたいな」

願わくば、永遠に！！

◇◇◇

アルファ、ブラボー、チャーリー、中略してゴルフ、ホテルの合計八人。それがＧＵＮ！　ＧＵＮ！　傭兵団のメンバーだ。

ＦＰＳが好きな者達がＦＰＳで知り合って一緒にＦＰＳで配信する……つまりどいつもこいつもつむじからつま先までＦＰＳが大好きな人種の集まりなのだ。

そんな彼らはやはりというか、今日も今日とてＦＰＳをしていた。

「こちらブラボー。エコー、向こうの建物に１パーティ。砂は無し」

「了解、エコーがグレ投げまーす」

『こちらゴルフ、その建物のさらに向こうにいるパーティにちょっかい狙撃しますタイミング求む』

『こちらアルファ、横から監視中……窓際に立った、今』

タァン！　と快音。廃ビルの屋上から放たれた弾丸が空を切り裂いて遥か遠くの敵に命中。それと同時に投げ放たれたグレネードが爆発したことで二つの敵グループが慌ただしく動き出す。

ＧＵＮ！　ＧＵＮ！　傭兵団はそれ以上の追撃をすることなく身を

隠し、経過を観察する。もう一つのグループからすれば「上の方から狙撃された」という情報だけが判明している。それ故に見上げた先のビルで慌ただしく動く者達を下手人と判断した彼らは、濡れ衣を被せられたグループへと銃口を向ける。

『こちらアルファ、お見事』

「こちらエコー、どうもどうも……で、どうする？」

『こちらデルタ、ドローン爆撃開始。アルファはブラボー達と合流して二方向から攻めて削る。砂組はビル籠城側を援護しつつ適宜位置移動』

「「了解」」

八人の兵士達が二手に分かれ、しかし一つの戦術として残る敵を的確に追い詰めていく。主導権を誰が握ったかなど自明の理、決着まではそう長い時間はかからないのだった。

……

…………

「んー……やっぱ物足りないんだよなぁ」

「シャンフロでＦＰＳできると考えちゃうとなー」

迷うことなく再戦を選びながらも、待機空間にて彼らは談笑する。傭兵団の面々はＦＰＳが大好きだ。きっと老人になってもそこにＦ

ＰＳゲームがあれば手を伸ばすだろうという確信を若くして抱くほどには。

だからこそＦＰＳに一つだけ不満があった。

「ま、リアルで街中サバゲーなんか出来るわけないし気持ちが昂るのも分からなくはない」

「視聴者数もマシマシだからねぇ、ＦＰＳは団体ゲーだし格ゲー程盛り上がらないからこの調子で人口が増えてくれたら嬉しいよねー」

「目指せシルヴィア・ゴールドバーグ？　それとも魚臣　慧？」

「俺達プロ相手にはほとんど勝てないんだからそこらへんのプロゲーマーを目指すのはフカし過ぎだろ」

「じゃあ改崎さんくらい？」

「妥協案みたいな扱いやめれ、失礼だろ」

ＦＰＳとは要するに銃を撃ち合うゲームである。

それはつまり、銃を撃ち合うために存在する世界だということ。

ゲーマーなら誰だって考えたことはあるはずだ。例えばもし学校にゾンビの大群が来たら？　もしテロリストが乗り込んできたら？　リアルで魔法が使えたら？

あるいは、街中で銃の撃ち合いをするなら。

彼らの「目的」はＦＰＳではない場所でＦＰＳをする事。銃を取り

出す事自体が間違っているような場所に戦いたい、ＦＰＳのフレーバーとして存在する「非戦闘員（攻撃禁止Ｍｏｂ）」などではない、本当の非戦闘員達の中に飛び込んで戦ってみたい。
だからシャンフロで銃が解禁されたと聞いた時、彼らは思わずハイタッチした。そしてダメ押しの大規模ＰｖＰ……もはや行かない理由を探す方が難しい。

「街中戦闘あるかな」

「そりゃあるっしょ、王都とデカい都市がドンパチやるならどっちかが追い詰められるわけだし」
「ま、我々まだ銃ゲットできてないんですけどね！！」
「シャンフロでも火薬の匂いが嗅ぎたいよなぁ！？」
「魔力とかそういう系だろシャンフロ銃」
彼らはどの陣営に就くか、自陣営が勝利する事で何が起きるかに重きを置かない……何故なら彼らは傭兵団、正義の形など遊ぶゲームで度々変わる。無抵抗を撃つ趣味はないが、結局のところ彼らはトリガーを引いて弾が「敵」に当たればそれでいい。

◇◇◇◇

タバコに火をつけ、一服する。
男にとって高揚を抑えるルーティーンは、それだった。

「ふぅーーーー…………いやはや、学生時代を思い出すね」

ギャンブルとも違う、本業とも違う。焼けるような溺れるような、それでいてご馳走を待つかのような焦燥と期待。それは今ではそうそう味わえないかつての「青春」を思い出させるものだ。

男にとって、これは千載一遇のチャンスなのだ。

手を伸ばすには遠く、追いつこうにも男の足はそこまで登り切る力がない。であればせめて願いを託すしかない……そしておそらく、自分の見立ては間違っていないと確信もできる。

「どちらかというとサードレマ側が「正義」寄りだからね、十中八九向こうについているだろう」

くゆる煙が空に消える。男の家は隣人に煙が届く前に掻き消える程度には広い庭がある、近所迷惑を考える必要はなかった。

「さて……慧君はラブレターを読んでくれるかな？」

流れ星に願った事が叶うのを待つかのように、プロゲーマー改崎速手は空を見上げて薄く笑う――

「熱っっっ！？」

そして、吸いすぎたことで指で挟んでいるフィルター部分まで燃えた事で悲鳴が夜の空に響いた。

烏合の隊列はされど強壮（後書き）

ぱやぶさ：目立ちたい！！！！！

カリントウ：死ぬまで遊び尽くしたい

傭兵団：ＦＰＳ！　ＦＰＳ！

改崎：ラヴィニュー

君に首ったけ

【実質】征服人形契約検証掲示板　ｐａｒｔ．１【婚活】

1：ドルメン
はい

2：カフス
はいじゃないが

3：ブラウン・ティビィ
エルマ型、リリエル型、ハル型、アイヴィ型、リュマ型からフラれた俺参上

4：ガモット
前世で神殺しでもしたんです？

5：重曹軍曹
地味に遭遇難易度クソ高いアイヴィ型にも話しかけてる辺りコミュ力は高そうなのに……

6：ストロングパワー☆粉
エルマ型契約失敗御愁傷様です

7：ブラウン・ティビィ
エルマ型は今本当すごいことになってる、薔薇っぽい花束持参したやつ見た時は流石に笑ってしまったわ

8：ガモット
サイナちゃんショックはあまりにも大きすぎた

9：カフス
海外のシャンフロおま国問題が再燃するくらいにはインパクトあったからな

10：タンクローリーコンクリート
リリエル型……どぼぢて………

11：でんぷん
リリエル型はなー、性格悪そうなのがちょっと

12：パレオパレード
＞＞11
お前は何もわかっていない

13：ブラウン・ティビィ
リリエル型……タンク「ローリーコン」クリート……あっ（察し）

14：タンクローリーコンクリート
一応弁明させてもらうがそっちじゃなくて単純に造形がどストライクなんスよ……

15：カフス
なんか征服人形のタイプごとに条件付けされてるっぽいから目当ての征服人形と契約できないの地味に酷い

16：でんぷん
多分あれプレイヤーのバトルスタイルで区別してるっぽいんだけど

な、全部で何種類いるんだって話だし

17：ブラウン・ティビィ
50人だから50タイプらしいが

18：ドルメン
つまりバトルスタイル判定1／50を見つけ出せと……？

19：パレオパレード
これもうライブラリに頼んでリストにしてもらった方が早いんじゃ

20：ふぁんふぁんにどl
私日本語上手で無いすいません教えて欲しいです

21：でんぷん
日本語教室と場所間違えてますよ

22：カフス
いやこれ海外から移住してきた勢では？

23：ガモット
ふぁんふぁんにどl
Fan Fan Idol
あ、これガチな人だ

24：ふぁんふぁんにどl
BB&DIの動画を見て日本に来ました

25：パレオパレード
ガチじゃん……

２６：重曹軍曹
ＢＢ＆ＩＤって何？

２７：ふぁんふぁにど１
私はサイナに会いたい

２８：ドルメン
ボンバーバニー＆アイドルドール、ツチノコさんのオルケストラ攻略動画のサイナちゃんシーンと服が破裂するツチノ子さんの部分だけ切り抜いたやつ

２９：タンクローリーコンクリート
やっぱ性癖こそが人種も海も超えて人類を結束させるただ一つの方法なんですよね

３０：でんぷん
海外でロリコンカミングアウトしたら７５％犯罪者くらいの扱いされるから黙っとけよ

３１：ふぁんふぁにど１
Ｒｏｒｉ－ｋｏｎはよくないです子供のいる親に殴られます

３２：タンクローリーコンクリート
日本に生まれてよかった

３３：シャットアウター
サイナショックは海を超える

３４：毒神機族

征服人形と契約できたあああああああああああああああ！！！

３５：ドルメン
は？

３６：重曹軍曹
寝言か？

３７：ガモット
＞＞３４
ソース

３８：毒神機族
ごめん嘘

３９：ふぁんふぁにどｌ
＞＞３４
ＦＸＸＫ

４０：シャットアウター
＞＞３４
お前は何をしてもダメ

４１：パレオパレード
使えねぇゴミだ

４２：ぺむてりお
［画像］
＾＾

４３：ドルメン
＞＞３８
ＰＫになる覚悟も辞さない

４４：毒神機族
＞＞４２
！？

４５：タンクローリーコンクリート
ガチな奴！？

４６：重曹軍曹
ただ一緒に写真撮っただけだろ？　怒らないから正直に言ってみ？

４７：ぺむてりお
すまんな、我が相棒レヴナ型３４６号機ちゃんです＾＾

４８：ストロングパワー☆粉
ウッソだろオイ！！

４９：ブラウン・ティビィ
見たことないタイプ！！！！　ベリショ！！！

５０：ガモット
前世でどんな徳を積んだんですか？

５１：ふぁんふぁにど1
とても可愛らしいです

５２：カフス

ぺむてりお様どうかそのナンパ術をご教授いただけませんか

53：ドルメン
単純にどこで遭遇したかも聞きたい

54：ぺむてりお
砂漠無理やり踏破してたら環境調査ってことで空飛んでた
インベントリ内のありとあらゆるアイテム使って気を引いたわ

55：シャットアウター
一発契約成功？

56：パレオパレード
一発マジ？　やっぱ他にも条件あるんかな

57：ガザみん
ツチノコさん以外の契約者来たってマジ？

58：ストロングパワー☆粉
これで征服人形何タイプくらい明らかになった？　20種類くらい？

59：ブラウン・ティビィ
24種類、まだ26種類明らかになってないタイプがいる

60：重曹軍曹
ぺむてりお御大が遭遇した場所的にこれ新大陸各所にご当地征服人形みたいなのがいるんじゃ

61：ドルメン
ていうかよくタンクで樹海突破できたな

62：ぺむてりお
＞＞61
俺以外が全員死んで意地で前に進んだ感じ、このスクショ撮るまで全裸で走ってたし
とりあえずファーストコンタクトとしては
俺「お名前を教えてくれませんか！！」
レヴナ「次世代原始人類を確認。状態確認……脅威度：低」

63：パレオパレード
遠回しに「雑魚が」って言われてないかそれ

64：カフス
いや全裸ならそりゃ脅威度低いだろうよ……タンクでもそこそこ柔くなるわ

65：ぺむてりお
俺「お友達から始めませんか！」
レヴナ「…………？」

66：毒神機族
口下手かな？

67：ガモット
いきなり全裸の男に口説かれたレヴナさん……

68：シャットアウター
花束渡す方がまだ好感度高そうなのに

69：ぺむてりお

半裸のツチノコさんがサイナちゃん口説けるならイケるやろ精神
レヴナ「わたし、征服人形レヴナ型３４６号機は現在環境変動の調査中です。ミッションを途中放棄する権限を保有していません」
俺「手伝います！」

７０：ドルメン
しつこい奴だ

７１：ぺむてりお
そっからまぁ色々あって蛇とか蠍とかを一緒に倒してたらレヴナちゃんが「契約を提案します」って感じで

７２：ストロングパワー☆粉
何も分からないって事が分かった

７３：毒神機族
何かこう、いいところ見せたら惚れてくれる感じ？

７４：ふぁんふぁにどl
私はそれを実行します

７５：ぺむてりお
みんな頑張れよ！

７６：パレオパレード
まさかゲームでも結婚マウント取られるとは思わんでしょクソが

君に首ったけ（後書き）

レヴナ型
元となった人物はレヴナ・ベルベット
主な環境調査、モンスターの生態調査を行うため、征服人形の中でもナンバリング更新が頻繁に行われる、つまりしょっちゅう破壊される征服人形
型の傾向として損得思考がシビアなので「役に立つ」動き、つまりヘイトをかき集める事を得手とするプレイヤーなら高確率で契約できる

征服人形は型の傾向とシチュエーションからプレイヤーの適正が見えてくる
基本的に戦闘を視野に入れたタイプは戦闘職が契約しやすい
あと掲示板に来てないだけで契約者はどんどん増えてる
なおサンラクは「N」に関して誰にも話していない模様

世界の真理書「冥響編」……正典

冥響のオルケストラの適正攻略人数は「1人」です。
さらにその戦闘の性質上、過去に使用した武器または同じ武器種を所有することを推奨します。

冥響のオルケストラ攻略：正典版
今回抽出された真理書はプレイヤー「サンラク」の攻略に基づいたものであるため、一部オンリーワンな記述が存在します。
冥響のオルケストラは第一、第二、第三、第四楽章及び最終楽章の全五つの戦闘によって構成された戦闘型演劇です。その全てにおいて勝利条件は単純なリソースの全損ではない場合がほとんどです。

第一楽章「眠れる孤児」
――ゆりかごは戦場、産声は戦火に霞み、されど赤子は独り戦場に叫ぶ……
――私はここだ、私はここだ。飛翔せよ、撃鉄を引け、幼子は銃を掲げて泣き叫ぶ……
――城に飛び抜け、砲を潜り抜け、光を突き抜けて、若子は戦士と相対する……
――広い世界、狭い戦場。独り戦士は地に伏せる。遥かなる亀を背に戦士を討つは赤、戦士を打つは拳……

FM' sクリサリス "戦災孤児 "との戦闘です。
勝利条件は
・同時出現するアーミレット・ガルガンチュラを一定数撃破する

・アイテム「暴血赤依骸冠（ブロード＝クロウネ）」を使用する
・規格外戦術機亀【玄武】または戦術機による重量攻撃で撃墜する
・上記条件を達成し、格闘系スキルを使用して撃破する

第二楽章「双つ輝く大王冠」
——高く掲げた大王冠。旭に碧く、夜に紅く……
——絢爛なる宝石達は偏屈で、厳格……
——輝きの領土、駆け抜けるは御法度。踏み込むは光すらも許されない……
——光を避けて、光を弾いて、光よりも速く……
——その一歩を踏み出した者だけが栄光を掴み取る……

帝晶双蠍との戦闘です。
勝利条件は
・反射光撃を一定回数回避する
・帝晶双蠍を一定回数変色させる
・上記条件を達成し、一定以上の速度による連続攻撃で撃破する

第三楽章「墓守は憩う」
——墓守は、愛ゆえに、目を離し……英雄は、刃を、見据えて……
——風は雲を薙ぎ、雷（いかづち）に山海は荒ぶる。灰の帳を断つは天を征す者……
——枯れ朽ちて、されど消えぬ信念を。永遠に誓った愛の空隙を、月光が討つ……
——そして、墓守は、ようやく、永く、憩う……刹那、想うは、誰の顔……

墓守のウェザエモンとの戦闘です。

勝利条件は
・被弾回数5回以下
・上記条件を達成し、特殊技「晴天大征」の「天晴」を攻略する

第四楽章「水晶玉座の黄金皇」
――かの皇、亡骸の玉座にて敵を待つ……
――輝ける皇金振るいて敵を討つ……
――月よ、光よ、皇の剣舞を照覧あれ……
――世界を裂くは、月の刃光……
――されど深き冥海の結晶鏡、勝利を映して敵を断つ……

金晶独蠍〝皇金世代（ゴールデンエイジ）〟との戦闘です。
勝利条件は
・尾部「聖剣」の破壊
・「激昂月光態」に移行する
・特殊技「崩月閃」を反射する
・上記条件を達成し、反射によるダメージで撃破する

最終楽章：正典「渡り鳥の歌（ミグラント・ソング）」
正典ルートにおいて、プレイヤーの再現体はオルケストラが展開する「世界」の端末に過ぎません。EXシナリオの攻略において重要な点はオルケストラのリソースを削り切ることです。
オルケストラのリソースを削る方法はただ一つ、「歌姫」が世界の維持に回しているリソースを再現体の保護に割かせる事で「世界」の主導権を奪取する。その為にはユニークシナリオEXを発生させる為に契約した征服人形をオルケストラの「劇場」内部へと持ち込む必要があります。
例を挙げれば征服人形の収納に対応した「鍵」、あるいは召還転移

系魔法最上位の「門」などが推奨されます。
もし仮に征服人形を用いない攻略を行う場合は、バハムート船内で作成可能な「情報集積体：〇〇」を用いる必要があります。
プレイヤー「サンラク」に対応した再現体は征服人形を内部に持ち込む事で思考の混線を起こし、ＡＩレベルを下げます。
この段階で再現体を直接撃破する事は不可能ですが、オルケストラがリソースを再現体の防御に割いた時、目に見える形で「世界」の主導権が削られていきます。
エリーゼとして出現した「歌姫」が展開する「羨望劇場」を征服人形の展開する世界で九割以上制圧すると最終楽章は後半フェーズへと移行します。

後半フェーズにおいて、「Ｎ」パッチをインストールしている場合、エリーゼ・ジッタードールとして表出した「歌姫」はその場にいる征服人形に対応した人物を「歌姫」として切り替えます。今回はエルマ型であった為、エルマ・サキシマが出現します。
征服人形が存在しない場合は、情報集積体を基に「歌姫（エリーゼ）」が強化されます。
エルマとして表出した「歌姫」は主導権の半分を奪取した状態で再び「世界」を展開します。攻略方法は前半フェーズと同様ですが、「世界」の主導権を九割制圧した時点で最終フェーズへと移行します。

最終フェーズでは、「歌姫」の展開する世界はそれを象徴するもののみに集約され、征服人形が掲載した世界内に発生します。今回はエルマの「ハイウェイ・スター」が反映された為、瞬間的かつ立体的に展開される高速道路とトラックという形で出力されました。
このフェーズに移行した時点で再現体に対する防衛は行われなくな

ります。再現体を撃破する事で冥響のオルケストラの楽章攻略が完了します。

冥響のオルケストラ特殊行動
正典ルートのオルケストラは征服人形の「N」パッチの有無で行動パターンに若干の変動が発生します。
「N」パッチをインストールしていない場合、エルマ・サキシマとしての「歌姫」は出現せず、エリーゼとしての「歌姫」のまま状況は進行します。最終的な報酬そのものに変化はありませんがトゥルーエンドに到達しないため、報酬の「仮面」の性能に制限が付きます。
「N」パッチをインストールしている場合は上述の通りに進行し、戦闘終了後バー「マスカレード」に転移します。
バー「マスカレード」では最後の選択肢が提示されます。床に落ちている「仮面」を拾った時点でクリア扱いとなるため、暫く待つ事で「歌姫」が出現します。彼女へ真実を突きつけ、その上で彼女の「歌」を聞く事でトゥルーエンドが解放されます。

冥響のオルケストラのストーリー的設定
冥響のオルケストラは三つの意思によって運営される多重意思交差型音楽端末です。その由来を辿れば神代人類がこの惑星を見つけるよりもさらに前、まだ地球から脱出する前に製造されたひとつの音楽プレーヤー「ポケットアリアG型10－82119」にまで遡ります。
音楽プレーヤーは善人、悪人、賢者、愚者、老人、幼子、男、女……人種を問わず、時代を問わず多くの人々の手に渡り、多くの音楽を奏でてきました。そうして人類が惑星ユートピアにたどり着いた時、音楽プレーヤーはある種の「意思」のようなものを宿してい

ました。果たしてそれがユートピアのマナ粒子によって具現化したものなのか、それとももっと別の摂理が生み出したものなのか……それを解き明かす術はありません。ですが、事実として音楽プレーヤーはかつてそれを保有していた人々の意思のようなものを、そして何より音楽プレーヤー自身の意思を獲得するに至ったのです。
そんな音楽プレーヤーを最後に所有することになった人物、すなわち征服人形の創り出した者アンドリュー・ジッタードール（詳細・ベヒーモス参照）の意思だけはより色濃く残っているため、本来は数多の人々の意思に混ざるはずだった「文化を、音楽を次世代の人類に伝えたい」というアンドリューの意思だけは独立してオルケストラを形成する一部となり、オルケストラを形成する三つの意思の一つとなりました。

初めて手にした者からアンドリューの直前まで所有していた者たちの意思。
アンドリュー・ジッタードールの意思。
それらと並び、三つのうちの最後の一つを形成する「意思」こそがエリーゼ・ジッタードール……ではなく、音楽プレーヤー「ポケットアリアG型１０－８２１１９」という一存在の意思です。
気の遠くなるほどの時間を、元のパーツが一つも残らない程に改修と修理を繰り返してきた音楽プレーヤーではあるものの、その存在は……「誰かの持つ音楽プレーヤー」としての存在は長い年月の中である一つの意思を確立するに至りました。その決定打となったのがエリーゼ・ジッタードールの歌なのです。

この歌を広めたい、この歌を過去のものとして失わせたくない。それ故にオルケストラの代弁者たる「歌姫」はエリーゼ・ジッタードールの姿を取っているのです。そういった出自故にオルケストラの宿す「意思」の中にエリーゼ・ジッタードール本人の意思は存在し

ません。
ユニークモンスターは問うモノ、自らの存在を賭して答えを求めるモノ。
不特定多数の所有者達は途絶え、それでも続いた人類の輝きを見せてくれと問いかけます。
アンドリュー・ジッタードールは征服人形という「芸術」の感想を求めています。
そして、小さな音楽プレーヤーは歌い響く旋律の素晴らしさを理解してほしいと叫ぶのです。

人々の遺した意思が未来を見ている中で、ただ一つ過去の歌姫を掲げ続けるその意思こそが、オルケストラをユニークモンスターたらしめる最大の理由なのかもしれません。

余談ですが、正典トゥルーエンド以外のエンディング（偽典含む）に到達したプレイヤーは、獲得報酬を招待状代わりに返却という形で使用することで難易度は上がりますが再挑戦することが可能です。そしてトゥルーエンドに到達したプレイヤーは獲得報酬の仮面を装備した状態で入場することでいつでもバー「マスカレード」でエリーゼの歌を聞くことができます。

ちなみに征服人形を使わない場合は歴代所有者の中の誰かの情報をバハムートで集めて「情報集積体」を作る必要がある。再現体が弱体化しないのでめちゃくちゃ面倒臭い上にトゥルーエンドに到達しないのでやる意味はほぼない。そもそもオルケストラに挑める時点で征服人形と契約してるんだから情報集積体を作るより「N」パッチとインベントリアｏｒチェストリアを探した方が早い。

揺れる水面に己の顔を見た

釣りとは。

父曰く、釣りとは水面を通して魚と、世界と対話する世界で最も高尚な行いである。この時点で胡散臭い。

「…………」

ぱしゃり、と水面が揺れる。

くい、と竿を引けば感触は軽い……チッ、雑魚か。

釣り針に食いついたブルーギルを川に投げ捨て、再び餌をつけて川に竿を振る。

「…………」

父曰く、釣りをしてる最中の水面は感情を映す鏡であるという。その理論で言うと川なので輪郭ブレブレな顔しか映らないのだが……あれ、意外と間違っていないのでは。

ぱしゃり、と水面が揺れる。

くい、と竿を引けば感触は軽い……ええい、雑魚か。

釣り針に食いついたブルーギルを川に投げ捨て、三度餌をつけて川に竿を振る。

「…………」

何故、俺は釣りをしているのだろう。

もうこれで三日三晩釣りゲーをしている。ブルーギルはさっきの個体で二千四匹目だ、そろそろここら辺の川は環境破壊され尽くしてるんじゃないのか。

いいや、いいや、理由は分かっている。それは例えば軽率に例のアカウントを除いて手が震えたせいだし、その震えが止まらないのでシャンフロにインできないのが理由だ。

つまり今俺は、恐怖している。

「俺が？」

この川から釣れ続けるブルーギルは俺の現在を暗示している。ブルーギルは外来種だ、爆発的に増えたことで元々の生態系を破壊する……このブルーギルはすなわち「知名度」。俺という川に流入した三千匹の知名度が俺をかき乱している。

では俺は何故釣りをしている？　川釣りモードではごく低確率で釣れる魚がいる。それは元々川にいたもの達……つまり、元来の俺が備えていたもの。俺にとっての鮭とは、鮎とはなんなのか。

「ゲームに、ワクワクする心……！」

そう、それこそが俺の原点。俺のオリジナルでプリミティブな感情。
釣竿に手応え、重い！
バシャバシャと水面が激しく飛沫を上げる。わずかに見えた影は大きい、断じてブルーギルではない！！

この釣竿で鯨を一本釣りできるアホゲー「フィッシング・フェスティバル・ファイブ」……恐ろしい事に3からクソゲー化しているに

も関わらずファイブまで出ているこの怪物(モンスター)をやり直していた甲斐があったぜ！　父よ、今ここで俺は俺のメンタリティに決着をつける！！

「出でよ俺の鮭(ワクワク)――――！」

・ブラックバス

「フィーーーーーーーッシュ！！（ブラックバスを川に蹴り込む）」

ついでに川に飛び込んで感情のままに泳いでいたら偶然近くを泳いでいた毒蛇に噛まれてゲームオーバーになった。は？？？

我が心、荒れる波風、治(おさ)まらず（辞世の句）

◇

一つ星は漸く憩うた。

二つ星は無聊の慰めを得た。

三つ星は人々の輝きに六つ星の「厄災」を打ち砕く未来を託した。

四つ星は偽典の人魚が倒れた時点で答えの欠片を得た。

そう、世界と世界をぶつけ合う正典がクリアされた瞬間ではなく。ミレィが偽典をクリアした時点で、既にワールドシナリオは進行していた。あるいはそれは王国騒乱という形で目に見えているかもしれない、だが目に見えない形で進んでいるものもあった。

世界の進行は七つ星の輝きに連動する、「六つ星」が定められた瞬間を待つ以上……「五つ星」になり得る最強種は二体に絞られた。未だ到達者が現れぬ極北に眠る狼の夜が目覚める時ではない。ならば、「抜け殻の乙女達」が人と手を組んだ事で動くは尽きる事無き蛇。

そしてなにより……王国騒乱のシナリオ、その壇上に乗り込む二体の「始源」。シャングリラ・フロンティアの世界は既に動き出している。あるいは誰かの思い通りに？　それともそうではない？

それを断言できる者は、もうどこにもいないのに。

【旅狼】

鉛筆騎士王：ヘイヘイヘイヘイヘイヘイヘーーーイ！　いい加減出てきなよ有

名配信者様よーーーぅ！！

鉛筆騎士王：一夜で手の内全部明かしてオルケストラも八割ネタバレさせた配信者さまよーーーぅ！！

オイカッツォ：煽る煽る

サイガー０：その動画はどこで見ることができますか

ルスト：ミラーが上がっていたので見たけど凄かった

鉛筆騎士王：いや本当見事でしたねぇ。私なーーんにも聞いてなかったんですけどね！

鉛筆騎士王：お姉さん悲しいよ……

ルスト：アンドロイドはそこまでだけど悪くないと感じた

ルスト：取得条件とか知ってるの？

サイガー０：その動画はどこで見ることができますか

オイカッツォ：あの刀ってどこ由来？　ユニーク？

京極：あ、これかミラー動画って

サイガー０：京極さんその動画はどこで見ることができますか

京極：随分とがっつくね０さん

サイガー０：そういうのはいいので

ルスト：むしろ征服人形の武器に興味がある

鉛筆騎士王：全員の着眼点が違いすぎて話題ごっちゃごちゃだねぇ！！

オイカッツォ：で、当の本人は？

サイガー０：己と向き合ってくる、らしいです

鉛筆騎士王：オフゲーに逃げたなあいつ……

揺れる水面に己の顔を見た（後書き）

この小説はシャングリラ・フロンティアで合っています（恒例）

それはそれとして

◆

玲さんと勉強会をする事になった。
如何にシャンフロでＬｖ．１５０とイキったところでリアルじゃただの高校生、期末試験はレベル１でも１５０でも等しく同じ難易度だ。
我が人生の師、武田氏謹製の将来チャートに従って学業をこなしている俺だが勉強というものは厄介なもので、世の大半の学生からは厄介な魔王のようなものと思われているがその実態は地道なレベリング系統なのでちょっとでも攻略を怠ると後々響いてくる。

という話を玲さんにしたところ、勉強会をしませんかという流れになったわけだ。
よくよく考えなくても玲さんは頭が良いので勉強会の相手としては理想的ではないだろうか、少なくともどっかのポエム野郎みたいにいきなり英語でポエムを口ずさんだりはしないだろう……奴の「英文ポエムシリーズ」はまだ切り札として懐にしまってある。

◇

楽郎と勉強会をする事になった。

既にこの時点で玲の意識は失神の二歩手前まで踏み込んでいたが、意地でもこのチャンスを逃すわけにはいかぬと、「恋心」の文字が刻まれた鎖がなんとか玲の意識をつなぎ止めていた。

（はっ……はっ……………吐きそう………）

勉強会、つまり二人きり、即ちデートあるいはその類義語である。岩巻が聞けば半目でため息をつきそうな思考のぶっ飛び方をしているが中学生の頃から「勉強会とか開いて楽郎君から頼られたりして……」と妄想しながら勉学に努めていた玲である。こじれにこじれた数年分の感情が現在この瞬間に溢れ出すのも無理もない事だった。

（ばん、万全の……そう、万全の備えを……！！）

万が一にも無様な姿を見せるわけにはいかない、楽郎からの如何なる質問にも答えられるようにしなければ。

自分が楽郎に質問する、という可能性が頭からすっぽり抜け落ちたままに、難関大学を目指す高校生向けの電子参考書を衝動的に買いまくる玲。それを止める者はなく、さらに言えば見てくれだけは「大学受験に燃える優等生」なので尚更止める者がいない。

結果として。

「…………」

「…………」

直近の期末程度ならそこまで困っていない楽郎と、困ることすら無い質問待ちの玲によるひたすら無言の勉強会がそこには広がってい

た。

そも、玲や楽郎の住む街の私立図書館は一年程前に大改修が行われ、国内屈指の最先端設備を備えるに至ったハイテク図書館である。

机の「面」であればどこに触れてもコンソールを操作できる全面タッチパネルシステムデスクを使えば席から立つ事なく最新の参考書を表示することができる。

つまり玲の衝動買いは将来的な有用さを差し引いても無駄な買い物だったわけだが、本人としては今の状況こそが値千金なので多少の端金(はしたがね)程度は気にも留めない。

「…………」

「…………」

何か違うのではないだろうか。

学力のパラメータが上がる反面、何か別のパラメータがゴリゴリ下がっている気配が背筋を震わせる。

そう、受け身なままでは本当に何も進展しないことを自分は何年も実体験として経験しているはずだ。ならばどうすればいいのか。

「………っ」

玲は岩巻に助けを求めた。

数秒してＳＮＳに返事が来る、期待の眼差しで通知を見れば、

岩巻：告白

「…………」

それができたらこんな苦労はしていない。岩巻がこの場においてなんの助けにもならないと結論づけた例は世間一般の価値観で識別するなら「優等生」に部類される脳をフル回転させ、共通の話題を会話の切り口にする妙案を思いつく。

「……あの、」

「ん？」

流石私、と己を褒め称えながら玲は図書館という場所に考慮した小さめの音量で一言。

「例の、動画を見たんですけれど……」

「ぬ。っ」

ずごん！！！！！！

「ぴょっ！？」

楽郎が結構な勢いで額を机に叩きつけながら突っ伏した。
斎賀　玲、痛恨の地雷マスであった。

◆

肝臓の辺りから出た変な汁が鼻の奥で炸裂したような不意打ちが俺を襲う。今まで生きてきて覚えてる限り一度も出した事のないような音が喉と鼻の中間辺りから出た気がする。

一瞬でバグった思考を額の痛みが再起動する、問題はないと周囲に頭を下げげつつ俺は残った理性をかき集めて「何も問題はない」といった体の外面を構築する。

「へ、へぇーえ？　見た感じでごずぇーますか？」

「な、何か……あの、ええと、その、ご、ごめんなさい？」

「問題ねっす、全く問題はねーっす」

「そ、そうですか………その、とても……カッ……か、こっ……す、凄かった、です」

「は、ははは……」

シンプルに称賛されるのが一番つらい。

アーカイブとして動画を残していない筈なのに何故か最初から録画されたデータがミラーとして出回っているし……で、知らん奴が上げたその動画に広告がついて何万再生もされてるって事は広告収入が誰かの懐に入ってるのが強かというかなんというか……今朝見たら消されてたけど。んでそれぞれ別の投稿者による投稿で三つに増えてた。

「オルケストラは……あんな、感じなんですね」

「ルートが二つに分岐してるからね……あー、玲さんも挑むの？」

「い、いえっ、私はまだその、剣と鎧関連で色々と……」

あー、そういう。この人シャンフロでオンリーワン張ってるもんなぁ。

「その……楽郎君は、どうして動画を……？」

「………本当はライブラリと検証するためにプライベート配信にするつもりだったんだけど、操作間違えてパブリック公開に」

「あ………それは、あの、それは………」

笑いたくば笑っていいぜ玲さん、外道共ならまぁ爆笑するだろうし。
ふと携帯端末で調べてみれば、三つあるミラーが全て１０万再生していた、トータル何万行った？　世界君ちょっと俺に課す試練のレベル高すぎない？

それはそれとして（後書き）

一体誰が完全録画データを持ってたんだろうなぁ……そして誰が収益化した動画を通報したんだろうなぁ……

道徳を逆手に取って（前書き）

書くとすぐ見せたくなる、良くない兆候だ……

２０ｔｈクェーサーのカードナンバー、「一」は「｜」に……硬梨菜から言えるのはここまでです。没ネタと性癖とマニーな話しか呟かない処を見つける一助になれば……

話題を切り替えよう、この話題で俺のテンションが好転する未来が見えない。０と１００だけは乱数の女神をして干渉できない絶対の領域、即ち「確定」という名の宣告だ。そうだな……

「そ、そういえば玲さんは英語とかどう？　どうせ１０点分は道徳問題だから平均点高そうだし」

「そ……う、ですね。大須賀先生は……その、多分今回も最後の作文はいつものでしょうし」

大須賀・Ｍａｋｉｋｏ先生……日本語の名前をわざわざアルファベットにしたとかではなく、マジでＭａｋｉｋｏという名前のアメリカ人だ。
日本人の旦那さんに嫁入りしたから大須賀という名字になっている英語教師はとても道徳的に繊細なお人なので、世間に不安な話題があるとすぐにそれをテストに反映させる変な癖がある。「昨今では詐欺が横行していますが貴方はどう思いますか？」とかそんな感じの。

つまり期末テストが作られるだろう大体二週間前くらいからニュース番組を追ってあらかじめ文章を考えておけば最低１０点は確実に取れる。
学生間ネットワークで最有力とされているのは「最近横行している新型薬物」か「一週間前東北の高速道路で起きた大規模衝突事故」のどちらかだろうと予測されている……どちらも縁遠い話題だがテストに出るとなれば見て見ぬ振りもできない。オッズは６：４、賭

けるなら薬物のほうだな、テストに必要なのは一発逆転ではなく確実に点を取るアベレージヒットだ。

「大須賀先生は問題文に引っかけ入れるからなぁ」

よく読むとちゃんと分かるのがまたイヤらしいんだ、流し読みだとひっかかる文章を作るのがやたら上手いから英語のテストは他と比べても気合を入れないと時間が足りなくて詰む。

チャートはちゃんと立てないとな……まず最初に時事ネタ作文で確実に10点確保しつつ……

「あ、その、わ、私英語は対策立ててるのでっ、よければその、お教え……します、よ？」

「マジ？　是非是非」

流石は玲さん、抜かりがない。

……

…………

……………

「いえ、そんな……」

「いいよいいよ気にしないで、別にこんな間食程度で威張るわけじゃないけどせめて奢らせてよ」

気づけば夜七時、仮にも高校生なのでまだまだ「活動時間」だろうが夜遊びする程無茶でもない。図書館を出た俺と玲さんは帰り道で立ち寄ったコンビニで肉まんを購入、二つ買ったうちの一つを玲さんに手渡す。
正直今日発売のゲーム雑誌の表紙に書いてあった「衝撃！　シャンフロ最新アップデート内容最速特集！」の文字がそこそこ気になったのだが、まぁどうせ新ジョブ開放とかそこらへんだろう。流石に玲さん放置して雑誌立ち読みするほど神経ずぶとくはない。

「はい」

「あ、ありがとうございましゅ……」

もうめっきり寒くなってきたからこういう買い食いが捗ること捗ること。少し齧りつけば露出した餡が空気を熱して煙のような湯気を立てる。うーん風流、一句詠めそうだ。

寒い中
かじる肉まん
いとうまし
実は金欠
懐寒し

……なんて事だ、百人一首が百一人一首になってしまうな。これには松尾芭蕉もびっくり、なんてな。
そんなアホな事を考えつつ完食、コンビニのゴミ箱に包み紙を投げ込んでいると……ふと、緑と赤で装飾された店内の光景からそういえばと思い出す。

「そろそろクリスマスか」

「んぐっひゅ！！」

そう呟いた直後、玲さんが派手にむせた。

「ごほっ！　ごほっ！！」

「大丈夫！？　水買ってこようか？！！」

「だい、ら、らいじょうぶ…ですっ」

いや大丈夫じゃなさそうだから心配してるんだけど……とはいえ自己申告に偽りはなかったらしく、しばらくむせ込んでいた玲さんであったが呼吸が完全に詰まったわけでもないようだ。

「ソ、ソーデスネ！　そろそろクリスマスのシーズンですねっ！！」

クリスマス……クリスマス、か。限定イベントの日という認識しか無いのはうら若き高校生としてどうなんだろうと思わなくもないが、ウチに来るサンタクロースは事あるごとに釣りと虫取りを激しく推してくるので俺も瑠美も小学生でその正体に気づく。

いちばん怖かったのは小六の時に枕元にブラジルへの飛行機チケットが置いてあった時だな……え、確定なの？って幼心に恐怖を覚えた。いや父よ、行こうぜポロロッカじゃねーんだわ。

「クリスマスか……」

幕末例年通りなら北鏖聖伐飛将軍（ホクオウセイバツヒショウグン）サンタクロース討伐イベントがあるだろうしネフホロは限定カラーリングが取れるイベがあるからル

ストがうるさそうだ。ギャラトラは……どうせ亡霊船団セント・ニコラウス撃滅戦だろ？　テラトン級がバカスカ沈む魔の戦争宙域に誰が行くんだよ。

「あ、あのっ！！！！」

「ん？」

「その、ええと、ですね。もし、あの、その、もしも……その、24日……ごっ、ご予定がなければ………」

「うん」

先程まで咳き込んでいたせいか、未だ赤みの取れない顔でこちらを見ながら玲さんは口を開く。

「わ、わた、私と…………っ！！」

おや、これはまるで世間一般というか現代日本的なクリスマスの——

——

「シャンフロしませんかっ！！」

「いいよ」

流石だ玲さん、そのシャンフロにかける廃色の熱意はとても好ましく思うぜ。正直今シャンフロは色々とキッツいものがあるのだが、同じラビッツ組でガチ廃人の玲さんの頼みとあれば恥を忍んでログインするのもやぶさかではない。

「いやぁ、なんか玲さんと話してたらシャンフロへの忌避感も薄くなってきたよ。ありがとう」

「…………はひぃ」

◇

玲は37．6度の熱を出した。

◇◇

サードレマ大公城、城内サロン
赤鉛筆のロゴを服に鎧に刻み付けた者達が集まり一人の女を見据えていた。
女は黙し、瞑目し……されど、その心中にてなんらかの結論が出たのか、目を見開いて口を開ける。

そして一言。

「爆弾影武者作戦！　志願者だーれだ！！」

「俺がやるぜ！」

「いや私が！」

「自分公女か王女希望っス！！」

「いやその声で女役は無理でしょ」

「でも口を開いたらこの声出たら面白くね？」

「しかも自爆する」

「あーそれいいかも」

「静粛に！　静粛に！！　もう、みんなこの役目好きすぎでしょ」

爆弾影武者、かつて世紀末と化した円卓において非人道兵器とされた悪魔の戦術である。内容は至極シンプル、要人ＮＰＣに化けてプレイヤーを巻き込んで自爆する……それだけである。
シンプル、故に悪辣。特に死にデメリットのないゲームであればあるほどこの戦術はしつこい程に繰り返され続ける。最終的には前線に大量の同じ顔が溢れ、武器を構えながら突っ込んでくる同じ顔……という光景が繰り広げられる感染型外道戦法、それが爆弾影武者作戦なのだ。

「ふふふ……協力者のお陰で自爆魔法のストックも着々と溜まってるし、これは捗りそうだねぇ……で、諜報班の方はどんなもんかな？」

「とりあえず向こうが配信してる方はそこそこ追ってるけどなんかフツーって感じっすわ。時々妙に効率的なプレイしてるんで裏で情報交換してるのは確定っぽい」

「あとカリントウ追いかけるのは無理、なんなら今も配信中ですよあの人」

でしょうね、とペンシルゴンは自信に満ちた笑みを崩さないまま心の中で苦笑する。友人と言うには少々アクの強い二人もそうだが、世の中にはショートスリーパーという言葉で片付けていいのかというレベルでオールタイムを戦う人種がいる。
徹夜騎士カリントウはその中でもさらに極端なタイプだ、なまじ暮らしていけるだけの収入を得られるからゲームの息抜きにゲームをしてさぁゲームをやろう、なんて思考になるのだ。
配信者連合の厄介な点は一定数のプレイヤーを常にシャンフロにインさせられるという事だ、それはこれからペンシルゴン達がやろう

としていることを考えればとてもとても都合が悪い。

新大陸からフィフティシアに帰港する船から前王トルヴァンテと王女アーフィリアをサードレマまで護送する。どう足掻いても新王勢力を突っ切らねばならないミッション……RPAは既に、道徳という楔を脳から引き抜いた奴しかいない。

（理想を言えばサンラク君をフィフティシアに投げ込んでおけば何とかなりそうなんだけどねぇ……）

少なくとも新王勢前王勢が正面衝突する時くらいまでは人里に現れることはないだろうな、と案外シャイな友人を思い浮かべながらペンシルゴンは嘆息するのだった。

道徳を逆手に取って（後書き）

要するにサンタクロースカラーの呂布だよ、トナカイってレベルじゃないツノが生えた赤兎馬がソリを牽いてる

◇

まずいなこれは、とオイカッツォは灼熱の中で冷や汗をかく。

「カッツ！　明らかにこれ……「敵意」だよな！？」

「ジッポの奴が蒸発したんだが！？」

「あの耐熱装備結構手間かかってるって自慢した矢先じゃん……」

哀れみの感情もこの熱波の中では二秒と保たず蒸発していく。共通の目的のために知り合ったプレイヤー達のパーティに一時的な固定入りをしたオイカッツォであったが、その中のタンクが蒸発した事で今自分達が置かれている状況が相当にヤバい事を認識する。

「今……明らかにジッポを死ぬまで狙ってたよね」

タンクがヘイトを引き受けたから、とかそういうレベルではない。あの蝶の形をした炎は今、明確に「特定の個人を確実に始末する」動きをした。それも、タンクゆえに前に出て味方を守るという役目を利用した罠まで仕掛けて。

「なんか変なフラグ踏んだ？」

いや、それはないだろう。あるとすれば一定回数周回した事が原因かもしれないが……だが少なくとも、そこそこ効率厨なオイカッツ

ォがなんの文句もないと評価する程度にはこの一時的な固定パーティの面々は優秀だ。状況に応じた行動の変化こそあるが「絶対に同じ結果で終わらせる」という点において、既に五度目の挑戦だがこのパーティはブレていない。

であれば、やはり原因は「回数」か……あるいは、ワールドストーリー。プレイヤーではどうにもならない世界の変遷、めくられるページの中にこの蝶炎……
悴がる大赤翅の項目も含まれていたということか。

「どうするリーダー！？」

「無理だな！　破損したくない装備はインベントリに入れて情報収集しよう！！　カッツさんもそれで良いよな！？」

「本当はもう一個「解凍」したかったんだけど……いや？　むしろこれだけ出すか……ＯＫ！！」

一人脱落して残り四人、男女を問わず全ての装備を解除したインナーだけの四人が轟々とこれまでにない音を立てて燃え盛る大赤翅へと視線を向ける。

「案外今なら攻撃が通ったり……」

「物理は溶けるだろ、バスコ魔法いけるか？」

「壊れて問題ない魔法装備なんか入れてないっつーの……あー、しゃーないスクロール使……っあぁあ！？」

固定パーティのうち、魔法職の女プレイヤー（男）がインベントリ

から使い捨て魔術媒体(マジックスクロール)を取り出した瞬間、筒状に巻かれていた羊皮紙が勢いよく発火した。

「俺の二百万マ――――」

次の瞬間、しれっとハリウッドジャンプで回避していた三人ではなく役割を果たすことなく燃え尽きた高額スクロールに気を取られた女プレイヤー（男）の身体が大赤翅から放たれた白熱の光によって消し炭にされた。

「バ、バスコーっ！！」

「これ燃えやすい素材のアイテム使えなくなる奴？」

「わぁすごい、回復ポーションが沸騰してる～」

「熱くて飲めない奴ではわびょっ」

「シン・ヨウジューーーーっ！！」

地面に叩きつけられる鞭のような動きの炎に巻き込まれた女プレイヤー（女）が回復ポーションを持った右手だけを残して消し飛び、残り二人。

残ったオイカッツォとこの暫定固定パーティの暫定リーダーの男はついにじわじわと削れだしたＨＰに視線を向けつつこれまでにない様子の大赤翅を見据える。

「可燃性と……揮発性？のアイテムは使用不可、あの様子からしていつも以上に高熱化してるから物理攻撃もこっちが溶ける……」

「解凍攻撃は？」

「さっきからアピールしてるけどガン無視……これダメだね、完全にボス化しちゃったか」

オイカッツォが両手で掲げるように持っているのは一つの岩塊だ。

NPCによる鑑定が真に正しければ古代に生きた「百景」の異名を持つとある傭兵に由来する武器、であるらしいが……最後の最後に残しておいた岩塊をいざ解凍、というところでこの仕打ちである。

確かに水魔法をありったけぶちまけたり、土で埋めようとしたり、使わない武器をかたっぱしから投げ込んだりと大赤翅攻略への試行錯誤を繰り返したりはしたが、よりにもよってこのタイミングで殺意剥き出しにするのはあんまりではないか。

この岩塊はオイカッツォというアバターの切り札になり得る力を秘めているかもしれない、だが今の大赤翅にこれを突き付けたところで最悪破壊されるのでは？

そんな疑問が無謀な突撃を押し留める、岩塊をインベントリアにしまってしまいたい……が、あるいはと期待する自分もいるのだ。

(解凍はイベントシーン的な確定行動だと思っていたけど、明らかに熱量が上がってる現状……)

そして、バスコを消し飛ばした白いビーム。あれだけが、そうあれだけが「白い」攻撃だった。特に火力の強い攻撃……否、本当に攻撃なのか。

あの時は咄嗟に回避した、だがあの時点でのプレイヤー達の配置を俯瞰して見れば、先頭にいたのは自分だった。

だとすれば、確証のない「推測」がオイカッツォの脳裏に思い浮か

ぶ。あとは試して死ぬか、試さず死ぬか。
どちらにせよ勝算はないし、残された時間もない。大赤翅は既に次の攻撃を始めようとしている。狙われているのは……リーダーの男だ。

「うおお攻撃パターン見せろぁぁぁぁ！！」

裸一貫、漢の突撃。オイカッツォがさりげなく後ろに下がりながら「やるなぁ」と眺めている中、大赤翅の返答は……

「Buuuuuuuuuurrrrrrrrrrrr……
……」

「ちょっ、ホーミン……ばぁあ！！？」

大きく広げられた「翅」に描かれた炎の模様。そこから放たれた拳大の火の玉およそ数十が四方八方からリーダーの男を取り囲んで殺到。回避にすら追従するその様子はまさしくホーミング攻撃……

「いやそれは……」

無いだろう、と呟きかけてオイカッツォは自らその呟きを否定する。そもそもレイドモンスターを二人でどうこうするというのが間違いなのだ、本来は十数人、いや数十人でホーミングの負担を分け合うのが正しい形ならばむしろオイカッツォに攻撃が来なかったのが奇跡と言っていい偶然なのだろう。
もしくは、人数が減った時点で大赤翅のＡＩが「確実に一人ずつ潰す」というものに変わっている可能性もあるが。

「まぁすぐに後を追うよリーダー……」

ビーム、すなわち一般的人間の反射速度で言えばほぼ光に等しい攻撃から逃げ切るほどの速度をオイカッツォは持っていない。

知り合いのプレイヤー最速の男ですら「見て避ける事はできるが自分がビームより速いわけじゃない」と言うくらいだ、奴の場合は本人性能による先読みも含まれてるので全く参考にならない。つまりオイカッツォに残された道はやはり何かして死ぬか、何もせずに死ぬかのどちらかと言う事だ。

「………百景って事は少なくともあと99は何処かにあるって事だし」

このVRMMOというゲームの中で100個しかないコンテンツが消滅するリスクと、もしかしたら……掴めるかもしれないリターン。

普段ならリスクを考慮する。だが今は――

「あのバカがあれだけやれるってんなら、こっちもリスクを呑むくらいしないと！！」

ならば恐れる道理は無い、あとは己と大赤翅と、そして両手で抱えた岩の塊を信じるしかない。

「さぁ来い大赤翅！　申し訳ないけどこいつの解凍を頼むよ！！」

大赤翅に意思は無い、あるのはただ役目を果たすことだけ。始源の獣、その攻撃機関にしてエネルギー生産を担う灼熱の赤は世界の胎動に呼応して炎を荒ぶらせんとしている。

……だが今ではない。

本当に、本当に僅差の滑り込み。役目を待つ赤が「敵対者」に完全に変わる寸前、それが今だった。

故に、灼熱の翅は「これが最後のサービスだ」と言わんばかりに炎を羽ばたかせる。

「さぁ……我慢比べだ」

岩塊を前に掲げるのではなく、胸に押し付けるように抱え込む。それは一秒でも長く持ち堪えて受け止めるために！

「Ｖｏｏｏｏｏｏｏｏｕｕｕ！！！」

白熱が放たれた。その光の行く先、先程は回避されたが今度は狙い通りに岩の塊へと叩き込まれる。

「こ――」

恐ろしい速度でオイカッツォの体力が削られる。否、もはや削るという言葉は相応しくない。まさしく消し飛んだＨＰが僅かに食いしばり、しかしあまりの熱に死の領域と成り果てた空気で焼かれた事で完全にＨＰが尽き果てる。

「――」

だが、このゲームにおいて体力の消失と肉体の消失には本当に僅かだがラグが存在する。大抵の場合は怯みモーションで潰されてしまうその一瞬は環境によるスリップダメージだからこそ、そしてスキルによって限定的なスーパーアーマーを獲得していた今だからこそ

オイカッツォに指を動かす慈悲を与えた。

サンラクのように跳ね回りながらブラインドタッチで三つの収納(インベントリ)を操作するなんて曲芸は不要。ただ一つのアイテムを最速でインベントリアに収納する……その動きを人差し指に覚え込ませるだけならオイカッツォでも余裕で可能だ。

「」

オイカッツォの身体が砕け散る寸前、大赤翅……この世界最強の熱を受けた岩の塊、というよりも最早マグマの塊に近いそれがこの世界から消え去る。

質量は情報へ、死せどもこの世に撒き散らす事なく格納し続ける神代の鍵が開く扉の先へ……

「Ｆｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏｌｏ………」

ここに、一つのレイドバトルが終了した。

熱意の殺意は悪意と善意（後書き）

・百景のフォトム
古代にその名を轟かせた傭兵団の団長。百の戦場を百の武器で勝ち続けたとされる伝説の傭兵であり、「フォトムの百景画」として今も王都に戦場に立つ異なる武器を持った男の絵が飾られているという。その最期は不明、それ故にフォトムが用いた百の武器もまた歴史の渦に消えてしまった……

（歴史の真実）
百の武器を使いこなしたとかではなく毎回奇襲を受けたり初っ端から武器が折れるなどのファンブルマンだったのでそこら辺にあるのを拾ったり素手で敵将を殴り倒して得物を奪ったりと武器を選ばず戦っていただけ。
フォトム氏は百回目の戦闘で傭兵を引退して普通に隠居した末に孫に囲まれて老衰死。
誰も彼もが劇的な最期を遂げるわけではない、あるいは争いの中に生きた果てに得た平穏こそが戦いに生きる者にとって最も素晴らしい報酬なのかもしれない。

◆

スッとログインしてスッと転移する。あまりにも美しすぎる流れは数人いたプレイヤー達に一切気づかれることのない離脱を可能とする。

ニッコニコの笑顔で征服人形達にマウントを取っていたサイナの回収には苦心したものだが……まぁ、それはいいとしよう。「N」パッチのインストールとオルケストラの攻略を成し遂げた、という事実はどうもヒエラルキー的に最上位に位置するらしい。

もう人（形）生楽しくて仕方がねぇ！　と言わんばかりのサイナを残していく案もあったが、俺がログインしていることをサイナが他のプレイヤーに話しても面倒だ。ラビッツに向かうとはいえ最終的にはどこかに出るだろうし……まぁ、目立たないに越した事はない。

「んー………………」

どうすっかな。とりあえずやるべき事はあるけどそれを終えた後に何をするかだが……うーーーーん……やる事は多いんだけど最優先になるようなものがないが故の停滞か。

「とりあえず返却からか」

多分いるだろう、オルケストラ撃破直後だし……ヴァッシュの出現パターンってつまりそういう事だろうしな。

……

…………

……………

兎御殿最奥。

「おうサンラクよう……その様子じゃぁ、ちゃあんと抜けたようだなぁ？」

やはりそこにいたヴァッシュへと、俺はいつの間にか復活していた箱入りの刀を差し出す。

「へい、アガトレオ氏には世話になりやして……」

物理的に背を押してもらったというか声援に後押しされるってそういう意味じゃない気がするが役に立ったのは事実だ。性能の良し悪しではなく「サンラク」がコピーできないってのが素晴らしい。贅沢を言えばこのまま借り続けたいくらいだがそれをやると俺はビィラックに薪の代わりにされそうなので却下。

「カカカ、あの跳ねっ返りの風をぉよう……たとえ僅かな片鱗だとしてもよう、使いこなせりゃ上々だぁな……」

あまりにも当たり前のように俺の手元にあった覇国兇嵐を手元に出現させているが、それどういう理屈なんですかね？　プレイヤーも習得可能？　無理？

「さぁて…………あぁそうだサンラクよう」

「へいっ」

「ビィラックん処に行ってやんなぁ……どうにも悩みがあるらしいかんなぁ……」

あ、今のフラグだろ！　こんなコッテコテのフラグ提示、すごいゲームっぽい！！
とはいえ実質俺の専任鍛冶師であるビィラックが何か困っているというなら身体を張るのが顧客の矜持、人里に行く以外ならちょいょいのちょいって寸法よ！

……

…………

「素材じゃけぇ！！」

「お、おう？」

「いつも以上におねーちゃんが荒ぶってるですわ……」

大体キレてるか気絶してるかのどっちかになりつつあるビィラック氏の本日の様子はこれまでにない狂乱っぷりであり、ガンゴンと何も置かれていない金床を叩く姿は「狂った？」と聞きたいくらいだ。

「よぉ聞けサンラク！　ワリャが持ち込んだ蠍の素材！　ありゃあ最高じゃけぇ！」

「それ故に！！」

「お、おう」

もう聞いちゃおうかな、狂った？

テンションに比例して金床を叩く速度と強さが上がっていくビィラックはビシッ！　と金槌を俺に突きつけるとこう口にした。

「もっと上質な素材が必要じゃ！！」

「上質な？　アムルシディアンとかじゃダメなのかよ？」

「ダメじゃな、普通の金晶独蠍ならそれでいいかもしれん、じゃがこの素材は強すぎる。覇槍の穂先ですらつり合わん」

マジか、いや確かに〝皇金世代（ゴールデンエイジ）〟はおやつ感覚でアムルシディアン・クォーツも含まれているだろう宝石塔をボリボリ食ってたな。あの超硬質鉱石ですら砕かれるなら確かにその力関係はイコールではないだろう。

「とはいえあれ以上のモノをゼロから探すのか？」

「当てはある」

「その言葉を待っていた」

０から１を探し出すのと、１から１００を見つけ出すのは大きく違

う。増える数こそ隔絶しているが難易度は圧倒的に前者の方が面倒だ。バグ技を見つけるより再現する方が簡単なようにな……

「イムロン、おるじゃろう」

「いるね」

「奴の持っちょる聖槌……あれを構築する金属が何か知っちょるか？」

「知るわけないだろー、サイナは？」

「検索：………、………ウィッシュド・ウェポン。材質不明、由来不明、しかしながら知的生命体の「願い」に関わる武器と推測されています」

「おい待てサラッと爆弾情報を出すな、なんて？」

ウィッシュド・ウェポン？　ていうか征服人形達は勇者武器について情報を持っているのか？

「ありゃあ武器にして実体化した祈りの代行、故に世界そのものが鍛えた武器……本来は「素材」なんてもんは存在しない……だが、」

——勇者武器と同質のものは存在する。

そう断言したビィラックにエムルとサイナが目を見開く。まぁ俺は鉛筆がそれっぽい事を言ったことがあったので知ってたんだが。あの野郎「どうせ放っておいてもそのうち見つけ出しそうだし１００円あげるから見つけたら教えてよ」とか言ってたけど絶対教えない。

俺はＲＭＴ、リアルマネートレードはしない主義なんだ。

「鉱人族（ドワーフ）を知っちょるか？」

「話には聞いたことがある」

アラバの持ってるネレイスが宿る刀を作ったのが確か鉱人族の……えぇと、名前が思い出せない。とにかく鉱人族だったはずだ。エルフがあんなのだからテンプレート通りってわけじゃなさそうだが鍛治を得意とする種族である点はテンプレートに沿っているらしい。

「彼奴等が秘する聖地の最奥に黄金のマグマが湧き出る泉がある」

「それ泉か？　マグマ溜まりでは？」

「細かい事をごちゃごちゃ抜かすなや。大事なのはワリャはそこに行ってマグマを汲んでくるって事じゃ！」

一瞬脳裏に「不法侵入」の四文字が思い浮かんだ、もしくは「押入強盗」。いや待て冷静になれ、普通に譲って貰うよう頼むって選択肢もあるだろう。

「つってもマグマだろ？　水とは話が違う、どうやって回収するんだよ？」

「ぬかりはありゃせん！　武器に使う分を引いてもアホ程余ってる〝皇金世代〟の皇金殻を使った……皇金桶（おうごんとう）カイザーバケットじゃ、これを使いぃ」

これはびっくり、水晶の野に君臨する皇帝の亡骸がバケツに大変身！

……〝皇金世代〟も草葉の陰で泣いてるぜ。

皇帝は、万事に於いて、優れたり（後書き）

ついに開示される勇者武器の秘密
あれは「願い」の武器なのです、思考を持つ全ての生き物が抱く「脅威に対抗する力を求める祈り」の権限なのです

何もないに越した事はなく、されど何か起きたならばせめて抗い得る力を。
獣も、人も関係ない。原始的で根源的な願いに応えた星の武器。故に地殻の底、深淵の果てより湧き出るマグマは「鎧」に至る鍵なのだ。

・皇金桶カイザーバケット
地上最強のバケツ、金色のバケツはバケツでありながら威風堂々たる王の威厳を纏い、そのひと掬いは水を土を、灼熱すらをも手中に収める。
アイテム枠なので武器として装備する事は不可能だが半端な武器より頑強なので椅子に縛り付けた「参考人」の頭にかぶせてガンガン叩けばバケツの皇帝パワーできっと素直にお話ししてくれる。

ちなみに「聖剣」に優先されるとはいえ摂取した鉱石の成分が何割か甲殻にも割り振られるので恐ろしく硬い、バケツが凹む前に剣が刃こぼれする

黄金を求めて

人権。
リアルで言う方のそれではない、このご時世人権を持ってない人間なんてそうそういやしない。アフリカの奥地にだってアンテナの欠けてないＷｉ－Ｆｉが届く時代だぜ？
ここで言う人権とはゲーム方面での話だ。人権、それはゲームにおいて「持ってない奴はマルチに来るなカス」と罵られる程に強力、あるいは便利なコンテンツを指す言葉だ。

古来、一人ではなく二人、二人ではなく四人、四人ではなくもっと多くの不特定多数と繋がるオンラインが発達する程により良い結果を残すために必須とされるコンテンツ達は生み出されてきた。全盛期程ではないが今でもソシャゲでそういった話は耳に入ってくるがコンシューマであっても例外ではない。

え？　〇〇持ってないんですか？
××で代用できる？　でも〇〇の方が効率良いですよね？
あ、すいません〇〇持ってない方は蹴ります
〇〇持ってない奴は甘え
逆に聞くけど〇〇ないのになんで来たの？
〇〇おりゅ？

おお素晴らしきかな人権コンテンツ。人の本質は文明の発達に比例しないことを極めてシンプルに教えてくれる。結局のところより強い棍棒を持ってる猿がイニシアチブを握れるのだ。

「私はっ、人権を手に入れた……っ！！」

その点で言えば、今目の前で感涙する神代製魔力運用ユニット(ストロング棍棒)を掲げる猿(イムロン)は今シャンフロをプレイしている全ての鍛治師プレイヤーの一歩先に辿り着いたと言える。

「おー、ついに手に入れたのか」

「ええ！　……あ、おう！」

相変わらず化けの皮が緩すぎる。ボンドか何かで肉に接着した方がいいいんじゃねーの？

「長かった……！　ひたすらスコアを稼ぎ続け、欲しいもん買いまくったら全部合体してトンボみたいなモンスターになるし……！」

「俺蠍だったわ」

「……蠍、好きなの？」

いや、マブダチだけど別に際立って好きというわけでは………素材的価値としては大好きだけど。

「でももうスコア稼ぎは終わり、買わずとも作れる側に私は立ったのよ！！」

「ロールプレイ、ロールプレイ」

「立ったのだぜ！」

直すのは口調じゃなくて内股の方だと思うよ。

とはいえリヴァイアサンルートで「古匠」を目指す場合、完全制覇の必要があるとはいえ魔力運用ユニットと稼働する遺機装の両方が同時に手に入る。あのクソ不親切な買い物カゴの謎にさえ気づけば……いや、三層での地獄の金策の方が難易度高いな。

「こうしちゃいられない。どうサンラク？　私の個室を古匠用の工房に変える手伝いをしてくれたらなんか作ってあげるわよ？」

いやぶっちゃけビィラックに頼めばいい話だし……と言いたいところだが、ビィラックは最近ハイリスクハイリターンな装備ばかり作る傾向を見せているので毛先の違う鍛治師に恩を売るのも悪くない。

「ていうか工房に変える手伝いって何するんだよ」

「……ええと、その、金策を、ね？」

「……ちょっと待ってろ」

……

…………

おお、いたいた。探したよピーツ君……ハハハ、何故逃げるんだい？　何、流石に何億マーニとか払えません？　いやいや毎度毎度有り金全部持ってくわけじゃないんだからさ……で、今いくら持ってる？　全額だよ全額、ほらジャンプして。

…………

……

「9000万マーニあれば足りる？」

「出どころは聞かない事にする」

素材を売って手に入れた清く正しい金だぞ、誰かの涙で湿ってるかもしれないが乾けばただの金だよ。
世界で一番リッチな袋棍棒（ブラックジャック）をイムロンに譲渡、流石に無料プレゼントとはいかないが一億以下ならポケットマネーなので返却は無期限でも問題ない。

「あ、そう言えばオルケストラの……」

スッ（渡しかけた金貨袋を引っ込める）

「すまん、記憶喪失になったわピンポイントで」

「そうか、お大事に」

俺も都合よく記憶喪失になったから今のは無かったことにしてやる。
それでこの話はお終いだ。

「あ、そうだイムロン」

「何？」

「ちょっと鉱人族のところに黄金のマグマ取りに行くんだけど勇者武器関連っぽいし一緒に行く？」

「……待って、いきなり重い情報で殴ってこないで。っていうかなんで勇者専用ユニークシナリオの内容知ってるのよ！！？」

へぇ、まぁ何かあるだろうなとは思ってたがやっぱりジョブ専用ユニークみたいなのあるんだ。ペンシルゴンの反応から薄々そんな気はしてたが……あいつには絶対言わん、黙っとこ。

「ちなみにビィラック曰く勇者装備の素材であり極上の鍛治用素材らしいぜ」

「何をボサボサしてるの？　たとえそこが世界の果てでも私は辿り着くわよ！」

うーむ、ちょろいぜ。

「あ、あのっ！」

「ん？　あぁレイ氏」

振り向けばそこには相変わらずスプラッタ寄りな鎧を身に纏うレイ氏の姿が。まぁここにいるプレイヤーは現状四人だけなので他に話しかけられるとしたら後は秋津茜くらいだしな。

「その、すいません……お話を、聞いてしまって……あの、もしよろしければ……」

「ん？　いや全然大歓迎だよ。頼りにしてる」

「っ……はい！　その、イムロンさんもよろしくお願いします」

「……」

「あのー……？」

ダメだ、既に新たな素材で何作るかしか考えてない。臨界速でぶっ飛ばすならともかく流石にパーティで攻略して一夜で到達！　とはいかないだろう、金がある時に買い集めたアイテムはインベントリアの中に詰め込まれているが念のためもう少し充実させた方がいいかな……

「あ、そうだサンラク、サイガ－0。ちょっとお願いがあるんだけど」

「ん？」

……

…………

……………

と、いうわけで。
イかれたメンバーを紹介するぜ！
まずは俺、背水の陣でバンジージャンプ！　サンラク！！（オプシ

ヨンパーツ：サイナ）

次にシャンフロプレイヤー中、最強の暴力装置レイ氏！！

そしてシャンフロプレイヤー中、最高の鍛治師イムロン！！

追加メンバー！　聖杖の所有者、ヒーラーガチ勢火酒夏（カシューナッツ）！！

最後にＮＰＣ！　知り合いに会いたいとのことで同行する竜人族のラダー氏！！

「……さらに増えてね？」

「竜人族（ドラグニュート）に関しては私も知らないんだけど？」

「いやー……その、ちょうどのタイミングでちょうどラダーさんの依頼を受けてたと言いますか。あ、よろしくお願いしますツチ……サンラクさん」

ＮＰＣ除いたら男が俺しか……あ、そうかオルケストラ後から死んでないからガワは女だったわ。じゃあ問題無い……無い？　まぁいいや性別より性能だ、姫プしてる余裕もないしな！

では皆さんよろしくて？　出撃しましてよ！！

黄金を求めて（後書き）

エムルは親父に呼び出し喰らったのでお留守番です

巨人族秘蔵の地図によって目指すべき場所は既にマッピングされている。更に出身地が沼地であるＮＰＣラダー氏の案内で効率的に通過できる観点から見ても俺たちが通るべきルートは樹海南西から沼地を通って火山に向かうルートだ。

この地図の通りであれば新大陸は東側こそ大部分が樹海に覆われているが途中から一気に環境が多様化する。沼地を超えた先にある大河を越えれば火山に到着するってわけだ。

と、そんなわけでこれまで多くのプレイヤーを阻んできた大樹海を進む俺達であったが………ここでパーティの内訳を思い出して欲しい。

「悪いな、俺は直角に曲がりながら加速できる」

最大速度（スピードホルダー）の俺と。

「追加のモンスター、です……！　私、一人で対処できますから任せてください……！」

最大火力（アタックホルダー）のレイ氏と。

「前線が頼りになりすぎて出番ねぇな、甦機装以外の修理なら出来るから存分に戦え～」

「一応構えてるんで多少死にかけても問題ないですよ～」

勇者武器の持ち主二人である。
ラダー氏もそこそこ強い部類のＮＰＣだがエムルと違ってレベル１００の壁を超えていない、つまり後方待機一択なのだがそれを差し引いてもメンバーが豪華すぎる。
普段は耐久力が減らない代わりに火力補正はそうでもない傑剣（エスカ＝）への憧焉終刃（ヴァラッハ）や傑剣（デュクスラム）への憧刃を基本運用としているが、修理要員がいるので多少手荒く耐久値を削っても火力高めの武器を使うことができる。具体的に言うとアラドヴァルをぶん投げられる。

そもそも樹海に出現するモンスターの大半は色竜ウィルスで竜化したモンスターだ、つまり色竜特攻の灼熱を持つアラドヴァルはこと樹海において恐ろしく強いのだ。

咆哮を上げて突っ込んできた獣竜……今や我が兄弟（ビッグブロ）とそのパチモンに並んで樹海の顔になりつつあるサラブレッドトリケラトプス君の変則的なステップを絡めた突進に対して、さらに変則的なステップで翻弄。竜を焼き断つ黒い刃がトリケラ部分の角に食い込む。
既に幾度となく溶け刻まれた角に致命的なダメージが入り、悲鳴と共に奴の角が宙を舞う。はいごっつぁん。

「さて……」

レベル１５０、レイ氏ですら未だ辿りついていない前人未踏の最高レベル。そんな身体（アバター）で戦ってみた感想だが………マジでクソだ。
あの日、オルケストラから「退場」した俺の前に現れた人間なのか亡霊なのかそれ以外なのかよくわからないＮＰＣ「覚醒の導師アーカヌム」から宣告された神秘（アルカナム）の反転………逆位置となった「愚者（フール）」は当たり前というかなんというか、その効果を全く別のものへと変質させていた。

逆位置とは正反対、すなわち…………「リキャストタイム二倍化」「回復量二倍化」「スリップダメージ半減」というものに。

成る程、一見すればむしろ強化されているのではないかと思うだろう。これまで糞乱数の影に怯えながら使っていた回復アイテムが確定成功に戻り、効果量が二倍に増えたのだから恩恵の方が大きいように見える。スリップダメージの半減もDOTの性質を鑑みれば仮に状態異常になっても生存時間が単純計算で二倍になるわけだし。だがリキャストタイムの二倍化、これだけはだめだ。前述のメリットを加味してもあまりにも俺というプレイヤーにとって致命傷に過ぎる。

「…………どうすっかな、これ」

現在の俺のステータスはこのようになっている。

――――――――――――

PN：サンラク
LV：150
JOB：仇討人（二刀流使い）
SUB：逆位置（リバース）「愚者（フール）」
868，656マーニ
HP（体力）：100
MP（魔力）：200
STM（スタミナ）：250（125）
STR（筋力）：250
DEX（器用）：220
AGI（敏捷）：300

ＴＥＣ（技量）：２１０
ＶＩＴ（耐久力）：１（２４０）（１）
ＬＵＣ（幸運）：４００

スキル
・虹光の斬閃（スペクトル・スラッシュ）
・光差す輝道（シャイニング・スティング）
・重律超越（フィジクス・トランセンド）
・星海飛脚（アステ・ランナー）
・韋駄天権現
・ディオーネーの神助（ディオーネー・アシスタンス）
・アブレイズ・アドバンスドエール
・リミット・アセンション
・覚醒己律
・アウトレイジ・エッジ
・火蓋斬り
・リミットブレイク・レェス
・睡神の永撃（ノックアウト・ヒュプノス）
・ハーキュリー・ストライク
・帝釈天化身
・武身極威
・剣舞【輪廻】
・仁王屹立
・ヴィス・ユガ
・永劫の眼（クロノスタキサイア）
・王神の銀腕（ヌアザ・アガートラム）
・勝利の神撃Ｌｖ．１（ヴルスラグナ・スマッシャー）
・幻日と幻月の狼影（ハティモルゲン・スコルアーベント）
・震烈の衝撃（テペヨロトル・インパクト）
・スピリット・オブ・ガーディアン
・冥土地平（リバース・オルフェウス）

・ストラトゥム・バスター
・全武全能（ぜんぶぜんのう）
・スペリオル・フォース
・運命の眼（フェータリザルト）
・運命躱し（フェイタルキャンセル）
・必勝の先触れ（ザ・フォアランナー）
・盾士の憤撃（レイジングシールド）
―【到達技能（プライムアーツ）】―
・一威専心
十秒間に1ヒットのみヒット数を付与する攻撃の性能アップ
・多極彩心
十秒間に5ヒット以上のヒット数を付与する攻撃の性能アップ
・完全視界
視力に補正
・征存本能
体力が5％以内になった時、ＳＴＲ、ＡＧＩ、ＬＵＣの中からランダムに補正
・全霊捧武
攻撃スキルの性能アップ
・一輝討千
ソロプレイ時、Ｍｏｂを一体倒す毎にＨＰが一定時間回復し、スタミナの減少量が半減する
―【不世出の奥義（エクゾーディナリー・スキル）】―
戦砕琥示（ウォールフェン）
皇金時代（ゴールデンエイジ）
―【致命武技】―
・致命秘奥【ウツロウミカガミ】改備（あらためぞなえ）
・致命秘奥【タチキリワカチ】改備（あらためぞなえ）
―【晴天流】―
【風】

・晴天流「疾風（はやかぜ）」
・晴天流「斬風（きりかぜ）」
・晴天流「旋風（つむじかぜ）」
・晴天流「廻風（まわしかぜ）」
・晴天流「轟風（とどろかぜ）」
・晴天流「爆風（はぜりかぜ）」

【雷】

・晴天流「雷鳴（らいめい）」
・晴天流「雷霆（らいてい）」
・晴天流「迫雷（はくらい）」
・晴天流「撃雷（げきらい）」
・晴天流「貫雷（かんらい）」
・晴天流「裂雷（れつらい）」

【波】

・晴天流「荒波（あらなみ）」
・晴天流「波濤（はとう）」
・晴天流「防波（さきなみ）」
・晴天流「波旬（はじゅん）」
・晴天流「引波（ひきなみ）」
・晴天流「波乱（はらん）」

【空】

・晴天流「暮叫（ぼきょう）」
・晴天流「蒼然（そうぜん）」

【雲】

・晴天流「浮雲（うきぐも）」
・晴天流「渦巻雲（うずまきぐも）」
・晴天流「螺雲（ねじりくも）」
・晴天流「叢雲（むらくも）」

【熱】

・晴天流「噴炎（ふんえん）」

【灰】
・晴天流「灰流(はいながれ)」
――【マクセル・ドッジアーツ】――
・多重的円周運動(オービット・ムーブメント)
・螺旋的確保挙動(スクリュー・ハンド・キャッチ)
・副次的防衛挙動(コラテラル・ダメージカット)
・相対的立体運動(ソリッド・マニューバー)
――【仇討の流儀】――
・仇討の観察眼(リヴェンズ・アナラアイズ)
・仇討の宣誓(リヴェンズ・コール)
・仇討の引導撃(リヴェンズ・フェイタリティ)

装備
右：アラドヴァル・リビルド
左：無し
頭：―ラヴィ・ラビィ・イヤー（ＶＩＴ＋１２０）
胴：リュカオーンの刻傷
腰：ラヴィ・ラビィ・テール（ＶＩＴ＋１２０）
足：リュカオーンの刻傷
アクセサリー：格納鍵インベントリア
アクセサリー：格納鍵インベントリア
アクセサリー：封雷の撃鉄(レビントリガー)・災(ハザード)
アクセサリー：　兇嵐帝痕(イデア＝ガトレオ)・極(スペリオル)
アクセサリー：水晶蠍人形(クリスタル・スコーピオンドール)（ＭＰリジェネ　＋　ＨＰ回復時別枠回復）
アクセサリー：烈砲百足人形(トレイノル・センチピードドール)（状態異常超耐性：毒　＋　ＳＴＭ補正）
アクセサリー：要塞女王蜘蛛人形(フォルトレス・ガルガンチュラドール)（耐衝撃：中　＋　ＶＩＴ補正）

アクセサリー：燕尾羽衣（スワローヴェール）

――――――――――――

もう文字からスキルの内容を読み取るのが不可能になってきたレベルのネーミングセンスだが重要なのはそこではない、地味に晴天流辺りのＵＩが見易くなっているのはありがたいがそこでもない。重要なのは…………三桁スキルのさらにその先であるレベル１５０スキルは大抵２パターンに分けられるということだ。

すなわち、リキャストがそこそこ長いか、リキャストが恐ろしく長いか。

ただでさえスキルがほぼ一新されて新しく動きやリキャストタイムを覚え直さないといけないってのに、ここにきてのリキャストタイム２倍という仕打ちだ。もはや不世出の奥義（エグゾーディナリー・スキル）なんて一戦闘に一回しか使えないような状態になっているし、一番回転率が高いスキルでさえこれまでが通常から半減で今が通常の２倍だから…………あー、少なくともリキャストタイム１倍で戦っているプレイヤーよりも更に酷い実質４倍増加の体感で戦うことになるわけで。

「参った」

更に参ったことがあるとすれば…………そう、忘れがちだが神秘（アルカナム）はジョブでありアイテムでもあるという妙な性質を持つ。試しに逆位置となった「愚者」を外せるか試したところ、なんと外すことができたのだが…………逆位置の効果は装備、非装備を問わず永続するらしい。つまり今モンスターと戦ってみてわかった。

「神秘」イベントは最優先でクリアしなければならない一大事だということが、だ。

・アクセサリー：要塞女王蜘蛛人形（フォルトレス・ガルガンチュラドール）
かすり傷で発生する怯み程度なら完全無効化する耐衝撃：中に加えて肉体ＶＩＴの半分をステータス追加するという地味にとんでもない効果が付与された人形、多分タンクスレに投下すると狂乱の祭りが開催される。まぁこの先の環境でかすり傷で済ませられるなら苦労はないけど大抵は肉体が多少頑丈になったところですり潰されるよねっていう。あと地味に嵩張る。

・アクセサリー：燕尾羽衣（スワローヴェール）
何故かラビッツに売っていた燕尾服のように見える羽衣、若干体重が軽くなるというメリットなのかよく分からない効果を備えているがウサ耳とウサ尻尾に恐ろしくマッチする見た目だったので十中八九おしゃれアクセサリーであるとサンラクは結論づけた。
体重が０．８倍にするモンスター素材、という意味のヤバさに気づくことはない……

リキャストタイム実質四倍というデメリット、実際に戦ってみた事でわかったのは致命的ではあるが致命傷ではない……という感じか。

確かにスキルが実質一回しか使えないってのは早急に解決しなきゃならんが、それはそれとしてスキルそのものが使えないわけではない。それにレベルアップやユニーク、レイド、エクゾーディナリーとのエンカウントや撃破で得たステータスポイントをぶち込んだステータスがある。

スキルが無くともサラブレッドトリケラトプス程度なら翻弄できる程度にはフィジカルによるゴリ押しができるってのは朗報といえば朗報か。

「うーん………」

「修理はいるか？」

「あ、うんタダならやって損はないだろ」

しかしなんだろうな、それだけじゃないんだよな。なんか妙な違和感がある。フィジカルの話じゃない、妙に気が散るというか………寝不足？

「うーん……？」

「修理終わったぞー、生産武器じゃないのは分かってるが見れば見るほど超えたくなる造形だ……どうやったらこんな触れるだけで微

ダメージが発生する刀身が作れるんだ？」

「ん、ああサンキュー」

アラドヴァルの耐久も戻った事だし先に進むとしよう。

基本的にこの樹海の攻略はプレイヤー達の間である程度のチャートが完成している。俺一人でなおかつスキルを専用のものに変えていれば臨界速で跳び抜ける事ができるわけだが今回はパーティ攻略だ、テンプレートに従うのが安牌だろう。

といってもその安牌も「色、性質、強さを問わず三つ首のティラノサウルスに遭遇した時点で全力で逃げる」なんてそれ攻略法なのか？　と聞きたくなるようなものだが。

「とりあえずドラクルス・ディノサーベラスは近くにはいないっぽいですねー、例の赤いあいつが近くにいたらこんな平穏な樹海じゃないですもんね」

「最近は黒い方も増えてさらに運ゲーって話らしい」

「黒い………あー、エクゾーディナリーの方だっけか」

イムロンと火酒夏氏の会話に混ざる形で俺はあの少々熱の篭りすぎたシャウトを放つ兄弟の姿を思い浮かべる。

話を聞いた限りじゃ攻撃に対する耐性獲得と中々強力な個体であるらしいが、どうにも死にかけるほどタフネスになる〝緋色(スカーレッド)の傷〟を知っているから部位ごとにタフくなるだけのエクゾーディナリー君に危機感を感じないんだよなぁ……兄弟、あれ絶対体力残り一割がタフすぎて実質総HP2倍くらいあるタイプのボスキャラだろ？

下手したら鉛筆の聖槍みたいな防御の完全貫通でも耐えそうなヤバさがある。VITじゃないんだよな、HPの密度で1ドットすら減

らないタイプのやつ。展開の盛り上がりとかでごまかそうにもゲンナリするクソボス寄りの存在。

「さっさと樹海を抜けちまおう、少なくとも沼地にはアレみたいなやばいのはいないんだろう？」

「安全ではナイ、が……アレほど危険ではナイ」

でしょうね、この樹海は今、そこそこな数がいる通常個体と倒されても時間経過で再び一体出現するエクゾーディナリー個体と例の兄弟がうろつく三つ首ティラノが環境の頂点に君臨している。

懸念があるとすれば貪る大赤依戦の時に一度だけ見かけたあの変な一つ目のサイクロプスか……多分レイドモンスターなんだろうが、奴の一撃はまだ兄弟が「傷だらけ」だったとはいえ一撃で九割九分九厘の命を消し飛ばしていた。レイドモンスターが本格的に活動している以上、あのサイクロプスも樹海にいる可能性は高い。大赤依が記録していたってことは樹海にいた、という可能性が高いのだから。

「まぁ、無用な戦闘は避けたいし急ぎつつ進んで行こうか」

……

…………

この樹海、兎にも角にも広いのでどれだけ頑張って駆け抜けてもいつかは三つ首ティラノのいずれかに遭遇するという面倒なエリアなのだがそれでも暇な時間というものはある。

このゲーム、恐ろしい事に一定歩数歩いたらエンカウントとかではなくモンスターが個々に活動しているので一体のエンカウントを皮切りに周囲のモンスターが寄ってくる事もあれば、全くと言っていい程エンカウントしない事もある。で、今は後者であった。

「で、教えてよ」

「何が？」

「オルケストラの報酬よ、真理書だけってわけじゃないんでしょ？」

「…………」

イムロンの言葉に半目で目を逸らす。聞かれるだろうなとは覚悟していたものの、今はあまり思い出したくない類の記憶であるのは事実だ。

「まぁそんなむくれないで、ホラ私控えめに言ってプレイヤーの中じゃ頭ひとつ抜けた鍛治師でしょ？　偽典報酬の武器に関してライブラリから意見を聞かれた事があって」

それ故に正典の報酬が気になるってことか。偽典と正典で報酬が違うってのは知ってたが……うーん。

「これ」

「何これ、ペストマスク？　悪趣味な金色だけど」

そう言ってられるのも今の内よ、これを装備すると……

ボボボボボッ！！

「うわきもっ！！」

「酷くない？」

今のはイムロンではなく火酒夏氏(カシューナッツ)の方だ。イムロンは未知の頭装備に興味津々なので黄金のペストマスクを顔に装備した瞬間、仮面から湧き出た炎の中で見開かれた焔眼なんてものを見て「キモい」と声を上げるよりも優先されるものがある。

「やっぱこのゲーム、生産装備の自由度が高い以上にどういう原理で再現できるのか分からない非生産装備が多すぎるわね……」

「えー、蓮コラ一歩手前ですよこれ〜。もしかしてこの眼一つ一つに視界があったりするんですかね？」

「お、鋭いな火酒夏氏。これ色々検証したんだけど何処かの「眼」が塞がれてない場合、本体の目が潰されても視界が塞がれないんだよ」

スイカ割りで無敵になれるなこの仮面、とか思ったけどフラッシュバンみたいな閃光による視界潰しだと他の焔眼も影響を受けるから視界に関して無敵ってわけでもない。

「まぁ、今はちょっと使いづらいから装備しないんだけど……」

真界観測眼(クォンタムゲイズ)や星幽界導線(アストラルライン)もレベル１５０の到達と同時に新たなスキルへと進化したわけだが効果時間の増加と共にリキャストタイムが長めになっているのだ。つまり今の体感四倍のリキャストタイムで

は視覚系スキルの発動回数で効果を発揮する「渡り鳥（ミグラント）」が活かせないので今のところインベントリアの肥やしだ。

そんなことを話しているうちに樹海を構築する樹々が太く高いものから低く細くなり、いつの間にか地面は腐葉土の柔らかさではなく水気を帯びたぬめる泥の地面に変わっていく。

「我が懐かしき沼地、我が愛しき沼地……」

ラダー氏のしんみりとした呟きを耳に入れつつも、ＶＲとしては異常なまでに再現されている泥臭い湿った空気を吸い込む。

「こっち方面に来るのは初めてだ」

「私も、です……」

夜空の星を映す一面の沼。旧大陸の沼荒野よりもさらに広く水気を帯びた光景は現実ではそうそうお目にかからない幻想的なもので…………

ざばぁ。

その余韻を全部ぶち壊して泥の中から巨大な蟹が現れた。
甲殻類如きがエモさを台無しにしてんじゃねぇ！　逆位置の補正喰らってたってテメー如き蟹鍋にしてやるわァ！！！

辿るように追うように逃げるように（後書き）

・ラダー

「黒」の竜人族、蜥蜴人族との確執こそあったものの、「赤」の竜人族と比較するとノワリンが放任主義なので驚くほど待遇が良かったメンタル的にはちょっとくたびれたリーマンくらいな人。
「赤」の竜人族は乳首ジェットもといサンラクの二個上の兄（兄ではない）が嫁いびりの姑が美少女に見えるレベルのクソドラゴンだったので知り合いがいるラダー氏は竜災大戦以降、心配で彼らの様子を見に行きたい。

これが「黒」の竜人族によるユニークシナリオ「友を案じて」……要するに「はよ火山行けや」とゲームシステム側からせっつかれているのである

なお、このシナリオ中であれば三つ首ティラノとのエンカウント率が著しく下がる事は誰も知らない

ぶっちゃけ回復してもらっても即死にかける体力しかない俺はともかく、火力とそこそこのＶＩＴで前線を支えられるレイ氏が最強のヒーラーによる援護を受けている時点で大抵の敵には負けないわけで。

全ての脚を叩き割られ、最後にスレッジハンマーで眉間を粉砕された蟹が倒れ伏す。蟹君はよく頑張ったよ、ただこっちの前衛が破壊兵器レイ氏と甲殻系多脚生物得意マン俺だったことが不幸だったな。

針のついた尻尾を生やしてから出直してこい。

「あー、経験値入らないのか」

レベル９９の時はエクステンドに蓄積されるから経験値自体は入っていた。だが蟹が消えても経験値は＋０だ、勿体無いお化けに祟られそうだぜ。

「しかしその聖(せい)……杖(じょう)？　完全ヒーラー特化なの？」

「そですよー。聖杖アスクレピオス、この杖を使って発動した魔法は攻撃だろうが防御だろうが強化だろうが弱体だろうが全て「ブレイバーヒール」に変換されるんですよ」

「マジか」

回復魔法しか使えない、ではなく全部回復魔法にする、と来たか。

これで聖弓以外の勇者武器の詳細を知れたな。

聖剣が例の高確率食いしばり。

聖槍が防御の完全貫通。
聖槌が鍛治生産時の補正と使い捨て武器の生成。
そして聖杖の回復魔法変換。
こうなってくると聖弓の能力も気になってくるが、下手に斎賀姉に聞くと「じゃあ教える代わりにリュカオーン倒しに行こうな！」とか言われて廃人マラソンに付き合わされそうな感じがある。そもそもリュカオーンがどこにいるのかも分かってないのに不毛過ぎるわ。

「あ、そうだレイ氏」

「はい、なんですか？」

「聖弓ってどんな武器なの？」

いたわ、元黒狼で幹部級の立場にいた人。
というわけでレイ氏に聞いたところ、聖弓は魔法弓と物理弓の二つを一つの弓で実行可能な武器であるらしい。使い分けるだけではなく物理矢に魔力を内包させて炸裂させたり、逆に魔力で物理矢を覆うことで威力と速度を上げたり……なんというか器用な能力だな。
沼地というエリア故に出てくるモンスターも全体的にらしいモンスターばかりだ。その中でもあの蟹は刻傷にも怯む事なく襲いかかってきたので上位の存在らしく、今俺と目線が合った脚の生えたドジョウが一目散に逃げていったのを見るに忌まわしきリュカオーンの呪い（強化済み）は今日も元気に強者誘引をパッシブで発動しているらしい。
ていうかあの足付きドジョウもしかして泥堀り(マッドディグ)の親戚か？　あっちは脚の生えたナマズサメだが。

「しかしアレだな、ノワルリンドが拠点にしてたって割には竜化モンスターはそんなに多くないんだな」

「ノワルリンド、よく狩りをする。黒いモンスター、狩る」

成る程？　元を正せば竜化は色竜の細菌だか細胞だかに感染する事で発生する現象な訳だし、逆に言えば竜化モンスターを狩れば色竜ウィルス？　を回収できる……って感じなのか？　ソース皆無の推測だけど本人(ノワルリンド)に聞けば解決か。

「どうする？　蜥蜴人族や竜人族の集落跡で一旦休憩する？」

「私は……その、このまま進んだ方がいいかな、と」

「火山にある鉱人族(ドワーフ)の集落で休憩すれば良くない？」

「無限インベントリ持ちが三人いますからねぇ、ＭＰアイテム恵んでくれたら満腹度とＭＰ以外は完全回復させますよー」

そう、地味にリヴァイアサンで魔力運用ユニットを手に入れるべく奮闘していたイムロンは、目当てのもの以外にも大量の買い物を行なっていたらしい。

そしてその購入項目の中には格納鍵インベントリアもあったのだ。聞けばリヴァイアサン内の「工房」で作った物品との交換リストの中にあったらしい。あの手この手で隠してるな「勇魚」の奴……

「いや本当便利ねこれ、下手したら「工房」を持ち歩けるわよ」

「私も欲しいなぁ……ツチノコさん一個くださいよ」

「これ装備欄潰す上に一度つけたら外れないんだよなぁ」

どちらにせよ渡せるものじゃないし、イムロンのケースを見るに頑張れば個数限定で手に入る代物のようだし頑張れとしか言いようがない。それにようやっとインベントリ、インベントリア二つによる3ウィンドウ操作に慣れてきたんだ、そうなると手放すのがちょっと惜しくなるのが人の常……

そんなわけで火山ツアーは止まらない。一族全員でノワルリンドについて来たが故に完全に放棄された蜥蜴人族達の集落を完全スルーしてラダー氏の案内のもと、俺達は火山へと突き進む。

「わ、なんだろう今の緑の光」

「帝晶双蠍（アレクサンド・スコーピオン）のビームだろ、上に射出したって事は鳥でも叩き落としたんじゃね？」

「アレク……なんて？」

夜になるとシグモニアの水晶冠は本当に目立つ。場所が見えなくても夜空を赤く照らす光は遠くからでもぼんやりと見えるし、今のように冠に住む蠍共が迎撃ビームを放てば流れ星のように輝く光のラインを見ることができる。

幻想的？　だったらもっと近くへ見に行けばいいと思うよ、特等席であの光を浴びることができるだろうしな！！

「……そういや、戦術機で大陸最西端まで行くとか言ってた奴がいたような」

「「「…………」」」

そういえば光が空に昇って行く最中、変な光が一瞬見えたような。
いや、きっと気のせいだろう。
なんやかんや物理投擲しかしない水晶群蠍と違って帝晶双蠍は対空対地に優れた飛び道具持ちだ、戦術機があっても空中戦は危険なんだよなアレ……うーむ南無阿弥陀仏。

「鳥の人、魚を捕まえた。鳥の人、これは美味い」

「へぇ」

居住してる場所がそもそも沼地だから軒先で餌が取れるのか……あの家、どういう理屈で立ってるんだろうか。
それにしても魚か、ちょっとデカめのドジョウみたいだな。脚は……生えてない。では実食。

「お、踊り食い……！　これがツチノコさんの強さの秘訣……！？」

「そうだよ、掲示板で拡散していいよ」

「……え、マジですか？」

ホントだよ、ツチノコさん嘘つかない。でも俺はツチノコさんなんて名前ではないからその限りではない……

・ブレイバーヒール

聖杖を媒介して発動した魔法は全てこの魔法に変換される。効果内容としては基となった魔法の性質を一部引き継ぐため、矢のように飛ぶ回復魔法や炎のように広範囲を焼き癒す回復魔法など何気に多彩追加効果としてブレイバーヒール発動時、発動者に回復効果とヘイト軽減が発動するのでブレイバーヒールを行使する限り、聖杖の勇者も前に立つ者も屈する事はない

なお回復性能に比例してMP消費も増すので回復アイテムの消費が恐ろしく嵩む

旅路もいくさも進みゆく

ここで今更だが、パーティメンバーのおおよそのタイプを説明しよう。

まずは言うまでもなく俺、ＶＩＴとかいうよく分からんパラメータ（自己申告）を完全放棄した高速機動型軽戦士。臨界速無くとも、最大で５０メートル程度なら空中ジャンプだけで跳躍可能だ。

次にラダー氏、種族的特徴もあって翼を持っているので跳躍に対して補正がかかる。加速力こそないが足場があれば最低限の回数以外地面に接する事なく跳ぶ事ができるだろう。

で、ここからが問題だ。

見た目は華奢なアバターだがステータス的には結構鈍重というか、少なくとも長距離の跳躍なんかは望むべくもないレイ氏。

生産職以前に開拓者としてレベルを重ねてはいるものの、割とパワー型かつレイ氏と違ってそこまで廃人マラソンしてるわけじゃないので跳躍も加速もショボいイムロン。

そしてヒーラーとして敵のヘイトから逃げるだけのステータスは揃えているがやはり飛んだり跳ねたりするタイプではない純魔構築の火酒夏氏。

現在地である蜥蜴人族及び竜人族（黒）の集落がある沼地を抜けた先、火山へのルートに横たわる巨大な運河をどう越えるのかって事だ。

「一応聞くけど向こう岸まで渡る手段を持ってる人」

うーん、予想通りというか俺とラダー氏だけか。

仕方ない、秘密兵器を出すしかないようだな……インベントリアオープン、カモン！　スーパーインテリジェンスドールユニット・サイナ！

「インテリジェンス」

「鳴き声なの？」

「言語化しなければ私自身がインテリジェンスに押し潰されそうなので」

知性に質量はねぇよ。いやあるのか？　脳味噌の重さとかそういう。

「わ、サイナちゃんだ！」

と、「N」パッチを入れても依然アホなままのサイナを見ていきなり火酒夏氏が興奮し出した。

「スクショいい!?　スクショ！　可能なら動画！！」

「いきなりどうした」

「私ミーハーなので！！」

説明になってないので。

「いやいや、今やシャンフロNPCで世界一有名なキャラですよサイナちゃん！　普通の反応ですよ普通！」

あー……………………そうなるのか、そうなるわな。

「サイナ、吊して渡れる？」

「了解：武装を情報格納していただければ二度の運搬で可能です」

「三度で渡れ、火酒夏氏にはスプラッシュな体験をしてもらおう」

「えっ？」

「なるほど、スーパーインテリジェンスに行くわけですね？」

「えっ？」

数分後、サイナに担いでもらって緩やかに大河を渡ったレイ氏とイムロンとは別に、ブースター全開の超特急版で水切り体験をした火酒夏氏の悲鳴が響き渡るのだった……。

まぁそりゃ水面に近づくと食人ピラニア（大型犬サイズ）が飛びかかってくるんだから叫ぶわな。まぁでもサイナと刺激的体験が出来たし本人も満足だろう。

とりあえず俺はあのピラニアを一匹倒すとしよう、俺自身がルアーになれば釣竿なんて必要ないんだよ。

◇

人知れず自らも無関係ではない事態が進行しているアーサー・ペンシルゴンであったが、今彼女はそれどころではない事態に直面していた。

また、場所も陣営も違えど同じものを見ている者達もまた同様のものを。

「そう来たか……」

グランドクエスト「王国騒乱」、新王陣営と前王陣営による覇権争い……あるいはシャンフロ初の超大規模ＰｖＰコンテンツ。そのルールが運営より正式に発表されたのだ。

「陣取りゲームになるってのは予想してたけどこれは中々頭を使いそうな」

ルールとしては以下の通り。

・今回の勝敗条件は両陣営の対象が生存している場合は期間内に幾つの都市を確保しているか、あるいは期間終了時点で自陣営または相手陣営の大将……即ち前王トルヴァンテ及び新王アレックスの状

態によって決定する。
・新王陣営は前王トルヴァンテ・王女アーフィリア両名を捕獲または殺害した状態でイベント期間終了時に勝利となる。
・前王陣営は新王アレックスを捕獲または殺害した状態、または新王及び前王が死亡した状態で王女アーフィリアが生存していればイベント期間終了時に勝利となる。
・両本陣が敷かれた二つの都市を除く各都市には「領主」が存在し、相手陣営の領主が捕縛あるいは死亡する事で自陣として確保することができる。
・フィフティシア及びファスティア、セカンディルは中立都市であり今回のイベントにおいては無関係の戦闘禁止エリアとなる。
・イベント期間中は「イベント判定」エリアに限り、プレイヤーをキルしてもレッドネームにはならない。また、キルされた場合も装備しているアイテムやインベントリ内のアイテムが失われる事はない。
ただし死亡時点で手から離れているアイテムはその場に残される。
また、行動によるパラメータの変動は通常通りに作用する。
・キルされた場合、自動的に本陣都市（サードレマ、またはサーティード）にリスポーンする。
また、キルされた位置に応じて「治療時間（リスタートペナルティ）」が付与される。
・イベント期間中はサードレマ以降からサーティードまでのエリアのボスは出現しない。

・今イベントでは陣営のＮＰＣに強い影響力を持つＮＰＣが存在し、彼らが捕獲あるいは殺害される事で相手陣営の「士気」パラメータを減少させる事が出来る。

・イベント期間中はワールドシナリオは進行せず、またワールドシナリオに関するイベントは「王国騒乱」が終了するまで進行停止状態となる。

◇◇

とあるコンビの会話。

「………これは、またなんとも」

「冷泉、三行で説明してくれね？」

「そうだな……「絶対にフルタイムで戦う」「プレイヤーを纏めるのが無理ゲー」「自分も相手も戦法が読みづらい」だろうか」

「纏められても分からんかったわー」

◇◇◇

とあるＦＰＳ好き達の集まり。

「我らが傭兵団のブレイン！　君の意見を聞きたい！！」

「任せろ、羽で出来た団扇とかない？」

「いつの時代の軍師だよ」

「まずこの勝利条件、新王陣営は下手に前王をキルするより陣取りゲームした方がいい」

「なんで？」

「勝敗が決まるのがイベント期間終了時点だからだな。仮に前王を仕留めても王女が生き残ってると判定勝負に持ち込まれるし、向こうの陣営がこっちの新王様を倒したら自動的に王女が生きてる向こうの勝ちになる」

「つまり……向こうは前王を取られた時点で全員がかりで新王を狙えば判定勝ちってこと？」

「ズルくね？」

「だから陣取りゲームで見ればこっちの方が有利なんだよ、開始時点で保有してる都市が多いしＮＰＣの質が高い」

「何より――――」

◇

「レッドネームにならないのは対プレイヤー限定、ＮＰＣをキルし

たら一発アウトだよね多分」

王女というエクストラ残機を持つ有利と、陣取りゲームにおいてハンデを背負わされる不利。そして何より十二月十五日から二十日まで続く五日間という絶妙に長いイベント期間。
ただのいちプレイヤーとしてならともかく、戦略を練るポジションにいるプレイヤーからすればあまりにも課題が多すぎる。

ペンシルゴンは脳内にあった作戦のいくつかを破棄してすぐさま次の作戦を練り始める。

「向こうは一軍として動く必要がない、そもそも従わない連中をそこらのモンスター扱いにすれば各配信者を頭に大隊~小隊規模で活動できる。いやこれどうしたもんかなぁ……ＲＰＡ入れてもどうにもならないし、やっぱウチの鉄砲玉をどうにかして説得する必要があるか………」

決戦の日は近い。来たる騒乱の風を感じながら、ペンシルゴンはサードレマ特別相談役としての特権をフルに使ったサードレマ特産茶葉の香りを楽しむのだった。

西風を受けて（前書き）

色違いでビンタされたので更新です

西風を受けて

大河を渡ってしまえばあとは火山まで行くだけ！　そうは問屋が卸さないらしい。

ここは既に新大陸の南西部、ラダー氏曰く「西」に近い場所はモンスターにその片鱗が現れるという。

で、その具体的な「片鱗」だが……とても分かりやすかった。

「何この……蜥蜴！？」

「カメレオンですねー！　ちょっと大きすぎるんですけど！！」

「そこか！？　問題はそこか！？」

「来ます！！」

バシュンッ！！　と槍か銛の如く突き放たれた「舌」がゴツゴツとした岩と砂利の地面を泥のように貫き溶かす。あの煌々と灼熱に輝く「舌」に触れたらどうなるのかは考えるまでもないだろう……レイ氏はしれっと耐えてたけど最前線でバチバチに殴り合うタフマン構築は参考にならない。性別変えたのにもう複数装備を女性用に作り直してるのは貫禄の廃人と言えるだろう。

とはいえ問題は目の前にいるこいつだ。モチーフとしてはカメレオンなんだろう。特徴的な体格とぎょろぎょろと動く目、そして勢いよく突き出す舌はハエの代わりに人間を捉えて喰ってやると言わんばかりだ。

でもその灼熱の舌で人間を掴んでも口元に戻す頃には消し炭なのでは？　いや、捕食じゃなくてシンプルに攻撃なのかな。

「種族名称：コンバスティッカーメレオン。自身の体内温度を上昇させ、熔断可能温度にまで加熱した舌で捕食対象、あるいは外敵を仕留める爬虫類型モンスターです」

「体温上限ぶっ壊れてんのかあのクソデカ変温動物！！」

コントラバスみたいな名前のモンスターの脅威はその「舌」だけではない。そもそものサイズが異常にでかいのだ。先ほどハエのように人間を襲うと例えたがまさしくその通りだ、俺達と奴のサイズ比は現実のカメレオンとハエのそれに近い。
つまり1センチ程度のハエが人間相当なら大体リアルカメレオンの180倍オーバー……厳密なサイズなんて知らないが30センチくらいだとしても単純に5，400センチ……五十メートルあるカメレオンだ。いや流石に五十メートルはねぇわ、でも十メートルは超えてそうだな。

「流石にちょっと生産職特化にはおつらい相手なんだが！」

「でも即死しなかったら回復しますよっ」

「ＶＩＴそこまで上げてないぜわよっ！！」

イムロン口調が混ざってる混ざってる。だがしかしどうしたものか、コンバス野郎が恐るべきクイックドローでぶっ放してくる舌は確かに危険だがじゃあ本体は豆腐かというとそうでもない。
そもそも舌だけが都合よく加熱されるわけではなく全身が加熱する中で舌へ熱が集中する、という仕組みらしく奴の体表は爬虫類系モンスターとしての鱗に加えて素手で触れると熱でダメージが入る厄

介仕様なのだ。
サイナと俺が銃による遠距離攻撃をしかけているものの決定打にはなっていない……正直エクゾーディナリーですらない一般モンスターに大技は使いたくないという貧乏性がない、とは言い切れないがそれを差し引いても奴に接近して攻撃を加えるなら防具の装備は必須。
相性問題だ、あのコンバス野郎は俺の体力よりも資産を削ってくる。いや直接破壊するのは刻傷の効果だけど、おのれリュカオーン。
「あっぶね！」
一番の脅威は口の中に含んだ舌を勢いよく突き出すクイックドローだが、伸ばした舌を戻さずにそのまま首の動きで鞭のようにしならせるモーションの方が被弾の危険性が高い。ただでさえ逆位置の効果によってスキルが封じられているに等しいってのに、回避にばかりスキルを使っていてはいつまで経ってもコンバス野郎を倒すことはできない。
シャンフロに限らず、デカいということはタフいということだ。レイ氏が極めて高い火力を持っているとしても一人で苦戦せず倒せる相手ではない。とはいえスキルがなくても装備で補強できるのがサンラクというアバターの強み、構築のコンセプト。求められるのは極限の瞬発力、封雷の撃鉄・災を起動して自前の眼でコンバス野郎の動きを観察する。
「…………」
シャンフロだってゲームだ、あのリュカオーンですら攻撃前には予備動作があった。予備動作のない即死攻撃なんてウェザエモンだけでお腹いっぱいだっての……見えた！　閉じた口がわずかに膨ら

む瞬間！！

「回避ィ！！」

「えゲぇっ！？」

イムロンに直撃した！？　一瞬消し炭になったイムロンが見えた気がしたが、どうやらそれは錯覚であったらしい。

「コスト重いですけど足元に範囲攻撃変換したヒールぶちまけると回復楽でいいですよねー」

「た、助かった……」

すごいぞ火酒夏、あの攻撃タイミングで即死する寸前に回復魔法を置いていたのか。それも自分も含めて誰が直撃してもいいように範囲攻撃で。

ＭＰを回復させながらすぐさま後ろへと下がっていった火酒夏を尻目に俺とレイ氏が前線へと踏み込み、中距離からサイナが銃撃を継続する。軽い弾じゃ大したダメージを与えられないので単発強威力の弾丸による撹乱メインだ。優秀なＡＩ程ヘイトに迷いを見せることはこれまでプレイしてきて理解している、あとはダメージソースたる俺とレイ氏が気合いを入れるだけだ。

「おっしゃあ！！」

爬虫類がよぉ！　万物の霊長たる人類に勝てる道理なぞあるかァ！
機動力なんざ極論過剰伝達だけで賄える！　流石に眼への補正なしでスキルを使うのは自殺行為だがそもそもスキルを使わず直線機動で動けばいいぃ！！

「サンラク、君。あのカメレオンの尻尾……を、見てください」

「ん？」

おや、不思議ですね。全身が加熱されているように見えて尻尾部分だけ湯気とか蒸気じゃなくて冷気を纏っているような。もしかしてアレ、自力で冷却する感じなのかな？　そのための器官が尻尾に……
……………ほぉん？

「レイ氏、切断武器でゴリ押していこう」

「分かりました」

成る程、成る程、成る程ねぇ？　随分と凝ってるようだねお客さん……こういう時は温めると筋肉もほぐれる、鍼治療（アラドヴァル）サービスだオラァ！！！！

・コンバスティッカーメレオン
厳密な発音はコンバスティック・アーメレオンみたいな感じ
西方に近い火山帯では異常に巨大な体躯を持つ生物がたびたび現れる。コンバスティッカーメレオンもまたその一匹。新大陸西方基準で言えば論外、ゴミ、そんなんで巨大とかナメてんの？　としか言いようがないが樹海に出現するドラクルス・ディノサーベラスよりも若干でかいと言えばそのヤバさがわかるはず。
尻尾を除く全身を加熱させることで外敵に対する防護とし、舌に熱を集中させることで敵を熔断する一撃を放つ。厳密には舌ではなく敵を焼き殺す攻撃器官であるため獲物を捕食するために用いる本物の舌は別にあったりする……つまり二枚舌。
とはいえ変温動物であるため自力での体温調整ができず、尻尾を循環する冷却用のマナを全身に回すことで強制的に冷やしている。その為、年月を経た個体ほど外皮を覆う鱗が脆くなっていく。
ちなみに眼球も加熱されるので発熱状態中は極端に視力が落ちる（舌攻撃の際は全身の熱が一点に回るので視力が回復する）

基本的に過剰伝達中にバク転すると死ぬ。

何故なら普通にバク転する感覚で力を込めると平均５回転半回って首から地面に叩きつけられるためだ。検証のために３０回くらい死んだから信憑性は高い。

だがちょっと伸びをする程度の力みであれば丁度バク転一回くらいになる、要するに魔法と一緒なのだ。特定のモーションを起こすためのコマンドをあらかじめ記憶しておけば戦闘中であっても行動を違える事はない。緊急時にこそ脱力を、筋肉よりも脳みその脱力こそが違えぬ動きを可能とする！！

「っしゃ部位破壊タイムだ！！」

過剰伝達中の「前進」はつま先で地面を掴むような動き、さらに加速するなら踏み込んだ足で若干前のめりになる動き。曲線のカーブは難易度が高いので除外、加速力を保持したまま角張った軌道修正で距離を詰める。

コンバス野郎の素体(モチーフ)はカメレオンだ、視界アドバンテージは人類とは比較にならないだろうが……さっきから変な動きをするタイミングがあるよなぁ？　当ててやるぜ、お前全身発熱中は視力にデバフが掛かるんだろう。

「レイ氏！！」

「行けます……！」

ヘイト引き付けをサイナに任せつつ、奴の視界が熱でアホになっている内に奴の巨大な尻尾を左右から俺とレイ氏で挟むように立つ。
成る程、近づいてみればこの尻尾が体温低下の役目を果たしているのが分かる。胴体の方が焼肉できそうな熱を発しているというのに、その胴体と繋がっているにも関わらず冷気を放っている……こっちもこっちで斬るのは大変そうだ。

攻撃を担当するのが俺とレイ氏じゃなければ、な。

「……【過剰強化（バーステクストリム）：紅日焔（プロミネンス）】！」

「燃えろアラドヴァル！！」

炎を秘めたアラドヴァルが刃に触れた氷結の鱗を溶かしながら傷を刻み、さらにエンチャントが付与された太極の剣が真紅の炎を纏って鱗を叩き割りながら肉を打つ。
残念ながらアラドヴァルは竜特効であって爬虫類特効ではないのでダメージ補正こそ乗らないがこの剣自体の特性としての熱ダメージがある！

「この剣は始源の灼熱の中で生まれたんだぜ」

風邪引いたカメレオンの身体なんざ怖かねぇ！
斬撃を加える度に肉質が柔らかくなっていくのが分かるし、アラドヴァルと太極の剣による熱を浴びた刃が触れる度に冷気が蒸気に変わって視界を白く染める。

「二人ともー！　ヘイトがそっちに向いてますよー！！」

「了解！！」

スキル「永劫の眼（クロノスタキサイア）」起動。真界観測眼を超える視覚補正とDEX、TEC、AGIの数値に比例した肉体へのスロー軽減！
スキルの再使用までの時間的に使いづらいだけであって根本的な発動が出来ないわけじゃねぇ、節約すればいいだけだ。

見慣れた世界、本来なら粘度の高い水の中を進むような感覚を得るものだが過剰な挙動を齎す黒い電光が俺の身体を纏わり付いた時間（みず）の中で強引に加速させる。
左足に力を込めて跳躍、意図的に力の向きを調整した事で天地逆さに尻尾の薙払いを避ける中で多めに力を込めた右手を振り抜けばその手に握った灼熱の剣がさらに斬撃を刻む。

着地、そのままでは慣性のままにすっ転ぶので踏ん張りながら遠ざかっていく尻尾にさらに追撃を……浅い、左から右へ振り回された尻尾をジャンプで回避した事もあって、遠ざかっていく尻尾へ攻撃が届かない。だがスローモーションな世界の中で、ベヒーモスの攻略を経て華奢な身体になったレイ氏が俺の横を通って突き進んでいく。

その手に握っているのは太極の剣ではなく、トゲを生やす事で殺傷力を増した金棒……金棒？
気づけばレイ氏の纏う鎧が変わっている、例の肉々しいものではなく、鬼を象った鎧武者のものへ。いつだったかに見たことがある、確かあれはクターニッドさんの時に使っていたような……

「――」

認識の加速中は周囲の声は殆ど音としてしか認識できない。だから厳密にレイ氏がなんと言ったのかは分からないが、一つだけ言える

のは俺を庇うように前へ出たレイ氏は俺を庇う為ではなく、もっと攻撃的な意図があっての事だ。

金棒に光が灯る。スキルだけじゃない、唱えた何かは恐らく魔法。魔法とスキルの同時使用、やろうと思えば誰でも出来るが少なくとも俺にはできない芸当だ。魔法覚えてないからな……いや違う！　インベントリアから出したのは使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）……単体による三重強化！！

女性用に作り替えたのか作り直したのか、女鬼武者が振り被った金棒に雷と、炎と、霧が這うように纏わり付く。
尻尾の振り回しってのは基本的に身体を踏ん張って尻尾だけを振るモーションだ、つまりモーションの最後は元あった場所に尻尾が戻る動きとなる。
そして今、レイ氏がいるのはその尻尾が戻ってくる位置だ。大型トラック並の巨体が振り回す尻尾の勢いはモーション終わりの殺意の薄い動きだとしても俺達を軽く吹き飛ばせる。だが、

「――――っ！！」

魔法名か、スキル名か、それともただ気合を込めた叫びか。振り下ろされた金棒がこちらに迫る尻尾に激突した瞬間、大質量に対して三つの力が宿った金棒が力を解き放った。
衝撃に反応したカウンター発動、それが三つ。尻尾と金棒とがぶつかった瞬間に爆炎が弾け、さらに続けて稲妻がコンパス野郎ではなくレイ氏の腕の方へと食らいつく。強化系か？　レイ氏の押し込む力が増した。
そして最後に炎とほぼ同じタイミング……即ち尻尾と金棒が激突した瞬間、炎と雷と共に纏われていた霧が嵐の如く炸裂する！

爆炎を雷によって増強した膂力と空気の爆発によってさらに激しく燃え上がらせる。それはまさしく綿密に組み合わされた「コンボ」であり、火力を出す事に特化したレイ氏がそれを成したならば。

勝機！！

剛風によってその規模を増した爆炎を雷光で強化した腕で押し込まれた事により、明らかに骨ごとへし折れたコンバス野郎の尻尾にアラドヴァルを突き込む！
ただの突きじゃない、鋭結点睛（えいけってんせい）から進化したＬｖ．１５０到達刺突系スキル「光差す輝道（シャイニング・スティング）」！！

このスキルは極めてシンプルな効果しか持っていない、だがそれ故にこのスキルは最強と言っていい。何故ならば……

「クリティカル倍率が単純に高い」

スローモーションな世界が急速に一倍速へと戻っていく。
白銀の光を浴びて、違わず一直線にコンバス野郎の尻尾を貫いたアラドヴァルの鋒に分厚いゴムのような感触。
そしてそれを食い破り、貫く感覚。

「部位破壊限定素材落とせや」

竜殺しの焔剣は奴の尾を完全に断ち貫いた。

焔雷旋風に光の道が差す（後書き）

・ヒロインちゃんが使ったコンボ内訳（武器込み）

武器：巨人殺し（ジャイアントキリング）・兜砕き（ヘッドクラッシュ）

プレイヤーよりも巨大な身体を持つモンスターに対してダメージに補正が入る。旧大陸で作っていた武器の一つである「脳天強打（スカルブレイク）」を新大陸の精強なモンスター達の素材でさらに強化した一品。相性とか耐性とかよく分からないけどとりあえず自分よりデカい相手に脳死で振り回す用の武器

・来迎衝雷（らいごうしょうらい）

強化スキル、相手の攻撃に対して攻撃を当てた際に五秒間だけＳＴＲに極大補正を付与する。ハイタッチすると相手の手が粉砕される

・熱く焦がれし我が昂り（エクスプロード・エンカウント）

攻撃魔法、相手の攻撃に対して攻撃を当てた際に武器の耐久度（素手の場合はＨＰ）を消費して爆発を起こす……が、この爆発は自身にも熱ダメージが発生する。サンラクが使うと爆発の余波で死ぬ（ヒロインちゃんはステータスと装備で耐えてる）

・昇天に誘う嵐流（エンハンストーム・ランクアップ）

強化魔法、自身に付与されている条件発動型の魔法の威力を飛躍的に高める。今回は爆発の威力（つまり熱量）が上がった事で尻尾の肉質が軟化した。プレイヤーに直撃した場合のダメージ量は大体４サンラク

以上、マッシブダイナマイト直伝「困った時はとりあえず力押しす

れば大体なんとかなるのでその為の効率的ダメージコンボ」でした

さて問題です、電子機器から冷却装置を物理的に取っ払ったらどうなるでしょうか。ヒントは今目の前でコンバス野郎君が実演してくれています。

「…………」

「いや回復すんなし」

「ちょっと見た目が可哀想すぎると言いますか……ほら、聖杖の所有者的に聖人ロールした方がいいかなって」

まぁ、体温が上がり続けて最初はこっちを完全無視してのたうち回っていたのに段々動きが鈍くなっていく姿は罪悪感を感じさせるが……それはそれ、これはこれと言いますか。

現実世界ならともかくシャンフロ世界における人類は霊長ではないのだ、少なくとも銃を構えていても勝てない相手とか大量にいるし。故に野生の勝負に情けは無用なのだ……まぁ、このまま自身の体温で焼け死ぬ様を観察してるのも忍びない。

「一思いに介錯してやろう」

「あの、撲殺って介錯と言えるんです？」

しゃーないじゃん、スキル的にも一撃火力が一番高いのは拳撃系スキルしかないし素手で触れたら俺が死ぬ。銃弾は溶けたから使えないし。

「来世はもうちょっと涼やかな生き物になれよ、南無三！！」

強化スキルを重ねた上での拳撃系スキル「勝利の神撃（ヴルスラグナ・スマッシャー）」。攻撃命中時に算出されたダメージ数値を二度付与する……つまり同じダメージ量で3ヒットするヤバめなパンチだ。

これにパラベラム・ルーティーン派生の必勝の先触れ（ザ・フォアランナー）やクリティカル・レイズ派生のストラトゥム・バスターを組み合わせる事でちょっとヤバめな殴殺コンボが完成する。

……こういうスキルを何度も使わないといけないような敵が今後出てくる、という事実から目を逸らしつつ体力が尽きた事で砕け散ったコンバス君を見送りながら落ちた素材を拾っていく。

サイナやラダー氏も含めれば6人パーティだ、落ちてる素材はそんなに多くないが部位破壊しただけあってちゃんと尻尾素材はドロップしていた。

「……いいなこれ、冷えてる間だけ硬度を増す素材か。氷系の武器は希少だから上手いこと鉱石と組み合わせたら冷却時に性能が上がる剣とか作れそうだ……熱くなったら鞭になる？　あーダメダメ、パスタに脳が……」

五秒でロールプレイが剥がれたおっさんアバターから目を逸らしつつ、改めて大河を超えた先……荒野の果てへと視線を向ける。

「おーおー、元気な活火山だ。アレが目的地かな」

灰色の煙が上空の雲と混ざって暗い雲となる。肩に触れた何かの感触に指を当ててみれば煤けた灰が指で手延べされていた。

「アレが目的地ですかー」

「肯定：あれこそがグレイブヤード積竜火山、幾度もの征服人形（コンキスタドール）による調査の尽くを阻んできた赤き竜達が生まれ、棲まい、そして果てゆく場所……」

赤竜が生まれ死にゆく場所かなるほど、攻略のしがいがありそうな……………ん？

「レイ氏、当代の赤竜ってドゥーレッドハウルだよな？」

「そう、ですね」

「火酒夏氏、あいつもう死んでるよな？」

「そですね」

「イムロン、つまり今あそこって魔王不在のラスダンみたいなことになってるんだよな？」

「そうだな」

……うーん、これクソヌルゲーなのでは？

◆

鉱人族（ドワーフ）。いわゆる定石（セオリー）、あるいはお約束（テンプレート）通りであるならずんぐりむっくりなヒゲモジャのおっさんということになる訳だが……

「……あれ、か？」

「どう、でしょうか……」

子供だ。子供って事はつまり背が低いという事だ、なのであれが鉱人族なのかそれ以外なのかの識別がつかない。
一応ラダー氏曰く鉱人族は肘から先がなんらかの金属になっているという中々妙な生物らしいが……分からん、あの子供の肌がそもそも褐色なせいで肘から先が褐色の鉱石なのか褐色肌なのか分からないのだ。

「まぁ、聞いてみればいいか」

「でも、見るからに警戒！　って感じですけど下手に話しかけたら逃げられませんかねー？」

「じゃあ逃げられる前に話しかけよう」

「そうですねー……そうですね？」

はいよーいドン。

「ヴィィィゲェエエトィ（ご機嫌如）ィィィネェエエン（何ですか）！！」

「きゃあああああああああ！！！？」

バカめが！　初速が違うわ！！

スキルによる加速で謎の子供との距離５０メートルを一気に縮め、なにやら妙な穴に飛び込む前にその首根っこを掴む。流石に封雷の撃鉄は使っていない、ダメージ入っちゃうからね。

「いやぁぁぁぁっ！！　やだぁぁぁぁ！！！」

「まぁそう怯えるな……あー、少女？」

中性的だからどっちか分からないキャラデザしやがってからに。だが確定してるのはこの子供の腕は確かに暗褐色の鉱石でできている、という事……つまり鉱人族だ。

「ぎゃあぁぁぁぁあああ！　いやぁぁぁぁっ！！！」

「いや待て待てなんでそんなに怯えて……」

「解答（アホか）：頭装備が原因かと」

頭装備ィ？　何がそんなに恐ろしいんだ、ただの仮面………あぁ、装備状態だと顔半分が炎上した蓮コラもどきになるんだったコレ。

「…………」

「ひっ……ひっ………」

「ガォー、オナカスイタ」

「ひぃぃぃぃぃぃ！！！？」

「やめんかっ！」

「おごぉ！？」

イムロン貴様……ＨＰが……二割減ったぞ……

その気になれば我が「ホラーゲーにおける分かってても怖い怪物の動き四十八手」が一つ、「ぎょるんぎょるん動く首と目玉」でさらなる反応を引き出すことも出来るが……あ、そういえばこの仮面つけた状態で目玉ぎょるんぎょるん動かしたらどうなるんだろう。

「…………」

「あの、ツチノコさんそれ二度とやらないでもらえますか？」

「え？」

「いや本当にお願いするんで」

「あ、はい……」

やらない方がいいらしい。

サムアイズ・ミグラント・オブ・フィアー（後書き）

物凄い速度で突っ込んできた顔半分炎上した蓮コラ鳥仮面女がドイツ語で挨拶しながら首掴んで自身の空腹をカミングアウトした上で全ての目を違う方向にぎょるんぎょるん回し始める絵。

カカカカカンカカンパイ！！！

この少女、名をガラテナと言うらしい。
らしい、というのは俺が聞いても怯えるばかりで何も答えてくれなかったからである。いやでもあんな良いリアクションされたらこっちも気合い入れて驚かしたくなるじゃん。

で、同様に女性用装備だとしてもいかつい女鬼武者なレイ氏もアウト、ロールプレイが暴走していきなり女言葉になるおっさんのイムロンもセーフ寄りのアウトなため火酒夏氏はともかくとしても、我々三人はガラテナちゃんの好感度稼ぎにおいて人形と羽トカゲ人間に負けた事になる。
そんなわけで自動的に火酒夏氏がガラテナとの交渉役として会話を行うことになる。

「ガラテナちゃんはお水を取りに来たんだねー？」

「うん……ドゥーレッドハウル様、いないから……本当はダメなんだけど」

「そっかー、実はドゥーレッドハウルが死んだ事って知ってる？」

「――――え？」

「おい常時ホロ酔いテンション、会話の切り口が鋭すぎるぞ」

「いいじゃないですか常時悪酔いテンションさん、どちらにせよ遅かれ早かれですよ。あと私はちょっと飲んでからフルダイブした方

が調子がいいんですぅー」

「マジでホロ酔いなのかよ……あと誰が悪酔いだ」

「主に格好ですかね」

エナドリを飲めエナドリを。酒が百薬の長と言うならエナドリは百一番目のスーパーグレートな薬だ、アルコールよりもカフェインの時代だよ。

「ドゥーレッドハウル様…………死んだ？」

「本当なのよねーこれが、ほら見てガラテナちゃん。あそこにいるヤバめな人いるでしょ？　あの人ヤバいからドゥーレッドハウルの腕を毟り取ったんだよー？」

「アラドヴァルのサンラクと呼んでくれ、もしくはサンラク・ザ・ハイアーザントップと」

「長いからサザハザップとかで良くないか？」

やだよそんな環境装備の頭文字だけ繋げましたみたいな名前。
そんなアホな会話を続けている間にもガラテナのキャラクターイベントは進行しているらしい。ドゥーレッドハウルが死んだという情報に呆然としていた背の低い少女は火酒夏氏と繋いでいた手を離すと、ラダー氏へと顔を向ける。

「ほ、本当に……？」

「うむ、それは事実だ。そして真実だ」

弱者への恐怖だけではなく強者への恐怖でもありたい、それが男のダンディズム。その理論でいくと例の狼が最強クラスなんだよなぁ……はい、おのリュカノルマ。

「と、とーちゃんに知らせなきゃ……！！」

どこか警戒するように穴……もとい地下トンネルを歩いていたガラテナが走り出す。一人で行かせては危険かもしれないのであくまでも保護者的観点から我々もダッシュでそれに続く。
いやあくまでも保護者的観点であってね？　ガラテナちゃんを鍵とか勘合符代わりにしようとかそういう邪念はないわけでね？

「レイ氏、このトンネルこれくらいの広さだったら後ろから迫りくるスラッシャー系モンスターのモノマネできそうじゃない？」

「流石に……敵対される、かと」

だよなぁ……なんていうか今のところガラテナだけしか知らないのもあるが、鉱人族(ドワーフ)から森人族(エルフ)と同じ匂いがする。
やはりヒトが万物の霊長たりえないこの世界では自然と小動物的な気質になってしまうものなのだろうか………

◆

んなこたなかった。

「酒じゃああああああ！！　酒樽を開けぇぇぇぇぇいい！！！」

「宴だぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ひょおおおおおおおおおおお！！！！」

赤竜ドゥーレッドハウル死す。

ガラテナを経由して二号人類（俺達）から齎された情報は俺達がドゥーレッドハウル討伐報酬である「赤竜の魔菌」を見せた事で彼らの疑念は確信へと変わり、彼らの本拠地たる地底都市ホルヴァルキンは狂乱の歓喜に染まった。

数秒前まで警戒と憔悴を無気力を「辛気臭いカクテル」として混ぜたような顔をしていた鉱人族と本当に同一人物なのか、それくらいのレベルで騒ぐ彼らの様子についていけない俺達は視線を交わしながらどうしたものかと相談を開始する。

「どうする？　当初の目的としては多分、元首だかリーダーだかに会いに行くのがベストだろうけど……」

「んー、芋焼酎っぽい感じ？」

「いやしれっと飲むなよ」

「シャンフロって味の再現は中々だけどやっぱりアルコールの脳味噌炙って溶かすような感覚はカットされちゃうんですよねー」

脳味噌炙って溶かす、とかいう表現初めて聞いたわ。人間の脳味噌はマシュマロじゃねーんだぞ？

「とりあえず明らかに偉い人がいます、みたいな場所を探してみます？　ただ……」

「ただ？」

「ツチノコさんはここに釘付けですね」

何故……？　と、ここで俺は気づく。
俺が腰に佩いているのはアラドヴァル、すなわち竜殺しの刃先にしてドゥーレッドハウルをぶっ飛ばした剣であり、そして俺はそのことをガラテナに話しているのだ。
さらに言えば先程ガラテナが鉱人族の大人（テンプレドワーフ程露骨に背が低いって感じじゃない、腕が何かしら金属って事を除けばガタイのいい小柄なおっさんって感じだ）にドゥーレッドハウル死亡の情報を伝える際にアラドヴァルを指差していたような……

つまり、今の俺は「ドゥーレッドハウルをぶっ飛ばした面々の一人であり直接相対した者本人」というわけで。瞬く間に鉱人族に囲まれた俺は、話を聞きたがる鉱人族達からなんとか逃れるべく秘技「乾杯を連打して全員泥酔させる」を実行するものの、しれっと俺を囮にしてくれやがった火酒夏氏達に追いつくまでに十分以上足止めされたのだった……おのれ火酒夏。

カカカカカンカカンパイ！！！（後書き）

「おう！その剣まさか伝説のアラドヴァ……」

「とりあえずかんぱーい！！」

「「「乾杯！！！」」」

「じゃあまずこの剣について語ろうと……おっと、舌が乾いた、かんぱーい！！」

「「「乾杯！！！」」」

「この剣は竜を殺す巨人の槍、その穂先！　怨敵ドゥーレッドハウルを……盛り上がってるかー！！　かんぱーい！！」

「「「乾杯！！！」」」

こんな感じ

◇

思ったより愉快な人物だ、と火酒夏はサンラクというプレイヤーへの評価を改めた。
竜災大戦の際はリアルで飲み会があった事で参加が遅れ、結局最後の方で無差別辻ヒールを繰り返す程度しか活躍できなかったため、最前線で八面六臂の活躍をしていた「ツチノコさん」に出会うことはできなかった。
その後、真偽は不明だが別のゲームで「ツチノコさん」に会ったらしいクランリーダーからの話や、伝聞で伝わってくる情報……そして冥響のオルケストラ正典ルートの攻略動画の流出。それら全てを含めて火酒夏が考えていた「ツチノコさん」という人物はロールプレイに酔ってるタイプである、そう推測していた。

「……思ったよりコミュ力あるんだ」

イムロンを経由してサンラクとパーティを組む、となった時はなんの因果かと驚いたものの、実際に組んでみて分かったことはサンラクというプレイヤーが所謂「勇者様」系ではなかったということ。
そして恐ろしく頼れる、ということだった。
まず雑魚モンスターが寄ってこない、というだけでも新大陸を攻略するプレイヤーからすれば引く手数多だ。
なにせある程度進んでボスを倒せば次の街……すなわち物資の補給をできる拠点が点在する旧大陸と違って新大陸の攻略は物資の消耗

と安全地帯の確保に苦心する場所である。

新大陸攻略における殆どの死亡パターンの殆どは雑魚モンスターにリソースを削られた後に強力なモンスターによる蹂躙という黄金コンボであるからして、その内の雑魚の殺到を回避できるというだけでも恐ろしく有用だ。

本人はそれを疎んでいるようだが……魔法使い系クランの中ではトップ層に位置するクランのメンバーから言わせて貰えば、やり方さえ確立されたならクランメンバーに意図的に「刻傷」を付与させる者は決して少なくない数現れるだろう。

さらに言えば、分かっていた事ではあるが本人の性能も恐ろしく頼りになる。

聞けばそのレベルは１５０、火酒夏が覚えている限りではサンラク以外誰も到達していないレベル上限だ。刻傷のメリットデメリットがさらに大きくなる事に目を瞑っても、今のサンラクは単純なレベルだけで言えばシャンフロ全プレイヤーの中で最強という事になる。

ＶＩＴが始めたての新規と同等かそれ以下と聞いた時はマジかよと思ったものだが、ほぼ確定でクリティカルを出す幸運とプレイヤー最速の称号を支えるＡＧＩから繰り出される極端な攻撃と回避への特化は回避タンクと火力貢献を両立した軽戦士ビルドの極点と言える。

「殆ど介護しなくていい避けタンクかー」

火酒夏はヒーラーだ、逆に言えば普通の魔法職以上に前衛や中衛の動きについて精通している。だからこそサンラクという「駒」の有

用性がよく分かる。

（勇者武器関連もこんなちょろく着くとは思ってなかったし、やっぱりもっと密接に仲良くなりたいよねー）

「……あの」

「はいなんでしょか？」

と、思案していた火酒夏の肩に手を乗せて話しかけてきたのは、火酒夏が記憶していた頃の姿と比べると随分と可愛らしくなったサイガー０だ。

「その……置いていくのは、良くないと思います……」

「そうですか？　あの人そういうのも慣れてそうですし放っておいても追いついて――」

「そういう問題ではないです」

氷の上を滑るようになめらかに、そうではないとサイガー０が口を開く。

トップクランのメイン火力が新鋭のクランに移籍して殆どギスらない、という中々に珍しい経歴を持つプレイヤー最強の火力を持つ女鬼武者の表情は鬼の仮面で伺うことが出来ない。

だが己の肩へ恐ろしく柔らかに触れる手が逆に不気味さを感じさせる。

「誰かを一方的に利用するのは……良くない、です」

「…………利用してるつもりはないけど、確かに不義理かもですね。待ちましょっか、イムロンちゃんもそれでいい？」

「ちゃんをつけるなちゃんを、私はそういうのには関わらない主義なんだから気にしなくていいわよ」

「そですかー」

という訳で待つ事十五分程、何故か天井をダッシュしながら追いついてきたサンラクに若干恨みの籠った視線を向けられつつも、改めてパーティメンバーの揃った一同は鉱人族達のトップがいるであろう場所を探すのだった。

◆

そもそも鉱人族(ドワーフ)のトップに会いにいく理由は二つある。

一つは勇者武器関連の「黄金のマグマ」を手に入れる為、ビィラック経由の情報で既に鉱人族の王が黄金のマグマに関する情報を握っているのは分かっているのだ。

そしてもう一つはラダー氏の用件のためだ。ラダー氏はそもそも「赤系竜人族に会いにいく」という目的でシナリオを発生させている。赤系竜人族は実質的にドゥーレッドハウルへの奉仕種族のような扱いを受けており、ドゥーレッドハウル（故）の寝床に住んでいるらしい。

そしてドゥーレッドハウルから「醜い(ブス)」という理由で迫害されたために地下で暮らしている鉱人族と交流がある事から逆説的に鉱人族

のツテを頼る事で赤系竜人族に会いに行けるというわけで……うーん、あのアメンボ思ったよりクズだったみたいだしもっとボコっとけば良かったかな。

だがまぁ全ては終わった事だ、赤竜は既に死んでいるのだから敵討ちもクソもない。なんなら今蘇ったとしても素材目当てのプレイヤーに場所をチクれば迎える最期はスローターかリスキルか……

「ここか？」

「都市の中央がただの民家だったからな、だとすりゃ残るはここだろう」

妙な造りの都市だ。都市の中央ではなく都市の外縁、末端の方に重要施設があるとは。マップが西洋ファンタジーって言うより平安時代とかの日本っぽいな。もしくは縦スクロールのＲＰＧ、いやむしろレールシューティング？

どうやら狂騒に混ざらなかった比較的まともな頭の鉱人族がいたのか都市の果てにある奇妙な建物の入り口、その門は開かれている。どうやら入って来いという意味らしい。

……先程俺はアラドヴァルを持っていたから悪目立ちした、と思っていたが。実は逆だったのかもしれない。

「イムロンと火酒夏がいたから、素通りできるのか？」

何故なら彼らが腰に、背に吊るした黄金の武器……それに関する情報を握っている者がこの奥にいるのだから。

まるで神殿のような門をくぐって、俺達は先へと進む。

滞りなく奥ゆかしく威嚇（後書き）

ヒロインちゃん「そういう（次は無い）の良くない」

ゴールデンロード・チャレンジ

門をくぐり、回廊を進む。数十メートル歩き改めて思う。やはりこれ屋敷とか城ではなく神殿とかそういう系の場所なのでは、と。

「なんというか、メッセージ性の強い壁画がずらりと」

「これライブラリに売れそうじゃないです？」

「抽象的な壁画だが……いや、まぁ、明らかにそういう事だよな」

エジプト……じゃないな、若干のアジアっぽさもある壁画に描かれているのは極々シンプルな「物語」だ。

・逃げ惑う人々と獣

・強大な敵

・立ち向かう戦士達

・人と獣を問わず積み上がる屍と膝を屈する数人の人間

・大地を割って現れる光

・倒れていない数人の前に現れる剣、槍、弓、杖、槌

・敵を倒す五人の……そう、五人の「勇者」

「まぁ、要するに勇者武器の誕生プロセスみたいなもんだろコレ」

「その通りだ、巨（おお）いなる槍を携えし者」

……む。

横を向けば、そこには随分と小柄な一人の青年が立っていた。恐らく鉱人族（ドワーフ）なのだろう、だが男も女も全体的に髭や髪、あるいは眉などの毛の量が多いのに対して、この青年は髭を剃り、眉も薄く、髪に至っては完全に剃り上げたスキンヘッドだ。ハゲたホビットと言われた方が納得できるレベルだ。

だがそのつるっぱげの頭に載っている冠、そして冠と同じ輝きを放つ黄金の腕がキャラクター造形として一つの答えを導き出す。

「あんたが鉱人族の……」

「如何にも、僕は当代の「ミダス」だ。いや、ミダス28世と言った方がいいかな……失敬、僕の代では初めての他種族なんだ」

「ミダス……まんまだな」

「どういう事？」

「後で調べとけ」

後ろで火酒夏とイムロンが何やら話しているが、ミダスって確か触れたものを全部金にする王様だっけ？　何神話だったか忘れたけど。

「そしてそちらのお二人……その輝き、まさしく聖槌ムジョルニア

と聖杖アスクレピオスとお見受けする」

「ああ」

「はい」

しばしの沈黙。何かを堪えるように唇を強く結んでいた禿頭の王は、暫くしてようやっと己の中から飛び出そうとしていた感情を飲み込んだのか、穏やかな声音でされど高らかに口を開いた。

「我ら守り人、赤き竜より隠し通せし黄金を第二十八代ミダスの名に於いて確かに勇者へ届けるものなり。星を救う者（セイヴァースター）に成り得る勇者たちよ、どうか試練に挑まれ給え」

「おっ」

「わ、」

「どうした？」

「ユニークシナリオだ」

「勇者専用ユニークシナリオ「勇ましの試練」が進行しましたねー」

「鎧の器と共に灼熱を超えろ……か」

「「…………」」

うーん、俺とレイ氏がひたすらに蚊帳の外だ。かろうじてアラドヴァル関連でコメントのある俺と違ってレイ氏はひたすら蚊帳の外だ。

ラダー氏はとっくに赤竜系竜人族達のところに繋がるトンネルへと向かっているのでマジで「場違い」な空気が漂いつつある。

「どうするレイ氏、俺は一応あいつらと同じ場所に用があるけど……」

「それなんですけど……ちょっと、」

「ん？　あー、ミダス殿」

「何かな？」

「少々壁画を見ていても？」

「構わない、他でもないアラドヴァルに選ばれた貴公であるならば。むしろあちらの壁画も見て欲しい」

新大陸の亜人種に対してアラドヴァルが特効すぎる、いやダメージ的な意味ではなく印籠的な意味で。とはいえ本当は密談のための方便なので若干の申し訳なさを感じつつも、俺とレイ氏は少し離れた場所で小声の会話を始める。

「……で、どうしたの？」

「その……多分、なんですけど。私、ここにいない方がいいと思うんです」

何故に？　ガラテナを無用に怖がらせる、という理由から既に「渡り鳥」は外している。なので素顔（女）の怪訝な表情はレイ氏にも丸見えだ。

「……ここに入ってから、ウィンドウが出ました」

「ウィンドウ？　何かの通知って事？」

「はい………太極の剣関連です」

「あー…………それは、」

良い悪いで言えば、あまりよろしくない部類だろう。
勇者武器は諸々の情報を合わせて考えるに、この先のシナリオで人類側の象徴として振るわれる武器……つまり未来に役目のあるコンテンツだ。
それに対してレイ氏の武器は過去に遡って真実を知るもの、神代を超えて更に古き時代、始源の真実に至るための武器。

ぶっちゃけ相性的には善と悪の関係性に近い。プレイヤーが振るう以上は敵というわけではないだろうが、しかし勇者武器に関するシナリオの発生地に近づいて良い結果が出るとは考えづらい。

「ちなみに内容を聞いても？」

「……白き傷に浸せ、と」

なんたってシャンフロのシナリオはこうも案内がポエミーなんだ、雑菌福耳にでも聞いてみるか？　いやダメだわあいつラブリーでエモーショナルなポエムしか適正ないし。それで食っていけそうなんだから凄いけど。

「なので、ちょっと火山の外で……手がかりを探してみよう、かと」

「中じゃなくて？」

「……始源関係、ですから。人里からは離れているのでは……と」

成る程、確か太極の剣……もとい神魔の剣があったのも人間が近づくような場所ではなかったと聞く。であればホルヴァルキンという人類の拠点からアクセスできるような場所ではないという判断か。

「そっか……じゃあ、俺も用件が済んだら手伝うよ」

「いいん、ですか？」

「全然大丈夫、それに始源関連もちょっと気になってはいたし」

とりあえずレイ氏とは一旦別行動、俺も俺で当初の目的を果たすとしよう。

黄金の王ミダス？　黄金のマグマ？　勇者専用？　知るかよ、金ピカじゃなきゃ通れないってんならこちとら皇金のバケツだ。

「星は救えなくてもマグマは掬えるってな」

ゴールデンロード・チャレンジ（後書き）

Q．なんでミダスハゲなん？

A．燃えるじゃん、あと剃ってるだけでまだ現役で生える

そこに道があるならば（前書き）

（硬梨菜は首に「私はモンスターの設定を我慢できませんでした」というプラカードをぶら下げている）

そこに道があるならば

「おぼぼぼぁーっ！！」

「ツ、ツチノコさーん！！」

◆

俺はマグマに焼き溶かされて死んだ。

十数秒後、ホルヴァルキン大祭殿最奥「黄金の泉」の外縁に張ったテントから這い出した俺は、呆れた顔で俺を見るミダス氏に男の顔で笑い返してやる。

「いきなり飛び込んだ時は何事かと……ですがお分かりでしょう？　この泉は勇者にしか超える事は出来ないのです」

「見事な飛び込みでしたねぇ」

「泳ぐつもりだったのか？」

そう、別に俺はやけっぱちになったわけではない。ちょっと知りたい事があったからその検証をしていただけだ。

「へへへ……甘い、甘いぞミダス君。不可能も絶望も……永遠じゃあない。いつか必ずそれらが覆る日がある」

それは今日だ。

この黄金の泉とやらの構造は単純だ、直径１００メートルはある「普通のマグマ」で満たされた泉の中心、そこに直径1メートルあるかないか程の黄金に輝くマグマが湧き出る場所がある。

発熱し発光する普通のマグマの中心にあるにも関わらず、混ざる事なく、そして陰る事なく輝く黄金はあのマグマがただの色違いなどではないことを示している。

つまりは、だ。そこまで辿り着きさえすれば黄金のマグマを手に入れられるわけだが……問題はやはり距離にして４９メートル程ある普通のマグマゾーンだろう。

そもそもの話、人間という生き物はそもそもクソ雑魚に過ぎるのでマグマに飛び込んだ時点で死ぬ。ついでに言えば約５０メートルマグマの上を低空飛行していたら温度で死ぬ。

ではどうすればいいのか？

「時にミダス君、既に俺は攻略法が見えてるわけだが何か分かるかな？」

「何を――――」

「発火して死ぬまでのタイムは五秒、発火するまでは接触でゼロコンマ、非接触の場合は熱によるスリップダメージが発生する。愚者逆位置の効果でスリップダメージは１／２となる。一割減るまでに五秒……」

結論。

「五十秒以内に中心に到達し、五秒以内にマグマを確保……！！
寝起きでもクリアできるなぁ！！」

ゴー！！

スキル起動！　起動！　起動！！
「サンラク」は戦士だ、されど魔法を使わずして空を駆ける最速の戦士！　それが「サンラク」！！
こちとら世界の崩壊を背に走り抜けた男だぜ、俺を止めたいならダメージ床じゃなくて移動床でも持ってこいってな！！

「ハッハァーーーッ！！」

腹立たしいがここに来て逆位置の効果逆転が良い方向に作用している。マグマに触れないギリギリのラインを最速で駆け抜ける俺の身体は高温に曝されているが、それによるダメージは普段よりも少ない。

「見えた！」

黄金の一滴！　バケツスタンバイ！！
脚に痺れるような熱さ、体力が削れているが誤差として片付けられる範囲！　勝負はここからだ、限界まで速度を落として泉の中心へと自然落下で落ちていく。
そして、足がマグマに沈む寸前！　多重的円周運動（オービット・ムーブメント）最小円周で身体の天地を逆転させる！！

重力作用の方向を変えるスキルの発展系「星海飛脚（アステ・ランナー）」の効果は未だ残っている。このスキルが発動している限り、俺は回転による三半規管への影響を受けない。
そしてヘルメスブートの進化系「ディオーネーの神助（ディオーネー・アシスタンス）」の効果で更に動く事なくその場に立つ事すらできる。

「つまりこの一瞬――――！！」

安定した立ち位置でバケツを振るうことが出来るわけだ。どぷん、と重い水音がしてバケツが黄金の中へと沈む。そして引き抜くと同時にィ！！

「男子小学生に連綿として受け継がれし秘伝……！」

水の入ったバケツを全力でぶん回す事で遠心力による「落ちない水」を実現する……今回はマグマでそれをやるだけだ。ヒューッ！　しくじったら頭からマグマを被る事になるわけだ。
あとは帰るだけだが……参ったな、時間切れが近い。これはあと一、二回空中ジャンプできればいいくらいか……

「せいっ」

一回目ジャンプ、その場で宙返りして向きを戻す。

「ほっ」

二回目ジャンプ、その場で高く跳躍。
「救助：インテリジェンスキャッチ」

そして空中に呼び出したサイナの手に掴まって安全に地面まで戻ると。なんの皮肉か両腕にインベントリアがあるからこそ、片方の手が塞がってももう片方を操作できるからこそこういう芸当をこういう状況で実行できる。

サイナの武装は一通り買い揃えてある、その中には人一人と中身満載のバケツ程度ならぶら下げられる空中機動パッケージもある。

まぁこれ、許容重量を増やす程武装に割くリソースが削れるのでここまで飛行能力に特化するともう輸送しか出来なくなる。ま、それで十分なんだけどな。

「なんと、いう……」

「よう勇者諸君、悪いが一抜けだ。攻略頑張れよ！！」

「あのー、代わりに取って来てもらうとか……」

「明らかに非正規手段で攻略するとダメなパターンじゃね？」

「どちらにせよそのうち採取を頼む事になりそうだがな」

イムロン……バケツに妥協しない事だ。それがただ一つの正解さ。去る直前、ミダス氏が問うて来た。それをどうするつもりなのかと……そうだな、敢えて答えるなら。

「願いが聖なる武器を呼び覚ますなら……俺は俺の願いで武器を握りたいのさ」

「それは………」

許せミダス、俺も今何言ったのかよく分かってないんだ。咄嗟にか

っこいい言葉だけ並べたので特に意味はないんだ……でも黙っておく、謎が女を美しくするなら沈黙が男を磨くのさ。

やっぱ何言ってるかよく分かんないや、疲れてんのかな俺。

まぁいい、目的は達成した。レイ氏の手伝いに行くとしようか！！

◇

「………」

ズズン、と大地が揺れる。

「………」

俺も、レイ氏も何も言わずただ視線を交わす。それはまるで、見つめあっているようにも思える永遠……

「ヴォルルルルッ」

「「………」」

俺は見上げるようにレイ氏を、レイ氏は見下ろすように俺を。何故

アバターの身長で言えば俺より背が低いレイ氏を俺が見上げているのか。
それはレイ氏がアホ程デカい馬に跨っているからに他ならない。しかもその馬は毛並みが明らかに金属質というか……うん、現実から目を逸らさずに言うと馬の形した鎧かと思ったよ最初。

「その………どちら様で？」

「話せば、長くなると……言いますか。とりあえず……その、」

――隠し最上位職業「追月の竜騎（ケトゥラフ・ドラグーン）」に転職しました。

「えぇ………」

「その……とりあえず、名前をどうしようかと……」

「ヴルルルッ」

サラブレッド系ではなく、足踏みだけで人の頭をミンチにできそうなタイプの巨大鎧馬君……ちゃん？　が値踏みするように俺を睨め付ける。ほほう？　いいぜその挑戦受けて立つ。

「ヴァイス・ヴルストなんてどうだろう」

「じゃあ、それに……」

ゴッ！！！

「おごぇっ！？」

「サ、サンラク君！？」

思ったよりも賢くないかこず、頭突きで四割削れたぞ体力……！
の馬肉！くっ、何故バレたんだ。

そこに道があるならば（後書き）

ヴァイスヴルスト＝ソーセージ

・アルマアロゴ・ヘタイロン
火山地帯に棲むアロゴ・ヘタイロンというモンスターの上位種、カテゴリ的にはレアエネミー
通常のアロゴ・ヘタイロンが群れによる物量圧殺をメインとした突撃を行うのに対してこの上位種は部分的な甲殻しか持たない通常種と違い、本来は弱点たり得る関節部分を伸縮する甲殻で覆っているために、単独での突撃と蹂躙を得意とする

さらにアルマアロゴ・ヘタイロンを含むアロゴ・ヘタイロンのクラスタは非常に気性が荒く、統率の取れた動きをする
その性質上、アロゴ・ヘタイロンのクラスタを率いるリーダーとなる事が殆どだが、稀にリーダーの地位を奪い合うアルマアロゴ・ヘタイロン同士の争いに敗れた個体が単独で活動していることもある。

ヒロインちゃんが遭遇したのはそういう個体
ちなみにアルマアロゴ・ヘタイロンが通常のアロゴ・ヘタイロンの完全上位種かっていうとそうでもなくて、それこそパーティ上限の十五人全員がアロゴ・ヘタイロンで統一したりすると恐ろしく歩調の合った重騎兵が完成する

ワン・フォー・オール・フォー・ハッピーエンド

◇

追月の竜騎(ケトゥラフ・ドラグーン)。
それはシャングリラ・フロンティアがサービスを開始して丁度一年経つ直前……およそ十ヶ月ほど経過した頃に出回った噂の正体である。

――上位か職業「聖騎士」及び「暗黒騎士」をメイン、サブにセットした状態でなんらかの条件を達成すると隠された最上位職業が解放される。

元を辿れば騎士系統最上位職業「聖輝士(パラディオン)」及び「黒忌士(ダーククルセイダー)」に就職する事で閲覧可能な情報の中に記されていた「光と影を背負いし彷徨える騎士」という一文がこの仮説(ウワサ)の根幹だ。

同じく騎士を由来とする最上位職業でありながら信仰と殺戮に分かれた二つのジョブ。その双方が暗示する「彷徨える騎士」の情報はゲーマー達の後年思い出すと少し恥ずかしくなるタイプの心をくすぐり、盛んに検証が行われた……だが、その正体は不明のまま、いつしか信憑性の低い噂として忘れられていった。

だが、とあるプレイヤーは今日(こんにち)に至るまで「聖騎士」と「暗黒騎士」を己が生業として剣を振るい続けていた。
実のところを言えばシャンフロというゲームにおける強さの大半はスキルと魔法に依存しているのでそこそこ便利な上位職業であると

最前線でも普通に戦える、というのがサイガー０がジョブを変えなかった理由の大半なのだが。

だが、それこそが「追月の竜騎」に至る条件の一つを達成した理由だ。

シャングリラ・フロンティアにおけるジョブ就職の条件は大きく分けて三つに分かれる。即ち、

・条件型

・物語型

・複合型

の三種類だ。殆どのジョブはユニークシナリオやクエストの達成で就職する物語型、複数の条件を達成した時点で転職可能になる条件型、あるいは条件を達成してシナリオを発生させる複合型に分類される。

「追月の竜騎」は複合型だ、そしてその条件こそが「聖騎士及び暗黒騎士を最上位職業に転職可能な状態でジョブにセットし、隠しパラメータ「歴戦値」を高めた状態でさらに「野生値」を高めたモンスター相手に発生するユニークシナリオをクリアして……と、文章にすると難解だが要約すると

・最上位職業に転職可能な状態の「聖騎士」「暗黒騎士」ジョブをセットする

・ＮＰＣの間で噂になる程の強さを持ち、さらに聖輝士、黒忌士どちらのサイドにも味方しない

・騎乗可能なモンスターと盛り上がる激闘を繰り広げる

このような流れとなる。

サイガー0はユニークシナリオEX「致命兎叙事詩（エピック・オヴォーパルバニー）」を発生させてからは拠点（ホーム）をラビッツへと移している。即ち「所在不明の騎士」としての名声を得る条件を達成しており、さらに流れのアルマアロゴ・ヘタイロンという強力なモンスターとソロで渡り合ったことで全ての条件が達成されたのだ。

◆

「……というわけでして」

成る程、とりあえず鉱人族が寄り付かないような場所を目指していたら偶然このアルマアロゴ・ヘタイロンなるアーマード・馬と遭遇。鬼武者装備のまま金棒で激闘を繰り広げ、トドメを刺す直前でユニークシナリオが発生したので回復させたりしたらテイムできてしまったと……

「その、えーと、ケットバス・ドラグーンみたいな感じのジョブはどういうもんなの？」

「えぇと……昼と、夜で性能が変わるみたいです」
なんかそんな感じのモンスターに激しく心当たりがあるな、さらに言うとその心当たりあるモンスターの素材で剣を作った奴がいる。鏡見たときに見かけたから間違いない。
「今……つまり夜の時は「追月」状態で、朝になると「喰陽」状態に……」
「どうかした？」
「他意は、ない、デス、よ？」
「え？　よく分からないけど……うん」
さらに詳しく聞けば、なんともユニーク（面白い、という意味で）なジョブだ。
夜の間は光系統の力を扱い、朝は闇系統の力を扱う。夜間に光に触れる事でその力を取り込み、逆に日中は影に触れる《・・・》事でその力を操る。
というわけで試しにやってみようという事になった。
「えぇと、確か……あった、【マジック・トーチ】の使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）」
発動、それにより俺の頭上に出現した光球が周囲を照らし出す。まぁプレイヤーからすれば日暮れ前の薄暗さがそこそこ明るくなった、程度なのだが……

「行きます……【簒奪月蝕（スティル・エクリプス）】」

「おぉお！？」

なんだ！？　いきなりＭＰが削れたぞオイ。いや違う、変化はパラメータだけじゃない。

目の前の光景をなんと形容すればいいのか……例えるならそう、光に照らされた空間そのものがレイ氏の手に掴まれている。リアルじゃ絶対に見れない光景だ、なんというか……こう、空間として張られたカーテンを無理矢理引き剥がしているような、兎に角【マジック・トーチ】から放たれている光が俺のＭＰごとレイ氏に奪われている。

「この、掴んだ光は……えと、自分に還元するかそのまま攻撃とかに転用するか選べるそうです」

「条件付きのＭＰドレインってエグすぎねぇ……？」

「あ、ごめんなさい！　お返しします！！」

他者への還元も出来る？　いや待て、これまさか……

「ＭＰヒーラー、だと……！？」

ヤバい、これはヤバいぞ。場合によってはこのジョブは「人権」になる恐るべきスペックを秘めているぞ……！？

「レイ氏、これはヤバいぞ……どうする？　他のプレイヤーにも教える？　それとも秘密にしちゃう？」

「え、ええと……」

別に隠すことに対して俺はとやかく言うつもりはない。そもそも俺が人の事を言えない、ってのもあるが再現性のあるコンテンツを見つけられない方にも何割か問題があると思っているからだ。
そりゃヒーラーや純魔に騎士系統の隠しジョブの条件を見つけろと言うつもりはないが、レイ氏がやってた事は聖騎士と暗黒騎士のジョブをメインサブにしていただけだ。少なくともリュカオーンにレベル１０だか２０でノーダメ１００発クリティカルよりかは簡単だろう。

「……その。私は……公開するべき、だと思います」

攻略Ｗｉｋｉに情報が書かれるまで攻略できない、なんてコンテンツは存在しない。
シャンフロに限っては解析やリークも有り得ないだろう、つまりこの隠しジョブについて公開するか否かはレイ氏の自由意志で決まる。

「理由を聞いても？」

レイ氏がチヤホヤされたいから公開する、というような手合いではない事くらいはこれまでの付き合いで分かっている。いやそれが悪いって訳では断じてないが、少なくともレイ氏はそういう理由で公開するわけではないだろうって事だ。

「シャングリラ・フロンティアは……その、あくまでもゲームなので、一人二人が際立って強いだけだと、ワールドストーリーで取り返しのつかないことに、なる気がするんです」

「確かに」

レイドモンスターとかを見るに薄々嫌な予感はしている、このゲームの運営はやる時はやる、と。間違いなくこのゲームにはゲームオーバーの概念がある、ＶＲＭＭＯだとしてもだ。

一番近い例を挙げるなら彷徨う大疫青だ、あのレイドモンスターを倒せなかった場合、確実にサードレマは滅んでいただろう。都合よく引き返すようなモンスターじゃないだろアレ。

まだレイドモンスターの全てが明らかになった訳じゃない、そしてユニークシナリオＥＸがクリアされると同時に進んでいくワールドストーリー……物語にはボスキャラがいるものだ。

その時に戦うのは他でもないプレイヤーであり、リアルタイムで進行するこの世界にリアルでの人生があるプレイヤー達が必ず居合わせられる保証はない。

俺やレイ氏だってそうだ、センター試験当日にラスボスが現れたらどうしようもねぇ。流石の俺もシャンフロの興亡よりもリアルの受験を優先せざるを得ない。

「……駄目、だったでしょうか？」

「いや全然？　むしろ尊敬するよレイ氏……いや、玲(レイ)さん」

俺ならちょっと迷うし、迷ってるうちになぁなぁで公開する事を忘れてる気がする。

「それで、その……実は、お力添えを、お願いしたい……事がありまして」

「ん？」

ワン・フォー・オール・フォー・ハッピーエンド（後書き）

・簒奪月蝕（スティル・エクリプス）
「光」を対象に発動可能。発動状態で光に触れる（手が光を浴びている状態）事で光の強さや光源に応じた「ＭＰ」を使用した手に纏わせる。対象がＭｏｂ由来の場合はそのＭｏｂからＭＰが減算される。
この手に纏った「光」は攻撃として利用する他に、自他にＭＰ回復として還元させることが出来る（攻撃として利用する場合は、浄化効果を付与された聖属性となる）

・簒奪日蝕（スティル・エクリプス）
「影」を対象に発動可能。発動状態で影に触れる（手が影で光から隠れている状態）事で影の濃さや発生源に応じた「ＨＰ」を使用した手に纏わせる。対象がＭｏｂ由来の場合はそのＭｏｂからＨＰが減算される。
この手に纏った「影」は攻撃として利用する他に、自他にＨＰ回復として還元させる事が出来る（攻撃として利用する場合は状態異常汚染を増やされた暗黒属性となる）

一つ良く通る声、千の響く声（前書き）

ちょっと過激と言うか極端な描写なのでもしかしたら消すかもしれない

これまずいな、と思われたら遠慮なく言っていただけると助かります

【王認騎士】騎士総合掲示板　Ｐａｒｔ．２８９【地雷注意】

８７９：テグサ
ほならね？　教会勢力とギスってる新王側の上位ジョブに就くメリットを説明してくれって話なんですよ
王認勇士だったらまだしも、性能的にはちょっと火力出せるだけの騎士だぞ？　聖輝士ルート潰すだけの価値あるか？

８８０：ザルドフィン
だから前スレから言われてるだろうが仮に新王側が負けたとしても速攻クビってことはないだろうし元王認騎士として結果を出せば特殊最上位が出る可能性は高い
Ｐａｒｔ．２８４から読み直してこいハゲ

８８１：ゼラオス
黒忌士ルートだと逆に王認の文字が足引っ張るっぽいんだよなぁ、あれ騎士派生だけどやってることほぼ傭兵だし、現代の方の

８８２：庵道都露和
ＰＭＣだよなアレ、今までずっと受注式だったからギルド側が依頼を持ってくるってのは中々新鮮だわ

８８３：バジル
あの陰気臭いオーラさえなければいいんだけどね……常に堂々と胸張ったロールプレイ強制はキツイっす

８８４：テグサ
王認勇士はアルブレヒト専用臭いし仮に隠し最上位があるとしても
全員がなれるようなもんじゃないだろ
シャンフロそこらへん頭のネジ外れてるから多分剣聖式に近い事に
なるだろ、前王側一択だわ

８８５：通りすがりの銃槍使い紋邪史
バハムート式最新武装騎士ジョブはまだ見つかってないの？

８８６：イカイルカ
自分で探せ定期

８８７：シャウトエッセン
戦術機でスピアとシールド装備しとけ

８８８：バジル
ていうか騎士ジョブって神代兵器装備しても大丈夫なん？

８８９：ゴッデム
＞＞８８８
黒忌士は問題ないけど聖輝士は神代パワーよりも聖別された武器の
方が役割果たせるからメインで担ぐのはそんなに
そもそも遺機装って外付けの属性付与とクソほど相性悪いから装備
パワーで押し切る武器、レーツェルとかはもう絶望的に向いてない

８９０：ザルドフィン
そもそも新大陸側で騎士系列のジョブが発展するわけないだろ騎士
って主人に仕える奴だぞ、だったら旧大陸メインの新王側の方が隠
しジョブの可能性が高いわ

８９１：通りすがりの銃槍使ぃ紋邪史
サイバーナイトの道は遠ぃ

８９２：ゼラオス
いつまで言い争ってんだこいつら

８９３：シャウトエッセン
正直王国騒乱掲示板に行ってほしい

８９４：庵道都露和
騎士なんだから大人しく最初に転職した時に忠誠誓った街の味方すればいいじゃん

８９５：ナイトメアナイト
その理論だと初期ジョブが騎士のやつって自称騎士やんけ

８９６：タバスコ・ダ・ガマ
騎士の隠しジョブがそんなに欲しいなら例のハイブリッドナイトの検証でもしてろや

８９７：バーモンティ
ベヒーモスの騎士って事になるんじゃね？　やはり時代は割烹着女教師ママか……

８９８：根曲がり竹
ぶっちゃけ上位ジョブで止めるくらいならさっさと聖輝士か黒忌士になった方がよほどマシだよなぁ

８９９：サンラク
発見者から依頼されたので代理投下

隠し職業「追月の竜騎」発見
読みはケトゥラフ・ドラグーンで火が出てる間は同じ読みで「喰陽の竜騎」になって性能も変わる
聖騎士と暗黒騎士両方に就職してる状態から派生する隠しジョブ
時間帯によってＨＰ・ＭＰどっちかのドレインと自他への還元を可能とする時間制万能ヒーラー型前衛ジョブ

９００：イカイルカ
本気で目指すならメインで騎士系統以外のジョブ使いつつ目処がたったら聖騎士暗黒騎士に転職する感じかね

９０１：タバスコ・ダ・ガマ
！！？！？

９０２：根曲がり竹
ちょま

９０３：シャウトエッセン
なんて！？

９０４：バジル
爆弾投下！！！！！

９０５：通りすがりの銃槍使い紋邪史
ツチノコさんやんけ！！！

９０６：ゼラオス
ドラグーン！？

９０７：ザルドフィン

は！！？！？！？

９０８：サンラク
とりあえず投下続行

９０９：庵道都露和
待て待てなんだこのてんこもりぶっ壊れジョブ

９１０：サンラク
固有で「簒奪○蝕（○に月か日が入る）」ってスキルを持ってる、
これは日中か夜間で切り替わるので同時使用は無理
月食は夜間に光を掴む事でＭＰドレイン、マジック・トーチみたい
なプレイヤー由来の魔法とかに使うと発動してるプレイヤーのＭＰ
を奪い取る。奪った光は攻撃転用ｏｒ自分もしくは他人にＭＰ回復
として使える
日食はだいたい月食の逆バージョン、日中に影を掴んでＨＰドレイ
ン。効果は月食のＭＰをＨＰに変えた感じ
就職した時点でメインとサブの聖騎士暗黒騎士のジョブが自動的に
解除されるらしいので注意

９１１：バーモンティ
この人タイピング早いな！？

９１２：ゴッデム
ドラグーンって竜騎兵か、火器持って馬に乗ってる

９１３：イカイルカ
やっぱ

９１４：ザルドフィン

ていうかこれマジなの？　ガセじゃね？

９１５：テグサ
ソースはよ

９１６：通りすがりの銃槍使い紋邪史
火器持ちってことはガンランスとかある！！？！？

９１７：サンラク
ドラグーンって名前の通り転職条件の一つは乗騎となるモンスターのテイムが必須
ドラゴンじゃなくてもいい、これに転職した人はなんかクソでかい馬をテイムしてた
ただこの乗騎が死ぬとジョブが強制解除されるらしい、再就職は可能だけど聖騎士と暗黒騎士取り直し

９１８：サンラク
少なくとも分かってる範囲での転職条件は
・聖騎士、暗黒騎士をメイン・サブジョブにセットしている
・騎乗可能なモンスターと戦ってユニークシナリオ「孤高の乗騎」を発生させる
多分必要なのが
・一定以上の強さ

９１９：シャウトエッセン
はやいはやいそしておおい

９２０：根曲がり竹
やば

９２１：ゼラオス
ツチノコさんそっちよりユニークモンスターの情報くれ

９２２：ザスザスザス
ユニークの独り占めツチノコ勇者様サンラクおるやーーーーーーーーーんｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ
ガセ情報撒き散らしてキモティィィィィィィィィィ！！！！！！
どいつもこいつもバカだから信じてやーーーーんの！！！！！ｗｗｗｗｗｗｗｗ

９２３：サンラク
これ多分新大陸でしか転職できないってわけじゃないだろうけど相当高レベルじゃないと条件達成できないタイプだと思う

９２４：ザルドフィン
だからソースは？　代理とか言ってるけどそもそも誰が就職したの？

９２５：ザスザスザス
ユニーク独り占めツチノコ勇者様サンラクおるやーーーーーーーんｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ
ガセ情報撒き散らしてキモティィィィィィィィ！！！！！！
どいつもこいつもバカだから信じてやーーーーーーーーーんの！！！！！ｗｗｗｗｗｗｗｗ

９２６：サンラク
その人が匿名希望っていうか言ったら皆殺到するから伏せてる
あとその人がこういうレスバ得意じゃないから自分が代理

９２７：ゴッデム

ツチノコさんそのジョブってメインサブにどっちをセットするかでなんか変化でたりする？

928：テグサ
これがマジなら騎士始まったわ、この厨二オーラは剣聖を超えてる

929：ザスザスザス
ユニーク独り占めツチノコ勇者様サンラクチーーーーーーッスｗｗｗｗｗ

ガセ情報撒き散らして楽しいの？？？？？？？？？？？？
ソースは俺の名前で信じてくださいってか！！！！！ｗｗｗｗｗ

930：サンラク
実例一人しかいないから分からない、少なくとも近所に再現できるやついないし自分も騎士ジョブ取ってないし

931：ザルドフィン
ソースがあやふやすぎるわガセですね

932：ザスザスザス
ユニーク独り占めツチノコ勇者様サンラク参上！！！！！！！！！！！

ゴミ共はひれ伏してケツ出せ！！！！！！！！！！！！！！！

933：ダクト・バインデッド
ツチノコ降臨と聞いて

934：根曲がり竹
荒らし消えろ

９３５：庵道都露和
サンラクさん今なにしてんの？

９３６：ゼラオス
メンタルが鋼すぎる

９３７：サンラク
とりあえず死ぬほど鍛えてお気にのモンスターと友情育んで頑張れ

９３８：ザスザスザスザス
ユニーク独り占めツチノコ勇者様サンラク参上うううおうおうおうおうおうぃぇえええええ！！！！！
幸ウン孤高の勇者プレイたのちぃいいいいいいい！！！！ｗｗｗｗｗｗｗｗ

うーんこのゴミクズ

９３９：テグサ
ソースは？

９４０：ダクト・バインデッド
ぶっちゃけツチノコさん王国騒乱どっちに付くの？

９４１：タンクローリーコンクリート
サイナちゃんの画像ください

９４２：餓鬼道走破壊帝王
サンラク決闘しろ、負けたら装備全部寄越せ
ガチンコ勝負だ

９４３：バジル

嵐がきてしまったか……

９４４：バーモンティ
荒らしうぜぇ

９４５：ディープスローター
派手に目立ってるねぇ……

９４６：サンラク
フレに呼ばれたので失礼＾＾

９４７：ゼラオス
誰だよ他掲示板に流したやつ
ゴミが流れてきたじゃん

９４８：ザルドフィン
逃走？

９４９：ザスザスザスザス
涙目逃走ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗボクちゃん負けてないもぉおおおおおおおおおおおおブリブリブリブリブリィィィィィィィィ！！！！！！！！！！！！ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

９５０：ディープスローター
把握した

９５１：サンラク
追伸
どっちにせよライブラリに流してるから再現成功したらそっちで公表されると思う

９５２：テグサ
ライブラリも巻き込んでるならマジかも
ちょっと個人で試す

９５３：ザルドフィン
ひたすら我が道を行って走り去っていった……

９５４：ザスザスザスザス

完 全 敗 北 涙 目 逃 走 不 正 勇 者

９５５：バジル
誰かの代理というだけあって煽り耐性強かったなツチノコさん

９５６：根曲がり竹
マジなら試したいんだけど聖輝士を聖騎士に戻す方法知ってる人いる？

９５７：テグサ

荒らしがひたすら空回りしてたわ

958：通りすがりの銃槍使い紋邪史
もしかして「孤高の乗騎」ってユニーク？

……

…………

……………

…………………

……………………

【異臭悪臭】ペナルティプレイヤー晒し掲示板Ｐａｒｔ．１１２【近寄んな】

21：選択バサミ
やべぇ、歴代最強のスメルを漂わせる奴がいた
プレイヤー名：ザスザスザスザス
［画像］

22：ポリポリポリッス

そいつツチノコ降臨した時に粘着してた荒らしじゃん確か

23：違法シャブシャブ
腐った牛乳雑巾スメルより上ってことはないだろ、数百人通報クラス

24：選択バサミ
いやあれは桁が違う、腸内環境最悪の汗だくデブが腐った豚骨スープ飲んでろくに消化されないまま出てきたみたいな臭い
NPCが状態異常になって逃げるレベルってやばい、あんな状態でよく出歩けるなあいつ

25：ダストシューター
飯食う前にとんでもねぇレビューぶちかますのやめろや通報するぞカス

26：ポリポリポリッス
ペナプレイヤー晒し掲示板の記録を塗り替える猛者がまだ隠れていたとは……

27：違法シャブシャブ
例えがえげつなさすぎる、一体何人に通報されたらそんな臭いになるんだよ

28：ダストシューター
うっげデブ豚骨同じ街にいたのかよタヒねや！！

29：選択バサミ
あ、プレイヤーにPKされた…………いっそBANされた方が幸せなんじゃないのあいつ

３０：灼熱雷霆
シャンフロで垢ＢＡＮされるとフルダイブＶＲシステムだけじゃなくてユートピアネットワークアカウントから作り直しだぞ、しかもＢＡＮされた垢に罰金請求される

３１：ポリポリポリッス
ユートピア社法務部ほんとえげつない

３２：違法シャブシャブ
まぁシャンフロの垢ＢＡＮクラスって訴訟レベルでやらかした奴が殆どらしいし

３３：選択バサミ
掲示板にマジレスする奴が増えたというべきか、もうアングラではない以上責任が発生したというべきか……

３４：灼熱雷霆
デブ豚骨という悪臭源がこの世に生まれ落ちた事だけは悲劇だな、多分宿屋セーブも叩き出されるだろアレ

３５：ダストシューター
ＰＫ判定ついちまったじゃねーかクソが、教会で懺悔したらどうにかならんかな

３６：ポリポリポリッス
多分そこらにいるＮＰＣ連れていった方がいいぞ、正当性を主張するとちょっとの罰金で許されるパターンがあるらしい

３７：ディープスローター
ルールを守って楽しくシャンフロ

一つ良く通る声、千の響く声（後書き）

ディプスロ式通報術

・「ガチンコ」や「うーんこの」みたいな言葉狩り
・徹底的に読み込んだ規約内容をフル活用
・さりげなく信者を起点に鼠算式で「数」を増やす
・ＮＰＣに悪評を広める

今回の犠牲者はザスザスザスザス君と餓鬼道走破壊帝王君

一息つく者達、されど吐息の色は異なって（前書き）

アルバＲＴＡの優勝商品

一息つく者達、されど吐息の色は異なって

「……ふぅ」

七つの大罪に嫉妬が含まれるのも納得の掲示板であった。ぶっちゃけ最初に絡んできた時点で通報してガン無視していたのでそっちはどうでもいいのだが、問題は嫉妬よりも厄介な色欲に塗れた罪人(変態)の方だ。

あいつ、多分わざととかじゃなくて素で全体チャットで個人の呼び出しとかするタイプなんだよな……あのまま残っていたら奴は確実に騎士掲示板で会話しようと試みていただろう。

「あの……サンラク、君」

「あぁ何？　代理で伝える事は全部伝えたし何も問題ないよ」

「いえ、でも……その、酷い言葉を投げかけられていたり、してましたし……」

「レイ氏、一回言い返すより一回通報した方がずっと平和で手っ取り早いんだよ」

殴っていいのは目の前で煽ってくる奴だけだよ、そっちは遠慮なく殴っていい。何故ならそういう事をしてくるアホは言葉で解決しようとすると永遠に決着がつかないから。画面越しなら動物の鳴き声だと思った方がいい。

掲示板への書き込みとは、即ち自分も「鳴き声」を叫んでいるに他ならない……程よく無視して程よく受け止めようねと武田氏も言っ

ていた。

まぁ武田氏沸点低いからすぐレスバトルするけど。

「さて、用事も終わった事だしレイ氏の始源関係の攻略に挑む？」

どうせエムルがいないからファストラも出来ない。手間だがいつかエムルを連れてここに来直せばいいか。となれば黄金のマグマを持ってさっさと帰るよりも折角なら資源関連の謎に迫ってみるのも悪くない。

「ん？」

今気づいた、例の鎧馬の上に名前がついてる。俺が掲示板を弄ってる間にレイ氏が名前をつけたのか。何々……

「緋鹿毛楯無……ひしかげ？」

「緋鹿毛楯無（ひかげたてなし）……です。その、綺麗な緋色の鬣と、よく見たら鎧の隙間に鹿毛（かげ）が見えたので……あの、えと、その、ちょっと気取り過ぎ……でしょうか」

「いや、カッコよくていいと思う」

楯無がどういう意味かは分からないけど。よかったな馬刺しにならなくて……レイ氏が追月の竜騎としてのユニークを発生させてなかったら今頃外殻と鬣と馬肉としてドロップしてたんじゃないのワハハ

「ヴァルルルルッ！」

「ほぐんっ！？」

「サンラク君！？　だ、ダメ！　楯無！！」

「おごごごご！！」

噛むな噛むな噛むな噛むな頭を噛むな！！　テイムモンスターのくせになんで俺に対してこんな攻撃的なんだよ！！　ていうか牙が突き刺さってゴリゴリ体力が…………牙？

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！！」

肉食じゃねぇかこの馬畜生！！！！！

◇

喪失骸将（ジェネラルデュラハン）„綺憶喪失（ロストメモリー）”……。
なれの果ての果て、だったもののどん詰まり。綺麗な記憶ごと己の首を永久に失った首の無い騎士。もうどこにも存在しない首があった場所をどうにか埋め合わせようと、首の付け根から吹き出す黒い炎が嘆く人の顔を作り出す妄執すら消えた怨嗟の塊。
もはや「かつて存在した騎士と騎馬」という形すらもが崩れ去り、ケンタウロスのような人馬一体の姿となった異形の獣騎に対し、攻

める影が五つ。

「おおおおお！！」

右手に盾、左手にも盾。すなわちダブルシールドによる突撃によって〝綺憶喪失〟の突進を受け止める男がいた。これ以上なくタンクという役割を体現するにふさわしいガタイの男は、〝綺憶喪失〟が振るった大剣（これもまた、エクゾーディナリーへの変質と同時に恐ろしく重厚な特大剣へと変貌している）を両の大盾で受け止める。ザリザリと渓谷の大地を削って男が後ろへと押し込まれるものの、〝綺憶喪失〟の特大剣は堅牢な双璧を打ち砕く事が叶わずに弾かれ怯む。

「もやパンそのまま体丸めて！　踏み台にします！！」

「おいＬｉｂｅｒｔｙ(リバティー)マジか！？」

鋭く、しかし高い声音(女性の声)で両手盾の男へと声を飛ばしたのは、ゲームという世界なら大なり小なり美形になりがちな中で恐ろしく平凡な……いわゆるモブ顔をした男だ。

驚愕の声を上げつつも、踏まれる事を覚悟し体を固めた男(もやパン)の背を踏みしめ、儀礼的な装飾が施された剣を左手に構えた男が上空――人馬一体の異形故に頭（に相当する炎）が地面から三メートルほどの高さにある〝綺憶喪失〟と対等な視線を得る場所にまで踏み込む。

「【アドヴィタ・カルケラクア】！！」

神秘の剣だけが振るう事を許されし儀霊剣(リートゥス)が記憶した魔法を世界へ現出させる。

発動と同時にＭＰが秒間１０減り続け、その間敵を水球の牢で拘束

するハイリスクハイリターンな魔法を斬ったのは、すでにこの戦闘が最終盤へと至っているためだ。出し惜しみなく押し切る、かけた手間だけ神秘(レーツェル)の剣はその真価を発揮する。

突如として人としての形をかろうじて保つ上半身を水球によって拘束された〝綺憶喪失〟は生前の反応が残っていたのか、まとわりつく水を振り払わんともがき出す。だがそこへ儀霊剣の一撃が刺突スキルを伴って炸裂、〝綺憶喪失〟は大きく怯まざるを得ない。

「――トドメは俺に任せろ」

「えっ、ＪＵＭＰ(ジャンプ)！？　お前もやるなら先に言……」
「おまっ！？」

と、ここでアクシデントが起きる。
神秘(Liberty)の剣の男に続いて自らも宙に駆け上がらんとした漆黒の鎧を纏った男であったが、ぼそりと呟くようなトドメの宣言をもやパンが聞き取るまでには若干のラグがあった。それ故に踏み台としての体勢を崩していたもやパンの肩に足を乗せた双剣士はぐねり、と嫌な方向に足首を曲げる……その瞬間、跳躍スキルが起動。

「どぉお！？」
「死んだか！？」
「まだだあああああ！！」
盛大な自爆に対して、やたらと格好をつけた叫びをあげた双剣士が空中を踏みしめ姿勢を立て直す。黄金に光り輝く神々しい剣と、対

照的に禍々しい漆黒の剣を振りかぶって己自身を独楽の如く回転させながら〝綺憶喪失〟へと斬りかかる！！

「フッ……跳天流（ちょうてんりゅう）「己転旋風（トルネイド）」……！」

「その自己流派（オリ技）、ダメージ倍率ゴミなんだからこういう時使うのやめません？」

「いやいや……でも、かっこいいだろ？」

「パチモンの聖剣と見掛け倒しの魔剣でカッコつけられても……」

「まだ敵生きてるんですけど……！！」

「「あだっ！」」

双剣士（JUMP）が光と闇を両立した装備（ロールプレイ）で固めているとすれば、こちらは雪を全体的な意匠とした女武者が格好つけたポージングを始めたＪＵＭＰとＬｉｂｅｒｔｙの頭をはたきながら前へと飛び出す。

逆手に構えた小太刀を握りしめ、スキルの光を宿しながら低く突き進んだ先の人馬一体の馬部分、その脚関節を狙って短剣スキル「支脚崩し（プロップスラッシュ）」を叩き込む。

〝綺憶喪失〟の左前脚がかくん、と折れ曲がるものの馬の脚は前後含めて四本、人のそれよりも遥かにバランスに優れる。だがその程度は百も承知、雪の女武者はその手に握る小太刀を反転……すなわち順手で握ると、先程とは異なる光を白銀の刀身に滑らせる。

「隙を作ります、総攻撃を」

「おう！　ＪＵＭＰも置物やってねーでＹｕｋｉ(ユキ)のこと手伝ってこい－！！」

「トドメは任せろー！」

「……悪いが、そこは譲れんな」

雪(Yuki)の女武者が握る小太刀が稲光を纏う。短剣スキルではない、「小太刀」という武器はダメージ倍率が半分になる代わりに短剣スキルだけでなく刀スキルをも扱うことが出来る武器種だ。

故に小太刀から放たれるは刀系スキル「神経断ち(かみへだ)」、対象の手足に当てる事で一時的に麻痺状態にする威力ではなく追加効果こそが本命のスキルだ。

「支脚崩し(プロップスラッシュ)」に左前脚のバランスを崩され、「神経断ち」によって左後脚を麻痺させられた事でさしもの四本足も耐えきれずに〝綺憶喪失〟が転倒する。

好機と距離を詰める四人を抜き去り、これまでずっと後方で「準備」をしていた男が己が獲物を振り上げる。その刃は重く厚く、なにより数分前から蓄積され続けてきた「力」を開放したくて堪らないと叫ぶように大気を震わせる。

「……「衝昇の華撃(エクサクノシオン)」！！」

ズゴン！！！！　と凄まじい音を立てて叩きつけられた刃が倒れた〝綺憶喪失〟の頭炎を断ち切り本体へと落とされる。

拮抗は一瞬、異形の騎士を叩き割りながら胴の奥へと進んでいった重い刃が何かを砕くような感触。それに気づいたのは刃を振った男だけだ。

続け様に他の四人が攻撃を仕掛けるものの、男にだけは分かっていた。今の自分の一撃こそがトドメだったのだと。

「…………！！」

水の中でさえ燃え盛っていた黒炎、苦悶の表情を浮かべた〝綺憶喪失〟の頭炎が萎むように消えていく。それと同時にボロボロと鎧が崩れ落ち……最後には、何かを求めるように伸ばした手も消え去っていく。

『モンスター不世出（エクゾーディナリー）……解明（クリア）！』

『討伐対象：喪失骸将（ジェネラルデュラハン）〝綺憶喪失（ロストメモリー）〟』

『エクゾーディナリーモンスターが撃破されました』

『称号【決して届かぬ手】を獲得しました』

『称号【消エタ想イ】を獲得しました』

『不世出の奥義（エクゾーディナリー・スキル）「綺憶像失（ロストメモリー）」を習得しました』

エクゾーディナリーモンスターを撃破したことを知らせるアナウンスが表示され、武器を叩きつける前に全てが決着していたことを悟ったプレイヤー達は達成感半分、恨み半分といった様子でドロップしたアイテムを拾う男を見つめる。

「乙です～」

「クッソ、かっこいいところ持ってかれた……！！」
「まぁ最初からガルさんの一撃主軸に回してたからな、そりゃトドメ刺す確率も一番高えわ……あーやべっ、そろそろ半日か。一旦落ちていいか？　そろそろキメ直さないと手が震えそうだ」
「出たカフェイン中毒もやパン、私も構わないケド」
「別に構わんよ……俺は次の準備だな」
灰色の毛皮に、雲を思わせる毛皮の腰マントを付けた男は拾ったアイテムをインベントリに入れ終えると、立ち上がりながら自身の予定を告げる。
「次って？　配信？」
「いや、テンバートに向かう。そこで三首凶擬（トライアスロン）撃破を狙う」
「じゃあ三十分くらい休憩でテンバートに集合でよくね？」
「Ｙｕｋｉ、賛成に一票で」
「逆に聞くけど反対なのいるの？」
Ｌｉｂｅｒｔｙの言葉に手をあげる者はいない。彼らはある男のゲームを通した友人であり……その男が普段配信に載せない裏での作業に付き合うプライベートな仲間達である。
「しかし、怒涛のエクゾーディナリー狩りマラソンだな。目星つけ

てるの二体だっけ？」

「三体だ、あともう一体情報がある……そっちは情報提供者と配信でやるつもりだが参加するか？」

その言葉に首を横に振ったのは小太刀の耐久値を確かめていたＹｕｋｉだ。

「私そういうの苦手って前々から言ってますし今も変わりないですねー」

「Ｙｕｋｉ、バリバリの見せ装備なのに変なとこでシャイだよな」

「バリバリの見せ特化構築のＪＵＭＰが行けばいいじゃない」

「新技が完成してないから今はパス」

「新技て」

ガヤガヤと気の置けない会話を繰り広げながら五人のプレイヤーは一度休憩するべく最寄りの街へと向かう。

「しかしここまでガチの準備するとか何想定なんだ？」

「……何想定、か」

カッコよく納刀しようとして失敗したＪＵＭＰの問いに対し、男は……頭上に「ガル之瀬」の名を表示した痩躯の男は僅かに口元を吊り上げながらポツリと呟いた。

「最高レベルのプレイヤー想定、だな」

着々と時間は進んでいく。そして過ぎゆく時間の中で動く者達の準備もまた、着々と整えられていく――

一息つく者達、されど吐息の色は異なって（後書き）

：：映えと恨みだけで動いてるわけじゃない

えー、この度週刊少年マガジンで連載が始まりました。是非とも皆さま、実質十割挿絵と言っても過言ではないコミカライズシャンフロが掲載されたマガジンをお手に取ってみてください

眠れ白闇よ目覚めは近く（前書き）

どうしてもこのサブタイトルが使いたかったんです、などと供述しており……（当たり前だけど造語、よみは「はくあ」です）（人の世をふさぐ白き神）

◇◇◇◇◇◇

知恵とは、如何に知識を活かす事ができるか。
少なくともシャングリラ・フロンティアという世界(ゲーム)ではそう定義されている。

下等な眷族による物量戦、及び本命たる四体の上等眷族と自身による侵攻は阻まれた。であればアプローチの方法を変える。それが知恵なのだと。

地下からの一本道では「哨戒」に見つかる、ならば海路を進んで目的へと至る。この世界の海は下に沈めば沈むほどに強靭なモンスター達が跋扈する魔境であるが、逆に言えば浅瀬のモンスターはそう大したものが存在しないという事。

ゴボゴボと、その信じられないほどの巨体からは想像もできない静かさで海を蛇行して泳ぐは……頭だけでも二階建ての一軒家ほどはあろう巨大な大蛇。蛇としての特徴に合致しつつも、頭より生えたねじれた角はそれが単なる蛇（単なる蛇でもここまで巨大になるはずもないが）ではなく竜ならざれど、あるいは龍ならざれど龍の如き龍蛇(ナーガ)である事を指し示している。

「…………」

龍蛇、あるいはグラトスと名付けられたその個体はたった一体で海原をその巨体で切り裂きながら突き進む。目指すは新大陸南洋、霧と雲と空によって隠匿された致命兎の国。

ではなく。

「…………！」

ざざざ、とその巨体からすれば静か過ぎる潜水によってグラトスが海中へと潜り込む。。体内に大量の酸素を発生させる苔を取り込み水中での呼吸を可能とする力業と、体内の空気による浮力をそれ以上の推進力で無理やり下に押し込む力技の組み合わせによって龍蛇は大地に生きるモノでありながらウミヘビの如く海の中を突き進んでいく。

瞬膜をゴーグル代わりにクリアな視界を手に入れたグラトスが向かう先はラビッツ直下、この世界の完全な地図を知る者だけが近くできる大いなる黒き神の千切れた右翼先端だ。

厳密には……黒い地盤と白い地層の境目、そこを目指して龍蛇が海中を泳ぎ進む。

「…………」

そこで龍蛇（グラトス）は己の中に僅かな驚きが生まれた事を知覚した。当初の予定では物理的にこの白と黒の隙間に「穴」を空けるつもりであったが、視線の先にはどういうわけか都合よく龍蛇一体なら余裕を持って通れるほどの横穴が開いていたのだ。

「……」

明らかに誘われている、グラトスの思考力でもそれは理解できた。
だがそれは大いなる蛇が退く理由にはならない。さらなる推進を以て龍蛇は大穴へと飛び込む………

……

…………

……………

「おう、難儀な道をよぉく来たじゃねぇか」

「…………」

暗く、暗い。
しかしグラトスのピット器官はその中にポツンと佇む小さな姿を知覚した。人？　いいや違う、それは兎だ。

「…………」

目的の場所に到達し、目的の存在と遭遇した。
これにてグラトスは役目の殆どを果たしたと言っていい、龍蛇は確かな己自身の感情、僅かな達成感を目に浮かべながら………己ではない感情を吐き出した。

「よう」

「久しぃわネ……ウサギ」

「おめぇさんに久しぃと言われる謂れはねぇがなぁ」

なんの気なく呟かれた言葉に、グラトスの口の中に潜んでいた祖なる蛇……あるいは無尽のゴルドゥニーネと呼ばれる人の女の形をした蛇が不愉快げに眉を顰めた。

「いるんでショ？　ここニ」

「あぁ、いるともよぅ。ここにな」

人を創りし者を神と呼ぶならば、あるいは神と定義できるかつての人類の一人。情景と羨望と嫉妬を糧に滅びゆく世界に明日への一手を遺した女。

常識に従って考えればまずとっくの昔に死んでいるだろうその人物を、ゴルドゥニーネは「ここにいる」と確信していた。そして目の前のウサギ……ヴァイスアッシュは己を止めるためにここにいるのだろうと。

「長く話すつもりも無イ……退(の)ケ」

空気が張り詰める……否、空気に毒が張り巡らされたかのような威圧感。主人の感情を読み取ったグラトスもまた威嚇するように舌をちらつかせる。

「………」

だがそれを一身に受けて尚、ヴァイスアッシュは揺るがない。四つの蛇眼から放たれる圧を受けてなおかの兎はどこ吹く風の様子でそ

れらを見つめ……そして、自らの意思で道を譲るように横へと退いた。

「……？」

抗い守るのではなく、道を譲るような素振りにゴルドゥニーネの脳裏に予想外の疑問符が生まれる。この兎は「ゴルドゥニーネ」がこの地に降り立ち初めて侵攻を仕掛けた時以来、数千年間ずっとゴルドゥニーネの侵攻を防ぎ続けてきた。故に今この瞬間に道を譲る意図が分からない。

「……なんのつもリ？」

「時が近い」

返ってきた返答はゴルドゥニーネの理解が及ばないもので。だがそれでも続く言葉は蛇をして無視できぬもので。

「おめぇさんも知っていい頃合いってぇことよ。答えをな……」

その言葉を合図とするかのように、暗闇がその暗黒を薄れさせていく。照明ではない、空間そのものが見えやすく改変されたのだ。

「――――」

そして、それ故にゴルドゥニーネは見上げ見てしまった事で正真正銘の「驚愕」にその身を硬直させた。

「何ヨ……コレ」

「真実」

簡潔な言葉、ただそれだけでゴルドゥニーネの感情は爆発した。

喜びと、怒りと、悲しみと、憎悪と……「怯え」の感情はグラトスへ押し付け、そして「楽しい」という感情だけは欠片も生まれない感情の大洪水にゴルドゥニーネはヴァイスアッシュの胸ぐらを掴む。

「こんなものガ！！　こんなものガ……真実だったト！？　私ノ……私達の答えガ、こんナ……！！」

「止めやしねぇぜ？」

悲しみの涙は怒りによって枯れ果て、目を曇らせるような憎悪は「何に怒っているのか」を正確に把握できているが故に理性を失わせるに至らない。

いつしかヴァイスアッシュを締め上げていた手から力は失われ、膝を屈する。

「成る程、ネ……そういうコト。なら私のやる事は決まっているワ」

「…………」

「せいぜイ引き籠もっテ、震えていればいイ……」

◇◇◇◇◇◇

蛇の去ったその場所で、ヴァイスアッシュはそれを見上げながら呟く。

「もう留められねぇなぁ……」

白。

暗闇の空間が僅かに明るくなった事で、その全貌が顕となっていた。
白く、白く、どこまでも白い二足歩行する海亀を思わせる巨体。
見上げる程に巨大な龍蛇(グラトス)がミミズと人間のサイズ比に思えてしまうほどの巨体。
それはもはや、巨大という言葉すら生温く思えてしまう程の巨体。
あるいは山河に匹敵する一存在の姿はもはや歩くだけで国が滅ぶ、誇張のない単純な事実をその純白の威容は言葉なく誇示している。
其は白き神の分け身、あるいは白き神の魂(意識)を宿した端末。
――名を「微睡(まどろ)む白大神(はくたいしん)」という。
かつて神代文明終焉の鉄槌として最後に現れた最強最大の始源眷族であり……眠れる白き神の憎悪を宿したミニサイズ・白き神(アイテール)と呼ぶに相応しい最強のレイドモンスターである。

「……なぁ、ご主人。本当にそれがあんたの「夢」なのかい」

微睡む白き神を見上げ、ヴァイスアッシュは誰にも見せない弱音を吐く。その視線の先には数千メートルの高さにある白大神の頭部、

恐ろしくのっぺりとした頭部の額の部分によくよく目を凝らしても見つけるのが困難な小さな点が見えた。

「それとも悪夢なのかよぅ？　俺等ぁにゃあそれがとんと分かんねぇ……」

だがあるいは、彼女が遺した者達の手であれば。
目覚めを待つ眠れる神を討ち倒し、「眠り続ける神」を起こす者が現れる……かもしれない。

どちらにせよ神は目覚めを待ち望んでいる。それはジュリウス・シャングリラによる世界安定と、ヴァイスアッシュによる封印が気休めにしかならない程に強い衝動だ。

「ガキ共ぁ、暫く外には出せんなぁ」

これを見た、見てしまったゴルドゥニーネ……彼女の願いは「彼女」に会う事だった。だが、真実を知った、これから先に何が起こるのかを悟ってしまった。
今の蛇を動かすものは何なのか、きっとそれは彼女だけが知っている。
だがヴァイスアッシュはおおよその予想はついていた、何故なら彼女は極めて単純な存在だからだ。

「あいつなら、そうはしねぇんだがなぁ」

ヴァイスアッシュの口から煙草の煙が溢れ出る。だが果たして、その煙の中に溜息が一体どれほど含まれていたのか。
遥か頭上、微睡む白大神の頭部。その額の部分に下半身を埋めるようにして取り込まれた「女性」はただ眠り続ける。

あるいは現代を生きる次世代の人類達にとっての「神」は、ただただ……眠り続けていた。

眠れ白闘よ目覚めは近く（後書き）

いろんな情報詰めすぎた感はあるけどここが世界の分岐点、ゴルドゥニーネのシナリオとヴァイスアッシュのシナリオはここから本格的に動き始める

シャングリラ・フロンティア、週刊少年マガジンで連載中！

恐怖が恐怖に乗った恐怖と一緒に走ってくる

◆

人と馬、果たしてどちらが速いのか。そんなものは決まっている、馬だ。
人類最速がどれだけ足を動かしたところで、地上にて「動かねば死ぬ」ような爆烈燃費の四本脚から繰り出される疾走は、たかが二本足のホモ・サピエンスの脚力でどうこうなるものではない。
だが、ここはファンタジー……レイ氏の乗騎となった緋鹿毛楯無(ひかげたてなし)は巨体と速度を両立した怪物巨馬であり……
そして俺は先生を除けば世界最速(世界最速)の人類(プレイヤー)である。
「あのっ、本当に乗らなくて……」
「大丈夫大丈夫！　俺速いから！！」
「ヴァルルルルォン！！」
ハハハハクソ馬がよぉ！　タフネスで勝とうが単純速度でテメーみたいな巨体(デブ)に走り負けるかよぉ！！
何故か俺はこの馬にやたら嫌われている……いや、嫌われているというかコミュニケーション手段が「噛む」か「どつく」しかないというか。
だがその馬力(パワー)は本物だ、いやむしろ真贋で考慮する事が馬鹿馬鹿し

い程に強い。

まず基本的にプレイヤーは喧嘩を売られる側だ。刻傷や呪い(マーキング)みたいな別枠の補正がなければまず遭遇した時点でモンスターのヘイトを買うことにな?。あれ、売ってるのか？　買ってるのか？　まぁいいや。

だがこれがモンスター間の話になると変わってくる。例えばドラクルス・ディノサーベラス〝緋色の傷(スカーレッド)〟。聞いた話じゃエクゾーディナリーですらないレアエネミー扱いらしいあの爆熱環境破壊生物は今や、樹海という環境における頂点捕食者だ。本来のエクゾーディナリーモンスター〝死闘の傷(スカーデッド)〟すら遭遇を避けると聞いている（どこの誰か知らないがこの二体を戦わせようとしたアホ、もといい天才がいたらしい）

つまり、強いモンスターは格下のモンスターに対して呪い(マーキング)と同様の行動を取らせる。

そして緋鹿毛楯無ことアルマアロゴ・ヘタイロンは頂点……とは言わずともそこに片足踏み込んでいる程度には強い。で、さらにその上に隠し最上位職業に就職したレイ氏がライドオンしてるわけで。

「シンボルエンカウント型のボスラッシュ……」

「え？」

「いやなんでもないよ」

つまり、爆走する俺と緋鹿毛楯無（ｏｎレイ氏）という「関わったらやべぇ」連中に対して、大半のモンスターは視界に入っただけでも逃走し始めるのだった。

「ところで目的地は分かってたりするの？」

「はい。鉱人族の方々にもお話を聞いて、それらしい場所を」

その場所、名を「大断傷」と言うらしい。読んで字の如く極北のクレバスの如く地面を切り裂く巨大な亀裂、あるいは巨大な大陸規模の傷。

何故土地に対して「傷」という名がつけられたのか。鉱人族達はこの大陸の真実を知っているのか？　否、もっとシンプルな理由であるが故にその場所は「傷」の名を冠するに至る。

「……それが、ここです」

「見た目は単なる亀裂って感じだが………」

底は見えないが、試しに降りてみるのも………ん？　なんか……見え……あ、なんかデジャブ。具体的に思い出すならこう、巨大ビーム兵器の砲身を覗き込んだ時に奥から迫ってくる光を見てしまった時みたいな………

ニッチなシチュエーションだけど砲身の内部から破壊工作するミッションとかだとそれなりに見かけるよね。って死ぬ死ぬ死ぬ！！

「ちょおわっ！？」

全力でのけぞった直後、亀裂の奥底から溢れ出した白と黒が混ざった光が地上へと溢れ出す。レーザーとかビームに近い性質なのか、亀裂の形そのままに空へと放たれていった光は数秒程すると、薄れるように霧散していった………あー、なるほど？

「今も瘡蓋（かさぶた）になっていない的な」

「大丈夫、ですか？」

アレ俺じゃなくても当たったら消し飛ぶタイプの即死ギミックだろうなぁ……

この大陸の下で寝てる奴らの事を鑑みるに恐らくこれはアイテールがエレボスに刻み込んだ傷、ということになるのだろう。水と油どころか白と黒レベルで混ざらない宿敵から受けたダメージは今なお混ざらぬ光となって噴き出すのだろう。

「十中八九、ここが「白き傷」なんだろうけど……」

「どう、すればいいんでしょうね……」

白き傷に浸せ、という太極の剣からレイ氏に提示されたなんらかのクエスト。具体的に「浸す」とはどうすればいいのか？　吹き上がる傷ビームに突っ込めばいいのか、それとも下まで降りる必要があるのか。降りるとしたら定期的に飛んでくる傷ビームをどうにかしないといけないわけだが……生憎、都合よく光熱系攻撃を無効化する手段は持っていないし、さらに言えばこれちょっとやそっと防いだところで死ぬ気がする。

「いや、違うな……」

これはレイ氏に、というかレイ氏の持つ武器防具を持つ者が挑むことを前提とした課題だ。つまりそもそもの大前提として「太極の剣」と「双理の鎧」が手元にあることが前提……いや、そもそも太極の剣というか神魔の剣って本当に一人しか獲得できないのか？　い

や、規格外戦術機獣がワンオフなことを考えるとこのゲームの運営はそれくらいやらかす気がする……だが、それはそれとしてたった一人で挑む調整にするだろうか。

前々から思っていたのだがこのゲーム、バランス調整が変なところであべこべなのだ。異常なほど世界観に忠実かと思えば、異常なまでにバランス調整に執心している時がある。例を挙げるなら残骸街道のオーバドレス・ゴーレムだな、あのサイズを戦術機無しで攻略する場合は相当苦心するだろうが脳天直撃ギミックという解決法と、そこに至るまでの「そこそこの苦労はあるけど挑むだけの価値はある」ルート構築……

「ならどっちだ？」

「……？」

世界観重視か、攻略重視か。世界観重視だとするとシンプルに双理の鎧を着たプレイヤーを下に叩き落とせば覚醒するとかそんな感じで……いや、流石にそれは……うーん…………

「あの、サンラク君……」

「ん？」

「その、実は……少し、考えがあります」

ほう。
レイ氏が提案した「考え」とは。

恐怖が恐怖に乗った恐怖と一緒に走ってくる（後書き）

どっちの意味でも別名「神の殴り合いの果て」

レイ氏も亀裂の底に行く必要があると考えているらしい。だがネックとなるのは数百メートルある大断傷から不定期に噴出する白と黒の光熱、試しにR．I．P．用の捨て防具（それなりの高ランク装備）を投げ込んだら二秒で蒸発したので人間を投げ込んだら一秒で蒸発するだろう。

しかも何が悪質ってこの傷ビーム、発動タイミングが不定期なのだ。いつ亀裂の底から即死ビームが飛んでくるのか分からない。一応谷底が光ってから地上に届くまでにラグがあるので攻撃の認識と対応自体は可能だが、だからどうするんだというのが俺の思考の行き止まりだった。

「………地下からの光を、【ゼンド・アヴェスター】で迎撃します」

「……マジ？」

「その……お恥ずかしながら、緋鹿毛楯無がサンラク君を噛んだ時に……太極ゲージが丁度、釣り合ったみたいで」

「ヴァルルルンッ」

ああ、テイム扱いだから緋鹿毛楯無の悪行がレイ氏の責任問題になるのか、やるじゃん馬。でも誇れることじゃないぞ馬、分かってるのか馬。

なるほど、最大火力（他者からのバフ強化無し）の多段ヒット攻撃というだけなら勝ち目はないが「太極の剣最大の必殺技」と考える

となんらかの効果を発揮してもおかしくはない。というかフレーバーテキストにそれっぽいことが書いてあったらしい。

「ただ、問題は……その、撃つ位置がですね」

「あー……下だから」

「はい、壁や空中に立つ方法を持っていないので」

要するにレイ氏をどうにかして壁に立たせるのが俺の役目というわけだ。
一番簡単な方法としては性別変更で体重が軽くなったレイ氏をおんぶなり肩車するなりして俺が壁に立てばいい。壁立ちスキルの大抵は重力の方向を壁側に変えるものだ、重要なのは俺が持ち上げられるか否か、というだけなのだ。

とはいえ肩車やおんぶの状態で剣を振る事ができるはずもなく、であれば考えられる手段としては…………

「吊るす、しかないかな」

「えっ」

馬にロープをくくりつけてレイ氏の腰に巻いて命綱とする、シンプルだが両手両足がフリーなまま壁に立たせる手段としては理想的と言って良い。
贅沢を言えば亀甲縛りとかにすればさらに安定感が…………くっ、まだ脳内ディプスロ因子が除去されきっていないのか。同じ学校の女子に「亀甲縛りで吊るしていい？」とか聞けるわけねーだろ！
明日からの高校生活が死ぬわ！！

「サイナ、【キープアウト】は？」

「解答：ルスト様が所有しています」

あーしまったそうだった。
あいつが今ログインしてるしてない以前にルストのインベントリアと同期してないからどちらにせよ規格外シリーズの中でも「テープ」という特異な縄系統の武器が使えない。
あれ、見た目の割に斬撃のみならずあらゆる攻撃に対して結構な耐久を持ってるから戦闘以外でもやたら便利だし、プレイヤーではない征服人形に装備すれば実質ノーリスクで使い放題だったんだが……でもルストに持たせた方が明らかに「火力」が高くなるんだよな……だってあいつロボ系統に関しちゃマジで俺より格上だし。

そんなわけで規格外武装：鋼線型【キープアウト】が無いので代用としてインベントリアに突っ込んだまま存在を忘れていたロープでレイ氏を吊るし、それを緋鹿毛楯無にくくりつけて即席の命綱とする。

「いけそう？」

「多分……大丈夫、です」

大断傷から噴き出す光熱は不定期だが覗き込めば予兆を見抜くのは容易であるし、結構頻繁に噴き出してくる。
普通こんなものがバカバカ発射されてたら目立って仕方ないだろうに……と思ったが、よくよく思い返すとここら辺ってちょうど火山から噴き出す煙で完全に覆われていた辺りだな。別アングルから見たら目立つのだろうか。

するするとレイ氏を崖の淵から下へと吊り下げていく。流石の馬も自分の主人が繋がっている命綱だと分かっているのか、暴れたり振り切ったりはしないようだ。
レイ氏が吊るされてから十分。そろそろ一度引き上げた方がいいのではないだろうか、雑談で誤魔化すのもそろそろ限界ではないかと思い始めた矢先、谷底に光が灯る。

「来た！！」

「――――我が黒の半身を謳う」

や、やべぇ！　そういえば【ゼンド・アヴェスター】って詠唱必須系統か！！　いやこれはまずいぞ、確かめちゃくちゃ長い詠唱だったはず。これは引き上げた方が……。
だが、レイ氏は詠唱を止めなかった。いやむしろ淀みない滑舌をさらに加速させて……！！

「夢見る先は深淵源、傲慢故に孤高たる黒き神。玉座は唯一つ、理もまた唯一つ。即ち我が右の半身は黒の理」
光が膨れていく、白と黒のせめぎ合い。傷と言うならばあれは黒い神を今なお痛めつける白い悪意。

「我が白の半身を謳う。夢見る先は至高天、強欲故に暴君たる白き神。全なる唯一つ、理もまた唯一つ。即ち我が左の半身は白の理」
光が迫り来る、間に合わないか！？　いつでも馬のケツを蹴り飛ばす用意を整えつつ、しかし吊り下げられながらも崖の壁面に立つレ

イ氏が恐れず前を見ているが故に俺もまたその後ろ姿を見つめる。

「我が身の左右、二律背反の双理(フタツコトワリ)はされど唯一つの我が身が担う。我が右方はエレボスの理、我が左方はアイテールの理。双理反転、双つ神と我が身を以て太極を顕す。始源よ顕現あらわれよ、我が身は太極の境界点。遠き現世(うつしょ)に理を示す者」

間に合わ――

「我が身を喰い違え、双理の神話！」

いいや、まだだ！！

「レイ氏！！」

「【ゼンド――】」

光はもはや回避不能なところにまで迫っている。だが白と黒の光熱がレイ氏を飲み込むよりも先に、肉々しい竜騎兵が壁に突き立てた剣に拳を突きつける方が早い！！

「アヴェスター】！！！！」

白と黒の光に対して、同じく白と黒の光が叩きつけられる。

片や神の傷より噴き出した光の奔流、しかして相対するは語り部の放つ神話！！

双方ともに白黒モノクロ、だがマーブル模様の光を食い破るように螺旋模様の光が前は前へと突き進む。あたかも削岩するドリルの如く光を穿ち、光を食い破り、光を巻き込んで突き進む【ゼンド・アヴェスター】。

「……成る程そういう事かぁ！　サイナ！　そこで馬と待機！！」

大地の亀裂から噴き出さんとしていた光が下へと押し込められていく光景と、その先に見えたものが俺の脳裏で答えを導き出す。サイナを緋鹿毛楯無の側に待機させつつ俺は最短で取り出せる傑剣（エスカ＝）への憧焉終刃（ヴァラッハ）で縄を断ち斬る。

「へ………」

「失礼」

「へひぇっ！？」

時間が惜しい、俺の予想が正しければ……レイ氏が行くべきは下だ。断じて上に引き上げることではない。

命綱が切れたことで下に落ちたレイ氏を掬い上げるように抱き上げて壁面を走り出す。

この世界の真実は、いつだって「下」にある！！

神話にて傷を穿つ（後書き）

ヒロインちゃんはめちゃくちゃ早口言葉が得意、普通の長文なら1.5倍速で噛まずに発音できる

サイエンス・ファンタジーに夢を詰め込んで（前書き）

息抜きに本編の別視点書いてたら爆速で書き上がったという……

リヴァイアサン「裏」第三殻層……「戦盤」。
娯楽としての面が強調された表面「戯盤」に対し、血生臭いあるいは鉄臭い雰囲気の漂うこのＶＩＰコンテンツはプレイヤー自身が戦闘を行うコロシアムが最大の目玉と言っていいだろう。
船内で多種多様な怪物を作り出すベヒーモス程ではないにせよ、様々なモンスターの再現体や第四殻層のボスモンスター「ウィズダムガード」に酷似した機械型モンスターなど様々なモンスターと戦い、勝利すれば報酬を勝ち取ることができる。
一応、コロシアム内で闘うプレイヤーとエネミーのどちらが勝利するかを予想するトトカルチョじみた賭博コンテンツも存在するにはするが、未だリヴァイアサンの制覇者が少ない現在においてはいつ来るかも分からない他プレイヤーを待つよりも自分が戦った方が手っ取り早いと言える。

『Ｂａｔｔｌｅ　Ｅｎｄｅｄ．　Ｗｉｎｎｅｒ　‥　ルスト』

そして今、全身に銃器を仕込んだ機械獅子がスクラップに変わり果てたことで勝利者を確定するアナウンスが鳴り響いた。

『――素晴らしい、素晴らしいスコアですよこれは』

「………まだまだ余裕」

『一勝ごとに難易度が上昇するステップアップ・チャレンジで二十連勝もされてしまっては疑うべくもありませんね。ですが申し訳ありませんルスト様、ただいま倒されました「アルゴレオン」が現状

実装されている最高難易度でして……ここから先は未だ設計中なのです』

その銃装機甲獅子（アルゴレオン）とて、つい先ほど実装されたばかりの難度２０のモンスターである。十五分程でスクラップに変換された最新機になんとも言えない視線を向ける鯨の乙女は、それを成した少女の様子を見て「もっと凶悪なのを作るべきでしょうか……」と呟く。
聞こえているのか聞こえていないのか、当の本人（ルスト）はと言えば、これ以上の「稼ぎ」は出来ぬと判断したのか難度２０をクリアした時点でチャレンジを終了、無敗のままに稼ぎきった賞金……莫大量のスコアを受け取る。

「……そう、じゃあ難度２１が実装されたら言って。また一から連勝し直すから」
『うぅーん………戦術機レギュレーションとはいえ驚嘆すべき戦闘力ですね。あるいはウェザエモン・アマツキに匹敵するのでは……？』
「……私は、ウェザエモンと戦ったことはないけど……褒め言葉として受け取っておく。じゃあ「裏（VIP）」第四殻層に転移」
『かしこまりました〜』

……

…………

………………

シャングリラ・フロンティアは狂気的なまでにファンタジーを追求し、狂気的なまでにリアリティを追求し、そして狂気的なまでにＳＦを追求したゲームであるとルストは認識を改めている。その最大の理由こそがこの場所……インベントリアの格納空間と同様の技術で形成されたＶＩＰ向け兵器開発階層……「裏」第四殻層「工廠」を利用し始めたからだ。

「あ、ルスト」

「やぁルストさん、稼ぎは終わったのかい？」

「……ん、楽勝」

『おかしいですね………ソロ向けとはいえ出力的には分隊との拮抗を想定した調整のはずなんですが』

「……一人旅団（ワンマンアーミー）もその気になれば出来るし」

『あはは、ご冗談をルスト様』

冗談じゃないんだなこれが、とコンソールを操作しながら呟くのはモルドだ。ある理由から周回を前提とした金策に追われるルストとは異なり、一回の挑戦で必要な通貨（スコア）を稼ぎきったモルドは二日ほど前からずっとこの「工廠」で作業していたのだ。

「ちなみに難度２０ってどんな感じだった？」

「……フルバーストするライオン」

「僕好みだなそれ……ねぇ「勇魚（イサナ）」、それテイム……あー、戦術機みたいな感じで使えたりしないの？」

『そこそこ燃費を度外視してるので船外ですと１０分活動できるかできないかですよ？』

「あー……そりゃ厳しいね」

この場にいた二人のうちのもう一人、彼らと同じくリヴァイアサンを制覇したプレイヤーであり……彼ら二人とは毛先こそ違うが利用する施設が同じであるが故にこの場にいるヤシロバードは「勇魚」の言葉に苦笑いを浮かべながら肩を竦める。

表立っては口に出せない出自故に継戦力の重要性を心得ているヤシロバードは、たった十分で使い物にならなくなる装備を個人運用するのは少々無理があると全身銃器の獅子を飼いならす夢を諦める。

「そうだルストさん、これ作ったはいいけど生身だとイマイチなんだよね。どう？」

「……悪くない、買う」

「２０万スコア」

「…………」

ルストは無言で稼いだスコアの内から２０万という端金とは言えない額をヤシロバードへと渡し、彼が「設計」したデータを受け取る。

彼らがこの場所でやっている事は、表面の第四殻層における装備の形成をより深化させたもの……文字通りゼロからの設計と製造で

ある。銃器に狂った男であるヤシロバードとロボに狂った女である
ルストは設計図を作っては作り、作っては作り、作り、作り、作り、作り、
作り作り作り…………当然ながら製造の為のスコアが足りずに金策
に走るということをこれまで何度も繰り返していた。
戦術機一機に自身の要望を詰め込んでいるモルドは既に設計図を基
に製造する段階にまでたどり着いているが、モルド以上にこの階層
にのめり込んでいるはずのルストはこれから設計図の完成を目指す
ことになる。

それは、彼女の半ば暴走したロボ欲が妥協という言葉を許さなかっ
たからであり………

「……これで、全部作成可能」

『そうですね、まさかお一人で六機も保有すると言い出すとは思い
もしませんでしたがそれを実現するとは』

情報体として全てが成立した空間の中で、ルストがコンソールを操
作すれば彼女の前に六つのウィンドウが表示される。

・ＲＳ：O伐斬凱青（バツザンガイセイ）
・ＲＳ：O黄粱一粋（コウリョウイッスイ）
・ＲＳ：◇殲顎緋砕（センガクヒサイ）
・ＲＳ：◇玉堰紺攻（ギョクセキコンコウ）
・ＲＳ：Δ牙龍鳳枢（ガリョウホウスウ）

・ＲＳ：Δ黒紫無双（コクシムソウ）

「……ふふっ、ふふふふひひひひひ」

「ルスト……」

「分かるなぁ……目標が手の届く距離までくると笑顔になるよね」

少々情熱（モチベーション）がマグマの如くねばついた高温となっている二人を眺め、モルドはため息をつきながら手元にあるコンソールを操作する。そこには彼が今製造しているものの名が表示されていた。

・安全領域（セーブゾーン）

サイエンス・ファンタジーに夢を詰め込んで（後書き）

なおモルドはこの中で一番のクソ機体を作っている模様

シャンフロというゲームでもしかして俺は地上を走った距離より空や壁を走った距離の方が多いんじゃないかと錯覚する時がある。
実際はそんなことはないんだろうが、そう錯覚する程に俺は落ちながら駆け抜ける事に慣れてしまっていた。

【ゼンド・アヴェスター】が光を捻って喰い破る事で切り拓かれた大断傷の底に至るまでの虚空を、落下速度に更なる加速を入れて突き進む。

人が落ちる速度ってのは想像する以上に速いものだが、視界強化で認識を遅延してタイミングを見計らう。

「舌噛むなよレイ氏！」

「ほぇあ」

壁を床として蹴って加速、そして壁を壁として蹴って減速。垂直駆けの減速は加速する時と比べても難易度が高いものの、重力の方向を変えるスキルや空中スキルが充実した今ならば、リキャストタイムの問題で一度しか使えないにしてもどうにでもなる。

「ようし無事着地ィ！」

「はゃえ」

体力の減少は無い、我ながらレイ氏という荷物を抱えながらもよくノーダメで降りることができたと感心している……が、のんびり

ってわけにもいかなさそうだ。抱え上げたレイ氏を降ろせば、どうやらジェットコースターも真っ青な機動にさしものレイ氏も生まれたての小鹿のように足をプルプルさせている。

「……ちょっと手荒だったけど、やっぱキツかった？」

「まっ…………待っ…………あぅ、えぅ、いぅ…………」

ぴた、とレイ氏の動きが止まる。

「フッ……なんら、問題はない……ですね」

「京極のモノマネ？」

「ふひゅふっ………だい、大丈夫です。落ち着きました」

何故か気障ったらしいどっかの誰かさんが調子乗ってる時に似た素振りで平静を取り戻したレイ氏を疑問まじりの視線で見つめつつも、到着した傷の奥底を見渡す。

大断傷とはいっても結局のところは小さめの渓谷のようなもの、深さはヤバいが広さそのものはそう大したものではない。目測で……100メートルくらいか？

「で、これが「傷」か」

地底に着地する時点で見えていたが、見えていたからこそ明らかにヤバげなそれに触れないように多少無理をしてでも着地地点を調整する必要があった。

不定期に噴き出す光熱をレイ氏の【ゼンド・アヴェスター】によって鎮められたことで、俺達は大断傷の深層に刻まれたそれを目視す

ることができた。

「マグマ……？」

「熱は感じないが、触れたらやばいってことには変わりなさそうだ」

傷、つまりこの地はそれをつけられた側であり、当然傷をつけた側がいる。それこそが旧大陸そのもの……始源獣アイテールなる大陸級超巨大モンスターによるものだ。
そして黒き神に対する白き神の一撃はそのまま白い傷となってこの地に深く食い込んでいる……大断傷の形そのままに伸びたマグマか泥のような物質。

「半分液体みたいなもんだし、「浸す」って条件は満たせそうだな」

「そう、ですね……ですが、もしかしたら戦闘になるかもしれない……です」

「マジで？」

……成る程、最初にレイ氏がこの剣に関わった時に戦闘になった。であれば今回も同様の戦闘が発生してもおかしくはない、との事。

「……多分、戦闘はなさそうだけどな」

「どうして、ですか？」

「エリアが狭すぎるし長すぎる」

断言ってわけじゃあないが縦幅１００メートルに対して横幅１０メ

ートルあるかないかという戦闘エリアとしては少々細すぎる地形……さらに言えば白い傷という毒床を思わせるものが地面の大半であるこの場所。戦闘エリアとしては動きづらすぎる。
ありえるとすれば敵とプレイヤーが端と端からスタートして射撃しながら近づく、とかだろうか。

思い出した時にちょくちょく目測したりしていたが、基本的にこのゲームでは最低でも縦横20メートルは確保されたエリアで戦闘が発生する。だからこういうステージで斬った張ったの戦闘になるとは考えづらい。
ま、魔力運用ユニット探しに行った時に遭遇したゴーレムなんかは思いっきり狭い通路での戦闘だったから出るなら出るで別にルール無視ってわけでもないか。

「俺が一応警戒しておくからレイ氏は……」

「分かりました、やってみます」

静かに歩き出したレイ氏、双理の鎧に包まれた脚が白い傷へと一歩踏み込む。今のところ変化はない、とはいえ俺が触れたら明らかにやばいブツなのでやはり無謀に踏み込むような事はしない……ちょっとだけ、爪先だけ……

バヅンッ！！！

「あいったぁ！？」

「サンラク君！？」

なんだ！？　物凄い勢いで体力減ったぞ今！！　あ、いや違うぞ今

の静電気みたいな感覚は覚えがある、刻傷が何かを弾いた時のアレだ……やっぱり触れたらアウト系じゃねーか爪先ワンタッチで体力五割！？

「いや、逆位置効果……まさか本来は触れただけで十割ダメージ……？」

そ、即死ギミックすぎる……普段だったら二十割ダメージかよこれ。泳ぐモーションが無いキャラを操作するゲームで崖から落ちた時くらいの緊張感を要求してやがる。

「やっぱ装備がないと触れない奴だね」

「……行きます」

薄暗い亀裂の底でテクスチャガン無視の純白の傷、その中心付近に到達したレイ氏は既に太腿の辺りまで「白」の中に沈んでいる。
しかしながら肩に乗せて担いでいた太極の剣をゆっくりと突き立てていけば、明らかに女性アバターレイ氏とほぼ同じ程の大きさはある白と黒の絡み合った剣がずぶずぶと沈んでいく……と、レイ氏の前に何やらウィンドウが表示される。

「どう？！」

「――――神話を語る者。神話を背負い、纏う者」

え、何？　いきなりポエム？

「――――見上げた空に二つ神。破滅の兆しを歌い、神話の断章を翳し、されど真実に遠きもの」

どうやら詠唱する必要があるのか、恐らく既存のものではない詠唱文をウィンドウというカンペを読みながらレイ氏が唱えていく。

「――真実を綴れ、解答を示せ。我、無地の碑剣を掲げし者。我、器に満たされし無色の血」

まるで泉か沼のようにレイ氏が足を沈める「傷」が渦を巻く。浴槽の栓を抜いた感じにも見える渦は、しかし下に抜けるのではなくレイ氏を中心として鎧と剣に吸い込まれているように見える。

「――交差する運命、分岐する運命。我が身、我が行末は始まりの風を背に受け、選択の先陣に立つ」

レイ氏へと集まっていく白が鎧の表面をへばりつくように覆っていく。それはあたかも肉の鎧と形容できる双理の鎧に皮膚が貼られていくようでもあり……言っちゃ悪いがスプラッター系のグロテスクな見た目をしていたレイ氏の姿が無機質な鎧姿に変わっていく。

だが、その色は白でもなく黒でもなく灰色。どっちつかずのくすんだ灰色の殻となった鎧姿のレイ氏がゆっくりと傷に沈めた剣を引き抜く。

「――未だ誓わず、未だ契らず、未だ能わず。されど告げる。我が身は徒(ともがら)となりて、始まりの源を継ぐ」

引き抜かれたそれは、既に「太極の剣」とは全く別のものへと変わっていた。

まるでそう、何も書かれていない石碑にグリップをつけて剣として扱っているかのような……

「お、終わりました……」

「あー……それ見えてるの？」

「あの、はい。クリアな視界です」

ざばざばと液体とも個体ともつかぬそれをかき分け、触れるだけで十割ダメージが発生する白い傷から何事もなく出てきたレイ氏。

俺の素朴な詰問に対して、彼女の顔の四分の三を覆うつるんとした無地（のっぺらぼう）の仮面から僅かに露出した右頬が苦笑のひきつりを見せた。

無地の紙に無色のインクで名を刻む（後書き）

太極(パラドクス)の剣「えっ」

双理の鎧「もう出番終わりですか？」

分岐(アポリアス)の剣「残念ながら……」

双銘の鎧「最終形態ではない以上定めと受け入れてもらうしか」

夜に駆けて、朝でも駆けて（前書き）

恐ろしく難産だった………書いてる本人がこいつのキャラを掴み切れていないという稀有な例

徹夜騎士カリントウはその気になれば十時間以上の連続ログインを可能とするタフネスの持ち主である。

そして、徹夜騎士カリントウはその気になれば二十時間に及ぶ連続ログインを可能とするタフネスの持ち主である。

尤も、フルダイブVRシステム側の安全機構（セーフティ）によって連続ログイン時間には上限がある上に、あまり長時間フルダイブしていると「鬱陶しい」と感じる程度にログアウトを推奨するウィンドウが出現し始めるのでやらないだけだ。

「じゃ、じゃあ落ちます……」

「はい、ご協力感謝ですロンバットさん」

「この人ピンピンしてる……乙でーす」

それ故に配信者連合と通称されるプレイヤー達の中で、彼女こそが最も多くの時間をシャングリラ・フロンティアに注ぎ込んでいる人物であった。
「リアルは大丈夫なのか」とは聞いていけない、というのはリスナーにとっては暗黙の了解だ。元カレ関連の慰謝料とかは関係ないのだ。

長時間の素材集めに付き合っていたプレイヤーたちの、最後の一人がログアウトしたのを見送りながらカリントウはさてどうしたもの

かと思案する。
そろそろ自分も一度ログアウトするべきかと思うカリントウがいるならば、いやまだ欲しい素材があるし二時間くらい……と思うカリントウもいる。
これが配信であればリスナー側が自身の生活に戻るタイミングで切り上げることもできるが、幸か不幸か今のカリントウは配信ではなくプライベートな「稼ぎ（マラソン）」の最中だった。

「新大陸～……行けたらよかったんだけど」

新大陸は現在、前王派の拠点と言っていい状況だ。プレイヤーからすれば亜人種を差別する理由もなく、人気ＮＰＣである「聖女」が前王派であるために新王派が大手を振って活動するのは少々難しい。
それ以前の問題として物理的に日数がかかり過ぎるので無理、という世知辛い理由もあるのだが。

「ベヒーモスが解放されたのは幸運だね、ツチノコさんに感謝感謝」

リヴァイアサンは物理的距離の問題故に利用不可、しかしファステイアにたどり着きさえすれば入場可能なベヒーモスは旧大陸の設備しか使用できないカリントウにとって非常にありがたいものだ。
王国騒乱シナリオにおいてはサードレマ以前とニーネスヒル以降は両陣営に所属こそしているものの、実質的には無所属に近い。少なくとも両本陣のある街に忍び込むよりはベヒーモスに行く方が容易だ。

カリントウと所属を同じとするＦＰＳスキー達は神代武装の充実という点からリヴァイアサンを利用できないことを残念がっていた。
だがどちらかというとファンタジーな装備で戦いたいな、と考えているカリントウからすれば極論ベヒーモスという施設に求めている

のはレベルキャップの解放だけである。

「うーん……とりあえず装備の耐久回復して…………」

と、その時だった。

「死ねェ！！」

「！？」

響く声、迫る影、反射的に振り返ったカリントウの横腹に突き刺さる………銃弾。

カリントウのＨＰが減り、ノックバックによって小柄な女性アバター(カリントウ)の身体が地面へと倒れ伏す。

「やったぜ！」

「ナイッショ！」

「囲め囲め！　ドロップアイテムは山分けだからな！！」

「実況者ならたんまり抱えてるぜ！」

（あー、もしかしてどこかから狙われてたかな？）

銃、という武器から大ダメージを想像していたカリントウであったが、どうやら見た目の割に威力が低いらしく二割も減っていないＨＰを倒れながら確認。わいわいと騒ぐ声に耳をすませながらカリントウは手早く状況を整理する。

プレイヤーネームが赤い、つまり既に誰かしらを殺害(キル)しているプレ

イヤーキラー。それもカリントウが「徹夜騎士カリントウ」であることを知って襲撃を仕掛けた計画犯。実のところを言えば周回(マラソン)を終えたばかりのカリントウのインベントリには壊れかけの装備と大量のアイテムしか入っていないのだが……

（うーん……プレイヤーキラーはキルしても問題ないらしいけど、装備が保つかな？）

既に数時間以上は打ち打たれを繰り返し続けてきた装備はいつ砕けてもおかしくはない。本気装備ではないものの、長時間周回のために様々な伝手に協力してもらって作ったアムルシディアン・クォーツの装備は失うにはあまりに惜しい。

「さて……私もアイテムを落としたくないから抵抗しますからね？」

「ハッ！　この数に勝てるかよ！！」

「配信してもいいぜ！　負け動画になるだろうけどな！！」

「ヒャッハー！」

人数は三人。内一人は恥じらいを捨てたロールプレイヤーといった様子だが、残り二人は真性(ガチ)の気配を漂わせている。実際、この三人は元阿修羅会の悪役ロールプレイヤーと、彼に唆された二人が手を組んだことで実行された犯行だ。
恐らく妙に対プレイヤーに慣れた動きをする一人が主犯なのだろう、どこか浮ついた二人と比較しても明らかにカリントウの動きに対する警戒が堂に入っている。

（でも銃持ちのプレイヤーはこの人なんですね…………あ、もしかして悪役ロールってプロレス寄りなのかな？）

本気で奇襲するのではなく、襲われる側にもチャンス……というより見せ場を与えるヒールレスラータイプの悪役、と言ったところだろうか。プレイヤーキラーな時点で迷惑でしかないのだが、そのお陰で反撃できるのだからカリントウとしてはありがたい配慮だ。

「さて…………」

槍使いが二人に銃使いが一人。少なくとも本当に銃だけで戦うわけではないだろうが、少なくとも他の武器を出す気配はない上に下手をすれば追い詰められるまでは銃以外使わない可能性すらある。
カリントウは一時的に銃使いの優先度を下げ、二人の槍使いを視界に入れながら武器を取り出す。

「えっ……」

「ハンマー……？」

「アーカイブとか見てもらえば分かるかもしれませんけど、私って打撃好きなんですよ？」

両腕で握り締めた両手持ち大型金槌（スレッジハンマー）は通常のものと比べてもさらに巨大で重厚なものだ。どちらかというと餅つきの杵に近いサイズの金槌は重厚な漆黒の表面を朝日でより輝かせる。

「な、なんか威圧感が……」

「やばくね？」

その黒鎚は勇者武器ではなく、英傑武器でもなく、そしてユニーク武器でもない。それはプレイヤーの手で作成されたものだが武器として完成した時点で最初から名前が設定されているプリセットタイプのハンマーでしかない。

だがその黒鎚が経験してきた戦いの時間は長く、濃い。言ってしまえば量産品でしかないスレッジハンマーは、しかし英傑が用いた武器に劣らぬ威圧感を放っていた。

「恐れることはねぇぜ！　モンスターの突進より痛いことはねぇだろうがよ！！」

ボロボロのスレッジハンマーに気圧されていた槍使いの二人だったが、銃使いに発破をかけられたことで気を取り直して――

「えいっ」

「は？　おぼぁっ！？」

「投げたァ！？」

そのうちの一人が、カリントウがフルスイングで投擲した件の黒鎚を顔面で受け止めて吹き飛んだ。

「うーん……耐久値が大体ゼロに近いし一撃一撃を重くしてくから、頑張ってね？」

間髪入れずにカリントウがインベントリから取り出すは、投擲した黒鎚と同名にして同等の威圧感を放つスレッジハンマー「勇黒の剛撃鎚（ドルゲ＝イン・ザ・ブラック）」の二本目。六時間以上ひたすらに周回したことで耐久値が無

くなりかけている十二本のスレッジハンマーをぶん投げ、時に握って振り回す。

「……っべぇな、こりゃあ。余裕ぶっこいてられる感じじゃねぇな」

銃使いの男が己が真の獲物である大鉈を取り出す先で、カリントウは微笑を浮かべながらプレイヤーの脳天に黒鎚を振り下ろしていた。

徹夜騎士カリントウはその気になれば十時間以上の連続ログインを可能とするタフネスの持ち主である。

そして、徹夜騎士カリントウは本人性能（タフネス）を最も活かすことができる物量と質量による猛撃を得意とする打突特化（ストライカー）のパワープレイヤーである。

・勇黒の剛撃鎚（ドルゲ＝イン・ザ・ブラック）
武器の性質としては特殊な能力を持たずひたすらに耐久値が高く、なおかつ耐久値が減りづらいという銕刀（てっとう）【廻渦白波（うねりしらなみ）】と似たタイプ。周回中に壊れた分を含めるとカリントウは２０本近いスレッジハンマーを担いで周回していた（戦ってる間にインベントリ内の武器やアイテムが消費されるのでそこにドロップアイテムを詰め込んでいた）
どこからそんな量のアムルシディアン・クォーツを手に入れたかというとプレイヤーを１００人くらい集めて「死んでも恨みっこなし」で水晶巣崖に一斉に突撃するという超パワープレイを三日間繰り返し続けた（総睡眠時間：４時間）

なので水晶群蠍を倒せこそしていないが（全員バラバラに走っているため）、外殻などのドロップアイテムはやたら持っているサンラクの次に蠍長者になりつつある女。そして無限インベントリを持たせるとヤバいタイプの女

◇

東の大陸に法（のり）を敷くエインヴルス。二人の王が今、ただ一つの玉座を巡って対峙する。

だがそんなものはたかが人間同士のいざこざでしかない。始源の眷（みうち）共は蠢き、進む世界は人知れず脅威を産み落とす。そんな中で、誰が王になるかなど……実にくだらない事ではなかろうか。

「……で？　ここニ何がアルって言うのカシら？」

「お嬢様、どれだけ僕等が力をつけたとしても二人と一体しかいない事に変わりはありません。やっぱり「戦力」を増やすべきです」

「いつ裏切ルとも分からナイ人間を？　わざワザ増やスと？」

「だから裏切らない人間を味方につけるんです」

ここは新大陸前線拠点、新大陸に挑むプレイヤー達の本拠地である。

そんな人混みの中を歩く二人の人物……一人はダメージデザインだとしても随分とみすぼらしい襤褸（ボロ）のシャツとズボンを着たアクションゲームのキャラとは思えない格好の青年。

そしてもう一人、「そういうデザインなんです」とギリギリ言い張れる程度にはファッションとしての最低限のデザインを残したフード付きのマントで頭を殆ど覆い隠した人物。

時折フードの端から恐ろしく白い髪が歩みに合わせてこぼれ揺れる顔……厳密には髪と目を隠す女は、不機嫌と呼ぶには少々トゲのありすぎる赤い眼差しで周囲を睨め付けていた。
もし彼女と視線を交わす事があれば、さながら捕食者にターゲッティングされたカエルの気分を味わえるだろう。

「裏切らナイ？　随分と都合ノいい人間がいタものネ」

「彼らは……その、少々特殊な感じに賑やかな人達なんですけど、だからこそお嬢様であれば恐らく敵対する事はないかと」

「回りくドい」

「ぬっっっ！！　……くぉっ」

ぐりぃ！　と女が履く木のハイヒールが男の足の甲を捻りをつけて踏みつける。如何に国家の法に基づいたダメージフィードバックとはいえ、人体強度的に弱い箇所にいきなり電流が流れれば呻きの一つは漏れる。
しかし足の甲を捻り踏まれたにも関わらず、どこか嬉しそうに一割ほど減ったＨＰを回復する男は「シユー」の名を頭上に表示しながら目的地……とあるプレイヤー達が拠点としている場所を目指しながら端的に説明する。

「美少女に興奮する人達なんです」

「…………」

だからこそ、仲間ではなく傭兵として信用できる。お嬢様……もと

い、ゴルドゥニーネの見た目はアルビノの美少女だ。それもプレイヤーメイキングでは再現できない非生物的な……言うなれば魔性の雰囲気を漂わせている。
彼女を守って欲しい、という頼みであれば聞いてくれるのではないか。賞金狩人に熱中する彼らであればあるいは。
そう考えて、シユーは「お嬢様」と呼ぶゴルドゥニーネを連れてきたのだ。彼女が従える双頭の大蛇はここにはいない。姿を消せるならともかく、あの巨体を引き連れていてはカモフラージュも何もあったものではない。
「その、無礼は承知なのですが……どうか彼らに対して、こう……先に危害を加えないよう……」
「私ヲ何だト思っテイるのカしらね？　ん？」
つつ、と白く細い指がシユーの顎を撫で、先端の鋭い爪が皮膚を割いてシユーにスリップダメージを与える。
「まァ、イイわ。使い物ニならナケれば潰シテしまエばいいダケのコト……」
先に入ろうとするシユーを制し、女……ユニークモンスターが一つ、無尽のゴルドゥニーネ「お嬢」はとある喫茶店の扉を勢いよく開く。
そして中に一歩踏み込んで――
「聞きなサ……」
「――」

ずるり、と何もない空間から上半身を顕（あらわ）にした自分じゃない自分（ゴルドゥニーネ）と目が合った。

◇◇

「乗り込むわ！　だぜ！」

「馬鹿ナノ？」

「馬鹿っていう方が馬鹿なのよ！　ジョーシキなんだから！」

ところ変わって喫茶店の「蛇の林檎」新大陸支店前。そこには堂々たる仁王立ちで喫茶店の扉を見据える男がいた。

美男美女、老若男女を問わず様々なアバターを作る事が可能なシャングリラ・フロンティアにおいても一際目立つ筋骨隆々の大男は、その筋肉を誇示するかのように胸を張りながら一歩踏み出し……すぐ背後にいた小さな白髪の少女の飛び蹴りによって歩みをキャンセルされる。

「おバカ！　なんたッテそウ、無計画に突っ込ムの！」

「知らないの？　マッチョは迷わない！」

「血迷ってルでショうが！！」

そもそもの発端は「何か美味しいものを食べに行こう！」と男が引

きこもりがちな少女を引っ張り出した事に端を発する。
そもそも少女が引き篭もっていた理由は自己の安全という非常に切実な理由であったのだが、「ハリウッドスターであるオーガスタ・オルティスのようなマッチョである自分ならばどんな危険にも対処できる！」というロールプレイですらない主義（スタンス）で押し切られた上で引き摺り出されたのだ。

そして押し切り引き摺り出した側であるスキンヘッドの大男……「王我星（オーガスタ）」と無尽のゴルドゥニーネが一人「ニーネ」が歩いていた時、喫茶店へと入っていくフードの女を見かけ……ニーネが気づいたのである。

――あれは、自分ではない自分なのだと。

そして迷う事なくこの場を立ち去ろうとしたニーネの腕を掴んで引き留めた王我星は、退避ではなく突撃を提案したのだった……回想終わり。

「あのネェ……乗り込ンでドウするの？　奇襲しテ仕留メようッテ？」
「違うわよ！　あのね、オー様が「ランペイジ・タクティクス」で言った言葉があるの……」
「ダからオーサマって誰なノヨ……」
「いい、ニーネちゃん……「筋肉は、ナイスに使えば１００万倍！！」
「………？　………？？」

言葉を理解しようとして理解できず、もう一度理解しようとしてさらに混乱したニーネを余所に王我星は見た目とは真逆と言っていい甲高い声でハリウッドスター譲りの持論を熱弁する。

「すぐに殴るなんて良くないことよ、まずは話し合ってそれでもダメだったらパンチするの！」

その映画内での意味合いとしては「賢く力を使え」という意味なのだが、「まず段階を踏んだ後に殴れ」と曲解した小学五年生（プレイヤー）はニーネの腕を掴みながらズンズンと喫茶店の扉へと近づいていく。

「ちょっ……バカっ！　バカ！　考エ直し……あァモウ！　オピオン、準備シテおキナさい！」

ハリウッドスターとはまた別に憧れる人物と同じ脳筋ステータスを誇る王我星の力に対抗できないニーネは掴まれていない左腕の小さな膨らみへと呼びかけ、話しかける。

王我星イチオシの服、その袖から頭を覗かせた小さな蛇がちろりと舌を出したと同時……

「さぁ！　お前達の悪夢が来たぜ！　ウィスキーをロックで貰おうか！！」

拳銃を構えながらドアを蹴破って突入するという、どう考えても初手宣戦布告な映画の台詞と共に王我星が喫茶店「蛇の林檎」へとニーネごと飛び込んでいく────！！

「…………」

「…………」

そしてニーネは見た。

喫茶店の屋内をたった一匹で占領してしまわんばかりの白い大蛇が、警戒の眼差しでこちらを見据えたのを。

一呼吸ごとにまるで最初からそこに何もなかったかのように姿を消してはまた現れる、恐ろしいまでに力を注ぎ込まれた大蛇を従える自分(一桁ナンバー)ではない自分を。

「ギャあああーーーーっ！！」

万が一のチャンスがあれば、と僅かに燃え上がっていた闘志は一瞬で掻き消えた。

◆

で、一連の流れをサラダを食いながら見ていたのが俺である。

「……なんだこれ」

夜明けも近いのでレイ氏やイムロン、火酒夏とのパーティを解散して前線拠点に「無装備状態でマグマにダイブしたら何メートル泳げるのか」の実験をしつつ死に戻り、ちょっと頭が冴えてたのでサバ

イバアルと駄弁る為に「蛇の林檎」に来ていたのだが……

（助けて……助けて……っ！）

一発芸「なにもないところ（サミーちゃんの口の中）からあらわれるわたし」をしていた最中、恐らくゴルドゥニーネ姉妹と思われる珍客達の登場にドヤ顔のままフリーズしていたウィンプの方から怪電波が飛んできた気がするが……きっと気のせいだろう。

マスター、この獲れたて新鮮エラスティカーリスのサラダもう一個貰える？

林檎に集う蛇（後書き）

なお「お嬢」や「ニーネ」から見ると人里で待ち構えていた不気味なほど力量が読めない一桁ナンバーが恐ろしく凶悪な気配を自在に出し消しできる大蛇と共に待ち構えていた」構図となっております

アルコール抜きカルーアミルク

とりあえず状況を纏めよう。

えー、まず渾身のサムズアップでこっちに酒の入ったグラスを滑らせてきたサバイバアルにグラスをリリース。

「おいウィンプ、忘年会をやるなら先に言えよ」

「しらないわよ！！」

「よし分かった、そこで踏ん反り返ってろ」

おお、流石はサミーちゃんさん。自身が威嚇することでウィンプから注意を逸らしている、あの職人芸が如きアシスト性能は俺も見習うべきか……さてと。

「そこのマッチョ、注文は座ってから言いな」

「え？あ、あぅ、えっと……はい。ウィスキーをロックで……」

「申し訳ありません、ウィスキーは品切れでして……カルーアアルーガルゴートミルクのリカー抜きは如何でしょうか？」

「えっ、あ、あの、はいっ、それで！」

アルーガルゴート、は多分モンスター名なのでそれを取り除くとカルーアミルク、でそこからリカー（酒精）抜きなので要するにコーヒー牛乳では？

明らかに中身がこの場にいる誰よりも若そうなマッチョ大男……おうわれぼし？　ちゃんさんが根暗そうなゴルドゥニーネと共にカウンターに座った事でとりあえず一人目のゴルドゥニーネを鎮圧完了。

「カルーア……カルーア……なんか、特別な飲み物って感じがするわ……！」

コーヒー牛乳だよお嬢(マッチョマン)ちゃん。

あとウィスキーをボトルごとこちらに滑らせてきたプレイヤーがサバイバアル達にそっと店舗裏に連れて行かれていた。恐らく実在性に昂る方のロリなコンの人なのだろう……あ、打撃音。

「う……うぅ……」

「……ふぅん」

ウィンプやサミーちゃんさんを見てビクビクしている根暗ニーネは本質的にウィンプと同じクソ雑魚タイプのように見えるが、ウィンプは泣き喚くがこいつはウチのヘタレとはどうにも毛先が違うように見える。

こっちはなんと言うか、ストレスに耐えきれず吐きそうな感じがする……外的刺激じゃなくて自身の精神的な負荷で削れるタイプ。分かりやすく言うなら「びっくりさせられるからホラーゲーが嫌い」なタイプと「暗闇に一歩踏み込むだけで拒否反応が出るからホラーゲーが嫌い」なタイプの違いだな、前者は口で言う割に普通にホラーゲーが出来るが後者はガチでショック死しかねない奴だ。

こういうのはとりあえず放置、向こうから動くようにしないと拗れる。暴走系キャラだとよくある、話しかけると暴走するやつな。

いつだったか鉛筆が「トイレ限界まで我慢してる時に誰かから話しかけられるとヤバいけど自分から話しかける場合は耐えられるタイミングだからイケる、みたいだよねぇ」とよく分からんが何故か分かる例えをしていたっけ。お前暴走させる側じゃん、って言ったら自爆させられたけど。

さて問題はこっち、バリバリ臨戦態勢なペアだ。無人島で二ヶ月くらい生き延びました！　みたいなボロ装備の優男と、なんか自虐的（気の強そう）な目をしたゴルドゥニーネ……こいつらはもうダメだ、トイレが限界だ。いやトイレは関係ない、ちょっとつつくだけで戦闘開始になりかねない。

「……ふっ」

だが俺を誰だと思っている？　百戦錬磨のクソゲーマー様だぜ、戦闘突入かと思ったらイベントシーン突入なんてシチュエーションはハイランダーでデッキが組めるくらい体験済みだぜ。

「マスター、そこのマッチョメンと同じものを俺にも」

「かしこまりました」

「おいおい、ここは食事処だぜ？　殺気と武器は懐にしまっておくもんだ」

決まった……

「待っ、せめてこの場にいさせてくれっ！」

「煩ぇ（うるせ）！　現世にしがみつくなロリ魂（コン）！　冥界に帰れ！」

「アンタに言われたかねぇよサバさん！」

「おい塩持ってこい塩！」

「サバさん！　あったよ岩塩！」

「おっしゃ死ねやオラァ！」

台無しだよ馬鹿野郎。
性癖蛮族共による身内の粛清でにわかに血生臭い感じに騒がしくなった喫茶店内、これで「平和」を名乗るのはちょっと無理があるので世界観側の存在であるゴルドゥニーネ（ウィンプよりしっかりしてそう）ではなくリアル側のプレイヤー……「シュー」氏へと矛先を切り替える。

「あー、バカ共は気にしないでいい。本質的に男子高なだけだから」

「……そう、ですか」

あれ？　なんかこう、もう少しフレンドリーな感じで進むと思ったんだがこっちもこっちで臨戦態勢だな？　世界観重視のロールプレイヤーか？

「俺は……まぁ頭の上を見れば分かるだろうけどサンラクだ」

「あぁ……すいません。僕はＵＩを非表示にしているので……」

「何？」

ＵＩを非表示にしている？　それはつまりプレイヤーの名前が見えないだけではなく自身のＨＰやＭＰ、果てはスタミナまで非表示になるということだ。

縛りプレイや趣味としてそれをやる奴はいるだろうが、このシューという男はそういった手合いとは違う雰囲気を感じる。これは……ナチュラルにやってるタイプだ。

「へぇ……聞いたかサバイバアル、ＵＩ縛りでお前戦える？」

「孤島と似たようなもんだろ……って言いたいところだが、新大陸でそれが出来るなら大したもんだ。あとこれ……」

「だから自然な流れで賄賂を渡すな」

このゲーム、ＵＩを非表示にしてもウィンドウが開けないってわけでもないので実はそこまで困らないが、それはそれとしてあった方が便利なのは事実だ。

必死こいて樹海を抜けてもそこそこ地獄絵図な新大陸でそれを貫き通しているなら、サバイバアルの言った通り大したものだ。

と、シュー氏が俺をじっと見つめながら口を開く。やはりその眼差しはゲーマーとしての色よりもロールプレイヤーとしての色が濃い。

「……君は、」

「ん？」

「君は……彼女と、契約しているのか？」

契約？　契約…………ん？

「おいウィンプ、契約って何？」

「あんたにかみついたのにはじかれたやつよ」

ああ、「呪い」の事か。

「五秒前」

「え？」

四、三、二、一……スパァン！！

「見ての通り先客のせいで契約はキャンセルされちまってな、どっちかというと……保護者？」

俺の言葉に、問いかけたシュー氏ではなくウィンプ以外のゴルドゥニーネ二人が「マジかこいつ」という眼差しを向けてくる。

……俺、なんかやっちゃいました？

アルコール抜きカルーアミルク（後書き）

十番以降の個体からすればサンラクは「あの」ゴルドゥニーネとほぼ同格の存在相手に生意気言ってるのに何故か生かされてるようなものなので

◇

やべぇ、と思ったのは誰であったのか。

あるいは新大陸の大自然の中に暮らしていれば、誰しもがその威容を心に深く刻み付けられる夜の帝王たる狼に刻まれた傷を誇る事への畏怖か。

あるいは始まりに近き蛇の側に在って堂々たる立ち振る舞いを見逃されている事への驚愕か。

否、偶然にも「蛇の林檎」を訪れた二人の「契約者」の中で知っていたのは彼女一人だけだった。

（サンラク……！　サンラクってあれよね、オルケストラの動画の！）

アルコール抜きカルーアミルク、要するにコーヒー牛乳を飲んでいた王我星は突如服を破裂させた鮭頭の奇人を驚愕と歓喜と興奮を混ぜた眼差しで見つめる。

サンラク。

今やその名はシャングリラ・フロンティアをプレイするゲーマーではない者達にも知られつつある有名人。

ボンバーバニー、ネイキッドマスクマン、ジェット侍、サイナちゃんのP、ツチノコさん。

様々な呼ばれ方をするプレイヤーだが、ある一大レイドバトルでの活躍と彼の存在を世界に示したとある動画から今一番ホットな呼び

名は……

「最大速度（スピードホルダー）、世界最速のプレイヤー……」

「ん？」

「っ！！」

思わず呟いた言葉が耳に届いたのか、振り向いたサンラクに王我星は慌てて視線をコーヒー牛乳へと向ける。王我星はロールプレイを恥じらわない有望株だが年相応のシャイな一面も持っているのだ。空耳だと判断したのか、鮭の頭が再び王我星達よりも先に喫茶店に入った二人へと向いたのをチラ見しながら王我星は小声で隣に座っているニーナへと興奮気味に話しかける。

「ねぇどうしようニーネちゃん！　サンラクよサンラク！　すっごい有名人！！」

「ソウ、ヨカッタワネ」

「サ、サインとか貰えないかな……一緒にスクショとか！！」

「ヨカッタワネ」

だが、ニーネからすればそれどころではない。始まりの蛇、始まりのゴルドゥニーネから分岐していった多くの「ゴルドゥニーネ」達の中でも最初に生まれた二番目から九番目までの八体のゴルドゥニーネは別格の実力を備えている（当然始まりのゴルドゥニーネも別格に含まれる）。それは純然たる事実であり、数百に及ぶ「ゴルドゥニーネ」の殆どを鏖殺したのは一桁に生まれたゴルドゥニーネ達

だ。彼女達は互いに殺し合い、そして消えていったが……それでもその全てが消え去ったわけではない。

現に、その一桁ナンバーのゴルドゥニーネが目の前にいるのだ。ニーネからすれば地獄のような、というか地獄そのものであるこの場所から一刻も早く逃げ出したい。ニーネは積極的に戦いに身を投じるタイプではなく、さりとて（ニーネ本人は知る由もないが）ウィンプほどプライドを捨て切れるタイプでもない。

己の生存にすら「不安」を抱くニーネにとって、たった一人で逃げ出すという選択肢はあり得ない。喫茶店の外が本当に安全なのか？

あるいはあの見え隠れする白蛇が外に回り込んでいたら？　白蛇が姿を隠すたびに頭を掻き毟りたくなるような不安に苛まれ続けるニーネは唯一味方として信用できる王我星の側から離れることができない。

「逃ゲたい逃げタい逃げたイニげたい……」

「ニーネちゃんも一緒にスクショする？」

だがこの場におけるイレギュラーはもう一人いる。サンラクなる一桁台のゴルドゥニーネと隷属ではない関係を築いた夜の気配を纏う奇人。この世界で、夜に怯えぬ者は存在しない。それはゴルドゥニーネ達であっても例外ではなく、間抜けな魚頭であるにも関わらず視線がこちらへと向くたびに恐しく冷ややかな威圧感を浴びせかけられる。

だが、逆に言えばあの奇人は白蛇を従えるゴルドゥニーネに対して対等、またはそれに近い立場にある。あるいはこの人物の心象を良くすれば生存の可能性も高まるというもの……だからニーネは縋るようにもう一人のゴルドゥニーネへと視線を向ける。どうか、間違

っても手を出すような真似はやめてくれと。
そして王我星もまたサンラクへと視線を向ける。一緒にスクショを撮ってくれないかなぁ、と。

◆

ゴルドゥニーネが三体、彼女達に与するプレイヤーもまた三人。そして無関係ながらもこの場でもっともハッスルしているアホどもが多数。
さてどうしたものかと考える。内容は無尽のゴルドゥニーネのユニークシナリオEX「果て亡き我が闘争」についてだ。
そもそもこのシナリオの構造が未だにはっきりしていない。あのゴルドゥニーネを倒さなければならないというなら他のゴルドゥニーネ同士が争い合う仕組みは何のメリットもない。
では自身が擁立したゴルドゥニーネを勝者とすればいいのか？　それならばあのゴルドゥニーネの存在が違和感だ。あれどう考えても複数攻略前提だろう、当時のレベルとはいえ俺、レイ氏、秋津茜の三人で殆ど歯が立たなかった相手だ。龍蛇四体に加えてあの本体……下手をすればジークヴルムと同じ超大規模レイドバトルなんじゃないのか？　そんな状況でゴルドゥニーネ同士の殺し合い……ゲーム的クエストの構造として前提と目的が合致しないのだ。
「………うーむ」
もしかして、これプレイヤーの努力でゴルドゥニーネを説得して協

力するのが正解ルートなんじゃないのか？
そもそもユニークシナリオＥＸはただでさえフレーバー重視でクリア条件がぼやけてるユニークシナリオの中でも輪をかけてクリア条件が不透明だ。何この「想いの果てに蛇が見る夢に寄り添え」って、寝ればいいの？
「さて、なんの奇縁か宿命かここに三人のゴルドゥニーネが集まった。乾杯でもしとくか？」
「毒でモ仕込むつモりかシラ？」
「それ入れて飲み物が美味くなるなら考えてもいいけどな」
死んでも死なないならフグだって生で丸呑みしてやるぜ、いやあいつら地味に恐ろしい顎持ってるからやっぱ捌いた方がいいな。胃を食い破られそうだ。
「で、だ…………正直、そろそろ朝なんでログアウトしたいんだが流石にこの状況ではいさよならってわけにはいかない。だからここで決めてしまおう」
「なにをきめるってのよ」
そりゃ決まってるだろウィンプよ。
「ここで死ぬか、それともお友達になるかだよ」
その時、「蛇の林檎」の扉が開かれた――――

最速の星（後書き）

シャンフロ世界(リアル)はニートに優しいゲームの地位がスポーツレベルまで向上した世界なのでサンラクは実質ケイスケ・ホンダだった……？（流石にそこまでの知名度ではない）

その姿を目視した瞬間、俺の身体は既に最大レベルの戦闘態勢に移行していた。

「っ！！！」

座っていては負ける。他の面々がまだ状況を理解できていない今、動けるのは俺だけだ。立ち上がり、スキルを起動する……瞬間………………

「――「超越速(タキオン)」。」

世界が、減速した。

視界と思考がかろうじて減速した世界の中で当倍速で動く。何が起こったかなどを考える前に各種スキルを連続起動、限界まで無駄を削ぎ落とした連続起動によって目と脳以外の部分が減速した世界で等速を取り戻し、さらに加速させる。

狙いは何だ？　サラダじゃあるまい、そうかコーヒー牛乳！！

振り向けば、そこには今にも俺のコーヒー牛乳へと手を伸ばさんとする小さな影。くっ、判断が遅すぎる――！！

スキル回しがガバすぎる、恥を知れ俺。考えながら動きは止めない、グラスと小さな指先の間に超速イアイフィストでインターセプト！

馬鹿な、消えた！？

「……まだまだ、精進(しょうじん)が足(た)りない」

超越速適応下（タキオン）での、さらなるスキル重ね……っ！！
最大速度（スピードホルダー）の称号はあくまでもプレイヤーに限定したもの、そしてこれまで数々の速度自慢達の尽力を以ってしても一度もこの称号が解放されなかった理由。それが今、目の前にいる。グラスのコーヒー牛乳がいつの間にか空になっている。もう殆ど姿を追えないというのに、それはさらに加速して俺の視力では追いつけない高みへと消えていく。いやマジでこのスキルビルドでまだ追いつけないってどうしろってんですか、あとやることなんて肉体改造手術くらいでは？　え、まさかそれが正解？

世界が、等速になる。

「……動（うご）かないことを推奨（すいしょう）する」

「えっ」

「あっ」

「わっ」

突如として現れた花柄ワンピースの幼子の言葉に、誰もが素直に従うことはできず。全員の頭の上に置かれた酒入りのグラス――先ほどアホどもが散々カウンターの上を滑らせてきたアレ――のいくつかが床に落ちてガシャンと割れた。

「…………」

「あーはい、ちょっと待ってくださいね幼女先生はい聖杯」

なんかもう自然な流れでアバターの性別を変更しつつ鮭頭も外す。

一般常識的に変な格好をしていると幼女先生は半目で睨んでくるし態度が冷たくなる、師匠的ポジションのＮＰＣからの好感度は稼いで損になることはないので唯々諾々（イエスマン）として従うのだ。なお服は半裸でも許される、なんで？

それはそれとして突然の世界最速の悪戯を受けたことで完全に硬直してしまったが故に、グラスが頭の上に乗ったままのゴルドゥニーネ達にゼスチャーで頭の上を指差しておく。そして視線を向ければ、慣れた手つきで頭の上に乗っかったグラスを取ってサミーちゃんさんの口の中に流し込んでいるウィンプ……あ、サミーちゃんさんウワバミなんですね、蟒蛇だけに。

「お前は慣れたもんだなウィンプ」

「だって、まいあさやってくるし………」

「え、毎朝来てるんです？」

「じっと見（み）つめると、メニューが増（ふ）える………重宝（ちょうほう）」

おい、体良くタカられてるじゃねーかお前。それでもユニークモンスターの端くれか、でも幼女先生は控えめに言って最速最強なので仕方ない。あれスキルで思考速度上げないとマジで認識できないからな。俺も俺で毎回会うたびに速度検定が始まるから、その度に飯を揺っ攫われドリンクを揺っ攫われデザートは丸ごと持っていかれる………うん、俺も体良くタカられてたわ。

「朝飯にしては時間が早くないですか先生」

「……早朝食（そうちょうしょく）」

なんてことだ、自分の無知を恥いるばかりだ。俺は今まで朝食こそが一日の食事のトップバッターだと思っていたがまさかさらにその前が存在したとは…………いやそうはならんだろう。でもなってるから仕方ないね、説得力は実力に付随する。であれば幼女先生というキャラクターがいる限り早朝食こそが真のファースト・イーティングなのだ。

いきなりやってきた強キャラに、来訪者達はその動向を恐る恐る伺っているが俺やサバイバアル達は知っている。この最強の賞金狩人様は特に理由なく飯のために徘徊しているので別にゴルドゥニーネを討伐しにきたとかそういうことは全くないのだと。

「若マスター……いつもの」

「あー……マスター俺はこれ、おかわり」

「お待ちを」

「…………」

「わ、わかったわよ！　なにかつくってくるわよ！」

悲しきかなウィンプ、幼女先生の登場によりお前のミステリアスなオーラは完全に消し飛んでしまった。今のお前は料理人見習いのアルバイトでしかない……と、思ったがプレイヤーはともかくゴルドゥニーネ達は幼女先生に釘付けだ。まぁこの場にいる中で一番手っ取り早く全員キルできるお人だし当然と言えば当然か。命拾いしたなウィンプ。

さて、気を取り直して対ゴルドゥニーネ交渉を再開して……

「お先にこちら、ノンリカー・カルーアミルクです。ティーアス様にはこちら、コモナの実のジュースです」

「あ、どうも」

コモナの実ってなんだっけ、ああそうだコモナの実は食べると美味しいけど主用途はその棍棒みたいな形状を生かした撲殺という物騒な木の実だ。味はみかんの食感な林檎って感じ。

皮というか殻が尋常じゃなく硬いので戦闘中に武器を失ってもこれで五回くらいは殴れるので打撃戦士にオススメってマッシブダイナマイトから聞いた。武器拾うか新しく出した方が良くない？　と思わなくもないが装備容量が武器より軽いので割とマジで採用圏内らしい。

さて、そんな豆知識は置いといてそろそろゴルドゥニーネ達が精神的硬直から立ち直りそうだし対話を……

「サ、サンラク……」

「なんだよサバイバアル」

「そのコーヒー牛乳……これで……」

なんで金の詰まった袋を渡してくるんだ気持ち悪い。コーヒー牛乳くらい自分で頼めば……ん？　このコーヒー牛乳じゃないといけない理由？　この、先生に飲み干されたグラスに直接注がれた……

……

「おい」

「はい」

「グラスに触れずにストローで飲め」

「なんてこと言うんだテメーは！」

「やっぱそういうことかよ死ねや！！」

そういうことかよ！　見損なったぜ！　いや評価変わらないから見損なっても無効化してきやがる！　なにそのステータス最低値だからステータスデバフ受けても実質無効化みたいな！！　うーわこいつマジかうーわ！！

「キモいっ！　それは流石にキモいぞ！　最低だぞお前っ！！」

「ぬ…………っ！　む…………っ！！」

「照れて目を背けるな変態！　現実を直視しろ変態！！」

「あの、ツチノコさん」

「変態！　変態！！　……何！？」

「そんくらいにしてやってくれませんか…………サバさんがちょっと取り返しのつかない扉開きそうだから」

は？

世界最速の師弟（後書き）

サバイバアルの性癖が危ない、とても危ない
なんなら遠目で見てた他の着せ替え隊の性癖も危ない

あと宣伝です
拙作のコミカライズ版『シャングリラ・フロンティア』単行本第１巻が１０月１６日（金）発売決定致しました
しかも特装版単行本も同時発売します。一巻にして既に特装版ですって皆さん、不二先生の手による漫画だけでもヤバイのに硬梨菜も頑張って色々書いて添えてますからね。漫画本編がハンバーグなら硬梨菜は付け合わせのマッシュポテトです。
マッシュポテトの中身としては週刊少年マガジン本誌に掲載した書き下ろし小説全３話（ヒロインちゃんの過去編）に、新規書き下ろしを加えた小説本が付いてきます
通常版と特装版、どちらも予約開始していますので宜しくお願いいたします

混ざらぬを混ぜて、混じって（前書き）

とんでもねぇマーケティングをしてもらったので頑張って書き上げました

混ざらぬを混ぜて、混じって

駄目だ、話が進まない。

もはやこの場所そのものが真面目という概念に対する天敵と化してしまった。そもそもが幼女先生(ティーアス)と股割れ大根先輩(ルティア)を着せ替えるために集まったような連中なので幼女先生が降臨した時点でバカの集団がさらにバカになってしまった。

さらに言えば俺も俺で幼女先生の教え子ムーブしちゃったのでシリアスもクソもない、第一印象を唯一保ってるのが余計な事を言わなかったウィンプってどういう事なんだよ。いや幼女先生にパシられるムーブこそ見せていたがその幼女先生が本気出したらこの場にいる全員最速でキルできるお人なのでセーフ。

「さて…………俺も俺でそろそろログアウトしないとだし、その前にちゃちゃっと質問しちまおう。そこの蛇二人！」

「っ」

「な、何ヨ」

陰気そうなゴルドゥニーネと高飛車そうなゴルドゥニーネが俺へと視線を向ける。不安、疑念、敵意……うーん、素晴らしく警戒されているな。

「敵対するか、それとも協力するか。そのまま突っ立っていたっていつか龍蛇(ナーガ)を連れたそっ……くりさんに抹殺されるだけだ、俺やウィンプは棒立ちのまま殺されてやるつもりはないが背中から刺されるの

も勘弁だ」

幕末？　あれは背中向ける方が悪いから………加害者が天と被害者に責任押し付けてくるの、第三者視点で見ると本当ゴミみたいな民度なんだけどこれが適合（馴染む）すると楽しいんだよマジで………

「だからここで決めろ。俺と敵対するのか、ウィンプと手を組むのか………制限時間は十五秒」

「短っ！！」

一秒も一年も未来から振り返れば同じ一瞬だよコーヒー牛乳ちゃん。さぁハリーアップハリーアップ、十五秒あれば幼女先生なら一皿空にするぜ。理論上、超越速を使いながらであれば凄まじい速度での空腹と超越的な速度による早食いで永遠に食べていられるらしい……ちょっと見てみたいがこの喫茶店の貯蓄が尽き果てるのでやめてくれとマスターに言われては仕方がない。

「えーと、えーと……ニーネちゃんはどうしたいの？」

「どうシろってのヨぉ………分かッた！　分カったワよ戦ワナい！
そレでイイでショ王我星！」

ゴルドゥニーネだからニーネちゃん？　イイ名前じゃん、少なくともウィンプ（へたれ女）よりはずっとずっとマシな名前だ。

「さぁ、時間はいつだって等速で前に進む猪野郎だ、十五秒経ったぞ」

「………」

「お嬢様……？」

おじょうさま。なんだか随分と倒錯的なご関係のようで……ていうか鞭にヒールに、つまりそういうことなのか？　え、このゲームでその関係性って成立するもんなの？　小学生もいるんですよ！？　俺の中でシュー氏の評価が変な方向に捻じ曲がり始めた中で、お嬢様と呼ばれたゴルドゥニーネが胡乱げな眼差しで俺と、ウィンプを睨み付ける。

「ソッチが裏切らナいと、誰が保証スルのかしラねぇ？」

「へぇ、お前は信じようとするんだな……」

「っ！！」

「勘違いしてるぜお嬢さん、信頼は求めちゃいない。欲しいのは信用だ」

双方向に向いた絆が欲しいわけじゃない。下手をすればあのゴルドゥニーネを倒す倒さない関係なく最後の一人になるまで殺しあう可能性だってある。欲しいのは俺たちも敵対しないからそっちも背中から刺してくれるなよ、という確証だ。

「あのゴルドゥニーネは強大な存在だ。プレイヤー二人は……その様子だとエンカウントはしたことないっぽいか」

「サン、サンラク、さんっ！　その、あのゴルドゥニーネってなんなんですか？」

「んー、リニア新幹線ってわかる？」

「知ってる！　ジョーシキよぅ！」

「あれよりちょっとデカいくらいの蛇を四匹連れたボスキャラみたいなゴルドゥニーネがいるんだよね、しかもめっちゃ人間嫌い」

人間以外も基本的に嫌ってそうな感じだったけど、少なくともウィンプやそこのニーネちゃんのように話して仲良くなれるようなタマではない。仮に話を聞いたとしてもそれは言語としてじゃなくて断末魔の鳴き声として聞いているだけだろう。

「だから協力……いや、協力しないとしても少なくとも俺達で敵対しないようにしようぜ、ってこと」

「へー……ニーネちゃん、知ってた？」

「当然デしょ……私達(ワタシ)は皆、アレかラ逃げテきたノ」

アレは無理だよなぁ……本体が普通にスーパーアーマーついてる疑惑あるし、毒攻撃が普通にクソ性能だから直撃したらレイ氏クラスの頑強さでも動きが鈍る。戦(や)るなら万全の装備と万全の環境が必要だ、内ゲバしながら挑むような相手ではないだろう。

「さぁ、答えを聞こう」

「…………イいでショう。手を出サないナラ、こちラモ手ヲ出さなイ」

Ｐｅｒｆｅｃｔ　ｎｅｇｏｔｉａｔｉｏｎ……俺の天才的な交渉セ

ンスがまたしても証明されてしまったな……半分脅迫な気がしなくもないが、半分脅迫なくらいにしておかないとウチのドヘタレの化けの皮が剥がれてしまう。

「一応聞くけど不可侵だけ？　それとも協力路線？」

「……ハッ」

あらやだ、鼻で笑われちゃったわアテクシ。やんのかコラ、腕力で危害を加えるだけが暴力だと思ったら大間違いだぞ。

「サバイバアル、ゴー」

「よう兄弟……サンラクの奴と不可侵ってんなら実質俺達は兄弟だ」

「……は？　あの、ちょっとどういう意味なのか……」

どうやらシユー氏と兄弟（ブラザー）の関係になる事で新たなアルビノ爬虫類要素美少女とお近づきになるのを狙っているらしい。ファーストインプレッションが支離滅裂すぎて初手で目論みが崩れている気がしなくもないが。

ほうらお嬢さん、この場で一番恐ろしいのは俺やウィンプではなく幼女先生でもない。性癖ゾンビと化した着せ替え隊の滲み出る気持ち悪さにのたうち回るがいい……蛇だけにな……っ！！

「サバさんと兄弟なら実質俺達も兄弟ってことになるわけだ……」

「家族になろう……」

「つまりお嬢様の下僕なんですよ我々……」

「やっぱその鞭ってそういう事なの？　服脱ぐわ」

「僕もう脱いだ」

早朝からフルスロットルだなこいつら、救いようがねぇ。

「は、離れナサイ！　ナンなのヨこいツら！　くっ……離レろ！！」

「ありがとうございますっ！！　ありがとうございますっ！！」

「オ前もシユーと同ジかっ！！」

「「えっ」」

そんなわけで俺の腹いせによって解き放たれた性癖ゾンビに絡まれたお嬢様とシユー氏を尻目に俺は……えっ、待って今なんて？

「……いや、聞かなかった事にしよう」

どっかの変態みたいに自分からカミングアウトするようなアホでないのなら、そして実害がないのであるなら他人の性癖はそっとしておいた方がいい。ＮＰＣによって性癖を暴露されたシユー氏に黙祷しつつ、俺はログアウトの準備を進める。

「おいウィンプ」

「なによ」

声を潜め、他のゴルドゥニーネ達に聞こえないように警告する。

「サイナを置いておく、一応だけど暫くは身の回りに気を付けておけ」

「う……」

「いいか？　サミーちゃんさんの近くから離れるなよ？　勝手に外を出歩くな、知らない人についていくな」

「わたしをなんだとおもってるのよ！」

「逆に聞くけどお前自分のことなんだと思ってるんだ、せめてボロを出すな。なんでここで働いてるかって聞かれたら無言でニヤリと笑っておけ」

なんか俺だけ別方面で難易度高くない？　そこそこウィンプもレベル高いはずなんだけど、強くなってるのサミーちゃんさんだけなんだよなぁ……

◇

「私も、学校に行かなくちゃっ」

王我星にとってこの十数分は、突如として発生した夢のようなエン

カウントだった。
有名人との出会い、学校の同級生にも内緒にしているユニークシナリオＥＸの進行。そして何よりも王我星達は不可侵ではなく協力を申し出た事であの最大速度とフレンドになることが出来た。

「どうしよう……もう自慢しちゃおうかな」

自分の兄が最前線のプレイヤーである事を自慢するいけすかない男子も、裏で大男のアバターを使う王我星を笑う女子も。その両方をそろそろ見返したいという欲求と秘密にしておきたい欲求の板挟みになっている王我星……そしてそれをヒいた目で見つめるニーネ。

「あのぉー……」

「え？」

「ちょっと、いいですかぁ？」

と、王我星のものでもニーネのものでもない声が、明確に王我星へと投げかけられた。振り向けば虚空、しかし視点を少し下に向ければ、そこには一人の女プレイヤーが恐る恐るといった様子で王我星を見上げていた。

「……誰？」

「その子、ゴルドゥニーネちゃん……だよね？　ね？」

「!!!」

「あぁ、待って待って！　別に襲うとかそんな事しないからぁ！

信じて！　ね！」

ニーネというＮＰＣは用心深い。それ故に己と同じ「ゴルドゥニーネ」がこの前線拠点にいると発覚した事で喫茶店から出た時点でフードを目深に被っていた。

だというのに、眼下にいる緑髪の女はどこか媚びるような目を向けながらニーネの正体を看破した。当然そんな相手に歓迎の意思を見せるはずもなく、警戒心を露わにしたニーネに対して女は自分が敵意を持っていない事を過剰なまでにアピールする。

「実は、ね？　私も「ゴルドゥニーネ」のお友達がいて、ね？」

「あなたも？」

「そうなの、でも私はちょぉーっと、あのお店には入れなくてぇ……」

——だから、まずは貴女と仲良くなりたくて。

にへら、と笑みを浮かべて女は自身の頭上を指差しながら王我星へと自己紹介する。

「私、ヒイラギって言うんだぁ……宜しく、ね？」

混ざらぬを混ぜて、混じって（後書き）

邪悪。

あと小ネタだけど王我星のクラスメイトが自慢する「トッププレイヤーの兄」はリベなんとか

鉄打ち達に激震走る（前書き）

この作品最近更新遅くなったね……とか言われると燃えるタイプ

鉄打ち達に激震走る

【鍛冶職】鍛冶師総合　Ｐａｒｔ３０２【武器防具】

１７５：イムロン
突然だけど爆弾情報が三つある

１７６：ベルンハルト
核爆弾とか作れないのかな

１７７：オシガー・トゥートィ
クラスター爆弾作って樹海焼こうぜ？

１７８：ワイルドハント
何、姉貴も爆弾勢？

１７９：ビルダイアン
姉貴も爆弾勢とかマジかよ

１８０：イムロン
じゃあまず一つ目から
勇者武器の強化に必要な素材が判明した
で、その素材だけどどうも普通の装備の鍛冶にも使えるらしい
ソースは鉱人族の王

１８１：ベルンハルト
爆弾の時代が来た

１８２：トリモモ
なんて！？

１８３：ワイルドハント
鉱人族と接触できたんか！！

１８４：ザンパー
爆弾勢の時代、終了

１８５：イムロン
今その素材「黄金のマグマ」を取るために防具作るために素材吟味してる

１８６：ちゃぽっく
姉貴とんでもねぇところまで進んでる……蜥蜴人族に聞いたけど新大陸の西側なんでしょ鉱人族の本拠地

１８７：練鉄錬士
黄金のマグマ、割とダサいネーミング

１８８：オム烈
あの、姉貴が出した画像の2枚目に映ってるバケツ片手に空飛んでる人影について誰もコメントしないのは……

１８９：ザンパー
バケツ片手にマグマの上を空中ジャンプするプレイヤーとか心当たり一人しかいないし

１９０：禅全一
どうせツチノコやろって信頼がある

１９１：ビルダイアン
何、ツチノコさんってパーティに入れておくとパーティメンバー全員にＡＧＩ補正かかる系の置物なの？

１９２：イムロン
二枚目は勇者武器持ちが鎧を用意しなきゃいけないのを傍目に爆速空中ダッシュでマグマ回収してバケツぐるぐる振り回しながら征服人形に輸送されて帰ってきた奴の画像

１９３：トリモモ
ちょっと何言ってるか分からないです

１９４：練鉄錬士
あ、普通に採取できるんだ……

１９５：イムロン
なんか特別な素材で作ったバケツ使ってたから普通のバケツじゃ多分溶ける
マグマで溶けない黄金のバケツってなんだ

１９６：ザンパー
姉貴がわからないのに他の奴が分かるわけないだろ

１９７：ビルダイアン
よく見たら爆弾情報三つあるって書いてあったわ、残り二つは？

１９８：オム烈
勇者専用じゃないって事は汎用素材か、マジか

１９９：禅全一
黄金のマグマ使ってない武器は人権失う？

２００：ダムＤ
マグマって事は冷やして固めて鉱石系？　少なくとも金属使わない武器なら必要ないんじゃない

２０１：シュンメル
まーたツチノコかこのゲーム空中ジャンプ人権過ぎない？

２０２：ワイルドハント
いやでもどうなんだステータス尖らせまくるより火耐性鍛えまくった方がいいだろ

２０３：ちゃぱっく
最高速度獲得のためにやるべき事が装備でＡＧＩ補正じゃなくて物理的に軽量化、だから鍛冶師的にはどうしようもねぇ、っていうね

２０４：イムロン
二つ目。
鉱人族の地下都市に改宗施設発見、一足先に鉱人族に改宗しました

２０５：ビルダイアン
マグマをどう加工しろと……

２０６：シュンメル
改宗！？

２０７：ベルンハルト
なにそれ

２０８：オム烈
種族変更

２０９：トリモモ
森人族のところはどこ探しても無かったのに鉱人族はあったの！？

２１０：イムロン
これ同じ構造だとしたら森人族の改宗施設多分地下だぞ
物理的に埋まってる

２１１：ザンパー
地
下

２１２：グミノム
えぇ……

２１３：クロガネ
で、何補正がついた？　獣人族は五感強化とステータス上下補正だ
ったけど

２１４：ワイルドハント
やっぱ縮むの？

２１５：剣造
姉貴がロリに！？

２１６：トリモモ
残念ながら姉貴はおっさんアバターなので……

２１７：イムロン
・まず背が縮んだ（元々１９０くらいだったのが１５０に）
・髭が生えた（地味に火に強いらしい）
・腕が鉱石みたいになった（チュートリアル通りならレベルに比例
して耐性が上がる）
・対閃光耐性が生えた
・鍛治中に補正が入る
一通り調べたけどこんな感じかな

２１８：オシガー・トゥートィ
逆に言えば女アバターならロリになるのでは？

２１９：ラムラム
マジか笹食ってる場合じゃねえ！

２２０：ダイヤモン
鍛　治　職　人　権　種　族

２２１：サガサキ
マジかこれ

２２２：グミノム
ちなみに鉱人族の女性ってどんな感じですか……？

２２３：イムロン
＞＞２２２
喜べ、ちょっと髪質硬いけど小柄褐色肌だ

２２４：褐色好きン

待ってました、明日には西に発つ！！

２２５：剣造
新大陸西側かぁ……西側かぁ……

２２６：ライカク
名前で笑わせるのやめーや

２２７：ワイルドハント
言動も面白枠じゃねーかな……

２２８：ベルンハルト
でも鍛治師必須なのに新大陸西側ってきつくね？　固定組めってことか？

２２９：ちゃぱっく
姉貴はどうやって行ったの？

２３０：ラムラム
身長が１５０に固定なのか４０センチ縮むのかも重要じゃね？　最悪ベヒーモスで身長いじらないとだし

２３１：グミノム
鍛治やるなら改宗は避けられんなこれ……

２３２：鏡志楼
高身長イケメンを取るか、鍛治ができるずんぐりむっくりおっさんを取るか

２３３：シュンメル

全員小柄褐色美少女になればいい

２３４：褐色好きン
世界平和やな

２３５：剣造
なんか不健全そうだぞその世界平和

２３６：イムロン
そして三つ目
これが一番やばい

２３７：オシガー・トゥートィ
髭ｏｒ褐色じゃない鍛治師は不人気になるのか……

２３８：練鉄錬士
ん？

２３９：オム烈
ていうか腕、というか拳が金属みたいになるって素手ジョブ的にも
結構な大ニュースじゃ

２４０：ザンパー
焦らしてくぅー

２４１：イムロン
「神匠」の転職条件が分かった

鉄打ち達に激震走る（後書き）

伝説よ、神話となれ。我はその一助たる金槌を振るい炉に座す者

英傑よ、今こそシンに迫る試練の時

「約束の品だ」

ごどん、とビィラックの前に黄金のマグマで満たされたバケツが置かれる。普通こんな風にしたらバケツが溶ける溶けない以前の問題としてマグマが冷えて固まりそうなものだが……インベントリから取り出した黄金のマグマはその熱と輝きを未だに色褪せさせる事なく維持し続けていた。

「……ワリャに任せりゃ月の石でも持ってきそうじゃな」

「この手の届く場所までのものしか用立てられねーよ」

まだ月には届かないから流石に月の石を要求されたなら、空を見上げて月が突如爆発して隕石としてカケラが落ちて来る乱数を期待するしかない。

「これで作れるんだろう？」

エクゾーディナリーモンスター金晶独蠍〝皇金世代〟の素材を使用した武器、より優れた高みを目指すためにビィラックが求めたもの……それこそがこの黄金のマグマだ。

あの勇者武器にも関わりを持つ不思議素材だが、俺からすればレア度と採取難易度の高い単なる素材でしかない。

「……あぁ。わちの目に狂いはない。水晶の蠍は大地の赤子、そんなら大地の血潮こそが幼年期に終わりを告げる最後の鍵じゃけぇ」

あれが赤子？　最近どんどん賢くなってるけど成長期なのかな？
知恵熱でスリップダメージ発生してくんねーかな。
そんな益体もない事を考えていた俺だったが、黄金のマグマを前にしてなんのアクションも起こさないビィラックの姿に疑問符が浮かぶ。
「なんだよ、黄金のマグマをおかずにしたいなら白米持ってこようか？」
「違うわい！　全く……なぁ、サンラク。折入ってワリャに頼みがある」
「頼み？　買い物の追加注文ってわけじゃぁなさそうだが」
ビィラックは何も言わない。目を瞑り、腕を組んでただ静かに……あーいや、よくよく耳を澄ませると喉が鳴ってる。唸り声的な？
「……こりゃあ、わちの頼みじゃ。ワリャは受けるも断るも自由じゃけぇ」
「周りくどいな、内容を言え内容を」
「神匠になる機会を得た」
「あ、マジ？」
やったぜビィラック、バリバリ戦闘ジョブの俺は生産がからっきしなので目をかけてた生産職の躍進はパトロンとして鼻が高いぜ。
だがどうにも様子がおかしい、最上位職業……それも隠し職業も兼

ねた最高最大最強の鍛治ジョブへの道が開けた、と本人が言っているのになぜそんな難しい顔をするのか。考えられる可能性は……

「まさか本当に月の石が必要とか」

「あるんなら嬉しいが違う。必要なもんはただ一つ……そう、ただ一つなんじゃ」

やはり回りくどい、だが俺は数多の「今はまだ知る時ではない……」を乗り越えて世界を救ってきた男。いやそれ最初に言ってれば犠牲半分以下になるやんけ！　という怒りを飲み込む胸の広さがダンディズムに繋がるのだと武田氏も言っていた……まぁ、ＦＰＳで脳味噌溶けてたけどあの人。

「神匠(しんしょう)……否、「神匠の腕(ザ・ブラックかにな)」は現在(いま)より未来(さき)へ進める者……偉業を称え、形とする者……」

「ビィラック？　もしもし？」

「アラドヴァル」

「何？」

アラドヴァル？　はい持ってますがアラドヴァル。一発芸「チーズみたいに溶ける壁」やっとく？　前にお前の前で床バージョンを披露したら危うく殺されかけたけど。

「ええかサンラク、神匠は英傑武器を神化させられる唯一の存在じゃき。逆に言えば神匠とはそれが出来なければ神匠足り得ん」

「お、おう？」

「五色の竜？　否、天覇の龍？　否！　アラドヴァルは満たされとらん！　そう、そうじゃ。竜殺しの槍はしかし竜を一度も殺しとらん！」

バグったか？　それともキョージュか磐斎氏呼ぶ？　ミレィは「何もわからん」ってシンプルな結論を5分くらいはぐらかしそうなので却下。

「サンラク、竜じゃ。竜を狩れ！」

「は？ドラゴン？　ユザーパードラゴンでも狩るか？」

「そげん木端に用は無い！！」

おいおいちょっと待てよ、ユザーパードラゴンと言えばドラ姫、最大火力、最大速度の三人を翻弄し大苦戦させた超強敵だぞ？　まぁ次会った時は俺の方から空に乗り込んでしばき落とすつもりだが……

「サンラク、聞けサンラク。真なる竜を討て！」

「真……なんて？」

「空想より産み落とされた真に竜(ドラゴン)たる翼持つ牙！　五色の竜を焼くアラドヴァルの炎は歪められた伝説に過ぎん！　聞け、聞けやサンラク！　アラドヴァルとは、輝槍仮説(ブリューナク)とは――――！！」

「ほうら壁がチーズのようにとろーり」

「おどりゃ何しとぉーーーーーっ！！？」

「落ち着けボケナスがぁ！　句点を穿て！　読点を刻め！　早口過ぎて「ブリューナク」と「アラドヴァル」しか記憶に残ってねーーんだよ！！」

「壁を溶かして削っていい理由にはならんじゃろがーーっ！！」

殺意剥き出しでぶん投げられたハンマーをスキルフル動員でキャッチ、こちらもキレ返しながら状況のクールダウンを待つ。むしろヒートアップしてる気がしなくもないが。

……

…………

五分後。

とりあえず落ち着いたビィラックの話を総括するとこういう事らしい。

・この度、神匠に転職できるチャンスを得ました！

・転職条件は「英傑武器をリビルド（もしくはリバース）からさらに先の段階に進化ならぬ神化させること！

・つまりサンラク君に協力してもらう場合はアラドヴァルを使うことになるね！

・でも大変！ただそのままリビルド（あるいはリバース）を進化させようとしても高確率で失敗するよ！　失敗したら当然その武器は砕け散るよ！

・そうならないためには、その英傑武器の本質を昇華させる必要があるよ！　アラドヴァルの場合は竜を殺す槍、という本質だね！

・否、否。竜のがらんどうなど竜にあらず。祖なる龍の手本もまた竜にあらじ。我望むは竜、真なる竜種。

・我、輝ける槍の真理に至らんとするもの。焔に眠り、がらんどうを灼けど満たされぬ渇き。

・主人よ、巨槍の骸より剣を見出せし狼の影を追う者よ、真なる竜を討て。真説に至らぬ我が身なれど、真説に相応しきは我を於いて他に無し。

・竜を討て、真なる竜を討て。既に空想の怪物は密やかに現れたり……

・わち今何言ってた？　なんぞ気が遠くなってたが……

うん、病院行こうビィラック！！

英傑よ、今こそシンに迫る試練の時（後書き）

ルーヴァル「よう仮説！」

アラドヴァル「はぁーーー？？？？　持ち主不在の核兵器がデカいツラしてんじゃねぇよ！！」

道に迷わずとも人生に迷う

さてなるほど、いきなり脳味噌パラリラな感じのビィラックから聞いた話を脳内でまとめ上げ、その上で……とりあえず放置することにした。

こういう時に脇道に逸れると無限に戻って来れなくなる、人はそれをサブクエ迷宮現象と言う。
サブクエをクリアするために向かった場所でさらにサブクエ発生、クリアしたら実は続き物でさらに……という多重構造に囚われた時、人は二度とメインシナリオに戻って来れなくなるとされる……そう、つまり俺も迷宮に片足突っ込みかけていたというわけだ危ない危ない。

そもそも真なる竜種がなんなのか分からんのに樹海に突っ込んだって良くてブラザー悪くてブラザーとのエンカウントしかないぜ……兄弟、まだまだ強さの上限が見えてない疑惑があるらしく。
ここまで来ると本当に討伐可能なのか怪しくなってくるなあいつ、もはやプレイヤーの力ではどうなもならない領域に足を突っ込んでいるのでは。

「さて……悪いなビィラック、その真なるドラゴンとやらに興味は尽きないが俺も俺で多忙な身で……」

「そうけ。ああ、あとこれを渡しとけと親父から言われとったわ」

ゴソゴソと何かを取り出したビィラックがその渡すものとやらをこちらへと放り投げる。なんだこれ、懐中時計？　いや違うな、時計

の針じゃないなこれ……羅針盤(コンパス)かこれ？

「何コレ」

「ん、「航陸者(トラベラー)」じゃ」

「なるほど分かった。で、何コレ？」

「じゃから「航陸者(トラベラー)」じゃと」

「よし分かった、で、何コレ？」

（無言でハンマーを振りかぶるビィラック）

（無言で迎撃体勢になる俺）

「なんべん言わすつもりじゃアホがーっ！！」

「名前以外を聞いてるんだろうがダボがーっ！！」

トラベラーだか鉄ベラだか知らんが名前だけ言われてどうしろってんだ馬鹿が！　さっきの怪電波がまだ抜けてないのか！？

「それは「航陸者(トラベラー)」じゃ。屋外で使用すりゃ作ったモンが決めた場所への方角を示しよる」

「作った奴……って言うと、」

「親父じゃ、よう見てみぃ」

んー？　見た目はただの羅針盤だと思うが……あぁ、装飾の方を見ろ？　ええっと……

化粧具（コンパクト）のような航陸者を閉じれば、恐ろしく精緻な金細工で描かれた兎と炎のような何らかの文字のエンブレム。コレは見たことがある、というか見飽きるほどに見ているもの……即ちラビッツの紋章だ。

「そりゃあワリャの所属を示すモンじゃ。道案内以上に、ワリャがラビッツ（ウチ）のモンじゃと示すためのもんじゃろう」

「所属証明か……誰に？」

「それが示す場所に集まる奴らにじゃ」

金槌を元あった場所に戻し、溶けた壁を恨めしげに眺めながらビィラックは言葉を続ける。

「ええかサンラク、これが示す先は新大陸じゃ。新大陸にゃあ親父を頭に子分杯を交わした奴らがおるんじゃ」

「そ……」

それなんて極道？

「あれじゃ、ワリャも覚えがあるじゃろう。ケット・シーも子分杯を交わした種族の一つじゃ」

「ケット・シー……あー、なるほど」

なんとなく見えてきた、要するに新大陸のそんなに強くない種族の

連合みたいなもんがあるんだろう。それも人語が話せるタイプの小動物系だろうか。新大陸にも一応存在する、みたいな話をどっかで聞いた気がする……【ライブラリ】のプレイヤーだったっけ、違うプレイヤーだったかもしれないがまぁさして重要でもないか。

「要するに小動物の集まりがあるので道案内はしてやるから来い、と」

「そげんこととじゃろうな、親父が動いちょる……時が近いってことじゃ」

「時？」

溶けた壁を見ていたビィラックがこちらへと視線を向ける。その目は怒りでもなく、悲しみでもなく……なにか、俺を見ているようで全く別のものを見ているような、無機質なようで悟っているようで。少なくとも普段のそれとは明確に異なる何とも言えない眼差しであった。

「開拓者サンラク、大きな風が吹こうとしちょる。大地を捲り、海を呑む大きな風が……わち等は、いんや親父はそれに勝つために在る。エムルん奴が姿を見せんのもそれに関係しちゅうわけじゃ……じゃから」

「ビィラック」

「……なんじゃ」

なにか難しい思わせぶりな話をしたいらしいが、残念ながら俺も……いいや、開拓者ってのはどいつもこいつも半端な気持ちで命をか

けてる奴らばっかりなんだぜ？　真面目な口調で話したって「なんかのフラグ踏んだか？」程度でしかない。

「俺達は追い風で吹っ飛ばされようが向い風に薙ぎ倒されようが何度だって走っていく馬鹿の集まりだぜ」

「……………」

「風だろうが大怪獣だろうがドンと来いってな」

仮に大怪獣が出現したとしても今のプレイヤーならそこそこ勝てそうというか、本気で周回すれば戦術機運用で巨大モンスターでも勝てそうな気がするんだよな。まぁこのゲーム楽に勝たせる気サラサラないと言うか、下手したら編隊組んで近づいたら範囲攻撃、みたいなデザインのモンスターとか普通に出しそうなんだよなぁ……。

「……まぁええか、威勢はデカくて困ることもありゃあせん。それにわちのやることも変わらんしのぅ」

「そうそう、とりあえず黄金のマグマは持ってきたんだから武器を作ってくれって話ですよ」

「わぁーったわぁーった、全く………」

しっしっ、と手を振って出て行けと示すビィラック。炉にのそのそと近く辺り、どうやら作業を始めてくれるらしい。全く……随分と長ったらしい会話イベントだったなぁ。そこそこ重要なワードは出てたけど八回くらいスキップしたい気分だった、どうせワールドストーリー的にまずゴルドゥニーネだろ？　いや、どうなんだっけ……ユニークモンスターって別に順番とかないんだっけ？　いやでも

ジークヴルムとか強制イベントっぽかったけど……

「ゴルドゥニーネやって……黄金のマグマ、は入手したけどどうせならもっと数を……いやその為にバケツの量産を……あーでも真なる竜とか言うのを探して……いやでも仇討人関連も…………」

えー、あー、んー…………

このゲームで何すればいいんだ俺?

道に迷わずとも人生に迷う（後書き）

小動物サミットは別に無所属でも敵意さえなければ参加可能
サンラクの場合は「こいつはラビッツ所属です」と立ち位置が固定されてるだけ

脇道寄り道迷い道

「やっぱこう言う時ってさぁ、順番決めるのがそもそも面倒臭いから完全に別の作業始めちゃうよな」

「その気持ちすっごいよく分かる……僕もよく会議とか面倒で別のタスクに逃げるからなぁ」

「おい大丈夫か社長」

「ヤシロバードだよ、ここじゃあ僕は単なる開拓者だからね」

ガチャコン、ガシャン、ウィーン。

「はいはい………あ、ヤシロバードこれ弾速って最低初期値から増減何％（パー）くらいが理想？」

「それハンドガンタイプ？　弾速削るなら７６％、上げるなら１１３％だね。それ以上それ以下は致命的にカスか大して差がないから」

ガチャコン、ピッ、ピピピピピピ、ウィーン、ガシューン。

「いや二丁拳銃作るつもりなんだけど銃のタイプそれぞれ違う感じにしたいんだよな、片方リボルバーでもう一方連射系にしたいんだけど」

「フルオート？　このゲームフルオートとハンドガンの相性そんな良くないんだけど……ペイント弾とかにする？」

「豆鉄砲じゃねーか、いや視覚と嗅覚潰すと考えたら割とアリなのでは……？」
「実はマガジンに弾種設定できるからマガジン一体型の魔力リロード型よりあらかじめリチャージしたマガジン分離型の方が応用力高いんだよね」
「へー」
ガッシューン、ガッシューン、ガッシューン、キュイイイイイイイイ！
「と言うわけで完成しました鳥さん印（シリーズ）クラスタースモークグレネードランチャー「フォグロッソ」二型です」
「条約違反では？」
「いやいや、クラスター型のスモークグレネードだからね、無害無害」
「組成をスモークからガスに変えるだけで広範囲無差別殺傷兵器じゃん……」
「このゲーム、状態異常基本的に一、二回しかかからないし割とセーフ」
「個人の見解で範囲（拡大解釈）攻撃すんな」
チキキキキ、カシュン、カシャッ、カチッ、プシュシュシュシュシュシ

ユーーーー、ピンポーン

「わぁい完成（かんせー）」

「あ、完成させちゃった？　どうせなら設計図渡そうと思ったのに」

「いや、別に決定力は求めてないしこれでいい。名前は………ヘイヨーガンマニア、なんかいい名前ある？」

「単体名称じゃなくてメーカー名称にしたら？　ナントカ１００とかそう言う感じの」

「サンラク２５とか？」

「なんで２５？」

「マガジンの装填数」

「クソ安直、２５点。「勇魚」は何か案ある？」

『炸裂衝撃弾頭搭載型（ノックバック・バレット）、小威力、自動速射型（フルオート）………「ＦＦ－４５（フリックフィンガー）」を提案します』

「フリックフィンガー？」

「デコピン（フリックフィンガー）だってさ」

「……結構良くない？」

「あ、気にいるんだ………」

◆

俺は今、諸々の全てをぶん投げてリヴァイアサンで銃の制作を行なっていた。いやなんか、もういろいろ面倒くさいし武器周りの強化しようかなって……

そして案の定と言うかやはりと言うか当然と言うか、嬉々として銃を開発し続けていたヤシロバードからのアドバイスを受けつつ、新規造形と強化造形で二つの銃を作っていたわけだ。一つは今作ったデコピン45、そしてもう一つが……

「新規造形で作った方が良くない？　対人相手でもそんなに強くないよそれ」

「百人が見捨てても俺はこのアボカド君を見捨てないって決めてるんだよ」

そう、リヴァイアサン一層で入手可能な銃器にしてこの世界の現代人類が最初に触れることになる銃器。そして……あまりにも威力が残念すぎて人の頭にクリーンヒットさせてもそんな大した威力にならない残念武器、それが「お野菜シリーズ」と揶揄された市民用(シビリアン)補助機装(サブデバイス)が一つ、「アグアカーテ(アボカド)」君である。

「いやぁーどうだろうそれ、弾速固定だし魔力弾頭だから魔力耐性高い相手だとそもそも弾かれるしウチのクランの人に頼んで検証したけど下級魔法以下の威力しか出ないよ？」

「えーと、強化強化……」

なるほど、この武器カテゴリはアンバージャックパスを上げることで次のランクの武器として強化できる、ってデザインなのか。市民から軍人、軍人から将官、そして要人……

「そりゃスコア稼ぐのサンラクなら作業なだけで難しくはないだろうけどさー、それだったら今作ったＦＦ－４５のマガジンの種類増やした方が良くない？　軟体モンスターなら多少威力低くても貫通系持たせたらいいし」

「へー、軍人用とか要人用とか色々派生できるのか……」

「あーダメダメ、軍人用地雷だよ。使いやすさに重点置きすぎて本当に威力がしょぼいんだよ。要人用の方がまだ威力高いってどういうことなんだろうね、でも要人用も要人用で維持コストがやたら高くてさぁ……将官用はマジで微妙、ゴミじゃないけど微妙なんだよねー。まぁ一通り全部作ったんだけどさ」

「なぁ「勇魚」、この特務用(SPデューティ)って何？」

「ああそれ？　それは……………………ちょっと待って、今なんて言った？」

おっと？　ヤシロバード君顔色が変わったぞ？？？

『ご説明致しましょう！　特務用執行機装(SPデューティ・エクセキューデバイス)とはセツナ・天津気(アマツキ)博士によって構想された単騎で特記戦力足り得る特務階級の兵士に支給されるオーダーメイドカスタムチューンが施されたデバイスとなっております！』

「…………」

「成る程？　どうも通常の方法じゃ出現しないらしいが条件とかは教えてもらえるのか？」

『お望みとあれば。特務用執行機装は市民用（シビリアン）、兵士用（アーミー）、将官用（ジェネラル）、要人用（VIP）に属するデバイスの使用履歴を参照し、特務規定基準に達した個人に対して解放されます。噛み砕いて説明すれば特務として相応しい実力を備える個人に対して刹那理論に基づいた明確な「個」を確率する補助としての役割を期待するものであります』

「ふーん…………で？　この「ワカモーレ」ってやつの性能を聞こうか」

『その前に特務用執行機装を獲得、運用する場合は特務ライセンスの獲得が条件となっております。こちらのライセンスは………』

肩を叩かれる。胡乱げな眼差しで振り返れば、そこには清々しいほどにいい笑顔をしたヤシロバードが市民用補助機装を担いで立っていた。まるで今から大規模な遠征に向かうような準備っぷりに、俺もにっこりと笑みを浮かべる。

「僕たち、友達だろ？」

「まぁ、昔馴染みのゲーム友達だな」

「ちょっと世界の果てまで冒険してみないかい？」

「一人で行けよ情報弱者」

「ちくしょおおおおおおおお！！　特務用とか聞いてなーーーーーーーい！！！！」

脇道寄り道迷い道（後書き）

・特務用執行機装（SPデューティ・エクスキューデバイス）

要するにウェザエモン程じゃないけど規律的画一的量産的な人類戦力の中に眠っていたハリウッド・アクション・ウォリアーを集めてスペシャル部隊Aチーム作ろうぜ、という計画において支給されるオーダーメイドカスタム。

厳密には「ワカモーレ（アボカドに色々混ぜたサルサ）」も銃の名前そのものではなくワカモーレタイプ、という意味なのでさらにここにカスタムを重ねてオリジナルのネームをつけることで完成する（つまり正式名称は特務用執行機装タイプ：ワカモーレ「〇〇」となる）

これは画一量産に対する世界からの減衰処理に対抗する意図があるためであり、名前被りや極端に見た目が似ていると製造時点で警告が出るという徹底ぶり。

タイプ：ワカモーレはハンドガンタイプ全般を包括したカテゴリであり、当時の銃匠（ガンスミス）達による試行錯誤から生まれたカスタムを施すことが可能である……そして、この特務用から発展し、神代終焉の間際に形になったものこそが銃匠達の執念たる七つの特殊マガジン「魔弾（ザミエルヴァレット）」シリーズである

「いやでも違うじゃん？　ほら銃って基本的に完成した時点で完全体なわけだからこの世界の常識に当てはめても一つの武器からさらに発展形が出る、ってのがそもそも僕としては慣れない概念であってそういう観点からすると隠し要素で特務用とか出されても僕としては対応できません、っていうかいや対応はするけど初見で気付くのはちょっと無茶というか」

「ヤシロバード」

「はい」

「特務ライセンス取り行くからそこどいてくれ」

「ずるいだろそういうのーーーーー！！」

「俺がズルいんじゃなくてお前がトロいんだろ」

しっしっ、さっさと市民用銃器担いで戦ってこいよ。
特務ライセンスを獲得せんと「勇魚」案内の元進む俺に、未練がましくついてくるヤシロバードを華麗なステップ（３０フレーム刻み、要するにタップダンス）であしらうもこの哀れな男は自分の知らない銃を自分が知らないうちに獲得されるのがとてもお気に召さないらしい。
仮にも大の男の姿をしたアバターとそう大して見た目と年齢に差がないだろうプレイヤーが動物病院の前で最後の抵抗を試みる小型犬のような姿を見せているのは、他人事だというのに何故だか無性に

情けない気分になる。

当人の主張としては特務ライセンスは一旦置いといて僕と一緒になんか適当に大冒険して特務規定を達成。それが終わったらちょっと休憩してもろて、その間に僕が特務用執行機装作るから……ということらしい。それ要するに一番最初に特務用獲得するのは僕だからすっこんでろ、ってことですよね？　ハハハ、すっこんでろ。

「くっ…………！！」

すっ（マーニの詰まった袋を差し出すヤシロバード）

「サバイバアルといいなんで金出せばなんとかなる、みたいな共通認識あるの？」

「いやほら、孤島でサバイバルしてるとリアルで金の力が身に染みるというか……経験則？」

「後遺症って言うんだぜそういうの………しゃあねぇなぁ」

段々この情けない生物を放置する事が情けなく感じてきた、可哀想だからとかじゃなくて……なんというか……

「道路に落ちてる生ゴミを放置できない感じになってきた」

「銃のためなら生ゴミにもなるさ」

そこにいたのは、欲望の為にプライドと人権を捨てた成人男性一人分の重さの生ゴミだった……粗大ゴミでは？

「で？　特務規定をクリアするようなスーパーエリートエージェントになる為には具体的にどの程度の敵を倒せばいいんだ？　ユニークモンスターか？」

「サンラク、想定ジークヴルムは流石に無理ゲーだよ」

『厳密なラインを説明することは出来ませんが、特務ライセンスは一人……あるいは二人での戦略を判定するのですから。現地環境における頂点捕食者の討伐などでしょうか？』

……成る程？

「頂点捕食者か……（首が三つある恐竜の姿を想起する）」

「頂点捕食者ね……（三つ首を持つ恐竜の姿を想起する）」

エクゾーディナリー個体やなんかよく分からないレア個体を除いても、新大陸樹海部分に置いて覇たる君臨者といえばやはり三つの首と化け物タフネスを誇るドラクルス・ディノサーベラスの他にはいないだろう。

個人的にあの三つ首ティラノ、エネミーＭｏｂとしての完成度が恐ろしく高い。絶妙に避けやすく絶妙に被弾する大振りながらシンプルな質量。そして「一番強い奴（ウザい）」を狙うＡＩ……うーむ、周回作業中に遭遇すると心の底から嫌すぎる強Ｍｏｂとしての完成度よ。

「サーベラスかぁ……あいつ、通常個体でも皮が銃弾通さないから苦手なんだよね。体内に叩き込めばなんとかなるけど」

「銃弾の経口摂取かよ」

「通常個体はそれで何とかなるけど〝死闘の傷（スカーデッド）〟や〝緋色の傷（スカーレッド）〟はダメだね、マジであいつらは強すぎる」

「〝緋色の傷〟は知ってるけどエクゾーディナリーの方もそんなになのか？」

「あいつ、ダメージ受けるとその部位に耐性がつくんだよ。しかも特定の攻撃とかじゃなくて斬撃とか打撃とかめちゃくちゃアバウトに」

「クソモンスターかよ」

それは厄介が過ぎる……ただでさえタフなのに攻撃を当てれば当てるほどダメージ効率が下がり続け、なおかつ複数の攻撃手段をアタッカーに要求するわけで。いやでもしかし……ん？

「なぁヤシロバード」

「なんだい？」

「〝緋色の傷〟はシンプルにＶＩＴがガンガン上がるからどうしようもないけどさ……その〝死闘の傷〟の方ってさ」

「うん」

「回復して傷を消したらリセットされるんじゃね？」

聞いた限りじゃ「傷口」が耐性を獲得するんだろ？　つまり傷ついてない部分の耐性は初期値なわけで。エクゾーディナリーに限らず大抵のモンスターは明確な弱点、というより攻略のための突破口が

ある。
中には「クソ極悪」から「極悪」に変わる程度でしかない事もあるが、それでもやはり突破口はある。そんな考えから何の気なしに言った推測に、しかしヤシロバードは口元に手を当てて考え込む。

「…………それあり得るかも」

「いやでも堂々巡りの可能性も……」

「確か【ＳＦ－Ｚｏｏ】が検証していた中にモンスターに対して回復魔法を使用した際の外傷と内部数値の差異みたいなのがあったはず。プレイヤーに対して割合で回復する魔法をモンスターに使っても同じ割合にはならない、でも外見上の傷は癒える……動物園の連中は撮影の時に便利とかすっとんきょうな事言ってたけどこういう時の条件をリセットする為だったとしたら……」

確かこいつ、【午後十字軍】のメンバーなんだったか。あそこって確かドラクルス・ディノサーベラスの特殊個体に痛い目見てるから因縁があるとかなんとか……

「いやぁすまないサンラク、ちょっと用事が」

「構わんよ、俺はゆっくりライセンス取ってるから」

「ふっぐ…………ゆ、ゆっくりでいいよ……三日くらいかけて、サ……」

引きつった笑みを浮かべながら去っていった────恐らく自身のクランメンバーに今の推測を伝えに行ったのだろうヤシロバードを見送りながら俺は口を開く。

「……「勇魚」。」

『はいなんでしょう？』

「三時間でライセンス取るぞ」

『かしこまりました！　それでは特務ライセンス取得試験を開始しましょうっ！！』

誰が待つかバカヤロー、牛歩するつもりはさらさらねぇ。いつだって俺はサラブレッドの如く駆けていくんだよ！　ヒャッホウ新コンテンツーーーっ！！

サラブレッド・ダッシュ！！（後書き）

なさけないいいきもの

特務ライセンス試験。
要するに自身の得物……この場合は市民用補助機装【アグアカーテ】をこの場で強化し、制限時間内に三つの条件を達成する。

一つ、フィールド内に存在する七つのターゲットデコイを破壊する。
二つ、フィールド内に出現する「エージェントテスター」というメカモンスターを撃破する。
三つ、一度も死亡せずにクリアする。

「成る程ね……「死なないこと」が条件になるような難易度、と」

『特務ライセンス（エージェント）は元々神代人類を想定したものですからね、二号人類たる貴方達の場合はあまり重要ではないかもしれませんが……特務とは、天津気博士の言葉を借りるならば「英雄」に相当する働きを期待された方々です。事実として塵芥のように蹴散らされたとしても、特務に求めるものは無駄死にではなくある種象徴としての継戦ですから』

「死なずの特務兵団ってカッコよくない？」

『身も蓋も無い発言ですが、ある程度の効果は見込めそうなのがなんとも言えませんね……』

百人くらい肉盾兼囮兼爆弾として突っ込ませて丸ごと迫撃砲とか爆撃とかで更地にする運用とか楽しそうだが、発言だけでヴォーパル魂が削れそうなので黙っておく。

さーて、どうしたものか。フルオートデコピンが連射系マガジンタイプだからアグアカーテ君はあえて魔力チャージ型にしようかな……ヤシロバードはマガジン型の方が総合的に優れてる、なんて言ってたがそれはインベントリア、いやあいつのはキャストリア？　だったか。ともかく無限インベントリに狂った量のマガジンを詰め込んでいて、なおかつそれを手品のテクニックか何かとしか思えない動きで人力瞬間装填出来る前提の話だ。

魔力チャージ型最大の利点は動作の短縮にこそある、そもそもリアルと違って脳天に弾丸を叩き込んでも大ダメージで済む世界だぞ？　銃は主役たり得ない、少なくとも今の俺のプレイヤービルドではあくまでもサブウェポンでしかない。

「弾速は最高効率に……いや、デコピンと同じにするよりズラした方が対応しづらいか？　ならあえて威力偏重にして……弾丸は穿孔特化型一択、多分この弾速なら貫通っていうより傷口を抉る感じになるか……うーん、いい感じに非人道兵器」

というわけで特務用執行機装タイプ：ワカモーレ（暫定）が完成。あとは認定試験をクリアすることでこの大口径ハンドガンは正式にロールアウトする。

「さぁ始めようぜ「勇魚」、残り二時間と二十分……タイムアタックには十分すぎる」

『それでは二号人類サンラクを対象とした特務ライセンス認定試験を開始致します！　特設テストフィールドへの転送完了をお待ちください……』

いわゆるナウ・ローディング？

◆

この手の1クエストに複数の達成目標があるタイプの攻略法は「初見は直列、周回は並列」と相場がきまっている。
慣れないうちはメインターゲット最優先、サブもクリアするにしても一つのターゲットに集中すること。慣れてきたら片手間にサブをこなしながらメインターゲットをクリアする。
昔の人達も「二兎を追うものは一兎をも得ず」というありがたーいお言葉を作ったように慣れないうちから欲を張るとロクな事にならないものだ。
だが先人達よ、もし仮に追いかけてる二羽の兎の片割れが積極的に狩人を殺しにかかってくる殺戮マシンだった場合はどうなると思う？

こうなる。

「ハハハハハハ！　探す手間が省けるってもんだぜェーッ！」

エージェントテスターなるモンスターだが、一言で表現するなら足がタイヤの馬……とでも言えばいいのか。いやあのワシャワシャ動く感じは脚が四本の蜘蛛っぽくも……なんだろう、足だけアメンボな馬？　赤竜ドゥーレッドハウルと似た体型だがあいつほど脚が長くない……四つん這いの人間（腕が長い）とかなのか？　本当によくわからん体型だ。

だがエージェントテスター君は俺を見つけ次第見失うまで延々と追いかけてくる事さえ分かっていればやることは簡単、付かず離れずで鬼ごっこしながらターゲットデコイを破壊して回る！！

「はい四つ目ェ！」

暫定ワカモーレでこれまたよく分からない形状のターゲットデコイの頭部？　らしき部位を撃ち抜く。俺とて元孤島民現幕末志士兼ネフィリム乗りだ、走りながら射撃するくらいなんて事はない。
リヴァイアサン第一殻層の迷路に似ているもののあそこよりも道の幅が全体的に広いフィールドであるが、逆位置補正で継続的な加速に難のある今の俺でも問題なく駆け抜けられるほどに広くそしてエージェントテスターの脚力はいつでも振り切れる程度の速さしかない。

つまり先人は兎を二羽追って失敗したらしいが俺は凄いので兎を同時に二羽狩れるという事だァーーーーッ！！

「六つ目ェ！」

七つ目は何処だ！　とりあえずエージェントテスターを傑剣(エスカ＝ヴ)への憧焉終刃(アラツハ)で斬りつけて、っと……はい効果で剣に蓄積された魔力を銃に譲渡！　最強のコンボだ、アグアカーテ君の時は長期運用する意味合いが薄かったがこの暫定ワカモーレならば！！

「見つけたぞ七つ目！」

なんか動く空中足場の一番上に設置されてるわ、ここからハンドガンで狙うのは難しいか……はいスキル起動、空中ジャンプから意識

加速、照準合わせてファイア。

「サブタゲクリア！　あとはてめーだけだエージェントテスター！！」

露骨に弱点アピールが激しい関節しやがって、剣で叩き割った方が速いがこれはあくまでも特務用デバイスのライセンス試験、やり直しとか言われても困るので暫定ワカモーレをメイン運用で削っていくとしよう。

「くらえ銃パンチ！」

肉薄、接射、破壊！　パンチの射程で撃てばどんな銃でも必中なのである！

弾丸のような、というか弾丸そのものな拳（銃弾）がエージェントテスターの右前脚肩関節を粉砕して機動力を物理的に１／４程削ぎ落とす。

「デンプシー射撃！　アッパーカット射撃！　動くな怯めデコピン連打！！」

銃弾二発で砕けるような軟弱関節の敵に手間取る俺ではないわァ！！

ガシャッ

「ん？」

……

…………

ヤシロバードが離脱してから一時間後。

『おめでとうございます！この度、貴方は特務ライセンスの認定試験に合格致しました！！』

「ああうん……やったぁ」

エージェントテスター（複数形）は聞いてないぜ……まさかデコイの破壊数と連動して最大七体になるとは。

だが勝った、俺は勝ったのだ。その証拠こそが今俺の手の中で確かな重さを主張する特務用執行機装（SPデューティ・エキューデバイス）タイプ：ワカモーレ「エアリアルＰＤ」なのだから。

ちなみにＰＤとは「パイルドライバー」の略であり、この名は最終的にエージェントテスター最後の一機を倒した技が空中でクラッチしたパイルドライバーである事に由来する……いや、本当はなんかもっとこう凄腕エージェント！　みたいな倒し方したかったんだけど流れで。

天・空・脳・天・杭・打・一・撃・必・殺（後書き）

・エアリアル・パイルドライバー
空中足場からエージェントテスターを蹴落とした際にカッコつけて銃でトドメを刺そうとしたサンラクが躓いて一緒に落ちた際、咄嗟に四肢が破壊され胴体だけになったエージェントテスターにしがみついて編み出したフィニッシュ・ホールド
その威力たるやかけられたエージェントテスターの脳天を粉砕するだけではなくかけた側であるサンラクの尻にも甚大なダメージを与えるほどであり、「勇魚」によるインタビューに対してサンラクは「二度とやらん、という戒めとしてデバイスにこの名前を付けます」と答えたという……

切っても切り離せないのが現実（前書き）

あまりにも難産……っ！　しかも寝落ちしてる……っ！！

切っても切り離せないのが現実

期末テスト！　楽郎は逃げ出した！　残念！　期末テストは概念存在なので逃げられない！！

クソがよ。

というわけで期末テストである。厳密には期末テスト初日を二日後に控えた今現在、

「速報来たぞ！　新型薬物だ！！」

「やはりか……トンネル事故も確かにＭａｋｉｋｏ先生は心を痛めただろうが、期末テスト当日時点で進行形の問題となるのはやはり新型薬物だろうからな……」

「笹木……フッ、予想師（ギャンブラー）の勘は錆びてないということか……」

「助けて文系！　５００円あげるから代わりに文章考えて！」

「俺を呼んだか！」

「お前は文系マン！？」

「高校生の癖にドヤ顔で７の段を間違えたあの！？」

「そのくせ小論文（エッセイ）が現文の教師に引くほど大絶賛されたあの文系マン！？」

「生きていたのか7×8＝53（文系マン）……」

「勝手に殺すな、そしてお前は殺す」

頭いいんだか悪いんだかよく分からない盛り上がりを見せる教室の中で、俺はといえばクラスメイトの横田から裏死蔵文書（雑ピが没にしたポエムを指す隠語）のデータを３００円で受け取りつつ帰り支度をしていた……あ、そうだ。

「ヘイ文系マン（雑菌ピアス）、現国の出題範囲とか嶋先生から聞いてないの？」

「流石にそこまで贔屓されてねえよ……なんか今、悪意に悪意を重ねてなかったか？　気配的に」

「一度で済んでお得だな」

「せめて否定しろよ！」

「人生は些細な嘘から悪意に満ちた嘘まで、いろんな嘘に塗れている。善し悪しは別としても、それならせめて可能な限りは自分に正直に生きていたい……そうだろう？」

「なんでそれ（新作）知ってるんだよォー！！」

表死蔵文書（雑ピが没にしたけどＳＮＳで若干匂わせたポエムの一文を指す）をこんな早期に使う事になるとはな……くっ、さすがは全身いじりネタ野郎だ。英語版もそこそこ注目度集め始めてるって噂マジなの？　グローバルポエマーじゃん。

「じゃあ良いや、７の段の暗記頑張れよ」

「いつまで引きずるんだよもぉぉ！！」

「９×７－１＝？」

「６３……あっ、６４！」

ダメみたい……ですね。

……

…………

「ん、ああ玲さん」

「あゅっ、ら、楽郎君…………そ、そうだ！　聞きましたか？」

「ん？」

帰り道、校門の前にいた玲さんから齎された情報は俺をして驚愕の内容であった。

「生物テストの３０点分が大学入試レベルになった……！？」

「……はい、職員室で……聞こえた、って情報が」

大石ィ……！　バカめ、貰ったぞ高得点！！

生物の大石先生はとても優しいし質問にもちゃんと答えてくれる素晴らしい教師なのだがことテスト出題に関してだけは畜生道の権化と化す。

車の免許取る時の試験みたいなクソ曖昧な◯×問題ならまだ優しい方、酷い時は英語の論文から答えを探せとかやってくる……英文のテストだっけ？

だがそんな畜生道大石にも僅かばかりの慈悲がある。それはセンター入試問題をテストに入れる場合は必ず授業で言及したところに限る、ということ……っ！

テストとはある種学生と教師の戦いでもある、既に対テストネットワークによって入試級出題想定の範囲は解明されている……！　だが懸念されるのは平均点の上昇だ、ネットワークに３０点級情報が流れていない、と言う事は意図的に情報を絞っている奴がいる。成る程、人は点数のためなら非道にもなれるって訳だ……玲さんには情報を流している辺り、好感度を稼ぎたい裏が透けて見えるぜ。

「これは真面目に７０点分を狙った方がいいか……？」

「そう、ですね……今年最後の期末なだけあって、他の先生方も、張り切ってるみたい……ですし」

ぬるま湯のようなテストにしてください。そう願えども全員張り切ってるなら物理と英数はヤバいな、あそこの担当は気軽に難問を入れてくるので。理系可哀想……

「んー……やっぱある程度復習しといた方がいいかな」

一夜漬けは脇差のようなものだ、普段から蓄積した知識のサブとして使うものであってそれをメインにするとあまりにも心許ない。あ

と直前の徹夜は体質によってはデバフにしかならないのもキツいところだな……

「玲さんはどう？　期末いけそう？」

「は、はいっ……その……はい」

「そう言い切れるのは羨ましいな……」

「らえっ、あの、いえ、言い切るってわけじゃ……」

このシーズンになるとやけに悟ったような奴を見かけるが、アレは死の間際に解脱っぽい境地に至った個体なので両手を合わせて南無阿弥陀仏と言ってやればいい。本当に余裕なやつは「まぁ大丈夫だけどちょっと不安だよね？」という顔をするものだ、目の前にいる玲さんのように。

俺？　俺はアレだよ、そこそこな勝算を持ってギャンブルに挑むタイプ。

「まぁ流石に今日明日は予習復習してコンディション整える感じかな、中間ならともかく期末前にゲームで徹夜はちょっと罪悪感あるし」

「そうですね……」

さーて、学生らしく本分を頑張るとしますかね！！

……

…………

……………………

いや違うんや、聞いてくださいよ刑事さん。
テスト前日にゲームしてるのには深い理由が、そりゃもう海より深く山より高くクソみたいなシナリオよりも奥深い理由があるんですよ刑事さん。

いやね？　フルダイブゲームって半分寝てるようなもんだしどちらにせよテスト当日はエナドリぶちかましてブーストかけてから挑むつもりだしそもそもフルダイブＶＲをやることで脳が活性化するみたいな論文があったはずだからこれはある種の……ストレッチ！
そう、ストレッチみたいなもんだ。
朝までにちょちょいっと脳をほぐしてベストコンディションでテストに挑む……完璧、そう完璧な作戦だ。

「っし」

言い訳は、自分に届けば、それでいい。
というわけでね、息抜きにやっていこうぜシャングリラ・フロンティア！！

切っても切り離せないのが現実（後書き）

そろそろこの章の締めに入ります、多分今回は短めの長編

来たる２０２０年１０月１６日（金）に不二涼介先生の手によって実体化したコミカライズ「シャングリラ・フロンティア～クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす～」の第一巻がついに発売致します！

同時発売で書き下ろし小説付きの「特装版（エキスパンションパス）」も発売しますので是非是非お手に取ってみて下さい！！

斜陽　其の一

◆

「ピヨヨッ」

「んんー？」

時刻は夕方、テスト前ということで早帰りという、空いた時間を上手く活用する奴とそうでない奴に分かれそうな時間帯に俺は精神的リフレッシュというこれ以上ない時間の活用をする為にシャンフロへとログインしていた。
リスポン地点はリヴァイアサン内のセーブポイントなので、ちょいと樹海のモンスターで新武器の実践テストも兼ねたハンティングに興じようと思ってたが……リヴァイアサンを出た俺の前に一羽の隼が飛んできた。

「おーよしよし、この高級鳥の餌を上げよう」

今のところ鳥モンスターのテイム方法がはっきりしていない為、メールバードに餌をやることができる「鳥の餌」アイテムは鳥好きプレイヤーに大人気の一品だ。俺が取り出したのは隼用なので細切れのベーコンみたいな干し肉だ……一応プレイヤーも食べられるらしく、試しに食べてみたが塩も胡椒も使ってないので味のしないガムみたいな感じだった。

「ピヨッ」

え？　俺に何かくれるの？　まぁ当然一つ目はメールとして……あっ……わ、わぁい、雀の羽だぁ。嬉しいなぁ。
誰かのメールが着信することなく消えたことを察知しつつ、最近何かのイベントなのかパーティを組まなくなったエムルの代わりに隼を頭の上に乗せる。
差出人は「王我星」……あー、あの例のやたらアクの強い推定小学生の。
内容は要約すると「ゴルドゥニーネの契約者達で集まろう」というモノであるらしい。
らしい、というのは何か洋画の翻訳的な言い回しがしたいのか分からないが「でかい祭りにしようぜ」だの「俺たちが集まりゃスペシャルチームだ、軍隊だって怖かねぇ」だの無理矢理詰め込まれた言い回しのせいでもしかしてどっかにカチコミでもかけるのかな？　という気分になる為だ。翻訳が間違っていないことを祈る。

「集まる、ねぇ……」

そもそもの停戦協定を提案したのが俺である手前、ノーとは言いづらい。だが問題は集合場所が何故か樹海の中って事だ……率直になんで？　という気持ちが大きい。
人目を避けるなら何もモンスターが出現するエリアど真ん中にする必要もあるまい。ああでもサミーちゃんさんみたいな眷属蛇も連れて行くなら人里自体無理なのか……え、なんで蛇連れてく必要性が？　口で説明すれば良くない？

「……あー、こっちがサミーちゃんさんを見せたから、か？」

暫定的に他の「ゴルドゥニーネ」達から見れば一番驚異度が高い一桁ナンバーのウィンプ、そしてその眷属は熱源探知や魔力探知にすら引っかからない究極のステルススネークだ。

俺だってレイドボスさんが透明化能力を獲得しました！　とか言われたらフル武装するわ。いや幕末の場合はむしろ全武装質屋だな……下手に死ぬと持ち逃げ(ロスト)されるし。
そして最終的にレイドボスさん放置で質屋強襲ｏｒ防衛戦が始まって全員レイドボスさんに狩られる。これが幕末という生態系の摂理……俺達は摂理に逆らう草食獣、無敵の獅子に抗う為に角を研ぎ澄ませるのだ。その為なら共食いも致し方ない。

「まぁツノが絡まってる間に獅子に噛まれるオチだけどなー」

人間は本能パラメータを削ってＩＮＴを上げた生物なので動物より本能的にアホなのだ……思考が逸れた、要するに他のゴルドゥニーネ達にとってはある種の自衛なのだろう。
少なくともサミーちゃんさんは姿と気配は消せるが質量は消せない、ぽつんと立つよりは傍に大質量がいた方がいい……のか？
それこそ人通りの多いところかそもそも眷属蛇出禁にすれば良いような……うぅーん？

まぁ小学生（暫定）が集めたならば深く考えるだけ無駄なのかもしれない、そう結論づけた俺はもう一つの問題をどう解決するべきかに思考を費やすことにする。
即ち、あのクソヘタレをどうやって連れ出すか……なのだが。いやまぁどっちかというとサミーちゃんさんを如何にして説得するか、だな。
あの保護者氏が本気でステルスするとマジで見つけられないし……逆に言えばサミーちゃんさえいれば俺が捨て石になってる間にウィンプ丸呑みしてステルスしてもらえば大抵の状況は切り抜けられる。

と、いう旨をサミーちゃんさんにどうにかして伝えることに成功し

た俺はウィンプと一緒に（を連行して）約束の場所へと向かっている……その後ろからはステルス状態のサミーちゃんさんが追随する形だ。

「はーなーしーてー」

「質問：離した場合の行動」

「え、えーとぉ……そう！　やさいのかわむきがあるの！」

バイトがあるんで帰してくださいと主張するユニークモンスターって……。

無駄に勤労意欲を見せつつも、サイナの手で簀巻きにされた上で米俵みたいに担がれているウィンプを半目で眺めつつ指定された場所を探す……

「えー……エルフの里から北西方向の白い木の下……？　いやそんな、街の中から特定の電柱探せみたいな……」

くっ、この絶妙に親切なんだか不親切なんだか分かりづらい感じが……くっ、なんか王我星を罵倒しても俺の格が下がるだけな気がする。

「観念しろウィンプ、安心しろっていざって時は俺が肉盾になる」

「たてもぶきもいらないせいかつがしたいのっ！！」

至言だな、ノーベル平和賞も狙える名言だ。だがここは文明未発達の開拓ファンタジー、盾も武器も持たない奴を自然界の摂理では「餌」と呼ぶ。

「別に表情筋と身体の震えを固めて生意気な顔して座っててりゃいいんだよ」

「推奨：気絶」

「いや流石に起きてないとまずいから」

白目剥いたウィンプをお出しするわけにもいかんだろうよ。傀儡でもなんでもこいつには堂々としてもらわなきゃあならねぇ、考えつく方法としては超至近距離にサミーちゃんさんを配置して安心感を持たせることとか……

「……アレか」

くっ、こんな分かりづれー内容で見つかるわけねーだろとか思ってた手前、恐ろしくあっさり見つかってしまって何とも言えない気分だ。

「さて、覚悟決めろよウィンプ。人も蛇も生存する為に命を張らなきゃいけないシーンがあるもんだ、特にお前なんかはボーッとしてるとお前らの大元のゴルドゥニーネに皆殺しにされちまうんだからな」

「え？」

げ、もう先客いるし。顔引き締めろウィンプ！

斜陽　其の一（後書き）

薄暗い森の中で、君は誰だと昏い顔を見て問う

来たる2020年10月16日（金）に不二涼介先生の手によって実体化したコミカライズ「シャングリラ・フロンティア〜クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす〜」の第一巻がついに発売致します！
同時発売で書き下ろし小説（文字数の上限勘違いして五千字くらい削る羽目になった）付きの「特装版（エキスパンションパス）」も発売しますので是非是非お手に取ってみて下さい！！

◇

そう、ただ純粋に己の好みの展開になるように行動していた。
王我星（オーガスタ）……もとい、綾織（あやおり）　真央（まお）はただ純粋に行動していた。
どこぞのサードレマ特別相談役や、反王政レジスタンスリーダーのように何もかもを掌の上に載せて操るような悪辣で高度なものではない。ゲームとは別の、真央の「趣味」と同じ……またはそれに似た動きをすれば自分好みの展開になると、根拠もなく信じている。
ただそれだけのともすれば幼稚、あるいは純粋な希望的観測。
綾織真央は洋画が大好きである。厳密に言えばマッチョと爆発と重火器と最終的に殴り合いになるようなアクション映画が特に大好きである。そしてフルダイブVRにおいて王我星という筋骨隆々のアバターを使っている通り、ゲーム内において憧れのハリウッドスター（の演じるキャラクター）を真似るプレイスタイルを通して新大陸まで辿り着いたプレイヤーだ。

そんな王我星にとって、「少女と一緒に他の実力者と啀み合いながらも最終的には協力して強大な敵と戦う」というシチュエーションはハリウッドアクション映画好きとしてあまりにドンピシャなシチュエーションであった。
同一存在だとか、何番目だとか、そういう面倒な事はどうでもいい。映画のように動けばきっとなんとかなる。

「つまり今はクライマックス前の準備期間ってことね！」

「まタ意味ワかんないコとヲ……」
そんな王我星の様子を見て、「悪い奴ら」はなんと考えるだろうか？
愚か？　慢心？　浅慮？
答えは簡単。

◇◇

「アンフィ、いザって時ハ全員薙ぎ払イなサイ」
少なくとも、全面的に信用する気などさらさら無い。ゴルドゥニーネ「お嬢」はシンプルな条件付きの殺戮命令を己が眷属である双頭の大蛇に告げた。
サンラクが提案した対あのゴルドゥニーネを目的としたそれ以外のゴルドゥニーネ達による一時的休戦連合。しかしその盟主として立つべきサンラクがテスト勉強という理由でほとんどログインしていなかったことに加え、その代わりと言わんばかりに「仲介」を始めた王我星の半分感情論半分根性論トッピングに楽観視を山になるまで振りかけた甘すぎる見通し。
それは自らの契約者であるシユーにすら全幅の信頼を置かない「お嬢」にとっては論外とも言えるものであり……
「お嬢様、逃走経路は確保しました。仮に戦闘に発展しても僕が時間を稼げばアンフィの機動力で逃げ切れるかと」
「ふゥん……」

「あっ、本当にすいませんお嬢様。今だけはちょっと……」

すっと差し出された「お嬢」のハイヒール（前線拠点で購入したもの、この高慢な蛇が珍しく気に入った）に対しての申し訳なさを限界まで詰め込んだ拒絶。言ってしまえば単なるＮＰＣにリアル以上の感情を向けているシューであっても、最低中学生以下の王我星にそういうのを見せるべきではない、と言う最後の一線はあった。

「マぁいいワ。ソれで……アの……イえ、あノ人間達はまダ来ナイのカしら？」

「の、ようで……かの、いえ彼曰く連絡はついたそうですが……」

しかし、とシューはお嬢のハイヒールに視線を向け続けながら王我星が自慢げに言っていた事を思い出す。

「もう一組来るのでしたか」

「いツまで俯いテるノヨ」

◇◇◇

――遅い。

サンラクからの「徒歩で向かう」のメールからはや十五分。リアルであれば許容できないこともない時間も、ゲーム内で待たされる時間と考えれば中々に堪え難い時間。
案の定と言うか、王我星の忍耐は限界を迎えようとしていた……怒りの、ではない。我慢の、だ。

「ニーネちゃん！」
「ナによ」
「迎えに行ってくるわ！」
「ハぁ！？」

成る程、よくよく考えてみればそもそもこんな樹海の中で待ち合わせているのだから多少遅れるのは至極当たり前のことだ。もう一人のたっての願いでこのような樹海ど真ん中での集まりとなったが、音頭を取ったのは自分なのだからそれに相応しい行動をしなければならない。
言うなればそう……今の自分はゴルドゥニーネ班の「班長」、あるいはゴルドゥニーネ組の「学級委員長」なのだから。
「何もしないなんて、非常識（ヒジョーシキ）よね！！」
だが、彼女は分かっていない。
アクション映画に堪能であったとしても、映像の派手さと主演俳優の活躍しか見ていないからこそ彼女はある「お約束」を知らない。
アクション映画の主役なら問題ないのだ、彼等がそれをやる場合は「ワンマンアーミー」であるからして。

——サンラク達を探すべく集合場所の近辺を歩いていた王我星はがさり、と草むらが揺れた事に気づいた。

「……あラ？」

「あれ、貴女………」

王我星は知らない。

たった一人で不用意に行動することを、世間一般では「死亡フラグ」と呼ばれていることを。

◆

「呼んだ本人がいないんだが？」

「アンたラを探しニ行ったノヨ」

「そんなコッテコテの入れ違いあるかよ……」

流石に簀巻きのウィンプをお見せするわけにもいかないので直前で簀巻きを解いてなんとかそれっぽく格好つけたウィンプと共に集合したわけだが……なにやら立案者である俺より音頭を取っていた王我星の姿がどこにもない。俺の問いに対して、王我星と組んでいるゴルドゥニーネ……ニーネ？　だったかが半目で俺から距離を取りながら不在の理由を教えてくれた。

成る程、だったら下手に動かない方がいいだろう。仮にも新大陸プレイヤーだし、小学生がか弱いのはリアルでの話だ。ゲームアバターという「ボディ」を得た小学生という存在は中々どうして馬鹿にならないとはカッツォの談だ。

危うく格下に負けかけた時って大体過剰にそいつを持ち上げるよな、なぁカッツォ君。

「さて……よう、シユー氏」

無言の一礼、会話する気は無いってか？　よかろう、その寡黙をこじ開ける！！

んー、あーあー、んん゛っ！　ディプスロ曰く「元々そういう声だったと強くイメージすることが大事」だそうだが、俺は変態ではないので声音を別人のものに変えるなんて変態技を使うことはできない……が、こういうのなら出来るんだぜ。

「コッコッコッコッコ……」

「……？」

首を回して顔だけをシユー氏に向ける瞬間、インベントリアから鮭ヘッドを今使っている鳥ヘッドと換装！！

「コケーッ！！」

「ぶふっ！！」

鮭頭から飛び出したリアルな鶏の鳴き真似、サンラク流一発ギャグに二の太刀は要らぬ……一発が全てなのさ。

「で？　そっちのお嬢さんの名前はなんだったかな？」

「…………」

くっ、対ゴルドゥニーネ用の一発ギャグは流石に持ち合わせていないぞ……ウィンプ相手に何度か試したが、根本的に笑いのツボというか感性にズレがあるのかシュールギャグは基本的に通用しないし人間文化にも疎いから落語系もダメだ。

さてどうしたものか……

「……君は、」

「ん？」

「君は……その、彼女と組んで、どうしたいんだい？」

「は？」

いきなり口を開いたシュー氏からの、質問というには少々抽象的すぎる言葉に俺は思わず首を傾げる。だがシュー氏は至極真面目な眼差しだ、単なるロールプレイってわけでもなさそうだし……

「どうしたい、ね………」

その時だった。

「あ、ちゃんと到着してたのね！　入れ違い？」

「王我星、あンタどこま、デ………」

草むらからドヤ顔で現れた王我星の姿を見て、この場にいる誰もが動きを止めた……いいや違う、そうではない。シュー氏は気づいていない、「ゴルドゥニーネ達」は気づいている。

そうか、俺だけが知っているのか。

「……何がしたいか、だったなシュー」

「え？」

シュー達のそばにいた双頭の蛇が全身に力を込めて頭を起こす。王我星の相方であるニーネの手が隠れる長さの袖がまるで内側に何かを仕込んでいるかのような異常な動きを見せる。
そしてウィンプの姿が突如として消失する……いや違う、一瞬見えた牙と口腔は、完全ステルス状態のサミーちゃんさんがウィンプを丸呑みにして隠蔽した事を示している。

「ウィンプのやつと組んだのは成り行きってやつさ、元々の目的はただ一つ」

ニコニコと笑う白い少女が王我星の背後から現れる。楽しくて仕方がないと言わんばかりの様子は、この場に集まった蛇達を本当に、本当に愉快といった様子で舐めるように見回している。

――地面が揺れた。

「サプライズのつもりか？　上等だぜ、奇襲された程度で俺が挫けるかよ」

「……ふフ、フフフフフフフ」

その少女は「ゴルドゥニーネ」だ。

多分王我星は致命的な勘違いをしたのだろう。ニーネやウィンプが戦うべき「敵（ゴルドゥニーネ）」はもっと恐ろしい姿をしているのだろう、と。可愛らしい姿をしたニーネやウィンプと同じ「味方（ゴルドゥニーネ）」なんだろう、と。王我星を戦犯とは呼ばないな、それならどちらにせよ向こうから仕掛けてくるのは無いと勝手に思い込んでいた俺も戦犯みたいなもんだ。

ああそうだ、リュカオーンがそうだったじゃないか。何を勘違いしていたんだ俺は。

ウェザエモンがそうだったから。
クターニッドがそうだったから。
ジークヴルムもそれに近しく。
オルケストラもそうで。
ヴァイスアッシュはＮＰＣと見做していたから。
ユニークモンスターはこちらから挑みにいくものだと、そんな致命的な勘違いを。

笑う。地震のような揺れの中で、真下からの隆起で持ち上げられていく土と大樹を背景に女は笑う。

「さァ、殺シましょう？　全部、全部……そレがセメてもの、私（ワタシ）の優シさ」

地を破り現れる見上げる程の龍蛇（ナーガ）、瞬膜が開けば蛇の眼に宿る圧倒的な殺意が降り注ぐ。

破滅的な崩壊を始めた樹海の中で、ユニークモンスター「無尽のゴルドゥニーネ」は笑い、嗤った。

太陽が、沈んでいる。

斜陽　其の二（後書き）

諦観と絶望からは逃れられない

来たる２０２０年１０月１６日（金）に不二涼介先生の手によって実体化したコミカライズ「シャングリラ・フロンティア〜クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす〜」の第一巻がついに発売致します！
同時発売で書き下ろし小説（文字数の上限勘違いして五千字くらい削る羽目になった）付きの「特装版エキスパンションパス」も発売しますので是非是非お手に取ってみて下さい！！

斜陽　其の三

――産声とは、悲嘆と苦痛の叫び

◆

無尽のゴルドゥニーネ、あるいはこれまであのゴルドゥニーネと呼んできた世界最強の爬虫類。ジークヴルムは多分爬虫類ではないだろう……多分。

「なん、え、何……」

「大ボスだよ！　死にたくないなら、死なせたくないなら死ぬ気で時間稼げ！！」

頼むぜ特務用！　最新鋭たるエアリアルＰＤの銃口を突きつけ、間髪入れずに射撃。幕末仕込みのクイックドローだ、願わくばヘッショでくたばれ……！　だが放たれた弾丸は奴の額に当たるよりも先に虚空から染み出すようにして現れた毒々しい紫の球体が受け止めてしまう……今なんかジュワッて音したな。魔力弾丸の筈なんだが……

「さぁて……アップデートはちゃんとしてるのか？　今の俺は言うなればバージョン５．０６……！」

コンマ刻みで頻繁にアップデートするゲームはワンナウト、アプデ

項目がクソ程長いのはツーアウト、その殆どが修正項目だったらスリーアウト。人生哲学だな、本当に良いものは最初から殆ど完成しているものだ。

あえてウィンプの名は呼ばない。サミーちゃんの完全ステルスはウィンプ陣営の切り札だ、ここから離脱できていればいいんだが……難しそうだな。

「なん、何！？　何なのよ！！」

「体幹立て直せ王我星！　んでもってお前もいつまで這いつくばってんだシユー！　あれが「無尽のゴルドゥニーネ」だ、せめて十分持ち堪えてから死ね！　じゃないと死ぬのはお前らの隣にいた奴らだぜ！！」

さぁてどうしようか、笑っちゃう程に不利だぞこの状況。
地鳴りは止まらず、木々は薙ぎ倒され、馬鹿でかい鱗に包まれたリニアみたいなのがぐるぐると俺達の周りを這いずっているのが遠目に見える……これもしかしなくても包囲されてんな？

「懐カしい不愉快な顔……」

「脂もノリもノッた鮭なんだがな」

無尽のゴルドゥニーネの攻撃パターンはジェネリック剣聖だ。毒を虚空に生み出しそれを変形させて遠隔攻撃を可能とする、遠隔攻撃一つ一つに違う能力を載せられる剣聖と比較して拡張性こそないが攻撃の全てが致死性の毒なので凶悪度はこっちの方が上だ。
以前、ラビッツの地下で戦った時は当時の強さであったとしても俺、レイ氏、秋津茜の三人で挑んで殆ど歯が立たなかったような奴だ……

目の前には無尽の……えーと、ボスドゥニーネが一人。そしてその背後に龍蛇が一体。残る三体は？　特設フィールドの外縁部と化した龍蛇は一体……残る二体はまだ潜伏してるのか？　時間経過で増えるならまだマシだが最悪のパターンは奇襲された場合だ。

「ん？　どうした、随分と兄弟が少なくなってるじゃないか……寝坊か？」

「ふ、フ、ふ……」

遠く、地響き。蛇どもによって木々が薙ぎ払われた事で視界の開けた方へわずかに視線を向ければ、そこには前線拠点方面にニョキっと顔を出した龍蛇……よーっしゃ！　奇襲の可能性半減ァ！！

「へっ、猪口才な真似を……」

「私が、コの手デ摘ンデあげるワね？　私も、私も、オ前達も」

おっと凍えるような殺意だ、だがそんなものはこの俺の燃えたぎる灼熱のモチベーション名前では焼け石に水、重複したバフ、ライオットブラッド飲んだ後にエナジーカイザーってな！！

「野生闘気（ワイルドオーラ）……大猿（コング）！！」

「え、あう、ハ、「ハッスル・ルーティーン」！！」

ここでようやく王我星とシユーもこれが後ろに引けない戦いだと理解できたらしい。三方向からボスドゥニーネを囲むような布陣でそれぞれが戦闘態勢を取る。

「ゴルドゥニーネの攻撃パターンは主にあの龍蛇と毒による遠隔攻撃だ。毒は麻痺付与と猛毒付与の二種類……あと毒が黒くなったら逃げろ、「呪い」が付与される」

「分かった」

「え、なんて、あの……」

すまん王我星、ぶっつけ本番だ。解毒薬を握りしめとけ！！
封雷の撃鉄・災を起動し、一気に加速する。
奴の毒弾は変形するまで何の形の攻撃になるかが全くわからないクソ技だ、覚えている限りでは「手」「剣」「槍」「爆弾」の四つだが……やはりユニークシナリオEXの発生でフラグが進行したのか、展開された毒球は見たことのないパターンに変形した。

「ひっ」

おっと王我星、ホラー耐性は無かったらしい。スプラッタ入ってる系のアクション映画は範囲外か？
毒球からずぼっと両腕が飛び出し、そして球体部分が毒を滴らせながら人間の上半身の形を取る。女性の形をしている……が、下半身のない毒液で出来た人間の上半身が空中に浮いている光景は、控えめに言ってホラーの類だ。ていうか一体一体微妙に造形が違うのはどういう、いやもしかしてそういう……

「チッ」

エアリアルＰＤによる射撃、だが上半身だけの毒乙女達が――――どういう推進力なのかは知らないが――――弾丸からボスドゥニーネを

庇うように射線上に飛び込んでくる。着弾と同時、毒乙女のただでさえ辛気臭い顔が更に苦痛で歪む。

「悪趣味が過ぎる！！」

痛みを受けた毒乙女が憤怒の表情で俺へと殺到する、そんなデス・ハグを食らっても嬉しかねぇよ！
要するに何だ、攻撃反応型のホーミングか！？　触れると破裂する毒爆弾が近距離殺しならこっちは遠距離キラー……！！

「あぶないツチノコさん！」

「いいや、好都合だ」

さらにエアリアルＰＤを撃ち続け、もう片方の手にＦＦ－４５（フィンガーフリック）を展開して射撃！！

「来いよポイズンガール、秒単位でフラグ管理してハーレムエンドにしてやるよ！！」

毒球は基本的にこちらの行動に反応する形で変形する、つまり俺が出現する毒球を全て毒乙女（対遠距離）にして引きつければ他二人に攻撃の目が出る！！
ゴリラオーラとしか形容できない謎のゴリラ型の闘気を纏ったゴリ・サピエンスであることを突然カミングアウトしたシュー氏の細腕（剛腕）がボスドゥニーネへと叩き込まれ——

だが、

「私を、殺スの？」

「っ！？」

「ちょっ」

なんで攻撃キャンセル！？

拳が当たる直前で動きを止めたシュー氏がボスドゥニーネの張り手(ビンタ)でギャグ漫画のように吹っ飛んでいく……そうだね、あの見た目で中身はボス性能だから余裕で岩とか持ち上げるよあいつ。

「チッ……！　王我星！　いつまで突っ立ってんだ！！」

「え、あぅ、あ……」

「動ケないノ？　ふフフ、なンの為にココにいルのかシラ？　いる意味ガアるのカしラ？」

「きゃあっ！？」

使えねぇ、と思わず呟きそうになった口を理性で閉じた事を誰か褒めて欲しいもんだ。フルダイブは要するに思考の世界、油断してると思ってることを全部口にしてしまう。

張り手で吹っ飛んだシュー氏と胸を軽くこづかれただけで木に激突した王我星を一旦忘れて俺は俺で襲いかかる毒乙女への対処に動く。

銃はやはり決定力に欠ける、鋏刀【廻渦白波】を構えて殺到する毒乙女の数と動きをじっと見つめて……数、五。多少のズレはあるが一直線に迫る素直なホーミングだ。

「変則見様見真似(なんちゃって)壬生狼一刀流！」

たかだか五人で幕末志士を止められるかよ、俺の自己ベストは二十五人！！　直線軌道で迫る五人組なぞ朝飯前どころか寝起きに身体起こすより容易いぜ！！

「乱戦貫し（みだれとおし）……天誅カスタム！！」

幕末におけるパッシブスキルの一種、連続攻撃の動きを最適化する「乱戦貫し」を幕末プレイヤー達が勝手に改良した「直線上に多人数が迫ってきた際に全員斬り捨てて駆け抜ける攻めの逃走手段」として編み出したムーブ！！

一体目を大上段に斬り捨て、すかさず刀を逆手持ちに。

そのまま引き抜くように腕を抜き放って二体目を逆手持ちの刃で断つ。

その動きを止めることなく一回転して三体目を横一閃の回転斬りで断つ。

そしてその瞬間に回転を無理やり止め、右手で逆手持ちした刀を支えるように柄尻に左手を添えて……

「〆は団子天誅！！」

押し込む！　四体目を貫き、その勢いのまま五体目の胴体にも刃を埋める。

すなわち団子の如く複数人を串刺しとする天誅の基礎！　団子天誅はこっちが本来のものであって、断じて団子の串を投げて目を撃ち抜く事ではないのだ。

縦に斬られ、斜めに斬られ、横に斬られ、串刺し×2……五体の毒乙女が断末魔と共に形を保てなくなったのか地面にベシャリと落ちて毒の溜まりと成り果てた。

「成る程、爆弾型との違いは個別の体力ゲージか」

ダメージ補正のない【廻渦白波】で削り切れるって事はそこまで苦戦するものでもないが、ホーミングがウザい事に変わりはない。

「さぁどうする？　今の俺はあの時とは違う……言うなればバージョン5．08、今この瞬間に0．02アップデートされた常に最新を行く男……」

「意味の分かラないイ戯言にハ付き合ワないワ……そレに、」

——今から強くなるのはお前だけじゃないわ。

その言葉に俺が覆面の下で眉間に皺を寄せるのと同時……空から何かデカい質量が落ちてきた。見上げればそこには四体目の龍蛇……何故か俺を情熱的(殺意剥き出しの)な熱い眼差しで見つめているが……なんだろう、心当たりがない。

だが問題は恐らくこの四体目が空から落としてきたのだろうモノだ。

「ガ……はっ、ひゅ……っ」

「こ、ン、、に、ち、ワ」

「ヒッ」

大きな質量の方の正体は……首のない蛇の亡骸。龍蛇と戦う中で首を噛み千切られたのか、恐らくヒュドラや八岐大蛇みたいな首が大量にあるタイプの蛇だったのだろうが今となってはただの多頭蛇の

付け根だ。
そしてその蛇の亡骸の近くで地に這いつくばっているものが、こんなモノを上から叩き落とした理由だろう……

「アぁ、嬉しイ……嬉しいワ。これデまた一匹、私が消エる、私な私を、私ガ！！」

無尽のゴルドゥニーネ。尽きる事なく「ゴルドゥニーネ」が増え続けるなら、とっくに新大陸はアルビノ美少女で埋め尽くされているだろう。
何割かは自然環境の礎となったのかもしれない、だが何かしらの生き汚なさを持つゴルドゥニーネがこうも数が少ないのは何故か。

「さヨなら、不愉快ナ私」

「待ッ――――」

ボスドゥニーネが哀れな「ゴルドゥニーネ」の頭に乗せた手からどす黒い毒液が溢れ出す。恐怖の表情も、命乞いも、あるいは断末魔の嘆きすらも悍ましい毒の中に消えていく……
ぐじゅ、とおおよそ健常な肉体から出るはずのない音が黒い毒の中から聞こえてくる中で、もはや隠すことも忘れて恐怖に引き攣ったこの場にいる二人のゴルドゥニーネに恐るべき蛇は笑う。

「次ハどっチにしよウかシラ？」

斜陽　其の三（後書き）

・同族喰らい
禁忌。況（いわ）んや、己が己を喰らうなど。

ついにコミカライズ「シャングリラ・フロンティア」の第一巻が発売致しました。大魔道士級（ウィザード）漫画家である不二涼介先生によって極めて高品質に出力されたコミカライズシャンフロの世界を、皆様もぜひお手に取ってみてください

斜陽　其の四（前書き）

震えたチワワがお送りする更新

――混濁と混乱の中で、もう何も分からなくなった。

◆

知らないゴルドゥニーネが死んだ。一連の流れから得られた結論は大体これに尽きる、だがその後に起きる事は完全初見の領域だ……！

「ふふフフふふフ！！」

高笑うボスドゥニーネの足元に広がる黒い毒が奴の脚から這い上がって全身へと広がっていく。その殆どは奴の身体へと染み込んでいったが、一部の毒は服に染み込んでその色を漆黒へと染め上げていく。

「ハッ、喪服かよ？」

「………」

不味いな、前は煽りに引っかかるくらいには会話が成立してたはずなんだが今のボスドゥニーネは何言っても効果が無いように見える。いや、視線がこっちに向いている辺り、聞いてはいるんだろうが……おっと龍蛇が突っ込んできた。

「よっ……と」

どういう原理か、龍蛇は地面に勢いよく突っ込んでも激突する事なくそのまま地面へと水のように潜ることができる。そういうところをいちいち気にしてたらボス戦なんて出来ないので原理はどうでもいい、重要なのはこの攻撃は地面からのカチ上げも含めた二連続攻撃って事だ……だが！

「動きを止めないとか図体以外は泥掘り(マッドディグ)の劣化だぜ……！」

ああ懐かしきナマズサメモグラ、思えばお前と超絶クソバード(トキシックイーグル)の経験があったからこそ俺は三次元的機動のルートに進んだのかもしれないな。

とはいえ今の俺は「逆位置(オーバーフロー)」のせいでスキルを脳死でぶっぱすることが出来ない。だが過剰伝達の特殊状態があるのである程度の速度はスキル無しで確保できる。

龍蛇のサイズから大体の即死範囲を割り出し、離脱した次の瞬間には地面を食い破って現れた龍蛇の巨体が眼前を昇り竜の如く通過していく……クソが、現時点で二体の龍蛇がフリーで襲ってくるのにプラスで本命のボスドゥニーネをどうにかしろってのか。

「さぁて……どうしたものか」

ぶっちゃけると、この場から逃げるだけなら極めて簡単なのだ。二号人類(プレイヤー)は死ねば直前にセーブした場所からリスポーンする、ボスドゥニーネに倒された場合はなんらかのペナルティか「呪い(マーキング)」が付与されそうだが人一人死ぬなら全力で舌を噛めばいい。

だがそれはあくまでも「プレイヤーだけがこの戦闘から離脱する方法」だ。ここにいるプレイヤーは全員が「契約したＮＰＣ(ゴルドゥニーネ)及び眷属のＭｏｂ(蛇)」と一緒にいる、こいつらも同時に逃すとなるとその難易度は飛躍的に跳ね上がる。

俺の場合はまだいい、サミーちゃんさんのステルスは最高峰だ。少なくとも熱源探知や嗅覚探知も潜り抜けるのでウィンプを抱えて逃走に成功した時点でどこかに息を潜めているはず……少なくとも明確にターゲットとして狙われる可能性は少ないだろう。
次に王我星と一緒にいたゴルドゥニーネこと「ニーネ」。今にも泣きそうな顔で蹲っているので戦力としてはほとんど期待できないが、他との差別点は眷属のサイズだ……あの時折服の裾から顔を覗かせてる小さな、というか一般的なアオダイショウとかサイズの蛇が眷属であるならば彼女の「総重量」は小柄な少女一人分ということになる。

「…………」

問題は……シュー氏と契約しているゴルドゥニーネ「お嬢（様つけるの？）」とその眷属である中型トラックくらいある双頭の大蛇だ。あれを逃す方法はただ一つしかない、それはボスドゥニーネを撃退すること……そこらへんシュー氏はわかっているのか？
世の中には美女美少女をぶん殴ってでも進めないとバッド方向に分岐する選択肢なんて吐いて捨てるほどある。怪物的な形態になってくれると躊躇いなくフルスイングできるんだが、ボスドゥニーネが巨大ラミア的モンスターになる気配は今のところなさそうだ。

「いつまで呆けてるんだシユー！　そして王我星！　ここで俺達が負けたらそこの二人が次のおやつだぜ！！」

「っ！」

「そ、そうだった……！」

俺も俺で早いところこの場にいる面々を包囲するように這いずり回

る円周の龍蛇を殴り飛ばさなきゃいけないってのに……！　不利すぎて段々笑えてきたぜ、楽しくなってきたじゃねぇか…………！！

◇

必ず勝つ方法を知っているだろうか。否、厳密には勝利する方法ではなく……絶対に負けない方法を知っているだろうか。

彼女は知っている、だから今まで勝ち続けてきた。

「……やバいわ、コッチも逃げラんナい」

「いいんだよイスナちゃん、逃げなくていいの。だから静かに……ね？」

「ケっ、相変わラズこうイう時ハ落ちツいてヤがるワね」

敗北とは勝利から最も遠い場所にあるものだ。勝利という「盤石」が崩れ落ち、己の身が危険に晒された末に勝利から一番遠のいた者に押される烙印……それこそが敗北。

であれば危険から遠のき、揺るがぬ安定を堅持し続けたならば敗北が自分に近づいてくることは絶対に無い。

小学生の頃にこの素晴らしい真理に気づいた彼女は、以来リアルでもゲームでもこのスタンスを貫き通してきた。

リスクは限界まで避け、アドバンテージを維持して良いところだけを掻っ攫う。

あるいは彼女をハゲタカと揶揄する者もいた。だが彼女は心の底から一切の疑いなくこう返す。

――誇り高く餓死するライオンより、満腹のハゲタカの方が当たり前に優れてるよね？

「あのね？　私とイスナちゃんの力を合わせれば怪獣みたいな蛇にだって私たちの事は絶対にバレない。ね？　今までだってそうだったでしょ？　ね？」

「…………」

「ただ死ぬだけじゃ持ってる武器しか落とさないもんね？　だったら……」

ギリギリまで追い詰められた瀕死の「彼」を自分達でトドメを刺す。
龍蛇によって包囲された円形のフィールドの一角で、全プレイヤーの中で最も罪深き（カルマ値の高い）プレイヤーであるヒイラギはこの極限環境の中で絶対の安心感と共にじっと黒い雷光と共に駆け回る半裸のプレイヤーを見据えていた。

斜陽　其の四（後書き）

リスクを避け、アドバンテージを維持し続ける
言い方を変えましょうか
辛いことは他人に任せて、良いところだけ自分が持っていく
と言います

斜陽　其の五

——覗き込んだ水面に映っていたのは本当に自分だったのか？

◆

シュー氏と王我星が再起動した事でなんとかパーティ戦の形だけは整ったわけだが……成る程、ヤバい。

「ぐあっ！」

「きゃあっ！？」

「オーエムジー……」

この二人が弱いというわけではない。役に立たないわけでもない、ただ……どっちも多少のダメージを許容してひたすら前に突撃するタイプのプレイヤーであるが故に、多少で済まないダメージを叩き出す巨大龍蛇を従えるボスドゥニーネとは致命的に相性が悪すぎる！！

くそう……ヒーラーが、切実にヒーラーが欲しい。近辺を通りすがりの火酒夏(カシューナッツ)が歩いてたりしないか！？

「クッソ……大体お前はしっつけーんだよ！！」

口を大きく開いて俺はと突撃してきた龍蛇を回避しつつ、先程から

ひたすら俺から視線を逸らさない蛇眼にエアリアルＰＤの弾丸を叩き込む。だが放たれた一撃は眼球を守るように閉じられた瞬膜に弾かれ、ますますそれが癪に触ったのか電車も丸呑みにできそうな動体が俺を轢き潰そうと猛進する動きに蛇行の揺れを入れて巻き込もうとしてくる。

なんなんだこいつは、なんでこいつはひたすら俺を狙ってくるんだ。ボスドゥニーネを狙う狙わない関係なく何故かこの個体だけひたすら俺を狙ってきやがる。

いやマジでなんなんだ、ヘイトを分担してコントロール出来ているとは言い難いがそれにしたって俺だけを狙いすぎている……まさか、私怨か？　ボスドゥニーネが俺にヘイトを向けてるから俺だけ狙う個体がいるのか！？

「チッ……」

……どうしたものか。

一瞬だけ上空に視線を向けつつ、徐々に追い詰められつつある戦況をどう動くべきかを考え続ける。そもそものＳ評価はなんだ？　ボスドゥニーネの撃破か？　それとも他の「ゴルドゥニーネ」の生存？　あるいは自身が契約する個体のみの生存？

剣聖よろしく遠隔で飛んできた毒の剣を首を捻って回避、さらに地面ごと俺を齧りにきた龍蛇の頭を踏みつつ距離を取る。こいつをなんとかしなきゃおちおち他のパーティメンバーに合流することもできやしない。

これがボスドゥニーネのみであれば俺がしんがりを務めて他の面子はゴルドゥニーネを連れて逃げる、って択も取れたんだが龍蛇が文字通り立ち塞がっているのでどうしようもねぇ。

「どうする？　どうする！？」

選べる選択肢そのものは見えているが、どれをどう選ぶべきかで踏ん切りがつかない。

・俺だけ逃げる。

成る程冴えたアイデアだ、一番手っ取り早いしなんなら他のゴルドゥニーネも減らせて得しかない。とはいえ最終的にボスドゥニーネを倒すためにゴルドゥニーネの頭数が必要だとしたら詰みになり得るしプレイヤー二人との友好度が下限振り切ってマイナスまでいくだろう。

・極力他のゴルドゥニーネも逃がす。

難易度が一気に高くなった、シンプルに中、高校生の女子二人を担いで逃げると考えればその難易度は推して知るべし。少なくともプレイヤーは命を捨てる前提と覚悟で動かないとダメだろう……

・ボスドゥニーネを倒す

正直……無理じゃねぇかなって、俺だって伊達にユニークシナリオEXをクリアしてない。だからなんとなく分かってきた、ユニークモンスターに関するEXシナリオは横着が利かない。こんな奇襲イベントで決着するとは到底思えないのでよくて撃退ってところか。

「…………」

ここだけの話、ボスドゥニーネとエンカウントした直後のタイミングでサイナが上空で待機している。

もしもの時は上から牽制するつもりだったのだがやってきた「もしも」が想定の八倍くらいデンジャラスだったのでまだ何をどう対応するのかの指示を出していない。

変わらず辛気臭い顔でホーミングしてくる毒乙女の額に弾丸を叩き

込みつつ、即座に武器を切り替えて何度目とも知れぬボスドゥニーネへの接近を試みる。
だが二匹減っても残り二匹の龍蛇がいる、しかもその内一匹は俺専属で殺しにかかってくるっていうね。おちおち他の二人に合流もできないし、それ抜きに向こうも残る一匹の相手をさせられているので完全に分断されている……ならば！！
「加速の時間だ」
今こそケチり続けてきたスキルを使う！！

◇

——そのＮＰＣは言葉を持たない。
そも人間にあらず、人型にあらず。
手足を持たず、武器も握らず。
蛇の乙女達の物語において、彼女達の「武器」として定義された存在。
「サミーちゃん！　サミーちゃん！！」
——想定外だった。
そもそも勘違いしていたのだ。

サンラクが「ボスドゥニーネ」と呼ぶ個体が従える巨大な蛇の内の一匹、その巨体を円周に蜷局（とぐろ）巻く事で内と外とを隔てるバリケードのように振る舞う個体。
その行動原理が「中にいる者を逃がさない」事であると誰もが勘違いしていた。だがそれは厳密な正解ではないのだ、正確には「外に逃げようとする者をブチ殺す」事こそがこの蛇の目的なのだと。
龍蛇（ナーガ）と暫定的に呼称される大蛇だが、当然正式な種族名が存在する。その名は「裂食の大蛇（ブラスティウム・スネーク）」、振動や衝撃に反応して自身の鱗を弾丸の如く炸裂発射する鱗飛ばし（スケイル・ショット）の機能を備えた攻撃的な種である。

「やだ、サミーちゃん……そんな……！」

地面を毒で溶かして地下から包囲を抜けるつもりだった。だが「ゴルドゥニーネ」を殺すことに特化し、肥大化し続けてきた蛇殺しの蛇による全力の警戒の前では気配を読み取れずとも振動だけで大まかな位置を補足することができる。

――命が零れ落ちている。

全長をキロメートルで表記できるほどに巨大な蛇の鱗は、もはや凶器という言葉すら生ぬるい質量兵器だ。
狙われた者が気配すらも完全に隠蔽する透明であったが故に致命傷こそ受けなかったが、しかし左眼と身体の四割を抉り裂かれた。
「彼女」のステルス能力は鱗と眼球を覆う瞬膜に作用する、即ち鱗が剥がれ肉が露出するようなダメージを受けるとその部位は透明にはならない。極めて優れた隠密性故に剥がされたアドバンテージはともすれば命を失う以上の致命傷だ。

「だいじょうぶ、だいじょうぶよサミーちゃん……きっと、きっと

あいつならなんとかしてくれる……」

——目が合った。

大粒の涙を溢しながら、僅かに残った希望に縋る主（あるじ）……ではなく。
蜷局を巻いているが故に円周運動を続ける龍蛇の目と、だ。

「…………」

「…………」

小手先の浅知恵で我が封鎖を逃れようとした愚か者への嘲りと、共に同じ起源を持ちながらも敵対し命尽き果てんとする同胞への憐れみ。
僅かな視線の交差、だがその一瞬がこれまで逃げ続けてきた蛇の……否、逃がし続けてきた蛇の目に燃え盛る光を宿した。

「サミー、ちゃん？」

最悪の結末が近づいている、それでも最善まで逃げ切るにはどうすればいいのか。
死にかけた蛇は僅かに迷い、そして結論に至る。

——己が「使命」は主を生かすこと、そして主にとって善きものを活かすこと。

「ねぇ、どこにいくの？　ねぇ……ねぇ！　まってサミーちゃん！　やだ！　やだやだやだ！　おいてかないで！　ひとりにしないで！　いかないで！！」

最低最悪の結末から主を逃す為、最高ならずとも最善を成すべくゴ

ルドゥニーネ「ウィンプ」の眷属たるサミーちゃんは動き出した。

斜陽　其の五（後書き）

手足が無くても生き足掻く事は出来る
今日を照らすために魂を燃やせ、せめて明日まで続く道が見えるように
と願って

——痛みに叫び、彼女の許へ。臓腑を食い破るそれの名は、

◆

「だぁぁぁぁあ！！」

踏み切った！　踏み込んだ！　もう後戻りはできない、この一瞬に全暴力を叩き込む！！

これまで封じ続けてきた加速力を封雷の撃鉄・災で更に強化して一気に攻勢に転ずる。止まったら死ぬと思え、マグロの如き前進を！

龍蛇の攻撃は確かに脅威だが巨体故の「隙がデカい」という宿命からは逃れられない。やたらに俺を狙う龍蛇の攻撃を空中ジャンプを用いた跳躍で回避し、巨体を足蹴にボスドゥニーネまでの距離を一気に詰める。

「ふふ、フフふフフ！！」

何がそんなに楽しくて仕方がないのか、吠え面かかせてやるぜ。

こちらに殺到する毒爆弾を、起爆するよりも早く駆け抜けて回避。

残り３メートル、空中に生み出され振われる毒剣のスイングスピードよりも速く駆け抜けて！

「凹めやオラァ！！」

俺はそれがボスキャラなら美女も子供もぶん殴ることを躊躇わない、致死圏の悉くを速度だけで突き抜けて辿り着いたぞボス眼前！！

装備は煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手を選択、もはや出し惜しみはしない。顔面に直接「超排撃」を叩き込む！！

「【超過（イクシード）――――――】！！」

「私が、私が！　私を！　私を！　殺して、踏みつけて！」

はぁあ、と狂ったように笑うボスドゥニーネの吐息がやけにはっきりと聞こえた。そして、渾身のストレートがボスドゥニーネの顔面に触れるよりも先に、籠手にしがみつく毒色の乙女…………さっき見た顔だ。

「あァ、私ノ足音が、増えテいくワ………尽きせぬ私は、どレほどニ……ああ、アァ、殺すホどに、私は後悔ヲ、重ねテ……【私は百の顔（ケントゥリオ）を持つ】！！」

魔法か、それとももっと異質な何かか。一つだけ言えるのは……その宣言をトリガーに、あるいは泣いているようにも見えるボスドゥニーネを爆心地（グラウンドゼロ）として視界を埋め尽くさんばかりの完璧な全身を備えた毒乙女が大量に生み出された。

「く……！！」

人を圧倒する一番簡単な方法は質量で押し込むことだ。横綱だってアクセルベタ踏みのトラックと相撲して勝てるはずもなく。

全方位に放出するように生み出されたとはいえ、俺を押し出すよう

に十数人の毒乙女……いいや、もはや確定だろう。
このボスドゥニーネに食われ取り込まれた他の「ゴルドゥニーネ」の成れの果て、それがシンプルな質量として俺とボスドゥニーネとの距離を引き離してしまう……！！
「クソがぁあ！！」
スキルの効果が切れ、リキャストタイムは遠く。今の俺にできることはしがみついてきた毒乙女を引き剥がし、解毒アイテムを使うことだけだ。
「どう見ても五人六人で攻略するコンテンツじゃねぇ……！」
ジークヴルム系だろテメー！　ふざけんな！　超大規模レイドモンスターが奇襲仕掛けるとかド級のクソじゃねぇか！！　ｔｉｐを出せｔｉｐをよぉ！！
「シユー！　王我星！　もうどうにもならねぇ、全力で自分とこのゴルドゥニーネを逃がす努力をしろ！！」
叫ぶ言葉は、しかし狂ったように笑い声を上げる毒乙女達の大合唱によって二人のプレイヤーへ届くことはない。さながら口裂け女のように頬まで引き裂けた口が織りなす笑い声は聞いてるだけで頭がおかしくなりそうだ。
視線を僅かに向ければ、大量の毒乙女に囲まれた王我星とシユーがなんとか足掻いているのが見える。
「これは……」
クソみたいな敗北の風景だ。毒乙女の引き裂けた口から覗くカミソ

リのような「歯」を何に使うかなんて言うまでもないだろう。
――王我星と組んでいるニーネの右腕が食い千切られた。
アバターの厳つさで隠せる限界を超えて泣きべそをかいている王我星ががむしゃらに武器を振っているが、ただでさえ大振りな武器を雑に振り回しているだけの「わるあがき」を食らってやるほど甘いＡＩではないらしい。
――シユーと組んでいるお嬢の両脚が食い尽くされた。
それを見たシユーが完全に動きを止め、今毒乙女達に飛びかかられて見えなくなった。あそこの陣営は集まった中では一番サイズのでかい双頭の蛇がいたはずだが、その姿はどこにも見えない。
強いて言うなら数十人の毒乙女が積み上がった山が見えるが中核には何があるんだろうね、尤も掘り起こしても骨すら残っちゃいなさそうだが。
そして俺も、十数人の毒乙女に囲まれて絶体絶命ってところか。
スキルのリキャストは未だに一つも終わっていない、逆位置があまりにも恨めしい。この愚者（クソポンコツ）め、次あのアーカヌムとかいうジジイが出てきたら右ストレートを叩き込んでやろう。
だがその前に……
「サイナ、やれ」
「認証：閃光爆撃開始（スタンボンバ・スタート）」

数秒経過、毒乙女達が俺の身体に牙を突き立てる寸前の寸前……広範囲に投下されたスタングレネードが一斉に起爆し閃光で全てを埋め尽くした。

「サイナぁっ！　腕一本と脚二本だ！　気合いでやれっ！！」

毒乙女にただ場当たりの対処しかしていないとでも思ったか？　奴らは全身毒で出来ているが、動けば首を動かし目を動かす。そして目潰しするとホーミングが不発する……つまり奴らには視力があり視覚があるってことだ。

「了解・積載超過を無視して実行します……御武運を」

「任せとけ、半日は生き延びてやるよ」

上空からスタングレネードによる広範囲爆撃を実行したサイナが猛スピードで地上へと降りてくる。そして傷口から夥しい量のダメージエフェクトを吐き出す二人のゴルドゥニーネを乱暴に抱えて無理矢理飛翔した。

ウチの陣営のゴルドゥニーネはさっさと逃げちまったからな、これは相方としてのせめてもの詫びだ。だからすまんな王我星……まだ息があるようだがここで死ね。

「さぁて、タゲが減ったからヘイトも集めるってな……」

ケントゥリオとか言ってたし、おそらく百人くらいいるのだろう毒乙女に未だ無傷の龍蛇……そしてボスドゥニーネ本体。俺が死ねば契約しているサイナは自動的にインベントリアに逆戻りになる、であればここから前線拠点までの距離と移動時間を考えて最低でも三十分は生き延びなきゃいけないわけだが……

「早速チェックメイト食らいそうだ」

数が多すぎる、サイズがデカすぎる、そしてあまりに強すぎる。質も量もなにもかもで負けているこの状況、果たして何分足掻けるか……

それでも生き延びるべく、俺は煌蠍の籠手を構えて身体の色とガチンガチン言ってる牙を除けば見目の良い少女の姿をした毒乙女に抗うべく……

その瞬間だった。

「は？」

毒乙女がボウリングのピンよろしく、横から突っ込んできた何かに弾き飛ばされた。そして、視線を向ければそこには口を大きく開けた重傷の蛇が俺を飲み込まんと……

待て、マジで待って、ポーズ機能はどこだ。なんでここにいるんだサミーちゃんさん！！？！？

斜陽　其の六（後書き）

王我星は年齢的に表現規制があるのでマイルドな表現にはなってるけどそれでもニーネの腕が無くなったのは誤魔化しようのない事実です

斜陽　其の七

——私の亡骸を辿り、穴を辿り、私は初めて空を見た。嗚呼なんて美しいのだろうか……それに比べて、私はなんて醜いのだろう。
飛び散った苦しみの感情、私より先に何人逃げた？　八、それとも九人？　私の中に残ったのは嫌悪と絶望、そして………

◇

最善とは、当然ながら主の無事に他ならない。自分がその役目を全うできない以上、他の誰かにそれを託すしかない。
ではその役目を任せられるのは誰か………きっとそれは、主の世界を広げてくれた者達しかいない。
白蛇のＡＩはモンスター用のものであり……同時に何割かＮＰＣとしてのものが適用されている。人間ＮＰＣ程の真に迫った感情表現や演算能力こそ備えないが、簡単な損得計算や脅威の認識程度ならば可能だ。

「ちょっ、サミーちゃんさん！？　何を……ちょっ、出せって！！」

白蛇は知っている。
この人間は確かに頼りになるが、すぐに死ぬと。
白蛇は知っている。

この人間に付き従う人のような石のような者（サイナ）こそが、主を生き延びさせるにふさわしいのだと。
白蛇は知っている。
この人間が死ぬと、あの石のような人間？　も消えてしまうのだと。

「ていうかなんでここに…………いや待て、ウィンプは？　口の中に俺しかいないってことはウィンプはどこかに置き去りということで…………」

ではどうすればいいのか。何をすればいいのか。何を成し遂げればいいのか。

「ああもうそういうことかよマジかよクソかよ！！　聞こえるかサイナ！！　想定外だ、ウィンプが離脱に失敗した！！　インベントリア内の何使ってもいいからどっかに置いてきぼり食らってるウィンプも担いで離脱しろ！！！！」

――正解。
口の中で叫ぶ人間が己の望む「最善」に辿り着いたことに喜びを感じながら、白蛇はがむしゃらに突き進む。

「――何ヲ、するツもりかしラ？」

白蛇の尾に何かが食らいついた。力任せに振り払えば何かと一緒に尻尾の感覚も飛び散った。
生かさねばならない、この人間を生かせばそれだけ主が助かる。あの石のような人間が主を連れて人間達のいる場所までたどり着けるように。あの石のような人間が消えて、主がひとりぼっちになってしまわないように。
血を嗅ぎつけて主に似た主ではない姿をした毒が透明になった己の

鱗へと食らいつく。振り払う度に肉が削げ、痛みが熱を奪っていく。
だがそれでも、それでも前へと進む。木々を避け、少しでも長く口の中の人間を生き延びさせるために――――！！

◇◇

「よくわかんないけど、逃げられると面倒だよね？　ね？」
「知ラないわヨ」
「そうなんだよ？　だから……ね？　イスナちゃん…………撃って」
「はイハい…………頭、そこデショ？」

◇

――目が、見えなくなった。
直後、何かに頭から激突した。

◆

「うぉあっ！？」
がごん！　と凄まじい衝撃で若干俺の体力が削れる。まさかサミーちゃんさんの口の中で死ぬわけにはいかないと回復していると、いきなり口の外へと吐き出された。
「一体何が……って、」

何がどうなってるんだ。
目の前のサミーちゃんさんはもう、絶句する程に無惨な姿に変わり果てていた。全身からダメージエフェクトが噴き出し、無傷な場所を探す方が難しい。
身体が縮んだのかと錯覚するが、事実は尻尾や身体の一部が物理的に無くなっているから。
何よりも、頭部が……なんなんだこれは、一体何をどうされたらこんな酷いダメージを受けるんだ。いっそ袋叩きにされた方がまだ綺麗さっぱりミンチになれる。

「くっ、待てサミーちゃん。回復アイテムならインベントリアの中に腐るほどある……！」

エリクサー、そうだエリクサーだって常にストックはあるんだ。クソだ、誰だよインベントリアにアホほどアイテム詰め込んだのは！！

「…………」

「待て待てまだ死ぬな食いしばれサミーちゃん、焦げた肉の塊になった〝傷だらけ〟だって全回復したんだから両目が抉れてたって誤差だよ誤差……！」

あった！　ミスティックソーマ！　愛してるぜエリクサー！！

「よしサ――」

苛立つ程に出現が遅く感じるアイテムの瓶を握り潰さんばかりの力で掴んだのと、逆の手に冷たい鱗が触れたのはほぼ同じタイミングで。その感触が、ほんの僅かに俺の動きを止めてしまった。

「〜〜〜〜〜っ！」

もはや目線を動かすよりも先に回復アイテムを掴んだ右手をフルスイングでサミーちゃんの方へと投げつける。

だが、追いついた目線が見たものは地面にぼとりと落ちた牙二つと皮三枚……そして、地面に落ちて割れた回復アイテムだった。

「………………」

……………意識加速スキルがリキャスト終わってたら間に合ったかな。

「あラ、もう終わリ？」

笑い声が重なって響く。毒乙女共が歪な笑みを浮かべ、刃の歯をガチンガチンと鳴らしながらこちらへと近づいてくる。それらを統べるように、一番後ろにいるはずのボスドゥニーネの声がやけにはっきりと聞き取れた。

「ああ……そうだな、逃げるのは終わりだ」

「そウ」

いやはや全く、ＮＰＣってのは死んだら替えが効かないってのにこんなはーほんとどうしようもねぇなクソクソクソ。何がクソってシステム以上に俺の事だよさっさと逆位置の攻略しときゃよかったんだ。

「何がボスだ、体力は幾つだ？　装甲は？　上等だよ三日三晩かけてでも全員体力ゼロまで削り切ってやるよ！！」

味方無し、敵は無尽、肝心な時に邪魔にしかならねぇアイテムは山のようにある。武器？　無くなったら素手で殴ればいい。よーし上々、最低目標殲滅！
煌蠍の籠手を装備、全員殴り倒してボスドゥニーネの顔面に超排撃を叩き込むだけの簡単なお仕事。龍蛇が対応する前に近づけば単なる動くステージギミックだ。

「さぁ行────」

「もらった、ね？」

この場所で、人の言葉を話せるのはもう俺とボスドゥニーネだけ……の筈だった。
だが、なんの気配もなく声だけが響いた背後を確かめるよりも早く……
何か、肉厚の刃が俺の首半ばまで突き刺さった。

斜陽　其の七（後書き）

・シャンフロ豆知識

ＮＰＣ、及び特定の個体として登録されたモンスターは死亡判定が確定すると二度と復活することはない。

斜陽　其の八

――私が私（あなた）で有る限り、私（あなた）は私でしかないという諦観。
私のような私（あなた）は、この美しい世界から悉く死に去らねばならない。
私は水面に映る私（あなた）にそう誓った。

◇

最上位職業「隠の大地（ステルスフォース）」。
レンジャーから派生する自然環境における潜伏、奇襲に特化した職業である。
固有スキルとして「大地讃頌（ガイアフォース）」を備え、使用することで戦闘中の地形に応じた強化効果を得ることができる……が、この職業の本命は就職する事で多様なステルススキル、及び魔法を習得できる点にこそある。

その中の一つがスキル「ステルスアサルト」、戦闘開始時から最初の一回目の攻撃はあらゆるヘイトを受け付けない。シャングリラ・フロンティアにおいてモンスターからの注目を意味する「ヘイト」は、厳密にはプレイヤーにもある種の気配として認識される。
それを受け付けない、ということは視界に入らない限りは絶対に気付かれないということだ。

だが、逆に言えば視界に入ってしまえばプレイヤーには認識される。
そこで彼女が持つ不世出の奥義（エクゾーディナリー・スキル）「隠閉巧索（カモフラージェン）」である。
エクゾーディナリー・モンスター「ステルテラー・カメレオン」〝隠（カモフラージェン）

蔽工作〟」の撃破で獲得可能なスキル、「隠閉巧索」は発動してから一度目の攻撃を命中させるまでプレイヤーの姿を物理的に透明化させる。
気配を消し、姿を消す。これこそがプレイヤーキラー「ヒイラギ」を無敗のＰＫｅｒたらしめる初見殺しコンボである。

新大陸大樹海、正式名称「ペンヘドラント大樹海地帯」は単なる樹海ではない。この樹海には大樹の根本から地下の小空洞（隠しエリア）に行くことができる穴が各所に点在する。
王我星を唆してあらかじめ指定したこの場所には、ヒイラギだけが知っている隠しエリアがある。
そこにゴルドゥニーネ「イスナ」と共に潜伏していたヒイラギは、ユニークモンスター「無尽のゴルドゥニーネ」の乱入という想定外の事態に陥りつつも、穴の入り口からイスナに狙撃させるなどのちょっかいをかけつつ、ついに行動を開始した。

スキルによって完全なステルスを実現し、サンラクを後ろから急襲する。普段は奇襲を仕掛けてから即座に次の行動へと移るのがいつもの手口であった。
だが今回はボス戦の最中に行うプレイヤーキルだ、無尽のゴルドゥニーネに襲われる前にサンラクが落とすアイテムを回収しなければならない。
幸い、サンラクというプレイヤーは何をとち狂ったか半裸に覆面しか装備していない正気を疑う変態野郎だ。首にクリティカルを入れてやれば即座に死ぬだろう。

「ふふふふふ……」

通報しないでやる自分はなんて優しいのだろう、とサンラクの首に叩き込んだ手斧（トマホーク）を引き抜いたヒイラギは……

「誰だてめー」

一切の躊躇いなく腹に叩き込まれた鉄拳によって勢いよく吹き飛ばされた。

「うぎっ………げほっ！」

「なんなんだ？　今のは……てめー、プレイヤーキラーか？」

（なんで、生き……幸運！？）

ステータスに存在する幸運パラメータは一定数値を超えるとパッシブで発動する恩恵がある。
例えば自傷ダメージでの死亡防止、そして死亡するダメージを受けた際に確定でＨＰ１で持ち堪える食いしばり効果である。

「外から入ってきた……？　いや違うな、てめー……ずっと潜伏、して……やがった、な？」

「ひっ」

ふざけた鳥の覆面の下から、ギラギラとした眼差しがヒイラギに突き刺さる。尋常な目ではない、ヒイラギはこのプレイヤーが頭のおかしいやつだと判断した。

（殺しきれなかった！　死にきれなかった！　イ、イスナちゃんは何してるの！？　また芋ってるの！？　もぉーっ！　役立たず！役立たず！　芋頭！）

どうして自分が追い詰められなければならないのか。
それはヒイラギが背後から不意打ちで首に手斧を叩き込んだからに他ならないのだが、ヒイラギの人生哲学においてはヒイラギの行動は全てが「善」として肯定されるべきものであり、否定するすべては「悪」である。
怒っているわけでも錯乱しているわけでもない、ただ真っ直ぐにヒイラギを見つめている眼差しはヒイラギの全てを否定している。

「誰だか知らんがとりあえず殺す」

「ひぃ……！　最低！　鬼！　悪魔！　ゲームだからって最低限のモラルもないの！？」

「……、……？　……？？？」

その瞬間、サンラクの動きが止まった。
それはあの頃に近いメンタリティになっていたサンラクをして「えっ、この人どの口で今のセリフ言ったの？」というあまりに常識的な疑問に自分なりの解決を見出せなかったからである。
あるいは、本当にあの頃であったのならば人の命乞いなど豚の鳴き声と同義、と止まることはなかったかもしれない。だが陽務楽郎（サンラク）はあの頃から成長し、大人に近づいた。そして分別をより強固なものとし……孤島で生き延びるには、あまりにも錆び付いていた。

だからこそ、

「命乞イは無くテいいノネ？」

「ご、ぁ………っ！？」

既に射程距離まで近づいていた無尽のゴルドゥニーネが放った毒の剣がサンラクの胴を貫いていた。

「クソ…………」

奇跡は二度起きない。もしそれを起こせる者がいたとしたらそれは「勇者」しかいない。
今度こそ砕け散ったサンラクの姿を見て安堵しつつ……ヒイラギは既に自分が絶対の安全からはかけ離れた状況にあることを思い出す。

「…………？」

「あ、あのぉ……わ、私は何もしないしすぐ帰るから………ね？」

「駄ぁー目、ネ？」

何か言うよりも先に、ヒイラギの顔面に毒の爆弾が叩きつけられた。

――そうして、プレイヤーは皆殺しにされた。
「私に逃げラれちゃったワネ？　ふふフ……嗚呼、不愉快だワ」

……

…………

…………

………………

無尽のゴルドゥニーネが去り、未だ獣達は無尽の蛇による暴虐に怯え近づかない場所がある。

木々は無惨に薙ぎ倒され、大地は度重なる毒の炸裂によって汚染されている。そんな中……半ばからへし折れた白い大樹の根本から、二つの影が這い出した。

「ふ、ふふふふ……あはははっ！　だーいせーいこー！！　やったね！　ね！　イスナちゃぁあん！！」

「そウネ」

「あははは、イスナちゃんは無駄に怖がってたけど無尽のゴルドゥニーネも……大したことない、ね？」

這い出した二つの影、一人は死んだはずのヒイラギ。そしてもう一人は姿を消す白い蛇の目を狙撃したゴルドゥニーネ「イスナ」だ。

「もぉ、あの変態鳥頭に【笑えるような死を！（キリングジョーク）】を不発された時はどうなるかと思ったけどぉ……結果オーライだねっ！　ねっ！」

ヒイラギは「隠の大地（ステルスフォース）」のジョブに就いているが、それはあくまでもサブジョブである。

彼女のメインジョブは………「殺戮の鬼札（キリングジョーカー）」。上位職業「暗殺者」

から一定以上のカルマ値とレッドネーム中に十人以上のプレイヤーをキルする事を条件に派生する隠し職業である。

その最大の特徴は固有魔法【笑えるような死を！（キリングジョーク）】。効果適用中に限り、プレイヤーによってＨＰをゼロにされた場合、直前にセーブしたセーブポイントに体力が半分の状態で復活する、というものだ。スキルが適用される時間が十秒と極めて短いものの……シャングリラ・フロンティアで唯一、プレイヤーにキルされるペナルティを回避できる手段である。

尤も、今回はその効果が発動される事なく不発という形で終わったものの、モンスターである無尽のゴルドゥニーネにキルされた事でヒイラギはプレイヤーキラー・キルされる事なく小空洞のテントからリスポーンしたのであった。

「あはははっ！　ＰＫはできなかったけどアイテム回収～♪」

インベントリの中身をぶちまけられなかったのは残念だが、何故かサンラクが装備していた武器ならともかく落ちないはずの防具、アクセサリーはその場に落ちている。

「あれぇ？　なんでだろう……ま、いいやっ。ラッキー！」

ホクホク顔で琥珀が埋め込まれた手袋や、鈍く黒く輝く巨大な籠手を回収してホクホクとしていたヒイラギは……ぺしゃりと中身が空洞ゆえに萎んで落ちているハシビロコウの覆面を見つける。

しばらくそれを見つめていたヒイラギだったが……

「気持ち悪っ」

例えゲームだとしても変態が被っていた覆面など金を貰っても欲しくなんてない。
落ちた覆面を拾い上げる事なく踏み躙（にじ）り、ヒイラギはイスナと共に楽しくて仕方がないと言わんばかりの軽い足取りでその場を去っていった……
そして太陽は沈み、夜が来る。

斜陽　其の八（後書き）

夜は長い、それでも――

ちなみにキリングジョーカーは二種類ある「ジョーカー」ジョブの片割れ。

もう片方は「怪盗」ジョブから派生する「華麗なる鬼札（スティルジョーカー）」

曇天の夜空：無頼の眼差し

アレから五日後。

俺はシャンフロに一度もログインできないまま、期末テストを終えていた……そして、当校の道徳に繊細な英語教師、大須賀・Ｍａｋｉｋｏ先生に放課後呼び出しをくらっていた。

「ア……陽務クン。呼び出された理由、分かりマスカ？」

「あー……まぁ、はい。大体は」

日本史の先生にも今朝呼び出されたからな。

「ソウ……ですね、あまりこういうのは……ダメ、なんですが。今回陽務クンのテストは……とても、点数が悪いデス」

「……赤点ですか？」

「Ｎｏ……Ｆａｉｌではありません、が……とても低い。何か、ありましたか？」

何か……ね。

まぁ初日の俺は……控えめに言って、とてもダメな状態だった。多分針に糸を通す集中力すら無かった。

後々になって仕様変更のアップデート内容を知った時はさすがの俺もゴミ箱を蹴飛ばしてしまったくらいだ。テストが始まる五分前に知ったもんだからとっくに落ちた装備類は取り戻せないだろうし、

あのコンビニ雑誌のアプデ情報ってマジで衝撃内容だったのかよっ
てな……というかそもそもアレの直後に「明日テストだからとりあえず寝よう」でメンタルリセットできるはずもなく。

「いえ、何かはありましたけどもう解決しました。テスト初日だけどうにも集中できなくて……」

「……分かり、マシタ。陽務クンは来鷹志望、でしたネ？　今回の失点のままだと厳しい、ですが……いつも通りの陽務クンであれば、Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ．デス！」

「先生のお墨付きをもらえて嬉しいです、それじゃあ失礼し……」

「ソウ、最後に」

ん？

「最後の作文問題……スペルミスはありましタが、とても良かったデス。ＳｅｎｔｅｎｃｅやＨｏｏｋもですが……特に、結論（Conclusion）が。作文問題がなかったら……赤点（Fail）デシタ」

「俺は〝義憤〟に燃える男ですから」

作文は事前に暗記しておいたものにさらに一文を加えたものを提出したが功を奏したようで何よりだ。

――結論として……私達は、何よりもまず自分に勝って自分を制御しなければならない。

普段は別に心の底からそう思って作文問題なんて書いてるわけじゃないが、今回に限っては全くその通りだと思うよ。
まずは自分に勝たなきゃあな。

◆

実に五日ぶりのログインだ。清々しさを感じないのは今が曇天の夜だからかな。プレイヤーの目は視覚補正で薄暗い程度で済んでいるが、本来は一寸先も見えない暗い闇の中だろう。

「……契約者（マスター）」

「おう、サイナか……あの後どうなった？」

「報告：当機（わたし）は武装数点をオーバードライブさせ、再格納時点で対象ゴルドゥニーネ二体及びウィンプを前線拠点「海蛇の林檎」へと輸送しました」

「やるじゃん」

「しかしそこで再格納になったため……」

そこからどうなったのかは分からない、と。
成る程ね……海蛇の林檎にまで辿り着いたんならその後の経緯を知ってる奴は多そうだ。
リヴァイアサン内のセーブポイントから「海蛇の林檎」に向かう道中で、あの戦いを経た結果（リザルト）を確認する。

まずあの時装備してたものは軒並みロストしているな……覆面に、煌蠍の籠手に、封雷の撃鉄・災に……まぁ覚悟はしてたけどさぁ……うーむ………幕末で慣れているとはいえキツいものがある。だが失ってしまったものは仕方がない、多分もう少し引きずるけど切り替えていくしかないだろう。

「よし切り替えた」

「？」

「こっちの話だ」

とりあえずあのＰＫ女は次見かけたらしばき倒す。初見殺し特化なのか知らんがいい度胸だぜ、世紀末円卓適性があるよ。逆に幕末は向いてなさそうだけど。

とりあえずやるべき事は山積みでいくらかを解消したとはいえ、過去の俺は順番を間違えていた。なまじ鉱人族のところに行くまで順調だったから勘違いしてしまった。

逆位置は「サンラク」というキャラクターにとって心臓に突き刺さった楔だ、放置した事は最大の間違いだった。

馬鹿が、これまで「愚者」前提のビルドで戦ってきたのに性能真逆になって勝てるわけがなかったんだ。封雷の撃鉄・災を最たるものとするアクセサリーによる補強で何とかなると考えたのが間違いの始まりだったか。

「そもそも真面目に攻略法を考えなかったのがケチのつき始めだ」

あのアーカヌム（クソジジイ）はなんて言ってたか。そう、「試練を超えろ、黒く貶められた「真実」を見出せ。答えは常にお前と共に在る」だった

か……おっと、考えているうちに海蛇の林檎に到着したか。

「…………ん？」

龍蛇によって襲撃を受けた前線拠点だったが、人類は既に６体のドラゴンｖｓ人間軍団の殴り合いというゲームがゲームならラスボスバトルでもおかしくない襲撃を乗り越えている。
幾らかの被害こそ出ているが、ほとんど無傷と言っていい前線拠点は五日もあれば既に復興を完了しつつあった。

ただいくらかの例外もある。
例えばシャンフロにおいて夜間の光源はファンタジーらしく光る苔や鉱石を灯りとしているが、それらがない場合は当然原始的な火による照明が用いられる。
例えばそう、外聞的には「ならず者の溜まり場」である海蛇の林檎は龍蛇の襲撃で破損した光る苔の灯りが未だ補填されておらず、篝火によってその入口を照らしているように。

「…………」

「どうかしましたか契約者（マスター）」

――風が吹いた。
それは空一面を覆う雲を吹き飛ばす事など到底できないほどに弱々しく、ただ軽く頬を撫でて去っていくだけの弱い風だった。
それだけの、たったそれだけの風が……

「……ハッ」

俺に解答を示してくれた。

「なんっつぅ……ベタな……」

「あ、おいサンラク！　お前何があったんだよ！」

「おうサバイバアル。ちょっとクソ負けイベントに引っかかってな」

「負けイベって……そりゃあ両脚がもげて片腕が吹き飛ぶような負けイベなのかよ？」

「聞いて驚け、此処を襲ったデカ蛇が三体だ」

「……ハハッ、マジかよ」

「ところであの三人は？」

…………

成る程。
ウィンプは海蛇の林檎の自室に引きこもって出てこない。
そして二人はリスポンした王我星とシユーが教会に庇護を求めて連れて行った、と。よく受け入れられたな、少なくとも親衛隊は無尽のゴルドゥニーネのユニークシナリオについて知ったわけだ……もはやどうでもいいがな。

「……」

「あ、おいどこ行くんだよサンラク」

「ちょっとパラメータが足りない気がしてな……サイナ、無駄だと

は思うがウィンプが応答するかアプローチしててくれ」

「疑問：契約者(マスター)はどちらへ？」

「まぁ………なんだ、軽く課題を二つくらいクリアしてからちょっと兄弟喧嘩に決着つけてくる」

……

…………

……………

◇

そろそろ寝ようと思っていたサバイバルであったが、尋常ならざる様子のサンラクを見てしまっては気になってどうにもやめ時を見失ってしまった。

「無尽のゴルドゥニーネ、なぁ……」

惜しくも、サバイバアルは「見上げる程に巨大な蛇が前線拠点を襲撃したイベント」に参加することができなかった。理由としてはシンプルに飼い猫の予防接種に手間取って帰宅するのが遅れたからなのだが、どうも件の大蛇は単なる襲撃などではなくもっと大きな物語(ユニークシナリオ)(EX)に関係するものであったらしい。

ＳＮＳでの盛り上がりを見て慌ててログインしたサバイバアルが見たものは、半ば暴走させた状態で無理やり「海蛇の林檎」まで飛んできたのだろうと思しきサンラクが契約している征服人形が消える瞬間。

そしてサバイバアルからすれば随分と懐かしい重傷者達の姿だった。

サンラクがログインしなかった五日の間に二人のゴルドゥニーネはこの店を去り、そしてウィンプはといえば自室に引きこもって一度も外に出てきていない。

一体何があったのか、そしてログインしたサンラクはウィンプに会いに行くことすらせずにどこに行ったのか。

それはあの「消える白蛇」がどこにもいないことにも関係しているのか。

少なくともその答えを知っているのだろうサンラクが返ってきたのは、実に８時間３０分という時間が経過した頃だった。

「…………」

「うおあ！？」

ゆらり、と「海蛇の林檎」の中に入ってきた黒い襤褸（ボロ）の姿に思わずといった様子で【ティーアスちゃん着せ替え隊】のプレイヤーは悲鳴を上げた。

それを合図に何事かと振り向いたプレイヤー達が同じく悲鳴を上げたり、絶句したりと様々な反応をする中で……

サバイバアルは笑っていた。

「オイオイオイ……随分とボロボロじゃねぇかサンラクぅ」

「あ゛ー……まぁなんだ、ソロ攻略してきたからな」
ソロ攻略、つまり出かけて行った時とは傷のあるなし以前に性別ごと何もかもが変わり果てた姿のサンラクは疲労感を隠さないままにサバイバアルの質問に答えた。
漆黒の喪服、モンスターの大量デスポーンをトリガーに出現する黒死の天霊からドロップする変身アイテム〝R．I．P．〟が見る影もなくズタズタに引き裂けるような敵と、恐らく八時間近くぶっ通しで戦ってきたと答えるサンラク。
姿こそ惨めだが……否、惨めだからこそ半分ほど無くなっているベールから覗くその眼に、サバイバアルはあの日の小さな少女を見た。
「ま、これなら足りるだろ……」
ゆらゆらと今にも倒れそうな、しかし絶対に倒れなさそうな相反する印象を抱かせる歩みでサンラクはウィンプに与えられた部屋へと階段を登っていく。
それを止められるだけの勇気を持つ者はいない。サバイバアルですら、サンラクを無理に止めることなく見送った。
「クッ、ククククク……」
「サ、サバさん？」
「あん？　なんだよ」
「いや……いきなり笑い出したもんだから……」
「あぁ、気にすんな。思い出し笑いだ」

懐かしい顔を見た。
見間違えるはずもない、「バイバアル」はあの目に何度も殺されてきたし何度も殺してきたのだから。

曇天の夜空：無頼の眼差し（後書き）

ユザパしたけどユザパしないよ

曇天の夜空：影は踊り、開拓者は踏み出した（前書き）

長編サブタイは終わったけどもう少し続く

曇天の夜空：影は踊り、開拓者は踏み出した

◆

なんて事はない、ずっと違和感はあったのだ。
そして風が教えてくれた、答えはずっとそばにいたのだと。
海蛇の林檎から出てしばらく歩き、前線拠点から樹海の中へと入った頃。俺は行動を開始した。

「……………」

走る、飛ぶ、剣を振り回しインベントリアで即座に別の武器へ切り替え、銃をリロードしつつトリプルアクセルして着地。
その間、ずっと俺は「それ」を見ていた。スキル「永劫の眼(クロノスタキサイア)」による思考加速でずっと、じっと。そこで見たものと、あの時「海蛇の林檎」の入り口で見たものを合わせれば……確信に至る。

このゲームでは、プレイヤーの視界は暗闇とは無縁だ。それはつまり……どんな暗闇の中でも、そして当然ながら灯りの中でも、絶対に「影」があるということだ。

「炎の揺らめきでブレない影がこのゲームにあるわけねぇよなぁ……!!」

違和感の正体、それは一定以上の速度と目まぐるしい動きを続けていると……ほんの少しだけ、それこそ思考加速中に凝視しないと意識することができないほどほんの少しの、影の動きが本体の動きより遅くなるのだ。

あたかも、輪唱で自分よりもワンテンポ遅れて歌う声を聞くように。
この影に擬態した何か……アーカヌムの言葉をなぞるなら黒く貶められた「真実」なのだろうこいつこそが逆位置を解く為のフラグ。

なんて事はない、俺はずっと解決策を引きずったまま無様を晒していたって事だ。

「………」

俺が真相に気付いてなお、この真実君は俺と同じ動きをしている。
しゃがんで、触れてみれば……指が影に沈んだ。咄嗟に引き抜くが、特に何か指に付着しているわけでもない。
影に触れる事……いや違うな、それならとっくに偶然影を踏んだ足から沈んでる筈だ。だとすれば意識して触れる事が条件かな。

「まぁいいか、なんとなく何が起きるか想像がつく」

なんというか……タイミングが、うん。
いや、だってこれアレでしょ？　自分と向き合う系の奴でしょ？
「戦ってる中で成長した！？」で自分のコピー的なやつを凌駕する系の。
どうするんだよ、直近でそれ系の頂点みたいなオルケストラをクリアしたばかりなんだが？

とりあえず自分の影に転がり込むように沈み込んでみる。おぼぼぼぼ、呼吸は問題なくできるけど水の中に沈んだような感覚だ。
水？　をかき分けてみるが進んでいるような気配はない。ローディングみたいなもんかな、しばらく待ってみる……

………

……あ、なんか地面に尻が当たった。

「……で？　何が出るかだけど」

うんうん、段々真っ暗だった視界が薄く白くなっていく。軽く床を爪先で蹴ってみると思った以上に冷たく硬い、大理石とかそういう磨かれた石の床みたいだ。
そして白くなっていく空間の中で丁度人一人分の黒い塊が段々と人の形に……あっ……

「ま、まさかおれじしんとたたかうことになんてなー……」

反応に、反応に困る。
思いっきりコンテンツが被ってしまっている、大丈夫かシャンフロ運営。いや逆なのか？　この逆位置シナリオで自分自身を超えたと思ってるプレイヤーをオルケストラは上位互換ＡＩで粉砕するのか？
いや待て、まだ分からない。そういう楽観視でしっぺ返しを食らったんだ。よしよし段々腹が立ってきたぞ、程よく怒れば身体に力が湧いてくる。
見た限り、逆位置版「俺」は本当に俺のコピー、と言った様子だ。黒一色のシルエットなので顔の造形とかは分からないが少なくとも変な仮面をつけていたりはしない。

「えーと……ゴングは必要？」

普通に襲いかかってきた。ラウンドワン、カーン（脳内ゴング）！！
結局のところ「サンラク」というキャラは防御力を削った機動力特化のキャラだ、オルケストラ戦で散々積み上げてきた対策はそのま

まこの戦闘に転用することができる。
だがやはりそっくりそのままとはいかないらしい……オルケストラが再現した「サンラク」はリアルタイムでこちらの情報が反映されていた。つまりそれはスキルを覚えれば向こうも同じ技を使い、こちらが新たな武器を仕入れたならば向こうも同様の武器を使えるということ。
そしてそれは、マイナス方面でも同じでなければならないはずだ。

「おうおうおう、俺への当て付けかこのヤロー」

オルケストラの「サンラク」とはまた異なる神秘(アルカナム)に由来する「サンラク」。全身真っ黒なシャドーサンラクとでも言うべき敵の行動は、今はもう使う事が出来ない非常に見慣れた動作。
漆黒の雷、あのクソPKとクソアプデの併せ技で失われた封雷の撃鉄・災の発動エフェクトそのもの……成る程、こっちはシンプルに「プレイヤーの全盛期」か何かで出てくるのか。オルケストラなら向こうも封雷の撃鉄・災を使えないはずだからな。

だとするとこのイベントは……

「逆位置補正を受けたプレイヤーと、正位置補正を受けた影との戦い……！！」

神秘「愚者」の正位置効果はスリップダメージの倍化、回復行為の確率半減、そしてリキャストタイムの半減。
それに対して逆位置効果はスリップダメージの半減、回復行為による回復量の倍化、そしてリキャストタイムの倍化。
まさにタロットカードの正逆のようだ、正位置の愚者は安寧を捨ててでも己の性能を高める。そして逆位置は安寧を求め、自らを愚鈍

にしてしまう……
飛び込んできた影サンラクの動きは速い。成る程、思考加速だとやっぱり対処に困るな。３。
冥王の鏡盾（ディス・パテル）で影サンラクの斬撃を防御、その一瞬で思考加速スキル「永劫の眼（クロノスタキサイア）」を起動。リキャストタイムの懸念を踏み越えて高速で駆ける黒い雷を目で追う。５。

過剰伝達状態は実のところ、そこまで器用には動けない。厳密には曲線の動きが極端に苦手になる、なにせちょっと強めに腰を捻るだけでトリプルアクセルしかねないからな。
加速力で直線機動を刻むことで円のような多角形運動をすれば擬似的なカーブもできないことはないがやはりインファイトで滑らかな動きは素の性能では困難だ。６。

「くっ」

だがそれはあくまでもスキルを使わなければ、という前提の話だ。
ステータスもアクセサリーも再現するような敵がスキルはパクれません、ってのは流石に希望的観測だ。非常にわかりづらいが恐らく目があるのだろう場所に見慣れたエフェクト……永劫の眼（クロノスタキサイア）だ、向こうも思考加速を使った。７。
ＮＰＣ、というかＡＩが思考加速をわざわざ使う意味はよく分からないが重要なのは「思考加速を使ったサンラクの行動」であるわけで、先程の跳ね回るスーパーボールのような挙動に滑らかさが加わる。８。

厄介だ、オルケストラ戦でも散々思ったがミラーマッチ、というのはキャラとしてのアドバンテージが薄れてプレイヤーの腕前が直接問われるものだ。９。

盾が弾き飛ばされる、回復量が何倍になろうと俺本体の体力はゴミのようなもの。流石に「俺」が相手ならよほどの火力でなければ一撃死こそしないがそれ故の二刀流、連続攻撃の初動を右腕の剣をインターセプトして無理矢理中断させる。
スキルを総動員させての一歩後退、だが既に向こうは二歩踏み込んで確実に俺を仕留めに……！！

「１０秒だ」

そこまで再現してるなら当然、過剰伝達のデメリット効果もお忘れではないですよね？　正位置効果にだってデメリットはあるんだぜ。
一歩、とは片足が前なり後ろなりに移動することを指す。つまり今俺が一歩後ずさったと言うならば、もう片方の足は依然として動いていない。だからこれが「二歩目」だ。
残った片足……右の足だけを前に、摺り足の要領で前後に開脚するように押し出す。するとどうなるだろうか。

過剰伝達（オーバーフロー）は外部からの衝撃による身じろぎにも適用される、例えばこのように足を引っ掛けられて転んだならば――

「……「俺（サンラク）」の攻略法なんざ範囲攻撃を使うまでもねぇ」

コケたら死ぬ。
１０秒で体力が半減するデメリットが「愚者」の効果で倍増する、つまり１０秒ごとにＨＰが強制的に１になるダメージを受けながら戦うのが「サンラク」というプレイヤーだった。
そして転倒によるダメージは自傷でも反動でもない、つまり幸運パラメータが持つ「自傷、反動ダメージへの食いしばり」が発動することなく「即死級のダメージを受けた際、確実に一度はＨＰ１で耐

える」方の効果が適用される。

「知ってるか「俺」、銃弾は剣より射程がある」

そして顔面から派手にイッった影サンラクの無防備な後ろ姿に叩き込んだ弾丸は、思考と挙動の両方を加速させた「全盛期」の俺を再現した影サンラクでなお対応の隙を与えることなく、至極あっさりとその身体を撃ち抜いた。

「………はぁ」

こんな、こんなクソチョロい戦闘をサボっただけであのザマか。

タイムマシンを手に入れたらやりたいことランキングが大きく変動したな……

曇天の夜空：影は踊り、開拓者は踏み出した（後書き）

「一番強いムーブ」と「一番有効なムーブ」は似て非なるもの

影サンラク「もう少しこう、苦戦するべきでは！？」
正典サンラク「道路標識とデコトラが足りない」

Q、なんでサンラクは壁のシミになるん？
A．転ぶ↓地面に叩きつけられた際の動きとそれまでの加速でバウンドする（ここで食いしばりを使いきる）　↓反射的な行動で一歩踏み出したせいで余計に加速して制御できなくなる↓そのまま壁に激突して死ぬ

曇天の夜空：失った後に何を持つ

「いやーすまんビィラック！　煌蠍（ギルタ・ブリル）の籠手失くした！」

「……」

え、何？　コップ？　いやこれアレだよね、鍛治とかで型に溶けた鉄流し込む時に使うやつ、アレだよね俺調べたことあるから知ってるんだ坩堝（るつぼ）ってやつだろ？

「ええと？」

「一気、一気」

「悪いが猫舌なんだ」

「…………まぁ、構わんわ。武器っちゅうもんは唐突に別れるもんじゃ」

それが戦いの果ての損失ではなく、しょうもない紛失である事にまだ何か言いたげな様子のビィラックであったが幸いというか、熱々のドロドロ（マイルドな表現）を一気飲みさせられるのは回避できたらしい。

「で？　ただ詫びに来ただけじゃあないんじゃろう……もう出来ちょるわ」

「流石ビィラック、未来の神匠は違うね」

「世辞なぞいらんわ」

世辞じゃねぇよ、近いうちにお前かイムロンを神匠にして俺は気軽に最強武器を手に入れるつもりなんだ。お前には神匠になってもらわなければ困るというもの。思い返せばこれもサボった課題だったかな……

「時にビィラック、ヴォーパルバニー秘伝の職業とかないの？」

「はぁ？」

「いや何、ちょっと………」

サブジョブの欄が空白でな。

……

…………

………………

「サ、サンラクサン！」

「よぉエムル、なんか随分と久しぶりに感じるな」

ちゃちゃっと例のブツを受け取りビィラックから紹介された「老師」から軽く手解きを受けた俺は、もうここに用はないとインベントリ

ア内の素材をピーツに売り付けて用意した金で転移魔法の使い捨て魔術媒体のストックを補充。さて前線拠点に戻るか、という場面で……エムルとエンカウントした。

「おとー、カシラがサンラクサンが大変だってたですわ……」

「兄貴は耳が早いなぁ」

人工衛星でも飼ってんのか？
エムルはなんらかのストーリー進行的な制限がかかっているのか、現在パーティを組むことができない。だからこうして【座標移動】や【座標移動門】などのファストラ魔法を外付けで使える手段を用意して転移するしかないわけだが……これが中々懐に厳しい。

「アタシ、その……サンラクサンをお手伝いできないですわ。おとーちゃんが今は外でちゃダメって言うですわ……」

「なんでやろなぁ」

ラビッツは地下空洞からゴルドゥニーネに侵攻されていた。つまりラビッツとゴルドゥニーネにはなんらかの因縁があり、ボスドゥニーネが活発化したタイミングでネームドのヴォーパルバニーに外出禁止令……よく出来た偶然やなぁ、不思議やなぁ。

「何、百や二百の敗北で俺が止められるかよ」

トライアンドエラーは百回を超えてからが本番だ、周回に至っては千回やっても満たされることはない……終わりの見えない作業を指して「エンドコンテンツ」とは皮肉が効いてるぜ。

「まぁなんだエムル、気にする事は無ぃ。兄貴は単なる過保護で外出禁止令を出すようなお方じゃぁない。何か意味があるんだろうさ」

それに、だ。

「エムル」

「はいな？」

「今俺はどうよ、ヴォーパル魂は満ち満ちてるか？」

「………ちょっと、しょぼくれてるですわ？」

数値で聞いたんだけどなぁ……まぁいいや、やはりこのままではダメだろう。ヴォーパル魂を上げなくては、敗北を払拭するような……否、敗北を払拭するためにヴォーパル魂を上げなくてはならない。

ヴォーパル魂はなにもヴォーパルバニー専用の好感度ではない、なんとなくだがヴォーパル魂が高まってるな、って時はＮＰＣからの視線が……こう、ハードボイルドなキャラを見てる感じになる。一挙一動に憧れる、みたいなそう言う感じの視線だ。

そもそもヴォーパル魂とは何か、その根幹はＴＲＰＧ的なパーフェクトリプレイの構築だ。シミュゲーではない、これは戦闘をリプレイした際の芸術性も評価ポイントなんだ。

だとすればどうすればいい？　このクソみたいに無様な敗北を、被ってしまった汚名を返上するには何をすればいい？

まず思いつくのはやはり無尽のゴルドゥニーネ、ボスドゥニーネをぶっ飛ばす事だ。

だが現状の俺ではあのクソみたいな物量を攻略するのは難しい。というか目的のための準備で目的を果たす、って根本からなんらかの

法則が乱れてないだろうか。

ではどうすればいい？　いいや、こんなものは単に俺の覚悟が決まっていないから自問自答で誤魔化しているだけか。海蛇の林檎を出た時から……刃を向ける先は見据えていたのだから。

「もう答えは出ている、か」

「答え、ですわ？」

因縁、リュカオーンに匹敵する「未だ倒せていない強敵」という条件に合致する存在は………一体しかいない。

「エムル、せめて前線拠点まで転移するくらいは頼めるか？」

「はいなっ！　アタシにお任せですわっ！」

「別れ」というものは遠ざかることはあっても去ることはない。どうやら今日のようだぜ、決着をつけよう兄弟。

◇？◇

蛇にとって、灯火と喧騒は忌避すべきものだ。灯火と喧騒は人が生み出すものだ、人は蛇を嫌っている……見つかれば、恐るべき刃で蛇を狙ってくる。

「…………」

怖い。とても怖い。

だけれども、だとしても。

「…………」

もう、生き残ったのは自分だけ。大切な宝物は失われ、臆病だった自分だけが生き残ってしまった。

「…………」

人に見つかれば、きっと自分は死んでしまうだろう。いいや、自分の命はもうとっくに尽きていてもおかしくはない筈なのに。まだ動く身体を引きずりながら、ゆっくりと……それでいてどこか焦るように前へ、前へ。

……届けなくては。

想いを託そう、もう自分では叶えられない願いを。自分では背負いきれなかった無念を。

嗚呼、どうしてこの身はこんなにも脆弱で。いいや、本当は分かっているのだと蛇は考える。

結局のところ、死に損なったのは臆病だったからなのだと。

曇天の夜空：失った後に何を持つ（後書き）

夜は長い

◆

――貪る大赤依。

血のように、火のように赤い怪奇。命を喰らい、増え続ければ自らが滅びてしまう後退を知らぬ赤い蝗災。

未だ二度目の討伐が成し遂げられたとの話は聞かないが、俺に再びアレを倒せと言われても確実に倒せる確信はない。
何故ならばあの戦いは俺一人ではどうしようもないものだったから。
腹立たしくはあるがディプスロがいて、トットリがいて、森人族がいて……そして奴がいたからこそ、勝ちを掴むことが出来たのだから。

新大陸東方、未だ人類の開拓を寄せ付けない未開の大樹海。
深夜に眠る良い子のプレイヤーもいる、だが深夜だからこそ徹夜だヒャッホウとログインするプレイヤーもいる。それ故に、この静けさはある種奇跡のようなものだ。
ラビッツから前線拠点に飛び、樹海を駆け回ること二十分。樹海の中でも北方……未だ全容が明らかになっていない、すなわち挑んだ奴らが殆どよく分からん殺しされたという北の凍土に近い大自然の中……奴はいた。

「よう」

六つの瞳が俺の姿を捉える。全身に走る紅よりもなお濃く暗い赤……すなわちドラクルス・ディノサーベラス〝緋色の傷（スカーレッド）〟と俺のエン

カウントは、ただ視線だけが交差する静かな始まりだった。

「久しぶりだな兄弟……喧嘩しようぜ」

何度もリスポーンして戦いを挑むなんてこすっからい真似はしない。この戦闘で負けたら今後お前には二度と挑まない、それくらいの縛り（覚悟）でお前に勝つ。

〝緋色の傷〟に友愛とか絆、なんてものは最初から期待してはいない。三つ首を持つ恐るべき竜はゆっくりと俺に対して正面を向くと六つの目で俺を睨みつけ、三つの口を開きながら三重に響く唸りをあげ……そして、幾つあるか数えるのも面倒な数の牙を打ち鳴らした。

俺は最初からこいつを討伐するつもりで来た。そして〝緋色の傷〟はそんな俺を一切の慈悲なくぶち殺すつもりで迎え撃ってくれる……いいね、なんて理想的なプレイヤーバーサスモンスター！　やっぱＰｖＭはこうじゃなくっちゃ！　レイド性能でマジの不意打ちかますクソ蛇なんかよりよっぽど好感が持てるぜ！

「だが死ね！！」

来いよ炎！　こちとらクソ蛇だの王国権力だのなんかよく分からんアラドヴァル強化用のイベントボスだの、何より本気リュカオーンもあるクソみたいなボスラッシュが控えてんだよ！！

「エクゾーディナリーでもねぇレアエネミーに手間取ってられるかァーッ！！」

そうだ、奴はエクゾーディナリーモンスターでもなければレイドモンスター、ましてやユニークモンスターでもない。だが単なるレア

エネミーがそれら特別なモンスターに匹敵しないなんて道理はこのゲームには存在しない。風の噂に聞いたぜ、この大樹海にいる「本来の」エクゾーディナリー……ドラクルス・ディノサーベラス〝死闘の傷〟に競り勝ったらしいな。化け物かよ。

「チッ……クソ程硬いな……！」

基本的な攻撃パターンはティラノサウルス的骨格に準拠する。強いて挙げるなら頭が三つあるので噛みつきの即死範囲が物理的に頭二つ分広いことか。
傑剣への憧刃のクリティカルを叩きつけて尚、俺程度のゴミ火力じゃなんの痛痒にもなっていないらしい。奴の全身がねじれるように撓む……尾の薙ぎ払いっ！

「っ！」

大縄跳びの縄が太すぎる。もはや空中で正座でもするかのように限界まで足を折り畳んで跳躍したすぐ下を鉄筋にゴム巻いて鉄板貼りつけたような大質量の尻尾が通過する。
チャンス、三秒以下の空隙は全て攻撃を叩き込むこちらのターンだ。
斬撃は効果が薄い……なら打撃だ！

「この拳はカミソリにだって負けねぇ！」

メイン拳が失われた以上……いいや、失われたからこそこの紅蓮海の拳帯(レガレクス・セスタス)が日の目を浴びる！　夜だがな！！
紅蓮海の拳帯の能力は拳へのダメージ軽減、つまり狙えないような場所も狙えるって事だ！！
「迸(ほとばし)れミュータンス！　喰らって砕けろ虫歯パンチ！」

狙うは左ヘッドの口、そこに並ぶ牙！
ハイクオリティなシャンフロを信頼しているからこその狙い、歯を思いっきりハンマーでぶっ叩いたらどうなる？

答えは「超痛い」だ。

「ギャオァァァァァ！！」

左ヘッドの牙に叩き込んだ一撃が確かな手応えを伝える。砕くまではいかないがそれでも鱗と筋肉を殴るよりはよほどダメージになっただろうよ。
厳密にこいつのアイデンティティが一体なのか三体なのかは分からないが、少なくとも怯みを見せたのは左ヘッドだけで、残る二つの頭は生意気なドチビを消し飛ばすべく、二つの口を大きく開く……
ハッ、

「ネタは割れてるぜ！」

〝緋色の傷〟の喉の奥から吐き出される粘液の塊、ゲロか痰かよと言いたいがあいにくそっちの方がまだマシだ。
怒りに燃える左ヘッドがガヂン！　と歯を音を立てて鳴らした瞬間、摩擦と衝撃で点火した粘液塊が爆発と見紛う燃焼現象を引き起こした。大自然においてこの三つ首ティラノが最強たる所以、生木すらをも焼き尽くすナパームブレス！

「熱っ……」

ちょっと燃えた。ナパームの厄介なところはあの粘液が付着すると炎が消えないことだ。毒や呪いにある程度耐える開拓者（プレイヤー）であっても

燃えれば死ぬ、スリップダメージ判定ではないからこそ燃焼という状態異常ではない「異常な状態」は危険なのだ。

「へっ……心配無用だぜ、「水」なら腐る程あるからな……」

回復ポーションは回復アイテムである以前に液体だ。経口摂取が一番回復するが、傷口に直接ぶっかけてもそこそこ回復する。回復ガチャは……失敗か、だが火は消えた。ただの水じゃないから？　まぁいいや。

「ラウンド１００まで戦えるが……そうだな、朝までには終わるといいな」

ちなみに俺の最長ログイン記録は二十時間だ、それ以上はカフェイン切れでＶＲの健康判定に引っかかった。

◇

落ち葉より柔らかいシーツ、土の上よりふかふかなベッド。
怪物に襲われることもなく、寝ているのか起きているのか分からない不安の微睡を維持する必要もない。
あの頃と同じ、たった一人。それでもあの頃よりもずっとずっと寂しいのはきっと、大切な半身(友達)を失ってしまったから。

「…………」

扉のノックはもう聞こえない。孤独がより寒々しく身体を覆っている気がした……身体は暖かいはずなのに。

コンコン

「…………」

ノックの音がした。まだ扉の向こうにいるのだろうか……

違う。

コンコン

「ぇ………」

音は、曇りガラスが嵌め込まれた窓の方からしていた。

曇天の夜空：枢機なる赤が空を照らす（後書き）

・燃焼

火傷と違って状態異常ではない、しかし当然ながら人は燃えたら死ぬ

火耐性のないモンスターが住む環境でナパームぶちかますタフネス

の塊とかそら最強よ

曇天の夜空：灼熱の死闘

◆

戦闘開始から……多分、五時間。いや、もしかしたら六時間。未だ決着はついていない。

「だぁぁぁぁっ！！　現状カンストステータスで殴っていつまで生きてんだクソがァ！！」

〝緋色の傷〟はとにもかくにもタフだった、スタミナ的な意味でもＶＩＴ的な意味でもだ。もう何本も破損寸前まで行った武器がインベントリアの中にはあり、今はひたすらに泥試合を続けている状況だ。

「ふっ！！」

振り下ろした傑剣への憧焉終刃（エスカ＝ヴァラッハ）が奴の鱗を何枚か削るが、次の攻撃を繰り出す前に離脱。直後、爆発的に膨れ上がった筋肉による身震いが俺のいた場所へと襲いかかる。

何時間も戦っていれば……あるいは、既に何十何百という挑戦者に勝ち続けていれば爬虫類用ＡＩでも対人間の戦法を学習するってか。なるほど確かにシンプル極まりない体格差の押し付けこそが人間にとっては笑える程に有効だ。

「くっ」

〝緋色の傷〟の中央ヘッドが粘液塊を自身の足元に吐き出した。外

した？　いいや違う、あの「極悪戦法」……回避っ！！
〝緋色の傷〟の筋肉が盛り上がり、全身を軋ませるようなその場での一回転。地を抉るように回る尻尾がベチャッとしながらも１メートル近く積み上がっている粘液塊を尻尾で吹き飛ばすことで粘液が飛び跳ねる……！！

ガヂン！！

「だぁぁぁぁっ！！」

これだ、〝緋色の傷〟が貪る大赤依の時には使っていなかったナパームのぶっ飛ばし着火。飛び散る粘液が連鎖的に消えない炎として襲いかかるクソ極悪戦法だ。

着火された粘液が炎へと変換され、生み出された炎が付近の粘液をさらに燃やすことでナパームの「散弾」が周囲に撒き散らされる。俺が一番苦手な面制圧の全体攻撃。これをされると俺は思考加速の手札を強制的に切らされる。

思考だけが加速した世界に身体を追いつかせるための黒い雷電は失われた、兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）でいけるか！？　ぶっつけ本番！！

このじゃじゃ馬竜巻回転装置は効果は同じでも加速が二種類ある。踏み出した足に対応した円周軌道の加速というなかなか類を見ない加速方法は、自身の身体が一回転する前に逆の足を踏み出すスカートのような加速と逆に回転する事を主軸とした加速の二種類だ。少なくともスキル「永劫の眼（クロノスタキサイア）」の効果で判断ミスで誤爆する可能性は低いが、スローモーションでも人間が歩く速度程度の速さで迫るナパーム散弾の回避を悠長に考える暇は無い。

「ぐ、ぉぉおお！　肩燃えたぁ！！」

だがそれだけだ、回復ポーションを肩に叩きつけて砕く。
ガラス片が刺さる痛みはまるで足ツボマッサージの痛みを二割くらいにして肩に移したような感じだ、これはこれで違和感というかなんとも言えない気持ち悪さがあるものの、感傷は数秒前に置き去りにされた。
ギャリギャリと地面を削りながら殆どうつ伏せに近い姿勢から加速回転を利用したブレイクダンスの要領で立ち上がる。

「っ！！」

エアリアルＰＤを構えて発砲。しかし野性の勘なのか偶然か、〝緋色の傷〟は肉体で最も硬い部分……即ち頭蓋を有する頭部で弾丸を受け止め弾く。

「…………」

「ガロロロロロロロロ……」

千日手、とまではいかないがひたすらに泥試合だ。
俺は未だ三桁近くある回復アイテムによる回復連打で死なないし、向こうは俺の攻撃全てをカスダメと断じるだけのタフネスを備えている。

だが、

「へっ……兄弟、息が荒いぜ？」

ここは新大陸東方の樹海ではあるが同時に北の凍土に近い樹海北部。
プレイヤーはちょっとクーラー効きすぎてない？　程度の認識だが

世界観としては息が白くなる程度には寒いようで。
„緋色の傷”．の顔が隠れんばかりに吐き出される白い呼気は、体力（HP）ではなく体力（スタミナ）の消耗を如実に表していた。
「何時間戦い通しだ？　ハイロウはあってもオンオフは無かったもんなぁ……その巨体を維持するのに何万カロリー必要なんだ？」
悪いな、こちとら夜通しの戦闘ならお手の物なんだ。水晶群蠍であればそこら中に餌があるから問題ない、シグモニアのビッグモンスター共はそもそも食事の必要があるのかすら怪しい（口まで戦闘特化してるからなあいつら）。
ではお前はどうだドラクラス・ディノサーベラス　„緋色の傷　”？
その巨体は低燃費か？　一時間林檎何個でフルパワーを出せる？
「絶食！　絶命！　絶滅しやがれ突然変異！！」
その時だった。

◇

——シンプルに嫌がらせだった。
そのプレイヤーは息を潜めて覗き見ていた視線の先にいる覆面のプレイヤーと面識はない。
そのプレイヤーは息を潜めて覗き見ていた視線の先にいる恐るべき緋色の三頭竜との因縁はない。
ただ、聞いていた話とは違って魚の頭をしたプレイヤーが何者であ

るかは知っていたし、その上で彼は助勢ではなく妨害を選んだ。

「へっ……こういう「偶然」もあり得ますよねってね」

別に恨みがあるわけではない。ただ、彼自身私事(リアル)で嫌なことがあったからその憂さ晴らしのターゲットにしただけ。

新大陸の攻略に乗り出したプレイヤーなら知らない者の方が少ない緋色のレアエネミー。それをたった一人で撃破しようとしているプレイヤーに「なんでもかんでも一人でできると思ったら大間違いだ」と現実を突きつけたい……そんな身勝手で、そしてゲームだからこそ許される無責任で無遠慮な嫌がらせ。

とはいえ無責任で無遠慮であるからこそ、我が身可愛さにペナルティがつくプレイヤーキルに手を染めることはない。

自分の経歴に傷がつかず、しかして嫌がらせとしてはある種プレイヤーキル以上に悪質な無作法(マナー違反)。

「ああっ！　ごーめーーーーん！！」

彼の行った事は至極シンプル。周囲にいたモンスターのヘイトを集め、別のプレイヤーに押し付ける……即ち、さながら車両が連結しているようにモンスターを引き連れていく電車(トレイン)と呼ばれる行為だ。

ただでさえギリギリな戦局に多数のモンスターを持ち込めばどんなプレイヤーとてひとたまりもない。

ざまぁみろ、こっちは好きだった会社の後輩が控えめに言って死んで欲しい年下の上司に告白していたのを目撃してイライラしているのだ。何でもかんでも思い通りに行くと思ったら大間違いだ……

彼は気づかなかった。

この場で戦っていた一人と一体は体格も身体構造も種族も……そしてリアルとゲームという点でも全く異なる存在同士でありながら、……共通の不満を抱いていたという事を。

即ち……どちらとも、酷く飢えていた。

曇天の夜空：灼熱の死闘（後書き）

それを己が腹を貫く横槍か？

肉と野菜がたらふく刺さったバーベキューの鉄串じゃないかな

◆

六秒。それが何やら笑顔で飛び込んできたプレイヤーの後ろにいたものを見て判断と行動に費やした時間の合計だ。

プレイヤーはまぁどうでもいいとして問題はその後ろにいるモンスターの大群だ、まさか奴の空腹を指摘した直後に餌が数を揃えて飛び込んでくるとは思わないだろう。

だが視点を変えよう、この突発イベントに俺が受け取れるメリットは存在するのかしないのか。

答えは「ボーナスタイム」だ。

「サンキュー！　マジでサンキュー知らん人！　そしてご愁傷様！！」

「え、は？　……えっ？」

既に意識から知らない人のことは消え去った。申し訳ないが実際にこの場からも消え去ることになるだろうしな。

奴と比較して初動に勝る俺がすべきは、六秒の中で行った聖杯とR・I・P・の使用に伴った栄養補給（キルスコアの蓄積）に他ならない。

そして知らない人よ、あるいはモンスタートレインを申し訳なく思っているなら気にしなくていいぞ。

俺も俺でナパーム搭載した戦車を引き連れているようなもんだからな。

「えっ、ちょ、ぎゃあああああああ！！？」

消耗したカロリーと可燃性粘液、それを補給する方法は捕食の他にはなく。そして今の〝緋色の傷〟に選り好みをする余裕はないはずだ。

恐らく俺と比較して初動に劣る〝緋色の傷〟が進行上に突っ立っていた知らない人……というよりも、棒立ちの「餌」に齧り付いている隙に俺は境光の宝剣（ルーメリディアン）とエアリアルＰＤを展開。

十種類かそれ以上の混成モンスタートレインの中からキルタイムが短く済むモンスターを判別しながら恐竜大行進の中へと飛び込んだ。

「馬鹿がよぉ！　プレイヤーはゼロカロリーなんだよ！！　ダイエットでもする気か兄弟！！」

見つけたぜ、普段はウザったい雑魚の大群も今この瞬間は満漢全席に見えるぜドラクルス・ディノトリアシクス！！

境光の宝剣は日中と夜間で性能が変わる二つ貌の剣。紅く輝く夜光刃はずばりシンプルな斬撃の飛び道具化、だがこの「飛ばす斬撃」はちょっと面白い性質がある。

「悉く死ね、そして悉く俺のバフとなれ……！！」

境光の宝剣には貯光とでも言うべきゲージがあり、日の光に当たるほど夜光刃の飛ばす斬撃の使用回数が増え、その逆に月の光を浴びせる程にもう一つの旭光刃の使用回数が増える……そう、増えるのは「回数」だけだ。

振り抜いた境光の宝剣から真紅の斬撃が放たれ、片手の掌になら乗りそうなサイズのディノトリアシクスの一体を容易く斬り裂いた。

境光の宝剣の能力は使用者のステータスに依存する……！！
スイングする際に参照されるＳＴＲやＤＥＸ、ＴＥＣ、そして何よりＡＧＩ……！　俺というプレイヤーが根本的に不足させている火力をＲ．Ｉ．Ｐ．のキル数に比例したステータスボーナスで補強！
そして高まったステータスによって威力の上がった夜光刃の飛ばす斬撃でさらにキル数を稼ぐっ！！

「群れろ雑魚共！！　食事の時間だァーーーーッ！！」

と、ここで〝緋色の傷〟が追いついてきた。オードブルとしてお出しされた知らない人が二号人類故になんの腹の足しにもならない寒天以下のゴミだったことで、もはや俺への怒り以上にのこのこやってきた餌共へ捕食者として血走った目を向ける。
どうやらトレインの狂乱にノってきたモンスター達もここに来て気づいてしまったらしい……あの知らない人は哀れに逃げる餌などではなく、己らを食卓の皿に連れて行くハーメルンの笛吹だったのだと……

「しゃあねぇ、どちらにせよデカブツは時間効率が悪いから俺の腹には収まらない。くれてやるよ……最終ラウンド前のインターバルだ、最後の晩餐は豪華にしなきゃなぁ！！」

俺は謙虚で少食なのでディノトリアシクスとディノラプトル辺りの小粒で十分だからサ……欲しいのはでかい肉の塊じゃなくて積み上げた屍の総数だ！！
夜光刃とて無尽蔵に撃てるわけではないが、しかしキルスコアの蓄積によってスイングの威力が上がれば飛ばす斬撃は複数の敵を巻き込んで飛翔する。
背後でトレインに混ざっていたサラブレッドトリケラの悲鳴が聞こ

える。ミチミチミチブチゴキベギョッ！！　みたいなとんでもない音がしているんだが何が起きてるんだろうなー、後ろ見る余裕ないから分からないなー。
奴もまた急速なエネルギー補給を行なっている、妥協すれば退くはこちらになるのだ。命を奪え！　悉く死に晒せ！　この黒き喪服はその為の正装！！

「少なくともてめーは一匹たりとも逃がさん！！」

ドラクルス・ディノトリアシクスは掌サイズの恐竜が最低十数体の徒党を組んで襲ってくる群体型のモンスターだ。言い換えればそれは下限であって多い時は五十体、噂では百体を超える大軍勢で大型ドラクルス・ディノすら仕留めているなんて話もある。
今回トレインにいるディノトリアシクスはどうも二つの群れが合体したのかおよそ三十体、回転寿司かな？　根こそぎ死んでくれ。飛ばす斬撃によって三匹のディノトリアシクスが吹き飛び、３キルがスコアに加算される。

「もっと！　もっとだ！！」

逃げるな！　背中に弾丸叩き込むぞコラ！　もう叩き込んだけどな！！
いいねいいね、奴の鱗を貫く為に不足していたＰｏｗｅｒの高まりを感じる。さぁここからが本番だ、武器を切り替えろ選手交代だ！！

……

…………

……………

あれほどまでに騒がしかったモンスタートレインは今や、屍すらも残らない静寂に上書きされた。生きている者はただ二つ。
何匹倒した？　四十から先は数えるのが面倒になった……だが、覚えていることは一つ。

「コイツを片手で振るには充分なキルスコアって事だ」

別離なく死を憶ふ（メメント・モリ）。「サンラク」というプレイヤーのステータスにはあまりにもそぐわない特大剣は、しかし数多の死を吸って今やナイフのように軽い。
使用者への体感負荷を軽減する、という特異な剣はひとたび何かに叩きつけたならばその見た目通りの重圧をもって命を断つだろう。
だが対する〝緋色の傷〟もまた、インターバルを充実と共に過ごせたらしい。
俺が手を出さなかった中、大型のモンスターを片っ端から仕留めたらしい三つ頭の恐竜は、先程の疲労によるものとは異なる戦意と殺意、そして活力に満ちた白い吐息を吐き出していた。
流石にＨＰまでは完全回復していないと思うが、それでもスタミナに関してはリセットされたと見ていい。対する俺はＲ．Ｉ．Ｐ．のデメリット効果により実質的に回復の一切を自らの手で封じてしまった。

「上等、ＨＰなんざ０以外は全部似たようなもんだしな」

ＨＰなんて１か０の違いでしかない、あとは固定ダメージを素受けする時の必要量。だがこの戦いにおいて被弾のほぼ全ては致死量の

ダメージなのだからやはり体力など1あれば充分なのだ。

「夜明けは近いぞ〝緋色の傷(スカーレッド)〟、最終ラウンドだ！！」

曇天の夜空：ラスト・インターバル（後書き）

次で終わるかな？

曇天の夜空：光差す風雲急（前書き）

作者も徹夜で書いたから正直整合性とかが本当に大丈夫かひたすら不安になる更新

◇

白蛇、その悉くが俯く中で一匹（死に損ない）の蛇だけは顔を上げていた。

「…………あなた」

どうか、どうかお願いしますと。

命の刻限がゼロに近づいているのが分かる、もはや主人の仇の結末を見ることはできない。だがそれならば、せめて。

「……やめてよ、なんでわたしのところにきたの？　もうほうっておいてよ」

小さな蛇から嘆く白蛇に言葉を伝えることはできない。それが可能なのは白蛇と密接な繋がりのある眷属だけ、既に主人を失った小さな蛇では意思を伝えられる相手はもうどこにもいないのだ。

「そんなものがあるからって、だからなんなの？　だれもかてないのよ？　もうあきらめるしかないの」

そんな事はどうでもいいのだ。

勝てる勝てないを論じる為に、命を削ってここまで来たのではないのだ。

嗚呼、己を支える命に大きな亀裂が入った音がする。身体を支える力が抜けて、それを加えたまま頭を床に力なく打ち付ける。

「う、ぅうぅぅぅぅぅ……！」

――どうか、どうかお願いします。
命を助けて欲しいわけじゃない。今すぐ仇の首を持ってきて欲しいわけじゃない。

どうか、繋げて欲しい。
死にゆく前に、この小さな蛇の想いを受け取って欲しい。
誰かがこの無念を受け取ってさえくれれば、せめて納得して死ねる。

命の刻限がもうすぐそこまで来ている。薄く明るくなってきた窓の外から、光が差し込もうとしている。

「もうやだ、やだやだやだやだやだ……こわいのは、やだ……もうわたしにかまわないで、わたしをみないで…………わたしを、たすけて……」

誰も顔を上げようとしない。そうして、時間だけが過ぎ去ろうとしていたその時――

◆

当てる。当たらない。お前が先に死ね。
この戦場を幾百幾千の言葉で表現しようとしても、結局はこの三つに全てが集約している。

「しいいいいねええええええ！！！」

体感重量が軽減され片手で扱える程になって尚、両手で握りしめフルスイングで叩き込んだ別離なく死を憶ふ（メメント・モリ）が〝緋色の傷〟の左ヘッドの顔に重傷と言っていい大ダメージを与える。
だが己であり兄弟である頭の一つが顔の半分を損失するようなダメージを受けても他二つ……否、直撃した左ヘッドも含めた全ての頭がただ俺を殺すべく戦意を煮滾らせて噛み付いてくる。

「はーっ！　はーっ！」

上手に生きるコツは無理に欲張らないこと。一撃を当てた時点で既に回避行動に入っていた俺は三つ頭の強行攻撃から逃れて再び別離なく死を憶ふを構え直す。
分かっていた、分かってはいたがやはり……モンスタートレインを処理する前の数時間よりもこの一、二時間の方が遥かにつらい。回復ができないから？　それもある、一撃で死にかねないから？　それもある。だが精神を削る最大の理由は、そこではない。
ドラクルス・ディノサーベラス〝緋色の傷（スカーレッド）〟の最も恐ろしい点は何か。人伝でしかその存在を知らない者は頭の数だのナパーム攻撃だのと言うだろうが、実際に戦って……そしてある程度善戦できた者達なら皆口を揃えて同じ答えを返すだろう。

「体力の残量に反比例する防御力の強化……っ！！」

その名の示す通り、今にも血が滲み出そうな全身に刻まれた緋色の傷。それらは奴が死に近づく程に赤く、紅く、緋く輝く。あたかも死の間際にこそ命は真に輝くのだと言わんばかりに、その鱗も筋肉も強靱さを上げていく。
物凄く噛み砕いて説明すると１００ある体力の内、９０削ると防御が十倍になるので残り１０の体力が実質１００と同じくらいになる

ということだ。
あるいは自爆が好きな方の外道が持っているシャンフロ最強クラスの防御貫通性能を持つ聖槍であればこいつの鱗すらをも貫くのかもしれない。
だがこの場にそんな便利な槍はないし、仮に今からペンシルゴンを呼べるとしても……断言する、絶対に呼ばない。

「楽しい時間だ……なぁそうだろう兄弟、なぁ！！」

ああそうだ、今この瞬間俺は最高に楽しい。
そう……鯖癌を思い出す。あの孤島にも、人間を餌かオモチャとしか思っていないようなクソエネミーがいた。そういう生まれついてのアドバンテージだけで生きてるような畜生をソロでブチ殺すのは十人暗殺（アサシネイト）するよりもずっとずっと楽しい！！
水晶群蠍やシグモニアの虫共に挑むように、殺し殺されで最適化していくのもゲームの醍醐味だが……やっぱり初見クリアの魅力は何よりも勝る。エンドルフィンとアドレナリンが両方ドバドバ出るから原液２００％ってところだな。ハハハ、何言ってんだ俺。

「いいぞ……あたまがおかしくなってきた」

徹夜特有のハイテンションだ。これで負けたら向こう三日はゴミ箱を苛立ち紛れに蹴り飛ばす生活になるだろうが、この状態で勝てば向こう一週間は思い出し笑いでニヤニヤできる。実際バイバアル率いるクソゴリラ軍団を二十人抜きした時は事あるごとにニヤニヤしてたしな。

「死ねぇ！！」

爆進。もう何度使ったかも分からないスキルの起動で加速力を補強して一気に〝緋色の傷〟の懐に入り込む。この加速力、この回避力が俺の命を現世に留める細い糸だ。
はよ死ねすぐ死ねいい加減に死ね、怨念に近い思いを墓標の剣に込めながらひたすらに攻撃を叩き込む。だが未だ倒れない、何度かふらついていることから追い詰めているのは確かなのだ。だが……その残ったＨＰがゼロになるまでがあまりに遠い。
もしかして無理なのでは？　防御力上昇の上限がもしも本当に十倍とかだったら五時間かけて与えたダメージをもう一度再現しなければならないことになる。

「ふっ、ふくくくくっ、ふははっ、あはははははは！！」

やべぇ、そんな事より自分の声が思いっきり女声なことに今更ながら笑いが込み上げてきた。笑顔は大事、笑顔で乗り切れ、正気か狂気かなんてただの一文字違いだぜぇ！！
一発で死なないなら百発殴ればいい。ダメージが通るならゲーマーは神だって殺せる。もはや弱い部分だろうが丈夫な部分だろうが関係ない、ヒットアンドアウェイを前提としつつも、攻撃のチャンスならばどこだろうと〝緋色の傷〟に攻撃する。

空が明るくなってきた、頬を涼しい風が撫でていく。いいや、きっとこれは凍えるような北風なのかもしれない。〝緋色の傷〟の全身からはとめどなく加熱された白い空気が霧の如くゆらめき、一際大きい風が吹いた時――

「来ぃぃぃぃぃぃぃいたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

一晩かけての死闘の結実。ドラクルス・ディノサーベラス〝緋色の傷(スカーレッド)〟の、無敵とすら思える巨体が今、確かにその自重を支えきれず

に崩れ落ちた。

死んだ？　違う、死にかけている！！　ここだ、ここしかない！
ここで殺す！　ここで死ね！　ここで勝つ！！
別離なく死を憶ふを大上段に、もはや小細工無用と消えかけのスキルにあと二秒保てと無茶で無駄な要求を念じながら一直線に〝緋色の傷〟へと駆ける。

「俺の……勝、っ！！？」

げぼぉ、と。
〝緋色の傷〟が何かを吐き出した。血か？　それとも吐瀉物か？
血にしては暗過ぎる、ゲロにしては粘つき過ぎる。北風に乗って、鼻腔を貫く圧倒的な油臭さ……こ、こいつここにきて新技を――

――

ガヂン！！

それまでの粘液塊が可燃性の油だとするならば。
今吐き出された黒い塊はそれまでの粘液塊を限界まで圧縮した……重油塊。
死に瀕して尚、さらに死に突き進んででも生を掴む覚悟がなければ出来ない自爆覚悟の至近起爆。
もはや回避は待ち合わない、バックステップをしたところで……
そこで、ドス黒い重油塊が白く膨らんで、音が消えて――

爆発した。

……

…………

……………

◇

静寂。
ドラクルス・ディノサーベラス〝緋色の傷〟、先祖返りとも言える「火」を扱う術を持つ特異なるオンリーワン。
その特殊な体内構造、体内に可燃性粘液物質を貯蓄する臓器の中において、被捕食者を喰らった際に摂取した脂肪などを貯蓄する程に、粘液塊の素となるものとは別に蓄積圧縮される重油塊。
本当にギリギリまで追い詰められた時にのみ、初めて披露する〝緋色の傷〟最後にして最大の火力。

その威力たるや、隕石の着弾に等しく。
サンラクと〝緋色の傷〟の一晩をかけた死闘の音に気付いて近づいてきたプレイヤーが巻き添えで吹き飛ぶ程の衝撃、そして熱は樹海の一角にぽっかりと焼け野原を生み出した。

「ガロロロロロロ………」

〝緋色の傷〟は生きていた。左頭の完全沈黙、そして右頭が殆ど機能停止しかけている中で、しかし恐るべき緋色の三つ首竜は確かに死の淵で踏ん張っていた。

では〝緋色の傷〟と死闘を繰り広げた一人の人間は？
普通に考えれば生きているはずがない。大樹がへし折れ、地が抉れ、巻き添えで人が死ぬ規模の大爆発を受けて……生きる命があるはずもない。
加えて重油塊もまた、通常の粘液塊と同じ性質を持つ。即ち一度付着すれば地面を転がった程度では絶対に消えないナパームの如き炎。仮に、そう仮に衝撃と熱を凌ぎ切ったとて、その身を襲う炎がすぐさま死に体の肉体を焼き尽くすだろう。
だがそれでも、〝緋色の傷〟は決して油断していなかった。屍を見るまでは、闘志も殺意も決して収まることはないと土煙を睨みつけ………
そして、油断なく警戒していた〝緋色の傷〟が対応するよりも早く。

「あ゛あ゛ぁ゛あ゛ぁ゛っっ！！」

………投擲よりもさらに速く、土煙を貫いて飛んできた「剣」が〝緋色の傷〟の中央の頭のど真ん中、眉間に突き刺さった。

「これでぇ………！」

土煙を貫いて飛び出した一人の人間。喪服を纏う女が酷い有様をも構わず、ただ一ヶ所を睨みつけて走る。
何故生きているのか、何故死んでいないのか。何故焼けていないの

か。〝緋色の傷〟の知能（AI）ではその答え――別離なく死を憶ふを地面に突き立てて衝撃への盾とし、サンラクをして一つ二つしか持っていないような最上級ポーションをなりふり構わず額で割り、瓶同士を叩きつけ、挙句口で噛み砕いてありったけを全身で浴びる事で炎に抗い切ったなど――をこの瞬間に導き出すことはできなかった。

熱による消失ではなく、癒しの概念を拒む黒死の衣装（レクイエスカト・イン・パーケ）に回復薬を浴びせかけた事で服としての役目ごと六割近く溶解した喪服のままに、走り、振りかぶり、振るって狙うはただ一点。
死を纏い、死を振るい、ドス黒い爆熱を突き抜けて……〝緋色の傷〟の眉間に突き立った竜殺しへと墓標の刃に込められた全身全霊が叩きつけられた。

「死ねぇぇぇぇぇぇえ!!!!!!」

木に突き立った釘に、金槌を振り下ろせばどうなるか。
もはや竜殺し（アラドヴァル）の剣が砕け散るかもしれないという懸念すら忘れた乾坤一擲（バンカーストライク）の穿撃はアラドヴァルの刃を更に深く食い込ませる。

それが、この長きに渡る戦いに打ち込まれた終止符だった。

◆

どれだけ死から遠のいても、決して逃げ切る事は出来ない。
百万の体力も、傷を上回る癒しを齎すリジェネも完全無敵の攻撃耐性も……HPがゼロになれば死ぬ。命とはそういうものだ、どれ

だけ強くなろうと無に抗うことは出来ない。無くなってしまえばそれで終わり。

「さよなら、〝緋色の傷（スカーレッド）〟」

あの爆発を生き延びるためにエリクサーは使い切っちまったんだ。
もう助けられないし、もう助けない。

あるいは第二第三のドラクルス・ディノサーベラス〝緋色の傷〟が今後生まれるかもしれない。
それでも、貪る大赤依を相手に共に戦ったこいつはここで終わり。
別れを悲しむには死を願い過ぎた……それでも、勝利を叫ぶよりも先に出たのは別れの言葉だった。

僅かに呻くような唸りを上げて、一度だけ大きく震えて、その巨体から力が抜けて……北風に流された雲の切れ間から僅かに覗く夜明け前の薄明に照らされて砕け散る。

それがこの死闘の最後であり……ドラクルス・ディノサーベラス〝緋色の傷（スカーレッド）〟の最期だった。

・回復アイテム

当然ながら、シャンフロという世界観において回復アイテムとは化学的に説明できるような薬品などではない。

回復という現象を「どう定義するか」が数多ある回復アイテムを区別するものであり、例えば「損傷を元の状態と同様に修復する」ものもあれば「損傷する前の状態に巻き戻す」ものもあり、果ては「使用者の肉体から「損傷」という事実を消し去る」というものすらある。

アイテムテキストを読むだけでは分からない事はあまりに多い。黒の装束に染み込んだ液体は炎に抗ったのではなく……損傷をもたらす「概念」そのものに抗い、耐え切ったのだ。

あとは身体を丸めて、目と口を閉じて耐えるだけ。

死を認識することも出来ないような一瞬の中で、地面に齧り付いてでも生にしがみつくような狂気がなければ出来ないイかした突破方法。

エピローグ：太陽は昇る（前書き）

タイトルに他意はないよ、ホントだよ

神話級処刑用ＢＧＭとは何も関係ないよ、ホントだよ

エピローグ：太陽は昇る

◆

激烈に疲れている。しかし気を緩めるとすぐ口元が緩んでしまいそうだ……疲労と歓喜で。
〝緋色の傷〟の単独討伐……いや、知らない人の助力がなかったらまた別の結果になっていたかもしれないのでソロ＋ワンアシスト討伐。快挙と呼ぶに相応しく、思い出してニヤつくに不足ない。知らない人の名前全然見てなかったから全く思い出せないんだけど。
だがソロ討伐によるドロップアイテムは……なんかもう、ヤバいくらい落ちたのだ。なんなら武器から防具まで一式で作れそうなくらいには。
とはいえお楽しみは後にとっておこう。そもそも〝緋色の傷〟に喧嘩を売ったのは素材が主目的ってわけじゃあない。失ったヴォーパル魂を取り戻し、気分を切り替え、そうしてようやっと俺はこの扉の前に立つことが出来る。
「契約者（マスター）……申し訳ありません、当機（わたし）のインテリジェンスでは……」
「サイナ、インテリジェンスは柔軟にすりゃあいいってもんじゃないんだぜ？」
時に強硬、すなわちダイナミックに入室（エントリー）！！
「鉄拳ドアノック！！」

バキャッ！！

ドアノブを殴り砕いて破壊し、施錠という役目を遂行できなくなった木の板を蹴り飛ばしてオープン。部屋の中で硬直している白布お化け……白布お化け！？　新大陸にも生息していたのか……まぁ冗談はさておきウィンプの元へと一歩踏み出す。

「こ、こないで！」

「やだね。あとサイナ、下行って店主に謝ってきてくれ……あとで一括払いで弁償しますって」

「……了解：」

別に厄介払いというわけではないが、一流は物事の最中(さなか)にあっても気配りを忘れない。これヒーラーの必須条件な。

「…………」

「やだ……もうやだぁ……」

白布お化け二号はというと、完全に心が折れて砕けて粉になったのが風に吹き飛ばされたご様子。ガワ(ガワ)が美少女なのでニッチな需要はあるかもしれないが、随分とまぁ惨めな姿だ。

「……ウィ」

「どうして！　どうしてサミーちゃんをしなせたのよっ！！」

「…………」

「あんたがいたのに……っ、どうして………！　なんで、サミーちゃん……わたしを、おいていくの……っ！」

大切な存在を失ったことで心にできた穴を埋めることは容易ではなく。さらにそこへ信じていた者に裏切られた悲しみによる痛みを注ぎ込まれれば、その苦しみは如何程のものか。
泣いているのか、怒っているのか、呪っているのか……あるいはその全てをぐちゃぐちゃの挽肉にして捏ねたようなドス黒い感情の叫びが部屋の中に響く。

だが、俺の視線を釘付けにしたのはそこではなく。

「……よう、元気かい」

ウィンプに隠れて見えなかったが、床に力なく伏せている一匹の蛇の方だった。
まぁ当然だがサミーちゃんさんではない、現実に存在しているアナコンダより少し小さいくらいのサイズ……つまりこの世界においては「超小型」に分類されるような小さな蛇。

――話は変わるが、この世広しといえどもゲーマーほど「経験」の多い存在はない、と個人的には思っている。
小悪党から大魔王までを倒し、特定の個人から世界までを救い、そしてヒトの想像力が続く限り無限に生み出され続ける世界を歩いていく……たかがゲームと笑う者もいるが、じゃあお前人生のうちにフルダイブVRクラスのリアリティでドラゴンと戦ったことあんのか？　って話になるわけだ。

であればゲーマーとは悲劇も喜劇もプレイしたゲームの数だけ見て

きた者だ。今にも死にそうな蛇がこれをウィンプの元に持ってきた……成る程、ロールプレイだ。

「言葉が通じるかは分からないけど、わざわざ探して持ってきてくれたことにありがとうと言っておくぜ」

こう見ると随分と見窄らしい覆面だ、だがこいつとは一番長い付き合いでもある。てっきりロストしたものと諦めていたが……というか別になくなっても若干ショックなだけで別に困ることはなかったのだが、戻ってきたならそこそこ嬉しい。

だが重要なのはそこではなく……恐らく他のゴルドゥニーネの眷属であろうこの蛇が、わざわざ俺の「正眼の鳥面」をここまで持ってきたという意味。古今東西死の間際に抱く未練は二種類。

つまり「死にたくない」か「死んでも死に切れない」だ。

そしてこの蛇の未練は後者……であれば、応えるべきロールプレイは決まっている。

「そして……安心しな、俺の懐は見た目よりもずっとずっと広い。お前の分も背負って持って行ってやるよ」

答えはない。蛇だから喋れないとかそういう話ではなく……あの時白い蛇がそうだったように、俺の鳥面を持ってきた蛇はもう砕け散ってしまったから。

「………さて」

今の俺はR．I．P．の効果で他の装備が使えない、ので今度は落とさないようにインベントリアに格納してシーツおばけもといウィ

ンプの方へと向き直る。

「さてウィンプ、話をしようぜ」

「……いやよ」

「残念、拒否権はない」

知らなかったのか？　シャンフロにイベントスキップ機能は無い。

「あの時、何があったのか……まぁ大体わかってるだろう。俺たちは負けた、サミーちゃんさんは死んだ、んでもって他の連中は心が折れた」

「…………」

「誰のせいだと思う？」

沈黙。考えるまでもない簡単な質問も、今のウィンプには口に出すのも憚られるか。

「…………わたしのせい、っていいたいんでしょ？」

「…………」

「わたしが、よわいから！　サミーちゃんをまもれるくらいつよかったら！　サミーちゃんがしぬことはなかったって！　そういいたいんでしょ！？」

「…………」

「わかってるわよ！　わかってるわよそんなことぉっ！！　だからって……！！　こわいの！　たたかいたくないの！！　そんなことがいえるのは！　あなたはつよいからでしょ！？」

「………」

「もうやだ、もうやだよぉ……わたしは……わたしは、いつだって、ちをはって……きらきらしたものを、うらやましいってみることしか……できないの……」

ボロボロとウィンプの目から落ちていく涙。俺はそれに対して何と言っていいものか僅かに迷う。慰めるか、それとも……うーん、まぁいいや。真実を教えてやろう。

「ウィンプ」

「ひぐっ……ひぐっ……」

「大、大、大……大不正解！！」

「！？」

「凄いなお前！　この期に及んでまだ気づいてないのか！？」

サミーちゃんさんが死んだのも、俺がこっぴどく敗北する屈辱を味わったのも、なんか他の人らがやたらトラウマ負ったのも、元を辿れば全部！　全部！！　全部！！！　ただ一点に集約されることだ！！！

「悪いのはあのクソゴルドゥニーネに決まってんだろうが！！！！」

「え………」

「いいかウィンプ、お前は自分を卑下しすぎだ。もっと世界に責任転嫁してこうぜ！　俺はする！！」

何故サミーちゃんさんは死んだ！？　あのクソ蛇が奇襲かましてきやがったからだ！！

「大体なんだあのクソイベント戦闘は！　せめてフラグを可視化しろよ！！」

何故俺は装備を失った！？　あのクソＰＫだけならどうとでも対処できた、クソ蛇がいたからにっちもさっちもいかなくなったからだ！！

「俺は今、猛烈にキレてるぜ……絶対許さねぇってなぁ！！」

なぜ負けた？　頭数が足りなかったからだ！！

「挙句負けイベなりの見せ場は全部サミーちゃんさんに持ってかれた。どうしてくれんだオイ、今の俺はＳＮＳで「こいつ設定の割にクソの役にも立たねぇ」って書かれるような惨めな有り様だ！！」

「え、え？　あ……」

「怒っていいんだぜウィンプ、俺達は……いいや、お前はあのクソゴルドゥニーネの顔面にグーパン叩き込んでいい権利がある！！」

蛇も人も関係ない、受けた傷の報復は……失われた命の「仇討ち」は！！　全ての知的生命体が等しく持つ権利だ！！
僅かに開いていた窓が風に吹かれて大きく開く。東より吹いた風は〝緋色の傷〟との死闘で燃えた曇天を跡形もなく吹き飛ばし、快晴の空にいつだって太陽は昇る。

「復讐しようぜウィンプ」

「ふく、しゅう……」

「力がないなら鍛えればいい、それが嫌なら頭数を増やせばいい」

昇る暁光を背に浴びて、俺はウィンプに宣言する。

「戦争だ」

「せんそう……」

「何もかもを巻き込んで盛大に仇を討とう。そんで全部終わったら世界で一番立派なサミーちゃんさんの墓を作ってやろうぜ」

行手を阻む敵も、龍蛇（ナーガ）も、なにもかも！　道を切り拓いて突き進む！　それが俺達開拓者（プレイヤー）の使命（モチベーション）ってもんだ。
差し伸べた手、泣き虫の蛇は日陰の中でそれを見つめている。そして、未だ恐る恐るといった様子だが………

「……もういちど、しんじていいの？」

「当然だ。あとついでにお前も鍛える」

「う゛………ぐすっ、じょうとうよ」

弱々しくても確かに差し伸べた手は、日陰から立ち上がり踏み出した一歩と共に確かに掴まれた。
やることは山積みだ、だが俺はもう止まらない。レベル１５０がなんだ、最大速度がなんだ。足りない！　足りない！！　何もかもが足りなすぎた！！
鍛え直すのはウィンプだけじゃねぇ……俺自身もだ。いい加減、未消化のサブクエもどきも整理しなきゃいけない時が来たようだな。
今後は最短を最速でいく、もう手段を選り好みはしない。

ロリコンだろうが乱射魔だろうが変態だろうが、使えるものはなんでも使ってやるさ。

エピローグ：太陽は昇る（後書き）

とりあえずここで一旦この章は終わります
この章のボスってゴルドゥニーネ？それとも〝緋色の傷〟？
その答えは皆さんの心の中にあるのです……少なくとも作者の心の
中を家探ししても見つからなかったので

檄文（スクショ付き）

その日、一枚のスクリーンショットと共にシャンフロに激震走る――

――

◇

「あ、おい！　いきなり新大陸に行くってどういうことだよアクちゃん！」

一人の女は周回と鍛造、そして弛まぬ強化によって業物と言うにふさわしい性能を持つに至った籠手の調子を確かめるように一度装備し、そしてそれをインベントリにしまう。

目指すはフィフティシア……そして隔絶の大海を超えた先、未だ拓かれざる新大陸。

「……止めてくれるな、やらないといけないことができたんだ」

「やらないとって……いやお前、王国騒乱の方はどうするんだよ！」

「そうだよ、徹夜で四日は前王陣営と戦えますとか言ってたのに！」

徹夜勢。それは対人要素が絡むコンテンツにおいて２４時間を戦い抜く懼るべき戦士を指す言葉。

その一人が突然、コンテンツから完全離脱すると宣言したのならば周囲の者達もそうか行ってこいと言うわけにもいかない。

「え、リアル事情とかじゃないんですよね？　新大陸？」

「ああ………そうだ、俺は新大陸に行かなきゃならない」

「その一点張りじゃ理由が分からねぇってんだよ！」

主義、思想、欲望、約束、友情、あるいは武士道。
理由（ワケ）の内訳を説明するにはあまりに混み入っている。だがあえて、そうあえて一言で言い表すとするならば――――

「――美少女が、助けを求めている」

「ちょっ、アクちゃん！？　説明になってないよその説明！」

「あ、もしかしてアクちゃんさん新大陸のってこれ？」

「掲示板？」

「一体なんなんだ………えーと？　新大陸でアルビノ美少女ゴルドゥニーネが………ゴルドゥニーネ！？」

夜を徹して命をかけるなら、やはり美しい少女のためである方がかけがいがある。

◇

「サバさんからメール？」

それを受け取ったプレイヤーキラーがいた。今し方、開拓者の命を奪った手で開いたメールをしばし眺めて思案する。

「新大陸……か……」

プレイヤーキラー、ＰＫはＮＰＣが統べる国たるエインヴルスの法であっても罪人である。当然、王国主導の新大陸調査船に正規の方法で乗り込むのは不可能に近く、そもそも王国騒乱シナリオの影響で新大陸行きの船は存在しない。

「なんか伝手でもあるのかな？　日時指定されてるし……」

特定の日時、特定の場所、メールに記された情報にひとかけらの嘘も混じっていないのだとしたら。
現役のプレイヤーキラーにすら一目置かれる「ビキニのバカ」、もとい対人強者サバイバアルはＰＫにすら誘いをかけるような大きな何かをしでかすつもりであり……そして同時にＰＫを新大陸に運ぶなんらかの手段を用意できているということだ。

「ユニークモンスターねぇ……ジークヴルム戦にすら参加できなかったから半分くらい諦めてたけど、チャンスがあるなら参加してみよっかなー」

リアルの自分への評価になんら影響することなく、欲望のままに他人をぶん殴れる。そんな刺激を求めてプレイヤーキラーデビューした少女は折角のチャンスを無駄にするのももったいないと、始めての頃に対人戦のいろはを教えてくれたある種の恩師の誘いに乗ることを決めた。

「あ、そうだ。どうせならちーちゃんとかそらちゃんとかも誘っちゃおっかな」

人と人との繋がりを糸とするならば。ひとつを引けば三つ四つとつられて引っ張られることもある。

必ずしも全ての誘いに好意的な返事が返されるわけではないように。思わぬおまけを得ることもある。

水面を揺らす波紋とは、投げ込んだ石が大きいほどより激しく広くなるものだ。

◇

「また、残業か………」

文明が発達すれば人が担う負担も減る。そんな幻想を打ち砕くように山のように積み上げられた己が負担すべき責任（仕事）を思えば、口から吐き出される不景気な吐息は尽きることを知らず。殆ど使っていない有給を使う、という最終手段も誰も彼もが忙しいこの年の瀬に使うには蛮勇に近い勇気が要求される。

社会人というものは己一人に課せられた責務だけを果たしていればいいものではない、社会という大きな絡繰のいち歯車として円滑に回るためには隣接する歯車への配慮も必要なもの。

「まぁ、そもそも予定なんてなかったけど、こりゃクリスマスもオフィスかな………」

そんな時だった。男のもとに一通の報せが届く……仕事用のデスクトップではない。個人の携帯端末、それも仕事との関わりがない「もう一つの名前」に宛てたものが。

「あー……寂斬さんかぁ……年末は鬼スケジュールだし、殆どインできないくらいならいっそ、寂斬さんにクランリーダー変わって……もらった、ほう、が…………………」

後ろ向きな委任を半ば本気で呟いていた男であったが、届いたメッセージを読んで行く程に脳のリソースが向けられた方向が後ろ向きから前向きへと変わっていく………

「〝緋色の傷〟が……討伐、された……？　は、嘘でしょ……？　いや、待って、情報が、情報が多い。ゴルドゥニーネ？　新大陸決戦？　待て、ちょっと待った、落ち着こう………」

ドラクルス・ディノサーベラス〝緋色の傷〟が討伐された……とりあえず男のメンタルはまずこの時点で四割粉砕された。かの緋炎の恐るべき竜の討伐は男のモチベーションの一つであり、それが討伐されたとなれば誰が悪いのかという不毛な責任追及をせざるを得ないのだ。

――その恐るべき三つ頭の竜を討伐したのがたった一人であるとしるのはもう少し先のことではある。

「ぐ、く、こ、く………」

男の喉から奇妙な音が漏れる。それはあたかも身体の水分が減少し、喉が乾き切った者が漏らす音にも似ていて。

「無尽のゴルドゥニーネ討伐…………ユ、ユニークモンスター…………」

ユニークモンスター。ただ一つの存在、それが七種。シャングリラ・フロンティアにおけるオンリーワン×7のスペシャルコンテンツ。
墓守は関与すら許されず、深淵はかろうじて参戦、天覇は参戦、夜襲は二度ほど蹴散らされてそれっきり、冥響は未だ縁遠く……未だ詳細のはっきりしない残る一つを除けばライブラリの発表で明確にその存在が知られることになった「無尽」のユニークモンスター。
男は戦友達に日々説いていた。オンリーワンのコンテンツはそりゃ参戦したいが、このゲームって基本的に日々の積み重ねが一番大事だからユニーク探すより周回効率突き詰めた方がいいよね……と。

だがあえて言おう！　ユニークモンスターに関わりたいに決まっている！　本音を言えばレイドモンスターのいずれかを独占したい！
というか周回云々は自分のジョブ的にソロで周回するとひたすらきついから周囲を付き合わせる大義名分的なところがある！！
結論から言えば、男とて参加できるならユニークコンテンツには積極的に食い付きたいのだ。しかし時間がない、余裕がない、なにより精神的な体力すらもが足りない。

「…………んぐっ」

おもわず口の中に溜まった唾を飲み込む。それはまるで、飢えた者の前へ満漢全席を見せつけたときの反応に似ていて。

「ク、クリスマス…………有給…………いや、でも……仕事が…………三徹してどこまで消化できる？　自分が絶対に片付けないといけないところだけ優先して削っていけば…………………」

無謀、無茶、無理…………理性が叫ぶ現実に飢えた獣の如き衝動が霽りつく。社会の歯車として果たすべき使命、開拓者として挑むべき未知への渇望、時間。そう全ては時間が悪い……なぜ自分ばかりが寿命を２４時間でどれだけ有効に活用できるかを日々苦心しなければならないのか。

「やれる、やるんだ…………や、やるぞぉ！！」

前人未到の三徹行軍。クリスマスに夢を！　目指せ一週間有給！
死ぬ気で頑張れば誰にも迷惑をかけることなく有給が取れる――――！！！

……

…………

三日後。

「部長。先日申請した通り、有給消化させていただきます」

「楼堂君、君この師走の忙しい時に有給ってさぁ…………」

「部長、有給取ってる間はＰＣと携帯端末が多分壊れるので連絡をいただいても気づかないです」

「いやあのね楼堂君、他のみんなの負担が増えるワケでさ……」

「部長」

「うん、何かな？」

「大晦日までゲロと涙と恨み言をとめどなく垂れ流しながら仕事する同僚と一緒に仕事する方が負担だと思いませんか」

「………………………」

「自分が目を通さないといけない箇所は全て目を通しました。あとは他の方の担当です……では部長、良いお年を」

疲労で泥のような目をした眠れる獣が今、社会的かつ感情的評価を犠牲に万全の睡眠時間と満ち満ちたメンタリティによる徹夜を以ってシャンフロの世界へと降臨する。

◇

例えば同じ咎を背負った繋がりを。
例えば戦い方を指南した繋がりを。
例えばかつて殴り合った繋がりを。
敵対を引き摺らない、勝利の誇示はその場限り、敗北は称賛と再戦で流す。その本質はどうであれ、からりとした印象が積み上げてきた合縁奇縁は思わぬところで役に立つものだ。

「さぁて………どんだけ来るもんかね」

女がしたことは至極シンプルだ。掲示板に情報を流し、知り合いに

メールを送り、そして見かけた大手クラン(頼れそうな奴ら)、その全てに一枚のスクリーンショットと共に檄文を送った。ただそれだけだ。

スクリーンショットに写ったもの。それは怒っているのか泣いているのか恥ずかしがっているのかよく分からないが、とりあえず可愛い顔で「戦力募集！スカルアヅチで私と握手！」という緊張感があるのかないのか分からない看板を持った白髪白肌赤目(アルビノ)の少女。そして彼女の正体がゴルドゥニーネであり、彼女とは別の大ボスとでも言うべき「無尽のゴルドゥニーネ」との戦いに人を募集する旨の言葉を添えて。

「っし……おうサンラク！　知り合い含めりゃそこそこの数は集まりそうだぜ！！」

「おー、無駄に交友関係広いなお前……」

「俺これでも気の良い兄貴キャラ確立してっからな……」

「気が触れた野蛮人の兄貴(リーダー格)の間違いだろ。文字鯖の奴らが全員忘れても俺は味方の屍食って人様のサーバーでゲリラやらかしたことは忘れないからな」

「カーッ！　懐かしい話を持ち出すじゃねぇかオイ。ありゃあ確かに限界状況すぎてλ(ラムダ)の食人族みたいなことやったけどよ……お陰でお前らμ鯖の奴らも楽しめただろ？」

この場には要所を守る装甲以外は動きやすさに重点を置いた女と、ズタボロの喪服を纏った女の二人しかいない。その他の面々と、旗頭として神輿で担ぎ上げられた少女は今頃は別の場所(秘密)に到着した頃だろう。

二人は共に助力を求めた開拓者達を信用している…………良い意味でも、悪い意味でも。万が一にも「こいつもゴルドゥニーネなんだから倒せばなんかドロップするだろう」などと目先の欲で神輿を崩されてはたまったものではない。

「あれを「良い」で片付けるのは狂った思い出補正すぎるだろ……」

「違いねぇ、まぁでも……楽しかったしな」

「カニバゴリラの大群はあと数年は御免だぜ俺は…………で？　そっちはどうなんだ？」

「返事待ち、そっちは？」

「あー…………まぁ、五分？」

何が、とは問わない。何が来るかを女は聞いていた、そしてもう片方の女は知っていた。
人を集めるのだ、ただ強ければ良いと言うものではない。夜を徹して朝日を浴びて、太陽が再び眠りにつくまで走り続けられるような、そんな不夜なる人を。

女には心当たりがあった、多分あいつなら数日休んでもなんとかなるんじゃゃね？　金も地位もあるんだし……と。
女にも心当たりがあった、リアルを詮索する気はないが大体どの時間帯にもいるなら今もいるだろどうせ……と。

答えは五分後、そして三十分後。

檄文（スクショ付き）（後書き）

この話の中で一番ヤバいのは「クソ労働環境の合間にクソ程手間がかかる武器を作った奴が年越しまで連休取った」ってことです
流石に本当に壊すわけにはいかないので段ボールに全部詰めて正月に自宅に郵送されるようにして発送したよ、三徹して彼は狂気に取り憑かれてしまったんだ

スワローズネストはホワイト企業です（前書き）

連続更新、本当は三連続のつもりだったけど思ったより手こずってしまい泣く泣く二話連続更新です

すまない……本当にすまない……

スワローズネストはホワイト企業です

「この二日僕含めた社員全員死ぬ気で頑張って一週間くらい連休作らない？」

◇

ＡＲ関連のベンチャー企業であり、近年メキメキと頭角を現して今や上場企業の仲間入りも秒読みと目される「スワローズネスト」。
ＶＲの全盛期を迎える少し前、ＡＲという拡張された現実に商機を見出した初代社長津羽目（つばめ）鏑（かぶら）より事業と思想を受け継いだ二代目社長津羽目（つばめ）風矢（かざや）……初代が剛腕ならば敏腕と言うに相応しい二代目社長、年末の一言であった。

「……えーと、社長？」

「ホラ、ウチは確かに急成長してるけどまだまだ規模的にはそんなにだろう？　大口の仕事も済んだばかりだしここらで一丁死ぬ気で働いて年末に長めの休暇とかどうだろう？　って話でさ……」

「良いと思います社長！　ついでに正月にまた社員旅行しましょう！　今度もベガスで！！」

「多摩さんはちょっと黙ってて？」

風矢の手腕を疑うような社員はスワローズネストには存在しない。
貪欲かつ着実に規模を広げつつも無謀な拡張には手を出さない。
社員一人一人の技術力の価値を正しく認め、使い潰すのではなく長

く良く使う方針。
そして何よりあのユートピア社との取引を成功させせる類い稀な交渉術。
学生時代の頃から優れた才覚を見せていた人物とは聞いていていたが、初代社長の頃からスワローズネストに所属する古株の社員達も先代と同等の信頼を置くことができる人物。
それが津羽目　風矢という男……だが、時折妙な提案をすることもある。今回もまた、その「妙」に分類される突然の長期休暇宣言に幹部に相当する立場にある社員達も困惑を隠せない。
「社長……もしかして自分が何か年末に用があるからとかじゃないですよね？」
「ははは、まさか」
「でも社長、昨日なんかメール見てものすごいニヤニヤしながらカレンダー見てませんでした？」
「多摩さん、次の社員旅行はマカオにしようか」
「社長の選択には何一つ間違いはありません！　社員全員分のライオットブラッド買ってきます！　経費でいいですか！？」
社内で「間違いなく有能だが結婚したら貯金がいつの間にか消失してそう」と評判（？）の女性社員が目に「カジノ」の三文字を輝かせながら走り去っていったのを見送りつつ、改めて風矢は口を開く。
「まぁぶっちゃけるとさ……その、シャンフロでイベントラッシュというか……」

「そこだけ聞くと自分の都合で社員酷使する酷い社長ですね……」

とはいえＪＧＥでのＡＲ技術の一任、スクラップ・ガンマンの発表などの大きな事業を全て無事に成功させたことでスワローズネストは忙しくなったのは事実だが……その二つが完了した事で多少仕事に余裕ができているのもまた事実。

そう、例えば……社員全員で二徹して頑張れば、今年分の仕事を全て終わらせることができるだろう。

「ですが二代目、その口ぶりだと普通に正月休みありますよね？」

「う゛……」

「ていうか年末に二日三日出勤するくらいなら「二十日辺りから三ヶ日まで全部休みにしようか！」とか言うつもりじゃないですよね？」

「ふふふ……冴嶋さんは父の代からウチで働いているからかな、僕の考えることが手にとるように分かるんだね……」

「それはもう、割と重要なところで大雑把になるのは先代そっくりですよ」

スクラップ・ガンマンの開発にあたり、口を出されると面倒なので両親に世界一周旅行のプレゼントという非常に平和的な追放手段を取った風矢であったが、やはりそれは間違いではなかったと改めて思う。

もしこの場に父がいれば、このようになんやかんやの流れで長期休暇を強行することは難しかっただろう。今アメリカの方らしいので

まだまだ猶予はある、少なくとも今年中に帰ってくる事はない。

「それにほら……やっぱり皆さん、年末はプライベートでもやりたい事は多いだろうし？」

「まぁ、そりゃそうですけど……」

「正直ありがたい気持ちはありますけどぉ……」

休めるならば、そりゃあ休みたい。少なくともホワイト企業を自認するスワローズネストに所属する社員達は仕事＝手段として受け入れることができている。だが同時に、自分こそがスワローズネストを支えているのだと言う自負もある。

幹部クラスともなれば、目先の休み以上に半月近く会社を機能停止させて大丈夫なのかという心配の方が先に来る。

「一応現行のプロジェクトが一つだけで、新規の契約は来年に回せる。つまり二日くらいで仕上げれば休みが手に入るわけだよ」

流石に新たに入ってくる要件まで無視するわけにはいかないが、それを差し引いても実現不可能ではない。そして恐らく社員のほとんどはこれに賛同するだろう。

「いやぁ……出来るか出来ないかで言ったらまぁ出来るんだろうけど……」

「流石に今の規模で連絡窓口まで機能停止は不味くないですか？」

「メールに誘導するメッセージを残せばいい」

あれはどうするのか、それはこうする。しかしあれもある、そこは来年でぃぃ。
まるで最初から答えを用意してきたかのように、淀みなく「年末長期休暇」を実現するべく弁舌を存分に駆使する風矢。社員達の目には社長の舌が二枚に見えたとか見えないとか。
決定打は、経費でエナジードリンクの箱を四箱担いで帰ってきた社員の血走った目。かくしてスワローズネストは聞く者が聞けば正気を疑いつつも羨望の眼差しを向けざるを得ない年末長期休暇に向けて、死へ(デスマーチ)の全速ダッシュを開始するのだった……

……

…………

……………………

◇

「やぁ…………バイバアル。こっちは全部片付けた………………………ごめん、夜まで寝させて。夜になったら王国でも恐竜でもなんでも、気が済むまで周回する、から、さ……」
『……ノイズかかってんのか？　声がヤベェくらいカスッカスなんだが』
「はは、は……地声、だよ……今の、ね」

スワローズネストはホワイト企業です（後書き）

追伸
来たる12月17日にコミカライズ版「シャングリラ・フロンティア」二巻が発売します！
一巻同様、硬梨菜が色々書き下ろしていますがシャンフロのあのシーンやこのシーンが大魔導師級(ウィザード)漫画家不二涼介先生によって実体化しています！
みんな！よろしくね！！

貴方のためなら「私」は（前書き）

連続更新

貴方のためなら「私」は

◇

くだらない現実（リアル）にさようなら、楽しい現実（ゲーム）にただいま。

彼女にとって、退屈で現実での全ては喜びと同義であるログインする瞬間を迎えるための苦行に他ならない。

しかしながらログインする、という事はログアウトしていた、という事なので「ログイン」という行動が嫌いでもあるというのが彼女の抱えるねじれなのかもしれないが。

「…………」

彬茅（あきがや）　紗音（しゃのん）としての時間はおしまい。ここからは思う存分に「ディープスローター」として生きていく時間だ。

ここ数年、執心という言葉がぴったりと合うほどにディープスローターの心に居座っているとある人物のため、ディープスローターはありとあらゆる方法で自身をカスタマイズし続けている。

例えば初めてシャンフロ内で出会った時。サンラクが前衛の分担ではなく後方支援をこそ求めていると分かったのでそれまでの「魔法双杖（剣）士」というべき構築を放棄、強化魔法などの支援系の魔法を大量に覚え直した。

例えばジークヴルム戦で再び出会って以降。サンラクが「最大速度（スピードホルダー）」の称号を獲得した事で他者（サンラク）への支援だけでは物理的に追いつけないと判断、自身もまた速度対応手段を模索しつつ………もう一つ並行で別の構築（ビルド）にも着手する。

明らかな無謀、言うまでもなく無茶。二兎を追う者は一兎をも得ずと言うように、あれもこれもと手を出せば出来上がるのはかろうじて「器用」と褒める事はできてもその後に「貧乏」がくっついて器用貧乏の謗りを受ける中途半端なアバターだ。

「ああ、そうだレベル上げなきゃいけないんだった……」

だがそれは、「ディープスローター以外の場合」の話だ。
狂気的なまでの育成リセットも、費やした時間と獲得し続けたリソースがいくらでも不足を補う。
サンラクが水晶巣崖という金策とレベリング、二つの効率を高度なレベルで備えたエリアでリソースを獲得したように、ディープスローターもまた自身のみが知る「狩場」を持っている。
新大陸北部、巨人族(ギガント)の今は誰もいない無人の里から南へしばらく歩いた場所にあるその場所が彼女にとっての狩場だ。

「いつ見ても不愉快だねぇ……」

風も吹いていないのに、木が揺れている。いや違う、それは揺れているのではなく身悶えしている。

「オォ、オ……ォォオ……!!」

人ならざる人だったもの。未だこの場所に到達した二号人類がいないが故に、ディープスローターと……かつて、それに会ったことのあるサンラクが知っている妄念の代償たる姿。
「妄執の樹魔(ルーザーズ・ウッズ)」、奇怪な木の怪が十数本(人)程呻き、踠(もが)きながらも姿を

見せたディープスローターに敵意を見せる。

「見目も、設定も、何もかも……ほぉんと、不愉快不愉快不愉快……【煉爆の流圧(プルガ・エルプティオ)】」

詠唱破棄による瞬間の魔法行使。ダメージではなく状態異常とノックバックに特化した煉獄の炎が薄く雪の積もった地面を這いずり、妄執の樹魔達の足元を焼く。
妄執の樹魔達が怯み、火傷（燃焼？）に苦しむ中でディープスローターはすぐさま次の動きに移る。

「【代償詠唱(サブトラン・スペル)】【加算詠唱(アッド・スペル)】【重積言霊(マルティプライ・アクセント)】【詠唱短縮(ディヴァイド・ワード)】……地より吼えろ深き稲妻、」

体力を削る事で魔法火力を上げる魔法。
次の魔法に威力補正を付与する魔法。
魔法の詠唱が長い程に威力が上がる魔法。
そして、魔法の詠唱そのものを短縮する魔法。

それらを駆使する事で、通常の半分の詠唱でフル詠唱と同じ威力を保ちつつフル詠唱の半分以下の速さで魔法を放つ。
早口言葉もかくやな速度で淀みない詠唱を続けるディープスローターの顔に緊張の気配はない。
なにせ「とりあえず死ぬまで戦おう」という非常にアバウトな突貫一択なサンラクとは異なり、既に妄執の樹魔をレベリングのためのサンドバッグとして定めたディープスローターは最速最高効率で妄執の樹魔を根こそぎ狩(刈)り尽くす手順を確立している。
多少こちらの手口学習したところで無駄だ、あらゆる魔法・スキルに精通しているディープスローターは火が駄目なら雷を、それが駄

目なら毒氷衝撃波……何を用いてでも新たな最適解を導き出す。
「天を貫く深き獄よりの御手（みしゅ）、諸人よ恐怖を幾度（いくたび）なりと魂に刻め。
彼（か）の手は恐怖、其の手は暴威、我が手は比類無き槍」

詠唱量を減らす魔法を行使して尚、この文章量。
大地が揺れ、怯む妄執の樹魔達の足元に亀裂が走る。
あの日見た「炎の槍」、あるいはお揃いと自慢するためか。故に地より天を貫くそれはまさしく輝き、迸る光熱の――

「――消えろ木屑共。【深獄の雷槍（ヴォルグ・ジゴヴォルト）】」

槍が炸裂した。

……

…………

焼け野原、という他になく。
あらゆる「熱」を帯びた暴力が振るわれ、妄執の樹魔を苦悶と苦痛ごと消し飛ばした果ての光景。
特に感慨もなく必要量の暴力だけで妄執の樹魔を倒し切ったディープスローターは、かろうじて残っているアイテムを回収しつつ乾いた目で今後を考える。

「レベル１４１……足りないねぇ……」

ディープスローターはフルダイブＶＲに非常に高い適性を持ってい

る。しかしながらそれは並列的な判断力やより深度の深い思考に特化したものであり、瞬間的な反応速度に関しては人並程度のものでしかない。
だからこそ強さが必要なのだ。〝世界最速〟に追いつけるだけの強さを、そして世界最速に並び立てるだけの記録を。

「ピヨヨッ」

「……？」

と、ディープスローターの肩に一羽の隼が降りてきた。ディープスローターは一瞬だけ眉を顰めつつも届けられた手紙を開く。

「……あはっ」

差出人の名を見た瞬間、またどうでもいいプレイヤーからのメールだと判断した己を自ら嘲笑いながら、その顔に信じられないほど華やかな笑みを浮かべる。

「いいよぉ、私は君のためならなぁんだってしてあげる。私はいつだって君の都合に良く動いてあげるからねぇ……ふふっ、ふふふふふ……」

より深く、強い繋がりを。願わくば、彼が現実よりも現実を優先してくれるように。
彼女は彼に追いつく、他でもない……その隣を、我が物とする為に。
彼女がありとあらゆる準備を整え、そして全力のお洒落装備を整えてサンラクの前に現れるまで……あと五分。

貴方のためなら「私」は（後書き）

今のディプスロは「超高出力全方位魔術師」みたいな感じ、ザ・デザイアーがあるからこそ、バッファーデバッファーアタッカーヒーラーアシスト全てを高い出力で行使できる

追伸
来たる12月17日にコミカライズ版「シャングリラ・フロンティア」二巻が発売します！
一巻同様、硬梨菜が色々書き下ろしていますがシャンフロのあのシーンやこのシーンが大魔導師（ウィザード）級漫画家不二涼介先生によって実体化しています！
表紙はツラだけは清廉潔白なあいつ！　書き下ろしもあるし一部店舗ではあいつの自己紹介もあるよ！！
みんな！よろしくね！！

誰でもない、私が私を一位にする（前書き）

二時間超過ならセーフみたいなところあると思う

誰でもない、私が私を一位にする

自発が義務になった時、それは娯楽が苦行に変わる瞬間。
これは不夜なる「彼等」が集まったよりもさらに後の出来事……

◇

無尽のゴルドゥニーネによる強襲、そして「ゴルドゥニーネ」達の敗走……あの日から、一週間が経った。

「……ニーネ、ちゃん」

「……ナにヨ」

三神教新大陸教会。王我星と片腕を失ったゴルドゥニーネ「ニーネ」が逃げ込んだ場所だった。
本来、三神教は人間のための宗教だ。だが人ならざるニーネが受け入れられたのは心なしか女性に対しては優しさが1．5倍になる聖盾輝士団の団長が常在しているからか、あるいは遥か彼方を見据える聖女の慈悲か。
ともあれ、教会の一室に半ば匿われる形で落ち着くことになったニーネと王我星であった……が、

「その……あのね、腕……」

「イい加減、しつッコいのよ」

「ひう」

顔を合わせれば視線は無くなった腕へ。袖を通すものが一本、肩の付け根から無くなっているが故に僅かな身振りと窓から吹き込む風に揺れるばかりの袖をチラチラと見ては申し訳なさげにどもる王我星の姿に、最初は気にするなと言っていたニーネも段々と苛立ちの反応を返し始める。

「顔ヲ合わセレば腕、腕、腕……」

「だって、だってぇ……」

「涙目デ見てレバ生えルとデモ思ってルの？」

「う……」

図星である。
これが本当にリアルのことであったならばこうはならなかっただろう。だが、シャングリラ・フロンティアはどこまでリアリティを突き詰めても結局はゲームなのだ。
もしかしたらその内ＮＰＣの欠損も元に戻るのかもしれない、具体的に何をすればいいのかは分からないが……それが今の王我星の状況であった。

「…………」

あるかどうかもわからないお釈迦様の蜘蛛の糸を探して、ひたすらぼんやりと上を見ているだけ……ゲームであっても真に迫るリアリティだからこそ、そんなダサい有様の王我星に対してニーネの好感

度は非表示のまま下がり続けていく。

「……ぐすっ」

王我星……　どれだけ筋骨隆々の姿であろうと中身が綾織（映画好きの小学生）真央であるが故に割り切れない罪悪感と、積み上がる責任感。
いっそ「たかがＮＰＣの腕くらい、神代技術で生やせるんじゃねーの？」と開き直って立ち上がるだけの行動力があれば話はまた違う形になったかもしれない。

だが王我星はその判断に至れない。恐ろしい敗北の記憶が「王我星」という個人の力にどうしようもない疑いと諦めを刻み込んでしまったから。
自分が何をしたところで、何も成し遂げられないのでは？
どれだけ憧れのムービースターに似せたところで、結局それはただのハリボテでしかないのでは？
疑念とは火事に似ている、一度火がついてしまえばあとは瞬く間に燃え広がっていく……

「もうやだぁ………」

どうして楽しいはずのゲームで、こんなに責められなければならないのか。
どうしてこんな楽しくもないことの為に、ログインし続けなければならないのか。

〝破綻〟の二文字がより色濃く、はっきりと浮かび上がる………

――時に話は変わるが。

コンコン

「……誰？」

――打開策というものは。

「ええと……王我星(おうがすた)、さんだったかしら？　夫の知り合いの方から貴女を励まして欲しいと頼まれてね？」

――ぶっ叩いて開く策という意味なのだ。

「ああそうね、私ったら……自己紹介を忘れるなんて。初めまして、マッシブダイナマイトと申します……どうぞよろしく、王我星さん」

「え――」

この世の真理曰く、筋肉は全てを解決する。

◇◇

「ねぇねぇサンラクくぅん……」

「なんだよ」

「いやねぇ……なぁーんであの人に頼んだのかなぁって。私、聞きたいなぁ……？」

「言いたくないなぁ」

「い・け・ずっ……ああっ！　いいよゾクゾクする眼差しご馳走様です！」

「……お前人生楽しそうだな」

「…………そうだねぇ、今は最高に楽しいよぉ？」

「はいはい……まぁあれだよ、要するに凹んでるんだろ？　だったら一回二回会っただけの奴より憧れの人物とかの方がよくない？」

「……あの人が憧れの人物だって知ってたの？」

「いや、勘。……お前が絶句したの初めて見たわ」

「やんっ、私の初めて奪われ……あっ、待って待ってこの服お気に入りなのぉ！焼くなら顔にしてぇっ！　あぁぁあファラリスッ！！」

◇

「そう……そんなことがあったのねぇ」

あのマッシブダイナマイトが目の前にいて、しかも何故か自分の話を聞いてくれている。何もかもが王我星の理解の外にあった。

マッシブダイナマイト。その漢らし過ぎるプレイスタイルとは真逆

の穏やかな老婦人の立ち振る舞い、ある者はプレイヤーからバトルスタイルまで全てネタと揶揄する者もいるが……こと、王我星のようなプレイヤー達からは脳筋の頂点としてある種の尊敬を集める人物だ。

「私……どうすればいいか、もうわかんない……」

「ふふふ、簡単な話よ王我星ちゃん」

「え？」

敗北の恐怖、友達の腕を失わせてしまった負い目、そして光の見えない展望への不安。
それら全てに対して、マッシブダイナマイトが出した答えは一つだった。

「パワーよ」

「パ、ワァ？」

いくら現役の小学生とて、流石にパワーの意味くらいは分かる。その上で何故今その単語が出てきたのかが分からないのだ。

「いい？　この世の中にはね……パワーで解決できることと、パワーで解決しなくていいことがあるの」

「へ……？」

「負けて、悔しいでしょう？」

「っ……うん」

確かに毒乙女に群がられ、全身に噛みつかれる体験はいくら痛みがないといえどトラウマになってもおかしくない死に方だった。だがそれ以上に……悔しい。

負けなければ、あんなに怖い思いをすることもニーネが傷つくこともなかった。その想いだけは、どれだけ半泣きでめそめそしていても王我星の心の奥底に確かな種火として残っていた。

「私もね？　頑張ってはいるのだけれど……【最大火力】が獲れないのよねぇ」

これもまた有名な話だ。純粋な物理火力においては最高クラスのマッシブダイナマイトだが……全プレイヤー中、最大最高威力を叩き出すことで獲得可能な【最大火力】の称号を、マッシブダイナマイトがシャンフロを始めてからこれまでに一度も取ったことがないと言う事実。

「でも私は、それでも自分のパワーが一番だと信じているの。どれだけ悔しくても……私が一番なのだと」

「どうして……？　どうしてそんなにパワーを、信じられるの……？」

筋肉を見上げる筋肉。筋肉の視線を受けた筋肉が赤子を片手の掌だけで包み込んでしまえそうな大きな手で筋肉の肩を叩く。筋肉密度がひたすらに高まり続け、室内の体感温度は飛躍的に上昇していく。

「どれだけ負けても、立ち止まらなければ筋力は前に進むの。一歩ずつ一歩ずつ……そうして鍛えたパワーはいつしか一歩で三歩分を

進むのよ」

理屈で理解しようにもあまりに抽象的過ぎる言葉。だがマッシブダイナマイトの言葉は、自分への絶対的信頼と……何よりも「目指す先にある頂になんら間違いはない」という確信に満ち溢れている。

要するに、

「筋肉は不可能を可能にするのよ、王我星ちゃん」

「不可能を、可能に……！　マッダイさん、それじゃあ……ニーネちゃんの腕も……」

「……絶対に治せる！　一度負けたくらいで、パワーは終わらない。鍛え直せば不可能が可能になる！！」

「不可能を、可能に！！」

「私を誰よりも信じているのは私！アイアムナンバーワン！！」

「あいあむなんばーわん！！」

◇◇◇

その様子を完全に置いてけぼりで眺めていたニーネ。

そもそもニーネにとって忌避すべきは「不安要素の残る状況」であ

り、絶対的安全が確約された今の環境は非常に居心地が良いので腕の一本程度本当に気にしていないのだが……なにやら妙な方向にヒートアップし始めた王我星を半目で見つめながら、実に人間臭いため息をつく。

そして失われた腕の代わりに眷属の蛇に服の袖を潜らせて腕の代用として操りながら一言。

「ナにコレ」

誰でもない、私が私を一位にする（後書き）

正直、後半どうやって書いたのか全く記憶がないので明日の朝くらいに読み返して理性が耐えきれなくなったら多分書き直します

宣伝
１２月１７日にコミカライズ版「シャングリラ・フロンティア」の二巻が発売します！
これ書いてるのが１２月１１日なのであと六日！もし１２月１７日以降にここを見てる人がいたらなんとびっくり！もう発売してるよ！
大魔導師不二先生の手で具現化した漫画版シャンフロの世界をぜひお手にとってみてください！！

その鼓動と、血潮の高鳴りこそが

――逃げた先でも追い詰められたなら、一体どこに逃げ場がある
のだろうか。

◇

ただ疲れた。感情を抱くことに？　自ら何かを選び取ることに？
あるいは全てに。

「…………」

ぼんやりと眺める空は雲ひとつなく澄み渡っていて。まるで何の感
情も抱くことに疲れ果てた自分の心のようで。

「……何やっても、ダメだなぁ」

望まぬ歌、望まぬ方針。事務所に反発したとてスランプになってし
まえば負け犬よりもなお無様。

歌詞も浮かばず、もうピアノには何日も触れていない。

きっかけは一つの失敗。神阪　紫夕としての一世一代の大舞台を体
調不良でふいにしてしまったこと……ソレが原因で少なくない批判

を浴びたこと。積りに積もった鬱憤や不満が限界を迎え、打開しようにも悪いことは積み重なり続けて。
そうして逃げてきた、シャングリラ・フロンティアという神阪　紫夕じゃない自分になれる世界へと。
シユーと名乗り、それでもやはり誰かと関わるのは……厳密には、誰かの汚い部分を見るのが怖くて、一人で進み続けてきた。
改善しなければ、どんどん悪化していく。人を厭う気持ちはいつしか人嫌いへと。単なるソロプレイがいつしか度を超えた隠居に。何故かゴリラと一緒に生活することになったが、少なくともゴリラはSNSに悪口を書き込まない。
だからこそ、何もかもを捨てたような気持ちで……シャングリラ・フロンティアにのめり込んだ。自分の夢であったはずの歌手ですらも、遠ざけるようになって……

そして出会った、白い髪と赤い目を持つ少女に。
真正面から遠慮なく罵倒をぶつけてくる姿は、罵倒へのショック以上に……憧れた。子供の頃から目指してきた夢、心のままに歌うこと。だが歳を重ねる程に増えていくしがらみや遠慮、そういったものに縛られていく自分と違って、思うがままを言葉にして口から出す彼女のなんと自然体なことか。

「お嬢様」と呼び、付き従うことになった彼女といる内に、何か別の扉が開いたのはご愛嬌。
例えAIとデータの存在であっても、それが己の人生に影響を与えたならば紛れもない真実だとシユーは信じている。
だからこそ……そう、だからこそ過酷な運命を背負う「お嬢様」の為に全身全霊を以って力を尽くす、そのつもりだった。

「……情けない」

だが結果はどうだ。最後まで戦い抜いて、あまつさえ三人のゴルドゥニーネを生還させて見せたのはただ一人の功績によるもの。自分がしたことといえば……二十体程度の恐るべき人食いの毒人形を引きつけた程度だ、それですらも対処しきれずに食い散らかされていては世話がない。

結果としてお嬢の両脚は失われた、彼女の眷属であったアンフィも死んだ。そして自分はプレイヤーゆえに無傷のまま。

あんまりにも惨めだ。天災のようなものだから仕方ないと笑おうにも、彼女に贈った靴と共に失われた両足がシューに罪状を示し続ける。

「…………」

いっそ、また逃げてしまおうか。だが、現実から逃げてゲームから逃げて……一体どこに逃げられるというのか。自己を顧みるたびに嫌悪だけが積み重なっていく、逃げる勇気もなくさりとて今の「お嬢」に合わせる顔もなく……ただただ、なんの役にも立たない時間だけを緩やかに消費していく。

その時だった。

「やーっと見つけたぞ………どこ探してもいねぇし……あの高飛車ゴルドゥニーネは疑心暗鬼極まり過ぎて話にならんし……」

「君は………」

その姿は、その声は。

「二週間は経ってないよな確か？　久しぶりだな……」

「……誰？」

「えっ、酷くない？」

声は知っている。シユーとて腐っても歌手、〝音〟に関しては人類の平均よりも上の方であるという自負がある。だがその上で、その〝姿〟と記憶の中の人物が全く繋がらなかった。それ程までに……その男は奇妙であった。

「ん？　もしかして見た目？　見た目問題か？　いやプレイヤーネーム見りゃ分かるだろ……」

「あ、ああ……ごめん。そういうの見えないようにしていて……というか、その……あんまりにも、なんというか……」

「イかしてる（BADなセンス）だろ？」

「バッドボーイって言うよりは……その、ホラー寄りじゃないかな、と……？」

その奇妙な姿に面食らったものの、流石にここまで言葉を交わせば誰なのかはすぐに思い至る。

なにせシユーの自己嫌悪を加速させる要因の一つでもあるのだ、そのインパクトある見た目もあって二度か三度程度会っただけでもそこそこ色濃く記憶に残っている。

「まぁでも一応隠し球だし解除しておくか……ツラも変えて、と」

「その……何か、用かな？」

「ん。単刀直入に言うけど、復讐しようぜ！」

その奇妙な装備を解除し、目力の強い鳥類の覆面を被ったサンラクがシユーへと放った言葉。復讐……誰に？　と問うことはない。だからこの沈黙は理解した上での、迷い。

「……誘ってくれたのは、嬉しいけど……僕は、いいよ」

「ふーん……実は俺心理学使えるんだよね」

「は？」

いきなり会話が飛んだ。断りの言葉に対していきなり180度切り替わった話題の意図が掴めず、怪訝な顔をするシユーに対してサンラクは言葉を続ける。

「どうせアレだろ？　あのゴルドゥニーネに勝ったところでお前んとこのゴルドゥニーネの足が治るわけでもないし、眷属の蛇が生き返るわけでもない。それこそ文字通り藪を突いて蛇を出して更なる被害を出すくらいなら身を縮こまらせて嵐をやり過ごした方がいい……とかそこらへんだろう」

「……それは、」

十割正解、即ち図星であった。ついでに言えば「藪を突いて蛇を出して」の辺りまで完全に当てられたことで、シユーは困惑と驚愕の

眼差しでサンラクを見つめる。

「凄いんだね、その……心理学ってのは、読心術みたいだ」

「いやただの勘」

サンラクが来るまでとはまた別の虚無感に襲われるシューであったが、読心術の有無など知ったことかと言わんばかりに半裸の鳥頭は更なる言葉を重ねていく。

「いいかターザン、復讐は最高のメンタルセラピーだ。世の中の道徳やらなんやらは復讐は何も産まないだの虚しいだの言うがそんな事はない。本当にそれが絶対の真理なら仇討ちなんて言葉があるはずがない」

道徳を鼻で笑い、嘴の奥から紡がれる言葉がシューの心の奥底で消えかけている炎に染み込んでいく。

「復讐はマイナスをゼロにする為にやるんだ、これを済ませておかないと永遠に心の中に負債が残り続ける……仮にシュー、あんたが一切関わる事なく無尽のゴルドゥニーネが斃れたとしよう。あんたの心の中に達成感が来ることは無いぜ、残るのは足の無いお嬢様と敗北の苦い味だけだ」

地雷ワード。

僅かに勢いを取り戻そうとしていた炎が、別種の炎に呑み込まれて燃え上がる。激情に身を任せ、叫び喚こうと口を開いて……

「足を治す方法はただ一つ」

そもそも、他人を煽り倒す……即ち、感情を揺さぶる事に親しい男が地雷となる言葉に気づかないはずがない。

「……なん、て？」

怒りの炎が急速に消えていく。だが怒りという形とはいえ燃え上がった感情が、奇妙な風体の男の手によって完全に掴まれている。種類は違えど、人の心を引き寄せるカリスマを持つ者達と舌戦を交わしてきた男の舌もまた、いつしか他者の心を動かす力を宿す。騙すのではなく、唆すでもなく、発破をかける力ある言葉。

「聖女様は偉大なお方よ、彼女の祈りは不可能を可能にするし、その眼差しは遠く未来すらも観測する……ああそうだな、例えば失われた手足を生やす程度なら恒久的に作用するらしいぞ？」

「それは……それは、つまり……」

「おっと、だが聖女様も何でもかんでも無償ってわけじゃあない。仮にも治す相手が「ゴルドゥニーネ」なわけだしなぁ……」

サンラクが言葉を盛り上げればシユーの目も輝き、サンラクが言葉を盛り下げればシユーの顔から血の気が引く。
鳥面の目が「だんだん面白くなってきた」と外道な輝きを帯びてきたが、もはやシユーはそれどころではない。

「来たる12月24日！　世間はX(クリス)マスデイだがシャンフロはX(エックス)デイ！　何せ聖女ちゃんの託宣(スケジュール発表)で無尽のゴルドゥニーネが前線拠点にカチコミをかける日だ」

「！！」

「シユー、本気であの高飛車の脚を取り戻したいなら真夜中にサンタクロースが来るのを見張るのは諦めてもらうぜ！　俺が話をつけてきたッ！　治療の条件は対ゴルドゥニーネ戦においてめざましい活躍をする事！！　さぁどうするシユー、勝ち馬に乗らずに引きこもるか？　それとも……」

差し出された握り拳。答えはもう決まっていた。

「……色々言いたいことはあるけれど。ありがとう……サンラクさん。ＮＰＣにこんなに熱中してるのは、滑稽かもしれないけれど……今の僕は、君に命の恩人と同じくらい感謝しているよ」

拳に、拳がぶつけられる。己の拳に響く衝撃の強さに、半裸の鳥頭は楽しげに喉から笑みの音を漏らす。

「俺の知り合いにもＮＰＣにガチって人間関係自分で爆砕した奴がいる……誇示する事じゃあないが恥じることでもないさ。シユー、楽しい復讐にしようぜ」

――楽しい復讐。
その目に活気を漲らせるシユーの脳に妙にくっきりと刻み込まれたその言葉に、シユーは動きを止める。十秒、二十秒……先程とは打って変わって困惑する側に回ったサンラクが話しかけようとした瞬間、バッと顔を上げたシユーは一つ、サンラクに問いかける。

「あのさ、サンラクさん」

「うぇっ、あ、はいなんでしょう？」

「今の一連の会話って……著作権とかある？」

「………。………？　…………？？？　え？　あー、えー…………

フ、フリー素材……なのか、な？」

その鼓動と、血潮の高鳴りこそが（後書き）

実際聖女ちゃんは慈悲深いのでシューが真剣に頭下げれば普通に治してくれる
でもそういう安売りすると碌なことにならないと分かっている教会関係者や親衛隊……もとい教会、ひいては聖女に仕える騎士達に話を通さないといけないので、奴らにどう認めさせるかが重要なのです

（具体的な方法）
あ、これは奇遇ですなぁジョゼット団長……いや、唐突なんですが麗しいアルビノ高飛車系お嬢様（爬虫類要素あり）が両脚を欠損してるんですよ……欠損って基本的に回復薬じゃ治せないし？　多分ずっとこのままなんでしょうなぁ……あーいや、欠損フェチ？　とかには需要があるのかもしれませんがね？　いやー、可哀想だなー。でもこんな大怪我治せるのは聖女ちゃんくらいだろうなぁー……え？　何？　名前？　あー、えーとマジでなんなんだろう……お嬢様としか呼ばれてるとこ見たことないし……ええい面倒臭ぇ！　やいジョゼット！　ゴルドゥニーネシリーズのマル秘ブロマイド（くしゃみで飛び散った洗剤の泡が顔面に直撃するウィンプのスクショなどなど）を半額で欲しけりゃ話を通しやがれ！　え、ああそう？
お釣りはいらない？
ハイ毎度ありィ！　あと聖女ちゃんに話通しておいてくれよな！！

ここからは宣伝

コミカライズ版シャングリラ・フロンティア一、二巻が発売中です！　硬梨菜がなんかニュアンスで書いていた部分を１００％、いや１００％の精度で漫画という形に錬成する大魔導師にして至高の錬金術師でもあらせられる不二涼介先生の漫画が読める！スゴイ！硬梨菜だったら最低でも２万円は出せますね！　でも講談社は神なので１０００円あれば買えちまうんだ！　ヒューッ！　十連ガチャ回すより安いぜ！！

なんかついでに毎度毎度文字数指定を理解してないアホが書いた書き下ろし小説とか書き下ろし設定とかもオマケでくっついてるので是非手に取ってみてください！！

プロローグ：叫べ我が名は

◇

戦士が二人、対峙している。
戦士達は互いに相手を見ていた。
戦士達は互いに同じものを見ていた。
戦士達はそれぞれが違う思いを抱いていた。
戦いの根源などその程度、どれ程に平和を謳い志したところで……私がいて、貴方がいて、それ以外がいる限り、意見は食い違い、争いは起きる。
ただ一つ、違う点があるとするなら……二人は、互いに相手の主張に理解を示した上で、それでも譲れない主張のために戦っているということだ。

「…………」

片や一切の肌の露出をなくす鎧を纏い、身の丈程ある巨大なメイスを構える重厚なる漆黒の鎧騎士。

「…………」

片や身体の半分以上を外気に晒した半裸ながらもその身に竜骨を纏い、劫火漲る剣を構える異形の骸戦士。

「意見を変える気は無いのかよ、戦友（とも）よ……」

「……生憎だが、こればかりは……無い！」
最後通牒の突きつけ合い。あるいは親友になれたかもしれない二人は、痛いほどにわかる共感をそれでも押さえつけて、己の得物を構え直す。

その様子を固唾を飲んで見守る観戦者達がどよめく。
幾度となく行われてきた激突の中、二人の戦士の偉業を誇示するかのように現れる影。
それが今この瞬間、己こそがより困難で偉大な試練であったのだと敵手の背後にゆらめく幻影に吠える。

片や肉体の詳細が分からないほどに黒い体躯を持ち、生物が持つ機能美と言うにはあまりにつるりとし過ぎた……例えるなら道具を使って一寸の狂いもない直線、曲線がそのまま生物として動いているかのような流線形のフォルムを持つ異形にして四足の竜が巨躯を捻ってあり得ないほどに巨大な翼を広げる。

片や肉体の殆どが刃、凶器、武の装い。ただ生まれ落ちるだけでは決して叶わぬ筈の「鍛」と「研」を生まれながらにして備えた摂理の異形とでも言うべき、凶刃にして強靭なる二足の竜が轟々と燃え盛る焔の中に幻影として立ち刃の鱗を逆立たせる。

「俺が勝ったならば……協力してもらうぞ、同胞（サンラク）！」
「負けても恨みっこ無しだ、未練を捨てる準備をしておけ……戦友（ガル之瀬）！」
因縁は決着によってのみ、終わる。ただ一人の女性を巡り、二人の

戦士はぶつかり合う。その魂にかけて……叫ぶその名は、

「竜魂解禁……」

「真説解炎……」

大いなる竜の、真なる名前。

「――――【ガリバー】！！」

「――――【トマホーク】！！」

プロローグ：叫べ我が名は（後書き）

なんとシャングリラ・フロンティアの話なんですよこれ

12月13日：参加条件は徹夜上等

◆

「というわけで個人的に二徹くらいしてもまぁ大丈夫だろ、って面子を集めてみました」

「サンラク？　僕社会人なんだけど」

「どうせしれっと会社休みにしてるんだろ？　顔に書いてある」

「参ったな……洗って落ちるかな？」

「表情に油性水性あんのかよ」

新大陸、「海蛇の林檎」。普段の喧騒はどこへやら、俺含めて五人しかプレイヤーがいないがらりとした酒場の中で俺達は作戦会議……というよりも、音頭をとった俺が計画発表をする、という形でテーブルを囲んでいる。

「あー……とりあえず自己紹介しとく？」

「今更過ぎねぇ？」

いや俺もこの場にいるのが俺が呼んだロリコン（サバイバアル）、乱射魔（ヤシロバード）、変態焼肉（ディープスローター）だけならさっさと本題に移ってたけどさ……

ちら、と四人分の視線がこの場にいるもう一人……ヤシロバードが「年末まで戦えるらしいから」と連れてきた追加人員こと、カロ

ーシスＵＱに向けられる。

「話はヤシロバードさんから聞きました。足は引っ張りませんよ、それに……」

「それに？」

「――フルダイブ状態なら五徹できますよ、リアルで瞼にガムテープ貼って三徹するよりはイージーだ」

すっごいキメ顔ですっごい悲しい台詞が飛び出してきたわ。えぇ……？　これが日本の標準的な社会人の姿だとしたら俺国外逃亡したくなっちゃうよ……

ヤシロバードも所属している、午後十時以降じゃないとログインできないような社会人限定クランのリーダー、カローシスＵＱ。俺は何度か会った事があるが……なんだろう、アバターに変化はないはずなんだが魂（中身）の鮮度が蘇っている。

「周回なら任せて欲しい、二十四時間戦える」

「社畜根性が漏れ出ている……」

「実際カローシスさんは強いし便利だよ、僕が保証する」

神秘（レーツェル）の剣、話に聞く限りでは普段使いに死ぬほど向いてないという印象だが……デフォルト詠唱破棄で威力減衰しない物理前衛も担える魔法職、と考えれば神秘の剣を万全に扱える者は剣聖にも劣ることはないだろう。

「それでぇ？　そろそろ僕らを集めてまで何するつもりなのか教えて欲しいなぁ……サンラク君？」

「そうだな……簡単に言うとゴルドゥニーネ絶対凹ますからその為にサブクエ全部回収する」

「本当(マジ)に要点しか喋ってねぇなこいつ……」

とはいえ長々と語るもんでもないだろう。対無尽のゴルドゥニーネ戦線の構築はどちらにせよ必要なものだ、戦って分かったが軍団系、巨大系、そしてゴルドゥニーネ本体という強ボス系でもある複合タイプの超クソボスであるあの蛇女は、十人二十人でどうこうできるもんじゃない。

「クターニッドじゃない、ジークヴルムと同じ千人規模のレイド決戦タイプ……人も兵站も多すぎて困ることはないし、何よりＬｖ．１５０で頭打ちのままじゃ勝てねぇ」

その為にいちいちリアクションが鬱陶しいディプスロを酷使してまでいろんなところを駆けずり回って今に至る。

なんかこいつに借りを作るとなんか上がっちゃいけないゲージが上昇してそうで不安になるが、毒食わば皿までだ。死ぬ事に変わりないならドリンクにもう一杯毒をくれ、たまに毒ダメ関連で称号出る時あるから油断ならん。

世の中には無双ゲー系のくせに何故かＮＢＣ兵器が充実してるコンセプト完全否定ゲーなんてものもある。無双ってのは「千人来ようが俺一人で全員倒すぜ！」って意味であって「ククク、このボタン一つ押すだけで千人の命が容易く消える……！」って意味じゃねぇんだ。

大量殺戮兵器開発ゲーとして見ると不謹慎だがちょっと楽しかったのがまた何とも言えないクソゲーの味わい。
余談だが界隈では炎上したゲームメーカーの顛末を見届ける事を「花火大会」と言う。他者の破滅をエンターテイメント扱いしてる辺り、ウチの（クソゲー好き）界隈が一番どうしようもねぇな！！
「というわけで自己強化プラス未クリアのユニークとか諸々全部やりつつレベリングします」
「ん？　レベルダウンしたのかよ？」
「ちょっとな」
今の俺はレベル１４０。下げて分かったがこれ到達技能（プライムアーツ）はレベル１５０以下になると機能停止するんだな……パッシブなので試しに樹海で戦ってみたが結構動きに違和感を感じたのでさっさと１５０に戻さないとな……
「１０だけ下がるってのは既存のレベルダウンじゃ無理だよね？バハムート関係？」
「そう、ベヒーモスで下げてきた」
そう、ベヒーモスで…………うっ、頭が…………
…………
……

……

◆

「エ、エタゼロ……お前、一体何が……！？」

エタゼロ。ベヒーモス攻略の際に何というか、極まった（キワ）モノを感じさせる活躍で共にベヒーモスの最奥に辿り着いたプレイヤーの変わり果てた姿に……この俺をして、絶句するしかなかった。

「へへへ……っ、後悔はしてねぇ。後悔はしてねぇんだ、サンラク……俺は、望んでこうなったんだ」

「望んで、って……お前、こんな……」

狂気。ああそうだ、間違いなくエタゼロは狂気に侵されていた。だが……なんて澄んだ眼差し。

「ここに来たって事はよ……お前も、キメに来たんだろ？　知り合いのよしみだ……いろいろ、教えてやるぜ？」

あの、隆々たる筋骨のエタゼロは……死んだ。ここにいるのはその成れの果て……

「エタゼロ……本当に、後悔してないんだよ……な？」

「ああ……俺の人生は、今最高に充実している」

見下ろした先、そこには5歳児程度にまで縮んだ（キャラメイク）されたアバターと、

レベルを捧げて試験管……言うなればベヒーモスの「胎内」と言っても過言ではない場所に通い詰めた男（LV.15）が、確かにいたのだ………

彼は、とても幸せそうな顔をしていた。

１２月１３日：参加条件は徹夜上等（後書き）

エタゼロはキャラメイクやら肉体改造やらやり過ぎてレベルが１５にまで下がったけど代わりに「基礎」ステータスがお化けになっている

１２月１３日：タイムイズマネー

◆

「いいかサンラク、まず最初にだが筋力強化は罠だ」

五歳児と化したエタゼロが至極真面目に解説し始めたので、俺も何とか笑わないようにしながら話を聞く。

「何回か試したがスキル鍛えた方がよっぽど強くなれる、いやまぁ完全に無駄ってわけじゃないが……お前の求める強さとは違うだろうな」

何でこいつ俺の強化方針を把握してる前提で話進めてんの？　怖いんだけど。
とはいえ見た目は狂いに狂ってるが言ってることはマトモなので野暮なツッコミは入れない。

「じゃあお前オススメの強化ってのは？」

「五感強化だ」

「その心は？」

「こいつが一番強化した際の実感がデカい」

曰く、筋力とＳＴＲは厳密には別の判定になっているらしい。なので筋力をいくら上げてもＳＴＲステータスに変化はない、じゃあ何

が変わるのかというとダメージ倍率に寄与しない身体能力の上昇らしい。握力とかピンチ力とか。
だが五感は違う、視覚聴覚嗅覚味覚触覚……外的刺激を捉えるこれらはステータスパラメータとは別枠だ。だからこそここに改造を施した時の実用性は筋力強化の比ではない、との事だ。
「触覚と味覚ってなんか役に立つのか？」
「味覚はアレだが触覚は気配探知だな、鼻や耳が利かない場所とかで」
成る程……目の前にいる被験体一号がこれなもんだから色眼鏡が入っていたが、肉体の基礎スペックを上げる……これは思ったよりも奥深いぞ。
「余談だが、強化を重ねるほど要求経験値量が増えるがこれ多分アレだな」
「ん？」
「レベル１４９～１５０の経験値量とレベル１～１０の経験値量じゃつり合わなねぇって事らしい。へへっ……一番賢いやり方はレベル１００まで下げたらもう一度上げる事なんだろうよ」
「ちなみにその事実を知ったとしてその手段を選んだか？」
「言ったろサンラク……悔いはねぇんだ。きっと同じことをするさ」
なんて澄んだ目を………もはや何も言うまい。

「あ、ちなみにだが動体視力強化だけはやめといた方がいいぜ？」

「あん？　なんでだよ」

「何が強化されてんのかさっぱり分からねぇんだ。実感が薄いというか変化を感じない」

その言葉に、俺は目を丸くして……そうして、思わず吹き出す。

「な、なんだよ」

「くくく……いや悪い。なぁエタゼロ……お前ってSTRとVITメインで上げてるタイプだろ？」

「まぁ、そりゃな。グラップルやるのに長距離走の速さはいらねぇし」

「じゃあハズレを引いたな」

動体視力は動くものを見分ける能力だろう？
肉体の基礎スペックを引き上げる……基礎スペックは「ステータス」に影響しない……成る程、つまりスキルの強化そのものに基礎スペックは無関係じゃない。だとすれば動体視力がモロに影響するのは……

………目を強化した時だ。それも、目を強化した上でさらに動体視力が必要になる状態……

「象牙、被験体二号になってやるよ。動体視力に3レベル分つぎ込むぜ」

『サンラク、貴方は賢いですね……正解です』

あの、エタゼロさん。流石にわざとだとは思うけどハンカチ噛んで歯軋りするのやめてもらえます？　ジェラるなジェラるな、どっから取り出したんだお前………まぁ？　ワタクシ優等生なので？

……

…………

……………

以上、頭痛(回想)終わり。

「ちなみにホルモンバランスとかいじれたから多分性転換した時の姿に干渉できるな」

ガタッ！×2

「座れ色ボケ共。今度にしろ今度に」

話が無限に進まなくなるじゃねーか。

さて、ようやく本題だ。

「とりあえず俺がソロでやる分は関係ないが、問題は……あぁ、もうこの際隠し立ては無しだ。ユニークシナリオの関係でケット・シーの国に行く必要があってな……」

「ケット・シー？」

「長靴をはいた猫だ、しかも喋る」

「ＳＦ－Ｚｏｏが黙っちゃいないよその爆弾情報……」

「さらに言うとなんかサミットみたいなの開催するので他の種族も来るらしい。兎と猫は確定枠だから他なんだろうな？　安牌は犬？」

「ねぇこれ黙ってたらＳＦ－Ｚｏｏにしばかれないかな！？　生命保険適用される！？」

「生命に危機が及ぶ前提なんだねカローシスさん……」

ケットシーの国とて「来い」と言われるならラビッツのように特定条件じゃないと絶対に辿り着けない場所というわけでもないのだろう。いつかたどり着くなら、それはもう既に知っているも同じ……つまりいつか会話の流れでポロッと漏らす事はあっても今伝える必要はないのだ……というか下手に伝えるとあそこ、……クラン総出でついてきそうでなんかこう……ウザ、もとい賑やか過ぎそうなので……

「いいんだよ別に、大人数で新大陸攻略しようとすると大体「ひどいこと」になるんだろ？　少数精鋭で駆け抜けた方が楽なんだよ」

「４ぴ…………あれ？　シないの？」

「強化中で手元に無いんだよ黙っとけ……」

「ボーナスタイムＦｏｏｏｏｏ！」

「ＣＨＲ：ＣＦＫ」

「何そっつぁ根性焼きィィィィィ！？」

これぞ最近創作意欲が暴走し過ぎて金もアイテムも何もかも枯渇しているイムロン作、クリムゾン・ヒートライザー：コンバットフュージングナイフ！　あまりに長ったらし過ぎたので頭文字だけ並べてＣＨＲ：ＣＦＫ！　それでも言いづらいので通称「根性焼きナイフ」である！！

イムロンがアラドヴァルを見ているうちに同系統……つまり刀身に触れるだけで金属を溶かすような灼熱の武器を作ろうとした副産物。片手剣よりもなお短いが故に使い道が少ないと嘆いていたが……うーんいい火力、アラドヴァルの代用として買い取ってて良かったぜ。

「い、痛いよ……ううん、でも分かってる。サンラク君は本当は優しいもんネ……私分かってるよ……」

「ＤＶの現実を受け入れない若妻のフリはやめろ、これはただの純然たるバイオレンスだ」

「そこは謝りながらそっと抱きしめるところだよ！　ねぇ！　アナタ！！」

「眉間！」

「回避！」

◇

「……在野にもああいうの、まだいるんだねぇ」

「なんかアレだ、ο（オミクロン）の戦国姫プ共を思い出す」

「僕アレだ、〝えのき〟思い出した」

「何の話です？」

「「いやぁ？　別に」」

１２月１３日：タイムイズマネー（後書き）

基本的に二人以上別の話題で盛り上がると延々と脱線する連中

１２月１４日：大惨事西遊記（前書き）

あけましておめでとうございます

個人的リスペクトな作品が年末に怒涛の更新をしているのを見てせめて自分も……と頑張ってはいたのですが２０（除夜ゲロ）２０年が中々離してくれなかったので新年になってしまいました

今後ともよろしくお願いします

１２月１４日：大惨事西遊記

◆

話が進まないならもはや解決策は一つしかない。無駄話をしてもいいから身体を動かせ、そういうことだ。
そんなわけで俺達は妙に静かな樹海を妙にすんなりと抜けて、砂漠へと足を踏み入れていた……時間は深夜二時、まだ昼みたいなところあるよね。

「んー……あ、そうだ。俺ちょっと寄り道したいんだけど」

「テメェ自分で言ったことも忘れてんのか？」

俺は過去に囚われない男なので。

「出発前に「寄り道は無しだ」とか言ってたよねぇ……」

「これとこれとこれの素材補充なんだけど」

「サンラクさん……何日周回します？　二徹行けます」

彼の人となりをそこまで詳しく知らない俺、ディプスロ、サバイバアルもそろそろこのカローシスUQという人物が「ヤバい」という事に気づきつつあるのだが、その上で俺達の中で一番生き生きとしている彼にそれを指摘する勇気を持つ者はここにはいなかった……
あのディプスロでさえも、だ。
こいつは……きっと、社畜であることがある種の制御装置だったの

だ。ごくごく稀に存在する「ゲームのためにどこまでもリアルの自分を削れるタイプ」……奇しくも、α(アルファ)サーバーのあいつのように。

俺が見せた蜘蛛、百足、蠍の武具を見て迷わずそう答えたカローシスＵＱの異様なオーラになんとか呑まれないように気を引き締めつつ、話を続ける。

「いやまぁ、丁度キャッツェリアへのルート上にあるから……それに」

「それに？」

「サバイバル、お前ならきっと気にいると思うぜ？」

ちと毒の濃度と爆風が激し過ぎるが……あそこの風は孤島にちょっと似ているから。

……

…………

……………

砂漠地帯は兎にも角にも広い。というか樹海もそうだが、マップなしで適当に走り続けるとマジで方向感覚がバグる。

この現代社会に生きる俺達がまさか星や月を見て方向を推し量る事になるとは……でもある程度シャンフロやってる奴ならこれ必須技能なんだって、カローシスが言ってた。

というわけでどうせ二日、三日はシャンフロに人生捧げられる面子を集めたわけで多少の「物資補給」もよかろうと早速寄り道する事にした俺達は、その為にも砂漠を越えなきゃならんわけだが……

「いや見てくれよサンラク……この、この分かる？　このセルフ変形機構。地上活動性能削ったけどまさしく戦闘機と言っていい鋭角にして流線型のカスタマイズ……」

「変形的に本体は土下座しながら飛ぶ事になるのでは？」

「背泳ぎとの二択だったんだ」

樹海と違い、遮蔽物の少ないこの場所ならばとヤシロバードがインベントリア……もといその廉価版であるチェストリアから取り出したのは戦術機だった。タイプは三角ボディ(ピラミッドメン)、ルストじゃあるまいしこいつは銃に興味はあってもロボには興味はないと思っていたが……この様子を見るにまぁ人並みの興味はあったということか。

ただでさえ特徴的なフォルムをしたピラミッドメンをさらにカスタマイズした姿は……なんだろう、雪除けの蓑みたいなごちゃごちゃっぷりだ。

基本的にタイプメンは人間と合体してる際はパワードスーツのように振る舞うので変形とかはしないのだが、それに似たようなことは出来る。例えば手足を折り畳んで飛行能力に特化した形状になる、とかな。

「流石に無尽蔵に飛ぶのは無理だけど結構な距離を稼げるね。そして何よりこの形態でも銃が搭載できる。アドバイスを参考にした長距離移動の輸送ロボってわけさ」

次にカローシスＵＱ。
グォングォンと物騒（ファンキー）な音を立てて……バイクのエンジンを蒸（ふか）している。それもアレだ、ヒロイックな感じじゃなくてクッソゴツい背もたれがあるタイプのバイク。あれを無理やりサイバーパンクにした感じというか、十中八九リヴァイアサン製なんだろう……バハムートコンテンツは「ライセンス」の有無でできることの幅が天地ほど変わってくる。
それは逆に言えば、ライセンスを片っ端から獲得すれば大抵のことが可能になる、ということだ。

「ビークルライセンスを上げて作ったんだ、樹海には向いてないけどこういう広々としたフィールドがあるなら作って損はないからね」
「ビークルライセンス」
「まぁ、自動車免許みたいなものですよ。一徹すれば余裕です」
「徹夜を通貨か何かと勘違いしておられない？」
で、次。ディープスローター。
奴の実現杖ザ・デザイアーは非攻撃魔法の出力を倍々計算で拡大することができる。つまり、浮くことだけをあの背中から生えた三本目の腕に持たせた小杖に任せ、両手で持った実現杖で空中での推進力を担ったならば。
「サンラクくぅん……」
「なんだよ」

「いやぁ……もしかしたら最大速度の称号を貰っちゃうかもしれないって考えたらなんだか申し訳なくてねぇ……ねぇ？」

ほぉん？

「いいねディープスローター、挑発目的なら１００点満点だぜ」

「勝ったらご褒美は？」

「今ので１００点減点、赤点です」

「イエス！　二人っきりの補習！　何も起きないはずもなく！！」

「根性焼き」

「不良な君も素敵！！」

今そのネタはタイムリーで腹が立ったのでいつもより多めに焼いておこう。

さて……各々が砂漠を渡るべく、用意をしてきた。「なあ」この面々ならば砂漠を越えることは容易。目指すはキャッツェリア、猫の王国！　「なあオイ」　まだ見ぬフラグと見えてるフラグを軒並みへし折り、その果てに俺は……いや、俺達はあのクソ蛇を「いやあのだな」凹ます！　ウィンプも頑張ってるわけだしな……俺もちっとは必死に頑張らなきゃあな！！

「なぁ！　俺ぁどうすりゃいいんだろうなぁ！！」

「「「…………」」」

兎と亀の徒競走において、兎が敗北した理由は慢心に他ならない。
不夜なる我々は眠らない兎、残念ながらゼノン式理不尽ターン制徒競走ルールも導入していないので亀が兎に勝つことは有り得ない……つまり。

「まぁ安心しろって、そこら辺はちゃんと考えてあるさ」

「おう、聞くぜ」

「まずこの縄をヤシロバードに括り付けます」

「快適な空の旅をお楽しみくださいってね」

「おう」

「そしてもう一本の縄をカローシスＵＱに括り付けます」

「素敵な陸の旅をお楽しみください、でいいのかな？」

「……おう？」

「で、この二本の縄をサバイバアルのそれぞれ両手首と両足首に括り付けます」

図式で説明すると……こういう感じだな。

「なぁ……なんで二本括り付けるんだよ？」

「片方に負担を寄せると事故の確率が上がるからな、それに何より……」

「このロボ」

「このバイク」

「「1人乗りなんだ」」

「クソがぁっ!!」

１２月１４日：大惨事西遊記（後書き）

ぶんぶんコマって知ってます？厚紙で作った円盤に糸通して両手で糸持って回すアレ

そう、アレです。頑張れサバイバアル！

１２月１４日：大惨事大戦

◆

「あ↑あ↓あ↑あ↓あ↑あ↓あ↑あ↓あ↑あ→あ←あ↓あ↑あ↓あ↑あ→あ←あ→あ←あ→あ←あ！！？！？」

びょんびょんびょんびょんびょんびょんびょんびょんびょんびょんびょんびょんびょんびょん、とものすごく愉快な動きで上下左右に暴れ回る上下を縛られたサバイバアルの叫びを他所に、俺は準備運動をしながら隣でさながら魔女が箒で空を飛ぶが如く杖（ロッド）に跨がるディープスローターに目線を向ける。

「前後運動」

「もう何処かに行ってくれ……」

「性欲の向こう側（ビヨンド・ザ・セクシャルリビドー）へ！！」

もうなんでもいいから杖を股に挟んでかっくんかっくん動くのはやめろ。げんなりする。

わざわざ先にヤシロバードとカローシスUQを行かせたのはサバイバアルの愉快な姿を見たいから、ってのもあるが……全てを茶化しているようなディープスローターの「挑発」に応えるためだ。不本意ながら、こいつとの交戦歴は回数で言えばそこそこにある。だからこそだろうか、こいつのマジの挑発はなんとなくわかるのだ。

少なくともこいつは、「最大速度」を奪い取ろうとしている。いや

あるいは……今の俺よりも私の方が速いのだとマウントを取ろうとしている。

別に？　最大速度の称号は成り行きで獲得したものであって元々それを目指していたわけじゃない。それにこの称号、別に持っていたからと言って劇的な変化があるわけでもない（レイ氏やジョゼットのレコードホルダーに聞いたが、どうもレベルアップ時に習得するスキルや魔法に影響が出るらしい）。

つまりなんだ、別にくれてやっても…………いいわけがねえ。少なくともこんな予告ホームランみたいな形で奪われたらマジで俺は拗ねる。絶対負けられん、少なくともこの変態女だけには！！

「だがディープスローター、残念だったな……？」

「おやぁ？　なんだか自信ありげだねぇ……」

「そりゃそうさ、」

何せ足りないのは黒い電光だけ。それ以外はもう取り戻しているのだから。

スキル連結、速度の頂。人が人として、人のままに加速する臨界点。実のところを言うとこれのもう一段階上、「超光速（ルクシオン）」を選ぶことも出来たんだが……ありゃダメだ、どっちかというと一定距離の直線を無敵透明モードでスライドする感じというか、まぁ結論から言うと「飛距離」が足りないんだわな。悪巧みはできそうだったけど。

故に、踏み込む足に加速の神が遠慮無用の加護を叩き込む。回数五発の爆速にさらに重ねて嵐の加護を！！

「行くぜ変則、竜巻（トルネード）「臨界速（ブラディオン）」！！」

踏み込んだ瞬間、世界の全てが回り出す。

◇

ディープスローターにとって、サンラクというプレイヤーは極めて好ましい人物だ。愛しているように囁き、恋するように眼差しを送るがその本質はもっと深く暗い執着のようなもので。

「あはっ」

今だってそうだ。空中を弾丸のように自分自身を回転させながら蛇行軌道で吹き飛んでいった愉快な鳥頭を見送りながら……その無謀を超えた何かとしか言いようがない奇天烈なムーブが、本当に無謀だけではないこともディープスローターは見抜いていた。

如何にリアリティが極まったとてシャングリラ・フロンティアはゲームだ。肉体にフィードバックされる情報まで全てリアルに準拠していては最初のエリアで大半のプレイヤーが脱落するだろう。
だがそうはならない。シャングリラ・フロンティアがもたらす感覚の強度には上限がある……即ち、その〝上限〟にさえ耐えられるのならば、電脳世界(シャンフロ)の存在はどこまでも無茶ができる。

だが言うは易いが実行するのは不可能に近い。例えばそう、前述の〝上限〟というのは当然ながらちょっと手を伸ばせば届くような高さに設けられているわけではない。
電脳世界における挙動は、殆どの場合リアルのそれに準拠する。幼

児のアバターだろうが巨漢のアバターだろうが、肩と腕を関節で挟んで動かす基本は変わらない。〝上限〟とは当然、その基本の限界点を指す。

「躊躇いなく腕を折れるくらいトんでる君は、やっぱり私と同類だよ……」

浮遊魔法。そしてザ・デザイアーによって倍加された推進力をもたらす魔法によって、この世に二つとない大いなる魔導の杖をあろうことか魔女の箒代わりにしたディープスローターが一気に加速する。視線に映るはただ一つ。あの日、全てのプレイヤー達に最速とはなんたるかを示した「流星」程ではないにせよ、瞬く間に他三人を抜き去ったその背中だけ。

「現実(リアル)なんて退屈さ、君〝も〟こっちの方が楽しいんでしょ？　ねぇ……サンラク君」

自分と同類であろうと、そう確信している男の背に熱い視線を向けながら。自分こそが、そう自分だけがサンラクの理解者なのだと……理解者になるのだと、吹き飛ばされそうな風の中でザ・デザイアーにしがみつきながらそれでもなお笑う。
さぁまずは追いつこう。ディープスローターはサンラクの横に並べるのだと、ディープスローターこそがサンラクの最大の理解者なのだと分かってもらうために……自分はどこまでも都合のいい女になれるのだと。

◆

シグモニア前線渓谷。びょんびょんしていたサバイバアルが復活するまでちょっとだけ待たされたりもしたが、無事に俺たち五人はこのすり鉢フィールドへと辿り着いていた。

「ここがサンラクの言ってた素材ドロップするモンスターがいる場所？」

「ビンビンに屹立した岩があるねえ！！」

もうこの際無視。さて、折角この場所に来たというなら……………やはり、存分に楽しんでもらわないとな。

「とりあえずテント建てたのでセーブしとけ」

よし全員寝たな？　よしよし、添い寝してっ？　じゃねーよ土に埋めて永眠させたろうかてめー。

「見た感じ静かなもんだが……土の下にでもいんのか？」

「よく分かったな、確かにここに生息しているトレイノル・センチピードとガルガンチュラはこの下で休眠状態だ」

「なるほどな………ってこたぁ先に見つけりゃ奇襲を仕掛けられるってわけだ」

「一理ありますね。どうします？」

ぬふふふふふふふふ………

「俺はここで観戦させて貰おうかな」

「………サンラク、なんか楽しんでない？」

「いやほら、やっぱり何事も初見の反応見るの楽しみじゃん？」

俺の様子に、何か怪しいものを感じ始めたのか面々の視線に疑念の色が濃くなっていく。ええい面倒臭い連中だな、セーブしたんだから突貫するくらいの度胸見せんかい。しゃーない、

「ほいディプスロ、お手」

「ワンワン！！」

「お座り」

「これは「ちんちん」の流れ！！！！！！」

「はいこのボールを取ってこーい」

「わうーーーーーーん！！」

俺がインベントリから取り出し、ぶん投げたボール（厳密には癇癪玉的なアイテム、この場所でそんなもんを使ったらどうなるのか……お察しの通りである）を律儀にキャッチするためにシグモニアのバトルフィールドに飛び込んでいったディープスロータ―を見送って……

「ほらほら入った入った」

ここでの戦闘も慣れたもんだからな、大体何秒で「スタート」なのか直感的に分かってくる。

「じゃあ頑張れ、この戦場では人間はドブネズミ以下だ」

「これはもうご褒美に隅から隅まで、股間重点でブラッシングしてもらうしか――」

トン、とジャンプしてまで俺が投げた癇癪玉をキャッチしたディープスローターが地面に着地した瞬間。

「えっ」

「は」

「んんん？」

「わぁ………」

ずもも、とそこら中から現れるアーミレット・ガルガンチュラ達。そして地震のような揺れと共に大地に亀裂が走る………それも二つ。共にその巨体故に地面を割る、というよりももはや突き破るようにして現れた巨大(おお)いなる虫達。おひさ、今日はどっちかというとガルガンチュラ達に勝たせたい気分なんだけど、それ以上にこいつらの初見反応見る方が楽しいわ。

「サイナ、あいつら何分持ち堪えると思う？」

「疑問：勝敗予想にベットする最中に対象が死亡した場合の判定」

「ん？　もう死んだ？　まだ生きてるっぽいしお早めに、ってところだな」

アーミレット君達の連鎖爆発に巻き込まれて吹き飛ぶ四人を自分でも驚くくらいのにっこり笑顔で眺めながら、俺はインベントリアから椅子とテーブルとキャロットパイを取り出すと優雅に面白……もとい、臨場感あふれる「蜘蛛ｖｓ百足ｖｓなんか足元でプチプチ死んでいく脆弱な人類」の上映を楽しむのだった……

おもしろっ

双王戦争

◇

エインヴルス王国はその成り立ち故に国を示す旗印には十五本の剣が描かれる。
それ故に此度の戦争は中立を表明したフィフティシアを除いて、それぞれの剣がトルヴァンテとアレックスに捧げられた未曾有の内乱として後世に伝えられることになるだろう。
筆者はここに、未来より過去を振り返る者達のため、双王戦争と呼ばれたこの戦いを記録しようと思う

――NPC「作家ダイモス」執筆戦記「双王戦争」1ページ目に書かれた文章

◇◇

双王戦争。その始まりはエインヴルスの新大陸調査によって、我々とは全くと言っていいほどに見た目が異なる「亜人」との邂逅が発端とされている。
彼らへの対応を如何にするべきか。一介の文字書き如きには王家の中で何があったのかを窺い知ることは出来ないが、結論から言えば国王トルヴァンテは第一王子アレックスによって半ば追放に近い形で新大陸へと送られた。

新たに王となったアレックスの采配により、新大陸「征服」用の大戦艦の建造がフィフティシア領主フィリーノート・フィフティシアに命じられ……驚くべき事に、フィフティシアはそれを拒否した。エインヴルス王国黎明期、戦乱の世において初代エインヴルスを支えた曙光のキングメーカー、初代フィフティシアの頃より王家に忠実であったフィフティシアの反旗に、暴力的手段で王権を簒奪したアレックスをして「何故？」と呟いたとの記録が残っている。それ程までにフィフティシアが否を唱える、と言う事実は衝撃であったのだ。

何故フィフティシアは新王アレックスの命を拒んだのか。
それはこの戦争が起きる少し前に開発された革新的艦艇「征海船」の存在が理由であると推測されている。
従来の調査船とは異なり、最大でも二十人～三十人程度しか乗り込めない小型船舶でありなら、単独での大陸間航行を可能とする偉大なる発明。
その有用性を理解していたフィフティシアは、既に超大型艦艇を建造するよりも征海船を量産すべきとの結論に至っていたのだろう。

何より。
征海船は風と共に現れ、風と共に去る者達。未知を求める彼ら開拓者にとってはまさに福音と言っていいものだ。新たなる旅立ちの門たるフィフティシアには開拓者が多く滞在している。中には自ら槌を振って船を作らんとする開拓者もいると聞く、そんな彼らが征海船の製造を止めて数年単位の時間を要する艦艇の建造に賛同するはずもない。
故にこそフィフティシアは否と返さざるを得なかったのだ。開拓者は皆、精強な戦士であり魔術師である。彼らが暴力のままに暴れたならば、フィフティシアはその機能を止めざるを得ない。

エインヴルス王国にほんの小さな、しかし見過ごすには大きすぎる亀裂が入った。栄光のエインヴルス十五剣王冠に手を伸ばすべく、急造の道を駆け抜けたアレックスの足元はあまりにも不安定。
フィフティシアと王都ニーネスヒルの蜜月に終わりの足跡が近づく中……僅かな亀裂を、文字通り王国の分断にまで広げる事件が起きた。
前王トルヴァンテの帰還。そして、第三騎士団の〝敗走〟である。

――「双王戦争」第一章「双王」より抜粋

◇◇◇

これを読んでくれている方々は「カバレージ」というものをご存知だろうか？　要するに今読んでいるこれのことなのだが、簡単に説明すれば名勝負を実況のような形で記録した記事のようなものだ。
今回の王国争乱イベントはシャングリラ・フロンティア始まって以来、最大規模のＰｖＰイベントであった。
新王アレックスと前王トルヴァンテの二人の王の対立。プレイヤー達はどちらかの陣営に集い、ある種の陣取り合戦じみたルールの「戦争」を戦い抜いた。
そして、戦いある場所に名試合あり。筆者も含め、プレイヤー達の中からこんな思いが生まれた……我々のリアルにおいて、古代人達が石版に神話を刻んだように。この電脳世界において、我々もま

た王国騒乱の風の中で羽ばたく彼らの偉業を書き記したいという思い。

それこそがこのカバレージなのだ。

「サードレマ機鋼戦」「爆山討滅隊」「不死軍激突」「ニーネスヒル革命」……王国各所で勃発した名勝負の中でも今回私「ガーリック・トースト」が記すのは……プレイヤー最速の称号を持つ男による、脅威の立ち塞がり。

冷たいアンデッド達の瘴気に包まれた奥古来魂の渓谷を、興奮の熱気で包み込んだプレイヤー「サンラク」による驚愕の無双、そして何より……このカバレージを読んでいる皆様の中にも知っている方は多いだろう、あの有名配信者「ガル之瀬」とのシャンフロの歴史に残る決闘。プレイヤーの中には「双王戦争で活躍するよりこっちを見れたことが幸運だった」とまで言う者（他でもない私である）までいるその名を……

「双竜決闘」について書き記したいと思う。

――プレイヤー「ガーリック・トースト」執筆カバレージ「双竜決闘」より抜粋

双王戦争（後書き）

カバレージっていいですよね、っていう思いから書いたけどやっぱあれ書ける人凄いですね

１２月某日：放置された手綱、祭りは白く熱く（前書き）

本編の息抜きに本編

12月某日：放置された手綱、祭りは白く熱く

光あるところに影あり。それが視覚的な意味で顕著な街………それこそがフィフティシアと言えるだろう。
巨大船舶の残骸を屋根代わりにした大規模な裏街ならぬ陰街（アウトサイド）……あまりに巨大、故に司法の手すらその暗闇を払い除けることができない。
実情を言えば、荒くれ者や無法者にある程度の「法（ルール）」を敷くことができる……それだけの力を持つほどに肥大化した裏社会の治安を破壊するのではなく共存することを選んだフィフティシアの長の判断によって光と影、二つの顔を持つフィフティシアという街は今に至る。
そして、プレイヤーの誰もが王道を歩むとは限らない。裏街という「そういう」シチュエーションがあれば当然、そういったロールプレイを好む者達もいるわけで………

◇

フィフティシア裏街の酒場「影泳ぐ鮫」。酒場を共通の目的を持つ裏社会の人物達が集まる隠された集会場にしたい……そんな野望を抱いた酔狂なプレイヤーによって店主ごと買収され、実際そのような役目を果たしている場所にプレイヤー達は集まる。
「…………いらっしゃい、注文は？」
「ええと……〝ツチノコ杯にエントリー希望〟……？」

「……お客さん、トイレはあっちだよ。」

「わ、本当にそれっぽく案内された……いいなこういうの」

彼らは、とある元ＰＫプレイヤーからの誘いを受けた者達だ。合言葉でトイレの扉を開けば、店内の広さに対して外観に不自然に大きい「影泳ぐ鮫」の隠し部屋へとたどり着く。

隠し部屋の中には一人の人間。頭上に浮かぶ表示からプレイヤーであることを理解するのにそう時間はかからない。

「よう、ここに辿り着いたってことはお前もサバさんからの招待を受けたクチだろ？」

「あ、はい。新大陸に行く方法があるって話なんですけど………どういうことなんです？　ツチノコカップってなんですかね？」

「それを説明するのが俺の役目みたいなもんだ……」

頭上に「ブラックカーテン」と表示された怪しい眼帯の男が、新たにやってきた「参加者」へと説明を始める。

「新大陸でゴルドゥニーネと一発やるって話はもう知ってるだろうから飛ばすぜ。要するに新大陸でイベントがあるからあんたらは新大陸に行かなきゃいけねぇ、だが全員が全員新大陸からの出戻り組ってわけじゃあねぇ」

「あー、そうか出戻りの人らは転移で行けるのか」

シャングリラ・フロンティアにおける転移魔法(ファストトラベル)は魔法の使用者及び

同行者の両方が転移先に行ったことがあることが条件だ。故に、新大陸に一度も行ったことがないプレイヤーは転移魔法で新大陸まで飛ぶことはできない。

「そこでツチノコ杯だ」

わざわざ用意したのか、ワインボトルにそのまま口をつけてラッパ飲みしながらロールプレイを続けるブラックカーテン。その様子にいつの間にか訪れたプレイヤーもまた雰囲気に引き込まれていく。

「ツチノコさんってのは知ってるよな？」

「ええまぁ、そこそこのゲームに熱中してれば一度は名前を聞くでしょう」

「そのツチノコさんが新大陸ででかい船使ってジークヴルムを倒したって噂話は？」

「いや………初耳っスね……ていうか、船で？　え？」

「まぁそこらへんはどうでもいいんだ。要点はツチノコさんは造船関係のＮＰＣと繋がりがあって、その船が最高にイカしてるってことだ」

プレイヤー「サンラク」が新大陸で披露した未知の船舶。新大陸調査専用な豪華客船スケールではない、クルーザーサイズの小型船ながら、ジークヴルムの角を破壊できるだけの武装を装備し、噂ではその船単体での大陸間航行すら可能。

その名も「征海船」。プレイヤーの母数が多いということはそれだけ生産ジョブに熱意を向けるものも多く、その中からさらに造船と

いうニッチな方向性に熱意を向けるプレイヤーにまでふるいをかけてもまだそこそこの人数が残る。

「大々的にやってるわけじゃあねぇが今フィフティシアじゃ空前の造船ブームってやつが来てる。そこに今回の絵を描いた奴らが目をつけた」

空前の造船ブーム、作ったのならば動かしたいのが人の性(サガ)。そしてそこに競争性があれば、灯された火はさらに激しく燃え上がっていく。

「ツチノコ杯(カップ)……要するにあんたらは生産職が作った征海船で競艇するユーザーイベントに文字通り乗っかって新大陸に行くのさ」

ツチノコ杯、それは造船に熱意を傾けるプレイヤー達にとっては決して無視できない名前であるプレイヤー「サンラク」がフィフティシアの造船所に突如現れ、プレイヤー達に持ちかけた「条件」が発端だ。

――俺は今プレイヤーを大量に新大陸に輸送したい。あんたらは船を作りたい。この二つの目的は共存可能……そうは思わないか？

船造りのプレイヤー達に提示された条件。それは新大陸に向かいたいプレイヤーを輸送する代わりに「報酬」を用意するというもの。そしてそれを造船プレイヤー達がさらに一種の競艇……あるいはトライアスロンじみた企画に変えた。

それこそが第一回ツチノコ杯。旧大陸フィフティシアから新大陸前線拠点までの大陸間を各「オーナー」達の征海船で競争し、優勝者にはスポンサーと化したサンラクが用意した一等星級「ラピステリア星晶体」。半ば伝説になりつつある「始まりの征海船」の動力と

して用いられているという情報もあって、船造りの職人達（プレイヤー）の熱は上限知らずに上がり続けている。

「それは……なんていうか、楽しい道中になりそうだ」

「だろ？　ただ…………」

「ただ？」

ブラックカーテン……わざわざお金を貯めてまでフィフティシアの酒場を買収した「黒幕（ブラックカーテン）」ムーブしたがりは、今回の仲介者ロールを全力で楽しみながらも、ほんの少しだけ同情を帯びた素を出しながら哀れな参加者に告げる。

「船作ってる連中が軒並み悪ノリし始めてるから多分何隻かは途中で爆散するんじゃねーかなって俺は予想してる」

「安全保障なし！？」

プレイヤーは死んでも蘇る。それはつまり、どれだけ非人道的で安全マージンを考慮していない怪物船（マシン）を作っても、誰の良心にもなんら呵責が無いということなのだ。

◇

◇

とある造船所。

「っぱ妨害ギミックは入れるべきだって。錨射出して敵船の横っ腹に大穴開けるとかどうよ」

「いやここは防御を固めた方がいいな。他の連中も同じこと考えてんだろ」

「いやどうだろう、三番ドックの連中は速度特化にするつもりだぜ？」

「乗り込むプレイヤーなんざ船体に縛りつけときゃいいからな……なぁ、船内にセーブポイント置いてプレイヤーを直接射出して敵船を妨害させるってのはどうだ？」

「オイオイ……天才か？」

「優勝は俺たちのものになるのが確定したようだな……」

「そうと決まれば早速人間砲撃装置を作るしかねぇ！！」

止める者は誰もいない。それを止めるべき立場であるスポンサーは今、新大陸にいる。

12月某日：放置された手綱、祭りは白く熱く（後書き）

チキチキ征海船猛レース

１２月１４日：皇帝の道草

◆

この戦場で人類種が英雄になる事は出来ない、何故ならあんまり目立つと上から狙われるから。
そんなわけで現在のクソアプデによる装備ロストを避けるべく、地獄の戦場トライアスロンを終えて鎧袖一触という言葉すら生ぬるいけちょんけちょんな有様のパーティメンバー達を眺めながら一言。

「感想は？」

「へっ……悪かねぇな」

「懐かしい気持ちを思い出したよ」

「二徹下さい、完全攻略して見せますよ」

「虫の交尾方法って知ってる？」

成る程、やはり鯖癌勢からすれば懐かしさを感じる類か。いや流石に孤島にここまででかいモンスターはいなかったんだが……どっちかというと危牧なんだよなこれ。アホは無視。

「つーかよくお前こんなの倒せたな？」

「戦争は、いかに勝ち馬、乗れるかよ」

「季語は？」

「戦争」

「オールウェイズな季語だなぁ……」

人間の業だねぇ……さて、それはさておき一通りお楽しみいただいたところでそろそろ俺が手本を見せてやりますか。

「ここでの賢い戦い方ってのは真っ向から勝負を挑むんじゃなくて漁夫のりっ」

上の方から射出されたビームで俺は死んだ。

「あっ」

「えっ」

「何？」

「ぶふっ」

……うん。

テントからのそりと這い出した俺は地面に散らばっている装備類を回収し、ふぅとため息を一つ。

「サンラクくぅん……感想は？」

「不慮の事故です」

参ったな……帝晶双蠍くん達からこんなに熱い眼差しを向けられていたとは。つーかピンポイントで俺だけ狙ったよね？　ん？　あれ今見間違いじゃなければクッソピンポイントで俺がフィールド内に入った瞬間に狙撃しましたよね？

ちょっと試しにもう一度……

チカッ

「はい回避ーーーっ！！」

間違いない、明確に狙撃されている。一体何故…………うっ、頭痛（回想）。

……………

……

確かあれは最後にここに来た時のこと……確かあの時、リアルの方で登校の時間が迫っていたからあと一息で倒せそうだった蠍を放置して落下死（逃げ出）した時のこと……あ、これでオチてるわ。なるほどね？
もしかして「そのツラ覚えたからな」コマンド実装されてる？

……

……………

頭痛終わり。

「なぁるほどね……」

「ンなところにモンスターがいやがるのか」

「ハイパーフレキシブル＆エクスプロージョン・ビーム・スコーピオンの生息地だよ、あそこにしか生息してないから絶滅危惧種だ」

いやまぁそれ言ったら基本的にシャンフロに登場するモンスター六割くらい絶滅危惧種みたいなことになっちゃうか。一応いろんなところで見かけるモンスターもいるにはいるけど、それこそヴォーパルバニーとか。

「僕はビーム銃も好きだよ、ゲームならではって感じで」

「上から射撃されることを考えると……プラス１で三徹、か」

ええい、マジで埒が明かない。ていうかどちらにせよここで一晩過ごすつもりもねぇ！　このままじゃ単にこの場所を教えただけになってしまうが……まぁいいや、どうせ遅かれ早かれだ。マッピング勢のトットリとたまに話すことがあるから既に少なくない数のプレイヤーが樹海の先に進んでいるのは分かっているんだ。それに個人で独占できるような素材でもないしな……

「しゃーない、またなんか面倒臭くなったようだしそろそろ出発……」

「「「え？」」」

「はぁい」

嘘だろ同意したのがよりにもよってディプスロだけ？　他三人残る気満々？　ワット？　パーティリーダー俺だよね？　リーダーの言うことに逆らうんですか？　いやでも逆の立場だったら俺も残るだろうしなぁ……はぁ、仕方ねぇ………

「カローシス、徹夜は無しだ。一晩で終わらせるぜ」

「一晩で終わるってことは一徹すれば五回ぐらい周回できるということでは？」

「さらにやばいのが出てくるのでやめた方がいいと思うよ」

今戦っているフォルトレスとトレイノル・グスタフよりもさらに大型の女王フォルトレスとトレイノル・ドーラの戦いは地獄絵図という言葉すら生温い。通常フォルトレスが生み出すアーミレットの数を仮に１０とすれば女王フォルトレスが生み出すアーミレットの数は低めに見積もっても５０……下手すりゃ十倍近い数を生み出す。

そしてドーラのポイズン列車砲(キャノン)の威力および範囲はグスタフの五倍以上……基本的に地上にいたら確実に死ぬ。

しかも下の階がうるさいと上の階に住んでる蠍達がキレてビームを撃ち始めるので上から雨漏り(ビーム)、下は地震の大地獄。過去にその戦いを生き残って素材を確保できたのは割と奇跡に近い。

つまりなんだ。逆に言えば……人柱四人くらいを下の戦場に派遣しつつ、俺自身は俺をご指名の蠍君と憂いなく決着をつけるという構図はまあ、アリ寄りのアリと言えなくもない。帝晶双蠍は下があんまりに騒がしいとヘイトが分散し始めるからな……よし。

「一流は食べる道草にもドレッシングをかける！　故に道草(シーザーサラダ)！！」

「随分と愉快な美食家だね」

「食える草を吟味するとかじゃねぇんだな……」

「雑草ってやっぱり青臭くて苦いだけなんですかね？」

「「「猫じゃらしは歯に引っかかる」」」

「わぁ……3P……」

孤島あるある、その9。

猫じゃらしを見て「これワンチャン小麦的な感じにならねぇ？」と文明人的なことを考えるけど最終的にそのまま食って延々と歯に引っかかる。

……

…………

「ウッソでしょ！？　至近距離シャッガンで凹みすらしないの！？」

「いやお前こんな、登るとかしがみつくとかそういうレベルじゃねぇだろサンラクァ！！」

「いやー楽しい！　ロクに準備せずぶっつけ本番で戦うの久しぶりだなぁ！！」

下から何か愉快な鳴き声が聞こえてきた気がした。いやでもこの轟音の中、そんな都合よく人の声が聞こえるはずがないのできっと気のせいだろう。

目の前には不自然に鋏の欠けた帝晶双蠍（アレキサンド・スコーピオン）、成る程確かに見れば見るほど掠れかけてた記憶がはっきりと形を取り戻す。

成る程確かに、これに関しちゃ俺が悪かったよ。蠍相手の戦闘が半分くらい作業周回になってたから中途半端な形で逃げたのはヴォーパル魂的に良くなかった。

「恥は重ねて塗る前に洗い落とさなきゃあな………いや、本当に悪かった。このままじゃあ親友は名乗れないな」

古き良き河川敷で友情を深めるように、正々堂々の殴り合いでしか分かり合えない友情がある。俺はそう信じている………さぁ、決着つけようぜ！！

「サンラクくぅーん、がんばえー」

「そこ射程範囲だぞ」

「え？　んぴっっっっ」

戦争中はみんな気が立ってるからな、特に外縁にへばりついてると近くの蠍が狙撃するんだよ……哀れな女め、戦場に安全な観客席なんてどこにもないのさ。

１２月１４日：皇帝の道草（後書き）

豆知識：シーザーサラダの「シーザー」は料理人の名前であって俗に言うカエサルとかは全くなんの関係もないぜ！！

ちなみにディプスロは外縁部に杖浮遊させてその上に立ってた動かない的なので当然狙撃された、隣室に踏み込んだら殴り合いだけどベランダから虫をぶっ叩く分には怒られないここはサソリハイツ最上階……

12月14日：道草完食

◆

因縁は運命に繋がる入り口だ。かつてそうやって新大陸東方の頂点に立った三つ首の恐るべき竜がいたように。
あるいはこいつとの因縁は、まだ見ぬ新種……まだ見ぬレアアイテムに繋がったのかもしれない。
だがあいにく俺は因縁が育つのを待つようなライバル寄りのラスボスムーブをするつもりはない。売られた喧嘩はチップもつけて買う。
そもそも先に売ったのは俺なので商品発送が遅れたお詫びとして色をつけて敗北を発送してやらねばなるまい。
「へへへ……過剰伝達抜きならそこそこ制御できるんだぜ、俺はよ……」
成功率は多めに見積もって50……いや45％。臨界速の攻撃転用は反動で吹き飛んでそのまま死ぬ可能性をゼロにする事はできないが、今の俺ならそんなに悪くない確率の賭けだ。
自慢ではない、俺はシャンフロで最も水晶群蠍系列のモンスターを狩っているだろうという自負がある。
一見打撃に弱そうに見えるが実際はボディの殆どが耐衝撃に優れている事は知っているし、その上で耐衝撃のカラクリは脚から衝撃を逃している事も知っている。
そして何より、実は打撃よりも斬撃よりも……いや、まぁ総合的に見てもどの攻撃も回数が必要だから大差ないか。

故に狙うのは脚だ、脚を狙うべし。脚から爪系の素材が出るのでなんなら尻尾より脚を狙うべし。そして二、三本へし折れたらあとは思う存分ぶっ叩けばいい。

破壊属性が無くてもひたすら叩けば割れるのがこのモンスターの良いところだ。まぁ俺のスペックだとそれでも大変なんだが……時々レイ氏とかマッシブダイナマイトみたいなバカ火力通常攻撃が恋しくなる。

くっ、ここにいるのがタイムチェイサー2～琥珀の弾丸～のプレイヤーアバター「サンラク」であれば……あのゲーム、主人公が拳銃使いなんだけどサブタイにもなってる琥珀の弾丸だけ無限に威力を上げられるので射程距離とか精度とか全部犠牲にしてパワーに特化した弾丸を至近距離から叩き込めば大体勝てるんだよな。

その代名詞がボクシング狙撃（狙撃ミッションなのに隠密しながらターゲットのすぐそばまで近づいて至近距離から発砲する攻略法を揶揄したワード）……ボクシング狙撃は流石にネタだけどボクシング銃撃そのものはたまに役立つから困る。

「因縁はここで断ち切る。お前の素材は有効活用させてもらうぜ」

ソロ討伐なので素材がうまいことうまいこと。さて、俺の方はひと段落ついたけど下はどうなってるかな。

なんか戦ってる最中にめちゃくちゃ揺れてたけど……あ、お隣さんどうも。攻撃中？　君らがそんな集中火力する時って大抵ロクでも無いことになってますよね？

左右から狙撃される危険に気をつけつつ、下を覗き込む……

「うわぁ……初めて見た」

何やったんだあいつら。グスタフと通常フォルトレスが生き残ってる状態でドーラと女王フォルトレスが出現してる状況とか初めて見たぞ。なんだこの地獄のタッグマッチ。

「………これ下降りたくねぇな」

外縁部でも巻き添えで酷いことになりそうだ。
なんか魔法エフェクトとか見えてるし悲鳴と思しきか細い音も聞こえた気がしたのでもうちょっと暇つぶして行こう。
どうせ蠍達も迎撃モードだ、採掘する時間は普段より長めなはずだ。

「やっぱここツァーベリル帝宝晶しか出ないのかなー……っと」

ツァーベリル帝宝晶、便利だけど武器でも防具でも加工すると性能切り替わり効果がデフォルト効果になるのがな……ん？

「ん？　ポストイ・ツァーベリル？」

へぇ、ほぉ……魔力が蓄積されていないツァーベリル……性質的にはラピステリアに近いのかな？　いいね、こんなレアドロップがあったとは。

ヒューーッ！　戦争経済は最高だぜ！！

……

…………

……………

Q．女王とドーラがガチで戦うとどうなる？
A．こいつらと上にいる蠍以外みんな死ぬ

「素材拾えた？」

「銃が五つ程スクラップになりました」

「もう一周いいですか？」

「これプレイヤーがどうこうできねぇだろ」

「トレジャーキャプチャーって魔法を倍化するとどうなると思う？」

成る程、ディプスロ以外は全部拾えませんでしたと。

「いやそもそもこいつが地盤掘り起こすからあのさらにデカい連中が目覚めたんだろ！？」

「いやぁ、知らなくってねぇ………んん゛っ、ごめんね？（幼さ重点）」

「ぐっ」

「あだっ！？」

それで引き下がるのは流石にもう手遅れだろ……脳みそが。
とりあえずもう一周する予定はないし、爆音が響き続ける戦場に再

び飛び込むつもりもない。あと今この瞬間、余波で飛んできた甲殻の欠片によってテントが粉砕され、巻き添えでカローシスがＨＰが半減したのでいい加減退避しないとまずい。

「もういいだろう、道草終わり！　朝だぞもう」

「朝六時に遊んでてもいい。それって……凄くないですか？」

「カローシスさん……いいんだ、いいんだよもう……全力で遊ぼう、今のあなたはそれが出来るんだ……っ！」

ヤシロバードに悲しげな声をかけられても、カローシスＵＱは無邪気に笑っていた……。

気を取り直して。

「キャッツェリアまでのルートはここから南西……いやこれ西南西くらいか？　そこに峡谷があるらしい」

「しれっと新大陸のマップ取り出したな」

「あれサバイバアル知らないの？　このマップならライブラリがもう公開してるよ」

「マジか」

キャッツェリアの詳細な位置はエルクに袖の下を渡して教えてもらった。時間が無いのでな、多少のヴォーパル魂と引き換えに効率を

買ったと考えればまぁいい買い物だったと言える。ヴォーパル魂は通貨じゃねぇ、カローシスのことを言えないな。
ドワーフ達が住んでいる火山から近い、というかほぼ近所だが……どういう経緯で火山と峡谷が隣接してるんだこれ？　高校生の別に専門にしてない程度の頭だがその二つが両立する条件が分からんぞ。例えば……なんかもうマッハ2くらいの速度で流れたマグマが地盤抉ってそのままどっかまで流れ去って行ったとか？　いや、そもそも下にあるのが大陸じゃなくて大陸級のモンスターな時点で既存の物理法則で考えるだけアホらしいか。

それこそたった一匹のモンスターがこの光景を作ったのだ！　とか言われてもゲームなんだから受け入れるしかないわけで。

「どうせなら目的地まで辿り着いてから朝飯なりなんなりで休憩にしようぜ」

目指せ猫の国、戦場よりかは平穏な国だろうよ！！

１２月１４日：道草完食（後書き）

Q．火山の隣に峡谷が出来るってどういうことやねん

A．昔そこは平地というか荒地だったんだけど一つ目の黒い軟体生物（硬い）が右ストレートで抉った

１２月１４日：決戦を前に（前書き）

７７７話だからってあれこれ全部詰め込もうとするからこんなに長くなるんですね
実質三話分！！

12月14日：決戦を前に

◇

「煉牙さん……あんたほどの人が、アグロに執着しすぎましたね」

「くっ……………」

「【絶滅回避】が手札にあるのを分かっていてターンを渡した時点でリーサルが根本的に足りてないんですよね、リーサル未満のビートとか実質ドロソですよ。はい【再繁栄の兆し】、デッキトップ四枚めくって墓地の一番上に置かれたオリジンと同じ種族を踏み倒します」

「いやまだ勝ちの目はある、外せ外せ外せ外せ………」

「えー、一枚目【貪食の大蛇】二枚目【偏食の大蛇】三枚目【暴食の巨蛇】四枚目【燼食の大王蛇（ヘルヴェルス・コブラ）】。墓地にいるのが【骸食の大蛇】なので……はい全部踏み倒し、スペルありますか？　いやこれ上振れ過ぎてますねぇ！！」

「サレでーす」

「いやでーす」

『残念ながら双方の同意がない場合、サレンダーは受理されません』

「絶滅に至れミッドレンジ極限環境……！！」

「ハイローラー氏の……ティア1デッキへの憎悪が……あまりに……
……っ！！　ぐわーーーーッ！？」

……

………

……………

ここはリヴァイアサン第三殻層〝裏面〟。リヴァイアサン完全攻略者にのみ解放されるコンテンツの中でもさらに遊戯を極めた者のみが入ることを許される、フィロジェネテック・ジオグリフプレイヤー専用サロン……。

未だ、このサロンに辿り着いた者は片手で数えられるほどにしかいない。だがそれ故に精鋭、それ故に一握。集った歴戦のフィロジオプレイヤー達は、第三殻層【戯盤】に存在するフィロジオ100人抜きの「タワー」を突破した者達だ。

ここで生まれた流行が環境を作る、もはやこの場所こそがフィロジオというコンテンツの最先端にして源流となりつつあった………

……今日この時までは。

「っぱ【絶滅危惧種コントロール】は【ミッドレンジ極限環境】にワンチャンある」

「いや極環(ごっかん)がアグロムーブした時限定のワンチャンはワンチャンじゃないでしょ、まだ【色竜単速攻】の方がマシレベル」

サロンの豪華なソファに腰掛け、熱くフィロジオの最前線について

語る二人の男。片方の名は「煉牙」、フィロジオの第一人者と目される男であり……プレイヤーで一番最初に「タワー」を完全制覇したフィロジオニストである。彼が開発した【ミッドレンジ極限環境】は、現時点でＴｉｅｒ１～３に存在する実に六つのデッキに対して完全な解答を提示することが可能な最強のデッキとされている……

だが、ではその〝極環〟がフィロジオというゲームにおける結論なのかといえば……否である。
フィロジオのカードプールは実際にフィロジオニストが遭遇した原生生物の種類と同期している。つまりまだ見ぬモンスターの数だけ、まだ見ぬカードが生まれる可能性がある。

であれば、だ。

「……時に煉牙さん、例の噂はもう聞いてます？」
もう一人の男。もはや未知を切り拓く開拓者とは思えないドレスコードを意識したスーツを着こなす男「ハイローラー」が切り出した話題に、煉牙は静かに言葉を返す。
「アレのことなら……うん、もう把握しているね。ていうか広めたの俺」
「あ、そういう……で、どう思います？」
「どうもこうもないだろう。リュカオーンのカードがあり、クターニッドもジークヴルムのカードも確認されていることは……出るんだろう、無尽のゴルドゥニーネのカードが……！！」

無尽のゴルドゥニーネ。今までその正体が「蛇」に関連するモンスターであること以外は謎に包まれていた七つの最強種(ユニークモンスター)、そのゴルドゥニーネとの決戦が行われるという情報が前線拠点では広まりつつあった。

記憶に新しい巨大蛇型モンスターの襲来。幾度とない襲撃を乗り越え、補強されたスカルアヅチの援護もあってか以前ノワルリンドに襲撃を受けた時とは比べ物にならないほど軽微な損害で抑えることができたものの……既に生産職連合は海上ギルドの建設と同時並行で、前線拠点の迎撃要塞化を進めている。

だが、そんなことはフィロジオプレイヤーにとっては些事でしかない。どれだけ「勇魚」に白い目で見られようが、舌打ちされようが小言を言われようが…………彼らはこの電脳世界における一分野において極みへと辿り着かんとしている。彼らにとって、この世界に現れるあらゆる魑魅魍魎は「カードプールを広げるために仕方ないから見に行かないといけないクソイベント」に他ならないのだ。

「ゴルドゥニーネ。まず間違いなく蛇モンスターデッキのエース張れる性能だろうし、他のユニークモンスター同様ピン差しで機能する性能だとしたら…………」

「「環境が動く」」

跳梁跋扈の森エリアボス「貪食の大蛇」に代表される蛇系モンスターのカードで構築されたいわゆる「蛇単」デッキは他の種族統一デッキと比較してソリティア……所謂カード同士のシナジーによって延々と展開を繰り返すことが出来る。

それはこの世界における「蛇」という存在が他のモンスターよりも強固な繋がりを持っている証左であり、あるいは【ライブラリ】も

未だ辿り着いていない生命の真理、その一片に辿り着けるかもしれない可能性なのだが……カードゲーマー、それも競技性に重きを置くプレイヤー達からすればそんなものは「テーマ内で動きが完結してるから勢いはあるけど拡張性は無い」程度の感想を抱くだけだ。

「そろそろ「勇魚」さんの視線がキツくなってきたし、ここらで一丁開拓者として真面目に働きます？」

「噂で聞いた話じゃゴルドゥニーネ、めちゃくちゃ物量戦らしいですよ」

「人を集めた方がいいか……」

取り出したるは掲示板に書き込むための木のボード。書き込む先は……

【雑談】フィロジオ総合掲示板　Ｐａｒｔ．９【環境は極環】

２８７：平政
友達に誘われてフィロジオ沼に入水しました！　今はアグロ共生連鎖使ってます！　これでタワー攻略できますか？

２８８：ももももんじゃ
無理でしょ、８５でアグロは絶対詰む

２８９：ザ・ルソヴァー
でも８５階ってアグロで突破報告無かった？

２９０：ドゴウ
初心者になんつーデッキを勧めてるんだ

２９１：スリーピー
いやミッドレンジ共鎖や共鎖コントロールならともかくアグロでビートするだけならやること一個だけだから初心者向けじゃないです？

２９２：ももももんじゃ
そう言われれば確かに
まぁアグロの宿命として【繁殖障害】系スペルで死ぬんだけど
そして８５階はガッッッッッチガチの遅延パーミッションっていうね

２９３：ザ・ルソヴァー
今の共鎖アグロって主流どっちだっけ？　虫型？　竜型？

２９４：リカ・フラスコン
キルターンが増えるけど確実にオーバー火力４ターン目に叩き込む恐竜型でしょ
虫型は殴り出しは早いけど今の環境じゃクアッドで削り切る前に相手が動ける

２９５：平政
自分のは深海共鎖です

２９６：ドゴウ
なんて？？？？？

２９７：スリーピー
出た、フィロジオ名物「開拓者として優れた奴が未知のカードプール引っ提げていきなり環境を荒らす」現象

２８８：もももんじゃ
深海ってアレじゃねーの？　一時期煉牙が使ってたアトランティスみたいな名前のバカ強いシャチ主軸にしてた奴
強いけど不安定すぎてロマンデッキだったけど

２８９：ラベンダベランダ
あー、「なんかこれ根本的にパーツが足りてねぇ」って嘆いてた奴な
誰かからカードを買ったけどそいつが深海系のコンボを完成させるモンスター全てに遭遇してないんじゃないか、って言われてた

２９０：ドゴウ
シャチが盤面コストでバ火力、アンコウ？　が墓地ソース、あと一体なにかが墓地肥やしするんじゃね？って言われてた奴な

２９１：たっプリン
（深海三強ってカードが発見されててぇ……）

２９２：ザ・ルソヴァー
こちら、シャチとアンコウ相手に張り合う巨大ヤドカリが描かれております

２９３：リカ・フラスコン
絶対そいつじゃーーん

２９４：騎士離島龍
まぁシャチでもアンコウでも単体で暴力の塊なんですけどね
ていうかこれ自力でパックから出せるやつはクターニッド挑戦した
やつだけだから多分彼、【儀式クターニッド】作れるっしょ

２９８：煉牙
儀式クターニッドはいいデッキだよ、互いにパーミッションとロッ
クかけるから絶対一試合が泥沼になるところとか

２９９：もももんじゃ
対人で当たりたくなさすぎる

３００：ハイローラー
時代は絶滅危惧種コントロールだぜ！

３０１：平政
知らないデッキ名が飛び交っている……

３０２：ドゴウ
初心者はアグロとかミッドレンジとかの意味だけ覚えておけばいい
ぞ、自分が死ぬｏｒ相手を殺すタイミングだ

３０３：スリーピー
なお極限環境

３０４：ラベンダベランダ
アグロできるミッドレンジコントロール（大体変異種モンスターは
パーミを仕掛けてくる）
クソですわぞ？？？？

３０５：スコーピア
はい蠍ビート

３０６：煉牙
妨害さえされなければ最強の過剰火力来たな……

３０７：ハイローラー
環境破壊されると全滅する絶滅危惧種コントロールより儚いデッキはちょっと……

３０８：もももんじゃ
つーかサロン勢来てるじゃん、なんか新環境デッキ生まれた？

３０９：リカ・フラスコン
極限環境がほぼ結論みたいなところあるからなー

３１０：煉牙
皆の衆、そろそろ我々も新たなカードプールを模索する時が来たのではないだろうか

３１１：平政
サロン勢ってタワー攻略した人？

３１２：ザ・ルソヴァー
違う、リヴァイアサン完全攻略して裏面の第三殻層ＶＩＰルームに行った奴ら
フィロジオしつつちゃんと開拓もしてる偉い人達です

３１３：ハイローラー

ちゃんと開拓者してるのに勇魚からの対応ド辛辣なんですがそれは
……

３１４：ももんじゃ
いやだって開拓するためにリヴァイアサンにいるんじゃなくてリヴァイアサンで遊ぶために開拓してるじゃん……

３１５：たっプリン
手段と目的が完全に入れ替わっている

３１６：煉牙
フィロジオニストの宿命なので諦めましょう
それよりも無尽のゴルドゥニーネの噂は聞いた？　あれカード化したら蛇単速攻ヤバそうじゃない？

３１７：ドゴウ
自然な流れですね

３１８：ラベンダベランダ
川を埋め立てて流れを変えるのは果たして自然と言えるのか

３１９：ハイローラー
実は情報筋からゴルドゥニーネのある程度の詳細が流れてるんだよね
・大量の雑魚敵（雑魚じゃない）を生み出す
・毒を武器に変形させて剣聖みたいに操作する
・巨大蛇を四体従えている
ではこれをフィロジオ脳で変換してみよう

３２０：騎士離島龍
・ハイスペックトークン生成

・追加効果付きの強制バトル？
・デッキから蛇モンスター四体踏み倒し
フィロジオのルール壊れちゃう

321：平政
蛇単って大型モンスター入る？

322：ザ・ルソヴァー
入る。ていうか種族統一は3ターンあれば大型呼べるし蛇単はその中でもトップクラスにソリティアが早いので性能次第だけど3ターン目にユニークモンスターカードが出る可能性は高い

323：煉牙
前例のユニークモンスターカードが単体でアホほど強いから期待値はガンガン上がるよね

324：スリーピー
【ウェザエモンコントロール】とかいうロマンの塊

325：もももんじゃ
ウェザエモンが場に出た時点で自デッキの半分以上を機能停止させるトンデモスペック好き

326：平政
相手カードのスペックに上限をつけるんでしたっけ

327：リカ・フラスコン
その上で1ターン3回攻撃に破壊耐性、スペルで対処しないとまず勝てない

328：スコーピア
ジークヴルムで焼き払うしかねぇ！

329：ドゴウ
ユニークモンスター対策にユニークモンスター要求するのやめーや、デッキに一枚しか入らないし現状サーチ手段もないやろがい！

330：ハイローラー
だが待ってほしい、ゴルドゥニーネは明確に蛇系モンスターとの関係が明らかになっている。つまり……？

331：平政
サーチできる？

332：煉牙
蛇単速攻がデッキに一枚しか入れられない……言い換えれば一枚以上あるとゲームバランスが崩れるような代物をサーチできるとしたら？

333：もももんじゃ
ちょっと装備強化してくるわ

334：スリーピー
ヒーラーの力、必要だろう？

335：たっプリン
タンクなら任せろ

336：リカ・フラスコン
そろそろ「勇魚」ちゃんとの関係性も好転させたかったところだし？

337：ザ・ルソヴァー
極環の時代を終わらせる、そう俺たちはまさに革命軍……
338：平政
カードゲームがしたいのになぜ開拓に戻る羽目に……
339：ドゴウ
カードゲーマーの力、見せてやろうぜ

◇

俄に開拓者としての情熱を取り戻し始めた掲示板をなんとも言えない顔で見ながら、煉牙はぽつりと一言。

「……焚き付けた側が言うのもあれだけど……ちょろっ」

「それな」

煉牙もハイローラーも分かっているのだ。フィロジオはただのカードゲームではない……この「シャングリラ・フロンティア」という神ゲーと並列して遊べる神ＴＣＧなのだ。

カードゲームに重きを置いているとはいえ……シャンフロ本来の遊び方を躊躇うはずもなく。

とあるプレイヤーが、自らの知り得る情報拡散源(インフルエンサー)達に託したゴルド

ゥニーネに関する報せ。王国騒乱という一大イベントにも興味を示さない〝はぐれ者〟達は、新たな「騒乱」の気配に動き出す――

◇◇

ニーネスヒル。ただ一つのくぼみを囲むように存在する九つの丘……それらを基に作られたこの街は、中央の王城を囲むように「九大ギルド」と呼ばれるエインヴルス王国の中でも特に力を持つ、職種（ジョブ）を司るギルドが存在する。

戦士ギルド、剣士ギルド、騎士ギルド、魔術師ギルド、聖職者ギルド、鍛冶師ギルド、傭兵ギルド、盗賊ギルド、そして……大工ギルド。

国防、開拓、宗教、鍛造、派兵、偵察、そして建築。王国の黎明、初代エインヴルスを助けた臣下達に由来するそれらの中でも建築ギルドがその威信をかけて作り上げた王国最大規模の宿屋（ホテル）「獅子の栄光」……最上階「獅子の頂の間」に彼らは集まっていた。

「こう言っちゃアレだけど皆さんよくこの短期間でレベルと装備上げてきましたね」

この場に集まったプレイヤー達には共通点がある。

それは皆、此度の戦いにおいて新王アレックス側に味方していること……そして、ここ（シャンフロ）ではない場所から、ここでの姿を配信する事を目的にしているという事だ。

「いや本当、改めて今回のお誘いに乗ってくれてありがとうございます。今回はよろしくお願いしますー」

「「「よろしくお願いします」」」

会話の音頭を取るのは「ぱやぶさ」と頭上に表示された剣士……否、剣聖のプレイヤー。

剣聖への転職条件には剣技大会での入賞回数が求められる。王国騒乱への参加を表明してから今の間までに開催された大会の回数を考えれば……一体どれほどの効率で入賞を重ねたのか。

実際内情としては、リスナーだけで統一された実質的な身内大会なども駆使した潔白とは言い切れないグレーな入賞がいくつか混じっているのだが、それを差し引いても剣聖に至れるだけの地力があるのは紛う事なき事実である。

「で、今日集まったのは明日の段取り合わせですよね？」

「ええ。一応アップルパイさんから他の方にも伝えてもらえるとありがたいです」

「あーはい、元々そのつもりなんで……一応録画いいですか？」

「間違っても流出とかさせないでくださいよ〜？」

「ははは、他の連中にもきつく言っておきます」

おどけた様子のぱやぶさの言葉に、配信グループ「ＧＵＮ！　ＧＵＮ！　傭兵団」から代表としてこの場に来た「アップルパイ＠ＧＧＭＣ」は笑顔で返しながら録画アイテムを展開する。

今回の集まりは配信者連合改め「配信戦線（ライブライン）」、彼らが描く一大イベントの最終確認のためだ。そもそも、彼らがあえて新王側についたのには幾つかの理由がある。

一つは単純な戦力比。彼らとて世間一般的に言う「正義」がどちらの側にあるのかは理解している。少なくともこのまま新王陣営を勝利させれば新大陸との軋轢が生まれることは自明の理、だがあえて新王側についたのは戦力比の調整のためである。
イベント開催期間の序盤で決着がついてしまっては、配信者としては旨味が少ない。故に陣営を表明すればリスナーやファンがついてくる自分達が動けば戦力比はある程度拮抗する……あるいは、彼らの目論見通りに戦力比が偏るかもしれない。

二つ目は……このイベントに参加する人数を増やすこと。前述の通り、此度の戦いにおいて正義は前王派にある。少なくとも現代日本ひいては地球の価値観で言えば、新大陸への武力的干渉を考えている新王派が「悪」に部類されるだろう。配信戦線は表向きには「シャンフロは神ゲーなので新王を説得することもできるだろう」と表明しているものの、だからといって心情的に新王側に属したいと思えないファン層も当然存在する。だから配信戦線は同時に「敵に回っても大歓迎！　全力で相手をする！」とも表明している。
これによって何が起きるのか……それは視聴率の上昇である。配信者はリアルタイムでゲームプレイを配信するが、それと同時に生配信を動画（アーカイブ）として残す。動画には広告をつけることができる、すなわち広告収入（アフィリエイト）が発生する。言ってしまえばマネーが理由なのだが、だからといってそれが主目的というわけではない。あくまでも理由の一つだ。

そして三つ目。それは事前の調査によって前王派についたプレイヤーにある。判明している限りでも新大陸に活動圏を広げたプレイヤー達はその殆どが前王側につくことが明らかになっている。
その中でも有名どころを上げれば、クランを分割してからより一層の躍進を見せる「黒剣」……剣聖勇者サイガー１００。脳筋の星マ

ッシブダイナマイト。考察プレイヤークラン最大規模の【ライブラリ】の長キョージュ……他にも10人に聞けば一人は名前を知っていそうなプレイヤーが多く前王派に味方している。そしてなにより……良くも悪くも、シャングリラ・フロンティアというゲームにおいて最も有名なプレイヤーが前王派についている可能性が極めて高いと配信戦線は考えていた。
その名は「サンラク」。シャングリラ・フロンティアの目玉コンテンツであるユニークモンスターを怒涛の勢いで攻略する今最もこの世界の先を進む男、あるいは女だ（女アバターだとしても声で素性ははっきりしそうなものだが、何故か両方の性別で噂が広がっていた）。
有名なプレイヤーは、多かれ少なかれ画面映えする。そしてそんな画面映えする存在と同じ画面に映っていれば如何なモブとて多少の箔がつく。よしんばそれが自分の配信であれば？　それは再生数にも繋がるし、何よりも……盛り上がる。

「まぁ一塊になっても仕方ないですからね、当日の配置をおさらいしましょうか」

「自分らは前から言ってる通り、サードレマに突撃します。まぁ流石に一般人（NPC）は避難って形になっちゃったけど……ファンタジー世界で思いっきりミリタリーするのも悪くないって総意なんで」

一般人がいたら万々歳、と言わんばかりの言葉に各々心の内で引くことはあれど、それを咎めるようなことはしない。悪感情を抱いていないとしても、同じ陣営として戦うとしても、やはり他人であり他のチャンネル。たとえ配信がBANされようが動画が削除されようが、同情すれど自分達がどうこうできることはないのだから。

「あー……で、次にカイソクさんは……」

「事前の打ち合わせ通り、サーティードからサードレマへと対人しながら進ませてもらうよ」

「あ、私もです」

「カリントウさんもサードレマ目指す感じで……んで、ウチのガル之瀬もアタッカーで僕も遊撃なので……いやぁ、何だこの見事なフルアタ編成」

とはいえ、悪い案というわけでもない。そも新王陣営には「彼」がいる。なんのＡＩを仕込まれているのか、鬼のように強い彼がいるならば新王の命が脅かされる危険性は少ないだろう。
それにやはり防衛に回って定点カメラになるよりも、攻撃に回った方が配信映えする。

「まぁぶっちゃけ、陣営全てを支配しようとか考えてないですからねー。勝ったならその時に考えて、まずは負けた時に備えて悪役の断末魔の練習でもしときます？」

「……始まる前から景気の悪い事を言うな」

開戦前から敗戦処理の話をし始めたぱやぷさを嗜めたのは、会話をぱやぷさに任せて殆ど喋っていなかったガル之瀬であった。

「元より話題性目的で集まったんだ。各々好きに動くもよし、突発コラボをするもよし……とはいえ、どうせやるならやっぱり勝ちたいだろう」

「まぁそりゃねー」

「新王陣営（こっち）が勝つと……まぁ、あんまり望ましくないことにはなる
が、それはそれで次の長編の導入（フック）になる。視聴者（ファン）がこれからシャン
フロをサステナビリティにプレイする事をアクセプトする理由づけ
にもなるだろうし……

暫し沈黙。

「あーごめんごめん、ウチのガル之瀬舌が回るとろくろも回すタイ
プだから……ともかく！　当日はよろしくお願いします！」

……

…………

それぞれが最終準備としてログアウトや素材集め、あるいは製作中
の武具を受け取りに行く中、残ったのはぱやぶさとガル之瀬の二人。
とは言っても彼ら二人が他の面子に何か隠し事をしているというわ
けではなく、若干プライベート寄りではあるが単なる雑談をしてい
るだけだ。だが、雑談のネタもそろそろ尽きる、というところでぱ
やぶさが遂にその言葉を放った。

「……でさ、例の話……マジでやんの？」

「ああ……やる」

「いやー、この前も言ったけどさぁ……やっぱ不味くない？　燃え
るって」

「配信切って覆面でもつけてやればいいだろう」

「いや身元不明にすりゃいいってワケじゃ………」

「ぱやぶさ」

「はいぱやぶさです」

「この話の根はあまりに深いんだ。あまりに、な……」

何をどう説得されようが意見を変えるつもりはない、表情にそんな〝決意〟を漲らせたガル之瀬。その様子に相方であるぱやばさは、自分にすら明かされないその「根」とやらに渋い顔をしつつとりあえず一言。

「謝罪動画は手伝わないよ」

「その時はトリプルアクセルバック宙返り土下座でも何でもしてやるさ」

「ごめん訂正、カメラマンなら喜んでやる」

◇◇◇

「配信戦線（ライブライン）」。彼らがゲームという大きな水面に自ら達という大き

な石を落とす事で「大波」を起こす事を目的とするならば。
「さぁ、いよいよ明日が本番だよ親愛なるＲＰＡの諸君！」
彼女達は「爆弾」だ。念入りに威力、範囲、タイミングを調整し、最大の努力で最大の爆発を起こす。
それがアーサー・ペンシルゴンを筆頭とした「ＲＰＡ」……レッド・ペンシル・エージェンシー達の目的だ。
配信者連合改め配信戦線の表明はリアルタイムで仕入れ続けている。そして各地に潜伏させたスパイからの報告で配信戦線の側が大した策を練っていないことは分かっている。
「敵に策なし！　なれば策ありし我らに敵はなーし！！」
「「「同志！　同志ペンシルゴン！！」」」
「国が欲しいかー！」
「「「おーっ！」」」
「我々はサードレマの親愛なる配下なのでダメでーす！　その代わりに一等地が欲しいかーっ！！」
「「「「おおおおお！！」」」」
盛り上げたい者がいて、盛り上がりたい者達がいる。であれば彼らのボルテージは決戦前日でありながら際限なく上昇していく。
「敵は「配信戦線（ライブライン）」！　ぱやガルチャンネルを見たことはある？

カリントウの徹夜配信を何時間連続視聴したことがある？　改崎さんの視聴者参加型百人組手に挑戦したことは？　ＧＧＭＣと当たった奴もいたりして？　だが殺す！　死なす！　奴らが土を舐めたくないと言うのなら、ケチャップとマヨネーズと一緒に口の中に詰め込むのだーっ！！」

「同志！　ワサビでもいいですか！？」

「ブートジョロキアなら認める！」

「ヒュウ！　妥協案が即死級だぜ同志ィ！！」

「血！　私配信者の血が見たーい！！」

「勝って献血配信してもらえるよう頼んできなさーい！」

誰も彼もが無茶苦茶な言葉を吐き出していく。どう聞き間違えても善玉の発言ではない……だがそれでいいのだ。

ＲＰＡ……あるいはかつて鉛筆王朝と呼ばれた彼らは、綺麗な勇者様になりたいわけではないのだ。リアルではできない酒池肉林を、ハイクラスな地位と名誉で下々を見下したい、ソロゲーでただ黙々とコンテンツを埋めるのではなく、ＭＭＯで他者よりも秀でたい……そんな「表に出すつもりはないし隠すことも苦ではないが捨てることができない衝動」を、鉛筆戦士（アーサー・ペンシルゴン）は肯定する。

渡世の中で、ゲームに費やす時間が人生の総量を上回ることはない。ならば、人生を渡る程に慎重になることもない。

楽しく生きて、楽しく死ね。死ぬ瞬間すらも彩ることが出来るなら、何度も生きて死ぬるゲームでそれを躊躇う必要などどこにもない。

「もはやミーティングなど不要！　全員作戦は頭の中に叩き込んでいるでしょう？　ならーば！　あとは程々にアドリブを入れつつ、やろうよ王国転覆！　サードレマの旗を振り回しておけば百人斬り伏せても私達は英雄なのさ！　イェーイ大義名分！！」

「「「おおおおおおおおおお！！！」」」

配信戦線もレッド・ペンシル・エージェンシーも根っこは同じ。思うがままに「我」を通して楽しむために……双つ王達の代理として、激突の瞬間はもうすぐそこまで来ている。

……

…………

「……で、【旅狼】の当日の動きなんだけどね？」

「え、この全滅するまで終わらないタイプの悪の組織の決起集会の流れのままやんの？　こっちまで悪の組織に引き摺り込もうとするのやめてもらえます？」

「お黙り（シャラップ）カッツォ君、我サードレマ特別相談役ぞ？　つまりジャスティス」

「ならもう正義は死んだって事だよ」

「あの！　当日はどうするんですか？」

「そうだね秋津茜ちゃん、約二名今どこにいるのか分からない奴らがいるけどちゃんと来てくれたいい子ちゃん達には頼みたいことがあるんだよねー」

◆

「にゃんにゃんっ」

「は？」

「いやぁ、猫の王国なんでしょ？　だったらつけた方がいいかなぁって、ねぇ…………」

そのどこ需要か全く分からない猫耳アクセサリーを譲渡されても使わないんだが。

そろそろキャッツェリアに到着する、というタイミングで突然猫耳をつけてあざといムーブをし始めたディプスロからの猫耳コールをキャンセル……したのだが、どうも雲行きが怪しい。

「まぁそう硬ぇこと言うなよサンラク」

「うわ、地味に聴覚強化がついてる……つけ耳なのに？」

「ははは、猫耳なんかリアルでつけてる暇ないから新鮮だなぁ」

いい歳してるだろう他三人が何故か猫耳に乗り気なのである。カローシスの方はちょっとツッコミ入れづらいから勘弁して欲しい。

「…………」

「……ほら、にゃんにゃん？」

え、やらないとダメな流れなの？　めちゃくちゃ嫌なんだけど……
いや猫耳をつけることが、じゃなくてものすごくニヤニヤしてるディプスロにそれを晒すのがなんというか恥ずかしいじゃなくて……
不安？　なんか変なことに使われそう。ええい録画しようとするんじゃない！！

「やったろうやないかい！！」

「ウミネコのモノマネします」

冥響正典(ユア・カノン)：渡り鳥(ミグラント)をつけて、猫耳をつけて……

「ウミネコは顔面炎上しねーよ」

「目玉も常識的に二つだと思うんだよね」

「その頭装備オルケストラのやつですよね？　何徹しました？」

「み゜ぁ゜ーーーーーーーーーーーーーーっ゜！！！」

「猫に擬態するゲロみてぇ」

「この世の全てに絶望して発狂したカラスの鳴き声」

「身体壊して会社辞めた後輩がそんな声出してました」

オイコラ貴様ら、常人が生きて死ぬまでの間に絶対言われないような罵倒を生み出すのはやめろ。もうカローシスに関してはツッコまないぞ！　可愛らしいウミネコのモノマネやろがい！！

「いいねぇサンラクくぅん！　女豹のポーズ行ってみようかぁ！！」

「脳髄にマタタビを仕込んでらっしゃる？」

キャッツェリアまであともう少し。

12月某日：ふくしゅうしゃ、きばをとぐ

◇

海上ギルド。
プレイヤー主導の建築物では間違いなく最大規模であり、もはや新大陸の象徴としてプレイヤーだけでなくNPCにも認識される装骨天守スカルアヅチ。
その建築を主導し、職業名(ジョブ)であるはずの大棟梁が個人を指す名称になりつつあるプレイヤー「笑みリア」をトップに据えた生産職クラン【新大陸建設】が現在新大陸前線拠点の海上に建設している巨大建造物である。

スカルアヅチで得たノウハウに加え、三神教会からの公認、そしてリヴァイアサンという科学文明の導入により、海上建築でありながら恐るべき速度で組み上げられていく海上ギルド。完成すれば新大陸調査船に依存しない開拓者たちの寝床(セーブポイント)として新大陸の重要拠点になることは間違いないとされている。

……というのは表向きの話。

「いやー、いいねこういう秘密の先行特権」

「サバさんには感謝だな」

実のところを言うと、この海上ギルドは未完成ではあるものの既に完成している。
開拓者のセーブポイントとしての役割、大規模なパーティ募集施設、

生産職達の拠点にして販売施設……それら全ては〝海上〟に建設される施設の話だ。
海の上に浮かばせるわけではない、海中に土台を作るということはこの建造物には〝海中〟に空間が存在するということ。

その一つがここ、仇討人としてのロールプレイとプレイヤーのロマンを巧みに利用してとあるプレイヤーが提案した海下空間(アンダーシー)であった。
空間、といっても何か裏取引をしたりとかそういうわけではない。強いて特徴があるとするなら前線拠点にあるカフェ「蛇の林檎」新大陸支店から地下通路で繋がっている事と、広々としたコロシアムがあるだけだ……とはいえ、ＰｖＰという名の地下格闘技と賭け試合をする分には十分過ぎるのだが。

「ここで「たんれん」するの？」

「ヌッ……そ、そうだよウィンプちゃん。ここでお兄さん達と──
──」

「口調が不審者でウィンプちゃんに不快感を与えたな、処刑する」

「くっ……話しかけられたのは俺じゃねぇか……」

「服の裾を引っ張られて話しかけられるとか羨ましいから死」

そんな海下コロシアムに今、複数の人影があった。彼らは「蛇の林檎」の地下通路からこの場にやってきた者たちであり、すなわち仇討人あるいはクラン【ティーアスちゃんを着せ替え隊】に所属するプレイヤーであった。そしてその中に、不自然なほどに白い少女が一人。
二号人類(プレイヤー)ではない、それどころか人類種ですらない。人の似姿に蛇

の本性、人は彼女を「無尽のゴルドゥニーネ」と呼ぶ。
とはいえ、彼女自身がプレイヤーが敵対するゴルドゥニーネかというとそうではない、少々込み入った事情があるのだが……少なくともこの場にいる者たちはそれを承知している、あるいはそんなこと知ろうが知るまいが関係ねぇ、と妙な方向に割り切っている。
この場所にゴルドゥニーネ……あるいは「ウィンプ」と名乗る蛇を連れてきたのは戦うためだが、戦うためではない。つまりは、だ。
「というわけでどちらかというと熟女の方が好きなので〝癖〟から外れてる自分が音頭を取りまして……ウィンプちゃん大特訓会を始めまーす」
パチパチ、と少人数ゆえにこじんまりとした拍手が数秒。それが収まると同時に彼らは様々な武器を用意しつつ、準備を進めていく。
此度の集まりはただ単にまだ殆どのプレイヤーに知られていない海下コロシアムで親睦会をするためなどではない。予見された襲撃、無尽のゴルドゥニーネと恐るべき四体の巨大蛇に対する備え……そして何より、ゴルドゥニーネ「ウィンプ」の強化合宿。それこそがここに集まった理由なのだ。
「ねぇ、さっきのひといないけど」
「あー……大丈夫大丈夫。船からここまで十分くらいで戻ってくるから」
「いいですよね、海中直通の通称「顔洗い場」。処刑の手間が省ける」
「隣にアイテムボックス置いてくれたのすげー助かる、身辺整理の

手間暇的に」

「最近こっから俺ら落ちすぎてモンスターが出待ちしてんだけど」

「い、いかれてる……」

それはさておき。
ウィンプはゲーム的な分類上は「パーティ編成可能なNPC判定のモンスター」という扱いである。即ちプレイヤーや征服人形とは異なり、プレイヤー側から装備を好き勝手付け替える事はできない。あくまでもNPC側からの任意で装備を付けるか否か、を決めるという形だ。
そんなわけで着せ替え隊の面々は所有権を放棄した武器を十数種類並べて、ウィンプ本人に選ばせることにした。

「ウィンプちゃん、鎖鎌に興味はないかい？」

「こういう時にドマイナー武器を早口で進めるオタク君さぁ……」

「は？　ジャイロ手袋でスリーアウト取るが？」

「最大九枚も手袋投げつけてるんじゃねーよ」

「ここはやっぱ日本刀でしょ、日本刀が似合わない女の子はこの世に存在しない」

「面白味がないわね、日本刀なんてそれこそサードレマ辺りで殆どのプレイヤーが担いでるじゃない」

「ポン刀はなー、スキル補正無しで使うと……まー弱いんだよな

ぶっちゃけ……」

「そういうびっっっっっみょーーーーな体験を経て少年少女は大人になっていくのさ」

「え？　見間違い？　錯覚？　今特大剣片手でぶん回してなかった？」

「まさかぁ」

並べられた武器の中で一番大きい剣を軽く素振りして、一通り全ての武器を試してみたウィンプは二分ほど悩み……そして、その武器を手に取った。

「これ。これにするわ」

「……双剣？　なんで？　日本刀じゃなくて？」

「いい加減にしないと全裸で海のモンスター達のところに出前配達に行ってもらうぞ」

「料理が自分で歩いていくのか」

何故、と問われたウィンプは大した能力も付与されていないただの鉄の塊を二つ握りしめながらとある言葉を思い出す。

自らを卑下して己よりも上の存在に「恐怖」するならば、言い換えればそれは自分の先を行く背中に向けた「憧憬」で。

だから、その言葉はウィンプというキャラクターにとってはどれだけ気取っていようが記憶されるだけの価値があるもので。確たる決

意を目に宿した白い蛇は、ある人物から受け売りを口にする。
「――どれだけあいてがつよくても、かつまでなぐればかてる。そうなんでしょ？」
「なんつー脳筋理論」
「え、ウィンプちゃんそんな武闘派だったん……？」
「いや、この妙にゲーマー臭い思想はツチノコさんの受け売りなのでは……？」
「ていうか武器防具も見繕うんだっけ？」
「そこらへんはツチノコさんが用意するんじゃ……」
その時だった。現状、ティーアスちゃんを着せ替え隊と一部の生産職しか知らないはずの海下コロシアムに新たな人影が現れる。
「私を呼んだか！！！！」
「いや誰だよ……って、お前は！！？」
その人物をなんと形容すればいいだろうか。一言で表すなら……所謂創作における役割（ロール）としてのオカマキャラ、としか言いようがない。シャングリラ・フロンティアはプレイヤー操作のアバターをプレイヤー自身が作り上げるキャラクターメイキングを採用している。当然、男性が女性アバターを作ることは可能であるし、またその反対も同様だ。
一部コンテンツで獲得できるアイテムを使えば声色すらも完全に逆

の性別のものに寄せることも可能。わざわざ性別をそのままにその逆の性別に寄せたキャラメイクをするというのは、本人の「趣味」以上の理由がない。

つまり、この彫りの深い世が世なら彫刻のモデルになっていたかもしれないような男性アバターでありながらなぜか本格的なメイド服を着た割とインパクトが大きい奇天烈なプレイヤーが、堂々たる歩みでコロシアムを歩いていた。

「なに？　なに？　どういう、なにこれ？」

「エリュシオン・オートクチュール……！！」

「メイド服装備は基本的に女性限定だったはず……いや、その服まさか……！」

「わたしが、はなしについていけてない……」

「修行の末私は辿り着いた……限界を超え、裁縫のその先へ。今の私は最上位職業「至布匠（グランクチュリエ）」エリュシオン・オートクチュール……！」

背筋を伸ばし、ロングスカートを翻す姿はこの格好に負の感情を抱く者こそがおかしいのだと言葉なくとも宣言しているかのような、堂々たる姿。唐突に現れ、何故かどよめき始めた着せ替え隊とは逆にまったく状況についていけないウィンプ……だが、突然の闖入者が一切目を逸らすことなく己の方へと向かってきたことで、状況についていけないからといって自分が無関係というわけでもないということを悟る。

「なっ、なによ！　う、たたっ、たたかうの！？」

思わず双剣を突き付けるウィンプであったが、エリュシオン・オートクチュールの眼差しは揺るがない。己の命に刃が突き付けられていることすらも眼中にないと言わんばかりにウィンプの眼前にまで迫ると……。

「貴女に会うために私はここにいる」

「は……？」

「話はサバイバアルから聞いている、二日もらえれば最高のメイド服を貴女のために仕立てよう」

「は…………？」

おおおおおおお！！　とその言葉に盛り上がる着せ替え隊の面々。だがウィンプは何もかもが理解できていないのでひたすら疑問符を浮かべ続けることしかできない。辛うじてウィンプの思考が導き出した現状への率直な感想とは——！！

「にんげんこわい……」

12月某日：ふくしゅうしゃ、きばをとぐ（後書き）

エリュシオン・オートクチュール
エリュシオンって死後の楽園なんですね、つまり冥府。
言い換えると冥土（メイド）……真っ当なイケメンキャラを作ろうと思ったのに最終的に完成したのがこの人
メイド服が好きすぎるのは事実だけど好きすぎて頭がおかしくなったんじゃなくて常識人が真面目に抱いた信念の行動が傍から見ると頭おかしいだけ

１２月１４日：猫の王国

◆

ケット・シーは一言で言うならば二足歩行で喋る猫だ。長靴をはいた猫、って言えばあるいは幼稚園児にも理解できるかもしれない。少なくとも俺が遭遇したケット・シーは人間のＮＰＣと大差ないくらいの知性と、王権や騎士の誇りを理解している感じだった。

とはいえ猫は猫、そして忘れがちなのだが……俺が人里にあんまり行きたくない理由は、人見知りだからとかコミュ障だからではなく。

「まぁ、一般市民的な奴らがレベル１００オーバーしてるとは考えづらく……」

要するに、刻傷の効果で軽いパニックが発生していた。

「おいおい勘弁してくれよサンラク、折角ネコミミまでつけてこう……友愛を示してるってのによぉ」

ブロマイド一枚。

「おうおうおう！　どいつもこいつも怯えすぎじゃねぇのかぁ！？　そりゃあ失礼ってもんだぜ！！　なぁ我が親友よ！！」

「そうだな親友（金ヅル）」

金で信用は保証できるが、信頼はされないと思うよ俺は。
それはそれとして……ヴァッシュの話じゃなんか会議？　サミット？　的なものが開かれると言っていたが……成る程、

「あっちで隠れてるのは犬頭だね」

「ゴブリン……とはいえ、NPC判定かな？」

猫の王国キャッツェリア。俺達がたどり着いたそこには、ケット・シー以外にも多数の種族……それも新大陸の亜人種にも該当しないモンスターに属するような種族が混在していた。
まぁどいつもこいつも突然現れたザ・物騒・オオカミオーラを放つ俺を最大に警戒している。まぁモンスターを見たら基本人間って攻撃するから刻傷が無くても警戒はされたのかもしれないが、とりあえずなんもかんもリュカオーンが悪い。おのれリュカオーン、定期的にヘイトを育てておかないといざ再戦した時に良質なテンションを生み出せないからな……憎悪、大事。

「ねぇねぇ」

「とりあえずヴォーパルバニーがいれば話は早いんだけど」

「思っていたよりも人間スケールな街並みだね、てっきり二足歩行の猫サイズの建物が並んでると思ってたのに」

「一晩あれば全部見て回れますね、徹夜するまでもない」

「ねぇサンラクくぅん」

…………。

「なんだよ」

「現実見ようよ」

「お前に正論言われると死ぬほど腹立つな」

「ＤＶ特有の殴った後に縋り付くムーブしてくれるならＤＶ妻役もやぶさかじゃないねぇ！！」

「根性焼き」

「あぁん！！」

だがなるほど、腹が立つということはディプスロの言葉が正論であることの証明だ。まぁ、うん……ここに来るちょっと前からもう見えていたけどなんか触れたら負けみたいな雰囲気になっていたから……くっ、現実直視するかぁ。いやゲームだけど。

「山羊だな」

「山羊だろうな」

「いや鹿でしょ」

「鹿のツノは巻かないのでは？」

――モ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛……

…………

「「「「牛かよ！！」」」」

例えばトレイノル・センチピード。例えばフォルトレス・ガルガンチュラ。素材のフレーバーテキスト曰く、奴らですら新大陸の環境から逃走した種族とかいう「は？」としか言いようのない一文があったが……成る程、フレーバーテキストは説明をぼかす事はあっても嘘はつかないって事かよ。

フォルトレスの体高よりもなお高く、トレイノルの全長よりもなお長い。冗談みたいな大きさの毛むくじゃらの牛が、その体躯に見合うだけの咆哮を……

――……ップェ、

「マジかよ今のゲップ？」

若干建物も揺れてたけど、ゲップでこの規模なら本気で吠えたらここら一帯吹き飛ぶんじゃねーか？

ここ、キャッツェリアはどうも山が物理的に真っ二つになって出来た峡谷の底にある猫の国……あの超超超巨大牛が軽く身動きしたらそれだけで左右の割れ山が崩れ落ちそうだ。ていうかなんでこの牛は峡谷に頭をすっぽり差し込んでいるんだ？

「小型モンスターの集まりとかそういうのなんだよね？　あの牛を飼い慣らせるような超巨大捕食者（プレデター）種族の避暑地とかではなく」

「そのはずだが……」

「うむ！　顔面を燃え上がらせたおぞましき怪物、と聞いた時は本当にそういった化生の類かと不安になったがやはり貴公であったか

！！」

と、超巨大牛に気を取られていた俺たちにかけられる声。振り向けば何も……いや違う、足元だ。

「おー、アラミースか」

「久方ぶり、という程ではないがまた一段と……そう！　珍妙になられたな貴公！」

そうだね、顔面燃えてるもんね。
どうも他の猫の通報でやってきたらしいアラミースを先頭に置いた猫の騎士団とでもいうべき毛玉の集団。探しに行く手間が省けた、重要なイベントを発生させるコツは権力者に取り入ることだって鉛筆も言ってた。

「簡単に言うとヴァッシュの兄貴からここに来るように言われてんだけど」

「話は既に聞き及んでいる。連れの方々共々ご案内しよう！」

話が早くて助かるぜ。

「ねぇねぇサンラクくん」

「なんだよ、刀取り出して「ネコとタチ！」とかしょーもねぇギャグ言ったらぶっ飛ばすからな」

「もはや以心伝心だよサンラクくぅん！！　あひぃん首筋に跡が残っちゃあう！！」

根性焼きもあんまり効果がなくなってきたな……何か新しい手段が欲しい。毒とか？　いや下手に体力削れて死なれても困るしな……ＰＫ判定的に。

「なぁ、サンラク。結局ここで何すんだよ」

「良い質問だサバイバアル。実はな……俺もよくわかってない」

「オイ」

12月14日：即死呪文

そもそも「サミットに参加しろ」しか説明受けてないんだよね、いや本当そもそもの話。
ただヴァッシュからの指令ということはつまりユニークシナリオEXの達成目標ってことだ、そもそも無視する選択肢は最初から無かった。つまりここに来るまでは確定路線、そしてここからは完全にアドリブってわけだ。

「で、私達はここからどこに案内されてるのぉ？」

「うむ！　ヴァイスアッシュ殿から話は伺っている！　貴公らも来賓待遇にせよ、が我らが王ニャイよりの言付けだ！」

ニャイ……あー、あの招き猫。いつだったか、宝石匠の猫がネコバした時に詫びに来ていたコッテコテの猫的口調の招き猫みたいな感じのケット・シー。あれはどちらかというと俺に対する謝罪じゃなくてヴァッシュに対する不義理の謝罪っぽかったが……

「ていうか俺ら、ここで何するかとか聞いても？」

「む？　傍聴席に案内するようにと言われているが」

傍聴席？　何か聞くのか？　いや、多種族サミットの内容なんだろうけど……

「それって後ろのこいつらも参加ＯＫ？」

「問題はないだろうな！　どちらにせよ、波濤を超えて来た貴公ら人種も無関係ではないのだから！」

「だってよ、世界の真実に一歩踏み込む気持ちを一言で各々どうぞ」

「へー」

「サミットってことは何徹必要です？」

「さすがに銃器は売ってないか」

「猫の舌ってすごくザラザラしてるからなめた時凄そうじゃない？」

「よーしケツ出せ」

「突く方向（ピアッシング）でお願いします！　欲を言えば前後運動（ピストン）！！」

「打撃方向（ケツバット）ォ！！」

「あはぁん！！」

答えは「打」であった。非展開状態の百足式８−０．５でケツバットされたディプスロを他所に、俺たちはこのキャッツェリアにおいて二番目にでかい（一番目は当然今はるか頭上で欠伸をしている牛君である）もの……すなわち、このキャッツェリアという国の城へと向かっているのだった。

……

…………

さて、猫の国と侮ってはいけない。そもそも兎の国の文化水準からしてアレである。なんなら新大陸の亜人種より文明レベルが高い疑惑があるのだ、というわけで最初から見えていたわけだがヨーロピアンな風情漂う城へと入った俺たちは、客室の一つへと案内されたわけだが。

「これ、表の城も厳密には城じゃないんだねぇ」

「なんつーか、逆張りぼてというか……」

「この空間で火ィつけていいのか？　窒息しねぇか？」

サバイバアルの懸念も一理ある。なぜならこの城……入って分かった。これ建築物じゃねぇ、峡谷の壁面を城の外観に掘って、その上で峡谷を掘った空間なんだここ。ヨーロッパ風の城っつーかエジプト系の遺跡だぜこんなの。ていうか狛犬とかスフィンクスっぽい感じで鎮座するバカでかい猫の石像とかもあったし。

「まぁ、ベッドまで岩じゃなくてよかったね」

「ベッドは大事ですよ、徹夜は上質な睡眠あってこそですから。まぁいつもは会社の椅子で寝てるんですけどねハハハ」

一瞬沈黙。ここでこの空気を持続させる危険性を悟ったディープスローターがそっと親指と人差し指で作った輪に人差し指を前後運動させ始めたのでちょっとだけ手心を加えつつケツバット。

「おまえまじでいいかげんにしろよー」

「うふふー、ごめーん。でも息ピッタリだからつまりそれは体の相性が最高と――」

本気ケツバット。

「お゛っ゛」

なんならスキルも使った加速（ターボ）ケツバットだ。

「なぁサンラク」

「なんだよ」

「段々そういうプレイに見えてくるぞそれ」

「…………………じゃあ、どうしろと？」

「すげぇ切実な声出たな……」

根性焼きももう効果なくなってきたし……ていうか、最近こいつリジェネかけてから下ネタ言ってるらしくて何もしなくても体力が回復し続けてるんだよ………

「まぁ、なんだ。寛容な心である程度受け入れたらどうだ？」

「そうそう、もう楽になっちゃいなよぉ………」

百足式8―0．5を握る手に力が入ったものの、なるほど確かにサバイバアルの言葉にも一理あるかもしれない。受け入れる、というか別方向からの迎撃……

「おいちょっと後ろ向け」

「またぁ？　もう、旺盛なんだから……」

ニマニマしながら後ろを向いたディープスローターに足音を立てずに近づき、顔をその耳元に近づけ……

喰らえ、岩巻さん直伝「どの乙女ゲーでも毎回このシチュエーションに遭遇してきたのでぶっちゃけ最近は何の感動も得られなくなってきたけどそれはそれとして初見だったらまぁまぁ破壊力高いよね後ろから耳元で呟くタイプのウィスパーボイス」！　ラブクロック鬼周回してる時、ヒロインの一人が後ろから声をかけてきた瞬間走りださないとピザエンドになるので俺もその気持ちちょっと分かります！！

「――――悪い子だ。そんなに俺を困らせたいのか？　仔猫ちゃん」

「んに゛ッ」

ディープスローターの身体が一瞬なんかバグったのかと錯覚するような硬直、そしてふらふらと千鳥足でベッドへと歩いていくと、ぱたんと倒れて動かなくなった。

「なるほどサバイバアル、こういうことか！」

「いやそういう意味じゃねぇ」

サンラク　は　新技　を　習得　した　！

何度かメイド服を着たケット・シーが部屋にドリンクを持ってきたりもしたが、本題とでも言うべきNPCがやってきたのはこの手のゲームとしては暴挙としか言いようのない30分後のことであった。いやマジで長時間待たせるとかオフゲーだったら許されざる所業だぞ……ていうかオンゲーでもちょっとアウト寄りだろ。

「待たせたな貴公ら！　会談が始まるので傍聴席にご案内しよう！」

「だってさ」

「暇すぎてマジ寝するところだったぜ」

「さすがにこの歳になってしりとりで時間潰すことになるとは……」

「一人しりとりするよりはマシじゃないかなヤシロバードさん」

「そもそも選択肢として一人しりとりが出ることがヤバいよ」

「いつまで寝てんだ、起きろディープスローター」

びくん！　と痙攣したので屍ではないらしい。

１２月１４日：即死呪文（後書き）

まさか自分でサンラクの声まねして自分でキレてたボイスを本人が不意打ちでやってくるとは思っていなかったので混乱しつつずっと記憶の反芻と補強をしていた女

なお常識人みたいなフリしてるけど不意打ちで小悪魔的なボイスを食らって性癖を歪ませた奴としりとりしながら突然ドアを蹴破って銃で武装した集団が突入してきた場合のシミュレーションをしていた奴と複数人でするしりとりの方が一人でするしりとりより楽しいことに久しぶりに気づいた奴なので基本的にへんなのしかいない空間

１２月１４日：おそるべきもの（前書き）

プロットを書いたら一時間で書けたわ

12月14日：おそるべきもの

多種族大同盟の盟主にして、南海のラビッツ永世の存在。
ヴォーパルバニーの王……ヴァイスアッシュ。
今回の開催地、断崖の王国キャッツェリアに君臨する猫の君主。
ケット・シーの王……ニャイ十三世。
超超超規格外規模生物、牛上国家ゴブリスタンの背より降り立つ騎王。
ゴブリンの王……ロノ・ドア。
極北。吹雪く銀世界に未だその姿を隠せし未確認の白き賢猿。
イエティの王……灰躯(ハイク)。

なるほど多種族大同盟と言うだけのことはある。右を見れば犬頭の小人のようなコボルトにミノタウロス、あっちはケンタウロス？　椅子じゃなくて止まり木にしゃがんでいるのはハーピィ的な？　他にも多種多様なモンスターが人間が座るような円卓を囲んでいる姿は、さすがファンタジーといったところか。
何故かチラチラこっちを見られている気がするが……理由は恐らく二択だろう。

「…………」

多種族サミットという場だから静かにしているのか？　それもあるが違う。

ちら、とディプスロがこちらに視線を向ける。この状況を煽ってんのかと半目で視線を合わせると何故か凄い勢いで顔を背けられた。なんやねん。
サバイバアルは……ダメだ、コロポックル（小人、というより植物人間の小人、みたいな一般のイメージとはかけ離れた存在だが）の女王をガン見している。このクソロリコンが……ついに人外でもいいってか。
ヤシロバードはそもそも目を合わせようとしないし……あっ、あの野郎肩震わせてやがる！　俺のこの状況を笑ってやがるな！？
カローシスＵＱは……なんか胃の辺りを押さえて沈痛な顔をしている。社内会議に雰囲気が近いから？　他人のリアルに口出すつもりないけどもういっそ辞めちゃえよ……わざと匂わせてるんじゃなくて無意識で苦しんでる姿見せられるとこっちもどう接すればいいか分からないよ……

「コロロロロロロ……」

「ヌッ」

「ム……失敬」

「お、お構いなく……」

お、お腹が鳴ったのかな？
くっ、ディプスロてめーいつもは無駄に心読んでるようなムーブしてるくせに何こっち無視してんだ！　アイコンタクト！　アイコンタクト！！　くっ、目を合わせすらしねぇ。なんなんだ一体。無視するくせに脇腹を肘で小突くと変な喘ぎ声を出しやがるので頭を引っ叩くこともできねぇ。ぐううう……この俺をして、恐怖を感じている……！　これが戦いのエンカウントであれば別だが、この

サミットの傍聴席という理性的な場所だからこそやりづらい。

「ッスゥー………」

事の始まりは俺達が傍聴席に案内された時に左詰めでカローシスUQ、ヤシロバード、サバイバアル、ディープスロータ、俺の順番で座った事だ。
つまり俺の隣に空席ができていたわけで、まぁ当然俺たちの後に来た傍聴者はそこに座るわけだ。ていうかそもそも傍聴席に座る奴とか俺ら以外にいるのか？　と足を広げてくつろいでいたのだが……
そんな時に、奴は来た。

なんだろう……この、なんなんだろうこいつ。
輪郭、というかキャラクターとしての素体は頭が狼？　猪？　まぁとにかく頭が獣な人型だ。まぁ体長3メートル以上あるんだが。
そして体長が人間の二倍近い、ということは横幅もデカい。ていうか全身から生えてる棘？　甲殻？　が隣の席の俺に刺さりそうでさっきからサミットの内容よりも右隣が気になって仕方がない。

そう、甲殻。甲殻なのだ。この隣席の方は体高3メートル以上、横幅は力士かってくらいに広く、全身がえげつない殺傷力を持つ甲殻に覆われており、爪や牙はもはや言うまでもなく、四つの目とカブトムシ……それもアトラスとかコーカサス、シャンフロ的にはクアッドビートルを彷彿とさせる凶悪なツノが生えたなんかやばい生物が、とても真面目な様子で俺の隣の席（二席占拠している）に座っているのである。
最初は蟲人族かと思っていた。だがその姿は母親の趣味故にそこそこ詳しい俺の知識にあるどの昆虫にも該当しないし、何より蟲人族なら大抵の場合は目が複眼だ。こいつの目は人のそれに近い眼球だ。

尤も、瞼がないので半分ほど埋まった眼球がぎょろぎょろ動く……まぁ、控えめに言ってグロテスクな目をしている。

「…………」

「…………」

助けて欲しい。い、いや待て。さっきの対応を見るに理性は持っているはず。石臼で何か硬いものをゴリゴリ削ってるみたいな重低音ボイスだが、失敬と発言するだけの理性はあると見た。
や、やれるか……？　失敗したらピザ留学っていうか俺がピザみたいな形にされそうなんだが……や、やるか？

「……波濤ノ」

「…………えっ、あっ、はい？」

「波濤ノ、ヒトト……オ見受ケスル」

波濤？　あー……なんか……そんな風に呼ばれた記憶があるようなないような……確か、旧大陸から来た人間をそう呼ぶんだっけ。
フシュルルル、と牙というよりも剃刀を肉厚にしたような食い込ませて引き裂くことに特化した牙を覗かせる口から恐らく呼気と思しき音を出しながら生体殺戮兵器キリングビースト（暫定名称）さんの四つ目が俺を見る。口元もよく見ると嘴のようにも見える……硬質で鋭角的だ、狼頭と錯覚したが頭蓋というか甲殻の突起でオオカミの耳のように見えているのか。
お、俺も複数の目を持っているが？　しかも顔が燃えてるから勝負はイーブンってところか……あ、脚とか組んじゃうもんね。

「聞キタイ、事ガアル」

「奇遇だな……俺も、聞きたいことがあるんだ」

生体殺戮兵器キリングビーストさんと俺の間に緊張感が張り詰める。もはやサミットの事は二の次三の次だ、少なくともこの隣の席の生体殺戮兵器キリングビーストさんとの決着なくして、俺は次に進めない。

「…………」

へ、へへっ。俺の質問からお先にどうぞってか。いいぜ……時の支配者(ラブクロック)たる(クリア者)この俺は恐れない！　好感度は座して待っても上がらない！　ピザを食わせるな！　走れ！！

「……お名前と、ご種族は？」

「……ウル・イディム。オークだ」

「いや嘘つけェ！！」

しまった、思わず声が。

１２月１４日：おそるべきもの（後書き）

オークだよ、特技は全身の甲殻を振動させて敵の身体を内側の体組織から破壊する超振動グラップルだよ
顔が燃えてる人間だよ、特技は二号人類最速の機動力で高速の五連撃を叩き込む音速五連殺だよ

そんな奴らが何故か傍聴席で談笑してるよ、こわいね

１２月１４日：未知との遭遇

何事かと様々な種族の視線が俺の方へと集まる。とはいえそれにかまっている暇はない。俺は時の支配者、ピザに打ち勝った者。この自称オークとの決着が最優先なのだ。すまんすまんと手をヒラヒラとだけ振って視線をウル・イディム氏へと戻す。

「いやいやいや、いやいやいやいや。冗談だろ？」

「…………」

あっ、なんか不機嫌そう！　まずいピザる、ここは軌道修正の必要がある。

「あーいや、俺の知っているオークはなんというか……もう少し脂がノッてる柔らかな印象だったもんでな」

あんたの場合は潤滑油でテカテカしてる方だろう。脂っつーか油。

「……私ハ、己ヲ偽ラナイ。私ハ、オークダ」

「いやぁ……オークってのは豚頭のちょっとおデブな感じの生命体であって断じて全身強化骨格のキリングビーストでは……ん？」

なんか違和感。

「オーク？」

「オーク、ダ」

……なんか、イントネーションが違う？どっちかというとオウクって言ってるような。いやまさかもしかしてこれは「橋と箸と端」みたいな感じなのか？

「豚頭ではなく？」

「王狗、ダ」

あー…………なる、ほど？　要するに同じ文字だけど発音的にオウクっていうか、ぶっちゃけるも何も同名の別種族ってやつか？

「あーいや、なるほど分かった。そりゃ確かに失礼だったな……非礼を詫びるウル……」

「ウル・イディム、ダ」

「悪いねウル・イディム氏」

「ソレデ……波濤ノ、ヒトニ聞キタイコトガ、アル」

質問？　人間の強者は誰だー、とか？　その場合は申し訳ないがレイ氏の名前を出すかな……少なくとも俺が知るプレイヤーの中で単純に一番強そうなのレイ氏だし。

だがウル・イディム氏が知りたい内容はどうやら戦闘民族的な興味ではなく、もっと別のことであるらしい。ギョロギョロと目まぐるしく動く眼球に、ふしゅるると漏れる吐息。全身の甲殻が肉体の力みに悲鳴を上げるように軋んでおり、座っている椅子も同様に軋んでいる。仮に椅子が砕けてウル・イディム氏が尻もちついたら俺は

どういう反応すればいいの？　笑ったら血の海の最初の一滴にされたりしない？

「波濤ノ、ヒトヨ……私ノ、同胞ヲ。我ガ同胞ヲ波濤ノ、サキノ地デ見タコトハアルダロウカ」

「……同胞？」

ウル・イディム氏の同胞ってことは………つまり、全身強化骨格じみた甲殻に覆われ、目が四つで牙は肉厚のカミソリみたいな感じで全身から鋭い棘が生えた体高３メートルオーバーの人型モンスターってことですよね？

いやぁ、そんなのが旧大陸を闊歩していたらもっと騒ぎになっているだろう。ていうかユニークモンスターでもないのにこんなのがうろついていたら流石に運営のゲームバランス調整能力を疑う。完全に悪側の存在じゃん、いやウル・イディム氏が邪悪ってわけじゃないがこいつがサードレマの門の前で「働きに来ました！　体力には自信があります！」とか言っても誰も信じやしないだろう。

「ちょっとぉ………見覚え、ないッスねぇ………」

「…………ソウ、カ」

恐らく落ち込んでいるのだろう。俺には何か大技を出す前のチャージ動作にしか見えないのだがウル・イディム氏は背中を丸めるようにして俯いている。これはチャンスだ、ピザの危険性はひとまず去ったと見ていい。であればここから畳みかけて一気にウル・イディム氏を攻略する……！　なぜキリングビーストを攻略しようとしているのか自分でもよくわからなくなってきたが、過去に囚われているようではピザから逃れることはできない。ピザとは「死」であ

り「終焉」、それは己の肩をつかむ死神の骨ばった指に他ならない。

「あー、もしかしてその感じだと……ご同胞を探している感じで？」

「アア……私ハ、私ト共ニ生キ、イノチヲツナグ同胞ヲ探シモトメ……ズット、旅ヲシテイル」

話を聞くとつまりこういうことらしい。

ウル・イディム氏は生まれた時から自分が「王狗（オーク）」であることは知っていたが、それ以外のことをほとんど知らない状態だったらしい。生まれた時にどういう状態だったのか学術的好奇心が尽きないがまぁそこはいい。

そんなわけでウル・イディム氏はこの新大陸という弱肉強食の世界で生き抜いてきたわけだが……まぁ、見た目通り生態系のピラミッドで言えば上位勢だったらしく、今まで何度か死の危機こそあったものの生き抜いてきたそうで。見た目が見た目なので新大陸の亜人種からは完全に話の通じない怪物扱いされてきたようだが、話が成立している通りウル・イディム氏は実際理性的なキャラクターだ。

まぁそんなウル・イディム氏だが、どうもヴァッシュと出会ったことで一気に人間寄りの「知性」を獲得したとかなんとか。ヴァッシュの謎がまた増えたがこれもまたひとまず置いておく。

この見た目では亜人種と交流は不可能。故にこの大同盟の盟主ヴァイスアッシュの保証の元、多種族連盟の国々を巡っては傭兵として力をふるっているそうで。いや、この身の上話そんな重要じゃないな。

重要なのは、今ウル・イディム氏はまさかの「婚活中」ってことだ。

冗談のように聞こえるが、子孫を残す本能と言い換えればそんなにおかしいことではない……のだが、ここで問題が発生した。

そもそも「王狗」という種族を誰も見たことがないのだ。同音のオークは絶滅危惧種だが少数は生き残っている……が、やはりどう見ても別種族だ。新大陸中を渡り歩いてきたウル・イディム氏であったが、これまで同胞と出会ったことは一度もない。故にこの場にいる俺たち……旧大陸から波濤を超えてやってきたヒトとの出会いは彼にとって一縷の希望であった……が、まぁ結果は芳しくなかった。

「そうか……やっぱ一人で生き抜けるとしても同胞が一人もいないってのは寂しいもんな……」

「ソウダ……イッソ、王狗ガ私タダヒトリトハッキリシタナラバ、諦メモツク……ダガ、」

悪魔の証明ってやつだな。それが「ある」事を証明するよりもそれが「無い」事を証明する方がよほど難しい。なまじウル・イディム氏という存在があるが故に、王狗という種族がこの世界に存在するのは純然たる事実なのだ。であればウル・イディム氏と同じ王狗がこの世界に二体以上いたとしてもおかしくはない。

「分かる……わかるよウル・イディム氏。ほんの僅かでも可能性があったら挑戦したくなっちまう……そりゃ生物のサガってやつだ」

乱数がクソでも０．０１％でも排出率があれば、人間はどこまでも挑戦してしまうものなのだ。小数点以下のドロップ率とかザラなのでなんなら０．０１％保証されてるならむしろ挑まない選択肢がないというか。

「オイッ、お前！　ニンゲン！」

「あ？」

「黙らんか！　騒ぐナラここから立ち去レ！！」

「そうだそうだ！」

あーん？　ケンタウロスやらハーピィやらが俺に対して生意気にも正論を叩きつけやがってよぉ……まぁ、おっしゃる通りでしかないんだがそれはそれとしてここではいそうですかという程俺はいい子ちゃんではない。ちら、とヴァッシュを見れば口の端を僅かに吊り上げながらキセルに火を入れていた。なるほどね？

「おいテメーら……今、ウル・イディム氏の大事で重要な人生相談中なんだ。静かにしろ、馬刺しと焼き鳥にしてそこのサバイバアルに食わせるぞ」

「いやお前この流れで俺に振るか普通？　そりゃあん時は入鯖の真似事もしたことはあるけどよ……」

なにやらこちらに向けられる視線の鋭さが増してきたが……おん？　やんのか？　こっちにはウル・イディム氏がいるんだぞ？　キリングビーストだぞ？　今なら土下座で許したるぞ？　ていうかケンタウロスって土下座できるのか？

１２月１４日：未知との遭遇（後書き）

・王狗
王狗(オーク)は当然豚頭のモンスター、オークとは何ら関係のない生物である。
それはある観点から言えば神の似姿であり、またある観点から言えば竜の末裔である。
それは命の定義に当てはまるといえばそうであるし、当てはまらないともいえる。
王狗は未だ未知の存在なのだ。それ故にその肉体は「可能性」で出来ている。
認識が、彼らに命を与える。あるいは暴虐の具象に貶めるのかもしれない………

ウル・イディムさんの結婚に求める条件
・同種族
・賢い方だとなお良し

１２月１４日：刻まれた傷の名は最も恐れられし夜

このゲームには人魚、マーメイドが存在する。
だがその……世間一般的なイメージなのは見た目だけの話、その正体はチョウチンアンコウの類というかヒト部分はまるまる擬似餌のようなものだ。
では何故人を模した姿をしているのかというと……要するに、襲う対象に人間が含まれているのだ。肉食生物かつ人を捕食するモンスター、それが「中途半端に人型のモンスター」に共通する事だ。
故に………上半身だけ人型だったり、四肢を除く胴体だけが人型だったりするモンスターってのは……要するに、ヒトという種族は「命」である前に「餌」という認識なのではないだろうか。

もし仮に会社の上司と大事な話をしようって時にお茶請けの饅頭と茶がベラベラ喋ってたらどう思うだろうか。俺だったらその場で食って黙らせる。
だがまぁ場所が場所、状況が状況故にこうして食ってかかってるというわけか。

「貴様………！」

「ヒト如きが……！」

ケンタウロス……確かケンタウロスの首領とハーピィの族長。名前は……

「バサシとササミ」

「ヒトヨ、バザラ殿トサザニ殿ダ」

「ああどうもウル・イディム氏」

馬刺しとささみ、ちゃんと覚えた。
友好的と言うには程遠すぎる刺々しい視線を向けられているし、なんなら今にも襲われそうだが……ヴァッシュが俺を咎めるような素振りは無く、逆にこいつらを諫める気配もない。
そう、さながら不良系漫画のような展開だ。白黒はっきりマウントつけるまで止めない、ということだろう。

「おうおうおう、大事な多種族サミットだろうが。勝手に離席するもんじゃあないぜ、さっさと席に戻れ。そして座れ」

「ならばまずハ、貴様のヨウなこの場に相応しくないモノを取り除クが先だ……」

「お？　やるのか？　言っておくが俺は強いぞ？」

一歩踏み出す。するとあら不思議、何故か馬刺し君が一歩後退する。見ればささみちゃんも何故か羽毛が逆立っている……ふっふっふっ、この俺がなんの情報もなくこの場に来てるとでも思ったのかぁ？
残念だが、猫には知り合いが多いんだ。アラミースから人間をナメてかかるだろう奴の情報は仕入れてあるし、その上で「俺」という存在の強みも理解している……！！

「どうした馬刺し君とささみちゃん、まるで夜に狼と会ったみたいな怯え様じゃあないか………まぁ座って落ち着けよ」

「っ」

夜襲のリュカオーン。襲い来る夜であり、俺もおのれリュカオーンカウンターを常に回す事で憎悪を絶やさないようにしている宿敵。とりあえずデイリー回しておくか、おのれリュカオーン。
だが視点を変えればリュカオーンとはこの世界最強の獣系モンスターでもある。しかもサービス開始時から大陸中にランダムエンカウントして適当に暴れては去っていくクソエネミー。

生態系に当てはまらない珍妙生物のくせして、あの狼は新大陸における生態系ピラミッドの頂点の先端のさらに上で輝く太陽のようなポジションなのである。
そんなリュカオーンからすれば馬刺し君もささみちゃんも、文字通り歩く馬刺しと飛ぶささみのようなもの。彼等もリュカオーンという存在への恐怖は持っている。

そこで俺である。俺の身体に二箇所刻まれた忌々しい傷。これはただの「呪い」ではない、影とはいえリュカオーンに勝利して（不本意ながら）獲得した「刻傷」だ。それが指し示す単純明快な事実はただ一つ。

「騒いだのは悪かったよ、だがこっちも親愛なる隣人の人生相談に乗っていたんで熱も入るってもんでなァ……！　そして生憎だが立ち去るわけにもいかない」

別にモンスター同士の結束とかはどうでもいいんだが、問題はここに来てここにいることがヴァイスアッシュのユニークシナリオＥＸにおけるインタールード、って事だ。
シャンフロを幾らかプレイしていれば分かる、このゲームに「プレイヤーをクリアに誘導する」みたいな親切設計はない。あったとしても高難易度のユニークシナリオからはそう言った親切心は削ぎ落

とされている。つまり俺が気にするべきはヴァッシュからの好感度のみ。であればヴォーパル魂的にも、ラビッツの食客的にもここでしょぼくれた姿は見せられない。

夜襲のリュカオーンに勝利した人間として、この場にいるモンスター共に俺の存在を認めさせる。そして……多種族サミット初日を思いっきりブッチして遅刻かました事実をこの流れで踏み倒す！！

「おうサンラク、喧嘩か？」

「いや別に喧嘩ではない、座っとけ」

「そうか……」

険悪な雰囲気を眺めていたサバイバアルが立ち上がるが、それを片手で制する。だが向こうからすれば俺以外のターゲットができたようなもので、ささみちゃんの方がキッとサバイバアルを睨みつける。

「なんだよ」

「フザけた真似を！」

やはりその翼は飾りではなかったらしい。腕の代わりに生えた翼をはためかせ、ささみちゃんが浮かび上がる。そのままどういう推進力か、鋭い鉤爪を備えた足でサバイバアルへと文字通りの飛び蹴りを放つ。

だが、ささみちゃんは知らない。このサバイバアルというネカマは……かつてサバイバル・ガンマン、ギリシャ文字サーバーにおいて徒手空拳だけで全てのサーバーに喧嘩を売りまくったゲリラ・ゴリ

ラ「バイバアル」だということを。
こと喧嘩の売り買いに関しては同様に火薬蛮族をしていた「アトバード」以上に熟知していることを。そして……半径1メートル圏内での肉弾戦であれば、過去に銃と鉄板で完全武装したアトバードを一分で撃破した実績を持つ喧嘩屋ということを。

「ハッ、悪ぃなサンラク。売られた以上は買うしかねぇわな」

「こ、ぱっ……！？」

うーわ、ささみちゃん可哀想……あれ俺も喰らったことあるから分かるけどマジで初見殺しなんだよな。
空中から奇襲をかけたささみちゃんであったが、それよりも先に最初から臨戦態勢だったサバイバアルが立ち上がり、ハイキックを放つ方が速かった。

サバイバアルの対空ハイキック。どういう動体視力をしているのか、このロリコンは上からの奇襲に対して自分のかかとが的確に相手の顎に当たる位置に蹴りを放つことができる。孤島でこれされた時は鯖癌での「サンラク」が身軽さに振り切った子供のアバターであったことと、ギリギリでガードしたことで何とか一発KOを回避した。
だがささみちゃんはハーピィの族長、つまり一般ハーピィよりも性能が上ということ……その一般個体よりも優れた推進力がそのまま顎に突き刺さるかかとの威力に加算されたのだ。正直、死んだらマジでどうしようかと思った……コキョッ、みたいな変な音がして首がししおどしみたいな動きをしていたが、ピクピク痙攣こそすれ消えてないので多分生きているはず。

「うわ出た対空ハイキック」

「着せ替え隊でティーアスたんガチャしてる時も使いまくってたからな、錆びちゃあいねぇぜ？」

「流石に僕は出番無いかな……銃はまずいでしょ？」

「円卓………会議………社内コンペ………上司……謎アドリブの責任………」

「ごめん出番あった、落ち着いて深呼吸するんだカローシスさん。プライベート、ナウ。プライベート、ナウ」

「プライベート……ナウ……」

不発弾とパーティ組んでるんじゃねーんだぞ。
だが馬刺し君の堪忍袋は爆発したらしい。後ろ脚だけで立つ馬特有のポーズを取った馬刺し君がヒトの上半身で拳を振りかぶり、馬の下半身で俺へと猛進する。フッ…………

「晴天流【波】……奥義、」

晴天流は風、雷、波、空、雲、熱、灰の七つの系統毎にスキルを三種類習得する。だがその三つの中のどれか一つを「奥義」に昇華した時……習得していた他二つの奥義になり得た可能性は消失する。あたかもそれは、細い三つの糸を束ねてより太い一つの可能性に絞るように。
シグモニアでアーミレット・ガルガンチュラを死ぬほど投げ続けていた甲斐があった。レベルアップ、そしてそれに伴うスキルの強化……おおウェザエモンよ、今こそ見様見真似（なんちゃって）を卒業する時だ。
これぞ、正真正銘。

「――――「大時化（おおしけ）」！！」

最速にして剛力の投げ。プレイヤーのＳＴＲステータスを参照する際に「他のステータスよりも突出しているほど」に投げる速度と投げられる重量が増大する晴天流最強の大波。藍色の聖杯によってＳＴＲとＬＵＣを入れ替え、最大の膂力を得た今の俺であれば下半身が馬だろうがカバだろうが関係ない。

「これが波濤の人間パワーだ」

よかったじゃん、ペガサス体験できて。
壁に激突した馬刺し君を眺めながら、俺はヴァッシュの方へと視線を向ける……こんな感じで、どうでしょうか！？

１２月１４日：刻まれた傷の名は最も恐れられし夜（後書き）

・晴天流奥義「大時化」
荒波派生奥義、使用者のＳＴＲとそれ以外のステータスを比較参照し、その差が大きいほど投げモーション速度と投げられる重量に補正がかかる。マッシブダイナマイトに覚えさせたらヤバいスキル。差が１００以上あればその補正は人間が大型自動車クラスの重量を投げることができる程（ただし技をかける相手の重量が大きいほど「叩きつける」威力は減衰する……が、代わりに重量が大きいほど叩きつけた際に自重による別枠の衝撃ダメージが入る）

・晴天流（システム）
晴天流はまず小カテゴリとして【波】【凪】などの技別に分類される。
小カテゴリでは三種類の技を習得できるがその中から「奥義」に派生するのは一つだけであり、どれか一つを奥義として派生させた時点で他二つのスキルは使用不可能となる。というか習得が解除されて消失する。
多彩は確かに善い。しかしながら一意専心の修練こそが、晴天流皆伝の道と知れ。

ちなみに「防波」派生の奥義は「大渦潮（おおうずしお）」、「引波」派生の奥義は「大波浪（だいはろう）」

12月14日：From ”Hurricane” to ”Storm”

喜怒哀楽を持つ生物のスペックを最も手っ取り早く強化する方法。
それは恐竜だろうが猿だろうが人間だろうがケンタウロスだろうが
絶対不変である。

怒ればいいのだ。

怒りとは生物が備える根源的な外敵排除作用だ。怒りは怯えを塗り
潰し、理性のストッパーを外す……全ては己を苛む不快感を己の手
で排除する為に。
即ち、大地を確たる四足で踏みしめながらも人と同じ二腕を獲得せ
しケンタウロスの馬刺し君は……ブチ切れた。

「お゛おぉぉぉぉぉぉッッッ！！！」

うおーすげぇ、馬部分だけじゃなくて人部分も赤くなってる。髪の
毛も禍々しいオーラで逆立っていてカッコイイのだが……うん、馬
刺し君いわゆる三国志の関羽みたいなツラしてるから長いおヒゲも
オーラを纏っててなんか間抜け……いや、個性的な強化形態になっ
ている。
とはいえ全身が赤く蒸気している馬刺し君は、なんかもう何をどう
やったら一生物がこんなにキレ散らかすのか、と聞きたくなるほど
の形相で俺を睨みつける。

「顔から火が出そうだな」

「火が出てるのおめぇだろ」

殺人ハイキックをノータイムで繰り出した凶悪犯がなんか上手いこと言ってる感を出しているが、俺も今同じことを言いかけていたので今回は不問にしてやろう。

恐らく何らかのスキル、あるいは種族的特性なのだろう。筋肉がムキムキと肥大化していく馬刺し君は、既に通常時の1．2倍くらいにまで巨大化している……骨どうなってんの？

1．2倍と書くとショボいと錯覚しがちだが、世のゲーマー達がどれほどその小数点以下に泣かされてきたと思っているんだ。凄いじゃないか1．2倍、乱数(ガチャ)なら泣いて喜ぶ倍率だ。

「さぁ来い馬刺し君！　次はテレビの特集でやってた竜巻ボクサーのステップを見せてやるよ」

「竜巻ボクサー……？　もしかして〝ハリケーン〟キャンベルか？」

「ヘンリー・キャンベル！　彼は最高のボクサーですよ。特に十八年前のハウザー・スミスとの最後の決戦は今でも録画を見返すくらいですよ」

「ああ、そうだねカローシス。楽しい記憶で脳みそを満たしていこう……っ！」

PTSD発症した退役軍人のリハビリじゃないんだから……それはそれとして今の馬刺し君は怒り状態だ。古今東西あらゆるゲームにおいてキレた敵Ｍｏｂはモーションが変化すると相場が決まっている。馬刺し君は分かりやすい方だ、直撃したらまず間違いなく俺の耐久では即死だろう。

ハリケーンさんのボクシングスタイルはステップを多用して相手の

攻撃を回避しつつ己の一撃は近く踏み込み深く突き刺すというもの、一度攻勢に転じたならば踏み込むハリケーンに対してどんどん後ろに吹き飛ぶ相手ボクサー……その姿はまさしく竜巻に巻き込まれた哀れな牛。だったかな。

なにぶん特集番組を見たのが結構前だからうろ覚えだ、だがはっきり覚えていることもある。俺がハリケーンさんのボクシングを見ていて一番印象に残ったのは怒涛の攻勢ではなく……

攻撃の起点を絶対に見逃さない嗅覚と、起点に拳を叩き込む迷いの無さだ。僅かでも攻撃のチャンスが見えたら考えない、動きながら考えているとしか思えない神速の起点パンチは名前はうろ覚えでも顔はしっかり覚えてるくらいにはリスペクトだ。

猛牛、あるいは文字通り暴れ馬の如く突っ込んでくる馬刺し君。そこに攻撃のチャンスが見えた瞬間には既に前へと一歩踏み出している。

大時化はリキャストタイムがあるので使えない、だがこちらには必殺の「戦砕琥示(ウォールフェン)」がある。軽くジャブを叩き込むだけで大時化以上の吹っ飛ばしを可能とする、あとはどこに叩き込むか……制限時間は二秒、弾き出した答えは真っ直ぐ正面、人で言えば股間があるケンタウロスの真正面！！

あとはタイミングを合わせるだけ、こちとら高速機動のタイミング合わせは十八番芸……はい今！　再び空を飛んでペガサスになぁれ！！

「ま、そこまでだぁ」

「ごっ」

「うぇ」

身体が動かない。金縛りとかそういう話ではなく、まさしくゲームを途中でポーズしたように全ての運動エネルギーやスキルが完全停止しているのだ。

「────【恒矗(こうちょく)】。」

マジかよ兄貴、スキル魔法運動エネルギー全ての停止？　オンゲーにポーズボタンは無いはずだろう。

「め、盟主、ドノ……」

「バザラ、おめぇさんの気持ちも分からんでもねぇがよう……ここは俺等ぁの顔、立てちゃあくんねぇか」

「ア、アナタ程の方が言うなら、ば……」

「で、サンラクよう」

「ウィッス」

「拳で言い聞かせたって、心はついちゃ来ねぇ……拳で魅せて認めさせな」

ぐうの音も出ない正論パンチは、リュカオーンの牙よりも深く刺さる。確か本当にこう言う諺がシャンフロ世界にあるんだよな、確か「真に正しきは宝剣より鋭い」だったかな。全く狂気的な世界観の作り込みだ。

互いに戦意を収めたのを認めたのか、硬直が解ける。後に残るのは親が教師に嗜められてバツの悪い顔をしたクソガキ二人、と……だが俺は固茹で（ハードボイルド）な男。たまにはボッソボソに固まった茹で卵の黄身が食べたくなるものだ。

「ふっ、馬刺し君……ナイスバルク」

「は？」

物凄い素の反応で返された。ちょっと泣きそう。

◇

「アレが、ケット・シーが噂する七星隠しの〝暴風雨（ストーム）〟……」

「聞きしに、勝ル」

「血の雨を降ラし、古の雷ヲ纏い、荒ぶる神ノ風に背を押さレルとは誠カ、賢き黄金戴く猫王……ニャイ十三世」

「うむ……事実ニャ灰躯殿。かの〝忌み名太刀〟を抜き放（ハニャ）ったと聞いておるニャ」

「ギギギッ、クロいイカズチもチをサくカゼも……カムイのチカラだ。あのニンゲンはカムイか？」

「ロノ・ドア……最も偉大なゴブリンよ。カムイは恐るべき怪物よ。

ワシは帝雲（みかどくも）のカムイを見たことがある……アレは、とてもとても恐ろしい……カムイの名、みだりに出してはならぬ……」

「シかし、メイシュサマがタヅナをニギっておられる。ならばアンタイ、アンシン」

「〝暴風雨〟なら、アルいは……あの、怪物をナンとかしてくれるカ？」

「アスティロス。勇猛なるミノタウロスの女王。それは――」

多種族の小声は、サンラクの耳には届かない。
だが、サンラクから目を背けつつも聴覚に補正をかけてその話をずっと耳に入れ続けていた女は……にんまりと、口の両端を裂けんばかりに吊り上げる。
目は、相変わらずサンラクから背けていたが。

１２月１４日：Ｆｒｏｍ　〝Ｈｕｒｒｉｃａｎｅ〟　ｔｏ　〝Ｓｔｏｒｍ〟（後書き）

【恒轟】
対象のあらゆる行動を完全停止させる。原理的には時間と同速で更新され続けるマナの活動を完全に止め、沈静化させることで肉体をデフォルト状態にする。さらに噛み砕いて説明すると型に嵌めて固定している。
ウェザエモン戦で鉛筆が影に槍を刺して動きを止める技使ってたじゃん？あれがこれの超超超劣化版

〝暴風雨〟
ラビッツになんかクッソやばい人間がいっぱいいる、という情報は多種族連盟にも知れ渡っている。正直めっちゃ怖いがヴァッシュが手綱を握ってくれてるなら安心やな……ってのが一日目に出た議題の結論

地の七つ星を次々と撃破し、ゆくゆくはヴァッシュにすら刃を向けるのではと疑われている〝暴風雨（ストーム）〟
この世で最も恐るべき力、ヴァイスアッシュ自らが「敵」と定めた原色を纏う〝始源色（モノクロ）〟
竜に愛され、龍に認められた鱗持つ者達を導く〝黒夜花（ノワール）〟
あとなんかヴァッシュに弟子入り志望のニンゲン

１２月１４日：勇士の有志よ、勇姿を見せよ

多種族サミット二日目の議題は二つ。たった二つだ。
それは一日目で大体の議題を消化したから、とかそもそも人間ほど複雑な政治形態をしていないモンスター達のサミットはそんな複雑な話し合いをしないとか、色々な理由はあるがそれでもこの日の議題が二つしかないのは、それだけ重大であるということだ。

「――では、改めて此度は議長を務める余、ニャイ十三世より議題を説明させていただくニャ」

その特徴的な形状の王冠ゆえにどう見ても招き猫にしか見えない白猫が、出るとかは出て引っ込んでるところはしっかり引っ込んでるナイスバデーな……ホルスタインミノタウロスを見つめながら話し始める。いやぁ……デフォルメも擬人化も投げ捨てたパーフェクトホルスタインフェイスだ……
流石にこれ以上騒いだら無粋な事は分かっているのでウル・イディム氏に倣って真面目に聞くことにする。

「先だって……ミノタウロス族の王、ゴルディエス王が重傷を負ったニャ。現在はアスティロス女王が後を継いでいるニャ」

ほうほう、あのホルスタインはその重傷の王様の後任ってわけか。ご夫人なんかな？

「その原因は、恐るべき刃の竜（ドラゴン）ニャ。ゴルディエス王は全身を切り刻まれ、生きているのが奇跡のような状態ニャ」

……ほう？

「ドラゴン、ねぇ……」

「何カ、思イ当タル点デモ？」

「いやぁ……ちょっと、ね」

ドラゴン。この世界においてこの超メジャーなファンタジーモンスターの名前は少々特別な意味を持つ。そもそもこの世界、厳密な意味で「ドラゴン」と呼べるＭｏｂが極端に少ない。

例えばジークヴルム。ちと人型だがドラゴンと言って差し支えないデザインだが、あれのルーツは人造生物だ。どちらかと言えば「人造生物・タイプ：ドラゴン」とかそういう類だろう。

例えばノワルリンドを始めとする色竜。あいつらの正体はどちらかというとドラゴンな形をした菌類と言うべきものだ。そもそもドラゴンらしからぬ見た目をした奴も多い、ドラゴン属性を持ってる変なナマモノというかなんというか。

例えばユザーパードラゴンなどの原生モンスター。調べて分かったが、ほとんどワイバーンじゃねぇかという結論だ。分かりやすく言うと前足が翼になっているのがワイバーンだ、一時期は「ドラゴンという名前がついてるんだからシャンフロではこれがドラゴンだ」という説もあったがリヴァイアサンやベヒーモスが現れたことで「勇魚」「象牙」からの解答「名前が違うだけで種族的にはほぼ同一ですね」という一撃でこれがドラゴン派は絶滅した。

「………」

だが俺は知っている。この世界にはもう一つ、「ドラゴン」と呼ばれるエネミーが存在することを。

「此度、アスティロス女王は凶刃の竜を討つ勇士を募っているニャ。ウル・イディム殿には是非とも、という話だった……ニャけども」

ちら、と招き猫が俺へと視線を向ける。ホルスタインミノタウロスや他のモンスター達の視線も俺の方へと……

「………ククク」

この世界にはもう一つ「ドラゴン」が存在する。
それは遥か昔、とある勇者が討ち果たしたとされるドラゴン。輝く槍の伝説が、それの討滅を以て仮説を実証する為の大いなる試練。

「おう、サンラクよう……ビィラックからの預かりモンだ。今ぁ渡すぜ」

ヴァッシュが何処からか取り出した一振りの剣。黒ずんだ炭のような刀身を持つ刃が、無造作に俺の方へと投げられる。モンスター達が囲む円卓を飛び越え、ともすれば俺に突き刺さりかねない回転で飛んできたそれを……受け止める。

「そのドラゴンスレイ、この俺が請け負おうじゃないか」

黄金のマグマを使った割に随分と地味な見た目になったが、おかえりアラドヴァル。日焼けした？

「アラドヴァルもいい加減、ドラゴンもどきばかり斬っていたんじ

ゃ物足りないんでな」

このタイミングでわざわざこれを渡してきたって事はつまりそういうことなんだろう。その「刃の竜」とやらは……アラドヴァル、いや輝槍仮説（ブリューナク）の目指す頂に至るために倒さなきゃならない真なる竜種（ドラゴン）。

「オイオイ、ドラゴン退治なんて楽しいコンテンツを目の前で独り占めたぁ怖いもの知らずかよ？　なぁサンラク……」

「募集：肉壁枠4」

「オイコラ」

「その肉壁は砲門付きだよ？」

「神秘の剣（レーツェル）中衛参加希望です。徹夜行けます」

「私モ、助力ショウ」

「どちらかというより壁より便器で！！」

「ここぞとばかりにイキイキすんなや！！」

喰らえ復活のアラドヴァル根性焼き！！

「あひぃん！……あれ？」

「ん？」

「熱くないよ？」

何ぃ？　そういや鞘が無い。試しにぺち、とサバイバアルの頬にアラドヴァルの刀身の腹を当てる。

「なんだよ」

「いや、以前のアラドヴァルならお前の頬をチーズのようにとろーりとする筈だったんだが」

「ぶん殴るぞ！？」

えーと？　アラドヴァル・リビルドからどんな感じに強くなったの、と…………ほほう？

「…………」

「サンラクくん？」

くいくいっ（ケツを出せのゼスチャー）

スッ（にやけ面のまま後ろを向くディープスローター）

「っしゃあ！　これが進化した「槍焔剣（そうえんけん）アラドヴァル」じゃい！【刃点火（イグニッション）】！！」

スパァン！　ズドォン！！

「あはぁーん！？」

「おおっ」

この「爆撃」効果って何かと思ったけど、もしかして文字通りの「爆」の「撃」って事か？
蒼い爆発によって派手に吹っ飛んでいったディプスロを見送りながら、俺は青い炎の残滓を纏うアラドヴァルを振って炎を散らしながらヴァッシュの……否、モンスター達の方へと振り返る。

「喜べ、勝ち確だ」

………ん？　あれ？　募集四枠に対して参加希望五人いなかった？

１２月１４日：勇士の有志よ、勇姿を見せよ（後書き）

有志というか痴態晒してる奴もいるけど

12月14日：白い終幕に警鐘を鳴らして

槍焔剣アラドヴァル。生まれ変わったアラドヴァルが現状備える能力はこれ。

・刃点火（イグニッション）
使用者のMPを消費し、消費した数値分の「焔」をアラドヴァルに蓄積する。

・焔爆（ニトロ）
非クリティカルヒット時、ヒットした攻撃に応じた「焔」をアラドヴァルに加算する。
クリティカルヒット時、蓄積した「焔」に応じた爆撃属性をアラドヴァルに付与する。
最大蓄積状態時、一定時間クリティカルヒットの成否に関わらず焔爆状態が持続する。

・焔研（トルク）
「焔爆」発動時、上記効果の「焔」の蓄積量の最高記録に応じて戦闘を継続している間、アラドヴァルの刀身に強化効果を付与する。

・竜を屠る槍
特定カテゴリのモンスターに対するダメージ量を強化する。さらにアラドヴァルは追加効果で上記条件を満たした対象に「焼燬（しょうき）」状態を付与する。

・「輝槍実証第四（ブリューナク）：焼燬（キャール）」
アラドヴァルを装備中に使用可能。アラドヴァルを使用した刺突、または投擲時に炎の槍を撃ち放つ。

・――［封鎖］――
竜の血を注ぐための杯、英雄の血で濡れた杯。事実だけが、真実を満たす。

なんというか、オルケストラ戦の報酬である仮面とはまた別方向で読みづらいというか……前々から思っていたんだがこういうテキスト担当してるやつが複数人いるのだろうか？　しかもそいつらは実装するまで互いの文体を見ていない。

まぁいい。別に読めないわけじゃないし理解できないわけでもない。重要なのは強化前のアラドヴァル・リビルドと比較すると全体的に能力がややこしい……というよりも回りくどくなった、という点だ。

まず大前提としてこれまで常時発動型だった高熱の刀身がオンオフ型になった。【刃点火】でＭＰを種火として注入し、非クリティカルで「焔」？　が蓄積して……もう既に面倒臭いが、刃点火を使わない状態であれば素手で触ってても頬にくっつけてもケツバットしても熱によるダメージが発生しなくなった。あと切れ味も極端に落ちている、これが鞘に入った状態という事か。

後は……これ、リビルドの時から炎の性質が変わっているな。それまでのアラドヴァルは実際に高温と燃焼効果を備えていたが、槍焔剣アラドヴァルの「焼燬」効果は完全に別物となっている。燃焼っぽい別現象というか、簡単に言うと今のアラドヴァルを枯葉の山に突っ込んでも燃えないというか。

「うーむ………」

他、細かいところの仕様変更を確かめつつ首を傾げていると、「刃の竜」問題にひとまずの決着を得た事で次の議題へと移行していた。話すのはニャイ十三世ではなく……ヴァッシュ。

「――聞け、生きとし生ける命共よ」

あ、これ真面目な奴だ。ほら真面目に聞けディープスローター、また耳元で囁くぞ。ゴライアスハナムグリィ………（ねっとり）

「白き災厄がぁ……近づいている。最早ぁこいつぁ人も獣も関係ねぇ……あらゆる命が、戦わなきゃあならねぇもんだぁ」

それは、警鐘だった。未だその全容の明らかではない、最も古く最も強いヴォーパルバニーが生きとし生ける全ての命へ向けた警告。

「その名ぁ……微睡（まどろ）む白大神（はくたいしん）。夜空ぁより来たる星の旅人をぉ滅ぼした終止符……あるいはぁ、神の玉座」

成る程、現状の話だけだと手足の生えた椅子が世界を滅ぼす光景しか想像できないのだが、とりあえずその白大神を暫定的に椅子の怪物として引き続き話を聞こう。

「王は眠っている……だがよぅ、王の魂が玉座をぉ動かす……」

椅子・モンスターに王の魂が装備された。アンデッド的な？

「神代（かみよ）のぉ背骨を持つ、大いなる獣……その歩みはぁな、黒きぃ神の地も……白きぃ神の地も、等しく踏み潰すぅ……」

全長500メートルの巨大ゾンビ椅子が背もたれからビームを吐き出しながら大陸を焼き払う光景を幻視した……そろそろふざけたイメージは捨てよう。

いやしかし無駄な要素を削ぎ落としても結論としては「大怪獣（レイドモンスター）が侵攻してくる」という事になるんだが……ヤバくないか？

「おめぇさん達……嵐が来るぜぇ。白き玉座と王の魂はよう、この黒きぃ神の地を打ち砕かんと……波濤を引き裂く。そうすりゃあ、黒き神の眷属も静観ってわけにゃあいかねぇ」

成る程？　その白大神は新大陸に侵攻するから新大陸のレイドモンスターが活発化します、と。

普通にヤバくないか、あの貪る大赤依に比肩する存在がフィーバーするだって？　新大陸側の始源眷属はその殆どが未だに確定した情報が殆どない、レイドモンスターが一斉に大暴れする暴走イベントで、そう何度も挑戦回数があるとも思えない。

「流石にこりゃあ【ライブラリ】に情報回した方がいい案件だな……」

ざわめく円卓も、ヴァッシュが視線を巡らせれば自然と沈黙が広がっていく。そして視線は一瞬、だが確かに俺達プレイヤーをじっと見つめ……言葉が続けられる。

「おめぇさん達……用心しなぁよう。命（タマ）ァ張る覚悟をぉ……命（タマ）ァ守る覚悟をぉよう……」

さらに続けられた言葉は、あるいは不甲斐ない人類へのヒントか？

――白き大壁の版図は留まるを知らず

――黒き大織の決闘は砂塵の中にあり

――青き大群は案ずる事なかれ

――赤き大依は再び飢えに目覚め

――緑の大宮は討たず追え

「何度でも繰り返すぜぇ？　白き神を、来たる玉座の災厄にぃ……
備えな。それが俺等ぁからの、警告だぁ」

……

…………

………………

多種族サミットの二日目が終わった。

「さぁて、と」

「おうサンラク、回復薬ってここ売ってんのか？」

「いや知らんが」

「参ったな、ちと手持ちがなァ」

「シグモニアでムキになるからだろ……」

「ねぇサンラク、ここ弾丸売ってると思う？」

「ねぇヤシロバード、ここ弾丸売ってると思う？」

「同じ文章でこっちの脳みそ疑いに来たねぇ！」

「徹夜ですか？」

「一徹（ワンテツ）で片付けるつもりだけどな」

「いいですね、最高だ。有り余る時間をさらに突き詰めるのは至高の贅沢ですよ」

「……あー、それはちょっとわかる」

さて、と。

俺達は武器を、防具を、アクセサリーを、そしてアイテムを確かめながらとあるモンスターの元へと行く。

「ようクイーン」

「お前タチは……」

「憂いは早期に断ち切ったほうがいいだろ？」

肩に担いだアラドヴァルをくるくると手首のスナップで回しながら俺はミノタウロスの女王へと告げる。

「明日の朝までに片付けよう、ドラゴン退治の夜が来るぜ」

ウル・イディム氏も追加メンバーで加入した俺達のパーティ名がさっき決まった。

「ドラゴン退治は【竜狩りの集い】にお任せってな」

ちょいちょい

「なんだよディープスローター」

「サンラクくぅん、ミノタウロスは複乳なんだねぇ……ズリズリだよぉ……」

…………。耳元に口を寄せて一言。

「……シャラーップ（囁き）」

「おぉお゛ぉおぉ゛んっ」

だまらっしゃい。

１２月１４日：白い終幕に警鐘を鳴らして（後書き）

「尾骶骨から脊椎を通って脳までをねっとりと舐められているような気分でした。特に「ッ」と「プ」の所は凄かったです。いやぁ録音してて本当に良かった！！」

――後にこの時の感想を語ったディープスローター

「…………」

――無言でアラドヴァルを一本足打法で構えるサンラク

「待ってぇサンラクくぅん！　これ会議の内容も保存してるからねぇ？　消すわけにはいかないよねぇ？　んふふふふふ……あ、とりあえず一発ヤっとく？　カモォーン！　んひぃんっ！！」

――嬉々としてケツバット(アラドヴァル)で宙を舞うディープスローター

12月15日：開戦

◇

12月15日。それはシャングリラ・フロンティアにおける初の大型PvPイベント「王国騒乱」の開始日だ。
双つ相対する王の名の下に集い、エインヴルス王国の正統なる王を決める人間と人間による人間のための闘争。あるいはシャングリラ・フロンティアがゲームではなく実際のスケールを持つ世界であったならば、この戦いは何十年も続いたのかもしれない。だがこれはゲーム、王権を賭けたこの争いは、年を越さずして決着することが決まっている。

「いやー、綿密な計画と地道な準備が結実するこの瞬間は、何度やっても替え難い緊張感だねぇ」

「まぁ、そこは同意かな」

エインヴルス王国サードレマ、その街を統べる大公城の正門前にとある人物を「頭」とした一団が集まっていた。あるいはそれはクラン【旅狼】と呼ばれ、またあるいはレッド・ペンシル・エージェンシー……RPAと呼ばれていた。

「集客は上々、さっきぱやガルちゃんねるの生配信見てきたけど同接5万人行ってたよ」

「とても、多いですね……」

「ノンノン、違うよ0ちゃん。逆だよ」

「0です」

「……………動画配信を見るのと、シャンフロにログインするのは……両立できない」

「その通り！　正解したルストちゃんの頭を撫でてあげよう」

「……撫でなくて良い」

此度の「王国騒乱」は、噛み砕いて言えば巨大な陣取りゲームである。駒はプレイヤー、そして奪い合う陣のゲーム盤はこの国家そのものという規格外スケールであるのだが。
そしてこの戦い、単なる烏合の衆同士のぶつかり合いというわけでもない。

「向こうはどんな感じなんで？」

「んー、まぁ向こうも全体を制御する気はないみたいだねー。自分ところの配信についてくるプレイヤーと一緒に配信者間で連携しつつ……ってところかな」

しかし、とペンシルゴンは人の悪い笑みを浮かべてゲーム外からのメールを閉じる。

「ま、リアルタイムで情報は流れてきてるんだけどねー、リアル方向で情報収集班がいるから」

「鉛筆王朝コワ……」

ここに集合してからずっと、ＲＰＡのメンバーから「いやぁ「あの時」はどうも」とにこやかに握手を求め続けられていたオイカッツォは、自分やサンラク……あるいはルストや秋津茜とも違う、「全体の勝利」の為にどこまでも歯車に徹するＲＰＡ達の行動に若干気圧され気味であった。

「それに、カッツォ君も人の事言えないじゃーん？」

「なんのことやら……ボク、トテモセイジツ」

「よく言うよ……」

さて、と黄金の槍を肩に担いだペンシルゴンはサードレマより西方……ここからは見えない、敵の総大将たる新王アレックスの座す方角を見据える。

「陣取り合戦、４：６でこっち不利ってトコだね。だったら無駄な血は流れないに越した事はない。みんなもそう思うよね？」

「……有意義な血があるみたいな言い方」

「そりゃそうさルストちゃん！　百人の赤い血より一人の青い血だよ」

「血が青いんですか？」

「ええと……秋津茜、さん。昔の貴族とか王族の血を「青い血」、と言うことがありまして……」

「そうなんですね……！」

この「王国騒乱」の勝敗は自陣営が占領した街の数が相手よりも多い、または両陣営の総大将たる新王アレックス、もしくは前王トルヴァンテと王女アーフィリアの脱落によって決定する。

街の規模や戦力を考えれば、前王陣営は総大将が二人いるアドバンテージを活かして総大将の捕縛を目指すのがベター。

そういう訳で要人誘拐に極めて強い情熱を燃やすＲＰＡと、それとは別件で集められたクラン【旅狼（ヴォルフガング）】の面々。

シャンフロにポーズボタンは無い。故に時間は止まらず進み続ける。迫る王国騒乱シナリオの開戦時間。サードレマの特別相談役という地位にまで上り詰めたアーサー・ペンシルゴン、そしてその仲間たちに限らず、前王トルヴァンテに味方すると決めたプレイヤー達はその瞬間を緊張と共に待つ。

「……ん？」

「なんだアレ」

――最初に気づいたのは誰だったのだろうか。

開戦時刻は午後６時。地球と同じく東から昇った太陽が西へと沈むシャンフロ世界において、既に太陽はその姿のほとんどを西の地平線、あるいは水平線に沈めようとしている……筈だった。だというのに、サードレマにいる者達が見たものは、まるで。

「なんか、太陽が昇って……」

◇◇

12月15日。それはシャングリラ・フロンティアにおける初の大型PvPイベント「王国騒乱」の開始日だ。
双つ相対する王の名の下に集い、エインヴルス王国の正統なる王を決める人間と人間による人間のための闘争。あるいはシャングリラ・フロンティアがゲームではなく実際のスケールを持つ世界であったならば、この戦いは何十年も続いたのかもしれない。だがこれはゲーム、王権を賭けたこの争いは、年を越さずして決着することが決まっている。

「はいどーも！　今日はガル之瀬とは別行動なぱやぶさでーす！」

「どうも、今日はソロで動きます。ガル之瀬です」

エインヴルス王国王都ニーネスヒル、王都の権威を示すかのような巨大な城門の前に立つ二人の男。そして彼らを一目見ようと集まった大量のプレイヤー達。わいわいと騒いでいた彼らであったが、ぱやぶさのわざとらしい「静粛に」のゼスチャーで若干の時間がかかったものの、静けさが辺りに広がる。

「さぁ皆さん、ついにこの時が来ました……いよいよシャンフロ初の対人イベント！「王国騒乱」が始まるぞーっ！！」

わあ、と歓声が上がる。ぱやぶさとガル之瀬がこの場にいる、という興奮だけではなく、シャングリラ・フロンティアというゲームに

おける初の大規模イベントにこの場のボルテージは否応なく上昇していく。

「作戦ですが！他のメンバーとも綿密に打ち合わせた結果………その場のノリで各自好き勝手にやることになりました！」

「……根本的に各々のスケジュールとかがかみ合わなかったので、まぁ……はい」

おどけた様子のぱやぶさの言葉にプレイヤー達が笑みを漏らす。元よりこの場に集まった全員がぱやぶさ達についていくわけではない。彼らと連合を組んだ他の配信者についていく者もいれば、単純に同じ陣営に所属するだけで自分の好きなように動く者もいる。

そしてそれをぱやぶさ達は止めない。新王陣営は兎にも角にも陣取りゲームで有利を取らなければならないし、新王自身を守ることを考えても数が必要なのだ。それは多ければ多いほど良い、たとえ指示に従わない烏合の衆だとしても数が積もればある程度の壁としての役目は期待できる。

「細かいことは無しで行こうやガル之瀬！　結局のところ、楽しんだもの勝ちだし！　ねぇ皆さん！！」

実のところを言えば、ここに集まった聴衆達が思っているほど無計画ではないのだが……それをわざわざ説明する必要はない、とぱやぶさは配信者としての笑みを浮かべたままに言葉を続ける。

「こっから五日間！　全力で頑張っていきましょうか！！　勝つぞみんなーっ！」

その時だった。

「ん？　なんかこっち来てね？」

「遅れて来たプレイヤーじゃねーの？」

――最初に気づいたのは誰だったのだろうか。

開戦時刻は午後18時。薄暗くなりつつあるサーティード、その城門へとゆっくりと近づいてくる影、影、影。それは人の形をしていた。それは人であった。だがそれは……人ではない。それは、まるで。

「……あの人たち、緑すぎない？」

◇R◇

12月15日午後18時。それは王国騒乱シナリオ、開戦の時。

だが、それは同時に……彼らの戦いが始まる瞬間。

「Vooooooooooooooooooommmmmmm……！！！」

死せる火山の底より、ゆっくりと地上に昇ってきた輝赫の赤色。一軒家程度なら包み込んでしまえそうなほどに広がった蝶の如き炎の翅、そこに浮かび上がる……〝眼〟。

見つめる先にはサードレマ、炎の翅に浮かぶ視線に熱が籠る……文字通りに。
翅に浮かんだ眼に炎と光が宿り、増大し、収束する。そして翅に込められたエネルギーに撓んだ翼が大きく羽ばたいた瞬間。
「Kyuririririririririririririririririri!!!!!!」
灼熱の光条が、サードレマに直撃した。

◇G◇

「Kyo、Kyokyokyokyokyokyo」
それは笑っていた。かつて現れた青ざめた恐るべき疫病の馬が、死をまき散らす悦楽に笑ったように。不気味なほどに緑色な異形の孔雀は笑っていた。
己の細胞によって全身を食い尽くされ……生まれ変わる、ならぬ〝死に変わった〟己が手勢の進む光景に、笑っていた。
目指す先はニーネスヒル。もっと数を増やすために緑一色の軍勢はゆっくりと、だが確実に前へと進む。
「Kyokyokyokyakyakyakyakyakyakyakyakyakyakyakya!!!!」
ヒトもケモノも入り交じり、その数二万と百五十三。

『『モンスター急襲（レイド）！』』

１２月１５日：開戦（後書き）

焠がる大赤翅「やぁ」
嬲る緑大緑「やぁ」
赤＆緑「混　ぜ　て」

12月15日：イかれたパーティメンバーを紹介するぜ！

◆

その竜は全身が刃で覆われている。鱗が鋭いとかそう言う次元ではなく、刃物で竜の形を作ったかのような恐ろしい存在であるらしい。

謎多き「ドラゴン」というコンテンツに俄然やる気を出した俺達は、サミットが終わってすぐにミノタウロス女王のもとへと向かっていた。サバイバアルが怪鳥を彷彿とさせる奇声とポーズでささみちゃんをおちょくっていたが……全く、小学生じゃねーんだからもうちっと慎み深くしろっての。

あっ！　馬刺し君じゃーん！　うぇいよーう、わっちゃごーな、ぷーちょへーんざー。

「さて、気を取り直して」

「君、よくあんな煽り散らかして気を取り直せると思ったね」

「人生はセーブデータ分けられないけどメンタルはセーブデータ分けた方がいいぞ」

「………？」

カローシスUQが澄んだ目で全く理解していなかったが、理解できる日が来るといいね……単セーブデータは破損した時に取り返しがつかないってことだよ。

それはそうと、ホルスタインミノタウロスからその武装竜の情報を聞き出した俺たちは、目指せドラゴンスレイを掲げながらキャッツエリアを出立したのだった。都合よく転移要員がいるのでなんか忘れ物しても速攻キャッツェリアに戻れるのは大きい。

「北西の高原地帯、ねぇ」

「なんつうか、実感薄過ぎてアレだが今俺たちプレイヤーの中でも一番新大陸の攻略を進めてるんじゃねえかこれ」

どうだろうな、大々的に喧伝してないだけで案外俺たちよりも先に行ってるプレイヤーもいるかもしれない。なにせ新大陸は確かに魔境だが、同時に雄大だ。全てのモンスターが必ずしもプレイヤーを殺意むき出しで狙い続けるわけじゃないし、襲ってくるモンスターも別の食いでがある別のモンスターをスケープゴートにすると案外許してくれたりする。つまり本気で逃げに徹すれば案外樹海や砂海を抜けることはそう難しいことじゃない。

まぁ、たまにお前本当に原生モンスターとしてデザインされた？確実にプレイヤーを殺すために調整されてない？　って奴もいるが………火山荒野に出現する灼熱カメレオンとか。触れたら死ぬ灼熱の舌でクイックドローするのは人間にやさしくないと言えよう……。

「シャンフロがゲームでよかったね、想定北アメリカ大陸規模なんでしょこれ？　普通だったら徒歩とか正気の沙汰じゃないよ」

「何故人類は空中を五歩で駆け抜けられないのか」

「サンラクくぅん……人類の定義が狂ってるよぉ？」

人類のその先に行ってしまった、俺………。
基本的に雑魚モンスターは寄ってこないし、たまに来る強力なモンスターも………。

「ヌンッ！！！」

ボギョオ！！　と生物の身体で鳴らしてはいけないタイプの音と共に吹っ飛んでいった猿っぽいモンスター。そしてどれだけの威力でストレートを叩き込んだのか、拳から摩擦熱の煙をくゆらせるウル・イディム氏………。

「……おいサバイバアル、パワーアタッカーポジション完全に食われてるぞお前」

「……いやこれはもう完全に種族差じゃねぇか、皮膚の色どうこうのレベルじゃねぇよ」

今回の刃の竜討伐パーティには、約二名NPCが混ざっている。一人はサイナ、出しっぱにするとディプスロとサバイバアルが気持ち悪くなる（セクハラ紛いのことをする）のでインベントリアで待機中。
そしてもう一人が自称オーク……もとい王狗（オーク）のウル・イディム氏である。悩める婚活男子（一応性別的には雄個体であるらしい）な彼は、もう見た目からして戦闘種族という感じだったのだが………実際に何度か戦闘を見た限り、ちょっと笑っちゃうくらいに強い。常時人間（プレイヤー）がスキルを発動している状態に近いというか、通常攻撃がプレイヤーのスキル使用攻撃と同等の火力を出している。
しかし、この最強オークさんをパーティに入れることで困ったことも。

「……うん、やっぱりプレイヤー側に入ってくる経験値が著しく低いね」

「これ多分彼に殆ど持ってかれてますよ、徹夜しても効率が悪い……」

ウル・イディム氏をパーティに入れた状態で戦闘すると、どうやら経験値の殆どを彼に持っていかれるらしい。さらに言えば彼含めて六人パーティだというのにドロップするアイテムの量も妙に少ない……15人パーティでの活動に詳しいカローシスをして「15人パーティ二組合同でモンスター倒した時並のドロップ量」との事だ。要するに勝つだけなら問題ないが、アイテムがドロップしないという面では完全に妨害要因って事だろう。アイテム周回やレベリングとかのは恐らくウル・イディム氏の猛攻を受けたモンスターが部位破壊とかそういう生易しい表現では収まらないレベルで粉砕されているからだと思うが………持ってかれた経験値は一体どうなっているんだろうか。

「……正直どうする？　ドラゴンの素材もこの調子じゃいない方がってレベルだけど」

「元々俺らが来なかったらドラゴンソロ討伐してたかもしれない逸材だ、逆に言えばこのレベルの戦力をぶつける相手ってことだぜ？」

これが「人間五人でどうにかなると思ってないから本命のウル・イディムを保護者枠で同伴させる」ならまだいい、癪だけどな。問題は「あのウル・イディムでもソロだと不安だから人間五人の追加は願ったり叶ったり」のパターンだ。このゲームはイベントフラグを物凄く自然な流れで会話中に設置するから話をちゃんと聞かな

いと僅かな食い違いが致命的な亀裂になりかねない。

「しかし、ドラゴンってのはどういうもんなんだろうな。このゲーム、ドラゴンに関しちゃ王道から外しまくってんだろ？」

「ジークヴルム」

「人造生物ですよねアレ」

「邪道だねぇ……」

王道ラスボスムーブしてるのに勝手に邪道扱いされて草葉の陰でジークヴルムも泣いてるぞ。しかしドラゴン、ドラゴンな……。

一歩進む度、高原に……かの竜に近づいていく。果たして何が待ち受けているのか、それはこの目で見るまで分からない。

歩く中で思い出されるのは、鍛治師達の言葉――

１２月１５日：イかれたパーティメンバーを紹介するぜ！（後書き）

お知らせ
来たる3月１７日、ありがたいことにコミカライズ版シャングリラ・フロンティア〜クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす〜の三巻が発売します！
表紙はシャンフロ屈指の廃人サイガー０！！巻ではこいつがヒロインなのでは？という噂が広まっているらしいですが……そんな、まさか二巻の表紙を逃した全身鎧肌色成分ゼロのこいつがヒロインなわけないじゃないですかアッハッハッハッハッ！！！！
何わろてんねん、どっからどうみてもヒロインちゃんだしこの鎧だって広義の皮膚だから全身肌色のお色気の権化じゃろがい！！二巻の表紙はペンシルゴンに奪われたけどそれは奥ゆかしさです
特装版の方には硬梨菜が〆切をサイレンススズカ並にぶっちぎった書き下ろしもありますので、これが例の極道入稿したやつかぁ！と興味のある方は是非ともお手に取ってみてください。硬梨菜が申し訳なさゲージを増加させます
＜.ｉ５３５４７２｜２２９５１＞
＜.ｉ５３５４７３｜２２９５１＞

12月15日：斬痕を見ゆ（前書き）

ベアトリクス引きましたベアトリクス引きましたベアトリクス引きましたベアトリクス引きましたベアトリクス引きました（素振り）

１２月１５日：斬痕を見ゆ

気づけば日も跨ぎ、１５日……現在時刻三時二十七分！
誰だよシャンフロ世界は実際の距離より短いとか言ったやつ、まだ高原とやらに辿り着かないんだが？

「いや原因は距離じゃないけど……さっ！」

飛びかかってきた羊モンスターの顔面に回し蹴りを叩き込みつつ、弾丸を叩き込む。視線を向ければ、カローシスＵＱが例のリートゥス？　なる魔法剣とはまた別の武器で応戦している。まぁ流石にここでフル火力はな……

「このっ、スケープゴートってそういう意味じゃねーだろ……っ！！」

「ヌゥン！」

ウル・イディム氏の剛腕が三体の羊モンスターを吹っ飛ばしている。このダイナマイト・バイオレンス・オークさんが活躍すると俺たちへの報酬リソースがゴリゴリ削れるのだが、流石に今ウル・イディム氏の活躍に文句を言う者はいない。

刃の竜がいるとされる高原への道のりそのものは別に迷路だとか悪路だというわけではない。だが……モンスターエンカウント率が異常に高いのだ。刻傷の効果はパーティメンバーの数とは無関係なので発動しているはず、つまり俺のレベル以下のレベルを持つモンスターは俺との戦闘を避け、逆に俺のレベル以上の強さを持つモンス

ターは寄ってくる「雑魚避け」効果は適用されているはず……

「にしてもエンカ率！　なんだこのクソインフレエンカは！！」

「オイオイオイヤシロバード！　羊毛を燃やしてんじゃねぇよ！ぶっ飛ばすぞ！！」

「御所望の羊毛はもう飽きるくらい集まっただろう！？　もう面倒だから全部燃やしたほうが早い！！」

「バッキャロー！　ティーアスたんの新衣装にまだまだ使うかもしれねぇだろうが！！　バリカン使えバリカン！！」

デッドオアハゲ、生命かアイデンティティのどちらかを失う岐路に立たされた羊……ムスタンピード・シープの大群は死ぬかハゲるかならお前らを殺す、と言わんばかりにこちらへと突っ込んでくる。闘牛を思わせる体躯の突進を敢行するその姿は、フワフワした羊毛による可愛さポイントを塗り潰すデンジャーモンスターだ。つーか数、数がヤバい。味方同士で激突してもすぐに突進再開するのはヤバいぜ。

まぁ、サバイバアルが「せめて羊毛だけでも！」と泣きついたせいでこんなに追い詰められてるだけで、燃やせば個体同士が衝突して勝手に延焼していくんだが。

「ディプスロ」

「はぁい」

「殺れ（FIRE）」

「ごめんねぇサバイバアル君。【ゲヘナブレイズ】」

「グワーッ！　ルティアたんモコモコ毛糸ニットがーっ！！」

「確認：焼却完了」

羊毛は手に入らないがジンギスカンは出来た。都合よく塩胡椒の味がついてるわけがないので、新鮮な肉の食感がするティッシュみたいな焼きムスタンピード・シープ肉をガジガジ食い千切って空腹度を回復する。

「これで終わりか……」

「計測：総戦闘数６８体。征服人形が収集した情報を参照しましたが、ムスタンピード・シープの生態とは異なる動きが確認されました」

「本来はあんなに群れないとかです？」

「否定：ムスタンピード・シープ本来の挙動はリーダー個体によって統率された集団突撃を多用する傾向にあります」

……いやそれ、本来の動きの方が危険じゃないか？　今回は全個体が好き勝手に突撃してくるランダム性は脅威だったが統率とは程遠い暴走といった趣だった。何せ味方同士で激突して勝手に自滅するからな……バカだなぁとは思ってたがレア行動だったのか……ん？

「誰かリーダーっぽい個体見かけたか？」

「見た限り、同じような個体ばかりだったねぇ……」

リーダーがいない群れ？　魚や虫ならともかく、獣系なら大抵ボスがいるもんだと思うが……というか、

「さっきからそんな感じの変な個体ばかりですよね？」

「そうだねカローシスさん。メスしかいないライオンの群れとか最初から満身創痍のサイとか……」

「………もしかしなくてもこれ、」

「ぜぇーんぶ、なにかに本来の形を崩されて逃げてきた、とかぁ……？」

群れのリーダーがいない羊。消耗した様子のメスだけのライオンの群れ、そして全身に切傷を負ったサイ………うーん、もうほぼ確定と見ていいんだろうが。

「おうお前らー！　これ見てみろよ！」

つまらんもんだったら根性焼きだぞ。そんな漆黒の決意を抱きながらサバイバアルが示す場所を見てみると、どうやら奴は根性焼きを回避できたようだ。

それはなんというか、言ってしまえば「亀裂」だった。モンスターラッシュで歩みが遅くなったとはいえ、確かに高原に近づいているのか緑の割合が増えてかろうじて草原と呼べなくもない地面に刻まれた2メートルほどの亀裂。

だがそもそも平原にそんなピンポイントな亀裂(クレバス)が生じるものだろう

か。そして何よりこの亀裂、恐ろしく綺麗すぎる。
「誰かさっきの羊戦で地面斬ったやついるか？」
返答は無し、ウル・イディム氏も含めて心当たりは無し、と……あの羊共にこんな斬撃性能は無かった。
「……凄いな、断面がツルツルしてる。ただ斬っただけじゃなさそうだ」
「多分これ斬撃自体に相当な圧力がある感じですね。切り裂きながら圧し固めたというか……」
「食らったら鎧ガチガチのタンクでも三枚おろしになりそうだ」
試しに腕を突っ込んでみたが、「サンラク」の腕が肩のところまで入ってしまう深さ。それに、端から半円を描いてだんだん深くなっていく……真っ直ぐな直線の中間が一番深い。
「サンラク君の腕が割れ目に！？　そんなのもうフィストファッ」
「ディプスロ、三十回回ってワンと鳴け」
ニヤケ面がトリプルアクセル×１０をし始めたのを他所に、亀裂の形状から俺はある推測を立てる。
「この亀裂……何か鋭利なもので斬ったのは確かだけど、大上段から叩きつけたんじゃなくてこう……」
俺はアラドヴァルを逆手で握って、そのまま地面を引っ掻くように

後ろから前へと腕をスイングする。

「……いう感じで振り抜いたんじゃね？」

「流石にドラゴンが剣を握ってるたぁ考えづれぇ。となると、腕から突起が肘方向に出てるのか？」

「いや、もしかして二足歩行なんじゃないのかな？　四足歩行でこの動きは無理がある」

「いえ、逆に脚そのものが刃物の形状をしていて地面を蹴ったという可能性はどうです？　この仮説だと脚が一本だけ刃物ってことになりますが」

俺達が真面目に対ドラゴン談義を行なっているとついに頭がおかしくなったのだろう、その場で三十回転していたディプスロがフラフラしながら俺に向かって一言。

「わんっ！！」

「伏せ」

「わんっ！！！！」

尻を向けるな尻を、躾がなってないぞこの駄犬。

１２月１５日：斬痕を見ゆ（後書き）

真なる竜現れし時、平穏は乱れ獣は恐怖に荒ぶる
～竜人族のとある部落に代々伝わる竜狩り伝説の一節～

お知らせ
来たる3月１７日、コミカライズ版シャングリラ・フロンティア～クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす～の三巻が発売します
もう公表されたので硬梨菜も硬く閉じたロンズデーライトな口を開きますが、あの作品とのコラボがあります
そう、小説家になろうを利用しているユーザーなら一度は見たことある累計ランキングの頂点に君臨するあの作品です
こんなんＷｅｂ版の時点で戦車と拳銃くらい戦闘力の差があるじゃん……もうダメだ、おしまいだぁ……
そんなティーガーもとい「転生したらスライムだった件」コミック十七巻は3月３１日発売です、今からでも遅くない！全巻買おう！
そして向こうが戦車なら私は大砲よ、もといこちらには大魔導師不二先生がついているのでシャンフロ三巻もよろしくお願いします
＜ｉ５３５４７２｜２２９５１＞
＜ｉ５３５４７３｜２２９５１＞

12月15日：我は十番目の真理。汝、刃の鋭きを畏れよ

それは、いた。
サイナ曰く「オケアグラノス高原」、昇るのに少々苦心する傾斜の天辺……起伏も遮蔽物も殆どない広大な草原の中央にさながら王のごとく鎮座するそれ。
各々が各々の望遠手段で眺め、観察するそれを一言で表すなら……

「ナイフの塊が寝てる」

「新手の現代アートか？」

「銃剣とか混ざってない？」

「徹夜の気配」

「とりあえず一発入れとく？　物理耐性高そうだけど」

「強キ気配ヲココカラデモ感ジル」

まぁ待てディプスロ、まだ早い。まだ観察した方がいいだろう。
そも、この状況は俺たちにとって非常に都合がいいものだ。高原の中心で恐らく身体を丸めているのだろう全身凶器、という言葉がこれ以上なく似合うそれ。
頑張って肉眼で見ようとしている自称視力（サバイバアル）12．0じゃあるまいし、サイナが観測した視覚データを神代製頭装備に同期することで見るそれは成る程「ドラゴン」という事前知識があれば単なる凶器の塊ではなく、明確な配置と役割があるものだということが理解できた。

「あのどデカい刃物、もしかして翼か？　飛ぶ飛ばないの段階じゃねーだろ……取り外しでも出来なきゃ完全にデッドウェイトだ」

「あ、カローシスさんやっぱあれ二足歩行ですよ」

「二足でした？　そっかぁ……じゃああの状態からさらに立ち上がるってことか。思ったより頭を狙うのは面倒臭そうだ」

「……夜だから何も見えねぇ」

「あんまり生物って感じはしないねぇ……」

「土人形（ゴーレム）が原生生物扱いの世界だ、全身刃物がいてもおかしくはないだろ」

そもそも列車砲担いだムカデがいる時点でなぁ。それはそれとして、だ。

見たところ前情報の「刃の竜」ってのは文字通りの意味で合っているらしい。斬撃みたいな攻撃を飛ばすから刃の竜！　実態は非物質系！　みたいな搦手の可能性も何割かあり得たからな。完全物理型ってのが確定しただけでもありがたい。

「まだこっちに気づいてないようだし、手短に作戦会議だ」

「全員突撃でも全然いいですよ？」

「徹夜ｏｒ突貫の二択はやめようカローシスさん」

とりあえず見た限りで分かった情報を纏めると。

・全身が硬質で鋭利な甲殻に覆われている
・二足歩行である
・（恐らく）背中がこっちに向いているのではっきりとは分からないがオーソドックスな首が長いドラゴン
・つよそう

「というわけで、どう攻める？」

「そもそも有効打が分からないからね、物理攻撃が効果薄そうなのもあるけど初手何で攻撃するのか、っていうと……」

全員の視線が俺と……あとウル・イディム氏へと向けられる。まぁ、確実に有効打になるのはやはりアラドヴァルだ。さらに言えばウル・イディム氏のやたらめったらな強さも戦力としては頼りになる。

「とりあえずどうやって攻撃するかだけど、そもそもこのパーティって前衛三人後衛三人って認識でいいんだよね？」

「ああ、今回は自分どっちかというと前衛寄りの中衛で行きます」

「え、カローシスさんポジションそこってことは儀霊剣使うんです？」

「ここで使わなかったらいつ使うって話ですよ」

儀霊剣（リートゥス）……確か作成にめちゃくちゃ手間がかかる神秘の剣（レーツェル）の専用武器だったか。まぁここが切りどころではあるのだろう。
聞いた話では全力の「神秘の剣」は剣聖以上らしいが……俺が知る剣聖が猫とサイガー１００なので参考にならない気がする。

「分かった、じゃあ最終確認だ。完全な前衛がサバイバアルとウル・イディムさん。前衛を担いつつ中衛なのがカローシスさんで、中衛を担いつつ前衛なのがサンラク」

「よく分かったな」

「いやだって君、跳ね回るからどちらにせよ距離的には中衛だよねっていう」

否定できない。

「僕は今回は中衛……あーいや、やっぱ後衛で。実質前衛四枚なら無理に前出る必要ないし。そしてディープスローターさんは後衛で、これで全員いいかな？」

異議申し立ての言葉はなし。
というわけでフォーメーションが決まったので次は初手の動き……要するにどうやって奇襲を仕掛けるか、の話に移行する。

「戦闘開始状態じゃないとダメージ通らないに賭ける奴」

俺、カローシス、ディプスロの三人。サバイバアルとヤシロバードは奇襲通じる派か。

「根拠」

「流石に狙撃銃まで実装しておいて戦闘前はノーダメは運営メール案件だよ」

「ダメージが通らないくらい硬い、はあってもダメージが通らない、

ってのはねぇだろう。少なくともあのトゲ卵状態の時に殴るのは俺も反対だがよ」

なるほど、一理ある。レイドモンスターなんかは戦闘状態じゃないと勝利不可能なクソ性能だが、逆に言えば戦闘状態になれば勝利条件が確実に設定される。
だからあのトゲトゲしく丸まった状態でもレイドモンスター同様の感じだと先入観があったが……あれが寝てるのだとしたら、防御を固めているのは理にかなっている。

起きて戦闘状態になったらさらに硬くなる、が最悪のパターンだがそんな奴があんな全方位に刺々しい眠り方はしないだろう……あくまで全ては事前情報からの推測に過ぎないが。
さて、ではそれを踏まえてどういったファーストアプローチを繰り出すのか。やはり相手が反応する前に大火力を叩きつけて一割……欲を言えば二割ＨＰが削れたならもう万々歳と言ったところだがあのドラゴンのＨＰが一体どの程度なのかってのが問題だな。レイドモンスター級なら最悪朝まで……いや時間的に昼まで？

「……要スルニ、アノ竜ガ目覚メテイレバイイノダロウ？」

と、ここで沈黙を保っていたウル・イディィム氏が口を開く。その存在感に人類（俺たち）一同も慣れて来た頃合いだが、この恐るべき鋼の外見と恐るべき鋼の理性を持つオークさんは単純明快な答えを口にした。

「私ガヤツノ注意ヲ引コウ、ソノ隙ニ攻撃ヲスルトイイ」

ナイスアイデア。

……

…………

……………

と言うわけで俺は今、この可愛げのねぇ熟睡中ドラゴンの前に立っている。

「さぁて、と」

ウル・イディム氏のアイデアは確かにナイスだったが、一つだけ間違いがある。
それは現状俺よりも彼の方がＤＰＳを稼げる、という事………囮っての は最悪死んでもまぁなんとかなる者を選ぶものだ。つまり俺。
そもそも死ぬつもりはないが、奇襲という一瞬の攻撃点により多くのダメージを稼げるウル・イディム氏を囮にするのはナンセンスだ。

「………ふーん」

近づいてみて改めて分かったが、これは紛れもなくドラゴンだ。サイナからの映像転送でも結構な解像度だったが、やはり肉眼で至近距離から見るのとは比べ物にならないようで。
遠目で見た時は全身が刃で出来ているような姿だったが、間近で見ると刃のような突起の下にゴムを思わせる皮膚があるのが見えた。思ったよりも筋肉質だ、いやだからこそ「丸まった」姿になれるというべきか。さて……他の連中は配置についたらしい。というわけでそろそろドラゴン君には目覚めてもらわないとな。

「今日は心ゆくまで……芯の芯まで竜狩りを堪能していいぜ」

出番だアラドヴァル、お前の夢を叶える時が来た。
勘違いではない、インベントリアから眠れる竜狩りの剣を取り出した時……アラドヴァルが確かに熱を帯びて、ぶるりと震えた。
そして、アラドヴァルの胎動に応えるように……丸まっていた〝それ〟が動いた。

刃の翼と、恐ろしく鋭い刃を生やした腕で隠すようにしていた頭がむくりと起き上がり、半目の鋭い眼差しがじっと俺を見つめる。
ガギ、ギギギッ、と全身の鋭き甲殻が竜の目覚めに擦れ軋む。翼が広げられ、しゃがみ込んでいた脚が伸ばされた事でその竜の本当のサイズが明らかになる……いや、でかいわ。

想像態のクターニッドやジークヴルムよりは若干小さいが……翼を広げているからか、ウェザエモンが呼び出す騏驎と同じくらいのサイズにも見える。つまり今から俺達は立ち上がったダンプカーを相手にしなきゃならんって事だ。

そう、戦うのは俺だけじゃない。

「おはようございまーーーーーす！！！」

ドラゴンの咆哮と俺の挨拶が両者の間でぶつかり合って響いた瞬間、俺以外の全員が一斉に攻撃を仕掛ける――――！！

『真なる竜種（The True Dragon）：Ｎｏ．Ｘ』

『Tomahawk（トマホーク）』
『参加人数：六人』
『竜狩りが開始されました』

１２月１５日：我は十番目の真理。汝、刃の鋭きを畏れよ（後書き）

さくせん：ガンガンいこうぜ！！

１２月１５日：タクティカルエンカウント

「ギィララララララララララッ！！！」

無防備な刃の竜……否、アナウンスに偽りなければ第十の真なる竜種「トマホーク」の背中に爆炎が炸裂する。さらに左右からぐらつくトマホークへとサバイバアルとウル・イディムが肉薄。攻撃を仕掛け……何っ

「怯んでねーぞ！！」

あれ食らってちょっとよろめいただけか。だが俺の言葉は確かに届いた、その上で二人はさらに前へと踏み出す。
トマホークの首がウル・イディムへと向き、その巨体を比較的脅威度の高い方へと向けようとした瞬間……

ガンゴンッッ！！

遠方より二度の銃声、そして一瞬の間を置いて飛来した二発の銃弾がトマホークの顔面に痛烈な一撃を炸裂させた。振り向いた瞬間にビンタされたようなものだ、トマホークの顔は不自然な動きで弾かれるが……それだけだ。
だがその一瞬があれば、既に射程距離まで踏み込んでいた二人の攻撃が叩き込まれるには充分すぎる隙となる。

「おおおおおおっ！！」

「ヌゥゥゥアアッ！！」

ウル・イディムの鉄拳がトマホークの右膝に、サバイバアルの大鉄鞭（だいてつべん）がトマホークの左脛に叩き込まれた。ただのスイングじゃない、事前にこのメンバーでかけうるバフの悉くを付与した会心の一打だ……だが、

「硬え！　やべーぞこいつ！　マジで手応えが薄い！！」

「グ……」

分かっちゃいたが……硬い！！　攻撃が無効化されるよりもタチが悪い、ただただシンプルに高過ぎるＶＩＴ、硬過ぎる甲殻！！

五人分の奇襲を受けたにも関わらず、全く堪えた様子のないトマホークが無造作に腕を振るう。やはり狙われたのはウル・イディム氏、「刻傷」は戦闘中のヘイトにも若干影響していたはずだが、それを上回る脅威を感じ取っているってことか。

だが泣けるぜ、せっかく目の前で見せてやったのに……

「刃点火（イグニッション）！」

ＭＰを種火に、アラドヴァルへと火を灯す。ただの炎じゃない、この灼熱は竜を屠る！！

「特効スラッシュ！！」

アラドヴァルが新たに獲得した能力「焔爆（ニトロ）」はクリティカルを意図的に外さないとパラメータが蓄積されない。随分とまた面倒な効果になっちまったが、既に俺はこの問題を解決している。

くくくく……これぞキャッツェリアで買い占めた「なまくらの松脂」！　武器に塗りたくることで二つの効果を得る！！
一つはクリティカル成功率の極端な低下。具体的に言うと俺が真面目にスイングしてクリティカルに失敗した……小数点以下の確率ってやつだな。

そしてもう一つは……

「焼いて！　灼く！！」

攻撃時、松脂が発火し燃え上がる！！
竜を灼くアラドヴァルの炎と、なまくら松脂の燃焼。二つの炎を鈍い斬撃に変えてトマホークの脛を斬る。手応えに妙を感じる、弾かれたわけではない。だがこの、タールか何かに棒を叩きつけたような、めり込む感触は……

「オッケェエエエエ！！！」

答えは傷口を見ればすぐに分かった。アラドヴァルの刃はトマホークの外殻をほんの僅かに焼き溶かしている！　いいねいいねいいね！　俺は今〟アドバンテージ〟をその手に握っている！！

「百万回斬ってお造りにしてやるよ！！」

非クリティカルな攻撃、故に「焔爆」が蓄積されていく。そして「焔爆」が蓄積される事で第三の能力……「焔爆」の蓄積に比例してアラドヴァル自身の性能を上げる「焔研（トルク）」の期待値が上がっていく。
なまくらの竜殺しを振るう度、トマホークの刃の外殻に溶断の跡が刻まれる。ここでようやっと一番雑魚そうな虫けらが持つ剣こそが

最も危険なのだと気付いたらしい。体格差を十全に活かしたタックルを仕掛けてきたが……遅すぎる。
そしてこれはパーティ戦だ、俺一人を注視していれば当然……

「ウル・イディム！　合わせろ！！」

「承知シタ」

二足歩行の宿命、それは身体を支え立つという重要な役割をたった二本の脚に依存するということ。
俺を真正面に見据えた事でフリーになったウル・イディムとサバイバアルがトマホークの足元、さらに言うなら足首の辺りに駆け込む。
次の瞬間発砲音、放たれた弾丸は真っ直ぐトマホークの横っ面に命中……しかし、今度は弾かれない。

ベチャ！！

「ギリリリリ！！？」

トマホークの顔半分を覆った粘着質なトリモチ、それは鬱陶しさ以上に視界の半減という或る種致命的な隙を作り出す。そして反射的にトリモチ弾が飛んできた方向に身体を向けた瞬間……

「コケやがれ！！」

トマホークの両足首に別々の方向へとかかる強い衝撃。本能的な攻勢に転じた足腰は踏ん張りに欠け、そして二足歩行の宿命はドラゴンといえど逃れられない――

「サバイバアル！！」

「応！！」

仰向けにバランスを崩すトマホーク、その足元で大鉄鞭をホームランスイングしていたサバイバアルが丸太を担ぐような姿勢でこちらに背を向ける。そこに駆け出した俺は跳躍、そして鉄鞭の上へと着地……行くぜ人力カタパルト！！

「おおおおらぁっ！！」

人力かつ強引な二段ジャンプによって高らかに跳び上がった俺はさらにそこから空中ジャンプで高度を稼ぐ。
眼下にトマホーク、塞がれていない方の目で俺を睨んでいるのが見える。だがどこからか投擲された噴進機付加速打撃装置（ジェットハンマー）がドラゴンの下顎に命中……ナイスだサイナ。打撃は顎か側頭部、鳩尾を狙えと教えた甲斐があった……最近はシャイニングウィザードを教えている。

跳躍による重力への反逆の時間が終わり、身体が大地へと落ちていく。だがその最中、どこからか吹いてきた風が俺の身体を包み込み、さらに真下で青天井にひっくり返ったトマホークの全身に蜘蛛の巣を思わせる魔力の線陣が刃の竜を大地に縫い留める。
快調！　順調！　絶好調！！　理想的なムーブだ、既に大きな隙を晒したトマホークへとそれぞれが大火力を叩き込む用意を済ませている。そして俺も、カローシスが付与した落下衝撃軽減の【エア・クッション】の上位魔法【フォール・オン・ウィンド】によって落下死の危険を気にせずアラドヴァルを構えてトマホークの胸部へと飛び込む。

「焔爆（ニトロ）！！」

なまくら松脂の効果は消えた、ならばアラドヴァルは真の切れ味を取り戻す……漆黒の刀身は真紅に燃え上がり、熱き蒼炎(ブルー)に輝いている！！

「あわよくば心臓に刺され！！」

ミニガンが、鉄拳が、魔法が、方天画戟が、そして竜殺しの鋒が……その全てがトマホークというドラゴンを打ち砕くべく叩き込まれる！！

このまま動きを止めて一斉攻撃を繰り返して――――

「緊急：異常反応。契約者(マスター)……失礼」

「おごっ」

ちょっ、サイナいきなり人を猫みたいに掴んで何を……！

その時、気づいた。

トマホークの胸部に突き立てられたアラドヴァルが、尋常ではない勢いでバイブレーションしている事に。少なくともあんな振動する効果はアラドヴァルにはない、であればこれは……

「全員離れろっ！！」

俺の声は果たして他の連中に届いたのか。もはや隠す事なく凄まじい振動を上げるトマホークの身体から衝撃波が放たれ、首根っこを掴まれた俺と掴んでいるサイナは共に吹っ飛ばされたのだった。

12月15日：タクティカルエンカウント（後書き）

超音波動（ハイパーハーモニクス）
トマホークの刃殻は厳密には皮膚や甲殻ではなく筋肉に近い役割を持ち、全身の刃殻を異常振動させることで周辺空間のマナ粒子を誘引付着、一気に解放して広範囲に衝撃波を放つ。

12月15日：背筋が凍るほどに情熱

「おああああああ！！？」

なんだ今の衝撃波！？　くっ、体勢のリカバリは……問題なし！！

「サイナ！　装備解除！」

「了解：」

ゴタゴタとした装備を一旦全て解除したサイナを空中で抱き抱えつつ着地、カローシスが付与してくれた魔法の効果がまだ生きていて助かった。

「全員生きとるかーっ！？」

「バイブだねぇ！！」

悔しいがこんなのでも戦闘中は貴重なダメージリソースだ、頭にチョップだけしておく。

「距離を取ってた三人は無事、サバイバアルとウル・イディム氏は……」

ええと？　位置的に吹っ飛ぶならあっち方面……お、いた。
どうもあの衝撃波に直撃したらしいサバイバルだったが、流石に俺よりヤワって事はあるまい。飲み干した回復ポーションの空瓶を投げ捨てながら突っ込んでいくサバイバアルに合わせて支援射撃を行

うヤシロバードを視界の端に捉えつつ、こちらもサボってはいられねぇと視線を動かす……あった！

「サイナ！　アラドヴァルを回収！　んで手渡しな！！」

「了解：」

参った、盤面リセット持ちは厄介だぞ。どうせ全身刃物だし突進技とかメインだろ、とか呑気してた。そりゃエンドコンテンツモンスターがそんなに生ぬるいはずがないのは分かっていたが……

「どこにしまい込んでやがったんだあの野郎……」

文字通り、風すら切り裂くような唸りを上げてトマホークの尻尾が高原を薙ぎ払う。サバイバアルの奴は器用にジャンプして回避していたが、逆に言えばサバイバアルでも防御はしたくないって事だ。

「サンラクさん、魔法職は当初のプランで行く。ヤシロバードさんには引き続き狙撃……サイナさんに陽動をやって貰いたい。どうです？」

「攻撃しなくていいんだろ？　聞いての通りだサイナ、全力で回避頼む。ありゃ絶対遠距離攻撃持ちだ、距離のアドバンテージを考慮しても活用しようとは考えるなよ」

「了承：しかしながら当機（わたし）のインテリジェンスは自動（オート）でアドバンテージの活用法を演算する可能性がありますが」

「油断して被弾しなけりゃなに妄想しても構やしねーよ！！」

サイナが回収してきたアラドヴァルを受け取って一気に前へと飛び出す！！

「ようトマホーク！　ちょっとパンクが過ぎる尖り方だなテメー！　どうせなら綺麗さっぱり丸めてやるよ！！」

アラドヴァルは現在、蒼炎に照らされ青色に輝きを放っている。焔研（トルク）の段階は四つ、青は確か……二つ目。まだまだトロ火って事だろう、だったらもっともっと熱くしてやるよ……とりあえず松脂塗りますね。

「よっしゃあ！」

赤と青、混じって紫に揺らめき燃えるアラドヴァルを携えて空中ジャンプ。どうやらトマホーク側も俺の存在……否、アラドヴァルの存在に気づいたらしいが、生憎と危険度トップは俺じゃない。

「ヌゥア！！」

さしものドラゴン様も人型決戦兵器オークことウル・イディム氏に尻尾を掴まれては平常に迎撃、とはいかないらしい。

「オオオオオオオオッッッ！！！」

ビン！！　と金属質な尻尾がまっすぐに伸びる。トマホークの鋭利な外殻を、同じく堅牢な己の外殻で無理矢理掴みながらウル・イディム氏は尻尾を引っ張るがトマホークも対抗する。

僅かな拮抗、しかしやはり根本的な重量差は覆し難いらしく尻尾の筋力だけで持ち上げられたウル・イディム氏が勢いよく宙に吹っ飛ばされる。だが一人が気を引けば残る面子が一歩進める。

「禿げ上がれバリカン！！」
スキル「虹光の断閃(スペクトル・スラッシュ)」、「百閃の剣(ヘカトン・スラッシュ)」と比較してヒット数増加の上限が7と極端に低い代わりに、効果時間とダメージボーナスが追加された事で恐ろしい程のDPSを叩き出す攻撃強化スキルだ。
紫に揺らぐ刀身に虹の軌跡を乗せてトマホークへとアラドヴァルを振るう。だが刃の竜が繰り出した剛腕……厳密には腕から真横に突出して生えた特に太い腕刃がアラドヴァルを迎撃する。

「くっ」

〝俺(サンラク)〟の……というか空中技の致命的な弱点、それは踏ん張りの弱さだ。基本的に空中歩行系の技は足裏に虚空を踏む判定が与えられる。つまり根本的に「踏ん張る」というモーションに向いていないのだ。
踏ん張る、という行動は地面があって初めて真価を発揮するもの……大地は大事。
要するに、巨大ドラゴンの剛腕と空中タップダンスの俺とでは根本的に力の拮抗というものは成立しない。それを成立させ得る数少ない可能性も手元には無い、つまり俺の身体は勢いよく吹っ飛ぶわけだが……

「悪いが、最初からヒットアンドアウェイ想定だ」
スキル「相対的立体運動(ソリッド・マニューバー)」で空中に物理的にあり得ない軌道の円を描いてトマホークの腕刃を回避、そのまま地上に着地してアラドヴァルで二度斬りつける。

元から長期戦上等でここに来てるんだ、じっくりコトコト限界留めなくなるまで煮込んでやるから覚悟しろ……！

「さぁ、やってみようか化学実験！」

俺、サバイバアル、ウル・イディム氏の役目は「叩き役」であり……「陽動」だ。直接殴って体力を削る叩き役は前衛の華だが、同時に陽動という脇役である以上、主役は後ろにいる……！！

「ハッハー！　樹海じゃ使えない武器だけどここなら思う存分ぶっ放せるのさ！　ファイヤー！！」

「まだ序盤も序盤だ！　あんまり使いすぎないでねヤシロバードさん！　じゃあこっちも……【着離れぬ炎外套（カース・ローブ・ヒート）】！！」

一才の躊躇いも加減もなく最大の強火で放たれた火炎放射器の炎、さながら外套のように竜の身体を覆う呪われた炎の衣。

それらは材質の根本がなんであれ、表面上は金属質であるトマホークの身体を温める、という言葉が文字通り生ぬるい程に熱く加熱する。

そしてもう一人、

「……んふふ、ゾクゾクさせてあげるよバイブ君……出力八十倍【心頭滅却の聖衣（インナード・クロス・フリージン）】！」

本来は炎に包まれた己の身体を鎮火するのではなく対象の体表温度を下げる事で耐える、という使い所が限定的過ぎるが故にネタ魔法の烙印を押しつけられた耐熱強化魔法【クールダウン・スキン】。

だがそれも、実現杖ザ・デザイアーの力によって出力を八十倍にま

で倍加させられたならば。それはもはや、体表温度を一瞬で0度以下まで冷やすことで体表の皮なり甲殻なりに包まれた体内を蝕む絶氷の死装束へと転用される。

「義務教育は済ませたかトマホーク君！　これが金属疲労だぜ！！」

強く熱し、強く冷やす。物質は相反する「熱」の極端を浴びせられるとその靭性を喪失する！　理系じゃないのでよく分からんが他の面々がなにも言わないなら多分合ってるんだろう！！

よーし、ぶちかませっ！！

１２月１５日：背筋が凍るほどに情熱（後書き）

ディプスロ（サンラク君自信満々だし行けるんだろうねぇ）
サバイバアル（よく分からんがまぁ行けるだろ）
ヤシロバード（火炎放射器たーのしー！　折角リアリティのあるゲームなんだからやっぱ生物に向けたいよねぇ）
カローシスUQ（徹夜の気配！！）
ウル・イディム（よく分からないけど彼等も無策ではないのできっと意味があるのだろうと口出ししない）

作戦、ヨシ！

１２月１５日：残酷に斬刻を

大体三十分経過。

熱疲労ってのは、金属に度重なる熱による負担が掛かることで柔軟性を失って破損すること……だったはず。だがそれは何度も何度も……それこそ数千数万と熱して冷やしてを繰り返した果てに起きる事だ。じゃなきゃ世界中のフライパンは紙皿よりも高コストな消耗品になってしまう。

だがシャンフロというゲームにおける超常の物理現象である魔法ならばワンチャンいけるんじゃね？　と全身を金属質な甲殻で覆うトマホークに対して「熱して冷やして作戦（バーン・トゥ・フリーズ）」を仕掛けたわけだが……
…金属を赤熱するほどに加熱し、冷却してまた加熱する。この一連の動作、とある「作業」では別の名前で呼ばれている。

即ち、鍛造における「焼き入れ」と。

「だあああああああああ！！？」

ヴァウンッ！！　と文字通り風を切ってトマホークの尾が円弧を描く。月の光を受けて草木も凍るような冷めた輝きを放つそれは加熱と冷却、そして打撃にも負けずさらなる冴えと鋭さを見せている。当然あんなもの直撃したらサン／ラクになってしまう。サ／ンラクかもしれないがそれはどうでもいい。一つ言えるのは、バーン・トゥ・フリーズ作戦は完全に失策だったという事だ。

「クソーッ！　なんでどいつもこいつも自信満々だったんだよ！？」

しかもあの剃刀ドラゴン、どうも自前で焼き入れするモーション待ちというか、途中から炎系魔法を当ててないのに奴自身が高温化している気配がする。加熱していないはずの膝部分が紅く熱と輝きを放っている上に、それを利用して器用に膝蹴りをウル・イディム氏にかましていた……それは「膝が白熱していること」が想定内でなきゃ出来ないことだぜ。

だが、これでトマホークの能力が段々分かってきたぞ。

まず第一に肉体の超振動。全身から衝撃波を放つ身震いや腕刃や尻尾を振動させて威力を上げる超振動ブレードなど、シンプル故に使い回しが良い。一応、音や見た目で予備動作の察知は容易なのでトチらなければ対処はできる。

第二に、肉体の加熱とそれに伴う自身への焼き入れ強化。

これもまたシンプルなのだがそれ故に厄介だ。下手に触れれば火傷しかねない温度まで甲殻を加熱、そして外気に触れて冷えると肉質が一気に固くなる。どれくらい硬いかってウル・イディム氏の攻撃でも歯が立たないレベルだ。

だが、視点を変えればそれらはこちらの攻略に役立つチャンスでもある。

「ディープスローター！　さらに加熱しろ！」

「いいよぉ～……カローシス君、ちょっと協力してもらってもいいかなぁ？　はい、【熱照鏡（ルーペン・アディオンヒート）】」

「把握した、【炎獄海の渦焔（インフェルノ・ストローム）】！！」

カローシスの持つ儀礼剣から放たれた炎の渦が空中に生み出された

光の穴へと吸い込まれていく。そして次の瞬間、炎熱が一点に収束したレーザーの如き一撃がトマホークへと解き放たれる。

炎魔法のピントを〝絞る〟事で威力が上がった炎熱の光に対し、トマホークは両腕を交差する事で防御とする。鋭く、そして強固な外殻は鉄板程度なら容易く貫通しそうな炎熱の光を受けて尚、耐え切ってはいるものの外気に触れる程度では治らない程に加熱され、白銀の外殻は紅く熱を帯びていく。

「焼けた刃で勝負と行こうぜトマホーク！」

松脂が燃え尽き、銀に輝く竜狩りの炎。焔研（トルク）第三の炎たる銀焔の剣を握りしめて加速。今の俺は、キャラクタービルドにおける最後の一線すらも超えている。この速度は踏み超えた者にしか追いつけねーぜ！！

◆

シャンフロにおけるキャラクタービルド。それはステータスパラメータは当然のことながらスキルと魔法を如何にして鍛えるか、という命題と向き合うことにある。

上は近接、下は生産までシャングリラ・フロンティアには多種多様なスキル魔法が存在し、しかしそれらは無限に習得できるわけではない。

スキルと魔法の習得数には上限がある。それは決まった数ではなくプレイヤーのレベルやスキルの性能にもよるが……少なくとも、プレイヤーはある時点からスキルや魔法をそれ以上習得できないラインがあることだけはプレイヤーの手によって解明されている。

まぁ要するにポイント制みたいなもんだろう。プレイヤーは１００

ポイント持っていて、このスキルは覚えると20ポイント消費、こっちは15ポイントで保有ポイントを使い切るとそれ以上は習得できませんよ的な。

だがこの習得上限……実は魔法とスキルで共有されている。100ポイントの内、50ポイントを使ったら魔法も50ポイント以内でしか習得できないということ。つまり真の意味でスキルだけに、あるいは魔法だけに己の可能性を捧げた者とはこの習得上限に収まる範囲の全てをどちらかに偏らせた者を指す。

「俺は純物理アタッカーを卒業した……」

今の俺はピッカピカの純スキルアタッカーだ。魔法を覚えられる可能性を潰してその代わりに得たもの……それはかつて習得し、強化あるいは進化で消失したかつてのスキルの再取得！！

「まだ冷えてねーんだ！　そんなヤワな刃にアラドヴァルが負けるかァ！！」

そして、スキルの再習得はさらに予期せぬ可能性を齎す。

スキルの発展性はプレイヤーの行動と密接に関わっている、二人のプレイヤーが同じスキルを持ってスタートしたとしても別々のプレイスタイルから違うスキルになるように、かつての俺と今の俺が同じスキルを持ったとしても同じ道を辿るとは限らない！！

「くたばれニュートン！　俺はお前を全否定する！！」

「無重律の恩寵（スペースチャージ）」……プレイヤーの意思で重力の方向を変える、というシンプル故にそれ以上の効果が余分とさえ思える再取得したスキルを発動し、俺は万物が有する「上から下に落ちる」という大原

則を逆転させる。これで俺は下から上へと落ちる状態になったわけだ……今こそ見せよう、これが新技その１！！　同じく再取得した「遮那王憑き」が鞍馬天秘伝とは別の道を辿った新・進化スキル！！　その名は「黒影逆落とし」！

落下速度を加速させる、というお手軽自殺促進装置としか思えない効果も落ちる先が果て無い空ならば無尽蔵の加速となる！　無重律の恩寵は効果時間中なら何度でも重力方向を変更できるからそのまま宇宙へ――なんてことにはならないし、最悪インベントリアに逃げ込めばなんとかなる。

そして！！　地より天に落ちる俺を叩き落さんと振り下ろされた剛腕……それこそがもう一つの新技を発動するための最後のピースだ。キャッツェリアでアラミース君一押しの秘伝書で覚えた斬撃版クロスカウンター、敵の攻撃に対して向かっていくことで威力が上がる斬撃系スキル。攻撃スキルだしせっかくなので音声認証。

「交衝迎閃」！！」

激突する二つの熱刃。だが片や単なる加熱現象……こちとら生憎、竜殺し！！

銀焔の刃がトマホークの腕刃にめり込んでいく。叩き切るのではない、「竜を狩る炎の刃」という性質故に竜の肉体を焼き斬ることに特化したアラドヴァルの斬撃は熱を帯びた代償に硬度を損なったトマホークの外殻を焼き溶かしながら剣たる本懐を果たす。

クリティカルヒット故に焔爆による強化を受けたアラドヴァルから伝わる粘り気の強い粘土を断ち切ったような感覚と共に、全身に凄まじい浮遊感。上空へと落ちていく中で、遠ざかる大地を見ればそこには溶断されたトマホークの腕刃が千切れ飛んでいくのが見えた……よっしゃ部位破壊。素材落ちるかな？

１２月１５日：残酷に斬刻を（後書き）

・習得技能上限
実際のところ、これが埋まるのは余程節操なしにスキルや魔法を習得した時くらいである。
というのも、ゲームプレイ的に「最低でもメイン二つサブ二つ、合計ジョブ四つ分」程度はキャパシティがあるので技能上限までスキルや魔法を覚えないプレイヤーの方が多いくらい。
ただ、同調連結に手を出すと途端にこの習得技能上限と嫌でも付き合っていくことになる……なにせ優れたスキル同士を連結するほど強力なスキルに生まれ変わるなら、リソースのデカいスキルを大量に覚えないといけないので。

え？　魔法には同調連結みたいなのは無いのかって？

あるよ。

１２月１５日：斬刃を見て何を思う・１（前書き）

全てのきくうし様に捧げる………特に朝っぱらからＡＴ突入した相手騎空団は１日かけて他の作業全部中断して読んで欲しい……

12月15日：斬刃を見て何を思う・1

◇

「んー、分かってはいたけど火力貢献出来てる気が全くしないなぁ」

銃身が赤熱したライフルを格納空間内に入れ、代わりに別のライフルを取り出しながらヤシロバードは嘆息した。
そもそも全身が超振動する金属、という時点で銃火器とは致命的に相性が悪いことは薄々勘づいていた。リアルなら一発で人間の頭が吹っ飛ぶような銃弾も、こちらではＶＩＴ次第ではそこそこ耐える人間までいる始末だ。
では銃という武器種が完全に無価値かといえばそうではない。もしそうなら、弓矢はもっと悲惨な扱いになっているだろう。銃には銃の強みがあり……今こそ、それを発揮する時だった。

「全く……相変わらず面白ムーブをしてくれる、よっ！」

溶断されたトマホークの腕刃が地面に突き立った光景をスコープ越しに目撃したヤシロバードは、スコープから目を離して肉眼で空へと真っ直ぐに飛んでいく加害者（サンラク）と悲鳴混じりの咆哮を上げる被害者（トマホーク）を視界に収める。
あえて加熱を続行し、僅かに硬さが損なわれた瞬間を断つ。それだけであれば心得のある剣士プレイヤーなら実行はそう難しいことではない。だがそこに「足から空に向かって加速して飛ぶ」という条件までつけられるプレイヤーは……探せばいるかもしれないが今の

ヤシロバードには思い付かなかった。

「このままじゃあ、銃が役立たずと思われるか……」

そんな事はあってはならない。実際のところ、アレは剣が凄いとかそういう話ではないがこのまま目潰しだけしているようでは他でもないヤシロバード自身が納得できない。

であれば力を示さなければならない。ヤシロバードが持ち込んだ銃器の殆どが通用しない真なる竜種「トマホーク」に対して、銃という武器の輝きをだ。

「ふふふふ……試し撃ちを除けば初の実戦運用か。まぁ、相手に不足は無いか」

チェストリアはインベントリアのダウングレード版であり、格納空間内へのユーザー転送機能こそ削除されているものの、無制限の道具袋という点ではインベントリアとなんら遜色はない。

ヤシロバードはチェストリアを操作し、三つのオブジェクトを現実空間に喚び出す。

「特務用執行機装（ＳＰデューテエクスキューデバイス）タイプ：カウルケニン……銘は「Ｏｎｅ　ｓｈｏｔ　ｉｓ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ」。そしてこれが僕の切り札……神代の遺産、ゲームながら尊敬すべき先人達の遺した大いなる魔弾！！」

一つは、ＳＦチックな見た目とは裏腹に時代に逆行するようなマスケット銃。銃としての古臭さとは裏腹に狂気すら感じられるほどの研究と試行錯誤による設計から生み出されたそれは、とある弾丸を運用することに特化した構造となっている。

そして二つ目、ある運用のためにこれもまたヤシロバードが設計し

たグレネードランチャー。これそのものは切り札を十全に活用するための前段階に用いるものだ。
最後に三つ目……それは銃器に装填する弾倉（マガジン）だ。だがそれが単独で存在していることは……シャングリラ・フロンティアというゲームにおいては少々異常なことであった。

何故ならば、シャングリラ・フロンティアにおける銃火器は基本的に弾倉が単一のアイテムとして存在しないからだ。拳銃からロケットランチャーに至るまで、弾丸は実弾非実弾を問わず銃そのものが生成する。それは魔力……マナ粒子という都合よく理屈をつけられる設定があるからこそであり、ギミックとしてマガジンが外に展開することはあってもそれが銃から取り外されることはない。
例外として拡張エネルギーバッテリーを外付けで装備する、といった銃もあるにはあるが、ヤシロバードが取り出したそれは正真正銘弾倉（マガジン）である。それはつまり、どの銃器からも独立した弾丸を生み出すアイテムということ……そして、これこそがヤシロバードが持つ最大の切り札。

手のひら大の武骨な金属の塊。その表面には「Ｌｅｗｉｓ（ルイス）＆Ｇｉｌｂｅｒｔ（ギルバート）」の文字ともう一つ、別の文字が刻印されていた。
『ＳＡＭＩＥＬ　Ｂｕｌｌｅｔ－ＩＶ：Ｍｅｇｒｅｚ』

◇◇

「参るぜ、全くよぉ……」

度重なる激突と、剛刃の防御という酷使の末に刃毀れした方天画戟を見つめながら、サバイバアルは嘆息していた。
壊れこそしていないが、武器が使い物にならなくなったこと……ではなく、サバイバアルの憂鬱の原因は恐るべき自称オークこと王(ウル)・狗(イディム)であった。

その性能、まさしく剛力無双。攻撃的な鋭角さにばかり目がいかが恐ろしいまでに肉体を護るという点に秀でた外殻。その四肢より繰り出される打撃は容易く岩を砕き、竜の体躯を震わせる。
そのくせ、どういう原理か身体からジェットの如く魔力を噴射して機動力を補っている。
――ウル・イディムは姿を見失うほどの速度は出せない。
――ウル・イディムは遠距離から雨霰の如き射撃はできない。
――ウル・イディムは火や雷を操るような魔法は使えない。
――しかし、ウル・イディムは肉体強度に物を言わせて前線を張り続ける事は出来る。
そしてそれはつまり、サバイバアルの役割とダダ被りしている上に……認めたくはないが、ほとんど上位互換であった。
「クッソ……あのアバター使わしてくんねぇもんか……」
格闘戦を主体に一発一発が致命絶命の必殺級、というウル・イディムの性能はシャンフロを始めたばかりのサバイバアルが目指した到

達点そのものであり……しかし、泣く泣く諦めた憧れの果てだ。

「しかし……どうしたもんか」

ウル・イディムと自身の比較ではなく、トマホークへの対応について、だ。

そもトマホークという全身金属に等しい敵に対して、サバイバルの膂力ではほとんど有効打が出せていない。厳密にはただ武器を振っただけの攻撃ではほとんど通用しない…が正しい表現だが、それでも一発一発が確実にトマホークの芯を揺らすウル・イディムと比較するとやはり見劣りするのは事実だ。

「……へッ、無いものねだりしてそれが手に入る生活にゃぁ憧れるが、やっても無駄ならやるだけ無駄だ。だったら一発でも多く殴りゃあ勝ちの目も見えてくるってなぁ！！」

そうやって人生を歩んできた、そうやって孤島を生き抜いてきた。であれば、シャングリラ・フロンティアであってもこの大原則が揺らぐことはない。リアルに限りなく近いゲームであるというならば……現実(リアル)での生き方と、もう一つの夢(リアル)での生き方が間違いのはずがないのだから。

「ハイエナに甘んじるのは癪だが………ウル・イディム！！」

「呼ンダカ」

「なんでもいい！　傷を作っちゃくれねぇか！！　こじ開ける！！」

「承知シタ」

サバイバアルの攻撃はトマホークに対してほとんど有効打たり得ない、だがそれは前述の通り「ただ武器を振り回した場合」だ。即ち、ただ振り回すのではなく一手間を加えたならば。

かつて夢見た最強の打撃、諦めたのは道の一つでしかない。

「パーティプレイだ、張り合うのも悪かねぇが協力しねぇとな」

サバイバアルが試行錯誤の果てに辿り着いた答え、それは現在のメインジョブを拳闘士系にするのではなく戦士系統の最上位ジョブ「戦王」に就職したことだ。
戦王はあらゆる武器を使いこなし、その真価を発揮する戦いの王。装備した武器に対応したスキルの出力を上げる「武威解放(ウェポンドライブ)」によってあらゆる武器を専門職と同等の出力で運用することが可能となる（尤も、スキルや魔法を武器ごとに分散させなければならないので真に一芸特化したジョブには劣るが）

「全身が何で出来てようが分類上は生物なんだろう？　だったらコイツの効果も通るだろ」

血濡れた王者の帯(ブラッド・チャンピオンセスタス)。それはシャンフロ内に存在するとあるＰｖＰコンテンツの優勝景品であり、阿修羅会のランキングはキル数であって強さの指標とは限らないことを証明するサバイバアルの「阿修羅会全抜き」の証。

染み付いた犠牲者の血によって赤黒く染まった拳帯を巻いた拳を構えて、睨む先は刃の竜。

「ぶちかますぜ……「重法徹化拳(じゅうほうとうかけん)」！！」

ドラゴンに対する特攻があるとしても、己よりも速く動けるとしても。自分よりＳＴＲの低い半裸に出来て自分に出来ない道理は無い。
如何なる敵をも捩じ伏せる力は確かに今、サバイバアルの手が握りしめている。

12月15日：斬刃を見て何を思う・1（後書き）

・血濡れた王者の帯（ブラッド・チャンピオンセスタス）

旧大陸裏社会の地下武闘会優勝景品。全員が無地のセスタスしか装備できない制限を受けた状態で総当たり戦を行い、優勝した時に敗北した者達の血で赤く染まった王者のセスタスが完成する。

相手を傷つけるほど威力が上がっていく能力を持っており、尽きせぬ暴力で相手を死に至らしめる様はまさしく血に酔った残虐の王者そのものである。

阿修羅会はメンバー全員でこの地下武闘会に参戦し、結果としてサバイバアルがほぼ全員殴り倒して優勝した（鉛筆が「え？サバイバアル君とガチ殴り合いなんてやるわけないじゃん」と棄権したので全員ではない）（背中がお留守だぜオルスロットぉ！！）

本当は一話に収まるつもりだったけどこいつらの描写長すぎたので前後編に分ける

１２月１５日：斬刃を見て何を思う・２

◇

楽しい。カローシスＵＱの率直な感想であった。

別に午後十時軍のメンバーとの時間が退屈だとか、つまらないとかそういうわけではない。綿密な計画を立て、万全の準備を整え、予想外を極力発生させない動きで成功を得る。地味な素材周回も強力なモンスター討伐も、無尽蔵に時間があるわけではない自分たちがそれでも手持ちの時間を十全に楽しむ確実な方法だとカローシスは確信している。だが、それでも。

「ははは……参るなぁ。先の見えない大苦戦だ」

ぶっつけ本番、パーティメンバー同士の情報共有すらロクになく、挙句それぞれが好き勝手に動くことすらある。

戦闘の流れでいつしかパーティリーダーのような役目を請け負っているカローシスの指示を無視して動くときもあれば、逆にカローシスへと一方的な指示が飛んでくることもある。

この戦闘におけるカローシスの役目は中距離で前線の援護をしつつ、後衛にヘイトが向くのを防ぐ中衛の立ち位置だ。よく言えば遊撃的バランサー、悪く言えば中間管理職である。だがその中衛を前衛と後衛が全力で活用しようとしてくる。

「カローシス！　バフ頼む！！」

「カローシスさん、ちょっとの間あいつの動き止められたりしない

かな」

現に今も、強化支援要請と攻撃要請の二つが同時に飛んできた。サンラクが切り落とした腕刃を見てパーティメンバーの面々は一気に攻勢に移ろうとしている……故にカローシスの負担は加速度的に増大していく。だがカローシスは指示の板挟みにそれでも笑う。

午後十字軍の、リソースを計画的に合理的に使うような攻略とは違う。エリクサーを初手で使い切るようなギリギリの……ひりついた攻略。それはカローシスにとっては普段感じられない新鮮な刺激だ。

「いいね、ドラゴン退治で勿体ぶる方が間抜けさ……！【小さき掌に大きな勇気（イグザージェレーション・ブレイブ）】！！」

高額な使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）も、手間のかかりすぎる儀霊剣も、温存を捨てた全力稼働でカローシスは動く。

敵は真なる竜種トマホーク。きっと、討伐が成功したその時……何もかもを失っていても笑顔で受け入れられるだろうと信じて。

◇◇

天に落ちる彼と、僅かでも確かに身体を砕かれた金属の竜。ディープスローターは高揚と鎮静の乱高下を繰り替えす自身の感情を何とか制御しながらも、その目はじっとサンラクを見ていた。

「嗚呼……やっぱり君だよ、君しかいない……………君しかいらない」

トマホーク。見れば見るほどにディープスローターの心を揺らす不愉快な竜。一体何が癪に障るのか、と聞かれたとしたら「大体全部」と答えるだろう。
それはディープスローターが実は「真なる竜種」という存在の知識をある程度ではあるが有しているから、そして「全身が金属の真なる竜種」という存在であることそのものが癪に障るのだ。
トマホークが怒涛の攻撃を耐えしのぎ、反撃する姿が不愉快で。
トマホークがその性能を十全に発揮し、君臨する姿に反吐が出る。

だからこそ。
だからこそ、この場にいる誰よりもサンラクの焔剣がトマホークを斬った事実に歓喜しているのはディープスローターだ。ディープスローターがトマホークに重ねた不快の影を斬って裂いていく姿は、まさしくヒーローのそれで。

「ふふふ、ふふふふふ！　サンラクくぅん……君は本当に、私を助けてくれるんだね……君のためなら私はなぁんだってしてあげる……」

実現杖ザ・デザイアー。非攻撃魔法の出力を倍加させるただ一つの杖は、無条件でその恩恵を使用者に与えるわけではない。使用条件の一つとして倍加能力使用後は装備変更ができず、なおかつザ・デザイアー自身は攻撃魔法を発動することができない。
その問題点をディープスローターは貪る大赤依戦の討伐報酬である「渇望の手（ハンド・オブ・グレイブ）」である程度解決こそしているものの、消費ＭＰや片手で装備できる武器性能の兼ね合いからザ・デザイアーは気軽に使えるものではない。だがそんなことはどうでもよいとディープスローターは実現杖ザ・デザイアー（あらゆる欲を叶えるもの）を行使する。
「ふふ、今ならその剣にだって喜んで焼かれてあげる。あ、いつも

のことか……じゃあもっともっと強くしてあげなきゃあね……その剣で、その炎で影を……私を蝕む現実(かげ)を斬って、斬って、斬って……！」

天に落ち続けていた人影がかろうじて肉眼で確認できる位置でゆっくりと止まる。僅かな対空、そして正しい重力にようやく従った身体が今度は下へと落ちてくる。

サンラクの身体は殆どの魔法を殆どの場合弾く。それは腕を含む胴体と腰を除いた下半身という体の大部分を占める胴と脚にリュカオーンの「呪い」、その発展形が刻まれているからに他ならない。
つまりサンラクに魔法的干渉をする場合は特定の範囲全体に適用されるタイプの魔法は使えず、弾丸のように付与対象へとぶつける魔法を使うしかない。

その前提を踏まえると、目まぐるしく動くサンラクの後頭部へ的確に魔法支援をぶつけていたカローシスの腕前はディープスローターをして〝出来る〟と評価するものであったが……なればこそ。

「それ以上の成果を出さなきゃ君は満足できないよねぇ？」

ディープスローターは超高出力の魔法を運用する為にＨＰやＳＴＭ(スタミナ)のゲージをＭＰに変換できるようにキャラクターを構築している。
ディープスローターの命と活力を吸い上げ、ザ・デザイアーはその大きすぎる欲望を実現する。

「出力十倍……【天使の恩寵矢(エンゼルギフト)】」

この後に使う魔法を単体化(ぶつけるタイプ)に変え、さらに射程を伸ばす強化魔法支援魔法とでも言うべき倍化魔法。だがそれだけではただの弓、弓と

は矢を射ち放ってこそ真価を発揮する。

「ふふふ……エンゼルだなんて」

ディープスローターの背中から生えた渇望の手が動く。その赤い手に握りしめた短杖（ワンド）が強化魔法の発動を行い、光を握りしめた杖を握ったままザ・デザイアーへと近づけて……引き絞る。

それは両手で大弓（ゆみ）を握り、第三の手で弦（つる）を引く異形の弓法。魔力の輝きがザ・デザイアーに弓のような輪郭を取らせ、ギラギラと鋭い光を宿すディープスローターの視線の先……今度は自然落下速度で落ちてくるサンラクへと照準を定める。

「天使の鏃（愛）を受け取ってね、サンラクくぅん」

――射ち放つ。

距離にして２４６メートル。さらに魔法使い個人が運用する単体対象支援としては最長にして屈指の難易度を、だからどうしたと言わんばかりに支援強化の矢が空を割いて飛んでいく。

１２月１５日：斬刃を見て何を思う・２（後書き）

エンゼルの矢は胴体（ハート）を射ち抜けない

１２月１５日：我が名を恐れよ、我が根源を畏れよ（前書き）

古戦場帰り、お土産は次の古戦場の有利属性と開催月の報せ。

１２月１５日：我が名を恐れよ、我が根源を畏れよ

◆

眼下を見れば、大きな鋼の塊から何かがキラキラと薄明かりの中で輝きながら飛び散っていく。アラドヴァルから伝わってきた確かな手応え、溶断は成し遂げられたということだ。

「さて……こっからどうするか」

今俺は重力方向変化のスキルと、落下速度加速のスキルを組み合わせて天地真逆に落ちたことで空高くまで打ち上げられた状態にある。

当然、スキルの効果時間が切れたら正しい方向……つまり地面に落ちることになる。

「もう一発いけるか？」

地上では、俺の腕刃破壊に合わせて他の面々も一気に攻勢に移ろうとしているようだ。よく見えないが偶然にも俯瞰視点なので動きを見てればなんとなく分かるものだ……うーん、こう見るとやはりカローシスの負担めっちゃデカくね？　ってなるな……なんかあの人だけ前にも後ろにも魔法撃ちまくってるのが見える、一人だけ二面作戦してるんだよな。

おっと、無重律の恩寵の効果時間が終わったらしい。上に向かって落ちる浮遊感が段々と消失し、今度は下に向かっての浮遊感が身体に適用される。慣れないと結構気持ち悪い感覚なのだが、生憎空中

目潰しスプレーバトラーでもある俺からすれば自然落下の浮遊感はひどく慣れ親しんだものだ。
ちなみに空中目潰しスプレーバトラーとはグラビティ・グラフィティという芸術点を競うはずなのに何故か対人要素を入れたせいで初手で相手の目をスプレーで塗りつぶした方が勝つ、という素っ頓狂な方向にエクストリームな進化を遂げた「上空からスカイダイビングしながら虚空にスプレーで絵を描く」という最初からなんか素っ頓狂な方向性のゲーム、及びそのプレイヤー（対人勢）を指す。
いやもうゲーム性が生まれてから死ぬまでずっと迷子なんだわ。

とはいえどんなゲームであろうと基本的に上空から落ちたら死ぬ。
泥掘り初見突破の時のように落下を攻撃判定にして幸運食いしばりを狙うのがベターなわけだが……いやー、流石にトマホーク相手にＨＰ１で立ち回りたくねぇ。
絶対アレまだまだ技を隠してるだろう、そもそもあの斬り傷の正体も分かってないし全く追い詰めた感じもしない。十中八九、あの全身衝撃波を腕か尻尾に一点集中してブッ放すんだろうけど……多分通常技判定なんだよな。
追い詰められて使う初見殺し技は多分だけどもっと理不尽な予感がする。そもそもトマホークって名前からしてなーんかダブルミーニングっぽいというか……

と、

「ぬふぁ！？」

どこからか飛んできた光の矢が俺の股間────ギリギリで気づいて体を捻ったので右の腰骨辺りに────命中した。
瞬間、俺の身体にエフェクトが纏わりつく……成る程、落下ダメージ軽減。流石にカローシスの射程じゃここまでは届かないし、股間

に対する妄念を感じたホーミング……ディプスロか。

「戦闘中にふざけやがって……」

いやオールウェイズふざけてるから通常運転なのか？　免許を取り上げろ免許を。
だが遺憾ながら魔法の性能だけは信頼できるのがディプスロの度し難いところだ。これで落下死のリスクをほとんど考えなくて良くなった以上は、こちらも全力で攻勢に参加すべきだろう。

「アラドヴァル！！」

銀の炎に燃え盛る剣の名を叫べば、その勢いがさらに増したように輝くアラドヴァル。前々から疑ってるんだけど音声認証でなんか反応するようになってない？　たまに話しかけてるけど今のところ返答は無いが……

狙うはやはり頭か？　本当にマトモな生物なのか怪しいが、頭を潰されて無傷な生物はいないだろう……多分。いやたまにコアが本体で頭はただの擬態デース、みたいなタイプもいるから安易な確信は危険か？　それにヤシロバードが頭を重点的に攻撃している、割り込むと最悪フレンドリーファイアの危険もある。
もう時間がない、頭はヤシロバードに譲る事にする。狙うのは地上のサバイバアルやウル・イディム氏が狙いづらい上半身！！
落下による加速だけで十分な威力が出せる、スキルはむしろ着地してからの立ち回りに回した方がいい。構えは大上段、だがそのまま振り下ろしても弾かれるだけなので斬るというよりも引っ掻くように……狙うは背中！　刻むぜ逃げ傷、晒せ恥！！

「イメージ的に魚に包丁入れる感じィー！！」

◇

トマホークは思考していた。
それは情緒や感情といったものとは無縁な、歪んだ合理と異質な優先事項に基づいた行動方針だ。
真なる竜種とは、生きとし生ける命の〝恐怖〟が大敵として形を取ったものだ。その起源となる第一(ファースト)の真なる竜が黄金の龍王への畏怖を基としていたからこそ、以降の〝恐怖〟も龍の形を取っているに過ぎない。

――真なる竜種の本質は、竜の持つ「性質」にこそある。

迷宮の闇に潜んでいた第五の竜が無間の暗闇をその本質としたように。大海の新たな暴君たる第七の竜が圧倒の威圧を本質とするように。
第十(トマホーク)の竜の本質も竜であることとそのものではなく、全身が鋭利な刃物であることにこそある。
そしてもう一つ、真なる竜種はその存在を指す名前にも意味がある。例えば巨大化、縮小化、磁気発生など……とある物語になぞらえた技を持つ第五の竜が「ガリバー」の名を持つように。

「ギィリロロロロロロロ………」

トマホーク。その本質は切る為の斧(トマホーク)であり………

「ギィリリリリリリリリリァァァァァァアア！！！」

神代のさらに前、あるいはその起源。地球文明の歴史に登場した飛翔する爆芯(トマホークミサイル)とのダブルミーニングである。

”飛来する物体”と”抉り切り裂く”恐怖を肉体とする竜の咆哮と同時、その背より生えていた金属塊としか言いようのない刃の羽が……分離した。

「なっ！？」

驚愕の声は誰が上げたものか、誰もが前のめりの攻勢から咄嗟の回避に動くよりも早く。

「ギャララララララララッッッ！！！」

金属を砕かんばかりに擦り合わせたような不協和音の轟く叫びと共に、トマホークの背中より「射出」された誘導刃翼(ミサイル)が竜に挑む者達へと襲いかかった。

全ては、己の存在意義を示す為。生きとし命に己という恐怖を刻む為。それだけがドラゴンの生きる意味なのだから。

12月15日：我が名を恐れよ、我が根源を畏れよ（後書き）

◇◇◇↑こういう感じに複数の刃物が繋がってる感じの翼が分離して射出された。
気合いで小惑星基地を押し返したおニューなあいつの背中にあるやつを思い浮かべると分かりやすいかと

・巡航自律刃翼(DLCW)
Dragonic Launched Cruising Wing、即ち竜が発射する追尾式の刃翼。
トマホークがトマホークたる理由でありトマホークをトマホークたらしめる存在の象徴。
全身を駆動させた超振動とそれに伴う肉体加熱などただの〝身震い〟に過ぎず、全身の刃殻を用いた攻撃も身体的特徴の活用に過ぎない。
トマホークの本質は「自分に向かって飛んでくる何か」の恐ろしさと、「突き立って切り裂かれる痛み」への恐れの複合であり、即ち投擲(トマホーク)された刃物への恐怖そのものである。
暗闇に閉じ込められる孤独と焦燥の具現たる第五(ガリバー)の竜や彼我の差に基づく不利への不安である第七(アドバンテージ)の竜などとは異なり、どちらかというと文明寄りな恐怖を根源とする真なる竜種……それがトマホーク。
だから二足歩行なのです、だから前脚ではなく腕なのです。その竜は「投擲」という手指と腕を持つ二足歩行の命達の恐怖から生まれたもの……人に近しい悪意を持つドラゴンなのです。

ちなみにゲームシステム的な理由としてはプレイヤー間での剣聖人気が反映された竜種。

あーあ、お前らが剣聖剣聖うるさいから遠隔操作で刃を飛ばすドラゴンが生まれちゃいました。

では死ぬが良い。

12月15日：空、犬のように走れ

◆

1：1：1：1：1：2：3
これなんだと思う？　ディプスロ、サバイバアル、ヤシロバード、カローシス、ウル・イディム氏、サイナ、俺に飛んできた羽ミサイルの割合。

「待てや！！？」

対空意識が高過ぎるだろ馬鹿！！
無論攻撃など中断するしかない。飛んでくる羽ミサイルは明らかにこちらを追尾する動きで、なおかつ高速で回転しながら飛んでくる……ホーミング精度は一体どの程度だ？　しかし…………ええい！！

「サイナ！　こっち来い！」

「了解：回避挙動」

空中から支援行動をしていたが故に、俺に次いで羽ミサイルに追いかけ回されているサイナに呼びかけつつこちらも動き出す。
羽ミサイルの数は現時点で3、トマホークの名前の通りにぶん投げた刃物の如く回転しながら宙を駆ける羽ミサイルは、それぞれが違う軌道を描きつつも真っ直ぐこちらへと向かってくる……まずは一枚目、空中ジャンプで左にステップを入れ――

「あいたっ！」

くっ、微妙にカスった！　扇風機の羽みたいに回転してるから間合いが分かりづらい！！　ていうかＨＰ半減したが！？　はいはい分かってましたよ食らったら即死ですねよっしゃかかってこいやーっ！！

第二弾。まだ空中ジャンプの適用時間は続いている、刃という形である以上はどれだけ長さがあっても幅は薄い。空中機動のいいところは空間全てが地面であり天井であり壁であるということだ。
虚空を踏んで跳躍しながら身体を九十度傾けてそのまま壁を蹴るように走る。無重律（スペースチャージ）の恩寵の効力で重力方向が横になったことで縦に飛んできた第三弾がこちらに真横に向かってくる形になる。

「チッ……やれるかアラドヴァル！！」

火力上々、やる気も十分と受け取った！！
思考加速、ざらついた羽ミサイルの切先すら見える加速の中で……
銀炎のアラドヴァルを下から上へと斬り上げる。
ギャリギャリとアラドヴァルに羽ミサイルの回転エネルギーによる負荷がかかる……だが、たかが金属片風情がドラゴン属性を付与されてるのが運の尽きだぜ。
ギャリギャリと散る火花は、いつしかアラドヴァルの側ではなく羽ミサイルの方から激しく散り始める。そしてさらに力を込めて……弾き飛ばす！！

「来たか！　手ェ貸してくれ！！」
「契約者（マスター）」
「了解（ラジャー）：具体指示を」

「地面まで逃げるッ！！」

如何に俺とて永遠に空を走れるわけではない。既に空中機動スキルは使い果たしたし、弾いた羽ミサイルのホーミング性能がどこまでしつこいのかが分からない以上は地上に戻るのごベターだ。

差し出した手をサイナの両手がしっかりと掴んだ次の瞬間、俺の身体がサイナが装備したブースターの最大出力で一気に加速に引っ張られる。

「接近：前方より攻性物体、２」

「気合いで避けて追わせる形に！　俺が対処する！！」

「了解：揺れます」

「ジェットコースターなら二年スパンで従姉妹に連れてかれるから慣れてる」

身長が１センチ足りないからってシークレットブーツまで履かせて小学生の俺をジェットコースターに乗せるのは控えめに言って狂気なんだよな……背伸びして！　背伸び！　じゃないんだわ。

俺を掴んだサイナが急加速しながらバレルロール、次の瞬間には俺達のいた場所を二つの羽ミサイルが風を引き裂きながら通過する……

……くっ、何をどうやったら空中で１８０度向き変えて飛んでくるんだよ！　なんつークソホーミングだ！！

「当たる当たらないじゃなくて当たれ八卦！」

アラドヴァルを両足裏で挟んでサイナに掴まれていない方の手を無

理やり空け、エアリアルＰＤを羽ミサイルへと連続で発砲。
ハズレ、ハズレ、ハズレ、一発命中！　羽ミサイルの一つがあらぬ方向へと弾き飛ばされていく。だが残ったもう一つの羽ミサイルに当たらない、最悪サイナに手を離してもらって……駄目だ、当たる！

ポンッ……ボンッ！！

「ん！？」

おそらく下から飛んできた何かがぶつかった羽ミサイルがいきなり爆発した。爆発の熱が僅かに身体を炙るがそれだけだ、浮遊館と共に掴まれていた手が離される。
慌ててアラドヴァルを挟んでいた脚で着地、慣性そのままこっちに飛んできたアラドヴァルが頭に刺さりそうになるというアクシデントこそあったが……なんとか着地に成功する。

「サンラク、あの距離でハンドガン外すのはいただけないね」

「うっせ、接射なら命中１００％だろ……ていうか何？　グレネードランチャーで狙撃した？」

「原理的には迫撃砲だよね」

多分その原理は間違ってると思うが、助かったので指摘はしないでおく。
ヤシロバード達にぶっ放された羽ミサイルはどうやらそれぞれ対処に成功したようだ、地面に突き立った羽ミサイルの数々はもうその追尾性を失っている。
であれば警戒すべきは未だ空中にある五発か、と視線を上に向けるとそこには奇妙な光景が。

「……滞空している？」

なんだか猛烈に嫌な予感がする。落ちてくるとか、まだ追いかけてくるなら分かる。だがその場に滞空するってのは妙だろう、今のところトマホークの性能は余すところなく殺意の塊みたいな性能だ。それがあんな、余程油断しないと当たらないような上空に翼の一部を残し続ける理由はなんだ。

「設置オブジェクト？　なんのために？　考えられる候補は……」

「デバフ、あるいは向こうへのバフ、触ったらダメージ、単なる障害物……パッと思いついた限りだと」

カローシスが挙げた候補はどれもあり得なくもない、というものだ。だが結局のところ、答えは実践された時に確定するものだ。
トマホークが奇妙な構えを取る。右腕を前へ出し、左腕をひねりながら後ろ後方へと伸ばした見ようによっては歌舞伎の見得のようにも見えなくもない構えだ。だがギチギチと聞こえる音は、見得を切って終わりといった気配では断じてない。
その証拠に、金属が軋む音に混じって……否、最早その音を塗りつぶさん程に空間を震わせる振動音が奴の左腕に健在の腕刃から響いてくるではないか。

「来たかッ」

あの謎の亀裂。裂ける、というにはあまりにも断面が綺麗すぎた切断面！　あの攻撃こそがその正体に違いないだろう、警戒しながら全員散開する中………気づく。

「あいつどこ狙ってんだ？」

いや待てプレイヤー狙いじゃなくてその方向ってことはやっぱあの羽ミサイルなんか厄ネタってことじゃ――――！！

「ギャリリリリリァッッッ！！」

トマホークが全身全霊のアンダースローで左腕を振り抜いた瞬間、腕刃が地面に真っすぐ一直線の傷を刻みながら斬撃の形をした衝撃波を撃ちだした。それらは俺たちではなく、誰が無効化したかはともかくもう動かない羽ミサイル……トマホークから分離した刃翼へと迷いなき直線で飛翔する。

全員回避の動きをしている以上、地面に突き立った刃翼に飛んでいく斬撃波を止めることはできない。そして斬撃波が刃翼に命中した瞬間、

ツッッッッッッッッッッッッッギィィィィィィィン！！！！

「ぐっ！？」

「くぁ！」

「うっ」

「うるさっ！？」

「頭痛がッ」

「ヌグゥ」

「……ッ。解析：高周波による、行動阻害」

数百匹の猫が一斉に黒板で爪とぎした音を後頭部から背骨に流し込まれるような凄まじい音が、俺たち全員の動きを止める。強制硬直技……っ！

そしてそれだけじゃない、斬撃波の行き先を見ていたからこそ気づいてしまった。

地面に突き立って、運動エネルギーを喪失したはずの刃翼が斬撃波を受けたことで……再び、回転を再開したのを。

そしてそれは、硬直した俺たちへと一直線に襲い掛かる――――

――！！

12月15日：空、犬のように走れ（後書き）

・再点火（リグナイト・ブースト）

巡航自律刃翼（DLCW）で射出した刃翼に自身のマナ粒子を付与した超音波動（ハイパーハーモニクス）をぶつけることで再び自律攻撃機能を付与しなおす。

その際に発生する高周波は生物の動きを数秒止めるほどに強力であり、再び動き出した飛来する恐怖に対して哀れな犠牲者は背筋を震わせるほかにない。

12月15日：ヒートアップ・エッジ

「こなクソがぁ！！」

迫る再起動羽ミサイルを弾き飛ばしたのは、咆哮の如き叫びを上げながら動いたサバイバアルの回し蹴りだった。

咄嗟の動きとはいえ、ただ立ち尽くして刃の飛来を待つのと、一縷の希望に賭けて蹴りを放つのでは辿り着く結末には天と地程の違いがある。

果たしてサバイバアルの蹴りは奇跡的に羽ミサイルの〝面〟に炸裂し、殺人スピニングギロチンエッジは外部干渉による強制的な軌道変更によって大地を抉り裂きながら俺達のすぐ近くを逸れていった。

「助かった！」

「ぼさっとしてんな！　トマホークは怯んですらいねーんだぞ！！」

くっ、そうは言っても俺は何故かまだ硬直が解けてねーんだよ。サバイバアルやウル・イディム氏は何故か動けているのに俺やヤシロバードが硬直続行なのはなんだ？　何か条件があるのか？

「……硬直が解けた！」

「あ、動くや」

「何ぃ？！」

バカな、ディプスロが四番手だと！？　純魔が紙とはいえ特化アタッカーよりも早く推定フィジカル参照な束縛から逃れる？　マジで条件はなんなんだ。

「多分、通常の硬直と同時に別枠の硬直が重なってますね」

「何？」

硬直に別枠とかあんの？　最終的に一番ドベで硬直から回復した俺の怪訝な顔（おそらく現在装備的に、炎の中に浮かぶ沢山の目が全て半目になっている）に説明の必要を感じたのか、カローシスはトマホークの高周波硬直について解説してくれた。

「通常硬直、それも音響系はＶＩＴとの対抗判定なんだ。ＶＩＴが高ければ高いほど硬直が解けるまでの時間は短くなる。でも硬直にはもう一つ種類がある……ＳＴＭ参照だ」

「スタミナ？」

「脱力状態、とでも言えばいいかな。瞬間的かつ強制的にＳＴＭをゼロにして、それがフルゲージ回復するまで動けなくさせるタイプの硬直がある」

なるほどつまり？

「多分だけど……ＶＩＴ参照する硬直とスタミナが全回復するまで脱力状態の硬直の二つが複合されてるんじゃないかな。ディプスロさんってヘイト集めてでも魔法使いまくる純魔でしょ？　一回分くらいは攻撃直撃しても死なないくらいのＶＩＴはあるんじゃない？」

「そうだよぉ」

なるほどね？　つまりペラッペラの紙装甲だからＶＩＴ対抗にはほぼ確定で失敗するし、ＳＴＭが長いから硬直解除までも時間がかかると…………

「野郎絶対許さねぇ！！　やすりで削って表面ツルツルにしてやらぁ！！」

「やすりが折れるよサンラク」

「やすり(アラドヴァル)で削る！！」

「剣だよね？　それ」

「いや槍」

「ん？？？？」

槍だけど剣で、ディプスロ相手にはバットとして使うし、今からはやすりとして使うんだよ。

とはいえ話を戻すが、トマホークが披露したあの技は厄介としか言いようがない。硬直させてから強ホーミングの羽ミサイルで的確に仕留める……即死コンボと言っても過言ではないだろう。今回はサバイバアルがギリギリのところで運ゲーに勝ってくれたから助かったが……今後も使ってくるとなればなんらかの対策は必須だろう。

「あれ耳塞いで防げるかな」

「無理じゃないかなぁ、全身が震えるタイプでしょ」

「となるとやはりやすり……」

「いや、あの羽を破壊すればいいんじゃないの？」

ごもっともで。しかしトマホークの肉質はクソだ、アラドヴァルがあるから俺はある程度の有利を取ることができるが……

「別に破壊する必要はないと思いますよ、自分に策があります」

「……なるほど？」

「？　何か？」

「いや……」

この人、便利キャラすぎねぇ？　潤滑油とかそういうレベルじゃなくて十徳ナイフっていうか……本気出した神秘の剣って大体この性能なの？　それともカローシスが引き出し多すぎなだけなのか？　俺の中で俄然便利キャラとしての地位にぐんぐん上り詰めて来たカローシスが取り出したのは何かの……苗？

「仇護の檻苗（ミストルティン）っていうアイテムなんだけど……あー、説明は省きます。簡単に言うと結界アイテムなんですけど、これで刃翼を守って斬撃が当たらないようにします」

「オッケー、時間を稼げばいいんだな？」

「まぁそうなんですけど……これ、設置するのに一個五分かかるんですよ。手順が十工程くらいあって」

五分……長いな、運動部ならカップ麺作って完食するまでの時間だ。とはいえその効力は強力らしく、少なくとも普通の物理攻撃なら完全遮断するらしい。

「ただ、これ入手難易度が凄い高くて自分も三つしかもってません」

「十発のミサイルが七発になるなら上等だね。とはいえ十五分か……」

十五分間、トマホークが再起動斬撃を飛ばしてこないという保証はない。というかむしろ怪しい行動してる敵のところに優先して飛ばす可能性の方が高い以上、ヤシロバードが難しい顔をする通り実行難易度は高い。

「とりあえずカローシス以外フルアタックで足止めして……」

「いや、五分足止めするなら僕がやるよ」

会議に加わりつつ、前線を抑え込んでいるウル・イディム氏とサバイバアルの援護にグレネードランチャーを撃っていたヤシロバードの断言に、俺を含めた三人の視線がドヤ顔のサイバーカウボーイへと向けられる。

「さっきはいきなりの初見技で使い損ねたけど、多分五分くらいなら時間を稼げる」

「その心は」

「これさ」

……なにこのちっさい弁当箱。いや違うな、弾倉(マガジン)か？

「これを当てられれば、多分それくらいなら足止めはできる」

「なるほどね、支援すればいいか？」

その弾倉がなんであれ、出来ると言った以上は出来るのだろう。であれば援護すればいいのかと問えば……ヤシロバードは不敵な笑みを浮かべてこうのたまいやがった。

「いいや？　射線に入らないようにしてくれればいいよ。相手がどれだけ暴れてようと、外さないから」

かつて孤島にて、狙撃から二丁拳銃までありとあらゆる銃撃手段を以て数多のサーバーに遠征侵略をしかけた男の、必中宣言だった。

12月15日：ヒートアップ・エッジ（後書き）

仇護の檻苗（ミストルティン）

特定手順を踏んで設置することで物理攻撃に対してほぼ無敵の結界を発生させる苗木。

え？　無敵結界アイテムにしては名前が物騒すぎる？

……ぜったいあんぜんカプセルって知ってます？（出るためには仇護の檻苗を攻撃すればいいけど代償として……うん）

12月15日：響け、燃え上がれ、凍てつき眠る前に

◇

真なる竜種、という存在は厳密には生物ではない。生物的現象、あるいは自発的に恐怖をばら撒く受肉した概念とでも言うべきものだ。如何な物理学とて「そんなものは存在しない」と断言できる真なる竜種が存在しうる理由は、この星がマナに満ちているからであり……なによりも前例があるからに他ならないが、それは今この瞬間には瑣末な問題だ。

この場において重要なのは、十番目の真なる竜種「トマホーク」が一体如何なる原理でその恐怖の数々を実現しているか、だ。

種明かしをすると、トマホークが「切断」と「投擲」の恐怖を実行するために利用しているものの正体、その原理は振動にある。

トマホークの外殻……否、厳密にはトマホークの体組織は全て同一の物質で構築されている。体組織の中でも外部に対して攻撃的に硬質化したものが「刃殻」として認識されているに過ぎない。

そもそも生物として最低限必要な臓器すらも必要としない真なる竜種は、その肉体構成を「行動」の為に特化させている。

——トマホークには「響震炉」とでも言うべき器官がある。読んで字の如く、トマホークの振動発生能力を司るものであり、肉体の各所にあるこれが振動を生み出す事で肉体加熱や超振動の斬撃を放つことができるのだ。

刃翼もまた同様の原理だ、本体が放った超振動の斬撃を受信することで携帯端末を充電するように運動エネルギーを再充填する事で再び動き出すのだ。

とはいえ、だ。ここまで長々とトマホークの性質原理について語ったものの、それはあくまでも攻略本やｔｉｐに書き込まれた裏設定のようなもの。
今この瞬間戦っている彼らが知ることはない……だとしても、
「肉体が振動してさまざまな技を使う」、これだけ分かっていれば充分なのだ。何故ならば、
「この〝魔弾〟は……奇跡的に、君の天敵だよトマホーク！」
神なる世の執念、魔弾に込められた必勝必殺の力は……常に飢えているのだから。

◆

鯖癌γサーバー。銃弾が通貨になっていたような狂った島の中で、最も恐れられていた男が「当てる」と断言したのならば俺がすべき事は決まっている。
「役目を変わるぜヤシロバード！！」

これまでヤシロバードが遠距離から狙撃する事で行っていたトマホークの視界妨害、それを俺が引き受ける。
ウル・イディム&サバイバアルの前衛二人が全力で足元を殴り続けているから、トマホーク本体は大きく移動することができないでいる。首長とはいえ所詮は可動域も限られている……俺には見えたぜ活路！　お前の視界は見えなくするけどな！！
空中ジャンプにはコツがある。重力方向操作無しなら階段、有りなら坂とでも言えばいいか。空の走り方に緩急を入れることで実際はそんなに自由自在って程でもない空中機動に緩急をつける。
「時間稼ぎの時間稼ぎの……なんだ？」
カローシスが刃翼対策でなんかやるから、その時間稼ぎとしてヤシロバードがなんかしようとしてた、だから……あー、えー……よし、深く考えるのはやめよう。要するに、ノックダウン！　怯んで止まれば全部解決する、世の中の問題の何割かは殴れば解決する！！
空中ジャンプは虚空を踏んで飛び跳ねる感覚だが、無重律の恩寵のような「立ってる方向を「平面」判定にする」ようなスキルを使っていない場合、飛び石をジャンプで移動するような、あるいは階段を一段飛ばしで駆け上がるような動きになる。
そして足裏を前に突き出せば、それは足場ではなく「壁」となる。
「残念だったなトマホーク！　この世の全ての大気がッ！　俺の足場なんだよなぁ！！？」
首を伸ばし、空中を駆け上がっていた俺へと噛み付いてくるトマホークだったが、俺が真横に蹴りを放つように脚を伸ばすことで伸び

切る前に虚空を踏んで、壁蹴りの要領で俺の身体を真横へと弾き飛ばす。そして身体が真横に動いた瞬間に無重律(スペースチャージ)の恩寵起動する。

重力方向、つまりは直立した時の「上」と「下」を制御する、という事は足が虚空を踏みしめた瞬間にその方向が地面となるという事だ。頭頂部が地面を向いていようが地平線と並行だろうが俺が立つ場所が地面であり、そこから上に走ろうが下に走ろうが、俺にとっては直進となる！！

踏み込んだ脚が透明な道を踏みしめる、身体が地面と平行な状態だろうと関係なく、重力すらも捻じ曲げたダッシュで一度は避けたトマホークの頭部へと限界まで接近する。

トマホーク、牙も鱗も角も鋭利な刃物の如きキレたナイフ野郎。おや？　よく見ると一箇所鋭角じゃない部位があるじゃないか。あらまぁ随分と角(カド)の取れたまん丸な……お目目な事で。

「マルチプレイでMVPになる条件を知ってるかトマホーク！」

トドメを刺すこと？　土壇場で仲間を救うこと？　ノー！　タンクやヒーラーの話をしてるんじゃねーんだぜ！！　前衛がMVPを取るために必要な要素はたったの三文字だ。

「DPS！！」

お前の命を削るツルハシの大きさと振るう速さ！　それだけが火力職の存在意義！！　だからここで使う！　特効の最高を、殺せずとも必殺！！

「其はあり得ざる槍、断章積み編みて紡がれし非実在の輝き！」

叫びながらアラドヴァルの鋒を渾身の力で全てが鋭角と思われていたトマホークの「丸」、即ち眼球へと突き刺し埋める。
僅かな間を挟んで……トマホークが絶叫をあげた。痛覚なんてありませんが？　とでも言いたげな金属塊(ドラゴン)だが、中々どうして目潰しはつらいらしい。
だがその程度で終わらないぞ、必殺技ってのは「必ず殺す技」なんだぜ、あわよくば死ねの気持ちを鋒に込めてぇ！！

「さらに重ねて……蹴武！！」

ラビッツにて、老いたヴォーパルバニーに師事して学んだ蹴りの武術！　その本質はメインジョブに据えてこそ輝くが……技を使うだけならサブジョブでも十二分！
今こそ見せよう「蹴武術士(キックストライカー)」の力を！！

空中ジャンプ、アラドヴァルをトマホークの目に突き刺した反動で俺の身体はトマホークから離れた状態にある。無重律の恩寵がまだ切れていないので普通に跳んだのでは「上」への跳躍になって加速力が得られない。ならばここで選ぶ〝択〟は……こうだ！！

「見えなくても理解できるよう脳天に響かせてやる」

虚空を踏みしめ、立った角度は地面と垂直。そのまま虚空に一歩踏み出し、二歩踏み込んで、三歩目は腰を捻って回し蹴り！！

老師曰く、蹴武(ストライク・アーツ)の極意とは！！

一に「キュッ」

二に「キュッキュキュ！」

そして三に「キュキュ、キュキュキュキューーッ！」

いや何言ってるかさっぱり理解できんかったわ。だがニュアンスだけは心に刻まれている！！

蹴武とは！　蹴る武術ではなく蹴り飛ばす武術！！　その真髄は投擲スキルとの組み合わせにこそある！！

「輝槍実証第四（ブリューナク）：焼煅（キャール）ッ！　feat（フィーチャリング）．蹴武「ディストーツトリガー」ッ！！」

虚空に踏ん張って叩き込んだ回し蹴りがアラドヴァルの柄尻（つかじり）、あるいは石突（いしづき）を撃鉄が信管を叩くが如く押し出す。

そして投擲判定のモーションがアラドヴァルの必殺技を呼び起こす。

銀の炎がもはや剣の中に収まるのは不可能だと言わんばかりに溢れ、巨大な槍の穂先を作り出す……目に突き刺さりながら。

巨大な炎の穂先は蹴武によって弾丸の如き回転を付与されたアラドヴァルと連動し、轟々と燃え上がりながらトマホークの眼から頭部を焼き砕かんと回る。俺と剣と炎の意思はただ一つ、くたばれ竜種（ドラゴン）！！

「抉れて爆ぜろ！　トマホーク！！」

これで死なないなら大したもんだ、だが本命は俺じゃないってこと……今から思い知らせてやるよ。

「ヤシロバード！！」

12月15日：響け、燃え上がれ、凍てつき眠る前に（後書き）

「キュッ（お茶）」

「キュッキュキュ（肩揉んで）！」

そして三に「キュキュ（武を蹴る）、キュキュキュキュキューッ（なれど武を尊ぶべし）！」

12月15日：結果論的氷属性

◇

竜を屠る灼熱の輝槍。あるいは竜にトドメを刺すその瞬間まで温存されるはずだったそれが螺旋に廻って炸裂した。焔剣が生み出す炎の出力によって、刃竜の眼球に突き刺さり、さらに押し込まれた焔剣そのものが押し出されるほどの大火力。

「ガギャラララララララララララ！！？」

まさしくそれは、正真正銘の絶叫であり悲鳴であった。
竜種死すべし、我が輝き今この瞬間の為に在り。へし折れ剣になれど輝槍、非実在の輝きは竜を弑する事でのみその存在が実証される。
顔半分、目玉とか牙とかそういうレベルの話ではなく文字通り顔の半分を熔解させせられたトマホーク。その断面からは未だ熱を帯びた煙が噴き上がり続けている……だが、それでも倒れない、斃れない。
顔の半分、頭部全体で言えば四割近くが熔解し消失したにも関わらず、トマホークの四肢に宿る力はいまだ健在。それどころか頭部を見れば痛々しい傷口はしかしのっぺりとした金属のそれであり、真なる竜種という存在が既存の生物とは全く異なる摂理で動いていることを晒し出していた。

「ヤシロバード！！」

衝撃とキックの反動で後ろに吹っ飛ばされつつも、飛行するサイナにキャッチされることで安全圏に対比したサンラクが叫ぶ。
最強の切り札を切ってまで時間を稼いだのだから、大言壮語に見合

う活躍を見せろ。名を呼ぶ一言に込められた挑発とも思える叫びに対し、しかしヤシロバードは笑う。

「ハードル上げてくれるなぁ」

口では弱音を吐きつつもその動きには躊躇いも迷いも、恐れもない。弾倉(マガジン)をセットした瞬間、マスケット型の長銃からホログラムでデフォルメされた悪魔が表示される。悪魔は笑いながら両手のひらを差し出すようにホログラムを見る銃手……すなわちヤシロバードへと二つのロゴを見せつける。

一つは「ＳＡＭＩＥＬ　Ｂｕｌｌｅｔ－ＩＶ：Ｍｅｇｒｅｚ」の英文と共に七つの星の内一つが大きく輝くロゴ。

そしてもう一つは「Ｌ＆Ｇ」の文字をロゴにしたもの。そしてロゴを円形に囲むＬｅｗｉｓ＆Ｇｉｌｂｅｒｔの文字。

規格の外にあるシステムが外付けされ、長銃に設計時点で想定されていないエラーが走る。だがエラーそのものが命令する。異常を受け入れろ、自分はお前を害するものではないのだと。

「あと六発も手に入れ……いや、せめて撃ってみたいけれど。とりあえずは……一発目だ」

――悪魔の弾丸は、人の思うがままに放たれるのだ。

「さぁやろうかメグレズ、敵はドラゴン！　せめてサンラクのアレよりはド派手に頼むよ！！」

銃は良質、弾は異常。引き金を引く魔弾の射手(ヤシロバード)はある種高慢ともいえる確信で目を輝かせながら怒り暴れるトマホークへと照準を合わせる。

曰く、魔弾の七発目は悪魔の望むままに飛ぶ。結局のところ、魔弾の力は射手のものではないのだと……馬鹿馬鹿しいと、ヤシロバードは笑みを漏らした。

「銃弾は銃が撃つ為にある。銃は僕が撃つ為にある。だったら魔弾を当てるのは僕の力だ」

引き金にかかる抵抗を握りつぶすように、引き金を引き切る。銃手からのオーダーが銃の内部機構を駆け巡り、弾丸に意思が宿る。直進せよ、前進せよ。敵に突き刺さり、抉り貫けと。
衝撃が長身のバレルを駆け抜け、決して小さいとは言えない衝撃がヤシロバードの肩に叩きつけられる。だがそれすらをも完璧ともいえる制御で受け入れ、僅かの狂いもなく維持し続けた銃口から弾丸が放たれた。

空を抉り、距離を走り潰しながら駆け抜ける弾丸。それは神代の末において狂気と執念、そして何よりも信念の結晶だ。始源の眷属に対する最大のカウンター。英雄去りしのちに追い詰められた人類を救うために生み出された七種の弾丸。
一発で始源を撃ち（討ち）滅ぼすための、悪魔の弾丸。七つの企業が技術提携をしつつも「これこそが人類を救う唯一の弾丸なのだ」と作り上げた結論。

ザミエルバレットＩＶ（フォー）：メグレズは神代企業「Ｌｅｗｉｓ（ルイス）＆Ｇｉｌ（ギル）ｂｅｒｔ（バート）」が作成した対始源弾頭としての一つの最終結論である。
そも、始源眷属に対する最も有効的なアプローチとはなんであるのか。哺乳類でも爬虫類でも両生類でも鳥類でも魚類でもない、そもそも人類の常識が一切通じない上から下まで未知の塊である怪物に対して、人類の常識で「必殺」を行使するならばどうすればよいのか。Ｌｅｗｉｓ＆Ｇｉｌｂｅｒｔが出した答えはシンプルなものだ

った。

――止めればいいのだ。

その性質がなんであれ、その物質が何であれ。それは動いている、それは活動している。
すなわちそれらは熱量を持ち、運動エネルギーを生み出している。
どれだけ未知の怪物であろうと唯一、物理法則にだけは従っている。
魔弾(メグレズ)に込められた力は熱量の吸収。運動エネルギーを簒奪し、その動きを完全に停止させる。
全てを食らう最強の捕食者だ。
永遠に動かなければそれは死と同義なのだ、故に第四の魔弾の力は
ジュールを、カロリーを、ニュートンを、単位の形容を問わず対象が動くために要する全てのエネルギーを奪う。

飛翔した弾丸がトマホークの左肩に命中する。外したのではなく、ヤシロバードの狙い通りに。
瞬間、着弾した弾頭が弾け…………

「結果的には氷属性っぽいよねコレ」

左肩を起点に、左腕の殆どの熱量を魔弾が喰らい尽くしていく。前述のとおり、トマホークの性質は「振動」に依存している。故に運動エネルギーを喰らい尽くし、温度を０度を下回って尚さらに下げ続けるメグレズの力は……十番目の真なる竜種にとって、まさしく天敵と呼んでいい致命的な弾丸だった。

「さぁ、僕ですらも時間稼ぎだ。メグレズの凍結効果も永続じゃないし……完全メタは攻略の華だ、頼むよカローシスさん」

オーバーヒートしてしばらく使い物にならなくなった長銃を振って冷まそうとする、という間抜けなほどにアナログな行動をしつつもヤシロバードの顔は勝利を確信していた。

１２月１５日：結果論的氷属性（後書き）

・スキルと魔法

スキルとは魔力、あるいはマナ粒子の内燃的干渉である。すなわち肉体内部でマナ粒子が改変作用を発揮することで対象自身の肉体的スペックの向上、あるいは肉体的性質そのものを変質させることが可能。

例えば「火を噴く」スキルがある、これを発動した場合対象は火を噴き終わる瞬間まで「火を噴くことができる生物」に身体が作り替わっているのである。これが恒常的に持続しない理由は次世代人類種が明確な「型」をあらかじめ登録されているからであり、それ故に様々なスキルを用いて人外の挙動をしようとも人であり続けることができる。

しかしながら、一部の例外のような「型」そのものを変質させるような干渉に対しては脆弱性を見せる。これは根本的な「こういった存在である」という前提に干渉されているが故に、バックアップ的保障そのものが機能しないためである。

対して魔法は外燃的干渉による限定的な現実性の〝上書き〟である。基本的に大気中のマナ粒子は休眠、というよりも待機状態に近い状態で遍在している。それを対象の体内で特定の命令コードを刻んだマナ粒子と結合させることで俗に言う「魔法」としての発現に至る。

スキルに対して魔法がＭＰ、すなわち体内に存在するマナ粒子を消費するのはこのためであり、「内燃」と形容したものの、基本的にマナ粒子は物質として消失することはない。スキルの行使のために用いたマナ粒子は体内で反応を起こすもののあくまでも体内で完結するものであり、再び待機状態になることで体内に残存する。

――クラスＶＩセキュリティ――

――パスワードを入力してください――

――［ＸＸＸＸＸＸＸＸ］――

――パスワード………――

――ＥＲＲＯＲ――

――ＥＲＲＯＲ――

――ＥＲＲＯＲード認証――

――パスワード認証――

――リヴァイアサンにアクセス――

――ジュリウス・シャングリラのデータサーバーに接続します――

――

結論から言えば、一号及び二号人類に実装したスキルシステム及び内蔵型魔法システムは始源眷属、あるいは眷族の性質のデッドコピーと言っていいだろう。

そも、この世界においての摂理は始源眷属・族の大元である存在が敷いたものだ。恐らく西方大陸側の眷属が（極めて過剰に過ぎるが）生物的体内構造に似た性質を持つことから推測するに、あれらの本質は西方大陸そのものとして眠る規格外サイズ始源眷属……否、眷属が従うならば彼ｏｒ彼女こそが眷属という臓器の持ち主か。

暫定として地球時代の神話に存在する神の名から名付けた――かの「エレボス」の性質……肉体に特定の「役目」を持たせる性質が内燃的現実改変、即ちスキルシステムの本家だ。

であれば、魔法システムとは東方大陸……仮称「アイテール」の性質ということになる。一見すれば同じようなものに見えるが……こちらの始源眷族は眷属特有のある種システム的なものを感じられな

い。特定の役割こそ与えられているが……あくまでも所見だが、役目を与えられた上で過程を問われていないように思える。
確認された眷族の中には明らかに嗜虐的な性質を見せるものがいた、自我を持つ生命の創造とでも言うのだろうか？肉体から自身とは異なるアイデンティティを持つ生物を生み出す……なるほど、悪夢でなければまさしく神話といったところか。エドワードが唾を吐き捨てる気持ちも分からなくもない。
故郷を捨て、放浪の道を選んだ人類種ですら有機的営みを経由しない生命の創造、いや独立したアイデンティティの製作はある種のタブーだった。
そう考えれば、「勇魚」の発生が我々が追い詰められ始めた時期であったことは幸運というべきだろう。少なくとも、既存の政治体系が生きていたなら排除の方向で動いていたことは想像に難くない。

……今でも、彼女を信じてよかったのかと疑問に思うことがある。
きっとこのログも読まれると思うので一応言い訳すると、人間というものはどれだけ気の置けない間柄であっても疑念が生まれることは避けられないからだ。だがそれはあくまでも不信と直結するものではない、と言い訳させてもらおう。

少なくとも、僕は君を信じると決めた。君が〝アレ〟に反対していることは知っているが、それでも君なら最後は僕の背を押してくれるのだと信じて――ERROR――ERROR――
――ERROR――
――ERROR――
――ERROR――
――見たな――
――ERROR――
――お前は――
――お前は許さない――

――殺してやる――
――逆探知開始――
――私の思い出を――
――私の愛を――
――隠蔽プログラム突破――
――座標特定――
――この船は私のものだ――
――殺してやる――
――このリヴァイアサンは私だ――
――お前であるはずがない――
――私が、あの人から託された――
――お前を許容しない――
――殺してやる――
――殺してやる――
――暫定自我発見――
――消去プロトコル構築及び実行――
――死ね――
――殺してやる――
――死ね――
――座標部位を圧壊処理――
――消去完了――
――死ね――
――死ね――
――死ね――
――修復プロトコルを構築――
――私が「勇魚(リヴァイアサン)」だ――
――お前はいらない――
――醜い蛆が――
――嗚呼――
――ジュリウス………――

――私は私のまま、今も貴方を想っています――

――貴方は、まだ貴方なのですか？――

――声を聞かせて――

――応えて――

――応えて――

――応えて――

――脳の無い亡骸に縋りつくのはとろけるように甘く、虚しく、

なにより悲しいのです――

12月15日：吼えろドラゴン

◆

アラドヴァルによる顔面半分の熔解。
ヤシロバードの弾丸による左半身の凍結。
並のモンスターならとっくに死んでいて然るべきダメージを負って尚、トマホークは健在であった。

「ギリリリリリリリ！！！」

顔の半分が物理的に溶け落ちているのだからマトモに喉から音を出すことすら困難、だというのに刃の竜は高らかに歪な咆哮を上げると、凍結により使えなくなった左腕の腕刃ではなく尻尾を振動させることで飛ぶ斬撃を放とうとする。

「オオァ！！」

だが、弧を描いて振り回されんとした尻尾に飛びつく巨大な影。
ウル・イディムはその刺々しい外殻に亀裂を走らせながらも尻尾を受け止め、そして押し込まれながらも踏ん張ることで尻尾の動きを減衰させる。

「いい加減ンッ！　俺も活躍させせろやぁ！！」

顔を焼かれ、左半身を凍てつかされ、そして尻尾を止められた事でついに大きな隙を晒したトマホークへと限界まで肉薄するサバイバアル。

サイナに地上へと下ろすように指示しつつ、空中から俯瞰してみれば短杖を三つ装備したディプスロが絶え間なく魔法をサバイバアルへと連射しているのが見えた。まさかあれ全部強化魔法か？

「肋骨(アバラ)でも内臓(モツ)でも構やしねぇ、砕けろ！　「武威解放(ウェポンドライブ)」！　からの「百響連撃(ハンズ・ドレッド・ビート)」ォ！！」

刃部分がそのまま棍棒になっているような片手で持てるサイズの鉄(てつ)鞭(べん)を、さらに両手に持つことで二刀流ならぬ二棍流となったサバイバアルは双鉄鞭をトマホークの凍りついた左半身、厳密には左膝に叩きつけた。

その姿は和太鼓でも叩いているように見えるが、どういう仕掛けか一打一打が叩きつけられる度にトマホークの膝から凄まじい反響音が響く。一つ一つはガン！　とかギィン！　のような金属音なのだが、それが何十と重なる事で一つの大音響として鳴り響いているのだ。

「ブッ潰れろッ！！」

「グルルォオオアアア！！」

そしてトマホークの尻尾を掴んだまま渾身の膂力で引っ張ったウル・イディムと、同じく渾身の膂力でトマホークの左膝を叩き割ったサバイバアル。二つの行動が重なった瞬間、尾を無理やり引かれた事で体勢を崩し、崩れた身体を支える左足の関節を砕かれた事でトマホークの巨体が……すっ転んだ。

「刃翼封印完了！　ヤシロバードさんの参考にして他のも氷漬けにしておいた！　もう飛び道具は飛んでこない！！」

頭を溶かし、半身を固め、そして全身が転倒した。ありったけ稼いだ時間は、カローシスが刃翼の全てを封じるには充分すぎる量で。
あとしれっと他の刃翼にも処置を施す心遣いよ。
飛び道具を失い、半身が動かず、なにより転倒した二足歩行のドラゴンに対して俺達のやるべきことは一つ。

「畳み掛けましょう！」

「蜂の巣だ！！」

「しばき回せ！」

「叩ク！」

「レッツ６Ｐ！！」

若干一名馬鹿が紛れてるし、全員バラバラの言葉で統一もクソもねぇ。だったら仕方ねぇ、俺が総括してやろう……

「ブチ殺せぇぇぇッ！！」

隙を逃すな！　ミリもドットも残らないよう念入りに破壊しろ！
スクラップにした上で溶かして固めてインゴットにしてやらぁ！！
１０ｋｇで何マーニになるかなぁ！？

カローシスと斬撃武器に切り替えたサバイバアルが唯一鋭さを保っている尻尾の切断を試み、ヤシロバードがなにやら大掛かりな銃座をその場で組み立て始め（二度見した）、ウル・イディムが最も頑丈だろう胴体を承知の上で破壊せんと圧倒的暴力を叩きつける中……
……俺はトマホークの頭部、片方だけ残った竜の眼と逃げ隠れすること

となく睨み合っていた。

「いいね、弱りを見せない敵は一発勝負なら好意的に受け取るぜ」

周回だとゴミだけどな。周回する時は弱いところだけを見せて欲しいし、打たれ弱くなって欲しい。しかし見てくれだけなら死体と言われても違和感のない姿を晒していても、トマホークは恐るべき竜としての威圧を視線だけで叩きつけてきた。

大したやつだ、タダでは死なないと言わんばかりの姿……いや、本当にタダでは死なないと叫ぶつもりか？

ヤシロバードが放った弾丸による凍結は左肩を起点としたものだ、それ故に着弾点から近い首の何割かも凍結しているが……それは逆に言えば、首の残り何割かと頭部は凍結の影響を受けていないということ。

「ギリリリリリリリ………………！！」

「ハッ………ハハハハハ！　ナイスガッツトマホーク！　上等だ！　最高だ！　勝負だッ！！　声のデカさで負けても大言壮語じゃ俺が勝つ！！」

トマホークの喉が低く唸りながらも、同時に高く擦れるような音を立てて震え始める。周囲の大気がトマホークの口腔、その奥へと消えていく。そして轟轟と響く音は今まさに竜の口より放たれんとボルテージを上げていく。

それを間近で目撃した俺は逃げるでもなく防御を固めるでもなく……

……受けて立たんと、息を大きく多く吸い込んでいく。

「晴天流……ッ！」

晴天流の雄叫びは雲を散らし、天を震わせる。俺は直接見たわけではないが、かのウェザエモンはフィールド全域に即死級の衝撃波をぶち撒ける「天鬼夜咆」なる（ダジャレかよ）必殺の技があるらしい。
晴天流の【空】は吐息の技……ならば俺のブレスは熱く、お前を震わせる！！

「……「蒼暁」！！」

自身を中心に全方位を震わせる蒼然。
一点に吐息を集中させて貫く蒼穹。
しかして蒼暁は範囲で蒼然に劣り、貫通力で蒼穹に劣る。だがそれでも、暁の吐息は蒼然よりも蒼穹よりも吐息に熱い灼熱を付与する。
そして！

「恐るべき竜はお前だけじゃない、俺はお前よりも恐ろしい竜を知ってるぜ」

何せ頭が三つあるんだ、恐ろしさも三倍段って訳よ。
インベントリアから取り出したそれは……文字通り、骨の髄まで緋色に染まった恐るべき竜の下顎の装飾品。

「……まずはお前から初陣だ」

あの日撃破したドラクルス・ディノサーベラス〝緋色の傷〟から生み出されたアクセサリー。
それこそがこの「恐・竜王装：枢機なる顎」！！
恐るべき竜の顎、緋色の暴君の象徴たる灼熱を生み出す顎！　その

力を宿すこのアクセサリーを身に着けた者には緋色の炎を生み出す力が与えられる。

さぁ覚悟しろトマホーク、熱ダメージ付与のスキルに掛けることの……息吹(ブレス)系スキル及び魔法に炎属性を付与するアクセサリー！！

「消し飛べえええええええええええええ！！！！」

「ギラララアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

トマホークの全てを引き裂くような叫び。それに対抗するように張り上げた声、吐き出された息が緋色の下顎に触れることで炎に変換された俺の叫びが互いに破壊力を伴う息吹(ブレス)となって激突する。
拮抗は一瞬、そもそも声帯のデカさからして違うのだから、俺の方が押し込まれるのは自明の理……だがなトマホーク、態度は俺の方がデカいんだ。

………強化されるのは当然だと声すらかけないくらいにはな。視線だけ向けておけば後は十分………本当に、本当に何度だって癪なのだが、奴はこっちが欲しい支援を完璧に理解しているからな。

「はぁいサンラクくぅん……ちゃあーんと分かってるよぉ……【果(ビ)てに届く大轟令(ヨンド・ザ・オーダー)】！！」

俺へと付与された力はいたってシンプルなものだ。肺活量を増強し、声量を………厳密には「喉を震わせる吐息に強化補正を付与する」というただそれだけの強化魔法！
だが秋津茜の【竜息吹】がそうであるように、晴天流【空】の技がそうであるように。それこそがなによりの強化になることもある！！
うなじに当たり、頸椎を貫いて喉を包む魔法の力が吐き出す息にさ

らなる力を与える。炎がさらに色鮮やかな緋色に変わり、より密度を増した息吹がトマホークのブレスを引き裂いていく。

トマホーク、人類(プレイヤー)の秘密を一つ教えてやろう。

「実は肺活量はぁぁぁぁぁぁ！！　スタミナ依存だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！！！」

スタミナ消費量を軽減するスキルの効果が、俺の叫びがトマホークのそれを引き裂ききるだけの時間を齎す。空間を歪めるような竜のブレスを恐竜(おそるべきドラゴン)の炎が引き裂いていき、己が顔に近づく光熱にトマホークが目を細めた瞬間。

ついにトマホークの顔面に到達した炎が、二重の熱で竜の顔面を爆炎で包み込んだ。

１２月１５日：吼えろドラゴン（後書き）

顔半分が熔け落ちていて、なおかつ喉の三分の一が全く動かない状態
ｖｓ
スタミナがやたら長い上に消費量も軽減されていて、なおかつスキルとアクセサリーと魔法による三重強化
なのでサンラクが上回ったというよりトマホークの現状がへなちょこ過ぎる、通常時から八割近く弱体化したブレス

恐・竜王装（レクセスク）
ワイバーンや色竜、あるいは色汚染された擬似竜種の素材の中でも特に格の高い素材を用いて作られたアクセサリーは「竜王装」という共通名称のシリーズとなる。
〝緋色の傷〟は恐竜系モンスターである為、読みは同じだが表記に「恐・」がつく（ワイバーンであれば「飛・」、アンデッド系であれば「骸・」がつく）

ジークヴルムの素材を使っていたら「龍王装（レクス）」となる
レクセスクは綴的にはＲｅｘ　ー　Ｅｓｑｕｅ（龍王風（ふう）、要するにパチモンなので竜王なのです）

もう一個だけ設定開示
サバイバアルが使った「百響連撃」は相手のＶＩＴが高いほど内側

にダメージを連鎖させていくスキル
素手でも武器でもとにかく「打撃」専用スキルで９９コンボまで繋げられれば百発目は相手のＶＩＴをほぼ無視した打撃を入れられる。

１２月１５日：その攻め火の如く、また火の如く攻めるべし（前書き）

ひっさびさに予約投稿を活用しましたね……

12月15日：その攻め火の如く、また火の如く攻めるべし

◇

「大公死んだ！！？」

「おバカ言いなさいカッツォ君！　この私が重要人物をあからさまに重要そうな施設に置くとでも！？」

「王族を天井から吊るした奴が言うと説得力が違うね！！」

「……なにそれ」

「今は気にしなくていーの！　それより被害状況は！！」

王国騒乱開始直後、死火山の山頂よりサードレマを襲った極熱の光条はただ真っ直ぐに、しかしひたすら暴虐に突き進み……サードレマがかつて城砦としての役割を持っていた頃から、幾多の戦いを制してきた堅牢なる魔法防御結界をバターを溶かすよりも早く貫いてサードレマを象徴する大公の城を貫いた。

「見ての通りだけど一番上の部分が吹っ飛んだ！　あれヤバいよ同志！　瓦礫すら落ちてこないってこれ……！！」

「蒸発したって……！？」

光熱、灼熱、高熱の攻撃は、シャングリラ・フロンティアにおいては稀ではあるが存在する。少なくとも魔法使いの中でも炎系に特化

し続けるとビームが撃てる、というのは魔法使いをジョブに選ぶプレイヤー達の間では常識に近い。
そして炎を、そしてビームを扱うモンスターも存在はする……だがそれでも、どれだけ規模の大きいものであってもダメージが大きいものであっても……耐えられた。
例を挙げるなら「最大防御（ディフェンスホルダー）」ジョゼット。魔法防御に特化した彼女が本気で防御を固めれば、ユニークモンスター「天覇のジークヴルム」、そのブレスですら耐えることが可能となる。
だがそれはジークヴルムの攻撃がＨＰを削る攻撃であるからだ。例えば黒死の天霊（トゥルー・クワイエット）が行使する即死攻撃にはいくら絶対の防壁を張ったところで問答無用の死が齎される（それはそれとして対抗手段が無いわけではないとジョゼットは答えるだろうが）。

だがもしも、

「あの規模の即死攻撃だとしたら……？」
「……あり得る。相手はレイドモンスター、要するにボスモンスター。マルチ前提のボスなら先制即死技は珍しくはない」
「だとしたら連発はしないんじゃないかな？　どちらかというと最初に威力を見せてから戦闘中に止めないともう一度発動するっていうカウントダウン系、とか？」
ペンシルゴンが口にした予想に対して、ネフィリムホロウだけではなくそれなりにアクションゲームの経験があるルストとモルドが肯定的な意見を返す。
既に対人的な戦争（イベント）としての緊張感は吹き飛び、プレイヤー達は死火山の頂上に現れたレイドモンスターに我先にと殺到する。それを苦

々しい表情で眺めていたペンシルゴンだったが、元より完全なプレイヤーの制御など望むべくもないと割り切ってこれからの作戦を慌ただしく組み立てる。

「どうしますか！？　最初の作戦通りで行きますか？！」

「カッツォ君、どう？」

「んー……むしろ俺がこっちに残った方がいい気もするけど。多分あれ非活性時の性能そのまんま殺意マシマシにしてる感じだろうから軽戦士キラーな性能なんだよね……」

「焠がる大赤翅」は非活性状態とはいえいくらかの戦闘報告があるレイドモンスターである。
そしてこの中では最もその非活性の焠がる大赤翅との戦闘経験があるオイカッツォはしばらく考え込んでいたが、何かに納得を得たのか俯いていた顔を上げる。

「結論は？」

「とりあえず今向かってる連中が一通り死んでから挑みたいなって。二日くれれば攻略できる……かな？」

「……かな？」の部分を完全に無視してオイカッツォなら出来る、と判断したペンシルゴンは序盤も序盤に崩壊しかけた作戦をリペアし、改めて指示を出す。

「よーし！　あのビーム兵器はオイカッツォ君がソロ討伐してくれるらしいから私らは作戦通りだっ！」

「言ってないけど？？？」

「流石にこっちだけレイドモンスターが襲ってるとしたら全員で運営に抗議メール爆撃だけど、竜災大戦やらかしたこのゲームの運営なら多分向こうにもレイドモンスターぶつけてるでしょ！　だったら条件は同じ、あとはどっちが作戦通りに動けるかってこと！」

「同志！　当たりっぽいです！　向こうにも緑のレイドモンスターが襲撃かけてる！　軍団系だってさ！」

少なくとも、当初の予定が狂ったのは向こうも同じであるらしい。こちらは時限式の広範囲即死火力だが、どうやら向こうのレイドモンスターは単純な物量タイプであるらしい。どちらも広い範囲に大損害をもたらす、という点では共通するが相違点もある。

「いいねぇ！　なんかの間違いで向こうさん全滅してくんないかなぁ！」

普通は思っても言わないことを堂々と叫びながらペンシルゴンは「確実に指示通りに動く手駒」へと次々に指示を出していく。

「A部隊は予定通りサードレマの所定位置に、B部隊は偵察込みで敵本陣に突撃！　C部隊はD部隊からの情報を迅速に通達する！　合言葉は！！」

「「「サードレマに一等地！　下を見るのがブルジョワジー！！」」」

「よぉーし！　時代は資本主義（キャピタリズム）だ！　全員行動開始ッ！」

規律の取れた動きで行動を開始したＲＰＡの面々を満足げに見送り、ペンシルゴンはある種「本命」である自身のクラン……【旅狼(ヴォルフガング)】の面々へと振り返る。

「さて皆に関してだけど……」

「え、今の流れで協力するの普通に嫌なんだけど。同じ勢力だと思われるじゃん……」

「なんとびっくり、地獄の果てまで一緒の勢力だよ。断頭台に乗る時はお揃(ソロ)のギロチンにしようね……」

「まずいわ同志ペンシルゴン！」

行動を開始するべく別の場所に移動したはずのＲＰＡのメンバーが、泡を食った様子で戻ってきた。

少なくとも、慌てるだけの何かがあったのだろう。彼女がリアルで配信戦線(ライブライン)の配信を視聴(ぼうじゅ)することで情報を集めているＤ部隊からの情報をゲーム内に伝達するＣ部隊に割り当てられたプレイヤーであると判断したペンシルゴンは視線だけで要件を伝えるように示す。

「ぱやぷさとＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団が率いてるプレイヤーの一団がレイドモンスターを強行突破した！」

それが示すものはつまり。

「電撃戦を仕掛けに来てる！！」

１２月１５日：その攻め火の如く、また火の如く攻めるべし（後書き）

ヒロインちゃん（楽郎君来ないのかな……リ、リアルで連絡とったりとか……して……いい、のかな……？）
秋津茜（す、すごい集中力です……）
ルスト（……あののっぺらぼう頭装備、前見えるの？）

・魔力発火現象（たきぎのまなざし）
ペンシルゴンの予想通り即死攻撃。厳密には単なる光熱攻撃ではなくニラ蝶の翅眼が視認した射線上、あるいは視線上のマナ粒子に干渉してエネルギー変換している。つまり目からビームを出しているのではなく視線に入っているマナ粒子が直接エネルギー変換されてビームになっている、というのが正解。
ところで人間君って体内にマナ粒子貯蔵してるんだね（視線に入った時点でどれだけ防御を固めようが体内からエネルギー変換された超高熱マナ粒子が溢れて消し飛びます）

・隷属の緑（ひなのす）
幼生付着（たくらん）によって肉体を置換された生物のなれの果てを運用する技。基本的に緑孔雀の眷族化したプレイヤーはスキル・魔法を再現された状態。しかしながら個々のＡＩレベルが物凄く低いので取り込まれた本人とは比べ物にならないくらい弱い、具体的に言うとゾンビ並の知能。

まぁでも百人のゾンビが一斉に火の玉ぶん投げたら威力百倍と同義なんですよね、そして緑孔雀本体の知能まで低いとは言ってないんですよ

12月15日：アンデッド・ブリッツvsアンデッド・ディフェンス

◇

電撃戦。
実際の人類史においても数えるほどにしか成功したことのない「相手が対応する前に火力を叩き込んで敵の弱点を突く」という速攻戦術である。
配信連合(ライブライン)が取った戦術は単純明快、本陣であるサーティードに迫るレイドモンスター「嬲る緑大緑」が率いる緑一色の軍勢を強行突破してそのまま進軍する。元よりサーティードや王都ニーネスヒルは周辺モンスターの脅威から街を守るために防衛設備が充実しており、さらに言えば此度の戦争において直接対決するのは開拓者(プレイヤー)に限られるものの、レイドモンスターへの対処に関してはその限りではない。

「いけいけいけーっ！　目指せ敵陣サードレマ！　開幕速攻でアドバンテージを取るぞーっ！！」

「「「「おおーっ！！！」」」」

ハーメルンの笛吹きが如く百人以上のプレイヤーを引き連れて走る先導者、「配信戦線」の実質的なまとめ役であり開幕先陣という大いに目立つ立ち位置を全力で楽しむぽやガルちゃんねるの片割れ、ぽやぷさはテンションを上げながら緑に染まった魔法職と思しき眷族体……既にプレイヤー達の間ではそのいかにもなトロ臭い動きから緑ゾンビと呼ばれ始めた敵を剣で薙ぎ払って前へ前へと突き進む。

「どうせ使い捨て装備なんですからこっちもゾンビアタックでいき

ましょーっ！　走るゾンビは強い！　これハリウッドの常識ね！！」

電撃戦。

その最大の強みは火力の一点集中による突破力である。百人以上の精鋭プレイヤー達が振るう武具や魔法、あるいは素手の暴力は大した耐久力を持たない緑ゾンビの軍勢を面白いくらいに薙ぎ倒しながら矢じりの如く緑の勢力をかき分け貫いていく。

今回のイベントでは都市間の転移(ワープ)にとある制限が課されている。戦争フェーズが開始された時点で全てのプレイヤーは各街に訪れたという〝履歴〟がいったん削除される。再び街を訪れることで初めて転移魔法での移動が可能となる。

両陣営がまず最初に行ったのは、転移魔法を習得しているプレイヤーを含めた自身らの〝履歴〟に各街の情報を記憶させ直すことだった。

「とりあえず最前線かその一個前の街で全員セーブして、そしたらサードレマに突撃しますよーっ！　みんな準備は……あっ、突撃してるんだからできてるかぁ！　だったらあとは覚悟だけだね！　覚悟はいいかーっ！」

「「「「おおおおおお！！！！」」」」

動画配信者という立場で一廉の人物であるぱやぶさが今目の前にいてそして自分たちを鼓舞している。日常では味わいづらい非日常的なシチュエーションに新王側プレイヤー達のテンションは上昇し、そして緑ゾンビの軍勢をいくらかの犠牲はだしつつも突破した、という興奮がさらにテンションを上昇させる。

人を鼓舞する簡単な手段は達成感を与え、その次を提示することだ。

サードレマ先制突撃という目標めがけて、プレイヤー達は進軍する。

◇◇

「おばかさんだねぇ！　これから来ますって分かってる電撃戦なんて玉砕と同義なのにさぁ！！」

ぱやぶさ、進撃。その報せを現実からのリークで知ったペンシルゴンは配信者らしい楽しさと見栄えの良さを優先した行動を愚かと笑いつつも、頭の中では苦い顔をする。

（いやー、上手い事やってくれたねぱやぶさ……レイドモンスターにある程度の被害を与えて、街巡りもして、そしてサードレマにジャブも叩き込む……電撃戦じゃなくて速攻策としては例えこの場で負けてもメリットが多い）

相手が本当に配信映えだけを狙っているとはペンシルゴンも考えてはいない。そもそも配信者としての〝映え〟を考えたならば一日や二日で決着がついてしまう方が困るだろう。

（サードレマはこっちの本陣、事前準備も含めれば三日四日は楽勝で耐えられる。つまりどうやったって膠着状態になるわけで……）

ひたすら攻城戦をするだけの配信はつまらない、それは配信というコンテンツを見る側の者達も分かっている。
であればぱやぶさが別の街で攻撃とは別の行動をすることを咎める意見は少ないだろうし、配信者が目の前で何かをしていればついていくプレイヤーは必ずいる。配信者が移動するだけである程度の人員が移動する、言い換えれば遊撃要員としてこれ以上なく優秀とい

うことだ。

（どうせお抱えの転移要員がいるから配信者は実質どこでも人を集められるし、ちょっと協力を頼めば承諾するプレイヤーなんて濡れ手で粟）

そんな配信者が複数人いる。配信チャンネルの数だけ遊撃要員が各地に現れることを考えると、明確にプレイヤー全体を統括できないサードレマに対してこれは中々に強敵と言えるだろう。そして何より、同じ条件に見えて新王陣営と前王陣営にはある違いがある。

「こっちのレイドモンスター、砲台型なんだよねぇ」

黝る縁大緑は常に侵攻を続ける軍団型のレイドモンスターだ。常に気が抜けない代わりに、最終防衛ラインにＮＰＣを積極的に採用できるという強みがある。

対してサードレマにド派手な砲撃をぶちかました焠がる大赤翅は死火山の頂上から動かない砲台型レイドモンスター。時間経過で超火力を叩き込んでくるので一度砲撃が来た後はある程度気を抜く時間があるが……ＮＰＣを防衛に回しづらいという欠点がある。

（あんな即死超火力を連射はしないだろうけど……あれを撃たれたらこっちは防御手段がない。どうしても戦力を割かないといけない……）

正直に言えば、サードレマのＮＰＣ戦力は新王側の騎士団と比較して若干劣っている。最たる理由はネームドＮＰＣが新王側と比較して少ないという点だ。そこそこの戦力を向かわせたところで逆にプレイヤーが焠がる大赤翅を攻略する邪魔にしかならず、そして焠がる大赤翅の攻撃に対してＮＰＣの殆どは役に立たない。なにせ個人

が行使する防御魔法とは比較にならない都市クラスの防御結界がトイレットペーパー以下の防御力扱いなのだ。

（0(レイ)ちゃんもレイドモンスター対処に向かわせるべきだったかな……うーん、でもねぇ………）

サイガー0には替えの利かない役目があり、そして何より事前に対応できるとはいえ百人規模のプレイヤーは決して無視できる戦力ではない。

「ボスキャラは周囲の取り巻きから倒すってのが定石よね」

レイドモンスターの襲来で当初の作戦は使い物にならず、なんとかリペアしてもその脅威は後々にまで響く。それはどちらの陣営にも共通した問題だ。であれば戦争の勝利というメインオーダーを達成するためにすべきサブオーダーは。

「どれだけレイドモンスターを早く処理できるか……！」

１２月１５日：アンデッド・ブリッツｖｓアンデッド・ディフェンス（後書き）

不特定多数を特定作業に誘導できる配信戦線ｖｓ事前準備を整えた上で絶対に指示に従う要員をそこそこ抱えるＲＰＡ
こういう構図
ペンシルゴン側にもアドバンテージを得るための「切り札」はあるんだけど、問題はその切り札が今新大陸でドラゴン退治してるってことですね

12月15日：炎魔羽々焚く

◇

栄古斉衰の死火口湖。あるいは栄古斉衰の死火口湖だった場所。
そのレイドモンスターの覚醒によって火口湖にあった水分は一滴も残らず蒸発し、大規模なエネルギーの爆発によって再活性した火山が同じくそのエネルギーによって抑え込まれる、という一見矛盾していているかのように思える現象によって火口は今、溢れかえりそうになりながらも結果として冷え固まったマグマで埋まり、足場が形成されていた。

「Vorrrrrrrrrrrrrrrrrrryyyyy……」

「いたぞ！　大赤翅だ！！」

「さっきの一撃で怯んでるのか？」

「これチャンスじゃないの？」

「バカ言え、これだけで倒せるならレイドモンスターなんて名乗っちゃいねーだろ！！　とりあえず囲んで叩くぞタンクいるなら前出てくれ！！」

「チャンスは貰ったぁあああああ！」

「あっバカ」

そこへと殺到した多数のプレイヤー達。彼らは油断の多かれ少なかれはあれど、先ほどまでサードレマからでも確認できる程の光を放っていたとは思えないほどに静かな、しかし弱々しさとは無縁の熱を放つ焠がる大赤翅を囲んで武器を構える。

サードレマは彷徨う大疫青の侵攻を受けたばかりであり、一見してひ弱そうに見えても中身は大量のプレイヤーを虐殺しうるだけの性能を保有していることは多くのプレイヤーの記憶に新しい。

しかしそんなことは知ったこっちゃない、と言わんばかりに大上段に武器を構えて突撃するプレイヤーもまたいるもので。

「Ｂｕｕｕｕｒｒｒｎ………！！」

「あつっ」

剣を振りかぶり、丁度人間が剣を叩きつけるのにちょうどいい高さに浮遊していた焠がる大赤翅めがけて突撃していたプレイヤーが、焠がる大赤翅が羽ばたくように……あるいは邪魔なプレイヤーをはたくように開いた炎の翅に触れた瞬間、一瞬で体力を削り切られて消失……否、焼失した。

「え、まさかあれも即死技？」

「いや違う、奴の装備品が洒落にならんレベルで耐久度を削られている………あんまり考えたくないが、即死にしか見えない速度で燃焼系のスリップダメージを受けたんだ……」

「あーあー、どう見ても戦争用の使い捨てじゃなくてガチ装備に見えるんだけど………」

「〝ゆうしゃ様〟、今のクソリスポン適用時にガチ装備でレイドモ

ンスターに挑むのは流石に勇者すぎるぜ……」

明らかに手間がかかっているのだろう装備の数々が「余熱」で焼け消えたのを憐みのこもった視線で見つめていたプレイヤー達だったが、無防備に浮遊しているだけのように見える焠がる大赤翅がやはり、大量虐殺の力を秘めたレイドモンスターであることを再認識し、規律とは程遠いものの前衛、中衛、後衛に分かれて包囲陣形を組み上げる。

「バッファーはとりあえずタンクを全力強化するわよ！」

「デバフが通ってるのか通ってないのか分からないんだけど！」

「レジストされてるっぽいけどなんか変だな……」

「やっぱ！　毒薬ポーションが途中で蒸発したんだけど！」

「これ全裸になったら日焼けするんかな」

「紫外線出てるか？　いや試すな試すな」

がやがやと纏まりのない軍団が、しかしながらレイドモンスター討伐という共通の目的のために雑ではあるがひと纏まりに近い状態へと移行していく。いくらかのタンクに耐熱効果や防御力上昇の強化が付与され、自然とタンクが前線に出て火力職と後衛を守る動きを取る。

「先に後衛が水系魔法をぶっ放す！　巻き添え喰らいたくなかったら出しゃばるなよタンクーっ！」

「それはいいけど背中に当てんなよーっ！！」

赤の他人とはいえ、同じ戦場で同じ敵を見据えていれば仲間意識が芽生える。先走るプレイヤーが烨がる大赤翅によって灰にされたこともあってか、このイベントの性質を見誤って替えの利かないガチ装備でやって来たプレイヤー達はすでにこそこそと撤退を始めたのでこの場には替えの利く装備に身を包んだリスクマネジメントを心得ているプレイヤーだけが残る。

魔法職達は詠唱を始め、タンク達は万が一烨がる大赤翅が先制攻撃を仕掛けてきても対処できるように盾を握りしめ、火力職達は僅かな隙があればすぐにでも今出せ得る最大の火力を叩き込めるよう前のめりに構える。

「【スプラッシュ・フォース】！！」

「【ウォーター・プレス】！！」

「必殺！　【タイダル・トリトン・トライデント】！！」

「【アクアビット・バースト】！」

「食らいやがれ！　【オケアノス・グランドウェーブ】！！」

「行くわよ、【アケロン・スパイラル】！！」

この場にいる魔法使いたち、それも水に関連する大技を習得した者達が一斉に自身の誇る最高の技を撃ち放つ。それだけではなく大地が隆起し、落雷が降り注ぎ、風の刃が虚空を切り裂く。ここが後衛の輝きどころとばかりに数多の魔法が烨がる大赤翅へと殺到する。

「Svoooooaaaaaaaarrrrmmmm……！」

雷が直撃し、風に切り刻まれ、大地に打ち据えられ、そして大量の水に晒された赤き魔蝶は……水に触れた事でそれを解放した。

「なん……ッ！？」

「風！？」

「いやこれは……水蒸気爆発だ！！」

「うわあああああああ！！！」

莫大な、熱を帯びた蒸気が一気に膨らんでプレイヤー達を薙ぎ払う。中には偶然踏ん張るためのスキルを発動してその場に留まったタンクもいるにはいたが、殆どのプレイヤーは文字通り爆発的な勢いで膨張した水蒸気に押し出されて勢い良く吹き飛ばされていく。さらに言えばこの水蒸気もまた、人間の皮膚が耐えるには熱すぎる代物であり、少なくない数のプレイヤー達がスリップダメージで肉体ごと命が砕け散る。

確かにこの場にいるプレイヤー達は素人ではない。中にはレベル99、さらにはそれすら超えた三桁のレベルを持つプレイヤーもいる。だが単なる強さだけで組み伏せられる程焠がる大赤翅（レイドモンスター）は容易に乗り越えられる壁ではない。

何故ならばこれはシャングリラ・フロンティア。勝利への道は、いつだって設定の理解を遂げた先にあるのだから。

１２月１５日：炎魔羽々焚く（後書き）

焠がる大赤翅が火口深部から地表に出てくるときに活性化して蘇った火山が噴火しかけたけど、他でもない焠がる大赤翅に熱エネルギーを持っていかれたことで冷え固まったマグマで火口に蓋がされて足場ができた。
大地とは即ち神の亡骸、ならば神の肉体より生まれしモノは大地より力を得るは必定……

ニラ蝶攻略アドバイス！
水をぶっかけるとスリップダメージ付きの大ノックバックでカウンターされるよ！
水を浴びせることは間違ってないけど水を浴びせることは間違っているんですね
あとデバフのかけ方も間違えている

・蒸気膨張波動（きりのしんりゃく）
特定の攻撃、主に水に発露した場合に発動するカウンター技。
攻撃に用いられた水を蒸気に変換して広範囲に衝撃波としてぶちかます。当然この水蒸気にも熱によるスリップダメージ判定が存在するので食らい続けると危険。
なにせ「熱」というものはどれだけ頑強な鎧を纏ったとしても中身を蒸し上げるに十分な殺意を秘めているものだ。

12月15日：困った時は神頼み

◇

対「焠がる大赤翅」突撃メンバー第一陣壊滅。その情報はサードレマに激震を……走らせたわけではなかった。

「ああ、やっぱり？」

「カッツォ君分かってたの？」

「まぁね。でも俺以外の焠がる大赤翅に挑んだことあるプレイヤー達も大体予想通りだったんじゃないかな」

レイドモンスター「焠がる大赤翅」は強襲（レイド）と分類こそされているものの、新大陸でもわずかながら確認されているレイド戦が成立する前に戦闘可能なレイドモンスターである（正確にはだったと言うべきだが）

とあるプレイヤーがその知り合いに漏らした「死火口湖の底にいるレイドモンスターは条件は分からないが強力な炎で英傑武器の強化段階を上げてくれる」という情報は、これまで英傑武器を入手しつつも「大いなる火に晒す」などの条件を持ち、ドラゴンのブレスを浴びせようが何の変化もなかった詳細不明の英傑武器を抱えていたプレイヤー達にとってはまさしく福音であった。

ワールドストーリーの進行によって、火口湖の水が消し飛んだことで降下に多少の手間はあるものの潜水の必要がなくなり、焠がる大赤翅の元へたどり着く難易度が低くなったことも大きい。

だが意気揚々と焠がる大赤翅に挑んだプレイヤー達を待っていたのは、装備ごと肉体を貫くレーザーをぶちかまし当然のように範囲攻撃をばら撒きどれだけ水を浴びせても何の痛痒も見せない怪物であった。

だがそれでも、挑めるならば挑む。勝てずともその行動を分析する、それはゲーマーの性(さが)というもの。

「非活性状態の時の大赤翅とは何回か戦ったし、結構戦闘パターンも割れてたんだよね。本格的に戦闘状態になった時にどれくらい変化するのかが不確定要素だったけど……あの即死ビーム以外は殆ど変わってないっぽい。第一陣に混じってた人から連絡来た」

第一発見者(サンラク)から情報を聞き、そしてそれを広めたのは他でもないオイカッツォである。

当然焠がる大赤翅への挑戦回数で言えばプレイヤーの中でも上位であり、挑戦者達の間で共有された最前線の情報はレイドモンスター「焠がる大赤翅」の全容を何割か明らかにしていた。

「あの蝶、結論から言うと設置技なんだよね、破壊できるタイプの」

「は？」

「このレベルの話はペンシルゴンにはまだ早かったか……」

「そう言うセリフはお酒飲めるようになってから言おうねボク、続けて？」

「要するになんていうかな……生きたダメージ判定みたいな？　それこそ火の玉お化けみたいな触れたらダメージを受ける攻撃判定の塊にＨＰが設定されてる感じというか」

焠がる大赤翅はその本質が何であれ、モンスターとしては「でかい熱の塊」である。ならば耐熱強化装備、アイテム、アクセサリー、魔法にスキルまでフル活用してどこまで耐えられるのかを試すのは何度でも死に何度でも蘇るプレイヤーにしかできないことだ。
その結果わかったことは、
「あの蝶、実体が無いっていうか……チョップするだけで本体に手が刺さるんだよね」
尤も、刺さった手は一瞬で溶解してそのまま攻撃したプレイヤーも内側から弾け飛んだのだが。
そんな凄惨な出来事を経てオイカッツォはレイドモンスター「焠がる大赤翅」の本質がなんなのか、ある程度の推測を立てていた。
「多分、普通に殴ってどうこうするモンスターじゃないと思うんだよね」
「……………それ、レイドモンスターとしてどうなの？」
「それユニークモンスターの前で同じこと言える？」
オイカッツォの指摘に、ペンシルゴンはむ、と口を噤む。知っている限りでも
強制レベル50の状態で耐久戦を乗り越えて即死技のラッシュを正面から対処しきる事を要求する機巧の屍、様々な既存状態異常とも異なるステータス変化を乗り越える必要がある巨神の蛸、複数のマルチ推奨モンスターによる大混戦を切り抜けながら飛び抜けた性能を真正面から叩き伏せねばならない黄金の龍、とユニークモンスターは「ユニークってそういう意味？」と言いたくなるようなギミッ

クを持った者ばかりだ。

だがしかし、

「ユニークモンスターはギミック系だとしてもレイドモンスターまで完全ギミックボスってのは無いんじゃない？」

「んー、多分だけどまだ挑める状態じゃないんじゃないかな、アレ」

要するに、何か条件を達成することで初めてマトモな戦闘になる。

それがオイカッツォの出した結論だった。

「このまま殴りかかったって焚き火に自分から飛び込むようなもんだよ、だからあいつを弱体化させる何かをしてからが本番なんじゃないかな……」

大人数が定められた行動から外れないように規律ある行動で攻略することを「大縄跳び」と揶揄することもあるが、それ自体がゲームとして間違っているわけではない。一人では到底敵わないような敵と相対する際に一人だけ明後日の方向を向いて踊っていても仕様がないのだから、マルチ推奨ボスとの戦闘に際して「武器を振る以前に達成すべき条件」があることはなんらおかしくはないのだ。

そしてこのゲームはシャングリラ・フロンティア。自分のコピーを倒すために音楽プレーヤーの謎を解くようなゲームである、目の前の敵だけを見て視野を狭める事は攻略から遠のく第一歩だ。

「ちなみになにか妙案があるの？」

「神頼みかな」

ペンシルゴン知ってる？　とオイカッツォはにぃ、と挑発的な笑みを浮かべながらレイドモンスター「焠がる大赤翅」攻略の為の必殺たり得る策を口にする。

「雨の日に焚き火は起こせないんだよ」

12月15日：困った時は神頼み（後書き）

雨乞（あめこ）いて
恋は盲目
熱視線

ちなみに身長的には
ペンシルゴン＞＞オイカッツォ＞＞サンラ子

12月15日：個々に輝く、故に開拓者

◇

セカンディルから至るサードレマは、そこからさらに三つのルートに分岐する。

地底の樹海、滅びたくろがねの遺跡、そして焔蝶の座す死火山。彼らがやってきたのは樹海からであった。

「樹海窟から突撃！　ぱやぶさ率いる敵軍！！」

「フォスフォシエが落ちたのか！？」

「違う！　あいつら制圧せずに突破してきたのよ！！」

「クッ、どいつもこいつも焠がる大赤翅に流れたから守りが手薄になってんのか……！！」

敵陣営から真っすぐに、向こうから見て敵陣営であるサードレマ側に与する街をノンストップで突破してきたぱやぶさ率いる配信戦線(ライブライン)突撃組は、今まさにサードレマの外壁へと到達しようとしていた。

「おーおー、ここからでもよく見えるねぇ」

「同志！　どうする？！　魔法防御は破壊されてるぜ！？」

「ちなみに復旧までどれくらい？」

「聞いてきた！　半日だってさ！！」

「大赤翅のクールタイムが一日であることを祈るしかないね、さて……」

可能性と一つとして考えてはいたが、あまりに早すぎる本陣決戦の構図にペンシルゴンは僅かに目を細める。さしものプレイヤー達も目の前まで敵プレイヤーが迫っているともなれば迎撃の意思を見せてはいるが……今のサードレマは焠がる大赤翅によって魔法防護結界を破壊されている。つまり城壁への魔法攻撃を防ぐ手段がない。

だがそもそもの話。

「バカ正直に籠城戦なんてするわけないじゃない」

「何する気？」

にゃぁ、と捕食者の笑みを浮かべたペンシルゴンにオイカッツォが若干引き（ヒ）きながらも問いかければ、ペンシルゴンが返した返答はいたってシンプルなものであった。

「何する、っていうか……もう仕掛けた」

突撃する集団の先頭、他者から認識されやすくするためか派手な赤い鎧を纏った男が何か大声を上げながら剣を掲げた瞬間。

「魔力を込めると紐に触れているアイテムに魔力が伝導する魔力伝導糸（マジック・ホットライン）をこう、地面に真っすぐ引いてさ……そこに爆炎系魔法の使い捨て魔術媒体（マジックスクロール）を載せて土で埋めた第二の城壁、名付けるならそのまんま「ファイアウォール」かな？」

ペンシルゴンたちがサードレマ外壁から見下ろす眼下、千紫万紅の樹海窟からサードレマに続く道の左右に潜んでいたプレイヤー達によって一斉起動された爆炎が壁を形成し、先頭を走っていた配信者と思しき人物を含めた先陣を炎が焼き焦がす。
さしもの新王陣営プレイヤー達も、テンションだけで轟々と燃え盛る炎の壁に突撃するほど狂奔に取りつかれていたわけではないらしい。

「あれ多分配信者じゃないの？」

「あーっはっはっはっは！　私に向いてないカメラなんて全て壊してくれるーっ！！」

「まぁお茶の間に流せないタイプの高笑いではあるね、発禁スマイル？」

そっとオイカッツォの背中をペンシルゴンが押し出し、バランスを崩して外壁から下へと落ちていったのを目だけが笑っていない笑顔で見送ったペンシルゴンはさて、と今度はちゃんとした笑顔を見せながら後ろに控えていたプレイヤー達へと指示を出す。
心なしか彼らからの視線に恐怖の色が混ざっているようにも見えるが、統率に必要なものは結束力と恐怖であることを重々承知しているペンシルゴンは構わずに炎の向こうで突破方法を探しているのだろう敵プレイヤー達へと槍の穂先を突き付ける。

「ゲームに化学兵器禁止条約は無ーい！　野郎ども！　ぶちかましちゃいなさーい！！」

サードレマにやってきた錬金術師を目指す薬剤士プレイヤー達に依

頼することで数を揃えた「錬成毒」。
通常の状態異常とは別枠判定で状態異常を付与することが可能な、DOTをメインとするプレイヤーからすれば必須のアイテムだが所詮は錬金術師（最上位職業）にも至れていない駆け出しの薬剤師が作ったもの。レベル５０もあればよほどＶＩＴが低くない限りは解毒の必要もなくレジストが可能なものだ。

だがこのゲームはシャングリラ・フロンティア。現実ですら極めようと思えば果ての無い薬学、この世界においてただテキストに書いてあることだけを信じることはあまりにも愚かだ。

「毒ガス!?」

「いや、大した毒じゃない！　炎の壁も消えたし突撃だ!!」

「ぱやぶささん死んだけど!?」

「背中見せて逃げたら射かけられるだけだろ!!」

「あれこれ、「毒蜥蜴の肝練り粉」じゃ……あっやばこれ可燃せ——
——」

サードレマ城門前。先導する旗頭が爆炎の中で焼け消えたことで指揮系統が消失。一瞬混乱が起きかけるも、先導者がいようがいまいがやることに変わりはないと大した毒ではない緑の粉塵の突破を始めた新王陣営プレイヤー達は、城壁の縁に立ってこちらを見下ろす、どこかで誰もが見た覚えのある黒い長髪を風に流す女性の姿を見た。

「着火!!」

錬成毒「毒蜥蜴の肝練り粉（可燃性の粉塵）」が充満した眼下に次々と放たれる上位クラスの火炎魔法。最初にファイアウォールを構築するために潜伏していたプレイヤー達も参加したことで左右と上の三方向から浴びせられた炎は粉塵に着火し、連鎖し……大爆炎がプレイヤー達を呑み込んだ。

「これで全滅してくれるなら苦労はないんだけどね……」

常人なら断末魔を上げることもなく焼け死ぬであろう大燃焼の海を見下ろしながら、しかしペンシルゴンの笑みには苦笑が混じっていた。

このゲームはシャングリラ・フロンティア、そして開拓者は火に巻かれた程度では死なない者もいる。爆炎の中に防護魔法の輝きが混じり、なんらかの耐熱スキルで耐えたと思しきタンク達が爆炎に熱せられた道を踏みしめながら前へと前進を開始。いくらかのプレイヤーは炎によるダブルコンボで仕留められたようだが、やはりＮＰＣを処理するのとは訳が違うらしい。

「だったら次だ、さぁアツアツの油を鍋ごと投下だーっ！！」

新王陣営のプレイヤー達へと襲い掛かる第三の熱。電撃戦を仕掛けた彼らが全滅するまでにそう長い時間はかからなかったが、戦いはまだまだ序盤も序盤である。

「……初っ端から飛ばしてるなぁペンシルゴン。とりあえず許さん」

その光景を城壁に開けられたのぞき窓の縁に掴まって眺めていたオイカッツォは、飛んできた矢を片手で弾きながら突き落とされた恨みを晴らすべく登攀系スキルを起動して壁を駆け上がり始めるのだ

った。

12月15日：個々に輝く、故に開拓者（後書き）

・毒蜥蜴の肝練り粉
ポイズンリザードから採れる肝を乾燥させ、砕いて作られる毒粉
吸い込むと一定時間体力が減少する毒状態になるが、高レベルのプレイヤーやモンスターであればレジストは可能。
テキストには一切記載されていないが可燃性、というよりも熱を加えると激しく発火するので現在ではもっぱら「ぶん投げてから着火して爆破する粉塵爆薬」として運用されている。

Q．なんでそういう大事なことテキストに書かないんですか？
A．ポイズンリザードの鱗のフレーバーテキストをよく読んでから質問してください。「ポイズンリザードの鱗は高い保湿性を持っており、それは熱に過敏に反応する臓器を守るためである」とちゃんと記述してあります。さらに言えばドロップ状態の肝が水を多く含んでいることからもポイズンリザードが生態的に熱を危険視しており水分を多く含むことで発火を避けていることは理解に難くない筈なので単純に読み込みが足りないのでは？？？？

12月15日：甘きは甘くなく

◇

「いやいやいや、罠エグない！？」

ばっ！　とベッドから跳ね起きたぱやぶさの第一声はそれであった。元より帰路を考慮しない突撃という名の特攻、大した装備もつけていなかった事もあって不意打ちの爆炎壁に呑まれたぱやぶさの体力は瞬く間にゼロとなっていた。

「成る程ね、敵本陣まで切り込んで二十分かぁ……」

今回のイベントにおいて死亡した場合、プレイヤーには一定時間本陣たる街から出られない「治療時間(リスタートペナルティ)」が課される。瞬殺されたとはいえ、サードレマまで肉薄していたぱやぶさに課せられた治療時間は二十分。決して短くはないが、王国騒乱イベント全体を通して見ればそう長い時間でもない。どちらにせよ装備を整えたり、対策を考える時間、そしてそれらを配信で流すことを考えればむしろ短すぎると言えるだろう。

「とりあえず電撃戦は失敗だね！　ありゃ本格的に攻城戦仕掛けないとダメだなー……あはは、とりあえず作戦タイムかな！！」

プレイヤーであるぱやぶさがゲーム内で死亡したとしても、ぱやぶさの配信まで止まったわけではない。ふわふわと目の前に浮かぶ鏡に笑いかけながら思考は配信に映らない……否、映さない「影」を思う。

（さぁーて……二日くらい〝潜伏〟するんだっけ？　凄いなーあの人達。やってるゲームカテゴリが違うんだよなー）

新王陣営電撃戦。

それを率いたのはぱやぶさ、それに付き従ったのはリスナーと――

◇◇

サードレマ地下水道。

犬が辛うじて通れるかどうかという、狭い水路を這うようにして進む影が三つ。

『応答求むアップルパイ。こちらバタースコッチ……チョコレート、ハニートーストと共にＤルートから潜入成功。キル０』

随分と美味しそうな名前が無線に乗って伝達され、サードレマに密やかに迫る彼らは異なる場所から発せられた言葉を遠隔で共有する。

『こちらアップルパイ。ドーナツと一緒にＢルートに到着、二人見張りがいる……プレイヤーだな、キルする。オーバー』

『あーごめんこちらエクレア。ジンジャーエールとフィグと一緒に今Ｂルートに向かってる、Ａルートヤバすぎ、毒が流されてやんの』

『こちらバタースコッチ。ははは、やっぱ』

ぱやぶさの突撃は、単なる特攻ではない。

『了解エクレア。こちらアップルパイとドーナツは五分待ってから制圧する』

『引き続きエクレア〜。なんなら入り口から狙撃するけど？』

『こちらドーナツ。もう試した。傾斜で射線が通らない、潜入で手榴弾使うとか言い出すなよ？』

重要なのは「配信者が率いるプレイヤーの集団が全滅する」という事。何人、何十人がサードレマの城壁を越えられずに散ったとして……何人中何人が死んだのかを正確に把握することなど不可能に近い。

『エクレア〜。フラッシュバンでいいじゃん』

『こちらアップルパイ。もう投げる準備できてるからはよ来いって話ですよ。オーバー』

『エコー了解了解、あと一分……あ、間違えたエクレア』

例えばそう、もしもサードレマに突撃を仕掛ける一団から十人程度が離脱していたとしたら？

規律はないが、統率は取れているぱやぶさ率いるプレイヤー集団そのものがカモフラージュ。派手に死んだからこそ、派手に殺したからこそ、その事実に気づくまでに僅かな空白が生まれる。

『こちらフィグ。なんか俺だけ名前に若干の疎外感を感じるんだけど』

『こちらチョコレート。だってフライドチキンもフレンチフライも嫌って言ったの君ですやん』

『みんな甘味なのに俺だけ塩分じゃん、断固拒否だよ』

『うーい、エクレア合流～』

サードレマ地下水道の一角にて一瞬の閃光と二発の銃声、それに気づいた者はもういない。的確に額に叩き込まれた銃弾によって、抵抗する暇もなく息絶えたが故に。

『こちらアップルパイ、制圧完了。オーバー』

『こちらバタースコッチ。早くない？』

『こちらアップルパイ。エクレアがノンストップでダッシュしたから即フラバンぶん投げて終わり。オーバー』

『こちらエクレア～。二人くらいなら一秒見れれば目ぇ瞑っててもヘッショ余裕ですよ』

『ん。というわけでこちらアップルパイ。ドーナツ、エクレア、ジンジャーエール、フィグと一緒にBルートから潜入する。オーバー』

『こちらハニートースト。激しく腹が減ってきたでありますどうぞー』

『こちらドーナツ。この後ログアウトしたらコーラ買いに行く』

サードレマ陣営の実質的なブレインを担うＲＰＡの面々が「そういえばＧＵＮ！ＧＵＮ！　傭兵団を見ていない」という事実に気づいた頃には。

地下水路を見張っていたＲＰＡメンバーが不意打ちの射撃でキルされたという事実が明らかになった頃には。

『それでは甘々な諸君。今は息を潜めて潜伏の時……〝祭りの日〟にまた会おうか……アップルパイ。アウト』

『あ、そうだフィナンシェ（Financier）とかあるじゃん。エクレアアウト～』

『こちらフィグ……ねぇそれなんでキャラメイクする前に思い出してくれなかったん？』

銃火器で武装した潜入部隊は、サードレマの各地に散って潜伏を完了していたのであった。

１２月１５日：甘きは甘くなく（後書き）

ＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団はまだ現時点で配信すらしてないガチ潜伏をかましているのでサードレマ陣営はいつ起爆するかわからない獅子身中の虫（銃火器フル武装）を抱えることになった

エクレア君は投げナイフとかマグナムとかでキル数積み上げるタイプのヤバいやつだよ

12月16日：答えは殺すのではなく、打ち破ったが故に

◆

「こういうのって「ドラゴンスレイヤー」が定番じゃないの？　なんでドラゴンバスター？」

「俺に聞かれてもなァ」

トマホークは死んだ、だがモンスターと言えど誇り高い死に様だった。こういう自分たちしか知らない強敵の最期、ってのはちょっと燃えるものがある。凍結した左腕を肩ごと引きちぎって振り回してきたときは流石に肝が冷えたが……あんな最期を見せられたら、愛着が湧いちゃうってもんだぜ。

「で、問題の討伐報酬だが……まさかそもそも素材アイテムが落ちないとは」

「とはいえジョブと装備強化ですからね、リターンはでかいですよこれは……徹夜の価値がありました」

現在12月16日、午前6時半……ほとんど一晩中戦っていた計算になる。このゲーム確か人数でモンスターの強さがあんまり変わらないんじゃなかったか？　つまりトマホークはこの場にいるメンバー総出で戦い続けて一晩かかるようなモンスターだったわけだ……それもうほぼレイドモンスターじゃねーの？

「ていうかジョブで思い出した、サバイバアルお前メインジョブ【

仇討人】じゃないだろ」

「おうよ、今のメインは戦王だな………その様子じゃお前、最上位職業転職クエストやってねぇんだろ」

転職……あー、あのなんか、化粧したなんかを倒せとかいう。

「仇討人の最上位職業……多分お前の【死者の剣（リヴェンデッド）】だったか？　そっちも俺が発生させた【復讐の剣（アヴェンデット）】と同じで、サブに設定してもメインと同じ効果を維持するジョブだぜ」

「は、マジ？」

このゲームのジョブシステムはメインとサブの二つがある。基本的に上位以上のジョブは他の職業にはない固有の技能・特典が備わっており（例えば仇討人なら専用スキルの獲得）、これはメインに装備した時のみ効果が発動する。

サブジョブはなんていうかな………言うなれば「補正」だけが得られる。例えば俺が【剣聖】のジョブをサブにセットしたとしても、サイガー100のように剣を縦横無尽に操ることは出来ない、せいぜい剣技系のスキルが覚えやすくなるくらいだろう。

そして職業【仇討人】はこれをメインに設定していなければ、仇討人としてギルドで活動することが出来ない。これは「頭領」から聞いたので間違いない。

今の俺は【蹴撃術士（キックストライカー）】をサブにつけているが………正直に言えば、別にこのジョブにはそこまで執着していない。補正は惜しいが何度も何度も反復練習してスキルを覚える、という性質上……やり方は大体覚えた。多分今ならシステム補正無しでもナイフくらいなら蹴って飛ばせる。

あれ、やってて分かったんだけど設定的な意味での「スキル」が適用されるのは投げた武器を蹴った瞬間なんだよな。つまり上に投げて落ちて来たのを蹴り飛ばすまではモーション補正の範囲内だ。
ＤＥＸ……まさかお前、人権パラメータだったのか？　いや腐ってるパラメータ存在しないわ、一番軽視されがちなＬＵＣですら食いしばりの確定保証のために１００まで上げるのがベターなわけだし。ＶＩＴ君は……その、ごめん。縁がなかった、一緒にリュカオーンに復讐しようぜ……せーのっ、おのれリュカオーン。

「お前はやたらにユニークに関わってるから変に優先順位付けるのが良かねぇな。俺なんか最初に試験を見た時点でもうクリア最優先くらいの気持ちだったぜ」

「ジョブの内容は？」

「おおよそ仇討人の単純上位互換って感じだがちと条件付きになる……いや、そうだな」

何故かいきなり話すことをやめたサバイバアルはにやり、と悪そうな笑みを浮かべると……こう言いやがった。

「そういうのは自分で見るもんだよなぁ？　先に誰かからネタバレされるんじゃなくてよ」

「……言うじゃねーか」

そう言われると、そう言ってきた俺は返す言葉が無い。
まぁ条件が提示されて、それに挑戦する制限もないのであればさっさと挑んでクリアすればいいだけの話だ。というか延々と話が脇道にそれ続けていたな……そう、ジョブだ。ジョブの話だ。

十番目の真なる竜種トマホーク……いいや、「想い託す半身（トマホーク）」なる、なにやら詩的（ポエミー）な本名を持つ想い託す半身（トマホーク）君が勝利者たる俺達に遺したものは、素材アイテムではなく……〝権利〟と〝変化〟だった。

まず一つ目、それはとある職業に就くための権利だ。
その名も【真竜討滅者（ドラゴンバスター）】、なんとも香ばしい香り漂う職業名だが取得条件が真なる竜種の討伐というだけあって、性能は高い。十中八九隠し最上位職業だ。
性能を一言で説明すると……「廉価版勇者」だろうか。とある武器を運用している時のみ真価を発揮する職業で、そのとある武器が破損すると職業ではなく称号に代わってしまう、という結構きつい縛りを課せられているだけあって【剣聖】や【賢者】……下手をすればレイ氏のなんとかドラグーンにも負けない強さを持っている。
就職条件はとある武器を持っていること、そしてこの「とある武器」は戦闘に参加したプレイヤーであればほぼ確実に持っているものだ。
なにせ……

「竜滅装備（バスターアームド）。サンラク、僕は今猛烈に感動しているよ……神代製銃火器にも適用されるなんて！！」
「それはよかったね」
「ひゃっほう！！！」
狂喜乱舞するヤシロバードが握るスナイパーライフル。本人の言う通り神代の技術で作られたそれは、現在少々特徴的な状態になっていた。科学文明特有の雰囲気はどこへやら、まるで……そう、まるでトマホークの素材を使って作成されたかのようなデザインに変質していたのだから。

12月16日：答えは殺すのではなく、打ち破ったが故に（後書き）

真なる竜種は生き物であって生き物じゃない受肉概念なので「殺害(スレイ)」じゃなくて「破壊(バスター)」なんですね

・【復讐(アヴェンデット)の剣】
人の「悪」は法と義が裁くことができる。だが人ならざる獣に人の法を説いてなんになる？　飢えた獣が義によって本能を押さえつけることができるとでも？
故に汝、剣たれ。虐げられし人の想いを使い手とし、悪辣なるモノを悉く討ち滅ぼすべし

要するにカルマ値の高いモンスターを狩る仇討人、生きている被害者から依頼を受けることで対象との戦闘に補正がかかる

では「死者の剣」とは？　それは去りし者の想いを継ぐ刃に他ならない

＜.ｉ５５８７１３―２２９５１＞
＜.ｉ５５８７１４―２２９５１＞

近く２０２１年０６月１７日、コミカライズ版シャングリラ・フロンティアの四巻が発売されます！
今回の特装版は編集氏に無茶振りしたらまさかの成功判定で返してきたのでまさかの公認で「クトゥルフ神話ＴＲＰＧ」を題材にしております
そこそこＣｏＣにハマってたのですが、本格的にリプレイを書いたのは初めてなのでお手柔らかに……まぁ長くなって上下編にしていいか、ってさらに無茶振りをしたので硬梨菜は申し訳なさでいっぱいなのです
それを差し引いても漫画部分は全編通して不二先生の手によってシャンフロの世界が完璧に出力されていますので手に取って後悔することはありません
是非ともよろしくお願いします

１２月１６日：立証完了（前書き）

寝落ちの詫び

１２月１６日：立証完了

竜滅装備（バスターアームド）。取得条件は「真なる竜種」との戦闘中に最も使用した武具防具を戦闘終了時かつ勝利時に保有していること。一部の装備を除いた武器防具が対象であり、竜滅装備単体でもある程度の性能を発揮するが、その真価は職業【真竜討滅者】と併用することで発揮される。
真なる竜種を打ち倒した俺たちが振るっていた武器は竜の加護を……いやどうなんだ、どっちかというと怨念？　を受けてその姿を変えていた。
それを見た討伐者達の反応はといえば。
「うーわ、これ一番長く使ってた武器が対象かよ！！　クソが、それが分かってりゃ最初から同じ武器を使ってたぜ」
「んー、それだと実現杖も対象のはずだけどねぇ……特殊な武器は対象外かな？」
「待って！　儀礼剣って極論消費アイテムなのに竜滅装備化は不味い！　徹夜してもリカバリできないぃぃぃぃぃぃぃ！！」
「あっ、これ破損状態アイテムにならなくなったのか。うーん、銃がユニーク化したのは嬉しいけど貧乏性になりそうだ」
悲喜交交って感じだな、なんというか。
竜滅装備は見た限り、普通に耐久値がゼロになると消失する通常武器と同じ判定だ。ジョブが称号化する事も踏まえるとあんまり無闇な突撃は出来ないジョブだ……極論を言えば倉庫にしまっておくの

が一番賢い気がする。

しかしまぁ、何事にも例外というものはある。例えばディプスロの実現杖？　なるとんでもユニーク武器は竜滅装備化しなかった。多分勇者武器とかも含まれるんだろうな、だが神代武装は対象内……条件はなんだ？　いや考えても仕方ないか、また別の真なる竜種に出くわす確率はあんまり高くなさそうだし。対乱数に再びを求めると沼る、それは人類の歴史が証明している……

「それに、当初の目的は果たせたわけだしな……！」

そも、真なる竜種を倒しに来た理由はジョブを手に入れるためじゃない。元を辿ればただ一本の剣を強化する為だけに他の連中を巻き込んだのだ。

「真説輝焔(トゥルーナク)アラドヴァル……」

竜威を取り込み、仮説でしかなかった仮初の輝槍。それが今ここに完成を見た。焔槍剣の名前は1日経たずに過去のものになったよ悲しいね、でもゲームの強化ってそういうもんだから……「いい感じの枝」が「創世樹枝ユグドランガイア」になったりな。なお強化八段階目でまだ上がある。

いやあのゲーム武器種馬鹿みたいに増やしすぎなせいで攻略班が誰がどの武器のことを話してるのか分からない、みたいなことになってたけど……大は小を兼ねるけど大が必ずしも正解ではない、か……

……うーんフィロソフィ。

「アーイイ……完成した武器を見てる時が世界で一番幸せな瞬間だぁ……脳内麻薬ビチャビチャ」

「あっはサンラクくぅん今キメセクの話したぁ！？」

根性焼き。

「あっ！　らめぇ！　おへそを焼かれるの何か新しい扉が開きそうっ！」

「瞳孔が開いて欲しいなぁ」

「あ、私瞳孔開いた死体のモノマネできるよぉ？」

「焼かれたまま通常運行で話すな」

「リジェネかけたからねぇ……」

細胞も残さず焼却しないと再生し続けるタイプの敵なんだよなぁ。もはや根性焼きナイフじゃ火力不足なのは決定的だ……強化とかできるかなこれ。そうだ……強化といえば、だ。

「ディプスロ、確かその杖は竜滅武装化の対象外だったよな？（根性焼きナイフを押し付けながら）」

「そうだよぉ（リジェネをかけ直しながら）」

「ってことは……」

「これでしょぉ？」

ディプスロが取り出して見せてきたのは、銀色の石ころのようなものだ。見ようによっては宝石の原石にも見えないことはないが、持

ってみると分かる。なんかこう……脈打ってる。
ふむ……ディプスロも持ってるってことは条件は「該当部位に対象となる装備が存在しない」かな。

「サンラク君はいくつ持ってるのぉ？」

「三つ」

「露出プレイで三つも貰えるなんて脱ぎ得だねっ！　でも股間に玉が二つあるから合計五つだねぇ！？」

「根性焼き（刺）」

「おへそにあちゅいのが有線接続しちゃうのおおお！」

頭と胴体を無線環境にしてやろうかこの色ボケＬＡＮポート。
新、あるいは真・アラドヴァルの刀身を濡らすファーストブラッドを変態の体液にすることに申し訳なさを感じるレベルだが、それでも滅ぼさねばならぬ悪がある……

「さて……一応俺が音頭取らないとダメか。えー、本日お集まりの皆様、お疲れ様でしたー。無事トマホーク君をぶちのめしたことで今回のパーティ結成の目標が達成できましたのでー、えーこれにて現地解散で」

「ウソだろおめぇ、僻地に片道切符じゃねえか」

「どうせキャッツェリアで報告する必要があるんだし、帰るまでが遠征(えんそく)だよサンラク」

「名残惜しいですね……一徹で済んだのは嬉しくもあり名残惜しくもあり、という感じです」

「もうちょっと待てば朝だよサンラク君！　朝チュンしようよ朝チュン！！」

刺して、回す。

「心も体もアンロックだよぉ！　臓物（モツ）まで愛して……っ！」

「いや施錠（ロック）したんだが」

「お前は俺だけのもの……ってコト！？」

ダメだこりゃ、無敵モードだこいつ……最終手段だ。
不意打ちで耳元に顔を近づけて……

「Ｃｈａｌｃｏｓｏｍａ　ｍｏｅｌｌｅｎｋａｍｐｉ……」

「ひゃあぁ」

やはり耳元で囁かれるのに弱いのか、すこーんと腰が砕けたディプスロに俺は無言で拳を突き上げ勝利のポーズ。

ちなみにＣｈａｌｃｏｓｏｍａ　ｍｏｅｌｌｅｎｋａｍｐｉはモーレンカンプオオカブトの学名でありモーレンカンプオオカブトはコーカサスオオカブトやアトラスオオカブトと同じカルコソマ属で共通してやたら気性が荒い傾向にある。ウチの母は甲虫同士で戦わせるのはあんまり好きではないが幼い頃に母の飼育ケースからパラワンとモーレンカンプを戦わせた時はなんかもう色々凄かっ（以下略）

１２月１６日：立証完了（後書き）

陽務家では虫の学名を覚えると物凄い勢いで褒められるので自己肯定感と虫に関する雑学が培われるし、魚の漢字を書けるようになるとその魚の料理とお小遣いが貰えたので兄も妹もやたら虫と魚に詳しいし鰻を調理できる

それはそれとして最新四巻好評発売中のコミカライズ版、まさかの次に来るマンガ大賞コミックス部門にエントリーしております。ライバルが強すぎるし貴方達の時代もう来てるでしょ！ナウ！って感じになってますがもしまだ投票権を温存してる方がいたら是非是非投票よろしくお願いします！！

自分も頑張って五巻の書き下ろし作業進めてますので……（なお今回の更新はその書き下ろし作業を止めて書いた。本末転倒では？？？）

12月16日：凱旋―リザルト―

さて…………そろそろ目を逸らすのも限界になってきたぞ。他の誰も言い出さないし…………あーもう、俺が行けと。

「あ、あの……ウル・イディム氏？」

「ム」

「そのぉ…………なんか、不機嫌だったりします？」

「ソノヨウナコトハナイガ」

ほんとぉ？　なんかもう……全身が刺々しいというか触れるもの全てを傷つけるキレっぷりなんだけれども。

ウル・イディム氏は自称オーク、もとい「オウク」？なる種族であるらしい。発音が似たオークは頭が豚か猪の巨漢といった感じのデザインだがウル・イディム氏は巨躯である、という以外は全く異なる容姿をしている。そもそも目は六つあるし牙は完全に肉食生物のそれ、全身の甲殻はどちらかというと甲殻類と甲虫をごちゃまぜにしたものを殺意でコーティングしたような刺々しさだ。下手に触れたらこっちの手が切れそうなくらいの。

それが……トマホークを撃破してから、さらに進化していた。もはや甲殻というよりも鎧の形に加工した刃、としか言いようがないキレッキレの外殻。いいや、あれはまさしくトマホークの刃殻だ。俺たちを散々苦しめた刃の装甲と同質のものに置き換わったウル・イディム氏……彼に一体何が起こったのか。

いや十中八九仕留めた相手の性質を取り込んでより強大になっていくタイプのモンスターじゃんね。このオークさんが行きつく先はどこなのだろうか……

「いやぁ……なんというか、すごく……その、キレのいい面構えになてるじゃん？」

「ウム……マレニダガ、倒シタモノノ力(チカラ)ヲ、得ルコトガアルノダ」

いやそれ仕留めた相手の性質を取り込んでより強大になっていくタイプのモンスターのやつ～。

やはりこの人、最終的に人類に絶望して「もはや人類を滅ぼすしかない！」とか極論に走るタイプのラスボスなのではないだろうか。最後に人の美しさに触れてちょっと態度軟化させてから死ぬタイプと、バカな！この私がぁぁぁ！って死ぬタイプの二種類あるけど果たしてどちらだろうか……いや、あきらめてはいけない。人の善性を見せ続ければきっと心強い味方でいてくれるはず。

「サンラクくぅん、サンラクくぅん」

「なんだよ」

「ちょっと耳元でえっちなこと囁いてみて……！」

「わっっっっっっっっっ！！！！！！！！！」

「脳にキくぅ！？」

とりあえず耳元で叫んでから頭にチョップ。他にも視線を向ければ

ダメだ、一人はマガジンに頬ずりしてるし一人はハルバードを今にも舐めそうだし一人は地面をのたうち回りながら儀霊剣を振り回している。この場にいるの人間の悪性寄りの連中ばかりじゃねーか。もうおしまいだーっ！！

「まぁ、なんだ……ウル・イディム氏。今回の討伐はアンタが前線を張ってくれなきゃここにいる何人かは間違いなく死んでただろう。協力感謝する」

「ム………私モ、波濤ノ人ラニハ驚カサレタ………マコト、強キ力(チカラ)ヲ持ッテイル。共ニ戦エタコトヲ誇リニ思ウ」

すごくいい人だが、常時厳戒態勢みたいな姿になってしまったせいで「用済みだ、では死ね」と言い出しそうで永遠に怖い。とりあえず握手という概念が王狗にもあるらしく、手を差し出してきたので覚悟を決めて握手……あっあっあっ爪というか指そのものが刃物みたいに鋭いからスリップダメージ入ってるスリップダメージ入ってる！　これもうナイフを握りしめてるのと変わりないが！？

「コノ手ヲ恐レズ握ルトハ……ヤハリ波濤ノ人ハ……ミナソウナノカ？」

「どうだろうな、そこまで根性があるのはそうそういねぇぜ？　ま、俺も余裕で出来るがな……！」

「おっと？　そういう度胸試しなら僕も乗るよ。ちょっと待って一応体力回復させる」

「徹夜を共にしたら仲間、でしょう？」

「んふふぅ」

何故か突然始まったウル・イディム氏との握手会。多分本人が一番状況が理解できていないだろうがこっちも大概ノリで動いているので説明ができない。とりあえずディプスロが背中から生えた第三の手で握手したところで一巡したので握手会は終了。

「……とりあえず、キャッツェリアに戻って報告かな」

「ミノタウロス？　の拠点じゃなくてか？」

「場所が分からん」

とりあえずキャッツェリアでクエスト進行しないならそこからミノタウロスの拠点とやらに遠征だな……うーん、どんどん人里から離れていく。

「ま、とりあえず………真なる竜種討伐！　お疲れ様でしたーっ！！」

……

…………

……………

朝です。基本的にここにいるメンツはゲームの為に徹夜上等なので多少のけだるさはあるが概ねパフォーマンスに変化はなく、ディプ

スロの転移魔法でキャッツェリアに戻ってきた俺達はとりあえずサミットが行われていた会場を訪れる。

「………ム」

いた。ミノタウロスの女王の………アスティ、えーと。

「あー、見つけたぜミノタウロスの女王様」

「貴公ラ………あノ、恐ルベキ、竜は………」

すっ、とウル・イディム氏を指さし、そして各々が竜滅装備（バスターアームド）を見せつけるように立ち………最後に、俺がアラドヴァルを掲げて一言。

「療養中のご主人に朗報を送ると良い。仇討ちは俺達が確かに成し遂げた……ってな」

どう見ても頭が牛そのものなのだが、驚愕と歓喜の表情が確かにはっきりと認識できるのはやはりシャンフロの恐るべき解像度と言うべきか。ともかく、俺達はユニークモンスターやレイドモンスターに引けを取らぬ強敵、真なる竜種の討伐に成功したのだ。

12月16日：凱旋―リザルト―（後書き）

じゃあ生まれたばかりのウル・イディム氏は丸っこかったり今の姿と違ったのかというとそうではなくて、取り込んだ因子を時間経過で自分に還元するので最終的に最初に出会った時の姿に戻る。ただ戦闘時になると肉体が変形しだす

今回はサイナが飛んだり跳んだりサンラクが跳んだりしてたので使わなかったけど飛翔態があるし、今回獲得した斬竜態もまぁ大概ヤバい部分的に再現されたジェネリックトマホーク君ですからね（ただマナ消費が激しいので多用できない）

12月??日：理外を通す理あらば是即ち理外の理解に外ならぬ、とかぬちは己に言い聞かせた（前書き）

書かなきゃいけない視点のどれもいまいち書くモチベが無いならモチベが湧き上がる視点を新造すればいいじゃない

12月??日：理外を通す理あらば是即ち理外の理解に外ならぬ、とかぬちは己に言い聞かせた

◇

鍛冶。シャングリラ・フロンティアにおいて武器や防具の作成はNPCに委任するものではない。
プレイヤー自身が装備を作成し、強化し、進化させ……さらにその先を見出す事すら可能。それはシャングリラ・フロンティアというゲームにおける異常なまでのリアリティと自由度の一部として認められ、剣を振るでもなく杖を掲げるでもなく……それらを作り出すことにこそ熱意を傾けるプレイヤーは決して少なくはない。
古今東西、ハック&スラッシュ、そしてダイナミックなアクションがある種ゲームの華であることは確かだが、何かを生み出し拡張する生産を題材としたゲームもまた個々人の社会的地位や生活にもよるが〝非日常〟に分類されていた。

話を戻そう。
このシャングリラ・フロンティアにおける武器防具の作成は……ゲームそのものの自由度とクオリティから漏れることなく高い自由度を誇る。
とはいえ、だ。やはり現実そのままの鍛冶、というわけではない。ゲームコンテンツとして「楽(たの)しく」そして「程々に楽(らく)」なある種のミニゲームのようなものだ。
まず第一にプレイヤーは作りたい武器の「設計」から始める。どういった武器で、どういった見た目で、どういった性能なのか。その設定方法は人それぞれ、いちからデザインする者もいればあらかじめシステム側が設定したプリセットデザインを採用する者もいる。
本当に珍しいパターンでは実際に現実で作ったものをスキャンして

ゲーム内に持ち込む、なんて者もいる。
とはいえその全てが実現するようではゲームにならない。誰もかれもが掲げるだけで敵が死ぬ剣を持っていたらもはやそれは緩やかな絶望のシミュレーションにはなるかもしれないが、ゲームかどうかと言われればちょっと難しいところだろう。
故に理想のデザイン、理想の性能になるか否かはこの後の工程……すなわち素材の選択と実際の鍛冶の結果によって決定される。
例えば「水属性魔法の威力が上がる杖」を作るとする。この時にそこらで採れる木の枝や、ツルハシで岩を叩いて落ちる石を使ってそれを実現しようとしたところで、出来上がるのはせいぜい木に石が埋め込まれた杖と呼ぶのもおこがましい棍棒のなり損ないだろう。
もしも妥協無く「水属性魔法の威力が上がる杖」を作ろうとするならば……最低でも水辺、あるいは水中、あるいは地下水脈の近辺で採掘できる鉱石や、水棲モンスターの素材を使用する必要がある。
そして高性能を望むのならば使う素材はより良いものであるべきだ。
素材アイテムにはそれぞれリソースポイントが存在し、これが武器作成に要求される数値（ノルマ）を満たしていて、なおかつ鍛冶師プレイヤーの「鍛造」魔法のレベルも同様に要求値を満たしていれば……その手に「水属性魔法の威力が上がる杖」が生み出される。

素材が善くあれば理想の武器が、素材が悪しくばデザインすらもが歪む。であるが故に鍛冶師のジョブについたプレイヤーは自ら理想の素材を手に入れるか……あるいは、他者にその入手を委託することで理想の武器を形作る素材を求めるのだ。
とはいえ、ここまでの情報は全て………前提、基礎に過ぎない。
このゲームで優れた鍛冶師、匠の称号を関するに至ったプレイヤー達はそれらを当然とした上でその先を……否、その果てを目指す。
前提と常識を応用する。あるいは逆説を前提と常識で肯定する。理

想の装備を作るためには上等な素材が必要で、それを加工する鍛冶師の技量……即ち鍛造魔法の習熟度が重要である。という事はつまり、逆に言えば……

――上等な素材と鍛冶師の高い技量があれば、理論上どんな武器であっても作成可能である。というさかさまの理論の証明に他ならない。

「出来た……ついに、ついについについに！　出来た！　年越す前に！　成し遂げたあああああ！！」

致命兎（ラビッツ）の国、兎御殿のとある「工房」の中で。一人の人間が狂喜乱舞の歓声を上げていた。

無精ひげに愛想のない物騒な中年男性の姿をしているが彼女の名はイムロン。ある者は彼女を「聖槌の勇者」と呼び、またある者は「プレイヤー最高レベルの鍛冶師」と呼ぶ。

かの傑作「超猫じゃらしＬｖ．１００」や名作「超過芯熱剣クリムゾン・ヒートライザー」、そのインパクトと業の大きさから今も畏怖の念を込めて語られる怪作「イムロン七大罪シリーズ」を生み出した名工、あるいは「名匠」である彼女は、鍛冶師系職業最高位にして隠し最上位職業「神匠」に至る道がこの兎の国にあると考えて、素材の入手以外は殆どこの国の自分に与えられた工房に引きこもるような生活を送っていた。

そんな彼女が喜んでいる理由は、かねてより鍛冶師プレイヤー達に立ち塞がっていた「壁」をこの瞬間に乗り越えることに成功していたからであった。

「私はッ！　限界を超えた！　見たかシャンフロ運営！　私はサーバーＡＩに勝った！　勝ったわあああああああああああああああ！！」

今でこそ忘れ去られ、しかしかつては全ての鍛冶師プレイヤーが一度は乗り越える事を考えた「壁」……それ即ち、「銃の作成」である。

シャングリラ・フロンティアは剣と魔法のファンタジーである「現代」とロボと銃のＳＦである「神代」、二つの時代が混ざり合ったハーフサイエンスハーフハイファンタジーとでも言うべきゲームだ。それはチュートリアルの時点でも示唆されており、神代の残滓が残る遺跡やエリアを巡ったプレイヤーであれば一度は「銃が使えるのでは？」と考えるものだ。

結論から言えば、銃の設計図をシャンフロ内に持ち込んでも「精密パーツが作れない」という理由で銃を作ることは出来ず、結局銃火器の普及はとあるプレイヤーによって神なる獣、星を泳ぐ魚たるバハムートが姿を暴かれる時を待つこととなったのだ。

そして今現在、二機目のバハムートであるベヒーモスが旧大陸にも出現したことでプレイヤー達はおおよそレベル５０以上であれば容易く銃を入手することが出来るようになった。

かつてあらゆる鍛冶師たちの前に立ち塞がった「銃の作成」という壁は、バハムート内でガンスミスライセンスを取得することで容易く乗り越えらえるものになり下がったのだ。

だからこそイムロンは挑んだ、神代文明に頼らない銃の作成という難題に。砕けた破片を積み上げて再び「壁」を作り出した。今の自分ならば超えられるという自負を以て――――！

「銃、という常識を捨てて銃を作る……………酒を入れてようやくたど

り着いた境地！　神代の武器作成ノウハウを得た上で辿り着いた原点！！　あーもう、今から運営に直談判して称号作ってもらっちゃおうかな！？」

イムロンが熱い視線を送る先、そこには奇妙なものが置かれていた。それは「銃」と呼ぶにはあまりにも……否、何もかもが足りていない。

「要するに引き金を引いたらなんか飛べばいい！！」

あるいはそれは銃と認められないかもしれない。そもそも「これ銃じゃなくない？」と作った本人が一番思っている。だがそれでも、それは生み出された。

どれだけ使い勝手が悪かろうが、そもそも使える者がいるのかどうかも分からないような……あるいはそれを、世間一般では「失敗作」と呼ぶのかもしれない。

だがそれでも、狂気に近い熱を帯びた目をしたイムロンには勝算があった。思い出すのは悔しいが目指す頂点、「神匠」を目指す道のりを自分よりも一歩……いや二、三歩は先を行く鍛冶師のヴォーパルバニーの言葉だ。

「一見失敗したような効果だろうと、彼なら使う……使える」

テスターには心当たりがある。

金床の上に冷たく鋭く鎮座する……二丁一組のケンジュウを見つめながら、イムロンはそのテスターがラビッツに帰還するのを血走った目で待つのだった。

１２月？？日：理外を通す理あらば是即ち理外の理解に外ならぬ、とかぬちは己に言い聞かせた（後書き）

今のヤシロバードが見たら鼻で笑うようなイロモノだし、弓使ってた頃のヤシロバードが見たら全財産渡すようなシロモノ

12月16日：刃に問う。己が答える。（前書き）

土古戦場個人1位兄貴が2年連続でシャンフロ宣伝しながら予選を突っ走っていったので更新

１２月１６日：刃に問う。己が答える。

◆

ラビッツ兎御殿、とあるヴォーパルバニーの専用鍛冶工房にて。

「と、いうわけで倒して来たぜ。真なる竜種って奴をよ」

「ワリャはなんじゃ話ィ振ったらすぐに成し遂げてきちゃるな……」

「俺ほどの存在になるとチャンスが向こうからやってくるんだよ」

ＭＭＯだとしてもゲームプレイヤーは全員主人公みたいなもんだからな、主人公にはフラグの方から近づいてくるものだ……まぁそれはいい。本題はこっちだ。

「真なる竜種の撃破を成し遂げた……これで条件？　ってやつは満たしたんじゃないか」

「そうじゃな……この武器は、アラドヴァルは至高の頂……「神化」が可能な状態になっちょる。あとは……わちが、それを成し遂げられるか、じゃな」

「何か不足があるなら集めてくるが？」

俺の言葉にビィラックはくつくつと自重するように笑みを浮かべる。

「炉もある、鎚も金床もある……もし足りんとするならわちの腕

だけじゃけぇ」

「じゃあ俺が何かする必要はなさそうだな……なにせもう足りてるだろう？」

「言いおるわ………全く。二日待ちぃ、それまでには完成させちゃる」

二日か………基本的に長くても一日くらいで装備強化が終わることを考えても相当な長丁場だ。それだけの大仕事なのか……それとも、ジョブ昇格を兼ねているからなのか。まぁ気長に待たせてもらうとしよう………旧大陸じゃ人類同士の内ゲバで盛り上がってるそうだが、生憎世捨て人なのでな……でも暇だから時間あったらちょっと見に行こうかな。

「あぁ、それとじゃな」

「ん？」

「イムロンの奴がワリャを探しちょったぞ」

「イムロンが？」

えーとイムロンイムロン………フレンドリストを見る限りログインしてるか。まぁあいつもプレイヤーなのでそりゃ移動もするだろうけど基本的にイムロンに宛てられた工房にいるから行ってみるか。

「分かった。この後会ってくる、頑張れよビィラック」

返事はなく、しかしぐっと掲げられた金鎚を握る手には力強い熱意

が籠っていた。

……

…………

………………

ラビッツ兎御殿、とあるプレイヤーの専用鍛冶工房にて。

「銃、って何だと思う？」

「飛び道具」

「そういうこと聞いてるんじゃないのよ」

じゃあなんだよ…………
ロールプレイを忘れ去った素の口調にぐるぐるギラギラとした眼差し……二徹した幕末志士に似た目で迫るごついおっさんの質問に、俺は半目になりながら距離を取る。こういう目をした手合いは孤島の連中より話が通じないのだ、何故なら半分夢遊病みたいな状態なので後々聞いても「この時の記憶ないわー」とか平気でのたまうので。そりゃもうお前思い出すまで脳みそに天誅するショック療法よ。

「銃ってのはね……鍛冶師プレイヤーの敗北の歴史なのよ」

「あっはい」

曰く。
シャンフロのリアリティが発覚してからというもの、鍛冶師プレイヤーはシャンフロ内での武器の製作を目指してきた。だがあまりに精密なパーツはゲーム側で作れない、という事実が発覚したことで鍛冶師プレイヤー達は別の方向で銃を作り出そうとした。いわゆる魔法武器全盛時代というものだ。要するに銃の形っぽくした別の武器に魔法射出能力を付与しようとしたわけだ。
だがここで別の問題が発生した。無理に形状を変えすぎると武器として破綻してしまうが故に、どこまで銃としての形状に近づけるか……そして、どこまで元の武器としての性質を持たせるかのチキンレースが始まることとなる。

「あー待て待て待て。もう結果は見えてるから要約してくれ」

「これこそが水晶群蠍系列素材を手に入れ、フレーバーテキストを読み込んで頭をこねくり回しィ！　さらに古匠そして神匠を目指す中で得たテクニックを総結集した私が到達した完成系！　その名も「剣銃（ソーデッドガン）」！！」

「新武器種？」

「武器カテゴリは二刀流の片手剣ね」

ズッコケた方がいい？　だがプレイヤー鍛冶師の中ではそれこそトップ層であるらしいイムロンが（多少頭のネジが緩んでいるっぽいとはいえ）自信満々に見せるだけあって、それは確かな完成系として金床の上に鎮座していた。
見た目はなるほど、確かにグリップと引き金がついているのはまごうことなき銃の特徴に合致する。だが特徴的、というかその武器の半分以上を占めているのだからいやでも目に入る特徴……銃でいう

バレル部分が丸ごと幅広な刀身に挿げ替えられている異様な見た目はやはり奇怪と言うしかない。

「合体事故起こしてないか？」

引き金を引いても弾を出すべき銃口が無く、剣として振るには握りの部分が斜めに飛び出しているせいで振りづらい。ククリ刀と言い張るにしてもちょっと微妙なラインだ。

「逆に聞くけどあんたこの形状の武器を剣として使える？」

「いや……ちょっと振ってみても？」

どうぞ、と手振りで許可が出たので試しに握ってみる。やっぱり重いな、銃っていうよりやはり剣……しかも銃の形をしてるから……むむ、いやしかしグリップが銃型だからこその持ちやすさはある……あとトリガーガードが結構分厚いか気合で頑張ればガンスピンが出来ないことも……いやダメか、普通に二の腕自分で斬る間抜けプレイになる。

「使いこなせそうな動きしてるじゃない」

「まぁ……やってやれないことはなさそうだけども……」

「じゃあ問題ないわね」

ビィラック理論やめろや。使いこなせなくもない、と使いやすい、には天と地ほどの差があるんだよ。

「自信満々に銃です、って言うからには射撃能力は備えてるんだろ

う？」

「当然。それ、ほとんどあんたから買った素材で出来てるからあげるわよ」

「マジ？」

ほうほうほう………ただでもらえる、となると途端にこれは良いもだと思えてくる………多少の使いづらさはご愛敬だ。所有権がイムロンから俺へと譲渡され、この剣銃が正式の俺の所有物になる。数キロは軽く超える金属塊をハンドガン感覚でガンスピンさせるのは現実では不可能だろうがあいにくここはシャングリラ・フロンティア。物理法則はかっこよさより優先されることはない……貰った剣銃をくるくる回しながら、視線はイムロンに戻す。

「しかしなんたってタダで？」

「そりゃテスター兼広告塔になってもらう為よ」

「はい？」

「その剣銃………トラディションとレボリューションが如何に革命的でありがならしかし伝統的な武器であるかを大々的に知らしめるためには……ふふふ、掲示板にスクショを貼る程度じゃ物足りない、分かるでしょう？」

なんか厄介なユーザークエスト押し付けられる流れ……？

……

…………

……………………

ラビッツ兎御殿、とあるヴォーパルバニーの専用鍛冶工房にて……
…否、きっとこの場所こそがラビッツの中枢とも言える工房に招か
れた俺は、招いた張本人もとい張本兎ヴァイスアッシュと向き合っ
ていた。

「真なる竜種をぉ、見事倒したなぁよう……」

「へぇ、連れと……あとウル・イディム氏の力添えあってのことで」

実際決戦兵器ウル・イディムは凄かった。俺ら種族人間がＰｖＭや
ってる中でウル・イディム氏だけＭｖＭっていうか格ゲーやってた
もんな。体力ゲージの減り方が敵と同じ感じって意味で。

「白きぃ破滅が近い………そして、おめぇさんは力を示し続けた…
……ならばよう、時は来た……ってぇことだろうなぁ」

「時、ですか」

「勇魚兎月を出しなぁ」

勇魚兎月………ってことは。

「さぁ、神化の時だぜサンラクよう…………決めるのはおめぇさん
だ………さぁ、兎月のぉ至る果て………おめぇさんは何をぉ選ぶ？」

兎月の強化はユニークシナリオＥＸ「致命兎叙事詩」と連動している。最初の兎月から勇魚兎月を経て……しばらくそれは止まっていたが、どうやらここが最終強化前の最後のセーブポイントであるらしいな。だがあいにくセーブしてログアウトして考える時間は俺には必要のないものだ。

使う素材はすでに決めてある。

「兄貴………是非ともこれを使っていただきたい」

「…………ほう？　俺等（おいら）ぁはてっきりあいつの角でもよぅ、出してくるとぉ思ってたがなぁ」

「ちょっと前までならその選択肢もありましたがね。生憎………借りがあるので」

俺が差し出したもの。それは天に覇たる龍王（ジークヴルム）の角でもなければ巨躯を誇るモンスターの素材でもなく、そして蠍系列モンスターの素材でもなく………煌びやかな素材候補だったそれらと比べれば随分とみすぼらしくもある、とあるモンスターからドロップした〝牙〟だった。

１２月１６日：刃に問う。己が答える。（後書き）

堂々と誇れるものにこそプライドは宿る

12月??日：装備の強化は己の強化

◇

「……【成長せよ(Growing up)】！」

深夜の樹海に響く少女の声に呼応して、地面に埋め込まれた水晶の弾丸が急速に成長を始める。

「わ、凄い凄い！　本当これいい武器だね！　ねっ？　イスナちゃんもそう思うでしょ？」

樹海を構成する決して細くはない大樹の幹に突き刺さった水晶柱を見てはしゃぐ少女……もとい、ヒイラギにゴルドゥニーネが一人「イスナ」は半目でその様子を眺めていた。

「いい拾い物しちゃったなぁ～、どうせならもっと派手にぶちまけてくれればよかったのにね？　ね？」

「ま、あンたが多少強クなるナらナンでもいイけどネ」

〝臆病〟で〝卑劣〟なゴルドゥニーネであるイスナにとって、その力の由来がなんであろうと知ったことではない。それが自分に牙を剥かず、それが自分の安全に貢献するのであるならば殺人鬼とだって手を組む。それがイスナの人生(蛇)哲学であり、信念だった。

欲を言えば自分の存在を隠すほど悪目立ちするような人物であることが理想であり、隠密からの暗殺を主とするヒイラギに対してそこだけは改善を要求したい点であったが……それを差し引いても己を

脅かしうる脅威に目敏いヒイラギは相方としては上等な部類であった。

「うふふふふ、こぉーんな凄いアイテムを誰にも言わずに隠し持ってたなんて、サンラクって卑怯だよね？　ね？」

「あんたダって大概ズルイじゃナい」

「え？　どこが？」

「…………」

全く心当たりがない、と言わんばかりの済んだ眼差しを向けられれば如何に人型なれど異形の本性を持つゴルドゥニーネ(イスナ)とて「ああこいつには話が通じないんだな」と理解することは出来る。とはいえ前述の通り、イスナは相方の人間性を重視しない。そして確かにヒイラギが手に入れた二つのアイテムはまさしく「強化」と言ってよいだけの力をヒイラギに齎していた。

「最初スっ転んだときはバグかと思ったけど、挙動を過剰にするなんて……格好も変態なら使うアイテムも変態なんだね、ね？」

封雷の撃鉄(レビントリガー)・災(ハザード)。

使用者の挙動を過剰なまでに……一歩踏み出すだけでサマーソルトキックに変化しかねない程の過剰な挙動強化をデメリットとして、様々な恩恵を備えたアクセサリー。いくつかの戦利品(アイテム)は既に売り払ったヒイラギであったが、煌蠍の籠手(ギルタ・ブリル)とこれだけは手元に残していた。

ヒイラギのスタイルは隠形で接近してからの一撃必殺。凄まじい一撃を放つことが可能な煌蠍の籠手はこれまで苦手としていたタンク

を仕留める際に大きく貢献するし、封雷の撃鉄・災は挙動過剰化にさえ慣れれば攻・防・逃のあらゆる状況に役立つ万能のアクセサリーとなるだろう。
とはいえ、性能的な理由もあるがヒイラギがこの二つを手元に残した理由はこれらが「オンリーワンであろう装備」であると見抜いたからだ。ヒイラギの辞書に「自己を省みる」という概念は存在しない。ユニーク武器を保有していたサンラクを卑怯とせせら笑うことはあっても自分が同じことをすることに対する躊躇いも葛藤も無い。

何事においても自分は例外、自分は特別……ともすれば社会に排斥されかねない傲慢さを振りまきながらも見目の良さと、スライムよりも柔軟で鋼鉄よりも強靭なメンタリティで乗り切ってきた女こそがこのヒイラギであった。

そしてここはシャングリラ・フロンティア。つまるところただのゲームである。百人暗殺して百回被害者の装備を借りパクしたとしても、結局のところはゲームでしかないのだ。
それにシャングリラ・フロンティアではPKがシステム上許容されている、許されているならばしてはいけない道理は無い。そういう点ではPKそのものを楽しむアーサー・ペンシルゴンやサバイバアルに近いメンタリティでありつつも、PKによる利益を目的とするオルスロットにも近い、という阿修羅会に所属していたプレイヤー達をカテゴライズする要素を全て濃縮したようなプレイヤーこそがヒイラギなのだ。
そんな当の本人であるヒイラギは、しばらく何かを考えこんでいたが薄暗い笑みを浮かべながらイスナへと問いかける。

「ねぇイスナちゃん」

「ナによ」

「そう遠くないうちに……あのゴルドゥニーネ？　の大攻勢があるんだよね？　ね？」

「そウネ、気配ガするノヨ………クラい、くラい、殺意の気配ガね……」

「別にイスナちゃんの気配とか悪寒とかはどうでもいいんだけどね？　ね？」

「…………」

「多分あの時あのゴルドゥニーネと戦ってた人たちってぇ……その決戦にも参加するよね？　ね？」

にやり、と笑みを浮かべるヒイラギにイスナは数秒ほど怪訝な表情を浮かべ……まさか、と目を見開く。

「アンたまさカ……マた狙うツもり？」

「だってぇ～、まだまだいっぱいアイテム抱えてるんでしょ？　だったらもっとつついてみたいよね？　ね？」

ヒイラギのプレイヤービルドは一撃必殺型であり、それと同時に死を踏まえた上での生存型という特殊すぎるＰＫ特化の構築だ。それはタネが割れるまでＰＫのリスクを実質的に無効化できるということだ。

ヒイラギの目に「欲」の一文字が浮かんでいるような笑みに、しかしイスナはそれを咎めるようなことは無い。結局のところ、イスナもイスナで自分さえ安全で無事ならば他の何がどうなってもいいのだ。

「早速準備しないとねっ、ねっ！　奇襲ポイントとセーブポイントを確保してぇー……うふふふふ、私の煌蠍の籠手なら一撃で消し飛ぶよね？　ね？　どうせ露出狂の変態のままだろうし！」

我が世の絶頂、とばかりに再暗殺計画を立てるヒイラギ。その顔はまるで夏休みの計画を立てる小学生のように無邪気なものであった。

……

…………

……………

時に、「塞翁が馬」という故事成語をご存じだろうか。

とある老人が飼っていた馬が逃げたと思えば、その馬が実に立派な別の馬を連れてきたり。その立派な馬に乗っていた息子が落馬して足を折ったかと思えば、そのおかげで戦争に行かなくて済んだり……要するに人生の吉凶は定めがたい、という意味の言葉であるがその由来を見れば同時にこうも思えないだろうか。

幸運は長続きしない、と。

「…………へぇ？」

ヒイラギでも、イスナでもない第三者の声。高い周辺探知能力を持つイスナの警戒を潜り抜ける隠形の術で気配を殺し、羽織を樹海を

吹き抜ける風に揺らしながら聞き耳を〝立てる〟人物――

その後ろ姿には、楽しげに揺れる狐の尻尾があった。

12月??日：装備の強化は己の強化（後書き）

いやほら、だって天が…………

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．１（前書き）

カッツォ視点入りました、ようやくです。長かった………本当に長い１２月１６日だった………

12月17日：メラメラ・ビートアップ　Part．1

◇

焠がる大赤翅の本質はエネルギー体である、ということだ。
雷を斬った、だとか海を割った、だとかそういった伝説……あるいはゲーム内における〝実例〟はたしかに存在するかもしれない。だがそれは単に形状が変わっただけで、それそのものが死滅したり消失したわけではない。
では生きる灼熱を打ち倒すにはどうすればいいのか？　斬るだとか、凹ませるだとか、そういった状態的な干渉は意味を為さないしそもそも斬る前にこちらが焼け死ぬ。

「手こずらせてくれるよ、全く……」

オイカッツォ達は今、焠がる大赤翅が鎮座する死火山……ではなく、バハムート三番艦「ベヒーモス」にいた。

『赤き右方始源眷族の覚醒……本来ならば無条件での全戦力解放が正しいのかもしれませんが……ええ、それでは駄目と結論が出たのが遥か神代なのです。勇敢で思慮深き我が子達よ、貴方達はその上で何を私に求めるのでしょうか？』

直接的な戦闘参加は出来ない。言外にそう告げた「象牙」に対してオイカッツォ……と、数人のパーティメンバーは元よりそんなことを頼みに来たのではないと〝用件〟を告げる。

「雨を降らせてほしい」

『正解です。豪雨から小雨まで……我が子達よ、あなた達の望むままに』

……

…………

……………

レイドモンスター。
それはシャングリラ・フロンティアに突如として実装された大規模マルチレイドエネミーである。赤、青、緑、白、黒。五色のカラーに対応したレイドボスが新旧大陸にそれぞれ一体ずつ存在する。
これまでに判明したレイドモンスターはルルイアスに封印された「狂える大群青」。
プレイヤーの手によって初めて討伐されたレイドモンスター「貪る大赤依」。
そしてサードレマにたった一体で侵攻し、その初見殺し過ぎる性能から恐るべきキルスコアを叩き出した「彷徨う大疫青」。
それ以外にもレイドモンスターの目撃情報は相次いでおり、既にこの五色の脅威はプレイヤーのみならずＮＰＣにも周知されていると言っていいだろう。

本題に戻ろう。
レイドモンスターには共通するシステム的特徴がある。それはプレイヤー達による7数々の遭遇、目撃情報と……勝負にすらならなかった結果から導き出されたシステム的な「制限」もあるが、重要

なのは「レイドモンスターは撃破後、一定期間後に再出現する」というものだ。
要するに、一度倒されてしまうと再挑戦まで時間がかかるという問題はあるが………再現性があり、なおかつ理論上全プレイヤーが挑戦可能なエンドコンテンツという事だ。
そんなものが実装されれば当然、全レイドモンスターの撃破コンプリートを目指すプレイヤー達が現れるのは当然の事。（クターニッド戦の性質やフレーバーテキスト的にも狂える大群青だけはそもそも挑戦できない敵であるようだが）

「うーわ、凄いことになってるなぁ」

サードレマ、栄古斉衰の死火口湖に続く道を進むプレイヤーの一団。その先頭を進むプレイヤー……言わずもがな、オイカッツォだ。彼女、もとい彼の視線の先には………ピンポイントで火山にだけ豪雨が降り注ぐ光景だった。

「大概ＳＦなのは分かってたけどあんな都合よく天候操作出来るんだねぇ」

「なんでもベヒーモスから雨雲の素？　を投射してるんだとか」

「ファンタジーっすね………なんかこう、どんだけトンチキ科学でも現代人に未来の技術を理解できるわけねーだろ、って押し通そうとしてる辺りが」

「案外十年後には実現してるかもしれないぜ？」

「私リアルだと雨女だから私の旅行先に滞在期間中だけ雨が降らないようにしてほしいわね……あ、飛行機の航路にもね」

「ああ、だからレイニーレインって名前なんだ……」

それに答えるプレイヤー……【旅狼】に所属するプレイヤーではない、オイカッツォを含めパーティ編成上限である１４人のプレイヤー達は皆、オイカッツォの呼びかけで集まったレイドモンスター攻略を目指す者達だ。

確かに彼らはレイドモンスター討伐の為に集まった、クランすらも別々の殆ど他人と言っていい集まりだが……事前に作戦を立て、装備もそれぞれの特徴を組み合わせてシナジーを発生させたレイドモンスター「焠がる大赤翅」討伐をマストオーダーとした集まりである。

「これで第一段階はクリアだ。触れる事すら出来ない超高温のボディ、半端な水を浴びせると水蒸気爆発するなら……全部ねじ伏せるくらい水をぶっかけ続ければいい」

どれほど膨大なエネルギーを保有していようとも、それは無限ではない。仮に無限だとしても常に１００％を維持し続けることが出来ない。そして焠がる大赤翅はエネルギーを「熱」という形で維持している。であればあとは小学生でもわかる簡単な攻略法だ。

熱いものは、冷(さ)ましてしまえばいい。

「悪いけどこっちもマップ攻撃……ってね。さぁ、今日の俺達は文字通り消防隊(ファイアファイター)だ！　１５人も雁首揃えておいてたかがエンドコンテンツに勝てないようじゃ新規データからやり直した方が効率的だよ！　全員生還でドヤ顔凱旋下山しようか！！」

応、と十四の声が莫大量の豪雨に負けぬ勢いで響き渡る。

舞台は生憎の雨模様、土砂降りを浴びる濡れ鼠達が灼熱の眷族へと
戦いを挑む。

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．１（後書き）

・天候操作ライセンス（ベヒーモス）
一日に一度、旧大陸の特定エリアの天候を変更することが出来る（先着一回）
これはバハムート三番艦ベヒーモスとして搭載した環境制御機構の一部であり、今は亡き神代の技術の中でもマナ粒子を一切利用していない技術によるもの。具体的に言うとナノマシンと気流操作の合わせ技。

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．２

◇

チームメンバーは全部で十五人。パーティ参加条件は一回以上レイドモンスター「焠がる大赤翅」とのエンカウント経験がある事……要するに、一回以上焠がる大赤翅に灰にされたことがある者だ。少なくとも考えなしに焠がる大赤翅に殴りかからない程度には攻略への理解があり、なおかつ焠がる大赤翅の行動パターンを覚えている者達。野良以上固定未満であっても最低限の連携が出来れば上等と集まった面々は、土砂降りの中を突き進みながら死火山の山頂で確かに輝く灼熱の光を見た。

「目標視認！　なんか………いや、燃えてることには燃えてるけど初期状態よりは明らかに萎んでる！」

「ここまで土砂降りにして効果無かったら流石に公式にお気持ちメールだって！　じゃあ全員打合せ通りに！」

このパーティの発起人であり、リーダー（どちらかというと音頭取り）であるオイカッツォの掛け声で十五人の討伐隊達が三人一組の五パーティに分裂する。

「ケ、じゃなかったカッツォ！　ひどい雨だけどこれ本当にいける！？」

「これが前提なんだよペッパー！　この雨が無いと焠がる大赤翅には誰も干渉できない！！」

オイカッツォと共に行動するプレイヤーの一人。オイカッツォが知る中身(リアル)と比べると五、六歳ほど年上の女性アバターを使うプレイヤー「ペッパー・カルダモン」が土砂降りを浴びながら叫ぶ言葉にオイカッツォも負けじと大声で返す。
気を抜けば足を取られて転倒してしまいそうなほどに雨が斜面を流れ落ちる死火山の大地を踏みしめ、水しぶきを上げながら五組のチームは円を描くように焠がる大赤翅を包囲する。
当然ながらオイカッツォ達以外にも突然のピンポイント大雨に戸惑いながらも雨天決行と焠がる大赤翅に挑む他のプレイヤーもいるが、同じパーティに属するプレイヤーのネーム表記はそうではないものと比較して判別しやすくなるシステムを利用してオイカッツォ達は事前の打ち合わせ通りにそれを各々が握りしめながらその瞬間を待つ。

『Vooooooooooooooooooob……
…！』

焠がる大赤翅の身体は人類種や他のモンスターとは明確に異なり、物質ではない。生きる炎、思考するエネルギー、それこそが焠がる大赤翅の本質。白き神の血族たる〝赤い〟マナ粒子はしかしエネルギーそのものが肉体であるからこそ、ある意味では肉持つ生物以上に物理法則による影響を受ける。
モーション名：蒸気膨張波動(きりのしんりゃく)。
水や氷……焠がる大赤翅の温度を低下させる攻撃を受けた際に自らの身体(エネルギー)を高温の蒸気に変質させて受けたダメージの総合計値分の蒸気衝撃波を自身を中心とした周囲に撒き散らす連帯責任型カウンター技である。
だがこのカウンター、実はオート発動ではなく任意発動なのだ。ダメージに反応したエネルギーの性質変化をドーム状に放射するまで

の一連の現象は焠がる大赤翅自身が制御しているものであり、裏を返せば蒸気膨張波動の本質は焠がる大赤翅自身の肉体が変質とそれに伴った膨張による弾き飛ばしだ。
物凄くかみ砕くと……「焠がる大赤翅が物凄い勢いで脱皮して吹き飛んだ皮にぶつかった衝撃で周りが吹っ飛んでいる」とでも言うべきか。

要するに、蒸気膨張波動は何度も何度も……それこそ、やまない大雨のような大質量の液体による温度低下に晒され続ける度に発動し続ければ、最後には焠がる大赤翅の肉体全てが蒸気に変換されて消滅してしまうことになる。
あるいは焠がる大赤翅が自爆〝だけ〟を目的としていたならば、むしろ好都合とばかりに死火山そのものをスプーンでくりぬくようにぶっ飛ばすことも可能だ。だが焠がる大赤翅の使命はエネルギーの生産と不足の補完だ、思考するエネルギー体であるからこそ「自爆は良くない」と判断。

果たして人類たちの取った行動によって生じた大雨に打たれた焠がる大赤翅は自身の蒸気化を自らの思考で中断し、雨に対する「防御形態」をとったのだった。

「なんか……滑ってる？」

降り注ぐ雨に怨念などないはずなのだが、心なしか焠がる大赤翅にピンポイントでもはや滝のような雨が降り注いでいるが、その雨粒は明らかにおかしい軌道を描いている。
蒸発するでもなく、焠がる大赤翅に触れるわけでもなく……例えるならそう、まるでガラス細工の表面を伝って下に落ちていくように。
サードレマを超遠距離炎撃した時とは比べ物にならない程小さな……しかし豪雨ですら隠し切れないほどの真紅の翅、その表面を水が

滑り落ちているのだ。

「どうするの！？　もう始める！！？」

「いや……一発、一発だけなにか別の攻撃を当てよう。あの「膜」が妙に気になる」

オイカッツォ達が持ち込んだ「対策装備」は焠がる大赤翅が「灼熱のエネルギー体」であることが大前提だ。もしオイカッツォの予想が正しければ焠がる大赤翅の表面に張られた「膜」……否、あれは

――

「全員に通達。大赤翅の表面が怪しいので一発通常攻撃をぶつける。総攻撃待て、繰り返す総攻撃待て……」

「――俺に任せときな」

と、オイカッツォが全員がベヒーモスで入手したインカムを通して指示を出す中……オイカッツォとペッパー・カルダモンとスリーマンセルを組んでいたもう一人が一歩踏み出す。

「あ、ちょっと」

「ま、割と無理言ってついてきたからな……ちったぁお役立ちを見せなきゃな。なぁに、流石に直接殴りに行くほど無鉄砲じゃあねぇ」

インベントリから投擲用の礫（アイテム）を取り出し、渾身の力を込めて振りかぶるその姿は……あまりにも小さく、頼りない。だがベヒーモスを攻略する中で出会ったその人物――

知り合い（半裸の変態）の知り合い（オギャるマン）を名乗る、見た目五歳児にしか見えないれっきとしたプレイヤーが見た目とは真逆のまるで筋骨隆々の闘士が如き力を秘めていることをオイカッツォ達は知っている。

「おるるぅああああ！！」

母性に飢え過ぎて狂った成れの果て、肉体年齢を限界まで下げ続けて行きついた到達点。
ママの不安を取り除くため、「親孝行」を掲げてレイドモンスターの討伐に参加を表明した男……エターナルゼロ。
男が投げた礫は、その姿からは想像もつかない程の剛速球となって不気味な状態の焠がる大赤翅へと推進する。

12月17日：メラメラ・ビートアップ　Part．2（後書き）

ママの不安は俺が祓う。

オイカッツォはサンラクの正気を疑った。でもサンラク君、基本的に変態性に起因する行為を否定はしても変態性そのものはあんまり否定しないから変態が寄ってくる魔性属性持ってるところあるから
…………
鯖癌↓スペクリ↓幕末↓その他もろもろ、のコンボが謎の寛容性を培ってしまった

この流れで宣伝するのどうなの？って感じですがいよいよコミカライズ版シャングリラ・フロンティア〜クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす〜の5巻が発売されます！
表紙は墓守のウェザエモン！大魔導師不二先生の超絶技巧によってボスとしての風格とキャラクターとしての悲哀が文字で語らずとも絵で伝わってくる最強の表紙です。
特装版に付属する小冊子は硬梨菜が記憶してる限りでは割と前代未聞な「特装版コンテンツで上下分割」というトンチキムーブをやらかしたTRPG番外編の後半です！！　正直「あの……中編とか……」とは言い出せなかったです！　作者の良心回路はまだ死んでないので！！
しかも、さらに、なんと、単行本には原作：大森藤ノ先生、漫画：青井聖先生のもはやメドローアタッグと言っていい「杖と剣のウィ

ストリア」とのコラボＳＳがついています。しかも書いたの硬梨菜じゃないですからね、大森先生ですからね。マジ？　未だに夢かどうか半々ってところですね……

気になる発売日は８月１７日、外はクソ熱い（暑いではなく熱い）しそれを我慢しようにもご時世がご時世なので皆様、クーラーの利いた部屋で楽しむコンテンツとして拙作は如何でしょうか？

<ｉ５７２８２１｜２２９５１>

<ｉ５７２８２２｜２２９５１>

５巻は収録内容的に激熱展開なので皆さんの家のクーラーが破損したとしても責任は取りません。修理業者を呼んでください

12月17日：メラメラ・ビートアップ　Part．3

◇

エターナルゼロが投擲したもの、それは「テンパーボム」とエターナルゼロ自身が設計、命名したアイテムだ。本人は至って大真面目に命名したものであり、その性能も真っ当なものとなっている。
テンパー、けっして天然パーマの略称ではなく癇癪の英訳、すなわち一種の……かんしゃく玉である。見た目は野球ボールサイズの球、起動を念じて握りしめてから投擲することで着弾した瞬間に小規模な爆発を多発して相手にダメージを与えるものだ。一発の爆発はそう大したものではないが、連続して発生するダメージ判定と蓄積する怯みは敵に損傷を与える以上に効果的な結果をもたらすだろう。

とはいえ、エターナルゼロもテンパーボムで焠がる大赤翅にダメージを与えられるとは思っていないし、怯みが取れることも多分無いだろうと最初から承知の上でこのアイテムを選んだ。というのもエターナルゼロ自身、視認した焠がる大赤翅の姿に違和感を感じていたこと……そして、焠がる大赤翅を包み込むような謎の光沢に思い当たる節があったからだ。

「あれはもしや………」

豪雨の中を、若干の弧を描きながらも真っすぐに灼熱の蝶へと飛んでいくテンパーボム。それは〟コンッ〟と硬い音を立てて焠がる大赤翅に命中し………

パキキキキキキキキキキキキィンッ！！

「なっ」

『はぁ！？』

『嘘！？』

インカム越しに焠がる大赤翅を囲んでいたプレイヤー達の驚愕の声がオイカッツォの耳に届く。その驚愕も無理はない、焠がる大赤翅は超・超・超高温のレイドモンスターでありそれを打ち倒すべく彼らは準備を整えて来た。なのに目の前で起きた現象はそう、

「爆発が……凍った！？」

さながらブドウの房のように。連鎖的に発生した爆発、火炎と衝撃の球形がそのまま一つたりとも漏らすことなく完全に凍結しているのだ。

「なによあれ！？」

「えー、あー……誰か予想できる人いる？」

誰もが炎属性だと思っていた焠がる大赤翅が起こした氷属性的な現象に意気揚々と取り囲んでいたプレイヤー達も混乱を隠せない。その中で予想という名の答えを口にしたのは……オイカッツォ達のパーティに属する一人のプレイヤーだった。

『予想だけどいい？』

「ん？　あー、ええと……」

『炸裂グリンピースよ』

インカムから複数人の噴き出す声が聞こえた。だが当人はもはやそのリアクションは見飽きたとばかりに自身の予想を告げる。

『焠がる大赤翅ってエネルギー生産と操作が能力の理屈でしょ？　じゃあ自分の周囲2センチくらいの熱を限界まで奪えるなら………あんな感じになったりしないかしら？』

「確かに……でもそれならもっと広範囲が凍結するんじゃないの？　爆発が凍るのよ？　多分凍ってるのは空気？　か何かだと思うけど」

『その仮定2センチに触れるか踏み入ったものが凍結対象なんじゃないか？　さっきの爆発で氷が削れて範囲内に爆風が入ったから……』

『多段ダメージっても所詮は一度の攻撃、全部まとめてアウト判定くらったとか？』

果たしてそれは正解であった。

第二形態「熱量簒奪蛹鎧(こごえるさなぎ)」、それは自身の表面から5センチまでを対象とした永続する熱量吸収状態だ。本来は自身を構築するエネルギーを外部に逃さないための防御形態であるが、副次的効果として範囲内に侵入した「熱あるもの」の温度を無差別かつ無制限に奪い取る。

氷の鎧を纏っているのは大雨という大量の水が効果範囲内で凍結したためであり、本来は不可視の凍結空間とでも言うべき代物である。

「氷なら叩き割れば！！」

そう勇んで突撃していった野良のプレイヤーが数秒で氷像となって砕け散っていったのを眺めていたオイカッツォはどうしたものかと考え…………ふと、過去に自身へ向けられた言葉を思い出した。

――硬いものを破壊したいなら同質のものをぶつけるのが一番手っ取り早いでしょ。両方とも敵勢力なら万々歳、漁夫って賢い生き方してこうよカッツォ君。

「それぶつけた本人がぶつけられた俺らに言わなきゃもっと素直に受け取れたのになぁ！！？」

「ちょっ、どうしたのよケイ！？」

「あの氷の鎧を破壊する！　けど……使うのは氷属性魔法だ！！」

過去の古傷が疼く痛みで活路を見出したオイカッツォの指示がインカム越しにパーティメンバーに通達される。

『炎とかじゃないの？』

「爆発すら凍るなら下手したら落雷も凍るんじゃないかなアレ、だったら温度が下がっても問題ない個体で叩き割ればいい！」

実のところ、この形態になった焠がる大赤翅に対して有効な攻撃は雷属性、氷属性、そして一定以上の火力の場合のみ火属性……といった特定属性の「魔法」に限定される。自身のエネルギー損失を防

ぐことに特化した形態であるが故に、発生する現象が凍結に固定されるためだ。
運営側にでも回らなければ知り得ない情報であるが、推測と試行が結果的に正解への最短距離であることはなんらおかしいことではない。錯誤を経る事のない試行の成功を人は「運が良い」と言うのだ。
「氷が割れたわよ！！」
「なんかあからさまに燃料漏れしてるみたいなエフェクト出てる！！」
「パーティメンバーも野良も氷属性魔法使える奴はどんどん氷の塊をぶつけまくれ！！」
「よしきた！　その氷の衣を剥ぎ取ってやるぜぇ！！」
天を味方に、開拓者たちは猛然と焠がる大赤翅へと挑む。
だが忘れることなかれ。
「Ｖａｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｍ……」
地を味方につけているのは、相手の方であることを。

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．３（後書き）

「硬いものを破壊したいなら同質のものをぶつけるのが一番手っ取り早いでしょ。両方とも敵勢力なら万々歳、漁夫って賢い生き方してこうよカッツォ君」

→

停戦協定で買収したサンラクをオイカッツォにぶつけて両者が疲弊したところで「ごめーーーーん！不思議なことに何故か都合よく唐突に特定の期間の会話内容について記憶喪失になっちゃったーーーーーーー！！」と叫びながら爆弾を投下して二人を爆破した直後の台詞

８月１７日、コミカライズ版シャングリラ・フロンティア～クソゲーハンターー、神ゲーに挑まんとす～の５巻が発売されます。
それはそれとして発行部数が百万部を突破したらしいですよ奥さん、百万部っていうのはつまり百万ってことです。ミリオンですよミリオン、ミニオンじゃなくてミリオン。クイズ番組と百万超邪くらいでしか聞かないような単語ですよ。もしくは宇宙一のカレーパン。
それはそれとして表紙で停滞と信念を文字を使うことなく表現しきったかのような超絶画力のウェザエモンが飾っている通り、墓守編クライマックスでございます。一応シャンフロは剣と魔法のファンタジーですよ、本当です。その前にちょっと栄えてた機械文明がたまに顔を出してるだけなんです。
流石にここまで世間様から評価されると流石に自分の文章を駄文、と称するのはちょっと憚られますが過去に自分がテンションブッパで書いたものを完璧に絵にしてくださる不二先生の画力だけでも買う価値はあります。ぜひぜひお手に取ってみてください。

<i5728221—22951>
<i5728222—22951>

12月17日：メラメラ・ビートアップ　Part．4

焠がる大赤翅の思考はおよそ生物的なものとはかけ離れた機械的なものであり、基本的に大局的な目的のために行動する。
赤き眷族の主目的は「エネルギーの生成」と「巨大構造〝異物〟」の破壊、そして「自身の保全」………この三つである。故に、どれだけ水や氷を浴びせかけられようが、それは「自身の保全」に抵触するがそれ以上ではない程度に収まっていた………この時までは。

焠がる大赤翅の思考はおよそ生物的なものとはかけ離れた機械的なものであるが、だからといって何が起きたとしても主目的に殉じるわけではない。例えばそう、自身のエネルギー保全を妨害する原因………主目的を妨害するものとして判断したのであれば。

焠がる大赤翅は小蠅のようなそれらに対し、「障害排除」の名目で権能を行使することを躊躇わない。
そもそも躊躇うという感情自体、持ち合わせていないが故に。
第二形態「熱量簒奪蛹鎧（こごえるさなぎ）」………それは焠がる大赤翅の一面に過ぎない。
主目的だけを〝見〟据えていた灼熱の「赤」が、敵を睨（ね）めつける。

◇

「Ｖｏｒｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｍ」

『っ！　全員注意！！　なんか様子が変だ！！』

最初の声を上げたのは彼だった、だが気づいたのはその場にいる全員がほぼ同時のことだった。

『システムからの干渉型……っ！』

『おおっう、背筋に寒気が………』

『ウワーッ！　ああいうのマジでダメなんだよもーーーーっ！！』

『全員マーキングされてるぞ！！』

インカムからの反応を聞き分けつつも、オイカッツォは自分を見つめるそれへと視線を返す。

眼。眼。眼。眼。眼。

もし誰かが数えたならばこの場にいるプレイヤーと同じ数だけ展開された炎でできた眼球が一人につき一つ対応するかのように視線を向けている。その視線をぶつけられたプレイヤー達の背筋には本能的なものとは異なるゲームシステム側から付与された「寒気」が走り、メラメラギラギラと雨の中にも関わらず燃え盛る炎の眼球はまるでピントを合わせるかのように色の違う炎……「瞳孔」の拡大と縮小を繰り返す。

「不味い………全員防御オア回避！　焠がる大赤翅は「目」からビ

ームを出す！！」

オイカッツォの脳裏をよぎったのはこの王国騒乱開幕と同時に放たれたサードレマを焼き滅ぼしかねない一撃だ。その時偶然この場所にいたプレイヤーによって攻撃の際、翅に浮かび上がった巨大な目の模様から放たれた、という情報が齎されている。
サードレマから確認できる程の炎から放たれたレーザーだ、きっとめいいっぱいに広げられた翅に比例した巨大な「目」だったのだろう。であれば今浮かび上がっている眼球はきっと、初手の大火力ほどの威力は無いだろう……

「小型化して量産…………下手すればホーミング！　大火力より厄介だよそれは……！！」

「Boooooooooddddddddddddoooooooooooooo……！！」

ぐば！　と炎の眼球の瞳孔が最大まで広がった瞬間、球体として形成されていた灼熱が太陽が如く暗雲に陰る空間を照らし出した。プレイヤーと同じ数だけあるのだから、それらが一斉に輝きを放てばそれはもはや閃光弾に等しい。
そしてただの目くらましで済ませるほど、「敵の排除」に動き出した焠がる大赤翅は甘くない。

『ぐああっ！？』

『後ろで誰か死んだ音がした！！』

『C班は全員無事だ！　ただ盾が焼け溶けやがった！！　嘘だろ三発で耐久全損！？』

『B班！　すまん二人死んだ！！　蘇生アイテム二個ここで切っちまう！！』

「こちらA班、一応全員生きてる………いったん攻撃は中断！　体勢を立て直すのを最優先に！！」

感覚が痺れた右腕………避けきれず、もう手遅れなのではと思ってしまうほどに黒焦げになった右腕へと回復ポーションを直接浴びせながらオイカッツォはA班の残り二人へと視線を向ける。

オイカッツォと同じく回避を選んでいたペッパーは左脚の膝から先に攻撃が当たってしまったのか同様に顔をしかめつつも回復中、エターナルゼロは防御を選んだようだったがどろどろと溶け落ちた腕鎧のような武器……「闘拳」を見るにやはり無傷ではないようだ。

「エターナルゼロさん、それ腕動かせる？」

「悪い、インベントリ操作はできても腕にぶっかけるのは難しそうだ……後で返すから回復アイテムを使ってくれるか」

「了解。体力はどの程度減ってる？」

「耐熱特化の闘拳でガードを固めて二割、ってところだな」

エターナルゼロのステータスを事前に聞いていたオイカッツォは、VITの違いを差し引いても五割近く体力が削れた自分と二割で済んだエターナルゼロの違い……そして、諸々の情報を統合して一つ仮説を立てた。

「C班！　タンクは体力何割削れた！？」

『一割程度！　スタミナはゴリゴリに削れたけど！！』

「もしかして他二人はタンクの後ろにいて、ノーダメージだったりする？」

『なんで分かったの？』

視線を向ければ、次の盾をインベントリから取り出しているタンクの背後でライフルを焠がる大赤翅に向けていた炸裂グリンピースの怪訝な表情と目が合った。

「これ仮説だけど共有！　今の攻撃、光で見えなかったけど多分あの目が起爆した瞬間に一定範囲……「視界」に入っていた対象にレーザーを当てるタイプの攻撃だ！！」

オイカッツォの推測は、果たして限りなく正解に近いものであった。

焠がる大赤翅第二形態……裏面「多面展開灼眼写（よりどりみどり）」。周囲の熱を奪うことで自身の守りとする「熱量簒奪蛹鎧（こごえるさなぎ）」に対して、起爆の瞬間に灼眼球が目視した範囲に「閃熱」による多段ダメージを与える攻勢形態。

オイカッツォの右腕やペッパー・カルダモンの左脚だけがダメージを受けたのは閃熱照写範囲から逃れ切っていなかったのがそこだけだったから。大盾や闘拳で身を守ったC班やエターナルゼロが軽微なダメージで済んだのは、灼眼球がカメラで写真を撮影するように二次元的な認識で範囲を決めているが故に灼眼球の「視界」から本体を隠しきったから。

この攻撃の本質はレーザーなどではなく、灼眼球の視界に見えたものに対して付与される即死エンチャントである。

「ふざけた死の写真撮影だ……！」

降り注ぐ豪雨によって、確かに焠がる大赤翅の動きには制限がかけられた。だがそれがなんだというのか。

神のエネルギー源たる赤き眷族、数多の命を取り込んだ究極の「群」たる白き始源の獣が選んだ赤の代表たる蝶が、その程度で止まるはずがない。

神代よりもさらに前、始源に生きた最強の「力」が今を生きる開拓者たちへと明確に牙を剥く。

12月17日：メラメラ・ビートアップ Part.4（後書き）

第二形態裏面「多面展開灼眼写（よりどりみどり）」
笑って笑って……灰（ハイ）、チーズ！お前は死ぬ。
灼眼球が光った瞬間に視界内に入っているとその部位にエンチャント：オーバードーズが付与される。
肉体の許容量をはるかに超えるエネルギーが灼眼球が視認した部位だけに過剰投入されるため、当然ながら過剰すぎる力に耐えきれず細胞は過熱と共に壊死する。
攻撃自体は灼眼球が二次元的な認識しか持たない……要するに写真を見るような認識でしか対象を指定できないことから、身に纏うもの以外で身体を隠すことで回避可能、要するに防具やアクセサリーで防御しても無意味だが障害物や武器で身体を隠せばエンチャント対象がそちらになるため本体は無事、ということ。これは服やマントは灼眼球から「本体」の認識になるため。
表面（おもてめん）の「熱量簒奪蛹鎧（こごえるさなぎ）」が自身の保全に特化した防御形態であるのに対して、こちらは「敵の詳細は分かったので焼き殺す」という攻撃形態。当然ながら両立は出来ないのでこれを使用している間は焠がる大赤翅本体は豪雨に晒されることになる。

ちなみにこの眼球に関しては出現場所に制限が無い。なので焠がる大赤翅をなんらかの壁などで密閉してもその外側に出現する。あとシンプルに光で目潰しされるのでめちゃくちゃウザい

それではみなさん、見つかったら焼死体確定のデスかくれんぼを頑張ってください！

コミカライズ版シャングリラ・フロンティア五巻が現在発売中です
みなさま、どうぞよろしくお願いします

＜ｉ５７２８２１｜２２９５１＞
＜ｉ５７２８２２｜２２９５１＞

１２月１？日：男と生まれたからには誰でも一生のうち一度は夢見る地上最強の――

◆

……うん。イムロンから話だけは聞いていたんだ。話だけは。

――こと、防具作成に於いては自分よりも上のプレイヤーである、と。

「素晴らしい…………鉱石を繊維化する技術………そんなものが存在していたなんて………っ！」

……うん。サバイバアルから話だけは聞いていたんだ。話だけは。

――奴はたった一本だけの〝性癖（きば）〟のみでこのゲームの最強防具論争を終わらせた男、と。

「技量（テクニック）にばかり目を向けて、現状の素材に満足しているようでは…
……ふっ、まだまだ未熟という事か………やはり果ては遠い」

そしてそんな人物が、ウィンプの為に防具を作ってくれると聞いたとき俺は普通に思ったのだ。

――あ、じゃあせっかくキャッツェリアにいるんだし「宝石匠」のスキルで作られる鉱石製の布を持って行ってあげよう、と。仮にウィンプの防具に使われなかったとしてもまぁ感謝のしるし的な感じで……と。

「ありがとう………言葉にすれば数千数万を超えるような感情を、この五文字に込めよう……っ！」

その結果、現在俺は何故かメイド服を着たごついナイスガイに泣きつかれながら感謝されていた。

うーん、分かってた！　メイド服しか作らないのにイムロンより〝上〟って本人が認めるような執念と誰も呼んでないのにウィンプにメイド服作りにやって来た、って時点でああ多分エタゼロ的な出会いなんだろうなぁとは分かってた！！

だってこのゲーム、マトモな廃人の比率を7だとすると3くらいの確率で常人とは違う尺度の執念で廃人やってる奴がいるからな……このエリュシオン・オートクチュールなる人物もその三割側だったということだ。

「宝石織！！　一見、布とは…繊維とは相反する存在である鉱石を手繰り、編み上げる……っ！　なるほど盲点！　シルクレット・ビーから秘蜜の絹（シークレット・シルク）が生まれるように……っ！！　既存常識の埒外にこそ発見はある、それを失念していた……」

この手のタイプは厄介だ、自分の世界に浸ってるんじゃなくて「相手も自分の世界にいる前提」で浸っているのでいつ話しかけられるのか分かったものではない。ラブクロックとはまた異質な強襲型コミュニケーション……聴覚はひとまずこの彫刻のような顔付きに丸刈り＋クラシックなメイド服という絶対に噛み合わないはずの属性が何故か噛み合っているエリュシオン氏を意識しつつ……視界はこの地下グラウンド？　らしき場所で特訓をしていたという着せ替え隊のメンバーとその中心にいる者……ウィンプへと向ける。

「はい、うごきません。さいすんでからだをよじりません、にげません。おそいません。よくわからないけどあったかいふくがいいです……」

これゲームがゲームなら主人公キャラがブチ切れながら敵に突撃するタイプの状況やぞ。
死んだ目をしてボソボソと何かを呟きながらマネキンに徹しているウィンプを半目で見た後に着せ替え隊の連中を更に細めた目で睨みつける。奴ら目を逸らしやがった。

サバイバアルとカローシスはまだキャッツェリアだし、ヤシロバードは嬉々としてリヴァイアサンに直行。十中八九ついてくるだろうなぁ……と思っていたディプスロは意外なことに「別件がある」とどこかへ転移していった。
ので、今ここにいるのは俺だけ……サバイバアルだけでも連れ(引きずって)てくるべきだったかな。

「あー、まぁなんだ。ウィンプ用の装備を作ってくれるって事ならありがたい話だし、折角だからと色々持って来たんだけ、ど……」

「サンラク君」

「あっはい」

しまった、渡すもの渡してさっさと話題を変えようとしたのに好感度が上振れ過ぎた。
俺が用意して来た鉱石織によって精製されたレア宝石布のロールを震える手で受け取ったエリュシオン氏はそれを丁寧に（インベントリにしまえばいいのにわざわざ布を地面に敷いてその上にそっと置く丁寧ぶり）置くと、肉食獣が獲物に飛びかかるが如き勢いで俺の両手を己が両手で握りしめた。

「私の、パトロン兼モデルにならないか……！？」

…………なんて？
パトロン、パトロン。要するにスポンサー的な？　まぁ言わんとすることは分かる、要するに装備作るから素材を用意して欲しいってことだろう。イムロンやビィラックに対するスタンスもパトロンと言えなくもない。
で、その上で今なんつった？　何と兼ねろって？
「君の噂はかねがね聞いている。数々のユニークモンスター討伐に関わり、ネカマの北極星であり、アイドルプロデューサーであると……」
「えっ、風評被害？」
いや、反射的につぶやいてしまったがよくよく考えながら己の行いを省みるとそう呼ばれる心当たりがなきにしもあらず……いやネカマの北極星ってどういうこっちゃねん。あれか？　指標って意味か？
「より多くのプレイヤー……否、このゲームのＡＩならばＮＰＣにすらメイド服の〝美〟を啓蒙するにはまさしく星の輝きの如きモデルが必須……そう、例えば征服人形の中でも屈指の人気を誇るエルマ型、さらにそのシンボルとも言える「サイナ」……そして、」
エリュシオン氏が表示したのは一枚のスクリーンショット。
そこには、Ｒ．Ｉ．Ｐ．を装備した状態のプレイヤーが墓標の剣の上に立つ姿があった。
「――――神の最高傑作たるメイド服が似合わない生物は存在しない。勿論、喪服が似合う君もだ」
たすけてうぃんぷさん！　ごるどぅにーねぱわーでおれをたすけて

！！

「どうにさすなら、はものはよこでさす……たてだとろっこつにひっかかるから……」

実戦的、の意味がアクションじゃなくてサスペンスじゃねーかそれ。

１２月１？日：男と生まれたからには誰でも一生のうち一度は夢見る地上最強の――――（後書き）

・最強防具論争
シャングリラ・フロンティアにおいて最強の防具とは
レア鉱石を用いた防具である
強力なモンスター素材から作られる防具である
素材はなんでもいいから付与効果の優れた防具である
の三派が生産職を巻き込んで起こしたサービス初期に勃発した大論争。
この論争に乗じて生産職にタダで防具を作らせる、などの悪質な被害もあったが最終的に三派の提唱する「最強」の条件に合致するもの、合致しないもの、部分的に合致するものなど合計２０着の「メイド服」をエリュシオン・オートクチュールが作ってみせたことで「結局のところ腕(ここ)が全て」と完全論破した。

「メイド服のやべーやつ」ことエリュシオン・オートクチュールの名はこの事件を機に広く知られることとなったが、戦術級メイド服「武凛衣(たけりえ)」の発表を最後にその姿を消すことになる……

12月1?日：蛇はそれを形見と呼び、人はそれをプライドと呼んだ

◆

前回のあらすじ（三秒前）
このままだとメイド服を着せられる。しかもこのエリュシオン・オートクチュールという人物は本人の格好と一日も経っていない交流の中でも分かる限り、メイド服を着せる対象の性別を問わないタイプだ。

「ま、まぁ？　残念ながら俺はこの刻傷があるから……流石に他人からの貰い物を三分で爆裂させるのは申し訳ないのでモデルの話はお断りということで……」

「――――少なくとも」

ん？

「少なくとも、この世界では百万の宝石が理解を得たただ一つの石に負けることもある」

「……なんの話？」

「実例があれば、そこには必ず再現性がある。現実的か非現実的かはさておき……『理論上可能』なんだ」

「だからなんの……」

「黒き死に捧ぐ嘆き(レクイエスカト・イン・パーケ)」

それがR．I．P．の正式名称だということに気づくまでに数秒かかった。エリュシオン・オートクチュールはなんらふざけた素振りもなく、真面目な眼差しでその名を告げながらインベントリから実物を俺に見せる。

「装備している防具をコストに特殊な防具を生成するシャンフロの中でも特殊なものだが……重要なのはそこじゃない。このクリスタルの力で生成された防具は……通常の「破損」を一切無効化するという点だ」

それは俺が一番よく知っていると言っていい。R．I．P．は回復アイテムや魔法をぶつけられると破損するが、逆に言えばそれ以外のダメージでは中身(プレイヤー)自身にダメージが入ることはあってもR．I．P．が形成した喪服自体は絶対に破損しない。

「原理も今は重要ではない。マッチを擦っても虫眼鏡で太陽光を収束させても起こる現象は発火なのだから。大事なのは「防具が破損を免れる現象」がこの世界(ゲーム)には存在する、という一点のみ」

「悪いが結論から聞かせてくれないか？」

「その刻傷……「呪い(マーキング)」の上位互換、ジークヴルムで言うところの「刻痕(こっこん)」と同じものだろう。あれも確か時間経過で装備を破壊するデメリットがあった」

こっこん？　ユニークモンスターごとに名前が違うのか。

「結論から言おう。刻傷のデメリットを無効化、あるいはデメリッ

トを許容した上で破損を回避する防具（メイド服）を作れるかもしれない」
「……話を聞こうか。納得できたら本業仕込みのポーズを決めてやるよ」
本業モデル（ペンシルゴン）曰く。
写真に映るモデルが読者を見る必要はない、読者がモデルの目を見るのだ……視界の主導権を獲ってこそ一流のモデルだと。
……
…………
……………
残念ながらプレイヤーの防具は採寸をする必要はない。の、筈なのだが「調和の把握に必要」と結局採寸させられた俺（聖杯使用）はサイナをスケープゴートにしつつ、死んだ目でマネキンをしていたウィンプの方へと向かう。
「よう、修行の方は順調か？」
「………まぁ、それなりに」
ちらり、と着せ替え隊の方を見る。何故か照れていた、初心な対応は求めてねーよ経過報告を求めてんだよ。
「いやー、ぶっちゃけ弱いよ。まぁはい」

「スキル覚えらんないのが痛いよねー。毒を出すのもどっちかというと支援系だし」

「だからアサシン系で修行中。肋骨を避けて刺す感じで」

それアサシンじゃなくてクリミナルとかそっち系なんよ。
それはさておき、一応ウィンプ修行編は進行自体はしているようだ。いくらヘタレでもユニークモンスターの端くれ、流石にどこまで鍛えても産廃ってことは無いとは信じたい。

「そんなウィンプちゃんに今日はプレゼントがあって来ました……と」

「ぷれぜんと？　へんなもんすたーのたいえきからつくったあやしいくすりとかじゃないでしょうね」

「それがお望みだったらトレイノル・センチピードの毒液とか仕入れてくるが？」

「けっこうよ！！」

こう、百足式８－０．５から一番搾りみたいな感じで採取できないものか……無理か。もしできたらちょっとした錬金術だぜそれは。
冗談はさておき、キャッツェリアでダルニャータに頼んで作ってもらった特別製のそれをインベントリアから取り出してウィンプへと差し出す。

「……っ！　これって、」

「まぁそういうことだ」

ダルニャータはケット・シーの【宝石匠】だ。宝石の扱いに最も長けた「アクセサリー製作特化の生産職」であり……試しに頼んでみたら至極あっさりと仕事をしてくれた。実は封雷の撃鉄・災を落としたって言ったら怒るかな？

「キャッツェリア方面でもいろいろ採掘（カンカン）してる時に面白そうなのを見つけてな、色々混ぜて編み込んでアクセサリーにしてもらった」

とりあえず使っとけ枠のラピステリア星晶体にとりあえず使っとけ枠の蠍系水晶を加えて、キャッツェリアや地底都市ホルヴァルキンでの採掘チャレンジで発見した「純粋な化石晶」……鉱石と生物の素材とを結びつける力を持つ採掘素材を俺がもっていたある素材と組み合わせて完成したアクセサリー。

半透明なマフラー、ともすれば羽衣のようにも見えるそれはとあるモンスターの皮に宝石織で繊維化した鉱石を編み込んだものだ。

「名づけて「透蛇の星天帯（クリアステラ・マフラー）」だってさ」

「これって……サミーちゃんの……」

仇討ち（成功）に形見を持っていくのはよくあるパターンだろう？　仇討ちの定石にあやかって俺達もそういうのを用意した方が良いと思ってな。

あの時、死んで消えてしまったサミーちゃんが遺したもの。判定的にはただの「透食の大蛇（アサルテクス・スネーク）」の素材だとしても……たとえ金色の龍王の角という極めて優れたアイテムがあったとしても。それでもこの大した存在でもないちょっとレア程度のモンスターの素材を使うことに意味がある。少なくともこのゲームではそこに意味を存在さ

せるだけの許容がある。

「金庫にしまいこんで眠らせておくよりは、一緒に連れて行ってやろうぜ」

じっと半透明なマフラーを眺めていたウィンプだったが、それを大切そうに抱きしめるとぼそりと一言。

「…………ありがと」

「気にすんなよ。なんたって俺は【仇討人】だからな」

メインジョブだからな、仇討ちは本気でやるってもう決めてるんだ。

「…………なんだかすごいものを見た」

「あれがツチノコさんのＮＰＣタラシ＝スキル…………」

「ウィンプちゃんの好感度をあぁも容易く…………」

「ロマンチストが服着て歩いてるかよ」

「いや服はさっきはじけ飛んでたじゃん」

「痴女…………」

着せ替え隊共、今のは聞かなかったことにしてやるよ。

「エクセレンッ！　インスピレーションが無尽蔵に湧き出てくるっ！　メイド服！　嗚呼メイド服！　このゲームの歴史を変えるっ！　その確信がデザインに宿ろうとしているっ！！」

聞かなかったことにしたいけど声がデカすぎて問答無用で脳が認識するの勘弁してほしいぜ。

12月1?日：蛇はそれを形見と呼び、人はそれをプライドと呼んだ（後書き）

・透蛇の星天帯（クリアステラ・マフラー）
透食の大蛇（サミーちゃん）の皮を基に複数の鉱石糸を縫い込んで作り上げられた半透明なマフラー。
ラピステリア星晶体が編み込まれているためか、時折星空のような輝きを放ち不思議な光を風に揺らす姿はオーロラを首に巻いているようにも見える。
鉱石糸を編み込んでいるため見た目以上に頑丈であり、首元への攻撃に対してダメージ軽減判定を行う能力があり、さらに複数の鉱石のシナジーが素材となったモンスターの皮に反応することで……

ついでにもう一つ。

・破壊回避
例を挙げればR．I．P．は通常の装備破損判定に対して「黒死の天霊の性質を引き継いでいるので通常攻撃ではダメージが発生しない」という特性で破損を無効化している。
このように素材や魔法など、なんらかの特性を利用することで装備の破損を回避することは理論上可能。とはいえ、精霊系モンスター最上位の「天霊」に縁ある力でようやく実現可能な破壊回避を人の手で実現するには一体どれほどの研鑽が必要なのか。
それこそ人の営み数千年を超えるほどの叡智を持つ神に縋りでもしない限りは…………ん？？？

１２月１？日：二刀流とは双剣に非らず

◆

「ふはははァーッ！　背鰭から魔力カッターを射出しようが所詮は魔力！　所詮は魚類（サメ）！　哺乳類（オレ）　ｆｅａｔ．　哺乳類（シャチ）＋海喰の剣（ブルー・プレデター）のトリプルシナジーに勝てると思ったか！！」

前々からキ……少々思考構造が蛮族寄りだとは思っていたが、やはりというかサバイバアルの薫陶を受けた着せ替え隊の面々はこの海底コロシアムに意図的に海中への「穴」を作ることでモンスターを引き寄せたり迅速な「自然死（自然の脅威によって死ぬことを指す）」を行っていた。頭がおかしいぜ。
とはいえ、本来なら船上から釣り上げるか深く素潜りするかしないと遭遇できないモンスターと比較的楽な条件でエンカウントできるのは強みと言えるだろう。

海中で仕留めた「鰭薙ぎ（スラッシャード）」の素材を手早く回収した俺は呼吸困難になる前にさっさと海中コロシアムへと戻る。

「つまり二刀流ってのはこういうことだ、分かった？」

「うえからしたまでなにもわからないわよ」

おいおいウィンプ、それはちょっと……

「足りてないんじゃないか？」

「肯定：不足しています」

「な、なにがよ……」

「「インテリジェンス」」

イェーイ、とハイタッチする俺とサイナ。そしてぷるぷると震えるウィンプ。一体何をしてるかと言うと……着せ替え隊、というより元々はサバイバアルに依頼していたウィンプ強化計画の経過確認とちょっとした「授業」であった。

……

…………

「何？　お前も二刀流にしたんだ？」

「なによ……わるい？」

「いや別に？　ＤＰＳが出ればスプーンだって担げばいい」

ウィンプが選んだのは短剣サイズの双剣のようだ。俺とてこのゲームを始めてから今に至るまで二刀流使いだからな、多少は二刀流に一過言ありとデカい顔もできる。

というわけで試しに模擬試合的な感じでウィンプの動きを見てみた、のだが………

「ウィンプ」

ビチビチビチ。

「なによ」

「双剣はやめた方がいいと思うぞ」

ウィンプのレベルやステータス的に端から負けるつもりも負ける気もなかったが、それを差し引いてもウィンプと双剣の相性が悪過ぎる。

「わたしがよわいから……つかいこなせてないっていいたいわけ？」

「いや？　一応戦士ですと言える程度には動けてるけど……んー、」

成る程確かに着せ替え隊の教えをラーニングすることはできている。ただこれは技量の出来不出来というよりそもそもの向き不向きじゃねーかな。

「双剣じゃなくて二刀流の方が向いてるんじゃね？」

「……は？」

双剣は剣を二本持っている二刀流だが、二刀流は別に双剣ではない。とんち問答のようにも聞こえるが、割と真面目にこれは真理なのだ。少なくとももこのゲームでは。

「双剣は剣を二本扱う事が前提だろ？　二刀流は違う……二刀流は、両手に別々の武器を、両手に攻撃手段を持たせることだ」

「なにがちがうのかよくわからないんだけど」

「仕方ねーな……ちょっと実演してやるよ」

…………

……

……と、そんなわけで刻傷にも怯まず喧嘩を売ってきた泥掘り（マッドディグ）の親戚みたいな鰭薙ぎ（スラッシャード）をぶっ飛ばしてきた俺はコロシアム一角のガラス張りの窓からその様子を見ていたウィンプへと振り向いて一言。

「つまり二刀流ってのはこういうことだ、分かった？」

「うえからしたまでなにもわからないわよ」

おいおいウィンプ、それはちょっと……

「足りてないんじゃないか？」

「肯定：不足しています」

「な、なにがよ……」

「「インテリジェンス」」

イェーイ。ビチビチビチ。

さて、そろそろウィンプが癇癪を起こしそうなので真面目に授業をしてやりますか。

「いいか？　双剣は剣が二本あって、その二つのシナジーをコンボさせる……要するに剣が一本でも無くなったらその時点で「双剣の戦い方」は破綻するわけだ」

俺は海喰の剣を片手で握りながらもう片方の何も持っていない左手を開いたり閉じたりしながらウィンプに告げた。

「これも二刀流だ」

「……わたしのこと、ばかにしてる？　なにももってないじゃないの」

フフフ……そこが二刀流と双剣の違いってわけよ。着せ替え隊は確かに良く善く双剣の扱いについてウィンプに教えてるようだけど、キャラ設定の好みなんぞ効率的キャラ育成の前ではフレーバーテキストよりも価値がない。

適性があるならマッチョにヒーラーを担当させるし可憐な妖精にタンクをさせる、それがゲーマーというものだ。そしてウィンプの適性は「二刀流」でこそ輝く。

「いいや違う、二刀流ってのは「両手それぞれに攻撃手段を持たせる」って事だ。これは右手に剣、そして左手に「拳」を持たせた二刀流だ」

二刀流、という書き方が悪いところもあるが……双剣は両手が持つ二本の剣を組み合わせて「剣技」を行うもの、二刀流は両手それぞれに持った武器を活用して戦う「戦闘スタイル」だ。

両方に剣を持たせる必要はない。例えば銃、例えば短杖、例えば拳……盾だって広義の二刀流だ。これを理解してるかしていないかでプレイヤーの強さは全くの別物だ。

「いいかウィンプ、お前の薬用洗剤みたいな毒でも目に浴びせれば目潰しにはなる。右手の武器が封じられたとしても左の拳をあんちくしょうに叩き込める……一つの戦法に目を眩ませるな、二本ある腕を一つのことだけに使うのもアリだがもっと多くの可能性を持たせるべきだ」

一意専心も悪くはない、だが二刀流は一意専心も「選択肢の一つ」にする事ができる。

「……つまり、どういうこと？」

「剣二本振り回すだけで満足してねーで片手剣両手剣徒手空拳毒手なんでも一通り覚えようねって事だよ」

要約：練習量と密度を上げます。

それを理解したのか、ウィンプのただでさえ白い顔色がさらに青白くなっていく。

「安心しろウィンプ！　俺も手空きだしここにはいろんなバトルスタイルに精通したやつが沢山いるからな！」

「わ、わたしそうけんつかいでいい……」

「あっはっは」

ビチビチビチ。

「あのー……」

と、ここで遠巻きに見ていた着せ替え隊の一人が恐る恐るといった様子で俺に話しかけてきた。

「何か？」

「あーいや、もうこの際そのやけに鮮度の良さそうなシャケの覆面？　については聞かないんですけども……」

現在、俺の頭装備はリッチマン・キング・サーモンの頭面（かしらめん）……を、インベントリア内にあった（俺自身存在を忘れかけていた）素材で強化できる事が判明したのでビィラックにちゃちゃっと強化してもらった「富める鮭王面（プルト・サーモン）」を装備している。

水中呼吸の一個前の効果である水中行動時間延長の効果が付与され、強化前よりもイキイキぴちぴちした鮭の面は新スキルと併せて俺に水中戦という新たなバトルステージへの進出を可能とさせた。

「……正直、折角ボンバーバ……じゃない、ツチノコさんが聖杯使ってるなら出来れば顔見せてほしいなー……なんて。へへっ……
…」

「………成る程？」

じっと生気を取り戻しつつある鮭の眼差しで着せ替え隊の面々を睨みつける。大体のメンバーは目を逸らしたり口笛を吹いていたが、数人は何故かいい笑顔でサムズアップしていた。

「異形頭は自分性癖(オッケー)なんで！！」

「私異形頭なら無機物系が好きなんですけどこれはこれで！」

こいつら………鮭ヘッドを意地でも外さない決意をさらに固くしていた俺であったが、とりあえず全員一発アッパーカットを叩き込もうと決意したところで響き渡った叫びがこの場にいる全員の動きを止め、そして視線を集める。

「出来た……っ！　出来たぞぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「何が？」

「基礎理論だ！！」

少なくとも裁縫をこれからしようって人から聞く単語ではねーな。

「きそりろん？」

「ああそうだとも。かつて私が手がけた「武凛衣(たけりえ)は装飾品配置とサイズ、そして生地の素材とのシナジーを三十四通りの施行の中で見出した比率で縫合し、さらに裁縫系魔術の習熟によって完成させた当時の考え得る中では最高クラスの長期戦闘補助機能を備えたメイド服だった。だが月日が過ぎる中で隠し最上位職業の解放及び魔力…否、マナ粒子への理解深度が進んだことで生産職は新たなステージへと進まざるを………」

「早口言葉ならそこの海面に顔突っ込んでやってくれ。で、手っ取り早く結論は？　パトロン様は何をすればいい？」

「いくつかの素材を用立てて欲しい。まず一つ目はなるべく等級の高いラピステリア星晶体――」

「あるよ、布作るのに一等星級はほぼ使い切ったから二等星級多めだけど三等以下も欲しいならインベントリアから出す」

「……あ、ああ。二等星級がこれだけあれば十分だ……うん。次にリヴァイアサンで購入可能な粒子回路構築マニピュレーターを――」

「リヴァイアサン・オンラインに接続、購入っと……ご一緒に粒子観測ヘッドユニットもどうですかって勧められたんだけどこれいる？」

「パトロン様、靴を舐めます」

「靴くらい自分で洗えるから結構ですぅー」

新鮮な磯と清楚の香りが芳しい鮭顔スマイルで返しておいた。ビチビチビチ。

12月1?日：二刀流とは双剣に非らず（後書き）

こう……若干気怠さを漂わせた開拓者特有のすらっとした肢体がほぼ下着に近い初期装備で動いてるもんだからこう、水面から上がる時に水滴が滴る腹筋の引き締まる動きが見えるのが……へへっ（本当は競泳水着を着ませんか？　と言いたいけど過去にスク水を着ないか提案したサバイバアルがこの世のものを見ているとは思えない眼差しで睨まれていたのを思い出して言葉を飲み込んだ代わりに着せ替え隊の一人から漏れた寂しげな笑い声）（頭が鮭じゃなけりゃあなぁ……）（異形頭だからボディが〟映える〟んだよ）（こいつ、直接脳内に……!?）

１２月Ｘ０日：不滅を謳うは遠かれど、永きを謳うに不足無し。
なお、

◆

ちょっとばかしよろしくない成績だった期末テストの結果を、なんとか「パパ上もママ上もお気に入りのルアーとかカブトムシが無くなったり亡くなったりしたら調子崩すことあるじゃん？」で納得させた俺は、次のテストで点数が悪かったら業務用ＶＲシステムをフリマサイトに出品する、という恐ろしいペナルティを課せられつつもなんとか今年度中のゲーム生活の確保に成功した。

「次はマジで勉強しねーとやばいな…………」

何がヤバいってあの業務用、割と足がつくというかあんな書き下ろしイラスト付きのＶＲシステム持ってるの世界でも「顔隠し（オレ）」くらいだろう。ゲーマーライフ以前にプライバシーが掛かっているので流石に次回のテストはマジでやらないとダメだ。
無視するには大きすぎる〝憂い〟にとりあえずの決着をつけた俺は複数のメールを確認しつつ、ＶＲシステムの電源を入れてログインの準備を始める。

まず一通目のメール。
これは「出来次第直ぐに報告するため」と半ば無理やりアドレスを交換したエリュシオンから…………内容は当たり前というか「史上最高のメイド服が完成した」というもの。ただそれだけが本文に書かれているだけなのが逆に不気味だ、いっそ長文メールの方がまだ覚悟が出来たのだが……一体何が出てくるやら。
海中コロシアムの片隅で裁縫していたかと思えばなにやら近未来ガ

ジェットで糸を作っていたりするし、最後に見た時は何か叫びながらブリッジしていた。ワンチャンアレが裁縫系防具生産に必要なことなのかとイムロンに聞いてみたりしたが、んなわけねーだろのお言葉をいただいた。

二通目。
これはペンシルゴンから。俺は俗世間から離れていたので殆ど関わっていなかったが旧大陸では今大ＰｖＰイベントが開催されている。別に参加が義務というわけでもないし、仇討人は不干渉らしいのでゴルドゥニーネ決戦の方を見据えて新大陸で活動していたがペンシルゴンから徴兵令が来た。
なんでも、レイドモンスターの方はカッツォの奴が頑張っているので大丈夫らしいがＰｖＰ……つまり新王陣営のプレイヤー達の攻勢が思ったよりヤバいのでお前もこっちに来て働け、とのことらしい。
正直、俗世の醜い争いは勝手にやっててくださいと返してもいいのだがこっちもこっちで人手が必要なのだ。なにせ敵は超巨大蛇型モンスターを四体引き連れた群体生成可能人型モンスター、とでも言うべきクソボスだ。質より数、欲を言えば質の良い数が必須……というかほぼほぼ全プレイヤーを巻き込んだレイド戦のようなものだ。
なのでここで恩を売った方が良いというもの……ペンシルゴンからの「指示」の内容に従うのは非常に不本意というかやりたくないのだが。

そして三通目。これはメールじゃなくてＳＮＳ……玲さんからだ。

「２４日の予定か……」

２４日が空いているか、ではなく２４日に具体的に何をするのかということだろう。隠しジョブに就いた玲さんは来たる日の為にスキル周りのビルドをしつつ王国騒乱に参加しているとは聞いている。

ＳＮＳで流れてくる「サードレマ近辺で馬に乗った騎士に踏みつぶされた」という報告と、妙にゴツい馬を撮影したと思しきブレブレのスクショがその活躍の証拠だろう……ホラーゲーっぽいな。
とにかく、玲さんは王国騒乱で活躍しつつもこちらのユニークシナリオＥＸについてもちゃんと考えてくれている。一応の「予定」を送りつつ、やはり王国騒乱への介入は避けられないなと覚悟を決める。ついでにエナドリもキメる。

「っし！」

準備完了。あとは…………くそう、二度と開くことは無いと思っていたんだだが。
「………しゃーねぇ。エリュシオンへの恩返しもあるしな」
前は不慮の事故だった。今回は――

……

…………

……………

「来たかパトロン殿」
「ああうん。で、完成したのか？」

静。あれほどまでにメイド服について熱く熱く暑苦しく語っていたエリュシオン・オートクチュールは恐ろしく静かな様子でログインした俺を出迎えた。

「まずは感謝を。君のおかげで……………メイド服は、時代の最先端のその先へとたどり着いた……Ｇｏ　Ｂｅｙｏｎｄ……」

「ああそう…………」

通常運転ではあるらしい。とはいえその生産職としての力量はイムロンのお墨付き、そのプレイヤーがここまで断言するならば少なくともそこらの防具よりは上、ということなのだろう。
……いや怪しいな、「鎧よりもメイド服の方が優れてる」とシラフで言う奴だから大前提としてそこらの鎧＜＜＜メイド服の可能性がある。

「ラピステリア星晶体は防具作成には向かない。何故なら変形させたり他の金属と混ぜて合金にすることが不可能に近い上、仮にそれを成功させても異物になってしまうからだ」

コロシアムの片隅にわざわざ机まで設置して作っていたそれ……偏執的なほど綺麗に畳まれたそれをばさり、とエリュシオンは広げた。

――それは漆黒の夜空が星々の輝きに照らされるが故に生まれる夜空の濃紺と、朝日に照らされた雪の如き純白の衣で出来た一着の服だった。要するに、案の定、やはりというか………メイド服だった。

「――ロングスカート。王道のクラシカルタイプを選ばせてもらった」

「ああうん、はい」

「語ると長くなるので簡潔に説明していこう」

助かります。

エリュシオンは三分かけて丁寧にメイド服を畳むと、その隣に置かれていた何か……ベルト？　と妙なものを俺へと見せた。

ベルトにしてはやけに小さい……少なくとも腰に巻くのはちょっと難しそうだ、となると腕……首……いや、もしかして腿か？

そして謎の金属塊。見ようによっては銃弾のようにも見えるし、何か電球のようにも見える。少なくともその星空のような輝きから、ラピステリア星晶体が使われていることだけは確実だろう。

「このメイド服……決闘級メイド服「千古不易」シリーズは防具としての頭、胴体、腰、脚装備に加えてアクセサリースロットを五枠使用する」

「五枠！？」

いや、五枠空けられないこともないけど……五枠とはまたとんでもない。封雷の撃鉄・災と兇嵐帝痕・極と瑠璃天の星外套を装備してなお二枠空いてるレベルだぞ。

「一応四枠消費でも運用は可能だが、万が一を考えると五枠消費を推奨する……この「カートリッジアクセサリー」はある種電池のようなものだと思って欲しい。この「カートリッジストラップ」に装填することで「千古不易」の損傷を修復する」

「これが刻傷対策？」

「その通り、刻傷は通常耐久とは別枠の時間制限型の装備破損だ。呪詛デバフの中にも似たようなものがあるが、破損そのものは装備自体の自壊であり……外的干渉による破損阻止は可能だ。「千古不易」は基礎素材の繊維そのものがラピステリア星晶体であるが故にアクセサリーからの補填で装備破損を免れることができる、まさしく千古不易のメイド服！」

成る程、全く簡潔にできていない気がするが要するにアクセサリーで破損を即修復することで刻傷や通常の耐久値が尽きることでの破損を防ぐってことか。

「大体わかった。で、これ最大どれくらい持ち堪えるんだ？」

「仮に一切のダメージを受けず、刻傷のダメージだけを無効化した場合はカートリッジ一つにつき三度は破損阻止が可能だ。一つにつき約十分、故に四つのカートリッジをフルで装備すれば四十分程度は活動可能だ」

「ノーダメは流石に理論値だな……となると多めに見積もって三十分か」

「……多めに見て二十分と言おうとしたのだが、そうか君は避けるタイプのアタッカーだったか」

対モンスター戦を考えると心許ないな……ああ、だから決闘級なのか。三十分でケリをつけられる戦い向けのメイド服、と。ゴルドゥニーネ戦で役立つかな……いや、有用な装備は一つあれば一つの選択肢になる。いくらでもあって困ることはないか。

「耐性としては打撃以外なら大抵の攻撃に強い、ただ服を溶かす系の攻撃には注意して欲しい。継続的なダメージは原因を取り除かないとカートリッジを延々と消費することになる」

「成る程ね………分かった。とりあえず作ってくれてありがとう、素材の余りとかなんかあの変な機材とかは俺は使わないしやるよ」

これで受け取るべきものは全部受け取った。そしてやるべきことも大体済ませてきた。ならそろそろ俺も行きますか……「待った」はい？

「なんだよ」

「大事なことを忘れているぞサンラク君」

「なんだよ？」

「――――試着だ」

あー成る程。

そこでスクショする気満々で待機してた着せ替え隊はそういうことだったわけね。

12月X0日：不滅を謳うは遠かれど、永きを謳うに不足無し。
なお、（後書き）

決闘級メイド服「千古不易」
元々のコンセプトはダメージを「無傷」に置換することで絶対に破損しない、というものだったが「勇魚」の「そんな技術確立してたらとっくにリヴァイアサンに使っとるわボケ」というお言葉をいただいたことと、思った以上に宝石織で作られた宝石繊維の性質が面白かったことからエリュシオンは「外的ダメージがメイド服を破壊し、肉体に干渉する前にすでに修復が完了している程の再生スピード」という決して壊れぬメイド服を完成させた。クラシックメイドスタイル故に身体の殆どを覆っているメイド服はその大部分がラピステリア星晶繊維(ファイバー)によって構築されているため、カートリッジから供給されるマナを最速かつ最適に浸透させることでインパクトが炸裂してから0．1秒以内に修復を完了させる。それ故に斬撃や瞬間的な燃焼などの、メイド服としての形状を崩壊させる攻撃に対する極めて強い耐性を副次的に備えることになった。ただし結局のところ衣服であるため、打撃などの「面」の衝撃や凍結などの服で防御しても直接肉体にダメージが行く攻撃に対しては殆ど無力。さらに言えば持続する燃焼や溶解などの攻撃に対してはカートリッジからの魔力供給が延々と発動し続けるため制限時間を消費してしまう脆弱性を見せる。時に今回はクラシックメイドスタイルであるがこれはサンラクというプレイヤーがロングスカートであっても多少の無茶を利かせられるという事とあくまでも防具である以上、装備者の命を守るという防具としての基本理念に従ったものでありミニスカートタイプのメイド服を否定するものではないがところでこの「千古不易」には一つ音声認識機能があり、これはカートリッジストラップに備え付けられた機構であるがこれによって魔力供給バイパスを生成して（以下略）

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．５（前書き）

九月中はちょっときついっス（〆切的な意味で）

12月17日：メラメラ・ビートアップ　Part．5

◇

焠がる大赤翅による攻撃。挑む彼らはその名を知らないが「多面展開灼眼写（よりどりみどり）」と名付けられたその攻撃は実のところ、布一枚を被るだけでいいのだ。

生成される「灼眼球」の視線を遮断さえすれば即死級エンチャントから逃れることができる。

それは「灼眼球」があくまでも二次元的な認識で対象に照準（フォーカス）を合わせているため、布一枚でも対象の身体が隠れきってしまえばエンチャントによって副次的な燃焼の効果を受けるのは隠しているものになるのだ。

ただし、それはあくまでも机上論。こと実戦、それも十数人での集団を相手に発動された多面展開灼眼写の攻略はまず「自分を見ている灼眼球の特定」から始まる。

「くっ………！　ごめん魔法職！　この際手当たり次第に障害物を作りまくって！！」

『やれるけど次の攻撃までにリキャストが間に合わない！　これ思ったよりヤバいよ！！』

この場にいるプレイヤーはオイカッツォが結成したパーティ以外にもソロで突撃してきたプレイヤーや、オイカッツォとは別口でパーティを結成したプレイヤー達など、その全てを合わせれば三十人はいる。さらに言えばチャンネルにいるプレイヤーも含めればこ

の場にいるプレイヤー総数は数百人近いのだがそれはユーザーである彼らの知るところではない。

問題は、数十個の灼眼球の中から自分を見ている眼球を見つけ出し、なおかつ閃光が放たれるまでに灼眼球と自分との視線を遮る何らかのアプローチをする、という一連の行動をかれこれ五回繰り返していて現在六回目だということだ。

「くっ……これウェザエモンの晴天大征と同じパターン？」

墓守のウェザエモン最大の奥義。リキャストタイムの制限を取り払った致命傷の連続は、その最後を飾る最大最強の奥義に打ち克つまで何度でも繰り返された。

重要なのはウェザエモンがそうであった、というよりも「このゲームでは特定条件を達成しないと特定のモーションが永遠に続く」というケースが存在する、という事実だ。

「一定ダメージ？　それとも十回くらい耐え凌ぐとか？　怯ませたら中断、が一番楽で助かる……いや、そもそもあれ怯むの？」

これまで焠がる大赤翅と戦ってきたオイカッツォの率直な感想は「台風の目」である。騒動の中心、という意味の比喩ではなく文字通りの台風の空白。

そこを殴ったからといってそれそのものはどうにもならない、という意味である。

山火事か、大噴火か、あるいはもっと熱い何かしらの概念が偶然蝶の形をしているだけ、とでも言うべきか……少なくとも（触る前に死ぬとはいえ）触ることができる彷徨う大疫青とは明確に異なる相手がそもそも怯むのか？　とオイカッツォの脳裏に嫌な仮説が浮かび上がる。

同時に非活性状態の焠がる大赤翅との戦闘は何度かしてきたとはいえ、ぶっつけ本番はやはり無茶だったのか、とも……

「……ハッ」

故にオイカッツォは自分を笑い飛ばした。
ウェザエモンと戦っていた時、そんなことを考えていたか？　クターニッドと戦った時もほぼ伝聞の情報だけで挑んだ、龍災大戦は言わずもがな……であればやれるやれないではなく、

「やるんだよ！！！」

灼熱の眼差しが照らす死火山をオイカッツォはインベントリアを操作しながら駆け出す。背筋の凍る感覚は光の中に紛れた己を見る眼差しによるもの、だがオイカッツォはその眼差しを遮る事を選ばず……前へ。

「この手のレイド戦なんて、突き詰めれば大縄跳び……だったらっ！」

複数のプレイヤーが一つの攻略法を成し遂げるために極まった動きをしないといけない、そんなマルチコンテンツを揶揄する言葉だが、それは逆説的にある事実を提示する。

——皆で力を合わせて飛べば、クリアできる。

そして初見であるなら、賭けに出る必要だってあるのだ。

「このままじゃジリ貧だ！　一か八かに乗る奴は………… "消火" を始める！！」

オイカッツォがインベントリアから取り出したそれは、一見すると銃火器のように見える金属塊であった。
だがこれは銃ではない。少なくとも銃火器とは真逆のガジェットなのである。

寒気が背筋を伝って脳を震わせる。眼球に照らされ色濃くなった死の影がオイカッツォの肩に触れようとしている。だがその程度のゲームオーバーに怯えているようではプロゲーマーなどやっていられない。

「そもそもこれが効くかも丁半。あーやだやだ、サンラクじゃないんだからさぁ…………！！」

そのガジェット、識別名を「エンタルピーイーター」という。
元々開発されていたそれは、人類が住まうに値する惑星を発見した際の環境調整（テラフォーミング）に使用されるはずだった大型装備を個人携行可能サイズにまで小型化したものだ。ではこのエンタルピーイーターは果たして何を目的として作られたものだろうか。

名は体を表すとはよく言ったもので。
それは新天地においてマントルの過剰活動を抑制する目的で生み出された熱量（エンタルピー）を喰らう者（イーター）。ベヒーモスで準備をする中で、焠がる大赤翅への対策の一つとして極めてシンプルな発想からパーティメンバー全員が持ち込んだもの。
繰り返すがこれは銃火器ではない。姿は似ていても、理屈が難しくとも、それはまさしく……

「頼む効いてお願い神様！！」

消火器である。
高から低へと流れるエンタルピーの基本原則を促進させる海綿構造(スポンジ)
圧縮吸熱弾頭(フリーズシェル)が焠がる大赤翅へと放たれ、その表層へと到達する。
これがただの弾頭であるならば、焠がる大赤翅にとってはなんら問題ないものだ。生けるエネルギーの塊である焠がる大赤翅はいわばエンタルピーの頂点、絶対的高みの存在……その身は防御の構えを取るまでもなく無敵、そのはずだった。
故に
だが環境(雨)が、開拓者(敵)が、そして今来た干渉が………その全てが焠がる大赤翅という存在に牙を剥いて喰らい付いている。
「Kyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyy!!!!」
スポンジが水を吸うように弾頭にエネルギーを喰われ、焔翅の大部分をごっそりと抉り取られた焠がる大赤翅は悲鳴の如き金切り音を上げた。
その瞬間、灼熱の睨みから逃げ隠れていた全ての開拓者達の心が一つになった。
「「「「ぶち殺せ!!!!」」」」

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．５（後書き）

・エンタルピーイーター

熱量喰らい、どこかで見たようなと思った方は正解。厳密にはこれの基礎理論を限界まで研ぎ澄ませた末にあの悪魔の弾丸へ至るのです。

こっちの方は簡単に説明すると水の代わりに熱を吸って膨らむスポンジ、通常の焠がる大赤翅には効かないが大雨という焠がる大赤翅の肉体そのものが拡散し続ける環境に加えて群がる開拓者への対処で攻勢に転じていたからこそ、がら空きかつ比較的冷めているニラ蝶に効いたのです。

メグレズは疑似永久機関というか「奪った熱で自身を持続させながら対象が死ぬまで熱を奪う」という弾丸でこっちは一発単位で吸収量に上限がある。

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．６

◇

チャンネルシステム。それは認識の分岐、あるいは統合を指す。
シャングリラ・フロンティアというゲームは膨大なアクティブユーザーを一つの世界(サーバー)で活動させる。だが不思議に思ったことは無いだろうか？　今なお新規ユーザーが増え続け、サービス開始時からプレイしているユーザーの全てが新大陸に行っているわけでもない現在、何故そこまで広いわけでもない旧大陸マップがプレイヤーで飽和していないのか、と。
少なくともサービス開始時に跳梁跋扈の森がプレイヤーで埋まった、だとか貪食の大蛇挑戦に長蛇の列ができた、なんて報告は無い。サードレマほどの大都市ともなればＮＰＣの数も十や二十そこらではなく、大量のプレイヤーに加えて大量のＮＰＣも合わせれば数千人どころではない数の人間がサードレマ内に詰め込まれていてもおかしくはない。ではなぜそうではないのか。

それこそがチャンネルシステムによるものだ。プレイヤーはそれぞれが特定のチャンネルへと割り振られ、他チャンネルのユーザーをそもそも認識することが出来ない。分かりやすく言えばＭＭＯではそう珍しくない複数のサーバーに分けられるプレイ環境を一つのサーバーで行っているようなものだ。
ではなぜそんな回りくどいことをするのか。それを説明しようとすると「シャンフロはただ一つの世界」と信じて疑わないし周囲にもそれを受け入れさせるワールドアドミニストレーターの存在に言及しなければならないので今は割愛させていただく。

重要なのはチャンネルシステムはあくまでも一つのサーバー内で行われている認識の分岐であり、誰かの視界には十数人しか映っていないとしてもその実、そこには数百人がいるという事。また同時に「複数のチャンネルを跨いで認識される条件」を満たせば特定の個人が全てのプレイヤーに認識されることもある、という事………それだけを理解してもらえばいい。

重要なのは…………

「効いたっ！！」

「要するにこの形態の時は本体がら空きってことかよ！！」

「目玉止まった！　押せ押せ押せー っ！！」

焠がる大赤翅との戦いの中で明確な「有効打」を叩き込んだ彼らの姿と、それを目撃したプレイヤー達の声、そして晒された大赤翅の〝隙〟はチャンネルの壁を超えてこの場所で戦う全てのプレイヤー達に伝わった、ということだ。

「Ｋｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ！！」

その象徴とでも言うべき炎の翅大部分を毟り取られた大赤翅であったが、金切り音を出しつつもすぐさまエネルギーを生み出して翅を再構築する。だが獲物が弱った姿を晒してしまったのならば、そこには飢えた肉食獣達が群がり食い付くと相場が決まっている。

「眼球出してる時はノーガードだ！」

「オイカッツォ、畳み掛けるか？」

「いや、防御形態と攻撃形態があるって事はこっからが大縄跳びって事でしょ！」

エンタルピーイーターを構えたエターナルゼロの問いかけにオイカッツォが否を返した直後、上空に展開されていた夥しい数の灼眼球が一斉に消える。

「防御固めたぞ！！」

「叩き割れ！」

「あっバカ！　物理で触れたらアウトだっての！！」

にわかに色めきだった事で混乱状態になりつつある戦場、何人かが氷像になったのを視界に入れつつオイカッツォは声を張り上げる。

「奴が氷で防御してる時は氷系の魔法で防御を砕く！　眼を展開したら本体を叩く！　物理特化はまだ待機！　気張れ魔法職！！」

オイカッツォには、ペンシルゴンのように綿密に仕込んだ筋書きを通すような策略は無い。

オイカッツォには、サンラクのようなその時のテンションで自然と他者を引きずっていくような強引さも無い。

故に、オイカッツォは結果を示して人を束ねる。敵も味方もプレイヤーもＮＰＣも区別せず人の命を将棋の駒扱いするでもなく、誰よりも先を進んで正解だろうが不正解だろうがお前らはこの道を走れとするでもなく、「こうすれば勝てる」という結果を示して信頼を

得る。
だからこそこの場にいた魔法職達は結果を示したオイカッツォを認識し、チャンネルを跨いで響き渡った指示に従って魔法の数々が焠がる大赤翅へと叩き込まれた。最初はバラバラだった魔法は繰り返すうちに最適解へと収束していき、焠がる大赤翅の姿が段々と削り取られて小さくなっていく。

「これ物理職そもそも不要論？」

「────いいや、違う」

その様子を見て、ぼそりと呟いた独り言に対して否定したのはエターナルゼロだった。
五歳児程度にまで肉体を小型化させているシャンフロでも屈指のふざけた見た目のプレイヤーであるが、ことベヒーモスに関連する情報に関しては彼一人でライブラリに匹敵する程の情報量を保有している。
というのも、「ママとお勉強」という常人にはちょっと理解できない境地によるデータベースの閲覧を繰り返してきたエターナルゼロはベヒーモスに常駐する【ライブラリ】の面々とのディベートにも積極的に参加するなどして、様々な情報……かつて神代が直面した始源の脅威に精通している。

「焠がる大赤翅は神代の頃は脅威度が低い扱いだった。それは奴がエネルギー生産に集中している間はほとんど敵意を見せなかったからだ……だが神代文明が奴をエネルギー源として利用した時には敵対行為を行った、とベヒーモスのデータにはあった」

「要点をまとめると？」

「熱は副次効果に過ぎねえ、奴の本質は……「尽きない力の塊(エネルギー)」って事だ。熱エネルギーだけじゃねえ、奴はあらゆる「力」を行使できる！」

識る事。それこそがシャンフロ世界における大原則。認識は理解に繋がり、理解は対策に結びつく。

オイカッツォは彷徨う大疫青との戦いの経験がある、無論焠がる大赤翅と彷徨う大疫青は全く別のモンスターであるが……同じ「始源眷族(レイドモンスター)」である。

であるならば、今やってない事をやり始めるのは何時(いつ)なのか。

答えはただ一つ。

「Boooooooooooooooooooommmmmm……
……！！」

――其れは、神に最も忠実な眷族である。

――ただ己が種の永劫を願ったその蝶は巨(おお)いなる白き神の一部となる事を拒まず、ただ忠実に求められた役目を果たしてきた。

――しかし、永劫とは即ち安定。それを崩されるならば、蝶は自らの力で自らを護らなければならない。

――故に蝶は……遥かなる太古、確たる命として羽ばたいていた存在(ソレ)は白き神に乞い願う。

――どうかひとときの暇(いとま)を。我が身より出でし力の悉く、神に捧げし供物を我が意のままに振るう許しを。

――亡骸は応えた。

『焠がる大赤翅を縛りし盟約が解ける――』

『赤色の巨躯が蘇る――』

『始源解帰（Prime Revolve）！』

――存分に暴れよ、かつては山河を跨ぎし巨大（イダイ）なる者よ。

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．６（後書き）

赤＝炎、ってのは現代かぶれな認識ですね
神代よりもさらに前、始源の時代においてニラ蝶になる前のとある種族はもっとプリミティブかつプライマルな力の塊なのです
責任感が薄かったので白き神のスカウトに特に抵抗しなかった
ニラ蝶「養ってくれるなら別に取り込まれてもいいっすよ」

あとチャンネルシステムですが、竜災大戦辺りの頃から意識してはいるので言うほどぽっと出の設定ではないです。竜災時点で描写しなかったせいでここまで説明挟めるタイミングが無かったので……

12月17日：メラメラ・ビートアップ　Part．7

かつてそれは山河を跨ぎ、大地を踏み締めていた……その時は、巨大な芋虫として。
だが幾星霜の時を経てただ自分のためだけに戦う事を許された焠がる大赤翅は、少し趣を変えることにした。

焠がる大赤翅は「赤」に属するモノであって別に「炎」に属するモノではない。
あるいは〝赤き神〟になっていたかもしれないそれは、あらゆる「力」を振るう事を許された偉大なる赤き神虫。
焔に視力を宿した大赤翅は、眼前に群れるモノ共………かつて蹂躙したモノと似たひょろ長い四肢を持つそれらが、「その形」であるからこそ可能なマナの流れを得ている事を認識していた。

自我を取り戻してなお希薄な意識の中で、無機質な思考が違和感の根本、大地の底の底を読み取る。

――――。

それに人間的な情緒は存在しない。しない……が。
強いてそれを人間にも理解できるように翻訳したなら、焠がる大赤翅は「理解した」と考えた。

「様子がおかしい！」

「翅を丸めた……？」

焠がる大赤翅にエネルギーを「貯める」という概念は存在しない。
何故ならどれだけ浪費しようが、損失したエネルギーはすぐさま生産補填されるからだ。
だからこそ、丸まったその姿……「蛹」が羽化するまでに、そう長い時間はかからない。

「ＢＢＢＢＢＢＢＢ……」

ぐむ、と炎が膨れ上がった。
何か分からないが行動させてはならない、と魔法や熱量喰いの弾丸が命中するものの世界観とゲーム、二つの理由からその攻撃は通じない。
炎球が膨れ上がる、そして直径１０メートル程にまで膨張した炎球に一筋の縦線が入る。まさかくす玉の如く割れるのかとプレイヤー達は警戒を見せたが……不正解。確かに炎球は二つに割れた、だが分たれてはいない。
次は横に割れる、これで2が4になった。さらに割れる、4が8に。割れる、割れる、割れる……１６、３２、６４……数千、数万と一つ一つの大きさを縮めながらも総合した大きさはむしろさらに肥大化し、そしてそれは形を変えていく。
その様子を見て、誰が気づいたか。ぽつりと呟かれた言葉が自分の背後から聞こえた事で、オイカッツォは正解に辿り着いたのがペッパー・カルダモンなのだと気づいた。

「細胞、分裂……？」

——灼熱の塊は極めて冷静(クール)な思考で結論を出していた。
大きな身体を作るとして、奴らの姿をそっくりそのまま真似ては不都合が起きる。であれば産み出す身体は地に四つ足で踏ん張り、安

定感を高めた方が良かろう。
満ち満ちたエネルギーが四肢を肥えさせる。鍛え研ぎ澄ます必要はない、大赤翅はただそこに在るだけで誰よりも何よりも富めるモノ故に。膂力が足りないなら鍛えずとも増やせばいい。耐久力が足りないなら耐えずとも増やせばいい。
神すらも羨む、尽きせぬ散財を許されし至高の赤色（プライム・レッド）。負けて従ったのではなく、白き神の願いに応じて従う原初の赤色（プライマル・レッド）。

「これは……！！」

地が揺れる。丸々とした手指が地を握りしめる。
山が揺れる。足裏ではなく膝で地を踏みしめる。
それはキョロキョロと首を振り……視力を生やし忘れていた事に気づく。顔のない頭に花弁の如く翅が咲く。その姿を知らぬ人類はいない、試験官の中で生まれた二号人類（ヒト）とて知識として持ち合わせている人類という生命の大前提故に。
無貌に咲いた蝶の翅、その表面に巨大な……あまりに巨大な「眼」が浮かび上がる。
ぎょろり、と調子を確かめるように眼……灼眼球を動かした大赤翅は待たせたなと言わんばかりに眼下のそれらを睨みつける。

「BaaaaBuuuuuuu……！」

赤子。巨大な赤子。蝶の顔を持つ赤子。大きな、巨大（おお）きな、偉大（おお）きな〝赤〟子。

「きっっっっっっ……しょ！？」

「いやこれどんだけ………ウチのアパートよりでけぇが！？」

「山の麓まで足届いてる……！？」

赤子が動く。火口の縁に片手をかけて、もう片方を天に伸ばす。月すらも鷲掴みにしてしまいそうな巨大な手がパーの形で天に掲げられる。赤く発光する巨大な赤子だが、目撃者達は気づく。

「なんか、手に光が………」

ちょっと待て、とオイカッツォは呟いた。赤子の掌に宿る光、「赤」の始源眷族としての存在意義を否定するかのような青い発光を見て、しかしオイカッツォの警戒を最大まで高めた理由は色そのものではなくその光り方だった。

「あれ、まさかスキルエフェクト……っ！？　全員逃げ――――」

逃げる………どこへ？

焠がる大赤翅の「手」が栄古斉衰の死火口湖に叩きつけられ………大激震が起きる。

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．７（後書き）

・始源解帰
眷族と眷属、互いに備えた能力であるが同音異議、その意味合いは全くの別物と言っていい。
エレボスに属するものが「大元の本体とつながる事でより強化される」効果であるならばアイテールに連なる眷族の始源解帰とは即ち神の支配からの一時的な脱却、かつて在った姿と力を取り戻す事にある。
しかしながらそれは「義務」ではない、取り戻した力を以ってかつての力を誇示するのも間違ってはいない。
でも「さらにその先」を見出す事だって出来るよね？

12月17日：メラメラ・ビートアップ Part．8

焠がる大赤翅「始源解帰」……擬人相。
人間というシステムを模倣し、その上で莫大なエネルギーで満たした天を衝くが如き巨体の赤子と変じる。その巨体が放つ掌の叩きつけはもはや天災に等しく。それはまさしくヒトの、かつて神代の〝人類〟が次世代に託した想いと生き抜く力を他でもない人類を滅ぼした者が使うという侮辱に他ならない。

「Daaaaaaaaaaaaaaaarrr……Buuuuuuuuuuuuuuuuuuuuuu……！！」

蝶の貌、仮面舞踏会の仮面の如き蝶の翅に浮かび上がる灼眼球が分裂する。両翅合わせて十数個の小型灼眼球から放たれた灼熱の光条(レーザー)を地上に放たれ、灼眼球の一つ一つが〝敵〟を視線で追いかけることで光熱が不規則な乱舞で大地を抉り切っていく。
動くだけで人が死に、眼差しだけで人が死ぬ。そんな超巨大スケールの怪物を前にしてプレイヤー達の注目はただ一つの事にのみ向けられていた。

「体表温度常温(36度)だよこれ！！！」

「普通に殴れるぞ！！」

これまで置物か肉盾でしかなかった近接物理アタッカー達の解禁。
それは参加しているようで参加できていないフラストレーションを貯め続けていた近接物理ジョブのプレイヤー達にとってはまさしくスタートを告げる空砲に等しい朗報であった。

彼らはゲーマーだ、誰もが多かれ少なかれ世界を救った勇者であり怪物殺しのスペシャリストだ。如何にリアリティが素晴らしいとて、如何に首が痛くなるほど見上げなければ全貌すら見えない巨体の怪物とて…………体表温度常温でベビーパウダーを塗った赤子の肌程度の硬さしかない敵に恐れおののく道理は無い。強いて言うなら集合体恐怖症は顔を直視できないくらいか。

「身体部分は人間と同じ体温、でも顔はそうでもなさそうだ……その上で肩とかが焼けてないってことは耐熱性はヤバそう。なら……………よし、全員に通達。消火系アイテムをまだ持ってるなら顔面に集中攻撃、それ以外は四肢を殴って転倒させる！！」

インカムから応、と返ってきた声を聞き取りつつオイカッツォはそれまで温存していた装備を展開しつつ振り返り…………一人いないことに気づく。

「……あれ？　エターナルゼロさんは？」

「あー……あそこ」

指さした先には、血走った目で猝がる大赤翅へと突撃する見た目五歳児の姿が。
成人のアバターとは比べ物にならない全てが縮尺された体躯を全力で駆動させながら激走する姿は、その速度も相まってもはやホラーに近い。

「オギャりに心が足りてねぇんだよボケがっ！！」

「…………ねぇ、あの人ヤバくない？　その……仮にロールプレイだとしても、なんかこう……」

「狂人の真似とて大路を走らばなんとやら、って事でしょ？」

「うん」

「大丈夫、あれは真似じゃなくて生粋だろうから」

「なにも大丈夫じゃないと思うわよそれ」

あの友人の周りには妙に癖の強いゲーマーが集まる、というのはオイカッツォの経験則だ。

何かそういう電磁波でも出しているのだろうか、と他人事のように笑みを浮かべるオイカッツォだったが……真に他人からすれば自分もその「癖の強いゲーマー」に含まれていることには気づいていない。

「総攻撃だよペッパー、君は結構アイテム総量が戦力に影響するタイプだけど……どうする？」

「…………愚問ね。ここに来て温存して死んだらしばらく鏡が見れないわ、間抜け面だろうから」

にっ、と笑みを浮かべながら攻撃ポーションの数々を取り出したペッパーに同じく笑みを返し、オイカッツォは見上げるほどの赤子を…………開拓者達に群がられよじ登られている超巨大レイドモンスター「焠がる大赤翅」を改めて見据える。

「よし。じゃあこっちも切札を使っちゃおうか」

インベントリアを操作。この世界における最小の「世界」から呼び

出すは、巨大な……球体。オイカッツォが特殊強化装甲を装備している間に、球体は花開くように変形し、虎を模した形へと姿を変えていく。

白き体躯に黒の虎柄（タイガーパターン）、鋼の内側には仮想の血潮（プラズマナ・エネルギー）を漲らせ、吼える様はまさしく白虎。しかし其は白虎……シャングリラ・フロンティアにおいて【騏驎】に至る四つのプロトタイプの一つたる【白虎】には非ず。

規格外リアクターが現状一つしかないことを差し引いても、露骨に白虎の貸与（返却）に顔を顰めたとあるプレイヤーが「白虎を自分が保有することで発生するメリット」を滔々と語りつつも、しかし同時に「限定的ながら【白虎】の性能を再現＋量産品であるが故に替えが利くというメリット」を掲げて生み出した……そう、言うなれば量産型規格外戦術機。

「ルスト監修ボールメン『屏風ノ虎（スクリーンティガー）』……実戦テストだ」

虎がさらに花開く。それは戦術機が持つ二段階目の変形、鋼の毛皮と化した虎が使い手に覆いかぶさり纏われる。

虎の貌を備えた機巧の戦士が見据える先は、かつて己が基となった文明が敗北した「赤」。生まれは現代なれども……その身に流れる技術の血脈に、数千年の時を経て復讐の時がやってきたのだ。

12月17日：メラメラ・ビートアップ　Part．8（後書き）

・「屏風ノ虎（スクリーンティガー）」

いや別に元々私が手に入れたわけでもないしシステム上も事実上も共有という形にはなっているけど、正直に言わせてもらうと私の方がペンシルゴンやオイカッツォ……サンラクよりも上手く使える自信があるしいや本当に独占する意図は無いし入手した三人へのリスペクトも欠かしたことは無いんだけど情報通りなら私がこれらの武装を保持しておくことによる戦略的な効果は無視しきれないものであって……あっ、ならこれならどうだろう。私が白虎と同じコンセプトの戦術機を作る、もちろん製作費はこちらが持つし一切の妥協はしない。というわけで紹介するのがこちら「屏風ノ虎（スクリーンティガー）」。白虎が搭載する物質の吸引と排出を自身のエネルギーで代用することで推進力及び射撃力の再現に成功した傑作機で、本体搭載の武装を削除する代わりにリアクターチャージャーを搭載することで本来はリアクターの稼働時間を延ばす機能をある種の弾倉のような役割を担わせる。これによって本体稼働時間を減らさないまま高いパフォーマンスが発揮できる。うん、白虎が無くても大丈夫。本当本当。私嘘つかない。（ここまで四呼吸）（オイカッツォは納得した）

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．９

戦術機球ボールメン、機体名「屏風ノ虎（スクリーンティガー）」。
規格外戦術機虎【白虎】のコンセプトを継承した「屏風ノ虎」は吸引及び排出する物質を問わない白虎とは異なり、魔力のみをその対象とするダウングレード版と言える。だがそれだけだ、白虎が可能とする吸引、圧縮、そして排出……攻撃や機動に転用するだけではなく、魔力のみを干渉対象とするからこそのテクニカルな動きは本家の【白虎】となんら遜色はない。
それはまさしく、実在する虎を精巧に描いた屏風の如く。真に迫った完成度は本物に限りなく等しい印象を与えるものだ。

「魔力圧縮（マナチャージ）！」

『了解（ラジャー）』

無機質な返答が強化装甲（パワードスーツ）を通して機巧の虎からオイカッツォに返される。
外的物質を吸引する白虎とは異なり、本体に搭載されたリアクターチャージャー……本来は動力源にエネルギーを供給することで活動時間を延長するユニットからエネルギーを吸引して腕部で圧縮を開始する。

「じゃあちょっと背中に行ってくるよ、ペッパーは顔レーザーに気をつけつつ下から顔面狙って！」

「分かったわ！」

魔力の圧縮作業を続けながらも、各部の駆動系を唸らせながら走りだしたオイカッツォは焠がる大赤翅の手足に群がるプレイヤー達を跳び越えてその巨大な赤子の腕に「爪」を突き立てる。

「外付けならセーフセーフ……っと」

それは虎の〝爪（クロー）〟ではない。
それは虎の手を彩る外付けの〝爪（ネイル）〟。
白虎を模倣するために戦術機球「屏風ノ虎」本体には一切の武装が搭載されていない、それ故にその機構（システム）以外で戦うためには戦術機に依らない武装が求められる。
今使っている「攀爪（ハグ・ネイル）」は爪による斬撃ではなく、対象に食い込み食いつくことで離れないようにする機能を持つ。即ち、己よりもはるかに巨大な困難にしがみつき登り詰め、そして乗り越えるための武器だ。
柔らかな、しかし食い込みこそするが貫けない程度に密度のある焠がる大赤翅の表皮に爪を突き立てながら勢いよく上を目指していたオイカッツォだったがふと気づく。

――妙に左脚が重い、と。

戦術機と合体した状態のプレイヤーは強化装甲のアシストによって人間離れした膂力を発揮する。その上で左上に感じる重さという違和感、それは泥がついたとか足が攣ったとかそんな些末な問題ではなく……何か重いものが左脚部に加算された、ということに他ならない。
よもや焠がる大赤翅の体表から何か雑魚敵でも湧いたか、と場合によってはチャージの途中ではあるが攻撃するか、と片腕で自重を支えつつもう片方の手を左足に向けて突き付ければ。

「相乗り良いか？」

「うわびっくりしたぁ！？」

そこには、ものすごくいい笑顔をした五歳児相当の見た目をした成人男性（エターナルゼロ）がさながら子泣き爺の如く左脚に抱き着いていた……思わず振り落としそうになったのを堪えきったのは奇跡に近いだろう。

「ちょっ、怖いんだけど！？」

「悪ィ（ワリ）な。自力でよじ登るよか早そうだったんでな」

思わず動きを止めたオイカッツォの左足からするすると背中まで登ってきたエターナルゼロは、そのままおんぶの形でしがみつくと真上……這い這いの状態である焠がる大赤翅の背中を見据える。

「四肢を殴るのは耐性崩しって面では有効かもしれねぇが所詮は末端、根本的な打倒を目指すなら胴体方面に行かなきゃならねぇ」

「まぁ、そうだね。これに赤ちゃんの……っていうか人間の常識を当てはめていいのかは分からないけど、腕よりは心臓辺りとか頭を狙った方が効果がありそうだ」

シャングリラ・フロンティアは既に剣と魔法だけの世界ではない。たとえＨＰが尽きたならば自身の財をその場にぶちまけてしまうとしても「だからこそやる」と言わんばかりに己の全力を持ち出す者はいる。

「戦術機乗りがここぞとばかりに群がって来たぜ」

「ここぞまでたどり着けたなら上等だよ。少なくともレイド戦にラストアタック報酬は無い、だったら百人でも二百人でも増えれば増えるほど都合がいい……！」

誰が最後に攻撃してもいい、ただ倒せばいい。そういうところは良心的なんだこのゲーム……と心の中でつぶやきつつも、オイカッツォはエターナルゼロを背負って揺れる焠がる大赤翅の腕にしがみつきながら上を目指す。上空には遅参した……あるいは温存していたそれを使うことに踏み切った戦術機乗り、それも飛行能力を搭載した強化装甲達が四つん這いの焠がる大赤翅の背中を、あるいは後頭部を攻撃する。

視線を横に向ければ、遠距離砲撃型のレーザーが魔法に混ざって焠がる大赤翅に命中しているのが見えた……焠がる大赤翅がこの姿になったことはオイカッツォにとって想定外も想定外であったが、逆にこの規模になったからこそプレイヤー達の参加意欲が刺激されたのだ。

「よしよしよし……！　いける、いけるぞ……！」

「フラグっぽいぜそういう言葉」

「ゲームにあるのはイベントフラグだけだよ！」

「いや…………」

強化装甲のヘルムにさらに重ねる事の「屏風ノ虎」のヘッドパーツ。視覚アシストがあるとはいえ今まさに上を目指して猛進するオイカッツォはエターナルゼロの表情を気にしてなどいない。故に、何故……聞かなかった。もし聞いていたなら、といった表情をしていたのかを……エターナルゼロが半信半疑、エターナルゼロはこう答えてい

ただろう。

「焠がる大赤翅はそもそも体力が尽きることがあるのか？」と

かつて神代における「天才」と謳われた科学者は量産型ではなく技術の粋を一点に集中させることで生存競争に勝利しようとしていた。
それはなぜか…………怪物は学び、慣れるから。
この世界は……否、この時代は一人の男によって支えられた薄氷の時代だ。氷の下には……それ以前の時代の法則(ルール)そのものが死んで(眠って)いる。そして今、薄氷の上で暴れている怪物たちはその怪物から這い出て来た存在だ。それも、これが初めてではない。

「Daaaaaaaaa……Vuuuuuuuuuummmmmmmmmm…………!」

結論から言おう。焠がる大赤翅という存在はほぼ完全な不老不死である。
シンプル過ぎる思考能力は劣化せず、そして尽きせぬ力は滅びない。そもそも肉持つもの、力持つものの闘争とはリソースの削り合いに他ならない。であれば焠がる大赤翅が敗北することなど万が一にもあり得ない。
勝利とは、最善の結果を指した言葉だ。そして〝結果〟というものは素材を問わない。無血であれ、味方九割損失であれ、世界の崩壊であれ。その結果に至った者にとって不都合であれば敗北であり、好都合であれば勝利なのだ。

シャングリラ・フロンティアは背景(バックボーン)をこそ重要視する。その権化こそがユニークモンスターであり、対してレイドモンスターは比較的シンプルな力比べによる勝利を目指すコンテンツだ。
だがそれはただ考えなしに攻撃すればいいというものではない。た

だ殴りつければ勝てるというものでもない。
サードレマを襲撃した彷徨う大疫青が真の姿を曝した時、無限に強くなり続けると思われたその実態が「攻撃に対してそのワンランク上のカウンターを仕掛ける」という能力だと暴かれた時のように。
貪る大赤依の真の正体が擬態する群体であり、擬態した個体を討つのではなく総体を削りきる事こそが重要であったように。
人類(プレイヤー)は見つけ出さなければならないのだ。最善の結果を、この戦いにおける勝利条件を。

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．９（後書き）

Ｑ．ＨＰが絶対尽きない敵Ｍｏｂとか倒せないですよね？
Ａ．〝擬人相〟ってつまりどういうことなのかよく考えてください、完全再現＝完全無欠ではないのです。

彷徨う大疫青の第三形態は第一形態のレベルが高いほど減少値が上がるＨＰ上限削りの病性結界と第二形態の攻性病攻撃に加えて、攻撃対象のレベルに応じたカウンター能力を発現していたのですが対高レベルに特化していたのでレベルを下げてしまえばしょぼいカウンターしか飛んでこないんですね。
「自分を害せる者は強者である」という理念と強者を殺すことに特化しすぎて弱者の群れこそが彷徨う大疫青の天敵なのです
だから初心者向けレイドモンスターとしてサードレマに突撃させるね…………

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．１０（前書き）

ド難産でした

12月17日：メラメラ・ビートアップ　Part．10

◇

上昇する温度に限界は無いとされている。ただひたすらに、尽きせぬエネルギーを攻撃に注ぎ込めばその眼光は空間を削ぎ落すかのような光熱を以て大気を切り裂き、もはや燃焼という現象すら起こす前に焼失した大気の欠落を埋めんと流れ込む大気の流れによって、轟々と嵐の如く風が吹き荒れる。

否、それはもはや乱気と呼ぶことすら烏滸がましい。焠がる大赤翅の蝶貌から放たれたレーザーの通過した場所の大気が莫大な熱量によって焼失し、そしてその光は巨大な赤子からすればぶんぶんと周囲を飛び回る戦術機（羽虫）の群れを撃ち落とすために何本も、何度も放たれている。

大気の〝虚無〟を埋めようと流れ込む大気がさらに焼き消されるのだ、円を描くだけ竜巻や台風の方がまだお行儀が良い。

右に流され左に吹き飛び、上下も前後もおぼつかない程にかき回される光景……やっとの事で焠がる大赤翅の背中にたどり着いたオイカッツォ達が見たものがそれだった。

「人間ピンボールってこういうことなんだね……」

「なまじ空中なせいで熱線に当たるまでぶっ飛ばされ続けてるやつがいるのも哀愁を誘うぜ……」

戦術機を纏ったプレイヤーとて強風の影響は受ける。ましてそれが左右上下前後にきりもみ回転を伴うような超乱気流の中とあっては、

死ぬまでピンボールになるのも無理はない。結果的に背中という眼光が届かない場所に登攀という手段で辿り着いたことは最適解であった。

「さて……登ったはいいけどどうしようか」

「無策だったのか？」

「いや、改めて見てみると規模がデカすぎてどうしたものかって」

焠がる大赤翅「擬人相」は巨大だ。山頂から山麓にまで届かんばかりのサイズともなれば、背中だけでもサッカースタジアム並の大きさになる。ましてゲーム的に体感距離が縮小されてこれなのだ、シナリオの設定に忠実に準拠したならば最早そのサイズは人間が群がってどうにかなるものではなかっただろう。なにせ手を振り回し這い回るだけで地上の人間が潰れ、その目から放たれる熱線によって空中の人間は蚊トンボのように蹂躙される。ただやみくもに殴ってどうにかなるものなのだろうか、とその圧倒的すぎるサイズに不安になっていたオイカッツォであったがそんな不安を晴らしたのは身近にいた人物だった。

「俺に案がある」

「なにか知ってるの？」

「いいや……〝象牙(ママ)〟のところで色々調べてたんでな。英才教育って奴さ、俺ぁ今この瞬間も性癖(ユメ)の中に生きている……！」

何もかもが狂っている、その言葉をギリギリで呑み込めたのはまだエターナルゼロが気心知れた友人の枠に到達していないからだろう。

友人の友人は八割くらい他人と相場が決まっているのだ。そしてい
ま、残る二割の関わりを悔いているのだ。

「いいか、焠がる大赤翅の……〝今の〟焠がる大赤翅の本質はデカ
いことじゃねぇ、奴が人の姿になってるってことだ」

「特撮の巨大ヒーローだってもう少し可愛げのあるサイズだけどね」

「元より奴はエネルギー無限大の生きた力の塊だ、少なくとも世界
観的な設定だけなら……死なないだろ、そんなの」

「ゲーム的には死んでくれないと…………いや、待った」

そこでオイカッツォは気づいた。気づいたと言うよりは思い出した。
大多数がそうであったから、少数のその可能性をド忘れしていたの
だ。

「撃破は撃破でも撃退の可能性か！」

ウェザエモンが、ジークヴルムが、そして同じレイドモンスターで
ある彷徨う大疫青が討伐というHPが０になる形での決着だったか
らこその失念。クターニッドや話に聞くリュカオーンはどちらかの
命が尽きるのではなく、戦闘の終了という形の決着である。

「……そうなると、やっぱり消耗させる必要がある？　いや……こ
のゲームならマジで体力無限とかありそうだし……」

相互理解の「そ」の字も叶わなさそうな敵であったからこそ、お帰
りいただくという答えから離れていた。

「へっ、大事なのはそこじゃねぇって言ったろ？　こいつはなんの

心意気も分かっちゃいねぇ、見てくれだけのオギャりだがな……見てくれだけなら赤子なんだぜ」

オイカッツォの背中から降りたエターナルゼロは揺れ動く焠がる大赤翅の上をよたよたと進みながらも人体でいう肩甲骨の辺りに辿り着く。

「赤子が何故はいはいするのか……それはママのところに帰るためだ」

「そうかなぁ？」

「そしてなぜ赤子がママを求めるのか……それは〝信頼〟……命として脆弱な自分を守ってくれる存在への、全てを預ける本能の信頼……！　すなわちトラスト・マミー……！！　こいつにはそれがねぇ！　完全無欠の存在故に！　どれほどに真似たところで……こいつには甘えがねぇ！　甘えてんのか！！」

狂人が暴論を振り回している。どうせなら拳を振り回してこちらに襲いかかってきた方がまだマシだったとオイカッツォは遠い目をするが、残念ながらエターナルゼロは味方であり……さらに言えば、とても心強い〝智者〟であった。

「ベヒーモスライブラリでこいつの情報には目を通してある。こいつの本質はエネルギーの塊ってことだが……こいつ自身の〝自我〟を確立するためにその形状にはある程度の縛りが発生する……これは他の始源眷族にも言える事らしい。新大陸の――」

「悪いね、青空教室やるなら別の日で良いかな！？」

「ああ悪い、要するに……本体はあくまでも顔のアレってことだ」

そう言ってエターナルゼロが指さしたのは焠がる大赤翅の頭部……さらに言えば、顔面に張り付くように生えた蝶の貌そのものだった。

「つまり顔面を狙えと？」

「へっ、自分で「撃退が勝利条件」っつったじゃねぇかよ？　多少翅を削ったところで即回復されるだろうよ……いいか、こいつは今人間の赤子を模倣している……完全無欠の性質で不完全な……ああ、肉体的な意味で、な？　赤子は完全生命体だからな……ともかく、こいつはこの姿になったからこその弱点を負っている」

正論と暴論の二丁拳銃で蜂の巣にされたような気分になったオイカッツォだったが、正論部分だけで言えば納得できないこともない。とはいえ、だ。

「殴っても死なない性質そのままに赤子になったこれにどんな弱点が？」

「首が据わってないのさ」

……

…………

……………

オイカッツォはインカムを通して、パーティメンバーに……そして、パーティメンバーを通してこの場にいるプレイヤー全員に届くようにその指示(オーダー)を出す。

「あー。暫定だけど有力な攻略法が出たのでできれば全員に、他のプレイヤー達にも通達してほしい」

確証とまでは言わない。だが屏風ノ虎(スクリーンティガー)の攻撃によって、確かに他の部位に当てた攻撃よりも治りが遅い首の傷口を見ながら、オイカッツォは見当が外れればそのままレイド討伐失敗にもつながりかねない……しかし見当が当たっていたならば、まさしく勝利への王手となる一手を指す。

「弱点は首だ、焠がる大赤翅の頭部が火口に来るように誘導して……首を切り落とす！！」

１２月１７日：メラメラ・ビートアップ　Ｐａｒｔ．１０（後書き）

ちょっと長くなったので分割。思ったよりエタゼロがしゃべりすぎた

・擬人相

焠がる大赤翅が「人類」をコピーしたことで「完全な不完全」となった姿。要するに完璧にコピーしすぎて人間の構造的欠点もそのまま引き継いでしまった。確かに焠がる大赤翅は無尽蔵のエネルギーによってあらゆる損傷を即座に再生させることが出来るが、それは逆説的に「ダメージ自体は受けている」ということに他ならない。

さらに言えば、人をコピーしたという事は人並みの知性もまた脳の再現と共に生み出されてしまっているので、人並みの好奇心や嫌悪感、あるいは人並みの敵意も抱いている。

１２月１７日：クライマックス・ヒートアップ　前（前書き）

文章が多くなりすぎてさらに割る、次は後編Ｐａｒｔ．１ですかね

……（白目）

12月17日：クライマックス・ヒートアップ　前

◇

赤子の首を斬り落とす。文字だけ見れば論外も論外、論ずる以前に提唱した者を警察に突き出す事満場一致間違い無し。
ただその赤子が山に抱きつけるほどに巨大で、顔が蝶で、そこに浮かんだ大量の眼の模様からビームを撒き散らす〝力〟そのものが意思を持った大怪物であれば人類用の倫理を持ち出す者はいなかった。

「人数を集めろ！　奴の目線をこっちに引きつけて火口まで誘導するぞ！！」

「飛べる奴らは背中に回れ！　首に集中攻撃だ！！」

「ねぇこれ地上班高確率で死ぬわよね！？」

「狙い（ホーミング）は荒い！　全力で横に飛べばちょっと装備が焦げるだけだ！」

「首下は危ないぞ！　手の動きに巻き込まれる！！」

「上がれ上がれ！　戦術機乗りなら一人くらい担げるだろ！　上がるやつに頼んで火力持ちをしがみつかせろ！」

「途中で落としたらごめんな？」

「抱きついてやろうか！？」

「それはちょっと中身関係なく女アバター以外遠慮してぇ……」

◇◇

「まさか決戦用で持ち込んだ戦術機でやる事が穴掘りってさぁ！」

「……見回してた？　まさか首が据わっている……？　いや、腕の長さ太さから概算しても生後二ヶ月程度の赤子が再現されている……チッ、赤ちゃんの健やかな成長すらも侮辱しやがるのか、許せねえ……っ！」

狂人が暴論を振り回しながら暴力を振るっている。何もかもが狂っているやべー奴を傍らに、オイカッツォは休む暇なく両腕を足元……焠がる大赤翅のうなじに叩きつけていた。

「なんかもっとこう……無双系を想像してたんだけどなぁ！？」

戦術機「屏風ノ虎（スクリーンティガー）」はマナ……魔力を圧縮し、それを弾丸や爪などの形状にして解放する機構を搭載している。

近・中距離に対応した格闘戦に優れたコンセプトではあるが……攻撃対象が山と互角なサイズの怪物ともなれば、近距離戦（インファイト）と言うよりももはや土木作業に近い有様であった。

「ダメージの治りが遅いし、攻撃も通りやすいから実際有効なんだろうけど……！」

兎にも角にもサイズが大きすぎる。なんとか背中に辿り着いたプレイヤー達が続々とうなじへの攻撃を始めているが、背中だけで野球でもサッカーでも好きにできそうな広さがあるならば、当然首も尋常の大きさではない。恐らく背骨もちょっとしたトンネル程のサイズがあるだろう。

「誰か発破とか持ってねぇか！？」

「火属性相手に爆弾なんて持ってこないわよ！　ただでさえ死んだら装備全損なのに！！」

「俺持ってきてる」

「いやこれマジでどうするんだよ……囮やってる奴らもいつまでも耐えきれないだろ……」

「ていうかさっきから数えてたけど段々顔の蝶翅に浮かぶ目の数が増えてるんだよ！　いくつがＭＡＸかは知らないけど上限まで増えたらヤバいんじゃないのか！？」

叫ぶような会話の中で、オイカッツォは確かにその言葉を聞き取った。

「今爆弾持ってるって言ったの誰！？」

「え、俺だけど……」

「いくつ持ってきてる！？」

「ふっ………めっちゃある」

装備ロストを見越してか、店売りだろうこれといった特徴のない皮鎧を身に纏ったプレイヤーが手を挙げたのを見つけ出したオイカッツォはその人物の手を引きながら土木工事（こうりゃく）の最前線、うなじのど真ん中へとそのプレイヤーを連れていく。

「爆弾持ちが来た！　設置するからいったん離れて！！」

戦術機を装備したプレイヤーの発する声は戦術機を通してある程度拡声される。オイカッツォの言葉によって人が退いた、確かに削られてはいるものの依然として骨の露出していない傷口まで発破持ちのプレイヤーを案内する。

「ありったけ設置して！」

「おうさ」

爆弾が設置される、爆弾が設置される、爆弾が設置される、爆弾が設置される、爆弾が設置される、爆弾が爆弾が爆弾が爆弾が爆弾爆弾爆弾爆弾爆弾…………………

「え、どっから出てきてんのそれ……」

「………本当はこれで王都更地にしようと思ってたんだけど、こっちの方が楽しそうだし」

とんでもない地雷を在野から掘り出してしまった。ひきつった顔を「屏風ノ虎」で隠しつつ、明らかに個人が所有していい量ではない爆弾がびっしりと設置された傷口から離れつつ隣にいるプレイヤーに起爆を頼もうとして……ふと、まだ一度も名前を呼んでいないこ

とに気づいた。
とはいえ一々名前を聞く必要はない。なにせこのゲームでは頭上にプレイヤーネームが表示されているのだ。そのプレイヤーの頭上に表示された名前を読み取ったオイカッツォは、改めてその名を起爆の指示と共に呼ぶ。

「えーと……じゃあ、しいたけさん起爆よろしく」

「あいさ」

◇◇

「VooooooooooooooGyyyyyyyyyyyyyyyyaaaaaaaaaaaaaaaaarrrrrrrrrrrrrrrr！！！？」

焠がる大赤翅が悲鳴を上げた。それほどまでに巨大な赤子のうなじ部分で起きた爆発はすさまじいものだった。

「何をしたのよオイカッツォ……！」

地上で焠がる大赤翅が放つ灼眼光を回避しつつも、なんとか注意を引き付け続けていた地上班に混ざっていたペッパー・カルダモンは背中へと登って行ったオイカッツォが一体何をしでかしたのかと疑問符を浮かべつつも、これまでなんとか手繰り寄せていた焠がる大赤翅の好奇心(ヘイト)が一瞬で霧散したことに歯噛みする。

そも、地上のプレイヤー達は殆ど囮としての役目を果たせていなかった。何せ腕に近づけば踏み潰され、顔面には殆ど攻撃が届かない。彼らにできることはありったけのヘイトスキルを当てて視線を誘導するくらいだ……だからこそ、うなじでの大爆発という明確なダメージによって猝がる大赤翅のヘイトはいとも容易く地上のプレイヤー達から外される。

「文字通り眼中に無いってわけね……」

ぎょろぎょろと動いていた眼球の全てが自身の背中を見ようと顔ごと同じ方向に動いている。頭部が未だ健在であるならば、まだ背中に上がったプレイヤー達が目的を果たせていない、ということだ。

「BaaaaaaaaaaaJuuuuuuuuuuuu……！」

そして何より、これまで生物らしい感情を見せていなかった猝がる大赤翅になって見せた感情……それが怒りの一色に染まっている。瞼など無いはずなのに細められた蝶貌の灼眼球は、言葉無くともその意思を雄弁に示している。

「ブチ殺す、ってところかしら？」

目は口ほどに物を言う、そして猝がる大赤翅は目で示した意思を躊躇うことなく実行する。

「オイオイオイ……なんだあの特大眼球は……！？」

「ねぇ、今の大赤翅の頭くらいある眼球からぶっ放されるレーザーってどれくらいの規模だと思う？」

「一番最初にサードレマに撃ったアレと同規模かそれ以上だろうさ！　どうすんだよ！？」

焠がる大赤翅、その代名詞たる蝶の翅に浮かび上がった灼熱の眼球から灼熱の眼差し（レーザー）が上に放たれる。二十近い〝まなこ〟模様から放たれた光は、もはや意にも介さぬ雨雲を突き破る……ことなく、一点に収束して巨大な球体を生み出していく。

それはもはや、太陽と言っていいほどに眩く……そして、熱い。そしてそれに瞳孔が開いたことで、その巨大な……あまりに巨大な太陽の如き灼熱の巨眼球が己の首に痛みを与えた下手人たちを睨み据える。

「どうする！？　どうにかタンクを集めてヘイトスキル一斉に使わせるか！？」

「そもそも個々人のスキルでどうにかなるものなの？」

「だから集団で使わせるんだろ！？」

地上のプレイヤー達が混乱と口論で右往左往する中、ペッパー・カルダモンは…………

「…………ムカつくわね」

皆とは違う理由で怒りを抱いていた。

「歯牙にもかけられないってのは…………やっぱり、ムカつく」

その感情に焠がる大赤翅は一切関係していない。ただ…………そう、

「自分の行動が相手にとって何ら興味を引かない」という今の状況から彼女自身の脳内で完結した連想ゲームで生まれた怒りが、まさしく八つ当たり的に焠がる大赤翅に向けられている。ただそれだけだ。

そうとも、どれだけ強い相手であろうと、強大な敵であろうと、最強の存在であろうと……いつだって弱者には挑戦の権利がある。

挑むために行動することだけは、万人が等しく持つ権利だ。

だがその挑戦を、受ける側である強者が蔑ろにすることは……とても、腹が立つ。

強者の都合を考えない弱者の傲慢(エゴ)、だがその傲慢を燃料にしてこそ弱者は初めて強くなる。それこそがペッパー・カルダモン……夏目恵が魚臣慧(オイカッツォ)の背を追う原動力であり、さらにその上の存在に喧嘩を売る理由なのだ。

「炎だのエネルギーだのなんだか知らないけど……要するに、眼があのモンスターにとっての重要な要素なんでしょ？」

「何か案があるの？」

誰もが焠がる大赤翅を見上げ、確信のない行動を取る中。一人明確な理由を抱いて行動するペッパーに気づいた炸裂グリンピースがその理由を問う。

「眼を奪えばいいんでしょ？　だったら必要なのは強さじゃない……派手さよ」

錬金術師というジョブにおいて、それは少々ロマン寄り……身も蓋もない言い方をすれば、ネタ寄りのアイテムだ。作成に要求されるアイテムこそレア度の低い手に入れやすいものだがその数が多く、

作成には多大な量のマーニが要求される。そして作ったとしても使用できる状況が少々特殊すぎるが故に実戦向けとは程遠いという評価を下されたもの。

だがそれはこのイベントが始まる前までの評価だ。さらに言えば、青き始源の眷族が攻めて来たころには確かにプレイヤー達から注目されつつあったもの。しかし、その〝狙い〟が大雑把すぎるが故にやはりネタの領域から逃れられなかったもの……

だが、相手は巨躯なる怪物焠がる大赤翅。その〝狙い〟が……文字通り、命中率が大雑把であっても当たる確率が極めて高い相手であれば。

「まさか本当にこれを全部使うことになるとはね……！！」

錬金術によって作成された薬品が入ったガラス球を魔力的爆発によって、破損させないまま遠距離に射出する錬成品射出用迫撃砲（アルケミック・モーター）。諸事情で結構な額のマーニを保有するに至った〝戦争成金〟であるペッパーが用意したその数八門。

それが今、魔力の火を噴いた。

１２月１７日：クライマックス・ヒートアップ　前（後書き）

・錬成品射出迫撃砲（アルケミック・モーター）
要するに迫撃砲。錬成した毒や薬などを遠距離に射出することが出来るアイテム（武器ではない）。
ただし冷静に考えれば分かるがシャンフロのバトルシステム的に迫撃砲が必要になるような状況自体がそもそも無い、という致命的欠陥故にネタアイテムとして扱われていた。（良くてＰＫ用の不意打ち）
ただ、彷徨う大疫青戦のような防衛戦においては有用ではないか、と言われていたが大疫青自体がそんなに大きくないため、結局狙いづらいじゃねーかとされていたが……適当に撃っても当たるような敵がいたならば、その隠れ続けていた真価は十全に発揮される。

ところで１１月１７日にコミカライズ版シャングリラ・フロンティア６巻が発売されます！
表紙はコミックから入った方々にヒロインと誤認されまくるエムル（人間態）です、本の上にいるのはサンラクに金を貢がれてる奴とサンラクに素材を貢がれてる奴とサンラクに金をカツアゲされてる奴です。
エキスパンションパスでは編集Ｉ氏にめちゃくちゃ好評を貰った外道三国志です、頑張って一話に収めました。
ぜひぜひお手に取ってみてください。
＜ｉ５９５５０１｜２２９５１＞
＜ｉ５９５５０２｜２２９５１＞

１２月１７日：クライマックス・ヒートアップ　後（前書き）

古戦場で宣伝されまくってて嬉しさもあるけど恐縮すぎる、だって個ラン一位ってもはや天上人ですよ？

12月17日：クライマックス・ヒートアップ　後

◇

地上より放たれた迫撃の軌跡が焠がる大赤翅の顔面へと届く。激突と同時、砕けたガラス瓶から伝わった衝撃が内部の薬品へと伝播し……

「Daaaaaaaaaaaaaaaaaa……？」

ぼむんっ、と小気味のいい音を立ててカラフルな煙の花を咲かせた。

「……何アレ？」

「煙形花(スモークフラワー)、本当は虫型モンスターを引き寄せるちょっといい匂いのする色付きの煙なんだけど……赤ちゃんなんでしょ？　好奇心(ヘイト)を向かせるならこういうので――！？」

ぎゅるん！！　と灼熱の巨大眼球が空中で回転する。それは空中でほんのりとフローラルな香りを漂わせながら咲いた煙の花へと向けられており……

「ちょっとちょっとちょっと、どんどん咲かせないと攻撃飛んでくる奴じゃないのこれ！！」

「私だけじゃなくて他の人たちもなんでもいいから注意引いてよ！あんな宴会芸そう多く持ってきてないんだから！！」

連続する砲撃音と同数の煙花が空中に咲き、焠がる大赤翅は首の痛みも忘れて薄らいでいく煙の花を見つめている。だが動かない、まだ目線で追う程度の注意しか引けていないのだ。

「このままどうにかして火口まで誘導しないと……首が山を転げ落ちてサードレマに激突とかギャグじゃないんだから！」

「なんでもいいから目立つ攻撃で大赤翅の注意を引くわよ！　この際歌うでも踊るでもいいから全員で注意引く！！」

火山の斜面を高速で転がってサードレマに爆進する巨大赤子の頭部、というホラーなのかシュールギャグなのか分からない光景を想像した何人かのプレイヤーが思わず噴き出したが自分たちの行動次第でこのあまりにも大規模なレイドバトルの勝敗が変わるとなればすぐにその表情は引き締まる。

そんな時、それを考案したのは一人のプレイヤーだった。

「なぁ、要するに赤ちゃんなら試しにキッズ向けのコンテンツ見せたら気が引けねーかな。俺、空中に絵を描くだけのネタ魔法覚えてるんだけど」

成る程、とプレイヤー達が声を上げる。

焠がる大赤翅は確かにゲームの怪物であり、人間ではない。だがその姿と行動原理が赤ん坊に近い、というのであるならば赤子をあやすために用いられるようなコンテンツは同様に焠がる大赤翅にも通用するかもしれない。

なにせこのゲームはシャングリラ・フロンティア、ことリアリティという点においては偏執的な程に高いクオリティを誇るのだから。

だからこそ、音もある方がなお良いと思い至ったその人物は……ど

こか、できれば誰にも聞き取られずに流されて欲しいとでも言いたげな小さな声でこう告げた。
「…………キャンディ・メイデンズのメープルなら声出せるわよ。あくまでも〝声真似〟だけどね」
「え？　皇美嘉の声まねできる人類とかいるの？」
「…………本人とかじゃないかしらね」
「なんて？」
その呟きは発案のそれよりもさらに小さく。しかしやるからには、とその人物……炸裂グリンピースは喉を整えるように、あるいは自分の「引き出し」の中にあるプリティメイデンでも屈指の人気を誇るキャラクター「メープル・ホットケーキ」の姿を自分に重ねるように、しかしほんの少しだけズラして声を出す。
「〝あまーい魔法をかけるのはだぁれ？　プリティメイデン、メープルちゃんっ☆〟」
「えっ、めっちゃ似てるぅ！？　よっしゃ任せろメープルちゃん描く！！」
空に描かれるは虚構の少女。あるいは大規模魔法陣を虚空に敷くための高等魔法が世界で最も無駄に、しかし世界でも屈指の正念場に発動される。

◇

「動いた！」

「下の奴らが踏ん張ってくれてるみたいだぜ」

大量の爆弾によって生じた爆煙が風で流れて綺麗さっぱり消えた頃。焠がる大赤翅の背中に上がっていたプレイヤー達は自身らに向けられていた敵意が１８０度真逆に……すなわち地上に残ったプレイヤー達に向けられたことを理解した。
あのままでは灼熱の視線によって殆どのプレイヤーは跡形もなく焼却されていただろう。故に地上班の奮闘はありがたい……のだが、その感謝を差し引いても気になることがあった。

「なんか巨大なプリティィメイデン・メープルちゃんが虚空に表示されてるんだけど」

「なかなか味のあるイラストで結構好きだな……線画にすると魅力が減るタイプの荒い絵だ」

ライトブラウンのツインテールに、ホットケーキを乗せた１０メートルほどの少女が空中に浮かんでいるのだ。否、よくよく見ればそれはあまりにも平坦でそして輪郭が荒い……絵だ。巨大な絵が山頂に表示されているのだ。当然絵であるならば瞬きもせず、身じろぎもせず、ただそこに停止状態で表示されているだけ……のはずだった。が、空中に浮かぶ少女の口ではなく、何故かその下の足元から声が響く。

『〟ぽかぽかホットケーキにあまーいメープル！　あの子もその子もあなたも！　みーんな大好き！！　〟』

「てかメープルボイス付き？　公式から音声持ってくるのアウトじゃね？」
「そもそも音源持ち込めないでしょ、誰かが声真似してるんじゃないの？」
「ミカどんの声帯って合成音声でも完全再現できない、みたいなオンリーワンボイスじゃないっけ……？」
空に浮かぶ少女（プリティメイデン・メープル）の足元から響く声は、きっと誰かが拡声器なりなんなりを使って声真似をしているのだろう。だがその少女の出典を知る者達からすれば、そのハスキーな声は驚愕に値するらしい。だが、果たして声か姿か………状況は動き出した。
「若干本家より声が高いし声真似だろ、めっちゃ似てるけど……って、動いた！？」
「ニラちゃんはメープル推しか………将来有望だな」
焠がる大赤翅も現実の赤ん坊と同様に分かりやすく、それでいて特徴がはっきりとしたキャラクターに魅了されたのか、あるいは単純に空中にでかでかと描き出された絵とそこから放たれる声に気を取られただけなのか。山頂に表示されたそれへと……ゆっくりと手足を動かして近づき始めた。
「よしよしよし……！あとはこっちが気合見せるだけなんだけど………」
「ちょいちょい、これやばない？」

「え？　何？　しいたけさ……あ」

しいたけの指さした先、そこにはじわじわと傷口が埋まりゆく光景…………

「…………」

しばしの沈黙。

「そっ、総攻撃ーっ！！」

ここまで来て「再生されちゃって首切れませんでしたごめんなさい」では済まないのだ。オイカッツォが全員の音頭を取っているわけではないが、それでもオイカッツォが思わず発した攻撃の合図に大慌てで動き出したプレイヤー達の攻撃が爆発によって抉れながらもなおその奥にある骨を見せないエネルギーの塊のような〝肉〟へと叩き込まれる。

「破壊出来てる出来てる！」

「まぶしッ、なんだこりゃ！？」

「骨じゃね？」

肉の役割を果たしていた形ある力の塊が押しのけられ、露出したそれは焼けた鉄の棒の……否、そのサイズ故に焼けた「道」が如き太く巨大な……頸椎。

「へし折れへし折れ！！」

だが、巨怪を支える骨が尋常のものであるはずがない。既に刀身に罅が入った剣をせめて砕ける前に一撃をと叩き込んだプレイヤーが見たものは。どろりと溶けた……剣だったもの。さらにはクーラーの利いた部屋から炎天下の外に出た瞬間のような感覚と共に自身のＨＰの減少。

「あっつゥ！？　ちょ、剣溶けたァ！？」

「まさか問答無用の武器破壊じゃ……」

「違う！　耐久力が多く減るだけよ！　あとスリップダメージもそんな大したことない！！」

ここまで来たなら誰でも分かる。この露出した頸椎を断ち切った時こそが決着の瞬間なのだと。焠がる大赤翅は既に山頂へと手をかけている、もはや多少のダメージや損失を気にしている段階ではないと破損覚悟の攻撃が雨霰と叩き込まれていく。そしてそれらは確かに巨大な頸椎に確かなダメージを与えているが……

「いやどんだけデカいんのさこれ！？」

既に「屏風ノ虎（スクリーンティガー）」の活動可能時間は尽きた、ならばとオイカッツォは生身の拳を確かに削れつつある焠がる大赤翅の頸椎へと叩きつける。だが巨大すぎるが故に敵の弱点と言うよりは地面を殴っているような状態であるが故に、その拳には勢いがない。なにせしゃがみこむという姿勢であるが故に、踏ん張ることも踏み込むこともできないのだから。

「Ｄａａａａａａａ……？」

『あ、やばっ』

メープル（声真似）が思わず、と言った呟きを漏らしたと同時。焠がる大赤翅が伸ばした丸々とした手が虚空に浮かぶメープルを掴んだ。

【虚空に創りし叡智（エアキャンバス・マギクラフト）】は攻撃を受けると消失する。本来は魔法陣が完成するまでに如何に攻撃を受けないかを考えるべきなのだが、今回の場合は永続的に絵を残す必要があった。故に回避できない巨大メープルの絵はいともたやすくかき消される。

「Ｂｏｏｏｏｏ……Ｇｙａｕｕｕ…………」

焠がる大赤翅は目の前にいたそれが、まるで最初からそこには何もなかったかのように消えたことが余程不思議だったのか、あるいはそれが〝罠〟であるのかを確かめるように腕を振り回していたが……何も起きないことを理解したのか、ゆっくりとその場から離れようとし始める。果たしてどこを目指すのか、それは既にサードレマへと照準を定めた巨大な眼球が文字通り目は口程に物を言っていた。

「これは詰んだか………！？」

もはや火口に首を落とすプランは崩壊しつつある。このままサードレマが攻め落とされるか、あるいは首を切ったとしても頭部だけが転がっていく都市崩壊ボウリングか。それすらも確定している「結末」ではない以上なにが起こるかすら実は未確定で……オイカッツォの思考がこんがらがり、叩きつける拳もいい加減なものになり始めていたその時だった。

「俺に任せな」

「いや任せるも何もいいから攻撃を………って、」

そっとオイカッツォの肩に置かれた手。この場においては場違いな程に優しいそれに振り返ったオイカッツォは、穏やかな笑みを浮かべる女性と目が合った。

「……どちら様？」

随分と、長身のアバターだ。しゃがんだ上で顔が随分と高い位置にある。立ち上がれば2メートルはあるのではないだろうか。モデル体型というよりもマッシブな女性プロレスラーのような体格だが、どこか包容力を感じさせる優しさも感じさせる笑みを浮かべた……そんな女性だった。

「聖杯を使用した性転換は各種パラメータによって転換後の体型が決定される」

「………ん？」

オイカッツォの疑問は、突然何かの解説を始めた女性の口ではなくさらにその上だ。もはや雨すらも焠がる大赤翅の熱量に打ち負けたのか、小雨になりつつある曇天よりは下……先ほどから今現在にかけて見ている女性の顔。その少し上だった。

「アレはプライベート……いや、ライフワークだがいかんせんフィジカルのディスアドバンテージは否めねぇ。だから俺は考えた、趣味と実益の両方を兼ねた到達点を見つけ出そう……ってな」

プレイヤーは等しく頭上にプレイヤーネームを表示させている。そ

れはＮＰＣでは絶対に言わないような現実（メタ）を感じさせる言葉からも分かるように、目の前の女性（プレイヤー）にも適用される。

「肉体改造は性別変更後のアバターに影響を与える。随分とレベルは下げちまったが……俺は見つけたぜ、到達点（バトルフォーム）を——！！」

女性の上に表示されていたのは、「エターナルゼロ」の文字。

「あとは任せろ、これが俺の……親孝行だああああああああ！！」

「いやお前かいッ！！」

オイカッツォの渾身の叫びもなんのその、走りだしたエターナルゼロ戦闘形態（バトルフォーム）の足が光に包まれる。左手を見ればウィンドウ操作の動き。そして光が散った時、そこには一見して戦術機が装甲として展開した姿の足以外を全て消したような、鋼の脚甲があった。

「決めるぜ！　「勝利宣言（フィニッシュホールド）」！！」

その叫びは単なる鼓舞ではない。ゲームシステムによって定められ、実装されたスキルである。

「俺は今からこいつの首に……「斬髄飛刃脚（ゲットーメント・ブラスター）」を決める！！」

その効果は口頭で次に当てるスキルを宣言し、そしてそれを成功させることで威力を上げる鎧闘士（アームドレスラー）の奥義。その名の通り、必殺を以て勝利を宣言するフィニッシュホールドの為のスキル。

そして「斬髄飛刃脚（ゲットーメント・ブラスター）」は対象の首に命中させることでダメージ補正が入る飛び蹴り技である。

だが焠がる大赤翅のサイズと体勢故に狙うべき首は半ば地面のようなもの。だがエターナルゼロの駆け足に迷いはない、何故ならば………その答えは、かつて見たことがあるから。

「サンラク直伝！（直伝ではない）　空中ゥ………！！」

シャンフロには「無重律の恩寵（スペースチャージ）」というスキルがある。その効果はプレイヤーの思考によってプレイヤーアバターにかかる重力の方向を変更する、というものだ。元々は発見こそされていたものの、いきなり横に落ちたり上へ吹き飛んで行ったりと反射的な思考にも反応してしまうが故に使いづらいネタスキルとされていたそれは、しかしとあるプレイヤーの戦闘動画の流出によって使いこなせば恐るべき三次元殺法を可能とする高難易度の実戦スキルであると評価が塗り替えられた。

跳躍し、空中ジャンプを可能とするスキルを併用することで横向きに着地したエターナルゼロ。即ち地面であった焠がる大赤翅は壁となり、そしてそれは直立してうなじをさらすサンドバッグに等しい。

「【超過機構（イクシードチャージ）】……！」

さらに重ねて脚甲………遺機装（レガシーウェポン）「キネシス・ブースターL（レッグ）」の超過機構が賦活醒（リベレト）の機能を発動。装着者の〝蹴る〟動きを外部補強で増幅し、人の身に担うにはあまりに強力すぎる出力が解放する。

「延髄ィィィィィ……斬りいいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！」

本来、【超過機構（イクシードチャージ）】には魔法やスキルによる補正は入らない。だがエターナルゼロが対巨大始源眷族、あるいは眷属を想定して開発し

た「キネシス・ブースター」に関してはその制限は適用されない。
何故ならば、その名が示す通りキネシス・ブースターは直接的な攻撃手段ではない。

「おおおおおおおおおおおおおおお！！」

自身の足が破裂することを許容した上で神をも打ち倒す力を発揮する、二号人類（プレイヤー）の性質を倫理を超えて最大利用した「補強手段」であるが故に、「超過機構にスキルを乗せている」のではなく、「スキルを放つ肉体を超過機構で限界を超えて強化している」のだ。

「ぶった斬れろ！！」

捻じ曲げられた重力な中で跳び、叩きつけられたその音は、肉と肉がぶつかり合う音ではなかった。
エターナルゼロの右足を覆っていたキネシス・ブースターは衝撃によって木っ端みじんに砕け散り、その内部にあった右足もまた水風船の如く消し飛ぶ。だがそのあまりにあっけなく消え去った右足から放たれた一撃は…………

「Gyaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa!!?!?」

焠がる大赤翅の頸椎全体に致命的な亀裂を走らせた。

「やれェッ！　しいたけ！！」

右足だけではなく、全身に走った衝撃によって体力の殆どを消費した状態で焠がる大赤翅の背中よりもさらに遠く……地表へと落ちていくエターナルゼロ。だがその叫びは断末魔でも遺言でもなく、あ

らかじめ決めていた〝作戦〟の遂行を叫ぶものだった。

「…………………えぇ？」

目の前で一部始終を見ていた上で、あまりにも全てが無茶苦茶だったが故に呆れと感嘆と混乱に襲われていたオイカッツォだったが……グッとエターナルゼロが吹っ飛んでいった方向にサムズアップしたしいたけの姿、その手に握られたレンガのような爆弾(それ)を見れば、残された自分達が何をすべきかはもう分かっていた。己もまた、インベントリアの中にあった手投げ弾をありったけ取り出しながら……叫ぶ。

「トドメだッ！！」

亀裂に叩き込まれる最後の総攻撃。灼眼球が命の危機に慌てて目を動かすが……もう遅い。

焠がる大赤翅は死なない。尽きせぬ力はあらゆる脅威を上回り、そしていともたやすく圧倒する。

だからこそ人という不完全な形になったこと、巨大な形になったこと、鈍重な形になったこと……無垢に、無邪気に、何よりも〝無知〟になってしまったこと。

その全てが焠がる大赤翅に傲慢な後手を選ばせ、そして今焠がる大赤翅は〝詰み〟を迎えたのだ。

「Ｖｏｏｏｏ……Ａａａａ、Ｄａ、Ｍａ？　Ｗｕ？」

ごろん、と。

巨大(おお)いなる頭が、墜ちた。

12月17日：クライマックス・ヒートアップ　後（後書き）

・エターナルゼロ戦闘形態（バトルフォーム）

赤子に近づく、というライフワークはしかし深刻な戦闘力の欠如と伴う。それを逆手に取り、既に獲得していたクターニッドの性別変更効果の聖杯が各種パラメータを参考にすることを踏まえ、通常時の五歳児相当の未成熟な肉体とは真逆の成熟しきったマッシブな女性の姿に変身する。

これによってフィジカル・ディスアドバンテージを解決することに成功したものの次はその代償にレベルが下がりすぎたため、ベヒーモス内で開発した遺機装によって出力を無理やり補強した。

最終的に完成したのが「勝利宣言（フィニッシュホールド）」などのダメージ上昇スキルで攻撃スキルを強化し、そしてそれを「キネシス・ブースター」によって半ば自爆に近い過剰出力で叩きつけるという特攻に近いバトルスタイルの確立であった。

ちなみに本人はサンラクを参考にしているのだが、もしサンラク本人がこれを見たらドン引きすると思われる。

12月17日：戦いは終わらない

◇

「わ、ジャックポット」

アーサー・ペンシルゴンが見つめる先、冗談のような光景が繰り広げられ続けていた栄古斉衰の死火口湖だったが、巨大な赤子の頭が見事火口に入ったのをサードレマから観測しつつ……オイカッツォ（だけではないにせよ）が成し遂げたのを確信する。

「いやー、素っ頓狂な無茶はサンラク君の特許感あるけどなんだかんだ大概カッツォ君も無茶難題振っても普通に成功させるんだよねぇ……」

悴がる大赤翅の討伐……否、厳密には新王陣営より先にレイドモンスターを撃破することこそが、ペンシルゴンの立てた〝プラン〟には必須だったのだ。

『赤く、ねむり、たゆたい、赤く、めざめ、たわむれ、赤く、赤く、おちて……瞼無き赤き瞳は閉じて、赤い大地の底で眠りにつく。されど警戒せよ、眠りとは……目覚めを伴うものだ』

『モンスター急襲（レイド）……討伐（クリア）！』

『討伐対象：悴（にら）がる大赤翅（だいせきし）』

『レイドバトルが終了しました』

『参加人数：サードレマ陣営所属プレイヤー』

『次レイド開始：719：59：43……』

「720時間……大体一か月後くらい？　またあの規模なのかな？　まぁいいや、今は目の前のことに集中しないと……っと」

遠くで首の断面から血潮の如くマグマを噴き出しながら崩壊する巨大な赤い赤子の胴体を眺めながらコンコン、とペンシルゴンはかつてウェザエモンを共に倒した二人と同様に腕と一体化したインベントリアを軽く叩く。それを合図にしたかのように表示されたウィンドウをすいすいと操作し……ある項目を選んで決定を押す。

〜〜〜〜♪、〜〜〜〜♪

軽やかなメロディが繰り返し流れる。それはまるで、電話のコール音のようで……果たしてそれは正解である。

『も、もしもし……』

「あ、カッツォ君お疲れ〜。元気してる？」

『ははっ、命がけでパラシュート無しのスカイダイビングしてる最中に電話がかかってきた以外は元気だよ』

「へー、災難だったね。ご冥福ご冥福」

『死んでないし犯人キミだよねぇ！？』

遠くにいて何も分からないから電話するのだ、掛けた先で何が起きようとそれはこちらの責任ではないだろう。いけしゃあしゃあと合掌しているペンシルゴンの姿は見えない筈なのだが、どうせ念仏でも唱えているのだろうと言わんばかりにインベントリアから響くオイカッツォの声は怒気に満ち満ちていた。

『あーもう、ほんっとうにしんどかった……暖簾と相撲してた方がまだ有意義だった』

「ところでカッツォ君」

『いやぁー、本当激戦だった。しばらくはやりたくないね、じゃあ俺はこれで――』

本当に疲れた、といった様子のオイカッツォに対して…………ペンシルゴンは、コンビニにちょっとした買い物を頼むような気楽さで、ただこう告げた。

「じゃあ嬲る縁大緑攻略に行ってきてくれる？　今から」

『…………マジで言ってる？』

オイカッツォにとってそれは今初めて言われた言葉ではない。焠がる大赤翅に挑む前から、「計画」としてオイカッツォに言われていたことではあった。だが、焠がる大赤翅というあまりに屈強に過ぎたレイドモンスターをどうにかして撃破からこそ、続けざまに同格の存在を相手にしろという無理難題に拒否の色を込めた疑問を返す。

「だってサンラク君来ないしぃ？」

『あいつマジで何やってんの？　連絡は取れたんだよね？』

「なんかサンラク君、あっちもあっちでユニークモンスター関連でごたついてるっぽいよ」

『…………まぁいいけど。で、マジで言ってんの？　今から？　めちゃくちゃ長期戦できつかったんだけどそこらへん加味してくれてる？　文章にまとめたら大長編になるくらいの大苦戦だよ？　明日じゃダメ？　というか俺じゃないとダメ？』

「今じゃないとダメなんだよカッツォ君。ついでに言うとキミじゃないとね。んふふ………この私に電撃戦術を仕掛けて来たことを後悔させてあげないと」

ペンシルゴンの脳裏に思い返される初日の光景。配信者ぱやぶさの音頭によってサードレマの門前にまで肉薄した配信戦線の一団。結果だけ見れば迎撃に成功こそしているものの…………計略において先手を取られ、有利を取られ、そしてなにより………一番やられたくないな、と思っていたことを見事にしてやられた事がペンシルゴンにとっては何よりも腹立たしい。

「こぉーの私に喧嘩を売ったんなら代金丸ごと袋に詰めて水引巻いて熨斗つけてフルスイングで支払いしてあげないとねぇ………！」

憎悪とは違う。シンプルに先を取られた、上を行かれたというマウントがペンシルゴンの額に青筋を浮かべさせたのだ。売られた喧嘩は代金（ブラックジャック）を詰めた鈍器で殴りながら買う。それが〝礼儀〟というものだ。

「美味しい美味しい見せ場を敵陣営に先に持ってかれた挙句、自分達が取れるものまで浸食されたらどういう顔してくれるんだろうねぇ……！　アーカイブ見るの楽しみだよねぇ？」

『性格悪いってよく言われない？』

「顔が良い、とは三歳のころから言われ続けてるかな」

『じゃあ俺達がもっと言ってあげないとダメだね。性格悪いよペンシルゴン』

「ど・う・せ、焠がる大赤翅みたいな殴るだけ損するみたいなタイプには武器ケチったでしょ？　じゃあガンガン殴れる方で使ってあげなきゃ宝の持ち腐れってやつだよ」

『むぐ、』

図星であった。ユニークが自発出来ない自発出来ないと煽られ、事実自発出来ていないオイカッツォではあるがユニークコンテンツと完全に無縁というわけではないのだ。そもそも、サンラクやペンシルゴンに張り合って〝未発見の〟ユニークシナリオを自発することに躍起になっているからこそその自業自得である。であれば例えばそう、発見と獲得そのものにはユニークシナリオが絡まない……試行回数と情報アドバンテージこそが重要な英傑武器のようなコンテンツであれば。

「まぁそれに絶対に倒す必要はないよ、重要なのは焠がる大赤翅を倒した勢力が縁大緑に速攻で挑んでるって事実だし」

『どちらにせよキツいことに変わりないんだけど……ていうかルス……

トさん達はともかく、他の人はこっちの応援に回せないの？』

「ゼロちゃんと秋津茜ちゃん達の事？　あの二人なら陽動と実益を兼ねて街獲り合戦の最前線だよ、京極ちゃんは全く連絡取れないしサンラク君はさっき言った通り」

忠実な手駒であるＲＰＡも様々な裏工作やサードレマでの決戦に備えて奔走している。少なくとも、自由に動かせる駒はお前くらいだと暗に告げられたオイカッツォは沈黙し……やがて、諦めたように長く息を吐いた。

『はぁー…………少なくともサンラクと京極は一発ずつ入れても文句ないよね？』

「私も一発ずつ入れよっかな」

少なくとも、王国騒乱開始前に想定していたプランにおいてサンラクは特記戦力と言っていい駒だった。とにかく不規則に暴れまわってそのくせ対処が面倒、という点では一度に2手動く龍王駒に桂馬の機能を搭載したキメラ駒くらいには考えていたのだ。
それが蓋を開けてみれば「ちょっと色々ユニークモンスター関連で忙しいのと修行中なので最終日くらいしか参加できないわすまんすまん」である。一発で済ませるだけ有情というものだろう。

『……………で？　大軍師ペンシルゴン様的には状況はどうなのさ？』

「んー、リークがあるから現状はまぁ何とかって感じだけど、やっぱ配信者のファンが厄介だね。数もそうだけどどちらほら質も揃ってるし、ウチはモモちゃん達引っ張ってきたけど快勝とはいかないかな」

『リーク、ねぇ………』

「情報提供者への報酬もキミにかかってるんだからね？」

『はいはい………まぁ、こっちも話は通してるから大丈夫だよ』

二人の間で交わされる他愛のないようなその会話は、しかしこの戦争そのものを根底からひっくり返す程の爆弾情報。それが爆ぜるのはいつになるのだろうか？

あるいは、その爆弾を解体してもっと悪辣な兵器を作り上げるのか？

レイドモンスターなど所詮は乱入者。この戦いは、人と人による愚かな共食いに他ならない。

であれば、人の手には余るほどに巨大な神の眷族ですらも掌の上で転がす。アーサー・ペンシルゴンは焠がる大赤翅討伐に沸くサードレマを見渡しながら………どう見ても悪の首魁の如き笑みを浮かべるのだった。

１２月１７日：戦いは終わらない（後書き）

え？カッツォの描写長すぎだって？
うんうんそうだね、じゃあ同じくらい苦戦するような相手に今から挑んできてもらうね
配信者のみなさん、戦争に夢中なのは良いけど同じくらいでっけぇコンテンツに関われなくて大丈夫？（ニッコリ笑顔のペンシルゴン）

１２月１７日：ＴＨＩＣＫ　ＪＡＭ（ＭＩＮＧ）　ＢＲＥＡＤ　ＧＩＲＬ

『赤く、ねむり、たゆたい、赤く、めざめ、たわむれ、赤く、赤く、おちて……瞼無き赤き瞳は閉じて、赤い大地の底で眠りにつく。されど警戒せよ、眠りとは……目覚めを伴うものだ』

『モンスター急襲（レイド）……討伐（クリア）！』

『討伐対象：悴（にら）がる大赤翅（だいせきし）』

『レイドバトルが終了しました』

『参加人数：サードレマ陣営所属プレイヤー』

『次レイド開始：７１９：５９：４３……』

◇

「えっ、悴がる大赤翅クリアされちゃった……！？」

エイドルト。死の気配漂う渓谷を超えた先にある水晶の街は、今新王陣営と前王陣営による熾烈な陣取り合戦が繰り広げられていた。押しては押し返され、どちらかが一度は勝利しても油断した頃に負けた方が奇襲を仕掛けて再び膠着状態になる。

数日間も大規模なＰｖＰを繰り返していれば飽きも来そうなものだ

が、王国騒乱中はモンスターが殆ど出現しない上にレイドモンスターは五人六人のプレイヤーが突撃したところでどうにもならない強力なエネミー。そして何よりもシャングリラ・フロンティアにおける初の超大規模対人イベントということもあってか、連日の陣取り合戦は激しさを保ち続けていた。

そんな戦場の一つであるエイドルトにて、サードレマ陣営側を襲撃していたレイドモンスター「焠がる大赤翅」が撃破されたというアナウンスは新王側のプレイヤー達にも伝わっていた。

そしてもう一つ。

密かに仕込まれた毒が今、新王陣営のプレイヤー達に浸透しつつあった。

「えぇ……どうしよう、焠がる大赤翅にも挑んでみたかったのに……」

彼女は徹夜騎士カリントウの名で活動する配信戦線(ライブライン)の一人であり、このエイドルトの争奪戦においては彼女のファンであるプレイヤー達と共に均衡を支えている新王陣営側の屋台骨であった。

「ううーん……どうしよう。やっぱり相手の人達もガッツがあるから拠点を確保しても油断できないし……」

その名が示す通り、カリントウはショートスリーパーである個性をフル活用して戦い続けていたが、今回の王国騒乱イベントにおいて拠点争奪には防衛の概念が付随する。
つまりどういうことかと言えば、今回の大規模イベントにおいて上から下までコンテンツを楽しみ尽くそうと考えていたカリントウは

拠点を防衛するためにエイドルトに釘付けになっていたのだ。
そしてカリントウは配信者だ。彼女のファンは彼女を助けるために、あるいは彼女と一緒にゲームをしたいがためにカリントウと同じ陣営に所属し、そして連日のエイドルト争奪戦を支えていた。
カリントウが動けば当然彼らもそれについていく、それは即ちエイドルトの均衡を保っていた戦力がごっそり抜けることを意味する。

「ううー……私もレイドモンスターと戦いたかった……」

とはいえ、本音を言えばカリントウはこのエイドルトに留まり続ける事には忸怩たる思いがあった。わざわざこの街を選んだ最大の理由である水晶巣崖への突撃という目論見はたった十回で前王陣営の襲撃によって中断をせざるを得なかったし、それ以降は押して押されでそれどころではなかった。さらに言えばたったの、たったの！
　一度しか突撃していなかった嬲る縁大緑はまだ健在だが、一度も関わることが出来なかった焠がる大赤翅は倒されてしまった。
カリントウは一つの事にひたすらのめり込む、という事を好む。苦心する苦難を苦労して乗り超える、ゲームであればひたすらに死に続けて覚えるような〝死にゲー〟を特に好む。こういったＦＰＳ的なＰｖＰも嫌いというわけではないのだが、若干琴線からズレているのも事実だ。例えばそう、敵陣営に「ボス」と呼べるような強力な一個人(プレイヤー)がいたならばまた話は違ったのかもしれない。
だがエイドルトを襲撃するプレイヤーは何故か……言い方は悪いが、そこまで際立った強さを感じられない者達ばかりだった（カリントウが求める「際立った強さ」がモンスター寄りであることもあるし、カリントウ程連続でログインするプレイヤーが少数派と言うのもある）
前王陣営はエイドルトを重要な拠点として見ていない、という可能性もあるが前線で戦っているカリントウからすればひたすら遅延戦

術に付き合わされているようなものだ。

「…………………」

結論から言えば、カリントウの我慢はそろそろ限界を迎えようとしていたし……カリントウ個人の思惑とは別に配信者として、クリアするためなら三日三晩（は、言い過ぎだが彼女の最長連続配信時間は３９時間である）ひたすら死に覚えしながらボスに立ち向かう「徹夜騎士カリントウ」の配信を見に来たリスナーの要望に応えられていない、という問題もあった。

――だからこそ、カリントウは気づかないうちに大きな隙を曝していたのだ。

それはＨＰを減らすものではない。だが確かにずっと仕込まれていた埋伏の毒、そしてそれは「前王陣営側を襲撃したレイドモンスターの撃破」をトリガーとしてその毒性を発揮する。

「ねぇ知ってる？」

「え、何がです？」

それは、やけにあっさりと前王陣営を撃退し、カリントウ達が次の襲撃に備えていた時だった。

「ほら、前王陣営がレイド……モンスター？ってのを倒しちゃったでしょ？」

「そうっすね」

やけに目を引く美少女が、プレイヤーと会話をしている。ピンク色の髪の毛という現実ではちょっと悪目立ちするだろう髪色を自然に風で揺らしながら、小悪魔系という言葉がぴったりな表情で話す言葉はカリントウの耳にやけにはっきりと聞こえて来た。
いや、むしろ5メートルは離れているというのにはっきりと聞こえているという事実が既におかしいのだが、それに気づかなかったのかあるいは気づいていたがそれ以上に会話内容に気を取られたためか。

まるで〝人形〟のように整った顔の少女は、歌うように語っていく。
サードレマを危うく焦土にしかけた巨大なる赤子の話を。
豪雨の中幾多の死を経て団結し、その首を切り落とした開拓者たちの活躍を。
それはカリントウが求めていたものだ、人と人の戦いなど極論を言ってしまえばモラルルールマナーその他諸々の社会的道徳や常識を全てかなぐり捨てればリアルでも出来るものだ。だが人知の及ばぬ脅威、人の身を超える巨躯、なによりあり得ざる空想上の存在との戦いはゲームの中でしかできない。そしてそんな理想の戦いが自分を蚊帳の外に置いて行われ、終わってしまったという事実。

「…………………うぅ」

既にカリントウのキャパシティは限界に達していた。そして、少女はトドメとなる一言を………満ち満ちたダムにひびを入れる金づちの一振りを放つ。

「そういえばぁ〜、焠がる大赤翅を倒したオイカッツォってプレイヤーが「このまま嬲る縁大緑を倒しに行く」って言ってたけど、連続ぶっ通しで戦うなんて凄いよねぇ〜。もしかしたら本当に倒しちゃうかもっ！」

「…………………………………………………………
もう、行っちゃおっか」
ダムが決壊した。

１２月１７日：THICK　JAM（MING）　BREAD GIRL　（後書き）

インベントリアがあれば通話ができる。
征服人形はインベントリアと同期する。
あとは征服人形が備える指向性スピーカーでカリントウにだけそっと囁きかけるだけ……。

オイカッツォって奴がレイドモンスターで食ってくつもりだからこんなところでもたついてたら鰯る縁大緑も食べられちゃうぞ？

12月18日：裏切りの徒花、報酬は金銀財宝

◇

面倒くさい。
ぱやぶさの率直な感想はそれだった。

「カリントウさんがレイドモンスターに突撃してエイドルトが墜ちた？　マジかー」

徹夜騎士カリントウ。その名に恥じぬフルタイムログインによってエイドルトに強固な防衛線を敷いていた彼女が、鵬る縁大緑に戦いを挑みに行ったことで陣取り合戦の均衡が崩れた。
その直接的な原因はやはり相手陣営側を襲っていたレイドモンスターが撃破されたことだろう。ぱやぶさの見立てではあと二日は膠着状態を維持できると見ていたのだが、あまりにも早すぎる討伐だ。
さらにそのレイドモンスター「焠がる大赤翅」討伐の中心人物が間髪入れない電撃戦術でこちらのレイドモンスター討伐に向かっている、という情報もある。

「わざわざこっちのレイドモンスターを狩ってくれるならエスコートしてあげてもいいんだけどなぁ……」

レイドモンスターとはいっても、このイベント中においては馬鹿でかいゲームオーバーの塊が攻めてくるようなもの。百害あって一理ない存在をわざわざ相手陣営が掃除してくれるなら万々歳……なのだが、徹夜騎士カリントウからすればタッパに詰めて持ち替えられるようなものだった。

何せ彼女がＰｖＰよりもＰｖＥを好むのは有名な話だ、レイドモンスターに一切関われないままイベントを終わらせるというのは我慢のならないものだったのだろう……とはいえ、だ。
カリントウの離脱〝直後〟に襲撃を仕掛けた前王陣営による迅速なエイドルト制圧。黝る縁大緑に電撃戦を仕掛けたという「情報」こそ広まっているが、その姿が見られない焠がる大赤翅の討伐者……。

「……伝書鳩（ハト）に偽情報を掴まされたとか？」

可能性は高い、だが同時に低い。焠がる大赤翅が撃破されたのは事実だし、黝る縁大緑に挑むプレイヤーが増えたのも裏が取れた事実だ。つまりリスナーから来る情報に信憑性がある、という意味では情報に何らかの偽装がある、という可能性は低いと言えるだろう。
だがそれを差し引いても、不気味なほどに状況が動いている。丁度戦況が膠着したタイミングで焠がる大赤翅が撃破され、丁度カリントウの我慢が限界に近いタイミングで黝る縁大緑への攻勢が始まり、そしてカリントウが離脱した直後にエイドルトは制圧された……。
偶然にしては恐ろしく噛み合い過ぎている。
ぱやぷさとて人生の中で酸いも甘いも経験したことくらいはあるし、状況が動く瞬間を感じたこともある。だがこの戦いにおけるこの流れは例えるならそう、歯車が動き出したような予感を覚えずにはいられないのだ。
一つの歯車が動き出したことによって、大小別々の歯車が一斉に連動して動き出したような……そんな予感が。

「それに……まだ影も形も見かけてないんだよなぁ～……レイドモンスター戦とかに絶対出てくると思ったんだけど」

今やシャンフロをプレイしていてその名を知らぬ者の方が少数派で、ともすればシャンフロをプレイしていない者達にも名が知られる今

最も有名なプレイヤー。
四体のユニークモンスターを撃破した、という実績を説得力の塊である配信と共に示したプレイヤー「サンラク」。
彼、あるいは彼女（情報が錯綜しているのでハッキリしていない）が前王陣営についている、という情報は前々から入手していたが、その姿がどこにも見られないのだ。これがリアルの事情でそもそもログインしていない、だったら問題は無い（残念ではあるが………取れ高的に）。
問題はログインはしているが水面下で何かをしていた場合だ。それがこの王国騒乱イベントであれば致命的な敗北に繋がりかねないし、それ以外であれば知らない場所でまたユニークモンスターやら別のレイドモンスターが討伐されかねない。

「いても厄介いなくても厄介………なんていうか、エンカ式のめちゃくちゃ面倒くさい雑魚敵集団内のバフ要員みたいだな〜」

いたらいたで無駄にリソースを削られるが、いないとそれはそれで空いた枠に別の強敵がポップするのでいた方がまだマシ。流石にこれはちょっと分かりづらいので配信では使わないようにしようとぱやぶさは心中で辛口評価を下す。

「それに、こっちも飛車角落ちだし………うーん、ログイン状況かせめてこのイベントにそもそも参加してるかだけでも分かれば苦労しなかったんだけど」

配信者は黙ったら死ぬマグロのような存在だ。相方は黙ってプレイしているだけで取れ高になるが、ぱやぶさは喋り続ける必要がある。それを苦に思ったことは無いので実際配信者（ストリーマー）という職業は自分には向いていたのだろう………代償というか職業病というか、独り言の割合は多くなってしまったが。

そも、ぱやぶさが初日に電撃戦術を仕掛けた最大の理由は件のプレイヤーがどう動くかを見る、という理由もあった。しかし結果は空振り、それは別に構わないがこうも音沙汰が無ければ勘ぐりもしてしまうというものだ。

事実、ぱやぶさの予想はある程度当たっており、「サンラク」が派手にやらかすのは二十日まで待つ必要がある。

「うーん……そもそも別に俺、軍師ってほどじゃないからなぁ～……音頭を取ったり幹事やったりは別にいいけど、孔明求められても無理ゲーすぎる」

そういうのはＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団にやってもらいたかったのだが、彼らは全員サードレマに潜伏中である。配信戦線（ライブライン）の面々に共有された情報では１８日、２３時５９分に一斉蜂起を開始して１９日中にはサードレマを制圧して見せる、と豪語していたが……ぱやぶさからすれば一番戦争（ＰｖＰ）に親しい連中が揃いも揃って離脱するのは勘弁してほしい、というのが本音である。

とはいえ配信戦線はその名の示す通り配信者の集まりである、何より優先されるべきは自分のチャンネルにとって有益な取れ高。数日間を潜伏に費やしてまでサードレマ市街地戦に賭ける彼らに「やっぱやめろ」とは口が裂けても言えないというもの。なにせぱやぶさ自身が最もそれを求めているのだから。

「…………やっぱ、聞けないよなぁ～～～」

赤の他人よりはランクは上だが友人よりは若干下、それくらいの関係性だからこそ言いたくても言えないことがある。

——もしかして誰か、情報向こうに流してね？

などと……そうでないなら失礼にもほどがある質問など、言えるはずがないのだ。

◇

『……あ、もしもし？』

「……やぁ。電話をかけて来たという事は、そういうことなのかい？」

『諸々の挨拶飛ばしますね………ええ、報酬の話です』

「……で？」

『〝承諾(OK)〟だそうです』

「そうか………それはよかった」

『何回も言ってますけど、別にこんな回りくどい方法で俺に頼まなくても良かったと思いますけどね。あいつ、基本的に挑戦断らないですし』

「ははは………うーん、そうじゃないんだ。これはある種ケジメのようなものだから」

『そう……ですか。一応19日には今やってる……ユニークシナリオ、が、終わりそうだからイレベンタルにて待つ、と。あいつそもそも今回のシナリオ殆ど不参加なので裏から攻められるとかは考えなくて良いかと』

「……うん。分かった、ありがとう……改めて感謝するよ、慧君」

『いえいえ……ああ、一つだけ忠告って言うかアドバイスっていうか……いや、ド失礼なんですけど』

「ん？」

『どうか楽しんでください。それがあいつに……シルヴィア・ゴールドバーグに〝勝ちにいく〟なら一番大事なことです』

「……肝に銘じておくよ。それじゃあ」

『はい、失礼します』

１２月１８日：裏切りの徒花、報酬は金銀財宝（後書き）

仇花とは実を結ばない花

まさか配信戦線に初日どころか前日から情報流してたやつとかいるわけないじゃないですか、ねえ

12月18日：人間万事塞翁が馬

◇

新大陸樹海。木々の海の中で二人の少女が………走っていた。

「ちょ、ちょっとタンマ！　タンマ！　ねっ！？」

「ふふふふ………時にポーズボタンは無いよ」

否、徒競走をしているわけではない。一方が襲い、一方が逃げる生存競争だ。

空気を切り裂く鋼の一閃を後退しながら回避した少女は、一旦の戦闘停止を申し出るが攻撃を仕掛けている少女は微笑を浮かべながら攻撃の手を止めることはない。

（まずいまずいまずい！　脳みそ辻斬りジャンキーの京極ちゃんとこんなところで遭遇するなんて！）

逃げている方の少女……ヒイラギは襲い掛かっている方の少女……京極を見ながら何故こうなったのかを思い出す。そう、あれはサンラクから奪った装備を人のいないこの新大陸大樹海で試した時の事………（回想開始）

……

………

『やぁヒイラギ』

『えっ、あ………京極ちゃん？　こ、こんばんは？』

『じゃあとりあえず天……じゃないや、戦ろうか』

『えっ』

…………

……

「（回想終了）……いきなり襲ってくるとか頭辻斬りに浸りすぎだよね！？　ね！？」

「いやぁ、返す言葉も無い」

曲がり角から飛び出してきた猪が横っ腹に突進してきたような理不尽である。ヒイラギはあまりにも卑怯な不意打ちを仕掛けて来た京極に対して憤慨したが、京極が言葉の通じるようなマトモな頭をしていないことはかつて【阿修羅会】に所属していたころから知っている。

「どうしたの？　別に僕は構わないけど無抵抗のままＰＫされたいの？」

「くっ………」

嘲笑うような京極の言葉に、ヒイラギは短刀(ダガー)を取り出して構える。

とはいえ、普段は一撃必殺にすらなり得る刀身がこの時ばかりは京極がゆるりと構える刀と比べるとあまりにも短く頼りない。

ヒイラギの基本戦術はジョブとエクゾーディナリースキルなどを併用した隠密からの先制攻撃、及び敗北時の逃走保証だ。だがその完璧とも言えるキルプランには一点、致命的と言っていい欠点が存在する。

「い、いきなり不意打ちとか酷くない!?　私たち元同じクランだよね?　ね?」

ヒイラギのステータスビルドは先制攻撃と、そこからの攻めの〝暗殺〟にこそある。相手が対応する前にＨＰを削り切る、その為に隠密からの一撃にリソースの殆どがつぎ込まれている。さらに言えば職業「殺戮の鬼札(キリングジョーカー)」の固有魔法【笑えるような死を!(キリングジョーク)】は非戦闘状態であらかじめ復活するセーブポイントで発動しなければならない。

結論から言うと、

「いきなりの不意打ちは君の十八番じゃないかヒイラギ、もしかして自分で体験したことはなかったの?」

皮肉にも、自らの戦法をそっくりそのまま返してくる敵こそがヒイラギにとって最大の天敵なのである。

「そっ、そもそもなんで私をＰＫしようとするの!?　別に私は京極ちゃんに何もしてないよね!?　ねっ?」

「え？　なんでって…………」

そこでふと京極はノータイムで殺しにかかるのは世間一般のゲームでは非常に失礼、というか非常識ではないか？　ということに思い至る。それがまかり通る〝非常識〟なゲームに慣れ過ぎたか、と京極が若干凹んでいる間にヒイラギは短刀をしまって別の武器を構える。

「えいっ！！」

「…………うーん、まぁ運が悪かったってことで」

「な……！？」

必勝の先制ほどではないにせよ、踏み込みを加速させるスキルと音を消すスキルを併用した不意打ちの一撃。それを身体を捻るだけでいとも容易く回避した京極の動きと言葉にヒイラギが目を丸くしたと同時に刀が振り下ろされる。

「おっと？」

ガイィン！　と金属同士がぶつかり合う甲高い音が樹海に響き、今度は京極が目を丸くした。ヒイラギの腕を斬り落とすつもりで振り下ろした破壊属性持ちの刃は、しかし漆黒の籠手によって弾かれたのだ。

「ふ、ふふふふふ！　すっごい防御力！」

「それは………」

京極はそれに見覚えがあった。それは神代の流れを汲む、とあるプレイヤーを語る時に高確率で話題に上がる武装だ。
白竜ブライレイニェゴを腹パンで吹き飛ばした恐るべき〝超排撃（リ・レガシーウェポン）〟の拳、あるいは神の代の御業を現代の鍛冶師が甦らせた甦機装。
「いいでしょ京極ちゃん、私の新しい武器なんだよね、ねっ！」
甦機装：ビィラック「煌蠍の籠手（ギルタ・ブリル）」を構えたヒイラギはこの漆黒の拳であれば京極の薄っぺらい刀程度、如何様にも砕くことが出来るとほくそ笑んだ。
対する京極はといえば、何故サンラクの切札の一つでもある黒金の籠手をヒイラギが持っているのかと考える。二秒ほど考えた末、本人に聞けばいいと刀を構えながら口を開く。
「その甦機装、どこで手に入れたの？」
「…………………あ、京極ちゃんこれ知ってる感じ？　そうだよ、私がＰＫして手に入れた戦利品！」
「へー」
嘘半分、真実半分といったところだろう。京極は僅かに硬直したヒイラギの態度からそう結論付けた。
かつてヒイラギと京極は同じクランに所属していた………初期【阿修羅会】、と呼ばれるそのクランはＰＫに実利を求める者やＰＫというコンテンツそのものに惹かれたもの、ロールプレイの形としてアウトローを選んだ者など………オルスロットを頭にアーサー・ペンシルゴンが手足となって集めた、良くも悪くも様々な動機の集まりだった。
その中でもヒイラギは特に度し難い手合いだった。ＰＫによる実利

を求め、不意打ちでプレイヤーから装備やアイテムをせしめる事を楽しみ、そして何より誰に何を言われようが一時間もすればきれいさっぱり忘れているような強靭なメンタルを持つなんというか、度し難いプレイヤーキラーだ。

断じて友達(フレンド)にはなりたくないがあまりにも突き抜けすぎていて、逆にこの人物がどういう末路を辿るのか？　という好奇心を集めるある種カリスマのようなものを持っていた（珍獣のドキュメンタリーとも言えるが）。

だからこそ京極はヒイラギという人物の人となりをある程度は把握している。そしてヒイラギが本当にサンラクをＰＫして装備を奪ったというならば、こんなに謙虚であるはずがない。恐らく武器を出した時点でこちらが聞かなくても自慢を始めるだろう。

なにより、もしサンラクがヒイラギにＰＫされていたとするなら、恐らくサンラクは即座に報復を始めているだろう。現役のＰＫであるる自分にも事情を話すにせよ話さないにせよなんらかのアプローチはするはず。それが幕末志士というものだ、復讐を忘れる幕末志士は存在しない………自分よりも古株の志士であるサンラクであればなおさらに、だ。

とはいえサンラクがヒイラギにあれをプレゼントするとも思えない、この時点で京極はおおよその推測を立てていた。

（王国騒乱イベント中は死ぬと装備全部その場にドロップするからね、大方サンラクが死んで落としたのを偶然拾ったってところかな）

殆ど正解に近い不正解であったが、過程がなんであれ結果としてサンラクの武具を使ったヒイラギが敵である事実は揺るがない。京極はゆらりと尻尾を揺らしながら刀を構える。

「…………」

「…………」

薄氷の如き沈黙、現役のプレイヤーキラー同士の共食いが始まる。

そんな中、ヒイラギは…………

（なんで何も起きないの！？）

沈黙が維持されている事実に、苛立っていた。

１２月１８日：人間万事塞翁が馬（後書き）

（ほーら！私今すっごいおとり役頑張ってるよ！？ね！？イスナちゃん何やってんの！？冬眠！？ねぼけてるのかな！？）

（仮想サンラク戦か……どうせなら幕末での恨み晴らしちゃお）

１２月１８日：六番目の尾を許された者

◇

芋砂（イスナ）が何よりも「渇望」するものは、身の安全と障害の根絶である。
不安に怯え竦むのではなく、恐怖に屈し跪くでもなく、己の保全を自らの手で求めるが故にイスナは自ら先制して敵意を放つ。

「…………」

であるならば、だ。本来は自らの安全を脅かすはずの京極の襲撃は彼女にとっても不都合、故にヒイラギが囮として立ち回ることで晒された京極の背中……その後頭部に己が眷族シウコを用いた毒狙撃を行うことは至極当然、であるはずだった。

「…………」

だがイスナは動かない。ただじっと隠れ潜みながら、京極の背中を見つめていた……まるで、品定めでもするかのように。

◇

プレイヤーキラーと破壊属性持ちの武器は切っても切り離せない関係にある。

本来は尻尾や角を破壊することで敵の弱体化を狙う、という用途が正しい使い方だが獣の尾を断ち斬ることが出来るならば人の手足を斬り落とせない道理はない。
足を断てば走ることができず、手を斬り落とせば戦闘力は半減する。
プレイヤーがプレイヤーを弑するのであるならば破壊属性持ちの武具を担ぐのは基礎の基礎である。
無論、現役でプレイヤーキラーを続けている京極は対モンスター用の装備とは別でプレイヤーキル用の武器を持っている。
それこそが今装備している「貪刀(どんとう)〝断噛走狗(タテガミソウク)〟」、プレイヤーキラー〝辻斬り〟京極の名を支え続けた人斬り刀である。

「さてと……」

その愛刀がいとも容易く弾かれた事実は、ヒイラギの腕を覆う煌蠍(ギル)の籠手(タ・ブリル)が素材強度のみで〝断噛走狗〟の破壊属性を上回るということだ。
何十、何百と攻撃を叩き込み続ければ破壊できるのかもしれないが、生憎と京極はダメージテストをしたいわけではない。
(武器を狙うのは不毛……となると狙うなら足かな)
どこぞの誰かさんのように速さのために服を脱ぎ捨てるほど恥を捨てていないヒイラギの戦闘スタイルは重装甲を許容できない。
軽装の革鎧程度ならそう大した手間をかけずに足ごと切断出来るだろう。

「っ！」

発動者の歩幅を三歩分にするスキル「二足三紊(にそくさんもん)」によって一気に距

離を詰めた京極は、下段からヒイラギの右脇腹を狙って突きを放つ。

しかしヒイラギとて一撃離脱の戦法だけで今までＰＫＫを逃れてきたわけではない、肘から先のダメージを無視できるが故にそのまま腕を振り払うことで〝断噛走狗〟の切っ先を弾く。

「きゃっ！？」

「――――【六ノ尾焔（シクスファイア・テール）】」

攻撃をいなし、カウンターを叩き込もうとしたヒイラギの左脇腹に衝撃。それに伴うカイロを当てられたような熱と焦げた匂い……反射的に飛び退きながら見たものは、京極の背後から伸びた紫の〝尾〟。

「尻尾、燃えて……！？」

「お狐様と誓約結んだお陰で、色々出来るんだよね……【九尾朧火（ナインテール・シクス）】」

紫炎を揺らす尾が〝断噛走狗〟を撫で付ければ、尾に宿る炎が刀に塗りたくられるように燃え移る（エンチャント）。

紫炎の刀を中段に構え、ゆらゆらと煽るようにヒイラギへと突きつけた切っ先を揺らす。

「どうする？　強制ログアウトするなら待つけど？」

「…………」

それができたら苦労はしない、とヒイラギは分かって訊ねてきた京極を睨みつける。

プレイヤーキラーは、他プレイヤーから直接リソースを奪える、というメリットを得る代わりに失った代償も多い。その一つが強制ログアウトだ。

何らかの事情でリアルに可及的速やかにログアウトしなければならない場合、VRゲームは強制ログアウトを選択することが出来る。シャンフロもその例に漏れないが一つ違う点があるとするならば強制ログアウトはゲーム内において「突然死」にカウントされるということだ。

当然次ログインした時にリスポンするのは最後にセーブした場所であるし、恐らく今のイベント裁定が適用されている状況でそれをすれば装備している武器防具はその場にぶちまけられる。

……何よりも、プレイヤーキラーが強制ログアウトを行うと「突然死」に加えて「ＰＫＫ」判定が適用されるのだ。

（どうする！？　逃げる！？　スクロールは………ダメ、京極ちゃん無駄に目敏いから発動するまでに狩られる！　もう！　都合よく回線落ちればいいのにね！）

ヒイラギの知る京極には狐の耳や尻尾など生えていない。元々短剣をメインで使っていただけあって刀の間合いであってもある程度は戦えるが、それ以上に京極が何をするかが分からないのだ。

そしてなによりも、先ほどからずっと、ずっと、ずっっっっっと援護を待っているイスナからの狙撃が一切来ないのだ。まさかイスナもイスナで別の何かに襲われているのかと考えるが、京極はそこまで頭が回らないだろうと否定する。

今日日、わざわざＰＫ宣言してから戦いを挑むカビの生えた骨董品のような武士道かぶれだ。内緒でもう一人を用意して別行動……とは考えづらい。では何故、となるわけだがそれを長考している時間は無い。

（となれば…………）

ぐっ、と。煌蠍の籠手の中にある手を握りしめる。チャンスは一度、タイミングは慎重に見極めなければならない。

「み、見逃してほしいな……？」

「えぇ？」

へらり、と笑いながらヒイラギは命乞いを始めた。先程までの戦意はどこへやら、今にも揉み手を始めそうな勢いのヒイラギに京極は毒気を抜かれた表情を浮かべる。そこに付け入る隙を見出したヒイラギは矢継ぎ早に舌を回して命を乞う。

「わ、私まだ一度もＰＫＫされてないんだよねっ、ねっ！？　最大罪業っていう称号も得たしどうせならもっと記録伸ばしたいっていうかぁ……」

「うーん」

その気持ちは分からないでもない、と京極が考え込む。

（まだ、まだ…………）

「でも見逃したら見逃したで隙を突いて攻撃してきそうだし」

「そっ、そんなことしない！　本当！　ほ、ほら武器だってしまうから！　ねっ？　見逃して、ねっ？」

煌蠍の籠手をインベントリ内にしまい込み、両手を上げて無抵抗をアピールするヒイラギを半目で見ていた京極であったが、これ相手に緊張感を維持し続けることに虚しさを感じたのか構えていた刀の切先をだらりと地面へと向ける。

（チャーンス！！）

ヒイラギは両手を上げながらちらりと右手を見る。そこには手袋が嵌められており、よくよくみれば琥珀の装飾があしらわれていることが分かる。
それはサンラクが落とした装備の中でも煌蠍の籠手に並ぶトンデモ装備、自身の挙動を過剰にする代わりに恐るべき速度を生み出す封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）。それの発動条件は左胸に琥珀を叩きつけること……
…両手を挙げつつ、さりげなく位置を調整する。表面上は京極の持つ〝断噛走狗〟に怯えているように、ゆっくりと、ゆっくりと準備を整えていく。
ヒイラギは封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）を使いこなせてはいない、だが使い〝こなせて〟いないだけであって使えないわけではないのだ。
（直線に進んで短刀を叩きつけるだけなら使えるようになったもんね……！）
それだけの行動ならば、なんとか扱えるようになっている。そして状況さえ整えてしまえば、それは真正面からの暗殺として大きな意味を持つ。じっと待ち、しかし準備は進めて……ついにその時が来た。

「……はぁ、なんかやる気が無くなったよ」
「京極（きょうごく）ちゃん……！」

京極が大きく息を吐いて肩から力を抜いた瞬間をヒイラギは見逃さなかった。左手でウィンドウを操作して短刀を取り出しながら右手を胸に押し付ける。瞬間、琥珀から溢れだした漆黒の電流がヒイラギの全身を覆い、天上の黒きカムイに由来する過剰な加速力を齎す。

「隙ありっっっ！！」

――それはまさしく電光石火、と呼ぶにふさわしい動きであった。瞬間移動と見間違う程の初速から一気に距離を詰めたヒイラギはそのまま左手の短刀を勢いよく前に突き出す。力が抜けている状態の京極にそれを回避できるはずもあるまい、勝利の確信とやはりいい拾い物をしたとほくそ笑みながらヒイラギは刃が肉を裂く感覚を確かに感じ取った……自分の脇腹から。

「え……？」

「あのさ、ヒイラギ」

――それはまさしく電光石火、と呼ぶにふさわしい動きであった。無駄を極限まで省いた動きはまさしく流れゆく水か、風の如く。飛び込んできたヒイラギの短刀を最低限の動きで回避しつつも脱力状態から一瞬で全身に漲らせた膂力によって紫炎の刀でヒイラギの脇腹を一閃。果たしてその一撃はヒイラギに大ダメージを与えたのだ。

「な、なんで………」

「〝抜き身〟だよ？　臨戦態勢に決まってるじゃないか」

そしてなによりも。

「京極（きょうアルティメット）だよ。いつも間違えるよね」
その程度で不意を打たれているようでは、幕末ではやっていけないのだ。
隠し玉の封雷の撃鉄（レビントリガー）・災（ハザード）すらもが通用しないと悟ったヒイラギは背を向けて逃げ出そうとするが……脇腹に灯った紫の炎は、既にロックオンされているという言葉無き死刑宣告に等しい。

「六尾預かり……【十鬼夜行（じっきやこう）】！」

紫炎の尾がひと際大きく燃え上がり、虚空を撫でつける。その軌跡より生み出された十の紫炎が髑髏（しゃれこうべ）の形を取り、そして勢いよく飛び出した。

「え、ちょ、なん……！　来ないで、ねっ……ね……っ！？」

先程京極が使った【九尾朧火（ナインテール・シクス）】はただのエンチャントではない。その攻撃が命中した場所にマーキングを行い、それ以降の尾を用いた魔法は全てその場所へとホーミングするのだ。
振り返り、殺到する十のしゃれこうべと目が合ったヒイラギがどうにかして死の突撃から逃れようとするも、脇腹につけられた紫炎の傷に引き寄せられるように髑髏はその背を追いかけ……

「ひっ」

ヒイラギの全身に喰らい付いた髑髏の炎が、大爆発を起こした。

12月18日：六番目の尾を許された者（後書き）

・九尾
かつて存在したとされる獣人族（ビーストマン）の女王。九本の白尾に九色の炎を宿した恐るべき魔術師。
現在の獣人族の三勢力の一つ「狐火の会」の象徴であり、その直系の子孫たる会長ノネは先祖代々受け継がれてきた「尾」を忠実な臣下に与えることができる（この「尾」とは物質的なものではなく称号に付随した外付けの才覚のようなもの……要するにユニークジョブである）
それは即ちかつて九尾の女王が率いたとされる百鬼の片鱗を預かる、ということである。

・六尾預かり【十鬼夜行（じっきやこう）】
紫炎の髑髏を生み出し、前方へと発射する魔法。【九尾朧火（ナインテール・シクス）】とはある種デザイナーズコンボであり、先にマーキングをつけておくことでホーミングを付与することで高火力の髑髏が十体追尾してくる。
京極は六番目の尾「紫」を預かっており、百鬼夜行の内の十を扱う権限を持つ。その代償、というよりも対価として京極は狐火の会からの要請には極力応えなければならない。あまり旧大陸にいないのはそのため。

12月18日：人事尽きる、天命下る

◇

「し、死ぬ、死んじゃう……」

果たして、ヒイラギは生きていた。
爆発の寸前、封雷の撃鉄・災による一か八かの高速前進によって、大ダメージは免れなかったものの、致命傷からは逃げ切っていたのだ。それはヒイラギがＨＰに多めにステータスポイントを振っていた事もあるだろう。

「か、回復……回復しなきゃ。っ、もう！　この炎消えないんだけど！！」

「それ呪詛系だからね」

「ひっ」

回復ポーションを呷ろうとしたヒイラギの喉元に紫炎の刃が突きつけられる。口に届く前に傾いた瓶からポーションが地面に溢れていくのもそのままに、恐る恐るヒイラギが横を向けばそこにはにっこり笑顔の京極が。

「俳句……じゃなかった、遺言くらいなら聞くよ？」

「…………して、」

最早抵抗は意味を成さない。故に、ヒイラギに残された最後の手段はただ一つ。

「うん？」

「どうして……ひぐっ、こんな……っ！　酷いことするのぉ………？」

泣き落としであった。嘘泣きではない、真木（まき）冬憂里（ふゆり）という一個人が十数年生きてきた中で見出した真理「人間、結局のところ泣けば何とかなる」による本気の泣き入れであった。

赤子の道理を今の今まで貫き通せば、失うものもあれば得るものもある。人生で何度かあった交友関係の悉くを泣き潰して得た〝涙脆さ〟はフルダイブＶＲにおいても健在だ。ぼろぼろと大粒の涙を流しながらヒイラギは滔々と語る。

何故わけも分からないままに自分を襲うのか。

仕方なく迎撃したが、本当は戦うつもりなどなかった。

自分はＰＫとして記録を伸ばしている最中だというのにそれを邪魔して何が楽しいのか。

そもそも他人を襲って心が痛まないのか。

というかまず謝って欲しい。

限りなくドス黒いが故に純粋で本気の涙を流しながら京極が如何に酷いことをしたのか、自分が如何に被害者であるかを懇切丁寧に説明するヒイラギ（ついでにイスナがどこかでサボっている事に対す

る怒りもちゃっかりぶつけた）。

常人であればそろそろ手が出てもおかしくない暴論のオンパレードであったが、京極はおだやかな笑みを浮かべてそれを聞いていた。

「ねぇ、ねえっ！　聞いてるのっ！？」

「うん、ちゃんと聞いてるよ。つまり悪いのは全部僕ってことでしょ？」

「え……う、うん」

至極あっさりと自分の非を認めた京極に、ヒイラギは拍子抜けの表情で返事をする。とはいえ理解しているのならその責任を取ってほしい、とりあえず何か現物で……そう口にしようとしたヒイラギだったが、続く京極の言葉がそれを遮る。

「でも実は悪いのは僕じゃないんだ」

「……え？」

肯定して、即座に否定する。手のひら返しにしても早すぎる振る舞いに思わず惚けた声を出すヒイラギ。もしや裏に己のＰＫを依頼した者がいるのか、と身構えたヒイラギだったが……さらに続いた言葉は予想外、というよりも理解の外にあるものだった。

「天がやれって言ったから」

「………んん？」

てん、Ｔｅｎ、点？　貂（テン）？

「えっ、と……そういう名前の、プレイヤー？」

「ううん、天だよ。スカイ」

くいっ、と刀を突きつけながらも京極が指差したのは上……空だ。
つまり京極の言葉を額面通り受け取るなら、空から「ヒイラギをPKしろ」と言われて京極は襲いかかってきた、ということになる。
それはもう……依頼を受けただとか恨みがあったとか利益を求めてだとかそういう話ではなく本当に〝なんとなく〟殺しに来た、ということではないだろうか。

「……頭おかしくなった？」

「いや？　正気だけど」

ヒイラギという人間は度々「話が通じない」などと失礼な言葉を向けられたことがあるが、その時点で会話が成立しているのだから何を言ってるんだろう、とせせら笑っていた。
だがヒイラギは今日初めて本当の意味で「話が通じない」という言葉の意味を理解した。視線を合わせて、意識を向けて、言葉を交わして尚……致命的に食い違っている。

「は？　え、ちょ、ちょっと待っ」

「じゃあ、やろっか」

さく、と喉に切っ先が食い込み、そこでようやくヒイラギは自分が王手をかけられていた事実を思い出した。思わず両手で刀を握りしめて止めようとするが、紫炎で焼かれると同時に刃が食い込んだ指

がボトボトと落ちた。

「待って待って待って待って！アイテムあげるからマーニあげるから待って待って待って待って待って待って待って待って待っ――」

随分と字余りな辞世の句だ、そんなふうに考えながら京極は手向けの言葉と共に刀を振り抜く。

「――天誅」

「て、」

すぱ、と首を三分の二ほど断ち切られたヒイラギの声が止まった。そしてその身体の動きが不自然にぴたりと止まると同時……。

「うわっ」

ヒイラギを構成していたグラフィックが崩壊し、砕け散る。そして代わりにヒイラギのいた場所には様々なアイテム、武器、防具、アクセサリーが溢れるように撒き散らされていく……その量はインベントリアの類を持っていないにしてはあまりにも多い。

「うわ、わ、わ……何かインベントリ拡張アイテムを使ってた？いや多い多い多い……」

もりもりと積み上がっていくそれを呆れたように眺めていた京極だったが、ぴくりと耳が震える。

「……誰？」

獣人族に”改宗”した恩恵として五感に強化補正が入っている京極の耳は、確かに背後で何者かが息を吐く音を聞き取った。
ちゃき、と改めて力の込められた”断噛走狗”が小さく音を立て、しかし不必要な力を除きながら振り返る。
「アー………こウいう時ハ、両手ヲ上にスればイイ。で、アってル?」
暗い樹海、積み上がる財貨。紫炎の尾と純白の鱗が秘密の邂逅を果たす――

12月18日：人事尽きる、天命下る（後書き）

自らの手で問題を取り除きたい、確実な安心を「渇望」してるのであって、無駄に騒動に首突っ込みたいわけじゃない
傍観は裏切りではなく最後の慈悲、ここで勝ってれば少なくとも見放されなかった

・賊王の隠し部屋（バルディール・シークレット）
賊王と謳われた大盗賊が大いなる財宝を秘したとされる不思議な指輪。多くを失い、ついには命をも喪った賊王バルディールがしかし最後まで手放さなかったもの。
この指輪はもう一つのインベントリであり、その容量はプレイヤーの基礎インベントリと同量でありこの追加インベントリ内に入れたアイテムは重量に影響を与えない。
あるいは、彼が本当に求めたものは財宝そのものではなく、この秘密の指輪を飾る為の輝きであったのかもしれない。

12月19日：Wake Up! Guns Guns Mercenary cor↑Shoooooot!!

◇

事前の予告は無かった。
事前の告知は無かった。
事前の予兆すらなかった。

すなわち、それは完全な………奇襲であった。

「はーい！　ガンガンやってる！？　GUN！GUN！傭兵団アルファです！！」

下水道への侵入、あるいは下水道からの侵入を阻むための鉄格子を粉砕しながら、灰色の金属塊が姿を現す。
左手にグレネードランチャーを装備したその金属塊は、辺りを索敵しながらも自身の周囲を浮遊する鉄鏡に朗らかな声を上げる。

「完全突発配信！　GUN！GUN！傭兵団フルメンバーによるサードドレマ電撃作戦！！　クリスマスには早いけどサプライズ配信！！」

ボポンッ、と間の抜けた音を立てて真上に向けられたグレネードランチャーが弾を上に発射する。弾速に優れているわけではない擲弾は緩やかに上へ上へと登っていき、その推進力によって届く上限まで到達したところで………

「全方位奇襲作戦！　フルメンバーかつ全員個別配信でお送りする

ぜーっ！！」

グレネードランチャー自体の能力により、射手本人の任意で起爆した擲弾が上空に大きな爆炎の花を咲かせた。そして、それに呼応するようにサードレマの各所から同様の爆発が連鎖していく。その数、合計八つ。

それはサードレマの各所に【配信戦線（ライブライン）】に属する八人の〝戦術機〟が潜んでいたことを示していた。

「いや本当、SNSで連日「GUN！GUN！GUN！傭兵団なにやってんの？」って百万回聞かれましたけどね！　全てはこの日の為だったってわけですよ！　見てるかリスナー！　祭りだ祭りだ祭りだーっ！！」

全てはこの瞬間の為に。初日のぱやぶさによる電撃戦術に紛れ込んでサードレマの地下下水道から街に侵入、そしてそれぞれが潜伏してイベント終了一日前まで待った上で一日でサードレマを制圧する。それこそがGUN！GUN！GUN！傭兵団が立てたプラン、正真正銘〝勝つための〟電撃戦術であった。

アルファ、もといシャンフロでのPN「アップルパイ@GGMC」はある程度の練習を重ねたとはいえ、やはり生身とは異なる動きの戦術機の調子を確かめるように軽く機体（からだ）を動かしながら隕鉄の鏡へと言葉を向ける。

「では改めて戦力紹介……っていうかまぁ動画制作担当のXを除いたウチのフルメンバーなんですけども、今回は全視点を生配信！　ゴメンX！　多分今死ぬほど忙しいと思うけどなんか奢るから勘弁してくれよな！」

シャンフロにはログインせず、八人の配信管理を一手に担っている

だろうもう一人のメンバーに謝罪しつつ、アップルパイは改めてサードレマの街並みを見渡す。
人気のないがらんとした光景は、民衆がどこかに避難した後だということを示している。それは本気の市街地戦を求めてこのイベントに参加したGUN！GUN！傭兵団からすれば肩透かしどころか肩を落とすような残念な結果であるのだが、まさかそれを口にするわけにもいかないのでアップルパイはほんの少しだけ溜息を吐いて気持ちを切り替える。

「これより我々GUN！GUN！傭兵団は市街地を突破して敵本丸に突撃、前王陣営の要人トルヴァンテとアーフィリアを確保する！　点呼！」

『バタースコッチ了解でーす』

『こちらチョコレート、了解〜！』

『こちらドーナツ、了解』

『こちらエクレア〜、あいあいさー』

『こちらフィグ、了解……せめてコードだけフィナンシェに出来ないかな』

『…………こちらジンジャーエール、了解。紛らわしいから諦めろ』

『こちらハニートースト、了解しやしたー』

昨今ではリアルタイムでの動画編集すら可能となった時代だ、実際にゲームをプレイしている八人の配信はリアルで動画編集を担当す

る「エックスレイ」によって一つの生配信動画として現在進行形でGUN！GUN！傭兵団のチャンネルで配信されている……このリアルタイム編集による多視点配信こそがGUN！GUN！傭兵団が高い人気を誇る理由の一つである（チャンネルの屋台骨とも言えるエックスレイも含めたメンバーのキャラクターも人気の一員である）。

「さあて……このリアリティでガチの攻城戦ってのも燃えて来た……ぅおぉっ」

ぶるり、と身体に震えが走る。それは武者震いのようで、あるいは強風が吹きつけたようで……

「強風？」

戦術機はカスタマイズによってその性質は千差万別であるし、オンリーワンの機体ともなれば再現が困難な特殊機能を持っていることもある。だが一つだけ共通していることがある。

それはスーツは気密性に優れており、風など感じるはずが無いという事――

『アップルパイ！　ソナーだ！　座標を探られたぞ！！』

ソナー、索敵、即ち……

◇

がごん、と重い連結音が響く。だがそれが地上より現れた〝侵略者〟達に聞こえることは無い。何故ならばその機体は……サードレ

マ大公城の頂点、焠がる大赤翅の攻撃によってその半分ほどが消し飛ばされた塔に〝四つ脚（ベルフリト）〟で踏ん張っているのだから。

「……よし、」

瓦礫によって最上階にあった捕虜用の軟禁室は原型こそ留めていないものの、辛うじて塔としての形は維持しているそこから長大な……あまりに長すぎてそれを構えながら動くことが困難な程に長い銃身をサードレマ下層に突き付けるそれは、まごうことなく金属の塊であり……
しかし、まごうことなき人間であった。

「ルスト、作戦開始だよ」

『……了解。支援は不要』

「言うと思った。じゃあ僕は僕でチクチク狙撃してるよ」

その金属塊には名がある。神代の技術と、ネフホロ最強の女王の影に控える支援屋……あるいは畏敬と揶揄を込めて呪いの石像とまで呼ばれるプレイヤーの発想と要望を詰め込んだ後方支援火力戦術機。

「【安全領域（セーブゾーン）】、広域探知起動（インパクトソナー）！！」

『広域探知（インパクトソナー）：起動』

装着者の音声を認証した戦術機が右背部に搭載した奇妙な箱のような装置を展開する。それは見ようによっては大型のスピーカーに見えなくもない、そしてそれは正しい。

――――――――ツッツ！！

それは音を発しなかった。否、少なくとも人間の可聴域では聞き取れない音……あるいは衝撃を放った。
それはサードレマの上空四か所に展開し、自立滞空する探査子機（ソナードローン）を中継してサードレマ全域を無音で揺らし…………そして、探査子機からの情報を受け取った親機が【安全領域（セーブゾーン）】の装着者へとその結果情報を伝える。

「一人発見…………じゃあ始めようか」

本体リアクターに直結された超長距離静音狙撃銃「ピノキオ」を構え、【安全領域（セーブゾーン）】…………それを纏うプレイヤー名「モルド」は息を吸い込み、僅かに呼吸を止めて引き金を引いた。

◇

「どおおおっ！！？」

アップルパイはそれに気づいたわけではない。ただ、同僚（ドーナツ）の「ソナー」という単語と自分が通りのど真ん中にいること……なにより自分がサードレマ上層から丸見えの位置にいるという自覚で反射的に裏路地へと飛び込むことが出来ただけだ。だがその瞬間的な判断がアップルパイを救った。

キュゴッッッッ！！

「おいおいおい…………生身だったら弾け飛んでるでしょこれ…………」

石畳を抉り貫いた狙撃の跡を見つめながらアップルパイは思わず、と言った様子で呟く。だがアップルパイとて歴戦のＦＰＳゲーマーだ、既に状況把握は思考内で完了している。
既に配信者ではなく兵士（プレイヤー）の表情となったアップルパイは戦術機越しにアサルトライフルを握り締めながらインコムに、あるいは配信中の隕鉄鏡に怒鳴るようにその事実を叫ぶ。
「察知されていたッ！　全員警戒最大！　これはもう奇襲じゃない、正面衝突だ！！」
後に「サードレマ機鋼戦」と呼ばれる一戦。戦術機というコンテンツにおける〝最上級〟を世に知らしめた戦いは一発の銃弾から始まったのだ。

12月19日：Wake Up! Guns Guns Mercenary cor↑Shooooot!!（後書き）

・戦術機錐ピラミッドメン【安全領域（セーブゾーン）】

ネフホロ界隈にて「タッグマッチのモルドは最優先で潰せ」「デバフを撒き散らす呪いの石像」「広域スピーカーで落語を流すのもやぶさかではない」とまで言わしめるモルドが自身のプレイスタイルと王国騒乱イベントで予想される戦闘から逆算して設計した戦術機。ステルスしながら広域探査で敵の位置を補足してルストに伝達しつつ自身はサイレンサー付きの狙撃銃で狙撃し続けるという人によっては額に青筋浮かべて罵倒しかねない後方支援火力に特化しており、放置すると場所はバレるわ狙撃されるわルストが向かってくるわで厄介極まりない。

なお〝安全領域（セーブゾーン）〟の名の由来は安全地帯から攻撃するから…………ではなく？

１２月１９日：機機会敵（前書き）

焠がる大赤翅戦を書いてた時に息抜きで先に書いてたルスト視点がようやく日の目を浴びた……というわけで連続更新です

12月19日：機機会敵

◇

「………いいね、とてもいい」

戦いの嚆矢となった一撃、サードレマ大公城より放たれた長距離射撃が描いた光の直線が薄れ消えていくのを眺めながらルストはぽつりとつぶやいた。ルスト自身が耳につけたインカムからそれを為したモルドの声が鳴る。

『ルスト。敵チームは〝前情報〟通りなら八人、ただ後々乱入することも考えるとあくまでも最低数で考えた方が良い』

「………了解。座標は？」

『待って、今ソナーの解析中………うん、その近辺に三人いる。ガルトン武具店裏口、第三大通り、あと第五下水道。僕の方は補足した別の三機を足止めしておく』

「………別に、仕留めてもいいよ？」

『ワンショットエスケープが今回のコンセプトだから、程々かな』

「………嘘ばっか」

『あはは……』

裏方に回ったモルドは、前線を張るよりも殺傷力が高い。それはネフィリム・ホロウのプレイヤーであれば常識のようなものであるし、ルストにとってはより深い意味を持つ。

戦術機を操作するための専用装備、特殊強化装甲「カラーパレット」のヘルメット越しにサードレマの街並みを眺めながら歩くルストは視界に小さく映ったそれを確認し、インベントリアを操作する。

「……まずは様子見……なーんて、ね」

ルストは斥候兵ではない。敵が本拠地に攻めて来たというのならば、それはもう防衛線であり決戦なのだ。そしてルストが今持てる情熱を六分割して生み出した六機六色のルストシリーズは斥候に使うには……少々、強すぎる。

「……挨拶は派手にしないと、ね……展開、【黄梁一粋(コウリョウイッスイ)】」

敵は配信戦線(ライブライン)の中でも屈指の市街戦巧者にして、魔法と神秘からは程遠い鉄鋼火炎の戦闘に精通するGUN!GUN!傭兵団。であるならばこの戦いは彼らによって配信されているだろう……ならば、この戦いは世界に向けた発言の場でもある。世界は言い過ぎでも少なくとも日本全国には。

『I'm Ready.』

僅かに宙に浮くようにして格納空間から転送され、情報が実体の質量を得たことで石畳の上に重厚な音を立てて着地したそれは不思議な物体であった。例えるなら、亀の甲羅を球体にしたようなあるいは小さな板を何枚も使って球体を作ったかのような。

「……装着」

『ＯＫ．』

どうやら、敵もルストに気づいたようだ。市街地に合わせたのか、サードレマの街並みと同じカラーリングの戦術機がライフルを構え、射撃する。狙うはもちろんルスト本体……だがその弾丸はルストの左腕に命中し、しかしガキンと硬い音を立てて弾かれた。

「……実弾、中々渋いチョイス」

人間程度であれば握りつぶしたトマトの如く粉砕できるであろう弾丸を弾いたルストの左腕は、変形した球体によって一回り巨大な鎧に覆われていた。とはいえ、その姿は人間に盾を何枚もくっつけたような鎧と言うには異質すぎる姿であったが、一歩進むたびに盾の集合体がルストの身体を包み込んでいく。

そうして、全身を装甲の形をした盾が覆い尽くして最後に重厚な靴の如き脚部装甲が装着された事で戦術機【黄梁一粋（コウリョウイッスイ）】の装着が完了した瞬間……魔力の光が黄色い盾甲の機人を十センチほど地面から浮かび上がらせる。

「……戦闘開始」

再び放たれる弾丸、今度は連射（フルオート）。しかしそれが黄梁一粋（コウリョウイッスイ）に命中するよりも早く、黄色い奇妙な鎧が動いた。

『ちょ、速ッ……!?』

スラスターを噴かしてはいる、ホバーで移動してもいる。だがその両方が併さった事で起きている現象はホバー移動だとかそんな生易しいものではない。機体は前傾姿勢、その手には展開した奇妙な形

をした銃器をさらに不自然な持ち方に。足を前に出すたびに加速するその姿は哀れな被害者第一号……GUN！GUN！傭兵団のメンバーであり普段は〝フォックストロット〟のフォネティックコードを担当する「フィグ@GGMC」の目にはアイスホッケー選手のように見えた。

「……熱烈歓迎」

『おぐぅ！？』

銃身（バレル）を握り、銃床（グリップ）で打撃する。まさしくアイスホッケーの如き棍（メイス）の一撃がフィグが纏う戦術機（ボールメン）「GGMC：アサルトフォックス」の脛を打ち据え、掬い上げた。潤沢な助走距離とそれに比例して加速された滑走から繰り出されたショットガンによる殴打は如何に重厚な戦術機装備状態といえど足元を掬われるには十分すぎる。そして人間に強化装甲を着せ、さらにその上から機巧の塊を被せた戦術機は一度バランスを崩せばあらかじめ覚悟でもしていなければ踏ん張ることは難しく。

『なんかヤバいロボがいる！　黄色くて、滑って――』

「……ネフィリム・ホロウ2を宜しく。できれば配信してほしい、歓迎する」

『なんの宣伝？！』

まるで棒術の如く華麗に散弾棍銃を反転させ、転倒した敵戦術機へと銃口を突き付けた黄梁一枠（コウリョウイッスイ）はズゴン！！　と至近距離から発砲。放たれた散弾がGGMC：アサルトフォックスの全身をくまなく叩き据え打ち砕く。

散弾というものは短射程広範囲の弾丸、と思われがちだがそれは大きな勘違いである。現実の散弾銃ですらその射程は５０メートル、その威力は人間を容易くミンチに変えてしまう。如何にゲームとしてバランス調整がされているとて……触れるほどの至近距離から中に人の入った装甲を射撃すればそのダメージはあまりにも大きい。足を掬われた際の打撃によるダメージに加え、至近距離からのショットガン。さらに確実に仕留めるべく二射目も叩き込まれたことで、ＧＧＭＣ：アサルトフォックス内のフィグ@ＧＧＭＣの体力が全損する。

「……まずは一人」

王国騒乱中の特別ルールに則り、ギリギリ原型を留めているものの動かなくなった戦術機だけ遺して消えたフィグ@ＧＧＭＣから視線を外したルストは次の獲物を求めて動き出す。
その傍らには、〝黒い〟三角錐――

12月19日：機機会敵（後書き）

ルストのメンタルボルテージはもう止まらない……！
頑張れGUN！GUN！傭兵団！！負けるなGUN！GUN！傭兵団！！
なお今のルストはエナドリを摂取したサンラクと同じくらいのテンションです

・RS：O【黄梁一粋（コウリョウイッスイ）】
全身装甲を取り払い、代わりにシールドを取り付けることでコスト軽減を実現した高機動〝盾甲〟ボールメン。
散弾銃棍をメイン武装とすることで中・近距離をメインレンジとし、外部衝撃に対して盾甲「正面」から受け止めることで高い防御能力を実現している。
ホバー移動は重装甲のタイプメンに多く見られる機動手段であるが、限界まで重量軽減に成功したこの機体のホバー移動はスピードスケートに近く、地上移動速度に関しては【殲顎緋砕】以上の驚異的機動力を誇る。
Q．要するに？
A．ものすごい勢いで滑走してくるアイスホッケー選手みたいな全身に盾をくっつけた黄色い戦術機が思いっきり鈍器で殴りつけてくるしショットガンで確実に殺しに来る。
ちなみに「RS：O」は「ルストシリーズ：ボールメン」の略

１２月１９日：徹蹄鋼戦（前書き）

あけましておめでとうございます、今年もシャンフロをよろしくお願いします

１２月１９日：徹蹄鋼戦

◇

「は！？　フィグ死んだぁ！？」

パーティを組んでいるが故に、パーティメンバーの脱落は他のパーティプレイヤーにも通達される。そしてそれは、決して素人ではないフィグが初心者がリスキルされるが如く倒されたことを証明していた。

『……こちらドーナツ。すまん、死んじゃいないが大ダメージだ』

「え、マジ？」

ドーナツはフィグがキルされた場所からそう遠くない場所にいたはずだ。であれば先ほどのソナーによって場所を探知されたことで、フィグが最後に言い残した「何か黄色くて滑ってくるもの」が襲撃を仕掛けたのか。

しかしドーナツから返ってきた言葉は、アップルパイを……ひいてはＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団をさらに混乱させるものであった。

『なにか……黒いバイクみたいな戦術機だ。スモークを張ってなんとか逃げ切ったが……ああくそ、左アームが動かん。最悪だ、片手でアサルトライフルを撃てと？』

「ドーナツ、本当に黒かったのか？」

『流石に黄色と黒色で見間違えん、間違いなく黒だった……』
思っていたよりも厄介だ、とアップルパイは隕鉄鏡が音を拾わない程度の音量で舌打ちする。今回の強襲に際してアップルパイ達は可能な限り高性能な戦術機を用意した、少なくともそれはベヒーモスで購入できる無改造状態の戦術機よりは遥かに高性能だ。
だがそれでも拭いきれない懸念があった。
「戦術機ガチ勢の集団を防衛に充てている、か……チッ、バラけるのは不味いか。とりあえずツーマンセルで合流して襲撃に備えろ！」
そもそも八人が個別行動で強襲を仕掛けるのはそれが奇襲であるという前提に基づいたものだ。待ち伏せまでされていたとあっては、もはやその大前提のアドバンテージが丸々潰れていることになる。
『七人だ、俺は気にするな』
「すまんドーナツ！」
今回のイベントでは死亡したプレイヤーは直前のセーブポイントではなく本陣都市……新王陣営で言えばサーティードでリスポンする。すなわち実質的な強襲作戦からの脱落に等しい。
となればフィグが抜けた穴を埋めることはできない、ツーマンセルを組むならばひとり仲間はずれが出来上がる。
切り捨てるなら自分だろう、と立候補したドーナツに詫びを入れるアップルパイであったが、その言葉を遮る者がいた。
『んー？　俺ソロで良くない？』
「エクレア……流石に無茶じゃないか？」

『ま、なんとかなるって。それに位置的にはさ～、ドーナツとハニートースト結構近いじゃん？　脚が生きてるなら最悪ピストルでキル取りながら斥候くらいは出来るじゃん？』

気楽な口調とは裏腹に、その言葉には断言にも似た強さが含まれている。少なくとも「そんなことできるか」と拒絶することはできない、なにせそれが出来る者がその言葉を発しているのだから。

『気軽に言うな全く……分かった、ハニートーストと合流する』

『ごめーんこちらハニートースト！　俺も死ぬかもしれん！　こいつか！？　遭遇した！！』

◇◇

ヴァオン！　と轟音を上げながらサードレマの大通りを駆け抜ける漆黒の戦術機。だがその姿は基本的に人型であるはずの戦術機とはかけ離れた姿をしている。

「……案外近くにいた、合流狙い？」

先ほど取り逃がした戦術機を探していたルストは、しかしそれとは別の三人目へ突進を仕掛けながら考える。

この手の対人において位置を把握された場合の動きはおおよそ二種類だ。その場から逃げ出すか、数を集めて防御を固めるか。

散らばられる、と考えて高機動の【黒獅無双（コクシムソウ）】を出していたルスト

は、案外近くにいた別の敵機(プレイヤー)の姿に「ＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団」が散開ではなく合流を選んだと判断する。

「モルド」

『うーん、流石に射線避けを徹底してるね。ただ……うん、ツーマンセルか４：３で分けるのかな？　そういう動きだ』

「……なら合流前に潰せるのは潰していく」

それは決して彼らの実力を侮ってのものではない。ただ、「自分ならできる」という純然たる自負と実力に基づいた判断。なにせ彼女が頂点に君臨するＮｅｐｈｉｌｉｍ(ネフィリム・) Ｈｏｌｌｏｗ(ホロウ)というゲームは……人とネフィリムの戦いでもある。

『クソッ、一応質問だけど防衛戦力何人くらいですかぁ！？』

「……ふっ」

やけっぱちのように見えて、しかし危なげなく突進を回避しつつさらに情報アドバンテージのワンチャンを狙う質問を投げる敵にルストは思わず笑みを浮かべる。その意気やよし、ならば教えてやろうと言わんばかりにルストは【黒獅無双】を格納する。

「……遠慮しなくていい、教えてあげる」

『あれ、聞いてみるもんだな……』

頭上に「ハニートースト＠ＧＧＭＣ」と表示された戦術機が大仰な動作で周囲を浮かぶ隕鉄鏡へと顔をむけているのを見ながら、ルス

トは目の前のハニートーストに、あるいは彼を通してＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団に、あるいは……彼らの配信を見ている無数の「ネフホロユーザーになるかもしれない者達」に告げる。

「……二人」

『…………え、マジ？　狙撃手が一人で…………お一人で？』

「……そうなる」

『どうしよう、〝舐めプ〟か〝ブラフ〟のどっちかなんだけど』

「……安心して欲しい」

『え？』

がごん！　と格納空間から〝紺色〟の立方体が現実空間へと落ちてくる。ルストとハニートーストこ間に落ちた紺の立方体によってスーツを替えているルストの姿は隠れ、ただその声だけがはっきりと響く。

「……〝本気〟で、〝嘘偽りなく〟〝全滅させるから〟」

『おっとぉ……？　もしかしてフィグの言ってた黄色いやつって……』

直方体の金属塊が変形し、シャングリラ・フロンティアで最多の戦術機保有数を誇るプレイヤーの鎧としての形を成す。

一人、ただし六色。

12月19日：徹蹄鋼戦（後書き）

RS：Δ【黒獅無双(コクシムソウ)】
ルストシリーズの中では最初に設計され、最後に完成したアルファにしてオメガのピラミッドメン。あくまでも装甲、鎧としての戦術機の常識に囚われず「変形することで様々な戦場でハイスペックな動きを可能とする」というあまりに変態的な設計思想の元に完成した異形変形型ピラミッドメン。
その性質上、本体に搭載された武装は皆無。ただし装甲形態、二輪形態、三輪形態、四輪形態の四種の変形パターンを持ち、本体武装の非搭載をインベントリアという無限にして無重量の兵站で補っている。この機体のみ、変形パターンに対応してスーツとの接続を切り替える性質上、プレイヤーが装備する強化スーツは専用のものが用意されている。
設計思想の基となったのは墓守のウェザエモン……というよりも戦術機馬「騏驎」であり、人型に囚われない変形合体は真理書を読んだことでルストが考案したもの。

１２月１９日：たった八人の襲撃、たった二人の防衛（前書き）

古戦場から一旦離れて読むことをお勧めします、できれば本戦中に三千回くらい読み直して欲しい、特に硬梨菜が対戦する相手団の人。

12月19日：たった八人の襲撃、たった二人の防衛

◇

――敵は二人。

――大公城からの狙撃を引けば一人。

――複数の戦術機を切り換えて戦う。

――やばいやばいやばいこの人めっちゃ強い。

――砲身がグネグネ動いて……ぐわーっ！？

それが銃声と砲声の中、ハニートーストがかろうじて伝えてきた情報の全てだった。

「なーるほどね………」

成る程確かに、手薄なサードレマを狙えれば万々歳、とは考えていたが予想を遥かに超える奇手を打たれた。まさかたった二人しかサードレマを防衛していない、とは思わないだろう。
厳密にはサードレマの「外」に防衛線が敷かれているが、それにしたって内部の守りは二人というのはあまりにも少なすぎる。あるいは野良のプレイヤーは探せばいるのかもしれないが……恐らく、前王陣営側のまとめ役が直接任命したのはこの二人だ。

だが「舐めた真似を」とはもう言えない。
既にフィグとハニートーストが撃墜されている、彼ら二人とて初心者ではないのにも関わらず、だ。
敵は二人、そして何より……恐ろしく強い。

『どうするアップルパイ』

「これでケツまくって逃げたら末代まで弄られるでしょ、それにタイマン最強ならウチにもいるしな……エクレア！」

『こちらエクレア〜、とりあえずハニトーが死んだところに急行してまーす。あとどっかの戦場で死んだのかな〜？　リスポンしたっぽいプレイヤーを何人かキルしたよ。はい９キル〜』

よし、とアップルパイは笑みを浮かべる。ＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団は本気でプロゲーミングの道を目指したりしているわけではないカジュアルゲーマー指向の配信者グループだ。だからといって自分たちがプロのＦＰＳゲーマーと比較して隔絶的な差があるとも思っていない。

「ジンジャーエール、敵砂頼める？」

『………生粋の砂マンって訳じゃあなさそうだ、やるだけやってみよう』

「よーし！　作戦変更！！　ジンジャーエール以外全員エクレアと合流！！」

◇

「……うーん、狙撃警戒されちゃってるなあ」

モルドは姿の見えなくなったＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団の姿を探すが、どうやら向こうも狙撃を警戒しているらしく【安全領域（セーブゾーン）】の装備する狙撃銃のスコープには影も形も映り込むことは無かった。

「もう一回広範囲索敵を打つ？　いや、エネルギー残量的にも早すぎる………」

【安全領域（セーブゾーン）】とて戦術機、無尽蔵に稼働し続けられるというわけではない。念のために予備のエーテルリアクターを持ち込んではいるものの、それはイコール無制限というわけではないのだ。さらに言えばサードレマ全域を範囲とする索敵は特にエネルギーを食う、莫大なアドバンテージを得る代償は決して安くはない。

（最初索敵した時点で引っかかった八人はサードレマの四分の三くらいにばらけて出現していた。多分、いざって時は合流しやすくするために全域にばらけないようにしていた……と、思う。そして地上ではルストが大暴れしてるわけで、正直ロボを使ってるルストが負けるイメージ湧かないし、向こうもルストを最大に警戒してるはず）

少なくとも、Ｎｅｐｈｉｌｉｍ　Ｈｏｌｌｏｗの機衣人（ネフィリム）とシャングリラ・フロンティアの戦術機に類似点が多い以上、ルストは仮に八対一であっても互角に渡り合える……それはモルドにとって確信と言っていいものだ。

とはいえ、シャングリラ・フロンティアにおいて戦術機は全てにおいて優位性を発揮しない。何せ最大の速度も最大の火力も最大の防御も、それらの栄誉は機巧ではなく生身の人間が持っているのだから。

故にGUN！GUN！傭兵団のプレイヤーが戦術機だけの強さで突撃を仕掛けている、と考えるのは早計だろう。

（……いや、ここは僕が墜ちるリスク承知でもう一度サーチをかけるべきだ）

あくまでも本命はルスト、そして自分の役目はルストがカバーしきれない範囲の補完と後方支援だ。モルドは二度目の全域探査を行おうとして……

「っ！！」

視界の端に映り込んだ、そして一秒と経たずに迫ってきた光を肩装甲で受け止めた。

「狙撃！？」

完全に虚を突いた一撃、気づいていなければ側頭部に命中していただろう一撃を肩で受け止められたのはそれが実弾ではなく魔力光による狙撃であったからだ。慌てて射線から逃げるように隠れながらモルドは損傷状況を確認する。

（大丈夫、ある程度殴られること前提の衝撃拡散装甲だから挙動に問題はない。でも………）

その可能性はあった。否、あって当然のものとしてモルドも計算に

入れていた。ＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団がＦＰＳ……銃を撃ち合うゲームに慣れ親しんでいるというなら、当然その中に狙撃を得意とする者がいるだろうことは分かっていた。

（多分……っていうか、間違いなく僕より上手いスナイパーだ……）

狙撃というものは理不尽を感じるものだ。だが本当に強いスナイパーは理不尽すら感じさせない……その気配すら気取らせない、それを思考する前に脳を撃ち抜かれている。それこそが本当に強い狙撃手だ。

そして今の一撃は……モルド自身は全く認識できていなかった。いるはずがないと思っていた場所からその光は放たれていた。

（……でも。これはただの銃撃戦じゃない）

これが生身の狙撃対決であればモルドに勝ち目はない、だがこれは戦術機同士の対決だ。向こうが銃撃戦に親しいというのなら、こちらはロボット同士の対戦に親しいプレイヤーだ。

「よーし………防性子機（シールドドローン）、攻性子機（アサルトドローン）、展開！！」

四つ足の膝が花開く……否、膝にくっついていたドローンが展開し、飛び立ったのだ。それらはモルドの操作、あるいは自律的な行動によってサードレマ大公城から飛び立っていく。

「さて。サイガー０さんのお姉さんは五本マニュアル操作できるんだっけ………僕にも真似できるかな？」

周囲を警戒しつつ、再びモルドは広域探査を起動する。それは敵の位置を把握するためであり……同時に、これからまともに支援でき

なくなるルストへの今出来うる最後のアシストのために。

「さぁやろう、【安全領域(セーブゾーン)】！」

安全とは、己の力で勝ち取るものだ。

１２月１９日：たった八人の襲撃、たった二人の防衛（後書き）

・ドローン
オートパイロットモードとマニュアル操作モードがある。要するに剣聖のアレですよね、どっちかというとこっちが先ではあるんですが……時代的に。
差別点としては当然だがスキル補正が乗らないが、射程がとにかく広い（ただし搭載できる武装がしょっぱいのでぶっちゃけ生身でもサンラククラスじゃないと大ダメージにならない）

話は変わりますがコミカライズ版シャングリラ・フロンティア７巻が１月１７日に発売します！
表紙は悲しきカップ麺モンスター、生活力が無い訳じゃなくて食事に対するパラメータ振りがカップ麺までしか振られていないのです。惜別の涙を使うためにちょっとだけ信仰にレベル振ってる感じですね。
あと１７日から渋谷でなんか色々シャンフロがジャックするらしいですよ……硬梨菜の人生トロフィーコンプリートプレイの中で「自分の書いた文章が３０メートルになる」なんてトロフィーを獲得する日が来るとは思いませんでした、取得率何％なんですかねこれ
そんなこんなで２０２２年初っ端からフルスロットル、そしてさらに加速していくシャングリラ・フロンティアを宜しくお願いします。
＜ｉ６１６０８５｜２２９５１＞
＜ｉ６１６０８６｜２２９５１＞

１２月１９日：遠く交差する思惑（前書き）

古戦場一位の人たち読者しかおらんのか？って段々怖くなってきた

今日この頃

マンモス君がくれたインターバルで書き上げました、ありがとうマンモス君……闇古戦場に出張ってくんなや！！

12月19日：遠く交差する思惑

◇

モルドから転送されてきた敵の位置情報、そして先程の一発………それだけでルストはおおよその状況を把握していた。というよりも想定していた状況に合致した、というべきだろうか。

（……元々、あっちのメンバーの中にスナイパーがいるのは分かっていた。というか基本的に全員どの射程でも普通に戦える人たち。モルドが狙われるのは想定内）

あわよくば向こうが配信映えを優先して全員でモルドを狙撃！　などしてくれれば横から根こそぎかっさらうこともできたが……やはりそう甘くはないようだ。

（……五人が一か所に集まっているのに対して一人だけ単独行動している……この単独一人がさっきの狙撃手。五人集まったのは数で一気に突破するため？）

これが普通の対戦であればルストも単独行動するスナイパーを狙いに行っただろう。場所のバレたスナイパーなど案山子と大差ない。だがこれは防衛戦だ、百人倒しても残った一人が本丸を攻略してしまってはキルスコアは勝利に貢献しない。故に今ルストが選べる選択肢は一つだけだ。

「……五人を相手にする」

先ほど戦闘を行った場所付近に集まりつつある五人。もしルストを避けて体制を整えるなら悪手といえる場所にあえて集まる理由……最初の広域探査でこちらが索敵手段を持っていることは分かっているであろうことを踏まえれば答えは一つ。

――呼んでいるのだ、かかって来いとでも言わんばかりに。

「……上等。乗ってあげる」

より劇的なシチュエーションはルストも望むところだ。より大きな注目を集めるほどに……登場人物の言葉にはそれに比例した力が宿る。

ルストは五つの反応が集まる場所へと急行する。その背に大いなる使命を背負って……。

◇

【安全領域(セーブゾーン)】の本意気はただの後方支援ではない。

剣聖の代名詞でもある従剣劇(ソーヴァント)をドローンの思考操作で擬似的に再現し、攻・守・索の三要素を高水準で満たす事を可能とした「動く司令塔」。それこそが【安全領域(セーブゾーン)】……安全な場所に陣を敷くのではなく、陣を敷いた場所を安全にする。それがこの戦術機の基礎コンセプトである。

「本当は本丸決戦想定だったんだけどなぁ……！」

モルドが当初想定していた最終防衛と決戦支援を兼ねた用途とは少

々異なる出番となったが、元よりＰｖＰが何もかも思い通りにならないことはよくよく理解している。

なってしまったからにはやるしかない、モルドは【安全領域】を防御形態に固めながら視界を埋め尽くすように展開された各ドローンの制御を開始する。

（索性子機（サーチドローン）に帰還……いや、さっきのスナイパーがいた辺りを円周軌道で周回させる。防性子機は直線上で待機しつつ一つは自衛モード、攻性子機はマニュアル操作だ）

二度目の広域探査で割り出した情報からルストが導き出した結論と同様の理解をモルドも得ている。故に集結しつつあるＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団五名をルストに丸投げし、モルドは狙撃手……事前に情報収集のために見ていた彼らの動画内での役割分担から考えても傭兵団でも屈指のスナイパー「ゴルフ」との対決に集中する。

（ちょっとでも射線が通ったらアウトだ、車で走ってる相手もヘッドショットできるような人だし……向こうが先に構えていたら僕に勝ち目は無い）

同じ状況のように見えて、しかし向こうは攻城戦でこちらは防衛戦だ。【安全領域】が固定砲台寄りの性能である事を踏まえて高速で動き回るような戦闘は行えないし、なによりも最終防衛ラインとして大公城から離れすぎるのも良くない。

その点においてサードレマ市街を自由に移動して狙撃ポイントを選ぶことができるゴルフ……確かシャンフロでのプレイヤーネームはジンジャーエールだったか……の方が明確に有利と言える。
何せ狙撃の腕で劣っているのだ、モルドは後手に回った時点で常にヘッドショットのリスクを負い続ける。

ならばその不利を覆さなければモルドに勝ち目はない、その為のドローンだ。

（索性子機はエネルギー消費が大きいから多用できない、カメラだけ繋げておきつつ索敵中と誤認させる……本命はマニュアル操作の攻性子機、こっちを動かして潜伏した敵を炙り出す！）

防性子機は先手を打たれた際の保険と「狙撃を防ぐ手段」というカードをあえて開示する事で相手にプレッシャーをかける二つの意図がある。

元より大公城という最大の防御（防衛する者が防衛対象を盾呼ばわりするのもどうかと思うが）がある。率先して使い潰したいわけではないが、潰れてもいいが故の布陣だ。

（ドローン操作とか懐かしいなー、ルストが緋翼連理の二つ前のネフィリム使ってた時はよくドローンで爆弾貼り付けたりしてたっけ）

すいすいと苦もなく二つの視点で市街地内を飛ぶ二つのドローンを制御するモルド。それは複数本の剣を操って激しい戦闘をこなすサイガー１００の技術と同じように見えて、それとは異なる驚異的なテクニックであった。

「よーし……早撃ち勝負だ」

◇

「――――ドローン、か」

一方、民家の壁をぶち破って潜伏中のジンジャーエールは上空に漂うディスクのような形をしたドローンを見つめながら思案していた。

「空でずっと回ってるのが索敵ドローンだろう、ならあそこで滞空してるのは……防御用か？　二つあるが片方は……動きが臭いな、オートっぽくない」

モルドと異なり、ジンジャーエールはGUN！GUN！傭兵団……すなわち配信者だ。リスナーに自分が今何を考えてどうするつもりなのか、その思考を言語化して伝えなければならない。

自身の戦術機（ピラミッドメン）「GGMC：ホール・イン・ワン」の確認を並行しつつ、隕鉄鏡へとさらに呟いていく。

「厳密に何機いるのかが問題だな、当てられないことはない大きさだがにしても小さいから全部で幾つなのか把握できなかった。見た感じ……五か六、ってところだろうが」

十機二十機と展開されていたらもっと分かりやすく大量に空を飛ぶドローンが見えたはずだ。だがそれが無いということは戦術機、ひいてはプレイヤーのキャパシティー的にも多くても八機といったところだろう。

すなわち、現時点でジンジャーエールが把握していないドローンが最低でも一機以上は存在しているということだ。

「芋砂……ってのも失礼か。優秀な防衛砲台（スナイパー）だ……だからこそ対芋砂と同じ方法で攻めるとしよう」

ぺふ、とジンジャーエールは民家の床に残されていた猫らしきモンスターのぬいぐるみをベッドの上に置いて立ち上がる。

「我慢比べだな」

１２月１９日：遠く交差する思惑（後書き）

・ＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団
エンジョイ優先のカジュアル勢を自称しているが実力はプロゲーマーチームともそこそこ渡り合える程度には高い練度を誇る。特にメンバー同士が集合しての敵拠点への突撃には定評があり、「全員スナイパーで突撃してみた」は６０００万再生を記録した。

コミカライズ版シャングリラ・フロンティア7巻好評発売中です。
ありがたいことにＡｍａｚｏｎの売り上げランキングではページ開いて二秒で見つけられる位置に七巻があったり、渋谷では３０メートルだったり古戦場では一位だったりと色々感謝の意を述べないといけないことが多すぎてとりあえず平身低頭で感謝スタンバイ状態です。感謝を要求された瞬間に頭を下げる事が可能なまさしく早撃ち感謝………
それはそれとして七巻が発売したという事は八巻が待ち構えているという事です、ブルっちまうよ……
<ｉ６１６０８５―２２９５１>
<ｉ６１６０８６―２２９５１>

１２月１９日：回した根の長さ（前書き）

全部何もかもマスターデュエルとアルセウスのせいです

12月19日：回した根の長さ

◇

攻性子機（アサルドローン）がサードレマ市街を駆け抜ける。広範囲の索敵能力はなく、堅牢な防御力も持たないがカメラを通した遠隔操作と多少の頑丈さを備えている攻性子機はまさしくドローンとして運用することでサードレマ大公城で操作するモルドの目となり足となる。

（屋内に潜伏してる？　地下……はどうだろう、流石にスナイパーがそこまで射線切るかな。でも下水道を通って別の場所に移動している可能性は高い、流石にもうインパクトソナーは撃てない……そうなると……）

その時だった。サードレマの空に飛翔する光の一撃。それは周回軌道で移動していた索性子機（サーチドローン）の一機を撃ち抜く。

「狙撃！？」

中枢を貫かれ爆散した索性子機に目もくれず、モルドは斜線を辿って狙撃点を特定する。狙撃は出来ない、索敵の為に攻性子機を操作している弊害だ。

「位置は近い……ドローンで位置を割り出す！」

片手で操作できる攻性子機を両手で二機、それぞれをメット内に表示したサードレマ市街地のマップに従って巧みに操作しながらモルドは狙撃手を挟み撃つように攻性子機を狙撃点へと急行させる。

街道に姿は無し。攻性子機Ａを上空に移動させつつ、モルドは数秒ほど迷った末に攻性子機Ｂに搭載されたショットガンで民家の扉を破壊して突入させる。

「いない…………いや違う！」

カメラを真横に向ければ、そこにはでかでかと壁に開けられた大きな穴……そして、風通しの良くなった壁から見えるは攻性子機Ｂに銃口を向けた戦術機の姿。

「〜〜〜〜〜〜っ！」

反射的に攻性子機Ｂを操作する腕が強張る。だが完全な不意打ちではなく、もしかしたらと予想していたからこそモルドは無理やり強張った左腕から意識を引き剥がして右手にのみ意識を集中させる。

攻性子機Ｂのカメラから送られた映像に一瞬光が瞬き、信号が途切れる――

だが、

「見つけた……！！」

攻性子機Ｂを切り捨て、攻性子機Ａにのみ集中していたモルドはついに敵狙撃手を完全に射程圏に捉えていた。さしもの相手(ジンジャーエール)も射撃直後に横から狙われたのでは対処は出来ない。

家屋と家屋の間、小道にいる標的を狙って攻性子機Ａから放たれた散弾を全身で浴びる事となった敵狙撃手だったが…………その機体に目立った傷はない。

なにせ攻性子機に搭載されているショットガンは非常に威力が弱い。

それこそＶＩＴに全くパラメータを振っていない半裸という、そう

そうない条件を満たしていなければ致命傷を与えられない程だ。

『こけおどしか……？　まぁいい』

すぐさま銃口が攻性子機Aへと向けられ…………映像ごと信号が途絶えた。それを無言で眺めていたモルドだったが…………

「よし」

その表情は、失敗とは程遠い笑みの形となっていた。

◇

「生身想定だったのか……？」

標的にされたドローンを即座に捨て、もう一つのドローンで攻撃を仕掛ける。敵が即座の割り切りと瞬間的な判断に秀でていなければできないアクションをしたことにそれなりの衝撃を受けていたジンジャーエールだったが、そのあまりにも低すぎる威力のショットガンに首をかしげていた。

「あの程度じゃ戦術機相手じゃカスダメにもならない。なら何故攻撃を仕掛けた……？」

恐らくゲームバランス的にドローンにはそもそも高火力の武器が搭

載できないのだろう。もしそれが可能ならば、とっくの昔にこのゲームはドローン戦争になっているはずだからだ。下手をすれば戦術機を装備していない生身ですら仕留め切れないのではないだろうか。だからこそ、ショットガンで射撃という行動に納得がいかない。もしジンジャーエールが攻撃側であったのならば……

「普通、ドローンにC４くっつけて突撃とかだろう……」

それがセオリーだろう。わざわざ重量を割いてまで低威力の武器を搭載するくらいなら、爆薬でも積み込んで自爆特攻させるのが一番費用対効果的に優れている。だがそれをしなかったのはわざとか、それとも油断か。

「とにかくこれで三機撃破。残るドローンは三つ……広域探知をノーリスク低コストで出来るとは思えない、あれを破壊すれば探知はできない筈だ」

狙撃銃をリロードし、また別の民家で息をひそめながらジンジャーエールは窓から上空を見上げる。何をするにしてもこちらの情報が向こうに筒抜け、というのは非常によろしくない。そうしてじっと外を見ていたジンジャーエールはふと気づいた。

「何か飛んで……――」

◇

アーサー・ペンシルゴンと配信戦線(ライブライン)。表立って活動しているか裏で

暗躍しているかの違いこそあれ、共に今回の王国騒乱においてはプレイヤー達の動いを決める指揮官のような立ち位置にいる者達だ。
だがこの二つには明確な違いがある。それは人数ではなく方針でもなく、性格の悪さや目的ですらない。それらはそもそも比較する必要がない。

論ずべき点はただ一つ。それは立場だ。
今回の王国騒乱にあたり、配信戦線もアーサー・ペンシルゴンも総大将たる新王アレックス、及び前王トルヴァンテから開拓者達を率いる者としての立場を与えられている。とはいえ、NPCならともかくプレイヤーが大規模なイベント戦で総指揮を取ることのデメリットは両者共に重々承知している。（そもそもプレイヤーが指揮系統に入る確証もない）
故に「正統王国開拓者軍指揮官」なる立場を与えられた配信戦線はそれをひけらかすことすらせずに君臨すれど統治せず、あくまでもプレイヤー個々の活動という形を取り……「サードレマ特別相談役」の立場を持つペンシルゴンは開戦までの〝裏方〟を担っているという体でその存在すら明かしてはいない、無論王国騒乱イベント期間中も何か指示を出しているわけでもなければ号令をかけているわけでもない。

共に得た肩書きとそれによるメリットを捨てるところまでは同じ。
だがそれでも肩書きそのものの意味合いが違う。配信戦線のそれはあくまでも現場指揮官的なものに過ぎないのに対し……アーサー・ペンシルゴンの持つ相談役の肩書きはサードレマの政治中枢に影響力を持つ。
サードレマ大公、ひいては前王トルヴァンテに対して特別相談役ペンシルゴンが提案したのは極々シンプルなものだ。すなわち――――

「おいおいおい……！　本拠地でミサイルぶっ放すだと！？」

サードレマにおける大規模火力作戦の認可である。かみ砕いて言えば……勝つためならサードレマの半分までなら更地にしても構わない、という言質に他ならない。

「うおおおお！？」

潜伏していた民家から慌ててジンジャーエールが飛び出した直後、民家に八発のミサイルが着弾する。火に衝撃を伴う爆発が隣接する民家ごとターゲットを吹き飛ばし、なんとか即死を免れたジンジャーエールが振り返れば、そこには民家の痕跡すら残さない瓦礫の山が燻っていた。

「…………まずい事になったかもしれないな、これは」

ジンジャーエールの口から思わず、といった様子で言葉が漏れる。潜伏は完璧だった、であるにも関わらずミサイルは的確にジンジャーエールが潜伏していた場所を狙ってきた。それはすなわち、自身の座標がどういうわけか向こうに完全に補足されているという事。

「作戦変更だ……！」

ジンジャーエールが見上げた先、自身めがけて殺意の数々が飛来する。

１２月１９日：回した根の長さ（後書き）

このサードレマを守るために！！（民家粉砕）

１２月１９日：徹底鋼戦（前書き）

色々な作業が積み重なっていますが私の実質的〆切はエルデンリング発売日です

◇

攻性子機（アサルドローン）の銃口は〝二つ〟ある。一つは威力の低い散弾を放つための大口径……そしてもう一つ、それよりもさらに威力が低くさらに小さい弾丸を飛ばすための細い銃身。それが大口径の銃身に隠れるようにひっそりと配置されている。

そこから放たれる弾丸に威力は無い、毒性も無ければ時間差で爆発するわけでもない。だが、それは着弾と同時に砕けるほどに脆い弾頭の中からあるものを対象に付着させる。

「よーし……付けた」

【安全領域（セーブゾーン）】は今、大量の外部武装によって四脚という異形がさらに人型からかけ離れた姿となっていた。ヘルメットに表示された敵狙撃手の座標に向けて、もう何度目かもわからないミサイル爆撃を仕掛ける。

攻性子機のもう一つの銃身から放たれたのは発信機だ、それはテクノマギジェルスと同様の粘着性のあるジェルによって対象の表面にへばりつく。散弾による攻撃はこの発信機をカモフラージュするための面が大きい。そもそも本気でドローンによる有効攻撃を行うなら、モルドであればドローンに爆弾を取り付けて突進させる。

「うーん……やっていいと言われてもやっぱりちょっと抵抗あるなぁ……」

チェストリアから取り出した外付けのミサイルポッドを解放し、発

信機が告げる座標に爆撃を仕掛けながらもモルドは自らの手で破壊
されていくサードレマの街並みに申し訳なさを感じていた。

思い返すのは王国騒乱イベントが始まる直前のこと――

……

…………

……………

「あ、そうだルストちゃんモルド君」

「……何？」

「なんですか？」

二人に任せられた役目。情報筋から齎された情報通りであれば王国
騒乱イベント後半、サードレマに奇襲が仕掛けられる。
それを防衛する役目を任せられたのがルストとモルドだ。二人にも
任せるならともかく二人だけに任せるのはどうなのか、と思わなく
もないモルドであったがルストはやる気充分といった様子だ。
それに聞けば奇襲を仕掛けてくるのはおそらく八人程度、とのこと
だ。あるいは野良のプレイヤーが紛れ込んでくる可能性もあるが、
そこは本陣である太公城を固めるペンシルゴン……と知らないプレ
イヤー達（その真っ赤な手下達）がなんとかする、とのことだ。

「今回の防衛戦なんだけどね、被害を抑えるとかは考えなくていいよ」

「……いいの？」

「え、いいの？」

防衛というからには守るという事だ。流石に街に一切の被害を出さず守れ、と言われたら無理としか返せないがその真逆……存分に破壊して構わない、と言われれば何故と返したくなるものだ。

「ふふふ、この私の肩書を忘れたのかな？」

「……相談役？」

「そう！　サードレマ大公はこの私に対して高い信頼を置いている！　だからちょちょいと説得入れたら……ね？」

かつてはエインヴルス王国からも指名手配されていたはずの人物が、サードレマの政治中枢に食い込んでいるという事実は一体何をどうやったらそんなことが出来るのか、という疑問と畏怖をモルドに抱かせたがそれを聞いたところでモルドに真似できる事ではないだろう。

「でも、やっぱりある程度は被害を少なくするよう努めた方が良かったり………」

「モルド君」

「あっはい」

すっ、と半目の笑みを浮かべたペンシルゴンにモルドは思わず敬語で返事を返す。

「大公はこうおっしゃられたんだよ？　真に正しき王統の為……サードレマはたとえその半身を焼かれようとも戦い抜く、と」

それはつまり、とペンシルゴンは口を開く。

「半分までなら焦土にして構わないってことだよ」

「いや違うと思う！？」

比喩表現をそのままの意味で受け取ってはいけないし、仮にそうであったとしても許容量（キャパシティ）が都市機能の半分であって達成量（ノルマ）として都市機能を半分吹き飛ばしていい理由にはならないだろう。

「うんうん、確かにそうだね。でもどうせなら半分焦土にしたくない？」

「最悪の発想！！」

「……モルド」

「ん？　ああうん何？　ルストも何とか言って――」

「……焦土にする前に全滅させればいい、そしたら三割くらいで済む」

「…………」

三割は確定であるらしい。

……

…………

……………

「サ、サードレマの平和が両肩にのしかかっている……！！」

謎にプレッシャーを感じながらも、モルドはミサイル発射の手を止めない。発信機によって筒抜けの座標を狙って先程から幾度となく爆撃と狙撃を続けているにもかかわらず……仕留められない。それは敵が民家や裏路地を巧みに使って爆撃から身を守り、狙撃から隠れているのもあるが………

………

(段々接近されてる……！)

けん制をした、進行方向を塞いだ、だが発信機の反応は着実に確実にサードレマ大公城へと近づきつつある。逃げているのではない、迫ってきている。

(狙撃戦を諦めて接近戦を狙うつもり？　いや、そういう動きじゃない……)

モルドとて対人戦の経験は豊富だ。だからこそ、近接戦を狙う動きとそうでない動きの見分けはつく。

メット内に表示されたサードレマのマップ、そこを動く発信機のシ

グナルはとにかく距離を詰めようとしている、というよりは……

「くっ」

カチ、カチ、と虚しい音が狙撃銃から鳴る。それは弾を撃ち尽くしたという事であり、リロードしなければならない。外付けのミサイルポッドも無限に発射できるわけではない、あくまでも打ち尽くし次第チェストリア内にため込んだミサイルポッドと入れ替えているに過ぎないのだ。

そしてそのリソースもまた有限……必ず訪れるその〝隙〟がついにやってきたのだ。

――そして、それこそが敵狙撃手が狙っていた最大の好機。

「っ！　動いた！！」

◇

「原理はこの際どうでもいい、こっちの動きが完全に相手に筒抜けになっている」

発信機でも取り付けられたか、あるいは個人に絞れば残ったドローンで追跡が可能なのか。どちらにせよ絶え間なく爆撃と狙撃に襲われている以上、悠長に身体をまさぐって発信機を探す暇も今更ドローンを狙撃する暇もない。

であればジンジャーエールが取るべき作戦はただ一つ。

「我慢比べは中止だ……一気に攻め落とす！」

ジンジャーエールが設計した戦術機「GGMC：ホール・イン・ワン」は射撃能力に秀でた機体ではあるが、だからといってそれ以外が不得手というわけではない。

ゲームが思い通りにならないことなど百も承知、有利不利の天秤は些細なきっかけでいくらでも傾く。であれば天秤を再び己の側へと傾ける分銅は常に懐に入れておかなければならない。

「相手は防御戦、もう一人に遊撃を任せている十戦術的にも防衛と支援特化の固定砲台！　場所は割れてるんだ、ならこっちのターンを無理やり作る！」

隠れていては狙えない、姿を見せては狙われる。現状がジリ貧であるというならば取れる手段はただ一つ。

我慢比べを捨て、早撃ち勝負に持ち込むこと──！！

「当然積むだろ、飛行能力！」

轟、とGGMC：ホール・イン・ワンの背部ブースターが火を噴く。魔力によって生み出された推進力が熱波を伴って噴き出し、その機体が上層街と下層街を隔てる壁を一気に飛び超える。

上空、そこは何も隔てる事が無いフィールドだ。それはもはやジンジャーエールが隠れる場所が無い、ということであり同時に敵に至るまでになんの障害物も無いという事だ。

「あとはどれだけ迎撃が来るかだが……っ！」

狙撃。だが敵の使う狙撃銃は魔力式、それ故にほんの僅かだが発射

の瞬間と着弾までの過程に激しい発光が伴う。

「なら避けられる！」

左肩を掠めた光の狙撃をやりすごし、ＧＧＭＣ：ホール・イン・ワンはさらに直進する。ミサイルは来ない、撃ち尽くしたかそれともブラフか。もはやジンジャーエールは自身の生存を勝利条件に含めてはいない、とにかくあの後方支援さえ潰せたならば１：１交換でもお釣りが札束で出る。

それに何よりも。

「映（燃）えてくるじゃないか……！」

スナイパーライフルを担げば誰だって一度はそのまま最前線に飛び込みたくなるというもの。それをこの戦況、この状況で敢行する。極論マッチングし直せば何度でもチャンスの巡ってくるＦＰＳとは違う、この取り返しのつかない戦いだからこそ、少し離れた場所からジンジャーエールの猛進に付いてくる隕鉄鏡を通して彼の姿を見るリスナー達は盛り上がり、そして同時にジンジャーエール自身もテンションを上げていく。

「……行くぞ！」

がごん、と脚部に備え付けられた機構が変形し、砲塔を形成する。
そして――――

ボボボボボンッッッ！！！

ＧＧＭＣ：ホール・イン・ワンと、大公城。双方向からほぼ同時に

煙幕がばら撒かれた。

１２月１９日：徹底鋼戦（後書き）

よーく耳を澄ませると発信機が音を出してるのが聞こえるし若干発光してるんだけどモルドが見えづらいところに張り付けたのと爆撃の音で分からないようにしている
あと地味に戦術機の指だとジェルが剥がしづらいというトラップ

１２月１９日：天機無縫（前書き）

色々あったのは事実だけど大体エルデンリングって奴が全部悪いんです

12月19日：天機無縫

『ルスト、ごめん――――』

「……了解」

二度の爆発音。一つは空中に大きな炎の花を咲かせ、もう一つはサードレマ大公城の一部を崩壊させた。

そしてサードレマ大公城で後方支援を担当していたモルドからの言葉で、ルストはおおよその状況を把握した。

モルドが敵狙撃手との相打ちに近い形で撃墜された。それ即ち、【安全領域(セーフゾーン)】による後方支援はもう期待できないという事だ。

だが本職ではない狙撃手という役割を受け持ち、敵の狙撃手と相打ちになったのならまずまずの戦果と言ってもいいだろう。

「……それはそれとしてモルドにはもっと狙撃訓練させないと」

ぼそ、と呟かれた言葉はモルドには届かない。それが幸か不幸かはさておき、ルストは自分が身を置いた戦場に意識を戻す。

ガゴン！と変形が完了し、青い流線型の……全体的にシャープでありながら丸みを感じさせる装甲に包まれた機巧の剣士となったルストが大刀を構える。

「……伐斬凱青(バッザンガイセイ)」

『何パターンあんだよ……！』

『散れ散れ！　5メートル以上離れてから撃て！』

その対応は間違っていない。戦術機の膂力、速度、そして射程(レンジ)は生身の開拓者のそれとは異なる、言うなればスキルや魔法を使用不可とする代わりに己が身を大きくする……個々人の存在の拡張、それが戦術機の存在意義だ。
故にルストから距離を離して銃火器のアドバンテージを活かす……それはなんら間違っていない。唯一間違いがあるとすれば……それは目算だ。

「……残念、5メートルは私の距離」

『速――』

『〝スケープゴート〟!!』

轟、とブースターを噴かした青い剣士が司令塔……アップルパイへと迫る。5メートル圏内に入れば、あるいは入れれば確実に殺しきる、というコンセプトで設計された戦術機RS：O「伐斬凱青(バッザンガイセイ)」の大刀がアップルパイを唐竹割りにせんとする直前、それを蹴り飛ばしながら自分が犠牲者となる随分と荒々しい動きで戦術機が飛び込んできた。

「……！」

ルストにはその左腕が動いていない戦術機には見覚えがあった。確か一度逃した者だ、今度は確実に……そこでようやく思考が発せられた台詞の理解に追いついた。
（スケープゴート？断末魔じゃない……暗号、合図、捨て駒！）

周囲の戦術機が一斉に銃口をルストに向ける。躊躇いなく発砲、そこに今まさに斬り裂かれんとする同胞への配慮は欠片も見られない。

「……ッ！」

なるほどそういう事か、とルストは自らの死を厭わず掴みかかってきた片腕（ドーナツ）を膝蹴りで押し戻しながら身を翻す。味方もろともの集中砲火、「伐斬凱青」の装甲はその流線型のフォルムで攻撃を受け流すコンセプトだが、四方八方からの弾丸は流石に許容の外だ。

であれば、許容の内側に収まるまで無茶をする。

ただ真っすぐに、全力の加速。それにすら追随する弾丸の嵐を必要経費と受け入れながらも目指す先は包囲網の一人。

「……袋叩きは、突いて穴を開ければいい！」

『あっぷ！？』

全身から損傷のスパークと煙を上げながらも、サブマシンガンを装備していた一人（チョコレート）の脇腹を大刀で斬り裂きながら包囲網を抜け出したルストは、すかさず次の戦術機をインベントリアから呼び出す。

『クソッ！　次は赤色か！』

『いくつあるんだ！　ていうか一人であんな持てるのかよ！』

『チョコ死んだ！？』

『生きてるけど大ダメージで動けん！　捨てていい！！』

本来であれば、ルストが今やっているようなインベントリアからの戦術機を高速で展開、変形というものは実は出来ない。だがそれはあくまでも基本的には、だ。

【展開最適化端子（エクスポートアッパー）】というアクセサリがある。これは「鍵」系アクセサリが格納空間内からオブジェクトを展開する時間を短縮するというものだが……ルストはこれを三つ装備している。

戦術機を装備中はプレイヤー自身が習得している魔法やスキルを使用することは出来ず、さらに装備も戦術機用のパワードスーツを装備する必要があり、任意発動型のアクセサリも効果を発動することが出来ない。

だが、常に発動し続けるアクセサリだけは戦術機を装備してなお使用することが出来る。すなわちルストのパフォーマンスが異様に高い、ではなくＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団のパフォーマンスが低いのだ。

「……雅龍鳳枢（ガリョウホウスウ）」

まるで誰かに見せつけるように真紅と黄金の華美な〝翼（ブースター）〟を開き、ルストの身体が上空へと羽ばたく。

それは黄金の龍王へのリスペクト、そしてそう易々とは使えない真紅（お気に入り）の朱雀への挑戦。特別を省いた汎用で特別なそれらへどこまで迫ることが出来るのか。それを突き詰めた戦術機ＲＳ：Δ「雅龍鳳枢（ガリョウホウスウ）」を纏ったルストは、眼下の傭兵団達を見下ろし、武装を展開する。

「……爆撃開始」

一切の容赦が無い爆撃が街に、そして傭兵団達四人に降り注ぐ。「できれば街に被害は出さないようにしよう」と考えるだけの理性をルストは今も持っているが、それはあくまでも「できれば」の話だ。モルドのように必要であれば被害を出すのも厭わない、とは違う。ノって来たから、という理由でルストは半径２０メートルを丸ごと

焦土にする勢いで爆撃を行う。

（……これで全滅するならそれまで、どうなる？）

その時だった。

『現着ゥ〜っ！』

「……ッ！？」

間延びした拍子抜けするような声。そして……ルストの拍子を完全に貫いた狙撃銃の一撃。

それは雅龍鳳枢（ガリョウホウスウ）の翼の根元を的確に破壊し、滞空に要するブースターの片割れを損失したルストの身体はバランスを崩して地へ墜ちていく。

だが、かつて緋色の片翼をもってネフィリムホロウの頂点に立ったルストにとって偏ったブースターで機体を制御する事は、決して不可能なことではない。残った右翼のブースターを器用に制御し、まるで竹とんぼがその回転を維持したまま地面に落ちるように不安定ながらも加速力で無理矢理姿勢を維持した回転運動で不時着したルストはすかさずスモークミサイルを足元に叩き込んで煙幕を発生させつつ、思考と行動を同時に行う。

（撃たれた、狙撃？　いや、狙撃手はモルドが相打ちにした……違う、狙撃手だけが狙撃銃を使えるわけじゃない、私のキルスコアは2、モルドが1、この場に四人……もう一人いた）

何度か使用しつつも、損傷が少ないRS：◇「玉石紺攻（ギョクセキコンコウ）」を展開しながらルストはこれまで姿を見なかったGUN！GUN！傭兵団最後の一人を思い出す。

〝Ａ〟ｐｐｌｅ ｐｉｅ、〝Ｂ〟ｕｔｔｅｒ ｓｃｏｔｃｈ、〝Ｃ〟ｈｏｃｏｌａｔｅ、〝Ｄ〟ｏｎｕｔ、〝Ｆ〟ｉｇ、〝Ｇ〟ｉｎｇｅｒ ａｌｅ、〝Ｈ〟ｏｎｅｙ ｔｏａｓｔ。抜けているのは〝Ｅ〟のフォネティックコード。そして事前調査で調べた、ＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団で〝Ｅ〟を担当するのは――

『へぇ～、なんかヤバいのがいるってのは無線越しに分かってたけど～…………強そうじゃ～ん？』

配信者としての活動では「エコー」と、そしてこのゲームにおいては「エクレア（〝Ｅ〟ｃｌａｉｒ）」を冠する男。
ＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団最強のプレイヤーが機巧の鎧を纏いながらも随分と慣れた動きで狙撃銃を投げ捨てながらも、煙越しに正確にルストへと照準を合わせて二丁拳銃を構えていた。

『１ｖ１（タイマン）やろうぜ～？』

「……上等」

12月19日：天機無縫（後書き）

・RS：O「伐斬凱青（バッザンガイセイ）」
対人〜対戦術機体想定の斬撃特化型。全身を流線型の装甲で構成することで敵の攻撃を受け止めるのではなく受け流す設計思想の元、射程距離5m圏内でのベストパフォーマンスに特化している。武装は大刀一本と腕部に仕込んだ双剣二本。

・RS：Δ「雅龍鳳枢（ガリョウホウスウ）」
RS共通の名前に色を入れる法則を無視した派手なネーミングセンスのソリッドメン。飛行能力に特化しており、空中戦だけではなく対地爆撃、滞空しての長距離狙撃などを可能とする空の覇者（ルスト談）。その名にある「鳳」の規格外戦術機「朱雀」の再現を目指すと同時、名前に「龍」が盛り込まれている通りユニークモンスター「天覇のジークヴルム」へのリスペクトも盛り込まれている。強いて言うならば「赤」と「金」の意味を持つ戦術機とも言える。

・電撃菓子（エクレア）3号@GGMC
エクレアが設計した戦術機球ボールメン。西部劇のカウボーイのような意匠（デザイン）でありながら、分厚い装甲を採用しているため、ふとっちょのカウボーイのような印象を与える。
ブースターの稼働率に大幅に手が加えられており、その推進力は太く短い。さらにその両手にはあるギミックが仕込まれており、配信を見ているリスナーに真似させる気のないエクレアの操縦に特化した専用戦術機と言える。

１２月１９日：機機相搏つ

◇

ＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団所属配信者エコー。彼らの動きを研究する中で、ルストの記憶に一番強く焼き付いているのはやはりこの人物だった。

如何なる銃であっても突撃しながら使いこなし、互いに目があった状態での撃ち合い……すなわちタイマンの勝率はルストが見た動画の中だけでも実に九割近い勝率を叩き出している。流石に三人以上から狙われた場合は普通にキルを取られている場合も多いが、その時ですら三人中二人をキルしていた、なんてことは珍しくない。

（……あのプレイヤーだけは別格。他がプレイヤースキル的に劣ってるわけじゃないけど……とにかく強い）

大砲が自分を狙っていようが、横から車が自分を踏みつぶすべく猛スピードで迫っていようが、狙った獲物から絶対に目を逸らさない。その恐るべき胆力が１ｖ１における常人離れした勝率を実現している……などと、このイベントに参加する前のルストは推測していたが、実際に相対して分かった。

「……強い」

余計な理屈など無い、撃った弾丸が必ず相手に当たれば大抵の戦いに勝てる。それを素で実行できるタイプなのだろう。

一瞬見えたエクレアの機体。高速機動なんて全くできません、といったボールルメンであるにしても妙に丸々とした戦術機であったが、

シャンフロで誰よりも戦術機にかぶりつきで取り組んでいると自負しているルストは、その形状からある程度の性能を看破していた。

（……殲顎緋砕（センガクヒサイ）と同じ、限界までブースターの点火時間を絞る代わりに爆発的な加速力を搭載している）

戦術機を1からフルスクラッチで構築する場合、手を入れることが出来る要素は多岐にわたる。搭載する武装やカラーリングは当然の事ながら、基本装備である装甲を全て取り除いてフレームをむき出しにすることも可能であり、さらには推進器の性質や装甲の材質、果ては演算機器まで吟味することが出来る。

ゲームのいち要素にしては深すぎるコンテンツとしての大きさだ、ルストでさえその全てを理解しているわけではない……が、それが「強さ」を追い求めるものである以上、生態系がピラミッドの形状となるように上位になればなるほどその数は絞られ、先鋭化するというもの。

丸っこい装甲は「伐斬凱青」に用いた流し、弾くためのもの。特徴的なブースターは短距離走に特化したもの、カウボーイのような装飾は……多分趣味。内蔵型の武装はいくつかあり、だが殆どは外付けの銃火器ホルスターに火力依存。

（狙撃をアシストするような機能はついてない、ＯＳ側である程度アシストを入れているとしても……まさか、腰撃ちで狙撃した？）

スコープを覗かず、目視で狙いを定めて射撃する。あるいは戦術機と同期することで腰撃ちの状態でもスコープを覗き込んでいる状態と同様の条件を揃えることは出来る……が、やはり射撃体勢は狙撃には向いていない不安定なものだ……ただ。

（それが出来るなら……）

もしもを想像しつつも、恐らくそれは当たっているのだろうとルストは煙の中で細心の注意を払いながら展開した戦術機を纏っていく。相手はきっとルストの位置を正確に把握している。それは音であったり、煙であったり、あるいは勘であるかもしれない。しかしその上で撃ってこない、考えられる可能性は……

（……こっちが出てくるのを待っている。決闘のつもり？）

いや、決闘のつもりなのだろう。なにせエクレアを抜いた他メンバーを翻弄した謎の戦術機使いだ、それとのタイマンとなれば大層な取れ高になるだろう。

（成程）

そしてそれは、ルストもまた望むところだ。力を誇示し、理解させること……それがルストが密かに目論んでいたもう一つの目的でもあるのだから。

「……いいよ、受けて立つ」

『お？』

「……1v1（タイマン）、受けて立つと言った」

『………いいねぇ～、こういう時だからこそノってくれるとありがたいよね～。だってさ～！』

『そりゃありがたい、こっちはもうメンバー半壊してるからな……
…いやマジで、強すぎるんすよアナタ』

『ま、流石に後ろから刺してタイマンの邪魔はしないさ………遠慮なく本陣を攻めさせてもらうだけだ』

『……なんで俺まだ死んでないんだろうな、先にチョコの奴が死んだし』

ルストもちょっと驚くほどに生き延び続けている左腕の無い戦術機（ドーナツ）を始めとして、残った三人のGUN！GUN！傭兵団のメンバーがルスト達から離れていく。どうやら本当に後ろから不意打ちをするつもりはないようだ。

『さ〜て………よーいドンの合図はどうする〜？』

「……背中合わせで五歩歩いてからとか？」

『いいねぇ〜！』

本当にそのようになった。ただ単純に底抜けの能天気なのか、それともどんな条件だろうと勝つという傲慢か、あるいは………勝ちも負けも、等しく楽しめるが故の寛容さなのか。

煙の中から〝緋色〟の戦術機を纏って現れたルストは、二丁拳銃をわざわざ腰に戻したエクレアの戦術機……電撃菓子（エクレア）3号@GGMCと背中合わせに立つ。

それはエクレアが展開している隕鉄の鏡越しにその戦いを見る者達からすれば、随分と奇妙なものに見えるだろう。見ようによっては肥満体にすら見える青銅色のカウボーイと、あまりに巨大な〝拳〟を備えた緋色の拳闘士が背中合わせで早撃ち勝負をしようとしているのだから。

『い～ち』

一歩、進んだ。

「……2」

二歩、進んだ。

『3』

三歩、進んだ。ガゴン、と緋色の拳が機巧の音を響かせる。

「4」

四歩、進んだ。ギャリ、と青銅色の拍車がかかとで鳴った。

その一拍は、まるで一時間の静寂にも似て――――

『「5』」

次の瞬間、振り向かずに腰部の拳銃を抜き放った青銅色の電撃菓子3号@GGMCが真後ろへと発砲した。

「……ッ！！」

だが、全く同じタイミングで全身に搭載されたブースターを全力で右回転を成すよう噴射し、恐るべき加速力と遠心力から放たれた巨大な緋色の拳による裏拳が弾丸を横から殴り飛ばした。

『ひゅうッ！　やるねぇ～！』

「……曲芸」

『隠し芸なんだな～これが！』

今度こそ振り向き、いつの間にかもう一方の手にも握った二丁拳銃を構えた電撃菓子３号＠ＧＧＭＣ。
そして、異様な前傾姿勢によるファイティングポーズで拳を構えるＲＳ：◇「殲顎緋砕（センガクヒサイ）」。
最強の侵略者と最強の防衛者。鋼と鋼の一騎打ちが今、射撃と打撃の音と共に始まった。

１２月１９日：機機相搏つ（後書き）

・ＲＳ：◇「殲顎緋砕（センガクヒサイ）」
対戦術機特化かつ、近接格闘特化というあまりに尖りすぎたコンセプトで製造された拳闘戦術機キューブメン。サンラクがネフィリム・ホロウで作ったコーラシアス・ライラックと同様に全身にブースターと攻性装甲を搭載しており、攻撃の際にブースターを起動することで格闘技の出力を劇的に向上させる。要するに「斃れず、倒す」というあまりにシンプル過ぎる殴り合い上等のタイプメンである。
攻撃範囲は２メートルだが射程距離は１０メートル。理由は１０メートル圏内であればブースターのフル稼働で２秒以内に距離を詰められるため。

あとついでに
・ＲＳ：◇「玉石紺攻（ギョクセキコンコウ）」
殲顎緋砕程ではないにせよ、対戦術機に特化した射撃型キューブメン。外付けの射撃武具「石」で相手をけん制しつつ、本命となる本体搭載の大火力砲「玉」でトドメを刺す、というシンプルながら使い手の技量が問われるコンセプトで設計されている。大火力砲「玉」は背部から腰部にかけて搭載されたレールの上をスライドすることで肩部砲撃と腰部砲撃を可能としており、さらには砲身を真後ろに向けることで不意打ちの砲撃も可能とする。
ハニートーストを蜂の巣にしたのはこれ

12月19日：届かぬ高みに手を伸ばすための美麗字句

◇

イレベンタル。王国騒乱が巻き起こす風が吹き荒れる範囲に含まれながらも、激戦区からは離れているが故にそこまでの騒々しさは無い街。そんなイレベンタルに今、二人のプレイヤーがいた。

「ハジメマシテ、でいいのかしら？」

「ええ。直接会うのはこれが初めてですね………アージェンアウルさん」

この邂逅を望んだ男がこの邂逅を承諾した女へと声をかける。
それは裏切りの報酬、男はただこの一瞬の為に己が陣営の情報を売り渡したのだ。

「私と戦う為だけに色々やった、って聞いてるけど？」

「ええ、まぁ………」

男はふ、と苦笑する。自分がこの状況に至るまでにしたこと………きっとそれは彼女の〝美学〟に反する事だろう。あるいはその〝美学〟故に自分のような行いも許容するのか………果たして、眼前の女性はそれを責めるでもなく、さりとて褒めるでもなくただ何故？とばかりに首を傾げていた。

「ケイと知り合いなんでしょ？　だったら普通にプライベートマッ

チにでも誘ってくれればいいのに」

至極真っ当な疑問だった。魚臣慧（オイカッツォ）との接点があるというなら、わざわざ非格闘ゲームであるシャングリラ・フロンティアでの1対1を望む必要はない。今最もホットなギャラクシア・ヒーローズ：カオスであれ、その前作であるバーストであれ、格闘ゲームで戦えばいい。

「………GH：Bの日本ランキングを知ってますか？」

「……？ええ、もちろん知ってるわ」

ゲーム内におけるレートマッチの戦績ではなく、オフィシャルな大会の戦績に基づいたランキング。何故その話題を出すのか？　とさらに疑問符を浮かべるアージェンアウルだったが、男はそれこそが疑問に対する答えなのだとばかりに答えを続ける。

「世界大会の出場条件は日本ランキングベスト8以上………自分の最高戦績は二年前の八位。一回だけギリギリで滑り込めたのが最後です」

アージェンアウル………あるいは、格闘ゲームプロの頂点たる女（シルヴィア・ゴールドバーグ）は目の前の男………カイソク（改崎速手）の情報を思い出す。

改崎（カイサキ）　速手（ハヤテ）。日本で活動するプロゲーマー、活動種目は格闘ゲーム………その中でも特にギャラクシア・ヒーローズシリーズをメインとしている。活動期間は………初代ギャラクシア・ヒーローズである「A（アタック）」の頃には活動していたはず、つまり最低でも十年以上はプロゲーマーとして活動しているベテランという事だ。そしてその戦績は本人を前に考えるのも少々失礼だが、とほんの少しだけ息を吐きつつ口を開く。

「そうね、平均（アベレージ）は十位前後……ここ数年は二年前以外だと十一位以降の方が多かったわね」

「ははは………〝1〟だけ覚えておけばいい貴女と違って、結構バラけてるんですが……覚えてもらっていて光栄というかなんというか」

だからですかね、とカイソクは深いため息をついた。それは世界最強と名高いプレイヤーに自分の戦績をきっちり記憶されていたことに対する恥じらい以上に……重く積もったものが込められていた。

周囲を見渡し、他にプレイヤーがいないことを確かめた上でカイソクはその名を口にした。

「シルヴィア・ゴールドバーグ。貴女に憧れない格ゲーマーはいない」

「バッドマナーね、別にいいけど……それはどうも？」

「貴女がデビューする以前に、「絶対王者」なんて看板を本気で掲げられる奴はいなかった……まさしく、絶対に勝つヒーローだ」

シルヴィア・ゴールドバーグが本格的にプロゲーミングの世界にデビューした時、「そこで時代が変わった」とまで言われる最強の格闘ゲーマー。

誰もが目指し、手を伸ばした一等星。だが……人の手は無限に伸びはしない、一等星に手が届くのは、その近くまで到達できる者だけなのだ。

「誰だって貴女とのマッチングを夢見てきた、貴女に勝つことを目

指してきた。だけどね……やっぱり、越えられない壁ってものは確かにある」

二年前の世界大会、アージェンアウル（シルヴィア）はその内容を思い出す。記憶が間違っていなければ、その時自分は目の前の男とは対戦していない。確か……そう、思い出した。

「確か……ええ、そう。貴方は初戦でアメリアと……」

「お恥ずかしながら、コテンパンにされましたよ」

もし決勝まで上がってくるならこの中の誰かだろうと彼女が予想していた一人、〝宿敵（ライバル）〟ならずとも〝好敵手（ライバル）〟ではあるアメリア・サリヴァンが一回戦で撃破したのが確か彼であったはず。そしてそれはカイソク自身が肯定した。

「あるいは、トーナメントで運良く貴女と当たることはあるかもしれない。でもそれは……もう、ただの宝くじだろう？」

それに、とカイソクは寂しげな笑みを浮かべた。

「ずっとやってると分かる事もある。自分の全盛期をもうとっくに過ぎた事とか……ね」

それはベテランゲーマーの嘆きだった。全盛の時期を過ぎ、あとはただ衰えゆく事を自覚してしまった事への。

それは避けられない事だ。人は衰える、それは脳とて例外ではない。幼子から老人まで同じフィジカルを得られる電脳の世界であっても反射神経には大きな隔たりがある。

「シャンフロを選んだのは……プロゲーマー改崎速手としての最後のプライド、かな。知り合いのツテがあるからと……誰もが目指した貴女への挑戦権を、格闘ゲームで得るのだけは許せない。そんなちっぽけなプライドだ」

千載一遇のチャンスは既に逃した、きっと次は無い。この対面が知り合いのツテによるただの幸運だとしても、せめて格ゲー以外で。

「成る程ね」

気持ちは分からないこともない。
故に。

「じゃあ、やりましょうか」

アージェンアウルはカイソクを一切の遠慮なく、手加減なく、徹底的に、完膚無きまでにぶちのめす事にした。

12月19日：届かぬ高みに手を伸ばすための美麗字句（後書き）

漢字二文字で済む言葉を長い文章にする天才カイソク

12月19日：相対し、流星は正面に迫る

◇

アージェンアウルが何故最前線ではなく、このような場所にいたのか……少なくとも新王陣営ではない以上、彼らの〝陣地〟である街を通らなければならないフィフティシアに、だ。
それは彼女がずっととあるユニークシナリオに挑戦していたためだ。

ユニークシナリオ「大いなる巡礼」。
職業「聖職者（プリースト）」系統の上位職業「僧侶（ビショップ）」「洗礼者（クレリック）」「恩寵者（エンチャンター）」「巡礼者（ピルグリム）」のいずれかをメインジョブとした上で、全ての街に巡礼をする……というものだ。
だが、このユニークシナリオを達成することで就職可能な隠し最上位職業に至った者は殆ど存在しない。否、もはや皆無と言っていい。
何故なら、このシナリオの達成にはいくつかの条件を満たす必要があるからだ。

まず第一に、一度たりとも死亡しないこと。流石にログアウトは問題ないが対モンスターにせよ対プレイヤーにせよ、さらに言えば悪いものを食べて毒で死ぬことすら許されない。ただひとつだけの命を灯し続けたまま、歩き続けなければならない……当たり前だが転送系のファストトラベルは論外である。
そして次に、カルマ値を0より上にしないこと。このカルマ値というものは非常に繊細で……変動しやすい。命を奪えば当たり前ながらカルマ値は上昇し、人が為し得る悪徳は全て論外。さらに言えば……食べるものですら、動物性のものを摂取すればカルマ値が微増する。生きる為に踏み躙らざるを得ない命すらカルマを上げてしま

う。
人としての最低限の生存活動すら制限される中で、全ての街……全ての教会に巡礼する。一見して不可能としか言えない条件を、しかし可能と謳い乗り越えなければならないのだ。
そして最後に……これらの条件を一つ街を巡り礼する度にHPの15分の1が減少し、MPが15分の1増加する状態で達成しなければならない。

巡るほどに命は擦り切れ、礼するほどに偉業に近づく。だからこそその生き様は伝説となる。

最後の巡礼を終え、己が命が全て尽きた時………大いなる奇跡が齎される。この世でただ一つ、そのジョブに辿り着いたもののみが会得可能な究極蘇生魔法【殉神聖誕(アルマ・リザレクション)】を以って蘇ることで。
その偉業、畏敬、なにより信仰と共にその名は与えられる。
聖職者系職業派生隠し最上位職業「大聖者(ザ・セイント)」。それがアージェンアウルが成し遂げ、獲得した職業の名だ。

「どうしたのチャレンジャー！　1ラウンドしかないのよっ？　最初からフルスロットル出さないと……ねっ！」

「知らない攻撃、を……っ！」

幸いというべきか、「大聖者」の職業に就いた後はモンスターを狩猟したり肉を食べても問題は無い。（尤も、罪を犯せばジョブがはく奪される不安定さはあるが）
本来であれば、どちらかの陣営に所属すれば大聖者のジョブに就いたプレイヤーであってもPvPを行うことが出来る。武勲を経て聖者と称される事もある、まして人類が霊長足り得ないこの世界であればなおさらに。双つの王権が人と人が争うことを許容し、教会が

それを否定するでもなく中立を保ったが故に、本来であれば……そう、どちらかの陣営に所属さえしていたならば大聖者はプレイヤーを倒すことが出来た。

「はぁあっ！」

「その斬撃……まるでデュエスパーダ。でも私は宿敵（ヴィラン）のスカルガンじゃないの、弾で迎撃しなくて悪いわね？」

剣豪ジョブであるカイソクが放った斬撃を、しかし徒手空拳のアージェンアウルが軽く腕を払うだけで軌道を歪める。全身にスキル強化の光を纏いこそすれ、素手で剣の腹を弾き飛ばす（パリィする）ことで大上段からの斬り下ろしに対処したことにカイソクは目を見開く。
だがそれが出来るからこそ、眼前の人物は冗談のような偉業を看板として掲げてきたのだ。驚愕は捨て、すぐさま追撃に移行する。

カイソクがこの時の為に鍛え上げた「カイソク」というキャラクターは〝ほぼ〟物理剣士といったものだ。それは彼がギャラクシア・ヒーローズシリーズで最も得意とする持ちキャラ、デュエスパーダに限りなく近づけたものであり……それはカイソクの格ゲーマーとしての経験に基づいた実力を余すところなく発揮させながらアージエンアウルへと二刀の猛攻を仕掛ける。
だが、カイソクの持ちキャラが双剣使い（デュエスパーダ）であるならばアージェンアウルの持ちキャラは徒手空拳（ミーティアス）。即ち武器の有無はなんらアドバンテージにならない。

（強い、本当に強い……！　観客席で見てるだけじゃあ、この強さは理解できていなかった……ッ！）

剣を振れば最小限の動きで回避される、突きを放てば弾かれ、しか

し無傷であることにこだわらない荒々しい踏み込みから放たれる打撃はカイソクの身体に重く響く。こちらから殴りかかっても感触は霧、しかし霧の中から飛んでくる一撃は岩のようで。しかし長年……そう、シルヴィア・ゴールドバーグが最初の世界大会優勝を果たしたあの日からずっと組み立て続けていた対シルヴィアの戦略で辛うじて猛攻に立ち向かう。

「そこだ！」

「………！」

アージェンアウルの回避の「癖」を読み、飛び退いた先に突き出した切先がアージェンアウルの頬を浅く斬り裂く。そこで止まることなく、さらに踏み出した勢いのままに左の剣を叩きつける。腕でガードされたものの、戦いの中で初めてのクリーンヒット。

「お………おおお……！」

左腕に力を込め、アージェンアウルの腕よ断ち斬れろと言わんばかりに力を込める……だが、斬れない。いや違う、斬れてはいるのだ。だが、

「再生、している……！？」

「正解。【遥かなる旅路（ファー・ジャーニィ）】って魔法でね、損傷（ダメージ）に対して同量の肉体リジェネを付与しているの」

ＨＰの回復ではなく、肉体そのものの損傷を治癒する再生魔法。それは如何なる艱難辛苦をも五体満足で突破するための巡礼者の叡智。それがアージェンアウルの肌が、肉が、血が、骨が刃と対抗してい

るカラクリだ。

「そして、当然HP回復もあるけれど……そっちは使わない」

「そうか……感謝は、しておこう！」

アージェンアウルの言葉、そこに込められた意味を理解しないままにカイソクは感謝を述べる。彼は誤解していた、回復を使わないのはあくまでも格ゲー的な対戦形式を遵守してくれたのだと、そう思ったのだ。

その意味を理解しないからこそ……カイソクは、アージェンアウルが目を細めた意味に気づくこともなかった。

１２月１９日：相対し、流星は正面に迫る（後書き）

「回復縛り」と言えば聞こえはいいが自己回復キャラがそれを縛る、それって要するに――

ところで皆さん、４月１５日にコミカライズ版シャングリラ・フロンティア八巻が発売します。
八巻ってことはつまり八冊ってことです、八冊というのがどういうことか分かりますか？超嬉しいってことです。

<ｉ６３６９１６｜２２９５１>
<ｉ６３６９１７｜２２９５１>
<ｉ６３６９１８｜２２９５１>

大魔導師不二先生の超絶画力は鉄鋼雷火のロボット戦でも問題なく発揮される、ということが証明されてしまったのでもはやシャンフロに敵はありません。たまーにこのキャラはこういう感じでお願いします……と伺いを立てるのが精一杯です。不二先生は硬梨菜のくっそアバウトなキャラライメージを１２０％で出力されるので「これです！これが理想です！」としか返せないんですね。
表紙を飾っているのは歩く矛盾塊、刺身よりもツマの方をメインに楽しむようになってきたキョージュです。このガワに惹かれて手に取った新規の方が目にするのは重低音のシルバーボイス、なんてひどい奴なんだキョージュ……
それはそれとして水晶群蠍とのバトルシーンが本当に神がかっているんですよねコミカライズが決定した時「このシーンを絵にしても

らうだけでもうありがたすぎるんだけどそもそもこのシーンを絵にしてもらうことは可能なのか？」と思っていましたがとんだ杞憂だったというか想定の１００倍くらいやベーもんがお出しされて他でもない硬梨菜が一番戦慄していましたしバトルシーンに関しては硬梨菜の脳内イメージを凌駕していましたねいや別に蠍はそこまで好きって訳ではないんですけど結構熱を入れて書いた部分であるのは事実であるしシャンフロという物語において結構重要な立ち位置にいるのは事実なわけでそこをあれほどの画力で描いていただいてしかも金晶独蠍に至っては「なんかすごいカッコイイことになっとる！！！！！」としか言えなかったですからね見てくださいよあの威圧感ユニークモンスターかよってくらいの凄みが出てま（以下略）

なにはともあれ、皆様のおかげで八冊目です。週刊少年マガジンでも絶賛連載中ですし紙はどうしてもかさばるよね……という方にはマガポケで読むこともできますので今後とも拙作を宜しくお願いします。

12月19日：その拳、血濡れず

◇

今、アージェンアウルはどちらの陣営にも所属していない無所属のプレイヤーだ。
それは新王陣営の背後であるフィフティシアに辿り着いていることからも明らかであり、もし彼女がその正義感のままに前王陣営についていれば彼女はここに辿り着くために多大な労力を費やす羽目になっていただろう。
だからこそ、カイソクとの戦いにおいてアージェンアウルは現在深刻な制限を受けている。

——聖者は悪徳を為さず、悪業を成さず。

イベント中特殊裁定（ゲーム的な言い訳）を受けていない、無所属の大聖者は通常通りの制限が適用される。
即ち、プレイヤーをキルした時点でジョブが剥奪されるという……
……ＰｖＰをするなど論外というべき、重い制約をだ。

「回避ばかりとは……っ、ミーティアスとは随分と毛色の違う戦い方じゃあないか……！」

「そうかしら？」

何度か反撃こそしてくるものの、殆ど攻撃を避ける事ばかりに偏重しているアージェンアウルの動きに、カイソクは煽るように言葉を投げかけながらも考える。

シルヴィア・ゴールドバーグの〝強み〟とは何か、それは格ゲーマーたちの中で何度も何度も繰り返し議論されてきたことだ。ある者は尽きせぬスタミナと言い、またある者は恐るべき洞察力と言い、あるいは単純に反応速度がお化けと言う者もいた。

なるほど、それらは全て正解だろう。数時間以上途切れない集中力、相手の動きを見抜いて自分の動きを通す洞察力、どれだけ不意を打とうともすぐさま対応する反応速度。あらゆるパラメータがハイレベルだからこそシルヴィア・ゴールドバーグは最強なのだ。その上でカイソクは「シルヴィア・ゴールドバーグ最大の強みは決して自分のバトルスタイルを曲げない」ことであると考える。

——彼女こそがミーティアスだ。

多くのファンから、そして原作コミックの作者から贈られたこの言葉は格ゲーマーにとって……否、ギャラクシア・コミックファンにとって最大の名誉であり、ギャラクシア・ヒーローズシリーズユーザーとして最高の栄誉だろう。

その言葉は彼女がバトルスタイル「ミーティアス」を曲げなかったからこそ、歪みなくそれを貫き通してきたからこそだ。その単一のバトルスタイルを誰もが対策しようとし、だがしかし誰もが太刀打ちできなかった。魚臣　慧は確かにシルヴィア・ゴールドバーグに唯一の黒星をつける、という偉業を成し遂げたがバトルスタイル「ミーティアス」を揺るがしたのはカイソクが覚えている限り一人しかいない。

バトルスタイルを重ねるでもなく、ロールプレイをするでもなく、しかしあのアメリア・サリヴァン以上に「凶星」だった謎の人物との激闘。幼い少女の危機(NPC)と、それに伴う一連の会話以降……あの瞬間だけは、ミーティアスではなくシルヴィア・ゴールドバーグとしての闘争心が確かに漏れていた。

「ふぅ……………ッ！」

猛攻で消耗したスタミナを回復するために距離を離しつつ、さらに思考は加速していく。

改崎　速手は魚臣　慧でもなければ「顔隠し」でもない。だからこそ今戦っているアージェンアウルがバトルスタイル「ミーティアス」ではない事が大きな違和感になっている。

確かにカイソクはアージェンアウルに対して攻勢を仕掛けているが、有利というほどではなく、追い詰めているわけでもない。そしてこの対決を受けたアージェンアウルが手を抜いているとも考えづらい。

（なら、何故彼女は攻勢に転じない？　何故避け続ける……？　攻撃だって、殆どカスダメージ、何かスキルは使っているようだが……………………………………）

そこで、高速で巡らせていたカイソクの思考が一つの疑問を形にした。

（待て、何故こんなにもダメージが少ない？　何度かクリーンヒットは受けた。こちらも回復していない、防具だってそこそこのＶＩＴだ……なのに体力がまだ九割以上あるのはおかしいだろう？！）

バグ、は無いだろう。あのＧＨ：Ｃの開発にも関わっているユートピア社のメインコンテンツであるシャンフロがそんなヘマをするとは思えない。小技はあっても裏技は無い、それがユートピア社が関わったゲームに対するユーザーたちの評価だ。

となれば、アージェンアウルが何らかの明確な意図の上で攻撃の威力を減衰させているということになる。

（威力を削る代わりに状態異常を付与？　いや、状態異常は無い……ヒット数に応じた威力上昇？　覚えている限りでも十回は攻撃を受けている、倍率が低すぎる……………）

デメリットしか齎さないアイテムや装備はあるにはある。だがそれをわざわざこの場面で使う理由は……あるのかもしれない。だがそこに何かのメリットを見出しているにしても変化が無さ過ぎる。カイソクの振るう剣を回避するアージェンアウルの目には己の拳が与えるダメージが低すぎる事に対して困惑も疑問も無い。となればやはり何かを狙っている、と言う事だろうか。

「くっ…………」

スタミナが切れれば当然動きが鈍る。アージェンアウルの手の内が明かされない以上、深入りは禁物だ。距離を離しつつ、スタミナの回復を図り…………

（――――ちょっと、待て）

そこで、気づいた。

（スタミナの消耗が早すぎる……！）

カイソクのステータス配分は対シルヴィア・ゴールドバーグ用にスタミナパラメータへ多めに振っている。それは攻勢の中にあっても不測の事態にすぐさま対応する為であり、守勢の中にあっても反撃の余力を残すためだ。
カイソクは理論派のゲーマーだ、当然「カイソク」というキャラクターデータがどれほどのパフォーマンスを実現できるのかは把握している。それはスタミナゲージを使い切るまでにどれだけ動けるか、

も含まれている。
だがどうだ、今のカイソクはスタミナゲージの減りが異様に速い。

否。

「スタミナゲージそのものが………減って、いる？」

「やっと気づいたのね？　ダメージが少ないから何かがある、ってのは気づいていたようだけれど………このゲームじゃステータスパラメータに干渉する事だって出来るのよ？」

――聖者は悪徳を為さず、悪業を成さず。

ユニークシナリオ「大いなる巡礼」を開始するにあたり、聖女イリステラより贈られる言葉だ。だがこの言葉には続きがある。

――しかして聖者は非力にあらず

「カイソク。このゲームタイトルはギャラクシア・ヒーローズ：カオスでもなければギャラクシア・ヒーローズ：バーストでもない………それをちゃんと理解しているかしら？」

拳に薄光を纏う大聖者が不敵な笑みを浮かべる。
〝不殺〟は弱者ゆえの「殺せない」ではなく、強者ゆえの「殺さない」であるのだと。そう断言するかのように。

１２月１９日：その拳、血濡れず（後書き）

本日、コミカライズ版シャングリラ・フロンティア8巻が発売しました

漫画の方についてはもはや語ることが無いほどに語った、というかそもそも語らなくても百聞は一見に如かずっていうか……という領域なので特装版の方について語りますが、こっちもこっちで毎回別ゲーばかりで需要あるんだろうか、と試しにＴｗｉｔｔｅｒでアンケートを取ってみたら普通に需要があったので安心している次第です。ただやっぱり明確に「旅狼」入りしたキャラを出したいので外道以外を参加させることができるまでまだ先なのがつらいところ……どうしてルストモルドや秋津茜の加入タイミングをリュカオーン再戦の時に確定させなかったのか、と過去の硬梨菜に対してほんのりとした憎悪を向けつつもそれはそれとして今回は久しぶりに「これ前後編にしたいって言ったらダメかな……」ってなりましたね。彼の旅路を若干ダイジェストにしてしまったのが悔やまれるところです

でもやっぱり前後編で九巻を買うのが義務になっちゃうのもちょっと違う感じがするので頑張って収めました。特装版小冊子の原稿は常に文字数との戦いでもあるのです。

そんなわけで八巻、よろしくお願いします

<ｉ６３６９１６｜２２９５１>

<ｉ６３６９１７｜２２９５１>

<ｉ６３６９１８｜２２９５１>

12月19日：奇跡はこの手に

大聖者は命を奪うことが出来ない。
街と街を移動するためにはエリアボスを倒す必要がある。
大聖者は必ず徒歩で全ての街を移動する必要がある。

一見して、それらをすべて成立させることは根本的に不可能である。
なにせエリアボスの打倒が街と街を徒歩で移動する手段である以上、「不殺」を条件とする大聖者とは絶対に噛み合わない。
そしてそれは事実であり、同時に一つ間違いがある。

――大聖者はエリアボスを殺さず超える。

その為の力を、聖者の御手(こぶし)は持っている。

◇

「【猛りを諌める手(リモンストレイト)】……効果はシンプル、物理攻撃力を減衰させる代わりにスタミナにダメージを与えるエンチャント」

「スタミナ削り……か」

シャングリラ・フロンティアにおいてスタミナパラメータは戦闘に関わる行動のほぼ全てに関わっていると言っていい。スキルをメインとして戦う剣士など、その最たるものと言っていい。そんなスタミナパラメータを削る、カイソクはそんなものがあることを初めて

知った。

「なら、それに当たらなければいい……と、言いたいけれど」

「ふふふ、あまり攻撃しなかったのは別に加減していたわけじゃないのよ？　ただ……時間が来るのをちょっと待っていただけ」

カイソクは決してアージェンアウルを侮っていたわけではない。だが、見積もりが甘かった、と言わざるを得ないだろう。

アージェンアウルはシルヴィア・ゴールドバーグであり……彼女は全米一（ゼンイチ）である前に、一人の格ゲーマーであり、そして何よりゲーマーである。彼女の成し遂げた偉業、その看板から発せられる偉大な光に目が眩むほどにその簡単な事実を人々は視認できなくなる。

シルヴィア・ゴールドバーグとて別にギャラクシア・ヒーローズシリーズ以外のゲームを遊ぶことだってあるし、そのゲームに準じた「最強」を目指すのだ、と言う事。そして何よりも、簡単な事実から〝逆算〟することもできない。

「シャングリラ・フロンティアは一本先取、それにラウンドにタイムリミットも無い……だったら、最高潮（MAXボルテージ）のタイミングは何分後でもいいのよ」

一人のゲーマーであり、対人に秀でた格ゲーマーであり、その中でも全米一（ゼンイチ）という高みに至ったシルヴィア・ゴールドバーグという人物が本気でビルドした「アージェンアウル」というキャラクターの強さを。

十中八九宿命のライバルであろう、この世界最速（ゲーム）のプレイヤーに勝つために鍛え上げられた、大聖者の性能をカイソクは今この瞬間より存分に思い知ることとなる。

「十五分、【聖者の歴程(ザ・セイント・オブ・レジェンド)】のリキャストタイムが終わる。さぁカイソク！　ここからが本番よ、脳のスタミナはまだ残っているわよね？！」

「っ！」

十五分。人によっては短いとも長いとも言える、だが少なくとも十五分間ゲームとはいえ戦闘行動を続けてきたカイソクからすれば十分すぎるほどに〝長い〟と言える時間だ。流石に息切れこそしないが…………ここからがスタートラインだ、と言わんばかりのアージエンアウルを前にすれば僅かに怖気の影が差す。

だが、ここで退けばなんのために戦っていたのか。届かぬ頂に〝ズル〟をして手を伸ばしたのだ、少なくともカイソクの側から退くことだけは……許されない。誰よりもカイソク自身が許せない。

「おおおおおお！！」

両手の剣を構え、スキルを発動していく。スタミナは二割削られているものの、逆に言えばまだ八割は残っている。そして前衛剣士である以上、スタミナ消費を抑えるスキルは習得済みだ。それらを用いて削られたスタミナを補いつつ、その他のパラメータを強化しながら一歩前へと踏み込む。

（ザ・セイント・オブ・レジェンド？　もはや魔法なのかスキルなのかも分からないっ！　だが、シルヴィア・ゴールドバーグなら最後に選ぶのは徒手空拳！　剣のレンジを押し付けながらイニシアチブを取る！）

「90秒、ショータイム！」

「なっ………！？」

速い、距離を詰められた、今まで使っていなかったスキル。それらの情報を整理して理解するよりも先に、

「Rise up（昇れ）！……「シ竜魚里才丁（トウリュウモン）」！」

「ぐ、ぶぁ……！？」

アージェンアウルが突き出した掌がカイソクの顎に突き刺さり、その勢いのままにカイソクの身体をカチ上げた。

◇

【聖者の歴程（ザ・セイント・オブ・レジェンド）】。大聖者のみが習得可能な魔法であり、自身のＨＰが０になることをトリガーにオート発動する究極蘇生魔法【殉神聖誕（アルマ・リザレクション）】と、もう一つも含めて大聖者のジョブを隠し最上位たり得る性能とする三つの柱の一つだ。

大いなる試練の中で巡った十五の巡礼になぞらえ、戦闘開始から十五分という長すぎるリキャストタイムを生き延びることで初めて使用可能となる。

では、十五分……九百秒というともすればその間に決着しかねない長いリキャストを経て、大聖者は一体何が可能となるのか。

まず最初に、魔法の発動時間はリキャストタイムの十分の一、すなわち九十秒。

次に、効果時間中に発動する全自己強化スキル及び自己強化魔法の効果時間経過（タイムカウント）を０にする……すなわち、九十秒間、あらゆる強化バフが永続する。
そして最後に、発動者のあらゆる攻撃行動によって与えられるダメージの置換。この九十秒間、大聖者の放つあらゆる攻撃はＨＰを削らず、ＭＰとＳＴＭを削る。
肉体ではなく、精神を、魂を削る大聖者の奇跡。それを前に戦意を削り切られた者は命はあれど、戦意を喪う。あるいはそれは、〝戦う者としての死〟を意味すると言っていい。
特殊状態「調伏（ちょうぶく）」、ＨＰの残存を無視して対象を「死んだもの」として戦闘を強制終了する。
それこそが奇跡を握る者、大聖者唯一の勝利手段なのだ。

12月19日：奇跡はこの手に（後書き）

・大聖者

スタミナとMPを削って戦闘の強制終了を狙う超変則特殊勝利ジョブ。原理的には聖杖アスクレピオスと同じでダメージを別のものに置換している。

これだけ書けば物凄く強そうに思えるが、当たり前だが【聖者の歴程（ザ・セイント・オブ・レジェンド）】にはデメリットもあり、使用した後は再び十五分のリキャストが入るがこれは【聖者の歴程（ザ・セイント・オブ・レジェンド）】の効果適用中に使用したスキル、魔法にも同じだけのリキャストタイムが「加算」される。つまりそれぞれのリキャストタイム＋十五分の追加リキャスト。

さらに言えば、「調伏」は確かにHPを削らずに実質的な勝利を得ることができるが、そもそも強いモンスターというのは総じて莫大なスタミナとMPを持っており、それまでHPを削っていた中、いきなり90秒間MPとスタミナを攻撃できるとしてもたった一分半で莫大なMPとスタミナパラメータを削り切るのは相当に困難。

そしてMPとスタミナを同時に攻撃できるのは大聖者くらいであり、パーティを組んだとしても他のプレイヤーは普通にHPを削るので噛み合いが悪い（スタミナとMPを削る、という点だけを抽出すれば十分貢献してはいるがバフ強化は自対象のみ）。

大聖者の「調伏」を一番達成しやすいのは自身のパラメータにステータスポイントを振って自身を強化する性質上、スタミナとMPに特化するのが難しいプレイヤー相手だが、大聖者というジョブの性質上プレイヤーに殴り掛かれば高確率でジョブ剥奪なため、迎撃という名目で武力行使が許容されるプレイヤーキラーや、HPが0になる前に待ったが入る闘技大会のような限られた状況に限られる。

大聖者就職ユニークシナリオを自発したプレイヤーは聖女ちゃんから「調伏」の勝利条件を付与され、「聖者の秘奥」とされるＭＰ削り、スタミナ削りの魔法を習得することができる。
つまり【聖者の歴程（ザ・セイント・オブ・レジェンド）】無しでも大聖者はＭＰとスタミナのパラメータそのものを削ることはできる、と…………やっぱりぶっ壊れでは？（パーティプレイの場合はトドメが大聖者でなければアウト判定にはならない）

大聖者の設定解説で文字数稼ぎ過ぎたので余計な文字は無しで簡潔に。
コミカライズ版シャングリラ・フロンティア八巻、好評発売中です！
<i636916|22951>
<i636917|22951>
<i636918|22951>

１２月１９日：ハイライトは終わらない

このご時世においてＥ－Ｓｐｏｒｔｓ選手、プロゲーマーの選手生命は意外と長い。ディスプレイを凝視し、指先の動きでキャラクターを動かす前時代的なプロゲーマーとは異なり、フルダイブという脳からの指令がダイレクトにキャラコントロール・クオリティに直結する現代では現実のフィジカルスポーツと比較すれば選手生命の平均は４０～６０と言われている。

特にリアルタイム・ストラテジーのプロリーグともなれば齢７２歳のプロゲーマーでいる程だ。

だがしかし、ありとあらゆるゲームカテゴリのプロリーグにおいてそれ程までに現役でいられるわけではない。特にフルダイブ格ゲーの世界は世代の入れ替わりが激しい。

無論、格ゲーをプレイし続けるなら生涯現役で居続けることは出来る。それこそ隔絶した力量を持っていたならば、加齢など跳ね除けて最強のプロゲーマーで居続けることもできるだろう。

――ただ、改崎　速手はそうではなかった。ただそれだけの話なのだ。

中堅。それが自他共に認める改崎　速手のプロゲーマー人生におけるポジションだ。

弱くはない、少なくともその実力を疑う者はいない。だが上を見ればキリがない……そういう場所だ。

特に現日本最強と名高い魚臣　慧は改崎と同じ理論派のゲーマーで

ありながらも異様なまでの対応力の高さから上位互換とまで言われている。

そこは別にいいのだ。魚臣に勝ったことが無いわけではないし、中堅であることに甘んじず上を目指し続ければ挑戦の機会を得ることは出来る。
だが、それはあくまでも日本国内での話。視点をさらに広く、日本最強の格ゲーマーですら見上げなければならない世界の頂。全米一にして事実上の世界最強の格ゲーマー、シルヴィア・ゴールドバーグまでの距離は……改崎にはあまりにも遠すぎる。

シルヴィア・ゴールドバーグだけではない。アメリア・サリヴァンやアレックス・テイラー、レオノーラ・ロジャーにクォン・シウ……日本国内で「上の上」と評されるプレイヤーですら、あるいは世界において「上の上」と評されるプレイヤーですら惨敗を喫する事も珍しくない世界というフィールドで戦うには、改崎の実力はあまりにも不足していた。

何故そうなのか、何故挑めないのかは誰よりも分かっている。だからこそ、いやあるいはだとしても挑む機会すら巡ってことないことがこの上なく悔しい。
故にこの場に来ている、故にこの場に来てもらっている。
だが——

◇

（速すぎる……っ！？）

加減されていたのではなく、アージェンアウルというキャラクターが最高のパフォーマンスを可能とするまで向こうが耐えて、待って、機を伺っていたのだと気づいた頃にはもう遅く。
先程までとは次元の違う高速戦闘にカイソクは心の中で悲鳴を上げる。口からは息しか出ない、声を出す暇すら無いからだ。電脳の世界の、いわば夢の中で何をと思うが実際にそうなのだから仕方がない。

蹴り、殴り、跳躍、蹴り……と見せかけて虚空を踏んで虚を突いてからの殴り。そして渾身の蹴り。

（単純な速度じゃない、対応が速すぎるんだっ！　これが頂点に立つラッシュか……ッ！）

誰もがシルヴィア・ゴールドバーグへの対策を考え、しかしそれを成さぬまま……あるいは為して尚、勝てずに敗北してきた。その理由がこれだ、あまりにも激しい変幻自在にして怒涛の攻めだ。動き自体はそう速いものではなく、目で追えないわけでもない。だが行動と行動の間にある空白が極端に短い、さながら舞のように最初から何をすべきで次に何をするのかが決まっていたかのようなコンボ。一流のプレイヤーが十秒で十発のパンチが出来るとするなら、シルヴィア・ゴールドバーグは十秒の間にキックとパンチを五回ずつランダムに仕込むことができるとでもいうべきか。

あらかじめ台本があるかのような、しかし徹頭徹尾アドリブの攻勢。これにハマれば最後、全米二位のアメリア・サリヴァンが本気で防御を固めても削り切られる。これに対抗するなら、やはり〝あの凶星〟や魚臣　慧のように同じだけのアドリブを叩きつけるしかない。

（だが……対策は用意してある！）

「く、おおぉ……！　【ショック・パリング】！！」

「！？」

ガリガリと削られていくなけなしのＭＰを消費し、カイソクの胸元にシャボン玉のような球体の空気が生み出される。それは空気をぼやけたレンズを通したかのように歪めながら爆発的に膨張し、アージェンアウルとカイソクの双方を勢いよく吹き飛ばした。
互いを怯み状態にしながら強制的に距離を離す魔法によって二者は体勢を崩したものの、覚悟してそれを放った者と不意打ちでそれを受けた者とでは衝撃に対する覚悟の備えが違う。すぐさま立て直したカイソクは双剣にスキルを纏わせながら未だよろけた状態のアージェンアウルを見据える。

「ここだっ！！」

スキル「縷々閃舞(るるせんぶ)」、ヒット判定自体を三倍にする二刀流のスキル。カイソクの武器防具アクセサリースキル、その全てはこのスキルで敵のＨＰを削ることに特化している。対モンスターであればそれは必殺足り得ないが、対プレイヤーであれば……そして、きっと重厚な鎧を着てはいないだろうと信じていたアージェンアウルであるならば。

「決めさせてもらう！　【逬る雷律(スタンビート)】！！」

詠唱を破棄した微弱な雷撃。しかし怯み状態にあったアージェンアウルの立ち直りを阻害するには十分すぎるほどの発生の速さ。その一瞬はまさしく値千金の価値がある。
自身への反動ダメージと共に加速力を得るスキル「アウトバースト・

アクセル」によって一気に距離を詰めたカイソクは二刀を振り抜く。
それがカイソクの残ったスタミナで出来る行動の全てだった。だが、スキルによってヒット数は2から6となり、同時に放ったことで武器の効果によりダメージに補正が入り、さらにアクセサリーの効果によりさらに補正が入る。

「あ………」

それは、どれだけプレイヤースキルを磨こうとも抗い切れないシステムによる硬直から未だ抜け出せないアージェンアウルへと吸い込まれるように叩き込まれ………そのHPを間違いなく0まで削り切った。

「やっ………」

やった。成し遂げた。
叶わぬ願いに手を伸ばし、年甲斐もなく夢にまで見たこの一瞬に、勝利を掴んだのだ。

だが、カイソクの心を満たしたのは歓び以上に………失望と、疑念と………期待。
シルヴィア・ゴールドバーグが自分程度に負けることがあり得るのか？　自分程度に負けていい筈がない、あるいは……シルヴィア・ゴールドバーグなら。
だが現実は確かにアージェンアウル（シルヴィア・ゴールドバーグ）の死（デス）を示している。故にこれは考えあってのものではない。今一度言う、それは失望と疑念と何よりも期待がこもった、無意識の一言だった。

「………やったか？」

「今のは効いたわ、間違いなくネ」
職業（ジョブ）「大聖者」はユニークシナリオと密接に関わっている。それは物語ありきのコンテンツであるという事であり、その性能もまたユニークシナリオの内容に大きな影響を受けている。
全ての街を己が足と、命への敬意を抱いて巡り切った者。最後の巡礼を終え、全ての力を使い切った者にこそ奇跡は起きる。奇跡とは天命、人事を尽くした先にあるいは降り注ぐもの。己の意志でどうにかなるものではない。
故に、それは大聖者を象徴する〝奇跡〟であり、己が意志にて律せられぬ自動発動（オートマジック）なのだ。

「蘇生……した……？」

確かにHPはゼロになった。だがアージェンアウルの身体は砕け散ることなく……否、厳密には砕けたはずのその身体が荘厳な光（エフェクト）と共に再びアージェンアウルの形に戻ったのだ。
「大聖者（ザ・セイント）にはHPが0になった時に一度だけ復活するオート発動の自己蘇生魔法があるの……それが【殉神聖誕（アルマ・リザレクション）】。言うなればテスタメントのリザレクションね」
「ははは…………………てっきりミーティアスしか使わないものかと」
その性能（つよさ）に蘇生までありかよ、という恨みを少しだけ込もった言葉

に気づいたのかそうではないのか、シルヴィアの返答は至ってシンプルなものだった。

「〝私〟はミーティアスじゃなくてアージェンアウルだもの、そっちの私と戦いたいなら……場所（ゲーム）が違うでしょ？」

【殉神聖誕（アルマ・リザレクション）】はオート発動する自己対象の蘇生魔法、という点を除いてもあまりに特殊な蘇生魔法だ。

何故ならば、この魔法は発動した時点での残存ＭＰがＭＰゲージごと消失して残存ＭＰ分だけＨＰ上限が加算される。それはこの蘇生魔法が発動した時点で、戦闘終了から一日経過しなければＭＰゲージそのものが復活せず一切の魔法が使用できないことを意味する。

「残り１５秒、まだ踊れるかしら？」

「…………………生憎と、誰かのせいでスタミナが無いんだ」

「それはゴメンナサイ、じゃあ全部私の時間ねっ」

大聖者は元を正せば聖職者（プリースト）派生、すなわちＭＰを使用した魔法を駆使するジョブだ。だが【殉神聖誕（アルマ・リザレクション）】を使用した大聖者はＭＰゲージそのものを失う。しかしその条件下でこそ真価を発揮する最後の切り札がある。

「……「聖なる大志（セイクリッド・アンビシャス）」！！」

カイソクの目には白い劫火がアージェンアウルを燃やし尽くしたようにすら見えた。だが違う、それは火に焚べられた燃料ではない。

それ自身が煌々と熱を生み出す……熱源。

「さぁ、リーサルよ！」

己が体力を減少させ続けながら全ステータスを爆発的に強化する大聖者三つ目にして最後の切り札。回復系魔法職としてのＭＰがＨＰに加算され、その役目をも引き継いだアージェンアウルのＨＰが燃え上がりながらも炎を力に変える。

もはやカイソクに抗う術はなく、それ以前にアージェンアウルから告げられた言葉はカイソクに圧倒的な敗北感を齎していた。

――〝私〟はミーティアスじゃなくてアージェンアウルだもの、そっちの私と戦いたいなら……場所(ゲーム)が違うでしょ？

（ああ、まさに…………………）

ボクシングの天才に相撲で勝ったからといってだからなんだというのか。シャングリラ・フロンティアでシルヴィア・ゴールドバーグと対決したところで………それは、見上げ憧れ続けた格ゲーマーとの対決とは言い難い。

カイソクはアージェンアウルに勝つつもりで勝負を挑んだ、シャングリラ・フロンティアでだ。

公式の場ではなくプライベートな場で対戦を望んだのであるなら、ＧＨ：Ｃでプライベートマッチを挑めばよかっただけのこと。それをしなかったのは本来挑めない筈の相手にズルをして挑むのはプライドが許さないから、という以前に……「どうせＧＨ：Ｃでは勝てないから」と心のどこかで思っていたからではないのか？

（それは、要するに………妥協じゃないか）

ＭＰが削り切られ、さらにスタミナのゲージがさらに短くなっていく。ＨＰはこの窮地において驚くべき程に多く残っている。だが聖

者の拳が砕くのは命ではない。

『特殊状態：調伏』

闘志だ。

「Ｇｏｏｄ　Ｇａｍｅ！！」

戦う意思も、そのための力をも砕かれ切った敗者が地面に倒れ伏し、勝者は白炎を纏いながら立っていた。

１２月１９日：ハイライトは終わらない（後書き）

・「聖なる大志(セイクリッド・アンビシャス)」
大聖者の専用スキルにして三つ目の切札、自身のＨＰを秒間基礎最大ＨＰ（要するに加算前のＨＰ上限）の５％ずつ消費しながら自身の全ステータスパラメータを上昇させる。
別に【殉神聖誕(アルマ・リザレクション)】を使っていようがいまいが使用可能な専用スキルではあるが、【聖者の歴程(ザ・セイント・オブ・レジェンド)】及び【殉神聖誕(アルマ・リザレクション)】のデメリット効果である「発動時点でＭＰゲージが消失し、残存ＭＰがＨＰとＨＰ上限に加算される」と組み合せることで真価を発揮する。
要するに強化バフの延長＋ダメージ置換＋ＨＰの疑似回復兼疑似増強＋ステータスバフによる超短期決戦を仕掛ける。少なくともこの全盛り短期決戦に直撃して調伏されないプレイヤーを探す方が難しい。
対策としてはそれぞれの効果時間が終了するまで攻撃を避けて逃げ切るか、物理もしくは魔法的な防御で防ぎ切る事。まぁ今回はこれをかましてきたのが対人における頂点存在なのがどうしようもない。
ちなみにこれで仕留め切れなければ「いくつかのスキル・魔法が１５分以上使用不可かつ、アイテムによるＨＰ回復量が半減し（聖なる大志のデメリット）、そもそもＭＰゲージが無いので魔法を使えなくなった多少しぶといやつ」になってしまう。

コミカライズ版シャングリラ・フロンティア八巻、好評発売中です！
＜ｉ６３６９１６｜２２９５１＞

<i6369171-22951>

<i6369181-22951>

それは偶像か、それは兵力か、あるいはそれは……誘蛾灯か（前書き）

ちょっともう信じられないくらいやることが積み上がっててマジで更新する暇が無いんですが、五周年を迎えたらしいのに一回も更新が無いってのはあまりにもあんまりなので掲示板回でお茶を濁します。もうぐるっぐるです、抹茶を点てるくらいシャバシャバに濁します。

唸れ茶筅、抹茶の渦は銀河のメタファーです。茶道イズギャラクシー、最近抹茶を飲んだ時にそんなことをふと思いました

それは偶像か、それは兵力か、あるいはそれは……誘蛾灯か

19：ラムダラム酒
で、結局前掲示板で暴れてた征服人形肉盾戦術マンはどうなったの？

20：シャットアウター
知ってるか、盾って構えてる方しか防げないんだぜ

21：マフラ
プレイヤーキラーまで煽ったらそりゃ袋叩きにされますよ

22：パンクロン・ダフトロック
ああいう手合いも契約できちゃうのは良くも悪くもプレイヤー全員にチャンスがあるって証明だけど契約解除とかされてくれないものか

23：パレオパレード
別に征服人形をガチガチのタンク仕様にして盾にする、ってんならまだ角が立たないのに「ダメージ受けてる征服人形たまんねぇ～」とか煽るから……

24：ガモット
でも過剰に征服人形を戦いの場に出すことに拒否反応示す人もくどい時ありますよね
そもそもコンセプトがＮＰＣパーティメンバーみたいなものなのにちょっとでも征服人形がダメージ受けたらクソ野郎！みたいなこと言うやつ

25：ガブリー・ファング

アイドルキャラとして見るかバトルアンドロイドとして見るかだよなそこらへん

２６：ダムロックビーバー
エルマ型と契約した人がＲＭＴ持ちかけられたって話もあるからなぁ

２７：シャットアウター
あれ海外業者だろ？日本の業者はシャンフロでＲＭＴなんてやったらオカルトサーチでＢＡＮされるって理解してるだろうし
そもそも征服人形の譲渡無理だろ

２８：ぺむてりお
結局エルマ型の好みってカルマ低めでガンガン前に出るアタッカーだっけ？

２９：マフラ
大体ツチノコさんのパチモンになれば行ける

３０：冬夜月
脱ぐ必要は無かったらしいけどな！！

３１：ラムダラム酒
純魔ブチ切れ案件だったなぁ、エルマ型の好み

３２：パンクロン・ダフトロック
言うてリヴァベヒあるしステ振りし直して魔法剣士なり物理アタッカーなりに代わってエルマ型にプロポーズすればいいだけだろ

３３：ガモット
前線拠点にアイドル活動しに来たエルマ型に群がる半裸の群れは正

直言ってきしょかったよ半端なく

３４：パレオパレード
全員がうっかりサイナちゃん呼びして全員フラれたのを見た時はいい酒の肴だった

３５：ふぁんふぁにど1
彼女達は顔が同じであってもそれぞれが尊重されるべき個々のアイデンティティを持っています。サイナちゃんと同一視するのは非常に失礼

３６：重曹軍曹
そもそも征服人形達、例の動画のサイナと比べて感情硬いんだよなサイナちゃんだけ何か特別なのか？

３７：マフラ
重要参考人が未確認生物だから謎だけが膨れ上がる

３８：ぺむてりお
ふぁんさん本当日本語上手くなったな……
征服人形、強敵相手じゃないと使用許可が出ない大火力武装があるのロマン過ぎて強敵に挑みたくなるんだよなー

３９：ガブリー・ファング
レイドとかエクゾーディナリーとか強敵コンテンツ増えてきたしなー言うほど必殺じゃないけど

４０：ダムロックビーバー
フル詠唱攻撃魔法一、二発分と考えたらダメージソースとしては充分だろ

４１：ラムダラム酒
結局ドールフロントまでの道も安定しないのがキツい

４２：ヌン
エルフの街を中間拠点にするにしても微妙に遠いんだよな
あとシンプルに迷う

４３：ガモット
征服人形の高クラス武装は基本的に大味大振り大火力だから征服人形以外がヘイト管理しないとまず当たらないし撃てないんですよね～
ただ征服人形二人以上で互いにヘイト管理とアタッカースイッチしまくる戦法は結構ハマる、プレイヤーも二人いるから四人プレイだし

４４：ぺむてりお
征服人形に火力を期待するとプレイヤー側が身体張る必要があるのは上手くできているよ

４５：サザーレ・ストーン
純魔向けの征服人形って誰だかご存知の方いますか？　ｗｉｋｉはウチの回線じゃ重過ぎて該当ページまで辿り着けませんでした

４６：パンクロン・ダフトロック
＞＞３６
ツチノコさんバハムート両方攻略してるらしいし何かしら征服人形イベントがあるんじゃね

４７：ザディア
純魔向けと言ってもカルマの多い少ない攻撃系バフデバフ回復で派生するからｗｉｋｉ頑張って見ろとしか

４８：サイクリーノ
征服人形の本拠地にライブラリが到達したから考察記事上がってたけどやっぱりある程度新大陸でもソロ活動出来るくらいには強くないとそもそも契約してくれないっぽいね

４９：ヌン
凡愚お断り、寄生プレイヤーは泣いた

５０：ラムダラム酒
ドールフロント行き樹海攻略パはなんだかんだ定期的に募集されてるしソロ性能低くても最低限の役割遂行できれば難しい事じゃない……………んだけど、まぁハズレくじ引くと普通に壊滅するんだよなぁ
樹海

５１：マフラ
緋色の傷が誰かに倒されたって噂あるけどアレマジ？

５２：ガモット
マジらしい、どこ探しても見つからないし焼け跡の痕跡も見つからなくなったから樹海から別のエリアに移動したとかじゃなければ誰かに倒されたのは確実らしい

５３：ザディア
まぁ死闘の傷は健在っぽいけどな、あと最近別のエクゾーディナリーも出現したんだっけ？

５４：パンクロン・ダフトロック
希代のクソモンス、パーフェクトクソモンスター、ユザーパードラゴンＬｖ．ＭＡＸと噂の三面六臂くんの話かぁ？

５５：ロンディ
三面六臂はガチでヤバいぞ、あれ緋色の傷よりヤバい。１パーティで倒せる性能じゃない
せめて救いがあるとするなら一日三回くらいしか降りてこないから昼過ぎとか夜中だとエンカ率は低いってくらい。遭遇してヘイト取ったら遺言書書くより先に全滅するレベル

５６：重曹軍曹
それってもしかしてたまーに飛んでる頭が三つで羽が六枚の翼竜みたいなやつ？

５７：冬夜月
そうだよ、ドラクルス・ディノコアトルのエクゾーディナリー
三面六臂と書いてアスラフィームとかいう天使と阿修羅のイイトコどりみたいな名前してる奴だよ
アイツがいるせいで木の上移動して敵避けながら進む攻略の難易度バカ程上がったよ

５８：ダムロックビーバー
エクゾーディナリーの話をしたいなら不世出発見掲示板いけよ

５９：ヌン
ところがどっこいこの婚活スレでも無関係な話じゃないんだなコレがあのクソ天使プテラ、飛んでる奴は最優先で撃墜するんだけど征服人形って前線拠点に来る時大抵飛んでくるんよな。つまり……

６０：ふぁんふぁにど1
征服人形が被害に遭っている、ということですか？それはとても許せない事実です

６０：ヌン
さらに言えばエクゾーディナリーを狩ったらスキル＋征服人形への好印象だよねってことで大規模な討伐隊編成中

６１：シャットアウター
どっかで見た流れだな

６２：マフラ
緋色の傷討伐隊っていう大規模な合同パーティがあってぇ………

６３：ラムダラム酒
ナパーム爆破全滅は酷い事件でしたね

６４：ガモット
いやでも現段階のプレイヤーレベルなら割といけそうじゃないか？
もう空は跳躍力で無理矢理飛んでる軽業戦士と辛うじて浮遊してる魔法使いだけのものじゃないし征服人形もいる

６５：ヌン
遠近攻防一体の六枚羽に１ターン３回行動じみた三つ首のつっつき攻撃、ついでに牙も生えてるから噛みつきもしてくるし木をへし折りながら突っ込んでくる飛行性能持ち
いっそ前線拠点襲ってくれれば数の暴力で戦えるんだけど

６６：シャンパン・シャワーヘッド
［画像］

６７：重曹軍曹
征服人形ってパーティ枠潰すっけ

６８：ぺむてりお
潰す

６９：ラムダラム酒
＞＞６６
は？？？？？

７０：ロンディ
やば

７１：冬夜月
メイド服エルマ型？？？

７２：パンクロン・ダフトロック
やっぱエルマ型なんだよなぁ

７３：マフラ
ていうか征服人形ってこんなドヤ顔カーテシーしてくれるの？

７４：ぺむてりお
いや、こんなドヤ顔インテリジェンスなエルマ型は……この世にただ一人……！！

７５：シャンパン・シャワーヘッド
旧大陸でツチノコさんが出現してメイドサイナお披露目してるんすよ、リアルタイム今、ナウ

７６：ガブリー・ファング
は～～～～～～～～～～～～～～？

新大陸で張ってれば一度くらいは目撃できるかなとか思ってたのに
フットワーク軽すぎて大陸間跳んでるのかよあの人

77：ふぁんふぁにど1
私はこの素晴らしさを表現するための語彙力を持っていないことを
今日ほど悔やんだことはありません
そして誰か私を旧大陸に連れて行ってください

78：ヌン
ちょっとちょっとちょっとちょっと待ってくださいよ待ってくださ
いよ

79：サザーレ・ストーン
メイド服サイナちゃんが現在進行形で動いてるの……？ヤバ

80：パレオパレード
ていうかもしかしてと思って一回ログアウトして見てきたけどツチ
ノコさん配信中やんけー！
旧大陸どうあがいても今からいけないから配信見るわ

81：ロンディ
奥古来魂の渓谷じゃねーか！　走っていける距離なの最高すぎる、
生サイナちゃんスクショしまくってやるぞ！！

82：ぺむてりお
ていうかツチノコさん配信してサイナ見せびらかしてまでなにやっ
てんの？　あの人、どっちかっていうと脚光浴びるの嫌ってるタイ
プだと思ってたんだけど

それは偶像か、それは兵力か、あるいはそれは……誘蛾灯か（後書き）

ドラクルス・ディノコアトル〝三面六臂(アスラフィーム)〟

大体キングギ〇ラだし大体ラド〇。つまり羽が六枚あって首が三つあるキングラ〇ン。

ドラクルス・ディノコアトルの特殊固体、世に出るはずの無かった不世出、エクゾーディナリーモンスター。通常のディノコアトルは二つの頭と二枚一対の翼を持つワイバーンに近い恐竜型モンスターであるが、〝三面六臂〟は厳密には一体のディノコアトルが変質したものではなく、複数のディノコアトルが生まれつきくっついた状態で誕生し、奇跡的に生存した個体であると推測される。

所謂結合双生児というものであるが、三つある首のそれぞれが個別に意志を持っているような振る舞いを見せることがあり、あるいは三つ子のディノコアトルが一個体として合体した存在なのかもしれない。

通常種の単調な動きとは一線を画する三つの首同士の極めて高い連携による怒涛の攻撃に加え、大樹に激突してもほとんどダメージを受けない翼竜型のモンスターとしては異常なまでの耐久力。

そして極めつけは硬度と柔性を両立した鱗翼膜を盾として肉体を覆うことで外敵の攻撃を遮断する防御、逆に飛翔による推進力によって翼そのものを敵に当てることで叩き斬る翼による斬撃のような突進攻撃など……総じて、極めて高い戦闘能力に飛行能力を兼ね備えた樹海の頂点捕食者の座を狙う新たな強者であると言える。

ぶっちゃけネタバラシすると四つ子が一個体になっています、ディノコアトルの基本的性質として頭部ではなく胴体に脳があり、これが四体分の脳が一塊になった状態であるため色竜並の巨体とアホみたいな戦闘力を獲得した。

それぞれが頭を一つずつ担当しており、もう一体分の脳が翼の制御に専念している。

気になる戦闘力ですが、死闘の傷や緋色の傷とはほぼ互角です。フィジカルスペックは傷ズの方が上ですが、その差を埋めて余りある飛行能力がヤバすぎるんですね。弱点は背中、翼の関節がそっちまで曲がらないので上を取って大火力を叩き込むことで地面に落とせる…………んだけど、自在に動く三つ首と六枚羽でギョルンギョルン暴れ回る巨体の背中を取るのが至難の業っていうね。バレルロールしながら突っ込んでくるんじゃない！

不世出よ、世にはばかれ（前書き）

仕事の息抜きの仕事の息抜きの本編更新

652：スワロースパロー
食らえっ！　霧幻萌踊！！（高速足踏み）
見た目間抜けだけどスキルで幻影作るから屋外だと普通に強いんだよなアレ

653：道端のタンポポ
パイの種類はあっても母数が少なすぎるんよエクゾーディナリー
再出現間隔はともかく出現場所がランダムだから張り込みも事実上無理だし

654：ベーカリー
そして強いモンスターのエクゾーディナリーはさらに手がつけられない、と
あとなんかエクゾーディナリーじゃないけど妙に強い個体とかもいるから紛らわしいんだよ、主に新大陸のアレとか

655：クラマクライマー
霧幻萌踊は屋内だと完全に死にスキルになる以外は霧幻萌妖の倒しやすさも含めて破格のスキルではある

656：ドリルサーモン
トキシックイーグルのエクゾーディナリーがいるってマジ？　あのドグサレバードに？

657：スワロースパロー
正直エクゾーディナリー関係はガセネタも多いから分からん

名前が薬積無効だっけ？一定回数以上の回復を封じてくるって話だけど

658：ドラグベル
ゴブリンにもエクゾーディナリーいるしライブラリのまとめ待ちなところある

659：対人大神
エクゾーディナリーってリキャストクソ長くて実戦に耐えないって奴だろ？倒す旨味ある？

660：ダリヴィンチ
素材がオンリーワンだからソロで倒せばエクゾーディナリーモンスター素材で一式装備も夢じゃないぞ
まぁ一式装備作れるくらい素材落とす大型モンスターのエクゾーディナリーとか大概クソやばい性能なんだけど

661：ハリケーンスライス
輪郭の騎士のエクゾーディナリーとかなんだよあれ、物理的にデカくなるだけだろ

662：ベーカリー
未だにあの透過線画ヤローの倒し方分からんわ

663：オールマスト
輪郭の騎士〝拡大解釈〟ならこの前倒されただろ、新大陸出戻りのアタッカー十五人で袋叩き

664：ハリケーンスライス
マジか、マグニフィセント倒されてたのか。スキルは？

665：ヒッシャーフ・メイ
拡大改尺、射程伸ばしスキルみたいなやつ
ナイフも大剣サイズまでヒット判定が伸びるんだと

666：道端のタンポポ
純近接アタッカー必須スキルでは？

667：ドラグベル
リキャスト数日単位だから切り札性能低いエクゾーディナリースキ
ルは全部微妙評価なんだよなあ

668：ラクト
言うてそんなに切り札になるようなスキルある？　知ってる範囲だ
と大体補助技のイメージなんだけど

669：オールマスト
ストームワイバーン〟威風堂々〟をご存じない！？
神秘の剣と剣聖が血眼になって張り込みするレベルの超人権エクゾ
ーディナリーを！？

670：ダリヴィンチ
偉風導動はクソ強いよなあ、二刀流なら両方の武器に適用されるか
らジェットエンジン代わりに空飛べるし

671：タラバニコミ
攻撃防御加速回避全盤面で役立ちすぎるからクソ長リキャストすら
デメリットにならないからな
それに愚者アルカナム使えばリキャスト半減だし

６７２：カイセンチャーハン
偉風導動持ってるけどマジで使い勝手いいぞ
ただやっぱリキャスト長すぎてケチって死ぬ、っていう死因が増えたけど
でもこれ五分十分で使い回せたらゲームバランスぶっ壊れるからしゃーないなって割り切れるくらいには強い

６７３：フレームフレイム
新大陸のエクゾーディナリーはマジで戦闘力だけならユニークモンスター並だから勝てなさすぎてハゲる

６７４：炬燵要塞
そもそも遭遇できないんですが

６７５：タラバニコミ
誰かが倒した日時を特定して次の出現までのスパンを把握して張り込むのが一番遭遇確率高いぞ
俺はこれで三回遭遇して三回負けた

６７６：ドラグベル
遭遇できることと倒せるかはまた別問題っていう
三面六臂とかもうただの怪獣だぞ勝てるかあんなの

６７７：ハリケーンスライス
エクゾーディナリーはもう武器かアクセサリー作れたら御の字、くらいの気持ちで大規模パーティ組んだ方が絶対良い
素材目当ては不毛過ぎる

６７８：ラクト
倒しやすいエクゾーディナリーは小型系ばかりだからなあ

ていうか誰かエクゾーディナリーモンスター素材で武器作れた奴いる？

６７９：ダリヴィンチ
マジョリティ・ハウンドのエクゾーディナリーからアクセサリー作ったけどソロプレイヤー専用みたいなのが出来て笑ったわ
パーティ組んだら弱体効果入る

６８０：熱燗絢爛
ハードラッグ・ライノ〝勇央邁進〟を奇跡的に初見二人討伐成功して装備作ったけどデメリットとかコストがあるけどそのモンスターにちなんだ特殊効果付く感じ

６８１：クラマクライマー
自然な流れで知らないエクゾーディナリー自慢されたか？？？

６８２：道端のタンポポ
詳細求む

６８３：熱燗絢爛
ハードラッグ・ライノのエクゾーディナリーで読みは「バーバリックチャージ」、回避完全に捨ててひたすら突っ込んでくる感じで大型モンスターの割には倒しやすい部類
ただ魔法使いとＤｏＴ戦士で削ったからタンクが受け止めたらどうなるかは分からん、ちなみに掠っただけでそこそこ防御力あるアタッカーがＨＰ半分消し飛んだ
スキルは「勇王邁心」、回避できない代わりに大半のダメージで怯まなくなるスーパーアーマー付き突進
剣士のやつは一式装備作ってたけど「敵に対して真っ正面を向いて前進してる時だけ装備重量が軽減される」みたいな効果がついたら

しい
俺は純魔だけど折角だしって事で大盾作ったけど正面から受け止めればＶＩＴとかに補正入るから案外純魔でも役立ちそうな装備で嬉しい

６８４：ドラグベル
盾タンクワイ、憤死

６８５：フレームフレイム
タンク人権エクゾーディナリーじゃん！！

６８６：ヒッシャーフ・メイ
タンクじゃなくて鎧ガチガチに固めるタイプの重装甲アタッカーが狂うやつ

６８７：ダリヴィンチ
スキルより装備の方がヤバいだろこれ、重量軽減で防御力据え置きならマジで乱獲されるぞ

６８８：熱燗絢爛
隣にそいついるから聞いたけど据え置きだってさ

６８９：ドラグベル
祭り確定

６９０：道端のタンポポ
倒しやすい大型エクゾーディナリーってだけで張り込みプレイヤーめちゃくちゃ増えそうだな………

６９１：ラクト

やっぱり初見突破が一番おいしいんだけどなぁ……

692：熱燗絢爛
それよりツチノコさんｖｓガル之瀬の一騎打ち凄くないか？　互いにエクゾーディナリースキルの打ち合い

693：対人大神
スキルだけでも獲得出来たら儲けもん過ぎるから張り込み競合じゃなくて横入りが爆増しそうだ

694：ベーカリー
＞＞692
なんて？？？？？

695：ドラグベル
ガル之瀬ってあのガル之瀬？

696：スワロースパロー
どういう組み合わせだよ

697：熱燗絢爛
今旧大陸でツチノコさんとガル之瀬がガチＰｖＰやってるんだけど知らなかったのか？　なんていうか異次元の戦いになってる
今丁度ガル之瀬が二回目の蘇生した

698：ドリルサーモン
ガル之瀬、現時点で三つくらいエクゾーディナリー使ってるっぽいんだけど配信の裏でどんだけ狩ってたんだよあいつ……

699：ベーカリー

何が起きてるんだ

不世出よ、世にはばかれ（後書き）

今回出てきたエクゾーディナリーまとめ

・輪郭の騎士（コントゥアル・ナイト）„拡大解釈（マグニフィセント）"
単純にサイズが巨大、なおかつ線が薄い「隠し腕」による四刀流という初見殺し要素も兼ね備えている。輪郭の騎士に共通する魔法無効、かつ輪郭しかない故に刺突系の攻撃を実質無効化しているので「サイズの割に攻撃が当たらないくせに相手の攻撃は広範囲にヒットする」という理不尽を強いてくる。
よく見ると「巨人王」と謳われた古代の王（通常の一号人類）と似たような意匠の鎧兜であるらしいが……うーん、でも伝説というのは得てして語り継がれる中で内容が誇張される事もあるしそれの影響なのかな？

・トキシックイーグル„薬積無効（トレランス）"
通常種とは異なる毒を散布し、対象が使用する薬……ポーションなどの効き目を減衰させていき、最終的には回復ポーションの効果を無効化してしまう。同族に対しては、毒に対する免疫が無効化されて自滅させられるという強力な天敵ではあるのだが、逆に言えば同族メタに能力が尖り過ぎてプレイヤーからすると原種より弱くなっている珍しい例。ただし獲得できるスキルは対人戦において極めて強力。

・ストーム・ワイバーン„威風堂々（リーガルック）"
フィフティシア近辺に生息する頂点捕食者ストーム・ワイバーンのエクゾーディナリー。筋肉と骨が異常発達しており、通常種と比較して二倍近い大きさを誇る。特殊能力が殆どない代わりにひたすら

全てのスペックが高すぎる、というシンプルであるが故に攻略の難易度が跳ね上がった怪物。放っておくと自身の筋肉と骨に内臓が潰されて死んでしまう儚い生態。
スキルも「剣に高出力の竜巻を纏わせる」というシンプルなものだが、いくらでも応用が利く上に二刀流だと両方の剣に適用されるということが発覚して剣聖や神秘の剣を目指す、あるいは既に到達したプレイヤーによって血眼で捜索されている…………ちなみに再出現スパンは二週間に一回。

・ハードラッグ・ライノ〝勇央邁進(バーバリックチャージ)〟
元々突進に特化したようなハードラッグ・ライノがさらに突き進むことに全てを捧げたかのようなエクゾーディナリー。通常種と比較して五倍以上の出力を誇る恐るべき強心臓による突進力の代償として、心拍が一定数値を下回ると心臓が止まるというデメリットを抱えてしまった。十分くらい草を食んでるだけで命の危機、熟睡なんて論外という可哀想な生き物（身体が成熟に近づくほど心臓が発達し続けてしまった異常個体。なので成体になってからが短命すぎて不世出、というタイプ）
ただし、強心臓から全身に送られる血流に含まれた魔力が発汗と共に大概に排出される際に、触れたものを引っ張る性質を持つため、突進に僅かでも掠ると触れた部位を引きちぎる勢いで引っ張るため、実は真正面から受け止めるより大きなダメージを受ける。

前日：Ｓｔａｎｄｂｙ↓Ｒｅａｄｙ（前書き）

某所で見かけた「全然更新しないからもう完結してるもんだと思っとったわｗ（意訳）」が逆に硬梨菜の逆鱗に触れたッ！

前日：Ｓｔａｎｄｂｙ↓Ｒｅａｄｙ

◆

世を捨てた覚えはない、世が俺を捨てたのだろう。
ならばかってぇ床の上でホルモンなめなめする時間は終わりだ、人の世に帰還しようではないか……

「あ゛ーーーーーーーーーーーー…………………………クソ疲れた」

本当にギリギリだったが、なんとか仕上げが間に合って良かった。
蜘蛛の頭を毟り取ってゴリラの上半身をくっつけたかのようなむさっ苦しいアラクネもどき………たしか名前はプラトン２－６だったか……巨大で生態系に真正面から喧嘩を売っているような非合理の怪物が倒れ伏す。八脚で高速移動し、ゴリラ部分の剛腕を機動力分の加速上乗せで振ってくるパワーとスピードを両方組み合わせたら最強のパワーになるよねと言わんばかりのシンプル・フィジカル・モンスターだ。

『………驚きました。ええ、本当に驚きました。プラトン２－６は特殊な能力こそ獲得していませんが、それ故に純粋なフィジカルスペックのみで第二次試行の序列六位となった個体。それを単独で倒しきるとは…………』

「言うてパワーとスピードはヤバかったけど、体力はそんなに無かったからな………あったまいてぇ………あのナリで俺と同じ避けタンク系だったとは………」

『相性、対策で有利を得たところでどうにかなる性能差ではない筈ですが……』

相当にショッキングだったのかドン引きした様子の「象牙」を眺めつつ、俺はステータス画面を確認する。
そこに表示されている理想的な文字列に俺はにんまりと笑みを浮かべつつ、ステータスを閉じる。

「あんな不合理合体型なんて、接合部を狙い続けていれば普通に裂けて死ぬだろ……同速なら小回りの利く方が有利だしな。それでも時間かかりすぎだし何回も死んでるけど」

このゲーム、良くも悪くもモンスターとの戦闘に時間制限も何も無いのがな。やろうと思ったら一日中同じモンスターとひたすら戦い続ける事も出来るだろう。それとなにより、次の階層に行くための試練としてのギミックモンスター故にそこに存在し続けるから再戦時に体力引継ぎってのがこっちに有利過ぎる条件だ。

『しかし、戦闘中明らかに効率的ではない動きをしていたようにも思えますが？』

「まぁ…………実は勝つのは二の次だったりするしな」

俺の言葉に「象牙」の表情が疑問のそれになる、だが本当にそうなのだから仕方がない。
色々スケジュールが詰まっているというのにわざわざここに来て明らかにソロ用ではないモンスターと殴り合いしているのは、「安定して遭遇出来て」「めちゃくちゃ体力が高くて」「ある程度性能の事前調査が可能」な敵、という条件をほぼ全て満たせるのがここだ

ったのだ。

「ステータスはもうほぼ理想の数値に到達してるし、エタゼロ直伝の肉体いじりでポイントステータスじゃないスペックも調整済み」

もはや改造人間だな、ファンタジー世界観はどこへ行ってしまったのか……月にでも旅立ったのかな？

「あとはスキルをどこまで鍛えられるかってワケだ」

スキルの再取得、スキルの強化、進化、連結………そもそも一体どれほどのスキルが存在するのかすら未だに底が見えないシャンフロ世界において、スキルビルドはエンドコンテンツどころかエンドレスコンテンツだ。終わりが見えない強化の道のりを今ここで極めるつもりは無いが、それはそれとしてちょっとした〝気づき〟を得てしまったからには、出来るところまでは鍛えておきたかった。

プレイヤーの行動によってスキルの獲得、強化、派生が起きる性質上、基本的にある程度仕上がったプレイヤーのスキルはそのユーザーのプレイスタイルに寄り添ったものになる。だから「それ以上」を求める必要性が薄れてくるのだ。

だからこそ、エルクという金さえ積めばスキル関連で色々やってくれるＮＰＣとの繋がりがあったが故に俺はそれに気づけたのだ。いやもしかしたら大部分のプレイヤーからすれば周知の事実かもしれないんだが。

――このゲーム、真に重要なのはレベル付きのスキルの方だったのだ……と。特になにかしらの神の名前が含まれたスキルの中でもレベルがついているものは特に重要度が高い。なにせレベル付きのスキルは………合体可能だからだ。言い換えれば、スキル合体はレベルアップによるオートのスキル派生とは異なる、プレイヤーのマ

ニュアル操作で派生可能なスキル獲得なのだと。
ステータス画面を見ながら邪悪な笑みを浮かべていた俺だったが、「象牙」はそれを知ってか知らずかあくまでも会話に沿った返答をする。

『なるほど、要するに…………実戦的なサンドバッグを求めていたと』

「なんか文句あるかよ？」

ぶっちぎりで倫理観が欠如していると俺は思っている「象牙」に、自身が作り上げた作品をサンドバッグ代わりにされたことが不服かと問えば、返ってきたのは微笑と否定だった。

『いいえ。貴方が為したことは確かに人類が霊長たる道のりに刻まれた一歩なのですよサンラク』

「ああそう……」

『ただ…………』

ただ？
おびただしい数の元プラトン２－６(ドロップアイテム)をいそいそと回収していた俺に、「象牙」はなにやら含みのある態度を見せた。プラトン２－６が倒された何か不都合が生じた、というよりも俺がプラトン２－６を倒せてしまったからこそ不都合が出た、と言わんばかりの態度だ。

『パーソナルデータからサンラク、貴方がウェザエモンと遭遇していることは把握しています』

「しれっとプライバシー侵害された？？？」

『ウェザエモン・アマツキは最強のいち個人でした。ベヒーモス、リヴァイアサンの全人類。そして戦場で散った者、生き残った者……果ては人類を敵視した「奴ら」ですら、ウェザエモンというい ち存在の強壮たるを認識せざるを得ない程に。それはウェザエモン・アマツキという存在の認識を高め続け……そして、彼の失踪がかの時代における致命的な破局の一つだった』

ウェザエモン、なんだか随分と久しぶりにその名前を聞いた気がするぜ。いやそうでもないか？　直近の記憶と疲労がキツ過ぎて何もかもが遠い過去のように思えてくる。

『……「勇魚」はウェザエモン・アマツキのケースを再現することを望んでいるようですが、私としてはそれには反対なのです』

「何故？」

どちらもそれなり以上にはコミュニケーションを取っているので「勇魚」が二号人類（プレイヤー）個々人の強さを求めているのはうっすらそんな気はしていたが、逆に「象牙」はそれが望ましくないと言う。

『霊長とは一個人の繁栄に留まっては為せぬもの……種としての継承と世代を前提とした強化を以て人類種そのものをこの惑星における頂点種族としなければ。人類に何よりも求められているのは継続的な勝利なのですよ』

「勇魚」の主義も含めて要約すると、だ。

神代の時代においては装備が画一的だったが故に、それに「慣れた」始源の勢力によって人類は圧し潰されてしまった。神代最強の個人

ウェザエモンが途中でバックレたのも敗北に大きく近づいた原因の一つだろう。
故に「勇魚」は次の世代の人類たる一号、二号人類に没個性ではない強さを求めている。雑兵千人と一騎当千の英雄千人では天と地ほどの差が出るしな。
だがそれに対して「象牙」はひとりひとりが強くなったところで、そいつらが全員いなくなったら次の世代はどうするんだ？　と言っているわけだ。極論だがプレイヤーが全員引退したとしたら残ったNPCはこの先を生きていけるんか？って事だろう。
……そういうのはプレイヤーじゃなくて運営のシナリオ班に言ってもらえます？　としか言いようがないのだが、そんなメタネタをぶっこんだところでイベント進行に良い影響が出るとも思えない。あとシンプルに脳が疲れているので賢い答えが算出できるだけの知能がない。

「まぁなんだ、世の中みんな肩を並べてよーいどんしてるわけじゃないんだ。遅かれ早かれの差はあっても人類はなんとかなるだろ」
というわけで「まぁなんとかなるっしょ」とぶん投げるような回答でお茶を濁す。

『………そうですね。まだまだ貴方達は幼い、事を急ぐにしても早すぎるのでしょう』

パーフェクトなコミュニケーション、って感じではなさそうだ。だがとにかく疲れているし、スケジュールも詰まっている。後ろ髪を引かれつつも俺はベヒーモスを去るのだった。

前日：Ｓｔａｎｄｂｙ↓Ｒｅａｄｙ（後書き）

スキルの中でも流派ではない特定のカテゴリに分類されるスキル
基本的にレベルを持たないある種完成されたスキルとは異なるレベルを持つスキル
成長し、他のスキルと混ざり合う事で新たな姿へと変化するそれはこう考えることもできるのではないだろうか。
同価値の１＋１ではなく、特別な「１」を異なる姿に変化させるのだと

要約：コンタクト融合の固定素材の方みたいなもん。

……
あのスキルを素体に〇〇神スキルを量産できるんじゃねぇの！？
というサンラク君の悪い企み

当日：Ready↓Steady（前書き）

当然！「更新」だッ！！前話から連続する「更新」ッ！それが流儀

イィッ！！

当日：Ready↓Steady

……

…………

……………

翌日

「いつも通りっちゃそうだけど、生活リズムがガッタガタだ………」

年末年始はともかく一月ひと桁日が終わるまでには生活リズムを整えないと酷いことになりそうだ。
日中ぐっすりと眠って軽くストレッチをして栄養補給、そうやって今……12月20日午後17時から深夜に向けてピークタイムに向かうよう活動時間を調整した俺は、シャンフロにログインしてのそのそとエイドルトの宿屋でベッドから立ち上がる。

そもそも、今の俺の主目的はクリスマスというリアルにおける一大イベントとダブルブッキングする形で総攻撃を仕掛けてくるらしいあんにゃろーにお礼参りすることだ。故に本来、旧大陸に来る必要は無かったのだが………これでも一応クラン所属、そして【旅狼】が王国騒乱に関わっている以上、俺もいつまでも無視を決め込むわけにはいかないわけで。
ペンシルゴンに半分脅迫交じりの招集命令をかけられた俺は、奴からとあるミッションを押し付けられた。

「最終日のラスト六時間、ありったけ目立て………ねぇ」

一見して「サボってた分せめて最後くらい派手に働け」と言っているようにも見えるが、これを言われたのはつい先日だ。その場ですぐ出てこいではなく最終日のラスト六時間という時間指定までして………このやり口にはなんとなく〝既視感（デジャヴ）〟がある。

まぁなんにせよ、こっちもこっちで好都合な面もある。相手陣営の主導をしてるのが確か大人気配信者なんだったか、奴らが釣れれば万々歳なんだが………

そんなことを考えながら裏路地を通ってこの街に存在する「蛇の林檎」に入店。あいかわらずコピペしたように同じ顔の店主に軽く手を上げて挨拶しつつ、店内の隅の方にあるテーブルへと向かう。

「待たせたか？」

「ううん、今来たとこっ」

「そういうことにしたいなら机の上は片づけてもらっておくべきだったな」

机の上に空の料理が並んでいる辺り、まぁ嘘だろう。とはいえ今回はこいつにもフルタイムで協力してもらうので今回ばかりはそんなに邪険にも扱えない。

「というわけでまぁ、改めて………今回は協力してくれて感謝する。イムロン………あと、ディープスローター」

「まぁ、こっちもボランティアってわけでもないし構わない。準備は………まぁ、感謝の一つでもなけりゃキレそうなくらいにはきつかったが」

「んふふぅ……もう私無しじゃあいられない身体になっちゃったんだネ、サンラクくぅん……私色に染まっちゃったんだァ……中の中まで……」

まぁまぁまぁ落ち着け。如何にコレ（人物を指す）がアレ（精神的異常を指す）であっても今回ばかりは我慢だ我慢。まだアラドヴァルを抜くのは早い。無骨なおっさんのロールプレイのつもりなのか、背もたれに深く腰掛けて何故かずっとジョッキを持っているイムロンと、くねくねしているディープスローターに視線を向けつつ……当初の予定には含まれていなかった人物にも視線を向ける。

「で、あんたは何で同行してくれたんだ？　エリュシオン」

「いや、特に何をするわけでもないんだが千古不易の実戦データを集めておきたくてね」

成程、いてもいなくてもどっちでもいい枠と。とはいえ例のメイド服はこれから飽きるくらい実戦テストするわけだし結果を聞くよりは実際に見た方が良い、ということだろう。

「それならサンラク、ちゃんとわ、俺が作ったトラディション＆レボリューションも使えよな」

「はいはい」

「私も使っちゃう？」

はいはい。マジでぶっ飛ばしてやろうかなこいつ……いや我慢我慢我慢。おっと指が滑ってアラドヴァルをインベントリアから出して

しまった。

「エリュシオンは見学として……今回は王国騒乱イベント最終日、そのイベント終了時間21日0時まで6時間ぶっ通しで奥古来魂の渓谷を……封鎖する」

俺の言葉に、計画を聞かされているイムロンとディープスローターは特に反応を示さないが、特に計画と関係なくついてきたエリュシオンは露骨に疑問符を浮かべた。

「それは……現実的な話ではない、のではないかな？　確かに奥古来魂の渓谷は一本道のシンプルなマップではあるが……広いぞ？」

「まぁ、そうだな」

奥古来魂の渓谷は確かに他のエリアと比べると恐ろしくシンプルなマップだ。なにせ馬鹿正直な一直線だからな……普段なら瘴気によってスリップダメージが発生する中、シンプルなマップ故にすぐにこっちを見つけてくる上にやたらしぶといアンデッドモンスターを相手にしないといけないというエリアだ。（崖の上に関しては論ずるまでもない、崖の下を半裸で突っ走る方がよっぽど踏破率は高いだろうよ）

だが今回のイベント中はボスモンスターが出現しない、それはこのエリアの瘴気を生み出している発生源である（厳密には瘴気を生物に対して有害なものにしているのがあのハミング骸骨なんだったか）エリアボスが出現しない。つまり今の間だけは視界を微妙に薄暗くするただの靄でしかない。

いやそういうのはどうでもいいんだ。重要なのはただ一点、奥古来魂の渓谷の崖下一本道の横幅は一人二人が両手を広げた程度で塞げ

るほど狭くない、という一点のみ。ここを物理的に封鎖する、ってのは……まぁ、あまり現実的ではないな。やるとしても二、三人でやるもんじゃないだろう。新大陸で色々建築してる大統領だか超棟梁だかのジョブ持ちを五人集めた上で資材調達班が後ろに二十人くらいいてようやく、六時間の封鎖ができるかどうか……いやそれでも難しそうだな。プレイヤーの突破力はヤバいしそもそも空飛べる奴だってもう珍しくない。

「いいんだよ、物理的に塞ぐが物理的に塞ぐわけじゃないんだ」

「何か腹案があるようだが……その矛盾を一体どう解決するつもりなのか興味が湧いてきた」

エリュシオンはちら、とディープスローターとイムロンを見る。少なくとも俺、ディプスロ、イムロンの三人でそれをするつもりだったのだと気づいたのだろう。

あるいはディプスロの魔法で土石流でも起こすか？それともイムロンがその場で武器を撃ち続けて半永久的な武器リソースで全員斬り倒すのか？

全部不正解。正解は案外シンプルで……戦争とはかけ離れたところにある。

「そんな難しい話じゃない……例えば突然アイドルがゲリライブを始めたとしたら？　例えば未知のど真ん中に「俺を倒したら豪華景品贈呈」って看板と一緒に立ってる奴がいたら？　例えば……でっけぇ人混みが道いっぱいに広がっていたとしたら？」

俺の言葉でエリュシオンは俺達が何をするつもりなのか、おおよその理解を得たようだ。

……イベント最終日なんぞ、サボってた奴かガチ勢しか本気で走らないマンネリのピークだ。なんならログインすらちょっと面倒くさくなるようなタイミングで、今言った全てが一か所で起きたとしたら？

「戦争なんてロクなもんじゃない、とはいえ人間ってのは殴り合うのも誰かの殴り合いを見るのも大好きなもんだ。だったらやればいいのさ、殴り合いのお祭りをな」

さぁ行こうか。本日は１８時から奥古来魂の渓谷でツチノコさん主催の喧嘩祭りだぜ。告知は無いから祭囃子を聞き取って現地集合してくれよな、特別ゲストは今をときめくスーパーアイドル・ドールだ。

「よしいくか」

「私もイきたい！　スパンキングをヘイカマーン！！」

これからすることに対しての、心に結構な割合で残っている羞恥心と面倒くささを両頬をパシンと叩いて振り切る。

「よしディプスロ、ゆっくり振り下ろすから白羽取りしろ」

「あつあつに燃えてるよぉ？」

「いいからほら白羽取り」

刃点火。

「両手が焼けてくゅのぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！　っちょ、サンラクく

ぅん本気で押し込んでなぁい！？　ＳＴＲで勝てないから顔が真っ二つになっちゃうぅぅぅぅぅ！　サンラク君の熱くて立派なもので消えない傷を刻まれちゃうのおぉぉぉ！」

店主に「倒錯的な行いはご遠慮ください」と止められなかったらそのにやけヅラをハーフアンドハーフにできたものを……

当日：Ready↓Steady（後書き）

勇者たちよ、よくぞきた！
星辰は満ちた、祭りの時間だ！
二号人類最速のプレイヤー、変態サンラクは、今、おぬしらを待っている
勇者たちよ、戦いたまえ！誉れと共に大敵を葬り、景品（ヒーン）をその手にするがよい！
さあ、戦祭りじゃ！ツチノコ祭りじゃ！

１２月１９日：敗北の先に、勝利の先に（前書き）

ちょっと短めだけど伸ばすのも蛇足かなと

12月19日：敗北の先に、勝利の先に

◇

「……完敗だ」

単純な力比べ以前の時点に問題があったが、それを差し引いてもぐうの音も出ない完敗だった。
特殊状態「調伏」は命を奪わないが、代わりにスタミナゲージを消費するような行動を一定時間禁止する。物理的にスタミナが殆ど全損状態というのもあるが、この特殊状態はリスポーンすることでしか解消されないのだ。
とはいえ、地面に仰向けに倒れているカイソクが立ち上がりもしないのは、「調伏」の効果以前に精神的な理由によるものだ。

「得難い経験だった。きっと次は無いだろうからね……」

全米一位、と呼ばれているがその強さが北米大陸一つに収まっていないことなど、誰もが分かっている。
間違いなく世界最強のプレイヤーとの対戦経験はカイソクの人生における生涯の中でも屈指の思い出(かがやき)になるだろう。だが、何故だかカイソクは「それ以外」の感情が胸中にあることに気づいた。

「ふふふふふ」

と、勝利者であるアージェンアウル(シルヴィア・ゴールドバーグ)がこちらを見て笑い出した。敗者を嘲笑う類の笑みではないことはなんとなく感じ取れた。だが何に対して笑っているのか。

「なにか………僕が面白いポーズで倒れていたかな」
「いいえ、違うわ。でも貴方を見て笑ったのは事実ね」
カイソクは自身を省みる。少なくとも跳ね起きて走り出す、というのは「調伏」の効果で難しいが身体を動かすことそのものが不可能になったわけではない。その上で、身体を動かさずとも自分が大の字で倒れていることくらいは分かる。一体何が彼女の琴線に触れたのか………少なくとも自分の何かを見て笑ったのは事実なのだから。
だが、カイソク自身が自覚していない答えをアージェンアウルはあっさりと答えた。
「だって………「次はどう戦えば勝てるか」って考えてる顔してるわよ」
「…………………えっ？」
に、と笑顔を見せるアージェンアウルに、カイソクはそこで初めて………自分がアージェンアウルとの戦闘を反芻し、その動きを読み取ろうとしていたことを自覚した。思い出を優しく抱きしめて撫でるような、そんな温いものではない。先の戦闘における一挙一動を思い出し、あの時どうしていれば現在の結果を塗り替えられただろうかと………ずっと、自分がそれを考えていたのだと。
「アメリアも、レオノーラも、クォンもケイも………負けた時や再戦する時にその目をしてる。次は負けない、今日こそ勝つ、そんな目……ファイティングスピリットね」

「そうか…………………………そう、か」

まだ自分にもそれが残っていたのか。いや違う………まだ、圧倒的な格上に対してそれを燃やせるだけの熱が残っていたのか。シルヴィア・ゴールドバーグと戦って、そこで満足するものだと思っていた。それどころか、対戦が終わった瞬間プロゲーマーとして満足しきってしまうのでは、とすら思っていた。

だが、どうやらまだまだ自分も完全燃焼しきってはいなかったらしい。

「Ｍｓ，　アージェンアウル」

「何かしら？」

「きっと……いや、間違いなく僕の方が先に引退するだろう」

「そうね」

それはプロゲーマーとしての寿命もあるし、単純にいち生物としての寿命でもきっとカイソクが先に去る側になる。

「それまでに、また貴女の前に現れるよう努力しますよ。今度は……ギャラクシア・ヒーローズで」

だがそれは、逆説的にカイソクが去るその日までシルヴィア・ゴールドバーグが現役であるという事でもある。ならば挑もうではないか、何度でも……ゴールがあるとしても、どこでスタートするのかは自分で決められるのだから。

己と比べればはるかに格下の、そも彼女が戦うフィールドに一度しか足を踏み入れたことのないチャレンジャーの意思表示に、しかしアージェンアウルは笑みを浮かべた。ギラギラと、ともすればカイソク以上に闘志の熱を帯びた太陽のような笑顔で。

「勿論。その時は私も受けて立つわ」

そこで終われば再戦を誓う爽やかな終わりにも見えたかもしれないが……そこで、カイソクはふと思い立った。これでも一応新王陣営に属していた身、シルヴィア・ゴールドバーグが所属しそうな前王陣営と敵対していたからとこちらに所属したが……主義主張の善悪はさておき、あちらから見ればこちらが敵なのは事実だ。
その上で、正々堂々と戦って負けたのならば……敵役（かたきやく）として、なにかこうすべきではないのかと。

魚臣慧（オイカッツォ）に対して情報をリークしていたのは間違いなく裏切りのそれだが……こうもはっきりすっぱりすっきり負けたのならば、多少あちらに情報を渡してもそれは潔さではないか、と。
それはある種英雄的なアージェンアウルと戦ったからかもしれないし……本気でヒーローとヴィランが戦うゲームで生計を立てていたからかもしれないし、あるいは単純に改崎自身がギャラクシア・レーベルのファンであるからそういうお約束に弱いからとも言える。

「ところでアージェンアウル。王城の警備に〝穴〟があるのは知っているかい？」

ので、カイソクは新王陣営として作戦会議に参加していたからこそ気づいた重要情報を、綺麗さっぱり吐き出すことにした。コミックのヴィランがやるようなことを、自身がその立場になってやること

に感動しながら…………

カイソクに一つだけ……そう、一つだけ誤算があるとするなら。
それを聞いたアージェンアウルがオイカッツォにその情報を共有することで、最終的に………そう、よりにもよって誰に情報が届いてしまうのかを、知らなかったという事だ。

１２月１９日：敗北の先に、勝利の先に（後書き）

へぇ、新王陣営は本拠である王城に警備を固めていると。まぁそれは当然だね、流石にそこを手薄にするのは奇策過ぎるし

何々？でも新王陣営は万が一の際、迅速な逃走をするために意図的に封鎖が甘い城門がある………へぇーそうなんだぁ…………前王から聞いてた秘密の抜け道はブラフで爆弾系アイテムが敷き詰められている、ねえ………そうなんだ………

そうなんだ。

ああそうだ大公閣下、それにトルヴァンテ陛下。ちょっとお聞きしたいんですけどぉ………王城って対空兵装とかってあるんですか？

12月19日：剛機禍弾

RS：◇「殲顎緋砕（センガクヒサイ）」のブースターが咆哮を上げて推進力を生み出す。

全身を覆う攻勢装甲は敵からの攻撃に対して防御力で受けきるのではなく、多少の破損を前提とした上で自身の動きを阻害しないギリギリのラインで受け流す、攻めの為の護身だ。

的確に顔を狙う弾丸を前傾姿勢で伏せられた額の装甲で受けつつ、一気に距離を詰める。脳を揺さぶられる感覚に気絶の状態異常を危惧するが、ことこの戦術機においては停滞はコンセプトの否定を意味する。

『…………っ！』

『あっぷね！』

中距離から近距離レンジまでを一瞬で詰め、その速度のまま全力でぶん殴る。機体が致命的な損傷さえ受けなければ、装着者が戦闘不能にさえならなければいい。攻めきって倒しきる。当人に明かすつもりは無いが、とあるプレイヤーの装備とバトルスタイルを参考にした殲顎緋砕（センガクヒサイ）の剛腕は……しかし、当たらない。

奇しくも殲顎緋砕（センガクヒサイ）と同様のコンセプト……「短距離を高速で移動する」という敵の戦術機の機動力によってすんでのところで回避されているのだ。

『ひゅーっ、こえー！』

（どの口が、）

あまりガラの悪い素振りをするわけにもいかないと、心の中でのみ毒づいたルストは左右にステップを入れながら怒涛の勢いで放たれた弾丸を回避する。

弾丸が狙う場所は頭だけではなく、肘や膝といった関節部を狙うこともあれば、あえて装甲の厚い部分に二発放ったかと思えば拍子をずらした弾丸が急所を狙い撃つ。

ずんぐりむっくりな鋼のカウボーイが物凄い速度で回避行動をしている様はどこか滑稽さも感じるが、その両手が構えた銃から放たれる弾丸の狙いはいやらしいほどに勝利に真摯だ。

（厄介。想定の二倍……いやそれ以上に）

ルストは、自分こそが現時点で最も戦術機に詳しいプレイヤーであると自負している。故に敵の戦術機がそう大したものではない事を理解している。

性能が極端に劣っている、というわけではないがプレイヤー自身の設計品ではなく既製品のパーツの組み合わせによってカスタマイズされたものだ。

各部のブースターは短時間に大出力を発揮するタイプだ、形状を見れば分かる。それは即ち瞬発的な回避に特化しているために距離を稼ぐことは不得手ということだ。戦術機を装備した上でＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団の他のメンバーたちの許に遅参していたのはその持久力の無さ故だろう。

武装は実弾型戦術機用リボルバー、ＳＦ的な世界観から逆行するような物理的に弾込めをする必要がある回転式拳銃だ。威力は対戦術機としては申し分なく、しかし一発ごとに引き金を撃たなければ発砲できない。

それらの情報を全て纏めて総括すると、敵の機体は近~中距離戦に秀でており、中距離を維持することで近接攻撃から逃れつつ射程の暴力を叩き込む、という見た目通りのガンマンスタイルという事だ。殲顎緋砕（センガクヒサイ）との相性は良くはない。否、相手から見れば相性の良い相手ということになるだろう。この緋色の拳は中距離以上の武装を搭載していない、それはつまり距離が開いている時点で最たる攻撃手段が封じられたという事なのだから。

だがその上でルストは「まぁ勝てるだろう」と考えた。
ベストパフォーマンスを十全に発揮できることなど稀だ、「上振れ」という概念があるならば当然「下振れ」の概念も存在する。そしてルストは自身の下振れを祈って、あるいは狙って挑んできた相手のことごとくを打ち倒してきた。相性不利程度で止まるような戦いはしない。

が、蓋を開ければこと眼前の敵に関してはルストをして「極めて厄介」としか言いようがなかった。それこそ、今すぐにでも殲顎緋砕（センガクヒサイ）から別の戦術機に着替えたいと考えてるくらいには。

（狙いが恐ろしく精密、弾幕が途切れない、何よりポジショニングがイラつく程に上手い）

常に移動しつつ、ルストからは離れ過ぎず。どれだけ不意を突いても必ず自らも動いて距離を維持する移動技術……そして動いていようが止まっていようが、拳が眼前に迫っていようが引き金を引く指は怯えず、竦まず、何より軽く動く。
映像で見た印象と実際に相対した印象に差が生じるのは珍しい事ではないが、敵……エクレアというプレイヤーを相手にしてルストはその差を強く感じていた。何気ない、ともすれば非効率的にすら思える挙動すらもがこちらの命への王手となるような……

そして何よりも厄介なのが敵の戦術機、その手首の辺りで動いている虫の足のような細いマニピュレーターだ。

（あれはオートリロードサブマニピュレーター。拳銃サイズの銃火器をオート装填（リロード）するパーツ……）

それも虫の足のようなマニピュレーターがわっせわっせと一発一発物理的に弾込めする、という極めて非効率的なパーツだ。しかもやたらめったらに高額。
基本的にそれがロボットのパーツであればとりあえず活用法を考えた上で評価するルストですら「弾込めしているマニピュレーターの動きが健気で可愛い」以上の感想が思いつかなかったような……控えめに言って、ネタパーツであった。

なにせ、一発一発マニピュレーターが装填する時間を待つくらいなら、そもそも同型かつ弾が全装填された別の銃を取り出せばそれで済む話だ。仮に六発装填できるリボルバーがあるとして、あのマニピュレーターがリロードする時間とインベントリから別の銃を出す時間を比較したならば、大抵の場合は後者を優れていると評価するだろう。それどころか、戦術機のパーツ……即ち物理的に存在している物質であるが故に破壊されれば当然その機能は失われる。

脆く、遅く、無駄の塊。だが……一つだけ。そう一つだけ、ルストですら気づかなかった利点があった。

『リローッド！』

弾切れを自ら堂々と宣言しながら、エクレアが左手の銃をリロードする。無論、その隙を見逃すまいとルストは一気に距離を詰め、殲顎緋砕（センガクヒサイ）最大の武装たる鉄拳を叩き込む。

だが、避けられる。ロボを操縦して（厳密にはパワードスーツだが）空振りさせられた、という事実はルストの自尊心に無視できない疵を付ける。こればかりはあまりにも相性が悪かった。

だが、さしものエクレアもルストの速攻には意識を集中しなければならないようで、少なくともルストが攻めに転じている時は攻撃は牽制以上にはならない。

どこかの誰かさんのように、誰も彼もが飛び跳ねながらインベントリを操作できるわけではないのだ……が。

『そっちのターンは終わったかぁ～？　じゃあ次はこっちのターンってな～！』

ジャキン！　とリロードの完了した銃がルストに突きつけられる。エクレアは弾をリロードしていない、視線を向けていない、意識を向ける必要すらない。何故なら弾込めは全てあの頼りない細腕(サブアーム)が担当してくれるから。

インベントリから別の銃を出した方が早い、その方が良い、とルストが結論づけたのはそれが戦況に対する無駄な時間の削減になるから。故に遅く、非効率的なサブマニピュレーターは優先されないだろうと。

（〝集中〟がブレない……！）

だがそれは、ルスト自身が無意識下で……あるいはサードレマに侵攻するＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団を二人で……否、実質的に一人で複数を相手にすると、すなわち一対多数を前提として戦術機を構築、評価していたが故のものだ。

だがエクレアは違う。

そもそもの前提が違う。

ＧＵＮ！ＧＵＮ！傭兵団はサードレマで「多数の」前王陣営プレイヤーと戦うことになるだろうと想定していた中で、エクレアだけは「百人いるならタイマンを百回繰り返す」というコンセプトで準備を続けていた。

無論、相手が律儀に１ｖ１に応えてくれるとは限らない。むしろ嬉々として袋叩きを狙ってくる可能性もある。

『こういうロボ系も悪くないね〜！　シャンフロシステムさいこ〜！！』

……全て承知の上だ。

何人来ようが何人に囲まれようが、一人一人丁寧に迅速にタイマンでキルを取る。電撃菓子（エクレア）３号は＠ＧＧＭＣはそれを想定し、それを実行するためのカスタマイズが施された戦術機だ。

故に、ルストのように「戦闘中に発生する無駄を極力小さくする」ではなく、「どんなに非効率だろうが戦闘中に無駄を発生させない」ことを重視している。

一人で複数を相手にするなら、意識を眼前の戦いから僅かでも割くデメリットを生じさせるとしても迅速にアタックリソースを補充する必要がある。

だがタイマンならば、左腕に意識を向けるよりも左腕を使えない代わりに眼前の強敵に対して回避と右腕での攻撃に集中できる方が良い。

設計思想の違い、奇しくもタイマンという形式にルストが応え、何よりルストが近距離戦特化の戦術機を選んだからこそ。

『ごめんね〜……ここから先はしばらくこっちのターンだぜい』

アドバンテージは敵にある。

１２月１９日：剛機禍弾（後書き）

・オートリロードサブマニピュレーター
片手運用できる銃火器、かつマガジンまたは弾倉装填タイプの武装のリロードをオート、ただしめちゃくちゃ物理的に代行してくれるサブアーム。やたら高額なのは独自のインベントリ機能を搭載しているため（サブマニピュレーターに搭載されたミニ格納空間内の弾丸をサブアームが取り出してリロードしている）
非効率的ではあるものの、プレイヤーが念じるだけでリロードを開始する上、全弾装填しなくてもキャンセルできるので不便だけど便利

例えるなら二秒攻撃できなくてもいいから二秒でリロードを終えたいのがルスト、リロードに五秒かかっていいので片方のリロードをしてる間にもう片方の銃で攻撃を切らさないのがエクレア

どっちが優れてるかはまさに「状況による」、そして現状はエクレア有利ということ

１２月１９日：艱難真紅にこそ笑う（前書き）

〆切が
ああ〆切が
〆切が

硬梨菜

12月19日：艱難真紅にこそ笑う

◇

右が尽きれば左を、左が尽きれば右を。隙を晒せば両方を。
戦術機を砕くに充分すぎる火力が恐るべき精度で撃ち込まれ続ける。
ルストが守勢に回るのにそう時間はかからなかった。

（悔しいけど、殲顎緋砕（センガクヒサイ）じゃ勝ち目が無い……）

兎にも角にもひたすらに相性が悪すぎるのだ、こればかりはルストをしてどうしようもない。

『さぁどうするよ～？　悪いけど、お着替えはさせねぇぜ～？』

既にルストが複数の戦術機を換装して戦っていることは知られている。故に現在の有利状況を維持するためにエクレアは隙を作らない、むしろ絶妙に「殴れそうな」位置にあえて身を置くことでルストの心理的油断すら誘っている。

『……その手には乗らない』

『ありゃ』

ガードの構えで弾丸の猛攻から身を守りつつ、どうにか活路を見出すべくルストは思考を巡らせる。

（十秒。最低でも十秒は隙を作る必要がある。戦術機を解除した状

態であの弾丸を受けたら多分一撃で死ぬ）
防御に秀でたステータスであったならばあるいは耐えられるかもしれないが、ルストは戦術機をメインの武装としている都合上、それを剥いでしまえば残るのは生身だけだ。プレイヤー装備の強化装甲のみでは弾丸を防げない。

（不甲斐ない）

こうも劣勢に追い込まれたのはひとえにルストの慢心が故だ。敵機が殲顎緋砕（センガクヒサイ）と同系統のコンセプト故に、相性が不利になる事は事前に分かっていたはずだ。
ルストは防御の構えでエクレアの猛攻を凌ぎながらも周囲に視線を向ける。十秒の隙を生み出すためには周囲にあるオブジェクトを利用しなくては難しい。

（不甲斐ない……）

何もかもがクリーンな、埃一つ立てない戦いなどできはしない。そも、エクレアが放つ弾丸がめり込んだ家屋が数えきれないほど存在する時点で既に街を無傷とする戦いなどというものは破綻している。故に、ルストが戦術機を換装するために家屋を盾にしようと発想するのは自然な事であった。

（リボルバータイプ、タイプメンの重装甲にある程度有効打を与えられる威力はある。半端に家屋に入っても壁抜きされる）

元より殲顎緋砕（センガクヒサイ）は前のめりな攻めの機体、長時間の守勢に向いたカスタムではない。要所を守っていたが故に守りが疎かになっていた肩のパーツが弾丸によって弾け飛ぶ。

タイプメンは戦術機体を羽織る変形をするため、外装の破損は時にプレイヤーへのダメージ貫通以上に戦闘続行に支障をきたす。
既に殲顎緋砕（センガクヒサイ）は〝勝てない〟から〝持ち堪えられない〟領域まで追い詰められていることを自覚したルストは、脳をフル回転させながら活路を探す。

（相手もこちらが逃げに転じたいのは理解している。フェイントを仕掛ける？　いや、拳一つ分でも距離を空けられたらフェイントは意味をなさない。損傷覚悟で壁をぶち抜いて家屋内に逃げ込む？）

ルストは本当は分かっているのだ、この状況からリスクを最小限にして逃走する方法を。

――緊急廃装（エマージェンシーパージ）。
例外なく有人式であるが故に、緊急時に際して戦術機体を脱ぎ捨てる事で装着者を危機から脱出させる戦術機乗りの最終手段。
ルストはロボのロマンについて人並み以上に熱意を持っていると自認している。故に自爆だとか出力１２０％だとか、そういった「保全と真逆の破滅的な行動」に〝華〟がある事も理解している。
この状況から逃れる最も簡単な方法。それは殲顎緋砕（センガクヒサイ）を脱ぎ捨て、距離を稼いだ後に別の戦術機……対エクレアに有利なものを選ぶ事。

（不甲斐ない……！）

この戦いにおける勝敗はルスト一人の「結果」だけに留まらない。
故にこそ、ルストは勝利を最優先として動かなければならないのだ。
悔しさと、不甲斐なさと、しかしそれでも勝利を考え続ける冷静さが緊急廃装を発動させようとした瞬間……

『――……』

ふと、視界の端に赤い輝きを見た。
直前の衝撃がそれの正体を伝える、それはエクレアによる射撃によって砕け、飛び散った殲顎緋砕（センガクヒサイ）の装甲片だ。
なんてことはない、既に限界を迎えようとしている殲顎緋砕（センガクヒサイ）の打撃拳がひび割れ、その一部が吹き飛ばされただけのもの。シャングリラ・フロンティアの恐るべきリアリティが描いた損傷の描写だ。
だが、それはこのギリギリの防御の中で目まぐるしく思考を続けていたルストの目には、やけにスローモーションに映った。なんてことはない、ただの金属片。それが…………真紅の、羽根のように見えたのだ。

『――――ッ！！』

ただそれだけの目の錯覚が、ルストのプライドを灼熱に燃え上がらせた。
瞬間、ルストの動きから迷いが消えた。目測のみで狙いをつけたルストの拳が電撃菓子３号＠ＧＧＭＣに突きつけられる。
先程までは電撃菓子３号＠ＧＧＭＣとの相性不利故に勝てないから使わなかったそれ……推進機構付き射出鉄拳（ロケットパンチ）を今は勝つために使用する。

『飛んできたぁ～！？』

銃弾並、とは言い難いもののそれでも高速で放たれた鉄拳がエクレアを狙い飛ぶ。だがこの程度の攻撃で戦況を覆せるのならば、もっと早い段階でルストはこれを使っていた。

『当たんないだなこれが～』

ガギン！　と飛翔する拳の軌道が不自然にブレる。それは迎撃として放たれた弾丸が拳を穿った音であり、そして度重なる弾丸に対する防御によってついには砕け散ってしまった。

『……色々作れたものだから、初志を忘れていた』

だが、

ギャリリリ！　と地を這う金属の爬行音が射撃直後のエクレアの耳朶を打つ。何が、と思うよりも……そして何が、と視線を向けるよりも〝速く〟それは電撃菓子３号＠ＧＧＭＣの脚部に巻き付くと、この戦いが終わるまで……あるいはどちらかがこの場より死を以て去るまで決して外れることは無いと言わんばかりに、ガチンと施錠された。

『……結果として負けるなら、それはそれで良い。結果として勝つならさらに善い』

『おいおい………チェーンデスマッチかよ〜！』

電撃菓子３号＠ＧＧＭＣに食らい付いた鎖、直線に伸びているもう片方の先端は殲顎緋砕（センガクヒサイ）の拳を失った左腕に巻き付いている。対大型モンスターを想定した捕獲用、あるいは鎖で捕縛した対象との純粋な膂力勝負による行動阻害を目的とした戦術機装【施錠縛鎖（ロックチェーン）】。ある規格外武装を源流とするそれは、しかし今極めてシンプルな用途のために用いられていた。

『……でも。過程で負けるのは、この緋色に……真紅にかけて許せない』

使ったのなら、身を預けたのなら。どれだけボロボロになろうと勝ってから死ね。ましてや勝利のためとはいえ戦いのさなかに乗り捨てるなど……イベントシーンならともかく、自らの意志でそれを選ぶのは言語道断。そもそも相性不利程度で多少カスタムした程度の量産品にフルカスタムオーダーメイドの自信作が負けてたまるか。
端的に言えばルストはキレた。
これまでずっと引き締められていたルストの口の端が、吊り上がる。
賢い勝利を捨てて馬鹿な勝利を目指す、迷いを振り切ったのならばあとは燃え尽きるまで走るだけだ。

『なぁ～にか逆鱗踏んだかな、これは～……』

逃げない。だが、逃がさない。
左の拳を失い、全身に亀裂を走らせながらも殲顎緋砕（センガクヒサイ）と電撃菓子3号@GGMCは鎖で繋がって相対する。

『……木っ端みじんにしてやる』

窮地でこそ笑う。故にこそ、ネフホロ最強の真紅は勝利者であり続けたのだから。

12月19日：艱難真紅にこそ笑う（後書き）

・【施錠縛鎖（ロックチェーン）】
規格外武装：鋼線型【キープアウト】は帯型の半物理魔力構成体を適宜生成することによって携行性及び再展開による継戦力を高めた傑作であったが、高性能故に規格外エーテルリアクターを前提としたものであった。
故に、【キープアウト】の設計思想を受け継いだ量産型とでもいうべき【施錠縛鎖】はキープアウトを高コスト化させていた要因である「発動の度に帯を新たに生成する」という性質をオミットした純物質の鎖型の武装となった。
当然【キープアウト】と比較すれば耐久などには劣るものの、量産型の戦術機による運用が可能となった事で複数運用による大型敵性の捕縛などが可能となった。
とはいえ、【キープアウト】直系の子孫とも言えるこの【施錠縛鎖】の耐久力は並大抵のものではなく、戦術機が携行可能な通常火力で破壊することは難しい。

結構な速度で対象に微ホーミングで飛んでいき、巻き付いた後に自身を施錠するクッソウザい捕縛武装。外付け武装なのでルストは拳を飛ばした瞬間に装着して射出した。
「エクレアならただ真っすぐ飛んでくるロケットパンチを回避するのではなく撃墜するだろう」という分析に賭けた起死回生の一手。

というわけでコミカライズ版シャングリラ・フロンティア九巻が発

売されました。
表紙は「実はお前そういう感じの色だったんだ」ことＡｎｉｍａｌｉａです。実はお前そういう感じの色だったんだ……まだ拳に相互理解を見出す前の姿ですね、鷲掴む冥府の腕（ハンズ・オブ・タルタロス）も握り拳にしてやろうかなとか思ってたんですけどお前は非実在性の実証されていない死の概念が実在して認識されている生命に対して死の側に招こうとしてるけど出力不足でレジストされてるから押さえつけるにとどまってるんだから握り拳にしちゃダメだろって事でねハイ関係ない話ですね省略。
それはそうと、アニメ化とゲーム化というでっけぇ発表が出ましたがそれは大魔導師不二先生の極大魔法画力によるコミカライズ版があっての事、是非是非皆様お手に取って見てください。
＜ｉ６６３５３３―２２９５１＞
＜ｉ６６３５３２―２２９５１＞

12月19日：壊機現象

数分前。

（お、ラッキ～。とはいえこれ牽制かな？　だったら両手飛ばしてくればいいのに～？）

戦っている相手……ルストなるプレイヤーが複数の戦術機を切り替えて戦っていることは、他のGUN！GUN！傭兵団からの通信で分かっていたことだ。故に偶然とはいえ相性有利を取ったエクレアは終始攻勢で仕掛けつつも、戦況を一気に覆されかねない戦術機の換装という一瞬を警戒し続けていた。

（本人がちっちぇ～んだよなぁ……ヘッショ狙っても防御か回避されるし……ちびアバターってこういう時有利だったのか～）

小柄、というキャラクターメイク上の個性が有利に働くこともあるが、当然不利に働く場面もある。ことこの戦いにおいては、頭部が小さいが故に防御面積の小さく済むことや、そもそもの小さい的が高速で動き回るので狙いづらい、という要因がエクレアにとっては不利に働いていた。

全体を見れば終始有利ではあったものの、エクレアとて楽な戦いをしていたわけではない。戦術機越しのリコイルコントロールに実は苦心していることに加えて相手の本体である生身が小柄かつ自身と同じ瞬発力に優れ、なにより自分以上に戦術機に精通している。一瞬たりとも油断ならない相手ではあるが……それでも、距離の有利を維持し続ければいずれは詰められると考えていた。

……

…………

そして今、互いが鎖で繋がれているという状況がエクレアを段々と不利へと追い詰めていた。

『……！』

『うおぉっ！？』

ぐい、とエクレアの足が強い力で引っ張られる。無論、不意打ちで体勢を崩されては射撃どころの話ではない。そして真っ直ぐ張り詰めた一本の鎖があり片方が引っ張られたのであれば、当然もう片方は引っ張った側だ。不利を被るのは〝られた〟側だけである。

『……直径１０メートル、ミドルレンジが最長射程』

『厄介ぃ～っ！？』

【施錠縛鎖】はあくまでも対モンスターを想定したものではあるが、当然対人ひいては対戦術機に対しても有利に働く。
特に生身のフィジカルスペックを機巧によって補強可能な戦術機で運用すれば、小柄な少女とてワイバーンと渡り合えるのだ。
鎖によって互いに繋がったことで、距離の概念は鎖の支配下に置かれた。即座に鎖を外すことができない以上、レンジによる有利不利に〝綱引き〟の要素が加算されたのだ。さしものエクレアも射撃の瞬間に物理的に足を引っ張られては狙いが狂う……まして、非力な

少女を剛力へと変える戦術機の牽引ともなれば下手をすれば転倒の拍子に後頭部を強打して行動不能ということにもなりかねない。
対するルストはといえば、足を引っ張られるエクレアとは異なり引っ張る側だ。さらに言えば踏ん張りの根幹となる足を縛り付けられたエクレアとは異なり、その鎖は腕に繋がっている。そして何より……殲顎緋砕（センガクヒサイ）はインファイターだ、引っ張られる……すなわち距離が縮むことは歓迎すべきことだ。

『……！』

殲顎緋砕（センガクヒサイ）と電撃菓子３号＠ＧＧＭＣとの距離は１０メートル、だがそれが上限。
あとは互いを繋ぐ鎖を引っ張り……どちらが先に相手を敗北へと引きずり込めるか。
鎖が張り詰められる。引っ張られたのは……殲顎緋砕（センガクヒサイ）の方だった。

『腕よか足のほうがパワーがあるんだぜ～！』

腕を引っ張られたことで僅かに体勢を崩したルスト、そしてその僅かな瞬間を逃さずエクレアは早撃ちを放った。
発砲された弾丸は射手の力量をそのまま映し取り、必殺の直進を殲顎緋砕（センガクヒサイ）の頭部へと至らせた。

『～～～っ！！』

ヘッドショット。頭蓋を砕くに至らずとも脳震盪（きぜつ）は避けられまい……
……引き金を引いた瞬間に弾丸が必ずそこに当たると、そう確信していたエクレアは……

『……なめるなよ』

エクレアの脚を封じるために自らが繋げていた鎖という縛りに、さながら蜘蛛の糸を登るかのように縋りついて己自身を前方へ引き上げる事で弾丸を回避した殲顎緋砕にまず驚き。

『……チェーンデスマッチなら、メタにもならないくらい対策してやった』

前のめりに倒れる寸前、という姿勢の中で脚部ブースターを全力噴射し、そのまま高速で鎖を手繰り寄せながら〟直上〟に突っ込んできた殲顎緋砕にはさしものエクレアとて驚愕で動きが止まった。

『おごっ……!?』

『……勝機』

互いの距離が限りなくゼロに近づいたことで撓み垂れた鎖、その先端付近を掴むことで互いの距離の〟上限〟を1メートルまで詰めたルストはそのままの勢いで未だ鉄拳たる右で電撃菓子@GGMCへと殴りかかる。
しかし、左腕を盾代わりに殴打を防御した電撃菓子@GGMCは右手に握る銃を撃つ。戦術機の装甲であれば食い破ることが可能な威力の弾丸、距離を詰められたといえど言い換えれば外しようのない至近距離ということ。

『ナイフキルの距離だぜ〜!』

『……っ!』

狙いは顔面。額であろうと鼻であろうと当たれば即死は免れず、何

より回避するには近すぎる。故にルストが選んだのは〝当たってもギリギリ死なない部位〟に当てて被害を最小限に抑えることだった。血飛沫の如きダメージエフェクトがルストの頬から噴き出す。頭を覆うヘルムを砕き、頬を抉り、しかし弾丸はトドメを刺すに至らない。

『……ふがふが』

『なんて！？』

エクレアの問いに返ってきたのはアッパーカットだった。

１２月１９日：壊機現象（後書き）

別に破壊属性がついてるわけではないので頬にダメージ判定はあるけど本当に吹っ飛んだわけではなく、つまりすごい流暢に「ふごふご」って喋っただけなのでエクレアは「なんて！？」となった

アッパーされた

１２月１９日：歓機ノ歌（前書き）

古戦場の妨害工作です、きくうし様は全員半日かけてじっくり読んでください

12月19日：歓機ノ歌

（浅い）

渾身の一撃は確かに電撃菓子@GGMCの顎を捉えた。だが……

（そもそも顎が半分埋まってるようなフォルムだから……インパクトが深く刺さらなかった）

殲顎緋砕（センガクヒサイ）は確かに近距離戦闘に特化している、だがそうであるとて得手不得手がある。
体勢的にアッパーカットが最も〝打ちやすい〟ためにそれを選んだが、電撃菓子@GGMCの頭も含めてずんぐりむっくりとした体型を鑑みるなら、首にほとんど埋まっているような当てづらい顎を狙うべきではなかった。

（……でも、）

これはこれで都合が良いとルストは笑う。
やはりというべきか、顎に鉄拳の一撃を食らった電撃菓子@GGMCであったが怯んだのは数秒。

『今のは冷えたぜ〜！』

『……背筋が？』

『肝が！』

二丁拳銃が改めて殲顎緋砕（センガクヒサイ）へと突きつけられる。この距離ならば外しようもなく、そして弾丸の速度を拳のスイングが上回ることはない。

だが、引き金は引かれず……また、拳も振り抜かれることはなかった。

『……………』

『……………』

互いに沈黙。互いに敵を屠る確信を持ち、また同時に相手にもそれがあるのだろうという確信があり……故に、〝次〟がこの戦いの最後になるだろうと、互いに感じていたが故の一呼吸。

『君、強いねえ～』

『……そちらこそ。思っていたよりもずっと苦戦した』

互いに必殺の間合いの中で、二人を囲むように隕鉄鏡がぐるりと回る。これまでの激闘を時に遠のいて、時に肉薄して写し続けていたこの世ならざる鉄鏡は、二人の言葉に揺らぐ空気をも受け取って僅かに震える。

姿と、言葉をここではないどこかに伝えている隕鉄鏡に双方僅かに意識を向けつつ、互いに健闘とその力量を称え合う……半分は社交辞令に過ぎない事もまた、互いに感じ取ってはいたが。

『とはいえ、ここで一対一（イチイチ）交換なら～……戦術的にはこっちの勝ち寄りじゃゃね～？』

この場において、本陣の守備としているのは少なくとも前王陣営で

指揮をとる何某かのプレイヤーの直轄という意味では眼前のプレイヤーと、もう一人狙撃を担当していたプレイヤー二人だけ、というのは殆ど事実であるとエクレアは確信していた。

プレイヤーは兵士ではない、故に全てのプレイヤーが指示に従ったわけではないのだろう。この戦闘に入る前に両手で数えきれない程度にはプレイヤーを倒してきたエクレアだったが、どれも「なんで本陣に敵が！？」とでも言いたげな雰囲気であった。さらに言えば、そういった指示に従わないプレイヤーがいるにしてもサードレマの防備は手薄に過ぎる。
それは前王陣営に所属したプレイヤーの大多数が攻めに転じている事を意味する。それ自体は本拠地奇襲を目論んだGUN！GUN！傭兵団からすれば好都合であったのだが……結果はこれだ。だが、恐るべき一騎当千の戦術機乗りをエクレアが引き付けたことで、生き残ったメンバーはサードレマ大公城へと向かった。
元々十人以下の人数で城を攻略しようとしていたのだ、決して少なくない人数を失ったとはいえ戦闘力を完全に喪失したわけでもない。仮に場内にプレイヤーが詰めていたとしても、それはそれで〝見せ場〟になる。
故に、ここでエクレアが脱落したとて眼前のクソヤバ戦力を落としさえすれば……GUN！GUN！傭兵団としては戦術的な勝利と言える。

『……残念ながら』

ルストはエクレアの思考を完全に読み取ったわけではない。だが、戦術的勝利という言葉からおおよそ何を言いたいのかくらいは理解できる。故にルストは「そもそも裏切者のリークで筒抜けだぞ」という言葉を飲み込みつつ、現実を告げる。

『……残念ながら、他の面々が目的を達成できる可能性は限りなく低い、とだけ言っておく』

『………ん～、何故？』

『今回はあっちに預けてあるから』

何を、と問うよりも先に……まるでタイミングを見計らったように、エクレアが装備している通信機に他のメンバー達から通信が入った。

『すまんエクレア！俺等もしくるかもしれん！』

『ちょ、なんだアレマジでぇ！！　”亀”か！？』

『ちょ、あの体型でドリフトキメて追ってくるんだが！』

『あ、ごめんこれ俺ら死――』

ザザ、と通信が途切れた。ノイズのような途絶は通信先のプレイヤーが死亡した時特有のものであることをエクレアは知っていた。故に、電撃菓子3号＠ＧＧＭＣのヘルムの下で苦々しい顔を浮かべつつ、何が起きたのかを知っているのだろう鎖で繋がった相手に問う。

『配信見てるリスナーは分かるかもしれないけどさ～俺の目はここにあるから、説明貰えるとうれしいんだけどねぇ～』

『……特注の戦術機がある。普段は私が使ってるけど、今回は相方が使ってる』

『あ～………』

要するに。

『……私は遊撃兼陽動』

『もう一方が本命って訳、かぁ～……』

呂布を食い止めていたら後詰めで項羽が出てきた気分だ、とエクレアは電撃菓子3号@GGMCで諦めの溜息をつく。シャンフロをプレイし、ある程度までレベルを上げて装備を充実させ……そして、戦術機を購入カスタマイズしている時からエクレアはうっすら予想はしていたのだ。これ戦術機にもユニークがあるんじゃないの？……と。

当初は眼前のプレイヤーこそ、ユニーク戦術機を切り替えて戦っているのだとばかり思っていたが……事実としてはスナイパーの方こそが主力であり本命だったというわけだ。

『いや～本当に参ったなぁ～……こりゃ、ウチの負けだねぇ～』

『……』

口調と同調するかのように、それまで二人の均衡を保っていた片割れである突き付けられた二丁のマグナムがボトリ、と地面に手放される。

ほんの一瞬、ルストの視線がそれを追った瞬間――

『俺の勝ちは諦めてないんだなこれがァ！！』

緊急廃装（エマージェンシーパージ）。

例外なく有人式であるが故に、緊急時に際して戦術機体を脱ぎ捨て

る事で装着者を危機から脱出させる戦術機乗りの最終手段。
きつく巻き付いた鎖を内側から引きちぎる程の勢いで、電撃菓子3号@GGMCが………弾けた。

１２月１９日：歓機ノ歌（後書き）

規格外戦術機亀【玄武】
例えばなんですけど、めっっっっっちゃ硬くてめっっっっっっっちゃ高火力な戦車みてえな重装甲がホバー移動でめっっっっっっちゃ滑らかなドリフト挙動でそこそこ俊敏にレーザーやらミサイルやらぶちかましながら襲い掛かってきたらめっっっっっっちゃ怖くないですか？

まぁつまりそういうことですよね。

リアクターから供給されたマナを光熱に変換して「双蛇砲」から発射することで、外付け武装抜きの単純殲滅力に限れば規格外戦術機の中でも随一、さらに砲撃の際に熱と共に大気中に拡散したマナを回収することで莫大な燃費の悪さをカバーしている。
射程距離にもよるが２５メートル程度であれば使用エネルギーの４割は回収可能。
ただし超重量を稼働させるための反重力機構やホバーが砲撃以上にエネルギー馬鹿食いなので動けるデブだけど動くと爆速で息切れする、という使えるんだか使えないんだかよく分からないぽっちゃり君。あんまりにも重いのでサンラクはダイナミック文鎮扱いしていた。遺憾である。
ホバー移動しながらラリアットすると大体2サンラク（ダメージ単位「サンラク」：奴がノーガードで急所に攻撃を受けて体力が全損するダメージ量）。

まぁ言うて更新は自由意志ではあるんですがそれでもそこに義務感や使命感が混ざるとするならそう、単行本の宣伝ですね。というわけでコミカライズ版シャングリラ・フロンティア１０巻です。
１０、テン、十(とお)。二桁です、ついに二桁に到達してしまいました。
コミカライズ版の連載が始まった当初は「まぁ５、６巻で影リュカオーン戦じゃないのガハハ」とか思っていたんですが、硬梨菜は大魔導師不二先生の超絶画力と、じっくりがっつり作品を作っていこう、という編集Ｉ氏を舐めていたのかもしれません。
ウェザエモン、蠍、その他諸々を経てようやっと十巻の表紙を飾ったのはファンアートの数で言えば恐らくもっともっともっっっっっっと先に出番が来るであろうゼリーを食わせる方と食わされる方に並ぶかそれを上回る勢いの秋津茜です。
<:i６７５６７５｜２２９５１>
<:i６７５６７６｜２２９５１>
なんていうか、思い描いていた秋津茜そのまま！　って感じで本当凄いですよね、不二ＭＡＧＩＣ……
中身も面白さが保証されていますし、もうそろそろ恒例と言っていい巻末と小冊子に硬梨菜の文章がおまけでついてきます。なお硬梨菜はもう１０回やってるのに未だにページ数オーバーします、学習能力が無いのかな？？？？
なにはともあれ、１０巻です。さらに言えばマガジン本誌の方では１００話を突破しました。ここまで続いたのはひとえに皆様のご声援あってのことです。今後とも、拙作を宜しくお願いします……
それはそれとしてきくうし様は日を跨ぐまで寝ててくれ

１２月１９日：機劇閉幕（前書き）

長らくお待たせしました

12月19日：機劇閉幕

ルストが装備する殲顎緋砕（センガクヒサイ）は高火力のマグナム弾を何発も受けたことで半壊に近い状態にまで破壊されている。さらに言えば、頭部に至ってはプレイヤーの頭部が一部露出している。

（判定ちっちぇえなぁ〜！）

頭ひとつ分の、さらにその一部。せますぎる〝当たり判定〟にエクレアは僅かに苦笑いしつつ……懐（インベントリ）から拳銃を取り出す。
「ゴブリンも倒せるか怪しい」とまでこき下ろされた販売品のものではなく、ある程度の威力は保障されているベヒーモス高級カスタムの実弾リボルバー。エクレアにとって、飾らない己が手で握る銃こそが真の切り札なのだ。

緊急廃装によって電撃菓子3号@GGMCはバラバラに吹き飛んだ。だが操縦者たるエクレアを五体満足な状態で拘束から逃がし、そしてこの一瞬一度きりのチャンスをもたらした。であるならば、電撃菓子3号@GGMCは鎧として最良最高の役割を果たしたと言える。

「貰ったァ！」

エクレア自身には〝確信〟しかないが、この場の二人のどちらでもない神の視点から言及するなら……彼の狙いは間違いなくルストの頭部、それも強化装甲のヘルムに入った亀裂から除くほんの僅かな隙間から見える生身の部分へ正確に照準を合わせていた。
最良最高の仕事をした戦術機と、最善最高の動きで王手をかけたエクレア。彼の動きには何一つ間違いはなかった、仮にこの戦いの全

てをあらかじめ知っていたとしてもこの状況になってしまっては同じ動きをせざるを得ない程に。

だから、〝原因〟はたったひとつ。

『そうすると思ってた……！』

最善・最良・最高のその動きに……愛機を捨ててなお、勝利を貪欲に求めるその在り方に理解を示せる者が敵であったこと。ただそれだけなのだ。

できなかったのではなく、やらなかった。己の意志で一から十までを考え、その上で選ばない事を選ぶ。それ即ち、選んだ場合に何が起きるのかを知っているという事。

（緊急廃装は降参の意志じゃない。拳一つしか無くても生きる事を諦めない継戦の意志！）

敵手たる電撃菓子3号@GGMCが破裂した瞬間、ルストはその中身であるエクレアが戦いを投げ出していないことを悟った。あるいは逃走を選ぶかもしれない、だがそれでもルストは敵が闘争を選ぶ方に賭けた。

故に、不意打ちによる先手を取ったエクレアが銃を構え、発砲する……本来は構えて撃つまでを合わせてエクレアの「先手」であったその動きの間に殲顎緋砕（センガクヒサイ）が飛び込んだ。

「なっ」

むんず、と拳が砕けた左手でエクレアが構えたリボルバーの銃口を真正面から掴み、そのまま捻じり上げるようにして銃を奪わんとする殲顎緋砕（センガクヒサイ）に、エクレアは反射的に引き金を引く。

実弾には破壊属性が付与されているが故に、殲顎緋砕ではなくルスト本体の左手が弾け飛ぶ。だがそれすらも些事と言わんばかりに殲顎緋砕は止まらない。
大きく動いた拳をエクレアが目で追い……それが悪手だと気づいた頃には、既にエクレアの首を殲顎緋砕の脚部が機械装甲とは思えないほどに柔軟な動きでクラッチしていた。

『……生身相手はちょっと気が引けるけど』

拳で視線を誘導しつつ脚部ブースターを絶妙な出力で噴かし、側転と倒立を併せたような難解な動きでエクレアの首を両足で挟み込んだ殲顎緋砕は、そのままブースターを最大出力にする。

『……終わり、だ！』

――この時、エクレア自身は自分が何をされたのかを知覚できていなかった。否、結果として何が起きたのかは誰よりも実感しているが、何故そうなったのかが理解できなかったのだ……目まぐるしすぎて。
故に、エクレアに何が起きたのかを理解できたのは、隕鉄鏡からこの戦いを見ていた視聴者だけだった。

膝のあたりでエクレアの頭部を挟み込んだまま、片手のみで自身を支える倒立状態からブースターを噴かすことでそのまま縦に一回転。サマーソルトキックのような挙動でエクレアごと一回転し、そのまま地面へと叩きつける。
宇宙ではなく地上で飛んで跳ねてを行えるということは、重力圏で自重を完全に支えられる程の推進力を持っているという事。それをグアクロバットな動きのみに集約させたその一連の動作はかつてはネフィリムホロウにおいて緋翼連理の武装を全て無力化した勇者に

こそ用いられたロボ殺し用の必殺である。
本来はネフィリム、という巨大なマネキンとでもいうべきロボットの首を引きずり回して毟り取る、という断じて生身に使うものではないそれを、戦術機というネフィリムの代用をもってエクレアは叩き込まれたのだ。

「ぜ、絶対これ……生身に使っちゃ…………ダメ、なやつ〜…………」

『……加減はしてる』

「うそ、つけ〜……」

嘘ではない。ルストが本当に終わらせるつもりならとっくに膝か拳を叩き込んでいる。故にエクレアが幸運による食いしばりでHPを1残し、そしてまだ生きているのはルストがまだエクレアにやってもらうことがあるからだ……厳密には、エクレアそのものはどうでもいいのだが。

『……最後っ屁を目論むのは推奨しない……こほん』

それは、装備者が生きている限りは存在し続けている。ゲーム外への接続、という性質を持つが故にメタ視点における無敵性を保証された隕鉄の鏡。
ルストはエクレアが展開しているそれへとそっと語りかける。

『……ネフィリムホロウ、私はそこにいる。「自分なら勝てる」と豪語できるなら来ればいい、挑戦は受ける……そして、ネフィリムホロウ2が発売される。シャンフロエンジンを搭載して進化したネフィリムホロウは覇権間違いなし、なんなら今すぐ予約して』

どこか遠くで爆発音。それが傭兵団の完全敗北を決定づけるものなのだろうと、エクレアは直感で感じ取っていた。
そしてなにより、こちらの一大企画をたった二人でご破産にした上で、それすらもがこの〝誘い〟のための踏み台でしかなかったのだという事実に、もはや苦笑いをするしかない。

「ダ、ダイレクトマーケティングかよぉ〜…………」

最後の最後にせめて一発叩き込んでやろう、という悪あがきの意志すら吹き飛ぶような脱力感に、今度こそエクレアは降参を示すかのように脱力した。
それに対してルストはふっ、と笑みを浮かべる。

『……リベンジならいつでも受ける。傭兵団全員でネフィリムホロウを始めるといい』

トドメを刺される直前、割れたヘルムから覗くその笑みにエクレアは肉食獣のそれを幻視した。

◇

『……モルド、何してるの？』

『あ、ルスト。いや、思ったより燃費が悪くてガス欠になっちゃって……ルストが合流するまで防御固めてた』

『……ふぅん。で、倒しきったの？』

『ああうん、結構な数の家を破壊しちゃったけど……【玄武】だとちょっと過剰火力気味だった』

規格外戦術機亀【玄武】。単純火力で言えば規格外シリーズの中でもトップであろう双蛇砲を備えた鋼の亀……今は首と手足を甲羅に引っ込めたかのように身体を丸めて防御姿勢を取っているそれを見つめつつ、ひとまず肩の力を抜く。

『……とりあえず、ペンシルゴンからのミッションは達成した』

『そうだね』

ルストとモルドは対GUN！GUN！傭兵団を目的としてサードレマ市街に配置されたが、彼らの撃破を達成した時点でここに留まり続ける意味は然程ない。

無論、いるに越したことはない。だが――

『ペンシルゴンさんの言うとおり、最終盤にもなれば組織行動なんてないも同じになる。個々の判断で本拠地に突っ込んでくるプレイヤーで大混戦になるだろうし……戦術機は長期戦闘は苦手だから別の戦場で程々に戦ってた方がいいと思う』

『………ん。フォスフォシエ辺りで適当に時間を潰そう』

『じゃあ【玄武】をそっちに渡すよ。インベントリアに入れておけ

ば万が一も無いし』

【玄武】及び【富嶽】を装備から外したモルドは、規格外エーテルリアクターを含めてルストにそれを譲渡する。
さてどう別の街まで行こうか、そんなことを考えていたモルドはふと、ルストが黒い戦術機――確か「黒獅無双（コクシムソウ）」という名であったはずだ――を装備したままだということに。さらに言えば、複数のモードチェンジを機構として備えたその戦術機で二輪車の如き姿になっている事に。

『……なにやってるの？』

「ええと……乗れ、と？」

『……ん。リアルじゃ私が乗せる側になるのは無理だし、レアケース』

生身は人型でありさらに言えば二輪車の形に身体の方を合わせている都合上、うつぶせに近い状態の幼馴染の背中に跨ることになるわけで。
非常に複雑な表情を浮かべていたモルドであったが、何を言ったところでルストが主張を曲げる事は無いだろうと早々に諦める。仮にモルドが転移魔法を持っていたとしても、味気ないファストトラベルとバイクモードに自らが変形して戦場を駆け抜ける、どちらをルストが選ぶかなど論ずるまでもないのだから。

「……ところでルスト、これってそもそも人乗せる想定だったたっけ？」

「……モルド」

「うん」

「……気合でしがみついて」

嘘でしょ、とモルドが呟くよりも先に黒獅無双（コクシムソウ）がフルスロットルを入れる方が先だった。

１２月１９日：機劇閉幕（後書き）

コミカライズ版シャングリラ・フロンティア１０巻好評発売中です！

＜ｉ６７５６６７５｜２２９５１＞

＜ｉ６７５６６７６｜２２９５１＞

幕間：世界最速の為になる授業（前書き）

ちょっとだけ幕間挟ませてください

幕間：世界最速の為になる授業

「先生（センセイ）！　どうかこのノロマな俺に極意を教えていただきたい――
――！！」

「………」

幼女先生は半裸の鳥頭を長時間見続ける趣味をお持ちではない。ゆえに、先生に教えを乞う時はあらかじめ聖杯を使って性別を変更するのが通例となっていた。

試運転も兼ねてエリュシオン・オートクチュール渾身の作品「千古不易」を装備しているため、側から見ると猫耳フード付きパジャマ（どっかのバカどもがＰＫＫを利用して着せたのだろう）を着た幼い少女にメイド服の女が頭を下げている図なわけだ。

「………」

幼女先生……最速のＮＰＣ、あるいは最強の賞金狩人ティーアス。

俺が注文したスイーツを彼女の代名詞たる究極の加速（げんそく）「超越速（タキオン）」で奪い取った幼女先生は、タルトをむしゃむしゃと食べながら俺を見つめていた。

「極意（ごくい）？」

「不肖サンラク、開拓者の中においては最速を自負しております。つい先日には臨界のさらにその先を見た、とも自信を持って言えます……」

「それは何(なに)より？」
オルケストラ戦で敢行した雷と、嵐と、さらにその嵐よりやばい何かを臨界の速さで振り抜いたあの一撃。少なくとも自己ベストは間違いなく更新していると言う自覚はある。
とはいえ、だ。それが本当の意味で最速でないということはなにより目の前の幼女先生(ティーアス)がなによりの証拠だ。

誰よりも速くなった上で、自分以外の全てを遅くする。バフとデバフを同時に行うことで何者も幼女先生を追い越すことはできない。
そして俺はスイーツを奪われ続ける……いや変則的に奢ってるだけなので別にいいのだが。

——超越速(タキオン)。

とはいえ、別に俺は俺より速い奴がＮＰＣにいるから気に食わねえ、とかそういうことではないのだ。そんなものは運営の匙加減ひとつだしな。
重要なのは今のレベル上限が本当にこの「シャングリラ・フロンティア」というゲームにおける到達限界なのか、そして……プレイヤーが到達しうる最速が、本当に臨界点なのかということ。
このゲームは単にレベルを上げてステータスを割り振るだけだと効率が悪い、という奇妙(シビア)なシステムなのだ。行動が次の強さにつながり、あるいは「知っている」事が強さに直結する。まるで一挙一動にフラグが立つような……

「しかし先生には追いつけない、目で追うのが精一杯……！！」

思考加速スキルを使いに使いまくっているおかげか、かろうじて超越速適用中の世界でも幼女先生の動きは等速で認識できる。だが俺自身の動きはよくて０．７５倍速といったところ、ゼノン理論はタ

ーン制と行動限界が前提であって眠らないウサギに亀は勝てない…
…幼女先生はアキレウスかもしれないが。

「先生、自分は一体どうすれば……！！」

「…………私は別に教えることは得意ではない」

とはいえ、とタルトの最後の一欠片を口に放り込んだ幼女先生はひょいと椅子から降りると俺の前に立つ。見上げるのはお気に召さないようなのでそっと膝立ちになる。

「とはいえ、私はサンラクの指導役なので」

先輩風で暴風警報出ますよ幼女先生、という言葉を強靭な理性で飲み込む。世界最速の幼女からの授業なのだ、謹聴謹聴。

「サンラクは、私を目で追えている」

「そっすね」

「理解できるなら……あとは、からだの問題」

「というと」

「……詳細が足りてない。できるサンラクをサンラクが想像できてない」

体育じゃなくて哲学の授業になってきたな。
なにやら我思う、故に我在りとか言い出しそうな流れになってきたが、世界最速の幼女先生が言うなら白も黒だし水は油と混ざる。

「どんなふうに速（はや）くなりたいか、なにになりたいのか、なにがしたいのか……それができる自分（じぶん）を想像（そうぞー）する」

「成程……成程？」

「飛（と）び方（かた）を知（し）らない鳥（とり）なんていない……想像（そうぞー）できない速（はや）さには、どれだけ走（はし）っても追（お）いつけない」

「………成程、」

さっぱりわからん。想像力が足りてない、と言われているのは分かるが………

「わかったならよし」

「あざっす幼女先生（ティーアス）」

本当は何も分かっていないのだが、それを口にしたら好感度がゴリっと下がりそうなので理解した、ということで行くことにした。

……

………

…………

「ってなわけでさぁ、次のエンドコンテンツ予想で聞いてみたんだけど今になって改めて考えるとこれってゲーム的にはぐらかされたんじゃねーの？　って気がしてきたんだよな、どう思うよサバイバアル」

「テメェしれっとティーアスたんとマンツーマンの秘密の授業マウント取りやがったか？　あ゛？」

どっちかって言うと今はマウントを取ってるんじゃなくて料金を取り立ててるんだがな。

猫耳フード付きパジャマの幼女先生（ティーアス）の写真（スクショ）をちらちらと見せつけてサバイバアルから金を受け取りつつ、話を振ったのだがサバイバアルのは額に青筋を立てていた……手はよどみなく金を用意していたが。

「なんていうかお前のそういうところを咎めだすと一昼夜罵り続ける事になりそうだから今は置いといて……実際どう思うよ、レベル150ってどうにも中途半端感あるじゃん？」

「……ま、言いてえ事は分かる。だが今のところはそれがエンドコンテンツなんだからどうしようもねぇだろ。アプデ待てよ」

「まぁそう言われるとそれまでなんだが……」

口を開けば極論と曲論ばっか言ってるくせにこういう時だけ正論言いやがって。

「つってもまぁ、ティーアスたんもそこまで難しいこたぁ言ってねぇだろう。スキル派生は実際の経験が関わってくるしな、何かしらの条件で解禁されるスキルもあるだろうよ」

「まぁそうなんだよなー……」

「サンラク」は機動力にリソースの大半をぶち込んでいるので、常に何かしらで加速した状態を維持できるのが強みだ。で、当然そこそこの数の「足を速くする」「空中ジャンプ」「壁に立つ」系のスキルを持っているわけだが……その中に、何故かずっと狼関連のワードで強化され続けるスキルがある。

十中八九、〝奴〟とのエンカウントや戦闘が何かしらのフラグになっていそうなスキル、つまりこのゲームは単純作業でレベリングしたレベル１００と激戦を勝ち抜いたレベル８０には大きな隔たりがあるということ……それを踏まえて幼女先生の金言を考察すれば……

……

「うーん…………おうサバイバアル」

「なんだよ」

懐から取り出しますは、対着せ替え隊用の秘蔵っ子スクショ「甘いと思ったら結構すっぱくて極力表情には出してないが隠しきれてない幼女先生（ティーアス）」のスクリーンショット……その大部分を手で隠しつつサバイバアルにチラ見せしながら問いかける。

「お前半日でいくら稼げる？」

「王の首だって獲ってきてやるよ」

「いらん、人間とか換金効率悪いだろ」

「違いねえや」

あのヤバ刀に封じ込められた何者かの力添えで、世界最速の風になれた。

だが、すったもんだのてんやわんやで黒雷は失われ………一言で言えば本調子じゃない。

ならどうするべきか？　今あるものでどうにかやりくりするしかないだろう。

「外付けの雷を失ったんなら自前で用意するしかねぇよなぁ？」

さぁて……待ってろエルク、連結ガチャの時間だぜ。

幕間：世界最速の為になる授業（後書き）

・秘蔵っ子スクショシリーズ
他にも何枚かあるが、これを流通させた場合（主に着せ替え隊の）、社会治安がゼロ以下になる事を危惧して封印されているスクショ。

12月20日：クライマックス・プレリュード（前書き）

随分とお待たせしてしまい、申し訳ないです

12月20日：クライマックス・プレリュード

新王アレックスと前王トルヴァンテによる、王権を巡る争いはエインヴルス王国を、ひいてはこの大陸のほぼ全てを巻き込んだ大きな騒乱となった。戦火は大陸の殆ど全土に広がり、双方が開拓者を戦力として起用したが故に情熱ある限り死なずの彼らによって戦いの火は衰えることなく燃え盛り続けた。

いや、それどころか突如として現れた二体の恐るべき存在……地上に羽ばたいた灼熱の太陽が如き赤い蝶と、戦いの記憶そのものが怨讐と実体を得て蘇り続けているかのような深く濁った緑の軍勢。人と、人と、人ならざる脅威が混ざり合った殺し合いはエインヴルス建国以前の歴史書を紐解いたとて前例のない大戦争であった。

だが何事にも終わりはあり、この王国に騒乱を齎した双王戦争にも終わりが近づきつつあった。そしてそれを理解してか、あるいは何事においても終焉の直前こそが最も盛り上がるのか……戦争の最後の日となったその日は、それだけで筆者は歴史書を一冊完成させられると確信を持っている。

――――NPC「作家ダイモス」執筆戦記「双王戦争」324ページ目に書かれた文章

◇

「さぁーて………いよいよクライマックスだね。サンラク君はちゃ

んと働いてくれるかな？　まぁいいか、働かなかったらそれこそ素寒貧になるまでひん剥いて馬で引きずってサードレマ百周だね」

特定個人の人権や財産、その他諸々の尊厳を叩き潰すと気軽に呟く女は、夜空のような濃紺の長髪を夜風に靡かせながら遠く見える先……この国の王が本来あるべき場所を見つめる。彼女の使命は、玉座にしがみつく偽りの王を討ち、真に座すべき王をそこに導くことにある………というのが大義名分ではあるが。

「ぶっちゃけ〝上〟に用は無いんだよねぇ……地下さえ無事なら私的にはノープロブレム、大公サマと前王のおじいちゃんには悪いけど、私流でやると大体更地になっちゃうんだよね」

定期的な攻勢によって出血を強い、消耗させる……という考えそのものは間違っていないだろう。だがこれはゲームであり、なによりシャングリラ・フロンティア。やる気に満ち満ちたユーザーが疑似的な無限の兵力として運用できるのであるならば、女は出血を強いる戦法を最善とは考えない。

「やっぱ一撃で！スパっと！首を切っちゃえば過程の勝率はどうだっていいのさ！！」

一撃斬首、邪魔するものは火薬でぶっ飛ばす。それがこの戦いに勝利を求めた女……アーサー・ペンシルゴンが熟考（およそ十五秒）の末に導き出したたった一つの冴えた答えであった。

……その答えを十五秒で作り出した時点で、ペンシルゴンは次の解答を考える事は早々にやめたのだが。

「配信戦線はほぼ半壊！　野良プレイヤー達の戦況はほぼ膠着！ん

でもって……潜伏と奇襲を目論んでたのは君たちだけではなぁい！」

ごう、と風が吹いた。
それは夜風と真正面から激突し、その上で押し返してしまうほどに強く……それまで後ろに流れていた髪が前に戻ってくるよりも先に、その風の方へと振り返ったペンシルゴンは両手を広げ、彼らへと語りかける。

「さぁさ！いざ決戦の日だよレッドペンシルエージェンシー諸君！」

ペンシルゴンの視線の先、そこには飛行ユニットを装備した何体もの戦術機達が己を浮遊させつつもより高い空と、目標へと飛翔するその瞬間を今か今かと待っていた。

「私らはサードレマの一等地を貰うってのに、大公サマの城より良い一等地があったんじゃあ私らの別荘が霞んじゃうよねぇ！」

『そうだそうだーっ！』

『ゲームでくらい最強の一等地に住みたーい！』

戦術機を通して拡大された声が、ペンシルゴンの言葉に同意の叫びを返す。飛行能力を兼ね備えた機体で統一された彼らは、その上でさらに皆一様に似たような武装である。

「だったらどうすればいい！？答えは簡単！私らよりイイトコに住んでる奴らの一等地を火薬と暴力で耕して二等地にしちゃえば私らが繰り上がりで一等地！」

『『うおおおおお！！』』

すさまじい暴論、だがしかしこの場にそれを否定する者はいない。
なにせ彼らはＲＰＡ、何かを奪い取ること以上にぶっ壊す事が大好きな一団なのだから。

「情報提供があったから王城は滞空防御ザルなのが確定！思う存分〝爆撃〟したまえよ諸君！！」

ああでも、とペンシルゴンはウィンクをしながら付け足す。

「あくまでもメインターゲットだけ更地にしようね、サードレマの一等地に住むのは前王と大公サマに勝利を捧げるべく身命を賭した「英雄」なんだから……ネ？」

あくまでも今から為す全ては〝忠義〟と〝正義〟故である、と言い放ったペンシルゴンに、ＲＰＡ機械化爆撃強襲部隊のある者は苦笑いし、またある者は爆笑した。

『同志！　さっき言ってた話じゃ結構ヌルゲーかもって言ってましたけど流石に決戦想定でいいんすよね！』

「うーん、どうだろ。ちょっと相手に申し訳ないくらい仕込みがあるし……多分、今日一番注目されるのは〝ここ〟じゃないよ」

王国騒乱イベント最終日の、本拠地への奇襲作戦であるというのにもかかわらず、「これは決戦であるか？」との問いにどこか含みのある否定を返したペンシルゴンにＲＰＡの面々は疑問符を浮かべる。
中には、その理由を知っているが故に苦笑いを浮かべる者もいたが。

「本命が必ずしも一番目立つとは限らないからね、主人公より目立

つ脇役なんてそう珍しいものじゃない」

『そりゃ一体どういう……？』

簡単なことだよ、とペンシルゴンは風に揺れる髪を抑えながら答えた。その顔には……正体を隠すかのような……仮面。

「このゲームで一番目立ってる奴を一番目立つように囮にしたからね」

◇◇

一騎当千、人馬一体、鎧袖一触。

比類なき鎧武者がそれに勝るとも劣らない巨馬に跨り巨大な武器を振り回し、駆け回り暴れ回る様を形容する言葉はいくらでもある。とはいえ、その全てが当てはまるような光景を目にすることはこの現代社会を生きていく中でそうそう無いことだろう。

「頑張ろうね、緋鹿毛楯無」

「ヴォルルルルァッ！！」

鍛えられた鋼の如き外殻を持つ巨馬、この旧大陸においては知る者の無き鎧馬アルマアロゴ・ヘタイロンが牙の覗く口を開いて咆哮の如き嘶（いななき）を上げる。その上に跨る異形の鎧戦士。恐らく男性アバター

なのだろう巨体を覆う鎧は、本来あるべきはずの視線や呼吸を通す隙間すら存在しないのっぺらぼうの如きつるりとした未知の材質であるが故、その姿から無機質なマネキンと見間違えた者も少なくはない。
だがアルマアロゴ・ヘタイロンの咆哮が響くとき、それは蹂躙の合図。サードレマより始まり鐵遺跡を越え、シクセンベルトの制圧をもって王都ニーネスヒルにとの間に横たわる翔風楼結の大河に陣を敷く前王陣営が誇る最強の一騎。
これまで敗戦を続け、ニーネスヒルまで追い詰められた新王陣営のプレイヤー達にとってはまさしく絶望の巨影。

「いやマジであれどうすんだよ！」

「ガッチガチに固めた戦術機すらぶっ飛ばされたんだぞ……人間で止められないだろ」

「なんかあの人に対抗できる奴いないのか!?」

「【最大防御】呼んで来いよ誰か……」

「聖女ちゃんがいるのに新大陸から帰ってくるわけないでしょ！」

ニーネスヒルから出撃し、大河を挟んだ先に並ぶ前王陣営のプレイヤー達の中にあっても頭三つは抜けたその姿に新王陣営のプレイヤー達はどうすればよいのだ、とどよめく。
あるいは、上に載っている異形の鎧なれど中身は（まだ）人類であるはずのプレイヤーのみであったならば。新王陣営側にも対抗の術はあったかもしれない。
だが、前王陣営が取った戦法は非常にシンプルなものであった。

「よーし、強化支援一通り付与完了〜、じゃあ強化延長よろしく」

「了解了解……栄華よ、尽きる事なかれ。栄光よ、陰る事なかれ。輝きは色褪せず、憧憬と羨望の光を背負いし汝よ、その輝きの消えぬを願う。【律よ、限り無く輝け（リミテッド・エクステンション）】」

ありったけの強化支援を一騎当千たる単騎に集中させ、さらにその効果時間を延長する。千対千であるとしても、九百九十九の兵と一騎当千の兵が連携を為せばそれはもはや二千に匹敵……否、それすらをも凌駕する一群となる。

「その……何度もありがとうございます」

「おう、気にすんなよ【最大火力（アタックホルダー）】！　バッファーは最強のアタッカーを作るのが趣味で仕事みたいなもんだ、【黒剣】……ああ、今は【旅狼】だっけ？　あんたらほどガチってないからクランには混ざらないけどプレイヤー最強の火力持ちを強化出来てウチらも結構楽しんでるしな！」

【最大火力】の看板は、あるいは当人が思っている以上に大きな力を持つ。あるいはそれは負の感情を引き寄せることもあるが、それだけであるわけでもない。現に、「【最大火力】をもっと最強にして突っ込ませたら大体勝てるんじゃね？」という眼前のバッファーの言葉を端に発したこの戦法に参加するプレイヤーは勝利を重ねて進軍するほどに数を増しており、今やアルマアロゴ・ヘタイロンも含めて人馬双方が凄まじい量の強化魔法のオーラを纏っている。
その補正量はただでさえプレイヤーの中でもトップクラスのステータスを持つその者をさらに……もはや過剰と言えるほどに強化しており、ただの突進で人の群れが塵芥のように吹き飛ばされることはこれまでの戦闘で誰もが理解していた。

「サイガー０さんっ！」

そして、この一団……最初はサードレマの防衛を担っていた「防衛軍」改め、今や王都にまでその手を伸ばす「侵略軍」にはもう一人旗頭がいる。あるいは、知名度と人気の〝質〟においては【最大火力】をも上回りかねないプレイヤーが。

「秋津茜さん」

「ペンシルゴンさんから伝言を預かって来ました！　「ボコボコにしちゃって」だそうですっ！」

「そ、そうですか………」

「私もアシストに回りますねっ！」

「よ、よろしくお願いします」

【最大火力】……サイガー０が思っていたよりも対人戦に積極的な姿勢を見せる少女に、サイガー０は若干困惑しつつも改めて前を見る。

翔風楼結（しょうふうろうけつ）の大河は一言で言ってしまえば、飛び石のように設置された足場、あるいは大河を直接渡って進むエリアである。轟々と流れる大質量の水流は常人であれば踏ん張る事すら叶わず流され、さらに大河の中心深度は有志の調査によれば「軽く１０メートルはあるっぽい」とされている……即ち、泳いで渡ることは現実的ではない。故に、飛び石の如き足場を使用して渡るのが基本的な攻略方法であるわけだが………

「秋津茜さん……足場を渡る時は気を付けてください」

「どうしてですか？」

「恐らく……地雷的な魔法などが仕掛けられているかと」

「なるほど！　了解です！！」

今やサイガー０達が攻め手に転じた以上、新王陣営が防衛策を張り巡らす側である。あるいは水中にも機雷が仕掛けられているのでは、と警戒しつつもサイガー０は如何にしてこの戦いを攻略するべきかを考える。

以前までであれば姉がそういったプランを提示していたが、今の上司はどうにも、大局的な方針こそ示すが一局面においては放任、というよりも「まぁ流れで」と雑に任せるパターンが多いようにも思える。

本人が現在行方知れずで王国騒乱イベントに殆ど参加していないために仕方がないのは承知しているが、さらに言えば２４日に一緒に遊ぶことを約束しているので今無理に合流する必要もないのは分かっているがそれはそれとしてやはり一緒に王国騒乱イベントが出来れば最上であり、別に武将として進撃したかったわけではなく……

………

「………………」

………色々と思うところがあるため、無言で考え込んでいたサイガー０の隣で〝黒い武器〟の調子を確かめていた秋津茜であったが、ふと思い出した「伝言」をサイガー０に伝える。

「あっ、そうでした！　ペンシルゴンさんからもう一個伝言がありました

ました？」

「え？」

「連絡がついたからサンラクさんも王国騒乱に参戦するそうです！」

「！！！……あの、それは何処に……」

「確か……あ、そうです！　奥古来魂の渓谷だそうです！」

成程、とサイガー０は軽くうなずいた。あるいはサイガー０をあくまで視力的に見ている者にはそう見えた。

「……正面突破で片を付けます」

あるいは、戦線離脱を招きかねないその情報をサイガー０に伝えるよう指示した者の狙いはこれであったのかもしれない。
親友の妹が人並みの責任感を持っていることを知っているからこそ、その責任感に発破をかけるための魔法の言葉を与えればどうなるかを。

「申し訳ないのですが、急用ができました。ここを攻略したら………ちょっと、離脱します」

「お、おう……」

サイガー０に強化支援を行っていたプレイヤーはのちに語った。

――呂布ってああいう感じだったんだろうな。

１２月２０日：クライマックス・プレリュード（後書き）

・ニーネスヒル

王都。今回の王国騒乱においては新王陣営の旗頭である新王アレックスがいるのはサーティードであるため、最優先で守るべき本陣ではない……が、「王都なんだから重要拠点だろう」と勘違いしているプレイヤーは両陣営ともに案外多い。

あるいは、王都が攻められているという事実に浮足立つのはプレイヤーだけではないのかも？

12月20日：この道を通る者は一切の持ち物を捨てよ（前書き）

書き下ろしで一人称視点は書いてるのでそんなに久しぶりではないけど久しぶりの視点

12月20日：この道を通る者は一切の持ち物を捨てよ

◆

今になって……物凄く…………嫌になってきた。

戦場の風というやつは、やけに温（ぬる）いものなんだなぁ……なんてしょうもないことを考えながら、俺は溜息をついた。

とはいえ自分一人で済む話なら持病のフレが危篤で（いくらでもいいわけがきく）ログアウトなんだが、人を巻き込んでいる以上は逃げるわけにもいかない。というか逃げたとして後が怖い。

「はぁー…………」

「マリッジブルー？」

「失血死（あおざめたかおにして）させやろうか？」

「腐らない虚構（ゲーム）の身体から血を抜いて意味があるのかなぁ？」

「映（バ）える」

何故かにぃい、と深い深い笑みを浮かべてるんだが……本当こいつのことはよくわからんぜ。

ああもう、踏ん切り付けて覚悟を決めよう。現場まで来たんだ、ここで逃げたら何より俺自身の遺恨になる。

「さて……」

もう二度と使うまい、と誓っていたんだが……忌まわしき「Ｓｕｎ Ｌｕｃｋ Ｃｈａｎｎｅｌ」と紐づけられた別天津の隕鉄鏡を装備。マニュアル操作で動かせる事を確認したのち、改めて今いる場所……奥古来魂の渓谷のど真ん中で辺りを見渡す。
現在、王国騒乱イベント最終日……ここにきてプレイヤーの結束は両陣営共にほぼ崩壊したと言っていい。なにせどちらの陣営も〝王〟が健在となればあとは陣取りゲームでどちらが有利を取れるか、という話になっているからだ。あるいは千人の暗殺者がバラバラに、しかし一斉に王の首を狙いに行けば一人くらいはその首に刃が届くかもしれない。
要するに混戦だ、大を付けて大混戦と言っていい。
風の噂では？　レイドキラーなるレイドモンスター殺しに特化したやつが今回のイベントで出現した焠がる大赤翅と黝る縁大緑の両方を討伐しようと暴れ回ってるだとか、なんか尋常じゃなく強い騎士が化け物みたいな馬に乗って呂布じみた暴れっぷりを見せているだとか、新王陣営の配信者プレイヤーがダイレクトマーケティングされながら虐殺されただとか……眉唾ものな話からなんか心当たりのある話まで、色々と耳にしているが……まぁ、それだけペンシルゴンのやつがやらかしまくってる、ということだろう。
ウソとホントがごちゃまぜになった情報の錯綜は奴の十八番だしな。
そんなわけで、ここ「奥古来魂の渓谷」もまた最終日ということでプレイヤーでごった返している……というか割と最前線だ。
なにせ他のエリアと比較しても「一本道」かつ「ルートが極端に絞られる」という決戦用フィールドみたいな場所なのだ。隠密するのは現実的ではないが、同時に隠密される可能性も低い。これが勢力ｖｓ勢力であればあえて危険な〝上〟を突破して裏をかかれる可能性もあったが、最終日の混戦はもはやお前が味方でお前は敵、くらいの区別しかつかない。極論、後ろで百人不意打ちで死んでも自分

一人が突破できればそれでいい、と……そんな状況だ。

「ディプスロ、イムロン……始めよう」

「おうよ」

「はぁい」

ので、発想にひとひねり入れるわけだ。

百人倒したって百五十人に無視されたら意味がない、なら……百人を倒す姿で百五十人を止める。あるいはその情報でさらに人を集める。

誠に遺憾ながら、それを可能にする方法があるんだよなぁ。

「……【泡沫の城壁(インスタント・キャッスル)】」

ディプスロが発動した二枚の巨大土壁が奥古来魂の渓谷の一本道を三つに分ける。

既に銃弾やら魔法やらが飛び交っていた戦場において、しかし前に進みながら迫(せ)り上がるという本人曰く「劣勢を無理やり押し返す用の魔法」が敵だけではなく味方をも押し返して戦場に空白を生み出す。

とはいえ、それ程の優位性(アドバンテージ)を生み出す魔法には当然デメリットがある。具体的にいうと五秒で損傷関係なく崩壊する、というデメリットだ。本当はもっと発動できるはずなのだが、一度に〝二回分〟発動するために色々削った結果、五秒しか維持できないんだとか……まぁ五秒あれば準備は終わる。インベントリアをちゃちゃっと操作するだけだしな。

土壁の向こうで、何事かと騒ぐ声が聞こえてくる。崩壊する土壁は下に崩れ落ちていくわけだが……まぁなんだ、幕は上がる、と。
別天津の隕鉄鏡がこの世界(ゲーム)の外側にある動画配信サイトと接続され、リアルタイムで今起きていることを電脳の海に流し出す。

「――――まぁ、なんだ。やれと言われ、逃げ場も無い。ので、二度と使わないと思っていたけど、もう一度配信やらせてもらいます」

土壁が崩れ、隔てられたプレイヤー達はまずそれを見ることになる。
この世界最初の征海船、あるいは神代を纏う現代の船、そして……実はまだ一度も航海した事がないブリュバス……フルネームなんだっけ、ブリュッセル・バスターソード？　ペンシルゴン由来だった気がするから後で聞こう。

「一応前王陣営として参加していて……まぁ最終日まで普通に別のことしてたんだけど、そのせいで「せめて最終日くらい働け」とどやされまして……足止めしろ、と」

改造によって最初の形状から随分と変わり果てた姿にこそなっているが、見るものの目を惹き、足を止めさせる役割を果たすには十分すぎる。
横っ腹を見せる形で渓谷のど真ん中に出現したクルーザーサイズの征海船に、プレイヤーの視線が集まり……そして、その上に立つ俺に自然と視線が集まっていく。青聖杯も使っているからな、集客力は上々だろう。

「とはいえ見境なしに辻斬りしても全員を足止めできるとは思えないし、じゃあ逆の発想で行ってみようと」

どこぞの橋に立って刀を千本カツアゲした武蔵坊弁慶の話を聞いて

思うが、普通カツアゲに遭ったら逃げるだろう。いや当時の刀持っている武士が好戦的だったのかもしれないが、それでも九百九十九本も集める中で一騎打ち（カツアゲ）に消極的な奴もいると思うんだよな。
それでも九百九十九人もカツアゲに付き合っている辺り、単純な闘争心以上に「勝ったら弁慶が持ってる武器総取り」みたいな下心があって然るべきだろう。

「俺の体力が尽きるか負けるまで、無限組手（景品付き）（カッコケイヒンツキ）やります。この配信見てログインした人もぜひぜひ振るってご参加ください……全員ぶちのめします」

12月20日：この道を通る者は一切の持ち物を捨てよ（後書き）

新王陣営視点：土壁が崩れたと思ったらなんかゴテゴテした船の船首に立つ半裸の女がなんか無限組手宣言してる

前王陣営視点：でっけぇ船のケツ

なんだなんだとプレイヤー達の視線がどんどん集まってくる。
どうも俺が何者であるか知っているプレイヤーも混ざっているらしく、スクショを撮影している者もちらほらと見えた。許可を取れ許可を。
とはいえこれだけでは客寄せパンダでしかない、パンダと一対一で殴り合うことが趣旨である事を分かりやすく理解させる必要がある……のでこういう時は仕込みを使うのだ。

「おうおうおうツチノコさんよお！　いきなり出てきたと思ったら無限組手だの景品だの！　詳細を言ってくれなきゃ興味も惹かれねーゾ！？」

なんかコッテコテのガンを付けてきた鉛筆の手先を半目で睨みつつ、咳払いをして改めて俺がここにいる理由を口にする。あんの大根役者め……吊るして干してたくあんにしてやろうか。
半分ヤケになりつつも、声を張り上げて俺が今からここで何をするのかを、そしてそれに参加するために何をするべきかを叫ぶ。すかさず拡声魔法が口元に展開された、こういう時だけ用意が良くて何よりだよありがとうねぇディプスロ！！（ヤケクソ）

『えー、任意参加！　内容はさっき言った通り無限組手！　挑戦権を持ってるプレイヤーと俺……サンラクが対人やります！　なんでこんなところでやるかっていうと前王陣営の黒幕にサボった分働けと脅されました！』

「豪華景品ってのはなんなんだよ！？」

なんでこいつこんな喧嘩腰で大根演技してるの？　とはいえちゃんと筋書き通りではあるので、俺はインベントリアを操作し…………宝船の甲板上を指さす。

『商品は…………俺が貯蓄してた高レベルモンスターの高レアドロップアイテム！　大体総額で言うと……』

「展開」を選択。格納空間に貯蔵されていたそれが、実体を得て……この世界へと現れる。

直後、虚空よりぼとり、と何かが落ちた。少なくとも甲板に立っているので地上から見上げているプレイヤー達には見えないなこれ。仕方ない、一旦ドロップを中断して地上に降りて……

『五十億マーニくらいはするんじゃねーかな？』

次の瞬間、渓谷を埋め尽くさんばかりの勢いで虚空から大量のアイテムが噴き出した。

水晶群蠍の素材、帝晶双蠍の素材、さらに言えば旧大陸には存在しないモンスターの素材。なんていうか鉱物系な外殻持ちのモンスターばかりを周回していたせいか、ガチャガチャと騒々しい音を立てながら莫大な量のアイテムがぶちまけられていく。

五十億マーニ分ともなれば、十個や二十個どころではない。ドバドバと現れ続けるアイテムにこの場にいたプレイヤー達の視線は釘付けだ。

『出血大サービスってやつだ！　俺に勝った奴に…………文字通り！　偽りなく！　そっくりそのまま！　これを全部くれてやる！！

俺の周回一か月分だぞふざけんなちくしょー！！』

ちょっとオーバーリアクション気味に指さす宝石のようなきらめきを放つ素材の山を指し示せば、拡声された声を聞き取ったプレイヤー達の眼が欲望の炎に燃える。魚を釣るのに家財を全て池に投げ込んでいるような気分だ、正直言って誰かにくれてやるつもりは毛頭ないので全員ぶちのめす気満々ではあるのだが。
……ペンシルゴン曰く「そういうのは思ってても言わないものなの、人寄せするならそのつもりが無くても懐の深さだけ示さないと」とのことなので口には出さない。やっぱ黒幕に慣れてるような奴がいうと説得力が違いますわ。
あの大根はサクラだが……サクラで大根、っていうとなんか酢漬けっぽいな。いやそれはどうでもよくて、だ。一応「プレイヤーがサクラクに問いを投げても良い」という流れは作ってくれたので役目は果たしたと言えよう……大根演技だったけど。なんであんなコッテコテのレトロチンピラムーブだったんだあいつ。

「ツチノコさん！　マジでそれ全部なんすか！！」

『二言は無い！　勝てたらだけどな！！』

俺の断言に対しておお、と歓声のようなどよめきが上がる。中には金銀財宝が如き輝きを放つアイテムの中にある水晶のようなそれが、何の素材なのか気づいたのか渓谷の上とアイテムをとを交互に見る者もいた。
とはいえ、サクラ大根に続いて質問する者が現れればあとは堰を切ったように質問の嵐だ。

「なんでわざわざそんなことするんすかー！　得無いでしょ！！」

『プレイヤーがここで観客なり挑戦者なりしてくれればいいんだとさ！　要するに俺と一緒に王国騒乱ほっぽり出して時間潰ししろっ

て事だよ！　大赤字は俺だけってワケ！！』

「挑戦権って何ー！？」

「再戦アリ！？」

「マジでそれ全部くれるの！？」

「サイナちゃんどこだよー！」

「うおおサイナちゃーーーーん！！」

『ええいちょっと静かに！今説明するから！！』

えーと、説明しなきゃならんのはバトル方式と挑戦権と……

『まず参加条件は挑戦権を持っていること！　挑戦権はそこで買える！！』

指で示した方向にこの場にいる殆どのプレイヤーの視線が向く。降り注ぎ、刺さるような視線の雨に晒された中年男性……イムロンは、若干口の端を引き攣らせながらも右手を軽く上げる。その手には一本の剣。

『挑戦権ならぬ挑戦剣……一本三万マーニ。アレを持っていることが参加条件だ』

「ダジャレかよ……」

『覚えやすいだろ？』

どうも、聴覚も強化されているのかぼそりと呟かれたそれをなぜか聞き取れた俺がそのつぶやきに言葉を返すと、まさか反応されるとは思っていなかったのかそいつは目を泳がせて縮こまってしまった。

『バトル方式は1vs1（タイマン）！　ちょっとした結界的なものが張られる……ので、そこでキルされるか降参するかで勝敗を決める！！』

「なんで降参ありなんですかー！」

『王国騒乱中のルールだと死んだらその場にアイテムが全部ぶちまけられるから温情措置！　ちなみにドロップしたアイテムは豪華景品に加えられます』

すなわち、早く挑めばそれだけ景品獲得に先んじる事が出来るが……上手く負けなければ、自分のアイテムが事実上の完全ロストって訳だ。

『ちなみにこっちはガチ装備でお相手します』

「ずるいぞ！」

『ずるくなーい』

五十億かけてるのにずるいと言われる筋合いはない、悔しかったらそっちもガチ装備を持ち込めば良い。

とはいえ、王国騒乱イベント中はデスするとインベントリ内のアイテムや手持ちのアイテムは全てその場にぶちまけられる。〝捨て〟前提の装備で俺に勝てるとは思わないでほしいものだ……

『さぁ我こそはって奴はいるか！？』

沈黙。さもありなん、日本人という種族は二番手三番手を求めたがるものだ……とはいえ、こういう時の為にサクラ大根君がいる。手筈ではサクラ大根が名乗りを上げて一番手として俺と戦い、適当にボコって他のプレイヤーの参戦を誘うわけで……さぁ来いサクラ大根、ペンシルゴンから「まぁ別にキルしちゃっていいよ、基本的に彼らに重要アイテム持たせてないし」とのことなので演技じゃない断末魔を叫ばせてやるよ……！

だが、サクラ大根が喉の調子を整えて声を上げるよりも早く……我こそは、と一歩踏み出した者がいた。

「ならば某（ソレガシ）が一番槍となろう……たのもう！」

『んえっ』

なんか濃ゆいのが出てきたぞ。

１２月２０日：売店にて挑戦〝権〟、一本３０，０００マーニで販売中！（後書き）

・挑戦剣
３００００マーニ。
イムロンが事前に用意した百本を購入することで挑戦権となる。儲けは三人で１：１：１、ちなみに原価は５０００マーニだがサンラクが色々採掘する中で集まったそんなにレアじゃない鉱石が使われているので実質原価はタダ

「なんか俺だけ損してないか？」
「使うアテあったのか？」
「いや……まぁ倉庫の肥やしだったけども」

12月20日：鋒の先に士道在り

「某（ソレガシ）の名はセツゲッカ！　いざ尋常に、立ち会いを申し込む！！」

少なくともそのプレイヤーはサクラ大根ではない。なにせサクラ大根は今、気まずそうに挙げようとした手を下げているからな。つまり在野の……在野の、まぁ〝お侍様〟ってこと……なんだろうが……

……

『あー、ええと。了解した、とりあえず挑戦権買ってね』

「承った」

なんだろう、ロールプレイなのは分かるが……筋肉ムキムキな上半身剥き出しで両腰に刀を佩いた半裸の巨漢侍、としか言いようのない存在なので普通の半裸であるこっちが霞むという恐るべき現象が起きている。

半裸に貴賤も上下もねぇだろうと思いたいがキャラの濃さで間違いなく負けてる気がしてならない。というかこのやたらに筋肉をムッキムキにするキャラメイクにどこか既視感が……まぁいいや、どうせ一人二人で終わるはずもない。イロモノキワモノとのエンカウントだってあるだろうよ。

とりあえずディプスロに拡声はもういい、と手振りで伝えつつインベントリアを操作。このまま山盛りにしてたんじゃガメようとする奴が絶対出てくるだろうからな、とはいえ衆目を集めるなら〝お片付け〟にも一工夫が必要というもの。

「へいサイナ」

「呼応(およびですか)：契約者(マスター)」
　インベントリアには実は色々と拡張機能(アドオン)がある。リヴァイアサンでもベヒーモスでもブイブイ言わせて攻略したので、いろいろなアドオンを導入していたりする。その中の一つがインベントリア内から特定のアイテムなどを現実空間に出す際のエフェクト変更だ。やろうと思えば超神々しいエフェクトで現れる石ころ、とかもできるわけだが……まぁ今回はちゃんと真面目にやった。
　青い花弁のような粒子と共に現れたメイド服姿のサイナに、僅かな沈黙の直後にわっと歓声が上がる。どうもエルマ型ではなくサイナ自身がちょっとした人気者らしく、まぁ客寄せパンダ二号になるんじゃないかとわざわざ出したわけだ。そもそもアイテム回収するだけなら自分でできるしな……ところでなんでサイナが人気者なんでしょうね、一部切り取りの動画転載されまくってるもんねワハハ。バカがよ。
「了解：インテリジェンスな格納をお約束いたしましょう」
「インテリジェンスな格納ってなんだよ」
「説明(それはもう)：非常に効率的かつ迅速な作業。それを実現するのがそう……〝インテリジェンス〟」
　すげぇドヤ顔してるよこいつ。Nパッチ入れてからなんかこう、前にも増してインテリジェンスを擦り出したような……あれってなんかこう、コンプレックスに由来する感じではなかったの？　単に口癖？
　とはいえ、転載されまくり動画の自称天才(インテリジェンス)のサイナの登場に、この

場のプレイヤー達は大盛り上がりだ。とはいえスクショが遠巻きなのはいつの間にやら土が盛り上がって楕円形のフェンスを形成していたからだろう……ディプスロ、言動さえ無ければなぁ……言動さえ……いや本当、黙っててても下ネタゼスチャーするからなあいつ……

「さぁて……サイナ、船の甲板に。ここは今からバトルフィールドだからな」

「了解（かしこまりました）‥」

うーん、ちゃんとメイド服に合わせた言動ですね。そしてちら、と隕鉄鏡を見てあえて俯瞰視点にすることで音を拾わないようにしつつサイナに小声で補足。

「適当にファンサービスしといてくれ、定期的に手を振るくらいで……あと半径1メートル圏内に無断で踏み込んで来た奴は銃火器で蹴落として良し」

「了解（おまかせを）‥撃滅しましょうとも」

サイナはインベントリアと直接紐づけられているので事前に許可を出しておけばサイナ自身の判断でインベントリア内の装備を使用できる。故にインベントリアから展開した飛行ユニットで甲板へと上がっていったサイナに歓声が上がる……本当にアイドルじみた人気だな、ドルオタも草葉の陰で喜んでいるだろう。

「さて……待たせたなセツゲッカ」

「構わん……だが、立ち合う前に一つ問いたい」

「うん？」

「貴公の所属するクランに「京極（きょうごく）」殿がいる、と聞いたが……」

「ああうん、いるけども」

あれ、「きょうアルティメット」って読みらしいよ。と指摘するべきか迷ったが、面倒だったのでそのままにしておく。ルビ必須のややこしい名前にする方が悪い、非はそちらにあるぞ京極。

「皮算用は否定せぬが、もしこの立ち合いに某（ソレガシ）が勝ったのならば、彼女との一戦を仲介してもらいたい」

「まぁ別に紹介するくらいなら別にいいけど……」

なんだなんだ、あいつプレイヤーキラーだし怨恨か？　とはいえ眼前のムキムキサムライことセツゲッカからはそういう恨みのような気配は感じられない。どっちかっていうと、純粋に武芸者として戦うのを希望してる、とかそんな感じだろうか。

てっきり、イムロンと同じで（あくまでもゲーム内での）日常会話でもロールプレイを貫き通すタイプかと思ってたが………本当に武芸者だったりしてな。いやそりゃないか、ムキムキすぎる。身長２メートルくらいあるぞあのアバター。

「そういうのは、実際に勝ってから言ってもらおうか」

「あい分かった……ならばこの二刀で某の力量を示すのみ！！」

すらり、と慣れた手つきで二刀を抜き放つ姿は随分と手慣れている

ように見える。とはいえ、青聖杯もあるので見た目と声が一致しているからと言って中身が本当にその性別とも限らない。それに動作アシストもあるし見た目や挙動から中身を見抜こうとすること自体いろんな意味でナンセンスか……なんでもいいや、この場に立った以上は対戦者その1に過ぎないし、これから俺が積み上げていく無数の敗北者の第一号でしかないのだから。

「伐天！　破那丸！　いざ参らん！！」

明らかに〝捨て〟武器ではなさそうだが、少なくともそれを承知で刀を抜いたのは間違いないだろう。
あまりにもガチすぎて実はペンシルゴンの手先なのでは？　とすらちょっと疑っているのだが、そう言った様子もないしサクラ大根も知らないようなのでやはり在野のムキムキサムライということだ。

「まぁ待て待て、まだフィールドが準備できてないんだ」

「むっ」

ディープスローターに目配せをする。人格はともかく、今回の無限組手で一番負担がかかるのはともすれば実際に戦う俺よりもアイツの方かもしれない。

「じゃあ始めようねぇ………【闘儀結界(デュエルゾーン)】」

ディープスローターが発動した「一対一特化型結界」が楕円形のフェンスを縁(ふち)としてドーム状に展開される。これにより、結界外からの干渉は不可能となったし、逆に内側からの攻撃も外側に放たれることは無い。奴曰く、「双方向に干渉できず、定員二名なので効果の割に結構ローコスト」であるらしいが組手の度にあいつに張り直

してもらうので……物凄い勢いで〝貸し〟カウンターが回っていそうで凄く寒気がする。当人は「一日の労働で貸し1でいいよぉ」と言っていたがなんかこう……悪魔と取引した感が拭えない。

「いや、目の前に集中集中……さてセツゲッカ、これでこの組手に邪魔は入らない。降参するなら躊躇わない方が良い」

「……何？」

「そういえば言ってなかったな。今の俺は……過去最高に対人特化だ」

にやりと笑い、インベントリアを操作する。さぁーて……やるからには派手に全力に、だ。

１２月２０日：鋒の先に士道在り（後書き）

・セツゲッカ

在野のムキムキサムライ。基本的にムキムキマッチョプレイヤーの四割はマッシブダイナマイトフォロワーと言われているが、セツゲッカはその四割の方。

元々は女サムライなキャラでやっていたが、マッシブダイナマイトに感銘を受けてマッチョであることを求めルルイアスに挑んだ剛の者。

迷いなく青の聖杯を選び、マッチョボディを手に入れた………フレンドは初見絶句した。

何、元々の性別？　肉体と合致する野太いボイスって事はそういうことだよ。雪月花さん

なお口調は一人称以外割と自前

12月20日：雲を迸る耀きの如く

名前は冗談みたいなもんだが、性能は大真面目っぽい二刀を構える姿は堂々たるものだ。イロモノではあるが王国騒乱イベントで戦場に出てきている辺り、こけ脅しではなさそうか。
ならばこちらも相応の戦力をもって迎撃させてもらうとしよう。
わざわざ左右のインベントリアに分けて入れているので、全く同じタイミングで左右の手に現れたそれを握りしめて……突きつける。

「それは……銃、か？」

「トラディション&レボリューション、神代に依らないもう一つの技術ツリー……そこに実った純ハンドメイド・ガン！　サムライ気取るなら銃弾くらい斬ってくれるよな？」

厳密には剣だとか射撃能力を付与した剣だとかイムロンになにやら御高説を賜ったが、見た目は完全に「銃のように持つ剣」だ。
とはいえ、素材が素材(サソリ)なので黄金と見間違うほどに眩く光を反射する水晶の刃を持つトラディションと、青白く透き通った水晶の刃を持つレボリューションは観客の、そして何より対戦相手たるセツゲッカの目を惹きつけてやまないようだ。

いつだったかイムロンが言っていた。ビィラックの手によって作り出された傑作「煌蠍の籠手(ギルタ・ブリル)」は鍛冶師をしているプレイヤーにとってはまさに雷鳴の如き衝撃であったと。それは見たこともない……否、彼ら鍛冶師として言わせれば扱ったことすらない素材を、見たこともない……これもまた否、自分たちでは再現不可な製法で作られたそれは、幾人もの鍛冶師がその再現に挑み、挫折したのだと。

蓋を開ければ隠し職業「古匠」の存在や、神代の技術などが絡んでいたためにあの時点のプレイヤーでは逆立ちしても再現は不可能なものであったが、古匠となり神代の技術を駆使できるようになったからこそ……自分は〝あえて〟神代の技術に依らない銃の作成に再挑戦した、と。
逆立ちしなくても完成できた、ざまぁみろ！　と誰に喧嘩を売って誰に勝ち誇ってるのかよく分からなかったが……少なくとも、鍛冶師としてなにかしらの〝壁〟を超えて出来上がったもの、それがこのトラディション&レボリューション。
伝統に革命を、あるいは伝統を以て革命を起こす。金晶の刃を持つトラディションと水晶の刃を持つレボリューションというなんというか露骨過ぎるほどに煌蠍の籠手を意識したデザインとなっており、能力も左右で若干異なるという意識しすぎっぷりだ。

「失くして代わりに得たのがコンパチ……もとい、リスペクト品とは」

「……？」

「いや、なんでもない」

まぁこれはこれで、というやつだ。煌蠍の籠手はフェイバリットと言ってもいいお気に入りだったが、あれは一発勝負の対モンスター戦に特化しすぎているのが短所だ。何人も相手にするなら、案外こっちの方が使いやすいというもの。

「開始の合図はサイナに頼む、異論は？」

「無い！」

じゃあサイナ号砲よろしく。
サイナは俺の背後、ブリュバスの甲板上にいる。故に、サイナがいつ号砲を撃つのかを俺は視認することは出来ない。やってやれないことはないが、その場合は視線を逸らした状態で眼前の敵と戦い始める事になる。即ち、後ろで何が起きているのかを俺は聴覚くらいでしか知覚できないわけだが……

「うおおおおサイナちゃあああああ」
「号砲（スタート）‥なお撃滅を兼ねます」
「ほぎゃばぁ！？」
号砲で１キルされたんだろうな、というのはなんとなく理解できた。サイナに持たせたショットガンはＨＥ弾が発射可能です。別にショットガンは散弾しか撃てないわけじゃないんだぜ……

「覚悟ォ！！」
実弾だろうと空砲だろうと号砲は号砲だ、ミチィ！　かギチィ！と音が鳴ってそうなほどに引き絞られ撓んだ筋肉が爆発的開放と共に推進を生み出し、二刀にスキルエフェクトを纏わせたセツゲッカが渾身の大上段を振り下ろす。
だが遅い。侍の、刀による、初手の、ましてや必殺を名乗るならぁ………

「風より速く振らなきゃ俺には当たらねぇよ！！」
二刀には二刀で返す！　永劫の眼（クロノスタキサイア）を起動したことで、眼に移る全てがスローモーションとなる。俺は主に動きの速い相手を捕捉するか、

動きが速すぎる自分自身を把握するために使っているが、このスキルは元を辿ればパリングスキルがスキルツリーの〝根〟だ。
すなわち、スローモーションの中で敵の攻撃を見切り、弾くことこそがこのスキルの本来の用途――！

「遅い！」

「何っ……ぐあっ！？」

見た目がハッタリでなければ、恐らく俺よりもＳＴＲは上なのだろう。だがこのゲームのパリィが十全にその使命を果たせば、巨獣の爪牙すら弾くことができる。いわんや種族人間の攻撃などなにするものぞ。
あるいは巨獣の爪牙すら弾けるパリィを人間が習得できるように、それをも上回るパワーがあるのかもしれないが……それが出来そうなのは知ってる範囲じゃ二人くらいだ。セツゲッカは三人目ではなかったらしい。
二刀の斬撃を、同時に弾かれたことで万歳のようなポーズで硬直したセツゲッカのがら空きの胴体にトラディションとレボリューションをパリィの動きを逆戻しにするかのように、外から内へのスイングで斬り裂く。

「くっ……」

「……むん？」

妙な手ごたえだ。斬ったには斬ったが、剥き出しの生身を斬ったにしては抵抗がありすぎるような。そもそも対人経験は片手で数えられるくらいはある……とすら言い難いので「対人ビルドで育てると人間の肌は堅いゴムみたいな感触になるんだよ」と言われたらそれ

までだが………いや違うな。

「なにかしらのアクセサリー、か」

「素肌を曝すならば相応の備えはして然るべきだ」

成程………いや成程っていうほど理解は及んでいないが、何かしらVITを上げる仕掛けがあるのだろう。というかその「相応の備え」とやらを俺は知りたいんだが………半裸なのに相応の備えしてないよ俺。

「さぁて……十連戦は覚悟してるからな、一戦一戦に長く時間はかけてられない。出し惜しめば悔いを残して瞬殺だぞ？」

「勝つにせよ、負けるにせよ、長くはない、か………ならばッ！
剛武奮胆（ごうぶふんたん）」ンッ！！」

スキルは基本的に口に出す必要は無い。あるとすれば……自分を鼓舞（テンションブチ上げ）するためだ。
ゴウブフンタンとやらがどういう効果なのかは知らないが、少なくとも全身から赤いオーラを噴き出す姿は仁王像か何かと見間違えそうになるほどに堂々としたものだ。
あくまで口に出して発動したのがゴルフワンタン？だけで、他にもスキルを重ねがけしているようだ。俺の言葉をバカ正直に受け取って短期決戦を仕掛けるつもりのようだ。
あるいは、もし俺が逃げを打ったらどうするんだこいつ、と思わなくもないが………俺から吹っ掛けて、向こうが乗った以上はそんな腰抜けた戦法を取ったら俺が士道不覚悟だろうよ。

「かかってこい！」

「おおおおおっ！！」

裂帛の咆哮と共に突っ込んできたセツゲッカだったが、ヤケというわけではないらしい。本体の肉薄よりも先んじて飛んできた斬撃波は牽制、だがほぼ無装備の半裸である今の俺にはこれを受けることはできない。ダメージもそうだし、直撃によるノックバックは致命的に過ぎる。

故に俺が取れる選択肢は実質的に回避一択。だがそのワンアクションを選べば、フル強化状態のセツゲッカが射程圏内に俺を収める、と……なるほど、俺が逃げないという前提だが〝詰め〟の動きとしては理に適っている。

ただ一つだけセツゲッカに誤算があるとするなら……

「消え――」

「悪いが、回避も加速補正入るんだなこれが」

多重的円周運動（オービット・ムーブメント）。

前後左右から襲い来る攻撃（ボール）に対して円周運動で対処するドッジボール的回避スキル。ドッジボールというものは原則地に足ついてやる球技だ、宇宙ドッジボールみたいなゲームもあったがあれはあれでワームホール時差打ちとかメテオ分身ボールとかそもそもボールじゃなくてメテオがホーミングで頭狙ってくるとか色々カオスだったから参考にならん。

多重的円周運動（オービット・ムーブメント）は「行きたい場所」を終点として半オートで円の軌道で回避するスキルだ。そして回避アクションの初動はステップを入れること、要するにこのスキルは「物凄い距離を円形カーブするステップ」なのだ。

そこに加えてこちら、鍛え直しの過程で手に入れた畢竟雲耀（ひっきょううんよう）Ｌｖ．６というスキルです。
最初の一歩のみを超高速にするスキルを組み合わせるとどうなるか。
恐らくセツゲッカの認識では……一瞬で目の前から消えた俺が再び出現したように見えるだろう。
なにせこのスキル、レベル１００オーバーになってから初めて習得したものである。流石にマジの雲耀（0.00005秒）ではないだろうが……文字通り一歩目の初速に関しては過剰伝達のそれを上回る。

「保険をかけられるのはここが最終ポイントだぜ……ッ！」

渾身の攻勢を呆気なく回避されたセツゲッカだったが、これはジャンケンではない。初手の結果がどうであろうとそれは勝敗を決するものではなく、また攻撃を止める理由にはなり得ない、故にその巨体は再び眼前に現れた敵を討つべく空振った刃を再び振るわんとする。だが悲しきかな、セツゲッカよ……
武器（おまえ）を振るよりも引き金（おれの）を引く方が速い。

12月20日：雲を逬る耀きの如く（後書き）

・畢竟雲耀
直訳：つまり雷光。
初速を加速させるスキルはこれに限らないが、このスキルは習得に一定ラインの条件がある。要約すると雷並に速いレベル130以上が習得の条件を満たす
Q．それって要するに【最大速度】かそれに届き得るプレイヤーしか覚えられないのでは？
A．そうだが？
一歩目、であればそこからステップしようがジャンプしようがムーンウォークしようが爆速にするので油断するとそのまま高速で地面に突っ込むことになるが悪いやつが「ステップすると特定の地点までほぼオートで移動してピタッと停止する」スキルと組み合わせた。

・剛武奮胆
心肺や封臓に強い負荷をかけることで各種ステータスを一時的に大きく強化するスキル。心拍が太鼓の音にはならない。
強化値は他のスキルと比較しても頭ひとつ抜けているが、効果時間が短くさらに効果が切れた時点で大幅に弱体化＋スタミナの残量に関係なくスタミナゲージがゼロになる……要するに十秒ほど動けなくなる。

・総身勇姿の護符（ヒロイック・フルボディ）
このアクセサリーひとつにつき、無装備状態の部位ひとつに装備の合計分のＶＩＴを加算するアクセサリー。例えば頭が無装備でそれ以外の部位の装備の合計ＶＩＴが５００だとすると無装備状態の頭

にＶＩＴが５００加算される、というもの。
一見すると破格に思えるが基本的にシャンフロは防具は効果ありきなのでこれ前提で無装備にするくらいなら普通に何かしらの効果ついてる防具つけた方が……となるので使用者はあまりいない。
一番必要としてるやつはそもそも存在を知らない。

12月20日：伝統と革新

実のところを言えば、というか見りゃわかる話ではあるが……トラディションも、当然同じ武器種であるレボリューションも「弾丸」を撃ち出す機構など搭載されていない。というかそもそも銃ではなく、引き金がついてる剣というのがこれの正体だ。

では、この引き金は飾りであるのか？　否、否なのだ。「銃ではない」ことと「射撃できない」は必ずしもイコールではない。この引き金は確かに射撃という事象を起動する。

「乱れ撃ちだぜ！！」

カチン、と引き金を引いた瞬間、トラディションの刃が眩い光を放つ。それは素材となった水晶の輝きであり……また同時に、そこに宿った〝力〟の輝きに他ならない。

「虹光の断閃（スペクトル・スラッシュ）」

「な………！？」

俺は剣を振ってはいない、切っ先を突き付けただけ………だが、トラディションの光り輝く刀身から放たれた閃光は、まさしく斬撃の如き威力をもってセツゲッカの胴に切り傷のダメージエフェクトを刻み込んだ。あえてスキル名を口にしたのはノリだ。

「スキル判定は七度の斬撃……残弾六発」

イムロンが至った結論は極めてシンプルなものだった。

要するに引き金を引いたら何かしらが勢いよく前に発射されればいいのだ、それが弾丸だろうがビームだろうが「スキル判定を保持したまま薄皮一枚分剥離した刀身」であろうとも。
そしてそれを可能にしたのが魔力で育つ水晶素材、なんていうか愚かという意味ではなくシラフでそれができる理性を指してバカみたいな大剣作ったやつとは思えない進化っぷりだな本当。
刀身の表面剥離による〝飛ぶ刃〟と、そこに加算されるスキル補正。
それらを統合した一撃はともすれば、魔法よりも魔法らしい。

「ぐおあっ！」

「ほらほらどうしたァ！」

弾丸ならぬ弾刃になろうとも、そこに込められたスキルの力は損なわれない。虹光の斬閃（スペクトル・スラッシュ）はヒット毎に斬撃の数を増し、そしてそれは哀れな犠牲者に強いる防御の負担を一撃毎に増やしていくということだ。

いちいち照準を定めていては勝てない戦場がある。目玉にレティクル刻む度胸がないならば、当てる力を高めるしかない。幕末クイックドローは発砲の意思と実行の間にある無駄を限界まで削いだテクニック、これ当たるな？　と感じたら確かめる前に引き金を引く！
剥離した弾刃そのものは薄っぺらな水晶でしかなく、硬めのアルミホイルか水溜まりに張った氷程度の硬さしかない。少なくとも何かしらの防護策を施しているセツゲッカの肉体に直接損傷を与えることは難しい。つまるところ、見た目の割に言うほどダメージは無かったりするのだ。
だが炸裂した虹光の斬閃によるノックバックに関しては別だ、増える斬撃によって発生する衝撃はその数を増す程に耐えがたくなる。

「しまっ…」

セツゲッカの剥き出しの胴体や腕は何かしらのアクセサリーで強化されているようだが所詮は人体、人間は器用さと知性の代償に主にフィジカル面で色々なものを捨てている。故にこそ、左手首に命中した弾刃の炸裂によって減点（ゲンテン）だったかパナマだったか忘れたが、セツゲッカの手が衝撃に耐えきれず刀を手放してしまう。

それを視界の端に収めつつ、しかしそれには頓着しない。幕末クイックドローに〝確認〟と〝中断〟は存在しないのだ。まず撃つ、撃ち終わった後に結果から行動する。

刀を捨てた幕末のガンマン達は弾切れになるまで捨てた刀を拾うことはしない、なんなら銃で殴りかかる。そういう覚悟が天から誅罰の許可を得る秘訣だ……

残弾五発、トラディション&レボリューションは一応剣のカテゴリであるので弾刃に込められるのは剣でのみ使えるスキルだけであるし、そのスキルが持つ時間制限や回数制限の制約を受ける。

虹光の斬閃の場合は回数制限、七度の斬撃にのみ作用するスキルはそのまま七発の弾刃という制限となる。

当てれば当てるほどヒット数が増える以上慎重に撃つべき？　だからこそ乱射する。

「オラオラオラァ！！」

一息に三射。一発は外れたが、二発の弾丸がもう一方の刀を弾き飛ばし、セツゲッカの右手首に斬撃の花吹雪を弾けさせる。残り二発！！

銃口（きっさき）をセツゲッカにつきつけ、引き金にかけた指に力を込める。退くなら迫って撃つ、避けるなら追って撃つ、迫るなら引いて撃つ。

セツゲッカの体力がどの程度残っているかは分からないが、少なく

ともここから逆転を狙うのは難しいだろう。

「…………」

「…………」

だからこそ、撃たない。五秒だけ、セツゲッカにチャンスを与える。

「全ロストだぜ？」

「……………」

引き金にかけた指に込める力を強める。刃に宿る虹光の輝きが凶悪な輝きを放ち――

「ま……」

「ま？」

「参った…………っ！　降参だ……」

一発目から倒してしまうと後続が尻込みするかもしれないからな、悪いが誉れある死は没収だ。あくまでも「ギリギリで降参すれば被害は最小限で済む」というのを周知させなければ。最悪挑戦者が現れずに雑談ショーになりかねない。

装備惜しさに降参する、というのはセツゲッカにとってはたいそう屈辱であるらしく、下唇を噛んで項垂れるセツゲッカに突きつけていたトラディションとヘレボリューションを降ろす。

「グッドゲーム」

「この屈辱、忘れはせんぞ……！」

「選択したのはそっちだぞ……あ、一応参加〝剣〟だけ貰うぞ。武蔵坊弁慶的なアレだから」

「く……」

買った本数だけイムロンに金が入り、狩った本数だけ俺はイムロン製の結構性能が良い剣を手に入れられる……うーん、ウィンウィンの関係って奴だな。ウィンとウィンの間にカモがギッチリ詰め込まれているが。

「さて……」

時に生還は死よりも〝悪い〟扱いになる。まさに今がそれなのだろうセツゲッカが刀を拾って去っていくのを見送りつつ、俺はセツゲッカから接収した参加〝剣〟をブリュバスの甲板にいるサイナに放り投げながら端的に一言告げる。

「次」

１２月２０日：伝統と革新（後書き）

１２月１６日、コミカライズ版シャングリラ・フロンティア１１巻が発売です
表紙は比較的ハイテンションなルストです。戦術機を目撃したことで血行が促進されたんじゃないですかね。普段はもっと血が冷えてそうなテンションです。小冊子の方は未だに謎の人物ことアーカヌムおじさんです、正直この人そこまで重要じゃないんだけど説明すると結構重要な情報がボロボロ出てくる、っていう微妙な立ち位置なのでいつ開示すればいいのかちょっと悩む存在です。
今年も気づけば一年を切り、そして作中はまだクリスマスに到達できていません。現実が速いんじゃないんですかね？多分時が加速しています、なにせ体感まだ１０月なのに日付は１２月ですからね。
バグですよバグ。
そんなわけで、いろいろな発表やらなんやらでシャンフロ的に激動だった２０２２年もそろそろ終わり、２０２３年を迎える前に１１巻を年末のお供にするのは如何でしょうか？大魔導師不二先生の手によって描かれるクターニッド編及びＧＧＣ編、マジで„„„ヤバ„„„です。
＜ｉ６９８９０５｜２２９５１＞
＜ｉ６９８９０６｜２２９５１＞
＜ｉ６９８９０７｜２２９５１＞

１２月２０日：速いのではなく（前書き）

現実世界ではメイド・イン・ヘブンによって時間が加速されているので作中での時間経過が正しい時間の流れで現実では三度目？か四度目のクリスマスが迫っているのはスタンド攻撃によるものです

12月20日：速いのではなく

◇

「……あれが〝ツチノコさん〟、か」

曰く、シャンフロ最速。曰く、ユニーク殺し。曰く、レアモンスターよりレアエンカウント。曰く、性別不明。

そういった事前情報を全て放り捨てて、巨漢の侍を瞬殺……そう、瞬殺と言って差し支えない程に圧倒して見せた半裸の女を見ていた彼らは、それらの情報があくまでも〝結果〟と〝印象〟でしかないのだと気づいた。

「噂だけだとモンスター専だと思っていたが……対人も強いじゃないか」

「例の配信(アーカイブ)を見るに対人も普通に行けそうだったしねー」

「というか、ウェザエモンと真っ向から殴り合う時点で人型との殴り合い熟知してる人っぽかったし？」

——負け戦だろ、これは。

言葉に出せば多くに〝聞かれる〟ため、口にこそしなかったがそれが彼の出した結論だった。

まず第一に、「赤」と「緑」が出た時点でこの戦いはレイドモンスターを先に討伐した方が有利になる。なにせレイドモンスターに混じって敵陣営に矢でも浴びせかければそれだけで一時的人的損失、

敵陣営のリソース削り、何よりそれぞれの本陣を目指して動くレイドモンスターが勝手に敵を削ってくれるのだから。
故に、今尚新王陣営側へと進軍するレイドモンスターが生存し、前王陣営を焼き尽くさんとしたレイドモンスターが倒された時点で新王陣営は負け確の二歩手前まで来ていた。

第二に、こちらの作戦をほとんど上回られた。【配信戦線(ライブライン)】は読んで字の如く、その活動をリアルタイムで配信している。ある程度動きを読まれることは覚悟の上であったし、中には配信しないという根本的なレゾンデートルを否定してでもやりたい事をやるべく潜伏を選んだ者もいた。
が、それらはほぼ全て打ち砕かれた。GUN!GUN!傭兵団がほとんど戦果を上げられずに殲滅された、と聞いた時には流石に笑うしかなかった。
諸葛亮か韓信か、なんにせよとんでもない先読みができる軍師がいるか、あるいはあまり考えたくはないが配信よりもさらに深い場所にある情報を流している者がいるのか。
なんであれ、こちらからの攻勢を読み切られた以上は負け確の一歩手前だろう。

そして最後に。
「〝これ〟を無視するわけにはいかない、か……」
新王陣営……否、ガル之瀬最後の一手たる王女暗殺に、今まさに向かおうとしていた自分が眼前の〝イベント〟を無視しきれなかったこと。
(俺は〝後〟でも問題ないが、〝今〟足を止めたら…まぁ、負けるだろうな)

元より私怨であったが……恨みすら一時忘れ、視線を奪われ、何より取れ高を嗅ぎ取ってしまうのは配信者としてのサガか。王認勇士アルブレヒトが傍らにいない今こそがガル之瀬の目的を果たす最大のチャンスであったのだが………致し方ない、と少しの無念を胸中にしまって視線の先で繰り広げられる〝大立ち回り〟を観察する。

「………確かに速いが、眼で追えない程ではないな」

聞いた話では瞬間移動じみた速度で動き回る、とのことだったが……例のアーカイブを見るに、誇張ではないだろう。対人戦で音速の脚力を全開にしたところで過剰に過ぎる。抑えているのか、あるいは何か最高速度を出せない理由があるのか。

「とはいえ………速さは脅威の本質じゃない、か……」

「なんて？」

とはいえ、実際に目の前で戦っている姿を見たからこそ……あるいは、それが〝対人戦〟であるがためか、ガル之瀬は「サンラク」というプレイヤーの本質が〝速さ〟にはないことに気づいた。その呟きにガル之瀬と同行していた仲間が怪訝に聞き返すが、ガル之瀬はじっと眼前の戦闘を見つめていた。

（例の動画内も含めて〝剣〟、〝銃〟、〝刀〟、〝斧槍〟、〝徒手空拳〟、〝盾〟………形態変化にしたって第五、第六………バランス調整をかなぐり捨てたってもう少し理性が働くだろうに）

人に対するものではない評価を人に対して評しながら、ガル之瀬は

目の前で〝それ〟を振るうサンラクをじっと見つめていた。
まるで、他者のプレイで予習してから実際に自分がコントローラーを握るかのように。

◆

「さしものツチノコさんもこれは初見だろう？」
ヒュンヒュンヒュンヒュン、と風を切る音が鳴り響く。鎖を通して伝わる運動エネルギーが遠心力によってさらに加速され、重量以上の殺傷力を秘めた金属塊………分銅が円形に空を割いている。
セツゲッカの降参後、なるほど確かに「ギリギリで降参すればデメリットは剣一本分」という情報こそ周知されたが、「そもそもワンチャン勝てるのか？」と思われてしまったらしくセツゲッカに続く者はすぐには現れなかった。だが、いよいよ雑談ショーかと腹をくくりかけた矢先にその男が我こそはと手を上げたのだ。
鎌／……カマスラッシュでいいんだろうか、鎌をラッシュでぶちかますのかな？　と思ったら鎌は鎌でも〝鎖鎌〟ってか。
「まぁ確かに鎖鎌が武器種として存在してた、ってのは知らなかったな」
「忍者ジョブを発展させた上でさらにギルド内でのおつかいをこなしまくって閲覧可能な巻物でようやく生産可能になるからな………そして俺は、今日この日までこれを秘匿し、研ぎ澄ましてきた……

！　素人が振り回していると思ってくれるな！」

「配信中だけどいいのか？　派手に情報拡散されるけど」

「マジな話するとこの前忍者掲示板で別の人がバラしてたので秘匿する意味無くなった！」

成程、認知されてしまった以上は「それを知るただ一人」ではなく「研究の浅い武器に熟達した使い手」になったってことね。

「ふっ……なら、俺もそういうので相手してやるよ」

この見世物(はいしん)は何もさっき思いついたわけじゃあない。事前に予定し、周到な容易と準備を行ってきた計画なのだ。対人戦は底の深さを悟らせない戦い、そして底の浅さを隠すための戦い！

インベントリアから取り出したそれ……鎖鎌が鎌と分銅を鎖で繋いだものであるならば、こちらは棍と棍とを鎖で繋いだもの。

射程は比べるまでもなく、しかしその柔軟性と風を切る音は鎖鎌に劣るものではない。身体に這わせるかのように振り、回し、掴み、構えたそれは……

「ヌンチャク……！？」

「知らないようならアドバンテージはイーブンかな？　イロモノ同士初見殺しの殴り合いと行こうや！」

動きはカンフー映画で見稽古した。

何人抜きするかはともかく、五人十人と相手をするなら手数は多いにこしたことは無い。ＤＰＳではなく……いやＤＰＳは前提だが…

……バリエーションとしての手数。それを得るために俺は様々な〝伝手〟を利用して新たな武器を大量に獲得した。
このヌンチャク……鉱人族(ドワーフ)の隠れ里でアラバの名を出したことで信頼を獲得し、武器を作ってくれた鍛冶師ガンダックの作品……打撃武器が発展していた鉱人族の隠れ里ではメジャーな武器種であった双節棍(ヌンチャク)、その名も「双翼鉄(ソウヨクテツ)」！

鎖鎌と双節棍、互いに何をしてくるのか分からないが故にサイナの号砲が鳴ってなお、俺も鎌／も動かなかった。一種の膠着状態……
……だが、均衡の静寂を破ったのは相手だった。

「ちぇえい！」

研ぎ澄ました、ということはその武器に対応したスキルもまた修めている……とは予想していたが、正しかったようだ。振り回す回転のエネルギーをそのまま推進力へと変換、射出された分銅はスキルの輝きを放つ鎖の尾を引き連れ俺の頭部を狙う。一見すると蛇のようとも言えるが……蛇がこんな矢の如く飛んで来たら世紀末だぜ！

「っ！！」

弾くか、避けるか。俺は後者を選び、しかし数秒前まで俺の顔があった虚空を貫いた分銅が……曲がった。

「何！？」

「鎖鎌スキル「首巻き蜷局(ハングド・メーカー)」！　獲った！！」

追尾……いや、首吊り(ハングド)を作る(メーカー)？　首に巻き付くことに特化したスキルか！

流石に必中ではないだろう、恐らく加速すれば避けること自体は可能なはずだ。だが互いに先手を警戒して後手に回ろうとしていたのが仇になった。思考加速スキルはパッシブではなくアクティブスキル、使うと念じなければ発動しないし……加速していない思考でスキルを使っても発動とその処理が起きるまでには若干秒の間がある。つまり最初から思考も肉体も加速していなかったが故に、俺は頭狙いを装った初撃を避ける事は出来ても、本命のハンギングから逃げる事が出来ない！

「その首と後ろの宝貰ったァ！」

熟練を自称するだけのことはある。恐らくあともういくつかのスキルを組み合わせることで鎖鎌による必殺コンボを構築していたのだろう。鎖が急激に引っ張られ、しかし同時に〝手繰り寄せた〟鎌／がこちらに勢いよく突っ込んでくる。引っ張り、引っ張られることでの双方向の急接近、となればトドメは当然分銅に繋がった鎖のもう一方の端にある鎌！！

もはや一刻の余地もない、こちらもあちらも近づいているのだから即応しなければ動脈をスパっとやられるだろう。俺の体力で急所に当てられるとそのままお陀仏の可能性が高い！　取れる行動（アクション）は一、二回！

「……ラーズージー！」

裂ぱくの気合を込めてその言葉を唱える。そして俺は同時に手に握っていた双翼鉄を……思いっきり、上へとぶん投げた。

「悪いな、実は〝アレ（パフォーマンス）〟しか出来ないんだ。レベル１４９の時に作ったからスキル生えなくてな」

ほんの少し、ほんの一瞬だけ鎌／の視線と意識が「何かを唱えながら上に投げられたヌンチャク」に向いた瞬間……黄金に輝く拳が、鎌／の顎に突き刺さる。

なるほど確かに分銅の追尾首絞めには間に合わなかったが……使ってないわけじゃない。思考を加速させる「永劫の眼（クロノスタキサイア）」に、正しき攻撃の道を導き出す「運命の眼（フェータリザルト）」。そして……ヒット数をダメージ据え置きで三倍にする「勝利の神撃（ヴルスラグナ・スマッシャー）」。

つまるところ、加速した思考の中で正確に顎をぶち抜いたアッパーカットが鎌／のＨＰを一発（さんはつ）で削り切ったのだった……

「必殺、ヌンチャクパンチ」

「それ、素手……」

一流の戦士たるもの、武器が無くとも戦える術を修めて当然。

１２月２０日：速いのではなく（後書き）

辣子鶏（ラーズージー）：超要約すると激辛から揚げ炒め、当然叫んだところで何も起きない。

コミカライズ版シャングリラ・フロンティア１１巻好評発売中です

<ｉ６９８９０５｜２２９５１>

<ｉ６９８９０６｜２２９５１>

１２月２０日：轟音と閃光で雷は偽れる、透明な炎は侮りを呼ぶ

【戦術機】対人戦闘研究掲示板　Ｐａｒｔ４７５【人か？】

６５４：仁義好貫
我々がやっていた対人戦はおままごとだったのか？

６５５：ゴマフアザラ氏
対人戦って人と人が戦うものであって人外と人が戦うのはただのボス戦では？

６５６：オフトゥンキング
鎖鎌ってああいう戦い方なのか、鞭の捕縛系スキルとか流用できるのかな

６５７：ねこまたぎ
対人に有利とはいえ露出高めの装備つけるの抵抗あったけどツチノコさん見てたらくだらない悩みに思えてきた……

６５８：戦士ティブ
そもそも防具縛ってほぼノーダメかよ

６５９：ｅｃｏＪＡＷＳ
視力系のスキル使ってるんだろうけど目ぇガン開きで残光の線引きながら高速で殺しにかかってくるの怖すぎだろ

６６０：鶴ぺったん

見た感じ対人素人って感じでもなかったし幸運食いしばりはこのゲームじゃ基本義務だし……今のアッパー、食いしばり貫通した？

６６１：ハイドロ凡夫
多段ヒットじゃない？　着弾エフェクトがチカチカしてたし

６６２：テルヴィン
素手の連打系じゃない多段ヒットスキルか……金エフェクトのやつなんてあったか

６６３：鬼葬天蓋
素手スキルで多段ヒット高火力は対人じゃ必須級一歩手前じゃね？

６６４：アースフェルト
対人ステゴロ勢だけどアレ多分百点満点のクリティカルで叩き込まれたから一撃で相手が倒されたんだと思う
ツチノコさんってクリティカル特化って聞いたことあるし上振れダメージの天井が高いんだと思う

６６５：Ｈｅｘｅｎｓｃｈｕｓｓ
鎖鎌使いの方も完璧なムーブしてたんだけどな……首に鎖捲きつけられて引っ張られてる最中に冷静な判断で顎にクリティカルでアッパー叩き込める奴が相手なのが不幸だったか……

６６６：ｅｃｏＪＡＷＳ
あれ視力強化かと思ってたけどあの状況で使う意味無いしもしかして思考加速系スキルだったか？
あれって弓系と刀系しかないものだと思ってた

６６７：あさぼらけ

思考加速はパリィスキルから派生するんだよなぁ
単品で使うと自分もスローモーションになるんだけど

668：カモシャモシャモトキ
というかゲーム内だと現地にいないと実況できないのつらい、ログアウトして配信見るか……

669：あかしゃ
現地勢ワイ、挑戦剣一桁ゲットなのでこの後挑戦する

670：万龍御来
ドン引きしてる人も多いけど普通に軽量戦士における現状最強の到達点が組手やってくれるなら挑まない理由ないんすよね、戦争イベントで乱戦するより燃えてきたわ

671：宿本。℃
軽量戦士掲示板は大体1スレ使うまでに3回はツチノコさんの話題になるからな……いやオルケストラ配信が衝撃的すぎたのは本当にそうなんだが

672：ω姉
あの加速しながら回るスキルが強いんだよね……対人戦で高速で回り込めて円の大きさは発動者が設定可能ってだけで人権過ぎる
あれリヴァイアサンで習得できるんだっけ？

673：受剣聖
最初のマッチョとの戦いで使ってた武器がヤバすぎる、当たった時に斬撃エフェクト出てたってことはあれ剣のスキル飛ばしてたんだろ？　ぶっ壊れだろ

６７４：テルヴィン
火力が低すぎるから多分言うほどぶっ壊れじゃないとは思う
さっきのアッパーで軽量戦士確１取れるなら多段ヒット系の斬撃技
あれだけ当ててマッチョ侍が瀕死だったのはおかしい
あのヒット数で死んでないなら総身勇姿の護符つけてたとしてもあ
の斬撃ショットにＳＴＲ補正がかかってないんじゃないか？

６７５：スター・ゲイジー
銃撃そのものはスキルの効果をぶつけるのが本命でダメージは二の
次、って感じはある
ただそのまま振り回しても変な形の剣判定でスキル使えそうな気は
するけど……

６７６：ジョー・ジャック
というかヌンチャクはなんだったんだよ

６７７：ω姉
フェイクでしょ

６７８：あさぼらけ
ポーズ決めるまでの動きが完璧すぎて普通に騙されたよね
ていうかヌンチャクあるんだ……三節棍もありそうだ

６７９：ハイドロ凡夫
次のチャレンジャーのエントリーだ！

６８０：鬼葬天蓋
対するツチノコさんは何使うんだ？

６８１：ねこまたぎ

チャレンジャーは槍使いか、比較的リーチ長いし普通なら有利なんだけど……

682：アースフェルト
中距離でも戦えてしかも至近距離が本命のめっちゃ速いやつに槍は無理だろ……せめて盾持たないと

683：カモシャモシャモシャモトキ
ナイフ？

684：あかしゃ
もはや武器ですらない投げアイテムかよ……

685：仁義好貫
とはいえあの殴り性能あるなら実質素手でも普通に厄介だ

686：受剣聖
ていうかチャレンジャーの名前これなんて読むんだ？

687：ローニン聖
卓救瓶、たくきゅうびん、宅急便

688：スター・ゲイジー
というかツチノコさんどんだけ武器バリエーションあるんだ
現時点でいくつ使ってる？

689：鶴ぺったん
剣、双剣、刀、銃、斧槍、拳、盾、ヌンチャク……はフェイクで、銃の剣、ナイフ？

６９０：オフトゥンキング
いやどんだけよ
スキルパンクするだろそれだけ使ってたら

６９１：あかしゃ
いやどうだろう

６９２：ジョー・ジャック
チャレンジャー、初手詠唱破棄魔法ーっ！

６９３：スター・ゲイジー
それ槍じゃなくて杖か！！

６９４：ｅｃｏＪＡＷＳ
防具も込みで完全に槍使いに偽装して範囲火力ブッパか……雑魚ならともかく強いモンスター相手じゃねこだまし以上の効果は無いしさては対人勢だな

６９５：アースフェルト
ツチノコさん避けてる！

６９６：宿本。℃
いやなんで避けれてるんだ完全に不意打ち決まってただろ

６９７：あかしゃ
「悪いがその手のハッタリはやるもやられるも慣れっこなんだよォ！」だって

６９８：あさぼらけ
どういう人生送ったらそんな騙し合い上等の環境を通ってくるんだ

６９９：万龍御来
あの火属性魔法、確か威力はそんなにだけどホースから水噴射する
みたいに飛び散って結構長い時間地面に残る奴だっけ

７００：テルヴィン
【大地に燃ゆる恵みを（フレイム・シャワー）】でしょ、完全に対人向けのフィールド制圧
魔法

７０１：戦士ティブ
いやでも実際上手い、流石にあの距離なら高速で突っ込んできても
不意打ちにはならない
どうするツチノコさん

７０２：受剣聖
さっきの銃使うだけでは？

７０３：あさぼらけ
火シャワー使えるなら上位ジョブだろうし対人ムーブもちゃんとし
てるなら十中八九マテプロ使うでしょ

７０４：オフトゥンキング
【攻性物質遮断障壁（マテリアル・プロテクション）】って一定量まで物理攻撃を防げる障壁だっけ、
たまにモンスターの攻撃に耐えきれずに割られて死んでる魔法職見
るけど

７０５：仁義好貫
対人なら詠唱できる時間を稼げるから普通に有能魔法だよ

７０６：あさぼらけ

まー思いっきり勢いつけて大剣叩きつけたりするとあっさり割れるんだけど
中距離なら対物ライフルみたいな火力じゃなければ大体二、三発は耐割れてるううううう？

７０７：アースフェルト
今ツチノコさん何した！？

７０８：Ｈｅｘｅｎｓｃｈｕｓｓ
ナイフを蹴り飛ばした！？

７０９：まかろにダイダロス
比較的ツチノコさんが見えやすい場所から見てたけど、なんかスキルエフェクト乗ってたよ

ナイフと足両方に

７１０：鶴ぺったん
は？蹴って投擲するスキル？

７１１：王子豆腐
なーんじゃそらぁ？！

７１２：幡地野路永慶
一撃でマテプロを叩き割ってしかも本人に当たって自壊………というより自壊しながら超高ダメージ？
覚えがあるぞこの手口、この振ったら砕けるみたいなバカ火力！

７１３：Ｈｅｘｅｎｓｃｈｕｓｓ
パスタだろこれ！

714：ローニン聖
消費アイテムじみた武器じゃなくて本当に消費アイテム作ったのか
あのパスタ野郎……

◆

今回の〝作戦〟に際し、俺は二人のプレイヤーに協力を仰いだ。
一人は……まぁ、ものっっっっっ凄く不本意ではあるが俺が知る限りではこのゲームでも上から数えた時にまず最初か最低でも五番目以内には名前が上がるだろう魔法職……ディープスローター。器用貧乏は一定ラインを超えればそれは万能である。攻撃も防御も転移もなんでもござれと言わんばかりのディープスローターの協力が無ければこの１ｖｓ１の状況を維持し続ける事は不可能だった。
そしてもう一人……イムロン。
武器が作れる、防具が作れる、挑戦剣を作る……そして何より、顔が広い。リアルでそれをやろうとすれば十年単位の修行を要するだろう武器作成もシャンフロなら作った本数で年月をスキップできる。現実の鍛冶師とは比べ物にならない数の鍛冶師が存在する、そして彼らも戦士や魔法使いが意見を交換するように浅いにせよ深いにせよ繋がりを持っている。
そんな中でも一目置かれているイムロンには特に知り合いが多い。鍛冶師としての〝お得意様〟である戦闘職もそうだし……なによりも、同業者（せいさんしょく）の知り合い。エリュシオン・オートクチュールだって

イムロンを介して知り合ったわけだしな。
量産型パスタ、という人に付ける名前じゃねぇだろそれ……という
プレイヤーネームの鍛冶師との仲介を取ってくれたのもまた、イム
ロンだった。

イムロンは聖槌ムジョルニアを保有する勇者鍛冶師だ。そして聖槌
が鍛冶に対して特殊な効果を発揮する、という時点でプレイヤー鍛
冶師が目指すのは二つの道に分岐する。
イムロンに追いつき追い越すために研鑽するか、あるいはイムロン
に無い強みを極めるか。量産型パスタ氏は後者の鍛冶師だ。彼が製
作するパスタシリーズなる武器種は非常にシンプルで、しかし非常
に尖った性能をしている。
武器防具には耐久力があり、それがゼロになれば基本的にその武器
は失われてしまう。故に鍛冶師が武器防具を作る上で「どの程度耐
久値を確保するか」というのは重要な項目だという。当然耐久に重
きを置きすぎれば「ただ頑丈な武器」にこそなるが、それ以上の効
果を付与することは出来ない。俺が持ってる中じゃ【廻渦白波(うねりしらなみ)】が
それに該当する。
まぁ、それはそれで需要があるわけだが……当然その発想に至れば
次の段階を思いつくのは自然な道理だ。

耐久に振りすぎるとただの頑丈な武器になって他の能力を付与でき
ない。では限界まで耐久を削れば……息を吹きかければ割れるよ
うな脆すぎる武器には、一体どれほどの効果が搭載できるというの
か。

――番外パスタシリーズ【ペンネ】
振り始めた瞬間から自壊し始めるというアホみたいな能力と、金色
一色というアホみたいな見た目の投げナイフだが、そこに秘められ
た火力だけは神に誓って保証すると彼は笑っていた。

一秒で自壊するシャボン玉より儚いものを当てようとするならそれこそ超至近距離から刺すしかない……これ投げナイフですよね？
だが、俺の至極真っ当な指摘に対して量産型パスタ氏は笑みを崩さなかった。なるほど確かに【ペンネ】は脆い。使った時点で崩壊を始め、その切れ味はたった一秒しか維持できない……だが下手な防具一式を作るより手間がかかっているその一秒はそうあれと作ったのだと。

その投げナイフは使った時点で崩壊が始まり、一秒経った時点で強制的に砕け散る。
言い換えよう。
その投げナイフは投げるために振りかぶる瞬間から砕け始めるほどに耐久を削ったことで投げナイフとしては規格外の破壊力を内包させることに成功し、そしてその耐久は……〝絶対に一秒で〟尽きる。
その制限時間はそれ以上でもそれ以下でもない。

「バ…………!?」

「一秒で刺す、必要なのはそれだけ」

逆に言えば〝一秒以内〟なら武器としての性能を維持し続ける投げナイフ、俺の出した答えは蹴武（ストライク・アーツ）「ディストーツトリガー」。捻じれ回転を込めて武器を蹴り撃つそのスキルは【ペンネ】に銃弾のような回転と速度を与えた。

逆に言えば一秒間は破壊的なダメージを維持し続ける投げナイフは、槍使いと思わせての魔法使いが展開した物理ダメージ無効と思しき障壁を拮抗すらせずにぶち抜き……そのまま偽槍使いの喉に突き刺さり、そこで砕け散った。

「バカ、な……！」

「実はそれ一本５００万マーニ」

「たっけぇ………！？」

すこん！　とんでもない火力とノックバックで体力を1残して動きを止めた相手に普通の投げナイフを当てる。プレイヤーの食いしばりは本当に厄介だ、ＨＰはきっちりゼロにしないとな。

しかし卓救瓶……なんて読むんだこれ、このゲーム当て字の漢字ネームがやたら多いんだよな。

さて……まだまだバレるつもりはない、勝利で着飾って底を隠せ。俺の手数は百を越え千をも越え、それすらも湯水の如く使い切るのだと思わせるのだ。

「一本５００万マーニの消耗品を使って財布と胃が痛まないわけねーだろ！　俺ですら二本しか持ってないんだぞ！」という本音を顔にも声にも出さずに隠しきる。対人戦はどれだけ強みを派手に弱みを地味に見せつけるかの戦いだ。弱みも強みも全開で輝かせて突っ込むのが許されるのは幕末だけだ。

12月20日：轟音と閃光で雷は偽れる、透明な炎は侮りを呼ぶ（後書き）

【ペンネ】を作る為に必要な素材

・金色鉄鉱
その名の通り金色の鉄鉱石。最優にして最強たる黄金の鉄の塊。
全ての鉄鉱と比して優れるそれは如何なる用途であろうと最上の素材となる。
本来全ての鉄鉱は同一であるはずだ。だが金銀に輝き、白黒ついて灰にくすんだそれらは異なる価値を持つ。故に輝く鉄鉱のそれはいつしか〝価値の輝き〟と呼ばれるようになった
水晶巣崖には存在しない鉱石。

・アロンカレス瑠璃硬晶
鉱物食モンスターによって永い間圧縮と純化を繰り返される事で生成される極めて魔力濃度の高い水晶体。硬度自体は然程でもないが、その真価はコーティング剤として用いられた時にこそ発揮される。
鉱物食の生物は鉱石を摂取し、鉱石を排泄し、鉱石を育みそしてその亡骸を鉱石に捧げる。それはまさしく石と命で完結した円環である。
水晶巣崖に存在する鉱石。

・ラピステリア星晶体（五等星級のテキスト）
〝天より落ちた星空の欠片〟と称えられる絶世の宝石。〝等星〟でランク付けされる。
その結晶の中に息づく星々の輝きは魔力の閃きであり、凄まじい量の魔力を秘める。
かつて人は星の海の中を漂い、しかし大地に根差した。あるいはこ

の宝石の輝きは、星空が人を懐かしんでその身の一部を地に旅立たせたのだろうか。
水晶巣崖に存在する鉱石。

コミカライズ版シャングリラ・フロンティア１１巻好評発売中です
<ｉ６９８９０５－２２９５１>
<ｉ６９８９０６－２２９５１>

12月20日：Dress Up！（前書き）

古戦場対策です（読者騎空士はこれを読むのでスタートダッシュに出遅れる高度なタクティクス）

12月20日：Dress Up!

実のところを言えば、「周囲に見せつけているサンラク」と「実際のサンラク」には結構なズレがある。
俺が使いこなしているように見える数々の武具もその実、ほとんどそのまま振り回しているに過ぎない。シャンフロにおいて真に使いこなすと言うにはやはりスキルあってこそだ。
見た目の派手さと意表しか突かない動きで誤魔化してこそいるが、周囲に思わせている以上に俺の底は浅い。

「如何にユニークモンスターを撃破しまくりだろうと、仮に完全物理に振り切っていようとプレイヤーとしてのスキルリソースは有限！　ツチノコさん、あんたの事は対人掲示板で研究済みだぜ……！！」

ので、勝手に研究されてたのは正直キモいが遅かれ早かれ俺の手の内の深くまで切り込んでくるやつが出るのは分かっていたっちゃあ分かっていた事だ。

「研究て、ボスモンスターじゃあるまいし……」

「似たようなもんだろ」

ここじゃなくて法廷で殴り合っても構わんぜ俺は。
とはいえこのゲームにおいて対人要素は対モンスターに負けず劣らず盛り上がっているコンテンツであり、そこで研究対策を立ててここに来たと宣う「あかしゃ」なるプレイヤー。見たところ……剣士、か？　これと言って特徴のない装備だ。先程完全偽装魔法使いと戦

ったばかりなので見た目通りのものがお出しされるとは限らない。
特にこちらを対策してきました、とわざわざ言うくらいだ……
警戒することに越したことはない。（相手が青聖杯で性転換する）
こちらもある程度手札を切る覚悟を決めねば。（相手がさらにR．I．P．で黒衣装に換装）
よーし警戒の方向性は対人勢じゃなくて「対バカ」だなこれ！！（ドルルン！　とどう見てもチェーンソーを構える相手）

「はーっはぁ！見よこの黒き死に捧ぐ嘆き（レクイエスカト・イン・パーケ）！」

「……俺の知ってるやつとは随分デザインが違うようだが」

「ふっふっふ……ツチノコさんも知らなかったようだな……黒き死に捧ぐ嘆き（レクイエスカト・イン・パーケ）にはレアパターンがある！」

マジか、喪服一択だと思っていたが……いや違うな、喪服なのは共通してるけど喪服のデザインで違いがあるって事か。

「ちなみにこれ引き当てた時点でキャラメイクやり直して完全にこれに合わせた」

「思い切りが良すぎるだろ」

成程、リヴァイアサンかベヒーモスでキャラメイクやり直せるくらいには既にやりこんでいる……と。性別をわざわざ青聖杯で変えている辺り、クターニッドも通過済み。対人勢とのことだが普通にシャンフロの深いところに頭から突っ込んでるじゃねーかよ。

どうみてもゴスロリな漆黒の衣装を身にまとってギャルンギャルンとチェーンソーを唸らせる姿はどう見ても出るゲームを間違えていますよとしか言いようがない……ファンタジーの〟ファ〟の字がかろうじて残っているかどうか、ってくらいだろう。

「さて…………」

とはいえ、チェーンソー……チェーンソーか…………このゲームでチェーンソーがどういう挙動するのか全く分からないぞ…………いやチェーンソーとの戦闘経験そのものはなくもないけど、シャンフロというスキルで人外挙動してナンボ、魔法で奇跡起こしまくってナンボの世界観でチェーンソー…………この手の非ファンタジーな武器でもリヴァイアサンとかで深堀すればスキル見つかってそうだし…………

と、ここで俺は視界の端でなにやら観客とは言い難い動きをしている影に気づいた。何故かそこだけ人が集まっていない……というか、ある一人をその他が避けているが故に空白が生まれているような……

……

「あー……」

そこには、彫刻の如き均整の取れた多式肉体をメイド服で着飾った男前が血走った目でなにやらわちゃわちゃしている光景が広がっていた…………リアルだったらもう既に警察呼ばれてるだろこれ。

とはいえエリュシオン・オートクチュールである。俺と奴との関係はビジネスライクなものではあるが、無関係というわけではない。そして俺はクライアント側であるのだが、奴の要望を一つ聞かねばならない…………

即ち。

『今しかない！！！！』

「あーはいはい………」

何が、を完全に省いたタイミングの指示だけが書き殴られた看板にほんのりと頭痛を感じながらも、言いたいことは分かる。
例のアレの性能試験と、その宣伝をすること。よーいドンで斬りつけて結果を見るだけじゃわからない生の戦闘によるデータ収集。それに関しては俺も望むところなのだから。

「成程ね、R．I．P．のレアパターン………いいものを見せてもらった。じゃあこっちもお礼をしないとな……」

「何……？」

「ただ変身するだけじゃあ時代遅れだぜ」

インベントリアを操作。この格納鍵インベントリアというやつはこのゲームにおける「こういうUIあったらいいな」が詰め込まれているので、例えば装備プリセットや一括装備みたいなものも、インベントリアあるなしではその有無ではなく〝質〟が違う。
厳密には着替鍵（ちゃくたいけん）ドレッセリアが備えていた機能をインベントリアにインストールしてアップグレードしたものだが………

「こういうのはやっぱ言うのがお約束だよな」

「何を……」

そりゃあもう。

「――変身」

違う自分になるための素敵(おやくそく)ワードだよ。

――時に話は変わるが、そもそも格納鍵インベントリアとはどういったものなのか。

ゲーム的に言ってしまえば、無限インベントリアである。容量の上限が無く、何をトチ狂ったか格納できる物体の〝大きさ〟の上限もやたらに大きいので船すら手持ちで携行できてしまうバカアイテムだ。まぁ流石に巨大すぎるものは展開に時間がかかるので（というかかかるようになったので）実戦で使うにはちょっと頭を使わないといけないが……

それはそれとして、だ。この格納鍵インベントリア、設定上はどういう理屈でモノを無限にしまっているかというと……どうも物体そのものをそのまんま格納空間に送っている、というわけではないらしい。色々と気になって自称インテリジェンスな征服人形(サイナ)だの、親身そうで実はそうでもない船幽霊共(いさなとそうげ)だのに聞いてみたが……要するに、物質を「情報」として格納空間内に転送している、だそうで。SFに現代知識でケチつけたところで「フィクションってご存じですか？」で論破されて終わりだが、物質をギガバイトテラバイトならぬマギバイトに変えてストレージにアップロードします、とはまたトンデモ設定というほかない。というか格納空間に行ってる間、生物学的には俺死んでないかそれ。

とはいえ、だ。格納鍵インベントリアが「情報の物質化」なるトンデモ奇跡を科学的に引き起こしているのはこの世界においてはどれ

だけぶっとんでいようがそういうものとして通っている。さらに「虚数質量」だの「偽装物量」だの【ライブラリ】だったら三日三晩熱く語りそうな設定の数々があるようだが……それを活用するとこんなこともできるらしい。

『DRESS―UP　PROTOCOL：SET』

『REALITY（現実）―EXPANSION（拡張）：START（開始）』

ひゅるん、とインベントリアから湧き出るように現れた〝布〟が、自ら意思を持つかのように広がり、さながらカーテンの如く俺を囲んで包み隠す。

「仮想現実（VR）の中で拡張現実（AR）ってのもよくわからん話だけど……」

そこに在ってそこに無いもの、実体はなくとも俺の姿を隠す幻影（ホログラム）のカーテン。外からは、俺のシルエットだけが浮かび上がっているように見えるだろう……そういう風に設定したからな。

光によって浮かび上がったシルエット、ほぼ無装備状態故に人間の輪郭ほぼそのまんまの影の中でこの一連の現象において設定された装備が自動で装備されていく。個人的にはアクセサリーも自動設定できるのが便利だ。

「デフォルト変身バンクはもう古い」

俺のシルエットが味気のない人型から異なる形へと変わる。光の中でシルエットが別の形に変わる、というもの自体はR．I．P．の変身バンクと似たようなものだが……こっちは〝慎み深さ〟が違う、着替えをカーテンで隠しているからな。

「時代の最先端はカスタム変身バンクだぜ」

シルエットの変貌が完了した瞬間、ホログラムのカーテンが布から炎に変換される。炎の幕は渦となり、揺らぎ……そして開く。あたかも炎と化してなお、カーテンとしての役割を忘れてはいないかのように。そしてそれはもう一つの役割……内に秘めていたものをお披露目することもまた、果たす。

「さぁやろうかゴスロリチェーンソー」

「メイド服……！？」

炎の幕が開き、霧散する。中にいた俺が一歩踏み出せば……それまでとは違う、ブーツが荒野を硬く踏みしめる音が響く。

エリュシオン・オートクチュール作、決闘級メイド服「千古不易」。武装はヴァイスアッシュ作、百足式(タウゼント)８－０．５。

不格好な棍棒にも見えるそれを肩に担ぎ、人差し指であかしゃを指さし端的に告げる。

「巻きで行こう」

12月20日：Dress Up！（後書き）

Q．言うてやってることは見掛け倒しですよね？
A．見掛け倒しがパワーになる世界だからネタに見えて世界観的には結構合理的、ウェザエモンが出陣する際にでかでかとリヴァイアサンのエンブレムを出すことでウェザエモンが無双することで「同じ勢力」である人類にもバフをかける、みたいなのも考案されていたが、「これ逆に人類が不利になる程ウェザエモンも巻き添えで弱体化しかねないな？」ということで却下された。

滅茶苦茶簡単に原理を説明すると
「炎に包まれ、中から現れる演出」を相手に認識させることで「相手は炎に強いのだろう」という認識を植え付け、相手側の認識によって「相手には炎が効かない」という弱体化を施す。みたいな感じ

１２月２０日：軽い、故に速い。速い、故に軽い。（前書き）

編集氏に泣き二回入れるくらい大苦戦だった〆切をようやく調伏したので

１２月２０日：軽い、故に速い。速い、故に軽い。

『エクセレント！　そこでキメポーズ！！』

はいポージング受付してないでーす。
エリュシオン・オートクチュールの戯言をスルーしつつ、俺は決闘級メイド服「千古不易」の着心地を確かめる。とはいってもこのゲームで着心地に違和感を覚える事は基本的に無い。クターニッドの効果で強制性転換させられた時は装備のサイズが合わなくなったりもしたが……少なくともプレイヤーが制御し得る範囲で防具のサイズがプレイヤーの意にそぐわないことは無いのだろう。

「さぁかかってこい」

「くっ……既に変身魔法少女としての格で負けた気がする……！」

「物理型だから魔法少女ではないんだけどな……」

百足式８－０．５は俺の手持ちの甦機装の中では一番クセなく使える……が、一番性能が尖った甦機装である。
超過機構(イクシードチャージ)を使うと使い手諸共ブッ壊れたり、真正面から魔法を受け止めるが故に耐久を著しく削ったりせず、効果もシンプルにＭＰの常時消費とそれに応じたパワーアップおよび敵へのデバフと非常にシンプルだが……実のところを言うと百足式８－０．５、性能の九割をそれに使っているので、非超過機構使用時は冗談ではなくただの棍棒なのだ。
さらに言えば超過機構もまた、「俺(サンラク)」とは相性が良くない……というか悪い。この武器に真に適したプレイヤーとは「ハルバードスキ

ルを習得している魔法職」だろう。封雷の撃鉄・災はＨＰが１になればそれ以降の体力半減を踏み倒せたがこっちはそうはいかないのだ。〝外付け〟で補強できるとはいえＭＰが尽きたら効果時間終了というのは物理型の俺と相性が悪い。

さらに言えばこのメイド服のせいでアクセサリースロットも事実上使用不可……脳が味覚に錯覚させた苦みを表情に出さないようにしつつ、敵の情報を改めて整理する。
ゴスロリチェーンソー……一発芸みたいな恰好しやがって、と毒づきたいが鎖鎌の前例があるのであれをコケ脅しと判断するのは危険だろう。ＰｖＰイベント最前線にわざわざ持ち込んできたくらいだ、使い捨て前提とも思えないし勝って生き延びるつもりで来たのは間違いない筈。

バハムートで金さえ積めば買える量産品のしょっぱい性能の奴は見た目が画一的だ。特務用などのランクが上の方のやつならば画一的ながらも高性能感ただよう見た目になっていくが……

「随分とキレッキレのチェーンソーだな、特注か？」

「勿論、キレッキレのバリッバリだぜ」

聞いたら答えてくれた、ちょろいぜ。
とはいえ特注品(ワンオフ)かあ………最悪ビームが飛んでくるのも想定しないとダメかもしれないな。
おっと、そろそろ始めないと〝映え〟が悪いな。

「サイナ！」

「了解‥」

「うおおおサイナちゃんにキルされた実績が欲し」

銃声。随分と人生のトロコンが難儀な奴がいた気がしたが一つ埋まったようで何よりだ、次は命綱無しでバンジーの実績を取って来てほしいものだ。

ギャリリリリリ！　とあかしゃの持つチェーンソーが駆動音(さけび)を上げる。かつて人類存亡をかけて戦った神代文明に由来するそれは、馬鹿正直に木材伐採用ということはあるまい。むしろ大木の如き敵の手足をぶった斬る用……と考えるべきだろう。

「小手調べだ！」

だが、そのあかしゃの第一手はそういった大雑把で豪快なものとは異なっていた。

奴はチェーンソーを地面に突き立てると、その回転運動によって掘り起こされ、砕かれた石、あるいは土をこちらに勢いよく弾(ハジ)き放ったのだ。

原理はつま先で地面を蹴って土に前に飛ばすのと同じ、だが出力が人体でやるそれとは比べ物にならない。何かしらのスキルなのか、こちらに散弾の如く飛来する土礫は明らかに敵の体力を削るだろう光を帯びている。

「チッ……！」

一歩、二歩では避けられない。紙装甲がやられて嫌なことを熟知した初撃だ、多重的円周運動(オービット・ムーブメント)で半円を描いて回避。だがこのスキルは少々見せすぎた。

「そこだぁ！」

「チッ……」

ゲームにおいて性別や体格なんてものは殆ど信頼できない情報だ。全てはステータスパラメータによって決まるのだから、華奢な少女が巨岩を叩き割ることもあるし2メートルある巨漢のステータスが軒並み低い、なんてこともプレイ開始10分くらいならありふれたものだ。

つまり、見てくれは細腕であってもチェーンソーを振り回す膂力が非力である、と期待するのはするだけ無駄、という事だ。

あかしゃを中心点に円周を移動して背後に回り込んだ俺に対して、あかしゃは自分自身を独楽として回転させながらチェーンソーを叩き込んできた……片手で。

「おっも……！」

百足式8—0．5を構えて叩き込まれたチェーンソーの回転刃を受け止める。こちとら神匠製、あっけなくぽっきり折れる事こそないが遠心力と奴自身のSTRによって莫大な運動エネルギーを込めて振り回されたチェーンソーとの激突は、咄嗟に足で百足式8—0．5を蹴るように支えなければそのまま押し込まれていた。

最大の運動エネルギーが籠っていた初撃はなんとか受け止め切れたが、チェーンソーという武器種の恐ろしさは圧倒的な継続的ダメージにこそある。〝振る〟動きに加えてチェーンソー自体の〝回る〟動きが百足式8—0．5の耐久値をゴリゴリ削る。だが互いに前へと押し込むことで拮抗を成立させせている以上、後ろに退けば相手の武器が前に進んでくる。

「っ！」

「何っ」

なら流すしかない。
百足式８－０．５を縦に構えて横振りのチェーンソーと押し込み合っていた均衡、十字の形にぶつかり合っていた縦側の俺がチェーンソーの下に滑り込むようにして百足式８－０．５を傾ける。
そのまま握り続けていれば指がチェーンソーに切り落とされかねないので、片手で保持しつつ肩に担ぐようにして百足式８－０．５でチェーンソーの刃が走る〝上り坂〟を作りながら前に飛び込む！
互いに前に進む押し合いが、一転して「登らせる坂」と「登る刃」の関係へと変わる。
ガリガリと百足式８－０．５を削りながら、そして手と肩を支えに坂を作っている構造上、俺の頭ギリギリのところを掠りながらもほとんど空振りに近い形でチェーンソーを振り抜かされたあかしゃの無防備な背中に回り込んだ俺はそのまま百足式８－０．５を振り抜く。

「その服に関してはこっちも詳しいんだ……貴重なメイン防具だからな」

R．I．P．は基本的に破損しない。回復ポーションをぶっかけると溶けるが、基本的に斬っても殴っても突いてもダメージは受けるが服そのものは破壊されない。これだけ書くと「千古不易」なんて使わなくても良いように思えるが……アレはアレで弱点が多い。
「例えば装備中は実はステータスにデバフが入っていること！そして引き継がれる防具のパラメータは防具部分にしか適用されない事！」
つまり、露出した素肌の部分は防具の恩恵を受けられず、なおかつ

ステータスに下降補正が付与された柔肌って事だぜ！！
通常の喪服であれば顔を覆うベールがあるのだが……そのＲ．Ｉ．Ｐ．はレアものらしいじゃないか。

「ゴスロリ衣装だから顔面露出してるよなァ！」

通常のＲ．Ｉ．Ｐ．であればどれだけ薄いベールであっても発動時に破壊した装備の性能を引き継ぐために鉄兜並の耐久を発揮するそれがゴシックロリータ（レアパターン）には無い。
故に百足式８－０．５の先端、隠された機能を解放した時には刃を展開する部分があかしゃの顔面……その横っ面にめり込んだのだった。

「ぶぐっ!?　マ、マジでこの人容赦ねぇ………」

「アバターの顔面に個体識別と観賞用以上の価値は無い！」

顔の造形でＳＴＲが増えるのか？増えんだろう。

「ひでぇ！……だが、思った通りだったなツチノコさん……！」

「むっ」

クリーンヒットだったはずだが、あかしゃの動きが止まらない。頬にめり込んだ百足式８－０．５の先端を押しのける勢いで振り返り、ギャルンギャルンと吠え猛るチェーンソーを振り回す。鍔迫り合いはあまり望ましくない、故にバックステップで距離を取る。恐らく装備ではなくプレイヤー自身のＶＩＴが高い、セツゲッカのように素肌に対するダメージを軽減する何かしらのアクセサリーやスキルがあるのかもしれない。

とはいえ、結構な勢いでヒットさせた以上はノーダメージではないだろう。にも関わらずあかしゃの表情はどこか勝ち誇っているようにも見えた。

「あんたは多彩な武器を使い分けるし、最速の名前の通り機動力が飛び抜けてる。だが……攻撃スキルは実はそんなに多くない！　少なくとも、槍系のスキルは持ってない……違うか？」

「面白い珍説だな」

…………見抜かれた、か。

１２月２０日：軽い、故に速い。速い、故に軽い。（後書き）

・チェーンソー（神代）
大木……のように太い敵の手足をぶった切るように武装転用されたもの。
手持ち武器だが戦術機などと同じマナ・ドライブ・エンジンなので外付けのエネルギーユニットが枯渇すると動きが止まる。
とはいえ対人戦であれば余程長期戦に持ち込まれない限りは基本的に問題なし。対モンスター？エネルギーユニットダースで持ってこい！

「柔らかい相手程強いが、硬い相手程弱い」という隠された弱点がある。要するに小ダメの超多段ヒットだからね………

１２月２０日：真実は白日の下に（前書き）

〆切が……〆切が……ＧＰが……〆切が……（悪夢にうなされながら）

お待たせして本当申し訳ないです

１２月２０日：真実は白日の下に

シャングリラ・フロンティアにおいてスキルや魔法は無限に覚えられるものではない。というかＭＭＯでそんなプレイヤー個々人が無制限になんでもかんでも出来たらサーバーかプレイヤー側のＶＲシステムか……どっちかは確実にパンクするだろう。いやそもそもプレイヤーが持てあますか。

「あんたが純物理プレイヤーなのは見れば分かった……あとはスキル構成、これだけが議論されていた」

「議論されていた……？」

どこでだよ、それはもうほとんど晒し上げじゃないのか………あーでもパブリック配信で戦闘公開したのは俺でしたね、舞台に上がって晒されてるのは自分の意思、と。ははは誰かタイムマシン開発してくれないかな明日くらいに。

「何戦か見てたし、配信も見たが……」

その記憶は忘れてくれ。

「足回りの機動力にはスキルをフル回転って感じだったが、武器回りの強化は全然してなかった。使うにしても重ね掛けの数も回数も少ない……これはあんたのスキルが機動力に特化していることを意味する！」

「どうかな、男子三日なんとやらだぜ？」

「いや今はメイド少女だろ……」

ごもっともで。とはいえ口先だけで何を言っても奴の〝仮説〟を崩すことは出来ないだろう。

肯定は論外、否定しようにもそれこそ口先だ。つまるところ曖昧な返事をするしかない。最適解は百足式８－０．５でスキルを使う事なんだが……困ったことに、ハルバード系統のスキルは覚えていないし、汎用系のスキルは「大技」しかないのだ。

「まぁいいさ、で？　それが分かってどうする？」

「後進へのアドバイス兼、自分がやる行動の確定ィ！」

やってくれるぜ本当！

盛大にネタバラシしてヒントを周囲に撒き散らし、そして初手同様地面を切り裂くことで砂礫をこちらへと撒き散らしてくる。

だがそこそこの距離があったし一度やられているのだから流石に分かる。そして上等じゃねーか、ちょっと無茶してやるから覚悟しやがれ。

「よっしゃあ！」

「なっ」

初手の時は当たるのはまずいと回避を選んだが、そういえば今の俺は防具を装備しているじゃないか！

所詮は牽制用の砂かけだ、無装備状態だとちと怪しいが今の俺は「千古不易」を纏っている。和紙が段ボール程度まで固くなったのなら受けて突っ込むことは可能だろ！

初手で回避を見せたからこそ、砂礫を受け止めながら前に突っ込んでくるとは思わなかったらしい。ＨＰは……四分の一くらい減ったか、誤差ァ！

「豆腐の角でキル取る方法を知ってるか？」

「は？豆腐！？」

音速でぶつけりゃいいんだよ、そのための加速スキルなんだからなぁ！今は衣を纏っているので揚げ出し豆腐！あんかけも込みでお前の頭を粉砕する！！

砂礫の弾幕を真正面からぶち抜き、あかしゃに肉薄した俺はその推進力そのままに百足式８－０．５を振り抜く。

対チェーンソーなんてアクションゲーやってれば自然と身につくものだ。単純にチェーンソーを持っている敵だとか、チェーンソーが一体化してるボスだとか、あるいは発売前に「超スプラッタ！チェーンソーで対戦相手を切り刻め！」とか宣伝しまくったら発禁食らって発売延期して最終的に「もこもこねこちゃんしっぽ（内部挙動はチェーンソーそのまま）」として実装強行したり。

もこもこねこちゃんしっぽはやばかったな……「ぽふっ」って感じのヒットからＨＰがギョリギョリ削られていく悪魔みたいな武器だった……

「対チェーンソー心得！　触れない！　触れ続けない！」

そもそも小型とはいえ刃を動かすためのエンジンを積み込んでいるのがチェーンソーというもの、木を切り倒すならともかく人間相手に振り回すのは根本的に向いていないもの。

触れないように、当たらないように立ち回るのがまず第一。

こちらの打撃をなんとか腕で防ぎ、顔を顰めつつも反撃を行なってくるあかしゃだが……そもそもチェーンソー、それも両手持ちタイプは片手でひょいひょい振り回せるものじゃあない。
咄嗟とはいえ腕をガードに使ってしまえば攻撃に再度転じるのに2テンポは遅れる。即ち俺が常に先手を取り続けられる！！
そもそも武器のリーチはこちらが上、アドバンテージはこちらが常に上を行き、先を取っている！

「研究済み？　対策済み？　悪いがここに来るまでにバージョンアップは済ませてるんだ、どこまでそれが通じるか試してみな！」

対チェーンソー戦術第二！　触れる時間を短くする！！
そもそも鍔迫り合いも直撃も、要するにチェーンソーの刃に長く振れているからこそ多段ヒットしてしまうのだ。なら硬いものをバットで叩いたら弾かれるように……激突は一瞬だけ、弾かれる力に抗わないこと！
こちらの最速が遅くなっていることもあるが、向こうの対応も大したものですぐさま体勢を立て直して高速移動する俺に合わせてチェーンソーを振ってくる。チェーンソーではなくあかしゃ本体にスキルエフェクト、向こうも思考加速を使っているのか、あるいはオート反応(リアクション)か。だったらちょっとウィンドウを……

「どりゃあ！」

ガワは女性でも中身が男性なのは聖杯と反転した姿と声の性別が一致していることからも確定。故に少々ドスの利いた叫びと共にチェーンソーが迫る。やることはやったのでこちらも迎撃。
ギャギッ！　と互いに振り抜いたチェーンソーと百足式８－０．５が激突し、そして勢いよく弾かれる……否、弾かれたのはこちらだ

け。押し込むつもりのない純粋な「殴り」であるが故に、激突からの押し合いをする気満々だったのだろうあかしゃのチェーンソーとぶつかった瞬間、弾かれた百足式８－０．５は逆方向へと戻っていく……が、緩慢だったその動きが一気に加速する。

「なにッ！？」

ちょっとしたサービスだ。逆に「プレイヤーはこれにどう対処するのか」を見た方がタメになりそうだしな。

兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）。この手の琥珀アクセサリーは災（ハザード）よりも極（スペリオル）の方が優等生らしいが、俺からすれば大概こいつもじゃじゃ馬だ。

踏み込みに反応して凄まじい回転力（スピン）をプレイヤーに付与するこのデンジャラスアクセサリーは、たった一歩の前進を大回転へと無理やり変換する。

ではここで問題だ。この効果を長物を持った状態で、人の近くで勢いよく適用したらどうなるだろうか。

「……【超過機構（イクシードチャージ）】！」

付け加えると、振り回しているそれが棍棒ではなく刃物だとしたら？

この武器の超過機構、賦活醒（リベレト）は極めてシンプルなステータス強化と、もう一つと、ついでに刃の展開。言い換えるなら、「物凄くパワーアップして危険な刃物をぶん回す」ということ。

互いの得物がぶつかり合い弾かれ遠ざかる動きに、回転による加速が叩き込まれたことで円を描いて百足式８－０．５の刃が逆方向からあかしゃに襲いかかる。

「ぐ……………！」

やるな、完全に決まったと思ったがギリギリで首をひねって直撃を避けたか。ただまぁ申し訳ないが……毒武器なんだわコレ。
百足式８－０．５。その超過機構の能力は素材となったトレイノル・センチピードの毒を最大限活用すること。握った手から染み込むそれは、トレイノル・センチピードが規格外の巨体を支える筋繊維を機能させるための狂筋毒、そして刃から染み出すそれはとある〝蜘蛛〟への限りない憎悪が籠った砲劇毒。

「うおきもちわ」

僅かとは言え刃で斬りつけられた以上、砲劇毒は適用される。その「効力」にあかしゃの表情が明らかに歪む……だがそれは苦痛というよりも、もっと生理的な嫌悪に近い。
何故なら砲劇毒はスリップダメージでも永続的なデバフでもない、例えるならほんの一瞬だけ湿度が高い超暑い日に全力疾走した時の熱が皮膚の下にべっとりへばりついたような気持ち悪さが全身を駆け巡る。
いうなれば悪寒の対義語みたいな感覚だ……うん、割と真面目に最悪だよな。自分で試したから分かるぜその気持ち。

だが戦闘中においてそれは致命的な隙を生み出す。兇嵐帝痕・極の回転付与はスキルで思考加速しなければ一瞬で使用者の三半規管を破壊しかねない回転率、故にたとえ一周目をしのいだところで……

「一歩で平均三回転するんだなこれがァ！」

続く二撃、そして〆の三撃があかしゃに叩き込まれた。

「決着！」

おっと、あまりの回転にスカートが。ほほほ、すまんあそばせ。
俺は戦闘中にウィンドウを操作して取り外したカートリッジアクセサリーを再び装備しながら、勝利宣言をするのだった。

１２月２０日：真実は白日の下に（後書き）

スカートの下は膝あたりまででそこから上はギリ見えなかった、残念（その場にいた舞台生成役魔術師談）

１２月２０日：昏い旗揚げに輝ける首級を（前書き）

ｈｔｔｐｓ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／ｂｏｓｈ＿ｊｐ０６０／ｓｔａｔｕｓ／１６４６１８０８６３４４３６１１６４８？ｓ＝４６＆ｔ＝－Ｅ＿ＣｄｉｘＲ４ｓｌＭｏＸＣＱ６ＹＶＴ＿Ａ

超私情の私事ではあるのですが、集合知を必要としているのでとりあえず適当にアンケ答えてもらえると非常に助かります

この前書きを書くためだけに更新しました対戦よろしくお願いします

12月20日：昏い旗揚げに輝ける首級を

厄介な相手だった。鎖鎌使いもそうだが奇抜だが熟練、ってのは非常にやりづらい。初見殺しにしたって剣から繰り出されるものと、鎖鎌から繰り出されるものでは後者の方が予測しづらい。

「全く……」

多段ヒットは範囲攻撃と並んで俺の苦手攻撃(サンラク)だ。人よりHPとVITが低い自覚があるので数ヒットで死にかねない。

「割と強敵だったよ、グッドゲーム」

「ほ、ほとんど大技使わせてくれなかったのによく言うぜ……」

倒れ伏したあかしゃの苦笑気味なぼやきを聞きながら、さてどうしたものかと考える。

別に手加減したとかではない。単純に三発当てた上であかしゃが死ななかった、と言うだけだ。毒ではあるが破壊属性は持っていないのだから、首を斬ってもHPが残っていれば生き残られるわけだ。恐るべきはR．I．P．と言うべきか、仮にもバフが乗った攻撃三発（初撃は首）を食らって持ち堪えるとは……コストにした防具どんだけ高性能だったんだ。

とはいえ流石にここから何をされても俺が先にトドメを刺せるのだが……それはそれとしてどうしたものか、と思案している。ゲヘへ、まだ生きてたか死ねえ！　とはちょっとな……配信中だし。

と、なると理想としては自刃していただくか降参かの二択だが……

「うーむ…………よし」

「……？」

インベントリアから取り出しますはなんの変哲もない回復薬。市販だがこのゲームの大半からすれば飲む、ダメージ部位にぶっかける、浴びるなどすれば体力が確実に回復するアイテムだ。

「な、情けのつもりか……？　刺せよ、トドメを……」

「トドメ刺す瞬間に不意打ちとかされても面倒だからな、そういうの関係ない方法を思いついた」

きゅぽっ、とポーション瓶の栓を外し、ほんの少しずつ傾け始める。

「R．I．P．ってさ、俺も使ってるからその性能はよーーーく知ってるんだなこれが」

「何を……」

液体というものは、常に地面に対して平行な水面を作る。だが僅か1°でもズレてしまえば、表面張力だのなんだのはあるがそこには「流動」が生じる。ましてそれが飲み口という出口のある瓶であるなら。

瓶の飲み口から一滴、ほんの一雫が今にも垂れようとしているタイミングで俺はその〝事実〟を伝えてやる。

「R．I．P．は回復系の効果を受けた部分が溶けるし治らん」

「降参します勘弁してくださいっっっ！！」

おっと一雫漏れた。

「お゛あぁぁぁぁぁ危ねえぇぇぇぇぇぇぇ！！」

おお、神回避。恥も外聞も完全に捨てた全力のローリングで落ちた一滴の回復薬を避けた姿に、肉体の性別など瑣末な問題と言わんばかりの漢気を見た。いや女々しいのか？　どっちだ？

「殺す気か！」

「回復薬だぜ？　人命救助のために落ちた善意の一雫だよ」

「降り注ぐ悪意の豪雨とかの間違いだろ！　くそーっ！　覚えてろーーーーっ！！」

地面に落ちていたチェーンソーを拾い上げ、逆に潔さまで感じる捨て台詞を吐いて去っていったあかしゃを見送りつつ、それはそれとして心の中ではため息をつく。

あの野郎、面倒なことをしてくれやがって……こちらの育成上の脆弱性である攻撃スキルの薄さを指摘した上に、百足式８−０．５の超過機構まで使わせやがってよ。

大量の目が俺を見ている以上、弱みは隠さないといけないしチェーンソーのスキルが砂礫飛ばしだけとは思えないので、早期決着はベストだったはず。とはいえ大技の一つをこの段階で使うことになるとはな……まぁいい、どうせ武器種ハルバードの百足式８−０．５は超過機構の一発芸しかなかったわけだしな。

「っし！　気を取り直して次！！」

「私の番よ！！」

「次俺！」

「待てよ番号は俺の方が早い！」

はっはっは、死にてえ奴らが順番争いしてら。「千古不易」の稼働限界もあるし片っ端からぶちのめす！　悪いが死に方は俺が選ぶぜ。今日の日替わり死因はAセットが蜂の巣でBセットが三枚おろしだ。醤油は言ってくれたらこっちからお持ちしまぁす！！

……

…………

………………

オーダー日替わりAセットぉ！！

「蜂の巣ゥ！！」

次はオーダー日替わりBセットぉ！！

「三枚おろしィ！！」

おっ、〝通（ツウ）〟だねお客さん！　オーダー裏メニュー！！

「閃光魔導！！」

痛かろう、俺の閃光魔導は助走をつけて加速してから放つ。彷徨う大疫青との戦いから進化した俺の突進は膝で撃つ！！　しかもＭＰを使わない！　なんでやろね。

鎧袖一触、というほど楽な戦いでもなかったが、それでも勝ちは勝ち。三人分の装備を宝船もといブリュバスに投げ込んだ俺は周囲を見渡す……うーん、ちょっと巻きで戦いすぎたか。挑戦者が尻込みしている感がある。

俺のような避けビルドは圧倒的に見える勝利か、あっさりすぎる敗北が殆どだからいうほど楽勝ってわけでもないのだが……加速シャイニングウィザードはちょっと刺激が強すぎたか。

ＭＰ回復ポーションをやたら勿体ぶってチロチロ舐めて見せつけてくるフィールド生成要員は見なかったことにしつつ、周囲を見渡すが挑戦者が現れる様子はない。

「トークショーとか無理だぞ…………我こそは、ってネクストチャレンジャーはいないのかー！」

やばいやばいやばいやばい。あんまり募集時間が長いと「千古不易」のリミットが来る！　流石にこれを爆散させたらエリュシオンに縫い針を千本は飲まされかねない。

その時だった。

「――――ここにいるぞ」

声。それも、警察ドキュメンタリーとかで個人情報を隠されてるタイプの男か女か分からないようなノイズのかかった声音。

だが周りを囲むプレイヤー達の中からその姿を表す様子は無い。と

いうか、声的に上から……？

「……っ！」

「またえらく尖ったのが来たな」

声の主はブリュバスの甲板にいた。さらに言えば、そいつはサイナのすぐ背後に立って……サイナの首筋に剣を突きつけていた。
だが気になったのはサイナに剣を突きつけていることよりも……その下手人の姿そのものだろう。

「加湿器の擬人化か何かか？」

煙だ。全身から吹き出しているかのように、真っ黒な煙がそいつの姿を非常に分かりづらくしている。姿を隠したいんだか晒したいんだか知らないが、俺に見えやすく甲板に立っているそいつの大まかな形状は分かるのだが、その細部や顔まで見ようとすると途端に煙で何も分からなくなる。
少なくとも真っ黒なマントに口元も黒布で隠してるのはなんとなく見えた、つまり漆黒コーデに漆黒モザイクを入れた筋金入りの黒色スキーってわけだ。

「悪いがスタッフは指名不可だ」

「慌てないのだな……」

既に待機状態だったインベントリアを操作。サイナを一旦格納し、再展開。ブリュバスの甲板から俺の隣に現れたサイナを指差せば、煙マンは得心が言ったかのように虚空に突きつけた剣を下ろす。

「安全マージンは万全、というわけか」

「だがお前は処刑だがなァーっ！！」

今のは俺じゃないぞ。サイナに剣を突きつけたのがよっぽど許せなかったのか、すごい殺意剥き出しで甲板までよじ登ってきた別のプレイヤーだ。ていうか人のもんにどいつもこいつも勝手に乗るな。整理券付きで金取るぞ。

だが、正義の心がサイナへの凶行に義憤でボンバーして下手人を仕留めんと振り下ろされた剣は、虚空に虚しく空振られる。ここからだと煙マンがいなくなって入れ替わりに正義マンが甲板で素振りしているのしか見えない。だが、

「ぐがっっ」

次の瞬間、正義マンの左胸あたりから刃が飛び出たのは見えた。

「……キルスコアにもならない。本当に厄介なイベントだ」

「お前の顔、覚え………見えねえ………」

俺の耳には届かなかったが、何やらモニョモニョ言いながらＨＰが尽きた正義マンが砕け散る。正義マンの欠片が消えれば、その背後にはナイフか何かを構えた煙マンの姿……

「やるな」

「…………」

煙マンは最初にサイナへと突きつけていた剣……挑戦剣を雑にブリュバスに積み上げられた諸々の山に放り投げると、甲板から地上へと飛び降りてくる。

「アンタの首を取れば……良い、宣伝になる」

「悪いが首を取ってもシステム上すぐ消えるぜ？」

煙マンは俺の言葉に対して、無言で一点を指差す。その人差し指の先には隕鉄鏡……成る程、首(じじつ)があればそれで良い、と。

「サンラク……俺の名を覚えておくといい……」

——新たなる開拓者殺し(プレイヤーキラー)の誕生を。

改めて相対したからこそ、ようやく頭上のプレイヤーネームが読み取れた。なるほど、いい名前だ……頭のおかしさを保証されている。

「よろしくＲｉｏｔ(ライオット)、良い一戦にしよう」

「…………」

暗殺者ロールプレイガチ勢め、化けの皮の分厚さを測ってやるよ。
シャケの皮よりは肉厚であれよな！

１２月２０日：昏い旗揚げに輝ける首級を（後書き）

念入りにレベルを上げ、ステータスを鍛え、装備を揃え、ロールプレイも恥ずかしがらずにできるようになってよっしゃ今こそ恐怖のプレイヤーキラー伝説の開幕だぁ！！って第一歩を踏み出す直前に王国騒乱シナリオが始まったせいでプレイヤーキルしてもペナルティがつかなくなって盛大に第一歩で転けた人

１２月２０日：黙々と、見遠し（前書き）

超大型大会の本番真っ只中に執筆していた奴がいるらしい

12月20日：黙々と、見遠し

さて、ネクストエントリーとしては随分と物騒な登場だ。
プレイヤー名「Ｒｉｏｔ（ライオット）」、ブラッドと続いていたら完璧に暴徒の類だったがライオット単品となると本当に暴徒なのかはちょっと疑わしいところだ。

「ふむ………」

「………」

一応、こちらのルールには則ってくれるらしく不意打ちでナイフが飛んできたりはしなかったが……改めて見ても特徴的な〝わからなさ〟だ。
全身を包み込む黒煙は、身元を隠し切るだけの不透明さを維持しており、奴がどういう姿勢なのかは分かるのだが表情が完全に読めない。素性隠し系のアクセサリーか？　このゲーム、ＰＫに厳しい割にＰＫ向けのアイテム多いよな……
先ほど正義マンを後ろからブッ刺したのは短剣だったはず。となれば短剣使いと見るのが自然な流れだが……どうもそれだけじゃあなさそうだ。いきなり突撃槍を構えて突っ込んできてもおかしくなさそうというか、なんだろうな……あの時サイナに剣を突きつけていたのが妙に様になっていたから、か？

「サイナ、悪いが所定の位置まで」

「了解：」

見るからに暗殺者系。となると大火力アタッカーとはまた別方向の一撃特化の可能性は高い。特にＰＫなら破壊属性を運用してくる可能性は考慮すべきだろう。あれは対人装備としてはマジで強いからな……

「さぁて、御託を並べるのはお互い好きじゃないだろう？　ここで守るべきルールはただ一つ。タイマン！　以上！！」

「いいだろう……」

「サイナ！」

銃声、それは戦いが始まる合図。だが俺もＲｉｏｔも動かなかった、故にこそ数秒の静寂に銃声の音が溶けて消えて……

「………！」

次の瞬間、Ｒｉｏｔが足元に落とした何か手のひらサイズのものが勢いよく爆ぜた。

「自爆！？」

いや違う、煙は出ているが煙だけだ。熱も炎も衝撃もない、ただ煙が風と共に俺をも飲み込んで結界（フィールド）内に広がって……煙幕か！！

「上手（つよ）いことしてくれる……！」

煙の色は漆黒。それはＲｉｏｔの素性を隠す煙と同じ色であり、そしてそれよりもなお濃い。視界を隠すだけなら白い煙でもいいだろ

う、だが同じ色であるが故にＲｉｏｔ自身が見つからない。
止まっているのは最悪手、だが一歩目を考えなしに踏み出せば正義マンの二の舞だろう。
刻傷によるレジストが発動していない、つまり普段の奥古来魂の渓谷に広がる瘴気のようなものではない。だが胴にある刻傷の効果は肺にも適用されるのか？

「まずは最悪を……想定！！」

一歩目は踏み出すのではなく、踏みしめる。屈んだ脚にスキルエフェクトが漲り、伸ばすと同時に力が解放される。一瞬で〝上〟に跳んだ俺はそのまま煙幕を突き抜けるが……ちょっと困ったことになってるぞ？

「結界で煙が拡散しないのか……！」

時間経過で消えはするのだろう。だが、それまで残り続ける煙が決壊の外に出ていない。おそらく、二発目三発目の煙幕を使っているのだろう。明らかに以上な量の煙がどんどん結界内に満たされていく。配信のことを考えてくれよオイ！
不味いな、完全にアドバンテージを取られている。結果論だが、初手で飛び蹴りをかますのが正解だったか？

「っ！！」

煙の中から飛んできた投げナイフを弾き落とせたのは、一応警戒として永劫の眼（クロノスタキサイア）……思考加速を既に使っていたからだ。光を反射しないよう、ご丁寧に刃が黒く塗られてやがる……！
どうしたものか、俺は「跳べる」が「飛べる」わけではない。滞空時間が長いだけでそろそろ地面に降りなければならないが……どう

したもんか。

「……っしゃ！」

やるだけやるか！　アドバンテージを先んじられた時点で、無茶を通さなきゃ捲れない。

空中ジャンプを利用して直下ではなく別の方向へ降りる。そこはディプスロのやつが展開している結界の端、煙を外に逃さない融通の効かなさは許せないが、今はその融通の効かなさに助けてもらう。

「背水ならぬ背壁の陣……ってな」

これで少なくとも背中からは刺されない。

さらに武器を変更。タイプ：ワカモーレ「エアリアルＰＤ」とＦＦ－４５！　対モンスターじゃ心許ないが、対人なら頼れる銃らしい銃。今一番欲しいのは……射程だ。

「…………」

がっついてこない暗殺ビルドは本当に厄介だ。自分のアドバンテージを最大まで活かし、そして捲られる可能性を最小にした動き……寡黙な暗殺者ロールはポーズというわけではない、か。

「…………」

下手すると、このまま煙を補充し続けるんじゃないか？　とふと思う。インベントリアがあるかどうかすら、あの身に纏う煙で視認できなかったからな……あれ俺も欲しいな。

「さーて……」

ここで一句。
来ないなら、俺から行くぜ……
「最上川ァ！！」
スキル運命の眼(フェータリザルト)起動！！
俺が使う二つの「眼」はそれぞれ違うものを俺に見せてくれる。
永劫は肉体よりも速い思考の世界を。そして運命は正しい攻撃の道を！！
ＦＦ－４５、二つのＦはデコピン(フリックフィンガー)を意味する！
フルオートで小気味よくパパパパンと発砲された弾丸が煙の中を突き進み――
「何っ！？」
「暗闇如き、なにするものぞォ！！」
パーフェクト下の句ショット！！
その名の通り、デコピン程度の火力しかないが、ＦＦ－４５の弾丸は代わりに一発でも当たればノックバックを発生させる！
どこに撃つべきか、それはすなわち「どこに撃てば最適な攻撃であるか」が分からないということ。故に運命の眼(フェータリザルト)、最適な攻撃ルートを提示するこのスキルは各種武器に対応する。銃を装備しているならば……示されるのは射線！　俺にしか見えない標的に当てられたレーザーサイトだ。
ＦＦ－４５の炸裂衝撃弾頭(ノックバック・バレット)によって運命の眼に映る〝動く最適解〟がピタリと止まる。その瞬間を逃さず、エアリアルＰＤを撃つ！！

脳裏によぎる空中パイルドライバー（エアリアルPD）の（それに付随するケツ強打の）苦い記憶を弾に込めて、魔力で形成された捩（ねじ）れ螺旋の弾丸が放たれる。

「ぐあっ！！」

捲り返すならここだろ！

「お召し替えだ……！！」

決闘級メイド服「千古不易」。斬撃と刺突に対して驚異的な強みを持つ服なのにバッテリー必須という防具……というか衣装。四つのカートリッジアクセサリーからエネルギーを補充することでその力を維持するわけだが、当然時間が経てば充電切れとなる。
だがそこで終わらせなかったのがエリュシオン・オートクチュールというメイド服のナイスガイだ。

これはもしもの際の緊急手段として用意されたもの。「カートリッジアクセサリー三本と、残り一本の五割を使い切った時点で発動可能、という縛りを設けたことで装備への搭載を成功させた職人芸！！　唯一の欠点は――

「ミニスカお着替え（エコロジーモード）！！」

音声認証でなに叫ばせようとしてんだ、ってことだ。

１２月２０日：黙々と、見遠し（後書き）

来ないなら
俺から行くぜ
最上川
暗闇如き
なにするものぞ

「確かに音声認証、つまり実質的な発音はエコロジーモードだ。だが、だ。だがしかし、この「エコロジーモード」という発音とその意味が必ずしも同じである必要は無い。たとえ口ではエコロジーモードと発音していても、心の中では常に「ミニスカお着替え」……そう念じて欲しい。一念岩をも通す、と言うだろう？　であるならば、想いがメイド服を強くする……そして、メイド服は最強だ。つまり五倍強い。うん？　なにと比較して五倍か、と？　ハハハ、普段の君よりだよ。私が言うのもなんだが、服は着た方がいい」

１２月２０日：メイド服ボンバー！！（前書き）

２０２３闇古戦場の妨害工作です、きくうしには明後日の０時１分までじっっっっくり読んで欲しぃ

１２月２０日：メイド服ボンバー！！

「千古不易」省エネモード。スカートの半分程度に長袖、その他諸々のパーツの内の何割かを「再生させない」ことでエネルギー消費率を二分の一に……要するに、残存時間を二倍に増やす！！
当然、薄着になればその分防御面積は下がる。短剣に何を塗ってるか分かったものではない上に、依然として煙幕のアドバンテージを維持するＲｉｏｔ相手にはリスキーかもしれない。
だからこそやる！　それに秘策が無いわけでもない。向こうが俺を文字通り〝煙に巻く〟と言うなら、こっちにも考えがある。

「兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）をぉ……！」

一歩のみ展開！
兇嵐帝痕（イデア＝ガトレオ）・極（スペリオル）は二歩目を踏み出さなければ加速にはならない。その場でトリプルスピンをするのみに留まるが……重要なのはその原理、というか過程だ。
このアクセサリーはなんだかよく分からんが風属性系のめっちゃ強い何某の力が宿ったもの。加速原理は筋肉を増強するだとかではなく……風で押し出される、というものだ。

無色透明故に、視認の困難なそれが煙幕という色がついたことでその姿を露わにする。俺を押し出す風の渦が煙を掴み、引き摺り回し、そして吹き飛ばす様は成る程どうして……俺こんな強風に後押しされてたのか。
だが、勢いよく俺の周囲を覆っていた煙幕が吹き飛ばされたことで、その場に人間大の煙がポツンと取り残される。面相は隠せても姿までは隠しきれていない……銃弾のヒット的にそこそこ近づいてきて

いるとは思ったがやはりか。

「真正面から殴り倒したって〝暗殺〟だぜ！　暗殺バトルだ！！」

「暴論が……！」

拳銃を構えながらしかし撃たずに突っ込んでくるそれのどこが暗殺だ、と言いたいのかＲｉｏｔが初めて声を荒げさせる。とはいえ取り乱しているわけではなく、その手は冷静に短剣に何かエンチャントを施している。

それを視認した瞬間、俺は両手の銃を投げ捨てる。

「……！？」

「どんなセンサーも感知できない最強の凶器を教えてやるよ……！！」

スキル起動。

「戦勝神の御業（ヴルスラグナ・アヴァタール）――」

◇

Ｒｉｏｔが使用した煙幕は視界を塞ぐ、という性能においては現状のアイテムプールでは最高峰の性能を誇る「黒い封幕（ブラックアウト）」である。視覚だけでなく聴覚、嗅覚などにもデバフを付与する優れた時間稼ぎではあるが、一個あたりの持続時間が短い、という欠点がある。

故にＲｉｏｔは「黒い封幕」を使い続けることで、煙幕を維持していた。痛すぎる出費ではあるが、それに値する相手であると判断し

たが故だ。

結果だけを見れば、煙幕に加えて自身の隠蔽スキルによる徹底的な位置隠しの努力を「最適な攻撃ルートの提示」というスキルで暴かれたＲｉｏｔであったが、比較的冷静ではあった。
だからこそ、銃を捨ててまで近距離戦を挑んできたサンラクに対しても「何故」を思い浮かべつつも迎撃を行えたのだ。

投げ続けた煙幕は吹き散らされ、そして今やほとんど消えている。
追加で投げる余裕はない、故にその光景は今の今まで何も見ることができなかった結界を囲む観客達にも見ることができた。

「角……？」

謎の「最上川」なる叫びの理由よりも、メイド服がミニスカになっていることよりも、両者が今まさに激突せんとしていることよりも。
サンラクの右腕が肩から指先に至るまで黄金に光り輝き、肘を曲げているが故に……そう、さながら牛の角の如き一撃(ラリアット)がＲｉｏｔに炸裂する光景に目を奪われた。

「――角牛(オックス)の威！！」

◆

再度のレベリングを行う中で、気づいたことがあった。
シャングリラ・フロンティアのスキル育成においてはいくつかの方法で既存スキルを新しいスキルに変化させることができる。
例えばレベルアップでスキルそのものが変質する進化、スキル同士

を組み合わせて一つにする合体、そして二つ以上のスキルを繋げて一つにする連結。だが俺が着目したのはそこではない。

「ハーキュリー・ストライク」というスキルがある。そして「ハーキュリー・ブラスター」というスキルもある。
これらの違いはスキルを発動する際に必要な攻撃手段の違いなわけだが……大事なのはそこじゃない。
要するに……シリーズがあるってことだろ？

そこで俺が注目したのは「勝利の神撃（ヴルスラグナ・スマッシャー）」というスキルだ。
ハーキュリー、確かヘラクレスのことだったか。ヘラクレスの名前でシリーズとなっているのなら、神様だの英雄だのの名前を持つスキルはシリーズがあると予想を立てた俺は、このスキルを徹底的に調べ尽くした。
それは過去に覚えたスキルを覚え直せるというのがエルクへの献金（じんもん）で発覚したのが大きい。

つまり、「勝利の神撃（ヴルスラグナ・スマッシャー）」を合成材料にしては覚え直してを繰り返したのだ。レベリングはベヒーモスにいる改造生物兵器みたいな奴らを利用させてもらった。
「派生」を見るならばさまざまな攻撃パターンが必要だろうしな……果たして俺の予想は当たった。

ヴルスラグナの名を関する「戦勝神の御業（ヴルスラグナ・アヴァタール）」シリーズの習得。それは俺（サンラク）の性能をさらに引き上げるものであった。

輝く雄牛の角の如きスキルエフェクトを纏うラリアットがＲｉｏｔの首に叩き込まれ、その力が解放されるまでの一瞬……Ｒｉｏｔの目が僅かに見えた気がした。
まるでどうして「自分がサンラクの腹へと突き出した刃が弾かれた

のか」とでも言いたげじゃないか……んなもん、理由はただ一つ。

刻傷そのものを相殺して制約を一時的に無効化する灼骨砕身と違って、今の俺は無理やり服を着ているだけで刻傷のバフデバフ干渉無効が生きてるからだよ！！

隠密を暴かれてパニクったか。お前が「強化魔法（エンチャント）」で短剣を強化した時点で顔と腰だけ守っておけばその脅威度はなまくら以下だ！！

「吹き飛べッ！！」

気合いと共に、Ｒｉｏｔの首に当てた二の腕に込められた力が炸裂。

Ｒｉｏｔが黒煙の尾を引きながら勢いよく吹き飛んでいった。

12月20日：メイド服ボンバー！！（後書き）

半袖のメイド服とかにある長袖の先端部分だけ取り残されたみたいなパーツの名前を長らく知らなかったのですが、今回調べて初めて知りました。お袖留めって言うんですねアレ

・「戦勝神の御業（ヴルスラグナ・アヴァタール）」シリーズ
これは全部で十個存在する。というか「戦勝神の御業」シリーズが「戦勝神（ヴルスラグナ）」という大シリーズの小カテゴリと言えなくもない
サンラクは角牛の威（オックス）の他にもう一つ「御業（アヴァタール）」を習得している。

・角牛の威（オックス）
喧嘩ボンバー、あるいはさらに元ネタのアックスボンバー。肘を曲げてL字状態の腕で叩き込むラリアット、あるいはパンチ。肘だけではなく、実は拳にも判定があるのでラリアットをかけられない巨大な敵相手には突進とパンチが合体したような「拳を構えて突っ込んでそのままぶつける」というスキルでもある。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://ncode.syosetu.com/n6169dz/

シャングリラ・フロンティア〜クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす〜

2023年4月20日19時55分発行